八男って、それはないでしょう！

Y．A

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【小説タイトル】
八男って、それはないでしょう！

【Ｎコード】
Ｎ８８０２ＢＱ

【作者名】
Ｙ．Ａ

【あらすじ】
平凡な若手商社員である一宮信吾二十五歳は、明日も仕事だと思いながらベッドに入る。だが、目が覚めるとそこは自宅マンションの寝室ではなくて……。僻地に領地を持つ貧乏貴族の八男という、存在意義さえ怪しい子供に憑依した彼は、幸いにも魔法の才能があったので早くに自立しようと我が道を進む。家門と領地継承も、内政無双も経験が無いから無理。魔法で金を稼いで、自由に生きて何が悪いというのか。まあ、結局人の営みで発生する柵（しがらみ）からは逃れられないのはこの世の常として。これは、そんな若造ヴェンデリン・

フォン・ベンノ・バウマイスターの世界なんて救わないお話である。

※２０２０年４月より、八男のアニメが放送中です。
小説版は、最新第二十五巻が２０２２年４月２５日に発売開始（まだまだ続くよ）。
八男コミカライズ版は、最新第十一巻が２０２２年５月２３日に発売されます。
コミカライズ版は、コミックウォーカーにて好評連載中！
ドラマＣＤも発売中です。

外伝、後日談的なお話　「八男って、それはないでしょう！　みそっかす」
信吾と入れ替わったヴェンデリンは？　「八男って、それはないでしょう！　番外編『ヴェンデリンと信吾、邂逅す』」もよろしくお願いします。
★カクヨムにて、改稿、加筆をした「八男って、それはないでしょう！（改）」も連載中なのでよろしくお願いします★

※同じく書籍化された、銭（インチキ）の力で、戦国の世を駆け抜ける。（全七巻発売中、コミカライズ開始、ＦＷコミックス様より、第２巻まで発売中）と共によろしくお願いします。
※砂漠だらけの世界で、おっさんが電子マネー二で無双する（ＭＦブックス様より、第二巻まで発売中）
※異世界帰りのパラディンは、最強の除霊師となる（ＭＦブックス様より、第三巻まで発売中、ＦＷコミックスオルタにて４月１５日から連載開始）
※野生のＪＫ柏野由紀子は、異世界で酒場を開く（電撃の新文芸様より、第三巻が２０２２年２月に発売されます。コミカライズ版が、やわらかスピリッツにて連載中）

第一話　ふと目が覚めると……。（前書き）

何となく書いてみた。

第一話　ふと目が覚めると……。

「あれ？　ここは？」

いつものように、朝六時に目覚まし時計のベルの音で目覚め、急ぎ出勤の準備をし、途中のコンビニでオニギリなどの朝食を買い、それを同じく購入したウーロン茶で流し込むようにして食べながら職場へと向かう。

俺こと一宮信吾二十五歳は、誰でも名前くらいは知っている大学を卒業後にそれなりの規模の商社に入社し、三年目の今では年下の部下なども出来、彼らと上司との板挟みでたまにストレスを感じる日々であった。

だが、そんな事は誰にでも多少は当てはまる境遇であったし、それで会社を辞めてやろうなどと感じた事も、まあ少ない方だと思う。

普通の社会人ならば、一度くらいは勤め先を辞めたいと思う事もあるであろうし。

辞める度胸や財力が無いので、ただ思うだけで終ってしまうのだが。

会社から徒歩十分ほどの場所にあるマンションに一人暮らしで、嫁さんや彼女なども居ないので食事はほぼ外食。

仕事の疲れで朝はギリギリまで寝ていて、休みの日に洗濯や掃除などの纏まった家事をこなす事が多かったが、まあこれも人並みと言えばそれまでだ。

俺みたいな人間なんて、この日本に佃煮にするくらい存在するであろう。

別にその事に不満などないし、このまま俺も会社勤めで生活を維持しながら、その内に彼女などでき、結婚なんてして子供が生まれるかもしれない。

きっとこういうのを、平々凡々な人生と言うのであろう。

などと、考えていたのだが……。

いつものように夢の内容すら記憶に無いまま目を醒ましたものの、そういえば、いつもは五月蝿いくらいに鳴る目覚まし時計のベルの音も聞こえない。

今が何時なのかは知らなかったが、まだ外は暗いらしく。
部屋の中も真っ暗なままで、それでも次第に暗闇に目が慣れてきたので起き上がって周囲の様子を探る事にする。

すると、色々と不自然な事に次々に気が付いてしまう。

ここは俺の住んでいるマンションの一室のはずなのに、見慣れた壁紙や家具などが一切見えず、周囲に同じベッドのような物が三つほど置かれていた。

自分も同じベッドに寝ていると考えると、合計で四つ。
更に目を凝らすと、そのベッドの上には人間らしき者が被っている毛布で出来た膨らみが見える。

つまり、ここは四人部屋という事なのであろう。

いつの間に、居候が出来たのであろうか？

突然の環境の変化で混乱する頭を振り払うようにして、出来るだけ自分の状態を確認してみる事にする。
するとやはり、色々と就寝前とは状態が違っているようだ。

まず、ニ〇リ製よりは高級な物であったはずの俺のベッドであったが、どこか古臭いし、あまり寝心地も良くないようだ。
掛けていた毛布も、やはりボロくて少し臭かった。

『一週間前に買ったばかりの、新品の毛布だったのに……』とか言うセコい考えが頭に浮かぶが、すぐに気を取り直して今度は自分の体の状態も確認する事とする。

「（あれ？　体が小さくなっていないか？）」

決して高身長というわけではなかったが、これでも一応日本人の平均身長くらいはあったはずの俺の体が、どう見ても子供並くらいにまで縮んでいたからだ。

「（えっ？　これって？）」

最近良くネット小説などで見る、異世界への転生という考えがすぐに浮かぶ時点で俺も業が深いわけだが、それにしては赤ん坊にな

っていないわけで、これはもしかすると異世界の他の人間に俺の意識が乗り移った可能性もあるわけだ。

「（となると……）」

今は暗いし、他の人達がすぐ隣で寝ているのに下手に騒ぐと、もしかすると俺の気が狂ったのかなどと思われてしまう可能性がある。

第一、今のこの小さな体の持ち主と残り三つのベッドの持ち主との関係も不明だ。

家族である可能性が大きいが、俺には誰なのかわからないのだし。

「（とりあえず、自分の状態が確認できるまでは大人しくしていないと。さて、もう一眠り……）」

そこまで考えたところで急に抗えないほどの眠気が襲い、俺はそのまま再び眠りについてしまうのであった。

第一話　ふと目が覚めると……。（後書き）

更新速度は期待しないでください。

第二話　夢うつつで今の己を知る。

「また男の子か……。これで八人目だぞ」

「あなた、こんなに元気な男の子なんですよ。それに相応しい名前を」

「そうだな。ヴェンデリンとするか。その子が、バウマイスターの家名を継げる可能性はほぼゼロだがな」

突然の眠気で再び夢の世界へと落ちた俺は、その夢の中で不思議な光景を目の当たりにしていた。

俺が意識を移らせていると思われる、あの小さな少年らしき赤ん坊が生まれた場面が、まるで映画のワンシーンのように見えていたからだ。

どうやら俺は、このバウマイスターという家で八番目の男の子として生まれたらしい。

いや、正確にはその存在を乗っ取ったという方が正しいのであろうか？

それと話が進むに連れて、このバウマイスター家が辺境の人口二～三百人が住む村を三つほど治める下級貴族である事。

現当主であるアルトゥル・フォン・ベンノ・バウマイスターは、良くも悪くも平凡な四十男であり、同じ下級貴族出身の妻と地元名主の娘を妾にしている事。

その二人の妻との間に、俺ヴェンデリンを含めて男八人、女二人

の子供がいる事などがその名前と共に判明していく。

しかし、精々人口八百人程度を治める下級貴族の癖に子供が十人とか。

良い年をして、家族計画を理解しているのかと本気で考えてしまう。

もう既に今までに知り得た情報から、俺の居るこの世界が中世ヨーロッパに非常に酷似した世界である事は理解している。

子供が生まれても、必ず全員が無事に成人するという事も無いのであろう。

一人っ子というわけには行かないし、正妻が必ず子供を生める保障もないので、妾がいるのも納得はいく。

でも、この人数は多すぎであろう。

下手をすると、御家騒動の原因にも成りかねないからだ。

妾の子供は、可哀想だがこの際除くとして。

実際にまだ顔を見ていない妾は、男の子二人と女の子二人の母親であったとこの体の記憶にあったが、男の子達は名主の跡継ぎや、娘しかいない豪農や名主の家に婿として入る予定らしい。

女の子は、既に嫁ぐ先も決まっているようだ。

彼女等の事は良いのだ。

将来がちゃんと決まっているのだから。

肝心の残り六人兄弟、本妻の生んだ男子連中について。

てっきり八男の俺なので、自分は妾の子だろうなどとタカを括っ

ていたが、何と俺は本妻が四十歳近くになって生んだ子供らしい。

というか、年甲斐もなくそんなオバさんを孕ませないで欲しい。

多分、どう見ても貧乏そうな領地なので、主に財政的な面から新たに若い妾を作るのは不可能なのであろう。

逆に言うと、夫婦仲が良好で良かったとも言えるのだが。

「あなた、ヴェンデリンには剣や魔法の才能があるかもしれません」

「もしそうならば、独り立ちも可能であろうか」

この俺が乗っ取っている小さな子供の記憶というか、その情報を元にした第三者的な視線から、俺は次々と現在自分の置かれた情況を次第に理解していく。

まず俺が、貧乏貴族の恥かきっ子である八男ヴェンデリン満五歳、数えで六歳くらいに転生というか乗り移った事。

貴族の家に生まれたが、あまりに子沢山過ぎて領地などは当然継げず。

下手をすると、というか間違いなく貴族としてすら生きられない可能性が高いという事をだ。

普通に考えれば長男が家を継ぐし、次男は予備と考えて、三男以降は己で生きる道を模索しないといけないはずだ。

広大な領地を持つ大貴族家や、中央で代々要職に就いている世襲法衣貴族家ならともかく、この子作りしか取り得の無い貧乏下級貴族に、三男以降の身の振り方を考える甲斐性など期待しない方が懸命であろう。

となるとだ。
平成日本の自宅マンションで寝ているはずの自分はどうなったとか、先程聞こえた『魔法』というキーワードに浮かれたりとかしている余裕などない。

この世界の成人が何歳かは知らないが、それまでに自分一人で生きていく術を得なければいけないからだ。

「（慌てるのも良くないが、子供だからって遊んでばかりいると人生詰むな……）」

それからも俺は、この第三者的な俯瞰からヴェンデリンのこれまでの人生をダイジェストで確認し、目が醒めてから新しい家族に不信の目で見られないように懸命に情報を集めるのであった。

第三話　辺境最南端貧乏貴族家。

「……」

あの睡眠学習とでも言おうか、夢の中でヴェンデリンの情報を得た俺はその後すぐに目を醒まし、同じく目の覚めた他の兄弟達と共に屋敷の食堂で朝食を食べていた。

屋敷とはいえ、そこは貧乏下級貴族。

それなりに部屋数はあったし、書斎や食料や金品・武具などをしまう倉庫などもあったが、俺の感覚で言えば精々で豪農の家に毛が生えた程度でしかない。

実際にこの家で個人の部屋が貰えるのは、当主アルトゥル四十五歳と、正妻ヨハンナ四十四歳の他には、長男クルト二十五歳に、次男ヘルマン二十三歳だけであった。

残りの俺も含めた四人の兄弟は、一つの部屋に押し込められていたのだ。

三男パウル十九歳、四男ヘルムート十七歳、五男エーリッヒ十六歳。

まさに、部屋住みの悲哀という奴であった。

昔の時代小説などに良くあった設定だ。

なお、妾であるレイラ三十一歳は普段は実家である名主の家の別邸に、六男ヴァルター十四歳、七男カール十三歳、長女アグネス十一歳、次女コローナ十歳と一緒に住んでいた。

何か名前だけはドイツ貴族風で立派なのだが、実際はこんな程度かと思うのはどこの世も同じであり。

それと昨日の夢からの情報であったが、これだけの大人数で住めるほど屋敷の部屋が多くなかったのと、本妻と妾が仲が悪いのはいつの世でも一緒という事情からしい。

それに、妾の子達はうちの男子連中のように貴族としての教育という物を受ける必要もない。

よって、向こうの子供達とはあまり交流はないらしい。

記憶の中のヴェンデリンも、数度顔を合わせたくらいだ。

領地内の有力者である名主の跡取息子達と没交渉な当主やその妻というのも考え物だが、別に俺が継ぐわけでもないのでどうでも良いであろう。

あとは屋敷を維持する使用人達であったが、先代から仕えている執事のアーベル七十一歳に、メイドも四名いるが、これは若い子にするとまたあの家庭計画ゼロの父アルトゥルが孕ませてしまう可能性があるので、全員村のバアさんばかりになっていた。

他にも戦時に軍を指揮する従士などもいるのだが、みんな基本普段は村の中で農夫や職人、猟師、鍛冶師などとして働いているので屋敷にはおらず、全員村内にある自宅から通勤していた。

こんな辺境の貧乏村で、兵農分離とかは夢物語でしかないようだ。

有事の際に、忠誠を誓った主家のために兵を出す。

そのために、狭いとはいえ領地を貰っているのだが、肝心の戦争

とやらはここ二百年以上も発生していないらしい。

そもそも、この現当主アルトゥル・フォン・ベンノ・バウマイスターが治めるバウマイスター騎士領は、主家であるヘルムート王国領内の南端にある。

現在ヘルムート王国の仮想敵国は、王国のあるリンガイア大陸をほぼ南北で二分しているアーカート神聖帝国だけである。

更にこの両国は、ヘルムート王国は南方未開発領域に、アーカート神聖帝国は北方の未開発領域の開発に資金と労力を多く費やしていた。

つまり、両者共に戦争などしている余裕がなかったのだ。

それでも、今から二百年前くらいまでは、数年に一度は諸侯軍の召集があったらしい。

だが、無駄に人・金・食料・物資ばかり消費して損ばかりであると言う理由から、国境線を確定して停戦条約を結んでしまっていた。

更に、その後両国間で貿易も始まってしまったので、今では極一部の強硬派を除いて、戦争などという言葉を口にする者はいなくなってしまったそうだ。

どうやら、戦争にだけは借り出されないで済むらしい。

その部分では、ラッキーとも言える。

「あなた、いかがなされましたか？」

黒パンに野菜と肉の細切れの入った、塩だけで味付けしたスープ。

何とも味気ない食事であったが、朝から肉が食えるのは貴族の証であるらしい。
貴族は一日三食、農民は一日二食。

パンとスープのメニューに、身分差はあまり存在しないらしい。
ボソボソと硬い黒パンが、柔らかい白パンになったり、そこに、ジャム、バター、チーズ、紅茶などが付くか。
あとは、スープの具が貧しいか豪華になるくらい。

農村と都市部、他にも地域によっても大分差はあるようだが、俺が聞いている範囲ではそういう事のようであった。
本当に事実なのかは、外の地域に行ってみないとわからないのだが。

ただ残念なお知らせであったが、我がバウマイスター騎士領はかなり貧しい方であるらしい。

「冒険者ギルド支部の設置だが、見事に断られてしまった」

「まあ、お仕事ならいくらでもありましょうに」

「もっと開けていて、交通の便も良い、同じように稼げるポイントならいくらでもあるそうだ」

我が新しい父アルトゥルは、半分ほど残ったスープ皿の前で苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

前に、この新しい世界には魔法が存在する事が確認されたが、今度は冒険ギルドまで存在する事が確認された。
魔法があると言う事は、これは魔物のような生物も存在していて、

これを狩って生活の糧にする冒険者も存在するのではないかと思っていたからだ。

「うちの領内の魔物は手強いからな……」

「父上、ここは一度軍を召集してある程度を一気に狩らないと」

「クルト、それは出来んのだ。ブライヒレーダー辺境伯殿の二の舞はゴメンだからな」

長男で跡取り息子のクルト兄さんが、『領内で軍を集めて一気に討伐しては？』と進言したが、それは父アルトゥルによって退けられてしまう。

「あの……、父上？」

「何だ？　ヴェンデリン。スープのお替りなら無いぞ」

昨日の夢の情報によると、俺は八男で現在数えで六歳。
しかも、一つ上の七男とは七歳も年が離れている。
食事の席も一番端であったし、家が貧乏なのであろう。
ただ質問をしただけなのに、スープのお替りを無心したと思われるところが、この家が貧乏である証拠とも言えた。

「いえ、スープのお替りの話ではなくて、ブライヒレーダー辺境伯様が魔物の討伐軍を出した件についてです」

「ああ、数年前に一部の利権を条件にバウマイスター騎士領内の魔物の討伐をお願いしたのだ……」

相当の利権を条件に、断腸の思いでお願いしたらしいのだが、下手に大軍で魔物の領域に攻めたために向こうを無駄に刺激してしまい、ブライヒレーダー辺境伯の二千人の軍勢は哀れ壊滅的な打撃を受けたらしい。

直後にブライヒレーダー辺境伯は代替わりをし、新しい当主の最初の仕事が壊滅した諸侯軍の建て直しだったらしいので、相当に大損害だったようだ。

「新しいブライヒレーダー辺境伯殿に言われたよ。『他領の利権を貰うなど、貴族としては相応しくないので』とな。要するに、二度と我がバウマイスター騎士領内の魔物とは関わらないという事だな」

どうやら俺は、とんでもない魔境で成人までを過ごさなければいけないようであった。

そう思うと、口に入れたスープが途端に不味く感じられるのであった。

実際、少量の塩でしか味付けされていないので、あまり美味しい物ではなかったのだが。

第四話　バウマイスター騎士領。

「我がバウマイスター騎士領内は、実はその領域の広さで言えば大公領に匹敵するほど広いんだ」

朝食後、俺は同腹では一つ上の兄エーリッヒから、自分の実家であるバウマイスター騎士領内の実情について説明を受けていた。

六歳の子供が急にこんな難しい質問をするのでおかしいと思われる心配もあったが、新しい両親も含め、他の兄弟や使用人達も特に違和感を感じていないようだ。

というか俺は、この温和で知的な顔をした少年五男エーリッヒよりも十歳も年下な、味噌っかす扱いの八男なので、今まであまり注目もされていなかったのであろう。

味噌っかす扱いなのも、時としては助かる事もあるようだ。

「では、全てを開発すれば父上は……」

「開発できたらな。そう……、辺境伯は堅いだろうね」

ただ兄エーリッヒの口調は鈍く、もし開発できたらという事らしい。

我が新しい故郷バウマイスター騎士領内は、一応は東部と南部が海に面している。

だが、我々が辛うじて開いている土地との間には、広大な未開地と森が広がっていた。

内外の人間から『魔の森』と呼ばれるこの森には、様々な自然の食材や薬草、一部では鉱物や宝石などを産出する場所もあり、開発できれば莫大な富をもたらすはずであった。

だが、同時にこの森は魔物の宝庫でもある。

魔物とは、発生のメカニズムは不明であったが、普通の野生動物が巨大・凶暴化したり、明らかに自然の生態系から一脱したような生き物の事を指す。

彼らは繁殖力が豊富で、その強さは最弱の物でも普通の人間では歯が立たない。

その代わりに、それらを倒すと毛皮や牙などは高価な素材となり、肉なども美味で高級であった。

だからこそ、彼らの討伐を専門とする冒険者達や、彼らを支援・管理する冒険者ギルドが存在するのだが、問題なのはその冒険者ギルドにすら支部設置を断られるほど、このバウマイスター騎士領が辺境にあるという事であろう。

「確かに、魔の森は強い冒険者にとっては実入りが大きいのかもしれない。けれど、あのくらいの魔物の巣は、大陸中に何千箇所も存在していてね……」

リンガイア大陸には、このような魔物の住まう領域というのが大小何千箇所も存在しているらしい。

それは、荒野だったり、平原だったり、川や湖沼だったり、うちのように森だったりと。

とにかく一定の領域が魔物のテリトリーとなっていて、そこに侵入する人間や他の動物達を見つけると排除してしまう。
先程、父アルトゥルが話していたブライヒレーダー辺境伯軍の悲惨な最期は、魔物の縄張り意識を軽視した結果のようであった。

「ブライヒレーダー辺境伯軍の最後に関しては、あれは父上も先代ブライヒレーダー辺境伯も焦り過ぎたというのが……。あとは、中央の王宮側の判断もかな？」

それに、単独や少人数でこっそりと魔物の領域に侵入し、その力量に合わせて小数の魔物を狩って来る冒険者という仕事はちゃんと成立しているそうだ。

勿論途中で命を落す者も多いが、危険な分実入りも大きいので、一代で財を成し、有名になって王宮や貴族に仕える者も多いとの兄エーリッヒからの話であった。

「ですが、エーリッヒ兄さん。ならば、どうしてギルド支部設置を断られたのですか？」

「とても手が回らないのさ」

そう、魔物の住まう領域は王都の近くにも複数存在しているのだ。
彼らはなぜか自分達のテリトリーからは一歩も出て来ないのだが、逆に侵入した冒険者や軍勢には容赦をしない。
一攫千金を求めて魔物の領域へと侵入する人間と、それを排除しようとする魔物達との死闘。

よって、いくら多くの人が冒険者となっても、その分消耗もするので、リンガイア大陸には未だ中央部にも手付かずの魔物の住まう

領域が多数存在している。

当然これら領域の開発など不可能なので、ヘルムート王国もアーカート神聖帝国も魔物の住まう領域を『大陸の痣』と呼んで悩みの種となっていたのだ。

「考えてもみるんだ。いくら辺境とはいえ、たかが騎士爵しか持たない我がバウマイスター騎士領が広大な領域を有するのかを」

バウマイスター騎士領の起こりは、王都で無役で燻っていた貧乏騎士がスラムなどから数十名の貧民達を連れ、この地に農村を開いたのが始まりらしい。

「王宮は、まさかこの地に人間が農村を開けるとは思っていなかったようで、ご先祖様が村の設置に成功したと報告を受けるとすぐにバウマイスター騎士領の成立が認められたようだね」

とはいえ、このバウマイスター騎士領は恐ろしいほど辺境にあり、外部との交流手段も恐ろしいほど乏しかった。

「北・西部の領域境を走る山脈の麓に開いた三つの村に、人口が約八百人。主産業は農業と僅かな狩猟・採集物のみ。あとは、少しだけだが鉄と銅が採れるのが救いかな」

隣人には、うちに関わって痛い目を見たブライヒレーダー辺境伯領が西部に、北部にはうちと同じような弱小領主連合の領地が固まっているそうだ。

ただ、その間には飛竜が群れを作って生息する山脈が走り、他にも魔物が多数生息するので、彼らとの交流は数ヶ月に一度訪れる商

隊との交易のみであった。

「辛うじて、何とか護衛付きなら通れる細い山道が存在するらしい。ただ冒険者の護衛は必須だし、その分外部からの輸入品は高く付いてしまうんだ」

更に、こんな辺鄙な村まで、しかも飛竜まで襲って来る可能性がある商隊の護衛任務は冒険者に人気が無いそうだ。

当然報酬は弾まないといけないのでその分商品の値段は上がるし、父アルトゥルは領主の権利とも言える関税すら掛けられない状態にあるらしい。

「関税なんて掛けたら、ここに来る商隊なんてゼロだろうからね」

兄エーリッヒは苦笑しながら説明を続けてくれたが、要するに四方を魔物の住まう領域に囲まれ、その地も含めて膨大な未開地が領地として王国から認められているものの、まず開発など不可能な状態にある田舎の弱小領。

これが、俺の新しい家であるバウマイスター騎士領の現実であるようであった。

第五話　バウマイスター騎士爵家の人々。

「じゃあ、僕はこれから剣の稽古があるから」

「ありがとう、エーリッヒ兄さん」

「なあに、可愛い弟のためさ」

朝食後、まだ見た目がまだ幼い俺に一通り詳しく自分の家についての説明をしてくれた五男エーリッヒであったが、彼は剣の稽古があると言って屋敷を出て行ってしまう。

昨日の夢の内容から、エーリッヒ兄さんはあまり剣が得意ではないようで、下級とはいえ貴族の嗜みとして早く剣を覚えようと自主的に訓練を重ねているようであった。

とはいえ、実はこのバウマイスター家に優れた資質を持つ剣の使い手など存在していないらしい。

こんな魔物に四方を囲まれた領地なのでみんなリアル・〇ンハン状態なのかと言えば、実はそうでもないようだ。

それは、ここ数千年間一例の例外もなく、魔物が絶対に自分のテリトリーから出て来なかった事が大きい。

隣に魔物の住まう領域があるが、彼の領域に踏み込まなければ魔物の脅威には曝されない。

更に、言っては悪いがこのバウマイスター騎士領は貧しい農村であり、当主である父アルトゥルや跡取りである長男クルトを除けば、

全員が何かしらの仕事を割り当てられているのだ。

さすがに畑を耕す事は無かったが、徐々に人口が増えるバウマイスター騎士領のために、いまだ手付かずの魔物が住まない平原の開拓を行い、普通の野生動物しか住まない森などで肉を得るために狩りを行い、川で魚などを獲りと。

あまり貴族の仕事には見えないのだが、この子沢山貧乏騎士家にはある意味相応しいのかもしれなかった。

どこの地方下級貴族家も、実情は似たような物らしいが。

それと、あとは空いた時間に剣や弓矢などの武芸や、乗馬などの稽古も行うらしい。

「あれ？　貴族としての礼儀作法や、字の読み書きや計算などは習わないのですか？」

「私達のような辺境の下級貴族が、礼儀など習ってどうするのです？　叙任以外で、王都に用事など無いのに」

意外と稽古の内容が少ないので、俺は貴族の奥方なのに縄作りに精を出している母に聞いてみるのだが、彼女は訝しげな表情をしながら俺に答えていた。

要するに、このバウマイスター騎士領に居る限りは、当主が代替わりをする際には長旅をして王都に行きそこで叙勲を受けるが、後は貴族としての礼儀作法など特に必要は無いという事らしい。

それにその叙勲も、代々バウマイスター家に伝わる鎧を着て謁見

の間へと行き。

『我、ヘルムート王国国王ヘルムート〇〇世は、汝、〇〇に第七位騎士爵を授ける事とする』

『我が剣は、陛下のため、王国のため、民のために振るわれる』

このやり取りだけで終わってしまうらしい。

王国には騎士など沢山いるので、忙しい王様が長時間相手などしないのであろう。

俺の新しい母は、器用に縄を結いながら説明してくれた。

確かに、一生に一回このやり取りだけならば礼儀作法も必要ないであろう。

高級貴族や、中央で官職に就く法衣貴族は別としてだ。

「それで、文字の読み書きや計算なのですが……」

これも、あまり必要性が無いらしい。

貴族なのにと思ってしまう俺であったが、そういえば中世ヨーロッパでも、文字が書けない貴族というのはかなり存在していたそうだ。

自分の名前くらいはサイン出来たが、領地の税の計算などを村長や名主連中に任せきりにしていたので、全く必要性を感じなかったと何かの本で読んだ記憶があった。

中央の王宮に居る貴族がそれでは駄目だが、治安維持や戦争で活躍できればさして問題にもならなかったらしい。

どうせ普段は自分の領地に篭っているので、そのスキルを披露する機会も無いのだから。

礼儀作法も、中世欧州でも肉を手掴みで食べるような人もいたようであったし。

話を戻すが、うちも全員名前くらいは書けるが、あとは人によっては簡単な文章を読み書きできる。

その程度であるらしい。

「そういえば、ヴェンデリンは簡単な文章を読み書きできたわよね？」

八男で味噌っかすではあるが、領民のように幼い頃から労働力として数えられているわけでもない。

そんなわけで、俺が乗り移る前のヴェンデリンは一人書斎に篭って本を読んでいるような子供であったらしい。

味噌っかす八男の一番の仕事は、仕事をしている家族の邪魔にならない事であった。

「はい、少しですけど」

「もっと頑張らないと」

母にせっ突かれてしまうが、考えてみれば俺は八男なので当然家は継げないし、この領地に残れるかすら疑問でもある。

兄エーリッヒが懸命に苦手な剣を習っているのも、きっと将来を見越しての事なのであろう。

それと、兄エーリッヒはこの家では例外的にかなり文字の読み書きや計算が出来るようだ。

「書斎で本を読んでいます」

「そうね」

母との話を終えた俺は、急いで書斎へと向かっていた。

みんなそれぞれに忙しく、しかも俺は恥かきっ子で味噌っかすでもある。

兄達とは年齢も離れていて、特に長男・次男とはまるで会話すら存在しないのだ。

これは別に俺を嫌っているという事ではなく、あまりに年齢が離れ過ぎているので接点が無いというのが正解なのであろう。

夢の記憶の中では、ようやく六歳になったので少しだけ剣や弓の稽古を始めていたが、まだ六歳の子供に無理は禁物であり、残りの時間は他の大人達の迷惑にならないようにする。

これが、俺に課せられた使命とも言えた。

「へえ、意外と蔵書の数が多いな」

貧乏貴族家でもそれなりに歴史があるので、父の書斎にある蔵書の数は多かった。

分野も、歴史や地学から、文学、数学、鉱物、生物、魔物学などの平成日本で言うところの高校卒業レベルから、簡単な童話や絵本に、料理の本まで。

料理の本があるのにうちの飯は貧しいような気もするが、その料理に使う材料が確保できないからだと諦める事とする。

「普通に読めるな。というか、日本語」

家族と日本語での会話が成り立っているでそんな予感はしていたが、この世界は日本語が共通言語になっている。

ただ、若干の違いはあるようであった。

まず、庶民や中央の王宮に縁の無い下級貴族などが少しは読み書きが出来るという文章。

これは、全く漢字が使われていなかった。

漢字部分をひらがなで、ひらがなの部分がカタカナで記載されているのだ。

この世界に普及している大半の文章がこの形態らしく、俺にはかえって読み難いと感じてしまう。

次に、王国や隣の皇国でも、王族や皇族、高級貴族、中央政府で発行される公文書や、教会や各種ギルドの上層部、各分野の学者や学会など。

要するに、偉い人達が使用しているのが普通の日本語の形態に近い文章であった。

俺には、物凄く読みやすかった。

というか見慣れた物であったが、一部に意味不明な物も存在している。

なぜか、一部名詞に英単語が混じっているのだ。

あと、日本語をローマ字表記した物とかだ。

英単語は難しくても高校レベルだし、大半の文章は日本語なので問題なかったが、本によっては漢字で書かれた名詞がローマ字表記だったりと、イマイチその法則は不明であった。

更に、美しい失礼の無い公文書とは、ひらがなとカタカナが七割、漢字が二割、その他が一割というのが黄金比率らしい。

正直どうでも良いような気がするが、そんな事を気にするのがどこの世界でも官僚や役人という生き物なのであろう。

とりあえず今は六歳児なので、今は出来る限りの体力作りや武芸の訓練に励み、後はこの書斎の本を読んでこの世界の知識を蓄えるのが良いであろう。

そう考えながら本棚の端に目を向けると、そこには俺が今一番見たいと思っていたジャンルの本が並んでいた。

「初めての魔術、中級魔術、上級魔術、錬金術の基礎、初めての魔法具作り。おおっ！　魔法って本当にあるんだな！」

俺は、もしかしたら魔法が使えるかもと心躍らせながら本を手に取るのであった。

第六話　魔法の存在。

「魔法かい？」

「はい、魔法です」

本を読み始めたところで昼食の時間となってしまい、俺は断腸の思いで屋敷の食堂へと向かっていた。

昼食のメニューは、朝と同じく黒パンと塩だけで味付けをした野菜と細切れ肉のスープであったが、この世界では飯が食えるだけ幸せと考え、食事を口に運んでいく。

ひと通り食事を食べ終った俺は、隣の席に座るエーリッヒ兄さんに魔法について尋ねていた。

ちなみに、両親や上二人の兄達は新しく広げる開墾地の相談で忙しいらしく、俺の事など気にも留めていないようだ。

「魔法は、父上の書斎に大体の本が置いているよ。魔法の修練に使う水晶玉もあるし」

この世界では、特に魔法技術が世間から秘匿されているという事もないらしい。

実際にそれらの詳しい書籍類が、魔法とは縁遠そうな父の書斎に置かれているからだ。

「水晶玉もそうだけど、他の魔法関連の書籍も他の分野の書籍に比べると格安で流通しているのさ」

その理由は簡単で、魔法の才能がある人間が極端に少ないからだそうだ。

しかも、魔法の才能には遺伝性が無い。

いきなり農民の子に天才的な魔力を持つ子供が生まれる可能性も高く、とにかく庶民にでも魔法関連の書籍が手に入り易い環境を整え、自分に魔法の才能があるのを知らずに人生を終えるのを無くそうとしているのだそうだ。

ちなみに、その助成は王国が行っている。

優秀な魔法使いとは、それだけ国家に利をもたらす存在だからである。

「どんな人間にも微弱な魔力が存在する。でも、その程度の魔力では魔法は使えないんだよ。魔法が使える人間は、千人に一人と言われている」

しかも、その中の十人に五人は、火種が出せる、一日にコップ一杯程度の水を出せるなど。

その程度の事しか出来ないらしい。

「魔物を焼けるファイヤーボールを出せる魔法使いなら、王族や貴族が挙って高給で雇うだろうね。そんな人は、滅多にいないけど」

そこまで行くと数千人に一人くらいなので、なかなか見付からないのであろう。

この国に住まう人間の数は、約五千万人との本からの知識なので、それなりの魔法が使える人間は、大凡一万から二万人くらいしかいない計算になるのだから。

「あとは……」

魔法使いには、いくつかの傾向があるらしい。
火の玉、氷の矢、岩の棘、カマイタチなどの攻撃魔法の使い手に。
攻撃力、防御力、敏捷性、対魔法防御などを嵩上げして肉弾戦で戦う者や。

遠く離れた人間に通信を送ったり、会話をしたり、高速で目的地まで移動したりと戦闘系以外で活躍をする者。

そして最後に、鉱石から高純度の金属を精製し、魔力を貯め込む魔晶石を使用した、便利な魔道具の作成を得意とする者など。

後者に行けば行くほどその人数は少なく、極論すれば稼げる存在になれるらしい。

「魔法ですか。夢が広がりますね」

「まあ、そうだね……」

俺の発言に、兄エーリッヒは微妙な笑みを浮かべていた。
まさに夢見る子供その物だと思われたのだろうが、さすがに中身は二十五歳なのでそこまで夢を見ているわけではない。

ただこういう態度を取っていれば、大人達も俺を微笑ましく見てくれるであろうという一種の計算から来ていたのだから。

「僕も、ヴェルくらいの頃には毎日魔法の練習をしていたのを思い出すよ」

昔を思い出すように、エーリッヒ兄さんは話をする。
それと、ヴェルとは俺の略称というかあだ名のような物であるらしい。

ヴェンデリンを、どう縮めるとヴェルになるのかは不明であったが。

「早速、魔法の練習をしてみます」

「頑張れよ」

素早く食事を終えた俺は急ぎ書斎へと向かうが、それに言葉をかけてきたのはエーリッヒ兄さんだけであった。
他の家族は剣の訓練や新しい開墾地の話に夢中で、俺に関心など持っていなかったのだ。

役立たずの子供を最低限食わせてくれているし、過酷な労働を課すわけでもないので酷い家族ではないのだが、今はただ早く独り立ちしたいと願うのみであった。

第七話　魔法使いを志す。

「さて、魔法の練習を始めるか」

再び書斎に戻った俺は、まずは本棚から初級魔法入門という本を引っ張り出し、無造作に放置されている埃を被った水晶玉と共に目の前に置く。

この水晶玉の扱いを見るに、本当にこの家には魔法が使える人間は存在しないようであった。

間違いなく、うちの領内にもそんな人はいないのであろう。

何しろ、数千人に一人なわけだし。

「ええと……。まずは、覆うように水晶玉に両手をかざします」

本に書かれた通りにすると、水晶玉は薄く虹色の光を放つようになる。

「虹色の光が出ますが、それは誰もがそうなるので驚かないでください。次に、その虹色の光を手の平から吸収し、体内で循環させるようなイメージを頭に思い浮かべてください」

また本に書かれた通りにすると、水晶玉から虹色の光が消え、次第に体が熱くなってくるような感覚を覚える。

「水晶玉から虹色の光が消え、体が熱く感じた人は魔法の才能があると断言します。とはいえ、その才能には大きな差があるので過剰

な期待はしないように。あと、この魔力を体内で循環させる訓練は、毎日数をゆっくり１００数える間実行すると好ましいでしょう」

本に書かれた内容によると、魔力とは人間の体内にある魔力路という血管のような器官を循環し、魔力袋と呼ばれる臓器に蓄えられているらしい。

ただ、この二つの器官は当然人間を解剖しても発見はされない。学説によると、血管と肝臓の、違う次元の同位置に存在するというのが仮説で、それはまだ立証はされていないが、ほぼ事実であると本には書かれていた。

「魔力の循環を行い、魔力路を広げて活性化させると魔法の威力が上がり、意識して魔力袋に大量の魔力を送り込むと、同じく魔力袋が広がって魔力量の増大に繋がるか」

魔力袋とか、子供の頃に見た〇ルトラマンの怪獣が持っている臓器のようだと感じてしまうが、魔法の訓練で大きくしても腹が膨らむという事はないようだ。

あと、魔力量を増やすのに魔法を大量に使うのは、この手の物語ではデフォであろうか。

他にも魔法の精度と威力、それに魔力の全体量が上がるそうだ。

「ただ、どんな人間にも限界値があります。三日連続で魔力の増大を実感できない場合は、ほぼ間違いなく魔力量の成長限界です。使える魔法の種類を増やしたり、威力や精度の向上に努めた方が懸命でしょう」

なるほど、ここまで研究は進んでいるし、その成果を惜しむ事な

く世間に公表しているようだ。
習得の方法は研究され尽くしているのに、それを使える人間は極めて少ない。
だがとても便利で、需要は増える事はあっても減る事はない。

「つまり、魔法が使えれば自立への道は早くなる」

続けて今度は、初級魔法の習得に入る事とする。

とはいえ初級なので、マッチやライター程度の火種を指先に出し、持って来たバケツにコップ一杯分程度の水を注ぎ、手の平の上に小さな竜巻を起しては消し、外から持って来た土を鋭い棘に変えて的にした端切れの板にぶつける。

本に書かれている、この程度の威力の魔法の繰り返しであった。
なお、初級の魔法は頭でイメージをした物がすぐに出来るようになっていた。
本によると、特に小難しい術式の詠唱や魔方陣を書く必要は無いらしい。
人によっては、自分で考えた短い掛け声や文言などを呟いたり、叫んでみたり、それに杖を振るう動作を含めたアクションなどを加えてみたりと。

それで魔法の精度や威力が上がれば、それはその人に向いている発動方法であるし、俺のように無詠唱で頭の中でその魔法が発動した時のイメージ画像を思い浮かべて成功してしまう人もいる。

『簡単に言えば、才能のある人はすぐに出来るようになるし、駄目な人はいくら努力しても無駄』などと、本にはかなり酷い説明文が書かれていた。

「一週間続けて特に難しいと思わなければ、次は中級編です」

そう書かれているので、予習代わりに中級編の本をパラパラと捲ってみる。

中身は、火の矢、氷の矢、距離の離れた地面から岩の棘を出して遠距離の敵を串刺しにする、小さなカマイタチで敵を斬るなどの魔法や、簡単な身体機能強化などの魔法が書かれていた。

「どうせ、家の中でハブられているからな。毎日魔法の練習に励むか」

それから一週間、俺は本に書かれた通りに魔法の修練を行うが、なぜか家族からは『魔法が使えたのか？』と一切聞かれていなかった。

多分、宝くじに当たったのかと真面目に聞くような行為だと思われたからであろう。

味噌っかすなので、全く期待もされていないのであろうし。

第八話　味噌っかすは、魔法の修練に励む。

朝、日が昇ると共に起床し、朝食後に五歳児が体を壊さない程度に体に合わせた木刀や槍を振るい、弓を的に向けて放つ訓練を行ってから、書斎で一人黙々と本を読む。

昼食後は魔法の訓練を行い、夕食後も暗さで本の文字が読めなくなるまで読書か魔法の訓練を行う。

幸いにして、すぐにライト（明かり）の魔法が使えるようになったので、その時間は夜遅くにまで伸びていた。

体が子供なので、比較的すぐに眠くなってしまうのが欠点ではあったが。

ちなみに、あの書斎には父はほとんど入室して来ない。

彼は漢字などが一切読めないし、領主としての執務もほぼ全て村長や名主達に丸投げで、書類へのサインなどは下品にも食堂で済ませてしまうからだ。

というか、税金とかをチョロまかされたらどうするのであろうか？

俺には関係ないので、正直どうでも良かったのだが。

「さてと、今度は中級魔法だな」

転生と魔法の訓練を始めて一週間、俺は今度は中級魔法の訓練を始めようと誰もいない森の中にいた。

さすがに室内で、火の矢を飛ばせるわけがないからだ。

それと、俺は外に遊びに出かけると言っても、やはり家族はあまり関心がないらしい。
忙しいので、六歳のガキに構ってなどいられないのであろう。
そんなわけで、俺は屋敷の裏にあるかなり広大な森の入り口に立っていた。

この森は、所謂普通の森だ。
魔物などは一切住んでおらず、家族や村の領民達が定期的に蛋白源であるウサギや猪などの野生動物を狩り、薪や山菜や木の実などを採集する。

要するに、うちが管理する大切な生活資産というわけだ。

入り口くらいならそんなに危険性があるわけでもないし、火の魔法で木などを焼かなければ怒られる事もないはず。

俺に万が一の事があっても、家が傾くはずもないので完全に放任されているというのも事実であろうか。

気軽に魔法の練習が出来る分、これはラッキーでもあったのだが。

「目指せ上級だよな。やっぱり」

本には、中級魔法は一ヶ月ほど根気良く訓練を行うようにと書かれていた。
詳細なマニュアルではあるし、実際に書かれた通りに事が進んでいるので楽ではある。

俺は、本に書かれた中級魔法を一つずつ順番に試していく。
そしてそれが終わると、今度はその基礎魔法を用いた応用魔法に、自分で考えたオリジナル魔法。
あとは、所謂戦闘系以外の魔法の訓練なども開始する。

「やっぱり、ここでは上級魔法の習得は無理だったか」

実力的にという理由ではなく、こんな屋敷の裏の庭で巨大な竜巻やファイヤーボールを連発するわけにはいかないからだ。

まだこの身は六歳であるし、魔力量の増大や魔法精度の上昇は確実にしているので、ここは根気良く中級魔法で魔法技術の向上を図る事とする。

それと、目立たなければ別に上級魔法を訓練しても構わないわけだ。
今は、その機会があまり無かったが。

「大体一キロ圏内くらいかな？」

そんなわけで俺は、目立たずに使える上級の風魔法を駆使した探知の魔法を練習していた。
この魔法は、指定範囲内の自分以外の存在を全て把握するという魔法で、これの使い手はとても少ないと本に書かれていた。

それと、精度もピンキリであった。

有名な探知魔法の使い手は、数十キロ範囲の生物の動きを全て察知できるらしい。
他にも、ただそこに何か生き物がいるとしか判別できない人に、

人間が何人、このくらいの大きさの動物や魔物が何匹かとか言う人もいる。

更に凄いと、一度探知した人間や生物などを記憶していて、その個体が探知に範囲に入ると一発で解る人間レーダーのような人など。

恐ろしい探知精度を持つ人もいるようだ。

俺の場合は、ここまでの訓練で半径一キロ程度。

探知対象の大きさと数くらいは把握可能になっている。

イメージとしては、頭の中にレーダースコープが浮かぶようなイメージだ。

輝点の位置で包囲と距離を、大きさで対象物の大きさを把握していた。

まあ、探知できるのは人間と、ウサギ、猪、熊などの野生動物くらいなのだが。

この世界に転生して一ヶ月あまり、いまだに魔物の姿は見た事がなかったが、さすがに放任主義の新しい家族でも、あえて六歳の子供を死地に向かわせないようにはしているのであろう。

「あとは、地道に魔法の訓練に励むとしてだ」

この探知の魔法はとても便利であった。

いくら魔法が使えても、五歳の子供に猪や熊の相手は難しいはずで、その危険を回避しながら森の探索を行えるのだから。

せっかく森を探索しているのだから、というか実は昨日の晩に今まで碌に話しかけてこなかった父が、俺にある命令を出していたの

だ。

『ヴェルよ。最近は、森に探索に行っているらしいな』

『はい』

『森には危険な動物も多い。気を付けるように』

えらく簡単に許可が出たものだが、やはりそこは放任主義の継続なのであろう。

それと、やはり八男の俺が万が一に死んでも、バウマイスター騎士領の存続には何の影響もないわけで。

『それと、森の中で食べられそうな物があったら採取してくるように。薪も出来る限り拾ってくるのだぞ』

さすがに開墾を手伝えとは言われなかったが、財政的に六歳にして家の手伝いをする羽目になっていたのだ。

なので今日の俺は、毎日訓練に使う木剣を腰に差し。

ただこれはどう考えても、無いよりマシという方が正しいであろう。

鉄や青銅製の剣を子供に渡すほど、この領の経済は豊かでもないし、今の俺に金属製の剣など持たせるだけ無駄である。

あとは、薪を載せる背嚢に、訓練に使っている小さな弓と矢が十本あまり。

矢は小さく、しかも訓練用なのでただ木を尖らせただけの鏃しか付いていない。

運が良ければ、小型の鳥くらいは落せるのであろうか？
共に無いよりはマシで、使う前に逃げろよという事のようだ。

「武器には、全く期待していないけどね」

それよりも、自分で考えた魔法の方が威力があるはずであった。
石で短めの矢を生成し、それを風の力で飛ばす。
クロスボウを魔法で再現しただけなのだが、この世界の魔法はこんな改良も比較的簡単に行えた。
あまりに才能次第なので、考えても実行できるかは運任せであったが。

幸い、俺はこの魔法の展開に成功している。
威力も、当たり所さえ良ければ熊すら倒せるであろう。
連射もソコソコ可能で、今は発射速度の改良に勤しんでいる。

コントロールについては、自身の弓の訓練を参考にしているので、これも全く無駄というわけでもなかった。

「ええと……。この山菜は食べられるか」

他にも、家で読んだ図鑑を参考にキノコや野苺などを採取し、あとは薪を拾って背嚢に積んで行く。
次第に荷は重くなっていくが、これは風の中級魔法である軽量化と、自身の力を筋力強化の水魔法で嵩上げして誤魔化していた。

更に、疲労した筋肉に水の回復魔法をかけていく。
筋肉の中の乳酸が消えて、体が軽くなったような感覚に襲われる。

「今まで本に書かれていた魔法は全部使えるんだよな。将来は、安定した宮仕えを目指すかな」

魔法の訓練も兼ね、結構な量の薪や山菜、野苺が獲れたので今日は家に帰る事にする。

魔法のおかげで帰り道も軽快に進み、そろそろ出口に差し掛かった頃、ふと視界に一羽の鳥の姿が見える。

「（ホロホロ鳥だ）」

ホロホロ鳥とは、この大陸中に多数生息している鴨を一回りほど太らせたような鳥である。

その肉は美味で、羽なども装飾品の材料として人気があった。

ただ、この鳥はなかなか捕まえられない。

見た目とは違い、人の気配に敏感で、飛ぶスピードも早かったからだ。

我が領で一番の猟師が一日森で粘って、運が良ければ一匹獲れる程度。

当然、滅多に食卓には上らない。

俺もこの一ヶ月で、ほんの小さい肉片を一切れ口にした程度である。

貰えないよりはマシであったが、ああ悲しき小さな八男の悲劇とでも言えようか。

「（あんな小さな一切れでも、肉は旨みが凝縮して美味しかったな。待てよ……）

もし俺が、このホロホロ鳥を狩れたら？
毎日、黒パンと塩野菜スープだけの食事に焼き鳥が付くではないか。

うちの家族は、放任主義ではあったが冷徹ではない。
このホロホロ鳥を狩った功績を無にはしないはずだ。

「（決めた。待っていろよ！　肉！）」

この一ヶ月ほど、転生して魔法の特訓は楽しかったのだが、食事に関しては栄養のためと割り切っている自分がいた。
しかし、自分はやはり食に拘る元日本人なのだ。

拘りのレベルが若干低いような気もするが、そんな事を気にしてはいけない。

今は、とにかくホロホロ鳥を狩る事に専念する。

とはいえ、こんな射程の短い小さい弓では近付く前にホロホロ鳥は逃げてしまうであろう。

「ならば、新しく開発したクロスボウの魔法で！」

最初は五発ほど、大きく狙いを外してホロホロ鳥に逃げられ続けたが、次第に狙いは正確になっていき、遂に二羽のホロホロ鳥を仕留める事に成功していた。

「ただいま」

「ヴェルか。ちゃんと薪は……、お前、ホロホロ鳥を仕留めたのか！」

二羽のホロホロ鳥は無事に食卓へと並び、功労者である俺は久しぶりに美味しい焼き鳥を食べる事に成功する。

そして初めて、家族全員に褒められるのであった。

第九話　森での日々。

「森に行ってきます」

「熊や狼には気を付けるんだぞ」

この前、初めてホロホロ鳥を仕留めてから一週間後、いつものように森へと出かける俺に、えらく上機嫌な父の姿があった。

まだ六歳で役立たずだと思っていた味噌っかすが、家族の食卓を豊かにするのに貢献していたからだ。

元々員数外で、開墾の手伝いもまだ無理だと思っていた俺が、プロの猟師でも狩るのが難しいホロホロ鳥を毎日狩って来るようになったからだ。

他にも、野苺や山菜や自然薯など。

食べられる食材を的確に採集して来るので、最近では家族の受けも良くなっていた。

やはり、黒パンと塩野菜スープだけの食事には皆が辟易していたのだ。

だが、この村の生活はさして余裕があるわけではない。

人手の多くを、次第に増える人口に対応すべく新規の開墾と農作業に割り振っている影響で、狩猟と採集が行える人と時間が少なくなっていたからだ。

人を食わせる基本食材は、あくまでもパンの材料である麦。
その基本に則り、父は人手を動かしていた。

子供を回すというのは危険かもしれないが、俺は所詮は八男で、もし死んでも大きな影響があるわけでもない。

同じ子供でも、領民の子供は農作業や稼業の手伝いに忙しい。
更にその貴重な労働力に死なれると困るので、現在子供で森に入っているのは俺だけであった。

六歳の子供の稼ぎに期待する貴族ってどうなのかと思うが、これがこの世界の貧しい下級貴族家ばかりか、この世界の多くの人間の現実なのであろう。

俺が成人してから行く予定の都市部が、かなりマシである事を期待するのみであったが。

それでも俺は、己の食生活向上のために狩猟採集活動を続ける。
食事にホロホロ鳥や山菜を使ったおかずや、あの味気ないボソボソの黒パンに野苺を使ったジャムが好きに塗れるからだ。

他にも色々と手に入る物は多いし、何しろ森の中ならば自由に魔法の練習ができるのだ。

「一般的なその名を『報告』と言う魔法は……」

あまり派手な攻撃魔法の練習が出来ない分、俺は身体機能を一時的に強化する補助魔法や、他の生活魔法などの練習を主に行っていた。

探知で大型の野生動物が接近して来ないのを確認しながら森の奥まで進み、今度は魔法書の新しいページに書かれた魔法を試す事にする。

その新しい魔法『報告』であったが、これは文字通りに使用者に何かを報告する魔法だ。

試しに使ってみると、視界に入った数箇所にぼんやりと薄い光が光っている。

よく見ると、それは木の根元から地面に伸びている自然薯の蔓だったり、自生しているトリカブトだったりした。

なるほど、確かに何かの居場所をぼんやりと光る事で報告してくれるのだ。

だが、自然薯は食料として有効だが、トリカブトはこの世界ではあまり使い道が無い。

毒草なので、暗殺に使われる事が多いからだ。

毒だけど、使いようによっては薬になるとかは前の世界で聞いたような気もしたが、その使い方がイマイチ不明なので今のところは放置する事にする。

俺はまず、土系統の魔法を改良した掘削の魔法で自然薯を掘り出す。

前の世界でもそうだが、こんな六歳の子供が自然薯を自力で掘っていたら、それこそ日が暮れてしまうという物だ。

そこで、中級の魔法書に記載されている『掘削』の魔法を応用して自然薯を傷付けないように掘っていく。

すると、全長二メートルほどの見事な自然薯が掘り出されていた。
さすがは、普段はあまり人の出入りの無い森。
見事な自然薯だが、考えてみると長過ぎて持ち運ぶのに不便だ。
売り物というわけでもないので、半分に折ってから背嚢に括り付ける。

あとは、いつものようにホロホロ鳥を二羽狩り、他にも山菜やアゲビなどを獲って背嚢に詰めていく。

「しかし、この森の生態系や植生が理解できないな……」

前世の日本の森ではないので当然とも言えたが、ここには前世では見た事が無いような動植物に、松や杉や広葉樹に、ウサギに猪に熊に狼に、そして自然薯や山菜やアケビなどと。
日本でも御馴染みであった動植物が、まるでカオスのように混在している。

自然の恵みは、かなり多い方と言えよう。
ただ、普段は人手の多くを農作業に従事させているので、頻繁に狩猟採集に回す人間は、プロの猟師以外にいないようであった。

それと、熊や狼避けで基本は複数の成人男性で森に入るのが普通らしいのだが、そう簡単に複数の大人の男性が集まる事は労働環境的に不可能とも言えた。

「しかも、そのプロの猟師達も、自分の家から近い別の森で狩りをしているらしいし」

そんなわけで、この森は年に数回の集団狩猟の時期を除いて、普段は滅多に人が入って来ないらしい。

何とも勿体無い話だが、収量が安定しない自然の恵みよりも、税収になり、ある程度収量が計算できる農作物の方が優先なのは、これは領主として当然の考えとも言えた。

何しろここは他の領との交流が少ない僻地なので、自給自足が出来ないと飢え死にに直結してしまうであろうし。

「あとは……」

新たにぼんやりと光る場所を探すと、そこにはビワに良く似たような果実が木に成っていた。

確かビワの一種で、この世界でもビワと呼ばれていたはずだ。

俺は、一応毒を探知する魔法をかけてから皮を剥いて身を齧ってみる。

すると、ビワよりも甘い果汁の味が口の中に広まっていく。

他にも、アケビに似た果物や、柿に似た実も採取していく。

果物が獲れるので今は季節で言うと秋なのかと思ったのだが、そういうわけでもないらしい。

今は季節で言うと春と夏の間くらいらしいのだが、なぜ果物が成っているのかと本で調べると、『果実の成る時期は、その木の個体それぞれで違う』と書かれていた。

つまり、春に実を付ける木も、夏に実を付ける木もあり。

更にここは、冬でも雪など降らないで一部の樹木が枯れる程度で、冬に実を付ける個体もあるようだ。

さすがは、大陸の南部とも言える気候であった。

その割には、食生活が貧困なような気もするのだが。

とはいえ、今は子供の身なのでどうにもならない。

多くの魔法を使い、規定の収量を確保した俺は家路へと急ぐ。

「ご苦労様」

母に収穫の成果を渡し、二品ほどおかずが増えた夕食を堪能していると、父が突然こんな事を言い始める。

「猟師のエベンスが、『語り死人』を目撃したらしい」

「本当ですか？　父上！」

長兄クルトが驚きの声をあげる。

「ああ、五年前の犠牲者だろうな」

そう、五年前に魔物住まう魔の森の一部でもと開放を願った父と、その利権に釣られて軍勢を出したブライヒレーダー辺境伯の軍勢は大きな犠牲を出している。

幸いと言おうか、二千人もの他領の軍勢を領内に入れたので治安維持のために忙しかった父は魔の森に行かずに済んだ。

だが、父の家臣であった叔父が率いた軍勢百名は、僅か二十三名しか戻って来なかったらしい。

当然、その叔父も帰っては来なかったようだ。

せっかく人口が少しずつ増えていたバウマイスター騎士領において、七十七名もの成人男性の死は大きかった事は想像に容易い。

今の極端な農作業への人員の配分や、俺が森で危険と隣り合わせで狩猟と採集を行っても何も言わないのは、その辺の事情が大きいようであった。

なお、当のブライヒレーダー辺境伯軍も、先代当主を含めて千九百二十五名が戻って来なかったらしい。

世間の定義では、ほぼ全滅に近い犠牲であった。

「これから暫くは、死霊系の魔物に悩まされますか……」

「まだ、語り死人なのでマシとも言えるな。ゾンビだと討伐が面倒だ」

一切自分のテリトリーからは出て来ないのが常識である魔物であったが、唯一の例外はこの死霊系の魔物であろう。

元が人間なので、魔物になっても本能で故郷へと戻ろうとする個体がどうしても一定数発生してしまうからだ。

図鑑によると、本能のみで動くゾンビのような魔物は人間に害を成す厄介な存在らしい。

これは、早急に討伐が必要なようだ。

ただ動きも鈍いし、物凄く火に弱いので、油をかけて焼いてしまえば良いらしいのだが。

そして肝心の語り死人であったが、これは対応がケースバイケースになる。

死の恐怖で凶暴化していてゾンビのように焼くしかないケースや、普通の人間のように話しかけて来て、話しかけられた人がお願いを

聞くと成仏してしまうケースなど。

話しかけられる人は基本的には神父などの聖職者が多いようだが、波長が合えば普通の人でも成仏させる事は可能なようだ。

「神父様に頼みます？」

「マイスター殿は、年のせいで腰が悪くてな。どこにいるのかもわからない語り死人を探す事など不可能だよ」

こんな辺鄙な土地ではあるが、一応は王都にある教会の総本部から神父の派遣は行われている。

ただ、本当に神父は八十歳を超えた老人が一人だけ。

シスターもいないので、教会の雑務は領内のバアさんが数名で手伝っている有様であった。

しかも、このバウマイスター騎士領には信心深い人間などほとんどおらず、俺も数回だけ嫌々ミサに参加したのみであった。

多分、この老神父が天に召されない限りは、王都から新しい神父は来ないであろう。

「そういうわけなので、ヴェルも森に入る時には気を付けるように。その内、うちの領内から出て行く可能性もあるしな」

何とも無責任な父の話を聞きながら、不謹慎にも俺は語り死人に興味を持ってしまうのであった。

第十話　魔法のお師匠様との出会い。

「ようやく、波長の合う人間と出会えた。君の名は？」

父から語り死人の話を聞いた翌日、いつものように森へと入った俺は、そこで青白い肌が特徴の三十歳前後の人物に話しかけられるのであった。

「私の名は、アルフレッド・レインフォード。生前は、ブライヒレーダー辺境伯領でお抱え魔法使いをしていた人間だ」

この突然話しかけてきた人は、どうやら話題の語り死人であったらしい。

しかも彼は、俺の探知魔法にも一切引っかからず、採集のために下を向いているところを突然話しかけられたので、俺の心臓はバクバクしたままであった。

「驚かせてしまったようだね。つい、波長の合う人間に会えて焦ってしまったようだ。すまない」

この、容姿も言動も名前も紳士でイケメン兄さんは、驚く俺にすまなそうに頭を下げていた。

イケメンで性格も良いなんて、俺が女なら惚れてしまいそうなほどの好男子だ。

これで肌が青白くなければ完璧なのだが、その肌の青白さこそが語り死人の特徴なので仕方が無いとも言えた。

「年齢のわりに、探知の魔法が上手なようだね。というか、これほどの探知魔法を使える魔法使いが貴重とも言えるね。ああ、私が探知に引っかからなかった件だけど、何も死霊系の魔物がコレに引っかからないという事ではないからね。私が、探知を誤魔化す魔法の名手だからという事だけなんだ」

「物凄い魔法ですね」

「そうだね。この大陸で十人が使えるかどうかという魔法さ。当然、君にも覚えてもらう予定だけど」

「はい？」

突然の語り死人からの提案に、俺は思わず変な声をあげてしまう。

「語り死人を成仏させる方法は聞いているよね？」

「はい、その話を聞いて願いをかなえるとかで」

「私の願いは、この三十年の人生で得た魔法を授ける弟子に出会う事さ。君は魔力に長けているし、独学でほぼ一流の技量を得る事に成功している。魔法の会得とは、ほぼ独学で成し遂げる物だけど、一週間も私からコツを聞けば、その習熟は早まるはずだからね」

そんなやり取りの後、俺はこの元ブライヒレーダー辺境伯のお抱え魔法使いであったアルフレッド・レインフォード氏の弟子となる。

朝、武芸の簡単な訓練を終えてから森の奥へと向かうと、そこには家族を誤魔化すために俺に持たせる獲物や採集物を準備した師匠が笑顔で待ち構えていた。

狩猟と採集の時間を、なるべく魔法の訓練に当てるためだ。

「しかし、凄い物ですね」

「魔法を使えるとね。生活の糧には困らないものさ」

やはり師匠も、素早いホロホロ鳥などを魔法で上手く落としているようだ。

しかも、あっと言う間に俺のボウガンの魔法を真似して習得までしていた。

「じゃあ、始めようか」

「まずは何をするのですか？」

「うん、器合わせという修練方法だよ」

完全に独学の俺は知らなかったが、これは短期間で一気に魔力の量を上げる修練方法らしい。

お互いに両手を握り合って輪を作り、双方の体に徐々に大量の魔力を循環させていく。

すると、魔力の少ない方の魔力量が、魔力が多い方と同量になるらしい。

「ただ、これは可能性の問題でね。最初からその人の最大魔力量が決まっているから、それを越して魔力量が増えるような事は無いん

だ」

要するに、魔力量が１０の人と１００の人が魔力合わせを行った場合、理論的には魔力量が１０の人は１００になる。

だが、その人の魔力限界値が１０の場合は成長しないし、３０だと３０までしか上がらない。

もし２００の場合でも１００までしか上がらないので、これをしたからと言って修練をサボって良いわけでもないようだ。

「それでも私は、君の十倍以上の魔力量を持っている。まだ魔力が成長している君には十分に役に立つはずだ」

「あの、そんなに魔力量を急に成長させて大丈夫ですか？」

「ははははっ、破裂とかはしないから。ただ限界魔力量が低い人に一気に大量の魔力を流すと、魔力酔いで二～三日具合が悪くなるようだね。命の危険は無いけど」

そんな説明を聞きながら、俺と師匠は両手を繋ぐ。

やはり師匠は死んでいるらしく、その手は少し冷たかった。

それから目を瞑り、双方が魔力を沸き上がらせながら、お互いに繋いだ手から相手の魔力路を通して魔力袋へと魔力を流すイメージを思い浮かべる。

すると、次第に師匠の手から膨大な魔力が流れ込むイメージが頭に思い浮かんでくる。

「ほう、これは予想以上に」

十分間ほどこの状態が続いていたが、突然一気に魔力の流れが止まってしまう。

「よし、これで器合わせは終わりだね」

器合わせなる儀式が終わって双方が両手を話すと、師匠は目を輝かせながら俺に話しかけてくる。

「やはり見込んだ通りだね。今の君は魔力量だけなら私に匹敵するレベルになっている。でも、まだそれが限界でもない。君は、歴史に残る素晴らしい魔法使いになれるよ」

「そうなんですか？」

「私が保証する。君は、私を超える魔法使いになれる。慢心しないで着実に鍛錬を続けていれば」

それから一週間、俺は師匠から細かく魔法の訓練を受け続ける。さすがに広範囲の上級戦闘魔法の練習は出来なかったが、これは後で人のいない場所で一人で行っても何も問題は無いと師匠から言われたので、他の難しい特殊な魔法の鍛錬を中心に続けていた。

「師匠、その棒は何ですか？」

「私の作った、魔力剣の柄の部分だね」

「師匠は、魔法具の作成も行えるんですね」

「簡単な方だけだけどね」

魔法具の製作は、魔法使いの中でも特殊な才能を持つ者にしか出来ないと書物には書かれていた。
ただ、師匠に言わせると、この書物の記載は正確ではないらしい。

「魔法具には、二種類があるんだ」

そう言いながら、師匠は自分の持ち物である書物を俺に見せる。
本のタイトルはずばり、『魔法具の作り方と、その設計図』であった。

「作り方は、その通りさ。基本さえ掴んでいれば、多少雑な作りでも問題なく使える」

確かに、本に書かれた魔法具には普通の日用品のような物が多い。
唯一違う点は、そこに米粒大の魔晶石が付けてあるという事であろうか？

「えらく小さい魔晶石ですね」

「そうだね。それは、発動用の魔晶石だし」

つまり、これに魔力はさして篭められていないらしい。
どちらかと言うと、魔法使いが体内から流した魔力を道具本体へと繋ぐバイパスのような役割をしているようだ。

「あれ？　という事は？」

「魔法使いにしか使えない魔道具なんだよ。もっとも、魔力さえあれば自分が使えない魔法を発動可能なので、大抵の魔法使いは複数

持っているし、これを作れる魔法使いは多い」

逆に、滅多に作れる魔法使いがいないのは、これに大量の魔力を蓄えた電池のような魔晶石が付いた魔道具なのだそうだ。

これは、魔法など使えない人でも使えて汎用性が高い。

「ただ大容量の魔晶石を付ければ良いというわけでもない。下手に付けると使用時に道具が爆発するからね。だから、汎用性のある魔道具は値段が高いわけだね」

それと、魔晶石の魔力が尽きたら魔力の補充が必用であった。

当然、魔力の補充が出来るのは魔法使いだけ。

なるほど、容易には普及しないわけだ。

「魔法使い用のなら、君でも簡単に作れるさ」

「なるほど、そういう事だったのですか。ところで、その剣ですけど……」

「対魔物用とも言えるかな？　属性魔力を刀身にして出すための魔法具さ」

そう言うと、師匠は柄だけの剣から、青白い一メートル半ほどの細い炎を出す。

「青い炎は温度が高い。これの攻撃を防ぐと、鋼の剣でも溶け切れるだろうね」

続けて、氷、風、なぜか岩で出来た刀身を次々と柄から発生させていく。

「魔物には、弱い属性がある物が多いからね。火が苦手な魔物には火の刀身を、水なら氷、岩製の刀身については、見た目がアレでも土属性が苦手な魔物には効果が絶大なんだよ」

説明の後、俺は無事にこれらの魔法や、魔法使い専用の魔道具に取り付ける魔晶石の作り方についてもレクチャーを受け、それを習得する事に成功する。

魔晶石は、魔物の体内から出る魔石が原料になっている。
この森には魔物が居ないので、材料は師匠持ちとなっていた。

「意外と時間がかかりませんね」

「基本の鍛錬はね。実戦は、私でも油断すればこうなるのさ」

この一週間、俺は師匠が優れた魔法使いである事を確信していた。
だが、それほどの実力を持つ師匠でも、下手を打てば簡単に死んでしまうのがこの世界なのだと。

「数の暴力の前には、個人の強さも無力という現実があるのさ」

魔法の鍛錬の間に、俺は師匠から色々な話を聞いていた。
自分は孤児であった事や、それでも魔法の才能があったので冒険者として稼いでいた事。
その実力を買われてブライヒレーダー辺境伯のお抱えになったものの、最初の大きな仕事が、あの魔の森への進軍であった事などをだ。

「上司運が無いんですね」

「小さいのに、難しい言葉を知っているね。極論すると、そうなるかな」

せっかく栄達したのにすぐに死んでしまい、師匠は悔しくは無いのだろうか？

そんな事を考えていると、師匠が俺の心を見透かしたように言葉を続ける。

「悔しくないと言えば嘘になる。でも私は、語り死人になってまで自分の魔法を伝える弟子を見付けた」

「それが、俺であると？」

優れた魔法使いほど、他の優れた魔法使いの気配に敏感らしい。

魔法を使う時以外は、魔力は魔法使いの体内に篭っていてそれほど探知しやすいものではないそうだが、第六感とでも言うべきなのか、何となく察知できるものらしいのだ。

「ですが、俺は……」

「君の場合は、この周辺に魔法使いがいなかったからね。でもこれからは大丈夫。君は、私の存在を覚えた。これからは次第に、他の魔法使いの気配に敏感になるはずだよ」

師匠は、魔の森で主君であるブライヒレーダー辺境伯を魔物の大群から守り続け、多分数千匹は魔法で殺したらしい。

しかしそこで魔力が尽き、呆気ない人生の幕引きを迎えたそうだ。

そしてその死後、未練のあった師匠は語り死人に生まれ変わった。

近くに、自分が歩いて行ける範囲に、自分の魔法の技を伝える魔法使いが現れるまで。

「君の気配を感じた時は、これほど嬉しかった事はないね。でも、この楽しい時間ももう少しで終わりだ」

師匠との秘密の鍛錬は、既に予定の一週間を超えて二週間に達しようとしていた。

その間俺は、一秒でも長く師匠と居られるように、お昼の弁当まで準備して貰って森に向かっていたのだ。

多分家族は、俺が狩猟や採集を楽しんでいると思っているのであろうが。

「最後に、特殊な系統魔法である『聖』を教えようと思う」

『聖』の魔法は、性質的には水に近い物だと本には書かれていた。聖職者がアンデット系の魔物を退治する時に必ず使うのだが、厳しい修行を経た聖職者は魔法使いの才能が無くても、この魔法を発動する事ができる。

神に祈りを捧げながら、アンデット系の魔物には硫酸のような効果を示す聖水を作ったり、胸元の十字架に祈りを捧げてその動きを止めたりと。

ただ、本当に真面目に修行をしていないと効き目がないそうで、そこまでの厳しい修行に耐える聖職者の存在自体が貴重ではあるらしい。

教会で偉い、出世競争にばかり感けている枢機卿が碌に聖水すら

作れないケースも多々あり、これは世間では公然の秘密になっている。

あとは、数は少ないが魔法が使える聖職者の存在であろうか。

聖の属性を持つ光線のような魔法を放って呪われた人を治療し、純粋な回復魔法で怪我の治療を行い、教会に所属する戦士の武器に聖の属性を一時的に添付してアンデット系の魔物を倒したり、ゾンビの集団を滅ぼす広範囲に作用する聖光と呼ばれる魔法を使ったりと。

前世で言うところの、某ＲＰＧのような聖魔法が存在しているようなのだ。

「君ならば必ず習得できる。そして修行の卒業試験として私を成仏させて欲しい」

珍しく師匠は、真剣な表情で俺にお願いをするのであった。

第十一話　お師匠様との別れ。

「いや、しかし……」

「そろそろ、私も限界なんだよ。意識と理性を無くし、本能だけで人を襲うゾンビにはなりたくないのさ」

師匠から、最後の卒業試験として聖の魔法で自分を成仏させて欲しいと頼まれた俺であったが、さすがにそれには少し躊躇してしまう。

だが、師匠は早く自分を成仏させて欲しいと懇願していた。

「私は、極めて優れた魔法使いであったと思う。だから、これだけの長時間、肉体を保ちながら意識と理性まで保持していたんだ」

普通の語り死人は、長くても一年間ほどしかその形状が保たないらしい。

それを超えると、今度は次第に意識と理性が消えていき、肉体も徐々に腐ってゾンビと大差がなくなるのだそうだ。

「私には、もう時間がないんだ。我が弟子、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターよ。私を最後に安心させてくれないかね？」

「師匠……。わかりました……」

俺は、師匠から渡されている手引書の最後の項目である『聖』の魔法のページをめくり、そこに書かれた内容を一読する。

本には、基本的な概念しか書かれていない。
この魔法が使えるのかは、本当に俺の適性一つにかかっているのだ。

さすがに特殊な魔法だけあって、最初は碌に発動すらしない。
それでも段々と徐々に、聖系統特有の青白い光が両腕から溢れるように流れ出ていた。

「見本を見せられなくてすまない」

申し訳なさそうに師匠が言うが、語り死人というアンデッド系の魔物になっているので、聖の魔法が使えなくなっても当たり前としか言いようがなかった。

そして一時間ほど、何十回と練習を重ねた俺は、遂に師匠を成仏させられそうな威力の光線魔法の習得に成功していた。

「いよいよだね」

遂に師匠を成仏させる時間になり、俺は柄にも無く鼻を啜り涙を流しながら光線魔法を発動し、それを指先に貯めていく。
生前、高位の魔法使いであった師匠が魔物化している以上、それを成仏させるためにはかなり魔力を貯めなければいけなかったからだ。

「師匠……」

「私は満足しているんだ。このまま魔の森の奥地でゾンビとして彷徨うところであったのを、こうして弟子に自分の技を伝える事が出来た。安心して天国か地獄に行けるというものだ」

「師匠……」

俺は、涙が止まらなかった。

この世界の魔法習得は、確かに自分だけで何とかしなければいけないのが現実だ。

なぜなら、自分で有効であった修練方法が他の人に適合する確率が物凄く低かったからだ。

だが、師匠の鍛錬方法は、まるで奇跡のように俺に合っていた。

この二週間で得た成果は、自分だけで修練していたら何年間もかかっていたであろう。

更に、器合わせまで行えて、俺の魔力量は修行前の何十倍にも増えていた。

「このまま慢心する事なく努力を積み重ねて欲しい。君は……、ヴェルは、必ずや歴史に名を残す魔法使いになるのだから。ああ、それともう一つ」

師匠は、自分には家族がいない。

雇われていたブライヒレーダー辺境伯領には屋敷と多少の金銭があったが、これは既にブライヒレーダー辺境伯家によって接収されているはずなのであげられない。

だが、今自分が付けている装備。

ローブや帽子などはもっと大人になって体が大きくならないと装備できないが、属性魔力の刀身を出す魔法剣に、いくつか付けている指輪やネックレスなどのアクセサリー類。

そして一番の目玉は、実は財産の大半を入れている魔法の袋の使用者を俺に変更しておいたという事であった。

『魔法の袋』とか、これも良く某ＲＰＧなどで良く聞く物だ。中に、その袋の容量を超えた大量の品物を入れる事が出来るマジックアイテム。

この世界では、幾つかの種類に分類されている。

まずは他の魔法具と同じで、魔法使いにしか使えない専用品か、誰にでも使える汎用品であるか？

次に、事前に使用者の登録が可能で、その登録者以外の人だと品物の出し入れが不可能になってしまう専用品か、誰にでも使える汎用品かどうか？

あとは容量の問題があるが、これは容量が大きく、誰にでも使える物ほど作れる魔法使いが少なく、値段も高くなるらしい。

「私が君に託す魔法の袋は、魔法使いにしか使えず、しかももう使用者を君に登録してある。容量に関しては、使用者の魔力限界量に比例するようになっているので、君が使った方が容量は上がるだろうね」

そう言いながら、師匠はビーズのような魔晶石の付いた巾着袋くらいの大きさの魔法の袋を俺に渡す。

「小さいけど、大きな物を入れる時には口が広がるから大丈夫。中身も全て君にあげよう。このまま魔の森で朽ち果てさせるよりは、君が使った方が有用だからね。さあ、頼むよ」

「はい……」

涙と鼻水を啜り上げ、俺は貯めていた聖の光線を師匠に向かって放つ。
すると、師匠は一瞬にして青白い光の渦に包まれていた。

「良い魔法だ。まるで苦痛を感じない。むしろ、心地良い暖かさに包まれているようだ」

その言葉とは裏腹に、師匠の体は徐々に見た目が薄くなっていく。
本当に、もうすぐ師匠は消えてしまうのだ。

「師匠、今までありがとうございました」

「気持ちよく成仏させてくれてありがとう。また百年後くらいにあの世で会おう」

最後の言葉としてはどうかと思ってしまうが、その言葉を最後に師匠は装備品と魔法の袋を残し、その肉体を青白い光と共に天へと昇らせていくのであった。

これが、俺が唯一師匠と認めるアルフレッド・レインフォードとの短い交流の記憶であった。

第十二話　師匠の遺産。

「師匠は、満足して成仏したんだ。これ以上、悲しむのは止めよう」

師匠が天へと消えた後、俺はそう決意していた。

そして、師匠のお墓は作らない事にした。

彼が事前に、『お墓なんていらない。たまに、知っている人に思い出して貰えれば満足さ』と言っていたので、その意志に従う事にしたのだ。

それよりも、問題が一つあった。

師匠から形見として与えられた、魔法の袋とその中身の事である。

師匠は孤児で、血縁者がいなかったらしい。

なので、これを俺が受け取る事に関しては何の問題も無いであろう。

あっても、本来であれば魔の森の奥地で朽ち果てる予定であった物である。

万が一正式な相続者がいたとしても、命を賭してまで取りに行くかどうかも怪しい。

師匠は優れた魔法使いであり、ブライヒレーダー辺境伯のお抱えになる前は優秀な冒険者でもあった。

となると、その遺産は多いのかもしれないが、それを取りに魔の森へ向かって死んでしまっては元も子もない。

金を出して冒険者などに頼むとしても、場所なので受ける人が居るのかも怪しい。

普通の人ならば、諦めるのが当然であろう。

実際のところ、今のブライヒレーダー辺境伯は失敗に終わった出兵で発生した被害の負担どころか、遺品の捜索すら全くしていないと言うのだから。

「とりあえずは、中身の確認だな。良い魔法具とかがあるといいな」

俺は魔法の袋に付いている小さな魔晶石に触れながら、微量の魔力を送る。

こうする事によって、自分の脳裏に魔法の袋に入っている品物のリストが浮かんでくるらしい。

どんな仕組みなのかは不明であったが、物凄く便利な機能ではある。

すると、その筆頭に師匠から俺への手紙というのが浮かんでいた。

早速に袋から取り出して封を開けると、そこには丁寧に魔法の袋の中に入っている品物のリストが書かれていたのだ。

「これで、脳裏に浮かぶ大量の文字の羅列と戦わないで済む」

手紙には、こう書かれていた。

まずは、最後の挨拶を簡単な物としたいので、この手紙を事前に認めておいた事。

次に、この手紙が袋から取り出せたという事は、正式にこの袋の持ち主が俺に代わった事の証明であるという事をだ。

『事前に器合わせで君の魔力の容量は広げてあるし、私との僅かな期間の訓練でも君の魔力量は飛躍的に上昇している。限界が来るまで決して鍛錬を怠ってはいけない。さて、君に渡す私の遺産の内容

なんだが……』

まずは、師匠が愛用していた装備品のローブやアクセサリーに、杖、魔法の刀身を出す剣の柄に、他にも魔法の矢を飛ばす弓や、果てはオリハルコン製やミスリル製のナイフが数本ずつなど。

なるほど、師匠は優れた冒険者であったらしい。

その装備品は、全て魔法の効果がかかった、金を出して買うとなると高額な物ばかりであった。

あとは、愛用していた魔法具の類であったが、これは魔法使い専用の物と、市場では高額で取り引きされる汎用品も半分ほどを占めていた。

「食べ物を冷やし、氷を作る冷蔵庫なる魔法具か……。汎用品の大半は、冒険者時代に遺跡で拾ったと書かれているな」

冒険者とは、魔物のテリトリーに侵入してそれを狩って素材や肉を得たり、テリトリー内にのみ存在する植物や鉱物などを採取するのが仕事だ。

そして他にも、なぜか魔物の生存圏の中にしか存在しない旧魔法文明王朝の遺跡やダンジョンなどを捜索し、その古代の遺産を得るというものも含まれていた。

ただ、これを達成可能な冒険者というのは非常に少ない。

旧魔法文明王朝とは、今から一万年ほど前に滅んだ今よりも優れた魔法具の製造に長けた古代王朝であったようで、その遺跡から産出される魔法具には高価な値段が付くのだが、その分危険も大きいというのが現実であったからだ。

魔物の恐ろしさは、冒険者時代に何度も遺跡探索に成功している師匠が生き残れなかった件からしても納得というものだ。

『しかしながら、実は魔物のテリトリーへの侵入は少数精鋭の方が成功率は圧倒的に高くてね。そのための、冒険者稼業という事でもあるんだ。ブライヒレーダー辺境伯には良く説明したつもりだったんだが……』

まるで俺と話をしているかのように手紙には的確な合いの手が書かれていて、俺は思わず苦笑してしまう。

『あれほどの大軍で押し入って、目的が新しい土地の開発のために魔の森の魔物を殲滅。これで目立たない道理ないさ。最初の数日間は、派手に魔物の殲滅に成功していたんだけど、それで浮かれている間に数十倍の魔物に囲まれてね。良く少数だけど逃げ延びた人がいたものだ』

その僅かな生存者達も、半分以上はもう二度と兵士としては使えなかったらしい。

そういえば、我がバウマイスター騎士領軍の生き残りも兵役は免除されていて、常に何かに怯えたようにオドオドしながら農作業や開墾の手伝いなどをしているのを見た覚えがあった。

きっと、かなりのトラウマを受けてしまったのであろう。

『話を戻すが、私は出来る限り出兵を止めようとしていた。だが、完全に否定ばかりしてもブライヒレーダー辺境伯は納得してくれないであろう。ゆえに、もし新しい土地の魔物からの開放が成し得なくても、兵士達の士気を維持するために狩りの成果には恩賞を出す

べきであると』

二千人で狩りを行い、その成果である魔物から取れる素材や肉、魔の森の中で獲れた採集物などを買い取り、恩賞を出す。

次第に兵士達の懐が暖かくなれば、今の内に兵を退こうという雰囲気になるかもしれないし、ブライヒレーダー辺境伯も出兵の費用が補え、面子的にも大量の魔物の討伐実績と素材を得た事で帳尻が合う。

そのように考えて、師匠も出兵に参加したようだ。

結果は、ますます増長して魔の森の魔物を全滅させるまで撤兵はしないと断言し、その直後に地獄を見たようなのだが。

『それに、私がいれば兵站の苦労が減るからね』

なるほど、師匠は魔法の袋を荷駄部隊に当てて正面戦力を一人でも増やしたようだ。

ブライヒレーダー辺境伯軍二千人の兵站ともなれば。これは大きな負担となる。

いくら隣の領地内とはいえ、魔の森は富士山よりも高い山を越え、更に三百キロほど南に行軍しなければ到着しないからだ。

しかも、我がバウマイスター騎士領の人口は僅かに八百人ほど。

二千人もの軍勢が消費する食料を補給できるはずもない。

しかもバウマイスター騎士領軍は、敵軍どころか魔の森の解放のために共に戦う相手なのだから、その根源地からの現地調達など問題外であろう。

二千人もの軍勢が最長数ヶ月行動可能な食料や物資を、富士山よりも高い山を越えて荷駄部隊で運ぶ。

この時点で、この計画の無謀を悟ってくれれば良かったのにと師匠は手紙の文面でも嘆いていた。

というか、父は何も思わなかったのであろうか？

戦後に少しでも利権を取り戻すために、俺には大叔父にあたる家臣に兵百人を率いさせ、結果的には傷を広げてしまったのだから。

『君なら理解できたと思うが、この魔法の袋にはブライヒレーダー辺境伯軍とバウマイスター騎士領軍が使用する予定であった食料や物資が全て入っている』

しかし、偉大な魔法使いが持つ魔法の袋が、いかに大量の物資を詰め込めるかだ。

これだけの物資を準備したブライヒレーダー辺境伯も相当な物だが、これを全て魔法の袋に仕舞い込めた師匠の魔力が恐ろしい。

『そんな私よりも魔力が多い君が、それを言うかな？』

見事に俺が考えそうな事を読んで、次の行には的確なツッコミが入っていた。

「しかし、二千人が約三ヶ月行動可能な食料に……」

大半が、長期保存が可能な堅く焼き締めたパンに、甘くないクッキー、塩漬けの肉に、樽に入ったザワークラウトなどの類であったが、よくよく考えると魔法の袋の性質を良く理解していないように思える。

魔法の袋の中は、通常の物理の法則から外れた魔力の影響下にある世界なので、そこでは全く時間が経過しない。
だからこそ、大陸の中心部にある王都では、比較的富裕層の市民階級を中心に新鮮な海の魚が食卓に上っているそうなのだから。

これは本の知識ではあったが、早く大きくなってこの不便な田舎から出て行きたい物である。

あとは、予備の武器や防具。
これは、鉄や青銅製の物が多かった。
同じく予備の天幕などの、いかにも中世の軍勢が使いそうな備品に、現地で飲用可能な水が補給可能かという心配があったようで、大量の皮袋に入った水に、兵士の士気向上のためであろう。
ブライヒレーダー辺境伯領産のワインや、怪我の治療にも使うものと思われるブランデーなどの蒸留酒なども多数準備されていた。

大人が酒が好きなのは、どこの世界でも同じなようだ。

俺も前世では、あまり強くはなかったが毎晩の晩酌は欠かさない性質であった。
今はこの成りだし、手に入らないので諦めていたが。

「あとは、この大量の魔物の素材や肉に、魔の森で採集した戦利品か……」

よほど恩賞で煽ったようで、袋には大量の戦利品が入っていた。
ただ、知識でどのような物かは理解できても、今の俺ではどうにも活用は不可能な物が多かったのだが。

魔法の袋に入っている限りは劣化しないので、とりあえずはこの

ままにしておく事とする。

「そして最後に、大量の宝石類に、宝飾品、金貨に銀貨か……」

師匠の財産であったり、ブライヒレーダー辺境伯が大物貴族として見栄を張ったり、兵士達への恩賞用として準備していたらしい。

軽く眩暈がするほどの大金が、袋の中に入っているようだ。

「とはいえ、今の俺には使えないし」

この村に気軽に買い物できる店など一軒もないし、というかこの袋の存在を公には出来ない。

いくら大きくなるまで基本放任な八男でも、これだけの財産を持っている事が知られたら？

最悪、命の危険まで考えなければいけないであろう。

「というわけで、大きくなるまでは中身は封印と」

師匠のローブや装備品には強力な魔法がかかっているので着てみたかったのだが、如何せん俺はまだ体が六歳児。

サイズの問題で、この身の成長を待つしかなかった。

「ふう……。帰ろう……」

俺は、師匠の装備品を魔法の袋に仕舞うと、今日の分の獲物を抱えて家路へとつくのであった。

第十三話　跡取りの結婚。

俺が、この西洋ファンタージー風なリンガイア大陸ヘルムート王国の南部辺境地域、バウマイスター騎士領の当主アルトゥル・フォン・ベンノ・バウマイスターの八男ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターの体を乗っ取ってから約三ヶ月。

その間に色々な出来事が、まるで洪水のように俺のその小さな体を翻弄していた。

とはいえ、俺自身はこの情況を基本的には楽しんでいる。

味噌っかすの八男であるため、名ばかり貴族で跡を次ぐ家門や領地すら無かったが、この世界では数少ない魔法使いの才能がある事は判明していたし、その練習を兼ねて外に出ても子供の体の割にはあまり行動に制限もない。

正直なところ、忙しくて六歳のガキに構っていられないのであろう。

更に、ここ最近では高名な魔法使いであったアルフレッド・レインフォード師匠から器合わせという特殊な方法で魔力の大幅なアップにも成功していたし、彼から効率の良い魔法の訓練を受ける事も出来た。

本当ならばもっと色々と教えて貰いたかったのだが、彼は本来であれば既に死んでいる人間であり、ゾンビになるリスクまで負って語り死人になり、魔力の高い人を探していた身でもあった。

俺は、最後に教わった『聖』の属性魔法で彼を安らかにあの世へと送る事で、彼から卒業の証を受ける事となる。

そして彼からの遺産として受け継いだ、もうこのまま働かなくても一生食べていけそうな量の魔法の袋に入った様々な財貨や物資。

とはいえ、今の俺は世間的にはまだ親の庇護下に入っている六歳の子供でしかない。

中身は二十五歳なので理不尽とも言えるのだが、今は一日でも早く自立してこの家を出られるようにすべきであろう。

来たる自立と自由の日に備えて、勉学やら魔法やら武芸の訓練に身を投じながらだ。

それともう一つ。

俺は、数日前に七歳になったらしい。

らしいという部分で相当にアレなのだが、この世界で子供が誕生日を迎えたから祝うなんて風習があるのは、王族とか貴族でももっと裕福であるとか、あとはうちのような家であると長男くらいしか誕生日は行わないようだ。

中身はもう成人なので、今さら誕生日パーティーとかは必要ないのだが、俺が七歳になっておめでとうを言って来たのが俺の一個上の兄、五男のエーリッヒであったためにこうしてわざわざ報告している次第である。

五男なのに一個上と言うのもおかしいのだが、そこは妾の生んだ兄達が入っていないものだと思ってくれると解り易いと思う。

妾の産んだ六男と七男を、俺は兄と呼んではいけないのだと母から言われている。

貴族なので、その辺の身分差には厳しいようだ。

今年で十七歳になる五男エーリッヒであったが、彼は細身で腕っ節はイマイチな男であったが、イケメンだったし、味噌っかすである俺の身を一番気遣って話しかけてくれる優しい兄でもある。

領内のうら若きお嬢ちゃん達にも、もう少し年上のお嬢さん達にも、もっと上のお嬢様達にも人気があるらしい。

実は、我がバウマイスター家の面子の顔の出来はあまり良くない。不細工というわけではないが、要するに普通な人が多いのだ。

更に、才能の面からしても微妙であろう。

領地持ち貴族になるため、わざわざ王都から貧民達を連れてこの地に移住した初代は目端の利く人物であったらしいが、それ以降は悪愚な当主はいなかったものの、内政に戦争に魔物の討伐に大活躍という逸材はいなかった。

父アルトゥルは、五年前の痛恨の失政である魔の森への出兵で失った多くの成人男性の働き手の分を補うべく、毎日息子達と共に自ら土地を開墾する日々であった。

当然魔法など使えないし、剣などの騎士としての嗜みなども微妙な線であるらしい。

むしろ、肉の確保のために年に数回行う合同狩猟で使う、メインウェポンとなる弓の方が得意という有様であった。

そしてこの傾向は、長男クルト以降の子供達全員の特徴でもあった。

領内に魔の森があるものの、別に中に入らなければ魔物が脅威に

なる心配もなく、ならば肉を確保するための弓矢の腕前を上げた方が役に立つという結論に至ったらしい。

その魔の森に到達するには、何百キロにも及ぶ行軍が必要であったがのだが。

なるほど、俺ばかりか兄エーリッヒの剣の稽古がいつもすぐに終わってしまうわけだ。

騎士なのに剣を使う機会が少ないと言うかほぼ無いので、余計に訓練に身が入らないのであろう。

もっとも、毎朝一緒に訓練している兄エーリッヒなどは、剣が苦手なので助かっているとも言っていたのだが。

その分、兄エーリッヒは弓の腕前では領内では一番と言われるほどであったし、俺と同じく時間が空けば父の書斎で本を読んでいるので、ひらがなとカタカナしか読み書きできない他の家族とは違って、俺と同じレベルで読み書き計算が可能であった。

『もう少ししたら、王都に出て下級官吏の試験を受けるつもりなんだ』

なるほど、彼は俺のように魔法ではなく、堅実に公務員の道を目指しているようだ。

とまあ、こんな感じの我が家であったが、実はその家庭環境に大きな変化が生じようとしていた。

長兄クルトに、ようやく嫁が来るという話が父から成されたのであった。

「クルトの嫁は、マインバッハ家の次女アマーリエに決まった。来週にはこの地に到着して結婚式を行う予定だ」

いつもの黒パン、野菜と肉のスープ、ホロホロ鳥のロースト、自家製の山ブドウジュースとワインという、俺のおかげで多少豪勢になった夕食の席で、父は家族全員に長男クルトの結婚を発表する。

「いよいよ、来たるべき時が来たか……」

夕食後、余り者兄弟四人のベッドが置かれている部屋で、俺とは滅多に口をきかない三男パウルと四男ヘルムートは、ベッドの上で自分の私物を纏め始めていた。

こんな貧乏貴族家の三男と四男なので自分の持ち物は少なく、その作業はあっという間に終わってしまったのだが。

「エーリッヒ兄さん、パウル兄さんとヘルムート兄さんは、どうして荷物を纏めているのですか？」

「この家の跡継ぎであるクルト兄さんが結婚するからね。式が終われば、僕達は出ていかないといけない」

俺の質問に、エーリッヒ兄さんが詳しい説明をしてくれる。

こういう時のエーリッヒ兄さんは、俺が子供だからとバカにしないでちゃんと詳しく説明をしてくれるのだ。

この世界における成人の定義は、大体十五歳から十七歳くらいで

あるらしい。
多少の幅があるが、早くするか遅くするかは親の裁量一つらしく、だがそれでも三男パウルと四男ヘルムートは少し遅いような気がしないでもない。

その点を聞くと、いくら跡継ぎではない子供でも家を出る時には多少の援助くらいはするのが当然であったのだが、実は五年前の無駄な出兵でその余裕がなく、本当ならもうとっくに家を出るはずの三人を家の手伝いをさせながら残してしまっていたらしい。
結局、わざわざ長男クルトの結婚を遅くしてまでどうにか金を貯める事に成功したようなのだが、それで結婚が遅くなるとは兄クルトもなかなかに不幸とも言えた。

「持参金の件もあったけど、実はうちは嫁ぎ先としては人気が無いんだよね」

確かに、隣の領地とは山脈一つ隔てたこんな田舎の寒村に好き好んで嫁ごうと考える貴族のお嬢さんは皆無であろう。
生まれた子供を使って、バウマイスター家を嫁の閨閥に引き込むという貴族の常套手段も、下手をするとバウマイスター家への援助で大赤字になる可能性を秘めていたからだ。

「まあ、結婚できるだけクルト兄さんはマシかな」

もっと可哀想なのは、長男に万が一の事があった時のためにと飼い殺されている次男ヘルマンの存在であろう。
彼は、兄クルトと嫁との間に子供が出来れば自由の身となれるのだが、それまでは開墾の手伝いでもしながら部屋住みの苦渋を味わい続けなければいけない。

こう考えると、俺はまだ恵まれた身なのだなと思っていた。

まだ一回しか顔を見た事がない、妾のレイラとその子供達などは母の身分のせいで正妻の子供が全滅でもしないと相続の目が無いし、そんな奇跡にも期待していないので、実家を継いだり、適当に他の名主の家に婿に入ったり、嫁に行ったりして貴族にはならないらしい。

正直、少し羨ましいと考えてしまう俺であった。

「そんなわけで、僕も式の後は王都に行く事になっているんだ。ヴェル、急に寂しくなるけど、元気で暮らすんだよ」

「はい、今までありがとうございました」

「手紙くらいは送るから」

「俺も、返事を書きます」

「いいね。この家でちゃんと手紙を書ける人は少ないから。ヴェルはちゃんと書けるけど」

それから二週間後、俺は一番の理解者を失い、僅か七歳にしてボッチの境遇を味わう羽目になるのであった。

第十四話　エーリッヒ兄さん。

「（ようやく跡取り息子が結婚か……。うちも色々と事情があったからなぁ……）」

今年で二十六歳になる長兄クルトがようやく結婚をすると父が報告をした翌日、俺はエーリッヒ兄さんと共にいつも狩猟と採集に出かける森の中にいた。

なぜかと言えば、もう数日中にはお嫁さんがこのバウマイスター騎士領に到着して結婚式が行われるからである。

小なりとはいえ、一応は貴族の結婚式である。

更に、こんな何も無い僻地の田舎村での冠婚葬祭ともなれば、それは普段は娯楽に飢えている領民達も一緒に祝いたいわけで。

実際には、我がバウマイスター家が全て負担する結婚式に出す料理や酒が目当てだと思うのだが。

まあ、そんな本音と建前の話は別にして、数百人にもなるはずの結婚パーティーに顔を出すであろう面子が飲み食いする食料や酒ともなれば、これは膨大な量になる。

かと言って、この地を治めるお館様ともあろうお方が、その部分をケチってしまうと問題になってしまう。

領地の治める貴族が、その領民達にケチ臭いとか貧乏臭いと思われてしまえば、それは後に大きな禍根の原因となってしまうであろうからだ。

普段はいかに、ボソボソの黒パンと極薄味の野菜のスープで凌ごうとも、こういう時には食べ切れない、飲み切れないほどの酒やご馳走を準備しないといけないのだ。

嫁の実家に払う持参金に、衣装やアクセサリーなどは嫁の実家が準備するとしても、旦那の方の衣装なども新しく作らないといけないし、今話をしたパーティーで出すご馳走や酒の件もある。

何しろうちは、元々貧乏な上に、魔の森への無謀な出兵で無視し得ない人的・物的・金銭的な損失を出している。

領内の体制を建て直しつつ、跡取りである長兄クルトの嫁さん探しに、式を行えるだけの蓄えと。

普通、男でも貴族は二十歳くらいまでには結婚するのが普通なのに、なぜ兄クルトが二十五歳まで独り身だったのか？

それには、涙無しは語れない厳しい現実が存在していたのだ。

「（クルト兄さんが結婚するのは良いんだ）」

正直、こんな田舎の寒村しかない領地。

俺は八男なので元々継げないが、継ぎたいとも思わなかった。

早く独立して、冒険者として生きる。

これこそが、俺の夢であったからだ。

「（でも、他の兄さん達を追い出すのが早過ぎないか？）」

結婚式後、この世界の常識ではもうとっくに成人扱いの兄さん達

は、それぞれに独立して家を出る事になる。
貴族の習慣として、家や領地を継げないで出て行く次男以降の男子には、領地を継げない侘びも意味も込めて支度金を渡すのが常識になっているらしい。

相場は大した額ではないのだが、うちは兄弟が多いうえに、貧乏なので、これの準備にも時間がかかってしまったようだ。

今回、次男のヘルマンとまだ七歳の俺を除き、三男から五男までの三人が家を出て独立する。
ヘルマン兄さんは、まだ結婚していないクルト兄さんが万が一にも急死した時のための予備として、もう数ヵ月後には彼も親戚筋の家臣の家に婿に入るようだ。

ちなみにその家臣の家とは、父の叔父の実家で、先の魔の森への出兵で我がバウマイスター騎士領軍を率いた人物であるらしい。
当然その時に彼は戦死していたし、同時にその跡取り息子である父の従兄弟も戦死している。
他にも、残された男性相続者も不幸が重なって、今は大叔父の孫娘にあたる人物が、辛うじて家を維持しているようだ。

ヘルマン兄さんは、その孫娘と結婚してその家を継ぐのだ。

何というか、まるで〇ＨＫの〇河ドラマのような話ではある。
規模は、情けないほど小さいわけだが。

話を戻すが、そんな我がバウマイスター家の方針が色々と決まり、結婚式の準備に忙しいはずなのに、俺とエーリッヒ兄さんが森の中にいる理由。

容易に想像がつくわけだが、要するに結婚式で出す料理の食材を獲って来るようにとの、父からの命令であったのだ。

しかも、俺はなぜかエーリッヒ兄さんと組む羽目になってしまう。人前で魔法を見せたくないのに、なぜか付けられた同伴者。しかもそのパートナーが、俺が一番話をするエーリッヒ兄さんなのが意地悪だ。

一番仲が良いので無碍にも出来ず、かといって魔法を使わなければ僅か七歳の俺の収穫など、もしかしたら皆無という可能性もある。

さてどうしようかと思っていると、エーリッヒ兄さんが俺に話しかけてくる。

「遠慮しないで、魔法を使っても良いんだよ」

「ええと……」

突然の、エーリッヒ兄さんからの『魔法を使っても良い』発言に口を篭らせてしまう俺であったが、実は俺自身、自分が魔法を使える事を他人に秘密に出来ているとは思わなかった。

普通に考えて、まだ七歳の子供が一人で狼や熊の出る森に入って、下手な大人顔負けの狩猟や採集の成果を得ているのだから。

魔法には、普段は非力な人が筋力や速度を強化するための物があり、しかもこの魔法は程度の差はあったが、比較的ポピュラーな魔法でもあった。

俺が一人で森に入って心配されなかった理由の一つには、最低でも魔法を使っている件に対して黙認というか家族の間で緘口令が敷

かれているのであろうと想像していたのだ。

「ヴェルは、やはり七歳とは思えないほど賢いね」

俺が、バウマイスター家の八男ヴェンデリンへと転生したその日、夢の中で六歳以前の彼の様子を知る事となる。

俺が転生する前のヴェンデリンは、魔法使いの才能などは見せなかったが、いつも父の書斎に篭って本を読む、年齢に相応しくない行動を見せる人物であったらしい。

その点は、今の俺と共通項も多いようだ。

「そう。父上も母上も、クルト兄さん達も。ヴェルを除く家族全員が知っていたのさ。ヴェルに魔法の才能があるという事を」

何となくそんな予感はしていたが、そうなると一つ疑問が出て来る。

なぜ、俺の魔法をもっと領地の発展に生かさないのかだ。

すると、エーリッヒ兄さんが俺の疑問に気が付いたらしく、すぐに俺の疑問に答えてくれた。

「もし、ヴェルが幼くして魔法の才能を領民達に発揮したとしよう。そうなれば、これはお家騒動の発端となるだろうね」

この世界における貴族を含めた家の相続は、基本的には長男が優先される。

これの加えて王族や貴族ともなると、今度はその子を産んだ妻の身分が重要となる。

貴族でない名主の娘である、父の妾レイラの子供達には相続権が基本的には無い。
あるとすれば、それは本妻に男子が生まれなかった時の事だ。

本妻の子供が女子だけであった場合、これはその貴族によって判断が分かれる。
長女に婿を取って跡を継がせるケースと、妾の産んだ長男を継がせる場合と。

要するに、一応は本妻の子優先、長男優先という風習はあるが、最後には当主である父親の決定が最優先されるようになっていたのだ。

このせいで、良くお家騒動が発生して双方が刃傷沙汰に及んだり、騒ぎを自力で収拾できずに王家に知られてしまい、罰として領地を減らされたり、果ては改易という処分まで受ける貴族家も数年に一度は必ず発生するそうなのだ。

「ヴェル、君は僕と同じく家を出たいんだよね？」

「はい、若い内は冒険者として身を立てたいのです」

「なら良いんだ。父上も、それは把握している」

「そうなのですか」

「漢字は読めないけど、一応は貴族家の当主なのさ」

父は、俺が魔法を領民のために大々的に発揮した場合を想定し、これによる領内の利益よりも、家臣達や領民達が無責任に『魔法の

使えるヴェンデリンこそ、バウマイスター家の当主に相応しいのでは？』などと騒ぎ、おかしな派閥でも作られたら堪らないと考えているそうだ。

「そうでなくても、五年前の出兵の失敗が糸を引いているんだ」

このために、農地を広げる開墾ばかりでなく、通常の農作業などにも人手が足りなくてそのやり繰りに四苦八苦していたり。

損害を回復するまでという名目で一時的に税金を少し上げていて、それが領民達の不満の芽になっていたりと。

何より、その出兵でバウマイスター本家から一人も犠牲者が出ていない。

というか、一人も出兵していなかった件で、余計に領民達が不信を抱いている部分があるようなのだ。

「実際、分家で家臣筋の大叔父やその息子三人は戦死しているからね」

しかもそのせいで、大叔父の家には戦死した長男の娘しか残らず、彼女はもう少ししたら次男ヘルマンを婿に入れて家を継がせるわけなのだから。

これで、大叔父の家人達に不満が無いと言ったら嘘になるであろう。

「だから、ヴェルの魔法を大っぴらに宣伝しないのさ」

間違いなく、俺こそがバウマイスター家の次期当主に相応しいと騒ぐ人間が出て来るはずだ。

「もうそれとなく気が付いている人もいるだろうけどね。別に、ヴェルが皆の前で魔法でも披露しない限りは証拠がないからね」

「なるほど、そのための森篭りの黙認であると」

「十五歳になって成人したら、遠慮しないで家を出て欲しいんだろうね」

「個人的には、もっと早く家を出たいですね」

俺はエーリッヒ兄さんから、規模は小なれどお家騒動の芽がある事を知り、早く成人してこの領を出たいと真剣に思ってしまうのであった。

第十四話　エーリッヒ兄さん。（後書き）

誤字の御指摘ありがとうございます。
ちゃんと、二回は確認しているんだけどな。
多分、俺の目が腐っているのでしょう。

第十五話　エーリッヒ兄さん達との別れ。

「この森は我が家専用の森だから、遠慮しないで魔法で獲物を獲ると良いさ。僕が同伴なのは、狩りの成果が僕メインであると言う方便のためでもある」

「ああ。それで今までに、他の狩人の人とかが来なかったんですね」

「うちの専用にしても、領民から苦情とか来ないからね。うちの領地、無駄に土地が余っているから。自由に狩猟や採集が可能な森も多いし。魔の森の開拓なんかより、移民でも募って普通の無人地の開発に専念していれば良かったのに」

「ですよねぇ」

俺の魔法が家族に黙認されていた話に、加わりたくも無い相続争いの原因が俺であるという話を聞き。

ますます早く家を出たいと考えてしまう俺であったが、さすがに十五歳にならない者を独立させるわけにはいかないらしい。

あと、俺が毎日ホロホロ鳥を狩ってくれるので、それがいなくなると夕食のおかずが減ってしまうという。

冗談なのか？

本気なのか？

いまいち良くわからない理由でも、俺は毎日の森行きを黙認されていたようであった。

「黒パンと野菜スープのみの夕食から、ヴェルのおかげで肉や自然

薯やキノコや果物が付くようになったんだ。こんなに嬉しい事は無かったね」

「あの、父上や他に兄さん達は狩りには？」

「五年前に、多くの成人男性が戦死したからね。彼らの穴を埋めるために、父上ですら自ら畑を耕している状態なのさ。当然、僕らも言わずもがなさ」

「そうだったんですか……」

「とはいえ、来るクルト兄さんの結婚パーティーで、黒パンと野菜スープのみというわけにもいかず。ここは、ヴェルに期待するよ」

確かに、結婚式のパーティーでそんなメニューを出したら、貴族しては終わりのような気もする。

「エーリッヒ兄さんは、弓を構えていてくれれば」

「自分で探さなくて良いのは楽だね」

それから半日ほど、俺はいつもは避けている大物の獲物に探知魔法で探って接近をし、弓の腕前ではバウマイスター家一のエーリッヒ兄さんが放つ矢を魔法で強化する。

どうやら本当に、エーリッヒ兄さんの弓の腕前は優れているらしい。

矢の方角や進路の修正は全く必用なく、魔法で威力の上がった矢は容赦なく猪、鹿、穴熊、ホロホロ鳥などの急所に命中していく。

俺とエーリッヒ兄さんは、心臓か脳天に矢の一撃受けて絶命した獲物の血を急いで抜き、皮も後でなめせるように塩などをまぶしていく。

正直、七歳児には辛い仕事なのだが、さすがは身体強化の魔法。特に問題なく、獲物の処理を終わらせていく。

「やっぱり、今までは遠慮していたのか」

「猪とかを一人で狩れる七歳児って変でしょう？」

「実は、優秀な魔法使いだとそうおかしくもない」

エーリッヒ兄さんの話によると、生まれ付き大きな魔力を持って生まれた魔法使いの中には、下手をすると俺よりも下の年齢で魔物まで狩ってしまう猛者も少なからず存在するらしい。

最低でもソフトボール大のファイヤーボールが撃てれば、魔物化した大型動物や、ゴブリンや動きの遅いゾンビなどは簡単に殺せるからだ。

あとは、俺のように自分の身体能力を強化して弓や槍などで戦うタイプもいるらしい。

何と言うか、地球とは違って子供が大活躍である。

「魔法というのは凄い物だね。僕の放った矢の威力をここまで強化できるなんて」

「エーリッヒ兄さんの場合、狙いが正確だから威力だけ弄れば良いので楽でしたね」

「お褒めに預かり光栄だね」

俺は最初、わざわざ土系統の魔法で鏃を自作して、それを獲物まで飛ばすという魔法で獲物を狩っていた。

ところがエーリッヒ兄さんから、『どうしてわざわざ、そんな面倒な事をするんだい？』と言われてしまう。

確かに、俺は子供用とはいえ自分の弓矢を持っているのだ。

普通に矢を放ってから、その軌道や威力を修正した方が無駄な魔力を使わないで済むであろう。

多分、魔力の量を増やすためにわざと無駄に魔法を使っていた、師匠と出会う前からの癖であろうと自分では分析していた。

「さて、今日はこの辺で良いかな」

「はい」

二人の前には、既に血抜きを済ませた獲物が大量に積まれていた。

何しろ、普段は俺くらいしか出入りしていない森である。

その気になれば、この荒らされていない森はいくらでも獲物を恵んでくれるのだ。

しかも、領内にはこのような平原や森がまだ多数存在している。

魔物は住んでいないが、熊や狼などの凶暴な野生動物がいるので、女子供達や、戦闘力のある男でも一人では狩猟・採集には行けない。

だが、父が陣頭指揮を執って人手を集めれば、農地や居住地の開発はそう難しい事ではないはずだ。

実際に、今でもそれを行っているのだから。

「五年前の出兵は、どうやらブライヒレーダー辺境伯に唆されたとまではいかなかったが、乗せられてというのが真相らしい」

土地の開発などは二の次で、一番の目的は一攫千金も狙える魔物の素材や肉に、魔物の住む領域でしか獲れない魔法薬や霊薬の材料などが目的であったのであろう。

特に需要が高いのは、怪我や病気を治す魔法薬の原料である薬草や動植物の素材であるとエーリッヒ兄さんは説明する。

魔物の領域内で取れる薬草。

それらは、基本的に前世で生薬の原料であった物とさして違いはない。

ファンタジー物のお約束である、使用してすぐに傷が塞がったり、病気が治ったり、果ては死人を生き返らせたりする薬だとかは。

魔物の領域で採取した薬草などを使っているか、魔法使いの中でも原料に魔力を込めながら製造を行える薬師としての才能があるか、治癒の魔法が使えるかのどれかで。

そういう便利な物には、手間賃が上乗せされてお値段が高くなっているのが現状であった。

「うちの魔の森は、まだほとんど誰も入った事が無いから初い。入り口近くにでも、貴重な薬草や採集物が残っているのさ」

逆に、ブライヒレーダー辺境伯領内かその周辺にある魔物の領域では、もうかなり奥に入らないとそれらの材料が手に入らないのであろう。

乱獲に注意していても、魔法薬の材料になる薬草の成長には通常の薬草の何倍もの時間がかかる。
それに、いくらブライヒレーダー辺境伯などが乱獲を禁止しても、魔物の領域の中でまで冒険者達がルールを完璧に守っているのかなど確認のしようが無いのだ。

「まさか、素材獲りだけのためなんて父上には言えなかったんだろうね。名分を整えるための大軍を整えて、それで魔物を刺激してしまったんだから僕達としては笑うしかないんだけど」

エーリッヒ兄さんは、内心では先代故ブライヒレーダー辺境伯に文句でも言いたいのであろう。
彼の我が侭に付き合った結果、バウマイスター家も困窮してエーリッヒ兄さんはこの家を出る時期が少し遅れたのだから。
きっと、他の場所で狩りをしている他の兄さん達も気持ちは同じなのであろう。

しかも、俺達はこうやって結婚パーティーのご馳走の材料を狩らされているわけだし。

「今日は、もうこんな所でいいかな。まだあと三日間も狩りをしないといけないんだ。根を詰めるのは良くない」

俺もエーリッヒ兄さんの意見に賛同し、急ぎ二人で獲物を載せたリアカーモドキを引きながら屋敷へと戻るのであった。

なお、俺とエーリッヒ兄さんは他の兄さん達や村の狩人達よりも沢山の獲物を獲って来たらしい。
それから三日間も、なぜか物凄く狩りの成果を期待されるようになる。

そして五日後、ようやくにして長旅をして来た長男クルトの嫁さんとその護衛一行が到着し、教会の老神父が取り仕切る結婚式が行われる。

前の世界のキリスト式と同じく、やはり結婚式は教会がで行われるらしい。

お嫁さんであるアマーリエは、今年で十八歳。

些か年が離れているような気がしないでもないが、この世界ではさして気にする人間はいない。

身分の高い王族や貴族や成功した大商人ともなると、連れ合いを亡くしたとか、純粋に若い嫁が欲しいと。

このくらいの下級貴族の娘と再婚したり、妾を増やしたりする事が良くあるからなのだそうだ。

それと、この年で結婚するアマーリエであったが、この世界ではほぼ平均的。

男顔負けの活躍をする女冒険者などは結婚が遅れる風潮があるようであったが、庶民も貴族なども女性は二十歳前で結婚するのが普通らしい。

それでも個人差があるので、二十代前半くらいまでは周りが余計な陰口を叩くような事はしないようだ。

ただし、二十五歳を過ぎると、これはもう世間では大年増扱いされるらしいが。

アマーリエの実家であるマインバッハ家は、うちよりは財政状態はマシな騎士爵家であり、彼女は一生に一度の晴れ舞台に相応しく高そうなドレスをあつらえて貰っていた。

他にも、引き出物の家具なども質は良さそうに見え、それだけこういう時の貴族の見栄の張り方は重要という事なのであろう。

俺は貴族ではなくなるので、そんな見栄とも縁は無いはずであったが。

「あと一週間……」

式の間に、エーリッヒ兄さんがふとこう漏らしていた。

一週間後、今度は次男ヘルマンが名主の家に正式に婿入りをする。

それを見届けてから、三男パウル、四男ヘルムート、五男エーリッヒは父から支度金を貰い、ようやく家を出る事が出来るのだ。

みんな、王都で兵士や下級官吏の試験を受けるらしい。

合格出来れば独自に生計を立てられるので、みんな空いた時間に必死で剣の訓練や勉強をしているようだ。

「……」

「ヴェルは、まださすがに独り立ちは無理だろうからね」

やろうと思えば出来なくもないであろうが、如何せん今の俺は見た目がまだ七歳のガキでしかない。

この状態で家から出せば、最悪父や母が『貴族の癖にいらない子供を捨てた』などと非難されかねない。

俺は、あと最低八年くらいは我慢するしかないのだ。

「俺、クルト兄さんやヘルマン兄さんとほとんど話をした事が無いんですけど」

年齢が親子ほども離れているし、俺には魔法の才能という、バウマイスター家の相続問題で地雷になりかねない問題がある。
結果、どう話しかけて良いものか良くわからないのであろう。
嫌われてはいないのだが、何となく距離を置かれているのは簡単に理解できてしまっていた。

「（はあ……。また俺のボッチ人生のスタートか）」

それから一週間後、次男ヘルマンの結婚式も無事に終了し、それを見届けたエーリッヒ兄さん達はバウマイスター家から幾ばくかの相続権放棄の謝礼も込めた支度金を貰い、うちに商売に来ていた隊商の帰路に同伴して王都への旅に出ていた。

「大きくなったら、王都に遊びに来ると良い。歓迎するから」

優しいエーリッヒ兄さんは、俺に気遣ってそのような言葉をかけてくれたが、他の兄さん達とは特に話をする事もなかった。

「（はあ……。マジで俺のボッチ伝説が始まるな）」

少なくとも、暇を潰す手段は引き続き確保しよう。
俺は、次第に遠ざかるエーリッヒ兄さんの姿を視界に入れながら、これからの事を考え続けるのであった。

第十六話　ボッチを極める。

「おい、あの子は確か……」

「お館様の八男で、確かヴェンデリン様だったような……」

「何をしているのかな？」

「さあ？　うちは、子供でも貴重な労働力なんだがな。噂によると、あまり働き者の気質は持っていないらしい」

「お館様のお子だからなぁ。迷惑にさえならなければ問題ないべ」

長男クルトと次男ヘルマンが結婚し、他の兄さん達が家を出てから一ヵ月後、俺は一人領内のまだ開墾の予定すら立っていない平原を走り抜けていた。

途中、農作業に向かう農民達が俺の事を噂してるのが聞こえる。

内容が、『家の手伝いもしない、我が侭な末っ子』と言うのはとっくに理解している。

いや、敢えてそうなるように父や長兄クルトが流していたのだ。

僅か七歳の子供にと思うが、ここで俺が魔法を駆使して、農地の開墾や用水路を素早く整備したりするとする。

実際、もう既に上級の魔法すらほぼマスターした俺からすれば、農地の開墾や用水路の掘削などあっという間に終えてしまうであろう。

使える人間が少ない分、そのくらい高位の魔法使いとは優れた能力を発揮するものなのだ。
とはいえ、父達は俺の魔法使いとしての実力を把握しているとは言い難いので、手伝いを頼むかどうかの判断以前の状態なわけだが。

父達には、『一人で森に入ってホロホロ鳥を狩れるくらいの、身体能力を上げる魔法の使い手』という風に認識されるようにしている。

それと、ようやく昼の間は自由に外に出ても良いという許可を得ていた。
外に出れば、多少自由に動いても問題は無いはずだ。

なぜなら、このバウマイスター騎士領はとにかく広い。
その中で父達が認識している領域は、北部と西部の山脈の麓にある人口八百人が住んでいる三つの村と、その人口が食べていける程度の農地や森など。

しかし実際には、東部や南部の未開開発地域や、それに付随した魔の森と、その先にある海岸や海。
バウマイスター騎士領の領地や権利は、実は開発さえ出来れば南方随一の貴族となれる可能性を秘めている。

秘めているのと、実際に出来るのかには、大きな隔たりが存在していたが。

父に言わせると、特に海が惜しいようだ。
魔の森を突破できないと開発すら困難なわけだが、他に手を出せる貴族は皆無なので、独占できれば魚産物や港を作っての貿易や海運と夢は広がる。

更に、塩が自前で手に入るのが素晴らしい。
実際バウマイスター騎士領は、領地が海に面している癖に塩は山を越えて来た隊商から買うのが普通だ。
値段も、わざわざ山を越えて来ている商人にしては良心的だが、手間賃分はやはり割高にはなってしまう。

うちのスープが薄塩味なのは、このせいなのだ。

とまあ、我がバウマイスター騎士領の実情はこんな所であったが、俺はとりあえずは行動範囲を広げるために動いていた。
朝、日課になっている剣などの訓練を軽く行い、朝食後に昼食代わりの小さな黒パンを二個貰ってから家を出る。

ちなみに、今までの森での狩猟と採集物の提出は免除されていた。
人口に比例した農地と用水路建設がひと段落したので、借り出されていた人達が狩りをする余裕が出来たからだ。

我が家も、父と長兄クルトが交代で森に狩猟と採集に行くようになっている。
さすがに、七歳の子供が獲って来るホロホロ鳥だけにメインディッシュを任せるほど、二人にプライドが無いわけでもないようだ。

とはいえ、ホロホロ鳥ではプロの狩人にも難しい獲物である。
獲れない日の方が多いので、俺は帰りに二羽か三羽の草原ウサギをお土産にする事にしている。

何しろ、バウマイスター騎士領南部には未開の森や草原が多い。
それしか無いとも言うが。
なので、帰りにいくらでも獲る事は可能であった。

「さて、今日こそは魔の森を拝むぞ」

現在俺が集中的に訓練を行っている魔法は、『飛翔』と『瞬間移動』の二つであった。

飛翔は、前の世界では漫画やゲームで御馴染みの魔法だ。

某ＲＰＧの○ーラや、その漫画にもあった○ベルーラ。

あとは、○ラゴンボールにもあった武○術に当たる魔法である。

両方とも、魔法自体はすぐに使えるようになっていた。

最初にあまり良く考えないで飛翔のスピードを上げた結果、息が詰りかけたのは良い思い出であったが、それは自分の体を空気の膜で防御するようになってからは発生していない。

スピードも、高速道路を走る車並には出ているので、これも特に問題は無いであろう。

それに、一度覚えたポイントには一瞬で瞬間移動で移動可能であった。

そう考えると、海まで到達するのはあっという間という思いが頭の中に浮かんだのだが、実際にはまだ魔の森に到着していなかった。

なぜなら、俺は人が住んでいる地域以外録に地図すらなく、しかもその領域の広さが北海道にも匹敵するバウマイスター騎士領内を自在に動けるようにと、未開地の地図を作成しながらこの三週間を過ごしていたからだ。

この三週間の努力の結果、未開地のほぼ全域、魔の森の広さが北海道の四分の一ほどの大きさであったので、残り四分の三に千箇所近いポイントを置く事に成功していた。

ポイントとは言っても、何か標識などを設置したわけではなく、瞬間移動の際に安全に着地可能な場所を自作している詳細な地図に書き込み、そこに番号を振っているだけに過ぎない。

あとは、その番号と大体の位置を頭に思い浮かべながら瞬間移動の魔法を使えばそのポイントに無事に到着する。

多少位置がズレる事もあったが、あとの細かい移動は飛翔で十分なのだから。

しかし、この三週間でわかった事であったが、この未開地は宝の山だ。

開墾可能な土地は多いし、治水工事は不可欠だが河川が多くて水には困らない。

点在する林や森は様々な産物の宝庫だし、鉄、銅、金、銀、各種宝石、ミスリル、オリハルコンの鉱石を産出する鉱山すら複数存在していた。

開発さえ出来れば、バウマイスター騎士領は侯爵領にジョブチェンジどころか、独立した小王国の建国すら可能であろう。

ただ、それは今の時点では夢物語であった。

王国はまだ中央部の開発すら半分も終わらせておらず、南部辺境にもそれなりに貴族が配置されていたが、彼らも自領に開発可能な未開地を多数抱えていたからだ。

要するに、このバウマイスター騎士領の未開地に送る人間や資金が不足していたのだ。

この地の開発が始まるのは、多分何百年も先であろう。

というわけで俺は、第二到達者として自由にウサギを狩ったり、魚を獲って焼いて食べたり、あとは新しい魔法の練習場として利用していた。

特に高威力の上級攻撃魔法練習には、この誰もいない未開地は格好のポイントとも言えた。

あとは、土系統の特殊魔法の練習であろう。

金の鉱山で、適当に集めた鉱石や砂金から純粋な金の成分だけ取り出して金のインゴットを作る。

師匠が『抽出』と『再結合』と呼んでいた、錬金術師になるには基本となる魔法であった。

あとは上級魔法として、銀に魔力を添加してミスリルを生成するという物もある。

使用する魔力に比して出来るミスリルの量は少なかったが、大量に魔力を使うので、魔力量を増やす練習には格好の魔法ではあった。

なお、俺が第二到達者なのは、第一が一応はブライヒレーダー辺境伯とその軍勢に、我がバウマイスター騎士領軍の半数であったからだ。

しかし、彼らは本当にただ魔の森までの最短距離を移動のみしたらしい。

せめて鉱山の一つくらい見付けていても良さそうな気がしたのだが、よくよく考えるとこんな辺鄙な未開地に人を送るのも難しいし、目先の魔の森産の素材などに目が眩んで無視されたのであろうと思われる。

「暗い森だな……。何か出そうだし……」

そんな事をしながら、今日は遂に魔の森をその視界におさめる事に成功していた。
昼なのに外からでもわかる不気味な薄暗い森で、耳には不気味な鳥の鳴き声や、聞いた事もないような魔物の叫び声や悲鳴なども聞こえ。
どう考えても、七歳の子供が一人で入って良いような場所には見えなかった。

「まあ、成人するまで入るつもりはないけど」

いくら魔法が使えても、その身体能力を強化できるとしても。
このくらいで油断してこの森に入っても、今の俺だと死んでしまう可能性があったからだ。
大丈夫かもしれないが、それを自分の命をチップに試すつもりは俺にはなかった。

この世界は、ゲームではない。
一度死んでも、コンティニューというわけにはいかないのだ。

もう少し大きくなってから剣や他の武芸の訓練を始め、それがある程度形になって成人してから。
そのために、俺は瞬間移動でここに来れるようにしているのだから。

あの師匠ですら、魔の森の魔物の群れには勝てずに命を落としている。
慎重にいくら度が過ぎても、それは過ぎたとは言わないと俺は思っていた。

「とはいえ、海に行くのを諦めたわけではない」

それから一週間、俺は飛翔と探知の魔法を駆使して魔の森の上空を探っていた。

まずは、魔の森が一番薄くて海に近い地点を探り、その進路上に飛行可能な手強い魔物がないかを探るのだ。

そこに竜などがいればアウトだが、いなければ飛翔の魔法で全力で飛べば海に辿り着く事も可能であろう。

一週間の捜索の結果、どうにか飛翔で海まで飛び越えられそうな魔の森が薄い地点を発見する事に成功する。

幸いにして、魔物は魔の森からは絶対に一歩も出ないし、飛翔の魔法で全速力を出せば竜よりは少し早く飛べる。

「海には、美味しいお魚さんがいるんだ！　それと、自前の塩！」

いい加減、薄い塩味の食事には飽きていた。

醤油や味噌は不可能にしても、せめてもう少し味の濃い食事を。

この魔の森を飛び越えれば、そこには大量の塩が眠っているのだ。

でなくて、含んでいるのだと。

「飛翔！　マックススピードで！　いざ、海へと！」

久しぶりに燃えて来た俺は、多くの魔力を燃やして飛翔の魔法で魔の森を超高高度・超高速で飛び越える。

そして数分後、俺は無事に海へと到着していた。

「やったぁーーー！　海だぁ！」

そこは、全く人の手が入っていない綺麗な砂浜と透明度の高い海水でのみ構成された海であった。
しかも、この海岸と海は魔物の領域からは外れているので探知を使っても危険な存在は察知できなかった。

海中に大型の魚類らしき反応、多分これは鮫か何かであろう。
だが、浅瀬で遊んでいる限りは、俺に害を成す存在ではなかった。

「まずは、飯だな」

俺は、急いで自作の釣り道具を作成し、砂浜近くにある岩場でパンを餌に釣りを始める。
するとここの魚は擦れていないらしく、釣り経験の少ない俺でも簡単に釣り上げる事に成功していた。

前世で自炊をしていたせいで一応魚も捌けたので、すぐにサバに似たこの魚が食えるのかを『鑑定』の魔法で確認してから、念のために『毒消し』もかけ、火で焼いて食べてみる事にする。

味付けは海水だけであったが、久しぶりの海の焼き魚に俺は舌鼓を打っていた。
バウマイスター家だと、たまに用水路で獲れた鮒や鯉モドキが食卓に上がるのだが、これがとにかく泥臭くて不味かったのだ。
一回食べて以来、俺は二度と食卓に昇っても口にしなかったほどだ。

「あとは、貝とかエビにカニだな」

岩場では他にも、カキやサザエやアワビに似た貝や、食べられる

大型のエビやカニなどが簡単に獲れていた。
それらも串に刺してから火で焼くと、懐かしくて美味しい匂いが漂ってくる。

「美味ぇ！」

それを頬張りながら、久しぶりの海を幸を心から堪能するのであった。

第十七話　海には、夢が詰まっていると思う。

「しかし、そこで諦めては〇西先生も駄目だと言っていたな」

数日後、俺は海岸で新たな取り組みを開始していた。

別に海岸でわざわざ行う必要はないのだが、ここだと人目は皆無であったし、何より自由に海の幸が食べられるのが良い。

「ここでは、塩も大量にあるからな」

俺が今挑戦しているのは、土系統魔法の応用オリジナル魔術であった。

まずは、いくらでも好きに使える大量の海水を材料に、魔法で塩を作る実験を行うのだ。

ただ、この魔法は師匠が残した本にも書かれている。

冒険者が塩を切らした時に、土や岩塊、動植物に果ては魔物の死骸まで。

そこに僅かに含まれる塩を、魔法で精製して得る事は良くあるらしい。

人間とは不思議な物で、まだ食料が十分にあっても、それに塩味が付いていないだけで食欲を亡くして死んでしまう事があるそうだ。

人間にとって、塩はそれほど重要な物なのだ。

話を戻すが、師匠からの本に書かれていた魔法のコツによって、俺は無事に素早く大量の高純度の塩を得る事に成功していた。

塩化ナトリウム９９．９％とまではいかなくても、白くてサラサラした塩は、屋敷にある少し黄色がかった塩や岩塩とは一線を画すものだ。

「というか、塩の販売で生きていけるかも」

などと考えてしまう俺であったが、ここで満足をしてはいけない。この塩を材料に、あの調味料の復活を企んでいたのだから。

「まずは、味噌からだ」

うちの領内どころか、この世界でも大豆はポピュラーな作物だ。家畜の餌にしたり、スープに入れて煮込んだり、雑穀として麦粥に入れたりして食べられている。

値段も安いので、俺はここに来る前に屋敷の近くで畑を耕している領民から麻袋一袋分をゲットする事に成功していた。

代金は、自分で獲ったウサギの毛皮と肉である。

さて、あとはこの大豆と塩を材料に味噌を作るだけだ。

この世界には味噌がないので完全に手探りとなるのだが、幸いにして参考になる魔法が存在する。

魔法使いの一部には、自分で準備したブドウを材料に一瞬にしてワインを造ってしまう猛者が存在するらしい。

他にも、麦を材料にエール、砂糖を材料にラム、ハチミツでハチミツ酒などもあるそうだ。

この世界でも糖質がアルコールに変化する仕組みは知られているようで、色々な物を材料に酒を造る魔法使いは存在していた。

普通なら長期間かかる醸造の行程を、魔法で一瞬にして行うのだと言う。

真面目に酒を作っている醸造元からすれば噴飯物なのかと思えば、実はそうでもないらしい。

なぜなら、味はやはりプロの酒蔵の方が上であったし、たまにプロ顔負けの酒を造る魔法使いもいるようだが、今度は量が伴わない。大半が、趣味で作って自分や家族で楽しんでいるレベルなのだそうだ。

とはいえ、普通に飲める酒の醸造が僅かな時間で出来るのだ。ならば、味噌の醸造だって可能なはずだ。

「まずは味噌だ。そこから、味噌溜りに進み、最後に醤油の醸造も魔法で。夢が膨らむなぁ」

俺は、早速味噌の作成を始めるのであった。

「ははははっ……。まさか、こんなに苦戦するとは……」

俺は、ようやく完成した味噌と醤油を前に、この一年間ほどにも及ぶ苦労を思い出していた。

魔法なら気軽に作れるはず。

そんなに量も必要ではないし、俺の分だけあれば良いんだからと。
もし過去に戻れるのなら、そんなお気軽な発言をした俺に注意したくなるほどであった。

味噌の造り方は、昔に田舎の祖母が自分で作っていたので行程くらいは知っていた。
何回か、実際に手伝った事もあったからだ。

実際に大豆を煮るとかは、これは魔法に任せるのが普通なのでしない。
しなくても、豆を煮た状態に魔法で変化させる事は簡単だったからだ。

それと次の材料の混ぜ合わせまでは良かったのだが、次の発酵で大きく躓く事となる。
材料が、何回魔法をかけても腐ってしまうのだ。

昔に、高校時代の生物の教師が、授業中に雑談をしながら質問して来た事があった。
『発酵と腐敗の差とは何だと思う?』と。
みんな色々な答えを出したが、正解はこうであった。

発酵も腐敗も、同じ現象でしかない。
人間にとって有用なのが発酵で、害なのが腐敗なのだと。

こうして俺は、山ほどの大豆を無駄に腐敗させながら、狩ったウサギと大豆を毎日のように交換し、領民達から変な目で見られ続ける事となる。
それでも、何千回もの失敗の後に、何とか味噌の製造に成功していた。

そして、それと同じくらい醤油でも失敗を繰り返す事となる。

というか、上級の師匠の本ではかなり難しいとされる魔法でも数回で一応は成功させてしまう俺なのに、他にも色々とオリジナル魔法の開発を成功させているのに。

まさか、味噌と醤油の製造で失敗を繰り返すとは思わなかった。

ただ醤油の場合は、なかなか味噌溜りから進歩が無かったという種類の失敗だったので、これは大豆を無駄にはしていない。

やはり毎日大豆を交換していたので、領民達からは変な目では見られていたが。

あまりに毎日大豆を交換するので、領民達は食事に大豆を使わなくなったらしい。

それよりも、俺とウサギや猪の肉と交換した方が毎日肉が食べられる事実に気が付いたのであろう。

何に使っているのであろうと疑問には思うのであろうが、そこは一応は領主の息子。

対等な交換で搾取されているわけでもないので、心に棚を作って普通に交換に応じているのだと思う。

うちの家族が、何も言って来なかったのが幸いとも言えた。

扱いが、腫れ物に触れるの類だからなのだろうが。

なお、なぜか酒の製造魔法の方は一発で上手くいっていた。

またも屋敷近くで畑を耕す領民と、狩ったホロホロ鳥と麦を交換し、それで麦焼酎やエールを。

他にも、未開地で採集した山ブドウや野イチゴなどの自然の果物を材料に、ワインのようなお酒も製造に成功していたからだ。

まだ体が子供なので試飲は味見程度しか出来なかったが、なかなかに美味だったのでこれは魔法で土から頑丈な甕を作り、そこに酒を入れて密封して魔法の袋に仕舞っておく事にする。

土から魔法で焼き物の原料として最適な二酸化珪素、酸化アルミニウム、水を取り出して粘土状にし、甕の形に整形して、高温の釜で焼成を行った後の状態を目指して材質を変化させたのだ。

火の魔法で焼くという考えも一瞬浮かんだのだが、さすがに高温の火の魔法を一週間出し続けるのは不可能であったので、これはすぐに却下した。

最初は、脆くてすぐに崩れたり、水漏れが酷い甕ばかりが完成して粘土を相当に無駄にしたが、数百回の試行錯誤の後に、酒や味噌や醤油の保存に相応しい甕が完成している。

甕の造形美に関しては、これは俺の芸術センスの欠如によってまず売り物にはならないであろう。

要は、作った発酵食品の保存に使えれば良いのだ。

漏れなければ、魔法の袋に入れておけば品質は劣化しないのだから。

そんなわけで、この一年間は甕と味噌と醤油の製造に全力を傾けていたような気がする。

他にも、魔法で塩を精製したり、ふと南方に島を発見し、そこで自生していたサトウキビから砂糖の精製を魔法で試みていたりと。

砂糖は、リンガイア大陸の南端地域や南方海上に浮かぶ島嶼などで栽培されているらしい。

当然、王都や北方地域、果ては輸出品としてアーカート神聖帝国

にも輸出されているようであったが、俺はバウマイスター騎士領内では一度も見た事がなかった。

何でも、需要に比べて極端に生産量が少ないので、価格が塩よりも圧倒的に高いからなのだそうだ。

財政的に厳しい我がバウマイスター家ならば、贅沢品の砂糖などよりもその何十倍もの量が買える塩なのであろう。

あとは、森で獲れるハチミツや果物とか、汁を煮ると軽く甘い蜜が出来る蔓などで甘味を補っているのが普通であった。

話は長くなったが、何にせよこれでサバの味噌煮を作ったり、サザエのツボ焼きに醤油を垂らす事が可能になったわけだ。

海と繋がっている河川では、南方なのになぜか鮭に似た魚も遡上するので、これでチャンチャン焼きやイクラの醤油漬けなども作れるはずである。

「だがこうなると、余計にアレが必要となるな」

日本人には欠かせない主食、米の存在であった。

ここは南方なので栽培しているのかと思ったのだが、少なくとも我が領では栽培されていないらしい。

だが、無いはずはないと本で調べた結果、他の南方では作られているという記述を発見していた。

この事実を知った時に、俺は自分の新しい父親がバカなのではないかと思ってしまう。

水が不足しているわけでもないのに、麦よりも収穫効率の良い米を作らないとは。

水田を作るのには最初は苦労するはずだが、水田ならば連作障害も起きない。
どうせ開墾で苦労するのであれば、水田を作るべきだと俺は思っていた。

まあ、これは碌に家の手伝いもない放蕩息子の口先だけ発言でもあったのだが。
俺が進言してもまず聞き入れては貰えないとは思うし、南方で栽培しているとなれば、これは自前で手に入れるしかないであろう。
普通に市場で買えば良いわけだが、それにはまず外部に瞬間移動が可能なように瞬間移動のポイントを領外に作る必要がある。
つまり、一度はそのポイントに自力で移動しなければいけないのだ。

「第一の目標は、ブライヒレーダー辺境伯の館がある南部最大の商業都市ブライヒブルクだな」

ブライヒブルクは、先代が大きな失敗をしてその損害の回復で苦労はしていたが、その程度では揺るがない大身ブライヒレーダー辺境伯領の本拠地で、南部辺境地域における最大の商業都市であった。

南部に領地を持つ貴族達は、かならず贔屓の商人に商会の支店を作らせて常駐させていたし、近隣からも多くの人達が観光や買い物に訪れる。

そして何より、ここには南部辺境地域を統括する冒険者のみならず、各種ギルドの南方本部が設立されていたのだ。

「次の目標は、ブライヒブルクに瞬間移動で移動可能になる事だな」

米の購入に関しては、魔法の袋の中に入っている物でいくらでも購入可能であった。

師匠の財産や、ブライヒレーダー辺境伯軍の軍需物資に、壊滅するまでに得ていた魔物の素材なども大量にある。

更に、この一年ほどで大量の発酵食品や塩や砂糖なども大量に生産していたのだから。

保存する甕と合わせて、毎日必死に努力した甲斐もあり、魔法の袋には既に数万個に及ぶ甕が収納されていた。

数が異常に多いような気もしたが、これも魔力量の増大を兼ねた訓練のためでもあったからだ。

慣れるとどうしても魔力の使用量が効率化されて減るので、魔力量上昇のために限界まで魔法を使う訓練をする時に、次第に出来上がる物が増えてしまっていた。

別に攻撃魔法でも良いのだが、いくら無人の平原とはいえ火炎や竜巻の魔法を連発させると環境に悪いので、魔力量を上昇させる訓練では土系統の生活魔法を使う事が多かったのだ。

「明日からは、山道を走らないといけないからな。早く帰って寝よう」

俺は、瞬間移動の魔法を唱えて急ぎ家へと帰還するのであった。

第十八話　大都会だよブライヒブルク。

「すげえ！　久しぶりの大都市だよ！」

ブライヒレーダー辺境伯の治める南部最大の商業都市ブライヒブルクを見下ろす山の高台で、俺は久しぶりに見る大都市に感激していた。

人口は、二十万人くらいであると聞いている。

前世である平成日本の都市で言えば大した事はなかったが、ここ一年以上も人口数百人の寒村で暮らしていた影響で、俺には物凄い大都市に見えてしまうのだ。

更に、ここまで到達するのに俺は一週間の時間を要していた。

バウマイスター騎士領との間に横たわる山脈には、数ヶ月に一度は商隊が荷を持って来るので、一応は山道が存在している。

しかし、そこを通っても彼らは往復で一ヶ月程度の時間がかかってしまうらしい。

『良く、碌な特産品すらないうちに商売に来るよな』などと思ってしまうのだが、これはほぼ利益無しの半分公共サービスでもあるらしい。

南方最大の貴族にして、この南方地域の貴族の取り纏めをしているブライヒレーダー辺境伯が、寄り子であるバウマイスター家やその領民のため、赤字を切ってまで定期的に行っているのだそうだ。

この話は、前にエーリッヒ兄さんから聞いたのだが、更に五年前の無理な出兵でバウマイスター家も相当な人的・金銭的な被害を受けている。

しかもこの出兵は、ブライヒレーダー辺境伯側が求めて来たものなのだ。

父の鼻面欲も相当にあったのであろうが、寄り子が寄り親の頼みをそう簡単には断れない事情もあったようで、この出兵の後には、今までは年に二回しか来なかった商隊が年に三回来るようになったらしく、これは詫びというか批判封じという側面もあるようであった。

その辺の事情は、全てエーリッヒ兄さんが教えてくれたのだが。

そんな事情もあり、一応は山脈には道が存在している。

俺は身体機能を強化し、周囲を探知しながらその道を進む。

この山脈には、魔物がそれなりに出るらしい。

一応魔物の領域扱いになっているのだが、どういうわけか山道沿いには滅多に現れず。

だが、かと言ってゼロではないし、普通の熊や狼などは頻繁に現れるので警戒は必須であった。

それと、俺が飛翔の魔法を使わない理由。

それは、山の方に視線を送った家族や領民達に、飛翔で飛んでいる俺の姿が目撃されないようにするためである。

あとは、多少は体力強化のための運動という理由もあったが。

一日で進める限り進んでから瞬間移動で家へと戻り、翌日は昨日までに進んだポイントに瞬間移動で戻って移動を開始する。

そんな面倒な事をしたので、余計に時間がかかってしまったのだ。

もっとも、魔法のおかげで、商隊の半分ほどの時間で山を越える事に成功していたのだが。

「どうした？　坊主」

「お使いで、町に買い物です」

感動の後に、俺はブライヒブルクの入り口へと移動する。

近くに、冒険者達が篭る魔物領域ブライヒブルク大森林があるので、このブライヒブルクは高さ三メートルほどの防壁によって囲まれている。

とはいえ、魔物が今までに己の領域から外へと侵攻した例は一回もなく、多分これは対人間用なのであろう。

戦争など長らく無いヘルムート王国であったが、全く荒事がないわけではない。

貴族同士による、領地や水利権などが原因の小規模な小競り合いなどは、数年に一度は必ず発生するからだ。

特に、領地が接している貴族同士にはこの手の争いが多い。

実際にブライヒレーダー辺境伯も、近隣に数家仲がよろしくない貴族家が存在する。

ちなみにバウマイスター家には、そんな利権争いをする貴族などは存在していない。

山脈によって、物理的に隔離されているからだ。

「坊主、身分証はあるのか？」

「無いです。商業ギルドで会員証を作ろうかと」

「そうか。入街税の銅貨一枚は払えるのか？」

「大丈夫です」

実は身分証は持っているのだが、さすがに八歳のバウマイスターの八男がブライヒブルクに現れたとなれば、それは大問題になってしまう。

そこで俺は、近隣の農村の子供として街に入り込もうとしていた。

身分証は街で住んでいる住民はほぼ全員が持っているが、農村などでは発行してくれる場所が無いので持っている人間は少ない。

発行して貰うには、わざわざブライヒブルクまで出向く必要があったからだ。

ならば、買い物などで街に入りたい田舎者はどうするのか？

答えは、ギルドに加入するというものであった。

本当は冒険者ギルドが一番相応しいのだが、あそこは最低でも十五歳にならないと入れないルールがある。

戸籍など無い世界なので少々の年齢の誤魔化しは効くが、さすがに今の俺が十五歳を自称しても無駄であろう。

そうなると、残りは職人ギルドか商人ギルドという事になる。

職人や商人の世界では、俺くらいの年齢の子供でも丁稚奉公をしている人が多い。

しかも、師匠や親方の命令でブライヒブルクにお使いに行くケー

スも多く、比較的簡単に身分証を作れるようになっていた。

「なるほどな。そのウサギを売るのか」

門番の兵士は、俺が腰にウサギの皮を数枚ぶら下げているのを確認する。

これは、山道の途中で得た物であった。

「はい、何かを売る際には商業ギルドの会員証が必要だと聞きましたので」

正確には、身分証が必要であったのだ。

街の住民は最初から身分証を持っているし、各種ギルドに所属していれば会員証がその代理を果たす。

品物の売買の際には、防犯のためにこれを提示する義務があった。

意外と厳格ではあったが、実は裏町には身分証無しで売買をする店もあるらしいし、そもそもギルドの会員証自体が外部の人間には作り放題という罠も存在していた。

そのおかげで、俺も簡単に会員証が作れて万々歳なわけだが。

俺は、門番に入街税銅貨一枚を支払ってからブライヒブルクへと足を踏み入れる。

この入街税は、街に入る際には必ず払わなければいけないようだ。

銅貨一枚なので、それほどの金額でもないのだが。

ちなみにこの世界の通貨制度であったが、これはリンガイア大陸では全て統一されている。

ヘルムート王国とアーカート神聖帝国では貨幣のデザインが違っていたが、条約によって使われている金・銀・銅などの量が統一されていたので、別にどちらを使っても問題にはならなかった。

あとは、貨幣の種類と価値であったが、お金の単位はセントが採用されている。

ただ、貨幣経済に触れる機会が数ヶ月に一度来る商隊から売り買いする事くらいしかなく、普段は物々交換で済ませてしまう我がバウマイスター騎士領では、滅多に耳に入らないワードではあった。

銅貨一枚で一セント、銅貨十枚で銅板一枚で十セント、銅板十枚で銀貨一枚で百セント、銀貨十枚で銀板一枚で千セント、銀板十枚で金貨一枚で一万セント、金貨十枚で金板一枚で十万セント、金板十枚で白金貨一枚で百万セント、白金貨十枚で白金板一枚で1千万セントとなっていた。

銅貨一枚でリンゴが一個は買えるし、頻繁に支払う入街税も同額なので、一セントで日本円に換算すると百円くらいなのであろう。

「商業ギルドへようこそ。会員証の発行ですね。必用事項をこの書類にお願いします」

門番のお兄さんに教えて貰った商業ギルドのある大きな建物へと入ると、そこには様々な用件で訪れた人達でごった返していた。

会員証発行窓口と書かれた窓口で座る若いお姉さんに話しかけると、彼女は口調は丁寧ながらもマニュアル通りのような対応で俺に書類を書かせる。

とはいえこの書類、書くのは名前と出身地と年齢くらいであった。

年齢は普通に書き、住所はここから少し離れた寒村の名前を適当

に、名前はヴェンデリンのみで姓を持たない平民の子供の振りをする事にする。

虚偽記載ばかりであったが、この程度の虚偽では問題にはならないらしい。

中には、平気で名前すら偽る人もいるようなのだ。

「初回の会員証発行は無料です。ですが、再発行には再発行手数料として銀貨一枚がかかりますので失くさないように注意してください。それと、バザーで品物を売る際には、常駐の責任者に位置の指定を受け、品物が売れた際には売り上げの一割を納めるように。ルール違反には、厳しい処置が待っているので悪しからず」

どこまでも事務的な受付のお姉さんの元を辞した俺は、バザーなる物が行われている場所へと移動を開始する。

受け付けのお姉さんの説明通りに、街のメインストリートに繋がる少し細い路地に入ると、そこでは数百人もの老若男女が道の端でゴザを広げて様々な物を売っていた。

中には、俺とさして年の違わない子供もいて、なるほど俺が商業ギルドの会員証を求めても、受付のお姉さんは特に驚きもしなかったはずだ。

「坊主、お父さんの手伝いなのか？」

バザーを仕切るギルド職員の中年男性に話しかけると、彼は俺が親が狩った獲物を売りに来た孝行息子だと思ったようで、優しく声をかけてくる。

「自分で罠を仕掛けて獲りました」

別に魔法が使える事実を公表する必要も無いので、俺は自分が住んでいる村の近くで罠を仕掛けてウサギを獲ったのだと言う事にしていた。

良く見ると、他にも同じように罠などでウサギなどを獲って売っている子供の姿もあるようだ。

「へえ、小さいのに腕が良いんだな。あそこの空いている場所で売ると良い。ウサギの毛皮と肉か。常に足りない状態だから、すぐに売れるだろうさ。今の相場は、肉と毛皮で一羽銅板五枚くらいかな？」

日本円で、五千円くらいらしい。

確かに、指定された場所に行く途中で他にも狩ったウサギの毛皮と肉を売っている人を見たが、値札はみんな銅板五枚からプラマイ銅貨五枚くらいであった。

つまり、四千五百円から五千五百円くらいだ。

俺は細かな利益率の上昇に時間をかけたくないので、普通に銅板五枚を売価に設定し、持参したゴザの上に四羽のウサギを並べる。

すると、すぐに声をかけてくる男性がいた。

見た目はいかにも商人風の、四十歳前後の男性であった。

「お父さんのお手伝いかな？」

「いえ、自分で罠を仕掛けて獲りました」

「ほう、その若さで良い腕をしているんだね。それに、肉も新鮮だ

し毛皮のなめし方も良い」

血抜きも、解体も、皮のなめしも。

魔法で簡単に行えるので、プロの最高級品には劣るものの、そこそこの品質で行えるので当然といえば当然であった。

その魔法を習得する手間と、獲物の解体への抵抗感の方が最初は難題であったほどだ。

前世では、肉はスーパーなどでパック詰めした物しか買った事が無いので当然と言えよう。

特に困ったのが、血や内臓を抜く行程であった。

アレは、元現代人にはそう簡単に慣れる物では無いとだけ言っておこう。

「全部貰おうかな。また売りに来てくれると嬉しいな」

「ありがとうございます」

ウサギは全部で銀貨二枚で売れ、売り上げの一割の銅板二枚をギルド職員に納める。

「この後はどうするんだ？」

「父に頼まれて、米を買って来るようにと」

「相場は、十キロで銅板五枚くらいかな？　産地とか、品種とかでもかなり違うけど」

俺はギルド職員にお礼を言い、近くの米屋で十キロ銅板五枚の米を買ってから家へと瞬間移動で戻るのであった。

勿論、早く買った米を炊くためであった。

幕間一　使い魔は召喚できないらしい。

「そうだ！　ペットを飼えば良いんだ！」

昼間は行動の自由を与えられた俺であったが、実は周囲が思うほど行動に選択肢があるわけではない。

まず、領地の継承争いの原因になるからと、お仕事の手伝いは禁止されている。

直接に言われたわけではないが、定期的に来るエーリッヒ兄さんからの手紙で釘を刺されていたのだ。

『あのクルト兄さんに、そこまでの度胸は無いと思うけど……』

俺が、開墾や用水路の掘削に、整地や道路工事などで貢献したとする。

ある程度大きな領地ならば良いのだ。

大貴族の当主ともなれば、使える弟として高待遇で残そうとするであろう。

分家当主や、家臣として優遇するという手も使える。

ところが、我がバウマイスター家は貧乏だ。

分家も、次男のヘルマンが嫁いだ一家だけで。

俺が下手に活躍すれば、直接に見ている領民達は、俺の方がお館様になった方が良いと言い出すのは確実。

小さい領地なのだから、当然と言えよう。

ドヤ顔で領地の開発に貢献し、領民達から慕われ、みんなが嫡男よりも俺の方が次期当主に相応しいと言う。

『寝首をかかれる可能性があるんだよ。僕は、そんな凄惨な兄弟の殺し合いなんて見たくないね』

人間の嫉妬は恐ろしい。

前世の二流商社員時代にも、それは何回か経験している。

ましてや、小なりとはいえ貴族の次期当主を巡る争いなのだ。

寝ている間に殺されて、周囲には『病死しました』と言うくらい実際に有りそうなのが怖かった。

いくら魔法が使えても、隙を突かれれば呆気ないものなのだから。

というか、クルト兄さんには何よりも大切な次期当主の地位と領地なのであろうが、俺には特に必要性が無い。

むしろ、いらないと断言できるほどだ。

『そういうわけだから。駄目な放蕩息子のフリをしていた方が良い。どうせ、ヴェルは昔から変わり者扱いだから』

最後の一文で微妙に傷付いたが、さすがはバウマイスター家一の秀才であるエーリッヒ兄さん。

もし俺が女なら、惚れてしまうかもしれない。

どうにも実感の沸かない家族ではあったが、エーリッヒ兄さんの

ためならどんな事でも協力をしたり、手を貸すのも吝かではなかった。

そんなわけで、南部未開発地を自由に飛び回る俺であったが、如何せんなかなかボッチ状態からは脱せていなかった。

週に二回ほどはブライヒブルクに行っているのだが、それを公にするわけにもいかない。

なぜなら、俺が自由に瞬間移動可能なのが知れたら、また継承問題が拗れてしまうからだ。

それはそうであろう。

ようやく年に三回来るようになった商隊に頼らずとも、俺が好きな時に必要な交易品を持って来れると知られれば、そんな事は逆立ちしても出来ないクルト兄さんと大きな差が出来てしまう。

あと、俺がそうやって物資を補給するのが当たり前になったとして、では俺の死後にどうするのかという難題も出て来る。

何でも、親切にやってあげれば良いというわけではない。

短期益には益があっても、長期的には大損害というのが良くないからだ。

そんな事情もあり、俺のブライヒブルクでの知己も最低限だ。

ブライヒブルクでの俺は、近くの農村から罠や狩猟で獲った獲物を売りに来て、帰りに頼まれた買い物をする孝行息子ヴェンデリンでしかないのだから。

ローテーションの関係で門番数名、商業ギルドの職員数名、数軒

の馴染みの店の主人や従業員に、あとは図書館の受付のお姉さんくらいであろうか。

図書館のお姉さんは、眼鏡はかけていなかったが知的見える綺麗な女性で、思うにこの世界で母親に次いで一番接している女性とも言える。

以上のような状態なので、ここで俺はこう考えたわけだ。

前世では、一人暮らしの寂しさからペットを飼う人が多かった。
今世では、俺は魔法使いなのでペット兼使い魔が居てもおかしくはないはず。

そう思い、師匠が残した魔法関連の本を調べてみる。
そういえば。師匠にも使い魔が居なかったのを記憶していたのだが、その理由は意外と簡単であった。

『使い魔は、魔法使いの目や耳となり、時にはご主人に魔力を補充する役割りを担うもの。よって、動物との親和性が高い人でないと契約できないのです』

簡単に言うと、〇ツゴロウさんのような人でないと難しいらしい。

「師匠はそうは言うけど、試しにねぇ……」

そう、俺が狼に『ヨシヨシ』と言えるとも思えなかったが、物は試しでもあるし、もしかしたら一匹くらい懐く動物が居て使い魔になってくれるかもしれない。

そう思った俺は魔法の袋からウサギの肉を取り出すと、一番近く

にいる狼の群れを探し、彼らを肉で誘ってみる。

「ほーーーら！　美味しいお肉だぞ！」

「ウーーーーっ！」

「ほら、怖くない！　怖くない！」

昔に見たアニメで、そんなシーンかセリフがあったような気もしたが、別に二番煎じが悪いと言うわけでもないので誘いを続けてみる。

すると、早速に動きがあった。

「ガウガウ！」

「ウォーーーン！」

「駄目じゃん！」

手懐けるどころか、逆に狼の群れが全速力で俺を食い殺そうと迫って来たのだ。

正直、少しビビってしまった。

「こんちくしょう！　駄目じゃないか！」

俺は、異種間コミュニケーションの難しさを知り、暫くはボッチでも良いやと半ば諦めの境地に至るのであった。

「というか、人間同士でも争うのに他の動物とか無理！」

結局、襲いかかって来た狼は全て倒されて今では毛皮になっている。

狼の肉は臭いので食べないが、毛皮はソコソコの値段で売れるのだ。

「俺の使い魔になれば、肉くらい普通に食べさせたのに。畜生とは哀れな……」

数十枚の狼の毛皮を魔法の袋に仕舞いながら、次の候補を探す。

ところが、どの動物も俺が誘うと歯をむき出して襲って来るのだ。

まあ、いつも通りと言えばそれまでなのだが、道理でバイマイスター領の領民がなかなか未開地に来ないはずである。

狼も、猪も、大きな鹿も。

なぜか魔物でもないのに、物凄く好戦的なのだ。

「肉や毛皮の在庫ばかり増えたな」

結局、俺の使い魔になってくれる動物は居なかった。

みんな、俺に倒されて、肉や毛皮の在庫を増やしただけで終ってしまったのだ。

「まあ、良いか。ボッチ上等！　魔法の鍛錬を続けるぞ」

これ以上考えても仕方がない。
そう考えた俺は、今日も飛翔で飛びながら『探知』の魔法で何か無いかと探し始める。

「あれは……」

すると、今日は目の前の岩山が薄い光を発しているのが確認できる。

早速に一部の岩を採って『鑑定』の魔法をかけると、銅鉱石という結果が出ていた。

俺に、鉱石や宝石の原石を見分ける能力など無かったが、『探知』と『鑑定』の魔法があれば見分けくらいは簡単に付く。
あとは、如何に精製技術を上げるかであろう。

そういう没頭できる魔法があると、魔力の上昇や、魔法の精度向上に役に立つ。
当然、時間が経つのも早いというわけだ。

「さすがに、夜は寝に帰らないと駄目だからな。今日は、この辺にしておくか」

薄い光を発していた山は、主に銅を産出する山であった。
本格的な探索は明日にするとして、今日は家に戻る事にする。

本当は外泊でもしたいのだが、さすがに未成年の身では色々と問題になるからだ。

「銅と銀に。金も、少し採れるのか……」

翌日、俺はオニギリをモグモグと食べながら昨日見付けた鉱山の調査を続ける。
一応家で朝食は食べて来たのだが、やはり米も食べたいので家では抑え目にしていた。

ブライヒブルクで購入した大鍋で御飯を炊き、それをオニギリにして魔法の袋に仕舞っておけば、いつでも作りたてのオニギリが食べられる寸法だ。
未開地に土魔法で即席の竈を造り、火は自分の火魔法で一気に炊く。

昔にＣＭで見た、強力直火炊きというやつであった。

最初は火力が強過ぎて何回か米を真っ黒にしていたが、今ではオコゲも美味しい御飯が炊けるようになっている。

具は、未開地で獲れる肉類や、海で獲れるワカメや魚などを味噌や醤油で煮た物に、最近ではマヨネーズなども自作していた。
ブライヒブルクで購入した卵や酢を材料に、風魔法で攪拌して作るのだ。

これも、巨大なボールで作って仕舞っておけばそう頻繁に造る必要も無い。
さすがは、魔法。
実に便利である。

ただ、汎用性はあっても、量産・普及性については問題があるのであろう。
俺に普及させる義務など無いので、そこで文句を言われても仕方

が無いのだが。

「別に、量産して売るわけでもないしな。これで、十分」

自分で必要な分だけなので、とりあえず魔法で可能な事だけを行う。

魔法の鍛錬にもなって一石二鳥だし、これを商売にという話もまずは家を出てからだ。

一体、どこの貴族とはいえ八男のガキと取り引きをしようと考える商人が居るであろうか？

俺は、まずは成人して家を出ないと、世間的な事は何も出来ないのだから。

未開地で一人で好きにやっているのも、これは一種のストレス解消とも言えたのだ。

「うん？　あの動物は？」

試しに銅のインゴットを作ってその仕上がりを見ていると、少し離れた位置に一匹の熊を見付けていた。

大きさは、かなりの物だ。

前世で熊牧場で見たツキノワグマなど比べ物にならない大きさで、その熊は俺を見ても怒るでもなく、興味深そうに俺を観察している。

「もしかして、これは？」

波長が合った、というやつかもしれない。

熊を使い魔にという例は滅多に無いそうだが、居ないわけでもな

いらしく、ならばこの熊が俺の使い魔になってくれる可能性は高い。

「（いける！　いけるぞ！）」

内心は嬉しさで一杯であったが、表面上は冷静に魔法の袋からウサギの肉を取り出して熊に見せてみる。

するとその熊は、鼻をクンクンさせながら、少しずつこちらに近付いて来る。

「（使い魔が熊かぁ。移動とかは大丈夫かな？　まあ、そこのところは後で考えるとしてだ）」

他にも、あの大きさなので背中に乗せて貰おうとか夢が広がっていく。

ところが、そんな俺の夢を打ち砕くかのような悪夢が発生する。

突然、至近まで迫っていたその熊が、歯を剥き出しにしてこちらに襲い掛かって来たのだ。

正直、かなりヤバかった。

才能が無いと言われても、毎朝剣の訓練と一緒に体の捌き片も習っていて良かったと思えるほどだ。

「ちくしょう！　俺の純情を弄びやがって！」

結局その熊は、魔法の矢で脳天を一撃されて天に召され、立派な毛皮と、肉と、薬剤になるらしい肝を残す。

それと同時に、異種間コミュニケーションの難しさと、まだ暫く俺はボッチなのだという事実を再確認するのであった。

幕間二　嫁姑の会話。

「あの、お義母様」

「何です？　アマーリエさん」

「義弟の、ヴェル君の事なんですけど……」

私の名前は、アマーリエ・フォン・ベンノ・バウマイスターと言い、少し前まではアマーリエ・フォン・マインバッハと名乗っていた。

要するに、実家であるマインバッハ家からバウマイスター家に嫁いだ身なのだ。

マインバッハ家は、少領ながらも貴族の家系にある。

なので、当然婚姻は親同士が決めた政略結婚で、嫁ぎ先であるバウマイスター家側も同じ。

旦那様になるクルト様は男性なので、内心ではどう考えているのかは知らなかったが。

私は女性なので、政略結婚も仕方なしとは思っても、家に置いてある物語本の恋愛結婚にも憧れたりする。

憧れるくらいなら、別に罪でも無いからだ。

それに、この結婚自体に文句があるわけでもない。

僻地の騎士爵家とはいえ、同じ騎士爵家の次女が跡取り息子に嫁げるのだから悪い話ではないからだ。

私は次女なので、まずそういう人には嫁げないのが普通だ。

良くて、寄り親である大貴族の大物陪臣の跡取りにとか。

同格貴族家の、家臣化する次男以降にとか。

下手をすると、大物貴族の妾や後妻か、半ば身売り目的で大物商人に降家させられる事だって珍しくないのだ。

ならば、跡取りに嫁げただけ私は幸せだと思うしかない。

さすがに、義理の母になる人が縄を綯っているのを見た時には、少し驚いてしまっていたが。

それでも、貴族家の男性陣が開墾や狩猟に精を出す光景は、田舎の少領貴族家では特に珍しい光景でもなかった。

「あの子は……」

ただ、その中で一人。

普段の行動が良く見えない子がいる。

バウマイスター家の末子である、ヴェンデリンという名の少年の事だ。

義母様が四十歳を超えてから生まれた末子なのに、彼は義母様本人が生んだ子供であり、これはかなり珍しい事だ。

普通なら、若い妾が生む事が多いからだ。

実際、バウマイスター家にも妾がいる。
実家の父にも居たので、別に珍しい事でもない。

ただ、妾は名主の娘のようで、彼女自身とは結婚式で顔を合わせた程度。
彼女の息子二人と娘二人も同じで、これからもそう顔を合わせる機会は少ないはずだ。

何しろ、身分が違うのだから。

四人の子供に継承権は無いし、将来は名主の家を継いだり、他の名主の家に嫁いだりする。
血は半分繋がっているが身分が違うのだから、これは仕方がない事なのだ。

「お腹を痛めて生んだ子ですが、放置するしかないのです」

義母様は、重い口を開いていた。

まさか、生まれるとは思っていなかった八男について。

生まれてからも大人しくて手がかからず、更に時期的に村は魔の森への遠征で受けた損害を補うべく、毎日開墾などで忙しい日々を送っていたため、自然と放置してしまう事が多かったのだと。

ところが、それに不満一つ漏らすでもなく、一人で書斎に篭って本ばかり読んでいたらしい。
そして気が付けば、子供なのに自分達よりも字の読み書きが得意になっていた。

「先ほど独立した、エーリッヒさんのような子なのですね」

あの人とは少ししか話をしていないが、かなり頭がキレる人だ。

思うに、自分の旦那様よりも領主に相応しいかもしれない。

そのせいで、旦那様とはその関係に距離感があるようにも感じていたが、エーリッヒさん本人はアッサリと家を出てしまった。

王都に向かい、そこで下級官吏の試験に合格したそうだ。

多分、あの人ならば余裕で合格したのであろう。

「それだけはないのです」

義母によると、問題のヴェル君は六歳の頃には十歳年上のエーリッヒさんと対等に話ができ、文字の読み書きから計算まで完璧に行えるようになっていたらしい。

「加えて、魔法も使えますから」

どの程度使えるのかは、敢えて聞いてもいないそうだ。

それでも、成人後に家を出て独立しても生活には困らないであろうと、義父様も旦那様も思っているそうだ。

「どうして、そんな人材を放置するのですか？」

そこが、不思議なのだ。

せっかくの才能なのだから、あの子を領地の開発に使えばどれだけ作業が捗るか。

バウマイスター家大躍進のチャンスなのにだ。

「普通に考えるとそうですね」

ところが、そう簡単に行く話でもないらしい。

「バウマイスター領は、僻地にあって小さいのです」

食えないという事はないが、不便で皆で協力して生きて行かないと行けない領地なのだ。

実際に、自分の結婚式にはほぼ全ての領民が参加していた。

普段は質素な食生活を送っているのに、この日ばかりは大量のご馳走とお酒が振舞われる。

冠婚葬祭とは良く言ったもので、実家もそうだが、結婚式は娯楽の少ない領民達からすればお祭なのだから。

「大量にお肉が出ていましたが、これもヴェルの成果ですね」

表向きは、弓の名手でもあるエーリッヒさんの功績になっているが、実際には魔法が使えるヴェル君が奮闘したという事なのであろう。

「ますます協力して貰った方が……」

「それをすると、御家騒動になりますから」

領民と領主との距離が近い、閉鎖的な田舎の少領で魔法が使える息子が居ると知られれば。

当然、義父様に次期当主の交代を直訴する領民が増えるはずだと。

一般の農民は遠慮するかもしれないが、名主階級などからすれば意見を直訴するくらいは普通に行う。
何しろ、彼らは領内の有力者なのだから。

「もしそうなれば、どんな混乱が起こるのか想像もつきません」

１００％全員が賛成ならば良いが、そんなはずもなく。
もし、クルト派とヴェンデリン派で争いが起これば。
しかも、この領地で混乱が起こっても外部からの援軍は期待できない。
何しろ、お隣は山脈を越えないと行けないのだから。

「それに、もしそうなれば。あなたは、次期当主夫人から転落ですよ」

そういえば、そうであった。
せっかく次期当主の正妻になれたのに、それを自分で捨ててどうしようと言うのだ。

「そう言われると……」

醜いようだが、世間はそんなに甘くない。
ヴェル君が当主になって発展するバウマイスター家よりも、旦那様が当主になって今の生活を維持する。

私は、絶対にそちらを選ばないといけないのだと。

「幸いにして、ヴェルはこの領地に興味はないそうです」

それはそうであろう。

彼は魔法が使えるのだから、冒険者としてでも、他の貴族のお抱えになっても良いのだから。

むしろ、そちらの方が実入りは確実に良いはずだ。

「そんなわけで、ヴェルには自由にさせて良いのです。むしろ、そちらの方が双方にとって幸せでしょう」

少し冷たいようにも感じたが、これこそが義母様なりの息子に対する愛情なのであろう。

下手に領地に欲を持って、己の腹を痛めた子同士が争う。

実際に良くあるし、これほどの悪夢も存在しないのだから。

「わかりました。でも、世の中とは侭成らぬ物なのですね」

「ええ、侭成らぬ物なのです」

共に溜息をつき、私はまた少し義母と仲良くなれたような気がした。

何しろ、一生を共にする家なのだ。

義理の両親とは、なるべく仲良くなった方が良いのだから。

第十九話　人混みに出てもボッチ。

「よう、坊主じゃねえか。今日も獲物を売りに来たのか？」

「はい」

「精々、気張って稼げよ」

俺がブライヒレーダー辺境伯領内にある商業都市ブライヒブルクに出入りするようになってから三年の月日が流れていた。

俺もようやく十一歳になったわけだが、ここ三年間の生活に特に大きな変化は無い。

家では魔法のせいで扱いが微妙な子供になっているので、朝に起きて早朝の剣の稽古と朝食を終えると、すぐに森の奥に入って瞬間移動の魔法で出かける毎日だ。

行き先は、南部の未開発地のどこかか、魔の森を越えた海岸地帯か、海を少し南に下った無人島にも足を踏み入れている。

そこでは、魔法の特訓をしたり、鉱山から取れる鉱石を材料に色々と錬金をしてみたり、狩猟や採集や釣りを行い、その成果で様々な食品や料理を作ってみたりと。

そのおかげで俺の魔法の袋の中には、膨大な量の食料や、食品、素材、金属、錬金に成功した品物などが仕舞われていた。

魔法の訓練なのでつい大量に作ってしまうのと、魔法の袋に入れ

ておけば食品なども劣化しないのでつい大量に作ってしまい、その結果魔法の袋に入れて無かった事にしてしまうという行動を繰り返してしまうのだ。

しかし、魔法で精製した塩十キロを入れた自作の甕十万個とか、俺はこれをどうするつもりなのだろうか？

それでも、毎日の特訓で魔力が膨大になってしまった俺がまだ成長する魔力を上げようとすれば、それは沢山魔法を使って魔力を消費する必要がある。

あまりアホみたいに上級攻撃魔法を発動させるのも野蛮であるし、比較的魔力の使用量が多い特殊魔法を連発させるのは仕方が無いのかもしれなかった。

同じく、砂糖、味噌、醤油などの甕も軽く五万個は超えていて、もう十分に一生分は作った計算にはなっている。

一番多いのは、南方の無人島に自生しているサトウキビから魔法で精製した砂糖であろう。

味噌と醤油も、材料の大豆がブライヒブルクでも購入可能になったので、これも暇さえあれば作っていた。

作れば作るほど品質が良くなるので、必要分などを考えもしないで製造に没頭していたのだ。

あとは、鉄、銅、金、銀、白金のインゴットなども恐ろしい量になっていた。

どうせ数百年後に開発が始まるから、それまで少しだけと拝借していたのに、既に金属を取り尽して廃鉱になってしまっている鉱山も多い。

というか、元々俺以外はその存在に気が付いていない鉱山だったので、他の人達には廃鉱になったという認識すら無いのであったが。

しかも、俺には錬金術師や魔道具職人の才能はなかった。

全部、無骨なインゴットにして魔法の袋に仕舞っているだけなのだ。

純度の方は、魔法の精度が上昇したので全て最高級品ではあったが。

そんな感じで、三日間ほど未開地などで過ごしてから、今度はブライヒブルクへと向かう。

狩りで仕留めたウサギ、イタチ、穴熊、ミンク、ホロホロ鳥などを持って、家計のために自分で仕留めた獲物を売りに来る孝行息子という肩書きでバザーに参加し、売れた獲物の代金で米や大豆や他の生活用品などを買う。

特に米は、必須アイテムでもあった。

元が日本人なので、あると知ればどうしても一日一食は食べたくなるからだ。

この世界でも、米はかなりの種類が存在している。

赤米・黒米などの、所謂古代米と呼ばれる品種に、前世では東南アジアで主流であった長粒種、半長粒種、中粒種。

そして、日本で主流の短粒種と。

全て古代魔法文明時代から、コツコツと品種改良が行われて来た成果なのだそうだ。

ただ、最近ではそう品種改良は進んでいない。

古代魔法文明時代には、効率良く品種改良を進めるために植物の

『成長促進』という魔法が使える人達が居たが、今はほとんど居ない。
まあ、そういう事だ。

俺も使えなかったし、使える人でも効果は視界に入る範囲で、微弱な魔力を毎日朝から晩まで放出して収穫までの時間が半減くらい。
なるほど、前世で言う農業試験場みたいな場所を整備しないと、そう簡単に品種改良などは出来ないのであろう。

話を戻すが、米は値段は短粒種が一番高かったが、俺はこれをメインに購入している。
あとは、たまに珍しいからと古代米を買ってみたり、チャーハンやピラフにするために長粒種も購入していた。

それと、もち米もあったのでこれも購入している。
蒸して突けば、お餅が作れるからだ。
味噌の材料として購入した大豆からきな粉も作れるし、小豆もあったので煮れば餡子も作れる。
砂糖もあるので、安倍川餅やぜんざいにおはぎなどを定期的に作っていたのだ。

こうなると、前世で自炊をしていて良かったと思う。
毎日は無理だったが、休日などには趣味で凝った料理なども作っていたのだ。
和菓子などは、味噌造りを教えてくれたお祖母ちゃんのおかげで。
そういえば、お祖母ちゃんは元気であろうか？
それは、唯一気になってしまうのだ。

あと、勤めていた二流商社では国内外の食品購入を担当していて、多少は経験があったのも役に立っていると思う。

この前再現に成功したカレーは、材料に使うスパイスの種類や配合量などをある程度知っていないと、その調合に恐ろしいほどの時間がかかるからだ。

どうせ時間がかかっても、我が身はボッチなので問題ないという意見もあったのだが。

他にも、街の中で昼飯やデザートなどを買い食いしたり。

あと、この街には図書館があった。

入館料である銅板一枚を払えば丸一日居ても良かったので、俺は時間の許す限り本を読み漁っていたのだ。

我が家の書斎の本は読み尽くしていたし、ここにはもっと貴重でためになる本が沢山収蔵されている。

相変わらずあまり他者との関わりはあまり無かったが、まさか正体を明かすわけにもいかないので、ボッチでも仕方が無い点もあった。

魔法の修練に、食を含む生活の向上努力にと。

忙しいので、あまり不都合を感じていなかったという理由も大きかったのだが。

それでも、唯一エーリッヒ兄さんからは数ヶ月に一度手紙が来るので、この返事は欠かさず書いている。

あれからエーリッヒ兄さんは、すぐに王都で行われた下級官吏の試験に合格し、今では直属の上司に可愛がられているそうだ。

その証拠に、その上司の娘さんを紹介され、将来は結婚を視野に

付き合っているらしい。
さすがは、インテリでイケメンなエーリッヒ兄さん。
無難に、リア充の道を歩んでいるようだ。

魔法漬けで、ボッチな弟とは大違いである。

なお、その娘さんは上司である下級法衣貴族の一人娘らしい。
当然結婚相手はその一人娘なのだから、彼はその上司の家を継ぐ事となる。
十分に勝ち組と言えよう。

何しろ、この世界では貴族家に生まれても、その身分を最終的には失ってしまう子息の方が多いのだから。

それと、残り二人の兄達も無難に王都の警備隊の隊員としてやっているそうだ。
結婚はまだらしいが、これはエーリッヒ兄さんと同じく一人娘しかいない騎士爵家の婿入りでも狙っているものと思われる。
なぜわかるかと言えば、貴族家の次男以降で家を出て王家に下級官吏や兵士として就職し、そこで入り婿になって爵位を継ぐ事を狙っている連中は珍しくないと本に書かれていたからだ。

貴族家の次男以降なんて、生きている間は一応は貴族家の籍には入っているが、爵位が継げなければその子供は貴族扱いされないし、自分で食い扶持を稼がなければいけない。

無役でも領地持ちだったり、領地無しでも相続可能な爵位を持っていれば年金もあるのだが、それが無い彼らは自分で自分の食い扶持を稼がなければいけないのだ。

その辺の話は、前世における昔の武士や貴族と同じ扱いのようであった。

元から貴族になど未練が無く、将来は冒険者として生きる予定の俺にはどうでも良い話だったのだが。

「あと一年だ。あと一年経てば」

あと一年で、俺は十二歳となる。

まだ成人扱いではなかったが、実は自立が早まる道を見付けていた。

それは、この街の冒険者ギルドが経営する冒険者予備校に入る事だ。

冒険者予備校とは、冒険者になれるのは十五歳からであるが、その前に必用な技術などを教えてしまおうという趣旨で作られた学校であった。

入学の条件は、最低でも十二歳から。

二十歳以下なら誰でも入学可能であったが、最短でも一年間は冒険者として必用な技術を学ぶ事となる。

訓練は、基本的に魔物の生息領域では行われない。

だが、入学して一年以上経つと数ヶ月に一度。

成績優秀者のみ、護衛にプロの冒険者を付け、比較的難易度の低い魔物が生息する領域で実習に参加できるそうだ。

「いいねぇ。これには是非参加しないと」

しかもこの予備校、入学試験で成績優秀だと認められると、学費

が一切免除になるらしい。
俺ならばそのくらい余裕で払えるが、家族には魔法の袋の中身について黙っているので、『学費は免除になるように努力するし、もしそうなれば、狩りで学費と生活費を賄うから大丈夫』と言って説得するつもりであった。

どうせ家族は俺をなるべく領民の前に曝したくないわけだし、学費も生活費も自分で何とかするのだから反対などしないであろう。

実際、この話を家に戻ってから父に話したら反対されなかった。
学費と生活費は自分で何とかするのが条件だったが、そのくらいは余裕なので、早く一年が経たないかなと思ってしまったほどだ。

とはいえ、予備校入学までに特にしなければいけない事はない。
むしろ今まで通りに、武芸と魔法の訓練を続行するつもりであった。

そんなわけで無事に進路も決まり、俺はいつものように森に入り、そこから瞬間移動を行おうとする。
だが、今日は初めてそれを中止する羽目になっていた。

なぜなら、普段から瞬間移動の魔法を見られないように探知の魔法もかけて警戒しているのだが、今日始めてそれに反応があったからだ。

「南西の方角、人の気配が六つ？」

今までに感じた事のない数の、人間の反応であった。
特にこの森はバウマイスター家に独占権があるので、余計に他の人間が入って来るはずがない。

それに、他の村人達には他にいくらでも狩猟と採集が可能な森が沢山存在している。

それだけ未開発地が多いとも言えるが、バウマイスター家としてはこの森以外なら、税金さえ納めていれば自由に森に入れる許可を出している。

なので、この件で領民が不満を述べた事など一度として無かったのだから。

「（では、何のために？）」

もう既に、俺は彼らに視界に入っていた。

そのくらい距離が近付いていたので、俺は魔法で逃げるわけにもいかず、仕方が無いので先に相手を威圧する事にした。

こんなコソコソと人を探る、彼らの態度が気に入らなかったからだ。

「何者だ！」

俺が人の反応を感じた方向に向けて声を荒げると、大木も影から反応と同じく六人の人達が姿を見せる。

良く見ると、彼らは顔見知りであった。

父の妾であるレイラに、その父であるこの近辺の村の名主をしているレイラの父クラウスに。

あとはその子供達である、俺の腹違いの兄と姉達、六男ヴァルター十八歳、七男カール十七歳、長女アグネス十五歳、次女コローナ十四歳の合計六人であった。

彼らとは、一応は顔見知りである。
しかし、実際に始めて会話を交わしたのは、長男クルトと次男ヘルマンの結婚式と、その後行われたパーティーの席でだけだ。

腹違いとはいえ同じ父の子供で兄弟姉妹なわけだが、俺達の母親が貴族出身で、彼らが名主とはいえ平民の子供である事から、この世界ではその扱いが大きく変わる。

まず、本妻に子供がいなければ相続権など欠片も発生しないし、父親が認めなければ娘ですら政略結婚の道具にもなり得ない。

大半の庶子達は、家臣筋の家に養子や入り婿として入るか、領内の名主や村長の家を継いだりするのが恒例だ。

そのような事情から、父は自分の子供なので別として、長男クルトや次男ヘルマンなども、彼らとはほとんど口を効かなかった。
明らかに、俺や自分達の母でもある正妻ヨハンナに遠慮していているのは明白であった。
実際母も、邪険にしていると言うか身分差があるからという態度でレイラ達とは口を利いていなかった。

一方の俺は、実の家族とすらあまり会話が無いのに。
普段は別に住んでいる、まだ二回しか顔を合わせていないこの人達とは当然ほとんど口すら利いた事が無かった。

なのに、今彼らは明らかに俺に用事があって、こうして目の前に姿を現していたのだ。

「突然の無礼をお許しください。ヴェンデリン様」

六人を代表して、名主であるクラウスが俺に挨拶をしてくる。
彼はもう六十歳近い年齢の、この世界では老人扱いされる年齢の人物であったが見た目は十歳以上も若く見える。
代々、この近辺の村の管理を行う名主の家に生まれ、農民達からも、先代の祖父や父からの信頼も篤い男というのが周囲からの評判であった。

それと、相変わらず騎士の癖に碌に漢字すら読めず、税金の計算すらままならないバウマイスター家の人間とは違い、普通の読み書き計算に、領民達からの税の徴収に、簿記や会計などを財政面を含めた一切合切まで。

更に今は引退しているが、若い頃はバウマイスター家の従士として、数十年前には先々代のブライヒレーダー辺境伯の要請を受けて援軍に赴き、ブライヒレーダー辺境伯と隣接するアインスバッハ子爵との領地境を巡る小規模な戦闘にも参加した事があるらしい。

なるほど、今もなかなかに油断のならない顔付きをしているように見える。

それと、まだ十一歳の八男坊とはいえ、父と正妻である母の息子である俺への言葉遣いにも隙が無い。
これがバカだったり無教養だと、血筋だけで何の力も無い俺にぞんざいな口の利き方をしたりするのだ。

俺からすればどうでも良いのだが、この世界における貴族と平民との身分差は大きい。

俺がまだ貴族籍から抜けていない以上は、この目の前のクラウス

の口調の方が正解なのだ。

現に、その後ろにいるレイラも、他の兄姉達も余計な口など利かないで静かにしている。

実際に俺を生んだわけではないレイラはともかく、他の四人は俺の兄と姉なのに、気安く口を利いて来ない辺り、それだけこの世界の身分差は大きいという事の証明でもあったのだ。

特にここが王都近くの中央部であったりすると、平民が貴族にぞんざいな口を利いただけで斬り捨てられるケースもある。

これは別に、その貴族が傲慢というわけではない。

この身分制度がヘルムート王国のみならず、隣のアーカート神聖大国の安定にも寄与している以上、その秩序を破った人間を公式の場で裁かないわけにはいかないからだ。

たださすがに斬られる平民は少なく、大抵は鞭打ち程度で済まされるのだが。

「それは良いんだけど、何の用事なのかな？　俺は、これから狩りに行くんだけど」

「いきなりこの場に現れた事をお許しください。実は、ヴェンデリン様にお願いがあって来ました」

「お願い？」

「単刀直入に申します。ヴェンデリン様には、バウマイスター家を継いでいただきたいのです」

「はあ？」

突然のお願いに、俺はその場で目をパチクリとさせてしまうのであった。

第二十話　小さな御家騒動。

「現在、このバウマイスター騎士領では、静かに領民達の不安と不信が増大しているのです」

朝、いつものように瞬間移動でブライヒブルクへと移動しようとした俺は、周囲に複数の人間の気配を感じてそれを中止する。

見られているような感覚が嫌で、俺は気配を感じる方向に向かって気が付いている事を叫び声でアピールすると、そこには屋敷の近辺の村を治める名主に、その娘である父の妾と俺の異母兄姉達が姿を見せる。

用件を聞くのだが、名主のクラウスから出た言葉はとんでもない爆弾発言であった。

「聞かなかった事する」

俺としては、そうとしか言えなかった。

バウマイスター家には父が健在で、しかも彼は長男のクルトを後継者にすると既に内外に発表している。

更に、四年前には無事に結婚して子供まで生まれているのだ。

しかも、その子は男の子だ。

普通に考えれば、バウマイスター騎士領を相続するのは、クルト、その子の順番なのは誰の目から見ても明らかであった。

「しかし、ヴェンデリン様」

「あまりに脈絡が無い頼みで、話にもならん」

そう、いきなりこんな話をされても俺は困るのだ。

まだ十一歳の味噌っかすの八男坊をこの場でそそのかしてその気にさせたとして、果たしてこれからどうしようと言うのであろうか？

「今の当主は父上だし、父上は子供が生まれた長兄クルトを後継者として発表している。しかも、俺の上にはまだ継承順位が高い兄達が三人もいるんだ。クラウスの提案を荒唐無稽と呼ばずして何と言えば良い？」

現在のバウマイスター騎士領の継承順位は、一位が長兄クルト、二位がクルトの長男のカール、三位は三男のパウルで、四位が四男ヘルムート、五位が五男のエーリッヒで、ようやく六位が俺となっている。

なお、家臣である分家の当主になっている次男のヘルマンは、既に継承権を放棄しているし、現在王都で下級官吏をしているエーリッヒ兄さんはもう少しで上司の実家に婿に入る事が決定しているので、彼もすぐに継承権を放棄する予定だ。

そのせいで俺の継承権が五位に繰り上がるが、いくら何でも俺を次期当主にするのは不自然過ぎる。

何より、最大の難関である父の説得すら出来ないで何が当主になって欲しいだ。

ひょっとすると、このクラウスは誰かに頼まれて俺を御家騒動の主犯として処分するつもりなのかもしれない。

そんな陰謀論までもが、頭に浮かんで来る俺であった。

「俺はひょっとすると、クラウスの良識を上に見過ぎていたのかな？」

「おい！　お前は！」

「控えよ！　ヴァルター！」

「でも、親父！」

「お前はヴェンデリン様の兄ではあるが、身分が違うのだ！　控えよ！」

俺の発言に六男ヴァルターが激怒するが、すぐにクラウスによって抑えられていた。

前世では考えられなかったが、なるほどこの正妻と妾の子供の身分差というのは難しい。

ヴァルターは俺よりも八歳上なのに、彼は俺に兄貴面など決してしてはいけないのだから。

「荒唐無稽な事を言っているのは自覚しています。ですが、ここで手を打たないと、バウマイスター騎士領は将来確実に衰退するでしょうな」

「衰退？」

俺には、なぜこのバウマイスター騎士領が衰退するのか理解できなかった。

膨大な開発をすれば莫大な富を生み出す未開地があり、もし魔の森の一部でも開く事に成功すれば海とも接する事が可能な領地なの

にだ。

「そう、開発できれば未来は明るいでしょう。ですが、それは現状では不可能なのです。そしてこのまま行けば、このバウマイスター騎士領は徐々に人口が減って過疎化するでしょう」

クラウスは、俺に自分の想定するバウマイスター騎士領の未来を含めた、十一年前に失敗した魔の森への出兵事件以降の裏事情を説明し始める。

「十一年前の出兵は、痛恨の失敗でした」

「それは知っている。目の前にこれほどの未開地が広がっているのに、なぜ遠方の魔の森の開放を急ぐのか理解できなかった。海がよほど欲しかったのかと思っていたが。あれは明らかに、ブライヒレーダー辺境伯が魔物の住む領域での成果を期待していたのだと」

「それに今のお館様も乗った。道案内に兵を出しましたからな。考えてみてもください。いくら同じ領内でも、我らに未開地や魔の森の地理なんてありませんよ。明らかに兵力として当てにされていたのです」

ブライヒレーダー辺境伯領は、その気になれば三万人以上の兵力を動員可能であるらしい。

とはいえ、領内の治安維持や、周辺には領地境で揉めている貴族も数名いるし、もっと現実的な予算や兵站の問題もある。

いくら兵站を魔法の袋を持っていた師匠に依存したとしても、万単位の兵を富士山と同じくらいの標高の山脈越えで進軍させるのは無謀でしかない。

いくら寄り子とはいえ、バウマイスター騎士領の領民も自分達よりも圧倒的に数が多い他領の軍勢に不安を覚えるだけだ。

「それで、二千人という中途半端な軍勢だったか」

「お館様が出した百人でもありがたかったようですな。そして、ブライヒレーダー辺境伯の真の目的ですが……」

先代のブライヒレーダー辺境伯には、二人の息子がいた。

長男のダニエルと次男のアマデウスで、先代ブライヒレーダー辺境伯は頭脳明晰な長男ダニエルを溺愛し、彼を後継者として期待していたらしい。

「ですが、彼は不治の病に犯されてしまいました」

ブライヒレーダー辺境伯はありとあらゆる手を尽くしたが、彼の死期は間近まで迫っていたようだ。

そして、そんな彼を治せるかもしれない僅かな希望。

それが、伝説の魔物古代竜の血から作る霊薬であったらしい。

「魔の森には、その古代竜が住んでいる可能性があったのです」

他の冒険者が出入りしている魔物の領域では、遂に発見できなかったようだ。

そこで、彼は未知の領域である魔の森に期待したらしい。

「冒険者に頼めば良かったのに」

「失礼ながら、そんな命知らずはおりません」

まず苦労してバウマイスター騎士領まで長旅をし、そこからまるで人間が住んでいない未開地を何百キロも横断する。
そこまでしてようやく魔の森へと到着し、そこから気合を入れて古代竜を倒す。
確かにこんな依頼、いくら積まれても嫌であろう。

「その後の結果は、以前のお話通りです。先代ブライヒレーダー辺境伯以下軍は壊滅。五体満足で戻ったのは百人程度でしたな。我がバウマイスター騎士領軍も同じです。生存者は、二十三名にしか過ぎませんでした」

当主を失ったブライヒレーダー辺境伯領は、父の死を聞いた直後に亡くなった長男ダニエルではなく、次男のアマデウスが継いでいる。
全く跡取りとしては期待されていなかったのに、いきなり跡を継がされ、まず最初に全兵力の十分の一に、お抱えの優秀な魔法使いを失った状態からスタートとか。
きっと、物凄い罰ゲームだと考えたであろう。

大貴族の軍事行動の失敗は、周囲の領地境紛争などで争っている貴族達に舐められる要因となるであろうからだ。
現ブライヒレーダー辺境伯の船出は、相当に苦労の連続であった事は想像に難くない。

「そのせいでしょうな。新ブライヒレーダー辺境伯は相場よりは良いお見舞い金をバウマイスター騎士領軍の戦死者に出しました。かなりお館様にピンハネされましたが」

バウマイスター家の財政を握っている男からの、聞きたくもない事実の暴露であった。

そもそも、見舞金だけではいくら色を付けて貰っても残された家族が一生楽を出来るほどではない。

しかも、その増額見舞い金を受ける条件として、父はバカな要求を呑んでいる。

この出兵は、父が魔の森を開発したいので寄り親である先代ブライヒレーダー辺境伯に懇願し、寄り子の頼みは断れないのでと渋々受け入れたという事にして欲しいと。

そんな事をしても何か情況が良くなるとは思えないが、これも大貴族のプライドという物の一種であるようだ。

「失った軍の再建もありましたし、当時は少々人口が増加傾向にあったので新規の開墾計画を実施直前だったのです。お館様は、資金が欲しかったのでしょうな」

しかし、失ったのは金と物資ばかりではない。

働き手も一気に失ってしまい、無理に新規開墾や用水路工事の働き手を抽出した結果の、あの毎日の黒パンと塩野菜スープのみの夕食であったらしい。

開墾さえなければ、畑仕事の合間に男手で狩猟に出かける時間くらいはあるのだから。

「こんな閉鎖性の強い田舎の農村です。不満は爆発寸前なのですが、暴発するわけにもいかずというわけです」

更に、クラウスからの話は続く。

「現在、お館様に不満を覚える人間は多いのです」

まずは、十一年前に一家の大黒柱や前途有望な若者を失った家族。しかも父は、愚かにも彼らに渡すようにと新ブライヒレーダー辺境伯から渡された見舞金をピンハネまでしている。これで慕われたら、領民達は相当なマゾであろう。

次に、その援軍を率い、戦死してしまった分家当主である大叔父の親族や家人達とその家族達。

この家には次男ヘルマンが当主として入っているが、彼は現在針の筵状態らしい。

穿った見方をすれば、ヘルマンは本家の影響力を強くするために分家に送られたスパイにも見えるであろうからだ。

「さすがに、ヘルマン殿も危機感を感じているようです。婿入りで本家との縁も切れたので、今では完全に反本家の立場を表明しています。実は、ヴェンデリン様が次期当主になる件でも賛成してくださいまして」

「おい……」

出て行く家なのであまり気にもしていなかったが、現在のバウマイスター家はかなりヤバい状態にあるようだ。

「そして、これが一番深刻かもしれませんな」

ようやく新規の開墾は所定の計画を終えて終了していたが、これは当然人口が増えればまた新たに計画される事となる。

「しかし、お館様や若様が指揮する開墾作業は評判が悪いのです」

別に、農民に鞭を打つわけではないらしい。

自ら先頭に立って作業を行うし、食事なども皆と同じ物を取って自分だけ良い物を食べたりもしない。

だが、父が体が丈夫で無理が出来るので、それを他の人間にも無意識に強要する癖があるらしい。

しかも、適度に休憩を取るとか、効率の良い工事を指揮するとか指揮官として相応しい能力には欠けるらしく、作業に参加している領民達からは評判は良くないそうだ。

「クルト様は、そんなお館様に何も言えないので、同じく評判が悪いです」

ナンバー2なのに、ナンバー1に意見できないで、普通の作業員と同じ仕事しかしないのだ。

それは、嫌われて当然だろう。

「人口が増えて、あの嫌な開墾作業が再開されたらと領民達が不安になった結果……」

開墾の間は食事が嫌でも貧弱になってしまうのもあり、彼らは人口を増やさないように動くようになったそうだ。

「次男以降の男子が、このバウマイスター領を出るようになったのです」

一番近い都市であるブライヒブルクに、数ヶ月に一度訪れる商隊に同行して家を出てしまう事が多くなったそうだ。

そしてブライヒブルクに到着した彼らは、そこで職を探したり、他の領主が募集している新規開拓地への募集に応募してしまうらしい。

「しかも、最近は女子まで……」

畑を継げる長男とその嫁になる女子を除き、今度は女子までもがバウマイスター領の外に出るようになった。

もうこうなると、人口の流出に歯止めが利かなくなる。

もし長男が嫁が取れない事態になれば、それは過疎化の第一歩であろう。

「更に悪い事に、ヴェンデリン様の魔法の件がバレました」

せっかくの魔法なのだ。

これをバウマイスター領の発展に生かせば良いのに、父は爵位継承の秩序を保つため、俺を極力領民と接触させないようにした。

もし本当に領地の発展を望むなら、跡取りを俺に変えてでも領地のために働かせるべきだと。

そういう非情な決断を時にはしなければいけないのが、貴族と呼ばれる者の使命なのではないかと。

「領民達は見切ったのですよ。お館様がこの僻地の農村で貴族様として振舞えて、波風立てずに家が続けば他は何もいらないと考えているのだと」

そこまで見切られると、それは厳しいかもしれない。

人間とは、欲を抱えた生き物だ。

過度の欲は良くないが、適度な欲は。
それも、もう少し自分達の生活を良くしたいなどの欲は、人間には必要不可欠なのだと。

「領民全員を最低限食わせるのは重要です。ですが、お館様はそこで止まってしまわれる。勿論それも大切でしょうが、先に未来を見せる努力も、統治者には必要なのでは？　と、思う次第なのです」

クラウスは、ここまで喋ると今度は溜息をついていた。
それは、もうこのバウマイスター領の人口は頭打ちどころか、このまま減少傾向に突入すると言えば、悩みも色々と尽きないであろう。

「クラウスの気持ちは理解できるが、ここで俺が次期当主になりたいと宣言して何になる？　余計な騒動が増えるだけだぞ」

どう考えても、本家の人間は一人も支持しないであろう。
父が俺を後継にしなければ何をしても無駄だし、もし後継争いが中央の耳に届けば。
なまじ距離感があるだけに、中央の官僚が事務的に減封や領地の取り上げを命令する場合もあるのだから。

「騒ぐだけ無駄なんだよ。むしろ、騒いでは駄目だ。父上を説得して、新規の移住者を増やす産業なり、効率の良い開発を進めるしかないだろう」

「ですが、ヴェンデリン様の魔法があれば……」

「もしここで俺の魔法でどうにかしたとして、俺が死んだらどうするんだ？」

「それは……」

魔法使いの素質は、遺伝しないそうだ。
遺伝していれば、王族や貴族は魔法使いだらけのはずなのだから当然とも言える。

そのために、王家や貴族達は大枚を叩いて優れた魔法使いを囲い込もうとするのだから。

話を戻して、もし俺がここで魔法を使ってこのバウマイスター領を豊かにするとする。
だが、もし俺が死んだ後はそれをどう維持するのであろう。

もしかすると、徐々に過疎化するよりも恐ろしい衰退が待ち構えているかもしれないのだ。

「それに、もし俺が強引に当主になっても絶対に揉めるからな」

クラウス達は父に不満を持っているようだが、領内にはそこまで父や兄に不満を持っていない人達だっているのだ。
俺の当主就任後、彼らが俺に反感を覚えたらそれはそれで意味が無くなってしまう。

「なので、俺はこの話を聞かなかった事にする」

俺は最後にそう言い残すと、急いで森の奥まで走り、すぐに瞬間移動の魔法で姿を消す。
その様子を、クラウス達は唖然と見つめていた。

「（というか、どうしろって言うんだよ……）」

クラウスの気持ちはわからなくもないが、まず順序が間違っているのだ。

俺を説得する前に、話を持って行く人が居るだろうに。

そう、まずは父を説得できないと、俺に話をするだけ無駄なのだ。

「（しかし、これは拙いな……）」

父やクルト兄さんが、クラウスの本心をどこまで把握しているのかは不明であったが。

下手をすると、俺にまで謀反の嫌疑がかけられてしまうかもしれない。

もしそうなると、色々と面倒な事になってしまう。

いかに出て行く家とはいえ、穏便に継承権を放棄してから家を出ないと、実家の継承秩序を乱した者として世間で鼻摘み者になってしまう可能性があったからだ。

そういう嫌な風聞を背負った身というのも、これからの人生なかなか辛い物があるであろう。

さりとて、これを父に相談するのも憚られる。

もし、それを利用して父が俺の処分を狙っているのだとしたら？

考えれば考えるほど、答えがこんがらがって来そうではあった。

「だーーーっ！　考えてもしゃあない！　クラウスは無視！　無視！」

俺は移動先の未開地の平原で、そのまま勢いに任せて大規模爆発

魔法をぶっ放す。
　すると、そこには大きな穴が出来てしまう。
「ストレス発散のためとはいえ、環境破壊だな」
　少し冷静になって反省する俺であったが、まさかこの大穴が人造湖として未来の人々に利用されるなど、まさしく神のみぞ知るという奴であった。

幕間三　そんな貧乏領地いらんわ！

「拙い！　拙いぞ！」

もう何年かで家を出る予定だったのに、突然領内の名主から領地を継いで欲しい。

そのために、協力は惜しまないと言われたで御座る。

などと、ふざけている場合ではない。

下手をすると、兄と殺し合う最悪の結末に至る可能性もあるのだ。

ところが、俺にはどうして良いのかわからない。

前世の経験など、まるで役に立たないからだ。

平凡なサラリーマン家庭に生まれ、自分の他に兄弟は弟一人しかいない家で、お家騒動など起こるはずもない。

というか、御家騒動の相談に乗ってくれる人というのも逆に怖いような気もするのだが。

とにかく俺は、なるべくクラウスとの接触を避けるようにしていた。

いや、もう探知の魔法をフルに使って家族以外との接触を避けたのだ。

さすがにクラウスも、『次期当主をヴェンデリン様に交代する相談をするので、出て来てください！』と、家の前では叫ばないで

あろうし。

朝、誰よりも早く起き、夜も大分遅くに戻って家で寝るだけという生活になっていた。

もう食事すら家で取らずに、自分で自炊したりブライヒブルクの店で食べたりしていたのだ。

既に半分家を出ているような感覚に襲われるが、まだ法律的にはバウマイスター家の庇護下にある未成年で、継承順位五位を持つ子供の一人であった。

そのせいで、余計に面倒な事になっているのだが。

家族が食事すら取りに来ない俺に何も言わないのが、唯一の救いかもしれなかった。

「ヴェル君、エーリッヒさんからお手紙が来ているわよ」

「すいません。義姉さん」

夜、遅くなってから家に戻ると、部屋の前にクルト兄さんのお嫁さんであるアマーリエさんが居て、俺に手紙を渡してくれる。

思うに、今の俺が一番バウマイスター家で会話があるのが、この人であった。

「丁寧な字ね。漢字も使ってあるし」

アマーリエ義姉さんが、エーリッヒ兄さん直筆の手紙のあて先などを見て感心している。

同じ田舎の騎士爵家の出にも関わらず、実は彼女は漢字も混じっ

た字の読み書きが可能であった。

次女なので、もし商家などに降嫁する事になったらと、両親から勉強させられたそうなのだ。

「エーリッヒ兄さんは、お役人ですからね」

前に、ひらがなとカタカナだけの文が庶民向けで、漢字とローマ字と英単語などが混じると、貴族向けや公の効力がある文章だと説明した。

他にも、こうやって個人同士の私信でも漢字交じりの文章が混じると、周囲から知性的だと思われるという利点もあったのだ。

簡単な、印象操作とでも言うのであろうか？

一種の見栄というか、アピールという面も強い。

手紙の封筒なので、『速達』とか、『南部』とかしか漢字は使われていないが。

あとはもっと単純に、もし手紙が開封されてもこの家では俺以外に読めないという利点もある。

ただ、ここ数年はアマーリエ義姉さんという例外が一人生まれていたのだが。

「手紙なんて、この家だとヴェル君と私くらいにしか来ないものね」

アマーリエ義姉さんにも、たまに実家から手紙が来ているようだが、返事は手紙が来る頻度よりも書けないのが普通だ。

この世界にも、郵便システムは存在している。
ある規模以上の町の商業ギルドに専用の受付があり、料金は距離に応じて先払いをする。

最低でも、銅板五枚なので五千円程度。
相手さえちゃんとしていれば、隣国のアーカート神聖帝国にも送れるが、国が違うと銀貨五枚、五万円は余裕で超えてしまう。

届く時間も、数ヶ月先などザラというのが普通だ。
速達で早くする事も可能であったが、それを使うと余計に金がかかる仕組みになっている。

ちなみに、我が領に郵便の受付など存在しない。

ブライヒブルクの商業ギルドに届いている手紙を、年に三回来る商隊が運んで来るだけがツテであった。
逆に手紙を出す時には、バウマイスター領に来た商隊に料金と共に渡すだけだ。

当然、手紙を運ぶ商隊への手間賃も発生するので、余計に割高になってしまう。

どうせ手紙を出したり貰ったりするのは、俺とアマーリエ義姉さんだけなので大して不便でもなかったのだが。

ちなみに、アマーリエ義姉さんが実家に手紙を出すと、商隊への手間賃込で銀貨二枚かかる。
嫁の立場としては、年に一回出すのが限界なのだそうだ。

俺の場合は、子供の頃から小遣いすら貰っていないので、現金は持っていない事になっている。
なので、父に立て替えて貰って、後で魔法で獲った獲物を代金として渡していた。

あと父に、『どうせ、商隊なんて年に三回しか来ませんし。アマーリエ義姉さんが、年に三回手紙を出しても良いと思うのですが』と言って、多めに獲物を渡している。

父は何も返事はしなかったが、次からは商隊が来る度にアマーリエ義姉さんが手紙を預けていたので、こちらの頼みは聞いて貰えたようだ。

それからであろうか？
アマーリエ義姉さんが、良く話しかけて来るようになったのは。

「エーリッヒ兄さんからの手紙は、漢字が多いですからね」

「職業病かしら？」

一応職業病だという理由にしているそうだが、実はわざと漢字の比率を半分以上にまで上げているのだ。
父や兄は漢字が読めないので、もし手紙を読まれても内容がわからない、一種の暗号として機能していた。

幸か不幸か。
今まで、一度も開封されて読まれた事はないのだが。

「王都かぁ。華やかなんでしょうね」

アマーリエ義姉さんの実家も、うち程ではないが田舎なのだそうだ。
なので、王都は憧れの大都市と言った感覚らしい。

「大人になったら、絶対に行ってみたいですね」

「死ぬまでに、一回は行ってみたいわね」

それから暫く二人で世間話をしてから、俺は自分の部屋に戻る。
昔は兄弟四人で使っていて狭い部屋だったが、今は寝る以外に使わないせいもあって、えらく殺風景で広く感じてしまう。
俺はベッドの上に座り、早速手紙を開封してみる。

実は、エーリッヒ兄さんにクラウスの件を相談したのだ。

『大変な目に遭ったようだね。実は、僕も過去に同じ目に遭っているんだけど……』

「（あの野郎……）」

エーリッヒ兄さんからの手紙によると、彼も実家を出る前に同じ事を言われたらしい。

何でも、『漢字も書けないクルト殿よりも、あなたが次期領主になった方が、計画的に領地を富ませる事が出来るはずだ』と説得されたらしい。

『でも、それがあの人の常套手段。見た目の腰の低さと言葉に騙されないで』

エーリッヒ兄さんによると、あのクラウスという名主は要注意人物なのだそうだ。

『従軍経験もあるし、名主としての職務は完璧にこなす。有能なんだけどね……』

同時に、欲深いという面も持ち合わせているそうだ。

『バウマイスター領には、他にも名主が居るけど。彼は、その中から一歩抜きに出るために、父に娘を妾として差し出した』

その結果、屋敷に出入りして領内全ての税収の計算や帳簿などを任されるようになったらしい。

当然、他の名主からは良くは思われていないようだ。

『ここからは僕の予想だけど、バウマイスター家の次期当主を僕やヴェルにして何の得があるのか。手紙には、クラウスは腹違いの弟や妹達も連れて来たと書いてあったね』

もし兄達を差し置いて、俺が次期領主になったとする。

当然、同腹の兄達との関係は最悪になるので、統治面での協力が貰えるかどうか難しい所だ。

次男のヘルマンに関しては、『もう自分は、他の家の人間になったのだから』と割り切っているのであろう。

『自然と、腹違いの弟や妹が嫁ぐ家を当てにするだろうね。クラウスには、大きな利益があるわけだ』

エーリッヒ兄さんは、あくまでも予想だと言っていたが。

クラウスが、彼にまで同じ誘いをかけていたとなればクロであろ

う。

『彼の言う事は、間違ってはいないからね』

せっかく、広大な未開地があるのだから。

長子継承に拘らずに優秀な領主の下で開発を行い、バウマイスター家を準男爵、男爵、子爵と発展させるべきだと。

その計画の中には、父の血を継いだ自分の孫達が相応の待遇を受けるという未来もあるのであろうが。

なるほど、領地の発展とクラウス一家の発展はセットと言う事のようだ。

『対策としては、とにかくクラウスと顔を合わせない事だね』

本当に、もうこれしか対策がないとも言える。

『利口ぶって父に話したとして、父が何にも気が付いていなかったら大惨事になるから』

父からすれば、クラウスは裏切り者に等しい存在なわけだ。

当然、相応の罰を受ける事となる。

ところが、我が領はクラウスがいないと税金の計算さえ正確には出来ない。

こんな家が将来爵位を上げるという未来など、俺から言わせればギャグにしか聞こえなかった。

『父や兄からすれば、もし事が露見すればクラウスは切るしかない。ところが、そうなれば領は混乱する。その混乱で出た恨みの一部は、

ヴェルにも行くから』

俺のせいではないが、『お前がいなければ！』という事になるからであろう。

何とも理不尽な、将来の可能性ではあったが。

『かと言って、その被害を防ぐためにもっと家族や領民とのコミュニケーションをとか考えているかい？　それも、駄目だから』

俺が魔法を使える事は、とうに漏れているのだ。

ここで急に領民と接したとしたら、彼らは余計に新領主ヴェンデリンを期待してしまうであろう。

もしそうなれば、逆に家族からは疎まれる事になるはずだ。

そこで、腹違いの兄弟姉妹が手を貸しますよとクラウスが近付いて来る。

考えるだけで、嫌になってくる話だ。

『ヴェルはこのまま、変わり者で領の仕事なんて手伝いもしない怠け者の八男として家を出るのが一番良いと思う』

クラウスとは絶対に会わない、顔も合わせない。

このまま今の生活を続行しつつ、なるべく早くに家を出る算段をつける。

エーリッヒ兄さんからの助言に、俺は従う事にする。

こんな俺の相談に乗ってくれる本当に良い兄さんで、間違いなく今世で唯一肉親だと本能で認識している人物であろう。

俺はお礼の手紙を認め、速達代金の替わりに未開地で採取した宝石の原石をそっと中に入れておく。

そして肝心の早くに家を出る算段であったが、答えは意外と近い場所に存在していた。

なぜ気が付かなかったのであろうかと思うほど、とても簡単な手であったのだが、俺は十二歳になる少し前にようやく家を出る事に成功するのであった。

第二十一話　冒険者予備校。

「これより、冒険者予備校の入学式を開始します」

父の妾の父親でもある名主クラウスから、バウマイスター家の次期当主になって欲しいと言う、おかしな要求をされてから一年。

ようやく十二歳になった俺は、実家を出てブライヒブルクにある冒険者予備校へと入学を果たしていた。

思えばこの一年間、俺はクラウスからの度重なる勧誘をかわすのに傾倒する羽目になっていた。

何でも、俺にその気があれば他の支持者と一緒に父を説得すると言って俺に決意を促していたのだが、俺からすれば、何が悲しくてあんな僻地の領地を継がなければいけないのであろうか。

それに、前世はしがない二流商社の平社員であった俺に、領地の運営など不可能である。

中身の人格に、貴族の義務とか責務といった殊勝な心がけは存在していないし、あの小さな領地からある程度自由に生活できる糧を得る労力があれば、俺が個人で魔法を駆使して冒険者をやっていた方がよほど金にもなる。

というか、便宜上の将来の夢は冒険者になっているが、別に魔法を使って生活の糧を稼ぐ自由業であっても問題はないのだ。

瞬間移動で自由に未開地や海岸へと移動し、そこで金になる物を魔法で作る。

もう既に五年もやっている事だが、思えば五年間の成果で俺はもう残りの人生が何百年あってもプーやニートとして生きて行く事が可能だ。

そう、俺はもう自由なのだ。

二度と実家になど戻るものかと俺は考えていた。

父も母も兄も、俺の意見には賛成らしい。

いくら貧しい領地でも、俺が魔法で領民のために貢献すれば、それは新しいお家騒動を招いてしまう。

もう招いているのだが、間抜けな事に父は気が付いていないらしい。

かと言って、それを下手に報告して藪を突くと、今度は蛇が出て俺に害が及ぶ可能性もある。

なので、俺は一切クラウス達の動きを報告していなかった。

クラウスにしたって、ここで簡単に父に漏れるような謀しか出来ないのであれば、もうとっくにこの世には存在しないはず。

父や兄は、さすがに薄々とは何かが変だと思っているようだが、俺は聞く気にもなれなかった。

俺の気のせいで、実は何にも気が付いていないのかもしれないし。

さて、面倒な実家の話はこれで終わりにして、今は冒険者予備校の入学式だ。

壇上でギルドのマスターと思しき初老の男性が長いスピーチをしているが、どうやら学校とはどこも似たような物らしい。

冒険者を育てる予備校なので、さすがに倒れる生徒は一人もいなかったが。

全員、椅子に座って話を聞いているというオチがあったとしてもだ。

「諸君等は、十五歳になると同時に魔物の領域で活躍できる人材となるべく……」

この予備校の目的は、王家の法によって十五歳にならないと冒険者ギルドに入れないという不利を補うため。

つまり、いきなり十五歳の素人を冒険者として魔物の領域へと送り出す非効率を避けるための物らしい。

素人をいきなりそんな場所に送ると確実に死んでしまうので、どんな人でも最低三ヶ月はギルド主導の元で基礎訓練を行う。

それでも、最初に任務で十人に一人は死傷してしまうのが冒険者の世界らしい。

何とも厳しい話だが、金にはなるので一旗上げようとか、色々な事情で人生詰んでいる人には人気の職業となっていた。

更に、この大陸全体では開発と人口の増加が進んでいる。

当然、魔物の領域で採集可能な素材などの需要は鰻昇りであり、それを獲る冒険者は常に新規参入者大歓迎の状態になっていた。

冒険者予備校は、下限十二歳の男女を十五歳になるまで鍛えるか、十五歳以上の人間は最低一年間は基礎訓練を行うために設立された学校である。

入学試験はあるが、基本的には全員が入学可能だ。

試験を行うのは、成績優秀者に学費などで優遇を行い、卒業後も気持ち良く冒険者ギルドブライヒブルク支部の専属となって貰いた

い。

これが、最大の理由となっていた。

どこの冒険者ギルドも、優秀な冒険者の確保に必死なのだ。

俺は入学式の一ヶ月前から家を出て、すぐに入学試験を受けている。

試験は、基本的な地理、歴史、生物学、魔物学、地方ごとの風習などとなっていて、これは冒険者には必用な基礎知識となっていた。

あとは、得意な武器を使った指導教官との模擬試合や、魔法使いは魔法の試技などがある。

正直、剣や弓などは基礎訓練しかやっていなかったのだが、さすがは末端でも貴族家伝来の訓練であったらしい。

試験を受けた中では、かなり高位の評価を受けていた。

主に、弓の方がであったが……。

それと魔法であったが、これは適当に手を抜く事にする。

今の俺は、ブライヒレーダー辺境伯のお抱え魔法使いであった師匠よりも魔力量では上になっていたのだから。

幸いにして、ここには師匠のように勘の鋭い魔法使いは存在していなかったらしい。

ドッジボール大のファイヤーボールを的に飛ばして燃やした俺に絶賛するのに夢中で、魔力の隠蔽には気が付かなかったようだ。

師匠の言っていた、優れた魔法使いは他の優れた魔法使いの存在に敏感になるが実証された形となった。

魔法使いは、特に優れた魔法使いは貴重な存在である。
なので、魔法が使えれば合格な予備校の試験会場に現れるはずなどなかったからだ。

しかも、優れた魔法使いは他の優れた魔法使いの存在に敏感になるが、実は魔力を察知しての事ではない。
ある種の勘に基づく能力であった。
いくら魔力量が大きくても、別に魔力が人の体から温泉のように湧き出ているわけではない。
普段は別の次元の体内にある魔法袋に貯められていて、あとは魔法回路を巡回しているだけだからだ。

しかも、大規模魔法を発動させても、それで使用した魔力は既に魔法の結果へと具現化していて魔力など残っていない。

魔法使いが、他の人間の魔力量をなかなか察知できない理由でもあった。
一部を除き、精々魔力を微量だけ持っている一般人と、火種くらいは出せる魔法使い以上との差がわかる程度であろう。

「中級クラスの魔法使いとは貴重だ。君は特待生試験に合格だ」

どうやら、中級までの魔法が使えれば前の筆記試験や武器の実技など関係なしに学費が免除になるらしい。
そのくらい、魔法使いは貴重な存在なのだ。

「いいなぁ……。魔法が使えて」

「俺は使えるけど、初級クラスだからあまり特待生試験に考慮され

ない」

他の受験者達から羨ましいという声があがる中、俺は無事に特待生試験に合格し、冒険者予備校に入学を果たすのであった。

「ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターです。名前の通りに、一応は隣のバウマイスター家の八男ですが、領地は継がないので冒険者を目指して入学しました。よろしくお願いします」

入学式後にクラス分けが発表されるが、どうやら特待生は全て同じクラスに編入されたらしい。

年齢は俺と同じくらいから、上は十八歳くらいまでであろうか？

剣の技に優れている者、弓が得意な者、槍が得意な者、初級ながら魔法が使える者と。

そして最後に、俺は中級魔法が使えると自己紹介をして終わる。

それから担任のギルド職員からカリキュラム表を渡されるが、授業は座学が三割に、実技が七割くらい。

しかも、冒険者になるための技術のみを学ぶので、授業は午前中までしか無かった。

加えて、週休二日という楽さだ。

「みなさんは、十五歳になるまで魔物の領域に入れません。十五歳以上の方も、一年間は入れませんから。授業が少ないのは、アルバイトをして生活費を稼ぐためでもあります」

なるほど、いくら特待生で学費が免除されていても、みんなが実家から通っているわけでもなく、むしろ故郷からブライヒブルクに上京して来た人が多い。

当然、家賃に生活費と自力で稼がないといけないわけだ。

「うへぇ。そういえば、そうだった。何のアルバイトをしようかな？　ところで、バウマイスターは実家から仕送りとかは？」

入学式から隣の席で仲良くなった同じ年の男の子に、俺は仕送りの有無を聞かれていた。

稀にいるのだが、実家が大商人だったり、大貴族なので、相続できなかった侘びを込めて仕送りが貰えたりする人も一部に存在していたのだ。

「騎士爵家の八男は、何年も前からそんな夢は見ない事にしている」

「だったよなぁ……。俺も同じ立場だけど……」

この十二歳になってようやく百六十ｃｍまで身長が伸びた俺よりも、更に十ｃｍほど背が高く、ブラウンの髪を角刈り風に短く纏めた目付きの鋭い少年は、俺と同じく西部の小領主の息子で、その名をエルヴィン・フォン・アルニムと名乗っていた。

実家は人口五百人ほどの村を有する騎士爵家で、財政状態はうちと似たり寄ったり。

エルヴィンは、その家の五男だそうだ。

当然家は継げないので、特待生試験に受かるほどの剣の才能を利用し、冒険者として生計を立てる計画だと彼は話していた。

「一応実家から支度金は貰っているし、今まで狩りで得た獲物を売って金は貯めているのさ」

俺はそんな物が無くても実は余裕で生きているのだが、さすがにそれを公にするわけにはいかなかった。

「俺も、小額だけど支度金は貰ったな。狩りの成果は、みんな親に取られちまった。早くアルバイトを探さないと」

「魔法の袋に、売れる素材とかも保存しているし」

「いいなぁ、魔法使いは。なあ、アルバイトは俺と一緒に狩りでもしないか？」

アルバイトの内容は、お店の店員やら街の清掃にベビーシッターなどに。

他にも、冒険者ギルドの仕事で魔物の住む領域に入らないで完遂できるものから、他のギルドで出されている低レベルの仕事などが主になっていた。

あとは、野生生物に襲われる危険があったが、街に食肉や毛皮などを供給する狩りなどで。

これは、戦闘技術の向上に役立つと冒険者ギルドからは推奨されている。

「バウマイスターは……」

「名前がヴェンデリンだから、ヴェルと呼んでくれ。家族にもそう呼ばれていたし」

「そうか、じゃあ俺はエルと呼んでくれ。下の子なんて、適当に略して呼ばれるのが当たり前だよなぁ。ヴェル」

「だよなぁ。宜しくな、エル」

「ああ。宜しく、ヴェル」

俺は無事に冒険者予備校へと入学し、そこで久しぶりに同年代の友を得る事に成功するのであった。

第二十二話　初めての友達と、フラグ？

これまでの流れを簡単に説明すると。
平成日本でしがない二流商社の平社員だった俺が、なぜか西洋ファンタージー風な世界の零細貴族の八男坊になっていた。

魔法の才能があったので、それを練習したり、コソコソと勉強にも励み、食生活が貧困だったので狩りも行うようになる。

次第に魔法が上達し、更には自分の魔法の技を伝えるためにと、死んだ後に語り死人というアンデット系の魔物になっていた、元人間で大貴族のお抱え魔法使いであった師匠から魔法を教わり、無事に免許皆伝と彼の遺産を受け継いだ。

無用な後継争いが起こるのを防ぐために、我が侭で家の手伝いすらしない駄目息子という評価を甘んじて受ける代わりに、俺は行動の自由を得る事に成功する。

まずは、とてつもない広さを誇る未開地への探索を、飛翔と瞬間移動の魔法の習得も兼ねて行い、もう人生を何回遊んでくらしても大丈夫なほどの資産や素材を得ていた。

ついでに、苦労して味噌や醤油などの醸造魔法を習得する。
実は、この魔法が一番苦労したのは秘密だ。

領内の名主の一人が、俺を次期領主にしたいなどと、物凄く規模は小さいがまるで歴史ドラマのような下克上フラグを持参してきた。

当然そんな苦労はしたくないので、俺は丁重にお断りしている。

家に居るとまた下克上の誘いが来る可能性があるので、十二歳で別の街の冒険者予備校に入学した。

ここまでで、およそ六年と数ヶ月の月日が流れている。

色々あったが自分なりに精一杯だったので、時が経つのは早かったような気がする。

今の季節は、四月の初旬。

前世と全く同じなので違和感を感じないで使っているが、この世界における暦や長さや重さの単位も日本とほぼ同しだ。

一年は十二ヶ月で、一ヶ月が全て三十一日で三百七十二日あるのが違うくらいであろうか？

長さは、ミリ、センチ、メートル、キロだし。

重さも、グラム、キログラム、トンで。

時間も、秒、分、時間であった。

曜日も月曜から日曜まであったし、日曜は安息日で基本はお休みとなっている。

敬虔な神の信徒は、この日に教会などに行くそうだ。

信仰されている神は、この世界を作った神とされていて、名前は神その物で、他の名前など付けるのは言語道断らしい。

完全な一神教で、他の神は少なくともこのリンガイア大陸には存在しないそうだ。

地方によっては、地元の原始宗教と結び付いて微妙に教義が違ったり、歴史が長いので実は幾つか宗派があって互いに仲が悪いのは、どこの世界でも有りそうな話ではあったが。

それと、俺の居たような田舎の農村になると、あまり安息日という考えが無いというか、毎日農作業があって空いた時間に狩りや採集に出たり、そこで休むという考え方だ。

農閑期になれば比較的休みは多いのだが、うちの村では開墾や治水工事への労役が多くて評判が悪かった。

余計な話が長くなったが、俺が無事にブライヒブルクにある冒険者予備校に入学し、友人も出来、早速授業などが始まってから数日後の午後、ようやく予備校にも慣れ始めたのでアルバイトを始める事にする。

本当はそんな事はする必要は無いのだが、あまり自分の資産状況を人に知られるのも嫌だし、どのみち俺は十五歳になるまで魔物の住む領域には入れない。

なので、戦闘実技を練習するためにアルバイトを兼ねた狩りを行う事にしたのだ。

この世界で始めて出来た同年齢の友人、エルヴィン・フォン・アルニムことエルと共にだ。

「はあーーーっ、ようやく到着したな」

「しょうがあるまい。もう近場の狩り場は、他の人に取られているのだから」

俺とエルは、一時間ほどの距離を歩いて予備校の事務所で教えて貰った草原へと到着していた。

ブライヒブルクは人口二十万人以上を誇る大都市であったが、その人口のせいで膨大な食料を必要としている。

穀物や野菜は、近隣にある多くの農村から。
魚は、生憎と海から数百キロも離れているので川魚がメインで、あとは塩漬けか干し魚くらい。
塩も少し高めであったが、大量に運び込まれるので他の内陸部の都市よりは安目なようだ。
砂糖も、産地である南部なのでこれも少し安めに手に入った。

そして残る肉類であったが、これは周辺の農村で行われている牧畜だけでは到底量が足りなかった。
農地の開墾は常に行われていて穀物の生産量は上がっていたが、それに比例して人口も増えていたので、肉の生産で使える穀物の量が追い付いていなかったのだ。

そこで、重要になるのが冒険者の存在である。
冒険者と言えば魔物の住む領域に入ってそこで魔物を狩り、貴重な素材や肉などを得るのみと思っている人もいたが、全員が魔物を狩れるほど強いわけではない。

その多くが、このように人里離れた場所で人々が食べる食肉の確保を行っていたのだ。
田舎の農村だと専門の狩人がいたし、農民が空いた時間に狩りをしたり、時には村総出で狩りを行って必要な肉を得る。

都市部では、狩人も冒険者ギルドに入って狩りを行うのが常識であった。
冒険者ギルドは、ハンター（狩人）ギルドも兼ねていたのだ。

なので、冒険者予備校の生徒のアルバイトというか、人によっては己の将来を占う大切な本業とも言えるのがこの狩りである。

野生動物は魔物ほどは強くないが、それでもたまに熊や狼に襲われて死ぬ冒険者が後を絶たず、油断すれば危険なのには変わりがない。

狩りだからと言って、油断して良いはずはなかった。

「みんな、慌てて近場の狩り場に行ったな」

「遠い場所だと、危険があるからだろう」

狼などの危険な動物は、このように人里離れた場所にいる事が多いらしい。

それに、一応は学生なので明日の授業も考えてと、アルバイト組の大半は街に近い狩場へと向かってしまったようだ。

「でもよ。競争率が高くなるじゃないか」

「実際、何も狩れない奴も沢山出るらしいな」

街に近い狩場は、当然頻繁に獲物を狩られているので数が少ない。そこにプロの冒険者もいるのだから、まだ経験の浅い学生では成果を出せない人の方が多いそうなのだ。

これが所謂、『新人への洗礼』という物らしい。

このまま数日間続けて狩りの成果が出ない人は、諦めて店番や荷物運びなどのアルバイトにチェンジする人も多いそうだ。

「このくらい離れていると、あまり他の冒険者も居ないな。なあ、ヴェル」

「静かに……」

俺はエルに静かにするように言うと、引き続き発動させた探知の魔法で周囲を探る。

「探知の魔法か？　便利なのを使えるんだな」

「狩りには便利な魔法さ。いたぞ……」

俺が反応のする方を指差し二人で移動すると、そこには大きな猪が地中の木の根を掘っている場面に遭遇する。

間違いなく、自然薯でも探しているのであろう。

「大物だな」

「ああ」

これ以上騒いだり、ただ凝視しているだけ無駄なので、俺とエルはすぐに準備していた弓に矢を番えてから狙いを定める。

エルは、剣技で予備校の特待生を勝ち取ったが、実は小さい頃から狩りをしているせいで、弓の扱いにも長けていた。

腕前は、多分魔法で軌道まで修正可能な俺よりも上手なはずだ。

彼は、数年間懸命に狩りで得た獲物を売って、ブライヒブルクまでの旅費や滞在費などの一部を得ていたのだから。

「矢にブーストをかける」

「ああ」

次の瞬間、俺とエルは同時に矢を放つ。
すると二本の矢は、猪のお尻と背中に深く突き刺さった。

「ブーストって便利だな」

風魔法であるブーストで強化した矢は、飛距離が伸び、貫通力が上がって獲物に深く突き刺さる。
上手く急所に刺されば、かなりの大物でも一撃で瀕死状態に持って行く事が可能であった。

今回は、獲物が穴に頭を突っ込んでいたので大ダメージとはいかなかったようだが。

「驚いて逃げるか？」

「残念、物凄く怒っている」

俺は前世で狩りをした事が無いので良くわからなかったが、この世界に生息する野生動物には、凶暴な個体が多いような気がする。
矢を受けたので、ここは普通逃げるのが常識かと思うのだが、なぜか逆上して、自分に危害を加えた相手に復讐を果たそうとするのだ。
猪にダメージを与えたものの、逆襲の突進で大怪我をしたり、下手をすると死んでしまう冒険者は、年に数名は発生しているとの予備校の講師からの話であった。

「突進して来るよ」

「むしろ、好都合だけど」

俺とエルは、慌てずに次の矢を番えてからそれを放つ。
またブーストで強化された矢は、二本ともこちらに突進して来る猪の脳天に突き刺さる。
猪は、物凄い音を立てながらつんのめったまま動くなくなった。

「死んだかな？」

エルは慎重に猪に近付き、既にその猪が死んでいるのを剣で突いて確認していた。

「幸先が良いな。でも、ヴェルは弓も上手いな」

「練習の成果さ」

最初は狙いが微妙だったので、ほとんど魔法で軌道まで弄っていたのだが、最近ようやく狙いが正確になっていたのだ。
それでも、猪の脳天真ん中に矢が刺さったエルの腕前には遙かに及ばなかった。

「ヴェルは、魔法が使えるから良いじゃないか。仕舞っておいてくれ」

「わかった」

俺は、すぐに絶命している猪を魔法の袋に仕舞う。
魔法の袋に仕舞えば、仕舞っている間は時間が止まっている状態なので猪の血が固まったり肉質が劣化する事もない。

獲物の処理は後で纏めてやった方が効率が良いので、今は袋に仕舞うだけにしていたのだ。

それと、今獲物を仕舞った袋は俺が新たに作った物だ。
魔道具作りの練習用に作った物だが、血の滴る猪の死体をいつも使っている魔法の袋にしまうのもと考え、事前に作っておいて良かったと思う俺であった。

この新しい袋は、やはり一般人でも使える汎用品は作れなかったので、同じく魔法使いにしか使えない一品となっている。
しかも、簡単に作ったので収容量が家一軒分くらいしかないのが難点であったが、獲物用の袋として割り切れば使い勝手は良いはずであった。

「一キロ圏内に、結構小型の獲物が点在しているな」

「へえ、当たりじゃないか。どっちが多く狩れるか競争しようぜ」

「負けた方が夕飯を驕るって事で」

「了解」

俺とエルは、二手に分かれてそれぞれに獲物を追い始める。
二時間後に合流した俺達は、早速成果の発表を行っていた。

「俺は、ウサギが六羽だな」

「すげえな」

「ウサギのみに絞って正解だな」

やはりエルは、弓の腕にも優れているようであった。

「俺は、ウサギが二羽にホロホロ鳥が三羽だ。うーーーん、負けだな」

「数ではな。しかしお前、良くそんなにホロホロ鳥を狩れるよな」

いくら弓の腕に優れていても、ホロホロ鳥は人の気配に敏感なので弓の射程距離に入る前に逃げてしまう事が多い。

狩人泣かせと言われる所以であった。

俺は魔法で弓の射程と軌道を変えられるから、比較的簡単に獲れてしまうのだ。

「勝敗は数だからエルの勝ちだよ。何を食べたい？」

「街に戻ってから決めるわって、どうかしたのか？」

「街寄りの東五百メートル。人間の反応が二つに、狼らしき反応が十二か……」

「拙いよな？」

「ああ」

情況的には、狼の群れが狩りに来ていた二人を包囲している情況であったからだ。

犬の仲間で群れを作る狼は、個体でも集団でも人間には脅威となる。

実際、狼に襲われて毎年多くの人が命を落としているのだから。

「助けに行くか？」

「帰り道だから、死なれると寝覚めが悪いか」

「でも、間に合うのか？」

「しゃあない。緊急手段だ」

俺は、素早く身体機能強化と速度アップの魔法を唱えると、エルを抱えて恐ろしい速度で現場へと向かうのであった。

「てめぇ！　せめて、どんな魔法かと手順を説明してからにしやがれ！」

「時間が惜しかったからな。ほら、行くぞ」

「ああ」

僅か数十秒で五百メートルの距離をエルを抱えながら疾走した俺は、エルの苦情を聞き流しながら現場の様子を確認していた。

そこには、俺達と同じ予備校の生徒二人が狼に囲まれているようであった。

一人は槍で、もう一人は珍しい事に両手に装備した手甲からして拳法使いのようだ。

この西洋ファンタジー的な世界には、実は拳法がポピュラーな戦

闘術として普及している。

戦場で武器を失った際に素手でも戦えるようにと開発された戦場格闘術が基礎と言われ、これから多くの流派が発生していた。

だが、今ではその多くが衰退気味であった。

やはり素手では、どうしても凶暴な野生動物や、更には魔物に対抗できなかったからだ。

一部の流派が、都市部の治安を維持する警備隊などの必須訓練メニューに指定されているので命脈を保っているのと。

あとは、冒険者の間で普及している魔闘流が世間では一番有名かもしれなかった。

魔闘流とは、読んで字の如く、魔力を闘気に変えて闘う格闘術である。

なので当然、ある程度魔力がないと使えない。

凄いと思われるには、最低でも初級と中級の間くらいの魔力は必要だ。

ただ、流派を掲げている家の人間に必ず魔力持ちが生まれる保障も無いので、そういう家の人間は技の型や修練方法を伝えるのが目的というのが、世間の常識になっている。

あとは、魔力を使って戦うので、使っている間は他の魔法が使えない。

魔力が中級以下で、しかも覚えられる魔法が少なかったり、覚えられた魔法の種類が微妙な人向けというのが世間からの認識であった。

しかしながら、修行によって魔力の消費効率が上がると少ない魔力で長時間超人のように戦えるので、実は冒険者として歴史に名を残す人が多い職種でもあったのだ。

「なあ、見覚えないか？」

「ある」

それもそうであろう。

この狼に囲まれた二人は、予備校で同じ特待生クラスにいる同級生であったからだ。

槍を振るっているのは、俺達と同い年で、燃えるような赤い髪を腰まで伸ばし、それを後ろで無造作に纏めている。

スレンダーな体型で、猫のようなイメージを受ける美少女、イーナ・ズザネ・ヒレンブラント。

彼女の実家は、地元ブライヒブルクで兵士達に槍術を教える道場を経営しているらしい。

名は貴族らしいのだが、実は彼女の実家は正式には貴族ではない。

槍の腕前で、ブライヒブルクの領主ブライヒレーダー辺境伯から兵士達に槍を教える師範に代々任命されている陪臣であったからだ。

正式な貴族とは、王国から任命された者とその家族だけが当てはまる。

なので、ブライヒレーダー辺境伯とその家族は貴族だし、うちの実家のような零細騎士でも一応は貴族だ。

大貴族ともなれば大身の家臣や親族がいて、その実入りはうちよりも遙かに多かったりするのだが、それでも彼らは陪臣なので正確

には貴族ではない。

仕えている貴族領内のみで貴族扱いの、半貴族という扱いになっていた。

最近では、平民などにはあまりその差が良くわからない人達も増えているようであったが。

わからなくても、誰も困らないから何の問題もなかった。

それに、陪臣でも家を継げない子供の悲喜劇は共通だ。

確か、このイーナ・ズザネ・ヒレンブラントも三女だと自己紹介をしていたはず。

どこかに嫁に行くか、とはいえ陪臣の三女などはまず同じ陪臣の家にも嫁げないのが普通で、ならば己で身を立てるのだと冒険者を目指しているらしい。

実は、こういう事情で冒険者になる女性はかなり多かった。

腕っ節があっても軍は女性への門戸が狭いので、自然と冒険者を目指すようになるのだ。

もう一人も、俺達と同じ十二歳なのに、小さくて下手をすると十歳くらいにしか見えない。

それでも、魔闘流で特待生になっているので、かなりの腕前ではあるはずの美少女。

水色の髪のショートカットで少しタヌキ顔ではあったが、とても可愛らしく見える、ルイーゼ・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェークという名前であったはずだ。

これを覚えていた俺の記憶力は、思ったよりも凄いのかもしれない。

しかし貴族の名前は、俺自身のも含めて無駄に長くて面倒なのが多いものだと思う。

彼女も、実家がブライヒブルクで兵士に魔闘流を教えていて、ブライヒレーダー辺境伯の家臣の家柄であると聞いている。

イーナと同じく三女で、己の身を立てるために冒険者を目指していると自己紹介をしていたのを思い出していた。

ぶっちゃけ、予備校の特待生クラスにはそういう人間がかなりの割合で混じっているのだ。

当然、普通のクラスにも多数存在する。

言うほど貴族も楽な商売ではなく、この世もなかなかに世知辛い証拠でもあった。

いくら貴族の子供でも、みんなを貴族にしていたら、いくら王国の予算や領地があっても足りない。

なので、枠を外れた子孫は平民へと落下する。

最近では、王族でもそういうケースが増えていて、王家に生まれても決して安泰とは言えないのが常識でもあった。

と、説明なんてしている暇があるのかと言えば、実はあった。

その間に、抱えていたのを降ろしたエルが弓を連射し、立て続けに二頭の狼の頭に突き刺さってその命を奪っていたし、残りの十頭は久々の手の込んだ魔法で全て沈黙していたからだ。

まずは、土の壁魔法で女性二人を狼から隔離し、次に無属性の魔力の矢を連発して一気に狼達を殺してしまったからだ。

「俺の活躍が意味がねぇ！　というか、ヴェル！　その魔法があれば、弓矢とかいらねえじゃないか！」

「必要さ。弓矢を使った方が魔力の節約になる」

エルにそう答えながら二人の女性を囲んでいた土の壁を取り払うと、そこには驚きの表情を崩さない二人の姿があった。

「えーーーと、大丈夫かな？」

「大丈夫だけど……。あなたは確か、同じクラスのヴェンデリンよね？　隣のバウマイスター家の八男の」

偶然に助けた同じクラスの美少女二人と、俺は果たして仲良くなれるのであろうか？

というか、六年ぶりに同年代の女性と話をしたような気がする俺であった。

第二十三話　押し掛けメンバー。

「助けてくれてありがとう」

「サンキューね。ヴェル君」

「あのぉ……。一応、俺も助けたんですけど」

「悪いわね。本当は、エルヴィン君も凄いんだけど……」

「魔法って、マジで反則だよなぁ……」

放課後の午後、同級生であるエルと一緒にアルバイトの狩りに出かけた俺であったが、かなりの成果にホクホク顔で街へと戻ろうとしたその時、偶然にも狼の群れに襲われていた同級生のイーナとルイーゼを助けていた。

エルの弓と俺の魔法で狼の群れは全滅していたが、やはり僅か十二歳のガキが二人で狼の群れを全滅させれば驚かれるのが当然だ。

狼は毛皮が売れるのでそれを回収した後、俺達は四人で夕食がてら話をする事になっていた。

「でも、狼の毛皮は良いのか？」

「そっちの話なの？　いいわよ、助けて貰ったお礼としてね」

「お礼とは言わないかもね。半分以上は、エル君とヴェル君が倒し

たわけだし」

実は俺達が駆けつけた時、現場には既に絶命した八頭の狼の姿があった。

二人は、それでも自力で八頭の狼を倒していたのだ。

だが、そこで体力の限界が来て、これ以上は倒せないで防戦一方の状態であったらしい。

俺は、彼女達が先に倒していた狼の毛皮八頭分の権利は向こうにあると思っていたのだが、二人は助けて貰ったお礼として俺たちにくれるという。

ふと横を見ると、エルが物凄く嬉しそうな顔をしていた。

実入りが増えて嬉しいのであろう。

それに、彼女達としては俺達に借りを作りたくないらしい。

ならばここは、素直に貰っておいた方が良いと俺は思っていた。

その代わりに、どうせ狩りの競争でエルに負けたので彼に夕食を驕らなければいけないのを思い出し、ついでに二人の分の夕食も驕る事にしたのだ。

俺達は、先に狩った獲物を予備校側から指定された冒険者ギルドが経営する買取所へと置いてから、予備校近くにあるレストランへと移動する。

以前は、ブライヒブルク近隣に住む農民のふりをして、商人ギルドカードを使ってバザーで獲物を売っていた俺であったが、今は指定された買取所に持っていくだけなので楽であった。

前の癖で、『解体をしなければ』などと思っていた俺であったが、買取所にはプロの獲物解体人がいるので、逆に素人が下手に解体などしないようにと予備校から釘を刺されている。

下手な奴がやると価値が下がるからという事らしいが、これでもバザーで獲物を売っていた頃には、商業ギルドの職員やお客さんから解体が上手いと褒められていたのに、全く酷い言い様ではある。

ただ、その解体は魔法によって行われていたのだが。

それと、買取所の受け付けで俺は、知り合いの商業ギルドの職員と顔を合わせてしまった。

受付で呼ばれた名前を聞かれてしまったので少し拙いかなとは思ったのだが、向こうは気にもしていないようだ。

後でエルが言っていたのだが、『農民の子供のフリをして副業に励む貴族の子供なんて、地方だとさして珍しくも無いからな。俺もそうだったし』という事らしい。

さすがに、犯罪目的での偽名がバレると大変な事になるのだが、貴族の子供のアルバイト目的の偽名は身元が確かなので逆に安心されるそうだ。

更に言うと、ベテランのギルド職員が見れば、農民の子か貴族の子かなんて大体わかってしまうらしい。

その辺は、さすがはプロと言うべきであろう。

確かに、あの商業ギルドの職員は俺に声さえかけて来なかった。

「七番の札をお持ちの方」

「はい」

結局、猪一頭は毛皮込みで銀貨三枚、ウサギは合計八羽で毛皮込みで銀貨四枚、ホロホロ鳥が三羽で銀貨三枚。

そして狼であったが、肉は食べられないが毛皮は意外と需要が多いらしく二十頭分の毛皮で銀貨六枚になった。

今日の合計は、銀貨十六枚で一人頭八枚。

日本円にすると八万円くらいであろうか？

アルバイトとは思えない金額であったが、これはわざわざ遠方の狩り場まで足を運んだおかげであろう。

街の近くで狩りをしている連中は、いつも半分くらいボウズなのが普通だからだ。

それに、遠方で人がいない場所で狩りをするので危険も増える。

今日の、二人のお嬢様方のような結果になるのだ。

「噂は本当だったのね」

「噂？」

「ええ、バウマイスター家の八男は、かなり強力な魔法が使えるって」

予備校近くの、学生御用達のレストランに到着した俺達は、奥のテーブル席に座り、四人分の今日のお勧めディナーを注文する。

一人前銅板一枚と少し高めではあったが、肉が沢山入った濃厚なシチューに、川魚のフライに、新鮮なサラダに。

パンは白くて柔らかい物が二つ付いていたし、飲み物はお茶かコーヒーに、デザートにアップルパイと。

値段分の、価値がある内容になっていた。

「高いメニューを奢って貰って悪いな」

「賭けは、エルの勝ちだからな」

「私達まで悪いわね」

「今日は、実入りが良かったからな」

お腹も減っていたのでまずは目の前の暖かい食事を片付ける事にし、デザートまで平らげた後に食後の紅茶やコーヒーを楽しみながら話をする事にする。

「しかし、災難だったな」

「いやぁ……。大き目の猪を狩るのに手間をかけ過ぎてね」

エルの慰めに、見た目が幼い水色の髪の美少女ルイーゼがなぜあれほど大量の狼に囲まれる羽目になったのかを説明する。

俺達と同じく、街から離れた場所で狩りを開始して運良く大きな猪を見付けたものの、その処理に手間取り、その間に血の臭いで狼の群れを呼び寄せてしまったらしい。

しかも、先に倒していた八頭が一つ目の群れで、あとの十二頭は二つ目の群れであったようだ。

いくら特待生でも、彼女達はまだ十二～三歳でしかない。

狼の群れとのダブルヘッダーは、今の時点では荷が勝ち過ぎてい

たようだ。

「それに、実は狩りは初めてだったんだ」

イーナの話によると、二人は普段は道場で訓練ばかりしていて狩りという物を経験した事が無いらしい。

そのせいで、スタミナの配分を間違えてしまったようだ。

「狩りをした事がないのか？」

「別に意外でもないぞ、ヴェル」

「そうなのか？」

「ああ。街に住んでいる貴族なんて、陪臣でもそんなものさ」

俺やエルのように、実家が田舎だと貴族でも狩りを行う。

農作業が優先なので狩人が少ないのと、冒険者などまず来ないからで、他にも武芸の鍛錬の一部と見なされていたり、趣味の一環として見なされていたりと。

逆に言うと、街の貴族や兵士は狩人や冒険者の仕事なのでそれを奪うような事はしないし、武芸の鍛錬は正式なメニューがあるし、狩りの他にいくらでも趣味や娯楽は存在しているとも言えた。

「狼は単独だと、ある程度訓練を受けた人間ならそう苦戦はしないけどね」

狼の怖さは群れで襲って来る事で、数頭を倒したり傷を負わせても、いつの間にか自分も怪我をしていて、次第に体力を失って最後

にはというパターンで命を落す事が多いのだ。

「それに、お前さん達はペアの組み方が間違っている」

槍のイーナに、魔闘流のルイーゼにと。

どっちも前衛タイプなので、せめてどっちが一人は弓を準備しておくべきであるとエルは助言する。

「その点、うちは俺は剣も弓も使えるし、ヴェルも弓も魔法も使えるわけで。バランスが良いわけだ」

「バランスは関係ないと思うけど」

「何でだ？　ヒレンブラント」

「イーナで良いわよ。いい、確かにあなたの剣の腕は優れているし、弓も上手なのはわかる。でも、ヴェンデリンの魔法が凄過ぎて全然関係ないのよ。ヴェンデリンなら、その辺の子供と組んでも結果は同じじゃないのかな？」

「そうだね。イーナちゃんの言いたい事はわかる。ヴェル君の魔法って、既に超一流の冒険者レベルだし」

イーナの発言に、ルイーゼも賛同していた。

「でなければ、同時に十頭もの狼を魔法の矢で殺せないわよ。魔力の量もだけど、魔法の精度が既にベテランレベルなのよ」

確かにイーナの言う通りに、俺は結構魔法の精度にも自信がある。

伊達に六年以上もの間、家族にハブられながら魔法の特訓を続け

たわけではないのだ。

そう、俺はボッチを糧に魔法の鍛錬に全てを賭けていたのだ。

決して、他にする事が無かったからではない。

それに俺には、短い期間ながら世話になった師匠という偉大な存在もいた。

彼の教えにより、俺は効率の良い魔法の鍛錬を行えたのだから。

「ズルいとは言わないけど、エルヴィンは圧倒的にパートナーに恵まれているわね」

「しゃあないだろう。その辺は、運だからな」

普通こんな言い方をすると不遜に聞こえる事も多いのだが、エルには不思議な魅力があってあまり敵を作らない羨ましい性格をしていた。

それに、エルの言う事も事実だ。

偶然とはいえ、たまたま入学式直後に出会って友人になったのだから。

更に言えば、エルは今の時点でも優れた剣の使い手である。

弓も腕前も、既に一人前と言っても過言ではないレベルだ。

俺は、彼を足手纏いなどとは一度も思った事がなかった。

「エルヴィンの言う通りね」

「そうだね。これも運。袖振り合うも多生の縁だよ」

「私とルイーゼが前衛、エルヴィンは情況に応じて前衛の剣と後衛の弓を兼用。そして、ヴェンデリンが弓と魔法で後衛と。バランスの良いパーティーね」

「何か、勝手にパーティーが結成されているけど……」

女の子という生き物は、可愛さとか弱さとの裏合わせで強かさも兼ね備えている。

前世で多少は経験した事実なのだが、俺は少し甘く見ていたようだ。

翌日、俺とエルが予備校の教室に入ると、すぐに担任のギルド職員から声をかけられる。

「バウマイスター、アルニム。ヒレンブラントとオーフェルヴェークから、パーティー申請書はちゃんと受け取ったからな」

「はあ？」

確かに、入学式時の説明でパーティーの結成についての説明は受けていた。

冒険者が生き残れるコツは、己の実力もあるが良い仲間を見付ける事であると。

なので、せっかく予備校に通うのだから、この時期に勉学や訓練を共にした者同士で良いパーティーを作っておくべきであると。

そしてそのために、パーティー申請用紙という物が存在していた。

これで申請をしておけば、後に行われるパーティー実習で申請さ

れたメンバーが優先されるし、予備校側としても、アルバイトの狩りなどでもそのメンバーで動いていると知れれば、安心できるという事らしい。

「バランスが良いパーティーじゃないか。これは期待できるな」

「あいつら……」

「（これって、ラノベとかで言うところのフラグが立ったなのか？）」

まあ、悪いやつらでも無さそうだし、ずっとソロや野郎のエルとだけで行動というのも味気ないので、とりあえずは様子見だなと思う俺であった。

幕間四　ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターという男。

「（凄い……）」

私、イーナ・ズザネ・ヒレンブラントは、ただ驚いていた。

自分と親友である同じ年の幼馴染を救った、狼からの攻撃を防ぐため瞬時に形成された土壁と、狡猾な獣達を絶命させた魔法の矢の乱射にだ。

槍術修行の傍らで鍛えさせられた動体視力により、二本ほど普通の矢も飛んで来て、二匹の狼を絶命させているのも掴んではいる。

だが、普通に考えれば凄いこの弓術でさえ、その魔法の前には霞んでしまう。

才能の関係で、魔法使いの数は極端に少ない。

更にその中でも、凄いと思わせる魔法使いともなると希少だ。

実際、我がブライヒブルク領で雇われている魔法使いの中で今の魔法に匹敵する物を使える人物は、筆頭お抱え魔法使いであるブランターク様だけであろう。

しかも彼は、三十年以上も一流の冒険者としてその身を馳せ、過去には竜まで討って王国から受勲をされた身でもある。

そんな彼に匹敵する魔法を使う者とは、一体何者なのであろうか？

そう思い、魔法を放った主の確認をする。

すると、そこには共に入学した冒険者予備校の同級生の姿があった。

魔法の主は、同年齢の同級生であるヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターだったのだ。

「（まさか、ここまでの実力とは……）」

冒険者予備校に入学する際に、ある一つの噂が流れていた。

私と実家の主君であるブライヒブルク辺境伯家の寄り子で、『山脈超えの、貧乏騎士家』と噂されているバウマイスター家の八男が、魔法を披露して特待生試験に合格したと言うのだ。

ただの入学ならともかく、魔法で特待生試験に受かるのは難しい。

なぜなら、いくら魔法で貴重でも、火種やコップ一杯の水を出せるだけで特待生になれるほど世間は甘くないからだ。

その程度の魔法が魔物討伐の役に立つはずもなく、そういう人は諦めて剣や弓などで特待生試験に挑戦する事が多かった。

そんな情況で、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターは純粋に魔法の才能だけで特待生試験に受かった。

当然、ブライヒレーダー辺境伯様の耳にも情報は届いているはずだ。

私でも、家族からその噂は聞いているのだから。

未成年なのに最低でも中級の魔法が使えるのだから、将来に向けて唾を付けておくのは当然とも言える。

そのくらい出来なければ、大物貴族としては失格と言われても仕方が無いのだから。

ただ、この点に関しては当代のブライヒレーダー辺境伯様は優れていた。
彼は、私が生まれたばかりの頃にブライヒレーダー辺境伯家の当主に就任している。

いまだに、家内でも古参の人達が話のネタにする痛恨の失敗。
魔の森遠征の失敗で戦死した先代の跡を二十歳前に継ぎ、他の領域を統括する大物貴族や、周辺の昔から仲の悪い寄り子達からの嫌がらせや干渉に耐えつつも領内の統治に腐心し、先代よりも優秀であるという評価を受けているのだから。

それと、魔の森遠征失敗の件であったが、原因がバウマイスター家側からの要請に従ったためなどと言う表向きの原因を信じている人は少ない。

先代が戦死し、他の軍幹部達や軍勢もほぼ全滅という第一報が入った時、その報告を聞いて血を吐いた人間がいた。

現在のブライヒレーダー辺境伯の兄であった、長男ダニエル様その人である。
天才的な頭脳を持ち、先代に可愛がられていた彼は不治の病に犯されていたそうだ。

もう既に病が大分進行していた彼は、その報告を聞くと、『ブライヒレーダー辺境伯家には、アマデウスがいるから何も問題は無いのに！　父上は、愚か者だ！』と叫び、そのまま急死してしまったそうだ。

まさに、憤死と呼ぶに相応しい死に様であろう。

そして、そんな彼の病に効くとされたのが、魔の森に住んでいる可能性がある古代竜の血から造る霊薬であった。

と、ここまで書けばもう後は誰にでもわかるシナリオとなる。

先代は、不治の病にかかった長男を救うために無謀な遠征を行い、寄り親の立場からバウマイスター家に援軍を要請した。

この場合、強制したと言っても過言ではないであろう。

そして、見事に失敗。

この戦争の無い時代に、国軍ではなく諸侯軍とはいえ二千人近い戦死者は、さぞかし王宮や貴族達の噂になったであろう。

しかも、その戦死者の中には当主までもが含まれていたのだから。

当然、大物貴族のプライドとして、余計な事実はなるべく隠蔽しようとする。

この遠征は、バウマイスター家からの要請をブライヒレーダー辺境伯が受けたのだが、魔の森に潜む魔物の戦力の算定を誤り、そのせいで多大な犠牲が出た。

ちょっとでも事情を知っていれば、そんな説明はすぐに嘘だとバレる。

だが、その嘘が時に事実になる事もある。

王宮としては、南部を統括するブライヒレーダー辺境伯家の混乱は、平穏な南部統治の邪魔にしかならない。

だから、ブライヒレーダー辺境伯家には何も言わなかった。

遠征を行った事情についても、バウマイスター家側の要請であったという嘘も、重病の息子のためであったという事実を肯定も否定もしない。

それに、責任を押し付けるバウマイスター家に何か罰を与えるつもりもなかった。

みんな、それとなく真相は知っているが、その真相を口にしてはいけないのだと。

まだ子供の身である私からすれば、所謂汚い政治の世界の話なのであろう。

可哀想なのはバウマイスター家であったが、その分ブライヒレーダー辺境伯様は兵士達への補償金や、交易での便宜なども行っているそうだ。

名誉を損なわせた分、金銭や現世的な利益で補填するように心がけたのであろう。

なので、ブライヒレーダー家の家臣や兵士でバウマイスター家に恨みを抱いている人は少ない。

言っても仕方が無い部分が多過ぎるからだ。

たまに、家族を失った怒りの向け先がそこしかないと思っている人や、本当に愚かで真相の噂すら知らず、本気でバウマイスター家を非難している人もいるのだが。

私は、特にバウマイスター家に隔意など持っていない。

生まれたばかりの頃の話をされても、正直困るのだ。

父や兄達は、実家の槍術道場に通っていたお弟子さんを十数名失っていたので、もしかすると少しだけ隔意があるのかもしれない。だが少なくとも、表立ってそれを口にしているのを聞いた事が無かった。

「助けてくれてありがとう」

私は、すぐにバウマイスター家の八男にお礼を言う。

正直なところ、この救援が無かったら相当に危なかったであろう。

私達は、少し過信していたのだ。

実家であるヒレンブラント家は、代々ブライヒレーダー家に槍術師範として仕える陪臣であった。

騎士の嗜みである武芸は、平時には見栄えも良く、貴族に叙任される際に宣誓する言葉の通りに剣が重要視される。

式典などでも、上級の者ほど高価で美しい剣を準備するのが普通だ。

ところが実際の戦場では、遠距離から使える弓に、リーチが長い槍が重要視される。

戦場における戦死傷者の多くは、これら二つによって発生するのだ。

良くあるサーガなどで語られる、騎士同士が剣を使っての一騎討ちなど、まず滅多に発生しないのが普通であった。

そのため、実は槍術を教える武官の地位や待遇は高い方だ。

だが、三女がのうのうとしていられるほど余裕があるわけでもない。

三女では同じ陪臣家への嫁入りすら難しく、私は子供の頃から自立のために槍術を学んでいた。

幸いと言うべきか、才能はある方らしい。

父は、『お前が、男ならな』と残念そうに口にしていた。

技の型などはまだ父に敵わなかったが、実は私にはほんの少しだけ常人よりも多目の魔力がある。

少し訓練すれば、一日にコップ数杯の水くらいは出せるらしい。

微々たる物だが、実はこの魔力が役に立つのだ。

この魔力をほんの少しずつ、己の身体に流して身体能力を強化する。

この技を懸命に訓練した結果、私は実戦形式の模擬試合で父や兄にも負けなくなった。

ただ、それは同時に残念な結果も生んでいる。

父や兄達は、私を疎ましく思うようになっていたのだ。

娘や妹しては、可愛がってくれているのはわかる。

だが、槍術道場の弟子としては疎ましい。

私が男ならば、その腕前で実家に師範として残るという選択肢も

あった。
しかし、私は女である。
嫁に行く条件は三女なので良くは無いし、嫁に行くのに槍の腕前は全く関係が無い。
むしろ、嫁よりも弱い旦那などと噂されるのも嫌なので、誰も貰ってくれないであろう。

そのような事情もあり、私イーナ・ズザネ・ヒレンブラントは、冒険者予備校に入学した。
得意な槍術で、特待生試験に受かってだ。

「でも、狼の毛皮は良いのか？」

私達を助けてくれたバウマイスター家の八男であったが、どこか抜けているというか、変わっているような気がする。
こちらに恩着せがましい事など一切言わず、まずは獲得した毛皮の分配について聞いていたからだ。

「（変わった人ね……）」

更に彼は、今日は稼げたのでお礼に夕食を奢ってくれるという。
お人好しなのであろうか？

何しろ、彼はあの有名な貧乏騎士家の八男なのだ。
その生活ぶりなどは、私など比べ物にならないほど貧しかったはず。

陪臣家の娘とはいえ、いや逆にそういう立場だからこそ、お隣の

小身貴族家の財政状態などわかってしまう。
わかってしまうからこそ、物悲しくなってしまう部分もあるのだが。

この世は、戦争も無く平和であった。
だからこそ、王族も、貴族も、陪臣も。
跡を継げない子供の悲哀は共通で、軍への道もある男子とは違い、それすらも極端に狭い女子は、良い嫁ぎ先の確保か、私のように冒険者などとして身を立てようとする。

ただ前者は、私のような身分だと厳しい物があるのだ。
もう引退している老齢の貴族の妾や後妻か、小領貴族の妾でも順番は三番目から五番目くらい。

降家でも商人に嫁げれば運が良い方で、諦めて豪農などに嫁ぐ人もいるほどだ。

これなら、冒険者として自立した方がマシというものだ。

前に誰かが、『戦争でも無いかな?』などと物騒な事を言っていたが、内心では賛同者も居るのではないかと思ってしまう。
戦争で貴族が減れば、その分自分に出番が回って来る可能性もあるのだから。

「イーナで良いわよ。いい、確かにあなたの剣の腕は優れているし、弓も上手なのはわかる。でも、ヴェンデリンの魔法が凄過ぎて全然関係ないのよ。ヴェンデリンなら、その辺の子供と組んでも結果は

同じじゃないのかな？」

せっかくの食事の席なのに、私は思わずバウマイスター家の八男の相棒であったエルヴィンに余計な事を言ってしまう。

だが実際、まだ様子見の人は多いが、魔法が使えるバウマイスター家の八男に目を付けている予備校生は多い。

男子は、パーティーメンバー候補として。

女子は、それプラス婚姻の相手としてだ。

まだ早いような気もするが、こういう事は競争でもある。

特に、こんな冒険者予備校に在籍しているような貴族の子達は、もう半分平民に片足を突っ込んだ身なので、己の将来のために必死なのだ。

こう言うと平民をバカにしていると思われるかもしれないが、みんな、生まれた時に持っていた身分や待遇を失うかどうかの瀬戸際なのだ。

必死にもなるし、他者を蹴り落としてでもと考える人も多い。

本当、貴族の世界は世知辛いのだ。

決して、綺麗事だけで語れる物ではなかった。

「（ヴェンデリンと組めば、上手くすると……）」

優秀な魔法使いなので、運が良ければ貴族に叙される可能性もあるし、そうでなくても収入が良いので生活は保障されるはず。

もしどこかの貴族家のお抱えになれば、その子が代々の陪臣として家を立てられる可能性もあった。

男子は家人や従士になるべく。女子は当然妻となるべく。
冒険者予備校なのに、もうその先にある第二の人生を見据えている者も多いはずだ。

酷く現実的な話ではあるが、貴族や陪臣の次男・次女以下などがここでのほほんとしているわけにもいかない。

早い者勝ち、図々しいくらいで無いと駄目。

継げる家門や領地に、良い嫁ぎ先などがある長男・長女などは、こういう考えをする私達がさもしいと陰口を叩く事もある。
でもそれは、自分達が恵まれている立場に居るからだ。

どうせ、冒険者予備校に居る貴族の子弟など、実は半分貴族扱いなどされていない。
冒険者として身分など関係ないほどの大金を稼ぐか、名を揚げて他の貴族に雇われる。

でなければ、限界を感じて引退をし。
開拓地に行くか、小さな商売でも始めるか。
むしろ、そういう人間の方が多いのだから。

王国には、そんな元は貴族の子孫ですと自称する平民階級の人間は多い。
身分によって名乗りに制限が無いので、平民でも貴族のような名前の人も多いのだ。

普通は遠慮して、姓を名乗らなくなるのだが。

「私は、そんな生活は嫌だもの」

夕食が終わり、私達はヴェンデリン達と別れて自宅への道を歩いていた。

隣に居る幼馴染のルイーゼも同じだが、成人後にはその実家からも出ていかなければならない。

残っていても良いのだが、それは親から勧められる縁談を断れない事を意味していたからだ。

良い話などまず奇跡でも無ければ無理で、もし相手が七十歳を超えた老人でも家に残っていれば断る事は出来ない。

オマケの三女が成人後も家に残るというのは、そういう事なのだ。

「イーナちゃんは頭が良いから、色々と考えるよね」

見た目が幼いせいで周囲はあまりそう思っていないようだが、実は私などよりもルイーゼの方がよっぽど頭はキレると思う。

いくら家が近所同士で、幼馴染で立場が似ているとはいえ、私達が親友同士なのは、心の奥底は似た者同士だからだ。

「私達は、チャンスを得たと思う」

「うーーーん、ヴェル君の事だよね？」

同年齢で同じ冒険者志望なのに、狼から助けられるという不甲斐なさであったが、だからと言って私達が物凄く弱いというわけではない。

他の特待生でも、多分同じような結果になっていたであろうからだ。

要するに、ヴェンデリンがあまりに強過ぎるのだ。

「イーナちゃんは美人さんだから、ヴェル君の目に留まるかな？」

「それはないわよ」

小さい頃から、顔立ちは整っていると周囲から良く言われていた。ただ、槍術を習っているせいではないのだが、目付きが鋭い時があって怖いと言われる事も多かったのだ。

あとは、考え事をすると口数が少なくなる傾向もあり、男性からすれば何を考えているのかわからず、たまに喋ると厳しい事を言う女の子に見えるはずであった。

とても、女性としてヴェンデリンから好まれるタイプとは思わなかったのだ。

体型も標準的だし、むしろ可愛い容姿をしているルイーゼの方が男性へのウケは良いと私は思っている。

「私は、チビっ子だもの」

「そういうのが好きな人も居るって」

「イーナちゃんは、突然何を言うのかと思えば。体型は、年齢的に将来に期待するにしても。イーナちゃんは期待できるけど、私は厳しいかも……」

それでも、実はヴェンデリンはルイーゼのような娘がタイプかもしれない。
私も数に入れれば、二人でツータイプとも言えた。
選択肢は、多い方が良い。

しかし、自分で言っていてしょうもない考えだと思う。

「何てね。今は、友達になれてパーティーでも組めれば最高かな」

一方のルイーゼも、サラっと凄い事を目論んでいるようだ。

予備校生は、卒業までは魔物の領域に入れない。
年度の後半から始まる、熟練パーティーを教官役とした実習を除いてなのだが。
それに備えて事前にパーティーを組み、狩りで連携などを確認するくらい出来ない人は、冒険者に相応しくないと言われても反論は出来ないはずだ。
今は、そういう大切な時期だと誰もが思っていた。

「ライバルは多いはず」

「だよねぇ。ヴェル君が居ると圧倒的だし、エル君もあれでなかなか凄腕の剣士だもの」

とはいえ、いきなりパーティー結成要請を出すのはバカのやる事だ。
実力の無い人間がいきなりパーティーを組んで欲しいと頼みに言っても、実力の高い人からすれば、『邪魔者や足手纏いはお引取りください』という事になるのだから。

「私達って、冷静に考えてどうかな？」

「ええと……」

正直、他の特待生に劣るという事は無いと思う。

二人共、入学成績はトップ５に入っているのだから。

「考えても仕方がないから、申請用紙を出してしまおう」

「ルイーゼ、あんたねぇ……」

たまにこういう直感的な行動や意見を述べるのが、ルイーゼという私の親友であった。

ところが、意外とその結果が悪くないのだ。

「駄目なら、向こうが破棄するって」

「何て、行動がポジティブなのかしら……」

そんなわけで、私達は駄目元でパーティー申請を四人で出してしまう事にする。

ところが、次の日にパーティー申請用紙を記入して提出すると、意外にも担任のゼークト先生は却下しなかったのだ。

「入学順位が五位以内の四人か。戦力バランスも悪くないし、こういうのは命がかかっているからな。経験を積ませるために成績下位者も入れろとは言えない」

命がかかっているので、成績上位者と下位者をバランス良く組ませてとは、元は冒険者でもあったゼークト先生は言えないようだ。
それに、私達はプロの冒険者でもない。
ただの見習いなのだから。

近い順位の者同士で組み、成績下位者は狩りなどで経験を積んで、将来は魔物に対応できるように訓練をする。
これが、正しい予備校の目的なのだから。

「優秀なパーティーは、一つでも多く欲しいからな。申請は庶務の方に出しておく」

まさかと思えるほど、パーティー申請は呆気なく通ってしまう。
唯一の問題は、肝心のヴェンデリン達が知らない事であろうか？

それが、一番問題なような気もするのだが。

「大丈夫だって」

一方、ルイーゼは何も心配していなかった。
ある意味、この娘は大物だと思う。

そして、勝手にパーティーを組まれてしまったヴェンデリン達であったが。

「なあ、エル」

「思う所が無いとは言わんが、他の成績下位者と組んでもな。こんな物だろう」

「そうなのか？」

「冒険者も、他の仕事と同じさ。組んで駄目なら、解散して新たにパーティーを作る。何も、一生同じパーティーでないと駄目なんて法も無いんだし」

「そう言われるとそうだな」

ヴェンデリンはどこか良くわかっていないようであったし、エルヴィンの考えは極めてドライであった。

もう申請は通ってしまっているし、組んで駄目なら新たに考えれば良い。

実際、一流の冒険者パーティーでも、初期からまるで同じメンバーなんて事は１００％あり得ないそうだ。

みんなパーティーの結成と解散を繰り返し、一部メンバーの入れ替えて今のベストメンバーになった。

人間同士なのだから、当然とも言えよう。

「まあ、良いか。それじゃあ、宜しく」

「よろしくね」

「よろしくな」

「……よろしく（優秀な魔法使いって、あまり細かい事を気にしないのかしら？）」

私は、自分の親友は今さらとして。

ヴェンデリンが物凄い大物なのだと思う事にして、まずは足手纏いにならないように努力する事を誓うのであった。

第二十四話　ブライヒレーダー辺境伯家主催園遊会。

「いやあ、今日も大漁だったな」

「熊が一頭狩れたのは大きいわね」

「だよねぇ。エル君の止めの一撃は見事だった」

「ふっ、ちゃんと熊の胆を傷付けない位置にと計算はしたさ」

いつの間にか、狼の群れから助けた二人の美少女がパーティーに入った俺達であったが、というかいつの間にか俺が新パーティーのリーダーになっているらしい。

前世では学級委員長すら未経験な俺なのにと思ってしまうのだが、実際になってみると、意外と仕事などなかったというのが結論だ。

放課後、四人でなるべく競争相手の少ない遠い狩場を目指して移動し、そこで俺が探知を使って獲物を探す。

簡単な物は適任なメンバーに振って狩らせるし、大物ならばパーティーの特性を生かして四人で戦う。

最初は、新規組の二人に少々の不安を感じていたのだが、あの狼の群れの件は運が悪かった部分も多かったらしい。

イーナの槍術は時には突進する猪の脳天を一撃で仕留める腕前であったし、ルイーゼなどは気配を消して敵に近付くという特殊なスキルで、プロの猟師にさえ難しいホロホロ鳥を容易く捕まえてしまうほどだ。

四人で動いているので、狼の群れや複数の熊に襲われても慌てないで済むし、効率も良いし、実入りもかなり良く。
今では、四人で狩りに出るのが当たり前になっていたほどだ。

「今日も、木の葉亭で夕飯にするか」

「今日のお勧めメニューは何だろうな？」

獲物を買取所に卸してから夕食に向かおうとすると、近くに見える予備校の校舎から見慣れた担任の教師が駆け寄って来る。

彼はギルドの中堅職員で、元はかなり腕の良い冒険者でもあったらしい。
惜しい事に怪我で引退を余儀なくされたが、今でもこうして後進の指導に邁進していたのだ。

今年三十七歳で、嫁さんと娘が二人いるらしい。
家族を食わせるのに苦労しているのであろう。

「おーーーいっ、お前達」

「ゼークト先生、何か用事ですか？」

「ああ、予備校経由でこんな物が届いてな」

担任は四通の封筒を持っていて、その中の俺宛への封筒の封を切ると、中には園遊会の紹介状が入っていた。

「園遊会ですか？」

「主催はブライヒレーダー辺境伯様なので、絶対に出るように」

「わかりました」

なぜか俺達は、ブライヒレーダー辺境伯主催の園遊会に出席する羽目になったのであった。

「しかし、なぜに俺が園遊会に招待なんて？」

「ヴェル君の実家は、ブライヒレーダー辺境伯家の寄り子だからじゃないかな？」

三日後の休息日のお昼前、俺達四人はそれなりにめかし込んで園遊会の行われる会場へと向かっていた。

俺とエルは、急遽仕立てて貰った貴族用の礼服姿で。

ちなみに代金は銀板二枚、日本円で二十万円ほどかかり、急な出費に俺とエルは半分涙目である。

イーナとルイーゼは実家にドレスがあったので急遽作る必要は無かったのだが、それに合わせたアクセサリーや靴などで出費を強いられ、やはり俺達と同じく涙目であった。

二人は、『新装備の購入貯金が……』と悶絶していたようだ。

せっかく女の子として可愛く生まれたのだから、嬉しそうにオシャレをすれば良いのにと俺などは思ってしまうのだが。

「そういえば、そうだったな。うちの実家って、ブライヒレーダー

辺境伯の寄り子だった」

「だったって……」

「俺は、まるで縁が無かったからなぁ……」

そのせいで物凄い不幸に見舞われていたが、それでも寄り親は寄り親で、そう簡単に縁は切れない所が零細貴族の悲しさとでも言うべきであろうか？

しかしながらよくよく過去を思い出すと、なぜか父や兄がこの手の園遊会やパーティーに参加した記憶がなかった。

と言うか、彼らが領内から外に出た記憶すらない。

出席するのに山脈一つ超えなければいけないので、それは当然とも言えたのだが。

「ブライヒレーダー辺境伯様も、さして重要ではない園遊会やパーティーでバウマイスター家に余計な負担はかけたくなかったんだと思うよ」

多分、ルイーゼの推測は当たっているはずだ。

だが、それに甘えてせっかくの縁を作るチャンスを逃す父や兄は、やはり貴族としてはどうなのかと思ってしまう。

コネや人脈は、一生かけて作る価値がある。

前世で、半分耄碌した会社の相談役のジジイが朝礼で言うほどなのだから。

「今回は、ヴェルがブライヒブルクに滞在しているからね。代理扱いなんだと思う」

「代理ねぇ……」

成人になってから自分で宣言しないとバウマイスター家の継承権は放棄できないので、俺はまだ一応は貴族の身分にある。

エルも俺と同じような境遇なので呼ばれたのかもしれないし、イーナとルイーゼは自分の所の陪臣の娘だ。

その二人が優秀な成績で冒険者予備校に入ったので、今のうちにツバを付けておこうという腹なのかもしれない。

貴族とは、何とも裏で色々と企む生き物である。

あくまでも、俺の想像にしか過ぎないのだが。

パーティーは、ブライヒブルクの中心部にあるブライヒレーダー辺境伯家の屋敷の庭で行われている。

さすがは領主の屋敷の庭、その広さは数百人の招待客がノンビリと食事や酒や歓談を行えるほどであった。

この園遊会は年に一度、ブライヒレーダー辺境伯家が、内外の貴族とその家族、陪臣とその家族、取り引きのある商人、各種ギルドや教会関係者などを招待しているらしい。

それと、冒険者予備校の校長や一部講師に、一般・特待生クラスを問わずに貴族籍を持つ生徒なども呼ばれているようだ。

一部、見知った顔も確認できた。

「こういう時に、自分が貴族だって確認できるんだよなぁ」

「エルは、こういうパーティーに参加した事があるのか？」

「まあね。うちにも寄り親はいるからな。その寄り親が、定期的にパーティーを開くんだよ」

エルは五男なので優先順位は低かったが、それでも何回かはこの手のパーティーに出た事があるらしい。

「でも、さすがは南部の筆頭貴族であるブライヒレーダー辺境伯家のパーティーだな。飯も酒も豪勢だ。うちの寄り親は子爵だから、もう少し内容が落ちるんだ」

エルは、そう言いながら積極的に料理に手を出していた。
その気持ちはわからなくもない。

突然に、『最近稼げているよな』という淡い嬉しさを奪う。
パーティーに着ていく正装代金という手痛い出費。

ならば、せめて銅貨一枚分でもそれを取り戻そうと必死に食事を食べているのであろう。
特に、単価の高い肉に集中しているようだ。

「ヴェルは、食べないの？」

同じく、女の子であるイーナやルイーゼも、まずは色気よりも食い気なようで。
持っている皿には、肉類を中心に料理が山盛りに積まれていた。

「勿論、食べるさ。食べて、この正装代金の一部でも回収せな。しかし……」

エルも俺もイーナもルイーゼも、身も蓋もない言動であったが、

これが零細貴族や陪臣の子供の現実なのであろう。
ふと脇を見ると他の予備校生なども同様で、冒険者予備校に入らざるを得なくなった時点で、もう半分貴族の枠からは外れているという認識なのであろう。

そのくらい図々しくないと、生活できないという現実もあるのであろうが。

「しかし？」

「いやね。このブライヒブルクに来てから思うんだけど……」

あのバウマイスター本家で出る、毎食の硬い黒パンと、まるで病人食のように塩味が薄い、細切れの肉片が多いとラッキーだと感じてしまうスープの食事とは、一体何だったのであろうと思ってしまうのだ。

俺が狩りに出るようになったら、メニューに何品か加わるようになったが、それでもあの硬い黒パンと薄い塩スープに変化はなかった。

初めてこっそりとブライヒブルクに来た時に、バザーで売った獲物の代金で食べた食堂のシチューをどれだけ美味しいと感じた事か。
前世が食に拘る日本人であったとは思えないほど、俺はあの薄不味い塩スープに慣れてしまっていたのだ。

「ああ、バウマイスター家の件ね」

「イーナは何か知っているのか？」

「子供の頃に、父上から聞いた事があるのよ」

簡単に言うと、あの出兵でバウマイスター家の財政は危機的状態に陥ったらしい。

領地が孤立しているので特産品を外部に売ろうにも、年に決まった回数山を越えて来る商隊が、わざわざ山を越えてまでも持ち帰ろうとするまでの物がなかった。

確かに、魔法の袋もないのに唯一余裕のある食料を荷駄で山道を運ぶのは、手間的にもコスト的にも厳しい。

そこで、比較的需要の高い、長持ちする小麦などをブライヒレーダー辺境伯家が儲け無しのボランティアで受け入れる事にしたそうだ。

小麦を買い取って貰えるようになったので、父は少しでも多く小麦を売れるように農地の拡大を指揮し、俺などまるで眼中になかった。

それが、俺の子供の頃の父や兄の姿である。

なるほど、そういう事情があったのかと思うのと同時に、『そこで時間を稼げたのだから、他の特産品を考えろよ！』とも俺は考えてしまう。

しかも父は、小麦の生産で領民達を縛り、そのせいで彼らは狩りや狩猟に行く時間を減らし、結果自分達も含めて領民達の食事がえらく貧困になった。

少々主食のパンが少なくても、自然の恵みの多いバウマイスター騎士領では狩りで得られる肉や、採集で得られる果物、山菜、川魚、自然薯、ハチミツなどがあるのにだ。

ただこれらの品々は、山を越えたブライヒレーダー辺境伯領でも普通に産出する。
なので輸出には使えず、そんな物を取っている暇があったら麦を作れと父が発破をかけたのであろう。

なるほど、名主のクラウスが俺に当主になって欲しいと懇願するわけだ。
彼本人の欲望は、考えない物として。

「……」

「どうかしたの？　ヴェル」

「いや、うちの実家って衰退する未来しか想像できないから」

「ご愁傷様」

と、素っ気無くイーナは言うが、こう言っては残酷だが彼女も俺もバウマイスター騎士領の将来に興味など無かった。
俺は八男でまず継承の目が無い実家の領地であったし、イーナにとっても関係のない隣領地の話だ。
これが実家を継ぐ身であったら、主家の寄り子が治める領地の話なので少しは気になっていたのであろうが。

あとは、俺達が生まれるか生まれないかの頃に起こった魔の森への遠征で、イーナやルイーゼの実家に犠牲が出て、隔意を持っている可能性であろうか？
ただこれも、本人達は『そんな、記憶も無い赤ん坊の頃の事を言われても……』という事のようだ。

「あと三年で縁が切れるから、気にならないな」

「いや、それは少し甘いと思うよ。ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスター君」

突如、イーナではなく他の若い男性の声が聞こえ、俺は声のした方向に身を向ける。

するとそこには、年齢は三十代前半ほどに見える、品の良さそうなブラウンの髪にグレーの瞳をした青年が立っていた。

まあ、年齢的にギリギリ青年扱いでも構わないであろう。

「ええと、どちら様でしょうか？」

「ヴェル、バカ！」

その青年に名を尋ねると、隣にいたイーナが慌てた態度で俺の腕を引っ張る。

「そのお方は……」

「ああ、申し遅れました。私の名は、アマデウス・フライターク・フォン・ブライヒレーダーと申します。君が、バウマイスター家に生まれた魔法使いですか。お会いできて光栄ですね」

何と、俺に挨拶をして来た青年は、我がバウマイスター家の寄り親であるブライヒレーダー家の若き当主であった。

「これは、無礼をいたしました。平にご容赦を」

「ヴェンデリン君は、今までこの手の席に顔を出した事がないと聞

いています。しかも、君はバウマイスター家の跡取りでもない。私の顔を知らなくて当然ですよ」

寄り親の顔を知らない寄り子の子供というのは前代未聞のような気がしたが、当人であるブライヒレーダー辺境伯は気にしていない様子であった。

「しかし、君が冒険者予備校に入学していて助かりました。バウマイスター家の方々を、この手の集まりに呼ぶのは不憫だったので……」

パーティーのために、山脈を一つ越えるのだ。

それに、現在のバウマイスター家の財政状態は良くない。

しかもその原因は自分達なのだから、パーティーに来られない父達を非難するわけにもいかず、かと言って形式だけでも招待状を出さないわけにはいかないのだが、毎度父達は断るので周りの家臣達が無責任に非難していたらしい。

「『寄り親の誘いを断るなんて無礼な！』と、こんな感じです。だからこそ、君が来てくれて助かっています」

この手の礼儀作法も習っていなかったし、貴族の嗜みであるダンスは今日が園遊会で助かったくらいの、いかに値段の高い飯を大量に食うかしか考えていない俺でも、バウマイスター家の人間が出席した事に意義があるらしい。

何とも、貴族とは面倒な生き物であった。

「挨拶も終わりましたので、これが本題です。少々、お時間を頂けませんでしょうか？」

「大丈夫ですが、何か私に用事でも？」

「ええ、大した用事ではないのですか」

そのようにブライヒレーダー辺境伯に誘われて屋敷へと向かった俺であったが、それはすぐに真っ赤な嘘である事に気が付くのにそう時間を必要としなかったのであった。

「お手間をかけさせて申し訳ありませんね」

「いえ……」

俺がブライヒレーダー辺境伯に案内されたのは、彼の私室であった。

しかも、室内には俺と彼の二人だけ。

最初にメイドが人数分の紅茶を煎れていたが、彼女は一礼してからすぐに部屋を退室してしまう。

「それで、ご用件とは？」

「気が付きませんか？」

「ええと……。何がでしょうか？」

「才能は折り紙つき。ですが、まだ経験不足といったところでしょうか。ブランターク」

そう言った後に、ブライヒレーダー辺境伯が誰かの名前を呼ぶと、そこに一人の男性が入ってくる。
年齢は、四十歳代後半くらい。
白髪混じりの黒髪を角刈りにしている、鋭い眼光の歴戦の冒険者といった感じであろうか？

しかも彼は、魔法使いに多いローブ姿であった。
つまり、彼は魔法使いのようだ。

「うちの、筆頭お抱え魔法使いです」

「ブランターク・リングスタットだ。見ての通りに、以前は冒険者をしていてな」

「更に付け加えると、前にうちの筆頭お抱え魔法使いであったアルフレッド・レインフォードの師匠でもあった人です」

「えっ？」

いきなり師匠の名前を出された俺は、間違いなく顔に誰にでもわかる驚きを示しているはずだ。
死んでから語り死人となり、五年以上も自分の魔法を有望な後継者に伝えるべくその姿を維持し続け、遂に俺と出会ってその願いを成就した師匠。

俺はこの話を、出来れば他の人に伝えないで墓まで持って行こうと考えていた。
師匠が語り死人になっていた件や、俺と出会って魔法を教えて貰った件に、最後に免許皆伝を貰って彼の遺産を引き継いだ件なども

だ。

特に一番最後は、実は大きな問題を孕んでいる。

魔の森で壊滅したブライヒレーダー辺境伯軍は、遠く数百キロ以上の行軍を含めた遠征を行うに対し、その弱点である補給を師匠に一任していた。

二千人の軍勢を養う食料や物資を、全て師匠が魔法の袋に入れて運んでいたのだ。

更に、それらブライヒレーダー辺境伯軍の物資は、あまり使われないままで軍勢のみが全滅してしまった。

魔法の袋には、まだとんでもない量の物資が残っていたのだ。

そしてその物資は、全て俺の腰に付いている魔法の袋に入っていた。

この魔法の袋が師匠から譲られた物なので、当然と言えば当然とも言えた。

「私は、先ほど言ったよね？　君は、まだ経験不足だと」

「まだ子供で学生ですからね」

「そうさな。結構な魔法は使えるようだが、まだ他の魔法使いの気配に鈍感だ。アルに教わらなかったのか？」

「えっ？　俺には、リングスタットさんが言っている事が理解できません」

さすがは、師匠の師匠なだけの事はあるらしい。

俺が師匠から、魔法の手ほどきを受けている事に気が付いている

ようなのだ。
しかし、ここで素直にその事実を認めるのも危ないような気がする。
ここは、一旦とぼけて様子を見る事にする。
「あれ？　俺って、この子に危機感を抱かせちまったか？」
「駄目じゃないですか。ブランターク」
「なあ、坊主。俺は、別にお前さんを罰しようとしているわけでもない。当然、お館様もだ」
「私は、君と交渉がしたいのです。そして、ブランタークはお弟子さんの最後の様子が知りたいわけでして。その辺は、信用していただけませんでしょうか？」
二人に諭され、俺は遂に師匠と二人だけの秘密を語る事になるのであった。
「そうか。器合わせまでしたのか。お前さん、相当にアルに気に入られたんだな」
それから暫く、俺は二人に少し長い話をしていた。
魔法の素質がある事に気が付いたので森で静かに練習していると、そこに語り死人になった師匠が現れて彼の弟子になった事。
師事した時間は短かったが、そのおかげで今の俺がある事。

最後に卒業試験として、聖の属性魔法で師匠がゾンビになる前に成仏させた事や。
そのお礼と卒業祝いとして、彼から魔法の袋とその中身を遺産として受け継いだ事など。

俺が話をしている間、二人は神妙な顔付きでそれを聞いていた。

「そうか、奴は満足して成仏したんだな」

「あの、疑わないのですか？」

「いや、疑う余地などない」

師匠の師匠であるブランタークさんは、些か他の魔法使いには使えない特殊な能力を持っているという。
それは一度覚えた魔力を記憶し、その魔力の持ち主である人物がどこにいるのかを感知できるというものであった。

正直、この能力は凄い。
いくら魔力の多い魔法使いでも、普段体の表に出ている魔力の量は少ない。
優れた魔法使いは、他の優れた魔法使いの気配に敏感だとは言っても、実はこれは一種の勘であったし、その探知範囲も良くて数百キロ程度。
魔の森で語り死人になっていた師匠が俺の存在に気が付いたのは、探知範囲で言えばギリギリであったのだ。

それをブランタークさんは、一度覚えた魔力ならば数千キロまで探知可能だと言う。
ただ凄いとしか言いようがなかった。

「まあ、その能力は凄いんだがな。魔力量は、中級から上級の間くらい。アルの師匠だなんて言ってもな。すぐに抜かれてしまうほどで、師匠だなんておこがましいにも程があったのさ」

そのブランタークさんであったが、なぜか南部の魔の森がある地点で、師匠の魔力を五年以上も感じていたと言うのだ。

「俺は、奴がリッチにでもなってしまったのかと思っていた」

リッチとは、ゾンビの上位種にあたるアンデット系の魔物だ。理性などないし、喋れないで魔法も使えないゾンビとは違って、リッチは生前には及ばないが知性と魔法が使える魔物であった。

「リッチでも、あの天才だったアルだからな。退治しないと駄目なんだが、場所が場所でな」

軍隊でもようやく辿り着いたのに、冒険者があの魔の森に到着するのは不可能に近かった。

「幸いに、あそこから動かなかったからな」

ところが、その師匠の魔力反応が突然移動を開始する。
俺と合流するためだったのであろう。
ブランタークさんからすれば、辺境の村にリッチが移動を開始したと思ってしまったようだが。

「討伐をと考えたんだが、当時は俺も冒険者でな。依頼も出ていない件で仲間に無理は言えなくてな」

山一つ越えて、元は天才魔法使いであったリッチと戦闘を行い、報酬どころか経費しかかからない。
ブランタークさんは、早くに討伐依頼が出る事を祈っていたそうだ。

「ところが、一箇所に留まっている。しかも、二週間ほどで消えてしまった。別口で誰かが倒してしまったものだと思っていたんだ」

しかし、あの魔法使いが一人もないはずの辺境の村で誰が？
そんな事を考えている内に冒険者稼業に限界が来てしまい、死んでしまった弟子の替わりにブライヒレーダー辺境伯家のお抱え魔法使いに転職してしまったので、暫くはその事を忘れてしまっていた。

だが、ここ最近になって話は急展開する。
その魔法使いがいないはずのバウマイスター家から、冒険者予備校に特待生で魔法使いが入学したのだと。

「更に、今日で確信したさ。坊主が、アルの魔法の袋を下げているのを今目にしてな」

「奪ったのかもしれませんよ」

「それは無いな。その魔法の袋は、アル自身が所有者の変更をしないと他の誰にも使えない。という事は、アルはリッチになっていなかった。語り死人として、坊主にそれを託したのだとな」

語り死人は、生前に残した未練を果たそうとする。
その魔力が消えたのに討伐の噂が流れないという事は、無事にその未練を果たしたのであろうと。

「なるほど、アルフレッドには家族がいませんでしたからね」

「アルは、物凄く女にはモテたんだがな」

十五歳の頃から冒険者として十五年間以上も活躍し、それから鳴り物入りでブライヒレーダー辺境伯家のお抱え魔法使いになった師匠であったが、彼は孤児出身ゆえにどこか家族を作る事に恐れを抱いていたらしい。

女性に言い寄られる事は多かったが、遂に家族を作らないままで死んでしまったようだ。

「そんなわけだから、坊主がアルの遺産を受け継いでも何の問題もないわけだ。何しろ、本人からの譲渡だしな」

語り死人でも、師匠本人と言えば本人だ。

ブランタークさんは、俺が師匠の遺産を受け継いでも何の問題もないと考えているようだ。

「私も、問題は無いと思うんですけどね」

とは言いつつも、ブライヒレーダー辺境伯には何か懸案事項があるらしい。

俺には容易に想像がついていたが、違う可能性もあったので本人から先に言って貰う事とする。

「アルフレッドは、魔の森への父の遠征において大きな役割を担っていました。遠征軍の副将兼参謀長、魔法部隊隊長、補給部隊隊長などです」

師匠は、魔法使いとしてはこの大陸で間違いなく五本の指に入る存在であったらしい。
魔力も上級クラスでトップクラスの量を誇り、各種攻撃魔法はおろか、師事していた俺は師匠の多彩な魔法を見本にそのレパートリーを広げていたのだから。

当然、軍内では攻撃の要であり、それを認められて遠征軍でナンバー2の地位を得ていた。
魔法部隊の隊長については、他の少数従軍していた魔法使いが全員良くて下級と中級の間くらいの実力しか保持していなかったので自動的に隊長に任命されている。

補給部隊の隊長に関しては、彼が全ての物資を魔法の袋に入れて運んでいたので、他にあまり補給部隊で偉い人がいなかったという点も大きかった。

「彼は膨大な物資を袋に仕舞い、その中に入れた物を自由に取り出せます。おかげで、あの二千の遠征軍は補給の心配をしなくても良かったのですから」

他にも、重要ではあるが荷を抱えているので足が遅い補給部隊を同伴しないで済んだ点も大きかった。
行軍が早ければ、その分必要な物資も減るからだ。

「その魔法の袋の中には、遠征軍の補給物資が納められているはずですが」

「はい」

知らなければネコババでも問題はないと思っていたのだが、知っ

ているのであればこれは返すのが筋であろう。
何しろ、俺は彼の領内にある冒険者予備校に通っているのだから。

正直、あんまり実家の事は考えていなかったが。

「ちなみに、こちらがそのリストです」

師匠は生前、毎日律儀に袋に入っている遠征軍の物資の種類と量を欠かさずチェックしていたらしい。
それを示す彼直筆のメモが残されていて、俺はそれをブライヒレーダー辺境伯に渡していた。

各種食料、水、薬草などの医薬品、資材、予備の武具に。
兵士に与えるためや、魔の森で得た魔物由来の素材やその他の物資などを買い取るため、かなり高額の金銭も持っている。
更には、既に一部褒賞を与えたのであろう。

かなりの量の魔物の素材に、薬草や鉱石なども入っていた。

「兄を治す霊薬の材料には手が届かなかったものの、さすがは魔の森。貴重な素材なども多いですね」

「それで、これをお返しすれば宜しいので？」

「ええ、さすがはアルフレッド。律儀に自分の資産と分けていてくれたのが幸いですね」

物資などの返還が決まったので、俺はすぐにブランタークさんさんが持っている魔法の袋と自分の魔法の袋の入り口を合わせる。
更に、俺が頭の中で指定した収納物を思い浮かべると、それらは

次々とブランタークさんの魔法の袋へと移動していた。

この方法を使うと、わざわざ一旦全ての物資を表に出さないで済むからだ。

「俺の魔力だとギリギリだな。行軍や侵入で消耗する前であったらお手上げだったな」

魔法使いしか使えない持ち主を限定する魔法の袋は、魔力をほとんど使用しない癖に、その魔法使いの魔力限界量で収納する量が決まる厄介な機能を備えていた。

ブランタークさんは、自分の弟子の魔力の大きさを改めて確認しているようだ。

「ブランタークだって、名の知れた有名な魔法使いじゃないですか」

「お館様はそう言ってくれるけど、坊主は他の魔法使いなんてあまり知らないでしょう」

「そう言われると、確かに……」

生い立ちと今までの生活のせいで、俺には世間で有名な魔法使いへの知識があまり無かった。

図書館では、もうとっくに鬼籍に入った、半ば歴史の登場人物のような人物の記載しか見れなかったからだ。

「これでも、俺は結構有名人なんだぜ。だが、そんな俺を遙かに超える天才だったんだよ、アルは。本当、惜しい男を亡くしたものさ」

ブランタークさんが嘆いている間に、リストを持っていたブライ

ヒレーダー辺境伯は、返却された物資の資産価値を丼勘定ながらも急ぎ計算していた。

「白金貨五十枚分は軽くありますね」

皮肉な事に、魔の森で得た素材などがかなりの価値を占めているようだ。

でなければ、普通に人が食す保存用のパンや干し肉や水や酒。

それに、予備の武具や宿泊用のテントなどがそこまで高価になろうはずもない。

むしろ、資産価値のかなりの部分がこれら魔の森で採集された素材の評価額で占められていた。

「おかげで、我が領の財政も一息つけるでしょう」

いくら十二年近くも前も領軍の大損害とはいえ、二千人近くの人死を出せば損害の回復にはそのくらいの時間は軽くかかる。

他にも軍事費の支出は増えるし、その間はそれを理由に内政をサボるというわけにはいかない。

いまだに開墾地の増大や、次第に人口が増えるブライヒブルクやその周辺にある町の整備なども必要もあるので、いくら大身のブライヒレーダー辺境伯家とはいえ決して楽な財政状態ではないのであろう。

俺が返却した物資に、ブライヒレーダー辺境伯は物凄く嬉しそうな顔をする。

「君がいてくれて助かりました」

それは、普通に考えれば諦めるしかない物を、すぐ傍にいる俺が持っていて、しかも素直に返還に応じたのだ。
嬉しくもなるであろう。

「それで、報酬なのですが……」

「あるのですか？」

「それは、当然あります」

もしその物資が入った師匠の袋が、いまだに魔の森の中に置き去りにされていた場合。
冒険者にその回収を依頼しても、これを受ける人は皆無であろう。

それを考えると、俺に報酬を払うのは安上がりとも言えた。

「二割を報酬とします。一千万セントを受け取ってください」

随分と準備が良いらしく、ブライヒレーダー辺境伯はすぐに謝礼として評価額の二割を渡してくれる。
さすがに白金貨は無かったので、全て金板で支払われていたが、元々白金貨は大商人が大口取引の決済に用いたり、王族や大物貴族が嵩張らない資産として保持しているくらいで、市場にはまず出回らないので当然と言えよう。

それに、お店で使おうにも、お釣りがないので断られてしまう。
なので、俺が持っていても意味が無かったのだ。
ただ、どういうわけか師匠の遺産の中に十枚ほど入っていて、冒険者はリスキーな分稼げる可能性があるのだという事にしておく。

結局物資は返す羽目になっていたが、それでも報酬は貰えたし、師匠の遺産や、俺が自分で得た物資などには一切変化がなかったので特に問題はなかった。

変に返還を断れば、この大陸南部で大きな力を持つブライヒレーダー辺境伯を敵に回してしまうが、素直に返したので彼の好感を得たし、コネも得た。

ただ魔法が上手ければ好きに生きられる世界など無いはずだから、俺の判断は間違っていない。

少なくとも、俺はそう考える事にしていた。

「（白金貨十枚か。日本円で十億円とか……）」

実は師匠は、もっと多くの現金を持っていた。

それでもこの金額は大金であったし、前世でも今世でも大金を使う環境に無かった俺からすると、正直あまりピンと来ないのも事実であったのだ。

変に気を大きくして破滅しないように、やはり今の生活レベルを維持しようと俺は決意する。

まあ、高級外車とかが買えるわけでもないし、服や服飾品でもオーダーすれば大金なのだろうが、生憎とその分野には興味がなかった。

唯一あるとすれば、冒険者や魔法使いとして使う、高価な素材や、魔法的な能力を付与された武器や防具なのであろうが、これも師匠は冒険者時代に相当に高価な物を多数手に入れて魔法の袋に仕舞っていたようだ。

俺が新しく買う必要はまるでなかった。

「さて、思わぬ幸運により、我らは臨時収入を得る事が出来たのですが、もう一つヴェンデリン君に渡さなければいけない物があるのです」

「もう一つですか？」

「はい。君は、我がブライヒレーダー辺境伯家の首席お抱え魔法使いであったアルフレッドの遺産を受け継ぐ資格のある人間です。実際に、その魔法の袋と中身は正式に受け取っている。違いますか？」

「確かに、受け取っていますが」

「彼の資産は、その魔法の袋だけではありません。他にもあるのです」

ブライヒレーダー辺境伯が言うには、彼は冒険者稼業を引退する間際にブライヒブルクに屋敷を購入したらしい。

他にも、冒険者ギルドにある程度の金を預けてもいたようだ。

「冒険者を引退しても、そこから一切ギルドと縁が無くなるという話ではないのです」

ギルドに再就職をしたり、有名で名の知れた冒険者はギルドにお飾りの名誉役職を貰って名義貸しをしたり、現役時代に貯めた金を預託金としてギルドに預けたりもするらしい。

その預託金で、新人冒険者に基本的な教育を施したり、初期装備を買う資金を低利で貸したり、他の商人ギルドや職人ギルドに低利

で貸し出して利益を得たりと。

預託金に利息は付かないが、冒険者ギルドに窃盗に入るバカはいないし、預けている預託金の額が多いとそれだけ冒険者ギルドに貢献している扱いになって名誉なので、元冒険者はあまり必要の無いお金は冒険者ギルドに預けてしまう事が多い。

銀行などないので、安全にお金を預かってくれる冒険者ギルドはありがたい存在なのであろう。

これを、持ちつ持たれつとも言う。

「でも、師匠が死亡扱いになったのは、もう十年以上も前の話ですよ。残っているのですか？」

「こちらにも、事情がありましてね……」

師匠には家族もいないし、以前のブライヒレーダー辺境伯領は今とは比べ物にならないほど財政的に苦しかった。

なので、師匠の遺産はすぐに接収したらしい。

「ギルドの預託金は良いです。金額は記録に残っていますから、引き揚げた分の金額を君に渡せば良い。一千万セントだったかな？確か？」

「……」

さすがは、有名な冒険者でもあった師匠。

ギルドに預けている預託金も大金であった。

「あの、宜しいのですか？」

「というか、君に返さないと駄目なんです」

このブライヒレーダー辺境伯領は自分の領地ではあるが、領地の運営には各種の法が適用されている。

遺産の受け渡しなどは、毎年大小多くの争いが発生して、その度にブライヒレーダー辺境伯側の事務方が苦労して裁定する羽目になっているそうだ。

「彼らが裁定に従うのは、私達が厳格に法に則って動いているからです。なので、それを私が破るわけにはいかない。君は、アルフレッド本人から正式に遺産を譲渡された人間です。よって、私が接収していた他の遺産も君に渡す義務があるのです」

「確かに、ブライヒレーダー辺境伯様の言う通りですね」

「屋敷は、予備校にも近い。今の寮を引き払って、そこに住めば良いじゃないですか」

他にも冒険者ギルドの事務本部にも近いので、師匠はそれを狙って近い場所に家を建てたのであろう。

「年数は経ちましたが、状態保存の魔法がかかっているから当時のままで綺麗だし、中の家具などもそのままにしています」

「えっ、どうしてですか？」

「アルフレッドの奴、魔法具で家の警備をかなり厳しくしていたんだよ」

とっくに運び出されていると思われていた家の家具などが運び出されていなかった理由を、ブランタークさんが教えてくれる。

家の家具の中には、魔法具に改造されていて他の人間が使えなくなっていたり、無理に外に運び出そうとすると、家の警備をしている小型ゴーレムが飛び込んで来るそうなのだ。

この小型ゴーレムも魔法具の一種なのだが、これは師匠が冒険者時代に古代の遺跡から手に入れた物らしい。

今よりも遙かに進んだ魔法理論によって作られているそうなので、到底解除は不可能という結論に至ったようだ。

「つまり、都合良く俺が現れたから押し付けたと？」

「そうとも言うな。それと、坊主なら魔法の袋のように専属使用人の変更も可能かと思ってな」

「家が貰えるなら努力してみます」

「おお。期待して待っているからな。引っ越したら俺も祝いに招待してくれよ」

「出来たら招待しますよ」

パーティーに招待された件自体には裏は無かったが、まさかそこでこのような交渉をブライヒレーダー辺境伯とするとは思わなかった。

多くの軍需物資と魔の森の魔物から取った素材は失ったが、その代わりに得た物も多かったので、俺としては大満足と言ったところであろうか。

「ヴェンデリン君がここに本拠を構えてくれるなると、こちらも色々と助かりますね。君が冒険者を引退した頃には、ブランタークもお抱え魔法使いは引退でしょうから、そのままうちに仕えて貰えると大歓迎です」

「そうですな。さすがに六十歳を超えると現役は辛い。跡を坊主が継いでくれると安心だな」

「はあ……」

いくら師匠以外の人間が入れない家でも、こんな小僧に景気良くくれた理由はそんな所にあったようだ。

冒険者を引退後なので、いきなり俺を引き抜くという事はしないようだ。

いくら魔力量に優れていても、碌な社会経験も無い魔法使いを大貴族家の筆頭お抱え魔法使いにするのは色々と厳しいのであろう。

師匠の遠征時の役割の多さを見るに、ただ魔法をぶっ放すだけでなく、一種の知恵袋的な役割も担う必要があり、それを得るための冒険者としての経験なのであろう。

ある程度年齢を重ねて得られる、人生経験や人間関係などもあるのだから。

「今は、確約は出来ませんが……」

「今日は、君と繋がりが出来ただけで私としては上等なのです。君はまだ冒険者予備校に通う生徒だから、焦らないで待つ事にします」

いつの間にか俺はブライヒレーダー辺境伯と知己になったばかりではなく、将来のお抱え魔法使い候補として唾を付けられたようだ。
いつまでも冒険者というわけにもいかないので、第二の人生としてはありがたい話なのだが。

「預託金は、後でうちの人間に届けさせます。では、園遊会を楽しんで行ってください」

結局、一時間ほど席を外していた俺であったが、すぐに園遊会の会場に戻ると、急ぎ残っていた料理を集めて食べ始める。

「おいおい、戻って来たと思ったら良く食べるな」

「お腹減ったし」

「ブライヒレーダー辺境伯様に呼ばれていたんだって？　実家絡みの事か？」

「そんなところだな」

まさか、あの取り引きの内容を他の人に話すわけにはいかないので、俺は主に肉料理を頬張りながらエルの質問に適当に答えるのであった。

幕間五　俺はロリコンじゃない！　……と思う。

「ねえ、どこかに連れて行って」

「いきなり、唐突だな……」

冒険者予備校に無事入学し、授業に狩りのアルバイトにと時間を過ごす中、俺は同性の親友エルヴィン・フォン・アルニムと知り合ってまずペアを組んだ。

彼は、俺と同じく騎士爵家の五男という厳しい立場にあった。

なので、仲良くなるのには時間がかからなかったのだ。

まあ、冒険者予備校に居る貴族の子弟など、みんな似たような境遇と言われればそれまでなのだが。

続いて、狩りの帰りに二人の同級生を狼の群れから救っている。

助けた相手は共に同級生で、一人はクール系美少女であるイーナ・ズザネ・ヒレンブラント。

槍の名手で、たまに見せる鋭い視線が好きな人には堪らないはずであった。

怖いと思う人も居るはずだが、俺はそうは感じていない。

ここは西洋ファンタジー風な世界なので、日本人よりも大人びては見えるが、所詮は十二歳か十三歳の少女。

中身の精神年齢が三十歳を超えている俺からすれば、早くデレる

所を見てみたいという感じであろうか？
精一杯背伸びしているのがわかるので、微笑ましいくらいだ。

もう一人は、まさにロリ系美少女であるルイーゼ・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェーク。
貴族らしい、実に長くて覚え難い名前だ。

彼女は、前世だと俺が手を出すとすぐに手が後ろに回ってしまう、リアル可愛い系少女であった。

しかし、見た目だけで騙されてはいけない。
彼女は、軍でも採用されている魔闘流で特待生試験に受かった逸材なのだから。

下手に胸でも触ろうとすれば、間違いなく鼻でもへし折られてしまうであろう。
触ってもその膨らみが無いというのが、これから数年間、彼女の大切な目標とも言えたのだが。

「連れて行ってって……。ルイーゼは地元出身で、俺よりもブライヒブルクの地理に詳しいはず……」

「それでも、女性をエスコートするのは男性の役割だと思う」

「そういう学説もあるようだな」

「ヴェルは男性なんだから、ここは格好良くボクをエスコートしてよ」

「残念ながら、経験不足だな」

「はぅ……」

紆余曲折があったものの、無事に四人によるパーティーが始動して最初の休日。

今日は、エルは新しい剣を見に行くと言って出かけ、イーナも新しい槍を見に行くと言って出かけている。

エルもイーナも、随分と武器が大好きなようだ。

己の命を預ける物なのだから、冒険者志望としては当然とも言えたのだが。

「そういえば、ルイーゼは新しい手甲でも見に行くとか無いのか？」

「うーーーん、今の所はね」

ルイーゼの話によると、魔闘流において一番重要なのは己の肉体なのだそうだ。

幸いにして、お古だが性能の良い手甲を父親から貰っていたし、戦闘時に着る道着も同様で、新調する必要は暫くない。

将来は必要だが、そのために今は貯金一筋なのだそうだ。

「そうか、そうか。貯金は重要だよな」

何か必要な物を買ったり、するために目標金額まで貯金をする。

前世では俺も、中学生くらいまでは真面目に貯金などをした物だ。

「そうだね。だから、案内賃として何か奢って」

「お前なぁ……」

前世から含めてロリに興味は無いと思っていたのだが、ルイーゼがニコニコしながらお願いをしてくると、俺は何も言えなくなってしまう。

長年、母親や義姉以外、ほとんど女性と話をして来なかったツケなのであろうか？

いや、前世では彼女も居た事があったし、そこまで人見知りや女性恐怖症というわけでもないはず。

だが、ここ六年ほどあまり人と接して来なかったせいで、もしや発症したのかもしれないと。

俺の心の中は、色々な考えで渦巻いてしまう。

「魔法具の専門店に案内するから。さあ、休日なんだから出かけよう」

「わかった、わかった」

俺はルイーゼに手を引かれながら、ブライヒブルクの町で今まで行った事が無いエリアへと足を向けるのであった。

「何も買わなかったね」

「品揃えが悪過ぎるぜ……」

約一時間後、ルイーゼの案内で今まで知らなかった魔道具専門店をあとにした俺達は、表通りの喫茶店でお茶を飲みながら話をしていた。

「ボクには、良くわからないけど」

「魔道具は、そう悪くは無かった」

魔法関連の品物を置く店というのは、実に解り難いものだ。
魔力が低い人でも使える汎用品は、置いてあるのか？
それとも、魔法使いしか使えない専用品しか置いていないのか？
最後に、魔法使いが装備可能な武器防具が置いてあるのかと。

実は魔法使いの数が少ないせいで、三番目の装備品が置いてある店は少ない。
または、置いてあっても品揃えがという事が多いのだ。

それでも、さすがはブライヒブルクの専門店ではある。
そこそこの品質の物が、一通りは置いてあった。

ただ、師匠からの遺産に比べれば質は落ちる。
当然買う必要はなく、俺は全ての品を確認してからこの喫茶店へと移動していた。

「魔道具か。値段が物凄いよね」

特に汎用品ともなれば、火種を起すライターのような物でも一個一千セント近くはする。

理由は、作れる人が極端に少ないからだ。

「専用品なら、そう高くもないさ。ところで、ルイーゼは買わないのか？」

「えっ、気が付いているの？」

「当然、魔法使いは魔法使いを知るだ」

実は、彼女を入学式で見かけた時から俺は気が付いていたのだ。イーナも、このルイーゼも、一般人よりも多い魔力を保持している事に。

しかもルイーゼの方は、初級から中級に属するイーナよりも多いはず。

更に言えば、ルイーゼはこれを意図的に隠蔽し、あえて魔力を伸ばす鍛錬を行っていないように見えた。

「鍛錬すれば、中級は超えると思うけど」

「その辺は、事情があってね……」

彼女の実家であるオーフェルヴェーク家は、代々魔闘流を教える家柄にある。

だが、そう都合良く家に魔力を多く持った人間が生まれるはずもなく、そこは代々の秘伝として、常人並の魔力でも常人を圧倒可能な戦闘能力を出す修練方法に、技の型や魔力の効率の良い使い方などがあるのは当然とも言えた。

「父も兄達も常人並の魔力しか持っていなかった。ボクは、ご覧の通りさ」

そんなルイーゼが物心付くと、早速父や兄から魔闘流を学び始める。

魔力が多目なのは特に意識していなかったが、多いので次第にルイーゼは強くなっていく。

次第に父や兄達すら、実戦形式の組み手などで圧倒していくようになったそうだ。

「子供心に、『手加減しないと』と思ってね。でも、技術がつたないボクは手加減したらバレるよね」

子供に手加減をされる。

更に、その子供は女の子であった。

おかげで、道場では次第に孤立していく。

家では優しい父や兄達なのに、道場では扱われ方が余所余所しくなっていったのだ。

それでも、道場に来るなとは言われなかった。

強引に排除すれば、弟子達から『師範である自分よりも強いから、あんな小さな女の子を排除した』と思われかねない。

しかし、師範よりも強い女の子というのも扱いが難しい。

鍛錬が苦痛になるのに、そう時間はかからなかった。

「でも、近所に同じ悩みを持つイーナもいたから」

結果、鍛錬の時間以外は彼女と一緒に居る事が多かったそうだ。

魔力も、別途で鍛錬すれば上がる事も知っている。

だが、それで上がった魔力を魔闘流で使えば、余計に父や兄達を

強さで引き離してしまう。

仕方が無いので、魔力の鍛錬は後回しにする事にした。

それが、今の情況らしい。

「でも、後悔したね。あの狼の群れに遅れを取った時に」

ちゃんと魔力も上げていれば、あんな狼に遅れを取る事は無かったのかもしれない。

そう考えて、今は積極的に鍛錬に励む決意をしたそうだ。

「頑張って、魔闘流を極めるよ、ボクは」

「おおっ、頑張ってくれ」

だが、後にその鍛錬の過程で思わぬ事実が発覚する。

魔力が増えた影響で、魔闘流での戦闘力は上がったものの、他に一切の魔法が使えず、ルイーゼはガックリと肩を落す羽目になったからだ。

実は、たまにこういう人は存在する。

魔力を身体能力の向上や攻撃・防御力の強化にしか使えない、所謂、魔法剣士や魔法武術家と呼ばれる人達であった。

「ヴェルぅーーー！」

「俺に言われてもなぁ。もっと魔力を上げると可能性があるとしか……」

魔力が少ない頃に魔闘流でしか魔力を使っていなかったため、体

が勝手に他の魔法を使えないと思い込む。
一説には、深層心理にそう刻み込まれてしまったので、使えない事もあるのだと。

これが、師匠の残した本に書かれた記述であったが、『元から適性が無くて使えない人も居るから、区別が難しいよね』とも書かれていて、俺はかなりガックリと来ていた。

師匠は優秀な魔法使いであったが、残された自筆の本や手紙などを見ると、かなり軽い性格をしているのがわかる記述が多いのだ。
切実に答えを求めて本をめくっているのに、正直その答えは無いと思う。

「魔闘流で強くなれば良いじゃない。というか、その才能でブライヒレーダー辺境伯様から誘いが来ないのがおかしい」

ブライヒレーダー辺境伯家に属する人間で、ルイーゼの魔力は既にブランタークさんの次くらいにはあるはずであった。
魔力を鍛え始めたばかりなのに、既に他の雇われ魔法使いよりも魔力の量が多かったのだ。

「それは、ボクが女だからさ」

女なので、陪臣にして一家を立てさせるわけにいかないからだ。
この国も、隣国のアーカート神聖帝国も。
女性の地位が低い傾向にあり、女性が一家の主になったり、爵位を持つ事などあり得なかったのだ。

もしルイーゼが男性なら、ブライヒレーダー辺境伯は勧誘をかけて来たであろう。

まだ形式上は、まだオーフェルヴェーク家に在籍している関係で、成人後にという条件は付いていたが。

ところが、ルイーゼが女性なのでそれは不可能らしい。

いくら才能はあっても、女如きが、代々ブライヒレーダー家で魔闘流を指南しているオーフェルヴェーク家を差し置いてという話になってしまうからだ。

強引にブライヒレーダー辺境伯が押し込むという事も可能ではあったが、それをすると今度は家臣団との関係がギクシャクしてしまう可能性がある。

戦乱の時ではないので、どうしても今までの秩序を乱す新参者に過剰に反応してしまうからだ。

能力があるからすぐに雇うという事すらそう簡単にいかないのが、ブライヒレーダー辺境伯家という巨大な組織であった。

こういう話は、実は平成日本の官庁や大企業でも良く聞く話なので、俺はそうおかしいとは思わないのだが。

「面倒な話だな（モロに封建社会なのな……）」

「宮仕えなんて面倒だから、別に構わないけどね」

ルイーゼは、これからどんどん強くなる。

そうなれば、兄にとっては宝石よりも貴重なオーフェルヴェーク家当主の地位は邪魔にしかならないのであろう。

実は俺も、彼女と同じだ。

クルト兄さんにとっては宝石よりも貴重なバウマイスター家の家督と領地でも、俺からすれば、実入りが少ない管理が面倒な物という認識でしかない。

人は必ずしも、同じ物を絶対に欲しいとは思わないのだと。

「何か、魔法が使えるようになると良いな」

「魔力を上げて、天に祈りなさい」

「いい加減な先生だなぁ」

俺はルイーゼが魔力を上げるための修練に良く付き合うようになり、次第に彼女と仲良くなっていった。

ただ、そのせいでおかしな噂も流れてしまうのだが。

「なあ、ヴェル」

「何だ？　エル」

「お前、ルイーゼと付き合っているって本当か？」

「んなわけあるか！」

予備校中に俺とルイーゼが付き合っているという噂が流れ、同時

に俺が小さい子が好きとか、小さい胸が好きなどという噂まで流れてしまうのであった。

第二十五話　師匠はセレブだった。

「ここが、師匠の家か」

園遊会の翌日、俺はブライヒレーダー辺境伯家で接収していた師匠の家を正式に譲渡され、放課後に様子を見に来ていた。

家とは言ったが、実際には貴族が別荘にでもしてそうなほどの大きさで、庭も広いし、周囲は防犯目的で高い石造りの塀に囲まれていた。

正面の門もかなり立派で、なるほど優秀な冒険者というのはかなり稼げるようだ。

辺境伯家のお抱え魔法使いに相応しいレベルの屋敷でもあった。

「門には、小さめの魔晶石か。これは、師匠を認識するものだな」

そのまま門を開けようとしても、魔道具でもある正面の門は開かないそうだ。

威力の高い魔法をぶつければ壊れるであろうが、それをすると今度は庭に配置されている小型のゴーレムが集まってくるらしい。

それに、俺はブライヒレーダー辺境伯からこうも言われていた。

『この門、魔法具で五十万セントもするそうです。壊したら、勿体無いんですよ』

中に入るために、せっかくの高価な魔法具を壊しても意味が無い。

この十年以上、ブライヒレーダー辺境伯家側がこの屋敷を放置していた最大の理由でもあった。

最初の一年間ほどは、家族が居ないはずの師匠の自称親族とやらが多数現れ、その遺産を寄越すようにと訴え出たらしい。
明らかに嘘なのだが、公平な統治を掲げるブライヒレーダー辺境伯家としては、ちゃんと調査をした上で結果を公表するしかなく、少し時間がかかってしまった。

なお、その自称親族とやらは、ブライヒレーダー辺境伯家側の調査でその嘘がバレ、数年間ほど詐欺未遂の容疑で開拓地送りになったそうだ。

人間はやはり、自分で働いて稼ぐべきなのであろう。
悪銭身に付かずなのだから。

「ええと……。確か、師匠からのメモで……」

師匠は、もし運があって自分しか使えないようにロックのかかった魔法具を俺が見付けた場合、その専任使用者を変更する方法をメモで残してくれていた。

とは言っても、さほど方法自体は難しくない。
師匠から暗号というかワードを聞いているので、魔晶石に触れながらそれを念じ、ロックが解けたら俺が新しい暗号を準備してそれを新しく念じて設定し直すらしい。

メモに書かれた通りに作業を行うと、正面の門はすぐに開いていた。

「さてと、次は……」

開いた門から敷地に入ると、今度は屋敷を守備する四体の小型ゴーレムが姿を見せる。
このゴーレム、小型とは言っても大きさは高さが二メートルほどもあり、四体で俺を囲みながら警告の言葉を発していた。

「侵入者ニ告グ、アルフレッド様以外ノ人間ハ直チニ立チ去レ。サモナクバ、強制的ニ排除スル」

「（言葉を話せるゴーレムか。魔導技術で人工人格が形成されているんだな）」

ちなみにこの技術、古代魔法文明時代では当たり前のように普及していたらしいが、今ではロスト技術となっている。
当然研究はしているのだが、その結果は未だ出ておらず。
現在稼動しているのは、冒険者などが遺跡から持って来た物だけであった。

現在のゴーレムは、ここまで精密な動きなど出来ない。
施術者や操作する人間が常に近くに居ないといけないし、まず『畑を耕せ』などと命令しても満足に命令などこなせない。
ただ、そこら辺の土に全力で鍬を入れて、その柄を折ってしまうのが精々であろう。

それでも、戦争があった頃は良かったのだ。
腕や武器を振り回しながら敵に突っ込むだけで、敵を倒したり、陣地や防衛用の柵を破壊したり出来たのだから。
要するに、戦闘でしか使えないのが今のゴーレム魔法とも言える。

「俺は、アルフレッド師匠からこの屋敷の権利を譲られた者だ」

俺は小型ゴーレム達にそう宣言すると、すぐにゴーレムを停止させる暗号を声に魔力を込めながら発する。
すると、四体のゴーレムはその動きを止めていた。

「停止に成功か。今度は……」

門と同じく、俺が新しい暗号を魔力を込めながらゴーレムに埋め込まれた魔晶石に触れて送ると、数秒後無事に再起動に成功していた。

「アルフレッド様ニ替ワリ、ヴェンデリン様ヲ新シイゴ主人様トシテ認識シマシタ」

「では、引き続き任務に励むように」

「了解」

再び庭へと散ったゴーレムを見送ってから、今度は玄関のドアも同じ方法で開ける。
開いたドアから屋敷へと入ると、内部は十年以上も放置されていたとは思えないほど新しく、塵一つ落ちていなかった。

「なるほど、状態保存の魔法が良く利いているんだな」

掃除の手間が省けて良かったと思いながら、早速に屋敷中を捜索し始める。
部屋は一階にリビングと書斎に、キッチン、風呂、トイレなどが余裕を持って配置されている。
あと、地下室には鍵のかかった倉庫があって、そこには高価なビンテージ物を含むワインやブランデーなどが置かれたワインセラー

も完備されていた。

更に、上下水道と調理器具などは全て魔法具が組み込まれ、風呂の釜やトイレの水洗機能なども全て同じようだ。

思えばこの世界に移転した直後、俺は子供の体で実家の僻地ぶりと、文明の遅れ具合にえらく苦労していた。

トイレはボットンで、水も井戸から汲んで来ないと駄目だし、風呂も水汲みと釜炊きが面倒なので週に二回が精々。

特に風呂は、俺がお湯を沸かす魔法を習得するまでえらく体が痒かった記憶があった。

それがこの屋敷では、付属の魔晶石の魔力をたまに補充してやれば自由に風呂炊きや調理を行えるのだから。

「さすがは師匠。良い屋敷に住んでいるな」

これだけの優良物件なのだ。

しかも正式に俺の名義になっている以上、住まなければ損といいう物であろう。

早速に、退寮の手続きと引越しの届けを予備校に出さなければと考えていた。

それに予備校の寮は、ギルドが所持する学生支援用の物で、俺のように自前で住む所を確保できた人は他の人に譲るのが筋であったからだ。

「じゃあ、早速に引越しを……」

大した荷物も無いので、俺は一人で引越しを済ませようとしたの

だが、やはりこれを隠し通すのは不可能であったらしい。

「お前、こんな屋敷、どうやって手に入れたんだ？」

「偶然かな？」

「偶然で、私とルイーゼの実家よりも豪華な屋敷を？」

うちの実家の貧乏さを、ブライヒレーダー辺境伯家の陪臣の子である二人が知らないわけもない。

そして噂通りに、うちの実家よりも、まだイーナとルイーゼの実家の方が家が立派という避け得ない事実も存在していたのだから。

「それに、魔導コンロ、魔導レンジ、トイレも水洗で、上下水道も自動とか。うちでは、まず揃えるのは無理だね」

「うちも無理だぜ。地方の田舎領主だし」

家の規模や外見は、貴族でも陪臣でも周囲に舐められないために豪華にする人が多い。

そしてその結果、その身分に合わない屋敷の維持に汲々とする事になり、ルイーゼやエルの実家のように、魔法具を用いた家具を購入する余裕が無くなってしまうのが、下級貴族や中堅クラス以上の陪臣の常識でもあった。

「うちもね。魔導コンロなんて贅沢品だもの。薪を燃やす竈が精々よ。これでも大型で高火力だから結構高いのよ」

「イーナの実家は、槍術を教えるお弟子さんに食事を出すからでしょう？」

「ルイーゼの所もでしょう」

「まあね」

そのせいで、この二人は意外に料理なども上手であった。

休日にアルバイトで狩りに出かけた時に、現地で狩った獲物の肉などを材料に、野外料理などをテキパキと作ってくれるのだ。

「俺も、自分で料理くらいは」

「エルは、料理禁止！」

「確かに、あのシチューはいただけないわ」

「イーナ、そうやって事実をボヤかすのは良くない。アレは、家畜の餌以下だと思う」

こいつは、小さい頃から狩りに出ると自分で飯を作っていたと言った癖に、試しに作らせると物凄く不味い飯を作るのだ。

なのに、なぜか味覚音痴というわけでもない。

狩りの後に行った飯屋が不味いと、ちゃんとそれに気が付いているのだから。

要するに、食べられる料理の味の許容レベルがかなり低いのであろう。

「よし、ここを俺達パーティーの本部にしよう」

「物は言い様だな。入り浸る公的な理由か？」

「ヴェル、正解だ」

「いや、正解とか言われても……」

早速エル達に見付かり、このようなやり取りの後にすぐに屋敷には彼らが入り浸るようになっていた。

まあ、俺が一人だけで住むのも味気ないので、『ちゃんと、片付けとかはしろよ』と釘を刺して、あとは自由にさせていたが。

「悪いけど、貴族の五男なんてずうずうしいくらいじゃないと生きていけないし。風呂を沸かしてくる」

「右に同じね。陪臣の三女なんてね。夕食の支度は任せなさい。これでも、結構できるのよ」

「ヴェル君、お茶淹れてあげるね」

こうして、俺は新しい自分の家を無事に手に入れたのであった。

「さて、学期末試験も終わった事だし、あとは夏休みに何をするかだな」

俺が冒険者予備校に入ってから三ヶ月ほど、その間には色々な出来事があった。

六歳でこの世界に覚醒してから、初の友人が出来た。

彼の名前はエルヴィン・フォン・アルニムと言い、俺と同じで実家を継げずに冒険者として身を立てる予定だそうだ。

俺と同じでまだ十二歳なのに、剣の腕では予備校髄一と評判で、他にも狩りをしていたせいで弓の腕前もかなり優秀であった。

次に、狩りをしていたら狼の群れに襲われていた二人の女の子を助けていた。

二人は予備校の同級生で、一人はスレンダー系赤髪美少女である槍使いイーナ・ズザネ・ヒレンブラント。

彼女の実家は、ブライヒレーダー辺境伯家で兵士に槍術を教える陪臣であり、彼女も相当な腕前をしているようだ。

そしてもう一人は、実年齢よりも幼く見える水色の髪の魔闘流の使い手で、その名をルイーゼ・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェークと言い、彼女の実家もブライヒレーダー辺境伯家では兵士に魔闘流を教える陪臣の家柄であった。

道理で、年齢の割に腕が立つわけだ。

最初の狼の群れに囲まれていたのは、運の悪さと経験不足によるものであったのであろう。

その後は、紆余曲折などはなく二人の少女にパーティーメンバーに押しかけられ、それでも腕前は良いので四人で狩りをするようになった。

どこか釈然としないが、これも運命なのかもしれない。

そして極め付けが、なぜか俺にブライヒレーダー辺境伯家が主催する園遊会の招待状が届き、そこでブライヒレーダー辺境伯や俺に魔法を教えてくれたアルフレッド師匠の師匠に当たる、ブランター

クさんと顔を合わせる事になった事だ。

しかも彼は、一度顔を会わせた人の魔力の位置を遠方からでも探知するという能力を使い、俺が語り死人となった師匠から魔法の袋を引き継ぎ、しかもその中に、十二年前のブライヒレーダー辺境伯軍が師匠に保管を頼んだ物資や食料などが残存している事実を掴んでいた。

そこまで知られていれば、俺としては返還に応じるしかない。

下手に揉めると、実家も巻き込んでしまうからだ。

俺からすれば、早く独立して縁を切りたい実家なのだが、今は年齢的にそれも適わず、ならば波風を立てない方が懸命であろう。

そして、その判断は正しかったようだ。

俺は、それら膨大な食料や物資、それに魔の森で遠征軍が得ていた高価な素材などを返し、その評価額の二割を報酬として貰い、更には俺が正式に師匠の財産を継ぐ法定相続人だと認定され、彼がブライヒブルクに残していた屋敷と財産を相続する事となる。

おかげで、その総資産は莫大な物となっていた。

一生働かなくても生きていけそうだが、それでは人生もつまらないであろう。

何しろこの世界には、ゲームも漫画もネットも存在しないので、物凄く退屈してしまうであろうからだ。

話は長くなったが、新しい家を得た俺はそこでお茶を飲みながらエル達と話をしていた。

冒険者予備校は一応学校なので、普通に試験はある。

前世の学校ほど教育レベルは高くないが、この世界の歴史や地理、魔法や魔物に関する知識などが筆記試験で出題されるので、それに

備えて勉強は必要であった。

滅多な事では赤点にはならないが、覚えないと死ぬ事もあるのでみんな試験の筆記成績は良い。

あとは、かなりのウェイトを占める実技試験であろうか。

これは、ある程度出来ないとお話にならないので、やはりみんな一生懸命に練習してから試験に臨んでいた。

特待生の俺達ならば、普通に試験を受ければ受かる程度の実技試験ではあったのだが。

試験に受かっても、実戦で死ねば意味が無いので油断はしてはいけないという、元冒険者である先生の忠告を最後に、俺達はもう少しで夏休みに入る。

期間は、七月の七日から九月の七日まで。

ほぼ二ヶ月と長かったが、これには理由がある。

実家に帰省する生徒が多いのだが、何しろこのリンガイア大陸は広い。

比較的近場から来ている生徒が大半とはいえ、往復で一ヶ月ほどかかってしまう生徒もいるのだ。

そのための、長い夏休みとも言えた。

帰省がある意味訓練にもなるので、夏休みが長くてもあまり問題にはならないそうだが。

「私とルイーゼは、帰省なんてしないし」

「そうだね。毎日、その実家から通学しているわけだし」

イーナとルイーゼは、実家がこのブライヒブルクにあるので帰省の必要は無い。

なので、出来れば狩りに出てお金を稼ぎたいらしい。

「新しい装備品の購入資金を貯めたいのよ」

「ボクも、イーナと同じ意見かな」

「俺もだな」

「あれ？　エルは、実家に帰らないのか？」

女性陣二人はともかく、西の遠方から来ているエルなので、俺は彼が帰省をすると思っていたのだ。

「帰っても、邪魔者扱いで意味が無いからな」

俺も零細貴族の八男でいらない子扱いだが、エルもそういえば同じような境遇にあった。

更には、やはり俺と同じく味噌っかすの五男なのに剣の才能が兄弟で一番優れているので、上の兄達と接するのが苦手なのだそうだ。

「家臣の中には、剣に優れた俺を次期当主になんて言う奴もいるから」

どこかで聞いたような話だが、騎士爵家レベルの当主ともなると、戦時には少数の軍勢で前線に立たないといけない事も多いらしい。

なので、一緒に前線に出る家臣や兵達は、生存本能で武芸に優れ

た次期当主を望むようになる事が多くなる。

例え、戦争が二百年以上も無いこの時代でもだ。
一種の、軍人の生存本能から来ているのであろう。

稀にではあるが山賊退治などもあるし、隣接する領主と仲が悪くて小競り合いになる事も多い。
なので、腕っ節の強い下級貴族の評価は高かった。

大物貴族ならば、数居る家臣で補えば良いのでそう必要ともされなかったのだが。

「俺も、言われた事があるよ」

「ヴェルの場合は、もっと話は深刻ね」

剣に優れた弟への対処なら、まだそう手間でもない。
家臣の家に婿に出してしまうという手もあるし、その技能を生かして王都の警備隊に推薦してしまうという手もあったからだ。

ところが、魔法使いだとそうもいかない。
その魔力量にもよるが、高威力の魔法が使えれば使えるほど家に引き留めようとするそうなのだ。

俺の場合は、結局家族は俺がどの程度の魔法を使えるのか一切聞いて来なかった。
聞かれても教えるかは不明であったが、下手に俺が魔法で活躍すると後継争いに火を付けてしまうので、知りたくも無かったのであろう。

どうせ、いなくなる人間なのだからと。

「俺は、もう二度と実家に戻るつもりはないけど」

ブライヒブルクに家まで貰えたし、予備校を卒業後はここを拠点に活動をする予定であった。

あの豊かな未開地には、瞬間移動ですぐに行けるので全く問題はなかったのだ。

「じゃあ、ヴェルも狩りのアルバイトを？」

「夏休みは、もう少し魔法の訓練の頻度を上げようかと」

まだ魔力量の上昇限界は来ていなかったし、あの園遊会で出会った師匠の師匠であるブランタークさんが、空いている時間に魔法を教えてくれるそうなので、そちらを優先したいという希望があったのだ。

「ブライヒレーダー辺境伯家の筆頭お抱え魔法使いから直接指導って……」

「ヴェル君ってば、魔法のエリートさんなのかな？」

魔力だけなら既に、俺はブランタークさんの数倍にも達している。

だが彼は、素晴らしい才能を持つ熟練の魔法使いであった。

例の魔力による個別識別と探知に、他にも便利なオリジナルの魔法も多数あり、他にも魔力の節約術にも長けているそうだ。

この魔力の節約というスキルは、習得が困難で時間がかかる。

というか、いくら鍛錬を重ねても完全な習得という物が来ないの

だ。

例えば、普通のファイヤーボールを放つ時に魔力を１００消費したとする。

同じ威力だとして、未熟で不器用な若い魔法使いだと魔力を１５０消費する事も多いし、逆に老齢で訓練を重ねている魔法使いが僅か１０ほどで済ませてしまう事もある。

体を使う剣士は、さすがに老齢から来る衰えは防げない。

魔法が使えないまでも、少し魔力が普通の人より多目の人の中には、その魔力を本能で身体機能の強化に使って全盛期を長くする人もいるのだが。

ちなみに、俺達にもその素養があるらしい。

実際に習得できるかどうかは、これからの努力次第のようだが。

若い頃から膨大な魔力量を誇る魔法使いだったのに、なぜかそれを習得できずに普通に加齢によって身体機能が衰えていく人も多いし、逆に魔力量が少ないのにそれを習得して見た目は老人なのに動きが機敏なままの人もいる。

まさに、才能と努力次第というところだ。

あと魔法使いには、老齢になって魔力量が増えなくなっても、魔力の節約によってかえって若い頃よりも強くなるケースがあったりするそうだ。

訓練を怠って普通に衰える魔法使いも多かったが、これは個人差であろう。

才能を認識して、それを伸ばす努力を行うかという。

あと、なぜ老練な魔法使いの方がお抱えとして重宝されるのかという理由も、こういう部分から来ているのであろう。

「狩りと、ブランタークさんからの魔法指導で二ヶ月だったんだけどねぇ……」

実はその計画を立てた後に、俺は定期的に手紙をやり取りしているエーリッヒ兄さんから予想外の誘いを受けていた。

「エーリッヒ兄さんが、結婚式を挙げるんだ。場所は王都だけど、良ければ俺も来ないかって」

リンガイア大陸のほぼ中心部から少し南にあるヘルムート王国の首都スタットブルクは、人口百万人を誇る大都市であり。
同じ王国領の各地からだけではなく、北方のアーカート神聖帝国からも多くの人達が訪れ、経済と流通と文化の中心地である。

確かに王都は遠いが、俺としてはこのチャンスを逃すつもりはなかった。

「（一度王都に行けば、今度からは瞬間移動で楽に遊びに行けるし）そんなわけで、俺は王都に行くんだ」

「ブランタークさんの訓練はどうするんだ？」

「ああ、それなら少し待っても良いってさ」

確かに王都は遠いが、さすがはこの国の首都。
実は移動に、そう長々時間がかからない方法が存在していた。

「魔導飛行船なら、週に一度ブライヒブルクから出ているし」

このブライヒブルクは、ヘルムート王国南方辺境地域を代表する、半ば副都扱いされている都市であった。

なので、ここにも魔導飛行船の港が存在していたのだ。

「エーリッヒ兄さんは、俺が遠距離馬車で王都に来ると思っているんだろうね。だが俺は、魔導飛行船を使う」

両者の違いを比較すると、遠距離馬車は王都まで往復で一ヶ月ほどかかるが、代金は銀板一枚と平民でも何とかなる値段であった。

もう一方の魔導飛行船は、往復でも五日間ほど。

片道なら、二日半で王都に到着する事が可能だ。

だが、その料金はと言うと、最低でも金貨一枚なので日本円で約百万円。

大分昔に、飛行機で海外旅行に出かけるような認識と言えばわかり易いかもしれない。

「よし、王都には俺も行くぞ」

「私も」

「ボクも」

「えっ、いいの？」

魔導飛行船の運賃金貨一枚は、俺ならば余裕で出せる。

だが、エル達にそれが出せるとは到底思わなかった。

「戻ったら、強化合宿で獲物を狩る。熊でも何でもな」

「そういう事だから」

「貸して」

「あいよ」

別に俺が出しても良いのだが、それでこの関係がおかしくなってしまうのもいただけない。

それに、もし返還されなくても、俺がそれを見抜けなかったからだ。

俺は、返されない事も考慮に入れ、彼らに魔導飛行船代を貸す事にする。

前世でも父から、『友人に金を貸す時には、最初から返って来ない物だと思って貸せ』と言われていたのだし。

「エーリッヒ兄さんも、友達がいたら一緒においでと手紙に書いていたし」

彼の想像の中では、同じ冒険者志望の仲間と遠距離馬車に揺られながらの往復一ヶ月間という光景が展開されているのであろう。

だが実際には、俺達は運賃が高価な魔導飛行船での旅行を考えていた。

「ねえ。ご祝儀とかは良いのかしら？」

「いらないって」

こう言っては悪いが、エーリッヒ兄さんはまだ下級官吏でしかないし、婿に入る家も家格はうちと同じくらいでさほど裕福というわけでもない。

だからこその、もし来れたらという内容の招待状に、旅費はこちらで負担するという話になっていたのだ。

こういう場合、祝儀は出さないのが普通であった。

「宿は、エーリッヒ兄さんが準備してくれるそうだ」

婚姻相手の屋敷の部屋に、王都滞在中に泊れるようにしてくれるらしい。

「ならば、あとは行くだけだな。あとは……」

「あとは、何だ？　エル」

「出発まで獲物を狩るんだ。借りた金は、早く返すに限る！　幸いにして、利息はないし」

「俺は、金貸しじゃないからな」

「利息なら、ボクが体で払うという案も」

「そういう事を言うから、変な噂になるんだけどな」

それから三日間ほど、俺達は狩りをしながら王都への出発準備を進め、いよいよリンガイア大陸中心部にある王都スタットブルクに向かう魔導飛行船へと乗り込むのであった。

第二十六話　アンデッド古代竜との遭遇。

「すげぇ！　眺めが絶景だな！」

「さすがは、運賃が金貨一枚だけはあるわ。食事とかも良い物が出るし」

「デザートも美味しい」

王都で下級官吏を勤めるエーリッヒ兄さんの結婚式に出るため、俺とエル達はブライヒブルクから週に一度出ている魔導飛行船へと乗り込んでいた。

この魔導飛行船は、過去に滅んだ古代魔法文明の遺産なのだそうだ。

奇跡的にほぼ無傷で遺跡から発掘され、それを現代の魔法技術で運営をしている。

現代の魔法技術は古代のそれよりは劣っているが、新規に魔導飛行船を建造するのは無理でも、簡単な修理と維持くらいは可能である。

古代の遺跡からは八隻ほどが発掘されたようで、ヘルムート王国は北方のアーカート神聖帝国の首都バルデッシュ航路、西方の貴族を取り纏めるホールミア辺境伯領ルート、東方の貴族を取り纏めるブロワ辺境伯領ルート、最後に南方のブライヒレーダー辺境伯領ルートと、合計で四ルートを運営していた。

王国が直に運営しているのは、魔導飛行船が有用な軍事兵器でも

あり、有事の際には軍に接収されるからである。

あと、北方のアーカート神聖帝国も同様に遺跡からの発掘品を何隻か運用している。

なので、魔導飛行船があっても、ヘルムート王国が一方的に軍事的に有利というわけでもないようだ。

ここ二百年近く、停戦は一度も破られていないので、戦争はもう数百年は無いであろうというのが、両国の政治関係者達の一致した意見のようであったが。

でなければ、魔導飛行船の航路が設定されるはずもないという事実も含めて。

「しかし、本当に早いな」

無事に魔導飛行船に乗り込んでから丸一日、既に航路の四割ほどを消化したらしい。

意外と高速で進む魔導飛行船の窓から外を見ると、眼下にはヘルムート王国の雄大な自然が広がっていた。

大半が未開発地か魔物のテリトリーなので、人が住んでいる土地が少なくても当たり前と言えばそれまでなのだが。

「坊主、何を見ているんだ？　魔物でも出たか？」

「まさか、魔物は一部の例外を除いて、領域からは出ないのが常識じゃないですか」

俺に声をかけてきたのは、ブライヒレーダー辺境伯の筆頭お抱え

魔法使いであり、俺の師匠であるアルフレッド・レインフォードの師匠であったブランターク・リングスタット氏であった。

ブライヒレーダー辺境伯の筆頭お抱え魔法使いともなれば結構忙しいような気もするのだが、俺が王都に兄の結婚式で出かけるので修行を少し遅らせて欲しいと願うと、なぜか彼は俺達の保護者兼引率役をすると宣言し、本当に魔導飛行船に乗り込んでいたのだ。

「アルのような、語り死人になった例くらいだものな」

普通の魔物は、まず例外なく自分達のテリトリーからは出て来ない。

なので、領域の隣でノホホンと畑を耕す農民がいたりと、傍から見るとかなりシュールな光景になっているのも珍しくなかったのだ。

唯一の例外と言っても良い語り死人は、元は人間である。

外に未練があるので、それを果たすために外に出るという行動原理はある意味納得のいくものであった。

ただ、魔物の領域で死んだ人間の大半はゾンビやグールになってしまう。

ゾンビやグールには未練もクソもないので、彼らが領域の外に出る事はあり得なかったのだ。

そこから更にリッチなどの上位アンデッドに進化し、稀に外に出る個体も存在はしていたが、数が少ないのですぐに討伐されてしまうのが常であった。

「他に例外は無いのですか？」

「あるにはあるよ。何千年も前の書物に書いてあったがな」

その滅多にない例外とは、死んだ竜が語り死人のようにアンデッド化する事であると言う。

「ただ、ワイバーンのような小型の竜や、領域の主クラスの属性ドラゴンではな。アンデッド化はするが、領域からは出ないんだ」

「それって、もしかして？」

「先代のお館様が求めた古代竜クラスじゃないと、領域から出たりなんてしないのさ」

その血が万病に効くと、古文書に書かれている古代竜。

以前、その血を求めて未知の魔物の領域に軍勢を送り込んだ先代ブライヒレーダー辺境伯。

その結果は散々であったが、そもそも今まで誰も見た事が無い古代竜をなぜ実在するとブランタークさんは明言するのであろうか？

「古代竜の存在を疑っているのか？　坊主」

「実際に見ないと信じない性質なので」

その辺は、幽霊とかＵＦＯなどと同じなのかもしれない。

俺は、どちらも信じていなかったが。

「そういう奴は多いな。だが、古代竜は実在するさ」

ただ、普通の人間では到底辿り着けない領域の奥地に生存しているし、何万年も生きるのでそう簡単にはアンデッドにはならない。

よって、そう簡単に人間の住む領域には姿を見せないそうなのだ。

「会えれば奇跡ですか」

「大抵の人間には、天災クラスの不幸だがな」

その体で使えない部分はない、高価な素材の塊ではあるが、同時にそれを得られる強さを持つ人間も奇跡の存在である。

普通の人間が顔を合わせれば、間違いなくあっという間に殺されてしまうであろう。

圧倒的強者にして、自分よりも弱い相手には無慈悲な存在。

それが、古代竜という生き物らしい。

「確率から考えても、一生縁が無いですね」

「そうとも言うな」

「ところで、どうしてブランタークさんは俺達の同伴を？」

俺は、この一日気になっていた事を聞いてみる。

王都に出かける子供の引率など、どう考えても筆頭お抱え魔法使いの仕事ではなかったからだ。

「そっちは、ついでさ」

ブランタークさんの話によると、王国の南部を取り纏めるブライヒレーダー辺境伯には定期的に王国に現地の情勢を伝える義務があるらしい。

だがそう毎回本人が行くわけにもいかず、こういう時に筆頭お抱

え魔法使いの出番となるようなのだ。

「社会的地位が高いという事で、良く代理人にされるんだよ」

他にも、王都で細々とした用事があるらしい。

代理人になっても失礼に当たらないので、あちこちに出向くのだそうだ。

「エーリッヒ殿の結婚式には出るけどな」

エーリッヒ兄さんの結婚式に出る事も、彼の仕事の一部なようだ。

エーリッヒ兄さんが婿入りをする家は、下級ではあるが世襲法衣貴族の家柄だ。

当然、上には高位の世襲法衣貴族が寄り親や派閥の長として君臨しているので、失礼にならない程度に式には顔を出す。

地方の有力在地貴族と中央の世襲法衣貴族が、あまり親密になるとキナ臭い噂が流れてしまう。

かと言って、何も繋がりが無いのも考え物だ。

そこで、ブライヒレーダー辺境伯の代理人としてのブランタークさんと、彼らとの顔合わせの舞台としての結婚式であるようだ。

「まあ、そんなに難しい話は無いけどな。少しは繋がりが出来ましたよという事実を確認するだけだ。それに、うちのお館様はエーリッヒ殿に期待していたからな」

比較的凡人が多い我がバウマイスター家の中で、温和で頭の良いエーリッヒ兄さんにブライヒレーダー辺境伯は期待をしていたらしい。

出来れば内政を担当する家臣として召抱えたかったようだが、それはエーリッヒ兄さん本人に断られてしまったそうだ。

「隣接領主の五男が、寄り親のお気に入りの家臣になるとか面倒な点もあるからな」

「将来、お気に入りのエーリッヒ兄さんをバウマイスター家の次期当主に押し込もうと……」

「そういう勘繰りはされるだろうからな」

そういうイザコザが嫌で、エーリッヒ兄さんは王都で下級官吏になったようだ。

他にも、面倒なクラウスの勧誘もあったのだが。

俺もその点は同じなのだが、さすがに将来俺がブライヒレーダー辺境伯のお抱え魔法使いになろうとした時に、それに嫌味を言うほどバウマイスター家の面々がバカではないと信じたかった。

「実力主義と、地縁・血縁に複雑な人間関係が絡まって余計に面倒なんだよな。貴族って」

「ブランタークさんは、その貴族のお抱えじゃないですか」

「別に俺は貴族でもないし、魔法の実力で雇われたに過ぎないし、嫁も子供もいないからな。おっと、この話は他言無用に……」

突然、ブランタークさんが話を中断して魔導飛行船の進行方向に鋭い視線を向ける。

「あの……、ブランタークさん？　っ！」

「半日の訓練で、ちっとはマシになったな。そうだ、何か禍々しい魔力を感じる」

しかも、この魔力の大きさは人間にはありえなかった。

これ以上の魔力量を持つ人間はいるが、それを表に出せるわけがないのだ。

以前も説明したが、普段はその魔力は体内に隠れていてその全容が探知できるはずもない。

ブランタークさんの魔力探知は、普通の人よりも少し多いくらいの見知った魔力を数千キロ離れた場所からも探知できるからこそ凄いのだ。

「人間ではない。野生動物もありえない」

「普通の魔物のはずがない。この航路は、魔物の領域からは離れているんだからな」

現状では、二度と建造が不可能な魔導飛行船を飛ばしているのだ。

その辺の配慮は当然とも言えた。

「何なんでしょうね？」

「まさかとは思うけどよ……」

どうやら、俺達の予想は当たっていたらしい。

魔導飛行船は急にその進路を変え、更にスピードを上げて逃走を開始していたからだ。

魔導飛行船は、内臓された巨大な魔晶石に込められた魔力をエネ

ルギーに、見た目が蒸気機関のような機械と普通の船のように帆を用いた風力によって動いている。

風力は無料だが、魔晶石に貯め込まれている魔力は適時補充しなければいけないので、それには当然コストがかかる。

なので、何も無い魔導飛行船が経済性を考慮した航路を外れ、一番燃費の良い巡航速度を無視するという事は、それらを無視しても構わない緊急事態が発生したという事しかあり得なかった。

「あの、ブランタークさん？」

「坊主、付いて来い。ブリッジに上がって船長に事情を聞く」

「あの、何で俺も？」

「いいから、来い！」

ブランタークさんに強引に手を引かれた俺は、普段は関係者以外立ち入り禁止のブリッジの入り口に到着する。

するとそこでは、十数名の貴族や大商人らしき人達が入り口を警備する船員に抗議の声をあげていた。

「だから、どうして急に航路を変えた！」

「何があったのか説明しろ！」

「こんな、魔導機関の燃費を無視した速度！　何かが無いとおかしいじゃないか！」

「私の口からは、何も言えないんです……」

「では、船長を出せ！」

「説明くらいして当然じゃないか！」

業を煮やしてブリッジに押し入ろうとする彼らと、ブリッジの中から応援が出て来て数名でそれを阻止しようとする船員達。

一向に埒が明かない状態になっていたが、彼らの目にブランタークさんの姿が入ると、一人の船員が声をかけてくる。

「ブライヒレーダー辺境伯家の筆頭お抱え魔法使いでいらっしゃる、ブランターク・リングスタット様ですよね？」

「そうだが、それが？」

「船長から、相談したい件があると」

「わかった。事態が把握できないで不安なのはわかりますが、ここは私が代表して船長からお話を聞くという事で」

ブランタークさんは、普段俺達に使うぞんざいな言葉ではなく、筆頭お抱え魔法使いに相応しい口調で貴族や大商人達に話をしていた。

はっきり言って、まるで別人のようだ。

身分が身分なので、こういう事も出来ないといけないのであろうが。

「まあ、このままじゃ何もわからないしな」

「ブランターク殿に任せるとしよう」

押し問答をしていた貴族や商人達も、ブランタークさんが高名な魔法使いである事を知って静かに道を開ける。

なるほど、高名な魔法使いは社会的な身分が高いようだ。

大物商人や貴族達が、素直に退くのだから。

「この子は、俺の弟子だ。一緒でも構わんな？」

「はい」

なぜか俺までブリッジの中に入る許可を貰ってしまい、仕方なしにそのままブランタークさんに付いて行く。

魔導飛行船のブリッジは、普通の帆船と同じような位置にある。

上甲板の上にクルクル回す舵と共にあるのだが、さすがに高速で飛ぶので、その天井部分は透明なガラス状の材料で出来たドームによって守られていた。

「わざわざすみません。船長のコムゾ・フルガです」

「副長のレオポルド・ベギムです」

共に三十代後半くらいの、落ち着いた風の中年男性に挨拶をされたが、その返事もそこそこに二人はブリッジの後方を指差す。

透明なドームのおかげで後方も良く見えるのだが、問題はその後方に見えてはいけない物が見えていた事であろうか？

「ただの竜じゃないな。この船の幅とさして大きさが違わないじゃ

ないか……」

更に性質の悪い事に、この竜にはもう一つの特徴が存在していた。
それは、既にこの竜には皮膚や血肉の類が一切存在しておらず、つまり骨だけで動いている竜であったという事だ。

そんなボーンドラゴンとでも言うべき巨大な竜が、この船に迫っている非常事態。
なるほど、これは他の乗客には言えないはずだ。

「ここは、高名であるリングスタット様に……」

「あんな化け物に勝てるか」

「それは、本当なのですか？」

「勝てると嘘をついてから俺が飛び出して負ける。パニックが広がると思うけどな」

勝てない物は、ハッキリと勝てないと言う。
その辺のシビアさは、さすがは元一流冒険者であった。

「ですが、このまま逃げ続けても……」

確かに船長の言う通りで、逃げるだけではいずれ手詰まりになってしまう。
このまま燃費も無視して逃走を続けても、そのうち魔力が尽きればあの骨竜に捕まってしまう。
かと言って、ブランタークさんが分の無い勝負に挑んでも情況が改善するとは思えなかった。

むしろ、ブランタークさんをけしかけた件で、余計にあの骨竜の怒りを買ってしまう可能性があったのだから。

「手が無いわけでもない」

「おおっ！　それは、どんな手で？」

藁にも縋る気持ちで、船長達はブランタークさんの回答を待つ。

「あの竜はアンデッドだ。ならば、『聖』の属性魔法で成仏させるのが良いだろう」

「なるほど。リングスタット様が、聖の魔法で成仏させるんですね」

「いや、俺は聖の魔法は使えない」

聖の魔法が使える魔法使いは、かなり少ない。

いくら高位の魔法使いでも、使える確率は初級や中級の魔法使いとさして違わなかったからだ。

魔法使いとしての才能に比例していないので、聖の魔法が使えるだけで貴重なのだが、大した事が出来ないという人も多く、それは余計に使える聖魔法の使い手を減らしてもいた。

そういえば、アルフレッド師匠はなぜ俺が聖の魔法が使えるとわかり、それを指導したのであろうか？

「では、誰が聖の魔法を使うのです？」

「そりゃあ、俺の弟子に決まっている」

ブランタークさんは、俺の事を弟子だと言っている。
師匠の師匠なので、孫弟子になるのだから間違いではないのであろう。

「えっ？　俺なんですか？」

「坊主しかいないじゃないか」

「それは、そうなんですけど……」

ブランタークさんの言い分はわかる。
あの骨竜を倒すには聖魔法が必要で、それが使える俺が戦うのが理に叶っているのだと。

だが、考えても見て欲しい。
俺はまだ十二歳のガキで、実戦経験など凶暴な熊を相手にしたくらいだ。

そんな俺が、あのバカデカイ骨竜の相手をする。
無理にも程があるというものだ。

「無理ですよ！　俺は、まだ魔物と戦った事すらないのに！」

「人間、何事も初めてがあるよな」

それは事実だが、こんな初めては遠慮したい気分だ。

「どこの世界に、竜がデビュー戦の冒険者見習いがいるんですか！」

「ここに居る！　というか、お前が戦わないと全員死ぬ！　根性据えて戦うんだ！　アルフレッドなら、笑顔で『行って来ます』と言うんだがな」

「その言葉は、卑怯ですよ……」

俺にとって、師匠はその人生全てを賭けて追いかける偉大な人であった。

彼はその才能を生かし切れないまま　その若い人生を終えた。

ならば、俺は彼の分まで魔法使いとして生きる義務があるのだ。

ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターには、アルフレッド・レインフォードという偉大な師匠が居たという事実を世間に知らしめるために。

普段はチャランポランでも、ヘタレでも、我が侭でも。

これだけは、譲れないのだと。

「あんな骨竜、ちょっと大きな模型みたいな物ですよね？」

「ああ、ちょっと材料費が高いな」

こうしてブランタークさんからの発破により、俺は初の魔物との実戦がアンデット化した古代竜という、最悪のデビュー戦を迎える事となるのであった。

「作戦は単純なんだがな。坊主が飛翔の魔法で飛び出し、一気に聖

の魔法であの骨竜を成仏させるだけだ」

「いやいや、そんなのは作戦とは言わないでしょう」

「綿密な作戦を立てている時間はないしな」

「正しい認識ですね。俺は、物凄く不幸ですけど……」

ブリッジにおいて、船長から船を追いかけてくる古代竜の退治を任されたブランタークさんは、ありがたい事に俺をその実行者に任命していた。

とにかく、外で戦闘をしないといけないのでその準備をしていると、そこにエル達が心配そうな表情で俺に声をかけてくる。

「ええと……。無事を祈る」

「すまないな。私達では攻撃すら届かないんだ」

「攻撃が当たっても、ボク程度の魔力だと致命傷を与えるのは無理なんだよ。ゴメンね」

もう既に、船内には船長からこの船が竜に追われているという事実が知らされていた。

普通ならパニックになるところだが、続けて船長はこの船にはブランターク・リングスタットとその優秀な弟子が乗船していると伝え、なら大丈夫だと彼らはすぐに落ち着いていたのだ。

さすがは、ブランタークさん。

ブライヒレーダー辺境伯自慢の魔法使いである。

「アルなら普通に勝てたと思うんだけどな。俺はと聞かれると、相当に分が悪い。坊主も、良い線でいけると思うんだがな」

あのレベルのアンデッドになると、相当に魔力を込めた魔法で始末するしかないらしい。

余計な小細工などよりも、ただ古代竜のアンデッドが無事に成仏するほどの聖の魔法を放てば良いのだと。

技よりも、パワーと言った感じであろうか？

「とにかく、念には念を入れてぶっ放せ。それだけだ」

ブランタークさんは、万が一骨竜がブレスなどを吐いた時のために船に残る事になっている。

せっかく竜を倒しても、その前に船が落ちてしまうと意味が無いので必要な処置ではあった。

「メインを坊主にやらせるんだ。俺は、この船が傷一つ付かないようにする」

骨竜がどんなブレスを吐くのかは知らなかったが、それを防ぐために、ブランタークさん魔法障壁の展開準備に全力を尽くすようだ。

「飛翔に、俺と同じくブレスが来れば魔法障壁、挙句に竜を成仏させる『聖』の魔法を貯めるのか。お前、やっぱりアルの弟子だよ」

魔法の同時展開は、師匠が得意とする特殊能力であった。

俺もそのコツを習い、この六年で三つまでの魔法の同時展開を習得している。

師匠は七つまで可能なのでまだ先は長いのだが、今はただ出来る

事をやるだけだ。

焦って、失敗しないようにだけ注意すれば良い。

例え、相手が伝説の古代竜でもだ。

「勝負は一瞬で終わる」

船のすぐ後方にまで迫っている骨竜に飛翔で接近し、その短時間までで『聖』の魔法の準備を終える。

既に、魔力の溜めは始めていて。

それが終われば、俺は急ぎこの船から飛び出して骨竜に魔法をかけないといけない。

本当に、僅かな時間で勝負が決まる一種の賭けでもあったのだ。

「坊主、飛翔の魔法で体を浮かせておけ。外に出たら、相対速度の調整も忘れるな」

「はい」

それを忘れると、俺は一気に船と竜に置き去りにされてしまう。

再び飛翔で追いかけると魔力と時間の無駄なので、これは必須事項とも言えた。

「坊主、これが終わったら訓練の続きを本格的にやる。死ぬなよ」

「こんな年では死ねませんよ。では……」

俺が頷くと同時にブランタークさんは、エル達と一緒に船の最後尾にあるドアを一気に開ける。

そのまま無事に飛び出した俺であったが、その直後に骨竜はドス黒い毒霧のようなブレスを広範囲に吐き始める。

「危ねえ！」

準備はしていたので、すぐに俺は魔法障壁を発動させる。
ブランタークさんの方も、船を完全に包み込む魔法障壁の展開を一瞬で終えていた。

やはりブランタークさんは、師匠の師匠なだけはある。
魔導飛行船全体を覆う魔法障壁は、骨竜のブレスを完全に防いでいた。

「と、感心しているわけには！」

船の無事を一瞬で確認した俺は、その僅かな時間の間にも魔力を聖の魔法を発動するために貯めていた。

「（骨竜を包む込む、高濃度の聖の光……）」

以前に師匠を成仏させた光線魔法は避けられる危険性があったので、今回はそんなイメージで魔法を発動させる事にする。
既に骨竜の至近に到達していた俺は、骨竜の両手と尾っぽからの連続攻撃を飛翔でかわし、一気に貯め込んでいた魔力を開放する。

聖属性特有の青白い光は、俺を中心として骨竜の全てを包み込み、聖光を浴びた骨竜は数十秒ほど断末魔のような咆哮をあげていた。

その間、骨竜は滅茶苦茶に手足や尻尾を振り回してくる。

俺は魔法障壁でそれを防ぐのだが、あまりの衝撃に骨竜の傍から弾き飛ばされそうになってしまう。
だが、弾き飛ばされれば、せっかく展開した聖魔法の範囲から骨竜が外れてしまい、骨竜を倒せなくなってしまうのだ。
懸命に飛翔魔法で位置をコントロールしながら、その攻撃を防いでいた。

「（まだだ。あいつが完全に動けなくなるまでは……）」

俺は、更に魔力を送り込んで聖の光を継続する。
すると、次第に骨竜の咆哮は薄れていき、最後にはそのまま動かなくなってしまう。
急ぎ魔力の反応を見ると、どうやら完全にアンデッドモンスターとしては、その活動を終えてしまったようだ。

「師匠の時と比べると、体が消滅する事は無いのか」

さすがは古代竜の骨とでも言うべきか、聖の光を長時間浴びても骨には何一つダメージを受けていない。
むしろ、アンデッド状態から脱したせいで、骨は美しい光沢を放つようになっていた。

聖の光が収まってから数秒後、上空で竜の骨格図通りの形を保っていた骨であったが、次第にパーツ毎にバラけて地面へと落下し始める。

アンデッドとしての活動を停止した骨は、ただの無機物でしかない。
重力に引かれて落ちるのは、当然の結末と言えよう。

「おーーい、坊主！　骨を回収しろ！　勿体無いじゃねえか！」

ブランタークさんは、空中に浮いている俺に、バラけて地面へと落下しつつある骨を拾うようにと叫んでいた。

いくら伝説の古代竜の骨とはいえ、アンデッドの骨を素材として使うのはどうかと思ったのだが、俺が無事に聖の魔法で浄化したので問題は無いのであろう。

素早く、地面に落ちる前に全ての骨の回収に成功する。

こういう時には、やはり魔法の袋は便利であった。

そして、俺はもう一つ不思議な物体の回収に成功していた。

直系二メートルほどと。

魔法の袋がなければ空中で拾えなかったであろう真っ赤で綺麗な光を放つ石の正体は、この竜の魔石であったらしい。

本では、どんな魔物でもその体内に持っている魔物が魔物である根拠となる石であるようだ。

加工すると魔晶石になるし、魔力の減った魔晶石の充電にも使えるそうなので、冒険者は必ず倒した魔物からこの魔石を回収すると予備校の参考書に書かれていた。

授業でも、先生が強調して教えていたほどだ。

「さすがに、今日は魔力がほぼ限界だよ」

古代竜の骨と魔石を回収してから船に戻ると、俺の魔力が既に限界ギリギリまで消耗していた。

もう一匹竜がいたら、俺は確実にあの世行きであろう。

「しかし、古代竜の骨格一式にとんでもない大きさの魔石か。大儲

けじゃないか」

無事にアンデット古代竜を倒した俺を多くの人が歓声と共に出迎えていたが、ブランタークさんは例の魔石が気になってしょうがないらしい。

要望に答えて袋から出すと、あまりの大きさに周囲からまた歓声があがっていた。

「確かに、大きいですね」

「この魔導飛行船を動かしている魔晶石でも、精々で直径五十センチほどですよ」

全長が百メートルを超える魔導飛行船のエネルギー源でもある魔晶石が、この目の前にある巨大な魔石の四分の一。

なら、この四倍の直径を持つ魔石ともなると、果たしてどれだけの事が出来るのであろうか？

俺は、その評価額と共に非常に気になり始めていた。

「そうですな……。これだけの大きさの魔石となりますと、相場は白金貨千枚からでしょうな」

まるで俺の心の声を見透かしたように、一人の商人がウンウンと頷きながら声をかけてくる。

年齢は五十歳ほどであろうか？

その身なりを見るに、かなりの商いを行う商人らしい。

運賃が最低でも金貨一枚の魔導飛行船に乗っているのだから、零細商人のはずはないのだ。

「アルテリオか。やはり、その魔石が欲しいのかね？」

「ああ、私なら白金貨千二百枚からスタートだな」

ブランタークさんは、その大商人らしき人物と知己であるらしい。

二人で魔石を見ながら、仲良さそうに話をしていた。

「白金貨千二百枚！　珍しいけど、そんなにするのか！」

「ええと……。君は、この古代竜を倒した小さな勇者殿の友人だったかな？」

「同じ冒険者予備校の同級生です」

エルは、アルテリオさんに自己紹介と挨拶をする。

「なるほど、そうだったのか。ブランターク、君の雇い主は良い冒険者を育てるのに熱心なんだな」

「そいつも、剣は良い腕しているぜ。騎士団の下っ端じゃあ、話にもならねえ」

「その若さでか。それは、素晴らしいな。おっと、この魔石の相場の話だったな。この魔導飛行船を動かしている魔晶石は、前に七千年の寿命を誇ったシナプス火山を住処とした老火竜の魔石を材料に作られている。大きさはこれの四分の一だったが、ロストテクノロジーである魔導飛行船を動かせるかどうかの瀬戸際だ。魔石はオークションにかけられ、王国の依頼を受けた政商が競り落としたのさ。その金額は、白金貨二百七十五枚だった」

戦時の際には、戦艦クラスの働きが可能なこの巨大な魔導飛行船を動かせる魔石なので、その価値が日本円にして二百七十五億円というのは決して安くは無かった。
前世の地球上にある国家が所持する、イージス艦や原子力空母と比べれば遙かに安い金額と言えよう。

「じゃあ、その四倍の大きさの魔石は？」

「ええと、エルヴィン君だったよな。当然、最低でもそれだけはする。俺が～からと言っているのは、これほどの大物ともなると、絶対にオークションで競り落とされるからだ」

このレベルの大きさの魔石は、隣国であるアーカート神聖帝国にも現存していないらしい。
アーカート神聖帝国では、古代魔法文明の遺産である遺跡やダンジョンが多くあり、中からたまに現在の技術では到底製作不可能な大きさの魔晶石が出土するらしいのだ。

「しかし、今回はそのオークションさえ行われないだろうな」

アルテリオという商人がそう独り言を言うと、周囲にいる他の貴族や商人達もその意見に賛同して静かに頷き始める。

「あの、それって？」

「なあに、簡単な事さ。しかし、小さな勇者殿。お前さん、王都に付いたら色々と大変だぜ」

「大変なんですか？」

「ああ」

何が大変なのかは良くわからなかったが、それから一日半後、無事に航路を元に戻した魔導飛行船は無事に王都へと到着する。

骨竜のせいで数時間の遅れはあったが、思ったよりも遅れは出なかったようだ。

「いやあ、俺達まで殿様待遇だったな」

「ブランタークさん、あんなに高い酒を全部飲んでしまって大丈夫なんですか？」

「大丈夫さ。坊主は、あのまま古代竜のブレスに焼き落とされるはずだったこの船を救ったんだからな」

確かにブランタークさんは、船上で強固な魔法障壁を展開して、あの古代竜のブレスからこの船を守っている。

俺も、無事にアンデット古代竜の活動を聖の魔法で終息させる事に成功していた。

なのでこの一日半、俺とブランタークさんと同伴者のエル達は船長のはからいで、この船の一番豪華な部屋に案内されていたのだ。

運賃は、通常金板一枚。

日本円で約一千万円の、まず政商クラスの大商人か大物貴族しか利用できない超ＶＩＰクラス専用の部屋であった。

室内には豪華な装飾や家具などが配置され、テーブルの上には高価なフルーツなどが籠に盛られている。

専属のメイドがいて、自由に高級なお茶やお菓子などを頼めるし、

専用のワインセラーなどがあって自由に酒を飲む事ができた。

俺やエル達は、まだ年齢が年齢なのでノンアルコールで過ごしていたが、ブランタークさんは箍が外れたように高価なお酒をガブ飲みしていたのだ。

良く急性アルコール中毒にならないなと思ってしまったのだが、彼は酒に異常に強いらしい。

二日酔いの兆候すら見せずに、朝食を美味しそうにお替りまでして食べていた。

「いいか、坊主。船長殿は、船を救った俺達に心から感謝して部屋を変えてくれたんだ。遠慮なんてしたら、かえって失礼に当たるじゃないか」

「さすがに、あのワインセラーの酒を全部飲んでしまったのは……」

「いやあ、高価な酒を堪能したな。一年分くらいは飲み溜めしたな」

ブランタークさんの、本当なのか嘘なのかわからない見解を軽く聞き流す俺であったが、確かに船に乗っている間は船長達は俺達を下に置かない丁寧な対応をしてくれたし、今もこうして船を下りる俺達に、わざわざ見送りまでしてくれていた。

「古代竜を討った英雄殿達だからな。多少の飲み食いくらいでは、船長は腹を立てないさ」

なぜか俺達と行動を共にしているアルテリオさんであったが、彼は王都に本部を置く大規模な商会の当主らしい。

王宮にも出入り出来るとかで、世間では政商扱いされている人物

であった。

しかも彼は、昔はかなり高名な冒険者で、そのメンバーにはブランタークさんもいたそうなのだ。

「ちなみに、さっきの話に出た老火竜を討伐したのは俺達なんだよ」

「私は、その賞金の分け前で商会を設立したわけです」

老火竜の討伐には成功したが、アルテリオさんは冒険者としては致命的で治療不可能な傷を負い、それならばと商人として第二の人生をスタートさせていた。

ちゃんと成功しているので、今となっては負傷も良い思い出なのだと言っているが。

「じゃあ、ブランタークさんはこれが二匹目の竜退治ですか」

「はあ？　何を言っているんだ？」

「でも、ブランタークさんが船を魔法障壁で守り、俺がその間に聖の魔法で成仏させたわけですから、これは共同作業でしょう？」

ブランタークさんが船を守ってくれなければ、古代竜による毒々しい色のブレスによって魔導飛行船は沈んでいたであろう。

なので俺は、ブランタークさんにも古代竜の骨と魔石の売却代金を半分貰う権利があると主張する。

「今回のケースの場合、坊主の聖魔法が無ければ退治なんて不可能だったじゃないか。俺は自分の身を守ったに過ぎない。まあ、エル達も船にいたからな。守り賃として、売却益の十分の一だけ寄越せ

や」

「ですが……」

「と言うかよ。俺は、坊主が思っている以上に資産家だし、この年でもう大金なんていらねえんだよ」

若い頃は超一流の冒険者として荒稼ぎをし、引退後は幾つかの貴族家などに仕えていたブランタークさんは、その辺の貴族など相手にもならないほどの資産を持っているらしい。

なので、今回の褒賞の分け前は半分もいらないと俺に伝えていた。

「それにな。俺は、お館様から仰せつかった仕事で忙しい。その分坊主に負担が来るから、まあ迷惑料だと思え」

「迷惑料ですか？」

俺はブランタークさんの言いたい事がわからずに、その場で首を傾げてしまう。

「なんだ坊主らしくもない。わからんのか？　まあ、良い。アルテリオ、少し面倒を見てやってくれないか？」

「報酬は？」

そこで報酬というところが、さすがは商人というところであろうか。

「そういえば、お前は商人だったな。俺やアルよりも才能がある魔

法使いと知己になれたと思って喜べや」

「まあ、ここで恩を売っておくのも悪くないか」

アルテリオさんは、納得したように一人頷いていた。

「なあ、エル。あの二人は何を言いたいんだ？」

「ヴェルが、とてつもない大金を得られるかもしれない。それと関連しているんだろうが……」

「ねえ、ヴェル。王都でケーキでも驕ってよ」

俺はますます二人の言っている内容が理解できず、更に俺の近くにいるエル達もそれがわからないようであった。

「もう少しすればわかるよ。じゃあ、俺はこれで」

一応引率者役のはずなのに、ブランタークさんは用事があると言って先に船着場から出て行ってしまう。

残された俺達が、エーリッヒ兄さんからの手紙に添付されていた地図を参考に彼の家への経路を話し合っていると、そこに煌びやかな鎧姿の騎士が従者と共に現れる。

鎧の豪華さから考えて、その騎士は相当な高位にある人物だと考えられた。

「陛下よりの言付けにございます。今回の古代竜退治の儀、ご苦労であったと。ついては、今より王城にて謁見を行うと」

「……（これが、ブランタークさんの避けた面倒……）光栄の極みにございます。すぐにお伺いいたします」

「ご案内いたします」

古代竜を倒さなければ、王都に来れないどころか命を落としていたはずなので、それは間違いではないと断言する。

だが、そのせいで俺はこの国の王様と顔を合わせる羽目になってしまうのであった。

幕間六　ロリ少女はたくましかった。

「ヴェル」

「何だ？　ルイーゼ」

エーリッヒ兄さんの結婚式に参加するため、王都へと向かう魔導飛行船に乗り込んだ俺、エル、イーナ、ルイーゼの四人であったが。

師匠の遺産などで金を持っている俺とは違い、残り三人は魔道飛行船の運賃金貨一枚を俺から借金している身だ。

人によっては、『そんなに簡単に金を貸して甘い』とか言いそうではあるが、この世界において金を借りるという行為は、そう甘い物ではない。

借りた金を返せないで貸主が起した訴訟に負けると、最悪鉱山送りになっても文句は言えない。

そのくらいお金は大切な物であり、返せないのなら、強制労働でも何でもして返せという法になっているのだ。

だが、今回の場合は証文も利息もない。

なので、俺が三人が金を返さないとブライヒレーダー辺境伯に言っても、勝訴は難しいであろう。

証拠が無いからだ。

だが、事情を話した時点で内二人は窮地に陥る。

自分の陪臣の子供達が、将来筆頭お抱え魔法使いにしようと考えている俺から金を借りて返さなかった。

しかも、証文無し、利息無しの完全な信用貸しでだ。

当然、ルイーゼとイーナの実家はブライヒレーダー辺境伯から睨まれ、不興を買う事となる。

そんな事など百も承知な二人が、借金を踏み倒す事などまずあり得ないのだ。

それに、エルも含めて四人で狩りをしていれば金貨一枚などすぐに返せる額だ。

金貨一枚惜しんで、馬車で往復一ヶ月を無駄にするのは勿体無い。

そう考えられる三人なので、俺は無条件で金を貸したとも言えた。

「はい、借りていたお金」

魔道飛行船に乗り込み、最初の夕食を終えて部屋でまったりとしていると、そこにルイーゼが現れて俺に借りていた金貨三枚を渡す。

正直、恐ろしいまでの返済速度だ。

「早いな」

「いいアルバイトがあったんだ」

「それって、俺も出来る？」

「出来ない。ボクが、魔闘流を使えるからこそのアルバイトかな？」

「どんな手なんだか……」

「教えても良いけど、秘密は守ってよ」

ルイーゼは、魔導飛行船に乗り込んでから僅か半日で借りていた運賃を返済した方法を話し始める。

「この船は、お金持ち様専用でしょう？」

運賃は最低でも金貨一枚なので、一般庶民には手が届かず、客層は貴族やその付き人に、大商人などが多かった。

ルイーゼは、多くの人が集まるラウンジであるゲームを始めたそうだ。

『ボクと腕相撲をして勝ったら、金貨一枚進呈します。参加費は銀貨十枚です』

突然、可愛い女の子が勇ましい事を言うのだ。

当然、多くの注目を集めていた。

「貴族様は、そんな勝負受けないだろうに」

「貴族の、お付きの人を狙ったもの」

見た目十歳くらいのルイーゼに、腕相撲で勝ったら金貨一枚。

貴族の護衛に雇われている護衛達には、腕に自信がある人も多い。

彼らはこぞって、ルイーゼに腕相撲に挑み始める。

「それは、可哀想に」

素のルイーゼの力は、同年代の少女とさして変わらない。
ところが彼女は、師範をしている父親や兄達をも凌ぐ魔闘流の達人なのだ。

身長二メートルを超える筋肉ダルマがルイーゼに数秒で負かされ、それで火が付いた挑戦者がこぞって参加費を進呈してくれたそうだ。

後半になると、『せめて誰か一度でも勝ってくれ』という空気になったらしい。
そのくらい、ルイーゼの連勝街道は続いていた。

「儲かったようだな」

「うん、これで王都で買い物が出来る」

王都滞在中の費用はかからなかったが、早くお金を返したいので、買い物やお土産をどうしたものかと。
今回の稼ぎは、そんな悩みを全て解決してくれたそうだ。

「問題にもならないだろうしな」

勝負は全て正々堂々と勝っているし、まさかルイーゼに腕相撲で負けましたと大の男が言うのも恥ずかしい。
そんなわけで、ルイーゼは特に何の問題も無く金貨五枚ほどの利益を挙げたそうだ。

「念のために、最後に一回負けたからね」

一人だけ、貴族の護衛として雇われている、かなり出来る元冒険者がいたそうだ。
そこで、彼と接戦を演じて最後にわざと負けたらしい。

「えぐい事をするな」

当然、挑戦者とギャラリーの視線と注目は、初めてルイーゼに勝って金貨を得たその男性に向かうわけで。
その間に、『毎度あり』という感じで上手く抜け出して来たようだ。

「それで、ちゃっかりエルとイーナの分まで返済しているし」

「ははははっ。エルは返済終了まで、買い物の時には荷物運びで扱き使う予定」

イーナは幼馴染なので、特に催促もしないようだ。
あの二人の関係を考えるに、ちゃんと返済はするのであろうが。

「恐ろしい女だな」

「そう、ボクは魔性の女」

そう言いながら、艶っぽく見えるようにポーズを取るルイーゼであったが、残念ながらその効果は無かったようだ。

「残念、まだ時間が足りない」

「そういう事を言うな！」

今の時点では、魔性の女にはどう見ても見えないであろう。
侮れない性格をしているのは、事実だったのだが。

「ボクは、ヴェルと同じ年齢で冒険者予備校の生徒でもある。半貴族な陪臣の子とはいえ、借りはなるべく作りたくない。と思ってはいるんだけどね……」

図々しく縋るが、一応貴族の末端なのでプライドもある。
その辺のバランスは、非常に難しい所だ。

「そこで、少しでも利息を払おうかとね」

「いらん」

「そこは、素直に貰っておきなよ」

そう言うと、ルイーゼは素早く俺の横に移動してそっと頬にキスをしていた。
さすがは、魔闘流の使い手。
俺は何も出来ずに、ただキスをされてしまったのだ。

「恥ずかしいから、口は無しだよ」

そう言い残し、まだ恥ずかしいのか顔が赤いままのルイーゼは、素早く部屋を出て行ってしまう。

「お子様な癖に、本当に魔性の女になるのか？」

あんな子供に惑わされるなんてと思いつつ、実は内心ドキドキし

ていた俺であった。

ただ、そのドキドキも、もう半日後には別のドキドキに変わってしまうのだが。

第二十七話　陛下との謁見。

「しかし、ヴェンデリンは凄いな。俺が陛下に初めて謁見したのは、老火竜を倒した四十歳前の事だ」

「あの、俺は何に気をつければ？」

冒険者予備校の夏休み期間を利用して、俺が一番仲が良かったエーリッヒ兄さんの結婚式に出席しようと王都へと魔導飛行船で向かう途中。

俺や、王都見学のために同伴したエル達に、俺達の保護者として同伴を宣言したブランタークさんは、その航路上で既にその寿命を終えアンデッド化した骨と魔石だけの古代竜と遭遇する。

骨だけとはいえ、まさかの古代竜の出現と、しかもその古代竜がとっくに寿命を終えたにも関わらずアンデッド化していた事実に、船内には重苦しい空気が流れ始める。

あの骨だけの大きい竜は、本当に古代竜なのであろうか？
そもそも、古代竜がアンデッド化するものなのか？
更に、本来の領域を外れて人間のテリトリーに顔を出すのか？

何しろ、相手は数万年も生きる古代竜である。
近年では、あまりに目撃者がいないので半分架空の魔物扱いされるほどであったが、研究をしている学者に言わせると古代竜は絶対に実在しているらしい。

滅多に見れないのは、古代竜がブランタークさん達も倒した事がある属性竜よりも上位の、半ば精霊などに近い種族だからなのと。
あまりに奥地に引っ込んでいるので、人間が見付けられないだけなのだそうだ。

『半分精霊なのに。凶暴だし、アンデッド化するんですね』

『そんな向こうさんの細かい事情まで、俺は知らん』

色々と疑問は尽きないのだが、それでもアレからは永遠に逃げられそうもないので、俺はブランタークさんと協力をしてその古代竜の供養に成功する。

供養と言っても退治や討伐とさして結果は変わらないのだが、聖の魔法で浄化して活動を止めたので、教会関係者などから言えば供養の内に入るのであろう。

俺が大量の魔力を使って発動させた聖の魔法によってアンデッド古代竜はその活動を停止させ、最後に骨と巨大な魔石を残す。
虎が立派な皮を残すのと同じわけだが、少し違うのはその残した物がとんでもない値段になるという事であろうか？

竜の体から取れる素材は、小型種であるワイバーンの物でもそれなりの値段で取り引きされる。
ましてや、以前にブランタークさんが倒した属性種と呼ばれる大型の竜ともなれば、使えない部分は無いと言われるほどに貴重だ。

血、肉、皮、骨に、他の魔物とは比べ物にならないほど巨大な魔石と。
属性竜の素材自体が五十年に一度でも市場に出れば早いと言われ

るほどなので、物凄い価格で取引されるそうだ。

俺は、迎えの馬車の中でアルテリオさんの説明を聞いていた。
魔導飛行船専用の港で騎士様の出迎えを受けた俺は、迎えに来るはずのエーリッヒ兄さんに会う間もなく、付き添いのアルテリオさんと共に騎士達が準備をしていた馬車に乗り込んでいたのだ。

なお、ブランタークさんは用事があるので先に港を出ていたし、エル達は不幸にもエーリッヒ兄さんへの説明役として、騎士様のお付の兵士達と共に港に置き去りにされている。

どのみち、エル達は俺も含めて宿泊先がエーリッヒ兄さんの家なので、意地でも彼と合流しないといけなかったのだが。

「ましてや、今回は過去の記録にも残っていない古代竜だからな」

俺に同伴しているアルテリオさんの話によると、古代竜はそれが存在している事は事実であったが、普段は人が入り込めない魔物のテリトリーの奥にいるので、実際にその姿を見た者はおらず。
寿命が数万年もあるとの事で、それが老衰で死んだり、死後にアンデットになる事実などを知っている人間は皆無であったようだ。

「じゃあ、どうしてあの骨竜が古代竜であると確認できたんです？」

「あの骨格と魔石の大きさだ」

骨竜は、軽く見積もっても全長が五十メートルを超えていた。
小型のワイバーン種でも大きくなって全長五メートルほどで、属性種でも最大で三十メートルほどらしい。

なので、あの骨竜の存在は、古代竜とでも考えないと説明が難しいようであった。

「それでですか。陛下は、そんな珍しい古代竜の骨と魔石を得た俺如きと謁見なされると？」

「如きって、少し卑屈じゃないか？」

「零細貴族の八男に、何を期待しているんです？」

「期待とか、そういう事じゃないんだけどな」

俺の王様に対する考えなどは、その程度であった。

前世で皇族をどう思うかと似たような感覚であり、反政府思想も無いので反感や打倒の意志などは皆無だが、熱烈に崇拝・支持しているわけでもない。

南の僻地の出身で全く接点が無かったので、これから謁見する事実にまるで実感を感じていなかったのだ。

あまりに雲の上の人過ぎるというのが、一番的確な答えであろう。会うと緊張しそうなので、出来れば一生会わなくても良いと思っているほどだ。

「確か、うちの父上が爵位を継承した際に謁見したのみだと思います」

当主変更による叙勲の儀式は、どんなに小身の貴族でも王都で陛下直々に行うのが決まりだ。

なので、父は陛下と一回顔を合わせているはずであったが、本当にその一回だけというのが現実であった。

まさか陛下も、数居る零細騎士の一人など覚えていないであろうし。

うちの父にような辺境に住む零細貴族が王都に行く機会は少ないし、一国の王ともなれば色々と忙しい身なので、来たからと言ってそう簡単に謁見など出来ないであろう。

「しかし、お忙しい身の陛下に俺如き小物が良いんですかね？」

内心では、『忙しいからやっぱり会わなくても良いや』という回答を期待していたのだ。

「陛下との謁見は、こちらから申請すれば時間がかかる。俺でも、最低一週間待ちだな」

政商クラスのアルテリオさんでさえ、陛下と謁見するのに一週間もかかるのに、俺が今すぐ謁見しても良いのであろうか？

俺の頭の中では、次第に不安が渦巻き始める。

「心配ありません。今回の謁見は、陛下ご自身が望まれたので実現したのですから」

俺とアルテリオさんを王城まで案内してくれている豪華な鎧を着た騎士が、今回の謁見についての事情を説明し始める。

「ヴェンデリン殿は、伝説クラスの古代竜を倒しました。次に、それによって貴重な国家資産である魔導飛行船を、搭乗していた乗客ごと守りました。あの船の乗客には、大身の貴族や商人の方も多いですからね。最後に、その古代竜の骨と巨大な魔石の入手に成功した。陛下は、ヴェンデリン殿に頼みたい事があるそうです」

陛下の方から用事があるので、俺はすぐに謁見可能なようだ。
説明してくれている身形が非常に良い騎士は、かなり陛下に近しい立場にいるようであった。

「それで、近衛騎士団の中隊長を務めるワーレン殿がじきじきに迎えに来たと」

「（姿格好といい、その隙の無い身のこなしといい。なるほど、偉い人だったんだな）」

「ワーレン殿は、坊主と同じような生まれだからな。この地位にいるのは、ただその実力によってなのさ」

身長百八十センチ超えで、金髪・碧眼・イケメンと絵に描いたような騎士様は、下級法衣貴族家の三男の生まれらしい。
三男と聞くだけで、なぜか親近感が沸いてくるような気がする。

この世界では、長男と長男以外で厳密な線引きが成されているのだから。

「良くご存知ですね。アルテリオさん」

「まあな。ワーレンも、一応はブランタークの弟子だし」

「そうなんですか？」

俺の師匠のみならず、近衛騎士隊にまで弟子が居るとは。
ブランタークさんは、思った以上に顔が広いようであった。

「私は、魔法が使えない魔力持ちですから」

ブランタークさんの指導のおかげで、俺はこのワーレンさんに普通の人よりは多目の魔力がある事に気が付いていた。

だが、このくらいの魔力だと、精々で一日にファイヤーボールを数発打てば終了になってしまう。

戦いにおいては切り札の一つにはなるが、決定打にはなりえないほどの魔力とも言えた。

「ワーレン殿は、魔法を使えないのさ」

正確に言うと、魔力で具現化した現象を外部に放出できないというのが正解らしい。

その代わりに、魔力で己の体や武器を強化して戦う、所謂魔法騎士としての才能で、近衛騎士団の中隊長を務めているとのアルテリオさんからの話であった。

魔力を身体で強化して戦う剣士や武道家の類は魔力持ちには一定数存在し、その実力は魔力をほとんど持たない者達に比べて圧倒的だ。

魔力をあまり持たない人間は、いくら訓練をしても量産品の鋳物の剣で大岩を真っ二つにしたり、バラバラに砕いたりは出来ない。

まあ、そんな普通の人間でも、誰でも持っている少量の魔力を無意識に身体機能の強化に使っているので、前世の一般人に比べると大人と子供ほどの差があるのだが。

「ブランターク様からは、魔力の制御と使用量の節約などを習い、大変にお世話になったのです」

なるほど、通りで一定数はいると聞いている、大物貴族やその子弟にありがちな傲慢な態度を取らないわけだ。

こんな子供の俺にまで丁寧な口調で対応するとか、それでいて近衛騎士団の中隊長なのだから、さぞや女性にモテるのであろう。

いや、先に陛下からの信任が厚いと言った方が良いであろう。

「あと、私がまだヴェンデリン殿よりも少し年齢が上くらいの時に、アルフレッド様と一度だけお会いした事があるのです」

その時にブランタークさんは、『一応俺の弟子なんだけどな。もう完全に抜かれてしまっているんだ』と笑いながら紹介をしてくれたそうだ。

「その時のアルフレッド様からは、その温和な外見からは想像も出来ない何かを感じました。あれが、超一流の魔法使いなのかと」

そう、師匠も見た目は温和そうで背の高いイケメンのお兄さんにしか見えないのだ。

ところが、魔法使いとしては超一流であった。

『人は見かけによらない』の典型例であったのだ。

「しかしながら、ヴェンデリン殿からも同じような感覚を私は覚えます。見た目は、まだ世の中の事に興味深々で成長途中の少年にしか見えないのに」

「そりゃあそうさ。ヴェンデリンは、単純な魔力量や魔法の最高出力なら、既にアルフレッドすら超えているんだから」

きっと、ブランタークさんから話を聞いていたのであろう。
アルテリオさんは、今の俺の大体の実力を知っているようであった。

「なるほど、陛下が直接に会いたいと願うわけです」

港を出た馬車は、王都の町並みを下町、町民街、商業区、工業区、貴族街などの順番に通って行く。
さすがは一国の首都というだけはあって、その規模と人の多さはブライヒブルクの比ではなかった。

「そろそろ、王城に到着します」

一時間ほど馬車に揺られ、俺達を乗せた馬車は王城へと到着する。

「大きい……。うちの実家と比べるのは無駄だけど、ブライヒレーダー辺境伯様の館よりも遙かに……」

お城を見上げなら正面の門に到着するが、ワーレンさんがいたので門番は俺達の身元確認すらしないで通していた。
城の内部に入ると、兵士や騎士や貴族やメイドなどがあちこちを歩いていたり、何か仕事をしていたりと。

城内は、活気に満ち溢れているようであった。

ただ、なぜか俺達に注目しているのが気になっていたのだが。

「古代竜討伐の話は、もう王都中に広がっていますからね。しかも、それを成した二人の内の一人がまだ十二歳のヴェンデリン殿なのですから」

ワーレンさんの言う通りに、気になるので実際に目を凝らして見ている状態なのであろう。
どこか、上野動物園に居るパンダの気分だ。

ワーレンさんを先頭に暫く城内を歩いていた俺達であったが、遂に目的地である豪華な扉の前へと到着する。
この先が、謁見の間のようだ。

「陛下は気さくなお方なので、最低限の礼儀さえ守っていれば問題はありませんよ」

「そのフォローをブランタークから頼まれたんだが、ヴェンデリンなら心配いらないよな」

アルテリオさんがそこまで言ったところで目の前の豪華な扉が開き、視界の先には赤い絨毯が敷かれた床や、一段高い玉座に座る男性の姿が確認できる。
そしてその両側には、十数名の警備の騎士達や、地位の高そうな貴族の姿も数名確認できていた。

「古代竜を討伐せし、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスター殿と、ブランターク・リングスタット殿の代理人。アルテリオ・マーシェン殿の御成り！」

昔に映画で見たように、俺達の入場を高らかに読み上げる役人らしき人の声を聞きながら、俺達はワーレンさんの誘導で玉座から三メートルほどの位置にまで接近する。

するとワーレンさんは横の騎士達が立っている位置へと戻ってし

まい、あとは俺とアルテリオさんだけになってしまった。

緊張で何をして良いのか忘れてしまったが、すぐにアルテリオさんがひざまづいて頭を下げたので、俺もそれを真似して事なきを得る。

「突然の呼び出しで大変であったであろう。頭を上げるが良い」

陛下にそう言われたので頭を上げると、そこには四十歳前後に見える高貴そうな顔をした美中年の男性が笑みを浮かべていた。

やはり、お約束で王族というのは美男美女が多いらしい。

陛下も、若い頃はさぞかし女性にモテたのであろう。

何か自分がモテないので、そればかり言っているような気がするが。

要するに、イケメンは敵だという事だ。

ただし、エーリッヒ兄さんを除いて。

「改めて紹介するが、余がこのヘルムート王国国王、ヘルムート三十七世である」

「ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターと申します」

「ふむ、改めて見ると本当に若いの。幾つになった？」

「はい、十二歳です」

こうして、俺と陛下との謁見は始まったのであった。

第二十八話　バウマイスター準男爵。

「（王都に到着して、いきなりこの国の王様との謁見か……）」

夏休みに、観光も兼ねて王都で行われるエーリッヒ兄さんの結婚式に行こうとしたら、途中で古代竜が現れてそれを退治してしまった。

簡単に言えばこれだけなのに、その後の話は簡単には行かなかった。

王都に魔導飛行船の港に到着すると、そこには王城から寄越された騎士様がいて、俺は哀れエーリッヒ兄さんとの再会もお預けで、王城へと連行されてしまったのだ。

中身が小市民で、外見が子供な俺には酷な話である。

正直なところ、どう対応して良いのか困ってしまうのだ。

一応貴族の子供なのだが、当然そんな教育を受けられる環境に無かった。

うちの実家など、王都に居る王族や大貴族に比べれば平民みたいな物なのだから。

「本当に若いの。魔法の才能は、年齢に関係ないとはいえ……」

ひとしきり挨拶が済むと、今度は陛下は俺が古代竜を倒した時の話を聞いてくる。

俺は、古代竜のブレスから魔道飛行船を守る役割をブランターク

さんに任せ、自分は飛翔で古代竜に接近し、自分も魔法障壁でブレスから身を守りながら、聖の魔法で古代竜を成仏させた話を出来るだけ詳しく話していた。

「飛翔、魔法障壁、聖光。三つの魔法を同時に展開か。なるほど、素晴らしい才能の持ち主のようだな」

「左様ですな、陛下」

そこで、陛下の言葉に賛同する人物がいたが、その七十歳近い男性は豪華に飾り付けられた司祭服を着ていた。

きっと、教会関係者なのであろう。

しかも王城に出入り出来る立場なので、教会の本部でもかなりのお偉いさんのはずだ。

「ホーエンハイム枢機卿もそう思うか？」

「はい。しかも、これほどの聖光を発動させられる魔法使いは少ないのでは」

聖の魔法は、本当に扱える人間が少ない。

魔法の才能が無くても、教会で聖職者として修行する過程で、己の持つ微小な魔力が聖の属性を帯びる事はそう珍しい事ではない。

当然、そうなった聖書者はこの世界では存在している悪霊などが近寄らないし、聖の力を付与された魔道具を使えば退治も可能となる。

ところが、戦術・戦略クラスの聖の魔法を発動させる事が出来るのは、大抵は聖職者でもない魔法使いだ。

どうしても才能の問題もあるし、別に強力な聖の魔法が使えなくても真面目で清貧な聖職者は世間の支持を受けるし、逆に欲深くて金と権力に執着する聖職者は、やはり世間から冷ややかな目で見られる。

ただ、それだけの事であったのだ。

「ヴェンデリン殿におかれては、後日に聖教会本部において本洗礼を受けるべきかと」

「本洗礼ですか？」

「ヴェンデリン殿は、まだ若いし南部の生まれ。知らなくても当然ですかな」

要するに、俺は田舎者という事らしい。

ホーエンハイム枢機卿からの説明によると、本洗礼とは、簡単に言えば生まれた時に地元の教会で行う洗礼よりもワンランク高いとされている洗礼であった。

しかもこの洗礼、一度地元の教会で洗礼を受けていても行える物なのだそうだ。

具体的な効果としては、世間からは敬虔で優れた信徒だと思われるという事だけ。

別に本洗礼を受けたからと言って、アンデッドが触れるだけで塵になる効果とかは無いそうだ。

あと、王族、大貴族、大商人などは、本洗礼を受ける時に高いお布施をするらしい。

箔を付けたい金持ちな信徒達と、金が欲しい教会側の妥協の産物とも言えなくはなかった。
簡単に言うと、『セレブ向けの洗礼』と言うのが正しいのであろうか？

「（目的は、囲い込みと寄付金？）」

「（寄付金が一番の目的じゃないのさ。簡単に言えば、己の宗派への囲い込みなんだから）」

アルテリオさんが小声で教えてくれたが、要は宗派間の信徒の取り合いらしい。
有名な人や世間で成功した人など、そういう人間が自分の宗派に所属していればそれは宣伝になる。

なお、ホーエンハイム枢機卿は、この国の国教にもなっている正統派カソリックの枢機卿らしい。
他には、最近信徒を増やしている古い清貧の教義に立ち返ろうという新教派プロテスタント。

更に過激な原理主義を打ち出している懐古派、その地方の原始宗教と結び付いた数十はあると思われる自然派各派など。

神は一人のはずなのに、所属している人達で色々と揉めるのは、どこの世界でも同じようであった。
本当、宗教とは厄介な物であった。

「（一度本洗礼を受ければ、他の宗派もおかしな勧誘はかけて来ない。時間が空いたら受けておけ）」

宗派間の仲は悪いが、暗黙の了解で信徒の強奪行為は禁止されているそうだ。
アルテリオさんは、『はい』と言っておけと耳打ちする。

「（わかりました）王都滞在中に伺わせていただきます」

「ヴェンデリン殿も、敬虔な神の子であらせられたか。良かった、良かった」

俺が素直に本洗礼の誘いを受けたので、ホーエンハイム枢機卿は満面の笑みを浮かべていた。
ただ一つ言えるのは、俺が敬虔な神の子ではないという点であろうか？

向こうも、そこまでは期待していないと思うのだが。

「それとな。余からも、そなたに頼みたい事があっての」

「はい、その願いとは何でしょうか？」

「今回、そなたが取得した古代竜の骨と魔石を売って欲しいのだよ」

なるほど、なぜアルテリオさんがオークションにもならないと言ったのか、その理由が良く理解できる。
あまりに高価で貴重なばかりではなく、戦略物資扱いなので絶対に王家が確保しようとすると見抜いていたのだ。

「実は、あの魔石と骨があれば、場所塞ぎの巨大魔導飛行船が動くのでな」

「巨大な魔導飛行船ですか？」

陛下の話によると、現在稼動している魔導飛行船以外に、船体は遺跡から発掘されていても、適度な大きさの魔晶石がなくて動けない船がもう何隻か存在しているらしい。

「王都の郊外に、古代魔法文明時代に造られた造船所跡の遺跡があっての」

俺達が乗って来た魔導飛行船の四倍、全長四百メートル超えの超巨大船がドッグ跡で眠っているらしい。

「小さな魔晶石を連結して動かすという案もあったのだがな……」

極端な燃費の低下に、連結部の異常な加熱で、とても危なっかしくて採用できなかったそうだ。

古代魔法文明時代には当たり前のように普及していた、多数の小さな魔石を材料に巨大な魔晶石を作る方法は、今ではとっくに失われてしまっている。

現在も研究は進んでいるが、まだ目に見える成果は上がっていないそうだ。

魔力が尽きた魔晶石にそれを補充するのであれば、小さな魔石を沢山使用しても、というか魔力の高い人間が複数人で魔力を補充しても結果は同じ。

だが、材料の魔石よりも大きな魔晶石を作り出す事は、いまだに一度も実験が成功していなかった。

大きな魔晶石を手に入れたければ、遺跡に眠っている物を発掘するか、属性竜クラスの強力な魔物から巨大魔石を手に入れて加工するしかなかったのだ。

「他にも、ドックに入っていた船なのでな。色々と部品や装甲などが外されておるのだ」

複雑な構造だったり、製造に物凄い技術が必要なわけでもないのだが、とにかく強度が必要で、それに最適な材料として古代竜の骨は必要らしい。

「古代竜の骨を加工して、それを足りない部品や装甲として利用すれば、巨大魔道飛行船は安全に稼動するのだ。どうだ？　売ってくれるか？」

「はい、それは勿論。喜んで提供させていただきます」

まず、どう考えても断れる情況ではないであろう。

それに、もしここで断っても誰も買ってはくれないであろうし、それで王国に目を付けられれば実家にも迷惑をかけてしまう。

あの実家は俺に親切だったわけではないが、決して虐めたり迫害をした事はなかった。

このまま共に波風を立てないで、俺が独立をすれば良いのだ。

「そうか、それは良かった。それでは、白金貨千五百枚で骨と魔石を買おう」

「陛下！　いくら何でも出し過ぎです！」

陛下の隣にいる、重臣と思われる初老の貴族が買取り金額に異議を唱える。

どうやら彼は、王国の財務を担当している人物らしい。

「世間では、相場であろう？　のう、アルテリオよ。定期的に王国に必要な物を卸している政商のそなたなら、余の考えが正しいとわかるであろう？」

陛下は、俺の隣にいるアルテリオさんに魔石と骨の相場を尋ねていた。

「はい、あの大きさの魔石が白金貨千二百枚を下回る事はありますまい。骨も同様です。竜の骨など、稀に遺跡で出る出土品から剥がして再利用しているくらいではありませんか。あれだけの大きさのを丸々一体分など、何千年後に手に入るのか想像も付きません。骨も、白金貨三百枚は妥当だと思います」

「しかし、予算の方が……」

「あの巨大船の再稼動に計上している予算は、白金貨二千五百枚だと聞いている。材料費に千五百枚。その他諸経費に幾らかかるのかは知らぬが、まさか白金貨一千枚を超えるはずもない。十分に、予算の範囲内かの」

まだ食い下がる財務担当者に対し、陛下は十分に予算内に入っているのだからと自分の考えを曲げないでいた。

「とは申せ、ここで節約がなれば、他の予算不足で遅れている案件や事業が行えるわけでして」

「のう、ルックナー財務卿よ。確かに、予算は無限ではない。同じ事をするのに銅貨一枚でも節約できれば、それに越した事はないのかもしれぬ」

「では、陛下」

「しかしな。ここで功績を挙げた者に対してその褒美をケチるような真似をすれば、それはこれから王国のために貢献しようとする者の士気を殺ぐ事となろう。もし、この者が魔石と骨をオークションにかけたとする。アルテリオ、どうなると思う？」

陛下は、再びアルテリオさんに質問をする。

「はっ、魔石と骨の標準評価額は白金貨千五百枚です。ですが、オークションとなればこれを意地でも手に入れようと考える者も多いはず。私には手が出ませんが、大身の方々なら余裕で白金貨二千五百枚まで競るでしょうね。そして、いかに苦労して手に入れたのかと言いながら、王国に対し高額の手数料を取るでしょう」

通常、商人が依頼された品を競り落とすと、その金額の五％～十％を利益として取る仕組みだ。

なので、手数料がかかった時点でとっくに予算を超えてしまう計算になる。

アルテリオさんは、白金貨千五百枚なら王国側の大儲けであると陛下に説明していた。

「ルックナー財務卿、白金貨千五百枚で材料は全て手に入れた。稼動にあと幾らかかるかの？」

「はい。材料の加工と、機関部への魔晶石の搭載作業。その他部品や装甲の装着作業に、試運転と最終艤装などで白金貨三百枚ほどかと」

さすがは、全長四百メートルの超巨大飛行船。
再稼動にかかる予算を聞いただけで、眩暈がしてくるようだ。

「節約された白金貨七百枚分は、予算の圧縮に成功したルックナー財務卿が、優先したい項目に重点的に割り振るがよい」

「ははっ！」

この一言で、ルックナー財務卿は二度と反論を口にしなくなってしまう。

巨大魔導飛行船の稼動予算をの大幅削減に財務大臣が成功し、その削減した予算の割り振り先の優先権を彼に与える。

陛下の見事な腹芸に、他の廷臣達も、俺も、アルテリオさんも。

もはや何も言えなくなってしまったのだ。

「そうそう、素材の売買の件はただの取り引きに過ぎない。もう一つ、余はそなたに褒美と名誉も与えなければならぬ」

「褒美と名誉ですか？」

「そうだ。そなたは、稼動に白金貨八百枚をかけた魔導飛行船を古代竜のブレスから守ったのだからの。報告を聞くに、ブライヒレーダー辺境伯の所のブランタークも貢献は大だが、そなたがいなければ、いつかは船は落とされていたであろうしな」

確かに陛下の言う通りで、ブランタークさんの魔法障壁は古代竜のブレスを防げたが、防御をしながら攻撃魔法で古代竜に致命的な一撃を与える事は不可能であった。

次第に魔力が尽きて魔法障壁が張れなくなれば、船は古代竜のブレスで破壊されていたであろう。

「その後に、この王都を襲撃されれば大損害であった。普通に考えても、そなたはドラゴンスレイヤーなのだから。それに相応しい名誉を与えなければなるまい」

そう陛下が言うのと同時に、一人の文官が何かを載せたお盆を持って後ろから現れる。

「アンデッド化した古代竜を討ち、魔導飛行船を守った功績により、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターに双竜勲章を与える」

謁見の場はいきなり叙勲の場と化し、俺は陛下から双子の竜をあしらった金とエメラルドで出来た勲章を左胸に付けて貰う。

すると、それと同時に周囲から大きな拍手が起こっていた。

どうやら、かなり名誉な勲章らしい。

前世から表彰などには縁が無かったので、全く調べた事が無かったのだ。

貰えないと思っていた勲章を調べるのに時間をかけるくらいなら、俺は魔法の特訓をする。

そういう男であったからだ。

「続いて、我、ヘルムート王国国王ヘルムート三十七世は、汝、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターに第六位準男爵位を授ける事とする。さあ、バウマイスター卿よ」

「？？？」

「（ヴェンデリン、叙勲の際の宣誓の言葉だ。短いから覚えているだろう？）」

突然の事で硬直していると、横からアルテリオさんが小声で助け舟を出して来る。

「我が剣は、陛下のため、王国のため、民のために振るわれる」

そういえば、小さい頃に母に聞いた事があったのを今思い出し、それを慌てて口にしていた。

まさか、人生でこの言葉を述べる時が来るとは思っていなかったし、同時に俺が剣など振っても大した成果は出ないだろうななどと、つい下らない事も考えてしまう。

「さて、これでバウマイスター卿は王国の臣となった。とはいえ、別にそなたを官職などで縛ろうとは思わん。兄の結婚式に参加し、王都の街を堪能し、冒険者の道を自由に歩むが良い」

立て続けに起こる予想外の事態に、俺はただ流されるだけであったが、とにかく俺はまた大金を手に入れ、勲章と爵位を手に入れたらしい。

そしてなぜか、俺の隣でアルテリオさんが苦笑をしているのが、大きく印象に残るのであった。

第二十九話　エーリッヒ兄さんとの再会。

「簡単に言うと、俺は勲章を貰って法衣貴族になったんですよね？」

「まあ、そういう事だ」

陛下との謁見を終えた俺は、再び馬車で王城から貴族が住む住宅街へと向かっていた。

下級とはいえ他の騎士爵家に婿入りするエーリッヒ兄さんは、現在その区画に居を構えているからだ。

石畳で舗装された道をゆっくりと進む馬車の中で、俺は色々と疑問に思っている事をアルテリオさんから聞いていた。

「まず、その双竜勲章だがな」

王国には、様々な種類の勲章が存在している。

久しく戦争も無いので、そのほとんどが大物貴族に順番に与える儀礼的な物であったり、軍や役所でも、組織運営に貢献した幹部などに順番に与える武勲とは程遠い物であったりと。

前世で、特に貢献した話を聞かないのに、大物政治家や官僚が高位の勲章を貰うのと同じなようだ。

あとは、比較的金を持っている商人などにも与えられる種類の勲章もあった。

これは、彼らが叙勲されたと知ると、その名誉に相応しい国家への貢献という事で孤児院や慈善団体や教会に追加で寄付をしたり、

叙勲を祝って多くの招待客をパーティーに呼んで金がかかったりと。

多分、彼らが溜め込んでいる金を吐き出させる狙いがあるのであろう。

他にもランクの低い勲章は、優秀な職人や、広大な農地の開拓や用水路の掘削などに貢献した豪農。

そして、名を挙げた冒険者なども叙勲の対象になるらしい。

実際にアルテリオさんも、冒険者時代と、つい最近商人としてはソコソコの勲章を貰ったらしい。

冒険者時代のは、ブランタークさんも一緒に貰っている竜退治での叙勲であった。

「名誉は名誉なんだけどな。これが、金がかかるんだよ」

「そうやって、世間に金を蒔かせるんですね」

「そういう事だな。まあ、長期的に見れば利益の方が多いと考えて金を出すしかないのだが」

そして問題の双竜勲章であったが、これは武勲に対して与えられる物で、ここ二百年以上は誰も貰っていない勲章なのだそうだ。

「二百三十七年前、まだアーカート神聖帝国と戦争をしていた頃だ……」

睨み合って膠着状態になっていた両軍であったが、それを打破すべく、アーカート神聖帝国軍が一万人ほどの部隊を迂回させてヘルムート王国軍を後方から奇襲しようとしたらしい。

「それに気が付いた王国軍の名将ビアホフ将軍が、すぐに五千人の部隊でこれを逆撃。撃破後に、敵奇襲部隊の行軍ルートを逆進撃して逆にアーカート神聖帝国軍の後方からの奇襲に成功した。歴史書に記載されているがな」

「俺も、その歴史書は見た事があります」

ビアホフ将軍の逆奇襲によって混乱したアーカート神聖帝国軍にヘルムート王国軍が襲い掛かり、これによってアーカート神聖帝国は二十万人の軍勢の内、十万人を戦死させ、三万人ほどが捕虜になったという。

更に、アーカート神聖帝国軍はその支配領域をかなり後退させた。現在のリンガイア大陸中心部を走る、『ギガントの断裂』と呼ばれる大陸を南北に分断する深さ百メートルを超える亀裂を挟んで、両軍が睨み合う展開になったのだ。

そして皮肉な事に、そのギガントの断裂のおかげで両国は無事に停戦を迎えていた。

ちょうど幅が広くて深い断裂があるので、国境を接する貴族達が僅かな土地や水利権で争わなくなったからだ。

むしろ、同国で領地を接する貴族達の方の争いが大きく感じてしまうほど、両国は小競り合いすらしなくなってしまう。

巨大なギガントの断裂を超えて他国を攻撃する労力に、成果が伴わなくなってしまったからだ。

結果、戦争の意義を失った両国は停戦へとその舵を切っていた。

ここ二百年ほど、戦争が無い理由でもある。

「そのビアホフ将軍以来なんだよ。その双竜勲章の叙勲者は」

「ですが、アルテリオさんとブランタークさんも属性竜を討ったと」

「討ったけどな。別に、その竜は王国に害を成したわけではない。新しい魔物の領域を探索中、たまたま見つけて戦闘になって討っただけ。だから、別の勲章は貰っているさ」

『もしその属性竜が、街でも襲っていたのなら貰えたんだがな』

と、アルテリオさんは語っていた。

「それと、新しい爵位だけどな」

まだ俺は未成年だが、例外として俺のような継承権の無い貴族の子供を別家の当主として独立させたり、小さな娘しか残っていない家に婚約者として他の貴族の子供を入れる際に爵位を継がせたりと。

そういうケースは、たまにあるらしい。

「ヴェンデリンの場合は、単純に功績だけで貴族に任じられただけだがな」

アルテリオさんの話によると、俺は実家のバウマイスター家から籍が抜け、この度新しい別のバウマイスター家の当主になったという事らしい。

「領地は与えられなかったが、年金は出るから法衣扱いだな。準男爵ともなれば、年に金貨三十枚だ。役職には任じられていないから役職給は出ないが、別に王都に滞在する義務はないし、普通にブライヒブルクで予備校に通えば良いのだから、見栄を張る必要も、必

要な経費もほとんどない。楽勝で左団扇だな」

続いて階位の話であったが、これは第一位から第十位まで存在している。

第一位は陛下だけで、第二位は王妃殿下と王子二人と王女二人、第三位は他の王族や公爵のみで、第四位は侯爵と辺境伯、第五位は伯爵と子爵と男爵だが、男爵には次の第六位の者も存在する。

そして第六位は準男爵で、第七位に騎士爵と。

ちなみに、第八位から第十位は継承権が付与されていない。

功績を挙げて昇進した平民出身者か、男爵以上の成人した子供に一代限りで与えるための階位として存在しているようだ。

当然、功績を挙げて昇位しないと子供は平民に転落してしまう結果となる。

ちなみに、つい先程までの俺はその階位すら持っていない。

ここが制度の穴というか、わざとやっているのかもしれなかったが。

準男爵以下の貴族の妻や子供達は、貴族籍にはあって一応は貴族であったが階位は与えられない。

当然年金なども貰えず、爵位を継承できなければ死んだ時点で貴族ではなくなる。

生まれた子供は貴族籍にも入れないので、やはり下級貴族は色々と大変な部分も多いようだ。

「じゃあ、俺って子供に跡を継がせられる貴族になったと？」

「ヴェンデリンの功績は偉大だが、かと言ってその子にも血筋だけ

で過大な待遇を与えるわけにはいかない。子供が並なら、準男爵のままで飼い殺しって事だな。随分と羨ましい飼い殺しなわけだが」

要するに、これからも続けて功績を挙げないと、そう簡単には男爵以上にはなれないという事であった。

「しかし、お前は偉くなったものだよな」

「ええ」

俺の父上は、騎士爵で第七位だ。

今度婿入りするエーリッヒ兄さんも、数年で義父から第七位騎士爵位を継承する。

つまり、俺の方が偉くなってしまったのだ。

「立場もな。いくらヴェンデリンの父親や兄貴でも、立場は同じ陛下から任じられた貴族なんだ。公式の場で、父親や兄貴面して威張ると大変な事になる」

そう簡単に罰せられる事は無いが、貴族同士のネットワークで『貴族の癖に、貴族のルールを理解できないバカ』として村八分の状態になってしまうらしい。

「父上はどうでも良いけど、エーリッヒ兄さんがなぁ……」

一番話が合う兄だったのに、向こうは俺を階位が上の者として扱わなければいけない。

少し寂しさを感じる俺であった。

「公式の場で弁えろだからな。普段は、別に問題はないさ」

そんな話をしている内に、馬車は無事にエーリッヒ兄さんが住む屋敷へと到着するのであった。

「何か、色々と大変だったようだね」

「はい、物凄く大変でした」

約七年ぶりの再会の挨拶としてはどうかと思うのだが、いきなりエーリッヒ兄さんに畏まられた話し方をされても困るので、俺としては良かったと思っている。

さすがは、バウマイスター家で一番理性的で頭の良い兄さんである。

今の俺が置かれた情況を理解してくれているようであった。

「そういえば、ヴェルの友人達には部屋で寛いで貰っているから」

「さすがは、エーリッヒ兄さん」

「さてと、俺はこれで失礼するかな」

「お忙しいところをすいませんでした」

「何の、商人ってのは人脈も重要でな。ヴェンデリンとこうして知り合いになれたんだ。俺からすると、こんなに得した日はねえよ」

口はブランタークさんに似て少し悪かったが、アルテリオさんは俺が陛下の前で粗相をしないように色々と気を使ってくれていた。
陛下と話をする時にも、言葉遣いを瞬時に切り替える器用さもあり、なるほど王都で新参者の商人として成功を収めているわけだと俺は思っていたのだ。

「弟が、お世話になりました」

「さすがは、ヴェンデリン殿の兄上ですな。あなたとも良い縁を結べそうだ」

「しがない零細貴族ですけどね」

「そんなのは、十年後にはわかりませんからな」

俺が無事にエーリッヒ兄さんと会えたので、自分の役割は終わったと感じたのか？
アルテリオさんは、自分の商会に戻ると言って再び馬車に乗り込む。
馬車は、商業街の方に向かって再び動き出していた。

「さあ、案内するよ」

貴族街でも、王城から近い位置に高位の貴族の邸宅が集まり、平民街に近い場所に下級貴族の邸宅が集まっている。
住み分けがちゃんと成されていて、エーリッヒ兄さんの屋敷というか、婿入り先のブラント家は勿論後者の方に属していた。

とはいえ、さすがは王都に住まう法衣貴族の屋敷である。
その門構えは、うちの実家とは比べ物にならない大きさであった。

とても同じ騎士爵家だとは思えないほどだ。

エーリッヒ兄さんに案内されて屋敷に入ると、そこには六十歳前後に見える、ロマンスグレーが特徴の品の良い男性と、四十歳前後のブラウン色の髪の落ち着いた感じの中年女性。

そしてまだ二十歳には見えない、中年女性と同じブラウン色の髪を肩まで伸ばし、瞳も同じ色をした少し落ち着いた感じの美少女が待ち構えていた。

「僕が婿入りをした、ブラント家の家族を紹介するよ」

初老の男性は、現在は当主を務めているルートガー・ヴィレム・フォン・ブラントで年齢は今年で六十二歳。

中年の女性は、奥さんのマーリオン・ヴィレム・フォン・ブラントで年齢は四十歳。

最後に美少女は、ミリヤム・ヴィレム・フォン・ブラントで今年十九歳になるそうだ。

現当主であるルートガーさんは先妻が子供が無いままに病死し、現在の奥さんとエーリッヒ兄さんの奥さんになる一人娘だけが家族だとの話であった。

年齢が年齢なので、下級官吏の試験に受かって部下として配属されて来たエーリッヒ兄さんを気に入り、彼に娘を嫁がせて家を継がせる決意をしたようだ。

「始めまして。バウマイスター卿」

「すいません。公の席ではともかく、こういう場でバウマイスター

卿は勘弁して欲しいのです」

「これは、すみませんな。何しろ、ヴェンデリン殿の古代竜退治の話は現在王都では有名でして。しかし、そんな高名な魔法使い殿がエーリッヒの弟とは世間とは狭いもので」

ルートガーさんは、一部貴族にありがちな傲慢な面もなく、気さくに俺に話しかけてくれていた。

「正直、魔導飛行船ごとブレスで焼かれないように必死だったので」

いくら魔法の鍛錬を続けても、狩りで凶暴な野生動物を相手にしていても、考えてみるとあれが俺の魔物デビューなので相当に厳しかったのは事実であった。

正直、骨竜と戦っている間の事は良く覚えていないのだ。

必死過ぎて、記憶に残っていないのであろう。

陛下に話しをした内容などは、後からエル達やブランタークさんから聞いたくらいであったし。

「あなた。よくよく考えてみると、私ってヴェンデリンさんの義姉になるんですね」

「そう言われるとそうだね」

「宜しくお願いします。お義姉さん」

「私は一人娘だから、義弟って新鮮ね」

エーリッヒ兄さんのお嫁さんは、前世で言うところの癒し系美少女という感じで、この人が義姉なら上手くやっていけそうな気がしていた。

そう頻繁に会えるかはわからなかったが、もう瞬間移動の魔法で王都には自由に行けるので、その可能性はなきにしもあらずであったからだ。

「おっ、もう戻って来たのか」

「貴族に叙任されたって本当？」

「緊張のあまり、陛下の前で失敗しなかった？」

ブラント家の面々と話をしていると、屋敷の奥からエル達が姿を見せる。

どうやら彼らも、俺が王城で爵位を受けた事実を知っていたようであった。

「双竜勲章と第六位準男爵だってさ」

「マジでか。俺を従士にして欲しいわ」

「エルなら、良い腕しているんだから余裕で仕官できそうだけどな」

「ところが、そう簡単な話じゃないんだよ」

「エルヴィン君の言う通りですな。いくら剣の腕が良くても、貴族の家臣採用はコネが重視されますから」

貴族なので、戦時に備えて精強な家臣団を作っておく。
建前としてはそうなのだが、今は戦争が二百年以上も途絶えていた影響で、いくら腕っ節が良くても、そう簡単には新参者が仕官を出来ない情況になっているとルートガーさんは説明してくれる。

例えば、どこかの貴族家で人が不足した時。
まずは、その貴族家の子供を分家して独立させるし、それが駄目でも今いる家臣の子供などを優先させる。
それでも駄目なら、自分の領地に住む平民で腕が立つ奴を雇えば良いので、新参者の出る幕はなかったのだ。

「それでも駄目な時は、寄り親と寄り子の間で融通し合いますから。ですが、それでも紹介状は必須ですよ。その紹介状だって、仕官した人間が不興を買えば紹介状を書いた人間の評価が落ちるのです。まず、良く知らない人のためには書きませんね」

つまり、実家の領地内で何かの職に就けなければ、あとは無人の未開地を根気良く開墾して自分で領地を切り開くか、冒険者になるしか道はないそうだ。

「ヴェルは、このまま予備校に通って冒険者になるんだよな？」

「ああ」

「じゃあ、俺を雇って欲しいな」

「まあ、良いけどね」

「思わぬ幸運だな。これで、ヴェルがリーダーとして指揮を執るのに何の不都合もないわけだ」

「私も、雇って欲しい」

「ボクも！」

「イーナもルイーゼも別に良いんだけど、貴族ってこういうのは有りなんですか？」

「建前としては駄目ですね。ですが……」

王都には多くの下級法衣貴族が存在しているのだが、彼らの半数ほどが公式な役職に就いていないらしい。

貴族の数に比べて、役職の数がかなり不足しているからだ。

それでも最低限の年金は出るのだが、貴族には金のかかる付き合いがあるし、無役職状態を脱しようと金を使ってでも運動を行う貴族も存在する。

そんなわけで、下級貴族の中には副業を持っている者が多数存在していた。

「本当は、駄目なんですけどね。『じゃあ、役職寄越せ！』と言われると困るので黙認しています」

「世知辛いですね」

うちの実家は相当に貧乏であったが、王都にいる下級貴族も色々と大変なようだ。

「だからたまにあるんですよ。副業で冒険者をしていて、仕事中に

死んでしまう貴族が」

正式には魔物に殺されたのが死因なのだが、それを公にするわけにもいかず。

役所と相談して病死という形にし、早く後継者に爵位を引き継がせるように自分達役所の人間が促す事もあるというのが、ルートガーさんからの話であった。

「あれ？　でも、俺の場合はどうなんです？」

「ヴェンデリン殿は、陛下が自由にやっても良いとお墨付きを与えましたからね。魔法使いであるという理由もあるのでしょうが」

貴族も王国も、いくら才能があっても、経験の浅い若い魔法使いは雇わないらしい。

逆に取り合いになるのは、冒険者として名を馳せ、引退後の第二の人生として仕官を望んでいる魔法使いであった。

ただその魔法のみならず、冒険者時代に培った経験や人脈がとても役に立つからなのだそうだ。

うちの師匠や、ブランタークさんなどがそれに当たるようだ。

「陛下からすれば、もうヴェンデリン殿に予約をしたのも同然ですので」

「予約ですか？　あっ！」

そういえば、俺は陛下に叙勲されたので既に王国貴族となっている。

冒険者を引退した後に、『じゃあ、役職を任じるから』で終わっ

てしまうのだ。
逆に、お抱えになる可能性もあったブライヒレーダー辺境伯家の方は絶望であった。

爵位や階位に差があっても、俺もブライヒレーダー辺境伯も王国から任じられた貴族であり、その立場は同じになってしまっている。
なのでブライヒレーダー辺境伯は、もう同僚である俺を雇えなくなってしまったのだ。

思えば、先程アルテリオさんが困ったように苦笑していた理由が良くわかる。
ブランタークさんのせいではないが、主人が目に付けていた人材を目の前で王国に攫われてしまったのだ。

いくら温和なブライヒレーダー辺境伯でも、ブランタークさんにお小言も言いたくなるであろう。

それに気が付いたアルテリオさんは、友人であるブランタークさんを可哀想に思い、あのような表情になってしまったのかもしれない。

「ヴェンデリン殿、友人のお三方ですが、形式だけでも雇われた方が宜しいかと」

ルートガーさんは、俺の形式だけでも三人を雇った方が良いと提案していた。

「ヴェンデリン殿は、無役ながらも準男爵になりました」

その年金は、年に金板三枚。

日本円にすると、約三千万円にあたる。
しかも、今の俺は王都に屋敷すら維持していないし、当然人など誰も雇っていない。

「ヴェンデリン殿が二百年ぶりに双竜勲章を受けたのと、準男爵に叙された件は、もう王都中に広まっていますので……」

当然、現在絶賛無職・ニート中の貴族の子弟が家臣にして欲しいと売り込みを開始するし、平民の子弟なども護衛や召使いなどで雇って欲しいと押しかける未来が容易に想像できるというものだ。

「王国の財政的な理由もあって、現在はそう簡単に貴族家は増やせませんし」

王都にいる法衣貴族家の半数が、ただ年金を貰うニートというのが現実なのだ。
年金の額は知れているとはいえ、それでも誰も表立っては口にしないがただの無駄飯喰らいであると、納税者である平民達からは思われている。

なので、そう簡単に貴族は増えない。

逆に減るケースとしては、いよいよもって養子の当てすらなく断絶してしまう場合。
ただこれは、滅多に無いらしい。
まずどこかに、何とか継承可能な遠い親戚がいるケースが大半で、むしろ候補者達が醜く争う事が多いそうだ。

「それで刃傷沙汰になって、継承の話が消えるケースもありました」

「……」

次に、爵位を取り上げられるほどの犯罪を犯したケース。
ただこの件も、大物貴族は収賄などがあっても誤魔化してしまう事が多いし、収賄なので罰金込みの弁済で済ませてしまうケースも多い。
たまに貴族のドラ息子などが平民などを殺してしまうケースがあるのだが、これも示談という形で大金を積んで終わりという解決方法が多いそうだ。

「たまに運悪く、派閥間抗争の槍玉に挙げられて厳罰に処される間の悪い貴族もいますけどね」

ただこれも、滅多に無いらしい。
あまりやり過ぎると、貴族社会が殺伐としてしまうからだ。

「貴族家が増える理由も同様です。まずは、ヴェンデリン殿のように比類ない功績を挙げた場合」

ただこれも、今は戦争が無くなっているのでほぼ絶望視されている。
たまに発生する領地境での争いで無双をしても、それで王国から賞賛されるわけでもない。
マイナスをゼロにしても、評価が上がるわけもないからだ。

「その兵士なり家臣を雇っている貴族自身が、普通に褒賞を出せば良い話ですので」

あとは、自分で未開地を開拓してそこの領有権を王国に認めて貰う事であろうか。

なお、俺の実家であるバウマイスター家がこれに当たる。

「ある意味前向きな方法ですが、これもなかなかに大変ですからね」

人を集めて何も無い土地を切り開き、そこで税収をあげられるようにする。

言うは易しだが、行うは難しだ。

それにもし成功しても、近場のどこの大物貴族の寄り子になるだとか、隣接してしまった領主と利権などで争いになったりと。

なかなかに苦労するようであった。

「王国は便宜上は騎士爵を与えますけど、村一つで人口百名以下なんて話も珍しくないですね」

そう簡単に内政王になって、領地が急速に発展なんていう美味しい話はないようだ。

あれば、我が実家バウマイスター家などとっくに辺境伯くらいにはなれたであろう。

「そんなわけで、ヴェンデリン殿の元には明日から人が殺到する可能性があります」

仕官希望の貴族の子弟に、雇って欲しい平民の子弟。

そして、娘や妹を嫁にして欲しいと頼み込む貴族や、妾にして欲しいと頼み込む商人や平民など。

俺は、考えるだけで頭が痛くなってくる。

「そこで、三人を形式だけでも家臣にしてしまうのです」

同じ冒険者志望であるし、パーティーメンバーなので、現在新バウマイスター家の仕事など無い今、報酬など払う必要も無からだ。

「そうだな、俺達は報酬なんていらないさ」

「あくまでも、第二の人生への保険よ」

「そうだね。変なご隠居の後妻とかにされるなら、未婚でヴェルの家臣の方が良いし」

もう既に家臣は確保していると知れれば、無理なお願いをしてくる人間は減るはずだ。

しかも、イーナとルイーゼは俺と同年代の女性である。

「失礼ながら、イーナさんとルイーゼさんは陪臣のご令嬢でいらっしゃるとか。なら、余計に好都合です」

「周囲が勝手に、イーナとボクを妾扱いするね」

貴族の当主になってしまった俺は、もし正妻を受け入れるとするとそれなりに家格を合わせる必要があるそうだ。

なので、陪臣の娘である二人はまず除外されてしまうらしい。

「ルイーゼさんの理解が早くて助かります」

「ボクは別に、本当に妾になっても良いけど」

「まあ、最低でも成人になってからだな。俺の食指が動くかは別として」

「ヴェルは言うよね。その頃には、ボクも魅力的な女性になっているさ。せいぜい誑かしてあげるよ」

その後は、エーリッヒ兄さんやブラント家の人々と共に夕食を囲み、他にも色々な話をして夜を過ごしていた。

話の半分ほどが、今日突然貴族家の当主にされてしまった俺に、老練で経験豊富なルートガーさんからのアドバイスになってしまって申し訳が無かったのだが、さすがは王都で長年役職に就いていた貴族。

同じ爵位でも、畑を耕す以外にほとんど何もしない父や兄とは大違いであった。

下級貴族でも中央の空気に触れていて、政治にも貴族の常識などにも敏感なのだ。

「ねえ、エーリッヒ兄さん」

「何だい？　ヴェル」

「ルートガーさんは、うちの父上や他の兄さん達の何十倍も頼りになるね」

「まあ、それは言わぬが華かもね」

就寝前、俺はエーリッヒ兄さんとそんな話をするのであった。

第三十話　エーリッヒ兄さんの結婚。

「よう、久しぶりだな。坊主」

俺が王都に到着し、陛下から古代竜討伐の件で貴族に叙されてから二日後、今日はブラント家においてエーリッヒ兄さんの結婚式が行われる事になっていた。

いや、実はもう正式には、エーリッヒ兄さんはブラント家の人間なのだ。

この世界における結婚式とは、王族や大物貴族でなければ二人だけで教会に行き、そこで神父に報告に行い結婚を認めて貰う。

あとは、役所に書類を提出するだけだ。

なので今日は、二人が結婚した事を周囲に紹介する結婚披露パーティーという位置付けになっていた。

実は、エーリッヒ兄さんとミリアム義姉さんが知り合ってからここまで三年ほど。

十七歳で下級官吏の試験に受かったエーリッヒ兄さんの働き振りを二年間ほど見たルートガーさんが、安心して一人娘を任せられると判断して、その間に地盤固めに動いたそうだ。

そんな面倒な事をした理由は、貴族間の複雑な人間関係や、他の親族からの嫉妬から来ている。

ブラント家には娘が一人しかおらず、跡は入り婿に継がせるしかない。

そういう情報が流れると、爵位と役職目当ての有象無象に、親族と自称親族に縁戚に、寄り親であるモンジェラ子爵なども周囲からせっ突かれて、『こういう婿候補も居るんだけど……』とルートガーさんに持って行く事も多くなる。

例えその候補者が駄目駄目で、推薦するに当たらない人物だとしてもだ。

いきなり駄目と言うと角が立つので、一応は話を持って行かないといけない。

寄り親というのも、なかなかに大変なようだ。

陳情で四苦八苦している、前世の政治家に似ているのかもしれない。

そんな中で、ルートガーさんはエーリッヒ兄さんを選んだ。

当然、面白くないと思う連中は多い。

正式な結婚が遅れたのも、そういう面倒な横槍を調整するのに時間がかかったからなのだ。

『もっとも、今は表立って文句を言う連中は減りましたけどね』

ルートガーさんが言うには、竜を退治して双竜勲章と準男爵位を得た俺の存在が大きいようだ。

以前は、散々にエーリッヒ兄さんを『水呑み貧乏騎士の五男風情』と批判していたのに、今では『竜殺しの英雄の兄で、頭も切れる素晴らしい婿殿』だと掌を返す人も多いそうだ。

嫌な話ではあるが、こんな俺でもエーリッヒ兄さんの援護が出来たのだから良しとする事にする。

『偶然とはいえ、ミリアム嬢の婿の件で強引に横槍を入れないで良かった……。私は、まだ運があるのだと思う』

『うちが、騎士爵家で良かったですな』

『これが準男爵家とかだと、ルックナー財務卿も絡んで来る可能性があった』

『もしエーリッヒ以外の人を強引に送り込んでいても、あの方は平気で竜殺しの英雄と縁を結べなかった件で怒るでしょうしな』

『立場上怒らないと駄目なのだが、言われるこちらは堪らんよ』

これが、寄り親であるモンジェラ子爵の正直な感想だそうだ。

式の前日にブラント邸に来て、ルートガーさんに愚痴を溢していたのをなぜか俺も聞く羽目になっている。

『バウマイスター卿も、他人事ではないのだぞ』と、テンションが下がる教訓と共にだ。

最終的に、婿の選定で決定権を持つのはブラント家当主であるルートガーさんである。

だが、場合によっては、寄り親の力で強引に婿を押し付けるケースも多々発生するらしい。

今回は、運良くそれをしないで良かったと安堵の溜息をついていたのだ。

「今日は、絶好のパーティー日和だな」

「ブランタークさんの場合は、天候よりも酒のような気が……」

「言うようになったな。準男爵殿」

パーティーはブラント家の屋敷と庭で行い、招待客は三百名ほど。この人数は、下級法衣貴族としては標準的な物らしい。

親戚に友人や、職場の同僚に上司。

あとは、ブラント家にはモンジェラ子爵という寄り親がいるので呼ばれているし、その寄り親と同じ派閥からも、数名の中級以上の貴族が呼ばれている。

本人が来るケースと、嫡男などを代理人として寄越すケースと半々なようだ。

一時間後に始まるパーティーに備え、ブラント夫人や屋敷のメイド達が準備にてんてこ舞いな中、俺は庭に設置された会場でブランタークさんに話しかけられていた。

そういえば、ブライヒレーダー辺境伯は自分と同じく文官肌のエーリッヒ兄さんを気に入っている。

ブランタークさんは、彼の代理人としてパーティーに参加しているようだ。

「久しぶりって、まだ二日くらいでは？」

「細かい事は良いじゃねえか。しかし、お前さんが準男爵ねえ」

「自分が、一番驚いていますけどね」

「それだけの功績を挙げたって事だな」

ブランタークさんは、うんうんと一人で勝手に頷きながら納得していた。

「ブランタークさんも功労者なんですけど……」

「俺はほらよ、オマケの類だろう？」

「ですが、古代竜の骨と魔石の代金の一割を受け取る権利があります」

ブランタークさんが魔道飛行船を守ってくれなければ、俺の功績は、片手落ちも甚だしい結果になっていたであろう。

それに、アルテリオさんが陛下にブランタークさんが報酬の一割を受け取るのが妥当だと進言し、陛下もそれを是としている。

なので、ブランタークさんには白金貨百五十枚を受け取る権利があるのだ。

「というわけで、白金貨百五十枚です。本当に、半分いらないんですか？」

「俺はもう四十八歳なんだぜ。老後の資金と酒代としては十分じゃねえか。それによ。俺自身にもそれなりに資産があるんだよ」

そう言いながら、ブランタークさんは自分の資産額を口にしていたが、そのあまりの金額に俺は驚きを隠せないでいた。

「俺の冒険者時代のパーティーは、半端なく稼いだからな」

超一流の魔法使いであるブランタークさんに、あの強かなアルテ

リオさんがいて属性竜まで倒しているのだ。
さぞや稼いだのであろうと、俺は思ってしまう。

更に、一時期はうちの師匠も新人教育の名目でパーティーに加わっていたらしい。
きっと、物凄い戦闘能力を持ったパーティーだったのであろう。

「他のパーティーメンバーも、適当に貴族様に仕えたりして第二の人生を歩んでいるのさ。だから、俺はこの分け前で文句は無いな」

そう言いながら、ブランタークさんは俺から白金貨百五十枚の入った袋を受け取り、それを無造作に魔法の袋に放り込んでいた。

「良い飲み代が出来たぜ」

「酒蔵ごと買うつもりですか？」

「それだと、同じ種類の酒ばかりになるからな」

そんな話をしている間に、パーティー開始の時間は着々と迫っていた。
屋敷に庭にはテーブルが置かれ、そこには沢山の豪華な料理や酒が並ぶ。
さすがは貴族の結婚披露パーティーとでも言うべきか、寄り親でもある中級以上の貴族も招待しているので当然ではあるのだが。

「貴族って、大変ですね」

「冠婚葬祭でケチる貴族なんて、バカにされるからな」

普段は質素な生活を送り、懸命に貯めたお金でここぞという時で使って、貴族として相応しい振る舞いをする。
中級以下の貴族は、概ねそんな感じのようだ。

「招待される側も大変なんだよ」

ブランタークさんの視線の先には、庭に繋がる部屋の奥に積まれたご祝儀が山と積まれていた。
さすがに現金の入った袋は無かったが、品質の良い夫婦が生活に使いそうな品々や、衣服や宝飾品など。

確かに、寄り子から招待されて寄り親が手ぶらで来るわけにもいかず、安いお祝いだと恥をかいてしまうわけで、金銭面での苦労は大きいのであろう。
長年の慣習で相場が決まっていて、それに合わせて手痛い出費を迫られるのだそうだ。

「しかし、無いなぁ……」

「何が無いんですか？」

「無いと大問題になるやつが」

ブランタークさんの発言に首を傾げていると、そこに正装に着替え終えたエーリッヒ兄さんが現れる。

「お久しぶりです。ブランタークさん」

「おう。うちのお館様も、本当は来たがっていたんだがな」

「ブライヒレーダー辺境伯様は、仕方が無いですよ」

「まあ、ブラント家の寄り親とのバランスもあるからな」

確かに、今回の結婚式はブラント家側が主役なのに、その寄り親を超える辺境伯が婿養子の客として来るのはバランスが悪い。

理解は出来るのだが、俺は余計に貴族の面倒臭さを実感していた。

「ところでよ。バウマイスター家側からの祝儀は来てないのか？」

「それが、手紙で何度も催促したんですけど……」

「おいおい、本当なのかよ。こんな事が、うちのお館様に知れたら……」

いつもは飄々としているブランタークさんが、この時ばかりは不安そうな表情を浮かべていた。

「あの、どういう事なんです？」

「エーリッヒと坊主の父親が、持参金を送って来ないんだとよ」

貴族同士の結婚の場合、普通は嫁を受け入れる家が嫁の実家に結納金を支払い、嫁も実家から持参金や結婚生活に必要な家具や衣服などを持参する。

その相場は双方の家柄によって大体決まっているのだが、細かくて面倒なので今は説明はしないでおく。

あと、エーリッヒ兄さんのように婿入りする際にも、婿を受け入れる家は婿の実家に持参金を持って行くし、当然婿の実家もそのお返しで祝儀を送るのは当たり前の風習になっていた。

ところが、なぜかまだバウマイスター家側から祝儀が送られて来ていないらしい。

「拙いんですよね？」

「当たり前だ。こんな無礼が許されるはずがない」

エーリッヒ兄さんも大恥をかいてしまうし、ブランタークさんの態度を見ればわかるが、寄り親のブライヒレーダー辺境伯まで大恥をかいてしまうのだ。

しかし、ここまでバウマイスター家の連中が空気を読めないとは思わなかった。

さすがは、王国最南端のボッチ貧乏貴族家とでも言うべきなのであろうか？

「遠方ですからね。荷が届かないとか？」

「いや、それはありえん」

こういう場合、遠方なので嵩張る物は送らないので、金貨や宝石などを一族の誰かが持参するのが当たり前らしい。

父が直接来るという可能性は低いが、家臣か、エーリッヒ兄さん以外で独立していない兄弟の誰かが来るのが普通なようであった。

普通なのに、まだ来てはいなかったのだが。

「困りましたね」

まさかこんな事態になるとは、エーリッヒ兄さんでも想像がつかなかったらしい。

それに、バウマイスター家は普段は貧しくても貴族なので、こういう儀礼的な物に金を惜しまないはずなのだ。

一体、どうしてしまったのであろうか？

そんな事を考えていると、俺達の元に二人の若い男性が現れる。

エーリッヒ兄さんが招待した、バウマイスター家の三男パウルと、四男のヘルムートであった。

二人は既にバウマイスター家の継承権を放棄し、この王都で警備隊に勤めている。

年齢はそれぞれに二十六歳と二十四歳であったが、共にまだ独身のようであった。

奥さんがいれば、当然一緒に来るのが当たり前だからだ。

「結婚おめでとう。エーリッヒ」

「おめでとう」

「ありがとうございます。パウル兄さん、ヘルムート兄さん」

俺はほとんど話した事が無い二人の兄達は、エーリッヒ兄さんにおめでとうを言っていたが、その表情にはどこか優れない物があった。

「どうかしたのですか？　兄上達」

「ヴェンデリンか。実は、困った事になってな……」

「今、王都はお前の話題で持ちきりだが、それを興味本位で聞いている余裕すら吹き飛ぶほどな」

正直、今まで碌に話をした事が無いので声をかけるのが不安だったのだが、二人の兄達は俺に特に隔意を抱いているわけでもないらしい。

実家にいた頃は、あまりに年が離れていたので話をするタイミングが難しかったようだ。

そして二人には、ある懸念が存在していた。

「実は、こんな手紙が実家から届いてな」

三男パウルが取り出した手紙を、エーリッヒ兄さんが読み始める。暫く紙面を真剣に眺めていたが、すぐに溜息をついていた。

「エーリッヒ兄さん」

「困った……」

エーリッヒ兄さんは俺にも手紙を見せるが、そこにはとんでもない内容が書かれていた。

要約すると、まさかエーリッヒ兄さんが同格の騎士爵家に婿入りするとは思わず、しかも今まで貯めていたお金は長男クルトが結婚

する時にほとんど使ってしまっていて、正直なところ出すお金が無い。

更には、王都まで祝い金を持っていける人間もいない。

そこで、お前達で立て替えておいてくれと書かれていたのだ。

加えて、そもそもお前達に独立準備金を出したから金が無いわけで、立替えくらい当たり前とまで書かれていて、かなりイラっと来る手紙だ。

しかも、紙面はひらがなとカタカナだけなので異常に読み難い。

筆跡からすると、どうやら長男のクルトが書いたようだ。

ちなみにお前達とは、パウルとヘルムートの事である。

「無茶にも程がある」

あまりの無責任な文面に、俺はただ呆れるばかりであった。

そもそも、兄達が勤める警備隊の給料などたかが知れているのだ。

年に金貨が三枚から四枚で、この金額だと地方では普通に暮らせるが、大都市で物価の高い王都ではギリギリの生活を強いられる。

更に、その中で結婚資金まで貯めるのだ。

祝儀の立て替えなど、まず不可能であった。

「クルト兄さんと親父は、王都で警備隊員風情の俺達に何を期待しているんだろうな？」

「知らん」

更に言えば、兄達は成人して実家を出る時に継承権を放棄する条件として、父から幾ばくかの独立準備金名目の侘び金を貰っている。

つまりもう縁は切れているので、バウマイスター家のために金を出す必要など全くないのだ。

「クルト兄貴の結婚式で、金を使い過ぎたんだろうな」

そこで、彼らにとっては予想外のエーリッヒ兄さんの婿入りだ。出せる金など無いのであろう。

「エーリッヒ兄さんも、実家を出る時に継承権の放棄を条件に準備金を貰っていましたよね？　だから、これで終わりと考えているのでは？」

「いや、そんな理屈は通用しない」

俺に考えに、ブランタークさんがすぐに反論する。

「貴族家の継承をしない結婚なら、わざわざ祝いなんて必要ないんだよ。だが、エーリッヒはブラント家の次期当主になるんだぞ。言わば、家を譲って貰うんだ。普通なら借金をしてでも祝儀は出す」

「その借金を、ブライヒレーダー辺境伯様が断ったとか？」

「それはねえよ。頼まれれば絶対に貸すさ。貸さないでバウマイスター家が祝儀を出さなかったら、お館様も恥をかくからな」

「なるほど」

ブランタークさんの意見に多くの人が賛同していたが、今はそんな話をしている場合ではない。

バウマイスター家の、おバカな行動を咎めている時間が惜しいのだ。
とにかく、あのご祝儀置き場にエーリッヒ兄さんが恥をかかないくらいのお祝いを置かなければいけないのだ。

「あの、俺が出します」

「そうだな。幸いにして、坊主には金があるしな」

「相場を教えてください。それと、物品もですよね？」

予備校入学前に、未開地や海などで魔法の訓練がてら狩りや採集や食品の製造などもしていたので、その中で使える物があれば魔法の袋から取り出せば良い。
無ければ、アルテリオさんに頼むという線もあった。
あの人なら、祝儀に相応しい品物でもすぐに揃えてくれるはずだ。

「ヴェル、すまない」

「うちも、バウマイスター家ですから。一家の当主として、兄さんの祝いを出さないのも変でしょう？」

エーリッヒ兄さんとは兄弟の中で一番仲が良かったし、これはエーリッヒ兄さんの問題だけで終わらない。
寄り親のブライヒレーダー辺境伯の面子も丸潰れだし、残り二人の兄達の将来にも関わって来るからだ。

今回の婚姻で、エーリッヒ兄さんがブラント家の人間になれば、

役所で財務関係の仕事をしている下級法衣貴族達や、その上司や、寄り親や、同じ派閥の幹部をしている中級貴族などと繋がりが出来る。

もしそうなれば、エーリッヒ兄さんのように貴族家への婿入りは不可能でも、その分家や家臣の家に婿入りが可能になるかもしれないのだ。

「というか、中央とコネを繋ぐチャンスなんじゃないの？」

今まで、うちの実家のあまりのバカさ加減に黙っていたエルがボソっと漏らしていた。

「ああ、エルの坊主も、騎士爵家の子だものな」

ブランタークさんは、エルの考えに納得したような表情をする。

「ええ、ここで普通に親戚付き合いをしておけば、何か中央に頼まないといけない時にツテが出来るじゃないですか」

たまにではあるが、地方の小領主だって中央に陳情などをする事もある。

ただ、中央からすればその件数は膨大なので、どうしても順番待ちが長くなってしまうのだ。

ようやく出番が出来て陳情しても、『無理です』と簡単に却下される事も多い。

そこで、中央の下級法衣貴族と婚姻関係を結んで親戚付き合いをするのだ。

何か頼みたい事があると親戚に頼み、頼まれた下級法衣貴族が寄り親や同じ派閥の中級貴族などに頼む。

なるほど、人脈は宝とは良く言ったものだ。
当然この関係を維持するのには少々の経費がかかるが、この費用をケチるようでは貴族としては問題アリであろう。

「普通の貴族ならそう考えるよな。だが、あのバウマイスター家はちょっと例外なんだよ」

「どういう事なんです？」

「あそこは、物凄く引き篭もり体質なんだよ」

ブランタークさんがエルの質問に答えるのだが、それはバウマイスター家の興りにも要因しているらしい。
初代は、王都に居を置く役職すら無い貧乏騎士爵家の次男であり、そんな環境を嫌って南部へと向かったそうだ。

無人の未開発地を開墾して村を作り、そこを自分の領地として王国に認めて貰おうとしたのだ。

その苦労は並大抵の物ではなかったが、次男以下が領主になるには一番確率が高い方法ではある。

初代は、あの山脈を越えた盆地に村を作るのにちょうど良い土地を見つける。
北部と西部は山脈で他領と隔たっていて、東部と南部には広大な未開発地と海が広がる、広さだけで言えば小国並みの土地。
お隣さんがいないのも、無駄な領地や利権争いをしなくても良いので好都合だったようだ。

本拠地を確認した初代は、実家のツテで王都に住む貧民などから移住者を募り、自ら泥に塗れて開墾に精を出した。
そして、それから四代百年以上。

四代目が、今の領主である父らしい。
前に、家系図で確認していたのだ。

「しかし、百年もかけて人口八百人。村落三つですか。多いのか少ないのか……」

「騎士爵にしては多い方さ。追加で、移民を募ったようだし」

なら財政的にはもっとマシな気もするのだが、そこであの痛恨の出兵が発生している。

「元から、バウマイスター家の当主ってのは寄り親とも疎遠なんだよな。まあ、そう頻繁に顔を合わせられないってのもあるけど」

寄り親が必要なので、仕方なしに一番近くにいたブライヒレーダー辺境伯に頼った。
だが、やはり物理的に山脈を隔てて孤立しているので、あまり懇意でもない。
引き篭もっても自給自足で生きていけないわけでもないので、余計に引き篭もり体質になってしまったのであろう。

「先代お館様の、出兵強要も良くなかった」

可愛い跡取り息子の病気を治す霊薬の材料を求めて、先代ブライヒレーダー辺境伯は、バウマイスター家に大きな負担をかけた。

「これが決定的となって、余計に孤立への道に進んでしまったんだな。俺も、その辺の事情は今のお館様に聞いたんだけど……」

「それでですか。ブライヒレーダー辺境伯に金を借りなかったのは」

引き篭もっているから、中央との繋がりなんていらない。

金なんて無いし、それをブライヒレーダー辺境伯家から借りるなんて真っ平御免。

この件でバウマイスター家の評判が落ちても、それで何か罰があるわけでもない。

法に触れたわけでもないし、辺境にいるバウマイスター家の貴族としてのマナー違反など、王都に住む貴族達はすぐに忘れてしまうであろう。

大身なので、ブライヒレーダー辺境伯はご苦労様。

多分、こんな風に思っているらしい。

「完全な開き直り……」

俺も、エル達も、ブランタークさんも、三人の兄達も。

実家であるバウマイスター家の意図に、ただ絶句するのみであった。

「拙いなんて話じゃねえ！」

「ブランターク様、ブライヒレーダー辺境伯家は、バウマイスター家に懲罰で兵を向けるとか？」

「この程度の理由で、兵なんて送れるかよ」

ただ、イーナの懸念もわからないでもない。
貴族とは、体面やプライドを大切にする生き物だからだ。

だが、あの山脈を越えて軍を送る難しさは前の失敗を見れば明らかだ。
魔の森への進軍とは違って山さえ越えれば良いのだが、超えてから八百人の住民が防衛戦闘を行うので、戦闘は悲惨な物となるであろう。
現地での物資の補給は不可能だし、多大な犠牲を出して勝利したとしても、今度は山一つ超えた占領地を復興しながら統治しないといけない。

もしそんな事をしたら、ブライヒレーダー辺境伯家の財政もまた傾いてしまうのだ。

「その辺も、見透かしているんでしょうね」

「まあ、並の頭をしていれば気が付くからな。あとは、嫡男継承への異常なまでの拘りと、才能ある下の子供への反応を見ればわかるか……」

閉鎖的な領地なので、思考が完全に保守的なのだ。
ただ領主を頂点とするピラミッドを維持する事に傾注しているので、嫡男継承に拘るし、その秩序を乱す可能性がある下の子達には素っ気無い。

虐めや虐待は無かったが、それは彼らからすれば最大限の優しさでもあり、それ以上の優しさなど必要ないと考えているのであろう。
こうなると、中身がおっさんなのも考え物だ。
そういう気持ちが理解できるからこそ、俺は家族と距離を置いた

のだから。

「エーリッヒなら、あの村をもっと発展させられただろうな。あとは、坊主。お前もだ」

魔法が使える俺が、もし当主になったらと。
実際、名主のクラウスに懇願もされている。

「あとは、エーリッヒ兄さんが当主になり、俺がそれを手伝うパターンですね」

「むしろ、その可能性を感じて怖かったんだろうな。お前らは、仲が良いみたいだし」

俺は、自分の魔法の才能についてはある程度自信を持っている。
しかし、領地を治める領主としては未知数だ。
そんな物は、やってみないとわからないのだから。

なので、エーリッヒ兄さんが領主をしてくれるのなら、俺は喜んで家臣になったであろう。

「あれ？　でも、普通は子供にこれだけの魔法使いが出たんだよ。お抱えにしない？」

「そんな事は簡単さ。無理だからだよ」

ルイーゼの意見を、ブランタークさんは真っ向から否定していた。

「いくら坊主が子供でも、坊主レベルの魔法使いを雇うのに幾らかかると思っているんだ？」

「でもそれは、家族価格でとか」

「無理に決まっているだろうが。ルイーゼの嬢ちゃんよ。もしお前さんが、実家に魔闘流の師範として物凄い安金で扱われたらどう思う？　お前の親や兄弟が、『この給金で問題ないよね。家族だし』って言ってな」

「さすがに、それは……」

そんな肉親の情を盾に搾取される関係など、長く続くはずもなかった。

「だろう？　それに、もし最初はそれで何とかなっても、坊主が逃げれば終わりだろうが」

引き止めようにも俺の方が圧倒的に強いのだし、そんな不手際で魔法使いを失えば領民からも不満の声が出るはずだ。

「どのみち、相場の給金は出せないんだ。なら、最初から雇わない方が良い」

更に、そこでエーリッヒ兄さんが当主になったらという話に戻るが、兄さんなら出来る限りの待遇にしようと努力するし、それがわかる俺は彼に手を貸していたであろう。

何しろ俺は自分で簡単にお金が稼げるのだし、出世払いという契約でも良いのだから。

だが、あの父やクルト兄さんのための無料奉仕は御免被る。

これが本音でもあった。

「要するにだ。そんな理由が重なって、祝儀に関しては絶望的だと。坊主、お前さんが出してくれ。あとで、お館様が全額返すから」

「わかりました」

別に返して貰わなくても良いのだが、それを言うとブライヒレーダー辺境伯様の面子を潰してしまう事になる。

新バウマイスター家当主として俺が出す分以外の分は、遠慮なく返して貰う事にした。

「すいません、ブランターク様」

「俺達は、金がなくて……」

「いや、この件はお前達の実家の方がおかしい。独立準備金まで出した息子達に祝儀の立て替えなんて、滅多に聞かないからな」

兄達はブランタークさんに謝っていたが、確かにこの件で彼らを攻めるのは酷だ。

それに兄達は、自分達が出来る範囲でエーリッヒ兄さんにもう祝儀を出しているのだから。

「ええと、祝儀の相場って幾らなんですか？」

「このケースだと、騎士爵家で金板一枚だな。だが、金貨を半分で、あとは金額分の物品も混ぜるのが普通だ」

パーティーの間、招待客に見えるように置くのだから当然とも言

えた。
あとは、両家との繋がりを演出する物なので、自分の領地から産出する物品も混ぜるとベターなのだそうだ。
結納で、三方の上に昆布やスルメとかが乗っているのと同じ感覚なのであろうか？
「実家の特産品ですか？」
「そこまで厳密に考える必要はねえよ。その地方の品で良いのさ。魔法の袋に無いのなら、アルテリオに用意させるか？」
「アルテリオさんは、商人ですしね。でも、彼は招待されていないんですね」
「そりゃあそうさ。坊主繋がりでブラント家と縁は出来たが、それまではお互いに顔すら知らなかったんだから。それとな……」
実は、エーリッヒ兄さんのパーティーに急遽参加したいと希望する貴族や商人などが、それこそ処理し切れないほど発生したらしい。
原因は、主に俺であったようだが。
「お前と縁を繋ぎたい連中が殺到してな。だが、これはエーリッヒの結婚パーティーなんだ。こんな失礼な話も無いから、俺がルートガー殿と捌いておいたから」
「仕事してたんですね……」
「当然だろう。というか失礼賃に酒を騙れや」

「酒ですか？　ありますよ」

祝儀をどんな物品で飾ろうかと迷っていたところだったので、俺は魔法の袋から酒が入った瓶を取り出し始める。

醸造や発酵を魔法で再現する実験の成果で、材料は野イチゴ、山ブドウ、砂糖、米、麦、などであった。

一応、ワイン、果実酒、ラム、焼酎、エールなどのつもりだ。

「へえ。坊主は、使える魔法の種類が多いんだな。どれどれ……」

早速試飲を始めるブランタークであったが、変な失敗作を祝儀にするわけにもいかないので、ちょうど良かったとも言える。

俺はまだ未成年なので、酒は飲めなかったのだ。

「良い味だな。超一流の名酒には少し劣るが、これなら毎日の晩酌にも十分だ」

最初に出した分は全てブランタークさんが自分の魔法の袋に仕舞ってしまったが、まだ沢山あるので全部の種類を何本かずつ出す。

「この酒瓶も、魔法で作ったのか？」

「はい」

「お前、アルよりも魔法の引き出しが多いな。羨ましい限りだぜ」

ガラス瓶はちょっと無理だったので、瓶は全て陶器製である。

瓶と言うよりは、陶器製の容器と言った方が正確であろう。

密封は、未開地にコルクの木があったのでそれで行っているし、

容器の方も、造作などはなるべく形を整える努力をしたが、酒が漏れなければ良い程度の出来でしかない。

芸術性など、皆無であると保証できた。

次は、あの山ほど作っていた塩の入った甕も十個ほど出しておく。内陸部にある王都では塩が高めなので、これも喜ばれるはずだ。

続けて、砂糖の甕も同じ数を置く。

これも南部が主産地なので、王都ではやはり相場が少し高いのだ。

あとは、麦や米の袋に、以前に狩って皮をなめして貰った熊や鹿の毛皮など。

あとは、エーリッヒ兄さん向けにブライヒブルクの武器屋に注文していた弓矢なども置いておく。

お嫁さんには、女性に何を送ったら良いのかわからなかったので、以前にブライヒブルクで購入した絹布の反物と、未開発地で採集した瑪瑙や翡翠の原石を置いていた。

「こんな物ですか？」

「坊主も、今では一家の主だからな。二家分なら十分だろう」

祝儀置き場に指定されたスペースは、ようやく全てが出揃って埋まっていた。

俺が祝儀の品を置かなければ婿側のスペースがスカスカで、エーリッヒ兄さんが大恥をかくところだったのだから。

「本当に、父や兄は俺達の事なんてどうでも良いんだな……」

「領地に引き篭もっていれば、外部からの評判なんて聞かないで済むからな……」

あまり話した事もないパウル兄さんとヘルムート兄さんであったが、さすがに哀れに思えてしまう。

「済まないな。ヴェンデリン」

「いえ、俺も祝儀は出さないといけなかったので。一応、手紙で父上に立て替えた分を催促しておいてください」

「無駄だろうがな」

「形式上、一応はしておかないと」

「そうだな……」

自分の息子達に祝儀の立て替えを頼むなどと言う、前代未聞な事をしたあの父に、立て替えた分の請求をしても１００％返って来ないのは確実だ。

それでも、一応は催促の手紙を出しておくようにと、俺は兄達に頼んでいたのだ。

「ヴェル、申し訳ない」

「エーリッヒ兄さんは何も悪くないのですから」

結局俺は、二家分の祝儀を金貨と物品で金板二枚分ほど出していた。

だが、以前から師匠の遺産やら、子供の頃からコツコツと未開地で採集・製造していた物もあったし、つい二日前には白金貨千三百五十枚を陛下から貰っている。

そのくらいの出費なら、気にもならなかったのだ。

「いや、そっちではなくてね……」

「そっちではない？」

どうやら、エーリッヒ兄さんの言う申し訳ないが祝儀の話ではない事に俺が気付くのは、式が始まってからになるのであった。

第三十一話　ヘルムート王国貴族事情。

「はあ……。疲れた……」

その日の夕方、エーリッヒ兄さんの結婚披露パーティーは無事に終わっていた。

花嫁さんも含めて、エーリッヒ兄さんは役場の同僚や友人達から暖かい祝福を受け、エルやイーナやルイーゼもそれに混じって楽しい時間を過ごしていたようだ。

「大変だな。やっぱり、モンジェラ子爵がしつこかったのか？」

「いや、あの人は抑えに回ってくれたんだ。おかげで、アレでもマシだったんだから」

一方の俺はと言うと、式の間中ずっと多くの参加者達に囲まれ続けていた。

この時になって、俺はようやくエーリッヒ兄さんの謝罪の意味を知ったのだ。

俺がブランタークさんと古代竜を退治した話は、ほぼ正確に僅かな時間で王都中に広まっていた。

ブランタークさんが自分の魔法では古代竜は倒せないと知り、魔道飛行船に留まって船の防衛に努めた事や、古代竜を昇天させた聖魔法を撃ったのは俺だと言う事実まで。

おかげで、いちいち人に『その話は違います』という手間が省けた分。

俺は、彼らパーティーの参加者達に新しい玩具の如く弄られ続けてしまう。

まさか、今日自分達が参加する結婚パーティーに、噂の竜殺しが参加しているとは思わなかったのであろう。

更に、花婿の実の弟であったという事実もだ。

目敏く気が付いた連中の中には、どうにかパーティーに参加して俺と接触をしたいと考えた貴族や商人もいたらしく、彼らの無理な懇願を上手く波風立てないように断ったのが、ルートガーさんとブランタークさんと、ブラント家の寄り親をしているモンジェラ子爵であった。

背は百九十センチほどで高いが、その体は細身で肌も白く、いかにも官僚と言った面持ちの四十歳ほどに見えるモンジェラ子爵は、大切な寄り子の結婚披露パーティーなのに俺が主役みたいな結果になるのを失礼だと感じたらしく、定期的に長時間俺に食い下がる連中を連れ出してくれたのだ。

なるほど、そういう細かい配慮が代々官僚を務める家に相応しいようにも見えた。

「モンジェラ子爵様に感謝だな」

式の間、酷い連中は、せっかくのエーリッヒ兄さんの正装姿や花嫁さんのドレス姿に視線すら向けず、俺に一方的に話し続けていたのだ。

家臣や使用人候補として、自分の知り合いや子供を紹介したり、妾でも良いからと自分の娘を紹介したり、酷いのになると怪しげな

投資話や借金の申し込みだったりと。

おかげで最初は、エーリッヒ兄さんに申し訳ない気持ちで一杯だったのだ。

ただ、俺が苦労している横で、エル達も混ぜて楽しそうにしている時点でその申し訳なさはかなり薄らいだのだが。

「お前ら、楽しそうだったな」

「まあね」

その後パーティーは無事に終わり、俺はブラント家が用意した客室のベッドの上で寝そべりながらエルと話していた。

エーリッヒ兄さんの計らいで、王都滞在中はこの部屋に泊まれる事になっていて、俺とエル、イーナとルイーズで二人部屋が二つ割り当てられていた。

「一応家臣なのに、助けにも来ないで」

「今はまだ名目上だけだし、給金も貰っていないからな」

「正論なだけに、何も言い返せない」

エル達が名目上の家臣になっているのは、俺に群がるであろう五月蝿い就職希望者を避ける狙いがあるからだ。

今は同じ冒険者志望で、パーティーメンバーでしかない。

家臣としての実が伴うのは、俺達が冒険者を引退してからになる予定であった。

「しかし、ヴェルもこれから大変だな」

「王都から離れれば……」

「どうせそんな事も無いから、夏休み中は王都の観光でも満喫していたらどうだ？」

突然ドアがノックされたので開けると、そこにはブランタークさんが立っていて、しかも俺達の会話が聞こえていたようだ。

突然、そのような事を言ってくる。

「えっ？　そんな事も無い？」

「ああ、これから坊主の争奪戦が始まるんだよ。おかげで俺も、暫くは王都で坊主達の御守りだからな。楽だから良いんだがよ」

突然古代竜を討伐し、その功績でここ二百年以上も叙勲者がいなかった勲章と、準男爵位を与えられた若者がいる。

更には、その若者は討ち取った古代竜の骨と魔石の売却で莫大な富を得た。

ならば、この国の富と権力を司る貴族達の考える事は一つだ。

「押し掛け家臣に、嫁・妾志望者なんて序の口なんだよ。まず、争いになる件がある」

「誰が寄り子にするかですよね？」

「おおっ！　エルの坊主は、意外と知恵が回るんだな」

「微妙に傷付くなぁ……」

「すまんすまん。これで、俺が坊主達に付いている理由がわかったよな？」

寄り親と寄り子。

この制度を一言で言えば、貴族社会の本音であろう。

騎士爵も公爵も、王家から爵位を与えられた貴族達は同じ王家の臣である。

これが建前とすると、経済力は一つの村から税を徴収できる程度で、動員できる兵員は数十名の騎士爵と、その領地と経済力は小国にも匹敵し、その動員兵数が万を超える辺境伯や公爵が同じ立場であるわけがない。

これが、本音の部分であろう。

それと、あまりに多過ぎて王国でも管理が面倒な騎士爵と準男爵などを、中央と地方の上級貴族に管理させる。

王国側のこのような思惑もあって、この制度は王国の成立直後から続いていた。

俺の実家であるバウマイスター家の寄り親は、当然ブライヒレーダー辺境伯である。

理由は、王国南部を取り纏めているのがブライヒレーダー辺境伯家だからという理由が大きいが、普通は領地持ち貴族は近場で固まるし、中央の法衣貴族も世襲している役職などで固まっているのが普通だ。

実際、エーリッヒ兄さんが婿入りしたブラント家も代々財務関係の仕事に就く事が多く、寄り親はルックナー財務卿の腹心であるモンジェラ子爵という事になっていた。

「でも、変ですね。ヴェルの寄り親なら、ブライヒレーダー辺境伯様に優先権がありませんか？」

「普通に考えるとそうだな。だが、そう考えない奴がいるんだよ。しかも、その考え方が間違っているわけでもないしな」

簡単に言うと、俺はブライヒレーダー辺境伯の寄り子であるバウマイスター家の出で、今は冒険者を目指してブライヒレーダー辺境伯領内にある予備校に通っている。

卒業後は、ブライヒレーダー辺境伯領内を含む南部が活動エリアになるであろうし、となれば俺を寄り子にする権利はブライヒレーダー辺境伯にあると考えるのが普通だ。

「本当は、お館様は坊主をお抱えにしたかったんだがな。あの食えない陛下の横槍で、直臣にされちまったが」

そう、準男爵となった俺はブライヒレーダー辺境伯と同じく王国貴族なので、ブライヒレーダー辺境伯の家臣にはなる事が出来ない。

しかし、その事を意図して俺を貴族にしたのだとすると、やはりあの陛下は相当に食えない人のようだ。

「坊主が誰の寄り子になっても、陛下は何も言わないだろうけどな。万が一の時には、王家の方が優先権があるんだから」

寄り親の命令よりは、主君である王家の命令。

まあ、当然であろう。

「じゃあ、ブライヒレーダー辺境伯様が寄り親で決まりなのでは？」

「ところが、そういうわけでもない」

まず、俺が領地を持たない法衣貴族扱いなのが問題らしい。

「坊主のように、過去にも功績を挙げて同じような形で叙勲された例は多いんだよ」

功績が大きいから、貴族にして年金とそれを子孫に継承させる権利を与えた。

だが、領地は無いし、何かの役職に任命されたわけでもない。

年に一度は年金を王都に貰いに行く必要があるが、あとは基本的に何をしていても自由。

俺のような立場の貴族は、実は結構な数存在しているらしい。

「領地があれば、その地方で顔役になっている中級貴族とか、ブライヒレーダー辺境伯様のような方面を統括する大物貴族の影響下からは逃れられないからね。選択肢は縮まるものなのさ」

続けてドアがノックされ、今度はパーティーも終えて普段着に着替えたエーリッヒ兄さんが現れる。

「でも、その選択肢が狭まらないと？」

「僕の立場で言うと、出来ればルックナー侯爵の寄り子になって欲しいかな？」

「あれ？　モンジェラ子爵様なのでは？」

「モンジェラ子爵の寄り親が、ルックナー侯爵なんだよね」

ここが寄り親・寄り子の制度のややこしい部分なのだが、モンジェラ子爵はブラント家の寄り親で、ルックナー侯爵の寄り子でもあるのだ。

ブラント家が、ルックナー侯爵の寄り孫と言えば分かり易いのかもしれないが、さすがに寄り孫という言葉は無いらしい。

「ルックナー侯爵ですか？」

「ヴェルは、陛下に謁見した時に会っているはずだよ。財務卿をしている人だから」

「ああ、あの骨と魔石の売却代金をケチろうとした……。おっと、失言」

「まあ、あの方はね……。でも、財務卿ともなると、色々と大変なんだよ」

「予算だって、無尽蔵じゃないからな。陛下がケチ臭い事を言うと、民衆や貴族からの人気も落ちる。時には、陛下の代わりに嫌われる事を言うのも仕事なんだよ」

ブランタークさんは、あの謁見の際の骨と売却代金の値切り騒動には、そのような裏があったのだと説明する。

財務卿が必要以上に値切って俺に嫌われ、それに陛下が助け舟を

出す。
そのお礼に陛下が、魔導飛行船予算の余り分を、他の予算が不足している事業などに回す許可を財務卿に与える。
完全に、ギブアンドテイクの関係らしい。

「ルックナー侯爵は優れた政治家だし、職権乱用をして財産を増やすような事もしないからね。陛下からの信用も厚いし」

「それは結構なんですけど、何かここ数日でお腹一杯です」

正直、魔法なんていくら使えても、それで面倒の種が消えるわけでもないのだ。
前世と同じく、面倒なのは人間関係というやつであった。

「それで話を戻すけどよ。坊主は、うちのお館様の寄り子になるよな？」

「現状で、他に選択肢が無いんですけど」

今の俺は、ブライヒブルクにある、ブライヒレーダー辺境伯が経営している冒険者予備校で特待生をしているのだ。
卒業後も、暫くはブライヒブルク周辺を拠点とする予定なので、ここで他の貴族の寄り子になる意味がなかった。

「エーリッヒ兄さんには悪いんですけど……」

俺は、ルックナー侯爵の寄り子にはなれない事を伝える。

「別に、気にする必要は無いよ。もしそうなればラッキー程度にしか、ルックナー侯爵も思っていないだろうし」

いくら中央で財務卿を世襲するルックナー侯爵家とはいえ、南部のまとめ役であるブライヒレーダー辺境伯家を敵に回すような愚は冒さないはず。

それに俺は、自分の寄り子であるエーリッヒ兄さんの実の弟なのだ。

もう十分に縁が繋げているので、これ以上欲をかいてもと思っている可能性が高いそうだ。

「本当、貴族の習性ってお腹一杯になるなぁ……」

「もう何千年も飯のタネにしているからね。僕も、その入り口につま先で立っていた程度なんだけどね。ヴェルに押されて、少し奥に入り込んだかな？」

新しいブラント家の当主であるエーリッヒ兄さんは、ルックナー侯爵の寄り子の寄り子という小物な立場にあるのだが、今回の件でルックナー侯爵の印象に大きく残った。

それに、エーリッヒ兄さんは物凄く頭が切れる。

多分、これからルックナー侯爵に重用されていくのであろう。

「エーリッヒ殿が出世すれば、仲が良い弟の坊主への印象も良くなる。そうなると、後に色々と坊主に頼める可能性が高いからな」

「ええと、何を俺に頼むんです？」

「あと十年、あるか無いかはわからないがな。アームストロングの奴が、お前の事を知ってパルケニア草原問題が動く可能性があるん

だよなぁ……」

そのアームストロングなる人が何者かは知らなかったが、もし貴族なら碌な目に遭わないかもと思い始めてしまう。

出来れば、関わり合いたくないものだ。

「そのパルケニア草原がどこにあるのかは知りませんけど、俺は未成年ですし、ここの所、魔法じゃなくて変な貴族間の権力闘争に巻き込まれていて不幸だったんです。残りの休みは、王都見学とか買い物とかグルメ三昧とか、普通に遊ぶ予定ですからね」

「でもなぁ、坊主。相手あっての事だからな。それに、その観光とか買い物とかも、謂わば女にいいように尻に敷かれているだけとも言えるぞ」

「別に、イーナやルイーゼは俺の恋人でも奥さんでもないですし……」

残りの休みは、広い王都の名所を観光したり、買い物をしたり、美味しい物を食べに行ったりしたい。

決して、イーナとルイーゼから『何日も放置して！』と文句を言われたので、そのお詫びとは考えておらず、俺自身も自分が観光などを楽しみたかっただけなのだ。

「ヴェル、奥さんと一緒に私も付き合うから」

さすがに、今年で二十三歳となり結婚もしたエーリッヒ兄さんなので、もう自分の事を僕とは言わなくなったようだ。

それでも、俺と話しをしていると昔に戻るのか？

たまに、僕が混じるようであったが。

「えっ、良いんですか？」

「三日ほどお休みを取ったからね。案内役の僕達も遊びなのさ」

ようやく結婚パーティーも無事に終了し、明日以降は普通に夏休みを満喫しようと俺は固く決意したのであった。

第三十二話　王宮筆頭魔導師クリムト・クリストフ・フォン・アームストロング。

「おおっ、陛下。某のために、貴重なお時間をいただき感謝いたします」

アンデッド古代竜が、僅か十二歳の少年によって討伐されて王都中が大騒ぎになってから五日後。

ここ王城の謁見の間において、ヘルムート三十七世は、自国の王宮筆頭魔導士であるクリムト・クリストフ・フォン・アームストロングとの会見を行っていた。

アームストロング導師は見た目は三十歳くらいに見えるが、実は若造りで実年齢は四十歳近い。

十年ほど前から、王国の王宮筆頭魔導士を勤める天才であったが、もう一つ彼には大きな特徴があった。

身長ニメートル十センチ、体重百三十キロという巨漢であり。

魔法使いなのでローブを着ているのに、そのローブの中は鋼のような筋肉で一杯であった。

更に、その手に持っている杖がまた凄い。

自分の身長ほどの、サーガに出てくる魔法使いが持っている、普通なら木製の杖は全てミスリルで出来ていて、その先端にはスイカほどの大きさの真っ赤な魔晶石が付いている。

見た目からして、魔法使いというよりも武道家や戦士と言った趣きの彼なのだが、やはり魔法使いとしても戦闘特化タイプに分類されるタイプであった。

その膨大な魔力を使って極限まで身体能力を上げ、超高速の飛翔魔法で三次元を縦横無尽に動いて、敵を粉砕する。

しかもこのアームストロング導師は、放出系の属性魔法の威力も半端ではなかった。

球状ではなく、巨蛇を象った炎や氷などを一度に八体まで自由に出現させてコントロール可能なのだ。

威力については、今さら言うまでもないであろう。

ここ暫く戦争など無かった世の中で、王宮筆頭魔導士にも特殊魔法が使えるなどのバランスが求められる時代に、戦闘特化の彼がそれに任命された理由。

それは、年に一度行われる軍事演習において、『一個軍団にも匹敵する』と言われるほどの戦略クラスの戦闘力を有しているせいであった。

『戦争なんてしないが、下手に攻め込んで、苦労して編成した軍団がアームストロング一人に皆殺しにされたらソロバンが合わない』

これが、あるアーカート神聖帝国軍幹部の正直な感想であった。

「余は、そなたと会うための時間は惜しまぬよ」

「光栄の極みにございます」

王宮筆頭魔導士に対して会見というのはおかしいのかもしれないが、一国の王ともなると色々と忙しいので、いくら王宮筆頭魔導士でもそう簡単に長時間話などは出来ないという事の証明でもあった。

それでもヘルムート三十七世は、アームストロング導師とはなるべく早く会おうと努力する。
それだけ、信用されている証とも言えよう。

「ふむ。パルケニア草原の偵察任務ご苦労だったな」

「いえ、偵察自体は楽でしたな。もう七代もの王宮筆頭魔導士が直々に偵察していますし、新しい情報も無いので」

「それもそうであったな。やはり、グレードグランドを倒せなければ草原は開発不可能か」

「残念ながら……」

ヘルムート王国の首都スタットブルクは人口が百万人を超える大都市であったが、実は代々の王が宿題にしている課題があった。

それは、あまりに人口が多いので食料事情に難を抱えていたのだ。
勿論、完全自給など不可能に近いので、王国側もそこまでは求めていない。
ただ、穀物類を補給する穀倉地帯がスタットブルクから千キロ近くも離れたホールミア辺境伯領だと言うのが問題なのだ。

距離的な問題もあるが、安全保障的に考えて直轄地内にも大規模な穀倉地帯が欲しい。
小・中規模な物は何箇所か存在するが、大規模な物となるとその地理的条件が厳しくなる。

ところが、条件に付随する場所ならば、実はスタットブルクから

百キロと離れていない場所に存在していた。

それが、パルケニア草原だったのだ。

このパルケニア草原は広大で平坦な草原地帯で、降水量もあり、農業に必要な水も三本も河が流れているので、開発は比較的簡単に出来るはず。

では、なぜ今まで誰も開発しなかったのか？

それは、この平原が魔物のテリトリーであったからだ。

「平原なので、グレードグランドは良く見えました。のん気にホーンシープの群れを襲って捕食中でしたな」

「あの忌々しい老土竜め」

グレードグランドとは、パルケニア草原を縄張りとする巨大な属性ドラゴンであった。

年齢は五千歳を超えるとされ、全長は三十メートルほど。

先のアンデッド古代竜には及ばないが、人類にとっては災厄クラスの化け物である。

「パルケニア草原なら、あのグレードグランドさえ倒せれば、冒険者と軍で一気に魔物を駆逐可能なのだが……」

大半の魔物のテリトリーは、森や山地や高原、砂漠、岩場などの魔物の完全駆逐が難しい場所にあるか、わざわざ駆逐する手間が勿体無い物が大半になっている。

ところがパルケニア草原なら、グレードグランドさえ倒せばすぐ

にでも大規模農地の開発が可能であった。
他にも、王都から百キロの草原地帯が魔物の領域でなくなり、周辺地域とのアクセスで余計な迂回をする必要が無くなるのだ。
流通路の観点から考えても、経済効果は計り知れない物となるはずであった。

「そう考えて、代々の陛下は……」

「まあ、死屍累々であったな」

冒険者を多数集め、グレードグランドの首を狙ったり。
軍部が功績を求めて出兵要請を運動し、それを時の王が認めて数千人の軍勢が壊滅したりと。

王国は、成立当初には比較的攻略が容易な魔物のテリトリーの開放に成功している。
成功していなければ、大陸の痣である領域は今の倍以上はあったであろうし、ただ無人なだけの未開地へのアクセスも繋がらなかったであろう。

しかし今は、ここ千年ほど魔物の領域の開放が成功した例はほとんどない。
比較的簡単に開放可能な場所は、既に古の人達がとっくに実行していたからだ。
残っているのは、地理的に難所であるか、そこを守る魔物やそのエリアの食物連鎖の頂点であるボスの難易度が高いかのどちらかであった。

「良くも、属性竜ばかりが王の領域ばかり残った物よ」

「前人未到の領域ならば、運が良ければ土亀や風鳥が主の場所もあるかもしれませんが」

「可能性で強行軍をしても意味があるまい。以前に、病弱の跡取り息子を治す霊薬の材料を求め、貴重な軍を壊滅させた者がおる」

「ブライヒレーダー辺境伯ですな」

「先代のな。今代の当主は、そんな無謀な真似はしないであろう。どうにか、立て直してくれたようだしな」

先代ブライヒレーダー辺境伯の魔の森への遠征と、その軍勢の壊滅は王宮でも衝撃をもって受け止められていた。

これが、男爵程度の独断専行なら王宮側も気にも留めない。

だが、ブライヒレーダー辺境伯が王国南部諸侯の取り纏め役であった事から騒ぎは大きくなった。

もしブライヒレーダー辺境伯領に混乱が生ずれば、王国南部の統治に大きな影響が出ていたからだ。

「そなたの親友も亡くなったしの」

「はい。アルフレッドはあんな無茶な遠征で死んで良い男ではなかった。某の親友にして、最大のライバルだったのです」

王都で同じ魔法使いの素質を持って生まれ、一方は親も知らぬ孤児の出で、自分は王国有数の名家アームストロング伯爵家の次男であった。

本来なら、一生視線すら合わさないで人生を終えたであろう二人は、共に魔法の才能があったために王都にある冒険者予備校で机を並べ、武芸や魔法の鍛錬に励んだ。

「魔力は某の方が少し上、身体能力向上魔法も某の方が上。放出系の魔法の威力はアルフレッドの方がと。あと、アルフレッドは多彩な魔法を器用に使いこなしました。不器用な某では、王宮筆頭魔導士は不可能であると思っていました」

そんな自分が王宮筆頭魔導士になれたのは、孤児出身で王都にはあまり良い思い出がないアルフレッドが、冒険者を引退後にブライヒレーダー辺境伯のお抱えになってしまったからであろう。

ところがその選択は、彼の若い才能を永遠に閉ざしてしまう。

「いつか某は、アルフレッドと本気で魔法勝負をしたいと思っていたのですが……」

「アルフレッドの事は、師匠であるブランタークも惜しんでおったからの」

アームストロング導師は、アルフレッドの師匠であったブランタークの事も良く覚えている。

魔力は自分達には及ばなかったが、その不足を頭脳と経験と訓練で補っていた尊敬すべき人物であった。

少々口が悪いのと、酒好きが過ぎるのがタマに傷であったが。

「そのブランタークだがの。アルフレッドの弟子の面倒を見ておるらしい。今は、王都に滞在しておる」

「そういえば、某はその件を聞きたかったのです！」

思わず大きな声になったしまったが、それには理由があった。

あの自分が唯一認めたライバルが、語り死人になってまで自分の技を伝えた弟子の存在。

しかもその弟子は、兄の結婚式で王都に向かう途中。

奇跡のような確率で発生したアンデット古代竜を、ほぼ単独で打ち破ってしまったのだから。

「陛下がその少年を呼び出した時には、某はまだパルケニア草原でしたので」

何と言うタイミングの悪さだと、アームストロング導師は思ってしまう。

そこで、その兄の結婚パーティーに参加して話をしようかと思ったのだが、それは家族に止められてしまっている。

あれだけの功績を挙げて準男爵にまでなっていたので、これを機に縁を結ぼうと欲深な連中が殺到しているらしく。

せっかくの実の兄の結婚披露パーティーで無粋な真似はしてくれるなと、財務卿であるルックナー侯爵から釘を刺されてしまったからだ。

「某は、その少年に会いたいのです」

「その気持ちは良くわかる。だが、もう数日待つが良い」

「もう数日ですか？　おおっ！　某の作戦が承認されましたので」

「いくらそなたが強いとはいえ、あのグレードグランドを一人では討てまい。余とて、そんな博打でそなたを失いたくはない」

竜に、いくら精鋭でも軍を向けるのは無謀の極みであった。遠方から広範囲にブレスを吐くので、どうしても無駄に損害が増えてしまうのだ。

下手をすると、何もしないまま殲滅されてしまうであろう。

竜を討つには、古来より飛翔の魔法が使える魔法使いによる攻撃が有効とされる。

飛翔の魔法が必須なのは、竜があまりにも大きいので地上で武器を振るっても足元くらいしか傷が付かないし、いくら俊敏に動けても、その巨大な尻尾を振り回されれば回避すら不可能で蝿のように潰されてしまう。

強力な魔法使いによる、少数精鋭での闘い。

下手な軍勢数千名よりも、強力な魔法使い一人の方が圧倒的に勝率が高い原因でもあった。

しかしながら、アームストロング導師は自分一人だけではかなり分が悪いと感じているのも事実であったのだが。

「光栄の極み」

「そこでだ。魔法の素人の策と笑ってくれても良いがの。そなた、バウマイスター準男爵、ブランターク・リングスタットの三名ならばどうかの？」

ヘルムート三十七世の作戦案に、アームストロング導師はこれまでに見た事も無い心からの笑みを浮かべていた。

「某と、バウマイスター準男爵でグレードグランドへの攻撃を続け、後方でブランターク殿が補佐を行う。十分に勝機あり！」

「それは良かった。では、余の権限においてグレードグランドの討伐命令を出すかの」

そこからは、ヘルムート三十七世は冷静な統治者として次々に家臣達に命令を出していた。

ブルックナー農務卿には開墾事業の準備進めるように、エドガー軍務卿にはグレードグランド討伐後にその他の魔物を組織的に狩るようにと。

その他にも、開墾を行う開拓民の募集に、軍と共同で魔物を狩る冒険者の募集をギルドに送り、これらの行動に必要な予算の執行準備をルックナー財務卿に命じたりと。

なぜかヘルムート三十七世は、グレードグランドの討伐作戦に絶対の自信を持っているようだ。

「大変に楽しみでありますな」

「そうよな。そなたとバウマイスター準男爵で、派手に祝砲をあげるが良い」

こうして、ヴェンデリンの預かり知らぬ所でとんでもない大作戦の計画が練られ、その参加者としてヘルムート三十七世から名指しで指名されていたのであった。

第三十三話　つかの間の休日。

「へえ、物凄く賑わっているな」

「この商業街には、大小様々な商店が軒を連ねているからね。王都内からも、国内各地からも、隣国のアーカート神聖帝国からも買い物に来る人は多いのさ」

無事にエーリッヒ兄さんの結婚披露パーティーが終わった翌日、俺達はエーリッヒ兄さんとミリヤム義姉さんの案内で、王都内にある商業街を訪れていた。

さすがは一国の首都にある商業街、ブライヒブルクにある商業街よりも遙かに規模が大きかった。

実家とは、比べるまでもない。

何しろ、バウマイスター領には店すら一軒も無いのだから。

「わざわざすいません。ミリヤム義姉さん」

「気にしないで。主人は、これから三日間お休みだから」

この世界では、結婚をすると大抵は二～三日の休暇が貰えるらしい。

教会への報告だと一日のみのお休みらしいが、披露パーティーだと準備に忙しいので疲れているであろうからという理由で、後は夫婦水入らずの時間を過ごして欲しいという事のようだ。

それと新婚旅行だが、出かけるのはかなりお金に余裕がある中堅以上の貴族とか、大商人くらいであるらしい。

都市部の下級貴族や、標準レベルの生活をしている平民は、三日間ほど休暇を取って、地元都市内での観光や買い物などで時間を過ごすようだ。

なお、うちの実家のような農村には休みなど無かった。

結婚した兄さん達も翌日から普通に仕事をしていたので、都市部と田舎では差があるのであろう。

うちが、貧乏暇なしであった可能性もあるのだが。

「本当、色々なお店があるよなぁ」

「そうね、ブライヒブルクも結構な都市なんだけど」

「人口だけでも五倍以上も違うし、仕方が無いよ」

一国の首都というだけあって、スタットブルクは誰もが認める大都市であった。

政治と経済の中枢で、領地の無い貴族の大半がここに居を置いていたし、有名な商会は必ずスタットブルクに本部を置く。

ここに本部がある事が、商人にとってのステータスでもあったからだ。

更に、スタットブルクの半径二百キロ以内には人口が一万人を超える町が多数点在していて、まさに首都圏とでも言うべき経済圏を形作っていたのだ。

「まあ、欠点が無いわけでもないけどね」

「欠点ですか？」

エーリッヒ兄さんは、王都は物価が高いし、人混みが最初は慣れなかったし、水が不味いのでそのまま飲めないし。
などと、王都の欠点を並べていた。

「あとは、パルケニア草原が邪魔で、これ以上の発展を妨げているとかね」

エーリッヒ兄さんによると、パルケニア草原とは王都周辺にある最後の魔物の領域らしい。
トップにグレードグランドと名付けられた老土竜がいて、今までに何度も冒険者集団や軍隊の討伐を失敗させたそうだ。

「パルケニア草原が開発可能になれば、まだ首都圏は発展するだろうね」

大規模穀倉地帯の開発に、パルケニア草原のせいで分断されている道の整備も可能となるので、その経済効果は計り知れないとエーリッヒ兄さんは説明する。

こういう部分は、さすがは下っ端でも財務関連の役人らしい認識であった。

「でも、そんな厄介な竜を誰が倒すんです？」

「あくまでも仮定の話さ。さあ、買い物を楽しもうか」

そこでエーリッヒ兄さんの難しい話は終わり、俺達は買い物を楽しむ事とする。

「エル、その剣で大丈夫か？」

「値段の割には良い鋼を使っているからな。ここは買いだろう。そうですよね？　エーリッヒさん」

「これはお買い得だね」

「エーリッヒ兄さんって、剣の質までわかるんですか？」

「少々独学でね。あれ？　ヴェルも、剣の稽古をしていたよね？」

「ええと……。才能が無かったので、まだマシな弓の方にシフトしました」

「うわぁ……、こういう部分は兄弟だねぇ……」

実家時代から、朝に一時間ほどの基礎訓練だけは欠かさなかったが、やはりどう考えても俺に剣の才能など無かったのだ。

むしろ、まだ弓の方が希望があったし、魔法は練習した分だけ報われるので、今ではほとんど剣の訓練はしていなかった。

そういえば、師匠から貰った各属性の刃を出せる剣は、完全に死蔵したままだ。

「まだ魔力の伸び代があるのかい？」

「ええ、それは毎日実感していますから」

俺は師匠から言われた通りに、いつ何があっても毎日座禅をしながら瞑想を行い、体内の魔力を練る修練を一日も休まずに行ってい

た。

「あまりに現実離れしていて、私からは何も言えないな」

「ただ、王都だと派手に魔法の訓練が出来ないですからね」

これがブライヒブルクなら、郊外に出て派手に練習できるのだが、今は無理なので室内でも出来る魔力循環のための瞑想などを行っているだけであった。

その点、庭で訓練ができるエル達が羨ましかったのだ。

そのエルは、良く俺に『貴族の嗜みだぞ』と言って剣の稽古に誘ってくる。

当然、俺はそんな無駄な時間があったら魔法の訓練をすると言って断っていたのだが、敢えて言おう。

俺が剣など持って、何の役に立つのかと。

「ようし！　新しい剣をゲットだ！」

結局買い物は、エルが新しい剣を手に入れ、俺も新しい弓矢を新調する。

剣よりも、まだ弓の方が使う頻度は高いので無駄にはならないであろう。

エーリッヒ兄さんも、普段は時間が無いとの事で普段着などを数着購入していた。

あとの女性陣であったが、三人は何件も洋服屋やアクセサリーショップなどを巡っているらしい。

なぜ、『らしい』と言うのかと言えば、正直女性の買い物に付き

合うのは疲れてしまうからだ。

「エーリッヒ兄さんは、ミリヤム義姉さんに付き合わなくて良いんですか？」

「前に一度付き合って、それで懲りた」

ミリヤム義姉さんは、下級貴族の生まれなので普段はあまり無駄遣いなどしないらしい。

その代わりに足でお買い得品を探すので、それに付き合わされて辟易したそうだ。

せっかくの休みに半日以上も商業街を歩かされて、翌日職場に机の上でへばってしまったとエーリッヒ兄さんは話していた。

「（何気に、発想がバーゲンセールに熱中する主婦だよな）」

ミリヤム義姉さんは、普段は温和で優しい感じの女性なので、やはり女性にとって『お買い得』という単語は鬼門のようであった。

あとは、『限定品』とか『処分品』とかのワードであろうか？

この辺は、前の世界でも同じであったのだが。

「ほら、ヴェルがご祝儀にくれた宝石をアクセサリーにしてくれるお店を探しているんだよ」

そういえば、俺はご祝儀に未開地で見付けた瑪瑙と翡翠の原石を送ったのだが、これに大喜びのミリヤム義姉さんは急いでこれをアクセサリーにしようとしているらしい。

「女性は、宝石が好きなんですね」

「しかし、あの原石をどこから……、わかったけど、全く問題ないだろうね」

エーリッヒ兄さんは、俺が宝石の原石を未開地から取って来たのだという事実に気が付いたようだ。

本当は問題無くはないのだが、実家のバウマイスター家は未開地の資源分布状況など把握していないので俺の盗掘行為を立証できないし、最初から認識すらしていないのだから。

「確かに、あの土地はバウマイスター家に権利はあるんだけど……」

バウマイスター家単独だと永遠に開発など進みそうもないし、もし王家や大貴族が目を付けたとしても、それは少なくとも数百年は先の話であろう。

そもそも、今の時点であそこにいける人間は瞬間移動の魔法が使える俺だけなのだ。

他にも瞬間移動の魔法が使える人間は数百人単位で居るが、もし未開地に瞬間移動で行こうとすれば、一回は己の力で現地に到着しなければいけない。

俺の瞬間移動で一緒に移動してという方法では、それだと移動の経路が頭に入っていないので不可能であったからだ。

実は、この瞬間移動の魔法。

便利である事には間違いなかったが、自分が行った事がない場所には行けないし、自分以外で運べる人数も最大で十人とその手荷物程度であった。

俺も自分の限界積載量を調べた事があるが、精々で自分の他に五

人とその荷物くらい。
まあ、パーティーのメンバーは運べるので俺としては不便はないし、俺の場合は魔法の袋に入っている分は無効なので問題はなかったのだが。

「という事は、ヴェルは王都に一瞬で来れるのか」

「そうですね」

「エドガー軍務卿が、本腰を入れて欲しがるかもしれないなぁ……」

運べて最大十人程度なので、瞬間移動の魔法で戦時に戦略的に戦況を覆すのは難しい。
だが、それでも少数精鋭の部隊や密偵などの送り込みには使えるし、瞬間移動が使えるのは魔法使いなので魔法の袋もそれに付随している。

地方の内乱鎮圧に、領地・利権争いの裁定に、大規模な山賊などの討伐などと。
先に編成した軍を荷駄隊無しで送り込んでも、兵站を瞬間移動が使える魔法使いが補ってくれるのはありがたい。

そういえば、師匠もその手でブライヒレーダー辺境伯軍が遠征をした時に補給を担当していたのを俺は思い出していた。

「軍部は、瞬間移動が使える魔法使いを常時数十名以上確保しているから、すぐにという話は無いと思うけど。予備リストには入るだろうね」

他にも、遠方の同じ能力を持つ人と通信が可能な遠距離通話の能

力持ちなどが数十名ほど確保されているらしい。

この遠距離通話は、魔法使いでなくても行える魔法具もあるのだが、作れる人間が物凄く少ないのでなかなかその需要を満たさないらしい。

当然これも集めていたが、軍が遠距離通話を使える魔法使いを各部隊に分散して配置するのも、これは王国の安全保障政策の一つとも言えた。

実はこの遠距離通話の魔法は、俺も師匠から習っている。

ただ、同じ遠距離通話が使える魔法使いとしか話せないし、その魔法使いと微量の魔力を交換して相手を登録する必要があったのだ。

感覚としては、携帯電話の赤外線通信に近いと言えば解り易いと思う。

ところが今まで、師匠以外に碌に魔法使いなんて知らなかったので、習得してから一度も使った事がなかった。

あのブランタークさんでさえ使えない魔法なのだから、かなり特殊な魔法なのだ。

そういえば、ブランタークさんは随分とブライヒレーダー辺境伯の意図に従って動くのが上手なようであったが、これは遠距離通信で指示を受けているわけではなく、最初にある程度の方針を聞き、それに沿って独自に判断して動いているそうだ。

貴族お抱えの魔法使いに、年齢を重ねた経験が必要とされる最大の理由でもあった。

前の世界の転職事情と同じで、経験者優先なわけだ。

「でも、ヴェルはまだ未成年だしね」

成人まであと三年弱あるし、まさかまた竜退治などに巻き込まれるはずはない。

そう考えていた俺であったが、それはすぐに撤回しなければいけないようであった。

「どう？　ヴェル。似合っている？」

「さすがは、王都のお店。服のセンスが最高だね」

「服を褒めるのは良いけど、着ている私達も褒めなさいよ」

そこに、何軒もお店を回ってようやく新しい服を購入したイーナとルイーゼが現れ、購入した服を嬉しそうに俺やエルに見せていた。

「しかし、結構買ったんだな。資金は大丈夫なのか？」

「王都から戻ったら、熊を中心に狩るわ」

「一杯お金を貯めて、来年も王都で服を買うんだ」

俺は服装など変で無ければ良いくらいにしか考えていないのだが、女性陣は王都の最新ファッションに感化されてしまったようだ。

最新ファッションを買うには金がかかるし、イーナは俺に借金もある。

となれば、獲物を沢山狩るしかないわけだ。

可哀想な理由で狩られる動物達であったが、この世界には動物愛護団体もいないわけで。

「ヴェル君。こんなに可愛い娘達が新しい服を着ているのよ。ここは、褒めてあげないと」

「義弟に厳しいですね。ミリヤム義姉さん」

「厳しいというか、常識よ」

流行の服のために大量に狩られる熊を、ほんの少しだけ可哀想だなと思ってしまう俺であったが、明日に訪れる俺の不幸と比べれば、そんな事は些細な物でしかなかった。

それと、俺は懸命に数少ない語彙でイーナとルイーゼの新しい服を褒めたのだが、合格点は貰えなかった事を記しておく。

「エルも、ヴェルと同類だなぁ」

「もう少し、褒めるセンスが必要よね」

その辺は、エルも似たような感じであったのだが。

第三十四話　強制従軍命令と、老属性竜討伐。

「……」

「……」

「おおっ！　この少年がアルフレッドの弟子で、屍古代竜を討伐した勇者殿であるか！　なるほど、その年齢で油断ならない雰囲気ではあるな！」

「（あの、ブランタークさん？）」

「（相変わらず、暑苦しい男だな）」

「（偉い人なんですよね？）」

「（ああ、王宮の筆頭魔導士だ）」

みんなで商業街に買い物に出かけた翌日、俺はいきなり王宮から来た使者と数名の騎士達により、同道していた馬車に押し込まれ、そのまま王都郊外にある軍の駐屯地に連れて行かれてしまう。

半ば誘拐のような気もするのだが、騎士の方々は陛下からの命令書を持っていたので誘拐ではない。

何しろ、俺は陛下の忠実かどうかは知らなかったが、王国の家臣なのだから。

この駐屯地は、いつもは王都駐留軍が訓練に使っている場所らしい。

簡易な造りの丸太小屋や、見張りのための櫓に、大型のテントと。
いかにも、ファンタジー風な世界の軍駐屯地に相応しい造りとなっていた。
王国が普段から維持している軍は、昨今の軍縮気運にもめげずに意外と多い。
仕事が無い貴族の子弟達のための救済処置でもあったからだ。

だが、ただ多いだけだと無駄飯喰らいのレッテルを張られてしまうので、訓練は常に厳しい物となっているらしく、一度に全軍は無理でも、こうやって交代で郊外で野外演習を行うのは王都駐留軍の恒例行事となっているようだ。

俺を乗せた馬車は、駐屯地内にある丸太小屋の一つの前に到着する。
入り口に立っていた衛兵に促されて入ると、そこには良く見知ったブランタークさんと。
もう一人、身長が二メートルを超えたガチムチの中年のおっさんが待ち構えていたのだ。
しかも、このおっさん。
筋肉の塊なのに、着ている服はローブだし、手に持っているのは物凄く大きくてゴツイが杖である。

つまり、武道家や戦士ではなくて魔法使いだと言う事だ。
魔法を使うよりも、その杖で敵を殴り殺した方が早いタイプに見えるのだが。

幸いにも、彼が魔法使いなのは先に連れ込まれていたブランタークさんによって証明されていた。
しかも彼は、王宮筆頭魔導士なのだと言う。

突然の筋肉武闘派魔法使いの登場に、俺は思わず絶句してしまう。
師匠とは、正反対の位置に居る人物であったからだ。

「（王宮筆頭魔導士？　ブランタークさん？）」

「（それはな……）」

魔法使いと、魔導士との差は？
こう問われるならば、ただ呼び方の違いでしかないらしい。
だが、両者には大きな差が存在している。

魔導士とは、王国に選ばれて仕える魔法使いの中でも究極のエリートであるという事だ。
宮仕えに最大の意義を見出す価値観が無い人間からすれば滑稽は話だが、それでも世間から見れば魔導士ほど社会的信用が高い人間もいない。

王国貴族でも、閣僚をしている者達はやはり社会的な信用がとても高いが、それよりも更に一段上と考えられているからだ。

しかも、魔導士は別に貴族でなくてもなる事が可能だ。
というか、魔法の才能が必要なので、いくら貴族でもそれがなければなれない。
故に、世間からは尊敬の目で見られるのだそうだ。

しかも、この目の前のおっさんは王宮筆頭魔導士である。
その凄さと偉さは、半端ではなかった。

見た目は、ガチムチのおっさんであったが。

「ひょっとして、緊張しておるのか？　なら、そんな必要は無い。某と少年は、これから共に戦うのだからな」

「戦うのですか？」

「左様、王国の更なる発展のため、長年グレードグランドに占拠されたパルケニア草原を開放するのだ」

パルケニア草原にグレードグランド。

悲しい事に、昨日たまたまエーリッヒ兄さんに事情を聞いていたので、なぜ俺達が呼び出されたのかを理解してしまう。

しかし、今の俺を魔物との戦いに招集するのは反則のはずだ。

なぜなら、まだ十二歳の俺は未成年なのだから。

未成年者は、魔物の住む領域に入ってはいけない。

だからこそ、俺達は予備校で訓練と普通の狩りの日々なのだし。

「あのぉ、俺は、未成年でして……」

俺は、未成年なのを理由にグレードグランド討伐を断ろうと考えていた。

そもそも、あの古代竜との戦いだって、自分が乗っていた魔道飛行船ごと自分を守るために仕方が無く戦ったのだから。

正当防衛、緊急避難処置。

言い方は何でも良いが、初陣がアレだったので二度目の竜は暫く勘弁して欲しいところだ。

誰が好き好んで、いきなり呼び出されてドラゴンと戦うのだと言うのであろうか？

少なくとも、俺はそんなマゾではない。

「その心配は、全く無用である！」

「あの……。それは、どういう事で？」

無意味にハイテンションなおっさんは、俺が未成年でも全然問題ないと断言していた。

「確かに、未成年者が魔物の住まう領域に入るのはルール違反である！　しかし！　少年は、貴族なので問題はない！」

「あっ、そういう事か……」

どうやら、一緒に参加させられるらしいブランタークさんには、何か心当たりがあるらしい。

一瞬だけ俺に顔を向け、『可哀想に』という表情を見せていた。

「少年は、バウマイスター準男爵家の当主である！　貴族は未成年でも、陛下よりの命令で従軍しなければいけない事がある！　今回のグレードグランド討伐は、陛下より王都駐留軍に命じられた軍事行動なのである！」

「……」

ガチムチのおっさんの言う事は、王国貴族としては物凄く正しい事のようだ。

まだ爵位を得たばかりの俺には、青天の霹靂でもあったのだが。

「諦めろよ。俺も、お館様経由で従軍命令が出ているし」

可哀想に、ブランタークさんにもブライヒレーダー辺境伯経由で命令が届いていて、グレードグランド討伐は断れないようだ。

「ブランタークさんも、何気にツイてませんよね」

「坊主の不幸体質が、伝染したのかもな」

「何だろう？　冗談に聞こえないなぁ……」

「半分、本気で言っている」

「……」

完全に逃げ道を無くした俺は、ブランタークさんと共に再び竜退治へと赴く事になるのであった。

誰か代わって欲しいと願うのは、いけない事であろうか？

「ふはははははっ！　相変わらずの大きさである！」

「デカい……」

「あの古代竜よりは小さいけどな。それでも、大きいわ」

筋肉導師との運命の出会いから一週間後、俺とブランタークさんとアームストロング導師は、パルケニア草原のほぼ中心部にある草原地帯の上空を飛翔の魔法で飛んでいた。

今回の作戦であったが、王国軍は王都駐留軍の六分の一にあたる

一万人を動員し、郊外の駐屯地にて編成と必要な物資を準備してから領域の近くに陣地を張っていた。

これは、領域の中に軍が入ると多くの魔物を刺激して大規模戦闘になってしまうので、グレードグランドが倒れるまでは領域に入らない作戦になっていたからだ。

別に、グレードグランドが倒れても魔物の数は変わらないような気がするが、グレードグランドはこの領域を統括するボスのような存在で、同時に食物連鎖のトップに君臨しているばかりでなく、その恐怖で他の魔物を自由に動かせる存在らしい。

なので、グレードグランドが死ねば魔物は集団での戦闘を行わなくなるので、あとは大軍で安全に各個撃破が可能なようだ。

それでも全くの被害無しとは行かないようだが、ボスが健在な時よりかは遙かにマシらしい。

それと、森や山地などとは違って草原には大軍が展開可能なので集団戦の利が行かせるのと、このパルケニア草原の魔物が比較的弱い事なども挙げられる。

少数の冒険者で狩りをするのであれば、比較的初心者向けの領域らしいのだ。

「さて、一秒でも早くグレードグランドに引導を渡してやるのである！」

既に飛翔の魔法でグレードグランドを見下ろす格好になっている俺達であったが、見下ろされたグレードグランドは俺達が物凄く気に入らないらしい。

耳の鼓膜が破れそうなほどの咆哮で、俺達を威嚇していた。

「導師？」

「では、始めるとしよう！　あとは力と力のぶつかり合いなのである！」

結局、三人だけでグレードグランドを倒すだけの作戦なのだが、作戦内容自体にあまり複雑な物は無い。

目の前の溢れ出る暴力に対し、細々とした作戦など不可能であったからだ。

そもそも、領域の外にいる王都駐留軍に、冒険者ギルド本部が臨時徴集をかけた冒険者傭兵部隊約二千人が対竜戦闘に一切参加しないのは、下手に参加させると無用な犠牲が増えるからである。

竜のブレスは、どの属性の物でも人間がまともに喰らえば即死してしまう。

なので、対ブレスの用意が出来ない人が参加をしても無駄に死人が増えるだけ。

俺達は、少数精鋭の刺客としてグレードグランドに戦いを挑む事になっていた。

あとこれはついでだが、可哀想にエル達も俺の家臣という事で、バウマイスター準男爵家軍として軍勢を集めて魔物討伐戦に参加するようだ。

その理由には、貴族特有の複雑な事情があるらしい。

駐屯地で出撃準備をしているとそこにエーリッヒ兄さんが訪れ、

バウマイスター準男爵家軍を編成して出撃させないといけないので資金を出して欲しいと頼まれていたのだ。
あと、エーリッヒ兄さんも副将兼参謀扱いで参加するそうなので、なら任せた方が楽だと白金貨百枚ほどを預けている。
エーリッヒ兄さんならば、お金をチョロまかすような真似はしないであろうし。

「少年は、カッタートルネードの魔力をひたすら貯める事に専念するのである！　ブランターク殿は、いつでも魔力注入を行えるように！」

「了解です！」

「任せてくれ」

もうこうなったら、あとは腹を据えてこの巨大な老属性竜を倒すしかない。
作戦案では、俺は飛翔の魔法で常にグレードグランドと等距離を保ちながら戦略級の風系統魔法カッタートルネードを放つ事になっていた。

実は、この世界の魔法の名称はかなり曖昧だ。
才能のある魔法使いが、自分の魔力を消費して頭の中で想像した現象を具現化させるだけなので当然なのだが、既に古代魔法文明時代から何万年もそうなので、過去の先人達が複数考えた魔法はアンチョコ本としてかなりの数が残っている。
例えば火系統の魔法だと、ファイヤーボールを考え付かない魔法使いは少ないという事だ。

あとは、火の矢とか、火の壁とか、火の蛇とかであろうか。

魔力を持つ者は、多数残された微妙に記述の違う資料や、師匠が居る人は、その教えを参考に自分が一番使いやすい方法で魔法を取得していく。

魔法を唱える際にも、無詠唱の人もいれば、呪文名を唱える人もいるし、術式のような半ば詩めいた短文を口にする人もいる。

もっと凄い人は、派手な踊りやポーズなどを取る人もいた。

要するに、自分に合っている方法で魔法を具現化させるのだ。

ちなみに、俺は無詠唱派である。

以前に、恥ずかしい派手なポーズやら、厨二病めいた詩のような文言を考えて唱えてみたりもしたのだが、気恥ずかしさからか威力がいまいちだったので今は使っていない。

『我の導きに答え、その敵を焼き尽くす紅蓮の火炎～』とか、俺はまだ十二歳であったが、立派な厨二病患者のカルテその物であった。

『無詠唱が一番良いでしょうね。文言で、相手に呪文の性質を悟られませんし』

『あんな、こっ恥ずかしいセリフなんて言えるか。魔法の威力が落ちるわ！』

師匠もブランタークさんもそうなので、俺は彼らの弟子になって正解だったのであろう。

俺達は、俗に言う無詠唱派なのだ。

そんな派閥が実在するのかは、別として。

話を戻すが、今度の相手であるグレードグランドはその名の通りに土属性の老齢の属性竜である。

この世界の魔法には、火・水・土・風の基本四系統が存在し、他に滅多に使える人がいない聖や、もはや伝承扱いである魔族が使うとされている闇があると言われている。

特殊な系統は除き、基本四系統の間にはそれぞれに得意・苦手な属性があり、簡単に言えばジャンケンのような関係になっていた。

火は水に弱く、水は土に、土は風に、風は火に弱い。

グレードグランドは土系統の属性竜なので、俺は高威力の戦略風系統魔法であるカッタートルネードで一気に葬ろうと考えていた。

正確には、アームストロング導師の作戦であったが。

『少年は、既に魔力量だけでいえば某よりも多い。何分、某の魔力量は、アルフレッドよりも少し多いくらいなのでな。そこで、トドメは少年に一任するものとする』

作戦開始前、駐留軍の駐屯する野戦陣地で俺はアームストロング導師から作戦内容を聞いていた。

『少年が使える最大級の風魔法で、一気にグレードグランドを葬り去るのだ』

『妥当だな。あの濃密な聖光で、アンデッド古代竜を昇天させた坊主だ。十分に勝算はある』

『ブランターク殿が賛成で、良かったのである』

ブランタークさんも、アームストロング導師の作戦に賛成していた。

『しかしながら、この魔法は貯めに時間がかかるのです』

下手に加減をして、トドメを刺せなければ本末転倒だ。
俺は、最低でも二分間の時間が必要であると明言する。
貯めの件を考えると、実は魔導飛行船内で魔力を貯められた前回の方が有利であった。

『二分間であるか』

確実にグレードグランドを葬り去れるであろう、カッタートルネードの展開には二分が必要だと俺は計算していた。
しかもそれは、途中でブレスなどの攻撃を受けると魔法障壁の展開で魔力の貯めが遅くなってしまうのだ。

先の古代竜との戦いの時には、ブランタークさんが確実に魔導飛行船を守ってくれるという保障があったので、精神的には相当に楽だった事を記憶している。

『二分であれば、某が全力で戦っても問題は無いのである。少年が、距離を置いてカッタートルネードの準備。某が、全力でグレードグランドに戦いを挑む。ブランターク殿は、予備戦力兼、万が一某の魔力が尽きた時には、魔力の補充を行って欲しいのである』

『任せてくれ』

魔力補充とは、その名の通りに他人に魔力を分ける行為である。
しかしながら、この特殊魔法を使える魔法使いは少ない。

いや、正確には全員が使えるのだが、他人に分ける際に膨大なロスが発生するのだ。
普通の魔法使いだと、百の魔力を使って五くらいしか相手に補充できない。
なら、他人に分けないで自分で魔法を使った方がマシという結論に至るのに、さして時間はかからなかった。

ところが、ブランタークさんは百を使って相手に九十五以上を補充可能だ。
稀有な才能と言っても過言ではなかった。

さすがにこの魔力補充は、師匠にも俺にも会得できなかったのだから。
ブランタークさんは、魔力の量で言うと上級カテゴリーでも低い方にある。
ところが、こういうあまり他の魔法使いが使えない魔法が使えるので、アームストロング導師からも一目置かれているのだ。

ベテランで『上手い魔法使い』というのが、周囲からの評価であった。

『交代して、ブランタークさんが戦うのは無しなんですか？』
『現役時代なら出来たが、今の俺だと無理だろうな』

そのための、アームストロング導師への魔力の補充らしい。

『ただ、実際に補充はしないと思うぜ。俺は、本当に後方で予備』

『ブランターク殿が後方で構えてくれるので、相当に余裕が出来るのである』

そう、アームストロング導師の言う通りなのだ。

少々厳しい条件で強敵に挑んで、ギリギリのところで勝つ。

子供が読むサーガならば問題ないが、実際の戦闘でここまで追い詰められるのは愚か者の所業という他はない。

俺とブランタークさんの二人で古代竜を討てているのだから、これにアームストロング導師を加えた三人で属性竜を討てる確率は相当に高い。

ならば、あとは作戦に更に確実性を持たせるべきであった。

『某一人でも六割の確率で勝てはすると思うのだが、それは筆頭王宮魔導士としては無責任なのである』

アームストロング導師は、王国でも五百年に一度と言われるほどの逸材と評判が高い。

更に、彼は家柄が良い。

伯爵家の次男なので、他の貴族達からのやっかみや妨害が少ないのだ。

加えて、本人の性格はこのようにサッパリとしているし、私財を必要以上に貯め込もうとしたり、権力欲が強くて出世に汲々としたり、おかしな派閥形成に動くような真似もしない。

見た目はガチムチだが、こう見えて意外と頭が良く、政治にも理解があると。
陛下が一番信頼している家臣であるとの、エーリッヒ兄さんからの話であった。

俺達が郊外の駐屯地に呼び出された時、わざわざ駐屯地を訪ねて来てその情報を教えてくれたエーリッヒ兄さんは、やっぱりイケメンであったと再確認していたが。
バウマイスター準男爵家軍を編成する相談のついでという事実は、とりあえず考えない事にしてだ。

『そうだな。今、お前さんに死なれると陛下は厳しいだろう』

『そんなわけなので、少年とブランターク殿には感謝なのである』

以上のようなやり取りの後に、俺達は三人だけでグレードグランドと対峙していた。
まず最初にアームストロング導師がグレードグランドの眼前に飛び出し、あの巨大な杖を両手で構えてから一言だけ叫ぶ。

「魔導機動甲冑！　装着！」

すると、アームストロング導師の全身が顔の部分も含めて漆黒のフルフェイス甲冑に覆われる。
持っていた杖も、真っ赤な魔晶石が見えなくなる巨大なハンマーに変化していた。

「なっ！」

「まあ、見た目通りだよな」

斜め後方で宙に浮きながらカッタートルネードの魔力を貯めている俺に、すぐ傍で同じく宙に浮いているブランタークさんがボソっと漏らしていた。

「魔力を物質化する特殊魔法だな。魔法障壁よりも防御力は圧倒的に上だ。杖も、物質化でハンマーに変化させて威力を上げている」

更に、限界まで身体能力を強化し、飛翔の魔法の速度も王国は髄一。

簡単に言うと、敵を圧倒的な戦闘能力でブチ殺すデストロイヤー的な戦いをするらしい。

アームストロング導師は、縦横無人にグレードグランドを翻弄しながら、その頭に、腕に、足にと。

竜の全身をランダムに、ハンマーでぶん殴ってダメージを与えていく。

一撃が決まる度に、バキバキと嫌な音がして。

グレードグランドは激痛と激怒のあまり、連続して空を引き裂くばかりの咆哮をあげていた。

「すげえ……」

「まだまだ、こんなもんじゃねえよ……」

しかし、グレードグランド側もただ殴られ続けてはいなかった。

アームストロング導師の移動の癖を掴み、未来移動位置に尻尾を使った振り払い攻撃を仕掛ける。
あんな一撃を普通の人間が喰らったら、間違いなく水風船のように弾けてしまうであろう。

「危ない！」

「大丈夫だ」

ブランタークさんは全く心配していなかったが、実際にまるで心配なかった。
それを見越していたのか？
アームストロング導師は、高速で振るわれたグレードグランドの尻尾を掴み、そのままあの巨体を投げ飛ばしてしまったからだ。

「マジで！」

「物質化の鎧は、あくまでも防御のため。本命は、あの強力無比な身体能力魔法にあるんだよ」

更に、驚きは続く。
アームストロング導師は、投げ飛ばされたダメージから回復して立ち上がったグレードグランドに、次から次へと蛇の格好をした風魔法をぶつけていたからだ。

土属性のグレードグランドの弱点は、風属性の魔法である。
グレードグランドは次第に傷だらけになり、数箇所で出血が始まっていた。

「少年！　準備は良いか！」

「ええと、大丈夫です！」

衝撃の光景に思わず見惚れていた俺であったが、魔法の貯めは勿論忘れていない。

時間は二分と少し過ぎていたので、必要な魔力は貯っている。

俺は、アームストロング導師が素早く退避したのを確認してからカッタートルネードの魔法を放っていた。

このカッタートルネードの魔法は、名前の通りに最初は標的を竜巻で覆ってしまう。

続けて、その竜巻から風属性の鋭利な刃物が次々と生み出され、標的に次々と傷を負わせるのだ。

グレードグランドは、傷が増える度に咆哮をあげ、続けて竜巻が赤い色に染まっていく。

流れた血が竜巻に巻き込まれ、徐々にその赤を濃くしていく。

そして、竜巻の赤が濃くなればなるほど、グレードグランドは体内の血を失っていくのだ。

「斬り殺されるか、出血多量で死ぬかか。坊主も、相当にエゲツねえよ」

「師匠の技ですよ？」

「あいつも、涼しい顔して魔物には容赦がなかったからな」

それから数分後、体中の血液をほぼ出し尽くしたグレードグランドは大きな地響きと共に地面に倒れていた。

いくら地上最強の生物でも、血が無くなれば死んでしまうのだ。

「さすがは、属性竜。切り傷では死ななかったか」

「ですね。さてと……」

グレードグランドは死んだのだが、実はこれで終わりではなかった。

俺はまだ渦巻いている赤い竜巻に近付くと、今度は水系統の魔法を使い始める。

「何をするんだ？」

「竜の血は、高価ですから」

実は、今回のグレードグランド討伐では王国からの報酬がなかった。

貴族の責務として従軍したからだ。

普段は年金や領地からの上がりがあるので、その恩を返す奉公なので仕方が無いのだが、そのために貴族は戦場で略奪などを行う事が多い。

悪い事なのであろうが、そうそう王国も貴族に手当てをするほど財政に余裕があるわけでもなく、これは黙認されていたのだ。

ここ二百年ほどは戦争が無いので略奪自体発生していないし、今回も相手が魔物なので魔物から略奪というのも変ではあったのだが。

その代わりに、今回のグレードグランド討伐と、その後のパルケニア草原における魔物殲滅の作戦では、参加する兵士達にある褒美

が与えられている。
それは、狩った魔物の素材を自分の物に出来るという権利だ。

魔物の素材は、とても高く売れる。
なので、今回作戦に参加している兵士達は大変に楽しみにしているとの噂であった。
冒険者も今回は大量に集まっているので、競争意識も出て余計に気合が入っているようだ。

血生臭いし、犠牲は出るのだが、兵士達は魔物の素材を売った臨時収入で家族や恋人などと贅沢をし、素材を手に入れた商人やギルドはそれを使って様々な商品を作り、それが売れる。

王国も税収が上がるし、何より魔物の領域であったパルケニア草原が開放されて広大な穀倉地帯になる。
そうすれば、更に農地開発が進んで穀物の生産量も増える。

今まで狩りに頼っていた肉類の供給も、その穀物や草原の草を使えば増えるはずだ。
食料自給率の低い王都に穀物を供給していた遠方の貴族達も、穀物の販売益は減るが近隣の住民達に牧畜で肉を供給できれば利益となる。

経済的な話をすれば、取引額が増えるので万々歳な話なのだ。

「そんなわけで、竜の血は貰いです」

俺は水の魔法で竜巻の中で舞っている血を一箇所に纏めてから凍結させ、その塊を魔法の袋へと仕舞う。

「坊主、えらく器用になったな」

「師匠の師匠が、物凄く器用な方ですからね」

年の功とも言うべきであろう。

俺が定期期に指導を受けるようになったブランタークさんの魔法は、このように便利で納得させられる物が多い。

ブランタークさんも、師匠のように今さら基礎や威力などに重点を置いた指導はしないと明言していた。

そんな物は、自分でやれと言われているのだ。

「あとは、グレードグランドの死体だな」

血だけでなく、竜の体は使えない部分がなく、どこの部分でも高く売れる。

なので、俺は素早く魔法の袋にグレードグランドを仕舞っていた。

袋の中では時間が経たないので、あとでギルドで解体して貰うためだ。

さすがに俺でも竜の解体は困難だし、下手に時間をかけると肉などの品質が落ちて値段が下がってしまう。

ここは、プロに任せるべきであろう。

「アームストロング導師、グレードグランドの売却益は三人で山分けですよね？」

「某は、それで良いのである。しかし、あのカッタートルネードは見事であった。威力で言えば、既にアルフレッドは超えていよう。今後も、油断なく修行に励むのである」

「はい」

「さて、某達がグレードグランドを倒したので、暫くはこの近辺に魔物は来ないはずである。今日は野営をして、明日からの魔物狩りに備えるのである」

「へっ？」

「今、何て言った？」

俺とブランタークさんは、アームストロング導師からの予想外の発言に驚いてしまう。

今回の任務は、グレードグランドを倒して軍や冒険者達の魔物殲滅戦を行えるようにする事だし、ここで俺達が下手に手を出しては彼らの仕事を奪ってしまう事になるからだ。

「いくらグレードグランドが倒れても、残存する魔物の数は多いのである。よって、我らが手伝いをしないと無用な犠牲が出るであろう。明日からの奮闘に期待する」

「俺、まだ未成年で普通の魔物狩りは未経験……」

「初回と二回目の対魔物戦闘が竜って、坊主は物凄い経験をしているよな。しかし、俺はもう引退しているのだが……」

「三人で組めば、些細な問題である」

結局、それから一週間もの期間を俺達三人はパルケニア草原中を駆け巡り、多くの魔物を狩る事に全力を傾けるのであった。

「あの、俺も魔物を狩っても……」

「エルヴィン君はヴェルの名代なんだから、前線に出ちゃ駄目に決まっているじゃないか」

「出ないと、ヴェルに金を返せないんです」

「名代役としての報酬が出るから」

「それは、金貨一枚よりも上ですか？」

「……」

「エーリッヒさん！　そこで、黙らないで！」

その間、エル達も慣れないバウマイスター準男爵軍の神輿役として、胃が痛い日々を送っているようであったが。

幕間七　バウマイスター準男爵家諸侯軍編成事情。

「ヴェルってば、また竜退治だってさ」

「大変ねぇ……」

私、イーナ・ズザネ・ヒレンブラントが、親友であるルイーゼと共に知り合ったヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターは、とんでもない魔法の名手であった。

私達の最初の出会いは、狼に襲われていたのを彼に助けられたからであり。

つい先日も、王都へと向かう魔導飛行船の中で、襲い掛かる天災レベル脅威『アンデッド古代竜』をほぼ一人で退治していた。

そして、高価な巨大魔石と骨を王国に買い取って貰い、竜退治の功績で準男爵にもなっている。

ブライヒレーダー辺境伯家中では、密かに『山脈超えの、貧乏騎士家』、『水呑み騎士』とまで呼ばれ、半ば嘲笑と侮蔑の対象であったバウマイスター家の八男が、昇爵して準男爵になったのだ。

いくら魔法の才能があったとはいえ、晴天の霹靂というやつかもしれない。

「しかし、ヴェルの奴。どんどん出世していくな」

才能があるから当たり前なのだが、エルからすれば心配なのであ

ろう。
いくら剣の才能があるとはいえ、王都の騎士団に行けばエルを超える腕前の騎士など沢山いる。
私も同じで、槍で私に勝る人など沢山いるのだ。
ルイーゼは特別として、彼女も心配だから暇さえあればヴェルにくっ付いているのだと思う。
基本的に、ルイーゼは一人の女性としてヴェルが好きなのであろうが。
魔法の才能があって、財力もある。
背も平均的だし、顔も『エーリッヒ兄さんには完全に負けている』と常々口にしていたが、平均よりは整った顔立ちをしていると思う。
というか、エーリッヒさんは、ブライヒレーダー辺境伯家中でも滅多にいない美男子である。
比べるだけ、ヴェルが無謀とも言えたのだ。
「ついでに、面倒なのも増えた」
ルイーゼの言う通りで、なぜルートガー様が形式だけでもヴェルの家臣という事にしておけと言ったのかが、ここ数日で良くわかったからだ。
『我が名は、ヘクトール・フォン・プリングスハイム。プリングス

ハイム騎士爵家の三男にして、剣において我に勝てる者は無し！』

『私は、先のランケ家とアルトマン家との領地境における小競り合いにおいて、敵方の三名の騎士を戦闘不能にし！』

『私、エルスハイマー男爵と申します。今回、古代竜退治で活躍されたバウマイスター卿を慰労すべく屋敷でパーティーなどを。偶然ではありますが、私には今年十二歳になる妹がおりまして……』

『ヴェンデリン様においては、身の回りのお世話をするメイドが必要かと。そこで、我がエグルマイヤー商会が良い娘を紹介いたしたく。我が娘なのですが、身贔屓な分を差し引いても……』

最初は、ヴェルが叙勲された翌日から。

後ろは、まだ今日も終っていない。

『我が必殺の、槍術大車輪！』

今日もブラント邸の門前で、アピールなのか、一発芸なのか？

良くわからない技を披露している浪人がいる。

目立たないと駄目なのは良くわかるのだが、ただ目立てば良いわけではないのは、ご覧の通りであった。

何か、ブラント邸前の風が強いような気がする。

準男爵になったヴェルの家臣志願者に、自分の娘や姉妹を妻として勧める貴族に、メイド名目での妾の押し付け。

商会の当主が多いのは、どうにかして貴族家の専属となって身代を大きくしたいという野心があるからだ。

普通、こういう場合は領地持ちの貴族が好まれるのだが、ヴェルはとんでもない額の金を持っている。
バウマイスター準男爵家の御用商人となり、ヴェルから資金の運用を任されたら。
アルテリオさんに言わせると、政商クラスでも涎が出るほどの優良物件なのだそうだ。

そんなわけで、並み居るこれら有象無象を避けるべく。
エルは従士長で、私とルイーゼは護衛兼メイドという扱いになっていた。

あとは、周囲が勝手に妾だと思ってくれれば御の字なのだそうだ。
そういえば、メイド服は着なくても良いのであろうか？

『君達も、そのくらいの覚悟はあってバウマイスター卿と行動を共にしていると思いますが……』

口調は丁寧だが、ルートガー様の言葉は厳しい。
今までヴェルにくっ付いて良い思いをした分、デメリットも引き受けて当然。

彼は、そう言っているのだ。

『俺は、軍の指揮とかも習わないとな』

エルは、ヴェルの家臣として生きる覚悟を決めているようだ。
特に動揺した様子はなかった。

『ボクは、ヴェルの側室さん？　妾？』

ルイーゼに関しては、彼女はヴェルの傍に居られれば良いらしい。
陪臣の娘なので、ヴェルの正妻になれるなどと言う甘い夢は元から抱いていないようだ。

『イーナ殿は、どうです？』

『私は……』

ヴェルは、出会った頃から私達にえらく寛容だ。
甘いとも言えるが、その甘さに私は甘え切っていた。
だがルイーゼとは違って、ヴェルに甘えた態度を見せたり、上手く会話したりが出来ていなかった。

きっとヴェルは、私をつまらないキツイ女だと思っているのであろう。

『今のところは、バウマイスター卿のパーティーメンバー兼家臣で良いと思うけどね』

そこで私に話しかけて来たのは、ヴェルのお兄さんであるエーリッヒさんであった。

『これは、私も不徳だったと思うんだけどね』

ヴェルはその才能のせいで、家族からは虐められたりはしなかったものの、互いになるべく関わり合わない関係を六年以上も続けていたらしい。

『あの年で、妙に一人に慣れているというか。積極的に他者と関わり合わないような。正直、結婚式に君達を連れて来るとは思わなかったくらいだ』

エーリッヒさんは、『成人するまで、自分が王都で面倒を見れば良かったのかな？』と悩んだ事もあったそうだ。

兄や両親が、そこまでヴェルを危険視するとのかと。

そして、それをまだ子供なのに平然と受け入れる物分りの良過ぎる弟にもだ。

『君達も、ヴェルも、まだ子供だからね。暫くは表向きの形式だけ整えて今まで通りで良いんだよ』

この言葉に、私はえらく救われたような気がする。

ただ、それから数日後に、同じ人物がその子供に厄介な仕事を持ち込むのであったが。

「バウマイスター準男爵家諸侯軍ですか？」

「私も賛成はしたくなかった。でも、編成しないと色々と面倒になるんだ」

ヴェルが王国からの命令により、王都郊外の軍駐屯地へと連れ去られた翌日。

朝、起きるのと同時にエーリッヒさんが話を切り出してくる。

内容は、私達を中心に諸侯軍を編成するという話であった。

「そんな突然にですか？」

「残念だけど、編成しないと収まらないんだ」

そう言いながらエーリッヒさんがリビングのカーテンを開けると、居候をしているブラント家の外には多くの人間が集まっていた。

「仕官希望者ですか？」

「いや、そちらはほとんどいない」

ここ数日で、私達の存在が広まったせいであろう。

一部例外を除いて、押し掛け仕官行為や、妾押し掛け行為は激減している。

その代わりに、今度は陣借り希望者が増えたそうだ。

「陣借りですか？」

初めて聞く言葉なので、私は思わず首を傾げてしまう。

「まずは、ヴェルが何の件で呼ばれたのかだね」

これは、エーリッヒさんの寄り親であるルックナー財務卿やモンジェラ子爵から連絡が来たそうだ。

王国で一番偉い人が、王都に近い魔物の領域を開放すべく、そこを支配する老属性竜の退治をヴェルにも命じた。

他のメンバーは、王国筆頭魔導師に、ヴェルと同じく巻き込まれたブランターク様のようだ。

何気に、あの人もツイていない部分があると思う。

「三人で属性竜を討ち。その後、軍と冒険者有志で統率が無くなった魔物を殲滅していく作戦のようだね」

作戦に参加する軍は、王国軍王都駐留軍から選ばれた精鋭を。残りは冒険者ギルドに募集を出し、自信のある者のみが参加する事になっていた。

「何かが足りないと思わないかい？」

「そういえば……」

ここ二百年以上も戦争は無かったが、王国が戦争をする際には、王国軍の他に指名された貴族が諸侯軍を編成して参加するのが普通だ。

「そう、王都周辺にも所領を持つ貴族はいるのに、彼らには動員命令が来なかった。理由はわかるかな？」

「ええと……。戦功を挙げた際の褒賞のせいでですか？」

「正解だ」

王国が広大な穀倉地帯を直轄地として得るために、今回の作戦は決行される。

そこに多くの貴族が参戦して、万が一にも戦功を挙げてしまった

ら。

褒美に領地を与える可能性も、考慮しないといけなかったからだ。

「王国軍には貴族も居るけど、当主以外か、当主でも法衣ばかりだしね」

戦功に対する褒美は、勲章と金銭で済ます事が可能である。

元々貴族としてよりも、王国軍軍人として出陣する名目の方が高いし、褒賞も金銭や軍内での昇進などで済ませるからだ。

冒険者に至っては、最初から倒した分だけの出来高払いなので言うまでもなかった。

「でも、本来の所領から離れた飛び地とか欲しいのかな？」

「次男に弟にと。他の一族に相続させてしまえば良いからね」

エルの疑問に、エーリッヒさんはそのように答えていた。

なるほど、継承争いの緩和と一族の発展という点から考えても、悪くない考え方ではあった。

「あれ？　でも、ヴェルは貴族枠での参加だよね？」

法で、未成年者が魔物の領域に入る事は禁止されている。

今回、未成年者であるヴェルが動員されたのは、貴族が戦争で借り出される際に当主が何歳でも問題は無いという法の穴を突かれたからだ。

「そう、貴族の枠で参加しているのさ」

貴族が動員されるわけだから、当然その貴族が兵を率いても構わないわけだ。

「相手が属性竜だから、別行動だろうけどね」

当主は最前線で属性竜と戦い、諸侯軍は後方で魔物と戦う。

そういう役割分担になるそうだ。

「王宮筆頭魔導師様は男爵だけど、彼は陛下の個人的な親友で一番信用されている家臣だそうだ。当然、陛下の意図は読むはず」

空気を読まないで、男爵でもある彼が堂々と諸侯軍を編成して繰り出してくる。

という事は無いらしい。

少なくとも、エーリッヒさんの寄り親であるルックナー財務卿は確認をしていないそうだ。

「王宮筆頭魔導師様は、法衣だからね。そう簡単に軍を編成可能な兵士なんて揃えられないし」

これは、ブランターク様の派遣要請に答えたブライヒレーダー辺境伯様も同様であった。

王都に屋敷は維持しているのだが、人員は数名の常駐家臣に警護の兵士に、屋敷を維持する使用人のみ。

これで、諸侯軍など編成できるはずもなかった。

王国側としても、ブライヒレーダー辺境伯様に諸侯軍など出されても困るだけであり、ブランターク様だけを借りたらしい。

「ブライヒレーダー辺境伯様の諸侯軍に参加を認めると、他の辺境伯が五月蝿いですから」

『うちも！』となるのは、当然の結末とも言えた。

「それで、最後に残ったのがヴェルか」

陛下は、ヴェルに単身で来いとは一言も言わなかったそうだ。

そうなると、ヴェルだけは軍勢を率いても良いという解釈も可能とも言える。

準男爵になったばかりでの突然の出陣命令で、まだ家の体裁など整えてはいないと高を括ったのか？

それとも、わざとなのか？

そこで最初の陣借りに戻るのだが、貴族の子弟や浪人などが一時的にバウマイスター準男爵家軍に席を置き、そこで活躍をして経歴に箔を付けるか感状を書いて貰う。

これが、陣借りと呼ばれる制度であった。

制度というのは、相応しくないかもしれない。

王国側とて、動員された貴族の諸侯軍が少ないと戦力にならないので、半ば黙認していると言うのが正しいようであった。

「陣を借りる側は、戦功と名誉と褒賞を求めてだね」

今回の場合は、多くの魔物を狩って報酬を得つつ、どの程度の戦功を立てたのかを感状を出して評価して貰う。

大活躍をすれば、陣を借りた貴族家にスカウトされる事もあるし、他に仕官する際にも紹介状と共に感状は有効な資料となる。

逆にバウマイスター家側のメリットは、少なくとも軍勢の数で恥をかかないで済むという点だ。

動員中の食住の面倒はバウマイスター家持ちだが、武具などは陣借りする側が自前で準備するのが当然で、戦死・戦傷も一度の見舞い金で済む。

安めに軍勢の数を揃える点において、これほど便利な制度はなかった。

「ですが、軍を編成するって言われても……」

多少腕が立つとはいえ、十二歳の少年少女三人に、ベテランも多い陣借り希望者をメインにした軍の編成と運営など不可能である。

困っていると、助け舟を出して来たのはエーリッヒさんであった。

「そこで、私の出番らしいね。うん、寄り親達に言われたさ」

竜殺しの英雄にして、準男爵家を立ち上げて初の動員。

ここでヴェルに恥をかかせるのは、同じ王国貴族としてどうなのか？

という建て前の元、ルックナー財務卿やモンジェラ子爵が、ブライヒレーダー辺境伯様を差し置いて恩を売るための策であろう。

「名目上の代将は、従士長であるエルヴィン君に任せるとして」

このバウマイスター軍は、出征期間中は主将であるヴェルとは合流できないそうだ。
そこで、エルを代将に私とルイーゼも幹部に入れ。
エーリッヒさんが、陣借り者との契約交渉、必要な資金や物資の管理、王宮や役所などへ提出する必要な書類などの作成と。
数多ある事務的なお仕事を、やってくれるそうだ。

「名目は、バウマイスター軍の参謀と副将扱いかな？　腕っ節はまるで駄目だから、後方支援専門で宜しくね」

もう既に、ヴェルの元を尋ねて必要な資金も貰っているそうだ。
さすがは、エーリッヒさんとでも言うべきであろうか？

「ですが、エーリッヒさんはブラント家の当主では？」

同じ貴族同士なので、一方の下に入ってしまうのは問題のような気がしたのだ。

「私はまだ跡取りだから大丈夫。爵位はまだ義父が持っているから」

それなら問題は無いが、予想では結婚後に行われる予定であった爵位継承を遅らせたのであろう。
主に、ルックナー財務卿からの要請であると思われるが。

貴族の爵位継承は、今の当主が生きている間でも死後でもどちらでも良い。
ただ、中央の法衣貴族は生前継承が大半で、領地持ち貴族は死後継承が大半。

なぜ違うのかは誰にもわからないのだが、ただそういう慣習だとしか言い様がなかった。
法衣は役職持ちが多いので、その役職を老齢でこなせなくなる前にという理由というか説が存在しているのだが。

なお、後継者に継承後は、譲った先代も前の爵位格の扱いを受ける。
年金が出るわけではないが、公の場での扱いが、例えばルートガーさんだと騎士爵位持ちと同じ扱いになるのだ。
一種の名誉爵位だと思うと、わかり易いのかもしれない。

『引退したジジイをぞんざいに扱うな！』という、年寄りの本音も見え隠れもするのだが。

「では、問題ないですね」

「『うわっ、何て面倒な！　エーリッヒ兄さん、報酬は弾みます！』って言っていたね。うん、結婚直後で物入りなのでありがたい」

当然、エーリッヒさん一人では回らない。
そこで、ルックナー財務卿とモンジェラ子爵が出てくるわけだ。

彼らが紹介する、財務閥に所属する貴族の子弟に。
エーリッヒさんの職場の後輩達なども、休職して後方支援で手助けをするそうだ。

「休職ですか？　大丈夫でしょうか？」

「全然問題ないから。むしろ、戦功が付くからありがたがられる」

休職の許可を出すのは、ルックナー財務卿とモンジェラ子爵なので文句など出ない。
休職中の給料は出ないが、それはエーリッヒさんがヴェルから預かった予算で戦陣手当て込みで出す予定で収入は増える。

職場の査定は、いくら財務系の役人でも貴族なので戦場経験があった方が良いに決まっているのだ。
長くても月単位でしかない休職など、出世の不利になるはずもなかった。

「希望者が多くてね。先輩を断るのは大変だったよ」

自分が実質ナンバー2になる諸侯軍に、職場の先輩が部下で入るとやり難い。
そんな理由で、エーリッヒさんは助っ人を全て後輩で固めたそうだ。

ルックナー財務卿やモンジェラ子爵が寄越す人材は、最初から言い含められているので問題はないそうだ。

「あとは、ブライヒレーダー辺境伯様だけど……」

ここで一人も出さない選択肢などまずあり得えず、王都の屋敷から後方支援担当の家臣、三名の文官、屋敷の警備隊長と十五名のベテラン警備兵、自分達で雇った陣借り者二十名ほどを寄越すそうだ。

ちなみに、費用は全額ブライヒレーダー辺境伯様が負担する。
理由は、ヴェルをお抱え魔法使いには出来なかったが、寄り子には確実にしたいので、隙あらば狙っているルックナー財務卿とモンジェラ子爵を牽制するためであった。

「ブライヒレーダー辺境伯様、気合を出して助っ人を出したね」

エーリッヒさんがバウマイスター家諸侯軍を編成すると聞くと、私とルイーゼは相談をして、すぐに彼女をブライヒレーダー辺境伯家別邸に使いとして出している。

その身体能力の全てを駆使して急ぎ戻ったルイーゼの成果が、一家としては最大の助っ人なのだから、よほどヴェルを寄り子として確保したいのであろう。

「そういえば、エルは？」

「陣借り者の面接」

面接とはいえ、陣借り者などは強くなければ使い道が無いのだ。エルと手合わせをして、残り二人の指揮官と普通に面接を行う。ちなみに、その二人の指揮官とはエーリッヒさんが助っ人を頼んだ二人のお兄さん達であった。

「とにかく寄せ集めだから、ある程度の指揮官は必要だよね」

というわけで、王都の警備隊で十数名の兵士を指揮しているヴェルとエーリッヒさん共通のお兄さん達。

三男のパウルさんと、四男のヘルムートさんであった。

休職の問題も、今回の出兵にはエドガー軍務卿が絡んでいるので文句など出るはずもない。

直属の上司にお伺いを立てたら『頑張って来い』と言われ、二十名ほどの貴族家出身の兵士達を付けられたそうだ。

彼らも、パウルさんやヘルムートさんと一緒に、陣借り者の面接の手伝いをしている。

「幸いにして、予算はヴェルからたっぷり出ている。期限までには、形にはなるかな」

「ヴェルは、幾ら預けたんです？」

「白金貨百枚」

「ヴェルは、どこかの方面軍でも編成するのでしょうか？」

バウマイスター軍は、後方支援者も入れて五百名以内に収める予定になっている。

諸侯軍と呼ばれてはいるが、実質はバウマイスター準男爵家軍に他家が助っ人を送っているだけなのだから当然だ。

あまりに数が多いと、『新興の準男爵風情が……』と騒ぐ貴族が出るので、ヴェルから預けられた予算が過剰過ぎるのだ。

「ちゃんと帳簿は付けているし、余ったら返せば良いよ。それに、陣借り者達も安心して魔物を狩れるという物さ」

活躍すれば、褒賞はケチらない良い貴族様だというアピールにもなるからだ。

今回は魔物の討伐なので、褒賞は倒した魔物の数に比例する契約になっている。

無いとは思うが、沢山倒し過ぎて褒賞が不足する事態は無いという安心感にも繋がるであろう。

「準男爵で、五百名は多いですね」

普通の法衣準男爵だと、三十名の諸侯軍編成でアップアップなのが現実だ。

陣借り者を含めてこの数字なので、人を雇うととにかく金がかかる事が良くわかる。

領地持ちだと、領内の男手を動員可能なので、同じ爵位でももう一つ桁が上がるそうだが。

ただ、いくら無料で動員可能とはいえ、働き手で税を納める領民を徴用し過ぎて、戦争後に借金だらけになる貴族も昔は多かったそうだ。

領内の田畑に手をかけられない分収穫が落ち、戦死・戦傷で人手も減るので当然ではあったのだが。

「このくらいの数にしないと、参加できない人が多過ぎて不満が出るんだ」

「まさに、寄り合い所帯……」

「諸派閥混成部隊だね。良く言ってだけど」

エーリッヒさんの認識は、的を得ているとしか言い様がなかった。

一族枠で、兄三人とその知己や部下達。

ヴェルの寄り親を狙っているブライヒレーダー辺境伯と、ルックナー財務卿やモンジェラ子爵。

エドガー軍務卿ですら、ヴェルの兄二人の休職を認めて助っ人まで送っているのだ。

「みんな、竜殺しの英雄と縁を繋ぎたいわけだね」

陣借り者達も、活躍して仕官狙いまではいかなくても、唯一動員された諸侯軍なので目立つという利点がある。

そこで得た感状は、他の貴族が出す感状よりも効果があると思っているのであろう。

この人数まで絞るのに、大分手間がかかっていたのだ。

「面倒な話ですね」

「ヴェルが、一番それを思っていると思うよ。さて、人員は揃ったから役割分担を決める会議に、必要な食料などの物資も購入しておかないと。アルテリオさんに連絡を取るかな」

実務は、エーリッヒさんが上手く回してくれるようだ。

出来る事はやるが、私達は十二歳の子供でしかない。

それでも、名目上はヴェルの三人しかいない正式な家臣である。

「必要な時に、偉そうに指定された場所に立っていてね。言い方が悪いけど」

予想はしていたが、お飾りという事なのであろう。

いきなり実務を全て振られても困るから、文句は言えないのだが。

「あと、もう一つ仕事があるんだ」

「何ですか？」

「怪我は治せるにしても、死なないでね。私と兄二人に、君達三人は死ぬ事が許されないから」

対魔物ではあるが、これは戦争なのだ。
当然、死者が出る可能性が高いわけで。
だが、エーリッヒさんと二人のお兄さん達に、私達三人は死ぬのは禁止らしい。

「可哀想だけど、死ぬのは陣借りしている人達が先」

上が詰っているので、彼らは命をかけて戦って評価を得る必要がある。
その話をエーリッヒさんから聞いた時に、自分達は相当に恵まれた環境にいるのだなと実感してしまう。

「今は、出来る事を精一杯にですか」

「そうだね。金勘定だけの私が言うのも何だけど……」

それから数日後、大慌てで準備を終えたバウマイスター準男爵軍五百七名は、王国軍パルケニア草原方面派遣軍と合流して戦場へと赴くのであった。

「チャンスだ。魔物を沢山討って、ヴェルに借りた金を」

「エルは、本陣で構えているのが仕事」

「魔物狩りてぇ！」

「ボクは？」

「前に出て活躍すると、陣借り者達に嫌われるわよ。エーリッヒさん、パウルさん、ヘルムートさんの安全第一で」

「だよねぇ」

私の仕事は相変わらず窘め役だけのような気もするのだが、とにかくこの諸派閥混成軍こと、『各貴族の思惑一杯軍』は、何とか無事に出発するのであった。

第三十五話　婚約者。

「アームストロング、ブランターク、バウマイスター準男爵の三名。共に、グレードグランドの討伐任務ご苦労であった」

グレードグランドを倒してから十日後、その任務に参加した俺達は再び陛下との面会を果たしていた。

「おかげで、パルケニア草原は有望な穀倉地帯となるであろう」

陛下の表情はご機嫌だ。

長年好条件にも関わらず、老巨竜に邪魔されて開発が不可能であった土地がようやく開発可能になるからだ。

加えて、現在も一部残存している魔物の討伐は進んでいるが、既に大半の場所から魔物は全て駆逐されている。

やはり、パルケニア草原を支配していたグレードグランドの力は偉大であったようだ。

今では全く集団で動けず、兵士や冒険者達に一方的に狩られているらしい。

死傷者が二百名ほど出ているようであったが、これは仕方が無い事なのかもしれない。

「犠牲になった者には、遺族への補償を厚くする予定だ。偽善ではあると思うが、しないよりはマシであろう」

「陛下のご温情に、このアームストロング。感服いたしました」

確かに偽善だが、やはりしないよりはマシであろう。
それに、兵士や冒険者とはそういう仕事なのだ。
特に冒険者は、年に千人を超える犠牲者が出るという。

他に食える仕事が無いわけでもないので、命をチップに金と名誉を求めて失敗したからと言って、後で文句を言うのは筋違いというものであろう。

冒険者でも、己の技量を冷静に判断して今回の作戦に参加していない者も多くいたのだから。

それに、この規模の出兵の割には被害者は少ない方である。
陛下が教会に命じて、治癒魔法の使い手を出来るだけ従軍させたからだ。
聖治癒魔法の使える聖職者に、教会が普段から把握している在野の水治癒魔法の使い手にと。
両系統の治癒魔法の使い手を、教会はその強大なコネを用いて大量に召集して従軍させていた。

それもそのはずで、パルケニア草原の開発が進めばそこに一定の割合で教会が設置される。
設置された教会や教区の分だけポストは増えるわけで、表向きは陛下からの命令だからという事になっているが、実際には揉み手で依頼を受けていたわけだ。

現場の人間は真面目に負傷者の治療をしていたのだが、偉いさんにはそういう思惑もあるというのはどこの世界でも一緒であった。

「褒美を出せないですまないの」

「前回で、大金を貰っていますから」

それもあるが、今回もグレードグランドの売却代金を貰っていた。
凍らせた血に、鱗、皮、肉、内臓、骨など。
殺した直後に魔法の袋に入れて鮮度を保ったので、これがかなり高額で売れていたのだ。
あとは、やはり巨大な魔石を体内に持っていたので、これは王国が白金貨四百枚で購入して行った。

当然、あとの一週間で得た魔物の素材と合わせて、アームストロング導師とブランタークさんで三等分したのだが、それが一人頭白金貨四百五十枚と金貨五十枚。
やはり、竜の素材は全てが高い。
もし前回の古代竜がアンデッドではなくて生きていたら、もっと買い取り額は高騰していたであろう。

「（もう大金過ぎて、良くわからん）」

以上の理由から、別に褒美など必要無いと思う俺であった。
前世で、給料二十五万八千七百四十六円（税込み）な俺からすると、白金貨が複数出て来るともう沢山なのだ。
白金貨など、この国では死ぬまで見ない人間の方が多い。
実家の領地で白金貨を見た事がある人間など、貴族であるはずの父も含めてゼロのはずであった。

「ただ名誉は必要なのでな。三人に、双竜勲章を与えるものとする」

ここ二百年以上も誰も貰っていなかったのに、俺が久しぶりに貰い、またそれから半月もしないでもう一個貰ってしまった。

見た目も金とエメラルドで出来ていて綺麗なのだが、あまりありがたみが無いような気がするのは、俺の感覚が麻痺しているのであろう。

実際、アームストロング導師とブランタークさんは、珍しく緊張した面持ちで陛下から勲章を付けて貰っていたのだから。

「あとは、爵位であるかの。アームストロングは子爵に、バウマイスター卿は、男爵に陞爵させるものとする」

アームストロング導師は、伯爵家の次男である。

次男なので爵位は継げないのだが、筆頭王宮魔導師なので独自に男爵の爵位を陛下から受けていたのだ。

俺と同じく領地は無くて年金だけなのだが、その爵位が子爵に上がり、俺も準男爵から男爵に上がっていた。

法衣子爵の年金は白金貨二枚で、法衣男爵は白金貨一枚。

なかなかの高収入である。

やはり、準男爵と男爵の間には大きな壁が存在しているようだ。

その分、なんっちゃって貴族である俺とは違い。

通常の王都在住の法衣貴族は、その家格に合う屋敷の維持に防犯なども兼ねた相応の私兵や使用人を雇い、他にも様々な付き合いがある。

寄り親であると寄り子への支援なども時には必要であるし、エーリッヒ兄さんの結婚式の時のように、冠婚葬祭で家格に相応しいご祝儀を出す必要もあった。

出て行くお金も、相応に増えると言う事なのだ。

なるほど、大物貴族でも普段は意外とケチだと言うエーリッヒ兄

さんの発言にも納得してしまう。

あと、普通は名誉だけの勲章の類であったが、実は双竜勲章だけは別らしい。

ここ二百年以上も貰った人が居なかったので、担当の役人が説明するのを忘れてしまうほどであったが、双竜勲章には生涯名誉年金が付与されているのだそうだ。

その額は、年に白金貨三枚。

俺は二つ持っているので、年に白金貨六枚だそうだ。

「（褒美は出ているよな？）光栄の極みです」

「竜の素材に比べれば、ささやかな物だがの」

二回の竜討伐による素材の販売益に比べると微々たる金額に見えるが、そもそも竜など五十年に一度討伐されれば早い方だと思われるほどだ。

滅多に、あのような大金が動く事などないのが普通であった。

「ブランタークは本人の希望もあり、別の褒美をブライヒレーダー辺境伯に預ける物とする」

ブランタークさんはブライヒレーダー辺境伯の家臣で、今回の従軍も陛下がブライヒレーダー辺境伯に命令した形になっている。

なので、いくら陛下でも勝手に爵位を与えるわけにはいかならしい。

本人もそんな物はいらないと言ったので、その代わりに宝石や財宝などをブライヒレーダー辺境伯経由で貰うようであった。

さすがにそれすら無しでは、陛下が碌に功績すら認めないと噂になってしまうからであろう。

あと双竜勲章であったが、さすがに勲章の類を陪臣だからと言って与えられないという事も無いようだ。

ブランタークさんも、普通に貰っている。

このように、直臣と陪臣の違いとは色々と面倒なようだ。

「此度は、若き才能が見出せて余は満足である。これからも精進して王国に尽くしてくれると嬉しい。期待しておるぞ、バウマイスター男爵」

「はっ」

そんな期待よりも、早く平穏な夏休みを過ごさせて欲しい。

俺は陛下に対して頭を下げながら、切にそう願うのであった。

「お替り！」

「えらく沢山食べるね」

「お腹が減っていたし、ここ半月ほど碌な物を食べていなかったんだよ」

王城での謁見を終えた俺は、すぐにブラント家に戻りそこで遅めの昼食を食べていた。

メイドが作ったシチューやパスタやサラダなどを、俺はお代りを

しながら食べていく。

その横で、ルイーゼが呆れたような顔をしながら話しかけてくる。

「郊外の駐屯地で、軍の進発準備に一週間。グレードグランドが鎮座するパルケニア草原の中心地まで他の魔物に見付からないように行くのに三日間。最後に、残った魔物の中で強そうなのを間引くのに一週間。帰還に三日間。ああっ……、せっかくの夏休みが……」

王都に到着してからの俺は、ほとんど自分の意思で動けていなかった。

せっかく王都観光を楽しもうと思ったのに、王都での印象の大半は、堅苦しい王宮での謁見に、郊外の男臭い汗と埃塗れの駐屯地と、そこで出される量だけはある不味い飯。

続けて、特撮物の怪獣のような竜との死闘。

挙句にその戦いでは、某有名漫画も真っ青な、とても魔法使いとは思えない白熱バトルを、ガチムチのおっさんが行っていた。

まさか鎧越しとはいえ、竜を素手で殴り付けたり、蹴りを入れたり、尻尾を掴んでぶん投げる魔法使いがいるとは思わなかったのだ。

あとは、本当ならば成人後にしか行えない魔物討伐を貴族なのでという理由で行っている。

正直に言うと、竜に比べればこれらの魔物達は弱かった。

ただ数が多いのと、なるべく掃討戦に出ている軍や冒険者達に犠牲が出ないようにと、アームストロング導師の命令で強い個体を間引き続けていたからだ。

掃討戦の一週間、遊撃部隊扱いの俺達はムサい男三人で魔物を殺

し、食事も自炊で、睡眠も交代で行っていた。
冒険者になった時の事を考慮すると良い経験になったと思うが、しかしながらこの三人で一番まともに飯を作れるのが俺と言う時点で終わっている。
軍の駐屯地で出された、量だけは多い飯がまともに見えるのだから。

というか、アームストロング導師もブランタークさんも、現役の冒険者時代はどうしていたのだろうか？
などと考えていると、ブランタークさんはその理由を教えてくれていた。

『飯の支度とかはよ。全部、アルテリオに任せていたからな。俺は、酒が飲めれば問題ないし』

なるほど、アルテリオさんはパーティーの縁の下の力持ちであったらしい。
引退後に、商人として大成できたわけだ。
それよりもブランタークさんは、塩辛いジャーキーなどに酒だけという晩酌は止めた方が良いと思う。
良く肝臓が悪くなったり、成人病にならない物だと思ってしまうほどだ。

そして、もう一人のアームストロング導師はもっと酷かった。
彼の当番になると、ただ血抜きされて切り分けられた魔物の肉を、直火で焼いて食べるだけであったからだ。
初日くらいはワイルドで面白いくらいで済まされるが、毎回だとウンザリしてしまう。
というか、アームストロング導師は貴族のはずなのに、普段の食

事はどうなっているのであろうか？

『血抜きをして塩を振って焼いた魔物の肉は、物凄く栄養があるのである』

正直、とても貴族とは思えない人であった。

魔物討伐で風呂にも入らずに薄汚れているので、下手すると山賊に見えてしまう時もあったほどだ。

多分、夜の山道で遭ったら死すら覚悟してしまうであろう。

『坊主、料理なんて出来たんだな』

『うむ、良い味である。明日からは、少年に食事を任せる事にする』

何とか工夫して、スープや米を使った雑炊などを作っていた俺がまだマシであったのだ。

しかも何気に、後半の食事当番を二人に押し付けられてもいる。

一番年下の俺は、ただ素直に頷くしかなかった。

「汗と土煙と血に塗れた夏休みか……」

「イーナ、それは言わないで……」

実際、その通りなのだから余計に腹が立つ。

しかも、俺達が王都に居られる時間は今日を含めてもあと三日間しかなかった。

夏休みはまだあるのだが、夏休み中ずっと王都に居るというのもエーリッヒ兄さんの迷惑になるし、正直五月蝿いのが増えたような気がする。

今もブラント邸の前で、『我が必殺の、槍術大車輪！』とか言う掛け声か聞こえていた。

少し風が出ているようだが、俺はこの大車輪な人を雇わないといけないのであろうか？

イーナは、『放置しておけば良い』と冷たく返事をしていたのだが。

「もうお土産とかも買いに行かないと」

「俺は、お土産なんて買わないからな。残り三日間で、出来る限り王都を満喫してやるんだ」

「必死ね……」

お土産というのは、親しい友人や家族が王都の外にいる人に必要なのだ。

エルは、俺達以外にも予備校に親しい友人がいるのでそれを選びに行く予定であったし、イーナとルイーゼはまだ実家に住んでいて、別に家族との関係が悪いわけではない。

俺はもう実家の家族とは顔を合わせるつもりはないし、友人はみんな一緒に王都に来ているので、わざわざお土産を買う必要もなかった。

精々で、礼儀として予備校の講師や校長にくらいであろうか？

そういう人への土産は、もうルートガーさんが準備しているので必要無かったのだ。

「とにかく、外に出るんだ！　王都観光を！」

「必死だな。ヴェルは……。というか、瞬間移動の魔法で来れば良いじゃないか」

なぜかエルが俺を見ながら呆れているようであったが、そんな事を気にしている場合ではない。

とにかく今は、王都を満喫する方が先であろう。

それに、確かに魔法を使えばいつでも王都には来れる。

だが今重要なのは、今この時をいかに楽しむべきかであった。

もう王様とか、貴族とかは必要ないのだ。

「お待ちください。ヴェンデリン殿」

急いでブラント邸をを出ようとした俺を、ルートガーさんが呼び止めていた。

「大変に申し訳ないのですが、聖教会本部から本洗礼の準備が出来ていると」

「しまった！」

聖教会本部で箔付けのために本洗礼を受ける件は、最初に陛下に謁見した際にホーエンハイム枢機卿と約束してしまっている。

しかも最初の予定も、急遽決まったグレードグランドの討伐任務で潰れているので、これを無視するわけにはいかなかった。

この世界で、教会を敵に回すわけにはいかないからだ。

「本洗礼ねえ……。エル達も来る？」

「遠慮しておくわ」

エルは、速攻で断っていた。

堅苦しいのは、嫌なのであろう。

俺も、嫌なのだが。

「エルは、私達の荷物持ち」

「残りの、銀貨一枚が返せないなんてね」

「新しい剣に。土産物を考えると、どう計算しても借金の返済が……」

エルの俺への借金は、ルイーゼが肩代わりをしている状態であった。

今回の従軍で十分に褒賞が出たはずなのだが、女性陣二人ほど節約に考慮しなかったのであろう。

全額返せずに、利子代わりに荷物持ちの刑を科されていた。

「焼き菓子なら、日持ちするよね」

「そうね。他にも、沢山名物とかもあるし。重ければ、エルに持たせるし」

「荷物の重さよりも、何店舗回らされるのかが不安だ……」

エル達は、下町にある観光客向けの土産物屋が立ち並ぶ通りで買い物をする予定らしい。

そして一方の俺は、教会で面白くも無い本洗礼を受けに聖教会本部へと出かけるのであった。

「ようこそ、おいでくださいました。バウマイスター準男爵。いや、男爵になられたのでしたな」

「これもひとえに、神のお導きかと」

「神は、バウマイスター男爵に良き加護を与えたようですな」

王都のほぼ中心部にある聖教会本部に到着した俺は、入り口で待ち構えていたホーエンハイム枢機卿以下、十数名の高司祭や司教達の出迎えを受けていた。

しかし、さすがはヘルムート王国のみならずアーカート神聖帝国でも唯一信仰されている宗教の総本山である。

ただ、アーカート神聖帝国では新教派プロテスタントを国教としているので、まるで別宗教のように聖教会本部同士の仲は悪いそうだが。

聖教会本部の敷地も広大で、建物も相当に金をかけて作っているのが誰にでもわかるほどであった。

洗礼などの神事を行う大聖堂などは、天井一面が巨大なステンドグラスで覆われ、なるほど宗教ほど儲かる商売は無いなと俺を実感させていた。

更に、このような会話となるわけであったが、これは定例の挨拶とでも言うべきであろうか。

俺は正統派カソリックの敬虔な信徒であり、『神様のおかげで、無事に竜を二匹も倒せました。ありがとう』とお礼を述べ、ホーエンハイム枢機卿達が『あなたに神の加護があって良かった』とお祝いを述べる。

別に俺は、神のおかげで竜が倒せたなんてこれっぽっちも思っていない。

向こうも、俺が真剣に神に感謝しているなんて思ってもいないであろう。

俺はまだ子供だが、大人同士で仲良くやりましょう。

お互いにギブアンドテイクでというのが、ぶっちゃけると今日の目的なのであった。

「あれほどの聖光が使えるバウマイスター男爵は、さぞや神に愛されているのでしょうな」

「ただ神の愛に感謝するのみです」

前世では無宗教で、今も実家時代は洗礼以外で教会に行った事は数回だけ。

それ以外で、碌に神に祈った事など無い俺に神の加護があるとは思えなかった。

どうやら、この聖の魔法は信仰心とはまるで関係ないらしい。

もし信仰心が使用条件なら、もっと聖職者に聖魔法を使える人間がいてもおかしくないであろう。

まあ、それを言わぬが華でもあり、教会はその有り余る金で聖魔法を使える人材を確保もしている。

聖魔法は、数少ない例外である人間の領域に顔を出すレイスなどのアンデット退治に便利な物であるし、聖の治癒魔法には威力が高い物が多い。

高位の聖治療魔法の使い手だと、千切れた腕くらいなら簡単に繋げるし、癌などの病気も治せ、心臓が止まっても数時間以内くらいなら生き返らせる事も可能らしい。

俺の聖魔法は高威力の聖光のみなので、治癒は水系統の魔法しか使えないのだが。

厄介な事に、治癒魔法は水系統にもほぼ同じ物が揃っている。
聖の治癒が使えると水の治癒が使えず、その逆もまた同じなので俺は水系統の治癒しか使えない。

威力は、師匠からは腕が千切れたくらいなら治せると太鼓判を押されていたが、実はそこまで大怪我をした事がないし、そんな人も今まで居なかったので碌に使った経験もなかった。

それに、エル達も碌に怪我などした事が無かった。
精々で少々のスリ傷くらいなので、それを治す程度にしか実際に使う機会が無かったのだ。

実は、パルケニア草原に出兵していた時に練習しようかと思ったのだが、ブランタークさんはともかくアームストロング導師が怪我などするはずもなく。
何しろ、本人が今までの人生で風邪すら引いた事がないと自慢しているほどなのだから。

『（何とかは、風邪引かねぇだな）』

『（ブランタークさん、聞こえるから）』

なお、治療応援の名目で味方部隊への合流を試みたのだが、主にアームストロング導師のせいで常に最前線であった事を記しておく。

『教会から派遣された部隊に任せるのである！　彼らで十分に対応可能であるし、我らが前線で危険な魔物を狩る事こそが、犠牲を減らす最良の手段なのである！』

正論ではあったが、俺はただ一度くらいは後方で休みたかっただけだ。

『空気読めよ、筋肉導師！』と、心の中で叫んでしまうほどであった。

「では、早速に本洗礼を始めましょう」

最初の予想では、長々と時間がかかるのかと思われた本洗礼であったが、実際には三十分をかからずに終了していた。

普通の洗礼と違う点は、司祭役がホーエンハイム枢機卿で、その他の高司祭達などがその雑用に回ったくらいであろうか？

お得意さんなので、高位の聖職者をケチらなかったようだ。

「本洗礼も無事に終わりました」

「ありがとうございます。これは、心付けですが」

必要ないとは言われたのだが、寄付を貰って喜ばない坊主はいなかったので、俺はホーエンハイム枢機卿に綺麗な絹の袋に寄付金を

入れて渡していた。

中身は、白金貨十枚。

大金ではあったが、ここでインパクトを与えておけば教会の坊主達は俺の味方となってくれるはずだ。

どうせ、まだ白金貨は千枚以上も持っていて、使い道など無かったのだから。

「これは、ご丁寧にすいません」

ホーエンハイム枢機卿は袋に入った貨幣を金貨だと思ったらしく、すぐにその袋を横にいた高司祭に普通に渡していた。

さすがに、この場で中身を見るような真似はしないようだ。

あとで、ビックリするかもしれなかったが。

いや、貴族からの寄付の相場などわからないので、実は普通なのかもしれない。

「さて、本洗礼も終わった事ですし、お茶でもいかがですかな？」

ホーエンハイム枢機卿にお茶に誘われたので、俺はそれを受ける事にする。

荘厳な聖堂を出て少し歩くと、その先にホーエンハイム枢機卿の執務室があると言う建物が見える。

建物の中に入ると、ソファーと机のある応接室ような部屋に案内されていた。

「奥が私の執務室です。面白みも無い普通の書斎ですが」

奥に見えるドアがその入り口らしい。
数秒後、別の方向にあるドアがノックされ、ホーエンハイム枢機卿の返事と共に一人の修道女姿の女性がお茶を持ってあらわれる。
いや、女性は女性なのだが、身長は百五十センチほどしかなく、確認できた顔も、俺とさして年齢に違いがあるようには見えなかった。
その少女は、まさに神秘的と言っても良いほど顔が整った美少女で、ベールから僅かに零れる長い金髪がキラキラと輝き、その神秘的なアメジスト色の瞳と相まって、俺は暫く彼女の顔に見惚れてしまっていた。
続けて気になったのは、その年齢に相応しくないほどの、ある部分の膨らみであろう。
あまり視線を送ると失礼になるのだが、同年代であろうイーナなど勝負にもならない二つの双丘が、本来体型が目立たないはずの修道服の、胸の部分を押し上げていた。
前世では十一歳のＦカップグラビアアイドルとかが存在していたし、この世界の人間は欧米人に近い姿格好の人が多い。
なので、十二歳くらいのＦカップ以上美少女がいても不思議ではないのであろう。
そう考えると、イーナとルイーズは色々と大変なのかもしれなかったが。
そして俺は、もう一つの事実にも気が付いていた。

「魔力持ちですか？」

「やはりわかりますか。今日はお茶汲みをさせていますが、実は私の孫娘でして」

「エリーゼ・カタリーナ・フォン・ホーエンハイムと申します」

何とこの美少女は、ホーエンハイム枢機卿の孫娘であった。

顔付きとかはあまり似ていないようが気がしたが、孫なので子供ほど似なかったのであろう。

そして、やはりホーエンハイム枢機卿は貴族であった。

実は、法衣で無役の貴族は、聖職者として身を立てるケースが多い。

一応、実家が平民でも貴族でも商人でも、出世に差は無いとされているのだが、やはり偉くなるためにはどれだけ寄付金を集められたのかという生臭い現実があり、教会の上層部は貴族と商人出身者で占められていた。

あとは、戒律がかなり緩く。

結婚も自由で、肉や魚が駄目という事もなく、精々人前で酒や煙草を飲むなという程度らしい。

要するに、あまり聖職者として世間から白眼視されなければ自由という事になっていたのだ。

とはいえ、ここ最近は生臭坊主の数が増えているらしい。

金があるので高利貸しなどで蓄財をしたり、公式に妾を持つのはさすがに駄目なのにコッソリと愛人を囲ったり、酒の飲み過ぎでアルコール依存症になったりと。

ここ数百年はそんな感じらしいが、そのせいで新教徒プロテスタントが生まれ、双方が対立しているという事情も発生していた。
ただ、その肝心の新教徒プロテスタントですら、数百年の歴史で正教徒カソリックと大差が無くなっていて、またそれを正すために懐古派が生まれるという歴史が繰り返されて来たのだが。

懐古派は、数千年前は当たり前であった聖職者の妻帯、肉・魚食、お茶、酒、煙草などの嗜好品禁止に。
昔の厳しかった教義を守り、信仰の原点に立ち戻るという目的の元で誕生している。
なので、信徒にも結婚禁止を除く厳しい教義を課している。
だが、そのせいで逆に信徒が増えないという矛盾も発生していた。

世間の人達の大半は、聖職者の堕落には眉を顰めている。
ところが、自分で厳しい戒律を守ろうとする意志があるのかと問われると、それは嫌な人が大半であった。

この辺の知識は全てエーリッヒ兄さんからであったが、話を聞くだけで気が滅入ってくるような話ではある。

前世も今世も、宗教にそう違いが無かったからだ。

『ホーエンハイム枢機卿は、マシな部類に入る人だという評判だね。無役の法衣だけど子爵だし、聖職者にしては寄付金に五月蝿くないし』

下手に平民出で高司祭などになっていると、何をするにも寄付金を寄越せと五月蝿いらしい。
上に上がるために、寄付金という営業ノルマに苦しんでいた頃の癖が抜け切らないのだ。

逆に貴族や商人出身者は、さほど苦労しなくても寄付金が集まって出世できるので、意外とその辺は鷹揚な人が多いそうだ。

『平民出の高司祭には、気を付けろ』

これが、世間の常識らしい。

「私の自慢の孫でしてな。聖の治癒術が使えるので、このように修道女として修行に出しているのです」

この世界の聖職者は男性も女性も結婚が自由だし、聖職者籍の出入りも自由なので。

彼女のような聖魔法の使い手でなくても、子供を教会に預ける人が多い。

貴族が多いので空いている時間に勉強などを教えて貰えるし、女の子には嫁入り修行の場としても提供されていたからだ。

「聖の治癒術が使えるのですか。俺は、聖の魔法は聖光しか使えないのです」

「使えるだけで大した物ですよ。それに、水の治癒魔法を使えるとかで？」

「ええ（良く知ってるな……）」

さすがは、教会幹部であるホーエンハイム枢機卿とでも言うべきであろうか？

今まで碌に水系統の治癒魔法など使った事もないのに、それが使える事が知られているのだから。

冒険者予備校ルートからであろうか？
数回、実習授業で披露した事があるので、その線で漏れたのであろう。
教会の諜報網が、とにかく広くて深い証拠でもあった。

「良くご存知で」

その時に、軽傷者を数名治している。
本当は、師匠が言うにはかなりの重傷者も普通に治せるそうなのだが、だからと言って急に重病人など現れるはずもなく。
俺の治癒魔法は、まだ未確定な部分があった。

「まあ、教会の目と耳は良いですからな」

所詮、俺程度の人間が下手に能力を隠しても隠し切れる物ではないので、ここは大人しくしている事にする。

『さすがは、アルフレッドの弟子である！　魔法の器用さは、師匠譲りなのである！』

一人、こう言って物凄く感心しそうな導師様がいたが。

「エリーゼは、あくまでも嫁入り前の手習いでここに置いています」

「あれ？　ですが、治癒術が使えるのですよね？」

「ええ、それもかなりの才能です」

魔力量は、中級から上級の間。
聖属性の魔法しか使えないという欠点があったが、先日のパルケ

ニア草原開放作戦でも、応急処置をして運び込んだ重傷者を数百人レベルで治療したとのホーエンハイム枢機卿からの話であった。

「この娘の祖父としては、普通に嫁いで欲しいのですよ。治癒術に関しては、結婚生活に支障が無い程度に指名を受けて働けば宜しいかと」

ホーエンハイム枢機卿は、少なくともこの孫娘を聖職者にするつもりはないようだ。

どうせ治癒術が使えるので、地元の教会や冒険者ギルドなどから治療の依頼は入るらしく、結局あまり変わらないのだとか。

嫁入りするまでは教会で見習い修道女として治癒を行い、結婚後は依頼で治療を行い、貰った代金の一部を教会に寄付する。

こういう、治癒術持ちの既婚女性は結構多いらしい。

「この子は器量も良いし、心根も優しい娘です。なので、最高の婿を探したいのです」

それに、エリーゼはホーエンハイム枢機卿の嫡男の娘なのだそうで、当然それなりに家格の釣り合う婿でないと駄目なようだ。

ホーエンハイム枢機卿は子爵なので、爵位が上下一個くらいの当主か跡継ぎに。

これくらいが相場だと思われる。

「エリーゼさんはお美しい方なので、競争になっているのでは？」

『人を茶に呼んで、孫娘自慢かよ！』とも思ったが、ここで教会の偉いさんを怒らせてもメリットなど無い。

俺は、ひたすらにエリーゼという娘を褒めていた。

前世における、二流商社サラリーマン時代の癖が出たのだ。

実際、褒めるのに値するほど美しい少女でもあったので、ヨイショする分には楽であったが。

もし〇ャイ子のような女だったら、さすがの俺も何も言えなかったであろうし。

「正直な話、是非にという家は多いですな」

数家の伯爵家から、当主や跡継ぎの正妻として打診を受けているそうだ。

「でしょうな。これほどにお美しい方だと。俺も、立候補してみようかな？」

後になって、なぜこんな事を口走ったのかを冷静に分析してみたのだが、それは俺が前世の記憶を引き摺っていたのようだ。

前世での俺は、簡単に言えば女にモテなかった。

本当に誇張無しでモテなかったので、イーナやルイーゼのような相当の美少女と知り合っても、自分が恋愛・婚姻対象になるとは思っていなかったのだ。

友人になれただけでもラッキーだと思うほど、まず縁の無いレベルの美少女だと思っていた。

そこに、リアルが無かったのであろう。

「おおっ！　エリーゼを、妻として受け入れてくださると？」

「まだ俺は未成年ですから、今だとまだ婚約でしょうかね？」

普段なら絶対に言えないセリフと口の軽さであったが、これはまずあり得ないと心の中で思っていたからであった。
一種の社交辞令、冗談の類だと思っていたのだ。

「そうですな。エリーゼもバウマイスター男爵と同じく十二歳なので、今は婚約だけにして成人後に正式に婚姻となるでしょうか？」

「そういう事になるでしょうね」

「では、そういう事で」

「えっ？」

突然、ホーエンハイム枢機卿が真顔になったので、俺は笑顔のまま凍り付いてしまう。

「陛下にお尋ねしたところ。『年も同じであるし、似合いの夫婦となるであろうな』とのお言葉を頂きまして」

「えっ？　これって、本当に？」

まさか、本当にこのエリーゼという娘と婚約する事になるとは思わず、俺は頭の中が完全に混乱したままであった。

「この娘の母親ですが、実はアームストロング導師の妹に当たりまして。導師も、この婚約には大賛成であると」

更に、とんでもない情報が飛び込んで来る。
陛下のお墨付きな上に、この娘はあの筋肉魔法使いアームストロ

ング導師の姪にあたる人物であるらしい。
なので、俺は彼とも親戚になってしまうようだ。

『ようだ』などと言うと、もう確定しているように聞こえるが、実際もう確定したような物であろう。
この情況で、この婚姻を断る勇気のある貴族など。
それは勇気があるのではなく、ただのバカか無謀なだけでしかない。

それと、結婚の意志をエリーゼの方に聞くのは酷だ。
彼女は貴族の生まれであり、親に俺と婚約しろと言われて断れるはずがないからだ。
貴族の結婚は、半分責務で仕事でもある。
だからこそ、恋愛結婚をした貴族が後世に語り継がれるほど珍しがられるのだから。

「エリーゼも良いな？　夫君となるバウマイスター男爵殿だ。挨拶をしなさい」

「はい、お祖父様。バウマイスター男爵様のご活躍は、王都中の話題になっていたのでお伺いしておりました。そのような方の妻となれて嬉しゅうございます」

「……」

「バウマイスター男爵殿？」

「ええと……。ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターです。正式な婚姻は成人後ですが、宜しくお願いします」

「こちらこそ、宜しくお願いします」

いくら前世の記憶があっても、強力な魔法が使えても。

やはり、俺は所詮俺。

老練なホーエンハイム枢機卿に乗せられて、僅か十二歳にして婚約者まで決められてしまうのであった。

幕間八　婚約者選定の舞台裏。

「さて、問題はヴェンデリン君の婚約者ですが……」

不運にも、王都の教会有力者であるホーエンハイム枢機卿がヴェンデリンと孫娘との婚約を成立させた直後。

ブライヒレーダー辺境伯は、執務室で手遅れ感で一杯の婚約者選定作業を進めていた。

何しろ、自分はヴェンデリンの寄り親なのだ。

彼の婚約者を、自分が決めるのが当然だと考えていた。

もはや間に合っていないのだが、それでブライヒレーダー辺境伯を責めるのは酷である。

大陸南部地域と王都との距離は、それほど離れているのだという事なのだから。

「ですが……」

執務室に、ブライヒレーダー辺境伯の命令で婚約者候補の資料を持って来た家臣の顔は暗い。

その理由は、親戚筋にも年頃の娘が居ないという問題のせいであった。

完全な弾不足なのだ。

「みなさん、年頃の娘さんは婚姻済みです」

「えっ、そうでしたっけ？」

確かに、よくよく思い出すと自分も結婚式に出席しているのだから、彼女達は全員婚姻済みだ。

「元々、年上過ぎるので候補者にはならないかと……」

貴族同士の婚姻なので、どうしても嫁の方が年上過ぎるのは良くないとされているからだ。

平民でもそうなのだから、この世界の男尊女卑には根強い物が存在していた。

たまに爵位が上の大貴族が、売れ残った年増の娘を下級貴族に押し付ける事がある。

普通の寄り親と寄り子の関係ならそれも致し方なしだが、ヴェンデリンにそれをすると、たちまち中央の法衣貴族達が攻撃してくるであろう。

『竜殺しの英雄に、子が生めるかどうかもわからない年増を？やれやれ、これだから地方の貴族は売れ残りの娘を抱える事となるのだ』と、批判されるのは目に見えていた。

「では、一個上までは容認として、十三歳から下ですか」

「居る事には居るのですが……」

分家に数名、幼い娘がいるそうだ。

だが、一番年上でも四歳。

一番下は、先月生まれたばかりである。

婚約でも子供など押し付けたら、中央の強欲法衣貴族達に攻撃材料を作るだけであった。

『成人時に、相手も成人でないと意味が無い！　子供が作れないではないか！』と、口撃されるのがオチであろう。

実際には、政治的な事情で年の差のある夫婦は多数存在している。要するに、ブライヒレーダー辺境伯にケチを付けるのが目的なので理由は何でも良いのだ。

「私の子は……。男ばかりじゃないですか！」

「ですね」

どういうわけか、ブライヒレーダー辺境伯本家は子供が男ばかりになる傾向があった。

分家などにはたまに生まれるのだが、生まれても結果はご覧の有様であった。

ブライヒレーダー辺境伯は、己の運の無さにただ絶句してしまう。

「ですから、あれほど妾を増やせと」

「それで、また男の子が生まれたら駄目でしょう」

男子が居ないと家を継がせられないが、逆に多過ぎてもその処遇に悩む事になる。

さすがに、辺境伯本家の子供を平民に落すわけにはいかないからだ。

「養子を取りましょう！」

「それも、攻撃材料になります」

『血の繋がらぬ養子を宛がって、竜殺しの英雄の縁戚を名乗るか』と、あの強欲な法衣貴族達なら、十分にあり得るとブライヒレーダー辺境伯は考えていた。

「あいつら、自分達は平気で養子を押し付ける癖に、人には平気で文句を付けますからね」

「それが、数少ない武器ですからな」

法衣貴族は、領地を持たない。
経済力も、同格の領地持ち貴族よりも遙かに劣る。

よって、役職と中央の権威と政治的な立ち回りで、ブライヒレーダー辺境伯のような大物在地貴族と渡り合うのが常であった。

「ところで、お館様。アニータ様の件ですが……」

「なぜに、ここでその話を出しますか？」

アニータとは、先代ブライヒレーダー辺境伯の末の妹にして御年四十歳越えの独身。
いまだにブライヒレーダー辺境伯邸で、悠々自適の暮らしをしている女性であった。

平成日本なら、家事手伝いと呼ばれる身分の女性である。

ブライヒレーダー辺境伯からすると叔母なのであまり強くも言えず、どこかに嫁にやるという話も今では難しく。

出来れば、話題に出して欲しくない女性でもあった。

自分が子供の時の事を色々と知られているので、苦手意識すらあったのだ。

「家臣の一部に、バウマイスター男爵と名目だけでも婚姻させてという意見が……」

その連中は、実家であるバウマイスター騎士爵家を貧乏だとバカにしている連中が多かった。

あんな成り上がり、売れ残りの大年増で十分だと思っているのだ。

「駄目に決まっているじゃないですか……」

そんな事をしたら、中央の法衣貴族達が大喜びでこう言うであろう。

『バウマイスター男爵、貴殿は寄り親に喧嘩を売られておりますぞ。ここは、毅然と対応すべきです。寄り親を変えてしまうのです』

十二歳の寄り子に、四十歳を超える嫁を押し付ける寄り親。

寄り子・寄り親の関係は、あまりに片方が不誠実であったりすると解消される事もある。

相性の関係もあるし、下級貴族の管理制度の側面から見てもすぐに代わりの寄り親が見つかれば、中央も何も言わないのが普通であった。

「バウマイスター男爵は、年齢の割に強かですしね。王都には、エーリッヒさんもいますし」

あまりバカな真似は出来ないという事であった。

ブライヒレーダー辺境伯からすれば、嫉妬から下らない提案をするバカな家臣より、エーリッヒとヴェンデリンの方を気に入っていたのだから。

「（あの連中は……。何か不祥事でも起こしたら、即座に潰してやるのに！）」

「ところで、婚約者候補はどうします？」

「なるべく近縁から、養子を取るしか無いですかね？」

その心配も、翌日にブランタークからヴェンデリンの正妻が決まった経緯が伝わると無事に解決していた。

ブライヒレーダー辺境伯からすれば、散々な結果なわけであったが。

「もういいです。バウマイスター男爵の跡継ぎの婚姻は、私が主導で行いますから」

枢機卿であるホーエンハイム子爵の孫娘にして、王宮筆頭魔導師であるアームストロング子爵の姪で、陛下の了承済み。

ケチを付けるだけ無駄なので、ブライヒレーダー辺境伯はすぐに考えを切り替えていた。

貴族とは、数十年先も考えて動く生き物なのだから。

「しかし、当事者である余が言うのも何であるが。王族や貴族の婚姻とは面倒な物よの」

「某としましては、傍流王族でも良かったと思うのですが。エリーゼのおかげで、良い義甥が出来た事は感謝ですかな」

「あの娘は、綺麗だし心根も良い。あの少しひねた部分のあるバウマイスター男爵に相応しいであろう」

「家族のせいなのか知りませんが、そういう部分は確かにありますな」

ちょうど同じ頃、王宮の一室。

国王が本音を口に出せる数少ない私室において、ヘルムート三十七世は、個人的に友人関係にあるアームストロング導師とワインを飲みながら話をしていた。

室内には、この二人のみ。

この部屋に入れる人間は、本当に数少なく。

男性では、二人の王子とアームストロング導師のみであった。

アームストロング導師は、ヘルムート三十七世と共に子供の頃から教育などを受け、たまに街に脱走して遊びに出かけた仲でもある。

幼馴染にして、竹馬の友であったのだ。

「バウマイスター男爵の出自は、騎士爵家の八男。王族の娘なども

っての他と言う輩が多くての」

「その癖、どうしてもと言うならと言いつつ、アレですか……」

貴族の結婚には、どうしてもこの問題が付き纏う。

格が釣り合うかどうかだ。

だが、常にタイミング良く全員の条件が合うわけではない。結果、王族や大物貴族に限って、大年増になっても余っている娘?が増えてしまうのだ。

養う財力があるという条件も、そういう女性を増やす要因となっていた。

駄目なら、死ぬまで独身でも養えるからこそ、上の家ほどそういうお嬢さんが増えてしまうのだ。

家格が下の家に養子に出し、そこから嫁がせるという手もあるのだが、それは向こうが養子として欲しないと難しい。

結果、王族にも年増扱いされている娘が数名存在していた。

「アンネリーゼ三十五歳、ディアーナ二十九歳、ヘルミーネ二十七歳、ヒルデガルト二十五歳。バウマイスター男爵には財力もある。押し付けてはどうかと言う意見もあっての。さすがに、一喝して抑えたが……」

「某なら、アーカート神聖帝国に亡命します」

「余も、同じ立場ならそうかの」

王族の娘なので、我が侭で気が強く浪費家な女性が多く。

アームストロング導師ですら、一人でもゴメンだと思ってしまうほどであった。

「余から見ても、嫌がらせにしか見えないからの」

王族から、娘が降家してくる。

普通に考えれば、貴族の名誉にして最高の恩賞とも言える。

ただ、内情を見ると悪質な嫌がらせにしか見えなかった。

「子が生めるかもわからず、男爵の資産を食い潰すわけだ」

その前に、圧倒的に元の身分と年齢が上で、完全に夫を尻に敷くであろう。

いや、竜殺しの英雄なら、反発して喧嘩になる可能性もあった。

「勧めた連中も、それが狙いでしょう」

僅か十二歳にして、竜を二匹も倒して男爵になった英雄であり。

その資産も、無視し得ない物となっている。

相手が強力な力を持つ魔法使いなので、正面切って張り合ったり嫌がらせをしたりはしないが、こういう絡め手で力を削ごうと考える。

生来の習性とはいえ、『貴族という生き物は……』と考えさせられる事も多かったのだ。

「全く、どいつもこいつも……」

こうやって、たまに優秀な者が下から出て来ると下らない妨害を

仕掛けようとする。
そのせいで、どれだけ王国の発展を邪魔して来たか。
『戦場があったら、数減らしでそこに送り出してやるのに』と考えてしまうヘルムート三十七世であった。
「しかし、現在の少年には金が集まり過ぎです」
「心配はなかろう」
無駄遣いをしている気配も無いし、聞けば教会に大金を寄付もしている。
一見無駄な出費にも見えるが、教会を蔑ろにすると国王でも足を掬われるケースが多く、これからの事を考えると白金貨十枚は無駄な投資ではない。
あのホーエンハイム枢機卿ですら、『子供なのに侮れない部分がある』と感心していたくらいなのだから。
ホーエンハイム枢機卿は、あのエリーゼや自分へのおべっかは芝居でやっている可能性があると報告して来たのだ。
完全な買い被りで、モテない男の心境を理解していないだけとも言うが。
「心配ない？　と言う事は……」
将来は、領地を与えるつもりなのかとアームストロング導師は考えてしまう。

「そなたの予想通りだ」

領地を与えて、そこを大々的に開発させる。
資金は十分にあるのだし。
という風に、ヘルムート三十七世は考えていた。

「とはいえ、男爵はまだ十二歳。焦っても仕方があるまいて。大人になって経験を積み、それからでも遅くはあるまい。ただ……」

自分だけでなく、他の大物貴族や閣僚などがどう考えるかだ。
場合によっては、それが早まる可能性もあるのだから。

国王でも、大物貴族のコントロールとは難しいものであった。

「ブライヒレーダー辺境伯などは、何か腹に一物あるようですな」

アームストロング導師は、雇われているブランタークだけを見ても、主人であるブライヒレーダー辺境伯も厄介な存在だと思っていた。
それでも、中央の擦れた法衣貴族連中よりは話がわかるので、まだマシだとは考えていたのだが。

「未開地の扱いであろう？」

ほとんど誰も到達すら出来ない土地なので、あの大山脈を越えて端にしがみ付く事に成功したバウマイスター家が書類上の主になっているあの土地の事だ。

「しかし、なぜにあの家の所有のままなのです？」

「その気になれば、開発の義務を怠った職務怠慢の罪で取り上げられるからの」

今でも、百年以上も放置しているのだ。

騎士爵家に相応しい広さの土地以外、全て取り上げれば済む問題だと中央の役人達は考えていた。

その内に開発計画が出るかもしれないので、その時までは面倒なので放置。

そういう事になっていたのだ。

「更に、バウマイスター男爵の存在もおる」

バウマイスター男爵への、領地分割命令という手も使えるのだ。

その時には、本家よりも分家の方が圧倒的に領地が広い状態になるはずであった。

こうも王国の歴史が長いと、本家と分家の力関係が逆転した貴族家などそう珍しくも無い。

たまたま、バウマイスター家もそうであったという事だけなのだ。

「良い神輿が出来たと、そう思っておるのであろうな。だが、男爵はまだ子供。竜討伐に動員してしまった余の罪は重いが、今は普通に過ごす時間も必要じゃて」

それにだ。

ただ優秀な魔法使いだからと言って、すぐに良い貴族やお抱えになれるというわけでもない。

なぜ、冒険者稼業で社会の荒波に揉まれたブランタークやこの目

の前の親友が重用されるのか？
彼らは、それだけの経験を積んでいるのだと。

「左様ですな。冒険者予備校に在籍している学生なのですから」

「アームストロングよ。なので、あまり振り回さないようにの」

「極力、努力いたします」

ところが、そんなヘルムート三十七世のお願いすらアームストロング導師には柳に風と言った具合であった。
それを見て、笑っているヘルムート三十七世も相当な物なのだが。

「アルフレッドに、ブランターク殿に、某と。三人で鍛えた弟子がこれからどう生きて行くか。楽しみでありますな」

そう言いながら、アームストロング導師はグラスに並々と注がれたワインを一気に飲み干すのであった。

幕間九　竜討伐後のバウマイスター騎士爵領にて。

「行商隊が来たぞぉーーー！」

「今回は、何か珍しい物でもあるのかね？」

「贅沢言うなや、塩の確保が最低限だがや」

オイラの名前は、フリッツ。

リンガイア大陸の南端、ブライヒレーダー辺境伯領から飛竜が飛ぶ山脈を越えた開拓村に住む農民だ。

年齢は二十六歳で、家族は両親に嫁に子供が二人。

子供は男の子が五歳で、女の子が三歳。

他にホルストと言う弟が居るんだけど、こいつは隣の村落に婿入りしている。

その家に、男の子供が産まれなかったからだ。

オイラは良く知らないが、うちの村落の名主様と隣の村落の名主様が相談して決めたらしい。

この開拓村は、山脈の南側に唯一存在する人が住む場所だ。

何でも、百年以上も前に今のお館様の四代前のお館様が王都から人を連れて移住し、百年以上もかけてここまで開拓したらしい。

想像を絶する苦労だとは思うのだが、オイラに言わせれば『フーン』の一言で終ってしまう。

それに、今だって別に楽をして生きていけるわけではないんだ。

十数年も前の話だけど、オイラがまだ未成年だった頃に大規模な出兵があった。

この村落からも、三十名ほどがお館様から命令されて出陣したんだ。

お館様の大叔父に当たる従士長様が重たそうな鎧を纏い、農耕馬とは違う綺麗な馬に乗っていたのを少年時代のオイラは記憶している。

でも、遠征は失敗して三十名の内五名しか戻って来なかった。

当然、その従士長様も、その補佐をしていた息子様達も戻らなかったそうだ。

数少ない生き残りは、みんなボロボロの状態で痩せ細っていたのを記憶している。

途中で飢えから馬を殺して食べ、槍を杖代わりに何とか数百キロを歩いて戻って来たらしい。

途中、怪我が悪化したり、病気になったり、狼の群れに襲われたりで。

どうしても、置いて行かざるを得なかった仲間も居た。

生き残った五名が、悔しそうに語っていたのを記憶している。

それに、彼らだって無傷というわけではない。

妙に暗闇を怖がったり、秋の団体狩猟で大きな猪や熊を見て恐慌したりと。

彼らが行った場所は『魔の森』という場所らしいけど、相当に恐ろしい目に遭ったようだ。

あと問題になったのは、村落同士の対立って奴だな。

この開拓地の正式名称は、バウマイスター騎士爵領。

騎士様のお館様が存在している。

領内は、大まかに三つの村落に別れていて、人口は合計で七百名ちょっと。

騎士様の領地としては大きい方らしいけど、うちの領地は貧しいからなぁ。

遠征の失敗で、人口が減ってしまったのは大きかった。

んで、こんな時になぜか、農地の拡張を行うので労役に参加せよとお館様から命令が来たんだ。

当然、うちの名主様も隣の村落の名主様も反対したさ。

働き手が減って今の農地維持で精一杯なのに、なぜ開墾計画を急ぐのかと。

それよりも、冬に備えて狩猟を強化すれば良いと。

オイラに言わせれば、うちと隣の名主様の方が正しいわな。

正しいけど、お館様と、お館様に娘を妾として差し出している本村落の名主クラウス様の意見が通ってしまったんだけど。

おかげで、オイラも忙しかった。
十四歳なら、大人と同等に見なされて働かされるからな。

それ以下の子供でも、たまに合間に遊ぶ程度でみんな開墾に家の手伝いにと精を出したんだ。

当然、川で魚を獲ったり森で狩猟や採集をする時間が無くなって食事が貧相になった。
この領地で暗い時間に外に出るのは危険だから、夜に狩猟などを行うわけにもいかない。
明るい時間を全て開墾と農作業に取られると、当然厳しいわな。

麦の収穫は増えていたけど、みんなお館様が税収以外でも食べる分以外は買い取ってしまうからなぁ。

当然不満は出るし、その麦の買い取り資金や開墾費用の一部が、あの出兵で戦死した者の遺族に渡す一時金の一部だという噂もあった。

何でも、出兵を強要したブライヒレーダー辺境伯様が規定以上のお金を払ったのに、規定以上の分をお館様がピンハネしたらしいのだ。

嫌な噂だけど、普段は碌に娯楽すらない村落だからな。
噂は、静かに密かに広がった物さ。

おかげで、暫く食事は薄い塩味野菜スープとボソボソの黒パンだけだった。
しかも、昼食は抜きで。

三食食べるなんて、名主様の家とお館様の家くらいなんだけど。
でも、山脈を越えたブライヒブルクではみんな三食らしいけどな。
それを聞いたら、少し羨ましくなってしまったんだ。

こんな状態なので、近所に住んでいる幼馴染のボリスが今度来る商隊に付いて村を出るらしい。
何でも、ブライヒブルクにある工房に弟子入りするんだと。

ボリスの両親は、彼が三男なので反対はしなかった。

名主様からは、一家の大黒柱を失った農家に婿入りしてくれと頼まれていたらしいけど、ボリスはまだ十二歳だしな。
婿入りは不可能だし、その間彼に実家で肩身の狭い思いをさせるのも酷だと思う。

結局、ボリスは村を出て行ったんだ。

オイラも、それで良かったと思っている。

あっ、そうそう。
ここからが、一番大切な話になる。

開墾がもう少しで終わりそうになった頃、オイラが二十歳になってそろそろ嫁をと言う話になっていた時に。

お館様の八男様について、少し噂が広まったんだ。
何でも、その八男様は魔法が使えるらしい。

どの程度かは良くは知らない。
何しろ、顔すら見た事が無いからな。

少しの水を出せる程度かもしれないし、岩山を魔法で吹き飛ばせるかもしれないし。
本当、噂っていい加減な物だがや。

でも、せっかくだから。
今、オイラも含めて五名で懸命に動かしている大岩を魔法でどかしてくれないかなと思うのは、オイラが怠け者だから？

暫くして本村落の連中が、『ヴェンデリン様の魔法は大した物でもない。当てにしないで開墾に精を出せ』と言って来た。

どうやら、お館様の八男様はヴェンデリン様と言うらしい。
何で知らないんだよと言われそうだけど、八男様なんて村にも残れないはずで、オイラ達が無理に覚える必要は無いと思うんだよね。

あと、魔法は実際に見てないから何とも言えない。

何しろ、言って来たのが本村落の連中だからな。

このバウマイスター騎士爵領が、三つの村に別れている理由。
それは、地域対立があるからなんだし。

昔のお館様が王都のスラムから連れて来た住民の子孫が、お館様の屋敷もある本村落。
名主はクラウス様で、彼はお館様に娘を妾として差し出し。
果ては、税収業務の一切合財を取り仕切っているので、領内の実質ナンバー2だ。

当然、評判は良くないわな。
うちの名主様も隣の名主様も、大嫌いだと明言しているほどだ。

オイラ達からすれば、名主様でも雲の上の人だからそっちは別にどうでも良いと思うんだ。
でも、本村落の連中は嫌いだな。

あの連中、最初に入植したから自分達がオイラ達よりも偉いと思っているんだ。
プライドが高いのな。

うちと隣は、第二次・第三次の募集で入植して出身地もバラバラ。
でも、百年以上も一緒に住んでいるし、本村落の連中が嫌いな面で一致しているから仲も悪くない。

しかし、こんな小さな領内で対立って、やっぱりうちの領地は貧乏臭いよな。

そういうのは、王都に住んでいる大貴族様のお仕事だと思うんだ。

『少し良いかな？』

『はい？　ええと、確かヴェンデリン様で？』

前に少しだけ噂になったウェンデリン様だけど、オイラは数度話をした事があるんだ。
ヴェンデリン様は、自分で獲った獲物と大豆を交換に来ていたから。

『今日は、ホロホロ鳥と野ウサギが二羽ずつだ。大豆との交換を頼みたい』

『ホロホロ鳥は、ありがたいです』

ヴェンデリン様は、まだ小さいのに狩猟が大変にお上手だ。
ホロホロ鳥なんて、うちの村落で一番の猟師であるはずのインゴルフですら、三日に一羽も獲れれば御の字の獲物なのだから。

でも、何で大豆なのかな？
これって、スープの具を増すのと、家畜の餌くらいにしか使えないのに。

まあ、取り引きはこちらに物凄く有利だし、貴族様に質問なんて緊張するからしないけど。

『あと、子実が青い物も交換して欲しい』

『青い大豆をですか？』

『中の実が大きくなって、黄色くなって来る直前の物が良いな』

『はあ、そうですか』

『茹でて、塩を振って食べると美味しいんだ』

何というか、変わった貴族様だったとオイラは記憶していたんだ。
でも、本当に青い大豆を茹でた物は美味しかった。
なぜか酒が欲しくなるんだけど、酒はここではそんなに飲めないから、それだけは残念だと思う。

『大豆は、一定の間隔で植えた方が他の作物の成長を助ける』

『なるほど』

一回だけ、ヴェンデリン様はこう仰っていた。

半信半疑だったけど、確かに作物の成長は悪くないんだよな。

それから、また本村落の連中が噂していたな。

『ヴェンデリン様は、生来の気質で少し怠け者なのだ。早くに、村を出て行くから問題は無いのだが』

と言っているんだけど、やっぱり本村落の連中が言っているから当てにはならない。

怠け者が、狩猟でプロよりも成果を出せるはずもないし。

それとなくうちの名主様に聞いてみたんだけど、本村落の連中からすると、優秀な弟ってのは領地の秩序を乱す存在なのだそうだ。

『あの連中は、生え抜きとしてのプライドが高い。よって、お館様にクルト様の継承秩序を乱すのを恐れる』

全体的に領地が豊かになるよりも、自分達が本村落で生え抜きとして優位に立てる方が大切。

田舎だと、こういう考え方は珍しくないそうだ。

オイラは、少しでも豊かになった方が良いと思うんだけど。

『人間とはそういう生き物だ。あと、ワシにはクラウスの考えが理

解できん』

クラウス様は、本村落の名主様だ。
なのに、お館様やクルト様に完全追随というわけでもないらしい。
裏で何かをしているという噂もあるし、良く理解できない、危険な人間なのだそうだ。

それと、うちの名主様はユルゲン様って言うんだ。
クラウス様に比べれば、遙かに良い名主様だと思うんだけど。

『その前に、人間として嫌いだがな！』

『ユルゲン様、聞こえたら大変だってばよ』

そんな経緯の後、十二歳になられたヴェンデリン様は村を出て行った。
何でも、冒険者になるべくブライヒブルクの学校に入学するらしい。

『大豆で、ホロホロ鳥が食える生活は終わりか……』

こう嘆く村民は多かったんだよな。
何か、本村落の連中はほっと肩を撫で降ろしていたようだけど。

跡継ぎのクルト様と比べられて、色々と大変だったのかな？
前にも、エーリッヒ様という五男様のせいで同じような事があったらしいけど。

そして、ヴェンデリン様が村を出てから二回目の商隊の到着。
領内にお店が無いので、みんなこぞって押し寄せる。

値段は少し高かったが、みんな貨幣で買える珍しい物に飢えているから懸命に吟味して買っている。

最初に、生きるのに必要な塩を買ってからだけど。

「みなさん、今日はブライヒブルクで刷られた号外を持って来ましたよ」

何でも、商隊が出発直前に配られた物らしい。

早速に貰って読むと、そこにはあのヴェンデリン様が伝説の古代竜を退治した記事が書かれていた。

うちは田舎だけど、最低限読み書きくらいは出来るからね。

教会で、今にも死にそうな神父さんが教えてくれるから。

庶民文字のひらがなとカタカナだけで、漢字はやっぱり難しいけど。

「ヴェンデリン様って、あの怠け者の？」

「そんな噂、当てになるか。本村落の連中が言っていた事だぞ」

「あいつら、クルト様に媚びて優遇されているからな」

こんな貧乏領地で優遇されても、高が知れているというもの。

そもそも、本当に優遇されているかも怪しいんだけど。

お館様の屋敷がある村落に住んでいて、自分達は生え抜きだ。

そういうプライドだけで、彼らは満足しているんだと思う。

「倒した古代竜の素材を王国に買い取って貰って大金を得た。双竜勲章という凄い勲章を貰って、準男爵に叙任されたか」

「全然、怠け者じゃないじゃん！」

確かに、竜を倒す怠け者って聞いた事がない。

しかも、こんな田舎出身とは思えない大人物にしか見えないわな。

というか、何でこれほどのお人を、お館様は手放したんだろう？

号外を見たみんながそう思っているようだ。

一方、その号外を面白く無さそうに見ている連中がいる。

本村落の連中だ。

あと、クラウス様も居るんだが、彼は笑みを崩さないままで不気味だった。

なるほど、ユルゲン様の言う通りだな。

「しかし、これは……」

ユルゲン様は、どう判断もつかないと言った表情をしていた。

「ユルゲン様？」

「もう数年で、この僻地に大きな変化が起こる可能性が高い。果たして、吉と出るか凶と出るか？」

そして、三ヵ月後の今年三回目の商隊が、ヴェンデリン様が二匹目の竜を倒して男爵となり、また大金を得て、枢機卿とか言う偉い

人の孫娘と婚約したという情報を持ち込む。

「良かった、この領地は豊かになるぞ」

「ヴェンデリン様万歳だよな」

無邪気に喜んでいる人がいるんだけど、果たして本当にそうなのかな？

オイラには、そう話が上手く行くとは思えないんだけど。

あのユルゲン様の表情を見ていると。

第三十六話　婚約者のあだ名は聖女。

「……、酒は無いよな？」

「ここは、喫茶店ですよ。ブランタークさん」

「知ってるけどな」

せっかくの王都での夏休みの大半が魔物退治で潰れ、残り三日でようやく自分の時間が出来た俺であったが、またまた人生の転機を迎えていた。

このヘルムート王国どころか、リンガイア大陸に影響が大きい宗教の総本山に本洗礼を受けに行ったところ、なぜかそこの偉いさんの孫娘と婚約をする羽目になったのだ。

しかも、そのお偉いさんであるホーエンハイム枢機卿は、王宮に出入りできる身分を利用して、既に陛下から了承を得ていた。

ここでこの婚姻を断るという事は、俺のヘルムート王国での人生が終わるという事だ。

隣国であるアーカート神聖帝国に亡命でもすれば第二の人生が始まる可能性が高かったが、生憎と隣国アーカート神聖帝国に関する情報は少ない。

なので、見切り亡命などは不可能であった。

結局、俺はこの婚約を了承する事となる。

相手のエリーゼは、十人が見れば十二人くらい振り返りそうな美

少女であったし、俺と同じ年とは思えないほどの巨乳でもある。
この世で、巨胸が嫌いな男は少ないであろう。
かく言う俺も、物凄く大好きだ。

それに、今は婚約をしただけなのだ。
貴族の子弟は、親の意志で婚姻相手を決められる。
なので、その決め手となる情勢によっては、先の婚姻が解消されてしまう事など珍しくも無い。
確実に、俺とエリーゼが結婚をするという保障もないのだ。

『そんなバカな話があるか。陛下が許可を出した結婚なんだぞ』

『その陛下が、予想し得ない事情によりその婚姻許可を破棄せよと命じるとか』

『そんなアクシデントはまず起きん！　というか、坊主はその娘が嫌なのか？』

『いえ！　見た目はストライクです！』

特に、あの胸が良かったと思う。
俺は今でも胸の大小に貴賤は無いと思っているのだが、現物を目の当たりにすると転向も止む無しと考えてしまうのだ。

『（ふっ、裏切り者と呼ぶが良い……）』

誰に対しての裏切りなのか良くわからないので、こんな事を思っている俺はただのバカだと思う。

『あの枢機卿め！　良い孫娘を持ってやがるな！　さすがは、ホー

エンハイム家の聖女』

『ホーエンハイム家の聖女？』

『あの娘のあだ名だよ。王都では有名なんだぞ』

『知りませんでした』

えらく神々しいあだ名のような気もするが、そんな若い年齢で少し可哀想な気もしてしまう。

俺だって、突然『竜殺しの英雄』とか言われて困惑しているが、中身がおっさんなので何とかなっているのだし。

とにかく今は、実際に話などをしてみて相性などを確認する方が先であろう。

実は、とても性格が悪いという可能性もあるのだから。

そんなわけで、本洗礼どころか婚約者まで決まってしまった俺は、ブラント邸への帰宅後にそこに居たブランタークさんをとエーリッヒ兄さんを屋敷近くの喫茶店へと呼び出し、これまでの経緯を説明していた。

「完全に、ホーエンハイム枢機卿に手玉に取られた！」

ブランタークさんは、ただ絶叫していた。

それもそのはずで、本来であれば、寄り親競争に勝ったブライヒレーダー辺境伯が、俺の正妻を紹介しなければいけなかったからだ。

それが、俺の正妻は今のところは中央の法衣貴族の縁戚に決まってしまっている。

しかも、ただの中央の無役の法衣貴族ではない。

国教である正教徒カソリック教会のお偉いさんの孫で、陛下の信

頼が厚い筆頭王宮魔導師の姪だと言うのだから性質が悪い。

完全に出し抜かれたブランタークさんは、主人であるブライヒレーダー辺境伯に後で何を言われるかと頭を抱えている状態であった。

俺の保護と監視というのも、彼の仕事なのだから。

「本洗礼のついでに、婚約の話なんてするか！　普通！」

普通はしないはずだ。

不謹慎だと、普通の人は思ってしまうからだ。

別に、戒律に違反しているわけではないそうだが。

「あの人は、してしまうんですよ。しかも、事前に陛下の言質まで取って。陛下のお墨付きがあれば、ブライヒレーダー辺境伯様には事後承諾だけで済みますし」

本当ならば事前に話くらいは通すのであろうが、それをするとブライヒレーダー辺境伯が先に手を打ってしまう可能性があった。

だからこそ、事前に何も言わなくてもブライヒレーダー辺境伯が文句を言えないように陛下の言質を取っているのであろう。

ブライヒレーダー辺境伯は南部の実力者であるが、中央との距離で政治的に法衣貴族に手玉に取られてしまう事が多かったのだ。

逆に言うと、手玉に取られている間は地方反乱も無く、王国も平和という事なのであろうが。

「俺、このまま王都で隠棲しようかな？」

まだ五十歳前なのに、ブランタークさんは隠居手前の老人のような事を言っていた。

そういえば、前世で大規模取り引きをポシャらせた部長が、その直後にこんな表情をしていたのを思い出す。

「今回の件は、ブライヒレーダー辺境伯様にも甘い部分があったのは事実ですから、何も言えないと思いますけど」

「エーリッヒ殿は、そうは言うがな。お館様はあまり怒鳴ったりはしないよ。だがな……」

何か腹が立つ事があると、物凄く不気味な笑顔で家臣に接するので、背筋が寒くなってしまうのだそうだ。

「坊主に文句を言ってもしょうがないがなぁ……」

「ヴェルがいくら魔法の天才でも、十二歳で王都の複雑な政治闘争を理解して流されないようにするのは無理ですよ。大人でも無理なんですから」

そう、中身が所詮は二流商社マンになれる程度の頭なので、複雑怪奇な政治の世界なんて良くわからないのだ。

「だよなぁ。ああ、もっとアルテリオを利用すれば良かった」

そうは言っても、もう後の祭だと言う結論に達し、三人は出されたコーヒーを啜っていた。

コーヒーは南方の特産品で、南方からの輸入品なので高かったが、王都では庶民も良く飲む飲み物である。

逆に、ブライヒブルクなどではかなり安く飲める飲み物なのだが。

「なあ、あの少年は……」

「竜殺しの英雄だよな？」

「まだ小さいのね。可愛い子じゃない」

「怒らせると、魔法で吹き飛ばされたりな」

この喫茶店は常連に貴族も多い評判の店で、紅茶もコーヒーもデザートも美味しいお店なのだが、あまりこのような話をコッソリとするのには向いていなかったようだ。

家族連れに、若いカップルに、貴族とそのお付の人などが、たまに俺達の方を覗き込んでコソコソと話をしていた。

「季節のフルーツタルトを注文されたお客様は？」

「はいっ！」

そんなヒソヒソ話も気にせず、俺は注文したデザートを持って来たウェイトレスのお姉さんに元気良く返事をする。

「坊主、のん気にデザートとか食ってる場合じゃねえぞ」

実は、この喫茶店は王都名店ガイドに載っていて、イーナとルイーゼがケーキが美味しかったと言っていたので、俺も食べてみたいと思っていたのだ。

「いやあ、もう決まってしまった事ですしね。というか、俺は全然王都観光とか出来てませんし」

所詮は俺如きなので、多少魔法に才能があっても、陛下から爵位

を与えられてもそれを突っ返す度胸など無い。
というか、そんな事が出来るのはどんな人なのかと思ってしまう。
前世で見た漫画だったか、小説だったか？
偉い人の提案や褒美を断る主人公がいたのだが、その主人公は良く断れた物だと思う。
少なくとも、俺には不可能であったからだ。

更に、婚約者を勝手に決められてしまっても。
これも、偉い人が決めた婚約者ではなく、自分の本当に好きな人と結ばれたいなどと言えるのは、ドラマとかに出て来る主人公だけであろう。

それによくよく考えると、今の俺には身分差などの障害がある将来を誓った恋人とかいなかった。
十二歳までほぼボッチの俺に、恋愛などあるはずもない。
元々恋愛偏差値が低いので、これも仕方のない事であったが。

なら、今は婚約を受け入れて、残り少ない王都滞在を楽しむべきであろう。

「お前、そういう所がアルフレッドに良く似てる。あいつも、見かけによらずマイペースで面の皮が厚かった」

「褒め言葉として受け取っておきましょう。でも、婚約はあくまでも婚約じゃないですか」

先ほども話したが、貴族の婚約ほどあてにならない物もない。
貴族家の当主同士で勝手に決めて、やっぱりこっちの貴族と縁を結んだ方が良いなと片方が思うと、すぐ勝手に解消されてしまうものだからだ。

それにどうせ、エリーゼは成人するまでは王都で生活するので、ブライヒブルクにいる俺とは録に顔を合わす機会もないはず。
なので、そこまで騒いでもと思ってしまう俺であった。

「桃の甘みと、初物の梨の酸味と歯ごたえも」

さすがは、王都でも有名な喫茶店で出るデザートである。
甘さも抑え目で大変に美味しい。
うちの実家では、こんな物は永遠に食べられないであろう。

「ヴェル、そのタルトは美味しいのかな？」

「ええ、絶品です」

「ブランタークさん、もう諦めましょうよ。私も、そのタルトを一つ」

「俺も……」

場所が喫茶店だったので秘密なのかは怪しい物であったが、結局三人は突然沸ってわいた婚約者への対応策も決められず、そのままお店の名物であるケーキを食べてからブラント邸へと戻るのであった。

「ヴェンデリン様は、王都の滞在期間が残り少ないとか。その間に、二度も竜の討伐に出られていてあまり観光などもしていないと伺っております。今日は、私が王都をご案内いたしますわ」

「あはは……。王都生まれのエリーゼさんの案内なら、安心して任せられますね」

「私は、ヴェンデリン様の妻となる女です。エリーゼと呼び捨てにしてください」

「そうですか。では、俺の事も様付けなんて必要ないので」

「いえ、そういうわけにはいきませんわ」

「……」

翌日、王都滞在まであと二日。

今日はどこに出かけようかとエル達と相談していると、そこに昨日婚約したエリーゼがブラント邸に姿を見せていた。

俺は、思わずイーナとルイーゼの方に視線を送ってしまう。

二人は特に表情を変えていなかったが、そういえば俺はなぜ二人に視線を送ったのであろう？

「エリーゼ殿ですか。これは、わざわざ」

「伯父様からご高名は伺っております。リングスタット様」

「まあ俺は、アームストロング導師に比べれば二流の魔法使いですが」

「いえ、そんな事は。伯父様は、練達の魔法使いであると仰ってしました」

続いて、そこにブランタークさんが現れて、エリーゼに挨拶をする。
ブランタークさんからすれば、エリーゼの存在自体が面白くないはず。
なぜなら、多分あとで、ブライヒレーダー辺境伯が寄り親として俺に婚約者を宛がう予定だったのに、それを台無しにしてしまったからだ。

しかし俺がエリーゼを昨日から観察した結果、彼女自身にその恨みを向けるのは酷であろうという結論に至っている。
この婚約の仕掛け人であるホーエンハイム枢機卿にこそ、文句を言うべきなのであろうから。

まあ、あの老人が何を言われた所で、そんな事を気にするとも思えないのだが。

それと、俺は昨日の夜に出来る限りでエリーゼに関する情報を集めていた。
知っているのはブラント家の人々とエーリッヒ兄さんくらいであったが、実は彼女巷では『ホーエンハイム家の聖女』と呼ばれているらしい。

嫁入り修行のためとはいえ、修道女見習いとして教会で働き。
教会の実力者の孫なので傲慢に振舞うかと思えば、誰にでも分け隔てなく接し、会得している治癒魔法で多くの人々を無料で時間の許す限り治療しているそうだ。

他にも、教会が運営している孤児院で子供達に服を縫ってあげた

り、食事やお菓子を作ってあげたり、勉強を教えてあげたり。
定期的に行われる、貧しい人達への炊き出しに参加したりと。

なぜ俺などの嫁になるのかわからない、聖女のあだ名に相応しい少女であった。
まさに、完璧超人だと思うのだ。

『聖女に相応しく、この魔王たる俺に身を差し出すか』

『魔王というほど、ヴェルは悪人じゃないでしょう。魔法以外の面で、抜けているだけだし』

『お前な……』

俺は、ルイーゼの指摘に心の中で涙を流していた。

『でも、そこまで完璧だと、逆に何か疑わしいような……。言っている自分で、性格が悪いと思うけど』

『イーナの言う事にも、一理あるかも』

俺は、ルートガーさんやエーリッヒ兄さんに、『かなり上手く装っているのでは？』と聞いてみたのだが、それはまずないそうだ。

貴族の箱入り娘が建て前だけの教育を純粋に受けた結果、このように未来の夫に尽くそうと懸命に努力をしている美少女という絵面になっているらしい。

あと、俺は良く知らなかったのだが、立て続けに二匹の竜を倒し、陛下から双竜勲章二つと男爵位を得た俺は、王都の女性に大人気になっているそうなのだ。

なので、エリーゼも純粋に俺に憧れているのかもしれないと。

そしてエリーゼであったが、彼女は自分と同じく魔法が使える伯父アームストロング導師を物凄く尊敬しているらしい。

当然、その伯父がベタ褒めをしている俺の事を、少なくとも嫌いという事は無いはず。

エリーゼの笑顔を見ていると、さすがの俺にでもそれは一目瞭然であった。

「（可哀想に、俺はそんなに高潔な人じゃないし）」

「エリーゼお嬢様、そろそろ参りましょうか」

「はい」

それと、エリーゼには一人のお供が付いていた。

初老でロマンスグレーの髪をオールバックで纏めている、『ザ・執事』とも呼ぶべきその男性は、その名をセバスチャンと自己紹介していた。

「セバスチャンは、私が生まれる前からホーエンハイム家に仕えている執事なのです」

「この度は、旦那様からエリーゼ様とヴェンデリン様のお供をせよと仰せつかりました」

その外見から言動まで、どこから見ても執事の鑑のように見えるセバスチャン氏（推定五十二歳）に、俺は自分の置かれた情況すら忘れて感動すら覚えていた。

「（まるで、執事喫茶の人みたいだ）せっかく王都に来たのに、ほとんど王都観光もしていなくてさ」

「ヴェンデリン様は、あれほどの功績を残されたのです。お忙しかったのは当たり前でございます。では、参りましょうか」

俺はセバスチャンの執事ぶりに感動しながら、エリーゼと彼と共にブラント邸をあとにする。

何か大切な事を忘れていたような気もするが、今はせっかく案内してくれるのだから王都観光に集中すべきであろう。

まだ婚約が決まって一日なので、エリーゼとも相互理解を深めた方が良いであろうし。

だが、俺達が外に出たあとのブラント邸ではひと悶着発生していたようだ。

「あの娘が、ヴェルの婚約者か。でも、あいつも大変だよなぁ。あの胸は羨ましいとして」

「エルも、普通に男なのね」

「悪いかっての。しかし、俺もヴェルと同じような境遇なのにな。

婚約者の話なんて出た試しもない」

エルヴィンは、正直にヴェンデリンを羨ましいと思っていた。
特に、あの胸がだ。
と同時に、イーナとルイーゼの胸に視線を送ってから溜息をつき、二人からビンタを喰らって両頬にモミジを付ける羽目にもなっていた。

「エルも、竜を倒せれば婚約者くらい出来ると思うわよ（私は、標準なのに……）」

「無理を言ってくれるなよ、イーナ。俺は、地道に一旗挙げる事にするよ」

「冒険者として？　それとも、ヴェルの家臣として？」

「うーーーん、臨機応変で」

現状で、色々な事があり過ぎて将来の予定が組めないため、そう答えるしか無いエルヴィンであった。

あとイーナからすれば、エルヴィンが男性としてヴェンデリンよりも劣っているとは思っていない。
むしろ背は高いし、顔もヴェンデリンとそうレベルは変わらなかったのだから。

単純に隣の比較対象が凄すぎるので、それで損をしているだけなのであろうと。

「じゃあ、イーナが俺の婚約者になってくれ」

「無理ね。というか、本気？」

「言ってみただけ」

ルイーゼもそうだが、あの園遊会でヴェンデリンがブライヒレーダー辺境伯に気に入られた時点で、自分は彼の未来の妾として周辺では認知されてしまっていた。

将来手を出されるかは不明であったが、イーナはそれでも良いと考えている。

優しい人ではあるし、魔法使いとしても優れ、財力も凄かったからだ。

現金な話ではあったが、妾とはいえ男女の関係を結ぶ相手なので、安全に子供を生める相手であるに越した事はない。

そういう条件で言えば、ヴェンデリンは最高の相手であった。

「ルイーゼの嬢ちゃんよ。もう少し頑張って欲しかったな」

そして、ブランタークはルイーゼに愚痴を溢していた。

予備校入学以来約四ヶ月、ヴェンデリンの屋敷にまで入り浸っているのだから、エリーゼの色気くらい簡単に排除して欲しいと思っていたからだ。

「ブランターク様は無茶を言うな。ボク達がもし今の時点でヴェルと相思相愛だったとしても、この情況で婚約も今日もデートも阻止できません」

陪臣の娘が、法衣子爵で教会有力者の孫娘と正妻の座を巡って争

う。

そんな無謀な勝負をするほど、ルイーゼも無謀ではなかった。

そんな事をするなら、結婚後に寵愛を受けるように努力する方が効率が良かったからだ。

「（この娘っ子は、見た目によらず世間を知っているな）すまねえな。おっさんの愚痴だよ。ただ、わかっているよな？」

ブランタークが言いたい事は、ここまで王都でヴェンデリンが名を挙げた以上は、その身近にいるイーナとルイーゼは余計に周囲から彼の女扱いされてしまうのだと。

そう言う事を、言いたかったのだ。

「実家は、明らかに期待しているだろうね」

「もう、実家からのお見合いの話はないわね。あっても、受けないけど」

イーナとルイーゼの実家からすれば、自分の娘がブライヒレーダー辺境伯のお気に入りで竜殺しの英雄の妾になれれば都合が良い。

元々家格の問題で、正妻になれる期待もなどヒトカケラも持っていないからだ。

嫁ぎ先のバウマイスター男爵家が将来領地でも貰えば、そこで自分の娘が生んだ子を師範とした槍術と魔闘流の道場新設も可能となる。

弟子を道場の運営人員として送り出したり、バウマイスター家で働けるように融通が出来たり。

基本は武術のみを教える流派道場でも、後の就職先の選択肢が多

いと弟子が集まり易いという利点があるのは当然であった。
ただ武術だけ極めても、飯は食えない。

これは、イーナの亡くなった祖父の言葉であった。
これでなかなかに、道場運営も大変なのだ。

「お前らも、色々と大変だな」

「目指せ！　ヴェルの妾にして魔闘流道場バウマイスター男爵領支部の創設と、初代師範の母！」

「ええと。同じく槍術道場バウマイスター男爵領支部の創設と、初代師範の母？」

「イーナちゃん、ここは淫靡に愛人とか妾とか言わないと」

「恥ずかしいじゃない……」

普段の冷静な表情とは違って、顔を赤くさせるイーナを見てブランタークは『そんな顔も出来るんだな』と感心していた。

「しかし、あのエリーゼは脅威だな」

もう今さら、ブランタークはエリーゼに隔意を抱いているわけでもない。
話すと素直で可愛い娘であったし、元々イーナとルイーゼに正妻の芽は無かったからだ。

それに、人が申し訳無さそうに高い通信魔法費用まで払って報告しているのに、肝心のブライヒレーダー辺境伯の方がちゃんと婚約

者候補を準備していなかったというのだから。

一体誰が、あの嫁き遅れの大年増を嫁に勧められて機嫌を損ねないと言うのであろうか？

『えっ！　アニータ様をヴェルの婚約者に？』

『さすがのヴェルも、絶対に怒ると思いますけど……』

後で、ルイーゼとイーナにそっと教えたら、彼女達も絶句していたほどだ。

あの年齢で、ブライヒレーダー家本屋敷で碌に仕事もしないで遊んでいるせいもあって、家臣の間でもあまり評判が良くなかったからだ。

本人に面と向かって言えないので、その評判は表向きは無い事になっている。

しかも、定期的に何とかお片付けをと狙う家臣達が、無理な縁談を持ち込んで来るのだ。

大抵が、六十歳過ぎの連れ合いを亡くした老人貴族の後添えとか。

そんな話ばかりであり、本人はすぐに断ってしまう。

ブライヒレーダー辺境伯も、妹とかならともかく叔母なので強く言い難い。

よって、なるべく普段は触れないように心掛けられている人であった。

「エリーゼさんと比べるまでもないね」

「比較するだけ無駄。全く、お館様は何を考えて……。二人は、何

とか坊主に気に入られてくれよ」

「任せて！　ボクのお色気でヴェルを見事に誑かすから」

「お色気ねぇ……」

どう高めに見ても、今は十歳くらいにしか見えないルイーゼであったが、後に化けるという可能性も否定できない。

それに、ヴェンデリンが実は小さな女の娘が好きだという可能性もあった。

「（そういう貴族も、実は一定数居るからな……）」

愛妾などで、小さい娘を望む貴族も多いと聞いているし。

実際に、ブランタークなどは目撃もしている。

あとは、どうせヴェンデリンはある程度は妻妾を増やす必要があるのだ。

色々なタイプが居た方が良いと、ブランタークは考えていた。

無理矢理色々なタイプを押し付けた時に、罪悪感が沸かないように心の棚を作ったとも言える。

「本妻を出し抜く妾って話も珍しくないから」

「それは、そうだな。で？　イーナのお嬢ちゃんは？」

「努力してみます……」

イーナは、また顔を真っ赤に染めながらブランタークの問いに答えていた。

普段の冷静な表情よりも、その恥ずかしそうな顔をヴェンデリンに見せれば一発なのにと。
それなりに経験のあるブランタークなどは、思ってしまうのだが。

「どうせ、もう数日でブライヒブルクに帰還だものな。向こうでゆっくり、坊主を誑かせや」

そもそも、僅か十二歳で色々な事が起こり過ぎなのだ。
今大陸全土で、一番忙しくスリリングな夏休みを過ごした十二歳。
それが、ヴェンデリンであった。

「しかし、婚約者とのデートに執事が同伴とは。お嬢様だねぇ」

「いきなり、出会い休憩所に直行とかでも困るから良いんじゃない」

「ルイーゼの嬢ちゃんは、発言が過激だなぁ」

ヴェンデリンと同い年でも、女性は凄いなと思うブランタークであった。

「今度、ヴェルに連れて行って貰おうかと」

「いや、入り口で止められるし。坊主も怒られるから」

未成年者は侵入禁止の場所なので、そこは釘を刺すと共に。
僅か十二歳なのに三人の婚約者を相手にしないといけないヴェンデリンに心から同情する、独身貴族と言う別の貴族であるブランタークであった。

第三十七話　聖女との初デート。

「とてもお似合いですよ」

「普段着として良いね」

「はい」

婚約者となったホーエンハイム枢機卿の孫娘エリーゼとの初デートは、俺が思っていたよりも上手く行っていた。

正直なところ、王都に不慣れな俺が彼女をエスコートなど出来ないし、貴族の箱入り娘で見習い修道女であるエリーゼが、王都の観光地や名店に詳しいはずもなく。

当然、今回のデートの段取りは、どこから見てもパーフェクト執事であるセバスチャン氏が段取りをしていた。

執事付きのデートと言うのもどうかと思うのだが、共に貴族でまだ十二歳なので二人きりで王都の街中を歩けるはずもなく、これは仕方が無い事であろう。

防犯などの理由もあり、二人きりでデートという事は有り得ないのだから。

実際他に、セバスチャン氏以外にも、こちらを密かに監視している連中が数名いるようだ。

間違いなく、ホーエンハイム枢機卿の手の者と思われるが。

ただ、さすがは執事の鑑であるセバスチャン。

必要が無い時には俺達の視界に一切入らず、必要な時にはすぐに傍に居て的確にフォローを行っていたのだから。

「（執事とか、ブライヒレーダー辺境伯様の屋敷で、チラっと見た程度だったからな）」

当然、我が実家バウマイスター家では存在しない生き物であった。

名目上はいたのだが、それはただの村の老人で、執事というよりはただの使用人と言った方が正確であったからだ。

実家における使用人とは、年を取ったので農作業が辛くなった人向けの、簡単なお手伝いと言った方が良い代物であった。

一応、外部には使用人が居るとアピール出来て、通いで無茶をさせない分給金が安く済みと。

バウマイスター本家の使用人の数に興味がある他の貴族なんて、間違いなく一人もいないはずなのだが、これも貴族の見栄という物なのであろう。

「では、この服を包んで貰いましょう」

王都の観光地やお店などに詳しくは無かったが、エリーゼほどの実家になると、服などは大抵オーダーメイドで作って貰ったりする。

なので、彼女の服などのセンスはとても良かった。

十二歳まで、兄達のお下がりしか着た事がなく。

前世でも、〇ニクロや〇マムラがメイン戦場であった俺に、ファッションセンスなどという物は存在しなかった。

服なんて、着れておかしくなければ良いと思っていたのだから当然であろう。

俺が持っている少し洒落た服とは、誕生日などにエーリッヒ兄さんがプレゼントしてくれた物だけなのだから。

「そうだね、ありがとう」

「いえ、私に出来る事はこれくらいですから」

俺は、久々に楽しい時間を過ごしていた。

デート云々は置いておいて、見た目は最高の優しい美少女と王都で買い物に、食事に、観光にと。

これで楽しくないわけがない。

ここのところ、喰えない陛下に、欲深な貴族達に、筋肉導師にと。

彼らへの対応のせいで乾いてばかりであった俺の心に、久々に潤いを与えてくれたのだから。

「あのレストランはいかがでしかたか？」

「美味しかった。素材を上手く生かして料理してあったね」

「セバスチャン、お勧めのお店ですから」

それに、エリーゼも凄く良い娘のようだ。

昼食を取ったレストランを探したのはセバスチャンであると、正直に言ってしまうのだから。

「（ヴェンデリン様、せっかく楽しかった初デートでございます。ここは、男の甲斐性として記念の品などを……）」

しかも、セバスチャンの方もなかなかに執事としては優秀らしい。

主人の孫娘であるエリーゼへの配慮を欠かさず、俺に小声でプレ

ゼントを贈れと絶好のタイミングで言ってくるのだから。

「（さすがは、セバス。執事の鑑だな）エリーゼ、俺達は無事に婚約をしたわけだし、今日は初のデートをしたわけで。記念に何かを贈ろうと思うんだ」

「あの、宜しいのでしょうか？」

「竜退治で、懐は暖かいから」

婚約者に、アクセサリーくらいは余裕で贈れる金はある。

しかし、この余裕が前世のあの時にあれば……。

もう終った事なので、記憶の引き出しに仕舞って置く事とする。

「（ヴェンデリン様。この通りに、良い品を売る宝飾店がございまして）」

続けて、また俺にしか聞こえない小声で、絶妙なアドバイスを送るセバスチャンであった。

しかも、何気に俺達を目的の店近くまで誘導していて、俺の中でますますセバスチャンの株が上がっていく。

正直、俺の執事に欲しいくらいであった。

「これはこれは、ようこそおいで下さいました。若様は、こちらの可憐なご令嬢に贈り物かと推察しますが」

セバスチャンが教えてくれた宝飾店に入ると、中から恰幅の良い店主らしき中年男性が現れる。

このお店は高級な宝飾品を扱っている関係で貴族のお客が多いらしく、まだ成人前の俺達がお客なのを見て貴族であると思ったよう

だ。
付かず離れずで、執事のセバスチャンがいたという理由もあったようだが。

「ご婚約の贈り物でしょうか？」

「ああ」

俺達くらいの年齢で婚約をして、その足で指輪をプレゼントという貴族は珍しくないらしい。
店主らしき人物は、もみ手で俺達に声をかけてくる。

「これはこれは、可憐なお嬢様ですな」

エリーゼは、『ホーエンハイム家の聖女』と呼ばれていて王都でも有名な存在ではあった。
だが、今日は普段の修道服姿ではなかったので、店主も彼女の正体には気が付かなかったようだ。
水色のワンピースだからというわけではないが、店主が良く目立つけしからん胸の部分に一瞬だけ視線を送ったのに俺は気が付く。

『俺の物なのに！』とか、セコイ事は言わない。
男なら、まず普通に視線を送るであろうからだ。

「それで、ご予算の方ですが……」

「相場って、どのくらいなんだ？　正直、良くわからん」

前世で女性に宝飾品くらいは贈った経験はあるのだが、学生がバイトをして彼女にクリスマスプレゼントを贈るのと、婚約した貴族

の令嬢に指輪を贈るのではまるで条件が違う事は明白だ。

しかも、俺の実家は貴族のしきたりなどとはあまり無縁な家であった。

まだ子供の俺に教えてくれる人もおらず、その辺の部分が良くからなかったのだ。

「普通は、金貨一枚から上ですな」

日本円にして、約百万円くらい。

貴族が婚約者に贈る指輪なので、まあ妥当な金額とも言えた。

婚姻指輪ともなれば、また相場が違うそうだが。

「そのくらいは普通か」

「ええ、貴族様があまり安物を付けているものどうかと思う次第でして」

高い指輪が売れれば儲かるという店主の欲もあるのだろうが、貴族に安物を薦めると逆に失礼という事もあるし、でもやっぱり高い物を売り付けたいんだろうなと俺は考えていた。

「あの指輪は変わっているな」

俺は店主から色々な指輪を勧められていく中で、数多くの商品の中からケースの端に陳列された指輪が気になり始める。

「はい。特殊な魔晶石を中央にあつらえた特別製ですから」

魔晶石は、基本的には大きい方が多くの魔力を蓄えられるので、

値段が高額となる。
ただ限度はあるが、極少数の魔道具造りの職人の中には、小さくても効率良く多くの魔力を篭められる魔晶石を製造可能な者もいる。

この指輪は、そういう魔道具職人の作らしい。

ただこの技術は、小さな魔晶石にしか使えないらしい。
理由は簡単で、魔導飛行船などで使うレベルの巨大な魔晶石にこの処置を施そうとすると、肝心の魔道具職人の方が魔力切れで瞬時に気絶してしまうからだそうだ。

更に言うと、中級クラスの魔法使いが持つ魔力を使っても、魔導飛行船は浮きもしない。
なるほど、その運賃が高いのも納得できると言う物だ。

「魔晶石の効率化には限度がありますが、それでもこの指輪に付いている魔晶石は、中級魔法使い分程度の魔力を蓄えられます。それと、当然当店に置いてありますので、宝飾品としても使えます」

「宝飾品としても？」

「これは　魔力が篭められていない状態でして。篭めると、エメラルドのように光るのです」

しかしながら、当然下手な宝石など相手にもならないほど高価であるらしい。

「実は、少し扱いに困る商品でして……」

売れると思って、わざわざ高名な魔道具職人に発注までして仕入

れたのだが、一向に売れる気配が無いそうなのだ。

「考えてみますと、魔法が使える貴族の方というのは案外少なく……」

魔法の才能と遺伝はまるで関係ない。

昔にわざわざ統計まで取った高名な研究者が断言していたし、そもそも遺伝が関わっているのなら、とっくに貴族は魔法使いだらけであろう。

一部功績を挙げた魔法使いを叙勲はするが、その後の子孫はまるでパっとせず。

このような例に、枚挙が無いらしい。

となると、エリーゼの一族はかなりレアな存在とも言える。

アームストロング導師と合わせて、伯父姪二名の高名な魔法使いがいるのだから。

「この指輪を買えるお金があれば、もっと大きくて綺麗な宝石が付いた他の指輪が買えますので」

「普通の魔法使いからすれば、宝飾のせいで高額になったから買い難いと？」

「はい」

確かに良く見るとリングの素材は白金だし、魔晶石の周りには小さなダイヤなどで飾られてもいた。

魔道具なので高いのは当然であったが、他にも宝飾品としての値段も上乗せされてしまっているので、余計に高くなっているのだから。

「幾らなんだ？」

「はい、白金貨三枚です」

日本円にして三億円。

いくら貴族でも、そう簡単に手が出る品物ではなかった。

「本当は白金貨五枚だったのですが、こう売れないと値引きするしかなく」

店主は苦渋の決断で値引きをしたような口調であったが、どこの世界でも商人が滅多な事で損をするような商売はしない。

大方、利益は僅かか、仕入れ代金の回収くらいに考えているのであろう。

「魔力を事前に篭めておけば、魔力が無い時にも魔法が使えるんだな？」

「勿論でございます。高性能な魔道具なので、魔力質の共通化で誰が魔力を篭めても使えますです。はい」

魔法使い同士での効率の良い魔力移転には、特殊な才能を必要とする。

魔力の最初の持ち主の性質というか、指紋や遺伝子のような要素が含まれてしまうので、他人に渡しても魔法として発動しないで無駄にしてしまうからだ。

それを可能にするには、ブランタークさんのように魔力質の共通化が行えるのが前提であった。

自分の魔力を、何かあった時のために魔晶石に込めておく魔法使いは多い。

俺も、万が一の時に備えて何十個も持っている。

だが、他人が魔晶石から魔力を引き出して魔法を使おうとしても蓄えられた魔力の５％も引き出せれば御の字であろう。

魔道具にはその制約が無い物が多いが、それは稀少な魔道具職人がブランタークさんと同じく魔力質の共通化を行える術式を道具に刻むからであった。

なお、ブランタークさんには魔道具造りの才能は無いので、彼の魔力転移は人間相手のみという事になる。

『才能も無いけどよ。俺は、ああいうチマチマとした作業が苦手だから不満はねえな』

本人は、至ってこんな感じであったが。

「本人用じゃなくて、汎用なのか？」

「はい、魔法が使える方なら、誰でも貯めてある魔力を引き出せます」

そしてこの指輪は、指輪の台座に篭められた特殊な術式により、誰が篭めた魔力でも装備者が自由に使う事が出来るようになっていた。

ブランタークさんの才能を、再現している指輪でもあったのだ。

「その分も含めて、値段が高いのか……。よし、買おう」

「ありがとうございます」

エリーゼもセバスチャンも驚いているようであったが、治癒魔法の名手であるエリーゼがこの指輪を持つ意味は大きい。

俺がブランタークさんのように魔法使い同士の魔力移転が出来ない以上、こういう魔道具にお金をケチるべきではなかった。

魔力を篭めた魔晶石で、他人に魔力を移転させるにはこのような高価な魔法具が必要だが、先の魔導飛行船のエネルギー源とするなら特に問題はないとか。

この世界の魔力とは、本当に面倒な物であった。

現在も王都アカデミーなどで研究中のようだが、まだ大した成果も出ていないようであった。

「あの……。こんなにお高い物はさすがに……」

「本当なら高いと思うんだけど。ここのところ、莫大な臨時収入があってね」

「ですが……」

「俺達は夫婦になるんだろう？　俺がその指輪の魔力を必要とするかもしれない」

討伐した竜二匹の素材の売却益に、師匠の遺産などもあって、俺はまだ白金貨千枚以上を持っていた。

なので半分感覚が麻痺していて、この指輪が特に高いとは思わなかったのだ。

「魔力を篭めて持っておけば、万が一何かあった際にも魔法が使えるじゃない」

「ですが……」

「教会だと、余計に治癒魔法が使えた方が良いでしょう？」

「ありがとうございます。大切にします」

ここで執拗に断ると、逆に失礼だと感じたのであろう。

エリーゼは、俺が購入した指輪を素直に受け取っていた。

「（それだけが理由じゃないけどね）」

一種の、ホーエンハイム枢機卿に対する脅しだ。

エリーゼほどの有名人が、これほどの高価な婚約指輪を付けていたら。

魔道具であり実用品なので、エリーゼはずっと指に填めるのでまず周囲の目に入る。

噂になるのは、そう遠くない事のはずだ。

その後、もしここまで貴族間の争いに巻き込んでおいて、突然俺を見捨てたり、梯子を外したりしたら？

白金貨三枚の婚約指輪を孫娘にプレゼントしたバウマイスター男爵なのに、その彼を見捨てた薄情な男としてホーエンハイム枢機卿は大きく評判を落すのは確実であった。

「（教会の力で、俺を守ってくれよ。半分、教会との婚約指輪なんだから）ああ、魔力を補充できるのか」

店主の説明通りに、魔晶石に触れながら魔力を流すイメージを送ると、今までは灰色だった魔晶石はエメラルドのように輝き始める。

「お客様は、やはり魔法使いでいらっしゃいましたか。そういえば、現在王都では竜殺しで名を挙げたバイマイスター男爵様がいらっしゃると。更に、『ホーエンハイム家の聖女』様が婚約者になられたとかで」

「何だ、気が付いていたのか」

どうやらこの店主。
俺とエリーゼの正体に気が付いていたようだ。

「半分は勘でしたが、これは魔晶石の指輪をお勧めすべきだと」

「商売人だな」

「はい、これで生活しておりますので」

見透かされていたようであったが、俺はエリーゼに美しさと実用性を兼ねた良い指輪を贈れたので良しとする事にする。
それに、この店主も俺達が来客した事をペラペラと周りに喋るつもりもないようであった。

「当店の品は高価でございます。防犯上の観点からも、顧客の情報は漏らさないように心がけていますので」

「（貴族が、あまり大っぴらに言えない女性にアクセサリーを贈る事もあるからでしょう？）」

俺は無事にエリーゼとの初デートを終わらせ、彼女に婚約指輪を買ってあげる事も出来て、ようやく心が落ち着いたような気がするのであった。

第三十八話　王都留学。

「坊主、お館様からの手紙だ」

「手紙ですか？」

エリーゼとの初デートを終えてブラント邸に戻ると、ブランタークさんが俺に一通の手紙を渡す。

手紙の差出人は、正式に俺の寄り親となったブライヒレーダー辺境伯様からであった。

「何々……。ブランタークさん、これは本当なんですか？」

手紙には、『もう予備校の卒業認定は出すから、このまま王都に留まって冒険者修行を続けるように』と書かれていた。

「本当に決まっている。その手紙は、お館様の直筆じゃないか」

「確かに、そうですね」

しかし、納得のいかない点はある。

ようやく入学した予備校に戻れず、いきなり王都で冒険者修行に励めと言われてしまったのだから。

「ブランタークさん。これは、どういう事なんです？」

エルは、俺よりも早くブランタークさんに質問をしていた。

なぜなら、これは俺だけの処置ではなく、手紙の続きにはエル達

も同じ境遇に置かれると書かれていたからだ。

「大人の事情ってやつだな」

ブランタークさんが、ブライヒレーダー辺境伯様がこの手紙を送って来た意図を説明する。

まずは、まだ未成年なのに俺が竜を二匹も俺が倒してしまったせいで、これ以上ブライヒブルクの冒険者予備校にいても何の意味も無いからであった。

「今さら、坊主があの予備校で魔法の講師から何を学ぶんだ？」

「いや、ほら。冒険者として必要な知識とか、魔法以外の技術とかもあるじゃないですか」

「そういう知識なら、王都でも学べるからな。ここには、冒険者専用の専門学校のみならず、様々な学校があって自分の好きに学べるんだからよ」

元々、予備校にいる魔法使いはそれほどの凄腕ではなかった。

冒険者稼業などとっくに引退した八十歳過ぎのおじいさんなのだが、現役ならば冒険者稼業に精を出すし、六十歳くらいまでならどこかの貴族家や商家で高待遇を受ける事もできる。

なので必然、このような老人しか魔法の講師になどなってくれなかったのだ。

まだ魔法の講師がいるだけマシだというほど、実はどこの予備校や学校でも魔法使い不足は深刻であったのだから。

「エルの坊主も、イーナとルイーゼの嬢ちゃんもな。うちの予備校で残り二年以上も燻るのは無駄だろうから、王都で一流の達人にでも習えという事なのさ」

元々、エル達も同年代の生徒達を圧倒する力量の持ち主だ。

同じく武芸の講師にもそこまでの達人がないので、彼らは自分とそう強さが変わらないエル達を持て余しているのが現状であった。

魔法でなくても、武芸の達人なら冒険者稼業で稼ぐ方を優先する。

なので、臨時講師以外で予備校の専任講師になる物好きなど、滅多にいなかったのも真実でもあったのだ。

おかげで、王都出発前のエル達は、普段の座学の講義は普通に受け。

実技は、俺達のパーティー内で模擬戦をする羽目になっていたのだから。

「エルの坊主は、空いている時間にワーレンが教えてくれるそうだ」

ワーレンさんは、師匠から魔力の扱い方の基本を習っていた練達の魔法剣の使い手である。

しかも、その腕前で近衛騎士隊の中隊長にまでなっているので、エルの剣の師匠としては適任であろう。

「イーナの嬢ちゃんにも、近衛騎士団に槍術の達人がいるから紹介してくれるそうだ」

「ねえ、ボクは？」

「ルイーゼの嬢ちゃんにも、良い師匠が付く予定だ」

中核都市とはいえ南部の辺境にある予備校よりも、王都の方が何を習うにしても有利なのは確かである。

だが、わざわざ俺達にそこまで恩を売って、ブライヒレーダー辺境伯様から許可を得た人物は何の得になるのであろうか？

思わず、考え込んでしまう。

「今回の件は、陛下が絡んでいるのさ。だから、お館様としては許可をするしかない」

ブランタークさんの説明によると、将来有望そうな俺達に今の内に恩を売って唾を付けておこうという事らしい。

貧乏騎士爵家の八男だったので、王宮では全くのノーマークであった俺が、竜を二匹も倒して男爵になってしまった。

当然、どの貴族も己の派閥に取り込もうと考えるが当然だが、寄り親になる権利には、実家がブライヒレーダー辺境伯様の寄り子であったせいで横槍を入れるわけにはいかなかった。

次に、不慣れな王都に滞在するのでそこで手を貸せばという思惑も、元々俺がブラント騎士爵家に婿入りするエーリッヒ兄さんの結婚式に出席するために来ていたせいで駄目になっていた。

下級ながらも代々財務系の役人であったブラント家は、財務卿であるルックナー侯爵や、同じく財務閥のモンジェラ子爵の寄り子であったので、彼らの指示を受けて俺達の世話をしていたようだ。

エーリッヒ兄さんからは、王都滞在中は宿泊先や食事は面倒を見ると言われていたのだが、これ幸いにとブラント家に金を出して援

助をしていたらしい。

あとエーリッヒ兄さんのみならず、王都で働いている三男パウルと四男のヘルムートの将来の保障で、十分に恩を売ったと思っているのであろう。

こういう考え方は、さすがは大物法衣貴族とでも言うべきであろうか。

そして肝心の陛下の出方であったが、これは己の親友にして筆頭王宮魔道師であるアームストロングの姪を俺の婚約者にした。

しかも同時に、その祖父は王国で影響力の大きい教会の幹部ホーエンハイム枢機卿でもあるので、教会側にも恩を売った事になる。

「竜が倒せる魔法使いは貴重だからな。みんな、縁を結びたいわけだな」

「それで色々と出し抜かれて、ブライヒレーダー辺境伯様に怒られたと」

「人の傷を抉るなよ、坊主。とにかく、十五歳になるまでお前達は王都で勉学と鍛錬に励めや」

これは、決定事項であるようだ。

いくら多少人より魔法が得意でも、個人が国や権力に逆らうのは難しい。

別に理不尽な扱いというわけでもないし、今は成人して正式に冒険者デビューをするまで陛下の好意に甘える事としよう。

俺は、そのように考えていた。

「王都住まいは良いんですけど、ブライヒブルクの屋敷はどうしましょうか？」

「はあ？　たまに魔法で戻れば良いじゃないか。坊主が瞬間移動の魔法まで使いこなせるのは、陛下も承知だよ」

「そういえば、そうだった」

「さすがに、新婚のブラント家に長々滞在するのも拙いからな。適当に家は準備しておく」

俺は、夏休みにエーリッヒ兄さんの結婚式に参加がてら王都観光を楽しむだけであったはずなのに、なぜか正式に貴族に叙任され、成人までを王都で過ごす事になってしまう。

俺はただ、自分の運命の大転換に半分驚き、半分流されるばかりであった。

第三十九話　師匠が増えた話。

「なあ、ルイーゼの師匠って誰なんだ？」

「さあ？　ボクも聞いてないし。ヴェルは？」

「何となく想像がつくけど、言いたくないなぁ……」

「あの人だよね？」

夏休みの期間が終わり、ようやく新学期という当初予定されていた未来は大きく変化していた。

もう予備校は卒業確定だと言われ、成人までにもっと鍛錬に励むようにと、王都滞在を大人達によって決められてしまったからだ。

ただ、この決定に特に文句があるわけではない。

同じ事を学ぶにしても、一国の首都である王都の方が教育内容も充実しているはずだし、何より社会インフラや娯楽の質が優れている。

遊び呆けるつもりはないが、休みの時くらいは休暇を満喫したかったからだ。

実際、王都はブライヒブルクよりも都会で、遊んでいても面白い。

あの碌に娯楽すらない実家になど、比べるだけおこがましいという物であろう。

滞在する貸し家も決まり、更にその家賃をブライヒレーダー辺境

伯が出すと聞き。
『貴族の縄張り争いも大変だな』などと思ってから数日後、俺とルイーゼはなぜか同じ場所に向かって歩いていた。

エルは近衛騎士隊のワーレンさんに剣を習うために、イーナも同じ近衛隊で槍術の達人がいるのでその人に槍を習うために城へと向かっていたが、俺とルイーゼはなぜか別の場所にある軍の施設に行くようにと言われていたのだ。

俺は魔法使いだし、ルイーゼは同じ魔力持ちながらも魔闘流関連の技でしか魔力を使えない。
俺のような万能型ではなく、ある種の特化型の魔法使いに分類されるわけだが、こういう人は一定数存在している。

一つの系統魔法にのみ、突き抜けた才能を持つ人。
エリーゼなどがそれで、治癒を中心に聖属性の魔法しか使えないので特化型とも言えた。

あとは、魔道具造りに使用する魔法しか使えない人や、便利な生活系の特殊魔法しか使えない人に、瞬間移動や遠方の魔法使いとの通信の魔法しか使えない人もいる。

この通話という魔法、風の系統に属する魔法であったが、使える魔法使いは軍や商人が高額で囲うほど便利な魔法であった。

達人になると、数千キロをタイムラグ無しで相手の魔法使いや通話専用の魔道具に声を届かせる事が出来るそうだ。

俺も使えるはずだが使った事が無いので、詳しくは知らないのだが。

そう、元ボッチに遠距離通話をする相手などいないのだ。
しかも、相手が同じ通信魔法を使えるか、通信用の高額な魔道具を所持していないと通信は成立しないので、今後もそう機会があるとは思えなかった。

「ボクが、ヴェルと一緒に特訓？」

「火炎の魔法でも覚えるか？」

「無理だから」

そんなわけで、俺とルイーゼが同じ場所で鍛錬を行う理由が存在しない。
ルイーゼは魔闘流を使うので近接戦闘特化型で、俺は遠方から魔法をぶっ放す遠距離戦闘特化型。

お互いに、同じ訓練メニューを提示されても困ってしまうのが現状でもあった。

「すいません。本日……」

「おおっ！　良く来たのである！」

施設の門番に経緯を伝えるとすぐに奥に案内され、とある建物の入り口の前で声をかけると、そこには以前に出会った事がある。
いや、夏休みに半月近くも行動を共にした、魔法使いとしては超一流で素晴らしい人のはずなのに、なぜか暑苦しい印象しか残らないあの人物。

王宮筆頭魔導師なのに、魔物退治で遠征した時には焼いた魔物の

肉にかぶり付くのが山賊よりも似合っているあの人物。

あの巨乳天使ちゃん、エリーゼの伯父とはとうてい思えない容姿と筋肉の持ち主。

クリムト・クリストフ・フォン・アームストロング子爵。

その人が、やはりいつも通りに暑苦しい笑顔で俺達を待ち受けていたのだ。

「アームストロング導師が、俺とルイーゼの先生なのですか？」

「左様！　某、楽しみで昨日はなかなか寝付けなかった由に」

魔力で物質化していた鎧を着ていたとはいえ、竜を素手で殴る。

所謂、普通の魔法使いからは半分以上逸脱しているアームストロング導師が俺達の先生という現実に、俺はどうやって逃げようかと頭を働かせ続ける。

向こうは楽しみかもしれないが、こちらからすると嫌な予感しかしなかった。

というか、俺は普通にブランタークさんからいくらでも学ぶ事があるのだから。

決して、竜の殴り方を習いに来たわけではないのだ。

「（俺にあんな魔法とか無理！　というか、あれは魔法なのか？）」

魔法だからこそ、王国はアームストロング導師を王宮筆頭魔導師にしているのであろうが、それでもどこか違和感を感じてしまう俺であった。

「（俺に会得できるはずが……。待てよ、ルイーゼなら会得可能か）」

俺からすると、魔闘流とアームストロング導師の格闘魔法の違いが良くわからないので、むしろルイーゼだけの方が修行も捗るであろう。

心の中でそう折り合いを付けると、隣で初めて見る筋肉王宮筆頭魔導師に絶句しているルイーゼに話かける。

「ルイーゼなら、きっとあの戦闘方法は参考になるだろうね。俺は、邪魔すると悪いかな？」

「えっ？　ボクだけ？　ヴェルも、一緒に決まっているじゃないか！」

ルイーゼには、アームストロング導師が魔法で魔力を物質化して全身鎧を作り、高速の飛翔魔法で縦横無尽に移動してグレードグランドをドツキ回し、ブレスを拳で引き裂き、挙句に高集束魔力弾を連発してダメージを与え続けていた話をしていたのだ。

俺からすると、それは魔闘流の技にあるのかと疑問に思って聞いてみたのだが、ルイーゼは魔闘流にそんな技は無いと断言していた。

『魔力を物質化？　そんな膨大な魔力があったら、わざわざ魔闘流の修行なんて誰もしないよ。高集束魔力弾も、魔闘流の技じゃない。直接魔力を乗せた拳と足で戦うのが基本なんだから。魔闘流は、少ない魔力を効率良く戦闘能力の上乗せに使う武芸なんだ。ボクには初級と中級の間くらいの魔力はあるけど、肝心の魔法が一切使えないから魔闘流を習っているわけだし』

アームストロング導師の戦い方は、攻撃力は圧倒的であるが、魔力の消費が激しいので長時間の戦闘には向かないらしい。
その割には、戦闘後もアームストロング導師は元気そうであったが、それは彼の魔力が極端に多い証拠なのであろう。

さすがは、師匠のライバルを自認している人物である。
爽やか系であった師匠と比べると、少々暑苦しいのが難点ではあったが。

「いや、俺は格闘技とかはねえ。遠距離から、魔法で攻撃と援護が適任でしょう」

一応、子供の頃から基本だけは訓練していた剣であったが、冒険者予備校入学時に『まるで才能が無い』と講師陣に太鼓判まで押されてしまっていた。
実際、入学時には真ん中よりも少し上くらいの成績であったのに、今では完全にビリから数えた方が早いくらいにまで剣の成績は落ちている。

バウマイスター家での基礎鍛錬は、俺の剣が下手だとバレる時期を少し遅らせただけであったのだ。

ただ、弓とナイフなどの投擲術はソコソコ才能があると言われていたので、これは魔法と一緒に訓練はしていたのだが。

「俺は、剣は駄目だから」

「剣は駄目でも、格闘技なら大丈夫かもしれないじゃないか！　一緒に習おうよ！」

なぜか必死に俺を説得するルイーゼであったが、やはりこの暑苦しい筆頭王宮魔導師と二人きりで訓練をするのが嫌なのであろう。

なぜわかるのかと言えば、俺だって嫌だからだ。

「俺は、魔法の訓練をさ。まだ魔力の限界も来ていないし」

俺はまだ十二歳で、師匠から毎日欠かさず行うようにと言われている魔力の循環や各種魔法の実技訓練に。

あとは、ブランタークさんから言われている使用魔力の節約などは、これは一生訓練をしても完成しないと言われている課題でもあった。

他にも、まだ使った事が無い魔法の実験に、使える魔法の質の向上に、次世代が参考可能なように俺なりに魔法の事を日記に記述しておく事もなどと。

その気になれば、いくらでも忙しい身であったのだ。

「何と！　既に某を超える魔力を持ちながら、まだ成長限界に来ておらぬと！」

「はい。なので、俺は……」

このままルイーゼだけを押し付けて帰ってしまおうとする俺であったが、そうは問屋が卸さなかったらしい。

導師は、なぜか感涙の涙を流しながら、俺の両肩をガッシリと掴んでいた。

「（肩が壊れる！　骨が砕ける！　というか、逃げられん！）」

「ならば、尚の事、某と訓練をするのである。魔力の循環訓練では、某の魔導機動甲冑ほど効率の良い物はなく。飛翔の高速化と身体能力を強化したままでの戦闘に慣れれば、魔闘流のように高度な格闘センスを必要とはしないのである。某も、格闘技など他人から習った事は無いのである」

アームストロング導師の説明は理に叶っていて、おかげで俺が逃げる好機を逸していた。

というか、この筋肉導師。

あの強さは、頑強な肉体と魔法のみで再現しているらしい。

世間の武道家から見ると、とんでもない人物なのであろう。

「アルフレッドは、某のような格闘魔法オンリーな魔法使いとは違って、多彩な魔法を器用に使いこなす天才であったが腕っ節の方はサッパリであった。才能が無いのだと本人は言っていたが、せめて某の魔導機動甲冑だけでも習得していれば」

あの南の果ての魔の森で、命を落すような事もなかったのかもしれない。

アームストロング導師は、寂しそうな顔をしながら俺達に語っていた。

「ねえ、ヴェル」

「そうだな。まだやった事が無い事を、出来ないと決め付けるのは早計か」

どうせ実力を隠すなどと言う器用な真似は出来なかったので、今

回の竜退治とそれに伴う叙勲に関しては仕方が無いと、俺はそう思う事にしていた。

だが、それで目立ってしまった点もあるので、これから先俺にどんな難儀が訪れるかもしれない。

いくら強力な魔力を持つ魔法使いでも、いつ不意に何かをされるかもしれないし、魔力が少なくなった時に身を守る術は複数確保しておいた方が良いであろう。

俺は、アームストロング導師から魔法というか魔法格闘術を習う事にする。

「少年には、才能があるのである。すぐに覚えられるであろう」

「ありがとうございます。ですが、宜しいのですか？」

俺は唯一懸念していたのは、アームストロング導師は筆頭王宮魔導師なので『忙しいでは？』という点であった。

書類仕事や部下の管理を細々とこなすアームストロング導師の姿が思い浮かばないが、筆頭である以上はそういう仕事からは逃れられないのではと。

そういう風に思っていたのだ。

「それならば、まるで心配無いのである。某は、陛下に呼ばれないと城に行く必要が無いのである」

「えっ？」

「考えてもみよ。某など、王国の日々の統治で何の役に立つ？　前

回のグレードグランド討伐を見ても明らかであろうが、基本的に王宮筆頭魔導師などは、有事以外はお飾りである」

陛下の護衛などは、近衛と王宮魔導師の中から中級レベル数名で事足りてしまうし、その中級レベルの中から自分とは違って書類仕事が苦にならない連中を下に据えているので何の問題も無いらしい。

あとは、定期的にある公式行事などに王宮筆頭魔導師として顔を出すくらいなのだそうだ。

「ただ。恐れ多くも陛下は、某を子供の頃からの親友であると仰られ、定期的に顔を出すようにと言われているのである」

なるほど、俺の読み通りにアームストロング導師は見た目とは違って頭の切れる人物であるようだ。

たまたま陛下の幼馴染であったアームストロング導師が、王宮では五百年に一度と言われるレベルの魔法使いであった。

その気になればいくらでも出世できるのに、彼は才能があった魔法のみでその位を極めている。

それでも、権力闘争に汲々としている貴族連中からすると、陛下のお気に入りであるアームストロング導師は、目の上のタンコブのような扱いなのであろう。

『アルフレッドの方が、筆頭王宮魔導師に相応しいのではないか？』

このような中傷さえ飛ばす彼らから距離を置くために、わざと面倒な仕事を部下に任せるバカでお飾りな、非常時にしか役に立たない王宮筆頭魔導師を演じているのだと。

もう一方の俺の師匠も、子供の頃に王都で孤児として苦労していたり、王宮に巣食う連中に辟易して南部へと逃げてしまったようだが。

「（この人は、かなり要注意人物かも）」

それでいて、親友でもある陛下への忠誠は厚いのだ。

その忠誠の結果、変に利用されないようにしようと俺は決意していた。

完全にそれが出来るのかは別として。

「それに、この訓練は某のためでもある」

「アームストロング導師のため？」

「左様。某は、まだ魔力量の限界が訪れておらず……」

「えーーー！」

今でも化け物なのに、アームストロング導師は四十歳を超えてもまだ魔力が成長途上にあるらしい。

普通なら、二十歳前には魔力の成長は限界を超えてしまう。

つまりアームストロング導師は、成長力でも特殊な部類に入る魔法使いであったのだ。

「ルイーゼ嬢にも、まだ魔力の成長限界は来てはおらぬ。よって、今日は最初に器合わせを行う事とする」

結局その日は、俺がルイーゼと、アームストロング導師と、彼が

連れて来た数十名の見習い魔法使いと器合わせを行う事で終わってしまう。

器合わせは、魔力を合わせる相手が自分の魔力限界量を超えていれば一回で最大魔力量まで引き揚げる事が可能だ。

才能が知れてしまうので、それでショックを受けたり、その事実を受け入れられなくて器合わせをしてくれた相手に暴言を吐くといった例もあり。

実は、お互いに信頼関係がないと行われない。

つまり、師匠と弟子の関係のような物だ。

この数十名はアームストロング導師が認めた弟子達という事と、器合わせではなるべく魔力量が高い人と行った方が魔力が上がり易いという事実無根の噂があったので、俺と器合わせをしたい連中を連れて来たようだ。

勿論、そんな事実は存在しないのであったが。

あともう一つ、こんな事情も存在していた。

以前に、魔法の才能がある赤ん坊に器合わせを施して、その赤ん坊が膨大な魔力を得たそうだ。

するとその赤ん坊は、泣くたびに風の魔法で部屋をメチャメチャにし。

おっぱいが欲しいと、魔法で強引に母親を引き寄せ。

歩き始めると、一緒に遊んでいた子供から玩具を取り上げるために魔法を使いと。

器合わせをするには、その相手の自我と理性が一定以上に達し、ある程度は魔法の修行を行っているという条件が必須となっていた。

俺は例外のような気もするが、ブランタークさんに言わせると『五歳だろうが、六歳だろうが。アルが認めたから器合わせは行われたし、坊主は多過ぎる魔力を持て余しているわけでない。問題ないだろう』との意見であった。

俺の場合は、中身がもうおっさんなので例外なのであろう。

「この中の全員が、この一回で魔力が限界まで上がるであろう。だが、その量が少なくとも悲しんでは駄目だ。確かに魔力量も重要ではあるが、他にも魔法では鍛えられる部分も多い。むしろ、魔力量の増大に使う時間が節約できたので、お主達は幸運なのである」

どこから連れて来たのかは知らなかったが、アームストロング導師は、俺と器合わせをしたために魔力酔いをして床に寝そべっている彼らにそう説明していた。

ただ全員が最低でも中級レベルの魔力を保持している事からして、彼らは将来の王宮魔導師候補だと思われる。

「でもどうして、アームストロング導師は魔力酔いをしないのかな？」

ルイーゼも、彼らほどではないが少し眩暈を感じているらしい。

俺の近くに座り込んでいたが、その成長は驚異的の一言であった。

魔力の量で言えば、ほぼ中級から上級の間に匹敵するレベルにまで上昇していたからだ。

さすがは、家族に遠慮して魔力強化の修行を最近になって始めた逸材でもあった。

しかし、ルイーゼに他の魔法が使えるのかは不明だ。

これからの課題というやつであろう。

「それは、俺と同じなのかな」

「ええと……。もしかして？」

現在のアームストロング導師の魔力量は、俺と全く同じ。

要するに、俺と同じで魔力の成長限界はまだ来ていないという事だ。

というか、もう既に師匠の倍以上にまで達している。

このまま行くと、師匠はアームストロング導師のライバルではなくなってしまうかもしれなかった。

「ふむ、器合わせで大きく魔力路と魔力袋が広げられる感覚は久しぶりなのである。何と心地良い事か……。では、早速に魔導機動甲冑の出し方から」

「修行するのかよ！」

「当然である！」

俺とルイーゼは、あまりに元気なアームストロング導師にその場で思わず脱力してしまう。

そしてこれから、最強の魔法闘士ヴェンデリンの伝説が始まらない事を祈るのみであった。

幕間十　桃色カバさん。

「なぜに、この四人で？」

「うむ、今回の魔物は少し厄介なのでな」

「魔物ですか？　俺は、未成年ですよ」

「カテゴリーは魔物ではあるのだが。この『桃色カバさん』は、領域に住んでおらぬのでな」

陛下からの命令で、王都での冒険者見習い修行を開始してから数ヶ月。

今日は、いつもの厳しいアームストロング導師との特訓も無く、このまま休みかと喜んでいたのに。

なぜか、王都郊外にある森にまで付き合わされてしまう。

メンバーは、同じく強制徴集されたブランタークさんとエルで合計四人。

イーナはいつも通りに槍術の修行を、ルイーゼはアームストロング導師から居残り特訓を命じられて残念そうな顔をしていた。

しかし、安心して欲しい。

別に、俺もアームストロング導師も、遊びに来ているわけではない。

また未成年なのに、魔物と関わる仕事に付き合わされていたのだ。

「『桃色カバさん』かよ。俺、帰って良いか？」

ブランタークさんほどの元ベテラン冒険者でも、この『桃色カバさん』の相手はゴメンらしい。

名前からして、ファンシーな感じのカバという印象しか受けないのだが、もしかすると物凄い必殺技でも持っているのであろうか？

というか、なぜに正式名称に『さん』が付いているのであろうか？

激しく、命名者に問い質したい気分であった。

「冒険者ギルドの面々は全て断った由に、我らにお鉢が回って来たのである」

なぜにそんな依頼を、冒険者見習いの俺とエルにやらせるのか？

俺の考えを見透かしたかのように、アームストロング導師は説明を始める。

「討伐依頼ではないのである。これは、保護依頼なのであると」

「保護ですか？」

更に、説明は続く。

この『桃色カバさん』という魔物は、魔物の領域ではなく普通の森の綺麗な泉などに住んでいるそうだ。

大きさはポニー程度で、色はその名の通りに全身ピンク色。

雌しか存在せず、単体で卵を産んで繁殖する。

寿命は竜に匹敵するという記録もあり、要するに物凄く長生きな

のだそうだ。

当然それに比例して、滅多に卵は産まない。

生息数も非常に少なく、現在王国では保護動物に指定されているそうだ。

「保護動物ですか？　保護魔物ではなくて？」

「別に、どちらでも構わねえよ。厄介なのには違いねえ」

まさか、この世界で動物保護の概念があるとは思わなかった。

しかも、その保護が厄介な仕事とは。

ブランタークさんほどの人が嫌がるなんて、よほど面倒なのであろう。

「卵の殻が、大変に貴重な薬の材料になるのである！」

「薬ですか？」

「不能治療の特効薬なのである！」

そのため、王侯貴族はこぞって『桃色カバさん』を確保もとい、保護しているのだそうだ。

気持ち良く卵を産んで貰い、孵化後に殻を譲って貰うために。

「今回、我らが保護する予定の個体が、予定よりも早く卵を産んでしまったのである」

「産卵後かよ。大丈夫か？」

「危険なんですか？」

「唯一、危険なタイミングだな」

『桃色カバさん』は、普段はとても大人しい魔物なのだそうだ。
魔物のカテゴリーには入れられているものの、猪なんかよりもよっぽど大人しく。
森にある綺麗な泉で、その近場に生える草のみを食べる。

危害を加えられなければ、向こうから襲って来る事など絶対に無いらしい。

ただ、産卵後には卵を守ろうとして凶暴になるのだそうだ。
そういえば、前世でいたカバも実は意外と凶暴な動物であると聞いた事がある。

「凶暴っても、別に突進とかして来ないんだよ」

「威嚇するくらいですか？」

「そのくらいなら、誰も依頼を断らねえよ」

ヒントは、卵の殻が不能治療薬になるという部分であった。

「『桃色カバさん』は、自分や卵に害を為そうとする敵に特殊な術を使うんだ」

催眠術と幻術を組み合わせたような、精神攻撃を仕掛けて来るらしい。

「精神攻撃ですか？」

「これが、どんな魔法使いにも防げ無くてな……」

その内容も、極めて悲惨な結果を齎すため。

今回、女性陣は参加をご遠慮願ったそうだ。

「男なら、被害に遭っても良いと？」

「そう言うなよ。もしかしたら、坊主は魔法で防げるかもしれないと」

「左様、某も前に魔法防御に失敗し、色々と大変な目に遭ったのである。出来れば、参加したくはなかった！　だが、アルフレッドの弟子である少年がいる！　某は、それに賭けたのである！」

「……（物凄く嫌な予感がする……）」

目標の『桃色カバさん』は、その森の奥にある泉の傍にいた。

集めた草で巣を作り、そこで卵を守っていたのだ。

「保護って、別の場所に連れて行くんですか？」

「左様、王国が準備した特別保護区へと連れて行くのである。さあ……」

だがそこで、厳つい筋肉達磨であるアームストロング導師が前に出てしまったのが良くなかった。

卵を奪われると思ったのか？

『桃色カバさん』は、卵を俺達から隠すように前に出てから、こちらをその小さな目で見つめ始める。

「あれ？　威嚇も無し？」

だがそれは、俺の認識不足であった。

その間にも、『桃色カバさん』の視線は動かないままであり、次第にこちらの方が無意識に、その小さな目に視線を合わせようとしてしまう。

「拙い……。これは……」

どうやら、俺達は罠に填まってしまったらしい。

次第にどうやっても、『桃色カバさん』から視線を逸らす事が出来ず、頭がボンヤリとして来て、最後には視界の端から桃色の霧のような物が確認されるまでになっていた。

「やっぱり、坊主でも駄目か！」

事前に、睡眠魔法などを防ぐ防御魔法を発動させていたにも関わらず、それらは全く効果が無いようだ。

次第に、俺達の体の自由が奪われていく。

「くっ、体が動かない！」

「仕方が無いのである。ここは覚悟を決め、後の結果に皆と神の寛容を祈るのである」

「そんな言い方があるか！」

ブランタークさんが、導師に文句を言っている間に。
次第に視界を染める桃色の量が増えていき、そのまま俺達は意識を失ってしまうのであった。

「起きて、信吾君」

「あれ？　ここは？」

俺が目を醒ますと、そこは森の中ではなかった。
もう二度と見るはずがない、平成日本の夕方の教室。

更に、自分の姿を確認すると高校生時代の制服姿で、顔などの見た目もそれに準じた仕様になっていた。
黒髪・真ん中分けで、中肉中背で普通の顔をした眼鏡モブ生徒。
これが、俺の高校時代であった。

「どうかしちゃったの？　信吾君」

続けて、俺を起した同じ制服姿の女性を見ると、彼女には物凄く見覚えがあった。
高校時代において、俺が好きになった女性。

県立桜ヶ丘高校のアイドルである、伊集院静香さんであったからだ。

生徒会長にして、文武両道。
それでいて性格も良く、同級生や後輩からも慕われ。

多くの男性がラブレターを送ったり告白して、見事にフラれている。

俺はと言うと、それすら出来ないで彼女を見ていただけだ。

当然、ほとんど会話などした事もないはずで、それなのに彼女の方から声をかけてきたのだ。

「いや、何でも。ええと、そろそろ帰ろうか？　伊集院さん」

「信吾君、静香って呼んで」

「えっ？　マジで」

今の俺はヴェンデリンではなく、一宮信吾として行動する事に全く違和感を覚えていなかった。

エル、ブランタークさん、筋肉導師と共に魔物の保護に森に出かけているはずなのに、今のこの情況をおかしいとは思わないのだ。

「ええと……。静香」

「はい、信吾君」

高校時代には、碌に会話すらした事が無い憧れのアイドルであった彼女。

その彼女を、呼び捨てで呼んでいる自分。

次第に、顔が熱くなって来るのが自覚できるほどであった。

「信吾君」

「はい」

「もうみんな、帰っちゃったね」

時間は夕方の六時半で、残ってるのは部活でグラウンドに居る連中くらいである。

もう教室には、二人しか残っていなかった。

「だからね」

そう言うと、彼女は俺に顔を向けてそのまま目を閉じる。

「（これは！　これは、ひょっとすると！）」

彼女は、俺にキスをして欲しいのだと。

もしかすると、目にゴミが入った可能性もと考えてしまうのは、俺がやはり非モテであったからであろう。

放課後の教室でキスなど、物語以外では都市伝説だと思っていたからだ。

「（しかし、ここで慌てては思わぬ失敗が！　一旦深呼吸をしつつ……）」

さすがは、非モテな俺。

既に心の中は、世界大戦勃発直前並の大喧騒に包まれていた。

だが、女性にここまでされたら、後は自分からキスをするのみである。

「（生きてて良かった！）」

そう思いつつ、俺も目を閉じて彼女と唇を重ね。
続けて、二人はお互いに背中に手を回して抱きあう。
初めてでは無いが、そう経験も無いキスはやはり素晴らしかった。
女子高生特有の良い匂いに、柔らかい唇の感触。
他にも、彼女の柔らかい体の感触などが俺の心を高揚させていく。

このまま永遠に、こうしていたい気分だ。

「（最高の気分だぁ）」

しかし、そんな幸福の絶頂にいる俺の肩を揺さぶって来る、とても無粋な奴がいる。
こんなに素晴らしい時間を邪魔するとは、さすがに温和な俺でもブチ切れても良いであろう。
さあ、上級魔法の餌食となるが良い。

俺は、怒りに震えながら目をあける。

すると、目の前には地獄の光景が展開されていた。
夕方の教室で、憧れのアイドル静香ちゃんとキスをしていたはずなのに。
なぜか目の前には、長方形で厳のような顔に、なぜかパイナップルカトで、鼻の下には立派なカイゼル髭を生やしている筋肉導師の顔がアップで映っていたからだ。

「ようやく、目が醒めたようである！」

「ええと、導師？」

俺は、高校時代の片思いの相手とキスをしていたはずで、それが目が醒めると目の前には筋肉導師の顔が。

更に、俺は筋肉導師の背中に手を回していて、導師も俺の背中に手を回して抱き合っている状態であった。

「認めたくない！」

最高の気分だったのに、嘘はバレなければ嘘じゃないのだ。

筋肉導師の抱き付く力で、次第に背中とか肩がミシミシ言っていても、その力が体の骨に輝が入りそうなほど強くても。

このまま目が醒めなければ、幸せでいられたのに。

「気持ちはわかるけど、現実を直視しようよ」

俺の肩を揺さぶっていたのは、後ろにいたエルであったらしい。

しかも彼は、なぜかブランタークさんと視線を合わせないようにしていた。

理由は、口にするまでもないようだ。

「このように、『桃色カバさん』は人を色の欲に誘う幻術のような物を使うのである！　今回、女性陣を連れて来なかった理由はわかるであろう？」

確かに、エルや導師やブランタークさんが、エリーゼやイーナやルイーゼとキスをしていたのでは風聞が悪い。

下手をすると他の貴族が、『そんなふしだらな娘達は、バイマイ

スター男爵の婚約者に相応しく無いのでは？　代わりに私の娘を…』とか言う事にもなりかねない。

だから導師は、ブランタークさんにすら事情を説明しないで、俺達をここまで連れて来たのであろう。

「はい……。ところで、導師」

「何かな？」

「失礼します！」

俺は、いまだに抱きついたままの筋肉導師を強引に振りほどくと、そのまま近場の草むらへと移動する。

そして……。

「うぇーーー！　一生物のトラウマだぁーーー！」

「某とて、普通に女性が好きなのであるが……」

あの筋肉導師とキスをしてしまったトラウマで、俺は暫く草むらの影でゲーゲー言い続けるのであった。

「しかし、このカバ。自分が保護動物だからって、調子に乗っているような……」

「あのな、ヴェル。カバが調子に乗るとか無いから……」

結局、あれから俺達は数度カバの保護を試みたが、その結果は全て失敗。

合計で三つほどのトラウマを、俺の脳裏に植え付ける事に成功する。

次は、通っていた中学校の野球部の部室で。

万年補欠選手であった俺が好きだった、可愛い同級生マネージャーとキスをしたはずなのに、仏頂面のブランタークさんが俺を睨んでいたのだ。

「情熱的なキスをありがとうよ」

「ブランタークさんこそ、経験で何とかあのカバの術を防いでくださいよ！」

「無理だから、俺は嫌だったんだよ！」

なるほど、誰も依頼を受けないわけだ。

ブランタークさんでも、どうにもならないのだから。

「もう一回試みる」

「失敗って、わかっているのに……。こんなの、本来のブランタークさんじゃない」

「そういう契約だから仕方が無いんだよ！」

予想通りに、三回目も駄目であった。

舞台は、小学生の頃に参加していたサッカー倶楽部の控え室へと移り、そこで俺が惚れていた女子で可愛いのにサッカーが上手だった同級生がそっと目を瞑り。

というか、俺はなぜにこう無理目の娘ばかり好きになったのであろうか？

現実を直視するという選択肢が無かったからこそ、非モテであったとしか言い様が無いのだが。

「エル……」

「ヴェルか……」

「あのさ……」

「皆まで言うな……」

一回目の筋肉導師とのキスは、最高級のトラウマとして。

二回目の、どこか酒臭いような気がする、その前に加齢臭がしそうなブランタークさんに比べると、まだエルはマシな部類に入るのではないか？

こいつは、顔も悪くないし。

だが、そう考えた時点で何か負けたような気分になってしまうのだ。

エルも同じ事を考えて、俺に何も言うなと言ったのであろうが。

「それで、四回目はどうしますか？」

「最低限、挑戦はしたんだ。もう帰るぞ」

ブランタークさんは、もう義理は果たしたとばかりに帰り支度を始めていた。

「でも、このままカバを放置ですか？」

「つうか、アレに害を成そうと考えても無理だろうが」

というか、どうしてわざわざカバを保護区に移動させる必要があるのかわからなかったのだ。

あの幻術の前には、どんな密猟者でも手が出せないであろう。

「実際、朝に監視員が様子を見に行くと……」

密猟者が一人だと木に抱きついてキスをしていたり、二人以上だともっと凄い事をしていた事も少なくないそうだ。

相手が男であろうと、女であろうとだ。

「保護任務においても、冒険者が悲劇に巻き込まれる案件も多くあったのである」

気が付いたら、そういう関係になっていて責任を取って結婚する羽目になった男女の冒険者に。

そのまま、同性愛に目覚めてしまった者も多いらしい。

「エリーゼは、連れて来れませんね」

「左様」

教会関係者にとって、同性愛は異端にも等しい罪である。
非生産的で、道義にも劣ると。
見付かると、厳罰に処されるのが普通であった。

「ヴェルと導師のキスなんて見たら、気絶するだろうな」

「エルとブランタークさんもな」

結局臨時の任務は失敗に終ったのだが、他の冒険者が全て断った任務なのでペナルティーは課せられなかった。
なお、問題の『桃色カバさん』であったが、卵が孵ると自主的に親子で保護区に移動したそうである。

完全に、働き損な一日であった。

「家に帰って、エリーゼ、ルイーゼ、イーナに口直しをして貰って人数的には差し引きゼロか」

「いや、導師のインパクトを一人前で考えると……」

それでも、エリーゼ達で口直しはさせて貰う俺であり。
それと、『もう一宮信吾に戻らなくても良いや』と思えるようになった一日でもあった。

幕間十一　聖女様の告白。

「なあ、ヴェルはもう少しで十三歳の誕生日だろう？」

「そう言われると、そんな気がする」

「お前なぁ……。自分の誕生日じゃないか……」

とある日の午後、現在ブライヒレーダー辺境伯様から借りて貰っている住居において、俺はエルからもうすぐ誕生日ではないかと聞かれていた。

誕生日。

普通に考えれば、家族だの友人だのに祝って貰える嬉しい日であるはずだ。

きっと、美味しいご馳走やケーキなども出るのであろう。

プレゼントだってあるはずだ。

ところが、前世と合わせてここ十年間ほどの俺は違う。

前世では子供の頃はともかく、大学生の頃から一人暮らしなので彼女が居た頃に祝って貰ったのが二回だけ。

あとは、社会人にもなると、誕生日などあまり気にならなくなるのが普通だ。

特に、二十五歳の誕生日は酷かった。

残業が長引いて、日付けが変わる寸前に誕生日である事に気が付き。

仕事帰りに、コンビニでショートケーキでもと思ったら売り切れ

で、仕方なしに生クリームが乗ったプリンを食べたあの日。

その後、子供に憑依したのに、まさかもっと情況が酷くなるとは思わなかったが。

ヴェンデリンに憑依してからは、何しろあの実家なので誕生日を祝うという発想すら無かった。

長男クルトの誕生日に、少し食事が豪勢になるくらいであろうか？

その辺は、長男なので多少は優遇されていたらしい。

他の兄弟の誕生日など、ほぼ無視というかまるで無視だ。

多分父などは、俺の誕生日すら正確に覚えていなかったのであろう。

どうせ覚えていても、あの実家の経済状態で誕生日パーティーなどありえないはず。

兄弟が多いので、いちいち祝っていたら金が足りなくなるのは確実であろうからだ。

よって、ヴェンデリンになった俺の誕生日の記憶は、七歳の頃に唯一エーリッヒ兄さんに『誕生日おめでとう』と言われ、家を出てからもエーリッヒ兄さんだけは、毎年プレゼントと手紙を贈ってくれていた。

１００％、エーリッヒ兄さんから祝って貰ったという記憶しか無かったのだ。

なるほど、これは酷い。

俺が実家の家族に興味が無く、唯一エーリッヒ兄さんだけが例外な理由が良くわかるというものだ。

最近では、パウル兄さんとヘルムート兄さんもであったが。

彼らは、あまりに年下である俺と、どう話して良い物かわからなかったみたいだ。

実家では、いつ家を出る事になるかわかならいので、自分の事だけで忙しかったようであったし。

「十三歳になるのは事実だ。それも、人生の通過点の一つにしか過ぎない」

それでも今年は、エリーゼ、エル、イーナ、ルイーゼに。

エーリッヒ兄さん達に、ブラント家の人達は祝ってくれるかもしれない。

などと言う予想を、自分なりに立てていた。

そこで、少し冷たく答えてみる事にしたのだ。

きっと、誕生日パーティー当日に態度を融解させると、前世で言うところのツンデレという奴になのであろう。

野郎のツンデレなんて、まるで需要はないと思われるが。

「頼まれなくても、祝ってくれる可能性もあるぞ」

「そうなのか？」

「お貴族様達が、一杯な」

「何か、もういいや」

ところが、エルの予想を超える規模で、また何かを企む貴族達が存在しているようだ。
彼らは、本当に逞しい。

そのタフさがあれば、きっと前世で俺が働いていた商社でも一流営業マンになれたかもしれない。
『一宮君には、少しガッツが欲しいな』などと、直属の上司に言われなかったであろう。

「よう、坊主」

とそこに、今度はブランタークさんが尋ねて来て、俺達に声をかけてくる。

「ブランタークさん、今日はお仕事は良いのですか？」

「お仕事だよ。来週の安息日に、坊主の誕生日パーティーを開くから」

「この年齢の子供のですか？」

基本的に、貴族はパーティーが好きという事になっている。
こういう時に、こういう規模で開くのが決まりという事情もあるのだ。
貴族本人も、人によってなので１００％とは言えなかったが基本的にパーティーが好きな人が多く、そのために普段からお金を貯めている人は多かった。

豪勢なパーティーを開ける貴族というのは、貴族らしくエレガン

トで財力にも優れていると評価されるからだ。

主催が多いと、これも交友関係が広いと思われて評価される。

人脈は、貴族の大切な武器の一つであった。

「珍しいが、開かないわけにもいかなくてな。坊主は、竜殺しの英雄だから」

要するに、プレゼントを持って押し掛けたい貴族や商人が多いそうだ。

そして、そのプレゼントの見返りを期待しているのであろう。

そういえば、まだ元気だと思う田舎のお祖母ちゃんが、『世の中、無料ほど高いもんはねぇ！』と言っていたのを思い出す。

「でも、この家の庭では無理でしょう」

この家は、冒険者予備校に通う学生が住むには豪華な家であったが、貴族の家からすれば狭い。

特に庭が狭いので、パーティーには不向きだと思われる。

「王都のブライヒレーダー辺境伯邸で行うから。坊主は、当日に身一つで来れば良いさ」

「わかりました」

「素直だな」

「いや、自分で全部準備しろとか言われたら嫌ですし……」

「どうせ坊主は主賓で、パーティー中はずっと忙しいからよ」

どうやら、せっかくの誕生日パーティーも色々と忙しくなりそうな気配だ。

とにかく沢山の人達の相手をさせられそうなので、楽しくはないであろう事だけは覚悟するのであった。

「誕生日パーティーですか。ブライヒレーダー辺境伯邸で行われるのは、ヴェンデリン様と縁を繋ぎたい貴族が多いからでしょうね」

ヴェルの、十三歳の誕生日パーティーをブライヒレーダー辺境伯邸で行う。

その話をブランターク様から聞いた時、ヴェルの婚約者であるエリーゼは冷静にそう分析していた。

中央で揉まれている大物法衣貴族の孫娘であるエリーゼは、普段はお菓子や料理を作ったり、お茶を淹れたりするのが好きな娘なのだけど。

その血は、やはり本物の青い血のようだ。

ヴェルほど有名になると、色々と貴族として面倒な礼儀とか習慣とか知識が必要になる事がある。

正直、ヴェルの生い立ちでは、それを覚えている時間は無かったのであろう。

あっても、あの実家が教えるはずもなかったが。

彼らだって、多分知らないであろうし。

そんなわけで、パーティーの時には常にエリーゼが傍に寄り添ってフォローする必要があったのだ。

「でも、イーナさんとルイーゼさんもですよ」

「三人で固めるんだ」

「はい、そうしないと……」

また懲りずに、側室やら、愛妾込みのメイドの押し付けをする事案が何回発生するか？

考えるだけで、そら恐ろしい事になるそうだ。

「でも、エリーゼはボク達を認めるんだね」

「私は、これでも貴族の娘ですから」

貴族で、妻が一人という人は珍しいそうだ。

エリーゼの実家もそうで、同じホーエンハイム枢機卿の孫である兄の一人とは母親が違うらしい。

「実は、うちもそうでした」

「うちもよ」

大貴族の陪臣だと、やはり複数奥さんが居る事の方が多かったのだ。

私が妹や娘として嫌われていないのは、相続に一切絡めない立場

だからという理由もある。

実際、本妻と妾の産んだ男子の年齢が近かったり、妾の方が寵愛を受けて子供も同じという理由で、双方の関係が険悪という事例も珍しくなかった。

「そういうわけで、三人で気合を入れて阻止するのです」

「エリーゼって、意外と張り切り屋さん？」

まあ、三人の仲が悪いよりはマシだし、これ以上妾が増えるのも面倒と言えば面倒だ。

ここは協力して、敵を防ぐ事にする。

ある意味、魔物とは違って倒せないから厄介な敵でもあるのだが。

「それでですね」

「まだあるの？」

「はい、ヴェンデリン様の誕生日ですけど」

仕方なしにブライヒレーダー辺境伯邸で行われる大規模な誕生パーティーではなく、この家で関係者だけでささやかに行う誕生日パーティーの相談をエリーゼはしたいらしい。

「私、ケーキを作りますから。お二人は、料理をお願いします」

「そうね。ヴェルだって、あんなパーティーは嫌々でしょうし」

ヴェルとしては、せっかくブライヒレーダー辺境伯様が仕切ってくれる誕生日パーティーを嫌だとは言えない。
貴族の責務として、嫌々出席しているのは私達からすれば明白であった。

「とにかく、三人で固めて防ぎませんと」

「そっちもなんだ。でも、意外」

「そうですか？」

「うん、怒らないで聞いてね。エリーゼって、ホーエンハイム枢機卿からヴェルの婚約者になるように言われて日が浅いでしょう？まだヴェルの事を、そんなに好きだとは思わないんだけど」

「私達だって、まだ知り合って一年も経ってないからね」

私とルイーゼだって、ヴェルと知り合ってそう時間が経ってはいない。
エリーゼは、もっと日が浅いのだけど。

そんな彼女が、今の時点でヴェルを好きなのかと言う疑問が出て来るのだ。
私もあまり、人の事は言えないのだが。

「そうですね。最初に御爺様から言われた時は驚きました」

今までに、エリーゼへの婚姻の申し込みは多かったそうだ。
法衣・領地貴族を問わず、伯爵家から男爵家まで数十家。
他にも、侯爵家、辺境伯家、公爵家から妾として欲しいと言われ

た事もあった。

エリーゼが言うには、聖治癒魔法の使い手にして『ホーエンハイム家の聖女』の名声を欲しいのであろうと。

貴族なので、確かにそういう物は欲しいはず。

今も実際に、ヴェルの『竜殺しの英雄』という名声に群がっている貴族は多いのだし。

「御爺様は、お話を断り続けていました。きっとどこかで、私が嫌がっているのに気が付いたのでしょう」

貴族の娘なので、実家から言われた縁談を断るわけにもいかない。なので、正直とてもありがたかったようだ。

「それが、ヴェンデリン様の古代竜退治が噂になってからすぐに……」

ヴェルが王様と謁見をし、準男爵の地位を得た直後の事だ。

突然、ホーエンハイム枢機卿から言われたそうだ。

『エリーゼ、お前の夫が決まったぞ。バウマイスター準男爵殿だ』

『あの竜殺しの英雄様がですか？』

『そうだ。その竜殺しの英雄のだ』

『それは宜しいのですが、竜殺しの英雄様は準男爵様ですが』

面倒な話ではあるが、ホーエンハイム家は子爵家である。

今まで公爵家の要請まで断って来た手前、最低でも男爵でないと文句が出るはずであった。

『家格の釣り合いに関しては問題ない。すぐに男爵になると陛下が仰っていた』

『もしかして、パルケニア草原でしょうか？』

今日教会の方から、軍がパルケニア草原に出兵するので、治療担当として遠征軍に加わるようにと言われていた。

他の治癒魔法の使い手に、戦死者を現地で弔う司祭様も合わせて、従軍神官という扱いになるそうだ。

過去に何度も討伐軍を撃退した老巨竜相手に大丈夫かと思ったのだが、先発して噂の竜殺しの英雄様も出陣するので安心だと言われていた。

私達も含めて、派遣軍本隊は竜との戦闘は無いらしい。

加えて、王宮筆頭魔導師である伯父様に、ブライヒレーダー辺境伯家の切り札である、高名なお抱え魔法使いブランターク様と。

どうやら王国は、本腰を入れてパルケニア草原攻略に乗り出すようであった。

『バウマイスター準男爵殿が遠征から戻り次第、聖教会本部で本洗礼を執り行う予定だ。その時に紹介するからな』

『わかりました』

正直、どんな人なのだろうと思っていた。

生まれは、貧しい名ばかり貴族家の八男で、寄り親の家臣からもバカにされるような存在であったと御爺様から聞いている。

そんな人が、竜を倒して独立した貴族家の当主になってしまったのだ。

その心境は、どのような物なのであろうか？

そして始まったパルケニア草原出兵中、私は本陣隣に設置された救護所で負傷者への治療を行いながら、そのような事ばかり考えていた。

途中、次々と先発した伯父様達の報告が入って来る。

伯父様は、得意の魔法を使った戦闘術で竜の動きを封殺。

その間に竜殺しの英雄様が準備をしていた戦略級の魔法で、老巨竜は呆気ない最後を迎えたようだ。

ブランターク様は、『ただ浮いているだけで楽だったな。もっとも、バウマイスター準男爵殿が居なかったらヤバかったけどな』とも言っていたそうだ。

伯父様の魔法戦闘術は老巨竜を圧倒していたが、魔力の消費量が膨大で、あと数分しか戦えなかったそうだ。

『やはり、魔力消費量の計算が甘かったようである！　全力で動いて八分で相手を殺す事が出来なければ、死ぬのは某であった！』

こう伯父様は、偵察に来た兵士に報告していたそうだ。

そして老巨竜の死後も、伯父様達は前線に残って魔物の討伐を続けていた。
軍や冒険者有志にとって危険な魔物を、間引き続けているのだそうだ。

救護所には、一日に百人を超える負傷者が運び込まれて来る。
私も懸命に治療に当たっていたが、老齢の司祭様に言わせるとこれでも大分少ないらしい。

『ワシは、若い頃に先々代の王の命令でパルケニア草原に従軍しての』

その時には、老巨竜のブレス数発で数千名が一気に即死し、生き残った兵士達も明日をも知れぬ重傷者だらけで、そこに魔物が追撃をかけて来てと。

救護所に運び込むどころか、撤退しながら助かりそうな人だけを治療し、あとは放置するという地獄の惨状であったそうだ。

『助からない兵士を、魔物の予定進行ルートに置き去りにしての。その兵士が、嬲られたり食われている間は時間を稼げるからじゃ。みんな、泣きながら戦友を置き去りにしたんじゃよ』

『蘇生魔法で、救えるかもしれないのにですか？』

『その魔力で、治癒魔法が何十回も使える。そういう事じゃ』

苦悩の表情で、その老司祭様は話ていた。

それでも、今回も戦死者が出ないわけでもない。
心臓が止まっても、数時間以内なら蘇生は可能なケースが多いのだが、あまりに体の損傷が激しいと蘇生魔法の意味が無い。

生き返らせても、またその負傷で死んでしまうからだ。
心臓が止まっている体に治癒魔法は効かないので、蘇生魔法も完璧というわけでないのだ。

そもそも、使える人が極端に少ないのだが。

『聖女様、大丈夫ですか？』

多くの負傷者に、たまに出る戦死者と。
あまりに凄惨な現場に、心配した人達が私を気遣って声をかけてくれた。

『大丈夫です』

まさか駄目とも言えず、私は無理に笑顔を向ける。
そう、私はホーエンハイム家の聖女なのだから。

「ええと、ちょっと感想が言い難い……」

エリーゼの従軍話に、私達は思わず絶句してしまう。
『後方に居て、戦っていないから楽そう』などと考えた私がバカであったようだ。

「お二人も、諸侯軍を率いて従軍されたとか？」
「完全なお飾りだったけど」
『怪我するな』、『死ぬな』と言われていたので、後方でエーリッヒさん達の護衛をしていただけなのだから。
戦死者は、陣借り者に五名出ていたけど、みんな少ない方だと言っていたほどであった。
ヴェルは気にして、多目の見舞金を出していたようであったが。
「それから、ヴェンデリン様とお会いしたのですが」
どんな厳つい容姿の人かと思ったのだが、普通の人で安心したそうだ。
それに、初めてのデートで。
『ホーエンハイム家の聖女か。いきなり竜殺しの英雄とか言われているからわかるけど、ちょっとプレッシャーだよね』
『プレッシャーなのですか？』
『英雄とか言われて素直に喜べるほど、肝が太くないから』
「ヴェンデリン様からそう言われた時に、私は始めて自分の気持ちを理解してくれる人と出会ったのだと感じたのです」

生まれ付き治癒魔法に才能があり、それを用いて多くの人達を治して尊敬された。

ホーエンハイム枢機卿も可哀想だとは思いつつ、貴族として心を鬼にし、彼女をホーエンハイム家のために利用して来たのであろう。

そして彼女も、その期待に答えるべく努力を続けて来た。

ホーエンハイム枢機卿とて孫娘を利用したくはないが、そうしないといけないのが貴族でもあり、エリーゼもそれは理解していたからだ。

だが、それにストレスを感じていたのも事実であった。

「ヴェンデリン様は、実は私をあまり聖女だとは思っていませんし」

「それって、頭に来ない？」

「いえ、逆に嬉しいです」

治癒魔法に特化した、優秀な魔法使いくらいにしか思っていない。

だが、その評価が逆に嬉しいそうだ。

「でも、前にお食事をお作りしたら」

教会で定期的に炊き出しに参加し、孤児院の子供達のためにお菓子なども作るエリーゼの手際を偉く褒めていたそうだ。

『へえ、エリーゼは料理が上手だな。手慣れている感がある。俺の

場合は、大雑把な男料理だし』

『私、ヴェンデリ様のお料理も美味しいと思います』

『ちょっと、調味料が変わっているけどね』

「確かに、あの茶色のペーストと黒い液体は見た事が無いね」

ミソとショウユと言うらしいが、ヴェルが独自に魔法で製造した物らしい。

命名基準がいまいち不明な調味料であったが、例のパルケニア草原出兵で、ブランタークさんとアームストロング導師には好評だったようだ。

「私は、『ショ』に似ていると思いますけど」

「『ショ』って何？」

ルイーゼの疑問に、エリーゼが答えていた。

『ショ』とは、王国東部の海沿いで造られている調味料だそうだ。

海の小魚や小エビなどを、大きな甕に大量の塩と交互に入れて発酵させる。

少し独特の匂いや癖があるが、王都にも輸入されて売られているらしい。

王都でも、固定のファンが多いそうだ。

「癖は、むしろ『ショ』よりも薄いので、販売されたら人気が出る

かもしれませんね」

「（ヤバいわね。大物貴族の娘だから、料理なんてしないと思っていたんだけど……）」

経験で言うと、向こうの方が上かもしれない。

というか、彼女はお茶を淹れるのも、お菓子を作るのも上手だ。

同じ年の女性として、少し敗北感が沸いて来てしまう。

「それに、エリーゼはスタイル良いものね」

「あの恥ずかしいので……」

ルイーゼのオヤジ丸出し発言に、エリーゼは顔を真っ赤に染めていた。

「男の方って、みなさん視線がその……」

それは、その胸なのだ。

見るなと言うのが、逆に酷なのかもしれない。

「わかる。ボクでも、胸に視線が行くもの」

「ヴェンデリン様も、実はそうです……」

やはり、ヴェルも男のようだ。

エリーゼの胸に注視しているのだから。

「男の人だと仕方が無いわね。むしろ、魅力だと思うけど」

「そうなのでしょうか？」

「そうなのよねぇ。現実問題として」

「イーナはまだ普通だから良いと思うけど、ボクは深刻なんだけど。この先、成長するかどうかで。エリーゼはいいなぁ。このまま成人しても勝ち組だし」

その後も話は続いたが、最初の関係者だけでヴェルの誕生日パーティーを行い、その料理を私達だけで作るという決定以外。あとは、下らない話ばかりになってしまった。

でも、楽しかったから良いと思う。

エリーゼとも、更に仲良くなれたと思うし。

幕間十二　主君からの命令がおかしい。

「ねえ、何の用事なの？」

「二人だけで、大切な相談」

ヴェルの誕生日パーティーであったが、予定通りにブライヒレーダー辺境伯様の王都屋敷で行われていた。

招待客は、大小の貴族に商人達だけでも二百名以上。

ブライヒレーダー辺境伯様本人も珍しく顔を出し、その前にブランタック様に出席者の厳選も行わせていたようだ。

参加者に、ルックナー財務卿、ホーエンハイム枢機卿、エドガー軍務卿、ブルックナー農務卿と層々たる面々だったので、自分も参加しないと負けると思ったのであろう。

あとは……。

『少年！　誕生日おめでとうなのである！』

最近、巷の話題を独占中の、ヴェル命名『筋肉導師』ことアームストロング導師も出席し、彼から掌がバラバラになるのではないかと思うほどの強烈な握手に。

『これからも、共に魔法使いの最高峰を目指そうではないか！』

『導師！　痛い！　痛い！』

肩の骨が砕けるのではないかと思うほど、肩をバンバンと叩かれていた。

そういえば、ヴェルは後でひっそりと掌と肩を治癒魔法で直していたような。

もしかすると、輝くらい入ったのかもしれない。

挨拶三昧に、プレゼント攻勢と。

ヴェルは忙しかったようであったが、ようやくその義務も終わり、来週は関係者だけで誕生日パーティーが行われる。

参加者は、エル、私、ルイーゼ、エリーゼに。

ブランタークさん、アームストロング導師、アルテリオさん、エーリッヒさん、パウルさん、ヘルムートさん。

あとは、エーリッヒさんの奥さんであるミリヤムさんと、ブラント夫妻も参加する事になっていた。

何気にアルテリオさんも参加していたりするが、その辺は政商と呼ばれる彼の、人脈構成力の成せる技なのかもしれない。

「ケーキは、エリーゼがメイン。料理は、ボク達にミリヤムさんと奥様も手伝ってくれるし」

奥様とは、ルートガー様の奥様であるマーリオン様の事だ。

彼女は実家も嫁ぎ先も騎士爵家なので、普通に料理くらいは出来る。

下級貴族家の女性も、色々と大変なのだ。

「相談とは、ヴェルにプレゼントをね」

本人は、『別にいらないから。パーティーを祝ってくれるだけで十分だし』とは言っている。

でも、みんな何かしらは準備しているようだ。

エーリッヒさんは、実家を出てから毎年ヴェルにプレゼントを贈り、ヴェルも毎年お返しをしている。

彼は下級官吏なので、そうお金に余裕があるわけではない。

それでも、私服として使えるセンスの良いセーターとか、王都で見付けた珍しい魔法関連の書籍とか。

高価な品ではないが、選び方に物凄くセンスがあって、ヴェルも『このセンスの良さは真似できないわ』と言っていた。

他の人も、それぞれに考えているはずだ。

「ボク達も、考えないと。インパクトのある物を」

「そういう狙いで暴走して、スベると大変よ」

きっとルイーゼは、エリーゼを意識しているのであろう。

そういえば、エリーゼは器用に男性用の服を縫っていたような。

料理のみならず、裁縫も得意とか。

ルイーゼは、『何、この完璧超人！』と叫んでいたほどだ。

本人に聞くと、『たまに教会主催のチャリティーバザーがあるので、そこに出す品として服を縫っていたんです』と答えていた。

他にも、孤児院の子供達のために服を作ったり、修理したりする事も多いそうだ。

何というか、『侮れないな、教会！』というやつである。

良いお嫁さんになるには、教会で教育を受けると良いのかもしれない。

「そこで、そんな高得点のエリーゼに対抗すべく！」

と言いながら、ルイーゼは一冊の古そうな本を取り出していた。

表紙に使われた皮製の表装を見るに、これは一部の愛好家に向けた少数品という奴であろう。

古さから見て、骨董的な価値もあると思われる。

しかしルイーゼは、こんな高そうな本をどこから入手したのであろうか？

「どこで購入したの？」

「借りたんだよ。ブライヒレーダー辺境伯様から」

先日に行われた、誕生日パーティーの後で借りたそうだ。

「何の本なの？」

「ヴェルを、ボク達に夢中にさせる本なんだって」

そういえば、以前に父からブライヒレーダー辺境伯様の唯一の趣味が、貴重な古書収集であったと聞いている。

これもきっと、その貴重なコレクションの一つなのであろう。

その貴重なコレクションと、ヴェルが私達に夢中になるの関連性はいまいち不明であったが。

「でも、くれないのはケチだよね」

「貴重で、二度と手に入らないのかもよ」

値段云々よりも、いくら探しても見付からない貴重な古書という物も存在するからだ。

「どんな本なのかしら？」

そう言いながら、表紙を見ると。

『メイド達の午後、野獣のようなご主人様』となっていた。

訂正する。

こんな本は、借りるだけで十分だ。

「タイトルだけで、嫌な予感がするわ」

「せっかく、ブライヒレーダー辺境伯様が貸してくれたから」

気を取り直して、中身を見てみる事にする。

しかし、ブライヒレーダー辺境伯様は、本当にこの本を読んだのであろうか？

私の中の、冷静な内政家という彼のイメージが崩壊しそうになる。

いや、逆にストレスが溜まっているから、このような本をという考え方もあるのかもしれない。

「ええと……。『私達は、ご主人様を愛するメイドコンビ。でも最近、ご主人様が私達に飽きて来ているのかもしれない』」

タイトルはアレであったが、中身はもしかしてという希望を打ち砕く冒頭だ。

文章も、素人の私が見ても普通。

内容は、たまに王都が発禁命令を出すお子様禁止な小説のようであった。

文字は漢字も多用されていて、それだけがこの本でクォリティーが高い部分なのかもしれない。

「読み進めるよ」

「ええ……」

内容を要約すると、若いメイド二人がご主人様に飽きられないように創意工夫する物語のようだ。

第一章、ミニスカメイドの巻。
第二章　ネコミミメイドの巻。
第三章　男装執事メイドの巻。
第四章　人気喫茶店のウェイトレス衣装を手に入れろ！
第五章　最後の手段、夜のプレゼント大作戦

これ以降も章はあったが、読めば読むほどバカらしくなるので一旦止める事にする。

「壮絶に、バカらしいわ」

「男の人って、こういうのが好きみたいだね」

問題は、これの何を参考にするのかという話だ。

物凄くスカートが短いメイド服か、頭にネコの耳の飾りとお尻に尻尾の飾りを付けるのか、男装するのか、今も現存する王都の人気喫茶店の制服を手に入れるのかと。

「イーナちゃん、最後のが有効だと思う」

「一番恥ずかしいじゃない」

ご主人様の誕生日に、裸でリボンを巻き付け。

『私達が、プ・レ・ゼ・ン・ト』とやると本には書かれていた。

現実には、まずあり得ない光景だ。

でも、大物の貴族だと、もしかして実際にやってしまうのであろうか？

段々と、正常な判断力が鈍って来たような気がしてくる。

「普通に恥ずかしいじゃない。というか、やると色々と終ると思うけど……」

ヴェルが喜べば勝ちなのであろうが、呆れる可能性だってあるのだ。

「でも、ブライレーダー辺境伯様からの本だから」

「それを言われると……」

相手は主家の当主様なので、何もしませんでしたでは問題になってしまうはず。
そう思わないと、恥ずかし過ぎて実行できないという理由もあったのだが。

しかし、人がやるからと言って、ブライヒレーダー辺境伯様も恐ろしい本を渡すものである。
一族から婚約者を送り込めなかった以上、私達に期待する部分が大なのであろうが。

「アニータ様に、この本の通りに」

「ストップ！」

こう言うと主家に失礼かもしれないが、もし四十歳越えのアニータ様がこの本に書かれた格好でヴェルを誘惑したら、さすがのヴェルも怒るはずだ。
ブライヒレーダー辺境伯家の寄り子を止めて、エーリッヒさんに泣き付くかもしれない。

「仕方ないわね……」

悲しいかな、所詮は陪臣の娘。
私達は、ブライヒレーダー辺境伯様の命令に逆らう事が出来なかった。
結果に対する責任に関しては、これは私達も知らなかったが。

「リボンの色は、ボクが青でイーナが赤ね」

「髪の色に合わせたのね……」

本当に、どうでも良い事である。
それでも私達は、その日に合わせてリボンを購入し、念入りに打ち合わせをして準備に時間を費やすのであった。

「ふぁーーーあ！　眠っ」

そして、決行日当日。
この日に行われた誕生日パーティーは、アットホームな雰囲気で楽しく終っていた。
みんなで楽しく料理を食べ、プレゼントをヴェルに渡し、ケーキに立てたロウソクの火をヴェルが消す。

ヴェルも楽しそうで、物凄く良いパーティーであった。

そして、その日の夜。
遂に、計画を実行する時が来たのだ。

「良くヴェルの部屋に入り込めたわね」

「魔闘流奥義、気配消しの妙技が役に立った」

貴重な奥義の無駄遣いのような気もするが、これであとはヴェルが部屋に入って来るのを待ち受ければ良いわけだ。

「恥ずかしくない。これも、ヴェルのため。私のため」

「そんな理由付けしなくても良いと思うよ。こういうのって、バカらしくて楽しいし」

そこまで話をしたところで、部屋のドアが開いて眠そうに目を擦りながらヴェルが入って来る。

さあ、これからが戦闘開始だ。

「ええと……」

裸に、いきなり見えると困る部分にリボンを通し、ヴェルに見え易いように頭の部分で蝶結びをしている私とルイーゼ。

ヴェルは、突然の事に驚いているようだ。

あとは、このまま押すしかない。

ここで下手に恥ずかしがると、あとで余計に恥ずかしくなるだけだと、あの下らない本にも書かれていた。

むしろ己を解き放つ事こそが、未来の勝利へと繋がると。

「（もう後戻りは出来ない！）私達が、プ・レ・ゼ・ン・ト」

二人で同時にセリフを言い、ちゃんとポーズまで研究した成果をヴェルに見せ付ける。

いくら普段のヴェルが自重して、私達にたまにキスをするくらいでも。

エリーゼの胸を、視線を追われないように瞬間的に見るという、まるで無駄な行動をしていても。

この裸リボンのツートップ攻撃には、成す術もないはず。

参考にした本には問題があるが、貸主であるブライヒレーダー辺境伯様の要望通りなのだから。

「（さあ、どう反応する？　もしかして……）」

興奮したヴェルにという可能性も考慮に入れつつ、私はヴェルがどう出るのかをルイーゼと共に待ち構えていた。

すると、いきなりヴェルは私に抱き付いて来る。

まさかの結末に、ルイーゼも驚いているようであった。

「ヴェ、ヴェ！　ヴェル！」

「うん、わかっている。わかっているから」

何がわかっているのかは知らなかったが、ヴェルは更に言葉を続ける。

「ルイーゼに唆されたんだな。イーナが自分でこんな事をするわけがないし」

ヴェルの唆された発言に対し、ルイーゼは不満があるようだ。

「あの、ヴェル？」

「正直に言うと、物凄く興奮した。でも、イーナの魅力はこういう事をしなくても十分にわかっているから」

「えっ、ボクってそういうイメージ？」

「あのですね……」

「ボクって……」

唆された疑惑で、ルイーゼは既に半分放心しているようだ。

何というか、こういう時に普段の言動がモロに影響するなんて、とても勉強になったと思う。

実際に、ルイーゼが主犯の事実に偽りは無いのだし。

それと、やはりヴェルの私に対するイメージは、冷静で真面目な女なのであろう。

あとは、そんな私をヴェルは好ましいと感じているのだと。

少し色恋から外れるかもしれないが、良いパートナー（夫婦）にはなれるのかもしれない。

「最近、偉い人に流されているけど、俺は成人になったらイーナとルイーゼとも結婚するし。でも、まだ無理をしなくても良いから」

そう言うと、ヴェルは私達に自分の着ていたシャツとベッドのシーツを私達に着せ、そのまま部屋から出て行ってしまう。

あとには、私達だけが残された。

冷静になると、裸にリボンだけの格好をしているのが物凄く恥ずかしくなる。

あと、ブライヒレーダー辺境伯様は、私達にこんな事をやらせてどんな得をするのであろうか？

私はひょっとすると、ブライヒレーダー辺境伯様を過大評価しているのであろうか？

冷静になればなるほど、余計な考えばかりが浮かんでいた。

「ねえ、これって成功なの？」

「プロポーズめいた発言も聞けたから、成功なのではないかと」

たまには、柄に合わない事をしてみる物なのかもしれない。

あと、モテないと言いながら、ヴェルが意外と格好良かったのを知ったのは、良い収穫だったと思う私であった。

「あの二人、恐ろしい手段で誘惑してきたな……」

まさかの、裸リボンでプレゼント発言攻勢に。

俺は、何とか誘惑に負けないように逃げ出すのが精一杯であった。

最近、エリーゼのけしからん胸もあるので、勘弁して欲しいところだ。

「（手を出すのは、成人してからです！）」

ヴェデリンの中身がそう思っているので、それを曲げるつもりはない。

普通にキスくらいはしているけど、前世では欧米だとキスは挨拶であった。

なので、この世界でもキスは挨拶の延長だと、俺は勝手に決めていたのだ。

「（すいません、嘘です。物凄く可愛い女の子とキスしたかったんです）」

誰に言い訳しているのかは不明だったが、前に変なカバのせいで、筋肉導師を含む三人の男性とキスをする羽目になった時から。

「でも、成人してから奥さんが三人か。人生勝ち組ってやつか？」

ただし、中身のスケベさで成人後は遠慮しない事を誓うのであった。

早く、成人年齢にならないかなと思いながら。

幕間十三　胡散臭い不動産屋。

「屋敷ですか？」

「ええ。さすがに、無いと拙いかと……」

王都での生活が始まってから約一年。
ブライヒレーダー辺境伯が借りてくれた家から、俺はルイーゼと共にアームストロング導師との地獄の特訓を。

それぱかりだと、魔法の訓練なのか武術の訓練なのかわからないので、追加でブランタークさんからも魔法の指導を受けている。
いや、敢えて言わせて貰うと。
本来魔法の特訓とは、ブランタークさんから受けているような物を言うのが普通なのだ。

おかげで彼は、俺の面倒を見るために王都に居る事が多くなった。
用事でブライヒブルクに戻る時には、俺の瞬間移動の魔法が使えるので何の問題も無いそうだ。

エルは、王宮に出向いてワーレンさんから剣の指導を。
イーナも、ワーレンさんの紹介で高名な騎士から槍の特訓を受けていた。

それで、何を言いたいのかと言えば、休日以外は家に寝に帰るだけなので、このブライヒレーダー辺境伯様から借りている屋敷だけで十分だと思うのだ。

家に帰ると、エリーゼが料理を作って待っていて。
休日には、俺はエリーゼと一緒にデートに出かける。
でも、それだけだと不満が出るので、交代でイーナとルイーゼともデートに出かけている。

あとは、導師との特訓で疲れた帰りに、ルイーゼとお菓子を買い食いしたり、買い物に出かけたり。
イーナと待ち合わせて本屋に行ったり、同じく服やアクセサリーなどを見に行ったり。

普通に、十三歳の青春というやつを送れていると思う。
所謂、リア充というやつだ。

前世ではそういう事はあったのかと聞かれると、それは言わぬが華というやつであったが。

とにかく、普段の生活を考えるに。
成人するまで、屋敷などいらないと思うのだ。

ところが、ルートガーさんの考えは違うらしい。

「ヴェンデリン殿は、法衣とはいえ男爵。男爵が、長期間借り住まいというのも問題かと」

「そういう物なのですか？」

「そういう物なのです」

そこは年長者からの忠告という事で、俺は男爵に相応しい屋敷を探す事にする。

あとは、その屋敷を維持する使用人などの確保であろうか。

幸いにして、一番の問題である資金には問題ないのだが。

正直、余計な仕事が増えて面倒なだけの気もするのだ。

「不動産屋に、全然ツテがないな。エルは？」

「あると思うか？」

元は俺と同じような立場のエルに、当然不動産屋の知り合いは存在しなかった。

「屋敷を維持する使用人は、後でも構わないと思います」

夕食後、リビングで屋敷を購入する話をすると。

食後のお茶を淹れながら、エリーゼが話に加わって来る。

彼女は婚約者なので、一緒に家を見に行って貰うつもりだったから好都合だ。

「ヴェンデリン様が、家を購入される場合。新築というのも難しいので、中古物件という事になります」

「新築だと駄目なの？」

「新築の屋敷を建てる土地が無いのです」

ルイーゼの問いに、エリーゼが答える。

王国の統治が長らく続き、その間に貴族の数も増えている。

現在の王都造成の際に、事前に貴族の邸宅が置かれるエリアは広めに確保されてはいたが、やはり年々不足しているのも事実であった。

「男爵ですと、ギリギリ上級貴族街に屋敷を置くのが普通です」

エーリッヒ兄さんが継ぐブラント家などは、準男爵や騎士爵が主に住む下級貴族街にあり。

一方、ブライヒレーダー辺境伯の王都屋敷は、勿論上級貴族街にある。

同じ貴族の間でも、そういう住み分けがされているのだ。

「でも、土地が無いんでしょう？」

「土地は無いのですが、屋敷はあるのです」

没落したり、財政的に厳しいので、同じ上級貴族街でも下級貴族街寄りの小さな屋敷に引っ越す貴族に、逆に羽振りが良いので王城寄りの大きな屋敷へと移る貴族と。

その辺の栄枯盛衰は、良くある事らしい。

そのためかは知らなかったが、屋敷自体は余っていて定期的に不動産屋などを介して売買が成されているそうだ。

「適当な中古物件を買い、そこを住めるように改築してから人を雇うと」

「はい。売買が行われているとはいえ、数年は空き家という屋敷も多いので、改装や掃除なども必要ですから」

「困ったな。不動産屋にツテがないな。エリーゼ、ホーエンハイム枢機卿に頼めるかな？」

「はい、お伝えしておきます」

あのホーエンハイム枢機卿の推薦で来た不動産屋が、俺にボッタクリなどかますはずもない。

そう考えてエリーゼに紹介を頼んだのだが、予想を遥かに超えるとんでもない不動産屋と、俺達は出会ってしまう事になるのであった。

「始めまして、リンネンハイム不動産のオーガス・リネンハイムと申しますです。はい」

「バウマイスター男爵だ」

「竜殺しの英雄様ですね。ホーエンハイム枢機卿から、是非に良い屋敷を紹介せよと命じられまして。はい」

「よろしく（胡散臭ぇ……）」

翌日の休息日の朝、俺達は屋敷を訪れた不動産屋と挨拶をする。

何でも、リンネンハイム不動産は、主に貴族の土地と屋敷の売買を仲介する王都有数の不動産屋らしい。

あとは、良く新しい教会の土地を準備する事もあるとかで、その縁でホーエンハイム枢機卿と知り合いのようであった。

「（胡散臭いなぁ……）」

「（胡散臭いわね……）」

「（胡散臭ぇ！）」

何も言わずとも、四人の心の声は一致しているはずだ。

リンネンハイム不動産のオーナーであるオーガス・リネンハイム氏であったが、この世界では特注品しかないので高価な金縁の眼鏡をかけ。

服装は、赤いラメ入りのスーツ姿に銀色の蝶ネクタイと。

前世では、こんな詐欺会社の社長が居たような記憶を、俺は思い出していた。

「（エリーゼ）」

「（あの……、こんな胡散臭い格好の人ですけど、ちゃんと実績はあって……）」

こんな怪しい格好の人を前に、懸命にフォローをするエリーゼ。

俺は、やはり彼女は優しい良い娘なのだなと改めて思うのであった。

「まずは、このお屋敷です」

胡散臭いリネンハイム氏の案内で、一軒目の屋敷へと案内される俺達五人であったが、まず一軒目から嫌な予感しかしなかった。

広さとか、屋敷の間取り以前に。
屋敷の塀の外まで、禍々しい黒い霧のような物が滲み出ていたからだ。

「思いっきり、瑕疵物件のような……」

「はいっ！　この屋敷を所持していた伯爵様ですけど、あまりお性格が宜しくなかったようで、家臣の方に惨殺されまして」

「いきなり、酷い前歴だな……」

それ以降、斬り殺された伯爵の霊が現れ、その伯爵の霊が周囲の浮遊霊を集めて屋敷を占拠した。
例外である領域外に出る魔物アンデッド、レイスの親玉になってしまったそうだ。

「なんで、浄化しないんだ？」

「代金が高いからですね」

その家臣から惨殺された伯爵は、性格が悪いだけでなく経済観念も悪かったらしい。
浪費癖があるために嵩んだ借金を返すべく、伯爵の死後に家族が売りに出したのだが、購入希望者が屋敷を見に来るとレイスとなった伯爵が妨害に現れ、遂には誰も購入を希望しなくなったそうだ。

購入者は屋敷が欲しいのであって、レイスなどいらないので当然とも言える。

「浄化を聖魔法が使える魔法使いに頼むと、最低でも三十万セントは取られますからね」

浄化するアンデッドの数や強さによっても違うそうだが、相場はそのくらいらしい。

今、幽霊屋敷の中で雑霊達を率いているレイスの浄化料金としては、決して高くはなかった。

「購入希望者を脅している内に、段々と凶暴化してしまいましてね。周囲の悪霊なども、少し前までは合流していましたし」

「今だと、人の命を奪う可能性があると？」

「はい」

「おいおい、大丈夫なのかよ……」

エルが心配そうに屋敷に視線を送るが、今のところは塀に封印が施されているので外に出る心配はないようだ。

良く見ると、この封印は教会が施したみたいでお札に教会のマークが書かれていた。

「最後まで、面倒を見れば良いのに……」

「教会がですか？　それは、厳しいかと」

代金はかからないが、同額のお布施を要求されるとかで、結局金が無いと浄化はしてくれないらしい。

それに、教会に居る高位の聖魔法使い達は、エリーゼを見ればわかる通りに忙しい。

大半の魔力を、教会を訪れる病人や怪我人の治療などに使ってしまうか。

どうせ大した寄付金が取れないのなら、評判と名声のために貧しい人の依頼を優先してしまうからだ。

勿論、ちゃんと寄付金を出す金持ち達も、更に優先するのは当たり前であったが。

「大浪費癖を諫める家臣を斬ろうとして、逆に斬られた伯爵様のレイスですからね。封印のおかげで、もう外部に迷惑はかからないし。無理に浄化しても、教会が世間から絶賛されるわけもないですしね」

その伯爵の評判を見るに、確かに浄化しても世間の絶賛は受けないであろう。

浄化でなく、退治して消滅でもさせれば、世間からは絶賛されるかもしれなかったが。

「本音……、偽らざる本音……」

「あと、この伯爵様のレイス。相当に頑固なようで、前に教会の聖魔法使いが失敗しているんですよね」

「それで、余計に強くなったんですね……」

「正解です！　さすがは、聖女様」

エリーゼの言う通りで、悪霊を浄化しようとして失敗すると、抗生物質に打ち勝ったウイルスのように、聖魔法に耐性が付いて強くなってしまうのだそうだ。

「一度失敗したけど、それを公にするのは恥なので。とりあえず、封印だけして帰りましたよという事にした？」

「大正解です！　さすがは、バウマイスター男爵様」

「いや、そんなんで褒められても……」

というか、このリネンハイム氏は、俺にこんな物件を勧めてどうしようと言うのであろうか？

「ねえ、肝心の伯爵家の家族はどうなの？」

ルイーゼは、屋敷を売りたい伯爵家の情況を質問する。

「確かに、そうだよな。その伯爵の家族はバカか？　金を借りてでも浄化して、それから売れば良いのに」

「借金が多過ぎて、誰も貸してくれないんですね」

あとは、浄化が１００％必ず成功する保証が無いという点もある。
実際に、隠してはいるが教会も一回失敗しているのだから。
それに、失敗しても前金で半分は費用がかかってしまうので、躊躇したというのが真相なのであろう。

あとはそんな博打で、前当主の大借金のせいで商人達のブラックリストに載っている伯爵家に、金を貸す商人が居なかったそうだ。

貴族なので、借金で爵位や領地を奪われる事は滅多にない。
だが、家が傾いているのも事実で。

仕方なく家族は、土地と屋敷を塩漬けしたまま、辛うじて上級貴族街にある小さな屋敷へと移って行ったそうだ。

「商人とて、戻って来るかどうかわからない金など貸しませんから」

当然であろう。

どうせ、金を借りた貴族の方が身分が上なので、借り逃げして返さないという選択肢も有り得るのだから。

当然訴えれば金は戻って来るのだが、相手が貴族だと面倒事が多いらしい。

利息で儲かるどころか、裁判の手間と費用を考えると。

駄目な貴族には貸さない方がマシという結論に至るのは、これはもう当然とも言えた。

そういう貴族に頼まれても、あまり恨まれないように上手く断る。

こういう能力も、政商クラスになるには必須なのだそうだ。

前に、アルテリオさんがそう言っていた。

「屋敷の中を見ようにも、封印されていて入れないじゃないか」

「評価額は、一千万セント以下という事は無いです。はい」

「屋敷は立派だものな。土地も広いし」

しかし、その屋敷の屋根にはレイスによって集められた亡霊達の集会所になっていた。

封印されて、外に出られなくなって屋根の上で暇を潰しているようだ。

その見た目はシュールで少し笑えたが、実際には厄介な事この上

なかった。

この世界において、幽霊とはそう珍しい物ではない。

前世において、霊感がゼロであった俺にでも良く見えるのだから確かなのであろう。

その分邪魔なので、浄霊が出来る魔法使いや聖職者が重宝されるわけなのだが。

「でもよ。法衣男爵の屋敷にしては、立派過ぎないか？」

エルの懸念は、最もであった。

いくら竜殺しの英雄の屋敷でも、男爵が過分な屋敷に住めば文句を言う輩も出て来る。

暇な奴だなとは俺も思うのだが、そういう事に拘る貴族は実は多かった。

「では、他の屋敷に行くか」

「えーーーっ、せっかくだから見て行きましょうよ」

「そのために、俺が浄化するってか。そんな手には、乗せられませんよ」

「やはり、駄目でしたか」

冗談なのか、本気なのか？

リネンハイム氏は、俺が無料で屋敷の浄化をすると思っていたのであろうか？

ガックリと、肩を落としていた。

「では、相場の三十万セントで」

すぐに、立ち直っていたが。

「仕事かよ！　って、俺は見習い冒険者なんだけど」

「ホーエンハイム枢機卿様から、バウマイスター男爵は、教会の名誉司祭であると聞いておりますです。はい」

「初耳だぞ……」

この場合、兼任先が教会なので冒険者ギルドからは文句は出ないらしい。

そういえば、冒険者でも治癒や浄化を使える神官をメンバーに加えているパーティーは存在していた。

魔法使い自体が希少なので、数はとても少なかったが。

あと、名誉司祭の件であったが、本洗礼を受けるとそういう扱いらしい。

名誉付きなので、本洗礼を受ける王族や貴族や大商人に、司祭としての義務は一切無いそうだが。

やれと言われても出来ないし、教会側も頼む事は無いのが普通であった。

俺はなぜか浄化を頼まれていて、ただ理不尽さを感じていた。

「俺、エリア浄化の経験がないけど」

俺が今までに使った聖浄化魔法は、師匠を成仏させた光線魔法と、骨古代竜を退治した放出魔法のみである。
決められたエリア内で、効果を発揮する浄化魔法は経験がなかったのだ。

「それでしたら、聖女様に教えて貰えば宜しいかと」

しかし、このリネンハイム氏は何を聞いても答えが早い。
きっと、ホーエンハイム枢機卿に事前に言われているのであろう。

瑕疵物件に俺を案内し、そこを浄化させて誰がどんな利益を得るのか？
そういう部類の話なのであろうが、試しに相手の思惑に乗ってみる事にする。
一回くらいなら、これも練習であろう。

「それも、そうか」

「いえ！　いけません！」

ところが意外にも、エリーゼは厳しい口調で俺にエリア浄化魔法を教えるのを拒んでいた。

「少し練習して、いきなり本番なんて危険すぎます！　それに、御爺様も御爺様です！　お屋敷を紹介して貰うだけの話なのに、なぜ悪霊に取り付かれた物件の浄化をヴェンデリン様がしないといけないのですか！」

「聖女様？」

エリーゼが激高するシーンなど、俺達は初めてであった。
ホーエンハイム家の聖女という評判からは想像もつかないエリーゼの怒りっぷりに、胡散臭いリネンハイム氏も驚いているようであった。

「ヴェンデリン様は、とてつもない魔力を持つ魔法使いですが、何でも完璧にすぐに出来るというわけではないのです。特に、こういう浄化などは経験者と共に見習いを経てから。それが、常識です」

「聖女様……」

いくら魔力があっても、強力な魔法が使えても。
相手は普通の魔物とは違う、実体が無いアンデッドなので、憑り付かれたりして危険な事もあるのだと。

エリーゼは、珍しく強い口調で説明をしていた。

「あのですね……」

「ホーエンハイム枢機卿は、こう仰った。『バウマイスター男爵殿に相応しい良い屋敷を紹介せよ。お前が仲介していたり、買い叩いた瑕疵物件の浄化を頼んでも良いが、当然屋敷は無料だよな？』と」

「あの、値引きは約束……」

「エリーゼ、何軒か浄化したら、無料で屋敷をくれるってよ」

リネンハイム氏が何か言おうとするが、俺はそれを押しのけてエリーゼに屋敷は無料で貰えると伝える。

「まあ、それでしたら内助の功です。ヴェンデリン様に、正しいエリア浄化をお教えする良い機会ですし」

「あの、値引き……」

「このまま、帰っても良いか？」

「無料で……、ご提供させていただきます」

ここで、俺やホーエンハイム家の聖女を敵に回す愚は避けたかったのであろう。

彼は素直に、屋敷の無料提供を約束する。

頭の中では冷静に、どの物件を浄化させると一番利益が出るかを計算しているのであろうが。

「ちなみに、男爵邸の相場は？」

「四百万セントくらいが平均かと」

「受けて、四件だな」

「そんなご無体な……」

とは言いつつも、まずはこの伯爵邸が浄化目標らしい。

きっと、普通の物件になって売れると、リネンハイム氏が物凄く儲かる仕組みになっているのであろう。

「エリーゼ、俺も手伝うから」

「では、まず最初に聖障壁の魔法を……」

この聖障壁の魔法は、アンデットや悪霊の浄化を行う時には必須の魔法であるらしい。

己を聖属性の魔力の壁で囲み、エリア浄化を唱えている最中にアンデッドの攻撃を防ぐのだそうだ。

普通の魔法障壁とは違い、相手がアンデッドなので物理防御力よりも魔法防御力の方がメインの魔法であった。

「アンデッド初期の悪霊及びにレイスなどは、実体が無い残存意志と魔力の結合体ですから」

一見、物理攻撃のような一撃でも、実際には魔力の塊で殴られているのだそうだ。

よって、その攻撃を防ぐのなら、聖障壁が絶対的に有効という結論になる。

「ヴェンデリン様は、聖障壁を展開してください。私が、エリア浄化を唱えますから」

俺は、エリーゼと共に問題の伯爵邸へと侵入する。

張り巡らされた結界は、これはあくまでも結界内の霊的な物を外に出さないためのもので、こちらから人間が入るのは問題ないようだ。

ただ、侵入者の気配に悪霊達は敏感であった。

すぐにこちらを見付けて、体当たりなどで攻撃を仕掛けてくる。

「シネイ！」

「シャッキンガワルインダーーー！」

「パイオツノデカイ、ナーオンツレトカ！　コロス！」

生前なのか、今の心情なのか？

本能の叫び声をあげつつ、悪霊達は攻撃を続ける。

だがその攻撃は、俺が展開している聖障壁によって全て防がれていた。

聖障壁の魔法自体は、普通の魔法障壁とそう出し方が変わらないので苦労なく習得できたようだ。

「単独での浄化って、危険なのか……」

「はい、魔法の同時展開が使える人なら大丈夫ですけど」

「あっ、俺は三つまで使える」

「凄いですね。あの、エリア浄化を使います」

俺が展開する聖障壁の中でエリーゼが祈りを捧げ始めると、次第に彼女の体が白い光のような物で包まれ始める。

そして、十数秒後。

その光は、結界内にある屋敷の土地全てに広がっていく。

屋敷の敷地内限定で、エリーゼの聖浄化魔法が展開されたのだ。

「ホワァ……」

前を見ると、俺達を攻撃しようと親玉である豚……。
じゃなくて、前伯爵のレイスがこちらに迫っていたのだが。
彼は浄化の光を浴びて、その表情をトロけさせていた。

「キモチイイ……」

「コノママ、テンニノボルヨウナキブンダァ……」

「カラダガ、カルクナッテイクゥーーー」

前伯爵のレイスに従っていた悪霊達も、エリーゼの浄化魔法を受けてトロケそうな表情を浮かべ始める。

「他の悪霊達もか……」

「はい。いかなる理由があっても、彼らは元は人間なのです。自ら、神の世界へと上る手伝いをする。これが浄化だと、私は考えます」

エリーゼの浄化は、悪霊達を気持ち良く天に送る魔法のようだ。
まあ、こんなに可愛い女の娘がかけてくれる浄化魔法なら、豚じゃなくて前伯爵も気持ち良く天国へと向かうであろう。

「（あの伯爵、地獄行きかもしれんけど……）エリーゼは、凄いなぁ」

治癒魔法に、あの性質の悪かった悪霊達を一気に昇天させる浄化魔法と。
なるほど、エリーゼはホーエンハイム家の聖女と呼ばれるに相応しい女性のようだ。

「さて、次は俺だな」

「次はですね。ある有名な元侯爵屋敷なのですが……」

魔力量の関係で、残り三件は俺が浄化をする事になった。

物凄く参考になる見本があったので、きっと上手く行くであろう。

先ほどと同じく、万が一の時のためにエリーゼに聖障壁をかけて貰いながら、俺達二人は同じく瑕疵物件である元侯爵邸の敷地へと侵入する。

先ほどと同じく多数の悪霊が襲いかかるが、それらは全てエリーゼの聖障壁によって防がれ、その間に俺の準備していたエリア浄化が発動していた。

「何か、光が強くないか？」

「眩しい。ヴェル、ちゃんと魔力量を調整した？」

外にいるエルとイーナから苦情の声があがるが、俺はそんなに魔力を込めた記憶はない。

それに、威力が弱過ぎて悪霊に耐性をつけるよりはマシなはずだ。

実際、悪霊達は俺の浄化魔法でもがき苦しんでいた。

「イヤダ！　ジゴクハイヤダ！」

「カラダガ、キエテイク！」

「タスケテ！」

「あれ？　おかしいな？」

昔に師匠を成仏させた時には、師匠は俺の聖魔法を心地良いと褒めていたのに、この悪霊達はなぜかモガキ苦しみながら消えて行ってしまうのだ。

「エリーゼ、これは？」

「あの……、ヴェンデリン様のエリア浄化の威力が強いのだと……」

「問題は無いんでしょう？」

「はい、威力が弱過ぎるよりは……」

師匠は語り死人になって、余計に対魔能力が増していた。

だからこそ、当時は俺の全力であった聖浄化魔法を心地良いと言って成仏したのだと。

エリーゼは、そのように理由を解説していた。

例えるなら、アームストロング導師の凝っている肩を鉄ハンマーで叩いても、彼なら『気持ち良い』と言うのと同じなのだと。

「ヴェンデリン様のお師匠様は、噂通りに相当に優れた魔法使いであったようですね」

だからこそ、俺の強い浄化魔法でも心地良いと感じながら成仏して行った。

逆に悪霊達にとっては、容赦なく自分達を地獄へと送る業火のような魔法であったと。

「まあ、効果はあるんだし問題はなくね？」

「ええと、無いですね……」

あるとすれば、悪霊達が苦しみながら強制的に成仏させられるシーンを見ている、俺以外の人間の精神状態にあるのかもしれなかったが。

エリーゼも、どこか困ったような表情をしていた。

「何か、ヴェルの方が悪役みたい……」

「ふっ、俺は悪党には容赦しないのさ」

その後、残り二軒の評価額の高い貴族屋敷も浄化を行い、そのお礼に男爵に相応しい屋敷を得る事となる。

しかし、この二軒も相当に酷い屋敷であった。

『さる侯爵様のお屋敷なのですけど、数年前に書斎で愛妾の方に惨殺されましてね』

実際、書斎の壁には血しぶきの跡が生々しく残っている。

ただ、この屋敷はみんなで入っても悪霊の妨害が無かった。

この屋敷の悪霊には少し知恵が残っていて、屋敷の購入者が実際に住むようになってから脅しに入るのだそうだ。

『嫌らしい精神だな』

確かに、エルの言う通りであった。

屋敷ごと浄化して、地獄行きが相応しいレベルだ。

『うへぇ……。血しぶきくらい掃除しなよ』

あと、一つ気になる事があった。

せっかく購入しないと脅しに来ないのだから、せめてその血しぶきの跡は掃除した方が良いと、俺はリネンハイム氏に文句を言う。

『男爵様。私とて、王都一の高級物件専門の不動産屋。管理物件の掃除は確実に行っております。はい』

『じゃあ、これは？』

『何度掃除しても、また血しぶきの跡が出て来るんです』

『怖っ！』

『相場は八百五十万セントですから、無料ではちょっと……』

『いや！　いらん、いらん！』

悪霊の姿はほとんど無かったが、怪奇現象連発ですぐに購入者が出て行く元侯爵の屋敷。

これも、なぜか浄化で普通の物件に戻っていた。

悪霊達の断末魔の声が聞けなくて、非常に残念とも言えたのだが。

『ワカイオトコォーーー！』

『なぜに、俺がぁーーー！』

『なあ、アレは？』

そして、いよいよ最後の一軒となる。

エルを追いかけ回しているのは、この屋敷の持ち主であった伯爵様の妹君の霊であり。

彼女は運悪く、生涯独身であったそうだ。

その未練から、屋敷に霊となって居残っているらしい。

浄化に来た男性の聖魔法使いに興奮して襲いかかり、女性の聖魔法使いだと意地と根性で浄化に耐え切ってしまう。

今では、王都でもっとも浄化が難しいとされている霊の一人であった。

今はなぜか、エルを気に入って追い掛け回しているようであったが。

彼が剣で容赦なく切り裂いても、相手は悪霊なのでまるで効果がなく。

悪霊の方も、『ゲンキガアッテ、ステキ！』とエルを余計に追い回しているようだ。

『エルが結婚してあげれば、成仏するかも』

『そんなバカな話があるかぁーーー！　ヴェルが結婚してやれーー！』

必死に逃げ回りつつも、エルは俺の発言をちゃんと聞いていたようだ。

俺に、憎まれ口を叩いていた。

『嘘だよ。来世で良縁があらん事を』

確かに、人を傷付けるタイプの悪霊ではなかったが、その執念が恐ろしいほどの対聖能力を身に付けさせたらしい。

早く浄化した方が良い悪霊ではあった。

『オトコノジョウカァーーー』

伯爵妹の未婚霊は、師匠と同じく俺の浄化魔法で気持ち良さそうに成仏してしまう。

しかし、この対魔能力。

彼女が生前に、魔法使いでなかった事が悔やまれるくらいだ。

『別に、男の聖魔法なら誰でも良かったのでは？』

『いえ、普通の男性聖魔法使いですと、効果がないどころか』

そのまま抱き付いてキスをしようとしたり、その魔法使いが最高出力で放った浄化に余裕で耐えて投げキッスをしたりと。

今まで数名に、最悪なトラウマを植え付けたらしい。

『物件自体の質はともかく、瑕疵の内容が酷い』

『はい、酷いゆえに解決すると儲かるわけです。はい』

『この四軒の浄化で、男爵に相応しい屋敷。実は、儲かっている？』

『いえ！　これは、私の一方的なサービスでして』

『（嘘臭いなぁ……）』

この半日ほどリネンハイム氏と居て気が付いた事は、やはりこの人はとてつもなく胡散臭いという事実であった。

「おんや？　坊主は、この屋敷を買うのか？」

「ええ。正確には、浄化のお礼に貰うですけど」

浄化のお礼でリネンハイム氏から貰う予定の屋敷は、ブライヒレーダー辺境伯様の王都屋敷の隣であり、屋敷を見ているとブランタークさんが声をかけてきていた。

「坊主、早速ホーエンハイム枢機卿に利用されたってか？」

「エリーゼからは聖障壁とエリア浄化を教えて貰えたし、四件の浄化で男爵に相応しい屋敷を貰えた。こんな所でしょうね」

「まだまだ甘いな。坊主はよ」

それと、エリーゼがやっぱり良い娘なのが再確認できて良かったという件もあった。

「上級貴族街には、碌でもない理由で瑕疵物件化している屋敷も多いからな。報酬の支払いとか、所有者関連が複雑で浄化もされないで放置されている屋敷も多いし」

「その物件を再生して売ると？」

「駄目元の物件が多いから、不動産屋のリネンハイムの奴が取り分が多い仕組みになっているんだな。あいつが、一セントだって損を切るわけないだろうが」

ブランタークさんは、リネンハイム氏の事を知っているようだ。なら、もっと早く教えて欲しかったところであった。

「お館様に相談しないから、胡散臭いのを紹介されるんだよ」

「本当、胡散臭そうな人だった……」

今回はそれに加え、ホーエンハイム枢機卿が少しだけ手を差し伸べたという事のようだ。

骨古代竜すら浄化した俺が、エリーゼから指導を受けて実地で瑕疵物件を浄化する。

そのお礼に屋敷を貰い、上級貴族向けに少しはためになる事をしたと思わせる。

あとは、名誉司祭である俺の功績は、所属している教会の功績という事なのであろう。

というか、普通に屋敷くらい買えるから、普通の不動産屋を紹介して欲しい。

「良い屋敷ですね」

「夜中に、この屋敷の主に殺されたメイドのレイスが出るけどな。このレイス、自分を殺した男爵をバラバラに切り裂いてな。男爵以外は、脅すだけで襲わないんだけど」

「こんな事だろうとは思ったよ！」

俺はもう一軒、追加で浄化をする羽目になったのであった。

いくら浄化したとはいえ、良くこんな物件に平気で住めるなと思わないでもなかったのだが、なぜか浄化をするとそういう事が気にならなくなるのだ。

「本当、浄化って不思議」

俺は、ようやく屋敷を手に入れたのであった。

幕間十四　決闘騒ぎ。

「さてと、今日も導師からの厳しい特訓が始まるな」

「だよねぇ……。ヴェルは、瑕疵物件の浄化とどっちが楽だと思う？」

「聞くなよ……」

あの胡散臭いリネンハイム氏に浄霊のお礼として貰った屋敷から、俺とルイーゼはダルそうに出かけようとしていた。

というか、結果的には貰ったというより、浄霊の代金として交換した屋敷でしかない。

俺は、リネンハイム氏に一欠けらの恩義も感じていないのだ。

さすがに、あの胡散臭いリネンハイム氏の件では、後でホーエンハイム枢機卿に文句を言いに行っている。

エリーゼも同伴してであったが、ホーエンハイム家に行くとわかっていたとばかりに彼は待ち構えていて、俺達にこう言っていたのだ。

『リネンハイムは、表の高級物件の売買では有名な男だ。だが同時に、裏の瑕疵物件の売買でも有名でな』

どう見ても売れそうもない物件を安く買い取ったり、もし売れた

ら高額の手数料を支払うと物件の持ち主に言わせた後、独自のコネで浄化を行って普通の物件にして利益を上げる。

そのコネというのは、大半が教会とのコネであると思われるが、そのための経費は十分に使っているようだ。

『あの男はどういうわけか、こちらが新しい教会を作りそうな場所を見抜くのが上手い』

事前に整地までして揉み手で現れ、しかも少し相場よりも安く売ってくれるらしい。

胡散臭いが、不動産屋としての才能はある。

そういう男らしい。

『それで、浄化の優先順位が高いと？』

『寄付金もケチらないのでな。平民出の司祭に大人気だな』

ホーエンハイム氏に言わせると、人の欲に敏感なのだそうだ。

『御爺様！　いきなり素人のヴェンデリン様に、あそこまで難易度の高い浄化なんて！』

話に割って入ったエリーゼが、また激高してホーエンハイム枢機卿に苦言を呈していた。

『すまぬの。エリーゼの大切な旦那様に無理を強いて。昨日は、愛しの旦那様と仲良く浄霊できたから良しとしてくれぬか？』

『愛しの旦那様……』

しかし、さすがは年の功。
軽くかわされて逆に反撃までされてしまい、エリーゼは顔を真っ赤にさせて俯いてしまう。

『浄化の良い練習にはなりましたけどね』

『それにだ。婿殿が自分で稼いだとはいえ、いきなり上級貴族街で大枚など叩いて屋敷など購入してみよ。どうなると思う？』

『えっ、そこまで酷いんですか？』

俺が、貧乏騎士の八男なのが良くないようだ。
普通に新参者が、いきなり上級貴族街で有り余る財力を使って元男爵以上の屋敷を購入する。
それだけで、『成り上がりの新参者が……』と陰口を叩かれるそうだ。

『お前なんて、下級貴族街の屋敷で十分だ』と。

『そこでだ。あの胡散臭いリネンハイムと裏に居る教会に騙されて、性質の悪い瑕疵物件ばかり数軒も、紹介とは名ばかりで浄化させられた。その苦労を思えば、あの男爵屋敷くらいという話になる』

ホーエンハイム枢機卿に言わせると、成り上がり者にはこのような配慮も必要らしい。
貴族達からの悪評も、俺を上手く使って多額の利益を得たリネンハイム氏に向かっているらしい。

彼の場合は、元々胡散臭いと評判なので余計にだそうだ。

『浄化した性質の悪い瑕疵物件も、普通に売れますしね』

『手頃な屋敷が無くて、下級貴族側で順番待ちをしている連中もおるのでな。そういう連中に、婿殿は恩を売ったとも言える』

たかが屋敷一つ買うくらいで、俺は本当に貴族という生き物がわからなくなってくる。

中身が元庶民なので、余計にそう思ってしまうのだ。

『挙句に、無料で貰ったあの屋敷にも、変なのが憑いてましたね』

メイド服を着た若い女性の霊が、『旦那様ですか？　旦那様なら、生きたまま八つ裂きです』とニッコリ笑顔で言って来るので、俺達は全員で絶句してしまったほどであった。

すぐにエリーゼが優しく説得し、軽い浄化魔法ですんなりと成仏はしてくれたのだが。

『何？　リネンハイムの奴、報酬の屋敷まで瑕疵物件を渡したのか？』

『俺とエリーゼなら、浄化可能だと思ったんでしょうね』

『相変わらず、油断のならない……。後で、少し絞らないと駄目だな』

翌日、ホーエンハイム枢機卿に呼び出されて絞られたのか？

リネンハイム氏がお詫びに来て、もう一軒屋敷を譲渡しますと言って権利書を押し付けて行く。

すぐにその権利書に記載された屋敷へと向かうと、そこは元は某

王族が使用していた屋敷であるらしい。

物凄く広大な敷地に、大邸宅が建っていた。

と同時に、また周囲の塀全てに教会謹製のお札が張られ、敷地の中では数百もの悪霊が真昼間から飛び交う、最高級の瑕疵物件でもあったのだが。

『何々……。（七代前の王弟様のお屋敷で、この人は使用人や家臣やその家族までもを、多数地下室で拷問にかけて虐殺するのが趣味でして。でも、内緒ですよ）……』

あまりに酷い話だが、王様の弟が大量快楽殺人者だと世間にバレるのも問題なわけで、結局その王弟は病死した事にされたらしい。

もっとも、その隠密処分のせいで、殺された人達の怒りが屋敷と敷地に澱んで溜まってしまい。

今では、教会すら匙を投げる災厄クラスの瑕疵物件と化しているようであったが。

そういえば、この屋敷と同じ区画にある屋敷は全て無人となっていた。

上級貴族なので当然この屋敷の由来は知っていて、近所に引っ越す事すら躊躇われる物件なのであろう。

『あのインチキ不動産屋め！』

『ヴェンデリン様？』

『所持しているだけで、邪魔じゃないか！』

結局この屋敷も、エリーゼと二人で浄化する事となる。
しかし、歴代の教会関係者が匙を投げるほどの物件だったので、その浄化には多大な時間と魔力を消費する羽目になり、その日は導師との特訓を休むほどであった。

『あの物件を浄化とは！　某なら、挑戦する気すら起きないのである！』

あのアームストロング導師がそこまで言う物件ではあったが、何とか屋敷の浄化には成功していた。
エリーゼの、助言と協力があってこそであったが。

俺だけなら確実に失敗するし、エリーゼだと魔力量が圧倒的に不足しているので不可能なのだそうだ。

『あのインチキ不動産屋、まさか揉み手で売却の相談に来ないよな？』

『無いとは言えません……』

『絶対に、売ってやらねえ！』

もしそうなると腹が立つので、浄化した物件をわざとブライヒレーダー辺境伯が懇意にしている不動産屋に売り、何と白金貨十五枚で売れはしたのだが……。

『この血塗れ王弟屋敷ですけど、周囲の屋敷は全てリネンハイム不動産に安く買い叩かれていまして……』

『さすがは、インチキ不動産屋』

『同業者の間でも、胡散臭いって有名ですからね』

それでも、暫くしてその買い叩いた周囲の屋敷が全て売れたようで、彼は追加報酬として大金を送ってきていた。

それなりに誠意もあるようで、やはり胡散臭いリネンハイム氏は本当に良くわからない人物であった。

結局、胡散臭いのには変わりはなかったのだが。

「あのインチキ不動産屋から来る浄化関係の仕事は、報酬は良いけどレベルは高いからな」

それ以降、たまに浄化魔法の練習も兼ねてその手の依頼も受けていた。

依頼主は、教会が半分にリネンハイム氏からのが半分くらいであろうか？

報酬が良いのと、導師との修行と違って魔法の修行をしているという実感があるので、つい引き受けてしまうのだが。

先生役のエリーゼと一緒に、最近では下級貴族街や商業・工業街にまで出かけるようになっていたのだが、その依頼全てが性質の悪い瑕疵物件の浄化であった。

「それなりのレベルなら、教会に任せれば良いから当然だと思うよ」

長年浄化されていない性質の悪い悪霊やレイスなどの排除には、俺のような極稀に出現する強力な魔力で一気に消滅させる力技の方が有効だったりする。

なお、同種である導師は、聖の魔法が苦手であるらしい。

『これなら、使えない方がマシである』と、良くこぼしていた。

「（導師の場合、悪霊でも殴り殺すのかな？）魔法の修練にはなるんだけどな。導師との修行とは別の意味で」

休息日以外にはほぼ毎日行われているアームストロング導師からの修行は強くはなれるのだが、ブランタークさんから教わる魔法のような上手さが確認できず。

しかも、修行内容が魔法格闘術一本なので、俺はつい自分が魔法使いなのを忘れてしまいそうになるのだ。

ルイーゼも、自分が魔闘流を修行している身である事を忘れてしまいそうになるらしい。

魔闘流とは、もっとスマートで技巧派な格闘技だと力説しているくらいなのだから。

「いってらっしゃいませ」

そして、そんな話をしている二人を見送る、俺の婚約者であるエリーゼの存在があった。

彼女は、イーナとルイーゼがブライヒブルクの邸宅時代から俺と一緒に住んでいる事を知り、屋敷の改装が終ると荷物を持って屋敷に居候を決め込んでしまった。

世間で言うと、結婚前に同棲しているとも言うわけだが、彼女は

そんな風聞など気にもしていなかった。

意外と、物事に動じない性格をしているのかもしれない。

更に、新しい屋敷に必要な使用人なども、全てホーエンハイム家のツテで揃え。

自身も、俺に食事やお菓子を作ったり、お茶を淹れたり、その他の家事をこなしたりと。

ルイーゼに言わせると、『もう若奥様だね』という状態になっていたのだ。

まあ、だからと言ってまだ手は出していなかったが。

この世界において、貴族の正妻になるような未婚の女性に婚前交渉は厳禁という考え方があるらしい。

その割には、えらく妾だの愛人だのの話が多いような気がするのだが。

キスくらいは、挨拶の延長として許して欲しいものであった。

間違いなく、他の貴族もしていると思うし。

「エリーゼ、張り切ってるね」

「これで、弁当とか貰えたらなぁ……」

別に、エリーゼが料理が下手というわけではない。

導師の修行の一つで、己で糧を得るというわけのわからないメニューがあるのだ。

簡単に言うと、昼食は自分で森などから獲物を獲って来いという事であった。

俺とルイーゼは一応は調理はして食べていたが、導師は血抜きだけをしてから、焼いて塩を振って食べるの繰り返すのみ。
しかも、それを主菜として俺達にも勧めるのだ

『導師、他の食べ方は？』

『いらぬ。某、この食べ方が一番好きな故に』

何不自由ない名門貴族の家に生まれた彼であったが、次男な上に魔法の才能があったので、それを伸ばすために冒険者稼業に足を踏み入れた。
次男なのに部屋住みにされなかったのは、幼馴染である陛下の後押しと、三男も存在していたためである。

とんでもない環境の変化に見えるが、彼はその変化を物凄く楽しめる人だったらしい。
実家では出ない、辛い味付けの大雑把な庶民料理に、アルコール度数だけは高い安酒にと。

何を口に入れても、『初めて食べます。珍しい味ですね』と言って他のパーティーメンバーが呆れるほどで、すぐに冒険者稼業に慣れていったようだ。

『野営も楽しみであったな！　獲ったウサギを血抜きして焼くのだ』

それで、塩を振って食べる。
導師は、この調理方法が大好物になった。
だが、これを実家や、己の子爵家で食べるわけにもいかず。

彼が、良く陛下の命令で外地に出るのを好むようになった最大の理由でもあったのだ。
あのパルケニア草原偵察任務でも、一人で何日も平原中を巡って大好きな野営を重ねていたそうだ。
何と言うか、とても似合っているような気がするのだが。

「俺は、エリーゼの弁当の方が食べたい」

「ボクも、何を獲っても血抜きして塩焼きだからもう嫌だ」

だからと言って、それがなくなるわけでもない。
諦めながら屋敷を出ようとするが、悲しいかな導師からの修行のせいで変に勘が良くなったようだ。
ルイーゼなどは、多分屋敷の玄関で気が付いているはず。
こちらに、意味ありげな笑顔を向けていた。

「何者だ？」

「きっ、きっ、気が付いたんだな」

俺が声をかけると、門扉の裏から数名の男性が姿を現す。
年齢は二十代前半くらいから、中心に居る人物は四十代後半くらいであろうか？
みんな、高価そうに見える服を着ているので貴族なのであろう。
しかも、その中心にいる男性は相当に身分が高いようにも見える。
金髪を七三に分け、体型は身長百八十センチ、体重百五十キロと言った感じであろうか？

典型的なメタボ体型で常に鼻息も荒く、どう見ても武術などの心得があるようには見えなかった。

「ろ、ろっ、ロマーヌス・アルベルト・フォン・ヘルター公爵なんだな」

何と、彼は公爵のようだ。

つまり、王族と血の繋がりがあるという事だ。

あと、喋り方が前世のテレビドラマで見た某画伯ソックリなので、思わず笑ってしまいそうになる。

オニギリとかを渡すと、喜ぶのであろうか？

「あの、公爵様が何の用事で？」

「お、おっ、お前に決闘を申し込むんだな」

と言うのと同時に、彼は白い手袋を投げて来る。

ところが、導師との修行で勘が鋭くなっていたのであろう。

俺は、その白手袋をひょいとかわしてしまう。

投げているのが微妙な公爵様なので、少し気を付ければ普通の人にでも簡単にかわせてしまいそうではあったが。

「に、にっ、逃げるんて卑怯なんだな」

「決闘って、理由をお聞かせ願えますか？」

というか、勝手に決闘なんてして良いのであろうか？
もし決闘が違法行為で、俺が彼を傷付けたり死なせたりして、その罪を問われた場合。
最悪、処刑などと言われても困ってしまうからだ。

「ぼ、ぼっ、僕のエリーゼちゃんに手を出したからなんだな」

「えっ、そうなの？」

俺は思わず、隣のルイーゼに聞いてしまう。
実は、俺と婚約する前は、この公爵様と婚約していた可能性などを考えてしまったからだ。

「ボクが知るわけないじゃない。でも、今のエリーゼはヴェルの婚約者なんだから」

「それもそうか。というわけなので、お引取りを」

もしかすると、過去にホーエンハイム枢機卿の命令で婚約者にされていたのかもしれない。
あくまでも過去の事なので、俺は気にしてはいなかったが。

「そ、そっ、そんな理由では引けないんだな」

「あいや、お待ちを！」

そこでようやく、公爵様の取り巻きの一人である若い男性が俺に声をかけてくる。

「私は、公爵様と交友のあるディートハルト・フォン・バルシュミーデ男爵です」

まるでカマキリのように痩せていて、いかにも腰巾着が似合いそうな男性だ。

あと二人居るのだが、共に三十代くらいでエンデルスとヘプケンという騎士であった。

多分、公爵の寄り子でもあるのだろう。

どこにでも居そうな、とても地味に見える二人であった。

「貴族同士の決闘に関しては、これは正式に法によって認められているのです」

正式に宣言して、お互いに了承し、日時を決めて第三者の立会人が審判をする。

以上の経緯で行われた決闘での負傷や死亡は、絶対に罪にならないという話であった。

「なので、安心して決闘を受けていただきたく」

「嫌だ」

「う、うっ、受けるんだな！」

また公爵が白手袋を投げて来るが、俺はそれをまたひょいとかわしていた。

「決闘は貴族の華。逆に受けぬは、大いに恥なのにですか？」

「俺に、何のメリットも無いじゃないか！」

さすがに、この目の前の運動経験ゼロにしか見えないメタボ公爵に負けるとは思わないが、もし負けたら向こうはエリーゼを要求してくるはず。

というか、エリーゼの許可も受けずに勝手に決闘なんてするわけにもいかないのだ。

ホーエンハイム枢機卿も、黙ってはいないであろう。

「勝てば、公爵様を倒した栄誉が得られますぞ」

「はあ？」

俺が他人の実力を見た目でしか見られない愚か者で、実はこの公爵が物凄い魔法や武術の達人だという事なのであろうか？

いや、ブランタークさんから習った他の魔法使いの気配を探る方法では、公爵の魔力は確認できなかった。

むしろ、下手に倒すと公爵を殺したとか怪我を負わせた罪でいらぬ罰を背負わされそうだ。

「ぼ、ぼっ、僕は寛容なんだな」

「明日、また伺いますので。それまでに良いお返事を」

「く、くっ、首を洗って待っているんだな」

言いたい事だけを言い、俺達の前から立ち去る公爵様御一行に。

俺もルイーゼも、ただ唖然として見送るだけしか出来ないでいた。

「決闘かよ。えらく久しぶりに聞く単語だな」

結局、その日の修行は例の公爵様対策で中止となっていた。
どう対応して良いものかわからなかったので、瞬間移動の魔法で呼んで来た寄り親であるブライヒレーダー辺境伯様に。
ブランタークさん、アームストロング導師、当事者の一人でもあるエリーゼといつもの俺達四人という面子で相談を始める。

俺の屋敷のリビングに集まり、エリーゼが全員分のお茶を淹れてから話は始まる。

「久しぶり？」

「ええ、ブランタークの言う通りです」

ブライヒレーダー辺境伯様の説明によると、貴族同士の決闘はこの王国がまだ小国であった頃から存在していたそうだ。
名誉、女、土地、利権、財貨など。

どんな理由でも構わないが、決闘を行うには明確なルールが存在している。

「相手に白い手袋をぶつけて、決闘を宣言するのである」

見た目通りと言うと失礼になるのか？

導師も、決闘のルールを知っていたようだ。

「それ、二回ともかわしました」

「では、成立していないのである」

導師によると、白い手袋が相手に触れない限りは決闘を申し込んだ事にならないそうだ。

「白い手袋をぶつけられない時点で、決闘なんて止めた方が良いと思うけどね。あの公爵様は」

「ルイーゼ嬢の言う通りではあるが、決闘には代理人も認められる故に」

どうやら、あの公爵様。

自分は戦わないで代理人に任せる癖に、偉そうに首を洗って待っていろとか言っていたらしい。

ある意味、とても羨ましい性格をしているようだ。

「でも、何でここまで時間が経ってからなのかしら？」

イーナの言う通りである。

エリーゼが欲しいのであれば、婚約した直後に異議を申し立てれば良いはず。

それが、今になってというのが怪しかった。

「念のために聞きますけど、エリーゼさんはヘルター公爵の事は？」

「はい、知っております」

今から二年ほど前から、『ぼ、ぼっ、僕の二十五番目の妻に相応しいんだな』と言われ、しつこいくらいに妻になるように誘われていたそうだ。

「御爺様が、断り続けているのですが……」

諦めが悪く、『し、しっ、子爵如きが、公爵たる僕に逆らうのは不敬なんだな』と、逆に向こうがホーエンハイム枢機卿を非難する有様なのだそうだ。

「子爵如きって、あの公爵様」

「ええ、バウマイスター男爵の言う通りです。表向きは、ちょっと困った方だと皆は言いますね」

本音は、教会の幹部を考え無しで侮辱する、空気の読めないバカという評価を受けているらしい。

他にも色々と問題を起していて、バカだけど公爵だから公に非難されていないだけなのだそうだ。

当然、裏ではボロカスであった。

王都の住民達などは、半分知恵遅れ扱いしているそうだ。

あと、ブライヒレーダー辺境伯であったが、俺の事をバウマイスター男爵と呼ぶようになっていた。

エーリッヒ兄さんの結婚式で祝儀を出さなかった件で、もう本家の方は記憶の隅に置いておきたいそうだ。

『商隊を、年に何回か回しているそんな家もあったかな？』くらいの認識であると前に言っていた。

結局祝儀を出さなかった件は、極一部の関係者にしか漏れていなかった。

あまりに非常識なので、外部に漏らす事が無いようにブライヒレーダー辺境伯が動いたからだ。

すぐに俺が補填していたので、披露パーティーの参加者で気が付いた人は少ない。

こちらが外部に漏らす意図がなく、向こうも敢えて公にはしないはずなので、そちらからも漏れる心配は無い。

思うに、父はどうかは知らなかったが、クルト兄さんはそれが目的だったのかもしれなかった。

「ヘルター公爵は、前国王陛下の末の弟なのですよ」

王族だが行き先が無く、たまたま子供がいなかったヘルター公爵家に養子に入った。

陛下からすると、叔父に当たるわけで。

今までの不祥事でも注意はしているが、相手が甥なのでその場では素直に頷いても、裏では聞く耳を持っていない。

その繰り返しで、王族間でも鼻ツマミ者扱いなのだそうだ。

「ホーエンハイム子爵、怒ったでしょうね」

「みたいですね。王都在住の家臣から報告も上がりましたし」

子爵風情とは言うが、実はヘルター公爵とホーエンハイム枢機卿では、貴族としての力は後者の方が上であった。

それもそのはずで、この王国における公爵とは半分名誉職のような物であり。

余った王族に、恥をかかせないレベルの生活を保障する程度の物でしかなかったからだ。

なので、公爵に領地持ちはいない。

大昔に国王が崩御した際、数名の公爵が同時に反乱の兵を挙げた事があるそうで。

それ以降は、公爵は王都在住で法衣貴族なのが決まりであった。

地方で王権の正当性を訴えて、反乱を起せないようにだ。

あと公爵家の数も決まっていて、そう簡単には増やせない仕組みになっている。

そもそも、階位というのはこの時に作られたらしい。

王国成立初期には、貴族の中で一番階位が高い者が国王という意図で。

その後に王権が確立されると、支給される年金の基準額が階位毎に決められたそうだ。

昔に、『余の財産である、国の資産を自由に使って何が悪い！』と浪費に走り、国の財政を傾けた国王が居たとかで。

現在では、国王も第一位の階位に定められた年金を支給され、それを個人的に使うシステムになっていた。

さすがに公費や歳費は予算から出るので、国王のお小遣いとしての年金であったのだ。

あと公爵も当然、階位に従った年金を貰っている。

「年金は、貴族で一番多いですけどね。領地は、無しですけど」

普通なら、法衣子爵如きに後れは取らないはずなのだが、ホーエンハイム子爵は教会の枢機卿でもある。

当然、それ以上の実力があるのだ。

「エリーゼさんは、ホーエンハイム枢機卿の長男で爵位継承者の長女であったはず。それが、公爵の二十五番目の側室とか。父親が騎士爵以上なら、間違いなく誰でも怒ります」

よほど食い詰めないと、二十五番目という時点で問題になってしまうはずだ。

その順位だと、規模の大きい商人でも娘は差し出さないレベルであった。

「御爺様は、陛下に事情をお話になって……」

事情を聞いた陛下は、ヘルター公爵を呼び出して叱責したそうだ。

しかし、この人は評判通りの人であった。

都合の良い時には、陛下の叔父である事を鼻に掛ける癖に、このように怒られると、『甥如きの叱責など気にしない』という人のようで、全く懲りずに定期的にエリーゼを妾に欲しいと言い続けている。

「ある意味、凄い人だな」

「ええ、ただ自分の欲望のままに動いていますから」

エルの指摘に、ブライヒレーダー辺境伯は困ったような表情をしながら答えていた。

実際今までに、迷惑を被った事があるのであろう。

「俺が驚くのは、あのヘルター公爵に二十四人の奥さんが居る事実ですね」

「籍に入っていない愛人なら、これの三倍はいますけど」

「良く破産しませんね……」

法衣とはいえ、公爵なので年金は多いはずだ。

だが、それに準じて人を雇ったり、貴族として様々な付き合いなどもあるはずで。

あと、王族と縁戚なのでそっちの付き合いもあって、公爵でそう余裕がある人はいないらしい。

なのに、彼は二十四人も奥さんが居る。

どのようにやり繰りをしているのか、気になってしまうのだ。

「（実はやり手で、財テクに勤しんでいるとか？）」

「いえいえ。あの人は、借金だらけですから」

さすがは、ブライヒレーダー辺境伯とでも言うべきか。

彼は、ヘルター公爵家の懐事情にも詳しかった。

「彼の代で、急激に借金が嵩みましてね」

「理由が、簡単過ぎる……」

浪費に、女性遍歴に、今日居たゴマを擂る寄り子達への支援にと。
毎年貰う年金は、借金の返済だけに消えているそうだ。

「（それって、自転車操業じゃん）」

そんな状態（借金まみれ）でエリーゼを嫁に欲しいとか、ある意味お目出度く出来ているようであった。

「私がヴェンデリン様と婚約したと発表したら、大人しくなったんです。それで、諦めた物ばかりと」

「何か必勝の策があるのかな？」

「必勝の策と言いますか、バウマイスター男爵に勝てる決闘の代理人を見付けたのでは？」

「決闘か……」

凶暴な野生動物に、骨竜、老巨竜、ある程度の数の魔物と。
それなりに戦闘経験はある。
だが困った事に、対人間戦闘はアームストロング導師との修行でしか経験していない。

もしかすると、予想外の敗戦を喫する可能性があったのだ。

「そもそも、竜殺しの坊主に対抗可能な代理人かぁ。厳しいよなぁ

……」

元冒険者であるブランタークさんは、可能な限りヘルター公爵が雇えそうな高名な魔法使いを含む冒険者を思い出し始める。

「爆炎のキンブリーは、代理人なんて受けないからな。ブリザードのリサは、あの借金公爵が出せるような依頼金じゃないし……」

「物騒な二つ名ですね」

「冒険者でもあるから、二つ名のインパクトって重要なんだよ。仕事の依頼数に関わるし」

プロレスラーに派手な名前を付けるのと、同じ事のようだ。

両名とも、現役の冒険者としては有名人なのだそうだ。

「決闘形式だから、魔力と魔法威力に優れた坊主を出し抜く技が使えないのが厳しい」

なまじ互いに公平な状態からのスタートなので、対戦相手は俺に勝るであろう、経験に基づいた奇襲や相手の意表を突くような戦法が使い難い。

そうなると、単純に魔法使いとして高出力な俺に勝つのが難しくなってしまう。

これで代理人を引き受ける人は、相当なマゾであるとブランタークさんは答えていた。

「相手が、俺なんて実は弱いと思っているとか?」

「あるかもしれないな」

魔法の才能がある事に気が付き、ある程度の鍛錬で中級くらいにまでなった新人が陥り易い罠なのだそうだ。

『俺でも、あの骨竜は倒せた。むしろ、もっと余裕だったと思うし』などと思い込んでしまう。

これも、その気になればほとんど独学で学べる魔法の悲劇というやつだそうだ。

「坊主、俺と導師で決闘方法を仕込んでやるから引き受けろ」

「良いんですか？　いや、大丈夫ですか？」

「俺や導師なら坊主の負けだけどな。生憎と、ヘルター公爵からは代理人の依頼は受けちゃいないよ」

「某もである。しかし、五十七年ぶりの決闘であるか。楽しみであるな」

「あの、楽しいイベントってわけじゃないですけど……」

人がこれから決闘なのに、導師は相変わらずであった。

やはり、見た目通りに決闘が大好きなようだ。

「前に、気に入らぬ貴族に申し込んだのだが、泣いて断るので興醒めであった！　大の男が、みっともない！」

「（導師と決闘なんて、未来が死しか無いからじゃないですか？）」

導師を除く全員が、心の中でその貴族に心から同情してしまうのであった。

「よ、よっ、良くぞ引き受けたんだな。い、いっ、引導を渡してやるんだな」

結局、俺は導師やブランタークさんに言われて、次の日に決闘を受け入れる羽目になってしまう。

向こうはなぜか大喜びなのだが、もしかするととんでもない隠し玉でも持っているのかもしれない。

「拙い。ここに来て、緊張が……」

決闘は、二日後と決まり。

その前日の夜、俺は緊張のためか眠れずに屋敷の二階のベランダで夜空を見ていた。

この世界でも月は一つだけで、色は少々青っぽかったが、大きさなどは地球とそう違わなかった。

「早く寝ないとな」

「ヴェンデリン様、私のために無理はしなくても……」

とそこに、俺と同じく起きてしまったらしいエリーゼが、俺に声をかけてくる。

エリーゼは優しいので、俺が緊張しているのを見て決闘を取り止

めてもと構わないと言い始めたのだ。

しかし、それは駄目だ。

あんな某画伯モドキのメタボ中年に、十三歳のエリーゼを二十五番目の奥さんとして渡すなど、俺のなけなしのプライドが許さない。

というか、四十代後半のおっさんに十三歳の巨乳美少女とか。まず犯罪だと思ってしまうのだ。

この世界では違法でも何でも無いが、俺の心の中の裁判官が彼を有罪だと告げていた。

「エリーゼは、安心して見ているがいいさ。エリーゼは俺の婚約者であり。それに手を出すバカは、公爵でも蹴散らすぞと世間に示してやる」

「ヴェンデリン様」

「なあに、油断しなければ大丈夫だって。あんなヒキガエルにエリーゼは渡さない」

「はい、そう言って貰えて嬉しいです」

俺はエリーゼを引き寄せると、二人でまた月を見始める。

完璧なシチュエーションに、俺の格好良いセリフ。

今の俺、大勝利の構図であった。

「私も、ヴェンデリン様の勝利を信じています」

「ありがとう」

俺とエリーゼはそっと口づけをしてから、明日に備えてお互いの寝室へと向かうのであった。

「さーーーて！　今日は、注目の大イベントだぁーーー！　あの竜殺しの英雄バウマイスター男爵と、ヘルター公爵の代理人による決闘が、五十七年ぶりに行われまぁーーーす！」

決闘を引き受けた俺は、翌日の朝にヘルター公爵が寄越した迎えの案内で会場へと移動していた。

俺は郊外の空き地ででも行うのかと思っていたのだが、実際には何と王都コロシアムで行われるようだ。

この王都コロシアムは、各種武芸の王国大会に、幾つかある騎士団による模擬戦闘試合など。

三万人ほどの観客を入れてイベントを行える、石造りの豪華な施設であった。

「時間もないのに、良く予約が取れましたね」

「ヘルター公爵様は、王城にも顔が利くのです」

自慢気に語るのは、先日にもいたカマキリ男バルシュミーデ男爵だ。

ブライヒレーダー辺境伯からの情報によると、あのヘルター公爵

の寄り子達の中では比較的頭脳派であるらしい。

あの集団自体の知能レベルが微妙なので、普通よりは少し上のバルシュミーデ男爵が、知恵袋扱いされているそうであったが。

「コロシアムには、観客席に魔法が飛ばないように魔法障壁をかけるスタッフも居ます。なので、安心して魔法をどうぞ」

「自信満々だな。魔法禁止とか言い出すかと思ったけど」

「あなたの、唯一の特技じゃないですか。存分にどうぞ」

明らかにバカにされているようだが、特に気にもならなかった。
むしろ、代理人の方が気になっていたのだ。

「さて、到着です」

コロシアムは、既に観客で満員であった。
あと、彼らは何かの紙欠を懸命に売買し、握り締めているようだ。

「おいおい、人の決闘で賭けかよ」

紙欠の売買をしている男性の横には、現在のオッズという張り紙がされたプレートが立っていた。

「何々……。バウマイスター男爵１．１倍。ヘルター公爵１３．５倍って！」

賭けは、完全に俺の方が優位であった。
だからと言って俺にギャラが入るわけでもないので、別にどうで

も良かったのだが。

「その自信が、あと少しで絶望に変わるのですがね」

ヘルター公爵側は、何かとんでもない隠し玉を準備しているらしい。

バルシュミーデ男爵も含めて全員が、俺に嫌らしい笑みを浮かべていた。

試合前に、控え室からコロシアムの入場口に移動すると、そこから観客席の様子が良く見える。

客の入りは満席で、久々に行われる決闘という伝統行事に多くの人達が興味があったようだ。

それと、観客席の一部に関係者専用の席も設けられていて。

エル、イーナ、ルイーゼ、エーリッヒ兄さん、ブラント一家、導師、ブランタークさん、ブライヒレーダー辺境伯のその家臣達と。

実はみんな、結構娯楽に飢えているのかもしれなかった。

心配して来ているのであろうが、なぜかみんな軽食と飲み物を買って楽しんでいるようであったし。

「さーーーて！　そろそろ、選手入場です！」

妙に元気なアナウンスの従ってコロシアム内の試合会場に入ると、そこにはヘルター公爵、バルシュミーデ男爵、あと二人の影の薄い騎士も合わせて四人で待ち受けていた。

「さ、さっ、最後なんだな。り、りっ、竜殺しもここで終りなんだな」

「よほど自信がおありなようで」

「さ、さっ、最高の代理人なんだな」

「どこにいるのです？」

「げ、げっ、元気が良過ぎるからまだ出せないんだな」

「はあ？」

何か嫌な予感がする。

そう思っている内にヘルター公爵達は後ろへと下がり、その直後に対戦相手が入場する入り口の扉が開く。

中から、巨大な檻を載せた台車が前へとせり出し、所定の位置に着くとその檻の扉が開く。

中からは、高さ五メートル全長十メートルほどの、金属製の山のような物体が飛び出していた。

いや、それは良く見ると魔物であった。

属性竜には劣るものの、小型種のワイバーンよりは大きい。

うちの実家と、ブライヒレーダー辺境伯領を隔てる山脈に多く生息する。

中型で群れを作って生活し、獰猛な肉食で時にはワイバーンさえ狩ってしまう中型竜。

飛竜と呼ばれるそれが、ほぼ全身を金属製の鎧に包まれていたのだから。

「おいっ！　代理人なのか？」

「決闘のルールに、代理人は人でなければ駄目とは書かれていません」

「そりゃあな……」

決闘のルールには、『決闘者は、代理人を指名する事も可能である』としか書かれていない。

だが常識から考えて、代理人なのだから人以外は駄目に決まっているのは当然であった。

「反則じゃないのか？」

俺の発言に、観客席からも『卑怯だ！』という声が上がっている。

逆に、『面白そうだから戦え！』という野次も飛び交っていた。

「魔物では駄目とは、一つも書かれておりませんので」

しかし、さすがは自称頭脳派のバルシュミーデ男爵だ。

考えが浅はか過ぎて、ただ笑うしか無い。

竜を俺に放ち、同時に決闘を賭けにして胴元として金を集める。

観客の大半は俺に賭けるはずなので、もし俺が負ければ胴元は大勝利となるはずだ。

「（エリーゼを手に入れ、同時に金も儲けるか）」

しかし相手が飛竜では不安なので、あの金属製の鎧なのであろう。

しかもこの鎧、魔法で探ると鋼の上にミスリルでコーティングがされているようだ。

要するに対魔法用の鎧で、魔法使いである俺に不利になるように準備したのであろう。

多分、俺とエリーゼが婚約した直後から念入りに準備をしていたようであったが。

「ささっ、早く戦わないと」

「バルシュミーデ男爵、あんたも戦う準備をしておけ」

「はあ？　何を仰っているのです？」

どうやって飛竜を捕らえたのは知らないが、捕まえた竜が人の言う事を聞くなんて事は絶対にない。

小型のワイバーン種でも、今までに飼い慣らした人など皆無で。

逆に、失敗して殺される人間の数は、今までに数え切れないほどなのだから。

この国の空軍が魔導飛行船のみで、竜騎兵などが存在しない理由は竜がまるで人に慣れないからであった。

「そのクソ竜は、まずは弱そうで一人のあなたに向かいますよ。死んでください」

「はあ……。忠告はしたからな」

確かに、全身鎧の竜は、最初は子供で一人の俺を食おうと突っ込んで来る。

途中、小さめの火矢魔法など放ってみるが、あのミスリルコーティング鎧がちゃんと仕事をしているようで、全く効き目が無かった。

「まあ、予想通りか」

「強がりですか？」

俺がピンチになったと思って嘲笑うバルシュミーデ男爵であったが、俺が飛竜になど負けるはずはない。

まずは、軽く魔法障壁を張って攻撃を受けないようにする。

飛竜はそのまま全力で俺の魔法障壁にぶつかり、そのまま数十メートルほど弾き飛ばされてしまったようだ。

「なっ！」

「俺にも、攻撃は効かないわけだ。それで、次だが……」

そうなると、あとは本能に従って近くにいる得易い獲物に標的を変える。

飛竜は食欲と言う本能を満たすために、四匹の獲物に飛び掛っていた。

そう、ヘルター公爵達という獲物にだ。

「ひいっ！」

飛竜の標的が自分達に変わり、ヘルター公爵達はその場で腰を抜かしていた。

どうやら、あの中に貴族の責務を果たせそうな人はいないようだ。

「く、くっ、喰われる！」

ヘルター公爵が叫ぶのと同時に、飛竜が四人の目前にまで到達するが、またも飛竜は魔法の壁に阻まれて数十メートルほど弾き飛ばされる。

俺が、あの四人の周囲にも障壁を張り巡らせたのだ。

「喰い殺されたら、後で事情が聞けないからな。決闘に制御不能な竜を持ち込むとか、大不祥事ですぜ。公爵様」

「……」

俺の発言にバルシュミーデ男爵は顔を俯かせてしまうが、逆にヘルター公爵は元気になっていた。

「ち、ちっ、チャンスなんだな。い、いっ、今の内に、バウマイスター男爵に一撃を！」

「バカ過ぎる……」

俺は、四人を魔法障壁で囲んでいるのだ。

抜け出して攻撃など、まず出来るはずがなかった。

「俺も、魔法障壁で囲まれているからな！　あと、代理人は竜じゃないのか！」

「か、かっ、関係ないんだな！」

というか、このヘルター公爵は特上級のオールマシマシバカであるようだ。

バルシュミーデ男爵以下三名は、もう観念して大人しくしているようであったが。

「坊主、竜をどうにかしろ！」

「わかりました」

観客席から、ブランタークさんが竜の始末を依頼して来たので、すぐにグラウンドの土を鋭い槍状にして複数空中に浮かせ、それを超高速で飛ばして飛竜の両目に突き刺す。

勿論、属性竜にこんな魔法は通用しない。

飛竜レベルなので、鎧が被さっていない両目から脳の部分を破壊する事に成功したのだから。

「本当に……。決闘をするなら、普通に申し込めよ」

俺は、素早く死んだ飛竜を氷漬けにしてから魔法の袋に仕舞う。

バカ公爵達の犯罪の証拠なので、素早く確保したのだ。

あと、それと同時に。

「久々の決闘を汚す愚か者達を捕らえよ！　裁定は、陛下に一任する！」

アームストロング導師の命令で、四人はコロシアムの警備兵達によって捕らえられていた。

どの程度違法なのかは知らなかったが、決闘の代理人として捕らえた竜をけしかけ。

更に、その制御が出来なかったのだ。

決闘なのに、決闘以前の無様で貴族としてこれ以上の恥は無いであろう。
陛下がどんな裁定を下すのか、興味が尽きないという物だ。

「ヴェンデリン様！」

導師に続けてエリーゼも観客席から降りてきて、俺に抱き付いて来る。

胸の感触がとても心地良くて、決闘に勝てて心から良かったと思っていた。

「ご無事で良かったです」

その聖女という評判に似つかわしくないが、普通の十三歳の少女の姿に、観客達はとても微笑ましいと思ったようだ。

すぐに観客席中から、拍手が鳴り響いていた。

「凄い拍手」

「ふむ、あそこに居るほぼ全員。賭けには勝っているからである」

なるほど、確かにそれは重要であった。

「胴元のヘルター公爵は、払えますかね？」

賭けの胴元プラス、多分自分達でも自分達の勝ちに賭けているはずで。

その損害額を考えるに、もしかするとヘルター公爵家の財政状況は、自転車操業すら不可能になったのかもしれなかった。

「あとの処理は、陛下に任せるのである」

導師はそう言うと、そっと一枚の紙を俺に見せる。

それは陛下直筆の手紙で、中身は決闘でヘルター公爵やその取り巻きなどを殺してしまっても、その罪は不問とすると書かれていた。

もし俺が決闘で勢い余ってという危惧を先取りして、導師が手紙を陛下から貰っていたようだ。

「こりゃあ、ただじゃ済まないでしょうね」

「せっかく水に落ちた犬なので、ここは棒で叩くという選択肢が採られるはずなのである」

「怖っ！」

「ヘルター公爵とは、それだけ目の上のタンコブであった。我らも気を付けるのである」

「ですね」

俺も出来るだけ、普段の行動には気を付けようと心に誓うのであった。

「ご苦労であったとの、陛下からのお言葉なのである！」

あの決闘騒ぎから三日後、今日は休息日なので屋敷で休んでいると。

そこに、陛下からの手紙と恩賞を携えたアームストロング導師が現れる。

彼は朝食がまだだと言って、エリーゼから配膳して貰い。

それを全て平らげてから、ヘルター公爵達への処分と合わせて発表していた。

「ヘルター公爵家は断絶。ヘルター公爵自身は、地方の修道院へ。妻達と子供達は実家に戻り、子供達は貴族籍を剥奪。他のバルシュミーデ男爵以下三名も、同様の処置である」

公爵の名を使ってコロシアムの使用順番を抜かし、観客兼賭け金の補給源として大量の平民達を集め、彼らの前で久々の決闘を汚した。

自分達ですら御し得ない飛竜を、コロシアム内に放ったのも良くなかった。

もし飛竜が、魔法障壁を打ち破って外部へと脱走したら？

大騒ぎになるのは明白であった。

「あとは、遂にヘルター公爵家の借金が、王家の忍耐許容量を超えたのである。飛竜を捕らえるのに、超一流の冒険者達に払った費用。飛竜専用の特注ミスリルコーティング鎧の費用。賭けの胴元としての支払いと。先日でトドメであったようである」

挙句に全ての陰謀に失敗して、ヘルター公爵家の借金が阻止限界

点を超えてしまってもいる。

主犯と主犯格に同情の余地などなく、四人は爵位を取り上げられて田舎で信仰に生きる生活を送るそうだ。

もし脱走などを試みると、まだ若いのに病死する可能性もあるのであろう。

改易された元貴族家当主の修道院送りなど、大概がそういう物だ。

処刑だと問題があるから、死ぬまで飼い殺しなのだから。

「あの竜の生け捕りと、鎧作成に協力していた他の寄り子達もである。陛下にコッテリと絞られた挙句に、『そのような余裕があるのであれば、罰金の支払いで改易は無しにしようかの』と言われて涙目であった」

払わなければ、改易されても文句は言えない。

なので、渋々支払う事を了承したようだ。

「一体、何だったんでしょうね？」

「陛下は、少年の事は褒めていた由に」

自分と、対決の相手であったヘルター公爵達すら同時に魔法障壁を展開して飛竜から救い。

飛竜が装備するミスリルをコーティングされた鎧部分を避け、その両目から脳に土槍を突き刺して殺し。

最後に、一発で死んだ竜を氷漬けにして魔法の袋に収納した。

「あんな連中ではあるが、ヘルター公爵達が死んでしまうと問題に

するバカも居るので良いフォローであった。観客達も、少年の華麗な魔法が見れて大喜びであった」

あとは、決闘後のエリーゼとの感動的な抱擁であろうか。

これも、『婚約者を、ブタじゃなくてヘルター公爵から守るため、決闘で見事に竜を撃ち果たしたまだ少年の貴族様』と市井では評判になっているらしい。

「あの話をネタにした劇を作りたいと、芸能ギルドが王城に申請を出したようであるな」

「うわっ、何それ」

きっと、物凄い脚色がされて本人が見るに耐えない作品になっってしまうのであろう。

「あとは、少年への褒美であるか」

そう言うと、アームストロング導師は俺に王国の紋章が刺繍された絹製の袋を渡す。

中には、白金貨五十枚が入っていた。

「多いですね」

「半分、口止め料も含まれているのである！」

「口止めって、何をです？」

「そういう名目だけとも言うのである！」

「うわっ！　ぶっちゃけた！」

内訳は、まず殺した飛竜の売却代金。
飛竜は竜なので、一体分あれば余裕で白金貨以上の価値はあった。
あとは、その飛竜が装備していた特製鎧の売却代金。
勿論、そのままでは使えないので鋳熔かす事となるが、あの鎧は表面にミスリルがコーティングされている。
それだけでも、結構な価値になるそうだ。

「借金だらけなのに、良くやるよ……」

俺とエリーゼが婚約した直後から、最後の財力を振り絞って準備を進めていたようだ。
考えようによっては、エリーゼのために物凄く情熱的なのかもしれない。

方向性は、激しく間違っていたが。

「あとは、ヘルター公爵家の財産整理で出た資産の一部もであるな」

「あれ？　借金だらけなのでは？」

ここ暫くは、あまりに借金が増えて年金で利息だけを支払っていた状態であったそうだ。
そこで、ルックナー財務卿が債権者達と相談をし、借金その物の圧縮や返済免除などを勝ち取ったらしい。

前世でも、大企業が経営破綻をして、銀行などがある程度債務放棄をするのに似ている。
債権者である商人達は、『今までに支払われた利息で、大分儲け

たようだな』とルックナー財務卿に言われると、素直にかなりの債権を放棄したそうだ。

「バルシュミーデ男爵以下三家には、借金など無かったそうである」

「なら、寄り親の財政を何とかしてやれば良いのに」

「それは、貴族としてのプライドから不可能である」

例え王家でも、ヘルター公爵家の財政状況を憂慮して手を差し伸べてはいけないのだそうだ。

ましてや、寄り子が寄り親の財政状態に口を出すなど不可能に近い。

ヘルター公爵家側が求めればあり得たが、それをすれば次のいらぬ介入を招く可能性がある。

結果、ヘルター公爵家は借金塗れのまま潰れる羽目になった。

貴族のプライドとは、本当に面倒な物である。

「他に、ヘルター公爵に協力していたバカな寄り子達も複数いて、彼らから罰金も取っているのである」

飛竜を生け捕り可能な冒険者パーティーを探し、実際に捉えさせ、特注鎧の発注まで行い、あとで返済すると言われていたとはいえ資金の提供までしていたそうだ。

「共犯ですかね」

「彼らとて、罰金を支払わなければ改易なのだから素直に支払った

のである」

貴族家を四つも潰し、罰金も取った。

潰した貴族家に年金はもう不要であるし、あの迷惑のタネであったヘルター公爵家が無くなるのは利益になる。

全体的に考えると、公共の利益になったのであろう。

俺に、多額の褒賞が出るはずである。

「ただ、潰れたヘルター公爵家に代わり、新しい公爵家が必要だと運動を始めた王族が何名か……」

「陛下も大変だぁ……。エリーゼ、イーナ、ルイーゼ。遊びに行こう」

話が終れば、今日は休息日である。

あとは、ヘルター公爵の事など忘れて遊びに行くだけであった。

「こら、俺も行くぞ。護衛役は必要なんだからな」

護衛役兼、自分も遊びに行きたいエルも同行を宣言する。

「某も、行くのである！」

「導師は、めちゃくちゃ目立つけどな。誘拐なんて考える輩も居なくなるけど……」

「某は、話題のバケツパフェが食べたいのである」

「うわっ、胸焼けしそう……」

それが人間の業と言われればそれまでだが、ようやく初の決闘とそれに関わる事件は終わりを告げるのであった。

幕間十五　ヘルムート兄さんの婿入り。

「家を出てから苦節五年、ようやく結婚できるな」

「パウル兄さん、俺も含めて笑えない」

とある日の夜、今日はエーリッヒ兄さんの案内でブラント邸において夕食会が開かれていた。

メンバーは、俺達いつもの五人に、エーリッヒ兄さんを含めたブラント家の面々。

そして、今度結婚する事になった三男のパウル兄さんが婚約者と共に。

あと、四男のヘルムート兄さんも参加していた。

なお、ヘルムート兄さんも近々婚約をする予定だそうだ。

お相手は、パウル兄さんと同じくエドガー軍務卿が紹介をする予定らしい。

近々、お見合いを行うようだ。

このお見合いの特徴としては、『今回は、縁が無かったという事で……』という結論にならない点にある。

ヘルムート兄さんが、貴族としての未来を投げ打つ覚悟があるのなら別であろうが。

「寄り子で、娘さんしかいない騎士爵家があるんだと」

「とんでもない好条件だな」

「その分、ヴェルが悲惨な目に遭っているからな」

屋敷を買うだけの予定が、ホーエンハイム枢機卿と懇意のインチキ不動産屋のせいで、何軒もの悪霊付き瑕疵物件の浄化をさせられたり。

手に入れた屋敷も、怖い八つ裂きメイドの幽霊が標準装備されていたり。

一瞬、可愛いメイド付きかと思って心の中で喜んだ、俺の純情を返して欲しいくらいだ。

念のために言っておくが、俺は別にメイドに手を出そうとかそういう事を考えているわけでなあい。

働いているメイドが可愛ければ、それは心を潤す一服の清涼剤となると考えただけだ。

「教会でも手に負えない物件ばかり、なぜに俺に……」

「魔力が多いのも大変だね」

俺は、エーリッヒ兄さんから慰められていた。

例の『血塗れ王弟屋敷』の浄化に、それ以降舞い込むようになった王都各地にある悪霊付き物件の浄霊にと。

魔法の修練にはなるが、苦労はしている自覚はあった。

そのせいで、俺がいきなり上級貴族街に屋敷を構えても批判はされず、逆に浄化の腕前で評価は上がっているそうだが。

上級貴族からすると、今まで悪霊のせいで住めなかったり購入で

きなかった屋敷が使えるようになるのだ。
それを行った、俺を役に立つ奴だと思っているのであろう。
ある意味、ホーエンハイム枢機卿の思惑通りでもあったのだ。

「挙句に、あのヘルター公爵か……」

「あの、エーリッヒ兄さんもやっぱり？」

「知っている。あの人は、悪い意味で有名だったから」

あの、かなり考えが足りなさそうな公爵様の件は、どうやら陛下がその取り扱いに疲れて、暴走する機会を待っていたらしい。
以前から、主にお金と女性の問題が多かった人だけに、すぐに俺をターゲットにして、壮絶に自爆したというのが真相であったようだ。

あの妙に多い謝礼金は、ヘルター公爵家が潰れて国家財政的に助かったお礼もあるようだ。
俺への謝礼は一度で済むし、ヘルター公爵家を潰しても新しい公爵家は立ち上げられず、長期的に見ると国家財政的には助かっている。

公爵への年金は、年に二千万セントである。
あのヘルター公爵に、もう二度と毎年二千万セントを支払わないで済むと考えると、俺に五千万セントを渡すくらい安く思えたのかもしれない。

加えて、十数家のヘルター公爵家の寄り子達が、取り潰しを間逃れるために多額の罰金も支払っていたのだし。

あとは、一応は迷惑料と、あまり真相を言いふらさないで欲しいという口止め料的な理由もあるのであろう。

「そういえば、バルシュミーデ男爵家も潰されたんだよね」

追加で、ヘルター公爵の腰巾着であった、バルシュミーデ男爵以下三家も取り潰されている。

最初はオマケの類かと思われたのだが、実はバルシュミーデ男爵は碌でもない事を考えていたようだ。

次第に増える公爵家への借金を減らすために、俺から大金をふんだくる計画であったらしい。

決闘に俺が負け。

陛下が認めた婚約者を手放すのは不忠ですよねと言って、その代わりに身代金ではないが大金をふんだくる。

肝心のヘルター公爵であったが、あの人は女好きでもあまり一定の個人に執着はしないらしい。

説得は容易なはずだと、後の取調べで話していたそうだ。

『エリーゼ嬢との交換で。纏まった金額と、残り二人の婚約者でも差し出させれば良いかなと……』

賭けの胴元くらいで、あの公爵家の膨大な借金が消えるとは思わなかったのだが、そういう意図があったようだ。

勝手に交換材料候補にされたイーナとルイーゼはとても怒っていたし、そもそも二人はまだ未成年なのでブライヒレーダー辺境伯の陪臣の娘のままだ。

地方の有力貴族の係累に手を出すなんて、そこが自称知性派であるバルシュミーデ男爵の限界だったのであろう。

「そのヴェルの多大な苦労のおかげで、俺達は結婚できるか」

「その代わりに、エドガー軍務卿なんてお偉いさんに目を付けられたわけだ」

俺のせいで、順調にエドガー軍務卿に囲われているようであった。

「警備隊勤務だからな。一応は、軍人の下っ端ではあるわけだけど」

「普通に考えると、俺とパウル兄貴なんて死ぬまで名前すら覚えて貰えないと思うけど」

王国全土に、騎士爵家だけで二千家以上も存在しているので、大物貴族が全員を覚えているはずもなかった。

「三男以下になると、よほどコネと才能が無いとな」

何とか娘しかいない貴族家に婿入りするか、子が居ない貴族家に上手く養子に入るか。

この時点で、かなり奇跡に近くその確率は低い。

続けて、大物貴族の陪臣家に婿入りするか。

これも普通なら、主人の次男以下を貰うか、陪臣同士で融通し合うので難しい。

最後に、同じ境遇の次女以下と結婚し、人生をかけて出世を目指

すか。
大抵は駄目で、子供の代で平民に落ちてしまうそうだ。
もう最初から諦めて、平民の娘と結婚してしまう人もいる。
利点は、無駄に見栄を張る必要が無いので、あまりお金を使わないで済むという点にある。
結婚後には、豪農や商人などを目指す人向けらしい。
あとは、意地でも貴族に拘って結婚しないで人生を終えてしまう人。
実は、少なからず存在しているようだ。
パウル兄さんは、こうならないで済んで胸を撫で下ろしていた。
「俺なんて、名前が駄目だから余計に……」
「この国で一番沢山いる、ヘルムートさんだからな」
四男のヘルムート兄さんであったが、彼の名はこの国の名前を冠している。
不敬な気もしたが、実は子供にヘルムートと付ける親は多い。
平民でも、貴族でも。
その数は、圧倒的だ。
実際、パウル兄さんとヘルムート兄さんの部下にも、数名存在しているそうだ。
最近では口の悪い人が、多過ぎて『平凡の証』とまで言っている名前であった。

勿論、各分野で業績を残している人も多かったのだが、歴史の本を見るとややこしい事この上なかった。
皆ヘルムートさんなので、結局ミドルネームや姓で区別する羽目になっていたのだから。

「名前負けだよな。親父の事だから、名前のストックが切れたから付けたとか言いそうだけど」

「あの、俺のヴェンデリンは？」

「わからん。あの親父の命名基準ってのが、そもそも不明だし」

最近では良く話をするようになった上二人の兄達に、エーリッヒ兄さんも含めて四人で一斉に溜息をつく。

あんな僻地を継ぐのは嫌だが、それでもバウマイスター本家の当主になれるクルト兄さんが羨ましくもあり。

上の兄さん達の感情は、色々と複雑であるらしい。

「でも、もう戻りたくないのでは？」

「そうだな」

「あんな田舎暮らしとか、もう無理」

エーリッヒ兄さんの言う通りで、確かに上の兄達は王都で安月給の警備隊勤務とはいえ、あの薄い塩スープとボソボソの黒パンだけの生活は嫌なのだそうだ。

今はさすがに違うと思うが、それでもあの何の娯楽も無い不便な田舎は嫌なのであろう。

「非番には、郊外の森で部下達と狩りも出来るし」

「狩りくらいだな。あの実家の恩恵は」

実家があの僻地なので、バウマイスターの男子には弓を上手く使える者が多い。

上の兄達も、非番の日にピクニックも兼ねて王都近郊の森で狩りなどをするそうだ。

空気は美味いし、食料を得られて、売ればお金になる素材が手に入る事もある。

生まれのおかげで狩りは苦にならないし、無駄なお金も使わないで済む。

こんなに良い趣味はないそうだ。

「今度、ヴェルも一緒に行くか？」

「良いですね。エーリッヒ兄さんも行きましょうよ」

「そうだね。四人で、狩りにでも勤しもうか」

「なあ、ヴェル」

兄弟四人で狩りの相談をしていると、そこにエルが加わってくる。

「何だ？　エル」

「いつの間にか、家を出たバウマイスター家男子の派閥が出来ているぞ」

「人は、三人居ると派閥が出来るから」

「それは良く聞くけどな」

とは言っても、実家がこちらを放置しているので、こちらは出て行った者同士で固まるしかないわけだ。

確信犯的に、エーリッヒ兄さんの祝儀を出さないような手まで使う実家なので、またおかしな事をしないか警戒する必要もあった。

「普通は年長者が纏めるんだけど、うちは逆」

「エーリッヒは頭が良いし、ヴェルは魔法が使えるから」

家を継げない悲哀を共に経験しているせいで、家を出た兄弟同士は集まる傾向が強い。

ただ、運良く他の兄弟が婿入りなどで貴族になれたり、出世したりすると、その関係が呆気なく崩壊してしまう事も多いようであったが。

「俺達は、並の才能しかないからな」

とは言うが、警備隊で部下達を統率しているので、先の諸侯軍でも無難に兵を率いていたと聞いている。

軍で中隊長くらいなら、普通に勤まりそうではあった。

「うちは、クルト兄さんが一番微妙だと思う」

「従士長の家に婿に入ったヘルマン兄さんは、バウマイスター家では、一番剣に優れていたからな」

兄弟の中で一番体が大きくて見た目は少し怖いのだが、実際に話すと気さくで、領内の警備では上手く領民達を率いているそうだ。

自慢ではないが、俺はほとんど話をした事が無いので良く知らなかったのだが。

「クルト兄さんは、どうなのです？」

「最近、父上が衰えたらしくて独自に判断している節はあるな。家を出る前は、父上の言う事を良く聞く真面目な……」

「普通の人だな。うちの兄弟の中では……」

俺からの質問に、パウル兄さんとヘルムート兄さんがそう答えていた。

一番駄目でも、長男なので跡を継げる。

家の秩序の事を考えると、これは仕方が無いのであろう。

それに、領内の統治が駄目になるほど無能というわけでもないのだ。

平凡の平凡。

これが、上の兄さん達に共通したクルト兄さんへの評価であった。

「王都在住バウマイスター一族閥ねぇ……」

「そういえば、王都にもバウマイスター家があると聞いていますけど」

「あるにはあるよ」

「絶縁状態だけどな」

「なぜです？」

上の兄達の話によると、実家であるバウマイスター本家の起こりは、王都バウマイスター家のいらない次男が、山脈を越えて土地を切り開き家祖となったという事であった。

「領民であるスラム住民の選定と送り出しに、当面の資金援助にと」

「大分世話になったらしいけどな」

「ある程度軌道に乗ったら、こっちが連絡を絶ったらしいけど」

酷い話ではあるが、上の兄さん達も王都でその話は知ったそうだ。

パウル兄さんが、警備隊でのパトロール任務中にたまたま屋敷前を通りかかり、ついでなので挨拶に向かうと、えらくおざなりに対応されてその理由を聞かされたらしい。

「援助した分を、返せと言われるのが怖かったんだろうな」

「酷くて、何も言えない……。というか、返せよ」

「普通は、そう思うよな？」

うちの一族には、何かそういう駄目な血でも流れているのであろうか？

「ヴェルが有名になっても、顔さえ出さないからな。よほど、恨み真髄なのかも」

「また実家のせいで迷惑を受けるんですね」

「親戚だから優遇しろとか。金を返せと言って来ない分、常識的な人なんだと思う。俺も少し話をしただけだけど、そんな風に感じた」

その後は、話題をパウル兄さんの結婚に戻して食事会は楽しいままで幕を閉じる。

それと三日後に、エドガー軍務卿の紹介でヘルムート兄さんの見合いが行われるらしい。

断られる心配はまず無いそうで、見合いというよりは顔合わせだったのだが、その席になぜか俺達も呼ばれる事になってしまう。

「エドガー軍務卿が、見合いの後で会いたいそうだ」

「俺も、まだ二〜三回しか会った事が無いですよ」

一回目は、骨竜を倒した謁見の席で。

二回目は、グレードグランド討伐後の謁見の席で。

三回目は、確か誕生パーティーでプレゼントのお礼を言ったような記憶が……。

そのほとんどが、陛下との謁見の席で一緒になっただけだ。
というか、あまり話をした記憶すら無かった。

見た目は五十歳前後で、常に勲章が沢山付いた儀礼用の衣装に身を包んだ。
ブラウン色の角刈り短髪とカイゼル髭が特徴の、いかにも軍人と言った風貌の人であったのだが。

「俺なんて、直接に顔を合わせるのは初めてなんだけど……」

そんなわけで、俺は貴族同士の見合いの席に顔を出す事になってしまう。
ヘルムート兄さんのお見合いなので、保護者扱いなのかは微妙な線ではあったのだが。

「えっ！　この家となのか！」

三日後、ヘルムート兄さんのお見合いが予定通りに行われる事となった。
会場は、エドガー軍務卿の家臣が手紙を持参したのでそちらへと向かう事にする。

メンバーは、いつもの俺達五人に。
護衛役のエルはともかく、俺が三人も婚約者を連れて行って良いものか悩んだのだが、エドガー軍務卿の家臣の人は『是非に』と言っていた。

何でも、側室まで紹介する人は、相手に懐を開いていると思われるらしい。
ヘルムート兄さんの見合い相手に、良い印象を与えるそうだ。

そして肝心の見合い相手であったが、何とあの食事会で話が出た王都のバウマイスター家で。
場所も、以前にパウル兄さんが尋ねた屋敷と同じであった。

実際に一回行った事があるパウル兄さんが驚いているので、事実なのであろう。

「絶縁状態の縁戚と婚姻かよ……」

縁戚関係にある家同士の婚約は、別におかしい事ではない。
四代も前に別れているから、血縁的に見ると相当に離れてしまっているし、貴族で従兄妹同士の婚約などは別に珍しい事でもなかったからだ。

むしろ、絶縁関係にある方が問題であったのだ。

「我が主は、寄り子が縁戚と仲違いしている情況を憂慮されています」

王都のバウマイスター家は、エドガー軍務卿の寄り子なのだそうだ。
正確には、法衣侯爵家で代々王国軍の重鎮を輩出しているエドガー軍務卿の実家シュタイベルト家の寄り子に、ダウム男爵家という同じく法衣男爵家があり、その寄り子に王都バウマイスター家があるそうだ。

ダウム男爵家は、軍関連の仕事を世襲する法衣男爵家であったが、その職とは王都周辺にある森や河川などの管理であった。

軍の仕事とはかけ離れているような気もするが、普段は人がいない場所なので流民などが勝手に入り込んだり、人の住む場所で犯罪を犯した人間が逃げ込んだり、密猟者が出没したりと。

その発見と、排除や捕縛なども仕事に入っている。

たまに荒事もあるので、仕事が軍の管轄に入っているそうだ。

滅多には無いが、山賊団などの討伐なども請け負うらしい。

「皆様方のご実家と仲違いをした次の代に、王都のバウマイスター家はこの職を世襲するようになりました」

仕事は、王都近郊にある水源地も兼ねた森林地帯の管理であった。

スラムの住民が住み着こうとしたり、密猟を試みるので、それなりに仕事は忙しいようだ。

「当代の当主様は仕事ぶりも堅実で、ダウム男爵様の評価も宜しいのですが……」

この家も、子供が娘しか居ないのだそうだ。

そこで、ダウム男爵に婿養子の斡旋を依頼していたらしい。

「手頃な御相手を探している所に、ちょうどヘルムート様のお話が出まして……」

エドガー軍務卿が、常にいち騎士爵家の家庭事情などを把握している暇など無いはず。

たまたま俺の兄達が警備隊に居る事を知り、何とか縁を結ぼうと模索した結果、王都バウマイスター家への婿入り話を持ち込んだのであろう。

「（なら、先にパウル兄さんに話を持って行けよ……）」

俺は、エドガー軍務卿の間の悪さなのか、わざとやっているのか気になる部分を感じていた。

こういう時に、エーリッヒ兄さんの助言が欲しいと思う。

今日は普通に仕事なので、今日は付いて来て欲しいとは言えなかったのだ。

「パウル殿には、我が主が折を見て騎士爵家を任せるものかと」

王国の財政状況から考えても、そう簡単に貴族の枠は増やせない。だが、貴族の子弟達に、貴族家の数が飽和状態だと知られるのは困る。

希望が無くなったと、現存当主の暗殺にでも出られると困るからだ。

なので、大物貴族達や陛下との協議は必要であったが、ある程度は余剰枠が存在していた。

その余剰枠を増やすため、時折りあまりに酷い貴族は改易されるわけだが。

あとは、未開地の開発成功などで貴族家が増える事もあった。

うちの実家も、その一例である。

「我が主は、パウル様とヘルムート様の才能に期待しておりますれ

ば」

エドガー軍務卿の家臣の言葉に、上の兄達は苦笑していた。
彼らとて、自分の才能くらいは理解している。
貴族一家の維持なら出来るが、他に極端な才能など無い事を。

俺だって、魔法には自信があるが貴族としての才能など未知数なのだから。

「では、入りましょうか？　当主様もお待ちです」

エドガー軍務卿の家臣に促されてバウマイスター邸に入ると、玄関では三十代半ばの少し父に似た男性と、同年代のその奥さんらしき人に。

十八歳くらいの可愛い娘さんが出迎えてくれた。

「ヴィレム・ハンス・フォン・バウマイスターです。こちらが、妻のコリンナと娘のフリーデです」

「（似ているのか？）」

四代前に別れた家なので、容姿などはあまり似ていないとは思う。
共通しているのは、ダークブラウン色の髪くらいであろうか？

「ヘルムート・フォン・ベンノ・バウマイスターです」

ヘルムート兄さんを皮切りに順番に自己紹介を行い、それが終ると屋敷の中に案内されてリビングに通される。
メイドが全員分のお茶を淹れてくれてから、王都バウマイスター

家の当主ヴィレムさんが話を始める。

「パウル殿と初めて会った時に少しつれない対応をしてしまったが、別にこちらとしては含む物は無いのだよ。あれは、先祖からの申し送り事項でね」

「申し送り事項ですか？」

散々に援助して自立を助けたのに、向こうから勝手に縁を切られてしまった。

そこで、『いつか子孫とでも顔を合わせたら、文句を言っておけ！』という、四代前からの申し送り事項があったらしい。

「運良く、三代前の曽祖父が森林警備の世襲職を得ましてね。多分、二度と顔を合わせる事も無いのだし、恨み続けても仕方がないと」

「（金持ち喧嘩せずか……）」

確かに、同じ騎士爵家でも出て来るお茶とお茶菓子にえらく差があるような気がする。

というか、うちの実家では茶菓子など出ない。

薄いマテ茶のみであった。

「このお茶、森林マテ茶ですよね？　甘みが違いますし」

「さすがは、ホーエンハイム家のお嬢様。良くおわかりですね」

エリーゼは、出されたお茶が高級品である事にすぐに気が付いていた。

さすがは、お茶を淹れる事に関しては名人級の実力を持つエリーゼである。

「森林警護の役得ですから、無料ですけどね」

決められたエリアの森林を、不法侵入者や密猟者の手から守る。
最下級である騎士爵の者が多数任じられていたが、当たりを引くと大変に美味しい役職であるらしい。

「我が家が守る森林の奥に、森林マテ茶の木の自生地があるのです」

森林警護の役職を慰労無く行えば、ある程度その森林から産出する物を自由に得られる権利があったのだ。
あとは、人数を決めて入森料を狩人達に課したりも可能で。

爵位と役職以上に豊かな者が多かった。

「自生地を減らさない程度に収穫を行うと、副収入にも自分で飲んで楽しむ事も可能です」

「羨ましいですね。森林マテ茶の葉は」

この世界において、一番普及しているお茶は間違いなくこのマテ茶であった。
見た目は、前世のお茶の木と葉に良く似ている。
葉の色が、少し黄色がかっているくらいだ。

値段は本当にピンキリで、同じ重さの銀やそれ以上で取り引きされる王侯貴族専用の購入品に、庶民が飲む茎なども利用した安い茶葉と。

両方が存在していた。

そして高級品の方であったが、実はこのマテ茶の木。
元は自生している植物で、自然環境が困難な場所に生えている葉ほど甘くなるという性質を持っている。

その甘さも、砂糖のようなハッキリとした甘さではなく。
ほんのりと上品な甘さで、後味が残らない物ほど高級品とされていた。

最高級品は、北方アーカート神聖帝国の、標高八千メートル級の山脈頂上付近に自生している物。
これは、同じ重さの銀よりも値段が高かった。

環境が苛酷で三年に一度しか葉が採れないので、どうしても高くなってしまうし、採りに行くのに命がけなのもある。

そして次に貴重なのは、この原生林などに生えているマテ茶の木であろう。
葉の質が良いのだが、良いので野生動物に食べられてしまう事が多く手に入り難かったのだ。

「お茶の木の自生地警戒で、別に人を雇っているくらいですから」

売れば儲かるし、偉い人への贈り物にも最適なのであろう。
なるほど、役得というやつであった。

放置しておくと野生動物に食べられてしまう自然の高級茶葉を、森林警備のついでに保護管理の名目で採集する。

そんなに沢山採れるわけでもないし、王都に近いので警備は忙しい方の森に入る。

実際ヴィレムさんも、今日は見合いなので戻っていたが、普段は休息日以外は森の中にある管理小屋で生活をしているそうだ。

「一族の男手が欲しいのですよ。この屋敷と警備小屋と、交代で男が居た方が良いですし」

王都の治安は良い方ではあったが、スラムも次第に広がっているし、警備関連の仕事なので恨んでいる人がいるかもしれない。なので、出来るだけ早く一人娘に婿を入れたいのだと、ヴィレムさんは説明していた。

「そういうお話でしたら。私は、弟達ほど有能ではないですけど」

「ヘルムート殿は警備隊で部下を指揮しているし、うちの連中を上手く使って、真面目に根気良くやってくれれば良いのさ」

それなりに教育を受けているとはいえ、いくら貴族でもそう有能な人ばかりと言うわけでもない。

普通でも、真面目にノウハウに従って気長に勤める。

職務は森林警護なので、そのくらいで丁度良いのだそうだ。

何しろ、基本が何も起こらなければ御の字の、事件を待つのがお仕事なのだから。

「初代バウマイスター家から十二代。そこに居る、ヴェンデリン殿のような魔法使いなんて初めてですからな。うちは、本当に平凡な騎士爵家ですから」

どうせ最初から決まっていたのだが、お見合いは無事に終了する。
ヘルムート兄さんとお嫁さんのフリーデさんは、『あとは、若い人達だけで……』という言葉と共にデートに出かけていたが、思うに俺達の方が圧倒的に若かったりする。

『（お前、本当にどうでも良い事を気にするよな）』と、エルに指摘されてしまったが。

「ヴェンデリン殿は一番若いのですが、一番爵位も上なわけで」

式の日取りなどを相談していると、フリーデさん曰く。
俺が、王都在住バウマイスター家一門のトップなのだそうだ。

「我が王都バウマイスター家は、ヘルムート殿が婿入りして、事実上男爵殿の派閥に吸収されますから。要するに、貴族社会ではそう見られるという事です」

思いっきり、本家がハブられているような気がするが。
そうなる原因は向こうにあったし、どうせ王都の貴族社会は本家など微塵も気にしていないはず。

あんな僻地にあるので、知り合う機会すら無いのだから当然とも言えたのだが。

「ええと……、本家はほぼ孤立していて。分家のはずのヴェルをトップに、エーリッヒさんのブラント家とヘルムートさんの王都バウマイスター家が一門を形成していると」

「あとは、旦那様がパウル殿の独立した騎士爵家の創設を必ずや。

パウル殿も一門に入りますな」

イーナに続けて、今まで静かにしていたエドガー軍務卿の家臣が説明を付け加える。

「それで、ヴェルはブライヒレーダー辺境伯様の寄り子で、エーリッヒさんはルックナー財務卿の寄り子。パウルさんとヘルムートさんは、エドガー軍務卿の寄り子か。面倒くさいね」

「面倒だけど、貴族ってこんな物だと思う事にする」

ルイーゼからの指摘に、俺は半分涙目で答えていた。

「うーーーん。ヴェルを良く見ると、様々な柵（しがらみ）で雁字搦めのような……」

「ううっ、早く冒険者として働きたい……」

以上でお見合いの付き添いは終了していたが、最後にフリーデさんからとんでもない発言が飛び出していた。

「今年は三年に一度の、王国主催武芸大会です。ヴェンデリン殿も一度は出場しませんと……」

何でも、エドガー軍務卿から絶対にと言われているそうだ。

「あの、その大会って魔法は？」

「使えません」

「一回戦負けだな」

大会は、一週間後らしい。

なので、時間があったら最後の足掻きくらいはしてみようと心に誓うのであった。

それと、この後にエドガー軍務卿に夕食に招待されたのだが、特に面白い事も無かった。

パウル兄さんとヘルムート兄さんは、相手が雲の上の人なのでガチガチに緊張していて。

エーリッヒ兄さんは、所作は自然であったが内心では物凄く緊張しているようであったし。

俺はなぜか普通に振舞えていたが、それは普段からあの人を相手にしているせいであろう。

「（さすがは、大物貴族の食事だね。美味しいや）」

何食わぬ顔でデザートのお替りまで要求するルイーゼを見て、修行以外でも少しはアームストロング導師も役に立っているのだなと、改めて実感するのであった。

幕間十六　武芸大会前夜。

「全く、あの家は……」

翌日、俺はブライヒレーダー辺境伯に昨日のお見合いの結果を報告していた。

とは言っても、破談しましたなんて有り得ない。

いつに、どこで式を行いますとか。

フリーデさんとした話の内容などが、主な報告内容となっていた。

そして当然、あの話が出てくるわけだ。

バウマイスイター本家が、王都バウマイスター家から援助だけ引き出し、自立が可能になったら連絡すら寄越さなかった件と。

援助された分を、銅貨一枚も返していない件をだ。

「知らなかったのですか？」

「エーリッヒさんの祝儀と同じですよ。共に、事実を公表していません」

王都バウマイスター家としては、次代で世襲可能な職を得られたので返済を気にしなくなった。

というよりも、それでまたタカられでもしたら嫌だと思ったのであろう。

「援助名目なので、厳密に言うと借金ではないんですよね」

それでも、領地の開発が進んで余裕が出来たら、利子を付けなくても返すのが筋という物だ。
これは、貴族として当然と言っても過言ではない。

いや、人として当然とも言えた。

「せっかく得た役職なので、あの家に返済の催促に行かせる人手すら惜しかったんでしょうね」

手紙を送り、苦労して人を行かせても。
うちの実家が、『無い物は返せない』と言ってしまえばそれまでだ。

そんな人手があったら、俺でも森林警護に割くと思われる。
職務の安定こそが、次世代以降の生活の安定をもたらすのだから。

「そういうのを見越して、お金を返さないんでしょうね」

狭い当事者同士だけが知る金の貸し借りを行い、それを確信犯的に返さない。
一種の寸借詐欺と言えるかもしれなかった。
金額が、まるで寸借ではないとしてもだ。

「あと、せっかく得た役職にケチが付く可能性もですか？」

「ええ。大げさ騒ぎ立てて、スキャンダルにしようとする連中はいるでしょうから」

一族に金に汚い連中がいて、そいつ等が仕事の足を引っ張る可能

性があるのでクビにしましょう。
後任者として、我が家などはどうでしょうか？
足りない役職を得るために、ニート貴族はこのくらいの事は平気で行うそうだ。

「それも考慮して、何も言わずか……」

「結果的に良かったようですね」

王都バウマイスター家は、そういう事をしないで森林警護の職務に邁進し、結果的に騎士爵家としては裕福な家になっている。

俺は、少しはうちの実家も見習えば良いのにと思ってしまう。

「式には、私も出ます。あとは……」

あくまでも極秘裏にだが、うちの実家が返していない援助金を慰謝料込みで王都バウマイスター家に返済しないと駄目らしい。

「秘密ですけど、その件で両家は縁切り状態ですからね。あとは、また祝儀ですか……」

エーリッヒ兄さんの時と、同じ問題に直面するわけだ。
パウル兄さんだって、独立した騎士爵家がエドガー軍務卿の後ろ盾で貰える事になっている。

当然、式では祝儀を出す必要があったのだ。

「全部、俺が……」

「いえ、私が出します。バウマイスター男爵が出した事にしますけど」

ブライヒレーダー辺境伯にも、南部最大の実力者として、寄り親としてのプライドがあるのであろう。

全て自分が払うと宣言していた。

「うちの経理帳面上は、全部バウマイスター本家の借金ですけどね」

どのくらいの額になるのかは不明であったが、間違いなく現実に降りかかったら、バウマイスター家を苦境に追い込む額になるはずであった。

「返済は求めませんか」

「うちの先代の罪状を考えるに、黙っているしかないでしょうね」

どちらも、叩くと埃が出る問題というわけであった。

それでも帳面には記載されていて、その返済が催促されないのはブライヒレーダー辺境伯からの指示が出ているからに過ぎない。

将来的に、大きな爆弾になる可能性を秘めていたのだ。

「そちらは、そのくらいで良いと思います。ところで、武芸大会に出るとか？」

「何か、強制らしいですね……」

貴族ならば、最低一度は王国主催の武芸大会に出るのが常識なのだそうだ。

相変わらず、うちの実家は例外なのだが。

「この国で、貴族に任じられた際に言うでしょう？」

「『我が剣は～』という奴ですね」

例え、戦場のメインウェポンが弓と槍でも、魔法が戦術・戦略級の秘密兵器として、両国がこれをしてはいけないという秘密紳士協定が結ばれていても。

貴族は、華麗に剣を振るってこそ尊敬されるのだそうだ。

今の全貴族の中で、俺も含めて剣をちゃんと扱える貴族が何人いるのか微妙な件は置いておいてだ。

「私も、若い頃に出た事があります」

まだ爵位を継承する前に、やはり一度だけ出場した事があるそうだ。

「どうでした？」

「見事に予選一回戦負けです。私は、剣の才能がマイナスな男ですから」

子供の頃に剣の先生から、『練習中に、怪我だけはしないでくださいね』とだけ言われていた生徒であったらしい。

さすがの俺でも、そこまでは酷くなかったはずだ。

「予選一回戦負けでも、別に問題はないですけどね」

「そうなのですか？　ブライヒレーダー辺境伯様は、軍人じゃないから？」

「別に軍人でも、そう問題というわけでもないですよ」

一応の決まりとして、最低一回は出場するようにと言われているだけだからだ。

それと、成績と軍人としての出世との因果関係であったが、成績が良ければ査定にプラスされるが、それは中級指揮官までらしい。

「上級指揮官になりたければ、指揮能力とか、後方担当能力とか、色々と必要ですし」

総大将が、その優秀な剣技で敵を次々と切り倒し。

という戦況になったらその時点で負けなので、剣の腕はさほど重視されないそうだ。

むしろ大軍を整え、補給を含めた後方支援体制を確立し、的確に指揮を行える者。

何でも、演習の時に査定を受けるそうで、ここで評価されないと出世できないそうだ。

「腕っ節だけ良くても、前に出されて終わりでしょう？」

「まあ、そうですね」

軍人なのだから、偉くなるには軍勢を率いる能力が必要となる。

ただの剣の達人では、有名な冒険者か剣術師範か前線で有能な小隊長くらいで終ってしまうであろう。

「それに、バウマイスター男爵は軍人にはならないのでしょう？」

「はい」

「じゃあ、問題ないですね。目標予選一回戦突破でも良いじゃないですか」

少し情けないような気もするが、今から努力して剣が上手くなるわけでもない。

ブライヒレーダー辺境伯の言う事は正しかった。

「バウマイスター男爵には、竜をも殺す魔法があるから良いじゃないですか。私なんて、それすら無いんですよ」

それに、男爵以上の貴族が、変に剣など武芸の達人である必要もないそうだ。

むしろ駄目で、そういう人を雇わないとという状態こそが好ましいと。

「何でも出来ると、嫌味に思われますしね。あと、武芸大会ですけどね」

剣術と、槍術と、弓術と、素手か手甲による格闘術の部門に別れているとのブライヒレーダー辺境伯からの説明であった。

「個人的には、弓の部に……」

王国有数の名人などと自惚れてはいなかったが、一番マシな成績になるような気がしたからだ。

「残念でしたね。貴族家の当主と跡継ぎは、必ず剣術の部門に出場しないといけないんです」

貴族は『我が剣は～』なので、必ず剣術の部門なのだそうだ。

「しょうがない。駄目元で……（待てよ。魔法で色々と強化をすれば……）」

「ああ、言っておきますけど。全部門で魔法や魔力の使用は禁止です。あくまでも、純粋な技を見るための大会ですから」

ブライヒレーダー辺境伯の言葉に、俺の最後の希望が音を立てて崩れ落ちるのであった。

「武芸大会であるか。某も、昔に一度出たのである」

ブライヒレーダー辺境伯の元を辞してから瞬間移動の魔法で王都の屋敷に戻ると、そこではアームストロング導師が優雅にマテ茶を飲みながらクッキーを頬張っていた。

実はこの人、見た目によらず甘い物が好きなので良く食べているのだ。

そしてその席で、武芸大会の話題が飛び出す。

「魔法禁止ってのは、辛いですね」

「大半の人は、魔法が使えない故に」

純粋な技量と経験を見る大会なので、そこに魔法や魔力を持ち込まれてもという事らしい。

もし導師が本気を出せば、どんな剣の達人でもプチっと潰されてしまうであろうし。

「ただ、規定が曖昧な部分もあり」

魔力の量が常人並かそれより少し多いくらいでも、その魔力を上手く身体能力などに上乗せして強い人も存在している。

ところが、こういう才能は半分本能なので、いきなり使うなと言われても難しい。

使われている魔力の量も少ないので、こういう人は黙認されているそうだ。

「判定員が魔力量を測定し、常人の平均魔力量を超える使用が確認されると失格になるのである」

「面倒な事をしてますね」

俺達は、ちょっと魔力を使っただけで失格になってしまうそうだ。

「純粋な剣術のみか。予選一回戦負けだな」

運良く、俺と同じような記念出場貴族に当たれば勝てるかもしれない。

だが他は、常連出場者のプロ軍人達に、近衛を含めて騎士団に所

属している騎士達に、見習いで毎日厳しい鍛錬に明け暮れている若者にと。

他にも、名を挙げようと、在野の冒険者や浪人達も多数出場する。
本選に出場できるのは、百二十八名のみ。
予選を突破するには、最低でも七回は勝たないといけない過酷な大会でもあったのだ。

「冒険者や浪人は、特に気合が入っているのである」

成績優秀者には、貴族からのスカウトが入り易い。
護衛や、少数の諸侯軍を強化する即戦力として。

この戦争が無い時代、余所者が貴族家に仕える事が出来るかもしれない唯一の機会でもあったのだ。

「ところで、導師はどうだったのですか？」

「うむ。某も、父に言われて剣術で出る羽目になり……」

導師も剣術は苦手なようで、それでもパワーはあるので予選四回戦まで行ったそうだ。

「凄いなぁ。予選四回戦……」

「確かに、四回戦は凄いですね」

更にそこに、うちの屋敷で結婚式の打ち合わせをしていたエーリッヒ兄さん達も姿を見せる。
パウル兄さんとヘルムート兄さんは、現在結婚式と婿入りに向け

て忙しい日々を送っていた。

「四回戦でも凄いのですか？」

「ヴェル、私は予選二回戦敗退だったんだ」

下級官吏になったばかりの頃、その頃は純粋な上司であったルートガーさんに『お約束だから』と言われて出場したそうだ。

「一回戦の相手が、某伯爵家の跡取りでね。助かった部分もあるんだ」

貴族のボンボンで、物凄く弱かったから勝てたそうだ。

確かに、エーリッヒ兄さんの剣の腕前は、もしかすると俺よりも弱いかもしれなかった。

「ちなみに、パウル兄さんは？」

「俺は、三回戦まで行った」

「凄いですね」

「俺も、トーナメント運だよな。アレは……」

対戦相手が、自分と同じような見習い警備隊員や、貴族の跡取りであったそうだ。

「トーナメントの隣の山がな。たまたま人数の関係でシードだったんだ。そこに、男爵家の跡取りが居てな」

それでも、二回戦突破には違いない。
俺も、エーリッヒ兄さんも、ヘルムート兄さんも。
パウル兄さんを尊敬の眼差しで見つめていた。

「さすがは、我がバウマイスイター家。物凄くレベルが低いぜ……」

他も、よほどの軍人家系であるとか、親が教育熱心でもないとこんな物らしいのだが。

「参考までに言うと、俺も二回戦敗退な。初戦の相手が、同じ警備隊で俺よりも弱い奴だったから」

そして、ヘルムート兄さんも一回戦は突破しているらしい。
俺は少し、プレッシャーを感じていた。

「何と言うか、まるで心躍らない話ですね。一回戦が突破したい……」

「パウル兄さんのように、三回戦まで行けたら大した物だけどな。
でも、現実はその程度だぜ」

何かのサーガの主人公のように、そう簡単に本選に出たり優勝をかけて決勝戦とか。
そういう事は、なかなか無いようだ。

俺には、元々そういうシナリオは有り得ないのだが。

「ベテラン冒険者とかに当たってみるとわかる。呆気ないほど簡単に負けるから。そんな奴でも、まず本選出場は奇跡だし」

加えて、そんな凄腕でも数の暴力には無力となる。
軍がそういう人材に、前線で活躍する事しか期待しない最大の理由でもあった。

「うちの兄弟はその程度だと考えても、エルヴィンや、イーナ嬢やルイーゼ嬢ならいけるんじゃないのか？」

「エルヴィンなら、予選五回戦くらいまではいけると思うな。トーナメント運にもよるけど」

貴族の目に留まるには、予選四回戦を突破する必要があるようだ。
逆に言うと、そこを突破できないと困った事があるかもと、パウル兄さんが言う。

「ヴェルの男爵家は、新興も良いところだろう？　従士長のエルヴィンが不甲斐ない成績だと、売込みが激しくなるかもしれないのさ」

あの程度で従士長なら、俺の方が使えるはず。
成績がエルよりも上で、現在求職中の連中が押し掛ける可能性があるそうだ。

「でも、剣術だけ強くてもですよね？」

「ああ、それだけで身近に置くと危険だな」

その剣に優れた浪人が敵対している貴族の差し金で送り込まれた刺客で、雇い入れた途端に剣で刺し殺される未来など想像したくもなかった。

「とにかく、エルには頑張って貰わないと」

それから暫く話をした後。
三人の兄達は帰る事になり、外まで見送りに出ると庭ではエルが懸命に剣の練習をしていた。

「大会が近いからだね。目指せ、予選五回戦突破くらい？　ヴェルは、一回戦突破だっけ？」

「はい、とにかく一勝ですよ」

エルの練習を見ながら、エーリッヒ兄さんとそんな話をしているとエルがいきなり声を荒げる。

「俺は、予選突破を狙っているの！」

現在、近衛騎士団に所属するワーレンさんから剣術を習っているエルからすると、この大会で好成績を挙げる事は必須条件らしい。

「何と、崇高な目標……」

「イーナだって、懸命に練習しているし。ルイーゼだって、そうなんだぞ」

魔力を込められずに技のみで戦うせいで、イーナとルイーゼにもハードルが高い大会となっているそうだ。
二人の場合は、別にそこまで好成績を挙げなくても良いような気もするのだが。

「俺は、勝たねばならぬのだ」

「そうですか……」

俺達は、必死に剣を振るうエルに心の中で声援を送るのであった。

「しかし、一回戦の壁が……」

「ヴェルにトーナメント運があると良いね」

「本当、それのみですよ」

エーリッヒ兄さんの発言は、俺に対してかなり失礼とも受け取れるのだが、事実なので俺はまるで気にしていなかった。

そして、武芸大会開催の日が訪れる。

幕間十七　武芸大会本番。

「……」

「あの、ヴェンデリン様？」

「今日のお弁当、楽しみだなぁ」

遂に始まった武芸大会初日。
今日は、予選の大半を消化する予定になっていた。

何しろ出場者が多いし、槍術、弓術、格闘技の部門もあるので一日で終るはずがないからだ。
メインの試合は、前に俺がヘルター公爵と決闘を行った王立コロシアムで行われる。

本選なので、二日間をかけてゆっくりと行われるのだ。
なので、ここで試合を出来る人は本選出場者のみであった。

あとは、王都各地にある道場や演習場などを指定されて、そこで予選を行うのだ。

「弁当よりも、試合の方を気にしろよ」

「ほぼ負ける予定の試合に、気などかけん！」

「そこまで言い切るかね……」

呆れるエルであったが。

朝、俺とエルは剣術部門の予選に、イーナは槍術部門の予選に、ルイーゼは格闘技部門の予選にと屋敷を出発していく。

部門によって参加人数に隔たりがあるものの、先に負けた人間がこのコロシアムに戻って来る予定だ。

今日は、一番参加人数が少ない格闘技部門の本選一回戦がコロシアムで行われる予定だからだ。

そして、約二時間後。

「少年、一回戦負けであるか？」

「はい……」

一応男爵なので、俺は関係者がすぐに座れるように大会期間三日間分のボックスシートを購入していた。

このボックスシートならば、特等席で十数名くらいなら余裕で観戦できるからだ。

飲み物や食事なども出入りの業者から注文可能であったが、うちには食事とお茶のプロであるエリーゼが存在している。

彼女は朝早くから起きて、大量のお弁当やお菓子などの準備をしていたようだ。

「聞いた。ワーレン様が相手だったって……」

「近衛騎士団の中隊長とか、ヴェルのトーナメント運って……」

万を超える人間が出場する剣術部門において、一回戦でエルの剣

術の師匠であるワーレンさんと当たってしまう。

果たして、こんな不幸があっても良いのであろうか？

俺のあまりの不幸ぶりに、パウル兄さんとヘルムート兄さんも絶句していたほどだ。

魔力剣の使い手であるワーレンさんには、魔力を使えないという不利がある。

それは俺も同等で、条件的には互角なのだが、元から持っている剣技に差があり過ぎた。

やはり、伊達にその実力を買われて近衛騎士団に推薦されたわけではないようだ。

試合開始数秒後、気が付いたら喉元に剣先を突き付けられて降参する羽目になっていたのだ。

魔法さえ使えれば、まずは魔法障壁で防げる攻撃であったのだが……。

これを、世間では負け惜しみとも言う。

『ええと、すまないとしか言いようが……』

『ははは、俺には魔法がありますし』

『竜を倒せる凄さだからね』

試合後の、ワーレンさんと会話が虚しかった。

会場の観客も、話題の竜殺しの英雄の呆気ない一回戦負けに唖然としている。

だが、俺の剣術なんて所詮はこんな物なのだ。

実家で行っていた早朝の訓練は、アレはきっと基礎体力トレーニングだったのだと。

「そもそも、坊主の剣術に最初から期待している人なんていないから。エルは、どうなんだ？」

あまりに酷いブランタークさんの発言ではあったが、事実なのでまるで否定できなかった。

「一回戦は、余裕で勝っていましたよ」

同じボックスシート内に座るブランタークさんに、エルの現状を説明する。

完全に、行楽気分なのであろう。

彼は、エリーゼが準備したお弁当の中からオツマミに向くおかずを食べながら、俺が自作した酒をホロ酔い気分で飲み続けていたからだ。

「そうか」

「完全な酔っ払い……」

「今日は、坊主が災難に巻き込まれないだろうからな。このまま休養モードで行く」

「また何かあったら？」

「知らん。導師も傍に居るから大丈夫だろう？」

おかしな公爵に決闘を申し込まれたり、胡散臭い不動産屋に浄化ばかりさせられたり、おかしなカバの保護を依頼されたりとか。本当、王都に居ると碌でもない事ばかりに巻き込まれるのだ。

なお導師であったが、彼も同じボックスシート内でエリーゼが作ったお菓子を食べながらマテ茶をガブ飲みしている。

導師にかかると、かなり良いお茶なのに井戸の水でもガブ飲みしているようだ。

お菓子の方も、次々と容赦なく口に入れていて、見ていて少し胸焼けがしそうであった。

「エルの坊主も、一回戦くらいはなぁ」

「エルヴィン少年は、努力していたのである！　きっと、結果は付いて来るのである！」

エルは、初戦から中堅レベルのベテラン冒険者と当たって苦戦するかと思ったのだが、数分で呆気なく相手の剣を弾き飛ばしていたのだ。

俺はエルの日頃の訓練など見ていないので、まさかここまで強くなっているとはと驚いていた。

「まずは、順当に勝ちか」

陛下からの要請という理由もあったが、ワーレンさんに言わせるとエルは剣術の才能があるそうだ。

王都に来てから一年と少しで、もう俺なんて相手にもならない技量を手に入れたのも頷けるという物であった。

先生がとても良いわけだし、その前に俺が大した事がないという点も大きかったのだが。

「坊主以外、誰も戻って来ないな」

「言わないでくださいよ」

しかし、時間が午後の三時を越えると、最初にルイーゼが戻って来る。

彼女は不本意そうな表情を崩しもしないで、俺の膝の上に座っていた。

まるで、慰めて欲しい子猫のようだ。

「魔力使用無しは、魔闘流習得者には不利だと思うんだ……」

ルイーゼは懸命に、今までに習った魔闘流の型だけで戦ったそうだ。

体が小さく力も無いので、スピードで翻弄して相手の力を利用するような技を連発。

おかげで予選四回戦までは突破していたが、五回戦で同流派のベテランに敗れてしまったと悔しそうに話していた。

「十三歳で、初出場で、四回戦突破は凄えな。坊主の四倍以上凄え」

そこまで残れると、騎士爵や準男爵などで家臣を雇いたい人がリ

ストに入れるレベルだそうだ。
若くて才能のありそうな若者を青田買いし、時間をかけて自分の家風に見合った人材に育てる。
この世界でも、新卒、未経験者採用に似たような事をする貴族が居るようだ。
いくら強くても、年配でベテランだと、癖があって使い難い事も多いからなのだそうだが。

「言われると思った。しかし、傷だらけだなぁ」

格闘技部門なので、どうしても相手の攻撃が掠ってしまう事が多かったからだ。
ルイーゼの腕や顔には、薄く痣や傷などが残っていた。

「ヴェル、治してよ」

「会場にいる神官から、治して貰えば良かったのに」

試合で怪我をする人は多いので、会場には教会が派遣している治癒魔法使いが複数待機している。
俺はてっきり、その魔法使いに治して貰っているとばかり思っていたのだ。

「そこは素直に、可愛い婚約者を治したいと言って欲しいけど」

「はいはい、治療でございますね。お嬢様」

「道着の中にも傷があるんだけど、見てみたい？」

「場所を弁えたまえ」

「でも、本音では？」

「見たいがな！」

俺は、水系統の治癒魔法で一気にルイーゼの傷を全て治していた。

「ヴェルの治癒魔法って、エリーゼのと同じくらい効くね」

「ヴェンデリン様は、魔力が強いですから」

効率の問題もあるが、それは魔力を十使うよりも五十使った方が効き目は強いはず。

ルイーゼの傷はかすり傷程度なので、特に苦労も無く全ての傷を綺麗に治していた。

「魔力の節約は、進歩はしているか。要修行継続だけどな」

「それは、自覚していますから」

「ねえ、イーナちゃんも戻って来たよ」

戻って来た時間的に考えて、かなり良い所までは行ったはずのイーナなのに、なぜか彼女は腑に落ちない表情を浮かべたままであった。

「イーナ？」

「予選六回戦、これで勝てば本選という所で負け」

トーナメント運もあったが、イーナもここ一年ほどで相当に腕を上げたようだ。

「不本意かもしれないけど、初出場にしては良い成績じゃない？」

「それは、そうなんだけど……」

「じゃあ、何が不満なんだ？」

「不満と言うか、納得がいかないと言うか……」

イーナの六回戦の相手は、何とあの一時期屋敷前で雇って欲しいアピールを続けていた『槍術大車輪』の人であったらしい。

しかも、彼はとても強かったそうだ。

「私の槍術の先生にも負けていないと思う。むしろ、もっと強いかも……」

「あの人、そんなに強かったんだ……」

あの常識ある人を引かせるパフォーマンスのせいで、彼は諸侯軍編成の際にも選ばれていないし、その後も暫くは屋敷の前で雇って欲しいアピールを続けていたが、敢えて無視もしていたからだ。

「あんなパフォーマンスをしないで、普通に応募すれば良いのに……」

たまに居るタイプである。

結構スペックは高いのに、何かを間違えていて目的を達成できな

い人なのであろう。

「それで、試合後に話をしたんだけど……」

あの槍術大車輪の人は、その名をローデリヒさんと言うそうだ。
しかも、意外な人物と縁戚であるらしい。

「ルックナー財務卿の？」

「弟が、商人の娘に産ませた子らしいわ」

甥という事になるのだが、母親が正式な側室でもなく、貴族の血を引いているが貴族籍にも入っていないそうだ。

「話してみると、意外と多才な人で……」

まず、母親の実家である商家で育てられているので、読み書き計算に、一通り商人の業務を全て行えるらしい。
帳簿付けに、決算処理に、各種税金の計算まで出来るそうだ。
商法や、商売に関連する法律などにも詳しいそうだ。

「ある意味、ルックナー財務卿の甥だよね。でも、なぜに槍術を？」

「子供の頃は体が弱ったから、その鍛錬のためにだと」

「はあ？」

あとは、なぜに仕官を目指しているのか。
これは、自分の母親の兄が既に商会の当主に就任していて、その伯父に当たる人物は甥ではなくて、自分の子供に商会を継がせたい。

なので、邪魔者扱いされてしまったらしい。

なまじ、ローデリヒさんの出来が良かったのも良くなかったそうだ。

自分の息子の部下にして、下克上でもされたら困ると思ったのであろう。

あと、ルックナー財務卿からの支援は難しい。

何でも、爵位継承や財産相続のゴタゴタで、ルックナー財務卿と弟の仲の悪さは宮廷でも有名らしい。

道理で、紹介状一つ持っていないわけだ。

「商人の世界も大変だなぁ……。でも、体を鍛えるための槍術で本選出場？」

真面目に槍術に人生を賭けている人から見ると、少し不愉快な人物に見えるのかもしれない。

例え、本人に悪気は無くともだ。

「ヴェル、私なんて彼に負けたんだけど」

「ええと、予想外の才人であったから仕方が無いという事で……」

「でも、変な人なのよねぇ……」

確かに、まだ遠目でしか見た事が無かったが、なぜに槍で大車輪をするのか良くわからない人ではあった。

見た目は身長百八十センチほどで、中肉中背ながらも良く鍛えられているように見える。

この世界でも珍しい、緑色の髪の好青年にしか見えないのだから。
『槍術大車輪』の掛け声からして、相当に元気な人でもあるようだし。

「ええと、使えそうな人だからキープしておこうか？」

「ヴェルがそう言うと思って、連絡先は聞いておいた」

どうせ成人したら冒険者になるので、王都の屋敷を任せる人を探していたからだ。
金勘定が出来て腕っ節も良いのだから、候補に入れておくのも良いであろう。

「ついでに、槍術でも教えて貰ったら？」

「あの人って、強いんだけど……」

試合中でも大車輪で、普通の人が真似をするとかえって隙が出来てしまうのだそうだ。
どこの流派かと聞かれてもイーナにもわからず、多分ほぼオリジナルのはずであろうと。

「常人には真似できずか……。まあ、良い所まで行けたんだから」

「それも、そうよね」

「次があるかは知らないけど」

少なくとも、俺には次は無い。

というか、必要が無かった。

「ところで、ヴェルはどうだったの？」

「ふっ、良くぞ聞いてくれた！」

対戦相手は、近衛騎士団で中隊長に任じられている魔法剣の名人ワーレン卿。

彼は、魔力無しでもその剣技に一点の曇りも無く、試合開始直後から鋭い剣を振るってくる。

そのあまりに素早さに、それでも六歳の頃から毎日……。

たまに休みはしたけど、実家で剣の基礎修練に取り組んでいた俺は……。

「負けたのね？」

「呆気ないほど簡単に負けた」

冷静な表情で聞くイーナに、俺も冷静な表情で答える。

「一回戦で？」

「決まっているじゃないか」

「そこで、自慢気に即答しなくても！」

考えてみるに、次男のヘルマンが少し強いくらいでうちの実家に剣に長けた人間などいないのだ。

バウマイスター家に代々伝わる自己修練方法とは言いつつも、朝

に一時間くらい本当に基礎的な事をするだけ。

あの程度では、厳しい剣術の世界基準で言うと。

中国の老人が朝にする太極拳や、日本のラジオ体操レベルであったのであろう。

何事にも、習得には努力が必要なのだと。

魔法ならば毎日日が暮れるまで、いくらでも時間をかけて練習していたのだが。

「俺を、剣術部門に出すこと自体が間違っている」

「確かに、そうかも。でも、魔法部門なんて聞いた事が無いけど」

「それには、理由があるのである！」

イーナの疑問に、すぐにアームストロング導師が答えていた。

その手には、自分専用の大きなティーカップと、エリーゼ特製のスコーンが握られていたのだが。

「魔法使いは少ない故に、そう大勢で王都に集まれないのである！」

人数が少ないのに任せる仕事は沢山あるので、大会で優劣など競っている時間と魔力が惜しいのだそうだ。

「あとは、死人が出る可能性もある故に」

剣などでも死人が出る事もあるが、魔法に比べれば圧倒的に少ない。

更に、会場内で魔法を撃ち合うので、強力な魔法障壁を張れる人

員を準備しないといけないなど。

大会を開催するには、ハードルが高いそうなのだ。

「納得しましたけど、エルはどうなったんでしょうね？」

「まだ残っているはずだけど……」

イーナが答えている間も、試合会場では格闘技部門の本選一回戦が始まっていた。

初日に全くコロシアムで試合をしないのも観客から苦情が出るので、行われているのだそうだ。

元々の身体能力の差なのか？

前世の格闘技の試合とは比べ物にならない、迫力の試合展開であったが、特に知り合いも居ないので流して見ていただけであった。

「何か、年配の人が多いね」

「技を競うからだよ」

ルイーゼの説明によると、あくまでも技量重視の大会なので比較的ベテランが残り易いそうだ。

特に、武芸師範などが多い格闘技部門では、その傾向が顕著なのだそうだ。

「でも、現実の強さは違うと？」

「大半の本選出場者に負ける気はしないけどね。ボク」

中級から上級くらいの魔力があって、それを魔闘流に使用できるのだから当然とも言えた。

「じゃあ、何でこの大会ってあるんだ？」

「『総合戦闘力ではイマイチだけど、毎日真面目に鍛錬して技術は優れているから！』と証明するためだと思う」

「ルイーゼ嬢の言う通りである！　我らが全力で戦闘を行えば、まず勝てる人間などおらぬ故に」

他にも、技量が優れているという事は、その人を雇うなり仕事を頼めば、他の人に指導はしてくれるという事になる。

在野の浪人の売り込みと、技量を後進へと伝える指南役としてのアピール。

この二つが、出場者達の主な目的なようだ。

「それを聞いたら、何かつまらなくなった」

普通、こういう武芸大会というのは盛り上がるはずなのに、事情を聞くと途端に詰らなくなってしまうから不思議だ。

俺は、エリーゼが作って来た弁当の方が気になり始める。

中でも、味噌漬けにした猪肉を焼いたおかずが御飯と合って美味しそうであった。

ちなみに、調理方法を教えたのは俺である。

「それは、坊主が一回戦で負けたからだろう？」

「そんな事はないですよ」
「俺は、十分に楽しんでいるんだけど」
ブランタークさんの場合は、美味しいツマミとお酒があれば何でも楽しいはずなので、全く当てにはならなかったのだ。
「あとは、関係者はエルだけか」
「あのさ、話の途中で悪いけど……」
「居たのか、エル」
いつの間にか、エルは戻って来ていたようだ。
しかも、少し申し訳なさそうな表情もしていた。
「負けたのか？」
「六回戦で、ワーレン先生に当たった」
「お前もかよ！」
さすがに、まだ経験の差で剣の師匠であるワーレンさんには勝てなかったようだ。
俺に至っては、どうすれば勝てるのか？
というレベルなのだが。
「何か、終わった感が一杯だなぁ」
前世で、自分の高校の野球部が、甲子園の予選で敗退した直後に

感じるような感覚。
とでも言えば良いのであろうか？

「六回戦まで行ったんなら、問題はなくないか？　しかし、何でみんなこんなに楽しそうなのかね？」

前世で読んだファンタジー小説や漫画では、武芸大会ともなると大変に盛り上がる物であった。
だが、この世界の魔法が使えない武芸大会はどこかつまらない。

なのに、観客達は固唾を飲んで結果を見守っている。
俺は、少し不思議に感じていた。

「この武芸大会では、王国が胴元になって盛大に賭けを行うからな。収益は、慈善活動の資金にするらしいけど」

「聞かなきゃ良かった……」

残り二日で、武芸大会は予定通りに全ての試合を終了させていた。
何とも盛り上がらないという俺の感情とは別に、ルイーゼは一人小躍りしていたようであったが。

「やったぁーーー！　格闘技部門の賭けで当たりだ！　倍率二十三倍！」

「賭けてたのかよ……」

その後二日間の試合も、特に何のトラブルもなく終了し。
俺達のした事と言えば、試合会場のボックスシートで来られる関係者だけで座り、エリーゼ特製の弁当やお茶に、俺が準備した酒を

楽しむ宴会の席となっていた。

試合は、ただの風景と化していたのだ。

「でも、試合に出ている連中が変にチラチラとこちらを見るな」

「そりゃあ、坊主に雇って欲しいんだよ」

「そんなに脳筋ばかりいらないですよ」

俺が欲しいのは、王都の屋敷を維持し、使用人達を統率する人材なのだ。

いくら剣の技術が優れていようと、それは雇用のミスマッチというやつであろう。

「あの『槍術大車輪』は？」

ブランタークさんも、以前に屋敷の前で槍を振り回していた『槍術大車輪』さんを見ていたようだ。

王都屋敷の管理人にする話をすると、意外そうな顔を見せていた。

「あの人、帳簿とかも付けられますから」

「人は見かけによらねぇ……」

この三日間の武芸大会で俺が得た事は、王都屋敷の管理人と、人は見かけによらないという言葉の実地経験のみであった。

第四十話　十五歳になり。

「疲れた……」

「ボクも……」

「某は、疲労感などまるでないのである！　さあ、某に最高の一撃を！」

俺達が王都を拠点としてから約二年半後、数日前に十五歳になった俺は、今日もルイーゼと一緒にアームストロング導師との修行に励んでいた。

『一体、どこの連載バトル漫画だよ！』と言わんばかりの二年半であったが、その成果は十分に出ているはず。

出ていないと、俺が精神面で悲惨な事になってしまう。

俺は相変わらず魔力が上がり続けていて、更に新しい魔法も大量に覚えていた。

その中でもやはり注目すべきは、アームストロング導師から習った身体能力超強化、高速飛翔、魔導機動甲冑の三つであろう。

魔力はバカ喰いするがその威力はお墨付きで、数日前にはアームストロング導師から合格を貰っていたので、もう十分に実戦で使用可能であった。

まあ個人的には、普段は使用せずに他の遠距離魔法で全てを済ませたいものであったが。

というか、これを使わないと戦えない敵とは遭いたくないものだ。

それと、俺と一緒に指導を受けていたルイーゼであったが、彼女も身体能力強化、高速飛翔、魔導機動甲冑、瞑想の四つの魔法の習得に成功していた。

かなり魔力が向上した影響で、今までは魔力を体に巡らせるだけであった状態から魔法の習得まで行ったらしい。

なお、彼女はオリジナル魔法である『瞑想』も習得している。

これは、瞑想を行って己の傷を治すという、俺やアームストロング導師ですら習得できなかったかなり特殊な魔法でもあった。

他人を治せないのは残念であったが、自分の傷を治せるので戦闘ではかなり重宝するはず。

同じパーティーメンバーから見ても、複数の負傷者が出た時に自分で何とかしてくれるメンバーがいると非常に楽なのだ。

以上のような経緯があり、今日は最後の一区切りという事で三人で模擬戦闘訓練を行っていた。

いや、言葉は正確な方が良いであろう。

この二年半、三人はほぼ毎日模擬戦闘訓練と称して、王都郊外にある原野で模擬戦闘ばかり行っていた。

限界まで戦って膨大に魔力を消費すれば魔力量は増えるし、他の訓練は模擬戦闘が終わってから行えば良いからだ。

唯一の誤算と言えば、『軍の練兵場が壊れてしまうので、誰もいない場所での訓練を希望します』と軍のお偉いに言われてしまった事であろうか？

それも、この大陸にはいくらでも無人の土地があるのでまるで問題はなかったのだが。

そんなわけで練習場所には事欠かなかった俺達であったが、問題なのは旗振り役であるアームストロング導師が異常にハイテンションであった事であろうか。

何しろ、アームストロング導師の魔法は規格外だ。

竜を、ハンマー状に魔力で変えた杖や、魔導甲冑越しとはいえ素手で殴り。

その尻尾を掴んで放り投げ、ブレスは魔力を物質化した鎧や武器で防ぎ、切り裂いてしまう。

当然誰かに教えようにも、そうは真似できるものではない。

もし強引に他の魔法使いに教えようとしても、かえってそれが迷惑になってしまう。

通常の魔力しか持たない魔法使いであると、すぐに魔力が切れてしまうからだ。

そのような理由があって、己一人で研鑽を続けていたところに、魔力の量は多かったが当時は魔法が使えずに実家の道場で魔闘流を修めたルイーゼと、魔力が自分をも上回っている俺が現れた。

その事実に狂喜した彼はこの二年半、俺とルイーゼを毎日のように過酷な修練で振り回していたのだ。

だが、それも今日で終わる。

明日にパーティーメンバーで一番誕生日が遅いイーナが十五歳に

なるので、遂に冒険者としての活動が始まるのだ。

そんなわけで、今日はアームストロング導師との最後の模擬戦闘が行われていた。

まだ数分とはいえ、全力での戦いで頭にアドレナリン全開のアームストロング導師はともかく、俺とルイーゼは急速な魔力の消耗から来る疲労感が堪らなかったのだが。

「最高の一撃ねぇ……」

「ヴェル。実際問題、ボクはもう一撃で限界」

「では、殺すか」

「えっ！」

「いや、そういう気持ちで行かないと駄目でしょうに」

王都郊外にある原野の上空で、俺とルイーゼは空中に浮きながらアームストロング導師と対峙していた。

共に持てる技の全てを撃ち続けていたので、この中で一番魔力の低いルイーゼにはそろそろ限界が訪れていたようだ。

ならば、あとは導師を殺すつもりで残り全ての魔力をぶつけないといけないであろう。

別に俺は、導師に恨みがあるわけではない。

色々とアレな部分も多い人であったが、悪い人ではないし、今は世話にもなっている。

魔法格闘技の修行のおかげで本来の身体能力も上がっていて、以

前の武芸大会のような一回戦負けという無様は無いと思う。
二度と参加するつもりはないので、確認のしようがないのだが。

「二年半も、導師からは指導して貰ったんだ。ここは、全力でぶちのめした方が恩を返す事になる」

というか、そのくらい全力でやらないと導師は戦闘不能にはならないはず。
なぜなら彼も、ルイーゼから効率の良い動き方や技などを習っていて、以前よりも強くなってしまったからだ。
魔力も俺と器合わせをして増えてしまったので、ますます強敵になっていた。

「これも、導師に恩を返すため！」

「（本音は？）」

「（二年半も、俺達は軍隊の新兵か！　道場の新弟子か！　ここでどさくさに紛れてぶちのめす！）」

強くして貰った恩はあるが、過酷な実戦形式の野外戦闘訓練ばかりだったので、やはり恨み事は沢山存在していたのだ。

「（恨み事が無いなんて、嘘に決まっているだろうが！　バーカ！　バーカ！）」

「（ヴェル、子供じゃないんだから……）」

毎日昼飯を野外で調達とか、俺は『どこのレンジャー部隊だよ！』とも思っていた。

「では、ルイーゼはどうだったんだ？」

「さすがに、ボクも結構辛かったなぁ」

子供の頃から魔闘流の修行をしていたルイーゼが辛いと言うくらいなのだから、中身が元現代人である俺はもっと辛かったのだ。

メンタルがもやしの、元現代人舐めてはいけないと思う。

「ルイーゼは、俺や導師よりも魔力が少ないしな」

それだけ、魔力の節約をしながら導師のパワーに対抗しなければいけないという事であった。

「その辺は、何とか大丈夫。ところで、ヴェルの方は？」

「倦怠感さえ何とか出来れば、もう数分くらいは大丈夫」

「最近、ますます化け物めいたね」

「それは、正面の御仁にも言ってくれ。あとは、ルイーゼもか……」

実際、この二年半の修行でルイーゼは魔力量だけで言えば、上級に近いレベルにまで上昇している。

俺との器合わせで、魔力量を上げていたからだ。

使える魔法は少なかったが、多分今では竜ですら単独で殴り飛ばせるかもしれない。

元々、魔闘流では師範クラスの実力の持ち主だ。

溢れる魔力を使って、攻撃力と防御力を嵩上げして強くしている俺やアームストロング導師などよりも、よっぽど器用に上手に効率良く戦えるのだ。

「ヴェルが、高集束魔力弾の連発で牽制。その後に、ボクが渾身の一撃を加えるでケリかな？」

「一番無難で確実な作戦だな」

魔導機動甲冑の魔法を覚え、全身を薄い鎧に包んだルイーゼが俺に作戦案を提示する。

彼女の魔導機動甲冑は、三人中では一番薄手で防御力が低い。保有魔力の関係でそうなっているのと、彼女の身体能力と動体視力が優れているので、敵からの攻撃は基本回避で、魔導機動甲冑は最後の防衛手段であるという点が大きいからだ。

魔力は、俺、アームストロング導師、ルイーゼの順で多く。格闘戦闘能力では、ルイーゼ、アームストロング導師、俺の順番であったのから当然の選択とも言えよう。

「高集束魔力弾は、もうそれは派手にね」

「了解」

俺がアームストロング導師に接近戦を仕掛けても経験の差で分が悪いので、遠方からの高集束魔力弾攻撃でその動きを止める事にする。

以前、グレートグランド退治の時に、アームストロング導師が蛇の形をした風系統の高集束魔法を放ったというアレだ。

俺からすると、わざわざ蛇にする理由がわからないのだが、魔法はそのイメージが本人に合えば効果が劇的に増大する。

なので、あの蛇の形の高集束魔力弾は彼に合っているのであろう。

俺の場合は、前世の影響もあって普通に魔法を超高集束させた砲弾型の高集束魔力弾であったが。

それを何十発と同時に発生させ、次々とアームストロング導師にぶつけていく。

こういう魔法では、俺は導師に負けない実力を持っているのだ。

「おおっ！　相変わらずの容赦のない攻撃である！」

とは言いつつ、アームストロング導師の方は、それを次々とまるで蝿でも振り払うかのように両手で弾いてしまう。

弾かれた高集束魔力弾が原野に降り注ぎ、一帯をまるで戦場跡のようにクレーターだらけにしてしまうが、今のところは誰かから苦情が出るという事もなかった。

何でも、この原野はあとで開墾が行われるらしい。

土が掘り返されても、何の問題も無いそうだ。

「相変わらずの、限界知らずな魔力である！」

もう数百発目なのかは忘れたが、アームストロング導師は相変わらず余裕で高集束魔力弾を手で弾き続けていた。

「（この人、マジで四十歳超えてるのか？）」

いまだに成長を続ける魔力に、それに比例するかのようにますま

す進化する化け物染みた戦闘能力。

果たして、この世に彼を殺せる人はいるのであろうか？

さすがに、そろそろ俺の方の魔力が危なくなって来たのだが、やはり魔力量では一日の長があったようだ。

よく見ると、次第にアームストロング導師の魔導機動甲冑に皹が入っていくのが確認できる。

遂に、魔力に限界が訪れたらしい。

そして、遂にルイーゼが動いた。

「てぇい！」

特に、技名などはないらしい。

というか、技名などを叫ぶと時間の無駄なので、俺はこの世界でそういう武道家を見た事が無い。

ルイーゼは、アームストロング導師にその動きを追われながらも一瞬の隙を突いてその死角に入り、そこから渾身の魔力を篭めた蹴りを加える。

蹴りを喰らったアームストロング導師の魔導機動甲冑が砕け、彼はそのまま地面へ吹き飛ばされてしまう。

落下した地面には、盛大な土煙や轟音と共に大きなクレーターが出来ていた。

「残念、魔力切れである」

普通の人なら生存を疑うレベルであるが、魔導機動甲冑が無くても強力な身体能力魔法がかかっている影響で、この程度の衝突でアームストロング導師がどうこうなるはずもなく。

彼は、ローブに付いた土汚れを振り払いながら俺達に声をかけていた。

「さすがに、二対一では分が悪いのである」

「でしょうね……」

それでも、倒すのに二人がかりなのだ。

この人が、いかに化け物かを証明する証拠となろう。

というか、攻撃しているこちらが疲労と眠気で今にも倒れそうであった。

今日は、さすがに魔力を短時間で使い過ぎたようだ。

「合格である。だが、少年も某も、まだまだ魔力を鍛えないと駄目であるな。再戦を期待するのである」

この二年半、俺もアームストロング導師も懸命に魔力量の増大に努めていたのだが、やはりまだ限界は訪れていなかった。

俺はまだ十五歳なので、むしろ普通の魔法使いはこれから二十歳前くらいまでが最も魔力量が増大のピークとなるので不思議はなかった。

なのに、アームストロング導師はまだ魔力が増大を続けている稀有な例だ。

いやもしかすると、その内魔力が暴走して凶悪な魔物と化す可能性もありそうだ。

勿論、軽い冗談ではあるが。

「お主達が、冒険者として大成するのを某は見守っているのである」

別に見守ってくれなくても良いような気がするが、とりあえずはこの過酷な訓練から逃れられる事に、俺とルイーゼは安堵の表情を浮かべるのであった。

しかし、物凄く眠い……。

第四十一話　冒険者登録。

「さてと、遂に俺達も十五歳で成人扱いとなり、冒険者としての一歩を歩みだすわけだ」

ブライヒブルクにある冒険者予備校に入学したのに、なぜか夏休みにエーリッヒ兄さんの結婚式に出ようと王都に行ったら、そのまま戻れなくなってしまった。

実は屋敷が心配なので、定期的に瞬間移動の魔法でブライヒブルクには戻ってはいたのだが、予備校にはまるで顔を出しておらず、なのに既に卒業扱いというわけのわからない事になっていたのだ。

ある意味ラッキーではあったが、代わりに俺達はもっと厳しい訓練を、約二年半もの間受ける羽目になっていた。

エルは、近衛騎士団で中隊長をしているワーレンさんから剣や実戦の指導を。

イーナも同じく、近衛騎士団に所属している槍術の達人から同じく槍と実戦の指導を。

そして俺とルイーゼは、ある意味一番の貧乏クジかもしれなかった。

筆頭王宮魔導師なのに、週に一度の休暇以外ほぼ毎日アームストロング導師から実戦形式で厳しい修行を受けていたのだから。

『しかし、この人は碌に王宮に顔も出さないで良くクビにならないよな』などと俺とルイーゼは思いつつ、彼の得意魔法である身体能力強化、高速飛翔、魔道機動甲冑の魔法を駆使した、前世で見たバトル漫画の戦闘シーンのような訓練に取り組む事となる。

しかも、教えているアームストロング導師の方も、俺を利用して魔力量の向上などを狙っているのだから性質が悪い。

この見た目筋肉親父が、その普段の言動からは想像できないほど、実はかなり強かである証拠でもあった。

お互いにまだ魔力量の限界には到達していなかったが、これはこれからも修行を続ける事として、今は冒険者登録である。

冒険者になるには、まずは冒険者ギルドに登録を行わないといけない。

勝手に自称し、武器や防具を装備して狩りや探索に行ってはいけないのだ。

とはいえ、実はその辺の管理は少し甘い部分も多い。

自分の住んでいる村に近い森で農民が狩りを行い、その成果を街のバザーで売っても別に咎められたりはしない。

俺も、七歳頃からブライヒブルクで商業ギルドの許可証のみでそれを行っていた。

ブライヒブルクの冒険者予備校時代には、予備校側から狩りについては仮の許可証が出ていたのだが、別に無くても魔物の領域に入らなければ特に問題は無い。

多分、ポーズで行っているのと、厳密に取り締まる余裕が無いからなのであろう。

あとは、魔物の領域と人口増加のせいでこの大陸では畜産を行う余裕があまりない。
狩りで得られる獲物は貴重な蛋白源であり、それを売りに来る人をなるべく阻害したくない。

この辺が、真相のようだ。

「でも、本当に王都の冒険者ギルド本部で登録を行っても良いのですか？」

俺は、付き添いで来ていたブランタークさんに問い質していた。
一応はブライヒブルクの冒険者予備校を卒業した事になっているので、『ブライヒブルク支部で、登録を行った方が良いのでは？』などと思ってしまったのだ。

「別に、どこで登録をしても問題ないさ」

そう答えるブランタークさんであったが、彼は俺達の件でお館様であるブライヒレーダー辺境伯と王都の貴族達との間で板ばさみに遭ってかなり苦労していたようだ。

今はもう完全に諦めているので、まるでプレッシャーを感じていないようであったが。

「ブライヒブルクに戻った時に、向こうの支部に到着の報告を行う。それで、ブライヒブルク支部は坊主達がブライヒブルクを活動拠点にした事に気が付くさ」

「そういう物なのですか」

「そういう物なんだよ。さあ、登録だ」

案内役のブランタークさんと一緒にギルド本部へと入る俺達であったが、その中はまるで役所のようであった。

十か所ほどの受付に若い女性が座り、冒険者らしき人達に色々と説明をしたり、書類を受理したり、逆に何かの書類を渡したりと。

まるで、役所の受付のようであったのだ。

「次の方、どうぞ」

全ての受付が埋まっていたので暫く並んで待っていると、遂に俺達の出番が回ってくる。

「新規の冒険者とパーティー登録です」

「畏まりました」

受付の若い金髪のお姉さんは、俺が持参した書類に視線を送り、その記述内容に驚いているようであった。

以前に竜を二匹も倒したので、俺はかなり有名な存在になってしまったからだ。

「個人の冒険者登録用紙は受け取りました。すぐに記載事項の確認を行います。あと、新しいパーティー構成員は五名ですね」

「はい」

本当は、俺、エル、イーナ、ルイーゼの四名でパーティーを組む

予定だったのに、色々と回避できない理由でパーティーメンバーは五人に増えていた。

「あの……。エリーゼ様もですか？」

さすがにギルドの受付も、巷で『ホーエンハイム家の聖女』と称されるエリーゼの冒険者登録には驚きを隠せないようであった。

聖職者が冒険者登録を行う事自体は特に珍しい事でもないので、それが問題というわけではないのだが。

「はい。私もヴェンデリン様の婚約者として、共に冒険者になる事を決めました」

この娘は良い子なので、その発言にはまるで表裏が無い。

本当に俺の婚約者として、一緒に居たいだけのようだ。

この二年半ほど、俺とエリーゼは最低でも週に一回はデートなどをしている。

他は全てアームストロング導師との修行であったので、俺はイーナとルイーゼ以外では、エリーゼとしか女性と碌に話をしていなかったのだ。

王都には綺麗な女性も多いので、少し残念であったのは事実であったが、俺が下手に一人で出歩くと色々と面倒が多くなる。

娘をどうにか紹介しようとする貴族に、メイドから妾へのコースを狙っている商人や平民。

他にも、己の利益のために人を自分の派閥に参加させようとする貴族や、押し掛け家臣なども多く。

結果、俺の休日の安寧は、ホーエンハイム枢機卿に、エーリッヒ

兄さんやその上に居る財務系法衣貴族達に頼る事となっていた。

まあ、ある意味アームストロング導師の思惑通りなのであろう。

己の鍛錬も兼ねる訓練で時間を潰し、俺に他の女が近寄れないようにしていたのだから。

そして残された休息日には、確実に俺とエリーゼは顔を合わせている。

一緒に住んでいるので、普通の日も朝や夜には顔を合わせて食事などの世話も受け、今では完全にエリーゼに依存している部分もあった。

他の空いている時間も、イーナやルイーゼと一緒に居るわけで。

まだそういう事をしているわけではないが、俺に浮気など不可能と言っても過言ではなかった。

他の貴族達も、財務系法衣貴族達や導師の妨害に歯軋りしていると、以前にエーリッヒ兄さんが言っていたほどだ。

『竜殺しの英雄殿を、今夜は園遊会に招待したく……』

『その日はの夜は、バウマイスター男爵殿は忙しいのである！　婚約者の実家であるホーエンハイム子爵家の晩餐に招待されている故に！』

その辺のスケジュール調整なども、あの筋肉導師は怠っていなかったようだ。

見た目とは違い、そういう部分があの筋肉導師が喰えない所であった。

「ええと、パーティー名は『ドラゴンバスターズ』ですか」

受付のお姉さんは、俺を一瞥してから冷静な声でパーティー名の確認を行っていた。

冒険者とは、田舎者や貧乏人が一攫千金や立身出世を目論んでなる要素の強い仕事だ。

なので、このようにパーティー名などで吹かす輩も多く、その度に受付の人や周囲の同業者達に冷笑される事も多かった。

だが、俺は既に竜を二匹も殺しているので、受付のお姉さんは特におかしいとは思わなかったようだ。

この辺の冷静さが、役人に良く似ていると俺は思っていた。

「メンバーですが、リーダーはヴェンデリンさんですね」

この二年半ほどで百七十五センチほどまで伸びた身長に、中肉中背で顔はまあ良い部類に入るであろうという程度の俺であったが、実家があの田舎者のバウマイスター家なので、これでも上出来な方であろう。

ちなみにこの世界では、平均的な背の高さでもある。

装備品は、師匠が残してくれた高価なローブや杖などを装備しているが、ローブは師匠が俺よりも十センチほど背が高かったので防具屋で調整して貰う羽目になっていた。

その時に、防具屋の主人が売って欲しいと妙にしつこかったのを記憶している。

何でも、フェニックスの羽やら、水属性の竜の子供の初毛にと、色々と貴重な素材で編まれているらしく、魔物からの魔力を使用し

た攻撃をかなり軽減してくれるそうだ。

『ローブを詰めた時に出た、端切れでも良いですから』と言われたので、承諾したらローブの調整代金は無料で金板を五枚渡されている。

切れ端でも、防具の裏側に張れば対魔防御力が全然違うのだそうだ。

『また端切れでも宜しいので、素材がございましたら』

『あったらね……』

俺は、師匠の凄さを再確認する事となる。

「次は、エルヴィンさん」

「はい」

エルは、良い師匠を得て剣の達人になっていた。

どの程度かは、俺の剣の腕前などたかが知れているので把握出来なかったが、剣を教えて貰ったワーレンさんから、『推薦するから、通常の騎士団だが入らないか？』と言われるくらいまでにはなっているらしい。

制度上、いきなり近衛騎士団には入れないので、まずは普通の騎士団で経験を積み、そこから推薦を受けて近衛騎士団に入る。

その出世コースを勧めてくれたのだ。

『すいません、俺はバウマイスター男爵家の従士長なので』

『淡い期待にかけて声をかけただけだから。でも、惜しいな』

エルは、ワーレンさんからの誘いを断ったようだ。

この二年半で身長は百八十センチほどにまで伸び、細身ながらも筋肉質で軽減化の魔法がかかったプレートメイルに両手持ちのバスターソードを持っている。

あとは、背中に同じく軽減化の魔法がかかったラウンドシールドを背負い、通常のロングソードも予備として腰に差していた。

エルは、情況に応じて両手剣と片手剣を使い分けるようだ。

俺には、一生できそうにもない器用な芸当であった。

「次は、イーナさん」

イーナもこの二年半で、燃えるような赤い髪が目立つ、豹のようなしなやかなスタイルをした美人へと成長していた。

背は俺よりも五センチほど低いが、それを感じさせないオーラを感じさせるほどだ。

武器は、メインに槍を使い、予備で腰に二本のショートソードを装備している。

槍を失った時には、二刀流で戦うらしい。

剣の指導も、空いている時間に受けていたようだ。

あと、防具は軽減化のかかったハーフプレートが主な物となっていた。

「ルイーゼさん」

「はーーーい！」

俺と共にアームストロング導師の犠牲者でもあるルイーゼであったが、彼女は背は１５０センチくらいまでは伸びたが、相変わらず体型はお子様のままだった。

本人は、『意外と胸はある』と豪語しているが、誰が見てもそうは思えない。

無ではないが、微と言った感じだ。

だが、それを口にしてはいけない。

彼女ほどの強さを持つ武芸家など、そうは存在しないからだ。

正直なところ、彼女に気配を消されて奇襲を受けたら、俺もアームストロング導師も魔法など関係なしで戦闘不能にされてしまうであろう。

彼女は、魔法防御のために良い素材が使ってある道着に、両手には手甲を填め、いかにも武芸者であるという格好をしている。

途中、彼女の見た目をからかおうとした冒険者がいたのだが、ルイーゼのひと睨みで彼は後ろに後ずさっていた。

もし彼女に殴られでもしたら、骨折くらいは当然なので彼は運が良かったとも言えた。

「最後に、エリーゼ様ですね」

お姉さんは、俺の申請書を見てエリーゼがパーティーに加わるのに不自然さを感じないようになったらしい。

エリーゼの手続きも、迅速に進めていた。

エリーゼもこの二年で身長が１６０センチほどにまで伸び、聖女と呼ばれるに相応しい美人さんへと成長していた。
あと、特筆すべきはやはり胸であろうか。
十三歳時点で推定Ｆカップだったのに、今ではどう少なく見積もってもＧカップには成長しているようだ。

装備は、祖父ホーエンハイム枢機卿がプレゼントした魔法防御力に長けた修道着なので、体型はわかり難くなるのが普通である。
なのに彼女は、その自己主張の強い胸のせいでその大きさが丸わかりであった。

武器は、メイスやナイフなどを装備している。
こう見えてエリーゼは意外と力はあるし、武器の扱いなども教会で聖堂騎士団から習っているので、そこいらの素人冒険者よりはよほど強かったりするのだ。

少なくとも、自分の身は自分で守るくらいは出来るはずだ。
でなければ、パーティー入りを許可するはずもないのだが。

それと、先に出た聖堂騎士団とは、簡単に言えば教会を守るために設置されている警備隊である。
王国所属ではないので、正式には騎士団ではなくて警備隊と呼ぶのが正しいのだが、そこは権威のある国教指定されている教会を守っているのだからという理由で、騎士団と呼ぶのが黙認されている。

貴族の子弟達の、有力な就職先であるという理由もあったのだが。

「パーティーメンバーは五名ですね。登録は、これで完了しました」

お姉さんにより、書類上の手続きは呆気ないほど簡単に成功していた。
ここはギルド本部なので、毎日デビューする冒険者や新規に結成されるパーティーも少なくない。
いちいち時間をかけていられないのであろう。

「細かい規定などは、こちらの小冊子をご覧ください」

最後に、人数分の小冊子を渡されて登録は終わっていた。

「何とも、アッサリとした登録ね」

登録終了後、俺達はギルド本部近くの喫茶店で小冊子を読みながらお茶を飲んでいた。
イーナは、せっかく冒険者になったのだからもっと色々とあっても良いようなと言った表情だ。

「受付で、長々と説明されるよりは良いよ」

「それは、そうなんだけど……」

この冊子に書かれているルールなどは、もう事前に教育を受けていたので理解していた。
大半が、人として生きて行く際に守るべき常識的な物でしかない。
他の冒険者の妨害をするなとか、殺して財貨を奪うなとか、仕事途中で寄った町や村などで迷惑をかけたり、犯罪を犯すなとか。

冒険者なので、どうしても海千山千の人材が集まる傾向にあり、念のために記載されている事項が多い。

あと冒険者とは、この戦争無き時代の一種の若者の不満吸収装置なので、どうしても無茶をする者が集まる傾向にあったのだ。

「次は、ランク制度」

ランク制度とは言っても、前世で読んだネット小説のように、別にSからFまでとかそういうランクが存在するわけではない。
ただ渡された個人とパーティーの冒険者カードに、達成した依頼数、失敗した依頼数、合計報酬が書かれるのみであった。

「ある意味、怖い制度だな」

冒険者の仕事の大半は、人がいない場所での狩りや採集。
あとは、強い冒険者やパーティーが比較的報酬が良い魔物の住む領域に入り、そこでより高価な魔物の素材を狩ったり、貴重な採集物を手に入れるかだ。

たまにギルドで、在庫が危うい素材などの急募を行う事もあったが、基本的には自分の力量に合った場所で狩りや採集を行い、その成果をギルドに買い取って貰う。

カードには他にも、倒した動物や魔物の種類や数。
それで得た報酬の総額が記載されるだけであった。

「冒険者は、狩りをしてナンボなんだね」

ルイーゼの言う通りで、前世でゲームなどで見た雑多な依頼などという物は存在しない。
犬の探索や、屋根の修理や、赤ん坊の世話など。

そんな仕事は、冒険者でなくても他にいくらでもしてくれる人がいるからだ。
むしろその手の仕事にもギルドがあるので、そういう仕事をしたければそっちに登録に行けば良いのだから。

犬の散歩は、小規模ながらペット関連のギルドが。
屋根の修理は、大工のギルドがあるし。
赤ん坊の世話は、メイドを派遣するギルドの一部門にベビーシッター部門が存在していた。

なので、冒険者が手を出せば彼らに喧嘩を売る事になってしまうわけだ。

「あとは、封印遺跡の探索か」

唯一の例外としては、古代魔法文明時代に作られた建造物やダンジョンの探索であろうか。
その大半がなぜか魔物が住む領域に存在し、その中には厄介な罠や強力な魔物が徘徊しているので、普段は王国側の判断で侵入禁止となっている。

たまに未発見の物も見付かるが、それに浮かれて碌な準備もしないままで侵入し、そのまま帰って来ないというケースも良くあるそうだ。

「封印遺跡は、王国側から探索の依頼がギルドに入り、ギルド側が相応しい冒険者かパーティーに依頼を行うか……」

「つまり、遺跡探索を依頼されるくらいの実績は、ただ強い魔物を多く狩って稼ぐしかないと？」

「エルの坊主の言う通りだな。ただ、お前らは少し情況が違う」

俺達に付き合ってコーヒーを飲んでいたブランタークさんは、そう言いながら一枚の紙を差し出す。

そこには、王国強制依頼の文字がデカデカと書かれていた。

「王国強制依頼？　まさか……」

「そのまさかさ。王国側が、遺跡探索をするパーティーを指名してしまうのさ」

「そういうのは、普通ベテランに任せません？」

「普通なら、そうなんだけどな……」

今、冒険者登録とパーティー結成をしたばかりの素人に、いきなり王国側が探索パーティーを指名するほどに危険な封印遺跡の探索を任せる。

普通に考えたら、こんなバカな決定は無いはずだ。

「俺達も、普通はボチボチと近場の狩りとかからですよね？」

「エルの坊主の意見も正しいんだがな……」

自分で命令したわけではないので、ブランタークさんは俺とエルの質問にタジタジになって答えていた。

「坊主は、竜を二匹も倒しているから」

とは言っても、それで冒険者になったばかりの俺達を、いきなり封印遺跡に放り込む理由にはならない。
いくら俺の魔法が竜を殺せるとは言っても、そんな大威力の魔法を無条件で遺跡で使える保障もないし、この二年半ほどで個々では鍛錬に励んでいたが、連携を含む集団戦にはこれから慣れていかなければいけないのだから。

「ブランタークさん、新規の冒険者には付き添いが付くそうですね」

イーナが、念を押して尋ねるが。
これは、冒険者が比較的初期に死傷する事が多いので創設された制度だ。
三回ほど、新規のパーティーは近場の魔物住む領域に狩りに出かけ、その際にベテランのパーティーか冒険者が指南役として付いて来るのだ。

そして新人時代を乗り切った冒険者は、今度はギルドの指名で自分が新人の指南役になって狩りに付いて行く。
こうやって、なるべく冒険者が初期に死んでしまう事を防いでいるらしい。

ただ、それでも初心者の死傷率は高いし、他にも慣れて来た頃が一番危ないのはどの業界でも同じであった。

「当然、指南役は付いて来るんだよね？」

「ああ、ベテランの冒険者がな」

「えっ？　それって、もしかして？」

「そのまさかだ。お互い、あまり新鮮味も無いけどな」

ルイーゼの懸念通りに、俺達の指南役はブランタークさんにいつの間にか決まっていた。

多分、既に冒険者稼業は引退しているブランタークさんも寝耳に水なはずなので、俺達は何も突っ込まずに静かに出発の準備を進めるのであった。

「駄目そうなら、逃げ帰りましょう」

「坊主の、その判断は正しい」

「えっ！　そんなんで良いの？」

「アホっ！　死んだ冒険者なんて、一セントも稼げないじゃねえか！　駄目なら即時撤退は、基本だぞ！」

『逃げ帰るのは有りなのか？』と聞いたエルを、ブランタークさんが怒鳴り付ける。

いきなり最初から、そんなハードな依頼を強制する王国とギルドなので、死にそうになるまで義理堅く付き合う理由もないのだし。

第四十二話　危険な冒険者デビュー戦。

「ブランターク様。この遺跡って、確か……」

「もうとっくに、アカデミーの学術調査は終わっている遺跡だな」

王都から、瞬間移動魔法と徒歩で合計半日ほど。

俺達新冒険者パーティー『ドラゴンバスターズ』とブランタークさんは、先年にグレードグランドを討伐したパルケニア草原内にある古代遺跡へと到着していた。

この二年半ほどで、パルケニア草原は大規模開墾作業を続ける多くの人達で賑わっている。

他にも、道や町や農村などの建設も進み、その経済効果は計り知れないほどであった。

この古代遺跡は、そのパルケニア草原でも比較的王都寄りの場所に存在している。

見た目は、少し風化した石造りの建造物が複数建つ神殿のような遺跡であった。

「上の部分は、半分観光地にまでなっていた遺跡だったんだ」

ブランタークさんは、俺達の事は顔馴染みで新鮮味も無いと言った癖に、エリーゼには愛想良く答えている。

良く見るとその視線がたまに胸に行っていたので、やはり女性は胸なのであろう。

その点は、俺も否定はしないのだが。

人の婚約者の胸をジロジロと見て欲しくないのだが、直接見ているわけでもないし、俺だって出会った女性が巨乳なら視線はそちらに行ってしまう。

同じ男性として、文句を言うのも何だと思ったのだ。

「この遺跡でしたら、前に私のお友達も学術調査で出向いたそうです」

「新人への、登竜門みたいな遺跡らしいからな」

ここは、王都にある考古学専門学校の生徒がレポートを書くために遠足で来るほど安全な遺跡であったのだが、ある生徒が何となく遺跡の石を触ってみたところ、いきなり地下遺跡の入り口が開いてしまったらしい。

一応『遺跡には触れるな』というルールがあったので、その学生はルール違反をしたわけだ。

だが、そのおかげで地下遺跡への道が開いたとも言え、その学生には賞賛もお咎めも無かったそうだが。

「その瞬間から、遺跡はご覧の通りだな」

空いた入り口から魔物が沸き出して来ないという保障も無いので、今はその入り口を中心に複数の兵士達が警備を行っている状態であった。

「当然冒険者ギルドは、すぐに連絡が取れたパーティーを送り込んだのさ」

ギルド内でも、かなり実力のあるパーティーを二つ合同で。
合計で、十一名を送り込んだらしい。

「あの……。帰って来なかったとか？」

「でなきゃあ、坊主達に、強制依頼なんて来ないさ」

「……」

確かにブランタークさんの言う通りではあるのだが、当然俺も含めてパーティーメンバー全員が、感情面ではまるで納得できないでいた。

そんな危険な遺跡なら、もっとベテランの冒険者を送るべきなのだから。

「最初の失敗で、冒険者ギルドも懲りれば良かったんだがな」

冒険者ギルドとしては、王国側がアームストロング導師を投入する事を恐れたらしい。

そうでなくても、二年前に二匹の竜を冒険者が倒せなかった件で、相当にプライドを傷付けられているとの、ブランタークさんからの話であった。

「でも、導師って昔は冒険者で……」

「今は違うじゃないか。ついでに言うと、俺も元冒険者なんだけどな」

しかも、後者のグレードグランドに至っては、貴族枠で参加させられた俺が、ブライヒブルクの冒険者予備校ではまだ半人前の見習い冒険者であった事も、相当にギルド側を刺激したらしい。
かと言って、それを俺に言って機嫌を損ねるわけにもいかず、ならば今回こそはと、意地で二つ目のベテラン合同パーティーを送り込み、また同じ失敗を繰り返す事になる。

「最初の失敗があったから、次はもっと実績が上のパーティーを送り込んだわけだ」

三組合同で、合計十三名。
実績では、トップクラスのパーティーばかりであったようだ。

「もしかして？」

「誰も帰って来なかったそうだ」

さすがに、これ以上のベテラン冒険者の喪失は看過できなかったようだ。
冒険者ギルドは、王国に探索不可能の回答を出し。
それを受けた王国側は、ここ数週間ほどは兵士達を派遣して遺跡に人が入って来ないようにと警備をしていた。

「そんな危険な地下遺跡に、素人を投入か……」

「あながち、間違いとも言えないんだよな」

戻って来ない冒険者パーティーは、ギルド内でも屈指の戦闘能力を誇っていたらしい。
そんな彼らが複数で潜って戻って来ないとなると、あの魔物がい

る可能性があるという結論に至るのだと。

「最低でも、幼生状態は抜けた竜がいる」

竜を倒すとなると、最低でも中級以上の魔力を持つ魔法使いが最低でも一人は必要で、他のメンバーもかなりの戦闘力を必要とするそうだ。

「二つの合同パーティーには、中級以上の魔法使いがいなかったからなぁ」

発生率の関係で魔法使いがそう沢山いるわけでもなく、普通の人は一生に数名も拝めれば多い方らしい。

更に、俺とルイーゼとエリーゼのように、一つにパーティーに三名もの魔法使いが居るなど。

そんな幸運はまず不可能であるとの、ブランタークさんからの話であった。

「竜が出ても、余裕で対処可能なパーティーだと思われたんだな」

それと、ブランタークさんもいるので余計にそうなのであろう。

アームストロング導師が居ないので、少々の不安を感じなくは無かったのだが。

あの人は普段の言動はアレだが、戦闘能力では王国髄一だったからだ。

「俺の指南役就任は、うちのお館様と陛下が決めてしまわれたからな。宮仕えの俺には、何も言えん」

新人の俺達に、良く知らない自称ベテラン冒険者が付けられ、また帰って来ないのを恐れたらしい。
二人が相談して、急遽ブランタークさんを一時現役復帰させたそうだ。

当然、ギルド側は良い顔をしなかったそうだ。
自分達の裁量権を犯されているので、当たり前とも言えるのだが。

「俺は、ギルドの上層部に含む部分なんて無いぜ。向こうは、俺を嫌っているようだけど」

現場レベルだと、冒険者稼業が長かったブランタークさんには知己が多い。
魔法使いの中には、短時間ながらも指導を受けた弟子なども多いそうだ。
一部幹部とも仲が良い人もいて、彼の情報源はそこにあった。

ただ、今の主流派幹部達とは物凄く仲が悪いのだそうだ。
何でも、現役引退後のブランタークさんに幹部の席を奪われると勝手に危機感を抱き、ギルドから追い出そうと必死になった連中らしい。

「そういうのが嫌で、俺は王都のギルド本部は苦手でな。非主流派の連中や、他の支部の連中とはそうでもないんだけどな」

ちょうどその頃、師匠が非業の死を迎えた事もあって、運命だと思ってブライヒレーダー辺境伯のお抱えになったそうだ。

「そんな連中で大丈夫なんですか？」

「普通に魔物の領域で狩りをしている連中には、何の問題もないわな」

その代わりに、今回のような緊急事態になると粗が出てしまうのだとブランタークさんは語っていた。

要するに、お役人なのだと。

若い新人の頃とは違い、冒険者ギルドで幹部になるような連中は失う物が出来て保守的になる。

冒険者ギルド自体も前世で言う所の大企業なので、つまりはそういう事のようであった。

「これ以上ここで喋っていても、何の解決にもなりませんね……」

「そうだな、入るか」

少々の理不尽を感じなくもないが、ここで手を抜くなど出来るはずもなく。

俺達は、地下遺跡の入り口を警備している兵士達に陛下からの命令書を見せ、そのまま地下遺跡の中へと入っていくのであった。

「魔物とかはいないわよね？　ヴェルは、探知の魔法で何か感じた？」

「いや、雑魚の魔物すらいない」

合計六人で地下迷宮に入った俺達であったが、実際に入ってみると罠も無いし、魔物やなど一匹もいない。

イーナから探知魔法の結果を問われるが、魔物の気配すら感じず。
ただ、石造りの迷宮を順番に移動し、地図を作成するだけになっていた。

「罠の存在は？」

「無いです」

「そうか、無いか……」

まさかこの展開は予想できなかったようで、ブランタークさんも、なぜこの地下迷宮で冒険者達が行方不明になったのかを理解できないでいた。

「この先に、広場があります」

「広場？」

三十分間ほど、薄暗い地下遺跡を進んでい行く俺達であったが、ほぼ曲がり道も無しで広大な空間へと出ていた。

「広いなぁ」

縦横は数百メートル、高さも五十メートルはありそうなその広場は、綺麗に壁や床を石で覆われているだけで、他には何も無い状態にあった。

「あっ、でも……」

この中で一番目が良いルイーゼは、奥に何かを見付けたらしい。

暫く歩くと一番奥に入り口があったので、やはりこの地下遺跡はほぼ一本道の造りになっているようであった。
ただし、その前を巨大な物が塞いでいたのだが。

「大きな竜の金属像ですね。ヴェンデリン様」

エリーゼが、竜の像を見上げながら感心したような声をあげる。
だが逆に、ブランタークさんはその顔に警戒感を露にしていた。

「全員下がれ」

「ブランタークさん？」

「坊主、戦闘準備だ」

「えっ？　これって造り物じゃあ……」

ブランタークさんが冷静な声で、竜の像から下がりながら戦闘準備をするようにと命令をする。
それに疑問を感じる俺達であったが、すぐに彼の言葉が正しかった事が証明された。

突然、竜の像が咆哮を挙げたからだ。

「古代魔法文明の遺産。拠点防衛用に造られた、金属製のドラゴンゴーレムか。文献で記述は見たんだが、実物は初めて見た」

「なあ、ブランタークさん。これって、拙いよな？」

「ああ、高レベルの合同パーティーを二回も全滅させているんだからな。エルの坊主も、覚悟を決めろよ」

「こんなデビュー戦って、あんまりだ」

全員が戦闘準備を整えた瞬間、金属製の竜は俺達に向けて強烈なブレスを発射するのであった。

「うーーーん。困った……」

戦闘開始から一時間ほど、俺達は完全にこう着状態となった戦況に困ってしまっていた。

「外殻が、全てミスリル製だからな」

ブランタークさんの言う通りで、このドラゴンゴーレムは外殻が全てミスリルで覆われていて、こちらの魔法が一切通じないのだ。

更に強烈なブレスを連発して吐けるので、現在俺達は全員で固まって、ブランタークさんの魔法障壁でそれを防いでいる状態であった。

「ブレスも、尻尾とかの物理的な攻撃も、ヴェルとブランターク様の魔法障壁で防げるけど。これからどうしようか？」

ルイーゼの言う通りで、こちらはドラゴンゴーレムからの攻撃は全て防げるのだが、一向に俺達が死なないのが不満らしく。

狂ったようにブレスと尻尾による攻撃を連発し、こちらは攻撃に出る機会を封じられていたのだ。

「しかし、良くあんなに連発でブレスが吐けるよな」

「よほど良い魔晶石を内臓しているんだろうな」

エルの疑問に答えるように、ブランタークさんが説明を始める。

竜という種族は、小型のワイバーン種以外はブレスを吐く事が可能である。

そしてそのブレスの元とは、竜が持つ膨大な魔力なのだそうだ。

「いくら火属性の竜でも、体内に燃える物質を大量に蓄えているわけではないのさ。人間で言えば、火属性の魔法に長けた魔法使いのようなものだ」

魔力が続く限りなら、いくらでもブレスは吐けるらしい。

しかも、その魔力が空になっても、竜が休めば二日間程度で満杯になってしまうそうだ。

「その竜の体の仕組みを利用して造られたのが、あのドラゴンゴーレムというわけだな」

「内蔵している魔晶石が肝なんですね」

「そういう事だな」

「でも、そんなに保つ物なんですか？」

生きている竜であれば、休めば魔力は回復する。

だが、あのドラゴンゴーレムは、どこから魔力を回復させているのであろうか？

「それは多分、あの変な鏡のような装置だな」

良く見ると、ドラゴンゴーレムの額や耳の部分、あとは首の後ろや背中の部分などにソーラーパネルのような物が張られていた。

「あれで、空気中の魔力を集めているんだろうな」

これも、文献には書かれていた事らしい。
元から空気中にも微量の魔力が漂っている事は知られていたのだが、今の魔法技術ではそれを集めて利用する方法は確立されていない。

なので、やはりあのドラゴンゴーレムは古代魔法文明時代の遺産であるようだ。

「でも、そんな微量の魔力で大丈夫なんですか？」

「連続して、侵入者が来る想定にはなっていなかったんだろう」

いくら古代の魔法文明でも、そうすぐにドラゴンゴーレムが使った魔力が補填できる装置の開発は不可能であろう。
何しろ、空気中に漂っている魔力の量は本当に少ないのだから。

「何年かに一度来る侵入者への対策なら、これでも十分なのさ」

確かにブランタークさんの言う通りで、実際に実力者揃いであったベテラン冒険者のパーティーは、ドラゴンゴーレムによって全滅

させられている。

間違いなく、あの初撃のブレスで全滅させられてしまったのであろう。

地面を良く見ると、焼け残った装備品の小さな残骸が、所々に落ちているのが確認できた。

「しかし、何と言うブレス。人間の方は、骨まで灰になっているとか」

「こりゃあ、ある程度魔法障壁が得意な魔法使いじゃないと、戦闘にも突入できなかったんだろうな」

「それで、これからどうするんです？」

「どうもこうも。これからも交代で、ブレスを防ぎ続けるだけだな」

「魔力切れを狙うんですね」

「決まっているだろう！　こんな化け物、正面から戦うだけ無駄だ！」

幸いにして、俺とブランタークさんはドラゴンゴーレムからの攻撃を全て魔法障壁で無効化できる。

こちらも、ドラゴンゴーレムに魔法を撃ってもミスリル装甲で弾かれてしまうし、一度試しにイーナが魔法で威力を上げた槍を撃ち込んでみたのだが、その槍はミスリル装甲は突き破ったものの、その下にあると思われる次の装甲で弾かれてしまっていた。

ブランタークさんの推論では、ミスリル装甲の下にオリハルコン

装甲が張られているのであろうとの話であった。
ミスリル・オリハルコン複合装甲とか。
前世で見たロボットアニメの設定なら面白いかもしれないが、敵に回ると迷惑の種でしかなかった。

「しかし、迷惑な最強戦術兵器だな」

それでも、戦術兵器なだけマシであった。
頑丈で火力も最強クラスだが、命令が侵入者の阻止に限定されているし、燃費が良いのか悪いのかは知らないが、その補充方法が貧弱なので、じきに活動を停止すると思われたからだ。

「ところで、ブランタークさん」

「何だ？」

「これって、あとどのくらい動き続けるんですか？」

「さあな？　俺が知りたいくらいだ」

「……」

それから約半日後、ドラゴンゴーレムはようやくその動きを止めるのであった。

「動きを止めたとはいえ、また空気中から魔力を貯めて再稼動という恐怖も……」

「それなら、大丈夫だよ。ヴェル」

「何でだ？」

「あのね。お腹の下にスイッチがあったんだ。それを、オフに切り替えた」

「そんな、玩具でもあるまいし……」

約半日にも渡り、俺とブランタークさんが魔法障壁でその攻撃を防ぎ続けたドラゴンゴーレムは、遂に魔力切れで活動を停止させていた。

前世のラノベとかなら、碌に戦闘にもなっていないので読者から文句でも出そうな展開であったが、こちらは実際に命をかけているのだ。

確実で安全な方法を取ったくらいで、文句を言われる筋合はない。そんな風に派手に戦うのは、あのアームストロング導師に任せるに限るのだから。

再び空気中の魔力を集めて再稼動という危険もあったのだが、その懸念は、ルイーゼが停止したドラゴンゴーレムの腹の部分から停止スイッチを発見したので、まずは大丈夫という事になっていた。

防衛用の戦闘ゴーレムなので、停止スイッチくらいは付いているはずだろうし、実際にスイッチはオンとオフに切り替え可能になっている。

すぐにルイーゼがオフに切り替え、俺達はドラゴンゴーレムが守っていた後方の扉を開けて中に入る事にする。

先にある、ドラゴンゴーレムが守っていた物が気になっていたのだ。

「大丈夫ですかね？」

「空中の魔力は無限だが、量は微量だからな。再稼動に必要な量を集めるのに、最低でも数週間はかかる計算だ」

万が一停止スイッチが嘘でも、ドラゴンゴーレムが再び動き出せるまでには時間がかかるらしい。

俺達のような想定外の敵にブレスを乱発した結果、一気に魔力を使い果たして停止してしまったようだ。

それでも、半日は全力で攻撃できるのだから、本当に性質の悪い兵器とも言えた。

「たまに来る侵入者に、今までは強烈なブレスを一発で済んでいたんだろうな。ブレス一発分なら、数日もあれば魔力は貯まるし」

それどころか、ドラゴンゴーレム停止後の調査では犠牲になったのは、先に侵入して行方不明になった冒険者達だけであった。

遺跡は完全に隠匿されていて、その入り口を開くスイッチを見つけた学生はまさに奇跡を引き当てたらしい。

当然、ドラゴンゴーレムは数千年以上も稼動しておらず、さぞや魔力は満杯に近い状態であったのであろう。

地面に転がっている、燃え残った哀れな犠牲者達の装備品の量から推定するに、ここは本当に未盗掘の地下遺跡であったようだ。

「さてと、問題はこの先にある部屋か……」

広いフロアに設置された、強烈なブレスを吐くドラゴンゴーレム。
それを活動停止にして、俺達はどこか気が緩んでいたのかもしれない。

行方不明の冒険者達もここで果てていた事を知り、さすがにこの先には何もあるまいと油断してしまったのだ。

「お宝でもあるのかな？」

「人工とはいえ、竜が守備しているからかしら？」

エルと、普段は真面目で慎重なイーナですらあまり警戒もしないで、そのままドラゴンゴーレムの後ろにある扉を開けてしまう。

この時点で、二人に何の異常も無かったのも、かえって良くなかったのであろう。

「お前ら、もう少し罠の存在なんかも慎重に探れ！」

二人に続いて、ブランタークさんもドアを開けて先に行き。
続けて、俺とエリーゼに。
最後に、ルイーゼが後方を警戒しながら部屋に入る。

「あれ？　行き止まり？」

その部屋は十メートル四方ほどの、何も無い天井も壁も床も全て石で出来た部屋であった。

「行き止まりかな？」

「……。まさか……」

「あのブランタークさん？」

「すぐに部屋を出るんだ！」

呑気に行き止まりかと言っているエルの後ろで、突然ブランタークさんが大声をあげる。

「一体、何があるんです？」

「いいから、早く！」

だが、結局は間に合わなかったらしい。

突然その部屋の床一杯に、何か円形のような模様が赤く光りながら浮かび上があったからだ。

実はそうは言われても、足の裏がまるで瞬間接着剤でくっ付けられたかのように動かないので、もはや逃げようがなかったのだが。

「魔法陣！　でも、探知できなかった！」

古代魔法文明時代の遺跡には、魔法技術を用いた罠が多く存在している。

当然、予備校の授業でその大半は教わっているし、普通の魔法技術を用いた罠は、ある程度実力がある魔法使いなら探知可能であった。

「ちっ、油断した！」

「ブランタークさん！　足が動かない！」

「すまない、現役時代に比べると勘が鈍っていたようだな。どこに飛ばされるかわからないから、臨戦体勢を解かないように」

「もう諦めかよ！」

ブランタークさんがそう言い終るのと同時に、俺は瞬間移動を唱えた時に感じる、どこかに引っ張られるような感覚を最後に意識を失ってしまうのであった。

「……、ここは？」

「さあな？　強制転移先としかわからん」

パルケニア草原にある地下遺跡でドラゴンゴーレムの活動を停止させる事に成功はしたものの、油断して先に進んだら探知不可能な強制転移魔法陣によってどこかに飛ばされた。

これが、俺の把握している現在の情況であった。

目を醒ますと、ブランタークさんが思い出させてくれたのだが。

周囲を見回すと他のメンバーも姿も全員確認でき、どうやらバラバラの場所に飛ばされる事態は避けられたようだ。

「あの魔法陣は、魔力吸収型の魔法陣だったようだな」

「魔力吸収型ですか？」

「ああ」

魔力吸収型の魔法陣とは、普段はそれが描かれている事すら気が付けない物である。

肉眼でも目視が不可能で、その上にある一定以上の魔力を持つ魔法使いが来ると、そこから魔力を吸収して発動するそうだ。

「魔法使い専用の、殺し罠ですか……」

「直接殺傷型でなくて……、良くはないか……」

魔力吸収型の魔法陣の中には、突然攻撃魔法などが発動するケースもあるそうだ。

ところが、それならば逆に対応は簡単だとブランタークさんは語る。

「魔法障壁で防げば終わりだからな」

それと、その攻撃魔法のせいで一度で魔法陣が壊れてしまうらしい。

むしろ、今回のような強制移転魔法陣の方が脅威なのだそうだ。

「ここって、どこなんでしょうね？」

先ほどとあまり変わらない造りの、同じくらいの大きさの部屋で

あったが。
唯一違うのは、昇り階段とその前に設置されたプレートのようであった。

「プレートには、何て書いてあるんです？」

「『逆さ縛り殺しへようこそ』と書かれているな」

古代魔法文明時代の文字や言語は、今とそう違うわけではない。
例えば、『い』が『ヰ』だったり、『え』が『ゑ』だったりとか。
あとは、言い回しが古い物があるくらいであった。

その割には、専門的に研究をしている王国アカデミーの成果は少ないと評判だ。
冷静に見るとそこまで酷くは無いのだが、貴族やその子弟の有力な就職先なので、『無駄飯喰らい』と世間で噂されてしまうからであろう。

無責任な発表も出来ないので、『調査中』とか『不明』と質問に答える事も多く、口の悪い人達に『水晶占いレベル』と言われる事も多かったのだ。

「『逆さ縛り殺し』ですか？」

「死出の旅にようこそというやつさ」

このように、強制的に他の場所に造られた地下遺跡へと飛ばして、そこを突破しないと生きては帰れない。
『逆さ縛り』の由来は、本来ならば下に向かって降りて行くのが地下遺跡なのに、最下層に飛ばされて地上を目指さないと生き残れ

ないからであった。

「俺も、実は文献でしか知らないんだけどな」

とにかく大規模な罠なので、そう滅多にはお目にかかれないらしい。

ブランタークさんも、あくまでも書籍からの知識だけであるそうだ。

「これだけの罠だからな。先にはお宝があるかもしれんな」

それだけ危険なので、それを得る前に死んでしまう可能性もあるという事でもあった。

しかし、こんな時でも『お宝云々』を言うブランタークさんは、やはり根っからの冒険者であったのであろう。

「勿論、上に昇る時には……」

「おうよ、仕掛けた魔物とかが居るのが常識だな。ここの場合は、あのドラゴンゴーレムを見るに……」

この地下遺跡を造った人は、相当にゴーレムに自信がある人のようなので、間違いなくゴーレムが配置されているはず。

古代魔法文明時代に作られたゴーレムは、今の物よりも複雑な命令をこなす事が出来る。

装備されている人工人格が、圧倒的に優れているからだ。

「では、地上を目指して上がるとするか。三時間ほども気絶していて、魔力もある程度は回復しただろう？」

「俺は、そんなに……」

「なあに、そんなに気にする事じゃねえさ。これから、何回か繰り返すんだから」

ブランタークさんが言っている事の意味は、それからすぐに俺達に理解される事となる。

更に数時間後、ほぼ魔力が満タンになるまで休憩をした俺達が階段を昇ると、その先の小部屋にはまたドアがあり。

それを開けると、再びドラゴンゴーレムが設置されていたような広いフロアが広がっていて。

そこを埋め尽くすかのように、数百体以上は確実にあると思われる兵士型のゴーレムが待ち構えていたからだ。

オール金属製で、鎧を付けた兵士風のゴーレムの大群は、剣、槍、バトルアックス、フレイル、弓などを装備していて。

数十体の中に一体だけ、金属製の馬に跨ってランスを構えている騎士タイプの物も存在していた。

まさに、ゴーレム軍と言った感じだ。

「厳しいですね……」

「ああ、普通の軍隊よりも性質が悪い」

作り物なので恐怖など感じず、全滅するまで戦う。

人間の軍隊のように、士気が崩壊して逃走などという事はない。

いくら犠牲が出ても、ゴーレムは動揺などしないからで。

多少の損傷など、痛みを感じないので、人工人格さえ無事ならば気にせずに戦闘を続行するのだ。

つまり、全て全滅させる必要があった。

「それに、材質もな」

兵士型ゴーレムの材料は、鋼に極微量のミスリルが混ぜてあるらしい。

探知魔法を駆使したブランタークさんは、すぐに気が付いたようであった。

「エル達が無双するか、魔法でも一定以上の威力が無いと効かない」

数が多いので、それは長い目で見ると魔力を余計に消耗する事となる。

加えて、指揮官クラスの騎馬騎士型ゴーレムは、もう少し材料に混ぜられているミスリルの比率が高いようだ。

『探知』の魔法で探ると、兵士型ゴーレム比べて反応が薄い。

この薄さで、対魔法能力があるミスリルの存在と含有比率を探るのもベテランの領域であった。

俺もある程度は出来るようになっていたが、まだブランタークさんには及んでいなかったのだ。

「さてと、これからは後戻りは不可。攻略に何日かかるかは不明だが、完全休養など出来ないからな」

「えっ、マジで！」

ブランタークさんの発言に、エルが驚きの声をあげる。
強制転移先には、あの吸収型の魔法陣は存在しなかった。
つまり、完全な一方通行という事だ。
「瞬間移動で戻れないの？」
「坊主、説明してやれ」
イーナは、こんな危険な地下遺跡からは早く脱出すべきだと意見する。
幸いにして、前に全滅した二組のパーティーとは違い、俺には瞬間移動の魔法があるからだ。
ところが、それは使えないのだ。
「勘違いしている人も多いんだけど、瞬間移動を使うには二つ条件があるから」
移動先の完全な把握と共に、今自分がどこに居るのか？
一定の精度以上で知る必要があるのだ。
普通なら、今自分がどこに居るのかわからない人はいない。
なので、この条件を忘れてしまう人は意外と多かった。
「強制移転で飛ばされて、ここがどこなのか？　パルケニア草原内の地下だとしても、正確な座標がわからない。他の場所の地下かもしれないし……」

「相手は、魔法使いを良く知っているのね……」

魔法使いを良く知り、それを殺すために作られた罠。
この地下遺跡に抱いた最初のイメージはこんな感じであったが、同時にどこか違和感も感じ始めていた。
そしてそれは、ルイーゼとエリーゼも同じようであった。

「ねえ、なら何で移転先は安全なの？」

ルイーゼの言う通りに、移転先の部屋にゴーレムは押し掛けていない。
もし容赦なく俺達を殺すつもりなら、移転直後に攻撃可能なようにゴーレムを配置するであろうからだ。

移転先の部屋は安全で、俺は六時間以上も寝ていられたのだから。

「地下遺跡製作者の意図に、攻略者誕生もあると？」

「エリーゼの言う通りだとしても、その条件は相当に厳しいよね」

ルイーゼの言うように、攻略は不可能ではないにしてもその条件は途方も無く厳しい。

俺達が今まで生きてきた時間か、それ以上の年月冒険者をしていたベテランが、ここに辿り着けもしなかったのだ。
攻略確率は、そう高くないのかもしれなかった。

「何か、試されているようだね」

「そうかもしれないな」

移転先は、ゲームで言う所のスタート地点。
だから、敵は存在していない。
なるほど、そういう考え方も出来るわけだ。

その先に、スタート地点と同じような安全地帯は存在しない可能性が高いわけだが。
それと、最初の階層に入った時点で、そのスタート地点も使えなくなっていた。
今ブランタークさんが、スタート地点とこの階層を繋ぐドアが開かない事に気が付いたからだ。

「閉まったドアを魔法で吹き飛ばして、スタート地点に休憩に戻るのは？」

「壊れたドアからゴーレムが押し寄せたら、逆に追い込まれると思うぞ」

最初の休憩は、この地下遺跡を造った人の好意であり、それが出来るのは一回だけ。
ブランタークさんは、エルの意見に否定的な見解を述べていた。

「何階上がってゴールかも不明だ。戦闘は効率良く。特に、俺と坊主とエリーゼ」

治癒が使える俺とエリーゼに、魔力を他人に分け与えられるブランタークさん。
魔力は極力節約しながら戦い、場合によっては三時間ほどの強制仮眠も必要になるはずだ。

「目の前で、仲間が戦闘中に仮眠ですか？」

「そうだ、眠りの魔法で強制的に意識を落としてでもだ」

経験的に、三時間の仮眠を取れば魔力は三割ほど回復する。

だが、目前でエル達前衛要員がゴレーム達と剣を交わしている中で眠るのは、精神的にも厳しいはずであった。

「エルさん達は、いつ休むのですか？」

「俺の計算だと、一日に一回三時間の仮眠のみだ」

「それだけですか……」

王国軍の衛生規定で、従軍中の兵士は最低でも一日六時間の睡眠が義務化される。

エル達は、その半分の睡眠しか取れないという事だ。

「エリーゼの嬢ちゃん、治癒魔法には疲労軽減もあるじゃないか」

疲労軽減は、使えば丸一日くらいは戦闘を続けられる。

ただ精神的な疲労感には効果がなく、次の日には最低数時間は動けなくなってしまう。

疲労軽減というよりは、元気な時間の前倒しという方が正解なのだ。

「その動けない時間に、坊主の眠りの魔法で強制的に意識を落として、同時にエリーゼの嬢ちゃんの回復魔法も重ねがけする」

「うわぁ、相当に肉体的には辛いな」

そうする事により、強制的に三時間仮眠で戦闘に復帰させる。
こんな無茶をずっとは続けられないが、一週間くらいなら若いので大丈夫だという、ブランタークさんの判断であった。

「ああ、精神的にもな。一流の冒険者だと、たまにこんな無茶もするんだ」

睡眠時間を十分に確保して死ぬか？
体には悪そうだが、薬と魔法でドーピングをして睡眠時間を減らして生き残るか？

きっとブランタークさんの現役時代にも、そんな事が実際にあったのであろう。

「最初の部屋みたいに、眠れるスペースがあればこんな事はしないけどな」

ただ、そう現実は甘くないであろうという事のようだ。

「前衛は、エル、イーナ、ルイーゼで。仮眠時間で二人になる時間帯があるな。中衛は俺と坊主だが、前衛の仮眠時間と被らないように。それでも、魔力が減ったら強引に意識を落す」

「あの私は？」

「当然、エリーゼの嬢ちゃんも同じ条件だがな」

彼女の仕事は、仮眠をするメンバーの護衛に、常に治癒魔法が使えるように魔力の温存。

あとは、簡単に食べられる戦闘糧食の準備などがあった。

「悪いが、エリーゼの嬢ちゃんをゴーレム攻撃に当ててもな」

相手が一体ならともかく、数百・数千体なのでエリーゼには無理なのだ。

それに、治癒魔法の使い手が死ねば俺達は終わってしまう。

魔力温存の関係で、攻撃にも参加する俺が治癒を担当するわけにはいかないからだ。

「そういうわけだから、後方支援を頼むぞ」

「はい」

「前衛メンバーに、俺と坊主もだ。エリーゼの嬢ちゃんが、ゴーレムに襲いかかられたら負けだからな」

小規模ながら、これは軍事組織による敵の殲滅戦に似ている。

本陣であるエリーゼが落とされたら、後は休憩すら出来ないで負けが確定する。

相手は、敗走などしない恐怖すら感じない人工物なので、勝利条件は全滅以外に無くて相当に厳しいのだが。

「バウマイスター男爵家の、初代当主就任期間は長い方が良いな」

今の時点で、実はバウマイスター男爵家が断絶する可能性は無い。

他に兄弟もいるし、エーリッヒ兄さん達には子供が生まれたり、これから生まれもするからだ。

「当たり前だ。そのために、こっちは体を張るんだから」

「ボク、結婚もしないで死にたくないし」

「士気が崩壊したり、敗走は無いけど。人工物を何体バラしても、罪悪感を感じないのは良いわね」

「私も、ヴェンデリン様との結婚を楽しみにしていますし」

「なら、目の前の敵を効率良く、作業のように排除せよ！」

普段からはとても想像できない厳しい声で、ブランタークさんは俺達に指示を下す。

エル、イーナ、ルイーゼの前衛三人が、一斉に一番前列にいるゴーレムに斬りかかり。

俺とブランタークさんが、後方で待機中のゴーレム達に攻撃魔法を炸裂させる。

遂に、『逆さ縛り殺し』攻略がスタートしたのであった。

「おい、坊主！」

「……。本当に、三割も回復しているのかな？」

「精神的疲労で、少なく感じるんだよ。モチベーションを維持しろ」

ゴーレム殲滅のために効率良く魔法は展開していたが、相手はと

にかく数が多く、いくら倒してもキリがないような気がする。
『逆さ縛り殺し』攻略開始から五日後、俺は多分十回目だと思われる仮眠から強制的に目を醒ましていた。
正直、目覚めは最悪である。
今まで通りに魔力は回復しているそうだが、精神的に疲れているのでそうは感じられないからだ。

「次は、俺が仮眠を取る」

「わかりました」

ブランタークさんに眠りの魔法をかけると、いつの間にか隣にいたエリーゼが続けて疲労軽減の魔法もかける。
この魔法をかけて睡眠を取ると、短い時間で疲労感が取れ、起きている時のように精神的な疲労感も来ないからだ。

しかし、こんな魔法でドーピングして長時間戦闘を続けるのが体に良いわけがない。
俗に言う、緊急避難的処置というやつであった。

「ヴェンデリン様」

「すまない」

ブランタークさんの意識が落ちたのを確認すると、エリーゼが俺に食事を差し出していた。
とは言っても、メニューはハンバーガーモドキに、砂糖と塩を少量を混ぜた冷たい水のみであった。
十メートルほど先でエル達がゴーレムと剣を交えている音が聞こえるような状態では、お茶を淹れる事すら難しかったのだ。

しかも、そう時間も取れない。
俺は、前世の商社員時代のように一分以内にハンガーガーモドキを口に押し込み、スポーツドリンクモドキ水で流し込む。
早く、温かい御飯が食べたいものだ。

「ヴェル！」

「ちっ！　もう効果が切れたのか！」

俺はすぐに前に出て、風系統の障壁魔法をかける。
この障壁はゴーレムの前進を完全に防ぐ物ではない。
わざと一部分に穴を空け、そこから少しづつゴーレムが侵入して来るようにしているのだ。

そうして数を絞ったゴーレムを、前衛三人が順番に各個撃破していく。
最初は後方で待機しているゴーレムに攻撃魔法をかけていたのだが、それは無駄なのでもう止めていた。
なぜなら、彼らには数以外にも恐ろしい特技が存在していたからだ。

『倒しても、倒しても。ゴーレムが出て来る』

『裏の秘密工房で、生産していたりな』

『それだ！』

最初の階層において、俺達はその事実に気が付くまでにかなりの時間を無駄にしてしまっていた。

まず、その階層で待機しているゴーレムの数は、そのフロアに配備されたゴーレムの五分の一ほどである。
倒しても倒しても、フロアの壁や床の穴から増援が現れる。

続けて、撃破したゴーレムの残骸であったが、定期的にそれを回収していくゴーレムが存在するのだ。

『持ち帰って、修理しているのか？』

『それって、エンドレスかよ！』

ゴーレムは、頭部に内蔵している人工人格を破壊するか、もっと簡単な方法としては、人間と同じように首を切り落せば活動が停止する。
人工人格が、人間で言うところの脳に相当するからだ。

『エル！　首を切り落すだけじゃ駄目だ！』

イーナが槍の突きで、ゴーレム頭部にある人工人格の結晶を破壊した個体は回収されていない点から考えて、修理には人工人格とある程度の体が残っている事が必要なようだ。

『最低でも、頭部は回収』

『うわぁ！　ハードル上がったぁ！』

短時間の仮眠のみで戦い続けている、エルの魂の叫びであった。
それ以降、俺達は撃破したゴーレムの人工人格の回収に、フロアを次の階の階段目がけて前進する際に、ゴーレムの他の残骸も回収

して魔法の袋に放り込んでいた。

上の階で、その残骸が復活して襲い掛かるという悪夢を避けるためだ。

だが、そのせいでまた前進速度は落ちている。

この五日間で、攻略したフロアは九つ。

次第に、機動力のある騎馬騎士型ゴーレムの比率も増え、全員の疲労度も限界に近い。

「これで最後だと良いな」

約三時間後、目を醒ましたブランタークさんの言う通りであった。

九つ目のフロアをクリアーし、本当にこれで最後であって欲しいと上の階層に階段から昇る。

すると、十個目のフロアーには、埋め尽くすような兵士型と騎馬騎士型のゴーレムは存在しなかった。

「あれ？　これで終わり？」

拍子抜けしたような表情のエルであったが、他の全員は知りたくも無い事実を知ってしまう。

広いフロアの奥に、また再びアレが鎮座していたのだ。

強制移転前に、魔力切れで活動停止に追い込んだ。

いや、そうせざるを得なかった、ドラゴンゴーレムの巨大な姿が。

これだけ疲労させられた後に、再びドラゴンゴーレムを配置するなど、この地下遺跡を造った人は間違いなく性格がひん曲がってい

ると思われる。

「もしかして、前のよりも性能は上とか？」

「エル……、お前……」

「アレよりも、後に置いてあるんだ。そう考えても不思議は無いだろうに！」

確かにそうなのだが、今の時点でそれは言わないで欲しかった。

みんな疲労と寝不足で、何とか気力で支えている状態なのだから。

理論的には、疲労軽減や回復魔法などで俺達の体は完全に回復しているそうだ。

ところが、人間の精神はそうは思っていないらしい。

この五日間の精神的な疲労感で、今にも倒れてしまいそうなのだから。

「とにかく、アレを倒さないとベッドで寝られないぞ」

結局、この五日間で普通に寝られる時間は存在しなかった。

フロアーのゴーレムを全て倒し、上の階へ続く階段を昇る。

すると、昇った時点で階段が消えて床が閉じ、下の階へ行けなくなってしまうのだ。

強引に魔法で床をぶち壊し、下の階で休む事も検討したのだが、それをすると上のフロアーから押し寄せるゴーレムを防げない。

挙句に、下の階からまたガチャガチャと音が聞こえていて。

罠の仕掛けとして、またゴーレムが配備されたらしい。

いちフロアの攻略に時間をかけると、再びゴーレムが配置される仕組みのようだ。
まさしく『前門の虎、後門の狼』で、俺達は前に進むしか選択肢が存在しなかったのだ。

「とにかく、あのブレスは厄介ですね」

「前と同じくな」

フロアーを前進する俺達に気が付いた二体目のドラゴンゴーレムは、やはり強烈なブレスを放ってくる。
まるで、性質の悪い強力な砲台のようであった。

動くと、無駄な魔力を使ってしまうのか？
相変わらず機動性は皆無に近いが、このフロアーで縦横無尽に動こうとしてもあの巨体では自爆するだけであろうし、ならばブレスを吐き続けている方が脅威度は上であろう。

「ちっ！　威力が上がっているぞ！」

一体目と見かけは変わらないのに、ドラゴンゴーレムのブレスの威力は強くなっていた。
当然その分、魔法障壁で使う魔力量が増えてしまう。

そしてその魔力が尽きた時に、俺達にブレスを防ぐ手段は存在しない。
あの二組のベテラン冒険者達と同じく、骨まで燃えてしまうだけだ。

「どうする？　坊主」

「また、燃料切れ待ちですかね？」

「いやあ、それは不可能っぽいな」

ブランタークさんの指差した先には、ドラゴンゴーレムと繋がっているケーブルの存在があった。

要するに、今回は外付けエネルギー源付きというわけだ。

外部にある魔晶石からでも、魔力の供給を受けているのであろう。

あの万を超えるゴーレムの群れを見るに、この地下遺跡には大量の魔力が何らかの形で蓄えられているはずだ。

「イーナ！」

「任せて！」

このドラゴンゴーレムが、エネルギー源である魔力を外部からの供給されているのか？

ケーブルが切断された時の事も考えて、魔晶石も内臓されているのか？

わからないが、今は切断してしまうに限る。

イーナに合図をしながら、俺は魔法の袋から予備の槍を取り出して彼女に放り投げる。

それを受け取った彼女は、狙いを定めると一気にケーブル目がけて槍を投擲した。

俺は、魔方障壁の一部を槍のために開け。

ブランタークさんが何も言わなくても、その槍の威力を風の系統魔法で強化する。

イーナの狙いも正確であったので、槍は見事にケーブルを切断していた。

ケーブルの外部はミスリル製なので、魔法には強いが物理的な強度には限度がある。

ケーブルの直径から考えても、オリハルコンは組み込めないはずなので、予想通りにケーブルは切断されていた。

「予備で、魔晶石も装備しているな。動きが止まらない」

「外から、魔力の供給が無くなっただけでも良しとしないと」

ケーブル切断で動きが止まれば御の字だったのだが、やはりそこまで甘くは無いようだ。

ガッカリする俺に、ブランタークさんが慰めるように声をかけてくる。

「あとは、根競べだな」

だが、またしてもここで、戦況はこう着状態となってしまう。

半日以上も、連続して高威力のブレスを吐き続けるドラゴンゴーレムに。

それを、魔法障壁で防ぎ続ける俺とブランタークさん。

その間に、他のメンバーは交代で休養が取れていたが、ドラゴンゴーレムの方は一向に活動を停止する気配が無い。

外部から魔力供給を絶たれたのに、最初のドラゴンゴーレムよりも高威力のブレスを同じ時間吐き続けて停止しないという事は、よ

ほど高性能で巨大な魔晶石が内臓されているのであろう。

「まだ粘りますか？」

「いや、時間が無くなった……」

今まで、ドラゴンゴーレムのブレスを防ぐ事しかしていなかったツケとでも言うべきか。

俺達は、この地下遺跡を造った臍曲がりの怒りを買ったらしい。

突然、今までは消えていた下の階へ続く階段が再出現し、更にその手前に横一列に並んだゴーレム達の姿をブランタークさんが確認していたのだ。

「えっ！　今度は下から！」

俺達が何日もかけて破壊した、大量のゴーレム兵士達。

その損害の補給が終わり、ゴーレム達は地下遺跡の創造者の命令により。

最上階で、ドラゴンゴーレムのブレスを防ぎ続けるという、つまらない戦闘を続けている俺達の排除に動いたようだ。

ゴーレムは、横一列になって階段を昇って来る。

「エル！」

「本当に、後門の狼が出た！」

休息は取ったので、何とか元気なエル、イーナ、ルイーゼの三人は階段付近に陣取り、下からガチャガチャと音を立てながら上がっ

てくるゴーレム達との戦闘に入る。

階段前で、エル、イーナ、ルイーゼの三人は横並びになり、下の階から上がって来るゴーレム達を破壊しながら階段下へと突き落としていく。

だが、倒しても倒しても、新しいゴーレムが次々と階段を昇って来ているようだ。

次第に、エル達の表情に焦りと疲労の色が滲み出始めていた。

「ヴェル、このままだと全滅よ！」

「しまった、追い詰められた……」

なまじ、前のドラゴンゴーレムを倒す時に、魔力切れを狙った持久策が成功したのが良くなかったのかもしれない。

というか、前のドラゴンゴーレムの時には兵士型ゴーレムは存在していなかった。

前提条件が違うのに、同じ戦闘方法を取った俺のミスでもあるのだ。

「多少の危険を承知で、攻勢に出ていれば……」

「坊主、嘆くな。時間を惜しんで攻勢に出ても、失敗していた可能性もあったんだ。それよりも、今どうするのかを考えろ」

こんな危機的な情況でも、ブランタークさんは冷静なままであった。

さすがは、長年一流の冒険者として活躍していただけの事はある。

俺は、素直に感心していた。

「後方の三人は、そう長時間は支えられないぞ」

続々と階段を上がって来る、多数の兵士型ゴーレムを順番に撃破しながら侵攻を防いでいるので、持久力の関係でいつか限界が来てしまうからだ。

この五日間、魔法と薬でドーピングをして睡眠時間を削ったのも良くなかった。

エリーゼが三人の後ろから疲労軽減魔法をかけているが、もう最初の頃のような効果はないようだ。

俺もそうなのだが、もう精神的に限界が来ていて長時間の戦闘は不可能になっていた。

「ならば、短時間でドラゴンゴーレムを倒す」

「それしかねえな」

倒せば、最悪でも前に逃げられる。

もしかすると、ドラゴンゴーレムが倒れるとクリアー条件を満たすかもしれない。

一種の賭けであったが、このままブレスを防ぎ続けるよりは勝算が高いのかもしれない。

俺は、覚悟を決める事にする。

「俺は、魔法障壁を止めます」

「大丈夫か？」

ブランタークさんは心配しているが、勿論補佐はして貰う。

ドラゴンゴーレムが吐き続けているブレスは、基本的に無属性の魔力を前に吐き出しているだけの代物だ。

それでも、超高速で吐き出されている魔力と喰らった相手との摩擦によって超高温状態となり、人間などは骨も残らない。

全滅した二組の合同パーティーの末路を見れば、それは一目瞭然だ。

「ドラゴンゴーレムのブレスを再現してそれにぶつけ。押し返して、その頭部を破壊します」

無属性の魔力同士でも、ブレス同士がぶつかれば膨大な熱が発生する。

なので、それはブランタークさんに防いで貰うつもりだ。

もし早くドラゴンゴーレムのブレスを押し返せれば、その分ブランタークさんへの負担は減るはずであった。

元々、ブランタークさんが二体目のドラゴンゴーレムのブレスを防ぐ魔法障壁を展開すると、魔力量の関係でそう長時間は保たない。

だが、短時間なら対処は十分に可能であった。

「俺は大丈夫だがよ。坊主の残存魔力はどうなんだ？」

ここ五日間の無茶で、多少は容量は上がっているはず。

だが今は、半日にも及ぶ魔法障壁の展開で、魔力は二割ほどしか

残っていなかった。

「駄目ですかね？」

「坊主が、いかに早くブレスを遠方に押し返すかによる」

それにより、ブランタークさんは魔法障壁の展開が必要なくなる。

もしそうなれば、ブランタークさんから魔力を分けて貰えば良いという作戦なのだ。

「最初に、ブーストをかけますよ！」

そう言いながら、俺は魔法の袋から魔晶石を一つ取り出していた。

万が一の事を考えて、余裕がある時に自分の魔力を貯めていたのだ。

実はもう四つあったのだが、それはもう使用して空っぽであった。

ゴーレム軍との戦闘で、回復が間に合わないので使ってしまっていたのだ。

「あとは……」

以前に、パルケニア草原にいた魔物から採取した魔石も何個か残っていた。

エネルギー効率を考えると一方的な大損害なのだが、命には変えられない。

魔晶石に加工していない魔石から全ての魔力が抜けると、まるで灰にようになってから崩れてしまい、二度と使えなくなるからだ。

「挙句に、本来の蓄積量の二十分の一以下しか魔力を補給できずと」

「その分も、ギルドと王宮の連中に請求してやれ」

「ですよねぇ。では、いきます！」

合図と同時に、まず俺が魔法障壁を解き、同時にブランタークさんが全力で魔法障壁を展開する。

「坊主、この威力だとそうは保たねえ！」

「了解です！」

俺はすぐに、脳裏にドラゴンゴーレムのブレスを思い浮かべ、それを正確に再現しようとする。

全くのぶっつけ本番であったが、自然と不安はなかった。

まるで根拠は無かったのだが、自分では出来ると信じていたからだ。

「（そういえば、師匠も大丈夫だと……）」

まさか、口から魔法を吐くわけにもいかないので、両腕の手の平をドラゴンゴーレムへと向け、同時に体内の魔力を加速させながら前方へと放出するイメージを頭に浮かべる。

すると、すぐにブレスに似た無属性の魔法が吐き出され。

ドラゴンゴーレムのブレスと激突して、眩いばかりの光を放つ。

「坊主、魔法の威力を上げろ！」

あとはブランタークさんの言う通りに、無属性の魔法でドラゴンゴーレムのブレスを押し返さないといけない。
まずは、自分に残った魔力を遠慮せずに投入し、続けて一個だけある魔晶石から魔力を抜き出して使用する。

俺の無属性魔法は徐々にドラゴンゴーレムのブレスを押し返していくが、魔力の消耗が激しいのですぐに意識が朦朧としてくる。

「坊主！　しっかりしろ！」

ブランタークさんの叫び声がおぼろげに聞こえる中、俺の記憶は一時的に過去へと飛んでいた。

『魔法においては、即応性は非常に重宝される。例えば、敵対する相手が初めて見る魔法を使ったとする。ヴェルは、どうする？』

まだ子供の頃、短い期間ではあったが忘れられない思い出である、師匠との修行の日々。
休憩中に、俺は師匠からこのように尋ねられていた。

師匠は、たまに俺が考え込んでしまうような質問をぶつけてくるのだ。

『防いで、様子見ですかね？』

『初手は、それで十分。だが、先の手が無いといつかは魔力が尽きて倒される。ヴェルは、どうするのかな？』

『……』

『戦いはの環境は、すぐに変化する。下手な考えは、何もしていないのに等しい。一つの答えとして、相手の魔法を見て同じ魔法をぶつけてしまう手がある。即応なので、似たような魔法でも構わないよ。この場合の利点は……』

『相手の動揺を誘えるですか？』

『そういう事だね。そして、また冷静になって考えるんだ。相手は、どの属性の魔法を使っているのかと』

『その属性が、負ける属性の魔法に切り替えると？』

『正解だ。火魔法には水魔法を。土魔法には、風魔法をとかね。ただ、ヴェルが冒険者になると出会うかもしれないのだが……』

冒険者の仕事には、古代魔法文明時代の遺跡探索という物もある。そしてその遺跡には、ある特殊な敵が存在する。

古代魔法文明における魔法技術の極地を結集した、一般にはゴーレムと呼ばれる人工生命体とも呼ぶべき存在。

魔力をエネルギー源にして動く、恐れを知らない無慈悲なカラクリ兵器が、冒険者という侵入者から遺跡や収蔵物を守ろうとするのだと。

『ゴーレムの中には、魔法を使う物もある』

正確には、魔力を流すと魔法が発動する魔道具を仕込んであるとでも言うべきであろう。

『その中でも、一番多いのは無属性の魔法だね』

貯めた魔力を、敵に向けて超高速で加速して飛ばすだけなので、魔道具の仕掛けが複雑にならないらしい。

他の属性魔法だと、その属性具現で必要な魔道具の仕組みや使用魔力の量が増えるそうだ。

『無属性には、それに強い属性が無い。逆に、弱い属性もないわけで』

どの属性が相手でも、一定の効果が望めるのだそうだ。

『闇属性の親戚ですか？』

『いや、闇とは違うね。属性が付く前の魔力をただ放っているだけなのだから。闇は伝承扱いだけど、ちゃんと闇属性に変化すると思うんだよ。私は』

『なるほど、では無属性への対処方法ですか』

『強い属性も弱い属性もないから、どの属性魔法でも高威力にして打ち消すしかないんだよね。ある意味厄介なんだけど、ヴェルのように魔力の量が多いと生き残れる可能性は高い。あとは、ヴェルが無属性魔法を放てるようにするかだね。同じ無属性同士なら、魔力消費効率も良い。少ない差だけど、これが生き残れる鍵になるかもしれない。でも、無属性は逆に難しいからなぁ。聖ほどではないんだけど……。ヴェルならいけるかな？』

そういえば、あの時には結局使えなかったのだが、人間危機が迫ると案外使えるようになるらしい。

『師匠、出ましたよ。無属性の魔法が』と思ったところで、突然肩を揺さぶられて目を醒ましていた。

「坊主、魔力不足で意識が飛びかけたな？」

「すいません」

「いや、体はちゃんと動いていたさ。それに、意識が飛んだ時間は一秒もなかった」

いつの間にか片膝はついていたが、両手の平を前に出し、無意識で無属性魔法を放ち続けていたようだ。

そして肝心の魔力であったが、大分ドラゴンゴーレムのブレスを押し返したおかげで魔法障壁が必要無くなり、ブランタークさんが俺の両肩に手を置いて魔力を補充している最中であった。

「ブランタークさん」

「俺も、予備の魔晶石は全部使い切っている。こうなったら、気絶するまで魔力をお前に渡すしかねえ」

「わかりました」

俺もブランタークさんも、もうこれで魔力に余りなどなくなる。

これらを全て使い切る前に、ドラゴンゴーレムのブレスを完全に

押し返してドラゴンゴーレムの頭部を破壊できるのか？
出来なければ、再び押し返されたブレスで、全員が骨まで消滅するだけであった。

「ヴェル！　魔力なら！」

「ルイーゼは、駄目だ！」

ルイーゼは、後方の階段から迫るゴーレム迎撃の要なので、こちらに来られても困る。
ドラゴンゴーレム破壊前に、後方からゴーレムに蹂躙されれば意味が無いからだ。

同時にエルとイーナも、俺に分けられるほど魔力を持っているわけでもない。

そもそも、全ての魔力を渡しても、変換効率のせいで大して足しにもならなかったのだ。

「今、冷静に計算して。魔力が足りないかも」

「とにかく、前に放て！　俺は、全部魔力を渡すから後は宜しく」

そう言うのと同時に、ブランタークさんは意識を失って倒れてしまう。
これで、残りは俺が持っている魔力だけとなった。

手の平から放ち続けている無属性魔法は、徐々にドラゴンゴーレムのブレスを押し返し、目標であるドラゴンゴーレムの頭部までもう十メートルほど。

ところが、それに危機感を感じたドラゴンゴーレムは更にブレスの威力を増大させ、それに対応するために俺も魔力を大量に使用する。

あまりの魔力使用量の増加に、俺は内心焦りで一杯になっていた。ジリジリと魔力が減っていく感覚が、二年半の修行のおかげで鋭敏にわかるようになっていたからだ。

「（拙い！　とにかく、一秒でも早く完全に押し返さないと！）」

ところが、いくら焦ってもそう簡単に押し返せる物でもなく、密かに危機感を募らせていると、再び両肩に誰かの手が置かれる。

「ヴェンデリン様」

それは、エリーゼの手であった。

「以前に、ヴェンデリン様から買って頂いた指輪が役に立つ時がきました」

そういえば、婚約した直後に魔力を貯められる指輪をプレゼントしていたのを、今になってやっと思い出す。

エリーゼの手から、次第に魔力が流れ込んで来るのが確認でき、どうやら魔力切れという事態は今は避けられそうであった。

ところが……。

「一向に押し返しきれねぇ……」

人工人格に心があるのかは不明であったが、ドラゴンゴーレムは三度ブレスの威力を増していた。

もしかすると、自分を破壊されたくないのかもしれない。

というか、どれほど巨大な魔晶石を内臓しているのであろうか？

外部から魔力を補給するケーブルは絶っていたし、一体目と同じく頭や背中に装備している、空気中から魔力を集めるミラーは、あくまでも補助でしかない。

それだけ、巨大な魔晶石が埋め込まれているという証拠でもあった。

「拙い！　また魔力が……」

ブランタークさんはもう気絶しているし、エリーゼ自身にどれだけ魔力が残っているのかは不明であったが、彼女は治癒の名手でも、魔力付与には長けていないと以前に聞いている。

なので、ここで彼女から普通に魔力を分けて貰っても、あまり足しにならなかったのだ。

「ヴェンデリン様！」

「もしかすると、押し返される。ブランタークさんを引っ張って、ブレスの射線から外れてくれ。エル達もだ！」

このままブレスが押し返されると、俺は間違いなく骨まで消し炭だが、同時に後方の階段を上がってゴーレム達も巻き添えであろう。

それに、いくら何でもドラゴンゴーレムの残存魔力量に余裕などないはず。
上手く立ち回れば、俺の犠牲だけで他の全員が生き残れる可能性もあった。

「そんな、ヴェンデリン様を置いてなど……」

「ヴェルも、逃げれば良いだろうに！」

「無理だな。お互いに全力で魔力を放出して相手を破壊しようとしているんだから」

逃げるために、魔力の放出を少しでも弱めたら、俺は一秒とかからないで押し返されたブレスで燃やされてしまう。
逃げるも死で、前に進むのも死な以上は、一人でも犠牲を減らす努力は怠るべきではなかった。

「ヴェル、やっぱりボクの魔力を！」

「それは温存しておけ！」

魔力が空で意識もないブランタークさんに、魔力は治癒魔法のために温存が基本なエリーゼ。
となると、俺が死んだ後には、一番戦闘能力に長けているルイーゼも余計な消耗をすべきではなかった。

「ヴェル、あなた……」

「すまんな、イーナ」

イーナは、ゴーレムを倒しながらも懸命に最善の手を考えているようだ。
とても彼女らしいとも言えるが、もう策は尽きたのだ。

「あの世で、師匠からまた魔法でも習うかな」

「そんな物騒なセリフを吐くな！」

エルが激怒するが、やはりどう計算しても少し魔力の量が足りないようだ。
俺の魔力が尽きるのは、ドラゴンゴーレムの頭部から一メートルほど手前の位置。

なまじ、計算が可能なので絶望も大きかった。

「ヴェンデリン様……」

あの曲者の祖父のせいで、優しいエリーゼは常に苦労していた。
もし俺が死んでも、まだ婚約状態なのでいくらでも良い嫁ぎ先はあるはず。
ここで、俺に付き合って死ぬ事などないのだ。

「（死か……）」

怖くないと言えば嘘になるが、もしかするとまた一宮信吾として目を醒ます可能性が無くもない。
このヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターの人生は長い夢で、俺は再び二流商社マン生活に戻るのではないかと。
そんな気もしてくるのだ。

「ヴェンデリン様……」

「エリーゼは美人なんだし。ここで俺に付き合わなくても、他にいくらでも嫁ぎ先が……」

「いえ！　私は、ヴェンデリン様の妻になります！　だから、ヴェンデリン様も諦めないで！」

「ええっ！」

まさかここで、エリーゼがこんなに声を荒げるとは予想だにしなかった。

続けて、俺の視界をエリーゼの顔が塞ぐ。

後ろから両腕を俺に首に回し、顔を前に出して俺の唇を自分の唇で塞いできたのだ。

要するに、後ろからキスをされているとも言える。

「なぜに！」

「エリーゼ、大胆」

「羨ましい……」

エリーゼの突然の行動に、エル達も驚きを隠せないようであった。

「（なっ！）」

続けて俺が驚くのと同時に、なぜか体の奥から魔力が湧き上がって来るのが感じられる。

「（なぜだ？　エリーゼには、魔力付与の才能は……）」

エリーゼでは、今彼女に残っている魔力を全て俺に注ぎ込んでも、変換効率が悪いので全体の一％も回復しないはず。

なのに、今の実感では二割以上は回復しているように感じていた。

「ヴェンデリン様……」

「エリーゼ！」

唇を離したエリーゼは、半分意識が朦朧としているらしい。

今にも消え入りそうな声で、俺に話しかける。

「『奇跡の光』を使いました。でも、魔力不足で完全には……」

「そういう事か」

『奇跡の光』とは、聖系統の最高級治癒魔法の一種であった。

膨大な魔力を使うのだが、瀕死でも生きていれば完全に回復する。

教会でも、使い手は五十名ほどしか確保していないそうだ。

当然、エリーゼもその中の一人だ。

そして、この魔法にはもう一つ効果がある。

かけた人の魔力を、ついでのように半分ほど回復させるのだ。

この魔法、別に俺のように大怪我をしていなくてもかける事は可能である。

していない怪我は治せないので魔力の無駄になり、今までにそんな事をした人はいないようであったが。

エリーゼはただ俺の魔力を回復させるためだけに、この魔法を使ったのであろう。
ある意味、盲点とも言えた。

「これで、少しは魔力を……」

「わかった、エリーゼは安心して寝ているんだ。なっ？」

「はい……」

その言葉を最後に意識を失ったエリーゼは、俺に負ぶさったような状態でスヤスヤと寝息を立て始める。
普段の半分ほどの効果でも、『奇跡の光』はエリーゼの残存魔力を全て奪い去ったようだ。

「エリーゼ、諦めて済まなかったな。でも、もう大丈夫」

俺は、背中に負ぶさったままのエリーゼに優しく声をかけながら、徐々に無属性魔法の威力を上げていく。
最後の最後で得られた貴重な魔力を、惜しげもなく全力で放出して目の前のブリキ竜をぶち壊す。
今の俺には、これ以上にする事など存在しなかったからだ。

幸いにして、今の俺はキスのおかげで非常にハイテンションであった。

「ドタマ吹き飛ばして死ねい！」

ここで変に魔力の出し惜しみなどして、また魔力不足になる事態は避けたい。

後方のゴーレム集団への不安はあったが、それはエル達に任せるしかなかった。

最悪、俺達を背負って前へと逃げて欲しい物だ。

そんな事を考えている間に、一気に放出した俺の魔力は底を尽き。

そのコンマ数秒前には、ブレスを押し返した俺の無属性魔法が、ドラゴンゴーレムの口から侵入してその内部を蹂躙する。

ドラゴンゴーレムの口腔内にもミスリル装甲が張られているはずであったが、狭い口腔内で自分のブレスと俺の無属性魔法が激突して炸裂したのだ。

いくらミスリルでも、この破壊力に抗えるはずはなかった。

哀れ、頭部が爆散したドラゴンゴーレムはその動きを止めてしまう。

派手な金属音を立てながら、その体が完全に前のめりに倒れてしまったのだ。

そして、頭部を失ったドラゴンゴーレムは微動だにしなくなった。

続けて……。

「あれ？　ゴーレム達の動きも止まった」

「あのドラゴンゴーレムが、ボスであるという定義でオーケー？」

「そういう事なんでしょうね」

今まで、次々と押し寄せていた兵士型のゴーレムも、全てがその

動きを完全に止め。
階段下は、まるで死体だらけの戦場跡のような静寂さを迎えていた。

「ヴェル、やったじゃないか」

「ああ……」

ようやくゴーレム集団からの脅威が解決し、安心したエルが俺に声をかけてくる。
だが俺も、ブランタークさんやエリーゼのように魔力が尽きて、今にも意識を失いそうであった。

「もう意識が飛びそうだ……。エル、後は任せるから……」

「ヴェルも限界か。厄介なゴーレム達も、動きを止めたから任せておけ」

「そうか……。なら、安心して……」

目の前の強敵を破壊して安堵した俺は、エルの言葉を聞くとそのまま意識を失ってしまうのであった。

第四十三話　地下遺跡の戦利品。

「のう、アームストロングよ」

「はい」

「心配ではあるの」

「少しだけではありますが」

ちょうどヴェンデリンが、二体目のドラゴンゴーレム破壊に成功した直後。

王宮内のヘルムート三十七世の私室において、ヘルムート三十七世とアームストロング導師はまたワインを飲みながら話をしていた。

「無責任な王宮雀共は、バウマイスター男爵が死んだのではないかと。特に、アレが騒いでおるわ」

「ルックナー会計監査長ですな」

共に財務系ながら、侯爵位を継げた兄ルックナー財務卿と、継げなかった弟ルックナー会計監査長の仲の悪さは有名だ。

そもそも、その役職からして両者の仲が良いはずもない。

予算を編成して執行する財務卿に、予算の使用状況を調査して無駄を指摘する会計監査長にと。

このところは、弟の兄への攻撃も激しくなっている。

兄と同じ派閥の者や、子飼いの連中のミスや無駄遣いを執拗に追及しつつ、自分の派閥や子飼いの連中には手心を加える。

そしてそれを、逆に兄から指摘されると。

周囲は、この二人は死ぬまでこうやって争っているのであろうなと思っているほどだ。

しかもこの二人、バウマイスター男爵の扱いでも正反対の対応を見せていた。

「ルックナー財務卿は、兄との繋がりでバウマイスター男爵と縁があるからの」

逆に、弟のルックナー会計監査長は縁を結べなかったので、彼と敵対している。

別に、碌に顔も合わせていないバウマイスター男爵に恨みがあるわけでもない。

むしろ、認知していない子供を雇って貰えたから恩があるはずなのに、なぜか彼と敵対しているのだ。

あまりに兄への憎悪が強く、『坊主憎けりゃ袈裟まで憎い』というやつらしい。

「あとは、ルックナー財務卿に反感を持つ連中を纏め、対立派閥を維持するためであろうがの」

共に財務系で、ルックナー会計監査長は兄を蹴落として財務卿の地位が欲しい。

そのためには、彼やその係累と仲良くするわけにはいかなかったのだ。

「話を戻しますが、遺跡探索で一週間連絡が取れないくらいで大げさですな」

「経験者は、そう思うのか」

「ええ。大規模な地下遺跡なら、最低でもそのくらいは潜りっ放しゆえに」

「なるほどの。では、ルックナー会計監査長は罪深い男よの」

何が罪深いのかと言うと、バウマイスター男爵が死んだかもしれないので、その後継者候補に連絡を取っていると報告が入っていたのだ。

「後継者候補ですか？」

「未婚ではあるが、兄弟に親族もおる」

「ですが……」

万が一の事も考えて、バウマイスター男爵はアームストロング導師に継承者の順位は伝えてある。

屋敷に遺書もあるし、それはルックナー会計監査長の子供である家令ローデリヒが、使用人を統率して厳重に管理している。

ローデリヒは、ルックナー会計監査長の子供ではある。

だが、ルックナー会計監査長側が認知もせず顔も合わせていない

せいで、ローデリヒは彼を実の父親だとは思っていないそうだ。
無責任に生ませて放置したせいで、恨みはあっても恩など一つも無く。
ゆえに、裏切る可能性は皆無とも言えた。
むしろ、喜んで実の父親と敵対するであろうと。

悲しい話ではあるが、貴族の中には無責任に平民の娘に子供を生ませ、認知もせずに放置する人も多い。
血は水より濃いとは言うが、その濃さが肉親間の憎悪を増幅するケースもあるのだ。

「兄達の子供に、年齢順に継承権を与えているようですな」

継承権一位に、数ヶ月前に生まれたばかりのエーリッヒの長男イエルンを。
次に、パウルとヘルムートに生まれる予定で、現在妻達のお腹にいる子供達にと。
もし生まれた子供が女なら、婿を取るので何の問題もない事になっていた。

周囲からすると、今バウマイスター男爵に死なれると困るが、万が一に備えて遺言くらいは残しておいて欲しい。
その結果の、早過ぎる遺言でもあった。

王族や貴族ならばそう珍しくもないのだが、たまにそれを忘れて当主が急死し、いらぬ争いを呼ぶケースもあるので必要な処置とも言える。

「それがの。実家の長男に連絡を取ろうとしておるようじゃ」

「あの南の僻地のですか？」

「そうじゃ。バウマイスター男爵の実家のな」

場所が場所なので、連絡には時間がかかるはず。

しかも、長男には男の子が二人居るが、バウマイスター男爵は継承順位すら指定していない。

遺言状が無ければ継承権は上なのだが、あるので継承の目などまず無く。

つまり、ルックナー会計監査長の暴走とも言えたのだ。

というか、彼がバウマイスター男爵家の継承に口を出す権利はない。

完全な、スタンドプレーであった。

「可哀想にの。長男は、ぬか喜びに終わって」

自分の子供のどちらかを、財産があるバウマイスター男爵家の跡取りに。

そんな嘘を言って翻弄する、中央の罪深い貴族ルックナー会計監査長と。

ルックナー会計監査長は、別に長男の子供が跡を継げなくても構わないのだ。

騙された長男が、その怒りをルックナー財務卿やその係累にぶつけて混乱を巻き起こしてくれるのなら。

間違いなく、バウマイスター男爵が死んでいても、継承権はエー

リッヒ達の子供に移る事となる。
屋敷にそう書かれた遺言状があるし、その写しは王国の公的な役所である貴族血統局にも保管されているので、まず異議を唱えても認められないであろうからだ。

勿論、そんな事は中央が長いルックナー会計監査長とて十分に承知している。
間違いなく、その結果を踏まえてから、その決定に不満を抱く長男にこう囁くのであろう。

『貴殿の子供の男爵位継承は、家を出た弟達によって阻まれた。彼らは、長男だから正統に継承者となった貴殿が憎いのだ』

他家の兄弟の仲を引き裂き、それを利用して実の兄に混乱を与える。
とんでもない輩とも言えるが、別に中央の法衣貴族でそんな連中など珍しくも無い。

いつもある、風物詩のような物であった。

「僻地とはいえ、普通に爵位を継げる者を翻弄か。あの男も、相当に罪深い」

「あの男、一見貴族の習性として動いているように見えて、実は兄が憎いだけですからな」

自分の方が優秀なのに、侯爵家とその財産を兄に奪われた。
苦労して法衣男爵にはなったものの、いつも兄は自分の邪魔をしてくる。
そんな憎しみのみで、五十年近くも兄と敵対しているのだから、

ある意味ルックナー会計監査長は情熱の人でもあったのだ。

物凄く、他人には迷惑な情熱とも言えたのだが。

「そもそも、あのブランタークが付いていてバウマイスター男爵が死ぬはずも無い。無意味な行動であるな」

とはいえ、ヘルムート三十七世は覚悟していた。

一部のバカのせいで、南方で何か騒ぎが起きる可能性が強まったと。

バウマイスター男爵が死んでいても生きていても、それは将来確実に起こるはず。

実家の領地に残る長男と、家を出た弟達による少々生臭い兄弟喧嘩がだ。

これぱかりは、本人達が気を付けていてもこの有様である。

周囲に煽る者が居て、それに誰かが乗ってしまえばこうなってしまうのだと。

「バウマイスター男爵は、既に成人している。余計に長男も、不安を感じているであろうしの」

「大人しくしていれば良いものを」

「本人としては、大人しく篭っていたいのであろう。外部から唆す輩がいて、それに抗う能力が無いから場当たり的に動く。しかも、それを自分の愚かさだと気が付きもしない」

「唆されないで、動かない可能性は？」

「余が想像するに、ありえん。なので、王国千年の計のため、犠牲となる小になって貰うつもりだ。まあ、もう少し待ちの時間は必要であろうが」

「某としては、かの長男が自重する事を祈るまでです」

「余とて、その方が楽だがの」

二人はワインを飲みながら、それから暫く話を続ける。

そして三日半後、バウマイスター男爵達が無事に地下遺跡を攻略したという報告を受けるのであった。

同時に、これで収まらない輩もいるであろうと思いながら。

「あーーーあ、ヴェルは重いよな」

「エルは、ヴェルが男だから重いんでしょう？」

「そうだな。エリーゼなら、背負い甲斐もあると言う物だ」

「ヴェルに言い付けてやる」

「卑怯な……」

ブランタークさん、エリーゼ、ヴェルと。

三人もの魔法使いが全ての魔力を消耗して意識を失っている中で、俺達は頭部を破壊されたドラゴンゴーレムの後ろにある扉へと歩い

て移動していた。

あのエリーゼが使用した聖治癒魔法『奇跡の光』によって魔力をある程度回復させたヴェルは、その全てを無属性魔法に込めてドラゴンゴーレムにぶつけていた。

ドラゴンゴーレムが口から吐く無属性のブレスを押し返し、逆にその口腔内に無属性の魔法を叩き込んだのだ。

当然、ドラゴンゴーレムの頭部は、哀れ大爆発の後に完全に吹き飛ぶ事となる。

更に、その頭部にはドラゴンゴーレムの人工人格も搭載されていたらしい。

すぐに動きを止め、続けて俺達が下り階段前で防いでいたゴーレム達も一斉に動きを止める。

どうやらあのドラゴンゴーレムが、この地下遺跡の防衛システムの要であったようだ。

何はともわれ、まだ動ける三人で意識を失っている三人を背負って逃げる羽目にならないで助かった。

正直、この五日間か六日間で、俺達は疲労の極地にあったのだから。

「地下遺跡の探索は、ヴェル達が目を醒ましてからだな」

「ええ」

その前に、ちゃんと休める場所を確保しないといけない。

あとは、地上への出口であろうか？

幸いにして、あの大量の存在するゴーレムはもう一体も動いていない。
更に先にある扉を開けると、そこには直前まで人が住んでいたかのような居住空間が広がっていた。

「大昔の地下遺跡の部屋なのに……」

ルイーゼは、埃一つない書斎やリビング、キッチン、バスルームなどに驚いているようだ。
だが、古代魔法文明時代の遺跡では、そんなに珍しい物でもない。

何でも、今はロストマジックになっている状態保存の魔法がかけられているからだそうだ。
この魔法が効いていると、数千年前の物でもまるで劣化しないらしい。

「とにかく、三人を寝かせないと」

「そうだな」

見付かった寝室にはベッドが四つ置かれていたので、一つにイーナが背負っていたブランタークさんを。
もう一つに、俺が背負っていたヴェルを寝かせる。

「うーーーん、今回の功労者だからなぁ」

続けて、エリーゼを背負っていたルイーゼであったが。
彼女は少し悩んでから、エリーゼをヴェルの隣に寝かせていた。

「優しいじゃないか」

「少々の嫉妬はあっても、エリーゼの『奇跡の光』のおかげで、みんな生き残れたわけだし」

確かに、エリーゼが居なければパーティーは全滅していたであろう。

あそこでヴェルだけが犠牲になって、俺達を一時的に生き延びさせても、後の展開にまるで希望が持てなかったからだ。

「『奇跡の光』か。凄い魔法なんだよな？」

「当たり前でしょう。その教会に一人使える人がいれば、信徒達から拝まれるレベルの魔法なのよ」

どんな重傷者でも一発で全快させるので、とにかくインパクトが強いのだとイーナが説明していた。

例えば、馬車に轢かれて瀕死の重傷になった子供を、母親が抱き抱えながら教会へと駆け込む。

泣きながら、子供を助けて欲しいと願う母親。

そこに、『奇跡の光』の使い手が登場。

素早く子供を治し、子供は元気に走り回る。

教会発行の聖人列伝にも記載されている、現実にもたまにある奇跡の光景というやつだ。

目に見える奇跡なので、信徒達にも人気のシチュエーションなのだ。

教会の人気を支えていると言っても、過言ではなかった。

「へえ、そうなんだ。でも、変だな？」

「何が？」

「『奇跡の光』って、キスをしないと効果がないの？」

「そう言われると……」

キスをしないと発動しないとなると、上の奇跡の構図がおかしな事になる。

もし『奇跡の光』を使える魔法使いが、子供にキスをしながら魔法を使うと。

教会でも禁忌となっている、同性愛的な組み合わせになる可能性があるからだ。

これでは、聖人列伝への掲載は難しい。

「あーーーっ！　どさくさに紛れて！」

「というか、魔法にキスなんてあるか！」

ルイーゼばかりでなく、珍しくイーナも大声を上げていた。

どうやらエリーゼは、あの危機的場面でちゃっかりとヴェルにキスまでして、その気を魅いていたようだ。

加えて、気絶するまで自分の残存魔力を全て使っての、献身的な魔力回復と。

アレをやられて、落ちない男など居ないのではないかと。

少なくとも俺は、ヴェルが物凄く羨ましいと感じていた。

エリーゼが、本当の天使に見えるような光景であったからだ。

「（エリーゼって、実は物凄く自分の女の魅力を理解しているよな……）」

逆に言うと、もうヴェルはエリーゼから逃げられないような気もする。

ヴェルも基本的にはエリーゼが好きなので、本人は何の疑問も不満も抱かないのであろうが。

「（ホーエンハイム枢機卿、あんたの孫娘教育は間違ってないんだな……）」

エリーゼの魅力にどっぷりと浸かり、そこから抜け出すつもりも無い、半ば尻に敷かれつつあるヴェルという親友兼主君。

可哀想に、俺とはもう住む世界が違うようだ。

「（今度、ブランタークさんが楽しい大人のお店に連れて行ってくれるそうだし。ヴェルは、勿論不参加で）」

そう考えると、あとの残り始末も楽しく出来るという物だ。

だがその前に、今は交代で睡眠を取る必要があった。

ここまで疲れていると、後の探索作業に支障を来たしそうであったからだ。

「それでだ。まずは、誰が起きて見張りをするかで……。って！おい！」

俺が考え事をしている間に、エリーゼの行動に怒っていたイーナは、自分もちゃっかりとエリーゼの反対側の位置でスヤスヤと寝息を立てていた。

大の字でベットに眠るヴェルと、その左右の腕を枕にして眠るエリーゼとイーナ。

少し前に、本屋で立ち読みしたサーガの主人公と同じ事をしていたのだ。

そういえば、あの主人公も両手に華で楽しそうに見えて、大変に羨ましくもあった。

「羨ましいとは思いつつ、今のヴェルには魔力を早く回復して貰わないとな。それで、ルイーゼ？」

「ボクは、今は寝ないよ」

「偉いな、嫉妬しないのか」

ヴェルの左右のポジションを二人に取られて怒っているのかと思えば、意外にもルイーゼは冷静その物であった。

寝ている四人が起きるまでは、俺と一緒に見張りに参加してくれるそうだ。

この情況なので、俺は一人で見張りをする覚悟をしていた。

ドラゴンゴーレムは破壊され、ゴーレムは一体残らず停止し、この居住エリアは綺麗なままで過去に踏み荒らされた様子もない。

見張りは念のためであり、別に俺一人でも構わなかったわけだ。

「元々、ヴェルを独占なんて無理だしね。ここはエリーゼのように健気に見張りをこなし、あとでヴェルの隣で寝る事にする」

「そういう事ですか……」

それから半日ほど。

俺は、最初にブランタークさんが起きるまで、暇潰しと眠気醒ましを兼ねてルイーゼと話をしながら見張りを続けていた。

「おい、どうなった？」

早速目を醒ましたブランタークさんが、自分が気絶した後の事を尋ねてくる。

俺はルイーゼと共に、詳しく情況を説明していた。

「最終的には、ヴェルがドラゴンゴーレムの頭部を魔法で吹き飛ばしました」

「ゴーレム達は？」

「ドラゴンゴーレムの停止と同時に、全てが動きを止めましたけど」

「そうか。やはり、あのドラゴンゴーレムの頭部には、リンク式の人工人格が内蔵されていたんだな」

そのリンク式の人工人格とは、ドラゴンゴーレム自身だけでなく、ゴーレム軍を用いた地下遺跡の防衛システムのコントロールも兼ねていたらしい。

だから、その爆発と共にゴーレムの動きも止まったのであろうと

ブランタークさんは説明していた。

「一番破壊が困難な場所に設置する。至極常識的であったわけだ。しかし、エリーゼの嬢ちゃんに救われたな」

ブランタークさんは、ヴェルの腕枕でスヤスヤと眠っているエリーゼを一瞥しながら『しょうがない』と言った風な表情をする。

ブランタークさんの立場だと、エリーゼの正妻としての立場が強くなると困るのだが、エリーゼ本人が良い娘な上に貢献度も上なので何も言えないのであろう。

特にブランタークさんは、自分もエリーゼに助けられているわけだし。

というか、どうせブライヒレーダー辺境伯様は碌な娘を紹介できないのだ。

俺に言わせると、『もう諦めたら?』という感じであった。

「さてと。残りの探索やら、地上に出る入り口の捜索は、全員がちゃんと睡眠を取ってからだな。お前らも、早く寝ろ」

「正直、助かりますわ」

「ボクも、眠くて……」

後は、ブランタークさん一人でも大丈夫だと言うので、俺は空いているベッドに。

ルイーゼは、危険な事に大の字で寝ているヴェルの足に間に入り込んですぐに寝息を立てていた。

「ちょっ！　ルイーゼ！」

その位置は、ヴェル的には非常に危険である。

いくら左右が埋まっているとはいえ、とにかくそこは危険なのだ。

「坊主、大人気だな」

「ルイーゼ、その位置は危険……」

「気にするだけ無駄だな。エルの坊主には刺激が強いか。後で王都に戻ったら良い店に連れて行ってやるから」

「はあ……」

ブランタークさんとそこまで話しをしたところで、俺は突然の睡魔に襲われ、そのまま意識を失ってしまうのであった。

「無事にドラゴンゴーレムも破壊され、一番奥の居住エリアに到着したと」

「何とか、命拾いしたわけだな」

ドラゴンゴーレムの頭部を吹き飛ばした直後に、魔力が尽きて気絶していた俺は、丸一日ぶりに目を醒ましていた。

一週間弱ぶりのまともな睡眠で、昨日のように精神的な疲労から

来るダルさも無く、久しぶりの爽快な目覚めだ。

それと、魔力切れギリギリの状態を何度か経験し、精神的にも緊迫していたようで、自分でもわかるほどに魔力量が上がっている感覚も実感している。

無事に地下遺跡の防衛システムも解除できたわけだし、生き残る事も出来た。

いきなり素人にこんな依頼を寄越す連中に文句も言いたくなるが、それは後だ。

何しろ、俺にはもっと切迫した事情が存在するのだから。

「ヴェンデリン様、おはようございます」

いつの間にか、見知らぬベットで大の字に寝ていた俺。

その右隣では、エリーゼが俺の腕を枕に寝ていて、ほぼ同時に目を醒ましていた。

「おはよう。エリーゼは、体調とか大丈夫？」

「はい、魔力もほぼ回復しています。あの、御飯をお作りしますね。ヴェンデリン様も、温かい御飯が食べたいでしょうし」

「そうだな。お腹が減ったな……」

丸一日半近くも何も食べていないので、俺の腹はグーグーと鳴りっ放しであった。

「……。ヴェル、起きたのね？」

続けてすぐに、俺の左隣で寝ていたイーナも目を醒ます。
彼女も、俺の腕を枕に寝ていたようだ。

というか、いつの間にこういう事になっていたのであろうか？

「ヴェル、大丈夫なの？」

「これだけ寝ればね。イーナの方は？」

「久しぶりにちゃんと寝たような感じ」

「だよなぁ。こんな無茶は、もう御免したいよな」

「そうよね」

この二人は良いのだ。
腕枕で両方の腕は痺れていたが、前世でそれは男にとっては嬉しい痺れだと聞いている。
実際に、とても心地良い物であった。

特に、前世における痺れ経験が正座による物だけだったので、大変に良い時間を過ごせたと思うのだ。

だが一人だけ、とんでもない位置で寝ている奴がいた。
俺の内太腿を枕に、ルイーゼが寝息を立てていたのだ。
正直、その位置は大変に危険であった。

「おい、ルイーゼ」

「時間的に、もう少し目を醒まさないと思うぞ」

一向に目を醒まさないルイーゼに、ブランタークさんはニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべていた。

この人も、完全睡眠で魔力は完全に回復しているようであった。

「寝るのはともかく、場所が拙い！」

「同じ男として、大変だなとは思う」

「そんな他人事のように……」

「残念ながら、他人事なんだな。これが」

このままでは拙いのでルイーゼの頭の位置をズラそうとすると、彼女は眠ったまま俺の胴体に抱き付き、まるで抱き枕のようにされてしまう。

「さすがは、武芸経験者。寝技の達人だな」

「ブランタークさん……」

実際、体の小さいルイーゼに、俺が何ら反抗できなかったのも事実だ。

寝たままの彼女に抱き枕扱いされ、それを解こうにもまるで金縛りにでもあったかのように体が動かない。

しかも、それで体のどこかが絞められて苦しいというわけでもないのだ。

むしろ、ルイーゼの体温とフローラルな匂いが伝わって来て、と

ても心地良い感じであった。

「なあ、イーナ」

「私も、子供の頃に同じ事をやられたのよ。まず、外すのは不可能だから」

イーナも、ルイーゼの家に泊まった時に同じように寝たまま抱きつかれ、一向に外せなかった経験があるそうだ。

「力じゃなくて、体の支点を抑えられているから絶対に外せないわ。ルイーゼが起きるまで寝てなさい」

「しゃあない。二度寝も、贅沢のうち」

それから数時間、また俺はルイーゼに抱き付かれながら寝る羽目になり、結局パーティーメンバー内で一番遅くに目を醒ます事になるのであった。

「やっと、探索に入れるか」

贅沢な二度寝の後、全員が十分に睡眠を取ったので探索を再開する事にする。

起床後に、エリーゼが今も普通に使える居住エリアのキッチンで作った食事を食べ。

探索後の食事も彼女が担当すると言うので、任せる事にしてあとの全員で探索に入る。

ドラゴンゴーレムが守っていた扉の奥は、地下遺跡の終点地であった。

数千年以上も前の物のはずなのに、まるでつい先程まで誰かが使っていたようにも見える書斎。

他にも室内には、地下水を吸い上げてからろ過をして出す水道に、魔晶石を利用したコンロに、お風呂やシャワー、洗濯機、冷蔵庫なども置かれ、この中に篭って生活が出来るようになっていたのだ。

今は、エリーゼが甲斐甲斐しく食事を作っている。

「隣は、作業場だな」

部屋には他に二つのドアがあり、片方はエルが作業場のような部屋だと報告していた。

ブランタークさんと共に見てみると、王都で見た事もある魔道具の製造工房に造りが似ているようだ。

「魔道具の工房か？」

「らしいですね」

書斎の本を見ていたイーナが、その本の中から一冊の日記を見付けてブランタークさんに渡していた。

「イシュルバーク伯爵か……」

その日記の持ち主の名前らしいが、もし本当ならかなりの有名人である。

古代魔法文明時代における魔道具造りの第一人者で、今でも現存

している彼の作品は高い評価を受けている。
実は、現在稼動している魔導飛行船はそのほとんどが彼が設計をした物なのだ。
なるほど、あんな危険な防衛システムを構築できるのだから、天才なのは確かなようだ。
この世の天才の宿命として、人間的には相当に性格がひん曲がっているようであったが。
「それで、この部屋も工房も綺麗なのか……」
現状保存の魔法をかけてあるのだが、その効果が数千年以上も持続していて。
それだけで、イシュルバーク伯爵がいかに優秀な魔法使いであったのかを証明する物でもあった。
「この書斎の本とかも、研究をすれば魔道具作りの技術進歩に繋がるかもしれないと？」
「その可能性は高いな」
良く見ると、魔法や魔道具関連の書籍が多い。
一部の本棚などは、彼の研究ノートらしき物が数千冊も収められているようであった。
「ねえ、もう一つの部屋だけど」
続けて、もう一つの部屋の様子を見に行ったルイーゼも戻って来るが、その報告は驚きの内容であった。

「向こうの部屋は、格納庫の入り口だったんだ」

ルイーゼの案内でもう一つのドアを開けると、そこにはドラゴンゴーレムが置かれた広場よりも広大な空間が広がっていた。

その部屋というよりも空間は、まるで造船所のような造りになっていて、造船用の船渠が十以上も連なり、それぞれに重量物専用の魔導クレーンが複数設置されていた。

「壮大な光景だな」

船渠は半分以上が空いていたが、それでも数えると七隻の魔導飛行船で埋まっていた。

大きさは、俺達が乗って来た定期飛行をしている魔導飛行船とほぼ同じ大きさのようだ。

どうやらこの施設は、魔導飛行船専用の建造・整備ドッグのようであった。

「外見上は、完成しているようですね」

「問題は、中身の巨大魔晶石が無事かどうかだな」

過去の遺産である魔導飛行船が再就役可能かどうかは、機関部に使っている魔晶石が無事かどうかにかかっている。

年数が経っているので、質の悪い魔晶石だと既に壊れている事が多いからだ。

現在の技術で、魔導飛行船を飛ばせるだけの魔晶石を造る事は難しい。

過去にあった、小さい魔石を複数材料にして大きな魔晶石を造る技術が失われているからで。
滅多に手に入らない、属性竜以上の魔物から得た巨大魔石からでないと造れないのだ。

二年前に、俺が倒した二匹の竜の魔石が強制的に王国によって買い上げられた理由でもあった。

「これ以上の調査は、王国側に任せるか」

「地下遺跡の様子の方も、見に行かないと駄目だろう」

「あのゴーレムとか、再稼動しませんよね？」

「さあな？」

どうせ、魔導飛行船やその専用ドッグに関する知識などないので、今度は『逆さ縛り殺し』の地下遺跡に戻って調査をする事にする。

全地下十階で、各フロアーは巨大な長方形の石壁の空間であり、数十箇所に防衛用のゴーレムを供給する穴が開いている。
フロア内には、俺達が突破後に再配備されていたゴーレムが活動を停止したままで置かれており。
俺達が近付いても無反応なので、ブランタークさんの推論通りに、あのドラゴンゴーレムの頭部に防衛システムの大元が内蔵されていたのであろう。

「ミスリル含有の鋼で作られ、動力は頭部に人工人格の結晶と並立配置された魔晶石か」

全員で停止中のゴーレムを一体バラし、中の構造を確認する。

「でも、このくらいの造りなら今でも」

「問題は、人工人格の性能だな」

人工人格は、見た目は透明な水晶の結晶に似ている。

この中に、特殊な魔術言語を特殊な魔法で記録させるのだそうだ。

当然、魔術言語を理解していないとそれは不可能だ。

理解していても、記録魔法が使えないと結晶に記録できないし、

その前に人工人格の結晶が作れないと意味が無い。

よって、現在では作れる人が非常に少なかった。

一番難しいのは魔術言語だそうで、前世で言うところのコンピュータ言語に似ているのだが、その手の分野が苦手な俺にはサッパリ理解不能であった。

文字ではなく、数万種類にも及ぶ模様のような物がビッシリと書かれている本を見た事があるのだが、基本的な法則とか以前に見ているだけで頭が沸騰しそうになるのだ。

師匠ですら、『全然わからないよね？　私も、全然駄目でね』と笑っていたくらいなのだから。

それに、どうせ理解できたとしても。

今の魔道具職人の技術力だと、ここにあるゴーレムのような動きは出来ない。

戦争で突撃くらいにしか使えない理由は、そこにもあったのだ。

「しかし、イシュルバーク伯爵も何を全力で守りたかったのか……」

「この地下遺跡全部でしょうね」

使っているミスリルとオリハルコンの材料費だけでも目の玉が飛び出るドラゴンゴーレム二体に、合計で万を超える兵士型と騎馬騎士型のゴーレム。

更に調査で、地下十階部分に隣接している、ゴーレムを修理して補給する無人工房まで設置されているのを確認していた。

そこでは、損傷したゴーレムを運搬専用ゴーレムがベルトコンベアーの端に載せ。

コンベアーを移動中に、上半身だけの修理用ゴーレムが効率良く修理を行う。

修理が終わったゴーレムは、自力で移動用の専用通路から侵入者の居る階層へと向かう仕組みになっていた。

「オーバーテクノロジーの極みだな。久々の大発見でもある」

そして、これらの設備全てを動かすための魔力を供給する、巨大な魔晶石の存在も確認される。

その大きさは、前に倒した骨古代竜の魔石を遙かに超えていた。

あれだけ派手に魔力を使ったのに、その巨大魔晶石はいまだに赤く輝き続けていたのだから。

多分、相当に気合を入れて魔力を補填していたのであろう。

「イシュルバーク伯爵は、全財産と全研究成果をこの地下遺跡に隠

したと？」

「うあぁ、偏屈な人だなぁ」

家族が、信用できなかったのか？
その家族すら、実は居なかったのか？
真相は不明だが、案外天才とはこんな生き物かもしれなかった。
孤高の天才という奴かもしれない。

「粗方の調査は終えたんだがな。坊主は、これからどうする？」

「どうすると言われても……」

安全に地下遺跡の全てに入れるようになったし、お宝の大半が、魔導飛行船やら、ミスリルとオリハルコンを大量に使用した巨大な魔晶石で動いているドラゴンゴーレムというのも拙い。

残されている文献なども、場合によっては国家機密になってしまう可能性もあり、俺達はここで調査を止める事にする。

既に、この遺跡にある全ての物の権利は俺達に確定しているわけで、あとはプロの査定が必要になっていたのだ。

「俺が一足先に王都に戻って、王城から調査団を送るように言って来る。坊主達は、見張りでもしながら待っていろ」

「はあ……」

結局、俺達の冒険者初仕事は、もう少しで死ぬ所であった上に、ワクワクするような金銀財宝なども得られなかった。

それよりも高額なお宝を見付けてはいたのだが、これを換金可能なのはこの依頼を寄越した王国というのも性質が悪い。

それと、この地下遺跡の出口であったが、呆気ないほど簡単に見付かっていた。

あの魔導飛行船専用ドッグに屋根の開放装置があり、レバーを入れると天井部分が開いて日の光が差し込んでいた。

魔導飛行船のドッグが地下深くにあっても仕方がないので、当たり前と言えば当たり前なのだが。

地下遺跡の場所も、最初の遺跡より王都側に位置する台形状の巨大な岩山の中というオチで。

正直、今まで良く発見されなかったと思う。

パルケニア草原内にあり、この二年半は草原内の開発に忙しかったからであろうが。

あとは普通に考えて、こんな岩山の中とその地下に巨大な地下遺跡があるとは誰も思わなかったのであろう。

「ヴェンデリン様、夕食の支度が出来ました」

「美味しそうな匂いだな。腹減ったし、飯にしようぜ」

「頂いた材料で、味噌煮込みを作りましたよ」

既に、この地下遺跡に脅威など存在していなかったので、エリーゼは一人居住エリアに残って食事の支度をしていた。

さすがに、もうハンバーガーモドキとスポーツドリンクモドキ水

だけの食事は暫く勘弁して欲しい。
これが、全員の一致した意見であったからだ。

料理は、エル以外はある程度出来るのだが、やはり一番腕が良いのはエリーゼであり、彼女が料理担当になる事が多かった。

「俺も、飯食ってから外に出るわ」

「落ち着いて食える飯の、素晴らしさよ」

「ヴェルは、飯に拘るからな。確かに、毎食肉挟みパンだと飽きるけど……」

「エリーゼ、次はボクとイーナで作るから」

「そうね、エリーゼに任せ切りなのも悪いし」

その後は、ブランタークさんが王宮とギルドに地下遺跡攻略の報告に向かい、その間俺達は過酷な初仕事で疲れた体を休養で癒すのであった。

幕間十八　地下遺跡攻略後の後日談。

「ブランターク殿。バウマイスター男爵達は、辛うじて地下遺跡を攻略したと？」

「まあ、そういう事になりますね」

新規に結成された坊主の冒険者パーティーに指南役として付いて行った俺は、そこで死にそうになっていた。

現役時代でも未経験だった、吸収魔法陣による『逆さ縛り殺し』への強制移転に、万を超えるゴーレム集団や二体ものドラゴンゴーレムとの死闘。

まさか、坊主に魔力を全て渡すために、魔力切れからくる気絶を経験するとは思わなかった。

気絶など、普通は駆け出しの魔法使いしかしない物だからだ。

現役時代にもヤバイと思える事は何度かあったが、今回は老火竜を倒した時を超えるヤバさであったと思う。

それでも、何とか地下遺跡の攻略に成功したので。

俺が先行して、王城や冒険者ギルド本部に報告に戻っていた。

別に坊主達と一緒に戻っても良いのだが、今回の件は下手をすれば責任問題に発展する。

坊主達も、内心では相当頭にきているはずなので、少し冷却した方が良いであろう。

ああ見えて、普段の坊主は王都の偉いさん達に表立って不満を言うような事はしない。
元の性格が慎重なのと、いくら向こうが悪くても、口に出してしまえば問題になるのがわかっているからなのであろう。

ところが、今回は冒険者ギルドのトップや王国側への不満を珍しく言った。
ここは俺が、大人として偉いさん達に坊主の心情を伝えるべきであろう。

向こうも悪いと思っているからこそ、こうして非公式ながら関係者が集まって話し合いが始まるようであったが。

「いつもの、謁見の間ではないのか……。あんまり、大っぴらに話せないからな」

そのためであろう。

今、俺は王城の謁見の間ではなく、とある防諜装備の整った会議室にいる。
室内に居るのは、陛下に、アームストロング導師に、ルックナー財務卿、ホーエンハイム枢機卿、冒険者ギルドの総帥、副総帥に最高幹部数名と。

俺は、ギルド本部の連中とは仲が悪いのだが、連中は俺に嫌味を言う余裕もないようだ。
前に二組も優秀な合同パーティーを全滅させ、危うく坊主達すら全滅させるところであった。

このクソったれな連中は、俺の参加が無ければ二流の剣士を一人

だけ指南役に付けてお茶を濁す予定であったのを、陛下に知られてしまったのだ。

しかし、何でそんなバカな事をしようとしたのか？

陛下と導師に心当たりがあるように見えるが、ギルド幹部達の話を聞くと違っていたらしい。

なぜか首を傾げていた。

「つまり、優秀な魔法使いが一人に、治癒魔法の名手である聖女に、魔闘流の闘士もいたから、前の二組のパーティーよりは実力が上であろうと？」

「ギルドとしましては、先の損害で通常の業務に支障が……」

一流の冒険者が二十名以上も死んだので、その穴埋めで大忙しなのだそうだ。

オドオドした表情で説明をする幹部連中であったが、こいつらが一昔前までは、一流の冒険者達であったと誰が信じるであろうか？

現役を退き、碌に鍛錬もしていないので腹が弛んで、保身のために陛下の前でオロオロとした表情で説明をする。

俺が早くに、現役を退きたいと願う要因の一つであった。

こういう連中を、老害と言うのだ。

「それは、あんたらのミスのせいだよな？　まあ、その件は良いさ。それよりも、俺が強引に付いて行かなかったらバウマイスター男爵達も死んでいたぜ」

「その件に関しましては、陛下とブライヒレーダー辺境伯様に対してお詫びの言い様もなく」

「勿論、ブランターク殿へも」

ペコペコと頭を下げる幹部連中であったが、本心では俺に頭を下げるなど、屈辱以外の何物でもないのであろう。

心なしか、顔が少し赤いような気がする。

「ギルド側は、戦力不足から来る焦りが原因である、必要戦力の算定ミスだと？」

「はい」

「そうであるか」

陛下は未だに首を傾げているが、何か他の情報でも得ているのであろうか？

同じく、アームストロング導師とルックナー財務卿も、不思議そうな表情を浮かべていた。

「しかしながら、ギルドのみならず我らにも責任が……」

続けて、アームストロング導師が発言をする。

「某も付いて行けば……。この二年半で、バウマイスター男爵もルイーゼ嬢も強くなった。なので、大丈夫だと」

「それを言うと、余にも責任があるの。アームストロングだけの意見を聞いて、ブランタークだけで十分だと判断した」

全員に責任があるので、あまり個人を特定して追及という席にはなっていなかった。
かく言う俺にも、追加で助っ人を頼まなかった責任がある。
坊主の魔法使いとしての力量から、冒険者としての実力を過大評価してしまったのであろう。

そしてそのミスのせいで、俺自身も死に掛けたわけだ。

「ところで、ウェルナー総帥」

「はい、何でしょうか？」

ここでようやく、ルックナー財務卿がギルドマスターに質問を開始していた。
何か、聞きたい事があるようだ。

「指南役の人選、とある会計監査長が絡んではおるまいな？」

「いえ。冒険者ギルドの運営で、そのような口出しを認めるわけには……」

ルックナー財務卿にしては、珍しくストレートに質問をしているようだ。
この会議室に居る関係者も少なく、防諜も完璧だからであろう。

しかし、驚いた。
ここで、ルックナー財務卿と不仲の弟の話が出て来るとは。

あの男の評判は、あまり宜しくはない。

兄であるルックナー財務卿との不仲も有名で、兄とその派閥への攻撃のために、坊主への指南役をわざと手薄にしようとしたという疑惑があるらしい。

だが、さすがにそれは陰謀論であろう。
なぜなら、ギルドは貴族や王国からの干渉をえらく嫌うからだ。
もう冒険者を引退した俺が指南役になるのに、こいつらはえらく反発した。

俺が、陛下とお館様の意向を受けていたからだ。
本人達を目の前にすると、こんな物であったが。

さすがに会計監査長の役付きとはいえ、男爵程度の圧力に屈するほど連中も軟弱ではないであろうし。

「嘘はないと信じるが、嘘なら陛下も許さぬと仰せである」

「神に誓って」

基本的に、ウェルナー総帥は小心者だ。
陛下相手に、嘘までつくはずがない。

それと、冒険者が小心者でも何の問題も無い。
小心は慎重に繋がり、それは冒険者として得難き資質でもあるからだ。

現役を引退すると途端に情けなく見えてしまうのだが、それは仕方のない事だ。

「あの男、ギャンブルが下手だな」

「ギャンブルが下手？」

俺が思わず口に出した疑問に、ルックナー財務卿が答える。

「あの男は、ワシを財務卿の地位から追い落として自分が後釜に座りたいわけだ。なのに、無茶をしない」

自分の会計監査長の椅子を守りつつ、余った物でセコいギャンブルを続けている。

今の体制で、彼が兄を追い落として財務卿の椅子に座れる可能性は低い。

ならば、時には大きな悪行に身を染めても賭けに出るべきであろうと。

なのに、それが出来ないからギャンブルが下手なのだと、ルックナー財務卿は語っていた。

「あの男、ワシよりも優秀だと自認しておるのにな」

「さすがに、それはないかと……」

「兄弟だからわかるが、そんなに大差はないとワシも思うよ」

ならば、既に地位が能力を作ってしまっている兄を蹴落とすなど不可能に近い。

なのに、ポーズとしては敵対して財務卿の椅子に未練を見せる。

俺からすると、不可解な男でもあった。

それと、一見安全な場所から、さも自分は賢いとばかりにこういう事をしていると。
いつか、予想外のしっぺ返しを喰らうのではないかと思ってしまうのだ。

「プライドが高いから、『やっぱり無理です』とは言えないのであろう。財務卿の椅子が目標ではなく、財務卿の椅子を目指していると周囲にポースを見せるのが目的になっておる」

「それで、派閥を維持していると？」

「貴族なんて、そんな生き物だからの」

それで派閥を維持できれば、特に問題もないのであろう。
それと本人は、まだ心のどこかで財務卿の椅子を狙えると思っている。

そういう事のようだ。

「あの男のセコいギャンブルで、犠牲になる男もいるのだが……。まあ、それは後にしよう。ところで……」

問題はあるが、取り敢えずはバウマイスター男爵は生き残った。
そうなると、次の問題が発生する。

「ブランタークよ。その地下遺跡にあった物の概要に間違いはないのか？」

「はい」

実際に自分も見て回ったので、間違いは無い。
魔導飛行船専用のドッグに、魔道具工房に、魔道具関連の研究資料など。

専門家に見て貰わないと正確な評価を出せない物も多いので、俺が先行して報告しているという理由もあったのだ。

「大発見だな」

確かに、ルックナー財務卿の言う通りだ。

普通の冒険者なら、引退するまで活動してもあのドラゴンゴーレムの足一本分も稼げない。
そんな厳しい世界で、坊主達はとてつもない成果を挙げた。

優秀な魔法使いである事を差し引いても、あの坊主には何か人とは違う運が付いているのかもしれない。

坊主自身が、良く悪運だと言っている物だ。

「（その悪運とやらに、俺も良く巻き込まれるものだがな……）」

「しかし、困った……」

同時に、困る部分もあった。
少し考えれば、王国の財政に詳しくない俺にでもわかる事だ。
それだけの成果を査定した後に、その評価額を坊主達に支払わなければいけないのだ。

王家は、大陸一の資産家である。

その資産額は、東、西、南部を任されている辺境伯が謀反を起す気すら考えないレベルであり、唯一対抗可能な隣国アーカート神聖帝国の皇家ですら及ばない。

あの国は、皇家の他に選帝侯に指定されている公爵家が七つもあり、次期皇帝を決める時にはそこからも候補者が出て、貴族や大商人が主体となっている貴族会議の投票が行われる。

王家ほど、強固な中央集権国家ではないのだ。

何を言いたいのかというと、その王家でも今回の成果に報酬が払えるのかという点にある。

払えなくも無いし、買い取った物を王家が有効に活用すれば払った金は確実に取り戻せるであろう。

いや、もっと資産が増えるかもしれない。

だが、決済用の白金貨が大量に坊主の魔法の袋に入るのは、王国の経済上宜しくないとルックナー財務卿は考えているようだ。

一時的にでも、王家が所持する現金資産が一気に減るのを容認できないのであろう。

「では、王権で取り上げますか？」

「それは、拙い……」

その時点で、あの坊主は王国に未練など無くすであろう。

元々、無一文で荒野に放置しても生活可能で。

それを逆に楽しみそうなくらい、あの坊主は逞しい根性をしている。

でなければ、十二歳になるまで実家であの境遇なのに、あそこまで達観しているはずがない。

前に、エーリッヒ殿から大まかな坊主の実家生活を聞いて、俺は驚きを隠せなかったのだ。

普通の子供なら、いや子供の頃の俺がその立場なら、間違いなくおかしくなると思うほどであった。

あの坊主の鷹揚さは、限界が来れば王国など鼻糞のように見捨てて。

明日から新天地で、何食わぬ顔でその生活を楽しめる点から来ている。

さすがにそのくらいは、陛下もルックナー財務卿も重々承知なのであろう。

そしてその新天地とは、間違いなく隣国アーカート神聖帝国になるはずだ。

向こうも、優秀な魔法使いなら喜んで受け入れるであろうし、仮想敵国の戦力ダウンで笑いが止まらないはず。

坊主を、丁重に受け入れるであろう。

「まずは、専門家を派遣して評価額の算定ですか」

「防衛も必要でしょう」

魔導飛行船の建造、整備ドッグに、七隻の使えそうな魔導飛行船にと。

特に前者は、場所が予想以上に王都から近い。

ここを整備すれば、平時は空軍の重要拠点に。
王都に危機が迫った時には、臨時の王宮や政府すら移転可能であった。

他にも、あの大量のゴーレムに、その無人修理工房と。
ドラゴンゴーレムの現物もあるし、あのイシュルバーク伯爵の研究資料や、工房には彼の試作品などもあるのだ。
持ち出しを謀る輩が出ると困るので、早期に警備を強化する必要があった。

「あの、ただの台形岩山にか。盲点であったか」

果たして、どれだけの評価額になるのか俺にも見当が付かないほどだ。

「（まさか、引退後に冒険者としての夢だと思うレベルのお宝に遭遇するとは……）」

逆に凄過ぎて、こうして面倒な事にもなっているのだが。

「それで、バウマイスター男爵達への報酬なんですけど……」

「うーーーん、困った……」

払わないわけにはいかないが、その影響を考えるという事らしい。
暫く唸った後に、ルックナー財務卿はウェルナー総帥に視線を送る。
その視線で、ウェルナー総帥は冷や汗をかいていた。

冒険者ギルドは王国や貴族からの干渉を嫌うが、ここはホームで

はないので、ウェルナー総帥もタジタジなのであろう。

曲がりなりにも、現役時代は高名な冒険者だったのに、その臆病ぶりに溜息が出る。

現場では、『王族や貴族が何だってんだ！　クソ喰らえ！』みたいな連中も多いのだが、現場から管理職になるとこうなる人は多い。

素直に、現実に気が付いたとも言えるのだが。

「バウマイスター男爵に渡す報酬の算定は、暫く時間がかかる。それが確定してからの事なのだが……」

ルックナー財務卿は、ウェルナー総帥との相談に入る。

冒険者ギルドのトップには、総帥などと言う大仰しい名称が付いている。

まだ小規模で、海千山千のアウトロー達の溜まり場であった頃の名残りなのだ。

今は、この体たらくであったが。

それでも、何とか王国や貴族の機嫌を損ねないようにギルドの独立性を保とうと努力はしている。

それが感じられないと、下から『辞めちまえ！』と突き上げを食うからなのだが。

この連中は、俺に幹部の地位を奪われると思い、追い出し工作に必死だったようだが。

こんな組織で上と下に板挟みになるくらいなら、まだお抱えの方がマシという物だ。

「ギルドは、冒険者が得た利益の二割を徴収するのが決まりであったと思うが……」

そんな事を、ルックナー財務卿がいちいち確認すること自体がおかしい。

そのくらい、子供でも知っているからだ。

冒険者ギルドは、その二割の上納金で運営されている。

財政状況は、悪くない。

他のギルドに比べると、冒険者ギルドには自己責任の観念が強く、初心者への支援以外ではそれほど費用がかからないからだ。

殉職した人間にだって雀の涙ほどの見舞金を渡すくらいで、あの見舞い金では、葬儀代の一部くらいが精々なのだから。

「上納金については、個別に相談したいものだな」

ルックナー財務卿は相談とは言っているが、事実上の命令とも言える。

『碌にバウマイスター男爵達を支援してないのに、高額になるであろう上納金をお前らがタダ取り？　勿論、遠慮するよな？』という趣旨の事を言いたいのであろう。

「特別な案件なので、条件によっては……」

ここで王国側から、冒険者ギルド責任論でも垂れ流されると困ったのであろう。

ウェルナー総帥は、すぐにその条件を呑んでいた。

こういう部分が、小役人的で現場から嫌われる要因なのだ。

「さすがにゼロだと、ギルド側も厳しいはず。固定の額を、王宮からワシが責任を持って支払う」

いくらなのかは知らないが、これでほぼ上納金の分は坊主達への支払いが減額できるわけだ。

坊主達の手取りが減るわけでもないので、文句など出ようはずもない。

弟と才能に差が無いとは言うが、そんなはずがないと思えるこの男の恐ろしさでもあった。

ギルド側の責任を追求しない代わりに、金は渡さない。

王国政府だから出来る、無茶ぶりとも言えたのだが。

「ギルド側が、受け入れてくれて良かった」

この言葉で、この席におけるギルド関係者達の必要性は無くなったようだ。

ルックナー財務卿に促され、連中は席を立って部屋の外に出て行く。

責任が消えて喜んでいるのか？

それとも、莫大な額の上納金が無くなって落ち込んでいるのか？

俺には、連中の詳しい心の内を理解できない。

それでも、安心して欲しい。

そんなクソったれな椅子、俺は死んでもゴメンだ。

「さて、これで本音を聞けるか。ブランタークよ」

ギルド関係者が部屋を出ると、すぐに陛下は俺に声をかけてくる。
本音とは、多分坊主が今回の件をどう思っているかであろう。

「『本気で死に掛けた。この王国強制依頼を出した奴と、容認してブランタークさん以外に応援を寄越さなかったギルドの責任者は覚えてろ！』だそうです」

「だそうだ、アームストロング」

「反論できませんな。某でも、同じ事を言ったはずなので」

誰でも、あの立場ならそのくらいは言うであろう。
俺なら、もっとキツイ事を言うかもしれない。

「ところで、その王国から強制依頼を出した責任者とは？」

「余以外におると思うか？」

いるとは思わない。
他の誰が出しても、陛下が許可を出せば陛下自身が責任者となるからだ。

「余とて、万能の神ではないのだ。アームストロングが万端に仕上がったと言うから、大丈夫だと余が勝手に判断して許可を出した。陰謀論など、存在せぬよ」

「まさか、あれほどの防衛戦力があるとは……」

この世の歴史的な事件の真相など、案外こんな物なのかもしれな

い。

後世では、坊主を消すために色々と暗部が動いたとか歴史書に書く学者も、複数現れるのであろうが。

「あの某会計監査長は？」

「あの男は、そんな危険な橋など渡らんよ。バウマイスター男爵の死の可能性に喜び、実家の長男にぬか喜びをさせているだけだ」

その可能性は高いとか、証拠となる手紙にも逃げ道を用意しているのであろう。

後で文句を言われても、『確実にそうだとは書いていない』とか言って逃げる。

ぬか喜びする長男が、良い面の皮とも言える。

「なるべく少ない投資で、ワシの庭を荒らす。この才能にかけては、あの男は天才じゃよ」

ルックナー財務卿によると、実家の長男に苦労して手紙を送ったそうだ。

時間短縮のために魔導飛行船を使い、なのにブライヒブルクから山脈を冒険者単独で歩いて越えさせるとか。

一ヶ月半もかけて短縮というのもおかしな話だが、あの領地ならば情報伝達速度は速い方だと言える。

「この時点で、また手紙は届いていない。でも、バウマイスター男爵は生きている」

そのタイムラグで、何かおかしな事にならなければ良いのだが。

「生きている以上は、バウマイスター男爵家の爵位や遺産など請求しても良い面の皮だと思うがの」

「確かに……」

おかしな事をしないで欲しいと、神に祈るしかない。

うちのお館様の、健全な精神のためにもだ。

ただ、うちのお館様も長男はあまり好きではないらしく、お互い様な部分もあるのだが。

「報酬額の算定で時間がかかるので、バウマイスター男爵達は送り出した警備隊や調査団と交代で戻るように伝えて欲しい」

「わかりました」

また地下遺跡にトンボ帰りであったが、これには別に不満などない。

あの悪運が強い坊主と関わってしまった以上は、これも運命なのであろう。

だが、この直後に俺にはある不幸が襲うのだ。

「報酬は、分割払いにするしかないの。完全に払い終えるまでは、遺跡の所有権をバウマイスター男爵達のままにして、使用料名目で少々の色を付けて……」

支払う報酬の計算で唸っているルックナー財務卿であったが、いきなり俺に顔を向けて話を始める。

「ところで、ブランタークよ。そなたは、大損だの」

「大損？」

最初は何を言っているのかわからなかったが、すぐに恐ろしい事実を思い出す。

それは、ギルドの規定にある指南役への報酬という事項であった。

「指南役は、行動を共にする新人冒険者パーティーの報酬分割に参加しない。ギルド本部から規定の報酬を貰う。あの地下遺跡の報酬は、ブランタークを除く五人で分割だな」

「そうだった……」

実はこの規定、新人冒険者と指南役双方への優遇処置でもあった。

新人パーティーが、初陣で得られる報酬など高が知れているし、それを指南役も加えて分割となると厳しい側面がある。

そこで、指南役の報酬はギルドが規定に基づいて出す事になっているのだ。

「詳しい規定は、ワシも知らんが」

「一日、銀板一枚です」

一日一千セントを、新人が稼ぐのは難しい。

だが、優秀なベテランならそう難しくも無い。

新人への指導はある種のボランティアではあるが、報酬を無料にするのは可哀想なので、ある程度の報酬はギルドが出す。

こういう仕組みになっていたのだ。

なお、ベテラン冒険者は新人への指南役を最低でも三回。
合計で、一週間以上はこなす義務があった。

「現役時代に、義務はもう履行しているんですけどね……」

ヒヨっ子だらけのパーティーで、えらく苦労したのを思い出す。
魔法使いなどいないので、適当に近くの領域で魔物と戦わせただけなのに。
坊主達のようなパーティーなど、滅多に居るものではないのだ。

「そうだな。ギルドが色を付けてくれるかなと」

「無いですね。それは」

ルックナー財務卿も、人が悪い。
坊主達の手取りを減らさないように、責任論をチラ付かせて冒険者ギルドに収める上納金を辞退させた癖に。

「ブランタークに、七千セントの報酬は少な過ぎだな。予備費から少し出そう」

一日一千セントで一週間拘束と考えると、俺への報酬は間違ってはいない。
間違ってはいないのだが、あの苦労を思うと溜息が出てくる思いだ。

「余も、残っている年金からある程度は出そう。責任があるからの」

「はい、大変にありがたく……」

やはり、あの坊主にはおかしな悪運が付いているらしい。
本来、陛下が自由に使える年金（小遣い）を、報酬の一部に出させてしまうなんて。

この集まりの性質上、一部の金の出所は誤魔化されるのであろうが、知ってしまった俺の胃は痛い。

「のう、ブランタークよ。あまり若者に余計な負担はかけぬようにの」

更に、坊主達にこの事を言ってはいけないと釘まで刺されてしまう。

「（本当に不幸なのは、間違いなく俺だな）」

受け入れる以外に、道は無いのだ。
お館様に報告はするにしても、そんな事は陛下は承知であろうし、お館様とて誰かに漏らすはずもない。

「（わかるか、坊主？　お前は、こんな魔窟でこんな大人達と死ぬまで付き合うんだぞ）」

とはいえ、あの坊主の事だ。
いくら大金を貰っても、使い道がないと言ってまた袋に仕舞ってしまうのであろうが。

「では、後でブランタークも含めて公式に呼ぶのでな」

「わかりました」

こうして、無駄にストレスばかり溜まる秘密の会合は終了する。
後日、秘密の取り決め通りに俺に追加の報酬が出た。
坊主達の取り分に比べれば少ないが、世間一般では大金に属する金額だ。

ただ、この報酬が、国家予算の予備費と陛下の個人的な年金から出ていると考えると、心が萎えてくる。
柄でも無いと言われそうだが、女遊びとかには使ってはいけないような気がしてくるのだ。

あと、冒険者ギルドからの報酬であったが。

「決まり通りに、一週間拘束で七千セント。死ね！」

やはり、あの連中は小役人であった。
多額の上納金を逃したとはいえ、あまりに杓子定規過ぎて乾いた笑いしか浮かばない。

というか、死ねば良いのに。
ただ、連中が死んでも、俺はギルドの幹部になるつもりはこれっぽっちも無いとだけ、宣言はしておくのだが。

更に、もう一つ。
あの会合に顔を出しているのに、一言も発しなかったホーエンハイム枢機卿の事だ。
会合中、まるで能面のような表情で一言も発せず。
陛下達に受け答えをしているウェルナー総帥に付いて来た、副総帥以下の幹部連中が顔を青ざめさせてご機嫌を取っていた。

あの枢機卿を怒らせると、神官冒険者の強制引き上げや、ギルドのサービスの一つである治癒魔法による治療が出来なくなる可能性があるからだ。

それはもう少しで、可愛い孫娘とその婚約者まで失うところだったのだ。

笑顔で連中に接するなど、出来ないのであろう。

冒険者なのである程度は自己責任なのだが、今回はギルドの対応がお粗末過ぎて庇う余地もなかった。

『あのホーエンハイム枢機卿？』

『あのぅ……。寄付金の増額を、ギルドとしましては……』

結局、ホーエンハム枢機卿は会合中に一言も発しなかった。

何も言わないので、逆に怖くなったくらいだ。

しかもそんなホーエンハイム枢機卿に、陛下も、アームストロング導師も、ルックナー財務卿も一言も話しかけないのだから。

そして、俺がギルドからのセコイ報酬に激怒してから一週間後、ウェルナー総帥以下の現最高幹部は全て、健康状態を理由に一斉に退職していた。

後任の総帥や幹部とは俺も多少の縁があったので話を聞いたのだが、少しは組織の風通しも良くなったという事なのであろう。

と同時に、この件も坊主やエリーゼの嬢ちゃんには言えないなと

思ってしまうのであった。

幕間十九　バウマイスター家嫡男の憂鬱。

「クルト様、今年度の徴税報告書でございます」

「ご苦労、そこに置いといてくれ」

「畏まりました」

今年も、収穫の季節がやって来た。

領内の畑から収穫された小麦に一定の税がかかり、その量を本村落の名主であるクラウスが計算し、集めて屋敷に隣接する倉庫に納める。

集まった小麦は、貴重な現金入源でもある。

山脈を越えてブライヒレーダー辺境伯領から来る商隊に売却され、彼らはそれを苦労して持ち帰る。

売却価格にしても、少し本来の相場よりも色を付けてあるそうだ。

こんな田舎の農村なので、日々細かく相場が変動する小麦の最新価格など俺には把握できない。

領主の跡取りとしては失格なのかもしれないが、物理的にそれを知る方法がないのだ。

『（ヴェンデリン様がいれば、そんな苦労をしないで済むのに……）』

先ほど、徴税報告書を置いて行ったクラウスが、以前にボソっと漏らした言葉だ。

果たして、無意識に口に出してしまったのか？
それとも、わざと俺に聞こえるように言っているのか？

この男は、本当に油断がならない。
親父ですら俺に、『クラウスには心を許すな』と言う。

この徴税報告書だって、正確に計算しているのかすら怪しい。
クラウスが、本村落の名主の身分と、親父から徴税業務の全てを任されている立場を利用して。
ちょろまかした分を、ポケットに入れている可能性だってあるのだ。

『残り二つの村落の名主もチェックしている。それはない』

親父はそう言うのだが、そのクラウスから若い妾を宛がわれて異母弟妹を無意味に増やした親父には言われたくない。

親父は、いつもそうだ。

先代ブライヒレーダー辺境伯に命じられるままに兵を出し、その大半が戻って来ないで、領内の人口と成人男性率を危機的な情況にまで追い込んだ。

更に、それに文句すら言わず。
足元を見て、まるで乞食に与えるかのように商隊をたまに送って寄越す、代替わりしたブライヒレーダー辺境伯のために開墾に大忙しであった。

こんな田舎の領地に、ブライヒレーダー辺境伯領で売れる産物など。

小麦くらいしかないからだ。

貴族なのに、まるで開拓民のように土に塗れ、そうやってコツコツと貯めた金は全て。

俺の結婚費用に、三男パウル以下の独立準備金として消えた。

正確には、少しは残ってはいる。

だが、それは万が一の時のためにとっておくのが貴族という存在であった。

例え、それがうちのような貧乏貴族でもだ。

そして、俺の結婚の直後から親父に変化が出た。

『俺ももう年だ。お前に任せる部分を増やす』

今まで、バウマイスター家の当主として絶対権力を握っていた親父。

その件については、特に文句があるわけでない。

こんな何も無い不自由な田舎の僻地では、生きるために当主に絶対権力が必要だからだ。

あとは、領民達の団結に。

長子継承を基本とした、争いが起こらない代替わりであろうか。

親父が長年、俺にあまり仕事を任せなかったのには理由がある。

まずは、次男ヘルマンの存在。

こいつは俺よりも腕っ節が強く、たまに訓練で領民達を率いても人気があった。

見た目は怖いが、話すと面白い男なので領民達に人気があるのだ。

小領の貴族家において、剣などの武芸や小集団の統率に長けた子供は人気が高くなる。
ヘルマン程度の能力なら、王国全土には掃いて捨てるほど存在はしているが、それでも俺よりは優れている。
長子相続の脅威になるわけだ。

『ヘルマン、お前は従士長の家に婿に出す』

『わかった』

ヘルマンは、何も言わなかった。
あいつは多少腕っ節に自信があっても、領主としては大した能力を持っていないと自覚していたからだ。

そして次に問題になったのは、五男エーリッヒの存在であった。
こいつは弓には優れていたが、貴族の嗜みである剣では俺以下。
ところが、こいつは頭が良かった。

十五歳くらいの頃に、奴はある騒ぎを起している。
いや、起したのは親父とクラウスであろうか。

クラウスが持参した徴税報告書を見た親父が、何を思ったのか？
たまたま傍にいたエーリッヒに、その書類を見せたのだ。

暫く書類を見ていたエーリッヒは、数箇所の計算ミスなどを指摘する。

『これは、私とした事が。お若いのに、エーリッヒ様は優秀なのですな』

計算ミス自体は、大した物ではなかったらしい。
少しだけ取り過ぎた税を、数件の家に返しただけだ。

ミスを指摘されたクラウスは、素直に謝って集め過ぎた税を戻していた。
この一連の騒ぎの流れが、クラウスの独断による物なのか？
親父も絡んでいるのか？

この頃の俺には、判断がつかなかった。

それでも、次第に領内でこんな噂が立てば予想も可能になる。

『計画的な領内の発展を希望するのであれば、ここはエーリッヒ様が次期当主の方が良いのでは？』

間違いなく、その噂はクラウスが流しているはずだ。
だが、それを下手に追求すれば藪を突いて蛇が出かねない。
それに、噂を流したのがクラウスだと言う決定的な証拠もないのだ。
親父も俺も、徴税報告書を読んでその不備を見つけるなど出来ない。
だが、親父は報告書を提出するクラウスの態度を見て何かがおかしいと感じて、計算なども出来るエーリッヒに見せた。

間違い自体は、大した物ではない。
クラウスも素直に謝って、すぐに取り過ぎた税を戻している。
なので、あまり強く叱るわけにもいかないわけで。

最終的には、クラウスがエーリッヒの能力を確認できてほくそ笑

んだだけなのであろう。

本当に、いちいち気に入らない男だ。

それから暫く、俺はエーリッヒを警戒していた。
親父に取り入って、次期当主になろうとしているのではないかと。

その心配は、エーリッヒ自身が王都で下級官吏の試験を受けると宣言して杞憂に終わったわけだが。

顔も良くて、領内の女衆にも人気で、弓が上手で、頭も良いエーリッヒという弟。
正直、気に入らないのも事実であった。

そして、極めつけの奴が出て来る。
八男のヴェンデリンだ。

親父が四十歳近くにもなって、しかも一つ年下の母に産ませた恥かきっ子。
うちの経済状態で、妾の生んだ弟達を除外するにしても、俺からすれば溜息しか出てこなかった。

年齢差を考えると、俺の息子でも不思議ではない弟なのだ。
俺も、他の弟達も、次第に大きくなっていくこの八男とどう接したら良いのか迷ってしまっていた。

実際には、こちらの心配を他所に。
三歳を過ぎた頃からのヴェンデリンは、父や母の言い付け通りに、大人達の仕事を邪魔しない大人しい子に育っていたのだが。

毎日、父の書斎に篭って本を読んでいるようであったが、よく頭が痛くならない物だ。
書斎の本など、エーリッヒが五歳頃から順番に読んでいた以外は、父ですらほとんど手を付けていないのに。

書斎など貴族の見栄で設置されているに過ぎなく、何も無理に読む必要などないのだから。

そんなヴェンデリンであったが、奴がもう少しで六歳になる頃から様子が変わってきたような気がする。
エーリッヒの話によると、『魔法が使いたい』と言って書斎に篭っているようだ。

確かに、書斎には魔法に関連した本があるし、判定用の水晶玉もある。
王国が数少ない魔法使いを発掘するために、格安で貴族や教会に配布していたからだ。

俺も、他の弟達も。
当然、父から言われて幼い頃に判定を受けている。

才能があれば俺の人生も変わったのかもしれないが、世の中にそんなに甘い話があるはずもない。

他にも、領主としての義務で全領民にも子供の頃に判定が受けさせている。
水晶に手をかざせばわかるので、大した手間でもなかったからだ。

結果は、本村落に一人だけ存在はしている。
ただ、その魔力は物凄く少なかったようで。

農民のアーダムは、一日に数回小さな火種を出せるだけであった。

家では、すぐに竈に火が付くので重宝はされているようだが、果たして彼を魔法使いと呼んで良いものなのか？

アーダム本人も、『さすがに、それは……』と恐縮していた。

『クルト、どうやらヴェンデリンには魔法の才能があるらしい』

小さな子供が、魔法使いを目指して懸命に修練に励む。

才能がなくても、それを目指して健気に練習する姿は、小さな子供ならば微笑ましい光景なのであろう。

そんな風に考えていた俺に、親父は衝撃の事実を伝えていた。

『どの程度なんだ？』

『今のところは、何とも……』

しかし、次第にその可能性は大きな広がりを見せていた。

子供なのに、狼や熊や猪も出るうちの裏森で、平気な顔をして狩猟や採集を行い。

貴重なホロホロ鳥を、毎日持って帰って来るのだ。

他にも、自然薯や野イチゴや山ブドウに、山菜や薬にもなる薬草なども。

更に俺の結婚式の時には、エーリッヒと組んで大量の獲物を狩る事にも成功していた。

いくら弓に長けたエーリッヒがいたとしても、その成果は尋常で

はない。

親父もそれに気が付いたから、ヴェンデリンとエーリッヒを組ませて誤魔化そうとしたのであろう。

そして、エーリッヒが家を出てからは、父はヴェンデリンに行動の自由を与えていた。

奴は、早朝に剣の稽古と朝飯を終えると、汚いマント風のコートを被り、一人でプラプラとどこかに出かけてしまう。

いや、親父に言わせると魔法の修練に出ているのであろうと。

一体、奴はどこまで出かけて何をしているのか？

一度問い質そうとも思ったのだが、それは父に止められていた。

『ヴェンデリンは、魔法の力で十分に独り立ちが可能だ。あの子には、家を出るまで自由にさせておけ』

『そんな勿体無い！　どんな魔法が使えるのかは知らないが、領内の開発に使えば良いじゃないか』

普通の人なら、そう考えるはず。

そんな俺の意見を、親父は即座に否定していた。

しかも、俺を哀れんだ目で見ながらだ。

『ヴェンデリンを、お前が使いこなす？　何の冗談だ？　それは？』

親父は、続けて言う。

『例えば、ヴェンデリンがその魔法で領内で貢献したとする。開墾に道や用水路などの整備に。凶暴な害獣の駆除。いっそ、ヴェンデリンに狩猟と採集を全て任せても構わないな。領民達が自由に大量に肉が食えれば、増やした農作業に文句も言わないはずだしな』

領民達が腹一杯肉を食べられて、商隊に売れば金になる小麦の栽培に労力を集中できる。

もし、使える魔法がもっとあって土地の整備も出来るのであれば。

開墾など、基礎はヴェンデリンに任せて、仕上げだけ領民達に任せれば良いのだと。

聞けば聞くほど、とても良い考えのような気がするのだが。

『領民達はこう思うであろうな。ヴェンデリンが次期当主になれば、この領地も安泰であると。そこにお前の居場所はないわけだが、お前はそれでも構わないのか？』

『っ！』

『それは……』

『この国から戦争が消えて長い。ゆえに、王国は領内の安定を求めて貴族家の長子継承を推奨するわけだ。だが、それは絶対ではないのだぞ』

長男があまりに無能な時や、次男以降に物凄く優秀な子供がいる時。

他にも様々な要因が付随するので絶対とは言えないが、長子継承が崩れるケースも存在していた。

『どうなのだ？』

俺は、何も答えられなかった。

自分は跡取りなので、将来が安定していて。

どこか家を出て行く弟達を哀れみつつ、居残られると迷惑なので安堵もしていた。

ところが、その立場がまるで逆になってしまうのだ。

魔法が使えるヴェンデリンが次期当主になって、俺がここから追い出される。

残れる可能性もあるが、二十歳近くも下の弟を当主と認めて頭を下げる。

そんな事が、俺に出来るのであろうかと。

『ヴェンデリンは、真面目に勉強もしている。エーリッヒと同じように、読み・書き・計算と全て出来るしな』

続けて親父から聞いたエーリッヒという言葉に、俺は内心で危機感を再燃させていた。

そういえば、ヴェデリンに唯一普通に声をかけていたのが、エーリッヒであった。

今も、定期的に手紙のやり取りや、誕生日にはプレゼントの交換もしているのを確認している。

『エーリッヒならば、ヴェンデリンが次期当主になっても嫉妬などせん。ヴェンデリンは、エーリッヒを優遇する。それに相応しい能力を持っているからな。逆に、エーリッヒが当主でもヴェンデリンは問題にもせん。エーリッヒも、ヴェンデリンを優遇するだろうな』

その関係に、俺が入る余地などない。
俺の唯一のアドバンテージは、長男に生まれた事だけだ。

別に、俺など必要ないのだ。
むしろ、二十歳も年上で兄の家臣など。
使い難いので、出て行って欲しいはずであった。

『わかったな、クルトよ。お前は、穏便にヴェンデリンに出て行って貰い、自分は自分で領地を無難に治めていくしかないのだ』

『はい……』

それは、自分でも理解はしている。
だが、親父の話には、俺への哀れみの感情が誰にでもわかるほど滲み出ていたのだ。

これ以上の屈辱などない。
心の中で、親父への感謝以上に怒りの感情が沸き上がってくる。

『（親父、あなたの意見は正しい。物凄く正論だともさ）』

だが、感情面では別だ。
俺にも、欠片ほどでもプライドという物があるのだ。

『（従士長の家に婿入りしたヘルマンに。元から相続権すらない妾の産んだ弟達。こいつらを除いて、男子は全て家を出た。だからこその、実権の委譲か……）』

親父は、年のせいだと言っている。

これは事実なのであろうが、これから徐々に俺に領主としての実権を移し。
時間をかけて、俺が次期当主になる事を既成事実化するのであろう。

在地領主なので、多分親父が死なないと正式な継承は行われないはず。
それでも、それまでには俺が事実上の領主になっている。

そういう計画のようだ。

『わかりました、父上』

『お前はお前。弟達は弟達だ』

『はい（弟達か……）』

正確には、エーリッヒとヴェンデリンだけなのであろうが、親父はそれを敢えて弟達と言い換えていた。
親父は、俺に配慮したつもりなのであろう。
だが、それすら俺には怒りの原因にしかならなかった。

『（親父の言う通りに、俺が早めに領内の実権を握るとするか。親父、あんたは衰えた。このまま耄碌して、年寄り特有の情でも沸くと厄介だ）』

やっはり領民達のために、エーリッヒやヴェンデリンに跡を継がせるなどと言われたら堪らない。
中年になった廃嫡貴族の子に、その家族と。
世間に出て、まともにやっていけるわけがないからだ。

『バウマイスター本家の次期当主として、努力します』

そんな経緯で、俺は親父から徐々に領主としての仕事を引き継いでいた。

だが、問題は色々と多い。

まずは、先年の出兵で家族を失った領民達のバウマイスター家に対する根強い不信感。

彼らは、表面上は不満を漏らさずに開墾にも参加している。

というか、親父は何を考えているのであろうか？

その開墾の原資は、出兵で戦死した領民達にブライヒレーダー辺境伯が出したお見舞い金をピンハネした物である。

普通ならば、働き手が減ったわけなのだから免除するのが当然だからだ。

『今の我が領は、結果を出さねば意味が無い』と、親父は一切の減免処置を取っていなかった。

そのおかげか、開墾は予定よりも少し早く進んでいる。

だが、後でピンハネしたお金を返すつもりはないようだ。

俺が返そうかと言うと、親父は顔を真っ赤にして激怒していた。

『バカ者！　その返したお金が無くて、我が家が窮地に立ったらどうするのだ！　ここは僻地なのだぞ！　中央も寄り親も当てにならん！　頼りになるのは、金だけなのだ！』

あまりの剣幕に、俺は何も言えなかった。

それに、俺自身もその発言に納得もしている。

こんな僻地の貴族が頼れるのは、確かに金だけなのだ。

次に、本村落と他の二つの村落の対立。

この問題は、昔からの物であった。

『うちこそ生え抜き！』と自称する本村落に、『偉そうに。お前らの先祖は、元はスラムの住民じゃないか。いらない農家の五男とかだった俺達と何の差がある？』と反発する残り二つの村落。

加えて、普段から何を考えているのかわからない本村落の名主クラウスの存在と。

こいつは、俺の前では隙を見せない優秀な名主である。

だが、裏では何を企んでいるのか？

こんな連中ばかり相手にしているので、ストレスは溜まりがちであった。

更に……。

『ヴェンデリン様からよぉ。大豆とホロホロ鳥を交換して欲しいと頼まれたんだ』

『なんでぇ、えらく有利な交換レートじゃねえか』

親父の命令で、お互いに不干渉を決めた弟ヴェンデリンであったが。

こいつは、昼間に何をしているのかまるでわからない。

一度、後を付けようかと思った事もあるが、そんな事を次期当主がするものではないと止めていた。

親父に言うと、『魔法の修行なんだろう。ヴェンデリンの自立の邪魔をするな』と言われてしまう。

正論ではあるのだが、こいつはたまに俺を苛立たせる行動をしてくる。

まずは、自分で狩った獲物を領民達と交換し始めたのだ。

一体何に使うのかは知らなかったが、大豆とホロホロ鳥とか、大豆と猪や野ウサギとか。

ホロホロ鳥はなかなか取れないので貴重だし、猪や野ウサギは一頭丸々なので、毛皮も付いていて領民には好評なようだ。

なので、今度は誰が交換をするかで、領民達が順番をちゃんと決めているらしい。

家を出る分際で領民に媚を売るなど、小賢しいガキだと俺は思っていた。

『親父、ヴェンデリンに言って止めさせるからな』

『止めた方が良いと思うがな』

もうなるべく俺に命令したくない親父は、かなり消極的に反対意見を述べていた。

『ヴェンデリンが、無料で獲物を配っているのならば問題だ。だが、交換では文句も言えん。それに、ヴェンデリンが出て行けば終了する取り引きだぞ』

親父に言わせると、交換レートにおかしな点も存在していないそうだ。

多少の細かい変動はあるものの、ブライヒブルクの交換相場よりも少し安いくらい。

それに、畑の間などに植える大豆は、税の対象にもならない家畜の餌でしかない。

俺が文句を言って止めさせれば、当然領民達から不満が出てしまう。

『領民達には、じきにヴェンデリンは領地を出ると言ってある。取り引きが、期限付きである事も理解している』

それに、この取り引きは娯楽の一種でもあるのだと。

年に三回しか来ない商隊からしか物を買えない領民達が、物々交換とはいえ買い物を楽しめる数少ない機会を、次期領主である俺が止めるのは拙い。

そのくらいの事は、目を瞑って放置する度量も時には必要なのだと。

確かに、後にヴェンデリンが領地を出たら騒ぎは収まっていた。

いや、元々騒ぎにもなっていない。

領民達が、ホロホロ鳥と大豆を交換できなくなって残念がった程度だったのだ。

他にも、俺の嫁の件もあった。
他領から嫁いでいる俺の嫁は、実家に年に一度手紙を出している。
商隊に、ブライヒブルクのギルドに出して欲しいと手数料込みで依頼するのだ。

年に一度なのは、こんな僻地からの郵便なので代金が高いからであった。
いくら次期領主の妻でも、万が一に備えて普段は質素に暮らしていかなければならない。

可哀想だとは思うのだが、これもこんな領地に嫁いだ宿命でもあると俺は思っていたのだ。

ところが、またヴェンデンリンが余計な事をしたようだ。

『父上。義姉さんの手紙くらい、年に三回出しても構わないのでは？』

エーリッヒという理解者を無くしたヴェンデリンは、今では俺の嫁と良く話をしているようだ。
別に俺とて、二人が只ならぬ関係とか疑っているわけではない。
ヴェンデリンなど、まだ子供なのだから。

外部の生まれで、うちよりは教育水準の高い嫁と。
何が楽しいのか？
子供の頃から、難しい本を読んでいたヴェンデリンの話が合ったというのが真相なのであろう。

そんな話の中で、嫁が手紙を年に一度しか出せない事を知り、親

父に意見を言ったようだ。

費用の問題があるから、俺も仕方なしに一回にしていたのだ。
しかも、それを俺ではなくて親父に言う点が小賢しい。
更に、親父はヴェンデリンの意見を受け入れた。

『こんな僻地まで嫁に来ていて、娯楽など碌にないのだ。手紙くらい、定期的に出させても構うまい』

実権は徐々に俺に譲りつつあったが、今でも親父が領主なのだ。
そう言われると、俺に断る術は無い。

嫁も控えめではあるが喜んでいるので、賛成せざるを得なかった。
その控えめな喜びも、俺に気を使ってなのであろう。

一番肝心な費用であったが、それもなぜか親父が出す事になっていた。
親父は領主なので、普段は全く使わないが自分で自由に使えるお金をキープしている。

そこから出したのかと最初は思ったのだが、後にヴェンデリンが出している事を知って余計に腹が立った。
商隊が換金してくれる、嵩張らない稀少な薬草などをそっと親父に渡していたそうだ。

『俺は、ブライヒブルクの冒険者予備校に行きます』

年数は経ち、ようやくヴェンデリンは家を出て行く事となった。
予定では成人後だったのに、奴は都合良く十二歳で入れるブライヒブルクの学校に入学するそうだ。

これで、ようやく一番の邪魔者が消える。
俺は、心の中で大喜びしていた。

周囲には、年下過ぎて話すらしない交流の無い弟というイメージで通っている。
しかし実際には、俺の立場を奪う可能性がある敵でしかないのだから。

多分、親父は俺の本心に気が付いているのであろう。
これで将来の揉め事を防げたと、安堵しながらヴェンデリンを送り出していた。

そして、これでようやく俺が次期領主としての地位を確立できるのだ。
クラウスが何を目論もうと、担ぎ上げる神輿が無ければ意味が無いのだから。

だが、数ヵ月もすると、再び奴は俺の心を掻き乱すようになる。

あの良い子ちゃんのエーリッヒが、王都で認められてとある騎士爵家に婿入りすると、本人から手紙が来ていた。
ここで普通ならば、婿入りする家に祝儀を送る必要があった。
家を貰うので、相当な額を出す必要があるのだ。

『親父、まるで足りないぞ』

ここが王都から近ければ、何とかなるのだ。
祝儀は、全てが現金や宝石である必要はない。
領内の特産品である小麦に、狩りで得た獲物の毛皮などでも構わ

ないからだ。

ところが、王都との距離を考えるとそれは不可能だ。

そんな嵩張る物を輸送などしたら、運賃で余計に出費が増えてしまう。

ならば、現金と宝石だけを持参した方がマシだ。

『仕方がない。ブライヒレーダー辺境伯から借りて……』

『はあ？　正気か？　親父』

そもそも、我が領が困窮する原因を作ったのは、そのブライヒレーダー辺境伯なのだ。

それなのに、また借金をして利息まで搾取される？

いくら相手が大身の貴族でも、なぜそんな横暴になぜ耐えなければならないのだ。

『しかしだな。それが貴族の……』

『常識か。親戚からの援助金を返さないで無視したうちが、貴族の常識？』

困窮具合も極まると、逆に笑えてくるものらしい。

元から貴族の常識など無いうちが、ここでまた貴族の常識に立ち戻ってどうすると言うのか？

王都の貴族で、うちを知っている連中が何人存在しているのか？

悪評なんて物は、相手がある程度有名だから周囲に拡散するもの

で。
うちが祝儀を払わないくらいで、果たして誰が困るというのであろう。

『ブライヒレーダー辺境伯が困る』

『なら、余計に好都合だろう』

文句があるのなら、貴族に相応しく攻め込んで来れば良い。
数千人の軍勢で山を越えてうちに攻め込んでも、ブライヒレーダー辺境伯はお荷物を抱え込んで損しかしないので、絶対に攻めてなど来ない。

これは、俺の確信でもあった。

『それに、エーリッヒの祝儀も黙って出すだろう』

寄り子の恥は、寄り親の恥でもある。
精々、あの若き知性派辺境伯様に出させてやれば良いのだ。
あの辺境伯は、噂に聞けば自分と似ているエーリッヒを気に入っていたらしい。

きっと、喜んで出すはずだ。

『クルト……』

『親父、ハッキリと言わせて貰う。うちは、王国でも最下位に近い貴族なんだぞ。これ以上評判など落ちないし、這い上がるには人と違う事をしないとな』

そのためには、金だ。
何を言われても金を貯めておき、余計な出費などはしない。

金さえあれば、王都のクソみたいな貴族にも取り巻きが付いて賞賛されもする。
これが、この世の真理であったからだ。

『パウルとヘルムートに手紙を……』

可哀想に、あの二人にそんな金など出せるはずもない。
親父、あんたは老いたな。
これからは、俺の好きにやらせて貰う。

その後、エーリッヒやブライヒレーダー辺境伯がどうするのか見物ではあったのだが、生憎とここは僻地で情報が遅い。
それに、余計な出費は間逃れたのだ。

それだけで良しとしよう。

そう思っていた俺に、またとんでもない情報が飛び込んでくる。

あのヴェンデリンが、エーリッヒの結婚式に参加するために王都へと向かう途中。
なぜか出現した、アンデッド古代竜を退治したというのだ。
しかも、その功績で物凄く名誉な勲章を貰い、準男爵に任じられたそうだ。

これも商隊が情報を持ち込んだのだが、この知らせに領民達は大喜びしていた。
だが、その喜びは無意味である。

ヴェンデリンは、貴族として新しい一家を立ち上げてしまったからだ。
当然、もううちの相続に関われる立場にない。
エーリッヒも、ブラント家という法衣騎士爵家を継ぐのでうちの相続に関われない。
全く関係の無い貴族の話なのに、領民達は大喜びしている。
『（お前達には、一セントの利益も無いんだぞ）』
そう言ってやりたくなる。
それよりも、うちの領民達を煽るヴェンデリンである。
こいつは、本当に祟ってくれる。
俺の邪魔ばかりしてくれる。
精々、中央の欲深い貴族達に利用されて死ねば良いのだ。
そう、死ねばよいのだ。
なるほど、これが俺の本心であったようだ。
判明すると、意外とスッキリとするものだと思っていた。
『クルト。うちはうち。ヴェンデリンはヴェンデリンだぞ』
親父がそう言うが、あんたはもう黙って孫の面倒でも見ていれば良いのだ。
とっくに、あんたの時代は終わったのだから。

しかし、それから二年半。
あの憎たらしい、ヴェンデリンの快進撃は続く。

王宮筆頭魔導師と共に、パルケニア草原という魔物の領域でグレードグランドという老属性竜を倒し、その領域を開放。
物凄く名誉な二個目の勲章を貰い、男爵へと陞爵して、教会有力者の孫娘と婚約した。

他にも、公爵と決闘をしたり、悪霊だらけの屋敷を幾つも浄化したり、共に竜を倒した王宮筆頭魔導師の弟子になったり。

こいつは、とにかく話題が尽きない。
間違いなく、寄り親になったブライヒレーダー辺境伯も絡んでいるのであろう。
商隊が来る度に、連中はその事が面白おかしく書いてある、ブライヒブルクで配られた号外を持って来るのだ。

娯楽に飢えた領民達はそれに飛び付き、そこでヴェンデリンの活躍を知る事となる。
中には、武芸大会で一回戦負けという記事もあったが、それでヴェンデリンの評判が落ちるはずもない。

何でも出来る完全無欠の人間よりも、どこか駄目な部分があると人は逆に共感したりするからだ。

他にも、ヴェンデリンの婚約者であるエリーゼとか言う小娘や、側室になる予定のブライヒレーダー辺境伯の陪臣の娘達の姿絵とか。

領民達は、ブライヒレーダー辺境伯の思惑通りに、ヴェンデリン

の情報を貪り読み、その将来に期待するようになるのだ。

嫌な事をする辺境伯だが、こいつは多分俺の排除を狙っているのであろう。

自分で排除するのは手間だし気が引けるが、多数の領民が父に直訴する可能性もある。

その数があまりに多い時、果たして父は長子継承に固執するであろうか？

父とて、小なりとはいえいち領地の領主で、一家の当主なのだ。

時に、非情な決断をする可能性もあった。

そしてその際には、切られるのは間違いなく俺のはずだ。

『親父』

『いや、わざわざ人の家の継承順位に寄り親と言えど、そう簡単には首を突っ込むはずがない』

親父は、ブライヒレーダー辺境伯が俺の排除は狙わないと予想していた。

それよりも、他にもっと有効な手があると。

『あの手付かずの、広大な未開地がある』

我が家も含めて、誰も開発できないで放置されていたあの膨大な未開地。

先祖が欲を張って王国に申請し、王都の役人が面倒なのでうちの領地で問題ないと放置していたあの土地が、ヴェンデリンに分与さ

れる可能性があると。

『申請から百年以上、何も開発していないから取り上げられても文句は言えまい』

幸いにして、ヴェンデリンには金がある。

寄り親である、ブライヒレーダー辺境伯の援助も期待できる。

中央の欲深貴族達に、教会も手を貸すであろう。

うちのように、手を出す余力が無いわけではないのだ。

『もしそうなっても、うちは現状維持だ。仕方あるまい』

親父はそうは言うが、あの未開地はうちの物だ。

開発をしなかった怠慢など、百年以上も放置していて今さらであろう。

そんな物は、うちから未開地を取り上げる口実にしか聞こえない。

『俺が無理でも、子供達か孫達かひ孫達が！』

時間はかかっても、開発が進んでバウマイスター家が大貴族家になれる希望を奪う王国に、魔法しか能の無いヴェンデリン。

しかも奴は、その功績を利用してエーリッヒのみならず、パウルとヘルムートまで従えているそうだ。

『あいつらは四人で、俺の居場所と未来への希望を奪うつもりか！』

その怒りは、日が経つにつれて激しくなっていく。

だが、うちの嫁のようにヴェンデリンの事を良い義弟だと思って

いる者も多い。
子供達も嫁から話を聞いて、『竜殺しの英雄に会いたい』と無邪気に言っているそうだ。

『（だがな。そのヴェンデリンは、お前達の将来を奪うかもしれないのだぞ）』

俺の鬱屈は、ヴェンデリンが成人してからも続く。
いや、もっと酷くなっていったのだ。

そしてそんな時に、予想外の客が来訪する。
商隊以外に人が来た事が無い山脈を越えて、一人の冒険者が手紙を持って現れたのだ。

その冒険者は、王都で会計監査長をしているルックナー男爵の使者だと自己紹介していた。

「この手紙を届けるようにと。いやはや、噂には聞いてしましたが」

「そうだな。噂通りの田舎なのさ」

手紙の封を開けると、そこには成人して冒険者になったヴェンデリンが、攻略困難な地下遺跡からもう一週間も出て来ない。
前に派遣した二組の合同パーティーも全滅しているので、死んでいる可能性があると書かれていた。

「死んだ？　ヴェンデリンがか？」

「可能性は高いですね。それで……」

手紙には、続けてこうも書かれていた。
死んだバウマイスター男爵の爵位と遺産を、果たして誰が相続するのか？

「貴殿には、この騎士爵領がありますね。なので、貴殿のお子のどちらかがという可能性も」

「それは、本当なのか？」

「ええ、バウマイスター男爵はまだ未婚です。婚約者はいますが、結婚もしていないし子もいない。同じ候補として兄達もいるのでしょうが、彼らは爵位があるか、貰える予定にありますから」

エーリッヒはともかく、パウルやヘルムートはヴェンデリンに媚びて爵位を貰ったクズだ。
あとは、三人の子供が候補として上がるが、継承順位で考えると俺の子の方が順位は上になる。

もし爵位と遺産が継げれば、未開地の開発に手が出せる。
うちは将来、男爵にでも子爵にでも。
伯爵にだって、辺境伯だって、夢ではないのだ。

「（俺にも運が向いて来たな。さてと……）」

今までの俺であったら、すぐに親父に相談でもするのであろう。
だが、今の俺は違う。

それに、多分あの親父の事だ。
王都とここのタイムラグとか、情報元が信用ならないとか言って自制しろとか言うのは想像の範囲であった。

「（そんな事は、わかっているさ……）」

ヴェンデリンが実際に死んでいるなど、確率で言えば半々かそれ以下のはず。

それよりも重要なのは、魔法に優れて王都で大活躍。

王都で時の人であるヴェンデリンに、明確に敵が存在するという事だ。

それも、王都で会計監査長という正式な役職に就ている男爵が最低でも一人。

他にも、もっと存在するかもしれない。

「（ヴェンデリンの遺産、未開地の利権。少なくとも、ルックナー男爵には食い付いて貰わないと……）あのヴェンデリンが、まさか！　急ぎ真偽を確認しませんと！」

「確かに。ですが、クルト様も領内の統治でお忙しいでしょう。そこで、我が主にお任せいただけたらと」

「おおっ！　男爵様が、お手を貸してくださるとは光栄な」

そこまで言うのなら、任せてやる。

着飾って、口ばかりで、地方の領主など普段は田舎者と見下している中央の法衣貴族に、何が出来るのか？

そして、それと同時にある考えが脳裏を占めるようになる。

「（ヴェンデリンが死んで、その遺産で未開地の開発に着手できれば……）」

俺の、次期領主としての権力は増大する。
親父だって、俺を哀れんだ目で見なくなるはずだ。

「（問題は、こいつの主人がどう考えているはずだが……）」

「これからも、定期的に王都やバウマイスター男爵の情報をお伝えしますので……」

定期的にとは言うが、この距離では情報が一ヶ月以上も遅れてしまう。
そこが、この辺境領地の悲しい部分でもあったが、そんな事は今更であるし、今までずっと我慢してきた事だ。

「（ルックナー男爵が、ヴェンデリンの暗殺でも引き受けてくれれば良いんだがな。そんな虫の良い話は無いにしても、何とかヴェデリンから金を毟り取る方法でも無いものか……）」

可能性の問題はともかく。
そんな事を考えていると、普段のストレスばかりが溜まる領内統治よりも圧倒的に心が躍る自分が存在するのであった。

第四十四話　多過ぎる報酬。

「と言うわけで、エリーゼはお茶を淹れるのも上手だし、夕飯の味噌煮込みも美味しかったです。朝食も、手際良く準備してくれて」

「さすがは、我が姪なのである。安心して、バウマイスター男爵の嫁になれるというもの」

「まあ、その前に死に掛けたんですけどね」

「それは……」

冒険者としてのデビュー戦において、連続して未帰還者を出した地下遺跡の探索を命じられた俺達であったが、その内容は激闘・死闘の一言に尽きた。

ミスリル・オリハルコン複合装甲を装備した、ドラゴンゴーレムとの戦闘に。

続けて、強制移転魔方陣による『逆さ縛り殺し』地下遺跡への強制的な移動と、大量のゴーレム軍との激闘や。

そして最後の極め付けは、最初の物よりも性能が上がっていた二体目のドラゴンゴーレムとの、残存魔力量を気にしながらの死闘にと。

正直、良く生き残れた物だと感心するほどだ。

魔法と薬でドーピングしながらの約一週間もの戦闘により、俺達は精神的にも肉体的にもボロボロであり。
俺は珍しく、こんな依頼を寄越した王国と冒険者ギルドに負の感情を隠せなかったくらいだ。

それでも、どうにか依頼を達成する事に成功した俺達は、翌日に王城へと挨拶に向かっていた。
元々あの地下遺跡探索は王国政府からの依頼な上に、発見された物が物なので、冒険者ギルド本部から王城で報酬に関する話を聞くようにと言われたからだ。

俺は、真っ先に出迎えたアームストロング導師と話をしながら謁見の間へと向かう。
途中の話とは言っても既に報告は行っているらしく、アームストロング導師からは、特に地下遺跡や戦闘自体に関する質問は無いようだ。

むしろ、普段のエリーゼとの生活などを良く聞かれていた。

多分、余計な事を聞いて、俺が王宮内で怒るのを防いでいるのであろう。
あとは、アームストロング導師自身が、魔法を使える姪をえらく気に掛けている点もあるようであったが。

「まあ、その話はこの辺で」

「うむ……」

王宮内では他人が密かに耳を立てている事が多く、そうやって集められた噂はそれぞれの主人の耳に入る事が多い。

なので、あまりお喋りなのも考え物であったからだ。

勿論、その主人とは貴族の事であったが。

そしてその貴族の中には、今回の件で俺と王国側が揉める事を喜んだり、それを何かに利用しようと考える輩も確実に存在する。

その最たる例として、ルックナー財務卿の弟などが挙げられるのであったが。

そのような事情もあり、アームストロング導師としても、俺の魔法の師匠として懸命に宥め役に回っていると思われる。

「（某会計監査長ですか？）」

「（やっぱり、知っておったか……）」

知らないはずがない。

何しろ、現在王都のバウマイスター男爵邸で使用人達を統制しながら管理しているのは、その実の息子なのだから。

『おおおっ！　お・や・か・た・様ぁーーー！』

発見した物の管理を、王都から来た警備隊に引き継いだ俺達が屋敷に戻ると。

突然、屋敷ドアが壊れるのではないかと思うほどの勢いで開き、俺に抱き付いて来る存在があった。

『えっ！』

『反応できなかった！』

本来、俺の警備も担当しているエルとイーナが驚く早業であったが、それも当然であろう。

彼こそは、槍術の達人にして他にも得意技が多い。

我がバウマイスター家の家令、ローデリヒその人であった。

『このローデリヒ！　大変に心配をぉーーー！』

『わかったから！　体の骨が砕ける！』

雇ってみてわかったのだが、ローデリヒは魔法が使えない代わりに多才なアームストロング導師と言った感じの人だ。

導師ほど筋肉ムキムキではないが、前世では細マッチョと言うのであろうか？

見た目よりも力が強く、その上ようやく就職が叶ったので、常に張り切り過ぎにも見えなくもない。

他の使用人達に言わせると、『たまに付き合い切れない部分がある』と言われるほどの人であった。

仕事ぶりは優秀で真面目なのだが、常にハイテンションで、ずっと付き合っていると疲れてしまうのだそうだ。

もしかすると、そういう部分が就職に成功しなかった理由の一つなのかもしれない。

『このローデリヒ！　お館様に、万が一の事があったらぁーーー！』

『わかったからぁーーー！』

そんな彼が、一週間ぶりに戻って来た主人に、『骨よ砕けろ！』とばかりに物凄く勢いで抱き付いてきたのだ。

気のせいか、背中の骨がミシミシ言っているような気がする。

『面接二百七件目にして、ようやく得たこの仕事をぉーーー！』

『わかったってのぉ！』

予め言っておくが、俺にもローデリヒにも同性愛の気はない。

主人の帰館で感極まったローデリヒが、勝手に暴走しているだけである。

というか、今俺は知ってしまった。

ローデリヒが、前世のリストラされたサラリーマンも真っ青なほど、採用面接を受けている事を。

多分前世の俺なら、世を儚んでニートになっているレベルである。

ところが、この世界では別段珍しくも無いそうだ。

戦争が無く、武芸大会の好成績者など一部を除き、貴族に仕えるには地縁・血縁などコネが物を言うので、いくら優秀でも得体の知れない新参者はなかなか仕官できない。

特にローデリヒの場合は、貴族の私生児で、しかも認知もされていないので、世間的には得体の知れない素浪人よりも採用する貴族

側から避けられる。

武芸大会でも優秀な成績を挙げたローデリヒが仕官できなかったのには、そのような理由があったのだ。

『お館様は、拙者の希望なのですぅーーー！』

『なあ、ローデリヒさん。その希望が折れちまうぞ』

『あっ……』

エルの冷静な一言により、ようやく我に返ったローデリヒに促されてリビングに移動すると、すぐにメイドがマテ茶を出してくる。

そのメイドは、栗毛でエリーゼよりも少し年上の可愛い娘なのだが、彼女の母親はホーエンハイム家のメイド長なのだそうだ。

なるほど、就職にもコネが必要だという理由が良くわかるような気がする。

ちなみに名前はドミニクと言い、エリーゼとは幼少の頃から良く一緒に遊んだりしていたそうだ。

所謂、年上の幼馴染というやつである。

ドミニクは若いが、メイドとしては優秀だ。

決して、コネだけで優遇されているわけではない。

それに、いくらコネで働けるとはいえ、紹介された先で失望でもされれば紹介した方も恥をかくわけで。

コネで就職が出来るからと言って、必ずしも楽というわけではな

いのだ。

『エリーゼ様が淹れるマテ茶には勝てませんが。それよりも、ローデリヒ様がまた……』

『背中の骨が……』

地下遺跡宮では負傷しなかったのに、なぜ屋敷の目の前でという理不尽さはさておき。

ドミニクが淹れてくれたマテ茶を飲んで、ようやく人心地ついたような気がする俺達であった。

『このローデリヒ、大変に心配しましたぞ』

『遺跡探索なら、一週間くらいは普通だろうに』

冒険者なので、一週間くらい留守にするのは普通のはずなのだ。その内容が、全く普通ではなかった事は差し置くにしてもだ。

『それはそうなのですが……』

実はローデリヒも、浪人時代に生活の糧を得るために冒険者ギルドに登録して活動をしていたそうだ。

今も引退届けは出していないので、まだ書類上は現役状態にはある。

『このローデリヒ、地下遺跡の探索はした事が無いのです』

就職活動と兼任なのでパーティーが組めず、得意技が槍術で大車輪なので、主戦場は近郊の森や先年に開放されたパルケニア草原で

あったそうだ。

そしてその実績であったが、ソロにしてはえらく稼いでいる冒険者と言えよう。

俺もカードを見せて貰って、えらくその戦績に驚いた記憶がある。

『あと、お館様が死んだかもしれないと、物騒な噂を流す輩もおりまして……』

この屋敷は、男爵以上の貴族が住む上級貴族街にある。

屋敷を維持するため、ローデリヒや使用人達が所用で外に出ると、色々な噂が流れて来るのだ。

上級貴族御用達の各種店舗に、屋敷の修繕をする大工や、庭を維持する庭師などを紹介したり派遣する職人ギルドなど。

そこには、様々な貴族家で雇われている使用人達が現れ、彼らは彼ら同士で、雇われている貴族家で聞いた噂などを守秘義務に反しない程度に話し合う。

たまに守秘義務を逸脱してクビになる者もいるが、大半は自分が働いている貴族家の情況を客観的に判断し、おかしな貴族から自分が被害を受けないようにするための、貴重な判断材料でもあった。

おかしな貴族家は、すぐに噂になる。

相手は雇い主とはいえ、平民も平民で自分の身を守るのに必死なのだ。

そんな情況の中で、屋敷の庭の手入れをする庭師を探しに職人ギルドに向かったローデリヒは、そこで俺達が死んだかもしれないという噂を聞き付けたらしい。

あと、『貴族なのに、専属の大工や庭師を雇わないのか？』とか言われそうだが、いくら屋敷が大きくても専属で雇うのは効率が悪い。

そんな人は、王族か、よほどの大貴族か、ガーデニングが趣味の貴族くらいで、あとは職人ギルドで腕の良い人を斡旋して貰うのが基本であった。

腕の良い人はすぐにスケジュールが埋まるので、そういう人ほど専属になりたがらないし、専属にするにはコストが嵩む。

腕の悪い人を専属にしても意味がなく、それなら日頃の簡単なメンテだけは使用人が行い、専門的な部分はプロに任せる。

こうした方が、効率が良かったからだ。

『誰が流したんだ？　そんな噂』

『最初は、不明だったのですが……』

気になったローデリヒは、その噂の出所を調べたそうだ。

そして、その噂の元がある男爵家である事を知る。

『あの男でした』

ルックナー財務卿の弟にして、ローデリヒの遺伝子上の父であるルックナー会計監査長であった。

噂は、彼の屋敷の使用人達が、人から聞いたと嘘をついて流していたそうだ。

ローデリヒの表情は渋い。

彼からすると、ルックナー弟は父親でも何でもないそうだ。
子供を抱えた母を捨て、生まれた子供の認知すらしていないから当然と言えば当然なのだが。

『勝手に人を殺すなよ』

酷い話ではあるが、これを罪に問えるかと聞かれると難しい。
噂はあくまでも噂で、『俺が死んだかもしれない』わけで、『死んだ』と断言したわけではないからだ。
貴族の性として、この手の噂話などは当の本人達も話半分に聞いている部分もあり、信用度にしても前世で言う〇スポのような物であった。

たまに、えらい当たりがくる事もあるそうだが。

『死んで欲しいという願望も混じっているかと』

『俺、ルックナー弟に恨まれるような事をしたのか？』

『いえ。お館様が、自分と仲が悪い財務卿閣下と懇意なので気に入らないのでしょう』

仲が悪い兄と弟。
どこか他人事とは思えないのは、俺の気のせいなのであろうか？

『そんな理由かよ』

俺は理不尽さを感じると共に、『別に、あんな金に五月蝿いおっさんと仲なんて良くないわ！』とも思ってしまう。
こういう関係を、前世では腐れ縁とも言うのだ。

もしくは、『金の切れ目が縁の切れ目』であろうか？

『ですが、ヴェンデリン様が無事に戻った以上は……』

『はい、奥様。こんな無意味な噂もありませんな』

エリーゼの発言に、ローデリヒは簡潔ながらも丁寧に答える。

彼は、まだ正式に式は挙げていないが、エリーゼを正妻扱いして『奥様』と呼んでいた。

『それに、拙者の方で報復もしておきましたので』

悪意ある噂には、同じ悪意ある噂で報復する。

貴族とはそういう生き物であり、ローデリヒも貴族の流儀に従って逆に噂を流したそうだ。

それと、なぜかローデリヒは自分の事を『拙者』と言う。

この世界にも存在する単語ではあるのだが、見られるのは古い時代劇のような書籍の中のみで、普通に生活しているとまず耳に入らない単語であった。

『ああ、逆撃したんだね』

『そういう事です。ルイーゼ様』

『どんな噂を流したの？』

『それはですね。イーナ様……』

ルックナー弟から、『バウマイスター男爵達が、地下遺跡探索に出て戻らないので死んだのであろう』と噂を流されたので。

『その死因に、ルックナー会計監査長が関わっている可能性がある。その権力を利用して、冒険者ギルドに何か働きかけたのでは？』という噂を逆に流したそうだ。

これも、そういう可能性があるだけであり。

だから、後ろにクエッションマークが付いているわけだ。

絶対ではないが、噂の域から出ないのでルックナー弟も文句を言うわけにもいかない。

先に、自分が同じ事をしているから余計にだ。

『しかも、ヴェルは無事に戻っているから、向こうの噂は嘘だとみんな気が付くしな。逆に、ルックナー会計監査長の方は……』

エルの言う通りで、ルックナー弟の方への噂はそう簡単に消える類の物ではない。

俺が無事に戻ったとしても、彼が冒険者ギルドに何か働きかけた可能性が消えたわけではないからだ。

ルックナー弟は役職付きなので、普通の男爵よりは貴族としての影響力が強い。

会計監査長なので、予算執行に対する不備の指摘で冒険者ギルド本部に出かけてもおかしくもないのだ。

なぜなら、冒険者ギルドが若者やアウトローの社会不満吸収装置を兼ねているので、王国が補助金を出しているからだ。

前世で言うところの、若年層に対する雇用助成金のような物や、

食肉確保のために補助金の類であったと記憶している。

『あとは、なぜそんな噂を流したのかですね。竜殺しの英雄が仲が悪い兄と懇意なので、兄の力を落すために竜殺しの英雄の抹殺を謀った可能性があると』

『陰謀論……』

『それが、事実なのか嘘なのかは全く関係ありません。あの男は、元々こういう噂で敵対勢力を攻撃するのが常套手段。たまには、その噂で逆にダメージを受けるのも良い薬でしょう』

憎んでいても、ローデリヒは実の父親の事を良く理解しているようだ。

更に、父親と同じ手段で敵対勢力に反撃まで行っている。

ローデリヒ本人に言うと怒るので言わないが、『血は水よりも濃い』という話に説得力を感じてしまうのだ。

『拙者が流した噂のせいで、どうにも困っているようですな』

『あの男なら、やりかねないと？』

『はい』

俺の生死を問わず、今までの悪行のせいでその噂は真実味を帯びて貴族社会を駆け巡っているそうだ。

事実ならばあとで処罰もあるかもしれないが、俺が生きているので処罰される事は無いであろう。

だがそれすら、会計監査長の職権を使用して処罰を逃れていると思われてしまう可能性がある。

遂に、武器にしていた噂で自分が傷付く事態にまでなったのだ。

『勝手に自爆したように見えるけど……』

『そういう輩に限って、逆恨みも常套手段。お館様も、十分にお気を付けになられますよう』

『そこで動いたら、またダメージが広がると思うけど……』

俺が無事に帰還してからも、ルックナー弟に関する噂は貴族社会を流れ続け。

彼は、暫くは大人しくぜざるを得ない情況に追い込まれたようであった。

というか、俺は彼と直接に顔を合わせた事が無いので、チョロチョロと周囲で騒ぐだけの男にしか感じないのだが……。

ただ、こんな噂程度が理由の停滞などはすぐに終わってしまう。

俺はローデリヒに、暫くルックナー弟から注意を逸らさないようにという指示を出しておくのであった。

「（本当に、貴族ってのはどうしようもないのが居ますよね？）」

「（辛辣であるな。貴族が全員、そこまで酷くないと思いたいので

ある）ところで、それは……」

場所が場所でもあるし、いくら小声でもこれ以上危ない会話は止めた方が良いと判断したのであろう。

だが、ただそれで口を噤むのも面白くない。

そこで、ある本を小脇に抱えていたのだ。

その本とは、『アーカート神聖帝国の文化と歴史』という本で、昨日ローデリヒに探して来て貰った物だ。

隣国アーカート神聖帝国に関する資料は、意外と少ない。

貿易と人の交流が王都とその周辺に限定されているのと、一応は仮想敵国なので向こうも簡単には教えないからだ。

平時でも互いにスパイなどは入れているはずだが、苦労して手に入れた情報を、両国政府が簡単に世間に公表するとも思えなかった。

特に地方では。

俺が居た南部ではたまに輸入品を見るくらいで、最近まで俺も良く知らなかったのだが、この本によるとそう政治体制に違いは無いようだ。

次の皇帝を議会の投票で決めるので、少し民主主義寄りにも見えるが。

議員の大半は貴族と皇族で、候補者も皇族と選帝侯なので平民に出る幕などなく。

実質はあまり変わらず、俺が移住してもそう環境の変化に戸惑う事もないようだ。

「北なので、冬に少し寒いくらいですかね？　旅行とか行けたら良いのに」

「いや、外国人は皇都周辺からは出られないゆえに……」

アームストロング導師は、なぜか汗を流しながら俺からの問いに答えていた。

「へえ、良く知っていますね」

「十年ほど前に、親善団の一員として行った事があるのである」

停戦から二百年以上。

両国は五年に一度、交互に親善団の派遣を行い。

国王や皇帝が代替わりした時にも、外交団などを派遣するそうだ。

というか、さすがはアームストロング導師。

何気に、そんな大切な親善団の一員に選ばれていたりしていた。

「ちなみに、亡命者とかはいるのですか？」

「居ない事も無いのである……」

「へえ、どんな理由で亡命したんでしょうかね？」

「……」

とっくに謁見の間に到着し、あとは陛下の登場を待つばかりであったが、その間アームストロング導師は額から流れる汗をハンカチ

で拭い続けるのであった。

「ご苦労であったの。聞けば、色々と大変であったとか？」

「はい、死ぬかと思いました」

「そうか……」

ここで、嘘をついても仕方が無い。

俺は謁見の間に姿を見せた陛下に、地下遺跡における死闘のあらましを説明していた。

今回の呼び出しは、発見された物が物なので王国側が必要と判断したからである。

地下遺跡で生きていた魔道具工房や、魔導飛行船専用の建造・修理ドッグなどは、間違いなく王国が買い取るはずだ。

俺に託されても、正直どう扱って良い物なのかわからないという理由もあったのだが。

あくまでも、俺は魔力量に長けた魔法に関しては器用な魔法使いであり、特殊分野である魔道具造りの才能はなかった。

一部、魔法使いのみ使える魔法の袋などは作れたが、価値の高い一般人にも使える汎用品ともなるともう手が出ない。

知識なども少し本で勉強したくらいなので、適正な価値で買い取って貰った方が良いのであろう。

魔導飛行船も、これは王国政府以外の所有が禁じられている。
正確には、ある一定の大きさ以上の魔導飛行船の所有の禁止なのだが。
小型船でも動かせる魔晶石の確保が難しいので、所有している貴族や商人は極少数に留まっていた。

そして小型船では、精々有効移動距離は三百キロ程度。
大物貴族が近隣への人や物の移動などに使ったり、近隣の貴族同士が数家共同で運用するケースも存在するそうだ。

長距離の輸送には向かないので、河川の無い内陸部を除くと海を走る船の方が良いという結論に至ってしまう。
実際、ブライヒレーダー辺境伯なども、普通の大型船の方を数多く所有していた。

「先に向かった冒険者達は、一人も生還できなかったと聞いておるが」

「はい」

先に探索に向かった先輩冒険者達は、全員がドラゴンゴーレムのブレスで焼き尽くされていた。

遺体は骨まで焼き尽くされ、地面に落ちていた残骸からは、彼らの身分を証明するような物は一切発見されず。

その現場で俺達が発見したのは、一部装備品などの焼け残った金属片のみであったのだ。

デビュー戦から死体を直視しないで良かったのかもしれないが、

俺達だって失敗すればああなってしまうのだ。

そう考えると、非常に考えさせられるデビュー戦とも言えた。

「そうか、犠牲者の冥福を祈るとしよう。それと、戦力の算定を誤ってそなたらを危険に曝してしまったの。余からは、済まぬとしか言えぬ」

「陛下！」

控えている一部貴族達から驚きの声があがるが、確かに一国の王が臣下に謝るのは珍しい。

「良い。誤りを認めずに謝罪もせぬのであれば、王などただ傲慢な独裁者でしかないからの」

とはいえ、陛下の謝罪は規定路線であったらしい。

驚いたのは一部の小物のみで、ルックナー財務卿などは涼しい顔で何かの書類を確認していたようだ。

「しかし、初陣でいきなり大成果じゃの」

「これも、悪運の賜物かと」

「確かに悪運よの。他の普通の冒険者なら、何も得られずに死んでしまうからの」

冒険者ギルド内でも、有名な一流冒険者達が揃って生還できなかったのだ。

これを悪運と呼ばずに、何と呼べば良いのであろうか？

「指南役と、パーティーメンバーが優れてもいましたし」

「そういえば、エリーゼ以外は初対面じゃの」

当然、パーティーメンバー全員も俺の後ろで控えているのだが、みんな一言も言葉を発しない。

皆、一国の王と面会する機会などないので、先ほどから緊張した面持ちを崩さないままなのだ。

三人の中で一番図太いと言われているルイーゼですらそうなのだから、それだけ王様とは雲の上の人という事だ。

エリーゼも、過去に数回会った事があるそうだが、普段よりも表情が硬いように俺は思っていた。

「三年ぶりくらいかの？　エリーゼよ」

「はい、お久しぶりにございます」

「美しくなったの。未来の夫君、バウマイスター男爵はどうかの？」

「はい、とても優しいお方です」

「そうか、それは良かった」

陛下がエリーゼに声をかけるが、さすがはホーエンハイム枢機卿の孫娘。

無難に受け答えをしているようだ。

「あとは、エルヴィン・フォン・アルニムに、イーナ・ズザネ・ヒレンブラントか。ワーレン達が将来が楽しみだと褒めておったの」

「ワーレン様にはお世話になっていました」

「光栄にございます」

陛下は、近衛騎士団に二人が出入りして訓練している事を知っているばかりか、むしろ黙認している節があった。

「そなたは、ルイーゼ・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェークであったか。アームストロングに目を付けられるとは、大したものじゃ」

「導師からは、良き指導をいただきました」

ルイーゼの魔力を使った格闘能力は、それを教えていたアームストロング導師も認めているほどであった。

せっかく魔力が高いのにあまり魔法が使えなかったが、その分竜でも殴り殺せそうな力を得たのだから。

あと、緊張はしていても陛下への無難な対応を見ると、ルイーゼは三人の中で、一番その手の部分で卒が無いようにも見える。

外見は、どう見ても十二歳くらいにしか見えなかったのだが。

「なかなかに、粒揃いのメンバーであるな。期待しておるぞ」

陛下も忙しい身なので、長い時間は取れないらしい。

謁見は軽い挨拶程度で終わり、次は本題の地下遺跡の扱いについ

てであった。

結局、地下遺跡で死に掛けた件では、あまり文句も言えなかった。アームストロング導師には少し言えたが、陛下はすぐに謝ってしまうし、俺の中身の小市民的な性格が謁見の間の空気に負けてしまったのだ。

思うに、俺の場合だと王族にも転生しないと王様に物申すなど不可能なのであろう。

それと今日の謁見であったが、なぜかブランタークさんは体調不良だとかで欠席している。

何でも、指南役はギルドから最低限の報酬を貰うので、今回の報酬分割には参加できないらしい。

確かにそれならば、わざわざ緊張しながら陛下に会う必要は無いのかもしれない。

思うに、なかなかに不憫な人であった。

「あの、魔導飛行船用の造船・整備ドッグだがの……」

その後の調査で、あの造船施設の天井部分が開く事が確認されたそうだ。

それと、魔晶石以外の部分を効率良く建造できる、既存の施設よりも遙かに優れたドッグで。

修理や整備も、楽にこなせる素晴らしい設備なのだそうだ。

「現在、かのドッグに空軍の拠点を移す計画があっての」

王都からも近く、現在のドッグ兼魔導飛行船の発着場からドッグの本拠機能を移す計画があるそうだ。

「現在の施設は発着場をメインに、サブのドッグにしてかの地のドッグを参考に改装工事を行おうかと思う」

普段の空軍は、魔導飛行船の修理・整備と、旅客・輸送業務がメインになっている。

そこで、俺達が最初に降り立った港の離発着機能を強化しつつ、既存の隣接するドッグを発見されたドッグを元に改修。

サブのドッグとして、空軍の戦力と拠点を強化するのだそうだ。

「まだそなた達の物なのだが、魔導飛行船関連では王国に優先権がある。許せよ」

「はい、それは」

俺が七隻の魔導飛行船と大型ドッグを、王都近くに私有して独自に運用を開始する。

間違いなく、『バウマイスター男爵は危険です』と陛下に囁く貴族が増えるはずだ。

多分、とっとと売り払った方が安全なはずだ。

「魔導道飛行船の新規建造に関しては、魔晶石の製造技術の関係でまだ研究課題ではあるが、造船所にあった七隻の魔導飛行船は、機関部に付いていた魔晶石が無事での。魔力さえ注げば、少しの整備ですぐにでも使用可能だそうだ」

巨大な魔晶石の製造についても、一緒に見付かったイシュルバーク伯爵の工房や書斎の本などから研究が進む可能性があったので、現在急ピッチで調査と解析が進んでいるらしい。

「あの二体のドラゴンゴーレムも、危険なので分解して解析中だ」

材料にふんだんにミスリルとオリハルコンが使われていて、中身の機構にも今までに見付かっていない仕組みが使われているそうだ。

あと、使われている魔晶石もかなりの大きさらしい。

そういえば、二体目のドラゴンゴーレムには、外部から魔力を補給するためのケーブルまで付いていた。

ゴーレム専用の無人修理工房などもあり、それらを動かすためにメインとサブで超大型の魔晶石がバッテリー代わりに設置されていたりと。

古代の名工イシュルバーク伯爵とは、相当に気難しい人物であったようだ。

あんな地下に、天文学的なコストをかけて自分専用の隠れ家まで作ってしまうのだから。

「その魔晶石は、他の魔導飛行船の再稼動に使えるので助かっておるよ」

続いては、あの大量の活動を停止させたゴーレム集団であった。

損傷が激しい物から、ただ動きを止めている物まで。

合計で一万体以上も存在し、現在兵士達がひいこら言いながら空いている地下遺跡のエリアに並べて数を数えているそうだ。

「一体一体に、人工人格の結晶クリスタルと長時間稼動可能なように魔晶石まで付いておっての」

それは、俺達も確認していた。

人工人格の結晶クリスタルに関しては、これから要研究なのであろうが。

魔晶石は、今普通に取り外せば使えてしまう。

さすがに大型の魔導飛行船には使えなかったが、魔道具の材料や王国でもインフラ系の魔道具に付けるのでいくらでも欲しいのだそうだ。

「早速、魔道具ギルドか嗅ぎ付けての。売ってくれと五月蝿いのだ」

汎用魔道具で一番面倒な部類に入るのが、電池部分に当たる魔晶石の製造である。

現物が既に一万個以上もあるのなら、一つでも多く手に入れて納期を短縮したいのだそうだ。

「地味に、あの魔力回収パネルも素晴らしい成果だそうだ」

最後に、あの空気中の魔力を回収するパネルであったが、思ったよりも単純な構造をしていたらしく、現在試作と使い道の研究が始まっているとの話であった。

「魔導街灯程度の魔力消費量なら、街灯の上にパネルを設置すれば経費削減になるからの」

王都や主要都市で普及している魔導街灯は、定期的に魔法使いが魔力を使用されている魔晶石に補充する必要がある。

その手間が省けるのであれば、相当な経費削減になるはずだ。

それに、どうせ街灯に魔力を補充する魔法使いの仕事は減らない。
他に魔力を補充しなければいけないインフラ系の魔道具は大量にあるし、魔法使い不足で補充間隔が長くて稼動していない期間があったり、必要なのに設置できていない物も大量にあったからだ。

あと、もう一つ買い取ってくれる物があるそうだ。
あの俺達を、不幸の『逆さ縛り殺し』へと誘ってくれた魔力吸収型の強制移転魔方陣。
あれの研究が進むと、もしかすると数名くらいなら自由に魔法陣間を移動可能になるかもしれない。

魔導キルドが、独占するために高額で買い取ってくれるそうだ。
俺達からすると、ただ罠に填まっただけなので、獲得した実感も無い物であったが。

「余の不手際で大変な目に遭わせてしまったが、冒険者デビューとしては最良の結果であるか。バウマイスター男爵達が見付けた成果については、王国が全て買い取る事としよう。すまぬが、それしか出来ぬ」

「まあ、確かに」

こうして、俺と陛下との三度目の謁見は終了したのだが、そろそろ普通の冒険者生活に戻りたいと思うのは贅沢なのであろうか？

いくら魔法が使えても、世間の柵（しがらみ）からなかなか抜け出せないのは、やはりどの世界もそうは甘くないという事の証明のようであった。

「買い取り査定については、ルックナー財務卿に任せるとしよう」

弟が変な噂を流してくれたにも関わらず、ニコニコしながら俺に査定を結果を伝える某財務卿を見ると。
俺は特に、そう感じてしまうのであった。

「ええと……。使える魔導飛行船が七隻で、一隻あたり白金貨千五百枚で合計一万五百枚。ドラゴンゴーレムが二体で、ミスリル・オリハルコン素材と魔力回収パネルの現物と合わせて白金貨八千枚。ゴーレムが、兵士型が一万二千五百体で、騎馬騎士型が八百五十体。これの査定については、損傷が酷く金属素材でしか使えない分もあり。ただ、新型の人工人格の現物多数に無人修理工房もあるので、合計で白金貨一万八千枚。合わせて見付かったイシュルバーク伯爵の工房や書斎にある膨大な研究資料。今後王国の魔導飛行船基地になる造船所。稼働用の超大型魔晶石が二つ。地下迷宮にある魔力吸収型の強制移転魔方陣の現物。これは、魔導ギルドが研究用に買い取るそうです。その他、王国強制依頼なので報酬の増額に。先に二つの探索隊が全滅しているので、ギルドからも報酬の増額がありまして……」

陛下との謁見を終えてギルド本部へと向かうと、そこでは受付のお姉さんが半分顔を引き攣らせながら今回の報酬について説明をしていた。

これだけ一度に沢山、良く舌を噛まないものだ。
きっとこのお姉さんは、受付のプロなのであろう。

「つまり、どのくらいで？」

「ええとですね……。一人頭白金貨二万枚です」

「二万枚！」

あまりの金額に、俺ばかりかエル達も絶句していた。

受付のお姉さんも、心なしか顔が青いような気がする。

「ドラゴンバスターズのメンバー五人で頭割りですから。ですが、報酬は二十年の分割払いになります。分割払いなので、利息分が増額で、税金も引かれた分だと思ってください。あと、ギルド本部に納める上納金も王国負担となります」

いきなり白金貨を二万枚も貰っても困るし、そもそも王国にそんなに白金貨があるのか不安になってしまう。

なので、報酬は二十年の分割払いで、面倒な納税も既に支払い終えていて。

冒険者ギルドに収める二割の上納金も、もう支払う必要は無いそうだ。

というか、何か怪しいような気もする。

普通ここで大金を得ると、税金だの、会費だの、手数料だのと。

大量に差し引かれるのが、この世の常識だからだ。

「（妙に、生暖かい優しさというか……）ところで、ブランタークさんの分は……。ああ、そうか！」

「ブランタークさんは、今回は指南役なので……」

指南役は、普通は新人の付き添いなので報酬を頭割りしても金額が満足できない額になる事が多い。
なので、ギルドが所定の報酬を出すのが普通らしい。

「ギルドの決まりのせいで、ブランタークさんは大金を逃したと」

「まあ、別にいらんがね」

と、そこにブランタークさんが本人現れるが、特に多額の報酬に未練がないそうだ。
その前に、体調不良で今日の陛下との謁見に来なかったような気がするのだが、今の彼は誰が見ても健康体にしか見えなかった。

「そこは、察してくれよ。坊主」

あんな重たい席、そもそもブランタークさんは正式なパーティーメンバーでもない。
保護者代わりにアームストロング導師もいたので、自然と体調不良になったようだ。

「そんな大金、もうロートルの俺には使い切れないからな。それよりも、お前達は身を持ち崩すなよ」

運良く大金を得てから、それで身を持ち崩す冒険者は多いらしい。
なので、ブランタークさんはエル達に注意をしているようだ。

「逆に、ここから破産とかする人って貴重ですよね？」

「ある意味、歴史に名を残すと思う」

確かにエルの言う通りで、二兆円に相当する金を散財して破産できる人は、ある意味貴重なのかもしれなかった。

というか、どうやって使ったら良いのであろうか？

屋敷全てを、ミスリル・オリハルコン装甲で覆って……。

あまりに意味が無いので、俺はすぐにその想像を打ち消してしまう。

あとは、毎日竜の肉とかを食べた方が良いのであろか？

中身の今までの生活レベルから考えて、全く使い道は思い付かなかった。

「しかし、本当に運が良いよな」

新人なのに、達成困難な強制依頼を受けさせられて運が悪いのかと思えば、思わぬお宝を見付けて大金を得てしまう。

ブランタークさんに言わせると、超一流の冒険者には実力の他に運の要素も必要らしい。

確かに、それには納得してしまう部分があった。

「その点で言えば、もうお前らは超一流の冒険者だな。先に死んでしまった連中は、一流ではあったが超一流にはなれなかった。そういう事だ」

ともかく、これで無事にデビュー戦も終了し、俺達は二年半ぶりに生活の拠点をブライヒブルクへと移す事になるのであった。

素直に移せるのかは、まだ不明だとして。

幕間二十　魔導ギルド。

「魔導ギルドから招待状ですか？」

あの地獄の地下迷宮を何とか攻略し、ようやく褒賞などの件が片付いた頃。

俺はなぜかブランタークさんから、魔導ギルド本部から送られた招待状を受け取っていた。

「王都ブライヒレーダー辺境伯屋敷に、俺宛で送られて来てな」

「ブランタークさんって、魔導ギルドの会員なんですね」

「別に、好きでなったわけじゃねえぞ」

ブランタークさんは、俺に渡すはずの手紙を団扇のようにヒラヒラさせながら答える。

魔導ギルドとは、文字通りに魔法が使える魔法使いが所属するギルドである。

会員数は、約二千人ほど。

魔法使いの全数から考えると少ないようだが、地方の農民で火種を出せる程度の人は会員にはならないからで。

もう一つ、魔道具が作れる人は魔道具ギルドに所属してしまうので、その分も人数は少なくなっていた。

「あれ？　二つに所属は出来ないんですか？」

他のギルドだと、例えば俺は子供の頃に商業ギルドの会員証を発行して貰っていたし、今は冒険者ギルドの会員証も持っている。

他にも複数のギルドを掛け持ちしている人は多く、ギルド側も会員数が多い方が色々と有利なので、何も言わないのが普通になっていた。

それが、魔導ギルドと魔道具ギルドだけは兼任できない。

不思議な話ではあった。

「出来ないわけでもないんだが……」

昔はそれほど仲も悪くなかったそうだが、今はある理由で両者の仲は険悪になっているらしい。

「予算の配分でな……」

「金の問題は深刻ですね」

「そうだな」

ヘルムート王国が成立してから暫くして後、余裕が出来た王国政府は、古代魔法文明時代の優れた魔法技術を復活させるため、魔法技術の研究に予算をつけるようになる。

ところが、魔法使いは数が不足している。

いくら公の機関でも、そう簡単に人は集まらなかった。

そこで、魔道具ギルドと魔導ギルドの双方に予算を渡し、魔法技術研究を依頼するようになっていったのだ。
この瞬間から、両ギルドは半公的機関として世間に認知されるようになっていく。

「どちらが成果を挙げたかとか、予算配分とかで揉めてな。あとは、ごらんの有様さ」

微妙に情けない話ではあったが、珍しい話でもない。
どこの世界でもある、人間の性という奴であろう。

「魔導ギルドは魔道具ギルドに対抗すべく、会員数の増加を図ったわけだ」

もう一方の魔道具ギルドであるが、ここは魔道具が作れない人には用事のない組織である。
それも、少なくとも汎用の魔道具が作れないと会員になれないのだ。
よって会員数は少ないが、魔道具は世間から引っ張り凧なのでギルドの存在感は揺らぎもしない。

魔導ギルドとしては、高名な魔法使いを無理矢理会員にしてでも、魔道具ギルドに張り合う必要があるのだそうだ。

「心の底から、どうでも良いですね」

「俺も心底、そう思う」

魔法とは、基本的には個人で習得していくものである。
師匠がいる人も多いが、別に魔導ギルドなんか無くても生きてい

けるわけで。

黙っていると、誰も会員登録に来ないらしい。
そういう俺も、魔導ギルドの存在など記憶の片隅にも存在していなかったほどだ。

「師匠は、会員だったのでしょうか？」

「勝手に登録されたと言っていたな。俺も同じだけど」

「良くそんな組織が、半公的機関扱いされますね」

「共用魔法陣の研究を委託されているからな。少数だが、優れた魔法使いもいるんだよ」

共用魔法陣とは、魔法使い個人の思考・想像能力に頼っている魔法を、魔力があれば誰にでも使えるようにするための物である。

先日の、強制移転魔法陣と同じ物と言えば分かり易いであろう。
あのような魔法陣を他の魔法でも作り出し、最終的には魔力を篭めるだけで様々な魔法が発動する魔法陣集を作り出す事が目的なのだそうだ。

「なるほど、魔法陣の本を捲って使いたい魔法をのページを探し、それに魔力を篭めて発動と」

「そんな感じだな。少ない魔力は、魔晶石で補填するわけだ」

即応性には劣るが、複数が同じ魔法を同時に使える。
軍などでは、重宝されるかもしれない。

「ただ、古代魔法文明時代の魔法陣はなぁ……」

移転か強制移転が大半で、他の攻撃魔法などは、トラップ発動後にかなりの部分が消えて効果が無くなっている物くらいしか回収されていないそうだ。

「魔法陣に書く文字や記号に、意味不明な模様や絵に似た物と。パターンが複雑過ぎて、あまり成果は出ていないそうだ」

もう一方の魔道具ギルドの方は、徐々にではあるが成果を挙げている。

世間にそれなりの種類の魔道具が普及しているので、これは誰にでもわかる成果であった。

なるほど、魔導キルドが焦るはずだ。

「そこでだ。先日の地下迷宮攻略の際に新しい魔法陣を獲得し、それを売却してくれた坊主への感謝の気持ちと共に」

「会員にしてやると？」

「正解だ」

そんな理由で、俺とブランタークさんは王都の中心地にある魔導ギルドの本部を訪ねていた。

本部の建物は、事前の説明から想像した物に比べると立派なようだ。

そして、その対面に同じくらい豪勢な建物も建っている。

「それは、魔道具ギルドの本部な」

「嫌い合っているのなら、なぜ向かい合って……」

「先に引っ越すと、世間様に逃げた印象を与えるからだと」

「はあ……」

あまりにバカバカしい理由に呆れつつ、俺達は一階の受付で来訪目的を告げてから会長が待つ部屋へと移動する。

さすがに魔導ギルドは、トップが総帥などと言う大仰しい肩書きではないようだ。

「初めまして、ベルント・カールハインツ・ヴァラハです」

魔導ギルドの会長は、どこにでも居そうな普通の白髪の老人であった。

魔法使いなのでローブ姿ではあるが、あまり大した魔法使いにも見えない。

良くて、初級と中級の間くらいの魔力であろうか？

とりあえず、こちらも自己紹介をしておく。

「本日は、よくお越しいただきました。早速ですが……」

俺が最初にここで行ったのは、魔導ギルドへの会員登録であった。

会長が呼び鈴を鳴らすと、すぐに二十歳前くらいの若い女性職員が入って来て俺に会員証を渡す。

「あの、何か記入しなくても？」

「はい、バウマイスター男爵様の身元は確実ですので」

「そうなんですか」

ただ若い女性職員から会員証のみ渡され、手続きは終了となる。

どうやら、本当に入会して欲しいと思われると、必要事項の記入すら向こうで勝手にしてくれるようだ。

更に渡された会員証を良く見ると、そこには名誉役員という表記も見える。

いきなり、名誉付きとはいえ役員にされてしまったらしい。

「あの、名誉役員って？」

「はい、バウマイスター男爵様は優れた魔法使いですから」

要するに、魔導ギルドの宣伝のために名前を貸せという事らしい。

だが、その名誉役員とやらの仕事で時間を取られるのも嫌なので、これは断ろうとする。

だが敵も然るもの、すぐにこちらの意図を予想して反論してくる。

「名誉会員は本当に名前だけですので。お隣に居る、ブランターク殿を見ればわかると思いますが」

「俺も名誉役員だけどな。仕事なんて何もないぜ」

その代わりに、報酬なども無いらしいが。

更に、他のギルドのように会員費用なども一切無いそうだ。
あまり用事の無いギルドなので、年会費を徴収すると脱会する会員が増えるらしい。

しかし、話を聞けば聞くほど、何のためにあるのかわからない組織のように感じる。

「研究部門では、現在大車輪で魔法陣研究が進んでおりますです。はい」

俺達が見付けた、あの新しい様式の強制移転魔方陣の解析もそこで行っているらしい。
研究のために王国から出る補助金と、極一部の奇特な方からの寄付で魔導ギルドは運営されているそうだ。

「早速に、案内させましょう」

別に見たいとも思わないが、向こうがそう言うので。
先ほどの若い女性職員の案内で、研究部門がある地下階へと移動を開始する。

「ブランタークさん、あの会長なんですけど……」

言っては悪いが、どう見ても大した魔法使いには見えなかった。
なので、その理由をブランタークさんに聞いてみたのだ。

「そりゃあ、優秀な魔法使いなら現場に出るか、これから行く研究部門行きだからな」

結果、魔法使いとしては微妙だが、事務能力があったりする人が

組織運営を行うそうだ。
なので、会長だからと言って、必ずしも優れた魔法使いなどと言う事もないらしい。

「あと、貴族の子弟の就職先な」

税金が投入されている組織なので、辛うじて魔力はあるけど現場で活躍するのは厳しい。
そういう人も、組織運営の方に入るそうだ。

「教育は受けているから、事務仕事とかは大丈夫なわけだな。あとは……」

ブランタークさんは、俺達の前を案内のために歩く若い女性職員を顎で指す。
王都に住む、辛うじて魔法使い扱いされる女性が、結婚するまで腰掛けで働くか、人によっては結婚後も職員として残るケースも多いそうだ。

「事務や管理部門なんて、基本お役所仕事だからな。魔法はあまり関係ないのさ」

「魔導ギルドって、つまり……」

優秀な人は、現場か研究部門へ。
そうでない人は、ギルド組織を運営する部門へと。

確かに、合理的ではあった。

「こちらになります」

お姉さんの案内で地下にある研究室に入ると、そこではいかにもな魔法使いの男女が、新しい魔法陣の試作や、解析などで忙しく働いていた。

魔力の方も、見た感じでは中級クラスも複数存在するようだ。

「ここが、魔導ギルドの心臓部なのさ」

言っては悪いが、今この上の階が吹き飛んで会長以下の職員達が全滅しても、全く魔導ギルドの運営に支障を来たさない。

彼ら研究部門こそが、この魔導ギルドの肝であると。

ブランタークさんは、小声で俺に説明をする。

「おおっ！　新しい魔法陣を売ってくれたバウマイスター男爵殿か！」

俺達の到着に気が付いた、一人の初老の男性が声をかけてくる。

白髪混じりのボサボサの髪を無造作にオールバックにしている、如何にも研究者と言った感じのその人は、研究部門のトップであるルーカス・ゲッツ・ベッケンバウアーだと名乗っていた。

「ブランターク。アルフレッドの弟子は、素晴らしい魔力の持ち主だな」

「だろう」

どうやら、この二人は知り合いのようだ。

お互いに気安く会話をしていた。

「よし、これほど魔力があれば。バウマイスター男爵殿、こちらに」

ベッケンバウアー氏は、形式通りに研究部門の案内などするつもりもないようだ。

俺の手を引き、自分が研究しているスペースへと強引に引っ張っていく。

「ブランタークさん？」

「こういう男なんだよ。所謂、研究バカ？」

俺の見立てでは、ベッケンバウアー氏の魔力は中級でも上の方だ。

普通に冒険者でもした方がよっぽど稼げるのに、魔導ギルドで研究に時間を費やしている。

ここに居る人達は、大半がそんな感じのようだが。

「これが先日、バウマイスター男爵殿から購入した魔法陣を改良した物だ」

「ブランタークさん、わかります？」

「いや、間違い探しみたいだな……」

集中して見ると眩暈が起こりそうな魔法陣の文様に、俺とブランタークさんは、自分達には魔法陣の研究など不可能だと感じてしまう。

「それで、これはどこに移動を？」

「いや、たまたまの成果なのだが、これは逆の効果が出る魔法陣の試作品でな」

「逆ですか？」

「うむ、逆にどこかからこちらに移動させる魔法陣なのだよ」

ベッケンバウアー氏の説明によると、この魔法陣は人や物をこの魔法陣の上に引き寄せる効果があるらしい。

「効果はわかりますが、どこの物を引き寄せるんですか？」

「その部分が、この魔法陣が試作品なわけでな」

普通の魔法と同じく、魔法陣を使う魔法使いの想像力にかかっているそうだ。

「ゴタゴタ説明しても意味が無いか。試しにやってみる事にしよう。このように……」

ベッケンバウアー氏が魔法陣の前に立ち、十秒ほど目を閉じながら集中する。

すると、一瞬だけ魔法陣が青白く光り、次の瞬間には何か白い布のような物が置かれていた。

「何、コレ？」

「パンツ……」

魔法陣の上には、白い女性用のパンツが置かれていた。
しかも新品ではなく、直前まで誰かが履いていたようにしか見えない物がだ。

「あの、ベッケンバウアーさん？」

「あの女性職員の履いていたであろう、パンツを移動させたのだ」

ベッケンバウアー氏からの衝撃の発言に、研究室内にいる人達の視線が全て、俺達をここに案内してくれた女性職員へと向かう。

突然、しょうもない理由で注目された彼女は、顔を真っ赤にさせながら怒りで体を震わせていた。

「このように、この魔法陣は引き寄せる対象物の大きさ、重さ、距離で必要魔力量が変わるわけだ。理論上は時間や次元も超える事が可能なのだが、魔力の消費量が桁違いに……」

「いきなり何をするんですか！」

真面目な顔で説明をするベッケンバウアー氏の頬を件の女性職員がビンタして、引っ手繰るように魔法陣の上のパンツを持ち去って行く。

あとには、頬にビンタの跡がついたベッケンバウアー氏が残されていた。

「ワシ、研究部門のトップ……」

「さすがに、あれはお前が悪いだろう」

ブランタークさんの正論に、俺達ばかりか他の職員達も同時に首を縦に振るのであった。

「面白そうな物ではありますか」

「偶然の産物という点において、研究者から見れば失敗作なのだが」

強制移転魔法陣を改良中に偶然誕生した、別の場所から物を引き寄せる魔法陣。

その威力を、俺とブランタークさんはまざまざと見せ付けられていた。

実験で履いていたパンツを取られ、その復讐でベッケンバウアー氏をビンタした女性職員を見送ってから、俺はその魔法陣に視線を送る。

しかし、いくら見ても前の魔法陣との差がわからない。

多分、俺では永遠に理解不能だと思われる。

「実際に、使ってみるかね？」

「良いんですか？」

「正直、そんなに成功率は良くないのでね。危険も少ない」

引き寄せる物とその位置を正確にイメージ出来ないと、ただの魔力の無駄遣いになってしまうそうだ。
ベッケンバウアー氏が、視界にある女性職員が履いていたパンツを標的にしたのにも、一応の理由があったのだ。

「男のパンツなど引き寄せても、何も楽しくないからな」

「納得は出来るけど……」

『なぜパンツに拘るのか？』という疑問だけが、俺に残ってしまう。

「そういえば、理論上は次元と時間も超越可能であると？」

「理論上はね」

次元とは、この世界にも他の良く似た世界パラレルワールドの概念が存在している。
何でも、古代魔法文明時代に異世界の産物を魔法で引き寄せたという伝承が残っているのだそうだ。

それが事実なのか、物語なのかは不明であったが。

「（ここに、その異世界から来た人間がいるんだけどね……）」

正確には転生なのか憑依なのかは不明であったが、確かに異世界は存在していると俺は断言できる。
信じて貰えるかは不明であったが。

「では、早速に」

そんなわけで、俺も試しに魔法陣を使ってみる事にする。
ただこの魔法陣の魔力消費量は、物の重さに距離を掛けた分なのだそうだ。

遠距離にある重たい物を引き寄せると膨大な魔力を必要とする。
しかも、イメージに失敗すると魔力だけ無駄に失ってしまう。

「という事は、時間や次元が違うと？」

「消費魔力は桁違いであろうな。ワシなら、目的を達せられずに魔力だけ消費して気絶する」

中級の上の魔力を持つベッケンバウアー氏でもそうなのだから、異世界から物を引き寄せるには相当な魔力が必要なのであろう。

第一、その対象物のイメージが出来ないと魔力だけ無駄にしてしまうのだ。
まずは、安全策で近場の物をイメージする事にする。

「何にしようかな？」

「バウマイスター男爵殿、ちゃんとイメージを固めてからにしないと……」

具体的に何にするのかを良く考えないで、魔法陣の前に立ち集中してしまったのが良くなかったのであろうか？
魔法陣が青白く発光した後、その上には先ほどと似たような物が置かれていた。

良く見ると、やはり女性用のパンツであった。

この世界にも、地球と同じような下着が普及している。

俺の実家のような田舎だと自作のカボチャパンツだったりするが、王都や都市部では専門の服飾店によって洗練されたデザインの下着も置かれているのだ。

これも、王侯貴族御用達とまではいかないが、それなりの値段がする下着のようだ。

「色は黄色で、女性用」

「パックに、ウサギ柄の刺繍ねえ……」

この下着の持ち主は、かなり可愛い物が好きなようだ。

「誰のなんだ？　坊主」

「さあ？　実は、屋敷の中の物をイメージしただけなので」

俺の屋敷の中にある物を何かとイメージしたので、これは誰かのタンスの中から引き寄せられた可能性が高かった。

「それだけのイメージで成功とは。さすがは、バウマイスター男爵殿。そして、このパンツは……」

ベッケンバウアー氏はそのパンツを手に取り、その温かさを確認していた。

本人は研究者としての目線で引き寄せられた物の確認をしているのだが、傍から見れば下着に執着するただの変態ジジイにしか見え

なかった。

「ふむ、先ほどのワシのイメージも重なったのであろう。このパンツは、誰かが履いていた物で間違いない」

「えっ、そうなの？」

だとしたら、とんでもない事をしてしまった事になる。

なとと考えていると、いきなり研究室の扉が勢い良く開き。

室内に、一人の女性が乱入してくる。

その女性とは、今日は屋敷で休んでいるはずのイーナその人であった。

「ヴェル！　私のパンツ！」

「良くわかったな」

「いきなり履いているパンツが消えるなんて、魔法しかあり得ないわ」

更に、今日の俺が魔導ギルドを尋ねるという予定は知っている。

パンツを取り戻すために急ぎ魔導ギルドまで行くと、親切な女性職員がこの地下研究室に案内してくれたそうだ。

間違いなく、先ほどベッケンバウアー氏にパンツを取られた女性職員であろう。

「おおっ！　いきなり初回で、上級貴族屋敷に住んでいる女性のパンツを召喚か。素晴らしい才能であるな。しかし、見た目はクール

ビューティー系なのに、パンツは可愛い系であるか。これは、ある種のギャップであるかと……」

「そんな事よりも！　パンツを返せ！」

まだガッチリとパンツを握っていたために、ベッケンバウアー氏はイーナから強烈なビンタを貰ってしまう。

というか、この人はなぜこんなに無駄口が多いのであろうか？

まさに、『雉も鳴かねば撃たれまい』という奴だ。

「あの、イーナ」

「何？　ヴェル」

「今度、下着を買うのなら付き合うから」

「……、まあ良いわ」

「坊主、惚れられてて良かったな」

イーナからの制裁を免れ、俺は心から安堵するのであった。

「ヴェル、今度はパンツ以外にしなさいよ」

「そういうコントロールには慣れていないんだよ。まだ二回目だし」

「慣れてなくても、パンツしか召喚できないなんて情けないじゃな

いの」

「改めて言われると、確かに情けない……」

ようやくパンツが戻って来たイーナも加わり、俺は次の召喚実験を開始する。

というか、いつの間にか実験になっているし。

召喚と呼ぶには、その成果は微妙とも言えた。

精々で、お取り寄せレベルであろうと。

「とにかく、パンツ以外で」

「わかったよ……」

イーナから強く言われながら、俺は再び自分の屋敷から何かを取り寄せるイメージを頭に思い浮かべる。

すると三度魔法陣が青白く光り、今度は黒い何かがその上に取り残される。

「ええと……」

その黒い物体は、俗に言うブラジャーと呼ばれる物であった。

「黒のブラジャー……」

「ヴェル……」

「いや、パンツじゃないし……」

「だからって、ブラジャーはないでしょうが！」

確かにイーナの言う通りなのだが、どこか思考がドツボに嵌っているらしい。

連続で下着を召喚とは、俺の品性が疑われてしまう話だ。

元から無いと言われれば、それまでなのだが。

「誰のなんだ？」

「ふむ、サイズは小さいな」

またベッケンバウアー氏が、黒いブラジャーを取ってマジマジと観察を始める。

重ねて言うが、これは研究者として真面目に召還物を観察しているだけである。

見た目は、ただの変態ジジイであってもだ。

「ヴェルゥーーー！」

そして、数分ほど後。

今度は、ルイーゼが研究室に乱入してくる。

やはり、とある女性職員が親切に案内してくれたそうだ。

「えっ！　ルイーゼなのか？」

まさか、あのルイーゼが黒い下着を着けているとは。

少し言いたい事もあるが、それを口にすると大変な事になりそうなので言わないようにする。

ただ、またベッケンバウアー氏は空気が読めていなかったが。

「その幼い容姿で、黒の下着はまだ早かろう。それに、ブラジャーが必要な胸とも思えないが……」

「ふんっ！」

「あべし！」

ベッケンバウアー氏はルイーゼから往復ビンタを喰らい、頬のモミジの色を濃くしてしまう。

「あの、今度下着を買うなら付き合うから」

「ふーーーん、まあ良いか」

「坊主、惚れられてて良かったな」

再びルイーゼの制裁から免れ、俺は心から安堵するのであった。

「どうして、下着ばかりなんだよ」

「知るか。イメージの調整が難しいんだよ」

「ヴェルもいい加減にしないと、あのジジイみたいに変態扱いされるから」

「魔導ギルドの研究部長を、変態ジジイ呼ばわり……」

「状況的に、否定は難しいわな」

今度はルイーゼも加わり、やはり実験は続行のようだ。

二重のモミジを両頬に付けたベッケンバウアー氏は、俺に次の物を召喚するようにと言う。

「屋敷外にすれば良いじゃないの」

「でも、それだと迷惑がかかるだろう」

「屋敷内でも、私はパンツを取られたけど」

「ボクは、ブラを」

イーナとルイーゼに非難めいた視線を向けられたので、俺はこんな下らない実験は早く終了させようと決意する。

「（となると、なるべく遠距離の物がいいな）」

別に、無理に成功させる必要は無い。

遠距離から召喚しようとして、魔力だけ消費して終わっちゃった。

となるのが、この場合において最良の結果なのだと。

ちなみに、地球からの召喚は今の時点では危険なので止めておく。

俺は、常に安全策を模索する、そのために情況に流される事も多い男なのだから。

「ええと……。目標は、アーカート神聖帝国領で」

「なるほど、外国だから文句は出ないわけね」

イーナが感心した風に言うが、さすがに人が住んでいそうな場所からの召喚は厳しいはず。

そこで、先日見せて貰った地図を参考に、誰かの所有物ではない自然物の召喚を試してみる事にする。

「（アーカート神聖帝国領北方の海域……）」

アーカート神聖帝国は、リンガイア大陸の北半分を領有している。

そしてその北端には、南端部と同じく広大な海洋と島々が広がっているそうで。

そして、冬は極寒となるその海で獲れる海産物は、帝国中で大人気なのだそうだ。

以前に読んだ本によると、その産物は地球の北海道で採れる産物に酷似していると書かれていた。

あとは……。

「（実は、この魔法陣は便利とか？　まあ、成功したらだけど……）」

などと思いながら魔法陣の前に立つと、また青白く発光してその上に何かが現れる。

「下着？」

「なわけあるか！」

俺はイーナに突っ込みを入れながら、魔法陣の上に現れた物体から急ぎ距離を置いていた。

「成功はした。だが……」

魔法陣の上に現れた物。

それは、地球で言うところのクロマグロという魚であった。

しかもご丁寧に、海の中で泳いでいた重さ二百キロ近い個体を召還してしまったらしい。

まだ生きているクロマグロは、元気に魔法陣の上を跳ね回っていた。

「イーナ」

「しょうがないわね……」

イーナは、俺が魔法の袋から取り出した槍を渡すと、素早くマグロに止めを刺す。

すぐにマグロは、魔法陣の上で動かなくなった。

「なるほど、今回は役に立ちそうな物を召喚したんだな」

「いや、ベッケンバウアーさんがそれを言いますか？」

正直なところ、最初にパンツを召喚した人には言われたくなかったのだ。

「まあ、良いではないか。早速に、食べよう」

「食べるのかよ！」

実は、リンガイア大陸において魚の生食は普通に行われている。
魔法の袋に入れると鮮度が落ちないので、内陸部にある王都や都市部などでは、高級食材として金持ちや王侯貴族に良く食べられているのだ。

ただ、ワサビは西洋ワサビに似た物で、醤油ではなく塩を付けて食べるのが普通であったが。

「やはり、新鮮な生の魚は美味いな」

食べるとは言っても、あれだけの大きさのマグロである。
解体などプロでないと出来ないので困っていたのだが、それを解決したのは、先にベッケンバウアー氏からパンツを奪われた女性職員であった。

何でも彼女は、実家が魚屋なのだそうだ。

実家から道具を借りると、手慣れた手付きでマグロを解体していく。

そして、上手く刺身に切り分けて皿に盛っていた。

「北方産のクロマグロで、重さは二百十三キロ。相場は、二十万セントほどですね」

突然の高級食材に、魔導ギルドに居た全員が集まって刺身を食べていた。

「えっ、そんなにするの？」

「はい、ヘルムート王国沿岸の海でも獲れますが、味は北方産の方が良いので」

北方産のクロマグロは、日本で言うところの大間のマグロに匹敵するブランドらしい。

更に、輸入品になるので値段が高くなるそうだ。

「なるほど。しかし、本当に美味い」

前世でも、これほど高級なマグロなど食べた事がないので、俺はその美味さに感動していた。

それと、刺身を食べるために提供した自作の醤油も好評なようだ。

「塩で食べるよりも、こちらの方が美味しいですね」

「こうなると、次の獲物が欲しくなるか」

今まではパンツのみ召喚していた魔法陣が、初めて人のお役に立てたのだ。

ここは魔力が続く限り、全力で召喚を続けるべきであろう。

「北方の海の幸を」

「だと思った……」

呆れるイーナを宥めつつ、俺は次々と北方産の魚介類を召喚していく。

地球のよりも大きいホタテに、バフンウニに似たウニ。

イカやタコですら高級食材なので、喜んでみんな食べている。

どうやら、悪魔の使いだとかそういう扱いはされていないようだ。

リンガイア大陸に住む人達にとっては、普段食べている動物の肉よりも海で獲れる海産物の方が高級品でご馳走というイメージが強い。

なので、突然始まった試食会は大人気となっていた。

「続けて！」

今度は、タイ、ヒラメ、カレイ、カンパチなど。

正式名称は違うそうだが、見た目はソレだし魚屋の女性職員も高級品で美味しいと言っているので問題は無いはず。

彼女は、次々と召喚される海産物を締めてから刺身に切り分け、それを魔導ギルド職員達が口に入れていく。

俺も、久々の海の幸に舌鼓を打っていた。

「さて。そろそろ皆がお腹一杯になったので」

「いや、それは関係ないので。というか、実験！」

「それは、わかっておるよ」

さすがに俺の魔力量でも、あと一回の召喚が限界になっていた。

周囲を見ると、刺身を食い尽くして満足そうな職員達の姿が見えるが、気にしないで最後の召喚を行う事にする。

ただ、残存魔力の関係で、あまり重たい物は召喚できそうになかった。

「距離を重点に置いて欲しい」

「わかりました」

ベッケンバウアー氏にそう言われ、俺はまた北方の海域から何か軽い物をとイメージする。

結局成功率は１００％なようで、魔法陣の上には発光と共に何か小さな物が置かれていた。

「紫色の……」

「下着ですね」

「ヴェル！」

「何でまた下着なのよ！」

「知るか！」

北海の海にある海産物を標的にしたはずなのに、俺はまた下着を召喚してしまった。

イーナとルイーゼから非難されてしまうが、別に俺だって好きで下着など召喚していないのだから。

「なぜに？」

「海で船に乗っていた誰かという可能性があるな。しかし、この下着は……」

三度、ベッケンバウアー氏は下着を手に取って調べ始めるが、イーナに、ルイーゼに、件の女性職員のみならず。
魔導ギルドの会長ですら、ベッケンバウアー氏を怪訝な表情で見ていた。

「色は紫で、材質は絹か。なかなかのサイズのブラと、レースやスケスケがふんだんに使われている。縫製も、素晴らしいの一言だ」

「変態……」

イーナの言う通りで、本来魔法の研究家であるベッケンバウアー氏が下着に詳しいのは妙な気もする。
だが、ベッケンバウアー氏に言わせると、それはおかしくないのだそうだ。

「ワシの実家は、貴族御用達の下着専門の服飾店でな。自然と、下着の知識が」

「そんな知識が、自然に身に付くんだ？」

「実家に居る間は、半ば強引に家業を手伝わされたのでな」

魔法使いの才能は、遺伝しない。
故に、様々な階級や商売をしている家から突然現れるわけで、そのための悲劇とも言えた。

そして、そんなベッケンバウアー氏の微妙な過去すら地平の彼方へと吹き飛ばす、衝撃の事実が判明してしまう。

「この家紋は……」

「えっ？　下着に家紋ですか？」

ベッケンバウアー氏が、その下着に家紋が付いているのを確認する。

「王国でもそうだが、王族や皇族ともなれば、指定された御用達の品しか身に付けないのが普通。店側も、他の品と区別するために家紋を刺繍するのが普通なわけだ」

さすがは、もう魔法の研究家よりも、下着のプロフェッショナルのイメージが強いベッケンバウアー氏。

適切な解説を入れてくる。

「ちなみに、その家紋ですけど」

「ふむ、フィリップ公爵家の物だな。選帝侯にもなっている、アーカート神聖帝国では一二を争う大貴族家である」

世の中、知らない方が幸せな事もある。

というか、そんな大貴族家の女性の下着を奪ってしまうなど、下手をすれば外交問題にも発展してしまうであろう。

俺を含めて、全員の顔が一斉に青ざめる。

「あの、ブランタークさん」

「俺に聞くなよ」

「ベッケンバウアーさん？」

ブランタークさんからすれば、確かに知らないとしか言えないはず。

なので、この実験の責任者であるベッケンバウアー氏に尋ねると、彼は反射神経的に素早くこう答えていた。

「北方の海の幸を召喚する実験は無事に成功。下着？　そんな物は知りません。そうですよね？　バウマイスター男爵殿」

「はい、知りません！」

俺は、素早く下着を魔法の袋に仕舞う。

これで、完全に証拠は隠滅した。

今頃、とあるフィリップ公爵家の女性が北の海でノーパン・ノーブラになっていたとしても、それは俺達には関与できない事であった。

「本当に、良いの？」

「良くはないが、正直に陛下に言うのか？」

「言えないわね……」

俺の疑問に、イーナも口を閉ざす事を決めたようだ。

会長以下、他のギルド職員達にも緘口令が敷かれ、公式にはただ北方の海産物の召還に成功したという記録のみが残される事となる。

だが、後にその下着の持ち主と大きく関わる事になってしまうとは、さすがの俺でも想像できなかったのであるが。

そして翌日……。

「ただいま、お父さん」

「お帰り、デリア。ところで、一つ聞きたい事があるんだが」

例の白いパンツの持ち主にして、魚屋の令嬢兼魔導ギルドの職員であるデリアは、今日も仕事を終えて家に戻ると、父親である魚屋店主から質問を受けていた。

「なあに？　お父さん」

「今日、バウマイスター男爵邸から大量注文が来たんだけど。お前、理由は知っているか？」

「お父さん直伝の腕前が認められたからよ」

「はあ？」

後年、デリア嬢は、バウマイスター領に魚屋を本店からの暖簾分けで出店する事になる。

第四十五話　始まった冒険者生活と、新たな依頼。

私の名前は、アマデウス・フライターク・フォン・ブライヒレーダーと言い。
このリンガイア大陸南部にあるヘルムート王国の、南部地方を統括するブライヒレーダー辺境伯家の当主を務めています。

年齢は今年で三十四歳で、四人の妻に子供が息子ばかり六人と。
世間では羨ましいと思う人も多いのでしょうが、これでも苦労はしている方だと思います。

元々次男坊で本来家を継ぐ立場に無かったのに、突然父が二千人もの諸侯軍を編成して遠征を行い、そのまま戻って来なかった。

そのせいで、急遽爵位を継ぐ事になったのですから。

そもそもの遠征の目的は、山脈と広大な南端未開地を突っ切った先にある、前人未到の魔物の領域で兄の病気を治す霊薬を手に入れること。

ブライヒレーダー辺境伯家の次期当主であった兄は、優秀な頭脳を持ちながら生来病弱であり、しかもこの一年ほどで明日をも知れぬ死病に犯されていました。

『何を心配する事がある。俺が死んでも、アマデウスが継げば良い。頭でっかちな俺なんかより、アマデウスの方が当主に相応しいのだ』

兄自身は、自分のような病弱な男が貴族家の当主になるのは良く

ないと常々口にし。
私に家を継ぐようにと言って、結婚すらしないで父を心配させていました。

私から言わせると、兄は頭が良過ぎたのだと思います。
なまじ頭が良いから、病気を理由に当主の座を諦めて私に譲ると言ってしまう。
御家騒動の元になるから、結婚すらしない。

正しいのでしょうが、せめて他の貴族家の人達のようにもう少し欲を持ってくれれば。
もし兄が若死にしたとしても、子供が居れば私が後見して当主を継がせるという選択肢もあったでしょうし。

そんな兄を見て、父も不憫だと思って兵を出したのでしょう。
急ぎ諸侯軍を編成し、未知の領域へと遠征に赴きます。

その優しさは、最悪の結果となって返ってきたのですが。

『父は？』

『アルフレッド様が奮闘して、大量の魔物を討ち果たすも。次々と沸く魔物の大群に囲まれ、あえないお最後を……』

山脈を越えた麓にあるバウマイスター騎士爵家の援軍と共に魔の森に侵入した父達は、最初は大量の成果に士気を挙げたものの、すぐに魔物の大群に包囲され。
暫くは、筆頭お抱え魔法使いであるアルフレッドが奮戦して戦線を支えたが。
彼が力尽きて倒れると、一気に軍勢は崩壊してしまったそうです。

何とか戻って来た兵士達が私に報告を行いますが、彼らは目の焦点は虚ろだし、小さな音にも異常に反応して怖がるようになっていました。

多分、この平和な世の中では珍しい。

戦場に出た兵士がかかる、精神の病だと思います。

『ご苦労様、今はゆっくりと休んでください』

二千人が出兵して、生存者は百人といなかった。

応援を無理強いした、バウマイスター家の犠牲者は八十名ほど。

人口が八百人ほどの領地なので、人口比率に著しい不均衡が生じ。

今頃は、当主もその対策に頭を悩ませているはず。

ですが、今は寄り子の事よりも、当家に差し迫った危機の方が重要でした。

父のせいで彼らも可哀想なのですが、我が家も現在大変な状態にあったからです。

『まずは、兄さんに相談しないと……』

亡くなった父は、次期当主をまだ兄に定めていました。

なので、この遠征の失敗を死病で床に伏している兄に伝える必要があったのです。

例えそれが、兄の病状に大きなダメージを与えるとしても。

『そうか……。次期当主の権限において命令する。アマデウス、俺はご覧の有様だからお前が対策に当たってくれ』

真っ青な顔色の兄は、何とかベットの上で上半身を起こし。
私に、父亡き後のブライヒレーダー辺境伯家の舵取りを命令します。

兄の顔には、苦悩の色が見えました。

兄だって、私に全て任せてベッドの上で寝ているなどしたくないのでしょうから。

『父上は、愚かだ……。俺の事なんて、見捨てれば良かったんだ……』

翌日、メイドが朝食を持って兄の部屋に行くと、既に兄は息を引き取っていました。
世間では、兄は憤死したなどと噂されたようですが、実際にはこんな物だったのです。

間違いなく心の中では兄は激高し、それが原因で残り少ない命を燃やし尽してしまったのでしょうが。

それからの私は、大変に苦労しました。

まず最初に、一族や分家に父と兄の死を伝えて、私が次期当主になる事を発表します。

すると中には、自分こそが次期当主に相応しいなどと言う親戚もいましたし。
若い私を傀儡にして、自分が実権をなどと考える者も複数存在していたからです。

彼らに舐められてはいけない。
ところが、そのための人材すら父は全てあの世に連れ去っていました。
遠征に参加した二千人は、ブライヒレーダー辺境伯諸侯軍全体の中では一部でしたが、率いていた幹部達の質は高かったからです。
更には、ようやく迎え入れた。
最近王都で王宮筆頭魔導師になった、アームストロング導師に勝るとも劣らない魔法使いであったアルフレッドの死。
彼らの死は、新当主である私を更に追い込んでいたのです。
『（今はとにかく、出来る事を順番に……）』
父と兄の葬式を、遺漏無く行い。
王都に、ブライヒレーダー辺境伯家継承の手続きと、陛下から襲爵の儀を受けるために向かいます。
戦死した兵士達の遺族に増額した見舞い金を送り、それはバウマイスター騎士爵家も同じ条件に。
特に後者は、さすがに相場通りにするわけにはいきませんでした。
明らかにブライヒレーダー辺境伯家側が悪いのに、涙を飲んで貰う必要がありましたから当然でしょう。
なぜなら、父と兄の死後から続く混乱を突き、東部を統括するブロワ辺境伯家が、境界境で寄り子の小領主達に扇動工作などを行わせていたからです。
境界を接するうちの寄り子達と、ブロワ辺境伯側の寄り子達。

どこの貴族でも同じなのですが、領地が接していれば何らかの争いは存在します。
純粋に領地争いから、水利権、境を跨いでいる共有管理地である森や鉱山などの取り分など。

ブロワ側は、今うちを突けば良い条件で交渉可能だからと言って、彼らに動くように命じたのでしょう。

この時期に、実に嫌な事をしてくる男です。

それでも私は、どうにかこれらの混乱を収めて次第に領内を安定させていきます。

多分、間違ってしまった事なども多かったのでしょう。

遠征で迷惑をかけてしまったバウマイスター家との仲は、今では完全に悪化してしまいました。
ですが、ブライヒレーダー辺境伯家全体の利益から考えると瑣末な事。
酷い言い方だとは思いますが、私だって万能の神ではないのです。

商隊を派遣するなどの便宜は続けているので、最低限の義理は果たしていると思う事にします。

向こうがもう少し歩み寄ってくれると、こちらとしても支援の手も差し伸べ易いのですが……。

聞けば、跡取りは私を嫌っているとか。
せめて噂に聞く、知性派である五男エーリッヒに継がせるか家臣として使ってくれれば、交渉も楽なのでしょうが。

ところがそのエーリッヒ本人は、継承のゴタゴタを嫌って王都に行って下級官吏になってしまいました。

下級とはいえ、あの官吏登用試験に一発で受かるなんて。

やはり、惜しい人材ではありましたか。

私が欲しいくらいだったのですが、そのデメリットの多さから断られてしまいましたし。

『あんたの親父さんには、言いたい事が山ほどあるけどな。だが、その息子に言ってもしょうがねえな』

それでも、得られた新しい優秀な家臣も存在しました。

戦死したアルフレッドの魔法の師匠にして、竜殺しの称号まで持つ、高名な冒険者であったブランタークの登用に成功したのです。

『アルフレッドの代わりというほど、優秀じゃないけどな』

このブランターク、一番最初に会った時には口が悪い遊び人風な男にしか見えなくて、私は内心不安を感じていたものです。

ですが、実際に雇うと。

魔法使いのしての実力はアルフレッドよりも劣るものの、二十年以上も超一流の冒険者として活躍していただけの事はあり。

社会経験と、国内各地に魔法を教えた弟子などがいるためにそのツテで人脈も豊富。

もしかしたら、貴族の家臣としてならアルフレッドよりも優秀かもしれない男でした。

『ところで、ブランターク。私の叔母で……』

『お館様、それだけは勘弁してください……』

お抱えになった時点ですぐに、最初のような口調を止める切り替えの速さを持っていたブランタークは、魔法使いとしても、優秀なアドバイザーとしても、私を支えてくれるようになりました。

なぜか極端な独身主義を貫き、私の勧める縁談を全て断ってしまうという欠点があるにしてもです。

他にも色々とあったのですが、何を言いたいのかと言えば。

若かった私は、様々な人達から足を引っ張られたり、逆に助けられたりして今があるわけです。

年齢も三十歳を超え、今の私は今度は困っている若い者達にアドバイスなどをしてあげる必要があると。

私の優秀な寄り子である、バウマイスター男爵達による古代地下遺跡攻略終了報告から数日後。

所用で王都へと瞬間移動魔法で来ていた私は、三人の若者達からとある相談を受けていたのです。

「いやあ、バウマイスター男爵の魔法は便利ですね」

まずは、軽く世間話から始める事にします。

ですが、本当にこの瞬間移動の魔法は便利です。

本来なら、大金を払って魔導飛行船に乗るか、時間をかけて遠距離馬車で来ないといけない王都に一瞬で来れるのですから。

私は、週に一度。

決まった曜日の朝に、バウマイスター男爵にブライヒブルクに迎えに来て貰い。

別の決まった曜日の朝に、ブライヒブルクに送って貰う生活をこの二年半ほど続けていました。

私が王都で週の半分くらい動けるというのは、実に都合が良いのです。

私はただの大身の貴族ではなく、南部の貴族達の統括を行う身分ですから。

今までは、王都との距離感のせいでそう頻繁に顔を出せなかったのですが。

中央のロクデナシ貴族達と交渉する際に、王都常駐の重臣だけではなく、自分が実際に顔を見せると有利な事も多く。

新しい人脈作りや、繋がりを強化するための付き合いなどにも顔も出し易いわけで。

バウマイスター男爵に大金を払っても、十分に利益が出るわけです。

「ブライヒレーダー辺境伯様がヴェルに運び屋を頼んでいるのは、俺達も知っていますけど……」

「おや、悩みは想像以上に深刻なようですね」

私に相談のある、悩める若い子羊達は三名。

一人目は、まだ十五歳で、バウマイスター男爵の冒険者予備校時代からの友人にして。

同じパーティーメンバーなうえに、一応バウマイスター男爵家の従士長でもあるエルヴィン・フォン・アルニム君。

彼も、西部地方の小さな騎士爵家の五男で、バウマイスター男爵とそう生まれに違いは無いと聞いています。

冒険者予備校なら西部に幾つも存在しているのに、彼がわざわざ南部にあるブライフビルクの冒険者予備校を選んだ理由。

それは、剣の才能が優れていたために兄達から疎まれてしまったからだそうで、こんな話は特に珍しくもありませんでした。

代わりに、バウマイスター男爵と知り合えたのだから。

私などは、良しと考えた方がなどと思ってしまうのですが。

「イーナとルイーゼとは違って、俺は相談できる立場には無いんですけど……」

「その辺は、気にしないでください。君は、バウマイスター男爵の家臣ですからね。寄り子の家臣の相談ならば受けますよ。これでも、二十代は苦労の連続でしたから」

今でも苦労の連続なんですけど、ある程度は慣れたという点が大きいですね。

「ありがとうございます」

残りの二人は容易に想像が付くとは思いますが、イーナ・ズザネ・ヒレンブラントとルイーゼ・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェークという十五歳の少女で。

共に、私の家臣の娘です。

槍術指南役と魔闘流指南役なので、家中では中堅といったところでしょうか？

同じく、バウマイスター男爵の冒険者予備校からの友人にして。

今では、一家を立てたバウマイスター男爵の側室候補というわけです。

家柄の問題で正妻は、ホーエンハイム枢機卿の孫娘に奪われましたけどね。

私としては、何とか一番の寵愛を受けて欲しいとか願う次第でして。

他の女性を押し付ける案は、うちの一族に適齢の女性がいなかったのと。

バウマイスター男爵から嫌がられる可能性があったので、止めていました。

「それで、イーナさんとルイーゼさんも同じ悩みがあると？」

「はい」

「物凄く深刻な悩みです」

普段は能天気にしか見えないルイーゼさんが深刻と言うくらいなのですから、本当に深刻なのでしょう。
というか、私にはどんな悩みかすぐにわかったしまったんですけど。

「重荷ですか？　二百億セントは？」

私の問いに、三人が一斉にうな垂れてしまいます。

「まあ、確かに多過ぎですよね」

確かに、ルイーゼさんの言う通りですね。
二百億セントなんて、今の私でも。
いや、ブライヒレーダー辺境伯家の貨幣保有量から考えても、すぐに揃えるのは不可能ですから。
勿論、領地も含めた総資産はその数倍はありますけど。

「それよりも、嫌がらせに近いと思います」

「冒険者が、思わぬ発見をして大金を得る。夢ではありますけど、あまりに金額が……」

普段は冷静なイーナさんも、困っているようです。

なるほど、一旗挙げるために冒険者になった者が思わぬ大金を得て周囲から羨ましがられる。

冒険者ギルドとしても、冒険者個人の成果は絶対に機密という法もないわけで。

時間が経つにつれて、噂として世間に漏れるのを防げるわけではない。

冒険者が一日に数万セントを得ると、知己の連中は羨ましがって酒くらい奢れよと言う。

数十万セントだと更に羨ましがられ、自分もそのくらい稼ぎたいなどと思われ。

数百万セントだと、これは世間一般では『百万長者』と呼ばれ、お金持ちの最低条件と見なされる事が多い。

ところが、それよりも上になると。

数十万セントから増えますが、タカリに、借金の申し込みに、おかしな詐欺投資話とか。

知人と友人も、なぜか異常に増えるんですよね。

あと、下手をすると犯罪に巻き込まれるケースも。

誰しも大金は得たいが、得れば面倒な事も増える。

世の中、なかなか侭ならない物なのです。

「（二百億セントを、今まで大金に縁など無かった少年少女にポンと渡す。なるほど、一種の嫌がらせに近いですね）」

今はまだ世間に広がっていないものの、もし彼らが大金を得た事が世間に知られたら？

額が額なので、もっと面倒な事が起こるのは容易に想像できるというもの。

金目当ての縁談の押し付けに、エルヴィン君の場合は実家が何か

引き起こす可能性すらあり。

イーナさんとルイーゼさんですら、実家が何かを企む可能性があるのです。

「実家が、金貸せとか寄越せとか言うくらいなら。まだマシだと」

下手をすると、エルヴィン君の死後に遺産を相続しようと、親族が暗殺者くらい送り込みかねない。

そのくらい、物凄い金額なのですから。

特にエルヴィン君は、お兄さん達とあまり仲が良くなかったそうなので。

「ボク達も同じかな」

「私達の場合は、女性なのでもっと深刻です」

女性は基本的に家を継げないのですから、エルヴィン君のように、最悪金の力で貴族として独立するという選択肢すら使えません。

「うちの槍術道場を国中に広げるから、金出せとか。そういう話になりかねません」

「あれ？　イーナさんの実家の槍術道場って、結構メジャーな流派だったような」

「先祖が、本部から免許皆伝と道場運営権を得たんですけど。このお金があれば、本部で運動してトップに立ってとか……」

「うちも、ありそうだなぁ……」

なるほど、お金の力で王国中に広がる流派道場本部のトップの立場になれれば、うちではしがない指南役でも、外に出れば他の道場主達がペコペコ頭を下げるような身分になれる。

陪臣である彼らの、ある種の立身出世の方法でもあります。

果たして、その誘惑に二人の親が耐えられるのかという事なのでしょう。

「大金過ぎて、デメリットしか感じられないんです」

「なるほど。ですが、辞退は出来ないでしょう」

王国とて、今回はバウマイスター男爵達を危険に曝してしまったというお詫びを込めてこの大金を渡しているのです。

いえ、違いますね。

ブランタークからの報告書は読みましたが、別に王国は損などしていないのです。

確かに大金は払いますが、代わりにその金額以上の資産は手に入っているわけですから。

長い目で見れば、あのくらいの金額なら取り戻して黒字になると計算済みなのでしょう。

あの財務卿なら、そのくらいは想定の範囲内でしょうし。

「ええっ！　駄目なんですか！」

『王国に返すくらいなら、俺に全部寄越せ！』とか、『陛下にか

えって失礼である』とか。

後者の方は、あまりに王国が強力になり過ぎるとという貴族達の本音が出ているのでしょうけど。

私も、ただ無条件で金を返すなんてして欲しくないのですから。

「はい、駄目ですね」

「そんなぁ……」

ガックリと肩を落すエルヴィン君でしたが、他に策が無いわけでもないのです。

ただ、その説明をするのは私ではありません。

私が近くにある呼び鈴を鳴らすと、室内に一人の男性が入ってきます。

我が家が誇る、お抱え魔法使いであるブランタークです。

「よう、破産の心配は無かったんじゃないのか？」

「意地悪を言わないでくださいよ。本当に、深刻なんですから」

「すまんすまん。確かに、大金過ぎるよな」

バウマイスター男爵と同じパーティーに居たがために、普通ならクリアーすら出来ない地下遺跡を攻略して多くの成果を得た。

一定以上の報酬を受ける権利はありますし、彼らもそれに相応しい活躍をしている。

だが、二百億セントは身の破滅の原因でしかない。

では、どうするのか？
相談を受けた私ではありますが、この答えは元は同じ冒険者であったブランタークに任せた方が良いでしょう。
彼ならば、こういうケースも対応可能なはずですから。
「最初の登録時に、ギルド本部で貰った冊子は持っているな？」
「はい」
ブランタークの問いに、三人は首を縦に振りながら答えます。
「第二十七条の四項。分配金異議申し立て制度を利用する」
私には冒険者をした経験が無いのですが、さすがは歴史のあるギルド。
それなりに、規則なども整備されているようですね。
「分配金異議申し立て制度ですか？」
「はい」
ブランタークの話によると、冒険者の報酬は人数で頭割りにされるのが基本。
ですが、ある程度熟練したパーティーに新人を入れるので、その新人を見習いとして扱うために暫く報酬が低い。
もしくは、経験が少ないパーティーに熟練した経験者を入れ、アドバイスを貰いながら経験を積むので、その人が在籍する間の報酬

を多くするなど。

ケースバイケースで、条件を変える事は多いのだとか。

ところが、それを悪用する冒険者も多いそうです。

「もう十分に戦力になっている新人を、低い報酬のままで脱退も許さずに拘束する。もう指導も必要ないのに、年配の冒険者がいつまでもそのパーティーに居座って多額の報酬を要求する。まあ、冒険者なんてピンキリですよ」

生きるためというか、人よりも多くの金を得たいがために他人を騙して搾取しようとする。

その辺は、冒険者でも貴族でもそう違いは無いんですけどね。

「そういう被害を受けている冒険者が、ギルド本部に異議を申し立てるわけです。すると、本部から人が来て事情聴取を行ってからケースによっては和解案を提示すると」

強制力は無いので、役に立つかはその人次第だそうですが、分配金異議申し立て制度を喰らった冒険者とパーティーは記録に残るので、また新人がその悪徳冒険者やパーティーに騙されるケースが減る。

この制度の本来の目的は、そういう部分にあるそうです。

「ですが、その制度は報酬が低いと文句を言うための物なのでしょう？」

「いえ、報酬に文句があるので異議を申し立てるための制度です。

報酬が多過ぎると異議を申し立てるケースは今まで聞いた事が無いのですけど、してはいけないと規則に書かれてもいませんから」

「確かに、書いてありませんね……」

ブランタークが持っていた冊子を見ると、確かに書いてありません。

ある意味、規則の盲点を突いたとも言えます。

普通なら、報酬が多過ぎると異議を申し立てる人もいないでしょうし。

「お前ら、これを活用して坊主にみんな押し付けてしまえ」

「わかりました」

三人は良い方策が見付かったと、良い笑顔で冒険者ギルド本部へと出かけて行きました。

間違いなく、異議を申し立てられたバウマイスター男爵は『寝耳に水』なんでしょうけどね。

私としては、彼にお金が集まるのは好都合なんですけど。

「あとは、陛下や導師やルックナー財務卿などもそうなると予想していたと？」

「間違いなくそうでしょう。でなければ、こんな決定を下さないでしょうし」

数日後に、再び三人から報告を受けますが。

彼らは、一億セントを受け取ってあとは全てバウマイスター男爵

の報酬に上乗せしてしまったそうです。

異議申し立て後に事情を聞きに来た審議官は、再度三人から地下遺跡での戦闘に関する報告を聞き。

もし二体目のドラゴンゴーレムをバウマイスター男爵が撃破していなかったら、三人はこの世に居なかったであろうと認定。

報酬の大半は、バウマイスター男爵が受け取る権利があると。

彼に対して、勧告案を出したようです。

しかし、普通に報酬を分配したのに、多過ぎるからと分配金異議申し立てを受けて記録に残るとは。

やはりバウマイスター男爵は、数奇な星の元に生まれたのだと思います。

理由はともわれ、分配金異議申し立てを受けた冒険者はマイナスイメージが付き纏います。

多分、冒険者ギルド側も記録を残さない案も検討したのでしょうが、記録を残さないと三人は世間から二百億セントを得たと永遠に思われてしまうわけで。

仕方なく、記録に残したというところでしょうか？

今更バウマイスター男爵にそんな記録が付いたくらいで、評価に何の影響も無いでしょうし。

逆に、地下遺跡における戦闘詳報が世間に広まって、余計に評価が上がるのでしょうけど。

あの三人に、天文学的な額の大金やら、世間からの注目は厳しいのでしょうが。

バウマイスター男爵に限っては、今更なので除外しますが。

ここは、家臣と側室二人のために我慢して欲しいところですね。

あの三人は、選択を誤らなかったわけですから。

「ところで、エリーゼの嬢ちゃんは異議を申し立てなかったですな。いや、三人は相談すらしなかった？」

「それはですね。ブランターク」

確かに、この国の女性は立場が低いわけで。

そんな中で、イーナさんとルイーゼさんが大金を持つと、周囲の男の大人達が蠢動しそうで怖いのです。

ところが、エリーゼさんはホーエンハイム枢機卿の孫娘なわけでして。

彼女に対して、いらぬちょっかいを出して来るバカはまず存在しないでしょう。

それに、あのエリーゼさんの事ですから。

そんなお金など、バウマイスター男爵に預けて終わりかもしれません。

バウマイスター男爵とてバカではないのですから、ドラゴンゴーレム撃破時に、最後の最後で気絶してまで魔力を分け与えた彼女を蔑ろにするわけもないわけでして。

三人とは違って、そんな分配金異議申し立てをする必要が無いのですから。

「寄付金も出すでしょうしね」

「そんな物は、今回は形だけですよ」

そんな目先の寄付金よりも、彼らには新しい利権が発生するので寄付金など無くても気にもしないはず。

「まさか、坊主に金が集まっているのは？」

「はい、これ以上は口に出してはいけません」

簡単に、説明しますと。

安定はしているが、ここ最近は停滞している王国経済を陛下やルックナー財務卿はどうにかしたいと思っていた。

特に、次第に広がる王都郊外にあるスラム。

これは、下手をすると王国衰退の原因にもなりかねませんし。

陛下達がどうするか考えていた時に、古代竜を撃破するとんでもない魔法使いが現れた。

しかも、その実家は南部辺境の貴族家で。

更には、そこに隣接する開発可能な広大な未開地があった。

王国単独で開発しようとすると、それに伴う巨額の予算が必要なのですが。

失敗する可能性を考えると、ルックナー財務卿もそう簡単に予算の執行には踏み切れない。

何しろ彼には、弟という対抗勢力までいるのですから。

いえ、これは正確ではありませんね。
偉い人が何か新しい事を始めようとすると、そこに必ず対抗勢力が現れる。
例えそれが良策だとしても、反対する事で利益を得る連中の抵抗を受けるのです。

失敗の可能性は、彼らからすると大変に美味しい武器なわけですね。
成功して経済が良くなる方が多くの人を幸せにするのですが、彼らはそんな事に興味は無いわけです。

話を戻しますが、突如現れた竜殺しの英雄バウマイスター男爵は、その後もパルケニア草原において二匹目の竜を倒してその開放に貢献し。

今回は、極めて利用価値の高い物が大量に眠っていた古代地下遺跡の攻略に成功と。

王国は、自ら損をする事なくバウマイスター男爵に資金を集積させる事に成功したわけで。

こうなると、後はもうあの可能性しかないわけです。

「（広大な南端未開地の開発を、かの地をバウマイスター男爵の領主にして任せてしまう）」

幸いにして、開発資金は十分過ぎるほどにあるのですから。
しかも、もし失敗してもそれはバウマイスター男爵の財布で。
王家は、払った財貨以上の資産を得ているとか。

だから、あの連中は怖いんですよね。

「（となると、次は実家の扱いですか……）」

あそこは、私でも厄介だと感じる場所ですからね。

騎士爵領に相応しい規模への、領地の縮小。

現状で全く開発もしていないので、王国で怠慢を理由に取り上げる？

手続き的には、領地の分割命令にするつもりなのでしょうか？

何にせよ、あそこの領主がどう反応するか。

現当主は冷静なんですけど、あそこの跡取りは私にも理解不能なんですよね。

今までに顔すら見た事が無いので、余計に不安を覚えるのは当たり前でしょう。

噂によると、貴族としての出来もあまり宜しくないみたいですし。

「（分割命令だけだと、反発は必至。王国側で、中央に近い適当な領地に転封とか考えているのでしょうか？）」

唯一の懸念は、中央の王国政府と南部辺境との距離感ですかね？

王国からすれば、吹けば飛ぶような騎士爵家への配慮など、必要ないと感じている可能性もあるわけでして。

それでも、下手に怒らせて開発時にちょっかいでも出されると、近場にいる寄り親の私としては迷惑なんですよね。

「（うちの足を引っ張るために、わざと放置する可能性もあります

か）」

広大な規模の領地の、新規開発なわけです。
しかも、バウマイスター男爵が現状で持っているのはお金と少数の家臣のみ。
あの未開地の広さから考えて、最低でも伯爵領に。
私が居なければ、辺境伯領でも大身の部類に入る規模なのですから。

全く新しい伯爵家が、一から立ち上がるのです。
その手間から考えて、私に協力を頼まない可能性はゼロなわけでして。

手助けをすれば、そのお礼が必要となるのはこの世の条理なわけです。

この場合で言いますと、まずは伯爵家に相応しい家臣団に属する人材の斡旋。
どの貴族も、自分や家臣の縁戚で飼い殺しな連中にポストを与えたいわけです。

教会も、あの規模の領地なら幾つ教会が必要になるか。
全てに人を置くとなると、もうこれは一種の利権なわけですから。
エリーゼ嬢からの一時的な寄付金よりも、こっちの方が重要なのでしょう。
というか、その寄付金分で早く開発を進めろというのが本音でしょうね。

一つ村が出来れば、教会が一つ増えてその分だけ聖職者が必要と

なる。
あの規模の領地だと、かなり大きめの支部も必要なのでその幹部ポストも増えるはず。
そんな事は、子供にでもわかる道理ですから。
次に、開発で必要な人手の斡旋。
自分の領内の商会や領民達が、新規の商いや出稼ぎで仕事を得るチャンスなのです。
そして彼らが、稼いだ金を故郷に持ち帰って領内で消費する。
距離的に考えると、実は南部貴族達にその恩恵が大きいわけでして。
その私を含めた南部貴族達が得る利権を少しでも奪い取るために、あのコブのような実家への対処が適当になっている。
『相手は小身なのだから』、という理由にして。
「（一度、あの連中を突いてみますか。ちょうど、バウマイスター男爵にしか頼めない冒険者向けの依頼もありますしね）」
あまり考え過ぎても意味がありませんし、実は王国側も何か変化を待ってから動く可能性もあるわけでして。
私は、バウマイスター男爵に仕事を頼もうと考え、ブランタークと詳細な打ち合わせに入るのでした。
「また、付き添いですか？」
「今回は、そこまで危険じゃないですから」
「危険度で言えばそうですけど、面倒な交渉が……」

「交渉が面倒になるかは、相手次第ですよ」

「きっと、騒動になりますから」

それでも私は、ブライヒレーダー辺境伯として多くの領民達の生活を守る義務があるのです。

なので、心を鬼にして情況を動かす決断をするのでした。

「久しぶりに、戻って来た感じだな」

「俺は、先週に荷物を運んで」

「ヴェルはな」

突然の二年半にも及ぶ王都留学に、冒険者デビューにおいて初めての地下遺跡探索で死に掛けたりと。

色々と大人と政治が絡む案件を無事に解決し終えた俺達は、ようやくブライヒブルクにある自分の屋敷へと帰還していた。

実は、瞬間移動の魔法が使える関係でたまに戻ってはいたのだが、冒険者として必要な学習と訓練に忙しく。

休みもエリーゼとのデートなどがあったので、実質的に屋敷に居た時間はそれほどでもない。

せっかく設備も良い屋敷なので少々残念だったのだが、これでようやく自分の屋敷に腰を据える事が可能になっていた。

初仕事で厄介な地下遺跡の攻略を終えた俺達は、発見した物や施設に対する報酬を受け取ると、エーリッヒ兄さん達やブラント家の人々。

それに、アームストロング導師やワーレンさんなど。

王都でお世話になった人々に挨拶をしてから、瞬間移動の魔法でブライヒブルクに戻っていた。

実はその過程で、エル達三人が得た報酬の大半を俺に返すという事件が発生していた。

あまりに大金過ぎて、厄介の種になるからいらないのだそうだ。

しかもご丁寧に、冒険者ギルドの分配金異議申し立て制度まで利用してだ。

この制度を使わないと公式に記録が残らないので、次第に噂が広がって三人が大金を持っているという情報だけが広がってしまうからであろう。

更に、エリーゼも俺に得た大金の大半を預けてしまっている。

支払いは二十年分割とはいえ、また増えた白金貨ではなくて王国政府発行の『王国札』五枚は魔法の袋の中だ。

この王国札とは、魔道具の仕組みを利用して作られた木製の札で。

王城に持参して申請すると、そこに書かれた金額分の財貨と交換してくれるという物である。

昔で言うところの、藩札のような物かもしれない。

魔道具技術を使っているのは偽造対策だと思われるが、持っている人自体が稀少であり。
担当者が所有者の顔を簡単に覚えられるので、偽造事件は今まで一件も発生していないそうだ。
バレ易い王国札の偽造で、贋金造りは死刑という刑法に挑戦する人は存在しないのであろう。

銀貨・金貨などはたまに偽造事件が発生し、犯人が捕まって処刑されているようであったが。

当然、王国札は滅多に見られる物ではない。
白金貨で支払うのも困難な事例のみで渡される、滅多に流通しない物だからだ。

ちなみに、今回の王国札の額面は一枚十億セント。
なので俺は、一億セント以上の報酬を遠慮したエル達に自分が持っていた白金貨百枚を渡し、この王国札を受け取っていた。
エル達は、もう一つ報酬の桁が低くても問題はないと言ったのだが、さすがにそれだと報酬の分配比率が小さ過ぎてしまう。
なので、半ば強引に一億セントを渡していた。

『俺も、連れて行けよ。経費削減をお館様から言われているしな』

話しを戻すが、ブランタークさんからも一緒に連れて行くように頼まれたので、俺は彼も連れてブライヒブルクに戻る事となる。

俺の瞬間移動の魔法は、あれからいくら訓練しても自分を含めて六人までしか運べなかったが、今回はギリギリ一回の移動で済んでいた。

『今度から、王都に用事がある時には坊主に頼む事にするわ』

『俺が、冒険者の仕事で居ない時には？』

『一日・二日待っても早いからな。経費も節約できるし』

大変に便利なので、ブランタークさんとその親玉であるブライヒレーダー辺境伯には目を付けられてしまったようだ。

どうせ瞬間移動や通信の魔法が使える魔法使いは、在野にある人物でもその登録が義務付けられるので、まず隠す事は不可能になっている。

治安維持のためと、有事の際に徴集される可能性があるという事のようだ。

その徴集自体が、ここ二百年近くも無いにしても。

そんなわけで、俺はブランタークさんも連れてブライヒブルクへと戻り、すぐにブライヒレーダー辺境伯へと報告。

続けてその足で、冒険者ギルドブライヒブルク支部へと移転届けを出し、この数日間はブライヒブルクから一番近い魔物の領域で普通に魔物を狩っていた。

いきなり最初から王国強制依頼を受けさせられる冒険者など本来はあり得ず、普通はこのように地道に魔物を狩るものなのだ。

ギルドから指示された魔物の領域である森へと向かい、そこで次々と魔物を狩る。

熊に似た魔物に、狼に似た魔物、猪に似た魔物。

この手の魔物は、長生きした野生動物がなぜか領域に誘われ。

そこで突然変異を起こし、魔物へと変化するらしい。
その他の特徴としては、普通の野生動物の数倍もの大きさである事と、その体内に魔石を持っている事。
あとは、繁殖力と成長が尋常では無くなるのと、肉や骨や毛皮や牙などの素材が高く売れる事であろうか。

ただ、通常の数倍の大きさの熊など、普通の人間にどうにか出来る物でもない。
下手をすると、腕の一振りで即死してしまう。

そういう危険性を含めての、高額の報酬を得られる冒険者稼業でもあったのだ。

「何か、エルとイーナが張り切ってる」

「デビュー戦で、あまりに常識外れだったからだと……」

確かにエリーゼの言う通りで、地下遺跡探索ではエルもイーナも極限状態を経験している。
二体目のドラゴンゴーレム戦でも、俺とブランタークさんが長時間魔法で戦っている間、迫り来るゴーレム達の相手で奔走していた。

役に立たないよりはマシなのであろうが、デビュー戦でいきなりアレは無いと思うわけで。

間違いなく、普通の冒険者稼業なので張り切っているのであろう。

ルイーゼはいつもあんな感じなので変化は無かったし、エリーゼは回復役なので誰かが怪我をしないと出番が無かった。

食事当番以外では。

「さて、もう結構狩ったから帰るか」

森に入った直後からエルとイーナは最前線で魔物を狩り続けていて、ルイーゼはその補佐を。

俺とエリーゼは、後方の魔法障壁の中で万が一の時に備えて待機していたが、もう数は十分に狩ったはずだ。

俺はそう判断して、撤収をみんなに薦めていた。

「そうだね。もう十分に狩ったみたいだし」

「あの、ルイーゼさんは狩りをしなくても良いのですか？」

「あの二人に譲って補佐に入っているけど、全然出番が無いね」

この数日、エルとイーナは自分達が中心となって結構な数の獲物を狩っていた。

これだけ狩れば十分に満足したであろうし、良い経験にもなったであろう。

別に、俺達が手を抜いたり、気を抜いているわけではないのだ。

「他所の無責任な外野が、エル達に文句タラタラなんだよね」

どの世界でも、恐ろしきは他人の嫉妬という奴であった。

竜を退治した俺に対しても、『餓鬼が運に恵まれた』と噂する貴族や魔法使いがいるし。

ルイーゼに対しても、『未熟な餓鬼』と批判する魔闘流を習って

いる連中が存在する。

さすがに聖女扱いされていたエリーゼに対する悪評は出ていなかったが、エルとイーナには更に厳しい悪口を言う連中がいたのだ。

『運良く、バウマイスター男爵に付いていただけの癖に』

地下遺跡探索で多額の報酬を得てしまった件で、余計に言われるようになってしまったらしい。

普通の地下遺跡探索で、あれほどの報酬を得られたのは奇跡という他はない。

見付かった物が貴重であったので、王国が独占するために高く買い取ったという点も大きかった。

大半を辞退して俺に押し付けた事実が判明しても、その額は一人白金貨百枚なので、日本円にしておよそ百億円。

普通の冒険者が一生努力しても得られない大金であったので、余計に非難が集まってしまったのだ。

俺の方にも、『あんな若造や小娘よりも、俺達の方が使えますぜ』とか抜かす、変な連中が沸いて難儀したりもしていたし。

ルイーゼに関しては、あのアームストロング導師の弟子という時点で表立って非難する連中は存在しなかった。

あの導師に、正々堂々と喧嘩を売る人は居ないらしい。

俺でも、そんな無謀な事はしないのだから当然とも言えた。

「あれだけの成果を挙げたパーティーに居て、報酬の大半を辞退し

たのにですか？」

「それでも、一億セントだからね。文句を言いたい人も多いんでしょう」

エリーゼは納得いかないようであったが、一部でもとんでもない金額だからなのだ。

特にあの中でも、魔導飛行船の価値は大きい。

現在稼動に成功した新しい魔導飛行船は、増便や目的地の増加などを行い、王国内で旅客船として利用され始めていた。

運賃で維持費や船員の給料を賄い、修理や運用技術などの習得も行える。

普段は王国内の流通に貢献し、戦時には有力な遊撃戦力や兵站維持などにも役に立つ。

ヘルムート王国では、俺達が王都に行く前までは予備も含めて八隻が稼動状態にあった。

それが、アンデット古代竜から出た超巨大魔石が手に入り、今までは究極の場所塞ぎであった超巨大魔導飛行船の就役に成功。

この船は、俺達が住まう大陸であるリンガイアの名を付けられ、現在は軍で訓練が進んでいる。

続けて、グレートグラントから出た魔石でもう一隻が就役可能となり、この船は既に既存の航路を飛行していた。

そして今度は、地下遺跡から出た使用可能な七隻に、ドラゴンゴーレム二体から出た魔晶石に、地下遺跡の動力源であった二つと合

わせてもう四隻が稼動可能になったそうだ。

つまり、俺達のおかげで王国は稼動可能な魔導飛行船が倍以上の二十隻になり、更に軍でも一隻の超巨大魔導飛行船の戦力化が進んでいる。

北方のアーカート神聖帝国に対して軍事的にかなり優位に立てたはずで、それだけの報酬を貰う権利があるという事なのだ。

エルやイーナを非難する連中からすれば、その運の良さが気入らないのであろうが。

「そうだな。そろそろ帰るか」

エルも、もう十分だと思ったらしい。

剣を布で拭いながら俺達に声をかける。

「良い切れ味の剣のようだな」

「そりゃあ、大金を得たんだ。良い得物を買うさ」

エルは、獲得した報酬で良い剣を購入したようだ。

というか、エルは暇さえあれば武器屋で剣を眺めているし、予備も含めて十本近い剣を所持している。

何でも、子供の頃は兄達が使い古したボロボロの剣しか使えなかったので、つい新しい良い剣が欲しくなってしまうそうだ。

「俺には、剣の良さが良くわからん。鑑定の魔法を使わないと」

「お前、一応は騎士の家の子じゃないか」

剣にまるで無頓着な俺に、エルが笑いながら半分冗談で文句を言う。

確かに十二歳くらいまでは、一応朝に一時間ほどの基礎訓練は欠かさずしてはいた。

だが、まるで才能が無いので、今では魔法と弓に完全にシフトしてしまっていたのだ。

「一応な。子供でも生まれたら、良い家庭教師を雇って教えさせるさ」

俺も一応は、男爵という身分にある。

遺伝的に魔法の才能が子に伝わるのが奇跡のような確率である以上、子供には普通の貴族教育をしなければいけないと思っていたのだ。

「そういうのは、俺が教えるから」

「そういえば、エルは俺の家臣だったよな」

まるで実績が無いので無給で名目だけであったが、エル達は俺の家臣という事になっていた。

「でもさ。せっかく大金を得たんだから、領地でも開拓したら？」

王国において、金で爵位を買う行為は忌避されている。

人様に売るのであれば、その前に継承可能な者に譲るか、養子を取るか、王国に返上するのが筋だからだ。

その養子も、成り上がりの商人などが爵位を金で買うのを防ぐため、養子になれる血筋などの条件が厳しくなっている。

エーリッヒ兄さんの場合は、兄さんが貴族の子供だったので比較的簡単に認められたに過ぎない。

いきなり商人などが婿養子に入ろうとすれば、すぐにお上から不許可という判定が下ってしまうからだ。

あとは、自分で無人の地を開墾してそこを領地に認めて貰うという手もある。

王国に貢献しているので、これは血筋など関係なく誰でも貴族にはなれるが、無人の地を一から開発して行くのだ。

当然、並大抵の努力では成功は覚束なかった。

単に腕っ節が強かったり、魔法が得意だったり、金があれば良いという物ではないのだ。

多くの人を効率良く使っていく手腕。

それが無ければ、ただ単に金を無駄にしてしまう。

大金をかけて領有を認められても、その資金回収に何十年規模でかかり、その間は手弁当で手持ちの資金ばかり減っていく事も多い。

開発資金回収に焦って住民に重税をかけ、まだ土地に愛着がない彼らに逃げられて領地を駄目にしてしまう領主なども意外と多いそうだ。

当然、それが王国にバレれば、その領主は統治能力無しとして爵位と領地を没収されてしまう。

つまり、かけたお金が無駄になってしまうのだ。

王国は、無制限に貴族を増やさないために厳しいルールを定めて

いる。
大分、既得権益に配慮したルールと言えなくもないが、ルールを定めるのが貴族なので、それは仕方のない事なのかもしれない。
それに、領地開発に成功して貴族になっている人も実在するのだから。

「成功も覚束ない領地開発で金を使いたくない。現金で残せば、相続する子孫も自由に使えるし」

王国では相続税が存在しないので、現金や貴金属、家や収穫可能な田畑などで持っていた方が有利なのだ。

金が社会に出回り難いかもしれないのだが、その金を回すのが金持ちの放蕩息子の役割になっているので、この世界ではそれでバランスが取れていた。

「だよなぁ。領地運営には手間がかかるし」

「有能で信頼できる代官でも見付ければ別だけど」

狩った獲物を魔法の袋に仕舞いながら、俺とエルは共に領地運営には手を出さない方針で意見の一致を見ていた。

ただ、俺を取り巻く環境は、次第に厳しさを増しているようにも感じていたが。

「しかし、今日は大猟で良かった」

獲物を仕舞う魔法の袋であったが、これは俺が別に幾つか製作し

ていた。
基本的に才能が必要な魔道具だが、魔法の袋は比較的簡単に作れる。
『魔法使い専用』という条件はあったが。
一般人程度の魔力量では汎用品しか使えないが、その汎用品は俺には全く手が出ないほど製作するのが難しい。
だが、ルイーゼやエリーゼくらい魔力がある人が使うなら、俺にでも簡単に作れるのだ。
「魔物だから、普通の動物のお肉よりも高く売れますしね」
「現状で、俺達にさほど金は必要ないけどな」
それでも、無くて首が回らないよりはマシと考え、エリーゼが持っている魔法の袋に獲物を回収してから、俺達はブライヒブルクへの帰途に着く。
瞬間移動魔法で、一気にブライヒブルクのギルド裏庭まで飛び、受付で獲物を納めてから商業街へと向かう。
今日はみんなで仕事をしたので、夕食はレストランで済ます事にしたのだ。
いつもは、なるべく女性陣が作ろうとするのだが、彼女達も俺達と同じ条件で冒険者として働いているのだ。
家事で、余計な負担をかけるべきではない。
俺もエルも、そのように考えていた。

「結構、魔物との戦闘にも慣れたと思うけど」

「そうね」

元々エルもイーナも、他のパーティーに居ればすぐに超一流の強さを持つ冒険者として認識される存在だ。

もう魔物の領域の入り口近くで、戦闘に慣れるための狩りは必要ないはずだ。

「もう少し奥で戦うとか？」

「でも、そんなに魔物の種類は変わらないと思うけど」

よほど奥に入らないと魔物の種類などそう変わる物でもないし、どちらかと言うと場所や地域差の方が大きいからだ。

あとは、属性竜などのその領域のボスにして食物連鎖のトップが魔物を纏めているのは常識であったが、その存在が発見される事は滅多にない。

そう簡単に見付かって討伐されていれば、とっくに魔物の領域など全滅しているはずだからだ。

「冒険者稼業なんて、大半がこれだしな」

今さら近場で、そう新しい遺跡や迷宮など見付からないのが普通だ。

見付けたければ遠出をしないといけないし、見付かってもそんな遠方に探索に出かけるには実力が無いと難しい。

人里離れているので、野営や戦闘の機会が増えるので素人には難

しいからだ。

「よう、坊主達じゃねえか」

いきなり後ろから声をかけられたので振り返ると、そこにはえらく笑顔のブランタークさんが立っていた。

昔は凄腕の冒険者として、今はブライヒレーダー辺境伯のお抱え魔法使いとして。

後者はえらく苦労しているようであったが、今の笑顔を見るとただ嫌な予感しかしない。

多分、ブライヒレーダー辺境伯の依頼で俺達を待っていたのであろう。

「夕食なら、ブライヒレーダー辺境伯邸でご馳走するってよ」

「嫌な予感しかしませんけど」

「そう言うなよ。うちのお館様は、坊主の寄り親じゃねえか」

「ブランタークさん、本当にそう思ってます？」

「……」

顔を引き攣らせるブランタークさんを見ながら、俺達は心の底から宮仕えって大変だよなと思ってしまうのであった。

「まだ日は浅いですけど、君達の評判は上々ですね。私も、寄り親として誇りに思いますよ」

ブランタークさんによって半ば強引にブライヒレーダー辺境伯邸に案内された俺達は、そこで贅を尽くした料理を振舞われていた。

ブライヒレーダー辺境伯は、俺の婚約者であるエリーゼにもご機嫌で料理を勧めている。

内心では色々と思う所もあるのであろうが、下手に教会のお偉いさんの孫娘を敵に回すわけにもいかないのであろう。

少なくとも、無下に扱うという事は無いようだ。

ニコニコしながら、彼女にも料理を勧めていた。

「竜に、ゴーレムに、色々な魔物にと。苦戦している様子はないようですね」

「今の所は……」

いや、実際には大苦戦している。

というか、死に掛けたほどだ。

あんな極物は、もう二度と出ないで欲しいと思う俺達であった。

「竜を倒せるのなら、他の魔物もほぼ大丈夫かな？」

「条件によります」

本当に、条件によるのだ。

非業の死を遂げた師匠だって、その気になれば竜に遅れを取る事などない。

倒せなくても、倒される前に逃げるくらいは余裕で出来たはずなのだから。

それでも、主君や味方の軍勢を守りながらの、魔物の群れによる数の暴力には抗えなかった。

自分一人なら逃げ出せたであろうが、雇い主とその軍勢を置いていけなかったのであろう。

それよりも未熟な俺なので、条件によっては師匠よりも呆気なく死んでしまう可能性があったのだ。

「そうですね。条件によりますよね。ただ、君に一つお願いしたい事がありまして……」

そのブライヒレーダー辺境伯のお願いとは、わざわざここに呼び出した事からも考えて、間違いなくギルドを通さない依頼であろう。

本当であればギルドからは嫌がられるのだが、ブライヒレーダー辺境伯はブライヒブルクの統治者であるので、多分ギルドとはもう相談が済んでいる可能性が高かった。

「それで、どのような依頼で?」

この場合、断るという選択肢はあり得なかった。

駄目なら撤退して、失敗と報告した方がマシなはずだ。

何しろ、この依頼はギルドを通していないので、失敗しても経歴に傷が付かないのだから。

「ある種の討伐依頼ですね」

「ある種のですか？」

「我が父の後始末ですよ」

その一言だけで、俺は全てを察していた。

ブライヒレーダー辺境伯の依頼とは、先代ブライヒレーダー辺境伯の我が侭から始まり、俺の師匠と実家も巻き込んだあの無謀な魔の森への遠征の後始末であろう。

「二千人近くの人間が死んで、魔物の領域に残されたのです。これの後始末が必要となります」

正確に言うと、ほぼ間違いなくアンデット化しているであろう、彼らの浄化が主な依頼となるはずだ。

師匠のように強い自我を持ったまま、語り死人になる例は非常に少ない。

大半は、ゾンビからグール、スケルトンやレイスなど順に次々と進化していく。

悪霊化した魂が数百個も纏まって集合体になったら、もう俺やエリーゼクラスの聖魔法でないと浄化は困難になる。

集合体にならなくとも、数が多いので浄化は非常に困難なはずだ。

そもそも、魔の森の場所が問題だ。

ここから南の山脈を越えたバウマイスター騎士爵領から、更に広大な未開地を南に数百キロ。

南東の果てにある、魔の森なのだから。

「君は、瞬間移動で魔の森に行けますよね？」

「ええ、まあ……」

普通の冒険者なら、魔の森へ行くだけで骨だ。

ところが俺は子供の頃からの探索で、瞬間移動の魔法で自由に魔の森の入り口までは行ける。

その辺の事情が、既にブライヒレーダー辺境伯にも知られているのであろう。

「ええと……。でも、勝手にバウマイスター騎士爵領内にある魔の森の探索は……」

「大丈夫です。あなたのお父上は、寄り親の頼みは断りませんから」

確かに、あの超保守的で領地の保全しか考えていない父が、寄り親であるブライヒレーダー辺境伯の頼みを断るはずがないからだ。

それに今回のケースでは、俺達だけで魔の森に行くわけで、父達に援軍を求めているわけでもない。

許可だけ出せば良いので、そう面倒な事にはならないはずだと。

「もし数百年後くらいに、あの森に冒険者が入るようになったとして。共食いで強化されたアンデットが侵入者を襲い、その原因がうちだと知れると評判が落ちますし」

「（大物貴族の面子って、面倒だな。これで、断る望みが消えたか。しかし、最低でもアンデットが二千って……）」

まあ、駄目なら逃げれば良いかと考えながら、俺はせめてもの仕

返しに出された料理のお替りを始めるのであった。

第四十六話　久々の帰郷。

「ほら、瞬間移動だ。坊主」

「ブランタークさん、また付き合わされるんですね」

「言うなよ……」

本当に極秘なのかは怪しいどころだが、俺達『ドラゴンバスターズ』の面々は、ブライヒレーダー辺境伯から半ば強制的に依頼を受ける羽目になっていた。

依頼の内容は、先代ブライヒレーダー辺境伯が我が実家バウマイスター騎士爵家をも巻き込んで多くの人間を犠牲にした、リンガイア大陸最南東部にある魔の森遠征という愚行。

その無謀な遠征で二千人近くの死者を出していたが、魔の森に残された二千体もの遺体がアンデッドへと化し、そのまま数百年もの月日が流れてしまったら。

アンデッドは、発生してから長い年月が経てば経つほど、その未練・悲しみ・怨念などが増幅されて厄介な存在になっていく。

あの王都に多数あった瑕疵物件を見れば、誰にでも理解できる事だ。

リンガイア大陸において、もっとも南東部に領地があるバウマイスター家の可住地域から未開発地を数百キロも挟んでいる関係で、

もし次に魔の森に人が入るとすれば最低でも数百年はかかるはずだ。

もしその間に、アンデッドがまるで蟲毒のようにその怨念を募らせて強力化してしまえば。

魔の森のアンデッドによって冒険者に犠牲者が多数出れば、当然その履歴が調べられ、その原因であるブライヒレーダー辺境伯家が悪評を得るはずだ。

『その数百年後に、ブライヒレーダー辺境伯家があるのか？』と言われると確信は持てないのだが、現時点でブライヒレーダー辺境伯家は千二百年間の歴史があるらしいので、続く可能性はかなり高いはず。

まだ見ぬ子孫のために、魔の森で彷徨う元遠征軍兵士が材料になっているアンデッドを、まださほど強力ではない内に成仏させる。

そのために、俺達が現地へと赴く事になっていた。

こういう大貴族家の恥部に関する依頼を受けている点からも、どうやら俺達は、ブライヒレーダー辺境伯からそれなりに頼りにされているようだ。

報酬も、口止め料を含めているので結構な額になっていた。

「でもさ、この少人数で大丈夫なのかな？」

「大丈夫だ」

エルの疑念に、ブランタークさんが即答する。

多くの魔物が住まう領域に、少人数の冒険者パーティーで挑む理

由は前に話した通りだ。
あまり大勢で押しかけると、それに呼応して魔物が大群で現れてしまうからだ。

昔の遠征軍の失敗は、ただその一点にあった。
他にもあるが、それは今は言わないでおく事にしよう。

「少数で侵入すれば、向こうもそれなりの数しか出ないんだよ」

「それは、ここの所の討伐で経験済みだけどさ。でも、それだと二千体ものアンデッドは倒せないだろうに」

「大丈夫だよ。そのための、エリーゼの嬢ちゃんと坊主だ」

もういい加減成人したので『坊主』は止めて欲しいのだが、ブランタークさんにその気は無いらしい。
彼からすれば、俺は弟子の弟子である。
感覚的に坊主扱いなのは仕方ないのかもしれないし、普段公の席では男爵である俺に無礼な口を利くわけでもない。

さすがに、その辺は弁えているからだ。

「ヴェルと、エリーゼが？」

「ああ、そうだ。一気に油虫を退治するようにな」

彼が考えた今回の作戦は、チマチマと一匹ずつ倒すのではなく、集まってくるアンデッドを一気に殲滅させるつもりのようだ。

「坊主は、広域拡散魔法は出来るよな？」

「ええ、師匠に教わりました」

広域拡散魔法とは、簡単に言えば広範囲に魔法の効果を広げる魔法の事だ。

魔法の効果を広範囲に広げるので、当然大量の魔力を使い、その対象も適切な魔法でないと使った意味がない。

それに、属性の相性も関係する。

火属性なら広範囲に火が広がるので、これで広範囲の魔物を焼き殺す事も可能だ。

たまに、自分が広げた魔法のせいで火に囲まれ、そのまま焼け死んでしまう人もいるらしいが。

風系統の竜巻なども同様で、逆にあまり意味が無いのは、土や水系統の魔法であろうか？

ただ全てに意味が無いわけでもなく、土系統では土木魔法などであろうか？

元から広域に作用する魔法なので、広域拡散をする意味がないという事実は存在していたのだが。

水系統だと、治癒魔法の広域拡散であろう。

過去に戦争があった時代、負傷者を集めて一気に治癒するのに便利であったようだ。

魔力の関係で軽傷者を治すのが限界であったらしいが、それでも、そこまでの魔法を使える人は滅多にいなかったらしい。

大変に頼りにされていたと、過去に本で見た事があった。

「坊主の広域拡散魔法は、他人の魔法にも使えるよな？」

「ええ」

「じゃあ、意外と楽な仕事になるな」

ブランタークさんが、作戦を説明する。

まずは、エリーゼが聖属性の浄化の魔法を使い、それを俺が広域拡散魔法で魔の森中に広げる。

途中でエリーゼの魔力が尽きたら、ブランタークさんが彼しか使えない魔力補充を行う。

エルとイーナとルイーゼは、俺達に他の魔物が近付かないよう、その排除が主な任務だ。

「それで、ブランタークさんは助っ人なんですね」

「さすがに、この人数だからな。少数精鋭が基本となるし、助っ人には、相応の実力と口の堅さが求められるわけだ」

殲滅に成功すれば何の問題も無いのだが、失敗する可能性も考慮して、助っ人にはブライヒレーダー辺境伯に仕えるブランタークさんが選ばれたのであろう。

「では、さっさと行きますか」

「いや、待て」

六歳になってから十二歳になるまで。

俺は、バウマイスター家の領地にはなっているが、まるで手が出

せていない未開発地への探索を魔法の鍛錬も兼ねて進めていた。
そのおかげで、魔の森の中には入っていないが、ほぼ全域に渡って自由に移動可能であったのだ。

なので、さっさと移動して依頼を済ませてしまおうとした俺であったが、それをなぜかブランタークさんが止めていた。

「えっ、どうしてです？」

「先に行かないといけない場所があるだろうが」

「行かないといけない場所ですか？」

「あの魔の森は、一応はバウマイスター騎士爵領内にあるからな。領主に挨拶に行くのは普通だ」

「いや、それはそうなんですけどね……」

当然気が付いてはいたが、正直気が進まなかった。
というか、こちらはブライヒレーダー辺境伯家の恥を処理しに行くのだから、せめて向こうが先に挨拶を済ませてくれれば良いのにと思ってしまうのだ。

「はあ……」

「我慢してくれ」

いくら調査隊すら入れず、あそこに入った事がある人間が俺と魔の森への遠征隊だけである未開地でも、書類上はバウマイスター家の物になっている。

なので、挨拶に行って許可を取り、獲物の分け前を交渉する必要があるのだ。

ブライヒブルクのように、そこに冒険者ギルドの支部があれば必要ない。

冒険者登録さえしていれば、あとはギルドが交渉して税金まで払ってくれるからだ。

だが、バウマイスター領と未開地には冒険者ギルドが存在しない。

なので、領主と直接交渉を行い。

例えば今回であると、アンデッド浄化の過程で得た兵士達の遺品や遠征軍の遺留物に、襲い掛かってきた魔物から得た素材や、魔の森で採集した薬草などと。

得た物全てから、どのくらいのアガリを収めるのか？

支払いは、現物支給なのか？

ブライヒブルクで売却後に、一定額を現金で納めるのか？

など、細かく交渉する必要があったのだ。

「（何となく、今更な気もするけど……）」

子供の頃、散々魔法の修行を兼ねて未開地で収奪に勤しんでいた俺が言うのもおかしな話だが、それとこれでは話が違う。

というか、ここが俺が悪党な部分だ。

俺が未開地で勝手に鉱物や獲物の素材などを収奪していても、うちの実家は俺を罰する事など出来ないからだ。

なぜから、窃盗事件の証明には証拠が必要となる。
調査隊を入れて、どこに何がどのくらいあるか把握していないうちの実家に、俺の犯罪を証明する能力が無いのだ。

自分のサイフに幾ら入っているのかも知らない人が、金を盗まれたと騒いでも、警察から相手にして貰えないのと同じ理屈であった。

「……」

「あの、ヴェンデリン様？」

「気持ちはわかるけどな。エリーゼ、少し放っといてやりなよ」

エルも、俺と同じく実家との関係が微妙なので理解してくれたようだ。
いくら仕事のためとはいえ、既に捨てたはずの実家に挨拶に行かなければならず、俺は少し憂鬱な気持ちになってしまうのであった。

「はあ……」

「何だよ。そんなに嫌なのか？」

瞬間移動で、俺は久しぶりにバウマイスター家の屋敷の前に立っていた。
正直、場所なんて忘れて移動できなければ良いと思ったのだが、なまじちゃんと修練をしていたせいで、数年ぶりにも関わらず瞬間移動の魔法は普通に成功していたのだ。

俺とエルは、ほぼ同じ立場にはある。
騎士爵家の相続など不可能な味噌っかすで、己で冒険者として身を立てて独立している身分だ。
エルは成人になったのと同時に、実家の相続権を放棄している。
思わぬ幸運で大金を得ていたが、もうそれは別の家の話なので、エルの実家が意地汚く援助など求める事は無いはず。

あの地獄の地下迷宮攻略から一ヶ月ほどなので、情報伝達速度の関係でこの先どうなるかわからないと、エルも心配そうにしていたのだが。

翻って、俺の場合はどうであろうか？
以前に名主のクラウスから、俺こそが次期領主に相応しいなどと言うとんでもない爆弾を放り投げられたので、俺は早々に相続権の放棄をしている。

というか、陛下から新しい爵位を貰った時点で放棄は確定していた。
その時に、急ぎ事務的な手続きをお役所に頼んだだけとも言える。

なお、その時に父も兄も何も言わなかったそうだ。
そうだなどと言うのは、手紙で全て済ませていたので実際に顔を合わせていないからだ。

何しろ俺には、バウマイスター家や両親兄弟への執着とか愛情などはあまりない。
当時六歳のヴェンデリンに転生していて、それ以前の記憶が夢で見た知識であった事と、その後もあまり接触が無いというか明らかに放置されていたからだ。

別に、虐待とかはされていない。
家の手伝いなどもしなくても良く、ただ勉学や魔法の修練に時間を費やし、その成果として多少の獲物を飯代として出す。
有り体に言えば、その程度の関係にしか周囲にも見えなかったであろう。

俺が魔法が使えると知ってからは、余計にその傾向はあったと思う。

最南端の辺境貧乏騎士爵家にとって必要なのは、一族と領民達によるある種の閉鎖的な協調関係であり、その関係に俺の魔法は邪魔でしかなく。

なので、なるべく早く独立して欲しいというのが本音であったのだから。

「今さら、挨拶ってのもなぁ……」

「あの、私は義父様と義母様にご挨拶をしたいですし」

「私もよ」

「ボクも、奥さんその3で」

婚約者なので三人が挨拶をしたいのは良くわかるのだが、それだけで兄クルトなどに、完全な嫌味だと思われそうな展開である。

妾がいる父とは違って、兄クルトにはアマーリエ義姉さんしか奥

さんがいないのだから。
男の嫉妬というか、奥さんの数は経済力のバロメーターなので、お前は貧乏だと相手に宣言しているに等しく。
実際に、それが原因で刃傷沙汰になった貴族もいると聞いている。
だから、挨拶になど行きたくないのだ。

「表向きは、坊主とアルトゥル殿は同じお館様の寄り子だからな」

血の繋がりでは永遠に親子なのであろうが、公の立場としては共にブライヒレーダー辺境伯の寄り子同士でもある。
しかも一応は、貴族同士は同じ陛下の家臣という建て前が存在しているので同じ立場にある事になっている。
だが実際には、公爵と騎士爵が同じ立場のわけがない。

領地の広さや経済力にも差があるので、大抵は公爵の方が偉ぶっているのが普通だ。
そして俺は男爵であり、父は騎士爵でしかない。
経済力も、言うまでもないであろう。

気分的に、こんなにやり難いのは初めてだ。
前世で中年の課長が、『今度、一度定年退職した部長が再雇用で部下になるんだけど、どうしようか？』と思い悩んでいたのを思い出してしまう。

「面倒くさいなぁ……」

そして現在、親が騎士爵で子が男爵という奇妙な逆転現象が発生している家が存在している。

勿論、俺自身の事なのだが。

「仕事なんだから、諦めろや」

「わかりましたよ」

ブランタークさんに言われたので、俺は屋敷のドアをノックする。

一応は貴族なので屋敷と呼んではいるが、相変わらずバウマイスター家は零細貴族なようで、その大きさは豪農の家に毛が生えた程度のレベルでしかなかった。

「はい、どちら様で？」

約三年ぶりの実家であったが、ドアを開けて出て来たメイドに変化は無かった。

メイドとは呼んではいるが、近所の農家から手伝いに来ているただの老婆なので、三年くらいではそう年を取ったように見えなかったのだ。

ちなみに、メイド服すら着ていない。

七十歳超えの老婆なので、あまりメイド服姿を見たいとも思わなかったのだが。

「これは、ヴェンデリン様！」

「やあ、ヘレナ。久しぶりだね」

思えば俺は、家族などよりも使用人達との会話の方が多い子供で

あった。
魔法の鍛錬の成果で得た獲物を渡しながら、普通に世間話くらいはしていたのだから。

「この前に来た商隊の方々が、ヴェンデリン様の噂をしておりました」

アンデッドになった古代竜に、王国近辺の魔物の住まう領域をを縄張りにしていた老属性竜を討ち、それによって多くの褒賞と爵位を得た事に、教会の実力者であるホーエンハイム枢機卿の孫娘と婚約した事など。

王都滞在中の、武芸大会や決闘騒ぎまでヘレナは知っていた。

さすがは、商人とでも言うべきであろうか？
かなり正確に、情報を南部辺境にまで持ち込んでいたのだから。

「おい、ヘレナさんや……。おおっ！　ヴェンデリン様！」

狭い屋敷ではあるし、仕えている者の大半は既に農作業はリタイアしている老人達でしかなく、俺が戻った情報はすぐに他の使用人達にも伝わっていた。

続けて、執事のロブスも顔を出す。
当然執事服など着ていない普通の老人で、彼も農作業をリタイアした七十歳超えの老人である。
ここでは、ある程度読み書き計算が出来て父の補佐が出来れば、あまり高度な専門性など求められないので勤まってしまうのだ。

「大きくなられましたな。ヴェンデリン様」

「ロブスも元気そうだね」

「いつ、お迎えが来るかわかりませんけどな。ところで、魔法使いとして大きな功績を挙げられたとかで。ヴェンデリン様は、我らの誇りであります」

家を出るまでは世話になっていたので、俺はなるべく彼らとは笑顔で接していた。

いや、こういう言い方をすると俺が彼らを鬱陶しいと思っているように感じてしまうかもしれないが、寧ろ逆だ。

彼らがこれからも安定した生活を送れるように、俺を褒めるのを止めて欲しいと思っていた。

父はとにかく、兄クルトの事を考えるとそう思ってしまうのだ。

「聞けば、綺麗な婚約者様もいらっしゃるとかで」

「さすがは、王都やブライヒブルクのお嬢様達ですね。お綺麗な方ばかりだ」

「お子が生まれるのが楽しみですねぇ」

ロブスも、ヘレナも、他の使用人達も。

エリーゼ、イーナ、ルイーゼを見て、目を細めながら喜んでいた。

あまりに喜んでいるので、俺はもう他の家の当主なんですとは言えない空気になってしまったほどだ。

「とにかくめでたい」

「ヴェンデリン様がお戻りならば、このバウマイスター家も安泰ですな」

しかも、話が妙な方向に進んでいってしまう。

どうやら彼らは、俺が王都での功績を掲げて故郷に凱旋して来たと思っているようなのだ。

このバウマイスター家の家臣か、もしかすると当主として。

「ヴェンデリン様が、未開地の開発にお入りになられれば」

「ここも、豊かになりますとも」

更に、話がヤバい方向に進んでいく。

以前に、俺にこのバウマイスター家を継いで欲しいと懇願して来た名主のクラウス。

この問題は、俺が法衣貴族として別家を立てた時点で終わっている。

ところが今度は、名目上はバウマイスター家の領地になっていても、まるで手が出せない未開地の開発に俺が当たればという結論に至ったらしい。

どうせ持て余している土地なので、それを分与なり売却してしまえば良いのだと。

一体、領民達に誰が入れ知恵をとも思わないでもないが、このくらいの考えなら誰にでも思い付くはず。

うちの父や兄クルトからすれば、物凄く不愉快な話なのであろうが。

「（この話題は不味いだろうに……）いや、俺は冒険者として依頼

で来ているんだ。父上を呼んで欲しい」

「お館様をですか？　少々お待ちください」

話を切り上げてから父を呼んで貰うのだが、奥から現れた父は前よりも頭に白髪が増えている状態であった。

確か、今は五十五歳くらいであったはず。

この世界ではまだ現役の人も多いが、そろそろ老後の事も考えなければいけない微妙な年頃になっていた。

「久しぶりだな」

「お久しぶりです」

三年ぶりに会ったのだが、正直何を話して良いのかわからない。

それは向こうも同じようで、二人の会話はそれだけで終わってしまっていた。

「失礼、バウマイスター卿。本日は、ブライヒレーダー辺境伯様からの要請をお聞きして欲しく参上しました」

「要請か……」

あくまでもブライヒレーダー辺境伯からの使いであるという態度を崩さないブランタークさんに、父は俺と交互に視線を送りながら渋い顔をしていた。

父から言わせると、今世の俺が生まれた頃くらいから、バウマイスター家は寄り親であるブライヒレーダー辺境伯によって碌な目に遭わされていない。

いくら先代の罪とはいえ、そう簡単に割り切れる物はないのであろう。

「父上っ。……っ！　ヴェンデリン！　何で生きている！」

「はあ？」

「控えよ、クルト！　バウマイスター男爵殿である」

続けて室内に入って来た長男クルトは、俺を見て大変に驚いているようであった。

しかし、『何で生きている！』は正直ないと思うのだが。

「兄上、どういう事なのです？」

「いや、それがだな……」

何か、情報の齟齬が発生しているらしい。

明らかに慌てている兄クルトに代わって、父が説明を始める。

「中央から、ある噂が流れてきてな。バウマイスター男爵達が、地下遺跡探索で命を落としたかもしれないという物だ」

間違いなく、情報元はルックナー弟であろう。

俺達が、初めての依頼で地下迷宮に入ってから一ヶ月と少しほど。

この僻地に、瞬間移動の魔法以外で情報を流すとなると、商隊では片道でも一ヶ月半はかかる。

だが、もし腕の良い冒険者などが、己の身一つで山道を急ぎ情報

を伝えたとなると、もう少し速度は上がるはずで。

ギリギリ、俺が死んだかもしれないという噂は得られているはずであった。

その後の、実は生きていてとんでもない大金を押し付けられた事実は伝わっていないようであったが。

「それは、いつ届いたのですか？」

「昨日だ」

また、えらくタイミングが悪い。

それと俺は、今度は明らかに残念そうな表情をしているクルトを見て悟ってしまう。

この兄は、俺の死を望んでいたのであろうと。

多分財産目当てなのであろうが、どうせ俺が死んでもクルトの係累には一セントも入って来ない。

そういう遺言にしているからだ。

彼の態度を見るに、教えてあげる義理もないのだが。

「（嫌な現実を見たな……）」

このまま一生顔を合わせなければ、知らずに済んだ事を知ってしまう。

正直、ブライヒレーダー辺境伯を恨んでしまいそうになる俺であった。

「（坊主、すまん……）」

そして、そんな俺の気持ちに気が付いてか。
ブランタークさんは、俺に申し訳なさそうな表情を向けていた。

「とりあえず、中にどうぞ。ブライヒレーダー辺境伯殿からのお話も聞かないといけませんしな」

俺があからさまに嫌そうな顔をしたのに気が付いた父は、まずはその話は棚上げにし、本来の交渉を行おうと俺達を屋敷の中へと案内する。

久しぶりに入る屋敷の中であったが、相変わらずというか全く変化が無い。
豪農に毛が生えた程度の屋敷なので、多分王都の人間なら貴族の屋敷の中とは思わないであろう。

一応、客も持て成せる事になっているリビングへと移動し、大き目の机で差し向かいで座る。
所謂、お誕生席と呼ばれる位置に父で、その右隣に兄クルトが。
左隣が空いているが、そこには名主のクラウスを座らせるらしい。
今、ヘレナがクラウスの家まで呼びに行っているそうだ。

今回の交渉では、俺達が得た成果からバウマイスター家側に何%を収めるのかなど。
計算が必要となるので、それが出来るクラウスを呼んだのであろう。

「（ヴェルの親父と兄貴もかよ……）」

「（エルの親父もか？）」

「（ああ）」

色々と金には五月蝿い癖に、なぜか田舎の小領主ほど漢字や計数の勉強を怠る傾向にあるのだ。

漢字などは、中央で小難しい文章を捏ね繰り回すひ弱な連中に任せておけば良く。

領主たる者が、細かな金の計算などに携わるべきではない。

こんな事を言って、その仕事をクラウスのような名主に任せてしまうのだ。

自分も知っていれば、チェック出来るので不正も防げるのに。

多分、プライドが高いので、習得できなかったら恥ずかしいという理由もあるのであろう。

「（うちも、名主に丸投げだな）」

エルの実家も、同じような情況らしい。

エル本人は家を出なければいけないので、ちゃんと勉強をしていたようだが。

実は、冒険者の漢字を含む識字率と、読み書き計算などの計数能力は意外と高い。

子供の頃から勉強をしていた貴族の子弟や、教会で教わっていた聖職者などが居るし、他の階層出身者も空いている時間にギルド主催の講習などを積極的に受けるからだ。

理由は、本部ではないが地方の小さな支部などで。

在地領主と結託しているようなギルド職員が、隙あらば冒険者に

渡す報酬を誤魔化そうとしたり。
たまに入る緊急依頼などで、書類にして渡す条件を低く設定しようとするからであった。

知らないと、低い報酬で命を賭けさせられるわけで。
なまじ生活がかかっているだけに、兄クルトなどよりもよほど真面目に勉強に励んでいるわけだ。

「お待たせいたしました。お久しぶりです、ヴェンデリン様」

暫くしてから、ヘレナと一緒にクラウスも姿を見せる。
また前のようにおかしな事でも言うのかと思えば、今回は挨拶だけであり、それが逆に彼の油断ならない部分なのであろうが。

「では、始めるとしますか」

反対のお誕生日席に俺が、右隣にブランタークさん、イーナの順で、左隣にエル、エリーゼ、ルイーゼと座る。

「ところで、ブライヒレーダー辺境伯殿からの依頼とは？」

いよいよ、話し合いが始まる。
内容は、俺達が魔の森で遠征の犠牲者達のアンデッドを浄化するので、その過程で出た成果の何割を収めれば良いかという物であった。

「また兵を出せと？」

父は静かに話を聞いていたが、兄クルトはブランタークさんの説明を遮り、底冷えのするような声でこちらを牽制してくる。

また、十五年前の惨劇再びなどと思ったのかもしれない。

「いえ、浄化は我らだけで行います。バウマイスター男爵様ならば、魔法で簡単に現地に行けますから。アンデッド二千体にしても、竜に比べればさほどの事もありませんし」

口調は丁寧であったが、ブランタークさんの返答は挑発的であった。

冒険者生活が長い彼からしたら、兄クルトの脅しなどは脅しの類にも入らないのであろうし。

交渉相手はあくまでも領主である父なので、そこに余計な口を挟むなという事なのであろう。

「そうだな。うちには、浄化のプロである聖女様も居るわけだから」

エルも続けて、自分の意見を述べる。

彼からすると、やはり兄クルトは気に入らないらしい。

実家で自分を散々にいびった、兄達を思い出してしまうのであろう。

「バウマイスター男爵殿達だけで浄化を行うのであれば、うちからは何も言う事はありません。案内役を出そうにも、地理に詳しい者もおりませんし」

遠征に出た生き残りにしても、ただ何となく方向だけ気にしながら往復していたそうで。

特に帰りなどは、生死と隣り合わせであったせいで未開地の地理に詳しくなる余裕などなかったそうだ。

その前に、トラウマのせいで二度と未開地などには行きたくない

であろうし。
多分、五年かけて稚拙ながらも全土を回って詳細な地図を作った俺の方が、よっぽど地理には詳しいはずであった。
瞬間移動用の簡単な地図を作った後に、時間をかけて内容の補強を行っていたのだ。

「父上……。じゃなくて、バウマイスター卿。浄化に関しましては、こちらで全て行います。あくまでも、その過程で得た成果の中からいかほどを上納するかという事でして」

これは公式の交渉の席であり、俺と父は別の独立した貴族である。なので、敢えて言い直して父をバウマイスター卿と呼ぶ俺であった。

「成果ですか」

「はい。まずは、二千体のアンデッドが装備している武器や防具ですね」

親子なのに、親子ではない二人の会話は続く。

アンデッドは、生前の武器や防具を装備し続けている。
碌に手入れもしないで十五年も経っているのだから、まず一部を除いてクズ鉄以外に使い道はないのだが、中には価値のある物や、遺族に渡せそうな遺品という物も存在している。

実はブライヒレーダー辺境伯から、持ち主を特定できそうな物は遺族に渡したいので、出来る限り持って帰って来て欲しいと頼まれていたのだ。

「遺品ですか。それは、確かに大切な物ですな」

「五割だ」

「えっ？」

突然、割って入って妙な事を口走り始めた奴がいる。

誰であろう、兄クルトであった。

「遺品を持ち帰れないのは辛いよな、ヴェンデリン。冒険者としての任務も達成できないわけだし」

「いくら何でも、五割は暴利だと思いますけど」

普通、このようにギルドが存在しない領地において。

領主が冒険者に課す上納金の率は、一割から三割が相場である。

一概に全員がそうとは言えないが、中央に近い大物貴族ほど率は低く、地方の小領主ほど率が高い傾向にあるそうだ。

大物貴族は、いち冒険者パーティーの上納金に過剰な期待などしないし、あまり暴利を貪ると評判が落ちるのでそちらの方を気にする傾向にある。

更に、大抵の大物貴族の領地には冒険者ギルドの支部があるので、実は交渉するケース自体が稀なのだが。

逆に地方の小領主は、滅多に冒険者が交渉に来ないので、少ないチャンスで大金を得ようと、どうしても高くなってしまうのだ。

だが、さすがに五割は暴利が過ぎるという物だ。

「クルト殿」

「確かに高いですが、何か文句でも？」

兄クルトは、自分の名前を非難するように呼んだブランタークさんに厭らしい笑顔を向ける。

「（この野郎……）」

ブランタークさんが無表情になってしまうが、内心では煮えたぎっているのであろう。

それと、五割の徴収が絶対に駄目だと言う法もないのだ。

なぜなら、その領地においては領主の決定こそが法なのだから。

「ところで、バウマイスター卿とクラウス殿の意見はどのように？」

小さい頃はわからなかったが、間違いなくクルトは俺の事が嫌いなのであろう。

こうなると、もうまともに話をするだけ無駄とも言える。

それに、余計な口を差し挟んでくるが、今のクルトは次期当主にしか過ぎない。

さきほど、俺にぞんざいな口を利いたのは、今の俺が貴族としてよりも冒険者としての立場の前にあるので、問題ないと思っての事なのであろうが。

ならば、こちらだってクルトなど無視するに限るのだ。

「あくまでも私の意見ですが。遺品になりそうな物は除いて、三割が適当かと」

クラウスの意見に、父も無言で首を縦に振っていた。
なるほど、やはりクラウスは油断ならない男だ。

地方の零細貴族なので、上納金は三割。
だが、遺品になる物の分は除いてなので、その分は俺達やブライヒイレーダー辺境伯に配慮しているわけだ。

そして、父はそれに賛同した。
ならば、これで決定だ。

まだ爵位も持たないクルトに、口を挟む権限などないのだから。

「では、遺品分を除く三割で」

持ち主が特定できないような装備品に、まだ残っている可能性がある遠征軍の遺留品。
そして、浄化の過程で倒した魔物の素材と言ったところであろうか？

「支払いは、現物ですか？　それとも？」

「ブライヒブルクで換金して、その評価額の三割を現金でお願いします」

「わかりました」

このように、父と話すと話はスムーズに進むようだ。
支払いが現金なのは、こんな僻地で錆びた鎧や魔物の素材を三割も貰っても仕方が無いからなのであろう。

「誤魔化すなよ」

「てめぇ！　さっきから何なんだよ！」

そして、ここでまたクルトがバカな口を差し挟み、この発言でエルが珍しくブチ切れてしまう。

剣には手をかけなかったが、席を立ち上がってクルトに近付こうとしたので、俺が慌てて彼を止める。

ぶん殴りでもしたら、それこそ問題になってしまうからだ。

更に、ブランタークさんの方に視線を向けると、既に彼は無表情を止めて、クルトを刺すような視線で睨み付けていた。

「ふん、竜殺しの英雄だか知らんが、連れている手下はチンピラだな」

などと挑発しつつも、クルトの足元は震えていた。

彼程度の腕っ節で、ブランタークさんやエルに敵うはずなどなく。

なのに敢えて挑発しているのは、バウマイスター家の跡取りである自分に危害を加えれば大変な事になると知っているからなのであろう。

そう思って挑発するのなら、せめて足の震えを止めて欲しいものだが。

正直、見ていて見苦しかった。

「クルト兄貴！」

そして、更に事態はややこしくなる。
突然リビングに、俺のもう一人の兄で、今は分家に婿入りしているヘルマン兄さんが飛び込んで来たからだ。

「お前は、呼んでいない！」

「なぜだ！　おかしいだろうが！　義祖父や義父達の遺品に、領民達の遺品もあるんだぞ！」

どうやらヘルマン兄さんは、クルトが自分をこの交渉の席に呼ばなかった事が不満であったらしい。
遺品の話をしているので、彼は婿入りした分家当主の立場として、遠征で戦死した父の叔父であった前従士長に、その息子達三人に、従軍した兵士達の遺品を求めているようだ。

「遠征に参加した、バウマイスター家側の遺品か。集められる限りは集めるので、後で見て貰って判別して貰うしかないな」

「いや、必要ない」

「はあ？　今、何と？」

「だから、必要ないと言ったんだ」

「はあ？」

「戦死者の葬儀と供養は済んでいる。今更、遺品などいらん」

クルトのまさかの発言に、ブランタークさんは思わず彼に二度も聞き直してしまう。

冒険者であろうが、軍人であろうが。
出先で遺体や遺品などを見付けたら、余裕があれば持ち帰って遺族の返そうとするのは常識だ。
なのに、それを必要ないと言うのだから。

ブランタークさんは当然として、ヘルマン兄さんは一気に顔を真っ赤にさせていた。

「（ねえ、どういう事なの？）」

いつの間にか、席を立って俺の傍にいたイーナがその理由を訪ねてくる。
もし俺の想像が正しければ、俺達にバウマイスター諸侯軍戦死者の遺品を集めさせると、その手間賃で上納金が減ると思っているのであろう。

俺は、イーナに自分の考えをそっと呟く。

「（最低……）」

確かに最低なのだが、クルトからすればもう死んでいる人間の錆びたり薄汚れた品など。
小銭以下の価値しかないと思っているのであろう。

ブライヒレーダー辺境伯軍の戦死者なら、もしかすると高価な武具やアクセサリーなどを付けている可能性もあるが、バウマイスター諸侯軍の面子に限ってそういう事は無い。

つまり、そういう事だ。

「ですが、いくら遺体無しで葬儀を行い、墓を建てたとしても。本人の魂は、現地でアンデッドとして彷徨っているんです。浄化して、遺品を遺族の元に返してあげる。これで、ようやく成仏を」

「残念ですが、お嬢さん。うちのような貧乏領地で二度も供養を行う余裕なんて無いんですよ。聖女様に渡す、大層な心付けも無いですしね」

「私は、そんな物は……」

さすがのエリーゼも、腹に据えかねた物があったらしい。

珍しく強めの口調で、遺品を遺族に返す事をクルトに進言するが、肝心のクルトの態度は『糠に釘』状態であった。

クルトは、一応エリーゼが教会のお偉いさんの孫なので配慮はしているつもりのようだ。

だが、発言の後半部分では、何を頼むにも寄付寄付と五月蝿い教会をバカにした口調になっていた。

図星の部分もあるのだが、エリーゼが今までに浄化で受け取ったお金はあくまでも報酬のみで、寄付金などは一度も受け取った事がない。

むしろ、貧しい人達のために、定期的に無料で浄化などもしているのだから。

「クルト殿。もういい加減に、無責任に言葉を吐き捨てるのを止めてください」

と言うか、もういい加減にして欲しい物だ。

俺は思わず父の方に視線を送るが、父も『処置無し』と言った表情をしている。
クラウスは、相変わらず無表情のままであったが。

「ヴェンデリン！　貴様！　兄に向かって！」

「そうですね。血統上は、俺はクルト殿の弟ではあります。ですが、公式の立場では俺は独立した法衣男爵なのです。たかが騎士の跡取りの分際で、男爵に偉そうな口を利きますね」

「貴様ぁ！」

本当は、こんな事を言うつもりはなかったのだが、気が付いたら口にしてしまっていた。
多分、許容範囲を超えた怒りで、キレてしまったのであろう。

エルをチンピラ扱いで、エリーゼを守銭奴の生臭坊主扱いとは。
ここで黙っていると、貴族としても体面が保てないという状態のはずで。
俺は家臣と婚約者をバカにされたのだから、言い返す権利もあるはずだ。

俺の挑発的な言葉に、ブランタークさんも、父も。
ヘルマン兄さんですら、先ほどの怒りを忘れて唖然としているようだ。

「そもそも、俺達の交渉相手はバウマイスター卿なのですよ。なぜ、ここであなたが偉そうに口を出すのですか？　挙句に、人の従士長をチンピラ扱いして、婚約者を生臭扱いとは」

他にも言いたい事はあったが、これ以上言うと収まりが着かなくなる可能性があった。
特に、計算も漢字も出来ないは父にも当て嵌まる。
言うと拗れる可能性があったので、ここで罵詈雑言は止める事にする。

「（ヴェルって、先日の件でストレスが溜まっていたのと違う？）」

「（そうかな？）」

俺が、暴発するとでも思ったのか？
ルイーゼも、いつの間にか俺の腕を掴んで抑えに入っていたようだ。

「（しかし、酷いお兄さんだねぇ……）」

「（今、知ったさ）」

というか、クルトは俺が家を出て貧しく惨めにでも暮らしていないと、そのプライドが保てないのであろう。

その癖、自分で何かを努力するという事も無い。

父も同類だが、漢字や計算などを全く覚えない。
俺は始めから知っていたのだが、それでも前世で大学に受かるくらいは勉強はしている。
この世界でも、魔法の特訓で手を抜いた事など一度も無かった。

加えて、少しでも領地の生活を豊かにしたいのなら、せめて将来のために、未開地に人を出して地図くらい作り始めるのが普通だ。

俺だって、瞬間移動で正確に移動するために、五年以上もかけて地図は作っていたのだから。

父の爵位と領地が継げる安定した立場なのだから、それが出来ないのなら静かにしていれば良いのに。

家を出た弟達に抜かれると、それが悔しいので実際に会うと嫌味が口から出る。

今度王都に行ったら、エーリッヒ兄さん達に報告しておくべきであろう。

嫌な思いをするので、なるべく行かない方が良いと。

「依頼を終えたら、一度ここに戻って来ます。その時に、バウマイスター家、ブライヒレーダー家双方の遺品を選別し。残りの売却益の三割を納めるという事で」

もうこれ以上、ここに居たくなかったのだ。

何か話せば、クルトが揚げ足を取ってくる。

なので、条件だけ決めてとっとと仕事に戻るべきであろう。

男同士の話し合いなので、母や義姉さんとまだ会っていなかったが。

俺がこの屋敷に長時間居るのを、クルトが認めるはずもない。

残念だが、これ以上の滞在は双方に不幸しか呼ばないので、俺達はすぐに席を立って屋敷を出る事にする。

「ヴェンデリン様。今日は、お泊りにならないので？」

「いや、俺達は冒険者だから野宿でもするさ」

アンデッドの浄化は、出来れば早朝の日が昇った直後から始めた方が効率が良いはず。
今は昼なので、今日は魔の森の近くで野宿をする予定にしていたのだ。

冒険者なのでその準備はしているし、野宿くらい出来ないと冒険者とは言えないのだから。

「せっかく戻られたのです。せめて一泊くらいは」

早朝に起き、瞬間移動の魔法で飛べば同じ事だが。
今までのクルトとのやり取りを見て、それを平気で言えるクラウスがある意味凄いなと、俺などは思ってしまう。

「しかしだな」

「大切なお仕事でございましょうから、ここは万全を期した方が宜しいかと。本屋敷でなく、ヘルマン様のお屋敷でお泊りになれば宜しいと」

確かに、クラウスの言う事にも一理はある。
それに、当主の息子が里帰りをしたのに、一泊もしないで領地を出て行ってしまえば、それはバウマイスター家側の面子を潰す事になるであろうと。

言わなくても気が付かせてくれるクラウスに、やはりこいつは油断がならないと感じていた。

「それで、宜しいでしょうか？　ヘルマン様」

「ああ……」

俺達とクルトの争いを見て絶句したままであったヘルマン兄さんだが、クラウスに声をかけられて我に戻ったようだ。

「双方共に、頭を冷やした方が良いか」

こっちが先に喧嘩を売られたような気もするのだが、ここで変に反論してクルトがまた騒ぐと、時間を無駄にしてしまう。

俺達は、無言のままで首を縦にふっていた。

「バウマイスター卿、本日はヘルマン殿の屋敷でお世話になります」

「大したもてなしも出来ませんが。ヘルマン、任せるぞ」

「はい」

何とか、交渉も無事に終わり。

無事かどうかは微妙なところだが、上納金の件は形が付いたので良しとする事にする。

あまり縁の無い家族ではあったが、エル達にはとんでもない醜態を見せたというべきであろうか。

とにかく、後味は悪かった。

あとは、俺にとって、もうこの屋敷は全くの他人の屋敷なのだなと。

自覚させられる事になるのであった。

「すまんな」

「ヘルマン兄さんが謝る事でもないでしょうに」

「ここ二～三年、何かおかしいんだよな。クルトの兄貴は」

バウマイスター家の本屋敷を出た俺達は、ヘルマン兄さんの案内で彼の屋敷へと向かっていた。

共にバウマイスターの家名を持つ、代々従士長を勤める家で、先代の当主は俺達の祖父の弟であったと聞いている。

ところが先代は、例の魔の森遠征で三人の息子達と共に戦死し。

三人共、子供が娘しかいなかったそうで。

長男の最初の娘に、ヘルマン兄さんが婿入りして家を継いだのだ。

ヘルマン兄さんが、俺以外の面子に自己紹介を兼ねて説明していたのだが、みんなどこか納得いかないような顔をしていた。

それもそうであろう。

いくら家臣とはいえ、親戚筋の家の男手を全て出兵させて全滅させてしまったのだ。

更に、その後継に本家から次男を婿として入れた。

何か、意図的な物を感じてしまうのであろう。

「言いたい事はわかるけどな」

長男のクルトは除くとして、目の前のヘルマン兄さんは当時には

もう十八歳前後であったはず。
なのに、本家からは一人も従軍させていない。
まるで、全滅する事がわかっていたので、わざと出さなかったと言う風にも受け取れるのだ。
そして、男手が全滅した分家に、多過ぎる息子を婿に入れて家を乗っ取る。
陰謀論かもしれないし、事実かもしれない。
少なくとも、そう疑われても仕方の無い情況であった。
「親父は、危ういと思ったんだろうな。だから、本家からは子供を出さなかった。分家は、最低でも一人くらいは戻って来ると思ったんじゃないかな?」
「それにしても……」
「ああ、エルヴィン君だったな。おかげで、新婚当初は針の筵だったさ」
分家の人間からすれば、ヘルマン兄さんは家の乗っ取りを謀る父の尖兵にしか見えなかったであろう。
なので、相当に苦労しているはずだ。
「どうやって、馴染んだんですか?」
「簡単な事さ。分家の人間になって、本家の都合よりも分家の都合を優先させる」
先ほどの、バウマイスター家側の遺品を寄越せという陳情も、確

かに分家の都合が最優先だ。
分家だって、戦死した先代当主やその息子達の遺品が欲しいはずだからだ。

「それを、ヴェル達への手間賃を惜しんで断ろうとしやがって」

「どうせ、拾えるだけ拾って後で選別するんだから、大した手間でもないんですけどね」

拾った物は魔法の袋に収納しておけば良いので、他の冒険者とは違って荷物が重いという事もないのだから。

「交渉されて、上納金の率が下がるのを恐れたんだろう」

「セコっ！」

「確かに、お嬢さんの言う通りにセコいよな」

ルイーゼの率直な感想に、ヘルマン兄さんも一切否定はしなかった。

「さてここが、俺が当主を務めるバウマイスター分家の屋敷だ」

見た感じは、本屋敷よりも少し造りが小さくて外見も少し古いような気がする。
多分、本屋敷に気を使っての事なのであろうが。

元々、本屋敷ですら豪農の家に毛が生えた程度なので、そんな気遣いも考えないといけないとは、ただヘルマン兄さんの苦労が偲ばれるという物であった。

「ただいま」

「旦那様、おかえりなさいませ」

本屋敷と同じく、七十歳近い使用人の老人が出迎える。

やはり、人件費やら、住み込みで働かせるほどスペースに余裕があるわけでもないようで、分家の使用人も農業をリタイアした老人達が主戦力となっていた。

「マルレーネは？　お客さんがいるから顔を出せと伝えてくれ」

「はい、私はここにいますよ」

そんなに広い屋敷でもないので、ヘルマン兄さんの奥さんはすぐに顔を出していた。

年齢は、二十代半ばくらいであろうか？

親戚だからなのか？

髪の色は同じブラウンで、顔立ちも少し似ているような気もする。

「あら、噂の竜殺しさんね。お久しぶり」

そういえば、又従兄妹の関係になるのに、俺は一度も彼女と顔を合わせた記憶がなかった。

いや、確かクルトとヘルマン兄さんの結婚式で二度顔を合わせているはずだ。

変に知己になって、継承問題で結託されても困るからなのであろう。

一回だけ、父から紹介されて挨拶をしただけであったが。

そして式の間中も、俺は出された飯を食っていただけなのだから。

「そうだ。クルト兄貴が絶賛敵視中のな」

「良い年して、本当にケツの穴が小さい男ね。あのバカは」

そんな下品な事を言う女性には見えないのだが、彼女はクルトをボロカスに貶していた。

いくら親戚同士でも、これまでの経緯を考えると仲良しなはずもないので、納得は出来るのだが。

「あの、次期当主にそんな陰口を叩いて大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。たまに、本人にも言っているから」

顔を引き攣らせたイーナからの質問にも、マルレーネ義姉さんはサバサバとした物だ。

彼女からすれば、本家の人間は祖父と父と叔父達の仇。

そして、分家の人間も意見を同じくしている。

何となく想像は出来たが、胡散臭い名主のクラウスの件と合わせると。

次第に、この領地はいつまで存続可能なのか疑問に思ってしまうのだ。

「お客様は歓迎します。それが、あのクルトと喧嘩してきた人達なら余計にね。あと、この村って本当にお客さんが来ないのよ」

「確かに……」

ここに居た頃に見た外部の人間といえば、少なくとも俺は商隊の人達のみであった。
なので、この領地では基本的にお客さんは歓迎される。
外の情報に飢えているので、それを聞きたくてしょうがないからだ。

「どうぞ、中に」

マルレーネ義姉さんの案内で屋敷の中に入ると、外部とは違って中は本屋敷よりも綺麗に整えられているようだ。
外部は本家が五月蝿いので粗末にして、内部は造りも合わせて内装なども綺麗にしている。
多分、ヘルマン兄さんや沢山いる分家の女性陣が整えたのであろう。

先代従士長の奥さんと、戦死した息子三人の奥さん達に。
マルレーネ義姉さんとその妹を始めとする、俺の又従姉達にと。
残りの男性陣であるヘルマン兄さんを始めとする婿達は、どこか所在なさ気にしていた。

この家は、完全に女性優位の家のようだ。
そして、彼女達は反本家で纏まっている。

婿達も、家に馴染むために。
ヘルマン兄さんなどは、元からさして実家に愛着など持っていないので、早くこの家に馴染むためにさっさと反本家になってしまったのであろう。

というか、あの家庭環境ならば、クルト以外はよほどのマゾでもないとそうなってしまうのだ。

これが、リビングに案内されてお茶を出された俺達が見た、このバウマイスター分家の第一印象であった。

「（表面上は従士長の家柄で親戚なのに、潜在的な反本家って……）始めましてじゃないのか？　ヴェンデリンです」

「何年も前から、早朝に出かける姿は見ているわ」

マルレーネ義姉さんを始めとする分家の人間は、俺が子供の頃に魔法の修行で外に出かける姿は目撃していたようだ。

ただ、彼女達は全く話しかけて来なかった。

反本家の立場を隠そうともしない分家なので、俺と接触する危険性を理解していたのであろう。

今は、俺が別家の人間なので問題はないと思っているようだ。

それに、今の俺達はこの領地を訪れた冒険者という立場の方が強い。

本家が泊めない以上は、分家が面倒を見る必要があると思ったようだ。

バウマイスター騎士爵領の、面子の問題として。

「それに、お爺さまやお父様の遺品を回収に行ってくれる冒険者を泊めるくらい。常識のある人間なら当然よ」

そう言いながら、マルレーネ義姉さんは一瞬本家の方角に視線を

送る。
　クルトのバカぶりと、老いて彼を止められなくなっている父を内心で非難しているのであろう。
「なので、ブランターク様も機嫌を直して」
　マルレーネ義姉さんは、そう言いながら未だに怖い表情のままのブランタークさんに、何か別の液体が入ったカップを差し出していた。
「いや、すまん。久々に、ブチ切れるところだった。へえ、ハチミツ酒か」
「うちの特製ですよ」
　ブランタークさんは、自家製のハチミツ酒を貰ってようやくご機嫌が直ったようだ。
「良い味だな」
「うちの秘伝ですから」
　俺は、正直驚いていた。
　普段の食事が、硬い黒パンと薄い塩スープのこの領地で、まさかハチミツ酒などという贅沢品が出てくるとは。
「あのな、ヴェル。おかしいのは、うちの実家だから」
　ヘルマン兄さんが言うには、婿入りしてから気が付いたのだが。
　どこの家でも。

少なくとも、従士長をしているこの分家では、もう少しまともな飯が出るそうなのだ。

「そうなんですか？」

「うちとて普通に節約は心がけているけど、飯は普通に食べるから」

農作物以外は、代々従士長の家なので普通に狩りや採集で賄っている。

何でも分家の教育方針のようで、マルレーネ義姉さん達も普通に弓は使えるらしいし、罠などの仕掛け方も必修事項なのだそうだ。

本家では主にプライドの関係で、『女性に弓など持たせるのはもっての他』という事になっているそうだが。

他にも、初期的ではあるが養蜂でハチミツを得ていて、それを材料にハチミツ酒なども造っている。

今、ブランタークさんがお替りを要求したのが、その成果であった。

「それを聞いて安心しました。またあのメニューかと思うと」

「うちは女性が多いからな。ちゃんとした料理くらい出るさ。本家の場合は、半ば脅迫的に節制を心がけている部分があるし」

少しでも多くの現金を保持していたいという、明確な目標があるためであろう。

でなければ、最初に上納金を五割などと言わない筈だ。

分家の方は、そこまで堅苦しいと毎日の生活で息がつまるから程ほどにという方針のようであったが。

「夕食まで時間がある。ゆっくりとしていてくれ」

とはいえ、珍しい外部の情報を持っている客である。

エリーゼ達女性陣三人は、マルレーネ義姉さん達に捕まって、王都のファッション情報などを根堀り葉掘り聞かれていたし。

エルやブランタークさんも、婿達に王都などの情報や冒険者稼業などについて聞かれているようだ。

そして、俺はと言うと……。

「すげえ！　本当に、竜殺しの英雄様がいる！」

「お父さんの弟だって、本当だったんだ」

ヘルマン兄さんの子供達を始めとして、分家の子供達多数に囲まれていた。

しかし、子供の目とはとても純粋で綺麗な物だと思う。

二十五歳で、この世界のヴェンデリンに憑依して十年ほど。

合算すると三十五歳を超える、心が薄汚れた俺から見ると眩しいくらいであった。

「レオン、俺は嘘なんてつかないけどな」

一番の年長者であるレオンは現在七歳で、ヘルマン兄さんの長男にして、この家の跡取りである。

他にもクラーラという四歳の妹がいて、彼女もその純真な瞳で俺を見つめていた。

「俺も、叔父さんですか」

「いや、ヴェルが八歳くらいの時からずっとそうだから」

実は、昔からヘルマン兄さんに子供が二人居るのは知っていたのだが、年齢や性別や名前なども知らなかったのだ。

顔を合わせたり、下手に可愛がったりすると。

それだけで、父に文句を言われそうな気がしていたからだ。

「思うに、今まで接触が無くて正解でしょう。今のクルトの態度を見るに」

あの男の事だから、俺が実家を乗っ取るために従士長の家の跡取りに好かれようと媚を売っているとか思われかねないからだ。

「確かにな。でも、もう今更だろう」

確かに、もう今更なのだ。

勝手に疑って、勝手に苦しんでいれば良い。

そう思った俺は、子供達に次々と魔法の袋からお土産を出し始める。

せっかく実家に行くので、アマーリエ義姉さんやその子供達の分も含めて準備していたのだ。

今の時点で渡すと、彼女がクルトに何か言われかねないので、魔法の袋に仕舞ったままだったのだが。

「何でも出て来る、魔法の袋だ」

「さすがに、先に入れていないと出てこないさ」

俺はそう言いながら、レオンを先頭に王都で購入したお菓子や、ボードゲームなどの玩具を渡していく。

相手は子供なのだが、お土産を渡す順番も貴族は気を使わないといけないのだ。

レオンは、この分家の跡取りで。

妹のクラーラを除くと、他の子供達は外に嫁に出たマルレーネ義姉さんの妹や従妹達の子供なので、序列はハッキリとさせないといけないからだ。

そういえば、徳川家光が子供の頃にそういう話があったような気もするのだが。

「ありがとう、ヴェンデリン叔父さん」

まだ十五歳なのに傷付く呼び方であったが、この世界では珍しい事でもない。

みんな結婚が早いのと、年齢差がある兄弟が多いので、どうしてもそうなってしまうのだ。

「竜退治のお話を聞かせて！」

「聞かせて！」

時間はあるし、クルトの事など思い出したくも無い。

なので俺は、子供達に骨竜を退治した話などをし始める。

子供達は、お土産の飴を舐めながら懸命に話を聞いていた。

こういう光景を見ていると、久しぶりに心が洗われるような気がする。

一時間ほど話したであろうか？

子供達はまだ話をせがんでいて、俺も時間があったので良いと思ったのだが、そこに思わぬ人物が姿を見せる。

「さすがは、バウマイスター男爵様。ヘルマン様のお子達にも大人気ですな」

「クラウスか……」

俺と分家の組み合わせだけでもクルトにとっては危険なのに、そこに名主のクラウスが現れたのだ。

「あの……、マルレーネ義姉さん？」

「何か頼みたい事があるって、強引に押し入られてしまって……」

以前に、俺が次期当主になったら協力するとまで言ってしまう、反本家の立場を取る分家なので、裏の行動が怪しいクラウスの行動に掣肘など加えないのであろう。

分家からすれば、クラウスと本家の仲が悪くなるのは好都合なのであろうし。

「頼みたい事？」

「はい、少し冒険者としての仕事からは外れますが、決して危険な仕事ではありませんので」

突然、俺達に仕事を頼む怪しい名主クラウスの存在に。
さてどう対応した方が良いのかと考えてしまう俺。

久しぶりに里帰りと、それに伴うゴタゴタはまだ始まったばかりであった。

第四十七話　クラウス再び。

「結局、引き受けたのね」

「あの野郎、人が断れないような言い方をしやがって……」

「冒険者としての仕事からは少し外れるけど、人のためになって利益も出る。条件付けが上手いんだね」

「あいつの場合、そのおどろおどろしい裏が無ければな」

「無理なんじゃないの？　そういう人みたいだし」

魔の森での浄化で得た成果に対する分配交渉の席で、俺達はクルトと決定的に揉めてしまう。
別に、俺が喧嘩を売ったわけではない。

向こうが、俺を決定的に嫌っているのを隠さなかっただけだ。
随分と無礼な口も利いてきたが、ブランタークさんに言わせると処罰できる案件でもないそうだ。

『坊主は、冒険者としてここに来ているからな』

ただ、貴族としては常識の無い。
空気の読めない男という評価は、受ける事になるであろうと。

碌に領地から出ないクルトからすれば、そんな評価は気にもならないのであろうが。

と言うか、襲爵の際にはどうするのであろうか？

少なくとも、俺は絶対に世話などするつもりもない。

そのせせこましく貯めた金で、どこかに泊れば良いのだと思ってしまう。

そのために、懸命に金を貯めていたのであろうし。

結局、父やクラウスが居たので交渉は無事に纏まってはいた。

もう用事は無いと本屋敷を出ようとすると、そこでクラウスが一泊していって欲しいと頼んでくる。

交渉は無事に纏まったのに、ここで俺達がすぐに領地を出てしまうのは問題なのだと。

とはいえ、この宿屋すらない僻地で泊るとなると、候補は非常に狭められてしまう。

一番の本命である本屋敷だが、俺も含めて全員が嫌であろう。

何しろ本屋敷には、その大いに揉めた戦犯であるクルトが居るのだから。

あの温厚なエリーゼですら、クルトを嫌がっているのだから当然であろう。

だが、ここで素直に引き下がるようなクラウスでもない。

彼は、分家であるヘルマン兄さんの家に泊れば良いと意見する。

本人の意思とは別に、バウマイスター騎士爵家継承で騒動の元に

なっている俺を、同じくヘルマン兄さんが婿入りしているものの、魔の森遠征の件で反本家で纏まっている分家に泊らせてしまう。

クルトの心を掻き乱し、父もまさか嫌とは言えず。

やはり、クラウスは厄介な性分をしている。

あのルックナー弟などよりもだ。

そんな経緯で分家の屋敷へと向かったのだが、ヘルマン兄さんの奥さんにして、分家の事実上のトップでもあるマルレーネ義姉さんは、こちらの斜め上を行っていた。

誰に隠す事も無く、クルトや本家の批判をしていたからだ。

特に、クルトの遺品などいらない発言で、余計に彼への批判を強めていた。

彼女からすれば、祖父や父や叔父達の遺品などいらないと言ったクルトは、貴族以前に人間として論ずるに値しないのであろう。

彼らの遺品に、資産価値などほとんど無い。

金に拘るクルトからすれば、回収の手間の方が高いからいらないわけだ。

多分、俺達が過大な手間賃でも請求すると思っていたのであろうが。

そんな発言が分家の人間に漏れれば、非難されて当然とも言えた。

正直、次第にクルトを次期当主にして大丈夫なのかと思ってしまうのだ。

だが、そこに俺が口を出す権利などない。

俺は本来、アマーリエ義姉さんやその子供達に渡す予定だったお土産を分家の子供達に渡したり、せがまれて竜退治の話などをして時間を過ごす。

クルトの事など考えるよりも、よほど精神衛生上良かったからだ。

ところが、そこにまた厄介な男が現れる。

先の交渉の席で、ボロを出すどころか憎いほどにフォローが適切だったクラウスが姿を見せたのだ。

しかし、反本家の立場を表明する分家に何食わぬ顔で現れ、俺に面会を要求するとは。

やはり、こいつは相当なタヌキのようだ。

『それで、用件とは？』

『それは、ですね……』

クラウスは、お茶の提供すら断っていきなり仕事の話に入る。

『バザーを開いて欲しいんですよ』

クラウスは、俺達に領内で商品を売って欲しいと頼んで来たのだ。

『商品は、何でも構いません。服でも、小物でも、調味料でも。領民達は、とにかく娯楽に飢えていますから』

主食の小麦は、広げた農地から自給可能であり。
野菜も同じく畑から自給可能で、肉は狩りで、魚は川や用水路や沼から淡水魚は取れる。
泥臭くて、大して美味しくは無いのだが。

他にも山菜に、自生している果物に、分家のようにハチミツ採りも出来るので、領民達は基本的に飢える事は無い。

ただ、塩は決定的に不足しているわけで、それだけは何が何でも購入する必要があっただけだ。

生憎と、昔の俺の調査でも岩塩などは見付からなかった。
この辺が、昔は海であったという事実はないのであろう。

『考えても見てください。あの規模の商隊で、八百人近くの物資なんですよ』

それも、年に三回しか来ないのだ。
山道の往復を考えると、四回は不可能という現実もあるのだが。
しかも、彼らが運べる品物には限りがある。
とにかく塩が優先され、他の物は極少量のみ。

だが、それで商隊の人達に文句を言うのは酷であろう。

相場は、王都やブライヒブルクよりも少し高いくらいだが、それでも彼らは完全に赤字のはず。
間違いなく、彼らの利益はブライヒレーダー辺境伯からの補助金のみのはずだからだ。

『正直、良くブライヒレーダー辺境伯様から切られないものだと』

『遠征の件があるからだろう』

どうせ相手はクラウスだし、この件は公然の秘密で領内で知らない者などいない。

なので俺は、堂々と商隊が来る裏の理由を口にしていた。

『ですが、コストを考えますと……。ブライヒレーダー辺境伯様の負担は大きいのです……』

ブライヒレーダー辺境伯家の財政規模を考えると大した負担でもないが、『あと何年続けるのか？』という疑問も残る。

バウマイスター領の人口が完全に回復し、計算しているであろう損害額の補填を、ブライヒレーダー辺境伯側が終えたと思ったその時。

もしくは、代が替われば中止になってしまう可能性だってあるのだ。

中止にしなくても、せめて利益は取れるような体制に変化させる事もあり得る。

もしそうなれば、当然塩の値段は相当に上がるはずだ。

彼らとて、別に慈善事業でやっているわけではないのだから。

『この場合、ブライヒレーダー辺境伯様の方が立場が上だとか。うちに借りがあるとか。大物貴族だから傲慢であるとかは、関係無いのです』

クラウスの言葉の先には、間違いなくクルトの存在がある。

ブライヒレーダー辺境伯に対し、エーリッヒ兄さんの件で最初に悪印象を持ち。

更に、祝儀の件などで喧嘩を売って仲が悪くなっている。

一度も顔を合わせた事が無いので、仲が良いとか悪いとかそれ以前の問題でもあるのだが。

そしてその状態は、クラウスを筆頭に領民達を不安にさせる。

クルトが次期当主になり、それに合わせて商隊が持って来る物の値段が上がったら？

もしくは最悪のケースとして、商隊派遣が中止になる可能性だってあるのだ。

『塩が無ければ、この領は詰みますので』

『昔は、どうしていたんだ？』

バウマイスター家の誰かや名主の一族の者をリーダーに、数名でブライヒブルクにまで買い出しに行っていたそうだ。

領内で集めた毛皮や薬草などを売り、そのお金で塩を買って戻りと、かなりハードな方法であったようだが。

『この方法ですと、今の半分の人口でないと成立しません』

人口が増えれば荷駄の量を増やさないといけないし、それをすれば今度は農作業などの人手が足りなくなってしまう。

困っていた所に、寄り親として先代のブライヒレーダー辺境伯が年に二回商隊を派遣してくれるようになり。

遠征後に、罪滅ぼしも含めて三回に増えたというのが真相なようだ。

『そんな先の不安もあり、領民達は塩の備蓄が欲しいところでして……』

ただ、商隊を年に三回に増やしても、領民達の塩の備蓄が増えたわけではないそうだ。

毎日使用する物なので、例えばいち家庭が四ヶ月に使用する塩の量を考えると。

四ヶ月分なのは年に三回商隊が来るからだが、自然と商隊はギリギリの量しか供給できない。

遠征前までは、次第に人口が増えていたからだ。

そして現在も、徐々に遠征前の水準にまで戻りつつある。

なので塩に限っては、一家の人数に比例した決められた量しか販売してくれないそうだ。

もっと売ってくれと無理を言っても、それは他家の購入枠を犯す結果となるし、どうせ在庫も無いので不可能でもある。

他にも、せっかくの商隊が塩しか持って来ないのも、それは領民達に不満を与えてしまう。

少しだけでも、外の世界を感じさせる産物を混ぜる必要があったのだ。

当然、その分は塩の搭載量が減る事になる。

『荷駄を増やすと、同時に人手も増やさないといけないのでブライヒレーダー辺境伯様の負担が増えます。なので、量は頭打ちでしょう』

往復三ヶ月間、山道ばかりの道をひたすら荷駄を引きながら移動するのだ。
飛竜の生息地ながら、いつも使用している山道には滅多に姿を見せないそうだが、他の熊や狼などは現れるので警戒は常に必要と。

募集をかけても、人手が集まる保障も無い。
支払う賃金なども考えると、商隊の規模拡大は不可能というのが結論であった。

『ヴェンデリン様がブライヒブルクに拠点を置くのであれば、月に一度でも構いません。領民達に物を売って欲しいのです』

『無理を言うな……』

物理的に不可能だと言っているわけではない。
魔法の袋に仕舞って瞬間移動で飛べば良いのだから、むしろ簡単な方の依頼に入る。
ただ、冒険者がする仕事とは微妙に違うし。
そんな事をすれば、クルトがますます意固地になるだけであろう。

『クルト様に関しては、私が抑えますから。領民達が自由に買い物が出来るようになって不安が収まれば、それはクルト様の利益にもなるのです。アルトゥル様からの許可も、私が取りました』

『もう取ったのか？（というか、クルト。あんたは、父の傍に居たんだろうに……）』

この目の前の老人が老獪過ぎて、俺に余計にこの領地の未来が心配になってしまう。
そしてこの老人は、もう間違いなくクルトを切っているのだから。

『無料で配れとか、安く売れと言っているわけではないのです。むしろ、それは止めてください。ブライヒブルクの相場に、ヴェンデリン様の利益を加えた額で構いません』

正直なところ、ブライヒブルクと同じ値段でも十分に利益が出るのだ。

他の商人達なら、瞬間移動が使えなければ往復三ヶ月分の移動費がかかるのに、俺は一瞬で移動可能だからだ。

荷を載せる荷台も、魔法の袋のせいで不要である。

仕入れも、商業ギルドに登録して会費を払えば、かなり安くなるはず。

もしブライヒレーダー辺境伯が知れば、商隊の経費を削減できるので、揉み手で援助を始めるであろう。

クラウスは、相変わらず人の欲を見抜くのが上手い男だ。

『俺が仕入れ担当で、領内に店を作れとか言うのかと思ったがな』

もしその条件の一つとして、店番担当に俺の異母兄姉でも勧めてきたら、俺は余裕でクラウスを糾弾可能なのに。

それを絶対にしないのが、この男の怖い部分であった。

クラウス自身は、俺が自分を怪しんでいる事など当に承知で、特に気にもしていない態度なのだから。

『さすがに常設の店となりますと、アルトゥル様への申請や手続きで面倒な事になりますからな』

『一番の問題は、クルトの不満が大き過ぎるからだろう？　定期とはいえ、商隊なら領民達への利益も考えてクラウスが説得すると』

『はい、その通りでございます。とりあえずは、一回だけ試しに実行していただければと』

『うーーーん、エリーゼはどう考える？』

領民のためという理由が一番なので、断り難い案件ではある。
別に、クルトにこれ以上嫌われても今更なのだが、僻地で苦労している領民達を考えると、無下に断るのもと思えてしまう。
俺の中身が、世界でも稀に見るお人好し民族である日本人であった影響であろうか？

そこで、正妻になるエリーゼに聞いてみる事にしたのだ。
こう見えて、彼女はあのホーエンハイム枢機卿の孫娘なので、時に素晴らしい意見を出す事があるからだ。

『今回に限っては、まず試しに引き受けても宜しいかと思います』

簡単に言えば、領民達に罪は無いという意見のようだ。
こういう部分が、彼女の聖女たる所以なのかもしれない。
あと、基本的に良い事なので、俺の評判が落ちる心配もないという意見もエリーゼは添えていた。

『私も、やってみれば良いと思うわ』

『善行で利益も得られる。良い事だと思うよ』

イーナとルイーゼも、エリーゼと同意見のようだ。

『エルは？』

『ちょっと……』

エルは俺を部屋の端に呼ぶと、小声でそっと耳打ちしてくる。

『（安全のために引き受けろ）』

エルに言わせると、もうクルトは何をしてもおかしくない状態にしか見えないそうだ。

ブライヒレーダー辺境伯の代理人でもあるブランタークさんにも、ホーエンハイム枢機卿の孫娘であるエリーゼにも喧嘩を売っているのだから、俺もそれは感じていたのだが。

『（いくらヴェルが強力な魔法使いでも、暗殺の手段なんていくらでもある）』

口に入れる物に毒を入れたり、弓に致死性の毒を塗って狙撃でもされたら、僅かな矢傷でも俺は即死してしまう。

そして、それを行える能力がクルトにはあるのだと。

『（あの男、一見全領民に見放されているイメージを感じるけど、俺達にそんな事はわからない。どんなバカにでも、熱狂的な信者は存在するからな。お前の親父もまだ見捨てていないから、おかしな命令でも引き受ける部下がいるかもしれないし）』

前に少しだけエーリッヒ兄さんから聞いた事があるのだが、初期移民者の子孫である本村落の住民達であろうか？

彼らはかなり保守的な連中で、クルトの支持基盤になっているらしい。

俺の事も、長子継承の秩序を乱す反乱者くらいに考えている可能性があった。

『（だから、物を売って領民達に恩を売れ）』

もしクルトが何かを企んでも、それを邪魔してくれる可能性がある。

そういう領民達の目があると、クルト達の行動も制限されるという利点もあった。

『（あくまでも可能性だけど、その可能性は低くはない）』

エルは、あくまでも俺の警護担当者の立場として意見を述べていた。

『（どのみち、依頼を終えるまではこの領に関わらないと駄目だからな）』

今日は泊るし、魔の森での依頼が終われば遺品の選別のために数日は滞在しないといけないはず。

最後に、上納金を持参するのも俺達の仕事になるはずだ。

『（わかった。引き受けるよ）』

こうして俺達は、夕食までの短い時間ながらも、クラウスの依頼でバザーを開く事になるのであった。

「あなた」

「手伝えって事ですね。わかります」

「（ヘルマン兄さん、見事に尻に敷かれているな……）」

「（ヴェル。あの分家の男達は、基本みんなそうだから）」

こうして始まったバザーであったが、さすがに五人では人手が足りなかった。

戦力として当てにしていたブランタークさんは、気に入ったハチミツ酒を可能な限りマルレーネ義姉さんと交渉して購入すると、その足でどこかに出かけてしまったからだ。

そこで、ヘルマン兄さんと分家の婿さん達の出番となる。

悲しいかな、この世界における男尊女卑の枠から外れている彼らは、マルレーネ義姉さんからの命令で、本村落と残り二つの村落との間の広場でゴザを広げ、俺が魔法の袋から取り出した品物を並べ、持って来た木切れに値段を書く仕事をしていた。

子供達も、全員手伝っている。

バザーが始まれば、店番も手伝ってくれるそうだ。

こういう光景を見ていると、前世で子供の頃に、自治会の夏祭りで縁日の屋台を手伝った記憶が蘇ってくる。

今度、水飴でも作ってみようかと思ってしまうほどだ。

「事前の準備無しにしては、かなりの量だな」

「そこは、魔法の袋のせいですね」

何でも大量に仕舞えるので、とりあえず何でも大量に仕舞ってしまうからだ。

仕舞ってしまえば、とりあえずは部屋や倉庫が散らかるという状態は防げるわけで。

ヘルマン兄さんはその様子を、まるで手品師だなと感心しているようだ。

ゴザの上には、子供時代に大量に魔法で作った塩入りの壷が置かれ、これがメインなので１０ｋｇ入りを百個ほど置いている。

他にも、砂糖、マヨネーズなどの調味料、胡椒などのスパイス類、ラムやエールなどの酒類など。

マヨネーズは以前は自作していたのだが、面倒なので王都の商会にレシピと製法を売り払っていたのだ。

そのおかげで、その商会から定期的に贈ってくるようになっていた。

大ヒットしたのでよほど感謝しているらしく、毎月尋常ではない量を送って来るのには、正直辟易しているのだが。

他の貴族や商人達も、エリーゼの趣味がお菓子作りや裁縫であると知ると、製菓材料と道具に、裁縫道具やら大量の生地類をこちらに贈り。

俺やルイーゼが美味しいお菓子を買って食べるのが趣味であると知ると、様々なお菓子を贈って来る。

イーナが空いている時間に本を読むのが好きで、俺も同じだと知

ると様々な本を贈って寄こしと。

屋敷の倉庫がパンクしそうだったので、全部魔法の袋に入れていたのは幸いであった。

当然、それらの品々も少しずつ商品として並べていく。

「貰い物を売って良いのか？」

「もうお礼状も出して、お返しもしましたし。全部使うのは無理です」

特に、お菓子類は危険であった。

全部食べていたら、確実に痛風か糖尿病になるからだ。

最後に、俺が弓を嗜むと聞いて贈って来た大量の弓矢を並べて準備は終わる。

弓矢は狩猟用として需要が高いが、ここの領民は自作する人が多いので、王都の一流職人が作る弓矢の需要もあると思ったからだ。

他にも色々とあるが、あまりに多くて値札を付けるのが面倒なので適当に置いていた。

ある程度相場は知っているので、何とかなるはずだ。

売れる保障も無いが、別に売れなくてもバザーを開けばクラウスからの依頼は達成なのだから。

「これは、結構な品揃えで感謝いたします」

「ところで、父上との条件はちゃんと履行されるんだろうな？」

「はい。それは、確実に」

販売利益の二割を、税として収める。

これが、このバザーにおける俺達の義務であった。

つまり、利益が上がらなければ税を収める必要が無いのだ。

最初は、クルトが売上高の三割を収めろと言ってきたらしい。

やはり引き受けない方が良かったのだと、俺は少し後悔までしてしまうほどであった。

まさか、山道を往復三ヶ月かけてくる商隊から税を取るわけにもいかないので、俺達が商売をすると聞いてクルトがおかしな欲を出したのであろう。

当然、クラウスの説得で撤回させられていたが。

「どうせ、税金の計算も出来ない癖に……」

エルは先ほどチンピラ扱いされたので、クルトを決定的に嫌いになったようだ。

漢字が読めず、計算も出来ないクルトを、嫌味だけ得意な子供以下の存在だとバカにしていた。

「そこは、無事に交渉が成立したという事で。私、先ほどから全領内を回って宣伝して参りました」

だからなのであろう。

次第に領内中から、人々が家族連れで集まり始めていた。

「人数が、多くないですか？」

「緊急の仕事がある人以外は、全員がここに来るはずです。仕事が終われば、その人達も来るでしょう」

驚くイーナに、クラウスが答える。

ほぼ全員が、商隊以外から物など購入した事が無い人達なのだ。

全員、今日までに集めた金を持ち、目を輝かせながらこちらにやって来る。

「みんな、お金があるのかな？」

「無い事もないんですよ」

小麦や、薬草や、特殊な動物の素材などを売り、決められた量の塩や僅かな嗜好品のみを買える生活なので、外地の人達に比べると現金収入は少ないが、貯蓄が無いわけでもないのだ。

食べるのは、自給自足や領民同士の物々交換で済み。

あとは、たまに鍛冶屋から農機具などを買ったり、職人から基本的な生活用品を買うくらいで。

あまり、現金が必要な生活をしていなかったからだ。

「税と食べる分以外の麦を売って、何年もコツコツと貯めるのですよ」

「なるほど」

「ここは、そんな田舎なのですな」

クラウスは、ルイーゼに領民達の懐具合を説明していた。

「さて、そろそろ始めるか」

ようやく始まったバザーであったが、みんな飛び付くようにして品物を購入していく。

まず最初に、壷入りの塩を男達が纏めて複数購入し、次々と家へと運んで行く。

皆、領内で自給が出来ないので、万が一の事を考えて備蓄しようと懸命なようだ。

「そんなに、安くないんだけどなぁ」

現在塩は、ブライヒブルクでは一キロ五セントくらい。

日本円で五百円くらいで、ここ暫くは相場は変動していない。

王都は内陸部にあるので、一キロ八～十セントくらい。

前回の商隊は、領民達に一キロ八セントで販売したそうだ。

高いのか？

安いのか？

判断に悩むところであったが、輸送の手間を考えると完全に足が出る。

商隊が、ブライヒレーダー辺境伯からの支援で運営されているのも納得できるという物だ。

ちなみに、俺達は一キロ五セントで販売している。

ブライヒブルクにおける、標準的な塩の値段であった。

俺が海辺に瞬間移動で移動し、そこで魔法で精製した塩なのでコストは無料に近く。
利益率は、物凄く高かった。
本当はもっと安くしても良いのだが、それをするとクルトが五月蝿いので、他の物品の利益率を下げてなるべく安く売るように調整していたのだ。

「ヴェンデリン様、この白い物は？」

「砂糖だよ」

「砂糖って、黒いんじゃ？」

「精製してあるから」

南方の未開地で、野生のサトウキビを材料に砂糖を精製した時。
前世の癖で、真っ白になるまで精製してしまったのだ。

「お前、知らんのか？　真っ白な砂糖は、高級品なんだぞ」

「へえ、知らんかったな」

塩のおかげで、砂糖も値段を下げて売っていた。
これも、ブライヒブルクと同じで一キロ十セント。
王都だと、一キロ十五セントから二十セントくらいだ。

「おっかあと、ガキが喜びそうだな」

結構な値段なのに、砂糖も壷ごと飛ぶように売れていく。

他の調味料や、スパイスや酒なども、小量ずつ試しに購入しているようだ。

「綺麗な生地」

「素材は木綿ですけど、王都で流行の色に染めてありますから」

エリーゼ達が担当している、生活雑貨や日用品も良く売れているようだ。

安価なアクセサリーに、小物に、服の材料になる生地や、裁縫道具に調理器具など。

なぜにこんなに大量にとも思わなくもなかったが、大半が貰い物なのが恐ろしいところだ。

高価な贈り物は除いていたが、貴族でも商人でも実は安価な贈り物を大量に贈って寄越す事がある。

インパクトが強いからという面も否定しないが、実際には贈り相手が、雇っている使用人達に配ると予想して贈っているからだ。

当然、ローデリヒ達にも配っているが。

『お館様、拙者はこんなにお菓子は食べられないのですが……』

と、困惑している状態であった。

うちはまだ小所帯なのに、注目度の関係で贈り物が大量に集まっている弊害とも言えよう。

「思っていたよりも安いですね」

「生地の産地だと、このくらいのお値段ですから」

値段は、大体相場を知っているエリーゼが安目に付けていて、ほぼ仕入れ原価なので同じく飛ぶように売れていた。
購入者は女性ばかりで、みんな自分や家族の分の服を自作するからだ。
加えて、裁縫道具なども良く売れていた。

「（あれ？　塩は魔法で精製してほぼ無料。砂糖も同じ。残りの物も、ほぼ全て貰い物。それを、相場の値段で売ると？）」

正解は、ほぼ全額が利益という結果になってしまう。
経費は、贈り主へのお返しの費用くらいであろうか？

「お母さん、お菓子買って！」

「はいはい」

「私は、絵本が欲しい」

「聞いた事が無い話だな。買うか」

外地とさほど値段が違わない様々な品が、飛ぶように売れて行く。

売れ残っても構わないなどと言ったが、逆にまだ在庫はあるかと聞かれ、魔法の袋から追加で取り出しているくらいだ。

「エベンス、その弓矢のセットを買うのか？」

「当たり前だ。やっぱり、プロの職人が作った品だな。自作だと限度があるわ。インゴルフはどうするんだ？」

「当然、買いだ。これで、ホロホロ鳥を毎日狩るんだ」

「無理じゃないのか？　主に、腕の問題で」

「五月蝿いわ！　お前だって、俺と大して腕前なんて変わらないだろうが！」

領内の猟師達は、こぞって王都の職人が作った弓矢を購入しているようだ。

領内にも鍛冶屋や職人はいるのだが、鍛冶屋は釘や包丁や農機具などをメインに作る程度。

職人も、普段の生活必需品に、剣や鎧の修理が精々で。

弓矢も自作していたが、やはり王都やブライヒブルクの一流の職人達に比べると腕は落ちる。

これが現実であったのだ。

「（この領内の職人は、悪い意味で独占企業だからな）」

競争相手がいないので、出来が悪くても売れてしまうのが良くないようだ。

外部から、新しい技術が入り難いという点も大きかった。

「いやあ、大盛況ですな」

何を出しても次々と売れていく情況に、クラウスも笑みを浮かべていた。

毎回こんなに売れるはずもないが、初めてこんなに色々な物が買えるという情況に、領民達のサイフの紐も緩んでいるのであろう。

「最初だからだな」

「そうですな。次回からは、もう少し小商いになるでしょうが。ところで……」

続けてクラウスは、商品と領民達が持参する換金物との物々交換や、買い取りの要請までしてくる。

彼の魂胆はわかる。

このまま俺達だけが物を売っても、それは領内からの財貨の流失しか招かない。

俺達が、商隊では輸送コストの関係で断られた品を買い取るようになれば、それは経済の循環を生む。

領民達も、自分達で何か現金になる産物を探し始めるはずだ。

「ヘルマン様、分家ですとハチミツ酒は売れると思いますよ」

あの酒に五月蝿いブランタークさんが気に入った物なので、ブランド化すれば結構な値段で売れるはずだと。

確かに、俺もそうは思っていた。

というか、クラウスは商売にも詳しいようだ。

内心はともかく、この男は優秀だと認めざるを得ない。

「マルレーネが喜びそうだな」

代々従士長を務める分家なので、やはり現金の貯えは欲しいところだ。

それが自家製のハチミツ酒で得られるのであれば、本家よりも有

利に金を貯められる。

そんなところであろうか？

「クルトから、税金を請求されたりして」

「まさか、家臣から税金を取るなんて話、聞いた事が無いですよ」

とは言ったが、まるで否定できないのが恐ろしい話でもあった。

ヘルマン兄さんも、あのクルトならやりかねないと思っているのであろう。

「さすがに、それはお諫めいたしますけど」

乾いた笑顔を浮かべながらそんな事を言うクラウスを見て、俺は、『クルトは、クラウスに相当舐められているんだろうな』と感じてしまう。

だが、全く同情はしていない。

次期当主が名主に舐められるなんて、ただの愚か者でしかないからだ。

「そろそろ夕食の時間だから、終わりにするか」

だが、結局暗くなるまで領民達はバザーの会場から離れず、それから二時間あまりも商売に勤しむ事になってしまうのであった。

「凄え売り上げだな」

「その凄え売り上げを上げるために、みんな大忙しだったんですけどね。ところで、ブランタークさんは何処に？」

「軽く、散歩」

「まあ、良いですけどね」

分家での夕食後、俺達は今日泊る部屋で今日の売り上げをカウントする作業を行っていた。

部屋割りは、男性部屋と女性部屋で三人ずつであったが、今は勘定のために全員が男性部屋に集合している。

「あーーーん、銅貨が多い」

「ルイーゼ、地道に数えなさい」

真面目なイーナはこの手の作業をあまり苦としないが、ルイーゼは生来の性格上、この手の作業に苦痛しか感じなかった。

能力は十分にあるのだが、根気が長続きしないのだ。

「ブライヒブルクの商業ギルドで数えて貰わない？」

「それをすると、手間賃を取られるでしょう」

この世界には、大量の財貨を数える機械などない。

なので、商業ギルドに持っていけば、手間賃を取られるのが普通であった。

数える人間には人件費がかかるのだから、当然なのだ。

「エリーゼは、静かに数えているでしょう」

「こういう分野でも、完璧超人なのか」

エリーゼは、静かに銅貨を十枚ずつ纏めて置く作業を繰り返していた。

「たまに、こういう地味な作業に没頭すると落ち着きますよ」

「ボクは、落ち着かないから。『あーーーっ！』ってなる」

「せっかく数えた銅貨をぶちまけないでね」

「しないよ。責任取らされて、一人で数え直す羽目になるし」

勿論、男性陣もチマチマと銅貨を数える作業に没頭していた。

やはり領民達が支払った物なので、大半は銅貨や銅板となっている。

ここ数年、感覚がおかしくなっていたのだが、そう簡単に金貨など流通しないものなのだ。

「ブランタークさん、手元が狂いません？」

「大丈夫だ」

ブランタークさんは、昼間に購入したハチミツ酒をチビチビとやりながら銅貨を数えている。

だが意外にも、手元は狂っていないようだ。

「それで、クルトはどうでした？」

「大人しくしてたよ」

俺達の付き添い役兼護衛も兼ねたブランタークさんが、バザー中に姿を見せなかった理由。

それは、クルトの動きを監視していたからだ。

「途中で、変な連中が何か言い付けに来たけど」

多分、本村落出身で変化を嫌う連中に、バザーで売っていた品から鍛冶屋や職人達が来たのかもしれない。

「鍛冶屋に職人？」

「腕が悪いから、外部から品物が入るとピンチですからね」

井の中の蛙で、独占企業である事に胡坐をかいてきたのだから当然であろう。

俺も、初めてブライヒブルクの職人街で商品を見た時に、実家の屋敷に置いてある生活用品とのレベルの違いに驚いたものだ。

その代わりに、ある程度は作れる物の幅が広いわけだが。

何でも作れるというわけでもなく、品質の悪さを補強する利点にはあまりなっていなかったようだ。

なぜ、全く期待していなかった生活雑貨などが飛ぶように売れたのかが、良くわかるという物だ。

「ふぅ……。計算が終わった……」

ようやく売り上げの計算が終わったが、その額はとんでもない事になっていた。

「八十一万二千五百六十七セントかぁ……」

日本円にして、八千万円以上である。

とても、バザーの売り上げとは思えなかった。

「何で、こんな売り上げになるんだ？」

「領民がほぼ全員参加したとして、売り上げ単価は子供も含めて一人頭千セント以上か……」

あまりの額にエルは首を捻っていたが、別段おかしい事ではない。

確かに、この村の平均現金収入は少ない。

だが、逆に使う機会も少ないので、彼らは現金を貯め込んではいた。

長い家だと、数十年単位でコツコツと金を貯めていたはずだ。

「一人頭千セントで、四人家族として平均四千セントの買い物。しかも、商隊以外から初めて自由に買い物できたわけだ」

当然、サイフの紐も緩むというわけだ。

臨時のバザーなので、二度と手に入らないかもという心理も影響していたのであろう。

「別に、貧しくないじゃん」

「いや、貧しいな」

余剰の麦や、森で採取可能な一部の産物を商隊に売らないと現金収入が無いのだ。
塩を買う以外に、ほとんど使い道が無いので貯まってはいるが、使う機会が存在しない。
社会が、極めて原始的な部分で止まっているとも言える。

「さっき、この家の子供達にお駄賃を渡そうとしたよな」

バザーを手伝ってくれたので、そのお礼にお駄賃を渡そうとしたのだが、予想外の結果になってしまう。

「そういえば、現金を渡したらキョトンだったな」

ブライヒブルクの子供達なら、喜んで商業街に何かを買いに行くはずだ。
ところが、この領地の子供達はそれが出来ない。
お金を渡しても使えないから、全然ありがたがらないのだ。
結局、お菓子や玩具などの現物支給で渡す羽目になっていた。

「何か、予想以上に深刻じゃないか？」

「ああ」

エルの言う通りで、ただ貧しいとかそういうレベルを逸脱しているのだ。
自分の実家も田舎で貧しいが、ここまで外の世界と隔絶しているわけでもないので、そう感じてしまうのであろう。

父もクルトも、貴族は万が一の事を考えて金を貯めるという行為を実践している。
領民達も、使わないお金は律儀に貯めている。
でなければ、今日のように買い物など出来るはずはなかった。

「貨幣経済を理解していないわけでもないし、塩などは買っているので買い物はする。相場とかも、普通に気にしている」

俺達が並べた商品の値段を見て、輸送費分高くなっていない事に気が付いていた。
それなのに、彼らはヘルムート王国の経済の輪に入れていないのだ。

「お金が循環していないのが致命的か」

商隊が来ないと、領内での僅かなお金のやり取りだけ。
今日だって、俺に一方的にお金を支払っただけだ。

多分、父やクルトはこの現実に違和感を感じていない。
領主なのにと言いたくなるが、生まれた頃からこうなので仕方が無いとも言える。

領民達は、その不満を不便さという物で感じている。
だが、それを理由に、父からクルトへの継承にケチを付けるまでには行っていない。

遠征の件はあるが、別に飢えているわけでもないからだ。

「むしろ、内部の人間なのに。それに気が付いているクラウスさんが……」

「そうですね。私がどこかおかしいのでしょうね。このバウマイスター領の常識でいいますと」

「クラウスか」

エリーゼの発言に呼応するように入って来たクラウスであったが、その表情には先ほどと同じく乾いた笑みが浮かんでいるのであった。

「私はね。若い頃に、買い出しや従軍で外に出た事があるんです」

いきなり入って来たので驚いてしまったが、別に物凄く都合の悪い密談でもしていたわけではない。

更に、普段は怪しさ一杯のクラウスが話を始めたので、みんな静かに聞き入ってしまう。

俺は、実家にいた頃にあまり領内の人と話をした経験がなかった。

一番話をしたのがエーリッヒ兄さんで、次がアマーリエ義姉さんであった部分でお察しであろう。

領民達となんて、精々狩りの成果を大豆を交換した時に少し話をしたくらいであった。

正直、今日初めて物を売りながら彼らの生活を少し実感したほどだ。

以前の俺は、知識としては知っていたが、ただそれだけの状態とも言えたのだから。

「従軍？　ここからか？」

「あれは、たまたまなんでしょうね」

今から四十年以上も前。

まだクラウスが、二十歳くらいの頃であったそうだ。

「私は、実は次男でしてね。名主の仕事は兄貴が継ぐから、お前は体を動かせと言われまして」

同じ農家や職人の次男や三男と共に、荷台に売れる領内の産物を載せ、山道をひたすら歩いてブライヒブルクへと移動。

向こうで産物を売り捌き、その金で塩を購入してまた荷台に載せ、また山道を歩いてバウマイスター領まで戻る。

そんな生活サイクルを、年に三回もしていたそうだ。

「あの山道で馬車なんて使えません。どのみち、馬を引くと飛竜や狼を呼び寄せますしね。十代半ばから二十代前半で領内に居たのは四分の一くらいです。居ても、休みどころか農作業で扱き使われるんですけど」

次男なので、領内では使い捨て扱い。

ブライヒブルクに苦労して到着しても、この領内で金に出来る産物は少ない。

おかげで、塩をなるべく多く荷駄に積むために苦労の連続だった

そうだ。

「昔は、領の外れにある赤石まで積んで持って行きました」

「あの低品質の鉄鉱石をか？」

赤石の存在は、俺も知っている。

要するに、鉄の成分が錆びて赤くなっている鉄鉱石の事だ。

余分に炭を使って還元しないと駄目なので、大した値で売れない物であった。

「買い叩かれましたね。それでも、私達の体力だけで金になりましたし」

とにかく夢も希望も無い、絶望しかない生活だったそうだ。

何で、こんな場所に生まれてしまったのかと。

「みんなで、ブライヒブルクに到着したら逃げようって良く相談していましたね。実際には、逃げ出さなかったんですけど」

どうしても家族の顔が浮かんでしまい、出来なかったそうだ。

「山道の途中で、死んでしまうのがいましたね。狼に襲われて、その傷から破傷風になってしまったり。足を踏み外して、大怪我をしたり。治療しても助からないから、遺髪だけ取って置いて行くんです。すると、そいつが頼むんです。殺して行ってくれと。私が止めを刺しました。そいつは、感謝していましたよ。自分を殺す私にです。ああ、話が逸れましたね……」

ちょうどブライヒブルクで塩の調達をしていた時に、突然ブライ

ヒレーダー辺境伯家の遣いが来たそうだ。

「東部との境界で、寄り子達が揉めているという恒例行事ですね。うちが従軍した試しは無いんですけど、先々代が『一度くらいは』と以前から言っていまして」

それを知っていた先々代のブライヒレーダー辺境伯が、ちょうどクラウス達が街に居たので、彼らで良かろうと声をかけたそうだ。

名主の息子で一番身分が高かったクラウスを臨時の従士長とし、合計六名のバウマイスター諸侯軍がハリボテのように誕生したそうだ。

「剣も槍も鎧も、全部借り物です。馬も食料もね」

その馬も、農耕馬の扱いならともかく、騎乗可能なのはクラウスだけ。

どうせ一頭しかレンタルされなかったので、クラウスが騎乗したそうだが。

「ブライヒレーダー辺境伯様としては、バウマイスター諸侯軍が参陣した事実のみが重要だったのでしょう」

言われるままに東部との境界に移動し、向こうの軍勢と対峙した。

だが、所詮は小領主同士の猫の額ほどの土地の争いや、森で取れる山菜や薪の分配率の争いである。

真面目に衝突すれば、足が出てしまう。

死者や怪我人に、領主が見舞い金を出すのが普通だからだ。

「『この利権は俺の物だ！』とアピールするのが目的ですからね。

逆に何もしないと、向こうの主張を全面的に認めた事になるわけでして」

何もしないわけにはいかないが、実際に衝突するのも勘弁して欲しい。

色々と面倒な事情があるようだ。

それと、アピール合戦が盛り上がると、たまに衝突なども発生する。

「死人を出さないように、訓練用の武器で馬から落したら勝ちとかですね」

それでも、たまに死人は発生するようであったが。

「ですが人間ですので、たまに感情が沸騰して本格的な衝突になる事もあるのです」

原因は結局不明であったが、クラウスが参軍した時には本格的な衝突が発生してしまったらしい。

「双方、総大将が懸命に止めたんですけどね。それでも、百人ほどは死にましたか」

クラウスは、迫り来る敵の軍勢に向けて全力で槍を突き出したそうだ。

緊張し過ぎて、あとは何をしていたのか今でも思い出せないそうだが。

「名主の次男なんで、一応訓練はしていましてね。果たして、実際の戦争で何ほど役に立つのか不明でしたけど」

それでも、数名を討ち倒してブライヒレーダー辺境伯から感状と褒美を貰ったそうだ。
自分は覚えていなかったが、ブライヒレーダー諸侯軍の偉い人が目撃していたらしい。

「一応、褒賞の対象になったわけです」

戦闘の拡大は困るが、実際に戦果を挙げた者は賞賛して褒美を出すのが、貴族としては当然。
討ち倒したとは言っても、彼らが死んだのかは不明だとしてもだ。
むしろ、死んでいない方が良かったりするらしい。

「貰った褒美で、塩を増やして少し他の土産も増やしました。ですが……」

領地に戻ると、クラウスは先々代の当主や父や兄から叱責されたらしい。

「原因は、私が目立ち過ぎたからですね。こちらは命がけだったのに、酷い言い方ですよ」

田舎の保守的な領地なので、出る杭は打たれるという実例とも言えた。
いつもよりも塩を多め持ち帰ったのに、そんな叱責を受けて堪らなかったそうだ。

「そんな事があっても、生活はそうは変わりません。数年後に、兄が病死するまでは……」

その長男には子が無く、急遽次男のクラウスが呼び戻されて名主を継いだそうだ。
父親も、同じ病気で今にも死にそうであったからだ。

「名主なんてという想いと、もう苦しい思いをして荷駄を引かなくても良いのだという想いと。複雑でしたね」

同時に仲間達の中で、自分だけがあの境遇から抜け出せる事への罪悪感と。

それでも、名主になった自分には何か出来る事があるはず。
時間はかかったが、まずは領内に定期的に商隊に来て貰えるようにと奔走したそうだ。

「先々代には、『荷駄を引く連中に任せれば良かろう』で取り合って貰えませんでした。先代になってようやくですよ」

年に二回、定期的に商隊が来るようになって塩を買いに行く苦労から開放された。
その時に、嬉しそうにしていた領民達の顔を忘れられないのだそうだ。

「先々代からすれば、私達は喋る荷駄馬程度の存在だったのでしょうね」

先代は、もう少し物分りが良かった。
というよりも、自分達で塩を運び込んでいると、どうしても村の人口が四百人から増えなかったので、常識があればそう判断する。

そういう事のようだ。

か細いながらも、何とか定期的に商隊が来るようになり、クラウスは名主としての仕事に集中できるようになった。
徐々に人口が増え、それに比例して畑も広がっていく。

「ささやかな発展ですが、それでも未来はあったのです」

だが、ここでクラウスをある不幸が襲ったようだ。

「ヴェンデリン様は知ってしましたか？　レイラには、昔婚約者がいた事を。その兄で、私の跡取り息子が居た事を」

その日の事は、今でも良く覚えているそうだ。
父の命令で、レイラの婚約者である青年と、クラウスの跡取りである息子は狩猟のお供をしたそうだ。

「二人は、幼馴染で同じ歳で親しかった。協力して、この家を支えてくれると思っていた」

そこで、不可解な事件が発生する。
危険なので領民なら誰も行かない崖から、その二人が転落して死んだと言うのだ。

「アルトゥル様は、獲物を追って二人が崖から落ちたと」

「……」

正直なところ、本当にそんな事件があったのか疑わしいくらいだ。
だが、それを証明する人物が現れる。

「俺は覚えている。当時、八歳だったからな」

「ヘルマン兄さん」

今度は、ヘルマン兄さんが部屋に入って来る。
そして、その事件は本当にあったのだと証明していた。

「ヘルマン兄さん、その事件って……」

「親父は、事故だと口を酸っぱくするほど言っていたな。領内でも緘口令を敷いていた」

その緘口令の意味がわからない。
都合の悪い真相があるので、外野は黙っていろと言う事なのか？
それとも純粋に、こんな狭い田舎で噂が先行して騒動になるのもと言う事なのか？

「ヴェルが生まれる頃には、口にするのもタブーになっていたんだよ。内心思う事もあるが、領主である親父の言う事だからな……」

「……」

あまりに怪し過ぎる話に、ブランタークさんですら黙ってしまったほどだ。

「それで、真相は？」

「調べましたけどね。答えには、辿り着きませんでした」

そのクラウスが行った極秘調査で判明した事は、実は狩猟で森に

入った父達三人に続き、なぜか本村落の連中が数名、あとを追うように森に入って行ったという事。

「彼らは森に採集に入ったので、アルトゥル様達とは合流しなかったそうです。息子達が崖から落ちて、アルトゥル様から救援を求める声を聞くまでは」

「坊主は、どう思う？」

「二人同時なのが怪しいですね」

レイラの婚約者のみか、クラウスの息子のみか。
一人だけなら、純粋な事故という可能性が強くなるような気がするのだ。

だが、それだと父の利益にならない。
二人同時に死なないと駄目なのだ。
そして、それは現実の物となった。

疑わしきは、最大の利益享受者というやつである。

「クラウスは、父を疑っているのか？」

「疑っています」

クラウスが、ハッキリと父を疑っていると発言したので、俺達は絶句してしまう。
今までのクラウスは、何か企みながらもどこか自分を安全圏に置く男であったからだ。

それなのに、今は堂々と父を非難しているのだから。
俺達から、父に漏れるリスクまで犯して。

「アルトゥル様は、レイラの婚約者の葬儀が終わると私を呼んでこう言いました」

『レイラを、妾として寄越すように。私が頼んだのを妻や周囲に知られると面倒なので、クラウスが差し出した事にしてくれ』とね。

クラウスは、泣く泣く父の言う通りにしたそうだ。
結果、他の村落の名主達から、『娘を差し出して、徴税業務の一切を取り仕切るようになった汚い奴』という評価を受けるようになったそうだが。

「いや、だが父は……」

「こう言っては何ですが、アルトゥル様の女好きは病気ですから」

「知らなかった……」

本村落の主である自分が、他の村落の名主達に嫌われている理由。
それは、他にも手を出している女性がいて、その後始末をクラウスが行っていたからだ。

「他の村落の名主達とて、口は噤むのが当然でしょう。好き好んで、私の息子やレイラの婚約者のようになりたくはない。結果、後始末の交渉に来た私を嫌う事で精神の均衡を保つ。理解できるから、勝手に嫌われていますが」

中には、妊娠してしまった女性も多いそうだ。

当然、その子は継承問題をややこしくする可能性がある。
幸い、主に手を出していたのは人妻ばかりで、生まれた子は次男以下が多く。

適当な理由を付けて、全員を領外に出してしまったそうだが。

「レイラの件は、あれは村内でも美人で有名でしたからな。さぞや欲しかったのでしょう。同時に、あの方は貴族ですからね。私の息子と。息子が死んでも、レイラの婿がいれば私の家に自分の子を送り込めないと考えた。さて、どちらの判断が先に出たのか？」

クラウスの娘を妾にして子を生ませ、その子に名主の家を継がせてバウマイスター家の地盤を強化する。
策としては理解できるが、そのためにわざわざ二人も罪の無い若者を殺す事はないはずだ。

「あの父に、そこまでする度胸があるのか？」

「クルト様の継承に拘って、領内の安定に寄与する。そういう冷静な部分と、好みの女性がいると手を出さずにはいられない。そういう獣も飼っているのです。あの方は」

信じ難い話ではあったが、実は否定する証拠を俺は持ち合わせていなかった。
うちは貧乏子沢山であったし、俺は母が四十歳近くになって生まれた子だ。
それと父の行動であったが、俺は全く把握していなかった。
俺は、昼間は森や未開地に出かけてしまっていたし、夜は自分の部屋に篭っていたから、父が仕事以外で日中や夜中に何をしているのかなど全く知らなかったからだ。

「だから、憎んでいると？　決定的な証拠も無しにか？」

「私とて、感情に左右される人間ですから。私は、アルトゥル様が有罪だと信じているのです」

「だから、バウマイスター家の力を殺いだと？」

「はい」

ヘルマン兄さんの件も、エーリッヒ兄さんの件も。
長男であるクルト継承に波紋は投げかけた。
だが、決定的な衝突があったわけではない。

ヘルマン兄さんは、父が分家に婿に出した。
エーリッヒ兄さんも、彼自身が危険に気が付いて家を出た。
他の兄達も、一人も家臣にならずに家を出ている。

残ったヘルマン兄さんが婿入りした分家は、元から反本家を隠そうともしない家で、ヘルマン兄さん自身もそれに同調している。

結果、残ったのは微妙なクルトのみという事になる。
だが、彼は長男なので、誰もおかしいとは思わないのだ。

「クラウス。お前、ヘルマン兄さんの前でそれを言うのか？」

「悪いとは思っています。ですが、あのまま実家に残って良い事がありましたか？」

「いや、無いな」

クルトに子供が生まれるまで、結婚も出来ずに予備の部屋住み生活。

それが終わっても、薄給で扱き使われるだけであろう。

「クラウス、俺が我慢できなくなって領地から出る可能性も考慮済みか」

「はい」

「うーーーん。それはそれで、気楽で良かったかも」

「ヘルマン兄さん……」

「嘘だよ。この家は、マルレーネ姉御が取り仕切っているけどな。二人きりになると、結構甘えてきて可愛いんだぜ」

「いや、そんなノロケを聞かされても……」

マルレーネ義姉さんには、俗に言うツンデレ属性があるようだ。

「エーリッヒ兄さんの件もだ。なぜ、エーリッヒ兄さんまで危険に曝す！」

「それについても、申し訳ないとしか。ですが、あの方も外に出た方が良かったのでは？」

確かに、クルトにエーリッヒ兄さんを家臣として使いこなす度量が無いのも事実だ。

次第に、エーリッヒ兄さんが頭角を現して領民達に慕われるよう

になると、またクラウスの息子達のような事件が起きないとは、少なくとも俺には保障できなかった。

「アルトゥル様なら使えるでしょうが、あの方には時間が無い。年齢が年齢ですし」

父の死後にクルトが跡を継げば、結局エーリッヒ兄さんの危険度は同じという事だ。

「ほう、恨み骨髄の現当主様をえらく評価するな」

「人格と、領主としての才能は別でしょう。アルトゥル様は、先代よりも少し劣るくらいですかね？　女癖のせいで、総合点はもう少し低いですか」

ブランタークさんの半分嫌味の篭った発言に、クラウスは更に毒まで込めて反撃していた。

己の主人に採点など、下手をすれば大問題なのだから。

「ちなみに、あのアンポンタン次期領主はどうなんだ？」

「ブランターク様、私は木の幹の評価をしているのです。あんな、小汚い枯れた葉の付いた枝の評価なんてしませんので」

「言うな、あんた。しかも、反論の余地すらない」

ブランタークさんも、クラウスも。

クルトは、領主として論ずる以前の人間らしい。

「これ以上は、聞くに耐えんな。それで、なぜ俺に全てを話す？」

「決まっております。ヴェンデリン様が領主になり、未開地の開発も含めて行えば良い」

やはりクラウスは、俺にこの領地を継いで欲しいようだ。

「俺は、別家の当主なんだがな」

「そんな建て前、王都におわす陛下や大貴族様達が気にするでしょうか？」

「するだろう」

その気になれば強引に事を進めそうだが、ここは意地でも認めたくなかったのだ。

「ヴェンデリン様がそう仰るのであれば、そうなのでしょう。と言う事にしておきます」

「それに、俺はあの父の息子だ」

クラウスの言う父の所業が事実なのかは知らなかったが、少なくともクラウスはそう思っているわけで。

そのせいで憎んでいる父の息子である俺に、何を期待しているのかと思ってしまうのだ。

「親の罪は、子には及びませんので。それに、ヴェンデリン様はもう別家の当主様です」

クラウスの口調から、次第に彼の真意が理解できた。

彼はこの領地が発展さえすれば、そこの領主がバウマイスター騎士爵家で無くても構わないのであろう。
いや、むしろ違う方が望ましいのだと。

そしてそのために、長期間あんなまどろっこしい策で父やクルトを翻弄して来た。
それが、クラウスという男の行動原理であったのだ。

「あの、大怪我をしたヨーナスの首をナイフで切り裂いた時から、私は喋る荷駄馬以下の存在になりました。従軍後の叱責や、レイラの婚約者や息子の件で。バウマイスター家の当主も、扱い的には同じ気持ちですね。ただ、名主としての義務で私は動いています。ですから、ヴェンデリン様がアルトゥル様にこの件を告げ口しても構いませんよ。私は、恨みません。なぜから、私は喋る荷駄馬以下の存在ですから」

その言葉を最後に、クラウスは自宅へと戻っていく。
あとには、どう判断して良いものかわからない俺達が残されていた。

「事実なら、嫌な話だな」

「ヘルマン兄さん」

「知らん！　親父の悪癖の話なんて、今知ったんだから」

というか、良く今まで子供達に隠し通せたものだ。
それだけ、後処理を任されていたクラウスが優秀であったという事なのだろうか？

俺の場合は、父の行動に興味など無かったので気が付かなかったのも当然なのだが。

「事実なのでしょうか？」

「オフクロは知っているのかな？」

「知っていても、俺達に話せる内容じゃないですよね？」

特に、未成年前であった俺には絶対に言えなかったはずだ。

それよりも、クルトの嫁であるアマーリエ義姉さんに手でも出していないかと心配になってしまう。

あの子供達も、実は父親が父なのではないと。

考えれば考えるほど、ドツボに嵌るという奴だ。

「ヘルマン兄さん、クルトは気が付いては……」

「あのエーリッヒですら気が付いていないんだぞ。クルト兄貴には無理だろう」

確かに、クルトにそんな機微を期待するだけ無駄であろう。

「とにかく、明日はさっさと魔の森で浄化して戻って来ますから」

「頼む。肝心のクルト兄貴がまるで頼りにならないどころか、足を引っ張りかねん」

「あとは、クラウスですか……」

あそこまで暴露したクラウスが、父と刺し違える可能性だってあるのだ。

それを考えると、俺も早く戻って来る必要があるであろう。

好むと好まざると、俺達はもう巻き込まれているのだから。

「最悪、ヘルマン兄さんは生き残らないと」

「当然だ。もしクラウスが暴走しても、まず親父達まで手が回らん。そもそもうちが、本家のために手助けなんてしない。親父の悪行が事実なら、自分で何とかして貰わないと」

俺とて、今の時点で父やクルトを助ける気持ちが全く沸いてこなかった。

最悪、母や、アマーリエ義姉さんとその子供達だけでも助けないととしか考えられなかったのだ。

「もう寝ます」

「十分に寝て、依頼を失敗しないでくれよ。絶対に戻って来てくれ」

「わかりました」

クルトとの確執に、急遽行ったバザーに、クラウスからの衝撃の告白と。

ようやく長い一日が終わり、俺達はそのまま泥のように眠ってしまうのであった。

明日からの、不確定な危険に備えるために。

第四十八話　依頼達成と、バウマイスター家の混乱。

「坊主の兄貴、開き直ったら暴言の嵐だな」

「まあ、引き篭もっているので、それが強みでもありますし……」

「それにしても、酷過ぎだ！」

翌日の早朝、色々な事があってお腹一杯のバウマイスター領から、俺達は瞬間移動魔法で未開地にある魔の森へと飛んでいた。

俺は幼少の頃から、広大な未開地の探索を魔法の訓練と平行して行っている。

おかげで、未開地のほぼ全ての場所に、瞬間移動で移動可能になっていた。

当時はまだ未成年だったのと、一人で魔の森に入って万が一の事があったら大変なので森の中には入っていなかったが、その周囲のポイントは全て把握済みとなっている。

例の遠征軍の侵入ルートも、大分前から把握はしていた。

さすがに、当時遠征軍が切り開いた木々や下草などは、その旺盛な繁殖力によって既に回復している。

だがその地点は、大軍でも何とか侵入可能にはなっていた。

侵入後の生命の保証は、遠征軍の最後を見ればわかると思うが、全く出来なかったのだが。

「元々、社交界に出る気すらない。寄り親はいるけど、付き合いに顔すら出さない」

十二歳になり、ブライヒブルクの冒険者予備校に通い始めた俺がその代理をしていたのだから、よほどの引き篭もり体質だと世間からは思われているようだ。

まさか、ブライヒレーダー辺境伯家の園遊会に初めて出席したバウマイスター家の人間が俺だとは。

うちの実家だからこそ出来る快挙とも言えたのだ。

ただ、何かパーティーがあると言われても、会場に到着するのに山脈越えで一ヶ月以上もかかるので、それはある意味仕方が無いとも言えた。

俺のように、瞬間移動の魔法が使える者は貴重なのだ。

多分、その点も含めて名主のクラウスなどは、俺に当主になって貰いたいのであろう。

「もう頭に来た！　あのバカを次期当主にしたくねえ！　お館様に言って、坊主に挿げ替えてやる！」

「そんな、ブランタークさん。俺は、嫌ですからね」

俺は、侵入予定地点から内部を探知魔法で探索しながら、ブランタークさんの暴言に反論する。

そんな事をしたら、クラウスは大喜びであろうが、クルトが暴発しかねない。

彼には、超保守主義である本村落優位主義者達という支持基盤も

あるので、最悪武器を取って抵抗しかねないからだ。
立て篭もるくらいならまだマシであろうが、クラウスや他の村落の人達と衝突でもされたら、死人が出てしまう可能性がある。

そんな犠牲はゴメンであり、俺はあんな領地は継ぎたくないと断言する。
というか、いくら魔法が使えても、領地の経営には色々なノウハウが必要なのだ。
更には、多くの人材も必要となる。

全て、新興法衣貴族で小所帯の俺が持っていないものであった。

「しかしだな。下手をすると、もう事態は動いている可能性があるんだぞ」

おかげで、二千体ものアンデッド浄化という大仕事なのに、実家の情勢の方が気になってしまうのだ。

しかも、それは俺だけではない。
全員が、全く同じ気持ちなのだから。

「分家に被害が出ないで欲しいよな。ハチミツ酒的に」

「どれだけ、気に入ったんですか……」

酒好き過ぎるブランタークさんの発言にエルは呆れていたが、確かにアレは美味しい物であった。
この世界では十五歳でほぼ成人なので、昨晩俺達も味見させて貰ったのだが。
甘みと酸味のバランスが良く、つい飲み過ぎてしまうほどなのだ。

「あの領地は、ヘルマン殿に任せれば良いんだよ」

「そんな、暴論を……」

ブランタークさんに言わせると、バウマイスター騎士爵領は強制隠居で父やクルトを押し込め。

ヘルマン兄さんに任せた方が、よっぽど建設的に話が進むのだそうだ。

「建前上は、坊主の親父と長男の体制を崩すのは良くないよな」

何しろ、ここ二百年以上戦争が無いのだ。

出来れば、順繰りに長男に継がせた方が安定はするはず。

「クルトのアンポンタンは、まだ完全に破綻はしていないからな。だから、性質が悪い」

俺達やブライヒレーダー辺境伯とは揉めたが、内部でまだ決定的な騒動が発生したわけではない。

中央からすれば、何か起こった方が介入はし易いという事のようだ。

「介入ですか？」

というか、やっぱり介入する気は満々のようだ。

未開地とセットで開発するために、クルトは邪魔だと思われているのであろう。

開発資金にしても、俺が十分に持っているわけだし。

いきなり王家から、父の強制隠居とクルトの廃嫡を命じるのは、他の小領主達への動揺が大きくなる。
出来れば、介入の理由となる何かが起こって欲しいのであろう。
それも、出来るだけ早くにだ。
「あり得るのは……」
まずは、父やクルトに悲観した領民達が決起する事。
本村落以外の領民有志という可能性は低いが、クラウス達かもしれないし、分家かもしれない。
いや、そのどれが蜂起しても、他の二つが呼応する可能性があった。
死人が出るような展開は無いようにと願いたいので、せめて大多数で決起して、父達に強制隠居を迫るという流れになって欲しい物だとブランタークさんは語る。
次にありそうなのは、その可能性を考慮したクルト達が反対派の弾圧に走る事。
これは、下手をすると多数の犠牲者が出る可能性がある。
「嫌な話だが、後者の方が王国には都合が良いんだよ。うちのお館様もそうだな」
理由は、クルトと父に責任を取らせて、最低でも爵位と領地を剥奪できるからだ。
未開地を含めた領地を俺に任せるにしても、前任者の臭いを出来るだけ取り払った方が後々楽であると。

王都で中央に居るような貴族達は、そのように考えるらしい。

「二人を悪党にした方が、坊主への期待度で後々やり易いわけだ」

「あの連中、軽く考えやがって」

と言うよりも、距離感の問題なのかもしれない。

王都の貴族達からすれば、バウマイスター領は人口が千人以下の小さな領地でしかない。

内乱になっても、書類上は大した死傷者など出ないわけで。

ならば、さっさとクルトには消えて欲しいのだと。

ところが俺達は、クラウスの誘導で実際に領民達と接してしまっている。

こうなると、彼らが死傷するような事態は避けたいと願ってしまうのだ。

「ヘルマン兄さんに継がせて、領地もある程度余裕を残す」

開発の糊代をある程度残し、そこの開発を援助する。

上手く開発すれば、男爵くらいにはなれるようにだ。

「そんな所だな。それで、残りの未開地は坊主の担当だ」

「こうなるのは、避けたかったんだけどなぁ……」

あれだけの土地を開発するとなれば、下手をすると一生かかっても終わらない。

領主としての仕事で、縛られてしまう可能性があるのだ。

そう考えると、憂鬱ではある。

「あの、ヴェンデリン様」

「何だい？　エリーゼ」

「何も今から、無理に領主の仕事に没頭する必要もないのでは？」

「それは、どういう？」

エリーゼに言わせると、いくら俺が強力な魔法使いでも、成人直後の十五歳の若造が陣頭に立って、領地を一から開発する必要は無いと言うのだ。

「領地と資金は、１００％ヴェンデリン様の物です。人手に関しては、御爺様達が勝手に集めてくれると思いますよ」

「こう言うとエリーゼに悪いかもしれないけど、利権争いで開発進まずという事にならないか？」

あの莫大で実感の無い金を預けて、完全に委任してしまっても構わないのだが。

そのせいで、汚職に走ってでも利益を得ようとするバカな貴族やその係累が出ると、後に面倒な事になりそうであった。

妙な争いばかり増えて、未開地の開発は進まずでは、俺が領主になったり金を出す意味が無いばかりか。

最悪、戦犯扱いされかねなかった。

「ゼロとは言いませんけど、酷い方はすぐに排除されるので大丈夫です」

軸になる代理人に能力があれば、それはほぼ防げるそうだ。

「となると、ローデリヒか」

「はい、あの方を家宰にして任せれば良いかと」

他の人材にしても、送り出す貴族連中もあまりおかしなのは出して来ないはずであるとエリーゼは言う。

「皆さんは、新領地開発で合法的に利益と利権を得たいわけです」

この貴族が余り気味の王国で、せっかく能力があるのに無駄飯喰らいに甘んじている縁戚や係累を新領地開発に送り出し、バウマイスター男爵家と縁を結び、開発特需や貿易などで利権を増やす。

それが目的なのに、明らかに駄目な人は送り出さないであろうと。

「そんな人が居て悪さをしますと、御爺様なら喜んで攻撃するはずです」

『〇〇の出した連中は仕事でも使えないし、金や物資をちょろまかして懐に入れておるようだ。神の前で悪さとは困った物だの。思うに〇〇は、陛下も注視しているこの開発事業に人を出す資格などないのでは？』

他の貴族と組んで攻撃し、新領地開発から追い出してしまう可能

性が高いそうだ。
そして、その空いた枠を他の貴族達と奪い合う。

悲しいかな。
貴族とは、そういう生き物らしい。

「ですから。ヴェンデリン様は、一番上でドッシリと構えていれば良いかと」

「そういう物かね？」

「はい。ヴェンデリン様は魔法使いなので、特に」

確かに、あれほどの大金。
何に使って良いのかもわからないし、余所者が大半になる家臣団が悪さをしないように、いちいち細かいチェックをするとか、面倒であり得なかった。

元々、有って無いようなお金だし。
どうせ死蔵していると、文句も出て来るお金なのだ。

精々派手にばら撒いて、この国の貴族が使い物になるのか高みの見学というのも悪くないであろう。
金はまた魔法で稼げば良いし、最悪面倒なら海外旅行感覚でアーカート神聖帝国に亡命してしまえば良い。

「私はヴェンデリン様の妻なので、ずっとお供させて頂きます。私が居なくなっても、ホーエンハイム家が断絶するわけでもありませんし」

「俺、何も言っていないけどね」

「あくまでも、独り言です」

「ふーーーん、独り言ね」

「はい」

どうやら、思った以上にエリーゼは貴族の血が濃いようだ。
しかも、なかなかにおっかない女でもある。
もしかすると、こういう女を重たい女と言うのかもしれなかった。

「うわぁ、我が主君の正妻殿はおっかないな」

「そういう従士長はどうするんだ？」

「冒険者で稼げるし、貯えは十分過ぎるし。外国暮らしでも全然大丈夫。あの腐れ兄貴と腹黒名主次第じゃねえ？」

「一応、まだ父が当主なんだけど」

「ヴェルの親父の悪癖が事実かは知らないけど。あの人って、半分傍観者みたいなんだよね。だから、あの腐れ兄貴に呆れても罰したりしないわけで」

エルの言う通りかもしれないが、クルトが健在だと次からのバザーは引き受け難いような気もするのだ。
これがヘルマン兄さんなら、月に一度くらいならまるで苦にはならないのだが。

それと、この現状に一番責任がある父であるが、不思議と何か積極的に手を打っているようには見えなかった。
顔には出さないが、内心では迷っているのかもしれない。

クルトを、次期当主のままにするのか？
それとも、変化を決断するのか？

その迷いが、クルトの暴言を許しているという可能性もあるのだ。

「このパーティーなら、どこでも通用するしね。と言う、私が一番戦力になってないか」

「イーナちゃんがいないと。このメンバーって、ちょっと常識の枠から外れてしまうから」

「ルイーゼ。俺も、常識枠なんだけど……」

「エルは、たまに怒りの沸点が低いから」

「それだけじゃないか」

色々と強力で便利な魔法は使えるが、どこか前世の常識に引き摺られてこの世界では浮いている感のある俺。

浄化と治癒魔法の名手で、美人で巨乳で聖女とまで呼ばれ、家事などの女性の嗜みも完璧なのに。
たまに、大物貴族の娘として怖い面も見せるエリーゼ。

その外見のせいで一見無邪気に見えるものの、どこか計算高い腕っ節の権化でもあるルイーゼと。

確かにイーナとエルが混じらないと、周囲の普通の人達は『近寄り難い』と思ってしまうかもしれなかった。

「色々とあったから、色々と先の事も考えてしまうけど。結局、実際に何かあってからじゃないと対応できないしね。まずは、お仕事でしょう」

「ルイーゼの言う通りだな。考え過ぎて、不覚でも取ると大変だし」

結局、成るようにしか成らないという結論に至った俺達は、暫し探知を続けてから魔の森へと侵入を果たすのであった。

「うわっ！　物凄い数の気配……」

ようやく魔の森へと入った俺達は、すぐに背筋がゾクっとする感覚に襲われる。

特に魔闘流の使い手で、こういう気配に敏感なルイーゼは、その感覚に警戒感を露にしていた。

十五年以上も前に、ほぼ同じ位置から遠征軍も入って行ったはずだが、彼らのそのほとんどが、この地で人生を終えていている。

当然その未練は、彼らの死体をアンデッドにしてしまう。

最初はゾンビになり、そこからまるで借金の利息のように怨念を募らせた個体からグール、リッチ、スケルトンなどへとジョブチェンジしていくのだ。

ルイーゼの感じた大量の魔物の気配は、間違いなく彼らアンデッドの物であろう。

「では、作戦を開始する」

一番の年長者であるブランタークさんの合図で作戦は始まるが、実はそんなに複雑な物でもない。

まずは最初に、エリーゼが下草を刈った地面に一枚の一辺が二メートルほどの布を広げて敷く。

これには、教会で祈りを受けながら高司祭が書いた浄化の補助魔法陣が描かれていた。

エリーゼの唱える聖の浄化魔法の効きが良くなるので、一種の魔法具とも言える。

これを手に入れる時に少し高いお布施を包んだので、効き目がある事を祈ろうと思う。

次に、エリーゼが魔法陣の真ん中に立ったのを確認すると、今度は残り全員が俺から渡された拡声器を口に当てる。

そして、一斉に決められた言葉を叫び始めていた。

「やーーーい！　ブライヒレーダー辺境伯の戦下手！」

「お前なら、十分の一の戦力でも余裕で勝てるわ！」

「軍事的才能が、ゼロどころかマイナスなブライヒレーダー辺境伯！」

別に、冗談でやっているわけではない。
戦に破れた軍勢の戦死者達がアンデットになる場合、当然その知能などは低下するわけなのだが。
生前からの本能なのか？
こちらからの悪口などを、ある程度理解する事が多いのだ。

バカにされている事に気が付く、という程度の物らしいが。

それと、もう一つ。
集団化したアンデッドには、なぜか統率者が現れる。
これも半ば本能なのであろうが、なぜかその統率者が決まる基準は生前準拠な事が多い。

という事は、当然先代のブライヒレーダー辺境伯が統率者になっている可能性が高かった。

なので、それを狙った悪口作戦はかなり有効なはずであった。

「うわっ！　本当に来た！」

拡声器で悪口を言い始めてから数分後、遂に前方の藪から数体のゾンビの姿が見え始める。

「先行偵察部隊かね？」

「嫌な偵察部隊だね」

魔法で燃やせる俺とは違って、もしエリーゼの身に危険が迫れば、ルイーゼはゾンビを素手で殴らないといけない。

精神衛生上、なるべくお断りしたい心境なのであろう。

「エリーゼ、詠唱準備」

「はいっ！」

俺の合図で、魔方陣の真ん中で立っていたエリーゼは、静かに祈りを始めてから浄化の魔法を発動させる。

その範囲は直径１００メートルほど。

悪口で呼び寄せてから、浄化魔法の範囲内に入れて浄化させる。

まるで、ゴキブリホイホイのような作戦ではあった。

「うわっ、気持ち悪っ！」

さすがは、十五年以上も前に死んだ死体である。

アンデットになると腐敗は遅延化するのだが、全く腐敗しないわけではない。

魔物に体を食い千切られ、切り裂かれた部分から腐った内臓や骨が露出し、肌もドス黒いゾンビが、見た目からして良い印象を得られるはずもなかった。

更に、着ている鎧なども錆だらけで再利用は不可能なようだ。

剣も錆びたていたり、死んだ時の魔物との戦闘で刃がボロボロだったり、先が折れていたりと。

その大半が、遺品として遺族に渡すか、クズ鉄として再利用するしかないようであった。

「当然、気の利いたお宝なんて持ってないだろうし」

「ブライヒレーダー辺境伯か、その幹部なら」

見栄えのために、剣や鎧に金や宝石などで装飾をしていれば、剥がせばお金にはなるはずだ。

その前に遺品なので、高価なお礼が出るはずであったが。

「持ち物とかで、売れる物はあるのかな？」

もうゾンビになってから、十五年以上も経っているのだ。

当時所持していた食料は非常食でも腐っているはずで、その前にゾンビは知性を無くし本能でしか動いていない。

グルメでもないので、集めていた魔物の素材ですら貪り食ってしまっているはずだ。

アンデッドが、生前の本能に従って何かを齧っていても、それが栄養になるわけでもない。

ただ噛み砕かれた物が、胃腸などを通って肛門から地面に落ちていく。

要するに、垂れ流しだ。

当然、噛み砕かれた時点で、魔物の素材などは無価値に成り果てる。

薬草などは、言うまでもないであろう。

次第に集まって来るゾンビ達の中には、尻から何かを垂れ流しながら向かって来る個体もあった。

中には、腹が切り裂かれているのでそこから何かが流れ出ている個体もあり、あまり見ていて気分の良い物ではない。

王都で瑕疵物件を浄化した時よりも、胃の中の物を吐き出したく

なるようなアンデッドが多かったのだ。

前世でゲーセンで遊んだゾンビを銃で撃つゲームよりも、ビジュアル面では最悪であった。

更に彼らからすると、生きている人間ですら餌でしかない。
視界に入れば喰らおうとするので、退治は必須とも言えた。

「でも、弱いな」

剣を構えて準備していたエルであったが、ゾンビは次々とエリーゼの展開した聖魔法に触れると体ごと消滅していく。
残ったのは、錆びて薄汚れた装備品のみであった。

「ゾンビは個々では弱いが、数が揃うと脅威だ。気を抜くな」

元ベテラン冒険者であるブランタークさんの助言により、全員が再び気を引き締め直す。
だが、やはりゾンビは、エリーゼが展開を続ける聖魔法に触れると溶けるように消えてしまう。

普通の浄化聖魔法の使い手ぐらいではこうは行かないが、それだけエリーゼが優れているという事だ。

「坊主」

「わかってます」

俺は予備の魔法の袋を取り出すと、その中に次々と持ち主であるゾンビが装備していた品や、持っていた袋などを仕舞い込んでいく。

錆びたり腐っている鎧や盾などの防具に、同じく錆びたり折れたりしている剣や槍などの武器。
持っていた袋には、薄汚れた銅貨や銀貨などが入っている。

これらの物品は、集められる限り集めて持ち主の判断が付いた物は遺族に返す事になっていた。

「駄目なら、教会で浄化して貰ってから、金属製の物は鋳熔かして再利用だけど」

「（何とも、物騒なエコもあった物で）」

この世界の人にエコを説明しても理解できないはずなので、これは俺の心の中に留めておく事にするが。

「しかし、ワラワラ来るな」

どこか緊張感が無いように見える俺達であったが、この一時間ほどが、全く戦闘もせずに遺品集めだったので仕方が無いのかもしれない。
加えてゾンビは、目の前で同胞がエリーゼの浄化魔法障壁に触れて崩れ去っても、自分が退くという事をしない。
強い統率者が攻撃を命令しているのと、目の前にある人間という餌に近付くという、本能のみで動いているからだ。

「ブランタークさん、何人分くらい集めました？」

「ええと……。八百人分ほどだな」

確か、この魔の森で骸になった兵士達は約二千人のはず。
なので、約半分を成仏させた事になる。

「しかし、早く出て来ないかな？」

「そうすれば、俺が範囲を広げて一気に成仏させるんですけどね」

ブランタークさんが早く出て欲しいと思っているのは、これらゾンビの群れを統率していると思われる、先代ブライヒレーダー辺境伯であった。

しかし、ゾンビになってまで生前の人間関係を引き摺るとは。
その話を聞いた時、俺は人間という動物の業の深さを感じてしまったのだが。

「エモノッ！　クウッ！」

「あーーーあ。元大貴族様も、ああなると惨めだな」

更に十分ほどゾンビ退治を続けていると、ようやく元は豪華であったと思われる宝石付きの錆びた鎧を着た、初老と思しき男性のゾンビが現れた。

装備している物から見て、間違いなく彼は先代のブライヒレーダー辺境伯なのであろう。
非常に稀なケースであったが、ゾンビの癖に言葉を話していて、さすがは元は大物貴族とでも言うべきなのであろうか？

本能に従って、『エモノッ！　クウッ！』を繰り返しているだけにしてもだ。

「ブランターク様、随分と失礼な発言ですね」

「先代なんて、俺は直接顔も見た事がねえしな。俺の忠誠心は、今のお館様に向いているわけだし。イーナの嬢ちゃんは違うのか？」

「子供の頃にお菓子とかくれて、優しい人だったんですよ……。と、兄さん達が言っていました」

遠征の時期を考えると、イーナもルイーゼも生まれる前か赤ん坊だったはずで、先代とは面識がないはず。

なので、そのフォローが微妙な物になっていた。

「優しいのと、貴族としての能力は違うだろうに」

「それを言われると、困るんですけど……」

俺は、身も蓋もない会話を続けているブランタークさんとイーナを尻目に、急ぎ探知の魔法の範囲を広げる。

すると、半径二百メートル以内に、残り約千体のゾンビと思しき反応を察知していた。

「漏れは無いよな。じゃあ、一気にやるか」

そう言うと俺はエリーゼの肩に手を置き、続けて魔法範囲拡大の魔法を使う。

念のために半径五百メートルまで広げた浄化聖魔法は、容赦なくゾンビ達を溶かしながら成仏させていく。

一番重要な先代ブライヒレーダー辺境伯のゾンビも、やはり基本

はゾンビなので簡単に崩れ去ってしまう。
残された宝石付きの装備品が、彼の存在を証明する唯一の証拠となっていた。

「よーーーし、もう魔法を止めても良いぞ」

そして数分後、ブランタークさんも探知魔法で周囲に魔物の反応がない事を確認し、これでようやくゾンビ退治が終了するのであった。

だが、ここで落ち着いてなどはいられないのであったが。

「周辺の遺品捜索を急げ！」

俺達は駆け足で、周辺の遺品探索と回収を再開する。
今までは二千体のゾンビがいたので、このエリアには他の魔物が一切存在していなかった。
それが一気に消えてしまったので、この空白エリアに魔物が大挙して押し掛ける可能性があったのだ。

「何一つ漏らさずなんて言わん。粗方回収したら撤退だ！」

それから三十分ほどで、聖魔法で消滅したゾンビの装備品に、彼らの最後の地であったと思われる野戦陣地跡地などで遺品を回収する。

ところが、ここで一つの疑問にぶち当たっていた。

「元バウマイスター家諸侯軍らしき連中がいないな」

「そう言われると、そうだな」

エルの指摘通りに、統一されたブライヒレーダー家諸侯軍の装備に身を包んだ兵士達に、高価な装備を着けた幹部らしき連中に、数名の元は魔法使いであると思われる連中のソンビは確認していた。

皆、経済力に余裕があるブライヒレーダー辺境伯家でないと揃えられない物だ。

バウマイスター家諸侯軍は、兵士は粗末な統一されていない部分鎧を着けた農民で、幹部とは言っても先代従士長やその息子達が多少はマシな鎧を着けているくらい。

魔法使いなど、初級レベルでも雇える財力などなかったからだ。

言っては悪いが、ギリギリ軍隊と呼べるかどうかという集団であった。

「どうして、姿を見せないんだ？」

俺は再び探知の魔法で周囲を探るが、五百メートル以内にアンデッドを含む魔物の反応はない。

こちらが元ブライヒレーダー諸侯軍を全滅させた直後なので、まだその外縁部で様子を伺っているのだ。

通常の魔物は、アンデッドを避ける傾向にある。

魔物とて、アンデッドに殺されて仲間入りはゴメンであろうからだ。

「ブライヒレーダー家諸侯軍と別れたって事？」

「可能性はあるな」

ブランタークさんは、冒険者として多くの経験を積んでいる。
なので、それを実際に経験した事があるのであろう。
俺の意見を否定しなかった。

「ゾンビは、生前の本能に引き摺られるからな」

寄り親な上に、ブライヒレーダー家諸侯軍は当主直々の出陣で、
バウマイスター家諸侯軍は従士長が主将になっていた。
なので、ブライヒレーダー辺境伯から家臣扱いされ、扱き使われていたのかもしれない。

いくら小規模の軍勢とはいえ、バウマイスター家諸侯軍は指揮系統が別の軍隊なのにだ。
当主である父に主将を押し付けられ、長い行軍の後に魔物と戦わされる。

大叔父である従士長は、色々と鬱憤が溜まっていたのであろうと。

「その嫌悪感で、あの集団から離れた可能性があるな」

「そんな事があるんですね」

「元は、人間って事だ」

「それで、他の可能性は？」

王都での浄霊経験で悪霊系には詳しくなったのだが、生憎とゾンビには詳しくない俺は、更にブランタークさんに知識を求める。

「その小集団なんだが、規模が大きくなっている可能性があるな」

基本的に理性など無いゾンビなので、集団が分割しても時間が経つと、共食いで吸収合併されてしまうケースが多く、滅多に長期間二つの集団が残っている事はないそうだ。

「悪霊系は、肉体が無いからフットワークが軽いんだよ。逆にゾンビ系は、自分達が死んだ地点から離れるケースは少ない」

「でも、いませんよ」

「離れないとは言っても、数キロ圏内は移動するさ。探知魔法の外なんだろう」

試しに探知魔法の範囲を広げてみると、外縁部には多数の魔物の反応がある事にはある。

数千体ほどは反応があるのだが、彼らが一斉に襲い掛かってくる事は無い。

こちらが少数なのと、アンデッドに支配されていた空間に慎重を期しながら戻るので、あまり長時間居残らなければそう危険でもないそうだ。

「それとな。向こうだって、バカじゃないんだ。二千体近いアンデッドを、この少人数で浄化した俺達に慎重になるのさ」

だが、それはあくまでも、その魔物達が普通の魔物であった場合のはす。

もし、その数千の反応がアンデッドであったら？

そんな疑問が、沸いてくるのだ。

「その中に、バウマイスター家諸侯軍のアンデッドもいる可能性がありませんか？」

「無いとは言えんが、数が合わないな」

バウマイスター家諸侯軍は百人以下で、外縁の魔物達は数千にも及ぶ。

確かに数は合わないが、どこか腑に落ちないのだ。

「じゃあ、数が増えたとか？」

「数が増えた？　ブランタークさん。本当に、そんな事があるんですか？」

「無い事もない」

エルの疑問に、ブランタークさんが即答する。

その小集団のボスが優れていて、アンデッドの仲間を増やすケースがあるらしい。

その場合、アンデッドは彼らが死ぬ時に倒された魔物や、その後アンデッドの犠牲になった魔物が材料なのだそうだ。

「嫌な、増え方だな……」

確かに、ホラー映画みたいで嫌な増え方ではある。

「ただなぁ……。そのボスに力が無いとな……」

生前の能力が、大きく左右されるらしい。
つまり、軍人で言うなら数千人を率いれる大隊長から将軍クラスの実力を持つという事だ。
同時に、魔物相手なので冒険者としての技量。
つまり、強かったのかなども基準になるそうだ。

「バウマイスター家の従士長だもんな……」

大叔父の能力を否定するのも失礼な気がするが、あのバウマイスター家なので、そんな能力があったとは思えないのだ。

人口から考えても、百人の諸侯軍ですら苦労して揃えたであろうに。
大叔父に、数千人もの軍を率いる機会があったとは思えなかった。

「でもさ、才能があったのかもしれない」

「と言うと？」

「あの領地だから、半農民な従士長で止まっていたかもしれないけど。ブライヒレーダー辺境伯家なら、大幹部になれる才能があったのかもって事」

才能はあっても、それが生かされる環境や機会がなかった。
エルは、こんな世の中なのでそんな人もいるだろうと、自分の意見を述べていた。

「なるほどね。でも、だとすると？」

「それはね、イーナちゃん。この探知エリアの端に居る連中はヴェ

ルの大叔父さんのアンデッドに率いられている連中で、ボク達を虎視眈々と狙っているって事だよ」

「ねえ、それってヤバいのでは？」

「物凄くヤバいかも……」

イーナとルイーゼのやり取りを聞いた全員に緊張が走る。

そして……。

「全員！　戦闘準備！」

ブランタークさんが叫ぶのと同時に、中心部に居る俺達に向かって外部の反応が一斉に移動を開始する。

俺達を殺そうと、攻撃を仕掛けてきたのであった。

「一体、何匹いるんだよ？」

「知るか！」

それからまた数時間後。

俺達は、またエリーゼが展開した浄化魔法の中で次々と迫り来るゾンビ達と対峙していた。

やはり、その大半が魔物がアンデッド化した物であり。

たまにそれに混じって、粗末な鎧に錆びた槍などを持つ人間のゾンビも存在している。

彼らはその姿格好からして、間違いなく旧バウマイスター家諸侯軍の連中であろう。

「エリーゼがいなかったら、大苦戦だった」

魔法展開で一歩も動けず、集中のために一言も発していないエリーゼのおかげで、旧ブライヒレーダー諸侯軍の時には直接戦闘はゼロ。

今も、浄化の光に当たっても消え失せない、ワイバーンなどのアンデッドと戦うだけで済んでいる。

エル、イーナ、ルイーゼが直接攻撃で、俺とブランタークさんが高集束の火矢魔法でワイバーンアンデッドの頭部を破壊していく。

活動が停止したワイバーンアンデッドは、浄化魔法によって消毒され、魔石と骨を残す。

他の魔物は魔石だけだが、さすがは小型でも竜というべきであろう。

素材となる骨が残されていたのだ。

アンデッドの時にはドス黒かった骨が、浄化されると綺麗な白色になる。

見ていると、実に不思議な光景であった。

「ちっ！　飛竜のアンデッドって！」

「そういえば、アルが居たんだ！」

大叔父に、統率力はあったのかもしれない。

だが、普通の人間や魔物のアンデッド如きが、ワイバーンや飛竜相手に何とか出来るはずもない。

ならばなぜ、彼らが一定数混じっているのか？

答えは、この数千もの魔物アンデッド軍団は、師匠が死ぬまでに殺した魔物達という事になる。

「ヴェルの師匠って、化け物かよ！」

力尽きるかまでに、数千にも魔物を次々と殺していく。

俺がやれと言われたら、出来なくも無いが迷惑な魔法で周辺の森ごと消滅させるしかない。

だが当時の師匠には、先代ブライヒレーダー辺境伯以下、守るべき存在が二千人も存在していた。

その条件で同じ事をやれと言われても、相当に難しいはずでだ。

少なくとも、今の俺ではそんな器用な真似は不可能であった。

「時間差を付けて、一瞬で自分と守備目標に脅威になり得る個体や少集団を順番に撃破していく。だから、アームストロングなどはアルを認めていたんだ」

魔力量では勝てていても、まるで油断ならない超技巧派の魔法使い。

それが、師匠であったようだ。

「でも、その師匠さんのせいでボク達が大変……」

ブランタークさんの集束火矢魔法で動きが鈍ったアンデッド飛竜の頭部に、ルイーゼが愚痴りながら、魔力の篭った拳で一撃を加え

て粉々にする。

頭部を失ったアンデッド飛竜は、すぐにその動きを止めていた。

「いや、これは試練なんだ！　師匠が俺達に課した！」

「うわっ！　ヴェルが、忠実なお弟子さんモードになっている！」

「先日のゴーレム軍団に比べれば、何ほどの事か！」

「今は、浄化の依頼よりも実家の情勢だものね」

「うわぁ！　それもあった！」

前回の反省を生かし、魔力補充用の魔晶石の数を増やした事もあって、第二陣のアンデッド軍団も数時間ほどで全滅させる事に成功していた。

いや、最後に残った個体があった。

錆びたフルプレートに、同じく赤茶けたロングソードを構えた初老の男性が俺達の目の前に立っていたのだ。

普通のゾンビであれば、エリーゼの浄化障壁を突破して何とも無い事などあり得ない。

つまり、その上位種なのであろう。

「相当に、恨みが深いんだな」

「それはそうでしょう」

「間違いなく、先代従士長だろうな」

「ええ」

ブランタークさんと俺は、そのアンデッドがバウマイスター家の先代従士長である事を確認する。

主命とはいえ、無謀な遠征で自分のみならず全ての息子と大半の領民達を犠牲にしたのだ。

分家では、この先代従士長の孫娘以外でも、婿を迎え入れている女性が多かった。

彼女達は、分家に仕える従士を勤める家の娘達だ。

皆、父を兄弟を親戚を失い、家を保つために他所から婿を迎え入れ、男性と同じく苦しい仕事に耐えてきた。

従士の家とはいえ、田舎領地なので普段は普通の農家でしかない。

増えた開墾などで、大変に苦労をしたのであろう。

それも加えての、彼女達の反本家でもあったのだ。

そして、この目の前の先代従士長には、それが理解できているのかもしれない。

剣を構えながらも、こちらを攻撃して来なかった。

「リッチにまでなっているのか！　こんな短い期間で！」

ゾンビがここまで理性的なはずがなく、良くて先ほどの先代ブライヒレーダ辺境伯くらいで、それすら滅多にいないのだから。

「ミンナ、シンダ……」

「十五年以上も前にな。今は、浄化しているだけだ」

「マゴ……」

「旦那を尻に敷いて、元気にしているよ」

リッチともなれば危険なので、普段の俺であればすぐに聖光魔法などで浄化してしまうはず。

だが、この先代従士長である大叔父は、とても悲しそうな目をしていた。

そして、俺に視線を合わせてくるのだ。

そのあまりに悲しい目に、『なら、あの集団をけしかけるなよ！』などとは言えなくなってしまう。

「わかっているんですかね？」

「さあな。実力差を本能で理解して、体が動かないというケースもあるし」

本能が前に出るので、獣と同じく敵が強過ぎると動きを止めてしまう事があるらしい。

ゾンビやグールでは無理な、リッチレベルでしか見られない現象のようだが。

ブランタークさんからすれば、先に数千ものアンデッドをけしかけているので、大叔父のリッチに隙を見せたくないのであろう。

あくまでも、リッチが萎縮しているだけだと攻撃態勢を緩めなかった。

「ヒマゴ……」

「跡取りと、妹が生まれてたよ。元気だった。あんたに似ている」

「ソウカ……。オナジチ……」

やはり、理解しているらしい。

更に、俺が血縁者である事も理解しているようだ。

「タノム……」

最後にそう言うと、先代従士長のリッチは剣を地面に下ろし、そのまま動かなくなってしまう。

攻撃はしないので、そのまま浄化しろという事のようだ。

「怒りが凄くてこの短期間にリッチにまでなったけど、親族から家族の話が聞けて満足したのかな？」

「かもしれないし、坊主に勝てないと思ったのかもしれない」

「では、聖光を」

俺の聖光魔法により、先代従士長のリッチも完全に浄化され、あとにはその装備品だけが残される。

「マルレーネ義姉さん達の元に、返してあげないとな……」

同時に、分家の事もだ。

もしリッチにまでなった大叔父と戦闘をしていれば、勝てなくは無いがかなりの労力を要したはず。

だが、大叔父は俺達と戦わなかった。

湧き上がる恨みが原因の殺戮衝動に耐えながら、残された家族の事を聞き。

無事だと知ると、俺に『タノム』とまで言った。

「まさか、リッチがあそこまで殺戮衝動を抑えるとは思わなかった」

大叔父を攻撃するために強力な火炎魔法の詠唱を準備していたブランタークさんも、初めての経験に驚いているようだ。

「『タノム』か……」

彼の頼むは、家族を頼むという事であろう。

というか、他にはあり得ない。

「仕事も終わったし、バウマイスター領に戻るか……」

大叔父の装備品を全て回収した俺達は、なるべく早くにバウマイスター領に戻ろうとする。

朝から魔の森に侵入し、食事も取らずに二つのアンデッド集団と戦闘をしていたせいでお腹も減っている。

木々の間から見える空の色は、時刻がもう夕方前である事を示していた。

「そうだな。早く森を出て戻ろう」

このエリアを占領していた数千ものアンデッドが消えたので、その空白を埋めるように普通の魔物達が押し寄せるのも時間の問題であったからだ。

「いや、その前に寄る所がある」

「寄る所？　ああ、エーリッヒ兄さんか！」

バウマイスター領の問題に関しては、俺達では知らない事が多過ぎる。

もしかすると、エーリッヒ兄さん達が何かを知っている可能性もあり、ブランタークさんはそれを確認してから戻っても遅くはないと意見したのだ。

「困った時の、エーリッヒ兄さんか。年齢の関係で、パウル兄さんやヘルムート兄さんも何か知っている可能性がある」

ブランタークさんの案を受け入れた俺は、その場で全員を呼び寄せると、一気に王都のブラント邸まで瞬間移動で飛ぶのであった。

「えっ！　そんな事があったのか！」

「クルト兄貴……」

魔の森での依頼を終えた俺達は、その足で王都にあるブラント邸まで移動していた。
突然庭に現れた俺達に、ルートガーさんや屋敷の使用人達は驚いていたが。
すぐに只ならぬ情況である事を察し、エーリッヒ兄さんが仕事から戻って来るまで、食事でもと屋敷の中に案内してくれた。

そして、使用人達を、パウル兄さんとヘルムート兄さんの元にも差し向けてくれたようだ。

それから約二時間後、三人の兄さん達は俺から領地での出来事を聞き、深刻そうな表情を浮かべていた。

「エーリッヒ兄さん？」

「ある程度、予想はしていたけど……。しかし、ここでクラウスか……」

エーリッヒ兄さんに言わせると、クルトの言動はある程度想定の範囲内であったらしい。
予想よりも愚物度は上がっていたが、それでも父が抑えれば何とかなると思っていたようだ。

あくまでも、暫くはという条件付きではあったが。

「ところで、クラウスの話は本当なんですか？」

「跡取り息子と、レイラさんの婚約者の件かい？　事実だよ。ねえ、パウル兄さん？」

「ああ。俺も当時四歳だから、後で聞いたんだけどな」

やはり、人の口に扉は立てられないらしい。

父が緘口令を敷いたせいで、余計に領内に広がってしまったようだ。

あんな碌に娯楽もない領地なので、真相を推理して楽しんだのかもしれない。

「ただ、二人が同時に崖から落ちて死んだのは事実でも、それに父が絡んでいた証拠は無い。噂は、本村落以外なら１００％有罪判定だったね」

被害者が、本村落の名主であるクラウスの息子達なので、あまり同情はしないが、領内の体制を強化するために領主様ならやりかねない。

二の舞はゴメンなので、あまり表立っては言えないけど。

と、思っている領民達は多いそうだ。

「ヴェルも知っているだろう？　あの崖では、岩茸が採れるのを」

パウル兄さんの言う通りに、その崖では確かに岩茸という茸が採れるのだ。

あの薄い塩スープに入れると良い出汁が取れるので、みんな競って採集していたはず。

なかなか成長しないので貴重なのと。

崖の斜面に生えるので、採るには危険も存在していたのだが。

「はい、知ってます。ですが……」

父と二人はあくまでも狩猟をしていたのであって、岩茸を目的にしていたわけではない。

ところがその日に、父に忠実な本村落の村人数名が、岩茸採りでその岩場に行っていたらしいのだ。

クラウスが言っていた連中とは、彼らの事なのであろう。

「状況的に言うと、父がその村人達に指示してという可能性がある。でも、彼らはクラウスの支持者でもあるんだよね」

「もう一つ、噂があったな」

ヘルムート兄さんは、もう一つ嫌な噂を聞いた事があるそうだ。

「レイラさんは、美人で男性に人気があった。自分の嫁に欲しいと願う村人達も多かったそうだ」

つまり、岩茸採りの連中は、レイラさんの婚約者だけを亡き者にしようとしていて、何かのミスでクラウスの息子も殺してしまったのではないかという物だ。

「それだと、父は無関係の可能性が」

「高いな」

「でも、真相は不明なんだ。父を拷問して吐かせるわけにもいかないしね」

拷問は極端な意見だと思うが、結局証拠が無いので父から真相を聞くしかないのも事実であった。
聞いたところで、父が事実を話す保障も無いわけなのだが。

「知っていたんですね」

「あくまでも、あらましだけだよ。真相は、クラウスでもわからないだろうし」

真相は不明だが、奇妙な事件で自分の愛する息子と娘の婚約者を失ったのだ。
彼からすれば、父を恨む事で精神の均衡を保っている可能性があった。

「父の悪癖と、レイラさんの件ですけど……」

「それもなぁ。本村落以外の連中は、有罪判定していると思う。でも、他の可能性もあってね」

エーリッヒ兄さんは、あくまでも自分の考えであると前置きしてから、その考えを述べる。

「本村落の名主であるクラウスは、跡取り息子と娘の婚約者を同時に失ったわけだ」

そうなると、クラウスの跡を継ぐ次の本村落の名主は、レイラさんの新しい婿という事になる。

「残り二つの村落の名主達が、自分達の次男以下の息子を押し込もうとしたという噂があってね」

もしそれが実現すれば、本村落優位の領内の体制に楔を打ち込める可能性が高い。
皮肉にも、他の本村落の婿候補者達は、あの岩茸採集に出ていた連中なのだそうだ。

「レイラさんからすれば、彼らは嫌だと思うよ」

自分の婚約者を殺した疑惑のある男達と結婚するなど、確かに誰でも嫌なはずだ。

「かと言って、他の村落出身者の婿だと。当然、本村落の連中から不満が出るよね。だから、父がそういう事にしたんじゃないのかな？」

領主の庶子に継がせるのなら、他の村落の名主達も文句は言えないはず。
だが、父が露骨に前に出ると、彼らの不満が高まってしまう。

だから、クラウスから話しを切り出した事にして、徴税業務の独占が褒美であったと。
父からすれば、将来的に自分の子供が徴税業務に関われるのは得になるわけだ。

情況的に仕方が無いとはいえ、息子達の喪も明けない内からの提案なので、クラウスは内心では気に入らなかったはずだ。

あまり話を先延ばしにすると、本村落以外の連中が五月蝿くなってしまうので仕方がなかったのだが。

「そう言う事なら、納得はいくかな？」

「でも、これも推論。結局、真実は父とクラウスしか知らないんだよね」

かと言って、探偵みたいに調査などしても領内が騒ぎになるだけであろう。

クルトからすれば、領内を掻き乱す迷惑者として、また嫌味でも言われるのは確実であった。

二時間物の推理ドラマでもないので、俺達が調査したところで真相に辿り着ける可能性は低いのだし。

もし調査を始めると、『冒険者男爵の事件簿。バウマイスター領殺人事件～名主の息子達はなぜ死んだのか？　その影に領主の陰謀と美女の涙を見た～』とかなるのかもしれない。

「それで、父の悪癖なんですけど……」

俺は、実家時代はあの生活だったので、真相など知る由もない。

だが、兄さん達は何か知っている可能性があった。

「俺達以外に兄弟姉妹がいる？　絶対に無いとは言えないなぁ……」

正妻である母に男ばかり六人、妾であるレイラさんに男二人と女二人。

この世界では、平成日本よりも出生率が遙かに高いのを考慮しても、平均よりは多い。

確かに、子供がいなくて家が絶えるのも問題であったが、うちの

ような零細貴族で子供が多過ぎるのも問題だ。
あまりに相続・財産争いが酷くなると、これも醜聞として噂になってしまう。

ルックナー兄弟を見れば、それは良くわかるはずだ。
あの家は、兄弟の数はあまり関係ないようだが。

そんな事情もあり、その辺のコントロールも優秀な貴族の必須条件であったからだ。

「ヴェルと揉めているルックナー会計監査長だって。相続で揉める要因になるから、ローデリヒさんを認知しなかったでしょう？」

決して褒められたやり方ではないが、相続で揉めるよりはマシだと非情に徹する。
これも貴族なのだと、エーリッヒ兄さんは言う。

「普通なら、愛人を囲ってとか。貴族御用達のお店もあるしね」

値段は高いが避妊薬もあるし、早ければ子供を下ろすという方法もある。
だがそれが出来るのは、都市部の貴族や、地方では大物貴族だけだそうだ。

「地方の零細貴族が、あまり家族計画とか考えないよね」

田舎暮らしで自分にヘイコラする領民達しかおらず、狩猟くらいしか娯楽もない。
となると、領内の綺麗な女に走る者も多いらしい。

なので、絶対に無いとは言えないと兄さん達は言うのだ。
まさか父とて本屋敷に女など連れ込まないであろうし、兄さん達に直接見られるようなドジもしないであろう。

「あと。うちは、他所から移民した連中の寄り合い所帯だろう？」

パウル兄さんの話によると、王都周辺や北方などは違うそうだが、南部寄りの田舎の農村とかだと住民が性にルーズだったりするそうだ。

江戸時代の農村と、似たような感じらしい。

「本村落以外の連中で、南部や西部寄りの農村部から来た連中だな」

婚姻前の娘に手を出すのはご法度らしいが、結婚して跡取りが生まれると、男も女も結構自由に浮気をする風習があるらしい。

「跡取りはいるから、それで浮気相手の子供が生まれても、『まあ、いいか』くらいの感覚なんだと。バウマイスター領は他の地域の出身者も多いから、もうほとんど無い風習だけどな。ヘルマンの兄貴や俺が子供の頃には、ギリギリ残っていたかも」

ちょうどその頃にようやく教会ができ、王都から一度引退した年寄りとはいえ司祭が赴任するようになると、そういう風習は鳴りを潜めたそうだ。

「教会は、不義密通を嫌うからな」

そんな事をするなら、正式に奥さんと認めて囲えという教義なので、地球のキリスト教とは差異が存在しているのだが。

移民初期には、それが当たり前の住民とそんな風習が無い住民とで良くトラブルになったらしい。
それは、自分の奥さんに誘いをかける妻子ある間男の存在など容認できないであろう。

「その仲裁で、クラウスは若い頃に苦労したんじゃないかな？」

「それで、父は？」

「若気の至り？　母が妊娠している時とかに？」

名主のクラウスからすれば、本村落や、他の村落でもそんな風習など無い人達に配慮しないといけないが。
父は、そういう風習のある人達に配慮したのかもしれない。

「特に、女性から誘われたら断るのはご法度だったそうだ」

「いいなぁ。その風習」

「あの、ルイーゼさん……」

一人危ない女がいるが気にしない事にして、もし老婆に誘われても断れないのであれば、それは拷問なのではないかと思ってしまう。

そういう特殊な趣味の人を除くとしてだ。
少なくとも、俺には一切存在しなかった。

「父は、そういう女性達からの誘いを断らなかった。領主として、出来る限り陳情を受け入れるという趣旨と。実は、誘惑に抗えなか

ったと？」

あとは、その後に相手の女性が妊娠した時にトラブルがあったのかもしれない。

風習からすれば、その子はその女の家の子供。

つまり、法的な旦那の子供という事になる。

だが、領主の子供という事になれば、風習を無視して権利を主張する女性が居たのかもしれない。

「ここで問題なのは、浮気したからって１００％父の子という保障もないからね」

単純に、本来の旦那の子供という可能性もあるのだ。

「旦那の方も、その子が父の子として優遇されるとなると良い思いが出来るかもと、一緒に権利を主張したのかもしれない。それで、その後始末だけど……」

そんな風習は、領内の秩序を乱すと考えて嫌っているクラウスの仕事だったのであろう。

結局、その生まれた子供は、継承争いの元になりかねないので領外に出す羽目になった。

人口的にも、生産力的にも。

クラウスからすれば、苦労ばかりさせられて『ふざけるな！』と思ったのであろう。

「ただ、これも推論なんだよね」

どのみち、真相など調べようがないのだ。
個人的には、『息子と娘の婚約者を失ったクラウスには同情するけれど……』という物になってしまう。
父に関しては、『もっと、怪しまれないように行動しろよ！』としか言えなかった。

「もうヴェルが行ってみるしかないよ。何しろ、ヴェルはあの領地の情勢を左右する大物になっているわけだし。クラウスの言う父への恨みとか、父の悪癖が事実かなんて。もう本当に瑣末な問題になっているんだと思う。本人達には悪いけど」

今までならどうにか現状維持でいけたバウマイスター領であったが、俺が再びあの領地に足を踏み入れた時点で、その箍が外れつつあるとエーリッヒ兄さんは言うのだ。

「領民達だってバカじゃないんだ。ヴェルが、もう別家の当主だなんてとっくに理解している。でも、ヴェルが領主になれば滅多に来ない商隊を待ちわびる日々も終わる。未開地の開発が進んで、他の土地との交流も始まるかもしれない。そのためなら、混乱が起こる可能性も、それで死ぬ人が出る可能性があってもね。だから……」

「だから？」

「ヴェルが収めるしかない。これも、青い血に生まれた宿命だと思って」

「はい……」

もうこうなったら、俺が何とかするしかないとエーリッヒ兄さんに言われてしまう。

とはいえ、まだ何か実際に起きているわけでもないので、今はとにかくバウマイスター領に戻ってみるしかない。

ただ、戻れば何かが起きる可能性があるのだと。

「今日は、もう泊って行くと良い。あと、パウル兄さん」

「やっぱり、何か起こる可能性があるのか。エーリッヒに言われて公休届けを出したけど、上司が文句一つ言わないどころか、『頑張れよ』だってさ」

その上司には、多分エドガー軍務卿から私的に通達が来ているのであろう。

ついでにとばかり、警備隊の同僚や部下で腕の良いのを数名押し付けられたそうだ。

「俺だけだと、心許無いからな。ヴェルの今の立場を考えるに、俺も含めて肉の盾だな。万が一にも死なれると、みんな物凄く困るわけだし」

うちのパーティーの戦力を考えると、そう不覚は取らないはずであったが、不意を突かれないために護衛も必要であろうと。

というか、うちの領地でクルトがバカをほざいている情況など知らないはずなのに、エドガー軍務卿もご苦労な事であった。

ただの軍人バカではない、という事なのであろう。

「王都の警備隊は、俺がいなくても回るからな。追加の助っ人数名くらい、余裕で出せもする。そんなわけで、明日の朝に一緒に連れて行ってくれ」

「わかりました」

予定では、パウル兄さんと五名の助っ人が同伴するらしい。
指揮能力よりも、個人的な武芸に優れたメンバーを選んだそうだが、一人警備隊に所属していない人がいるらしい。

「うちの上司から連れて行くようにって言われたんだけど、間違いなくエドガー軍務卿の推薦らしい。戦斧の達人らしいぜ」

人数的に、こっそりと本屋敷裏の占有森に、二往復して移動する必要がありそうだ。

「では、明日の早朝にブラント邸の庭で」

「わかった。助っ人達には伝えておく」

「出来れば、何も起きないと良いんですけどね」

「頭が悪い俺でも、望み薄だとわかるけど」

一通り打ち合わせを終えた俺達は、明日に備えて早めに就寝してしまう。
そして、その翌日の早朝。

「おはよう、ヴェル。護衛達を紹介するよ」

時間通りに、パウル兄さんは五名の護衛を連れてくる。
彼らはエドガー軍務卿の命により、最悪盾になっても俺を守るのが仕事なのだそうだ。

「少し、大げさな気もするけど」

「大げさじゃないから。ヴェルが死んだら、ホーエンハイム枢機卿とか、ルックナー財務卿とか、エドガー軍務卿とか。卒倒するから。もし何も起きなくても、護衛は絶対条件だから」

事情を聞いたエーリッヒ兄さんの中では、既にバウマイスター領は半分内乱状態にあると認識しているらしい。

そんな場所に、パーティーメンバーだけで行くとかあり得ないそうだ。

「そういう事なら。宜しくお願いします」

「紹介するよ」

合計十二名にまで膨らんだバウマイスター領ツアー御一行は、お互いに自己紹介を始める。

「ジークハルト・フォン・ヴィクトール・ルンマーです。ルンマー騎士爵家の三男です」

まずは、年齢は十八歳くらいであろうか？

俺と同くらいの背丈で、金髪碧眼でイケメンな少年が自己紹介をする。

彼は、武芸大会で本選二回戦にまで進んだ経験がある剣の達人なのだそうだ。

「後輩だけど。職階は俺と同じ小隊長で、数十名の部下持ちなんだよ」

「武芸大会本選二回戦……。予選一回戦の俺とは、住む世界が違うぜ……」

「私からすると、魔法が使えるバウマイスター男爵の方が羨ましいですけどね」

次は、身長１７０センチほどで、ポッチャリ体型とノッペリとした黒髪が特徴の、二十代半ばほどの男性であった。

「オットマー・フォン・ブライプトロイです。ブライプトロイ準男爵家の四男です」

彼は、貴族では珍しい大木槌の使い手なのだそうだ。

それと、剣もある程度は使えるらしい。

やはり、パウル兄さんと同じ警備隊小隊長の職にある人物であった。

「パウル兄さん」

「言うな。警備隊って、俺も含めてこんな境遇の奴が多いんだ。ちなみに、俺と同期でもある」

貴族の次男以下で食い詰めると、まずは軍関係へ。

どこの世界でも、それは同じようであった。

「持つべき者は同期の友人。パウルが、あの竜殺しの英雄の兄とはな。同じ家名の別人かと思ってた」

「煩いわ」

「まあ、そう邪険にするな。貧乏法衣準男爵家の四男に巡ってきた人生最大のチャンス。ここは殉職しても、バウマイスター男爵殿を守るべし」

「いや！　殉職とかしないで！」

目の前で死なれると心が折れそうなので、それは止めて欲しかった。

「ゴットハルト・テオドリヒ・フィリップス」

三人目は、身長百八十センチほど。

白に近い銀髪を腰まで伸ばしている、細身のぶっきらぼうな口調が特徴の、二十歳ほどの男性であった。

彼は、父親がフィリップス子爵家の三男で八位の階位を持っているそうだ。

父親は死ぬまでは貴族扱いだが、陞爵は難しそうなので自分は逆立ちしても貴族にはなれない身分らしい。

というか、父親の生死を問わずに自分は平民なのだそうだ。

それでも警備隊に職があるだけマシだと、やはりぶっきらぼうに説明していて、細身の突きが主体の剣と、ナイフの扱いも得意だと語っていた。

「ルーディ・ウルバーン・ライスターです。宜しくお願いします」

三十代半ばほどであろうか。

くすんだブラウンの髪をした、どこにでも居そうな普通のオジさ

んに見える。
実家は小さな食料品店で、自分は次男で跡を継げないから警備隊に入ったそうだ。

平民なのに苗字があるのは、祖先が貴族の子供であったからだそうだ。
『少しでも、商売の役に立つのかな？』と思って名乗っているらしい。

実際に役に立っているのかは、不明なのだそうだが。

「入隊以来、従兵一筋二十年ですわ。あまり腕っ節に期待せんでくださいね」

「じゃあ、何で？」

「パウル様は、地方巡検視扱いでのバウマイスター領行きですからね。形式上、従兵も必要であろうと。そういうわけなのです」

警備隊を公休扱いとはいえ、パウル兄さんがバウマイスター領に入るには名目が必要となるらしい。
一人で私的に里帰りならともかく、彼ら護衛を連れているからだ。

そこで、地方巡検視制度を利用するそうだ。

「でも、半分形骸化した制度じゃないか」

「エルが知っているとは驚きだ！」

「ルイーゼ、何気に失礼」

地方巡検視とは、王国政府が領地を任せている貴族がちゃんと領内の治安を維持しているのかを確認するため。
定期的に人を送る制度であった。

戦乱期にはある程度作用していた制度なのだが、今では完全に形骸化している。
貴族達も、余所者に入り込まれて治安がどうのこうのと言われるのが嫌であったし、彼らは万が一その貴族が離反した時のために情報収集も行っていた。

地方巡検視の滞在費用が、査察される側の貴族の負担であった事も要因となり、反対多数で次第に形骸化されていったという歴史があったのだ。

「うちの実家にも来た事があるしな」

今では、十年に一度来るかも怪しくなっているらしい。
視察自体も、領主が準備した場所だけを形式的に見て終わるそうだ。

あとは、食事と宿泊費用くらいは出して貰う。
ブライヒレーダー辺境伯くらいの大物だと毎年視察あるが、地方の零細領主だとエルの実家のようになるわけだ。

「お館様は、制度に名を借りたタカリだと溢しているけど……」

この制度が無くならないのは、金が足りない貴族の子弟達の臨時アルバイトになっているからだ。
遠方に行く事も多いので王国からの報酬は悪くないし、移動中も、

視察先に滞在中にも、無料で生活が出来る。

「貧乏な貴族の子弟達専用の、臨時アルバイトというわけだな。視察なんて形式だけで、昔ほどじゃないけど時間と金を使うわけだ」

ブランタークさんは、『お金はともかく、時間が勿体無い』と溢しているブライヒレーダー辺境伯を見た事があるそうだ。

形式だけでも視察なので、ブライヒレーダー辺境伯自身が時間を割いて彼らを案内する必要があるからだ。

「それでも、来るだけマシだろう」

「マシなんですか？」

「うちの実家に、そんな物は来た事が無いぞ」

パウル兄さんが言うには、バウマイスター領にそんな物が来た試しはないそうだ。

「治安もクソも無い領地だし、誰も行きたくないからな」

確かに、そこまでして視察に訪れる甲斐のある領地でもなかった。

反乱の可能性も、ほぼゼロなわけだし。

というか、もし反乱されても今までなら、『ふーーーん、そう』で終わってしまいそうなのが怖かった。

「故に、俺が初めてバウマイスター領の地方巡検視に命じられたわけだ。本命は、ヴェルの護衛だとしてもな」

「形骸化したとはいえ、地方巡検視は貴族様の大切なお仕事なわけでして。こうして、私が従兵としてパウル様のお世話をさせていただくわけです。はい」

「本当、形式だけなわけ」

パウル兄さんは、うちの次男以下の扱いを見ればわかるが、自分の事くらいは自分で出来る。

それでも、立場が以前とは違うので、こうして従兵も付けられるわけだ。

「ねえ、お腹空いた」

「今、紹介してからな」

そして最後に、第五の護衛の紹介なわけだが、その存在は異質ともいえた。

警備隊などの軍に所属はしていないが、エドガー軍務卿の推薦で戦斧の達人だと聞いていたので、物凄く屈強な男性が来ると俺達は思っていた。

なのに目の前には、パウル兄さんの服の袖を引きながら、『お腹減った』を連呼する少女の姿があったのだ。

「あの……。この娘は、誰か護衛さんの見送りとかでは？」

「それが、第五の護衛って、この娘なんだわ」

「お腹減った。ヴィルマ・エトル・フォン・アスガハン」

自己紹介の前に『お腹減った』を入れるほど、お腹が減っているらしい。

パウル兄さんに食べ物を強請る様子は、体の大きさがルイーゼとあまり違わない事もあって、まるで彼の娘のように見えてしまう。

「懐かれましたね」

「そうなのか？　とにかく良く食べるんだよ。この娘」

昨晩、エドガー軍務卿の家臣が、その娘を銀板と共にパウル兄さんの家に置いていったそうだ。

「銀板は食費だって事だな。さすがは、エドガー軍務卿って思ったんだけど……」

エドガー軍務卿が寄越したお客さんなので、パウル兄さんの奥さんは夕食を豪華にしたそうだ。

ところが……。

「追加で、何回か作り直す羽目になってな。あの銀板が無ければ、今月のうちの家計は詰んでた……」

それと、今もお腹が減ったと言っているが、朝食は五人前を平らげているそうだ。

「そうなんですか……」

一見、とても戦斧の達人には見えないのだが、パウル兄さんの服の袖を引いている反対側の手で、彼女の身長を超える長さとの柄と、巨大な両刃に、先端にも鋭い穂先の付いた特製の戦斧を持っている。

あんな重たそうな戦斧など、少なくとも俺には持つ事すら不可能だ。

「良く、そんな重たい戦斧が持てるよな……」

見た目よりも、遙かに力があるようだ。

「ヴィルマさんは……」

「ヴィルマでいい」

「ヴィルマは、幾つなんだ？」

「十三歳。お腹空いた」

「了解！」

とにかく、お腹が減ったらしい。

俺が魔法の袋からバザーで売れ残ったお菓子などを渡すと、それをボリボリと食べ始める。

その様子は、まるで子リスのようであった。

髪の色がピンクで。

その髪をお団子状に纏めているので、桃色お団子リスというわけだ。

前世とは違い、この世界には変わった色の髪をした人が多いので面白い。

「甘さ控えめで、美味しい」

「そうか、良かったな」

「お代わり」

「はい……」

良く食べるようだが、味音痴というわけでもないようだ。
お菓子は王都でも有名な店の品であったが、ヴィルマは遠慮なしに食べ続けていた。

「あの、パウル兄さん……」

「言うなよ……」

内乱が起きるかもしれない場所に、十三歳の未成年を連れて行く。
良くない事ではあるが、エドガー軍務卿の推薦なのでパウル兄さんにはどうにも出来なかったようだ。

「でも、この娘が今回の護衛で一番強いから」

「えっ！　そうなんですか？」

「パウルさんの言う通りですね。この娘、ワーレン様でも勝つのに苦労する実力の持ち主ですから」

腕自慢な他の護衛達から文句でも出るのかと思ったのだが、ジークハルトさんなどは、すぐにその事実を認めているほどであった。

「その娘、英雄症候群なんですよ」

「初めて会ったな」

英雄症候群とは、一種の遺伝病とも言えるかもしれない。
前世で似ている症状を探すと、ヘラクレス症候群であろうか？
あくまでも、似ているだけであったが。
体の筋肉密度が過剰な上に、その筋肉繊維に極小の魔力粒が効率良く絡み付く体質なのだそうだ。

「導師ほどパワーは無いけど、極小の魔力で常人など圧倒するパワーを長時間発揮できる。燃費に限って言えば、導師など比べ物にならん」

さすがに、ブランタークさんは知っているようだ。
しかしヴィルマは、見た目には筋肉ムキムキに見えない。
どこにでも居る、小さ目の普通の少女だ。

「（あっ、ルイーゼよりも胸が大きい）」

というか、イーナともあまり変わらないかもしれない。
言うと二人に殴られそうなので、何も言わなかったが。

筋肉の密度に魔力が絡んでの体質の問題なので、英雄症候群は見た目では判別が付かないのだそうだ。

「だから、初級に毛が生えた程度の魔力でもその娘は強いのさ。対人戦闘能力に限って言えば、最強クラスだろうな」

今回の件で戦闘があるとすれば、それは対人戦闘になる可能性が高い。

だからこその、ヴィルマ嬢なのであろうと。

「英雄症候群は、一千万人に一人出るか出ないかだ。魔法使いよりも稀少なわけだな」

魔法使い相手を除き、対人戦闘ではほぼ最強なわけだが、その代償として、過剰なカロリーを摂取しないとすぐに飢えて死んでしまう。

生まれによっては、その才能を生かす前に飢え死にしてしまうそうだ。

「それで、お腹が減ったなのか」

「ご馳走様。これで落ち着けた。エドガー様から言われた。バウマイスター男爵様を守れと」

この娘は、エドガー軍務卿の隠し札というわけだ。

軍は女性への門戸が狭いし、彼女自身もまだ未成年でしかない。

普通の仕事には使い難いが、俺の護衛としてなら使える。

そういう事のようだ。

「なあ、エリーゼ」

「はい。アスガハン準男爵家は、代々軍人を輩出するエドガー軍務卿とも縁戚関係にある法衣貴族家ですね」

ここで俺に死なれると困るのと、実家での事態解決後に手を貸して恩を売り、未開地開発の利権に食い込みたい。

一見、軍人軍人しているように見えて、やはりエドガー軍務卿も

大貴族であるようだ。

「もう一つ、エドガー様からお仕事を頼まれている」

「お仕事？」

「向こうは娯楽もない田舎だから、私がバウマイスター男爵の伽の相手をする」

「……。意味わかって言っているか？」

「何となく……。退屈させなければ良いと」

貴族の娘だし、十三歳にもなれば理解しているはずだが、見た目と喋り方で理解していないようにも見え。

というか、エリーゼ達の前でそんな事を堂々と言わないで欲しい。

三人とも、冗談だと思って笑っている風に見えて、実は激怒しているかもしれなかったからだ。

「バウマイスター領は、お店すらないと聞いた。娯楽は、必要」

「どうせ、クルトのせいで退屈はしねえよ」

これから実家で起こる可能性が高い混乱を解決すべく、ようやく決意を固めた俺なのに。

まさか、こんな爆弾を寄越すとはエドガー軍務卿も相当なタマであるようだ。

そして、この事態にエリーゼ達は……。

「可愛らしい娘ですね。保護欲を誘いますし」

エリーゼは水筒に入ったマテ茶をヴィルマに渡しているが、先ほどの発言から、早速飼い慣らそうとしているようにしか見えなかった。

「エリーゼが、ちょっと怖い……」

「ううっ！　ボクと同じような背丈。でも、胸がっ！　胸が圧倒的に！」

イーナは新しい側室候補に溜息をつき、ルイーゼは良く見ると自分よりも胸が大きい年下のヴィルマに危機感を募らせているようであった。

第四十九話　バウマイスター領滞在と、クルトとのトラブル。

「さてと。到着だな」

「しかし、瞬間移動って便利なんだな」

実家に関わる様々なトラブルについて、王都まで飛んでエーリッヒ兄さん達に相談した翌日。

俺達は、再びバウマイスター領に舞い戻っていた。

そういえば、昨日は魔の森で、普通の冒険者なら勘弁して欲しいレベルのアンデッド集団と二回も戦闘をしたはずなのに、実家のせいでその印象は薄い。

むしろ、大叔父のリッチの態度に感動したくらいしか記憶が残らなかったくらいだ。

彼は理不尽な遠征で命を落とした怒りから、他のアンデッドよりも遙かに早くリッチにまでなっていた。

だが、俺が親族だと気が付き、家族の情況を教えると一切戦意を見せなくなってしまう。

そして、ただ一言『タノム』と。

俺は、彼を浄化で成仏させ、実家の騒動に介入する事を決意する。

その後の、王都ブラント邸におけるエーリッヒ兄さんとの相談であったが、結局クラウスの言っている事が事実なのかはわからなか

った。

１００％真実でも、１００％嘘でもない。

こんな感じであろうか？

それに、エーリッヒ兄さんから言われてしまったのだ。

もう俺の影響力が大き過ぎて、それが事実かなど瑣末な問題なのだと。

そんな事を調べるのに労力を使うのなら、俺が実家を巡るゴタゴタを何とかすべきであると。

確かに、その方が将来的にも無駄な労力を使わない事は確かだ。

人に恨まれるという点においても、クルトはもう今更なので気にしてもしょうがないであろう。

俺は、実家の領地をこの手に奪取する事を決意する。

とは言っても、自分で領地開発などゴメンなので。

金だけ出して、後は委任作戦で行く予定であったが。

前世で言うと、歴史シミュレーションゲームで敵国と接していない領地に、政治能力に長けた部下を太守にして置き。

時間が経つと、あら不思議。

勝手に国力が増して前線に金と物資が送れるわ。

という作戦になっていた。

別に金と物資を送る前線はないので、ただ領地の国力が増せばそれで成功なのだが。

ちなみに失敗したら、さっさとアーカート神聖帝国に亡命する予定である。

願わくは、アーカート神聖帝国の飯が美味い事を願うのみであった。

魚介類は美味しいので、あまり心配はしていないのだが。

エーリッヒ兄さん達から話を聞いた俺達は、翌日にバウマイスター領に戻ろうとするが、それに合わせて護衛を付けられてしまう。

間違いなく、ルックナー財務卿とエドガー軍務卿からエーリッヒ兄さんに話が行ったはずで、黒幕は彼らなのであろう。

パウル兄さんと、五名の護衛を付けられてしまったのだ。

しかも、パウル兄さんなどは領地入りを正当化するために、地方巡検視にまで任命される始末。

そんな事までするとは、やはり王国は俺の資金を元手に王国南端部の未開地開発を進めるつもりなのであろう。

なるほど、人のお金ならば最悪失敗しても王国の財政は大丈夫なわけだ。

本当に、貴族とは嫌な生き物である。

そして、翌日の朝。

優秀な護衛達、聞けばその大半が貴族の子弟らしいのだが。

その中に一人、困った人が混じっていた。

エドガー軍務卿の縁戚にして、まだ未成年の少女。

なのに、英雄症候群という体質のために怪力を有する、戦斧の達人ヴィルマ・エトル・フォン・アスガハン。

しかも、あのエドガー軍務卿の切り札で、間違いなく俺の側室候補でもあった。

ここに、俺のハーレム伝説がスタートするかもしれない。

というか、前世では一人でも持て余し気味だったので、正直勘弁して欲しいところなのだが。

「なあ、エリーゼ」

「はい、何でしょうか？」

人数が増えたので、三回に渡ってバウマイスター家本屋敷の裏にある森へと移動した俺達であったが、目下興味の的はヴィルマと言う少女の事であった。

「あの娘、ちょっとなぁ……」

また『お腹減った』が出ると困るので、彼女に大量の飴を渡したのが幸いしたらしい。

ヴィルマは、それを舐めながらパウル兄さんの護衛達と何か話し合いをしているようだ。

多分、護衛計画の相談なのであろう。

「確かに少し言動が幼いような気もしますが、頭は良い方だと思いますよ」

護衛達は、俺の身を守る事が仕事になっている。
だからこそ、五人で集まってその計画を相談しているのだが、ヴィルマもそれに普通に参加している事から。

最初の印象で判断するのは、大きな間違いであるようだ。

「彼女の事は知っていた？」

「噂くらいですが」

ヴィルマは、アスガハン準男爵家の三女なのだそうだ。
アスガハン準男爵家は、エドガー軍務卿の縁戚で代々軍人家系とはいえ。
法衣準男爵家なので、ヴィルマは政略結婚の駒に使えるかも怪しい存在だ。

加えて、英雄症候群というハンデも存在する。

「とにかく沢山食べないと飢え死にしてしまいますから。ある程度大きくならないとハンデですね」

武芸を教えて戦わせれば強いのだが、そこまで育てるには普通の子供の何倍もの食費がかかる。
アスガハン準男爵家としても、惜しい才能ではあるのだが、彼女ばかりにお金を使えないという事情もあった。

そんな世間が羨むほど、法衣準男爵家が裕福というわけでもないからだ。

男ならば、その怪力を生かして軍で活躍したり、武芸大会などで名を挙げ。
その功績を持って、どこか娘しかいない貴族家に婿入りするなどの手もある。

だが、ヴィルマは女性だ。
冒険者として活躍する以外に、彼女のような存在の居場所は、実は意外と少ないのがこの国の現状であった。

「ただ、あの娘は子供の頃から逞しかったらしいけどな」

「パウル兄さん？」

「この話は、エドガー軍務卿の家臣から聞いたんだ」

ヴィルマは頭も悪くなかったので、実家にあまり迷惑をかけたくないと思ったらしい。
十歳くらいになると、家に置いてある武器を持ってエドガー軍務卿の屋敷に向かったらしい。

自分の怪力を見せて、彼に売り込みに行ったのだ。
女性なので扱いに困るところであったが、エドガー軍務卿くらいの大物貴族になると持ち駒は多いに越した事は無い。

「エドガー軍務卿としては、何かに使えると思ったんだろうな。私的に鍛錬をして食わせていたと」

その怪力に見合った戦斧術を会得させ、他にも勉学や食費などで面倒を見ていたらしい。

そして今、彼女の最も有効な使い道が見付かったと言うわけだ。

現在、あまり露骨に俺に女を近付けると、ホーエンハイム枢機卿などから文句が出る事が多い。

だが、護衛兼冒険者メンバーとしても通用する女性ならば、彼でも文句は言えまいと。

「今のヴェルは、冒険者でもあるわけだ。そこに、政略結婚用の貴族のご令嬢なんて連れて来ても無駄だろう？」

「確かに、ただの邪魔にしかならないですね」

今は実家の件で寄り道しているが、普段はパーティーメンバーで王国各地に出かけて冒険者として仕事をする予定なので、そういう深窓の令嬢などを紹介されても困るのだ。

「ヴィルマなら、全く不自然じゃないわけだな」

冒険者として魔物の領域に入っても戦えるし、今回のような護衛にも使える。

俺に付けるに、最適な人材というわけだ。

「ヴィルマは、ヴェル付きにするからな」

「はあ……」

パウル兄さんと話をしている間に、五人での相談は終わったようだ。

五人共、俺を護衛するのが任務なのだが、パウル兄さんには地方巡検視の仕事がある事になっている。

とはいえ、普通なら通達が来てから山道を一ヶ月半かけて来るしかない地方巡検視が俺達と一緒に姿を見せ、しかも団長はパウル兄さんと。

さすがにクルトでも、額面通りに受け取るはずがなかった。
王国政府が、この領地の統治体制に不満を持っているのだと。
ある意味、宣戦布告とも言えたからだ。

「親父は知らんが、クルト兄貴の恨みは俺にも向く。そうすると、ヴェルへの圧力も減るわけだな」

ともかく、まず最初にパウル兄さんは、父やクルトに挨拶に行かなければならない。
なぜなら、地方巡検視としてここを訪れた事になっているからだ。

「ジークハルト達は警備隊に所属しているし、貴族の子弟ではあるから団員に任命されている」

なので、パウル兄さんと一緒に挨拶に行かなければならないのだ。

「ところが、ヴィルマは団員ではない」

「私は、バウマイスター男爵様の私的な護衛」

俺から貰った飴をバリバリ食べながら、ヴィルマは自分の役割を語っていた。
しかし、良く糖尿病にならない物だ。

「あと、必要に応じて伽もする」

「それは、あとで要相談という事で」

「バウマイスター男爵様がそう言うなら」

ヴィルマは、意地でも伽をするとは言わなかった。

あまり意味がわかっていないのか、強引に押すのは良くないと考えたのかは不明であったが。

ただ、まだ飴をバリバリと食べていた。

舐めるのではなく、食べていたのだ。

「その飴、美味しいか？」

「前から食べたいと思っていたお店で美味しい。自分では買えないから」

王都にある貴族御用達のお店の飴なので、ヴィルマは今までに食べた事がなかったらしい。

実家でも、お世話になっていたエドガー軍務卿にも、そんな贅沢は言えなかったのであろう。

そう思うと、この娘が少し可哀想になってしまう。

これが、エドガー軍務卿の狙いであってもだ。

「ただ、飴は舐めた方が美味しいと思うぞ」

「次からそうする」

とにかく、全員の移動と事前の相談なども終了したので。

合計十二名にまで増えた俺達は、バウマイスター領本屋敷裏の森を出て、父やクルトに元に急ぐ。

「パウル……。いや、バウマイスター卿でしたな」

二年ほど前、ヘルムート兄さんの王都バウマイスター家婿入りとほぼ同時に、パウル兄さんも法衣騎士爵位の爵位を与えられている。

なので父は、実の息子相手に同爵位の貴族としての言葉遣いを崩さなかった。

しかし、俺の男爵家に、王都の本家、新法衣騎士爵家、そしてこの領地と。

まるでアメーバーのように、バウマイスター家の数が増えたものである。

「お久しぶりです。実は、先日王国から地方巡検視に任じられまして」

王国政府から、領地が開かれてから百年以上も経つのに、未だに一度も巡検視が行っていないのはおかしい事であると。

だが、視察にかかる移動時間などを考慮すると、そう簡単には巡検視は送れない。

そこで、魔法で移動可能なバウマイスター男爵を移動役に、現地の情勢に詳しい王都警備隊所属のパウル兄さんを巡検視に任命したのだと。

と言いながら、パウル兄さんは王国政府発行の正式な巡検視への任命状と、父に宛てた王国政府からの巡検視への協力命令書の二枚

を見せていた。

「これは、オフレコですけど。地方巡検視の実情は、噂通りなのでそこまで警戒をする必要はないかと」

「我が領では、滅多に犯罪も起きませんからな」

「それは、私でも知っていますから」

パウル兄さんと父との間で、白々しい会話が続く。
ここに来た理由など、パウル兄さん自身も含めてわかり切っていたのだから。

「それで、隣の男爵殿」

「これは失礼。クルト殿」

パウル兄さんの顔を見てから余計に顔を渋くさせているクルトであったが、今度は俺にその来訪目的を聞いていた。

昨日の今日なので、例の任務が成功したのか？
それとも、失敗したのか？
そのどちらかしかないのであったが。

「任務は無事に成功しました。バウマイスター諸侯軍の遺品の回収にも、粗方成功したものと」

「そうか」

「遺品に関しては、遺族の方に見て貰うしかないでしょうね」

そうなると、どこかに遺族達を集める必要がある。
確か、バウマイスター諸侯軍の犠牲者は七十七名だったので、その遺族が全員集まれる場所となると、先にバザーを行った広場しかなかった。

「夕方にでも集まって貰い、そこで遺品を見て貰うと」

「いや、必要ない。それらしい物は、全て置いていけ」

「はあ？」

ところが、ここでまたクルトがアホみたいな事を言う。

「うちは貧しい農村なんだ。先日のバザーもそうだが、そう簡単に領民達を集めろとか言われても困る。遺品の照会作業は、俺がやっておく」

「いえ、お断りします」

「何だと！」

「怒る事ですかね？」

怒るという事は、何かやましい事でも考えているのであろう。
そもそも、俺の依頼者はブライヒレーダー辺境伯である。

彼が遺品を遺族の元へ返して欲しいと言っている以上、それが完全に履行されているのかは、自分で確認する必要があったからだ。
もしクルトに渡して任せると、彼が全て自分のポケットに入れか

ねなかった。

あんな錆びた武器や防具を遺族達から搾取しなくてもと思うのだが、他にも領民達のサイフなどもほぼ全員分は確保できている。

どうも遠征先で狩りの成果があったようで、先代ブライヒレーダー辺境伯から臨時報酬を得ていたらしい。

思った以上に、銀貨などがビッチリと詰っていたのだ。

「（遺品のサイフの中身までネコババかよ……）俺は、ブライヒレーダー辺境伯様から、責任を持って遺族に直接返すようにと言われているのです」

「貴様！　俺はこの領地の！」

「次期当主就任予定者ですよね。バウマイスター卿？」

俺の皮肉を込めた一言に、クルトは更に顔を真っ赤にさせる。

そして、その情況を良くないと思ったのであろう。

珍しく父が、先に俺に話しかけてくる。

「遺族を呼んで遺品を見せるのは構わないが、本当に判別が付くものなのか？」

「実は、ブライヒレーダー諸侯軍よりも楽に」

ブライヒレーダー諸侯軍の場合、先代当主、幹部連中、魔法使いなどは装備の差で判別が容易であった。

ところが一般兵士ともなると、皆同じ装備品なので誰の物か判別が難しい。

逆に、もう一方のバウマイスター諸侯軍の方は判別が容易だ。
みんな、統一されていないバラバラの装備であったからだ。

「わかった。許可をしよう。遺族の者達には、夕方にでも広場で遺品を見に行くようにと」

夕方なのは、農作業を終えてからという事であった。

「あと、この領内にはいないと思うが、成りすまして遺品を持ち去る輩が出る可能性もある。その補佐に、クラウスを使うと良い」

父は少しだけ表情を曇らせながら、俺にクラウスを助けに出すと伝えてくる。

父とクラウス。
過去の因縁などもあり、その関係が良好とはとても言えない。
だが、能力的に考えて父は使わざるを得ないという事なのであろう。

もう一つ、この仕事をクルトに任せると、トラブルしか起きないとわかっているのであろうと。

「今日はこんなところかな？　巡検視殿は、私の案内で領内を視察して貰う事にして」

今日父は、パウル兄さん達を領内に案内する予定なのだそうだ。
地方巡検視本来の仕事を行うのであろうが、既にクルトでもパウル兄さん達が俺の護衛戦力である事に気が付いている。

かと言って、建て前を放棄するわけにもいかず。

父は何食わぬ顔でパウル兄さん達を実家なので見慣れている領内へと案内し、パウル兄さんも領内の治安に問題はないかと形だけのチェックを行う。

これが大人というやつなのだと、中身がおっさんの俺は思う事にしていた。

「ところで、バウマイスター男爵殿は本日の予定は？」

遺品の照会が夕方なので、それまでは何をするのかと父は尋ねてくる。

「数日大人数で滞在するので、出来れば」

「確かに。狩りや採集は必要ではあるか」

と言うか、それをしないとまた飯はボソボソの黒パンと薄い塩スープになる可能性がある。

さすがに今の俺では、あの食事は勘弁して欲しいところだ。

「採集と狩猟は許可をしますが、その前に……」

「その前に？」

俺は、父から一番大切な事を忘れていると指摘されてしまうのであった。

「お久しぶりです、母上」

「先日は、挨拶もせずに申し訳有りません」

父から指摘されたのは、パウル兄さんも俺もまだ母に会っていないという点であった。

この国が男尊女卑であるというか、パウル兄さんも公務という事になっている地方巡検の仕事を優先させただけとも言える。

あとは、まさか俺達が父達と仕事の話をしているのに、そこに母が無理に乱入すればどうなるのか？

肉親への情など一切考慮されず、ただ叱責されるだけなので静かにしていたのであろう。

更に悪いのが、魔の森での浄化を引き受けた昨日に、俺が母と顔を合わせていなかったという点もあった。

クルトのせいで、それどころではなくなってしまったのだが。

「いえ、ヴェンデリンの立場の大変さはわかっています」

クルトの奥さんのアマーリエ義姉さんもそうだが、母も外部から嫁入りした人間なので、この領地の閉塞性などは良く理解していた。

俺の存在のせいで、これからここも簡単に他領との交易が出来るようになるかもしれない。

この事実に、半数以上の領民達が期待している反面。

逆にそんな利便性など必要なく、今の生活で十分だと考えている人達もいた。

クルトを支援する、本村落の年配の人達である。
元の祖先がスラムの住民だった事を考えると、今の生活で十分だと。
むしろ、俺の存在など領内の秩序維持には邪魔になるだけだと。
彼らからすれば、自分達が父～クルトのラインを支持し、それによって相対的に他の村落の住民より厚遇される事だけを望んでいるのだから。

「それにしても、二人共立派になりましたね」

自分が腹を痛めて生んだ子なのに、その立場の急激な変化で碌に顔を合わせる機会すらない。
いくら二度目の人生における母とはいえ、それは少し辛い物があった。

「お袋、俺はヴェンデリンのオマケだから」

母の私室には、普通に親子として会話できるようにパウル兄さんと俺しか入室していない。
なのでパウル兄さんは、母の言葉に半ば皮肉を込めて反論していた。

「エーリッヒはブラント家の婿に自力でなったから別だろうけど、ヘルムートも俺と同じ気持ちだろうけどな。兄としては不甲斐なく思い。ただ、クルト兄貴みたいに駄々を捏ねても仕方が無いとも。恵まれているなという気持ちはあるんだ」

弟のおかげで、爵位を継承可能な貴族になれた。

それは理解しているが、兄としては不甲斐ないような気もする。

俺としても、パウル兄さんの気持ちは良く理解できた。

「私もクルトはおかしいと思いますが、この領地で私が言える事などないのです」

こんな田舎の僻地で母がクルトに注意などしたら、それだけで保守的な連中が騒いでしまう。

残念ながら、ここはそういう土地なのだ。

父やクルトが計算などでクラウスに頼り切りになっているが、実はそんな事をしなくても母やアマーリエ義姉さんならある程度はこなせるはず。

だが、その手の仕事に女がしゃしゃり出るのは生意気であろうと。

そのせいでクラウスとお互いに疑心暗鬼になっているのだから、これは笑えない現実なのだが。

「もう成るようにしかならないのです。その話は止めましょう。ところで、ヘルムートとパウルは結婚をし、ヴェンデリンも婚約者がいますよね」

「はい」

こういう時に、前世なら写真などを見せられるのにと思ってしまう。

実はこの世界にもカメラは存在するのだが、魔道具なので物凄く値段が高くて下級貴族には手が出なかったのだ。

と言ってもこれはパウル兄さんの事情で、俺はカメラを買えない事もなかった。
あまり興味が無かったので、購入していなかったのだが。

「エリーゼが、母上に挨拶をしたいと」

「わかりました。他にも、側室候補が居るのでしょう？　一緒に連れて来なさい」

俺は、部屋の外で待っていたエリーゼ達を母に紹介する。
エリーゼは貴族の礼儀に従って粛々と、イーナも少し緊張していたようだが普通に。
あのルイーゼですら、緊張からか静かに自己紹介をしているほどであった。

「私もレイラさんと仲が良いわけではないけれど、争っているところを表に見せないように。そういえば、私の母も妾と仲が悪かったですね」

母とレイラさんとの関係は、大嫌いとか嫌悪感を感じるほどではない。
だが、気分は良くないでの距離を置いている。
そういう事のようであった。

「大丈夫です、お義母様。私達は同じパーティーメンバーでもありますし」

「はい、三人で協力しないと」

「ヴェルは……、じゃなかった。ヴェンデリン様は、周囲が側室を押し込もうと懸命なので」

「そうみたいですね」

母は部屋に入る前に、俺の傍にいたヴィルマの姿を確認している。今の俺の状態から見て、押し付けられたのであろうと気が付いているようであった。

「ヴェンデリンの里帰りにより、この領内では色々と起こる可能性があります。あなた達は、しっかりとヴェンデリンを支えてください。母である私から言う事はそれだけです」

多分、クルトの身の安全も母としては頼みたいのであろう。だがそれを優先して、俺やパウル兄さんに何かがあっても意味が無い。

とにかく、自分の安全を優先して欲しい。

そんな風に、母は思っているようだ。

「あの……。母上は……」

「こんな僻地にある、男尊女卑の田舎領地なのです。老いた私など無視されますから」

確かに、どんな事態に陥ったとしても、政治的な権力など何も無い母に危害が及ぶ可能性は低い。

父やクルトの身に何かが起こっても、その先で必要な事態の収拾には、間違いなく母が必要になると皆が知ってもいる。

なので、母は自分の身が安全な事に気が付いているようだ。

「ただ、何も起きないで欲しいと願うのも事実です」

「いや、それは……」

「わかっています。あくまでも、願望ですから」

ここでもし何も起きなくても、またすぐに領内が混乱したら意味が無い。

もし残酷な結果になっても、何かが起こるのを待ち、それを処理する必要があるのだ。

「ヴェンデリン、パウル。ただ犠牲者が少ない事を望みます」

「はい」

俺とパウル兄さんは、ただ静かに頭を下げるのであった。

「とは言え、今は基本待機だよな？」

「休暇とも言えるか」

母との面談を終えた俺は、その後すぐにブライヒブルクへと飛び。

ブライヒレーダー辺境伯に、今回の浄化で得た物品の大半を渡していた。

例外は、別口のバウマイスター諸侯軍の遺品と思われる物だけである。
判別については、両者が別行動であったのが幸いしていて、間違える可能性は少ない。
元々、装備品が違うので判別が容易だったのだ。

ブライヒレーダー諸侯軍戦死者遺族への遺品の返還に、他に得た竜の骨や魔石の鑑定など。
ブライヒレーダー辺境伯に聞くと一週間ほどかかるそうで、それまでは俺達は領内で待機する事になっている。

まだバウマイスター諸侯軍戦死者遺族への遺品の返還もあるし、得た利益の三割を税として父に収める必要があったからだ。

そんなわけで、俺達は現在本屋敷裏の森で狩猟や採集に興じていた。

今回、また分家に泊るというのは良くないとクラウスが意見を述べたので。
俺達は、父から本屋敷近くの空き民家を借り受けている。

実はその空き民家は、クラウスの父親が名主をしていた頃に住んでいた家であったそうだ。

『数年前まで、予備の農機具と麦の保管に使っていたのですが、今は空き家ですので。掃除なども、既に済ませてあります』

『では、遠慮なく借りるとするか』

分家が駄目だから本屋敷では、クルトと顔を合わせる度に息が詰ってしまう。
それに彼のお膝元なので、また彼が何かを企む可能性もあったからだ。

『パウル様達も、ご一緒で宜しいかと』

『そうだな』

クラウスの見事なお膳立てにより、俺達の滞在先は決まっていた。
彼の意図は気になるが、余所者十二名で固まれて、食事なども自前で作れる。
無いとは思うが、毒を混ぜられる危険は減ったという事だ。
最悪、毒消しの魔法もあるので、滅多な事は起きないと思う事にしておく。

「パウルさん達は、結構大変なのかな？」

「ある意味な」

ヴィルマを除く、形式上は地方巡検視ご一行になっているパウル兄さん達は、現在父の案内で領内を視察している最中であった。
とは言っても、この領内では普段から犯罪など起きなかった。
精々で、仲が悪い領民達の喧嘩くらい。
一応形式に則って視察はしているが、父もパウル兄さんもお互いに茶番だと思っているはずだ。

「まあ、俺達から何か起すわけにはいかないからな」

「そういう事」

領内で問題が発生したので、それを俺達が収拾する。
そして、その最高責任者である父に引退を迫り、ついでにクルトも責任を取らせて廃嫡する。

一番可能性がある未来であろうが、それを成すのに俺達が先に何かをしてはいけないので、こうして休暇を兼ねた待機という状態になっていたのだ。

何もしていないわけでもなく、俺達がここに居る事で挑発しているとも言えたのだが。

「ヴェル様、野イチゴが一杯」

「頑張って採ってくれよ」

「野イチゴジュース」

森に入ったのは、俺達いつものメンバーに。
パウル兄さんから個人的な護衛だと押し付けられた、ヴィルマであった。

俺を『ヴェル様』と呼ぶようになったのは、俺が『バウマイスター男爵様』を止めてくれと頼んだ結果である。

「あの娘、結構慣れていないか？」

他の女性陣と一緒に、ヴィルマは野イチゴや自然薯などを採集しているのだが、その手付きはえらく手慣れたものがあった。

「実際に、慣れているんだって」

いくらエドガー軍務卿から援助があるとはいえ、彼女はとにかく沢山食べないと生きていけない。

そこで、時間が空けば、王都郊外の森で狩猟や採集に勤しんでいたそうだ。

「経験者なんだな。これが」

「ふーーーん」

それから一時間後、山菜類、野イチゴ、自然薯、果物などが必要量集まったので、今度は未開地へと移動して狩りを行う事にする。

森でも獲物は獲れるのだが、未開地の方が獲物が大きくて数が多いからだ。

ただ、その分野生動物なのにえらく凶暴で、バウマイスター家が調査を行わなかった原因にもなっていた。

「狼に、熊に、猪に、鹿に、草原ウサギにと。メインは、そのくらいかな？」

俺は、エルと一緒に久しぶりに弓で草原ウサギを狩る。

思ったよりも腕は落ちていなかったようで、二人で十羽ほどが獲れていた。

すぐに魔法で血抜きをしてから、魔法の袋に収納する。

「ヴェル。ここは、獲物が多いわね」

「未開地だからな」

イーナは、投擲専用の槍で数頭の鹿を仕留めてご機嫌なようだ。

「ところで、ルイーゼは？」

「猪を見付けたんだって」

少し離れた草原で、ルイーゼは見付けた猪を挑発しつつ、突進して来た所を跳躍で上空に退避。

通り過ぎる直前に素早く脳天に一撃という方法で、呆気ないほど簡単に巨大な猪を仕留めていた。

「ヴェル、血抜きをお願い」

「わかった。あれ？　エリーゼとヴィルマは？」

ルイーゼが背負って来た猪を、魔法で血抜きしながら袋に収めていると。

そういえば、エリーゼとヴィルマの姿が見えない事に気が付く。

「私は、ここに居ます」

よくよく考えると、エリーゼに狩猟に関するスキルは存在しない。

なので、近くで食べられそうな植物などを採取していたようだ。

「ヴィルマさんでしたら、確か向こうに」

エリーゼに言われた方向に視線を向けると、そこではヴィルマがとんでもない物と戦っていた。
この草原でも滅多に見ない、全長四メートル近い巨大熊と睨み合いを続けていたのだ。

「アレは……」

俺なら、魔法を使わないとすぐに殺されてしまうであろう。
そんな巨大熊を相手に、いくらヴィルマでも厳しいと思った俺達は急ぎ彼女の救援に向かう。

ところが、ヴィルマの行動は俺達の想像を遙かに超えていた。

「久々のお肉三昧」

ヴィルマはジャンプをすると、巨大な戦斧で素早く熊の首を跳ね飛ばしたのだ。
ヴィルマに対して仁王立ちをしていた熊は頭部を失い、その切り口からまるで噴水のように血を吹き上げる。

「あの……。ヴィルマ？」

「今日はお肉一杯」

「うん、一杯食べてね」

俺は、護衛として十分な能力を持っているから良いのだと。
自分で自分を納得させるのであった。

「えっ！　この巨大熊の首を一撃で？」

「はい」

「今度から、ヴィルマさんって呼ぼうかな？」

その日の夜、大量の獲物を材料に料理をしているとパウル兄さん達が戻ってくる。

今日は、夕方まで領内を父とクルトの案内で巡っていたそうで、皆精神的に疲れているようだ。

「こんな視察、必要ないですよね」

「とは言え、形式は重要だぞ。俺達は、地方巡検視の一員なわけだし」

必要もない視察で疲れたようで、ジークハルトさんは不満そうな表情を浮かべる。

そしてそれを、年長者であるオットマーさんが窘めていた。

「それよりも、飯だな」

もう終わった視察など、どうでも良いらしい。

ゴットハルトさんの一言で、エリーゼ達が準備した夕食がテーブルの上に並べられた。

「これは、予想以上にご馳走じゃないか」

パウル兄さんも俺と同じく、またあの薄い塩味の野菜スープとボソボソの黒パンだと思っていたらしい。

だがそれを避けるために、俺達は父の許可を得て狩りをしていたのだから。

「王都で貧乏警備隊勤務だけど、うちの実家よりはマシな飯が食えるからな」

そう言いながら、パウル兄さんは熊肉の味噌煮込みを美味しそうに食べていた。

ちなみに今日のメニューは、猪肉と山菜の鍋（ショウユ味）、熊肉の味噌煮込み、自然薯とホロホロ鳥の挟み焼き、ホロホロ鳥のロースト、草原ウサギ肉のワイン煮など。

そしてデザートには、野イチゴのジュースやジャムと。

パンは焼くのが面倒なので、大量に王都のパン屋で購入して魔法の袋に入れていた。

なので、常に焼き立てを食べられるようになっている。

あと、俺の希望で御飯も炊いてあるので、どちらでも自由に食べられるようになっていた。

「調理が大変じゃなかったのか？」

「うちは、女性陣が多いので」

エリーゼは料理が上手であったし、イーナとルイーゼも十分に手

慣れている。

ヴィルマも、獲物の解体や下ごしらえなどでその実力を発揮していた。

以前から、森で獲った獲物を自分で解体・料理して食べていたそうだ。

調理器具も、この家に最初からある竈ではなく。

師匠の遺産である、野営や野外パーティーなどで使える小さ目の魔導コンロがあったので、それを使用していた。

「でも、エリーゼ様の料理の方が美味しい」

「一杯食べてくださいね、ヴィルマ」

「うん、一杯食べる」

「確かに、この量は我々では無理ですな」

パウル兄さんの従兵ではあったが、あまり仕事も無いので一緒に食事をしているルーディさんは、テーブルの上にある料理の量に驚いているようだ。

「ただいま」

とそこに、領内に到着してから姿を消していたブランタークさんが戻ってくる。

彼は片手に、例のハチミツ酒の瓶を握っていた。

「ブランタークさん、酒は禁止ですよ」

「わかっているさ。これは、ハチミツ水で酒じゃねえよ」

領内に居る間はどんな事が起こるのかわからないので、俺は全員に禁酒を言い渡していた。

酒に酔っている間に背中からズブリという最後など、少なくとも俺は迎えたくなかったからだ。

「また、えらくお子様な飲み物を」

「これも、あの分家の名物なんだよ。なあ、ヘルマン殿」

「よう、地方巡検視殿」

どうやらブランタークさんは、ヘルマン兄さんを客人として連れて来たようだ。

「ヘルマンの兄貴か。何か、貫禄ついたな。噂では、嫁さんの尻に敷かれているそうだけど」

「パウルは、まだわかってないな。男は普段は女に譲歩しつつも、ここぞと言う時にはガツンと行くんだよ」

「何をガツンとなの？」

「いや、何でも無い」

「どこが、ガツンなんだよ」

「五月蝿いわ！」

加えて、奥さんのマルレーネ義姉さんに、主だった従士の人達やその奥さんなども来ていた。

「この人数だと、飯が足りなくなるか」

「追加で作りますね」

「ヴェル、仕舞っている食材をちょうだい」

「ボクも手伝うよ」

エリーゼ達に加えて、マルレーネ義姉さん達も協力して追加で料理を作り始める。

おかげで、今日獲った獲物の全てが調理されていき、更に魔法の袋に仕舞ってあった食材なども追加で提供する羽目になっていた。

「こんなに沢山、お肉が食べられるなんてね」

「一杯居るじゃないですか」

領内の森でも、未開地でも。

人口が少ないので捕獲される動物の数が少なく、その気になればふんだんに獲物を恵んでくれるからだ。

乱獲で数を減らす可能性も、今の所は少ないであろう。

「それだけ、バウマイスター男爵様達が優れた冒険者だからよ」

未開地には、危険な動物が多い。

今日も熊が出たし、巨大な猪も危険な猛獣なのだそうだ。

単身だと、プロの猟師でも危険らしい。

「開発でも進めば、もう少し気軽に猟に出られるかもしれないけどね」

追加で作った料理を食べながら、俺達はそんな話を続ける。

普通に考えれば、領内に滞在する地方巡検視一行と冒険者パーティーを、この領地の従士長一家が尋ねて食事会になっただけのはず。

だが、その地方巡検視と、冒険者パーティーのリーダーと、従士長は兄弟であった。

この事実に過剰な反応をする人物は確実に居て、次第に領内に波紋を広げる事となる。

「ふんっ！　ご兄弟で仲良く結構な事だな」

「それで何か、クルト殿に不都合な事でも？」

翌日の早朝、俺達は再び本屋敷の父を尋ねたのだが。

そこにオマケのように付いていたクルトは、昨日俺達とヘルマン兄さん達が食事会をしていた事が気に食わないらしい。

顔を合わせるなり文句を言ってくるが、俺はわざととぼけた返事をしていた。

とにかく、今回の滞在でケリを付けないといけないわけで。

そのために、俺はわざとヘルマン兄さんの一家と食事会を開いたのだから。

「いつまで居るつもりなんだ？」

「少なくとも、例の成果の換金が済むまでですね」

昨日の夕方、クラウスの通達で集まった遠征戦死者の遺族達は、俺達が集めて来た錆びた武器や防具に、所持品やサイフなどを持ち帰っていた。

誰の物かの判別は、ブライヒレーダー諸侯軍とは違って統一した軍装でなかった事が幸いし、さほど混乱もなく終了する。

むしろ、装備が統一されているブライヒレーダー諸侯軍の方が判別が困難であろう。

『ヴェンデリン様、ありがとうございます』

『父は、ようやく家に戻って来れました』

遺族達は、遺品を持ち帰った俺達に感謝していた。

だが、ここでまたバカが余計な事をする。

クルトが、自分と同じ年齢くらいの領民を連れて姿を現したのだ。

『やはり、そのままで再利用は不可能か』

『はい。ですが、鋳熔して再利用は可能かと』

クルトの問いに、その男性の領民は答える。

どうやら彼は、本村落の鍛冶屋のようだ。

『では、そうするか。その錆びた鎧や折れた剣は、鍛冶屋のエックハルトに差し出すように。あと、遺品で金になる物は、税金が半分かかるからな。誤魔化さずに申告して、来週までに収めるように』

クルトからの一切の慈悲もない宣言に、遺族達全員の顔が歪む。
そしてその中から、一人の老人が代表してクルトに発言を翻すようにと説得を始めていた。

『クルト様、税金はともかく、遺品の軍装品の提供は勘弁していただきたく』

『なぜだ?』

『戦死者には遺骨がありません。代わりに、墓に埋めようかと……』

アンデッドになった人を聖魔法で浄化すると体が崩れ去ってしまうので、遺骨は一切持ち帰れなかったのだ。
なので、代わりに遺品を墓に埋めて貰うしかなかった。

『何をバカな事を』

『クルト様、なぜ我らがバカなのです?』

『その軍装品を鋳熔かして農機具などにすれば、領地発展の役に立つではないか。ユルゲンともあろう者が、死んだ者の品にいつまで拘るのだ?』

どうやら、このユルゲンという老人は他の村落の名主らしい。

彼も、子供などを遠征で失っていたようだ。

『しかしながら、この軍装品は我らが自前で揃えた物ですので、墓に埋めても何の問題もないかと』

装備がバラバラなので気になってはいたのだが、バウマイスター諸侯軍は装備品すら自前らしい。

ブライヒレーダー諸侯軍のように、統一された軍装品の貸与などはしていないようだ。

『問題ならある。我が領では鉄が不足している。さっさと、その鎧をエックハルトに渡すのだ』

『それは、あまりにご無体です』

我が兄とはいえ、清々しいくらいに小物臭を漂わせた挙句の、ケチケチ発言であった。

確かに、遺品の鉄を鋳熔かして再利用すれば、領内では少量の赤石くらいしか採れないバウマイスター領の鉄不足も少しは緩和するはず。

だからと言って、遺族から遺品を取り上げる行為は感心しなかった。

地方の領主にはこの手の輩も多いそうだし、税金の徴収に関しても別におかしな点もない。

バウマイスター領においては、父やクルトの考えこそが法なのだから。

ただ、遺族から遺品を取り上げるほどのバカは少ない。

そこまでしてしまうと、領民達の心を痛め付けるのに等しい行為になってしまうからだ。

『ところで、クルト殿』

『何だ？　ヴェンデリン？』

父が居ないのと、領民の前なのでここは強気に出た方が良いと考えたのであろう。

クルトは、俺を昔のようにヴェンデリンと呼び捨てにする。

『有効な資源を、再利用する考えは理解できます』

『なら、余計な口を出すな』

『それで、後ろの鍛冶屋の方は、如何ほどで鉄を引き取るのですか？』

『しかるべき値段だ！』

間違いなく、無料に近い値段で買い叩かれるはず。

このエックハルトという鍛冶屋は、クルトとほぼ同年代に見える。

多分、幼少の頃から仲が良かったのであろう。

間違いなく、そのコネを利用して遺品の軍装品を遺族から買い叩こうとしているのだ。

先日のバザーの時に、ブランタークさんが見たクルトに御注進に赴いた連中。

その中の一人で、本村落の住民で領内唯一の鍛冶屋という事のようだ。

彼は、この閉鎖された領内で独占して鍛冶屋として稼いでいる。
前にその作品を見た事があるが、正直腕前は二流の下くらい。
ブライヒブルクや王都では、即座に潰れてしまうはずだ。
その前に、修行先から独立すら認められないはず。

それでもやっていけるのは、入植時から代々鍛冶屋でバウマイスター一族に忠実であったから。
他の村落に鍛冶屋をやらせないように、複数の鍛冶師を使って運営しているからに他ならなかった。

鍛冶屋では、鉄製の武器を作ることが出来る。
なので、こんな僻地では腕よりも忠誠心なのであろう。

他の村落出身の鍛冶屋が、反乱を企てて武器でも密かに作られると困ってしまうからだ。

そんな彼からしたら、父からクルトの継承体制を支持して鍛冶屋の仕事を独占しなければならない。
他の兄弟が継いで外との交流が増えると、廃業の危機に追い込まれてしまうからだ。

『つまり、鉄があれば宜しいので？』

『あればの話だがな！』

このエックハルトという鍛冶師は、クルトの後ろ盾があるのを良い事に、大した品質でもない農機具などを高く売って領民達に嫌われているようだ。

更にその態度も、次期当主であるクルトの威を借る何とやらであまり良い印象は得られなかった。

『ありますよ』

俺は、子供時代に自分で精製してみた鉄の塊を魔法の袋から取り出し、それをエックハルトの前に念威魔法で放り投げる。

一メートル四方ほどの鉄の塊が、目の前にドスンと音を立てて落下したエックハルトはその場で腰を抜かしてしまう。

『それだけあれば十分でしょう？』

『危ないじゃないか！』

『鍛冶屋なのですから、鉄の扱いには長けているのでしょう？』

戦死者の遺品に付いている鉄を、しかもクルトの威を借りてボッタクリ価格で奪い取ろうとした。

俺は、こんな奴とまともに話をするだけ無駄だと感じていた。

剣などの武器はともかく、鎧などはほとんどが皮製で碌に金属など使われていないのだ。

数があるので、集めればそれなりの量にはなるというくらい。

少数回収した盾なども、一部に金属が使われていてもほとんどが木製でほぼ腐っている状態であり。

これなら、墓に埋めても何の問題もないと思うのだ。

『頑張って良い製品を作ってくださいね。見た感じ、俺にはあなたがまだ本気を出しているとは思えません。もし王都なら、恥ずかし

くて店頭には並べられないレベルの品物ですし』

『貴様！　何を根拠に！』

『この前のバザーで、出品した品を見ればわかるでしょう？』

あの品々は、別に高級品というわけでもない。

みんな、ブライヒブルクや王都ではそこそこの値段で買える物だ。

それなのに、領民達は今度はいつ買えるかわからないと大量に購入をしていた。

他の生活雑貨などもそうで、本村落出身で領内で市場を独占できる代々職人や鍛冶師の家柄というのは、クルトの有力な支持者になっていたのだ。

彼らからすると、俺は不倶戴天の敵なのであろう。

『これからも、バウマイスター卿と本村落の名主クラウス殿の依頼で定期的に領内でバザーを開く事になると思いますけど、腕を磨かないと廃業の危機かと思いますよ』

俺の挑発に、エックハルトはおろか、後ろに居たクルトも顔を真っ赤にさせて激怒していた。

『エックハルト！　その鉄で素晴らしい農機具を作るのだ！　他の返還された現金収入については、五割を収める事を忘れないように！』

まるで捨て台詞を吐くようにしてその場から立ち去るクルトとエ

ックハルトの背中に、遺族達は侮蔑の視線を向ける。

しかし、クルト達は気が付いているのであろうか？
この件で、百人以上の領民達が自分達に敵意を向けた事を。
俺が居なければ我慢していたかもしれないが、可哀想な事にそこには俺が居た。

気が付いていたのかもしれなかったが、俺に対して領民達の前で下手に出るわけにもいかず、結局は同じ結末になったであろう。

「さっさと換金して、税を持って来い！」

「それは、ブライヒレーダー辺境伯様に言ってくださいよ」

「ふんっ！　誤魔化さなければ良いがな！」

「クルト！」

さすがに、寄り親への表立った批判は拙いと思ったのであろう。
父が、クルトを一喝していた。

「聞かなかった事にしますが。それで、今日の予定なのですが……」

まずは、昨日遺品が戻った遺族達がお墓にそれを埋めるので、その葬儀というか納骨・埋葬式に参加する許可を。
この式典には、領内にある教会を管理する神父が出席するのだが、彼はもう八十歳を超えた老人である。

一人だと負担が大きいので、エリーゼが手伝う事になっていたのだ。

「その式典には、私も参加しよう。クルトには、例の用水路工事の監督を任せる」

「わかりました」

クルトとて、俺とこれ以上顔など合わせたくもないのであろう。

父の考えに、素直に頷いていた。

「あとは……」

クラウスからの依頼で父が許可を出したので、これからも定期的にバザーを開く事や、領内に滞在中に魔の森や未開地で狩りや採集をする権利など。

表向きは、領内で自由に冒険者として活動をする許可を。

裏では、将来の禍根を絶つためにクルトを挑発する後ろ盾が欲しいという意地が悪い提案でもあった。

果たして、父は気が付いているのか？

容認する気はあるのか？

非常に気になるところではある。

「未開地や魔の森での成果に関しては、バウマイスター男爵達や領民が食べる分に関しては代価はいらぬ。外部で換金した物については、後で別途税の交渉を行う。冒険者ギルドブライヒブルク支部や、ブライヒレーダー辺境伯殿とも折り合いもあるからな」

「父上！」

「ほう。なら、お前が魔の森で狩りをして稼ぐと言うのか？」

「それは……」

「現状、魔の森で狩りをしようなどと考える冒険者は、バウマイスター男爵達だけなのだ。多少の優遇処置は必要であろう。それとも、お前が冒険者を勧誘して来てくれるのか？」

「それは……」

珍しく強硬な父の反論で、クルトはその口を閉ざしてしまう。
暫くすると、クラウスが正式な契約書を持参して先ほどの条件は無事に認められる事となる。

「では、葬儀に赴くとするか」

父との面会後、予定されていた遺品の埋葬が行われる事となる。
これには父と名主のクラウスも出席し、エリーゼはもはや補助が無いと歩けない領内の神父を支えながら、『戦死者達を、天国へと誘う言葉』なる祝詞のような物を唱えていた。

「神の子達よ。汝等はその苦しい最後の時を乗り越え、神とその弟子達の住まう約束の地へと向かう。そして汝等の導きにより、その親や兄弟や子らも、かの地へと導かれるであろう」

エリーゼが独特のリズムで唱える祝詞の中で、遺族達は事前に掘っておいた穴に遺品を入れ、土をかけて埋葬していく。

「エリーゼって、こんな事も出来たんだ」

「知らないの？　エリーゼは、助司祭の資格も持っているのよ」

「知らなかったな」

イーナから『何で知らないのよ？』という顔をされてしまうが、エリーゼは普段あまり教会や宗教の話などしない。

俺が興味ないのを理解していて、話さないようにしているのであろう。

「ヴェルは、本当に教会とかに興味ないからね」

「ルイーゼは、興味あるんだ」

「実は、あまりないけど」

ルイーゼにまで言われてしまうが、ちゃんと寄付などはしているし、そこまで教会や宗教に忌避感があるわけでもない。

熱心に信仰するつもりがないだけなのだから。

国教なので信者にはなるが、実はあまり興味は無い。

俺のような考え方をする人は、意外と多かった。

「ヴェル様、お供え美味しそう」

「食べるな、不謹慎」

「それは、わかっている」

遺品を埋めた後、遺族達はそれぞれに食べ物などをお供えしていて。

それを見たヴィルマが、食べたそうな表情をしていた。

「今夜まで待てよ」

さきほど、なぜまた未開地での狩りの許可を父から得たのか？
それは、また今夜宴会を開く予定であったからだ。

戦死者の遺族達が今日の慰労のため、それぞれに食べ物をなどを持ち寄り宴会をする。
ただ、俺達とヘルマン兄さん達も遺族なので参加するため、クルトから見ると非情に胡散臭い宴会となっているのだが。

「（しかし、回りくどい事をするよな）」

同じく式典に参加していたブランタークさんが、俺の隣に立って小声で話しかけてくる。

「（クルトが先に手を出した。必要な大義名分でしょう？）」

どうせ相手は小領の次期領主なのだから、王国命令で強制的に廃嫡にでもしてしまえば良い。

だが、その手は他の貴族達への影響が大きくて出来ないのだから、俺達が領内で派手に動いてクルト達を暴発させる必要があったのだ。

「（暴発するかね？）」

「（少し時間はかかりますけど、します。確実に）」

クルト本人だけなら、暴発はしないのかもしれない。

先ほどみたいに、父に怒鳴られると萎縮してしまう男だからだ。
ところが、周囲の支持者達の存在がある。

「（俺達が、この領地を開けば開くほど。周囲が加熱していきますので）」

昨日の鍛冶屋のエックハルトに、他の職人達とその家族も。
彼らは本村落出身者で、その腕前ではなくて代々の忠誠心で市場を独占してきた。
それが、俺達のせいで崩れかかっている。

他にも、考え方が保守的で領内の変化など望んでいない人達などもいて、彼らは既に外部の人間になっている俺達の行動に眉を顰めているはずだ。

「（支持者達から突き上げを喰らえば、クルトも動かざるを得ないか）」

「（何でも良いんですよ。クルト達が動けばそれで）」

動けば、それで介入の口実になるからだ。
王国政府からすれば、どんな些細な事でも。
俺に、何か少しでも危害が加わりそうな気配があれば良いのだから。

「（そのために、宴会を？）」

「（宴会ではありません。せっかく故郷に戻った英霊達を遺族と共に慰める会？　食事付きですけどね）」

その後、無事に埋葬の儀式は終了する。

出席していた父とクラウスは、特に何も言わなかった。

遺族達も、クルトと二流鍛冶屋には思う所があるようだが、父にはその件では思う所があるわけでもない。

そういう事のようだ。

「今夜は、ヘルマン様とヴェンデリン様が慰霊の食事会を開くそうだぞ」

「遺族なら、みんな参加できるそうだ」

「じゃあ、会場の設定とか調理の手伝いとかで人を出さないとな」

「俺達も、何か食材を持参するべ」

この領内では娯楽が少ないので、みんな楽しみにしているようだ。

思い思いに話をしながら、それぞれに家に戻って行く。

昼間は畑仕事を行い、夕方から会場である俺達の滞在先に集まって準備を手伝う事になっていた。

「結構、参加人数が多いか」

「七十七名の戦死者の遺族ですからね」

ブランタークさんの言う通りで、どの範囲まで遺族として認めるなどと言うルールも無かったので、その気になれば半数近い領民達が参加可能だからだ。

「じゃあ、俺も準備を手伝うかな」

「エル達と、無限の狩りに行ってくださいね」

慰霊の会名目とはいえ、この世界に精進料理などの概念は存在しない。

なので、こういう会を行う時は、この時とばかりにみんなご馳走を準備して食べるのが普通であった。

「エリーゼの嬢ちゃんは、あの神父と一緒に祭壇作りか」

一応埋葬した死者達の慰霊会なので、小さい物だが祭壇を作るのが普通であった。

神父さんにはその知識は十分にあるのだが、如何せん年齢で体が動かない。

なので、エリーゼも手伝う事になったのだ。

そして終了後は、マルレーネ義姉さん達や遺族の女性達とで会場の設定や料理を手伝う事になっていた。

「イーナとルイーゼの嬢ちゃんは、エル達と狩りの手伝いか」

宴会に出す肉類などを、パウル兄さん達やヘルマン兄さん達と共に獲りに行く事になっていた。

大人数を満足させる肉を得るために、ブランタークさんを酷使して頑張って欲しいところだ。

「それで、坊主は？」

「ちょっと、海まで」

「はあ？」

それから約一時間後、みんながそれぞれに宴会に向けて準備をしている最中、俺はヴィルマと共に魔の森南方の海岸に立っていた。

南方の海は魔の森を越えないと来れないのだが、子供の頃に飛翔で森の上空を突破してポイントを覚えたので、瞬間移動ですぐに来れていたのだ。

昔には、魔法で大量に塩を作ったり、海産物を獲ってから焼いて食べたのを思い出す。

「海」

「海と言えば？」

「海の幸」

「正解だ」

肉類の確保は他の人達に任せるとして、俺はヴィルマを使って魚介類を確保しようとしていた。

せっかくの宴会なので、珍しいご馳走があった方が良いと考えたのと。

俺が単純に食べたかったからだ。

「お魚、食べたい」

「食べた事が無いのか？」

「コヌルとか、ナマサはある」

コヌルとナマサとは、見た目はそのまま地球で言う鯉とナマズの事であった。

河川などで大量に獲れるので、王都では比較的安価で売られている。

泥抜きをしてから、塩や香味野菜と共に煮込んだり、フライのように油で揚げて食べるのが普通であった。

味は正直なところ俺は苦手で、高価でも海産物を購入する事が多かった。

他にも、ウトクと呼ばれるウグイに。

フーハと呼ばれるフナなどが、庶民の味となっているようだ。

共に、やはり俺は苦手であったが。

「今日は、海の魚介類を食べるぞ」

「おーーーっ」

少々抜けた感じのヴィルマの返事であったが、その目はいつもの食べ物を貪欲に欲する目となっていた。

「それで、海に潜って獲るの？」

「まさか」

肉類に人数を回したせいで二人しかいないが、俺は魔法が使える

し、ヴィルマは怪力の持ち主である。

ならば、あの手しかあり得なかった。

「二人だけの、地引き網作戦です」

「網で獲るの？」

事前に使う事があるかもしれないと、魔法の袋に地引き網を購入して入れていたので、それを飛翔で海上から投入。

すぐに、ヴィルマと魔法で身体機能を強化した俺とで引く作戦になっていた。

網の投入ポイントとかは素人なので詳しくは無かったが、あまり獲れなければ何回か試してみれば良いと思う事にする。

「ヴィルマ、この地引き網の片方の紐を持っていて」

「わかった」

続けて俺は、もう一方の引き綱と網を持って飛翔で海上へと向かう。

持っている網を少しずつ沖合いで弧状に投入してから、ヴィルマの待つ砂浜へと戻って来たのだ。

厳密にやると網船なども必要なのだが、それは俺の飛翔魔法によるバラ撒きで対応する事とする。

「駄目なら、何回か試すさ」

元々怪力であるヴィルマと、身体機能を魔法で強化した俺で海上に弧状に撒いた網を引き寄せていく。

「お魚」

「ゆっくりと、俺とタイミングを合わせて引け」

本当に獲れるのか心配だったのだ、今までに誰も網を入れていなかったのが幸いしたのか？

砂浜へと引き揚げた網には、大小数百匹にも及ぶ魚が入っていた。

サバに似た魚、アジに似た魚、ヒラメに似た魚。

他にも沢山いるが、今は準備した魔法の袋に仕舞っていく。

毒探知の魔法で怪しい魚は除外していたのだが、中には変わった獲物もかかっていた。

「カメさん」

「それも、食える」

「美味しいの？」

「美味しいらしい」

全長二メートルほどの海亀が網に引っかかっているのを、ヴィルマが見付けていた。

肉は食べられるし、甲羅はべっ甲細工の材料として王都では高額で取り引きされている。

「わかった」

ヴィルマは、躊躇する事なく海亀に止めを刺してから魔法の袋に放り込んでいた。
さすがは、自分の食い扶持は自分で稼いできた女。
実に、逞しい性格をしているようであった。

「もっとお魚が欲しい」

「そうだな」

思ったよりは獲れていたが、もう少し魚はあった方が良いかもしれない。
そう思った俺達は、もう三回ほど別のポイントで地引き網漁を行う。

その結果、結構な量の魚が獲れたので。
更に近くの岩場で、エビ、カニ、貝類なども獲る事にする。

「今度は、カニ獲り用の網でも準備しておくか」

「今日は、私が獲る」

そう言うなり、ヴィルマは着ている服を脱いでから岩場近くの海へと飛び込んでいた。

そう言うと、ヴィルマのヌードでもとか予想しがちであったが、下に全身タイツのようなアンダーウェアを着ていたようだ。

「川や湖や沼でも獲物を獲るから」

沢山食べるために、ヴィルマは泳ぎなども達者なようであった。
そして海に潜ってから数秒後、まず最初の一匹が海上から顔を出す。

「一杯いる」

「大きいのだけを獲ってくれよ」

「わかった」

ここでヴィルマだけに任せるのも何だったので、俺は素早く水中呼吸の魔法を唱えてから海へと潜って行く。
別に泳げないわけでもないのだが、ヴィルマのように海中で漁をしながらというのは難しかったからだ。

その点、この水中呼吸の魔法を使えば海中でも地上と同じように行動が可能だ。
何しろこの魔法は、自分の周囲を空気の層で覆ってしまうのだから。

「一杯いるなぁ」

俺も加わり、二人で全長一メートル近いエビに、同じく全長一メートルを超えるカニ。
リンゴほどの大きさのサザエに、全長三十センチほどもあるアワビなどを次々と採取していく。

確か、正式名称を前に図鑑で見たような気もするのだが、今は食べられるので良しとする事にする。

「ヴェル様、美味しそう」

「試食するか？」

「食べる」

結構な量が獲れたので、まずは一休みという事にする。

魔法の袋からバーベキュー用の金網を取り出し、それを竈型に組んだ岩の上に乗っけてから、火を付けた炭をくべていく。

ある程度金網が熱せられてから、そこに貝や切り分けたエビやカニなどを載せ。

暫くすると、ほど良く焼けてきたので、少し醤油を垂らせば完成であった。

「美味しそう」

「火傷しないようにな」

「いただきます」

ヴィルマは、美味しそうに焼けた貝やエビ、カニを次々と口に入れていく。

やはり良く食べるので、次第に焼く作業が間に合わなくなるほどであった。

「ご馳走様」

「美味しかったか？」

「こんなに美味しい物。初めて食べた」

「そうか、良かったな」

「もっと一杯獲る。エリーゼ様達の分も一杯」

「そうだな」

ヴィルマは良く食べるし怪力であったが、見た目は大変に保護欲を誘う女の娘であった。

俺の中身が、四十歳超えなのも影響しているのであろう。

「そろそろ帰るか」

「沢山獲れた」

「そうだな」

数時間後、宴会分と暫くは俺達が食べられる分を確保したので、今日はこれで戻る事にする。

「ヴィルマ、服を着る前に」

海水なので、俺は海から上がってきたヴィルマに洗浄魔法をかける。

「ベタベタしない」

この魔法は、冒険者は冒険中に風呂に入れないので、自然と開発された魔法であった。

あまり魔力を消費しないので、初級レベルにでも簡単に使えるのが特徴で、これを使える魔法使いは女性比率が高いパーティーでは引っ張り凧になるそうだ。

冒険中でも身嗜みには気を使いたいというのが、女性心理なのであろう。

俺も、自分の体に洗浄魔法をかけて体に付いた塩分を落す。
ヴィルマの着替えも終わり、さて帰ろうとしたその時であった。

突然彼女が愛用の戦斧を構え、海上に向けて鋭い視線を送る。
続けて俺が海上を見ると、その沿岸には全長二十メートルほどの竜に似た生物がこちらに向かって来るのが確認できた。

「サーペント（海竜）か……」

サーペント（海竜）は、見た目は竜に見えるが実は魔物ではない。
大型海生肉食動物のカテゴリーに入る、海の野生動物であった。

普段は、大型の魚類や、鯨・イルカなどを捕食し。
時には、海上を飛ぶ海鳥などを食べる事もある獰猛な奴なのだそうだ。

ただ、基本的に臆病なので大型の船ならば襲われない。
向こうが先に逃げてしまうからだ。

それに、人間の活動領域には滅多に姿を見せず。
普段はもっと遠洋を生活拠点にしていると、前に見た図鑑には書かれていた。

「デカいな」

ところが、二十メートルでは平均的な大きさなのだそうだ。
このくらい大きくないと、鯨など狩れないのであろうが。

「しかし、あの海竜はなぜ俺達に向かってくる？」

「餌だと思っている」

「だよなぁ」

たまたま沿岸に来たら、俺達という餌があったので捕食しようとしている。
サーペント（海竜）に限らず、この手の大型肉食獣は毛が少ない人間を見付けると喜んで捕食しようとするのだ。

なので、海上で遭難して小船や筏の上で遭遇すると、まず生き残れないと考えた方が良いであろう。

「ヴェル様」

「何だい？」

「私が倒す」

「えっ！　大丈夫か？」

サーペント（海竜）は大きな海生肉食動物なので、当然一般人や漁師の手には負えない。
普段は遠洋に居るので滅多に捕獲されないのだが、肉は味が良い

珍味として。
骨・牙・ウロコなどは、武器や防具の材料として高値で取り引きされていた。

「ここは、私の大技で」

「じゃあ、任せるけど。駄目そうなら、すぐに俺に言ってね」

「わかった」

一言頷くと、ヴィルマはこちらに迫り来るサーペント（海竜）に向かって戦斧を構え、そのまま目を閉じて集中に入る。
すると数秒後には、徐々にヴィルマの体から探知される魔力の量が増えていた。

「（そうか、一瞬で少ない魔力を爆発させるのか）」

ヴィルマは、精々で初級から中級の間くらいの魔力しか持っていない。
魔法も、普段は筋肉に効率良く魔力を循環させるくらいしか出来ないそうだ。

「（普段は、節約しながら使っている魔力を一時的に大量に燃やすか）」

一時的に爆発的に身体能力が上がるが、後は魔力が枯渇してしまうので、もう後が無い時に使う大技のようであった。
ヴィルマは、目を瞑ったまま集中を絶やさず。
その間に、サーペント（海竜）はこちらの至近にまで迫っていた。

そして、水際からその長い首をこちらにかまげて俺達を捕食しようとしたその時、ヴィルマはまるでブーメランでも投げるかのように戦斧をサーペント（海竜）に向かって投げていた。

「あんなに重い戦斧を投げた！」

もう少しで二つの餌が食べられると思ったサーペント（海竜）にとっては、寝耳に水であったと思う。

わけもわからないままに、ヴィルマによって投擲された戦斧によって首を切り落され、頭部を無くした首の切り口からは血が噴水のように湧きあがる。

暫くすると、投擲した戦斧が上空で弧を描いてから戻ってくるが、それすら彼女は普通に柄を掴んで回収していた。

恐ろしいまでの動体視力と、とっておきの大技とも言えた。

「血抜きは早い方が、お肉が美味しくなる」

「確かにそうだけど……」

普段は小リスのように可愛いのに、食料確保になると途端に『首切り公』と化してしまう。

昨日の熊といい、今日のサーペントといい。

彼女は確かに、エドガー軍務卿の切り札なのであろう。

恐ろしいまでの、戦闘能力の持ち主であった。

「もしヴェル様なら、どうやって倒した？」

「そうだな……」

鱗が高く売れるし、大型ではあるが竜ほどパワーがわるわけでもないので。
凍結の魔法で胴体部分を動けなくしてから、脳天に岩製の槍を魔法で作って一撃。
もしヴィルマが駄目なら、こんな作戦を考えていたのだと教える。
「私と同じ。ヴェル様も、海竜の胴体を傷付けると食べられる部分が減ると思った」
「（いや、鱗が傷付くからなんだけど……）まあ、そうだね」
最後に思わぬ収穫物もあったが、俺達は無事に海産物を得てバウマイスター領へと戻るのであった。
「ようやく、神の元に帰する事が出来る者達を送り出すために。それを行った者達に明日を生きる糧を与えるために。ささやかながらも、このような食事が提供される事となりました」
「別に、ささやかじゃないよな？」
「ヴェル、しっ！」
夕方になる少し前にバウマイスター領に戻ると、そこでは既にエ

リーゼ達が、応援のマルレーネ義姉さん達や遺族の女性達と共に食事会の準備に奔走していた。

大量に料理を作り、会場となる借りている家の庭にテーブルを並べていたのだ。

「俺達も手伝うか」

俺はエルやヴィルマと共に、庭に数箇所石を積んで即席の竈を作り、金網を載せてから炭火で温め始める。

「肉でも焼くのか？」

「違うな」

「今日の収穫物を焼く」

温まった金網の上に、今日獲った半割りにしたエビやカニ、貝類、下ごしらえした魚やイカなどを乗せていく。

ある程度焼けたら、醤油や事前に作ってあった味噌タレを塗って完成だ。

更に、焼け具合をエル達に見て貰っている間に、一部の魚を捌いて刺身を作っていく。

素人調理なので、先日の魔導ギルドのお姉さんよりは下手であったが、多少形が崩れていても味にそう変化はないはずだ。

切り分けた刺身は、紫蘇と大根の千切りとワサビを添えて完成である。

大根は王都より北では普通に流通していたし、紫蘇は胃腸の薬と

して大都市のほとんどで流通している。

そういえば赤紫蘇もあったので、今はそれで色を付ける梅干の試作もある商家に依頼しているところであった。

一刻も早い完成が望まれるところである。

ワサビも、普段王都で流通している西洋ワサビではなく、学名ワサビア・ジャポニカに似た物が山地に自生していると聞いたので、ここに来る前に大量に入手していた。

ワサビは成長が遅いので、『根が大きいのだけ、高値で買うよ』と言ったら、同業者達がこぞって持ち込んで来てくれたのだ。

自生地が高地で、魔物の領域ではないが取りに行くのが困難な場所だったので、自分で行くのは後にしようとしたからであった。

「さてと、刺身の盛り合わせの完成と」

「美味しそう」

「あとは……」

皿に乗った刺身の半分に、オリジナルの熟成の魔法をかけていく。

実はこの魔法、醤油や味噌を醸造する魔法の親戚で、土系統の魔法に該当する。

刺身は、獲れたてのコリコリ感を楽しむ人と、二～三日熟成させてから調理する人が存在する。

なので、両方楽しむのが良いと思ったからだ。

なおこの魔法は、肉の熟成でもエリーゼなどには重宝されていた。

そして数時間後、夕方から夜の間の時刻にようやく食事会の準備が完了し、まずは神父様からの挨拶という事になる。

彼の挨拶が終わると、エリーゼと一緒に作っていた祭壇に料理が供えられ、ヘルマン兄さんの献杯の合図と共に食事会はスタートする。

テーブルの上に置かれた大皿の肉をメインにした料理が参加者に分配され、同じく金網で焼かれた海産物も次々に配られていく。

領民達は、遠征で戦死した家族の話をしながらも、楽しそうに食事をしていた。

「神父様、如何ですか？」

「この地に赴任してから初めての海の魚で、やはりとても美味しいですな」

もう九十歳近いマイスターと言う名の神父様は、美味しそうに魚を焼いた物を食べていた。

「この地に赴任する前に、王都でアヒム枢機卿に食べさせて貰ったキリですかな。いやはや、長生きはしてみるもので」

一部古典的な宗派を除き、聖職者に食べてはいけない物などは存在していなかった。

精々で、なるべく人前で酒は飲まない方が良いくらいであろうか？

なのでさすがに、神父様は酒は飲んでいないようであったが。

ちなみに、俺達も酒は禁止という事になっている。
あのブランタークさんですら、野ブドウジュースで我慢していた。
一応、クルトの暴走に備えているわけだ。

「しかし、良くサーペント（海竜）なんて居たよな。無人の浜辺だったからかね？」

ブランタークさんは、サーペント（海竜）肉の網焼きを食べながら、中央に置かれたその頭部を感心しながら見学している。
実は、サーペント（海竜）の首を飾るように言ったのはブランタークさんであった。
『坊主は、あのヘッポコ長男とは違う』と思わせるには、ちょうど良い証拠となるわけだ。

風聞で聞いている竜退治よりも、実際のサーペント（海竜）の首の方がインパクトが強いので当然とも言える。

「あのサーペント（海竜）の気まぐれだったのか？　最も、その気まぐれのせいでご覧の有様ですけど」

ヴィルマにあっという間に首を戦斧で刎ねられ、その肉を貪り食われているのだから。
当然、食事会に来ている領民達も焼いた物が配られ、彼らは初めて食べるサーペント（海竜）の肉を美味しそうに食べていた。

「あのヴィルマとか言う嬢ちゃんは、想像以上にやるな」

「ええ」

「じゃあ、坊主が最後まで面倒見ないとな」

「やっぱりですか？」

ヴィルマは、エドガー軍務卿が大貴族特有の『何かに使えるかもしれないから面倒を見ておこう』という性質のおかげで養われていた。

腕っ節で見ると切り札とも言えるのだが、女性はほぼ入れない軍では使えないし、政略結婚で使おうにも、あの食欲のせいで普通の貴族家からは引かれてしまう。

そこで、冒険者として活動もしている俺に、使える新メンバー兼護衛兼側室候補として送り出されたのが現状であったようだ。

「坊主がいらないと言って戻すと、後の人生大変だろうな」

エドガー軍務卿の私的な護衛などが出来れば良いが、良くて成人後に冒険者として一人立ち。

下手をすると、何か貴族特有の裏の仕事で使い潰される可能性もあるらしい。

「そう言われると……」

見た目は可愛らしい少女であったし、今日一緒に漁をしてみて、性格も素直で好感が持てた。

良く食べるのが難点とも言えたが、そのくらいなら俺なら何とかなってしまうのだ。

「嫁にするかはともかく、俺の私的な護衛として面倒みます」

まだ未成年なので、魔物の領域には入れない事になっているのだが、貴族である俺の護衛扱いなら特例で領域にも入れるのだ。
実力面では、ヴィルマよりも弱い冒険者の方が圧倒的に多いはず。
その点では、問題になるはずもなかった。

「でも、随分と優しいですね」

「俺は、子供には優しいんだ」

そういえば、先ほど子供達に王都で購入していたお菓子を配っていたのを思い出す。
果物以外で甘い物をあまり知らなかった子供達は、その美味しさに大喜びであった。

もっとも、『小父ちゃんありがとう』と言われて微妙な顔もしていたのだが。

「坊主は、何か配らないのか？」

「そうですね……」

せっかくクルトを挑発するために開いた食事会なので、露骨とはいえ子供達への人気取りも必要であろう。

なお、肝心の食事会への参加者であったが、これは六百人を超えていた。

遺族限定にした割には数が多いような気もするのだが、別に何親等までの親族と限定したわけでないからだ。
戦死者の遺族の縁戚などを否定するわけにもいかず、別に否定す

る理由も無いので何も言わなかったと言うのが現実であった。
むしろ、多数参加した方がクルトを挑発できるのだから。

さすがに、料理はすぐに無くなってしまうが。
その都度領民達は、こちらが下ごしらえをしておいた材料を調理して配ったり食べたりしているようだ。

バーベキュー用の金網では、常に大量のサーペント（海竜）の肉や魚介類が焼かれている。
他にも、エリーゼが自作したお菓子や普段飲んでいる物よりも高級なマテ茶なども出され、遺族達は食事会に満足しているようであった。

「では、水飴でも作りますか」

「ああ、あの甘いのか」

果汁やハチミツや穀物を酒にする魔法は大分前から普及していたのだが、なぜか水飴はこの世界には普及していなかった。
一部醸造元で、アルコールに変わる前の甘い液体をジュースとして販売しているくらいであろうか？

なので早速に、甕に事前に購入しておいた餅米や玄米などを材料に魔法で水飴を精製する。
本当ならば結構な手間がかかるのだが、魔法はその辺を省略してくれるのがありがたかった。

すぐに粘度が高い水飴が甕一杯に完成し、それを木の棒に巻いて子供達に配っていく。

「ヴェンデリン様、ありがとう」
「甘ぁーーーい」
甘い水飴に、子供達は大喜びであった。
「しかし、集まったな」
「居ないのは……」
遺族以外の本村落の住民と、一部他村落の保守的な人達に。
どうしても、忙しくて来れなかった人達くらいであろうか？
「それで、これからの展望は？」
「相手次第ですね」
ここで一時的にクルトが次期領主で安定したにしても、それは将来の混乱の原因にしかならないはず。
なので、彼には強制隠居をして貰う予定であった。
今の領地と一部未開地をヘルマン兄さんが相続し、残りを俺が金をばら撒いて開発を進める。
ただし、俺は軽い神輿であまり口は出さないで冒険者として暫くは活動する。
別に、そうすると直接相談したわけではなかったが、王国側やブライヒレーダー辺境伯もそのくらいの認識なのであろう。

ブランタークさんが特に何も言わないのは、それがわかっているからなのだと思う。

あと、昼間は魔法で気配を消しながらクルトにくっ付いてその行動を監視しているのも、ブライヒレーダー辺境伯からの命令に従っての事のようだ。

「（クルトの暴発を、みんなが待っているのか。ある意味、哀れでもあるか……）」

とはいえ、もう実家絡みでこれ以上の面倒もゴメンである。

ここは、心を鬼にして彼を排除する必要があった。

「明日から、また挑発の日々だな」

「挑発ねぇ……」

ブライヒレーダー辺境伯が、例の遺品の選定や素材の査定を終了するまでには時間がかかる。

どうせクルトがあと五日以内に暴発するとも思えないので、実はまだ暫くは領内に留まる予定なのだが。

名目としては、俺は魔法で魔の森に行けるので、そこを拠点とする専属冒険者として暫く活動するためという事になっていた。

条件面などでは、既にブランタークさんが密かに父やクラウスと相談して決定しているそうだ。

なるほど、五月蝿いクルトは既に排除されているらしい。

そして、領内での定期的なバザーや、領民達から売れる物の買い

取り業務なども行う。

更にそんな俺達を、休職を延長したパウル兄さん達や、ヘルマン兄さんの一家が補助する事が決まっていた。

普通に考えれば、領内の経済発展のために商売もする冒険者とその護衛を受け入れ、従士長の家に手助けを命じたとも言えるが、内情はある種の下克上フラグとも言える。

多分王国としては、とっととクルトに暴発して欲しいのであろう。

そしてそれを、なるべく犠牲を出さないように俺達が鎮圧する。

そういうシナリオになっているのだ。

「とにかく、なるべく早く冒険者本来の生活にですね……」

「坊主は、拘るなぁ……」

そんな話をしていると、突然宴会をしていた領民達が騒ぎ始める。

なぜなら、会場にクルトの奥さんであるアマーリエ義姉さんが姿を見せたからだ。

しかも、彼女とクルトの子供にして、クルトの次の領主と見なされているカールとその弟であるオスカーも連れてだ。

「へえ、大胆な奥方だな」

「いや、そういう女傑タイプの方じゃないんですけど」

うちよりは地方都市に近い少領の騎士爵家の次女で、降家の可能性も考慮し、読み書き計算などの教育をちゃんと受けていた大人し目の女性。
それが、俺の彼女に対する印象であったからだ。

あと、エーリッヒ兄さんが家を出た後は一番話が合う人でもあった。

「お久しぶりです、バウマイスター男爵様」

「こちらこそ。アマーリエ義姉さん」

確か、今年で二十六歳のはずであったが、見た目はもう少し若く見える。
そんなに美人ではないが、感じが良くて話し易い人であったのを。
俺は改めて想い出していた。

「今回の、戦死者遺族慰労の食事会主催に対し、お義父様が感謝をしておりました」

本来、自分達が開かなければいけない種類の物であったが、クルトとその取り巻きが反対して開く事が出来なかったのだと、アマーリエ義姉さんは説明していた。

「その件に関しては、戦死者の中で最上位者であった前従士長の家族が主催しているので問題は無いかと」

今回の宴会は、建て前上はヘルマン兄さんの一家が主催して、俺達がその補佐をしている事になっている。
問題が無いとは言えないが、あまり気にしても仕方の無い事でも

あった。

「そう言っていただけると」

アマーリエ義姉さんは、父とクルトの名代扱いのようだ。

多分、まだ彼女が仲が良かった俺と顔を合わせていないので、父が気を使ったのであろう。

クルトからすれば、『お前らに送る名代など女で十分』くらいの認識だと思うが、そんな思考すら父に読まれてしまっているようだ。

「では、早速に祭壇の方に……」

アマーリエ義姉さんは、持参したお供え、花束、供物料などが入った袋を祭壇に置き、連れて来た自分の子供達と一緒に祈りを捧げる。

「良かったら、食事をされていけば。ご子息達も、いらっしゃるのですから」

「では、遠慮なく」

すぐに、アマーリエ義姉さんや子供達に食事やお菓子が提供される。

ただ、給支をしているマルレーネ義姉さん達の表情は複雑だ。

クルトの奥さんなので冷たくあしらいたいのだが、同じ女性として、夫の暴走に巻き込まれつつある可哀想な人であるという認識もありと。

それと領民達とて、ある程度は現在の領内の情勢を理解している。

なので、不安そうにアマーリエ義姉さんに視線を送っていたのだ。

「ご活躍ですね」

「ええ。その分、王都の強欲貴族達に振り回されていますけどね」

「それは、貴族なので仕方がありません。うちの父のような零細騎士ですら、良く嘆いていましたから」

食事をしながらアマーリエ義姉さんと話をするのだが、あまりクルトの件などを聞くわけもいかず、当たり障りのない話題ばかりになってしまう。

王都の強欲貴族の話題が当たり障りがないのかと言われると困るのだが、彼らがアレなのは数千年前からなので一般の世間話に相当する物になっていた。

「俺の甥達ですか。大きくなりましたね」

家に居た頃は、たまに顔くらいは見るだけの関係であった。
どうせ俺は家を出て行くので、なるべく接しない方が良い。

当時の父やクルトの考えはこんな感じで、俺もそれを実践していたから碌に会話すらした事がなかったのだ。

「大きくなりましたね」

「はい、私も年を取りました。子供達も大きくなり、残る心配はカールとオスカーの将来のみです」

「俺はまだ親になっていないので良くわからないのですが、そういう物なのでしょうね」

二人で話をしている間に、エリーゼ達が気を利かせて二人の甥にお菓子などをあげて気を逸らせてくれていた。

「将来に嵐が起きるかもしれませんが、なるべく遠ざかる事ですね。お子達を連れて」

「やはり、避けられませんか……」

アマーリエ義姉さんは外部の人間であったので、クルト達の偏屈ぶりは理解しているはず。

そして、以前ならばそれでもどうにか領主としてやって行けたのだが、今では通用しないという点にもだ。

「ここで、一時だけ凌いでも」

「ですね……」

もう既に、領民達の大半は外に目を向けてしまった。

そして、クルトのやり方ではもう駄目だと気が付いてしまっていたのだから。

「お子達の将来については、幾ばくか貸しがある連中が居るので何とかさせます」

「ありがとうございます」

それから三十分ほど世間話に興じてから、アマーリエ義姉さんは

子供達と共に家路につく。
俺の甥であるカールとオスカーは、俺から竜退治の話を聞き、王都のお土産であるお菓子や玩具などを貰って嬉しそうであった。

「おい、何とかするって？」

「何とかします。当然、ブライヒレーダー辺境伯様にもねぇ？」

「しょうがないかね」

別に、血の粛清をしたいわけでもないのだ。
クルトさえ強制引退させれば、それで終わってしまう案件であり。
というか、こんな事は性に合わないので早く終わって欲しいと思ってしまう。

「明日は、魔の森で狩りでもするかな？」

「情況が動かなければそんな物だかな」

俺は、二人の子供を連れて家路へと向かうアマーリエ義姉さんの背中を見送りながら、なるべく早く事態が収拾するようにと、信じてもいない神に心の中で祈るのであった。

第五十話　未開地を開発してみる。

「では、そういう事で」

「私にも異存は無いな。バウマイスター男爵達が、この領地の発展に寄与する事を願おう」

魔の森での浄化を終えてから一週間後。
俺達はバウマイスター家本屋敷で、再び父との交渉に臨んでいた。

とはいえ、父は基本的に反対などしない。
事前に、ブライヒレーダー辺境伯の使いとして来たブランタークさんから条件などを伝えられていたからだ。

それに、まだ領主である父からすれば、領地の発展に繋がる上に領民達の支持も得られる良案ばかりである。
クルトの感情など無視しても、それに賛成するのが領主としては常識であった。

その結果、色々と複数の案件が解決したのだが。
その隣で蚊帳の外になっているクルトが、一人顔を真っ赤にさせながらプルプルと小型犬のように震えている。

何か文句を言いたいのであろうが、これ以上の暴言はバウマイスター家の評判に関わると、父から止められているようだ。

交渉の間、何も言わずに俺を睨み続けていた。

「（まだキレないか。もっと、挑発するかな？）」

まず、ブライヒレーダー辺境伯に預けていた遺品の選別と、獲得した持ち主不在の遺留品や、戦って得た魔物の素材などの鑑定が終了していた。

事前の交渉により、バウマイスター家側の取り分は三割となっている。

クルトは、相当に期待していたらしい。

詳細な内訳の書かれた明細書を渡すと、引っ手繰るように俺から奪い取ってある数字を探していた。

彼は簡単な計算しか出来ないので、合計欄を見て幾ら貰えるかでしか判断が出来ないのだ。

しかし、それで良く誤魔化すなとか言えるものだ。

自分で確認できなければ、誤魔化すもクソもないと思うのだが。

「少ないな……」

そして、その数字を見て落胆している。

合計二十万セント以上なので、今までを考えると十分に大金なのだが、何か不満があるようだ。

「クラウス、この計算に間違いは？」

「ありませんな」

南方の責任者であるブライヒレーダー辺境伯が、隣の貧乏騎士爵

家に渡す金を誤魔化すなど、まず普通はあり得なかった。
僅かばかりの金を誤魔化したところで、それで得られる利益よりも、失う評判の方が大きいのだから当然だ。

ミスもあり得ない。
ブライヒレーダー辺境伯家には、クラウスレベルかそれ以上の財務系の人材が複数存在しているのだから。

「ですが、バウマイスター家がブライヒレーダー辺境伯家にしていた借金は清算されています」

「借金？」

バウマイスター家がこの地で独立する際に、王都の本家から借りて返さなかった援助金という名の借金に。
エーリッヒ兄さん、パウル兄さん、ヘルムート兄さんが結婚した際に出さなかったご祝儀という名の借金と。

ブライヒレーダー辺境伯は、寄り親の責任として全て清算して立て替えていたのだから。
これは、清算して当然の物であった。

「詳細を見るに、返して当然かと……」

さすがのクラウスも、そうとしか言いようがなかったようだ。
だが、それを聞いたクルトは激怒していた。

「いつ返すかなど、我らが決める事だ！」

とは言っているが、間違いなく返す気など無いのであろう。

そういう事をしているから、ブライヒレーダー辺境伯に全く信用されていないというのに。

本当に、バカな男である。

「貴族が借金をするのは普通ですけど、内容が内容なので返済は早い方が良いのでは？」

クルトに何か言っても、無駄に時間を使うだけなので父に聞いてみる。

「そうだな。これで、うちは借金が消えたわけだ」

父のこの一言で、魔の森での仕事に関わる話は終了していた。

それと、バウマイスター家の借金の話についてもだ。

「あとは、今後のバウマイスター男爵達の冒険者としての活動であるか……」

この領内に拠点を作り、そこから俺の瞬間移動の魔法を使って魔の森で狩りを行う。

他にも、定期的なバザーの開催や、領内には一切のギルドがないので、その他の業務というのを俺達が引き受けられるようにという話もあった。

そして、それらの仕事で得られた報酬から、いかほどを税としてバウマイスター家に納めるのか？

これも既に、ブライヒレーダー辺境伯も挟んで税率は決まってたのだ。

「我が領内での換金は難しいからな。魔の森で獲得した素材などは、ブライヒブルクの冒険者ギルドで換金後。その額の二割を納める事とする」

俺達はまだブライヒブルク支部に所属しているので、換金に関してはそこで行う必要があったのだ。

本当は、ブライヒブルク支部にも換金額の二割を上納金として納める必要があった。

だが、合計で四割も取られてしまうと、俺達冒険者の方から不満が出てしまう。

そこまで搾取されるのは、さすがに嫌だからだ。

なので、ブライヒレーダー辺境伯がその辺をギルドと上手く交渉していたのだ。

結果、ブライヒブルク支部側への上納金は無くなっていた。

こうなるとギルド側の一方的な損失にも見えるのだが、冒険者から買い取った魔物の素材の転売でギルドも十分に利益を得ているので、特に問題にはなっていないようだ。

それに、今回の件では政治的な意図も絡んでいる。

先日の冒険者ギルド本部の失態もあって、俺やブライヒレーダー辺境伯に無理に上納金を要求しなかったらしい。

この話は、あとでブランタークさんから聞いたのだが。

「とにかく、得た利益の二割を納める事と。詳細な明細の提出を月に一度求める」

「わかりました」

その明細の確認はクラウスの仕事なのだが、彼は仕事の部分では手を抜くような男ではないし、父やクルトのために俺に難癖を付けて利益を掠め取るような真似もしないはず。

その点では、彼は信用できた。

何しろ、内心では父を恨んでいるのだから。

「ヴェンデリン様が、この領地で冒険者として活動を開始する。実に素晴らしい事ですな」

父から明細書のチェックを頼まれたクラウスは、間違いなくわざとであろう。

オーバーアクションで大喜びしをしていた。

正式には、冒険者としての活動を隠れ蓑に、後々厄介の種になりそうなクルトの排除が目的なのだが。

クラウスは、間違いなくそれに気が付いているのであろう。

彼からすれば、俺の決断は万々歳な出来事なわけだ。

そして、そんなクラウスをクルトが鋭い目付きで睨み付けるが、彼はまるで気が付いていないかのように振るまう。

「久々に、計算し甲斐のある明細書なので楽しみにしています」

普段は、各家の麦の収穫量からどのくらいの税を納めるのか？

いつもはこのくらいしか計算が無いので、久々に会計役らしい仕事が出来ると喜んでいる風に見える。

だが実際には、父やクルトの領主としての能力をバカにしている

ようにしか見えなかった。

それに気が付いたクルトは、顔を更に真っ赤にさせながらクラウスを睨み付けていたが、父は特に表情に変化は無い。

クラウスも、クルトに睨み付けられている事にすら気が付かないフリを続けていた。

「（クラウスは、やはり油断ならないな……）」

俺が、クルトを暴発させようと挑発しているのに気が付き、それに何も言わずに手を貸しているのだから。

「あとの細かい件は、また相談して決めるという事で」

「そうだな」

こうして、父との交渉は無事に終わっていたのだが。

ただ一人、クルトは蚊帳の外に置かれ、顔を真っ赤にさせながらその場に立ち尽くしているのであった。

「お館様、なかなかの品揃いかと」

「ローデリヒは、店長経験も有りとか？」

「代理でしたが。知人に頼まれて、とある雑貨屋の業務を一通り」

「なるほど」

とりあえず、クルトを暴発させて排除するまでは、バウマイスター領を拠点に動く事を決めたので。
俺はこの一週間で、様々な人や物を取り寄せていた。

まず家であったが、人が増えるとあの借家では手狭なので、他の家に移る事にした。
だが、この領内で一番大きな家は領主の館しかない。

そこで、ブライヒブルクにある師匠から譲り受けた屋敷を移築する事にしたのだ。

『あの山脈を、どうやって超えるのか？』という疑問が出るであろうが、それを解決するのも魔法であった。

『まいど！　移築のレンブラントだす！』

三日ほど前、俺はブライヒブルクにある自分の屋敷の前で、この似非関西訛り丸出しの、頭部がバーコードなおじさんと待ち合わせをしていた。

実は、このおじさん。
系統は土に属する、特殊な魔法の使い手なのだ。

その魔法は『移築』といい、かなり巨大な建造物などを他の場所に移築する事が可能であった。
他にも瞬間移動も使えるので、依頼者から仕事を受けると対象物

を魔法の袋にまず移し。

目標地点まで移動してから、そこに建物などを魔法の袋から取り出して移築する。

当然、建物には地面に埋まっている土台部分などもあるので、移築後も前と同じようにそれが作用していないといけないわけで。

そこまで計算して移築可能なレンブラント氏は、常に数ヶ月先までスケジュールが埋まっているそうだ。

顧客は、主に貴族などの金持ち層となっている。

例えば、風光明媚な土地に別荘を建てたいのだが、そこまで建設人員を呼ぶのが難しい時。

適当な空き地で建物を完成させ、それをレンブラント氏に移築して貰う。

他にも、王国政府の命令で歴史的建造物の移築などを行ったりと。

この特技のおかげで、彼も俺と同じく法衣男爵の地位にあった。

本来、すぐに俺の依頼は受けられないのだが、そこはルックナー財務卿が骨を折ってくれたらしい。

彼は、約束した時間に屋敷の前に現れていた。

『では、行きましょか』

なぜか微妙な関西弁を喋るレンブラント氏であったが、仕事は早いの一言であった。

さっと屋敷の周りを一周してからすぐに、先ほどまであった俺の屋敷が姿を消していたのだ。

『では、予定地点まで案内を頼みまっせ』

さすがに、ほぼ王国全域を移動可能なレンブラント氏でも、バウマイスター領には行った事が無いそうだ。

なので、俺が瞬間移動で彼をバウマイスター領へと連れて行く。

『のどかでんなぁ』

目的地に到着したレンブラント氏は、田舎の農村その物なバウマイスター領を見ながら目を細める。

そして、そんな俺とレンブラント氏を護衛役のパウル兄さん達が出迎えていた。

『ここが、予定地点です』

先に父との交渉で、バウマイスター家の実行支配範囲と未開地との境目にある、地盤のしっかりとした平地を借りていたのだ。

賃料は無料で、未開地側では何をしても構わない。

その代わりに、得た利益の二割は確実に納める事。

多分父は、未開地で狩りでもして得た獲物が金にでもなれば御の字だと考えているのだと思う。

『ここなら、大丈夫でっしゃろ』

『（変な関西弁だな……）』

何でも、レンブラント氏は建築家も兼業しているらしい。

その知識も生かし、魔法の袋から取り出した元は師匠の屋敷は平

地に以前と同じ状態で建っていた。
相変わらずの、一瞬の早業である。

『あとは……』

続けて、事前に頼んでいた十数軒の家も移築し始める。
俺に付いて、暫くバウマイスター領で生活する人達のためにレンブラント氏から持って来て貰ったのだ。

まず、師匠の屋敷には、俺達パーティーメンバーとヴィルマとローデリヒとメイドのドミニクが。
両隣の家には、ローデリヒが選んできた腕の立つ警備員達や、新たに雇い入れた使用人達の住まいに。

他にも、パウル兄さん達が暫く住む家も移築される。

『えっ？　円満退職？』

『先輩、私達もなんですけど……』

地方巡検視の仕事を終え、今は休職扱いで俺達の護衛をしているパウル兄さん達であったが、突然ブライヒブルク経由でエドガー軍務卿から貰った手紙に絶句してしまう。

なぜならその手紙には、パウル兄さん達五人は俺の護衛任務を全うすると同時に、警備隊を退職する事になったと書かれていたからだ。

『なぜに？』

『続きを読んでみたらどうだ？』

オットマーさんに促されてパウル兄さんが手紙の続きを読むと、そこにはこう書かれていた。

『このまま、バウマイスター男爵の護衛を続行せよ。成功報酬として、準男爵への陞爵としかるべき土地を与える事を約束をする。残りの四人に関しては、別途報酬とパウル殿の陪臣として……』

他にも、休職中ではあるが、王都の家族には警備隊での給料分の補填に、地方巡検視任務の役職手当と遠隔地手当て。

加えて、護衛料として纏まった額を支給する旨が書かれていた。

『領地？』

『多分、未開地のどこかじゃないのか？』

間違いなく、オットマーさんの言う通りであろう。

そして、ヘルマン兄さんが継ぐ予定の領地と合わせて、俺が開発を援助する。

その結果、将来的には未開地を領有する俺を補佐する分家のような存在になるのだと。

『まあ、一人蚊帳の外のクルト兄貴を引き摺り下ろす嫌な仕事だしな。開発の苦労はあるけど、こういう報酬も悪くは……』

『俺、マジでお前と友達で良かったわ！』

『先輩！　最高です！』

『親父の鼻を明かせるぜ！』

『奥さんや子供達が喜びます』

他の四人は、パウル兄さんが開発する新準男爵領に陪臣として入れると聞き、大喜びでパウル兄さんに抱き付いていた。

『こら！　俺には、その気はねえ！』

『知っているさ、同期の親友よ！　いや、今日からはお館様だな』

『オットマーに言われると変だな』

『とはいえ、慣れないと問題だろう』

男四人に抱き付かれて心の底から嫌そうな顔をするパウル兄さんに対し、世襲可能な陪臣の職が内定した四人は喜びに満ち溢れた表情をしていた。

『世襲可能！　これがあるから、陪臣って素晴らしい！』

『これで、クリスタにプロポーズが……』

『今度、家族に手紙を書かないといけませんね』

みんな、貴族の三男以下や、一代騎士の子供に、先祖は貴族の商家の出と。

貴族になれれば嬉しいのであろうが、そこまで夢を見ているドリーマーは存在しないらしい。

彼らからすると、パウル兄さんの家臣で世襲可能ならば十分に勝ち組なのだそうだ。

『となれば、バウマイスター男爵様の身の安全は確実に守らないと』

『私の剣の腕が役に立つ時ですね。暴漢は、苦しまずに首を刎ねてやりますよ』

『そうだな。怪しいのは、片っ端から斬り殺そう』

『間違えて、あの長男を斬った事にしませんか？　むしろ、その方が仕事が早く……』

『ストップ！　その危険な発言ストップ！』

俺は、嬉しさのあまりとんでもない事を言い始めたオットマーさん達を懸命に冷静にさせるのであった。

「結局、お店を出すのですな」

「バザーとか、わざわざ面倒だもの」

父から、未開地側は自由に使っても良いと許可を得たので、それから一週間ほど時間をかけて様々な物を運び込んでいた。

移築名人のレンブラント氏に頼んで、王都で売りに出されていた手頃な価格の家を十数軒、俺の屋敷の周りに移築して貰う。

中には捨て値同然の古い家もあったが、それは現在ローデリヒが

雇って連れて来た大工達が修理をしている最中である。
彼らは仕事が終われば、俺が王都まで送り届ける予定であった。

「半分以上が空き家ですが、移民でも募集するのですか？」

「ローデリヒ、移民という言葉は危険だ」

ここは父の領地で、俺はあくまでも借地人の冒険者ではない事になっていたからだ。
なので、移民ではなく俺が雇った新しい使用人というわけだ。

「このお店で、様々な物を売ると？」

「ローデリヒ店長、頼むよ」

「はあ……」

空き家の中には、王都郊外にあった古い一度倒産した中規模の商店もあった。
俺がそういう店舗を探していると聞くと、あの胡散臭いリネンハイム氏が格安の物件を探してくれたのだ。

他の古いが安い家屋なども、彼が見付けてくれていた。
古いので取り壊す予定だったりした建物を、ほぼ無料に近い値段で売ってくれるようにと交渉してくれたのだ。

向こうも、取り壊す予定の物を解体費用をかけずに処分してくれるので、これはお互いに良い取り引きであったという事だ。

それに、家の状態もそれほど悪くはない。

王都では、家屋の建て替えが早い傾向にあるので、少し直せば十分に使える物件ばかりだからであった。

言っては悪いが、むしろバウマイスター領内の家の方がボロかったりするのだから。

「この中型商店も、外部の修理だけでいけます」

それら物件の中の一つである元中規模商店には、既にローデリヒ指揮の元。

屋敷のメイドを売り子に、王都で雇用した若い男性店員なども奮闘して多数の商品が陳列されていた。

バザーを開くくらいなら、俺が商店を経営した方が面倒もなくて良い。

という結論に至り、父に許可を得て、俺がオーナーでローデリヒが店長の『何でも屋』が誕生する。

売り物は、まさに何でもというか前のバザーで販売したような品揃えであった。

調味料、生活雑貨、農機具などの金属製品、お菓子、肉類など。

腐り易い物もあるが、これは魔法の袋に仕舞っておけば問題は無い。

実は、師匠の遺産の中に汎用の魔法の袋があり、それをローデリヒに預けていたからだ。

汎用なので貴重な品ではあるのだが、俺からすると収納量が家一軒分くらいで使い勝手が悪く、死蔵していた品だったからだ。

「使い勝手が悪いって……。お館様。この魔法の袋は、買うと三百万セントはするのですが……」

「じゃあ、無くさないように」

「弁償とか嫌なので、無くしません」

商品の仕入れは、俺がブライヒブルクの商業ギルドから定期的にする事になっていた。

あとは、領民達からブライヒブルクで売れそうな物を買い取る仕事もだ。

最初は小麦くらいしか売る物が無いはずであるが、次第に領民達も知恵を絞るようになっていくと思う。

そして、この商店が出来た事により。

ある伝統が中止されようとしていた。

『じゃあ、わざわざ商隊を派遣する必要もありませんね』

ブライヒレーダー辺境伯は、長年続けていたバウマイスター領への商隊派遣を中止する事を宣言する。

俺に色々と便宜を図ってくれるのも、商隊を派遣するよりも俺に任せた方が、圧倒的に金がかからない事に気が付いたからだ。

『麦の買い取りもお願いしますね』

なお、この麦の買い取りでは利益を一切出さない事にした。

相場で買い取って、相場で売る事にしたからだ。

商隊の買い取りも実はそうだったので、急に変えると問題になると判断しての事であった。
それに、利益なら他の商品の販売益で稼げるわけであるし。

「しかし、お館様は、えげつない事をなさいますな」

「わざとやっているから」

俺が商店を経営し始めた事で、バウマイスター領は商隊という外部からの塩の供給手段を失った。
更に、俺に頼らないと塩などが得られなくなってしまったのだ。

俺は、父がそれに気が付いて何か言うかと思ったのだが。
交渉の席にクルトを入れず、無条件で容認をしている。

『ブライヒレーダー辺境伯殿の罪悪感という、怪しげな理由で運営されている危うい商隊だったからな。それが、バウマイスター男爵の商店に変わって、何ほどの事か』

しかも、商隊よりも品数が多く、値段も抑え気味なのだ。
父からすれば、税さえ納めて貰えば反対する理由など無いのであろう。

『親父！　このままだとヴェンデリンに領地を乗っ取られるぞ！』

『乗っ取られる？　では聞くが、今までのバウマイスター領は、塩という戦略物資をブライヒレーダー辺境伯家に握られていた。だが、今までにこの領がブライヒレーダー辺境伯家に乗っ取られたりしたか？』

『それは……』

『文句があるのなら、お前が商隊を何とかしてみせろ』

やはり、俺の商店経営に対してクルトが父に文句を言ったらしい。

だが、以上のようなやり取りの後に父に凹まされてしまったようだ。

「他にも、農家の召集ですか」

「俺は、米が食べたいんだ！」

「そうですか……」

バウマイスター領とその南方の未開地は、気候も温暖で雨もちゃんと降る。

なので、十分に米作も可能であろうと、試しに作らせてみる事にしたのだ。

『米作りの名人ですか？　ええ、いますよ』

米作りが盛んなブライヒレーダー辺境伯領から、数名の既に子供などに農地を任せている老齢の農民を数名雇い。

彼らに、王都で募集した農家希望の若者達を指導させていたのだ。

一から農地を開墾させると時間がかかるので、土木魔法で区画割りを均一にした田んぼや用水路などを作り、田んぼの土から石などの余計な物を魔法で取り去る。

更に、ブライヒレーダー辺境伯領内で、数百年間も優秀な田んぼ

として使われている場所の土を少し貰い、それを参考に開墾したばかりの田んぼの土を魔法で変性させる。

何度も微調整を繰り返し、最後には指導役の農民達から合格が出る田んぼの土が完成していた。

あとは実際に米を作りながら、時間をかけて土をこの土地と気候に最適な土にしていくだけである。

今も、十数名の農業志望者の若者達が、指導役の老人達に従って土起しをしたり。

用水路や畦道の補強工事をしたり。

田植えに備えて、俺が事前に購入していたガラス製のハウスを組み立てたり、育苗の準備などをしていた。

「本格的ですな」

「俺が新米を食いたいからですよ。本当に」

それもあるが、今までバウマイスター家の人間が誰一人開発すらしなかった未開地を俺が魔法で短期間で開発し、クルトにプレッシャーを与えるためであった。

「お館様がそう言うのであれば。ここも、拙者が大本は管理いたします」

バウマイスター領と隣接しているので、将来的にはヘルマン兄さんへの支援として割譲する予定にしていたが。

小規模農村、商店、田園地帯の開発管理に税収の計算と。

そう遠くない先、未開地で領地開発の代官をする予定のローデリ

ヒへの訓練になるであろうからだ。

「税金の計算をミスらないように」

「あの御仁に、付け込まれるからですな。ところで、奥方様達は？」

「ああ、エリーゼ達なら……」

パウル兄さん達は、俺とローデリヒを囲んで護衛の最中であり。
エリーゼは、教会でマイスター殿の手伝いに行っている。
何でも、昨晩にまた腰を痛めて立ち上がれなくなってしまったそうなのだ。

この田舎領地で他に神官など居るはずもないので、助司祭であるエリーゼの出番となったわけだが、彼女を一人にするとクルトがバカな事を企みそうなので、ヴィルマが慣れない神官服を着て護衛を勤めていた。

「神様、お腹減った……」

「ヴィルマさん。神様は、そういう直接的な願いは聞いてくれないのですが……」

多分、俺と同レベルで信心の薄そうなヴィルマなので、こんな事を言っていそうではあったが。

「それで、エル達とブランターク様は魔の森ですか」

冒険者扱いでの滞在なので、狩りに行かなくては本末転倒であった。
そこで、エル達とブランタークさんは魔の森に探索に出かけていたのだ。

「俺も、行きたかったな」

「お館様は、ここで仕事がありますので」

今まで、魔の森はほぼ中央部にある遠征軍侵入ルートの探索しか行われていない。
この中央部の魔物の分布は、さほど他の地域との差異が見られなかった。

だが、他のエリアではそれが変わる可能性もあり、これから暫くはそれを調査する事にしたのだ。
朝、調べるポイントまで俺が瞬間移動で送り、夕方に迎えに行く。

こういう予定になっていた。

「まだ、お出迎えの時間には早いかと」

「では、早めにやってしまうか」

この未開地で、バウマイスター家が開発を断念した理由。
それは、未開地には危険な野生動物が多いという点にあった。
農作物などを作っていると、実は猛獣の猪に、熊や、農作物目当てのウサギや鹿などを狙って狼の群れが出現する事もあった。

開発を行いつつ、その人員の安全と確保する。
確かに、あまり余裕の無い小規模領主では不可能であろう。

「しかし、それはお館様も同じでは？」

金とコネで集めた開発人員や警備兵達であったが、まだ数が少ない。
なので今、大まかな開墾を終えた田園地帯の防衛には人数が少ないような気もすると、ローデリヒが心配していた。

「人員は、あまり必要ないさ」

なぜなら開墾した田園地帯と未開地の間に、幅三メートル、深さ五メートルほどの堀を魔法で掘り、その時に出た土で土塁も作って二重に動物の侵入を防いでいたからだ。

「それならば、大丈夫ですな」

ローデリヒは、安心したようだ。

そして、それから暫く俺から大まかな管理管理方針などを聞くと、急ぎ張り切って仕事に戻るのであった。

『いやあ。バウマイスター男爵様のおかげで、開墾に害獣対策と早い早い』

指導役の老農夫達は、僅か数日で形になってしまった新開墾地に

驚きの声をあげていた。
あとは、自分達と新人達で何とかなるそうだ。

『その代わりに、新米は頼むよ』

『ただ、肥料が足りないもので……』

『肥料か』

美味しいお米を作るには、当然肥料が必要となる。
ただこの世界で化学肥料などは期待できず、俺は魔法で未開地の雑草を大量に刈り取り。
他にも、生ゴミや糞尿などと合わせて魔法で発酵させていく。
暫く作業すると、空き地に大量の肥料が完成していた。

『バウマイスター男爵様は、魔法で肥料まで作れるのですね』

『ずっと作るのは無理だけど』

『最初の分がこれだけあれば、初回の収穫から大分良い出来になると思いますし。あとは、自分達で何とかしますよ』

開墾、用水路掘り、土作り、肥料作りと。
本来ならば、自分達が体を酷使してしなければいけない事をほとんど魔法でやって貰えた。
こんな好条件な開墾などまずあり得ないので、あとは新人達を甘やかさないようにビシビシと鍛えるそうだ。

『バウマイスター男爵様は、新規の開墾の時にまた魔法を使ってい

ただければ』

『ところで、気候的に二期作で行くとか？』

『いきなりは危険なので、二毛作で行く予定です』

以上のようなやり取りの後、老農夫達は新人達に米作りの指導を開始していた。

「そんなわけだから、この開発特区の管理を頼むよ」

「開発特区ですか」

父から利益の二割を納めれば良いと言われた土地で、稲作や商店の経営などを始める。

バウマイスター領内にはあるが、そこの主は俺で父やクルトの影響力が及んでいない。

なので、俺は勝手に開発特区と呼んでいたのだ。

一先ずの、家屋、農地、商店などの準備か終了した日の夜。

俺は、屋敷の書斎で経費の計算をするローデリヒに自分の考えを語る。

「ここが利益を上げるほど、クルトの声望は落ちていくわけだ」

「刃物で殺さずに、金で殺すですか。エグイですな」

「まさか、魔法で吹き飛ばすわけにもいくまい」

「確かにそうですな」

「ローデリヒは、俺を嫌な奴だと思うか？」

別に思われても良かったのだが、試しに聞いてみる事にしたのだ。

「以前の拙者の境遇を考えると、そんな事を考える余裕もありませんな。あの御仁は、継げる領地があったのに努力を怠った。外部との繋がりという、時代の変化にも対応できなかった。年長者だからという理由で、弟に頭を下げられなかった。貴族とは、時に人が見ていない場所で頭を下げる必要もあるのですから」

「なるほど」

「これから先、お館様が頭を下げる必要があるかは不明ですが。しかし、こう初期費用が低くなるとは。魔法とは、とんでもない物ですな」

こうして、俺が持つ金の暴力によって未開地の一部がようやく開発されていくのであった。

幕間二十一　魔の森初探索。

「へえ、変わった森だね」

「何？　このトゲトゲな葉の植物」

本日の、ボク達冒険者パーティー『ドラゴンバスターズ』には、リーダーであるヴェルがいない。

色々な大人の事情というか、ヴェルに言わせると将来の禍根を絶つために、実のお兄さんの追い落とし工作に奔走しているからだ。

こう言うとヴェルが残酷な人に聞こえるかもしれないけど、貴族では別に珍しくない話で。

あのルックナー兄弟を見れば、おのずとわかるというものだ。

それに、ボクもあのお兄さんの態度には感心しなかった。

いくら弟に頭を下げるのが嫌だからって、それが出来ない時点で貴族としては駄目だと思う。

そんなわけで、ヴェルはそのお兄さんの追い落とし工作のために魔法を駆使している最中だ。

朝、ボク達を探索する魔の森の入り口まで魔法で送ると。

一生懸命に開墾をしたり、用水路を掘ったり、土壌の改良を行ったり、肥料を作ったりと。

いまいち、お兄さんの追い落とし工作には見えないんだけど。
今まで誰も開発できなかった未開地に、見事な農村やら田園地帯を作り、新しい使用人という名目の移民希望者に、商店までオープンさせていて。
これが、バウマイスター領の住民達を驚かせているらしい。
ボクも、その話はエリーゼから聞いたんだけど。
『ヴェンデリン様が領内の開発に手を貸してくれるのならば、この領の将来に希望が持てると。皆さん、そう仰っています』
そのエリーゼは、バウマイスター領唯一の神官であるマイスター様の代わりに教会で働いている。
何でも、マイスター様は腰を悪くしてしまったらしく、現在はベッドから起き上がれない状態なのだそうだ。
エリーゼが治癒魔法をかけてみたようだけど、マイスター様が老齢過ぎてあまり効き目はないらしい。
徐々に症状は緩和しているが、あとは自然治癒に頼るしかないのだそうだ。
『年を取ると、治癒魔法が効き難くなるのですよ。残念な事です』
ヴェルと見舞いに行った時に、マイスター様は笑いながら自分は年を取り過ぎたのだと語っていたのを思い出す。
そして、エリーゼが臨時で代理司祭になったんだけど、教会は恐ろしいほどの賑わいを見せているらしい。

領民達が急に信仰に目覚めたわけではなく、エリーゼが可愛いから見学がてらという人もいないわけでもないけど。
一番の理由は、エリーゼの治癒魔法にあったんだ。

『エリーゼ様、うちの子が熱を……』

『先週の開墾作業中に、腕を切ってしまいまして……』

『木から落ちて骨折を……』

医者など居ない領地なので、全て民間療法で治療していた怪我や病気が、エリーゼの治癒魔法で一瞬で治ってしまう。
彼女が王都で、『ホーエンハイム家の聖女』と呼ばれている事を知らない領民はいないらしく。
居る間に治療して貰おうと、皆で順番に押しかけているようだ。

エリーゼも人が良いから、来る人を拒まずに治してしまう。
更に、代金代わりの寄付金なども一切受け取っていなかった。
少しの食べ物などは受け取っているようだけど。

『さすがは、ヴェンデリン様の奥様』

『エリーゼ様、ありがとうございました』

『お礼代わりと言っては何ですが、今日採れた野菜です』

皆、エリーゼを女神の如くありがたがり、その婚約者であるヴェルの評判も上がっていく。

当然、あのお兄さんが良い顔をするわけがない。
エリーゼが危険なので、ヴィルマの他にも護衛を増やしたくらいなのだから。

ただ、今のエリーゼに手を出すと、領主であるヴェルの父上でも危険だと思うんだよね。
皆、ヴェルが領主を継げば良いと心の中ではそう思っているのだし。

「凄く蒸し暑いわね」

「南端だもの」

「それだけが理由かしら？」

まあ、ヴェルの方は今は放置するしかないよね。
朝夕の送り迎えはしてくれるのだし、ヴェル自身も何だかんだで土木魔法が気に入ったみたいだし。

『あははっ！　田んぼが広がって行くぞ！　土壌の改良も順調だ！』

妙にハマっているようだけど、イーナに聞いたら『男は時に、良くわからない物に熱中する』のだそうだ。

『おおっ！　綺麗な真四角の田んぼを邪魔する巨石め！　お前は強制排除だ！』

『古い巨木の切り株とは！　砕けて、肥料になってしまえ！』

真剣に動かない障害物と対峙しているのを見た事があるけど、ちょっとボクには理解できなかった。

そんなわけで、暫くはヴェルは戦力にならないわけだけど。

その代わりに、ブランターク様が探索に参加している。

魔力の量ではヴェルに負けるけど、多彩な魔法を使う経験豊富な魔法使いなので、安心して頼れるという物だ。

「ふむ……」

そして肝心のブランタークさんであったが、彼は持参した古い本を見て一人勝手にフンフンと唸っていた。

「あのブランタークさん？」

「ああ、悪い」

イーナの呼びかけに、ブランタークさんは謝りながらこちらに顔を向ける。

「その本は？」

「お館様から、借りたんだけどよ」

ブランターク様やボクやイーナの主君であるブライヒレーダー辺境伯様の趣味は、古書籍の蒐集であった。

前に貸して貰ったエッチな小説を見るに、ジャンルは特に問わな

いようだ。

とにかく、古くて貴重なら無類の愛着を感じるらしい。
こう言っては失礼だけど、少し変わっていると思う。

「その本って、どんな本？」

「タイトルは、『図解魔物・産物大全』となっているな」

かなり昔の本で、そこには魔物の領域に住まう魔物や採取可能な産物が図付きで紹介されているらしい。
他にも、攻撃パターンや弱点。
食べられたり、使える部位などと。

大変に詳しく載っているのだが、一つ問題のある書籍でもあるそうだ。

「一部、見た事も無い魔物や産物の紹介がされていてな」

詳しくは書いてあるのだけど、誰も見た事が無い魔物ばかりで。
その部分が、この図鑑を『半フィクション図鑑』などと呼ばせているそうなのだ。

「ただ、このトゲトゲの葉の植物が載っていた。『ナンゴクシダ』だそうだ」

この図鑑には、魔物の領域特有の虫や魚や植物なども詳しく載っていて、その中の一ページにトゲトゲも載っているそうだ。

「えっ？　じゃあ、もしかして？」

未開地南端で海を塞ぐようにして存在する、広大な魔の森を現在三つに分けて探索していたのだが、遠征軍が入った中央部は、他の魔物の領域とさしたる違いが見付けられなかった。

ところが、今日入った西部の森は、ボク達が今までに見た事が無い樹木や植物が生い茂っている。

このナンゴクシダの他にも、多くの植物が重なるように生い茂っていたのだ。

「未発見の魔物が居るとか？」

「図鑑には残っているからな。大昔の冒険者はここに来ていたのかもしれないな」

確認する術はなかったけど、そういう可能性もあるのだとボクも思う。

もしくは、他の場所にも、この森と同じような植生や魔物が分布している場所があるのかもしれない。

「その図鑑が、フィクションで無い事が証明されましたね」

「まあな。ただ……」

「ただ何ですか？」

イーナの問いに、ブランタークさんはとある方向に視線を向ける事で答える。

「この森は、何でもデカいな！」

「確かに……」

ブランタークさんも、イーナも。

巨大な木に大量になっている、黄色い三日月のような果物に絶句していた。

何しろ、その一本がボクの身長くらいあるのだから。

「えーーーと。『バナナ』って果物らしいな」

図鑑を見ると、そのバナナなる果物の解説が図入りで書かれていた。

南方に自生する植物で、黄色い二十センチほどの実が大量に房状でなるのだそうだ。

「まず最初に、大きさが間違っていると思う」

「おかしいな？」

ブランタークさんの言う通り、この図鑑の記載で間違っていたのはこのバナナが初めてであった。

というか、大きさだけが間違っているのだ。

「魔物の領域だからな。他の土地では考えられない非常識があったりするという事にしておく。実際にあるけど」

魔物の領域は、ここもそうだが魔力の元であるマナが濃い場所が多い。

魔物が大型になるのも、その濃いマナのせいであったのだから。

「でも、大きければ得だよね」

「まあ、そういう事だな」

調査とはいえ、採集や狩りを行わないわけではない。

ヴェルへのお土産も必要という事で、ボク達はそのバナナの採取を始める。

他にも、全長一メートルほどある『マンゴー』とか言う実や、『ドリアン』とか言う実に。

「これって、コーヒーの実？」

「そうだな」

ボクだと両手でないと持てないほど大きなコーヒーの実が、目の前の巨木に大量になっていたのだ。

「こんなに大きいと、豆の焙煎が大変そうだね」

「そうでもないみたいだぜ」

ブランタークさんがコーヒーの実の果肉を齧り、焙煎する種の部分はそれほど大きさが変わらない事を証明していた。

逆に言えば、コーヒーにするために種を取るのが大変でもある。

コーヒーは、ブライヒレーダー領よりも南方の一部の土地で栽培されているのだが、量が少ないので喫茶店などで頼むとマテ茶の十倍近い値段がするのだ。

ちなみに、紅茶はマテ茶を発酵させた物なので、そこまでは高く

ない。
精々で、マテ茶の倍くらいの値段だ。
「少し酸っぱいけど、実も食えるんだぜ」
「へえ、初めて知った」
ブランタークさんから切り分けて貰ったコーヒーの実は、少し酸味はあるけど甘くて美味しかった。
「これも、ヴェルにお土産だね」
「そうだな。あの坊主って、珍しい食べ物が好きだからな」
確かに、その異常なまでの食べ物への執着は、王都滞在時でも大いに発揮されていたんだ。
『これ、不味いな……』
『王室御用達のお店のだよ』
『どこの御用達だろうと、不味い物は不味い！』
ヴェルは、食べ物の好き嫌いはハッキリ言うけど、初めて見る食べ物は必ず口に入れるし、気に入ると大金を使ってでも手に入れようとする。

王都では、お気に入りの料理屋、喫茶店、お菓子屋、魚屋、肉屋、穀物商店、乾物屋などが存在していて。
贔屓にして貰っている店は、密かに『竜殺しの英雄御用達』のお店として評判になっていた。

ただ、御用達看板などの掲示は、ヴェルが嫌がるのでどの店も行っていない。

あとは、本人もたまに料理を作る。
包丁捌きが雑だったり、味が濃い目だったり、量が多かったりするけど。
どこで教えて貰ったのかは知らないけど、今までに食べた事が無い独特の料理を作ったりするのだ。

特に大ヒットだったのは、『カラアゲ』と『フライ』だったと思う。
ある日ヴェルは、『料理を作るぞ！』と言って台所に入って行く。

たまにあるいつもの光景だったんだけど、その日はいつもよりも気合が入っていたようだ。

覗きに行くと、まずはホロホロ鳥の肉を魔法で熟成させ、更に別の魔法で肉を柔らかくしていく。

プロの料理人や家庭の主婦だと、薄い刃物で肉の筋を切ったり、イチジクやジンジャーの果汁に漬けたりして手間と時間がかかるのに。
ヴェルには、魔法があるから便利だと思う。

魔法をこんな事に使う人は、正直珍しいとは思うんだけど。

次に、例のショウユに砂糖やジンジャーの汁を混ぜた調味液に処理した肉を漬けて味を染み込ませ。
それにヴェルが、『カタクリ粉』なる粉を付けてから高温の油で揚げる。

他にも、『衣には、カタクリ粉以外に少量の小麦粉、御飯、卵、油などを混ぜて事前に冷やしておく』とか。
『二度揚げこそが正義！』とか言っていたけど、ボクにはなぜヴェルがそこまで拘るのか理解できなかった。

エリーゼも、『ヴェンデリン様は料理の腕前はそうでもないのに、なぜか独特の調理方法は良く知っているので不思議です』と首を傾げていたくらいだから。

それと、この『カタクリ粉』という粉だけど、ヴェルがジャガイモを材料にある日突然自作した粉で、エリーゼはスープなどにとろみを付けるのに使っていた。

あとは、教会や診療所などで、この粉を熱湯で溶いて砂糖と塩を混ぜた物を病人に食べさせるように勧めたのもヴェルだ。
こうすると、普通の食べ物では嚥下が困難な病人でも栄養が摂れるらしい。

実際に効果は出ていて、教会はヴェルに大金を払って『カタクリ粉』の独占製造権を獲得していた。
寄付以外で教会が経済活動をとか思う人は多いと思うけど、実は地方では独自に酒を醸造して販売し、それを運営資金に充てている支部も多いのだ。

何で酒をと思わなくもなかったが、利益率が高いのと、自分達が人前で飲まなければ良いという教義なので問題になってはいない。

問題に出来る人が少ないという理由もあるんだけど。

教会は急ぎヴェルからカタクリ粉の製造方法を聞きだし、効率的な生産工房を作って市場にカタクリ粉を流通させ始める。

あとは、カタクリ粉を使った料理の普及であろう。

『イモモチ』とか言う、蒸かしたジャガイモとカタクリ粉を混ぜてから丸く成型して焼いたお菓子に。

それの、カボチャを材料に使ったバージョンも。

焼いたイモモチは、砂糖と例のショウユを混ぜた物を付けて食べると美味しかった。

ネーミングセンスは、カタクリ粉と同じで疑問なんだけど。

他にも、中にチーズを入れて焼いた物や、中に『アンコ』とか言う小豆と砂糖を煮た物を入れたバージョンや、大豆を炒ってから粉にした『キナコ』と砂糖をまぶした物などと。

更に、カタクリ粉で作ったパスタも、歯応えがあって美味しかったのを記憶している。

それで、どうしてヴェルがこんな事をしているのかと言うと、教会はこれで新しい慈善活動を行うのだそうだ。

教会認定の屋台を王都で運営し、そこでイシモチ、パスタなどの販売を行う。

店主や従業員には、一家の働き手を失った寡婦や孤児などを当て

て、彼女らの経済的な自立を促すのだそうだ。

最後に、教会は屋台に材料を卸して利益をあげる。
という点も忘れてはいけないのだけど、その辺はヴェルがホーエンハイム枢機卿に、『あまり阿漕に稼ぐと、世間からの非難が増えますよ』と釘を刺していた。

そしてこれら一連の動きにより、ヴェルはいつでも安くカタクリ粉が買え、屋台でイモモチが食べられるようになって万々歳なようだけど。

更に後には、先のカラアゲや。
肉や魚の身に、小麦粉、解き卵、パンを砕いたパン粉をまぶして油で揚げた『フライ』なども加わっていく。

特にフライなどは、木の串に一口大の肉や魚や野菜などを刺して揚げた『クシアゲ』なる料理も考案していて、これは先に知り合いになっていたアルテリオさんに話を持ちかけていた。

『マヨネーズでハブにされたから、もう忘れられてしまったかと思ったぜ』

『今度の物は、製造で手間がかかりますからね』

その串揚げに付けるソースなら、ボク達もヴェルが手作りした物を何度も味見した事がある。
とても美味しいんだけど、材料に使っている香辛料の材料費のせいで、庶民には厳しい値段になるので商売は難しいと思っていたんだ。

『材料を一括で安く仕入れ、工房で大量に作るんですよ』

ヴェルは、他にもトマトを材料にした『ケチャップ』や、『タルタルソース』、『バジルオイル』、『ユズコショウ』、『ラー油』、『トウバンジャン』、『タバスコ』などのレシピをアルテリオさんに教えていた。

みんな、突然ヴェルが作り始めた謎ネーミングの調味料達だ。

『男爵様は、妙に調味料に詳しいんだな』

『自分で作ると面倒なんですよね。そこで、アルテリオさんの出番です。買いに行きますので』

『そんな理由かよ』

王都滞在中はほぼ毎日が導師との修行の日々で、ヴェルは休息日や早朝・夕方などを料理と余暇の時間にしていたのだから当然であった。

ボクも導師の修行に付き合わされて、ほぼ同等に忙しかったんだけど。

『あのショウユとミソだっけか？　アレの製法は？』

『うーーーん、アレは……』

ヴェルは、魔法に頼らない詳しい製法をアルテリオさんに伝えていた。

『醸造用の酵母の選定と、きめ細やかな温度管理か……』

ヴェルの場合は、魔法という力技で材料を強引にショウユやミソに変えてしまうのだそうだ。
それでも、そこに至るまでに相当の失敗も重ねたらしい。

もし魔法に頼らないでこれを作るとなると、もっと試行錯誤が必要かもしれないのだとも。

『詳しい製法は教えて貰ったわけだし、ここは知り合いの酒造蔵と組んで……』

ボクも良くは知らないんだけど、酒やお酢を作るには酵母という目に見えない小さな生き物の力を借りるらしい。
しかも、使える酵母の種類が決まっていて。
他の、酵母に似た物で醸造してしまうと、酒にならないで腐ってしまい材料を無駄にしてしまうのだそうだ。

そんな目にも見えない小さいな生き物をどう判別するのかは、これは各醸造元で秘伝となっていて、過去にはこれを巡って殺人事件まで起きた事があると聞いている。

ヴェルは、『食べ物の恨みは恐ろしいんだ』とか言ってたけど。

『しかし、酵母の選別にアレを使うのか……』

『内緒ですよ』

『酵母の話は、マジでヤバいんだ。拷問されても、絶対に言えるか』

アレが何なのかは知らないけど、アルテリオさんは魔法を使わな

いショウユとミソの製造研究をヴェルから委託されたようだ。

その代わりに……。

『製造に成功したら、独占製造権料を支払う。製造に成功するまでは、男爵様から購入すると』

『安くするから、材料持参で』

『自分で買いに行くのが面倒だからだろう？』

『正解です』

こんなやり取りの後に、アルテリオさんは新しい商売を始めていた。

例の『クシアゲ』をメインにしたお店を、王都内やその郊外に十数店舗一気にオープンさせたのだ。

他にも、ヴェルが考案した料理なども出していて、お店は全店オープン時から沢山のお客さんで賑わっていた。

『各店舗を寄り子にした飲食店経営か。なるほどね』

アルテリオさんがオーナーである母体の商会が各店舗に材料を卸し、各店舗の店員達の配置と教育も行う。

人員の出勤管理を行って定期的に休暇を与え、売り上げに応じたボーナスも支給する。

更には、優秀な人材の幹部登用や、独立支援制度なども準備されているそうだ。

『男爵様は、何でこんな事に詳しいんだ』

『ある朝！　突然神が！』

『言いたく無いのなら聞かないから』

各店舗と、そこに供給するために立ち上げたソースやケチャップ工房の運営で、アルテリオさんは笑いが止まらない状態らしい。

余計な事をヴェルに聞いて、機嫌を損ねたくなかったのであろう。

特に工房の調味料類は、ヴェルがショウユとミソを独占的に卸しているために、いくら納品してもすぐに無くなってしまう状態なのだそうだ。

そこから派生した、『テリヤキソース』の販売も好調らしい。

しかし、相変わらずネーミングセンスが謎だ。

『保存用に、高価な魔道具を利用した地下冷蔵倉庫を新設したんだけど。入れる物があまり無いんだよ。男爵様が月に一度ショウユとミソを納品して、それが一週間ほどで無くなるまでしか使わないのさ』

屋敷に姿を見せたアルテリオさんは、ヴェルに仕入れ代金を支払いながら、何気に仕入れ量の増量を要求していた。

『あまり一気に市場に流すと、価格が暴落しません？』

『暴落するほど、需要を満たしていないから』

むしろ、需要を満たしていないので転売で利益を上げている人がいるそうだ。

『良いですけど、早く量産体制を確立してくださいね』

ミソとショウユを造る魔法はもう手慣れた物らしく、導師との厳しい修行の後でも大量に製造可能らしい。

ヴェル自身も、『ここで魔力を使うと、魔力量の増大に効果的だ』と語っていた。

『ミソは、意外と早く製造できそうだとさ。ショウユは、何年かかると思う』

『醤油は、仕方が無いですね』

『今、委託している酒蔵と組んで、ミソ蔵を新設しているから。あとミリンだっけか？　アレは、すぐにでも製造可能だってさ』

『味醂も、料理には不可欠ですから』

『男爵様考案の料理にはだろう？　ところで、あのナットウとトウフだっけか？』

ヴェルが考案した物を、アルテリオさんが次々に量産体制を確立していく。

ヴェルは、導師との修行やボク達とのデートの合間に、こんな事ばかりしていたのだ。

『ニガリとやらの入手がなぁ……。塩とは違って液体だから、輸送の関係で仕入れ代金が上がる。製造だって、海水が無いとな』

『一応、代用品はありますけどね』

続けて、またヴェルは妙な食べ物の製造をアルテリオさんに委託していた。

前にヴェルが真剣な表情で作っていた、トウフという食べ物。

水に漬けてふやかした大豆をドロドロに砕き、それを煮てから濾して白い『トウニュウ』なる汁を作り。

それにニガリなる液体を入れると、なぜかトウニュウが固まるのだ。

ヴェルは、その固まった物を『トウフ』と名付けていた。

試食させて貰ったら、ホンノリ甘くて美味しかったのを記憶している。

何でも、このトウフなる食べ物は健康にも良いし、美容やダイエット効果もあるらしい。

製造が面倒なのと、ニガリという海水から採れる液体の入手にコストがかかるらしいけど、それはヴェルが代替品の情報を提供する事で解決していた。

『卵の殻を酢に漬ける？』

『ええ。四日間ほど漬けておけば、ニガリの代用になりますから』

『男爵様は良く知っているな。それで、このトウニュウやらトウフを量産してどう稼ぐんだ？』

『それはですね……』

またヴェルに唆されて、アルテリオさんは大金を投じて新しい商売を始めていた。

例の大豆が材料のトウニュウとトウフの販売に、煮た大豆を藁にくるんでから暖めて作るナットウなる食べ物にと。

ただ、このナットウはボクはちょっと苦手だった。

エルも駄目で、イーナとエリーゼは美味しそうに食べていたけど。

他にも、トウフを材料にしたアブラアゲとか、ガンモドキとか。

トウニュウを絞った残りである、オカラなる物を使った料理とか。

あまり味が無くて柔らかいので、色々な料理やデザートやお菓子にも転用可能で、販売直後から多くの客が詰め掛けていたのを記憶している。

『これもまた大盛況だな』

まだ数が作れないので値段は高かったんだけど、美容やダイエットに良いと店頭で調理方法込みで販売すると、貴族や富裕層を中心に爆発的に売れ始めたのだ。

あとは、あの人達に売れたのも大成功の原因であった。

『材料に、肉や魚を使っていないのが素晴らしい！』

エリーゼの御祖父さんであるホーエンハイム枢機卿が所属している正統派ではなく、古の教義に従い厳しい戒律を課している懐古派の神官さん達が、トウフやオカラの料理を良く買いに来るようになったんだ。

他の宗派の神官さん達でも、たまには肉や魚を使わない食事をとか、なるべく使わない食事をと言って買いに来るようになったそうだけど。

『また何か考え付いたら頼むよ』

アルテリオさんはご機嫌だったけど、ボクに言わせると自分で経営した方が良いような気もするんだ。

でも、ヴェルはそれをしない。

アイデアで得たお金はかなりの物だけど、自分で経営した方がもっと儲かると思うのに。

それで『なぜ？』って聞いてみると、ヴェルはこう答えていた。

『もう十分に儲けたし、こういう商売は真似する人が多いからずっと儲けるのは大変なのさ。なら、経営ノウハウのあるアルテリオさんに任せて、俺は安く普及した物が買えれば大満足だし』

なるほど、ヴェルには随分と計算高い部分もあるようだ。

それに、他にももっとアイデアを持っていそうだし。

「確かに……」

「王都の教会と、幾つかの商会に、アルテリオか。あの野郎は、坊主のアイデアを買い取ってバカみたいに儲けているらしいしな」

ボク達やブランタークさんは、ここ二～三年でヴェルが王都やその周辺に広げた様々な調味料や料理の話をしながら、森になってい

る様々な果物を採取していく。

「えーーーと。カカオ？　こんなのが食えるのかね？」

ブランタークさんは、『報告』の魔法で見付けた赤ん坊くらいありそうな実を次々に魔法の袋に詰めていく。

図鑑にはカカオの実と書かれていて、何かに使用できるそうだ。

他にも、パイナップルなる高さ二メートルほどの表面がトゲトゲな実に、パパイヤ、マンゴー、マンゴスチン、スターフルーツ、ココナッツ、ライチ、ザクロなど。

全部両手で抱えるほどの大きさで、名前は全て例の図鑑に書かれているフルーツ類であったが、やはり大きさは常識外であった。

「何度でも言うが、何でもデカいな」

確かに、図鑑に書かれた標準的な大きさの記述がまるで当てにならないのだから。

「でも、美味しいから良いと思うんだ」

「大味じゃないのが救いか。でもなぁ……」

ブランタークさんには、ある懸念があるらしい。

「でも、何です？」

「こんなにデカいフルーツが沢山自生しているって事は、それを食べる魔物もデカいって事になるよな」

「確かに……」

段々と嫌な予感がしてくるけど、それはどうやら正しかったらしい。

ブランタークさんは、ある方向を見てその表情を険しくさせていた。

「ワイバーンクラスの反応が複数か。お前ら、魔物に狩られて食われるなよ」

ブランタークさんの指示で戦闘準備を整えると同時に、ボク達の視界に巨大な魔物が襲い掛かる姿が映し出されるのであった。

「ああ、疲れた」

「ブランタークさん、ヴェルはいつ迎えに？」

「もう一時間と待たないで済むはずだ」

最初の大きなフルーツ採集は楽しかったんだけど、やっぱり未知の巨大な魔物との戦闘では疲れ果ててしまう。

フルーツも大きかったけど、それを食べる魔物も大きかったからだ。

全高二メートル、全長七メートルほどの体に、五十センチを超える長い犬歯が特徴の『サーベルタイガー』なる肉食の魔物に。

全長十メートル近い、『ライノー』という頭部に二本のツノがある魔物。
他にも、『ダチョウ』なる空を飛べない全長が五メートルを超える怪鳥に、『ヘルコンドル』というワイバーンと同じくらいの大きさの巨鳥と。

今までに見た事も無い魔物達と多数遭遇し、エルとイーナが牽制している間にブランタークさんが魔法で、ボクが魔闘流の技で仕留めていく。

多分、彼らの餌場を荒らしたから怒って攻撃して来たのだと思う。
肉食の魔物は、ただ単にボク達を餌だと思ったようだけど。

「しかし、何だあの森は？」

ブランタークさんが愚痴る気持ちも、ボクにはわからなくもない。
あんなに巨大で凶暴な魔物ばかり住む魔物の領域なんて、今までに聞いた事がなかったからだ。

冒険者時代に王国中を渡り歩いていたブランタークさんでさえも、これほど危険な領域は初めてであったと語っていた。

「獲物は、山ほどあったよね」

「そりゃあ、あれだけマナが濃ければな」

あの大量の巨大フルーツ群を、巨大魔物群は食い尽くせないでいるのだ。
つまり、それ以上の速度で繁殖しているという事になる。
通常の植物や田畑の作物では、到底あり得なかった。

「つまり、あのフルーツの木も半分魔物化していると？」

「多分、そうだと思う。だから、あんなに実が大きいのだろうな。ついでに、食い尽くされないほど早く成長する」

「中に入れれば、冒険者にはお宝の山であると？」

「この図鑑にしか載っていない、半ば空想扱いの魔物や採集物だからな。希少性もあって、売れると思うぞ」

ただ、普通の冒険者だと、魔物に遭遇した時点であの世行きだと思う。

優秀な魔法使いであるブランタークさんに、導師から修行を受けたボクが居たから何とか疲れた程度で済んでいるわけで。

あとは、ヴェルが居ればもっと楽に探索できるのだと思うけど。

「ところで、今回の成果だが……」

ブランタークさんが報告魔法で毒無しと判定した植物や果物類に、襲い掛かられたので倒した様々な珍しい魔物達にと。

ブライヒブルクで売れば、きっとかなりの金額になるはずであった。

「いいか。これは、あくまでも調査だからな。まだ探索していない場所も多いし、調査結果は魔の森全域を調べてからでないと出せないわけだ」

つまり、今のところは換金しないし。

換金しないという事は、利益が確定していないので税を納める必要がないという事だ。

「ただ、誤解するなよ。後でちゃんと換金して税は払うさ」

要するに、ブランタークさんはヴェルのお兄さんの懐にあまりお金を入れたくないらしい。

税を払うのは、あのお兄さんを次期当主の地位から引き摺り下ろしてからだと言いたいのであろう。

ボク達は元々ヴェル側の人間だし、それについては全く異存はなかった。

あのお兄さんが、脱税を疑ってここまで調べに来る度胸があれば払っても良いんだけどね。

「さて、そろそろだな」

「いやあ、今日も一日土にまみれて働いたなぁ」

突然目の前に、瞬間移動で移動して来たヴェルが姿を現す。

良く見ると、少しローブが土で汚れているようであった。

今日も、新規の田んぼや用水路の造成に勤しんでいたのだと思う。

「坊主、また田んぼを広げたのか？」

「『開墾不要・用水路完備。農作業オンリーでスタートできる農民生活』ってチラシをですね」

「そりゃあ、応募者は多いよな」

開拓地で自作農を募集する貴族は多いのだけど、このエリアの土地はお前の物だと言われ、あとは自分で開墾をするのが普通なんだよね。

ところがヴェルの場合だと、ある程度土壌まで改良された田んぼを渡され、ベテラン農夫の指導を受けながら稲作が可能なので応募者が殺到しているらしい。

みんな、新しい土地で農業をするのだから大変なのは理解している。

でも、その苦労が最初だけでも半減するのなら。

しかもヴェルは、一年目は最低限の給金を保証している。

生活に必要な物も、ヴェルが経営している商店で安く買えるし。

食料などはバウマイスター領でも買えるから、移民先で生活苦や食糧難になる心配もない。

だから、現在未開地の開墾地と人口は急激に増えていたんだ。

「家が足りなく無いか？」

「そこは、あの胡散臭いリネンハイム氏にね」

「大丈夫か？」

ブランタークさんは心配しているようだけど、実際には上手くいっている。

王都内で、もう取り壊す予定の物件をリネンハイムさんが見つけて来て、それを無料に近い値段で買い取ってしまう。

買うのは上の家と土台だけで、持ち主も解体費用が無料になって

僅かでも利益になるのですぐに了承してくれるそうだ。
買い取った物件はレンブラント氏の魔法の袋に収納され、ある程度纏まると、ここに来てヴェルから指示された場所に建てていく。
補修が必要な物件は、その都度王都から連れて来た大工達が修理していきと。

この方法により、僅か三週間ほどで開墾地は家屋は四十五戸、人口は百八十人ほどにまで増えていた。

「田んぼも前進させましたし、みんな育苗中の苗が育つまで土作りや細かな改修作業に大忙しですから」

米の苗が育てば、今度は水を張った田んぼで田植えを行うのだそうだ。
本当ならば、開墾と土作りで新規の田んぼが収穫可能になるのには数年の時間がかかる。
ところが、ヴェルが作った田んぼでは、一年目でもある程度の収穫が見込めるというのだから凄い。

「坊主も、自分の物でもない土地のために頑張るよな」

「そこは、親しき仲でも利益は必要ですから」

ヴェルが今、気合を入れて魔法で開発している開発特区とやらは、将来的にはヘルマンさんの物になる予定であった。
彼だって、心の中では実のお兄さんを追い落とすヴェルの工作になど力を貸したくないはず。

だけど、現在ヴェルが開発している田園地帯や村落が自分の物と

なると思えば。

分家のみんなのためにも、心を鬼にしてお兄さんを追い落とす工作に協力するはずであろうと。

しかし、いつものヴェルらしからぬ悪辣ぶり。

いや、貴族らしさとでも言えば良いのであろうか？

「（ボクは、そういうヴェルも好きだけどね）」

自分の居所を守るために、全く誰も傷付けないでなんて甘い理屈が通用するはずもない。

しかも、ヴェルには強力な魔法と、多額の資産があるのだから。

己の我を通すために、時にはこういう事もしなければいけないのだと。

そして、ボクはそれを悪い事だとは考えなかった。

「（ヴェルのお兄さんには悪いけど、ボクやエリーゼ達の居場所を確保するために追い落とされて貰うから）」

「ところで、探索はどうでした？」

「見た事も無い、変な果物とか魔物が沢山いたぜ」

「えっ、ブランタークさんでも見た事が無い魔物ですか？」

「坊主、俺はベテランの冒険者だったけどな。全ての魔物を見た事があるなんてはずもない。何しろ、この大陸は広いからな」

この南端の未開地のみならず、未だに前人未到で何が生息してい

るのかわからない領域など、まだ沢山残っているのだとブランタークさんは語っていた。

だからこそ、北方のアーカート神聖帝国とも和平が続いているのだとも。

みんな、勝てて利益が出る保障も無い戦争をするよりかは、未開地の開拓の方を選ぶ。

なら、昔の人達は何で戦争をしていたのかという疑問も浮かぶのだけど、それは偉い学者さんでも確実な回答は出せないそうだから。

「じゃあ、早速に戻って見てみましょうか」

「しかし、お館様の書籍が実務で役に立つとは……」

「何気に、酷い事を言いますね」

ブランタークさんの言う通りで、ボク達だってあのエッチな小説のせいで過去に酷い目に遭っているのだから警戒して当然だと思うんだ。

「さあ、戻るぞ」

ヴェルの合図で、ボク達は彼の傍に集合する。

そして一瞬の後に、広大な農地が南方に広がる開発特区内の屋敷の前へと戻って来るのであった。

幕間二十二　追い詰められたクルト。

『このままだと、バウマイスター領はヴェンデリンに乗っ取られるぞ！』

あの忌々しいヴェンデリンが、我がバウマイスター領内に生活の拠点を移してから三ヶ月の月日が流れた。

最初は、例の魔の森でアンデッド化している遠征の犠牲者達の浄化と、その遺品収拾のためにだけ来たと言っていた癖に、すぐに発言を翻して領内に居候を始めやがった。

しかも、次期当主である俺を無視して。

親父とだけ交渉して、好き勝手にやっていやがる。

まだ開発していない未開地の使用許可を親父から取り、そこに勝手に自分の屋敷を移築しやがった。

その屋敷は、うちの本屋敷と比べるだけ虚しくなるほどの豪華な物で、その時点で領主であるうちを虚仮にしている。

どこの世界に、領主屋敷よりも豪華な屋敷を移築するバカがいるというのだ。

さすがに問題なので親父に抗議したのだが、その反応は芳しいものではなかった。

『期間限定だと聞いている。暫くは、我慢しろ』

ところが、親父の返事はつれないものであった。

竜をも殺す魔法の使い手とやらである、優秀な息子様の圧力に屈したらしい。

ここまで老いると、既に老害の類としか思えなかった。

『領内の開発は、順調に進んでいるではないか。ここで文句を言って、何の得がある？』

確かに、領内の開発は進んでいる。

だが、そこに俺達は一切関われていない。

現在のヴェンデリンは、時間の半分を例の魔の森の探索にあて、残りを未開地の開墾に費やしているようだ。

とんでもない威力の魔法で土地を平らにし、時には小山ほどもある岩などの障害物を排除してから。

綺麗な真四角の形をした田んぼや、道や用水路などを整備していく。

加えて、その田んぼの土も、魔法で稲作に適した物に変化させているのだそうだ。

『あいつに！　ヴェンデリンに領地を乗っ取られるぞ！』

普通、一から畑や田んぼを開墾すると時間がかかるのだ。

まず、開墾自体に時間がかかる。

次に、そこに作物を植えても土がそれに適した物になるまで、数年から下手をすれば十年単位で時間がかかる。

それが、初年度からある程度の収入を得られるなど。
ヴェンデリンは、真面目に開墾している俺達をバカにしているとしか思えなかった。

この三ヶ月で、我が領と接した未開地には広大な水田と用水路網が広がり。
水が湛えられた水田では、先日に植えられた稲が順調に育っている。

ヴェンデリンが使用人だと言って集めた移民希望者達は、同じく雇われた老農夫達から稲の世話の仕方を習ったり、あぜ道や用水路の補強工事などに余念がなかった。

『じきに、あの開発特区はうちの領地になるのだがな』

『そんな約束！　あのヴェンデリンが守ると思っているのか！』

ヴェンデリンは、開墾地に『開発特区』という名称をつけていた。
現在では、戸数は約百戸、人口は三百五十人を超えているはずだ。

『本村落よりも、大きくなってしまったんだぞ！』

『それも、時代の流れであろう。本村落と言うが、領地の規模が発展していけば領の中心など変わる物だ』

親父は、ただ領内の耕作地と人口が増えれば満足なようだ。
しかし、そんなただ膨らんだだけの領地など。
領主のコントロールから外れた、ただの人が集まっている場所でしかない。

領の安全のためには、俺達が適切に支配しなければいけないのだ。
そのために、嫌がられてまで税を集めているのだから。

『しかも、あの連中は税を払っていない！』

『払っているではないか。お前は、あの契約の中身をちゃんと見たのか？』

契約の時には人を除け者にしておいて、随分な言いようである。
ヴェンデリンとの契約によると、奴の冒険者としての稼ぎと、未開地開発の収支は連動しているのだそうだ。

つまり、魔の森での狩猟・採集で得た利益と、未開地開発で使った経費を合計して。
全体の収支から、利益の二割を税として納める。

わざと複雑な契約にして、俺に詳細を解らせないようにしているのだ。
間違いなく、奴は税を誤魔化してやがる。

なのに、親父もクラウスも何も言いやがらない。
ただ、腹が立つだけであった。

『親父、絶対に誤魔化しているぞ！』

『それはない。クラウスが、ちゃんと確認している』

確かにクラウスは、卑しい金の計算などでは有能な男だ。
だが、現状で奴など信用できるはずもない。

あの男からすれば、このバウマイスター領主がヴェンデリンでも一向に構わないのだから。
いや、むしろその方が望ましいと思っているのであろう。

『信用できるものか！』

『なら、自分で確認しろ』

『……』

出来るはずがない。
そんな教育は受けていないし、そんな物は青い血には必要ないと言ったのはあんただろうが。

『他の村落の名主達に任せるか？』

それも出来るわけがない。
あの連中は、領の発展のために遺品から鉄を徴収するという俺の苦渋の決断を。
ヴェンデリンにチクって、邪魔をしやがったのだから。

『あの連中は、裏切り者だろうが！』

例の親父との契約の中には、ヴェンデリンが領内で雑用を引き受けるという物もあった。
嫌な予感はしたのだが、それは現実の物となっている。

『エリーゼ様、最近は体の調子も良いんですよ』

『それは良かったですね』

我が領の司祭が腰を痛めて動けなくなった時に、ヴェンデリンは自分の婚約者を代理として派遣していた。

中央の生臭坊主の孫娘で、いかにも聖女面した女だ。

年の割に胸がデカく、それでヴェンデリンを誑し込んだ淫売で。

得意の治癒魔法で領民達を治して、懸命に媚を売っている最中であった。

邪魔なので排除しようかと思ったのだが、治癒魔法のせいで領民達の反発も大きいであろうからここは自重するしかない。

全く、忌々しい話ではある。

『では、我らは開発特区の方に居を移すので』

『向こうは稲作が出来るのか。その内、こちらでも出来ると良いんだが……』

教会乗っ取りの次は、領内の再開発に手を出して来た件もあった。

さすがに本村落には手を出していないようであったが、他の村落ではこれに積極的に手を貸している。

巨石や森林、丘陵地帯で分断・変形している畑を区画整理し、用水路の支路を新たに整備して。

領民達の家を、自分の畑に近い場所に移築する。

これまで約百年間、我が領は畑の開墾に力を注いできた。

ところが労力の関係により、障害物や地形の困難さが原因で耕作地が歪になってしまったり、近場は無理なので遠隔地に新規の畑を

与えられてしまった領民達など。

色々と問題が多かったのだ。

一日で、自分の家の前の畑を手入れした後、歩いて一時間ほどの場所にある新しい畑で世話をする。

そんな不便さを解決したのが、あのヴェンデリンであった。

ちゃんと、自分の農地が自分の家の周囲に。

しかも、農耕用の牛馬や農機具が入れ易いように、畑は真四角になるように魔法で区画整理をしやがったのだ。

『あのバカが！』

せっかく麦が育っている最中に、そこの区画整理など。

収穫を無しにする気かと現場に乗り込むと、そこでは奇妙な光景が展開されていた。

『この畑の麦は、こちらに土ごと移しますよ』

『すいませんねぇ。ヴェンデリン様』

『仕事なので』

奴は、育成中の麦に全く影響が無いように。

周囲を少しずつ魔法で畑にしていくか、他の畑に土ごと麦を宙に浮かせて移動させていたのだ。

『ありゃま。これは、神の仕業かねぇ』

『隣の新しい畑に移動させた麦の苗は、大丈夫ですよね？』

『土ごとの移動なので、問題ねえです。冬植えの麦では、広がった畑と新しい畑にも麦が植えられて万々歳ですわ』

『土壌もある程度は改良してありますけど、二～三年は念入りに面倒を見ないと』

『経験があるから大丈夫でさぁ。一から開墾したら数年はかかるところを、魔法って便利ですなぁ』

ヴェンデリンは、この仕事を村落の名主達から受けたのだと言って、二つの村落の新規開墾と区画整理を一週間ほどで終えていた。

その結果、彼ら二つの村落の住民達が持つ畑の広さは、本村落の住民の平均を超えてしまう事になる。

他にも、開墾を邪魔していた巨石や巨木が消え、平らにするのに何年かかるかわからない丘が一瞬で平らな畑になり、移動に便利なように農道が整備され、水やりが楽なように用水路も延長される。

『親父！』

『領民達の畑が増え、農作業も楽になり、税収も上がる。何か文句でもあるのか？』

親父に文句を言いに行ったのだが、相変わらず何も手を下さない。

奴がこの領の分断を謀っているのに、なぜ親父は気が付かないのだ。

『ヴェンデリンは、本村落と残り二つの村落の分断を！』

『クルト……、お前……』

『いえ……』

続けて、思わず禁句を口にしてしまうところであった。

この領では、本村落と他の二つの村落との対立が存在する。

だが、代々の領主からの申し送り事項で、それを表立って口にしてはいけないのだ。

『とにかく！　ヴェンデリンは危険だ！』

二つの村落の再開発のみならず、奴は例の開発特区に、以前に領地を出た元領民達で希望した者達をUターンさせていた。

他にも、領民達の子供で三男や四男なども引っ越して稲作を始めていたのだから。

『二つの村落の人口が減ったんだぞ！　人頭税の税収が減る！』

微々たる物であったが、それでも減収になるはず。

しかも、引っ越し先の開発特区は、かかった経費を利益から引いて計算できるので。

ヴェンデリンの脱税を手助けしていたのだから。

『親父は甘い！　ヴェンデリンなどあれだけ稼いでいるのだから、搾りに搾り取ればいいんだ！』

この機会を逃す事は無い。

ここで金を貯め、それで独自に未開地の開発を行うのだ。
もう既に余所者のヴェンデリンになど、これ以上の開発を許してはいけないのだ。

『なぜ、ヴェンデリンから搾取などする必要がある？』

『ある所から搾って、何が悪い？』

『今、ヴェンデリンが開発している特区だが、うちでやると経費がいくらかかるか計算した事があるのか？』

『ヴェンデリンの魔法で無料だろうが！』

『クルト、お前はバカか？』

『バカとは何だ！』

人をコケにしやがって、俺は親父を睨みつける。

『確かに、開墾の費用はヴェンデリンの食事代くらいであろうよ。だが、他にも経費がかかっているのだぞ』

親父は、小難しい説明を始めやがった。

『中古とはいえ、王都から大量の家を持って来て移築専門の魔法使いに仕事をさせている。あの方は、法衣男爵でもある高名な移築魔法の名人だそうだ』

当然、その依頼費用はヴェンデリンが出しているのだと。
他にも、ブライヒレーダー辺境伯領からスカウトした老農夫達の

給金に、稲作を始めるために必要な農機具などの購入費に。
移民希望者にも、初年度は給金が出ているとの話であった。

『わかったか？　クルト。今は少しの減収になっても、あの特区は何年かすればうちの物になるし、住民達もうちの領民になるのだ。そもそも、減収などしておらんぞ。お前は、ちゃんと報告書を見ているのか？』

また人をバカにしやがって。
税収に関する報告書くらい、俺だって目通している。

開発特区の費用を差し引いても、我が領初の商店の売り上げ益と、魔の森探索で得た成果をブライヒブルクで販売した利益もあって。
ここ三ヶ月ほどで、六十万セントほどを納めている事実もだ。
だが、それだけでは足りないのだ。

というか、ヴェンデリンはあれほどの金持ちなのだ。
ここで親父は領主の権限により、奴が持っている総資産の半分ほどを税金として徴収すれば良い。

それだけあれば、俺達にだって未開地の開発が可能なのだから。

『とにかくだ！　もっと、ヴェンデリンから搾り取れば良い。このバウマイスター領におけるトップは親父で、この領の中では陛下とて口出しなど出来ぬのだから！』

『お前は、少しは頭を冷やせ』

人が懸命にバウマイスター領の将来について心配しているのに、肝心の親父はこの有様であった。

いや、親父からすればこの領が存続すれば良いわけであって、次期領主が俺でもヴェンデリンでも構わないのだろう。

『俺は、俺の道を行く！』

『好きにするが良い』

もう親父は当てにならない。

逆に、俺の潜在的な敵でもある。

ならば、もう親父の意見などに耳を貸す必要はない。

『クルト、どこに行くのだ？』

『今日は、会合の日だ』

バウマイスター領では、たまに領民達から意見を聞く会合のような物が行われている。

これには、三つの村落から数名ずつの代表が出るのだが。

それとは別に、本村落の有力者だけが出席可能な会合も存在していた。

建て前では、三つの村落は平等という事になっている。

だが本音では、親父も祖父もその先代も。

別の会合を開いて、支持基盤である彼らの意見を余計に聞く事を決して止めなかった。

何しろ彼らは、バウマイスター家の支配を強く容認する存在なのだから。

『本村落の住民には、ヴェンデリンが気に入らない連中も多い。彼らの賛成を得られれば、奴にもっと税を支払わせる事も可能なはず』

そう思いながら、俺は急ぎ会合が行われる予定のエックハルトの家へと向かうのであった。

「人数が少ないな」

「みんな、仕事が忙しいと……」

何を言っても無駄な親父を放置して、俺はエックハルトの家で行われる予定の集会に顔を出す。

この集会は、他の村落の連中には秘密という事になってる。

なぜなら、平等が建て前なはずの三つの村落の扱いで。

俺達バウマイスター家の人間が、本村落の連中にだけ事前に意見を言う機会を与えているのが公になれば。

それは、他二つの村落の反発を呼んでしまうからだ。

ただ、この会合の存在など、とっくに外部には知られているのだが。

「だからと言って、少な過ぎるではないか」

本来、この会合に出席できる本村落の人間は二十人ほど。

広い農地を持つ豪農に、今まではバウマイスター領内で市場と利益を独占してきた職人達に。

遺憾ではあるが、あの裏切り者であるヘルマンが当主の従士長家

と、数名の従士も出席が認められている。

ところが、今日の会合に来た領民達は合計で八名。

半分以下になってしまっていた。

「皮革職人のディルクは？　服飾職人のインゴは？　木工職人のルーカスは？」

「それが……」

参加者を見ると、今まで俺の次期当主就任を強く支持していた職人組で出席しているのは、鍛冶屋のエックハルトだけになっていた。

理由を聞くと、エックハルトが渋々とその理由を説明し始める。

「暫くは休業するそうです……」

「はあ？　休業？」

「はい……」

エックハルトの説明によると、彼らはヴェンデリンが開店させた商店に客を奪われて開店休業状態であったところを。

奴の誘いに乗って、職人を辞める事を決意したらしい。

確かに俺の目から見ても、この領内の職人達の腕はお世辞にも良いとは言えない。

だが、素人が作るよりはマシだし、別に使えないわけでもない。

第一、彼らは俺の有力な支持者でもあった。

利権のために打算的な関係ではあったが、逆に利権さえ与えていれば支持してくれるので楽な存在。
この考えは、俺ばかりでなく親父や祖父の代から全く同じであったのだ。

それが、この大切な会合を欠席して。
今度は休業するというのだから、ただ驚くしかなかった。

「そんなバカな話があるか！」

「私もそうですが、彼らはここ三ヶ月。ほぼ開店休業状態でして……」

ヴェンデリンが、ブライヒブルクや王都から仕入れた品を売るようになり、すっかり客足が途絶えてしまったらしい。

質が良くて値段も少し安いのだから当然とも言えるが、さすがにこれを看過するわけにはいかなかった。
うちの産業を空洞化させたヴェンデリンの罪は、大変に重いのだから。

「挙句に、税収のダウン！　ヴェンデリンこそ、このバウマイスター領を衰退に追い込む不貞の輩である！」

「それが、お館様……」

産業の空洞化についてだが、これにヴェンデリンは手を差し伸べたというのだ。

「どういう事だ？」

「はい。実は……」

客と売り上げがほぼゼロになって困っているところに、ヴェンデリンは『ご子息を、外に修行に出したら如何です？』と提案して来たらしい。

「このまま競争しても勝ち目が無い以上。外部の産品に対抗できる物を作れる職人が、領内で新規に工房を立ち上げるべきであろうという話です」

ヴェンデリンはそのコネを使い、職人達の子弟を王都やブライヒブルクの工房に見習いとして送り込んだのだそうだ。

そして、将来修行先から独立を認められた子弟達が、親達が維持していた工房で新規に仕事を始める。

そういう計画を持ち込んだらしい。

「今、現役の職人達はどうするんだ？」

「稲作をして生活するそうです」

年齢的に考えて、彼ら自身が今から修行をしても無意味とは言わないが難しい側面がある。

だが、まだ若い子弟なら修行の成果も出易いはず。

そこで彼らは、休業した工房の設備を維持しながら、開墾地で稲作をして生活の糧を得るそうだ。

「エックハルト。お前は……」

「私は……」

職人達をただ追い込むのではなく、逃げ道を用意してそこに誘導する。

王都で中央の腐れ貴族達に毒されたヴェンデリンらしい、反吐が出る策略であった。

唯一、鍛冶屋のエックハルトだけは参加していないようだが、前に奴はヴェンデリンと直に顔を合わせて揉めている。

なので、自分は許されないと思っているのであろう。

そういう経緯があるので、こちらとしても裏切る心配が無くて使い易い男なのだが。

「それで、豪農達の参加が少ないのもそれが理由なのか？」

「はい……」

と言うよりも、欠席をしている豪農の連中は、既に豪農と呼べるような存在でなくなっている。

本村落以外で農地の拡大と再配分が進み、むしろ規模が小さい農家に転落してしまったのだから。

「（連中の意図はわかっているさ……）」

ヴェンデリンに鞍替えをし、彼に本村落の開墾やら区画整理をして欲しいのであろう。

あと子沢山の農家などでは、土地を相続できない子供達の存在も

問題になっていた。

遠征で成人男性の戦死者が大量に出たので、それを補うために生めよ増やせよと親父が奨励したのは良かったのだが。

子供が多過ぎて、もう十年もすると農地が足りなくなってしまうからだ。

遠征後、ヴェンデリンが三歳になったくらいの頃から、親父は自ら陣頭に立って農地を開墾した。

働き手が減っている状態での開墾で評判は最悪であったが、それでも農地の拡大には成功している。

麦の収穫量も増えて、商隊から得られる金や物資も増えていた。

ところが、そこでまた一つ問題が発生する。

未開地を除く領内で、もう開墾できる土地が無くなってしまったのだ。

残っていても、ヴェンデリンが魔法で何とかしたくらいの。

障害物だらけの土地や、平坦にするのが困難な土地ばかり。

挙句に、無理矢理開墾しているせいで、畑は歪で農作業が面倒になっていて。

配分の不手際で、新しい畑の農作業に行くのに徒歩一時間かかる領民もいるなどという、笑えない現実も発生している。

各村落周辺の土地は、もうこれ以上開墾は出来ない。

未開地の開墾し易い平原は狼や猪や熊が出没するので、護衛を付けないと、開墾はともかく畑の維持が困難なはず。

だからこそ手を出さないでいたのに、ヴェンデリンは三ヶ月ほどでこれらの事案を解決してしまった。

魔法で、全てを解決してしまったのだ。

「さて、このバウマイスター領に危機が訪れているのだが……」

来ている参加者達も、内心ではもうヴェンデリンに鞍替えをしようかと迷っているのは明白で、俺の話を興味無さ気に聞いていた。

こいつらからすれば、むしろヴェンデリンにバウマイスター領が乗っ取られた方が都合が良いのだから。

「（ヘルマンも来ないか……）」

以前は、会合には必ず顔を出していたヘルマンも欠席している。

来られても、今ではヴェンデリンの手先として動いているので、参加を認めるわけにはいかなかったのだが。

それに以前から、ヘルマンは三つの村落の扱いに差を付ける事に反対していた。

このバウマイスター領の現実が見えない青臭い意見でしかなかったが、本村落の若い世代にも賛同者がいてえらく難儀したのを記憶している。

「あのう……、クルト様」

「何だ？」

「今回は、我々からは特には……」

今までは散々に本村落への優遇を求めてきた癖に、今となってはそれがヴェンデリンにでもバレると困るのであろう。

ヴェンデリンは、今までの我々の方針とは逆に本村落以外を優先している。

というか、明らかに俺の支持基盤への揺さぶりを狙っての事であろう。

そして俺が引き摺り降ろされた後には、本村落も平等に扱うはず。

そうすれば、本村落の連中は同じ扱いでもヴェンデリンに恩を感じるという寸法だ。

「（あのクソガキめ！）」

それから十分ほどで、本村落の有志を集めた会合は終了する。

安定した統治のためにある程度優遇して意見を聞いてやっているのに、ヴェンデリンの魔法を見た途端にもう裏切りの準備を始めている。

やはり、元は卑しいスラムの住民であったという事なのであろう。

ムシャクシャするので、頭を冷やしに本屋敷裏の森へと歩いていく。

思えば、ここからヴェンデリンの出しゃばりは始まっていて。

まだ七歳くらいの頃から森に入り、そこで子供とは思えない成果を挙げていた。

毎日、ホロホロ鳥やら猪などを狩り、山ブドウ、自然薯、山菜、薪などを持ち帰って来る。

親父やお袋は大喜びであったが、俺からすればやはり出しゃばりとしか感じられなかった。

「あのクソガキが！　あの時に、死んでいれば良かったのに！」

あの時とは、数ヶ月前に古代遺跡を探索して、一週間ほど連絡不能になった時の事である。

その時、中央からルックナーとか言う貴族の使いが来て。

如何にも思わせぶりな報告をするので、無駄にぬか喜びしてしまったのを思い出す。

今でも、たまに思い出すと怒りが沸いてくるのだ。

「ふんっ！　あんな中央の貴族など当てにはならん！」

「そうでもないですよ」

「誰だ！」

突然、後ろから声が聞こえたので振り返ると、そこには以前ルックナー男爵の命とやらで手紙を持参した男が立っていた。

何でも、ルックナー男爵から良く依頼を受ける冒険者との話であったが、顔色が悪くて陰気さを感じる不気味な男であったのだ。

「お久しぶりです」

「前は、偽情報をすまなかったな」

どんな反応をするのかと思い、まずは嫌味を返してみる事にする。

「申し訳ございません。ですが、私は依頼者の命令で手紙を届けただけですので」

「本当だかどうだか、怪しい物だがな」

どこまでルックナー男爵と親しいのかは不明であったが、わざわざこんな僻地まで来たのだから、相当に信頼されているはず。

もしかすると、冒険者だと嘘をついて子飼いの家臣という可能性もあった。

「私はフリーの冒険者ですよ。多少力量に自信があるのと、口が堅いのでこういう仕事で稼いでいる身なのですが」

王都から、こんな山脈超えの僻地まで一人で来るのだから、腕っ節と体力に相当自信があるという事なのであろう。

「それで、用事とは？」

「そうですね。お互いに時間は貴重ですからね」

そう言うと、この陰気臭い冒険者は古ぼけた小さな木の箱を俺に差し出す。

「これは？」

「はい、バウマイスター男爵暗殺で役に立つ道具です」

「……」

「時間が惜しいと言ったと思いますが。簡単に言うと、ルックナー

男爵はあなたにこれを売って恩を売り。あなたは、コレでバウマイスター男爵を暗殺して今ある危機を突破するわけです」

俺に今ある危機など、今さら言うまでもない。

ヴェンデリンに領内を侵食され、今では俺を支持する領民達は極小数になっている。

みんな、ヴェンデリンの魔法と財力で切り崩されてしまったのだ。

挙句に、親父までもがヴェンデリンの肩を持っている。

親父に言わせれば領内発展のためなのであろうが、俺にはわかっている。

もう俺に、次期当主を任せないつもりなのであろう。

理由は簡単で、親父はバウマイスター家当主として領内の繁栄に責任のある立場であり。

そのためには、長男である俺を切り捨てる覚悟もあると。

まさしく『断腸の思い』なのであろうが、それでもただ切り捨てられる俺よりはダメージが少ないはず。

トカゲだって尻尾を切り落せば痛いが、そんな痛みはすぐに忘れてしまう。

だが、切り落された尻尾の方は堪らないわけで。

だからこそ、俺は起死回生の策を得てヴェンデリンを排除しないといけないのだ。

「お疑いですか？」

「ああ、お前らは胡散臭い」

「でしょうけど、ここはお互いに追い込まれている仲間同士として協力しませんと」

「お互いに追い込まれている？」

「はい。ルックナー男爵も大ピンチなのです」

陰気臭い冒険者は、俺にルックナー男爵の危機とやらを説明する。

「未開地の開発が、バウマイスター男爵主導で行われると拙いのです」

もう既に王都では、早く俺を排除して未開地の開発に入りたいと貴族達の間で噂になっているそうだ。

「俺の立場は？」

「怒らないで聞いてくださいね。今まで中央との接触が無かった田舎領の跡取りなど、新規開発の利権に比べれば埃以下の扱いなのですよ」

「言ってくれるな……」

広大な未開地に、ヴェンデリンが持つ莫大な額の資産。

これが合わされば未開地は一気に開発が進むし、何よりヴェンデリンには子飼いの家臣が少ない。

そこに、余っている親族や家臣の子供達などを陪臣として送り込み。

開発工事なども最初は外部に発注するので、各貴族達も懇意にしている商会や業者などに受注させたいし。
開発に必要な資材などの売買に、工事で出稼ぎに来る人間の選定に。
貿易の利権も、莫大な物になるはずであった。
「貴族のみなさんは、とにかく必死なわけです」
そんな貴族連中からすると、俺はもう完全に死んだ人間扱いのようだ。
むしろ、生きていると邪魔なのであろう。
「依頼主も、利権確保に忙しいだろうな」
「それは無理ですから」
ルックナー男爵がいくら足掻いても、彼とその派閥は未開地開発の利権に加われないそうだ。
この未開地開発で主導的立場にあるのは、ブライヒレーダー辺境伯と、ルックナー男爵の兄にあたるルックナー財務卿で。
兄と仲が悪いルックナー男爵には、一セントとして金は入って来ない仕組みになっていると陰気臭い冒険者は説明していた。
「元々は、兄であるルックナー財務卿と対立していた関係で、バウマイスター男爵とも疎遠だったのですが……」
ヴェンデリンが、遺跡探索で一週間ほど連絡が途絶えた際に死亡したという噂を流し。
それが原因で、ヴェンデリン本人からもその寄り親であるブライ

ヒレーダー辺境伯からも嫌われてしまったそうだ。

「こう言っては何だが、自業自得であろうよ」

ルックナー男爵は、中央で会計監査長をしているそうだ。

さぞかし、自分の頭脳に自信があるのであろう。

結果は、俺と同じくヴェンデリンの魔法と財力に押し流されそうになっているようだが。

「俺を引き摺り降ろした後の未開地開発の利権であぶれて、派閥の維持も不可能になるとはな。ご愁傷様だな」

俺自身、明日にはどうなるのかも不明であったが、ルックナー男爵も人に思わせぶりな手紙を送って翻弄した罰というやつであろう。

この絶望的な状況下でも、少しだけ溜飲が下がる思いであった。

「お気持ちはわかりますが、ここでお互いに相手が下に落ちるのをバカにしても未来に変化はありませんよ」

「そんな事は、わかっているがな」

お前などに言われなくても、それはわかっている。

このままだと、間違いなく俺は廃嫡の後に教会送りであろう。

前にヴェンデリンと決闘をした公爵のように、死ぬまで軟禁されて有りもしない信仰の日々を送る事となるはず。

そんな生活は、死んでも御免であったが。

「つまりだ。起死回生の一手で、俺がその箱の中の物を使ってヴェ

ンデリンを暗殺。その財産と未開地開発の権利を継ぐ。というわけだな？」

「はい、その通りです」

「しかし、こんな小さな箱の中身で大丈夫か？」

「これは、古代遺跡から出土した魔道具ですので」

成りは小さいが、その効果は絶大なのだそうだ。

俺はこの手の物に詳しくないので知らないのだが、このまま座して滅ぶよりかは、これに賭けた方が良いのかもしれない。

「やってみるさ」

このままだと、来月の本村落の会合に誰も来なかったなどという笑えない未来すらあり得る。

ならば、その元凶であるヴェンデリンを殺す魔道具とやらに賭けてみても良いであろう。

「それで、これは幾らなのだ？」

季節の贈り物でもあるまいし、この手の物を貴族が貴族に無料で送るなどあり得ない。

むしろ、無料などと言われると逆に怪しくなってしまうのだ。

「料金は、将来の利権で優遇していただければとの依頼主からのお話です」

「なるほど。一時的な金よりも、永続する利権が欲しいのか」

それに、その方が派閥に参加している貴族達に分配しやすいという理由もあるようだ。

「承知した。それで、この魔道具の使い方は？」

それから暫く、俺は陰気臭い冒険者からこの古い箱に入った魔道具の使い方について説明を受ける。

確かに、これならヴェンデリンを暗殺可能かもしれない。

「見た目は、ただのオカリナにしか見えないけどな」

「ですが、強力な魔道具です。これが呼び寄せる物によって、バウマイスター男爵の命日も近いでしょう」

俺の頭の中で、哀れに殺されるヴェンデリンの姿が浮かぶ。

奴が死ねば、その財産を使って未開地の開発が主導でき。

中央のプライドと企みだけは一人前の貴族達が、俺に利権を請うために頭を下げにくる。

まるで、乞食のようにだ。

実に、楽しみな未来とも言える。

「物が物なので、あまり人気の無い場所で使ってください」

「三日後に、ヴェンデリンが未開地のかなり奥まで視察に行く。その時に使うさ」

「わかりました。依頼主には、そのように伝えます」

最後にそう言い残すと、陰気臭い冒険者は森の奥へと消えて行く。
そして残された俺は、懸命に込み上げてくる笑いを押し殺しながら、手の中にある古ぼけたオカリナを見つめ続けるのであった。

オマケ一話　マヨネーズとアームストロング伯爵家。

これは、まだヴェルを含めた俺達が、王都で留学という名の囲い込みをされていた頃の事。

今日も俺は、王城内の訓練所でワーレン様から剣の指導を受けていて。

終了後に、同じく槍の指導を受けていたイーナと共に屋敷に戻ると。

そこでは、ヴェルがまた奇妙な調味料の作成をしていた。

「マヨネーズは至高！　だが、ここは派生した仲間達を忘れてはならない！」

どうやら、本日の導師との特訓が終了したようで。

屋敷の台所で、例の『マヨネーズ』なる調味料の作成に勤しんでいたのだ。

作業台の上では大き目のボールが宙に浮いていて、その中では泡だて器が高速で素早く材料をかき混ぜていた。

このマヨネーズという調味料の美味しさは衝撃的であったが、作るのには意外と手間がかかる。

前に、『エル、腕の鍛錬になるぞ』とヴェルから言われて大量に作成し、翌日に腕が筋肉痛になったのを思い出していた。

『さすがに、根性あるな』

『なあ、ヴェルが魔法で攪拌すれば良くないか？』

『実は、今日の導師との特訓が厳しくて、魔力が不足していたんだ』

なら翌日でも良いような気もしたし、何より『こんなに作らせるなよ！』とも思ったのだが。

卵黄、酢、塩、胡椒を良く混ぜた物が入ったボールに、少しずつ油を入れて根気良く攪拌していく。

ボールと共に、油の入った容器も宙に浮き。

傾けられた容器の注ぎ口からは、糸のように細い油が少しずつボールに投入され、高速で回転する泡だて器で攪拌されていく。

手に触らずに対象物を宙に浮かせたり自在に動かす『念動』の魔法は、ヴェルに言わせると基本的な魔法に入るらしい。

そういえば以前に商業街の広場で、初級クラスの魔法使いが手品だと言って、『念動』魔法がネタの手品で町行く人達からお金を集めようとしていたのを思い出す。

ネタが簡単にわかる手品であったが、魔法使い自体が少ないので思ったよりもお金が集まっていた。

ヴェルは、『普通に手品をやれよ！』と銅貨一枚渡していなかったが。

「マヨネーズは、油断すると失敗する。とにかく、根気良く攪拌するんだ」

「はあ……」

マヨネーズとは、ヴェルに言わせると『苦役の後の極楽』なのだそうだ。

確かに、それは俺も実感している。

その成果の大半が、マヨネーズ作りになると逃げるルイーゼに食べられてしまってもだ。

『ルイーゼ、手伝えよ』

『マヨネーズは、男の仕事だと思う』

『んなわけあるか！　なら、もっと食うのを遠慮しろ！』

『ボクは、ほら。もっと食べないと成長できないから』

ルイーゼの体は、同年代女性の平均よりも圧倒的に小さい。

もう少しで十四歳になるのに、未だに初見の人から十歳以上に見られた事がないのだ。

なので、なるべく沢山食べて早く成長するというスタンスを取っているのだが。

少なくとも、今のところは成果は見受けられなかった。

『（マヨネーズって、成長の役に立つのか？　というか、ルイーゼって成長するのか？）一日でも早く、ヴェルがレシピを売った商会が製品を販売する事を祈るよ』

現在、攪拌などの作業を魔道具で行える工房を急ピッチで建設中らしい。

そしてその工房が稼動すれば、ヴェルには毎月決まった量のマヨ

ネーズがその商会から上納される事になっていた。

『ボクの他にも、マヨネーズ消費量が多い人もいるしね』

『ああ、あの人は半分中毒だと思う』

それともう一人、異常なまでのマヨネーズ好きが誕生していた。

『焼いた肉にも、洗っただけの野菜にでも。御飯やパンにも良く合うのである！　バウマイスター男爵！　某に、もっとマヨネーズを！』

修行中のお昼に、ヴェルとルイーゼが鹿の焼き肉に付けていたのを貰って以来、導師は何にでもマヨネーズをかけて食べるようになってしまった。

ヴェルは『マヨラーだ！』と言っていたが、そのあだ名は何となくわかるような気がする。

ただ、導師は絶望的なまでに不器用であり、自作をすると大半の材料を無駄にしてしまうので、定期的に屋敷に貰いに来るようになっていた。

そんなわけで、ヴェルは導師のためにまたマヨネーズ作りをしているようで。

ただ、今日は何か新しいマヨネーズに挑戦するのだそうだ。

「派生型？　どういう事なの？　ヴェル」

「マヨネーズにもう一工夫で、更なる極楽を目指すのさ」

イーナの質問に答えるヴェルであったが、彼女の方は首を傾げていた。

「さて、仲間達の完成だ！」

以前にヴェルが手に入れたワサビを混ぜたワサビマヨに、マスタード入り、シソ入り、ユズ入り。
そして一番のお勧めが、カレー粉入りのマヨネーズなのだそうだ。

「本当に、良く考えるよな」

「人は、食べねば生きていけないからな」

どうせ食事は必須なのだから、それを楽しまなければ損だ。
ヴェルは、珍しく哲学的な事を語っていた。

食べ物の話なので、本当は哲学的ではないのだが。

「それで、その新作は導師に味見させて実験とか？」

「勿論、もう試食しているし」

台所に居ないと思ったら、もう導師はエリーゼの給仕で試食を始めているそうだ。
あと、実験の部分は否定しないらしい。
別に薬とかではないので、最悪不味いくらいで死ぬ心配もないのだけど。

導師の場合、少々の猛毒くらいでは死ななそうなイメージがあるにしてもだ。

リビングにあるテーブルの上には皿に載った大量のカラアゲが置かれ、導師はそれにマヨネーズを浸しながら次々と口に放り込んでいた。

「ウゲっ！」

「良く胸焼けしないわね……」

ヴェルが考案したカラアゲは俺もイーナも好きだったが、一人で一度に何キロも食べるのはどうかと思う。

「マスタード入りは、ピリっとした辛さが……。ワサビ入りも、マスタードとは違う落ち着いた辛さで……。シソとユズ入りは、これもサッパリとしていて良いアイデアである。そして何より……」

導師が一番気に入ったのは、カレー粉入りのマヨネーズであったようだ。

残り数キロ分のカラアゲに大量に塗し、かき込むように食べ続けていた。

「富貴病にならないのかな？」

富貴病とは貴族や金持ちが中年以降に良くかかる病気で、症状が進むと手足が壊疽したり、失明したりする怖い病気であった。

ただ、一般人にはあまり縁の無い病気ではあったのだが。

「この前のカレーライスと言い、カレー粉とは素晴らしい物であるな！　これを、もっと融通して欲しいのである！　他のマヨネーズ各種も忘れずに！」

導師は、かなり強い口調と勢いでヴェルにお願いをしていた。

「ええと、カレー粉はそんなに無いんですよ」

この『カレー粉』も、ヴェルが休日に台所に篭って自作した黄色い奇妙な粉であった。

その独特の香りと、辛さに。

俺達は、また衝撃を受けたものだ。

更に、これを元にカレーライスなるシチューの親戚のような料理も作っていたのだが、このカレー粉には大きな弱点があった。

『香辛料が高い！』

南方でしか栽培できない物が多く、薬として流通している物も多かったので、王都だとどうしても仕入れが高くなってしまうのだそうだ。

『勿論、高くても使い道はあるからな。男爵様、レシピを売ってくれ！』

ヴェルのアイデアで儲けているアルテリオさんは、『カレー粉』を高級品として販売するようになっていた。

あとは、カレー粉を使ったフルコースメニューを出す高級レストランの経営だ。

一人前百セントで、最初にカレー粉を使った肉料理などを出し、最後にカレーライスを出す。

さすがに、サラダやデザートにはカレー粉は使っていなかったが、

店は毎日賑わっているらしい。

『カレー粉には、常習性がある！』

『それって、ヤバい薬なのでは？』

『そういう違法性は無いけど、カレー粉の匂いを嗅ぐとまた行きたくなるだろう？』

確かに、そのお店には常連客が多いそうだ。

高価にも関わらず、お持ち帰り用のカレー粉も飛ぶように売れているらしい。

当然、ヴェルの懐にも大金がもたらされていた。

正直、そんなに何に使うのかと疑問になってしまうのだが。

「ああ、高価な杖でも買うのかな？」

俺は暇があれば、武器屋を巡って良い剣を探している。

剣士にとって、良い剣とは己の命を預ける半ば分身のような物だからだ。

良い剣を得るには、時間と手間と金がかかる。

とはいえ、己の分身となる長ければ一生使う物なので、そこで手を抜くわけにはいかないのだ。

「あれ？　でも、ヴェルって……」

今、ふと思ったのだが。

台所でマヨネーズを魔法で作っている時にも、導師と修行をしている時にも。

杖を使っているのを見た事がなかった。

魔法使いと言えば、ローブ姿で杖を持っているイメージが強い。
導師は紫色のローブに身を包み、その見た目に相応しいゴツイ杖を装備している。

ローブの紫色は、昔からヘルムート王国では高貴な色とされていて。
王宮に仕える魔導師の中でも、筆頭である導師にしか着用が認められていない。
他の魔導師は、見習いや下位者は青のローブで、上級者は赤と決まっているのだそうだ。

あまり魔法使いなど沢山いないので、俺も良くは知らなかったのだが。

「ヴェルが魔法を使う時に、杖を使っているのを見た事が無いような……」

ところがヴェルは、師匠から遺産として何本かの杖を貰った癖に、普段使っている形跡が全く無かったのだ。

「俺が何？」

「今、ふと思った。ヴェルは、なぜに杖を使わない？」

「ああ、杖ねえ……」

ヴェルが言うには、自分の場合はあまり杖と魔法の威力に関係が無いらしい。

ただ、だからと言って杖が全く必要ではないというわけでもないそうだ。

「新しい魔法の練習では、必須アイテムだから。師匠が残した、火竜のヒゲにミスリルをコーティングした杖は、新しい魔法の習得が早まる効果がある。フェニックスの尾に水竜の硝子体をコーティングした杖は……」

「その杖は？」

フェニックス・水竜共に、半ば伝説扱いで材料の入手は困難を極める。

なので、それを材料にした杖を公式の席で持っていると、その魔法使いが超一流である事が一目瞭然でわかってしまうのだそうだ。

「偉い人と謁見する時に、見栄えが良い」

「魔法の練習用と、典礼用かよ」

「そうだけど、あまり力量の無い魔法使いが高価な杖を入手できるはずもないから」

「確かに、それは言えているな」

魔法使いと言えば杖だと思っていた俺に、ヴェルが衝撃の事実を語っていた。

ただ、確かに力量が無い魔法使いでは、そんなに高価な杖など入手できないのも事実であったが。

「いや、別に全ての魔法使いがそうではない故に！」

とそこに、カラアゲとマヨネーズのお代わりを求めて、導師が台所に入ってくる。
というか、まだ食べるつもりらしい。
その両手には、空になった大皿を持っていた。

「最低でも上級の魔力が無いと、杖を使わないと魔法の威力が落ちてしまうのである！」

威力や使用魔力の効率が、二割減から半分ほどに落ちてしまうそうだ。
どのくらい落ちるのかは個人差であったが、なぜか魔力の保有量が上級になると、杖無しでも落ちなくなるらしい。

「魔力量が中級の上と、上級の下。境目の判別が難しいようにも見えるが、実は簡単なのである！」

杖を使わないでも、魔法の威力が落ちない。
そこで、明確に線引きをされているのだと導師は語っていた。

「つまり、ブランタークさんは」

「上級の下なので、杖を使わなくても魔法の威力は落ちないのである！」

ただ、やはり新しい魔法の習得には杖は必須なようであった。
しかも、ブランタークさんはあの年齢で人生経験も豊富なので、偉い人に会う時などのために高価なローブや杖などを複数持っているそうだ。

魔法使いにとって、高価なローブと杖とは貴族の礼服に匹敵する物なのだ。
他にも、冠婚葬祭全てに着用可能で、ある意味汎用性は高かった。

「ちなみに、ボクは中級の上だね」

台所でエリーゼと一緒に、導師へのお代わり用のカラアゲを揚げていたルイーゼが、俺に左手の薬指に輝く指輪を見せていた。

「ルイーゼ嬢は魔力を使った格闘がメインなので、杖代わりにその指輪を使っているのである！」

杖で片手が塞がるのは、ルイーゼの戦闘スタイルから言うと効率が悪い。
そこで、ヴェルが婚約指輪の代わりにルイーゼにプレゼントしたそうだ。

「魔法使いの杖も、一種の魔道具なのである！　基本を抑えていれば、別に杖である必要は無いのである！」

別のアクセサリーでも、武器や防具や生活用品でも。
作り方の基本さえ押さえていれば、何でも杖代わりになるそうだ。

「へえ、知らなかった」

「魔法使いの世界は狭い故に、仕方が無いのである！」

人数が少ないし、魔法を使えない人が杖の事など詳しく調べるはずもない。
たまに姿を見る公式の席などでは普通に杖を持っているし、まさ

か上級者ほど見栄で高価な杖を持っているなどとは思わないのが普通。

多分、みんなそう思っているのであろう。

「ですが、導師様は杖を持っていますよね？」

同じく台所でカレー粉入りマヨネーズを作っていたイーナが、導師の持つ巨大な杖について質問をする。

長さは二メートルほどで、素材は冒険者時代に集めたオールミスリル製。

先端の形状はメイスのようになっていて、同じく先端にある直径五十センチほどの魔晶石を保護するように覆っている。

魔力など篭めなくてもそのまま人を殴り殺せそうな杖であったが、これに導師が魔力を篭めると形状が巨大なハンマーへと変化するのだ。

魔力の物質化であるが、この魔法を使える魔法使いは物凄く数が少なかった。

それと間違いなく、あんな巨大ハンマーで殴られたら人間はミンチになると思われる。

「某の戦闘スタイルを考えるに、この杖が一番効率が良いのである！」

あとは、付いている巨大な魔晶石が、導師の魔力が尽きた時の補給源になっているそうだ。

ヴェルも、余った魔力を予備の魔晶石に篭めて、魔法の袋に保存していた。

「導師の場合、杖で常に体を鍛錬しているという理由もあるけどね」

魔闘流を修めるルイーゼが言うには、導師が常にその巨大で重たい杖を持って移動する事により、自然と体の鍛錬を行っているのだそうだ。

「だから、定期的に持っている手を変えている」

「やはり、ルイーゼ嬢は気が付いたのである！」

「魔法使いでも、体が基本って奴ですか？」

「エル少年の言う通りではあるが、体の鍛錬についてはアームストロング家の伝統とも言えるのである！」

導師の実家であるアームストロング家は、千年以上の歴史を持つ王国屈指の軍系法衣伯爵家なのだそうだ。

世襲する役職は軍系統オンリーで、代々一族の男子は身長二メートルを超え。

特に鍛えなくても、筋肉隆々の肉体になるらしい。

加えてそれに油断せず、代々伝わる独自の鍛錬法によって導師のような外見になってしまう。

前に一度、城内で導師のお兄さんを見た事があった。

彼も街中を歩いていたら、チンピラやゴロツキなどはコソコソと逃げて行くはずだ。

「ですが、導師の剣は……」

武芸会では予選四回戦なので、軍家系の出にしてはお粗末なような気もするのだ。

「我が一族は、元々剣は苦手な故に」

その代わりに、その恵まれた体やパワーを駆使して敵を撲殺する戦闘スタイルを得意とするそうだ。

「撲殺ですか？」

「左様！　我が実家アームストロングには、代々オリハルコン製の『六角棒』が伝えられている由に！」

昔から、代々のアームストロング伯爵やその一族の男子は、鋼で作られた棒で敵の剣を折り、頭部などを狙って撲殺する戦い方で有名であったそうだ。

「今から三百年ほど前、まだアーカート神聖帝国との戦争があった時代の事である！」

両軍が激突し、暫くして形勢不利になったヘルムート王国軍は、当時の王様の命令で一時後退が命じられたらしい。

だが、その状態からの一時撤退は敵軍による追撃の危険性も孕んでいる。

そこで当時のアームストロング伯爵は、自ら志願して王国軍の殿を務めたのだそうだ。

「ご先祖様は自慢の鋼製の棒を振り回し、百人を超える敵兵を撲殺するも遂には……」

敵軍に囲まれ、遂に討ち取られてしまったそうだ。

「戦死ですか……」

「我がアームストロング伯爵家では、このような情況での戦死は名誉な物とされるのである！」

あと、アームストロング伯爵の犠牲もあって、王国軍は無事に撤退に成功。

その戦役では、後に逆襲にも成功して、有利な条件で講和が結べたのだそうだ。

「講和を結んだのですね。あれ？　でも……」

その割には、もう百年ほど戦争が続いていたような気がするのだが。

「あの当時は、戦っては講和を結び。またどちらかが出兵して、攻められた方も兵を整えて戦う。そんな状態であった故に」

なかなか、長期の停戦というのは実現しなかったそうだ。

そしてその講和の席で、当時のアーカート神聖帝国の皇帝が敵であるご先祖様の奮闘を称え、首を繋げた遺体を返還して来たのだそうだ。

「首を繋げてですか……」

「戦争ゆえに、手柄首を集めるのは常識であった。仕方のない事で

ある！」

当然、敵からも賞賛されたアームストロング伯爵に、王国側も多額の恩賞と新しい武器の下賜で答えたそうだ。

「いつの頃からか王家に伝わっていた『六角棒』が、跡を継いだアームストロング伯爵に下賜されたのである！」

その六角棒は、長さ二メートル、太さ八センチほどで、素材は全てオリハルコン製。

下賜された新アームストロング伯爵も、それを用いて戦場で大活躍した。

敵兵や指揮官である貴族の剣を六角棒の強烈な一撃で叩き折り、狼狽する相手をそのまま撲殺する。

アーカート神聖帝国の貴族達は、『撲殺魔』アームストロング伯爵を恐れたそうだ。

代が代わっても、身長二メートル超えの筋肉巨人が味方の兵や貴族を撲殺し続けたのだから当然とも言える。

そしてその六角棒は、代々アームストロング伯爵家当主の専用武器となったそうだ。

「あとは、この髪型もである」

導師の髪型は、何というか変わっている。

頭周部は綺麗にカミソリで剃りあげられ、頭頂部のみに硬そうな癖毛が三角形型に天に向かって伸びているのだ。

例えるなら、後に魔の森の探索で見つけたパイナップルという果

物のヘタの部分にソックリであった。

「三百年前に戦死したご先祖様が、この髪型だったのである！」

その髪型にした理由は、もし戦場で首を討たれても、敵が切り落とした首を持ち易いようにという配慮と。

そういう最後を迎える可能性が高いのが、アームストロング伯爵家当主なのだという覚悟から来ているらしい。

以後、アームストロング家の男子は全てこの髪型にするのが決まりになり。

導師も現当主の次男なので、子供の頃からその髪型なのだそうだ。

「何と言うか、凄いお話ですね」

「とはいえ、ここ二百年ほどは戦争もなく。家伝の六角棒も、全く敵兵の血を吸っておらぬ。父も兄も戦争の準備は怠ってはおらぬが、開店休業状態なのが実情なのである！」

導師は、それを良かったと思っているのか？

それとも、嘆かわしいと思っているのか？

ただ少なくとも俺は、戦場において血塗れの六角棒で敵を撲殺する筋肉大男など見たくもないと思ってしまったのだが。

第五十一話　竜使いの笛？

「よし、成功だな」

「また新しい調味料の試作か？」

このバウマイスター領に来てから、三ヶ月と少し。

今日も同じ時刻に起床した俺は、屋敷のリビングで朝食を取っていた。

俺が主人席に座り、両脇に護衛のまとめ役であるパウル兄さんと、所用で屋敷に来たヘルマン兄さんが。

あとは、エルやオットマーさん達も順番に席に座っている。

メイドのドミニクと、エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマの五人で調理や給仕などを担当していて。

前世の平成日本でこの光景が公になったら、間違いなくフェミニストと呼ばれる方々から苦情が出ていたであろう。

だが、この世界ではこれが常識なのだ。

屋敷の主人である男爵の俺と、現在法衣騎士爵であるパウル兄さんに、客であるヘルマン兄さんが上位の席に座り。

従士長であるエルと、パウル兄さんの従士長になる予定のオットマーさんや他の護衛達がそれに続く。

良いとか悪いの問題ではなく、これが常識なので疑問に思っているのは俺だけのはずであった。

身分による席順の差なのだが、思えば前世で会社の忘年会とかでも席順は偉い人が上座だったわけで。
貴族が偉いか、社会的な身分が高い人が偉いのかの差だけなのかもしれない。

ただ一つ、毎回お誕生席に座るのにもやっと慣れてきたような気がする。

「ヴェル、それは何だ？」

「新製品ですよ。パウル兄さん」

「お前、ここでも商品開発をしているのか？」

王都の警備隊にいるパウル兄さんは、俺が王都滞在時に調味料や料理の考案をしていた事実を知っている。
何回かアルテリオさんが経営する店の優待券をあげた事もあり、たまに部下を連れて食べに行っているそうだ。

「マヨネーズに新しい仲間が！」

「またかよ」

「じゃあ、エルはいらないという事で」

「新製品、美味しそうだなぁ」

エルからすれば、調味料や料理に集中する貴族という存在に不安を感じているのかもしれないが。
これればかりは、俺の趣味なので止める事はあり得なかった。

「それで、また売り出すとか？」

「とりあえず、試作だけですね。原価を計算したら、気軽に買えないですし……」

今回試作しているのは、俺が前世で大好物であった『明太マヨネーズ』であった。

作り方は簡単なのだが、問題はこの世界にタラコが存在しているかという点にあった。

イクラは、実は未開地の河川に『ナンポウマス』という温暖な気候なのに遡上してくるマスが居たので、そこから入手は可能であった。

これは、ちゃんと醤油漬けにして常に魔法の袋に保存している。

そしてタラコであったが、これも北方では食べられている事が判明する。

早速、以前に知り合いになった魔導ギルドに勤める女性職員の実家が経営している魚屋から取り寄せる事にしたのだが、タラコも含めて魚卵は現地では珍味扱いで、関税や輸送コストを含めて物凄く値段が高くなってしまったのだ。

更に、このタラコを辛子明太子にしないといけないわけで。

それを魚屋に頼んだ結果、値段はカレー粉よりも高くなってしまうという結果になっていた。

「しかし、良く思い付くよな」

「確かに。うちの実家の飯の内容を考えると特にな……」

パウル兄さんとヘルマン兄さんは不思議そうな表情を崩さなかったが、俺が調味料などの作り方に詳しい理由は、前世での仕事のせいであった。

一応名の知れた商社ではあったが、業界内では二流扱いであったうちでは、エリート社員が海外の現地政府と交渉して巨額のインフラ受注とか、最先端の工業プラントの建設とか。

そういう〇耕作的なお話とは、まず縁が薄かった。

新人研修を終えて俺が配属されたのは、主に食品関係の仕入れを担当する部署だ。

しかも、俺は主に国内の食材担当で、たまに国内の生産農家やら漁港やらに直接出向いて食材を吟味し。

それを必要とするメーカーや店舗などに提案を行う。

少々世間がイメージする商社員からは離れた存在かもしれなかったが、少なくとも扱っている食材は高級品が多かったと思う。

取引先も、昔ながらの製法に拘る酒蔵、味噌蔵、醤油蔵だったり。

国内産の品質の良い材料だけを使って製品を作る、中小の食品メーカーだったりと。

当然、そういう会社の人達と取り引きをする関係で、基本的な作り方を知りませんとは言えないわけで。

自然と勉強をして覚えていったのだ。

何しろ、こういう拘るメーカーの技術担当者や職人さんには気難しい人が多く。

新人時代に無知を曝して怒りを買ってしまい、そことの取り引きをライバル他社に奪われ、あとで上司から死ぬほど怒られた経験もあったりもした。

その勉強の過程と趣味で、休みに料理をするようになった経験が今に生きているのだから、人生何が幸いするかわからないものである。

「とにかく、試食を」

とりあえずは味を試そうと、早速でき上がった『明太マヨネーズ』を御飯の上に乗せてから試食する。

他のみんなも、それぞれに御飯にパンにと乗せて試食を開始していた。

「美味しいな」

「ああ、段々と舌が贅沢になっていく」

明太子だけだと御飯にしか合わないが、明太マヨならばパンにも合う。

前世でも、普通にパン屋で売られていたので試作してみたのだ。

ただ、やっぱり御飯に一番合うと思うのは、俺の中身が日本人だからであろう。

タラコが輸入品のせいで製造コストは高かったが、今の俺ならば何とでもなる。

御飯食を止める気にもならないし、もうバウマイスター領で食べられているボソボソの黒パンは食べたくない。

きっと、こういうのを舌が贅沢になったと言うのであろう。

「ところで話は変わるが、今日は未開地に視察に行くんだって？」

「はい、開発特区を前進させるので」

ヘルマン兄さんの問いに、俺は『はい』と答える。

密約なので誰も口にはしないが、もはやクルトを廃嫡にしてヘルマン兄さんに父の跡を継がせるのは規定路線となっている。

それに協力する見返りとして、ヘルマン兄さんには男爵になれるくらいの未開地の分与と、その土地の開発を助ける事になっていて。

一度、俺の領地との境目付近まで、土地の視察をしておこうと思ったからだ。

「そうか。しかし、中央の連中はおっかないな」

「そういう世界で生きていて、それが常識としか言いようがないです」

またもブランタークさんの姿が見えなかったが、彼はここ最近ずっとクルトの監視に当たっている。

あと、前にブライヒレーダー辺境伯に報告に行くからと言われ、瞬間移動で送ってあげた事があるのだが。

その時に、通信用の魔道具を渡されたようであった。

前世で言うところの、携帯電話や携帯用通信機に当たるこの魔道具は現在では作れる人が少なく、現存する物のかなりの割合が遺跡からの発掘品であった。

元々製造に大変な手間と時間がかかり、生産品の大半を軍や役所

が押さえてしまうので、大物とはいえ地方の貴族にはなかなか回って来ないからだ。

当然その価値は計り知れず、それをブランタークさんに託すという事は、バウマイスター領の情勢に貴族達の注目が集まっているという事の証明でもあった。

「クルト兄貴は、未開地も含めたこの領のトップでいたい。相続したいんだろうな」

「そんな夢物語」

「ヴェルから搾取すれば、可能だと思ったんだろう。おかげで、あの様だ」

パウル兄さんの言う通りで、微量の魔力から相手の現在位置などを特定可能なブランタークさんの諜報活動により、クルト側の動きは全て筒抜けであった。

つい三日ほど前も、本村落の有力者だけを集めて会合を行っていたそうだ。

「あの会合か……」

「ヘルマン兄貴は、知っているのか？」

「パウルも、噂だけは知っていただろう？」

「知ってはいるけど、あんな事前の談合みたいな会合。他の村落の連中からしたら不愉快でしかない」

「まあ、そう言うな。昔は、十分に役に立っていた会合なんだ」

バウマイスター領の開発が始まったばかりの頃には、本村落を優遇してバウマイスター家の与党にする策は有効であった。

こんな他所からの支援など期待できない僻地で、領主家が確固たる支配権を維持できなければ、内乱になれば滅亡しかなかったからだ。

「ただ、今の時代にはそぐわなくなっている。俺も、分家の当主になって初めて出席したんだがな。少しでも叶えられれば利益になると。あの連中、無理難題な陳情ばかり垂れ流しやがって」

会合に出るメンバーの大半が年寄りなのも、会合が陳腐化する原因にもなっているそうだ。

年寄りは、あとは死ぬまで今の本村落優遇の生活が続けば良いと思っている。

なので、ヘルマン兄さんが提案した三つの村落の待遇に差を付けないという提案は、鼻で笑われてしまったようだ。

あと、クルトが領主の仕事をかなり代行するようになると、そこに同年代の職人達も加わるようになった。

ヘルマン兄さんは、新しい世代による改革を期待したらしいが、結果は年寄り連中と大差の無い既得権益への執着と、本村落優遇を垂れ流すだけであったそうだ。

「クルトの兄貴からも、『青臭い理想論』だと笑われてな。ヴェルはどう思う？」

「短期的には、現状維持には有効。長期的には、緩やかな衰退への第一歩ですか？」

「だよな。俺もそう思ったんだよ」

独自に未開地の開発が出来ない以上、将来的にはこの領の人口を増やすのは自殺行為になる。

となれば、自然と若い人から領を出て行く事になるのだが、もしここで本村落の連中を優遇すると。

「他村落で娘しかいないような家に、本村落の領民が扱いに困る次男・三男を強制的に押し込めるとかな」

「それはさすがに断るのでは？」

「バウマイスター家が、強制的に命令する可能性がある」

他にも、新規の開墾地を取り上げたりと。

本村落を優遇するために、他村落に犠牲を強いるようになる可能性もあるそうだ。

「さすがに、そこまでは……」

「開墾の費用は、バウマイスター家で出しているからな」

「いや、労力は領民が出していますけど……」

というか、そんな事をして他村落の領民達に愛想を尽かされて出て行かれたら。

今度は、未開地の開発はどうするつもりなのであろうか？

「だからさ。『未開地を開発して、何代か後には伯爵くらいには』という夢は持っているのさ。具体的な計画については、良くは知らないけど」

「あって、ヴェルから金を搾り取って資金を貯めておくくらいじゃないかな？」

ヘルマン兄さんも、パウル兄さんも。

『俺が当主になって、支配権を強固に』、『将来は必ず未開地の開発を行って大領主に』という漠然とした方針しか言わないクルトに呆れているようであった。

そんな事ならば、その辺の子供にでも言えるのだから。

「それで、良く領民達が付いてきますね」

「いや、だから付いて来なくなったようだな」

とそこに、ブランタークさんが姿を見せる。

どうやらクルトの監視は一休みで、ここに食事を取りに戻って来たようだ。

「坊主に、相当支持層を剥ぎ取られたようだな」

ブランタークさんほどのベテラン魔法使いになると、気配を魔法で消しながら対象を監視する事など造作も無いようだ。

相手が手練ならバレる可能性も高かったが、クルトは武芸では俺と良い勝負かそれ以下。

その取り巻きにも、その分野で優れた者など一人もいないので、

簡単にその動向を探れるようであった。

「その三日前の会合だけどよ……」

職人組は事前に引き抜きが成功して、会合には以前に俺と揉めた鍛冶屋しか出席せず。

豪農組も、出席は半数ほどになってしまったそうだ。

「いきなり坊主に媚びるのも何だろうからな。連中にも、後ろめたさがあるだろうし」

「えっ！　それって？」

「俺は、ちょっと囁いただけだぞ。『現状において、誰が当主になるのかなんて神にもわからないよな？　だが、それは所詮は御上の問題だろう？　ここは、中立を表明した方が結局は得をすると思うんだけどな』という風にな」

このまま劣勢なクルトを無理に応援しても何も良い事は無いのは、本村落の連中でも気が付いている。

しかし、ここでいきなり裏切るのもどうかと思うわけで。

中立だと言って双方どちらにも味方をしなければ、それはこちらに付いたと判断する。

もしクルトが廃嫡されれば、本村落の区画整理なども始まるだろうなと。

「それで会合に行かなくなったら、中立じゃなくて裏切ったと思うでしょう。あの人は」

「それは、あの男がどう考えるかで、俺には関与できないなぁ」

「えげつな」

「そうは言うがよ。もう三ヶ月も経っているからな。うちのお館様も、中央のお歴々も焦れてきているんだよ」

向こうからすれば、一日でも早く開発を始めたいらしい。

だが、実際に現場で苦労しているのは俺達なので、そんな事は知りませんというのが本音であったのだが。

「だが、今日でもうケリだろうな」

「あの……。それは、どういう？」

「会合の後に、クルトが外部と人間と接触していた」

「外部のですか？」

ブランタークさんの話によると、夜に本屋敷裏の森で明らかに外部の人間と接触していたらしい。

なぜわかるのかと言えば、探知した奴の動きを探ると、明らかにプロの冒険者の動きであったからだそうだ。

「それに、瞬間移動が使えないのにここまで来る外部の人間ってのは、プロの冒険者しかあり得ないからな」

「何のために、あの人と接触したんでしょうかね？」

「決まっている。何か良からぬ事を吹き込みにだろう。その証拠は、

現在険しい山道なわけだが」

ブランタークさんが、三日前にその冒険者の身柄を押さえなかったのは、俺の安全が第一なのと。

既に、ブライヒレーダー辺境伯に通報されているからのようだ。

「一月以上も険しい山道で疲労したところを、出口で捕らえる算段になっている。誰の差し金で動いているのかは、想像しやすいしな」

一度でもクルトとの接触を試みた中央の貴族といえば、間違いなくあの人の弟しかいないわけで。

もし尻尾を掴めれば、ブライヒレーダー辺境伯はルックナー財務卿に対して大きな貸しを作る事が出来るというわけだ。

「面倒な話ですね」

「いや何、地方貴族の主体性の確立の一環だから」

「それで、あの人は今日に何か仕掛けてくると？」

「その冒険者が暗殺に手でも貸すのかと思えば、そのまま戻ったからな。可能性があるとすれば……」

依頼主であろう人が準備した、魔道具などを渡したのかもしれないとブランタークさんが言う。

あの人が追い込まれている以上、一発逆転を狙うとなると、そういう物を使うしか手段が無いのだそうだ。

「じゃあ、視察に行くのは危険じゃないですか？」

「かもしれんが、その可能性は限りなく低いからな」

非合法な手段で手に入れた魔道具だからと言って、そう簡単に目的を達せる物を入手できるとは限らないからだ。

「入手先は、犯罪者ギルドが運営している裏市場だと思うが。あそこは、ツテのあるそれなりの幹部に大金を積まないと、坊主を暗殺できるような魔道具なんて手に入らないから」

大半は、『もしかしたら物凄い威力のある魔道具の可能性もあるけど、その確率は十分の一くらいかな?』などと言って、本来の相場の十分の一くらいで安く売り付けるような連中が多いそうだ。

あとは、説明した事とはまるで違う効果が発生したり、相手を呪うつもりが自分が呪われたり。

購入者が苦情を言おうにも相手は犯罪者ギルドであるし、警備隊に訴えても、まずは自分が違法な物品を購入した事実を話さないといけないわけで。

「要するに、素人は手を出さない。少し齧ってもうわかったとか言っている奴は大火傷をすると」

その代わりに、ちゃんとしたツテを使って正統な代価を支払えば、表のルートではまず手に入らない品物が入手できる。

勿論、大金を払う必要はあるが。

それが、裏市場という場所なのだそうだ。

「ルックナー弟は、その裏市場にツテがあると?」

「あるような。無いような。役職付きでも、法衣男爵程度だとなぁ……」

それに、支払う代金の問題もある。

それなりの物を入手するとなると、最低でも五百万セントは必要なのだそうだ。

ブランタークさんがなぜそんな事を知っているのかという疑問は、とりあえずは無視する事にする。

「ルックナー弟にでも揃えられる程度の魔道具で、坊主を殺せる可能性は低いわけだ」

「つまり、視察は餌と言うわけで？」

「そういう事になるかな。視察には俺も付いて行くし、助っ人もちょうど……」

ブランタークさんがそう言うのと同時に、屋敷の外から何か隕石でも落下して来たような音が聞こえる。

慌てて全員で外の様子を見に行くと、屋敷の前の空き地にはあの人物が涼しい顔で立っていた。

「導師？」

「導師様はともかく、その横！　横！」

パウル兄さんが、驚愕するのも無理は無い。

何しろ、着地した導師の脇には、哀れにも首を一撃でへし折られた飛竜の姿があったのだから。

一部の山道を除いて、山脈は飛竜やワイバーンの住みかになっている。

多分導師は、王宮にいる瞬間移動が可能な魔導師からブライヒブルクまで送って貰い、そこから山脈上空を高速飛翔で突破して来たのでろう。

横の哀れな飛竜は、導師の飛行経路を妨害して討たれてしまったものだと推察される。

「久々の長距離高速飛翔で心地良かったのであるが、視界をその飛竜に邪魔されたので撃破したのみ！　暫し厄介になるので、お土産代わりに受け取けとるが良いのである！」

首だけへし折られた飛竜なので、導師の宿泊費には多過ぎるほどの成果であった。

「なあ、ヴェル……」

「王宮筆頭魔導師である、アームストロング子爵殿です」

「王宮の魔導師って、こんなに強いんだ……」

ヘルマン兄さんが驚くのも無理は無い。

山脈に多数生息する飛竜やワイバーンは、かの地の生態系のトップに君臨する存在である。

当然、バウマイスター領の領民達は竜に対して無力な存在であり、山脈に近付く事すらしなかった。

例外は、商隊が通る山道のみである。

初代バウマイスター家当主がこの地に移民して数年後、『討伐して素材を売れば、領の懐が潤うのではないか？』と、領内の男手十名ほどと山脈に入ったそうだが。

結果は言うまでもなく、初代を含めて三名しか戻って来なかったらしい。

以後、誰も飛竜を狩って金を稼ごうなどという輩は現れなかったそうだ。

「おおっ、バウマイスター男爵の兄君殿であるか！　某もそれなりに強いとは自負しておるが。この程度の飛竜であれば、ここには複数名倒せる者がおる故に！」

「えっと……。それって……」

俺、ブランタークさん、ルイーゼと。

ヴィルマだって、単独の飛竜やワイバーンなら普通に倒せるし。

エルやイーナも、二人で戦えばワイバーンの一匹くらいは倒せるはずであった。

「クルトの兄貴、どうやって一発逆転を狙うんだ？」

「さあ？　その魔道具とやらが、物凄い物かもしれませんし」

「いや、クルトの兄貴のコネと財力じゃ絶対に手に入らないから！」

何にせよ、このままだと情況に変化もなく。

視察の名目で、俺達は未開地にクルトを誘う作戦を実行する事になる。

「ところで、朝飯がまだなのである！」

「早速準備しますね」

導師も加わり、まずクルトの一発逆転の策が成功する事はないはず。

安心して視察に行けるという物であったが、ここで一つ大きな問題が発生していた。

「『メンタイマヨ』であるか！　これも、是非に大量に欲しいのである！」

朝に試作した、高価な『明太マヨ』を全て食べられてしまい。

「導師様、良く食べる」

「うむっ！　ライバル出現であるか！」

給仕のために朝食が遅かったヴィルマが大量に食べるのを見て、なぜかライバル心を燃やしてしまい。

「お代わりである！」

「お代わり」

二人によって、とんでもない量の御飯やらパンやら肉や野菜が一気に無くなってしまう。

「勝ち」

「ふぬぉあーーー！　次こそは！」

「（あんたは、子供か……）」

そして、いつの間にか始まっていた導師とヴィルマとの大食い競争であったが。

結果はヴィルマの勝ちであり、その事で導師が子供のように悔しがるのであった。

というか、普通の人が英雄症候群の人に食事量で対抗すること自体が無謀でしかないのであったが。

「あのう……、クルト様」

「何だ？　エックハルト」

何とか情報を入手した、本日のヴェンデリン一行による未開地への視察。

場所は大分奥のようで、ここならば例の『竜使いの笛』とやらを使っても問題ないはずだ。

今回、俺に同行している連中は五名。

俺と同じく後が無いエックハルトに、比較的老齢の豪農が四名と。

みな、ヴェンデリンが来る前のバウマイスター領を支持している連中であり。

皆、戦時招集される時に着る槍や剣や鎧を装備して、俺の計画に参加していた。

最初は、密かに計画を実行するために単独での行動も考えたのだが。

このくらいの人数で、このくらいの準備をしないと未開地の野生動物は俺達にとって脅威であったからだ。

「本当に、暗殺など成功するのですか？」

「するさ。この『竜使いの笛』ならな」

確かに、ヴェンデリンの魔法は恐ろしい威力を持っている。

だが、いくら奴でも数の暴力には勝てないはず。

『竜使いの笛』は、周辺の飛竜やワイバーンを呼び寄せる。

あの山脈に住む竜を大量に呼び寄せれば、いくらヴェンデリンとて生き残れないはずだ。

「そんなに大量の竜を、魔物の領域から引き剥がしても大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫だ。俺達はな」

「ええと……。それは、つまり……」

相変わらず、察しの悪いバカな男である。

鍛冶屋としても二流で、家臣にするにしても二流とは。

まあ、無能な方が俺に捨てられないように頑張るかもしれないからな。

「それなりに被害は出るだろうな」

「そんな！」

「おいおい。何か特別な事を成すのに、何もリスクを取らないつもりなのか？」

確かに、今ここでヴェンデリンに向けて『竜使いの笛』を吹けば、山脈から大量の竜が飛来してヴェンデリン一行はおろか、大量の領民達を殺すであろう。

「だが、俺達が生き残れば勝ちなのさ」

ヴェンデリンの遺産を継ぎ、あのクソガキに媚を売るようになった領民達も、親父も、生意気なヘルマンや分家の人間も抹殺し。一から、新しいバウマイスター領が始まるのだ。

いや、生まれ変わるのだと。

「しかし、家族が……」

「そんな物は、また作れば良いだろう？」

年老いた魅力の無い女房など、新しいバウマイスター領に相応しく無いのだ。

「俺とエックハルトは、まだ三十代半ば。残りの連中も、まだ五十歳にはなっていない」

俺も、エックハルトも、他の連中も。
新しい統治体制に合わせて、若い嫁を貰えば済む話だ。
子供など、また作れば良い。

「エックハルト。新しい従士長には、新しい妻が必要だと思うがな。他のみんなも、それぞれに家臣として働いて貰う。何か異存はあるか？」

「いえ、我らはクルト様の命に従うのみです」

そうだ、それで良いんだ。
とはいえ、『竜使いの笛』の笛を吹いた後に守られるのは俺だけなのだがな。
運良く生き残ったら、家臣にしてやる約束は守る事にするが。

「クルト様」

「来たか……」

無理をして、早めにこの場所に伏せていた甲斐があったという物だ。
視界の先では、ヴェンデリン達が何かを話ながら土地の状態などを確認しているようだ。

随伴は、いつものメンバーに。
何を貰う約束をしたのか？
意地汚い乞食のように護衛しているパウル達と、想定外ではあったがヘルマンも数名の従士と共に周囲を固めていた。

「ヘルマン様がいますね」

「丁度良い。弟に媚びるバカは一緒に死ね！」

もう憂いは無い。

ヴェンデリンも、それに媚びるパウルもヘルマンも。

クソな親父も、バカな領民達も。

全て、この『竜使いの笛』を使って浄化する時が来たのだ。

「では、いくぞ」

『竜使いの笛』の口に咥えて息を吐くと、すぐに聞きなれないメロディーのような物が流れ始める。

音の質は、普通のオカリナを吹いたのと同じような感じであった。

俺には、楽器の素養などなかったが。

三日前に森で遭遇した陰気な冒険者が言う通りで、魔道具なので口に咥えて少し息を送り込めば、メロディーが出る仕組みになっているそうだ。

あと、このメロディーは、笛から音が出ているのかを人間が判別するために出ているらしい。

竜を怒らせる音とは、人間の耳には本来聞こえない物なのだそうだ。

だが、そんな事はどうでも良いのだ。

あの小生意気なヴェンデリンさえ死んでくれれば。

ただそれで十分なのだから。

「一体何を？」

さすがに、一流の魔法使いや冒険者が揃っているだけのことはあ

る。
オカリナの音から、ヴェンデリン達は俺達の存在を見付けていた。
だが、もう手遅れなのだ。
もう既に、竜はこちらに向かっているはずなのだから。
「うーーーん、何かを呼び寄せる笛か？」
ブライヒレーダー辺境伯の飼い犬が、俺が吹く『竜使いの笛』を見て呟いていた。
「まさか、『竜使いの笛』では？」
「そんな物、滅多な事では手に入らんよ。何か、他の物を呼び寄せる魔道具だと思う」
この魔道具の正体に気が付いたのは、紫色のローブを着た大男であった。
だがそれを、バカなブライヒレーダー辺境伯の飼い犬が否定してしまう。
本当に、賢いつもりのバカには笑うしかなかった。
判断を誤って、そのまま竜の大群に食い千切られれば良いのだ。
「ねえ、あれは？」
ヴェンデリンの側室候補とやらのチビが何かを見付けたらしく、空を指差していた。
多分、山脈に住む竜達がこの笛に呼ばれて集まって来たのだ。

「（お前らの命は、今日までだったようだな！）」

竜の大群に襲われ、多勢に無勢で喰われるヴェンデリン達に、壊滅するバカな領民や家族達。

だが、そこからバウマイスター領を復興させる中興の祖となる俺。

最低でも伯爵になり、広大な領地に多数の新しい領民達。

側室も多数含めて多くの若い妻達に囲まれ、毎日貴族に相応しい贅沢な生活を送る。

そしてそんな俺に、ブライヒレーダー辺境伯や中央の貴族達も一目置くのだ。

「（俺のために、みんな死ね！）」

「あのクルト様……」

「（何だ？）」

人がせっかく気分良く笛を吹いているのに、邪魔をしてくるバカがいる。

相変わらず使えない、愚か者のエックハルトであった。

「あれは、竜ではないのでは……」

「（はあ？）」

竜を呼ぶ笛なのに、竜ではない物が来ているとエックハルトも他の連中も騒ぎ始めていた。

そんなわけがあるかと空を見ると、全方位の空から何か黒い煙の

ような物がこちらに迫って来ているのが見える。

「（何だ？　あの黒い煙は？）」

「クルト様？」

その黒い煙のような物は、笛の音によってかなりの広範囲から引き寄せられているらしい。

大きさは、小さい物は小石程度で大きくても拳大くらいであろうか？

ただ数が尋常ではなく、それが雲霞のように群れでこちらに迫っていたのだ。

「笛を吹くのは、止めた方が宜しいかと……」

何をバカな事を。

竜ではないかもしれないが、あの禍々しさならばヴェンデリンを確実に殺せるはず。

何より、俺はあの黒い煙の被害を受けないのだから。

「（それに、見てみろ！　ヴェンデリンの慌てようと言ったら無い！）」

次第に集まって来る黒い煙の塊に、ヴェンデリン達は慌てて魔法で防御を開始していた。

つまりは、それほど危険な物という事だ。

「クルト様！　もうこれ以上は！」

「何だ？　これは！」

笛を吹いている間、俺を守るようにと命じていたエックハルト達であったが、所詮は卑しい平民。
黒い煙の群れに恐怖して、その場から逃げ出そうとする。
だが、こちらに向かって来る途中の黒い煙の群れに捕まってしまい、その体を覆い隠されてしまう。

「クルト様ぁーーー！」

「助けてぇーーー！」

エックハルト達から断末魔のような叫びが聞こえ、俺はこの笛がヴェンデリンにも使えると確信する。
せっかく家臣にしてやると言ったのに恐怖で逃げ出した愚か者達であったが、あの黒い煙の効果をその身で示してくれた点だけは使えたようだ。

俺が伯爵にでもなったら、良い墓を建ててやるとしよう。

「（この黒い煙が、ヴェンデリン達の魔力が尽きるまで攻撃を続ければ……）」

いくらヴェンデリンとて、数の暴力には抗えまい。
竜を呼ぶ笛ではなかったが、使える魔道具だったので良しとしよう。

「（このまま、ヴェンデリン達を攻撃するんだ！）」

俺は、更に息を篭めて笛の音を大きくする。

空を見ると、まだ周囲からは黒い煙の群れが集まっているようで、それはまるで蝗の群れがこちらに向かって来るかのような感覚に似ていた。

「（エックハルト達は、死んだか？）」

エックハルト達を襲っていた黒い煙は既に標的から離れ、新しく集まって来た黒い煙と合流して、俺の周囲にまるで竜巻のように集まっていた。

俺はちょうど黒い煙の竜巻の中心地にいるようで、全くその影響を受けていない。

一方、ヴェンデリン達は懸命に魔法で黒い煙を防ぎ続けているようだ。

「（死んだようだな）」

エックハルトを含めた五人は、もう死んでしまったようだ。

ピクリとも動かず、肌も土気色になっていた。

「（この黒い煙は何なのだろうな？　まあ、使えるから良いか）」

さて、このまま次はヴェンデリン達をと思ったその時。

ふとエックハルトの死体を見ると、手足がピクピクと動き始めているのを俺は確認する。

「（実は、生きていたとか？）」

エックハルト達は始めは手足を動かしていただけであったが、今度はノロノロとであったが、立ち上がって顔をこちらに向けていた。

「（生きていたか。まあ、家臣にはしてやるっ！）」

だが、起き上がったエックハルト達の顔を見て、俺は明らかに何かがおかしいと感じる。

彼らの目の焦点はまるで合っておらず、口からは涎を、鼻からは鼻水を。

加えて糞尿すら漏らしているようで、次第にその嫌な臭いが周囲に漂い始める。

「クイモノ！」

「ニクゥーーー！」

「（はあ？　お前達、一体どうなって！）」

五人は、よたよたとした足取りで俺に向かって歩いて来る。

更に、人を食い物扱いとは。

暫し混乱した後に、俺はある事を思い出していた。

『バウマイスター諸侯軍の戦死者は、ほとんどゾンビと化していたそうだ』

最初に、ヴェンデリンが冒険者としてここに来た理由。

それは、遠征軍の戦死者が魔の森でアンデッド化しているので、それを浄化するためであったはず。

『ゾンビは、人間が持つ欲望の。特に、食欲に特化してしまうらしい。早めに討伐して良かったな』

親父は俺に、ヴェンデリンが報告した内容を後になってから語っていた。
その中で、ゾンビの生態についての話があったのだが。
奴等は、食べても栄養にもならないのにひたすら食べ物を求め、時には共食いまでするそうだ。

「（もしかして……）」

もう死んだと思ったエックハルト達が突然起き上がり、『クイモノ』と言いながら、俺に向かってくる。
つまりは、こいつらは黒い煙で殺されてゾンビとなり、俺を喰らおうとしているのではないかと。

「（バカな！　止めろ！）」

慌てて奴等に止めるようにと声をかけるが、そういえば俺は笛を吹いているのであった。
一旦止めようと笛を口から外そうとするのだが、更にとんでもない事実が判明する。

笛が、口から外れないのだ。
笛を吹くために添えた両手も同じで離れず、まずは音を止めようと息を止めても笛の音は止まらない。

「（魔道具だからか！）」

一旦口を付けて息を送ると、目的を達するまで笛の音は止まらない可能性が。
そう考えた次の瞬間、俺は体中に激痛を感じていた。

「ニクゥーーー！」

ゾンビと化したエックハルト達が、俺の腕や足や首筋に喰らい付いていたのだ。

「（こら！　離れろ！　次期領主に傷など付けて死刑だぞ！）」

ところが、ゾンビ達は俺の体を貪るのを止めなかった。
容赦なく体中の肉を食い千切り、俺はあまりの激痛に倒れこんでしまう。

「（とにかく、逃げないと……）」

だが、もう体に力が入らなかった。
逃げようにも、周囲は竜巻状になった黒い煙で覆われている。
なるほど、この笛は目標を殺す代わりに俺の命をも奪うようだ。

「（だから、中央の貴族など当てにならんのだ！　ちくしょう！　俺の夢が！　希望が！）」

ヴェデリンの遺産を使って、バウマイスター領中興の祖となる。
夢が音を立てて崩れ落ちるのを、俺は感じていた。

「（こうなったら！　犠牲は一人でも多くだ！　死ね、ヴェンデリン！　死ね、ヘルマン！　死ね、パウル！）」

俺が人生の最後に見たのは、首筋の急所に喰らい付こうとするゾンビ化したエックハルトの大きな口であった。

第五十二話　怨嗟の笛。

「あの中では、何が起きているのでしょうか？」

「さあな？　ただ、間違いなく碌でもない事だとは思うぜ」

あのルックナー弟から何か魔道具を手に入れたクルトを暴発させるため、俺達はわざと未開地に視察に出ていた。

視察自体は、一応は必要であったのだ。

現在のバウマイスター領に、パウル兄さんが独立する準男爵領と、俺が大半を分与される予定の伯爵領の三つ。

その境目は今はただの平原であったが、将来に起こる可能性がある領地境を巡る争いを避けるために、ちゃんと分けておく必要があったからだ。

ただ、別に今日である必要は無く。

やっぱりクルトの誘発が、最大の目的となっていた。

『問題なく、潜んでいるようだな』

クルトは、鍛冶屋のエックハルトに僅かに残った支持者達と武装をして、暗い内から視察予定地を目指して領を出ていた。

当然、ブランタークさんの手にかかれば、そんな行動は筒抜けなのであったが。

視察予定地に到着してからも、少し離れた藪に五人で潜んでこちらを探っているのは丸わかりであった。

さて、どんな魔道具を使うのかと内心では構えていると。

突然、俺達の前に姿を見せたクルトは、古いオカリナのような物を吹き始める。

すると、周辺の地面から何か黒い煙の塊のような物が噴出し、それらが竜巻状になってクルトを包んでしまう。

『いきなり自爆？』

『いや、さすがに竜巻の中は安全だろう。仮にも、魔道具の使用者なんだし』

どうやら台風の目と同じで、中心地は黒い煙の影響を受けないようだ。

ただし、クルトだけはという注釈が付くらしい。

黒い煙の影響なのか？

すぐに、エックハルト達と思われる悲鳴が聞こえてくる。

『自分だけ無事で、他は駄目とか。えげつな』

『見事なまでに使い捨てだな。さすがは、小物だぜ』

ブランタークさんの、クルトへの評価は厳しかった。

ただ、冒険者時代にもこの手の輩は珍しくなかったようで、特に思うところはないようだ。

それに、クルト自身も永遠に無事であったわけでもないのだから。
すぐに、彼の断末魔の叫びが聞こえてくる。

『何となく、どういう魔道具か理解できた。やっぱりクルトなんて、使い捨ての道具だったんだな』

どうやら、あの黒い煙は触ると危険な物らしい。

こちらは、更に遠方からも大量に湧き始めた黒い煙状の物体から身を守るべく、ブランタークさんと共に魔法障壁を展開していた。
視察に来ていた全員は、急ぎ魔法障壁の中に入る。

「これ、虫か？」

「いえ、怨念が顕在化した物です」

エルの疑問に、この分野には詳しいエリーゼが答えていた。

「えっ？　怨念って顕在化するの？」

「そこは、あの笛の力だとしか」

イーナの疑問に、エリーゼは少し曖昧に答えていた。
さすがの彼女も、魔道具にはさほど詳しくなかったからだ。

「ねえ、導師様は知っているの？」

「多分、アレは『怨嗟の笛』であろう」

「怨嗟の笛？」

意外にも、導師はクルトが吹いている魔道具に心当たりがあるようだ。

怨嗟の笛とは、古代に製造された仇討ち用の魔道具なのだそうだ。本人の怨念と、笛で周囲から集めた怨念をもってして自分を強力なアンデッドと化し、その目標を殺す。

自分の身を犠牲にしてまでも討ちたい相手を確実に殺すための魔道具で、これも『竜使いの笛』ほどではないが、王国では危険な代物であると認定されているそうだ。

「という事は、アレも裏市場で？」

「怨嗟の笛は、竜使いの笛よりは入手が容易い故に。あくまでも、比較論ではあるが……」

竜使いの笛を使われれば、最悪その都市が壊滅してしまう。

だが、怨嗟の笛であれば、目標の個人と最悪数名の巻き添えで済む事も多い。

王国がどちらを危険視するのかは、一目瞭然というわけだ。

「どっちにしても、標的は俺なんですよね？」

「あはは、物凄い怨念の具現化であるな！　バウマイスター男爵は、相当に恨まれていたようである！」

「あの……。笑い事じゃないんですけど……」

まだ周囲から集まって来ている黒い煙は、クルトを中心にして直

径五十メートル、高さは百メートルほどの巨大な竜巻を形成していた。

あまりの凄さに、俺達は慌てて後退をするほどである。

「伯父様。昔に見た本では、もっと竜巻は小さかったと記憶しているのですが……」

「要因は、幾つか考えられるが……」

まずは、この未開地が広く開けた土地であった事。

怨念とは、比較的簡単に発生する物らしい。

植物や昆虫が、走る鹿に踏み潰される。

ウサギが狼に狩られる。

熊が川で溺れ死んだり、子供が育たなくて死んでしまうなど。

人間社会においても、上司から叱られるとか。

日常生活で、少し知人が気に入らなかった出来事があったとか。

僅かではあるが怨念が発生し、それはその土地周辺に染み込むそうだ。

「ただ、時間が経てば蒸発する水のように消えてしまうのである」

普通の場所ならばそうなのだが、所謂『良くない土地』などと言われるような場所だと。

蓄積した怨念が、その土地を利用する者に害をもたらしたり。

王都の瑕疵物件のように、殺されて恨みが強い悪霊などが発生すると、その場にある怨念が増幅されて悪霊のエネルギー源となって

しまうそうだ。

「つまり、あの男の怨念が予想以上に強く。それを基点に、未開地中から大量の怨念が集まっているのである！」

未開地には、無念にも惨殺された人などおらず。

一箇所から集められる怨念など僅かな量でしかないが、未開地は広大なので塵も積もればという事らしい。

「という事は、ヴェルの兄貴が笛を吹くのを止めさせないと駄目って事ですか？」

「止めさせるというよりは、魔道具か使用者を破壊するしかないのである！」

「えっ、それはどういう？」

エルは、導師のクルトを殺すではなく、破壊するという発言に違和感を覚えたようだ。

「エル少年、バウマイスター男爵やブランターク殿が、なぜすぐに魔法障壁を張ったと思う？　あれほど濃度の濃い怨念を普通の人間が体に受ければ、死は間逃れない故に！」

導師はエルの質問に答えながら、もうクルトが生きているはずはないと説明していた。

怨念とはマイナスの要素であり、少量ならば大した影響もないが、大量ならば生物を病気にしたり最悪死に至らしめるのだそうだ。

「常人ならば、一瞬で発狂するはずです。あとは、短時間で体の機

能が停止してしまうのですが……」

エリーゼが、俺を見ながら申し訳無さそうに説明をする。
要するに、クルトとその取り巻き達は既に死んでいる可能性が高いらしい。

「エリーゼが気にする事なんてないさ。こう言うと悪いかもしれないが、自業自得だ」

その死を心から望まれ。
今まで散々に嫌がらせを受け。
挙句に、人の暗殺まで試みたのだ。
それに、どうせここで生き残っても碌な結末が待っていないはず。
後顧の憂いを断つべく、ブライヒレーダー辺境伯や中央の貴族達がクルトを生かすはずなどないのだから。

「でも、ならどうして笛の音が鳴り続けているのかしら？」

「単純明快で、魔道具だからである！」

イーナの疑問に、導師が素早く答えていた。
オカリナの形をしていたが、あの笛は魔道具であり。
一度息を吐いて稼動させると、あとは稼動させた者が標的にしている人間を殺すまで笛の音は止まらない。

実際に、どこかで聞いた事があるような気がしないでもない曲が、オカリナの音で周囲に流れ続けていた。

「あれ？　稼動者が標的にした者を殺すまで？　でも、あのお兄さんはもう死んでいるんだよね？」

ルイーゼが疑問に感じた事は、俺も感じていた。
クルトはもう死んでいるのに、なぜ笛や集まった怨念が俺を標的だと認識するのであろうかと。

「答えは、怨念の集合体を操る存在として笛の稼動者をアンデッドにするからだ。坊主、これは浄化するのは結構な手間だぞ」

魔法障壁の展開に集中していたブランタークさんから、例の巨大な黒い竜巻に変化が発生したという報告が入る。
視線を向けると、そこには全高さ五十メートルほどの黒い煙で構成された巨人が立っていた。

「怨念の集合体……」

「あと、胸の部分を見てみな」

ブランタークさんに言われて視線を向けると、そこには肌が焦げ茶色に変色し、ゾンビと化したクルトが埋め込まれていた。

クルトは相変わらずあのオカリナを口に咥えていて、そこからは例のメロディーが流れ続けている。
更に良く見ると、首筋や手足の一部が食い千切られたように欠損していて、その傷口がドス黒く変色していた。

「あの取り巻き達が先にゾンビ化して、食われて死んだようだな。そして、死後にゾンビにされてあの黒い巨人のコアにされる。えげつねえ魔道具だ」

確かに、俺ならばどんなに追い詰められても使いたくない魔道具

であった。
それとその取り巻き達であったが、やはりゾンビ化して黒い巨人の胴体や手足などに、まるで飾りのように埋め込まれていた。

「何というか、初めて見るアンデッド？」

核はクルトのゾンビのようだが、他にも四体のゾンビも取り込んでいるし、大半の構成要素は黒い煙状の怨念で構成された謎の巨人。

果たして、これはどういう種類のアンデッドに分類されるのであろうか？

「気持ち悪い。倒しても、肉は取れない。早く倒すべき」

もっとも、ヴィルマに言わせるとそんな事はどうでも良いようだ。
食える野生動物や魔物なら倒す楽しみがあるが、こんな食えもしないアンデッドは早く倒すべきだと。

俺のローブの裾を引っ張りながら、早く倒そうと意見していた。

「でも、強そうじゃないか？」

ルックナー弟如きが渡す魔道具なので、大した事も出来ないはず。
丁度良い機会だから、クルトの暴発を誘発させてしまえば良い。

などと言った割には、ブランタークさんも黒い煙の巨人インゾンビ五体の禍々しさに絶句しているようであった。

「ブランタークさん！」

「ああ……。坊主って、物凄くクルトに恨まれていたんだな」

「そこは、今更でしょう」

完全に向こうの思い込みであったが、それでも鬱屈した怨念が物凄い事になっていたらしい。

向こうにしてみれば、まず俺が生まれた事からして悪なのであろう。

しかも、大人しく慎ましやかに生活していれば良いのに、竜を退治して貴族になるなど。

クルトからすれば、まず許されない事なのだ。

何しろ、自分は跡取りで長男様なのだから。

そして、ならば持っている金を出して、自分の奴隷のように働けと。

全てクルトだけの都合であり、その都合通りにならない俺は邪魔な存在なので殺した方が良い。

そこまで考えている人間を、ただ血の繋がった兄だからと言って容認できるほど。

俺は、聖人君子ではなかったのだ。

「それで、どうします？」

「どうって……」

怨嗟の笛の範囲内の未開地から全ての怨念を吸収した黒い煙の巨人は、早速に標的である俺目掛けてその拳で連続してパンチを繰り

出していた。

だが、ブランタークさんと共同で展開した魔法障壁に阻まれ、まるで効果を発揮していない。

それでも、連続して両手を振り下ろして、その衝撃で魔法障壁がバンバンと大きな音を立てるので、精神的には少し怖いと感じてしまうのだが。

それはそうであろう。

全長五十メートルほどの巨人から、魔法障壁で守られているとはいえその巨大な拳を向けられているのだから。

「それならば、某の出番であろう！　バウマイウスター男爵の身に何かがあれば、陛下も悲しむという物！　まずは、某に任せるが良い！」

導師は俺の警備のために来たので、理論的には間違っていない。

だが、導師の魔法の特性を考えると、この黒い煙の巨人にはあまり効果は無いような気もするのだ。

「某が普段は使わない魔法で、始末するのである！」

そう言うのと同時に、導師は魔力を同調させて俺とブランタークさんが展開している魔法障壁をすり抜け、同時に身体強化の魔法をかける。

黒い煙の巨人は、先に邪魔な障壁から出た導師を先に始末すべく、その頭上に拳を落す。

普通の人ならばペシャンコになるほどの威力であったが、導師はそれを単体用の魔法障壁で防いでいた。

「導師って、魔法障壁を使えたんだな」

「いやいや、あの人は王宮筆頭魔導師だから！」

エルからすると、導師が魔法障壁を使えること自体が初耳であったようだ。

だが、導師の名誉のために言っていくと、導師は魔法障壁が使えないわけではない。

俺やブランタークさんのように、複数人数をカバーする半円形の魔法障壁が使えなかっただけだ。

「ある意味、完全に単体戦闘専用なんだな」

「そういう事になるかな……」

だからこそ、昔に導師よりも師匠を王宮筆頭魔導師にという声が上がったのだから。

だが、導師の魔道具への知識などを見るに、別に導師の王宮筆頭魔導師就任は間違っていないとも言えた。

むしろ戦争にでもなれば、敵軍を容赦なく惨殺する恐ろしいまでの攻撃力の持ち主なので適任とも言える。

「他の魔法は魔力を大量に消費する故に！　紅蓮の火柱にて、完全に焼き尽くしてくれようそ！」

そう言いながら、導師が指先を黒い煙の巨人に向けると、突然黒い煙の巨人の足元から強大な火柱が上がり、その体を完全に包み込んでしまう。

「会心の出来であったわ！　バースト・グレート・ライジング！」

バースト・グレート・ライジングとは、見ての通りに高温の巨大な火柱を標的の足元から発生させる魔法である。

威力は、普通の人間ならば骨も残らずに焼き尽くしてしまうほど。

オリジナル魔法かと聞かれれば、そうとも言えるし、言えないとも言える。

標的を火柱で包み込む魔法を使える魔法使いは複数いるが、バースト・グレート・ライジングと名付けているのは導師だけであったし、高さ百メートルにも及ぶ火柱を魔法であげられるのも導師だけであったからだ。

「凄い魔法だね」

「さすがは、伯父様」

ルイーゼとエリーゼは、巨大な火柱に包まれて焼かれる黒い煙の巨人を見て導師の実力に感心していたが、ブランタークさんは訝し気な表情をしながら首を横に振っていた。

俺も実はそうだ。

バースト・グレート・ライジングの魔法自体は、物凄いと思うのだが……。

そして、イーナも俺達と同じ事に気が付いたようだ。

「ねえ、ヴェル」

「ええと、何かな？」

「私は魔法なんて使えないのだけど、あの黒い巨人はアンデッドなのよね？　なら、聖魔法で浄化しないと駄目なんじゃないの？」

「そういう事になるかな？」

ゾンビのように腐っていても体があるのならともかく、あの大半が黒い煙状の怨念で出来ている巨人に、火系統の魔法が通用するはずがないのだ。

「伯父様は、黒い巨人を操っているあの人のゾンビを標的にしたのでは？」

エリーゼは、大半のアンデッドは聖魔法でなければ倒せないという事実を失念していたわけではないようだ。

あれほどの巨体なので、導師は先にコントロールをしているクルトのゾンビを倒そうとしているのではないかと。

なるほど、確かにそれならば効率が良いとも言える。

ただ、火柱が収まった地点には先ほどのままで黒い煙の巨人が立っており。

加えて、胸の部分には目が血走ったままのクルトが絶叫していた。

ゾンビではなく、レイスと化した状態で。

「おおっ！　業火で焼かれてもバウマイスター男爵への怒りで成仏できないとは！」

導師も、クルトの執念に驚いているようだ。
何しろ、他の四人が埋め込まれていた巨人の手足には、もうその姿が見えなくなっていたのだから。

多分、もうクルトには付き合い切れないと、先にあの世に行ってしまったのであろう。

「ヴェンデリン！　コロス！」

「うわぁ、マジで恨まれてるな」

「半分以上、向こうの勝手な思い込みだ！」

「俺も、兄貴達を差し置いて跡を継いだりしていたら、このくらい恨まれていたのかもな。そんな事は、まずあり得ないけど」

家や領地を継げるか、継げないか。
この差のせいで、時には殺人や暗殺事件まで発生する事があるそうなので、兄達に疎まれたエルからすれば他人事ではないようだ。

ただ、クルトの場合は黙っていれば領主になれたので、完全に逆恨みだと思うのだが。

「あーーー、早く浄化してしまえ」

コントロール部分がクルトのレイスに変化した黒い煙の巨人は、余計に恨みが増大したようで、無茶苦茶に腕を振り回しながら俺達に攻撃を続けていた。

攻撃自体は、ブランタークさんの魔法障壁によって完全に防がれ

ていたが、巨人が自分に腕を振り下ろすシーンは見ていて心臓に良くないのであろう。

ブランタークさんから、早く浄化してしまえと言われてしまう。

「わかりました。エリーゼ」

「はい」

俺とエリーゼは、同時に聖魔法の準備を開始する。

魔の森で使った広範囲浄化魔法の範囲を狭め、その濃度を上げた物を。

同じ系統の魔法で、二重に捕らえて完璧に浄化してしまう事にしたのだ。

万が一失敗でもすると面倒なので、ここは容赦なくやってしまう事にする。

「ヴェンデリン！　シネェーーー！」

もはや理性すら無さそうな、俺達に向かって両手を振り下ろし続けている巨人なので、他所で暴れられでもしたら面倒になりそうであったからだ。

何かの間違いでバウマイスター領にでも行かれたら、下手をすると領民達が皆殺しにされる可能性もあった。

「まあ、他所に逃げる心配は無さそうだけどな」

ブランタークさんの魔法障壁で防がれているのに、黒い煙の巨人

は他の方法を考えるでもなく、まるで機械のように両手を振り下ろし続けていたからだ。

「なるほど、仇討ち用の魔導具か……。俺が標的じゃなくて良かった……」

「俺も……」

「しかし、あまりにも理不尽な恨みというか……」

「何もしなければ、普通にバウマイスター領を継げたのにな」

ヘルマン兄さんとパウル兄さんは、クルトの悲惨な死に様などよりも、狂ったように両手を振り下ろしてくる黒い巨人に恐怖している。

なぜなら、こんな巨人に狙われたら、魔法障壁を張りでもしないとまず生き残れないであろうからだ。

多少武芸に優れていたとしても、巨人の理不尽な暴力からは逃げられるはずもない。

まさしく、己の身を犠牲にする価値のある仇討ち用の魔道具なのかもしれなかったが、唯一魔法使いへの対処には隙があったようだ。

「ただ、聖魔法がないと詰むけど」

「だな。攻撃は防げても、聖魔法が使えないと黒い巨人を倒す術が無い。魔法障壁の展開だって、魔力が尽きれば結果は同じなんだから」

大抵の人間ならば確実に殺してしまういう点において、怨嗟の笛はお上に取り締まられるのに相応しい魔道具でもあったのだ。

「それで、導師は時間稼ぎなのか？」

「多分……。ただ、本当に自力で倒そうとしている線も……」

「いや、聖魔法が無いと無理だから！」

俺とエリーゼが聖魔法のタメを行い、ブランタークさんが魔法障壁を展開して全員を守る。

その中で、唯一の例外が導師の存在であった。

自分一人なら魔法障壁を展開可能なので、それと身体能力を魔法で強化し、高速飛翔で黒い煙の巨人の周囲を飛び回りながら火系統の高集束弾を放ち続けていたのだ。

ただ、命中して一時的にその部分に穴を開けても、元が黒い煙なのですぐに塞がってしまう。

やはり、聖魔法でないと効果が無いようであった。

「導師って、聖魔法は……」

「ボクは見た事が無いけどね」

王都での修行時にも、俺もルイーゼも見た記憶がなかった。

ただ、前に使える事には使えるけど、威力がアレなので使えない方がマシだという話は聞いていたのだが。

「実は、嘘をついていて高威力の物が使えるとか？」

「別に、隠す意味が無いよね？」

「確かに……」

ルイーゼに正論で突っ込まれている間に、高出力の聖魔法を使うためのタメが完了し。

まずエリーゼが、黒い煙の巨人が立っている場所とその僅かな周囲に効果を限定した浄化魔法を発動する。

浄化の青白い光によって、巨人はその構成要素である黒い煙が徐々に溶けるように消えていき、次第にその身を小さくさせていく。

更に、胸に埋め込まれたクルトのレイスが、まるで硫酸でもかけられたかのように悲鳴をあげ続けていた。

「行けるぞ！　坊主！」

「はい！」

続けて、俺も同じ魔法を同じエリアに重ねがけする。

更に威力を増した青白い光に、黒い煙が浄化されていく速度が増し、もう数分で完全に消えるであろうと予想したその時。

悲鳴だけをあげていたクルトのレイスが、最後の抵抗を開始する。

「ヴェンデリィーーーン！」

再び怨嗟の笛の音を強くし、また周囲から徐々に黒い煙が集まって来たのだ。

「またかよ！」

「怨念なんて、どこにでもあるからな」

極少量とはいえ、どんな土地にも存在する物を広範囲から集めているせいで、巨人の体が小さくなる速度が完全に止まってしまう。

こうなると、あとは俺達の魔力が尽きるか。

クルトのレイスが、怨念を集め切れなくなるか。

完全な、根競べになってしまったのだ。

「坊主、大丈夫か？」

「俺は大丈夫なんですけど……」

エリーゼの魔力は中級の上くらいなので、もう何分かで限界が来てしまうのだ。

例の指輪に、前の反省を生かして所持している予備の魔晶石も合わせてもう十分ほどがプラスされるにしても。

エリーゼが脱落すると、今度は黒い巨人が再び元の大きさに戻ってしまう可能性があった。

「あれ？　これって、結構拙い？」

「拙いな」

もし俺の魔力が尽きるまでに巨人が消えないと、もう残りは魔法障壁を展開するブランタークさんだけになってしまう。

彼は聖魔法を使えないので、あとは守るだけになってしまうのだ。

「拙いな……。導師！」

「何事であるか？　ブランターク殿」

巨人の周囲を飛びながら牽制を続ける導師に、ブランタークさんが事情を説明する。

「なるほど、この開けた未開地が逆に仇となるとは！」

「開けていても、怨念ってそんなに早く飛んで来るんですか？」

「普通の物ではない故に、怨念の凄さは集める人間の恨みの深さに比例するのである！」

少量の怨念は、普段は透明で人間にも動物にも見えない。
怨嗟の笛で呼ばれて近くに来た時に、初めて黒い煙状になって人間に影響を及ぼすようになるのだそうだ。

「怨念が深ければ……。そう、この未開地で縁起の悪い土地や、魔の森からも集まって来るであろう！」

そういえば、昔に未開地を探索した時に、野生動物の墓場になっている場所や、水もあって日当たりも良いのに、なぜか植物が一切生えない場所などがあった。

多分、そういう場所には大量の怨念が溜まっていたのであろう。

「恨みは恨みを、利息付きで呼ぶのである！」

「絶妙な例えですね」

完全な言いがかりだとしても、クルトの俺への恨みは相当な物があるようだ。

「それで、どうしましょうか？」

「某は、魔力を他人に補充するのは苦手なのである！」

やはり、魔力補充には特別な才能が必要なようだ。

導師は、自分には使えないと断言していた。

「じゃあ、どうしましょうか？」

「簡単な事である！　某が、聖魔法を使えば良いのである！」

「えっ？　導師って、ちゃんとした聖魔法を使えたんですか？」

衝撃の事実であった。

究極の戦闘マシーンで、強力ながらもほぼ対単体用の魔法しか使えない導師が、以前に自ら苦手だと明言していた聖魔法を使うというのだから。

「いや、我が四十年と少々の人生において、僅かな期間しか聖魔法を試みた経験が無いのである！」

その時に、あまりにショボい聖光しか出なかったので、それ以上の訓練を諦めてしまったそうだ。

「あのようぉ……。導師」

俺を含めて全員が脱力してしまい、ブランタークさんが代表して抗議の言葉を述べる。

「前に全然駄目で、今も普通に使えるかどうかが不明なうえに。聖魔法ってのは、使えても慣れるのに時間がかかるんだからよ」

元から習得度が低いのに、もし使えてもいきなり黒い巨人に通用するような聖魔法など出るはずもなく。

導師の作戦は、無謀以外の何物でもなかった。

「最悪、一時撤退が妥当だろうな」

「いや、それは駄目ですよ」

「とはいえ、ヘルマン殿よ」

犠牲者は出るかもしれないが、ここは一時撤退して再び魔力を回復させ、リベンジに臨む。

確かに、一番現実的な作戦かもしれない。

だが、バウマイスター領に出る犠牲を考えると、ヘルマン兄さんとしては反対意見を述べるしかなかった。

「某が、聖魔法を成功させれば良いのである！　バウマイスター男爵よ。アルフレッドの本を！」

「そこからなんですね……」

俺がイーナに向かって頷くと、彼女は俺の魔法の袋から師匠から

貰った本を取り出し、導師に向かって放り投げる。
それを受け取った導師は、上空に浮きながら聖魔法の項目を読み始めていた。

「なるほど、さすがはアルフレッド。実にわかり易いのである！」

「マジかよ……」

エルの突っ込みを聞かなかった事にしつつ、再び導師に視線を向けると。
彼は、上空で何か踏ん張るような動作を行っていた。

「頭の血管が切れるんじゃないか？」

エルがまた酷い事を言っていたが、俺から見ても血圧を上げているようにしか見えなかった。

「駄目そうだな」

約三十秒後、ブランタークさんが匙を投げたのと同時に、導師の状態に変化があった。
突然、導師が前に突き出していた両腕から青白い光が湧き上がり、続けて手の平から聖光で出来た矢が飛び出したのだ。

「一応、本当に聖魔法だな」

ブランタークさんは、導師が一応は聖光を放出可能な事を認めていたが、その表情には呆れに近い物が浮かんでいた。

なぜなら……。

「小さい！　挙句に遅い！」

導師の気合の入れようは相当な物であったが、その割には聖光の矢の大きさはキュウリ程度で、その速度も人が歩く速さと大差はなかった。

導師の両手の平から放出された聖光の矢は、ゆっくりとした速度のまま黒い巨人に当たり、僅かな黒い煙を浄化して消える。

正直、本当に黒い煙が消えたのかは、遠くにいる俺達には確認できなかった。

一応発動はしているので、全く効果が無いはずは無いのだが。

「導師……」

「二十年ぶりに試してみたが、以前よりは威力が上がっているのである！　好機！」

「おい……」

再び全員が脱力し、ブランタークさんが冷静に突っ込みを入れている中、導師は気にもせずに気合を入れて聖光の矢を連続して発射していた。

ところが、何発撃っても黒い巨人は気にもせずに己の回復に集中している。

導師をまるで脅威と感じていないのであろう。

完全に無視されていた。

「あの人、物凄くポジティブだよなぁ……」

エルの言う通りで、ブランタークさんからの冷たい視線など気にもせず、導師はキュウリ大の聖光を連続で発射していた。
当然命中しても、黒い巨人に目立った変化は無い。

相手の大きさに対して、導師の聖光の矢の威力が低過ぎるのだ。

「導師、魔力が勿体ねえよ」

ブランタークさんからすれば、最悪撤退するにしても導師には魔力を温存しておいて欲しいのであろう。
これ以上無駄な事はするなと、軽く釘を刺していた。

「いやしかし……。ここで、あの黒い巨人を食い止めねば……」

導師も、ヘルマン兄さんと同じ意見らしい。
ここで黒い巨人を始末しないと、バウマイスター領に被害が出ると思っているようだ。

「ヴェル、何か策はないの？」

「策ねえ……」

ルイーゼは簡単に言ってくれるが、魔法使いが魔法を習得する時には、己の想像力やセンスに大きく影響される。
ここで俺が使う方法を知らせたとて、導師に効果があるとは思えないのだ。

「ルイーゼ、魔法は個性その物だと教えただろう？」

「個性か。じゃあ、導師の個性って？」

導師の戦法を見るに、己の戦闘能力を極限まで魔法で強化して単体で戦う、究極の魔法闘士と言える。

とにかく相手を直接ぶん殴り、放出系の魔法は苦手なようで、蛇の形をした高集束弾は牽制が主目的になっている。

苦手とはいえ、あの魔力量なので威力はそこいらの中級魔法使いなど相手にもならない威力ではあったが。

それを踏まえると。

俺は次第に、そんな導師が聖光を矢にして飛ばすこと自体が間違っているような気がしてきた。

「無理に矢にして飛ばすから駄目なのか？」

「おおっ！　我が弟子ながら素晴らしい意見である！　では、早速に！」

「あの……。導師？」

遠方からボソっと呟いただけなのに、それを聞いた導師は早速に再び気合を入れ始める。

己の魔力を燃やして発生させた聖光を、その身に纏って循環させる。

多分、そんなイメージを続けているのであろう。

導師の体の周囲に、徐々に青白い炎が纏わり付き始めていた。

「何か急に凄くなったけど、物凄く変！」

ルイーゼの言う通りで、青白く光る炎は聖魔法で間違いなかったが。

炎の形で具現化させる人は、間違いなく導師だけであろう。

「うむ。どうやら、聖光を放出はしない方が威力が上がるのである！　ならば！」

己の聖魔法の特性に気が付いた導師は、体に纏わせている聖光の出力を更に上げ、そのまま巨人の体に抱き付くという無茶な攻撃を開始する。

「おい、具現化した怨念に直接触れると死ぬんだけどな……」

「というか、普通に殴れば良いのに……」

「それでも、拳に怨念が直接触れると死ぬけどな」

「……」

聖光をバリアーにしつつ、同時に体から放出する聖光で黒い巨人の体を直接焼いていく。

一番効率の良い手ではあるのだが、下手に出力が落ちて体が黒い煙に触れると即死するので、あまりお勧めはできない戦法であった。

というか、いきなり本番でやるの危険だと思うのだ。

「しかし、何であんなに攻撃的なんだろうな」

「俺は、アンデッドに抱き付く時点であり得ません」

「だよなぁ……」

「私も、さすがにそれは……」

ブランタークさんの言っている事は、俺やエリーゼには良く理解できた。

聖魔法とは、基本的にアンデッドを相手にする系統魔法である。

なので、直接ゾンビやレイスを殴ったり、果ては直接抱き付くなど考えにも入れないわけで。

だから、聖光を飛ばしたり、エリア浄化などが発達しているのだ。

そのせいで導師はその習得に苦戦し、一時は諦めてしまったようであったが。

「三人同時の聖魔法にて、地獄に落ちるが良い！」

「あの伯父様……。『悪事を悔いて天に昇り、次に生まれる時には』です……」

エリーゼからすると、導師は魔法では尊敬できる伯父なのだが。

神への信心で言うと、実はあまり褒められた存在ではないようだ。

そもそも、あの年齢で二十年以上も聖魔法を試みていない点からして、明らかに教会と関わりたくないと思っている可能性があった。

聖系統をちゃんと使える魔法使いには、教会からのアプローチが煩いからだ。

その辺も、二十年以上も習得を放置していた理由かもしれない。

「ヴェンデリン！」

「某が死んだ時に、こんなのが先輩面していると鬱陶しいのである！　地獄に落ちるのである！」

「導師って、天国に行く気があるんだ……」

「ヴェンデリィーーーン！」

また聞こえてきた、エルの突っ込みを聞かなかった事にして。

導師が、その体の周囲に放出する聖光の威力をあげると、まず抱き付いた黒い胴体の部分から、急激に黒い煙が浄化されて消えていく。

続けて、俺とエリーゼで一気に浄化魔法の出力を上げると、黒い巨人は足元から徐々に消えていってしまう。

そして、その消滅が胸部に埋め込まれたクルトのレイスにまで及んだ時、今までに聞いた事が無いような断末魔の叫び声が聞こえていた。

「ヴェンデリィーーーン！」

「ふむ。悪は、滅ぶのである！」

最後に巨人の頭部も完全に消えてしまい、これでようやく黒い煙の巨人は完全消滅したようだ。

「だが、我らの魔力も限界ではあるか……」

予想以上の苦戦に、魔法障壁を展開していたブランタークさんも含め、ルイーゼを除く魔法使い全員が魔力不足で疲労困憊の状態になっていた。

だからなのであろう。

油断もあったと思うのだが、思わぬ失敗をしてしまう事になる。

「バウマイスター男爵。あの魔道具が落ちていたのである！」

導師が、黒い巨人が立っていた場所でクルトが吹いていた魔法具のオカリナを発見していた。

見た目は完全に黒焦げであり、一度しか使えない魔道具なので、今はただの焦げたオカリナになっていたのだが。

それでも証拠にはなるはずとそれを取ろうとした瞬間、オカリナの内部に潜んでいた僅かな黒い煙の塊が突然飛び出し。

恐ろしい速度で、山脈上空に向けて飛んで行ってしまう。

方角は間違いなく王都方面であったが、今の俺達では魔力不足で追う事も侭生らない状態であった。

「導師、どうしましょうか？」

「あのような残りカスでは、出来る事などたかが知れてるのである！　教会に任せてしまえば良いのである！」

「それもそうですね」

誰のせいで俺がこんなに苦労しているのかを考えると、怨念の残りカスくらい教会に任せても構うまいと思う事にする。

そして何より、俺にはもっと大変な仕事が残されていた。

「父やアマーリエ義姉さんに、報告しないとな」

クルトが、俺の暗殺を試みて失敗して死んだ。

クルト本人には罪悪感など感じなかったが、父や特にアマーリエ姉さんや甥達には、報告するのを他人に任せたいほどの罪悪感を感じていた。

「それは、ヴェルが言わないとな。エックハルト達の家族には、俺から説明しておく」

「ヘルマン兄さん……」

「クルトに協力して、使い捨てにされて殺された。正直に言うのは、気が引けるなぁ……」

「とはいえ、暗殺未遂事件の共犯だ。無罪放免とは言えないぞ」

パウル兄さんは警備隊勤務らしく、誤魔化して無罪にするのは不可能だと断言する。

「わかってはいるんだがな」

まだ大仕事が残っていたが、とりあえずはクルトに関するアクシデントの最大の山場は、これでようやく終了となるのであった。

幕間二十三　ルックナー兄弟。

「ワシに客だと？」

「はい」

「誰だ？」

「それが……」

ヘルムート王国の王都にある、王城内の財務卿執務室において。

現在懸命に、積み重なる書類へのサインを続けているルックナー財務卿は、突然秘書から来客の訪問を告げられていた。

「いやに歯切れが悪いな。コンラート」

「実は、『あの方』でして……。まさか、ここに来るとは予想外だったと言いますか……」

ルックナー財務卿が、ハッキリと報告しないこのまだ二十代前半の若い男性秘書に非難めいた口調で追求すると、彼はしどろもどろな口調で『あの方』が来たと告げていた。

ルックナー財務卿の秘書であるコンラートはその将来を嘱望されたエリートで、将来は財務卿も夢ではないと噂される人物であった。

それほどの男が、来客の名前すら告げられないで動揺する。

となれば、『あの方』とは間違いなく、あの不肖の弟であろうと

ルックナー財務卿は思っていた。

ルックナー会計監査長は、ルックナー財務卿の実の弟である。父違いとか、母違いという事もなく。同じ両親から生まれた年子の弟で、子供の頃は仲だって悪くなかった。

ルックナー侯爵家は財務系の要職を世襲する法衣貴族で、当主は必ず一期五年は財務卿職を全うする。例外は、在任中に当主が急死してしまったとかそういう理由だけであった。

王国には他にも、財務卿を世襲可能な伯爵家やら侯爵家が四家ほど存在する。ルックナー侯爵家を入れて五家で、なるべく五家が同じくらいの期間、財務卿の職を全う出来るよう。談合に近い、水面下での交渉があったりするのだ。

これを悪と言うべきなのか、王国の治世が安定しているからと言うべきなのかはここで論じる話ではない。

ルックナー侯爵家の兄弟は子供の頃は仲が良かったのだが、大人になるにつれて弟が家を継げない事実を知り、兄と対立するようになる。

子供が食べるお菓子は分けられるが、侯爵家当主の地位と世襲可能な財務卿職は、お菓子のように分け合うわけにはいかないというわけだ。

正直なところ、そんな話など珍しくもない。

子供の頃は仲が良かったのに、大人になると憎み合う貴族の兄弟など、さほど珍しくもなかった。

成人した兄弟は、兄の方は財務系のエリートコースに。弟の方は、成人後に家を出て中級官吏からその経歴をスタートさせる。

中級からスタートなのは、せめてもの実家や兄からの援助というやつなのだが。

弟からすればその程度の支援など、当たり前というか上から目線の嫌味にしか見えず。

結果、弟は兄への憎悪を更に募らせていた。

それでも、努力に努力を重ねて法衣男爵の爵位と会計監査長の地位も手に入れている。

兄は、あまり感心しない手段を用いてでも弟がその地位を掴んだ事に驚いていたが。

弟の方は、兄が先に財務卿の地位に就いた事を知って余計に憎悪を募らせていた。

兄としては、だからと言って弟に地位を譲る気など無かったし、不可能でもあった。

それに、この件で弟に謝ったりすれば、余計に彼のプライドを傷付ける事になるのを理解している。

それに加えて、次第に弟が自分と敵対する財務系法衣貴族達と組んで嫌がらせをするようになったので、自然と敵対する他は無くなってしまったのだ。

そのような経緯のその結果、会計監査長になった弟はこの執務室

に一度も入っていなかった。
意地なのか？
暗殺を恐れてなのかは知らなかったが。

不自然ではあったが、別に会計監査長がこの執務室に来なくても政務に支障があるわけでもない。
仕事上の話は、定期的に開催される会議ですれば良いのだから。

ただ、兄としてはお互いにビジネスライクに徹しようとした結果、萎縮してしまう部下達に申し訳ない気持ちで一杯であったのだが。

「用事があるのなら通せ」

「あの……、本当に宜しいので？」

今まで意地でも訪問して来なかったのに、今になってから自分に用事があるという。
コンラートからすると、何か良からぬ事でもと考えているのであろう。

「暗殺などあり得ん。それをした時点で、あいつも終わりなのだからな。ただ、どうせ碌な用件ではあるまい。早めに聞いてしまう事にする」

「わかりました」

「ああ、それと。あのバカに出す茶などない」

「……。承知しました」

数分後、コンラートの案内でルックナー会計監査長が入室してくる。

実の弟ではあるが、もうそんな事はどうでも良かった。
なまじ血が繋がっていると面倒だなと思いながら、用件があるのなら早く言えと、ルックナー財務卿は弟を急かしていた。

「実は、さる筋から入手した情報なのですが……」

早く言えと言ったのは自分であったが、まさか挨拶も無しにとは。
ルックナー財務卿は驚きつつも、更に話をするようにと促していた。

「財務卿閣下が現在挺入れをしている、南端未開地なのですが……」

挺入れというか、あれだけの大金を投じた未開地開発なので。
誰かが仕切らないと、欲に塗れた貴族達の内輪もめで計画が頓挫する可能性があったからだ。
極論すれば、バウマイスター男爵から金だけ抜いて、あとは未開地開発の成否なんて知った事かなどという貴族も珍しくは無いからだ。

そこで、自分やエドガー軍務卿に、バウマイスター男爵の寄り親であるブライヒレーダー辺境伯などが、近隣でバカ貴族達の監視をする事になっていた。
勿論、その苦労に見合う成功報酬はいただくつもりであったが。

「卿には、関係の無い話だ」

この計画が国家予算を投入した物なら、会計監査長の出番は多い。

ところが、この計画は１００％バウマイスター男爵が出資をして行われる。

当然、出番などあるはずもなかった。

王国も補助金を出す予定ではあったが、普通にチェックだけして終了である。

そこに、ルックナー会計監査長が利権に加われる要素は一つも存在していなかった。

何かケチでも付けてきたら、それを口実に役職を解こうとまで考えていたからだ。

「確か卿には、バウマイスター男爵を亡き者にしようとした疑惑があったな」

バウマイスター男爵による古代遺跡探索の際に、冒険者ギルドに圧力をかけてガイドをわざと少なくした。

真実は、冒険者ギルドが役職持ちとはいえ、いち男爵の圧力に屈するはずもないという物であったが。

ところが、それを理解している平民達などは極少数であり、今もその噂はかなりの人数に信じられている。

しかも、その噂を流したのは、この弟が認知をしていない血の繋がった息子とは。

ルックナー財務卿は、笑いを堪えるのに懸命であった。

自分でも嫌な奴だとは思うが、今まで散々に嫌がらせをされたのだ。

自爆した弟をバカにするくらい、少しは許されるであろうと思っ

ていた。

「その疑惑は完全に誤解かと。それよりも、早めにお知らせした方が良い情報がありまして……」

公式の場では、財務卿と会計監査長である二人。
当然、その地位の高さは財務卿の方が上である。
なので、目の前の弟は自分に敬語で話しかけてくる。

裏ではボロカスに言われているのであろうが、会計監査長になるくらいの実力はあるので、その辺は弁えているようだ。
個人的には、公の席で失言でもすれば良いのにと思ってしまうのだが。

「知らせたい情報？」

「はい。その情報とは、バウマイスター男爵の暗殺計画なのですが」

「ほう、卿もついに決断したのか」

弟から告げられた、未開地開発計画の要であるバウマイスター男爵暗殺計画に。
自分で、自分のバウマイスイター男爵暗殺計画を告げに来たのかと嫌味な口調で尋ねる兄。

我ながら、歪んだ兄弟関係ではあるなとルックナー財務卿は思っていた。

「ご冗談を。とあるフリーの冒険者が、バウマイスター騎士爵領の次期当主に古代の魔道具を融通したそうで」

「なるほど」

『どうせ、その冒険者も魔道具もお前が準備したんだろう？』という言葉を、ルックナー財務卿は喉の奥に呑み込んでいた。

証拠もないのに罪を問えば、それはルックナー財務卿の失態になってしまうからだ。

「そのような重要な情報を、卿がどうやって手に入れたのかは知らぬが……」

ルックナー財務卿は、明らかに自作自演でバカらしい茶番なのは理解している。

だが、貴族が他の貴族に情報源などを聞いても笑われてしまうだけ。

それこそが栄達や飯のタネなのに、無料でペラペラと喋るはずがないのは常識以前の事であった。

「この時期にそれを通報しに来て、卿は何を考えているのかね？」

貴族の子弟同士が殺し合う。

ある程度は発生する事案であったが、その対応には差があった。

上手く病死や事故死で切り抜けて、問題にもならない事案。

疑われても、証拠が挙がらずに処罰されない事案に。

見事にバレて、厳罰を受ける事案と。

どの結果になるのかは、これは様々な条件が加味されて素人では判別が難しい。

だが、今回のケースでは。
王国側が、犯人の処罰を手ぐすねを引いて待っていたケースになっている。
当然、犯人には厳しい処分が下るはずだ。
「（向こうが暴発してくれるのなら、処罰も容易いか。しかし……）」
間違いなく目の前の男は、バウマイスター家の長男に暗殺に使う魔道具を融通している。
そして、バウマイスター領との移動や連絡の困難さを考えれば、既に長男がそれを使用している可能性もあった。
もし狙われたバウマイスター男爵に何かがあれば、この男の身も無事に済むはずがない。
なのに、この男は平気な顔で恩着せがましく通報に来ている。
一体、何を考えているのかと思うのだ。
「卿は、バウマイスター男爵の身に何かがあれば……」
『お前は破滅なのだぞ』と言いかけたところで、目の前の男がそれを遮るように話を始める。
「私とて、王国に仕える貴族なのです。此度の、南端未開地開発を阻害するような真似はいたしませんとも」
「白々しいと言っても良いかな？」
「過去には、バウマイスター男爵殿と多少の諍いはあったものの、

私はそれを好ましいとは思っていませんので」

今のままだと、間違いなくこの男とその派閥に属している貴族達に未開地開発の利益は入ってこない。

出来るかどうかは別にして、関係修復を急ぐのは貴族として当然とも言えた。

「（ワシの目が黒い内は、絶対に認めないがな）それで、卿は何をしたいのだ？」

「そのフリーの冒険者は、長男の依頼を受けて裏町の盗品市でその魔道具を手に入れたようですな」

「まあ、そんなところであろうな」

遺跡から出土した魔道具は、基本的には発見した冒険者の物となる。

冷蔵庫やコンロなどの便利なだけの物はそれで良いのだが、中には厄介な機能を備えていたり。

場合によっては、呪われていて触るだけで大変な事になる危険な物もあった。

なので、そういう物は冒険者ギルドによって強制的に買い取られ、王国が精査して物によっては厳重管理される。

ただ、中にはそれを逃れて裏市場へと流れる品もあったのだ。

冒険者が自己申告をしないで、その危険な魔道具を盗品専用の市場に流し、それを貴族が裏から手に入れて何か謀略や犯罪に絡んだ事に使う。

いくら取り締まりを強化しても、ゼロに出来ないのは仕方が無い事なのかもしれない。

「そのフリーの冒険者は、その魔道具が『竜使いの笛』だと聞いて購入したようです」

「貴様……」

『竜使いの笛』とは、遺跡から出土する魔道具の中でも危険順位が高い品となっている。

この笛を吹くと、竜にしか聞こえないその音が広範囲に広がり。

それを聞いた竜が激怒して集まって来る、半ば呪いのかかった魔道具であったからだ。

しかも、その『竜使いの笛』を吹いている人間を竜は襲わない。

その代わりに、呼ばれた竜は死ぬまでその周辺を破壊して殺し尽くす。

さすがに、属性竜のような大物には効果はなかったが、飛竜やワイバーンには絶大な効果があるそうだ。

「あの領に隣接する山脈は、飛竜の住みかなのだがな。卿はその通報をわざと遅らせて、領民達を根絶やしにするのかね？」

だとしたら、この目の前の男は死刑にされても当然の罪を犯した事になる。

ただ同時に、そんなヘマはしないのであろうなとも思っていた。

「本当に、『竜使いの笛』であったらという話ですよ。あの裏市場の、胡散臭い連中が勧める魔道具ですので」

相当な目利きでないと、基本犯罪者が売買する物なので騙されてガラクタを掴まされてしまうからだ。
勿論、それで詐欺だなどと御上に訴えても、『そこで買い物をしたお前が何を抜かす！』という結論になってしまう。
裏市場でお得な買い物をするには、相当な度胸と目利きとコネが必要であった。

「それで、その魔道具は何だと言うのかね？　ハエでも呼ぶ笛なのか？」

「いえ、『怨嗟の笛』だそうで」

「お前は……」

ルックナー財務卿は、思わず目の前の男に暴言を吐きそうになってしまう。
『怨嗟の笛』とは、同じく古代に作られた『竜使いの笛』など比べ物にならない呪われた魔道具であった。
当然、出土した品は全て王国が管理している事になっている。
なぜなら、『怨嗟の笛』とは己の身を犠牲にした仇討ち専用の魔道具だからだ。

「（あの長男も、哀れだな……）」

この弟からの、今までの話で事情を推理すると。
これまでの弟は、自分とバウマイスター男爵に対抗するために、

跡取りの長男に手紙で情報を送ったりして縁を結ぼうとしていた。

ところが、その肝心の長男は思った以上に使えない男らしい。

こう言っては悪いが田舎者の僻みという奴で、中央の貴族など全て業突く張りのロクデナシだと思っているらしく、なかなか協調体制に至らないのだそうだ。

あんな僻地にいるので、余所者を受け入れ難いのであろう。

せめて、表面だけでも愛想良くするのが貴族でもあるのに、その点でもこの長男は、バウマイスター男爵に劣る男なのだと思ってしまう。

王国としても、長男が男爵くらいで我慢して本家の相続をバウマイスター男爵に譲るくらいの度量があれば、別に無理に引き摺り下ろす算段など考えていなかった。

ところが、情報を集めれば集めるほど、長男の狭量ぶりが目立ってくる。

こうなると、もう排除するしか選択肢はない。

社会的に生かしておくと、長男本人がこれから長きに渡りバウマイスター男爵の足を引っ張る可能性もあるが。

この目の前の居る、バカな弟のような存在を誘発してしまうからだ。

長男を神輿にして、未開地開発の利権やバウマイスター本家の相続問題に関わって利益を掠め取ろうとする。

正直なところ、そんな頻発するバカの相手をする労力が惜しい。

ならば、可哀想ではあるが長男には退場して貰う方針になってい

た。

当然、陛下もその線で合意している。

話を戻すが、ここで厄介なのはこの目の前のバカな弟がこちらの真意に気が付いているという点にある。

だからこそ、あの長男を最後に有効活用する策を実行したのであろう。

まず最初に、長男がバウマイスター男爵を暗殺しようとしている事実を通報してきた。

明らかに共犯関係にあるか、この弟の方が親切顔で長男に『怨嗟の笛』を提供したのであろう。

した事を考えるととんでもない悪党なわけだが、結果的にはこちらの裏の意図を読んで動いているとも言える。

三ヶ月以上と、予想以上に挑発に耐えて自重していたので、この弟が暴発を手助けしたとも考えられるからだ。

「しかし、『怨嗟の笛』では万が一の可能性がないか？」

「あの僻地でですか？」

弟は、こちらを見て嘲笑するかのような笑みを浮かべていた。

「『怨嗟の笛』は、人が大量に住まう場所でないと効果が薄い。そういう事です」

通報を遅らせたのも、万が一の可能性すらないと思っているからで。

あとは、そのフリーの冒険者とやらは使える人間なので使い捨てにしないという事なのであろう。

これから裏市場の捜査をしたとしても、『怨嗟の笛』の出所や、ましてやそれを購入したフリーの冒険者が誰かなどわからないはず。この弟からの情報で探すにしても、こいつが嘘をつけば終わりなのだから。

最悪、替え玉を準備されて死体となって発見という結末すらあり得た。

「あの領に篭る怨念では、バウマイスター男爵か婚約者殿の浄化一発で消滅かと」

確かに、この弟の言う通りであった。

『怨嗟の笛』とは、笛を吹いた人物に周囲の怨念を呼び寄せてから集め、その存在を高度なアンデッドにして仇に復讐を果たさせるアイテムであった。

集める怨念とは、説明が難しいが悪霊とかそういう物ではない。例えば、仕事をしていて上司から説教を浮け、その事でイラっと来たり、この野郎と思ったりする。

この時の負の感情などは、その場に堆積する。

だが、その程度の怨念では、その周辺にある霊的な存在などに変化は起こらない。

さすがに殺人などで発生した怨念は、被害者の霊をその場に留まらせる効果があったが。

そして『怨嗟の笛』であるが、これは笛の音が聞こえる範囲内に

ある怨念を、笛を吹いている人間に集める機能を持っていた。
笛の音も、魔道具なので想像以上の広範囲に広がるわけで。
一箇所では微量の怨念でも、数が集まればと膨大な量になるという仕組みだ。

そして集まった怨念は、笛を吹いた人間の命を奪い、その存在を強力なアンデッドにしてしまう。
少量の怨念では人間に害を及ぼさないが、大量ならばそういう効果もあるというわけだ。

「あの長男は、バウマイスター男爵の暗殺を目論んだ。ですが、罪を裁く前に死なれると困る。私もそう考えたのですが、如何せん私の情報網に引っかかるのが遅かった」

そのため、『怨嗟の笛』を持ったフリーの冒険者は、もうとっくに長男と接触しているはずであろうと弟は残念そうに語っていた。

その嘘の白々しさと、本当に心から残念そうな表情をする演技力と。
貴族らしいと言われればそうなのだが、今回に限っては腹が立つだけであった。

「間に合わなくて残念です」

「（良く言う。呆れて何も言えん）」

というか、長男には死んで貰わないと困るのであろう。
彼が生きたまま捕まり、『怨嗟の笛』の入手先を話せば全ては終わりなのだから。

「（さて、どうした物か……）」

この弟は、あの長男を陥れてから切り捨てた。

個人的には同罪で処分したいところであったが、長男の処分に手を貸したという見方も出来る。

勿論、善悪だけで判断すると最悪な男なのだが、それだけで判断できないのも政治や貴族の世界だ。

「（どうせ、ここに話に来た時点で自分が関わった証拠は消しているのは確実か……）」

証拠が無ければ、中央で役職についている貴族の処罰など不可能だ。

ルックナー財務卿は、この件での処分は難しいであろうという結論に達する。

一応痕跡の調査は行うが、この弟が証拠を残している可能性は薄いだろうと考えていた。

「情報の提供には感謝する。だが、バウマイスター男爵に何かがあれば、わかっておろうな？」

確実に潰す。

証拠など無くても、陛下も、エドガー軍務卿も、他の閣僚も、自分などは言うまでもないと。

ルックナー財務卿は、人を殺さんばかりの視線で目の前の弟を睨みつける。

「それと、例の分け前の事であるが……」

公に未開地開発の利権とは言えないので、この表現になっていた。
この弟は、それを得るためにあの長男を切り捨てた。
一番気になっているであろうから、教えてやろうと思ったわけだ。

「バウマイスター男爵が決める事であろうな。ワシからは、何とも言えん」

勿論、建て前で嘘である。
予算だけ渡して丸投げなので、ルックナー財務卿やブライヒレーダー辺境伯に権限が無いはずがない。
だが、バウマイスター男爵側の責任者である、甥でもあるローデリヒが一セントとて許すはずもない。

バウマイスター男爵本人も嫌がるはずなので、まず不可能という回答しか出て来ないのだ。
こうなると、もう自業自得としか言いようがなかった。

「なるほど。確かに、その問題はありますな」

「（何がその問題だ！）せっかく虎口を間逃れたのだ。余計な欲をかくべきではないと思うが……」

多分、捜査をしてもバウマイスター男爵暗殺計画でこの弟に罪を与える事は難しいはず。
証拠が見付かる可能性が低いからだ。

悔しいが、今回は仕方が無い。
だが、こいつらに利権を分けるのだけはあり得ないとルックナー財務卿は思っていた。

罪から逃れられたのに、まだ欲をかくのかと思ってしまうからだ。

「感情論的に、私達への分け前は認められないと？」

「いい加減にしたらどうだ？」

『お前など、つま先一つで崖に立って生き残っているに過ぎないのだぞ』と、ルックナー財務卿は心の中で悪態をついていた。

「ただ、貴族としてのコネがあれば可能だと私は思うのです」

「はあ？　コネ？」

コネどころか、嫌われている相手から利権を得るなど。

そんな夢物語を、一体どこから思い付くのか？

ルックナー財務卿は、ただ弟の能天気さに呆れるばかりであった。

「コネならありますがね。何しろ、ローデリヒは私の息子なのですから」

「……（しまった！）」

ルックナー財務卿は、己の迂闊さを呪い始めていた。

バウマイスター男爵家の家宰ローデリヒは、この弟と血を分けた息子である。

今までは、父である弟が息子であるローデリヒを認知していなかったので、二人は王国の貴族法においては他人の関係にあった。

ところが今になって、急に弟はローデリヒを息子として認知すると宣言した。

ローデリヒからすれば、『ふざけるな！』と言いたくなるのであろうが、ここが王国が二千年も前に制定した貴族法の盲点とも言える。

当主の力が著しく強いせいで、親である当主が子供を認知するしないは自由でも、子供の側から当主である親と縁を切るのは不可能。

というか、そもそも想定していないのが現状であったからだ。

「お前……。ローデリヒに……」

貴族なので、利のために捨てていた子すら利用する。

自分も貴族なので否定は出来ないが、さすがに人間としては酷過ぎるとルックナー財務卿は思ってしまう。

「（対策が無いとも言わぬが……）」

親と縁を切りたい貴族の子は当然いるが、彼らには親との接触を断ち、自分の死後に自然と平民に転落する道しか残されていなかった。

しかし、今のローデリヒにはバウマイスター男爵家の、いや間違いなく伯爵家にまで陞爵する家の家宰として働き続けなければいけない。

この弟と連絡を絶つなど、事実上不可能に近いのだ。

「（ローデリヒが、完全に拒絶してくれれば……）」

だが、それは甘い考えであった。

詳しい事情を知れば、人は弟を非難してローデリヒに同情的な視線を向ける。
ところが、世の中はそれだけで全てが決まるわけもない。

もしローデリヒが、父親を拒絶して意地でも利権を分けないと。
途端に、周囲から彼やその主人であるバウマイスター男爵に非難が集中するのだ。

『利権のために、今さら捨てた子供を認知とか。ルックナー男爵は人の道から反れている』という本音を隠し。
『長年不仲であった親子が和解をして目出度い』という建て前の元で、それを拒絶する主従を狭量だと言って非難する。

非難を世間に広めるのは、間違いなくルックナー男爵の派閥に属する貴族達と、ただ単に利権が得られない貴族達のはずであった。

「（この男は、そういう連中を纏めて大規模に圧力をかけてくるはず）」

この厭らしい策に、完璧な対策など存在しない。
悔しいが、ある程度の利権を認めてやるしかないのだ。
早めに和解しておけば、さすがに派閥に属さない連中を纏めて扇動したりはしない。

そこまで騒ぎを大きくしてこちらの怒りを買い、本格的な争いによって被害が増える前に、自分の派閥に属する連中だけ口を潤せる分を掠め取る。

言い方は悪いが、その辺の駆け引きはマフィアに似ている部分がある。

和解で約束する利権も、ショバ代その物とも言えなくはなかった。

「少し、待て」

「わかりました」

このやり取りを最後に、弟は何も言わずに執務室を出ていく。

利権の分配なので、ルックナー財務卿が勝手に決めるわけにもいかず、他の貴族達にも諮る必要があるのを向こうも知っているからだ。

「（あの腐れ野郎が！）」

もう実の弟だとは、欠片も思わない。

ただの政敵として、自分が死ぬまでに確実に社会的に葬り去ってやる。

ルックナー財務卿は心の中で、弟を口汚く罵りながら決意する。

「ところで、バウマイスター男爵殿の無事の確認ですが……」

「そちらも、ブライヒブルクに緊急連絡だな……」

秘書であるコンラートの指摘に、ルックナー財務卿は了承はしつつもこの場から逃げ出したくなってしまう。

実の弟のせいで、ブライヒレーダー辺境伯からも、他の閣僚達からも嫌味を言われるのは確実であったからだ。

「あの野郎、急死でもすれば良いのに」

「……」

コンラートは、自分の上司が呟いた貴族らしからぬ言葉を聞かなかった事にし、今日の予定の変更作業にとりかかる。

ルックナー財務卿の憂鬱な一日は、まだ始まったばかりであった。

「ふふふっ、大成功であったな」

「左様ですな、父上」

実の兄であるルックナー財務卿との面談を終えた弟は、その日の夜に自分の家族や同じ派閥に属する者達を呼んでパーティーを開いていた。

参加者は、自分の正妻に、跡取り息子と娘が一人ずつ。

あとは財務系の仕事を生業とする、反主流派に属する準男爵や騎士爵を持つ法衣貴族が十二名ほど。

彼らも家族や主だった家臣などを連れて来ていて、自分の家臣達は会場の警備を担当し、屋敷で働くメイドや使用人達は給仕に大忙しであった。

「あのバウマイスター家の長男は、死んだようですな」

「そういう魔道具だからな」

『竜使いの笛』だと嘘をついて、『怨嗟の笛』でアンデッドにしてバウマイスター男爵に始末させる。
向こうとて、あの長男には暴発して欲しいと願っていたのだし、むしろこちらは彼らに協力したとも言えるのだ。

「問題は、あの冒険者ですか？」

「アレならば、始末する予定だ」

現在、数名の腕の立つ家臣達を山脈の途中に配置していたので、依頼を終えて山道を進んでくるフリーの冒険者は始末されるはずであった。

「あんな高地の山道だ。負傷でもしたら生き残れまいて」

そして、沢山いる野性動物に始末される。
多少の残骸が残ったところで、死人には口無しなので証拠にはならないはずだ。

「あの者は、父上が重用していたのでは？」

「便利な駒ではあったよ。口も堅いのでな。ただ、あの程度の冒険者、代わりなどいくらでもいるからな」

冒険者本人は、依頼者の秘密などを知れる立場にいるせいもあり。
自分が、他の冒険者とは違うと思っていたようであったが。

「所詮は、吹き溜まりの中でマシな部類の人間であったというくらい。そもそも、冒険者とは魔物を狩ってナンボの商売だ。あんなカスは、チンピラに毛が生えた程度の存在なのさ」

「それは、あの長男もですか？」

「アレは、もっとバカだ。いくら弟が魔法の才能に長けているとはいえ、まだ十五～六歳の若造だぞ。心の中で舌を出して頭を下げれば大儲けなのに、それが出来ない時点でバカでしかない」

似た物親子は、メイドからワイングラスを受け取って話を続ける。

「所詮は田舎者というわけだ。お山の大将でないと我慢できない。なら努力をすれば良いのに、それも出来ない。付ける薬が無いとはあのバカを指すのだ」

「だから、利用して捨てたと」

「あのバカにでも利用価値があったのだ。むしろ、感謝して欲しいところだ」

パーティー会場では、皆が明るい表情で談笑し、料理や酒を楽しんでいた。

全く縁が無いと思っていた未開地開発で、自分達のボスが幾ばくかの利権を、犬猿の仲である兄から確約の言質を取った。

元々反主流派で、ボスであるルックナー男爵の才覚で何とか維持している派閥なので。

久々に実入りの良さそうな話に、全員が気を良くしていたのだ。

「しかし、あの下女の子供を認知するとは」

「認知はしても遺産など一セントも渡さないし、爵位の継承もあり

得ない。だが、ローデリヒと我らに血縁がある以上は、何かしらの便宜が必要となる。いくらローデリヒが拒否したくても、それが貴族の世界という物だ」

父であるルックナー男爵が温情で、庶子であった次男ローデリヒを認知した。

貴族の世界では、いくらルックナー男爵の普段の評判がアレでも、その決断を褒めないわけにはいかない。

それほど、貴族家の当主とは家族に対して強力な権限を持っているのだ。

「逆に、あの下女の子供からは親子の縁は切れない。現状で、あの下女の子供が未開地開発で代官を任される以上は、逃げてこちらと接触を断つわけにもいかず。バウマイスター男爵も、渋々ながら認めるしかないと」

「また一から、代官を今の時点で探しても。どいつもこいつも誰かの紐付きで、バウマイスター男爵も頭を抱えるだろうよ」

それに、ローデリヒは使える種類の人間である。

そう簡単に手放したくはないと、バウマイスター男爵も思うであろう。

「相変わらず、悪辣ですな」

「こんな、上に大物貴族が詰っている世界だ。バウマイスター男爵のように強力な魔法が使えるわけでもなし、人と違う事をしないとな」

でなければ、いくら現財務卿の弟でも派閥など作れるはずもない。
悪辣でも、生き残れて派閥が大きく出来れば結構。

そういう風に感じていたのだ。

「さて、そろそろ皆に挨拶を……」

「きゃぁーーー！」

「何者だ！」

ルックナー男爵が、パーティーに参加している面々に挨拶をしようとしたその時。
パーティー会場の窓際にいた、準男爵夫人が悲鳴をあげる。

全員がその方向に視線を向けると、窓の外一杯に黒い煙のような物で構成された巨大な顔が映し出されていた。
その目は赤く光っており、更に強く光った瞬間。
パーティー会場の窓が破られ、黒い煙の顔は中に入って来る。
そしてそれと同時に、会場中をその黒い煙が覆い始めていた。

「化け物！」

「いきなり何奴！」

不気味な物の侵入に反応し、家臣や警備の兵士達が剣を抜いて斬りかかるが、相手は煙みたいな物なので全くダメージを与えられない。
逆に、その体を黒い煙で包まれ、十数秒ほどで糸の切れたマリオネットのように倒れてしまう。

ルックナー男爵が良く見ると、倒れた家臣達は絶命しており。
その体の色は、土気色に変色していた。

「ひっ！」

更に、悪い事は続く。
パーティー会場中に漂っていた黒い煙は、今度は家族や他の貴族達など。
自分を除く全ての参加者達を包み込み、それら全ての命を奪っていた。

「ひぃーーーっ！」

僅か一分ほどで、パーティー会場に居た五十名以上の参加者が一瞬の内に絶命する。
あまりの恐怖に転がるように逃げようとしたルックナー男爵であったが、慌てていた彼は何かに躓いてしまう。
良く見ると、苦悶の表情のまま絶命した自分の跡取り息子であった。

「一体、ワシに何の恨みが！」

「ヴェンデリン！　ルックナーダンシャク！　コロス！」

「お前、もしかして……」

未開地で怨嗟の笛を使わせて始末したはずの、バウマイスター家の長男の怨霊なのではないのかと。

「しかし、あいつはワシの顔など知らないはず……」

更に言うと、連絡速度などを考えるとまだ長男が怨嗟の笛を使ってから二日ほどしか経っていないはず。

それが、まずあのバウマイスター男爵に、その婚約者であるホーエンハイム家の聖女、ブライヒレーダー辺境伯のお抱え魔法使いと。

これほどの面子と戦って生き残り、この王都まで飛んで来て顔すら知らない自分の屋敷を探り当てたのだ。

これほどの恐怖を、ルックナー男爵は今までに感じた事はなかった。

「オマエモ、シネェーーー！」

黒い煙で殺されるのかと思ったルックナー男爵であったが、黒い煙を操る悪霊は何もして来なかった。

不思議に思い、もしかして助かるのではないかと思い始めた彼に、新たな絶望が襲う。

「ニクゥーーー！」

「シンセンナニクゥーーー！」

先の殺された、他の貴族達や、使用人達や、家族のゾンビが一斉に起き上がり、一斉に自分目がけて襲い掛かってきたのだ。

「そんな！　こんな非常識な事があって良いのかぁーーー！」

その言葉を最後に、ルックナー男爵の意識は永遠に閉ざされる事

となる。

「はあ？　大量の貴族や使用人達がゾンビに？」

「ええ。突然、ルックナー男爵邸に謎の黒い煙が発生し、それに触れた者達が全員だそうです」

さて、ブライヒレーダー辺境伯やエドガー軍務卿などに、あの弟の分の利権をどう認めさせるかで悩んでいたルックナー財務卿の元に、突然その弟の訃報が入ってくる。

愚物とはいえ、あの長男を犠牲と踏み台にし。
今までずっと放置していた庶子を認知するという。
その方法も無いとは言わないが、周囲が引くほどの手まで使ってまで縁を作り、強引に利権に割り込む策が成功したので。
その成功を祝し、子分達を集めてパーティーをしていた時にこの惨劇に見舞われたらしい。

警備隊に属する知り合いの騎士から報告を受けたルックナー財務卿は、急ぎ現場へと直行する。
惨劇の舞台となったパーティー会場では、黒焦げになった五十体以上の死体の身元確認が警備隊員によって行われ。
先に駆け付けた聖職者や魔法使い達と共に、ホーエンハイム枢機卿の姿も確認されていた。

「ホーエンハイム枢機卿」

「卿の弟ならば、あそこに居るぞ」

不機嫌そうな表情を崩しもしないホーエンハイム枢機卿は、ルックナー財務卿に自分の弟の死体が置かれている場所を顎で指差していた。

そこに視線を向けると、ほぼ骨しか残っていない死体が一体倒れている。

どうやら、五十体以上ものゾンビに肉を全て食われてしまったようだ。

思わず、先ほど食べた夕食を吐きそうになってしまう。

「これほどの人数を殺したアンデッドとは？」

「ワシは、孫娘とアームストロング導師から通報を受けていてな」

二日ほど前の、未開地におけるバウマイスター家長男によるバウマイスター男爵暗殺未遂事件の結末と。

王都方面に逃げてしまった怨念の残りカスの存在。

何も出来ないとは思うが、万が一の事でもあるので注意して欲しいと。

ブライヒレーダー辺境伯が雇っている通信用の魔法使いから、緊急で連絡が入ったそうだ。

「なので、高位の浄化魔法を使える神官を複数名待機させていたのだ。エドガー軍務卿も、パウル殿から通報を受けていてな。念のために、同じく強力な火系統の魔法が使える魔法使いを数名待機させていた」

その甲斐もあり、被害はパーティーに参加していた人達以外には一人も出ていなかった。

膨れ上がるアンデッドの存在を探知した神官が会場に駆け込み、ゾンビ達に生きたまま食われているルックナー男爵を見て高笑いをしていた黒い煙の塊を一瞬にして浄化。

続けて飛び込んで来た数名の魔法使い達と共に、ゾンビを一体残らず焼き払ったとの話であった。

「そんな……。私には何の報告も……」

「出来ると思うかね？　この惨劇の責任の一端には、被害者でもある卿の弟も入っていると思うのだがね」

一端どころか、主犯と言われても否定は出来ないのはルックナー財務卿には痛いほどわかっていた。

「それは、最もですが……」

「卿の弟のせいで、ワシの孫娘とその婚約者であるバウマイスター男爵が死に掛けたのだがな。それをあやふやにして処分もせず、向こうの奇手に怯えて利権を認めろだと？　卿は、自分だけ手を汚さずに濡れ手に粟を狙っているのかね？」

「いえ、そんな事は……」

自分は閣僚で侯爵でもあったが、ホーエンハイム枢機卿は子爵ながらも教会の枢機卿である。

しかも、ミスをしてるのは自分なので何も言い返せず、ただ恐縮するばかりであった。

「まあ、未開地の開発には財務卿である卿の協力も必要なので、これ以上は何も言わないが。それなりの誠意が必要であるとワシは思うのだよ」

そこまで言うと、ホーエンハイム枢機卿はエドガー軍務卿の命で駆け付けた魔法使い達にお礼を言い、神官達に念入りに屋敷の浄化するようにと命じてから帰路についていた。

そしてその後ろ姿を、ルックナー財務卿は肩を落としながら見送るのであった。

オマケ二話　筋肉な臨時司祭様。

「大丈夫か？　テオ？」

「ああ、大丈夫……じゃないな」

俺の名前は、テオ。
バウマイスター領に住む、今年で二十一歳になる農民だ。
長男なので実家を継ぐ予定であり、三年前に結婚して去年には長男も生まれている。

ここ最近、領内ではクルト様とヴェンデリン様のどちらが次の領主に相応しいか議論が活発になっているけど。
俺から言わせて貰えば、そんな事は偉い人が決めるからなるようにしかならないと思っている。

ただ、ヴェンデリン様が未開地を開拓して田んぼを広げていたし、この前はうちの畑を広げて農作業がし易いように区画整理までしてくれた。

それを考慮すると、まあ勝負はあったんだろうなと。

俺はただの農民だから、どちらが新しい領主様でも日々の生活で忙しいだけなんだけど。

と言っておくのが、庶民の知恵だと思うんだ。

そんなわけで、俺は今日も農作業に忙しい。
あと、俺はさほど体格に恵まれているわけではないが、逆に体が細くて軽いので、森で木になった果物などを取るのが得意であった。

農作業終了後に、近所の人達と森にアケビを取りに行ったんだけど、木登りが得意なはずの俺が思わぬミスをしてしまう。
気が抜けていたのか？
手を滑らせて木から落ちてしまったんだ。

「テオ、右手が折れてないか？」

すぐに、隣に住むクラウドの爺さんが添え木をして布を巻いてくれる。
骨が折れたら、なるべく真っ直ぐにしてから添え木で固定して布を巻く。

昔から、そういう事になっているそうだ。

本当は、治療院に行くか、治癒魔法が使える神官様の所に行くべきなんだろうけど。
生憎とここには、そんな便利な物や人は存在していない。

司祭のマイスター様は良い人なんだけど、治癒魔法は使えないんだよな。
ただ、薬草学には長けているとかで、病気とかなら薬を処方してくれるんだけど。

「骨折は痛いなぁ。嫁に迷惑をかけるし」

「大丈夫だ。今は、エリーゼ様がいるから」

「そう言えばそうだったな」

クラウドの爺さんは、ここ最近腰痛に悩まされていた。

だが、同じく腰を痛めて休養中のマイスター様の代理で司祭をしているエリーゼ様が治癒魔法で治してくれたそうだ。

『腰痛は治るし、エリーゼ様は綺麗だし、治癒魔法をかけてくれる時に良い匂いがするんだよなぁ』

クラウドの爺さんは、エリーゼ様から治療を受けた時に様子を煌々とした表情で語り、後で奥さんにシバかれていた。

『あと、あの胸がなぁ。一回で良いから触ってみたい』

多分、付け加えたその一言が致命傷であったのだと思う。

というか、そういう邪な発言や感情のせいでエリーゼ様が治療をしてくれなくなったら、間違い無くクラウドの爺さんは村八分だと思うんだけど。

「とにかく、その手では何も出来まい。エリーゼ様に治して貰って来い」

「わかった」

俺は極めて冷静に、このままだと明日からの農作業に支障を来たすからという大義の元。

内心では、心ウキウキで教会へと急いでいた。

それは、エリーゼ様はヴェンデリン様の婚約者なので、そういう邪な気持ちや態度は絶対に表に出してはいけない。

だが、あれほどの美人に治療して貰えるのだ。

男なら、喜ばずにはいられないであろう。

「（しかし、ヴェンデリン様の奥様達は……）」

エリーゼ様は、もう言うまでもない。

あれほどの美人、バウマイスター領ではそうお目にかかれるものではなかった。

側室候補だというルイーゼ様も、容姿は幼かったが可愛らしいし。

イーナ様も、ああいう女性に怒られるとゾクゾクするかもしれないなどと思ったりもしたのだ。

ただ、クラウドの爺さんみたいに余計な事を口にして、嫁にシバかれるようなヘマはしていなかったけど。

「（しかし、治療が楽しみだなんて。おかしな感覚ではあるな）」

教会の入り口近くまで来ると、今日は珍しく誰も先客が並んでいなかった。

ここ暫く、エリーゼ様が懸命に治療をしていたので、患者が減ったのであろう。

「（とにかく、まずはエリーゼ様のご尊顔を……）すいません！」

内心のワクワク感を抑えながら、教会の扉を開ける俺であったが、

ここで予想外の出来事が発生する。

なぜなら、そこにはまるで女神のように美しいシスター姿のエリーゼ様ではなく。

いかにも急に誂えたかのような、いや司祭服が小さくて筋肉の塊なのが丸わかりの。

厳つく、大きい中年男性が待ち構えていたのだから。

しかし、この人は本当に司祭なのであろうか？

多分、マフィアのボスだと言われても納得するほどの威圧感を持つ人物であった。

いや、そのマフィアのボスすら裸足で逃げ出すかもしれない。

「おおっ、迷える子羊よ！　某に何の用事かな？」

迷える子羊というか、どう見ても今の俺は迷える獲物にしか見えなかった。

というか、あの綺麗で美しいエリーゼ様は何処に行ったのであろうか？

なぜ、今にも殺されそうな印象しか受けない、筋肉の巨人が俺に声をかけているのであろうか？

どうやら、この世の中には神にでもどうにもならない出来事が多数存在しているようだ。

「あの……」

つい言葉を詰らせてしまう。
だが、確かに俺は腕を骨折したが、別に今日急いで治療をする必要も無いはず。
明日の朝一番に来れば、またエリーゼ様が女神のような微笑を見せてくれる可能性もあったのだから。
いや、絶対にそうなのだから。

「おおっ！　腕を骨折したのであるな！　某の出番である！」

「あの司祭様は、治癒の魔法を使えますので？」

本当ならば、そんな事を聞くのは失礼に当たる。
だが、今の俺はこの筋肉巨人に治療されないように懸命であったのだ。

「然り！　昨日、突然覚えたのである！　それと、某は司祭ではないので緊張する事は無いぞ！」

昨日、ヴェンデリン様が未開地に視察に出かけて、そこで何かがあったらしいのだが。
後で正式に発表するとヘルマン様が仰られて、今は情況が不明であった。

もしかすると、エリーゼ様がいないのはそれが原因かもしれない。

「本来であれば、助司祭の資格を持つ我が姪エリーゼが治療をするべきなのであろうが。彼女は働き詰めであったので、某が交代したのである！」

自称ではあったが、この筋肉巨人はエリーゼ様の伯父であるらしい。
何というか、親子じゃないから似ていないのか？
似ていない事を神に感謝すべきなのか？

加えて、俺はもう彼の治療対象にされていた。
もしここで逃げると、間違いなく村に何か大変な事が起こるであろう。

「司祭様、腕を骨折しまして……」

「おおっ！　それは大変であろう！　すぐに治療を開始するのである！」

そう言うなり、筋肉巨人の体からまるで炎のように青白い光が湧き上がってくる。
多分、治癒魔法の光なんだと思うけど、以前に話に聞いたエリーゼ様の物とは全然違うように感じるのだ。

「某、まだ聖治癒魔法の経験が薄いのでな！　多少の不慣れは勘弁して欲しいのである！」

「いえ、治癒魔法で治していただけるだけでも」

「そう言って貰えると、大変に助かるのである！　では……」

筋肉巨人は両手を思いっきり広げると、そのまま俺を抱き絞め始める。
そう、抱き締めるではない。
本当の意味で、抱き絞めると言った感じだ。

互いに体が触れた部分から治癒魔法が流れ、徐々に骨折部分が治っていくのがわかるが、他の部分はあまりの力に骨が軋むような感覚に襲われる。

「あの……。司祭様？」

「昨日、色々と試してみたのであるが。この方法でないと、治癒魔法が使えなかった故に。では、仕上げといこう」

「（腕は治りそうだけど、他の部分が折れるぅーーー！）」

結局、他に骨折箇所が増える前に腕の骨折は完治していた。
一箇所の骨折を治すのに、また複数箇所骨折としたら意味が無いので、力加減はしたのだと思われる。

というか、なぜそんなに強く抱き絞めるのだと思ってしまう。
普通に抱え込めば良いのではないかと。

「治って良かったな」

腕の骨折を治すのに、筋肉巨人に抱き絞められた。
最終的に怪我が治ったので良しとする事にするが、気分的にはどこか納得いかない部分があった。

あと、この筋肉巨人はエリーゼ様の伯父にして、王宮筆頭魔導師様なのだそうだ。
とてもそうは見えないし、他のみんなは俺がそんな偉い人から治療を受けられて羨ましいとも言っている。

だが、やはりどこか納得できない部分があった。
俺はやはり、エリーゼ様に優しく治療された方が良かったのだから。

「伯父様、今日はお休みをいただいてありがとうございました」

「何の、習得したばかりの聖魔法の訓練に最適であったのである！
治癒魔法も、大分上手くなった故に！」

「あの、それは抱き絞めないでも発動するのでしょうか？」

「いや、何回も試したのだが、不可能であったわ！　まあ、使えるので良しとするのである！」

そしてその日の夕方、エリーゼが代理司祭役を交代して貰った導師にお礼を述べていた。
だが、相変わらず聖魔法は相手に密着しないと効果が出ないそうで、俺は筋肉導師に抱き締められながら治療された領民達に心から同情するのであった。

第五十三話　バウマイスター男爵暗殺未遂事件始末記。

「そうですか……。クルトが……」

ルックナー男爵に唆され、怨嗟の笛という魔道具で俺達の抹殺を謀ったクルトであったが、その陰謀はギリギリのところで防がれていた。

何でも、本来の怨嗟の笛の効果では、あんなに大量の怨念を纏ったアンデッド巨人になどならないそうだ。

高濃度化した黒い煙に触れると死んでしまうので、精々で人間の倍くらいの大きさくらい。

しかも、目標にした相手を殺すと途端に力が落ちてしまう。

元々怨念とは、いくら高濃度化して具現化させてもそう長くは保たないのだそうだ。

導師の言った通りに、『時間が経てば、水のように蒸発してしまう』物なのだから。

なので、いかにクルトが深い怨念を抱え込み、いくら消費しても未開地中から懸命に怨念を集めて俺達を攻撃したかという事だ。

『その執念を、もっと他の事に使うべきだったのである！』

戦闘後、導師が漏らした感想に全員が納得してしまったのも頷けるというものだ。

『当然バウマイスター男爵にも来て貰うが、事は貴重な魔法使いにして王国法衣男爵の暗殺未遂事件なのである！　まずは父君に某が話を通した方が良かろう』

普段はアレに見えても、やはり導師は王宮筆頭魔導師なだけの事はあった。

父にどう報告した物かと悩んでいる俺に、助け舟を出してくれたのだから。

あと、確かにクルトに狙われた中で一番爵位の高い導師に報告して貰うのが、一番筋が通っているとも言えた。

『あとは、うちのお館様から王都に連絡して貰わないと』

続いてブランタークさんが、ブライヒレーダー辺境伯経由で王都に魔法通信を送った方が良いと意見していた。

大した大きさではなかったが、怨念の残りカスが王都方面に向かって逃げていたし、この事件を内密に処分するわけにもいかない。

なるべく早く、中央の有力者達に連絡しておいた方が良いであろうと。

俺も、その意見にはすぐに賛同していた。

『ええと、ルックナー財務卿にもですか？』

『止めとけ』

まさかとは思うが、実はあの兄弟は仲が悪いフリをして裏では繋がってでもいたら。

彼に通報する事は、事件を闇に葬り去るのと同義になってしまう

からだ。

クルトを唆したのがルックナー男爵である以上、ここは慎重に動いた方が良かった。

『エリーゼの嬢ちゃんの名で、ホーエンハイム枢機卿に。陛下とエドガー軍務卿には、導師の名で送るようにお館様に頼んでおく』

ブランタークさんは、通信用の魔道具をブライヒレーダー辺境伯から借りている。

おかげで、この魔力切れの最中にブライヒブルクまで瞬間移動で飛ぶ手間が省けて助かっていた。

さすがの俺も、今日はもう魔力が限界に近かったからだ。

『それに、あの人は所詮は財務閥で文官だからな』

『左様、もしあんな弟が某の兄やエドガー軍務卿にいたら』

『消されるとか？』

『病死や事故名目にはするはずであるが、とっくにこの世には居ないはずである！』

導師は、指先で自分の首を切る動作をしながら、俺の質問に答えていた。

やはり導師も、名門貴族家の出ではあるようだ。

必要とあらば、暗殺も厭わないと発言するのだから。

『怖っ！』

『少し性質の悪い貴族くらいなら、そんな事はしないのである！アレは、己が十の利益を上げるために他人の利益を三十くらい壊す男故に！』

人間の内面なので見抜けなかったクルトの深い怨念と、ルックナー弟が裏市場で手に入れたと思われる怨嗟の笛。

両者の融合によって死にかけた導師やブランタークさんからすると、気分的にルックナー財務卿に通報するのが嫌なのであろう。

『某の兄にも連絡を入れておくのである！　兄は、エドガー軍務卿とも親しい故に』

両人共、見た目はヤクザも逃げ出すほど厳つい容姿をしている。共に軍務閥であるし、タイプも似ているように思うので気が合うのであろう。

『とにかく、まずはバウマイスター卿に報告である！』

そんな話の後に、なけなしの魔力でバウマイスター家の本屋敷にまで飛んだ俺達は、すぐに父と面会をする。

こちらは、俺、ブランタークさん、導師、パウル兄さん、エリーゼの五名で。

父側は、クラウスとヘルマン兄さんも父側の人間という事で参加している。

人数を絞ったのは、事が事だけに念のためにエル達を周囲の警戒に当たらせたからだ。

無いとは思うが、盗聴でもされて外部に情報を漏らされると困る

からだ。

会見は、まず最初に導師が未開地視察の際にクルト以下五名に襲撃されてそれを返り討ちに。

つまり、クルト達五名はもうこの世には居ない事と、暗殺に使われた魔道具の説明や、それがどこからクルトにもたらされたかなどを三十分ほどかけて説明していた。

父は何も言わず、神妙な顔で聞いているだけであった。

「あのバカ者が……」

クルトが、俺を殺した後にどのような展開を持っていたのかは本人が死亡しているので不明であったが、間違いなく最悪な選択をしたわけである。

父からすれば、御家断絶の危機でもあったわけだ。

あと、間違いなく父は強制引退させられる物と思われる。

何しろ、クルトは現時点で公式な後継者であったのだから。

「引退間近の、老いぼれのクビで済むのかね？」

「王国側としては、そこまでは望んでいないのである！」

父は、この場で一番爵位と地位の高い導師に自分の処遇を聞いていた。

普通に考えれば、爵位と領地没収で連座で死罪も十分にあり得たからだ。

王国の法では、罪を犯した者の家族には連座責任を問わない事になっている。
なので、クルトの罪で父が裁かれる心配はないはずなのだが、ここまで事件が大掛かりだと王国側から共犯を疑われる事態にまでなっていたからだ。

父としては、最悪自分の首一つで済ませたいのであろう。

「主犯のクルトに、共犯の取り巻き四人。バウマイスター領内における罪人は、この五名のみである！」

やはり導師は、こういう事態になった際の陛下の意向という物を事前に伝えられていたらしい。
澱みなく、父からの問いに答えていた。

「（それに、暴走したクルトの処分は出来レースだからな）」

クルトを暴走させ、それを名目に処分を行うというのは中央にいる偉い人達の秘密の決定事項でもあった。
その暴走ぶりが予想外に大きかったにしても、あまり連座で他人に罪を被せても意味が無いわけで。

加えて、多少の罪悪感もあったのであろう。

事前の談合通りに父は引退し、バウマイスター領と騎士爵位はヘルマン兄さんへ。

領地は、未開地の大半を王国からの強制命令で俺へと分与。　表向きの理由は、跡継ぎがあれほどの事件を起したので領地の大半を没収し、バウマイスター家の本家と分家も交代したのだという。

あくまでも正式な処罰であると、周囲に認知させるための物であった。

「そうですか……。あのバカは、在地貴族とは例え王宮にでも、時には逆らうべきだと妙なプライドを捨てられなかった……」

危険な考えではあったが、俺がこの領を出るまでのバウマイスター領ではそれが通用していた。

ブライヒレーダー辺境伯家も、先代当主の愚行のせいで罪悪感があり。

この僻地が混乱しても制圧と維持にコストがかかり過ぎるので、多少の傲慢は無視していたからだ。

だが、俺の帰郷で完全に情勢は変わり。

それに気が付かないで、以前と同じように振舞ったクルトが自滅した。

父の教育のせいと言えなくもなかったが、クルトは俺が生まれた時にはもう二十歳をとっくに超えている。

親が成人した子にあれこれ言うのも、それはおかしいと思ったのかもしれない。

「開発可能な領地の糊代は残し、徐々にバウマイスター男爵からの援助で開発を進める予定である！　あの開発特区と同じであるな！

陞爵については、事件の影響もあってすぐには不可能である！

十年以上先になる予定であるが、ヘルマン殿は準男爵で、次代の跡継ぎで男爵に。このくらいが妥当であろうと、陛下も仰っていたのである！」

あと、同じく未開地から一部の領地がパウル兄さんに分与される予定であった。
こちらは、最初から準男爵領として開発を進める予定になっている。

パウル兄さんの陞爵の理由は、クルトの暗殺計画を防ぐのに多大な貢献があったからとなっていた。

「俺、ブランターク殿の魔法障壁に隠れていただけだけど」

「あの場合、死ななければ功績なのである！　パウル殿は一から準男爵領の開発なので、色々と大変になるのである！」

「それでも、新しい領地と家が残りますからね。産みの苦しみというやつでしょう」

最後に、未開地の大半が俺に与えられる事になる。
だが、まるで開発されていない人口ゼロの場所なので、開発には相当な困難が予想された。
幸いにして資金はあるので、それをローデリヒを代官にして管理させ、ブライヒレーダー辺境伯やルックナー財務卿が色々と手配をして完全に委任してしまう。

俺は、冒険者を引退するまでに少しずつ領主に必要な教育などを受け、三十代半ばくらいにある程度開発が進んだ領地に戻る予定になっていた。

「バウマイスター男爵であるが、これも陞爵して伯爵になる予定である！」

「二階級陞爵ですか？」

「バウマイスター男爵には、功績が貯まっているので何の問題も無いのである！」

王都の瑕疵物件の浄化に、決闘でいらない公爵家を一つ潰せたし、例の地下遺跡で発掘された物の評価も高く。

むしろ、今まで陞爵していなかったのがおかしいくらいなのだそうだ。

「この機会を待っていたとも言えるのである！」

父との話し合いは、これで終了していた。

随分とアッサリとしている気もするが、父とてクルトの狂気の沙汰の詳細などもう聞きたくないであろう。

こちらとしても、多少の罪悪感があるのでこれ以上話をしてもと思ってしまうのだ。

ただ、俺は一つだけ確認したい事があった。

「クラウス、満足したか？」

果たして、死んだ息子と娘の婚約者の仇討ちなのか？

それとも、純粋に次期領主となるクルトに危機感を覚えての行動なのか？

クラウスが、何らかの働きかけを行った事もクルトが暴発した原因の一つとも言えた。

だが、所詮はただの働きかけ。

それに、クラウスとクルトではクルトの方が偉かった。

自領の名主が、次期領主に何かを囁いたところで、それは外部からは助言や忠告にしか見えない。
更に、それを受け入れるも入れないも、それはクルトの判断一つなわけで。

それでクラウスを罪に問えるはずもなかった。
裁く証拠もないのだ。

「そうですね。満足とは違うと思います」

まともな返答は期待していなかったのだが、意外にもクラウスは俺からの質問に普通に答えていた。
そして、それはすなわち、自分がクルト暴発の原因でもあると認めていたのだから。

「ただ、誤解の無きように言っておきます。私はただ単純に、次期領主がクルト様では駄目だと思っていた。だから、他のご子息様の誰かに継いで貰いたかった。それだけなのです」

このまま商隊としか外部との接触がない、人口八百人程度の閉鎖的な農村ならばクルトにでも何とか統治可能であろう。

だが、現実には外部との接触や未開地の開発も始まっている。
未開地の開発はまだ俺しか行っていないが、それとて背後には王国側の意図が透けて見えるわけで。
もし隣接領地が出来て交流や交易が始まると、領主は様々な交渉事なども仕事となっていく。

果たして、それがクルトに出来るのであろうか？

クラウスとしては、クルトを次期領主として仰ぐのに不安しか感じられなかったそうだ。

「あの方は、昔からそうです。領地発展のために、せっかく優秀な弟様達が居るのだから。家臣にするなり、分家を創設して開発を命じるなりすれば良い」

ところが、クルトは基本的に小心者であった。

人を使う事が出来ず、自分よりも優秀な家臣や弟に領地支配の実権を奪われるではないかと疑心暗鬼に陥っていたそうだ。

「その癖、具体的な方針もない『未開地を何代かかけて開発し、バウマイスター家を伯爵家くらいには』です。まあ、少領の頃ならば、それでも良いのですが……」

金を貯めて、領地に篭る。

そういう少領の主は、地方では珍しくない。

領民達も、一番偉い事になっている王都の王様など見た事もないので実感がわかず、近くにいる領主様を一番偉い人だと思ってそれに従うので。

ある意味、小国の主とも言えたからだ。

「ですから、まあそういう事です」

詳しくは言わなかったが、まずは名主としてクルトに助言などをしたのであろう。

『他の兄弟を上手く使え』と。

だが、クルトが額面通りに受け取れなかった。

逆に、クラウスが弟達と結託して、自分を追い出すのではないかと。

それに呆れたクラウスは、エーリッヒ兄さんや俺に密かに次期領主になって欲しいと要請するようになる。

その気があって、次期領主を目指すのであれば領内の発展に繋がるし。

その気が無くても、その噂がクルトの耳に入れば危機感を抱いて、開発に邁進するようになるかもしれない。

だが、結果は逆の物となってしまう。

クルトは俺達を嫌い、それを見た父は爵位と領地継承の秩序を守るために兄弟達を外に出してしまった。

当然、そんな事を囁いたクラウスを父は信用できなかったのであろう。

名主としては優秀であったので切るという選択肢が取れず、過去の因縁もあり二人の間に奇妙な距離感が広がったわけだ。

「（ただ、その結果になってもな……）」

クラウスからすれば、バウマイスター領の将来的な衰退はある種の仇討ちでもあったからだ。

名主としては、バウマイスター領は発展して欲しいが。

息子の仇を狙う身としては、衰退して父やクルト達が困ればそれはそれで目的を達しているとも言える。

クラウスは以前に、自分を喋る荷駄馬以下の存在だと言っていた。

優秀な名主としての立場と、陰湿に息子の仇を狙う親の立場と。
完全に矛盾した、二つの目標のためのチグハグとした行動。
これが、クラウスという人間の正体だと俺は考えていた。
あくまでも、俺の勝手な想像かもしれなかったが。

「クラウス。貴様は、まだあの時の事を……」

「まだ？　私には、まだ昨日の事のように思えますが」

父とクラウスは、ほぼ無表情のままで見つめ合っていた。
だが、他の人達からすればまるで殴り合っているかのような光景に見えていたのだ。

「父上」

「ヴェンデリン、お前はクラウスから話を聞いていたのか？」

「はい」

今まで、俺をバウマイスター男爵として扱っていた父が、急に父親として俺に質問をしてくる。

「そうか。それで、どう思う？」

「わかりません。事実は一つでも、見る人や方向によって見え方が違う。そういう物でしょう？」

「そうだな。クラウスは、本当に真相を知りたいのか？」

「親としては当たり前だと思いますが。アルトゥル様」

二人の間に緊張が走る。

父は突然、クラウスに息子達が死んだ事件の真相を話すのだと言うのだから。

「アルトゥル様が、真実を話しているという証拠は？」

「そんな物はない。ワシとしては事実を話すつもりだが、クラウスがどう判断するかまでは責任が持てない」

「そうですか。お願いします……」

父は、なぜ事件の真相を隠していたのか？

当時から美人で有名であったレイラさんを、妾として手に入れるためであったから？

領内の統治体制を強化するために、本村落の名主の家に自分の血を入れたかったから？

どちらにしても、あまり良い話ではない。

などと思っていると、父は予想外の話をし始めていた。

「クラウス、お前は優秀な男だ。ワシなどよりも遙かにな。バウマイスター家に生まれていれば、もう少しこの領内も発展していたであろうな」

「それは……」

父が言う、クラウスが信用ならない理由。
それは、自分よりも優秀なクラウスに領内統治の実権を奪われないようにという恐怖から来ているようであった。

名主が、貴族から領内統治の実権を奪う。

所謂、バカ殿様と専横を進める奸臣という構図であったが。大貴族家では不可能でも、騎士爵家くらいだと名主でも領内の実権を奪う事も不可能ではなかった。

レイラさんを妾にしたのは、そういう事態を避ける理由もあったようだ。

「だが、それでも人の親なのだな。お前の息子であるゴードンとレイラの婚約者であったハインの仲が、もう修復不可能な状態にまでなっていた事を知らなかったのか？　あの二人、表面は仲の良い幼馴染同士を繕っていたが、実際には殺し合い寸前だったのだぞ。クラウス、お前ほどの男が本当に気が付いていなかったのか？」

父からの問いに、クラウスは沈黙したままであった。
もしかすると、色々と思い当たる節はあったのであろう。

というか、その事実は俺ばかりかヘルマン兄さんやパウル兄さんも初耳であった。

「クラウスも、義理とはいえ兄弟になる予定の息子達同士で殺し合うほど憎み合っていた。ワシも、クルトが暴発して死んだ。まさか、こんな事で似た者同士になるとはな……」

「いえ、ゴードンとハインはいつかはまた仲直りをして……」

「無い！　そんな夢みたいな未来など無いのだ！　それに、もう二人共死んでいる！」

「あの……、父上？」

俺からの問いで、父は事件の真相を話し始める。

簡単に要約すると、昔は家が隣同士であったクラウスの息子ゴードンと豪農の長男ハインは、まるで本当の兄弟のように仲が良かった。

クラウスは、ハインならば次の名主になるゴードンを十分に補佐してくれるはずだと、レイラさんの婚約者に指名する。

ところが、それが悲劇の始まりであった。

「ハインは、欲をかいた。もしかしたら、レイラの婿として次の名主の座を狙えるのではないかと」

当然、幼馴染の心境の変化にゴードンは敏感に気が付いた。

最初は上手く宥めてその野心を押さえ込もうとしたようだが、次第にハインが自分の命を狙って来る可能性があると知って、徐々に対立するようになる。

だが、それを周囲に悟られるわけにはいかない。

なぜなら、それは名主であるクラウスの疵となってしまうからだ。

両者は、表面上は今まで通りの関係を繕いつつ、内心ではお互いに激しい憎悪を募らせるようになったそうだ。

「あの、その事実は……」

「レイラですら気が付かなかった。ワシが知ったのも、偶然であろうな」

たまたまではあるが、森の中で二人が激しく言い争っているのを聞いてしまったそうだ。

初めは、いくら仲が良くてもたまには喧嘩くらいと思ったそうだが。

次第に、激しい言い争いの内容が普通の喧嘩ではない事に気が付いてしまう。

「クラウスが薄々気が付いたかどうかの事実だ。ワシが普通に気が付けるものか。事件の日の事を知りたいか？　誰にでも予想できる事だ」

父が二人を狩猟に誘ったのは、自分なりに二人の関係修復を願っての事。

岩茸取りに来ていた本村落の若者達は、本当に偶然その日に崖に来ていただけ。

しかも、あの事件の瞬間には現場に居なかった。

二人が滑落死した直後、父の呼び声で駆け付けたに過ぎなかったそうだ。

最後に、事件の真相は……。

「ワシも、直接は見ていない。大きな猪を三人で追っていて、それがあの崖っ淵に逃げた。ハインは、『俺とゴードンの二人で上手く追い込んで崖から落とします。お館様は、危険ですので暫く待機を』

と言って、二人で崖っ淵まで向かった」

ハインは、良い機会なのでゴードンを事故に見せかけて殺そうとしたのであろう。

だが、そこでゴードンに強く抵抗され、誤って両方とも崖から落ちてしまった。

蓋を開ければあまり複雑な事情や陰謀など存在しない、単純な憎み合いから起こった事件とも言えるが、どこか釈然としない部分もある。

他のみんなもそうであったが、何か裏に父の恐ろしい陰謀があった方が、関係者ではない者は納得できるのかもしれない。

「事実とは、案外単純なのかもしれないな」

「どうして、父上は事実を隠したのですか？　緘口令まで敷いて」

「話せるはずがないからだ」

本村落の名主の跡取り息子と、その妹の婚約者が殺し合いの果てに崖から落ちて双方が死んだ。

確かに、あまり派手に事実を公表するのは躊躇われる話であった。

「レイラの件は、エーリッヒ辺りならわかっているはず。他の村落の名主達が、レイラの婿に自分の息子を押し込もうと画策を始めたからだ」

隣の家同士で仲良く育った二人でも、本村落の名主を巡って殺し合いまでしたのだ。

他からの婿など、クラウスとの対立や本村落と他村落の争いを煽るだけであろうと。

だからこそ、好色の悪評を被ってまでレイラさんを妾にした。

自分の血を引いた子が次期名主になれば、暫くは本村落の状態が安定するからだ。

「信じるも信じないも、ヴェンデリン達やクラウスの自由だ。それにどうせ、ワシは引退するからな」

在地領主としては少し早い引退ではあったが、これだけの事件があったので仕方が無いとも言える。

「ヘルマン。未開地の開発が本格的に始まれば、他所との交渉が増える。クルトのようなヘマはするなよ」

「わかりました」

多分、過去の事件の真相は父の言う通りなのであろう。

クラウスも薄々とは気が付いていたが、やはり人の親なのでそうではないと信じたかったのだと。

あと無責任な外野とは、事実が派手な方を喜ぶ。

巷に、おかしな陰謀論などが広まる原因でもあった。

「さて。ここで、ヨハンナとアマーリエを呼ぶ許可を欲しいのだが」

クルトの件を、母とアマーリエ義姉さんに伝える義務があったからだ。

数分後、呼び出された二人の前で、今度は俺が事情を説明する。

二人は泣いたり狼狽するでもなく、淡々とした表情で俺からの話を聞いていた。
多分、ある程度は覚悟していたのであろう。

「そうですか……。外の貴族が……」

母は、自分が腹を痛めて生んだ子供達が殺し合った事実にショックを受けていて、その原因の一つを作ったルックナー男爵に激しい怒りを覚えたようだ。

今さらだが、彼が怨嗟の笛など持ち込まなければ、クルトを殺す必要などなかったのだから。
本人が、教会送りを是とするかは別にしてもだ。

「ヴェンデリン、その貴族は当然処分されるのでしょうね？」

「何とも言えません……」

既に報告は送っているが、俺に言わせると中央の貴族連中は魔窟の住民でもあった。
何か手を用いて、その罪を逃れる可能性を否定できなかったからだ。

「クルト自身の罪も重いとはいえ……。わかりました、私も旦那様と共に引退します」

母は俺に言いたい恨み言もあったと思うが、それを腹の奥に呑み込んでこれ以上何も言わなかった。
正直なところ、非難でもしてくれた方がよっぽど気が楽という物

だ。

そして、アマーリエ義姉さんであったが……。

俺は、罵られるくらいの覚悟はしていたのだが。

「覚悟はしていました」

アマーリエ義姉さんの方も、その態度は毅然としたものであった。

「ここ最近、ヴェンデリン様への不満ばかり漏らしていて。私も子供達も、怖くて近寄れなかったのです」

昔は優しい夫だったのに、父から統治の実権を徐々に渡されると次第に傲慢になってきていた。

止めで、俺が領内で活動するようになると、俺が領地を奪いに来た敵だと言うようになったのだそうだ。

「とても表には漏らせない内容でした。子供達も、怖がってしまって」

挙句に、俺からなるべく多額の税金をかけ。

それで得た金で未開地を大々的に開発するのだと、半ば妄想のような事を突然口走ったりするようになる。

「とても付いて行けないと思いました。お義父様に言うわけにもいかず……」

「言って貰っても良かったのだがな。ワシにも、そんな感じであったからな」

あくまでも次期領主としての公式的な発言ではなく、夫婦の部屋で言ったオフレコに近い発言だと思い、アマーリエ義姉さんはそれを漏らさなかったようだ。

だが、その努力は完全に無駄になってしまったのだが。

「私はともかく、子供達の将来についてはただお願いするしか……」

「その辺は、最大限に考慮しますので」

「ヴェンデリン、私からもお願いします」

母からも、アマーリエ義姉さんとその子供達の処遇について頼まれてしまう。

二人は、同じく外部から僻地のバウマイスター領に嫁いで苦労しているので、仲がとても良かったのだ。

「もう数日で、王国側から何か言ってくるはずですから。それまでは普通に生活をして貰って構いません。ただ、外には出ないでください」

暗殺未遂事件を起したクルトの係累なので、いらぬトラブルが発生する危険があったからだ。

あと、共犯者四人の家族は、可哀想であったが本村落を出て貰う事になっていた。

俺が新しく開発する未開地に移住するか、パウル兄さんの新領地に移住するか。

こんな田舎なので、そうでもしないと犯罪者の遺族への風当たりも強く。

仕方の無い処置とも言えた。

「さて、王国側はどう判断するかだな」

結局は、ブランタークさんのこの一言に尽きた。
大規模な犯罪行為はあったが、犯人は全員死亡しているので拘束なども必要なく。

父との話を終えた俺達は、またすぐに普通の生活に戻っていた。
さすがに、翌日は休みを取っていて。
代理司祭の仕事があるエリーゼですら、休みを取っていたほどであったが。

「聖魔法は纏えるようになったが、暫しの実践が必要である！　治癒魔法については、某に任せるが良い！」

休暇を取るエリーゼの代わりに、なぜか導師が司祭の代理を買って出ていた。
マイスター司祭から借りた司祭服が今にも筋肉ではち切れそうであったが、治癒魔法だけかければ良いのだから問題はないであろう。

エリーゼから治療して貰えると思って教会に出向き、そこで導師を目撃する領民達の冥福を祈るのみであったが。

一日の休みを終えた後は、普通に領地開発と冒険者としての仕事を日毎に交代して行っていた。
更に、開発特区の整地や区画割りに、大まかな土木工事などを終わらせ。
新規の移民が来ても、なるべく早く農作業が行えるように準備しておく。

冒険者としては、魔の森に入って狩猟や採集を集中して行っていた。

「食品の試作と、そのための狩猟・採集をしている今が一番幸せ。貴族なのに、物凄い貴族嫌いになりそう」

周囲を魔法で警戒しながら、俺はカカオの群生地で乱獲しないようにカカオの実を一心不乱に採集していた。

しかしその心配は無用なようで、一度実を取っても三日もするとまた元通りなのはある意味恐怖でもあった。

「俺のような立場だと。みんな、『貴族になりたい！』で必死なんだけどな。なっても、ヴェルの兄貴みたいな人もいるけど」

「人間、上を見るとキリがないからねぇ……」

「結局、私にはあの人が目指していた物が理解できなかったわ」

「問題ない。俺も、良く理解できなかったから」

エル、ルイーゼ、イーナの三人は、カカオの実を採集しながらクルトの事などで世間話を続けていた。

「ヴェル様、この実は美味しいの？」

「加工すれば、極上の美味になる」

「頑張って集める」

ヴィルマも、カカオの実の採取に全力を挙げていた。
後でチョコレートやココアを試作するつもりであったが、工程が多くて面倒なので今は後回しにする事にする。
今は、暇な時にそれが出来るように、大量に魔法の袋に備蓄する事にしたのだ。

他にも多くの果物などを採取し、時折りこちらを襲撃してくる魔物も倒していく。
夕方まで仕事をした後に瞬間移動で開発特区にある自分の屋敷に戻ると、そこにはブランタークさんとエリーゼと導師が待ち構えていた。

「坊主、少々ヤバい事になったぞ」

「ヤバい事？」

「王都で、大惨殺事件が発生した」

ブランタークさんも、先ほどブライヒレーダー辺境伯から通信用の魔道具を介して連絡を貰ったばかりだそうだ。

「あの怨念の残りカスが、しでかしたらしい」

王都まで僅か二日で辿り着き、そこで新しい怨念を元に成長して。

あのルックナー弟やその家族に、十人ほどの貴族やその妻。
家臣や使用人達などを、ゾンビにして殺してしまったのだそうだ。
人数が多いのは、その日に屋敷で自分の派閥に属する貴族達を呼んでパーティーをしていたからだそうだ。

「犠牲者は、五十名を越えるそうだ」

「ですが、なぜ怨念は顔も見た事が無いルックナー男爵を？」

更に言うと、怨嗟の笛自体ももうこちらで導師が回収しているのだ。

それに、その怨嗟の笛は導師の魔法のせいで黒焦げであり、元々一回しか使えないので効果も切れていて、今では焦げたただのオカリナにしか過ぎなかった。

「匂いを覚えていたのでは？」

「匂いをか？」

アンデッドなどに詳しいエリーゼが、自分の考えを語る。

実は全てのアンデッドは、人間であった頃よりも視力が落ちてしまうらしい。

その代わりに、他の聴覚や嗅覚などが増すのだそうだ。

「あとは、魔力を感知する能力とかもですね」

「死んで、動物に近付くって事？」

「ゾンビの貪欲な食欲などは、それが原因だと言われています」

つまり、クルトの人格や意識が混在した怨念が、王都で別の怨念を貪って成長し。

俺の次に恨んでいるであろう、ルックナー男爵の匂いを感知して復讐に走ったのであろうと。

「匂いの元は、怨嗟の笛に僅かに付いていた物かと」

裏市場から購入直後に、ルックナー男爵は怨嗟の笛を触ったのであろう。

一応大金で購入しているので、確認くらいはしたかったのかもしれない。

「そんな、ちょっと触れたくらいの匂いをか……」

俺は、クルトの怨念の強さに恐怖してしまう。

「当然、常人では感知は不可能である！　ルックナー男爵から渡された魔道具で、殺されてアンデッドにまでされた。間違いなく、クルトはルックナー男爵を憎んだであろう」

俺の殺害に失敗して逃走する羽目になったので、今度は次の標的を狙う。

あながち、間違っているとも言えなかった。

「ただ、本当にあの程度の残りカスならば、普通は一日と保たずに消えてしまうのである！　あの男の執念の成果であろうな」

「成果と言っても、大事件じゃないですか」

法衣貴族ばかりであるが、役職には就いている男爵一人、準男爵三人、騎士爵九名の合計十三名。

その他に、ルックナー男爵は妻と跡取り息子に娘と。

使用人やメイド達すら全滅で、家族皆殺しという最悪の結末を迎えている。

他の貴族達もパーティーの途中だったとかで、奥さんや子供や主

だった家臣などを連れて来ている人がいて、現在王都は混乱の極地にあるそうだ。

「ルックナー財務卿は、頭を抱えているそうだぜ」

懸案の弟が、その家族や派閥ごと消滅した。

普通なら喜びそうな気もするのだが、降りかかる様々な雑事に疲労の極地にあるそうだ。

「まあ、想像はつきますけどね……」

反主流派とはいえ、財務系の役職就きが十三名も消えたのだ。

別に反主流派だからといって、ルックナー財務卿に逆らって仕事をサボっているわけでもなく。

その穴埋めに奔走しているのであろう。

「あとは、大勢の陳情への対処であろうな」

痛ましい事件ではあるが、役職が無い者にとってはチャンスでもある。

『後釜にうちを！』とか、ある程度の大物貴族などからも、『私の息子を頼む』とか、『〇〇は、親戚だから頼む』とか屋敷に押し掛けられている可能性があると導師は説明していた。

「大物貴族の陳情だと無碍にも出来ず、話くらいは真摯に聞かないと後で面倒になるのである！」

「あとは、相続関連だろう？」

ルックナー男爵は、跡取り息子ごと家族が全滅した。

親戚筋からすれば、法衣男爵家を相続できるチャンスなのだ。
当然、王都の貴族籍の管理や相続の手続きをする役所には、大勢の人達が押し掛けているはずであった。

ブランタークさんは、それに気が付いたようだ。

「他にも、相続が確定するまでは対象貴族家の財産保護とかもある」

当主が死んでゴタゴタしている間に、親族や自称親族の泥棒などが屋敷から財産を持ち去るケースがあり。
役所が管理人と警備員を派遣して、相続人が確定するまで屋敷などを保護するのだそうだ。

「普通に、貴族家の当主が病死したとかじゃないからな。暫くはゴタゴタするだろうな」

そして、それがある程度落ち着くと、当然責められる人間が出てくるわけだ。

「ルックナー財務卿でしょうね。あとは、うちかな」

ルックナー財務卿の場合は、弟がおかしな事をした結果なのだから、他の当主を殺された貴族家の遺族から責め立てられるはず。
うちも、怨念の元がクルトなので責められるはずだ。

「散々に責め立ててから。『じゃあ未開地の利権で許してやるよ』というのが、貴族の手法でもある！」

「また面倒な……」

それはヤクザの手法でもあるような気がするが、実はもう一つ困った事がある。

アマーリエ義姉さんと甥達の処遇であったが、甥達が成人するまで王都で生活して貰い。

成人後に、法衣騎士爵位を手に入れて継がせようと思っていたのが不可能になってしまったからだ。

「（バウマイスター姓じゃなく、アマーリエ義姉さんの実家であるマインバッハ姓でも名乗らせようかと思ったんだけど……）」

クルトの怨念の残りカスが、いくら暗殺事件の共犯とはいえルックナー男爵を家族ごと殺してしまったのは最悪であった。

しかも、そんな事情を知らない貴族を十家以上も巻き添えにしてだ。

いくら姓を変えても、アマーリエ義姉さんや甥達が王都を生活の拠点にするのは難しいであろう。

噂がすぐに広まって、嫌がらせや中傷が始めるのは目に見えていたからだ。

「その辺の交渉も含めて、坊主が王都に行かないと話にならんな」

「でしょうねぇ……」

ただこちらにも都合という物があり、実際に王都まで瞬間移動の魔法で飛んだのは、それから三日後の事であった。

第五十四話　バウマイスター伯爵。

「想像通りであるな！」

「何なんです？　この人の多さは……」

クルトの怨念の残りカスが、ルックナー男爵以下五十名以上を大量殺戮した日から四日後。

俺達も相談しないといけない事があったので王都のルックナー財務卿の屋敷に向かうと、その正門の前には多くの人達が詰め掛けていた。

今回の王都行きは、みんな忙しいので同伴は導師だけとなっていた。

あまり多人数でゾロゾロと動くと目立つし、いつもはパウル兄さん達に任せている護衛も導師が引き受けてくれる事になっている。

パウル兄さんは新領地の視察や調査で忙しいので、今度来るのは陛下から準男爵位を授爵される時になる予定であった。

「この子は、亡くなったブルーメンタール準男爵の子供なのです！　認知をお願いします！」

「ルックナー財務卿！　私こそ、ビューロー卿の後釜に相応しいと思うのですが！」

「これは、どういう事なのです？」

「十を超える貴族家の中枢が、ほぼ全滅した故であろう」

自分も含めて、家族、家臣、使用人が全滅したルックナー男爵家には、縁戚も含めた連中が『自分こそが、次代ルックナー男爵に相応しい』と複数押しかけ。

他の家も、最低でも当主と正妻が。

酷い家になると、跡取り息子に、他の子供や家臣などが根こそぎ全滅した家などもあり。

その爵位と役職の後釜を狙って、様々な人達が押しかけているらしい。

「ですが、ルックナー財務卿にですか？」

「派閥の長であった弟が、一家を含めて全滅。ならば、いくら対立していたとはいえ、兄が全てを取り仕切るのは当然である！」

加えて、その兄は財務卿で侯爵なのだ。

本人の屋敷に直接押し掛けて、財産を含めて警備している警備兵に詰め寄るよりは、天の声であるルックナー財務卿のお墨付きの方がよほど役に立つと思っているのであろう。

「じゃあ、やっぱり財務卿閣下に任せた方が良いですね」

「であろうな」

こちらだって、いつ新領地の下賜と開発命令が下るかもしれないので暇ではないのだ。

早くに、アマーリエ義姉さんや甥達の処遇について言質を取る必要があった。

当然、他の大物貴族達への挨拶回りはもう終了している。
ホーエンハイム枢機卿はすぐに了承して、最後に陛下に謁見する際に付き合ってくれると約束してくれた。

エドガー軍務卿からは、『ヴィルマは、俺の養女にしたからな！わかるよな？』と言われ。
すぐに首を縦に振っていた。

つまり、絶対に嫁に貰えという事なのだ。
個人的にはヴィルマは可愛いので良しとしたい所だったが、そうなると嫁の序列に変化が発生する。
ヴィルマは元々準男爵家の娘でもある関係で、序列をエリーゼの次にしなければいけないからだ。

気にしないとは言われているが、ルイーゼやイーナへの配慮も必要であり。
俺は、見た目が導師と大差ない筋肉軍務卿がただの脳筋ではなかった事に、心の中で呪詛の言葉を吐いていた。

あとは、残りの閣僚などにも挨拶に行ったのだが、彼らは特に何も言わなかった。
多分、未開地を下賜されてから色々と言うのであろう。

「とにかく、ルックナー財務卿に会わないと」

今日は屋敷で諸処の対応に追われているとエドガー軍務卿から教えられたので現地に行くと、ルックナー邸の前には陳情のためか多くの人達が詰めかけていて、俺と導師はそれをかき分けながら正門前に居る警備兵に話しかける。

「今度は、誰様の親戚でしょうか？　それとも、誰様のお子様か何かで？」

随分と横柄な門番だなと思ったが、彼はここ数日ずっとそんな連中の相手ばかりしていたのであろう。

俺や導師を見ても、すぐにはその正体に気が付かなかったようだ。

「王宮筆頭魔導師とバウマイスター男爵だ。主人であるルックナー財務卿に用があって来た」

「えっ！　アームストロング子爵様とバウマイスター男爵様で！　失礼しました！」

事前に上から、そちらに行くと連絡を受けていたのであろう。

門番は急に丁寧な対応になってから、俺達を門の中に入れる。

「バウマイスター男爵様！　この子は、本当にブルーメンタール準男爵の子なのです！　是非に、お口添えを！」

「私は、王都のバウマイスター卿とも仲が良いのです！　ルックナー財務卿閣下に、マルテンシュタイン騎士爵位には私クリスティアンを宜しくと！」

俺と導師が有名人で、すんなり屋敷の中に入れる身分である事を知ると、押し掛けていた連中はこちらにまで色々と面倒な事を頼もうとしてくる。

「いちいち気にしていたら、キリがないのである！」

貴族が死ぬと、この手の連中は必ず発生するそうだ。
貴族などを相手にしていた水商売の女性や、元は屋敷に勤めていたメイドなどが、その貴族との間の子だから認知して欲しいと頼んで来たり。

だが、この世界にはＤＮＡ鑑定などがないので、生まれた時に故人が書いた証明などがないとまず認められないそうだが。
それに、そこまでする人の大半は、最初から普通に認知するという罠も存在する。

あとは、有りもしない縁や交友関係を主張して、その役職の後釜を狙うような無役の貴族達。
彼らは基本暇なので、毎日のように必死に押し掛けてくるそうだ。

「わざわざ済まない……」

屋敷の中に入ると、主であるルックナー財務卿が目の下に隈が出来た状態で俺達を出迎えていた。

「あの、大丈夫ですか？」

「いや、屋敷の前は事件の翌日からずっとあの有様だし、死んだ連中の穴埋めの手配でも忙しいしな。あとは……」

貴族籍の管理や、貴族家の相続手続きなどを扱うベッカー内務卿や、その下に居る実務長の屋敷の前も似たような有様で。
昨日も、王城内で嫌味に近い苦言を言われてしまったらしい。

「大変ですね。こちらとしても、頼みたい事があるのですが大丈夫でしょうか？」

「暗殺未遂を起した長男の、子供達の扱いについてであろう？　そっちは何とかする。だが、その前に一つ問題が……」

ルックナー財務卿が申し訳なさそうに伝えた内容は、俺を驚愕させる物であった。

「はあ？　ローデリヒが、次のルックナー男爵に？」

それも驚きであったが、クルトが暗殺未遂事件を起した直後に、ルックナー男爵が何食わぬ顔でクルトに渡った魔道具の情報提供を行い。

挙句に、ローデリヒを認知して、その縁での利権の分配を要求した事の方が驚きであった。

しかも、ルックナー財務卿がそれを認めてしまったのだから余計に驚いてしまう。

「何で、そんな要求を認めるんです！」

「前の卿と決闘したヘルター公爵のように、大バカで現行犯ではないからな。捕縛するに値する証拠がないと……」

間違いなく共犯なのに、何食わぬ顔でクルトを売って善意の情報提供者を装う。

しかも、周囲から白い目で見られても何ら動揺する事なく、ローデリヒを勝手に認知してその縁から利権を要求する。

まさか、ここまで厚かましい人物だとは思わなかった。

「それで上手く行ったと思って、派閥の子分達を呼んでパーティーを開いたようだな」

そこで、絶頂から滅亡へと至ったようだ。

しかもその原因が、バカにして使い捨てにしたクルトであるという部分が笑えなかった。

まさに、因果応報その物であろう。

「鼠を追い込んだ猫が、その鼠に首筋を噛まれて失血死したというわけだ」

「そもそも、ローデヒリの認知は本人の許可を取ったんですか？」

「法的に言えば、そんな必要は無いのだ」

貴族家において、当主の権限は絶対である。

当主が子供を認知するのに、子供からの許可など全く必要無いのだそうだ。

「認知してやるのに、許可とか言う時点でその子供は度し難い奴だという話になるからな」

ルックナー男爵からすれば、ローデリヒを認知だけして縁を繋いで利権を要求できるというわけだ。

既に跡取り息子はいるのだから、爵位はともかく財産など一センントも寄越さないつもりだったのであろう。

ある意味、清々しいまでに最低な奴である。

イコール、貴族らしいとも言えるそうだが。

「ただ、そのせいで厄介な事になった」

パーティーは、ルックナー男爵の屋敷で行われていた。

よって、家族は一人残らず全滅したそうだ。

「長男と長女も死んだからな。他に生き残った正妻の子もおらず。となると……」

認知した次男であるローデリヒが、一番有力な後継者候補という事になる。

だが、もしそうなると未開地開発に大きな支障を来たす可能性があった。

「うちの筆頭家臣にして代官を奪わないでください」

未開地開発において俺の代理人になるのだから、当然待遇は筆頭家臣となって世襲も可能にする予定になっていた。

もし、ルックナー男爵家を相続したら、その話が完全に吹き飛んでしまうのだ。

「また代官の人選からスタートになりますけど」

当然、遅延した分の皆の怒りは、全てルックナー財務卿に向かう事となる。

また陛下や全閣僚から、嫌味を言われる事になるのだ。

「わかっておる。わかってはおるが……」

俺が下賜される未開地は、予定ではバウマイスター伯爵領になるわけで。

なので、もしローデリヒが法衣男爵家を継ぐと、俺の家臣には出来なくなってしまうのだから。

「なるほど。非難轟々であるな！」

「昨日までに、主だった閣僚やホーエンハイム枢機卿。陛下にまで言われておるわ！　あのクソ野郎！　死ぬ時まで迷惑をかけやがって！」

珍しく激高したルックナー財務卿は、貴族にあるまじき汚い罵詈雑言を吐いていた。

「それで、どうします？」

「どうも、こうも。ルックナー男爵家は取り潰しに決まっておろう。他の取り巻き連中は個々に対応だな。全く、下らない仕事を増やしおって……」

甥達の待遇に対する陳情は通ったようだし、詳しい処分は明日に陛下の前で発表するという事なので、その日は自分の王都にある屋敷に戻り、明日の登城に備える事にする。

翌日、王城からの使者と共に登城すると。

謁見の間ではなく、会議などに良く使う部屋に通されていた。

「まずは、あの不埒者への処分を発表するのでな。謁見の間は後で使う事にする」

「では、早速に処分内容を……」

室内に居た陛下に促され、ルックナー財務卿が処分内容を発表する。

まずルックナー男爵であったが、彼は俺への暗殺未遂の共犯として家を取り潰し、財産も全て没収という処分が下される。

既に文句を言う家族もいないし、あわよくば爵位と役職継承を狙っていた縁戚達も、この処分の前には沈黙するであろう。

「あの、証拠は挙がったのですか？」

「ブライヒレーダー辺境伯が、その証拠を捕まえるべく網を張っているようだな」

まだクルトに魔道具を渡したフリーの冒険者とやらは、山脈の山道をブライヒブルク側に向かって移動している最中で、それを捕縛しようとしているのをルックナー財務卿は察知したらしい。

「ルックナー男爵の家臣で、何名か所在が不明な者達がいる。大方、その冒険者の始末に向かっていると思われるがな。どちらでも確保できれば、証拠も挙がろう」

ルックナー男爵が生きていれば、もう少し慎重に処分を進めるのであろうが、残念ながらもう彼はこの世の人ではない。

ならば、さっさと処分してしまおうと言う事らしい。

「他の貴族達は、役職の取り上げだな」

十二名の貴族達は、その職務に精通しているベテランばかりであった。

当主が急死したからといって、子供にいきなりその職務を任せる

とはいかないので当然とも言える。

「下で優秀な者を昇進させ、新しい者を入れて経験を積ませる事にする」

そうやって入れる未経験者とは、普通は親のコネで入る跡取り息子である。

そして、その未経験者は大体親の役職くらいまで昇進できる。

法衣貴族で役職付きの家は、親子でそのサイクルを繰り返すのだが、思わぬ当主の急死で子供がまだ幼い者が多く、役所に入れるのも困難であった。

なので、今回は十二名の役職無しの貴族に門戸を開くという事になる。

当然激しい争奪戦が繰り広げられるであろうが、俺には知った事ではなかった。

「子が居ればまだマシだ。爵位は継がせられるからな。問題は……」

準男爵家一つと騎士爵家三つに子供がいないそうで、現在親戚や縁戚連中が押し掛けているそうだ。

「これは、貴族法に則るしかないな。ただ……」

「詳しい話は、謁見の間で行う事とする」

処分は会議室で、褒賞は謁見の間で行う。

ヘルムート王国では、それが決まりのようだ。

陛下の命令で謁見の間へと向かうと、そこには意外な人物が待ち構えていた。

「ヘルムート兄さん？　エーリッヒ兄さん？」

「ヴェルか……。クルト兄貴の件は聞いている……」

「まさか、こんな結末になるなんて……」

なぜ兄さん達が呼び出されたのかは不明であったが、やはり最初に話題になるのはクルトの悲惨な最期と、その異常な執念が成した大虐殺劇であろう。

ただ、実際に虐殺を行った怨念の集合体であるアンデッドを浄化した神官達の目撃によると、そのアンデッドにはクルトの身体的な特徴は一切存在していなかったそうだ。

黒い煙状の、赤い目が爛々と輝く顔が付いた直径三メートルほどの球体。

それが、ゾンビに喰われてほぼ骨と化していたルックナー男爵の遺体の前で不気味な高笑いを続けていたらしい。

しかも、まるで抵抗する事なく神官達に浄化されたそうだ。

俺の殺害には失敗したが、自分をこんな姿にしたルックナー男爵を殺せて満足したのか？

俺はクルトではないので、彼の真意はわからなかったのだが。

「ルックナー男爵は、呪われた魔道具を使ってその反作用で死んだというのが公式の見解なようだね」

エーリッヒ兄さんは、王国側から俺への暗殺未遂事件はクルトの仕業で、後のルックナー男爵の惨殺事件は、自分自身が魔道具の効果を良く確認しないで使った事によるミスであると伝えられたようだ。

それでも、クルトが使用した魔道具を裏市場から手に入れて渡したという罪があるので、御家は断絶という処罰に違いは無いようであったが。

「さて、三人に来て貰ったのは理由がある」

まず伝えられたのは、ヘルムート兄さんとエーリッヒ兄さんの爵位を準男爵に陞爵するという物であった。

「なぜ？」

「陛下、我々は特に何も功績など……」

「何も無い事はあるまい。日々、与えられた仕事に邁進しておろう」

「それは、他の貴族達も皆そうなのですが……」

エーリッヒ兄さんの疑問に、陛下は笑顔で答えていた。

だが、その表情には『反論しないで受け取れ』という物も浮かんでいて、それに気が付いたエーリッヒ兄さん達は素直に陞爵の褒美を受けていた。

「次は、バウマイスター男爵であるか」

クルトの死後一週間弱ほど放置されていたのだが、ようやく未開地を下賜されるようだ。

「バウマイスター騎士爵領は、跡継ぎの不祥事により未開地部分の没収を命じる。詳細な没収領域は後で伝えるとして、残りの未開地分の全てを伯爵に陞爵するヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターに与える物とする」

「謹んでお受けします」

俺は陛下から伯爵の爵位と未開地を下賜され、これでようやく実家に関するゴタゴタの大半が解決するのであった。

「一言で言えば、迷惑料であろうな！」

俺が伯爵に陞爵された後、導師は俺、ヘルムート兄さん、エーリッヒ兄さんを自分の屋敷に誘い。

そこで、今日の褒賞の儀について自分の見解を述べていた。

とはいえ、彼は陛下と親友同士の間柄にある。

その見解とは、すなわち陛下の考えその物であった。

「未開地開発のために、クルトの廃嫡をバウマイスター伯爵に任せたがためのあの暴走劇。挙句に、中央の要職を持つ者まで関与しておったのである！　そこで、二人の兄君達にも褒賞を与えてバウマイスター伯爵に気を使ったというわけである！　今は領地になる予定地を調査中のパウル殿も、すぐに準男爵位と領地の分与が認めら

れるであろう！」

「確かに、俺が断るのも何ですしね」

俺への褒賞はもう最初から決まっているわけで、あまり増やすと俺が断わる可能性を考慮したらしい。

だが、兄さん達の陞爵ならば何も言えまいと、急遽呼び出して陞爵をしたのだと導師は説明していた。

「いや……。いきなり陞爵とか、周囲の視線が痛いんですけど」

「ヘルムート兄さんは、普段は水源地警備だから良いよ。私の場合は、職場という物が……」

それは、いきなり呼び出されていきなり陞爵したのだ。

二人共、周囲からの視線が痛いであろう。

「しかも、実家は跡取りの大不祥事と。これで陞爵はおかしいだろうという話になる」

「どうせ、その件で暫くは不愉快な思いをするわけであろうからと。陛下は、陞爵を決めたのである！」

貴族達とてバカではないので、暗殺未遂事件の共犯がルックナー男爵である事も、その後に俺が未開地の開発を始める事も重々承知のはず。

なので、すぐに逆に擦り寄ってくるであろうと導師は語っていた。

「それはそれで、嫌というか……。もう実害は受けていますけどね」

もう王都に住む貴族達の間では、未開地開発の噂で持ちきりらしい。
既にエーリッヒ兄さんは、職場の上司や同僚から『うちの子を、弟さんの家臣に雇って欲しい』とか頼まれているそうだ。

「すいません。迷惑をかけて」

「大丈夫。全部、ルックナー財務卿に押し付けたから」

エーリッヒ兄さんは、『そういう事の決定権は、ほぼ全部偉い人が握っていまして。私では、どうにも……』と上手くかわしたらしい。

結果、先のルックナー男爵一家惨殺事件と合わせて、ルックナー財務卿の屋敷には余計に多くの人達が押し掛けるようになったそうだ。

なお、とばっちりでモンジェラ子爵などにも、大量の陳情者が押し掛けているようであったが。
これは、ルックナー財務卿の寄り子としては仕方が無いのかもしれない。

「そういえば、うちもあったな」

普段は、水源地である森を警備する仕事をしているヘルムート兄さんであったが。
つい先日、警備する人手が足りなくて一人だけ人員を募集したらしい。

「一人しか採らないのに、応募してきたのが三百人を超えたからな」

更に、侯爵家の三男とか、伯爵家の次男とか。

どうしてこんな人がというのが沢山来たそうだ。

「うちで落ちても、ヴェルの家臣に推挙されるかもとか思ったのかもな。単純に、顔を売りに来たのかもしれないけど」

「すいません」

「俺らは、普段は森の警備で篭っているからな。あまり世間の噂なんて気にしないさ。それに、準男爵になれたし」

ただ、その陞爵と同時に管理する森がもう一つ増えたらしい。

「隣接している森だから思ったほど面倒ではないけど、また人を採らないとなぁ……。応募、何人来るかな？」

騎士爵や準男爵が警備する森で働く人員なので、対象は元冒険者とか、平民の子供とか、騎士爵の三男以下とかそういう人を対象にしているわけで。

伯爵の子供とかに応募されても、困るのは当然の結果ともいえた。

「そんな人を採っても命令し難いですね」

「だろう？」

それに、下手に仕事上の事などで揉めると、父親である伯爵とかが出て来て面倒になる。

貴族の常識として、そんな格上な貴族の子供など採用しないのが

普通であった。

「私も、昇進するみたいだね」

「それは、おめでとうございます」

「ただ、予算執行委員の末席か。明らかに、ヴェルとの連絡役だと思う」

俺の手持ち資金で開発は始まるのだが、王国としては全く援助をしないわけにもいかない。

あと、一から伯爵家が立ち上がるわけで、余っている貴族の子弟達の有力な就職先でもあるのだ。

雇用関連で補助金を出すので、それを管理するのがエーリッヒ兄さんの役割になるらしい。

「未開地開発である程度目処が立ったら、また陞爵があるからと言われた」

「それって？」

「間違いなく、あの人の後釜だね」

同じ会計監査長ではないかもしれないが、財務関連の法衣男爵が一人消えたので、その後釜にエーリッヒ兄さんというわけなのであろう。

そして、俺に恩を売るというわけだ。

「そういえば、ヴェルにも追加で褒賞があったよね」

「ええ」

過去の功績と合わせて、俺にはあの未開地や魔の森での探索に貢献し、新しい領地開発のきっかけを作ったという。

適当にでっち上げた理由を元に、追加で褒賞が与えられていた。

まずは、取り潰されたルックナー男爵家の資産を全て。

次似、あの惨殺劇があった屋敷もなのだが、いらないと言ったら不動産屋に売却して現金でくれるらしい。

間違いなく、その不動産屋はあのリネンハイム氏であろうと思われる。

旧ルックナー男爵邸は、教会から駆け付けた神官達が怨念の残りを浄化した際に、一緒に浄化はされている。

だが、あんな惨劇があった屋敷をいきなり使う人もいないであろうから、暫くは塩漬けになるであろう。

あの胡散臭いリネンハイム氏からすれば、格好の儲け話という事だ。

「ルックナー財務卿から聞いたんだけど、屋敷の蔵から相当な資産が見付かったらしいね」

「確か、総額で五千万セントほどだと」

ほぼ半分が金貨などで、残りは美術品や魔道具であったそうだ。

「いくら役職持ちとはいえ、法衣男爵にしては多過ぎる」

「あの男の事である！　美術品や魔道具が多かった事から想像して、裏市場に便宜を図っていたのであろう」

侯爵にして財務卿の兄に逆らい、小規模とはいえ独自に派閥まで保持していたのだ。

子分を養うのに、金が必要だったのであろう。

「そっちは、開発に使えるから別に良いんですけどね」

誰がどんな手段で得ようと金は金。

開発資金に当てれば良いので何の問題も無いのだが、もう一つ困った物を押し付けられていた。

「複数の爵位を褒美って、あるんですね？」

「稀に、無い事もないのである！」

ルックナー男爵の巻き添えで死んだ貴族達で、直系に跡取りがいなかった準男爵家一つと騎士爵家が三つ。

これを、俺が他人に自由に与える権利を貰ったのだ。

「大領を持つ貴族などに、王国が配慮するケースが昔はあったのである！」

その権利を貰った大物貴族は、自分の領地を割いて次男以下を準男爵や騎士爵にしたり出来たそうだ。

「表向きは、相続問題で混乱を生じさせないためである！　実際には……」

王国側が、その大物貴族の力を落すために渡していた面もあったようだ。

代を重ねるごとに、領地が細切れになるのを期待しての事らしい。

「ただ、バウマイスター伯爵には必要であろう？」

「確かに、必要ですけどね」

本当は、アマーリエ義姉さんと甥達には王都で暮らして貰う予定であったのだが、あまりにあの虐殺事件の印象が強過ぎて不可能になってしまったのだ。

そこで、暫く事件のほとぼりが冷めるまではバウマイスター領内で暮らして貰い、それから王都で勉強をして貰う予定にしていた。

「クルト兄さんの子達か……」

「はい。成人したら、爵位と領地を分けて分家扱いにしますよ」

クルトには思う所があったし命まで狙われたが、アマーリエ義姉さんや甥達にはそういう気持ちは無い。

将来、向こうからは親の仇と思われるかもしれないが、それは仕方がないと思っていた。

「これでようやく、未開地の開発が始まると陛下は安堵していたのである！　さて、話も終わった事だし、昼食でも食べていくのである！」

アームストロング子爵邸での昼食後、ヘルムート兄さんは森の警

備に戻り、エーリッヒ兄さんも職場へと戻る。
俺と導師は、瞬間移動でバウマイスター領へと戻ったのだが……。

「導師、腹がはち切れそう」

「若い者は、もっと食べないといけないのである！」

「胃の容量は決まっているから！」

「何の！　一度お腹が一杯になっても、少し待てばまだ入るのである！」

「（どこの大食いチャンピオンだよ！）」

さすがに外の目があって唐揚げなどは出なかったが、物凄い量のフルコースで、更にお代わりは必ずさせられるのが導師の屋敷における食事のマナーだったのだ。

味は良かったのだが、森林警備で普段から体を動かしているヘルムート兄さんはともかく、事務系で食の細いエーリッヒ兄さんには試練であったと思われる。

更に、導師は奥さんが四人に子供が十八人もいる。
貴族なので食事中に騒ぐ子はいなかったが、食事前にはお土産や面白い話をせがまれて揉みくちゃにされる。

今回初めてのヘルムート兄さんとエーリッヒ兄さんは、その光景に絶句しているようであった。

『うちなんて、目じゃねえな』

『噂には聞いていたけど……』

ただし、導師の家の子供達は全員良い服を着ていたし、教育なども最高の物が受けられる仕組みになっている。

既に成人した上の子供達が数名いなかったが、これは跡取り息子が軍人になっていて、他の子達は冒険者をしたり、新しく商売などを始めているからであった。

『えっ！　商売なんてしてるの！』

ヘルムート兄さんは驚いているようであったが、それがこの家の教育方針であった。

跡継ぎである長男にしか爵位を渡せない以上、他の子達には自分で生きる道を探して貰うと。

その代わりに、教育は平等に受けられるし、貴族家にしては珍しく財産は分与する事になっているそうだ。

『財産を分与するのか！』

『導師の場合は、ちょっと特殊ですからね』

現役冒険者時代に、うちの師匠と遜色ないくらいに稼いでいたし。

法衣子爵家の年金、王宮筆頭魔導師の役職給、双竜勲章の年金、グレードグランド討伐で得た褒賞、いくつかの名誉職に付随する手当てと。

そして、今も少し時間が空くと狩りに出かけていた。

特に最近お気に入りなのは、うちの領地と隣接している山脈と同

じく飛竜の住みかになっている王都から少し離れた『コンロン山地』であった。

ここから、月に二～三匹ほど飛竜を狩ってくるのだ。

一般人には脅威でしかない飛竜も、導師から見れば効率の良い金蔓でしかなかった。

『あれ？　導師って、もう引退したんじゃ？』

『冒険者の引退宣言って、実は無意味なんですよねぇ……』

冒険者が引退宣言をするのは、ある程度の年齢になって衰えた状態で、ギルドや王国からの強制依頼を断るためであったからだ。

なので、たまにアルバイトで狩りに出ても、何ら咎められる事もなかった。

むしろ、魔物の素材は常に不足しているので、頑張ってくださいというのがギルド側の見解だ。

『空いている時間に飛竜を狩る冒険者って、間違いなく導師くらいですし』

『そうだな。俺なら、いくら時間があっても無理だわ』

その収入もあって、導師の家は法衣子爵の中では圧倒的に財政状態が良かった。

あのホーエンハイム枢機卿が、『うちも教会幹部なので、他の法衣子爵家よりは相当に裕福だと思うが、導師の家とは比べるだけ無意味じゃの』というくらいなのだから。

『このアームストロング子爵家は、某の魔法によって成り立った家なのである！　よって、某の死後は普通の法衣子爵家に戻るのみである！』

だから、財産を全ての子供達に分与して、普通の法衣子爵家に戻してしまうのだそうだ。

それでも、他の法衣子爵よりも圧倒的に裕福な家ではあるのだが。

つまり、それほど導師は稼いでいるというわけだ。

『ただ残念なのは、某に娘がいない事であろうか』

元々、アームストロング家は男子が生まれ易い傾向にあるらしい。

そして導師の子供達であったが、全員が男子であった。

『娘がいれば、バウマイスター伯爵に嫁がせるのであるが、とても残念である！』

『そうですね……（助かった……）』

俺からすれば、導師をお義父さんと呼ばずに済むのは大変に助かったわけであったが。

あと、娘とは父親に似るらしい。

ここまで言えば、他に何も言う事はなかった。

「しかし、バウマイスター伯爵もこれから大変であるな！」

「いいえ。全部、代官のローデリヒに丸投げですから」

未開地の開発については、金出してあとは丸投げのスタンスを変

えるつもりはなかった。
なので、ようやく元の冒険者稼業に戻れると、俺は心から安堵するのであった。

第五十五話　バウマイスター伯爵領開発開始。

実家に関わる様々な騒動や事件の処理も終わり、未開地の開発がようやくスタートしていた。

未開地の大半を下賜された俺は、王家からの命令でバウマイスター伯爵となり、本家を相続する身となった。

細かい事だが、これをしないとヘルマン兄さんが継いだ騎士爵家が本家で、伯爵家が分家という奇妙な状態になるからだ。

本家と分家の交代は、たまに発生する。

時の流れによる栄枯盛衰という奴だが、血縁関係の濃い貴族家同士を見分けるためだけに分けて呼んでいるので、それで特に何かが変わる事もないそうだ。

実質は別の貴族家同士なので、共犯ならともかく片方が何か罪を犯しても連座制などもない。

無事な方の家に家族などが世話になるケースが多いので、貴族家による一種の保険制度とも言えた。

子供が居ない場合に、そこから養子を迎え入れる事も多いそうだ。

山脈以南の未開地は、伯爵になった俺が本家で寄り親に。

その下に、将来的には男爵になる予定のヘルマン兄さんが継いだ旧バウマイスター本家と、パウル兄さんに分与された準男爵家。

そして、将来的にはアマーリエ義姉さんの子供達にも騎士爵領を

分与する予定になっている。
ただ、甥達はバウマイスターの姓を名乗れない。
共に、アマーリエ義姉さんの実家であるマインバッハの姓を名乗る事になっていた。
家臣達も、マインバッハ家の縁からある程度受け入れる。
クルトのせいで利権がパーになったので、それなりに配慮しないといけないからだ。

あと、アマーリエ義姉さん自身の処遇であったが、子供達を養育するために残るそうだ。

『まだ若いのですし、再婚とかは考えないのですか？』

『子供を二人も生んだ出戻りの再嫁先なんて、良くてご隠居様の後添えか、下手をすると商人の妾が精々だもの。もう結婚はしないわ。子供達をちゃんと育てないと』

クルトのようにならないても困るので、ちゃんと漢字や計算も教えるのだそうだ。

『それに、戻れないのよね。実家に、何を言われるか……』

マインバッハ家からすれば、今回のクルトの失態は晴天の霹靂だったはず。
普通に貴族の対応をしていれば、嫁ぎ先のバウマイスター領は未開地開発特需で潤っていたのに、今では嫁がせた娘は暗殺未遂犯の元妻になってしまった。

当然、立場的にうちに利益供与などは求められないわけで。
アマーリエ義姉さんが戻っても、ただの邪魔者にしか感じられな

いはずなのだから。

『パウル様の新領地に、お義父様やお義母様と一緒に移ります』

隠居した父であったが、そのままバウマイスター領に残るとヘルマン兄さんがやり難かろうという事で、パウル兄さんが開発を始める領地に移住する事になっていた。

パウル兄さんの領地も完全に一からスタートなので、父の領主としての経験も生きるはずである。

あと、クルトと一緒に俺の襲撃に参加した、共犯者の家族達も一緒に移住する事になっていた。

多分、一番の被害者は彼らなのかもしれない。

いきなり自分の祖父や父が、貴族への暗殺未遂事件の共犯だと言われたのだから。

共犯者は、極秘裏に参加をしていたので家族などに一切相談していなかった。

気軽に家族に相談できる事でもなかったのだが、知った時には一家の主はもうこの世にいないわけで。

それに、犯罪者の家族が周囲から偏見を受けるのは、どこの世界でも同じであり。

それを避けるために、新しい領地へ移住する事になったのだ。

とはいえ、パウル兄さんの新領地は隣である。

調査の結果、良い水田になりそうな湿地帯があり、俺がなるべく早くにある程度の開墾などを魔法で済ます予定である。

家などは、またレンブラント男爵が移築していた。

『最近、バウマイスター伯爵はんは大急がしでんな』

相変わらず妙な関西弁であったが、どうやらルックナー財務卿が優先してうちで仕事をするようにお願いしてくれたらしい。

そのくらいはしないと、弟の件もあって利権を大幅に削られる可能性があるからだ。

『お土産でも持って、遊びに行きますよ』

『是非にお願いします。あの子達にとっては、バウマイスター伯爵様は竜殺しの英雄ですから』

『親殺しの仇でもあるんですけどね』

『その辺の話は、もっと大きくなってからちゃんと話します』

父、母、アマーリエ義姉さん達がパウル兄さんの新領地へと引越したのを見届けてから、ようやくバウマイスター伯爵領の開発が始まる。

まず一番初めにやらないといけない事は、伯爵領の本拠地をどこに置くかを決める事であった。

『海沿いにでも置くの？』

『いや、魔の森で分断されているから止めておこう』

イーナが言うように海沿いという意見は多かったのだが、間に魔

の森があるせいで、広い土地を確保するのが難しいという事情があった。

将来の拡張を考えると、海沿いは難しい。

そこで、移動は魔導飛行船で移動すると割り切って、中央部の平地に作る事が決定する。

地盤が安定していて何も無い草原に、ブライヒブルクよりも人口が増えた時の事を見越して区画整理された都市を作るのだ。

そして、隣には大小複数の魔導飛行船が運用可能な港も作る。

海沿いにも造り、内陸部には小型の物も数箇所作って領内の移動を便利にするのだ。

幸いにして、魔導飛行船の当てはあった。

地下遺跡探索で使用可能な物を何隻も確保していたので、新しい航路を作っても何の問題もないそうだ。

王都～ブライヒブルク～バウルブルク航路が、一週間に一便。

なお、このバウルブルクとはバウマイスター領の拠点が置かれる中心の都市の名前である。

名前が何となくなんちゃってドイツ風なのは、中央の偉い人達のネーミングセンスのせいだと思う。

あとは、小型でも比較的大き目の船をブライヒブルクから週に三便運行する事になった。

現在、ブライヒブルクでは港の拡張工事を急いでいるそうだ。

バウマイスター領内においても、まず最初に比較的大き目の町を建設する場所に十箇所ほど小型船専用の港を作り、なるべく早くに

小型魔導飛行船を運用する事になっている。
開発に必要な物資の輸送に使うためだ。
船と人員は王国側が提供し、船は買い取りで、人員もベテランの空軍の軍人達が、うちで雇用した新人などを訓練する事になっている。

将来的には、大型船以外はバウマイスター伯爵家で独自に運用をして欲しいのだそうだ。

あとは、普通の道路の敷設に、海沿いには海上船舶専用の港も必要で。
これが整備できれば、南部の他の貴族領などから船便で荷が運べる。
東部や西部の海沿いに領地を持つ貴族達も、交易の増加などを多いに期待しているようだ。
工事を行う労働者などを、早速船で送り出していた。

更に、領内の大型河川などは、大雨が降ると氾濫し易い箇所もあるのでその工事も必要だ。

バウルブルクから、ヘルマン兄さんが新領主になったバウマイスター領や、パウル兄さんが開発する準男爵領へと続く道や、他の都市建設予定地点などへと続く道の整備も必要だ。

『計画だけ見ても、物凄く時間がかかるよな』

『普通に考えれば、そうでしょうな』

俺の代官にして筆頭家臣になる予定のローデリヒは、自分の机の

上に大量に積まれた開発計画書を横にずらし、その跡に財務と人事関連のその三倍はありそうかという高さの書類をまた積み上げていた。

前世で商社マンをしていた時にでも、見なかったレベルの書類の多さだ。

俺の防衛本能が素早く、『ローデリヒ、頑張れ！』という言葉を口から紡ぎ出す。

『応援や、紹介された人材なども到着して開発は始まるのですが』

まずは、バウルブルクの建設予定地に、政庁も兼ねる巨大な石造りの住居を作る予定なのだそうだ。

他にも、周囲には拡張性を持たせた町の建設に、魔導飛行船用の港の建設もある。

『とにかく、これが終わらないと話が始まりませんので』

ローデリヒは俺の肩をガッチリと掴み、魔の森に狩りに出かけようとした俺の移動を阻止する。

『工期の短縮のため、お館様に強制依頼です』

『待て！　俺は、冒険者ギルド所属だぞ！』

『お館様は、バウマイスター騎士爵領開発の際に土木ギルドにも登録したではないですか』

各種ギルド支部の進出はまだ先の事であったが、手続きなど後でどうとでもなるそうだ。

『当然、依頼料は払いますので』

『ローデリヒ、お前なぁ……』

結局断り切れず、俺はバウルブルク建設予定現場で一人整地作業に没頭していた。

ローデリヒや新しく雇用した建築に詳しい家臣の指示で、広大な平地を魔法で平坦にし、政庁を兼ねた屋敷の敷地や町や幹線道路などを区切っていく。

更に、近くに魔導飛行船専用の港の位置も決め、続けて彼らを連れてとある場所まで瞬間移動で飛んでいた。

『なるほど、良い石材が大量に採れそうですな』

未開地のとある場所に、鉱物は出ないが良い石材が取れる岩場があり、そこにローデリヒ達を案内していたのだ。

『それで、どのくらい必要なんだ？』

『出来るだけ一杯です！』

『……』

ローデリヒの無茶な要求により、俺は石材の採集を開始する。

大型の物は、風系統の魔法であるウィンドカッターでカットし。

小さ目な物は、水系統のオリジナル魔法であるウォーターカッターで形を整えていく。

このウォーターカッターの魔法は、前世で水圧で素材を切る機械を見たのをヒントに考案していた。

そして、ある程度加工済みの石材が貯まったら、魔法の袋に入れてバウルブルク建設予定地にある石材置き場に積んでいく。

整地や区画割りの作業と平行してやっていると、三日後くらいから、ボチボチとバウルブルクの建設工事は始まっているようだ。

港は無くても、魔導飛行船は大型で無ければ、平坦な土地ならば人と荷物くらいは降ろせる。

早速第一陣が、労働者用の仮設住居を建てながら、同時にバウマイスター邸の基礎工事を始めていた。

屋敷とは言っても、有事には防衛拠点も兼ねる城に近い物になる予定なので、地面を掘り起こして土台から工事を始めていたのだ。

『お館様、土台の工事に時間がかかり過ぎです。強制依頼です』

『お前なぁ……』

ローデリヒに言われて、巨大で頑丈な土台を埋める穴を掘る事になる。

しかし、ローデリヒも逞しくなったものだ。

勝手に故ルックナー男爵に認知された事を知った時には、『拙者には、あんな男の血など一滴も流れていませんから』と言い放ち。

『爵位も財産も結構』と断言するほどなのだから。

結局ルックナー男爵家は断絶となり、財産も没収されたのでその心配は無用であったようだが。

『ルックナー男爵の財産を貰ったけど、渡した方が良いのかな？』

『いえ。あんな男が触れた金など、一セントとしていりません』

商人の娘を母に持ち、経済観念なども優れた男であったが、それだけは譲れないのだという。

ただ、後日にルックナー財務卿も悪いと思ったのであろう。自腹を切って、ある程度纏まった現金を渡していたようであったが。

『あとは、町のメインストリートになる中心道路の造成ですね』

『あのなぁ……』

それでも仕事なので、俺は土木魔法で道路を整え、その両脇に雨水を排水する溝を掘っていく。

あとは、雇われた労働者達が石材を敷いて、隙間をコンクリートで塞いでいく。

要するに、大まかな部分だけ俺がやり、残りの細かな作業を人海戦術でやってしまうのだ。

『お館様は、大儲けですな』

『そうか？』

財政的に言うと、俺は大半の金をローデリヒに預けてはいるが、それは俺の資産なわけで。
なのに、俺が仕事で土木工事をすると、ローデリヒが俺の資産から依頼料を払い、それが俺の資産になるのだ。

多分、こんな奇妙な事を経験している貴族など、ほとんどいないはずであった。

なら個人の資産とバウマイスター伯爵家の資産を別にすれば良いと思うのだが、貴族にはそういう考え方は無いらしい。
自分のお小遣いを決めている律儀な貴族もいるそうだが、大半は領地経営に金を使うも己で放蕩するも自分次第になっていた。

『工事は早く進むし、別に人を使っていないわけではない。支出は少なくなるが、その分は第二期以降の計画を前倒しすれば良いわけで。でも、何か妙だな？』

『お館様。明日は、近くを流れる河川の工事です』

そう言われてローデリヒから図面を渡されるが、当然この世界にも治水の概念は存在する。

河の流れを変えたり、川底を浚渫したり、遊水地を作ったり、堤防を築いたりと。
さほど、古今の地球にある国家や地域で行われていたのと変化は無いはずだ。

あと、バウルブルクに用水路を引くので、その基礎工事も必要であった。

『この通りにやれば良いのか？』

『はい。細かな補修作業などは、後日に人を送りますので』

ここでも、大まかな部分は俺で、残りは人海戦術という基本に変化は無いようだ。

『それは明日にやるとして、まずはバウルブルクの整地と道路工事だな』

懸命な努力の結果、三日間ほどでバウルブルクの整地は終了していた。

ただ、今の時点では舗装もされていない道が碁盤の目状に広がるただっ広い平地だけしか存在していなかった。

例外的に、建設中の石造りの屋敷と工事関係者が寝泊りする仮設住宅が広がっていて、あとはレンブラント男爵が移築した僅かな建物だけ。

早速工事関係者目当てに商売人が小型魔導飛行船で現れていたが、彼らはゴザの上に品物を置いて売っている状態であった。

『募集した警備隊の第一陣ですが、予想よりも精鋭揃いですな』

それは、ヴィルマを養女にまでして縁を結んだエドガー軍務卿が推薦する人材ばかりなので当然であろう。

軍人家系で良く鍛えられている上に、軍や警備隊を辞めてまで来ているのだから。

第一陣なので、将来発足するバウマイスター諸侯軍の幹部候補と

いう点も含め、彼らは治安維持のためにパトロールを行い、工事関係者などを野生動物から守るために狩りも率先して行い、工兵訓練の名目で工事の手伝いまでしていた。

『野生動物か。凶暴なのも多いからな』

『そこで、依頼です』

『マジかよ……』

結局、バウルブルクを守るために作られる予定の外壁部分に、臨時で野生動物避けのための土壁を作る依頼が増え、この日は魔力が尽きて屋敷に戻れない羽目になってしまう。

この土塁は、後で石製の壁に交換するそうだ。

多分、石材の切り出しは俺の仕事になるはずである。

『仮設用の住居がありますので』

『お前は鬼だな、ローデリヒ』

戻れないのは仕方が無いので、今日は仮設住居に泊っていく事にする。

未開地は夜でも寒くならないので、仮設住居とは言ってもテントに毛が生えた程度の物が人数分並んでいるだけであったが、俺は冒険者なので大して気にはならなかった。

風呂も、警備隊が河から汲んで来た水で体を拭くくらい。

俺だけは残り少ない魔力で浄化魔法を使って体を綺麗にするが、このくらいの特権は許されるはずだ。

飯は、雇い入れた料理人に、警備隊で料理の上手な人が手伝って完成させたようだ。
パンを大量に焼き、御飯も大量に炊き。
野菜が大量に入った味噌仕立てのスープに、俺がローデリヒに貸している汎用の魔法の袋に入った肉や魚も調理され、警備隊がこの辺の野生動物駆除のために狩った獲物も解体され、醤油や味噌で味付けされてから焼かれて提供される。

あとは、果物だけであったがデザートもあるし、酒も警備隊員で夜の見回りが無い者には出されていた。
ただ、輸送量の関係で一人当たりの量は少なくなっていたが。

『それでも、酒が飲めるので好評ですな』

その日の夜、俺はローデリヒや警備隊の主だった幹部達と食事を食べながら話をしていた。
こんな状態なので皆同じメニューであったが、彼らは特に不満もなく食べているようであった。

『普段の食事からすれば、ご馳走ですな』

『ええっ！　そうなの？』

『軍や警備隊の食事は、質よりも量ですから』

そういえば、以前にグレードグランド討伐で軍の駐屯地にお世話になった時。
量ばかり多くて、味は微妙な飯を出されたのを思い出す。

『ミソやショウユは、王都で買うと高いですからな。未だに、軍や警備隊は塩でしか味付けしませんので』

幹部候補達は、みんな軍や警備隊で出る不味い飯に苦労していたようだ。

『その点、トリスタンの家は良いよな。実家が裕福だし』

『みんなが思っているほど、素晴らしい飯なんて出ないさ。パーティーとかで見栄を張っている時ならともかく』

実は、このトリスタンという二十代前半の若者は、エドガー軍務卿の四男なのだそうだ。

しかも母親が側室で、このまま軍内で燻っているよりはと。

父の勧めに従って、今回の募集に応募したらしい。

事前にエドガー軍務卿が紹介状を書いていたので、まず落ちる心配はなかったのだが。

『軍務系の貴族家は、普段はあまり豪勢なご馳走は食べないのはお前らも知っているだろう?』

軍務系の貴族達は、普段から体を鍛えてパーティー以外であまり豪勢な食事を取らないのだそうだ。

節約という理由もあったが、軍務系の貴族やその子弟が太っていると外部からあまり良い印象を受けないからだ。

特に出世したい人は、定期的にある閲兵の儀式などで見た目が良くないと、この時点で出世コースからは外れてしまう。

軍人の能力と体型に関係は無いと思うのだが、そういう人は補給

や参謀コースに進む事になっている。

そこでも出世は可能であったが、やはり軍人は若い内は前線で剣を振るい、ある程度年を取ったら指揮官になる事こそが花形だと思われていた。

ただ、この二百年ほどは演習以外であまり指揮官の出番も無かったのだが。

『トリスタンの家は、侯爵家だからな。例外かと思った』

『あの親父が、そんな無駄遣いなんてしないさ』

『確かに、エドガー軍務卿に似ている』

『お館様、私はうちの親父ほど悪知恵は働きませんから』

トリスタンさんの言う悪知恵とは、父であるエドガー軍務卿がヴィルマを自分の養女にし、俺の側室に押し込んでしまった件であろう。

『あの娘はまだ未成年なのに、親父も強引な事をする』

『という事は、トリスタンさんは俺の義理の兄になるのか？』

『お館様、ここは呼び捨てにしませんと。一応、そうなりますけどね。あの娘は養女ですし、あまり気にしない方が良いかと思います』

実の娘を押し付ければ少し関係が深くなってしまうが、義理の娘ならば微妙な距離感も保てる。

そういう計算なのかもしれない。
ホーエンハイム枢機卿への配慮もあるのであろう。

なかなかに油断できない筋肉達磨である。

『実の娘を嫁がせたって、縁が繋がるのはその代と次くらいですしね』

歴史の長い貴族家ほど、他の貴族家と婚姻を重ねている。
なので、古い代の縁戚など気にしていたらキリがないので、そこは無関係だという認識があるそうだ。

『とはいえ、何か交渉事があると古い話を引っ張り出すのも貴族ですから』

確かにローデリヒの言う通りで、そういう事もあるのであろう。

『奥さんが増える度に、面倒が増えるような……。ところで、俺の結婚式ってどうなったの？』

『延期です』

もう成人もしたし、中央の貴族達もじれているのではないと思うのだが、意外にもローデリヒの口から出た言葉は式は暫く延期という物であった。

『なぜに？』

『せっかく領地持ちになったのだから、屋敷が完成してからそこで行うという話で』

『屋敷って……』

まだ土台を工事中なので、完成時期を計算すると相当先のような気がするのだ。

『予定では、お館様が十六歳の誕生日を迎えた時に行うと』

その頃には、ヴィルマは十四歳になっているはずで。

十三歳よりはマシだと、エドガー軍務卿などは思ったのかもしれない。

『あとは、時間が空いた隙に他の貴族達が側室を押し付けるチャンスを与えたとも考えられます』

非常に迷惑な話である。

前世で一人の彼女すら持て余した経験のある俺が、今では四人の婚約者持ちなのだ。

これ以上増えたら、リア充ではない俺ではまた持て余してしまう。

『間違いなく、ルックナー財務卿が延期を提案したのでしょうな』

『全く、あの人は……』

結局、ルックナー弟によるローデリヒの認知は無かった事にされていた。

理由は、本人が頑なに拒絶したのと、未開地開発で代官を務める人物に余計な仕事を増やさないためだ。

なので、ローデリヒにとってルックナー財務卿は伯父でも何でもなく。

元から完全な他人だと思っていた事もあり、伯父に対する態度はかなり冷淡とも言えた。

苦しい時にまるで助けていないので、当然とも言えたのだが。

『今回の事件で、大失点をしていますから。噂によると、孫娘をお館様の側室に差し出そうかと考えているとか』

これは、直前まで王都に居たトリスタンが、エドガー軍務卿から手に入れた情報のようだ。

『それ、ホーエンハイム枢機卿が激怒しないか？』

ルックナー男爵邸での大量虐殺事件は不幸な結末であったが、もしあの怨念が屋敷の外でも活動していたら大被害となり、ルックナー財務卿への責任論も浮上していたはずだ。

なのに、それを防いだホーエンハイム枢機卿を余計に怒らせて、一体どうしようと言うのであろうか？

『エリーゼ様の対抗馬を、敢えて押し込めるのですかね。それは、怒るでしょう。計画倒れの可能性が高いと、親父も言っていましたし』

あと、その孫娘とはまだ八歳なのだそうだ。

さすがに、年齢が一桁の女の子とは式を挙げるのは、いくら貴族でも不可能であった。

『お断りだし、こんな開発途上の僻地に来れる貴族のお嬢様なんて果たしているのかね？』

何でも完璧超人のエリーゼはともかく、ルイーゼとイーナは俺と生まれに大した違いもないし、ヴィルマは自分で自分の食い扶持を稼ぐほど逞しい性格をしている。

『初代で成り上がったバウマイスター伯爵は、最低でも冒険に付いて来れる娘でないと嫁にしない』と貴族達が思ってくれた方が好都合でもあったのだ。

『どのみち、屋敷が完成しない事には……』

もう少し町の建設が進めば、現在はバウマイスター騎士爵領内にある屋敷をここに移転する事も可能なわけで、今はとにかくバウルブルクの建設を一日でも早く進める必要があった。

『というわけでして、お館様には更なる奮闘を』

『ローデリヒは、やっぱり鬼だと思う』

俺は、配給された酒を飲み干してから、割り当てられた仮設住居の中で横になるのであった。

第五十六話　『暴風』という名の女。

「お館様。今日は、港の浚渫工事です」

「わかった。急ぎ行うとしよう」

未開地の開発が始まってから、約三ヶ月の月日が流れた。

その間、俺は週に一度の休みを除き、朝から晩まで未開地中を駆け巡って土木魔法を行使し続けていた。

すぐに町や村が建設可能なように、土地の平坦化や地盤の強化や区画割りを行い。

それらを繋ぐ道の建設に、大規模な畑や田んぼの開墾に、用水路の掘削、野生動物避けの土壁と溝の作成。

河川の治水工事各種に、岩山での石材の切り出し、森林での木材の切り出しと。

海岸沿いでも大規模製塩を行うそうで、その基礎工事に積み出しも兼ねた港も大小十箇所以上作るそうだ。

大型船が着岸できるように海底の浚渫も必要であったし、港町建設のための基礎工事もある。

また、海に出ると大小数十の島もあって、そこでは野生のサトウキビが大量に生えているので、それを農業として行うために港や村や町も必要となっていた。

「ところで、お館様の地図に書かれた鉱山の位置ですが……」

「この未開地って、かなり鉱物資源が豊富だよね」

入り組んだ場所にあり、埋蔵量や含有量が微妙な鉱山は、魔法の練習のために廃鉱になるまで資源を採取していたが。

その他の人力でも簡単に採掘可能な鉱山は、調査だけして地図に場所を記載するだけにしてある。

抽出魔法の練習や、魔力量を上げるための魔法使用では、そういう鉱山の方が練習になるからだ。

実は、一番魔力を上げるために効果のある方法は、適当にその辺の地面でひたすら砂鉄を集める事だったりする。

集められるだけ集めて、最後にその鉄の塊から不純物を取り除くのだ。

この方法は、師匠が子供の頃にやっていた方法なのだそうだ。

そして、出来上がった鉄の塊を担いで行って鍛冶屋に売り、自分のお小遣いにしていたらしい。

ちなみに俺は、銀に魔力を篭めてミスリルを精製する方法や、辛うじて金属類を含む岩山から所定の金属だけを集めるという方法を好んで行っていたのだが。

「早急に人を手配します。ですが、魔法とは物凄い物ですな」

普通なら、大規模な鉱山技師を含めた調査団を送り、最低数ヶ月間は念入りに調べる必要があるからだ。

だが、魔法で調査すれば、採取可能な金属の種類に大まかな含有量や埋蔵量までわかってしまう。

なので、詳細な探知魔法が使える鉱山技師は、死ぬまでスケジュ

ールが詰っていると言われるほど忙しい仕事なのだそうだ。

「とにかく、今は開発第一ですな」

「そうだな」

「今夜は、アルノーのモツ焼き屋で飲み会でもしましょう」

「それは良いな」

朝、パーティーを組んで魔の森に出かけるエル達を瞬間移動で送り出してから、俺もバウルブルク建設に飛び。

そこで、ローデリヒから今日の仕事内容を聞く。

現地に飛んで作業を行い、場合によっては複数の依頼をこなし、夕方になったらまたエル達を迎えにいく。

日によっては、夕食はローデリヒ達や他の工事関係者達と取る事もある。

大体が支給される食事や酒を楽しむのだが、たまに外食になる事もあった。

とはいえ、まだバウルブルクに本格的な飲食店は存在していない。

商機に目敏い人が屋台モドキを引いているので、そこで食べる事が多かったのだ。

特にお気に入りなのは、モツ焼きの屋台であった。

ここの店主は、野生動物駆除や狩りで出た獲物の内臓を安く買い取り、それを丁寧に処理して煮込みや串焼きにして出してくれるのだ。

味は塩・味噌・醤油と三種類あって、他の工事関係者達にも人気のお店になっていた。
下品ではあるが美味しいモツ料理を食べ、アルコール度数が高い酒を飲みつつ、野郎しかいない席で色々な話をする。
別に俺は同性愛者ではないが、男だけで行う下ネタ込みの飲み会という物も楽しいものであった。
非常に楽しいのだが……。
「今、ふと思った。俺って、冒険者だよな？」
「はい、お館様は冒険者です」
冒険者なのにこの三ヶ月以上、ただひたすら未開地の土木工事しかしていないような気がするのだ。
果たして、これが冒険者の仕事と言えるのであろうか？
「これは、土木ギルドと冒険者ギルドの合同依頼です」
現在、掘っ立て小屋ではあるが、実はバウルブルクに冒険者ギルドが支部を出していた。
そこに土木ギルドが、凶暴な野生動物も出るし、行くのに困難な場所の工事依頼をローデリヒから請けたと連絡し。
連絡を受けた冒険者ギルドから、俺に依頼が行く。
俺は、仕事をこなしてから報酬を貰い、一部を手数料として冒険者ギルドに納める。
ついでに、土木ギルドもそこから分け前を貰う。

法的に言えば、冒険者としての仕事とも言えなくはなかった。

「なるほど、冒険者ギルドの仕事でもあるって……あるかい！」

全然、冒険者の仕事ではなかった。

おかげで、昨日エルから『ヴェルって、土木作業者だよな？』などと言われてしまったのだから。

「エルヴィンも、酷い事を言いますな」

「エルも酷いが、ローデリヒも酷いと思う」

領主として仕事をしなくても良いという話だったからバウマイスター伯爵家の当主になったのに、来る依頼は開発工事ばかりなのだから。

「お館様、土木工事は領主の仕事ではありません」

「お前、最近物凄く冷静だな」

こんな言い争いをしていても埒が明かないので、俺は一つ疑問に思った事を聞いてみる。

「とはいえ、この前にやった河の治水工事全般。全然、仕上げに入っていないじゃないか」

俺が担当するのは、効率を重視して一番手間のかかる基礎工事ばかりであった。

つい一週間ほど前に、ここから大分離れた河を三日かけて工事したのだが、その仕上げ工事が一向に始まっていなかったのだ。

「河の流れを変え、川底を浚渫し、遊水地を造り、浚渫した土砂で堤防を造り。苦労したのに、仕上げ工事に入ってないじゃない」

せめて、堤防を石材とコンクリートで補強する工事くらいはして欲しいものだ。

「あれだけの出来栄えですから、よほどの大洪水でも来なければ暫くは大丈夫なので。工事には、優先順位がありますから」

現在も、バウルブクル郊外に完成した港から、魔導飛行船で大量の人と物資が運び込まれていた。

他にも、数箇所の町の建設予定地に小型の魔導飛行船で物資が運ばれ、家の建築や大規模農場の建設も進んでいる。

あとは、未開地中を網羅する道路網の建設や、魔の森を越えた海岸沿いでも複数の港町の建築も始まっている。

結局、三分割されている魔の森の開放は、今は危険なのでしない事になっていた。

貴重な魔物や産物の多い、東と西はそのままにして中央部の森の開放を検討したのだが、中央部とその他二箇所の森では生息する魔物や植生がまるで違う。

下手に君臨する主を倒して統制を破壊すると、領域から出た魔物が大挙して海沿いや未開地中央部に流れ込む危険があったからだ。

結局、上空数百メートル以上を魔導飛行船で移動すれば問題は無いという事がわかり、今は海岸部と内陸部を定期的に航行する小型魔導飛行船の運行が試験的に行われている。

それと、港の建設も複数個所行われていた。
なぜ知っているのかと言えば、俺が基礎工事をしたからだ。

魔の森は、貴重な産物や魔物が多い。
なので、冒険者に開放して狩りを推奨し、その素材を冒険者ギルドに卸させ、ギルドから税金を徴収する。
そういう方針のためか、もう魔の森に建設中の複数の町には冒険者ギルドが支部を出していて、早速冒険者達が魔の森に潜っているそうだ。

ただ、見慣れぬ魔物に早くも犠牲者が複数出ているようであったが。

「お館様の基礎工事が進んでいる理由は、もしお館様が土木工事依頼を数ヶ月受けられなくても、開発計画に遅延を来たさないためです」

俺がいない間は、仕上げ工事などを集中的に行えば良い。
そのために、前倒しして俺に基礎工事をさせているようであった。

「（ローデリヒは、実は俺よりも貴族に向いているかも……）」

「拙者は、お館様の家臣で十分に満足しておりますので」

実はルックナー財務卿から、『ローデリヒにその気があるのなら、ルックナー男爵家の復活も……』という話があったのだが、彼にその気は微塵もないようであった。

「現実的に考えても、あんな失態を犯した家など継ぎたくもありま

せん。実入り的に考えても、お館様の家臣の方が優れておりますので」

代官を任せる都合上、その職にある限りは高額の役職給をローデリヒに払っていた。

その額は、王都にいる法衣伯爵が『代わって欲しい』というほどであった。

丸投げにしている以上、その間はそれに見合う報酬を払う必要があったからだ。

俺が冒険者を引退して領主の仕事を始めれば、減額の必要はあるのであろうが。

「予定では、二十年ほどは任せるさ」

「やり甲斐のある仕事なので頑張りますとも」

「そうか。それは、良かった」

そう言いながら、俺は魔法の袋から大量の冊子のような物を取り出してローデリヒに渡す。

その数は、多分五百冊は超えるであろう。

その重さに、ローデリヒも驚いているようであった。

「お館様。これは？」

「お見合い写真だ」

この世界には、カメラが存在している。

古代に製造された物しか現存していない魔道具なので、王族、大貴族、大商人くらいしか持っていなかったが、貴族はこれを良くお見合い写真に利用していた。

幸いにして、フィルム製造技術の復興には成功したので、貴族達はフィルムを買って寄り親や、寄り親から紹介された貴族の屋敷に行って撮影を行う。

フィルムの値段が一千セントほどと高いのが難点であったが、どうしてもライバルに負けられない貴族が気合を入れて娘や妹の撮影を頼むのだそうだ。

お見合い相手としても、相手の顔がわかるので重宝するらしい。お見合い相手側から、『うちの娘は、美しいですよ』と言われても知己でなければ相手の顔などわからないわけで、写真があって実際に綺麗ならば選ばれ易いのは当然の結果でもあった。

「数が多いですな」

「いやあ、数が増えちゃってね」

バウマイスター伯爵領で代官を務め、筆頭家臣でもあるローデリヒにはお見合い話が殺到していた。

と同時に、俺にもその数倍のお見合い話が来たのだが、別にローデリヒでも構わないという人は、全てローデリヒの方にお見合い話を変更してしまったのだ。

やはり、『俺の妻になるには、魔の森で狩りが出来ないと駄目』というハードルは物凄く有効な作戦のようだ。

「ローデリヒもこれから更に忙しくなるわけだし、早く結婚しないと」

「それは、わかっているのですが……」

ローデリヒが何となしに一枚目の冊子を開けると、そこにはまだ幼い女の子が写っていた。

「お館様……」

「ルックナー財務卿の孫娘だって」

俺に押し付けようとした八歳の孫娘を、そのままローデリヒに押し付ける事にしたのだ。

酷いようだが、これにはちゃんとした理由もあった。

「せっかくルックナー一族が持っていた法衣男爵枠だからね。失いたく無いんじゃないの？」

ローデリヒが継がないと言った以上は、この孫娘との間に出来た子供に継いで貰う。

それが、ルックナー財務卿の考えであったようだ。

「同じ財務閥の貴族同士、勢力比率とかで偏りが出ると困るんだってさ」

「上級貴族とは、面倒ですな」

兄弟で対立はしていても、あの法衣男爵家はルックナー一族の枠という考えがあるようだ。

失態を犯したのだから取り上げても良いような気もするが、五大財務閥家の間ではある種の談合が成立しているらしい。

下手に争ってその枠を他の一族が取っても、今度は他の財務閥一族の標的になってしまう。

無用な争いはコストばかりかかって実入りが少ないので、互いにある程度の権益を相互保障しているのだ。

「上で談合して結束していると、成り上がり貴族の下克上が防ぎやすいですからな」

そのせいで仕官に苦労したローデリヒは溜息をつくが、そんな堅苦しい貴族社会の閉塞感を打破したのが、竜を退治して未開地の開発を始めた俺なのだそうだ。

「そんなわけで、ルックナー財務卿は男爵家維持のために、他の五大財務閥家に分ける利益を増やす羽目になりと」

「あの男爵家を維持するのとしないのと。どちらが得なのやら。しかし、拙者が政略結婚とは……」

断れないと悟ったローデリヒは、盛大に溜息をついていた。

「その点に関しては、俺の方が先輩だな。その娘が正妻で、あと最低一人は貰ってね。じゃあ、俺は明日から狩りに行くから。予定では一週間ほど」

「お館様ぁーーー！」

「頑張れよぉーーー！」

俺は、お見合い写真の束を抱えて叫ぶローデリヒを放置して、一気に瞬間移動で工事現場へと飛んでいくのであった。

「ヴェルも悪党だな」

「いやいや、主君としては筆頭家臣に身を固めて貰わないとね。そういうわけで、エルも」

大量の見合い写真を渡されて絶叫するローデリヒを放置して予定通りに工事を行った翌日、俺はエル達と魔の森へと出かける準備をしていた。

約三ヶ月ぶりの狩りなので、エルから『あの情況で、良く来れたな』と言われ。

俺は、ローデリヒのお見合いの件も含めて開発状況の詳しい事情を説明する。

するとエルは、大量のお見合い写真をローデリヒに押し付けた俺を酷い奴扱いしていた。

「何で、俺もなんだよ！」

「当たり前だろうが！　お前は、俺の警備隊長なんだぞ」

剣の腕はなかなかだが、まだ俺と同じ歳で諸侯軍の指揮は不可能

であろうという理由から、エルは公式な役職を俺の警護隊長へと変更させていた。

まだ冒険者稼業を続けるので、常に俺から離れずに護衛を行うのがエルの仕事になったのだ。

多分、冒険者を引退しても俺の周辺警護の仕事にかわりはないと思われるが、その内に軍関連の仕事も習う予定なので諸侯軍の幹部になる事は確定していた。

「俺、まだ結婚とかいいや」

「無理！　まず無理！」

しかし、ブランタークさんも悪い遊びを教えたものだ。

以前にエルは、ブランタークさんから王都の歓楽街に何回か案内されたようで、身を固めるよりも適当に遊んだ方が面白いと思っているらしい。

「ヴェルも、まだ遊びたいだろう？」

「……」

否定はしないが不可能なので、俺は無言を貫いていた。

そんな場所で遊んで、後で『バウマイスター伯爵様の子です』などと、変な女が名乗り出でもしたら大変だからだ。

あと、エルは周りを良く見てから発言した方が良いと思う。

「えっ？　何？　女遊びがどうかしたって？」

「エル、ヴェルに妙な事を吹き込まないで欲しいな」

「エルさん、ヴェンデリン様は責任のある立場になられたのです。側室ならともかく、遊びの女性はいけません」

槍を構えるイーナ、拳をポキポキとならすルイーゼ、普段は使わないメイスを構えるエリーゼに囲まれ、エルは顔を真っ青にさせて冷や汗を流していた。

なお、普段はエル達に付いて狩りに参加している癖に、今日ブランタークさんは急用でお休みなのだそうだ。

その辺の嗅覚の良さが、彼をチョイ悪オヤジにしている最大の原因かもしれなかった。

「遊び？　木登りとか、釣り？」

「あのね、ヴィルマ。そういう遊びじゃないから」

この前、晴れて四人目の婚約者になったヴィルマは、最初に会った頃には夜伽をするとか言っていた癖に、その手の知識は皆無であったようだ。

遊びイコール子供の物という感覚しかなく、イーナ達が怒った理由が良くわかっていないようであった。

「とにかく、今日はこの面子で魔の森に行こうぜ。じゃあ、エルはこれね」

「何これ？」

「お見合い写真。最低、二人は選べってさ」

「なぜ、貧乏騎士の五男でしかない俺が……」

エルは、俺が渡した二百枚ほどのお見合い写真に絶句していた。

これも、ブライヒレーダー辺境伯経由で送られてきたのだ。

面倒なので任せているのだが、彼に言わせるとこれでも大分厳選しているのだそうだ。

『みんな、こぞってお見合い写真を持って来て、私に自分の娘や妹の素晴らしさを力説するんです。全部聞いている私って、相当に我慢強いでしょう？』

確かに、俺はそんな事に時間はかけたくなかった。

商社マン時代に、休日に先輩の家に招待されて嫁や生まれたばかりの娘自慢をされた事があるのだが、その時の気持ちに似ているのかもしれない。

「俺もエルも立場が変わったんだ。当然だろうに。なるべく、一ヶ月くらいで相手を決めて欲しいってさ」

「拒否権無しか……」

「そんな物、あるわけがない」

領地持ちの伯爵の重臣になるのに、独身で子供がいないなどという情況が許されるはずがなかった。

ブランタークさんのような存在は、滅多にいない例外なのだから。

「ヴェルの鬼！」

「何とでも言え！　ローデリヒと一緒に、お見合いのスケジュールを組んでやる」

大量のお見合い写真を抱えたエルも含めて、パーティーで魔の森の入り口まで瞬間移動で飛ぶ。

いつも行く、西側の巨大フルーツが採れる森の海岸側の入り口では小さいながらも港町が建設途中であり、同じく港も大型船舶に対応可能なように工事が進んでいる最中であった。

「ヴェル、あそこが冒険者ギルドの支部」

「ボロいね」

「受け付け業務が出来れば問題ないからね」

ルイーゼの指差す先には、粗末な小屋ながらも冒険者ギルドの支部があり、そこには数十名の冒険者が出入りしていた。

彼らの活動拠点の変更手続きを行い、その成果を買い取るだけなので今は小屋でも問題ないようだ。

買い取った品を入れる倉庫も、魔法の袋があるので必要ない。

魔物の解体なども、現在は王都の施設で行っているそうだ。

「しかし、予想以上に人が多いな……」

「危険でも、実入りが大きいから」

イーナの言う通りに独自の魔物や採集物があるので、危険度は高

くても東側と西側の魔の森に挑む冒険者は多かった。
かなりの犠牲者が出ているようだが、腕が良くて成果を得て戻って来るパーティーもある。

冒険者なので、無駄死にするのも、成果を得て大金を得るのも。
それは、完全な自己責任になっていたのだ。

「そういえば、初期の探索で得た物が高く売れたんだっけ？」

「ええ。ヘルマンさんも感謝していたわ」

イーナ達は、俺が土木冒険者として奮闘している間に、魔の森での狩りや採集を集中して行っていたそうだ。
その結果、魔物の素材は王都でオークションに掛けられて大金で売れ、それはフルーツ類なども同じであったようだ。

現在、王都の富裕層向けの食材店やお菓子屋などでは、フルーツその物や、それらを使ったデザートなどが物凄い値段にも関わらず飛ぶように売れているらしい。

当然、それを目指してここまで来る冒険者は多かった。

「でも、使い道に困った物もあったわよね。ヴェルが、何とかしたけど」

それはカカオの実であったが、確かに加工方法がわからなければただの実と種なので、イーナが心配したのも良くわかるというものだ。

「ココアとチョコレートって、高いけど美味しいのねぇ……」

俺が製法をアルテリオさんに伝え、彼が口が堅いお菓子職人などを抱え込んで製造したココアやチョコレートも、材料の一つであるミルクが元々高級品だった事もあり、大変に高価な物になっていた。

カカオの種子を果肉ごと取り出してから、バナナの葉に包んで発酵させ、低温で焙煎してから種皮と胚芽を取り除きとか。

一応は商社員時代に会社が輸入もしていたので勉強はさせられたのだが、実際の作業は全てプロのお菓子職人に任せていて、彼らは何回かの失敗の後に良い物を作ってくれたようだ。

おかげで、王都では高価なココアやチョコレートも、アルテリオさんからのパテント料込みで無料で貰う事が可能になっていた。

「イーナちゃんの言う通りだね。つい食べ過ぎてしまうから」

「ホットチョコレート、美味しいですよね」

「チョコレート美味しい」

どこの世界でも、女性の甘い物好きは同じらしい。

うちの女性陣は、携帯食料としてココアとチョコレートを持参するようになっていた。

品質の関係で前はブランタークさんの、今は俺の魔法の袋に大量に仕舞ってある。

「カカオの実を取りに行こうよ」

「実際、需要が多いからな」

昨日エルは、あの掘っ立て小屋な冒険者ギルドに入って掲示板を見て来たそうだが、アルテリオさんがカカオの実が足りないから持って来たら高く買い取ると依頼を出していたそうだ。

「じゃあ、主にカカオの実だな」

当然、採集作業の間に魔物の襲撃はあるのだが、それは冒険者の宿命というやつであろう。

その魔物も狩れれば利益になるので、腕の良い冒険者からしたら都合が良いわけであったが。

「昨日まではブランタークさんがいたし、今日はヴェルがいるからな。大変に心強いわけだ」

冒険者パーティーに強力な魔法使いがいると、狩りの効率が断然違ってくる。

安全性については、言うまでもなかった。

「じゃあ、エル達がここのトップパーティーなのか？」

「一応な。ブランタークさんに下駄履かせて貰ってだけど」

あの人は、元々超一流の冒険者であった。

なので、狩りの効率が全然違うのだそうだ。

「まだ冒険者としては未熟な俺に、そこまで期待するなよ」

「あらあら、竜殺しの英雄さんは意外と謙虚ですのね」

「誰だ？」

突然話に割って来られたので、俺はその声の主の正体を探し始める。

声がした後ろを振り向くと、そこには若い女性が立っていた。

「私、カタリーナ・リンダ・フォン・ヴァイゲルと申しますの」

俺は、すぐにこの女性が魔法使いである事に気が付く。

しかも、かなりの魔力量と腕前を持っているはずだ。

年齢は十八歳くらいであろうか？

またも珍しい、腰くらいまで伸ばした紫色の髪を、昔の少女漫画のお嬢様キャラみたいに縦ロール状にしていて。

頭には、水色の宝石を複数付けたカチューシャを装備していた。

「（宝石に見えるけど、アレは魔晶石か……）」

魔力が尽きた時のための、予備という事なのであろう。

あと、指にも複数の魔晶石が付いた指輪を填めていた。

服装は、特注であろうと思われる赤い皮製のドレスで、一部ヒモの部分とスカートのヒラヒラ部分が白い布で出来ている。

一見、冒険者には不向きな格好に見えるが、素材には竜の皮と産毛を使用した、物理・魔法防御力に優れた一品であると俺は分析していた。

当然目の玉が飛び出るほどの金がかかるのだが、彼女はそれを稼げる超一流の魔法使いなのであろう。

加えて、同じく竜の皮で出来ていると思われるダークブラウンの

ロングブーツと、その手には長さ二メートルほどの長い棒状の杖が握られているのだが……。

俺は、彼女の格好に物凄く違和感を感じていた。

「（ヴェル、彼女は没落貴族の子孫なんだと思う）」

エルが小声で耳打ちした内容は、間違いの無い事実であろう。

ヘルムート王国の歴史が始まってから約二千年。

その間に多くの貴族家が誕生していたが、同時に滅亡・没落した貴族家もそれなりの数存在している。

爵位と領地を失った彼らは当然もう貴族ではないのだが、それでも昔は貴族の家柄だったのだというプライドと、いつかは復活をと願って、名前からフォンを外さない人が多かったのだ。

「（見ればわかるさ）」

これでも、三年近くも王都で生活してきたのだ。

俺にでも、本物と偽物の貴族くらい見分けられるようになっていた。

彼女のように、お嬢様風縦ロールな髪型の貴族令嬢はそれなりの数存在はしているし。

顔も少しキツ目には見えるが、高貴な顔をした美人でもあった。

肌も白くて綺麗だし、装備品も彼女が着るとエレガントに見えるくらいだ。

だが、彼女は妙な物を余計に付けていた。

それは、同じく幼竜の産毛で織られたと思われる、純白のマントを付けていたからだ。

「（本当の貴族なら、あのマントはねえわ）」

このヘルムート王国において、マントの着用規定は物凄く厳しかった。

王族は当然として、伯爵家以上の当主と、軍において将官になれた者に、現役の閣僚。

しかも、将官は退役すれば着用は出来ないし、閣僚も辞任後に自分が伯爵家以上の当主でなければ着用は認められない。

あと言うまでもなく、女性にその権利は存在しなかった。

たまに平民などが、格好付けたいからと言って遊びやファッション感覚で着けるそうだが、それに王族や貴族も特に目くじらは立てないらしい。

なぜなら、あまりに着用規定が厳しいので、平民がマントなど着けても完全に浮いてしまい、すぐに不自然だと思われてしまうからだ。

マントを着けてる自分に酔おうとしたら、周囲から小さな笑い声しか聞こえなかった。

こうして若者は、過去のマント姿を黒歴史として葬り去るのが恒例になっているそうだ。

「（ヴェルでも、着けていないのにな……）」

「（今の俺は、あくまでも冒険者だし）」

更にマントは、着用可能になると王国が予備も含めて全て支給するのが決まりになっている。

『せっかく貴族の家に生まれたのだから、出来れば陛下からマントを下賜される存在になりたい』と野心のある貴族達は思うのだそうだ。

ちなみに俺も陛下から下賜されていたが、今は冒険者として仕事をしているので着用していなかった。

領地の視察などで、二～三回着用したのみだったのだ。

あとは、冒険者として活動している時は着けない。

ギルド側も、マントを着けていない時はなるべく普通の冒険者として扱う。

これが、俺と冒険者ギルド側との決まり事になっていた。

「（でも、あのマントは良い品だよな）」

王国から支給される物よりも圧倒的に高級品であったし、高い対魔法防御力も期待できる逸品でもある。

だが、女性の身でそれを着けていること自体が、彼女が貴族ではない事を証明していたのだ。

「それで、そのヴァイゲルさんがどのようなご用件で？」

「同じ冒険者として、ご挨拶をと思いまして」

「それはどうも」

ところがその表情は、明らかに俺に対抗心を燃やしているようにしか見えなかった。

身長は百七十センチほどと、俺よりも五センチくらい低いのに。

懸命に胸を張って、視線でも俺を見下ろしている風に見せようと

していたからだ。

あと、彼女はなかなかにスタイルが良く、胸もエリーゼより少し小さいくらい。

服装のチグハグさとキツそうな目線が無ければ、十分に美少女と呼ぶに値する存在であった。

「ヴェンデリンさんは竜を二匹退治したとはいえ、まだまだ冒険者としては素人」

「はあ……」

そんな事は自分でも十分に承知しているが、それをわざわざ指摘して何になるのであろうか？

不思議に思っていると、エルが小声でその意図を指摘してくれる。

「（狩り場を変えてここに来たけど、私はお前よりも上だぞって言いたいのさ）」

冒険者なのだから勝手に狩りをして実績を稼げば良いのに、なぜこの女性は俺を挑発するような態度に出るのであろうか？

俺には、ただ時間と手間が無駄なような気がするのだ。

「（こういう人、多いよねぇ……）」

ルイーゼもボソっと俺に呟くが、確かに冒険者にはこういう人が多い。

元々、海千山千なうえにピンキリと世間からは評価されている業界なので、妙に自意識過剰というか、常に自分の実力や立ち位置を確認していないと不安になってしまう人が一定数いるのだそうだ。

「（あと、貴族であるヴェルに思うところがあるんだろうね）」

没落貴族の子孫であろう彼女は、自己紹介の時にフルネームを名乗った。

今は没落しているが将来は必ずとか、今は平民だけど先祖が貴族であった誇りを忘れずとか。

そんな理由で、昔の名前を決して捨てない没落貴族の子孫は多かった。

過去に失ってしまった物なので、余計に拘りと憧れがあるのであろう。

「（あと、間違いなくヴェルに嫉妬しているんだと思う）」

最後のイーナの一言に、彼女の態度は全て記されていた。

彼女ほどの魔法使いならば、その内に貴族になれる可能性が高い。

最低でも、どこかの貴族家で世襲可能な陪臣くらいなら余裕でなれるはずだ。

ただし、男ならばという条件がつく。

このヘルムート王国では、女性に爵位が与えられる可能性はほぼゼロであった。

たまに、王族や大貴族の娘などが一代限りの物を貰うくらいで、当然このチグハグでエレガント風な格好をした彼女には絶対に届かない物であった。

いくら魔法使いとして実績を挙げても、彼女は絶対に貴族にはな

れない。

あって、小領の貴族が稼いだ金目当てなどで嫁に迎え入れるくらいで、それも正妻などはまずあり得なかった。

うちの実家を見て貰えればわかると思うが、どんなに貧乏でも貴族が正妻に貴族の娘を迎えるのは常識であったからだ。

「（だからなんだろうな……）」

彼女は没落貴族の子孫で、多分御家再興を願っているはず。

そして、俺は貧乏貴族の八男で、普通ならばその子孫は平民に落ちるはずであった。

共に魔法の才能があってそれを世間に示したが、俺は伯爵になれたのに、彼女は一流とはいえ冒険者のまま。

その鬱屈した感情を、自分が俺よりも上なのを確認して晴らす。

良くある話ではあるのだ。

「ここの狩り場の噂を聞き、参上いたしましたの。私が活動をすると、たまにお可哀想な人が出てしまうので」

自分が稼いだ分、他の冒険者の取り分が減るので、その対象になりそうな人に先に謝っておく。

なるほど、大した自信だなと思うのと同時に、俺に喧嘩を売っているようだ。

「ご心配なく、この魔の森は広いですから」

他の手狭になったり、魔物が数を減らした場所ならともかく。

この魔の森は他の領域とは一線を隔す部分があって、獲物の数が少なくなるなど暫くはあり得なかったからだ。

「それに、誰がどのくらい獲ってどのくらい稼いだとか。どうでも良い事でしょう？」

冒険者ギルドには、ランキング制度のような物は存在しない。誰がいくら稼ぎ、どのくらい上納金をギルドに納めたのかなども公表は一切していなかった。

金のある冒険者には、それを狙う妙な連中が付き纏い易い。それを振り払う手間のせいでギルドに納める上納金が減ると困るので、ギルド側も一切公表していないのだ。

ただ、優れた冒険者は自然と噂に上って名前が知られていく。

それだけの事であったし、そもそも冒険者とは『人よりも稼ぐのが目的ではなく、自分がどれだけ稼ぐのか？』が目的になっている。

俺には、彼女と張り合う気など全くなかった。

「お互いに頑張って、それぞれに結果が出る。それだけの事でしょう？」

「まあ、随分と自信がお有りなのですね」

とはいえ、人は自分と他人を比べたくなる物。

その気持ちを、彼女は強く持ち合わせているようだ。

特に、俺には負けたくないという感情が強いようにも感じていた。

「自信というか、ただ領域に潜って狩りや採集をするだけじゃないですか」

「あらあら。竜殺しの英雄さんは、模範解答がお得意な優等生のようですわね」

「あんたなぁ……」

思わずエルが苦言を呈するが、彼女はエルに視線を送る事すらしなかった。

「腰巾着が煩いみたいですわね」

「っ！」

続けて言い放った彼女の暴言に、怒ったエルがと飛び掛かろうするが、それはイーナとルイーゼによって防がれていた。

「あんた。いきなり話しかけてきて、人のパーティーメンバーを侮辱とか。頭の中は大丈夫か？」

「あなたこそ、お山の大将気取りで羨ましい限りですわ」

どうにも話が噛みあわない状態が続くのだが、段々と彼女の求めている物が理解できてくる。

きっと彼女は、俺と勝負をして自分が上である事を証明したいのであろう。

そして、女性である自分が俺よりも優れた冒険者であると世間に知らしめ、そこから御家再興の足がかりとなる何かを掴みたい。

要するに、名を売って世間に自分をアピールしたいのだと。
そのために、わざと俺を挑発しているのだ。

「あんたは、回りくどい。勝負をすれば良いんだろう？　ただ……」

「ええ。あなたと草原で魔法勝負なんてしても、一セントにもなりませんので」

そのくらいの理性はあるようだ。
この大陸では、魔法使いの数が極端に不足している。
なので、魔法使い同士の実戦形式による決闘など、お上からは冷笑どころか、下手をすると処罰される可能性すらあった。

「一日の獲物の評価額でいこう」

「冒険者としては、一番妥当な勝負方法ですわね」

あと、誰もいない場所で魔法使い同士が魔法を撃ち合っても、ただの魔力の無駄使いで何も生み出さないという極めて合理的な理由も存在している。

「では、日が落ちるまでか、魔力が尽きたら早く狩りを終わらせても構いませんわよ」

「それは、俺よりも魔力が少ないあんたが心配する事だな」

「魔力とは、ただ多ければ良いわけではありませんわよ」

とは言うものの、彼女の魔力の量は上級でもかなり上の方である

と予想される。
しかも、冒険者としての経験では向こうの方が上なので、全く油断は出来なかった。

「あのよ。警護役の俺としては、全く受け入れられないんだけど」

「とはいえ、エル達が付いてくると勝負の公平性が薄れるからな」

それに一応は貴族の端くれなので、受けた勝負は正々堂々と行う事も必要であったからだ。

「今日一日だけだから」

「ううっ……。ローデリヒさんに怒られる……」

「それならば、某に任せるのである！」

エルからすると、絶対に守らなければいけない俺が単独行動を取る事など容認できないらしい。
だが、俺からしても、あの女にズルをしたと思われるのは心外なわけで。

双方の主張が平行線を辿っていると、そこに突然また隕石のような落下音と共にあの人物が舞い降りてくる。
当然落下と共に衝撃波が発生し、あの女ですらドレスのスカート部分を両手で抑える羽目になっていた。

「導師ですか？　あの、今日はまたどうして？」

「いきなり誰ですの？」

「王宮筆頭魔導師である！　この勝負の、審判を務めるのである！」

「初心者のバウマイスター伯爵殿に、何かがあると困りますものね。アームストロング導師様」

意外にもこの女は、導師を見てもまるで動揺した様子を見せていなかった。

王都では認知度は高かったが、地方に行くと導師の顔や外見を知っている人は少なく。

そのせいで、イケメンの美男子か美中年だと勝手に思い、実物を見て絶句する女子供が後を断たなかったからだ。

「なかなかに肝が据わっている女子であるな！　その通りで、バウマイスター伯爵に何かがあると困るのでな！　某が監視をして、何かがあれば掻っ攫うつもりである！」

「まあ、宜しいでしょう。そうなったら、間違いなく勝負は私の勝ちでしょうし」

「であろうが、あくまでも万が一の事。某は、まるで心配していない故に！　では、勝負を始めるのである！」

スタートの合図と同時に、俺と彼女は一斉に高速飛翔で魔の森の奥へと移動を開始する。

入り口付近で獲物を待つよりは、内部のまだ人が入っていないポイントの方が獲物が多いからだ。

「ああ、そうだ。エル達は、あのポイントでカカオの実を頼む」

「わかったけどよ」

「ヴェルって、勝負よりもカカオの実の方が気になるのね」

「ヴェルがいないから、ボクとヴィルマでパーティーを守るね」

「チョコレートのためにも、カカオの実は必要」

飛翔する直前に、俺はエル達に入り口近くのポイントでカカオの実を採るようにと指示を出していた。

あの女との勝負の関係上、内部に入って魔物を専門に狩った方が評価額は上がるからだ。

「全く、アルテリオさんからなるべく沢山欲しいと頼まれているのに……」

他の冒険者などからもギルド経由で購入しているようであったが、まるで需要に追い付かないらしく。

採っただけ全部買うからと言われていたのだ。

「ヴェンデリン様のご無事と御武運を願っております」

「任せておけって」

一応、没落したとはいえ貴族の子孫に喧嘩を売られたので、エリーゼは将来の正妻に相応しい言葉を俺にかけていた。

あと、俺が少しあの女に腹を立てている事にも気が付いているようだ。

「では、出発！」

俺はあの女よりも少し遅れて、魔の森の奥地へと魔法で飛んでいくのであった。

「さてと、久しぶりの狩りだな」

数分後、俺は魔物の反応が多数確認できたポイントへと着陸していた。

上空を見ると、導師が宙に浮いたままで俺を監視しているのが確認できる。

ただ手持無沙汰のようで、魔法の袋からお弁当を取り出し、それをドカ食いしながら大量のマテ茶を飲み干しているようであったが。

見ていても胸焼けがするだけなので、早速に魔物を狩り始める。

まず最初に、一頭の全高が二メートルを超える巨大な鹿に似た魔物を発見し、素早く集束させたウィンドカッターで首を切り落とす。

「ええと、この魔物は……」

ブランタークさんから借りた図解魔物・産物大全によると、ワイルドインパラというらしい。

前世のアフリカの野生動物を紹介するテレビ番組で、これに似た動物が良くチーターなどに狩られていたのを思い出す。

図解魔物・産物大全によると、このワイルドインパラは他の大型肉食魔物の餌でしかないそうだ。

「この魔の森は、全部の物の大きさが間違っているよな」

などと言いつつも、俺は首を切り落としたワイルドインパラを魔法で宙に浮かせ。

切り落とした首を下にして、そのまま血抜きを始める。

魔法の袋に入れれば鮮度が落ちないので今する必要は無いのだが、この場にワイルドインパラの血を撒く事が重要であった。

なぜなら、この血を求めて大量の大型肉食魔物が誘い寄せられるからだ。

「サーベルタイガーが金になるからな」

前に、ブランタークさんが引率して行った調査で狩られたサーベルタイガーという魔物は、持ち込んだギルドでは値段が付かずに、後でオークションが行われたそうだ。

落札者は西部の金満伯爵で、その人は屋敷のリビングに剥いだ毛皮を置いて客に自慢気に見せているらしい。

あと、肉食獣なのに肉や内臓も美味らしく。

パーティーなどで出して、競り落とした金満伯爵は十分に元は取れたと嬉しそうに語っていたそうだ。

昔の図鑑にしか記載されていない魔物で、しかも狩れたのは元は超一流の冒険者であったブランタークさんと、魔闘流を使うルイーゼとの共闘による一匹のみ。

二人がその気になればもっと狩れるはずであったが、その時は調査が主目的で近寄って来た個体しか相手にしていなかったし、ここ三ヶ月ほどは主にカカオに実を集める事をメインに活動した結果、冒険者ギルドには『サーベルタイガー高額買い取り』の張り紙が出ているが、一攫千金を夢見て犠牲者もそれなりに出ていた。

あの大きさで普通の人間よりも遙かに素早いのだから、当然とも言えたが。

「（あの女は、どうやって狩りをしているのかな？）」

優秀な魔法使いが、必ずしも優秀な冒険者になれるという保障は無かった。

可能性は遙かに上であったが、例えば火系統の魔法が得意な魔法使いが得意技で魔物を焼き殺したとする。

普通の動物よりも遙かに生命力が強い魔物を殺すほどの火炎なので、当然魔物は黒焦げとなる。

結果、あまり使える部位が無く、大した金額にならなかったりするからだ。

なるべく傷を付けないで殺す。

これが基本であり、そのためには自分よりも弱い動物や魔物を相手にする必要があるという事だ。

「あの女も、そうしているのかな？」

などと考えている内に、視界に数匹の魔物の姿が見えていた。

「サーベルタイガーか……」

合計で四匹が見える。
図鑑によると、サーベルタイガーは基本単独行動を取るらしい。
なので、先ほど撒いたワイルドインパラの血に釣られたのであろう。

ワイルドタイガー達は、ワイルドインパラの血溜まりまで移動し。
そこで暫く血を舐めてから、今度は一斉に俺に襲い掛かってくる。

あまり毛が無い人間は、量は少なくとも彼らにとっては食べ易いご馳走なのだと図鑑には書かれていて、それは事実のようであった。

「おっかねえなぁ」

四匹のサーベルタイガーは、順番に獲物である俺に襲いかかるが、その攻撃は全て魔法障壁によって防がれていた。
サーベルタイガーが魔法障壁をガリガリと引っかく光景を見上げながら、今度はこちらが攻撃をする事にする。

不思議と恐怖感はなかった。
それもそのはずで、王都での導師との修行の方がよほど恐怖を感じたからだ。
あの人に一度でも実戦形式の戦闘訓練で襲い掛かられれば、誰にでも理解して貰えるというものだ。

「あとは、こいつらを狩らないとな」

この場合、なるべく獲物を傷付けない事が大切であった。
なので、ここは相手を切り裂いてしまうウィンドカッターではなく、子供の頃に良く狩りで使った矢を飛ばす魔法の改良版を使う事

にする。

矢は、周囲の木の枝を魔法で圧縮してから先端を尖らせ、それで全ての生物の急所である延髄の部分を後ろから狙う。

獲物である俺に夢中な癖に、最初は後ろから飛ばした矢を避けられてしまったり、刺さっても急所から外れたりと大分失敗を重ねたが。

サーベルタイガーは、俺を絶対に食おうと攻撃を止めなかった事もあり。

二十分ほどで、四匹のサーベルタイガーは急所である延髄部分を後方から飛ばした矢で破壊され、そのまま生命活動を停止させる。

「暫く、練習が必要だな」

俺は、倒れ伏した四匹のサーベルタイガーの死体を魔法の袋に入れてから次のポイントへと移動する。

「全部が全部、サーベルタイガーというわけにもいかないか」

それから十回ほど、同じ戦法で魔物を狩っていく。

サーベルタイガーの他に、同じくらいの大きさのヒョウに似たナンポウヒョウや、ライノーという巨大なサイに、ヘルコンドルという巨鳥と。

せっかく血を撒いて肉食の魔物だけを呼び寄せるつもりだったのに、雑食や草食の魔物も集まって来て俺を攻撃していた。

多分、縄張り荒らしに制裁を課そうと集まっているのであろう。

集まって来た魔物達を魔法障壁で防ぎつつ、木の枝を魔法で矢に

して飛ばし、魔物の後背から急所である延髄に深く突き刺す。

傍から見れば面白味の無い戦法なのであろうが、この方法なら魔物の体をあまり傷付けずに殺せるので、後で素材が高く売れる。

それに、世間の仕事の大半とは、大体似たような作業の繰り返しなので、俺としてはサラリーマン時代に戻ったようで落ち着くのだ。

「さてと、飯でも食うか」

ある程度成果が挙がったので、俺は魔法障壁を展開しながら地面に魔法の袋から取り出したゴザを敷き、その上で弁当を広げて食べ始める。

メニューはシンプルに、この前製造に成功した梅干が入った大き目のオニギリが三つに、水筒に入れた麦茶だけであった。

仕事中なので、昼飯はシンプルにする事にしたからだ。

「導師は、いないか……」

オニギリを食べながら上空を見ると、少なくとも視界には導師の姿がなかった。

多分、あの女の監視にでも行っているのであろう。

「まあ、勝負なんてどうでも良いんだけど」

俺は冒険者として狩りをしに来たのであって、決してあの女との勝負がメインではないのだから。

それに、別に負けても何の問題もないのだ。

あの女が俺に勝ってナンバー1を名乗ったところで、『ふーーー

ん、そうですか』という感覚しかないわけで。
というか、そのナンバー1の根拠を知りたいくらいだ。
他の地域に、俺達よりも優れた冒険者がいるかもしれないのに。

「また狩りをするか」

昼食と昼休みを終えた俺は、再び狩りを再開する。
少しポイントを移動して、そこで魔物を一匹倒してからその血を盛大にばら撒き、寄って来た魔物を次々と倒していく。

肉食系の魔物ばかりでなく、雑食・草食系の魔物まで引き寄せられるのは不思議であったが、全て例外なく俺を食うか襲おうと魔法障壁をガリガリやっている間に、後方から延髄や急所などを木の枝で作った矢で貫かれて死んでいく。

夕方までそれは続き、俺は魔法を使って一人で狩りをする方法の確立に成功していた。
これが出来れば、万が一アーカート神聖帝国に亡命したとしても、十分に冒険者としてやっていけるという物だ。

あと、上空にはいつの間にか導師が戻っていて、貪るように採った巨大なマンゴーを食べていた。
俺の監視はしているようであったが、自分もそれなりに楽しんでいるようだ。

「もう夕方か……」

まだ魔力には余裕があったが、さすがにもうすぐ夕暮れなので戻る事にする。

「なかなかに、器用な魔法を使ったようであるな」

「派手に切り裂いたり、焼き払うと素材が金になりませんしね」

冒険者の収入源は、討伐した魔物の素材を売った代金が大半である。

一部アンデッドなど以外、何もしなければ領域に篭っている関係で討伐報酬のような物は発生しないからだ。

「そうは思っても、魔物は強いのが常識故に」

なるべく素材が高く売れるように、体を損傷させないで殺す。

これが基本であり、どうせ無理して強い魔物を倒しても、素材の状態が悪ければ骨折りになる可能性もある。

それよりも、格下の魔物をなるべく傷付けないように丁寧に倒した方が金になるのがこの世界の常識であった。

「ところで、あの女はどうでした？」

「『暴風』のカタリーナであるか？　派手に魔物を倒していたのである！」

「導師は知っているのですね」

「西部では、大変に有名な冒険者兼魔法使いである！」

十五歳で冒険者デビューをし、僅か一年で西部地域のトップ冒険者になったのだそうだ。

「知らなかったなぁ」

「まあ、バウマイスター伯爵は仕方が無いのである」

俺は一応貴族でもあるので、高名な冒険者を覚える前に貴族を覚えろという生活を今まで送って来たからだ。

あと、冒険者予備校などの授業でも、現在高名な冒険者の名前など教えてくれなかった。

有名な冒険者の名前を覚えるよりも、自分が有名になるように努力するようにというのが教育方針であったからだ。

「とはいえ、人は勝手にランキングを付けて噂をするのである！」

導師の言う通りで、それが人間という生き物なのであろう。

「何にせよ、自分は自分なのがこの業界である！　さて、戻るとするか」

「はい」

二人でギルド支部のある掘っ立て小屋の前まで飛んで行くと、そこには既にエル達とあの女が待っていた。

「ヴェル、言われた通りにカカオは集めておいたから」

「悪いな」

「こいつは、稼げるからな」

現在王都やその周辺では、アルテリオさんがチョコレートやココアをほぼ独占販売している。

当然、他の商会などにも追随する動きがあり、カカオの実を買い集めて試作や販売も行っていた。

だが、大体の製法は想像できても、実際に作るとまだ品質に問題があり、まだほとんどシェアを奪えていないらしい。

とはいえ、その内に品質の問題は解決するので、俺はアルテリオさんに『ブランド化』する事を勧めていた。

『ブランド化？』

『最初にチョコレートやココアを製造して販売し、品質も一番優れているのですから』

じきに参入業者が増えて薄利多売競争になるので、高品質・高級路線で他との差別化を図るようにとアルテリオさんに勧めていたのだ。

『王室御用達のような物ですよ。アルテリオ商会のチョコは、高いけど他の商会の物とは品質が違うよと。差別化のために、品質を管理して出荷した商品にアルテリオ印とか付けたり』

『なるほどな』

『あと、取り扱っている店に看板を出す事を許すんですよ。当店では、アルテリオ商会のチョコレートを扱っていますよと』

『しかし、良くそんなアイデアを思い付くよな』

別に、俺が一番最初に思い付いた意見でもない。

王国でも、王家御用達とか、公爵家御用達とか。

王族や貴族が使っていますよと宣伝して、商品の高級感を宣伝している店や工房は多かったからだ。

『じゃあ、うちはバウマイスター印でいくから』

『なぜにうちの名前なんです？』

『アルテリオ印とかにすると、周囲からの嫉妬で面倒だから』

元々調味料で大儲けしているのに、新たに立ち上がったバウマイスター伯爵領の御用商人にも内定しているので、自分の名前を冠したブランドなど出したら周囲からの嫉妬が余計に激しくなるからなのだそうだ。

『ただ、嫉妬だけしていれば良いんだけどな』

邪魔でもされると面倒なので、カカオが魔の森でしか採れない特産品であるのを理由に、チョコレートやココアのブランド名は『バウマイスター印』に決定していた。

「アルテリオさんも、大忙しだな」

エルの言う通りで、今までの商いに、調味料や食材の販売、レストランやフランチャイズ形式の飲食店の展開に、チョコレートやコ

コアの製造と販売。

更にこれに、うちの御用商人としての仕事も増えるのだから当然とも言える。

たださすがにオーバーワークなので、一部の業務を中小の商会に委託して上納金を受け取るシステムに変更し始めたそうだ。

理由は、大物貴族の御用商人になると忙しさが跳ね上がるからだそうだ。

さすがに、大物貴族の御用商人なので独占ではないが、俺と何年も付き合いがあり、商会の規模もかなり拡大している。

なので、まずはその大半を任せる事から、暫くは忙しくなるのは当然でもあった。

「そんなわけで、カカオは売れるわけだ」

「チョコの材料が足りないわけだな」

なら無理をして、魔物を積極的に狩る必要などないのだと俺は思っていた。

実は、前にカカオを木を持ち帰り、栽培方法の研究をバウマイスター伯爵家でスカウトした農家に依頼したのだが。

結果が出るまでに年数はかかるし、そもそもカカオの木は熱帯の日陰でジメジメした場所でないと育たない。

生産地では、バナナなどの木の陰に植えて育てるのが基本であった。

なので、自然とバナナやマンゴーなどの栽培研究も始まっていて、バウマイスター伯爵領の南方に実験農場を作り、まずは移植した木を育てるところから始まっている。

元は魔の森で巨大化した木である事もあり、ハッキリ言っていつ成果が出るかもわからないわけで、その間は魔の森で採集する必要があるであろう。

「あらあら、あまりに覇気の無い発言ですわね」

エルとそんな話をしていると、そこに同じく狩りを終えて待っていたカタリーナが割り込んで来る。

「別に、覇気なんてあってもなくても、結果はあまり変わらないだろう」

前世でも、無意味に熱血な上司は苦手だったし、今世でも行動力ばかりでとこちらの迷惑にしかならない貴族など沢山見ているのだ。

ただ覇気があれば良いというわけでもないと、俺は思っている。

というか、いきなり人に勝負だとか言っているこの女こそ、気合が空回りしていると思うのだ。

「とにかく、早く成果を比べて解散な」

「なっ！　勝敗は？」

「別に、どっちが勝ちでも良いじゃない」

ナンバー1でないと魔の森に入れなくなるわけでもないし、それぞれに自分のペースで冒険者を続けていけば良いだけの話だ。

どちらが優れているか勝負すること自体、俺から言わせれば時間

の無駄でしかなかった。

「はいはい、鑑定鑑定」

この魔の森近くのギルド支部は、建物こそ掘っ立て小屋であったが、王都での魔の森産物品や魔物の素材の需要が増えていたので、人手と所持する魔法の袋を増やしていた。

買い取った素材は魔法の袋に入れて鮮度が落ちるのを防ぎ、定期的に人が魔導飛行船に乗って必要な場所へと届ける。

今は、ほぼ百%王都の冒険者ギルド本部からオークションなどで指定の商人へと渡っているようであったが。

「では、私からですわね」

まずは、カタリーナという女が魔法の袋から自分の成果を取り出していくが、その数はかなり多い。

さすがは、『暴風』という二つ名を持つだけあって風系統の魔法が得意らしく、鋭利で高威力のウィンドカッターで獲物の首の頚動脈を一撃で切り裂いて出血死させていたからだ。

「さすがは、西部でナンバー1の冒険者」

獲物を検分しているギルド職員達も、カタリーナの実力に感心しているようだ。

「ほぼ無傷なので、良い素材が取れますから」

頚動脈を一撃なので、他に損傷している箇所が無い。

なので、最近王都の高級貴族達の間で流行しつつある、魔の森産の魔物の飾りに最適であった。

貴族とは、基本的に見栄っ張りが多い。
高価で珍しい物をコレクションし、他の貴族に自慢して己の財力などを誇るのだ。

前から飛竜の首を剥製にした物が最高峰と言われていて、値段は高いが貴族達は競うように手に入れていた。
値段が張るのは、飛竜の首の皮や、眼球、牙などにも使い道があり、なかなか需要を満たせないので相場が高いからだ。

役に立つので不足している素材を飾りにしてしまうなど、財力のある貴族でないと出来ないというわけだ。

「でも、もう大半が持っているわけですよ」

王国建国から二千年も経ち、さすがに大半の貴族が飛竜の首の剥製は持っている。
なので希少性の面では、既にそれほどでもなくなっていた。
相手が持っている物を自慢しても、あまり意味が無いからだ。

そこで、一部の貴族がワイルドウルフの毛皮の敷物などに活路を見出そうとするが、竜に比べればインパクトが落ちる。
困っていたところで、初期の探索で狩られたサーベルタイガーが一頭だけオークションにかけられた。

その特徴的な長い牙に、ワイルドウルフの倍以上はある大きさ。
そして、今のところは魔の森にしか生存が確認されておらず、並みの冒険者では狩りに行っても逆に食われるだけと。

最初に手に入れて毛皮を敷物にした西部の金満貴族は、その名を社交界に轟かせる事になる。

「そんなわけでして、サーベルタイガーのなるべく傷が少ない個体を必要としているわけです」

敷物にするので、あまり傷があると敷物に出来ないからだ。
それでも、他の用途には十分使えるので問題は無いとも言えたが。

「傷口が首だけなのはありがたい。ただ……」

「ただ何ですの？」

「魔の森の産物や魔物は、全てオークションで評価額が決まるんです」

ここでしか獲れず、しかも超一流の冒険者でないとただの無駄死になってしまう。
その結果、魔の森の産物は需要を満たせず、オークションで金がある人しか購入できない仕組みになっていた。

「勝敗の行方が楽しみですわね」

カタリーナは、相当に自信があるようであった。
そして、次は俺の出番となる。

「これは……。更に傷が少ないですね」

しかも、魔物はほとんど出血していない。

後頭部から延髄を、木の枝で作った矢で貫かれて殺害されているからだ。

「という事は、血も採れますね」

「はい」

死んだ直後に魔法の袋に入れたので、まだ死後硬直や血液の凝固なども始まっていない。

魔物の血は、薬の材料や魔道具造りの材料や触媒になる物が多く、これもあればあるだけ買い取ってもらえるのだ。

「それに、数も多いですね」

「数は、あまり意識してなかったな」

今日は、なるべく魔物を傷付けないで倒す魔法の練習だと割り切っていたからだ。

勝負に関しては、やれば向こうは満足するかなくらいにしか思っていなかった。

「数は倍近いですし、コレなんて物凄い値段になりますよ」

「ああ、白子のサーベルタイガーがいたんだよな」

狩った魔物の中に、一匹だけアルビノ種のサーベルタイガーが混じっていたのだ。

いくら巨大な魔物とはいえ、自然界で白子が生き残るは珍しい。

他の個体よりも一回り大きいので、それが原因だったのかもしれないが。

「コレの毛皮は、欲しい貴族が多いでしょうし」

同じサーベルタイガーの毛皮を自慢するにしても、更に稀少な白子の毛皮ならば余計に自慢できるからだ。

それに、白子というよりは銀色に近いので見栄えも大変に良かった。

「もう数頭、狩れませんかね？」

「白子をか？　かなり運の要素が混じるしな」

多分、その割合は数千から数万に一頭だ。

魔の森は餌が豊富で、サーベルタイガーのような大型肉食獣でも恐ろしい密度で生息しているが、毎日狩りをしても何年もやらないと出て来ないはずであった。

「確かにそうですね……」

もう勝負に関しては、詳しい評価額を計算するまでもなかった。

魔物の種類も数も、俺が倍近く狩っていたからだ。

なので、ギルドの職員と狩れた白子について話をしていると、無視されて怒ったようでカタリーナがまた話に割ってくる。

「もう勝った気でおりますの！」

「見ればわかると思うんだけど……」

今日の成果を見れば一目瞭然だし、別に俺に勝てなくても一人でこれだけ魔の森の魔物を狩れるのだ。

十分に超一流の冒険者なので、無理に張り合わなくても良いような気がしてしまう俺であった。

「冒険者とはある程度の期間、コンスタントに成果をあげる事が必要ですわ！　勝負は、一週間の成果で！」

「ええっーーー！」

突然のルール変更であった。

そういえば、子供の頃にこんな奴がいたのを思い出す。

ジャンケンをして勝つと、『やっぱり三回勝負で！』と突然言い始めるのだ。

更に勝つと、今度は五回勝負になったりしたのを思い出す。

きっと、このカタリーナもかなりの負けず嫌いなのであろう。

「別にいいけど」

「俺は良くない！」

俺はローデリヒに、狩猟の期間は一週間ほどだと言ってあるから問題は無い。

ただ護衛を担当するエルからすると、俺が一人で狩りをする事は容認し難いようであった。

「あんた、パーティーメンバーとか居ないのか？」

同人数のパーティー同士による団体戦にすれば。

エルは自分も参加できると思ったようだが、カタリーナの返答は呆気ないほど残酷な物であった。

「私ほどの超一流の冒険者ともなりますと、なかなか同レベルの仲間など見付かりませんの」

「えっ？　今までにパーティーを組んだ事は？」

「ありませんわ！　私は、私一人でこれまでの成果をあげてきたのです！」

要するに、昔の俺と同じでボッチだという事だ。

元々、優秀な魔法使いは単独でも稼げるので孤立し易い傾向にある。

若い頃に寄生目的で擦り寄って来るような輩が多いと、その傾向は更に顕著になるようだ。

ましてや、彼女は女性だ。

中には、ヒモ目的の男性冒険者も多かったはず。

「どこぞの男爵家の四男とやらが、俺と組めば家が復興できるとか言い寄って来ましたけど……」

女性冒険者は、間違いなく属性竜を複数倒しても爵位は得られない。

そこで、家を継げないような貴族の息子が彼女の功績と資産を狙って擦り寄って来たのであろう。

自分が名目上の当主をやるから、その成果を自分に寄越せと。

こういう輩を信じると、まずその結果は悲惨な物となるので、彼女の判断は間違ってはいない。

ただ、逆に一人でも貴族家の復興など不可能なわけで。

彼女は、とにかく目立って稼げば道は開けると思っているようだ。

「それが世の中だと言えばそれまでですけど。バウマイスター伯爵にも、似たような方々がいらっしゃいましたわね」

とここで、急に流れがおかしな方向になる。

カタリーナは、エル達に挑発的な視線を向けたのだ。

「優秀な魔法使いに負んぶに抱っこの、パーティーメンバーさんたち」

「言ってくれるわね！」

一番最初に反応したのは、意外にも一番沈着冷静なイーナであった。

「自分が一人だからって、人のパーティーにケチを付けないで欲しいわね！」

「私は、駄目な方々に寄生されるくらいなら一人の方がマシだと思っただけですわ。誰の事かとは具体的には言いませんけど……」

「ヴェルに言われたのなら甘受するけど、あなたには言われたくない！　そういう偏屈な性格をしているから一人の癖に！　栄光ある孤立のフリだけでしょう！」

「（イーナ、もう止めてやれ……）」

俺もカタリーナもそうなのだが、自分と対等の実力を持つ冒険者をメンバーにしようとすると間違いなく詰んでしまう。
そもそもその条件に拘ると、会社だって、商会だって、貴族家だって成立しなくなってしまう。

多少の打算は、人としては当たり前の生存本能であって、最終的に両者の折り合いがついて上手く行けば良いわけで。
俺は中身がおっさんなのでそういう風に割り切っているが、カタリーナは多感な時期にそういう連中と接し過ぎて、人を信じられなくなっているのかもしれなかった。

「私は魔法も使えないし、あなたほど冒険者として稼げないかもしれない！　でも、一応プライドって物があるのよ！　勝負しなさい！」

「ええっーーー！」

まさか、イーナが勝負云々出だすとは思わなかった。
と同時に、カタリーナとイーナでは勝負にもならない事も理解している。
彼女は槍の名手だが、そんな物では追い付けないほど魔法とは圧倒的な力であったからだ。

「じゃあ、俺も加わる」

「ボクも、同じく寄生虫扱いされたからね。参加するよ」

「私も、回復役は必要でしょうから」

「エリーゼ様を守る」

やはりイーナ単独では無理なので、エル、ルイーゼ、エリーゼ、ヴィルマの五人で勝負を挑むと宣言していた。

「エル、俺の護衛は？」

「導師にお願いする」

「いや、某も参加する故に！」

「なぜ、そうなりますか……」

俺と、カタリーナと、エル達の三組で獲物狩り競争を行う。なので、導師には安全対策を兼ねた審判をお願いしたいのに、彼も突然参戦を表明してしまったのだ。

「一体、何を考えていますの……」

俺達ばかりか、カタリーナですら困惑の表情を浮かべていた。

「なぜかと問われれば、とても楽しそうだからである！」

「……。そうですか……」

俺は心の中で、『あんたは子供か！』と叫んでいた。

「監視兼審判役は？」

「ブランターク殿にお願いするのである！」

結局、導師の強引な参戦も認められ、明日から仕切り直しで獲物狩り競争がスタートする事になった。

俺が狩りを出来る残り六日の内、五日間で得た獲物の評価額が一番多いチームが勝ちとなるルールなのだが。

ならば、今日一日の成果は一体何だったのであろうか？

普通に狩りをしたのだと考えても、どこか釈然としない物を感じてしまう。

「俺、そんなに暇じゃないんだけどな……」

そして、もう一人犠牲者が発生していた。

夜、屋敷に戻ってからブランタークさんに相談すると、彼は渋々とであるが要請を受け入れる。

俺に万が一の事があるとブライヒレーダー辺境伯から怒られる程度は済まないので、引き受けざるを得なかったのであろう。

「自意識過剰の没落貴族のお嬢様に、ここまで引き摺られるか？」

「どうせ狩り三昧の予定でしたし、一度大差を付けて勝てば大人しくなるでしょう」

「だといいがな……」

だが、その表情には『面倒臭ぇ……』という物がありありと浮かんでいたのであった。

第五十七話　腕比べ。

「ルールは、日が落ちるまでに狩猟と採集で得た成果の評価額だ。五日間あるから、ペース配分を忘れるなよ」

翌日の早朝、元ベテラン冒険者であったブランタークさんの挨拶から、仕切り直された勝負が始まろうとしていた。

参加チームは、俺とカタリーナと導師は個人で一チームとなり、エル達は五人でチームを組んで戦う。

昨日、珍しくカタリーナの暴言にキレたイーナであったが、さすがに一人では彼女に勝てるはずもなく。

五人でチームを組んだのは、仕方の無い事であった。

そのくらい、強力な魔法使いとは圧倒的な力を持つのだから。

「イーナ、無理するなよ」

「勿論、私だってそこまでバカじゃないわよ」

「というと？」

「うちは、数で補う。あと、採集をメインにね」

なるほど、実に上手い手を考えたものだ。

大型の魔物を狩ると単価は高いが、手間がかかる。

ならば、狩猟は自衛的手段に限定して、フルーツ類や高価な薬草

などの採集に絞って数を稼ぐべきであると。

冷静なイーナらしい作戦でもあった。

「上手く、単価が高い物がある場所を見付けるのがポイントね」

「随分な啖呵を切ったかと思えば、随分とセコい手ですわね」

「あなたこそ、冒険者は派手に魔法をぶっ放して魔物を狩れば良いとだけ思っているのだから、単細胞よね」

「何ですって！」

カタリーナがイーナを挑発するが、逆にイーナに反論されて逆上してしまう。

確かに、イーナの言う事は正しい。

冒険者が派手に強力な魔物を討伐すれば、素人目には格好良く見えるのであろうが、何もそれだけが冒険者の仕事ではないからだ。

冒険者の仕事とは、とにかく売れる物を獲得する事にある。

それは、竜や強力な魔物を倒せればお金にはなるが、そんな事が出来る冒険者は少ないわけで、実は大半は採集物から得られる収入の方が多かったりする。

冒険者ギルド側としても、無謀な討伐で大怪我をしたり死なれてばかりでは困るわけで、なるべく長期に渡ってコンスタントに稼ぐ冒険者は大歓迎であった。

超一流の冒険者とは、少数しかいないから超一流なのだから。

実際、一度も魔物の領域に入らず、地味に人里離れた森などで高価な産物を効率良く集め、生涯収入が一千万セントを超えた冒険者なども過去には存在している。

そういう人は超一流冒険者の影に隠れてしまうが、隠れた成功者であるのは事実であった。

「お嬢ちゃん方、喧嘩は禁止だからな。勝負でそういうのは晴らすように」

「わかりました」

「わかりましたわ」

さすがのカタリーナも、高名な冒険者であったブランタークさんの注意には素直に返事をしていた。

文句の付けようがない実績を持っているので、下手に反論などできないのであろう。

「それじゃあ、スタートだな」

ブランタークさんの合図で勝負は始まるのだが、俺は特に変わった事をするわけではない。

魔の森に入り、俺に襲い掛かってくる魔物を綺麗に殺すだけである。

後背から延髄や急所に、木の枝で作った矢を魔法で突き刺す手法にも変わりはない。

昨日の夕方くらいから、矢にする前に魔法で木の枝を全体的に圧縮する方法を思い付いたので、刺さる威力が増して魔物達には不幸

が増えただけだ。

「しかし、こいつらは学ばないというか……」

もう少し頭が良いと思っていたのだが、魔物は相変わらず俺が展開した魔法障壁を破ろうと、ガリガリと爪を立てていた。

そして、後ろから急所を刺されて死んでく。

他の魔物も、先に攻撃した魔物の最後を見ているのだから諦めれば良いのに、全く同じ攻撃を繰り返し、同じ方法で倒されていく。

頭が悪いというよりも、闘争本能が高過ぎてそうしないと気が済まないのかもしれなかった。

「ふう、やはりオニギリは梅干だな」

昨日と同じく、魔物が魔法障壁をガリガリとやっている最中で昼食を取っていたのだが、成果は効率が上がって昨日よりも多く倒せている。

これなら、あのカタリーナには負けないであろう。

ただ、彼女もこのまま手を拱いているはずもなく、油断は禁物であったが。

「というか、俺は勝負なんてどうでも良かったんだ」

あとは、なぜか参戦した導師の事であったが……。

「あの人が死ぬわけないし、戦法も容易に想像がつくな」

魔物を傷付けないように、この前の飛竜のように首をへし折るか殴り殺しているのであろう。
先ほど、連続して魔物らしき物の断末魔の声を聞いたが、精神衛生上あまり気にしないようにしていた。

あとは、エル達がどれだけ採集優先で効率良く稼ぎ、カタリーナの成果に迫るかであろう。

「さて、狩りを続けるか」

その日の午後も効率良く狩りを進め、それが五日間も続く。
成果を入れた魔法の袋はギルドの職員に預け、前世のクイズ番組のように成績の途中経過発表とかは無いようだ。

「いやあ、これだけの成果。毎日、勝負してくれませんかね」

今回の勝負に際して、えらくギルド側が協力してくれたのだが。
彼らからすると、三名もの魔法使いが成果を競うのは実入りが増えて好ましい事のようだ。

「全然、需要を満たしていませんからね」

魔の森に侵入可能になったのは良かったのだが、難易度が高くて未熟な冒険者であると屍を曝すだけ。
というか、簡単に一攫千金に飛び付くような冒険者だと、この手の輩が多くてなかなか成果が増えないのだそうだ。

他の地域から乗り込んで来る超一流のベテランも居ない事は無いのだが、そういう人材の大半は元々活動拠点にしている領域で稼げているので、わざわざここに移る人が少ないというわけだ。

「あと、ここって何も無いですからね……」

魔道飛行船は定期的に来るが、元々魔の森に潜る冒険者目当てで作った町なので、まだ全く整備されていないのだ。

冒険者ギルド支部ですら掘っ立て小屋なので、当然とも言える。

娯楽施設も、同じくまだ掘っ立て小屋の宿屋に、冒険者目当ての行商や飲食屋台くらいであった。

口の悪い冒険者などは、『町？　まだ村にもなってねえよ！』と言っているほどであった。

「資金や資材が無いわけではない。時間が、時間が足りないんだ……」

「他にも、開発が必要な場所も多そうですしね」

元々何も無い未開地だったので、どうしても最初はバウルブルク周辺を優先してしまうわけで。

そこは、もう少し我慢して欲しいと俺はギルド職員に話をする。

「今のところは、何とか生活できているから問題は無いですよ。その内に人も集まってくるでしょうし」

「それでは、結果を発表する」

まず俺であったが、なるべく奥地で大型の魔物ばかりを狩った結果、カタリーナの三倍ほどの成果をあげていた。

魔物を傷付けないで倒す魔法に慣れたせいもあるのであろう。

サーベルタイガーも大分狩ったのだが、やはり白子は一匹も混じっていなかった。
やはり、初日はたまたま運が良かったのだと思われる。

「圧倒的ですね」

「くくっ……」

カタリーナも懸命に狩りをしたのであろうが、やはり魔力量の差が大きかったようだ。
成果の中に超高額になりそうな個体も無い事から、オークションにかける前に勝負あったというやつであろう。

「えーーーと、次にエル達だけど……」

カタリーナの成果にどれだけ迫れたかがポイントであったが、成果のカウントをしているギルド職員は意外な結果を口にしていた。

「カタリーナさんよりも、ほぼ間違いなく評価額は上ですね」

「なっ！　どういう事ですの！」

「いや、そこは数で補ったとしか……」

需要が多くて単価が高いカカオやフルーツ類を大量に採取し、他にも高額になる薬効の高い薬草類を大量に集めていたようだ。
薬草については、教会で治療の手伝いもしていたエリーゼが大きく貢献したらしい。
この薬草は、こういう場所に良く生えているとかそういう知識を上手く生かしたようだ。

さすがはエリーゼ、地味に完璧超人ぶりを発揮したらしい。

そして、予想よりも狩った獲物の数も多かった。

「サーベルタイガーも何頭かいますね。しかも、傷が無い」

「有るには有るんだけど、ヴェルと同じだね」

サーベルタイガーは、全てルイーゼが狩ったようだ。

その突進や攻撃を、優れた動体視力を生かして最小の動きでかわし、後方に回り込んで魔力を篭めた一撃で倒す。

外傷が無いのは、魔闘流の極意である内部破壊で延髄だけをズタズタに引き裂いているからららしい。

見た目には、まるでわからないのだが。

「何それ、地味に怖い」

「ある程度魔力が無いと使えない技なんだよ。導師の指導も役に立ったね」

そういえばそうだった。

ルイーゼは中級から上級の間くらいの魔力を持ち、それを魔闘流で極力節約しながら戦う。

俺や導師は、敵の攻撃を受けても大丈夫なように予め魔法障壁を張ってしまうが、ルイーゼはその判断が百分の一秒単位で行える。

かわせる攻撃なら、魔法障壁など張らないで普通にかわしてしまうのだ。

「四人で採集して、ボクが周囲の監視役。数が多いと、ヴィルマや

イーナちゃんに応援を頼むのが基本だったかな」

ルイーゼは、一番の脅威であるサーベルタイガーを専門的に狩っていたようだ。

他の魔物を見ると、綺麗に首を切り落とされているのがヴィルマの成果で、頭部や心臓部分近くに刺し傷があるのがイーナの成果なのであろう。

「現在、魔の森産のフルーツなどは価格が上昇傾向にありますからね。これだけあると、大商人などがオークションで値を吊り上げると思います」

大商人は、汎用の魔法の袋を幾つも持っている。

入れておけば鮮度が落ちないので、生鮮食品でも買える時に大量購入するのだそうだ。

価格が安い時に購入し、高い時に放出する事で利益をあげるのが目的である。

在庫を大量に抱えても資金力があるので経営を圧迫しないし、魔の森産の品は暫く価格の下落などはあり得ないらしい。

何しろ、ここでしか採れないのだから。

なので、今は買えるだけ買う。

他のライバル達に負けないように、オークションで競り値を上げる事にも躊躇しないのだそうだ。

「あとは、ルイーゼさんは運が良いんですね……」

ギルド職員の視線の先には、サーベルタイガーの白子が一体置かれていた。

これで二匹目であったが、その大きさは俺が狩った個体よりもま

た一回り大きかった。

「しかも、全くの無傷ですし」

「内部は無傷じゃないけどね」

「それを言うと、アームストロング導師なんですけど……」

もう一人、勝手に参戦した導師であったが、その戦果は驚異的であった。

恐ろしい数の魔物の死体が、全て苦悶の表情を浮かべた状態で並べられ、数名のギルド職員が懸命に査定を行っていたからだ。

「あの……。導師？」

「昔から、某はこれで大量の魔物を狩っていたのである！」

導師は、自分の拳を前に突き出していた。

簡単に言うと、魔力を篭めた拳で殴り殺し、蹴り殺し、首をへし折ったようである。

単純明快で時間もかからないのであろうが、この世界でそんな事が出来る人は間違いなく導師くらいであろう。

俺は、その攻撃が自分に向かない事だけを願っていた。

「あと、森の奥に遺跡を見付けたのである！　明日にでも、探索に行こうと思うのだが」

「何だ、導師が圧倒的に一位じゃないか」

まさしくエルの言う通りであった。
獲物の数も俺すら圧倒していて、更に未発見の遺跡まで見付けているのだ。
さすがは、勝手に参戦しただけの事はあるのかもしれない。

「導師、あまり若い者の仕事を奪うなよ」

「そうは思うのであるが。実は、二番目の妻と三番目の妻が妊娠していたらしく、転ばぬ先の何とやらで稼いでおこうと思ったのである！」

「ええと？　二十人目だっけか？」

「然り。今度こそは、女の子が欲しいのである！」

導師の大戦果を見て、ブランタークさんが若い冒険者の稼ぎをあまり奪わないようにと窘めるのだが、それに導師は子供がまた生まれるから物入りだと反論する。

というか、導師はうちの父以上に家族計画など考えてもいないようだ。
ただ、甲斐性は超一流なので誰も困らないのであろうが。

「女の子が生まれたら、バウマイスター伯爵に嫁がせても良いのである！」

「えっ？」

「（導師似の女の子が、ヴェルの奥さんに？）」

導師の娘を嫁にする。
まず年齢差云々よりも、エルがボソっと漏らした一言の方が気になってしまう。

「（導師似の娘？）」

すぐに頭の中で思い浮かんだのは、筋肉ムキムキで顔も導師ソックリの女の子であった。

「（それは勘弁して欲しい。というか、勃つ自信ないな……）」

下世話な話で申し訳ないが、初夜で背骨を折られそうなイメージしか浮かばなかった。

「あの導師様、エリーゼの前でその発言はちょっと……」

「おおっ、そうであったな。子供や孫の婚姻は考えておいて欲しいのである！」

どう返事をしようかと迷っていた時に、助け舟を出してくれたのはイーナであった。
可愛がっている姪のエリーゼの名前を出して、遠まわしに断ってくれたからだ。

「（イーナ！　助かった！　凄く助かったよ！）」

「ちょっ！　ヴェル！」

思わずそのままイーナに抱き付いてしまったのだが、導師以外は物凄く納得したような表情を浮かべていた。

やはり皆、導師の娘のイメージは女装版導師その物であったようだ。

「まあ、勝負は無事についたわけで」

一位が導師、二位が俺、三位がエル達と。

導師は元は超一流の冒険者なので、これは仕方が無いであろう。

「別に、順位なんてどうでも良いんだろう？」

ブランタークさんが傍にいたギルド職員に尋ねると、彼は肯定とも受け取れるような返事をしていた。

「これだけの大量の品が、王都でオークションにかけられて高額の値段がつく。すると、他の地域に噂が流れますからね」

地元よりも稼げると知れば、超一流の連中が集まってくる可能性は高い。

だからこそ、冒険者ギルドは勝負を手伝ったのであろう。

「あとは、遺跡か」

「はい。魔の森の探索は始まったばかり、他にも未知の遺跡は複数あるはずです」

もし導師が見付けた遺跡から多くの成果が挙がれば、これも多くの冒険者達が集まって来るようになる。

未知の遺跡とは、それだけ稼げる可能性が高いからだ。

つまり、冒険者ギルドも導師も、魔の森周辺に腕の良い冒険者を

集めて開発を助けようとしていたようだ。
稼げる冒険者が家族と共に来て、そこに家を立てて生活をする。
高額の納税もするし、彼ら目当てで商売人も来るので、地域の活性化に繋がるわけだ。

「では、明日に遺跡を探索するのである！」

「メンバーは、この面子で良いよな？」

前の、死にかけた地下遺跡探索よりも、ヴィルマと導師が加わって戦力は増している。
よほどの事がなければ大丈夫なはずだ。

「では、明日も早いし帰りますか」

「某も、泊めて欲しいのである！」

「俺もだな。瞬間移動で運んでくれ」

「良いですよ。最近、瞬間移動で運べる人数が増えましたし」

黒い煙のアンデッド巨人との戦闘や、その後の土木魔法の駆使などで魔力量と魔法の精度が上がったらしく、一度に自分を除いて十人まで運べるようになっていたのだ。

「そりゃあ、便利だな。じゃあ、頼むわ」

「わかりました」

俺達は明日の遺跡探索に備えて早めに休もうと、瞬間移動の魔法

で屋敷へと戻っていく。
だが次第に、何かを忘れているような感覚に襲われてくる。

「ヴェンデリン様？」

「エリーゼ、俺って何か忘れていなかったっけ？」

「一つあるとすれば、勝負をしていたカタリーナさんの事ではないかと」

「忘れてた！」

そういえば、カタリーナと勝負を何日もしていたのを思い出す。
最後に導師のインパクトが強過ぎて、俺も含めて全員が彼女の事を忘れてしまったようだ。
エリーゼが覚えているのは、彼女が導師の姪で免疫が付いているからだと思われる。

「戻りますか？」

「面倒だから、明日で良いでしょう。なあ、ヴィルマ」

「アレ、しぶといから一日くらい放置しても大丈夫」

「お前とヴィルマは、たまに物凄く酷いよな。あの女も、大概口が悪かったけど」

エルはそう言うが、俺はあの女のためにわざわざ戻る気など全くなかった。
誰がナンバー1かで勝負だとか、そういう暑苦しいのは勘弁して

欲しい。
勝負を受けたのは、狩りをするついでだったのと、受けないと煩いと思ったからだ。

「エルが相手してやれよ」

「嫌だよ。あの女、美人だけど煩いし」

「お前も大概だよなぁ」

結局その日は、忘れた物は仕方が無いと思い。
屋敷に戻ってみんなでドミニクが作った食事を取り、ちゃんと睡眠を取って、翌日にまた魔の森近くの冒険者ギルド支部前に集合する。

するとそこには、あのカタリーナが不機嫌そうな表情で待ち構えていた。

「勝負の結果も言わずに私を放置とは！　一体何を考えていますの！」

「やっぱり、怒っていたか」

「当たり前です！」

わざわざこちらに喧嘩を売ってくるのだから、無視されるのは嫌だったようだ。

「でもさ、導師の言動に唖然として何も言わなかったじゃない」

「それは……」

あの時に、『私を忘れるな！』くらい言ってくれれば忘れなかったのだが、彼女が導師に免疫が無かったために、その場で唖然として立ち尽くしてしまったのが良くなかった。

「俺達だってもう何年も付き合いがあるけど、あの人は定期的に衝撃的な事実が判明するから」

元は超一流の冒険者であったとは聞いていたが、まさかここまで凄いというか、王宮筆頭魔導師なのにたまにアルバイトで狩りをしているのだから衝撃的でもあった。

というか、誰か止めないのであろうか？
止めても、無駄なような気がしないでもないのだが。

「それに、勝負は俺達の勝ちでしょう」

カタリーナの成果は、世間一般では超一流の名に恥じない物ではあった。
要するに、相手が悪かったという事なのであろう。

「まだ勝負は終わっておりませんわ！　ここは一ヶ月間くらいの成果で！」

「導師と一ヶ月も勝負するの？」

「それは……」

まず勝ち目の無い勝負であろう。

俺達のパーティーとブランタークさんで組めば間違いなく勝てるが、それはもう勝ちとは言えないであろうから。

「勝てるようになるのは、時間がかかると思うけどね」

「勝負は、暫くお預けですわ！」

何とか、勝負の件は撤回させる事に成功する。

しかし何と言う負けず嫌いというか、俺に勝って名を売る事に執着しているというか。

「このまま普通にここで活動していれば、すぐに有名人になると思うけどね」

「それだけでは、駄目なのです！」

「なぜ？」

「あなたは、活躍すればそのまま功績や爵位に繋がるではありませんか！　私は、あなたすら突き破って活躍してもそれがあるかどうか……」

女性ならではの悲劇というやつであろう。

いくら活躍しても男性では無いので爵位などは貰えず、稼いだ金目当てに変な連中が擦り寄って来るばかり。

だから、パーティーを組まずに一人で名を挙げる事に執着している。

例外扱いされるほど活躍するしか、祖先が失った爵位を取り戻せないと思っているのであろう。

それすらも不確定ではあるが、今はそれに縋るしかないのだと。

そう考えると、少し可哀想にはなってくるのだ。

「ええと、役に立つのかは不明だけど……」

俺はカタリーナに、遺跡探索に参加して欲しいと要請する。

今回の遺跡探索では導師とヴィルマも加わり、前回よりもよりも圧倒的に戦力は増している。

だが、この世に絶対などという物は存在しない。

なので、超一流の魔法使いであるカタリーナにも参加して欲しいと思ったのだ。

実は彼女、少々口は悪いようだが意外と素直な性格をしているし、勝負の際にも一切ズルなどしなかった。

後ろから刺される心配も皆無であろう。

まず最初に、イーナ達には謝って欲しいところではあるが。

「未知の遺跡だから、何が飛び出すかは不明だけど」

「遺跡の探索は初めてですが、私は西部では名の通った冒険者。逃げるという選択肢はあり得ませんわ！」

「それは助かる。前回のような事はゴメンだからね」

「噂には聞いていますわ。先日、暗殺未遂事件に関与して改易されたルックナー男爵家が妨害をしたと」

事実ではないのだが、彼ならばやりかねないという理由で噂は広

がっているようだ。
自業自得なので、俺は一切訂正する気にもならなかったが。

「では、早速に潜るとするか」

「私の実力をとくと御覧なさい！」

「（口癖だと思えば、可愛い物か……）」

こうしてカタリーナもメンバーに加わり、再び未知の遺跡探索がスタートするのであった。

第五十八話　魔の森の地下遺跡。

「あなた達も、なかなかやるようですわね。前の発言を撤回して心から謝罪いたしますわ。あと、私も今回の探索に参加する事になりました。大船に乗った気持ちで安心してくださいまし」

魔の森で導師によって発見された未知の遺跡の探索が始まったのだが、その前に俺が参加を要請したカタリーナがイーナ達に前の暴言を謝っていた。

その発言を聞くと、もう少し柔らかく言えば良いのにと思ってしまうのだが、多分彼女はこういう風にしか言えないのであろう。

それでも、イーナ達は一応謝った点だけは認めているようであった。

「何か、モヤモヤするわね」

「イーナちゃんは、真面目だからね。ボクは、こういう人って面白くて結構好き」

「俺は、戦力になるから特に何も」

真面目なイーナからすると、カタリーナの暴言は許せない部分はあるが。

一応は謝っているので、まだ感情が上手く処理できない状態にあるらしい。

ルイーゼは、このカタリーナという人物にどこか面白い部分を見付けたようだ。

エルは前回の遺跡探索の件を含めて、戦力になれば問題は無いらしい。

美人ではあるが苦手なタイプだと公言しているので、恋愛対象でもないのでどうでも良いようであった。

「ヴェル様、ヒラヒラも仲間に加わるの？」

「まずは、今回だけね」

ヴィルマは、冒険者なのにヒラヒラの付いた皮ドレスを着ているカタリーナを『ヒラヒラ』というあだ名で呼んでいた。

ドレス状でも皮は竜の物を使っているし、マントも竜の幼生から抜けた産毛で編んでいるので、防具としては最高峰に近い物ではあったのだが、ヴィルマからすると珍奇な一品に見えるらしい。

冒険者になって僅か一年でそれだけの防具を手に入れているので彼女は間違いなく超一流の冒険者なのだが、冒険者としては効率を最優先するドライなヴィルマからすると、カタリーナはチグハグな存在に見えるのであろう。

「ヒラヒラ、結構使えるから良い」

「この娘、私よりも毒舌ですわね……」

カタリーナは、自分の口調が傲慢である事を自覚はしているようだ。

ヴィルマの発言に、顔を引き攣らせていた。

怒らないのは、ヴィルマの見た目がとても小さくて可愛らしいからのようで、その点においては彼女は物凄く得をしているというわけだ。

「ヴィルマさん、これから一緒に探索をする人に『ヒラヒラ』は駄目ですよ」

「はい、エリーゼ様」

「改めまして。カタリーナ・リンダ・フォン・ヴァイゲルと申します」

「これはご丁寧に。エリーゼ・カタリーナ・フォン・ホーエンハイムと申します」

そして、そんなヴィルマですら頭が上がらない、俺の未来の正妻であるエリーゼと。

彼女、見た目は『ホーエンハイム家の聖女』の二つ名に相応しい優しげな美しさを備えているが、同時に中央の名門貴族家の令嬢に相応しい芯の強さも兼ね備えていて。

さすがのカタリーナも、丁寧に挨拶をしていた。

エリーゼも、過去の暴言などまるで気にもしないで丁寧に挨拶をしている。

やはり、一度没落してしまった元貴族家の令嬢と、本物の貴族令嬢との差が出てしまったようだ。

過去の暴言を一切追求しないというエリーゼの行為は、実は大き

なプレッシャーになる。
貴族の世界では、『これで貸しが一つ』といった感じであろうか？

カタリーナもそれに気が付いたようで、普段の口調も大分引っ込んでしまっているようだ。

ただ、王都には逆の意味で貴族令嬢らしい人も沢山存在していて、その連中に比べればカタリーナは大分マシかもしれなかった。

「さてと、挨拶はそのくらいにして遺跡に入るぞ」

「左様！　新しい遺跡探索の事を考えていて、昨日はあまり眠れなかった故に！」

ブランタークさんに促されたので早速遺跡に入る事にするが、もう一人の大人兼監視役である導師は遺跡探索をとても楽しみにしていたらしい。

しかし、ワクワクして眠れなかったとか、正直『子供かよ！』とか思ってしまうのだが。

「では、遺跡まで移動するのである！」

俺が遺跡を発見したわけではないので、まずはみんなで歩いてそこまで移動する必要があったからだ。
道中、ここ数日間で相当に間引いたので魔物はほとんど出現しなかったが、それでもゼロというわけではない。

ただ数が少ないので、全部ルイーゼが省エネ魔闘流格闘術で仕留めていた。

「まだ遺跡に着いていないのに、魔法使いに魔力を消耗させるわけにはいかないしね」

「悪いな、ルイーゼ」

「数が少ないから大丈夫。きっと、導師が大量に狩ってしまったんだね」

「ルイーゼ嬢の言う通りである！　遺跡の中では何があるかわからないのであるから、極力魔力は節約するのである！」

約一時間後、導師の案内で遺跡の入り口に到着する。

場所は、冒険者ギルド支部のある町からは離れていたが、あまり奥地ではなかった。

入り口はとても小さく、しかも大量に繁茂したナンポウシダなどに覆われていて、導師は良く気が付いたものだと感心してしまう。

「たまたま小便を催したので、ここでしようと思ったのである！」

「はあ、そうですか……」

つまり、偶然に見付けたようであった。

導師以外の全員が、心の中で感心して損をしたと思っているはずだ。

「それで、この入り口って誰が開けるんだ？」

入り口に付いているドアは閉まっていて、エルは誰が開けるのかと尋ねて来る。

「その前に、罠の確認であるな」

導師の言う通りで、ドアに触れた瞬間にドカンでは溜まらない。
罠の有無を調べる必要があった。

「俺の出番だな」

素早くブランタークさんが前に出て、『罠感知』の魔法を使ってドアを調べる。
さすがは元一流の冒険者だけあって、こういう種類の魔法も使えるのは凄いと思ってしまう。

「罠は無いみたいだな。ただ、これは面倒な……」

「面倒？」

「ああ、この錠前を見ろよ」

ブランタークさんは、ドアにかかった錠前を指差していた。
鍵は必要無いようだが、四つのダイヤルが付いていて0から9までの数字に変える事が可能になっている。

一番解り易い言い方をすると、自転車の数字式のロックに似ているのだ。

「数字を間違えると、『ドカーーーン！』とか？」

「そういう罠は確認できないな。普通に数字を合わせるだけだろう」

時間稼ぎには使えるので、地味に嫌な罠とは言える。
多分、このドアに錠前をセットした人間はかなり性格が悪いのであろう。

「吹き飛ばすという策もあるのである！」

「その先に何があるのかわからん。ドアを吹き飛ばすのは論外だ」

魔法でドアを吹き飛ばし、もし内部で危険な物が見付かってドアを封印しないといけない事態になった時。
爆破して壊れていたら、封印作業が困難になってしまうからだ。

「一つずつ、試すしかないだろうな」

「間違えると、ペナルティーとかありますか？」

「そういう罠は探知できなかったな。そもそも、そんな高性能な罠は効率が悪い」

ダイヤルを一つ間違える度に何かが起こる罠など、コストの問題で設置など現実的にあり得なかったからだ、
それに、古代魔法文明時代の遺跡の大半は内部に手間のかかる罠を仕掛ける傾向が強いらしい。

そういえば、前の『強制転移魔法陣』や『逆さ縛り殺し』の罠などは内部に存在していたのを思い出す。

「えーーーっ！　ダイヤルを一つずつ？」

００００から９９９９までを一つずつ回して、ドアが開く番号を

確認するのだ。
大変に地味で、時間ばかりかかる嫌な作業である。

「えーーーと」

俺が他のみんなと目を合わせると、全員が視線を反らしてしまう。
エリーゼでもそうだったので、誰もやりたくないのであろう。
当然、俺だって嫌だ。

「こういう場合は、新入りに任せるとか？」

エルの発言により、全員の目が一斉にカタリーナへと向かう。

「そんな酷い話がありますか！　平等に、クジで決めるべきですわ！」

当然カタリーナは嫌がったが、その代わりに良いアイデアを出してくれたようだ。
クジ引きで平等に決めた方が、確かに後で不満も出ないはずだからだ。

「ヴェル様、ジャンケンで決めよう」

ヴィルマが俺のローブを引っ張りながら、ジャンケンでの決着を意見する。
この世界にジャンケンは存在していなかったが、前にふと空いた時間にヴィルマに教えたら、物凄く気に入ってしまったのだ。
それ以来ヴィルマは、何か決める事があると必ずジャンケンで決

めようと言うようになっていた。
イーナ達も、何も準備せずに簡単に勝敗がつくので、今ではほぼジャンケンに参加するようになっている。

この世界では、こういう時にはクジ引きかコイントスで決めるのだが、手間がかからなくて良いのであろう。

「えーーーっ！　ジャンケン！」

唯一の例外で、エルはジャンケンでの決着にかなり不満があるらしい。
その理由は、エルが恐ろしいほどジャンケンに弱いからだ。
というか、俺はエルがジャンケンで勝っている場面を見た事が無い。

良くヴィルマに負けて、オヤツなどを奪われているのを目撃していた。

「エルが意地汚く、ヴィルマからオヤツを巻き上げようとするから」

ただしその結果はイーナの言う通りに全戦全敗で、逆にエルがオヤツを巻き上げられていた。

「とにかく時間が惜しい。ジャンケンだ」

「しゃあねえ、新入りもいるからさすがに負けないだろうし……」

エルも渋々と認め、ダイヤルを回す人を決めるジャンケンが始まるのであった。

「９９９５！　９９９６！　開かねえ！」

それからまた約二時間後、やはりジャンケンに負けたエルは、懸命にドアについた数字式のダイヤルを一心不乱に回していた。

なお、その間に残りの面子は見張りを除いて休憩をしている。

二時間も緊張していたら身が保たないので、見張り以外はエリーゼが入れたお茶とお菓子を楽しんでいたのだ。

「このチョコレート菓子は、甘さ控えめで美味しいわね」

「それは、アルテリオさんが送って来た試作品」

「あの人、とことん突っ走るわね」

イーナは、アルテリオさんの商売根性に感心していた。

今まで何をしてもほとんど失敗がないので、多分暫くこのままであろう。

「でも、エルに悪いよね」

「負けたから仕方が無い」

「ヴィルマは、真実をズブリと貫くな。ボクも、代わってあげようとか一切思ってないけど」

「冒険者なのですから、敗北は素直に受け入れませんと」

「ここで、カタリーナの深いのか深くないのか良くわからない発言」

「別に、そんな事を狙ってはいませんわよ」

「お前ら、人が苦労している間に……」

お菓子を摘み、お茶を楽しんでいる女性陣に文句を言うエルであったが、所詮はジャンケンに負けた負け犬の遠吠えなので誰からも相手にされていなかった。

「９９９７！　これも駄目だ！」

最初は００００から回し、実は９９９９というオチがあるかもと最初に回したようだがそれはなく、また０００１から回し始めるが結果は９９９８であった。

当然、エルは激怒しながらドアから外れたダイアルを地面に叩き付けていた。

「これを作った奴は、性格がひん曲がっている！」

「時間稼ぎですかね？」

「そうだろうな」

俺の問いに、ブランタークさんはテンションが低いままで答える。

「やる気なさそうですね」

「入り口がこの手の遺跡は、ほぼ１００％外れだからだよ」

古代遺跡にも色々な種類の物があるのだが、入り口に鍵がかかっているパターンで、比較的簡単に外せるパターンの物はあまり価値のあるお宝が無いらしい。

「稀に当たりがあるんだけどな。本当に、稀だから」

以前に、同じような鍵を外して遺跡に中に入ったそうだが、そこは昔の食料倉庫であったらしい。

「一万年以上も前のだからな。何も無かった」

それだけ経つと、食料など腐るを通り越して何も無かったそうだ。

「かなり奥地にある遺跡だから、期待したのにな」

「食料倉庫だったんですか？」

「そういう地下遺跡もあるんだよ」

前に潜ったような、如何にも地下遺跡の皮を被った古代の偉人の秘密基地モドキとかは極端な例として。

普通に文化的な価値のある地下建造物だったり、個人が作った地下室だったり、昔の公共設備だったりと。

魔道具やお宝が出るのは、その地下遺跡を作った人や組織や商会の財産であったり、備品などが残っていたからだそうだ。

なぜ魔物の住む領域に集中しているのかと言うと、それ以外の遺跡はほぼ発掘されてしまったからしい。
皮肉にも、人が入り難いから残っているのだと。

「古代魔法文明時代は、魔物が住む領域にも人が住んでいたと？」

「そういう事なんだろうな。証拠もあるようだし」

あとは、魔物が住む領域では無くても、たまに前人未踏の僻地などでも遺跡が見付かる事もあるらしい。
ただ、今ではもう滅多に無いそうだが。

「酒の倉庫だと良いのに」

「またそんな。自分が好きだからって」

「酒なら、まだ可能性があるんだよ」

前に、大昔の貴族が所有していた地下式のワインセラーが遺跡として見付かり、そこに保存されていたワインが無事であった事があったそうだ。

「古代魔法文明時代のビンテージ物のワインだからな。目の玉が飛び出るほどの値段がついた」

貴族や大商人などが、こぞってオークションで競り落としたそうだ。

「という可能性を夢見つつ、探索開始だな」

「安全のために、某が前に出よう」

導師なら、突然魔物に襲われても大丈夫という理由により。

導師を先頭に、俺とブランタークさんが並んで後ろから鍵を開けたドアを開けて中に入っていく。

念のため、ブランタークさんと一緒に探知魔法を使いながら暗い通路を前に進むが、人二人が何とか横並びで進めるくらいの長い通路には魔物の気配が一切なかった。

「やっぱり、ただの倉庫だな」

ブランタークさんが、あからさまに残念そうな表情を浮かべる。

地下遺跡を作った人に財力などがあると、遺跡の中の物を守るために大量の罠や、魔物などが配置されているのだそうだ。

あとは、ゴーレムなども定番ではあると言う。

「経年劣化で壊れて、魔物が入り込んでいるだけなのもあるけどな。しかし、眩しいな導師」

「某、ライトの魔法も体に纏わせないと発現しないのである！」

「まあ、明るいから良いけど」

通路を進むにつれて暗くなってきたので、導師はライトの魔法を使っていた。

このライトの魔法、当然遺跡探索などではポピュラーな魔法である。

普通は、指先で光の玉を光らせて使うのだが、導師は全身に光を

纏わせて無意味に光り輝いていた。

エリーゼなら、『輝ける女神』とか世間からは言われそうであったが、導師だと『天罰を下しに来た光る巨人』にしか見えない。

あと、常に全身が輝いているので魔力効率も悪そうであった。

導師くらい魔力を持っていると、あまり気にならないのであろうが。

「また鍵のかかったドアであるな」

先頭の導師が、また鍵のかかったドアを発見する。

しかも今度は、普通に鍵で開ける錠前が付いているようだ。

「壊すしかないのである！」

「今回ばかりは、壊すしかないかね？」

罠の存在も察知できなかったが、同時に鍵もどこかにあるわけでもなかった。

錠前自体も南京錠モドキであまり貴重品にも見えず、ブランタークさんは壊しても問題は無かろうと判断したようだ。

「お待ちになって。私は、鍵開けの魔法が使えますから」

「へえ、珍しい魔法が使えるな」

ブランタークさんが感心するのも無理は無い。

この鍵開けの魔法も、かなり習得が困難な部類に入る魔法であったからだ。

自分の魔力を塊にしてから固形化し、その錠前に合った鍵の形に変形させて錠前を壊さずに鍵を開ける。

恐ろしいほど繊細な魔力のコントロールが必要であり、その割に成果が地味なので、すぐに習得を諦めてしまうという使用者が大変に少ない魔法であったのだ。

「これがあれば、一人で遺跡に潜れるかと」

「いくら凄腕の魔法使いでも、遺跡に一人は危険だぞ」

「わかっていますわ。おかげで、死蔵していた魔法ですし」

さすがのカタリーナも、ブランタークさんの忠告は素直に聞いていた。

彼が、その功績では文句の付けようが無い超一流の冒険者であった事実を知っていたからだ。

あと、そんな彼から凄腕と言われて気分も良かったらしい。

「俺は、ギルド本部の幹部にも知己がいるからな。『暴風』の噂は聞いていた」

王国西部を仕切るホールミア辺境伯領にある冒険者予備校をトップの成績で卒業し、一年あまりで西部領域一の魔法使いだと噂されるようになったそうだ。

「知らなかった」

「坊主は、本当に他の冒険者とかに興味ないよな……」

基本的に興味が無いというか、これは前世での会社勤めのせいだと思っている。

俺はあまり言われた事は無いが、営業成績によっては散々に上司から怒られる先輩・同期などを見ていて、同じ会社でもあるまいし、他の冒険者の成績など気にしてもしょうがないと思っていたからだ。

冒険者とは、個人個人が自営業者のような物なのだし。

「自分が稼げれば良いじゃないですか」

「それはそうなんだけどな」

その代わりに、貴族としては柵（しがらみ）だらけで酷い目に遭っているのだから。

「あっ、でも。カタリーナって、まだ冒険者になって一年あまり？」

「何か文句でもあるのですか？」

「じゃあ、俺達とあまり年は変わらないのか」

十八歳くらいに見えるのだが、実はまだ十六歳らしい。

「私には志があるのです！　ヴァイゲル家を貴族家として復興させるという！　その責任感が顔に出ているのですわ！」

要するに、老けているのではなくて大人びているのだと言いたいのであろう。

そのために、魔法が使えると知ったその時から一人で魔法の修練を懸命に行い、十二歳で冒険者予備校に入るまでは狩猟などで金を稼ぎ。
冒険者予備校時代には、同じく狩猟で金を稼ぎに稼ぐ。
勿論、その合間には魔法の修練を怠らず、今も魔力は増えているので修練を怠っていないそうだ。

「何か、話を聞くと昔のヴェルみたいだな……」

カタリーナが自慢気に話す昔話を聞いて、エルがボソっと感想を述べる。
以前に聞いた、俺の昔の生活に似ているのだと言うのだ。

「（なるほど……。カタリーナも俺と同じく、ボッチだったのか……）」

いや、間違いなく現在進行形でボッチなのであろう。
何しろ、パーティーも組まずに一人で冒険者をしているのだから。

「鍵開けも、いつか仲間が出来て必要になるかと思って会得したんだな……。偉いぞ、カタリーナ」

「何なのです！　人を友達がいないみたいに！」

「実際に、いるのか？」

「さあ、鍵を開けましょう！」

俺の質問を無視して、カタリーナは鍵を開け始める。
その誤魔化し方から見て、彼女には本当に友達がいないのだと俺

は気が付いてしまうのであった。

「開きましたわ」

「早いな」

「このくらいの鍵など、私にかかれば」

「一人で遺跡にも潜れないのに、良くぞここまで修練して」

「いい加減、気を悪くしますわよ！」

鍵は僅か十秒ほどで開き、俺達は更に遺跡の奥へと進む。

暫く歩くと、通路はまた行き止まりになっていた。

「また行き止まり？」

「いや、魔導エレベーターが設置されている」

「魔導エレベーター？」

「魔力で下の階層まで送ってくれる便利な装置さ」

首を傾げるイーナに、ブランタークさんが答える。

魔導エレベーターとは、簡単に言えば魔力で動くエレベーターの事である。

古代遺跡にはたまに設置されているらしいが、ちゃんと動く物は

今までほとんど無かったそうだ。

「これは生きているな。珍しい」

ブランタークさんが行き止まりの壁にある埃塗れのボタンを押すと、石壁だと思っていた物が横にスライドして開く。

確かに、エレベーターに良く似た作りになっていた。

「ボタンに『開』って書いてありますね」

その下にもボタンがあって『閉』と書かれているので、これはエレベーターで間違いないようだ。

横にスライドして開いたドアの中に入ると、その壁には『開』・『閉』の他に、階層数の書かれたボタンが付いていた。

「ここは一階で、地下二十階までか」

「実は、大遺跡とか？」

「大倉庫だと思うんだよな。鍵が単純だから、ほぼ外れの」

食料品や衣類などの倉庫ではなかったのかと、ブランタークさんは推理していた。

古代魔法文明時代には、大規模な倉庫を持つ大資本の商会が多数乱立していたそうだ。

「もう中身が空っぽだから、金にはならないと？」

一万年以上も時間が経っているのに、中身の食料品や衣類などが無事なはずもなく、ほぼ空っぽのケースが多いらしい。

「魔導エレベーターは売れるかもな」

魔道具ギルドが、研究のために買ってくれる可能性が高いそうだ。

「研究ですか？」

「ああ。王城に、魔導エレベーターは設置されていなかっただろう？　この魔導エレベーターもロスト技術で、魔道具ギルドがバラして研究している内に、全部オシャカにしてしまうんだよ」

数少ない現存品も、そのせいで全て壊れてしまったそうだ。

「そんなに複雑な構造には見えませんけどね」

ここにある魔導エレベーターのように、階層をボタンで指定するとそこに止まるとか、そういう機能が再現できないらしい。

あと、ドアが閉まる時に人が挟まってしまったら。

前世ではセンサーで勝手に開くのが普通であったが、当然今の技術では再現不可能であった。

むしろ、古代魔法文明時代には再現できていた事が凄いのだと俺は思うのだが。

「荷物を一階から二階に上げるくらいのエレベーターなら、王城でも裏方では使っているさ」

あくまでも荷物用で、それでも値段はバカみたいに高いのだそうだ。

生産数も少なく、王城や一部公共施設、大貴族や大商人が持っているくらいらしい。

「しかも、荷物専用か」

「魔導エレベーターは、維持に技術と金がかかるからな。大貴族でも、いらないと割り切っている人も多い。うちのお館様も、持っていない」

そういえば、ブライヒレーダー辺境伯の屋敷でエレベーターなど見た事が無かったのを思い出す。

「もう下の階に着きましてよって！　誰です！　私のお尻に触れたのは！」

「ああ、俺」

「少しは、申し訳無さそうに言いなさい！」

「しょうがないだろう！　狭いんだから！（つうか、皮の感触しか感じないし）」

思ったよりも広く、全員が入れたエレベーターは無事に地下一階へと到着していた。

人数が多いので鮨詰めにはなってしまい、俺の手がカタリーナの尻に触れたので彼女が文句を言っていたのだ。

「ねえ。ボクの胸に触れているのは？」

「俺だ。えっ？　胸？」

「ブランターク様、後でぶちのめしても良い？」

「すまんかった！」

狭いエレベータのせいでアクシデントがあったようだが、一向は無事に地下一階に辿りついていた。

「また通路だけ？」

「典型的な地下倉庫だな」

幅三メートルほどの、先が見えないほど長い通路が伸びていて、その両側に五十メートル間隔くらいでエレベーターのドアと同じように『開』・『閉』のボタンが設置されていた。

「ドアの動力も、魔力なんですか？」

「そういう事になるな。あとは……、珍しいな！　魔蔵庫になっているのか！」

「魔蔵庫ですか」

魔蔵庫が何なのかは、さすがに俺でも知っている。

要するに、魔法の袋の倉庫版だ。

小さい袋に大量に収納するという部分を省き、その部屋にある物の経年劣化を防ぐ機能だけを付けた物である。

ドアを開けて中身を取り出す時にはその機能は停止し、またドアを閉めると中の物の時間の経過が止まる。

古代魔法文明時代には、冷蔵庫と並んで普及していた物だと書物には書かれていた。

「でも、そんな昔の魔蔵庫とやらがまだ動いているんですか？」

「動いているさ。何しろ、これは魔道具だからな」

古代魔法文明時代の遺跡から見付かった魔道具は、見た目は古ぼけていても今でも使える品が多い。

元々長期間使う事が前提の品が多いうえに、経年劣化を防ぐ魔法がかかっている物が多いからだ。

さすがに一万年以上も前なので、それがかかっていないと見付けても使えないのだが。

「ほら、ボタンの下を見てみろ」

「あっ、魔晶石が光っている」

光っているという事は、今も経年劣化防止機能が生きているという事だ。

「へえ、そんなに保つんだな」

「腕が良い魔道具職人が建設に携わったんだろう」

ブランタークさんは、腕の良い魔道具職人は魔道具の性能だけでなく、付属させている魔晶石の燃費も格段に優れているのだとエルに説明する。

「でも、一万年以上ですよ」

「経年劣化防止は、さほど魔力を喰わないからな」

だからこそ、俺は師匠から魔法の袋を無事に継承したりも出来たのだから。

「魔蔵庫は、魔法の袋ほど魔力を消費しない」

大量の物を、袋の中に設定した異次元の空間に仕舞い込んだり、それを自由に呼び出したりという機能が省けるからだ。

実際に、ドアの裏側に付いている魔力補給用の魔晶石はソフトボール大くらいの大きさでしかなかった。

その大きさで一万年以上も稼動しているのだから、魔法の袋よりは魔力消費効率が良いのであろう。

「遺跡から発掘されて使用可能な魔道具は、こういう生きていた倉庫に入っていたケースも多い。案外、これは当たりかもな」

早速一番手前のドアを開けて、魔蔵庫の中に入ってみる。

室内は、幅五十メートル、奥行き百メートル、天井の高さ五メートルほどと大きく、中に入ると魔道具である照明が自然につく仕様になっていた。

床も壁も天井も、大理石のような白っぽい石で出来ていて、とても細かい魔法陣のような物が沢山描かれている。

どうやら、経年劣化防止の魔法陣のようであった。

「やっぱり、生きているな」

部屋の中には大量の木箱が積まれていたが、どれも一万年以上も前の物とは思えない。

木が白っぽくて新品のようで、更に木独特の良い匂いが室内に漂い始めたからだ。

「また時間が流れ始めたな」

ドアを開けたので時間の流れが復活し、木箱は新品だったので当時のままなのだとブランタークさんは説明する。

「つまり、中身の出し入れをしている時には時間が流れているのですね？」

「ドアの裏側にも、魔法陣が描かれているだろう。開ける事で、経年劣化防止の魔法が止まるのさ」

「便利なのかな？」

その疑問は魔道具ギルドの人達は考えているようで、それが魔蔵庫が普及していない最大の原因らしい。

あと、魔蔵庫は確かに消費魔力も少なくて一旦稼動させれば長期間使用可能ではあるが、作るには倉庫などの工事に、特殊な石材を全周囲に張り巡らせ、特殊な魔法陣を隙間無く書いていく必要があり。

初期費用を考えると、冷蔵庫の方が圧倒的に費用効率に優れているそうだ。

「そういえば、アルテリオさんも購入したのは大型冷蔵庫でしたね」

味噌や醤油の貯蔵に購入したと言ったのは、地下に設置した大型

冷蔵庫であったと俺は聞いている。

「時間が経たないから生鮮食料品の貯蔵に良いような気もするが、魔蔵庫はドアを開けると時間が流れるからな」

大規模な倉庫を魔蔵庫にして生鮮食料品を大量に保管しても、結局取り出す時にいちいち時間が経過するし、温度調節などもしていないので早く傷んでしまう。

それなら小さな冷蔵庫の方が圧倒的に経費がかからないし、ある程度の量の保存なら魔法の袋の方が場所も取らずに運搬も楽と。

魔蔵庫は、中途半端な存在として今では全く普及していないそうだ。

「衣服や雑貨とかを長年保存してもな」

「では、昔の方はどうして魔蔵庫を使ったのでしょうか？」

「それは……。これがヒントになるのかな？」

カタリーナの疑問に答えようとしたわけではないが、俺はドア近くの壁際に小さな机と本棚を見付けていた。

本棚には大量の紙が紐で結ばれて入っており、中身を見るとそれはこの倉庫に入っている物品のリストであるようだ。

「想像通りに、瓶入りの酒、衣服、生活雑貨か」

古代の物でも新品に近いので、それなりの値段になるはずであった。

「ねえ、ヴェル。これは、リストじゃないよ」

手分けして紐で結ばれた紙束の中身を読んでいると、ルイーゼが何か別の資料を見付けたようだ。

「ええと。『プライムタウン郊外に、大型ショッピングモールプライスオフが堂々とオープン！　八割・九割引きは当たり前！　新型省エネ魔道具も、大奉仕価格で大放出！　ここで揃わない物はない！』か……」

チラシのようであるが、どこか前世を感じさせてくれるような文言ではあった。

というか、同じ古代魔法文明時代の遺跡なのに、どこか王都周辺の物とは違うような気がするのだ。

「ヴェル、この地下遺跡の資料があったわよ」

丁寧に資料を読んでいたイーナが、この地下遺跡の正体が書かれた紙を見付けたようだ。

貰って読むと、どうやらこのチラシのショッピングモール専用の地下倉庫であったらしい。

「ええと、要するに大型バッタ市の倉庫だったみたいだな」

古代魔法文明時代については、未だに研究者の間でも良くわかっていない事が多いそうだが、少なくとも今よりは魔道具などが大量に普及していて、生活も豊かであったようだ。

前世の日本のように、大量に安価な商品が世間に普及した結果、

どんどんと価格が下がり、生産された商品の在庫が溜まって業者の経営を圧迫していく。

自然と業者は淘汰され、薄利多売の大資本か、小回りの利く小規模な業者の二極化が進む。

この地下倉庫は、その過程で潰れた業者から買い叩いた品を『新古品』として保存するための倉庫であると俺は推察していた。

「（古代魔法文明時代って、意外と世知辛いのね……）つまりは、この倉庫には大量の商品があると？」

「地下二十階層まであるので、当然大量にあるであろうな！」

導師は早速木箱を一つ開けて中身の酒瓶を取り出し、その中身を試飲していた。

探索は、まだ地下一階の最初の部屋であるここにしか入っていない。

一階層に、最低でもこの大きさの部屋が十以上もあり、それが地下二十階層まであるのだ。

どれだけの物資が残っているのか、想像するのも難しいほどであった。

「導師、探索中に酒を飲まないでくださいよ」

「若いワインであるな。魔蔵庫ゆえに仕方が無いであるか！」

試飲とは言っても導師なので、当然一気にラッパ飲みをして酒瓶は空になっていた。

しかし、この程度で導師が酔うはずもなく、顔色に一切変化は無

いようだ。

「エリーゼ様、お腹空いた」

「はいはい。今、オヤツを出しますね」

「ありがとう、エリーゼ様」

魔物も居ない遺跡の探索だったので、ヴィルマは暇になってしまったらしい。

時間もちょうどお昼前であった事もあり、エリーゼはヴィルマに自分で焼いたクッキーなどを食べさせていた。

何というか、世話焼きお姉さんと甘えている妹のような構図に見える。

「大当たりのようですわね。この稼ぎと功績を持ってして……」

「女の身で、貴族にはなれんだろう」

「この国って、本当に閉鎖的ですわね！」

まだ全部は調べていなかったが、これだけの物資があれば相当な稼ぎになるはずだ。

なのにカタリーナは、女性は貴族になれないという王国の不文律のために損をする羽目になっていた。

俺からすればかなり優秀な魔法使いなわけだし、例外くらい認めても良いと思うんだが。

「（導師、このままにしておくと）」

「（亡命してしまう可能性があるな……）」

アーカート神聖帝国では、女性の貴族も認められているらしい。

もし彼女が国を拘らなければ、亡命した方が貴族への道に近いとも言えるのだ。

「亡命はしませんわ。私には、守るべき家臣達やその家族がいるのですから」

カタリーナの実家であるヴァイゲル家は、祖父の代に派閥抗争の余波で、王家からの転封命令を断ったという理由で領地と爵位を奪われてしまったそうだ。

それと、彼女の言う家臣達とは。

その時の従士長以下の家臣やその子孫達が、王国の直轄地となっている今でも、いつかヴァイゲル家が貴族として復帰できるように領地を頑なに守っているらしい。

何というか、恐ろしいまでの忠誠心とも言える。

「祖父が陛下からの命令に背くなどあり得ませんわ！　あの悪辣なルックナー侯爵家の所業なのですから！」

今のルックナー財務卿の先代が、同じく財務閥で当時揉めていたリリエンタール伯爵家の勢力を落すために、そのような工作を行ったのだそうだ。

ヴァイゲル家は、在地領主にしては珍しく法衣貴族であるリリエ

ンタール伯爵家の寄り子であったらしい。
領地が王都に近く、縁戚関係でもあったようで、万が一の時にある程度の兵力を期待できるヴァイゲル家をルックナー侯爵家が疎ましく思ったようだ。

「あの人、色々と恨まれているな」

「大貴族というのは、それなりに敵がいるのであるが」

しかも、ヴァイゲル家が改易された当時は両家の当主は先代同士で犬猿の仲であったらしいが、今ではそれほど仲も悪くないらしい。
導師に言わせると、代が変わると極端に貴族家同士の関係が変わってしまう事があるそうだ。

逆に、『不倶戴天の敵だから絶対に許すな！』と必ず後継者に申し送りして、数百年間も仲が悪い貴族家同士も同じくらいあるそうだが。

「改易当初は、リリエンタール伯爵家も援助はしてくれたのですが……」

『必ず領地と爵位は復帰させるから』と援助をしていたのに、代が代わると見捨てられてしまったらしい。
それ以降は、家臣達は土着して名主などをしながら懸命に没落したヴァイゲル家を支えてくれたそうだ。

多分、リリエンタール伯爵家はルックナー侯爵家との仲が修復したので、ヴァイゲル家の事は見捨てたのであろう。

大の利益のために、小の利益を切り捨てる。

どこの世界でも、良くある話ではあった。

「彼らへの恩を返すため、私は貴族にならなければいけないのです！」

とは言え、このままではカタリーナが貴族になれる可能性は無いわけで、その辺の焦りが最初の傲岸な態度に。

いや、最初からあんな物なのかもしれなかったが。

冒険者としての活動を西部にしていたのも、王都周辺だと色々と煩かったからなのであろう。

「とにかく、その話は後だな。お宝持って帰ろうぜ」

ブランタークさんの意見で、俺達は昼食を取った後にこの地下倉庫にある全ての部屋を回って保管されていた物資の回収を行っていた。

魔道具なども大量にあるようであったが、確認は後でも構わない。

無いとは思うが、放置して他の冒険者達に横取りされるのも癪であったからだ。

「一階層に二十室の同じ大きさの倉庫部屋があって、二十階分で四百か……。一杯あるな」

「ギルドの人達、鑑定するのが大変でしょうね」

「それが連中の仕事だ」

ブランタークさんの答えは、あっさりとした物であった。

「冒険者ギルドは必要な物ではあるが、俺達冒険者のアガリで生きているのも事実。多少の忙しさなど、気にするまでもないさ」

「ですが、ブランタークさん」

「何だ？　イーナのお嬢ちゃん」

最近、ブランタークさんから『様付け』は止めてくれと言われたイーナは、彼を普通に『さん付け』で呼ぶようになっていた。

「この資料を見ると、ここって第四地下倉庫らしいですよ」

「捜索を続行するか……」

俺は、翌日からの工事依頼を延期してまで周辺の探索に参加し、同じ地下遺跡という名の倉庫を八つ見つける事に成功する。

全て同じ作りで、二十部屋×二十階層で魔蔵庫完備。

そして中には、大量の物資が詰っていた。

「昔は、物余りだったのですね」

大量の様々な物資を見ながら、エリーゼはそのような感想を述べていた。

「少なくとも、ここはそんな感じだな」

ブランタークさんに言わせると、この魔の森の中にある遺跡は他の地域の遺跡とは何かが根本的に違うのだそうだ。

確かにここは、如何にも地下遺跡風の造りではなくて、大量に物

資を仕舞うための地下倉庫でしかない。

保存している物資の劣化を防ぐために魔蔵庫まで設置しているという事は、日本人のように潔癖症な部分もあるのかもしれなかった。

「古代魔法文明とひとくくりにしてますけど、この地域は別国家だったのでは？」

「一応、統一国家だったようだぜ」

専門家による研究によると、中央部には強固な王政国家が存在していたようだ。

「じゃあ、属国とか、自治領とか、衛星国とか？」

「かもしれないな」

だが、その辺の歴史的な真実は王国の研究者が調べれば良い事である。

俺は、見付かった八つ全ての物資を魔法の袋に収納し、入り口を再封鎖してから自分の屋敷へと戻るのであった。

「もうダイヤル嫌……。人が律儀に０００００から回しているのに、９９８７とか喧嘩売り過ぎ……。次は、９９９９から回したのに００７だったし……」

一人だけジャンケンに負けまくり、八つの地下倉庫全てのダイヤル鍵を自力で開ける羽目になったエルは、心なしか放心しているようではあったが。

第五十九話　新しい家臣達とカタリーナ。

「カタリーナ、指名依頼が来ているけど」

「わざとらしいですわよ、ヴェンデリンさん！　依頼の指名者は、あなたではないですか！」

「それがね。俺の名前で指名されているんだけど、全然俺は関与していないわけで」

「そんな無責任な話がありますか！」

「ローデリヒって、案外人使いが荒いんだよね」

出会った当初からイーナ達と揉め、それが原因で狩りで勝負をした没落貴族の娘であるカタリーナであったが、その後は一緒に導師が見付けた地下遺跡の探索をしたりして、何だかんだと言いつつも一緒に行動するようになっていた。

彼女は、貴族とはこうあるべきだという信条のような物をもっていて、それがあの格好であったり言動であったりするのだが、どこかズレているのは本物の貴族ではないからかもしれない。

それと、彼女は自分の魔法を利用した御家復興を願っているようで、その行動指針は、常に世間から目立つようにという物から来ている事が多い。

俺の前でイーナ達を罵倒し、勝負を挑んで来たのにはそんな理由もあったようだ。

ただ、勝負の結果はもうどうでも良くなっていた。

あの導師が勝手に割り込んで、俺もカタリーナも彼に勝てなかったからだ。

『実は、わざと勝負に水を差して仲裁に入ったとか？』

『見た目からは、とてもそう思えませんわ』

導師の真意はわからなかったが、正直勝負などどうでも良くなってしまったのは事実だ。

その後、いつもの口調ではあったがカタリーナも素直に謝ったので、もう争いはこれで終わりという事になっていた。

俺には度々土木工事の依頼がローデリヒから入るので、カタリーナはなぜかエル達と魔の森に入るようになっていたのだ。

『ブランターク様もお忙しいでしょうから、私がみなさんを護衛してさしあげますわ』

口調はいつもの感じであったが、これは照れ隠しから来ているらしい。

実際に一緒に出かけると、女五人で姦しく楽しみながら狩りや採集をしているようだ。

『なあ、ヴェル。せめてもう一人、男のメンバーが欲しいんだが…

…』

『自分で探せよ。冒険者ギルドに居るのから。良さ気なら、俺も許可を出すから』

『そんなの、簡単には見付からないから相談している』

俺達とカタリーナと導師による狩りの勝負が行われた結果、魔の森の近くに数箇所作られた冒険者ギルド支部には多くの冒険者達が詰め掛けるようになっていた。

あの勝負で得られた大量の魔物の素材や、フルーツ類、カカオの実、貴重な薬草などが王都で冒険者ギルド本部主催のオークションで大金で落札されたからだ。

特に、あのアルビノ個体のサーベルタイガーは王家が大金を積んで二頭とも手に入れてしまったそうだ。

他のサーベルタイガーも複数の大物貴族達によって落札され、現在王都では『飛竜の頭なんて当たり前。貴族の癖に、家にサーベルタイガーの毛皮が無いなんて……』という空気になってしまったらしい。

その結果、貴族は多額の報酬を餌に冒険者ギルドに依頼を出し、それに応じた冒険者達が多数集まって来たのだ。

魔導飛行船の運賃は、最低でも金貨一枚である。

それを払っても、魔の森は美味しい狩り場であると認識されたのだ。

サーベルタイガーは無理でも、他の魔物も単価は高いし、フルーツ類やカカオの実でもある程度数を集めれば採算は良い。

現在、冒険者ギルド支部周辺には急速に町が出来上がりつつあるようだ。

それともう一つ、あの地下遺跡の存在もある。

古代魔法文明時代にあった大型アウトレットモール、というのが正しいのであろう。

その在庫を仕舞う魔蔵庫付きの大型地下倉庫が八つも見付かり、その中には大量の物資が当時のままで眠っていた。

生活雑貨なども多かったが、例えば服や下着などでも今の物よりも遙かに品質が上で、数もあるので結構な値段になるはず。

実際、今俺が着ているシャツやズボンなども、部屋着なら上級貴族が着ても何らおかしくはないほどだ。

他にも、今の物とは形式が違うが、スーツや礼服なども多数見付かっている。

カジュアルな服装などもあって、これらは寧ろ地球の物に良く似ていると思う。

ネクタイにスーツなど、試しに着てみるとまるで前世のサラリーマン時代に戻ったかのようであった。

皮靴を履き、カバンなどを持つと、急いで出勤しないとなどと思ってしまうほどだ。

衣服や装飾品は女性用も大量にあり、例えば園芸用品などもあった。

花や野菜や穀物などの種子も大量にあり、これは現在王国内で栽培されている品種よりも優れているのかのかを、バウマイスター伯爵家専用の実験農場で栽培し確認して貰う事にする。

前に、魔の森にあるカカオやフルーツ類の実験栽培を頼んだ所である。

ただし拡張が必要なようなので、また土木工事に駆り出される予定ではあったが。

他にも、様々な生活雑貨に、玩具、酒、食料品、家具、書籍、工具など。

あまりに量が多いので、現在ローデリヒ達がギルドの職員達とまだカウントしている状態であった。

本来ならば、ギルド側で全て買い取ってから俺達が上納金を納めるのが普通であったが、見ての通りに数が多いのでギルド側も全て買い取りは不可能との判断であり。

あと、ここの領主としては、現物を研究すれば新製品などが多数出せそうな物資を全てギルド側に渡すなど言語道断でもある。

特にローデリヒが煩いので、ギルド側には評価額だけ算定して貰い、俺が現金で上納金を納める事になっていた。

ちなみに、魔の森における上納金の額は評価額の一割。

かなり低いが、これはローデリヒが上手くギルド側の足元を見て交渉した結果であった。

他にも、ギルドはもう一割をバウマイスター家への税金として徴収する義務がある。

ギルド側も、収入に応じてこちらに納税する義務があるので、それらを差し引いた額を計算すると、俺も思ったほどの負担をしない

でも済むようになっていた。

とはいえ、普通の貴族だと頭を抱える金額なのであったが。

正式な金額の算定はこれからであったが、それは多数ある魔道具の査定がまだだからであろう。

様々な商品を取り扱うアウトレットモールの倉庫なので、当然魔道具類も大量に入っていたからだ。

冷蔵庫、エアコン、洗濯機、コンロ、オーブン、洗面台など。

他にも、ブランタークさんがブライヒレーダー辺境伯から預かっている携帯魔導通信機なども多数見付かっている。

しかも、現在王国内で出回っている品よりも性能や魔力消費効率が圧倒的に良かったのだ。

なお、倉庫に一緒にあったチラシには、『即日契約安心魔導携帯通信機』、『ご新規様、無料契約』と書かれていた。

そこはかとなく、日本を思い出させてくれるチラシの文言ではある。

更に、自動車、トラック、バイク、小型の耕運機などに類した魔道具も数百台ほど見付かっている。

商品を見ると、新品も、中古も、倒産品買い取りのバッタ品もあると見付かった帳簿には書かれていて、昔は魔道具が発達していたものの、在庫過多で作っている業者もかなり厳しい競争を強いられていたようだ。

例えば携帯魔導通信機などで見ると、高性能で作りも素晴らしい『ソニア』という工房の作品は、新品も、少し傷は付いているが性能に差が無い中古品もあった。
あとは、『ソミア』という作りが雑で魔力効率も悪い品があって、やはりそこはかとなく地球を思い出せてくれるのだ。

多分、一流の工房である『ソニア』製だと勘違いさせて買わせる戦略であったらしい。
ただ、その『ソミア』製ですら、性能は既存の魔導通信機よりも圧倒的に上であったが。

とにかく、この世界では大変に高価で貴重な物である。
また倉庫が見付かるかもと、同じく多くの冒険者達が魔の森に殺到していた。

ただ活気が出るのは素晴らしい事なのだが、同時に治安の悪化も懸念されるわけで、その対応のために警備隊の増設も急遽行われている。

そこで、新規の兵士と幹部候補達が加わっていた。

『お久しぶりですね。バウマイスター伯爵様』

まず一人目は、あの導師の三男であるコルネリウス・クリストフ・フォン・アームストロング。
彼は今年で十九歳になる、元は軍に勤めていた人であった。

王都時代に何度か顔は合わせていたのだが、まさか彼がここに来るとは思わなかった。

なぜなら、王国軍においてアームストロング家は重鎮中の重鎮であり、その血縁者も多かったからだ。
当然コネもあって、導師の三男くらいなら余裕で入れるし、何よりアームストロング家直系の男子は軍人として優秀な資質を持つ者が多い。
コルネリウスもその中の一人で、将来は軍幹部としてその将来を嘱望されていたからだ。

『俺って、全然親父に似ていないでしょう。だから、別に王国軍でなくてもいいかなと』

導師の跡継ぎで同じく軍にいる長男は、アームストロング家男子代々の伝統を受け継ぎ、導師や伯父であるアームストロング伯爵に良く似ている。
だが、次男以下の男子全員は奥さん達の方に良く似ているようで、コルネリウスも身長百八十センチほどの爽やかな好青年であった。

暑苦しい導師とは、逆のベクトルに位置する人物なのだ。

『あと、俺の従兄弟で伯父さんの三男のフェリクスも預かってきたので。口の悪い奴は、軍閥の余り息子達の大処分とか言ってますね』

こちらは、正しくアームストロング家男子の伝統を受け継ぐ、筋肉巨漢そのものといった若者だった。
他にも、ヴィルマの兄でアスガハン準男爵家の三男も一緒なのだそうだ。

『あそこは、ヴィルマさんをエドガー軍務卿に養女として取られて

しまいましたからね。真っ先にコネでエドガー軍務卿が押し込んで来ました』

確かにコネではあったが、全員軍家系の子供なので当然良く鍛えられている。

兵士にも元冒険者などが多く、荒くれ揃いの冒険者相手の警備隊業務には最適な人材とも言えた。

『ところで、親父は？』

『アルバイトを少々』

『また弟か妹も生まれますからねぇ……』

導師の上の息子達は、父親が大変にフリーダムなのでその反動か常識的な人が多かった。

多分、奥さん達の教育方針なのであろう。

反面教師にしているという可能性もあったが。

『そういえば、ヘンリック兄さんはちゃんと商売しているみたいですね』

『小型とはいえ、魔導飛行船を所有していますからね』

ヘンリックとは導師の次男で、貴族の子としては珍しい事に商人として現在未開地中を飛び回っていた。

ブライヒブルクなどから大量に物資を買い付け、未開地の工事現場や魔の森近くの町に運んで利鞘を稼いでいたのだ。

『魔導飛行船の代金、親父から借りてますからね』

元から王都周辺で小商いをしながら経験を積んでいたそうだが、未開地の開発ラッシュをチャンスだと思い、父親である導師から小型魔導飛行船の代金を借りたそうだ。

『利子はないですけどね。踏み倒すと、間違いなく殴り殺されますから』

『確かに、そんなイメージが……』

あの導師からの借金を踏み倒す、さすがの子供達でもそれは出来ないと感じているらしい。

返済時期が決まっているわけでもないし、儲かっているのでその心配は無いのだと、コルネリウスは説明をしていた。

『とにかく、冒険者の騒動は避けるように』

『あの手の連中は、舐められないようにちゃんと締める必要がありますからね』

似てないとはいえ、やはりその辺は導師やアームストロング伯爵の血を引いているようだ。

確かに、警備隊が舐められて冒険者が好き勝手をするのも困るので、コルネリウスの意見は間違ってはいないのだが。

『では、早速現地に向かいます』

以上のようなやり取りの後に、コルネリウスは警備隊を率いて現地へと向かう。

一部の不埒者を除けば、休養を取る町くらいは静かな方が良いし、

そうなればまた質の良い冒険者が集まって魔の森での狩猟と採集も進む。

そうなれば、冒険者とギルドから税金も集まるわけで、その税金でますます開発が進むという仕組みだ。

あと、俺がローデリヒから指名された土木工事を行って、開発期間と費用の節約も相変わらず行っている。

週の半分で土木工事を行い、もう半分で魔の森での狩りを。

残り一日は休養というサイクルを繰り返す事が決定していた。

勿論俺が決めたのではなく、ローデリヒや新しい家臣達が決定したのであったが。

俺が基礎工事を行うとバウマイスター伯爵家の現金の減りが減少し、冒険者として金を稼ぐと開発資金が増えるわけだ。

何というか、資金繰りには困っていないのに自転車操業をしているようにも感じてしまう。

そしてもう一人、土木工事魔法仲間が増えている。

勿論、あの御家再興を願うカタリーナその人であった。

「ここに深い穴をですか？」

「ほら、あの魔蔵庫の移動を行うから」

結局、導師が見付けた地下遺跡は物資の保管庫で、保管する物資が経年劣化をしないように魔蔵庫まで設置されている優れ物であった。

とりあえずは、中身の物資だけ魔法の袋に入れて来たのだが、あまりの量でカウントをしているローデリヒ達は音をあげている状態であり。

とりあえずは倉庫に仕舞おうとしたのだが、その倉庫自体が既に一杯になってしまっている。

そこで、魔の森からここに移転させる事にしたのだ。

魔蔵庫を完備しているので、バウルブルクの食糧や物資なども経年劣化を気にしないで仕舞えるのはありがたい。

コストの関係で、一から魔蔵庫の設置はしたくないが、元から使える物ならば何の問題もないわけで。

ただ、ブランタークさんがブライヒレーダー辺境伯に、導師が王国にも欲しいという事なので、屋敷近くの地下に設置されるのは残りの六つとなっていた。

なお、移築をするのはあのレンブラント男爵である。

彼は忙しいので移築は数日後の予定であったが、その前に移築し易いように大きな穴を掘る事にしたのだ。

俺だけでやっても良かったのだが、そこに偶然ではあるが優秀な魔法使いと知り合う事ができた。

ならば、任せるのは自然の流れであろう。

「私も、御家再興の際には屋敷近くの地下にでも埋めましょうか」

「分け前は、現金で貰うのも地下倉庫の現物でも構わないけどね」

今の時点では、貰っても持て余すだけであろう。

何しろ、カタリーナの御家再興の悲願は叶っていないのだから。

「穴掘りはともかくとして、他の土木工事まで私に振らないでくださいまし！」

「えーーーっ！　俺一人だと面倒だもの」

カタリーナは、今までは土木魔法の経験は無かったそうだが。
試しに教えてみると、一番得意な風系統の魔法の次に器用にこなすようになっていた。

せっかく他の優秀な魔法使いに会ったので、互いに魔法のネタを交換したり、一緒に鍛錬をしてみたりしていて。
あとは、俺が土木工事に出かける日にはエル達と一緒に魔の森に出かけるようになっていた。

どうせ一緒に居る時間が多いのだからと、つい先日建設途中のバウマイスター伯爵邸の中庭予定地に移築した師匠の屋敷に居候をするようになっていたのだ。

『この屋敷、女ばかり増えていくな』

『エルヴィンさん、何か文句でも？』

『いいえ……』

カタリーナは俺の屋敷に住み始めた表面上の理由を、まだ正式に終わっていない地下遺跡探索で得た物資の分け前を誤魔化されないためだと、その大き過ぎる胸を張りながら答えていた。

『はいはい、そういう事にしておくわね』

会って一番最初に激突したイーナであったが、彼女はもうカタリーナの口調に慣れてしまったようだ。

それに、普段の口調はアレでも、実は意外と常識的なのにも気がついている。

何しろ、屋敷に居候をするのに律儀に宿泊費を払っているのだから。

『毎日お風呂に入れるからとか、ヴェンデリンさんと魔法の訓練が出来るからとかは、物凄く小さな理由ですから！』

『はいはい、そうだね。カタリーナ、その野菜剥いて』

『なぜ、高貴な生まれの私が料理などを……』

『エリーゼは、料理上手だよ』

『ですわね……』

カタリーナは、実は料理が上手であった。

見栄えを良くするために装備などには金をかけているが、他ではしまり屋で、自炊をしてお弁当などを作っていたらしい。

彼女の貴族観では、貴族の令嬢は料理などしないと思っていたらしく、他人の前で料理をするのが嫌だったようだ。

『ヒラヒラ、白鳥みたい』

なるほど、ヴィルマの表現は的確である。

白鳥は優雅に水面に浮いているように見えるが、水面下では足を懸命に動かしていて、それがカタリーナに良く似ていると言っていたのだから。

『貴族の女性は普段はあまり料理などはしませんが、たまに家臣や領民の方々に振舞う事もありますから』

少領の在地貴族家などでは、収穫の時期などに奥さんや娘がそういう振る舞いをする事もあるそうだ。

うちの実家は単純に人手が足りないので、母もアマーリエ義姉さんも普通に料理はしていたのだが。

『将来のためですわね』

『ヒラヒラ、包丁の使い方が上手い』

『ヴィルマさん。私のあだ名、どうにかなりませんの？』

何だかんだで、女性陣は上手く行っているようだ。

現在、未だにバウルブルクの屋敷は建設中であったが、既に師匠の屋敷はその中庭に移り、俺達はそこで生活を送っていた。

俺は、魔の森の探索と、開墾・土木工事を交互に。

エルは、週に何回かは警備隊に混じって軍の事などを習い始め。

イーナとルイーゼは、それぞれに槍術と魔闘流の道場開設の準備を行っている。

ただ、町の建設において道場は優先順位が低かった。

別に無くても、その気になればその辺の草原でも教えられるから

だ。

二人は道場主としての登録だけを行い、後はブライヒブルクから呼び寄せた道場主代理と、数名の師範に全てを任せているようだ。

『あなた達は、当分は名義貸しだけです』

ブライヒレーダー辺境伯からも、こう釘を刺されていた。

とにかく俺の傍から離れるな、子供が生まれなければその道場は潰れるぞと。

そんなわけで、道場主代理と数名の師範達は警備隊の仕事も兼任して行い、開いた時間に希望者に少しずつ槍術と魔闘流を教えている。

扱いからいえば、軍務を行いつつ武芸を教えるバウマイスター伯爵家の家臣になったわけだ。

そしてその道場主代理とは、二人の上のお兄さん達であった。

『助かった！　これで槍術で飯が食える』

『助かった！　これで魔闘流で飯が食える』

大物貴族であるブライヒレーダー辺境伯家でも、それぞれに道場は一つしかない。

元から女であるイーナやルイーゼは跡継ぎ候補からも除外されていたが、同じく下のお兄さん達なども邪魔者扱いであった。

外部の人間も居るのでそんなに師範など増やせないし、そうそう外部に娘しかいない同流の道場主などいるはずもなく、俺達と同じ

く冒険者予備校を出て狩りをしつつ、アルバイトの臨時師範としてたまに道場で教えていたようだ。

この部分は、昔の俺と大分被っているような気がする。

『ヴェル、ごめんなさい』

『まあ、良いんじゃないの？』

真面目なイーナは、お兄さんをコネで押し込んだことに罪悪感を抱いているらしい。

『イーナが生んだ子供を、俺の後継者とかに押し込もうと画策しなければ』

『それはないと思うわ。ブライヒレーダー辺境伯様が激怒するから』

俺からすれば別に誰が家を継いでも構わないと思うのだが、貴族とは面倒な生き物である。

陛下から、エリーゼが生んだ最初の男の子を跡継ぎにと言われていた。

そこに、もし他の奥さんの子供を跡継ぎにしようと画策などすれば、排除されるのでやめた方がいいとイーナに忠告しておく。

『兄は職が得られたから、喜んで新弟子に稽古をつけているし』

槍は剣に次ぐ戦場の華で、平民出身の兵からすれば剣に勝るメインウェポンでもある。

よって、意外と多くの兵士達が空いた時間に稽古を受けていた。

ここには戦争はないが、少しバウルブルクから離れると凶暴な野生動物がいるからだ。

もう一方のルイーゼは、兄に魔闘流の指導を完全に任せてしまっているらしい。

『ボク、人に教えるのは下手だもの』

導師からも天才扱いされたルイーゼであったが、彼女には天才故の欠点があった。

人に教えるのが、物凄く下手なのだ。

『そこでね。魔力を適当に腕に込めて拳をバーーーンと！』

前世の某〇人軍永久名誉監督も真っ青な指導を、導師に対しても平気で行うのだから。

『ふむ、なるほど！』

ただ、導師も同種類の人間だったので、彼からするとルイーゼの指導はわかり易かったらしい。

飛躍的に格闘戦能力を上げていたので、嘘ではないのであろう。

「しかし、さすがはアームストロング様と次期王宮筆頭魔導師の座を争っていたアルフレッド様の元お屋敷」

そして、いつの間にかうちの屋敷で寝泊りするようになっていた暴風魔法使いのカタリーナであったが、彼女は師匠の事を知っていたようで、その元屋敷を見て感嘆の声をあげていた。

「師匠を知っているのか？」

「ヴェンデリンさんは、相変わらず他の魔法使いの知識が欠けておりますのね。アームストロング様と共に、唯二無双と言われた存在なのですが……」

王宮筆頭魔導師の座を巡って争っていたというのが、当時の世間の噂であったそうだ。

師匠に言わせると、王宮勤めまでいくと堅苦し過ぎて嫌であったそうだが。

「生まれていなかったのに、良く知っているな」

「冒険者予備校では、過去の偉大な魔法使いから学んで魔法の種類を増やすという講義があるではないですか」

「何となく聞いた事があるような……」

まともな講師など来ない、冒険者予備校独自の半ば丸投げとも言える講義であったはずだ。

俺はすぐに王都在住となり、ブライヒブルクにある冒険者予備校は名前だけ在籍している状態でその講義は受けていなかったし、魔法もブランタークさんや導師から指導を受けていたので、冒険者予備校ではほとんど講義を受けていなかったのだ。

「羨ましい環境ですわね」

「今は、カタリーナも修練を受けているじゃない」

現在彼女は、ブランタークさんと導師からたまに指導を受けてい

た。

ブランタークさんに言わせると、『坊主にはちと劣るが、数十年に一度出るか出ないかの天才だぞ』と絶賛しているほどであった。

ブライヒレーダー辺境伯の家臣である彼からすれば、カタリーナは要確保の人材なのであろう。

かなり親身になって魔法を教えているようだ。

「しかも、普段からその格好は凄いな」

「ヴェンデリンさん、貴族とは常に周囲から注目されるものなのです」

「かもしれないけど……」

カタリーナは、ほぼ不可能と言われている状態から御家再興を目指しているせいもあって、自己主張とプライドが高い女である。

魔法の鍛錬も怠っていないし、あのドレス風の装備やマントも貴族の出である事を周囲に宣伝するための物であったので、屋敷の中でも常に同じ格好であった。

あのドレス風の装備は予備が何枚か存在するらしく、使う素材を増やして費用を増しても、ドレス風のエレガントな装備に拘っている。

これを滑稽という人もいるが、実は王都では面白いと思っている貴族もいるらしい。

魔法の実力があるので、日本の安土・桃山時代風に言うと『傾いている』と思われているからだ。

知名度のアップには役に立っているわけだ。

その癖、普段の生活は意外と質素である。
必要な装備には金を惜しまなかったが、普段の生活では金をかけないで目的のために金をコツコツと貯めているらしい。
結局、食事の手伝いの様子から普段から料理をしている事がバレてしまい、エリーゼが纏めて弁当を作るからと言うまでは、あの派手な格好で屋敷の台所で弁当を作っていたのだから。

『鬼の霍乱か？』

なお、その際にエルは余計な事をほざいて、風魔法で庭まで吹っ飛ばされていた。
この点だけを見ても、エルとカタリーナを夫婦にするのは難しいようだ。

「ヴェンデリンさんと共に居るのは、私の実家を改易した、憎っくきルックナー侯爵家への圧力ですわ」

王都滞在時から、俺はルックナー侯爵家と懇意だと貴族達に思われている。
だが、弟の不祥事でその関係が薄れる可能性があると噂され、ルックナー財務卿は『頭がハゲそう』だと周囲に漏らしているそうだ。
加えて、過去に自分の父親が無実の罪で改易した家の孫娘が俺の家に居候しているのだ。
彼からすれば、ストレスの元が増えたとしか言いようがなかった。

「えげつな！」

「大貴族の方が、よっぽどえげつないですわよ」

大貴族がその気になれば、カタリーナの実家のような小貴族家など簡単に潰せてしまう。
そう思うと、彼女は被害者なのであろう。
家を復興するために、一人で舐められないように懸命に努力した結果、強気な言動が前に出ているようだ。

「あの魔道具の山の評価と分け前もあるか」

大量に獲得した魔道具であるが、未だに評価と分け前の比率が決まっていない。
あれだけの成果なので、カタリーナに爵位でもあげれば良いと思ってしまうのだが、王国はまだそこまで柔軟な対応は出来ないようだ。

「御家再興には、まだまだ長い道のりが残っておりますわ」

「大変だなぁ」

それは大変であったが、とりあえず今はカタリーナは家での生活に馴染んでいるようであった。

第六十話　新たな火種。

俺の名前は、ヘルマン・フォン・ベンノ・バウマイスター。
とある僻地の領地を継いだ新米貴族である。

ただ、その領地は僻地とはいえ、隣接している未開地の開発が大々的に始まっている。
もう少しで、その元未開地であるバウマイスター伯爵領とも道が繋がる予定であり、そうすれば外部との接触も増えて、以前は完全に孤立していた我が領も活気付くというものだ。

だが、それまでの道は決して平坦ではなかった。

俺は元々次男であった。
貴族家に生まれた次男など、長男の予備と相場が決まっている。
実家に部屋住みして居候扱いで、結婚も長男よりも遅くなる。
もしくは、出来ない奴も沢山いる。

最低でも跡継ぎ長男に子供が出来ないと、与えられた屋敷の部屋で人生が止まってしまうのだ。

子供の頃はわからなかった。
跡継ぎであった長男のクルトは、凡庸ではあったが決して悪人ではなかったからだ。

だが大きくなっていくと、次第に領地や家の状態が解ってくる。
クルトは跡継ぎなので大切にされ、俺はかなり扱いが適当だ。

妾がいる事もあって弟や妹が次第に増えていくのだが、彼らの方がまだマシなのかもしれない。

本妻である母から生まれた弟達は、どうせ家を継げないので外に出る準備をしているし、妾であるレイラさんから生まれた弟や妹達は、元から貴族扱いされていない。

赤い血として、名主になったり、その兄を補佐したり、妹達は豪農にでも嫁げば良いのだから。

俺は、クルトの予備として部屋住まいだ。

一応個室は与えられているが、これは俺には檻の無い牢屋にしか見えなかった。

別に、親父やお袋が嫌いなわけではない。

貴族の決まり事が、俺は大嫌いなだけであった。

その鬱憤を、俺は剣の稽古などで晴らすようになる。

あとは、同じ農家の次男・三男などで結成された警備隊の訓練などでだ。

この警備隊は、普段は治安維持のために。

有事には、当然諸侯軍の中核となる。

とは言っても、ここは他の土地から隔絶している田舎の僻地なので犯罪者など滅多に出ない。

諸侯軍も、俺は行かなかったが以前に大損害を出した魔の森への遠征でもなければ、まず出番などないはずだ。

それに、警備隊の治安維持活動と言っても。

たまに酒を飲んだ時に領民同士が喧嘩になったので止めたり、激

しい夫婦喧嘩を仲裁したり。
この領では、その程度の事でも警備隊が出動するのだ。
何名かで駆け付けて、当事者同士を割って話を聞いてあげればそれで終わる仕事なのだが。

あとは、たまに畑に迷い混んだ猪や熊の討伐であろうか。
猟師と協力して倒すのだが、警備隊が駆け付ける前に猟師が倒したり、追い払ってしまっている事が多く。

警備隊の仕事など、大した量でもない。
あとは、たまに隊員を集めて訓練をするくらいだ。

とはいえ、隊員達には普段仕事がある。
一応規定の訓練量は決まっているのだが、それが守られた事など一度もない。
規定通りに訓練を行って畑が放置されていたら意味が無いわけで、あと領主である親父は税収を増やすためだと言って大規模な開墾を行っていた。

訓練よりも開墾が大切なので、俺もそちらをメインに手伝っていたほどだ。

『ヘルマン、今日の担当はあそこだ』

親父に指定された場所の土を掘り起こし、邪魔な樹を切り倒して、切り株を何人かで地面から引っこ抜く。
大きな石や木片を取り除くのも、かなりの手間であった。

だが、今日担当している畑は隊員で良くやってくれているヘルゲが貰える事になっている。

彼は三男で、実家の畑を継げない。
なので、この開墾を失敗させるわけにはいかないのだ。

『すいません、ヘルマン様』

『それは言いっこ無しだ。お前がこの領に残ってくれないと、今でもショボイ警備隊がもっとショボくなる』

『ヘルマン様、それは禁句でさぁ』

俺達は、他の開墾を手伝っている警備隊員達と大笑いをしていた。
みんな次男以下で似たような境遇の者ばかり、ただ嘆くよりは自虐的でも笑ってしまった方が精神的に楽だからだ。

『お前は、大金を税として納めているんだ。遠慮するな』

今年で二十歳になるヘルゲは、こう見えてあの魔の森遠征の生き残りである。
当時は成人したばかりの十五歳ではあったが、三男なので死んでも問題ないと思われて実家から推薦されたのだ。

いや、厄介払いと言った方が正解であろう。

この手の問題に、貴族と農民の差などない。
正直なところ、当時十八歳であった俺が良く出兵させられなかったなと思っているほどなのだから。

その代わりに、大叔父である従士長やその三人の息子達は全滅していて、現在では分家との間に隙間風が吹いている状態であったが。

分家に仕える従士達や、男手が足らないので開墾を手伝っている女達の目を見れば一目瞭然だ。

親父の指示には従っているが、たまに刺すような視線で親父やクルトを見ているのだから。

俺もその対象になっているのだが、これについては仕方が無いのかもしれない。

大叔父達の犠牲の元に、俺は今でも生きているのだから。

『あの金を持って、外に出るという選択肢もあったんだ。それを奪われた以上は、ヘルゲはちゃんと畑を持たないとな』

ヘルゲは特に剣の腕が優れているわけでもないし、体も小さくて細い方だ。

だが、弓は上手い方で、それ以上に体が丈夫で持久力があり、そしてそれ以上に精神が強かった。

年齢のせいで下っ端扱いであった彼は、遠征軍では伝令役を務めていた。

表面上は対等の立場であるはずの、バウマイスター家諸侯軍とブライヒレーダー家諸侯軍であったが、当然そんなわけがない。

ブライヒレーダー先代の辺境伯は、大叔父達を自分の家臣の家臣。陪臣扱いして、そのせいで両者の間に次第に大きな溝が広がっていく。

大叔父は、バウマイスター家諸侯軍をブライヒレーダー家辺境伯軍から少し離した。

扱いの問題もあったのであろうが、もしかすると自分達の末路を

ある程度予想していたのかもしれない。

あの小勢で二十名以上が生き残ったのだから、間違いなく破綻に備えていたのであろう。

ただ、犠牲を少なくして逃げるという選択肢はあり得なかった。

ブライヒレーダー家諸侯軍が壊滅したのに、バウマイスター家諸侯軍にはあまり犠牲は出なかったでは、後々問題になってしまう可能性があったからだ。

特に、うちが塩などの物資の供給ルートをブライヒレーダー辺境伯家に握られている以上は、自分達だけで逃げるわけにもいかない。

ただ、若い者はなるべく逃がしてやりたい。

二十三名の生存者の全員が、十五歳から二十代前半の若者という事もあり。

大叔父は、自分が出来る範囲で最良の結果を残したのだ。

己と息子達の命をかけて。

だが、親父の評価は辛辣であった。

『貴重な領民をむざむざと失って』と。

ただ、親父には領主としての立場がある。

戦力の八割を失った大叔父を、表面的には叱責しなければいけないわけだ。

『確かに、親父の言う通りだな』

親父に続いて、兄のクルトも大叔父の批判をする。

クルトは凡庸な男ではあったが、親父の言う事は良く聞いている

ので当然こういう発言になる。

だが、その一言で俺はクルトの軍事的才能の無さに気が付いていた。

同時に俺は、親父が一瞬だけ残念そうな表情をしていたのを見逃さなかった。

親父は、きっとクルトに大叔父を褒めて貰いたかったのであろう。

自分は領主なので、戦力を大半を失った大叔父を褒められない。

だが、跡取り息子が出来る限りの若者を戻した大叔父を褒めてくれれば、多少は分家の人間の怒りを緩和する事が出来る。

俺は聡明ではなかったが、そのくらいは理解している。

なのに、クルトはそれに気が付かなかった。

親父は、内心でガッカリしたのであろう。

俺は、そういう事は事前に打ち合わせをしておけとしか思えなかった。

『それよりも、戻って来た者達を労ってやらないと』

出しゃばりとは思ったが、俺は戻って来た者達に対して親父が直接声をかけるべきだと進言していた。

何しろ、クルトにはそういう配慮は期待できないのだから。

遠征軍のせいで人手が足りず、まだ数名の領民を率いて領内を定期的に見回っているだけの俺であったが、率いている連中がミスをすればちゃんと正しく叱責する必要があるし、功績を挙げれば褒めなければいけない事くらいは知っている。

彼らは、軍勢の八割が壊滅するほどの地獄から生き残って来たのだ。

親父がその労を労い、気持ちでも恩賞や休暇などを与える必要があった。

『確かに、それは必要だな』

親父は、俺の意見に賛同していた。

そして実際にそれは行われたのだが、もしかするとその頃から俺を大叔父の分家に入れる構想練っていたのかもしれない。

『休暇など必要ない。むしろ、あの地獄を忘れさせるために開墾などで働かせた方が良い』

クルトはこんな感じであったが、彼の立場を考えるとその意見も間違っているわけではない。

生き残った若者達の全員が次男以下で、実家を継げる立場には無い。

死んでも困らない者達が運良く戻って来たので、その労働力をすぐに生かすべきだと考えたのであろう。

領地の発展のためには必要な決断なのであろうが、その発想は自分が長男であるという立場から出ている。

理解はするが、俺は心情的には気に入らなかった。

そして戻って来た若者達であったが、大半が精神的に参っていた。

大叔父の留守中に、数名の警ら隊程度の活動ではあったが勉強は必要だと思って父の書斎で本を読んだのだが、その中に戦争精神症の記述があった。

戦場であまりに酷い目に遭うと、精神が病んで軍人としては使い物にならなくなるという物だ。

彼らの話によると、魔物は大軍で夜襲をかけてきたらしい。
おかげで、夜の暗闇やそこで発生する音に異常なまでに怯えるようになってしまっていた。

大叔父一家の男手が全滅したので、暫くは俺が少数の警備隊を率いて警邏の真似事でもしなければいけない。
実戦経験のある彼らを期待したのだが、そういう情況ならば彼らを誘うわけにはいかないであろう。

『俺は、大丈夫ですよ』

ただ、運良く数名の精神も頑丈な若者達が警備隊に参加してくれる事になった。
その中でも格段に頑丈であったのが、先に紹介したヘルゲであった。
大叔父は、ブライヒレーダー諸侯軍への伝令役にヘルゲを指名した。

両軍の険悪な空気を少しでも払拭するために、一番若造を送ったというわけだ。

そして、その試みは少し成功している。
相変わらずブライヒレーダー家諸侯軍の幹部連中などは高圧的ではあったが、ヘルゲの親と同年代の兵士達が定期的に伝令で来るヘルゲを可愛がってくれたのだそうだ。

『お前も災難だな。お上同士の意地の張り合いに巻き込まれてよ』

『伝令をしていると、馬の訓練になるから俺は気にしないよ』

『お前は、良い性格しているな。狩った魔物の肉を焼いたから、食べてから戻れよ』

『ありがとう』

『若い者は、遠慮しないで一杯食え』

こんな感じで、下っ端の兵士達に可愛がられたそうだ。

そして、あの運命の日。

ヘルゲが伝令としてブライヒレーダー諸侯軍の陣地へと赴くと、彼らはヘルゲにある物を渡したそうだ。

『俺達は、多分生きて戻れない。坊主は、意地でも生き残れ。これをやるから』

何かは良くはわからないが、魔物の牙を数本貰ったのだそうだ。

そして、伝令役なので上手く馬を操って魔の森の外に逃げる事に成功していた。

他の生き残り達と共に、どうにかバウマイスター領へと辿り着いたわけなのだが、それから彼に胸糞の悪い事態が襲う。

せっかく生き残ったヘルゲを含む彼らに対し、親父は税金を徴収したのだ。

魔の森に入った際に狩りを行い、それにブライヒレーダー辺境伯が報酬を出していたので、彼らは小銭持ちにはなっていたからだ。

『親父、さすがにそれは拙いだろう』

『お前の言う通りかもしれないが、それでも法は法だ』

ただ、恩賞もあるので実質は差し引きゼロではあった。

『それに、彼らはほとんどその金を手元には置けまい……』

確かに親父の言う通りだ。

親父もそれがわかっていたからこそ、決まり通りに税をかけたのかもしれない。

生き残り組は、全員が次男以下。

実家での扱いはご察しの通りで、命をかけて稼いだ金の大半を奪われてしまう。

特にヘルゲは、貰った魔物の牙が高価な薬の材料になるとかで、直後に来た商隊の連中が金板二枚二十万セントで買い取って行った。

なのに、ヘルゲが親から貰えた金額は僅か千セント。

彼が命をかけて稼いだ金を、実家は徹底的に搾取したのだ。

『（本当に、胸糞が悪くなる話だ）』

とはいえ、これが地方の農村の現実だ。

家の存続こそが大事なので、次男以下などジュースを搾る山ブドウくらいにしか思っていないのだから。

最近、商隊に付いてバウマイスター領を出る若者がチラホラと増えているが、その気持ちは俺でも納得できる。

親父も、それが良くない事だとは思っている。
だが、あまりに急進的な方法は領内の統治を不安定にする。
こんな孤立した領地で内乱などあれば、バウマイスター領は致命的な損害を受けるわけで、開墾の奨励は次男以下の独り立ちをなるべく推進しようとしているのであろう。

その親父の配慮に、長男であるクルトが気が付いているとは思えなかったが。
彼からすれば、耕地が増えれば税収が増える程度の認識なのであろう。

『ヘルマン、お前は分家に婿に入るのだ』

親父からその話を聞いた時、俺は『今よりはマシかな?』程度の認識しかなかった。
大規模開墾がひと段落し、ようやくクルトの嫁が決まった頃。
俺は、分家に婿入りして従士長の職を継ぐのだと言われたのだ。

遠征の失敗で、バウマイスター諸侯軍の兵力はいまだに回復していない。
有事の際に男子全員で戦うのは義務であったが、ある程度訓練を続けている兼業兵士も必要だ。
ところが、それが可能なのは俺が書斎の本などを見ながら苦労して見様見真似で訓練した次男以下の二十名ばかり。

数少ない収穫は、ヘルゲが経験を積んで俺の片腕になってくれたくらいだ。
開墾されたばかりの畑の農作業と合わせて苦労させてるのが心苦しいのだが、今の俺には彼を遇する方法が無い。

同年代の職人達や豪農の跡取りなどを取り巻きにして、安定した地位を築いているクルトには必要の無い苦労なのであろう。

しかも、クルトは俺の軍事的な才能に嫉妬しているのだそうだ。
その話を聞いた時に、俺はあまりにバカバカしくて笑ってしまったほどだ。

確かに、俺はこの領内では一番の剣の使い手であったし、弓も猟師組に負けるとは思っていない。
ある程度の警備隊や自警団くらいなら、親父やクルトよりも上手く指揮する事は出来るであろう。

だが、それが何だと言うのだ。
こんな田舎の孤立した領地で一番だからと言って、外に出れば俺よりも才能がある奴など星の数ほど存在するはず。

クルトの嫉妬など、俺からすれば言いがかり以外の何物でもなかった。
その後、俺への嫉妬は分家への婿入りと同時に消える事となった。
競争相手が分家当主になったので、安心したのであろう。

本当に、お気楽な次期当主様である。

俺なんて、分家では針の筵だというのに。
分家への婿入りは、大叔父の直系の孫娘であるマルレーネが成人するまで待っていたので遅れてしまったという事情があった。
実際に婿入りすると、嫁のマルレーネの態度にも困惑した。
分家の人間からすれば、大叔父達は本家が分家を乗っ取るための策で殺されたような物だという認識らしい。

親父が何を考えたのかは知らなかったが、せめて俺だけでも出兵させれば良かったのだ。

マルレーネは見た目は可愛らしかったし、結婚できたので文句は無いと言いたかったのだが。

初夜で、『子供を作るためだから仕方なく』という態度を取られるとさすがに困ってしまう。

食事の時などでも、俺は明らかに招かざる客という扱い。

さすがに精神的にまいってしまいそうになるが、それを救ったのは意外な人物であった。

俺には兄弟が多い。

本妻である母が産んだ子供だけでも、三男のパウル、四男のヘルムート、五男のエーリッヒ。

そして、一番年下の八男であるヴェンデリンだ。

彼らは、どうせ家は継げないのだと王都に出るべくその準備に日々奔走していた。

万が一に備え、予備としての十代を過ごした俺からすれば羨ましい限りであった。

『その代わりに、自己責任だぜ』

パウルなどはそう言うのだが、それでも外に出られるのは羨ましかった。

貴族になど未練はないし、どうせ分家の当主になった時点でもう貴族ではない。

出来ればパウル達のように外の世界に出て、冒険者などをやって

みたいと夢見る事が今でもあるのだ。

『僕は出て行かざるを得ないのですよ。正直なところ、この故郷に未練は有りませんけど』

跡を継げるのに、クルトは新しい嫉妬の対象を見付けていた。

五男のエーリッヒであった。

こいつは、バウマイスター家に生まれて来たこと自体が間違っているとしか思えない男であった。

優れた容姿に、俺でも敵わない弓の腕前に、抜群に優れた頭脳と。

当然、領民達からの人気は高かった。

自然と、次期領主に相応しいと思われるようになる。

この領地が他の領主と交渉を行うとは思わないが、領主はその領地の顔なので容姿に優れていた方が良いからだ。

能力でもエーリッヒは、クルトなど何人いても敵わないであろう。

クルトが嫉妬するのも当然であったが、それはエーリッヒが将来領を出て行くと明言した事で消えてしまう。

そして最後に、更にとんでもない弟が現れる。

八男のヴェンデリンだ。

最初はこの子も、三歳頃から書斎で本などを読んでいて、エーリッヒに似たようなタイプだと思っていた。

ところが、次第に魔法の才能を見せる事になる。

こんな僻地の領地で魔法の才能を持つ子供が出るなんて、奇跡に

近い。
親父はすぐに対策を打った。
完全に放任してしまったのだ。
なるべく領地に貢献させないようにして、とは言っても食肉供給などでは圧倒的に貢献はしていたが。
俺も実家に居た頃は、良くホロホロ鳥の肉を食べさせて貰った物だ。

ヴェンデリンに行動の自由を与える。
彼は魔法の特訓なのであろう、朝から日が暮れるまで。
時には、どこかで外泊してまで魔法の鍛錬に集中するようになっていた。

当然、またクルトは嫉妬の炎を燃え上がらせるのだが。
俺からすれば、そんな暇があったら勉強でもしろと言いたくなる。

そして肝心のヴェンデリンであったが、こいつは良い性格をしていると思う。
クルトなど眼中に無く、自立のために好き勝手にやっているのだから。

『（ヴェンデリンを見ていたら、バカらしくなったな）』

親父やクルトの意向に従って婿入りをしたら、嫁にまで隔意を抱かれる。
そんな生活が嫌になったのだ。

確かに俺は本家の次男だが、もう元次男になった。
今は分家の当主で、家臣として親父やクルトのために働く必要は

あるが、他の事で従う必要など無いのだと。

そう決意した日から数日後、俺はとある会合に出席していた。

この会合は、初期移民者が集まっている本村落において彼らの意見を聞くという物であった。

支持基盤なので、気を使っているわけだ。

ただ、こんな事が常に行われていれば、当然他の村落の連中は面白くないわけで。

将来的には解決の必要があったが、今は俺は分家の当主としてその利益を代弁する立場にある。

『いい加減、労役の軽減を頼みたいのだが』

そうでなくても、分家は男が少ないのだ。

そのために、分家の女達は開墾作業の手伝いまでしていた。

分家にも従士は数名いるが、彼らは普段は農民として忙しい日々を送っている。

こちらを手伝わせるには限界があった。

『そのために、ヘルマンという男手を送ったのだがな』

『俺一人では限界があるだろう』

やはり、クルトは俺など子分の一人くらいにしか思っていないのであろう。

その子分を分家に送り込んだから、分家など利用できる道具くらいにしか思っていない。

なるほど、冷静に分析するとバウマイスター領の本村落優先の安

定統治など砂上の楼閣でしかないのだと。
親父や名主のクラウスは危機感を抱いているが、革新的な解決策などは見出せていないし、クルトはその危機にすら気が付いていない。

『（ある意味、羨ましいか……）労役のせいで、ハチミツ酒の製造量が減っている』

分家の生業に、伝統的な養蜂技術とそれを用いたハチミツ酒の製造がある。
ところが、極端な人手不足に労役の増加が拍車をかけて、その生産量は落ちていた。

『あと、いい加減にハチミツ酒の代金を払って欲しいのだが』

この領地では、酒は貴重品である。
麦の生産は増えていたが、それを酒にすると親父が渋い顔をするので精々で自家製のエールを少量作るくらい。

なので、分家が作るハチミツ酒を徴収して領民に配っていたのだが、その代金をツケにして支払いを滞らせていたのだから性質が悪い。

それは、俺の立場が針の筵になるわけだ。

『その内に払う』

『そうか。では、支払いが済むまではハチミツ酒の供給は停止する。ちょうど人手も足りない事だしな。あと、今まで貯めていたツケの清算も頼む』

『ヘルマン！』

なぜかクルトが激怒していた。

分家如きが本家に要求など、度し難い傲慢だと思っているのであろう。

あと、俺を何だと思っているんだ。

親父やクルトには、この領地を安定的に治める義務があるのであろうが、そのために何をしても良いというわけではない。

いくら男手が居ないからといって、分家に無茶ばかりさせれば、それは反本家にもなろうという物だ。

『（俺を生贄にでもしたつもりか！）』

段々と心の中で怒りが沸いてくる。

バウマイスター家の兄弟の中で、なぜ俺だけがこんな目に遭うのだと。

それは貴族にはなれないかもしれないが、俺はパウルやヘルムートやエーリッヒが羨ましかった。

外の世界で、こんなクソみたいな田舎領地の柵に捕らわれないで生きていけるのだから。

次に浮かんで来たのは、相続争いを防ぐために自由行動を許され。

だが、領民達には怠け者の八男だと言われているヴェンデリンの姿であった。

まだ幼いのに、ヴェンデリンは自分の思うままに行動している。

魔法の才能が有るからでもあるが、周囲からどう思われようと、

噂されようと本当に自由に生きているのだ。

毎朝早くに出かけ、夕方に戻って来るヴェンデリンの顔には憂いや迷いなど一切無いように思える。

俺は、彼とはあまり話した事が無い。

元々年齢が離れていたのと、今の俺が分家当主の立場なので、話をしただけでクルトが神経を尖らせるであろうからだ。

俺とヴェンデリンが組んで、クルトの地位を奪う。

妄想の類ではあるが、クルトの猜疑心が強ければ信じられてしまう可能性もあった。

『とにかく、先の条件を飲んで貰う』

俺もヴェンデリンほどではないにしても、己の道を歩むべきであろう。

もう親父やクルトは他所の家の人間であり、俺は分家の当主なのだと。

ならば、分家の利益を一番に考えないといけないのだ。

『開墾はひと段落ついた。貯まっていたツケは支払う』

『親父！』

『こちらが、開墾事業の関係で迷惑をかけたのだ。払って当然であろう』

結局、親父はそういう理由で支払いをツケにしていたらしい。

今の分家の人間からすれば、もう親父すら信用に値しないのであろうが。

そしてクルトは、支払いなどしなくても良いと考えたらしい。

思うに、クルトは貴族とは沢山金があれば何とかなると思っているのであろう。

だが、それで分家を敵に回してどうしようと言うのであろうか？

『（今は、親父・クルトのコンビで何とか本村落の保守派を押さえて領地は治まっているが……）』

魔の森遠征に端を発した分家との確執に、本村落でも若い層による保守層の年寄りへの反発。

残り二つの村落などは、親父やクルトが領主なので仕方なしに従っているレベルであった。

成立から百年ほどで、この領はガタガタになっていたのだ。

『（何か針の一刺しで、この領は破裂するかもな）』

そしてそれは、親父とクルトがこの領の支配者から転落するという事だ。

『（俺の妄想かもしれないがな……）』

この会合以降、ようやく俺は分家の人間に認められたらしい。

妻が妻らしくなったので、これも怪我の功名であろう。

クルトの顔が渋くなったが、どうせあいつは俺には腕っ節では勝

てないのだから。

そして数年の年月が流れたが、後の流れはもう何度も説明された通りだ。

親父は引退し、このバウマイスター領の当主は俺になり、パウルも領地を分与され、最後にヴェンデリンが未開地の大半を分与されて伯爵になった。

クルトの事は、もう話さない方が良いであろう。

あいつは、外部との関係が開かれたバウマイスター領の未来に付いて行けずに自爆した。

そういう事だ。

「おいクラウス。さすがに、これは拙いぞ」

ある事件の後に、五代目のバウマイスター騎士爵領の当主になった俺は、本村落の名主であるクラウスを呼び出していた。

親父とクルトは、このクラウスという男の能力は認めていたが、その行動理念と心の内は疑っていた。

それには、彼の息子と娘の婚約者の死が関わっていたのだが、その真相は既に解明している。

さすがにもう、領主の交代を裏で画策などはしないであろう。

ヴェンデリンもその辺は疑っていないようで、彼は本村落の名主のままであった。

その彼が名主として願った領主の交代に、他の領地との交流も始まり、お隣であるパウルとヴェンデリンの領地は現在開発ラッシュの真っ最中であった。

我が領にも外部から商人などが訪れるようになり、耕作地も増え、特産品であるハチミツ酒の増産もヴェンデリンが紹介してくれた王都の商人の支援で始まっている。

新しい住民も増えて村落は五つになり、我が領も未開地の開墾や新規の移民の受け入れなどで忙しい。

全体的には良い事ずくめであったが、実は一つ困った問題が発生していた。

「ヴァルターとカールの行動は目に余る。何とかしろ」

クラウスは、親父も俺も兄弟達も認める優秀な男である。
だが、彼にも欠点はある。
それは子供の教育に、いや娘の子供なので孫の教育に失敗した事であろう。

親父がクルトに足を引っ張られたのを散々に見ているのに、今クラウスは孫に足を引っ張られて俺に呼び出されている。
子では無くて孫なので、どこか甘やかしてしまう部分があるらしい。

親父などから言わせれば、クラウスも人間であったのかと安心するかもしれないが、俺からすれば再び領内に発生した不安定要因でしかない。

早急に対応する必要があった。

「すいません、何度も叱責はしているのですが……」

そこには優秀な名主ではなく、ただ孫のために謝る優しいお祖父さんの姿しかなかった。

「若い者達を扇動しているとも聞く。ちゃんと抑えないと、クラウスならどうなるのかわかっているな？」

問題の発端は、あの事件の後のクラウスへの処遇からスタートしている。

親父は引退してパウルの領地に移住したが、クラウスは引退などさせるわけにもいかず、そのままバウマイスター騎士爵領本村落の名主兼財政担当として残った。

一部領内で、クラウスも政治的な扇動を行ったので引退させるべきだと言う声も上がったのだが、今のバウマイスター領は人材不足であった。

代わりがいない以上は、そのまま仕事を継続して貰うしかないのだ。

親父も、他の兄弟達も、もうクラウスは普通の名主の立場に戻って働くであろうと思っている。

俺もそう思ったので、彼をそのままにした。

実際に彼は、黙々と名主の仕事をする優秀な名主に戻っていた。

年齢も六十歳を超え、彼自身はもう何年かで引退する決意をしているようだ。

徐々に本村落の名主の仕事を、孫でレイラさんの長男であるヴァルターに任せるようになり、徴税の仕事なども他の村落の候補者を集めて教育を行っている。

完全に恨みや野心が抜けた老人になり、黙々と仕事に励んでいるのだ。

それを他の村落の連中は、半分は不気味に思い、半分は好意的に見ている。

新規に出来た村落の連中からすれば、昔のクラウスの事など知らないので、引退するために後進に丁寧に仕事を教える優しい爺さんでしかないのだ。

前からここに住んでいる他村落の連中は、『また何を考えているのか？』などと思っているらしい。

ただ、徴税業務の独占が解かれるので、表面上は素直に彼からそのノウハウを教わっている。

徴税業務の独占は、クラウスが娘のレイラさんを父の妾として差し出したから得られたと。

少なくとも、他村落の連中は思っている。

だから、クラウスが引退してしまえばその恩恵は無くなるのだと、俺はみんなに思わせたかったのだ。

クラウスもその意見に賛成していた。

なぜなら、もう本村落など名前だけになってしまったからだ。

もう既に、移民して来たばかりの領民達で作られた村落が二つもあり、そこの名主は彼らによって決められている。

俺が領主になってから、本村落限定であった領民達の意見を聞く会合は、全ての村落から代表者を出すようになった。
開発はまだまだこれからで、次第に村落の数が増え、彼らが選ぶ名主は完全に他所の出身者となる。

もう今の時点で、本村落の影響力はかなり落ちているのだ。

それに、もっと未開地の開発が進めば統治効率の関係で、バウマイスター家本屋敷の移転も行われる。
そうなれば、本村落は元本村落と呼ばれるようになるであろう。

これは時代の流れであったし、クラウスも不満など無いようだ。

『このままバウマイスター領の発展を見ながら、私は老いて死んでいくのでしょうな』

以前に、クラウスは独り言のようにボソっと漏らしていた。

ところが、別の方向から問題が発生する。
それは、クラウスの孫達で、俺にとっては異母兄弟になるヴァルターとカール達からであった。

『カールを、他の村落の名主にして欲しい』

俺が領主になってすぐに、ヴァルターとカールがやって来てこんな陳情を始めたのだ。
しかも性質が悪い事に、二人にはレイラさんも付き従っていて、彼女からもお願いをされてしまう。

『（親父、恨むぞ……）』

親父が引退してパウルの領地に引っ越す際に、レイラさんは付いて行かなかった。

元々一緒の家に住んだ事などないし、レイラさんからすれば親父の妾になったのも、子供を生んだのも義務であったから。

離縁などはしないが、本妻であるうちのオフクロと顔を合わせて隠棲生活など嫌だったのであろう。

そんなわけでうちに残ったのだが、まさかここで政治的な陳情に口を出すとは思わなかった。

『無理を言うな』

元からある二つの他村落は、今までの関係を考えると無理であった。

それに、彼らは今の変化を好ましく思い、新領主である俺を支持してくれている。

私情で異母弟のカールを名主として押し込んだら、間違いなく大反発をするであろう。

税を誤魔化したなどの罪状も無いので、今の名主達を解任する根拠すら無いのだから。

『何の咎も無いのに、解任される名主達の身にもなってみろ』

『移民達の村落があるでしょう』

それも無理だ。

新規移民組は、彼らだけで新しい名主を決めてしまっているから

だ。
領主である俺に逆らっているわけでもないし、いきなり解任してカールを送り込めば問題になるであろう。

『また新しい村落の建設が予定されている。そこの名主を任せる。ヴェンデリンがある程度はやってくれるが、細かい仕上げや、移民して来た者達への統率はお前がやれ。補佐にノルベルトと、うちからも人員を出す』

ノルベルトとは、異母妹であるアグネスの夫であった。

『あと、ライナーにはヴェンデリンが残した商店の経営を任せる』

ヴェンデリンが伯爵になってすぐに、あの開発特区は短い生涯を終えていた。
あの未開地との境目にあった屋敷は、バウルブルクという名前になった都市へと移築され、あとは全て俺に譲渡されたのだ。
その中に色々な物を販売している商店があり、これの経営もライナーという同じく異母妹であるコローナの夫に任せる事にした。

『（やっぱり来たな……）』

実は彼らの陳情は、俺も親父もヴェンデリンも十分に予想はしていた事であった。
彼らは俺の異母弟・妹達であり、ヴェンデリンの異母兄・姉達でもある。

正妻の兄弟が全員貴族になっているのに、母親が妾である赤い血の彼らはあまり恩恵を受けていない。
不満が出るのも当然というわけだ。

『（しかし、ここでレイラさんが出て来るか……）』

俺が思うに、領内の力関係のせいで人生を翻弄されてしまった人でもある。

若くに婚約者を亡くし、親父の妾になった。

お袋も面白くないであろうし、元々身分が違うという理由で自分も生まれた子供もクラウスの屋敷で暮らしている。

今までは滅多に表になど出て来ず、正直ヴァルター達と一緒に来て陳情をしたのが驚きであったほどだ。

我が子が可愛いのと、親父が領を出てしまったという理由もあるのであろう。

『（この人は、相変わらず美人だな）』

もう四十歳は超えているのに、まだ三十歳前後にしか見えない。

統治体制を強化するために親父は妾にしたのであろうが、役得でもあったはずだ。

『ありがとうございます』

レイラさんは、ヴァルター達と共に頭を下げて俺の元を辞した。

この時点での陳情とその内容は、想定の範囲内である。

名主にしたり、ある程度の利益供与は親父も必要ではあると認めている。

ヴェンデリンは、『どこかに、領地でも分けた方が良いのですか

？』などと言っていたが。
これはさすがに、俺も親父も止めていた。

ヴェンデリンは頭も悪くないのだが、どこか甘い部分が存在している。
悪いとは思うが、赤い血を引く異母兄姉を貴族などにしたら大問題になってしまう。

中央の貴族達が騒ぐであろうし、貴族になりたいバカ達が、親父の子供だから認知しろと大勢押し掛けてくるであろうからだ。
将来を見越して分家を増やしたかったら、自分の嫁達に産ませた子供に任せれば良いのだから。

「俺は十分に譲歩はしたよな？」

「はい……」

ヴァルターはこの本村落の名主になるし、カールも新しく開発される村落の名主になる。
当然援助は十分にするし、異母妹の婿達にも十分に配慮している。

それなのに、ヴァルターとカールはまだ不満があるらしい。
いや、こちらが譲歩して利益供与をしたら図に乗ってしまったのだ。

『俺は今は名主に過ぎぬが、将来は領地を分与される可能性が高いな！　俺は、貴族になるんだ！』

そう言って、領内の若者達を集めて与党を形成しているという噂が流れて来たのだ。

「クラウス、ちゃんと説明はしたのか？」

「それが、ヴェンデリン様は一代で伯爵様になったので、勘違いをしているのかと……」

ヴェンデリンは青い血の生まれであったが、もし魔法の才能が無ければ、没後にその子供達は間違いなく平民に落ちていたであろう。

そんな境遇の彼が、若干十五歳で伯爵になった。

ヴァルター達からすればヴェンデリンは成り上がった貴族に見えるので、半分は青い血の自分達も貴族になる可能性が高いと思っているらしい。

同腹の兄達全員が爵位や領地を貰えたので、異母兄である自分達も引き上げて貰えると思っているのだ。

「とにかく抑えろ！　お前は、孫まで殺したいのか？」

「はい、必ずや……」

たまに平民や商人出身者で、無人の未開地の開発に成功して貴族になる者がいる。

そういう人には先祖代々の家臣などいないので、同じ平民の知人や家族などで家臣団を形成するしかない。

陪臣は半貴族のような存在なので、自分達はもっと上に、貴族として領地を分け与えられると思っているのであろう。

「すぐに何とかしろ！　俺が庇っても無駄なのはわかるな？」

「それは、勿論……」

広大な未開地開発の利権が絡んでいるので、下手な言動は中央の陛下や大貴族達の逆鱗に触れる可能性があるからだ。

本来跡取りであったクルトですら、彼らの目に止まって排除の対象になってしまった。

ヴァルター達など、何の躊躇いもなく処分するであろう。

「ヴァルター達は、ヴェンデリンと半分血が繋がっている。だから、余計に拙い！」

第二のルックナー男爵のような存在が出かねないからだ。

ヴァルター達を扇動して裏で操る。

そんな策を考える貴族が皆無とは言えなかった。

「ヴェンデリンの新しい家臣達は、中央とのパイプが太い者が多い」

閣僚や大貴族の三男以下や、妾腹の子供が多いからだ。

そんな彼らを受け入れた新興伯爵家の足を引っ張る存在など、間違いなく蝿でも叩き潰すかのように処分してしまうであろうと。

「必ずや、私が抑えますので」

「クラウス、このままでは親父のことを言えないじゃないか」

「孫というのは、子供とは違うもので苦労します」

厳しく教育するという部分で、どうしても一歩引いてしまうらしい。

何かの本で見た、『お祖父さん子は、三セント安い』という格言を思い出していた。

「とにかく、頼むぞ」

クラウスに釘を刺してから一週間後、さすがに積極的に動いたようでその手の噂は聞かなくなっていた。

ヴァルター達は黙々と次期名主としての仕事や、次の開拓村へ移住する準備を行っているようだ。

「やれやれ、一安心」

最近では、バウマイスター領を訪れる人も増えていた。

あまり商人はいなかったが、代わりに冒険者が増えている。

北の山脈に住む、ワイバーンや飛竜を狩れないものかと調査に来たらしい。

「冒険者ギルドも支部の設置を検討しているようです。竜の素材は高いですからね」

上手くいけば、冒険者とギルドからの税金に、竜を解体する施設などでの領民達の雇用も期待できるそうだ。

素材を加工する工房なども、もしかすると招致可能かもしれない。

「なるほど、それは良い話だな」

その冒険者の代表を数名を連れて来たクラウスと、俺はこの領の明るい未来について話をしていた。

ところが、それからすぐに俺は絶望の淵へと一気に落とされてしまう。

突然、その冒険者が俺に剣を突き付けたからだ。

続けて、外部からも人同士の争う声や揉みあっている音などが聞こえてくる。

「おいっ！　クラウス！」

「あまり抵抗して欲しくないですね。重度の怪我人や、人死にはこの領の人口を減らしますし」

俺の質問に、クラウスはいつのように冷静な口調で答えていた。

しかも、彼は冒険者達に剣を突き付けられてはいなかった。

「クラウス、お前……」

「ヘルマン様、大人しくしていてください。これは反乱ではありませんからね。このバウマイスター領の未来を想う、心ある内外の有志達による強訴なのですから」

暫くすると、この部屋に冒険者達やヴァルターとカールに剣を突き付けられた妻、二人の子供、使用人、従士、家臣などが集められる。

「ヴァルターとカールもか。不思議はないがな」

元々、自分達も貴族にしろと騒いでいた連中だ。

ここ一週間ほど大人しかったのは、この反乱の準備だったのであろう。

「まさか、クラウスがこんな真似をするとはな」

クラウスが教育を誤ったヴァルターとカールはともかく、まさか本人がこんなバカな真似をするとは思わなかったからだ。

父がいまいち信用していないクラウスを使い続けたのは、逆に彼が賢いのでこんなバカな真似はしないと思っての事なので余計にであった。

「ヘルマン様、私が何の勝算もなくこんな真似をするとお思いか？」

「さあてな。俺のようなバカ領主にもわかるように説明してくれないかね？」

「窓の外をご覧ください」

クラウスに言われた通りにすると、十数名ほどの冒険者やヴァルターとカールに賛同したと思われる若い領民達が屋敷を囲む木製の囲いを設置したり、屋敷の中に食料や弓などを運び込む光景が見える。

「冒険者を傭兵に雇って戦力強化か？」

いや、クラウスがたかだか十数名の援軍を得たところでこの戦いに勝算など確信はしないはずだ。

現在、未開地では魔導飛行船が定期的に運用されている。

それを使えば、ヴェンデリンも、ブライヒレーダー辺境伯も、王都の軍ですら数百人程度の軍勢ならばすぐに展開可能だからだ。

こんな豪農の家に毛が生えた程度の屋敷に囲いなど付けたところ

で、防衛などまず不可能であろう。

「人質を取って安心でもしたか？」

いや、それもない。

俺も一応は貴族の端くれだ。

人質に取られたからと言って、相手の要求を呑んで欲しいなんてヴェンデリンに言えるはずがない。

出来れば妻と子供達は助けて欲しいが、ここで一家が全滅しても新しい領主になれる一族など複数存在する。

後顧の憂いを断つために、俺達ごと焼き殺せば良いのだ。

「（クラウスが動いた理由……）」

少しでも真実に辿ろうと周囲の様子を探り始めると、俺は援軍の冒険者達にある違和感を感じていた。

「（統率され過ぎている……）」

冒険者とは、その人間性がピンキリで有名な商売である。

貴族よりも稼いでその一部を慈善活動などに使うほどの人格者もいれば、乞食か山賊同然の連中も多い。

この屋敷を占拠した後で戦利品でも漁るのかと思えば、クラウスが連れて来た代表者と数名が、テキパキとヴァルターとカール達も使って篭城戦の準備を行っている。

その動きは、まるで軍人のようであった。

「（誰か、貴族の家臣なのか？）」

一瞬、クルトに魔道具の提供を行って自滅したルックナー財務卿の弟を思い出すが、彼の家臣であるはずはなかった。

クルトに魔道具を渡した冒険者を北の山中で始末するため、彼の家臣が四名ほどブライヒレーダー辺境伯領側から山中に入っていたが、彼らはその冒険者を討つ過程で二名が死亡。

重傷を負った一名が下山の途中で死亡して、残り一名は憔悴し切った状態でブライヒレーダー辺境伯の手の者達に捕らわれていたからだ。

彼ら以外で、他に動いている連中はいないはずであった。

「（となると、こいつらはどこの家の者達なんだ？）」

考えれば考えるほど、その答えがわからなくなる。

「（もうこうなったら、ヴェンデリンに何とかして貰うしかないか……）おい、小便くらいはさせて貰えるのだろうな？」

「それは勿論です。ここで漏らされても困りますし」

俺は開き直り、このまま家族や家臣達ごと大人しく監禁されるのを選択するのであった。

第六十一話　ヴァイゲル家復興。

「爵位と領地を取り上げられた貴族を復活させる方法ですか？」

「そう」

「カタリーナ嬢の事ですな？」

「ああ」

出会った当初は、その言動のせいで損をしていたカタリーナであったが、彼女はなかなかに優秀な魔法使いであったし、付き合ってみるとそう悪い奴でもなかった。

ならば、それを囲い込んで使わない手は無い。

何しろ俺は、広大な領地に責任を持つ貴族なのだから。

あと、俺という人間が安定思考だからという理由もある。

良い人生を送るために、味方が多いに越した事はなかったからだ。

そしてそんな彼女に恩を売る方法であったが、それは一つしかない。

ヴァイゲル家の領地と爵位を復活させてあげるのだ。

女性が貴族になるのはほぼ無理なので、彼女が納得する方法を探らなければいけない。

一番良いのは、彼女の産んだ子供が爵位と領地を継承可能にする事であろう。

「しかし、それを拙者に聞きますか？」

バウマイスター伯爵家の友好貴族が増えるかどうかの問題なので筆頭家臣であるローデリヒに聞いているのだが、彼の表情は暗い。

なぜなら、来週にはお見合いの会が開かれるからだ。

しかも、このお見合いの会。

かなりの大規模になる予定になっている。

エルも参加するし、うちに仕官した若い連中で嫁がいない奴は強制参加となったからだ。

貴族達も気合を入れて千枚以上の見合い写真を送ったのに、その大半が無駄になるのもどうかと思い。

彼らに、『うちの若い連中でも構わない人は？』と聞いたところ、ほぼ全員が了承をしたというわけだ。

いつの間にか形成されていたバウマイスター伯爵家の家臣団であったが、幹部クラスに全閣僚の子供が混じっていて、実家の得意分野の仕事をしていた。

あの導師の子供であるコルネリウスも、警備隊の幹部になっている。

その仕事ぶりは優秀であったが、彼らは三男以下の余り者が多かったのでまだ独身の者が多かった。

なので、これから忙しくなる点も踏まえて、大お見合い会が開かれる事になったのだ。

我ながらナイスアイデアだと思うのだが、自分のお見合い会の準備を進めるローデリヒには、どこか納得がいかない部分があるので

あろう。

「どうだろう？　ローデリヒが嫁に貰って、産んだ子を貴族にするというのは？」

「なぜ、拙者なのです？　エルヴィンでも構わないではないですか」

結局紆余曲折の末に、次代ルックナー男爵家当主の父になる事が確定しているローデリヒなので、カタリーナと子供を作ってその子を貴族にしても何の問題もないわけだ。

ただ、ローデリヒはこれ以上の難儀を背負いたくないらしい。

エルに押し付けようとしていた。

「エルはなぁ……」

良い奴なのだが、ブランタークさんのせいで女遊びを覚えてしまったのが良くなかった。

カタリーナがその辺に敏感で、エルと距離を置いてしまっているのだ。

パーティーを組む仲間としてはアリだが、旦那としては嫌という事らしい。

「あの跳っ返り、案外ウブなのですな」

確かに、荒くれが多い冒険者の中でトップクラスの実績をあげ、その分け前を奪おうとする寄生虫やヤクザのような連中を実力で排除してきた割には、あまり男性に免疫がないようなのだ。

「この前もなぁ……」

早朝にエルと弓の鍛錬をした後、暑かったので上半身は裸になって中庭で涼んでいたら、同じく魔法の鍛錬をしていたカタリーナから苦情を言われてしまったのだ。

『ヴェンデリンさん！　貴族ともあろう方が、外で裸になるなど！』

『上半身だけじゃない』

『上半身だけでも、駄目に決まっているではありませんか！』

言い方はいつもの通りであったが、カタリーナの顔は真っ赤であった。

要するに、そういう免疫があまりないのであろう。

「エルは難しいと思う」

「なら、お館様で宜しいではないですか」

「俺？」

「はい。ちょうど、条件にも合致していますし」

元々超一流の冒険者なので、俺の狩りに付いてこれる。

カタリーナからしても、俺との間に子を作ってヴァイゲル家の当主にした方が王宮での工作が上手くいく。

お互いに利益があると、ローデリヒは言うのだ。

元平成日本人から言わせて貰うと少しドライな感覚のようにも感

じるが、この世界ではそう間違った判断基準とも言えなかった。
結婚とは家同士の繋がりで、本人達の相性とかは二の次であったからだ。
恋愛至上主義も悪くはないと思うが、それも理由で日本は婚姻率や少子化が問題になっているのかもしれないし。
とにかく、この世界で独身を貫くのは難しいわけだ。
カタリーナも覚悟を決めないと駄目だと、ローデリヒは語っていた。

「ヴァイゲル家を準一族扱いにして、バウマイスター家の陣容を厚くする必要がありますな」

ローデリヒは筆頭家臣なので、急速に大規模化したバウマイスター伯爵家の安定化は急ぎ取り組みたい課題のようだ。
俺の死後、次世代以降もバウマイスター伯爵家は続くのだから。

「しかし、それは本人の意志とかもあるでしょうに」

「とは申せ、一度腹を割って話し合う必要がありますぞ。ところで、その頬に残った跡は消せないのですか？」

「うーーーむ。なぜか、エリーゼに拒否されてな。俺が自分で治療するのも駄目だそうだ」

実は今日の早朝、いつも日課にしている魔法の訓練を終えてから、汗でも流そうと風呂場に入ると。
そこには、同じく先に訓練を終えて風呂に入っていたカタリーナの姿があった。

しかも彼女、洗面所の鏡の前で素っ裸で何やらポーズを取っていたのだ。

『最近、ヴェンデリンさんの家で出る食事が美味しいので、太ったような……』

『そうかな？　俺は、そうは思わないけど』

『えっ？』

ここで、すぐに返答をした俺がバカだったのであろう。

自分だけしか居ないはずの風呂場の洗面所で俺と顔を合わせてしまったカタリーナは、不用意に入って来てしまった俺と数秒間見詰め合ってしまい、双方の間に奇妙な空気が流れてしまう。

『ヴェンデリンさん？』

『男は、女の多少の体重の増減には気が付かないから』

『……』

『女性と男性の理想体型の差もある。あまり痩せ過ぎると、男はかえって魅力を感じないぞ』

『ヴェンデリンさん？』

『じゃあ、俺はこれで』

どうやら、俺は風呂場の入り口にかけられた『入浴中』の札を見

落としていたらしい。
　実はたまにやるのだが、エルは男だから何の問題もないし、他の女性陣の時もそうであった。

『ヴェル、実はわざとやってない？　別に、私は構わないけど』

『大変だぁ。ボクの裸に欲情したヴェルに襲われるぅーーー。って、ノリが悪いなぁ』

『ヴェンデリン様、こういう事は正式に式を挙げてからにした方が』

『ヴェル様、一緒に入ろう』

　四人は婚約者なので全く問題にならなかったのだが、やはりカタリーナでは誤魔化しが効かなかったようだ。

『ヴェンデリンさん……』

『悪い、ちょっとしたミス』

『嫁入り前の乙女の肌を見て、それで済ますつもりですか！』

　カタリーナの魔法は飛び出さなかったが、そのビンタを思いっきり受けてしまう。
　多分、その気になればかわせたと思うのだが、それをしてはいけないような気がしてつい喰らってしまったのだ。

「何と言いますか……。お館様も運が良いのか悪いのか……」

　同じ男であるローデリヒの感想はそんな物であった。

ビンタは不幸だが、良い物は見れたのだからという事であろう。
貴族にビンタなどして不敬だから処罰という話も不可能ではなかったが、それをすると俺の覗き行為がバレてしまう。
公表すれば、間違いなく世間で赤っ恥をかくのは俺になるであろう。

「しかも、カタリーナが意外となぁ……」

俺に盛大にビンタをまかした後は、柄にもなくエリーゼに縋り付いて泣いていたのだから。

『私、もうお嫁に行けませんわ！』

『そういうキャラじゃないと……。すいません、何でも無いです……』

少し裸を見られたくらいで嫁に行けないのなら、日本で結婚できる女などほとんどいなくなってしまう。
というか、こんな女がラノベやアニメ以外に実在するのが驚きだと俺は思ってしまったのだが、エリーゼはカタリーナの味方であった。

この世界の女性は、身分が高いほど貞操観念が高い。
なので、恋人や妻でもないカタリーナの裸を見た俺は悪い男になるのだそうだ。

『ヴェンデリン様。今日一日は、お顔はそのままにしていてください』

『さすがに、そのままは……』

『ヴェンデリン様には、反省をしていただきます』

珍しくエリーゼから強く言われてしまい、俺は自分で頬に付いたモミジの治療すら今日はしない事に同意させられてしまう。

『駄目よ。ヴェル。エリーゼが強く言う時は特別なんだから』

確かにイーナの言う通りで、普段は俺を立てる古風な女なのに、今は泣き縋るカタリーナを慰めつつ、俺に冷静に制裁を課している。

こういう部分も、彼女が俺の正妻に選ばれた理由なのかもしれなかった。

『私達なら問題ないけど、カタリーナは駄目じゃない』

『入浴中の札に名前欄でも入れるか？』

『それで、カタリーナ以外なら入るの？』

『ノーコメントです』

この国の貴族は、教会が煩いせいもあって婚前交渉を行うのが難しい。

なので、たまに間違ったフリをして少し裸を覗くくらい可愛い悪戯だと俺は思うのだ。

どうせ、相手は婚約者達なのだし。

『ヴェル、やっぱりわざとやっているわね……』

『さあて、どうかな？』

『実はこれって、結構問題なのよ』

やはりこういう状態になると、真面目なエリーゼとイーナに説教をされる構図になってしまうようだ。

『ねえねえ。ヴェル。カタリーナのスタイルはどうだった？』

ルイーゼは、大概こんな感じだ。

たまに一緒に風呂に入った他の女性達のスタイルなどを俺に報告してきて、精神に多少のエロオヤジ成分が含まれていると思われる。

『エリーゼと良い勝負で、こうバインバインと』

『やっぱりなぁ。ドミニクも結構凄いけど、カタリーナには及ばないし』

『へえ、ドミニクもなかなかなのか』

『結構、凄いよ。エリーゼと幼馴染だから、環境のせい？』

自称女体評論家のルイーゼに言わせると、この屋敷でメイドをしているドミニクもなかなかに着痩せをする性質らしい。

実に良いスタイルをしていると俺に報告していた。

『やっぱり、シッカリと見られていますわーーー！』

『ルイーゼさん！　ヴェンデリン様！』

ただ、このオヤジ丸出しな会話のせいで再びカタリーナに泣かれてしまい、俺とルイーゼはまたエリーゼから怒られてしまう。

『とにかく、今日は反省していただきます』

そんなわけで、俺は今日一日頬にモミジを付けたまま過ごす事が決定する。

『ヴェル様』

『何だい？　ヴィルマ』

『ヴェル様の頬のヒトデ。王都にお店があるヒトデ焼きに似ている』

『……。そうだな……』

そして、やはりヴィルマは、なぜこれほどの騒ぎになっているのかを理解していないようであった。

俺の頬のモミジを見て、俺はモミジ焼きをパクって王都に出店させている『ヒトデ焼き』に似ていると喜んでいるのだから。

なお、なぜヒトデ焼きなのかと言うと、モミジはヘルムート王国領内で北方の極一部の地域にしかないからである。

知名度の問題というわけだ。

「早速、尻に敷かれていますな」

「エリーゼは、普段はここまで強くは言わない」

「でしょうな。カタリーナは御家の復興を目指しているわけで、その扱いは貴族の令嬢に準じた物にしていたのですし」

だからこそ、不用意に彼女の裸を見た俺を窘めたというわけだ。

「どのみち、カタリーナがいくら努力をしても自分は貴族家の当主にはなれないのです」

王家や他の貴族に交渉しないと駄目な以上、どうしても婿を立てて産んだ子供をという条件にしないと色好い返事が貰えないわけだ。

逆に言うと、その条件さえ呑めばさほど難しい事でもないのだ。

「ですから、その辺を含めてカタリーナと良く話し合うべきです。あれほどの魔法使い、取り込まねば損ですぞ」

「お前、段々と貴族の家臣らしくなってきたな」

「褒め言葉として受け取っておきましょう」

何にせよ、俺はカタリーナと一度その辺も含めて話し合いをする事になるのであった。

「というわけなんだけど……」

「皆と相談して決めますわ」

「皆？」

「元ヴァイゲル領の領民代表や元家臣の方々ですわ」

俺がカタリーナにローデリヒが考えた案を伝えると、彼女は皆と相談して決めると答えていた。

彼女の言う皆とは、元家臣や領民達であるらしい。

しかし、祖父の代に領地と爵位を奪われたのに、恐ろしいまでの忠誠心である。

「昔のバウマイスター領なら、一年で新領主や代官に馴染んだりして」

「それは、他の領地の事なので何とも……。彼らと相談するので、付いて来て貰えますか？」

「わかった」

カタリーナとの話はついたので、俺達はまた二日間ほど土木工事で汗を流してから、元ヴァイゲル領へといつものメンバーで飛んでいた。

とはいえ、俺は元ヴァイゲル領の詳しい場所など知らないので、瞬間移動では飛べない。

ヴァイゲル家は元はうちと同じ騎士爵家で、領地があった場所は王都から徒歩で丸一日ほど。

人口千人ほどの、騎士爵家としてはかなり裕福な方であった。

広大な農地を耕して王都に食料を供給していたし、王都と西部とを繋ぐ街道沿いにあったので人と物の出入りが多く、宿場や商店街

もあって立地条件が物凄く良かったのだ。

確かに、王都まで瞬間移動で飛び、馬車で半日ほど行くと到着したので交通の便は良い場所のようであった。

「この立地だと……」

「坊主の予想通りだな。王国の直轄地整理で邪魔者扱いされたんだ」

随伴で来ているブランタークさんは、ブライヒレーダー辺境伯からヴァイゲル家が改易された事情を聞いてきていた。

「王都周辺を全て直轄地にするために、複数いた小領主達に転封を命じたわけだな」

その代わりに、代替地は前の領地よりも広い場所を準備する。

そういう条件のようであったが、この元ヴァイゲル領は立地が物凄く良い。

土地が広がって農業生産が増えるよりも圧倒的に美味しい、街道沿いという神立地から出るのが嫌であったらしい。

いつの時代でも、農業とは実はあまり儲からない。

人は食料が無いと生きていけないので重視されるが、実は流通経路を握った方が儲かるのだ。

「とはいえ、王家の命令を断っては駄目でしょう」

「お爺様は、断るつもりはありませんでしたわ」

ヘルムート王国では貴族がこういう転封命令を受けると、一度は必ず断るのだそうだ。

「小なりとはいえ貴族なのですから」

一度目は水面下での打診なので断ると、次でもう少し条件を良くして公式に打診がなされる。

なぜこんな事をするのかと言うと、貴族家側にも下の者達への面子があるからだ。

『一度は断ったが、向こうが是非にと条件を上げてきた』

と言い訳できて、安心して転封を受け入れる事が出来るというわけだ。

「何て、面倒な……」

「貴族ってのは、そういう物だから」

ブランタークさんの言う通りなのであろう。

俺は顔を引き攣らせるが、他のみんなは納得しているようだ。

そういう部分で、俺はまだこの世界に慣れていないのかもしれない。

「ところが、お爺様が慣習で一度断ったら……」

いきなり、王家の命令を無視した罪で改易されたそうだ。

なぜこんな事になったのかと調べたら、そこに先代のルックナー侯爵が絡んでいたらしい。

なるほど、いくら大物貴族でも慣習破りは良くないと俺も思ってしまう。

「カタリーナ様！　お戻りでしたか！」

カタリーナから話を聞きながら暫く街道沿いに元ヴァイゲル領内を歩いていると、宿場町の方から六十歳前後くらいに見える初老の男性が走って来る。

「ハインツ。もう年なのだから無理に走ってはいけませんよ」

「何の何の。まだまだ私は現役ですわ」

年齢的にはクラウスと同じくらいに見えるが、彼もまだ元気そうに見える。

「あなたは皆の纏め役なのですから、まだ元気でいて貰わないと」

「あと十年くらいは何とかなります。ところで……」

「王都で噂の、『竜殺しの英雄さん』ですわ」

「カタリーナ様はお顔が広いのですな」

「当然ですわよ」

またいつもの口調に戻るが、出会いは偶然だし、初見の印象は最悪であった。

なので、見栄を張るのも大変だなと俺達は思っていた。

「しかし、十二歳でカタリーナ様が西部の冒険者予備校に行かれて以降、初めての同行者ですな」

「私は、お友達は選びますの」

「（ねえ、それって……）」

「（イーナ！　駄目っ！　それ以上は駄目！）」

最初の印象は最悪なのに、なぜか俺が彼女を排除しない理由。
それは、彼女が俺と同じような子供時代を過ごしているからなのであろう。

魔法の鍛錬に時間を費やし、冒険者予備校時代も基本はボッチだったようで、成人してからも常に一人で行動していた。
帰省の際に一人なのは、誰も誘う友達がいなかったからであろう。

「（ボッチだ！　昔の俺と同じくボッチだ！）」

ボッチはボッチを知る。
俺には彼女のボッチぶりが詳しく思い浮かぶので、つい色々と誘ってしまうのだと。
しかも彼女、最初は枕言葉のようにしょうがないと言って付いて来るのに、実は誰よりも俺達との行動を楽しみにしている風にしか見えない。

土木工事などの仕事も一切断らないし、工事現場では多くの労働者達にも人気があった。
あの口調は相変わらずだが、荒くれが多い工事労働者達に言わせると『面白い姉ちゃん』らしい。

自分の娘のような少女の言動が多少傲慢でも、ネタ扱いして笑えてしまうのであろう。

『カタリーナ様。この穴なのですが、もっと深く掘って欲しいのですが』

『仕方がありませんわね。私の魔法を、とくと御覧なさい』

『さすがですなぁ』

『私にかかれば当然ですわ』

『その素晴らしいカタリーナ様にお願いがあるのですが』

『私に、お任せなさいな』

更に、上手く煽てて追加の仕事を頼んだりもしているそうだ。

「（ヴェル。あなた……）」

「（十二歳まで、俺はボッチだったからな。まあ、カタリーナは今も現在進行形で……）」

「（ヴェル、それは酷いと思う）」

「お客様方も、お茶でもいかがですかな？」

ハインツという老人の案内で、俺達は彼の家へと向かう。

その途中に、また同じ騎士爵家なのにうちの実家よりも豪華な屋敷があったが、その屋敷こそ元はヴァイゲル家の本屋敷であったそうだ。

「今は、代官様のお屋敷になっております」

ハインツさんの口調は冷めた物であった。

彼からすると、代官など主人の屋敷を不法占拠するヤクザと同等なのであろう。

「忌々しい事に、代官は決まってルックナー家の縁者なのです」

法を無視して不法な税などを取っているわけでもないが、あいつらはヴァイゲル領を潰して代官の給金を貪るルックナー一族の一味であるからと。

領民や家臣達も反抗などはしていないが、極めてドライな付き合いしかしていないようであった。

「ここが、私の屋敷です」

ハインツさんの家は、元々はヴァイゲル家の従士長の家系らしい。

その屋敷の大きさは、元ヴァイゲル家の屋敷に次ぐ大きさがあった。

更に屋敷に入ると、そこには様々な年代の男性二十名ほどが待ち構えていた。

ハインツさんによると、全員が名主や従士や家臣などの家の者達だそうだ。

「おおっ！　カタリーナ様がお戻りだ！」

「またお美しくなられたな」

「お客様もいるようだが」

「何でも、『竜殺しの英雄様』だそうな」

「へえ、お若いのに大したお方だ」

「皆さん。今日戻りましたのは、大切なお話があるからです」

ボッチなのに、カタリーナは元家臣や領民達に慕われているようだ。

ハインツさんにそっと聞くと、魔法の才能があった彼女はこの街で御家再興のために幼い頃から魔法の訓練を行いながら狩猟などでお金を稼ぎ、憎きルックナー侯爵家の目に届かない西部の冒険者予備校に通い、そのまま西部で稼げる冒険者となった。

当主であった祖父は改易のショックで直後に病死し、両親も御家復興のために無理をして病気になってしまいすぐに後を追った。

そのために僅か五歳で一人になった彼女は、その時からヴァイゲル家の当主として振舞ってきたそうだ。

「カタリーナ様は、ご無念であった先々代、先代のご苦悩を幼き身でご理解し、御家再興のために懸命に努力を続けてまいりました。このハインツ、灰になるまでヴァイゲル家の家臣でありますとも」

他の面子も同様のようだ。

ルックナー家が天下りで派遣してくる代官の勧誘を断り、商人、職人、狩人、豪農などで生計を立てつつ、ヴァイゲル家が復興した時のために勉学や訓練なども欠かさなかったそうだ。

しかも、次世代になっても脱落する者などおらず、そういえば集まっている連中には若い者も多かった。

「（脅威の忠誠心！　お前らは、三河武士か！）

というか、特に悪政を敷いているわけでもないのに、いまだに最低限の付き合いしか出来ない代官側も少し哀れだ。

「実は、御家再興の糸口が掴めました」

「それは、本当ですか？」

「良かった！　ワシが生きている間にヴァイゲル家が……」

室内は一瞬にして大きな喜びに包まれる。

年配の者などは、涙を流して喜んでいる有様だ。

「私は、功績さえ挙げれば貴族になれると懸命に努力をしてまいりました。ですが、お金は貯まっても御家再興には全く届きません。私が、女だからですわ」

カタリーナの発言に、みんなが一瞬静かになってしまう。

みんな、その事実に心の奥底では気が付いていたからであろう。

「そこで、考えを変える事になりました。ここにいらっしゃるヴェンデリン様の妻となり、その子にヴァイゲル家を継がせるのです」

「おおっーーー！」

「それは素晴らしい！」

「さすがは、カタリーナ様！」

やはり、カタリーナはその道を選ぶようだ。
変な貴族の次男・三男を婿にして御家再興を狙うと、実家に乗っ取られる危険があるが、俺の実家にそんな余裕などないし、俺自身だって自分の領地すらあの有様なのに人の領地に口を出している暇などない。

カタリーナからすれば、俺はベターな選択なのだと。

「ですが、この領地というわけにはいかないでしょう。引越しをする必要がありますわ。ですから、付いて来たい方だけで構いません。付いてこれない方には、私から幾ばくかの恩賞をお渡しします。こんな一旦潰れた家に今まで尽くしてくれて、心から感謝いたします」

カタリーナは、こういう教育も受けているのであろう。
貴族の令嬢に相応しい挨拶で締め括っていた。

「付いていきます！　どんな僻地でも！」

「俺もです！　家族も同意してくれるはずです！」

「俺も付いていきます！」

農地も豊かで、王都にも近く、買い物などでも不自由しない。
ここは神立地のような気がするのだが、この部屋にいる面子で残ると言った者は一人もいなかった。
みんな、御家再興と新領地への移転に大喜びをしているようなのだ。

「不思議でございますか？」

「ええ、ここは生活に便利でしょう」

みんなが大喜びして歓声に沸くなか、ハインツさんは俺の不思議そうな表情に気が付いたようだ。

「確かに、ここは便利で暮らし易いのは事実なのですが……」

元ヴァイゲル領で人口千人。

これ以上は養えないので、子供などが他に引っ越してしまうケースが増えていたらしい。

「子が親の元を旅立つのが普通とはいえ、あまりに遠方で孫の顔も見れないのは寂しいわけです」

その点、俺が未開地から分け与えるであろう土地は、開発の糊代が大きい。

利便性についても、俺の領地の開発が進めば大幅に改善するであろうと。

「将来性は断然上ですからな。付いて来る者は多いと思いますよ」

「ならば、明日が勝負かな」

「勝負ですか？」

「ヴァイゲル家改易の原因を作った家にお願いに行くから」

お願いというか、根回しである。

許可は王家が出すのだが、事前に相談に行かないで臍を曲げられ

て邪魔でもされると困るからだ。

「なるほど、それは大切ですな」

その日は、ハインツさん達が主催してくれた宴会を楽しみ、元家臣の人が経営している宿で一泊した翌日。

また王都に瞬間移動で飛び、ある人物と待ち合わせをしていた。

「婿殿よ。元気そうで何よりだな」

「ええと……」

「今や飛ぶ鳥落す勢いのバウマイスター伯爵様だからな。妻が一人くらい増えても仕方があるまいて」

義祖父なのになぜか俺を『婿殿』と呼ぶホーエンハイム枢機卿と待ち合わせをしたのだが、彼は妻が増える事に不満は無いと言いつつも、シッカリとカタリーナに鋭い視線を向けていた。

「始めまして。カタリーナ・リンダ・フォン・ヴァイゲルと申します」

「西部では有名な魔法使いで、あのヴァイゲル家の娘か」

「本日は、お世話になります」

「今の婿殿には足りない物も多いからの。カタリーナ嬢が婿殿を支え、その子がヴァイゲル家の当主としてバウマイスター伯爵家を支える。分を弁えれば、ワシは協力も厭わないよ」

「ありがとうございます」

さすがのカタリーナも、長年中央で生きて来た大物貴族のオーラと眼光に圧倒されたらしい。

素直に挨拶をしていた。

あと、本当に孫娘のエリーゼが可愛いのであろう。

彼女の正妻としての地位を揺るがせないように、こうやって必ず協力してくれるのだから。

「エリーゼも、元気そうじゃの」

「はい。ヴェンデリン様はお優しいので」

「そうか。結婚式が楽しみじゃの」

普段は、大物中央法衣貴族兼魑魅魍魎の巣である教会の枢機卿である彼であったが、エリーゼの前だと孫娘が可愛い好々爺と化す。

だからこそ余計に、彼女の正妻の地位を脅かそうとする輩には一切容赦しないはずであった。

その空気を読んだカタリーナは、すぐに大人しくなっていたほどだ。

「では、参るかの。ところで、今日は大人しいの。ブランタークよ」

「俺はただの護衛ですから」

「そういう事にしておくかの。ブライヒレーダー辺境伯は今回の件

どう思ってるのかの？」

「運が良かったと思っているのでは？」

「まあ、そうかの。ルックナー財務卿も、先代の罪でご苦労な事じゃ。あとは、リリエンタール伯爵家はバカをしたな」

何となくは理解できた。

要は、先代が改易さえしなければルックナー財務卿はカタリーナという使える魔法使いに嫌われる事も無かったであろうし、リリエンタール伯爵家は彼女を手駒に出来たのだから。

「カタリーナが有名になってから、リリエンタール伯爵家って何か言って来た？」

「ええ。四十歳くらいの三男が来て、『俺がヴァイゲル家を復興させるから、お前は俺の妻になれ』と」

「それで？」

「寝言は、寝てから言えと言いましたわ」

一応相手は大物貴族の三男なので、そんな暴言を吐くのはいけないのかもしれないが、その気持ちが良く理解も出来てしまうのだ。

「それで、俺を夫にするのか？　別に、俺もそれほど良い男とは思えないがね」

「ヴェンデリンさんは、甲斐性があって懐が大きいではないですか。旦那様の条件として、これほど良い物はありませんわよ」

ここは日本とは違うので、恋愛至上主義の延長で配偶者を選ぶ事は少ない。

なので、カタリーナの考えがドライ過ぎるというわけでもないのだ。

「それに、ヴェンデリンさんと一緒にいると楽しいですし。私みたいな女でも、普通に構ってくれますから……」

そこまで言うと、カタリーナは顔を真っ赤にさせて俯いてしまう。

「デレたわ」

「デレたね」

「デレた」

「デレましたね」

「なあ、エリーゼよ。その『デレた』という言葉は南方で流行しているのか？」

当然この世界では一切流行などしていなかったが、俺がつい口にしてしまうので、イーナ達もカタリーナに使うようになってしまっただけの事であった。

「まあ良いか。早く、ルックナー財務卿の屋敷に行くとしよう」

俺達はヴァイゲル家復活交渉のために、急ぎルックナー邸へと向かうのであった。

「あのホーエンハイム枢機卿？」

「あの男、最近気苦労が多かったからな」

肝心のヴァイゲル家復活交渉は、僅かな時間で終了していた。

多分、俺が陛下に頼めばすぐに認められるのだが、貴族社会とは面倒で、事前にヴァイゲル家改易に奮闘したルックナー侯爵家にも根回しが必要らしい。

これを怠ると、臍を曲げて邪魔に入る可能性などもあるそうだ。

バカらしいとは思うが、こんな事は商社時代でも良くあった。

新しい人事とかプロジェクトとかで、ちゃんと説明に行かないと後で『聞いてない！』と怒鳴り込んで来た挙句に、邪魔までするお偉いさんが実在していたからだ。

人間とはプライドを持つ生き物なので、そういう事前の根回しも必要というわけだ。

そう思って屋敷に行ったのに、なぜかルックナー財務卿は俺達を見るなりゲンナリとした表情をしてしまう。

正確に言うと、俺達と一緒にいたカタリーナの姿にであろうか。

『なぜに、バウマイスター伯爵とヴァイゲル家の娘が！』

さすがは、大物貴族とでも言うべきであろうか。
ルックナー財務卿は、カタリーナの事を知っていたようだ。

『カタリーナさんを嫁にして、生まれた子供にヴァイゲル家を継がせるから許可してください』

『呪われろ！　クソ親父！』

どうやらルックナー財務卿からすると、弟のみならず父親も自分の足を引っ張る人物であったようだ。
多分弟と同じで、ルックナー家のためには他者などどれだけ足蹴りにしても構わないという人だったのであろう。

その理念は理解できるのだが、やり過ぎは良くないと思う。
ルックナー財務卿の父親は、そういう人物であったらしい。
敵が多かったので、代替わりしたルックナー財務卿は関係修復に奮闘する羽目になったのであろう。

『駄目ですか？』

『いや、許可する……』

こういう交渉では、相手が弱っている時に畳み掛けた方が上手く行くケースが多い。
それに、後ろではホーエンハイム枢機卿が構えているのだ。
何も心配する事はなかった。

『それとですね。子供が生まれるまでは、カタリーナを名誉準男爵にね。ほら、大物貴族の娘とか王族だと、そういう制度あったでし

よう？』

『ワシが推薦状を書くのか？』

『ええ』

『というか、ヴァイゲル家は騎士爵家で……』

『領地って、俺の未開地から分与なんですよ。開発で苦労するし、ここはサービスでね』

俺もいくつか貴族を命名する枠を持っているが、なるべくなら使わないでとっておいた方が後で楽になるはずと、元からある家の復活という方法で交渉をしていたのだ。

『わかった……』

『あとですね』

『まだあるのか！』

『実は、旧ヴァイゲル領の家臣達や住民達がですね。カタリーナに付いて行くと』

別に引っ越すのは違法でも何でも無い。

だが、旧ヴァイゲル領の代官はルックナー財務卿のハトコだそうで、引越しの際の余計や軋轢や衝突を防ぐ必要があったのだ。

『わかった。ケルナーにはワシから伝えておく』

ケルナーとは、ルックナー財務卿のハトコの名前であった。

『あと、ヴァイゲル家にも開発援助金をですね』

資金の大半を俺が出して行っている未開地開発なので、悪いと思ったのであろう。

王国は、何種類かの補助金を出していた。

余っている貴族の子弟達が仕官できたので、彼らへの給金を数年間保障する制度や、甥達やパウル兄さんのように一から領地を開発しないといけない家もあるのでそれに対する補助金など。

これをヴァイゲル家が貰えれば、相当に開発が早く進むはずであった。

『しかし、カタリーナ嬢は相当に稼いでいるはずで……』

『俺もそうですが、それとこれとは別でしょう。ここは財務卿閣下がバーーーンと許可を出して、ヴァイゲル家と関係を修復しないと』

『駄目でしたら、リリエンタール伯爵家に陳情を……』

今はルックナー侯爵家が財務卿をしているとはいえ、あの家も財務閥の重鎮である。

それに、あと二年でルックナー財務卿の任期が切れてリリエンタール伯爵が財務卿になる。

そんな、ほぼ対等の力を持つ重鎮からの陳情を無視できるはずはなかった。

『ううっ……。　それだけは、絶対に止めてくれーーー！』

勿論、ルックナー財務卿がそれを認められるはずがない。

カタリーナの陳情に俺が付いて行けば、リリエンタール伯爵家と俺に縁ができてしまうからだ。

もっとも、カタリーナとリリエンタール伯爵家との関係は、過去の不始末のせいで断絶してしまっているのだが、それをルックナー財務卿に教えてあげる義理はなかった。

『わかったから！　出すから！』

『それは良かった。カタリーナも、お礼を言わないと』

『御家の復興を許していただき感謝いたしますわ。旦那様の交友関係もあり、私がルックナー侯爵家を恨み続けるのは良くない事かと思いますので、これで水に流そうかと』

『それは、大変にありがたい……』

ありがたくはあるが、ルックナー財務卿の顔は渋い。

なぜなら、後日にカタリーナが名誉準男爵位を貰うと、その噂が教会経由で流れる事になるからだ。

貴族社会の間で、ヴァイゲル家が理不尽な理由で改易された事を知らない人などいない。

そこに、家を復興させたカタリーナがルックナー侯爵家を許すと言うのだ。

どちらが人間としての器が大きいと思われるか。

貴族社会は建て前を大切にするので、当然ヴァイゲル家の方が度量が大きいと思われ、それに気が付いているルックナー財務卿としては顔を渋くさせるしかなかった。

『それと、カタリーナの産んだ次期ヴァイゲル家の当主と、年齢的に釣り合いが取れたルックナー侯爵家のお嬢様との婚姻を……』

『大変に結構ですな……』

もうこれでどう足掻いても、ヴァイゲル家の復興は邪魔されない。

一番の懸案であるルックナー侯爵家が、ヴァイゲル家に嫁を出すと約束してしまったからだ。

『無事に纏まって良かったですね』

『そうだな。バウマイスター伯爵殿』

一人だけ顔色の悪い人がいたが、無事に交渉は成立したのであった。

「まあ、交渉は成立したのだ。問題あるまいて」

カタリーナが子供を生むまでの暫定的な処置であったが、彼女には名誉準男爵位が与えられる事となった。

明日にも王宮から使者が来て爵位を与えられるそうだが、女性なので謁見の間で陛下から直々にとならないのは、この国の閉鎖的な部分なのであろう。

とはいえ、これで用事は済んだので今はホーエンハイム子爵家の屋敷にお邪魔してお茶やお菓子をご馳走になっていた。

こちらも、魔の森産のフルーツなどをお土産に渡している。

ルックナーの財務卿にも渡したのだが、彼がそれを心から味わえる心境になるのは何日後の事であろうか？
家族のために苦労するという点においては俺にも似た部分があったので、少し同情してしまうほどであった。

「婿殿、領地の開発は順調かね？」

「はい、計画よりも大分進んでいますから」

やはり、土木魔法で行う開発はスピードが全然違う。
更に、俺ほどではないが土木魔法が使えるカタリーナの存在もある。
彼女が新ヴァイゲル領と一緒に開発に邁進すれば、また計画が早まる可能性が高いのだから。

「そうか、それは素晴らしい事だな」

「自分の縄張りですからね」

「まあ、領主貴族とはそういう物さ」

そのままカタリーナが名誉準男爵位を貰うまでホーエンハイム子爵邸でお世話になったあとは、新ヴァイゲル領の確定と引越し準備のために急ぎバウマイスター伯爵領へと戻るのであった。

「なるほど、これはルックナー侯爵も泣くわな」

暫定的に名誉準男爵位を貰い、俺との間に出来た子供を継がせる

条件で得たヴァイゲルの新領地。
その位置は、バウルブルクの郊外に決められていた。

なぜなら、旧領地と同じ条件にして開発速度を速めるためだ。
北方山脈沿いのバウマイスター分家二家に、甥達が継ぐマインバッハ家との人と物の流れが進んだ時に、街道沿いにあって宿場町などの運営経験が豊富で、バウルブルクに食料を供給する農地も維持できる。

街道自体は既に作ってあるので、その脇に新ヴァイゲル準男爵領は分与されていて、そこでは多くの領民達が宿場町や農地の整備に奔走していた。

「わて、久しぶりにバテバテですがな」

「いやあ、すいませんね。レンブラント男爵」

「しかし、バウマイスター伯爵はんもやりますな。新領地を与えると言って、経験のある人材を丸ごと引っこ抜きとは。新しい嫁はんも、魔法使いで綺麗な人やし」

何も無い土地に、一から宿場町や農地を作ると時間がかかる。
そこで、ルックナー侯爵に得た許可が役に立つのだ。
新領地開発に付いて行きたい人がいるから、移動の許可をと。
勿論、そんな事は自由なのだが、彼らが移動する時には普通ならば旧領地に残った宿屋や農地を手放さなければいけない。

だが、この世界には移築の魔法が存在するわけで。
今度はホーエンハイム枢機卿のツテで予約に割り込み、俺も協力して旧ヴァイゲル領にあった大半の家、宿屋、商店などは新しい領

地に移転していた。

農地も、麦の収穫が終わるのと同時に畑の土を全て持って来ている。

新しい農地の開墾で一番ネックになるのが、土作りである。

俺の魔法で大分短縮は可能だが、もう出来ている土を持って来た方が楽なのは明白だ。

「あそこ。王都に近い宿場町なのに、えらく過疎になりましたなぁ」

ヴァイゲル領の領民達は、あの神立地を捨ててまで大半が新しい領地に引っ越していた。

レンブラント男爵の手によってバウルブルクと北方を繋ぐ街道沿いに宿場町などが出来、新しく俺やカタリーナが開墾した農地に向こうから持って来た土を入れて春麦を作る準備も始まっている。

まだ農地が余っているので、こちらは稲作の準備も始まっていた。

稲作の人手は、主に旧ヴァイゲル領時代に農地や仕事が足りなくて領地を出て行った領民の子供達やその家族が当たっている。

「旧ヴァイゲル領は、もうあれ以上の発展は望めませんか」

「王都郊外はどこもあんな感じやで。バウマイスター伯爵はんが開放したパルケニア草原は別として」

旧ヴァイゲル領時代は、人口が千人を超えるとその人達は養えないので外に出ていかなければならない。

だが、周囲も大体似たような状態なので、かなり遠方まで引っ越さなければならず。

王都に憧れて上京してみるも、暫くするとスラムの住民などとい

うケースも少なくないそうだ。

「これでも、パルケニア草原があるからマシになったんやで」

「でも、土地は余っていますよね？」

「ド田舎で新規の開墾って、大変なんやで。ここは、バウマイスター伯爵はんのおかげで大分楽やけど」

それに、情報伝達速度の差もある。

王都から大分離れた土地で開墾を行う人の募集を貴族が行うにしても、ではそれをどうやって新しい農地が必要な人に宣伝するかという問題も出てくるからだ。

「確かに、土地は余りまくっているんや。でも、それを開墾して収入を得るようにするのは大変なんやで」

そんなに簡単にそれが出来たら、貴族の子弟達が就職先が無くて泣くなんて事はあり得ないとレンブラント男爵は述べていた。

「ワイかてしがない騎士爵家の四男で、魔法の才能があったから助かったクチで」

でなければ、間違いなく子供は平民に落ちていたであろうと。

「旧ヴァイゲル領では頭打ち。でも、ここなら子供や孫も近場で暮らせる。実際、引っ越しの際に子供や孫やその家族も呼び寄せたようやし」

旧ヴァイゲル領の領民約千人の中から、この新領地に付いて来た

のは約九百人。
なのに、今の新ヴァイゲル領の領民は千二百人。

これに加えて、俺の要請でバウルブルク周辺で新しい宿屋の建設と経営に、バウルブルク郊外の農地を耕してくれる旧領民達も千人近く存在していた。

旧家臣達の子弟で、バウマイスター伯爵家に仕えてくれる事になった者も少数ではあるが存在している。

ローデリヒの言う通りで、ヴァイゲル家の再興はバウマイスター伯爵家にも利益をもたらしたのだ。

ただ、その代わりに割を食った人がいる。
人口が百人ほどに減り、ほとんどの建物が消え、農地も土作りから始めないといけない旧ヴァイゲル領で親戚が代官をしているルックナー財務卿である。

『王都郊外の有名な宿場町がいきなり過疎になって、ワシは全閣僚に嫌味を言われたのだが……』

『ちゃんと、引越しの許可は得たじゃないですか。そもそも、引越しは違法ではありません。ですが、俺はルックナー侯爵だからこそ、念のために承諾を得たのに……』

『わかったから！　バウマイスター伯爵の誠意は理解したから！』

先日の魔の森の地下遺跡探索で大量に得た成果の内、魔導携帯通信機は知己の貴族などに格安で販売していた。
この魔導携帯通信機は既存の物よりも性能が優れていて、早速ル

ックナー財務卿は電話をかけてきたようだ。

最初の通話は引越しで過疎になった旧ヴァイゲル領の現状というのが、彼の悲哀を物語るのかもしれなかったが。

『場所も良いですし、すぐに人が埋まると思いますよ』

実際に場所は良いので、ただの土地でもそれなりの値段で売れていたし、農地も俺が他所から持って来た土を魔法で土壌改良して補填していたので、二～三年も使っていればほぼ元の収量に戻るはず。

なので、これもすぐに完売していた。

農業を始めたいが、開墾の手間を考えるとという人にあっという間に売れてしまったのだ。

『カタリーナはこれで恨み無しとは言っていますが、ヴァイゲル領の領民達の感情を考えると、ここは虐められていた方が後でルックナー財務卿も楽だと思いますよ』

『それはわかっている。次代のヴァイゲル準男爵にワシの一族の娘を嫁がせるのだからな。嫁が虐められては可哀想だし』

ただ虐められているように見えて、やはりルックナー財務卿も大貴族なので、半分芝居で虐められているような部分もあるのだから。

「ワイには、大物貴族達のような腹芸とか無理ですわ。『移築』魔法を使って稼ぐのが精一杯で。しかし、この新型魔導携帯通信機ですか。使い勝手が最高でんな」

「俺としては、レンブラント男爵が持っていない方が不思議でした

けど」

「小型の魔導通信機は、お金を積んでも買えない人が多いんですわ」

とにかく造るのが難しく、出来上がった物も王宮や軍への支給が優先される。

なので、稼いでいるレンブラント男爵でも全く購入の見通しが立っていなかったそうだ。

「仕事で使えば便利ですからね」

「逆に言うと、仕事に縛られる可能性もありまんな。バウマイスター伯爵はんも、案外その辺の誘導が上手といいますか」

魔導携帯電話をレンブラント男爵に売ったのは、彼に仕事を頼むケースがこれからも多いからであった。

見付かった台数は五百台を超えるのだが、その販売先はローデリヒが良く見極めた方が良いと言っているので、まだ死蔵している物の方が圧倒的だ。

所有しているのは、あの探索に加わったメンバーに、陛下にも十台ほど売っていたし、エドガー軍務卿、ルックナー財務卿もそうだ。

残りの閣僚は、陛下から在任中は貸与されるという条件になったそうだ。

偉い大物貴族だからとホイホイ売っていたらキリがないので、俺が特に世話になっている人に限定していたのだ。

当然ホーエンハイム枢機卿にも五台ほど渡していて、彼は一台を

自分の家で所有し、残りは教会に俺の名前で寄贈したようだ。

教会の力の一つに情報収集能力もあるので、新型の魔導携帯通信機は必須というわけだ。

元から王家に次ぐ数の魔導通信機を所有しており、あとで豪勢な装飾を施されたお礼状のような物をバウルブルクに建設中の教会を任される司祭が持って来ていた。

あとは、ブライヒレーダー辺境伯にも三台ほど販売している。

『この新型魔導携帯通信機。素晴らしい性能ですね』

ブライヒレーダー辺境伯は早速電話をかけてきて、前の古いタイプの魔導小型通信機は、欲しがる金満貴族に売ってしまったと話していた。

『自分で所持していた方が良かったのでは？』

『私がバウマイスター伯爵に利益供与ばかり受けてズルいとか言う貴族も多いのですよ。ですから、虎の子を手放したわけです』

『大金で売ってですか？』

『本来なら大金を積んでも手に入らない物を、大金を出せば手に入るようにしたのです。これは、利益供与でしょう？』

相変わらずの大物貴族らしい発言ではあったが、この地球製の携帯電話に似た魔導携帯通信機は、その機能もソックリであった。

一体どういう仕組みなのか？

国内どころか、この大陸内ならどこでも音声クリアーで通話可能だと説明書には書かれていたのだ。
あとは、アドレス機能なども存在している。

実際に俺の魔導携帯通信機のアドレスを開けると、普段の仲間以外では陛下と全現役閣僚というちょっと怖い事になっている。

少し前にエドガー軍務卿から突然電話がかかってきたのだが、俺は最初ヤクザか右翼からでもかかってきたのかと思ったほどだ。

『ヴィルマは元気か！　あと、足りない警備隊関係で何人か送るから！　紹介状も持たせたから、偽物には注意しろよ！』

とんでもない内容に聞こえるが、実はうちならば仕官可能であろうと、偽物の紹介状を持って現れる輩が実際に出始めていたのだ。

「何か、えろう大変なようですな」

「まあ、慣れですよ。慣れ」

「達観してまんな。その年齢で」

「ヴェンデリンさぁーーーん！」

新ヴァイゲル領の中心部で、移築の仕事を終えたレンブラント男爵と話をしていると、同じく領民達との話を終えたカタリーナがこちらに歩いてくる。

「もう良いのか？」

「ええ。領内の事は、ハインツの息子アレクシスに任せますから」

名誉付きではあったが、準男爵になったカタリーナはなるべく領地の経営に参加しようとするが、それはハインツに止められたそうだ。

『まずカタリーナ様が一番にする事は、バウマイスター伯爵様との間にお子を成す事です』

あとは、妻になるのだから俺から離れるなとも言われたそうだ。

『たまにご夫婦でご視察をしてください。あとは、領内の開発状況や資産状況につきましては、半年に一度詳細な報告書をさしあげます。カタリーナ様は、これをバウマイスター伯爵様とご覧になってから指摘などをいただけたらと』

『何それ、物凄く羨ましい』

ハインツは、カタリーナの祖父が改易された時には、若手なのに領内の政務の全てを取り仕切っていたそうだ。

有能なので、ヴァイゲル家が改易された後に他の貴族家から誘いもあったそうだが、それを断って土着までしてヴァイゲル家を支えたらしい。

『同じく有能だけど、クラウスとは真逆の位置にいる人材だな』

ただもう六十歳を超えているので、代官の仕事は自分が子供の頃から教育した息子のアレクシスに任せるそうだ。

となれば、この老練で有能な人材が暇になるわけだ。

そこで、バウマイスター伯爵領の相談役として、ローデリヒの補佐に付ける事にした。
なので現在彼は、ローデリヒと共にバウルブルクで開発業務に邁進しているはずであった。

「私は、ヴェンデリンさんと一緒に冒険者としてバリバリ稼ぐのです」

「あまり気張るなよ」

「ヴェンデリンさんは、相変わらず覇気が薄いのですね。その割には、色々と功績が多いようですが……」

「悪運の賜物だな」

そう、俺には妙な悪運というか、何か事件に巻き込まれる性質でもあるのかもしれない。
などと思っているとまた何か起こりそうな予感がするのだが、実際にまた何か起きたらしい。

ブランタークさんが血相を変えて飛び込んでくる。

「坊主！　バウマイスター騎士爵領で反乱が起こった！」

「えっ？　反乱？」

少し前ならいざ知らず、この情況で反乱などまずあり得ないと思っていたので、俺の頭の中は混乱したままであった。

「この情況で？　誰が首謀者なんです？」

「それが、クラウスだそうだ」

「はあ？」

先ほど少しクラウスの事を考えたが、それで反乱とはいくら何でも悪運が過ぎるような気がしてならない。

というか、この情況で反乱など起こしても勝ち目などまずない。

あの自己保身の権化であるクラウスが、本当にそんな無謀な事をするのであろうか？

「反乱って、兵力は？」

「三十名ほどらしい。領主の館を占拠して、ヘルマン殿以下家族が人質になっている」

「全くもって理解できませんね」

「俺もだが、兵を送る必要があるぞ」

「この忙しい時に……」

とにかく、まずは情況を把握する方が先だ。

「カタリーナ」

「はい」

「戻るぞ」

「わかりました」

俺はブランタークさんとカタリーナを連れて、急ぎバウルブルクへと戻るのであった。

オマケ三話　男女器合わせ事情。

「何と言いますか……。意外とアッサリと終わりましたわね」

「みんな。良くそう言うけどな」

ヴァイゲル準男爵家の復興は、恐ろしいほど早いスピードで決まっていた。

ルックナー財務卿の強い推薦もあり、誰も反対した貴族がいなかったからだ。

陛下も、『バウマイスター伯爵家の安定化は急務であるか。特に反対する理由もないの』と発言したので、すぐに決定したらしい。

なお、その際に次代ヴァイゲル準男爵家当主と、ルックナー侯爵家の娘との婚姻も許可されたそうだ。

ヴァイゲル準男爵家関連では貧乏クジばかり引いていたルックナー財務卿であったが、この件では大いに面目が保てたらしい。

逆に、ヘマをしたリリエンタール伯爵は渋い顔をしていたそうだが。

そして以上のような経緯の後に、カタリーナの元に王宮から使者が来て名誉準男爵位が授爵されたわけだ。

『カタリーナ殿』

『はい。我は、次代のヴァイゲル準男爵の母となり。陛下のため、王国のため、民のための礎となる』

男が爵位を得る時と大分文言が違うが、それだけヘルムート王国では特殊な例だという事だ。

『もし子供が生まれなかったら？』という疑問もあるが、そこは最悪養子という手もあるのであまり気にはされない。

要は、その家が続けば良いのだから。

簡単に名誉爵位が貰えたので暇になった俺達は、ホーエンハイム子爵家の庭先で簡単な魔法のトレーニングをしながら話をしていた。

「男だって、陛下の前で一言宣誓して終わりだぞ」

「陛下もお忙しいでしょうからね」

カタリーナは、俺から教わった座禅を組みながら体内の魔力を循環させる訓練を続けていた。

人様の家の庭で魔法をぶっ放すわけにはいかないので、周囲に迷惑をかけない修練をしていたのだ。

「ところで、ヘルマン様はいつ襲爵を？」

「向こうは、色々とあるからなぁ……。もう少し情勢が落ち着いてからという話になっている」

クルトの後始末や、お隣で領地を開発しているパウル兄さんへの手助けに、新規の自領開発計画など。

急がしいので、王宮から情勢が落ち着いてからで良いと言われて

いたのだ。

あと、ヘルマン兄さんは側室を最低一人は貰わないといけない。パウル兄さんも同じで、これの選定作業にも時間がかかる。

既に本妻がいてしかもその身分が低いので、出しゃばらない側室を選ぶというのは案外骨が折れる作業なのだそうだ。

候補は、王都にいる法衣騎士爵家の次女以降であまり裕福ではない家で、無役なのが好ましいらしい。

その家は側室を入れた代わりに、仕送りを受けたり、役職を得る活動を助けて貰ったり、その兄弟や親類などを陪臣として雇い入れて貰えるという恩恵を受ける。

候補は、ルックナー財務卿、エドガー軍務卿、アームストロング伯爵などが探してくれるそうだ。

「二人共、出来ればいらないと言ってたな」

忙しいし、俺の兄弟達は父に似ずに好色でもない。

父に関しては、当時の状況的に仕方の無い部分もあったが、ちゃんとしている事はしているので、母などに言わせればやっぱり女好き扱いであった。

兄弟の中では、俺が一番婚約者が多くて女性関連では一番父に似たと言われているのだが、何というかかなり濡れ衣なような気がする。

「ヘルマン様も、大分後ではありますが準男爵に陞爵する予定ですし。奥さんが一人なのは……」

極少数の例外で、我を貫いて奥さんが一人という大物貴族もいるが、大抵は複数を持つのが普通だ。

家を潤滑に運営するために他家と関係を結ぶ、正妻に子供が生まれなかった時のために予備、あとは余裕があるので余っている貴族家の女性を引き受けるという弱者救済的な理由もあったからだ。

「エーリッヒ兄さんも、ヘルムート兄さんも。側室は避けられないだろうな」

あの二人も別段好色でもないので、慣習だからという理由で渋々受け入れるのであろうが。

「その点、私は女なので楽ですわ」

夫を増やすわけにもいかないので、確かにその点では羨ましいと思う人もいるはずであった。

後腐れなく遊べる良い女に憧れるのが男の性であったが、側室として生活を共にすると面倒な事も多くなる。

そういう風に考えている男は、かなり多いような気がするのだ。

「よう、地味に修行してるな。お二人さん」

とそこに、一緒にホーエンハイム子爵邸に泊っているブランタークさんが顔を出す。

彼は朝一番で、ブライヒレーダー辺境伯にカタリーナの叙爵が終わったと通信していたようだ。

「地味って、ブランタークさんが毎日やれと」

「当然だ。俺だって毎日やっているし」

どんなに忙しくても、ブランタークさんも毎日魔力を体内に循環させる訓練は欠かしていなかった。

この修練を続ける事で、魔力のコントロール力が維持・上昇するのだから。

ただ、座禅を組んで魔力循環を行うのは、俺の前世から得たオリジナルの手法であった。

この方法で行うと効率が良いようで、今ではブランタークさんや導師も採用していた。

師匠ですら、『良く思い付いたね』と当時は感心していたのだから。

「魔力の使用効率、精度、威力に直結するからな。毎日怠るなよ」

魔力の上昇が終わっても、必須な訓練方法であったのだ。

「加えて、私の場合には魔力量はまだ成長途中ですわ」

カタリーナは、まだ十六歳であった。

なので、まだ魔力の上昇は続いているようだ。

「羨ましい限りだな」

ブランタークさんは優れた魔法使いであったが、本人はもう少し魔力量が欲しかったなと常々口にしていた。

当時は、これぱかりは生まれ付き決まっているので仕方が無いとも良く溢していたのだ。

「ですが、さすがにもうそろそろ限界だと思いますわ」
カタリーナの魔力は、上級でもかなり上の方だ。
もう劇的な伸びは期待できないであろうと話していた。
「それなら、坊主と器合わせでもしたらどうだ？」
「うっ！　器合わせですか！」
ブランタークさんがカタリーナに俺との器合わせを勧めると、彼女は顔を真っ赤にさせながら俯いてしまう。
俺には、なぜ彼女がそこまで恥ずかしがるのか理解できなかった。
「別に恥ずかしがる事じゃないだろうに。お前さんらは、夫婦になるんだし」
「あの、いまいち事情が飲み込めないですけど……」
「何だぁ？　アルの奴、ちゃんと話していなかったのか」
魔法使いの世界は狭いので、器合わせにまつわる特別な風習があるのを俺は知らなかった。
師匠も、時間がなかったので教える余裕がなかったのであろう。
忘れていたという可能性もあったが。
「男と女が器合わせをするというのは、まあその……」
半分こじ付けだとは思うが、ある種の性行為を想像できるので。
異性同士だと、ただ師弟関係にあるだけではなく、恋人同士や夫

婦かそれに準ずる存在にしかしないそうなのだ。

「男同士だと、純粋な師弟関係としか見なされん。女性の場合は、相手が兄弟や父親なら問題ない」

「そんな、魔法の才能は遺伝しないのに……」

やはり、この世界の女性は損をする事が多いようだ。

いくら師匠でも、相手が女性だと恋人、婚約者、夫婦のような関係でないと器合わせは不可であるらしい。

もしすると、周囲からそういう関係なのだと思われてしまうそうだ。

「あとは、自分の子供に行うのなら構わないと」

「それも、非現実的ですね」

「極稀にいるからな。親子で魔法使いも」

そういえば、前に導師から頼まれて王宮魔導師や見習いの連中と器合わせをした事があったが、全員が男性であったと記憶していた。

「例外は……」

その時に、一緒に器合わせをしたルイーゼである。

「ボクの場合は、ヴェルの奥さんになるのが確定していたから」

「あれ？　そうだっけ？」

そして、いつの間にか彼女も話に加わっていた。

「ボクの中では、もう決まっていたから」

「なるほど」

俺はそんな慣習を全く知らなかったが、一緒に器合わせをした王宮魔導師達は当然知っている。

どうやら、あの瞬間にルイーゼが俺の奥さんになるのは確定していたらしい。

「あとは……」

そういえば、王都滞在時にエリーゼとも器合わせはしていた。

残念ながらあまり魔力は上がらなかったのだが、魔力酔いで二日間ほど寝込んでいたのを記憶している。

あとはイーナとヴィルマであったが、二人は元々魔力が少なく、更に限界まで上昇していたので器合わせはしていなかった。

魔力量が初級以下で魔法使い扱いされていない人は、器合わせなどしないのだ。

「エリーゼは、そういう話はしなかったな」

「知っていると思ったんだろう。どうせ夫婦になるから何の問題も無いし。ところで、カタリーナの嬢ちゃんとは器合わせはしないのか？」

「わっ！　私ですか！」

それはカタリーナ次第だと思って彼女に視線を向けると、なぜかとても動揺しているように見える。
更に、その顔も真っ赤であった。

「俺の勘だと、カタリーナの嬢ちゃんは伯爵様には魔力の量では勝てないはずだ。悔しいだろうとは思うが、ここで魔力量を限界まで上げてから、魔法の種類を増やしたり精度を上げてだな……」

ブランタークさんは、カタリーナと俺が最初に出会った時の事を聞いているので、魔力量で負けるのが悔しくて器合わせに積極的でないと思っているようだ。

多くの弟子を教えた経験を生かし、穏やかに説得をしていた。

「嫌なのか？」

「いえ……。そういうわけはなく……」

カタリーナは、まだ顔を赤くさせながら下を向いてモジモジとしていた。

「なら」

「あのうっ！　その前に、お風呂に入って着替えて来ますから！」

「はあ？」

突然妙な事を口走ると、カタリーナは脱兎の勢いでホーエンハイム子爵邸へと戻っていく。
あとには、全く事情が理解できない俺とブランタークさんだけが

残される。

「どういう事です？」

「あの嬢ちゃん、どんだけ男に免疫がないんだよ」

見た目は勝気そうで男など手玉に取りそうなのに、器合わせで俺と手を繋ぐと聞いただけで風呂とか着替えるとか言っている時点で、彼女に男性に関する免疫など皆無なのであろう。

「というか、意識すると駄目なんでしょうね」

「そういう事か」

俺達と出会う前に出会った冒険者達や、土木工事の現場で顔を合わせる男性労働者達に、導師やブランタークさんにエルと。

特に動揺した様子も見受けられなかったので、俺が婚約者になった時点で恥ずかしくてスイッチが入っているのであろうと思われる。

「あの嬢ちゃん、初夜の時とか頭が爆発するんじゃねえ？」

「さすがに、それはないでしょう」

それから三十分ほど後に、カタリーナは風呂に入り、軽く化粧をし、香水を振ってから戻ってくる。

服装も普段の皮ドレスではなく、高そうなシルクのドレスを着ていた。

仄かにバラの香水が漂い、カタリーナの美しさを強調していたが、ブランタークさんも俺も頭の上にクエスチョンマークを浮かべたま

までであった。

なぜ、たかが器合わせでそこまでする必要があるのだと。

「（いや、男と女の器合わせはそういう事だけど、なぜめかし込む必要があるんだ？）」

「（さあ？　まあ、普通に器合わせが出来れば良いかと）」

やはりどこかズレた部分のあるカタリーナであったが、俺は可愛いものだと思ってすぐに器合わせを行うのであった。

「ねえ、ヴェル。もしかして、カタリーナと庭先で妙な事を……」

「してない！　してない！」

ただ、カタリーナは着替えの際に何種類かの下着の中でどれが良いかをイーナに聞いていたようで、器合わせを終えて戻ると彼女から妙な目で見られてしまうのであった。

第六十二話　憎まれっ子は、年を取っても世にはばかる。

「おいっ、クラウス！　お前は、俺に何か恨みでもあるのか？」

「恨みですか？　ございますとも。私の孫達を蔑ろにしました」

「貴族にでもしろってか！」

「そのくらいは当たり前かと」

「はあ？　本気で言っているのか？」

「勿論にございます」

実家であるバウマイスター騎士爵領において、名主であるクラウスを首謀とした反乱が発生した。

その報告を聞いた時に、俺はそれが信じられなかった。

クラウスは、確かに裏で色々と企む怪しい人物である。

だが同時に、彼は有能な人物でもある。

このタイミングで反乱など起こしても、まず成功の目などない事は子供の目から見ても明らかで、そんな事にあのクラウスが気が付かないとは思わなかったからだ。

「それで、反乱軍の兵力は？」

ともあれ、まずは俺が兵を率いて急行しなければならない。
クラウスは、バウマイスター領に来ていた冒険者達を雇い、彼らと共にヘルマン兄さんとその家族、屋敷の使用人達や詰めていた従士達などを捕縛して軟禁している。
つまり、領内の統治体制が麻痺しているので、本家の当主であり寄り親でもある俺が対応しないといけないのだ。
『えーーーと。指揮官は、誰にしようか？』
『私は、忙しいですからね……』
警備隊の誰かという事になるが、みんな開発の手伝いや冒険者が集う町の警備で忙しい。
というか、この時期に反乱とはある意味嫌がらせにも近かった。
警備隊のトップであるトリスタンは、自分は動かずに部下を当てて対応するようだ。
『モーリッツで宜しいかと』
トリスタンの推薦により、ヴィルマの兄であるモーリッツが五十名ほどの兵を率いて参加する事になった。
『兵数が少なくないか？』
『反乱軍に魔法使いはいるのでしょうか？』
『いないみたいだな』

屋敷を占拠した反乱軍は、クラウス、ヴァルターとカール、賛同した若い領民五名、冒険者二十名ほどと。
合計で三十名くらい、しかも魔法使いなどはいないと判明している。

『更に言いますと、最初から打って出ないで篭城策です』

いくら領主を押さえたからと言って、下手に領内の完全制圧を試みると、反撃されて損害が出るだけなのはクラウスも気が付いている。
それに、外部には従士長や他の従士達に、男性の領民がいて兵力になるので領主という駒を押さえる戦法になったのであろうと。

『とにかく、なるべく早くに兵を送る事こそが肝要です』

『そうだな。モーリッツに兵を準備させろ』

『了解しました』

後に援軍を送るにしても、今はこの兵力で十分とだという結論に至り、俺は瞬間移動で何往復もしてモーリッツと兵士達をバウマイスター騎士爵領内へと送る。

『自分の装備だけは完璧に確認しておけ！　食料や他の必要な物資は、お館様が運んでくれる』

『はぁ……。初の諸侯軍出動が、反乱鎮圧とは……』

溜息をつきながら、兵と俺を含むいつものメンバーでバウマイスター騎士爵領へと飛び、出迎えてくれた従士長や彼が動員した領民

達と協力して逆に屋敷を囲うように兵力を配置する。

「なぜ、あの名主は反乱なんかしたんだ？」

「知るか。本人に直接聞け」

「いや、それは領主様の仕事でしょう」

エルの疑問は最もであった。

それでも、反乱は反乱なので早速に兵を送ったのだが、少数とはいえ即座に兵力を展開できるので、モーリッツなどは俺の魔法に感心しているようであった。

あとは、食料や水や必要な物資なども魔法の袋で運べるので、荷駄隊要らずで素晴らしいと絶賛していた。

何でも、王国軍人時代に訓練で荷駄隊の警備をやって、その大変さを良く覚えていたらしい。

「こういう小さい領地で反乱が起こり、領主や一家が捕らえられたので王国軍が援軍に入る。そういう想定の訓練もあるのです」

モーリッツによると、その際にはなるべく早期に兵を送る事が肝要なのだそうだ。

「反乱軍の人数など、たかが知れていますが……」

少数だからこそ先に領主を押さえるし、それを長期間放置すると拙い事になる可能性が高い。

領民達が次第に、反乱軍の言う事を聞くようになるのだそうだ。

「頭を押さえられて不在ですからね」

なので、俺が素早く領内に入って領民達を安心させる必要があるそうだ。

「そのために、食料や物資の輸送が急務となります」

反乱を鎮圧するために送られた兵士達が、食う物がないからと言って現地で徴発などしたら、それは彼らを反乱軍側へと押しやる原因になる。

なので、なるべく食料などを準備する必要があるのだそうだ。

「金で買うとか？」

「余剰の食料などがあれば良いですけど……」

無ければ、無理矢理にでも金を置いて徴発しなければならない。

だがその行為は、反乱軍と領民達との挟み撃ちフラグを立てる事になる。

彼らからすれば、食料を奪っていく王国軍の方がよっぽど反乱軍に見えるというわけだ。

「その点、今回は楽でしたね」

兵は魔法で移動し、食料も魔法の袋に大量にある。

対応が早かったので、捕縛を間逃れた家臣達が領民達から兵士を募って一緒に屋敷の包囲に参加していたし、寄り親である俺がバウマイスター領内に入ったおかげで混乱なども発生していない。

クラウス達がヘルマン兄さん達を人質にして屋敷に篭もっている

ので、屋敷外への波及は防げたというわけだ。

「ただ、クラウスなる名主は、最初から屋敷の占拠に留めるつもりだったのでしょう」

今の兵力と情況で、クラウスがバウマイスター騎士爵領を掌握するということ自体が夢物語だからだ。

現状では、本村落の住民でも彼に同調などしないはずで、他の村落などは言うまでもなかった。

「同調した領民は五名です」

俺が連れて来た兵と、捕縛を免れた従士長が率いる領軍とで屋敷の完全包囲に成功すると、従士長が数名の従士を伴って報告に現れる。

その中で、ヘルゲという三十歳前後に見える小柄な男性が、反乱に同調した領民の数を正確に調べてきてくれたそうだ。

「今はヘルマン様の元で家臣などしておりますが、元は本村落の農家の出ですから」

領主が家族ごと捕らわれているので、指揮権を把握した俺に報告に来ていたのだ。

「五名も、同調したのがいたのか」

「若い者ばかりですから」

若気の至りとでも言うべきか、僻地で育ち外への憧れや将来の夢などを大きく持っている時に、上手くクラウスにでも唆されたので

あろう。

「何でも、ヴァルターとカールに唆されたと」

「あの二人か……」

「はい、あの二人です」

従士長である分家の親戚筋に当たるライヒという人物は、最近バウマイスター騎士爵領内で、この二人がバカみたいな事を言っていたのだと報告する。

「俺達はバウマイスター伯爵様の兄だから、将来は領地を分与されるのだと」

「ああ、そんな話があったね」

俺は別にそれでも構わないと思ったのだが、父やヘルマン兄さんに絶対に駄目だと言われてしまったのだ。

中身が日本人気質の俺からすれば、ヴァルターとカールは異母兄弟なのである程度の優遇は必要だと思い、それには貴族にする可能性も含まれていた。

ところが、父やヘルマン兄さんからすると。

いや、貴族世界の常識でいうとそれは絶対にあり得ないのだそうだ。

青い血と赤い血。

この二つには、絶対の差が存在している。

『一代で、その土地を切り開いて貴族になった元平民なら良いのだ』

中央では下に見る貴族もいるが、それは次代以降で貴族との婚姻を重ねれば解消される。

貴族である本妻に子が無く、平民との間に生まれた庶子を跡継ぎにする際も、それは例外なので仕方なしには認められる。

だが、俺は本妻から生まれた青い血の貴族である。

その俺が、半分赤い血が混じった兄弟を貴族に押し上げるなど、周囲から総スカンになる事は確実であると言われてしまったのだ。

『名主にしたり、商売の利権を与えたり。優遇処置は、あくまでも平民の枠の中でだ』

そう父に言われてしまい、なのでヘルマン兄さんと協議して新村落の名主の枠や俺が以前に作った商店の経営権などを与える事にしたのだが。

なぜか、向こうがその待遇に不満を感じて反乱を起こしたようであった。

「ヴァルターとカールは、自分達も貴族になれると」

「それは、あの二人がバカって事？　でも、あのクラウスの孫でしょう？」

「教育に失敗したとしか……。若いので、バウマイスター伯爵様の躍進に自分達も乗れると思ったのでしょう」

ある種の若気の至りなのであろうが、反乱まで起こされるともう

言い逃れも難しい。
というか、なぜいきなり反乱なのであろうか？
最初は、陳情とかをするのではないかと。

「一番理解できないのは、なぜクラウスが同調する？」

それどころか、完全に首謀者である。
更に理解できないのは、こんな少数で反乱を起こし、全く勝ち目が無いという点だ。

少なくとも、俺が知るクラウスはこんな無謀な事はしない。
なのに、先ほど話を聞きに占拠している屋敷の傍まで行くと、出迎えたクラウスは自分の孫達も貴族にしろと理不尽な要求をぶつけていた。

「あのクラウスが、何の考えも無しにあんな無茶な要求をするか？」

「さすがに、みんなおかしいと思っていますね」

ヴァルターは自分の跡取りで、カールはこれから開発する新村落の名主に。
異母妹の婿達も、その補佐や商店の経営を任されるなど優遇はされている。
なのに、それを捨てて反乱をする意味が理解できないのだ。

「本人は、強訴だと言い張っていますけど」

「いや、普通に反乱だから」

冒険者を傭兵として雇って戦力にしているのだ。

強訴などと言っても、詭弁にしか聞こえなかった。

「とにかく奇妙だな」

従士長が報告を終えて戻ってから、俺は仮の本陣にしている家の中で考え事をしていた。

あのクラウスが、無謀な反乱を企てるなどあり得ないと思っていたからだ。

ならば、その理由を推察しなければいけない。

「確かに奇妙よね」

俺の護衛役として付き従っているイーナも首を傾げていた。

「なぜ、異母妹とその婿達は反乱から除外したのかしら？」

それがすぐに判明したのは、俺達がバウマイスター騎士爵領に到着した時に従士長に連れられ、レイラさんと、異母姉のアグネスと夫のノルベルト、コローナと夫のライナーが出頭して来たからだ。

何でも、反乱を起こす事に反対したら、レイラさんは親子の縁を切られ、残りの四人もクラウスから絶縁されてしまったそうだ。

『レイラ殿。あなたが先代との関係を利用して、ヴァルターとカールの増長を煽ったという噂がありますが』

彼女達を連れて来た従士長は、以前にヴァルターとカールがヘルマン兄さんに陳情に行った際に、レイラさんも付いて来たのを実際に目撃していたそうだ。

『それは、本当なのですか？』

『事実ですが……』

レイラさんが言うには、せめて子供とその婿達が平民としてそれなりに優遇を受けられたらなと、そういうつもりで一度だけ陳情に同行したのだそうだ。

決して、貴族になりたいなどとは思っていない。

最初の処置で、自分としては十分に満足していたのだと。

『潰されるとわかっていて、そんな無謀な陳情などは……』

歴史の長い貴族家とは、必ず相続や血縁者の扱いで一度は手痛い目に遭っている。

だからこそ、余計の他所の掟破りには厳しかった。

おかしな前例を作る元になってしまうからだ。

レイラさんも、それは理解しているようだ。

クラウスから言われているのかもしれないが、それなら余計にクラウスの反乱はおかしい。

そもそも、なぜ娘とその婿達を縁切りまでしてしまうのかと。

『事が解決するまでは、大人しくしていて貰いましょうか』

俺はレイラさん達に自宅軟禁を命じ、それが守られるように数名の警備兵の手配を行う。

あとは、反乱に手を貸している冒険者達の処遇だ。

「反乱に参加していない冒険者達も軟禁しているのよね」

「当たり前だ」

やっぱり同調していて、後ろからブスリでは困る。

当然、一箇所に纏めて軟禁している状態であった。

「エルとルイーゼとカタリーナが尋問に行っているのよね？」

「俺の勘だと、何も知らないような気がするけど」

三人は、その軟禁されている冒険者達の尋問に行っていた。

反乱に参加した冒険者達の情報を聞くためだ。

あとは、エリーゼがヴィルマを護衛に、領内を安定させるために教会での無料治療奉仕活動を行っている。

この領内におけるエリーゼの人気は、不動の物となっている。

反乱発生中にも関わらず、教会は多くの人達で賑わっていた。

「ただいま」

「どうだった？」

「駄目だね。いきなりの事で、向こうも晴天の霹靂らしいよ」

冒険者達の尋問を終えた三人が戻って来るが、やはり成果はなかったようだ。

「みなさん、北の山脈に生息する飛竜やワイバーンが本当に狩れる

のかどうか調査に来たみたいですわね」

魔法使いでもないと、凄腕の冒険者でも飛竜を狩るのは難しい。
せっかく狩れても怪我人ばかりでは利益が少ないし、死人が出れば尚更だ。
そこで、普通の冒険者が竜を狩る時には団体で行うのが常識であった。
竜の力に団体で挑むのだ。

最低でも十名ほどで、一匹ずつ上手く誘い込んでから罠なども駆使して狩る。
報酬は頭分けになるが、それでもチームワークが優れた冒険者パーティーならば平均よりも遥かに稼げる。

どうやら彼らは、ここが新しい狩り場として使えるのかどうかを調査しに来ていたようであった。

「あの反乱に同調した連中もか？」

「それが、冒険者の何人かが奇妙な事を言っていたな」

エルは、初老に達しているベテラン冒険者数名から、『あんな連中、見た事が無い』という証言を得たそうだ。

「竜を団体で狩る冒険者の世界って、意外と狭いんだって」

個人でもある程度の強さを要求され、団体戦でもチームワークを優先的に実行可能かどうか。
稼げるがハードルが高いので竜専門の大規模パーティーの数は少なく、その世界が長い初老の冒険者達はほぼ全ての同業者達を把握

している。

なのに、彼らの事を今まで見た事が無いそうだ。

「新人だから、初チャレンジとか？」

「それでも、最初は何人かベテランを入れて組むから、そのベテランの顔を知らないはずがないって」

確かに、占拠した屋敷を警備している冒険者達は全員二十代から三十代前半くらいで若い男性ばかりであった。

冒険者なので普通少しは女性が混じるはずなのだが、ゼロなのもおかしな点ではある。

「冒険者じゃないのかね」

「だろうな。統率が取れ過ぎている」

竜を専門に狩る冒険者パーティーも統率は取れている。

だが、それは竜を狩る時だけだ。

普段は冒険者なのでそれぞれ好き勝手にする者が多く、こんな軍隊のように真面目に交代で警備など考えられない。

傭兵で雇われた癖に、屋敷の金品を漁ったり、奪った食料や酒で宴会などをしていないのだ。

「動き方を見ると、軍人みたいだな」

「確かに……」

格好は冒険者なのに、まるで軍隊のようにキビキビと動いている

のだ。
ならば、冒険者に偽装した軍人という事になる。
「王国軍なのかな？」
「まさか」
現時点で、未開地開発の邪魔などするはずがない。
利益どころか、大損を被るだけなのだから。
「となると、貴族の私兵。それも、大物のはずですわ」
カタリーナの想像通りであろう。
大物貴族の諸侯軍なら、専門に訓練をする家臣がいるので自然と王国軍の軍人達と練度などで差が無くなるからだ。
「誰の差し金なんだろうな？」
またどこかの貴族が、何か企んでいる可能性が高くなった。
彼らはバウマイスター伯爵領の開発遅延と混乱を意図して、俺のアキレス腱である故郷を狙ってきたのだ。
冒険者に偽装した兵達を送り込み、そこでクラウスの孫達が現状に不満があるのを知って唆した。
いや、それだとやはりおかしい。
あのクラウスが、成功の可能性もない反乱の首謀者になるはずがないからだ。
クラウスは、バウマイスター家に屈折した感情は抱いているが、必ず自分の利益を確保する。

このまま鎮圧され、縛り首になるような男ではないはず。

「うちのハインツとは違って、腹黒ですのね」

「あんなお人好しの逸材、滅多にいるか」

没落した主家を給金も貰わずに支えるなど、この世界では超希少価値な逸材だ。

今はうちで相談役をしているが、ローデリヒが心から感謝しているくらいなのだから。

少領の筆頭家臣ではあったが、王都に領地が近かったせいで大貴族などとの付き合い方も心得ていたし、経済的な部分にも強く老練で、若い家臣ばかりのバウマイスター伯爵家には貴重な人材となっていた。

「とにかく、まずは様子見かな」

先ほどクラウスを呼んで話しかけてみたが、奴の答えは『俺の孫を蔑ろにしやがって！』という言葉に集約されていた。

俺が、ヴァルターとカールを貴族にすれば兵を退くそうだ。

要求が無茶過ぎて、全くお話にならないのだ。

「ところで、ブランタークさんは？」

一緒について来たはずのブランタークさんの姿が、大分見えなかった。

「ブライヒレーダー辺境伯様との通信だと思う」

こちらの情況を知らせているのかもしれない。
ただ、彼から援軍を送られる事態は避けないといけない。
いくら寄り親でも、あまり何でも世話になるとこれはこれで問題が発生するからだ。

「最悪、強行突入か……」

間違いなく多くの犠牲が出るが、これもこの世界なら致し方の無い方法でもあった。
反乱を起こした者と交渉して妥協などしたら、また第二・第三の反乱を誘発してしまうからだ。

「ブライヒレーダー辺境伯様の援軍は拙いかね」

「独自解決が、最良手だな」

「全くもってその通りなのでそうしてくれ」

エルと解決手段について相談していると、そこにブライヒレーダー辺境伯との通信を終えたと思われるブランタークさんが戻ってくる。

「何かあったのですか？」

ここで普通ならば、ブライヒレーダー辺境伯は援軍を送ると言うはずだ。
まだ開発で手一杯であろうからと手を貸し、自分の影響力を誇示する。
これが、貴族としては最良の手なのだから。

「急に大規模出兵が決まって無理だそうだ」

「大規模出兵？」

この時期に、というかこの戦争の無い世界で大規模な出兵がある？

俺の頭の中には、クエッションマークが浮かんでいた。

「東のブロワ辺境伯だよ」

そういえば、過去に大軍同士のにらみ合いから衝突があったと聞いている。

確か、クラウスも参加して戦果をあげたはずだ。

「とにかく、詳しい話はお館様に聞いてくれ」

俺は素早く懐から携帯魔導電話を取り出すと、ブライヒレーダー辺境伯へと通信を繋げる。

すると、彼はすぐに電話に出たようだ。

『バウマイスター伯爵。どうやら、そちらの反乱とこちらの大規模出兵は連動しているようですね』

「ですよねぇ……。でも、なぜ急に？」

『それがですね……』

昔から、東を統括するブロワ辺境伯家と、南を統括するブライヒレーダー辺境伯家の仲は良くなかった。

領地が隣接する統括下にある小貴族同士の領地・利権争いで度々

直接交渉が決裂し、時に互いの主張を認めさせるために兵を出して睨み合いや小規模な衝突も複数回発生している。

これは、アーカート神聖帝国と講和する前からずっとそうだったそうだ。

『先代同士が当主になったばかりの頃には、衝突が大規模になって犠牲も多く出ましたし』

それは、前に聞いている。

クラウスが戦果を挙げた戦いであったはずだ。

『あとは、私が家督を継いだばかりの頃に散々に嫌がらせをしてくれたんですよ』

当主が交代したばかりで対応が遅れるであろうと、一部紛争領域を実効支配しようとしたり、森林や鉱山利権を全て奪い取ろうとしたり。

当然、両者の仲は拗れるばかりであった。

『ただ、最近はうちが完全に有利でしたね』

その最大の理由は、俺がいるからだそうだ。

『バウマイスター伯爵がいてくれて助かりましたよ』

二回の竜退治を行った魔法使いが、自分の寄り子の子供だった。

ブライヒレーダー辺境伯は鼻高々で、そのおかげで中央とのパイプも強くなったそうだ。

あるパーティーで、ブロワ辺境伯はブライヒレーダー辺境伯を見て顔を真っ赤にさせていたらしい。

『あとは、もう言うまでもないでしょう』

新領地開発の利権に、魔の森で産出する様々な物もある。

ブライヒレーダー辺境伯領が王都とバウマイスター伯爵領との間にあるだけで、勝手に利益が入ってくるのだ。

魔導飛行船の便は増えているし、海運の方の船便と港も同様で、開発特需で仕事も一杯入ってくる。

まさに、ウハウハなわけだ。

『当然、東部の連中は完全に排除していますから』

確かに、今まで散々嫌がらせをしたブロワ辺境伯や彼が統括する東部の貴族達に、それを分けてやる義理などないはずで。

そんな余裕があるのであれば、南部の貴族達に分けるのが、親玉であるブライヒレーダー辺境伯の正しい判断であろう。

俺でも、間違いなくそうしてるはずだ。

「それで、出兵なんですか？　短絡的すぎません？」

『ちょっとおかしいのは事実ですけどね。それは、もっと調査してみないとわかりません。開発利権が無い東部の貴族達に突き上げられたから、うちとの紛争案件を出兵による実効支配で奪って分け与えようとした。こんなところかもしれません』

実際に、とりあえずは南北で半々という事になっている森から、

ブライヒレーダー辺境伯側の貴族の領民達が追い出されたり、同じく鉱山などでも鉱山夫などが追い出されたらしい。

死者は出ていないが、完全武装のブロワ辺境伯側の諸侯軍の兵士達や、ブロワ辺境伯家諸侯軍の兵士達に追い出されてしまったそうだ。

『完全に後手に回っています。早速兵を集めないと。はあ……。お金がかかりますね』

相手の実効支配を放置してそのままにするなど、弱腰外交の名手である日本くらいしかしないので、コストは度外視でブライヒレーダー辺境伯は兵を集める必要があった。

『出来ましたら、バウマイスター伯爵にも諸侯軍混成軍に参加して欲しいなと思いまして』

「そうですね。なるべく早めに参加しますよ」

『そうですか。それは、ありがたい。お願いしますね』

「良いのか？」

魔導携帯電話による通信を切ると、すぐにエルが本当にそちらにも諸侯軍を出すのかと聞いてくる。

「出さなきゃ駄目だろうな」

新しい領地の開発が始まった途端にコレなのだ。

ここで最初に妙な事を企んだ連中に徹底的に罰を下さないと、第

二・第三のブロワ辺境伯が出て来る可能性があった。
叩きのめして、うちに手を出すのは損だと思わせないといけないのだ。

「人を殺す戦争だけどな」

「そういうのは覚悟しているさ。ヴェルこそ、大丈夫か？」

「そんなの、やってみないとわからん」

人が人を殺す。
悪い事なのだろうが、それはその人の置かれた環境にもよる。
実際に人を殺した後に罪悪感で悪夢を見るかもしれないし、意外と何も感じないのかもしれない。

そんな事は、その時にならないとわからないのだから。

「ただ、この時代の戦争では。いや、紛争か。人が死なない方が良いらしいから」

「魔法で解決しますの？」

「そういう事。俺とカタリーナとブランタークさんでやれば予定では犠牲はゼロだな」

まずはこの反乱を平定すべく、早速魔法使い三人で相談を始めるのであった。

「人質は、食堂に集められているのか」

「良くわかりますね」

「探知では、まだ俺の方が上だな」

「いやあ、まだ魔法を使えない微細な魔力の持ち主だと、この人数では……」

「私も、ここまでは詳しく探知できませんわ」

魔法による反乱軍の制圧と人質の安全確保を同時に行うため、俺達はテーブルの上で手書きの地図を広げていた。

包囲に参加している従士長や運良く逃げ延びた使用人などから聞いた屋敷とその周囲の詳細な地図と、ブランタークさんから調べて貰った人員の配置などが描かれている地図だ。

自分の実家なのだが、俺は全体の配置をあまり理解していなかった。

自分の部屋、食堂、書斎とそれらをつなぐ廊下。

年を経るほど屋敷にいた時間は短くなったし、用事の無い場所などには極力近寄っていなかったからだ。

「ヘルマン殿、その家族、使用人などで合計十一名。食堂に纏められていて、入り口に四名の監視役。あとは屋敷の各位置と周囲に配置した柵の前で警備に当たっているな。合計で二十八名だな」

「クラウスはわかりますか？」

「ああ、食堂の中心部にいる」

反乱の首謀者らしく、人質に自分の持論などを語っているのであろうか？

「三人でやれば意外と楽だな」

「エリアスタンですの？」

「そういう事」

『エリアスタン』とは、その名の通りに電撃で相手を痺れさせて動けなくする魔法だ。

中級レベルの魔力があれば大半の人が使えるが、コントロールがとても難しい魔法であった。

警備隊では暴徒鎮圧目的などで重宝されるのだが、威力が弱過ぎて少しビリっとしただけ、逆に強過ぎて感電死、範囲のコントロールが下手で無関係の人まで痺れさせてしまう、逆に範囲が狭過ぎて大半の標的が痺れもしなかった。

こんな事例が、山ほど報告されている魔法なのだ。

「この屋敷と反乱軍がいるエリアを三分割してですね」

一番コントロールが難しい食堂を除外して、見張りをしている四人を標的にするのがブランタークさん。

「クラウスは良いのか？」

「一人だけ動けても何も出来ませんしね」

「年寄りだから、ショック死でもすると困るか」

「悪足掻きをしたら、別に構わないですけど」

あとは、俺とカタリーナで残りのエリアを二分割する。

「私、スタンの威力が少し強過ぎるのが欠点でして」

「感電死させるなよ」

「さすがに、そこまでは強くありませんわ」

俺達は、包囲網の中で自分が担当するエリアに一番近い位置に移動をする。

更に俺は、エリアスタン発動後に反乱軍の兵士達を捕らえる役割を与えられたモーリッツや従士長達に声をかけていた。

「痺れて動けなくなっているはずだが、油断はしないように。あと、ヘルマン兄さん達の安全確保も最優先で頼む」

「了解しました」

「お館様達に傷一つ付けさせませんとも」

先にカタリーナが所定の場所へと向かい、俺とブランタークさんも同じようにエリアスタンを発動させるポイントへと歩いていると、彼が小さな声で話しかけてくる。

「あの暴れ馬を上手く乗りこなしているじゃないか」

「暴れ馬ねぇ……。実際、そこまで凄くはないですよ」

上級でもかなり上の魔力を持ち、実はかなり器用に多くの魔法を使いこなすカタリーナであったが、ブランタークさんが言うような暴れ馬というイメージを俺は抱いていない。

ちょっと普段の言葉がキツイ時もあるが、御家再興という目的のために強がっているのだと思えば可愛いと思えてしまうのは、俺の中身がおじさんだからであろう。

「俺はおじさんだからな、暴風の態度が強がりから出ているのは知っているさ。若気の至りというのかね？　あの反乱に参加しているバカ達もそうだがな」

ブランタークさんは、ヴァルターとカールに同調して反乱に参加した若い領民達の事を言っているのであろう。

「失敗すれば縛り首なのに、若さってのは無茶を可能にするよな」

「あの冒険者達もですか？」

「あいつらは、もっと悲惨だ」

この情況で、ブロワ辺境伯領へと生還など絶望的である。

鎮圧の過程で殺されるか、捕らえられて処刑されるかのどちらかだ。

「多分、拷問されてもただの冒険者だと言えと言われている。あいつらは、坊主の動きを封じるのと、お館様の注意を分散させるため

の捨て駒だ」

「悲惨過ぎる……」

「陪臣でも下の方。一般兵士と大差ないような家の次男以下ばかりだろうぜ」

その陪臣家も継げず、部屋住みの居候で燻っているような連中ばかりであろうとブランタークさんは予想していた。

「冒険者にでもなればいいのに」

「みんながみんな、そうは思わないんだよ」

前世でも、恐ろしいまでの情熱で親方日の丸（公務員など）を目指す人は多かった。

きっと彼らも、それと同じ人種なのであろう。

「いつか自分も実家の居候ではなく、独立した一家を立てたい。そう思いながら勉学や鍛錬に励み、主家からたまにアルバイトで仕事を貰い、結婚もしないで年老いて死んでいく。そんなのが結構いるのさ」

余剰人員なので、こういう作戦で使い潰すには最適なのだそうだ。

「悲惨ですねぇ……」

「伯爵様のところで道場を開いた、イーナの嬢ちゃんとルイーゼの嬢ちゃんの兄貴達を見ればわかるだろう？　そんな奴はかなり多い」

少し目線を変えて、農民なり、職人なり、商人なりに転職する人も多いが、それは逃げだと思って独立した陪臣家を立てる事に執着する。

能力が高い人も多いが、いくら大貴族家とはいえそう陪臣家の枠は増やせないわけで、結局燻ったままの人が多いそうだ。

「そんな彼らの、一発逆転の舞台がコレですか……」

「物凄く勝算は薄いけどな」

それでも、彼らからすればこれはチャンスなのだそうだ。

どう考えてもチャンスには見えないのだが、そのくらい彼らは追い込まれている人達という事だ。

「坊主みたいに、魔法の才能でもあれば別だがな。暴風の件でもそうだ。あんなお転婆、そうそう嫁に貰おうと考えるかよ」

大貴族のバカ息子ならば、実家の力を利用してそんな事も考えるであろう。

だが、普通の男があれほど強い魔法使いを嫁に貰うのは難しいのだとブランタークさんは説明する。

「夫婦喧嘩で死ぬ可能性がある嫁なんて嫌だろうが」

「確かに……」

「坊主なら、その心配もないからな」

「ブランタークさんも、その心配は無いですけど」

「俺は、ああいうのは好みじゃねえから。それに、貴族である坊主には必要な手駒でもある」

取り込めば使い勝手の良い人材なのであろうが、そういう事を考える貴族的な思考が、師匠から魔法の手解きを受けて偉大な魔法使いになるぞという夢から外れているような気もするのだ。

「そんな事を気にしているのか？　というか、アルだって魔法はある程度極めたからこその、ブライヒレーダー辺境伯家への仕官だったんだぞ」

別に師匠は、とことん自由な冒険者としての生活に拘ったわけでもなく、だからお抱えとして仕官もしたのだとブランタークさんは説明する。

「アルの仕官を、先代は大いに喜んだ。あの遠征で戻ったら、アニータ様との婚姻と新陪臣家の新設を考えていたそうだ」

アニータとは、先代ブライヒレーダー辺境伯の末の妹で、今は四十歳超えのお嬢様兼家事手伝いである。

今では完全な嫁き遅れであったが、師匠が仕官した当時は何とか二十代であり、年齢的にも釣り合いが取れていたのでその話は水面下で進んでいたようだ。

「アルと先代の戦死で駄目になったけどな。ついでに、アニータ様もお一人様街道驀進中だ」

結婚とはタイミングである。

前世で、会社の上司が語っていたのを思い出す俺であった。

「毎日魔法の訓練はしているのだし、土木工事と狩りで魔法も使っているじゃないか。今もこうして、エリアスタンで大活躍だ」

「それもそうですね」

「人生の先なんて誰もわからん。坊主は若いんだから、今は好きにやれ。アルだって、坊主くらいの頃には好き勝手やっていた」

少々人生の悩みがあった俺であったが、ブランタークさんのアドバイスで気分は楽になったような気がする。

彼とも別れて所定の位置につくと、早速エリアスタン発動の準備を始める。

包囲網の前線に魔法使い三人の姿が見え、屋敷の周囲にある柵の前で警戒している冒険者達に緊張が走ったようだが、俺達が何をしようとしているのかはわからないようで、ただ睨み合っているだけになっていた。

エリアスタンの発動タイミングは、最初に突入をするモーリッツと従士長に任せていた。

俺の隣にいる兵士が肩に手を置いてから三秒後だ。

「（っ！　1．2．3！）」

打ち合わせ通りに俺の肩に兵士が手を置き、三秒数えた後にエリアスタンを発動させる。

直後に屋敷とその周囲の地面が青白く光り、一秒と経たないで警備している冒険者達はその場に倒れ伏していた。

「突入！」

モーリッツの合図で、選抜されていた兵士達が屋敷の内部へと強硬突入する。
屋敷の外で麻痺して倒れている冒険者達はその捕縛を包囲部隊に一任し、屋敷の中の制圧を第一目標としていたからだ。

「エル！　イーナ！」

「了解！」

「任せて！」

俺自身も、エルとイーナを護衛に窓から屋敷の内部に突入していた。
目標は、食堂に集められている人質の安全確保と……。

「クラウスが、どんな屁理屈を捏ねるか楽しみだな！」

「ヴェルって、クラウスさんが嫌いなのね」

嫌いとか、そういうレベルの話ではない。
あのジジイは、俺の人生の邪魔しかしないのだから。

「どうせ、俺が庇っても縛り首だからな。末期の言葉くらい聞いてやる！」

普段はほとんど使われない書斎の窓から突入し、部屋を出て廊下を進むとエリアスタンで麻痺している冒険者達の姿があった。
これは、一緒に突入したモーリッツ達に任せるとして、食堂へと急ぐとその入り口ではヴァルターとカール他二名の領民らしき若者

が倒れている。

彼らも、エリアスタンで麻痺して動けないようだ。

「さすがは、ブランタークさん」

食堂の中で手足を縛られて監禁されていたヘルマン兄さん達には、エリアスタンがかかっていなかった。

詳細な探知で見張りだけを限定し、エリアスタンで仕留める。

もう少し鍛錬しないと、俺やカタリーナでは出来ない芸当ではあった。

「縛っておいてくれ」

「わかった」

「わかったわ」

ヴァルターとカール達の捕縛はエルとイーナに任せて食堂に入ると、そこでは意外な光景が広がっていた。

この反乱の首謀者であるクラウスが、人質にしていたヘルマン兄さん達を縛っている縄を切っていたからだ。

「お前、その程度の事で無罪放免になるとか考えているのか？」

「何を仰います。バウマイスター伯爵様。私は、お館様の命令で芝居を打っただけでございます」

「はあ？」

やはり、クラウスはクラウスだった。
俺の顔を見るなり、この反乱が芝居であったと言うのだから。

「これだけの騒ぎを起こして芝居だと？　そんなに縛り首は嫌か？」

俺の発言を聞いて、後ろでエルとイーナに縛られていたヴァルターとカールは悲鳴をあげた後に意識を失ってしまう。
どうやら、やっと事の重大さが理解できたらしい。

「バウマイスター伯爵様のお気持ちはわかりますが、ここはお話を聞いていただけたらと」

「聞くくらいはしてやる。縛り首用の縄と処刑台の準備もあるからな」

続けて、ヴァルターとカールと一緒にいた若い領民達もショックのあまり気絶してしまう。
反乱に参加して他の領民達よりも優遇されようと軽い気持ちで参加したようで、やはり失敗した時の事はあまり考えていなかったようだ。

というか、若い連中は俺の発言で気絶していたが、クラウスは表情一つ変えておらず、どうやら絶対に処刑されない自信があるらしい。
その表情を見て、少しムカっとする俺であった。

「そちらの準備は、多分必要なくなると思いますが……」

果たして、クラウスがどんな釈明をするのか？
俺は、ただそれを知りたいがために、奴の話を聞く事にするので

あった。

「反乱を起こした挙句に、取り引きで無罪を要求とはな……」

「いえいえ。無罪ではなくて、死罪を避けて欲しいと願うわけでして」

結局反乱は、一日で完全に鎮圧されていた。

犠牲者もエリアスタンによってゼロであり、反乱に参加したクラウス以外の連中は武装解除され、一箇所に纏められて兵士達に監視されていた。

そして肝心のクラウスであったが、ようやく平穏を取り戻した屋敷の書斎で何食わぬ顔で堂々と取り引きを要求していた。

機密の関係で、現在書斎にいるのは俺、ヘルマン兄さん、エリーゼ、ブランタークさんだけである。

あとのみんなは、反乱の後片付けを手伝っていた。

「クラウス。俺は前に釘を刺したよな？」

ヘルマン兄さんからすれば、増長するヴァルターとカールに釘を刺すようにとクラウスに命じたのに、なぜか三人に強訴を名乗る反乱を起こされてしまったのだ。

それを無罪にしろと言われて、怒らないわけがなかった。

「ヴァルターとカールの教育を誤ったのは、正直私の不覚でした。上手く言い聞かせるというのは難しいのです。私の力で抑えるという手も、老い先短い私が死ねば役に立ちませんし」

さてどうした物かと悩んでいた時に、ちょうどタイミング良くあの冒険者達がヴァルターとカールに接触して来たそうだ。

「ブロワ辺境伯の手の者達です」

「知っていたか」

「ええ、彼らは苦労しているようですね。反乱計画に親身で協力していたら話してくれましたよ」

「……」

クラウスは、包み隠さず真実を話しているようだ。

貴族になれると増長したヴァルターとカールを利用しようと接触した彼らに自分も協力し、その過程で上手く情報を引き出した。

反乱に参加した連中を見ると、若い者が多い。

老練なクラウスからすれば、簡単に情報を引き出せるカモに見えたのであろう。

「そのまま通報すれば、手柄だったろうがな。手遅れじゃないかな？　老練な名主殿」

「そうは思ったのですが、この狭い領地で二十名を超える反乱分子の捕り物です。犠牲は大きかろうと」

成否以前にあとが無い連中なので、死に物狂いで抵抗してくるはず。

そこで、反乱を起こしてしまう事にしたそうだ。

「参加人数的に、領内の完全制圧は不可能です。彼らも、ブライヒレーダー辺境伯様の後背を混乱させ、バウマイスター伯爵様の出兵を抑えるための工作なので、そこまでは望みません」

そこで、領主の館の占拠に人質を取っての強訴という建て前にして、彼らと共に作戦を実行したそうだ。

「クラウスは、俺達が反乱を鎮圧してしまうのを確信していたのか……」

「それが、高位の魔法使い様でございましょう」

屋敷に集まった反乱分子を、俺達が一網打尽にするはず。

しかも、お互いに犠牲者もなく。

クラウスは、そこまで読んで反乱を起こしたようだ。

「ヴァルターとカールも巻き込んでか？」

「一度、手痛いお灸を据えないと駄目でしょうから。あとは、二度と二人を利用させないためです」

俺の異母兄である以上は、またいつか利用しようとする貴族が出て来る可能性もある。

そこで、二度と彼らが利用されないようにする必要があるとクラウスは考えたらしい。

「一度失敗して、辛うじて首が繋がっている状態で監視もある。確かに、余計な事を考える貴族もいないか……。ヴェル、こちらにも問題があって、受け入れざるを得ない」

ヘルマン兄さんにとって一番の問題は、名主やその後継者が一気に消える事による人材の枯渇であった。

「本村落の名主が消えるからな。次の手配が必要だ」

クラウスをそのままというわけにはいかず、かと言っていきなり余所者でも問題はあり、異母妹であるアグネスの夫ノルベルトに本村落の名主を、同じくコローナの夫ライナーに商店を任せる人事を行いたいのだそうだ。

「彼らは、クラウスの反乱に反対して縁切りまでされている。領民達からの反発も小さいと思う」

「それで、ヴァルターとカールは？」

完全なスタンドプレーではあったが、確かにクラウスの思惑通りに事を進めた結果、バウマイスター騎士爵領の人員に犠牲者は出なかった。

もしクラウスが、反乱が起きそうであるとヘルマン兄さんに通報し、兵を集めて取り押さえようとすると、捨て駒である彼らが必死に抵抗し大きな犠牲が出ていた可能性があるのだ。

独断専行なので、クラウスに功績があったと認めるわけにはいかない。

だが、そのまま縛り首にすれば良い案件でもなくなっていた。

表面上はクラウスが責任を取って引退する以上、ヴァルターとカ

ールを縛り首にするわけにもいかなかったのだ。

「名主にはしてやるさ」

クラウスは強制引退で、ヴァルターとカールに新村落の開拓を任せる。

だが、ヘルマン兄さんからの援助はかなりカットするし、俺やカタリーナによる手伝いも無しだ。

一から自分達だけで田畑を切り開き、村落を作っていく。

領主からの援助や待遇も、次世代にならないと元に戻さない。

俺の兄達だから辛うじて処刑は避けられたが、死ぬまで新村落の開墾に付きっきりとなる。

監視の目もあるので、これ以降は余計な野心など考えないであろうという、ヘルマン兄さんの考えだ。

しかも、この新村落の人口は少ない。

反乱に参加した者とその家族だけで、新しい移民を募集しても良いがヘルマン兄さんは手を貸さない。

外にツテが無いので、代が代わるまでほぼ彼らだけで新村落の開発を行うそうだ。

ある種の流刑にも近い処罰であった。

「ヴェンデリンは、どう思う？」

「そんなところでしょうかね？」

やはり処刑は躊躇われるし、かと言って無罪放免でそのままでは

他の領民達に示しがつかない。
落とし所としては良いと思うのだが、クラウスは特に表情を変えるでもなく普通に聞いている。
まるで、こちらの考えを予想しているかのようだ。
「クラウスとしては、この条件で良いのか？」
「はい。それは勿論」
バカな事を考えた孫にお灸を据えつつ、百％自力開発で困難ながらも新村落の名主には落ち着いた。
他の村落の手前、代が代わるまでは待遇は低いが、ヴァルターとカールの次の代には解除される。
本村落の名主も、孫娘の婿が継ぐ事が出来た。
一族縛り首に比べればマシかもしれない。
クラウスの真の目的とは、バカな事を考えた孫二人の助命だったのであろうから。
「では、後の事はヘルマン兄さんに任せます」
「捕まえた反乱分子達はどうする？」
「使い道があるので、引き取ります」
「助かる。あんな連中を管理して食わせる人手と食費がなぁ……」
軍事的な訓練を受けている成人男性が二十名以上だ。

発展してるとはいえ、今のバウマイスター騎士爵領では持て余す存在であろう。
かと言って全員を処刑するのも、領民達に強いショックをもたらす事となる。

「バウマイスター伯爵様は、あの連中を使ってブロワ辺境伯に反撃をいたしますので？」

「人が忙しいのに、下らない事で足を引っ張ってくれたからな」

「左様でございますか。それでしたら、私も何かお手伝いをいたしましょうか？」

「一度、お前の頭の中を覗いてみたいな」

「大した物はありませんよ。今回の事件で、私も強制隠居で暇が出来まして。ただ、この年齢でヴァルターとカールの手伝いで開墾も厳しい年齢になりました。幸いにして、私には多少人様よりも波乱含みな人生経験がございまして。それを生かして、バウマイスター伯爵様に少々のご褒美でもいただけたらなと。自業自得とはいえ、ヴァルターとカールに祖父として多少の援助も必要でありましょうし」

「そうだな」

他の領民達からの目もあるので、ヴァルターとカールと反乱に参加した若い領民達は、新しい村落建設予定地で自分で家を建て、田畑を耕す必要がある。
なので、クラウスとしては資金面で手助けをしたいのであろう。

「仕送りのお金を稼ぐアルバイトにございます」

ハインツのように相談役にすると問題になるので、俺が私的にアルバイト代を出す相談役。

位置的には、そんなところであろうか？

「本当に役に立つならボーナスも出すが、立たないなら飯しか出さない」

「引退したジジイですので、食の保障があれば結構にございます」

こうして、なぜか反乱の首謀者であるクラウスを臨時雇用する羽目になったのだが、どこか彼の思惑通りに動いているような気がしてしまうのであった。

第六十三話　謀臣って、こういう人を指すのかもしれない。

「うーーーん」

バウマイスター騎士爵領で発生した反乱は、無事に犠牲者ゼロで鎮圧されていた。

首謀者であったクラウスには上手く縛り首をかわされてしまった挙句、彼の思惑通りの結果になってしまったようだが、どこかホッとしている部分もあるのかもしれない。

やはり、人の処刑シーンなど見たくは無いのが真情だからだ。

「ヴェルは、クラウスさんに複雑な感情を抱いているわけね」

無事に反乱鎮圧も終わり、事後処理にみんな奮闘していたが、俺は一人領地外れの草原で寝転がって空を見ていた。

護衛はイーナ一人であったが、あまり役には立たないと思う。

なぜなら、俺が膝枕を要求していたので動けないからだ。

ここには野生動物も滅多に来ないのであまり問題は無いし、こういう身分になったので、少し離れた位置で兵士が数名俺の護衛をしている。

偉くなるというのは、なかなかに大変なようだ。

「複雑というか、ギャフンと言わせたい」

「ギャフンって……。子供じゃないんだから」

ヘルマン兄さん達の救助目的で館の食堂に突入した後、俺はクラウスに『そんなに縛り首は嫌か？』と尋ねた。
元日本人の感覚で心から縛り首など望んでもいなかったが、それを言えばクラウスが動揺するかと思ったのだ。
結果は見事に、ハッタリである事を見抜かれていたようであったが。

「クラウスさんくらいになると、感情を隠すくらい造作も無いはずだから、難しいと思うわ」

それでも、心の中では悩み、驚き、腹が立つ事もあるはずだと。

「あの孫達のバカさ加減に、溜息をついているとは思うわ」

今は軟禁状態であったが、もう明日からは新しい村落建設予定地に送られる予定だ。
人数は、ヴァルターとカールに反乱に参加した若い領民とその妻と子達で合計二十二名。

まずは住む家を自分達で建てて、それから自力で開墾をするそうだ。
以前の畑と家は没収され、新しい家を立てる資材はヘルマン兄さんが準備する。
前の家の中にあった家具や服に現金などの所有は認められたが、理由はそれがないと食料が買えないからである。
あとは人頭税もあるし、栽培した作物にも税がかかるが、これは三年間の免除が決まっている。

ただ、三年で税を払っても自分達が食える分の畑を作らないと飢え死になので、クラウスは仕送りのためにアルバイトをするわけだ。
何しろ彼も、元の家と畑を没収されているのだから。

金銭などの財産であったが、クラウスに聞くとそれほど多くもなかった。
普通の名主の平均くらいだ。

もし、父の代から税でもチョロまかしていたら縛り首再びという可能性もあったのだがそれは無さそうだ。
少し残念でもあり、クラウスなのでそんなヘマはしないとも俺は思っていた。

俺に付いて来るクラウスもあまり現金などは所持しておらず、少しの着替えと身の周りの物を入れたカバン一つだけであった。

『六十歳を超えて、外の世界で働く。なかなかにワクワクしますね』

加えて、今の情況を心から楽しんでいるのだから、クラウスの肝は相当に大きいのであろう。

「クラウスさんは、目的を達したわけね」

あのままの状態で放置しておくと、クラウスの死後にヴァルターとカールが暴走する可能性が否定できなかったので、彼らにお灸を据え、殺されずに済むように手を打った。

それが、あの反乱の目的だったのであろう。
一からの開墾で苦労するヴァルターとカールはご愁傷様であったが、自業自得なので仕方が無いと言えた。

「困難な開発に、監視の目もあるか」

必要な物は商店で買えるが、新しく商店を経営するライナーには安く売るのも禁止だが、高く売るのも禁止だとヘルマン兄さんが命令を下している。

あと、二十四時間交代で監視の人員も付けるそうだ。

『次に何か企んだら、俺が責任を持って始末する。ヴェルに二度も鎮圧など任せられん。ここは、俺の領地だからな』

というやり取りがあり、彼らは大人しく処罰を受け入れたようだ。縛り首でないので甘いという意見も出そうだが、何も無い草原を死ぬまで自力のみで開墾なので、ある意味縛り首よりも厳しい罰であろう。

逃走も不可能である。

監視はあるし、いくら開発が始まったとはいえ彼らが開墾をする草原の周囲にはまだ凶暴な野生動物も多いからだ。

弓くらいしか使えないヴァルターとカールでは、逃走は不可能であろう。

「そちらはヘルマン兄さんに任せて、俺達は戦争だな」

「ヴェルも、貴族らしくなったわね」

「イーナは、奥さんらしくなったか？」

「自信が無い……」

「全員が同じようでもつまらないから、それは良いんじゃないの？
俺は、イーナとは普通に話せるからありがたいし」

エリーゼだと少し畏まっているし、ルイーゼは面白いけど変な時があるし、ヴェルマはたまに毒舌だし、カタリーナは何というかズレている時がある。

なので、普通に話せるイーナという存在を俺は貴重に思っているのだ。

「そういうわけだから、今は普通の婚約者のように膝枕を続行で」

「そうね。私の足って硬くない？」

「そうか？　別に硬くないぞ」

「それは良かったわ」

俺は、イーナの膝枕で一時間ほど浅い眠りに入るのであった。

「バウマイスター伯爵様、お迎えに参りました」

「ご苦労様。やはり、こういう時には小型の魔導飛行船は便利だな」

反乱鎮圧とその後処理が終わった翌日、俺達を迎えに一隻の小型魔導飛行船が到着していた。

この大切な時期に足を引っ張ってくれた、東部を纏めるブロワ辺境伯に一撃かます。

そのくらいはしておかないとまた何か企む可能性もあり、加えて南部との境に大規模な出兵もしているとかで、ブライヒレーダー辺境伯からも参軍要請が出ている。

寄り親の要請はなるべく聞き入れ、その代わりにそれに応じた便宜を図って貰うのが正しい関係でもある。

仕返しの必要もあるので、俺は軍の移動に小型魔導飛行船を、保有しているアームストロング導師の次男ヘンリックからレンタルして運んで貰う事になった。

一時的に、傭船契約を結んだのだ。

「稼ぎ時なのに済まんな」

「いえいえ、利益は十分に出ていますから。それで、人数は予定通りで？」

参加者は、俺達にブランタークさん、あとはバウマイスター伯爵家諸侯軍にそれを率いているモーリッツという布陣になっている。

「クソっ！　俺も兵を出したかった！」

ヘルマン兄さんも少数でも兵を出したかったようだが、犠牲は出なかったが内乱が終結したばかりなので忙しく、悔しそうな表情で不参加を俺に伝えていた。

「唯一参加しているのはクラウスですね」

「あの野郎、全部計算しているのか？」

「俺も最近良くわかりません」

あとは、名主を引退してフリーターになったクラウスに、反乱に失敗して捕らえられたブロワ側の兵士達の姿もあった。

「あんなのを乗せて大丈夫ですか？」

「クラウスが見事に説得しやがったからな」

「あの人、反乱の首謀者ですよね？」

顔を引き攣らせる父親には似ずに常識人なヘンリックであったが、実際にクラウスがあの連中を寝返らせてしまったのは事実であった。

『お館様は、彼らを自分の駒としてお使いになるつもりですか？』

クラウスの臨時雇用が決まった直後、彼はすぐに捕らえられた反乱分子達の使い道を聞いてくる。

『そのつもりだが、まずはブライヒレーダー辺境伯に聞いてみようかなと』

『間違いなく、ブライヒレーダー辺境伯様は何も仰らずに許可を出すと思います。なぜなら、彼らを捕らえたのはお館様です。彼らを

どうにかする権利は、お館様にしかございませんので』

いくら寄り親と寄り子の関係でも、ブライヒレーダー辺境伯家とバウマイスター伯爵家とは別の家。

なので、捕虜の扱いや戦利品について余計な口は挟まないのだとクラウスは説明していた。

『なので、説得は早めに行うのが宜しいかと。私が、説得してみましょう』

『クラウスがか？　裏切り者扱いで大ブーイングになりそうだな』

『そこを逆転させるのが、年寄りの知恵でして』

許可を出して、一緒に彼らが捕らえられている空き家へと向かうと、ドアを開けるなり彼らから予想通りに大ブーイングが発生する。

『裏切り者！』

『俺達を売りやがったな！』

首謀者なのに、なぜか俺と一緒にいるクラウス。

彼らの怒りは当然で、俺も彼らを応援したくなるほどだ。

『誤解の無きように言っておきますが、私は全力で反乱に協力いたしましたよ』

クラウスは、だからこそあれほど鮮やかに領主の館を落せたのだと語っていた。

ただ、運が悪い事に鎮圧に来た相手が悪かったのだと。

というか、俺の目の前で全力で反乱に参加したと平気で言えるクラウスは良い性格をしていると思う。

『バウマイスター伯爵様、ブライヒレーダー辺境伯様お抱えのブランターク様、西部一と評判の暴風様と。三人でエリアスタンで制圧されてしまいますと……。私は誓って内通などしておりませんし、そんな物もバウマイスター伯爵様には必要ないかと思います』

クラウスの説明に、次第にブーイングの声は納まっていた。

『それで、捕らえられている俺達に何の用事だ?』

彼らのリーダーをしている、三十代前後の男性がクラウスに質問をする。

『それはですね。トーマス殿。みなさんの仕官の口利きです』

『縛り首になる俺達がか? 何の冗談だ?』

『いえ、冗談ではありませんよ』

更に、クラウスの説明は続く。

『バウマイスター伯爵家は、ヴェンデリン様が個人の才覚で切り開いた御家です。素晴らしい事ではありますが、やはり人手は足りません。普通であれば、トーマス殿の罪は縛り首が妥当。ですが、ここで無闇に人を殺してしまうのは勿体無い』

『人なら余っているだろう。王都のスラムにでも行け』

『そういう開拓民ではなくて、バウマイスター伯爵家で武官なり文官が出来る教育された人が必要なのですよ。トーマス殿のように、ブロワ辺境伯領内で訓練や教育を受けた人達がね』

クラウスの発言に、トーマス以下全員が視線を逸らしていた。

彼らは、ブロワ辺境伯家側から処刑されても出自を喋るなと言われているようだ。

『ここに至って、出自を隠される必要もないかと。以前に私に話してくれたではないですか』

クラウスが老練なので、つい話をしてしまったのであろう。

もしかすると、自分の娘を妾として差し出した話や、孫達の不遇話などで、上手く同情心を誘って話を聞き出したのかもしれない。

やはり、こいつはとんでもないジジイだ。

『ご実家や家族に迷惑をかけたくない。そのお気持ちは良くわかります。ですが、トーマス殿を使い捨てにしたのは誰です？　こんな敵地の真ん中で、今出兵している諸侯軍に混ぜてもらえるでもなく、捨て駒扱いで後方かく乱任務をさせられた。私、あなた方と行動を共にしていて思いましたが、ツテさえあればちゃんと仕官できる能力はあると思いますよ』

『そんなに世の中は甘くない……』

トーマスという名のリーダーは、ボツボツと話を始める。

零細陪臣家の三男以下など、捨て駒でも使って貰えるだけマシなのだと。

それこそ天才レベルの人なら上からの救いもあるが、自分達くら

いならそんな物もない。
長男や、コネがある大身の陪臣の子が拾われるのだと。

『そんな連中よりも、俺達の方がマシだろうな。だが、よほどのバカでも無い限りはコネが優先される』

領内の統治がある程度システム化されているので、所謂『ポッポ』レベルのバカでもないと何とかなってしまう。
だから、コネが何よりも最優先されるのだと。

『バウマイスター伯爵家による、開発特需の話は知っている。だが、ブロワ辺境伯家を始めとする東部貴族は、ブライヒレーダー辺境伯家に恨まれている。俺達が仕官を求めても、出入り口にも辿り着かないで却下されるんだ』

両家の仲の悪さは本物だ。
しかも、この二代ほどで更に増幅されている。
ブライヒレーダー辺境伯は、東部に一切の利権を回していないのであろう。
人材の登用も、東部出身者は完全にカットしているようである。

『ならば、これはチャンスですな』

『チャンスだと！　あんた、何を考えて！』

『出会いは反乱鎮圧なので最悪ですが、これもコネといえばコネでしょう。伯爵家の当主様と直接に顔を合わせました』

クラウスのあまりの発言に、彼以外の全員が絶句してしまう。
勿論、俺も絶句していた。

『今はマイナスですが、ここで活躍をしてやり直すのはいかがかと。あなた方はお若い。まだ十分にやり直せると思いますが』

『しかし……。そのやり直しとは……』

彼らを使う一番のネックがそれであった。

捨て駒にされたとはいえ、自分の実家や元主家に逆らう事になるからで、もしかすると戦場で親兄弟と再会する可能性だってあるのだから。

なので俺も、全員を引き抜けるとは思っていなかった。

『しかしながら、もう向こうはあなた方を家族とは思っていませんでしょう?』

『……』

『沈黙は、肯定と受け取りますよ』

彼らは使い捨ての駒で、ブロワ家側との関与を喋るなと言われている。

なので、今の時点で実家に戻っても居場所などないのだ。

『そんな人は、うちにはいません』と。

ブライヒレーダー辺境伯が引き取らないとクラウスが断言するのも、そういう事情を察したからのようだ。

『ブロワ家側は、あなた方を交渉の弱点にしたくありません』

ブロワ辺境伯家側が仕掛けた戦争であったが、当然どちらかの館が落ちるまで続くわけがない。
今のところは上手く占拠している利権の確保を狙って、水面下で交渉が始まるはずだ。

その交渉で、彼らは邪魔者でしかない。
いっそ全滅していて欲しいから、あんな無茶な作戦をさせたのだ。

『ご実家は、あなた方を生贄として差し出して何らかの利益を得ているはずです。その代わりに、交渉の席であなた方の身柄の話が出ても……』

うちには、そんな子供は弟はいません。
そういう風に答えるであろうと。

『悔しいと思いませんか？』

『……』

『ご家族との関係は確かに大切な物です。ですが、それはお互いを思い遣っての事です。一方が一方を利用するだけの関係など、歪な上に、家族の縁を利用した詐欺にも等しい』

クラウスの厳しい口調に、トーマス達は肩を落として落ち込んでいた。

『ですから、ここで再起いたしましょう。どうせ、反乱に失敗して一度亡くしたはずの命です。バウマイスター伯爵家に仕官して生まれ変わるのも手かと』

『生まれ変わる……』

クラウスの真摯な説得を、彼らは神妙な表情で聞いていた。

俺は、クラウスの詐欺師としての才能を新たに発見したと思っていたが。

『如何でしょうか？』

『俺はやり直す！　戦功を挙げて仕官して、結婚して家を持つ！』

『俺もやるぞ！　もう実家への義理は果たした！』

『俺も！』

暫くすると次々に手が上がり、最後に残されたトーマスがクラウスに質問をする。

『俺はもう三十二歳なんだ。やり直せるかな？』

『ええ。私など、もう六十歳を超えておりますよ。それでも動けるのですから、トーマス殿はまだ三十年以上も時間が残っておりますとも』

『俺もやり直す！　実家のクソ兄貴に目に物見せてくれる！』

クラウスの説得により、全員がブロワ辺境伯軍との戦いに参加する事を宣言するのであった。

「何とも、凄い話ですね」

「クラウスは、年の功かね？」

「何にしても、交渉と説得の能力が凄いですね。商人としては羨ましい限りです。それで、クラウス殿は？」

「こちらについた連中の相談」

いきなりモーリッツが指揮する諸侯軍に混ぜると問題が噴出するので、あのトーマスというリーダーを隊長にして他の部隊編成なども任せる事にしたのだ。

そしてクラウスは、彼らと俺との間を繋ぐような役割りに落ち着いていた。

適任なのはわかるのだが、その見事な填まり具合に俺の心情は少し複雑だ。

「大丈夫ですか？」

「また牙を剥いたら、さすがに縛り首だしな。あのクラウスが、そんなバカな事をするはずがない」

今は、彼らに新しい苗字などを考えてやっているらしい。

もう実家は捨てるので、新しい姓を名乗って戦功を挙げるのだそうだ。

「親切に助言しているように見えて、実はあの連中の退路を断っていますよね？」

「このままだと縛り首だったから、一応親切なのではないかと……（何で、俺がクラウスの行動を庇うかね？）」

さすがに、仕官を断った連中を生かしておくのも難しい。

王都に押し付けるわけにもいかず、犯罪奴隷のような扱いで使うにしても管理が面倒なので、間違いなく処刑すべきという意見が出てしまうからだ。

「私は、みなさんを迅速に運ぶのが仕事なので……。ええ、ただの傭船の船長ですとも……」

若干引き気味のヘンリックを他所に、クラウスはフリーダムに動いていた。

「みなさん、独身でしたよね？」

「嫁や子供がいると、実家の迷惑になるからな」

「でしたら、ここは踏ん張りどころですよ」

「というと？」

「実は今回の出兵で延期になってしまいましたが、ブライヒレーダー辺境伯様が大規模なお見合い会を企画していまして」

確かに、それは計画している。

最初は俺に側室を押し込む会だったそうだが、俺が断るとエルやローデリヒに嫁を紹介する会に変化した。

だが、二人だけでは希望者達に不満が出ると、うちで独身の家臣なら全員が出席できる大規模な会に更に進化していたのだ。

「功績をあげて正式に仕官が叶えば、みなさんにも参加する権利が出るとお館様が」

「おおっーーー！」

「結婚できるぞ！」

「気合は入って来た！　親父でも兄貴でも捕らえられそう！」

クラウスから出たお見合いの会を聞き、全員が異常なまでにテンションを上げているようだ。

「あの……。本当に、そのような許可を？」

「クラウスが言うには、若い独身の男には一番効果があると」

「なるほど。深いですね」

バウマイスター騎士爵位領を出て丸一日、俺達を乗せた魔導飛行船はブライヒレーダー辺境伯軍が駐屯する境界線近くの草原に到着するのであった。

第六十四話　紛争以上？　戦争未満？

「事前に連絡は受けましたが、早かったですね」

ブライヒレーダー辺境伯軍が駐屯する草原に到着し、俺が先に『飛翔』の魔法で船から下に降りると、ブライヒレーダー辺境伯とその一行が出迎えてくれた。

新米でも伯爵は伯爵なので、俺は気を使われる存在なわけだ。

「反乱は一日で平定しましたので。ブランタークさんの協力に感謝です」

「彼は、あなたを守る護衛ですから。気にしないで使ってください」

俺に万が一の事があると未開地開発が頓挫しかねないので、ブライヒレーダー辺境伯は、虎の子のブランタークさんを俺に付けている。

自身の護衛は、他に雇っている複数の魔法使い達に任せているようだ。

「それで、反乱分子達ですが……」

俺は、反乱の経緯や、その後捕らえられた彼らをクラウスが上手く説得してこちらに仕官させた話などをする。

「やはり、ブロワ家側の後方かく乱要員ですか」

「いえ、要員というか捨て駒扱いでした」

「あそこは経済が停滞していますからね。余剰人員の始末も兼ねてですか……」

未開地開発で、人、物、金の動きが封じられているので、下級の陪臣家などにいる三男以下の男子などの行き先が余計に無くなっているらしい。

余っている人間なので、使い捨てでも俺の動きを封じられれば儲けだと思ったのであろう。

「みんな追い出して冒険者というわけにもいきませんし。この問題は、我が家にもありましてね。バウマイスター伯爵には感謝しているんです」

ヘルムート王国のみならず、今の時点で人手が足りない貴族家などうち以外ではほぼ存在しないそうだ。

稀に、一から荒地を開墾して貴族を目指しているような人もいるのだが、その人が貴族になれるかどうかは未知数なので仕官希望者達には人気が無いし、求人情報誌があるわけでもないので知っている人もほとんどいない。

結果、多くの職にあぶれる陪臣の子弟が発生するわけだ。

「経済的には、相当に追い詰められているようですね」

二人で話をしている内にエル達も飛行船から降りて来たので、すぐに本陣に移って話を続ける。

「現在、我々が布陣しているのは東部と南部領域に跨るエチャゴ草

原の境界線近くです。兵力は、七家混合で四千人ほど。もう一週間もすると追加で援軍も来ますが、それで合計六千人ほどですかね」

数が少ないような気もするが、軍勢を整えて配置するだけで金が飛んでいくので仕方が無い。

兵士達への手当てに、彼らの食事代などはブライヒレーダー辺境伯以下諸侯軍を出した貴族家の負担になるからだ。

「それで、ブロワ家側は？」

「五千人ほどですね。そんなわけで、睨み合いですよ」

決戦など双方が望んでいないし、すれば被害が甚大になる。

なので、自然とこうやって睨み合いになるようだ。

「あとは、別に戦場もあるんですよ」

続けて、ブライヒレーダー辺境伯は境界線一帯の詳細な地図を机の上に広げていた。

「ここから北西に約三百キロ。ここでは、ブロワ家の寄り子であるヘンケル準男爵家と、うちの寄り子であるランセル準男爵家が銅山を巡って睨み合っています」

そもそもの事の起こりは、このような境界境における利権争いの再発から来ているそうだ。

「両家の境界線上にある銅山は、素晴らしい産出量を誇っているそうです。当然、過去に取り合いになりまして……」

過去に何度も衝突があったそうだが、今は取りあえずは折半という形になっているらしい。

「それが突然……」

ブロワ家側のヘンケル準男爵家が軍勢を出し、ランセル準男爵家側の鉱山夫や警備隊を銅山から追放してしまったそうだ。

そして今は、銅山を占拠するヘンケル準男爵家側の軍勢と、奪還を目指して軍を出したランセル準男爵家側で睨み合いが続いていた。

「幸いにして、死人は出ていませんけど」

争いなのに死人が出なくて幸いだと言うのは、下手に人死にが出ると争いの収拾が着け難くなるからだそうだ。

「どちらかが永遠に独占というのも難しいですから」

たまに争ってガス抜きをしつつ、それなりの分け方で双方が渋々納得する。

これが、この時代の利権争いの正体であった。

「そういうわけですから、武器は訓練用の物でお願いします」

何と、この争いに参加している全ての兵達は、両軍共に装備は刃を丸めた訓練用を使用するらしい。

まさか、死人をなるべく出さないために、ここまで徹底しているとは思わなかった。

「えっ？　訓練用ですか？」

「大丈夫です。ヘンリック殿の船に積んであるそうです」

横にいるモーリッツが、ヘンリックの船に人数分が積んであったと報告していた。

何でも、トリスタンが気を利かせて積んでくれたらしい。

「トリスタン様はエドガー軍務卿のご子息なので、そういう事情にも詳しいのです」

「助かったが、あの連中の分が無いな」

「二十名ちょっと分なら、予備を売りますけど」

「お願いします」

新規仕官組の武器も確保できたので、またブライヒレーダー辺境伯の話は続く。

「勿論、刃が丸めてあっても鈍器のような物です。当たり所が悪くて死ぬ人もいます。その数は大分減りますけど」

相手を捕らえて数を減らし、後で和解金を交渉して取るそうだ。

中世欧州の貴族のように、身代金で解決を図るらしい。

中世の騎士と傭兵主体の戦場だと、戦いをしたのに死者が両軍で一名しかいなかったとか普通にあったらしい。

殺すよりも、捕らえて身代金を要求する方が金になるからだ。

王国側も、なるべく死者が出ない戦いを裏で推奨しているそうだ。

「こんな感じで、境界境で揉め事を抱えている貴族家は双方で八十家を超えます。今回は、ブロワ側の貴族家が突然軍を繰り出してう

ちの統括下にある貴族家の利権を分捕って占拠し、それを取り戻すべく味方が軍を集めて睨み合いを続けている。こういう軍の動員数が数十から数百の小さな戦場が、四十箇所ほどもあるのです」

確かに、ブライヒレーダー辺境伯が広げる地図には、多数のメモ書きがされていた。

○○騎士爵家の軍勢が、突然共有森林地帯を占拠した○○騎士爵家の軍勢と睨み合いとか、○○準男爵家の軍勢が裁定待ちのために人の出入りが禁止となっている○○河の中洲地帯を勝手に占拠し、紛争相手である○○騎士爵家の軍勢が中州から兵を退けと騒いで睨み合っているとか。

大半は、ブロワ家側の奇襲が想定外であったようで、一方的にブライヒレーダー家側の貴族達が叩き出された後に、軍を集めて自分達の分の利権の奪還を虎視眈々と狙っているようだ。

「衝突した貴族家はあるのですか？」

「いえ、まだです」

ここが、こういう紛争の面倒な部分だ。

最初の銅山などはわからないが、所詮は僅かな広さの領地争いだったり、水源の水をどのくらい引くかの争いだったりするので、本格的に衝突して死傷者が増えると足が出てしまうのだそうだ。

「かと言って、ここで兵を出さないと向こうの実効支配を認める事になりますからね。兵を出さないという選択肢はあり得ないのですよ。貴族の面子から考えて」

前世でも、国家同士で領地争いなどいくらでもあったのでそれは

理解できる。
日本のように『まあまあ』で弱腰だと、相手に付け入られて更に酷い要求を出される事もあるので、軍を出して対峙するのは当然なのであろう。

なるほど、貴族というのは色々と金がかかるらしい。

「このままだと拙いと？」

「何家かは、事前に察知して占拠を防げたそうですが、あとはうちのボロ負けです。裁定に入ると、一方的に不利になります」

いきなり兵を進めたブロワ家側は悪いが、肝心の争っている利権や領地はブロワ家側が実効支配してしまっている。
これでは、裁定で一方的に不利になるのも当然といえた。

「ある程度は、取り戻したいと？」

「ですが、それも難しい」

ブロワ家側の後方には、ご本尊であるブロワ辺境伯軍などが控えている。
同じく後方で控えているブライヒレーダー辺境伯軍が援軍を出すと、それに呼応して軍勢を出すはずなので、今はこうやって睨み合っているしかないそうだ。

「困りました……。このまま裁定に行くと不利になります……」

「それが狙いですか？」

「ええ」

うちの開発利権にあぶれて不満が出ているので、こういう手段で子分達の不満を抑えているのであろう。

あとは、ブロワ辺境伯家が貯め込んでいる金を軍事行動で支出して領内に金を回す。

一種の公共事業的な面もあるのかもしれなかった。

「では、俺が取り戻しましょう」

「頼めますか？」

傭船している小型魔導飛行船で順番に紛争地帯へと飛び、ブロワ家側の貴族の軍勢を倒して捕らえまくる。

途中、ブロワ辺境伯軍側から援軍でも出してくれると更に好都合だ。

捕らえて多額の身代金をふんだくってやれば、ブロワ辺境伯もうちにチョッカイをかけた事を後悔するであろう。

「では、お願いしますね」

ブライヒレーダー辺境伯から地図を貰い、俺達は小型魔導飛行船で貴族の軍勢同士が睨み合っている地点へと急ぎ急行するのであった。

「やっぱり、今回は導師は不参加だな」

「南部と東部の争いで、王宮筆頭魔導師が来て南部に肩入れしたら問題になる」

「それは俺も理解しているけど、導師なら『面白そう』とか言って参加する可能性もありそうだ」

「まさか」

「いえ……。あの父なので可能性はあるかと……」

船上で、そんな話をエルやヘンリックさんとしながら半日。
船は、無事に一箇所目の戦場に辿り着いていた。

ブライヒレーダー辺境伯が最初に説明していた、銅鉱山を巡って対立しているランセル準男爵家領とヘンケル準男爵家との境界線近くである。

確かに、境界線上にある銅山の前では三百名ほどのランセル準男爵家軍が陣を張って銅山を警戒しているようだ。
銅山を良く見ると、ヘンケル準男爵家側の兵士がところどころで歩哨に立っていた。

「ようこそおいでくださいました」

最初は突然の魔導飛行船の来訪に驚く両軍であったが、エルを使者としてランセル準男爵家軍の本陣に送ると、すぐに本人が出迎えてくれる。

ランセル準男爵は、四十歳ほどの普通のおじさんであった。

「ブライヒレーダー辺境伯殿からの援軍とか？」

「はい。早速、銅山を奪還しましょう」

「えっ？　大丈夫ですか？」

銅山の奪還には賛成だが、それで犠牲が大き過ぎるのも勘弁して欲しい。

ランセル準男爵の顔を見ると、すぐにそう考えているのが理解できた。

「要は、お互いに死者がゼロで終われば問題ないですよね？」

「はい。それが一番最良ですから」

ならば、簡単だ。

反乱軍の時と同じように、エリアスタンで麻痺させてから捕らえれば良い。

取りこぼしも、探知を使えば無いはずだ。

「では、まずは協定の締結ですね。ブリュア殿」

「あっ、はい。私、ブライヒレーダー辺境伯様からバウマイスター伯爵様への同道を命じられた、軍監にございます」

とある戦場に、貴族が軍を率いて助太刀に向かうとある問題が発生する。

それは、手柄と戦果の認定とその分け前である。

応援に来て貰って助けても貰えたのに、いざ戦争が終わると援軍

に来た貴族の手柄を奪おうとする貴族も少なくなく、それが原因で発生するトラブルも多かった。

そこで、今回のケースだとブライヒレーダー辺境伯が軍監を派遣して公式に戦果などを認定して記載するのだ。

今回ブライヒレーダー辺境伯から派遣された軍監はブリュア氏といい、五十歳くらいの真面目そうな人であった。

いかにも官僚っぽい人物だ。

あとは、戦果の分け前に関する協定もある。

捕虜や軍勢が所持していた装備品・備品・金品・食料などの権利に。

捕虜本人の身代金などの分配比率などであった。

「全員、痺れさせて動けなくするので、捕縛に協力してください」

「さすがは、竜殺しの英雄殿ですな……」

反乱鎮圧の時と違って広範囲のエリアスタンとなるが、むしろ範囲や対象の選別が無い分、俺からすれば楽な部類に入る仕事であった。

銅鉱山は大きかったが、人がいるエリアは限られる。

俺一人でも、十分にいけるはずだ。

「痺れているヘンケル準男爵家側の兵士の捕縛の手伝いと、捕らえた捕虜の面倒と、再奪取した銅鉱山の守備はお任せします」

「それは勿論」

一つ目はうちの人員だけでやっていると時間がかかるからで、二つ目は身代金の中に捕虜を養った費用が含まれるので、あとで経費を返して貰えれば問題ないそうだ。

三つ目は、ブランタークさんの探知によれば、銅山には三百人ほどのヘンケル準男爵家側の兵士が詰めているらしい。

全員が捕虜になれば、銅山の守備はそう難しい事もないはずであった。

「これを機に、ヘンケル準男爵領の占領とかはしないのですか？」

「いえ。昔からの不文律で、禁忌に近い行為とされています」

最初にヘンケル準男爵家側が侵攻して来た時、その気になれば他のランセル準男爵領の占領も可能であったが、向こうはそれをしなかった。

いや、出来なかったのだそうだ。

「あくまでも、争っているのは銅鉱山の権利だけ。そうしないと、争いにキリが無くなりますので」

互いの領地に入って、領民を殺したり、女性を犯したり、畑を荒らし家を焼いたら、恨みの際限が無くなってしまう。

あくまでも、銅鉱山を巡る争いのみを行う形にする。

他の利権などを争っている貴族家同士も、これは同じなのだそうだ。

「あまり争いが酷いと、王家の介入も予想されますから」

この場合、マシな裁定など期待できないそうだ。

「争いの元になるから銅山を王国が没収とか。昔は、そんな裁定も少なくなかったそうで……」

あくまでも、両家のみで利権だけを争っている。

そういう姿勢を見せて、他勢力の介入を防いでいるのだそうだ。

寄り親や、ブライヒレーダー辺境伯のような地域統括者は、同地域の貴族に手を貸し、手を貸して貰った貴族はその代わりに地域の安定に力を貸す。

昔から、そういう関係になっているらしい。

「では、協定の締結を行います」

結局、銅鉱山の利権にバウマイスター伯爵家は一切関わらない。

その代わりに、戦闘不能にしたヘンケル準男爵家軍の持ち物と捕虜の権利はバウマイスター家側が全て取る。

あとで、預かった捕虜の管理にかかった金額を、ランセル準男爵家がこちらに請求する。

他にも細かな補足などがあったが双方で合意に達したので、ブリュア氏が急ぎ契約用の羊皮紙に記載を行い、俺とランセル準男爵家がサインをする。

この世界では既に紙が庶民にも普及していたが、こういう大切な契約書類などでは今でも羊皮紙を使う事が多かった。

「では、早速に」

ここと同じような状況になっている場所は多く、なるべく早く解

決するために俺達はすぐに作戦を開始する事にする。

「魔法使いはいるのでしょうか？」

「はい。鉱山に攻めて来た時に、火の矢を飛ばしている者が。多分、臨時で雇われた冒険者だと思いますが……」

準男爵家くらいだと、極稀に初級くらいの魔法使いを一人抱えているくらいだそうだ。

ランセル準男爵によると、ヘンケル準男爵が今までに魔法使いを家臣にしたという情報も入っていないそうで、今回の出兵に合わせて臨時で雇ったのではないと語っていた。

「一緒に痺れさせますから意味無いですけど」

これがカタリーナクラスの魔法使いだと、こちらのエリアスタンをレジストして反撃してくる可能性がある。

だが、証言通りだとすれば、そう心配する必要も無さそうだ。

「準備は良いな？」

「はい」

トーマスとモーリッツが指揮しているバウマイスター伯爵家軍に、ランセル準男爵が率いる軍が銅鉱山前に姿を見せると、防衛しているヘンケル準男爵家側の兵士達に緊張が走る。

「（いくぞ！）」

だがその緊張も、直後にエリアスタンによる痺れで途切れてしま

った。
鉱山にいる全員が麻痺して、その場で動けなくなってしまったのだ。

「突入！」

両軍の指揮官による命令が下り、麻痺しているヘンケル準男爵家軍の捕縛と銅鉱山の完全占領が始まる。

「さてと。あとはお任せしますか」

「はい……」

俺の出番はもう終わりだし、ランセル準男爵がわざわざ陣頭に立つ必要も無い。
これ以上の出しゃばりは、部下の仕事を奪う事になるからだ。

そこで、魔法の袋からテーブルや椅子を取り出し、彼やその側近をお茶に誘っていた。
ヴィルマがテーブルや椅子をセットし、エリーゼが取り出したティーセットを使ってお茶を淹れ始める。

ちなみに、エルとイーナとルイーゼは監視役としてモーリッツ達に付いて行った。
万が一にも、麻痺していない兵士に反撃された場合に備えたのだ。

あと、ブランタークさんとカタリーナも椅子に座ってお茶を飲んでいた。
どうせ鉱山に行ってもする事がないし、高位の魔法使いはこういうお茶会に出ると歓迎される。

貴族同士のお茶会というのも、なかなかに面倒なのだ。

エルは家臣として現地に出向き、イーナとルイーゼは婚約者でも身分が低いので遠慮して同じく現場に向かった。

ヴィルマはエドガー軍務卿の養女なので残ってエリーゼの手伝いをしていたし、エリーゼ本人は未来の正妻なので言うまでもなかった。

ランセル準男爵や側近達も、エリーゼが自らお茶を淹れているので恐縮しているくらいだ。

あと、クラウスも何気なくお茶会に参加している。

理由は、こういう貴族同士のお茶会で、俺の方に家臣ぽい人がいなかったからだ。

クラウスは俺が私的に雇っているに過ぎないが、俺の横に居ればそれっぽく見えるのも確かであった。

「バウマイスター伯爵殿の奥方自らとは恐縮です」

「まだ婚約者なのでお気になさらずに」

続けて、アルテリオさんから送られて来たチョコレートやお菓子なども出すと、彼らは興味深そうに口に入れていた。

「噂には聞いていましたが、美味しいお菓子ですな。子供達に少し持ち帰っても宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

お土産用に多めに渡すと、ランセル準男爵は嬉しそうに従兵の少

年に渡していた。

「ところで、突然の占拠だったとかで？」

「ええ。昔からあの鉱山の利権比率では、定期的に争いが起こっていたのですが……」

当然双方の主張は、『あの鉱山はうちの物だ！』である。

ただそんな事は現実的に不可能なので、北側をヘンケル準男爵家側、南側をランセル準男爵側という事にしているらしい。

「それでも、争いが起こるのですか？」

「一種のガス抜きと申しましょうか……」

代替わりなどがあると、新領主の力を見せ付けるのだという理由で、兵を出して睨み合いになるのだそうだ。

「それでも、通告はちゃんとするのですよ」

『この鉱山はうちの物だ！　何日までに兵を出すから首を洗って待っていろ！』と。

半分様式美のような物らしい。

それで双方が兵を出して別の境界線で睨み合い、五名ほど代表者を出して腕比べを行う。

勝った方が、次の出兵までは鉱山で有利な採掘が可能なのだそうだ。

「境界線上に所属が微妙な鉱脈がありましてね。そこの権利を得られるのです」

「完全に練習試合ですね」

「過去には血みどろの戦闘になって、双方合わせて百名以上の犠牲者を出したそうです。なのに、痛み分けで得る物はなく貴重な家臣や領内の若者達が死んだ。こういう形式になったのは、先人の知恵なのでしょう」

せっかくの鉱山も、掘る人が死んでしまえば意味が無いから賢い選択なのかもしれない。

それが、突然の奇襲と鉱山の完全占拠である。

他の貴族家同士も同じようなルールで戦っている場所が多かったそうだがそれが全て破られてしまい、みんな困惑しているとの話であった。

「やはり、ブロワ辺境伯家ですか」

「みたいですね」

それから約二時間後、エル達が戻って来て鉱山にいた全員の捕縛に成功したと伝える。

あとは、長対陣に備えた食料や水、武器や生活用品、恩賞用の宝石や現金など、大量の物資の鹵獲にも成功したようだ。

「ランセル卿。従士長のフリックス殿は、鉱山の守備に入るそうです」

「承知した」

エルの報告に、ランセル準男爵は貴族らしく鷹揚に頷いていた。

「防衛は大丈夫ですね。ヘンケル準男爵家は兵力が……」

「ええ。八割以上は、無効化されましたからね」

三百人の守備兵が篭もる鉱山を落すのに、残存戦力数十人ではどうにもならないはず。

現時点で、ヘンケル準男爵家は敗北したも同然なのだ。

「それと、ヘンケル準男爵が捕えられました」

「あの場に居たのか！」

ランセル準男爵の情報収集によると、ヘンケル準男爵は後方で指揮を執っていて鉱山には居ないとの情報であったらしい。

なので、ヘンケル準男爵本人が捕まったと聞いて驚いているようだ。

「視察にでも来ていたのでしょうか？」

「そんなところでしょう。バウマイスター伯爵殿としては、身代金が増えて結構だと思いますよ」

とりあえずは成功したが、まだ先は長い。

ブライヒレーダー辺境伯から貰った地図によると、ここと同じような紛争地域はまだ何十箇所もあるからだ。

あとは、ブロワ辺境伯本軍から援軍が送られる可能性もある。

ブライヒレーダー辺境伯本軍と睨み合いとはいえ、他から援軍を送る可能性もあるのだ。

もしこれが来たら、その軍勢の相手もする必要があった。

「ランセル準男爵殿、私は次の戦場へと向かいます。それで、守備の方は大丈夫でしょうか？」

「はい。もしブロワ辺境伯軍が援軍を送って鉱山の再奪取を図ったとしても、千人以上はいないと難しいので」

攻撃側は、守備側の三倍以上の兵力が必要だという法則は、この世界にも存在しているようだ。

それとブロワ辺境伯軍側も、この鉱山を落すのに多大な犠牲を出しては意味が無いのだと。

「ヘンケル準男爵家も、残存戦力を考えると治安維持で精一杯でしょう。跡取り息子が残っているそうですが、領内の統治で大忙しでしょうし」

鉱山で捕らえられた中には、ヘンケル準男爵領の統治を支える家臣達も含まれていたらしい。

当然、人手不足に陥っているわけだ。

あと、一般兵士の大半は徴兵された領内の農民達などである。

彼らの不在で、ヘンケル準男爵領の生産力や税収が落ちる可能性も高い。

まさに、踏んだり蹴ったりであろう。

「このまま裁定が下るまでは、鉱山を死守します」

「では、捕虜の管理をよろしくお願いします」

「任せてください」

ランセル準男爵に捕虜の管理を任せると、今度は次の紛争現場へと移動を開始する。
数時間後、俺達は魔導飛行船の上から河の中州を占拠する数十名の軍勢と、それらと河岸から睨み合っているほぼ同数の軍勢を発見していた。

「ええと、中州に軍を置いているイェーリング卿がブロワ家側で、南方の河岸で牽制しているのがお味方のベッカー卿です」

軍監として同行しているブリュア氏は普段は紋章官をしているそうで、この南部の零細貴族の当主や子息達に、主だった家臣などの顔と名前、その経歴などを全て記憶しているそうだ

何しろ、この国の貴族は多い。
そこで、大物貴族家は紋章官を必ず抱えていて、彼らは主人が初見の貴族に会う前には必ず情報をレクチャーするのだそうだ。

今回彼が軍監になったのも、俺が多くの貴族を知らないのでそれを補うためでもあったようだ。

「共に騎士爵を持つ、ささやかな領地を経営する貴族様です」

零細とか貧乏とか直接的には言わず、ささやかという部分が洗練された大物貴族家の紋章官らしかった。

紋章官という役職名で呼ばれるのは、昔は戦場で敵貴族の武具に記された紋章から、その人物を特定する仕事をしていたからなのだそうだ。
今は戦争が無いので、同国に多数存在している味方貴族やその家

族などの情報を集め、主君に必要に応じてレクチャーする。
数千から数万の貴族に関する情報を記憶するので、家には代々記憶方法に関する秘伝が伝わっているらしい。

物語法とか、頭文字法とか、語呂合わせとかが秘伝なのであろうか？
昔から物覚えは普通な俺からすれば、大変に羨ましい能力ではある。

「ここも睨み合いか……」

両軍が睨み合っているのは、中州の所有権で揉めているからしい。
昔は河を挟んで領地が分かれていたが、ある日洪水になって急に中州が出来た。
当然、共に領有権を主張して揉めたそうだ。

「農地とかにしても、実入りが少なそうな……」

エルは、数十名の軍勢で陣を敷くと余剰スペースがなくなる中州を見て溜息をついていた。

「とはいえ、それを主張せずにいられないのが貴族様かと」

領地を持つ貴族が、『どうぞどうぞ』などと言うのは論外だそうで、だが争ってもそう利益が出るはずもなく、今までは共に中州には立ち入り禁止にしていたそうだ。

「ですが、数年前から揉めていましてね」

農地転用とかではなく、その中州で漁をすると魚が多く獲れるそうで、勝手に入った双方の領民達の間で諍いが発生していたらしい。

「それ以降、夜中に勝手に中洲に入って魚を獲った、獲らないだので、喧嘩レベルの争いが絶えないそうです」

俺らからすると『この程度の事で……』なのだが、実際にそこで生活している領民達からすれば、生活が豊かになるかならないかの瀬戸際なのだ。

双方の領主達も、プライドもあって兵を出さずにはいられなかったのであろう。

「ただ、中州の占拠はやり過ぎです」

ブリュア氏の一言に尽きるが、こんなところまで占拠させてブロワ辺境伯は何を考えているのであろうか？

「とっとと済ませますか……」

手順は、先ほどと変わらない。

エリアスタンで麻痺させてから、捕虜にして中州を味方のベッカー卿の軍勢に占拠させるだけだ。

「今度は、私がやりますわ」

今度は中州で、銅鉱山ほど広くは無い。

なので、カタリーナに任せる事にする。

彼女が魔法を発動させると、中州にいたイェーリング卿側の軍勢が倒れて動かなくなり、一時間としない内に全員が捕縛されていた。

「大変に助かりました」

ベッカー卿からお礼を言われ、占領地と捕虜の管理を任せて次のポイントへと向かう。

同じ作業なのであとは省略するが、俺、カタリーナ、ブランタークさんで順番に麻痺させ、現地の味方と一緒に捕縛する作業の繰り返しだ。

「出たな！　竜殺しの英雄め！　我こそは、『火壁』と呼ばれた……あべし！」

たまに、エリアスタンをレジストして向かって来る魔法使いもいた。

だが、そういう輩もすぐにノックアウトされて捕虜の仲間入りとなる。

「名乗りくらい聞いてあげたらいかがですか？」

「時間の無駄」

『火壁』を名乗る魔法使いは、初級と中級の間くらいの魔力しか持っていない。

もし名乗りをあげてから対戦しても、一分と保たなかったであろう。

彼は、スタンウィップと名付けた電気の鞭魔法に絡め獲られ、すぐに意識を失ってしまう。

「一流なら、名乗っている間に倒されたりとかしないからな」

気絶してモーリッツ達に縛られている『火壁』を見ながら、ブランタークさんも辛辣な意見を述べていた。

「随分と、魔法使いの数が少ないですわね」

カタリーナは、貴族側が雇っている魔法使いの数が少ないと思っているようだ。

あとは、レベルも低いと。

「中級の魔法使いなんて、そう簡単に雇えないからな」

零細貴族同士の争いに、短期で雇われてるような中級魔法使いはほぼ皆無だそうだ。

「冒険者稼業で荒稼ぎか、大物貴族に雇われているから」

あとは、レンブラント男爵のような特殊魔法で荒稼ぎとかなので、零細貴族が出せる謝礼などには見向きもしないらしい。

「結果、『火壁』君のような微妙なのが来るんだよ。アレでも、雇うと高額だしな」

初級と中級の間くらいでも、この手の争いでは切り札になれるほど役に立つのだそうだ。

「数十名同士の争いで、火の壁とか作れる魔法使いだ。物凄く貴重だから。今回は、俺達と戦うという不運に見舞われただけ」

ブランタークさんの言う通りで、普通は俺達のような魔法使いが

出張る事もないのだ。
今回は、『火壁』君が不運だったのであろう。

「あとは、ここ十年ほどの東部地域は、なぜか魔法使いが不作なんだよな」

なぜか、中級以上の魔力を持つ新人がほとんどデビューしていないそうだ。

「魔法使いは足りないから、大体生まれた地域に縛られる。だから、東部の貴族達が金で引っ張ろうとしてもなぁ……」

地元優先なので、まず来ないというわけだ。

「仲の悪いうちのお館様には、坊主という近年一番の出来星がいるからな。ブロワ辺境伯も焦ったと思うぜ」

そのために、反乱を起こして俺の足を引っ張ったようだ。
だが、バカな事をしたと思う。
もしあんな事をしなければ、俺は領地の開発が忙しいからと出兵を断っていた可能性もあるのだから。

「うちで後方かく乱なんてしなければ、もしかしたら呼ばれなかったかもしれないのに」

「いや、やっぱり呼ばれたと思うぜ」

貴族としての俺は、ブロワ辺境伯にコケにされたので、絶対に兵を出して復讐しなければいけないらしい。

「その結果、大量の捕虜と前から持っていた利権まで奪われですか……」

実際に被害に遭った貴族達も、後の裁定で不利になれば出兵と占拠を要請したブロワ辺境伯を責めるであろう。

もしかすると、損失の補填すらしなければならなくなる可能性もあった。

「とにかく、全部の紛争地帯で味方側を有利にして戻ります」

「えげつな」

それから半月ほど、俺達は西から東へと境界線で睨み合っている貴族同士の紛争に介入し、ブロワ家側の軍勢をエリアスタンで麻痺させ、捕らえて大量の捕虜を得る事に成功する。

紛争案件である利権や領地なども、全て味方側に占領させて守備を任せたのでブロワ家側は青息吐息のようだ。

仕事を終えてブライヒレーダー辺境伯本軍が本陣を敷いているエチャゴ草原に戻ると、ブライヒレーダー辺境伯がご機嫌な表情で出迎えてくれる。

「報告は聞きましたよ。ブロワ辺境伯に一泡吹かせたようですね」

「身代金だけで、相当にふんだくれますよ」

「死者がゼロなのに、捕虜が膨大ですからね」

ブロワ家側の貴族が繰り出していた軍勢は、全てエリアスタンで

麻痺させられて捕虜になっている。
貴族の当主や重鎮の数も多く、多くの身代金が取れるわけだ。

「ただ、物凄く彼らの怒りを買ったようですよ」

ブライヒレーダー辺境伯に合わせて前方に視線を送ると、かなり距離を置いて対峙していたブロワ辺境伯軍が目視できる距離にまで接近していた。

と同時に、敵軍から数十名の騎士や陣借りの傭兵達が姿を見せる。

「我こそは、ブロワ辺境伯家にその人ありと言われたライヒアルト・シュタイナウアーである！　ブライヒレーダー辺境伯軍の勇者に一騎討ちを求める！」

次々と名乗りを挙げて武器を掲げる若い騎士や、感状目当ての浪人達。
だが、彼らの武器はやはり訓練用の刃が丸まった物であった。

「腕比べが始まりましたね」

「腕比べですか？」

「ええ、前の大惨事を教訓に考えられた物ですね」

「私の若い頃の紛争ですね。その時は、死に物狂いで槍を振るいましたとも」

ここ最近は、新規組のフォローや食料や物資の管理、会計などで嫌味なほどにさり気なく活躍しているクラウスが珍しく声を出す。

そういえば、彼は数十年前に多くの死者が出た両家の紛争に参加していたはずだ。

「そうです。クラウスさんは、当時参加していたのですね」

ブライヒレーダー辺境伯は、先日の反乱事件の経緯を知っている。だが、クラウスをどう裁くのかは俺の管轄なので、彼が近くにいても気にもしていないようだ。

「何とか生き残れましたという感じですね」

いまだに原因は不明らしいが、突如睨み合っていた両軍が動いて激突し、双方で百名以上の死者が出たらしい。

当時は武器が訓練用ではなかったので、死傷者が激増したのだそうだ。

「その後に、反省の意味を込めましてね」

密約で、武器は訓練用の物を使用する事になったそうだ。

あとは、模擬戦形式による一騎討ちの奨励である。

陣借り者も含めて、彼らは主君や貴族の前で優れた武勇を見せて、褒美や昇進や仕官に繋げる。

ただ、逆に負けて評価が落ちる事もあるので、参加は慎重にという物のようだ。

「皆さん、出て行きますね」

ブロワ側の要求に答えるようにして、ブライヒレーダー辺境伯軍や、行動を共にしている貴族家からも陣借り者や騎士達が出て行く。

両軍が見守る中、数十もの模擬戦形式の一討ちが始まり、すぐに勝敗が着く者、逆に長々剣を交わす者達など、様々な光景が展開される。

基本的に負けて馬から落とされると、捕虜にされて終わるようだ。

戦況を見ると、ほぼ互角に見えていた。

「あっ！　トーマスが出ている」

新規組のリーダーであるトーマスは、自分とあまり年齢が変わらない騎士と一騎討ちを行っていた。

「優勢だな」

双眼鏡で監察していると、戦況はトーマスの方が有利なようだ。

暫くすると相手側が馬から落とされ、剣を突き付けられて捕虜となる。

「馬なんてあったっけ？」

「必要との事で、私が借りておきました」

「そいつは、どうも……」

一騎討ちに参加したい兵士達のために、クラウスが何頭か予備の馬から借りて来たそうだ。

さすがの準備の良さに、俺は少し顔を引き攣らせていた。

「あのトーマスという人は、馬も上手いようですね」

雇ってみてわかったのだが、トーマスは使える人材であった。剣も槍も弓も馬も、教養や計算なども、ある程度の水準で何でも器用にこなすからだ。

天才ではないが、部屋住みの頃から暇を見ては何でも取得しようと努力したらしい。

出来る事が増えれば、いつか自分も独立した家をという風に自分を鼓舞して努力していたのであろう。

新規組の指揮も水準以上にこなすし、こういう人材は実は物凄く欲しかったりする。

「ブロワ家側の騎士を捕らえて戻るようです」

「感状と褒美を出すか」

これも士気を鼓舞するための物なのであろうが、味方が敵の騎士を捕らえてくると、ブライヒレーダー辺境伯も他の諸侯軍に参加している貴族達も、みんな側近などが準備した感状にペンで記載を始めていた。

何時に、どこで、誰が、誰を一騎討ちで捕らえたかと、その功績を称えて感状と褒美を与えると記載するのだ。

「こういう方法で、士気を鼓舞するのか……」

「はい。感状は自分の武功を証明する大切な物。仕官を目指す陣借り者なら余計にです」

さすがは、年の功で良く知っているクラウス。
小憎たらしいほど絶妙なタイミングで、俺にアドバイスをしてくれる。

「トーマス殿が戻ったようです」

捕らえられたのがよほど悔しかったのか？
睨み付けるような表情を崩さないブロワ家側の騎士を連れて、トーマスは戻って来る。

「ご苦労様。ええと、この捕虜になった騎士の名前は？」

「クリストハルト・レッチェルトです」

「なあ、クラウス」

レッチェルトは、トーマスの改姓前の家名であったはずだ。
つまり、この捕虜はトーマスの兄という事になる。

「仕官して間も無いのに、トイファー殿の武功は素晴らしく」

クラウスの言うトイファーとは、トーマスが新しく名乗った家名である。
どうせ、捨て駒にされた直後にレッチェルト家にトーマスという名の男子などいないという事になっているはずなので、心機一転でクラウスが家名を考えてあげたそうだ。

「トイファーだと！　お前は俺の弟！」

どうやら捕虜になって血が昇っているらしく、このクリストハル

トという男はバカみたいな事を口走っているようだ。

「クリストハルト殿とやら。トーマス・トイファーは俺の家臣なのだが、貴殿の弟だと言うのか？」

「当たり前だ！　トーマスはっ！」

ようやく、己の失言に気が付いたらしい。

レッチェルト家はトーマスをバウマイスター騎士爵領での反乱に参加させるため、その存在を抹消してしまった。

なのに、その抹消した男を弟などと言うのだから。

「本当に、トーマスは貴殿の弟なのですか？」

「いや……。似ていただけだと思う」

「似ていた？」

存在しないはずの人に似ているというのも変な話だ。

どうやら、弟に一騎討ちで負けて捕らえられ、相当に動揺しているらしい。

「いや、そんな男は見た事が無かった！」

「そうですか……」

クリストハルトの言葉で、トーマスはもう自分はレッチェルト家には戻れないと悟ったらしい。

少しだけ、寂しそうな顔をしていた。

「お館様。トイファー殿に褒美と感状を」

「そうだったな」

俺は急ぎペンで記載した感状を渡し、魔法の袋から以前にエルから教えて貰って購入していた鋼製の剣を渡す。

かなり高価な一品で、このレベルの剣に騎士などは家紋などを施し、常に帯剣するのだそうだ。

「これからも、トーマスの働きに期待する」

「ありがたき幸せ」

「あとは……（クラウス、相場がわからん！）」

「（金貨二～三枚にございます）」

金貨なども渡すのだが、その相場がいまいち不明なのでクラウスにそっと聞いてみる。

知らなかったらブライヒレーダー辺境伯に聞けば良いし、もしそうならザマぁとか思ったのだが、やっぱり奴は知っていたようだ。

「（良く知っているな）」

「（年の功にございます）」

相場はわかったので、ここはトーマスの忠誠心を上げておこうと、金貨五枚を袋にそっと入れて渡す。

ここで奮発しておけば、他の新規組も頑張るはずだ。

しかし、平均でも日本円で二百万円から三百万円だ。
そう滅多に紛争などないので、その時には貴族も貯えた金から奮発して褒美を出すのであろう。
周囲の目もあるから、余計にそうなのだと思う事にする。

「あとは、お見合い会への参加許可も出すから」

最後のはどうでも良いような気もしたが、アラサー男のトーマスはスキップでもしそうな笑みを浮かべながら戻って行く。
クラウスの言う通りに、若い男には女らしい。

「こういう場面を見ますと、バウマイスター伯爵も貴族の仲間入りですね」

ブライヒレーダー辺境伯は、そんな俺の様子を見て一人感慨に耽っているようだ。

「ところで、エルは？」

女性陣は他の貴族達の手前もあって、うちの陣地で食事の支度をしていたのだが、なぜか俺の護衛であるはずのエルの姿が見えなかった。

「エルヴィン様なら、あそこにいますが」

クラウスが指差した方角では、エルが前に出てブロワ家側の騎士と一騎討ちをしている光景が見えていた。

「あのバカ……」

「エルヴィン君も若いので、手柄は欲しいでしょう」

ブライヒレーダー辺境伯の言う通りなのだが、エルは捕まると取り戻すのが面倒なので、一騎討ちには出ないで欲しかった。

「優勢みたいですよ」

エルの相手は、思ったほど強くなかったようだ。

十分間ほど剣を交えると、エルに馬から落とされて捕らえられていた。

「お館様、敵の騎士を捕らえてきました」

他の貴族もいるので、エルは俺の事をお館様と呼びながら得意気に戻ってくる。

捕まった捕虜も、若造に負けたとあって心なしか悔しそうな表情をしていた。

「このおバカが！　お前が、一騎討ちに出るな！」

「だって、手柄欲しいもの！」

功績は功績なので、ちゃんと感状と褒美は出したが先に拳骨を落すのは忘れなかった。

こうして初めての特殊な戦争の日々は続いていたのだが、この争いが終わる気配も一向に見えないのであった。

第六十五話　無意味な長対陣。

「おーーーほっほ！　私こそは、西部一と称された魔法使いカタリーナ・リンダ・フォン・ヴァイゲル名誉準男爵。あなた方ブロワ家の魔法使いに対し、魔法での勝負を挑みますわ！」

クラウスの策を受けた翌日の早朝、両軍が対峙をするちょうど中間地点で、カタリーナが高笑い込みの宣誓を述べていた。

クラウス提案による、ブロワ辺境伯家のサイフにダメージを与える作戦が始動したのだ。

とはいっても、別にそう複雑な作戦ではない。

そろそろ若手騎士同士による一騎討ち合戦も人員が尽きつつあり、今度はそれを魔法に切り替えただけであった。

「カタリーナ。嬉しそうね」

「名を挙げるチャンスだからな」

ヴァイゲル家の復興は成ったが、彼女はその躍進も視野に入れているのであろう。

自らが魔法による一騎討ちをする事により、武功を稼ごうとしていた。

この規模の紛争は滅多になく、こういう場で武功を上げる事はその貴族の名誉に繋がる。

それが女性でも、そういう部分に差は無く。

いや、本当はあるのだが、数少ない例外として彼女自身が魔法使いなので、相手の魔法使いを討ち負かせば武功としてカウントされるのだ。

これは、魔法使いが数少ない事を利用しての抜け道であった。

ただ、この場合はその女性魔法使いが貴族でないと、ただ名誉と金だけ貰えて貴族にはなれないという理不尽な点がある事も忘れてはいけない。

やはりこの国では、女性の社会進出に大きな制限があるのだ。

「魔法使いは、身代金が高いだっけ？」

「そうみたい」

身代金は、捕まえた相手の身分によって金額が変わる。

それともう一つ基準があって、魔法使いの、それも高位の魔法使いだとその金額が跳ね上がるのだ。

クラウスの作戦とは、簡単に言えばカタリーナにブロワ家側の魔法使いを捕らえて貰うという物であった。

「向こうが出て来ない可能性は？」

イーナの懸念は尤もであったが、実はそれでも構わないというのがこの作戦の意地悪な部分だ。

「この手の紛争で、相手に勝負を挑まれて誰も出なければ大恥も良いところです」

貴族なのに、相手の挑戦に答えなかった。
一体何のために普段から軍を整えているのかと、周囲から笑われてしまうのだそうだ。

「でもさ。こういう事に絶対は無いわけで、カタリーナよりも強い魔法使いとか出ないのかな？」

「絶対とは言えませんが、まず大丈夫だと思います」

前にブランタークさんが言っていたが、今の東部は優秀な魔法使いが不足しているらしい。
なので、カタリーナを脅かすような魔法使いは存在しないはずだとクラウスは説明していた。

「そうだな。ブロワ辺境伯家のお抱えは中級が良いところ。外部から凄腕を雇えば、お館様から情報も入るはず。よほどのヘマをしなければ、カタリーナの嬢ちゃんは負けないさ」

ブランタークさんも、クラウスと同意見のようだ。
中級の魔法使いが上級に勝つには、例えば奇襲をかけるとか相手の弱点を上手く突くとかだが、これは戦闘経験などを積んだベテランでないと難しい。

しかもこの手の戦法は、今回のような『よーい、ドン！』な一騎討ちではほぼ通用しない。
単純に強力な魔法を沢山放てる方が、圧倒的に優位なのだ。

「その勝負引き受けよう！　ブロワ辺境伯家の筆頭お抱え魔法使い。『突風』のビエンコ・ロウケルである！』

カタリーナの呼びかけに、ブロワ側から一人の魔法使いが名乗りをあげる。
年齢は、四十歳ほどであろうか？
どこにでも居そうなローブ姿の中年男性が、杖を構えながらカタリーナと対峙する。

「あれ？」

「どうした？　伯爵様」

「あの人、そんなに凄そうには……」

こう言っては失礼かもしれないが、同じ筆頭お抱え魔法使いであるブランタークさんと比べると、格段に実力が落ちるような気がしたのだ。

「あそこは、数で補っているから」

ここ暫く東部に有力な魔法使いが出ていないので、ブロワ辺境伯家では上級クラスの魔力を持つ魔法使いの雇用に失敗している。
そこで、中級を何名か雇って彼らの中で年長だったり、人を束ねるのが上手い人を、暫定的に筆頭に任命しているに過ぎないのだそうだ。

「ブランターク様のように、圧倒的な実力があるので筆頭にされたわけではないのですね？」

「そういう事」

エリーゼがブランタークさんにお茶を出しながら質問し、彼はお茶を飲みながらそれに答える。
一騎討ちも下火になった両軍の対峙は、基本的に暇との戦いである。

なので、俺達のみならず味方の貴族達は、全て自分の陣地で椅子に座ってお茶を飲み、テーブルの上のお菓子などを食べながらその様子を見ている。

今の時刻はちょうど午前十時くらいであり、地球で言うところの朝のオヤツという感じであった。

「あのブロワ家側の魔法使い、カタリーナには勝てないんじゃ？」

「勝てないな」

「なら、何で出て来るのかね？」

エルからすれば、勝てもしない勝負に出て来る筆頭お抱え魔法使いというのが良くわからないらしい。
だが、貴族からすれば出て当たり前だと思うのだ。

勝敗はともかく、相手からの勝負の要求に答えないなど、敗北以上の恥をブロワ家側がかくのだから。

「いざ、尋常に勝負！」

お互いに名乗りをあげた後、カタリーナと『突風』との勝負が始まる。
まずは『突風』が先手を取り、両腕から二つの竜巻を魔法で出し

てカタリーナへと放つ。

両手で同時に二つの竜巻魔法を発生させる部分は、さすがは熟練の魔法使いだと俺は思っていた。

「ただ……。カタリーナ相手に、あの程度の風魔法ではな……」

カタリーナはすぐに自分の周囲に竜巻を展開し、『突風』から放たれた竜巻を打ち消してしまう。

「まだまだ！」

続けて『突風』が両腕で竜巻魔法を放ち続けるが、それらは全てカタリーナが周囲に展開している竜巻によって弾かれてしまう。

「見ただろう。こういう勝負では、魔法の威力と魔力の量だけが勝負を決めると」

「だけがですか」

「そうだ。他の要素とかはいらん！」

結局、竜巻の連発を続けて魔力が尽きた『突風』が降参をし、この勝負は終了となる。

彼は、カタリーナに杖を渡して降参していた。

「同じく、ブロワ家お抱えの『火鞭』のロイ・ザールニアだ！　尋常に勝負！」

カタリーナは続けて、『火鞭』を名乗る中級レベルと思われる三

十歳前後の魔法使いと戦いを始める。

彼はやはり両手で火の鞭を作ると、それを交互に振るってカタリーナを攻撃し始めていた。

火の鞭は、様々なタイミングでカタリーナに襲い掛かる。

正面からの一撃をカタリーナが防ぐと、同時に真後ろからも攻撃が来る。

続けて死角からの攻撃を防ぐと、また直後に同じ場所に火の鞭が来たりと。

『火鞭』は、この魔法を良く研究・訓練して己の物にしているようだ。

「ただなぁ……」

「ええっ！　凄いじゃないですか」

「だから、この条件の戦いだと『火鞭』に勝ち目は無いんだよ」

実際に、その巧みな火鞭による連続・フェイント攻撃は、全てカタリーナが展開している水の壁によって防がれていた。

どこから攻撃しても水壁を突破できず、虚しく『ジュワ』という蒸発音と水蒸気をあげるだけであった。

「『火鞭』にとっての火系統の魔法は、長年修練して極めた一番得意な系統だ。逆に、カタリーナの嬢ちゃんは水の系統は苦手な部類に入る」

なのに、その威力ではカタリーナの水系統の方が上と。

これが、上級レベルと中級レベルの間にある絶対に超えられない壁なのだそうだ。

「さっきの『突風』とさほど強さは変わらない。ブロワ辺境伯家が、中級の魔法使い複数でお抱えを維持している証拠だ」

数分後、『火鞭』はカタリーナが逆襲して展開した水壁に囲われてしまい、杖を捨てて降伏していた。

「私の実力をご覧になりましたか」

ブロワ家お抱えの魔法使い二人を捕虜にして、カタリーナは自慢気な表情をしながら戻って来る。

彼女が戦っていた場所では、今度は他の魔法使い達が勝負を始めていた。

ブロワ家にもブライヒレーダー家にも、まだ複数のお抱え魔法使い達が所属していたからだ。

普段は魔法を使った決闘など無駄なので禁止されているのだが、こういう戦争の時には例外的に許される。

勝てば名誉と褒美が得られるので、ここぞとばかりに勝負に挑む魔法使いは多かった。

「あんまり波乱とか無かったね」

「ルイーゼさん。波乱など見ている人は楽しいのかもしれませんが、私からすると堪ったものではないのですが……」

「何というか、全く危な気なかった」

「こういう勝負ですからね」

戻って来たカタリーナに、ルイーゼがお茶を渡しながら話しかけてくる。

「実戦では、上級でも不意や弱点を突かれれば負ける事もありますけど……」

こういう形式の勝負だと正面から向き合って合図と共に戦うので、ほぼ魔力が強い者が勝つのが当たり前なのだ。

カタリーナの勝ちは、むしろ必然とも言えた。

「不意を突くのは良い手ね」

「実戦ではそうでしょうが、これは名誉をかけた一騎討ちなのですよ」

この手の一騎討ちで不意打ちなどしたら、それは卑怯者も同然という事になってしまう。

それなら受けない方がマシだと、カタリーナはイーナに説明していた。

「なあ、ブランタークさんやヴェルは行かないの？」

「俺はパス」

ブランタークさんは、ブライヒレーダー辺境伯家が抱えている魔法使いの筆頭である。

現状でブロワ家が彼に勝てる魔法使いを抱えていない以上、下の者達に勝負をする権利を譲ってあげる必要があるそうだ。

「そもそも、俺が今さらこれに勝って何になる？」

功績だの名誉だのと、そんな物はもう十分得ているブランタークさんだ。

わざわざ中級以下の魔法使いと戦う理由などなく、下の者達のチャンスを奪ったと思われて嫌われるだけであろう。

「ヴェルも同じか……」

もう功績は十分だし、今回の戦いでは四十家を超えるブロワ側の貴族や主だった家臣や兵士達などを捕らえている。

ブライヒレーダーから、『もうお休みしてて良いですよ』と言われているくらいなのだから。

「導師は？」

「来るわけねえだろうが」

南部と東部の貴族達同士の諍いに、王宮筆頭魔導師が出て来ると面倒な事になってしまうからだ。

とはいえ、エルの疑問は良くわかる。

あの人ならば、楽しそうだからで勝負に参戦してくる可能性も否定できなかったからだ。

「それに、ブロワ家側が泣く」

導師が来れば当然知己であるこちらに付くはずなので、戦力比が絶望的にまで広がって、それはそれで大変な事になってしまうであろう。

「あのヴェンデリンさん、私への褒美は？」

「無いよ」

「どうしてです！」

「ちょっ！　お前も貴族だろうが！」

今回のカタリーナの立場は、バウマイスター伯爵家の親族であるヴァイゲル準男爵の女当主が、ブライヒレーダー辺境伯家の要請に従って参軍した。

軍は出せないが、有力な魔法使いが手を貸して功績を挙げたという扱いだからだ。

「カタリーナが捕らえた貴族やら兵士やら魔法使いの身代金が利益になるからな。俺から褒美を出したらおかしいし」

「そういえばそうでした……」

暫定とはいえ貴族家の当主になったのに、どこかその自覚が薄いカタリーナであった。

「中抜きがない分、身代金の方が多いじゃないか。交渉だって、代官をしているハインツの息子に任せれば良いし」

「そうでしたわ！　すぐに連絡してみます！」

ヴァイゲル準男爵領の開発に回せるお金が増えると知って、カタ

リーナはご機嫌でお茶を飲み始めていた。

「カタリーナはいいなぁ。ボクも、一騎討ちとかしてみたかった」

「ヴェル様、私も戦いたい」

「ここは戦場なんだから、基本的に女性は出ちゃ駄目なのよ」

今回の紛争では、食事当番と鍛錬くらいしかする事がないルイーゼとヴィルマが自分達も戦いたいと言い始める。

だが、当然無理なのでイーナに窘められていた。

「その前に、ルイーゼの嬢ちゃんやヴィルマの嬢ちゃんと戦う奴が不幸だろう」

ブランタークさんの言う通りで、万が一戦えたとしても子供にしか見えないルイーゼとヴィルマと戦って大の大人が惨敗でもしたら、その人は騎士や貴族としての経歴に致命的な傷を負ってしまうからだ。

というか、ルイーゼとヴェルマの実力から考えると、ほぼ間違いなく惨敗するであろう。

「男装して出るのはどうかな？」

「ルイーゼ、いいアイデア」

「止めとけ。相手が可哀想だろうが」

ブランタークさんに窘められて、二人はようやく一騎討ちに出る

のを諦めたようだ。

「しかし、これいつ終わるの？」

本格的な軍事衝突が不可能である以上、数少ない魔法使いが勝負を終えれば、もう睨み合いしかする事がなくなってしまう。

意地の張り合いも必要なのであろうが、ただ無駄に金と食料を消費するだけになってしまうのだ。

「こういう事は我慢比べだと、昔にお爺様が言っていました」

エリーゼがお茶のお代わりを淹れながら、俺の疑問に答えてくれる。

何でも、ホーエンハイム枢機卿が若い頃にも似たような紛争があり、司祭として従軍した経験があるそうだ。

「先に焦れて、『裁定に入りましょう』と言った方が不利になるそうです」

現時点で、ブロワ側は大惨敗している。

肝心の各所の紛争地域で、ブロワ家側の貴族達は戦前に持っていた利権や領地すらこちらに占拠され、多くの貴族やその軍勢が敗北して捕らえられているからだ。

「ブロワ家側は、もう今さらな気もするけど」

「だからなのです。もうこれ以上は悪化しないであろうと」

一騎討ちで多少不利でも、ブロワ辺境伯家本軍に綻びがあるわけではない。

本格的な衝突を起こせない以上は、ただ粘って裁定で少しでも有利な条件を獲得するしかないのだと。

「いやいや。大元の境界で接する貴族達の利権争いでは、もう完敗じゃない」

その前に、本軍以外の紛争地帯では大惨敗しているのだ。

ここで意地を張って、本軍同士で対峙している意味が俺には理解出来なかった。

「今さら、この情況では退けないのでは？」

とにかく、今回のブロワ家側の出兵には不可解な点が多い。

うちに妙なちょっかいをかけて復讐されているし、総大将であるブロワ辺境伯本人が本軍にいない可能性も高い。

病気で臥せっているという噂もある彼が、果たしてどの程度この出兵に関わっていたのか？

とにかく裏の事情が読めないので、ブライヒレーダー辺境伯も困惑している部分があるのだ。

これで、裁定など可能なのかと。

彼からすれば、こんな無駄な紛争など一秒も早く終えて、うちの開発の手助けでもした方が利益になるのだから。

結局ブロワ家側からの裁定を求める使者は来ず、どうやら両軍の睨み合いはもう少し続くようであった。

「バウマイスター伯爵。何か、良いアイデアはありませんかね？」

魔法使い同士による勝負も、カタリーナがブロワ家お抱えの中で筆頭とナンバー2を捕らえたので、判定はブライヒレーダー家側の勝ちとなっていた。

元々魔法使いの数も少ないので勝負もすぐに終わり、それから三日間も両軍は無駄に対峙を続けている。

さすがにブライヒレーダー辺境伯も焦れて来たようで、俺に何でも良いから向こうの士気を落とす策は無いかと尋ねてくる。

「士気が落ちるかは不明ですけど、相手に多少の動揺は与えられるかと」

「魔法でもぶっ放すのですか？」

「まさか、そんな無駄な事はしませんよ」

一応ブライヒレーダー辺境伯の許可を取ってから、俺はその策を実行する。

「ヴィルマ。書けたか？」

「結構自信ある」

「確かに、綺麗だな」

俺は、バウマイスター伯爵家の本陣で大きな布に字を書いていたヴィルマに声をかける。

意外なのだが、実は俺の婚約者達の中で一番字が綺麗なのがヴィルマであったので、俺が頼んでいたのだ。

普通ならばあまり女性はいない諸侯軍において、魔法使いで暫定当主であるカタリーナ以外の女性陣は、兵士達への食事の準備や、お茶を飲むブライヒレーダー辺境伯達への給仕、エリーゼは臨時の従軍司祭としてその時間を過ごしていた。

ヴィルマは相変わらずエリーゼの護衛をしているのだが、長対陣で彼女の治療の仕事が減ったので、今はこうして俺の手伝いをしているわけだ。

「本当だ。上手だ」

「ルイーゼは、字が下手だからなぁ」

「違うね。ボクの字は独創的なの」

エリーゼもヴィルマほどではないが字が上手であり、彼女の完璧超人伝説に色を添えていた。

カタリーナとイーナは普通で、俺とエルは少し下手。

そしてルイーゼであったが、かなり下手なので判読に時間がかかる有様であった。

「こういう紛争の時とか、ボクの書く文(ふみ)が暗号として役に立つかも」

「いや、それはないでしょう」

敵も味方も読めないのでは、それは暗号としての用事をなさないからだ。

「ヴェルは失礼だな。それで、これは何なの？」

「求人広告です！」

俺が考えた敵の動揺を誘うアイデアとは、ここで新しい人を仕官させようという物であった。

対象は陣借りをしている浪人達で、採用数は能力と人格が一定以上に達している者なら全部。

一応、求人広告には五十名と書いているが、採用基準に達していれば全て採用する予定であった。

どうせ俺に人を見る目などないので、判定はモーリッツとクラウスに任せる事にした。

悔しいが、人を見る目では老練なクラウスに勝てるはずがないからだ。

「へえ、陣借り者の中で優秀なのを雇うのか」

ブランタークさんが、良い案だと感心していた。

紹介状無しなので試用期間は設けるが、うちの人材不足を少しは解消できるかもしれないからだ。

駄目なら雇わなければ良いだけだし、採用がゼロでもうちに不利益はない。

何しろ、ここ三日間ほど魔法の鍛錬以外では暇だったのだから。

「日常業務を行って余裕を見せ、向こうの陣借り者達が動揺するな」

ブライヒレーダー家側に参加していれば面接が受けられたのに、ブロワ家側なのでそれも出来ない。
陣借り者だけとはいえ、相手の士気を落とせる可能性は高いと思ったのであろう。

「ああ、別にどちらでも採用試験と面接は受けられるようにしますから」

「マジでかよ！　前代未聞な事をするな。でも、悪くないアイデアか……」

数分後、ヴィルマが大きな布に書いた求人広告が両軍の間に掲げられる。

来たれ！　仕官希望者達！　バウマイスター伯爵家では、臨時に紹介状無しの採用試験を行います。

採用数：こちらの採用基準に満たせば、上から順に五十名まで。

待遇：面接の時に説明します。

職種：文官系の能力や経験を持つ人も募集。警備隊の人員も募集。優秀者には、幹部登用制度もあり。

備考：現在ブロワ家側にいる人でも、採用試験を受ける事は可能です。

「何か、凄いな……」

この求人広告が張り出された直後、両軍の陣借り者がほぼ全員殺到していた。

あまりに多いので、ブランタークさんやブライヒレーダー辺境伯からも人手を借りて採用試験や面接を行ったのだ。

場所は一騎討ちが行われた両軍の間にある草原で、武芸の腕前を見たり、計算や文章作成の筆記試験を行ったり、最終面接もモーリッツとクラウスによって行われていた。

この常識破りの行為に、ブロワ家側は唖然として見ているだけであった。

慣習しか決まりが無いこの手の人が死なない戦争において、相手の陣借り者を採用試験に誘ってはいけないという法は今まで無く、俺に文句を言う根拠もなかったからだ。

「簡単に言えば、想定外なわけです」

急遽始まった採用試験の様子を見ながら、ブライヒレーダー辺境伯は笑っていた。

「確かに、自分達で囲っている陣借り者達までバウマイスター伯爵家の採用試験に向かってしまえば……」

飯と寝る場所、あとは一騎討ちなどで敵の騎士でも捕らえれば感状と褒美が出るが、陣借り者とは基本的には軍勢の数増し程度の役割りしか期待されていない。

新規雇用など、いくらブライヒレーダー・ブロワ両家でもそう簡単に行えないからだ。

それでも、ブロワ家側の陣借り者達はこの紛争が終わるまでは雇用はされている。

それがこぞって、敵側であるバウマイスター伯爵家の採用試験に参加している。

彼らの困惑と動揺を広げる策としては、有効だと俺は思うのだ。

「これで、彼らから裁定を持ち出してくれると嬉しいのですが……」

結局、二日間にかけて行われた採用試験において八十六名の陣借り者達が雇用される。

半年の試用期間に、最初は一番下っ端からのスタートであったが、彼らはとても嬉しそうであった。

「その下っ端にも、普通は紹介状やコネがないとなれませんからね」

新規で余所者を取る前に、陪臣や領民の子弟などを優先するからだ。

「しかし、凄い光景でした」

新規採用された八十六名は、今日の早朝に魔導飛行船に乗ってバウマイスター伯爵領へと向かっていた。

現地で新人研修を受けてから、それぞれの職場に配置。

半年後に問題が無ければ正式に仕官となる。

結局ブロワ家側に居た陣借り者達もほぼ半数が雇用され、駄目だ

った連中は何食わぬ顔でブロワ家側の陣地に戻り、ブロワ軍の兵士達も唖然としていたようだ。

とはいえ、彼らを放逐など出来ない。

彼らが抜ければ、コストが安い兵力が減ってしまうからだ。

「ブロワ家の連中からすれば、途中で敵の採用試験に抜ける陣借り者達など信用に値しないと思うけど、陣借り者達にすればチャンスだったわけで受けない道理もないと」

これにより、ブロワ家側の士気はまた落ちているようだ。

策は成功したのだが、俺としては早く裁定に入って貰いたいと心から願うのであった。

第六十六話　推定勝利ながらも、グダグダは続く。

「しかし、来ませんねぇ……」

「何がです？」

「裁定を始めようという使者がです」

ブロワ辺境伯家や、その統括下にある境界線を接する貴族達との紛争が始まって一ヶ月。

戦況はこちらが圧倒的に有利であったが、本軍同士の睨み合いは相変わらず続いていた。

特にこの一週間ほどは、まるで戦況が動いていない。

一騎討ちをする若手騎士、魔法比べをするお抱えの魔法使い。

これらもネタ切れとなり、仕官のために騎士達と同じ事をしている陣借り者達の姿もない。

予想外の長対陣でアピールタイムも終了し、俺がブロワ家側を動揺させるために始めた採用試験に落ちてしまったので、これ以上は居ても意味が無いと戦場から去ってしまったのだ。

彼らの夢は、どこかの貴族家に仕官する事である。

ここが駄目なら、すぐに次の場所へと移動してしまうのだ。

その結果、両軍は合わせて五百人ほど人数を減らしている。

飯と寝床さえ与えれば彼らはアピールに来るので、貴族側も安く数を揃えるために陣借り者達を利用している。

だが逆に陣借り者達も、そこが駄目ならすぐに姿を消してしまう

のだ。

「圧倒的に不利な裁定案を呑まされるから嫌なんでしょうね」

「そうは言いましても、もう限界ですよ」

この戦争が無い時代に、数千人もの軍勢を一ヶ月も貼り付けているのだ。

それに、一騎討ちなどで勝った騎士への褒美などもある。

その経費は決して少なくなく、過去に一ヶ月を超えた対陣などほとんど無かったそうだ。

「経費は仕方が無いにしても、そろそろ王家が焦れてきますし」

ヘルムート王国の安定した統治を望む王家からすると、利権争いのために短期間対陣するくらいなら目を瞑るが、あまり長引くと本当の戦争になりかねないので介入して来る可能性があるそうだ。

当然介入されれば、それは地方の独自性を薄められる大事態という事になる。

ブロワ辺境伯家もブライヒレーダー辺境伯家も、相応にダメージを受けてしまうであろう。

「ですから、そろそろ顔を出して欲しいものですね」

「病気ですけどね。ブロワ辺境伯」

「ええ」

ブロワ辺境伯が病床にあり、今回の紛争では軍を率いていない事は既に周知の事実となっていた。

なぜなら、　その情報を掴んだのは俺達であったからだ。

それは、一騎討ち合戦が始まってから数日後の事であった。

『捕虜を交換するんだな』

『はい。大物ならいざ知らず、陣借り者や小物などはお金になりませんし』

両軍の間で行われている、模擬戦形式の一騎討ちは五日目。

結果は、ほぼ五分五分であった。

お互いに捕虜を溜め込んでいても金がかかるので、一日が終わると両軍による捕虜の交換が行われる。

得られる身代金を計算し、金にならなそうな者から順次交換されて戻って行くのだ。

あのトーマスの兄も、すぐにブロワ家側に戻されていた。

一応騎士ではあるが、零細陪臣家の次期当主なのですぐに戻されたのだ。

王国が叙任した騎士ではない、貴族が任じた陪臣騎士なので扱いが低いというわけだ。

『陪臣でも大物でしたら、当主や跡取りが一騎討ちになどには参戦しません。家格や経済状況に関してはお察しかと』

『クラウス殿の言う通りです。昔のお館様の実家が富豪に見えるほどの貧乏陪臣家ですから』

捕虜交換で戻しているのは、俺達が捕らえた貴族やその家臣ではなく、一騎討ちで発生した陣借り者や小身の陪臣のみである。

陣借り者からは身代金など取れないし、陪臣の身代金は主家の負担になるのだが、トーマスの兄くらいだと金貨五枚くらいで大した事は無い。

捕らえた捕虜などは面倒を見る必要があり、当然拷問や虐待などは禁止である。

身分に応じて待遇を上げる必要もあり、金にならない者は同じレベルの捕虜とさっさと交換してしまうのだ。

ちなみに、戻った者はもう今回の紛争では一騎討ちに参加できない。

討ち死に判定なので主家からも評価されず、人は死なない戦争ではあるが、滅多に無い紛争で己の力を見せる機会を逸したという点では、負けた者は死んだに等しい状態であった。

『トーマスの兄さん、しょんぼりしてたな』

トーマスの兄も、この世の終わりのような表情でブロワ家側へと戻って行った。

『私の身柄を売った功も、これで帳消しですか』

『トーマス殿が気にする必要はありません。他の家の方の事です』

『そうでしたね。もう他の家の事です』

とは言いつつも、トーマスは捕虜交換で戻って行く兄を複雑な表情で見送っていた。

『あの方から、トーマス殿達がお館様に雇われているとブロワ家側に情報が流れます。どんな顔をするでしょうね？』

それを交渉のネタにするつもりはないが、向こうは勝手に怯えているはずだ。

何しろ、俺自身がバウマイスター騎士爵領における反乱の真相を知っているのだから。

しかしながら、それを楽しそうに笑みを浮かべながら言うクラウスは、やはり悪辣な男だと思う。

『もう一押し、情報収集も兼ねて行いましょう』

クラウスが続けて提案するが、その案の悪辣さに俺は顔を引き攣らせていた。

『それは、拙くないか？　殺されないか？』

『なぜです？　新規仕官組の方々は、ブロワ辺境伯家とは何の縁も所縁も無いではないですか』

ブロワ側の様子を探るために、新規組の一人をわざと一騎討ちで敗北させ、捕虜としてブロワ辺境伯に引見させると言うのだ。

『一人だけ証拠隠滅で殺したところで、まだ二十名以上もこちら側に残っています。しかも、捕虜になった本人が別の家名とお館様の

家臣である事を主張しているのです。殺しなどしたら、大問題になりますよ』

この時代における、戦場のルールを破る事になるからだそうだ。
更に言えば、ブロワ辺境伯は大物だ。
その手の外聞は、一番気にする存在であると。

『万が一の事もありますから、ちゃんとリスクも説明して志願者を募ります。ですから、成功した際には……』

『褒美を出すんだろう？』

『はい。危険手当も含めてですが』

公式には一騎討ちに負けたので感状は出せないが、危険な任務に成功しているので多目の褒美を出せば良いとクラウスは進言する。

『では、早速に行います』

クラウスは、新規組に自分の作戦を説明していた。
これは、ブロワ家側に対する揺さぶりと、他の捕虜では知り得ない情報を収集するための任務なのだと。

『公式には、一騎討ちに負けて捕虜になったという事になります。感状は出ませんが、お館様が多目の褒美を確約してくださいました』

新規組はクラウスの説明を静かに聞き、その中から若い小柄な男が志願をする。

『ニコラウス・フラーケです。以前の家名はブリーゲルでした』

『クラウスから詳細は聞いていると思うが』

『大変に効率の良いお仕事を紹介していただき感謝いたします』

面白い物の言い方をする男であった。

トーマスが言うには、剣や槍などの貴族の嗜みはあまり得意ではないが、根が明るいのでムードメーカー的な存在らしい。

あとは、何気に新規組の物資管理や会計などでも手腕を発揮している男だそうだ。

『私は剣が苦手でして、単純に武功だけだと出世に必要な功績を挙げるのが難しいのです』

『殺される危険もあるが』

『まず無いでしょう。向こうが驚く様を観察してきますよ』

陽気な若者ニコラウスは、こちらの指示通りにブロワ辺境伯配下の騎士と一騎討ちを行い、わざと負けて向こうの捕虜となった。

ブロワ辺境伯本軍には、他にも数家男爵家だの子爵家の軍勢も混じっていて、そちらの騎士に負けるとブロワ辺境伯の前に引き出されないので、わざとそちらを狙って負けるようにクラウスが仕込んだのだそうだ。

『ただいま戻りました』

朝一番に一騎討ちで負けたニコラウスは、夕方には捕虜交換で戻って来ていた。

やはりブロワ家側は、今さらニコラウスだけを殺しても何の意味

も無いと思ったようで、小物扱いの彼は無事に戻って来ていた。

『大丈夫だったか？』

『ええ、良い食事が出ましたね。ここで出る食事には劣りますけど』

『うちは、エリーゼ達が作っているからな』

『それは大変に大きいと思います』

幸いにして、ニコラウスと一騎討ちをした騎士とは面識が無かったらしい。

勝利して自慢気にニコラウスを連れてブロワ軍の本陣に戻ると、本陣内は騒然とした空気になったそうだ。

『私がバウマイスター領で反乱を起こすための捨て駒になった件は、実家とブロワ家の家臣でも上の方しか知りませんからね』

下のニコラウス達を知る者達には、素行不良なので勘当して追い出したと説明していたらしい。

少し考えればおかしな事には気が付くであろうが、彼らとてそう余裕がある身でもない。

上におかしいなどと言って不興を買う勇気もないので、ただ遠巻きにニコラウスを見てヒソヒソと話していたようだ。

『彼らは、私が陣借りでもしているのかと思ったのでしょうが、生憎と剣や鎧には……』

参軍するので、急遽うちの紋章を付けていたのだ。

陣借り者ならば、武器や防具に紋章は付いていない。

勘当されて追い出されたはずのニコラウスが、なぜかバウマイスター伯爵家の正式な家臣になっていた。

彼らからすれば、いくらでもヒソヒソ話をするネタに事欠かないという物だ。

『ブロワ家中に、良い種が撒けましたな』

確かに、ブロワ家の家臣達はああでもないこうでもないと勝手に予想して騒ぐはずだ。

更に言えば、戦況は俺の参軍によってブロワ家側の圧倒的な不利になっている。

加えて、その俺の家臣になっている、勘当されたはずのニコラウスと。

上層部への不信と合わせて、士気の下降に大きく貢献としたと言えよう。

ただ、笑顔で種が撒けましたなどと言えるクラウスに、俺は多少引き気味であったが。

『それで、ブロワ辺境伯は？』

『それが変なのです』

普通、配下の騎士が一騎討ちに勝って捕虜を連れて来ると、貴族自らが引見するのが決まりだ。

捕虜に自身と主君の名前を聞き、大体の身分を確定させてからその場で感状を書き、褒美なども渡すからだ。

ところが、ニコラウスの時は諸侯軍の幹部が応対したらしい。

『確かに変ですな』

クラウスも、首を傾げてた。

『私のような小物にですら、先々代のブライヒレーダー辺境伯様は直接お会いになり、お褒めのお言葉と褒美を渡してくれました』

給金ではなく功績を挙げての褒美なので、これはどんなに忙しくても貴族本人がやるのが決まりだったからだ。

『ブロワ辺境伯が来なかった理由は？』

『忙しいからと』

その席では、平然と別の家名と俺の家臣であると名乗ったニコラウスに、諸侯軍の幹部達は目まぐるしく表情と顔色を変えていたらしい。

俺に反乱の証拠を押さえられたが、かと言ってニコラウスを今殺したところで何の解決にもならない。

なぜなら、その前にトーマスがやはり別の家名を名乗って兄を一騎討ちで捕らえているのだから。

『白々しく、私がバウマイスター伯爵家でどのくらいのポジションかとか聞いてきましたけど』

引見が終わり、捕虜交換で戻るまでの時間を待っていると、そこ

で更に奇妙な事がわかったそうだ。

『他の、お味方で捕虜になった人達から聞いたのですが……』

彼らには、ちゃんとブロワ辺境伯本人が引見したのだそうだ。

『なるほど、もしかすると』

『ブロワ辺境伯は、あの軍勢の中にいない』

俺、クラウス、ニコラウスの意見が一致する。

なぜかは知らないが、あのブロワ辺境伯本軍にはブロワ辺境伯がいない。

その理由は簡単で、ニコラウスの引見に出て来なかったからだ。

『ニコラウス殿がいくら下っ端だったとしても、元の主君の顔くらいは知っているでしょうからね』

影武者というほど似てはいないと思うが、ブロワ辺境伯の家臣達は似た背格好や年齢の人物にブロワ辺境伯の装備を付けて、彼が本陣にいると思わせている。

元々、一騎討ちをするような味方の騎士達は功名稼ぎの下っ端が多い。

そんな彼らは、東部の大物貴族であるブロワ辺境伯の顔など知らないはずだと。

年や背格好が似た高価な武具を付けた人が、捕虜になった自分達に家名などを聞き、捕らえたブロワ家の騎士達に感状や褒美を渡している。

当然ブロワ家の家臣達は、そのブロワ辺境伯が偽者だという事には気が付いているはずだ。
いや、言い含められているのであろう。
これも、敵を欺くためだと。

『これは、ブライヒレーダー辺境伯様にご報告した方が』

『そうだな』

トーマス達がうちで雇われている事をアピールして敵首脳陣に揺さぶりをかける作戦のはずが、とんでもな情報が出て来たものである。

俺は、それを成したクラウスの手腕に驚きつつも、彼とニコラウスと連れてブライヒレーダー辺境伯に報告に行く。

『すると、あの噂は本物ですか』

『噂ですか？』

ブライヒレーダー辺境伯は、俺達からもたらされた情報を聞くと納得のいくような顔をしていた。

『はい。大規模な紛争ですので、私もブロワ家側も情報収集は行っておりまして……』

互いの領内や館周辺に人を放ち、補給状況や何か有用な情報がないかと探っているそうだ。

『そこで、ブロワ辺境伯が病床に伏せっているという噂が出まして

ね。一年ほど前から、体調不良の噂は出ていましたけど』

東部を統括する大貴族の健康情報なので重視はされていたが、こちら側を混乱させる偽の情報という可能性もあり、信憑性の確認に時間がかかっていたそうだ。

『そうですか。良い事を教えてくれました。まだ詳細な確認に時間がかかりますが、かなり信憑性が大ですね』

顔を知る元家臣が捕虜であった引見で、代理人を出して来た。戦乱時とは違い、コストがかかるので影武者など今では王家でも用意していない以上、この紛争で用いるにしてもあまり高度な事はできないはず。

だからこそ、顔を知らない捕虜の前には出し、ニコラウスの時は代理人で誤魔化した。

と、推論も可能な状況になって来たようだ。

『この情報で裁定が早まるかはわかりませんが、当主不在の本軍に大した事も出来ませんか』

『揺さぶるのも楽ですしね』

『そういう事です』

もうこれでほぼ負けは無いと確信したブライヒレーダー辺境伯は、ニコラウスに褒美の入った袋を渡していた。

続けて、バウマイスター伯爵家軍の陣地に戻ると、俺もニコラウスに褒美を渡す。

『任務の内容的に感状は与えられないが、その分褒美は弾んだから』

『ありがたき幸せ』

感状とは武功に対する物なので、今回のような特殊な任務には出せない事になっている。

だが、こういう時には褒美を弾んでバランスを取るのが普通であった。

俺が袋に入れて渡した褒美に、ニコラウスは目を輝かせていた。

『お見合い会への参加権利も与える』

『それが一番の褒美ですね』

本当は独身者を全員参加させたいのだが、向こうは一応は貴族や大物陪臣の娘ばかりなので、どうしてもある程度人員を選ぶ必要があったからだ。

なので、その基準は若手の幹部候補という事にしていた。

『ニコラウス。褒美は、どのくらい貰えたんだ?』

『金板三枚でした』

有用な情報だったので、ブライヒレーダー辺境伯が金板一枚、俺が金板二枚を危険手当込みで出していた。

『すげえ！　元実家の給金十二年分とか！』

『うちなんて、十五年分だぞ！』

『ニコラウスは、殺される可能性もあった任務に成功したからな。俺も、志願すれば良かったかな？』

褒美を貰って仲間達の元に戻ったニコラウスは、その褒美の額を驚かれていた。

『なあ、クラウス』

『小身の陪臣騎士家の懐事情はそんな物です』

当然それだけでは生活できないので、普段は農業・漁業・狩猟などで生計を立てているそうだ。

女性も、布を織ったり内職などで家に貢献する必要がある。

そして、そうやって貯めたお金で表向きは騎士に相応しい振る舞いをする。

なるほど、前にヴィルマがカタリーナを称して『水鳥』と言っていたが、そんな陪臣は珍しくも無いようだ。

『うちは、主家自体がそんな感じだったな……』

『以前のバウマイスター騎士爵家は、他家の陪臣にもバカにされるほど貧しかったので……』

以前は、ブライヒレーダー辺境伯家の陪臣達から『水呑み騎士』とバカにされていたくらいなのだから。

今ではそんな事を言ったのがバレるとブライヒレーダー辺境伯にクビにされかねないので、誰も言わなくなったらしい。

『しかしながら、最低でも出陣できないほどの病状ですか。お館様の初陣が勝利となって、これは幸先が宜しいかと』

『それも、裁定開始の使者が来ないとな』

『そのためには、もう少し相手の動揺を誘う必要があります。お館様のアイデアには期待しておりますれば』

『アイデアねぇ……』

それ以降も出来る限りの事はしたのだが、ブロワ家側はいくら追い込まれても裁定の使者を送って来ない。

ブロワ辺境伯本人が病床の身とはいえ、ベッドの上で指示が出せているのであれば、さすがにそろそろ裁定の準備を始めるはずだとブライヒレーダー辺境伯は思っているようだ。

「このままだと、ブロワ家側の方がどんどんジリ貧になりますし」

お互いに無用な戦費を消耗しているが、未開地開発特需のあるブライヒレーダー辺境伯家と、それからハブられているブロワ辺境伯家とでは基礎体力に大きな差があるというわけだ。

「ブロワ辺境伯も、そこまでバカだとは思わないのですが……」

それどころか、ブライヒレーダー辺境伯家に嫌がらせをしてくるタイミングや、今回の秘密裏に兵を準備する部分など。

病床でも、やはり侮れない人だとブライヒレーダー辺境伯は思っているようだ。

「まあ、個人的には大嫌いですけどね」

「あまり良い人には見えませんよね」

ただ、個人的な感情と公人としての考えは別である。

軍事衝突やブロワ辺境伯家を攻め滅ぼす事が不可能な以上は、ここで裁定を結ぶしかないのだ。

「この状況で裁定を結んでも不利なままだから、譲歩を引き出そうと粘っているのでは？」

「大方そんな所でしょうが、私は譲歩するつもりはありませんので」

戦況は圧倒的に優位であったし、長対陣は費用がかかるがブロワ家よりも経済的にも優位なので自分から裁定を申し入れる事もしない。

自分がブライヒレーダー辺境伯家を継いだばかりの頃の数々の嫌がらせを考えると、ここで徹底的に叩いて二度とそんな事をしないようにする必要がある。

あとは、今回の紛争では四十家を超える貴族家が兵を出しているのだ。

彼らの面子や今後の統括などを考えると、下手な妥協で彼らの不興を買うのは避けたいのが本音なのであろう。

「うちは家臣達が私の不在を補っていますし、バウマイスター伯爵

も同様でしょう？」

「ええ」

大まかな部分は押さえる必要があるが、ブライヒレーダー辺境伯もうちも、今諸侯軍に混じっている家臣達が居なくても問題なく開発は進むようになっている。

うちの人材不足は相変わらずであったが、それを補うために両軍の間で陣借り者達の採用試験までして人を増やしたのだ。

「もうこうなったら、ブロワ家の陪臣の次男・三男大歓迎で採用試験でもしますかね？」

「さすがに、それは拙いでしょう」

「冗談ですよ」

ブロワ辺境伯家側へのダメージは大きいかもしれないが、スパイが大量流入する可能性もある。

ここは、自重すべきであろう。

「ただ、ブロワ家側の情報があまり掴めないのが辛いですね」

ブライヒレーダー辺境伯は今もブロワ辺境伯家の情報を懸命に探っていたが、当主が病気で屋敷の寝室に伏せっているのと、その周囲を物々しい数の警備兵で守備しているという情報しか追加では得ていなかった。

どの程度の病状なのかは、密偵を屋敷の中に入れないと確認でき

ないのだが、それはさすがに不可能であろう。

「想像はつきます。あそこは、御家騒動がありますから」

「そうなのですか？」

「はい」

ブライヒレーダー辺境伯によると、ブロワ辺境伯家には長男と次男による家督争いがあるそうだ。

「そのせいで、未だにブロワ辺境伯は次の当主を定めていません」

「普通に聞くと、長男で無難にケリなのでは？」

「いえ、長男のフィリップ様はお母様の身分が低いのです……」

意外にもというか、やはりというか。

エリーゼは、この手の情報に詳しかった。

ホーエンハイム枢機卿からの情報なのであろう。

「フィリップ様のお母様は、家格が低い陪臣の娘だそうです」

エリーゼの話によると、ブロワ辺境伯は先に側室であるフィリップの母親を妻にし、次に中央の大貴族家から正妻を迎え入れたそうだ。

「次男のクリストフ様は、お母様が正妻ですから」

母親の身分が低い長男に、母親が正妻な次男。

年齢もさほど離れておらず、確かに家督相続では揉めそうであった。

「更に加えますと……」

ブロワ辺境伯の長男フィリップは、今年で三十五歳。
軍才に恵まれ、風貌もそれに類している。
要するに、エドガー軍務卿と同類なわけだ。

「エドガー軍務卿のお気に入りだとか」

加えて、彼の正妻はブロワ家の従士長の娘だそうだ。
言い換えるのなら、諸侯軍を押さえていると言っても過言ではない。
実際に、諸侯軍幹部の多くはフィリップを支持していた。

「次に、次男のクリストフ殿ですが……」

今年で三十四歳で、タイプとしてはブライヒレーダー辺境伯に似ているそうだ。
軍才はサッパリだが、内政能力に長けている。
正妻は内政を担当している重臣の娘で、当然文官達の支持が厚い。

両者が対立するのは、当然の結果とも言えた。

「何と言うか、良く聞くような話と言うか……」

「ええ、おかげで困っています」

まずは、ブロワ辺境伯の病状だ。

果たして、本当に病床でもちゃんと指揮を執れているのか？
先ほど病床でも侮りがたいとブライヒレーダー辺境伯が言っていたが、諸侯軍の幹部達でも同じ仕事が可能である。

今回の出兵が、本当に東部の閉塞感の打破や、開発地利権にあぶれた貴族達の不満を解消するためにだけ行われたのか？

それとも、ブロワ辺境伯はもう指揮すら執れない状態で、軍を押さえているフィリップ側が相続を有利にするために勝手にやったのか？

「後者の場合、絶対に不利になる裁定への参加表明は言い難いですよね？」

「確かに……」

「ヤケになって、本当に戦争になるとか？」

「それは無いはずですが……」

もし戦争にでもなったら、未開地の開発が中断してしまうからだ。
あと、ブロワ家が崩壊するのは拙い。
ここ一千年以上も東部の統括を行っていた大貴族家が潰れるとなると、その後釜となる存在が必要になるし、戦争後の混乱を抑えて復興をするとなると莫大な費用と手間と時間がかかる。

「バウマイスター伯爵がいれば勝てる可能性は高いですけど、褒美と称してとんでもない負担を押し付けられますよ」

下手に東部の飛び地など貰っても、今の俺には統治など不可能で

ある。
　ブライヒレーダー辺境伯もいらないであろう。
「ブロワ色に千年以上も染まった外の領地なんていりませんよ。統治する手間を考えると、何十年も赤字でしょうね」
　そんな事になるのであれば、さっさとこちらが有利な裁定案を結び、未開地の南部の開発に邁進した方がよっぽど建設的だ。
　戦略シミュレーションゲームでもあるまいし、いきなり占領した土地から収益など上がるはずがないのだ。
「向こうがそこまで読んで、こちらが折れるのを待っているとか？」
「無いとは言い切れませんが、向こうも滅亡はゴメンでしょう」
　もしそこまで行けば、王国としてはブロワ家を許せなくなる。
　一族処刑でも文句は言えず、戦争の原因となった家臣達やその家族も同様であろう。
「あの、一ついいですか？」
「何です？　エルヴィン君」
「あのブロワ家本軍は、誰が率いているのですか？」
「多分、諸侯軍の幹部の誰かだと……」
　現在のブロワ辺境伯の病状を考えると、二人の跡取り候補は彼の傍にいたいはずだ。
　もし彼が急死してもそこにいないと、残って傍にいる方が『跡取

りに指名された』などと宣言して家督を奪取する可能性もあるのだから。

「ですが、ブロワ家の人間が一人もいないブロワ家諸侯軍ですか？」

「そう言われると変ですね……」

あとは三男以下という事になるが、他の息子達は分家や陪臣の家に養子に入り、娘達も全て嫁いでいるそうだ。

もはや他家の人間になってしまった以上、そう簡単に代理でも総大将は務まらないであろう。

「あの……。もしかすると……」

「エリーゼさん。何か知っているのですか？」

「はい。ブロワ辺境伯様には末の娘さんが……」

「未婚のですか？」

「はい。あまり大っぴらには公表されていないのですが……」

母親が王都で無役の騎士の娘で、つい数年前まで王都で暮らしていた末娘がいたそうだ。

エリーゼが知っているのは、教会への奉仕活動などで縁があったからだそうだ。

「私も知りませんでした」

ブライヒレーダー辺境伯も、知らなかったようだ。

「お母様は、ブロワ辺境伯様が王都に滞在していた時にお手付きになったそうで……」

東部の大物貴族と、王都で無役の貧乏騎士の娘なのだ。

ブロワ辺境伯からすれば平民の娘に遊びで手を出した感覚なのであろうし、相手側もそれに文句を言えなかった。

勝手に側室を増やすと家族から文句を言われる可能性もあったし、子供が増えると他の子供達からも文句が出る可能性がある。

なので、密かに認知だけして王都に母娘を住まわせていたのであろうと。

これはエリーゼの推察であった。

いくら知り合いでも、その娘が腹を割ってエリーゼに全てを話すはずなどないし、それでも推論は可能というわけだ。

「ブロワ辺境伯の他の子供達は、全てブロワ領内に居ますからね」

一人だけ王都で生活していたとなると、やはりいらない娘扱いされていたのであろう。

「それで、その方のお名前は？」

「失礼します！」

そこに、一人の陪臣が息を切らせながら駆け込んでくる。

「どうかしましたか？」

「ブロワ家側が、裁定の申し込みをして来ました！」

突然使者が来て、裁定を始めたいという旨の手紙を置いて行ったそうだ。
実際に彼の手にはその手紙が握られていて、ブライヒレーダー辺境伯は急ぎその手紙を封を切って中身を確認していた。

「封印は本物ですね。中身も、決まり通りの内容で……」

貴族がこういう手紙を送る際に、溶けた蝋で封印をして家紋の判子を押し当てるのを前世で見た記憶があった。
海外ドラマか映画かは忘れたが、この世界でも同じような慣習があったのだ。

「ただ、差出人の名は初めて聞きますね。総大将代理カルラ・フォン・ブロワ？」

「その女性が、先ほどお話した末の娘さんです」

「その娘さんと交渉するのでしょうか？」

「彼女は看板で、他の重臣達とでしょうね」

紛争の裁定が行われる事となり、ブライヒレーダー辺境伯やみんなの間に安堵の表情が浮かぶが、それでもまだ道は半ばといった感じにしか俺は思っていなかった。

性格の悪そうな連中なので、交渉の席で思いっきりゴネる可能性もあったからだ。
それでも、早く終えてまた狩りに行きたいなどと思いながら、一応は安堵のためいきをつくのであった。

第六十七話　ようやく裁定が始まったと思ったら……。

「ようやく裁定の始まりですか」

「ブロワ家側も、もう限界なのでしょうね。向こうから裁定を言い出した以上は、手加減はしませんけど」

俺が参加していない期間も含めて、二ヶ月近くも行われているブライヒレーダー辺境伯とブロワ辺境伯による紛争は、次の段階に移行していた。

全ての紛争案件で以前から持っていた利権や領地を全て失い、多くの貴族や家臣や兵士達も捕らえられ、本軍同士の戦闘でもお抱え魔法使いが捕らえられるなど。

誰が見ても、ブロワ辺境伯家側の不利は明らかだ。

このまま対峙だけ続けても、それでブロワ家側が有利になるわけでもない。

費用面などを考えると、余計に不利になるだけだ。

どうせ負けなら、早めに決着をつけてかかる費用を抑えたい。

そういう腹積もりなのかもしれない。

だが、まだ何か隠し玉を持っている可能性もあり、裁定には俺も参加する事になっていた。

さすがに、ブライヒレーダー辺境伯の暗殺を目論むとかは勘弁して欲しいところだ。

「そうですね。ヴィルマさんとエリーゼさんもお願いします」

裁定の会場は、双方の軍勢が睨み合う草原の中心地点。
そこに臨時で大型テントを張り、どちらも二十名までの随員が認められるそうだ。

ブライヒレーダー辺境伯は、数名の家臣にブランタークさん、諸侯軍に参加している貴族数名とその付き人に、俺はヴィルマとエリーゼを伴って参加する事になっていた。

正直なところ、ヴィルマがこの手の交渉で役に立つはずもない。
だが彼女は、エドガー軍務卿の養女であるし、護衛には最適なので選ばれたていた。

エリーゼも、あのホーエンハイム枢機卿の孫なので当然であろう。
この国に、教会の影響力が無い場所などほとんどないのだから。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。今日は顔合わせくらいでしょうし」

貴族として交渉に臨むという初めての経験に、俺は柄にもなく顔を真面目にさせていたようだ。
それを見て、ブライヒレーダー辺境伯が話しかけてくる。

裁定は、何日間かをかけて行われるようだ。
まずは双方が独自の裁定案を主張し、当然そう簡単に合意には至らないので条件のすり合わせを行う。
夕方になれば今日はこれで終わりとお互いに引き上げ、また明日の朝から交渉を行う。

大筋で合意したら、今度は担当の家臣達が実務者協議を行って細かい細則のすり合わせや、条件履行の確認などを行うそうだ。

「とはいえ、向こうは圧倒的に不利ですしね。支払う金額をいかに減らすかですか」

例えば河の中州の取り合いなど、無理矢理こちら側の物だと認めさせても、また時間が経つと元も木阿弥になる事が多いそうだ。

ただ、双方ともそれは十分に理解している。

それに片方が独占をすると、もう片方にいらぬ禍根を残して争いが広がる可能性もあるそうだ。

世代が変わると、『昔に取られた利権を取り戻す！』と宣言して家中の支持を集めるような新当主が出て、また兵を出したりする。

結局キリがないので、所有権が曖昧で半分ずつくらいの方が良かったりする事も多いのだ。

「前の条件にして欲しければ、多額の和解金に、捕まった人達への身代金もありますね。アレ、捕虜の期間が長いと増額になりますし」

捕虜には、それぞれの身分に応じた待遇が必要となる。

貴族本人などは金がかかるので、当然その費用は身代金に上乗せされるわけだ。

「それに、紛争の原因は向こうにありますしね」

ルールを破って、事前告知無しの奇襲まで仕掛けたのだ。

和解金の額はかなり高騰するはずだと、ブライヒレーダー辺境伯は説明していた。

「とにかく、まずは顔合わせです」

両軍が睨み合う草原の真ん中に、先に裁定を言い出したブロワ家側の兵士達が急ぎ野営用の大型テントを設営する。

それが終わると、ブロワ家側の兵士の一人が甲高い笛のような物を吹き、暫くするとブライヒレーダー家側からも同じ笛の音が響いていた。

「準備完了というわけです。では、参りましょうか？」

ブライヒレーダー辺境伯に促されて、合計二十名の交渉団がテントの前まで歩いて行く。

到着するとテントの入り口が開かれ、中に入って来いという事らしい。

ブライヒレーダー辺境伯を先頭に中に入ると、二十名が向かい合って座れるように長いテーブルと椅子がセットされていた。

「貴殿が、ブライヒレーダー辺境伯であるか？」

「いかにも。そちらは、ブロワ辺境伯とは違うようですが」

「総大将代理の、カルラ・フォン・ブロワ様である」

手紙の通りに、現在のブロワ軍の総大将はカルラという娘が務めているようだ。

彼女は、俺達と大して年齢が違わないように見える。

オーダーメイドだと思われる高価そうなミスリル製のチェインメイルを着ていて、腰くらいまである黒い髪を後ろで束ね、少し大和

撫子風に見える美少女である。

身長は百六十五センチほどで、スタイルも良かった。

胸の大きさは、イーナとカタリーナの間くらいであろうか？

事前にエリーゼから聞いた情報によると、彼女はつい一年ほど前までは王都で生活をしていたらしい。

母親が貧乏法衣騎士の娘であったせいで他の姉妹達に嫌われ、東部には一度も入った事がなかったそうだ。

『俺。全然面識がないな』

『王都でブロワ辺境伯様から仕送りを受けて生活をしていたそうで、ヴェンデリン様と接触するのを避けたようです』

エリーゼ自体は、かなり長い期間面識があったそうだ。

ただ、親友同士というわけでもない。

カルラが教会に嫁入り修行も兼ねて勉学や家事などを習いに来ていて、たまに教会主宰のチャリティー活動などの手伝いを一緒にした。

お互いに自己紹介をして、何度かお茶を飲んだ事がある。

そのくらいの仲だそうだ。

『教会で勉強ね』

ブロワ辺境伯から仕送りがあるが、そう大金でもない。

母娘で実家に居候しているので、それなりの金額は入れないといけない。

『カルラさんのお爺様や伯父様などは、あまり優秀な方とは……』

爵位に差はあっても、同じ王国から任じられた貴族同士なのに金欲しさに娘を差し出しているのだ。

当然、他の法衣貴族達からもあまり良い目では見られていなかった。

更に、その仕送りを利用して役職を得ようと付け届けなどをしているらしいが、周囲からの悪判に能力不足もあってただ金を無駄にしているらしい。

カルラが無料で学べる教会に来ていたのには、そういう理由があったそうだ。

『そのカルラさんも、残念な家族に振り回されていると』

『はい。そういう事になります』

そのせいなのかは知らないが、実は彼女武芸はかなり嗜んでいるそうだ。

特に、弓とナイフの投擲術には優れているらしい。

『俺と被るなぁ……』

『前回の武芸大会で、弓の部で準優勝だそうです』

『レベルが違うぜ……』

いや、訂正しよう。

比較的弓が得意なバウマイスター一族でも、束になってかかっても敵わない逸材だ。

前世的に言うと、『女版那須与一』というやつであろう。

ただ、さすがに今日は弓は持っていないようだ。

「総大将代理のカルラ・フォン・ブロワです。裁定交渉に参加いただき感謝しております」

結局、彼女が発した発言はそれだけだった。

主な交渉は彼女に随伴している家臣達が行い、彼女はお飾りでしかない。

相続を争っている二人の息子の内のどちらかでもいれば主役になるであろうが、カルラは女性なので実務などしないからだ。

隠してはいるがブロワ辺境伯は病欠で、というかこの場にいない時点で彼に何らかの不都合があるのは明らかであった。

「（ふう……）」

「（どうかしましたか？）」

「（長くなりそうですね）」

ブライヒレーダー辺境伯は家臣の一人から何かを耳打ちされると、溜息をつきながら俺に小声で話しかけていた。

交渉の席にいる家臣達が、全て武官なのが気に入らないらしい。

そういえば、前に長男の支持母体が諸侯幹部に多いと聞いたような気がした。

「（多分、今回の出兵は長男のフィリップ殿が大きく関与している

ようです）」

相続を争っている二人であったが、今はいつ死ぬかわからないブロワ辺境伯から離れられないはず。

なぜなら、ここで総大将などをしている内にブロワ辺境伯が死ぬと、残っている方が遺言を偽造し、勝手に王都に襲爵の許可を取ってしまう可能性があったからだ。

そこで、諸侯軍に支持者が多いフィリップが、彼らに手柄を立てさせて相続を決定付けるために兵を出した。

いくらブライヒレーダー辺境伯と険悪でも、この時期の出兵は王宮側の非難が大きくなるので、ブロワ辺境伯が健在ならば行わないはずだ。

次男であるクリストフの考えは不明だが、彼のシンパである文官が混じっていないので、彼も出兵には反対なのかもしれない。

エリーゼの話によると、一年ほど前に父親であるブロワ辺境伯から領地に呼ばれたカルラは、つい最近までは彼の世話でもしていたようだ。

だが、急に諸侯軍の総司令官代理にされた。

当然お飾りであったが、もし本当に指揮を任されても困るので、これで良いのかもしれない。

「（紛争絡みの大規模出兵って、代替わり直後とか、その直前に良く起こりますから）」

現当主が明日をも知れぬ命で家臣達に動揺が広がったので、跡継ぎが己の力を見せるために兵を出した。

または、襲爵直後に己の力を見せるために兵を出した。

どちらも、内部の不安を外に向けさせるための物で、これは某半島の反日政策とか、某お米の国の世界の敵認定に似ていると思う。

「（ただ、そうなりますと……）」

勝てていれば裁定で有利な条件を得られたので、これはフィリップの功績となり、彼を支持する諸侯軍幹部の将来も明るかったはず。

だが実際には、完全なボロ負けで戦前に持っていた利権を失うか、取り戻すのに莫大な和解金を払わなければならず、加えて多くの貴族や兵士達も捕まっている。

身代金だけでも、かなりの金額になるはずだ。

想像ではあるが、捕まっている彼らが掟破りをしてまで兵を出したのは、もし負けて捕まったり負けたりしてもその損害を補填するとかの密約があったのかもしれない。

だがそうなると、ブロワ辺境伯家の財布には大ダメージであろう。

「（更に悪い事に、クリストフ殿を支持している文官達の姿がありません）」

ブロワ家側の家臣達が武官なので、負けても金を支払う準備が出来ていない可能性があった。

何しろ、予算を執行する文官がいないのだから。

あったとしても、ボロ負けの上にブロワ家の財政に止めを与えかねない一撃である。

その失態をクリストフ支持の文官達に突かれれば、最悪フィリップは後継者争いから転落という可能性も大きかった。

「（いくら向こうがバカでも、現実くらいは……）」

見えているのかと思ったのだが、第一日目の裁定はただ双方が己の主張を言い合うだけで終了していた。

元々普通はそうなのだが、この状況でブロワ家側が全く譲歩しなかったのだ。

捕虜への身代金は払うが、紛争地帯の配分を無条件で戦前の状態に戻せと言い放ち、ブライヒレーダー辺境伯も含めて、参加しているこちら側の貴族達が話にならないと激怒したのだ。

「そちらが先に掟破りをして来たのですよ。それに反撃した私達がなぜ損をしなければいけないのです？」

ブライヒレーダー辺境伯の言い分は、もっともであった。

向こうも内心ではそう思っているのであろうが、無条件に不利な裁定案を受け入れた時点で、自分達の未来は終わるのだ。

いくら時間をかけても、引き分け程度の裁定案を勝ち取ろうと足掻いているらしい。

ただ、その裁定が長引けば長引くほど、ブロワ家側の財布には厳しくなっていく。

進むも地獄、退くも地獄とはこの事であろうか？

「今は有利でも、こちらが兵を出せばまた不利になるぞ！」

「へえ。また兵を出して紛争案件を取り戻すと。宜しい、我らもそ

の時は兵を出します」

元々、攻撃側よりも防衛側の方が有利であるし、その時には俺やブランタークさんやカタリーナもまた出陣する。

エリアスタンで麻痺させ、捕らえて身代金を要求する。

人を殺さずに済んで、お金まで稼げてしまう大変に美味しい商売なのだ。

「ところで、バウマイスター伯爵のご意見は如何に？」

ブライヒレーダー辺境伯が、俺にも意見を言うようにと振ってくる。

「私としては、我が家とヴァイゲル準男爵家で捕らえた捕虜の身代金さえ貰えれば。あとの利権を元に戻す和解金は、卑怯なだまし討ちをかけた各貴族家の方々に誠意を持って交渉するしかないでしょうね。勿論また何かあれば、寄り親であるブライヒレーダー辺境伯殿の要請で私も兵を出すでしょうし」

俺の言い分に、交渉に当たっているブロワ家側の武官達は顔を真っ青にさせていた。

また戦闘になって大量に捕虜など出たら、身代金で破産しかねないからだ。

かと言って、ここで自暴自棄になって人を殺す戦争になれば、今度は王宮から待ったがかかる。

今まで貴族同士の紛争が見逃されて来たのは、一部の暴走を除き極力人死にが出ないようにコントロールされてきたからだ。

一種のガス抜きという扱いだから黙認されてきたわけで、それを破れば最悪ブロワ辺境伯家はお取り潰しの可能性があった。

「バウマイスター伯爵殿は、他に何か？」

ブロワ家側の重臣と思われる武官が、俺に思わせぶりな口調で聞いて来る。

多分、トーマス達をけしかけてバウマイスター騎士爵領内で反乱を起こさせたのは、こいつなのであろう。

反乱は僅かな時間で鎮圧され、挙句に捨て駒にしたトーマス達が新しい姓を名乗って俺の家臣になっている。

トーマスは実の兄を一騎討ちで捕らえてしまうし、ニコラウスのように他の姓を名乗って堂々と捕虜になって向こうにプレッシャーまで与えた者までいた。

この幹部は、俺がいつその切り札を切ってくるか不安で堪らないのであろう。

「いえ別に。ああ、ここのところ不足している人手を補うために、結構人を雇いましてね。いやあ、ブロワ辺境伯家のように人材が充実していると羨ましいですね」

あえて言わないが、その後ろは『後方かく乱で、若い連中を二十名以上も使い捨てに出来るのですから』という文言が入る。

それに気が付いた初老の重臣は、更に顔を真っ青にさせていた。

別にこちらには、無理に早く交渉を纏める必要などないのだ。

急いで纏めようとして、ブロワ側家の思惑に乗る事の方が損なのだから。

「そういえば、喉が渇いたな。エリーゼ」

「はい」

俺の指示で、エリーゼがお茶を淹れて味方の人員に配り始める。
お茶請けは、やはりチョコレート菓子の新作だ。

こういう席では、相手に余裕を見せるためにあえて優雅にお茶などを飲んだり、お菓子や軽食をつまむ事がある。

だが、これは味方同士にしか配られない。
もし敵方に飲み食いさせた後に、運悪く急死などをされると毒殺を疑われるからだ。

こういう席では、自分の飲み物や食べ物は自分達で準備するのが決まりであった。

「これは美味ですな」

「今度、ブライヒブルクの店舗にも卸すそうですよ。うちの御用商人が」

「それは羨ましいですな。是非に、我がクリーガー子爵領内でも販売して欲しいものです」

「では、時期を見てその商人を伺わせましょう」

「それはありがたい」

「バウマイスター伯爵殿、我がクメッチュ男爵領も宜しく」

わざと暢気にお菓子の商談などを行い、ブロワ家側の焦りと怒りを誘っていると、ついに我慢出来なくなったらしい。

お互いに最初の条件を持ち帰り、明日にまた新しい裁定案を出すという結論になって解散となっていた。

「明日は、もう少し折り合えますかね？」

「さあ？　わかりませんね。向こうとしては、最低でも引き分け判定に持ち込みたいでしょうし」

「その条件が、最初から無理なんですけど……」

「そこでそれを認めてしまうと、彼らは揃って失脚です」

自分達が支持する長男に跡を継がせるため、当主不予を利用して兵を勝手に出したのに、逆にボロ負けして莫大な金を払う羽目になった。

そうでなくても開発利権から外れているのに、更に経済的なダメージを受けるのだ。

次男支持の文官達からすれば、彼らを追い落とす決定的なチャンスとも言える。

何しろ、ライバルが勝手に自爆してくれたのだから。

最悪、御家取り潰しに全財産没収もありえる厳罰を覚悟しないといけない点が、次男からしても悪夢かもしれないが。

「結局、多少時間はかかりますけど。こちらの裁定案を受け入れざ

るを得ないのですがね」

こちらに、譲歩する理由などないからだ。

一日目の交渉は、ただの顔見せであった。

だが、二日目になると様子が一変する。

「交渉の公平性を保つために、王都からマーラー外務委員にお越しいただきました」

突然、ブロワ家側が王都から来たという法衣貴族を連れて来たのだ。

五十代前半くらいに見えるデップリと腹が出た、いかにも汚職とかに身を染めていそうな男に見える。

そもそも、公平性を保つとか言っている癖に、こちらへの通告もなくいきなり連れて来るのが怪しい。

挙句にマーラー外務委員とやらは、交渉が始まると一方的にブロワ家側の肩を持ち始めたのだ。

「これ以上の東部と南部の騒乱を、王宮は望みません。ここで片意地を張っても仕方がないでしょう。戦前の状態に戻し、捕まっている貴族達の身代金は相場通りという事で」

昨日ブロワ家側が出した条件を、まるでオウムのようにマーラー外務委員が言い始めたのだ。

しかも丁寧に、これ以上の争いの継続は王宮が望まないという大義名分付きである。

当然、お話にもならない。

ブライヒレーダー辺境伯は昨日と同じく理論的にブロワ家側の非

を指摘し、昨日とまるで同じ条件を言ってから席を立っていた。

「あのマーラー外務委員って何者なんです？」

「外務卿をしている、シュティーリケ侯爵の子分です」

そういえば王都滞在時に、その名前と顔くらいは見た事があった。

ただ、ヘルムート王国において外務卿の影響力は小さい。

その理由は、唯一の交渉相手であるアーカート神聖帝国の相手だけをしているからだ。

他に沢山の国でもあれば、外務卿も花形の閣僚であったはず。

だが、現実には一国のみの相手なので役所の規模も予算も小さい。

戦争が二百年以上も無いので、定期的に送っている親善団の編成とガイドをするか、向こうの首都に置いている大使館で情報を収集するくらい。

更に、親善団の編成とガイドは交易をしている商務省と工務省の管轄に被っているし、情報収集も大使館には軍も駐在武官を派遣しているので、これも半分仕事を奪われている。

なら、『こういう貴族同士の裁定などは？』と聞かれると、これも同国の貴族同士の争いなので内務卿の管轄に入っていて、『全閣僚の中で一番影が薄い』、『体の臓器に例えると盲腸』などと言われてしまうほどであった。

「外務委員とは言っても、特に仕事などありません。貴族にポストを分け与えるために存在していますので」

そんな名誉職にあるので、誰も彼の動向など気にもしない。

もし裁定で大きな影響力を振るえるのなら、事前にルックナー財務卿などから注意が行くはずだ。

「ブライヒレーダー辺境伯は、彼をご存知なのですか？」

「はい」

法衣子爵で、能力的には凡庸。

ただ、ブロワ辺境伯の妹を妻にしていて、その縁で外務委員に就任できた人物らしい。

「思いっきり、ブロワ家側の人間ですね」

「まあ、何の役にも立ちませんけど」

マーラー外務委員は、別に王宮からの命令でこの交渉に参加したわけではないからだ。

しかも、交渉の席でこちらを脅かすように王宮の名前を出している。

潰すのは容易であった。

「というわけですが、シュティーリケ外務卿はブロワ辺境伯家側の肩を持ったという認識で宜しいでしょうか？」

『それは大きな誤解です。常時王都に詰める義務がある外務委員が勝手に紛争の裁定に乗り込んだ挙句、王国の名前を出して一方の肩を持つなど、絶対にあってはならない事なのですから』

魔導携帯通信機は全ての閣僚が持っているし、俺はいつでもシュ

ティーリケ外務卿と通話が可能だ。
そういえば彼とは初めて話をしたのだが、こちらの訴えを受け入れる度量はあるようであった。

あと、マーラー子爵の行動は独断であると断言している。

『私的に顔を出しているのに、公的な役職を名乗るなど。それ以前に、役職持ちなら誤解を招くので顔など出すべきではない。彼は委員に相応しく無い』

「その判断は外務卿閣下のご裁量の内ですので、私としては口を挟むつもりはございません。ただ、マーラー子爵の行動は常識を外れていると」

『十分に解任の理由になります。奴の御託など無視されても結構です』

私的な理由で公職を名乗り、王国の名前も出し、他の役所の職務に手まで出している。
しかも、貴族家同士の紛争で血縁がある片側に一方的に肩入れしているのだ。

それがどんなに危険なのかを考えたら、彼の解任は当然とも言えた。
可哀想に、もう彼は外務委員ではなくなる。
どうやらシュティーリケ外務卿にとっては、マーラー子爵は特に惜しい人材でもなかったようだ。

その解任を本人が知るのは、もう少し先かもしれないが。

「というわけで、シュティーリケ外務卿にはお世話になったから。チョコやフルーツなどを、適当に見繕って贈っておくようにとアルテリオさんに伝えくれ」

『承知しました』

シュティーリケ外務卿との話を終えると、すぐにローデリヒと通信をして彼にお礼を贈るようにと頼んでいた。

賄賂ではないが、お世話にはなったのでこういう事も必要というわけだ。

もう一度言うが、決して賄賂ではない。

「素晴らしきは、人脈ですかね」

「ただ、あの子爵が失業しても、それが裁定の進展に繋がる補償もありませんよ」

ブロワ家側からすると切り札であったマーラー子爵であったようだが、三日もすると姿が見えなくなっていた。

どうやら、外務委員の職をクビになって裁定に顔を出すところではないようだ。

なぜそれがわかったのかと言えば、事前に王宮から裁定の仲裁に入る特使を送ると連絡が入ったからだ。

特使は、ベッカー内務卿の下で貴族籍の管理をしているクナップシュタイン子爵であった。

年齢は三十歳ほどで、短めの頭髪を真ん中でピッチリと分けている、真面目なお役人といった風貌の人であった。

どういうわけか、役職を世襲する貴族というのは代々似たような雰囲気や容姿を纏う人が多い。

代々軍家系であるアームストロング伯爵家の人達など、その典型例であろう。

「特使のマテュー・オスカー・フォン・クナップシュタインです。念のため先に申しておきますが、私は片方に肩入れなどしません。あくまでも中立の立場で動きますので」

最初に一言だけ挨拶をすると、もう静かに聞き役に徹してしまう。彼はここに来る前に、今回の紛争の経緯やら今の状況を調べて来ているそうだ。

そして、その情報と過去の裁定案を参考に、自分なりの裁定案は持っている。

だが、それを口にするのは、双方の交渉がなかなか纏まらない時だけらしい。

出来れば当事者同士で解決してくれた方が、王宮側から裁定案を押し付けた格好にならず、丸く収まるからだそうだ。

「では、昨日の続きから……」

そう口にする、ブライヒレーダー辺境伯の表情は冴えない。

なぜならこの四日間、互いの条件に差があり過ぎて折り合いの糸口すら掴めないでいたからだ。

「身代金は別途交渉。紛争案件を戦前の状態に戻す和解金は、百万セントだ」

「何度同じ事を言わせるのですか？　その和解金では、今回の紛争の食料代にもなっていませんよ」

「百一万セントだ」

「ふざけているのですか？　私としては、和解金無しでこちらが抑えている利権を全て認めるという条件でも構わないのですがね」

「ふざけるな！」

やはりとしか言いようがなかった。

双方の主張は、平行線を辿るばかりだ。

ブロワ家側は、今回の失態で自らのプライドを保ちつつ、なるべく経済的な損失を負いたくないなどと虫の良い考えを持っている。

一方のブライヒレーダー辺境伯は、そこまで強欲でもないようだ。

彼からすれば、一方的な快勝とはいえあまり過分な金額を要求すると、向こうが意固地になると思っているらしい。

味方の貴族達の手前あまり手心は加えられないが、早く解決して開発の協力に回った方が利益になると判断しているのであろう。

「和解金は五億セントです。これ以上は引けません」

今回の紛争で余計な負担をした貴族達に、利権の分け前を戦前にまで戻す事を納得させる。

そのためにはある程度の現金を渡す必要があり、それをブライヒレーダー辺境伯家が負担する義理もない。

金が払えないなら、今の状況を容認せよ。

立場のあるブライヒレーダー辺境伯としては、これでもギリギリの譲歩なのだ。

「そんな大金は払えん！」

ブロワ家側で交渉を一手に引き受けている重臣は、声を荒げてその提案を否定していた。

いくら地方の雄でも、その和解金を一括で払えるかは微妙なところなのであろう。

今回は戦費も相応にかかっているし、間違いなく捕虜になった貴族達の身代金も負担しなければいけないのであろう。

更に、この金を払っても未開地開発の利権には加われない。

経済的には、もっと困窮する未来が予想された。

「バウマイスター伯爵はどう思います？」

「はあ。お互いの主張に違いがあり過ぎるので、このままだと何日経っても解決しなさそうですね。まあ、その分身代金の額も上がりますけど」

身代金は、捕虜の管理費も上乗せするのが普通だ。

なので、紛争が長引けば長引くほど負担が増えるのは当然ともいえた。

「私は若輩者なので、和解金の相場などは良くわからないのです。そこで、中立に立つ特使殿に指標となる案を出していただくのは如何でしょうか？」

「私がですか？」

「はい。念のために計算はされていると思いますが」

「そうですね。念のために、計算はしてあります」

真面目な官僚タイプであるクナップシュタイン子爵は、やはり自分なりの裁定案を作って来ているようだ。

「ただ、こういう王宮側の裁定案はあまり採用された事はありませんよ」

「構いません。採用されなくても、指標にはなるでしょうから」

「そうですね。私も、参考にはしますよ」

「……。念のために聞いておこう」

ブライヒレーダー辺境伯も、ブロワ家の重臣も、俺の提案を受け入れたようだ。

というか、間違いなくブライヒレーダー辺境伯はその提案を受け入れる。

なぜから、王宮はほぼエコヒイキせずに今の状況を客観的に見て裁定案を作るからだ。

こちらが不利になる事などあり得ず、多少の和解金の減額があってもそれを受け入れる方が利がある。

ブライヒレーダー辺境伯としては、多少の和解金の減額など開発利権ですぐに補えると思っているし、王宮側の裁定案に素直に従っ

た事で王国に貸しも作れる。
紛争当事者の貴族達に不満が出ても、それは少し利権を増やしてやれば解決可能だと思っているはずだ。

更に、もしブロワ家側がその裁定案を受け入れない場合、彼らは王宮からも嫌われて孤立の度合いを深める事となる。

どちらに転んでも、ブライヒレーダー辺境伯に損などないのだ。

「わかりました。試算した裁定案を発表します」

とはいえ、条件はブライヒレーダー辺境伯が最初に出した物と差などない。
唯一、和解金の額が四億セントに減額されただけだ。

「和解金の額が高過ぎる！」

「そうでしょうか？」

ブロワ家側の抗議に、クナップシュタイン子爵は表情一つ変えないで首を傾げていた。

「あの和解金の根拠は？」

「根拠ですか？」

クナップシュタイン子爵は、冷静な表情のまま和解金の内訳を話し始める。

「今回の紛争は、条文の無い慣習法とはいえ、ブロワ家側の貴族達

による奇襲から始まったと聞いています。事前通告は法には記載されていませんが、長年の慣習となっております。よって、ブロワ家側は慣習破りの責を負うべきです。あとは……」

クナップシュタイン子爵は、俺の方にわざとらしく視線を送っていた。

慣習破りの奇襲に、俺を出兵させないための後方かく乱工作にと。当然王宮にはバレていて、それも裁定案がブロワ家側が不利になる理由となっていたようだ。

「捕虜に対する身代金については、王宮は関与しません。そちらで決まりに従って交渉してください。あと、紛争案件を戦前の状態に戻すための和解金ですが。ここまで負けているのですから、諦めて支払わないと全てを失うと思うのですが……」

睨み合いだけなら双方兵を退けで済むが、もう実際に戦ってブロワ家側は全てを失っている状態だ。

王宮側としては、和解金を支払えとしか言えないとナップシュタイン子爵は説明していた。

「とにかく、高過ぎます！」

「いきなり攻められ、一度利権を失いかけた当事者達が聞くと怒ると思いますよ」

そもそも、戦前の状態に戻すというだけで不満が出て来る可能性があるのだ。

それなりの和解金を支払わないと、納得するはずがなかった。

「それと、私としては一つ疑問があるのですが」

クナップシュタイン子爵は、ブロワ家側に聞きたい事があるそうだ。

「何でしょうか？」

「裁定案が纏まったとして、誰がサインをするのですか？」

「それは当然、カルラ様である！」

全く声質を変えないクナップシュタイン子爵の質問に、ブロワ家の重臣は何を当たり前の事をという口調で答えていた。

「カルラ殿のサインでは、その裁定案は履行されない可能性がありますよね？」

「しかし、カルラ様はブロワ辺境伯様の代理で……」

「そこがおかしいのです。今回の紛争ですが、片方の責任者であるブロワ辺境伯殿は一体何をしているのですか？」

どうやら、クナップシュタイン子爵も俺達と同じような疑問を感じていたようだ。

「ブロワ辺境伯殿ご自身がサインをしないと、いくら合意に至っても裁定案など無意味です」

「いや……。しかし、その……」

「もし、ブロワ辺境伯殿が自らサインなど出来ないほどの重病なら、跡取りが代理としてサインをすれば宜しい」

カルラの総大将代理は飾りとしてはギリギリ有効だが、裁定案を記した書類にサインをしても、それは公的には有効にならない。

クナップシュタイン子爵は、まるで役所の職員のように貴族法の解説を始めていた。

「ご長男のフィリップ殿か、ご次男のクリストフ殿か。こちらにお来しいただいて、交渉に参加されるべきだと思いますが」

「それは、その……」

まさか、ブロワ辺境迫が明日をも知れぬ重病で、死んだ時に傍にいないと残っている方に出し抜かれるとも言えず、口をモゴモゴさせながらうろたえた姿を曝していた。

「では、ブロワ辺境伯殿を」

「それも……」

「なら、この交渉はお話にもなりません。条件を詰めて調印を迎えても、それが効力を発揮しないのですから」

クナップシュタイン子爵は呆れた表情を浮かべながら、今度はブライヒレーダー辺境伯へと標的を変える。

「早く裁定案を決めたいのはわかりますが、出ても無意味な物に時間をかけて意味があるのですか？」

「私としましては、ブロワ辺境伯は屋敷から外に出られず、今回の出兵もこの裁定協議も彼が後方から指示し、全権をカルラ殿や家臣の方々に委ねたと認識しています。裁定案が出れば、どなたか調印に姿を見せると。この会議は、予備会議扱いだという認識ですね」

「はあ……。やはり、そういうお考えですか」

こちらが集めた情報によると、ブロワ辺境伯の容態はかなり悪い可能性が高い。

擬態の可能性も考慮したが、ならばここまで戦況が悪化する前に前線に出て来なければおかしいわけで。

長男のフィリップが後継者として優位に立つために支持が多い諸侯軍幹部達に兵を集めさせ、今回の紛争を起こさせたという予想で大筋の一致を見ていた。

多分、父親であるブロワ辺境伯が不予なのを利用して、かなり強引に兵を出しているはずだ。

成功すれば優位に立てるが、失敗すれば次男のクリストフと文官達の突き上げが厳しくなる。

だから、裁定案で無理な条件を出してこちらを辟易とさせているのであろうと。

「条件のすり合わせはこのまま行って貰っても結構ですが、そろそろブロワ辺境伯家側は、誰が協定書にサインを行うのかを表明する必要があると思います」

クナップシュタイン子爵の勧告にブロワ家側の人達は意気消沈してしまい、その日も碌に条件をすり合わせられないまま、その日の

協議が終了するのであった。

「なぜ協定書にサインを行う人を決めるように言ったら、戦争になるのか理解できない。クナップシュタイン子爵の勧告には、彼らを挑発する何かが含まれていたとか？」

「ただ単に、追い込まれた故の暴走と言いますか……」

「ブライヒレーダー辺境伯が、追い込み過ぎたとか？」

「あれで追い込み過ぎたのなら、裁定などする意味がありませんよ」

その日の夜中、俺は突然モーリッツに起こされていた。

何でもブロワ辺境伯本軍に動きがあり、全軍に緊急対応指令が出たそうだ。

モーリッツとトーマスに軍を整えるように命令を出してから、急ぎブライヒレーダー辺境伯の元に行くと、そこでは軍の指揮官達が厳しい表情で伝令達に指令を出して戦の準備を進めていた。

「数十年前の悪夢再びですか」

魔法の袋から出した望遠鏡でブロワ辺境伯本軍の様子を探ると、彼らは大量の松明を炊きながら軍の隊列を整えていた。

多分、それが終われば全軍で突撃を開始するのであろう。

「奇襲でなくて良かったですね」

「うちも向こうも、そこまでの練度はありませんから」

音も立てず、火もほとんど炊かずに夜中に軍の隊列を整え、相手に気が付かれないように突撃を行い、同士討ちをしないようにする。この二百年で、そこまでの練度を持った軍はこの大陸から消えたそうだ。

精鋭を訓練するにも維持するにも、とてつもないお金と手間がかかるからだ。

「その代わりに、今まで見えていなかった予備がいたようですね」

後方にまだ軍勢を隠していたようで、ブロワ家本軍は合計で一万人ほどにまで増えているらしい。

数が倍近くになったので、先制すれば勝てると思っているのであろう。

「その代わりに、とんでもない犠牲が出ますけど」

「私が昔に参加した紛争よりも、多くの人達が死にますね」

俺に付いて来たクラウスですら、表情を暗くするような無謀な戦争である。

もしここでブロワ辺境伯側が勝ったとしても、とんでもない禍根を残すはずだ。

本当に戦争になってしまえば、もう王宮も介入を躊躇わないであろう。

「ブロワ家の連中、何を考えているんだ?」

「誤魔化す事でしょうか?」

ブライヒレーダー辺境伯は、交渉で代表代理を務めていた諸侯軍の幹部が企んだのではないかと予想していた。

「貴族同士の戦争ですから、勝てば一定の評価は得られるかと」

「その前に、損害が多過ぎて総スカンになりますよ。まだ何もしない方が……」

「ですから、このまま何もしないと彼らは破滅なのです」

どの程度長男フィリップの意向を受けて兵を出しているのかは知らないが、ボロ負けしたので不利な裁定案を受け入れる未来は避けられないであろう。

そうなれば、軍を率いている彼らは揃って失脚である。

なぜなら、後継者は次男クリストフに決定してしまうからだ。

このまま何もしないで失脚するのなら、いくら犠牲が出ても万が一の可能性に賭ける。

どうせ、死ぬのは他人なのだからと。

随分と無責任な考え方であったが、人は特権を失いたく無いもの。

陪臣でもブロワ辺境伯家ほどの大貴族だと、下手な法衣男爵などよりもよほど力を持っている。

それを失ってしまうかどうかの瀬戸際なので、無理をした可能性は高かった。

「軍人って、そんなに血の気が多いんですか？」

「血の気というよりは、追い込まれたが故の無謀な強硬策ですかね？」

先に奇襲をした挙句に、勝手に兵を出して紛争を招いたのに、それで負けそうになるとルールすら無視して本当の戦争を企む。

恐ろしいほどに、自分勝手な連中であった。

「戦争は論外ですけど、私も今日はこちらで泊っているのですがね。巻き添えで死んでも構わないと思っているのでしょうか？」

クナップシュタイン子爵も、困惑した表情を崩せないでいた。

中立の特使なので、彼は双方の陣営に一日交代で宿泊をしていたからだ。

「クナップシュタイン子爵が殉職されると、もう少し自分達を贔屓してくれる特使に代わってくれると期待しているのでは？」

「面白い冗談ですね」

クスリとも笑わずに、クナップシュタイン子爵は俺のジョークに反応していた。

王宮から派遣された特使が巻き添えで戦死などすれば、それは王国すら敵に回してしまうからだ。

「それで、どうしましょうか？」

「攻撃を防ぎつつ、援軍待ちですね。もう援軍の要請は出してあり

ます」

今から撤退をしようにも、兵の練度の関係でそれは難しい。
背中を見せたところを攻撃されれば、大敗は必至だからだ。
一糸乱れぬ退却など不可能なので、防戦して援軍を待つしかなかった。

「ただ、私の指揮能力ですとねぇ……」

こう言っては悪いが、ブライヒレーダー辺境伯は戦が上手ではない。
後方支援などの軍政面は得意なのだが、軍の指揮能力が大分低いのだ。
当然家臣頼りになるわけだが、数の関係で支えきれるかは微妙だと答えていた。

「なら、やるしかないですね」

もし戦争になれば、うちの合計百人以下の諸侯軍などひと揉みにされてしまう可能性がある。
女性も複数いるし、このまま蹂躙されるわけにはいかないのだ。

「魔法で吹き飛ばすのですか？」

「いえ、エリアスタンで戦闘不能にします」

「難しくないですか？」

一万人もの広範囲に渡って押し寄せる敵軍を、エリアスタンで全軍戦闘不能にする。

俺の魔力を全部使っても、まず不可能であろう。

「そこで、工夫するのです」

時間が無いので、説明する時間が惜しい。
なので、早速準備をしながら説明する事した。

まずは、ブライヒレーダー辺境伯本軍の最前列から二十メートルほど前進し、草原にドカっと腰を下ろし座禅を組む。
魔法の袋から、前の教訓を生かして準備していた魔晶石を全て取り出して両手に握れるだけ握り、残りは全て組んだ足の上に乗せる。

「魔力全開ってか」

「ブランタークさんも協力してください」

「そうだな。それしかないよな」

ブランタークさんも俺のすぐ横で座禅を組み、やはり大量に準備していた魔晶石を両手に持ち、余った分を組んだ足の上に載せていた。

「それだけの量の魔晶石も用いて、広範囲のエリアスタンですか？」

俺とブランタークさんの様子を見に来たカタリーナは、その無謀そうな作戦を知り、顔を引き攣らせていた。

「こうなったら、伯爵様の魔力の量に賭けるしかないな。俺は、自分で出来そうな範囲だけ担当な。名誉準男爵殿はどうする？」

「何を聞かれるのかと思えば。当然、参加いたしますわ」

少し恐れもあったようだが、自分なりに計算して勝算有りと思ったのであろう。

俺を挟んで、ブランタークさんの反対側に座禅を組んで座る。

更に、自分の魔法の袋から大量の魔晶石を取り出していた。

「魔力のコントロールが難しいですわね」

「無理そうなら、辞退しても良いぞ」

「せっかく受けた特訓ですので、成果は確認したいですわ」

広範囲にエリアスタンを発動させるわけだが、三人で被らないように範囲を分担する必要があるし、体内の魔力が一気に消費されるので、その補填を上手く意識してコントロールしないといけない。

せっかく大量の魔晶石があるので、全部使い切るのが最大の目標であった。

体内から魔力が完全に尽きれば気絶するので、その前に意識して次々と準備した魔晶石から魔力を吸収するのだ。

もしコンマ一秒でも対応が遅れれば、魔晶石の魔力を吸い上げる前に気絶する。

もしそうなれば、それほど広い範囲にエリアスタンがかけられない。

前に出ている俺達は突撃する敵軍に押し潰されるであろうし、本格的な戦闘で死傷者も膨大に出るであろう。

「体内の魔力を細く長く搾って使うのではなく、体から一気に無くなるのを、なるべく素早く持っている魔晶石から次々に吸い上げるんだ」

三人で持っている魔晶石の数は、合計で六十個ほど。
ブランタークさんの計算によると、全ての魔力を気絶する前に全て使い切れれば、何とか大半を戦闘不能には出来るそうだ。

「担当は……」

時間が無いので大雑把な説明であったが、ブランタークさんは端っこの十分の一ほどで、カタリーナも同じく端っこの五分の一ほど。
最後に俺は、中心部の大半が担当になっていた。

「残念ながら、魔力の量の関係で俺とカタリーナの嬢ちゃんはこのくらいが限界なんだよ」

「ですわね。前の器合わせで私の魔力量も頭打ちですし」

俺がしくじると、そのまま作戦の失敗に繋がる。
もし二人が失敗しても、軍勢の数では上回れるので援軍が来るまで十分に持ちこたえられるからだ。

「出来れば三人共成功して、犠牲は減らしたいものですわ」

「失敗したら、他から文句を言われようとヴェル達を担いで逃げるぞ」

広域エリアスタンの準備を終えると、そこにエル、イーナ、エリーゼ、ヴィルマ、クラウスが姿を見せていた。

「そうね。こんな事になるなんて想定外だもの」

イーナも、俺を担いで急ぎ小型魔道飛行船にまで逃げると宣言していた。

「カタリーナ。少し重そう……」

「ヴェンデリンさんと住むようになって少し太りましたけど、そこまで重くは無いですわ！」

ヴィルマがカタリーナが重そうだと毒舌を吐き、それに彼女が反論していた。

「あの、ヴェンデリン様にいただいた指輪もありますので、『奇跡の光』が二回かけられます」

「なら、伯爵様と名誉準男爵様の回復を頼む。俺だけ担げば、負担も少ないだろう？」

エリーゼには、魔力も半分だけ回復できる『奇跡の光』がある。これを使えば、もしかすると二撃目も可能かもしれない。駄目なら、逃げるという選択肢も選べるわけだ。

「ブランターク様を抱える。オヤジ臭い……」

「嘘だぁ！　俺にはまだ、加齢臭とか無いぞ！」

残念ながら、ヴェルマの言う事に嘘はなかった。

ブランタークさんももう五十歳超えで、どうしてもそういう物か

らは避けられなかったのだ。
いくら香水で誤魔化しても、ヴィルマの鋭い嗅覚は誤魔化せなかった。

「嬢ちゃん達！　俺は、まだそういう臭いはしないよな？」

「ええと……」

「何と言いますか……」

「交渉に来ていた、ブロワ家の重臣の方ほどは……」

「ぬあぁーーー！　あんな豚と一緒にするなぁーーー！」

全ての女性陣に加齢臭があると認定されたブランタークさんは、まるで戦いの前に士気を上げるためだと言わんばかりにその場で絶叫していた。

「そろそろ、来ますけど」

「よしっ！　あの豚は捕らえてやる！」

完全に八つ当たりのような気もするが、クラウスの指摘通りに前方数百メートル手前から地響きが鳴り響いていた。
馬に乗った騎士達や駆け足の歩兵達が、こちらを蹂躙しようと突撃していたからだ。

「本気で戦をしてどうするんだか」

「勝てば何とかなると思っているのでしょうな」

一応大貴族の重臣達なのに、追い詰められて思考がヴァルターやカールと大差が無くなっているらしい。

「広範囲エリアスタンの発動は、距離が百メートル以内になってからだ」

恐ろしいほどの地響きが徐々に増すなか、俺達は魔法をかけるタイミングを探っていた。

数秒後、敵軍から大量の弓が飛んできてこちらにも迫って来るが、それはエル達が剣や槍で上手く弾いているようだ。

「ちょっ！　演習用の矢じゃねえぞ！」

「本気で、私達を殲滅するつもりなのね……」

更にルールを無視して、連中は本物の武器を使用していた。

もうこうなると、完全に箍が外れているとしか言いようがない。

当然、味方側からも大量に矢が放たれ、当たって落馬している騎士もいるようだ。

「坊主！　嬢ちゃん！」

「行くぞ！」

「エリアスタン！」

俺達はそれぞれに分担したエリアに向けて、エリアスタンの魔法を発動させる。

広大な範囲を指定しているので、自分でもわかるほどに魔力が消

耗していく。
急ぎ、意識して持っている魔晶石から魔力を吸い上げていく。
一つ、二つ、三つと魔晶石が瞬時に空となり、最後の一つが空になった瞬間、五十メートル前まで迫っていた敵軍が一斉に地面に将棋倒しとなった。
騎士などは馬ごとその場に倒れ、歩兵なども同様なようだ。

「上手くいったか？」

だが、今の俺には確認不可能であった。
ブランタークさんとカタリーナも同じで、二人は既に完全に魔力が切れてその場で意識を失っていた。

「（あとは……）」

『頼む』と言い切る前に、俺はそのまま完全に意識を失ってしまうのであった。

第六十八話　戦争の後始末は、勝っても負けても面倒だ。

「……」

「大丈夫？　ヴェル？」

俺、ブランタークさん、カタリーナの三人で、一万人ブロワ辺境伯軍にエリアスタンを掛けて魔力が尽きて気絶した。

そこまでは覚えているのだが、その先の記憶が無い。

敵は夜に襲撃して来たのに今は日の光が眩しく、どうやらかなり長時間寝ていたようだ。

「ブロワ軍は？」

「全滅したわ」

目が覚めた俺を心配そうに見つめるイーナが、俺達が気絶した後の出来事を説明してくれた。

「広範囲のエリアスタンは成功したのよ」

三人で分担を決め、何十個もの魔晶石を用いたのが功を奏したようだ。

ただ、イーナが見せてくれた俺の魔晶石は全て魔力が空っぽになっていた。

「ブランタークさんとカタリーナも、魔力切れで寝ているわ」

「そうか。でも、何でエリーゼは奇跡の光を？」

「怪我人が多いのよ。ブロワ軍はほぼ全員が戦闘不能になったから、怪我人の治療を優先して欲しいとブライヒレーダー辺境伯が」

俺達は魔力切れで気絶していただけなので、そのまま寝かされていたらしい。

「そんなに損害が出たのか？」

「死者だけでも百人近いのよ……」

俺は、昨日の夜の事を思い出していく。

ブロワ軍全てをエリアスタンで絡め取るために相手を引き寄せたが、その前にブロワ軍は多くの矢を放っていた。

「当たり所が悪い人がいて、味方も三名の死者が出たそうよ」

ブライヒレーダー辺境伯軍側でも応戦して矢を放っているので、ブロワ軍側にも多くの死傷者が出ているようだ。

むしろこちらは待ち構えて大量に矢を放ったので、ブロワ軍側の方が矢による死傷者が多いらしい。

「あとは、騎士に死傷者が集中したか」

「ええ」

かなりの速度で走る馬に乗っている時に、馬ごと麻痺させて落馬させたのだ。

死傷者が増えても当然と言える。

日本の戦国時代や江戸時代には、落馬して死んだ武士や殿様も多かったそうで、この世界のサラブレッドに近い大きさの馬から勢いをつけて落馬をすれば、死者が激増するのも当然と言えた。

「エリーゼは、治療で大忙しなのよ」

ブロワ軍がまだ戦えるのなら、俺達の魔力を『奇跡の光』で回復させていただろうが、運良く一回でブロワ軍はほぼ全員が戦闘不能になっている。

昨晩は、麻痺したブロワ軍側の兵士達の捕縛と救助に、数百名ほどの後方でエリアスタンを逃れた敵軍がいたのでそれの捕縛を。

もっとも、いきなり目の前の味方がほぼ全滅したので、特に抵抗もせず武器を捨ててしまったらしい。

あとは、ブロワ本軍が置かれた本陣の接収も行われた。

ただこれも、物資などの警備のために百名ほどしか兵が残っておらず、これも本軍が全滅したと聞くとすぐに降伏したそうだ。

「エルが軍を率いて本陣の接収に成功したわ」

「あいつ。結構働いているんだな」

ブロワ本軍兵士達の捕縛と治療を続けている内に朝が近くなり、その頃になると昨晩の緊急要請で五月雨式に小型魔道飛行船などで緊急輸送された兵士達が到着した。

彼らは、味方の手伝いと、偵察に出て本陣後方にあった十数箇所

の食料補給所を占領したらしい。

「そこを守っていたのは少数の警備兵達だけで、彼らもほとんど抵抗せずに降伏するか、逃げ出してしまったそうよ」

「大勝利ではあるか」

何を考えてか、追い詰められたから勝って道を切り開くというとんでも思想に犯されたブロワ軍が全力で攻撃をしかけ、逆に俺達の魔法で多くの戦死者と捕虜を出してしまった。

その数は、一万人を超える。

本軍には十名ほどの貴族達もいたし、ブロワ軍とて諸侯軍の幹部達やお飾りとはいえブロワ辺境伯の娘もいる。

身代金だけで、またブロワ辺境伯家の負担が大幅に増えたわけだ。

「その件で、ブライヒレーダー辺境伯様がお話があるって」

「わかった」

もう時間はお昼前なのだそうだ。

長時間眠っていたので魔力は全快していたし、また少し魔力の量が増えた感覚もあった。

その代わりに恐ろしいほどの空腹感で、少し眩暈もするようだ。

魔法の袋からチョコレートを取り出して口に入れてから、イーナの助けを借りて簡易ベッドから起き上がる。

「大丈夫？」

「ドラゴンゴーレム戦の時と同じさ。すぐに、回復する」

暫くすると、脳に糖分が届いたようで頭がスッキリとしてくる。
これでようやく、ブライヒレーダー辺境伯の元に行けるはずだ。

「支えはいる？」

「大丈夫だけど、暫く支えていてくれ」

立ち上がってみると特に眩暈などはないようだが、イーナに寄りかかると良い匂いがするので、少し具合が悪いフリをしておく。

「カタリーナは？」

「ヴェルと同じよ。まだ寝ていると思うわ」

少し離れたカタリーナが寝ている簡易ベッドに移動すると、彼女はもう目を醒ましていたようだ。

「お腹が空いて……。ですが、ここは我慢ですわ」

「ダイエットか？」

「あくまでも念のためなのですが、私が太ったかもしれないという可能性が……」

「念のためねぇ……」

別にそうは見えないが、実際はどうなのであろうか？
俺は気にならないが、本人には深刻な問題なのかもしれない。

「そうか？　それよりも、ブライヒレーダー辺境伯が呼んでいるぞ。名誉準男爵殿」

「そうでしたわ」

彼女も貴族なので呼ばれていたのだが、魔力を全て使い果たしてから半日近くも寝ていたせいで、脳に糖分などが足りていないようだ。

思うように立ち上がれないで、簡易ベッドの上で座ったまま頭をフラ付かせていた。

「ほら、甘い物を口に入れろ。楽になるから」

「甘い物は……」

「ブランタークさんに教わっただろう。ええいっ！　ダイエットなんて必要ないだろうが！」

こうなれば、強引に口に押し込むだけだ。

だが、手で押し込むと口を塞ぐ可能性があるので、ここは冷静な判断力を奪ってしまうに限る。

俺はチョコの欠片を口に含むと、そのままカタリーナとキスをして舌でチョコの欠片を押し込んでしまう。

強引に口移しで食べさせたのだ。

「っーーー！」

俺のまさかの行動に、この手の免疫が皆無なカタリーナは頭がまた沸騰してしまったようだ。

顔を真っ赤にさせて呆然としていたが、口の中に押し込んだチョ

コはモグモグと食べているようだ。

「もう少し食べさせるか」

続けて三回ほど、口移しでチョコの欠片を食べさせる。

頭が沸騰したままのカタリーナは、何の抵抗もなくチョコを食べて飲み込んでいた。

「上手くいったな」

「ヴェル。最初のはともかく、後のは口移しにする必要あったの？」

「一応、あったという事にしておこう。おっと、そうだ！」

こういう事に不公平感が出ると良くないので、俺はもう一度チョコの欠片を口に含むと、今度はイーナとキスをしてチョコの欠片を舌で押し込む。

「ちょっと！　うぐっ……」

恥ずかしさからか最初は少し抵抗していたが、すぐにそれも弱まっていく。

俺が舌で押し込んだチョコの欠片を口に受け入れ、暫く舐めてから飲み込んでいた。

「私は、チョコを食べる必要はないじゃないの！」

イーナは、顔を真っ赤にさせながら俺に文句を言い始める。

「ここは、平等にと」

「今はいいのよ！　早くブライヒレーダー辺境伯様の元に行かないと」

「そうだったな。おーーーい、カタリーナ」

「ヴェルがおかしな事をするから……」

カタリーナが寝ていた簡易ベッドに視線を向けると、彼女はまだ顔を真っ赤にさせながら放心したままであった。

どうやら、刺激が強過ぎてまだ現世に戻って来ていないらしい。

「おーーーい、カタリーナ」

「カタリーナにいきなりそういう事をしちゃ駄目でしょうが！」

婚約者の中で一番真面目なイーナでも、少し顔を赤くさせるくらいですぐに復帰したのに、カタリーナは少しキスをしただけでこの有様。

なるほど、見た目と中身のギャップが大きい人間というのは見ていて面白い物だと感心してしまう。

「感心している場合じゃないでしょう。早く、カタリーナも連れて行かないと」

「それを忘れるところだった」

「忘れないでよ！」

「そうだぞ。お館様から呼んで来いと言われて来てみれば、伯爵様

が見ているこっちが恥ずかしくなるような事をしているし」

いつの間にか俺達の傍にブランタークさんが立っていて、しかも今までの痴態を全て見られていたようだ。

「ヴェルぅーーー！」

「若いって素晴らしいと思うけどな。今はお話があるからよ」

恥ずかしさからか？

再び顔を真っ赤に染めるイーナが、俺に非難の声をあげていた。

「ところで、カタリーナの嬢ちゃんはいつ起動するんだ？」

「さあ？　何しろ初めて試した事なので」

そして三人で騒いでいる間も、カタリーナは簡易ベッドの上で顔を真っ赤にしたまま放心し続けるのであった。

「バウマイスター伯爵、魔力の方は回復しましたか？」

「はい」

どうにかカタリーナを起動させた俺達は、急ぎブライヒレーダー辺境伯本軍の本陣へと向かう。

そこでは、ブライヒレーダー辺境伯と数名の家臣、諸侯軍を編成

している十名ほどの貴族やその家臣も集まっていて、俺達が最後に到着したようだ。

俺はイーナを護衛として連れていて、カタリーナは諸侯軍は出していないが自身が名誉準男爵なので、貴族の一人としての参加だ。

席に座ると、若い従兵がお茶を出してくれる。

飲むとエリーゼが淹れる物より少し味が落ちるが、彼女は昨日の戦闘で出た大量の負傷者達を治癒するためにここに居ないので我慢するしかない。

「さて。昨日は、思わぬ『戦争』に巻き込まれて大変でした」

ブライヒレーダー辺境伯が、殊更『戦争』という単語を強調するわけ。

それは、今までに貴族間で起こっていたそれを一線を画すからだ。

貴族同士が利権を巡って兵を出し、なるべく人が死なない方法で争う。

面倒なので戦争と呼んでいる人がいるが、王国的に言えばそれは『紛争』であった。

王国政府の見解としては、戦争はアーカート神聖帝国と停戦を結んでからは一回も発生していない。

これは、ちょっとした味方貴族同士の争いなので『紛争』だと言うわけだ。

ところが、昨日のアレを『紛争』と呼ぶのは難しい。

死者が百名近く出ているし、数十年前の偶発的な衝突とは違って、ブロワ軍は明確に戦闘を仕掛けて来た。

後方に伏せていた援軍も呼んで合計一万の兵力で、武器も訓練用の物から通常の物に戻し、馬に乗った騎士達を先頭にブライヒレーダー辺境伯本軍を蹂躙して粉砕しようとしたのだ。

もし成功していたら、ブライヒレーダー辺境伯軍の犠牲は軽く四桁に達していたはずだ。

「とにかく、困った事態です」

エリアスタンをかけた俺達が気絶した後、ブライヒレーダー辺境伯は一切の睡眠を取らずに事後処理に奮闘していたそうだ。

麻痺して倒れていたブロワ軍全ての兵士達を武装解除して捕縛し、怪我人などはエリーゼや従軍している治癒魔法が使える司祭などに治療させ。

次第に小型飛行船などで援軍が来ても、まだ捕虜の方が多いので管理などにも苦労し、本来こういう紛争で越境は禁止なのだがそんな事も言っていられず。

少数の部隊を派遣して、ブロワ軍の本陣や後方の食料備蓄所なども抑える事となった。

本陣には百名ほどで、各所の食料備蓄所にも二〜三十名ほどの兵士達がいて、彼らはそのほとんどが降伏したのでこれの管理もあった。

更に、捕虜の奪還を目指して別の部隊が攻撃を仕かけてくる可能性もある。

偵察なども必須で、人手が足りないのでモーリッツ、トーマス、エル、ルイーゼも十名ほどの兵を連れて周辺の探索に参加している

そうだ。

「幸いにして、ここに特使であるクナップシュタイン子爵殿がいる事ですかね？」

この『戦争』が、ブロワ家側から仕掛けられた事の証明になるからだ。

少なくとも、こちら側が一方的に責められる事は無いであろうと思う事にする。

もしかすると、土壇場で裏切って何か企む可能性も否定できなかったが。

「私が王宮側の人間なので多少のご懸念を抱いている方もいるでしょうが、この『戦争』がブロワ家側によって引き起こされたのは事実です」

慣習に則って相場通りの裁定案を出したのに、それが嫌で今の不利な状況を打破するため、後先考えないで『戦争』を仕掛けるなど論外だとクナップシュタイン子爵は述べていた。

表情はいつも通りであったが、彼も個人的に怒りを覚えているように見える。

昨晩はこちらに宿泊していたので、最悪自分が殺されていた可能性もあったからであろう。

「ただ、大きな問題が一つ」

この、更にグジャグジャになった状況をどう解決するかという問題が出て来たのだ。

俺達が捕らえて紛争地帯の味方側領主達に管理を任せている、ブロワ家側の貴族や兵士達も合わせ、現在ブライヒレーダー辺境伯家側で管理している捕虜の数は二万人近くいる。

後で費用を請求するにしても、大きな手間になっているのは確かであった。

加えて、必要とはいえ既にブロワ家側の領域に軍を進めている。本陣に、十箇所を超える食料備蓄所に、早朝に食料を運んで来た荷駄隊も人員ごと全て捕らえたそうだ。

「人数が多いから、食料の頻繁な輸送は必須だったんでしょうね」

ただ、荷駄隊が戻って来なければブロワ家側の不審に思うはずだ。その前に大敗北で周辺に噂は広がるし、一人も逃走者を出していないはずなどない。

数日もすれば、ブロワ家側にも情報は伝わるはずだ。

「当面は接収した食料を食べさせますし、もはや『戦争』状態なので軍の追加徴集も行っています」

「何が問題なのです？」

「これから先、私達は誰と交渉すれば良いのでしょうか？」

同席していた若い貴族からの質問に、ブライヒレーダー辺境伯は乾いた笑みを浮かべながら答えていた。

「クナップシュタイン子爵が、裁定の協定書にサインする人間を聞いたら攻めて来ましたからね」

現在、ブロワ家を動かしている人間が不明なので困っているのだ。
間違いなく、ブロワ辺境伯本人は生きていても人に指示など出せる状態ではないはずだ。

普通は、跡取りを領主代行にして領地の運営を行うはず。
だが、あの家は相続争いが発生しているわけで、だからこそ長男フィリップを跡取りにしようと諸侯軍の幹部達が兵を出し、挙句に敗北している。

「あの軍勢を率いていた幹部連中は、全て捕縛しました。偉い連中はフル装備で前線などにいるはずもありませんので」

エリアスタンによる落馬などで、死んだ人はいないそうだ。
せめて一人くらい前線に出て犠牲が出ていれば同情も出来たのだが、怪我も無く捕虜になったと聞いてその無責任さに反吐が出る思いであった。

「あの姫様はどうしました？」

「本陣にいましてね。エルヴィンさんが降伏させたようですね」

抵抗されるかと思ったそうだが、すぐに降伏してくれたそうだ。

「ちゃんと丁重にもてなしていますよ。戦場に女性を連れて来るから面倒ですけど」

もし彼女に何かあれば、それはブライヒレーダー辺境伯の恥となってしまうそうだ。
なので、丁重に隔離してあるらしい。

「あのお姫様には、何の権限もありませんよ。軽い神輿でしょうね。問題は……」

「これから裁定を再開するにしても、誰が来るのかですよね？」

長男か次男かは知らないが、跡取りが指名されていない以上は、条件は詰められても協定書にサインする人間がいないわけだ。

「ブロワ辺境伯本人は？」

「来れるのでしたら、最初からここまでチグハグにはならないはずです」

確かに、彼に指導力が残っているのなら、娘を総司令官代理などにして兵を出さないはずだ。

「ブロワ辺境伯は死んでいて、それを周囲が隠している。もしくは、既に人に何か指示を出せるような状態にない。意識が無いなどでいつ死ぬかわからず、だから軍からの支持が強いフィリップは軍幹部に紛争で功績をあげるように命令した。娘は、一族の者が飾りでもトップにいるべきであろうという判断からかな？」

「バウマイスター伯爵の想像通りですかね」

紛争で病床の父親から離れている間に彼が死んでしまうと、残っている次男が勝手に跡取りだと名乗って王家に使いなどを出しかねない。

だから、双方共に屋敷から離れないのであろうと。

「腹心とかに任せて、前線に来ればいいのに」

「印綬官の去就が不明なのでしょう」

貴族家の当主は、書類にサインをしてその効力を発揮させる。

なので、日本のように判子は存在しないのだが、当主の証として金で出来た紋章を彫った判子が王家から下賜されていた。

手紙に蝋で封をする時に、それを押してその手紙が本物である証明にするわけだ。

これを所持する者こそが当主というわけだが、大物貴族にはこれを管理する印綬官という役職の家臣が存在していた。

「非常に地味な役職なんですけど、大物貴族は印綬官を優遇しています」

能力以前に、誠実で主君に忠実な者が選ばれる。

自分だけが、密かに主君から後継者の名前を聞いているケースも多い。

主君が後継者を伝えていれば、その死後には命を賭してその人物に印綬を渡す。

過去には、他の後継者候補に殺される者も多かったそうだ。

「ブロワ辺境伯がまだ死んでいないとすれば、印綬官は意地でも印綬をどちらにも渡さないでしょう。ただ……」

死んでしまってから、ブロワ辺境伯が後継者を定めていなければどうするのか？

それは、誰にもわからないわけだ。

「印綬官も文官の類ですからね。フィリップ殿が出陣してからブロワ辺境伯が亡くなり、クリストフ殿が印綬官に印綬の授与を迫る。フィリップ殿が腹心を残していても、何の役にも立ちませんから」

だから二人共、意地でもブロワ辺境伯の病床から離れないのであろうと。

「こんな物がねぇ……」

さっと、袋から取り出してみる。

印綬なら俺も貰ったのだが、普段は魔法の袋に仕舞っていた。

「バイマイスター伯爵は新興ですから、もう何十年かしないと印綬官なんて決められないでしょう」

そうそう信用できる誠実な家臣など見付からないし、逆に言うとただ印綬を預かっているだけで給料が貰える存在なので、大物貴族にしか専任の印綬官など雇えない。

普通の貴族は印綬を自分で持つか、他の家臣に職務を兼任させているのが普通であった。

「えらく豪勢に改良をしていますね」

「ローデリヒが、派手な方が良いって言ったからですね」

印綬は王国が下賜する物だが、見た目は文具屋などで売っている三文判と大差が無い。

判子の先端部分が金で、残りの持ち手の部分は銀で出来ている。

そして、判子の部分は駄目だが、持ち手の部分は自由に改造が可能であった。

大物貴族は、持ち手の部分を改造してその豪華さを競うのだ。
誰に見せるでもないのに、やはり貴族とは見栄を張る生き物であった。

「竜が二匹絡み合う姿ですか」

「一応、ドラゴン退治で立身出世をした家だからという理由です」

竜は金細工で、目の部分にはエメラルドが入っていた。
細工は、ローデリヒが知っていた王都でも評判の細工職人に依頼している。

『職人にも知己がいるんだ』

『冒険者の仕事で、少し特殊な素材を採取して持って行った事がある縁からです』

ローデリヒの顔の広さは、相変わらずであった。
すぐに細工職人への依頼が行なわれ、バウマイスター家の派手な印綬は完成している。

「でも、持ち難そうですね」

「それに気が付いたのは、細工が完成してからでしたね」

そこまでは、俺もローデリヒも予想していなかったのだ。
二人の間に妙な空気が広がったので、話を変える事にする。

「しかし、面倒な事になりましたね」

「苦労した分、精々ふんだくってあげますけど」

「ふんだくるというのは少々下品かと思いますが、余計な夜襲などかけるから和解金と身代金の額は大幅に増えますね」

クナップシュタイン子爵は、表情も変えずに懸命に参考となる裁定案の改定を始めていた。

「裁定案で有利になるように、どこかの街でも占領しますか？」

「いえ、街を占領すると面倒なので」

他の貴族の領地なので、略奪などをするバカが出る可能性があるからだ。

これ以上騒ぎを大きくしたくないのに、また揉める元を増やしても仕方が無い。

ブライヒレーダー辺境伯は、若い貴族からの提案を却下していた。

だが、その代わりにエチャゴ平原の大部分を占領している。

敵軍本陣や食料備蓄所の占領のついでに押さえてしまったのだ。

「ここまで揉めた以上は、占領地があった方が裁定で有利でしょうし」

結局その日の会合は、ブロワ側が使者を出してくるまで占領地の確保と捕虜の管理を続ける事だけを決めて閉会していた。

「そういえば、バウマイスター伯爵にお願いがありまして」

「お願いですか？」

「はい」

捕虜になっているカルラとか言うブロワ辺境伯の娘を、こちらで預かって欲しいのだそうだ。

「バウマイスター伯爵の所には女性がいるので、同じ女性同士という事で預かって貰えないかなと」

注意しているとはいえ、ブライヒレーダー辺境伯の所には男性しかいないし、向こうも男ばかりに囲まれたら気も滅入るであろうと。

彼女は貴族の娘なので、捕虜とはいえちゃんと面倒を見る必要がある。

もし何かあれば、ブライヒレーダー辺境伯の評判が落ちてしまうからだ。

「面倒だから、女性なんて連れて来なければ良いのに」

捕虜になった、交渉で代表を務めていた初老の重臣に思わず言ってしまったそうだ。

勿論、その重臣は何も言わずに憮然とした表情を崩さなかったようだが。

「構いませんが、俺が気に入って嫁にするとか言い出したりして」

「英雄色を好むですか？　それは勘弁して欲しいですね」

俺の発言を、ブライヒレーダー辺境伯は冗談だと思ったようだ。

実際に冗談だし、周囲に反対されて成立しないのでまずあり得な

いのだが。

「（でも、彼女って……）」

黒髪に黒い瞳で、西洋風の人達が多いこの世界では日本人寄りの顔をしていて、しかも雰囲気が前世の学生時代の彼女に良く似ていたのだ。

あくまでも雰囲気で、カルラ嬢の方が圧倒的に美少女であったが。

「イーナ。大丈夫か？」

「女性同士は纏めてって事でしょう？　わかったわ」

ブロワ軍の掟破りの夜襲を防ぎ更なる戦果をあげたものの、俺達は余計に面倒な事態に巻き込まれてしまったのかもしれなかった。

第六十九話　早く責任者は出て来いよ！

「カルラさん、お久しぶりですね」

「こちらこそ、エリーゼさん」

ブライヒレーダー辺境伯達との会合を終えた俺達は、その足で例のカルラ嬢を連れて自分達の野戦陣地へと戻っていた。

彼女はブロワ辺境伯の娘であり、今回の諸侯軍の総大将代理でもある。

丁重に扱わねばならないのだが、何分ブライヒレーダー辺境伯軍には女性など一人もおらず、うちで預かる事になったのだ。

まずは社交辞令的に挨拶をしてから、彼女と世話役で一緒にいたメイド二人を連れて歩く。

ブライヒレーダー辺境伯は女性は彼女だけと言ったが、やはり世話をするメイドくらいはいたようだ。

共に二十歳前の若い女性だったので、彼女達の管理も面倒だと思い俺に押し付けたのだと思われる。

野戦陣地内のテントに入ると、そこには兵士達への治療を終えたエリーゼが護衛のヴィルマと共に戻って来ていた。

そして、お互いに知己であった二人が挨拶をしたわけだ。

「総大将代理を務めていらっしゃったとか？」

「はい。父はもう意識が無く、いつ天に召されても不思議ではあり

ませんので」

やはり、ブロワ辺境伯はいつ死んでもおかしくない状態であったようだ。

「あの……。そういう話は……」

「今この時点で隠しても、何も意味がありませんから」

既に、ブライヒレーダー辺境伯にも話しているそうだ。

あとは、その死にそうなブロワ辺境伯の病床に二人の兄達がお互いに出し抜かれまいと常に寄り添っている事や、そのせいで自分が総大将代理にされたのだという事もだ。

「その出兵ですが……」

「二人の兄は、共に関わっています」

軍人しかいないので長男フィリップの命令だけかと思えば、次男クリストフも関与しているそうだ。

別に軍人全てがフィリップの牙城ではないし、補給などを担当する軍政官の中にはクリストフを支持する勢力も存在する。

どうやらこの兄弟喧嘩の背景には、古から存在する武官と文官の勢力争いも原因にあるようだ。

そもそも、クリストフを支持する財務系の幹部が許可を出さないと予算が出ないのだから関与は当然であった。

「つまり、今回の出兵は両者の競合であると？」

「最初は、フィリップ兄様の独断でした……」

事の起こりは、一年ほど前から体調を崩していたブロワ辺境伯が遂にこん睡状態になってしまった事から始まる。

彼は二人の息子の内、どちらを後継者にするか決めないままそういう状態になってしまったそうだ。

「フィリップ兄様と彼を支持する家臣達は、『そもそも、長男であるフィリップ様が継ぐのが妥当で、お館様の遺言など必要ない』と言い、クリストフ兄様と彼を支持する家臣達は、『クリストフ様は、正妻であるヒルデガルデ様のお子である。血筋の良さから言っても、クリストフ様が継ぐのが正しいのは言うまでもない』と反論しまして……」

両者とそれを支持する家臣達によって、現在領内は混乱の極地にあるのだとカルラは説明していた。

特にブロワ辺境伯がこん睡状態になってからは、息を引き取った後に勝手に遺言の偽装や王国への相続報告をされないように、屋敷内で睨み合っている状態なのだそうだ。

「どうしてブロワ辺境伯様は、後継者を指名しなかったのでしょうか？」

「どちらかに決めると、内乱の可能性も否定できなかったからです」

物騒な話ではあったが、両者の勢力が拮抗しているせいで、いきなり片方に決めるともう片方の反発が予想された。

家臣達も勝者を支持していれば出世に繋がるが、敗者を支持していると左遷や最悪クビになる者も出る。

子弟などの将来もお先真っ暗なので、自然と争いが大きくなってしまうのだ。

「加えて、今回の未開地開発特需からの締め出しです」

「その件で、俺に文句を言われてもねぇ」

「いえ。事情は理解していますから」

自分達がブライヒレーダー辺境伯にした嫌がらせの数々を考えると、締め出されても文句は言えない立場にある。

だが、ここで頭を下げるわけにもいかず、寄り子達からの苦情も多かった。

そこでそれらの不満を解消するために、フィリップと彼を支持する軍系の家臣達が、今回の出兵と、バウマイスター騎士爵領への後方かく乱などを行ったのが今回の戦いの真相だそうだ。

「内部のゴタゴタを、外との戦争で紛らわすか……。それで、どちらが主役で？」

「一応、フィリップ兄様がメインです。軍部の支持が厚いので」

戦争で南部の貴族達から少しでも利権を奪って東部の貴族達の不満を抑えつつ、その功労者である諸侯軍がフィリップを支持すると言えば、当主昏睡で決まっていない後継者争いで有利に立てるはずだと。

病床で意識が無いブロワ辺境伯を世話しているカルラは、フィリップからそういう風に聞いているそうだ。

「それで、次男のクリストフ殿が出兵に反対のスタンスなのか？」

「表面上はそうですが、必ずしもそうとは言えません」

内政を担当する家臣達の支持が厚いクリストフは、表面上は今回の戦争に利益はないと反対の立場を取っている。

だが、諸侯軍を出すには予算の執行が必要であり、それが問題なく出ている時点で百％反対とも言えないのだ。

「それって、どっちの結果になっても俺には功績があるって事？」

「多分……」

補給などもちゃんと行われているので、戦争に勝てば『後方支援で俺の功績が大だ』と言うし、もし負ければ『だから反対したのに』と非難をする。

王都の嫌な法衣貴族達には、良くいるタイプである。

どちらに転んでも良いように、双方に保険をかけておくのだ。

「ところで、カルラ殿は随分と素直に話しますね」

「私が好き好んで、お飾りの総大将代理になったと思いますか？」

つい一年ほど前までは、領内に入れると正妻が怖いという理由でブロワ辺境伯から僅かな仕送りだけ貰い、母親と共に王都で生活していた。

母親はブロワ辺境伯が王都滞在時の現地妻扱いで、実家は貧しい法衣騎士爵家であったので、祖父達は金で母親を売り飛ばしたのが

真相だ。

その癖、自分達がブロワ辺境伯領に行けないで居候をしていると、祖父や伯父達からあからさまに邪魔者扱いされる。

家に居ても嫌な思いをするだけなので、子供の頃から毎日教会に入り浸って勉学や弓などを教えて貰い、残りの時間は王都郊外で狩りをしていたそうだ。

「なのに、一年ほど前に急に呼び出しがかかりました」

ブロワ辺境伯の具合が悪くなったからなのだが、いざ病床に着くと、正妻は自分の産んだ次男可愛さに早く後継者に指名しろと五月蝿いだけでストレスが溜まり、嫁いだ姉達もどちらに付くと利益が大きいか計算を始め、肝心の二人の後継者達は逆に病床から離れなかった。

離れている時にブロワ辺境伯が亡くなり、相手が先走って勝手に後継者になる手続きなどを始めさせないためである。

その様子を見たブロワ辺境伯は、自分の体調を微塵も心配しない家族に失望したのであろう。

王都で生活している、自分は『避難させていた』と思っている愛娘カルラを呼び出していた。

「病気になって、気が弱くなったのですね」

「そんなところでしょうね……」

大方イーナの考える通りであろうが、カルラは大物である辺境伯の命令なので断れずにブロワ辺境伯領入りして、彼の傍で世話など

をしていたそうだ。

「正妻であるお義母様に、嫁いだ二人のお義姉様達は来る度に私に嫌味を言っていましたけど」

呼んだのはブロワ辺境伯なのに、彼が死にそうになってから近寄って来た『腐肉を漁る女ハゲタカ』だと、ヒステリー気味に嫌味を言われる事が多かったらしい。

「それは、大変だったね」

「それは、別にどうでも良いんですけど」

今までの話などからすると、カルラは非常に自立心が強い女性なのであろう。

弓の腕前などから考えてもその辺の女性になど負けるはずもなく、本妻や異母姉の嫌味など軽く聞き流していたようだ。

「逞しいですね……」

「つい一年前までは、辛うじて貴族くらいの身分でしたから」

今まで疎外されていたのに、病気で気が弱くなったブロワ辺境伯は、『自分の死を前に、王都の愛人に産ませた娘との和解と最後のひと時』という勝手な妄想をしてカルラを呼び寄せた。

彼女からすれば、とっとと終わって多少の謝礼でも貰って王都に戻りたい気分だったのであろう。

「でもさ。そんなに都合よく行く?」

「いえ、いきませんでした」

ルイーゼの懸念通りに、カルラはそのままブロワ辺境伯家の相続争いにドップリと浸ってしまっていた。

二人の兄達は年の離れた母違いの妹に優しかったが、その優しさには打算があった。

「『俺が次代ブロワ辺境伯になるのを支持してくれたら、カルラを君の息子に嫁がせよう』とか言っているだろうしね」

どちらの兄も、複数の有力な家臣達にそう言って支持を集めようとするはずだと。

確かに、そんなに珍しい話でもなかった。

「カルラさんを奥さんにすれば、次期領主の下でその家の栄達は約束されたようなもの。皆さん、必死で後継者争いに参加したのでしょうね」

あとは、エリーゼの言う通りであろう。

だが、肝心のブロワ辺境伯本人はまだ死んでおらず、二人の後継者達は共に勝利の決め手に欠いていた。

そこで、カルラを餌にされた諸侯軍の幹部達などが、フィリップ考案の出兵案を現実の物にしてしまったそうだ。

「フィリップ兄様が諸侯軍の幹部達と出兵を計画しましたが、自らは陣頭に立ちませんでした」

戦争中にブロワ辺境伯が死に、クリストフが勝手に後継者を名乗り、王都に爵位と領地継承の手続きを出してしまう可能性があった

からだ。

「総大将には一族の誰かが必要で、私がたまたまいた。そういうわけです」

カルラからすれば、仕方なしに病床の父親の面倒を見たり、諸侯軍の軽い神輿に就任しているので、どこかどうでも良いと思っている部分があるのであろう。

俺やブライヒレーダー辺境伯からの問いにも、全て正直に答えていた。

「やる気が出ないか」

「その前に、兄様達は無責任です」

せめて、自ら陣頭に立つくらいすれば良いのに、それをライバルに出し抜かれるからという理由で、十六歳の小娘に押し付けてしまう。

いくら飾りの総大将でも、それはないだろうとカルラは思っているようだ。

「適当に任せた結果の悲劇だものね……」

極少数ではあるがこちらにも死者が出ていたし、ブロワ家側などは死者が百人近くにも上っている。

加えて一万人近い捕虜も発生してしまい、これらの面倒だけでブライヒレーダー辺境伯は頭を抱えていた。

管理の手間を考えると、『早く責任者出て来い！』としか言えないのだから。

「慣習破りの大無茶をしているからなぁ……」

後方に控えさせていた援軍まで呼んで、武器を実戦用に変えて奇襲を企んだのだ。

ブライヒレーダー辺境伯としては、本当の戦時に移行したので追加で諸侯軍を徴集してこちらに向かわせたり、多数出た捕虜の管理なども必要で、その軍勢は日々増えていた。

更に、本当の戦争になったので、貴族としては完全に勝ちを狙わなければいけない。

そこで、合計二万五千人までに増えた軍勢の大半を東部領域に入れて野戦陣地を構築。

これは、ブロワ軍が使っていた物の再利用であったが、加えて周辺の幾つかの貴族領や村や町などに軍政官を派遣して、その地の占領も宣言している。

ただ、本当に軍勢を入れて占領をすると面倒なので、統治などは現地の責任者に任せ、軍政官達はそこに居候しているだけだ。

状況が状況なので占領した事にしたのだが、軍を入れてそこの住民達とトラブルになると王国政府から難癖を付けられる可能性がある。

犠牲者が出た後の軍勢なので、仕返しで住民達に暴行や狼藉を働く可能性があったからだ。

もしそうなって被害者達がブロワ家や王国に訴えれば、基本的には国内の戦争を認めていない王国政府としては、ブライヒレーダー辺境伯の非を責めなければいけない。

そんな事情もあり、ブライヒレーダー辺境伯は魔導携帯通信機で閣僚達と相談しながら、自分の軍勢をコントロールしていた。

『通常の領内の統治に関する仕事に、開拓地関連の仕事に、諸侯軍と占領地関連の仕事に。バウマイスター伯爵、私を分身させる魔法とかありませんか？』

ブライヒレーダー辺境伯が、目の下に隈を作りながら俺に真剣にこう聞いて来た時には、どう答えて良いものかわからなかったほどだ。

『バウマイスター伯爵。例のトーマスさん達を貸してください』

占領を宣言した貴族領や町に、軍政官の補佐として付けるのだそうだ。

元々東部の人間なのでこの辺の地理に詳しい者が多く、あとはそこに置くだけの予定であった軍政官に仕事が多く発生していたからという事情もあった。

『バウマイスター伯爵達がみんな捕虜にしてしまったので、統治の人手が足りないそうです』

思わぬ副産物であった。

先の利権争いを巡る紛争で、俺達に当主や家臣などを捕らえられていて、統治の人手が足りなくなっているらしい。

『占領状態でも何でもいいから、軍政官なら統治の仕事を手伝えだそうです』

『今思ったんですけど、兵士達も預かっていますよね？　大丈夫か

な？』

諸侯軍の兵士達など、バイマイスター家を見ればわかるが普段はただの農民などが多い。

既に収穫は終わってこれからは農閑期に入るが、それでも一家の大黒柱の不在は大きいし、このまま戦争が続いて春になれば農作業の人手が不足する。

東部側の今回紛争に参加した貴族領は、統治体制が破綻する危険性があった。

『仕方がない……』

俺は、彼らを全て領地に帰す事を決断する。

当主、家臣、兵士、鹵獲した武具、物資、金品など。

身代金も含めて全て俺とカタリーナの権利であったが、クナップシュタイン子爵に標準価格を計算して貰って、それで手を打ったのだ。

あと、拗れている利権や領地の分配率も全て戦前の状態に戻して、その賠償も紛争相手の貴族家に払うようにと条件を出す。

これも、もう時間が惜しいので計算はクナップシュタイン子爵に一任している。

彼は真面目な官僚タイプの貴族なので、過去の膨大な慣例を基準に標準的な和解金の額を算出してくれた。

『この条件でいかがですか？』

『特に異存はありません』

『私もありません』

俺、ブライヒレーダー辺境伯、クナップシュタイン子爵立会いの元で、捕虜になっている貴族達や、家臣や兵士達を捕虜にされている貴族達が呼ばれて交渉が行われたが、共に一切の異議を申し立てなかった。

ブロワ家側の貴族達は、この非常時に一向に顔を出さない寄り親に失望していたし、ブライヒレーダー辺境伯の貴族達にしても、このまま戦争が続いて隣の領地の統治体制が麻痺したり崩壊すると、難民対策などで一緒に自爆してしまう可能性があったからだ。

セコく和解金の値上げを交渉している余裕はないと判断して、こちらの和解案を受け入れていた。

『それで、身代金も和解金も分割でお願いしたいのですが……』

和解に応じたブロワ側の貴族達は、泣き顔で身代金と和解金の分割払いをお願いしてくる。

まあ、当然であろう。

まず一括でなど支払えないし、分割にしても彼らが数十年も借金漬けの生活が確定しているのだ。

しかも、こんな時に肝心のブロワ辺境泊家が何のフォローもしてくれず、かと言ってこのまま交渉が拗れて捕虜のままだと領地の統治体制に不備が出てしまう。

これからの事を考えると、自然と涙目になるしかないのだから。

『こうなる可能性もあったのに、良く兵を出しましたね』

『これがあったからです』

呆れるブライヒレーダー辺境伯に、ブロワ家側の貴族達は領地から取り寄せた羊皮紙で書かれた契約書を見せる。

するとそこには、万が一この紛争で損害が発生した時には、ブロワ家で補填を行うという内容が書かれていたのだ。

『これ、法的には有効ですか？』

『有効ですね』

ブライヒレーダー辺境伯は、有効であると断言していた。

『筆跡はブロワ辺境伯ではありませんが、サインは長男のフィリップ殿であり、連署名にクリストフ殿と、数名の重臣達も名を連ねています。当主不予でサインが出来ない時もあるので、こういう連署が有効になるのです』

こういう書類は、当主が署名可能ならば当主のサインが無いと無効だが、当主がサイン出来ない状態にあると連署ならば有効になる。

『これで、公にブロワ辺境伯がサインすら出来ない状態なのは確定ですね』

ブロワ辺境伯家が当主の不予を公式に認めたからこそ、この書類が有効になる。

でなければ、ブロワ家側の貴族達も慣習破りまでして兵など出さないであろう。

『そこは、今更な気もしますが……』

『あの、一つ宜しいでしょうか？』

交渉の席にいた、ブロワ家側の貴族達の懸念。

それは、分割とはいえ借金の返済で財政が危機的な状態に陥る事だ。

契約書によると、それはブロワ家が肩代わりするそうだが、今の時点でその履行は難しい。

支払いの方を、少し待って欲しいと陳情してくる。

『二百年分割にして欲しいとか言うのかな？』

『いえ、お館様。契約書によると、損害はブロワ辺境伯家による補填となっておりますので……』

クラウスが、そっと小さな声で耳打ちしてくる。

要するに、身代金と和解金をブライヒレーダー辺境伯とうちで肩代わりして、こちらでブロワ家側へ請求して欲しいというお願いをしたいらしいのだ。

『そんなムシの良い提案……。とはいえ……』

寄り親の要請を寄り子が断り難いのは、俺が子供の頃の実家を見れば明らかである。

もしこれから後に、こちらとブロワ家側との裁定が締結して莫大な額の和解金が発生した場合、財政が悪化したブロワ家が自分達の借金返済を優先し、他の貴族達への損失補填を行わない可能性があった。

『さすがに、ブライヒレーダー辺境伯も受け入れないだろう。そんな提案』

自分の寄り子なら考慮するのは当然であったが、彼らはブロワ家の寄り子である。

最悪、ブロワ家から回収できない可能性もある借金の肩代わりなど絶対にしないはずだ。

『つまり、彼らは寄り親を変えると言っているのですよ』

『絶対に無いとは言えないが……』

『そう頻繁にはありませんが、今回は状況が状況です』

当主同士の相性などによって寄り親の交代はたまにあるし、今回のように紛争絡みで境界線際の貴族の寄り親交代も、過去の例を説明できるくらいは発生する。

今まで、東部を統括するブロワ辺境伯家の寄り子だったり、その影響下にあった貴族達が、南部のブライヒレーダー辺境伯家の寄り子や影響下に入るのだ。

『鉱山の採掘権やら森林の使用権やらで、散々揉めているお隣がいてもか？』

『同じ南部の貴族同士でも、それが原因で仲が悪かったり、代が変わると一騎討ち合戦をしたりもしますので』

境界線際での争いが大きくなるのは、お互いの親分が違うからでもある。

虎の威を借るではないが、どうしてもお互いに強気に出てしまうのだそうだ。

同じ寄り親の貴族同士で争う時は、それなりに遠慮はするようになるらしい。

『慣習破りの強硬占拠を強いられた挙句に、大惨敗して和解金と身代金で身代が傾きかけているのです。続けて、ブロワ本軍も壊滅しました。更に言いますと、この状況でブロワ家はまだ使者すら寄越しません。頼るに値しないと見限られたのです』

『加えて、南部に鞍替えをしておくと、開発地利権に加われるか』

『それもあります』

紛争の損失をブロワ家に請求する権利、これをブライヒレーダー辺境伯と俺に渡して借金の支払いから逃れる。

裁定の内容によっては回収できない可能性もあるので、向こうにばかり得で俺達に不利な要請ではあるが、逆に言えば俺達に借金をしている状態と同じで、彼らは進んで南部地域に組み込まれると宣言しているに等しい。

『南部領域が広がるのか』

今までブロワ辺境伯家の統制下にあった四十家ほどが、その所属をブライヒレーダー辺境伯家に変えるのだ。

寄り親というのは、今回の利権争いなどを見るに面倒を見るのに大変であまり実利はないのだが、世間からの評価は大幅に上がる。

戦争で新しい領地を得るような時代ではないが、自分に所属を変

えた貴族が四十家以上もあるので、これはブライヒレーダー辺境伯家の評価を上げる事になり、長い目で見れば実利にも繋がるというわけだ。

『マフィアの子分が増えて、親分の評価が上がるというわけだな。身代が大きければ、シノギで稼げるようになるしな』

『例えが極端ですが、まあ貴族もマフィアもそう中身は変わらないので』

俺の発言に、クラウスは特に表情を変えたり窘めるでもなく言葉を付け加えていた。

あくまでも内輪だけの会話なので、気にしてもいないようだ。

『ブライヒレーダー辺境伯家は、王家から目を付けられたりしてな』

『当代のブライヒレーダー辺境伯様は、中央からのそういう視線には敏感な方です。事前に相談くらいはしているでしょう』

魔導携帯通信機を持っているので、中央の閣僚とは相談済みであろうとクラウスは予想していた。

『時が経てば、バウマイスター伯爵家はブライヒレーダー辺境伯家に匹敵するかそれ以上の力を持ちます。そうなれば、自然とお互いを牽制するようになりますし』

当代同士は違っていても、時間が経てば自然とそうなる可能性が高い。

だからこそ、俺の正妻は中央で教会の要職を務めているホーエハイム家から迎えたのだし、多分次代以降もその傾向は続く。

自然と両者が牽制し合うようになれば、中央の王家からすれば危険が減るというわけだ。

『貴族ってのは、本当に面倒だな』

『習性のような物なので仕方がありません』

そんな未来の事まで考えてご苦労な事だが、このような細々とした出来事の後に、ブロワ家以外の捕虜になっていた者達は全て開放されていた。

その時に一緒に鹵獲された武具や金品なども全て返していたのだが、別に無料でくれてやったわけではない。

全てクナップシュタイン子爵が金額を査定しているので、形式上は全て彼らの借金となっていた。

ただ、それらの請求を全て、俺とブライヒレーダー辺境伯が例の契約書を元に行うだけなのだから。

『最悪、ブロワ家の屋敷まで進軍して接収でもしないといけませんかね？』

アーカート神聖帝国と停戦してから二百年、ここまで揉めた味方貴族同士の紛争は初めてなようで、あまり前例が無い分ブライヒレーダー辺境伯も困っているようだ。

一万人に近い捕虜達を管理し、エチャゴ平原の東部領域と、ブロワ家本軍野外陣地、後方の食料貯蔵施設、周辺の村や町にも占領宣言を出し、一日でも早い裁定の再開を待っているのだから。

『それは、やり過ぎじゃないですか？』

『王宮側も困惑しているのです。ブロワ辺境伯が重篤なのはわかったものの、どちらの息子が交渉を行うのかという問題もありますし』

片方とだけ裁定案の調印を行っても、もう片方が無効だと言えば、まだ法的には次期当主は正式に決まっていないのでそれが通ってしまう。

まずは、次期ブロワ辺境伯が決まらないと裁定を始める意味が無いのだ。

『二人の息子達は、何をしているのでしょうかね？』

『今回の夜襲は現地責任者の独断の可能性もありますし、報告を聞いて慌てているのかもしれません』

今もこん睡状態であるブロワ辺境伯の枕元で、二人でどちらが悪いのだと言い争っている可能性もあった。

だとしたら、どちらが後継者になっても問題がありそうだと思うのは俺だけなのであろうか？

『この問題の難しい所は、ブロワ辺境伯家を潰せないところです』

改易するにしても、ではその跡をどうするのかという話になる。

東部に千年以上も君臨してきた、大貴族家であるブロワ辺境伯家が消えれば、東部の統治体制が不安定になってしまうからだ。

新しい貴族を入れるにしても、旧家臣や領民達がそう簡単に靡くとも思えない。

下手に内乱などが発生すれば、それだけで隣接する南部と中央部の治安や経済などに負担を与えてしまう。

「まさか、バウマイスター伯爵やうちに任せるわけにもいきませんし」

未開地の開発があるのに、そんなお荷物を押し付けられたらブライヒレーダー辺境伯は過労死するし、俺は土木工事ばかりの毎日になってしまう。

その前に、王家としても俺達が大きくなり過ぎてしまうので許可は出さないであろう。

色々と思うところはあるが、何とか新しいブロワ辺境伯に東部を安定させて貰わないと困るのだ。

『でないと、正式に毟り取れないですしね』

こちらとしても、これだけ迷惑をかけられたのだから和解金をオマケするなどと言うつもりはなかった。

今のところは金には困っていないが、金はあっても邪魔にはならないからだ。

あとは、ケツの毛まで毟り取ってブロワ家が借金塗れになっても、そう簡単には潰れないので問題は無い。

前世で言うと、アメリカの自動車メーカービック3や日本の東電が潰れないのと同じ理由である。

ただ、ここで甘やかして第二のブロワ辺境伯が出ても困るので、うちに喧嘩を売ると大損だと世間に知らしめる必要もあったのだ。

『本軍の壊滅で、更に損害が増したでしょうね』

一万人規模の軍が壊滅し、そのほとんどが捕虜になっているのだ。身代金だけでも、余計に負担が増えたであろう。

彼ら無駄な事をして、また損失を増やしてしまったのだから。

『また軍勢の準備をしていたりして』

『ブロワ家側がよほど愚かではない限り、それはないと思いますよ』

ブライヒレーダー辺境伯の言う通りで、追加の軍勢は来ていなかったが、同時に裁定案交渉を再開させましょうという使者も来ていなかった。

ブライヒレーダー辺境伯は政務と軍務で疲労の極地にあったが、俺は陣地の馬避けの塹壕と土壁だけを作ったら、あとは暇になっていた。

トーマス達は占領地の軍政官の補佐で出向していたし、モーリッツ達は俺達の警護や諸侯軍の細々とした雑務などに没頭していた。

「そんなわけで、魔法の訓練以外でする事が無くて暇なんだ。弓の腕前を見せて」

「バウマイスター伯爵様。私は捕虜ですけど……」

「今更、一人や二人射って倒しても裁定で余計に不利になるだけでしょう？　はい、カルラさんの弓矢」

「大胆な方なのですね。バウマイスター伯爵様は」

カルラプラス女性陣でのお茶会にも飽きたので、俺は陣地の近くに立っている木に弓矢専用の的を設置して、弓の名人だと評判のカルラに腕前を披露して貰う事にしたのだ。

ブロワ家のせいで暇なのに待機せざるを得ない状態だし、このくらいの娯楽は許されるであろう。

「俺もやる！」

「じゃあ、俺もやろう」

「ヴェル様、私も」

一応競技形式にする事にして、五十メートルほどの位置から五本の矢を的に向けて放つ事にする。

まずは的に何本刺さるかで、次に中心との距離で点数を決める。

的自体が適当な板に書いているだけなので、正式な弓術の的というわけでもなく、半分遊び感覚であった。

「順番はクジで決めよう」

木の棒を使った簡単なクジで射る順番を決め、最初はエルが五本の矢を放つ。

「まあまあだな」

五本全部が中心点から三十センチ以内に納まっていたので、エルは弓の腕前にも優れているという証拠であった。

「というか、このくらい出来ないと田舎貴族のガキは肉が食えない」

子供が弓で獲る獲物はウサギが多いので、このくらいの精度が無いと肉が食べられないというわけだ。

「何羽か獲らないと、兄貴達に肉を奪われてしまうからな」

獲った獲物も、まずは父親や兄達が先に食べてしまう。

彼らも狩りをするが必ず成果があるわけでもなく、ボウズならエルから奪ってしまうのだそうだ。

だから、エルは多くの獲物を獲らないと自分で口に出来ない。

俺よりも弓が上手いのには、そういう理由があったのだ。

「次は、ヴィルマなのか？」

「弓は習っている」

エドガー軍務卿から養われている時に、弓の教師も付いていたそうだ。

ある程度色々な武器をこなせる方が潰しが利くという理由もあり、軍系貴族家同士では教師役を融通し合う事が多いらしい。

「ヴィルマが弓ねえ……。大丈夫か？」

今まで使っているのを見た事が無かったし、彼女のイメージはパワーファイターその物であった。

エルからすれば、正確に弓を引くヴィルマというイメージがし難いのであろう。

「上手じゃないけど、下手でも無い」

そう言いながら立て続けに五本の矢を放つと、それらは全て的には刺さっていた。

エルよりは分布が広いが、そう俺と実力に違いは無いようだ。

「上手いな」

「でも、本当は自分専用の弓を使う」

「何か想像できたわ……」

エルに続き、俺もすぐに想像がついていた。

ヴィルマ専用の弓矢とは、きっと普通の人では引けないような豪弓で、全て鉄で出来た矢を放つとかするのであろう。

「今回は使わなかった」

「人に命中すると、貫通しそうだな」

「フルプレートも、普通に貫通する」

豪弓をヴィルマの怪力で引けば、そういう事になるのであろう。

本当の戦争ならば良い武器なのであろうが、今回のような『紛争』では多くの人死にが出るので使用しなかったそうだ。

「次は、ヴェル様の番」

「プレッシャーだなぁ……」

最近、魔法の鍛錬に集中していて弓はサボっていたので、少し自信がなかったのだ。
それでも集中しながら矢を放つと、一本は外れてしまったが残り四本は的に命中していた。

「あちゃあ。鈍ったなぁ」

最近は、魔法の鍛錬を優先していたせいかもしれない。

「そうですか？　お上手だと思いますよ」

突然後ろから声がしたので振り返ると、そこにはブライヒレーダー辺境伯が立っていた。
相変わらず目には物凄い隈が浮かんでいて、気分転換に弓勝負を覗きに来たのであろう。

「ブライヒレーダー辺境伯様も、やってみますか？」

「いえ。遠慮しておきましょう」

刺さった矢を的から回収してきたイーナの誘いを、ブライヒレーダー辺境伯は断っていた。

「私の腕前では、一本も当たりませんし」

「そうなんですか？」

「はい。私に弓を教えた教師はこう言いました『アマデウス様は、人が周囲にいる時には弓を引くのを控えた方がよろしいかと……』と」

「凄いですね。その教師の人」

「一応、親切で言ってくれたみたいですよ。誤射で怪我人や死人が出ると大変ですから」

そういえば、ブライヒレーダー辺境伯は武芸全般で才能がマイナスだと評価されていた。

辺境伯だから家臣に任せれば良いわけなので、特に問題でも無いわけだが。

「私よりも、カルラさんの腕前が見たいですね」

「あの、本当に宜しいのでしょうか？」

一番の親玉が顔を見せたので、本当に捕虜が弓を射って良いのか気になったのであろう。

「ここで、私やバウマイスター伯爵に矢など射っても何の得にもならないどころか、余計にブロワ家の立場が悪くなりますよ」

「それもそうですね」

ブライヒレーダー辺境伯からの返答に納得した彼女は、俺から受け取った弓に矢を番えて集中を始める。

「良い弓ですね」

「田舎貴族の嗜みですよ」

子供の頃から剣よりも弓矢の方が得意であったし、今も金が無いわけでもないので、練習用でも弓矢はかなり高級な品を使っていたからだ。

「では……」

再び集中を始めたカルラが矢を放つと、それはピタリと的のど真ん中に刺さっていた。

あまりの神業に、全員が黙り込んでしまう。

「真ん中に近い位置なら、上手い人ならある程度は当たる。でも、ど真ん中は……」

続けて二射目を射るとその矢もど真ん中に突き刺さり、前に刺さっていた矢が弾かれて的から地面に落ちていた。

「惜しいですね」

「惜しい？」

始めは彼女が言っている事の意味がわからなかったのだが、それは第五射目で判明する事になる。

第三射目も第四射目も、ど真ん中に刺さって前に刺さっていた矢を弾き飛ばしていたのだが、最後の第五射目の矢は第四射の矢尻の真ん中に突き刺さり、真っ二つに割れて地面に落ちてしまう。

「ええと、これは？」

「ど真ん中に当たるのは当たり前で、前に射った矢を弾き落とすのではなくて、真っ二つに切り裂いてから落とすのが一番良い結果な

のだと」

田舎領地で弓を嗜んでいるから上手などと言っていた俺達など、子供に見えるくらいの名人ぶりであった。

『女那須与一』、『女ロビンフッド』、あだ名は何でも良いが、恐ろしいまでの腕前である。

「凄いなぁ。俺、弓を教えて貰おうかな」

俺がカルラに一番感じた感情は、『尊敬の念』であった。

自分も子供の頃から懸命に弓を練習していたのだが、やはり魔法と二足の草鞋だったりしたせいもあって、『中途半端に上手い』くらいの評価しか受けていない。

なので、あの武芸大会で準優勝という実力を持つ彼女を純粋に凄いと感じたのだ。

「でも、準優勝なのに仕官先が無いのね？」

「女性ですからね……」

それでも結婚前までは、式典要員で武芸に優れた貴族の娘の就職先はあったりする。

本当に二～三年間だけで嫁入り修行の一環と見なされるのだが、相応の実力がないと入れては貰えない狭い道だ。

カルラなら仕官できそうな気がするが、彼女は認知はされているが隠されている娘であった。

自ら積極的に、仕官先を求めるなどは出来なかったのであろう。

「二度目の裁定の使者が来るまで暇だし、カルラさんから弓でも習

おうかな」

「それは良いけど」

「良いけど？」

「随分と綺麗な人だからって、奥さんにしようとか考えちゃ駄目よ」

「その気もないし、立場的に無理だろうが……」

信用が無いのか？

俺はなぜか、イーナから釘を刺されてしまう。

そしてもう一人、彼女の弓の腕に感心している人物がいた。

「カルラ様かぁ……。弓を射る姿が美しい……」

エルがぼーーっとした表情で、カルラが弓を射る様子を眺めていたのだ。

「あのね。ヴェル。エルには、絶対に他の感情もあるから」

「みたいだねぇ……」

「カルラ様は、素晴らしい弓の腕前ですね。俺なんて、足元にも及ばないですよ」

「エルヴィンさんも、とてもお上手でしたよ」

「いやあ。それほどでも」

呆けから回復したエルは、無駄にさわやかな笑顔を浮かべながらカルラに話しかけ、彼女に弓の腕前を褒められて満更でもない様子だ。

そしてその様子を見た俺とルイーゼは、新たに増えたかもしれない問題に判断がつかず、ただお互いで見つめ合うのみであった。

第七十話　お前ら、やっと来たのか……。

「基本は出来ていますね。番えた矢から手を離す時に、僅かに揺らしているから狙いがブレる時があるのです」

「なるほど」

これだけの騒ぎを起こしておいて、未だにブロワ家側からの使者は来なかった。

仕方が無いので、一部東部側領域の保障占領を続けながら、俺達はバウマイスター伯爵家諸侯軍本陣で暇潰しに没頭していた。

トーマス達は、占領を宣言した村や町に、条件付きで開放した貴族達の領地に軍政官として出向いて忙しい日々を送っていたし、モーリッツは陣地の守りにブライヒレーダー辺境伯の手伝いが忙しい。

だが、俺達はかなり暇だ。

たまに領地から補給物資と共に書類などが回ってくるが、今の時点で俺に過度な負担はかけない方針らしい。

ローデリヒからは、状況報告くらいしか届いていなかった。

領地は、未だに人手不足ながら順調に開発が進んでいるらしい。

その書類を確認してサインをすると、あとは魔法の鍛錬か、既に客人扱いのカルラから弓を習う日々になっている。

本当は、魔の森にでも狩りに行きたいのだが、さすがに戦時に本陣を抜けるのは駄目なので、暇な時間は全てこれに当てていた。

俺達の中で一番急がしいのは、臨時司祭になっているエリーゼであろう。
戦闘は無いが、作業や食料調達のための狩りでたまに怪我人は出るし、病人は言うまでもない。

イーナは、食事の準備などの間に槍の訓練を。
ルイーゼは、暇になったのか？
ヴィルマに、初歩的な魔闘流の型などを教えているようだ。

『うわぁ。才能あるなぁ……』

英雄症候群のせいでパワーファイターに見られやすいヴィルマであったが、実は器用なタイプだったりする。
魔闘流の覚えも良いし、カルラからナイフの投擲術や弓なども教わって、彼女から才能があるとも言われている。

『その代わりに、兵を指揮する才能はありませんけど』

実の兄であるモーリッツの評価によると、兵を指揮する指揮官としての才能は皆無らしい。
とにかくパワーと武芸に優れていて、今の俺やエリーゼの傍で護衛をする状態が一番上手な使い方なのだそうだ。

『そこで、一気に魔力を放出するなよ。糸のように細く、なるべく長く魔力を流すイメージで』

『はい』

そしてカタリーナは、ブランタークさんから魔法の特訓を受けていた。

俺と同じく経験が浅いので、苦手な魔力のコントロールを毎日長時間習っていた。
彼女は『暴風』の二つ名に相応しく、派手な魔法をぶっ放す方が得意なのだそうだ。

「こうですか？」

「段々良くなってきたな」

カタリーナは目に見えて効果が上がっている実感があるらしく、ブランタークさんからの指導を真面目に受けている。

「大分、的の中心部に纏まるようになったな」

「良い調子ですね」

俺の方も僅か二～三日の指導で、自分でもわかるほどに弓の腕前が上達していた。

「ですが、意外でした。魔法の他にも、弓がお上手だとは」

「実家は、あのクソ田舎だしね」

子供の頃は魔法はなるべく隠していたし、魔力が尽きた時の事を考えて懸命に習っていたのだ。
あとは、実家の空気的に『弓くらいは上手く使えないと』という物もあったと思う。

「獲物が獲れないと、肉が食えない」

「私も同じでした」

カルラも王都にある母の実家が貧しく、弓で獲物を獲って来ないと肉は食べられなかったそうだ。

「そうでなくても、居候状態で肩身は狭いですし」

ブロワ辺境伯から来る僅かな仕送りを期待している癖に、祖父母、次期当主である伯父、伯母、従兄達と。

万遍なく、邪魔者扱いされていたそうだ。

「かと言って、ブロワ家でもいない人扱いだったので……」

急に呼び出されて、好きでも無い父親の世話に、お飾りの総大将まで押し付けられ。

正直なところ、早く王都に戻って母と二人だけで生活をする算段をつけたいそうだ。

「ええと。何と言いますか……。相談には乗りますので……」

妻にするつもりはなかったが、美人が憂いているのを見ていたらついそう口にしてしまったのだ。

やはり、世間的に美人は得なのだと思う。

「ありがとうございます」

暫く練習をするとお昼の時間になり、エリーゼが呼びに来たので昼食を取る事にする。

相変わらずののどかなお昼であったが、これも頑張って広域エリアスタンに成功したおかげであろう。

「狩りに行きたいわね」

「そうだなぁ……」

イーナの呟きに、俺だけでなく、エリーゼやカタリーナやカルラですら反応していた。

カルラに言わせると、こういう時は一刻でも早く狩りに出て獲物を獲りたいのだそうだ。

とても大貴族の娘とは思えないが、今までの生活が俺達と大差なかったので、総大将代理の職などは苦痛でしかない事の証拠でもあった。

「ならば、カルラ様も冒険者になって魔の森に狩りに行くとか」

「それはいいですね」

エルの、本気なのか冗談なのか良くわからない誘いに、カルラは笑顔で答えていた。

「俺達と行けば、かなりのリスクは避けられますし。あっそうだ。実は俺も弓を教えて欲しいんですよ」

「はい。大丈夫ですよ」

続けて、エルはカルラに弓を教えて欲しいとお願いをし、それは特に問題もなく受け入れられる。

昼食終了後、エルは楽しそうにカルラから指導を受けながら矢を的に放っていた。

「エルヴィンさんもお上手ですね」

「カルラ様には勝てませんから。しかし、指導もお上手とは素晴らしい」

カルラに弓の腕前を褒められたエルは、締まらない笑みを浮かべながら彼女と楽しそうに話を続ける。

「あのバカ……」

「物凄くわかりやすいわね……」

俺と一緒に遠方からその様子を探っていたイーナは、やはり気が付いたようだ。

エルが、カルラに惚れているという事実を。

「どれどれ……」

追加でルイーゼも二人の様子を探るが、それなりに付き合いも長くなってきたのでこちらもすぐに気が付いたようだ。

「エル。完全にお熱だね」

ルイーゼは、美人なカルラに夢中のエルを見て心の底から駄目出しをしていた。

まず、エルには俺の護衛という仕事があるからだ。

別にしなくても、陣内ではモーリッツが部下を配置しているので何の問題もないのだが、サボるのは良くないであろう。

「教えるのもお上手とは。ルイーゼとは大違いだ」

「そうなのですか？」

「はい。カルラさんとあいつを比べると、まさに『月とスッポン』」

「あの野郎……」

確かに、カルラは自分が上手なだけでなく、人に教えるのも上手い弓の天才であった。

エルから教えるのは下手だと言われたルイーゼは、声を低くして鋭い視線を送り始める。

だが、色でボケているエルには全く届いていなかった。

「まあまあ。ルイーゼは、強くて可愛いから（エルのドアホが！）」

このままだとルイーゼがエルに一撃加えかねなかったので、俺は慌てて彼女を後ろからそっと抱き締めて宥め始める。

「魔闘流と弓術は違うしさ。俺は、ルイーゼが可愛いと思うから奥さんにするんだ。外野の意見なんて無視無視」

「そうかな？」

歯の浮くような褒め言葉であったが、ルイーゼのご機嫌が直ってくれたようなので、俺は心の中で安堵していた。

「おバカさんにも程がありますわ」

「そうよね。まず、あり得ないし」

カタリーナとイーナも、辛辣であった。

形式上は捕虜にしている貴族の令嬢に、陪臣が恋に落ちてしまう。物語なら許せるが、現実ではただの迷惑でしかないからだ。

「脈はあるのかね？」

傍から見ると誰にでもわかるくらい、エルはカルラへの気持ちで顔がにやけている。

可哀想に、俺よりも良い顔に生まれたのに、あまりに締まらない表情なので若干ブサイクに見えるほどだ。

元からエルには距離を置いているカタリーナは気味が悪い物を見ているかのようであったし、イーナは身分違いの恋をしているエルを冷静に非難している。

そして俺であったが、何よりも気になったのはカルラがどのように思っているかであった。

この状態で、いくらエルでも告白をするとか妙な事はしないであろうと思っていたからだ。

「カルラ様は大人だと思う。別に、エルを意識してはいないはず」

極めて冷静に答えたのは、俺達の中で最年少であるヴィルマであった。

彼女は、恋仲になった男女の行為の知識には疎いようだが、男女の機微には意外と敏感なようだ。

「カルラ様は、今の自分の待遇が恵まれていると理解している。だ

から、エルのスケベ顔にも笑顔で答えている」

珍しく言葉が長かったヴィルマであったが、その内容は辛辣の一言であった。

要するに、カルラは社交辞令的な態度でエルと接しているのだと。

「そうかな？　彼女も満更でもないような？」

「ヴェル様は、まだ女性を見る目が甘いと思う」

「厳しいっすね。ヴィルマさん」

ヴィルマの指摘に、俺は若干心の中でへこんでしまう。

「ヴィルマさんの辛辣ぶりは相変わらずとして、どうせ実らない恋ですわ」

カタリーナの言う通りで、いくらいらない娘扱いされていたとはいえ、カルラはブロワ辺境伯の娘である。

陪臣であるエルの妻になど、なれるはずはなかった。

「ヴェンデリンさん、少し目を醒まさせたらいかがです？」

「どうせ、すぐに醒める事になるだろうしなぁ。個人的には、応援したい気もあるだけど……」

こうなると、貴族としての立場が重荷になってしまうのだ。

「エリーゼはどう思う？」

「私ですか！」

まさか、真面目なエリーゼが覗きなどしていないと思っていたようで、俺を除く全員が彼女の気配に気が付いていなかったようだ。

俺がコッソリと覗いているエリーゼに声をかけると、彼女は自分が俺に見付かるとは思っていなかったらしい。

声を上ずらせながら答えていた。

「エリーゼも、結構こういうのが好き？」

「ルイーゼさん。私だって多少は興味がありますから」

ルイーゼの質問に、顔を赤らめながら答えるエリーゼはかなり可愛かった。

「カルラさん。王都に居た頃は、男の方達に人気がありましたから」

エリーゼやカタリーナとは違って、一言で言うと透明感のある美人であるカルラは、俺から見てもかなり好みのタイプではある。

顔の系統が少しあっさりしているので、元日本人である俺からすると少し懐かしい感じのする美人なのだ。

「美人で、スタイルが良くて、料理とかも上手だしな」

「カルラさんの場合、ブロワ家に戻るまでは真面目に教会で家事とかも習っていましたし」

居候をしている実家が経済的な理由でお手伝いさんなど雇えないという事情もあって、エリーゼ達に混じって食事の支度などもテキ

パキとこなしていたそうだ。

当然、多くの男性の目に留まるわけだが、彼女の素性を知るとみんな尻込みしてしまう。

そんな事が続いたせいで、彼女の傍に男性の影はあまり無かったらしい。

「身分違いの恋が理由で、辺境伯を敵には回したくないか」

「はい」

「それはわかったけど、エルに芽はあるのかな？」

「いえ。それも……」

エリーゼは、ここ最近カルラと料理などしながら良く話をしていたそうだが、彼女が男性に求める物は誠実さであると聞いていた。

「お父様のブロワ辺境伯様のような方が、男性としては一番嫌だそうです」

自分の母親への待遇を見て、ブロワ辺境伯に好意を抱くというのも難しいであろう。

「エルは……」

ブランタークさんに女遊びを教わってしまったエルは、少し誠実さが足りないと思われているのかもしれない。

うちの陣地には女性が多いのでモーリッツ達もそういう話は控えているようだが、全くしないわけでもないし、女性はそういうコソ

コソ話には敏感ではある。

エルは立場が特殊なので、早く他の家臣達に馴染もうと一緒に酒を飲んだり下世話な話にも興じたりするので、カルラにも気が付かれてしまっているようだ。

『モーリッツ兄さんは、俗物』

『男は多かれ少なかれ、みんなそうなんだよ！』

少し前に、とある兄妹の悲しい会話を聞いてしまったので、エルも同類だと思われてしまったかもしれない。

とある兄は妹に汚物扱いされて、半泣きの状態であったのを思い出す。

「何だあいつ？　締まらない顔をしているな」

加えてそこにブランタークさんも姿を見せ、エルの駄目っぷりを呆れながら監察していた。

「彼は、恋に悩んでいるのですよ」

「可哀想に。エルの坊主はお熱でも、カルラ様は軽く受け流してるな」

人生経験が豊富なブランタークさんが見れば、エルの失恋は秒読み段階にしか見えないようだ。

「さすがに、弁えるとは思うが……。ああ、そうだ」

「何かあったのですか？」

「明日ブロワ家から、裁定交渉のための交渉団が来るそうだから」

「えっ？　それって、大事件じゃないですか」

一度開始した裁定交渉を駄目にした挙句にあれだけの事件を起こし、どういう顔をして来るのかは不明であったが、これでようやくこの長い紛争も終わりの糸口が見えたというわけだ。

「そんなに上手く行くかな？」

「でも、まずは交渉を開始しないと意味が無いわけで」

「それはそうなんだがな……」

ブランタークさんの懸念は、翌日に現実の物となって俺達に圧し掛かってくるのであった。

「さすがに、軍勢は連れて来ませんでしたか」

「集めるにも、お金がかかりますしね」

翌日の朝、ブランタークさんの報告通りにブロワ辺境伯家は裁定交渉を行う使節団を送り込んでいた。

占領地が増えたので、味方が駐留している最前線の草原に交渉用

の大型テントを建てて待っていると、そこに百名ほどの護衛と共に使節団が到着する。

だが、いきなり交渉は大きく躓く事となる。

躓くというか、その入り口にも入れなかったのだ。

「フィリップ・フォン・ブロワである！」

「クリストフ・フォン・ブロワです」

ある程度予想はしていたのだが、ブロワ家側のトップが二名存在しているせいで、ブライヒレーダー辺境伯がどちらと交渉すれば良いのか聞いたところ、双方が言い争いを始めてしまったのだ。

「長男である俺が交渉する！」

「何を言っているのですか！　あなたの失態が、この状況を招いたのでしょう。私が交渉します！」

二人だけでなく、双方が連れて来た家臣達も言い争いを始めてしまう。

「バカな戦争など企てたお前らに、交渉に出る資格などないわ！　その前に、みんな捕虜になって随伴が小物ばかり。そんな面子では、ブライヒレーダー辺境伯様に失礼だろうが！」

「お前達こそ、最初は碌に反対もせずに予算や物資の準備をしたではないか！　それが、戦況が不利になった途端に掌を返しやがって！　文弱の徒は黙っていろ！」

「剣を振るうしか脳の無いアホに交渉？　寝言は寝てから言え！」

「インテリぶるだけの低脳が！　お前らの頭の良さは、見せ掛けだけだろうが！」

色々と問題はあったのであろうが、ブロワ辺境伯が健在ならばこんな醜態は見せなかったのかもしれない。

もう一つ問題もあって、交渉に参加できるのはどちらも二十名までである。

ところが、フィリップもクリストフも両方が二十名の随伴を連れて来たので、互いに譲らずに争いになってしまったのだ。

「半々にしたら如何です？」

さすがに見かねたブライヒレーダー辺境伯が助け船を出したのだが、それすら新たな争いの原因にしかならなかった。

「諸侯軍幹部の多くが捕虜になっているフィリップ様には、十名も使節団はいらないでしょう」

「事は軍事行動に関する裁定なんだぞ！　諸侯軍を纏めるフィリップ様の随伴を減らしてどうする！　お前達こそ、書類にサインするしか能が無いんだ！　十名も随伴はいらないだろうが！」

このまま放置しているといつまで経っても交渉が始まらないので、見かねたクナップシュタイン子爵が半分ずつの随伴を連れてテントに入るようにと勧告していた。

彼はどちらの人数にもカウントされない、王国から送られた中立の立場に立つ人物である。

彼を怒らせると交渉が不利になると感じた二人は、素直に十名ずつの随伴を連れてテントに入っていた。

「交渉の前に、調停書のサインですが……」

「父は、五日前に亡くなりました。両者で連署すれば有効かと」

「そうですね」

クリストフの返答に、クナップシュタイン子爵は納得したような表情を浮かべていた。

しかし、ようやくここに顔を出した理由が父親であるブロワ辺境伯が死んだからとか。

顔も知らない人物であったが、どこか可哀想な人ではあったと思う。

「それで、交渉の続きですが……」

当然、前に出した裁定案などは全て無効である。

何しろ、前提条件がまるで変わってしまったのだから。

「実は、今回ブロワ辺境伯家側で参軍した貴族達ですが……」

ブロワ辺境伯家のあまりの無責任ぶりに、寄り親をブライヒレーダー辺境伯に変える旨を宣言していた。

紛争案件の和解金や身代金の交渉は終わっていないが、このまま紛争が長引くと領内の経済が破綻するので、先に解放して貰って領地に戻っていたのだ。

それと、紛争案件の状態も戦前に戻しているし、占領扱いなので

ブロワ家側からの商隊などを入れるわけにもいかないので、通商なども南部から受け入れている。

「もはや、条件が変わっているのです。その辺をご理解ください」

戦前にはブロワ家の寄り子達であった彼らは、今ではブライヒレーダー辺境伯の寄り子になっている。

紛争案件も全て戦前に戻しているし、捕虜になっていた貴族や兵士達も全て解放されている。

つまり、東部の統括領域が大分北上してしまった事を意味していた。

そして、更に残酷な現実を突きつけられる。

「とはいえ、侵略されたうちの寄り子達は、和解金の権利を放棄したわけではありません。うちが、請求を一括して行う形にしたのです」

「一括してですか？」

「だってそうでしょう。この書類があるのですから」

ブライヒレーダー辺境伯の手には、元ブロワ側の貴族に渡していた、紛争で発生した損害は全てブロワ家で負担するという契約書が四十枚以上も握られていた。

「彼らは紛争相手に、利権を戦前の状態に戻すために和解金を支払わないといけない。ですが、それはこの契約書によるとブロワ家が負担してくれると書いてあります。交渉の効率上、私が纏めて請求する方が宜しいでしょう」

その前に、既にブライヒレーダー辺境伯が和解金を貴族達に前払いしているので、取り立てないと赤字になってしまうのだ。

「うちの寄り子達が……」

更にブロワ家側が救われない部分は、この和解金を支払っても四十家を超える貴族家が二度と寄り子として機能しない点だ。

金だけ損をして、自らの支配領域を減らしてしまう。

ブロワ家は、間違いなく戦争に負けたという事になる。

「あとは、主にバウマイスター伯爵が得た捕虜に対する身代金もです」

こちらも既に解放してるし、預かっていた味方の貴族達には先に捕虜の管理費用を先払いしている。

当然この分も合わせて、俺はブロワ辺境伯家に請求する事になっていた。

「加えて、ブロワ辺境伯軍の捕虜が一万とんで五百六十七名。かなりの東部領域と村や町なども占領状態です。これの返還にも和解金が必要ですね」

最初の裁定交渉時には、クナップシュタイン子爵が四億セントと算定していた。

だが、今の状態で同じ金額のはずがない。

大幅な金額増となっているはずであった。

「いくらなのだ？」

ようやく口を開いたフィリップがブライヒレーダー辺境伯に尋ねてくる。

「計算によりますと、十億セントですね」

「バカな！」

あまりの金額に、二人の後継者候補達は絶句してしまう。

だが、あの無謀な夜襲の前でも五億セントだったのだ。

この程度の増額は仕方が無いであろう。

「いくら何でも高過ぎる！」

「ですが、あれだけの大失態です。増額はやむを得ないでしょう」

「特使殿は、ブライヒレーダー辺境伯の肩を持つのか！」

クナップシュタイン子爵の意見にフィリップが噛み付いて来るが、彼は顔色一つ変えずに静かに反論していた。

「肩を持つですか？　あなたの仰っている事の意味がわかりません。王国が黙認している『紛争』を無意味に長引かせ、最初の裁定が不利になると、実戦用の武器を装備して夜襲を目論む。ハッキリと言わせて貰えば、王国はブロワ家への不信感を募らせています。後継者争いも結構ですが、せめて他の貴族に迷惑にならないようにしてください。それと、もしここで和解金無しで戦前の状態に戻せとか言うつもりなら、それはブロワ家側への一方的な肩入れになるので承知しかねます」

淡々とした口調であったが、クナップシュタイン子爵の容赦ない

反論に二人の後継者候補達は黙ってしまう。
彼は、俺達が夜襲を防げなければ戦死していた可能性もあったので、余計に頭にきていたのであろう。

「多少の値引きは可能かと思いますが、他の案件では交渉しても無駄かと思います。寄り子達の離脱も同じです。ブロワ家はあの契約書に従って彼らの損失を支払う義務がありますが、彼らがブロワ家の寄り子に戻る事はありません」

彼らが断れないのを利用して強硬占拠を行わせ、自分達は後継者争いに夢中で前線に顔すら出さなかったのだ。
まさに、自業自得としか言いようがない。

「今日は顔見せと条件の提示が目的でしたので、これで終わりにしましょうか？」

和解金の減額交渉にしても、ブロワ家側での話し合いも必要であろう。
ブライヒレーダー辺境伯が今日の交渉の打ち切りを宣言し、そのまま両者は解散するのであった。

「バウマイスター伯爵様を夕食に招待いたしたいと思いまして」

「はあ……。招待ですか……」

初日の裁定交渉は一時間ほどで終了して俺達も自分の陣地へと戻ったのだが、その帰りにブライヒレーダー辺境伯から一つ忠告のような物を貰っていた。

『バウマイスター伯爵は気を付けた方が良いですよ』

『若造なので、搦め手でいけると？』

『そんなところです』

交渉でブロワ家側が支払う和解金のかなりの部分は、俺が捕らえた貴族や兵士達の身代金である。

あの無謀な夜襲によって、ブロワ辺境伯本軍の精鋭と多くの幹部が捕らえられている。

これも合わせるとその金額は莫大であり、二人の後継者候補達はまだ若い俺を単独で狙って和解金の額を減らそうとするであろうと。

『うちに支払う和解金の減額はかなり難しい。あなたなら、上手く誑かせば可能だと思っているかもしれません』

『成人直後の若造ですからね。ですが、あの後方かく乱の件を忘れていませんか？』

『だからですよ。それを非公式ながら謝罪して、代わりにある条件を出すのです』

『カルラさんか……』

年齢も近い、ブロワ家の末の娘を俺の妻に差し出す。

ブロワ家内には『例の工作への謝罪を込めて』と言えば済むし、

もしカルラが俺の妻になると都合の良い点も浮かんでくる。

『未開地開発利権に加われます。妻の実家に融通しないのは変でしょう？』

『俺は、彼女を妻にするつもりなんてありませんよ』

悪い娘ではないのだが、その親族が悪過ぎた。

そうでなくとも成立したばかりの領地なので、そういう輩の介入は防ぎたいのが本音であった。

『彼女も、困惑するでしょう』

弓を教えてくれるし、エリーゼ達と一緒に食事の準備なども手伝ってくれていてカルラ自身は良い娘だと思うのだが、それと結婚とはまるで別であった。

話すと人に気遣いなども出来る良い娘なのだが、逆に言うとそれがエルのような勘違い君を生む土壌になっている。

どういうわけか、エルは勝手に熱を上げているようであったが、あいつに惚れているわけではなく、大人の対応をしているようにも見えてしまうのだ。

ただもしかすると本当に好意を抱いている可能性もあり、その辺の判断は恋愛偏差値の低い俺には難しい話である。

『引っかからないでくださいね』

『勿論です』

ブライヒレーダー辺境伯と別れて、俺は自軍の陣地へと移動する。

合計で百五十名ほどのブロワ辺境伯家交渉団は、ブライヒレーダー辺境伯本軍に近くに陣地を張っていた。
これから毎日交渉なので近場を選んだのと、ここまで状況が悪化すると逆に自分達を襲撃や暗殺などしないであろうと読んでいると思われる。

良い度胸だとは思うが、その判断力をもっと早く発揮して欲しかったものだ。
そんな事を考えているとモーリッツが姿を見せ、ブロワ家から晩餐に招待したい旨の報告を持ってきたのだ。

暫く待つとブロワ家側から正式に使者が訪れて、招待状を俺に手渡していた。

「わかりました。お伺います」

「ありがとうございます」

使者である初老の男性は、ホっとした表情を浮かべながらブロワ家の陣地へと戻って行く。

「危険ではありませんか？」

「まさかな」

ここで俺を殺せば、確実にブロワ家は改易されるであろう。
まさか、そこまで頭が回らないとは思いたくなかった。

「護衛は連れていくさ」

「エルヴィン。わかっているな？」

「はい」

モーリッツは、エルに確実に護衛を行うようにと念を押していた。今はカルラにお熱で普段はボケボケのエルであったが、仕事を忘れるほどまでは行っていなかったようだ。

「ところで、この招待状なのですが……」

俺から受け取った招待状を眺めていたモーリッツは、ある重要な点に気が付いていた。

「差出人が、フィリップ殿になっています」

「えーーーと。つまり……」

「明日には、クリストフ殿から招待状が来るのでは？」

「だよなぁ……。二日連続はキツいわ……」

せめて一緒に招待してくれよと、俺は心の中で二人の後継者候補達を呪うのであった。

「ようこそおいでくださいました」

「遠慮なくご馳走になりましょう」

その日の夕方、俺はブロワ家主催の晩餐会に出席すべく出かけていた。
ブライヒレーダー辺境伯にその旨を伝え、敵陣へと乗り込むのは俺とエルの他に、モーリッツが指名した四名の護衛達。
あとは、女性もいた方が良いであろうと、同じく護衛役も兼ねてルイーゼも参加している。

彼女なら、もし何かがあっても多少の敵なら余裕で打ち倒すであろうからだ。

『それにさ。エリーゼは、危険だと思う』

俺への毒殺は無いはずだが、エリーゼには一服盛る可能性があったからだ。
毒殺が目的ではなく、未来の正妻であるエリーゼが子供を産めないように毒を密かに盛る。

滅多な事では手に入らないのだが、そういう毒薬は実際に存在するらしい。
万が一の可能性も考えて、今回はルイーゼが参加していたのだ。

『ボクなら、ある程度の毒薬は感知できるし』

『何その能力』

まるで、某世紀末救世主のようだ。

『武芸をある程度極めると、感覚が鋭くなるんだよ』

全てではないが、かなりの確率で食事などに含まれる毒は感知可

能らしい。

『報告の魔法みたいな物か』

『二人で気を付ければ、毒を食べさせられる事もないでしょう。ねえ、カルラ』

『フィリップ兄様がそこまでしない事を祈ります』

若干顔を引き攣らせているカルラを置いて、俺達はフィリップ主催の晩餐の席に参加する。

ブロワ家が設営した小規模な陣地は、対立する二人のために二つの大型テントが張られていた。

俺達が入らなかった方の大型テントには、次男のクリストフがいるのであろう。

「陣地なので、大した物は出せませんが」

状況が状況なので、フィリップは二十歳も年下の俺に丁寧な口調で対応していた。

「普段は冒険者もしておりますので、お気になさらずに」

「貴殿の実力は、良く理解しているつもりだ」

ブロワ家の長男フィリップは、身長が百八十五センチほどの良く鍛えられた引き締まった体の持ち主であった。

軍事的才能に長けるらしいが、俺達はブロワ軍の失態を目の前で見ているので、その話を鵜呑みにするわけにもいかない。

見た感じは、サッパリとした人であった。
今回の失態が無ければ、普通に付き合えたかもしれない。
エドガー軍務卿や、導師を含むアームストロング一族と比べると『濃い』人ではないからだ。

『フィリップか？　あいつは、優れた将軍候補だぞ』

晩餐の前にエドガー軍務卿から魔導携帯通信機経由で情報を仕入れたのだが、彼の口からフィリップの悪口はあまり出てこなかった。

『ただ、領主となるとなぁ……』

軍系の法衣貴族としてなら彼はとても上手くやれるそうだが、領地を統治するのは難しい。

本人もそれは重々承知しているのだが、自分を次期領主にと望む外戚や家臣達の前で言うわけにはいかないので、表面上は異母弟と争っている風に見せるしかない。

それが真相なのではないかと、エドガー軍務卿は推察していた。

『それで、あの大事件ですか？』

『アレは、コドウィンが焦ってバカやらかしたんだろうな』

コドウィンとは、最初の裁定の時に責任者になっていた初老の重臣の事であった。
従士長で、娘がフィリップの正妻なのだそうだ。

『外戚として、ブロワ辺境伯家で権勢を振るうですか？』

『大貴族家の重臣にはありがちな夢だよな。それどころか、今の職を失いかねない大失敗を犯して、それを何とか誤魔化そうとしたんだろうな』

それで、百名近い死者を出していれば意味が無い。

いくら外戚でも、あの大失態では彼のキャリアはここで終了なわけだし、今は捕虜になっている。

ブロワ家に戻れば処分されるであろうが、こちらがそれをどうこう言うつもりはなかった。

『王都にいると、俺が積極的に仲介に入れとか無理を言うバカがいて困るよな。ここで、俺がフィリップを手助けなんてしたら総スカンだっての』

領主になれなくて領地を出たとかなら再就職先の世話などで力を貸すが、この状況で下手に介入などしたら、自分にまで火の粉が降りかかってしまうからだ。

『デカい和解金になると思うが、払うしかないだろう。最悪、資産整理命令もあり得るだろうな。どうせ潰せないんだから、素直に受け入れるしかない』

『資産整理命令』とは、簡単に言えば一度破産してしまう事である。

負債が著しいが、王国としても潰すわけにはいかない貴族家に第三者の管財人、この場合は王国から派遣される財務系の法衣貴族を入れ、ある程度借金が消えるまでは予算の執行などに大きな制限がかかるのだ。

この制度がある理由は、いきなり大物貴族が消えると現地が混乱するからである。

甘いような気もするが、『資産整理命令』を受けたその地方の大物貴族など、ただの王国の飼い犬でしかなくなる。

それに、これが適用されるという事は、『お前は、領主として無能だ』と言われたに等しいのだから。

『次期領主の座は、クリストフに譲るしかないだろう。勝手に自爆したんだから。義父である家臣の暴走にしても、それを抑えられなかった時点で同罪だ。俺が引き受けて、面倒見るのが一番良い手なんだがなぁ……』

ただ、その手だとフィリップは良いのだが、他の彼を支持してきた家臣達は最悪失業の危機に見舞われるわけで、それを口にしようものなら明日にはフィリップの息子を『摘孫なので』と後継者に立てて騒がない保障はないとエドガー軍務卿は思っているようだ。

『みんな、頭を抱えているんだよ』

ブロワ辺境伯家を潰して、そこを直轄地にするなり、他の貴族を転封するにしても暫くは混乱が避けられない。

利益どころか持ち出しの方が多いはずなので、中央の大物法衣貴族ほど実は取り潰しが嫌だったりする。

これが小物なら、躊躇無く取り潰しなのであろうが。

日本で言うと、〇京電力や〇イエーは簡単に潰せないのと同じ理屈であろう。

『エドガー軍務卿は、領地貴族になりたいとか?』

『ないよ。統治できない』

侯爵と辺境伯。

呼び方は違うが、同じ階位を持つはずなのに法衣貴族しかいない侯爵の方が、財力も抱えている家臣の数でも負けている。

なので転封を命じられても、統治できるはずがないのだ。

むしろ、土着化した元家臣や兵士達に反抗されでもしたら、余計に混乱が広がる可能性があった。

『（物語みたいに、主人公がいきなり大きな領地とか下賜されても無理だよな）』

うちだって広大な未開地の開発なので、常に人材不足で困っているのだから。

『和解金が高くて嫌とか言うのなら、鉱山とか、税収とか差し押さえてしまえ』

『強硬な意見ですね』

『向こうが完全に悪いからな。俺達はある程度の規模のブロワ辺境伯家が残って、東部を統括してくれれば良いわけだ。多少の縮小と負債には文句は言わないよ』

こんな話をしたのだが、実はエドガー軍務卿からフィリップ本人に言わないで欲しいと言われていた。

彼一人だけの問題ならとっとと継承権を放棄して終了だが、家臣達が絡んでいるので、下手な外部からの誘導は命取りになってしま

うからだ。

「さあ。こちらの席にどうぞ」

フィリップに勧められるまま、俺は準備されていたテーブル席の上座に座り、その隣に妻役としてルイーゼが座る。

エルは、俺のすぐ斜め後ろに立って刺客などに警戒していたし、他の護衛達も同じであった。

このくらいの警戒は、まだ俺達は裁定案すら結んでいない敵同士なので当然とも言えた。

「まずは、乾杯といきましょう」

軍系な人なので、ノリが体育系なのかもしれない。

早速ワインで乾杯してから、コース料理のオードブルからスタートする。

料理の質などは、野営をしている割には素晴らしい物が出ていた。

さすがは、東方を統括する『地方の雄』と言った感じであろうか。

「東部でも噂は聞いていましたよ。竜を二匹も倒した素晴らしい魔法使いであったと」

交友目的の晩餐会なので今回の戦争の話をするわけにもいかず、話は俺の竜退治の話などに移行していた。

それと、あの貴族なら一度は出ないといけない武芸大会などの話もだ。

「私は、予選五回戦で負けました。貴族の息子にしてはマシという

べきですか」

ワインを飲み、次々と出て来るコース料理を食べながら適当に話を続けていく。

だが、やはり今回の戦争の話はしてはいけないので、俺は何のためにこの場に居るのかと疑問に思ってしまう。

ルイーゼは警戒をしながらも、その小柄な体に似合わず良く食べているし、エル達も周囲の警戒を続けたままだ。

ほぼ１００％毒殺や暗殺の可能性は無かったが、仕事なのでこれは仕方がない。

晩餐はデザートまで終了し、食後にお茶などを飲みながら話をしていると、やはりあの話題が出てくる。

「バウマイスター伯爵殿は、うちのカルラを妻にするつもりはないのかな？」

やはり、カルラを俺の妻に押し込もうとしているようだ。

「この状況ではブライヒレーダー辺境伯側からの反発が強いでしょうし、まず不可能だと……」

未開地開発の利権の分け前などで、また戦争になりかねない。

下手をすると、ブライヒレーダー辺境伯からの妨害もあり得る。

今は俺との関係は良好だが、彼にだって退けない部分があるのだから。

「考えてみてくれないかな？」

強引に押し込もうとすれば問題になるが、ちょうど今カルラはバウマイスター伯爵家の捕虜となっている。
扱いはお客さん準拠であったが、どうにか俺に見初められてとか考えているのかもしれない。

「（まさか、それが目的で交渉を伸ばしていないよな？）」

晩餐は終わり、俺達は自分の陣地へと戻る。
そして翌日、やはり今度はクリストフ主催の晩餐に招待されていた。

「本当に仲が悪いんだな。普通は一回で済ますだろうに……」

昨日に続き俺の護衛を担当するエルが、他の護衛達と一緒に溜息をついていた。

「今日は、誰が行く？」

「勿論、ボクはパスね」

まだ結婚はしていないが、婚約はしているのでまた婚約者を同伴しないといけないのだが、ルイーゼは昨日出席したので一番先に断っていた。

「じゃあ、イーナか？」

「いいけど。あまり料理の味がわからないでしょうね……」

ルイーゼはある意味天才なので、大物貴族家の晩餐に呼ばれても、警戒を続けながらデザートのお替りをするような図太さがある。

ところがイーナは真面目なので、こういう席では極端に緊張してしまうのだ。

「何か、嫌そうだな」

「正直ね……」

「俺も面倒なんだよなぁ……。礼儀的に出ないと駄目だから、仕方なく出ているけど」

美味しい食事ならいつでも食べられるし、どうせまたカルラを妻にして欲しいと頼まれるだけなので、俺だって食傷気味なのだ。

「ヴィルマは？」

「うちのご飯の方が美味しいからいい」

「さいですか……」

ブロワ家も大貴族なので良い食事は出るのだが、俺達と交流がないので醤油、味噌、マヨネーズ、チョコレートなどの新食材や、新しい調理法などに無縁だったりする。

なので、食事の内容が王都で出席した貴族主催のパーティーメニューと大差なくて、物凄く食べたいとか思わないのだ。

「エリーゼは？」

「私は、今回は遠慮いたします」

普段から未来の正妻であるエリーゼは、俺と同伴することが多い。
だから遠慮するのと、実はもう一つ理由がある。

「エリーゼを連れて行くと、エリーゼが説得されるしね」

カルラを俺と結婚させるため、エリーゼの方に説得や工作が及ぶ可能性が高いのだ。
将来は、彼女がバイマイスター家の奥を管理するのだから。

「私が行くと、余計に面倒な事になる可能性が……」

「さて、どうしたものか……」

勿論もう一人候補はいて、しかも彼女の様子を伺うと物凄く出席したそうな表情を向けてくる。
何が楽しくてあんな晩餐に出たいのかは知らないが、きっと彼女なりの楽しみがあるのであろう。

「あとは……」

「仕方がありませんわね。ここは、私が……」

「ルイーゼ、二日連続で悪いけど」

「どうして私を見て、またルイーゼさんなのですか！」

理由は簡単で、カタリーナがあまりに行きたそうなので、ついからかってしまったのだ。

「冗談だよ。でも、そんなに出たいのか？」

「私、そういうパーティーや晩餐とは無縁で……」

知らないがゆえに、物凄く憧れているらしい。

「じゃあ、カタリーナに頼もうかな」

「任せてくださいな。私の優雅さで、晩餐会を成功させましょう」

何か物凄く勘違いをしているかもしれないが、ただ飯を食って来るだけなので俺はあまり気にしない事にする。

そして、その日の夕方。

そろそろ時間なので、ブロワ家の陣地へと出かける事にする。

「ヴェンデリンさん。お待たせしました」

「おい……」

何となく嫌な予感はしたのだが、カタリーナは恐ろしく気合を入れてめかし込んでいた。

シルクを惜しげもなく使用したフリフリが一杯ついた真っ赤なドレスに、普段の魔晶石ではなく本物の宝石が沢山ついたカチューシャ、指輪などのアクセサリー類も宝石の物に、ヒールも踵の高い物に変えていた。

「完璧な正装……」

今は戦時で、しかも野外なので略装でも十分なのに、王家主催のパーティーにも行けそうな格好をしていたのだ。

「私、止めたのよ。ルイーゼも、昨日は略装だったからと言って…」

カタリーナの着付けを手伝ったイーナが、一人溜息をついていた。

ルイーゼ、カタリーナ、ヴィルマと。

三人三様でフリーダムなので、真面目な彼女に被害が及ぶ事がたまにあるのだ。

「別に、間違っているわけじゃないからいいか……」

「では、参りましょう」

カタリーナも嫌々行くのではなく、楽しみにしているのでそれは唯一の救いであろうか？

案の定、踵の高いヒールなので草原を歩くのは難しく、『飛翔』で地面から僅かに浮いて優雅に歩いているフリをしている。

俺から言わせれば魔力の無駄遣いだが、カタリーナにとっては大切な事のようだ。

「お招きに預かりありがとうございます」

今日はクリストフ主催の晩餐なので出迎えの執事も別人で、どうやら二人は陣地すら二つに割って寝泊りしているようだ。

非効率だが、仲が拗れているので仕方がないとも言える。

「婚約者です」

「カタリーナ・リンダ・フォン・ヴァイゲル名誉準男爵と申します。本日は、お招きに預かりありがとうございます」

野外なので全員略装なのに、一人だけヒラヒラの高価なドレスに身を包んだカタリーナ。
それだけで完全に彼女は浮いていたが、本人は全く気にしていないようだ。

「彼女が……」

出迎えた家臣達からは、ざわめきの声があがる。
彼女が、ブロワ家のお抱え魔法使い達を捕らえた凄腕だと気がついたからだ。

一部にガッカリしたような表情を浮かべている人もいたが、彼からすると『苦労して揃えた魔法使い達が、こんな派手な女に……』という気持ちがあるのかもしれない。

「初めまして。クリストフ・フォン・ブロワです」

初めて見る次男クリストフは、少し線の細い文系肌に見える人物であった。
あとは、他には特にないと言うか……。
普通の中年一歩前の人にしか見えない。

「今日はご招待に預かり、感謝したします」

早く裁定案に合意して欲しいと思うし、どうせカルラを妻にして欲しいと言うに決まっているので、正直対応が面倒である。
口に出して言うわけにはいかなかったが。

「さあ、席にどうぞ」

クリストフが、丁重に俺達を席に案内する。
座るとすぐに料理が運ばれてくるが、そのメニューはほぼ同じであった。

『同じような物が出ると思うよ。だって、大貴族家って、大体上客をもてなす食事のメニューは決まっているし』

季節によってや、普段はいくつかのパターンも準備しているのだが、ここは生憎野外の陣地である。
そこでフルコースのメニューを出せるブロワ家は、さすがは大物貴族という感想であったが、二日連続で同じ飯を食わされる身としては堪らないものがある。

「（せめて、何を出したのか兄貴に聞きに行けよ！）」

それが出来れば、ここまで兄弟で揉めてはいないかもしれないが。

「さすがは、ブロワ辺境伯家のディナーですわね」

「お褒めに預かり、光栄です。奥様」

「まだ婚約者ですのよ……」

俺は二日連続でもカタリーナは初めて食べる料理で、更に彼女はこういう席は初めてだ。
初めて観光地に行ったお上りさんのように、料理に会話にと楽しんでいた。

奥様と呼ばれて恥ずかしそうにするカタリーナは可愛かったが、

少々浮かれ過ぎな彼女に若干クリストフは引いている。
だが、今日の席では俺にとって都合が良かった。

「（カタリーナ。大いに楽しんでくれ。クリストフが、アレを言い出ださないように）」

俺の願いは珍しく天に通じ、クリストフは結局カルラの件を口に出来なかった。
彼が高名な魔法使いであるカタリーナに話題を振ったために、彼女の大独演会が始まってしまったからだ。

「私が初めて狩りに出た時に、巨大な熊の魔物が襲ってきまして。慌てて竜巻の魔法で上空に巻き上げてから倒しましたの。続けて、周囲の他の魔物達も風の魔法で吹き飛んでしまいまして。そうしたら、みなさんが私を『暴風』だと」

「ははは……。そうですか」

結局、晩餐会終了まで彼女の独演会は続き、クリストフは肝心の要件を告げられなくて顔を引き攣らせていた。
間違いなく、俺がこれを予想してカタリーナを連れて来たと思っているのであろう。
さすがにそれは、俺を過大評価し過ぎという物であったが。

「楽しかったですわね」

「そうだな。今日は、カタリーナに感謝だな」

「へ？」

なぜ感謝なのかと首を傾げるカタリーナは、やはり少し可愛かった。

そして、何の意味があったのか理解できない二日連続の晩餐も無事に終了するのであった。

第七十一話　俺は先に抜けさせてもらうから！

「完全に手詰まりですね」

裁定交渉が始まってから一週間、何の成果もあがらない状況にブライヒレーダー辺境伯は溜息をついていた。

こちらは王国からの使者であるクナップシュタイン子爵が試算した案を受け入れると言っているのに、ブロワ家側は『高過ぎる！』と拒否しているからだ。

そして、双方の決して交わる事のない金額交渉で一日が終わる。

あとは、交渉に出ている二人の後継者達が口を揃えて言う、『カルラを、バウマイスター伯爵の妻に！』という条件の追加であった。

反乱幇助の侘びを込め、非公式にではあるが謝罪して、カルラを俺の妻に差し出す。

うちとブロワ家との交渉の落とし所としては理解できたが、それはすなわち未開地開発の利権をブロワ家にも分けるという事にも繋がる。

当然ブライヒレーダー辺境伯の怒りは激しく、これで交渉が纏まるというのも変であろう。

「あの二人の仲は相変わらずですが、共に狙っている事は理解できます」

今回の紛争は、既に実質ブライヒレーダー辺境伯家・バウマイスター伯爵家連合バーサスブロワ辺境伯家という構図になっている。

当然今までの経緯から、ブライヒレーダー辺境伯が引くはずもなく、新興で当主が若造なうちが狙われるというわけだ。

「身代金の減額と、カルラさんの嫁入りで利権の分け前ですか。ムシの良い話ですけど、彼らにはこれしか手が無いとも言えます」

「酷い話ですね」

「王族でも、貴族でも、商人でも。交渉で弱点を狙うのは定石でしょう？」

俺とカタリーナは、ある程度の身代金さえ取れれば大幅に黒字となるので、一番減額を狙いやすいというわけだ。

紛争案件の利権には一切絡んでいないので、交渉がシンプルなのも良かった。

「俺達の身代金の交渉額ってどのくらいだっけ？」

「四億五千万セントですわ」

うちとカタリーナのヴァイゲル家、合わせての金額である。

金額が多いのは、捕虜が多数出ているので身代金が多いからだ。

「十分の一でも黒字だけどな」

うちの軍勢は、合計で百名にも満たない。

捕虜にした人達の管理費を考えても、利益率がとんでもない事に

なっていたからだ。
今の戦争のルールだと、高位の魔法使いは稼げるという事の証明でもあった。

「ですが、ここで十分の一では舐められてしまいますわよ」

「ですよねぇ……」

なるべく多く身代金を取らなければ、それは貴族としては駄目という評価を受ける。
だが、今の状態でなるべく多く支払わせるのは難しい。
時間がかかり、その分は未開地開発の遅延で損をしている状態になるからだ。

「物納はどうなのです？」

「それも難しいだろう」

領地、鉱山の採掘権、ブロワ家で所持している宝物など。
どれも、そう易々とは渡してくれないはずだ。

「物納に納得して、しかもそれが価値がある」

「しかも、ブロワ家は大した価値はないと思っている物……。ありましたわ！」

カタリーナは暫く考え込んでいたが、何かを思いついたらしい。

「こうなったら、『ヘルタニア渓谷』を貰ってしまえば宜しいのでは？」

「ヘルタニア渓谷？　……そうだ！　その手があったな！」

知らない人も多かったが、冒険者としての経験が俺達よりも少し長いカタリーナは知っていた。

「良質の鉱山や鉱床が、多数あると伝えられている場所です」

「そんな場所があるんだ。なぜヴェルに簡単に差し出すとカタリーナが思うのかは知らないけど」

それだけの鉱山地帯を和解金の減額程度で渡すとは、ルイーゼは考えられないようだ。

「それは、ここが魔物の領域だからですわ」

古文書によると、ヘルタニア渓谷は古代魔法文明時代には有名な鉱山地帯であったらしい。

鉄・銅・金・銀・ミスリル・オリハルコン・各種宝石。

豊富な埋蔵量を誇る未採掘な鉱山や鉱床も豊富に存在し、それが開発できれば莫大な利益になると。

「でも、今までは攻略されていなかったのよね？」

「はい。何度か高名な魔法使いの方々が挑んだそうですが……」

失敗しているからこそ、ヘルタニア渓谷は魔物の巣のままなわけだ。

イーナの問いに、カタリーナはそう答えていた。

「あそこの魔物は独特ですし」

通常、魔物の領域に住まう魔物は、特殊ではあるが一応は生物に近い形状をしている。

一部例外でアンデット系もいるが、これは発生条件が冒険者の死などであるからそれほど数がいるわけではないし、『聖』の魔法で比較的簡単に退治可能だ。

「ところが、ヘルタニア渓谷の魔物は……」

どういうわけか、全て岩で出来ているらしい。

狼・猪・熊・大鷹・ワイバーンなど、見た目はどこの領域にも生息している物だが、体が岩で構成されていて、たまに岩を食べると飢える事もなく、普通に出産をして岩で出来た子供が生まれる。

この場合は、分裂したとも言えるのであろうか？

中央の学者も匙を投げる、おかしな魔物達であるようだ。

聞いた限りでは、自立行動が多いゴーレムだと思うのだが。

「駆除を頼んでも、冒険者達はほとんど引き受けませんし」

岩で出来ているが、普通の魔物と同じく頭を切り落せば死ぬし、心臓部分を突いても同じく死ぬそうだ。

もっとも、生きているのかも不明で、血も流れないでの活動停止と呼ぶに相応しい状態らしい。

そして倒した魔物からは、魔石と鉱石が取れる。

「大半は鉄か銅の鉱石ですし、雑魚だと拳大がせいぜい。その癖岩製なので武器の損耗が激しく、誰も中に入らないそうですわ」

普通に考えれば、他の領域の方がよっぽど効率が良いわけだ。

「それって、ゴーレムなんじゃないの？」

「という学者も多いそうですわ」

ルイーゼの疑問に、カタリーナが答える。

とにかく何でも構わないが、その岩製の魔物達に阻まれてヘルタニア渓谷の開発は進んでいなかった。

「カタリーナは、よく知っているな」

「私、ここを攻略して貴族になろうと計画した事もありますから」

「チャレンジャーだな」

確かにここを攻略できれば、女性でも何の問題も無く貴族になれたはず。

もっとも、完全に計画だけで頓挫している。

高名な魔法使いが一人や二人では、とても成功の目がないからだ。

「先々代のブロワ辺境伯も、兵を入れた事があると聞いておりますわ」

一万人ほどの兵をヘルタニア渓谷に入れた途端に、数万体の岩製の狼、猪、熊などの大群に襲われ、更に上空から万を超える大鷲やワイバーンにも来襲を受け、領域のボスの影すら見ずに全滅したらしい。

「その負債の回復で、ブロワ家は南部にちょっかいかけているとか

？」

「かもしれませんわね」

「どっかで聞いたような話だな……」

主に、うちの実家の事である。

「過去に、上級一名と中級二名。上級二名中級二名で突入したものの、魔物の数に圧倒されて撤退。多少の鉱石を持ち帰ったのみと冒険者ギルドの記録にありますわ」

地下遺跡と同じで、ボスを倒せばこれらの魔物は統率を失い、数も増えなくなる可能性が高い。

いや、もしかすると完全に活動を停止してしまう可能性があった。

ここの魔物を、形態を生物に似せた岩製のゴーレム達だと考えると、ボスを倒せば領域を守る仕掛けが消える計算になるからだ。

「古代魔法文明時代の遺産か」

「ヴェンデリンさんは、知っているのですか？」

「パラパラと本で見た程度。だから、今思い出した」

本を見たのは、あの地下遺跡にあったイシュルバーグ伯爵の書斎にあった本のはずだ。

魔力切れから回復したばかりの半分ボケた状態で、暇潰しで適当に読んでいたのであまり良く覚えていなかったが、確か彼の作った作品のリストのような本であったはず。

「ヴェル。自分の物じゃないから興味がなかったんだね」

「他の人達が鉱山から採掘しないように、高度な罠を作ったとか。昔の魔道具職人って凄いのね」

ルイーゼの言う通りで、もし開放を依頼されても大金でも貰わないと割りに合わず。

イーナは、素直に昔の魔道具の凄さに感心していた。

「戦力はあるし、あとは上手く開放する作戦を立てないと」

「ヴェンデリン様、ブランターク様、カタリーナさん、伯父様、ルイーゼさん。この五人が主力になればボスの討伐も可能かもしれません」

エリーゼの推論に、みんなも特に違和感を感じていないようだ。

「確かにいけるかも」

今の時点では、ブロワ家のお荷物であるヘルタニア渓谷である。

身代金の額を少し減らして、ここを物納させる。

その後に俺達で開放してしまえば、一気に優秀な利権に早代わりというわけだ。

「駄目そうでも、そう管理に手間がかかるわけでもないからな」

南部と東部の境界境近くにあるし、魔物の領域のままなら誰も侵入もしない。

一億セントほど身代金の額を減らしても莫大な黒字になるし、面倒な裁定から一抜けが可能になる。

そう考えると、悪い条件ではなかった。

「早速、提案してみよう」

そして翌日、相変わらず何も決まらない裁定の席でこの案件を出すと、予想以上にブロワ家側の食い付きは良かった。

「あのヘルタニア渓谷をですか？　もしかすると、バウマイスター伯爵が開放なさるおつもりで？」

「試す価値はありますよ」

「それは結構ですが、お命を大切に……」

三人がかりで一万人の軍勢にエリアスタンをかけたら魔力切れになった俺達に、数万体の岩製のゴーレム達が集うヘルタニア渓谷の攻略は不可能だと思っているのであろう。

珍しく二人は対立もせず、すんなりとこちらの条件を呑んでいた。

「クナップシュタイン子爵。この裁定案を公式の記録に残してください」

「宜しいのですか？」

「構いません」

公式の記録に残すと、王国の基準ではヘルタニア渓谷はバウマイスター伯爵家の物となり、ここに他家が手を出すと世間的には侵略とみなされる。

利権があやふやなままが良い物件だと、公式の記録に残すとかえって不利になる事が多いが、ここを永遠にうちの物と記録させるのは、開放に成功したあとにブロワ家側に因縁をつけられるのを防ぐためであった。

「では、和解金は三億五千万セントで十年払い」

いきなり全額払うのは不可能なので、分割払いは仕方がない面もあった。

「今までも経費を計算した結果、和解金一年分だけでも黒字。これで、ヘルタニア渓谷が開放できたら大黒字だな」

ブロワ家に一泡吹かせられるし、裁定交渉で一抜けして暇から開放もされる。

何しろ、これからヘルタニア渓谷の開放を目指すのだから。

「ブライヒレーダー辺境伯。少しお願いが」

「良いですけど、ヘルタニア渓谷を開放したら少し噛ませてくださいね」

「それは勿論」

採掘を実際に行なう時の人員の手配や、ヘルタニア渓谷と隣接する貴族達からの妨害と盗掘に対応するため、警備人員などの強化も必要となる。

ブライヒレーダー辺境伯に少し利権を分けても協力を得るのは、安全な採掘のためには必要な事であった。

「では、暫くあの二人の相手をしていますか。もしバウマイスター伯爵がヘルタニア渓谷を開放したらどんな顔をするでしょうね？」

「当然、百％成功させるつもりでやりますよ。そのために、魔法使い以外も大勢動員しますから」

こんな実りの無い交渉からは早く抜け出すに限る。

俺は、退屈な裁定交渉の席から離脱して、再び冒険者として困難な仕事に挑戦をするのであった。

第七十二話　ヘルタニア渓谷開放作戦。

「広いけど、本当に不毛な荒野だなぁ」

バウマイスター伯爵家が、和解金の減額と引き換えに貰った『ヘルタニア渓谷』はとにかく広い。

ほぼ長方形のエリアは、碌に草木さえ生えない岩場や荒野が大半を占め、多数ある山も植物すら生えていない岩山ばかりである。

他にも、ほぼ中央部に東西百キロの長さで走る幅百メートル、深さ百メートルほどの断裂と、魔物の領域でなくても農業などにはまず適さない土地であった。

実はこのヘルタニア渓谷は、東部と南部の境界境近くにある、ブロワ辺境伯領の飛び地となっている。

ここは、古代魔法文明時代に記された書籍によると、多くの鉱物資源が眠る鉱床の密集地帯だそうだ。

その古文書には採れる鉱物の種類や場所なども記載されていたし、中央部の断裂はほぼ何かしらの鉱物の鉱床のようだ。

元々その断裂自体が、採掘によってそこまで広げられたと記載されている。

なぜか古代魔法文明はこのヘルタニア渓谷を放棄したわけだが、後にここを抑えた権力者達は、このお宝の山の有効活用にことごとく失敗している。

ブロワ辺境伯家は言うまでもなく、他に幾つもの貴族家に、王家

も昔にここの開放を目指して失敗したそうだ。
失敗の度に犠牲が多く、『果たして本当に開放できるのか？』という意見の多さから、現在では冒険者ギルドでも『無謀なので、侵入はしない方が好ましい』という評価に落ち着いている。

そのためか、冒険者予備校などは既に情報の開示すら行なわれていなかった。
下手に教えて、冒険心溢れる若い冒険者達が無謀な侵入をしないための処置なのであろう。
俺も成人前は、ヘルタニア渓谷の存在など全く知らなかったのだから。

カタリーナが知っていたのは、爵位を得られるほどの功績をあげられる場所を探していたからだ。

「ブランタークさんは知っていましたか？」

「名前だけはな。過去には、ここの開放で一攫千金を夢見た冒険者は多かったそうだ」

裁定交渉においていち抜けをした俺達は、ヘンリックの小型魔導飛行船でヘルタニア渓谷を臨む岩山の尾根に立っていた。

「生物の気配が無いですね」

「ここに立っているとな。あそこに、石碑が立っているだろう？」

「ええ」

ブランタークさんが指差した先には、銘も刻まれていない石碑が

立っていた。

「エルの坊主。あのラインをほんの少しだけ越えてみろ」

「はい」

ブランタークさんに言われた通りにエルが石碑を越えて一歩奥に入ると、俺も途端に魔物らしき反応を探知する。

「エル！」

「わかっている！」

突然、岩陰から狼が飛び出してエルに飛びかかる。
良く見ると、その狼は岩で出来ているようだ。

「ロックゴーレム？」

続けて二匹の狼が飛び出し、エルに襲いかかった岩狼は合計で三匹。

俺の剣の腕ならばアウトであったが、エルは時間差をつけてまるで舞を舞うように次々と狼を切り捨てていた。

岩狼は、普通の生き物と同じく頭部や心臓の部分を切られると活動を停止してしまうようだ。

バラバラの岩くれの山が三つ出来上がり、エルはそこからビー玉大の魔石と鉱石らしき石を拾って戻ってくる。

「あーーーあ。良い剣だったのになぁ……。あとで研ぎ直さないと駄目だな」

エルは、刃が欠けてしまった自分の剣を見て溜息をついていた。

「とまあ、こういうわけだ」

過去の犠牲から、ああして石碑が建てられて領域との境目が示されていて、その周囲も岩山や荒野なので近寄る人もいない。

境界線内に一歩でも入ると、ああして謎の岩製の獣達が襲ってきて、倒すと魔石と鉱石などが手に入る。

「ヴェル。この鉱石って何だ？」

「ええと。低品質の鉄鉱石」

「だあぁーーー！　割りに合わなぇ！」

『分析』で鉱石の成分を探ると、含有率の低い鉄鉱石であった。

魔石も、品質が物凄く低い。

なのに、たった三匹を斬っただけでエルが普段愛用しているかなりお高い剣が研ぎ直しになってしまった。

「つまり、こいつらを倒しても実入りはゼロどころか赤字なわけだ」

冒険者の狩り場としても不向きで、もし領域にエルがもっと長く留まっていたら数十、数百、数千と襲撃してくる岩製の魔物は増えていくそうだ。

「鉱床の採掘を目指して軍を入れると、いつの間にか岩の魔物達に包囲されるわけだな。そして、多勢に無勢で屍を曝すと」

ブランタークさんが言うには、少し奥に入ると朽ち果てた軍勢の

残骸が残っているそうだ。
回収は危険なので、そのまま放置されているらしい。

「古文書によると、大規模なミスリルの鉱床があるらしいから」

高品質の武具や魔道具造りには欠かせない金属であり、常に足りていないのでその値段は高止まりを続けていた。
俺も含めて一部高位の魔法使いが銀に魔力を添加して製造は可能であるが、その量は非常に少ない。
現在ある鉱山なども、含有率が低い物まで強引に採掘している状態なのだ。
当然、その手間分コストは増してしまう。

うちの領地で新規に見付かったミスリル鉱山は、『とにかく早く採掘を始めろ！』と王国から言われて、操業を前倒ししたくらいなのだから。

「大規模なミスリル鉱床を得るか、全滅するかか。ハードな選択だなぁ……。あの、ところで一ついいですか？」

「何だよ」

「どうして、カルラさんがここに？」

ブロワ辺境伯家とバウマイスター伯爵家との裁定交渉は終了したはずなのに、なぜかカルラが俺達の傍から離れずにここまで付いて来ていたのだ。

「なぜって、ブライヒレーダー辺境伯家とブロワ辺境伯家との裁定交渉は終了していないからだろう」

「彼女は、ブライヒレーダー辺境伯家の捕虜でしたっけ？」

「半分な。あとの半分はエルの坊主が説得して捕虜にしているから、バウマイスター伯爵家にも権利がある」

「その辺の利権関係は、シビアですね」

「身代金も、重要な収入源だからな」

まさか、人を半分に割るわけにもいかず。

だからと言って、カルラを男性ばかりの場所に置くと危険なのでうちに預けられている。

だから俺達がヘルタニア渓谷へと向かうと彼女も同行していて、今もエルが楽しそうに彼女に話しかけていた。

彼女に惚れているエルからすれば、一緒にいられて大喜びなわけだ。

「エルヴィンさんの剣は、素晴らしい腕前ですね」

「いやあ、カルラさんの弓に比べたら全然大した事はないですよ」

カルラに褒められて、エルは鼻の下を伸ばしていた。

「しかし、良くブロワ家が認めましたね」

「どうせ、向こうに置いておいても何の役にも立たん。だが、伯爵様と同行させると可能性が出る」

「はいはい。俺がカルラさんに惚れるわけですね」

「彼女の兄達は自信があるんだろうな。カルラのお嬢さんは、誰が見ても美人だから」

確かに、エリーゼやカタリーナにも引けを取らない美人ではある。むしろ少し控えめな印象があって、この国の男性ならば喜んで妻にする人が多いはずだ。

「伯爵様はどう思っているんだ？」

「美人だとは思いますよ……」

美人なのは間違いないし、実は学生時代の彼女に雰囲気が似ていた。

だから危ないかもと思ったのだが、実はあまり恋愛感情は持てていない。

まずは弓の才能に驚き、少し尊敬の念を抱いてしまったので、そういう感情が沸いて来ないのだ。

「そういう物なのか」

「それに、何かエルに悪いですしね……」

エルのカルラへの態度を見て、彼の気持ちに気が付かないバウマイスター伯爵家の人間はいない。

明らかに身分違いの恋なのだが、俺にカルラを娶る気がないのでつい遠くから見物する時間が増えてしまうのだ。

「あいつ。自分の立場がわかっているのか？」

「わかっているから、気合を入れていると私は推察します」

「クラウス……」

俺とブランタークさんの話しに割り込んできたのは、クラウスであった。

実は、俺は知っていた。

クラウスが、エルに何かアドバイスのような事をしているのを。

クラウスだという時点で怪しさ満点なのだが、まさか彼もエルに悪事を示唆するような真似はしないであろう。

エルも、受け入れるはずがない。

だが、どうしても胡散臭さと怪しさが前に出てしまうのだ。

「エルを炊き付けて、バウマイスター伯爵家の混乱でも狙っているのか？」

「今の状況で私がそれを企んでも、誰も耳を貸してくれないと思いますが」

いつもこんな感じであったが、実は俺の嫌味攻撃はクラウスの身を助けている部分もある。

どう繕っても彼は反乱の実行責任者なので、俺に嫌味を言われながら仕事をしている方が周囲の批判から身をかわし易いのだ。

「それはどうかね？　それで、エルには何を？」

「簡単な事にございます」

バウマイスター伯爵家によるヘルタニア渓谷開放を成功させ、更にブロワ家を窮地に追い込む。
そうなれば、ブロワ家はカルラの嫁ぎ先の条件を緩和するかもしれないと。

「可能性は高いけど、それでエルに話が行くか？」

他の中央の貴族とか、勢いが落ちたブロワ家の建て直しのために他の東部の有力貴族とか。
他にいくらでも候補は存在しているのだから。

「その可能性は高いですが、現状ではその可能性に縋るしかありませんよ。それに、思った以上に脈があると思います。何しろ、カルラ様がヴェンデリン様に付いて来たのですから」

現時点では、どうにかうちかその周辺に嫁がせて開発利権に食い込みたい。
そうすれば、今回の紛争で得た損失もどうにか回復可能であろうと。

「ヴェンデリン様のお傍に付けて、他の貴族達に印象付ける作戦かもしれませんね」

「もう俺のお手付きになったとか、そういう事か？」

「そこまでは思わないでしょうが、ブロワ家側の意志を周囲に鮮明にしたとも」

ブロワ家側としては、何としてもカルラをバウマイスター伯爵家に送り込みたい。

なるべく当主がいいわけだが、更に窮地に陥って貧すれば家臣でも構わないのではないかと。

特にエルは、俺の親友で近くに居るので狙い目だと思われるはずだと。

確かに、今のエルは俺の寵臣という扱いになっている。

俺が言ったわけではないが、周囲が勝手にそう思っているのだ。

「とても淡い目のような気もするけど……」

それでもエルには、バウマイスター伯爵家の家臣としてヘルタニア渓谷で働いて貰わなければいけない。

カルラと結婚できるかもという希望を抱かせて、テンションを上げる必要があった。

「エルヴィン殿の事はともかく、ヘルタニア渓谷開放の勝算はおありなのですか？」

「かなりある。多少の準備は必要だけど。あとは、参加戦力の徴集に何日かかかるかな？」

「暫くは、ここで待機ですね」

総勢百名にも満たないバウマイスター軍は、ヘルタニア渓谷の境界ギリギリの場所に陣地を張って応援を待つ事にする。

裁定案によってブロワ家から譲渡されたヘルタニア渓谷の中には、この魔物の領域ではない不毛な岩山地帯も含まれていたので、その中で俺達が行動しても何ら制約は無かった。

ヘルタニア渓谷で足を踏み入れると岩製の魔物が出て来るエリア

の外側の領域も、下手に誰かが足を踏み入れないように侵入を推奨しない地域に認定されている。
そのほとんどが碌に草さえ生えない岩山や荒野であり、そこでは鉱物資源なども採れないので、危険なヘルタニア渓谷の糊代という扱いになっていたからだ。
今では、立ち入る人もいないらしい。

「こんな荒野では、山羊すら育たないだろうよ。農業は論外だし、前に山師が入って鉱物資源も探したらしいが……」

ただの岩山しかなく、ヘルタニア渓谷のオマケとしてうちに譲渡されたそうだ。

「なら、ここが開放された時のために侵入者対策をしないといけませんね」

「伯爵様は、えらく自信があるんだな」

「でなければ、和解金を減らしてまでここを獲得しませんよ」

俺は、ブランタークさんとカタリーナを連れて他の貴族領との境界線に岩製の塀を魔法で建て始める。
『ここからはバウマイスター伯爵家の物なので、余所者は入るな！』という意思表示なわけだが、三人で岩山の岩などを材料に黙々と作業をしていると、外で見ていた他の貴族領の住民達が怪訝な目を俺達を見ていた。

「『そんなに強く領有権を主張しなくても、そんな場所はいらないよ』というわけだな」

いくら沢山の鉱床があっても、そこに入って採掘が出来なければ絵に描いた餅でしかない。

ブロワ家側があっさりと領有権を譲渡したのには、和解金の減額の方が魅力的に見えるほど、ここが不良物件である事の証明でもあった。

「それにしても、いくら塀を作ってもなかなか終わりませんわね……」

糊代部分も合わせて、約二万三千平方キロのヘルタニア渓谷を囲う塀なので時間がかかる。

大雑把に囲って領有権を主張するためだけの物であったが、ヘルタニア渓谷解放後には、鉱石泥棒を防ぐため本格的に工事や警戒態勢の強化が必要であろう。

「本当に開放が可能なのですか？」

「カタリーナは、以前に開放を計画したのでは？」

「しましたけど、どう計算しても勝算が薄いので諦めましたわ。多勢に無勢なのはわかり切っていましたし」

一人や二人優秀な魔法使いがいて、広域上級魔法を放って数百の岩製の魔物を屠っても、次から次へと湧いてくるので侵入すら難しい事に気が付いたのだそうだ。

「そもそも、あのゴーレムらしき岩製の魔物達の発生原理が不明ですもの」

「それを知っている助っ人がいるけど」

「本当ですか？」

「説明は、強力な助っ人が来てからだな」

「誰が来るのかは、すぐに想像できましたわ……」

数日後、塀を作る作業がほぼ終了したので本陣に戻ると、そこでは『強力な助っ人』が、エリーゼが淹れたお茶を飲みながらヘルタニア渓谷を眺めていた。

「噂には聞いていたが、不可思議な岩で出来た魔物が跳梁跋扈するヘルタニア渓谷であるか。しかも、某がこれの開放に加われるとは……」

強力な助っ人とは、勿論導師の事であった。

ヘルムート王国における『人型最終決戦兵器』の呼び名に相応しい彼に、開放作戦に参加して貰うのだ。

「お久しぶりです。導師」

「本当に、お久しぶりなのである！　バウマイスター伯爵は、ブロワ辺境伯家との紛争で暴れられて良かったであろうが、某は退屈であった故に！」

「（退屈って……）紛争ですから、暇な時間も多かったですよ。それよりも、頼んでいた物は持って来て貰えましたか？」

「陛下から許可を貰って持って来たのである。元々バウマイスター

伯爵が見付けた物であるし、既に目を通していた物なので問題ないのである」

「既に目を通していた物ですか？」

カタリーナが首を傾げていたが、それはみんなで話した方が良いであろうと会議を招集していた。

参加メンバーは、俺、導師、ブランタークさん、エル、エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、モーリッツ、トーマス、クラウスと。

いつもの面子といえば、その通りであった。

「まずは、俺が和解金の減額を条件にヘルタニア渓谷を得たのにはわけがある」

それは、あの『逆さ縛り殺し』を攻略した後の事であった。

イシュルバーク伯爵の書斎で暇潰しに本を読んでいると、このヘルタニア渓谷の事も書いてあったのだ。

「当時はブロワ辺境伯家の物だから、あまり興味は無かったんだけど」

もし開放を依頼されてもよほどの報酬でなければ受けなかったであろうし、その前に開放する気も無かったようだ。

実際に彼らは、俺に解放を依頼して来なかった。

まず不可能だと思ったのであろう。

頼んでもブライヒレーダー辺境伯が妨害すると思ったか、最初から開放する意志すら持っていなかった可能性もあるが。

「その後に、実家への嫌がらせと、不毛な紛争へのご招待だからな。何か意趣返しはと思ったところにコレだ」

「ブロワ家では不良物件扱いのヘルタニア渓谷を、ヴェンデリン様に格安で譲渡させたのですね」

「そういう事」

「エリーゼは、このヘルタニア渓谷の岩製の魔物達が逆さ縛り殺しのゴーレム達に似ていると思わないか？」

「繁殖する以外はそうだと思います」

「ところが、『その見た目は繁殖』も、逆さ縛り殺しにあったゴーレムの無人修理工房と似たようなシステムで運営されているわけだ」

「つまりは、このヘルタニア渓谷から盗掘を防ぐための防衛システムなのである！」

導師が持って来たのは、一冊の古書であった。
あの書斎にあった、イシュルバーク伯爵の『自分の作品目録』という奴である。

「遺跡とは違い、ヘルタニア渓谷は広い。しかも自然環境下にあるので、金属製のゴーレムでは経年劣化によって腐食する可能性があるのである！」

無人工房でメンテしようにも、数が多いので時間がかかる。
劣化が激しい部品は交換しないといけないし、年数が経てば次第に防衛システムの稼動率が落ちる危険性があった。

「そこで、岩製の魔物型ゴーレムというわけです」

稼動用の魔石に、体はヘルタニア渓谷内ならどこにでもある岩で出来ている。

鉱石が混じっているのは、立地上の偶然であるようだ。

「これなら数を揃えられるので、広域の防衛も可能になるのである！」

「はいはいっ！　導師」

「何かな？　ルイーゼ嬢よ」

「魔石はどこから出て来たのかな？　あとは、ゴーレムなら人工人格の結晶があるはずだと思う。エルが倒した時に、そんな物は無かったような……」

「確かに、魔石と鉱石しか回収しなかったな」

エルは、あの岩製の魔物を倒した時に残骸を調べていたが、人工人格の結晶は欠片すら見付かっていなかった。

「その理由は簡単である。このヘルタニア渓谷には主がいて、それが全ての岩製のゴーレムを操作しているのである！」

イシュルバーク伯爵の『自分の作品目録』によると、ヘルタニア渓谷の中心部にある割れ目の中に、岩と鉱石で出来た巨大な岩製の竜『ロックギガントゴーレム』が鎮座しているらしい。

「逆に考えると、ヘルタニア渓谷のゴーレムはロックギガントゴーレム一体しか無いとも言えるのである」

岩製で全長が軽く百メートルを超えるロックギガントゴーレムの内部に、岩製の魔物を多数同時に操る巨大な人工人格の結晶が内蔵されている。

外部からの侵入者を探知するとその規模に応じて迎撃を行い、数が減るとコントロールが可能な数までに回復を行なう。

その様子が繁殖に見えるのは、イシュルバーク伯爵の天才ゆえの奇妙な拘りなのかもしれない。

「魔石はどうなのです？」

「ロックギガントゴーレムが鎮座しているポイントに、ヒントがあるのである！」

巨大なミスリル鉱脈の上に、あえて鎮座させているのだと古書には記載されていた。

「ミスリルが生成されるのは、銀に大量の魔力が添加されるからだとヴェルから聞いたわ」

イーナの言う通りで、ミスリルの鉱脈は魔力が濃い元は魔物の領域が多い。

そこにある銀が、時間をかけて徐々に魔力を吸収しながらミスリルに変化するのだ。

「ロックギガントゴーレムは魔力が多いポイントに居座って、そこから人工的に魔石を精製している？」

「そういう事のようである！」

岩製のゴーレムであったが、これは数が戦力みたいな物なので狼でも猪でも熊でもそう強さに違いはない。

飛行可能な大鷹やワイバーンなども、飛べてそれなりに動きが似ているだけ。

本物ほどは強くないのだ。

「でも、数は驚異的ですね」

「左様、イーナ嬢の言う通りに数が脅威なのである！」

多少魔法に自信があって一日に数千体を破壊しても、次の日には既にその損害は回復している。

「一般兵士には、一体でも十分に脅威なのである！」

万の軍勢で攻め込んで数千体を破壊しても、人間の軍勢の方は無傷というわけにもいかない。

戦死・戦傷で数が減ったところに、また昨日と同じ数の軍勢に襲われる。

これでは、開放に成功するはずがなかった。

「例の古書に、『ヘルタニア渓谷防衛ゴーレム装置』の性能が記載されているのである！」

導師が開いた古書のとあるページには、こう記載されていた。

ロックギガントゴーレムは、魔力が溜まっている渓谷の奥に鎮座していて動く事は出来ない。

その巨体には、最大で十万体の岩製のゴーレムを制御する巨大な人工人格の結晶が内蔵されている。

他にも、魔力を溜めて岩製のゴーレムの核となる低品位の魔石を製造する装置も内蔵している。

魔石の製造能力は、一日に五千個ほど。

ゴーレムの数が減ると、人工人格の結晶が減った分を補填しようとする。

魔石をロックギガントゴーレムが体外に輩出し、それを外のゴーレム達が一旦飲み込んでから、自分を構成している岩を材料に小さなゴーレムを分裂させる。

見た目には産んだようにも見えるが実際には分裂で、親と同じ形状に生まれた子は、周囲の岩などで体を大きくする。

同じく見た目には、岩を食べているように見えるかもしれない。

「完全に自己完結している防衛システムなのか」

だからこそ、今の今まで稼動していたのであろう。

「ようやく謎が解けたわけであるが、だからと言って王国ですぐに開放できるはずがないのである」

ヘルタニア渓谷を開放する方法は、実はとても簡単ではある。

ロックギガントゴーレムの体内に内臓されている巨大な人工人格の結晶を砕けばいい。

この人工人格の結晶こそが、ロックギガントゴーレムと岩のゴーレム達を動かしている元なので、壊せばゴーレム達はただの岩塊になってしまうからだ。

「方法は簡単だなぁ。手段は物凄く困難だけど……」

エルの言う通りで、最大十万体にも及ぶゴーレム達を突破し、ロックギガントゴーレムの元まで辿り着かなければいけなかったからだ。

「手段も困難ですけど、ヘルタニア渓谷は元はブロワ家の物でしたわよ」

いくら王国内にあっても、ブロワ家が所有している物件に勝手に手を出すわけにはいかない。

カタリーナの言う通りであったが、今回の紛争が大きな機会ではあった。

もしブロワ家がヘルタニア渓谷の価値に気が付かないままであったら、裁定交渉の後半で王国が和解金を一部を負担すると言ってここを取り上げ、後で俺達に開放を依頼する可能性もあったのだから。

「陛下が苦笑いを浮かべていたのである。バウマイスター伯爵にまんまと攫われたと」

「今から思えば、あの地下迷宮で死に掛けたのが役に立ったというわけですね。同じ開放するにも、自分の物になるのならやる気も出ますし」

なので、今回は同じパーティーメンバーでも立場を変えている。

ロックギガントゴーレムに突入する主要メンバーには、俺バウマ

イスター伯爵が凄腕の冒険者達に依頼を出してる形にしてある。
鉱山の利権を分けるのは面倒なので、成功報酬は一億セントと予め決めていた。

「難易度は高いが、破格の報酬だな」

日本円にして百億円なので、まず滅多にある報酬ではない。

「ブランタークさんは、引き受けてくれますよね？」

「お館様から、受けるように言われているからな」

解放後の事を考えると、ブライヒレーダー辺境伯家のお抱え魔法使いであるブランタークさんは引き受けるしかない。
この広大なヘルタニア渓谷の鉱山地帯を、バウマイスター伯爵家のみで運営できるわけがないので、かなりの業務を委託する必要があるからだ。

「某も、陛下並びに商・工務卿から密かに後押しを受けているのである」

王国としては、先に俺から奪われたヘルタニア渓谷の利権を少しでも得たいわけだ。
所有権は俺にあるが、採掘・警備・精製・輸送などの利権はある程度は欲しい。

バウマイスター伯爵家としても、利権に王家を噛ませておけば、解放後にブロワ家に難癖つけられても良い用心棒になってくれる。
完全に独占すればやっかみもあるので、皆で幸せになる方法を考えたというわけだ。

そこにブロワ家が入っているのかどうかは、まだわからなかったが。

「魔法を使って飛べない組は、ここで陽動か」

「そういう事」

エル、イーナ、ヴィルマ、エリーゼは、あくまでもバウマイスター家の者として陽動に参加して貰う。

ロックギガントゴーレムを破壊するメインメンバーは、空を飛んで一直線に目標に突入する。

その間、地上の陽動組は境界線ギリギリを出たり入ったりして、地上の岩ゴーレム達を引き付ける役割を与えていた。

「ヴェル様」

「何かな？　ヴィルマ」

「陽動の数が少ない」

資料によると、ゴーレムは地上の物が八万体で、空を飛ぶ物が二万となっている。

さすがに、百名以下での陽動は厳しいとヴェルマは指摘していた。

「応援も呼んでいるから。その前に、少し戦闘訓練だな」

なるべく魔力を温存して、効率良く進路上のゴーレムを破壊する。

そのためには、あのゴーレム達がどの程度の魔法で壊れるのかを

確認したかった。
陽動組も、ゴーレム達の強さを把握しておいた方が良い。
そんな理由で、突入組は空から、陽動組は地上から境界線ギリギリでゴーレムを待ち、それらを倒す戦闘訓練を開始する。
「古書によれば、ロックギガントゴーレムの一日の魔石製造量は五千個！　よって、それ以上に倒せば回復が追いつかないのである！」
「導師は、難しい事を言うなぁ……」
エルは、剣の確認を行い。
導師は早速最低限の『魔法障壁』を纏うと、わざと挑発して呼び寄せた大鷹型やワイバーン型の岩ゴーレムの群れに突入していた。
「確かに、見た目だけでさほど強くないのである！」
「相変わらず、すげえなぁ……」
突入と同時に、魔力を纏わせた拳と蹴りで次々とゴーレム達を粉砕し、少し離れた目標に向かっては小型の蛇型竜巻魔法を作ってそれを投げ付ける。
小型の竜巻が命中すると標的のゴーレムがバラバラになり、砕けた破片が散弾のように周囲のゴーレム達も襲って破壊を広げていた。
「魔導機動甲冑は魔力の消費量の点で不採用であるが、竜ほど強くは無いのでなるべく効率良く進路上の物だけを破壊するのである！」
「あまり強力な魔法を放たずに、複数を巻き込むようにして数を減らせ」

「わかりました」

「わかりましたわ」

俺とカタリーナは、ブランタークさんの指導で順番にワイバーン型のゴーレムに小さな竜巻の魔法をぶつけていた。

命中するとゴーレムは砕けてしまい、破片が周囲のゴーレムに当たって被害を増やす。

「この魔法の連発でいいですかね？」

「他の系統の魔物もいないからな。それだけで十分だ。むしろ、魔力は極力温存しろ。ロックギガントゴーレムに辿り着いた時に魔力が空だと死ぬぞ。悪いが、その前に作戦中止命令を出すがな」

飛べなくなれば地上のゴーレム達の犠牲になってしまうし、ロックギガントゴーレムを破壊する魔力も残しておかなければいけないからだ。

「ロックギガントゴーレムへの止めは、ルイーゼの嬢ちゃんに任せる。ただ失敗する可能性もあるから、そのための他の突入メンバーも魔力は極力温存だ」

今回の作戦は、五人で突入を行なう。

ルイーゼを囲って万全の状態でロックギガントゴーレムまで運び、彼女の渾身の一撃でロックギガントゴーレム胴体に内臓されてる巨大な人工人格の結晶を破壊するのだ。

そうすれば、他のゴーレム達はその活動を停止させてしまう。

先に、無理に全滅させる必要は無いというわけだ。

「ルイーゼさん。絶好調ですわね」

カタリーナの視線の先では、ルイーゼがまるで八艘飛びのように飛行するゴーレム達の頭部を砕きながら空中を移動する姿が目撃されていた。

生き物と同じで、ゴーレムは頭部を失うと地面に向かって落ちてしまう。

無駄に魔力を使わないという点では、ルイーゼが一番優れていた。

「あとは……」

「今気が付いた！　剣が秘蔵のオリハルコンソードなら傷一つ付かない！」

カルラがいるのでハイテンションなエルは、地下迷宮攻略で得た金で買ったオリハルコン製の剣で、次々と狼型のゴーレム達を切り裂いていた。

確かに、オリハルコン製の剣なら岩など豆腐のように簡単に切れるはず。

「無茶を言うなよ！　そんな業物。よほどの一流冒険者か金持ちでもないと持てるか！」

「俺は持っていますけど」

「マジでか！」

「いいなぁ……」

エルが実際にオリハルコン製の剣で戦い始めると、モーリッツは驚き、トーマスは羨ましそうな表情を浮かべていた。

「エルヴィン。カルラ様が応援しているから前に出ろ」

「本当ですか！」

「もうエルヴィンしか見えないように声援を送っているぞ」

「前に出ます！」

「カルラ様の注目は、エルヴィンが独占だな」

「あははは っ！　死ねい！　雑魚ゴーレム共が！」

「（モーリッツ。えげつねぇ……）」

モーリッツやトーマス達から、カルラの件を出汁にされて常に前に出されていたが、エル自身の腕前とオリハルコン製の剣の性能によって一人前線で無双を続けていた。

「カルラさん。見ていてくれるかな？」

「大丈夫。物凄く注目されているから」

「頑張ります！」

ただ、モーリッツもエルが嫌いなわけではないので、ある程度戦

わせたら引っ込ませているようであった。

「エル。後ろで少し休んで来い。カルラさんが待っているから」

「はいっ！」

エルは急ぎ後方に戻り、エリーゼと一緒に負傷者の手当てをしているカルラの元にまるで犬のように戻っていく。

「エルヴィンさん。大丈夫ですか？」

「はい！　全然余裕です！」

彼女からタオルと水の入ったコップを受け取りながら、楽しそうに休憩をしているようだ。

「モーリッツは、エルの使い方が上手いなぁ……」

次にイーナの行方を捜すと、彼女はあの懐かしい大技を披露していた。

「槍術大車輪！」

あの空回りしていた頃のローデリヒが見せていた、強いのかどうか良くわからない槍術である。

いつの間にイーナが会得したのかは知らなかったが、これが思った以上に役に立っているようだ。

「この技って、対多数用の技なのね。何となく想像はつくけど……」

イーナの周囲には、多数のゴーレムの残骸が散乱していた。

「ヴィルマは、どこにいるのかな？」

ヴィルマを探すと、彼女は前に話していた鉄製の強弓を引いていた。

矢も全て鉄で出来ているようで、放った矢は何体ものゴーレムを貫通して破壊していく。

「良くあんな弓を引けるよな……」

俺は、彼女の怪力に改めて絶句していた。

俺では、その鉄弓を引いてもビクともしないはずだ。

『三年くらい前に、いきつけの武器屋に飾りとして置いてあった』

飾りで作ったので、主人も看板の代わりにしていて販売は考えていなかったらしい。

『引けるから売ってと言ったら、引けるわけがないと言われた』

もし引けたら無料でやると言われたので、目の前で引いて手に入れたのだそうだ。

「人相手だと躊躇するけど、ゴーレム相手だから都合がいい」

ただし、欠点もある。

矢が通常の物よりも高価なので、すぐに使い切ってしまったのだ。

「戦争って、お金がかかる」

ヴィルマはこの世の真理を嘆きながら武器を戦斧に交換し、それをを振り回して弓矢よりも多くのゴーレムを粉砕する。
さすがは、ヴィルマと言った感じであろうか。

「ヴェンデリンさん。そろそろ」

「ああ」

人数的にも時間的にも、そろそろ限界であろう。
カタリーナから告げられた俺は、少しだけ地上の陽動組を下げてからルイーゼを除く四人で巨大な魔力を使って巨大な竜巻魔法を完成させる。

「合体魔法ってか？」

「スピントルネード！」

「みなさん適当ですわね。ここは華麗に」

「テトラゴントルネード？」

「それですわ！　ヴェンデリンさん。疑問形は止めてください！」

四人による合同竜巻魔法によって、視界に見えていたゴーレム達は全て竜巻魔法によって砕かれ互いに衝突し、ただの岩の塊となって地面に落下していく。
あとには、大量の岩塊や、鉱石、魔石などが残されていた。

「拾えぇーーー！」

俺の上空からの命令で、下がっていた我が軍の人員は一斉にゴーレム達の残骸を捜索し始める。

「魔石が優先だ！　鉱石はあくまでもついで！」

とにかく時間がない。

すぐに、他から援軍が今以上の数で押し寄せるのは確実だからだ。

「ヴェル！　今の倍以上の数のゴーレム軍団を発見！　こちらに向かってくるよ！」

「全軍、境界線の外まで撤退！」

目が良いルイーゼが次々と押し寄せるゴーレム達を見付けたので、俺はすぐに全軍に撤退命令を下す。

こうして、実戦経験を積むために行なわれた戦闘の第一日目は無事に死者ゼロで終了するのであった。

「魔石の数は？」

「二千五十六個」

「こんな物かぁ……」

討伐自体が目的ではなかったが、今日の成果を聞くとやはり軍勢による正攻法での攻略は難しいという事実が判明する。

我が軍が少ないという理由もあるのだが、一日に二千体討伐してもそれ以上の回復能力があるから意味が無いというわけだ。

それに、この二千体の半数以上は魔法で仕留めたという現実もある。

「魔石はどうするんだ？」

「この前の広域エリアスタンで消費した魔晶石の補充に使う」

「なるほど」

俺の答えに、エルが納得する。

持っていた魔晶石が全て空になりいまだに魔力の補充が終了していなかったし、どうせ低品位の魔石なので他に使い道もそれほど無かったからだ。

「しかし、魔石の製造装置ねぇ……。　イシュルバーク伯爵って、天才なんだな」

「その天才のせいで、俺達は常に全力戦闘だけどな」

低品位とはいえ、今では生成過程解明の糸口すら掴めていない魔石の製造装置を作ってしまったのだ。

出来れば、無傷で鹵獲したいところである。

「あくまでも、出来たらだね」

「だよなぁ」

ルイーゼの言う通りで、余計な欲をかいて失敗したら目も当てられない。

まずは、ロックギガントゴーレムの破壊を優先すべきであろう。

「それで、いつまで戦闘訓練を続けるの？」
「お友達が到着するまで」
「はあ？」

作戦では、俺達五人の魔法使いが突入してロックギガントゴーレムを破壊するわけだが、古書によればロックギガントゴーレム自体はあまり強くない。
素材が岩なので、五人の内の誰かがある程度の魔力を保持して辿り着けば魔法で破壊可能である。

「問題は、ロックギガントゴーレムが操るゴーレム軍団をどうするかだな」

全部破壊するなど現実的には不可能なので、最低限の障害だけ破壊してロックギガントゴーレムを目指すわけだ。

「俺達は飛んでいくので、空のゴーレム達だけ相手にすればいい。だけど、ロックギガントゴーレムの傍に地上組がワラワラと居ても破壊の邪魔になるからな。陽動役が必要になるわけだ」

「バウマイスター伯爵家諸侯軍だけで？」

「全然足りないから、他にも援軍を頼んでいるよ。だから、導師にも冒険者として討伐依頼を受けて貰ったわけだし」

「それって、もしかして……」

数日後、ヘルタニア渓谷の上空に大型魔導飛行船によって編成された、合計四隻からなる空中艦隊が浮かんでいた。
ルイーゼは、その光景に絶句しているようだ。
「これって、ルート運行されている大型魔導飛行船の予備だよね？」
「そうだよ。これじゃないと、数が運べないし」
「経費かけてるねぇ……」
どうせヘルタニア渓谷を開放すれば、色々と利権を求めてくるのだ。
ならば、精々王国には力を貸して貰えばいい。
「どうせ金を出すのは俺だし、失敗してもそんなにダメージでもないから」
「ブロワ辺境伯家が、後方かく乱をした理由が良くわかるよ……」
ローデリヒが良い顔をしないかもしれないが、王国軍は経費をこちら持ちで訓練と実戦の経験が積めるし、参加する指揮官や兵士達はゴーレム相手とはいえ武功を積める。
実際に、この話をエドガー軍務卿に持ちかけたらすぐに魔道飛行船に軍を積んで送って来ていた。
「エドガー軍務卿の命で参りました。司令官のアロイス・フォン・ヴィリ・アヒレスです」
合計三千の兵を率いて来たアヒレス氏は、四十歳くらいに見える

軍官僚タイプの真面目そうな人であった。
法衣子爵家の当主で、アームストロング伯爵家とは縁戚関係にあるそうだ。

「なかなかに派手な作戦ですな。ところで……」

「あっ、はい。準備していますよ」

「さすがですな」

アヒレス子爵が急いで軍を率いて来れたのは、食料や水などの準備をあまりしていないからである。
港も無いので大型魔導飛行船もちゃんと降ろせず、兵士達は綱梯子で一人ずつ降りている。

「本当に急いで来たのですね」

「我々の仕事は陽動だと聞いていますし、物資は現地で準備されている。ならば、急ぎ開放してしまいましょう」

「なぜです？」

「このヘルタニア渓谷は、裁定案でバウマイスター伯爵に正式に譲渡されたとはいえ、もし我らの動きが知られてから時間が経てば余計な事を考える輩が増えますからな」

自身も貴族であるアヒレス子爵は、ブロワ辺境伯家の誠意など微塵も信じていないらしい。
なるべく早く終わらせて、既成事実化する事が重要だと述べていた。

「それもそうですね。あっそうだ」

俺は、準備していた大量の物資をアヒレス子爵に渡す。

昨日の内に、臨時の物資集積所を作ってそこに置いておいたのだ。

「物資が無いと軍は動けませんからな。それの準備がしてあれば、意外と無茶は利くのですよ」

大型魔導飛行船から綱梯子で降りて来た三千人の兵士達は、すぐに隊ごとに纏まってから物資を取りに行っていた。

急ぎ、陣地の設営や食事の準備を始めるためである。

「この境界線内に人が入るとゴーレム達が作動して、出ると襲ってこなくなる。事前に報告は受けていましたが、不思議な構造ですな。数日間、訓練がてら効率の良い陽動の方法を模索します」

アヒレス子爵率いる王国軍三千人は、境界線を出たり入ったりを繰り返しながら、地上にいる岩ゴーレム達をおびき寄せたり、狩ったりを繰り返していた。

「深追いはしないように。数が増える前に、外に出るのを忘れるな」

アームストロング家の面々やエドガー軍務卿とは違い、アヒレス子爵は冷静に軍の指揮を執る。

既に死傷者も出ていたが、このくらいは想定の範囲内だとアヒレス子爵は言う。

「死ぬのが嫌なら、軍人や冒険者にはならない事ですな」

アヒレス子爵は、淡々と本番に向けて陽動の訓練を行っていた。
彼らの任務は、俺達が突入する時に地上のゴーレム達を引き付ける陽動が任務なのだ。

「それで、お味方の援軍は？」

「今日・明日中には揃いますよ」

三千人の王国軍だけでは陽動には足りないわけで、他にも近場の貴族達に援軍を要請していた。

「バウマイスター伯爵殿。助かる……」

ヘルタニア渓谷に領地を接している貴族の大半は、今回の紛争でブロワ家に翻弄されて損害を出している。
ブライヒレーダー辺境伯家側に寝返って損害の肩代わりをして貰ってはいるが、ブロワ家が裁定案を結んで支払わなければ借金は残ったまま。

懐具合が厳しいので、軍を出して陽動任務に加わっていた。
バウマイスター伯爵家が出す謝礼を目当てに、傭兵の仕事を請けたというわけだ。

「うちは、本当に人手が無いからなぁ……」

「領地貴族で新興ですからな」

ヘルタニア渓谷には、王国軍と五十家を超える貴族家が到着し、十個の軍団に分かれて陽動作戦の訓練を繰り返していた。
境界線を越えてゴーレム達をおびき出し、ひと当てしてから外に

逃げる。
ゴーレムが姿を消すと、また線を越えて挑発を行なう。
なるべく多くのゴーレム達を引き付ける方法を模索しながら、効率良く破壊する訓練も続けていた。
期間は一週間にも及び、彼らに食料や娯楽品などを販売する商人なども姿を見せ始める。
ヘルタニア渓谷は、一種の開放作戦特需に見舞われていた。
「さて、そろそろ突入を開始しますか」
最後の会議の後に、作戦はスタートする。
ヘルタニア渓谷の周囲十箇所から軍勢が境界線を出たり入ったりしながら地上のゴーレム達を挑発し、その注意を最大限に引いたところでロックギガントゴーレムに一番距離が近いポイントから五人で突入を開始する。
最短距離で、最低限の空を飛ぶゴーレム達だけ排除しながら、一気にロックギガントゴーレムを破壊するわけだ。
「ブランタークさん。ここが最短突入ポイントですよね？」
「伯爵様も『探知』しただろう？　ご本尊は、ヘルタニア渓谷のど真ん中にいる」
正確には、中央を走る断裂の一番奥のど真ん中である。
そこの魔力溜まりに、足も無いロックギガントゴーレムが鎮座している。
その大きさは百メートルを超え、前方の頭部と後方の尻尾は八本

ずつある。

十万体ものゴーレムを同時に操る巨大な人工人格の結晶と、低品位ながらも魔石を一日最大五千個も製造可能な装置を体内に納め、ヘルタニア渓谷に侵入した敵を全て排除する。

古代魔法文明時代の天才魔道具職人イシュルバーク伯爵による、まるで生きているかのような防衛装置なのだ。

「頭と尻尾が八本ですか」

動けはしないが、頭からブレスではなくて岩弾を発射し、尻尾も振り回して敵にダメージを与える。

基本が岩製なので、前に戦ったミスリルゴーレムほど堅くはないが、時間が経つと再生するらしいので決して侮るわけにはいかなかった。

「昔に聞いた、『ヤマタの大竜』似ているのである！」

日本神話に出てくる『ヤマタノオロチ』に似ているが、この世界にも頭が八つある竜の伝説は残っている。

導師が知っているのは、冒険者関連の学校に行くと基本的な座学で教わるからだ。

実在しているかについては、これは不明であったが。

「前から思ってたんだけど、頭が八つなら『ナナマタの大竜』なんじゃないの？」

「ルイーゼさん。そんな昔の伝承に文句を付けても仕方が無いでは

ないですか。それよりも、そろそろ時間なのでは？」

ルイーゼの屁理屈に、カタリーナがツッコミを入れていた。

「カタリーナの言う通りなんだけどさぁ」

境界線の外にある岩山の尾根で五人で待機している間に、眼下では王国軍とバウマイスター家軍の混成部隊が引き寄せたゴーレム軍との戦闘に入っていた。

「おりゃあーーー！」

「エル。気合が入ってるなぁ。理由は邪だけど……」

前線に立って秘蔵のオリハルコン製の剣を振るうエルに、ルイーゼは容赦なかった。

エルだって、一番の目的は味方に被害を出さないために、剣の切れ味が落ちない自分が前に出ているはずなのだから。

「その理由と、カルラさんに良い所を見せようとしている気持ちが鬩ぎ合っているのでは？」

「カタリーナも容赦ないな……」

「あの年の男なんてみんなそんな物だろう。ほら、そろそろいくぞ」

十箇所を超える敵の侵入に対し、推定八万体のゴーレム達はほぼ外縁部に集まっていた。

これを全て相手すれば全滅だが、そこまでする必要は無い。

俺達が高速で飛行してロックギガントゴーレムを目指しても、既

に外縁部に引き寄せられているので、作戦の邪魔にはならないからだ。

ただ、空中の二万体はあまり動いていなかった。

彼らは、空から侵入した敵にだけ対応するようだ。

「二万体かぁ……」

「普段はヘルタニア渓谷中に散っているからな。集合する前に、急ぎロックギガントゴーレムを破壊するぞ。いいな？」

全てを破壊する必要は無い。

どうせロックギガントゴーレムが破壊されれば岩塊に戻るし、そんなに時間をかけていたら作戦は失敗する。

ブランタークさんは、特に導師に念を押していた。

「その場に留まって、無双とかしないでくれよ。導師」

「一応、某もプロの冒険者なのであるが……」

こういう場合、やはり経験豊富なブランタークさんの意見が尊重される。

導師も、年長者である彼の意見には素直に従っていた。

「念のためって奴さ。他のやつらもな」

「了解！」

「任せて」

「腕が鳴りますわ」

「ではいくぞ！」

ブランタークさんの合図で、五人は『高速飛翔』によりヘルタニア渓谷へと突入する。

陣形は、俺とカタリーナがツートップで、その後ろをルイーゼとブランタークさんが。

殿役を、追いかけてくるゴーレムを排除するために導師が務めていた。

「ブランターク殿。後ろに敵がいないのであるが」

「今の時点で追いかけられていたら失敗だろうに……」

まだ突入間近なので、空中にいるゴーレム達はほとんど俺達に対応できていなかった。

数体が前方に居たので、まずは魔法で槍状の竜巻を作って投擲する。

命中したワイバーン型のゴーレムと、その周囲にいた数体が砕け散って地面へと落ちていく。

「魔力は節約しないと。カタリーナもな」

古書の資料を元に完璧に作戦は立てたはずだが、何が起こるのかわからないので、魔力は出来る限り温存するのが作戦の基本となっていた。

「当然ですわ。私は、ヴェンデリンさんよりも魔力量が少ないのですから」

続けて、カタリーナが前方に見え始めた十数体の大鷹型のゴーレム達に魔法を使う。

「トルネードブレイク！」

『暴風』の名に相応しく、突然前方のゴーレム達の中心部に竜巻が発生し、彼らを上空へと巻き上げていく。

竜巻の中でぶつかり合ったゴーレム達は破壊され、損傷して地面へと落下していた。

「凄いねぇ。ボクも何か攻撃したいけど」

「ルイーゼは、温存だ」

「ですよねぇ……」

元々放出系の魔法は一切使えないので、ルイーゼの役割りはロックギガントゴーレムに強烈な攻撃を直接加える事にある。

到着まで魔力を極力温存して、ロックギガントゴーレムに止めを刺す。

これが、今回のルイーゼの仕事だ。

『渾身の力で、秘奥義を出しちゃうよ』

『何か期待できそうだな（やっぱりあるのかな？　秘奥義とか）』

『ヴェル。大いに期待したまえ』

出撃前のルイーゼは、いつもの通りであったが。

「思ったよりも、ゴーレムが少ないな……」

突入開始から十分ほど、ブランタークさんが首を傾げていた。

古書によれば、さすがにこれだけ時間が経てば空のゴーレム達はもっと集まって来るはず。

なのに、数体から数十体の集団を五回撃破しただけで、あまり前方に敵が見えなかったからだ。

「もしかすると……」

「もしかすると何です？」

「意外と人工人格さんが仕事をしているのかもな」

更に十分ほど飛行を続けると、遂に目標のポイントに到着する。

ヘルタニア渓谷を走る巨大な断裂。

その奥にロックギガントゴーレムが鎮座しているのだが、その上空には万を超えるゴーレム達が俺達を待ち構えていたのだ。

「ちっ！　俺達の目的を察知したか」

「あんなに数が多いと、断裂に入れませんね」

ロックギガントゴーレムは断裂の中にいるので、まずはあのゴーレム達を排除しないといけない。

二万体の大半が集まっていると推測される上空には、空の青さがわからない密度でゴーレム達が集まっていた。

「伯爵様。まだ想定内だ。やれ！」

「了解！」

ゴーレム達に接近しながらも、俺は十個ほどの魔晶石を出して両手に握る。

更に意識を集中させながら、極大上級魔法の準備を始めていた。

「（基本的に、こういう魔法の方がスカっとするんだよな）」

一分ほどの溜めを行なってから、両手を前に出して魔法を発動させる。

前のグレートグランド戦では二分かかったので、俺もそれなりに成長しているようだ。

「バーストトルネード！」

詠唱の必要はないのだが、気分的な物と、みんなに発動のタイミングを知らせるためでもある。

距離が離れたゴーレム達の中心部で発生させた巨大な竜巻は、数千体のゴーレム達を巻き込んで激しいうなりをあげていた。

その中でゴーレム同士がぶつかって破壊され、暫くして竜巻が消えると、周囲の無事であったゴーレム達を巻き込んで地面へと落下していく。

「ヴェンデリンさんは、こういう魔法の方が得意なのですね」

「そうだな。スカっとするし」

相手がゴーレムなので、前の広域エリアスタンのように威力などに気を使う必要がないからだ。

「こちらを排除する脅威と認定したようですわね」

四分の一ほどを一気に破壊されたので、ゴーレム達は俺達を排除しようと動き始める。

半分の七～八千体が、こちらに向かって来るのが確認できた。

「もう一発！」

今度は、ドラゴンゴーレム戦で使った無属性の放出魔法を再び両手を前に出してから発射する。

威力は落ちるが、命中すると後ろに吹き飛ばされて後方のゴーレム達に衝突して互いに砕けていく。

密集していたのが仇になったのと、やはり数が優先であまり強くはないようだ。

「初めて見ましたけど、デタラメな威力ですわね」

カタリーナも竜巻の魔法を連発して数千体を破壊していたが、彼女は予備の魔晶石をほぼ使い切ってしまったようだ。

「ですが、大分数も減って……。増えていませんか？」

確か、五千体くらいまでは減らしたはずなのに、なぜかまた倍くらいにまで戻っている。

「魔石を元にもう復活したのか？」

「一日五千個でしたっけ？」

古書の説明によると、ロックギガントゴーレムは一日五千個の魔石を製造可能で、お尻の部分から魔石を出すとそれをゴーレムが持っていき、まるで生き物のように小さなゴーレムを生み出す。
生まれた小さなゴーレムは、その辺の岩をくっ付けて大きくなる。
そんな説明だったような気がしたが、損害が急激に増えるとある程度の過程は吹っ飛ばせるのかもしれない。

「材料もあるからな」

先ほど派手にぶち壊して地面に落下したゴーレムの残骸があるわけだ。

「ブランタークさん？」

「時間をかけると、まずいかもな」

魔石の精製は一日五千個が限界かもしれないが、造った魔石を保存可能ならば暫くは増殖し続ける可能性がある。
ここは、作戦を急ぐ必要があった。

「断裂の奥からは巨大な反応が一つと、数百個の小さな反応のみだ。突入してこっちを破壊した方が早い！」

「そうですね……。突入しましょう。導師！」

「任せるのである！」

俺はもう一度無属性の放出魔法を放ってゴーレムの数を減らし、それと同時に導師がゴーレムの群れの中に突入していく。

導師が『魔法障壁』を身に纏い、向かってくるワイバーン型のゴーレムの頭部に拳で一撃を加える。

頭部が砕けたゴーレムは、そのまま地面へと落下していく。

続けて、後ろから襲いかかるゴーレムを蹴りで粉砕し、別のゴーレムの尻尾を掴んで振り回して数体にぶつけて破壊する。

「物凄く強いよな。やっぱり」

「ですよねぇ……」

魔法使いには見えないが、圧倒的に強いのは誰の目から見ても明らかであった。

ブランタークさんも俺も、その強さに改めて驚いてしまう。

「上空のは、導師に任せて突入だ！」

「了解！」

まだ数が完全に回復していない内に、ケリをつけるべきであろう。

急ぎ四人で断裂の中に突入すると、いきなり眼前に岩が飛び込んでくる。

事前に張っていた『魔法障壁』で弾くと、前方には岩弾を飛ばした岩竜の頭が咆哮をあげていた。

「ロックギガントゴーレム！」

その巨大な頭は古書の記述通りに八つもあり、次々と口から岩弾を吐いて俺達を潰そうとしていた。

他にも、この狭い断裂の中に数百体もの大鷹型のゴーレムもいて、こちらに攻撃を仕掛けてくる。
運悪くロックギガントゴーレムの頭部が発射する岩弾に巻き込まれて壊れるゴーレムも多かったが、いくらでも作れるせいか味方の損害など気にもしていないようだ。

「目標は、胴体内の巨大な人工人格の結晶だ。頭部を破壊して前に進むぞ」

ロックギガントゴーレムは巨大なので、胴体部分に行くには頭部を破壊して前進しないといけない。
俺はすぐに竜巻を槍状にした魔法をぶつけて二つを潰し、カタリーナも小型の竜巻を操って二つを、ブランタークさんはドッヂボール大の竜巻のボールをぶつけて倒していた。

続けてブランタークさんに大鷹型のゴーレムが襲いかかるが、これはソフトボール大の風属性の弾を作り、それを頭部にぶつけて破壊する。

彼の周囲には、常に十個ほどの風ボールがフワフワと浮き、それを飛ばして自分に脅威となるゴーレムを破壊。
減った分の風ボールは、すぐに補充されてブランタークさんの傍を舞う。

恐ろしいまでの魔法精度であった。

「俺は魔力が少ないからな。工夫するしかないだろう。あと二つ！」

ロックギガントゴーレムの頭は、あと二つであった。
断裂に横たわっているので、頭部を突破できれば胴体を攻撃され

てしまう。
それを危惧してか？
二つの頭部は、連射速度を上げて狂ったように岩弾を吐き続けていた。

「ああっ！　もう邪魔ですわね！」

カタリーナが『魔法障壁』で岩弾を弾きながら、中型の竜巻を飛ばして頭部を吹き飛ばす。
これで前進可能になっていた。

「でもさ。この胴体のどこに弱点があるのかな？」

「知らん！　手当たり次第に拳で叩き割れ！」

イシュルバーグ伯爵の残した古書には、ロックギガントゴーレムの設計図までは残っていなかった。
胴体に内臓されている以上は、それを破壊していくしかないであろう。

「ブランタークさんも、案外適当だなぁ……。胴体っていうか、ただの岩の塊？」

胴体というよりも、断裂の幅五十メートル、長さ百メートルほどを埋め尽くすただの岩の塊にしか見えない。
ルイーゼは、首を傾げながら壊した頭部に近いポイントに立ち、魔力を込めてから拳を振り下ろす。

魔闘流の極意なのか？
それとも、ルイーゼの魔力が強いだけなのか？

良くはわからないが、半径十メートル範囲の胴体部分に皹が入り、バラバラに砕け始める。

「当たりか？」

「残念。ハズレだ！」

ルイーゼの替わりにブランタークさんが答えるが、その理由はすぐにわかる。

「ヴェンデリンさん！　早く結晶を破壊しないと！」

どうやら、予想以上に頭部の修復が早かったようだ。

カタリーナが、後方から岩弾を吐きながら攻撃してくる八本の頭部を『魔法障壁』で防いでいた。

「そういう事か！　こんちくしょう！」

続けて、ブランタークさんが俺達の上空に移動して『魔法障壁』を強化し始める。

「導師は、健在だけどよ……」

一人で無双を行なってゴーレムを次々と破壊していたが、その残骸が降ってくるようになっていたのだ。

「導師がいないと、上からゴーレムの大軍が迫って来るからな……」

岩の雨くらいは、我慢するしかない。

ブランタークさんはそう言いながら、導師が討ち漏らした大鷹型

のゴーレムに向けて風ボールをぶつけ始める。

「ルイーゼ、どんどん破壊してくれ」

「わかったよ！」

四人で少しずつ前進をしながら、ルイーゼに胴体を破壊させていく。

尻がある前方の守りは俺になっていたが、やはりと言うか八本の尻尾と大鷹型のゴーレムが数十体も迫ってくる。

「ケツで、ゴーレムの核となる魔石を作っているんでしたっけ？」

「らしいなっ！」

ブランタークさんが、『魔法障壁』で岩の雨を防ぎながら答えていた。

ルイーゼは、持っている魔晶石で魔力を補充しながらロックギガントゴーレムの胴体に向けて拳を振るい続けていた。

次々と胴体の部分が破壊されていくが、次第に人工人格の結晶に迫っているからであろう。

太さ三メートルほどの尻尾が八本、鞭のようのうねりながらこちらを攻撃してくる。

加えて、その隙間から鷹型のゴーレムも襲来してくる。

「前は尻尾、後ろが頭で、上は岩の雨かよ！　ルイーゼ！」

「もう一気にケリをつける！　全ての魔力をこの拳に！」

「おおっ！　何か凄そう！」

ルイーゼが片手を天に向けて伸ばしながら集中を行なうと、自身の残りの魔力と、残っていた魔晶石内の魔力が集まってくる。

「自分の魔力量を超えた魔力を集めたのか？」

今のルイーゼの何が凄いのかと言うと、普通の魔法使いは自分の魔力量を超えた魔力を体に留めておけない。

だから俺達は、エリアスタンを広域でかけた時に、魔晶石から魔力を吸い上げるスピードに苦労をする羽目になった。

ところがルイーゼは、自分の魔力量の数倍の魔力を振り上げている拳に集めていたのだから。

「ちょっと反動が厳しいけど、時間が延びるとジリ貧だからいくよ。魔闘流究極の極意！　『ビックバンアタック』！」

技名は意外とベタであったが、ルイーゼが魔力を込めた拳でロックギガントゴーレムの胴体を殴った瞬間、目も眩むような閃光が走り、今までとは比べ物にならない範囲で亀裂が走り始める。

「成功だよ！　ヴェル」

一つの岩の塊であった胴体は全て拳大ほどの岩塊に砕け、俺を攻撃していた尻尾に、カタリーナを攻撃していた復活した頭部、断裂内で展開されていたゴーレム達も全て岩塊になって地面へと落下していく。

どうやら本当に、ロックギガントゴーレムの完全破壊に成功したようだ。

「凄いな！　ルイーゼ！」

今までに見た事がない大技だったので、俺は物凄く感動してしまう。

「でも、ちょっと体が動かない……」

大技であった分、体への反動が大きかったようだ。

岩塊の山の上でフラフラしているルイーゼを、すぐに抱えて回収していた。

「大丈夫か？」

「魔力が切れる寸前で、ちょっと眠い」

「そうか。良く頑張ったな」

ルイーゼの頭を撫でながら褒めると、彼女は目をトローンとさせ始めていた。

「ご褒美に、ちゃんとヴェルが抱っこして連れて帰ってね。お姫様抱っこのままで」

「要望には答えましょう」

功労者からの願いは無下にはできない。

俺はすぐに承諾の返事をする。

「ならボクだけ幸せだね。暫く意識がないし」

「はあ？」

俺にはルイーゼの言っている事が一瞬理解できなかったのだが、そぐにその答えは判明する事となる。

つまりだ。

全てのゴーレムを統括していたロックギガントゴーレムが破壊され、ゴーレムは岩塊へと戻ってしまう。

空を飛んでいるゴーレム達のかなりの部分は、導師が上空で引き付けていた。

そして、それらのゴーレム達は全て岩塊になって、物理的法則に従って地面に落ちていく。

どこにかと言えば、ちょうど俺達のいる場所にである。

「退避ぃーーー！」

俺は大声を上げて、ブランタークさんとカタリーナに退避命令を出す。

「こんなのって！　勝利の余韻に浸る余裕もありませんわ！」

「そんなのは後だ！」

俺がルイーゼをお姫様抱っこしたまま、三人で『魔法障壁』を展開しながら上空へと退避する。

途中、何百トンもの岩がゲリラ豪雨のように降り注ぎ、その威力

はロックギガントゴーレムの頭部が撃ち出す岩弾よりも凄かったほどだ。

一気に大量の岩が落ちて来たので、ヘルタニア渓谷は局地的な地震にも襲われ、断裂にも崩れたり亀裂が入った箇所が多かった。

「何とか脱出したな……」

「ゴーレム軍団よりも、ロックギガントゴーレムよりも、岩の雨で死に掛けたな」

魔力がかなりギリギリだったブランタークさんは、安堵の溜息をついていた。

「もう散々ですわね。ルイーゼさんは幸せそうですけど……」

魔力が尽きて眠っているルイーゼはご機嫌な表情をしていて、カタリーナが羨ましそうにそれを眺めていた。

「カタリーナも、お姫様抱っこを希望か？」

「ヴェンデリンさんは何を言って！……。あとで、少しだけ……」

カタリーナは、やはり顔を赤くさせながらモジモジとしていた。

「しかし、坊主も導師の元で体を鍛えて良かったな。ルイーゼの嬢ちゃんをちゃんと抱っこしているし」

「ブランタークさんの中で、俺は何ほどモヤシ君なんですか……」

一般的に、魔法使いにモヤシ君が多いのは否定はしない。
導師などは、滅多にいない例外なのだから。

「まあ、導師に比べるとな」

「それで、その導師なんですけど……」

一人で数千体のゴーレムを足止めしたもう一人の殊勲者である導師は、俺達が浮いている位置よりも更に上空にいた。

「ふぬぅ！　我らの勝利である！」

誰も心配していなかったが、やはり導師は傷一つ負っていない。
一人で奇妙な勝利の雄叫びをあげていたが、俺達の姿を見つけると嬉しそうに近付いてきた。

「ルイーゼ嬢から習った格闘技が役に立ったのである。魔導機動甲冑は燃費が悪い故に、大変に助かったのである。ところで、ルイーゼ嬢は魔力切れであるか？」

「秘奥義が炸裂しましたからね」

「あの眩しい光であるな」

俺がルイーゼが使った技の説明をすると、導師は感心したような表情を浮かべながら聞いていた。

「何と！　反動が強いながらも、己の魔力量の数倍の魔力を拳に込めて放つとは！　某にもピッタリな技であるな！　是非に、あとで教えて貰わなければ！」

「いや。止めとけよ。導師がそんなの放ったら、この大陸が崩壊するから」

「それは些か大げさであろう」

「（いえ。大げさとも思えません……）」

「（可能性は、無きにしもあらずですわ……）」

ブランタークさんのボヤキに、俺とカタリーナも同意してしまう。

こうして無事にヘルタニア渓谷の開放は成ったのであったが、導師の『ビックバンアタック』習得は難易度のせいで成らなかった事だけは明記しておく事とする。

世界の平和は、無事に守られたというわけだ。

第七十三話　結局、後始末をする羽目になる。

「ルイーゼは、もう大丈夫なのか？」

「今は大丈夫だけど、秘奥義は体に負担がくるねぇ……」

「凄い技だったな」

「ソコソコ威力はあるけど、高位の魔法使いが使う上級魔法ほどじゃないよ。威力も範囲も負けちゃうし」

「あのロックギガントゴーレムを倒せたから、結果論で素晴らしいわけだ」

「三日間、あまり動けなかったけどね」

防衛用の岩製ゴーレムの巣であったヘルタニア渓谷は、俺達が行った作戦によって無事に開放されていた。

十個に分けた応援の王国軍と貴族の諸侯軍が境界線上を出たり入ったりして地上のゴーレム達の大半を引き付け、その間に俺、導師、ブランタークさん、カタリーナ、ルイーゼが空から中心部にいる主ロックギガントゴーレムを討つ。

このヘルタニア渓谷を守るゴーレム達は、全て古代魔法文明時代の天才魔道具職人イシュルバーグ伯爵が作成したヘルタニア渓谷を守るための防衛システムで、それを統括するのがロックギガントゴーレムであった。

多数の空を飛ぶワイバーン型や大鷹型のゴーレムに、破壊してもすぐに再生するロックギガントゴーレムの頭部に、攻勢を強めると再生速度が増すゴーレム達と。

かなり苦戦させられたが、最後はルイーゼによる魔闘流秘奥義が炸裂してロックギガントゴーレムの活動が停止し、続けて十万体のゴーレム達もただの岩に戻っていた。

無事に、ヘルタニア渓谷の開放が成ったわけだ。

「ヴェルは、この三日間何をしていたの？」

「お仕事」

ルイーゼは功労者だったので、三日間寝ていただけであった。

完全に動けないわけでもないのでトイレくらいには行っていたようだが、あとは三度の食事なども全てエリーゼ達に世話されている。

「魔闘流って、奥が深いのね」

「沢山技とか秘奥義とかあるけど、大半が誰も使えないという現実もある」

「何それ？」

「今回の『ビックバンアタック』とかは、使う本人にある程度の魔力が無いと使えないもの。通常の魔力しか持たない人が使っても、ちょっと大きな岩を割る程度じゃないかな？」

魔闘流というだけはあって、魔力が沢山あってそれを扱う能力が

あれば、上級魔法にも劣らない威力の技が放てるというわけだ。

「持っていない人が大半だから、技の型が重視されるわけだね。魔力を込めて戦うという点では、導師やヴェルも強いでしょう？」

導師は、今回の戦いで数千体のゴーレム相手に無双していた。

全て倒したわけではないが、全く寄せ付けずに数百体を破壊したそうで、彼の最強伝説にさらなる一節が加わったというわけだ。

一方の俺であるが、ああいう戦い方は性格的に合わないので、どうしても魔法を放ってしまう。

導師は逆に魔法を放出するのが苦手なので、導師を強化型、俺を放出型とでも言うのかもしれない。

昔に読んだ漫画で、そんなタイプ分けがあったと思う。

「バウマイスター伯爵殿。王都から調査隊が来ました」

「彼らは、ここで分析を始めるのですかね？」

「いや、持ち帰ると思いますよ」

「今回は、何か成果があるといいですね」

ヘルタニア渓谷解放後、俺達の本陣は中心部にあるミスリル鉱床の傍に移転していた。

俺が魔法で埋蔵量などを調べるためにと、開放されたヘルタニア渓谷内に人が入り込んで鉱石泥棒などをするのを防ぐためである。

今回の作戦に参加した兵士達の一部は外縁部に陣を敷いて、そう

いう連中の侵入を警戒している。
実際に、既に何人かの侵入者を捕らえたと報告があった。

近隣の住民達で、『今なら鉱石を簡単に取れて、良い収入になるかも』と侵入を試みたそうだ。
今は個人レベルであるが、一番ありそうなのはブロワ家が未練がましく何かをしでかそうとする可能性であろう。

「魔道具ギルドの連中は、プライドが高いですからね」

本陣の警戒に当たっているアヒレス子爵が、俺に王都から魔道具職人達が来たと報告してくる。
彼らは、俺達が破壊したロックギガントゴーレムの残骸を引き取りに、大型魔導飛行船をチャーターして来たのだ。

「人工人格の結晶も、魔石生成装置も、他のわけわからん装置も、全部壊れて使えないですけどね」

「何とか解析して、少しでも技術向上に当てたいのでしょうね」

本当ならば壊さずに鹵獲したかったのだが、あの状況でそんな手抜きをしたら作戦が失敗するどころか犠牲者が出かねなかったので仕方が無い。

ルイーゼの秘奥義で全て壊れていたようだが、古代魔法技術の再現は魔道具ギルドに任せるのが一番であろう。
とはいいつつ、最近の魔道具ギルドはあまり目立った功績もないのだそうだ。

会員が１００％独占して魔道具を作っているから羽振りは良いが、

ここ数百年間でさほど技術も進歩していない。
ならば、過去の優れた遺物を解析しましょうと、魔の森で見付けた産物や、更に今回はロックギガントゴーレムもと。
かなりの高額で強引に買い取っていた。

魔石生成装置は魔導ギルドも興味を示したとかで、彼らと仲が悪い魔道具ギルドは強引に札ビラを切ってロックギガントゴーレムを買い取っていた。

お代は、全部で五億セント。
冗談で吹っかけたのに、目の前にドンと白金貨の詰まった袋を出してきた時には驚いたものだ。

「あれ。どうやって持って帰るのですかね？」

「大型魔導飛行船をチャーターして積み込むそうです。往復する必要があるそうですけど」

ロックギガントゴーレム全部なので普通の岩などもあるのだが、彼らからすればその何も無い岩にも何か未知の仕組みがあるかもしれないと、岩の欠片一つ逃さずに持ち帰るのだそうだ。

積み込みと運搬も自分達で行なうと断言し、なるほど技術者とは凝り性な人達が多いのだと、前世を含めて思い出していた。

「あとは、ゴーレムもでしたか？」

「さすがに、全部ではないですけどね」

ロックギガントゴーレムが操っていた、ゴーレム達を形成してい

た岩塊や魔石なども相当数買い取っている。
これも研究材料なのだが、さすがに全てではない。

人工人格の結晶の破壊によって全てのが活動を停止したゴーレムの残骸は、軽く十万体分以上もある。
全部持ち帰るのは難しいので、サンプル分だけ回収して、残りは今は兵士達が使える魔石と鉱石を拾って本陣の横に積んでいた。

「それで、ここをどう開発なさるおつもりで？」

「普通に委託しますけど」

自分の領地の人手すら足りていないのだから、よその人材で補うのは当然であった。
それに、人なら余っている。
貴族は自分の領地に鉱山が見付かった場合、なるべく全てを自分で補おうとする。

山師や、鉱山技術者、精製に関連する技術者などはよそからの出稼ぎ者も多かったが、掘る人間は余っている農家の次男以下が多い。
農地を継がせられない人達への良い就職先なわけだ。

ところが、鉱山は物によっては数十年で鉱物が出なくなる事も多い。
同じ領内や、最低でも近隣の他貴族の領地に新しい鉱床が見付かればいいが、見付からなければ彼らは失業である。

そんな事情もあり、掘る人間はその気になればいくらでも集められるのだ。

「移住して来ても良し、出稼ぎでも良し。要は、ここが掘られて金属が出ればいいのですから」

何も、全て自前に拘る必要もない。

王国直轄地や他の貴族領からほとんどの人材を集め、うちの人間は不正のチェックだけ行えばいいのだと。

「随分と、大らかな体制ですね」

「時間がかからなくていいでしょう？」

全部自分達だけでやっていたら、多分鉱石を搬出できるまでに相当な時間がかかるはずだ。

そのために、外部の人間を活用する事にしたのだから。

「（それに、周囲への嫉妬を抑えるためには飴を与えればいい）」

ヘルタニア渓谷はバウマイスター伯爵家の持ち物であるが、ここで働く大半の人は外部の人間だ。

これの意味するところは、直轄地や他の貴族領に籍がある人間の職と収入を保証しているという点にある。

領民達への雇用対策にもなるし、収入のアップで経済の活性化にも繋がる。

普段は鉱山で働いている鉱夫達が帰省で故郷に戻り、稼いだお金を地元で使う。

それだけで、彼らの故郷の経済対策にもなるのだから。

「王国軍も役職が一つ増えますしね」

実は、ヘルタニア渓谷の外縁部にある土地の一部を王国に売却する予定になっている。
その土地には何の鉱石も無いが、彼らはそこに『王国軍ヘルタニア渓谷守備隊』の本陣と千名ほどの兵士を置く。
彼らの仕事は、ヘルタニア渓谷にバウマイスター伯爵家以外の貴族が手を出してこないための防衛で、報酬は警備委託料と王国への鉱石の安定した供給だ。

「それもありますが、ここのミスリル鉱床は予想以上に大きい。どうせ王国が介入して来るのなら、先に餌を与えて取り込めですか？」

「あとは、規則通りに交渉して裁定案を結びましたがね」

「自分達が不良物件だと思っていた物を、僅かな和解金の減額であげてしまいましたからね。取り戻したくなるのが心情ですか」

それを防ぐために、ブロワ家以上の用心棒を雇ったというわけだ。

「他にも、これだけ大規模な鉱山地帯と、将来的には精製施設の稼動も必要ですか。人が集まるので町の運営も必要ですし、人手がいりますね」

不正のチェックはこちらでするとして、あとの人員は中央で燻っている法衣貴族の子弟なども雇う必要がある。
彼らとその親戚と親御さん達は、子供達の安定した生活のためにバウマイスター伯爵家のヘルタニア渓谷領有を保障するというわけだ。

「そんなわけで、早速忙しいのです」

ミスリルはとにかく不足しているので、鉱石の状態でも買うと王都にある多数の工房が言っているらしい。
なるべく早くに船を出すので、それまでに少しでも採掘をするのと、魔導飛行船を離発着可能な船着場の整備をしておいてくれと言われていて、またも土木工事冒険者として町を作る土地と道の整備に追われるようになっていた。

「あの石畳の道は素晴らしいですね」

「材料は豊富ですからね」

鉱石でもない岩などいくらでもあるので、それを元に岩の板を魔法で作り、掘削した道に押し当てるだけで舗装した道路が完成するからだ。

「名実共に支配を進めますか。私としては、ヘルタニア渓谷守備隊隊長のポストが美味しいので、ブロワ家の干渉などには気を付けますとも。ただ、早速駆け込んで来るのでは？」

「まだ裁定交渉も終わっていないのに、お忙しい事で……」

ブライヒレーダー辺境伯とブロワ家による裁定交渉は、和解金の値引きで粘るブロワ家のせいで全く進捗していない。
そんな中でのヘルタニア渓谷の開放がどういう効果をもたらすのかを、俺はまだ知る由もなかった。

「何かを言われても、ここはバウマイスター伯爵家の物ですしね。俺がブロワ家に譲歩する事はあり得ませんから」

「それはそうでしょうね。ブロワ家が現時点で残っている事自体が

陛下の温情なのですから」

もしこれが戦乱時であったら、とっくに改易されているであろうからだ。

戦乱時なら、改易と新領主着任に伴う混乱は力技で排除可能だという結論に至る。

軍人達も、反抗する不穏分子の排除が武勲になるので躊躇しない。

ブロワ家がのん気に兄弟喧嘩を続けられていること自体が、この国が平和である事の証拠でもあった。

「まずは、ミスリル鉱石を運び出せる準備を優先します」

幸いにして、ミスリル鉱床は露天掘りが可能なので、あまり時間をかけずに鉱石の運び出しは可能であろう。

それから一週間ほど、俺は魔法でインフラと積み出し用の魔導飛行船が離発着可能な港の土台を作ってからローデリヒからの応援を受け入れる。

『飛び地ではありますが、土地柄農業も牧畜も不可能。暫くは鉱石の掘り出しのみ。数年後にある程度まで精製可能な大規模工房を作って効率化を図る。こんなところでありましょうか……』

魔導携帯通信機から、ローデリヒの声が聞こえる。

彼はこのヘルタニア渓谷をバウマイスター伯爵家が完全に支配するため、追加で人員を送って来たのだ。

警備兵、鉱山技師、新しく作られる町を運営する政務・財務系の人材にと。

この他にも、ここで大量に人を雇い入れる事になっている。

移住・出稼ぎ希望者も、ここで集める事になっていた。

『食料の自給は不可能ですか』

出来なくは無いが、そのためには植林などから始めて岩盤質の地盤の上に土を定着させる作業から行わないといけない。
だが、このヘルタニア渓谷には川や沼すらない。
厚い岩盤を掘って地下から井戸で汲まないといけないので、最低でも数十年単位で時間が必要であろう。

鉱床や鉱山から出る鉱毒の問題もある。
俺ならば、魔法で使える金属を『抽出』して終わりだが、次世代以降にそれが出来る可能性は少ない。
鉱毒への対策を考えつつ、農業なども出来る土地に改良をするとなると、これはどうしても後回しになる。
まずは、未開地開発の方が優先だからだ。

『食料の自給は暫くはいい。周辺の貴族から買って彼らを味方にしろ』

これも、ブロワ家の横槍を防ぐためである。
せっかくのお得意さんを失わないために、喜んでブロワ家を警戒してくれるであろう。

『それは宜しいのですが、価格を吊り上げられませんか？』

『可能性はあるが、食料を売る全ての貴族が談合しないと難しいだろう』

それに、あまりに高ければバウマイスター領やブライヒレーダー

辺境伯領から輸入してしまえばいいのだ。

『貴族も一枚岩ではありませんからな』

『そういう事』

『代官の人選ですが、拙者の選んだ者で良かったのですか？』

『その辺は任せているから』

そんな話の後に、バウマイスター伯爵領から魔導飛行船に乗って代官とその他の一行が到着する。

「一応、代官に任命されましたが不安です」

ローデリヒが代官に任命したのは、アームストロング伯爵の三男フェリクスであった。

内政や財務の経験は無いがそれは他の人が補えばいいし、彼を任命した理由は、ヘルタニア渓谷守備隊隊長であるアヒレス子爵を上手くコントロールする事にある。

もし彼が良からぬ事を企もうとしても、ここの代官が王国軍の重鎮であるアームストロング伯爵の三男ならば実行は困難になるというわけだ。

王都のアームストロング伯爵家も、三男がバウマイスター伯爵家の重臣になれるように援助を惜しまないであろう。

その分コストはかかるが、新興伯爵家で全部自前でやろうとすれば俺もローデリヒも過労死する。

ある程度の利権で味方を増やした方が、長い目で見れば得というわけだ。

それに、楽であるし。

「ここの初代が武官なのは、他からのちょっかいを防ぐためでもあるから。予算も十分にあるから、上手く人を雇って鉱石が順調に運び出されるようにして欲しい」

「畏まりました」

フェリクスが初代代官に任じられ、彼は実家の助けも借りてヘルタニア渓谷の統治を開始する。

俺は土木工事を続けながら、空いた時間で優雅にお茶などを飲む時間を取り戻す。

「兄様達は、大慌てでしょう」

「慌てても、もう何も出来ないけど」

「バウマイスター伯爵様は、兄様達の予想以上に貴族様なのですね」

空いた時間に、俺とカルラは二人でお茶を飲みながら話をしていた。

本当に二人きりではなく周囲にはエリーゼ達もいるのだが、それは致し方のない事だ。

ブロワ家の娘である彼女が今一番家のためになる行動と言えば、俺を誘惑する事なのだから。

「そうですね。ヘルタニア渓谷は、既に正式にバウマイスター伯爵家の物。最初は、あの不良物件で和解金の減額がなったので喜んだのでしょうが……」

見事に開放されて、今では有望な鉱山地帯として開発がスタートしている。

今さら返してくれとも言えず、彼らは悶々としているはずだ。

「カルラさんが、俺に押し倒されればいいとか思っているかも」

「思っていますね。兄様達からすれば、それで私が幸せになるとも思っているのでしょう。日陰者の娘が、竜殺しの英雄の妻になる。大出世とも言えます」

貴族の立場で考えれば、それは間違った認識ではなかった。

「カルラさんは、どう思っているのかな？」

「私は、ブロワの姓など本当はいらないのです。どうしてベンカー家の娘扱いにしてくれないのでしょうか……」

可哀想だが、本人がそう望んでもまずあの二人はカルラを手放さないであろう。

ブロワ家が今の裁定案を呑んだとすると、今度は家を建て直すために彼女はどこかに嫁に行かされるからだ。

「幼少の頃からお世話になっていれば、それも貴族の娘として受け入れたのでしょうが……」

今までは放置されていたのに、今になって呼び出されて利用だけ

される。
カルラがブロワ家の将来に冷淡なのには、そういう事情があったわけだ。

「ベンカー家の娘扱いねぇ……」

カルラはブロワ辺境伯の娘ではあるが、今までの扱いからベンカー家の娘とも言える。
自分から扱いを下げて欲しいというのも珍しいが、王都の役無し貧乏騎士家の娘ならば政治的に利用されないし、どこに嫁ごうと自由という考え方もある。

母親と二人で自立したいと言っているので、結婚すら眼中に無いのかもしれなかった。

「何とかならないのか？」

俺の護衛役であるエルが珍しく口を挟んでくるが、カルラがベンカー家の娘になってしまえば結婚に何の障害もなくなるのだから当然とも言えた。

「カルラさんの立場を決めるのは、ブロワ家の当主なんだよなぁ……」

この世界では、貴族家の当主の立場が強い。
だからブロワ辺境伯の呼び出しにカルラは逆らえなかったし、後継者候補二人が俺の妻に押し込もうとしている件も自分からは嫌とは言えないのだから。

「そうだな……。クラウス」

ここで、俺は人が嫌がる案を考える天才クラウスに意見を求める。
今まで散々に、俺が嫌がる事をしてきたクラウスだ。
奴ならば、ブロワ家が嫌がる策を考えてくれるはず。

「ヴェンデリン様からかなり期待されているようですが、極めてオーソドックスな策しかございません。というか、策ですらありません」

しかし、クラウスは俺の心の内などとっくに承知で、更にそれを気にもしないで答えていた。

「あの二人以外の後継者を押して、そいつに約束させるとか？」

「そういう事にございます。そしてカルラ様には、誰か当てがあるのではないかと」

当てがあるから、俺にベンカー家の娘になりたいと願望を述べた。
そう考えないとおかしいのだ。
バウマイスター伯爵家の当主である俺に、ブロワ家に何かをする権限などないのだから。

「新しい当主に縁切りをして貰うのか……」

もしフィリップかクリストフがブロワ家の新当主になると、カルラは必ず利用される。
なのでカルラは、別の候補者が当主になるように俺に動いて貰いたいのであろう。

「俺に、何か得でもあるのかな？」

わざと意地悪く聞いてみる。
既に和解金の支払いは決まっていて、減額を条件に貰ったヘルタニア渓谷は開放した。
少なくともバウマイスター伯爵家の中では、既に紛争は終わっているのだ。

「寄り親であるブライヒレーダー辺境伯様の手助けになりますし、紛争が終わらないと未開地開発が遅れますが。新しい当主にヘルタニア渓谷に手を出さないように約束させる事も可能です。暫くは、余計な手間が省けると思います」

「（この人、切れるなぁ……）」

この人を女当主にして婿でも入れれば良いような気もするが、本人はそれを望んでいないのであろう。
本人の才能と希望が一致していないというわけだ。

「（何か萎えるというか……）」

前世の恋人に雰囲気は似ているのだが、なぜか恋愛感情が一切浮かんでこない。

エリーゼもなかなかあれで鋭い部分があるが、普段は甲斐甲斐しく食事やお茶の準備などをしてくれて女の子らしい。

イーナも、二人で居る時は本人が言うほど面白味がない女というわけでもない。
少し恥しがり屋さんなのだと思う。

ルイーゼは、普段からあんな感じなのでいいのだ。

ヴィルマは口数が少ないけど、子犬のように俺に付いて来るの可愛いし。

カタリーナは、付き合ってみると外面とのギャップに驚かされる。

ところがカルラは、一見誰にでも丁寧に接するがそれは社交辞令の域から出ない。

間違いなく、俺との婚姻を望んでいないのであろう。

どうせ状況的に無理だし、俺にも強引に奥さんにしたいまでの願望もない。

「（ヴェンデリン様。カルラ様の提案を受け入れるべきだと思います）」

クラウスが、小声で俺に助言をしてくる。

「（妻にして、援助を通してブロワ家を経済的に乗っ取れとか言うのかと思った）」

「（王国からの警戒に、人手不足もございます。ヘルタニア渓谷だけを維持・運営した方が実入りは大きいでしょう）」

いくら俺でもそのくらいはわかる。

もしかしたら、バウマイスター伯爵家の膨張を利用してクラウスが孫達の復権でも狙うのかと思って聞いてみたのだ。

「（それに、ブロワ家は王国建国初期からある名門です。創設して百年ほどの、ヴェンデリン様のご実家の風下には立てないでしょう）

」

金と手間をかけ、嫌な思いまでして統治する価値もないというわけだ。

しかし、名門というのは本当に面倒くさい存在である。

「（だよなぁ……。とっととあの二人以外の人を当主にして、裁定案を飲ませるか……）わかりました。受け入れましょう」

「ありがとうございます」

そうと決まれば、早速にブロワ辺境伯領入りだ。

案内役が必要なのでその人が来るまでの間、ヘルタニア渓谷で金を得るためミスリル鉱石の搬出を早く進める手伝いをしながら応援と新規に雇用した人員を呼びつつ、俺は土木魔法を駆使し続ける。

ヘルタニア渓谷開放作戦で、俺以外の突入メンバーへの報酬と陽動作戦に参加した軍勢への報酬で現金は減っていたが、これはミスリル鉱石の販売ですぐに黒字になる予定であった。

他にも、金、銀、銅、鉄鉱石などの鉱床もあるので、これも開発を進めれば更に収益は上がる。

「金と魔法の暴力で強引に開放か。バウマイスター伯爵様も貴族になったよなぁ。それで、ブロワ領内に向かうメンバーは？」

「あまり大勢では行きませんよ」

俺、エル、ブランタークさん、導師、ヴィルマ、カルラの六名に……。

「案内役ですか？　地理にはそれなりに詳しいですけど」

忙しいし、既にうちとブロワ家との裁定は終わったので、呼び戻したトーマス達のグループの中からニコラウスも付いて来る事になった。

「それで、変装でもするのですか？」

「するわけがない。俺達は、冒険者としてブロワ領内に入るのだから」

ブロワ家とバウマイスター伯爵家との裁定は、既に終了している。俺が冒険者としてブロワ領内に入ったところで、何か問題があるわけではない。

むしろ、コソコソしている方が問題であろう。

「何も宣伝しながらブロワ領内に入るわけでもないし、俺の顔なんて知らない人も多いだろう」

「いや、絶対にそれはないですよ。まさか、堂々と新しい後継者候補にお会いになるつもりで？」

「俺は一応は伯爵だぞ。裏で工作とかはしないさ」

変装してから新しい後継者候補に会うなど、裏工作を疑われるだけである。

堂々と入り込み、狩りでもしながら空いている時間にカルラが言う新しい後継者候補とやらに堂々と会えばいいのだ。

「何かしてきたら、また雀ってやればいいしな」

「普通にお供させていただきますが……」

俺は、フェリクス、モーリッツ、トーマス、エリーゼ達にヘルタニア渓谷の事を任せ、ヘンリックの小型魔導飛行船でブロワ辺境伯領内の中心都市ブロートリッヒに丸一日ほどで到着していた。

ブライヒブルクとほぼ同規模のブロートリッヒの郊外には、魔導飛行船用の港も存在している。

そこに船を置き、ヘンリックも加えた八名でまずは冒険者ギルドブロートリッヒ支部へと向かっていた。

「親父が一緒とは……」

「血縁など関係ないのである！　そなたも商人ならば、アルテリオ殿を抜くくらいの夢を持ち、今回のチャンスを生かすのである！」

ヘンリックは、俺と一緒にいる導師を見て少し嫌そうな顔をしていた。

気持ちはわかる。

仕事をするのに肉親が傍にいると、気持ち的に少しやり難いのであろう。

導師も、父親としてなかなか厳しい事を言っていた。

「しょうがねえさ。俺がいるのは、お館様への報告のため。導師がいるのは陛下への報告のため」

どちらも、ブロワ家が起こした紛争に辟易している状態であり、俺が堂々と行なう工作に保険をかけているのであろう。

俺としても、二人が付いて来てくれる方が都合がいいのだ。

「バウマイスター伯爵様！」

冒険者ギルドに到着して数日近隣で活動する旨を報告すると、受付の若い女性職員が驚き慌てて偉い人を呼びに行ってしまう。

「迷惑な……」

「あの……。バウマイスター伯爵様は、本日はどのようなご用件で？」

「冒険者として狩りをしている間は、貴族扱いしない。そういう話では無かったのかな？」

この話は、冒険者ギルド本部から通達されているはず。

前の地下遺跡での件もあり、ブライヒブルクや魔の森の支部ではちゃんと守られていたルールなのだから。

「失礼しました」

「狩りに行ってくる」

いきなり工作を始めるのもアレなので、まずは地図を貰って近くの魔物領域へと出かける。

「私も宜しいですか？」

「万が一の事があっても文句が無ければですね」

「それは当然です」

カルラも、自分の弓を持って参加していた。

成人した時に冒険者ギルドにも登録してカードを持っていたので、参加を断れないという理由もあったのだ。

「この面子では、よほど油断するか何かアクシデントでもないと怪我人すら出ない」

ヴィルマの言う事は正しく、カルラの参加に文句は一切出なかった。

「カルラさん。俺があなたを守ります」

エルは、カルラと狩りが出来て大喜びだ。

守るというのも、エルは前衛でカルラは後衛なので間違ってはいない。

「親父。なんで俺まで！」

「アームストロング家の男子たる者！　都市近郊の魔物の領域入りくらいで慌てるとは笑止なのである！　御用商人が、領主のお供をしないでどうするのだ！」

ヘンリックは、父親である導師によって強引に冒険者として登録させられ、武器である槍と防具まで与えられて強引に参加させられていた。

「俺。商人なのに……」

「アームストロング家の男子たる者！　武芸の鍛錬は必須なのである！　商人とて、それに手を抜く事は！」

「毎日しているから！」

導師に詰め寄られ、ヘンリックは半分涙目であった。

「あのう。私の腕っ節には期待しないでくださいね。案内はしますけど」

この中で一番戦闘力が無いニコラウスが、俺達に釘を刺す。

「案内だけしたら、あとは魔物に襲われないようにな」

「わかりました」

ニコラウスの案内でブロートリッヒ郊外にある魔物の領域に移動し、早速ヘンリックはヴィルマをサポートに熊型の魔物と戦わされていた。

いきなり中級編以上の課題を父親から与えられて、ヘンリックには不幸属性があるのかもしれない。

「親父。普通は、もっと小さなのから……」

「その程度の魔物。某なら、拳の一撃で倒せるのである！」

「そんなの、親父だけだぁーーー！」

「あっ、ボクも倒せる」

「ルイーゼ様。私は普通の人間のカテゴリーの中で話しています」
「さすがは、導師の息子さんだねぇ」
ルイーゼの揚げ足に、ヘンリックは丁寧な口調ながらもは毒の篭った返答をする。
とは言いつつも、さすがは導師の息子。
最初は苦戦していたが、すぐに慣れて続けて数頭の魔物を槍で仕留めていた。
「凄いな。ヘンリック。今度、うちのパーティーに加わらない？」
「お館様。私は商人なんですけど……」
他のメンバーも危なげなく、次々と魔物を狩っていた。
「みなさん。凄いですね」
ニコラウスだけは、安全な場所で普通に見学をしていたが。
「カルラ様！」
「はいっ！」
その中でも、エルとカルラは二人で効率良く魔物を狩っていた。
エルが一撃加えてから、カルラが止めの矢を射る。
またはその逆のパターンと。
傍から見ると、なかなかに良いコンビネーションである。
「カルラ様なら良い冒険者になれますよ。他の人と合わせるのもお

上手だし」

「いえ。エルさんが優れた冒険者だからですよ」

エルは、もう一つ思っている事があるはずだ。

それは……。

「（エルは、自分とカルラ様がお似合いだから上手く合わせられるのだと思っている）」

ヴィルマがボソっと、俺に漏らしていた。

今のエルの思考ならば、そういう結論に至る可能性は高いであろう。

「（答えは、カルラ様が才能があるからだけど）」

「ははは……」

ヴィルマのクールな分析に、俺は乾いた笑いしか浮かばない。

親友としては頑張って欲しいが、俺が公に応援できるのは工作が上手くいってカルラがベンカー家の娘扱いされるようになってからである。

もしそうなってカルラにその気があるのなら、俺は二人を祝福するつもりであった。

今は、バウマイスター伯爵として応援するわけにはいかないのだ。

エルもそれはわかっているのであろう。

だから、自分で何とかしようとしているわけだ。

そして、まずはお互いが相思相愛になるのが先であると。

「冒険者って、危険ではあるけど気楽でもあるよなぁ……」

そんな事をボソっと呟きながら魔法で狩りをしているブランタークさんも、このところの騒動のせいで色々とストレスが溜まっているのかもしれない。

魔法を連発して、魔物を立て続けに狩っていた。

「今日は、こんなところでいいか……」

夕方になり、結構な量の魔物も狩れたので今日はこれで終わりとする。

宿の手配をしないといけないのだが、カルラが当てがあると言う。

「その新しい後継者候補の屋敷とか？」

「はい。そうです」

「それがいいよな……」

紛争が長引いているし、どうせ会いに行かなければいけない人だ。

第一、何が悲しくてブロワ家の連中に色々と配慮しなければいけないのだ。

カルラが言う後継者候補が本当に優秀なら、笑顔で俺達に良い食事でも出せと俺は思っていた。

「フィリップとクリストフを支持する家臣達が、暗殺に来たりして」

「可能性はゼロではありません」

「今度は魔力が勿体無いから、麻痺じゃなくて黒焦げか冷凍か切り刻みだけどね」

エリアスタンは非殺傷も可能な魔法であったが、威力の調節が難しくて魔力を食ってしまう。

紛争だからこそ無理して使用したが、暗殺者相手なら普通の魔法の方が早くて魔力も使わないのだから。

「その前に、みんな導師に殴り殺されるさ」

「正当防衛である！」

俺、ブランタークさん、導師の脅しにカルラは特に表情も変えていなかった。

「（カルラ様が男なら、簡単な話なのに）」

ヴィルマの言う通りであり、カルラに継がせてしまえば済む話なのだから。

「このお屋敷です」

カルラの案内で、俺達はその人の屋敷まで移動する。

ブロートリッヒの中心部にある巨大な領主館の近くに、そのお屋敷は建っていた。

規模は小さかったが、綺麗に維持されていて持ち主に良いイメージが持てる。

「カルラ様！」

「冒険者のカルラです。このお屋敷のご主人に用事があって参りました」

門を警備していた兵士は、カルラの顔を知っていた。

慌てて屋敷の中に戻ってから、初老の執事らしき男性を呼んでくる。

「カルラ様。戦地からお戻りですか」

「色々とありまして。叔父様はいらっしゃいますか」

「はい。ご主人様は、現在退屈しておられます。何しろ、領主館があの有様ですから」

フィリップとクリストフが不在で、双方に組した家臣達が葬儀日程不明のために冷蔵されているブロワ辺境伯の遺体を挟んで対峙しているからだそうだ。

「領主館内に入れない者も多く、政務も一部滞っておりまして……」

「大変でしたね。ベッケナー」

「私はご主人様の執事なのでさほどの事は。ご主人様も、今は大人しくしているしかありませんから。ところで、後ろの方々は……。失礼しました。ご案内いたします」

どうやら、俺達の正体に気が付いたらしい。

ベッケナーという執事は、俺達を屋敷の中に案内する。

応接室で出された紅茶を飲んでいると、そこに四十歳ほどの上品な顔をした男性と、その息子らしき二十歳ほどの若者も現れる。

二人は、少しフィリップとクリストフに似ていた。

「ゲルト・オスカー・フォン・ブロワです。そして、こっちが息子の……」

「リーンハイトです。しかし、豪勢なメンバーですね」

二人は、俺や導師の顔を知っているようだ。

「ゲルトさんは、亡くなられたブロワ辺境伯の弟なのですか？」

「年齢は三十歳近く離れていますけどね。バウマイスター伯爵様と同じですよ。晩年に、先代が若いメイドに産ませたのが私です」

年齢は離れていたが一応認知はされて、成長と共に甥達を脅かさないそれなりの地位と給金を貰って生きている。

跡は息子のリーンハイトが継ぐし、特に不満はないのだとゲルトさんは説明していた。

「情報は流れてきましたが、メチャメチャですね」

「はい」

「あの二人は、何をしているのですか？」

「簡単に言うと、裁定交渉を長引かせて和解金の値引き交渉ですね」

ブライヒレーダー辺境伯が、折れるのを待っているのであろう。
和解金を値切っても、早く戦時体制を解いて未開地の開発に邁進した方が良いと思えるその時まで。

「どこか王家は絶対にブロワ家を潰さないと、高を括っているのでしょう」

今のところはそうかもしれないが、あまりやり過ぎると王国側がキレてしまう可能性もゼロではない。
だから、あまり無理をするのも良くないはずであった。

「カルラは、だから私が継げと？」

「他に手がありません」

「他の息子達は？」

「叔父様にはわかっているはずです。一旦降家して継承権を放棄した彼らを、再び継承者にするのは難しいと……」

継承権で揉めないように分家や陪臣家に降ろしてしまうのだから、それを簡単に戻してしまうと反発が大きくなってしまう。

「その点、叔父様には継承権があります」

実は、あの二人に次ぐ継承権を持っている。
普段の行動からまるで警戒されていないのと、彼を支持している陪臣などほとんどいないので意味が無いと思われているそうだ。

「私は、ちょっと帳簿を見るだけで生活費を貰っている普通の男な

のだが……」

「私には、とてもそうは思えません」

カルラは、ゲルトさんが有能な人物だと思っているようだ。

確かに、そんな気はする。

ほどほどの地位で、ほどほどの金を貰って生きているのだって、それが彼の処世術である可能性が高い。

亡くなったブロワ辺境伯からすると年が離れた優秀な弟など、子供達の将来を考えると邪魔者でしかない。

最悪暗殺の危険もあるので、能力など発揮しない方が安全とも言えた。

「印綬官のハイモを匿ったのは叔父様ですよね？」

「なぜそうだと思うね？」

前にそんな話を聞いたような気もするが、まさかここでカルラの口からそれが出るとは思わなかった。

「私の勘です。兄様達が人を使って必死に探させていましたが、消え方があまりにも手際がいいですし、彼がブロートリッヒを出たという情報を兄様達は掴んでいませんでした」

二人は、集めた情報に粗があったと思って捜索範囲を広げている。

だがカルラは、実は館から近い場所に住んでいるゲルトさんが匿ったと思った。

「やはり、油断ならないな。我が姪は」

確かに油断ならない。
俺も、導師も、ブランタークさんも渋い顔をしている。
カルラは俺やブライヒレーダー辺境伯に全てを話しているように見せて、実は最も重要度の高い情報を隠していたのだから。

「確かに、ハイモは匿っている。あのままだと、殺されて印綬を奪われていたかもしれないからな」

ゲルトさんが執事のベッケナーに目配せをすると、彼は一旦部屋を出てから一人の男性を連れてくる。
ほぼブロワ辺境伯と同年齢の彼こそが、印綬官のハイモなのであろう。

「やはり、叔父様が匿っていたのですね」

「すいません。お二人は、嘘でもいいからお館様が自分を後継者に指名したと言えと迫ってきまして。印綬も、寄越さないなら印綬官を交代させると……」

交代させるという事は、自然死でもなければ殺すという意味になる。
印綬官は特殊な役職なので、領主本人で無いと絶対に代えられないからだ。

「困っていたところに、ゲルト様が手を差し伸べてくれまして……」

それからずっと、この屋敷の中で匿われていたそうだ。

「それは大変だったと思うけど、肝心のブロワ辺境伯の遺言はある

のか？　あれば、色々と捗るんだが……」

ブライヒレーダー辺境伯の意を受けて付いて来たブランタークさんからすれば、誰が継いでも早く裁定交渉が終わってくれればいいのだから。

「それが、お館様は……」

『あの二人には、領主として大切な物が欠けている』とだけ漏らして、それ以上は何も言わなかったそうだ。

「領主が判断しなかったのか……」

どちらかを指名すると、双方の支持者達が争う可能性も否定できなかったという可能性も考慮したのであろうが、結果は無責任以外の何物でもなかった。

「それじゃあ、ゲルトさんが継いでも文句は無いわけだ」

「私が継いでも、誰も付いて来ないのでは？」

「逆に考えると、今付いていく事を表明すれば良い地位を得られると陪臣達も考えるかも」

紛争に勝っていれば良かったのであろうが、実際には二人は負けて、王国からもブライヒレーダー辺境伯からも俺からも後継者としての資質を疑われている。

娘を嫁に差し出した陪臣家は手遅れだが、他の家は今までの待遇を保障してやればゲルト派に転ぶ可能性があった。

「そんなに簡単に転ぶような連中で大丈夫か？」

ブランタークさんが、そんな連中を当てにして大丈夫かと心配そうに言う。

「逆に言うと、そういう連中の方が御し易いです」

おかしな信念や、二人に狂信的な忠誠心を持っている家臣達の方が危険なのだから。

陪臣とて世襲可能な家を守らなければいけないので、ここまでの失態を犯した二人を見捨てても仕方が無い。

今ゲルトさんがする事とは、彼らの背中を押してやる事である。

「明日。お茶会でも開いたらいかがですか？」

まずは、支持者を集める事である。

そしてその席で、彼らの前である儀式を行なうのだ。

「ハイモさんが、印綬をゲルトさんに預けるのです」

印綬官が、領主以外の人物に印綬を預ける。

それはすなわち、その人が次の領主だと明言しているに等しかった。

「ハイモは、どう考えているのだ？」

「亡くなったお館様は、あの二人の争いを危険視していました。何も手が打てなかったので非難の謗りもあるかと思いますが、お館様

から任命された印綬官である以上は、お館様の判断に従います。個人的にも私の命まで狙ってきましたので、お二人を後継者にはしたくありません」

ハイモさんは、ゲルトさんの質問にそう答えていた。

そして、印綬をゲルトさんに渡して引退すると。

家の跡は息子が継ぐが、彼は普通の中堅クラスの農政担当の文官だそうだ。

「私が印綬官に任じられたのは、幼少の頃からお館様の遊び相手であったからです。ゲルト様は、他の誰か縁のある方を印綬官にする。そんなものです」

「私は印綬官は任命しないかも」

兄と甥達に遠慮して生きていたので、あまり知己を作らないようにしていたらしく、年齢的に考えても信用できる印綬官を探すのが面倒なようだ。

「あとは、俺も話をしますけどね。それで、支持を表明した陪臣を中心に新しい人事を行なえばいい」

諸侯軍幹部は、当主処刑で御家取り潰しの処置をして貰わないといけない奴らがいる。

あの夜襲を企てた連中だ。

財務系の文官達にも、予算を出したクリストフに近い連中は役職剥奪や家禄の減少くらいはして貰わないといけない。

領内に残すと危険な、亡くなったブロワ辺境伯の血筋の者達も、ある程度は排除しないといけないであろう。

「二人を支持しているとはいえ、一連托生なのは少ないでしょうから、少し距離があるのを引き抜けばいい」

特にフィリップを熱烈に支持している諸侯軍幹部達の大半は、まだ兵士ごと捕虜になっている。

彼らは、ここで俺達が何かをしても止める手立てが少ないのだ。

「屋敷に残っている諸侯軍幹部の中で、脈がありそうなのには全部招待状を送りましょう」

運が良ければ、娘をフィリップの奥さんに出せなかったばかりに低い地位で甘んじている自分が上に上がれる可能性がある。

しかも、同じフィリップ支持で出兵している連中は大失態を犯した。

そんな連中ならば、裏切るのに躊躇いも少なくて良いのだから。

「ヴェル様。極悪」

「人の派閥ってそんな物よ」

前世でも、俺が新入社員時代にブイブイ言わせていた部長がいたのだが、彼がつまらない理由で失脚すると、彼にコバンザメのようにくっ付いていた連中の変節ぶりには笑うしかなかった。

栄枯盛衰は世の常なので、失敗した以上はあの二人には退場して貰う事にしよう。

「狂信的な支持者以外には、招待状を贈れば宜しい」

「そういうのは、粗方捕虜になっていますけど」

「なら話は早いですね」

その日は、そのままゲルトさんの屋敷に泊まらせて貰う。

翌日に備えて、ベッケナーさんが他の使用人達と共に招待状を届けるのに奔走していた。

手ごたえを聞くと、既に俺達がウロウロしているのは冒険者ギルド経由で伝わっているらしく、全員すんなりと招待状を受け取ったようだ。

「刺客とか送ってきますかね？」

「それはさすがにしないでしょう」

俺は冒険者名義でここに居るし、別にコソコソと隠れているわけでもない。

紛争自体も、バウマイスター伯爵家とは終了しているのだし、ここで俺に何かがあれば問題になってしまう。

王家もそうだが、冒険者ギルドにも睨まれてしまうであろう。

「冒険者ギルドは、そういう短慮を防ぐためにブロワ家側に情報を流したのですから」

ただベッケナーさんの報告によると、この屋敷を探っている妙な連中は複数いるようだ。

俺とゲルトさんが何を話しているのか、気になって仕方がないのであろう。

「なら、明日ですね」

そして、運命の翌日。
ゲルトさんの屋敷において、不思議なお茶会が開かれていた。
お昼前に、屋敷の庭にベッケナーさんがテーブルや椅子を並べ、そこでお茶とお菓子が振舞われる。
招待された陪臣達の大半がフィリップとクリストフのどちらかを支持している者達であったが、表面上はにこやかにゲルトさんと話をしていた。

「みんな。笑顔」

「こんな状況になったから、足抜けしたくて堪らないのさ。ヴィルマは似合っているな。その服装」

お茶会なので、ヴィルマはカルラが選んだ服を着ていた。
前に、今は嫁いだゲルトさんの娘さんが着ていた物だそうだ。

「もう少し背が高くなりたい。そうすれば、大人の女なのに」

背が足りないと言って拗ねるヴィルマは正直可愛かった。

「俺は、可愛いからいいと思うけど」

話をする俺達にも、参加者達は意識と視線を集中させていた。

もうこれ以上、二人の争いに手を貸しても何の利益もない。
彼らは、表面上はどちらかを支持しつつも、何か抜け出すタイミングを狙っているのだ。

「そうそう。本日のお茶会には、外部から招待したお客様がいまし

て」

ゲルトさんは、俺、導師、ブランタークさんを順に紹介していく。
とっくに知っているのだが、彼らはまるで予想外の出来事かのように挨拶をしていた。

「そういえば、バウマイスター伯爵様は此度の紛争で大活躍をされたとかで？」

「それなりにですね」

白々しい言い方であるが、貴族の陪臣なので紛争での武勲話は良くある類の話である。
俺は淡々と今までに起こった出来事を話し、それを聞いた陪臣達は溜息をついていた。

特に、まだあまり情報が入っていないヘルタニア渓谷開放の話では『聞いていない！』と耳を傾ける者も多かった。

「そんなわけでして、裁定交渉も揉めているようですね」

揉めているのは、ブロワ家側が和解金を支払いを拒んでいるからだ。
負けた以上は素直に支払わないと、負けた以上にみっともないのはこの世界でも同じであった。

「ブライヒレーダー辺境伯も困っているようですね」

「そうですか……」

「王家も、そろそろ我慢の限界でしょう」

どんよりとした空気が広がる中、遂に本命が姿を見せる。
印綬官のハイモさんが姿を現し、その場で二人の後継者達を批判し始めたのだ。

「お館様の言う通りであった。どちらを後継者にしても揉める元であると。実際に、二人は後継者争いの一環でブロワ家に損害を与え続けている。今なら、まだ何とかブロワ家は建て直せるのに……」

「ハイモ殿。お館様の遺言は？」

「無い」

恐る恐る聞いてきた陪臣に、ハイモさんはキッパリと答える。
と同時に、一部の陪臣達を睨み付けていた。
彼らがハイモさんに、印綬の授与を強要したのであろう。

「無い以上は、お館様が危惧していた二人に次ぐ継承権のあるゲルト様に継いでいただくのが正統であると思う」

「それは強引過ぎる！」

「交渉に出ているお二人や、同伴している者達にも意見を聞かないと」

「紛争で捕虜になっている者も多いのだ！　彼らにも意見を！」

「それをすると、また堂々巡りですね」

ゲルトさんの継承にケチを付けてきた陪臣達の多くは、昨日まで冷蔵されたブロワ辺境伯の遺体の前で睨み合っていた連中であった。

フィリップ派とクリストフ派の中ではかなり有力な支持者ではあるが、その地位は中途半端である。

出陣できず、交渉団にも加われず、留守を任されるような重臣中の重臣は、このお茶会に招待していない。

騒ぐのは、半分自派閥のボスや上司に対するアピールでもあるのだ。

「捕虜になった人達は、裁定交渉が終わらないと開放されません。果たして、いつ戻って来るのでしょうかね？」

「……」

しかも、その交渉を長引かせているのはフィリップとクリストフである。

俺の問いに、騒いでいた連中は黙り込んでしまう。

「それに、ゲルト殿ならすぐに王国も継承を許可するでしょうね」

少なくとも、二人とは違って騒ぎを起こしていない。

統治者としての能力も、実は王国はあまり高い物を求めていない。

大領とは家臣団を含めたシステムで統治する物なので、普通の領主でも正式に上に立つ事こそが重要であったからだ。

「バウマイスター伯爵様。さすがに、王国がすぐに許可を出すなどという根拠も無い話は……」

「根拠ならありますよ。そうですよね？　導師」

「陛下なら、すぐに襲爵の儀を行なうと仰っていたのである！」

テーブルの上にあるお菓子をドカ食いしていた導師は、一旦食べるのを止めてキッパリと答えていた。

昨晩の内に、魔導携帯通信機で陛下に連絡してちゃんと許可を取っていたのだ。

「今から行っても、何の問題も無く襲爵の儀は行なわれるであろう」

「まさか……」

「では、一緒に行きましょうか？」

「いや、今の状況でここを離れるわけには……」

「一時間もあれば終わりますけどね。魔法で移動するから」

渋る陪臣達に対して、俺は瞬間移動で王城に向かえば済む話だと言い、そのまま有無を言わさずにゲルトさんと陪臣の中から九名を選抜して王城へと飛んでいた。

王城の門を警備する兵士は俺の顔を知っていて、来訪目的を告げるとそのまま通される。

「バウマイスター伯爵様。陛下とお会いするのに服装が……」

「構わないです。今のブロワ領は非常時ですし、お茶会のための略装ではありますが、失礼には当たりませんから」

「……」

陪臣達は、なぜ自分達がお茶会に招待されたのかに気が付いたようだ。

「バウマイスター伯爵か。他の領地の件でご苦労な事だな」

「早く平穏な日々に戻るためですよ」

「フィリップは、俺が面倒を見ないと駄目だろうなぁ……」

「エコヒイキではないですか？」

「あのバカ。素直に継承権を放棄して王軍に仕えておれば、今頃は将官になれていたのに……。まさか、ブロワ領内には残しておけまい。第二の反乱の芽を摘むためだ」

「なるほど。納得できました」

謁見の間へと向かう途中、顔を合わせたルックナー財務卿やエドガー軍務卿と話をするが、陪臣達はその様子を心ここにあらずという感じで見ていた。

予想外の事態が続いて、思考能力が飛んでいるのであろう。

「襲爵の儀は、すぐに終わりますから」

彼らを連れて謁見の間に入ると、そこには既に陛下が玉座に座って待っていた。

「バウマイスター伯爵。此度は、大変じゃの」
「臨時で、運搬業などをしております」
俺の冗談に、陛下は軽く笑みを浮かべていた。
「なるほどの。では、始めるとするか。ゲルト・オスカー・フォン・ブロワよ」
「はっ！」
「我、ヘルムート王国国王ヘルムート三十七世は、汝、ゲルト・オスカー・フォン・ブロワに第三位辺境伯位を授ける事とする」
「我が剣は、陛下のため、王国のため、民のために振るわれる」
ゲルトさんが宣誓を行なうと、陛下は侍従に命じて一枚のマントを持って来させる。
「ブロワ家には代々王家が渡した物が伝わっていると思うが、今回の件で新ブロワ辺境伯も苦労の連続であろう。そなたの継承にケチを付ける輩がいるやもしれぬ。これを着けて東部の安寧に貢献するがよい」
「ははっ！」
侍従からマントを着けられるゲルトさんを見ながら、陪臣達は顔を真っ青にさせていた。
なぜなら、彼らはフィリップ支持、クリストフ支持を明言し、ゲルトさんの継承に一番五月蝿く異を唱えた連中ばかりであったから

だ。

「襲爵の儀に同行するという事は、そなたらは新ブロワ辺境伯の忠実なる家臣なのであろうな？」

陛下からの問いに、彼らは更に顔を真っ青にする。

その質問は、陛下からの踏み絵に等しかったからだ。

「それは勿論です」

「我ら一同、一致団結して新しいお館様にお仕えいたしますとも」

まさか、今さらフィリップやクリストフが相応しいとも言えず、彼らは自分の身を守るために、懸命にゲルトさんに仕えるしか道が残されていなかった。

「それは良かった。襲爵の儀とは、ご覧の通りに味気ない物でな。そこで、同行者には記念品を贈っている」

九人の陪臣達は、記念の大型銀貨を貰っていた。

通常の銀貨十枚分の銀を使った大型銀貨で、デザインも違う。

銀の量は日本円で十万円分ほどだが、貴族の襲爵の儀に同行した陪臣しか貰えないので、プレミアム的な価値がある。

歴史が古い貴族家の陪臣家ほど枚数を持てるチャンスがあるので、その数を競うような風潮もあるようだ。

確か、クラウスも父に同行して一枚持っているはずだ。

俺は、襲爵の儀の時には家臣がゼロだったので誰も持っていない。

多分、子供が襲爵の儀を受ける時には誰が行くかでひと悶着ある

はず。

「（しかし、重たい銀貨だなぁ……）」

重量的にではなく、もっと別の意味でだ。

今まで支持していた二人を見捨て、新しい主君への忠誠を誓わないといけない呪いの銀貨にしか俺には見えなかった。

今回の件では、王国もよほど腹を立てていたのであろう。

彼らに対する手厳しい褒美とも言える。

「さて、戻りますか」

結局、一時間もしない内に襲爵の儀は終わっていた。

帰る前に、一緒に襲爵の儀に参加していたルックナー財務卿が、

『バウマイスター伯爵を敵に回すとは、愚かだの。貴殿は、気前が良い貴族なのに』などと言っていたが、それは買い被りであろう。

俺はただ、ブロワ家に嫌らしい復讐をしているだけなのだから。

瞬間移動でゲルト邸に戻って王都でのあらましを話すと、残されていた陪臣達はすんなりとゲルトさんの襲爵を認めていた。

特にゲルトさんに同伴して陛下から念を押された連中は、全員目が据わっている。

「お館様。領主館に入って、先代の葬儀の準備を始めてください」

彼らは、屋敷に残っているかつては同じ候補者を推していた上司を最悪排除する覚悟を決めたようだ。

ゲルトさんと、その息子であるリーンハイトを伴って屋敷に入る。

すぐに彼らの私兵達が二人の護衛に入り、先代ブロワ辺境伯の遺

体が安置されている部屋に入ると、突然の事に驚く元上司達にこう宣言していた。

「新しいブロワ辺境伯は、ゲルト様である！　王都にて陛下から正式に襲爵の儀を受け、その証明に新しいマントも得た！　これより、正式に政務に入って貰う」

「バカな！」

「そんな嘘を信じるものか！」

「気でも狂ったか！」

フィリップ派、クリストフ派を問わず、遺体の傍にいた陪臣達は一斉に彼らの非難を始める。

格下の連中が相手なので、余計にその口調は強かった。

「一体、いつ王都で襲爵の儀など受けたのだ！　妄想もいい加減にしろ！」

「バウマイスター伯爵様の魔法により、その時間は短縮された。当然、襲爵の儀にも同行なされている。文句はありますか？」

「……」

彼らは上位の陪臣達なので、俺、導師、ブランタークさんの顔を知っていた。

更に、俺の隣にはカルラもいる。

「やられたのか……」

「やられたというのはおかしいですな。後継者争いでブロワ領を混乱に陥れたお二方を排除して、ゲルト様に治めていただく。バウマイスター伯爵様が隣の混乱を見かねて手を貸していただけた」

「まあ、そういう事ですね。譲渡後に開放されたヘルタニア渓谷の開発にも影響しますし」

「……」

唖然としたままの重臣達に向けて、俺は止めの一言を言い放つ。

「今なら、まだ取り返しがつくと思うけど。出陣して捕虜になっている連中や、無駄な交渉引き延ばしをしている連中に比べると」

寄り子と領地の減少に、和解金支払いによる借金の増加。

新しい領主就任と、今後のブロワ辺境伯家では家臣団のリストラと再編成が始まる。

早目に新領主への支持を表明すれば最悪生き残れるし、上手くすれば今まで支持者が少なかったゲルトさんに重用される可能性もある。

「あなた達は、留守番役だったからこそ逆にチャンスだと思いますけど」

二人に重用されているからと付いて行った連中は、良くて当主強制引退か、役職剥奪か、家禄の減少だ。

悪いと、二人と一緒に追放されるか、あの夜襲を計画した連中は間違いなく御家取り潰しと当主縛り首しか未来が残っていないのだから。

「ゲルト様に従います……」

彼らも腹を括ったようで、すぐに私兵を集めてから領主館の警備強化をしてゲルトさんの家族を受け入れ、同時にフィリップとクリストフの家族や逆らうと予想される同僚などの軟禁を行なう。

同時に教会に使者を送り、先代の葬儀を明日に行なうと連絡を入れていた。

「早いですね」

「外部から弔問客を呼んで行う対外的な葬儀は、もっと後に行なっても問題ありませんので。今は、家臣と家族だけで行なう内向きの葬儀ですね。布告も出すので、近隣の領民達も参加するかもしれません」

急遽葬儀委員長に任じられたリーンハイトは、突然お気楽な立場から次代ブロワ辺境伯にされて少し戸惑っていた。

「全く、バウマイスター伯爵様はやってくださる」

「これも、我が身の安寧のため」

「私の安寧は綺麗サッパリ消えましたよ……」

先代の葬儀の喪主をゲルトさん務めるという事は、その跡を継ぐと周囲に宣言するのに等しい。

更にその葬儀委員長であり、席次が彼の次であるリーンハイトは、次のブロワ辺境伯に内定したに等しかった。

本人はかなり嫌がっていたが、お気楽な分家の跡取りから次代辺境伯にされてしまったので仕方が無いとも言える。

「このような仕打ち！　決して許しません！」

「なぜ夫が葬儀に参加できないのです！」

「反乱分子の癖に、亡くなられたお館様の葬儀なんて！」

当然、騒ぐ人達がいた。

軟禁している先代ブロワ辺境伯の本妻に、フィリップとクリストフの妻達である。

だが、俺は彼女達に同情できなかった。

みんなそれぞれに、二人の後継者候補達の争いを煽っていたからだ。

「こんな若造に、いいようにブロワ家を掻き乱されて！」

その中でも、特に先代の本妻である老女が激高していた。

高価な服と装飾品に身を包み、実家の家柄も良いので上品そうに見えるが、怒ると余計に鬼ババのように見える。

「ヴェル様。鬼ババ」

「ヴィルマは、こんな風になってくれるなよ」

「ならないようにする」

葬儀に出るために借りた喪服姿の俺達は、鬼ババの怒りなど無視

していた。
気丈なように見えるが、彼女が自分の息子可愛さに次男クリストフを推して無茶をした結果、余計に争いが拗れたという原因もあったからだ。

「ブロワ家は終わる！　成り上がりの、水飲み騎士の八男風情に家を乗っ取られて！」

鬼ババの発言に、周囲が凍りつく。
裏でならともかく、俺本人の前で暴言を吐いたからだ。

「ゲルトさん。そちらのご夫人は、精神的な疲労のせいで錯乱されているようですね」

「はい……。これからは、療養に専念して貰います……」

鬼ババも、二人の妻達も、まずは王都のブロワ辺境伯邸に送られ、そこから教会や軟禁先などに送られる事となっている。
教会で始まった葬儀で、ゲルトさんとリーンハイトの次に棺と対面させられてから、強制的に王都行きの魔導飛行船に押し込められていた。

「自分の領地だけでも手一杯なのに、ブロワ辺境伯領の統治なんてしませんよ。内輪揉めも結構ですが、他の人達の迷惑にならないようにしてください」

最後に、港に強制連行される鬼ババ達にピシャリと言い放つ。
鬼ババ達はうな垂れながら、陪臣や兵士達によって葬儀会場から連れ出されていた。

葬儀自体は丸一日続き、多くの領民達も献花などをしていた。
式は内向きの物であったが、喪主はゲルトさんで俺達も参列している。
領民達は、誰が新ブロワ辺境伯なのかを理解したはずだ。

「暫くは忙しいでしょうね。あの二人は、自滅以外の何物でもない……」

葬儀は無事に終わったが、難題は山積みであった。
まだゲルトさんを支持する陪臣の数が少ないからだ。

「反乱しようにも、兵力が無いのが救いですか……」

捕虜になっている者が多いのと、家の当主が不在なのに勝手に兵を挙げるわけにもいかないからだ。

「ここに、夜襲で当主が戦死した家のリストがあります」

「十七家ですか。意外と多いですね」

戦功を求めて前線にいたのが大きかったようだ。

「残っている子供なり兄弟に家を継ぐのを認めれば、支持は得られますか」

新ブロワ辺境伯の名の下に、新当主を承認する。
他の捕虜になっている陪臣達も同じだ。
お咎めなしで家禄はそのまま。
そう伝えると、残されていた家族や使用人達からの反発は出なかった。

彼らからすれば、誰が主君でも家が保たれればいいのだから。

「ですが、看過できない者達もいます」

覚悟を決めて新ブロワ辺境伯になったゲルトさんが、すぐに兵を送った場所がある。

フィリップ、クリストフの姉妹達が嫁いでいる分家や陪臣家と、あの夜襲を指導した従士長コドウィンとそれに連なる諸侯軍の重臣達である。

当主と男手が出陣していたために、彼らの家族は突入した兵士達に呆気なく捕らわれてしまう。

「綺麗事は言っていられません。兄の直系の血筋の方々は出て行って貰います」

領内に残すと、碌でもない事を企む可能性が高いからだ。

コドウィン以下の重臣達は、大失態の咎で本人は縛り首、家族は全財産没収でブロワ辺境伯領を追放という事になる。

可哀想だが、あれだけのミスを庇いようがない。

「この女狐め！」

「お前の母親と同じよ！　水飲み騎士の息子を誑かして、ブロワ家を地獄に叩き落した淫売め！」

カルラは、俺とゲルトさんが行なう事をただ淡々とした表情で見つめていた。

彼女は先代ブロワ辺境伯の娘であったが、自分はそうは思っていない。

他所の家がどうなろうと、彼女にとっては心の底からどうでもいいのだから。

彼女の異母姉達は、可哀想に分家に見捨てられていた。

潰すと統治に影響が出るので、家禄の減少、罰金、当主を異母姉達の子供ではない親戚に継がせるという条件を呑み、彼女達は離縁されて母親達と同じく教会送りとなる。

連行されている途中でカルラに暴言を吐いていたのだが、彼女は無表情のままで特に気にもしていない様子であった。

「カルラ様は、ある意味凄いわ……」

ブランタークさんは、カルラの態度に珍しく少し引いていた。

「叔父の立場から言わせて貰っても、そう感じます」

彼女は思慮深い優しい人であるが、大切な物とそうでない物を冷静に分けて、後者を冷徹に切り捨てる。

思えば、この一連のブロワ辺境伯家当主交代劇も、彼女が最初に導火線に火を付けたとも言えるのだから。

「（いや、彼女なりの復讐か……）」

母や自分を翻弄した、ブロワ家への復讐なのであろう。

そう思うと、その結末を知らないまま死んでしまった先代は幸せだったのかもしれない。

「彼女を娶ってくれとかいう話は無しですよ」

「いや、それはさすがに言えません……。関係を修復するにしても、次世代以降でしょう？」

新しいブロワ辺境伯は南部との確執を引き摺っていないので、まずは交易や未開地開発に行く出稼ぎ労働者の受け入れなどから徐々に開放していく。

婚姻などは、跡継ぎであるリーンハイトかその子供の代でという事になるはずだ。

永遠に揉めるわけにもいかないし、追い込み過ぎると再び暴発の危険性もある。

本当に、貴族の近所付き合いとは色々と大変であった。

「バウマイスイター伯爵様。私も、ブロワ家の呪縛から逃れる事が出来ました。ありがとうございます」

ゲルトさんは、早速当主権限でカルラをブロワ辺境伯家の籍から外していた。

彼女は母親の実家であるベンカー家の娘という扱いになり、晴れて自由の身となったわけだ。

ベンカー家とて、ブロワ家から籍を外された娘など政略結婚の道具にも使えないはず。

その前に、あの家自体に政略結婚をする価値もないと言われればそれまでなのだが。

「良かったですね」

俺にお礼を言うカルラの所作は、本当に美しかった。

普通の男なら惚れてしまうのであろうが、俺はかなりドン引きし

ている。
彼女と結婚して子供を設けると、後日バウマイスター伯爵家がブロワ家の二の舞になりそうなそんな予感だ。
「（カルラさん。わざと俺にそう思わせているな……）」
しかも、わざとそういう風に見せて俺に惚れさせないようにしている。
彼女自身も、バウマイスター伯爵家に嫁ぐのは嫌なのであろう。
「（いえいえ。俺はあなたに興味が無くなりました……）」
『さらば、俺の元彼女に似た人よ』という感じである。
こうして、人は過去を捨てて大人になっていくのだ。
「ヴェル様？」
「ヴィルマは、可愛いなぁ……」
「ちょっと恥ずかしいけど、いい……」
近くにいたヴィルマの頭を撫で撫ですると、彼女は嬉しそうに顔を赤らめていた。
だが、あの男がこの程度で引くはずはなかった。
「（ヴェルは俺の親友だよなぁ。カルラさんが俺に嫁ぐ障害を排除してくれて）」
エルは、嬉しそうに俺にお礼を小声で言っていた。

「（カルラさんはベンカー家の娘になったけど、確実にエルの奥さんになるというわけでは……）」

家格的には問題は無くなったと思うが、問題はカルラ本人にその気があるかである。

ベンカー家の当主に命じても、その気になれば一人で生きていける彼女が受け入れる保障も無い。

それに……。

「（エルだと脈が無い。確率は一割を切る）」

ヴェルマの勘の鋭さは本物なので、そう外れた予想でもなかった。

「（大丈夫だって。ヴェルが場を整えてくれたんだから、あとは俺が男を見せる時だ）カルラ様ぁーーー」

そう言い残すと、エルは早速カルラに話しかけていた。

「（どう思う？　ヴィルマ）」

「（エルが自分でやると言ったから、任せればいい）」

今の俺の力なら、強引にベンカー家に頼む事も可能ではある。

だが、カルラに無理強いはしたくないし、親友であるエルには自力で恋愛を成就して欲しい。

「（それに、エルにもプライドがある）」

俺の命令で強引にカルラを嫁がせるとなると、それはエルの男としてのプライドを傷付ける事にもなる。
ヴィルマの指摘は、相変わらず鋭かった。

「（エル。頑張ってくれ）」

俺は、カルラに懸命に話しかけるエルを見る。
ブロワ家の問題はほぼ解決したものの、俺の悩みはまだ完全に解決していなかった。

「では、あの二人に引導を渡しに行くとするのである！」

「導師。ぶっちゃけたな」

「それにしてもあの二人。慌てて戻って来ると思ったのだが……」

ヘンリックの魔道飛行船の中で、導師とブランタークさんが話をしている。

新ブロワ辺境伯であるゲルトさんによる領内の掌握は、ほぼ完了していた。
わずか一週間で、フィリップ派とクリストフ派による争いは影すら消えて、表面上は新当主に忠誠を誓っている。

いきなりのクーデターで対応が出来ず、今は仕方なく従っている者もいるかもしれないが、時間が経てば経つほど反逆など不可能になる。

王家から襲爵された正当性に、紛争でブロワ家に完勝した俺達が手を貸したのだ。
今の当主ならば徐々に関係改善も進むとなれば、陪臣達はゲルトさんが当主になるのを認めるしかない。

それに、今居ない重臣達は改易と没落が決定している。
今の内に貢献して、あまり腹心がいないゲルトさんに引き上げて貰おうと、懸命に働いている者も多かった。

「情報が流れていないのですかね？」

「さすがにそれはないと思います」

導師達の横で、俺とゲルトさんも話をしていた。
突然のクーデターで、こちらに付かなそうな親族や陪臣達は捕らえたとはいえ、それは全員ではない。
逃げ延びた者が、裁定交渉に出ている二人に報告をしている可能性は高かった。

「抜け出せないんだろう」

一度目の裁定案を夜襲で反故にしているので、二度目でブロートリッヒに勝手に戻るわけにはいかないのであろう。
ブランタークさんは、そう予想していた。

「自分達が戻れば、大半の家臣達は自分達を支持しているのだからと高を括っているかもしれぬ」

基盤が脆弱なゲルト政権など、簡単に覆せると思っているのかもしれないと導師は語っていた。

「本当にそうなのですか？　導師」

「そう思いたいのであろう」

ところが、その忠実な家臣達も大半は第三の新当主を受け入れている。

それを認めれば家が繋がるので、無理に逆らうような無謀な行動はしないわけだ。

「残っていた連中の大半は、元々どっちが継いでもあまり立場に違いが無いのである」

フィリップかクリストフが新当主になれば重用される可能性があった者達は、ほとんどが出陣中だった。

残っていた者達からすれば、上を追い落とすチャンスでもあったのだ。

家臣の枠が決まっている以上は、この滅多にない上級陪臣の脱落は中堅・下級陪臣である彼らにとってチャンスというわけだ。

「先代と血縁のある連中も全て没落決定である！　まあ、あれだけの騒ぎを起こして一族皆殺しにならないだけ幸運であろう」

停戦前ならば、確実に血の粛清が行なわれていたであろうと導師は説明していた。

「ヴェル様。そろそろ到着する」

「半月前と変化無しかよ……」

ヴィルマの報告を受けて、俺は魔導飛行船から下の景色を見る。
裁定交渉を行っているテントと両軍の陣地なども、俺達がヘルタニア渓谷を目指す前と全く変化がなかった。

「そうなんですか。俺はどちらかと言うと……」

「エルぅーーー。到着したぞ」

「えっ！　もう？」

カルラを捕まえて楽しそうに話をしているエルを引っ張ってから魔導飛行船から降りると、すぐにブライヒレーダー辺境伯が出迎えてくれる。

「ようやく、交渉が纏まりそうな方の到着ですか」

「新ブロワ辺境伯ゲルト・オスカー・フォン・ブロワです。色々と面倒をかけて申し訳ない」

王国から支給されたマントを着けたゲルトさんを見て、ブライヒレーダー辺境伯は心から安堵の表情を浮かべていた。

「それで、どうなっているのです？」

「毎日毎日、意地汚く値下げしてくれと五月蝿いんですよ」

二人とも、この件では協調路線をとり始めていて、いい加減に嫌になっていたようだ。

「そうですか……」

「早速に、交渉を始めましょうか」

交渉が行われている大型テントに入ると、すぐにフィリップとクリストフが騒ぎ始めていた。

まさか、クーデターを起こした首魁がここに来るとは思わなかったのであろう。

「叔父上！」

「私達の留守に反乱とは許しがたい！　縛り首も覚悟していただく！」

今にも掴みかからんばかりの勢いであったが、それはゲルトさんが連れて来た家臣達によって止められていた。

「フィリップ。クリストフ。私は既に、王家から襲爵を認められた身なのだが」

「そんなわけがないでしょうが！」

「計算が合わない！　そのマントは偽物ではないのですか？」

「クリストフ。お前は、陛下が下賜なされたマントを偽物と言うのか？」

「時間が合わないじゃないですか！」

クリストフの言う通りで、普通に魔導飛行船で王都に向かい、陛

下の空いている時間を待って襲爵の儀を行なっていたら間に合うはずもなかった。

「なぜかな？　私は、『瞬間移動』が使える冒険者に依頼して王都に向かったのだが」

「まさか……」

「どうも、伯爵兼魔法が使える冒険者です」

「バウマイスター伯爵……」

俺は、新ブロワ辺境伯が早く襲爵できるように依頼を受けて彼を王都に運んだ。

公式には、そういう事になっていた。

「私も、新ブロワ辺境伯の襲爵の儀には同席していましたしね」

俺は、自分の携帯魔導通信機を魔法の袋から取り出して彼に見せる。

「まだお疑いなら陛下に直接お尋ねしてみますか？　『私の叔父は、本当にブロワ辺境伯の爵位を襲爵したのでしょうか？』と。お尋ねしてもいいですけど、最悪首が飛ぶ事も覚悟してくださいね」

「……」

クリストフは、俺の言葉を聞くとその場にうな垂れてしまう。

そんな事を聞けば、陛下の権威を否定した事になる。

たかが辺境伯の次男程度なら、簡単にクビが飛ぶであろう。

「貴様！　貴族として、恥ずかしくないのか！」

残りのフィリップが俺に怒鳴りつけてくるが、これにも俺は冷静に返していた。

「先に人の実家にちょっかいをかけておいて、自分が仕返しされないなんて幸運。本当にあると思っているので？　心ならずも貴族になってしまった以上は、貴族として動くしかないでしょうに」

「うちの者達を百名近くも殺しやがって！」

「掟破りはそちらが最初でしょう。なるべく殺さないようにどれだけ苦労したと思っているのです？」

「……」

「バウマイスター伯爵の言う通りですね。その気になれば、ド派手な上級広域魔法で、そちらは全滅でしたよ」

ブライヒレーダー辺境伯の指摘に、フィリップは気まずそうな表情を浮かべる。

彼に従っていた家臣達は、次第に彼と距離を取り始めていた。

どうにか、新しいブロワ辺境伯に助けて貰いたい心境なのであろう。

クリストフの方も、次第に家臣達が離れ始めていた。

「我が家の資産であったヘルタニア渓谷を！」

「それも、バウマイスター伯爵が大金と労力を使って開放しなければ不良債権でしょう？　報告は聞きましたが、五名の優れた魔法使いに牽制のための大軍と。そういう物を上手く揃えて作戦を行なうのが貴族だと私は思いますよ。軍人として優れているはずのフィリップさんが、そんなおかしな因縁をつけるのですか？」

「……」

ブライヒレーダー辺境伯の指摘に、フィリップはまた口を噤んでしまう。

「もうこの辺でいいでしょう。このお二方は、交渉に参加する権利すらないのですから」

「そうですね。彼らの処分はブロワ辺境伯殿の管轄でしょうし」

今まで静かにしていたクナップシュタイン子爵の最終宣告により、二人はゲルトさんが連れて来た兵士達によって身柄を拘束されていた。

「あとは、ゴドウィン以下の諸侯軍幹部も、解放後に身柄を拘束」

その後は、ようやくまともな交渉が行なわれていた。
もういい加減に疲れていたのであろう。
ブライヒレーダー辺境伯は、新ブロワ辺境伯のために和解金を少し下げていた。
新当主となった彼に手柄を与えて、早く東部を安定化させて欲しい。
そうなれば、交易なども活発になって減額分などすぐに戻って来るのだから。

「とにかく疲れました……」

「書類でも見ながら居眠りをしていれば、ある程度のお金がいただける。夢のような立場だったのに……」

紛争のせいで大損をしたブライヒレーダー辺境伯に、バカな甥達の自爆で継ぎたくもない爵位を継がされたゲルトさんと。

確かに、誰も得などしていないのだから。

「バウマイスター伯爵は、ヘルタニア渓谷という有望な資産を得ましたか」

「それなりに苦労しているんですよ」

「それはわかっていますから、少し噛ませてくださいね」

鉱山技師、工夫、精製を行なう技術者と。

足りない尽くしなので、紹介して貰う必要があった。

「鉱山が閉山して行き先ない人とか、結構いますからね。ヘルタニア渓谷は何百年も大丈夫でしょうし」

失業者対策になると、ブライヒレーダー辺境伯は嬉しそうであった。

「さて、捕虜を返還して戻りますか」

交渉が纏まり、捕虜が開放されて新ブロワ軍へと再編成される。

最初はカルラが飾りでフィリップの牙城であった諸侯軍であった

が、幹部達は全て捕らえられ、残った家臣達は新しいブロワ辺境伯を認めている。

現状維持なら勿論、紛争に関わり過ぎて家禄が減少した者達も、エチャゴ平原に作られた縛り首用の処刑台を見て逆らう気力すら無くしていた。

その前に、もう紛争と捕虜生活に疲れていたのであろう。

無表情で処刑台を見ている。

「フィリップ様！　私は、娘をあなたに嫁がせたではないですか！」

従士長のゴドウィン以下八名は、叫びながら縛り首とされていた。

両軍に公開となったのは、少しでもブライヒレーダー辺境伯家側に納得して貰うためだ。

「些か数が少ないですけど、あとの幹部連中も役職剥奪に減給ですからね。さて、見ていてあまり気分の良い物でもありませんし、帰りますか」

縛り首となってプラプラと揺れている戦犯達を確認してから、俺達はようやく自分の領地へと戻れる事となる。

ヘンリックの魔導飛行船で飛び立ってから下を見ると、処刑台ではまだゴドウィン達の死体がプラプラと揺れている。

俺は視界を逸らして、すぐに忘れようと努力するのであった。

幕間二十四　とある貴族の慣習について。

「どうも初めまして。アルトゥル・フォン・ベンノ・バウマイスターです」

「こちらこそ初めまして。アマデウス・フライターク・フォン・ブライヒレーダーです」

思えば、妙な挨拶である。

今は隠居の身だが、バウマイスター騎士爵家の当主を三十年以上も務めたのに、寄り親であるブライヒレーダー辺境伯との初めての顔合わせ。

普通ならばあり得ないが、以前のバウマイスター騎士爵領とブライヒレーダー辺境伯領との間にあるリーグ大山脈がそれを現実の物としていた。

思い起こせば、父の急死後に襲爵の儀に出るため王都に向かう途中、挨拶をしたブライヒレーダー辺境伯は先代であった。

ブライヒブルクに帰る商隊に同行し、当時はまだ同じく若く山越えに慣れたクラウスと共に先代に挨拶をし、王都行きの魔導飛行船の便が出るまで屋敷に泊めて貰ったのだ。

少しは費用が浮いたが、往復の魔導飛行船の料金が二人分に、王都での滞在費と。

本当は一人で行きたかったのだが、さすがに貧乏騎士でも一人での王都行きは躊躇われ、その分費用は高くついた。

それでも父が先に病死していたので、一刻も早く襲爵の儀を受けないといけなかったのだ。
鎧や剣が入った箱を重そうに担ぐクラウスは、私が全ての経費を負担するのを見て申し訳なさそうにしていた。

普通、従者がそんな事など気にするはずがない。
それほどうちが貧乏だという事だ。

ただ、私が生理的に合わないと思っているクラウスのそういう視線を見ると、バカにされたようで腹が立ってしまったのも事実だ。

クラウスは優秀ではあるが、私とは反りが合わない。
一番最初に強く認識したのは、この時であろう。

ブライヒレーダー辺境伯家の重臣達も、私を見てバカにしたような視線を向けていた。

仕方が無いと言えばそれまでだが、やはり頭に来るものである。

ただ、そんな気に食わない連中も先代ごと魔の森で戦死している。
うちも大打撃であったが、ただ一つ溜飲が下がったのも事実かもしれなかった。

「バカな跡取りの暴走を抑えられず、無能な先代ですよ」

「ええとまあ……。あの立地では、私でも似たような結果になったかなと……。ヴェンデリンさんでもないと」

今代のブライヒレーダー辺境伯は、若いながらも先代ほど傲慢な人物ではないようだ。

こんな、無能な隠居ジジイに気を使うくらいなのだから。

「お気遣いは無用です。私は、ヴェンデリンに継がせるという決断が出来なかった。無能な元当主なのですから」

「それをすると、それはそれで反発が多そうな気もしますが……」

「他の兄達。出来ればエーリッヒですか。あいつに継がせていれば、ヴェンデリンを上手く使ったでしょうね。愚痴は止めましょう」

「そうですね」

もう既に実現不能な仮定の話は止めて、実は私がブライヒレーダー辺境伯に呼び出されたのは、ヴェンデリンの父親として大切な事を決めなければいけないからであった。

今までなら、いきなりブライヒレーダー辺境伯に呼び出されても僅か一日でブライヒブルクに辿り着く事など不可能であった。

それが今では、私が移り住んだパウルの新領地も合わせて定期的に来る魔道飛行船に乗ればすぐに到着するのだから。

高山病の危険と、野生動物やワイバーンの襲撃に備えながら大リーグ山脈を越える必要がなくなったのだ。

領地の開発も、ヴェンデリンの魔法のおかげで順調に進んでいる。

パウルは元警備隊の同僚達やその知己を呼び寄せて家臣団を形成し、クルトの事件に連座してバウマイスター騎士爵領にいられなくなった領民達も受け入れ、今では人口が二百人を超えている。

クルトの死から僅か二ヶ月ほどで、驚異的なスピードと言えよう。

「問題は、『あてがい女』の件ですよね？」

「まあ、そういうわけです」

あまり良い風習とはいえないが、『あてがい女』とは貴族の跡取りなどが結婚をする前に、そういう事を教える女の事である。

教えないで失敗してしまい、その結果子供が出来ないと大変なので、王族、貴族、商人、大豪農などの跡取りにそういう女を宛がうのだ。

大抵は跡取り長男だけにあてがうが、経済的に余裕があると次男や三男にもあてがう家もあった。

この辺は、ケースバイケースとも言える。

ただ、その選定条件は厳しい。

目の前にいるブライヒレーダー辺境伯に相談しても、彼も思案に耽るくらいの問題なのだ。

まず、商売女は駄目である。

病気の問題があるからだ。

性根に問題がある女もいるので、その関係を大々的に世間に吹聴したり、最悪それをネタに強請る可能性もあった。

次に、素人でも欲の深い女や口が軽い女も駄目だ。

どうせ領内で噂になって知られてしまうが、公式には妾でもないので、後で結婚した妻達と対立などされたら目も当てられない。

男の方が初めての女なので妙に気に入ってしまい、強引に妾にしようとすると、奥の序列が乱れて争いの原因になる事もあった。

女自身が野心を抱いて、男を誑かす案件も決して少なくは無かったのだ。

「領民で未亡人とかいませんか？」

「いるにはいますが、あの事件の係累の妻とかですよ」

ヴェンデリンを暗殺しようとしたクルトの共犯の元妻達なので、さすがにあてがうわけにもいかなかった。

「私は男なので相談には乗りますが、うちで紹介するのは厳しいですね」

昔のバウマイスター騎士領の跡取りなら、ブライヒレーダー辺境伯もすぐに推薦してくれたはずだ。

だが、今のヴェンデリンの影響力を考えると、下手な『あてがい女』を紹介してその女が余計な事をすれば、非難を受けるのはブライヒレーダー辺境伯になってしまう。

彼も、余計なリスクは取りたくないであろう。

かと言って、私にもそう当てがあるわけでもないのだ。

何しろ今の私は、ただの隠居ジジイなのだから。

「本とかを渡してお茶を濁しません？」

子供全員に『あてがい女』など不可能なので、大抵次男以降はそういう本を見て予習する。

妻になる女性側も、嫁入り前にそういう本を母親から見せられて学習するのだ。

「大変に個人的な話で恐縮ですけど、アルトゥルさんはどうでした？」

「特定の『あてがい女』はいませんでしたよ」

私が若い頃には、領内の南部出身の女性達は性に奔放だった。

人妻なのに、平気で浮気をするのだ。

しかも、女性からの誘いを断ると失礼に当たるとかで、私も随分と相手をしたものだ。

もっとも、司祭であるマイスター殿に知られて、その風習は一気に廃れてしまったのだが。

あの頃の私は、まあ若気の至りという奴であろうか？

『何たるふしだらな風習！　その行為を神に向かって堂々と口に出来るのですか？』

当時から老人であったマイスター殿は普段は温和であったが、この時ばかりは烈火の如く怒り、村人達も怯えてしまったほどだ。

クラウスの奴は、そんな私を非難めいた目で見ていたようだが、なら代わって欲しかったとも当時は思ったものだ。

人が領内の融和のためにどれだけ苦労しているのか知ってる癖に、本当に嫌な男であった。

「私には普通にいましたね」

跡取りであった兄が病弱で、予備扱いの自分にもそういう女が宛がわれたそうだ。

「とある小身の陪臣の娘でして。若くして夫を亡くして未亡人だったのです」

そういう事を教えるので、当然経験がある女性が選ばれる。

更に旦那がいると話がややこしくなるので、必ず未亡人が選ばれるのだ。

「私の結婚と同時に関係は終わって、迷惑料的な物を払って終わりですね」

その女性は、今はとある老齢な陪臣の後妻になっているそうだ。

勿論、その陪臣共々言い含められているので大人しくしているらしい。

大人しくさせられるという点で、私はブライヒレーダー辺境伯家が羨ましかった。

「クルトさんは？」

「そういう余裕がなく……」

狭い孤立した領地なので、そういう女をあてがうと問題が表面化しやすい。

なので、本を渡してお茶を濁していたのだ。

思えば、そういう部分も含めてクルトがおかしくなった原因なのかもしれない。

自分は貴族家の跡取りなのに、なぜ他の家の跡取りと待遇が違うのかと。

まさかとは思うが、それが原因ではないと百％断言できない辛さ

があった。

「アルトゥルさん自身に準備して欲しいところですね。ただ……」

「バウマイスター伯爵家周りは避けたい……」

新興伯爵家で新規の家臣ばかり大量にいるので、そこの縁から決めるとトラブルが発生する可能性があるからだ。

下手にどこかの貴族家と縁がある女だと、新興のバウマイスター伯爵家相手なのでそれをネタに出しゃばる可能性が高い。

家臣団の形成が終わっていないので、その縁で重臣に成り上がる可能性があるのだ。

お気に入りの妾になって子を産み、その子を強引に跡取りにして外戚として力を振るう。

良くある話だが、その手の危険性は避けるべきであろう。

「困りましたね……」

「ええ……」

懲罰的な意味を込めて、先日の共犯者の妻達でも良いかなと思ったのだが、よくよく考えると年齢が釣り合わなかった。

あの連中は若くてもクルトと同年代だったので、その妻達はみんな三十歳超え。

こう言うと失礼だが、三十歳超えの大年増を押し付けて、ヴェンデリンが女に興味を無くしても意味が無いのだから。

「ヴェンデリンさんは、まだ十五歳ですしね」

最高でも二十代で、それなりに器量も無いと『あてがい女』など付ける意味が無いのだ。
本当に、面倒な慣習だと思ってしまう。

「うちのブランタークのツテで……。止めときましょう……」

「あのお抱え魔法使い殿ですか？」

「究極の独身主義者なので、商売女しか紹介できない可能性が……」

確かに、それは止めた方が良いと私も思う。

「領民の中でか……」

とはいえ、既にヘルマンが当主になっているバウマイスター騎士爵領内のツテは使えない。
あの領地は、もうヘルマンの物なのだから。

「今、ふと思ったのですが、あの方はどうなのです？」

ブライヒレーダー辺境伯殿は、ある人物の名を挙げていた。
確かに、あの人物ならば条件に合致する。
ただ、本人がそれを受け入れるかという問題があった。
何しろ、あんな事件があったばかりなのだから。

「本人に聞いてみたら如何です？　『案ずるよりも、産むが易し』と言うでしょう？」

「そうですな」

結局、それが駄目なら本でも渡すかという結論に至り、私はブライイヒブルクで家族にお土産などを購入してからパウルの領地に戻るのであった。

「私がですか？」

「この時期に、こういう事を頼むのは悪いとは思うのだが……」

パウルの領地へと戻った私は、妻や孫達にお土産を渡してから、その人物を密かに人気の無い場所に呼び出していた。

その時に、妻は嫌な顔をした。

私が隠居をしてここに引っ越す時にレイラを連れて来なかったので、今度は彼女に手を出すのではと思っているようなのだ。

確かに女は嫌いではないが、さすがにその辺の部分は弁えているつもりだ。

レイラの件だって役得ではあったと思うが、バウマイスター騎士爵領の安定した統治のために冷静な判断して決定したのだから。

間違いなく、レイラの方もそういう風に思っていたと思う。

ちゃんとクラウスの跡取りとなる息子達を産んでくれたが、それは彼女の中では仕事であったのだと。

現に当時から、本屋敷に住めなくても何の不満も漏らさなかったのだから。

子作りのためにだけ顔を合わせるくらいで、ちょうど良かったのであろう。
それでも、彼女はちゃんと仕事をしたのだ。
隠居した私に付いて来なくても、特に不満はなかった。

レイラの事はそれで良いのだ。

問題は妻だ。
五十歳の半ばを超えたジジイに、余計な心配をして欲しくない。
今の私は孫達に弓や剣などを教え、空いている時間に開発の手伝いや、狩猟や採集による食料の確保などを行っている。

あとは、五十の手習いで漢字や計算なども習っていた。
教師役は妻であったが、今にして思えば彼女にこういう仕事をやらせておけば良かったようにも思える。

領主の時は、いつも精一杯で気が付かなかったのだ。
あとは、当時のバウマイスター騎士爵領では、保守的な領民達の反発であろうか？

今では、その手の連中はヘルマンによって意図的に隠居させられて力を失っている。

このパウルの領地は、まだ開発が始まったばかりで常に人手が不足している。
なので、妻などの女性が書類仕事を手伝ってもあまり問題視されていなかった。

これも、時代の流れなのであろうか？

話を戻すが、父親としてバウマイスター伯爵になったヴェンデリンに『あてがい女』を付けなければいけない。
しかも、妻や他の女性達にあまり知られないようにコッソリと行う必要があるのだ。

どうせ隠し切れないが、あまり堂々と頼むのもおかしいので、こういう風に密かに候補者を呼び出す羽目になってる。
大貴族だと、信頼できる陪臣などが勝手にやってくれるのであろうが、生憎と今の我が家では不可能であった。

「夫を亡くしたばかりなのに、こういう事を頼むのはすまないと思う……」

私がヴェンデリンの『あてがい女』になるように頼んでいたのは、自爆したクルトの妻であったアマーリエであった。
彼女は、かなり条件合致するのだ。

まず、クルトの元妻で子供も二人いるので経験者である。
未亡人で騒ぐ旦那もいないし、暗殺未遂事件の主犯であるクルトの妻であるが、他の共犯達の妻と違って彼女は貴族である。
もし周囲に知られても、亡くなった夫の代わりにヴェンデリンへの罪滅ぼしをしているという風に受け取られるので得であった。

年齢も二十七歳で、しかも彼女は童顔で若く見えるので大年増には見えない。
それほど美人ではないが、可愛らしいタイプでヴェンデリンとも仲が良かった。
彼女も本を良く読む人間なので、ヴェンデリンと趣味も合っている。

彼女なら、最適だと思うのだ。

「はい。お引き受けします」

意外にも、彼女はすんなりと私の要請を受け入れていた。
安堵していると、彼女はその理由を話し始める。

「お義父様には申し訳ないのですが、当然打算はあります」

「当然だな」

彼女には、クルトとの間に残された二人の息子達がいる。
ヴェンデリンの甥にあたり、成人後には彼女の実家であるマインバッハの姓を継いで領地を分与される予定であった。

ただ、その約束が確実に履行されるかと聞かれると、私もすぐに首を縦に振れなかった。
ヴェンデリンには、これからも妻が増えていくと思う。

あいつがどんなに断っても、全くゼロになど出来ない。
なぜなら、それが貴族社会という物だからだ。

当然、子供が沢山生まれるであろう。
そして彼らは妻の身分によって分家を立てたり、まだ未開発の土地が多い領地を分与されたりするはずだ。
もし自分の子供達を優先した結果、甥達に領地を分与するのが惜しくなったとしたら？

酷い話だが、その時点で大貴族になっているヴェンデリンに苦情

を言っても無駄であろう。

だからこそ、彼女は自分の身を差し出して孫達の未来を確実な物にするのだと。

ヴェンデンにも立場がある以上、そういう関係になった女性の願いを無下にする可能性は低くなる。

打算と言えば打算だが、そこには母親としての優しさもあったわけだ。

「すまない。苦労をかける」

うちに嫁いだばかりに、彼女には苦労のかけっ放しだ。

まさか、貴族の娘が藁で縄を編むなど思いもしなかったであろうし、食生活は貧しいし、我が息子ながら夫のクルトは駄目な男であった。

もう手に入れたも同然の爵位と領地を失い、弟への暗殺を企んで逆に始末されるなど、私としても庇いようがなかったからだ。

更に、あいつの死後に私が密かに後始末をした問題もある。

普通なら問題にもならないのだが、あいつがバカな事をしたせいで余計に評価を落とす事になっていた。

「ヴェンデリン様が、いつお渡りになられるかはわかりませんが……」

それは、私でスケジュールを調整しないと駄目であろう。

あまり妻にも大っぴらに言えないし、パウルには伝えておく必要があるが、彼の妻にもなるべく最初は伝えたくない。

どうせ暫くすればバレるが、最初は騒動は少ない方が良いであろう。

「心の準備だけはしておいてくれ」

「わかりました」

私は義娘にそれを伝えると、急ぎ準備を始めるのであった。

『というわけなのだ』

「はあ……」

今日も今日とて俺が土木工事に勤しんでいると、突然魔導携帯通信機の呼び出しアラームが鳴った。

急いで出るとなんと父からで、隠密にとても重要な要件があるそうだ。

ただ、俺にはその重要な要件とやらが思い付かなかった。

父はもう引退していて、パウル兄さんの領地で開発の手伝いをしているくらいだ。

一部にしか渡していない魔導携帯通信機であったが、実は父には渡していない。

パウル兄さんには渡していたので、多分彼の物を借りて連絡をし

ているはずだ。
となると、パウル兄さんも承知している案件という事になるのか？
その要件とやらの詳しい内容を聞くと、直接顔を合わせて話をしたいそうだ。
「エリーゼ、今日は屋敷に戻らないかも」
『わかりました』
話は聞かないと駄目だと思い、土木工事を終えた俺はエリーゼに魔導携帯通信機で連絡を入れてから、パウル兄さんの領地へと魔法で飛ぶ。
パウル兄さんの領地はまだ開発途上ではあるが、領内は活気に満ち溢れていた。
警備隊で知り合った人達などで家臣団を形成し、パトロールや取り締まりで知っていたスラムの住民などを連れて来て農地などを耕させていたのだ。
家屋や道などの整備も続いていて、領内の中心部では屋敷の建設も急ピッチで進んでいる。
今はレンブラント男爵が移築した古い家で政務などを行っているのでそこに顔を出すと、父とパウル兄さんが待っていた。
「良く来たな」
「あの……。どのような用件で？」
「ええとだなぁ……。パウル」

「はあ……。お茶とかいらないから外に出てろ。ドアの外で盗み聞きする奴がいないようにな。お前達は、漏らしたらわかっているな？」

パウル兄さんは書斎から使用人達を出すと、彼らに入り口で盗み聞きがないか見張っていろと命じていた。

どうやら、とても重要な話のようだ。

「外部に漏れると大変なのですね？」

「そうだな。知る人は少ない方が良い」

父の表情は神妙なままであり、よほど大切な話らしい。

「それで、その内容とは？」

「ヴェンデリンは大貴族になった。それも、広大な領地を持つ伯爵様だ」

「はあ」

「大貴族になるとだな。特に大切な事がある。わかるか？」

「円滑に領地を治める事ですか？」

「それは勿論大切だ。だが、その前に子を成して次代以降も家を存続させる必要があるわけだ」

「エリーゼ達がいますけど」

父の発言を聞き、俺は彼が側室を押し込むのではないかと思ってしまう。

「いや。誤解を与えたようだが、側室とかそういう話ではないのだ。結婚をするにあたり、無事に子を成せるようにだな……」

どうにも父の話が要領を得ないので首を傾げていると、横で見ていたパウル兄さんが助け舟を出す。

「簡単に言うと、ヴェルが童貞のままじゃ拙いと。そういうわけだ」

「女でも買いに行けと？」

父や兄から言われて女を買いに行くというのも嫌だし、ブランタークさんやエルでもあるまいし、今の俺には難しい事であった。

それに、この体が童貞だが、前世では多数とは言わないが経験が皆無というわけでもない。

余計な心配とは思うが、まさかそれを教えるわけにもいかないので、どう断ろうかと思案に耽ってしまう。

「さすがに、伯爵様に女買いを勧められないのは私にでもわかっているぞ」

「では、本で学習しろとか？」

そういえば、実家の書斎にはそういう本も存在していた。

表紙が見えないように本棚の奥に横にして隠してあったのだが、俺からするとイラストが微妙過ぎて見る気がしなかったのを覚えて

いる。

日本がその手の分野では最強だという事を、改めて思い知らされた瞬間であった。

「いや、そういう時のための『あてがい女』である」

何となくではあるが、言葉面で大体意味が想像できてしまう。

要は、結婚前にそういう女性を相手にして経験値を稼げという事なのであろう。

「初めて聞く言葉ですね」

「うちは、貴族でも最下級だったからな」

パウル兄さんが説明してくれるが、『あてがい女』とは貴族家などの嫡男に未亡人などを宛がう慣習なのだそうだ。

経験のある女に、経験の無い男の相手をして貰う。

ただし、その嫡男が結婚するまでに極秘裏にだ。

完全に秘密にするのは不可能であったが、なるべくその存在を結婚する妻達などに見せないようにする。

期間限定の、妾のような物であると思われる。

「はあ、経験のある女性にですか……」

「未亡人などが多いな」

旦那がいると面倒だし、経験の無い女をあてがっても意味が無い

わけで、自然と未亡人が務める事が多くなったと思われる。

「（しかし……）」

ここは、ブライヒブルクや王都ではない。

経験のある未亡人という括りだと、とんでもないおばさんが現れる可能性を考慮しないといけない。

思えば、前世で新入社員の頃、会社の上司に飲み会の帰りに風俗に連れて行って貰った事がある。

その某上司氏によると、大変にサービスが良い美熟女が多く在籍していて評判のお店らしい。

別にＥＤでもないし、普通に興味があったのでワクワクしながら相手の女性を待っていると、そこに俺の母親よりも年上のピグモンが現れた。

何という、孔明の罠！

俺はこの店に案内した上司氏に、心の中で呪詛の言葉を吐く羽目になる。

何とか何もしないで誤魔化そうとしたが、ピグモンはえらく職務に忠実だった。

結局、同期入社した綺麗な女性社員を思い出しながら事を終えたのだが、その時から俺は信用などしなくなった。

熟女とか未亡人が素晴らしいのは、あくまでも創作物の中だけなのだと。

「（父は、親切で言っているんだろうな……）」

多分、『あてがい女』がいないような貴族家の跡取りというのは、

一段低く見られてしまうのであろう。
ましてや、今の俺は伯爵である。

父は俺が恥をかかないように、そういう女性を準備したのだと。
その点は感謝しているのだが、かなりの確率でピグモンなのはいただけなかった。

「（俺、勃つのかね？）それで、その女性とはどんな人なのですか？」

「年齢は、ヴェンデリンの一回り上だな」

どうやら、熟女という名のおばあさんは避けられたようだ。
だが、現物を見るまでは全く油断はできなかった。

「年齢的に言うと、アマーリエ義姉さんくらいですか」

「そのアマーリエだ」

「えっ？」

「一番条件に適合したのがアマーリエでな。本人も了承した」

俺に女を教える人が、兄の未亡人という現実。
半分冗談で聞いたのに、まさかその人が『あてがい女』であると聞かされ、俺はその場で絶句してしまうのであった。

「パウル兄さん」

「すまん！　この件では、俺も手助けが出来ないんだ」

いきなり呼び出されて父の元に行ってみれば、俺に女を教える女性を付けると言われ、その人は俺の義姉だった。

まさか他の人に相談するわけにもいかず、更にもう結婚まで時間がないので、今日から相手をさせるからという話になっていた。

何とか阻止したいところだが、エリーゼに相談するのは不可能であり、まずは携帯魔導通信機を渡しているローデリヒに聞くと。

『その件では、拙者には手が……。完全に父親の領分なのです』と見事に見捨てられてしまう。

加えて、『奥様達には内緒にしておきますので』というフォローがあったが、なぜか何もありがたくなかった。

次に、ブランタークさんに聞いてみると。

『向こうが無料で用意してくれてんだ。ありがたくやっとけ。まあ、無料ほど高い物はないとも言うがな。その未亡人に誑かされるなよ』という、完全に他人事なアドバイスを貰ってしまう。

要するに、あまり気にしないで『やれ！』という事らしい。

ある意味、チョイ悪オヤジなあの人らしくはある。

『まだだ！　こういう時には！』

ここ一番で、困った時のエーリッヒ兄さんである。

彼ならば、何とか上手くかわす手を考えてくれるかもしれない。
そう思い、最後の望みを繋いで連絡を入れてみたのだが……。

『あてがいの女性は、絶対に断っては駄目だよ』

エーリッヒ兄さんからの優しくも強い忠告により、俺は全ての退路を断たれてしまう。

『隠居したとはいえ、父上は元家長としての責任でアマーリエ義姉さんに頭を下げたのだから』

『あてがい女』は、家を残すために父親が跡取り息子に与える一番格式が高いプレゼントとされるそうだ。
その割には秘密にしようとするのだが、家長が仕切って連れて来るのでそういう扱いになるらしい。

更に言えば、どこの家でもそう簡単に用意できる物でもない。
貴族家でも下級だと準備しない事も多いし、商人などでは大規模でないと準備できない。
財力やコネを使い、時には大失敗しつつも跡取りにそういう女性をあてがう。

『適当に選んで渡しているように見えるけど、父上は人選で苦労をしていると思うし』

それを断るのは、大変失礼に当たるそうだ。

『あのエーリッヒ兄さんも？』

『実は、義父がね』

父ではなく、ルートガーさんがそういう女性をあてがってくれたそうだ。
やはり未亡人でモンジェラ子爵のツテらしいが、密かに当主同士でそういうお願を融通し合うという事は、双方に信頼関係がある証拠でもあるそうだ。

童貞喪失の相手を知られているのだ。
貴族同士にとって、これほどの信頼関係も無いとも言える。

『ミリヤムには内緒だよ』

『同じ男として、それは勿論』

薄々勘付かれてはいるであろうが、それを口にしてはいけない。
そういうルールになってるらしい。

『気持ちはわかるけどね。ヴェルとクルト兄さんの関係を考えると。でも、周囲の貴族達は別に変だとは思わないし』

実兄の元奥さんなので倫理的な問題を感じてしまうのだが、この世界では特におかしいと思う人はいないそうだ。
その一族で一番力のある俺が、夫を亡くした兄嫁の面倒を見る。これは当たり前の事であったし、この世界はそんなに甘くは無い。ただ世話になるだけではなく、出来る事はちゃんとしないと『もう養い切れない』と言われて追い出されても文句は言えないのだと。

『アマーリエ義姉さんはパウル兄さんの領地で暮らしているけど、ヴェルが大分援助しているよね？』

『はい』

いくらとは言えないが、パウル兄さんへの援助に混ぜているのは事実だ。

『甥達は、成人後に領地を分与される。そうだよね？』

『はい』

『アマーリエ義姉さんとしても心配なんじゃないかな？　そんなムシの良い話って、まずないもの』

他の大貴族家だと、アマーリエ義姉さんのような立場の人はほぼ不遇な人生になるそうだ。

『長男の不祥事で本家の跡取りが末弟にチェンジしたけど、長男の幼い子供達が残っている、その末弟からすると、残された長男の子供達は邪魔だよね？』

自分の子供の相続を邪魔する存在なのだ。

下手をすると、病死や事故死などに見せかけて殺される事もあった。

『うちはその可能性は無いけど、甥達に無事に領地が分与されるかはヴェルにかかっている。でも、別に約束を反故にしても何の問題にもならないから』

将来その約束を反故にする頃には、俺の力は圧倒的に大きくなっている。

いくらアマーリエ義姉さんが文句を言っても、誰も聞いてはくれ

ないであろうとエーリッヒ兄さんは断言していた。

『俺は……』

『ヴェルはそんな事はしないと思うけど、万が一という事もある。アマーリエ義姉さんとしては保障が欲しいよね？』

俺とそういう関係になっておけば、ある種の弱みを握った事になり、無事に甥達に領地が分与されるであろうと。

『アマーリエ義姉さんは、子供達のために。ヴェルは、女性を教えて貰って役得だと思う。このくらいの方が、お互いに考え過ぎないで良いと思うんだ』

『なるほど……』

そういう関係になるのだから、せめて少しはアマーリエ義姉さんの事を女性としてなどと考えると、正直気が重かったのだ。

向こうもそうであろうし、ならばお互いに打算があった方が楽で良い。

なるほど、さすがはエーリッヒ兄さん。

イケメンなのは昔からだが、人生相談においてもその才能を発揮していた。

『あと、ヴェルも嫌いじゃないでしょう？』

『勿論』

そこは、全男性共通の事実だと思われる。

『なら、気軽に遊ぶくらいで良いんだよ』

『わかりました。ありがとうございます』

さすがはエーリッヒ兄さんだと思い通信を切るのだが、まさか彼にもそういう経験があるとは思わなかった。

『やはり、イケメンは得か？』などと考えていると、隣で通信を聞いていたパウル兄さんがなぜか肩を落としていた。

「パウル兄さん？」

「俺、そういう女性をあてがわれなかったなぁ……」

「パウル兄さんは、いきなり貴族になったから」

「前にさ。ヘルムートが言っていたんだよね。ヴィレムさんからそういう女性を斡旋されたって」

あの家にも世襲可能な職務があるので、子供が生まれないという悪夢を避けるべく、ヘルムート兄さんにそういう女性をあてがったようだ。

「ヴェルも、エーリッヒも、ヘルムートも羨ましいなぁ……」

「代わりましょうか？」

「代わってどうするよ？」

パウル兄さんが羨ましそうな顔をするが、同じ男としては物凄く

理解できてしまう。

「などと、羨ましがっている場合ではなかった。この小屋だけどな。新しく建てたけど、まだ使わないんだ」

まだ仮とはいえ、領主の屋敷でそういう事をするわけにもいかない。

そこで、将来夜間に警備を行う者達の休憩所にすべく領地の端に建てたこの小屋を暫く貸してくれるそうだ。

「最低限の物しか置いていないけどな。最悪、ベッドがあれば大丈夫だし」

ここを密会の場所に指定するそうだ。

なお、この情報を知っているのは父とパウル兄さんと一部の家臣達だけ。

どうせじきにバレるが、今は緘口令を敷いているそうだ。

「もう暗くなったし、もう少ししたらアマーリエ義姉さんも来ると思う。では、頑張れというのも変か？」

そう言いながら、パウル兄さんが小屋から出ていく。

一人残された俺は、緊張しながら彼女を待つのであった。

「（ヴェル君とねぇ……）」

私の名前は、アマーリエ・フォン・ベンノ・バウマイスター。

つい二ヶ月ほど前に、夫を亡くした未亡人です。
とはいえ、夫は病死や事故死ではありません。

貴族である実の弟を殺そうとして自滅したのです。

詳しい説明は省きますが、そのせいで私は暗殺未遂犯の妻、子供達は暗殺未遂犯の子となってしまいました。

普通ならば、私も子供達も死ぬまで肩身が狭い思いをしなければいけないのですが、幸いにして夫の弟さんの援助によってあまり不自由もなく生活しています。

私の夫に暗殺されかけた弟本人が、暗殺未遂犯の妻と子を養っている。
世間では、剛毅で懐が大きい人だと思われていました。
更に、子供達には将来領地が分与されるそうです。

とてつもない幸運だとは思いますが、同時にどこか不安も感じています。
もし将来、その約束が反故にされたら？

夫の弟であるヴェンデリン君はそういう人ではないと思うのですが、どこか心配でもあるのです。

ですが、彼は本当にえらくなりました。

彼と初めて会ったのは、私が夫に嫁いだ十八歳の時。
まだ小さくて可愛らしい子供なのに、彼は魔法で狩猟や採集を行い、貧しい実家の食卓に貢献していました。

お義父様やお義母様は、その才能が領内で争いを生むという理由で彼の行動に不干渉を貫き、彼自身も十二歳になると領外に出てしまいます。

その時の彼の表情は、晴れ晴れとしていました。

夫からすると、彼は自分の家督を奪う敵という認識だったのでしょうが、彼からするとあの領地は重荷でしかなかった。

そういう事だったのだと思います。

そして、一年もしない内に竜を二匹も討伐。

魔法使いとして不動の地位を築き、独自に爵位まで得ました。

夫はまた不安を再燃させたようですが、それはある意味正しかったと思います。

彼の意思は別にして、王都の大貴族達がその力を利用しないはずがないのだから。

予想通りに彼は実家に戻り、魔の森で依頼を受けたり、未開地の開発を始めました。

その成果に領民達は喜び、彼を新しい領主にと望むようになり、凡庸な跡取りでしかない夫は次第に追い詰められます。

可哀想とは思いましたが、これも貴族の宿命ですし、夫にはまだいくらでも生き残れる手段がありました。

どうせ開発できないのだから、未開地を分与するようにとお義父様に進言する。

そうすれば、王国の思惑である未開地の開発を彼に任せるという考えに賛同したと理解されて潰される心配もありませんし、バウマイスター騎士爵領への援助も行って貰えるはず。

ですが、夫はそれを選択できませんでした。
自分は長男であり、未開地の権利は王国が認めたもの。
だから、未開地も含めて全て自前で開発をして爵位を上げるのだと。

そして、それに弟である彼が協力して当然であると言って、既に双方の関係は敵対関係になっていました。

出来れば私も忠告はしたかったのですが、この領地では女が男に助言など、出しゃばりにも程があると言われてしまうだけ。

私は、毎日彼を罵りながら荒れ狂う夫から距離を置く事しか出来なかったのです。

そのせいもあってでしょうか？
私は、彼を夫の仇だとは思えなかったのです。

そもそも、最初に暗殺を企んだのは夫の方だったのですから。

「まさか、こういう事になるとは……」

「私も意外だったわ」

お義父様に言われて新築されたばかりの小屋へと向かうと、そこには彼が待っていました。
そう久しぶりでもないのですが、やはり正式に伯爵様になった事実は大きいようです。
責任が増えた分、大人びて見えるようになっていたのですから。

「ええと……。アマーリエ義姉さんは……」

「その話は止めましょう。堂々巡りだと思うから」

正当防衛とはいえ、自分の夫を殺した男という話なのでしょうが、それは既に過去の事でもう考えるだけ無駄なのですから。

「それにね。あの人は、この方面では誠実でもなかったし」

新婚当初は妻として大切にして貰っていたと思うけど、二人の子供を産むと、次第に女としては見られなくなっていたと思う。

特にこの二～三年ほどは、新しい愛人に夢中であったのだから。

「愛人？　そんな話は……」

初耳だったようで、彼は驚きの表情を隠せないでいました。

「言えるわけがないでしょう。お義父様が、事件後に密かに後始末をしたくらいだから」

『貴族には、複数の妻が必要だ！』という理念に基づき。

これがただの女好きだったのか、本当に貴族とはそういう物だと思っていたのでしょうか？

領内にある、貧しい農家の娘を密かに囲っていたのは事実でした。

夫はその存在を隠しているつもりでしたが、当然お義父様にはバレていて。

まあ、この手の話題はすぐに噂になるので隠せるはずもないのですが。

何でも、正式に領主になったら妾にすると言っていたそうです。

「悪い事ではないんですけど……」

「そうね……」

それならせめて、私達に隠す事なく自分の才覚だけでそういう女性を囲って欲しかったのものです。

ちなみにその女性は、事件後にある程度の慰謝料兼口止め料を貰って領外へと嫁いでいきました。

お義父様が、内密に処理したのです。

幸いにして子供は出来ていなかったので、それだけが唯一の救いだったと思います。

「二人も子供がいるのにあまり経験豊富じゃないから少し心配だけど、短い間だよろしくね」

「はは……。よろしくお願いします」

二人でぎこちない挨拶をしてから、私達は抱き合ってそういう関係になりました。

ヴェンデリン君の婚約者達の事を考えると少し後ろめたい気持ちもありつつ、実はまだ私も女なのだと思って安心も出来た。

子供達の件もあるし、彼が結婚するまではこの関係を楽しんでも良いかと思ったのです。

ところが、私や義父様の予想とは少しズレが出てきたような気がします。

彼が、妙に私を大切に扱うのです。

「アマーリエ義姉さん。色々とすいませんね」

「パウル様。お気遣いは無用ですよ」

ヴェンデリン君とそういう関係になってから一ヶ月ほど。

密会のあった翌朝に小屋の掃除をしていると、ここの領主であるパウル様が一人で姿を見せて声をかけてきました。

密会を行なう小屋には、パウル様の命令で一切の立ち入りが禁止され、普段は鍵がかかっています。

掃除などの管理は私の仕事で、鍵を持っているのは私とヴェンデリン様とパウル様だけ。

他にも魔導携帯通信機も渡されていて、彼が来る時には事前に連絡が入る仕組みになっています。

期間限定のあてがい女に高価な魔道具をとも思うのですが、これは将来的には子供達に渡される予定の物なので問題は無いとの事です。

「私は、かなり楽しんでいますから」

「凡庸だけど、親父の言う事は真面目に聞く。俺は、クルト兄貴の事をそういう風にイメージしていたんだけどなぁ……」

パウル様も、夫が私を放置して他の若い女を愛人にしていたとは思わなかったのでしょう。

「ですから、私は久しぶりに女なのだと実感できて嬉しいのです」

「アマーリエ義姉さんがそう言うのならいいか。しかし、この小屋は凄いね……」

最初はベッドくらいしかなかったのですが、今ではかなり豪勢になっていました。

『ベッドを交換しましょう。クッションとシーツと枕とかも。一番必要な物ですから』

ヴェンデリン君は若いのに、婚約者が複数いても式を挙げるまでは彼女達に手が出せません。

かといって、そういうお店にも行けない身分ですし。

その結果、かなりの頻度で私の元に来るようになり、そうなると小屋の状態に不満があるようで、次々と中の家具や備品を追加し始めます。

『高そうなベッドね』

『貰い物だから気にしないでください』

『貰い物か……』

こんな豪勢なベッド。

私は見た事がありませんでした。

バウマイスター家やうちの実家では、まず購入できないほどの高級品なのですから。

クッションやシーツなどの寝具類も全て最高級品で、洗濯などにも気を使ってしまいます。

『部屋が寂しいですね』

続けて、カーペット、壁紙、カーテンなども追加され、小屋は外見とは違って中身は豪勢になってきました。

『アマーリエ義姉さん。この小屋って一応風呂があるんですね』

『水汲みが面倒だけどね』

『浴槽が狭いし、汚い……』

別に備え付けてある浴槽は新しい大きな物に変えられ、それに合わせてタイルなども張られます。

『さすがに、浴室の内装はなぁ……。壁紙くらいは張れるけど』

ところがヴェンデリン様は、王都から風呂とついでにトイレの内装を行なう職人を魔法で連れて来たのです。

『何日かかる？』

『この広さなら、二日もあれば十分でさぁ』

『朝晩に王都に送り届けてあげるから、室内でこっそりと作業をしてくれ。日当は、相場の十倍出すから』

『へい！　綺麗に仕上げてみせますぜ』

魔法で自由に移動できるので、王都から職人を呼び寄せて浴槽とトイレなどの改装を行なわせていました。

『あのヴェンデリン様？』

『この職人さんなら大丈夫ですよ。そういう職人さんですから』

貴族や金持ちが、ちょっと家族などに知られたくない妾宅などの改装を高値で引き受ける代わりに、口が堅くて秘密を守ってくれる。

彼はそういう職人さんのようです。

「だから、この小屋って内装が素晴らしいのか。うちの新築中の屋敷よりも内装が豪勢な気がする」

パウル様は、ヴェンデリン様がその財力に任せて改装した小屋の内装に少し顔を引き攣らせていました。

「綺麗な箪笥ですね……」

「ええと……」

ヴェンデリン様は、私にアクセサリーや衣装などを良くプレゼントしてくれるようになりました。

『王都まで買い物に行きましょう』

『ヴェンデリン様は、お顔が……』

『大丈夫ですよ』

下着も、綺麗な物を着けていた方が良いそうで。

王都の高級店に、魔法で買い物に連れて行って貰いました。
生まれて初めての、子供の頃から憧れていた王都は、本当ならば高い魔道飛行船の運賃を払わないと行けませんが、ヴェンデリン様なら魔法で一瞬で到着してしまう。

『この指輪を付けてください。変装用の魔道具です』

大物貴族などがお忍びで出かける時に使う変装用の魔道具を使って、私を色々な場所に連れて行ってくれました。

『エリーゼ様達に悪いような……』

『俺は、土木工事で忙しいから』

ヴェンデリン様は、週に五回は夕方から就寝するくらいの時間まで私を連れてデートをしたり、あの小屋で密会を重ねていました。

『今日は、工事先で夕食を済ませると言ってあるから』

と言って、王都の高級レストランに連れて行ってくれたり。

『この下着は、少し派手ではないですか？』

『そんな事はないですよ』

エリーゼ様達には悪いなと思うほど、色々と買って貰えたりと。
数年前ならあり得ない生活なのですが、これも期間限定の泡沫の夢。
ヴェンデリン様が結婚するまでの事だと考えて、私はその幸せに身を任せました。

「あいつ。よほどストレスが溜まっているのかね？」

「かもしれません」

小屋にいる時はそういう事もしますが、軽食やお菓子を食べたりお茶を飲みながら話をしたり、買い物した下着や服などを私が着るのを嬉しそうに見ていたり、一緒にお風呂に入ったり。

まるで、姉というか母親のように甘えてくる事が多かったのです。

「子供の頃はえらく大人びた子だったけど、今になってバランスが取れている？　しかし、週に五回とか嫁達にバレないのかね？　ああ、家臣達がみんな誤魔化すのか」

「ローデリヒ様なら、上手く誤魔化してしまうのでは？」

「あいつは優秀だからな。でも、ヴェルがここに多く来ると助かる」

アリバイ工作も兼ねて、領内の土木工事を恐ろしい速度で前倒しして行なうので、パウル様からすれば大助かりなのは事実でした。

「あと、カールとオスカーが継ぐ領地にも既に基礎工事が入っているな」

私の子供達が継ぐ予定の領地は、ここの隣。

今は無人の草原ですが、既にヴェンデリン様が魔法で整地や区画整理などを始めています。

実は来年から、実家であるマインバッハ家に家臣や人手を出して貰い、開発を開始する事が決定していました。

長男のカールが成人したのと同時に、ある程度は開発が終わって

いるようにというヴェンデリン様の配慮なのです。
次男のオスカーは従士長として分家を創設する事になっていて、お義父様も出来る限りの協力は惜しまないと約束してくださいました。

「何か、アマーリエ義姉さんを利用してるようで悪いけど。しかし、あいつ。物凄くアマーリエ義姉さんを気に入ったみたいだな」

「でも、私は結構嬉しいですよ。女として求められていますから」

「あいつ。結婚後も関係を続けたりして」

「それは絶対に駄目ですよ」

あくまでも、ヴェンデリン様が結婚するまでの関係であり、関係をずるずると延ばしては双方にとって良くない事ばかり起こるからです。

「あの人の死で、私の女としての人生は終わったと思った。でも、この半年ほどでまた女に戻れた。この思い出を糧に、あとはマインバッハ騎士爵家を裏から支えます。上手くやれば、準男爵家くらいまでにはなれるでしょうし」

「そこまで思い詰めなくてもいいと思うけど」

「それに、ヴェンデリン様の婚約者達を侮ってはいけませんよ。女性の勘は鋭い物なのですから。期間限定なら、エリーゼ様などは気に入らないとは思っても目を瞑ってくださるでしょうし」

「そういうのは、俺にはなぁ。妻の考えている事とか良くわからな

いし。しかも、もう少ししたら側室でしょう。俺には、少ししんどいわ」

「駄目ですよ。パウル様は今をときめくバウマイスター閥の一員なのですから」

「弟の七光りだけどね」

まだ、ヴェンデリン様の結婚までには時間がある。

私はタイムリミットまでの時間を、出来る限り女として生きて行こうと決意するのでした。

亡くなった夫や、子供達には悪いと思いつつ。

「ふーーーん。アマーリエ義姉さんが、ヴェルのあてがい女にねぇ」

「貴族としては、悪くない人選でしょう？　ヘルムート兄さん」

ちょうどその頃、王都のとある酒場でヘルムートとエーリッヒがヴェンデリンのあてがい女について話をしていた。

「クルトの兄貴の不始末をその嫁が償うわけか」

「あまり公にはされていないけど、過去にはそういう人選も多かったそうだから」

「貴族的にはわかるけど、感情的にはどうなのかね？　ヴェルの奴、

ちゃんと出来ればいいけどな」

「ああ。それについては心配ないですよ」

「どうしてだ？　エーリッヒ」

「あてがい女はですね。私もヘルムート兄さんもそうだったでしょう？　内密の仕事だけど、それには報いますからという話が出る」

「俺の時もそうだったな。義父の知人で同じ森林警備をしている貴族の陪臣の未亡人ってやつ」

密猟者を捕らえる時に戦傷死してしまい、まだ子供が幼くて仕事ができないので、その間の生活費を補填する条件でヘルムートのあてがい女になった。

ヘルムートは、義父からそういう風に聞いていた。

「エーリッヒもそうか？」

「私の場合も同じような感じですね」

モーリッツ子爵の陪臣で若くして病死してしまった者がいて、その残された若い未亡人が相手であった。

やはり子供が幼かったので、その子が成人するまで家計の面倒を見るという約束であったと。

「一種の救済制度でもありますからね」

秘密を守ってくれれば、それなりの金を口止め料として支払う。

未亡人なので、残された子供達にためにほぼ百％約束を守ってく

れるのだ。

「そう言って、男の罪悪感を減らすと」

「みんな。そんな物でしょう。最初は、結婚する奥さんに悪いとか考えて」

「確かに考えた」

二人とも既に婚約者がいたので、まずはそれを思い浮かべてしまった。

「次にその人の事情を聞いて、これを断るのはもっと悪いと思ってしまう」

「思った。思った」

ここで拒否をすると、その女性と子供達の生活に関わるからだ。

「でも、みんな男ですからね。女性とそういう事が出来ると思うと、本能では大喜びであると。ヴェルも男ですから」

そんなわけで受け入れるわけだが、そういう事が嫌いな男はいないというわけだ。

「言えてる。俺もそうだった」

「私もそうですよ」

エーリッヒが語った真理にヘルムートは大笑いをし、二人は暫く

酒を飲みながら楽しく話を続けるのであった。

第七十四話　大お見合い会。

「まだかなぁ。カルラさん。早く来ないかなぁ」

あの面倒な紛争が終わり、ようやく通常の生活が戻ってくる。

延期されていた大お見合い会の準備もローデリヒによって進められ、それが三日後と迫った日。

エルは一人バウルブルク郊外の魔導飛行船専用の港で、しまらない笑顔を浮かべながら船の到着を待っていた。

ブロワ家によって翻弄されていた末の娘カルラが、このバウルブルクにお礼を言いに訪ねてくるという連絡があったからだ。

現在の彼女は、新ブロワ辺境伯によってブロワ家の籍から抜かれ、今は自由の身となっている。

先代の看病やお飾りの総大将をした謝礼をゲルトさんから貰うと、母親に会うために王都に戻っていたのだ。

そして、今日改めてバウルブルクに来るという。

「きっと、俺の奥さんになりに来たんだ。うん。ああいうシッカリした人なら、家を任せても安心だ」

俺からすると少し怖いのだが、エルはカルラが賢妻になれると思っているらしい。

間違いなくなれるであろうが、どこか怖い気がしてしまう。

エリーゼなど比べ物にならない、底の知れない怖さという物を感じてしまうのだ。

「一度、あの男の頭の中を見てみたいものですわ」

うちの女性陣も、カタリーナはヴィルマと同じく脈が無いと思っていて、百％カルラが自分の妻になると思っているエルをお目出度い奴だと思っている。

「エリーゼ。カルラさんって、誰かと噂になっていた？」

「いえ。聞いた事がありません。ですが……」

「ですが？」

「カルラさんほどの方だと、密かにそういう関係の人がいても不思議は無いかと……」

「確かになぁ……」

カルラが男性にだらしないとか、そういう意味ではない。

父親を嫌っていたりして、むしろ男性には一途なタイプに見える。

例え、以前のブロワ家の娘の立場では難しい相手でも、それを上手く隠しつつ、その困難を乗り越えて恋愛を成就させるような。

そういう人に見えるのだ。

実際に、俺もゲルトさんも上手く利用されたような懸念がいつまでも脳裏から消えない。

しかし、それはあくまでも俺達の予想でしかなかった。

「私には、不可能な芸当です」

「俺も無理」

恋愛偏差値が低い俺には、リア充の行動規範など解らないのだから当然だ。

エリーゼは、黙っていても男性にはモテそうではあるが。

「私は、お爺様からヴェンデリン様を紹介されたので、そういうのは必要ありませんし。ヴェンデリン様が旦那様で良かったです」

そう言いながら、顔を赤く染めるエリーゼは可愛かった。

「エリーゼは、たまにヴェルのハートを鷲づかみにするね。ボクにコツを教えてよ」

「コツですか？　私はルイーゼさんが羨ましいですけど……」

よく体が小さくて軽いのを利用して、俺におぶさっているのを羨ましいと思っているのであろう。

「駄目だよ。エリーゼがおぶさったら、ボクの優位が消えてしまうし」

「消えてしまうのですか？」

「ヴェルの背中に、ダブルインパクトがねぇ……」

あの胸が背中に当たるとか、確かに男のロマンではあった。

「胸がですか？　ヴェンデリン様は、そういうのが嬉しいのでしょうか？」

「男なら、みんな嬉しいはず」

ルイーゼも温かくて良い匂いがするので素晴らしいのだが、エリーゼが俺の背中におぶさってくればもっと素晴らしい事になるはずだ。

「ヴェンデリン様がそう仰るのなら」

「あんたらねぇ……。船が来たわよ」

「わーーーん。イーナの意地悪」

「何でそうなるのよ……」

エリーゼが俺におぶさるのを止めてしまい、その原因になったイーナにルイーゼが文句を言っている間に魔導飛行船は無事に到着していた。

新規仕官者、魔の森を探索する冒険者、出稼ぎ・移民志望者と、増便された魔導飛行船によって多くの人達がバウルブルクを訪れる。

今日の便で、自由の身となったカルラがお世話になったからとお礼を言いに来る予定で、エルはそれを心待ちにしているわけだ。

「ところでヴェルは、エルとカルラさんはアリだと思っているの？」

「思っているけど……」

イーナの疑問に、俺は有りだと答えていた。

今のカルラは、現ブロワ家当主であるゲルトさんによってブロワ

家の籍から抜かれている状態である。
この世界の貴族は当主の権限が強いので、実はこういう現象がたまに発生する。

昔の日本などでいう、子供を勘当したという行為に近いのかもしれない。

ただこの場合は、カルラの方から望んで籍を抜けた形だ。
俺達も、あの紛争の解決に情報を提供してくれた彼女の願いを受け入れて貰うために、ゲルトさんに口添えをしていた。

『私はそれなりに恩があったから動いたが、我が姪御殿はそうだよなぁ……』

彼女からすると、ブロワ家には恩も良い想い出すらないのだから。
ゲルトさんは、すんなりとカルラの除籍を受け入れていた。

『実は、除籍する人は多いのですがね』

フィリップとクリストフ本人とその家族は、全て王都にあるブロワ家が所有する別屋敷に押し込められている。
彼らが余計な事を考えるとまたブロワ辺境伯家が混乱するので、俺のようにブロワ家が権利を持っていた騎士爵を長男であるフィリップが継ぎ、ワケ有り法衣騎士爵家として家を運営する事になったのだ。

家名はブロワ家を名乗ってもいいとゲルトさんが伝えたそうだが、辺境伯家の相続には子々孫々未来永劫関われないと王国が公式文書に記載していたし、今回の紛争に関わる不祥事は王都中で噂になっている。

彼らは既に、別の家名を名乗っているそうだ。

先代の正妻と側室と、嫁ぎ先を離縁された娘達は全員教会送りにされ、残された家族がフィリップとクリストフの肩に重く圧し掛かる。

昔のうちの実家も真っ青な貧乏騎士爵家となり、フィリップはエドガー軍務卿のツテで軍の仕事に、クリストフは会計などの雑務をして生活費を稼ぎ始めたそうだ。

あれだけの事をしておいて処刑されなかったのは恵まれているのかもしれないが、逆に言うと生き恥のような気もする。

正直なところ、少し複雑な心境ではある。

「お互いに、その気があればの話だけどね」

今の俺の立場なら、カルラに命じる事も可能なわけだ。

一応籍を置いている母親の実家も、文句など言わないであろう。

「エルが好きな人だから、俺が強引に奥さんに指名してしまうという手もあるんだけど……」

前にそれとなく聞いてみたのだが、それはエルに断られてしまっていた。

『ヴェルが気を使ってくれているのはわかるが、それだと俺が納得できない。俺がカルラさんを選び、カルラさんも俺を選ぶ。そういう形にしたいんだ』

自信があるとも言えるが、恋愛感がどちらかと言うと俺の前世の基準になってしまっている。
珍しいとは思うのだが、実は創作の世界ではとても多い。
現実では家同士の都合で結婚する人が多いので、どうしてもそういう物に憧れてしまうのであろう。

うちの女性陣も、たまにそういう本を読んでいるのを俺は目撃していた。

「イーナも、そういう本が好きだよね？」

女性陣の中では一番本を読むのが好きなので、彼女の部屋には大きな本棚が置かれていた。

「物語として読むのは好きよ。でも、エルがそういう物に憧れを持っているとは思わなかったわ……」

イーナは、自分の友人の意外性に少し驚いているようだ。

「そんなに長くはなかったけど、あの一緒に生活をした日々で自信があるのかしら？」

「かもしれないな」

二人で話をしている間に、次々と港に着陸した魔導飛行船から人々が降りてくる。
移住に、仕官に、商売にと。
彼らは、新しい土地での生活に思いを馳せているのであろう。
楽しそうに話をしながら、それぞれの目的地に散っていく。

「お久しぶりです。みなさん」

最後の方で降りて来たカルラが、エルや俺達の前に姿を見せる。
ブロワ家の娘であった頃とは違って、今日の彼女の服装は下級貴族の女性が着る地味な物であったが、それでも彼女の美しさは際立っていた。

「あれからどうでしたか？」

「母の実家の方も何も言わないので、開放された気分です」

表面的には、あの大貴族であるブロワ家から籍を抜かれた娘なので、実家の方も政略結婚には使えないと放置してくれているそうだ。

「それは良かったですね。それで、これからどうするのですか？」

「結婚します」

「結婚ですか……」

「勿論、バウマイスター伯爵様ではありませんよ」

「ですよねぇ……」

既に俺は、彼女に一欠の恋愛感情も持っていない。
前世の彼女に似ているという記憶はただの想い出となり、最初は弓の腕前に尊敬し、ブロワ家の新当主を擁立する一連の行動ではその策士ぶりに少し引いていたからだ。

「（結婚？　誰だ？）」

エリーゼが言うにはそういう噂は聞いていなかったそうだし、かと言って相手がエルかと聞かれれば疑問を感じてしまう。
だが、肝心のエルはその話を聞いてにこやかな笑みを浮かべていた。

「（自分だという自信があるのか？）」

思えばここ暫く、暇さえあればエルからカルラと過ごした楽しい日々の話を聞いていたような気がする。
多分エル視点では、二人は付き合っていたのと同じ感覚なのであろう。
ところが、話の中に告白したとか結婚を約束したとかそういう物が無かった。
それに疑問を呈するのも何だし、あまり突っ込んで聞いてはいけないような気がしたのだ。

「（でも、彼女はここまで来ているからなぁ……）」

ブロワ家から先代の介護とお飾りの総大将としての報酬は貰っているが、基本的には貧乏貴族の娘である彼女が高い船賃を払ってここまで来ている。
もしかすると、エルと結婚するつもりなのかもしれない。
まるで物語のように、二人が結ばれる光景が見られるのかと。

「それは、おめでとうございます」

エルが、にこやかに言い放つ。

「（エルって、自分が選ばれると思っているよな……）」

物語的に言うと、『おめでとうございます』、『それは、どんな人なのです？』という流れから、カルラがエルの特徴を並べ立てて、最後にエルだと気が付かせて二人は結ばれるというパターンである。

地球では使い古されたパターンの物語であったが、この世界では根強い人気を誇る作品であった。

「その方は、一つ年下でして……」

カルラの語るその結婚相手の特徴は、物凄くエルに良く似ている。髪型、髪の色、背丈、年齢、自分が弓を教えたのが馴れ初めだと。エルは、絶対に自分の事だと思って満面の笑みを浮かべていた。

「その方を紹介して欲しいですね」

「わかりました。あなた」

「へっ？」

カルラは後ろを振り返り、港から出て来る人達の中から一人の少年を呼んでいた。

その少年は、俺達とほぼ同じ歳であろう。

しかも、髪型から雰囲気までエルに良く似ているのだ。

「今度、結婚する予定の」

「カミル・ローベルト・フォン・プルークです」

嫌な予感はしたが、やはり別の男が存在していたようだ。

カルラが朗らかな笑みを浮かべながら、自分の婚約者を紹介する。
そしてもう一方のエルは、その笑顔が凍りついたままであった。
何が起こっているのかを、脳が処理し切れないのであろう。

「彼は、プルーク騎士爵家の三男なのです」

貧乏な法衣貴族家の子供同士で、幼い頃からの知己であったそうだ。
ただ、ある程度の年齢になって二人でいると噂になってしまう。
特にブロワ家が五月蝿いので、二人は弓を教え教わる師匠と弟子のような関係でその間柄を隠していたそうだ。

「私が一歳年上なので、彼に弓を教えていました。でも、今では彼の方が上手なのですよ」

なんと、俺が無様に一回戦負けした武芸大会で弓の部において見事に優勝したのは、彼であったようだ。

「ヴェル。武芸大会の結果とか興味ないものね」

「悪いか……。俺だって弓の部に出れば三回戦突破くらい……」

「ちょっとセコいね。ヴェル」

「ルイーゼは、かなり上まで行けたからいいじゃないか……」

どうせ俺は一回戦負けの身だが、武芸大会の成績と貴族としての格に関連性などないのだと負け惜しみでも心の中で思っておく。

「その成果を認められて、この度ホールミア辺境伯家の弓術指南の

一人として仕官が叶ったのです」

『芸は身を助ける』。

貧乏貴族の三男でも、そこまで弓の才能があれば救いの手はあるわけだ。

中央で軍務につかないのは、西部の雄であるホールミア辺境伯家に仕官すれば、継承権のある陪臣扱いだからなのであろう。

「そうですか。それは、おめでとうございます」

傍から見たエルは、既に笑顔が張り付いたまま内部が崩壊しつつあったが、まさか俺もそれに倣うわけにもいかない。

常識に則って、お祝いの言葉をかけていた。

「それほどの腕前ならば、うちがスカウトすれば良かったかな？」

これも社交辞令の一種である。

二人がいればエルの精神がヤバいかもしれないし、いくら縁を切ってもカルラがブロワ家の係累であるという事実に変わりはない。

彼女もそれをわかっていて、結婚して西部に移り住むのであろう。

その辺の察しの良さは、貴族である俺からするととても助かる。

「カルラが、大変にお世話になりました」

エルに似たカミルという少年は、とても礼儀正しく俺達にお礼を述べていた。

大変に好青年であり、彼に文句を言うわけにはいかなかった。

エルの笑顔は凍りついたままであったが。

「エルヴィンさんには、カルラにとても良くしていただいたそうで」

「いや、そこまでの事は……」

これが、常識の無い悪党ならばまだ救いはあったはず。

ところがカミルという少年は、心から俺達に感謝していて丁寧にお礼を言うのだ。

しかも、彼はエルに似ている。

今現在のエルの心境は、俺達にでも正確には察する事ができないであろう。

あのカタリーナですら、エルを気の毒そうに見ていた。

「エルヴィンさんが親切にしてくれたので、私も安心して陣地の中で過ごす事ができました。エルヴィンさんはカミルに似ているから、お話をしていると安心できたのです」

「それは良かった……」

その一言は、今のエルがようやく搾り出した一言であった。

「あの。お二人は、これからの予定は？」

さすがに、このままだとエルが拙いと思ったのか？

エリーゼが割って入って、二人の予定を聞いていた。

「新婚旅行も兼ねて、魔の森に行きます」

「少し物騒な新婚旅行ですわね」

「こういうのが好きなんですよね。夫婦して。『暴風』さんもそうでしょう？」

「ホールミア辺境伯家繋がりで、私の事もご存知でしたか」

「西部で、『暴風』さんを知らない人はいませんから」

まだホールミア辺境伯家に行くまで時間があるので、弓の鍛錬も兼ねて魔の森に入るそうだ。

知己である貴族の子弟達に冒険者になった人達がいて、彼らと組んで魔の森で狩りや採集を行なう計画だと語っていた。

「今度仕える主君に少しお土産でも持っていけば、良い印象も得られるでしょう」

若造の弓術指南役なので、少し腕前を披露して周囲との軋轢を防ぎたいという事らしい。

本人の考えかもしれないが、カルラの意見かもしれない。

カタリーナも、しっかりとしたカミルの考えにカルラの影を感じているようだ。

「そうですか。でも、気を付けてくださいね」

カルラは、冒険者としても優秀であった。

旦那はそれよりも腕が上なので、多分危険は少ないはずだ。

「みなさんと一緒に狩りが出来れば良かったのですが……」

俺達はこれから始まる大お見合い会の準備で忙しいし、二人には

二人の交友関係がある。
今回は、縁が無かったという事なのであろう。

「魔の森でしたら、すぐにここから船が出るのでは？」

バウルブルク～魔の森間の小型魔導飛行船は、もうさほど待つ事もなく発進する。
二人は、その船に乗って魔の森に向かう予定だそうだ。

「そろそろ時間ですね。本当にありがとうございました」

「このご恩は忘れません」

そう最後に挨拶をしながら俺達の元を辞して、二人は港に停泊している小型魔導飛行船へと歩いていく。
その姿はまさしくお似合いのカップルで、あれがリア充という生き物なのであろうと俺は心の中で思っていた。

「やっぱり、予想通りだな……」

「はい」

俺とエリーゼからは、この言葉しか出なかった。
では、親友としてエルとカルラをくっ付ける策はと聞かれると、正直全く思い浮かばない。
俺が結婚を命じるという案自体をエルが拒否していて、彼は相思相愛で結婚する事こそが大切だと思っていた。

そうなると、その分野で特に経験豊富でもない俺には手が打てなかったのだ。

完全にお手上げである。

「さすがに、可哀想になってきましたわ……」

今まで散々にエルを非難していたカタリーナも、目の前で笑顔が凍りついたままの彼に同情を始めていた。

「エル。元気だしなよ」

「この世には、女は一杯いる」

ルイーゼとヴィルマも続けてエルを慰めるが、ヴィルマの慰め方はどうなんだろうと、少し不謹慎にも思ってしまう。

「エル。魂が抜けかかっているようだな……。クラウス。人生経験が豊富なところで何か無いのか？」

反乱の首謀者から、紛争で活躍してかなりのボーナスを貰ってそのまま俺の個人的な知恵袋役に滑り込んだクラウスに、エルを慰める方法を尋ねてみる。

「前にエルに妙な事を吹き込んでいたんだから、責任を取るように」

「誤解無きように言っておきますが、カルラ様の立場を落とすために懸命に働いた方が良いと言っただけですよ」

他に助言できる事などないはずだが、一応言ってみただけである。

「わかっているけど、念のためだ。それで、何か無いのか？」

「そうでございますね。エルヴィンさん。人生には山あり谷ありでございます。女など、星の数ほども居りますれば……」

「それって……」

随分と丁寧に言ってはいるが、基本的にはヴィルマが言っている事と大差はなかった。

「クラウス。もっと何か無いのか？」

「ヴェンデリン様。私には、亡くなった妻とくらいしかそういう経験はないのですが……。失恋した経験もございませんし……」

「それは、実は自慢か？」

「婚約者が五人もいらっしゃるヴェンデリン様の方が、経験豊富なのでは？」

「切っ掛けは、恋愛じゃないし」

「その割には、毎日とても楽しそうですね……」

「悪いか？」

「いえいえ。御家繁栄には大切でございましょう」

次第に話が脱線していく俺とクラウスの横で、エルはいつまでも失恋のショックで笑顔を凍りつかせたままであった。

「ねえ。エルの魂が抜けかかっているように見えるけど」

イーナの指摘は、クラウスとの話の方が忙しくてあまり聞いていなかったが。

「ふーーーん。失恋ねえ……。まあ、そういう予感はしていたよ」

エルの失恋から三日後、八割以上が完成したバウマイスター伯爵家領主館の広大な庭で『大お見合い会』が始まっていた。

我が家に仕える独身の家臣達と、彼らと結婚したい貴族の子女が、食事をしたり話をしながら良い相手を見つける。

俺は参加した事がなかったが、日本におけるお見合いパーティーに似た物になっているはずだ。

参加資格は正規雇用されていて俺が認めた者達で、実は既婚者も含まれている。

幹部か幹部候補のみであったが、大身の陪臣になるのだから複数の妻は当たり前だと言われて強引に参加させられている者も多かった。

「しかし、凄い参加者だな」

王都～ブライヒブルク～バウルブルク間の魔導飛行船の経費をうちとブライヒレーダー辺境伯家の負担にしたので、沢山の若い女性が参加していた。

そしてその女性達に、未だ失恋のショックから立ち直れていないエル、ルックナー財務卿の孫である八歳の少女を隣に置いているロ

ーデリヒ、エドガー軍務卿からの手紙を持参した少女達に囲まれているトリスタン、ヘルタニア渓谷の開発で忙しいモーリッツとフェリクスも参加していた。

彼らは日帰りで、俺が瞬間移動でここまで連れて来ていた。
ちなみに、帰りは確実に奥さんになる人を連れて帰れと親から釘を刺されているらしく、若干顔を引き攣らせながら女性達と話をしていた。

「あの二人は、暫くヘルタニア渓谷から動けないからな」

大規模なミスリル鉱床があるバウマイスター伯爵家の金蔵なので、その開発と防衛に責任重大であったからだ。
今日中に奥さんを決めて、現地で式をあげる。
これが既に決まっていたのだ。

「何かお取りしましょうか？　コリンナ様」

「ローデリヒ様。私はフルーツが食べたいです」

「お取りしましょう」

ローデリヒとルックナー財務卿の孫娘のコンビは、傍から見ていると親子にも見えてしまう。
八歳の小娘でも彼女はルックナー財務卿の直孫なので、ローデリヒはえらく気を使っているようだ。

「あとは……」

何気に若い神官も多かった。

教会の建設ラッシュで、そこを管理する司祭の人事も決まっていたし、バウルブルクには南端部を統括する教区の本部も設置されるので、本部から来た枢機卿に幹部や下っ端の神官の数も多い。

神官が結婚禁止なのは極一部の宗派だけなので、ここで結婚相手を見つけて教会の仕事を手伝って貰うつもりなのだ。

あとは、結婚式の予約を取るという商売上の話もあった。

大変に商売熱心と言えよう。

「何とも欲に塗れたお話だな」

「ブランタークさん。残念ですが、人ごとではないのでは？」

「わかっているけどよ……」

俺と話をするブランタークさんの後ろには、多くの若い女性が待ち構えていた。

今回の大お見合い会では、花嫁候補を輸送する大型魔導飛行船の代金はブライヒレーダー辺境伯家と折半であった。

なぜ折半なのかと言えば、この大お見合い会にブライヒレーダー辺境伯家の人達も参加しているからだ。

男性は妻を、女性は夫を探しにだ。

そして彼らを引率するリーダーは、今をときめくブライヒレーダー辺境伯家の筆頭お抱え魔法使いであり、陪臣としても地位が高く、しかも未だに独身のブランタークさんであったというわけだ。

「俺。このまま、死ぬまで独身でいたいんだけど……」

半世紀も独身でいたので、今さら結婚などしたくないのであろう。

それに彼は、文字通り独身貴族なのだ。

元々資産家なのに、俺達と組んで色々と仕事をしたらまた資産が増えている。

仕事を終えて家に帰ると、そのまま家でノンビリと酒を飲むか、ブライヒブルクの歓楽街に遊びに行ってしまう。

一応屋敷は持っているが、年配の女性をメイドに雇って掃除と洗濯を任せているだけらしい。

「気楽なお一人様生活がなぁ……」

そんなブランタークさんの生活についにキレたのが、その主人であるブライヒレーダー辺境伯であった。

『いいですか。ブランターク……』

年下ではあるが一家の主としては先輩の主君に、ブランタークさんは説教をされていた。

『仮にも、我が家の筆頭お抱え魔法使いが歓楽街の常連では色々と風聞がですね』

『お館様だって、たまに行くじゃないですか』

『あれは、付き合いですから……。それに、私が行くのは綺麗なお

姉さんがお勺をしてくれるレベルのお店でしょう？』

ブライヒレーダー辺境伯によって、その先の娼館まで行っているのを咎められたようだ。

『しかも、エルヴィン君まで連れて行って……』

王都でも、ブライヒブルクでも、エルまでそんな場所に連れて行った事を問題視していた。

『さすがに、伯爵様は連れて行けませんからね』

『絶対に止めてください！　変な娼婦とかが、この子はバウマイスター伯爵の子ですとか言って騒ぎ始めたら、私が困るんですから』

ブライヒレーダー辺境伯による謀略だと周囲の貴族が騒げば、せっかく良好な両家の仲に皹が入りかねないからだ。

『病気とか避妊とか、ちゃんと対応している高級店ですよ』

『そういう問題ではないのです。おっと、話が逸れましたね……』

ブライヒレーダー辺境伯は、ブランタークさんに結婚をして子供を作り、その子に家を継がせるようにと命じたそうだ。

『あなたは気楽でいいかもしれませんが、あなたの死後が面倒なんですよ』

師匠が死んだ時に、その財産を巡って多くの有象無象の詐欺師達が出てきた。

それよりも資産が多いブランタークさんの死後となると、どれだけ手間がかかるか怖くて堪らないとブライヒレーダー辺境伯は語ったそうだ。

『今なら、子供が成人する頃でもあなたは元気でしょう?』

『さあて?　どうなんでしょうかね?』

『魔法使いは、長生きな人が多いじゃないですか』

確かに、魔法使いには長生きの人が多い。

大量の魔力が体に影響するからという説が有力だが、体力が資本の剣士や武道家と違って、年配の人の方が魔法の精度などが上がる人も多く、八十歳を超えても現役の人も一定数存在していた。

普通に生きるだけなら、百歳を超える人も珍しくないそうだ。

ボケなければ仕事も出来るので、魔導ギルドや魔道具ギルドの上が詰まっている原因にもなっている。

『とにかくですね。陪臣家として相続を認めますから、結婚をして子供を作りなさい。大お見合い会ではうちの団長を任せますから、率先して奥さんを探すように』

『わかりましたよ。ところで、一ついいですか?』

『何です?』

『アニータ様は、どうなのですか?』

『子供が産めないじゃないですか。その前に、本当に叔母上を妻に

したいのですか？』

『すいません。ただ言ってみただけです……』

以上のような経緯があり、ブランタークさんは大お見合い会のブライヒレーダー辺境伯家団長兼参加者として今日はローブの胸の部分に名札を付けていた。

この名札は俺のアイデアで、これを付けている人は参加者ですよという合図でもある。

「なら、俺と話をしていても仕方がないですよ。ちゃんと、奥さんを見付けないと」

「伯爵様には、婚約者様が五人もいるからなぁ……。言い返せない」

ほぼ十代と二十代の参加者しかいない会場内で、一人だけ五十歳を超えているブランタークさんが名札を付けている。

この光景がツボに嵌ったようで、イーナ達は突然の婚姻命令で困惑しているブランタークさんを見てテーブルに突っ伏して笑っていた。

「ブランターク様の御家の一大事なのですから」

唯一常識的に四人を窘めるエリーゼですら、ブランタークさんから視線を外している。

まともに見ると、一緒に笑ってしまうからであろう。

かく言う俺も、名札を付けた彼を見ないようにしていた。

「お前ら、覚えとけよ……」

とは言いつつも、主君の命令なのでブランタークさんはお見合いに戻っていた。

多くの女性に話しかけられるが、その中には二十代前半くらいの女性が多い。

そろそろ賞味期限切れと呼ばれる年齢の人達が、資産家で年齢が高いブランタークさんに殺到していたのだ。

「助かったぁ……」

同じく年齢が高めで、そういう女性が群がっていたトーマスが安堵の溜息を漏らす。

彼は、二十二～三歳くらいの綺麗な女性と端のテーブルで楽しそうに話をしていた。

「トーマスは、こういうところが如才ないよな」

「そうね」

イーナも、俺の意見に賛同していた。

もう一方のブランタークさんは、砂糖に群がる蟻の群れのように多くの女性達に囲まれる。

年齢は高めだが、資産家で、魔法使いで、実は彼も師匠と同じく孤児出身で家族がいない。

嫁ぐと問題になる舅・姑・小姑などの問題が無いので、それも人気を加速させているのだ。

「主君命令だから、何とか選ぶと思うけど……」

続けて周囲を見渡すと、同じく強制参加させられている俺の三人の兄達もいる。

エーリッヒ兄さん、パウル兄さん、ヘルムート兄さんと。

みんな、多くの女性に囲まれていた。

側室になる人を探しにきたのだ。

「でも、さすがはエーリッヒ兄さん」

他の二人とは違って、優雅にワイングラスを持ちながら女性達と話をしている。

元々正統派のイケメンでなので、彼に集まっている女性達は全員ウットリとしていた。

「（リア充だ！　本物のリア充だ！）」

昔から、エーリッヒ兄さんはバウマイスター家の人間とは思えないイケメンスキルを発動させていたが、結婚後もその能力は健在なようだ。

むしろ、磨きがかかっているかもしれない。

「同じ兄弟なのにね……（パウル兄さん、ヘルムート兄さん。どうにか上手く切り抜けるんだ）」

まさか自分達に女性が群がるとは思っていなかったパウル兄さんとヘルムート兄さんの慌てぶりを見ると、俺は心の中で二人を応援していた。

なぜなら、俺はどう考えてもあちら側の人種だからだ。

人は皆、簡単にはエーリッヒ兄さんのようになれないのだから。

「パーティー開始から三時間か……」

時間が経つに連れて、次第にカップルも生まれてくる。

たまに、男子一人に女子二～三人というグループもあったが、これもこの世界の貴族や陪臣の仕様だ。

余裕のある人ほど奥さんの数が増える。

地球の一夫一婦制を信奉する人達からは攻撃されそうであったが、金持ちや政治家が非公式に愛人を囲うのを考えると、ある意味潔いとも言えよう。

「みんな。フットワークが軽いな」

ある程度相手が決まると、会場から外に出かけていくカップルも現れ始める。

まだ建設途上であるが、バウルブルクの町でデートのような事をしたり、自分の家や建設予定地に案内したりと。

更に凄いのは、既に結婚するのを前提で荷物持参で来ている女性の多い事だ。

相手が決まると、すぐにその人の家や官舎で一緒に生活を始めるつもりなのだ。

「おいおい。大丈夫なのか？」

「それなりの家の人は知らないけど、大半は『もう実家に帰って来るな。次に会うのは結婚式で』という人なのよ」

イーナの言う通りで、うちの血筋が良い幹部連中狙いの貴族子女

はともかく、そうではない人を狙っている陪臣や一代騎士の娘などは背水の陣でもあるわけだ。

「可哀想だとか思って、沢山囲わないようにね」

「一人も囲わないよ」

もしそんな話が漏れたら、架空可哀想話を持つ若い女性が殺到しかねない。

「イーナの中で俺がどれだけ好色扱いなのかは知らないけど、絶対にないから」

「本当に、心当たりはないのかしら？」

「さあてね」

大お見合い会初日は無事に終了し、翌日は初日に仕事があった者へのフォローと、自由行動日になっていた。

参加者はみんな、それぞれにデートなどを楽しんでいるようだ。

そして、早速神官達と式の予定を相談している者達もいた。

脅威のフットワークの軽さであったが、そう感じるのは地球の知識がある俺だけのようだ。

「ブランタークさんも、相手を決めたみたいだな」

一人の若い女性を連れて、彼はバウルブルクの町に出かけていた。

若干目が死んでいるようにも見えたが、今までの夜の帝王生活ができなくなるので色々と思うところがあるのであろう。

そして、つい数日前に失恋したばかりのエルであったが……。

「いかん……」

「まだ意識が半分飛んでいる！」

ルイーゼの指摘通りに、パーティー会場内の昨日と同じ場所で一人佇んでいたのだ。

いくら女性が話しかけても全く答えず、目の焦点が合っておらず完全に目が死んでいた。

あまりの異様さに、話しかける女性がほとんどいないくらいだ。

エルは今回のお見合い会のメインなのに、それが全く機能していないのだ。

「ヴェル。どうする？」

「今回はさすがに無理強いできない……。少し時間を置こう……」

強引に結婚をさせると、俺の罪悪感が限界を超えてしまうからだ。

今回の大お見合い会によって、バウマイスター伯爵家家臣の独身率は大幅に下がる事となる。

だがその中に、エルは入っていない事だけは明記しておこうと思う。

「俺は、カルラさんよりも素晴らしい女性と結婚するんだぁーーー！」

失恋から一週間後、ようやく現実に戻ってきたエルが一人絶叫する。

「そういう夢のような高望みは、独身期間を長くしますわよ」

そんなエルに、カタリーナが冷静にツッコミを入れていたが。

幕間二十五　エルヴィン・フォン・アルニムの従軍日記？

「（天使だ！　天使がいた！）」

「バウマイスター伯爵様の軍勢ですか。私達は、ここで降伏します」

「（綺麗な人だなぁ……）降伏されるのでしたら、我々は慣習に従った待遇をお約束しましょう」

「承知いたしました。全員に武器を捨てさせます」

主君であるヴェルからの命令という事で軍を率いてブロワ辺境伯軍本陣へと赴いた俺は、この日生まれて初めて恋に落ちた。

長引く紛争で、提示される裁定案に不満を持ったブロワ家は最大の禁じ手に手を出した。

装備する武器を実戦用に変えて、全軍での夜襲を試みたのだ。

この夜襲は、俺の親友にして主君であるヴェルの『エリアスタン』によって防がれている。

『大規模魔法で吹き飛ばせばいいじゃないか』

『味方の被害はなるべく防ぎつつ、敵の損害もなるべく少ない方がいいじゃないか』

ヴェルは、たまに妙な気を使う事が多い。
既にここまで状況が悪化したのだから、ブロワ家の軍勢を壊滅させても文句は出ないような気がするのだが、危険を犯してまで損害が少なくなる方法を選ぶのだから。

『駄目なら、担いで逃げるからな』

『その辺は、エルに任せる』

ヴェルと出会ってから、骨竜、老属性竜、ドラゴンゴーレム、貴族とその軍勢ときて、遂に一万人の大軍だ。
ブランタークさんとカタリーナが手伝ったとはいえ、その貢献比率は三分の一ほど。

軍事の定義で言えば、七割が戦闘不能になった軍勢など機能しない。
二人の功績は、ヴェルの勝ちを完勝にするためのオマケみたいな物であろう。

『ブライヒレーダー辺境伯様から、兵を出してくれとの要請が来た。お館様はお休み中ではあるが、この状況で出さないのもな。お館様へは事後承認となるが、こちらも兵を出そうと思う』

気絶した三人を寝かせると、そこにモーリッツさんが姿を見せる。
ブロワ家による夜襲は失敗に終わり、わずかに後方で残っていた軍勢はすぐに降伏していた。
前方にいた味方の大半が、いきなり麻痺して動かなくなったのだ。
わずかに残った指揮官もいない兵士達が、五千人もの敵と戦って玉砕などするはずもなかった。

『急遽、後方の敵本陣を占領する事になったそうだ』

魔力を失ったヴェル達は気絶したままであったが、その間にも状況は動く。

夜襲への懲罰的な意味も込めて、ブライヒレーダー辺境伯様は東部領内への侵入と、本陣や補給物資の集積所などを含めた拠点の占領を決定する。

俺もモーリッツさんと共に、わずかな兵を率いて敵本陣の占領を目指す。

応援のブライヒレーダー辺境伯軍と共に本陣に向かうと、そこには碌な戦力が残っていなかった。

あの夜襲を成功させるために、ブロワ軍はほぼ全軍を投入したようだ。

「我らはブライヒレーダー辺境伯家・バウマイスター伯爵家連合軍である！　ブロワ辺境伯軍に告ぐ！　降伏せよ！」

麻痺しているブロワ軍の捕縛と救助に急がしいとはいえ、一応は五百人ほどはいる味方の軍勢に対し、ブロワ家側は百人ほど。

まともに戦えば、まずブロワ家側に勝ち目は無い。

「我らが降伏などするか！　明日には援軍が来てまた逆転するわ！」

ブロワ軍本陣から、責任者であると思われる中年の男性が姿を見せ、絶対に降伏などしないと声を荒げる。

味方全滅の情報を知っているのかは知らなかったが、敵軍が本陣に攻め寄せているのだ。

負けは理解しているはずだが、ここで何もしないで降伏などしたら恥の上塗りだと思っているのであろう。

「エルヴィンさん。頼んだぞ」

「わかりました」

ブライヒレーダー辺境伯軍を率いている家臣が、俺に説得を頼んできた。

俺にそういうスキルは無いのだが、ヴェルの家臣である俺から、主君が成した事を伝えて降伏を促す計画のようだ。

「（上手く行くのかね？）先に伝えておくが、ブロワ軍は一人残らず全滅したからな」

「嘘を言うな！」

「全滅しなきゃ、数が少ないうちが軍勢を割いてあんた達に降伏を勧告できないじゃないか。ブロワ軍は、バウマイスター伯爵様の魔法で壊滅した」

あまり言葉を飾り立てても意味が無いから、全て正直に話す事にする。

俺の言葉を聞いたブロワ家本陣内では、次第に動揺が広がっているようだ。

「早く降伏した方がいいと思う。我が主人の魔力は、少なくとも援軍とやらが来るまでには回復しているだろうからな」

「くっ……。カルラ様と相談する……」

カルラ様とは、ヴェルが言っていたブロワ軍総大将代理の女性の

事であろう。
　完全なお飾りのようで、さすがに夜襲には帯同させなかったようだ。
　もし何かの間違いで戦死でもしたら、それは問題になるであろうし。

「（そういえば、ヴェルは綺麗な人だって言ってたな）」

　とはいえ、『ただ綺麗なだけの深窓の令嬢ではな……』と思う。
　成人してから、ブランタークさんに王都のそういう店に連れて行って貰って納得したから。
　綺麗な女性は一定数いるけど、そう人生を共にしようなどと思える女性は少ない。

　ヴェルは立場があるから大変だろうけど、俺は暫く結婚とかは勘弁して欲しいと思っていた。
　もっとも、この紛争が終われば強制的にお見合いがあるんだけど。

　果たして、良い女性なんているのかね？

　そんなしょうもない事を考えていると、ブロワ家側はお飾りだと思っていたカルラ嬢が降伏を受け入れる事を決定していた。
　どうやら、思ったよりも芯がある女性のようだ。

「（ヴェル。本当に、綺麗な女性なのか？）」

　そう思っていると、そのカルラ嬢が姿を見せる。
　さすがは大貴族のご令嬢、ミスリル製の装備に身を包んで後光が差すようである。

「ブロワ軍総大将代理であるカルラ・フォン・ブロワです。降伏いたしますので、兵達には寛大な処置をお願いします。ところで……」

「……」

その顔を見て、俺は衝撃を受ける。

本陣から出て姿を見せたカルラ嬢の美しさに、俺は一瞬で恋に落ちたのであった。

「カルラさんだけど、うちで面倒を見る事になったから」

「うちには女性がいるからか？」

「正解だ。はあ……。戦争とか本当に面倒だな」

カルラ嬢達を後送し、追加でブロワ家側の物資貯蔵所などを占領して戦果を稼いで戻ると、ヴェルが溜息をついていた。

紛争どころか戦争になった状況で終結への筋道が見えないのと、カルラ嬢を預かる事になって面倒が増えたと思っているようだ。

「（しかし、俺には好都合！）」

俺はヴェルの護衛でもあるので、彼女と接するのに何の不自然さもないからだ。

カルラ嬢の面倒は、エリーゼ達が見るはず。

となれば、ヴェルと接触する機会も増え、ヴェルの護衛でもある俺と接触する機会も増える。

「ヴェル様個人の護衛は私がする。エルは、人手が足りないからエリーゼ様達を含めた奥周りの警護責任者」

「えっ？」

と思ったら、早速仕事の変更がヴィルマから告げられる。

「うちの兄は、陣地の統括や運営などで急がしい」

「だよなぁ……」

ブロワ家側がいまだに使者すら寄越さないので、ブライヒレーダー辺境伯は保障占領の枠を広げる決断をしていた。
追加で援軍も来るが、うちにも多くの仕事が割り振られてモーリッツさんは忙しいようだ。

俺も、本陣の警護責任者にされていた。

「（いいさ。それでも、カルラさんの傍にいられる。空いた時間にお話とか出来るし）」

「エル。何をにやけているの？」

「別に……」

ヴィルマは、とにかく勘が鋭い。
今の時点でカルラさんへの気持ちに気が付かれると困るので、俺はすぐに表情を元に戻して警備の仕事に打ち込み始めるのであった。

「（何だとぉーーー！　カルラさんがヴェルの妻にぃーーー！）」

俺は今まで生きてきて、これほどのショックを受けた事はなかった。

『エルヴィンさんは、弓もお上手なのですね』

『お館様と同じで、地方貴族の嗜みというやつです』

カルラ嬢がうちに来てから数日、俺は幸せの絶頂にいた。

警備の仕事はあったが、空いた時間に弓の名手であるカルラさんからその指導を受ける事が出来たからだ。

彼女と色々な話をしながら、弓を教えて貰う。

しかも彼女、教えるのも物凄く上手だ。

弓に矢を番えて構えると、手を添えてアドバイスをしてくれるのだが、とてもフローラルな香りがする。

少し変態チックな喜びであったが、ヴェルもそれは同じらしい。

『私は剣が全く駄目なので、エルヴィンさんが羨ましいです』

『俺は、一芸に秀でたカルラ様が羨ましいですけど』

『エルヴィンさん。様付けは不要です。私はブロワ家の娘ですが、一年前まではただの貧乏貴族の娘だったのですから』

忘れられた娘であった彼女は、ブロワ辺境伯の一方的な都合で呼

ばれていた。
だから、彼女はブロワ家への愛着が薄い。
それでも、あの本陣での対応は見事だった。
ただ綺麗なだけではない。
そこには、別の美しさも存在していたのだ。

『今日の食事は、私が作りました』

『料理もお上手なんですね』

『王都にある母の実家で居候をしていましたので、最低限の嗜みは』

『いえいえ。とても美味しいですよ』

カルラさんの作る食事は、とても美味しかった。
あの飯には五月蝿いヴェルが美味しいと言うのだから、相当な物だと思うのだ。
エリーゼとは、ほぼ互角なはずであった。

『エルヴィンさん。このお洋服ですけど、解れた部分を直しておきました』

捕虜とはいえ賓客なのでそんな事はしなくてもいいのに、カルラさんはエリーゼ達と一緒に甲斐甲斐しく働いていた。

『エリーゼさん達とお話をしながら働いている方が楽しいですから』

『（天使だ！　マジ天使だ！）』

きっと、こんな人が奥さんになってくれたら最高なのであろうと思う。

しかし、今の俺とカルラさんには身分の壁がある。

俺はヴェルの家臣で、カルラさんはブロワ辺境伯の末娘。

更に、ようやく再開した裁定交渉の席で、ブロワ家の二人の後継者候補達は共にカルラさんをヴェルの奥さんに押し込もうと画策していた。

その事実に、俺の心は大きく動揺する。

「なぁ……。ヴェル？」

「受け入れらるか！　ブライヒレーダー辺境伯も、ローデリヒ以下の家臣達に聞いても賛成なんて一人もいないわ！」

未開地の開発で経済的にも潤い、貴族や陪臣の次男以下を新規雇用しているバウマイスター伯爵家という、美味しいパイの分け前を狙っているのが明白であったからだ。

「うちの実家への反乱教唆に、この無駄な出兵。身代金をなるべくふんだくって黒字で戻るのが一番」

ヴェルは、もう金輪際ブロワ家と係わり合いになりたくないようだ。

「左様にございますな。今出している人数ですら、バウマイスター伯爵領では痛手でしょうから」

「反乱の首謀者が、そう言うくらいだからな」

「いえいえ。ヴェンデリン様。私は、実行責任者というところが妥当で」

貴族になったヴェルは、個人的な感情ではカルラさんを妻にはしないはず。

本人もそう言っているし、間違いはないはずだ。

『何の柵（しがらみ）もなければ、最高の女性だけどね』

とは評価していて、俺も少し不安ではあるのだが。

しかし、ヴェルの嫌味を余裕で受け流すあのクラウスという老人は恐ろしい。

こんな妖怪のようなジジイ、うちの実家にはいなかった。

きっと彼は、生まれて来る場所を間違ったのだ。

「エルヴィン殿は、何かお悩みでも？」

しかも、このジジイ。

俺の、カルラさんへの気持ちに気が付いたらしい。

早速に探りを入れてくる。

「悩みなんて無いけど」

「そういえば、裁定交渉の進展次第では再びカルラ様をヴェンデリン様が娶るという条件が真実味を……」

「ええっ！」

クラウスからの突然の暴露に、思わず俺は驚きの声を挙げてしまう。

「お若いですな。エルヴィン殿は、少し感情を隠される事を心がけた方が宜しいかと。こういう物は経験なので、焦る必要もございませんが……」

やはり、このジジイは妖怪だ。

どうせバレてしまったし、ヴェルに報告するであろうと、俺は正直に自分の気持ちを話していた。

「身分違いの恋ですか。私は、生憎と経験がございませんで……」

「そういえば、クラウスさんの奥さんの話は聞かないな」

「若くして病死しましてね。私は元は次男で、名主を継げる立場には無かったという話は聞いていると思いますが……」

そんなクラウスさんにも婚約者がいたそうだ。

「近くの農家の次女でして、幼馴染でした。お互いに、貧しくてもいいからどうにか二人で一家を立ち上げたいと……」

ところが、父と兄が急死してクラウスさんが名主になる事が確定してしまう。

「そうなると今度は、『名主になったクラウスさんには相応しい妻が必要だ』とか周囲が言うのです。私は、意地でもマルタを諦めませんでした」

唯一これだけは譲れないと、周囲の反対を押し切ってその幼馴染の女性を妻としたそうだ。

「ただ、彼女には負担をかけてしまいましたね……」

周囲から『普通の農家の次女程度が、名主の妻など本当に務まるのか？』というプレッシャーを受け、まだ子供達が幼い内に病死してしまったそうだ。

「可哀想な事をしたのかもしれません。ですが、病床でマルタは『幸せだった』と言ってくれました。私に気を使ったのかもしれませんが、その言葉で十分ですよ」

その後は、周囲の後妻を娶れという勧めにも従わずに、独身を貫いているそうだ。

普通ならば、名主ともなれば正妻が死ねばすぐに後妻を娶る。

それをしなかったのは、クラウスさんが自分を貫いたからなのであろう。

間違いなくそれを勧めたヴェルの親父の面子は潰しているので、あの二人の仲の悪さも納得できるのだが。

「私の経験は、あまり役に立たないかもしれませんね。身分差がある恋。例えば、エルヴィン殿は資産を持っています。ご自分で領地などを開発して貴族になれば……」

それも考えなくはなかったけど、ヴェルを見ているから余計に思うのだ。

貴族になるよりは、雇われている方がよほど気が楽だと。

「それに、その間にカルラさんの旦那は他の奴に決まるだろうし」

「そうですよねぇ。ならば、逆を考えるのです」

「逆？」

「カルラさんの価値を落とします」

カルラさんはブロワ辺境伯家の末娘で、今の立場だと最低でも男爵家以下の貴族家の当主か跡取りに嫁ぐのが普通だ。

「ですが、ヴェンデリン様の正妻というのは不可能ですね。長女や次女ならともかく」

このままヴェルに嫁ぐと、序列的にはカタリーナの下で四番目であろうと。

「エリーゼ様は言うまでもありません。正妻の地位など求めたらブロワ家に非難が殺到です。教会も敵に回す羽目になるでしょう。二番目もありえません。ヴィルマ様の義父様のご身分を考えますと。カタリーナ様もご自身が名誉爵位持ちなので、いきなり追い抜いたらやはり非難轟々です」

「となると、四番目？」

「それをすると、今度はルイーゼ様とイーナ様を送り込んだブライヒレーダー辺境伯様が怒ります。かと言って、一番序列を下にするなどブロワ家としても容認できない」

「最初から無理がある話なんだな」

「そういう事ですね」

妻の序列とか面倒な話だけど、当事者同士には深刻な話なわけだ。

「それがわかっていないのなら、ブロワ家はどちらが継いでも未来は暗いですね。暫く低迷状態が続くでしょう」

クラウスさんは、何気にブロワ家の将来を悲観していた。

「それはわかったけど、ならどうすれば？」

「カルラ様は、現時点でもヴェンデリン様の妻になるのは厳しい。ならば、もっと追い込まれればどうなるか？」

末娘なので、嫁ぐ先のハードルが下がるはずだと。

「ヴェンデリン様の親友にして、警備まで任されている重臣が独身である。さて、ブロワ家はどう考えるのかと」

ヴェルの妻には押し込められなくても、俺の妻にならいけるかもしれない。

しかも、本妻ならば文句も出難いはずだと。

「バウマイスター伯爵家と繋がりも出来ます。それが、どの程度の繋がりかはヴェンデリン様次第ですけど」

その内に、全く利権を融通しないで再びブロワ家に暴発されても困ると考える人達も出るかもしれない。

多少の融通をする時に、縁があれば何かと便利であろう。

「エルヴィン殿の妻なら、その辺のコントロールが楽なのです。都合が悪ければ、ヴェンデリン様のお力でその動きを封じられますし」

『俺の妻じゃないから』で、融通しない選択も可能なわけだ。

「それはわかったけど、これ以上ブロワ家が追い込まれるかな？」

今でも、無駄な抵抗しているわけだし。

その内に自暴自棄になって、全軍突撃でもするかもしれない。

「その件でしたら、カタリーナ様から聞いていらっしゃるでしょう？」

「ヘルタニア渓谷だっけ？」

資源の宝庫ではあるが、繁殖する岩製のゴーレム達に守られて採掘が不可能な魔物の領域。

ブロワ家側からすれば不良債権なわけだが、ここを貰ってからヴェル達で開放してしまえば、ブロワ家のショックも大きいであろうと。

「多少の和解金の減額など、一瞬で取り戻せるはずです」

もしそうなれば、ブロワ家は余計に追い込まれる。

交渉で正式にバウマイスター伯爵家に譲渡し、そこには王都から来た役人も証人として存在しているのだ。

『開放されたから、あの条件はやっぱり無しで』などと言えば、『ブロワ家は、決められた裁定案も守れないのか？』と非難されてしまうからだ。

「今の時点で、カルラ様の嫁ぎ先は不明です。状況も、そう簡単には動かないでしょう」

「ならば、俺は」

「ヘルタニア渓谷開放に全力を傾ける事です」

それからすぐに、ヘルタニア渓谷のバウマイスター伯爵家への譲渡が決定する。

和解金の減額と合わせて、先にバウマイスター伯爵家は裁定交渉を終わらせたのだ。

随分と呆気なく譲ると思ったけど、ブロワ側は過去に何回もヘルタニア渓谷の開放を目指して損失を増やしたらしい。

さすがのヴェルでも、開放は不可能だと踏んだのであろう。

俺から言わせると、ヴェルに格安で美味しい利権を譲渡したのに等しい行為なんだけど。

それはヴェルだけじゃ不可能だろうけど、あいつには知己の魔法使いが複数いるからな。

「さあて。導師に連絡だな」

「導師も呼ぶのか？」

「扱いは、冒険者に準ずるだけど」

貴族として呼ぶと利権の分配が面倒なので、ヴェルは導師を冒険者として呼ぶ事を決定していた。

ヘルタニア渓谷の開放に成功したら、全て現金で報酬を支払うらしい。

「そんな無茶が可能なのは、ヴェルだからか」

ヴェルが報酬に渡す白金貨を数えているのを見て、すぐに納得する。

ヘルタニア渓谷への突入は、ヴェル、導師、ブランタークさん、カタリーナ、ルイーゼで行なう。

メンバーを見ればわかるが、突入は空から『飛翔』を用いて行なうつもりのようだ。

「地上にいる獣型の岩製ゴーレム達は、最初から相手にしない。陽動部隊に一任する。エルは陽動部隊の先陣を任せるぞ」

「任せてくれ」

ここで頑張れば、またバウマイスター伯爵家が大きくなって、ブロワ家がカルラさんを嫁がせる条件を下げるかもしれない。

クラウスさんの言っている事が実現するのかはわからなかったが、今はそれに縋るしかないよな。

現場であるヘルタニア渓谷へと移動し、早速領域内に入って迎撃してきた岩製のゴーレム達を相手にする。

強さは、普通の狼よりは少し鈍いが、岩で出来ているから防御力は高いか。

三匹ほど切り伏せたけど、剣が研ぎなおしになってしまった。

数で相手の消耗を誘うのが、このゴーレム達の目的なんだろうな。

「エルヴィンさんの剣の腕前は素晴らしいですね」

そんな事よりも、カルラさんが俺を褒めてくれたんだ。

彼女に褒められると、真面目に剣の鍛錬をしていて心から良かったと思う。

「エルヴィン。カルラさんも応援してくれているぞ」

ヘルタニア渓谷の開放作戦が始まって陽動任務に入ると、モーリッツさんが俺にそう告げていた。

後ろを見ると、カルラさんが手を振ってくれている。

「（ここは、男の見せ所だ！）」

あのドランゴーレム戦の報酬で買った、二千万セントもしたオリハルコン製の剣でゴーレム達を斬り伏せていく。

さすがはオリハルコン製、岩のゴーレム達がまるで紙のように切り裂かれていき、俺の評価も上がったというものだ。

「お前。凄い剣を持っているんだな」

「冒険者としての報酬で買いました」

「あれだけゴーレムを斬って刀身に傷一つ無いとか……。主役を任せるからな」

「はいっ！」

ヴェル達がヘルタニア渓谷のボスであるロックギガントゴーレムを狙っている間に、俺は剣を振るい続ける。
ここで頑張れば、カルラさんは俺の気持ちに気が付いてくれるはずだ。

「終わったか……」

多くのゴーレム達を斬り伏せたところで、ヘルタニア渓谷の大地に轟音が響き、地震が発生する。
どうやら、ヴェル達が目的を達したようだ。

領域のボスであるロックギガントゴーレムの破壊と共に、操られていたゴーレム達が全てただの岩の塊に戻ってしまった。

「エルヴィンさんは、冒険者としても一流なのですね」

ゴーレム達が全滅してエリーゼとカルラが陣地を移動するために俺の傍に姿を見せてる。
カルラさんは、一番先に俺に声をかけてくれた。

「ヴェルのオマケですけどね」

「バウマイスター伯爵様は、かなり特別な方ですから例外ですよ。私は、エルヴィンさんも凄いと思います」

「（やったよ！　俺が凄いって！）」

ヘルタニア渓谷開放後は、本陣を移動してゴーレムの残骸から魔石や鉱石を回収したり、鉱脈の確認を行なったりと。
手早くお金になるようにして、同時に横取りを企む不届き者への

対策を行なうようになる。

俺もそれなりに忙しかったが、カルラさんとは良く話をするようになっていた。

「こんな事を言うと怒られるかもしれませんが、私はブロワ家になど本当は居たくないのです」

「気持ちはわかります。俺も、実家とはほぼ絶縁状態ですから」

カルラさんは、自分の人生を翻弄しかしないブロワ家を嫌っている。

俺も、実家には言いたい事が山ほどあった。

冒険者になった時に、親父や兄貴達から半ば勘当・切り捨て扱いされていた。

わずかな独立支援金だけ渡されて、『もう実家に戻って来なくていいから』と言われていたのだ。

ヴェルの実家よりは多少マシ程度の騎士爵家なので、五男の俺に居場所などなかった。

その前に、子供の頃から人が苦労して獲った獲物を横取りして当然という態度とか、人を何だと思っているのであろう。

独立後を考えての、金を貯める行為にまで親父達は邪魔してくる。

未成年者から成果を搾取するなど、一体何を考えているのであろうか？

ただ、その罰は受けている。

俺がヴェルの親友であり、バウマイスター伯爵家の重臣に確定し

ている事実を知った実家はいきなり手紙を送ってきていた。

『シュトフェルとヴィーラントは、どのくらいの家格の陪臣になれるのだ？』

この手紙を受け取った時に、俺は最初意味がわからなかった。

向こうから縁を切ってきた癖に、俺が当主の親友でコネがあると知ると兄達の仕官の世話をして当たり前だと手紙を送ってくる。

あまりの衝撃に、俺は呆然とするしかなかった。

『呆れるばかりだな』

『このシュトフェルとヴィーランって？』

『三番目と四番目の兄貴』

五人全員母親は同じであったが、兄弟仲はあまり良くない。

上の兄が下を虐げて搾取する構図が出来ていたので、一番目と二番目の兄達に搾取されていた三番目と四番目の兄達は、一番下の俺をその対象にしていたからだ。

冒険者予備校で他の同じような立場の奴から聞いても、うちはかなり酷い部類に入るようだ。

『そういうわけだから、無視でいいですから』

『多少は考慮しないと拙くないですか？』

ブライヒレーダー辺境伯様が気を使って忠告してくれたが、事情を話すと納得してくれたようだ。

『さすがに少し酷いですね。優遇しろとは言いませんが、せめて邪魔はしないのが常識でしょう』

独立資金を貯めるのを邪魔をするという事は、外に出てから野垂れ死んでも構わないと思っているからだ。

『野垂れ死んでも構わないと思っていた五男が独立したのです。それで十分だと思いますよ』

『そうですね』

そんな話の後に、うちの実家への優遇は一切しない事が決まっていた。

それを伝えるとまた手紙を送って来て、『厳しかったのは、我が子を谷底に突き落とす獅子に倣ったのだ』とか、『お前が優れていたから仕方なく』とか言い訳が書いてあったが、当然無視している。

更に、この件が西部を統括するホールミア辺境伯家に漏れたそうだ。

ホールミア辺境伯は、俺との縁で多少の優遇処置を受けられると思っていたらしい。

ところが、実際には普通の対応しかして貰えなかった。

東部のように除外されたわけではないが、当てが外れたのは事実で、その事情が知られてから実家は西部で白い目で見られるようになったらしい。

『母さんが生きていれば、少しは考慮したかも』

『お母様がですか？』

唯一庇ってくれたのは母だけであったが、俺が十一歳の時に病死してしまっている。

義理を果たす必要など、もうあの実家には無いのだ。

『そうですか……。私には母がいます。それだけでも、幸せなのかもしれません』

こんな話をするようになり、俺とカルラさんとの仲は相当に深まったはずだ。

ヴェルも、開放されたヘルタニア渓谷の開発・防衛計画を急ぎ推進していて、そのあまりのスピードに後継者候補達が裁定交渉の席に縛られているブロワ家は何も対応できていない。

「所属不明の密偵らしき奴らが何人か捕まったな」

「所属不明って、ブロワ家しかあり得ないだろう」

「どこの密偵でも、今のヘルタニア渓谷は準戦時状態だからな」

可哀想ではあるが、密偵は捕まれば処刑される。

平和な時代ではあるが、仲が悪い貴族同士は密偵を送り合い、それが捕まれば殺されてしまうのが普通だからだ。

「特に、応援に来ている王軍に捕まったのは駄目だな」

たまに水面下の交渉で密かに開放されるケースもあるのだが、決まり通りに動く王国軍に捕まればすぐに首を刎ねられる。

ブロワ家としても、既にバウマイスター伯爵家の物になっているヘルタニア渓谷に勝手に密偵を送っているので苦情を言うわけにもいかず、無駄に訓練された密偵を失ったわけだ。

「トップが不在だから、現場が混乱しているのでしょう」

カルラさんの言う通りであろう。

もし情報を得たいのであれば、もっと計画的に密偵を送るべきなのだから。

「やはり、自分の道は自分で切り開くしかないのでしょうね……」

ヘルタニア渓谷開放から数日後、カルラさんは俺にこう漏らしていた。

「自分で切り開く？」

「はい。私はブロワ家の籍から抜けたいのです。柵（しがらみ）の無い立場で、自分の力で生きていく」

弓の腕前から考えると実力的には可能であるが、あの二人の兄達が政略結婚の駒となる彼女を手放す可能性は低い。

一体、カルラさんはどうやってそれを成すのであろうか？

「ブロワ家には、継承権第三位の叔父が居ります」

彼女は、ヴェルに一つの情報を提示していた。

先に亡くなったブロワ家当主よりも、三十歳近く年下の末の弟。

この人物にブロワ家を継がせて、紛争の早期決着を目指す方が良いと。

「カルラさんは、彼からブロワ家の籍を抜いて貰うと？」

「それしかありません」

「なるほど。それは良いアイデアですね」

ブロワ辺境伯家の娘ではなく、母親の実家である貧乏法衣騎士爵家の子女となる。

これならば、彼女の行動の自由も広がる。

「（家格的に考えても、俺と釣りあう。素晴らしい作戦じゃないか）クラウスさん」

「私も絶対の確信があって言ったわけではないのですが、カルラ様はなかなかに……」

クラウスさんは、カルラさんが思った以上に知恵が回ると思っているようだ。

「綺麗で賢妻とか。素晴らしいめぐり合わせだな」

「はあ。そうですな……」

少しクラウスさんの口調が気になるが、今は先に事を成すのが先決だ。

俺もヴェルの護衛として、ブロワ領へと乗り込む。

そしてブロワ家は、ヴェルの仕返しによって第三の候補者による当主就任と、裁定案の受け入れを実行する。

あの夜襲を指導した重臣達は縛り首となって家も改易、他にも減禄で没落した家も多い。

先代の家族はほぼ全てが王都に押し込まれ、捨扶持代わりの騎士爵家を与えられて力を失ってしまう。

自業自得とはいえ、ヴェルを怒らせるからこうなるんだ。

あいつは、自分に害が無ければこんな事はしないのだから。

「ようやく終わりましたね」

「はい」

紛争終結後、カルラさんは無事にブロワ家の籍から抜ける事に成功していた。

これからの予定を聞くと、まずは王都に住んでいるお母さんに報告を行いたいそうだ。

「あとは、暫くは共稼ぎでしょうね」

「共稼ぎ？」

「はい。私は結婚します」

「そんな方が居るのですか？　どんな方なのです？」

衝撃の事実に鈍器でぶん殴られたようなショックを受けるが、彼女が続けてその相手の特徴を語り始めると、次第に嬉しさで胸が一杯になってくる。

「一つ年下で、馴れ初めは弓を教えた事です……」

他の特徴を聞いても、間違いなく俺の事を示しているとしか思えない。

「（つまり、これは……）」

前に、適当にパラパラとページを捲って見た恋愛物語の一つで、主人公に『結婚します』と言って一旦落としておいてから、実は女性の方から主人公にプロポーズするというパターンに良く似ている。

いや、全く同じシチュエーションである。

『女って、こういう物語が好きなのな』

『文句ある？』

本の持ち主であるイーナには悪い事を言ってしまったな。

今の俺は、そういう物語が大好きになっていた。

「王都の母に許可を貰いたいですし、結婚して落ち着いてから一緒に住みたいとも思っています」

「それが良いでしょうね（勝った！　俺は、勝ったんだ！）」

昨日ヴェルから、『俺が婚姻を命じた方がいいか？』と聞かれて断ったのだが、それで良かったわけだ。

せっかく結婚するのだから、相思相愛で主君からの強制は良くない。

実際に、彼女は俺を選んでいるのだから。

「王都で準備を整えてから、バウルブルクに挨拶に参ります」

「わかりました」

カルラさんは王都へと戻り、俺は彼女の再訪を心待ちにして普段の生活に戻っていた。

「エルヴィンは、ご機嫌なんだな」

「そうですか？」

トーマスさんに指摘された通りに、俺は浮かれている。
それでも仕事はミスしていないので、特に問題はないはずだ。

「大丈夫なのですか？」

「カタリーナが何を心配しているのかわからないが、俺は絶好調だぜ」

カルラさんから、明日にはバウルブルクに到着すると連絡が入り、俺のテンションは一気に上がる。
そんな俺にカタリーナが首を傾げながら心配していたが、彼女の見当違いの心配など今の俺には何の影響もない。

そして翌日、念には念を入れて到着時刻の一時間前から港の前で待っていると、着陸した魔導飛行船からカルラさんが姿を見せていた。
彼女は、初めて出会った頃のミスリル製の武具や高価な服装ではなく、下級貴族の娘が良く着る質素なワンピース姿であった。

それでも、彼女の美しさはまるで揺るがない。
やはり彼女は、俺の天使であった。

「お久しぶりです。エルヴィンさん」

「お久しぶりです。カルラさん」

待ちに待った再会を果たし、俺の心が歓喜に満ち溢れている。
彼女は、俺と結婚するためにここまで来てくれた。
それだけで、人生最大の喜びを迎えたのだ。

「私の婚約者をご紹介しますね」

「（まだ物語が続くのか。カルラさんって、意外とロマンチスト？）」

その後、その相手が俺だと知れて二人は抱きあったり、キスをしたりするわけだ。
わずか数秒後の事でも、待ち遠しくて仕方ない。
それでも、その瞬間までの喜びを俺は余す事なく甘受するのであった。

「……（あれれ？　どういう事？）」

のはずだったのに、俺はなぜか一人港の前で佇んでいた。
なぜだかわからないのだが、カルラさんは後ろにいた俺に雰囲気が良く似ている男性を婚約者だと紹介したのだ。

しかも彼は、武芸大会の弓の部で優勝した逸材君らしい。
その腕を見込まれて、ホールミア辺境伯家に弓術指南役として仕官がかない、夫婦で新婚旅行も兼ねて魔の森で狩猟と採集も行なうのだと。

『エルヴィンさんには、大変に良くして貰って』

『おめでとうございます』

どうにか気力を振り絞っておめでとうの言葉を言うが、これが俺の限界だ。
それが言えただけでも、俺を褒めて欲しいところだ。

「なあ。エル」

「ヴェル。そっとしておきなさいよ」

「でもさ。イーナ」

「今触れると、エルが瓦解するから」

何か、ヴェルとイーナが喋っているけど、俺には良く聞こえないや。
というか、どうしてこうなった？

俺は、何か悪い事でもしたか？
カルラさんとは、物凄く上手く行っていた。
ヴェルが遠慮をして、弓の指導時と仕事以外ではあまり話をしないから、女性陣を除けば俺が一番仲が良かったはず。

「（友人扱い？　友達扱いだったのか！）」

俺に良く似た男性を婚約者だと紹介して、彼女は去っていく。

「なあ、大お見合い会なんだけど……」

ヴェルが何を言っているのか、良くわからない。

「エルの坊主。選び放題だな」

ブランタークさんが何か言っているようだが、これも良くわからない。

「エルヴィン様ですよね？　私、イレーネ・フィリーネ・フェアリーガーと申します」

何か、女の子らしき人が話しかけてくるけど、良くわからない。

「駄目だな。アレは重傷だな」

「ブランタークさん。今回は諦めた方がいいですかね？」

「若いんだから、一年や二年遅れても大丈夫だろうしな」

「ですねぇ……」

外野が色々と言っているが、意味がわからないし頭にも入らないのだ。

「（でもなぁ……。せっかくの大お見合い会だ）」

それだけは、辛うじて認識できる。

確かに、俺の初恋は終わった。

完膚なきまでにフラれて終わったのだ。

「（だが、それで全てを諦めるか？）」

俺はまだ若いんだ。

きっと他にも、第二のカルラさんがこの世界にはいるかもしれない。

ヴェルが企画した大お見合い会には、多くの参加者がいる。

中には、ピンとくる女性だっているかもしれない。

「（立ち上がれ！　エルヴィン！　俺は、新しい恋を見つけるんだ！）」

俺は気力を振り絞り、失恋のショックで呆けていた自分を取り戻す。

「（ヴェルのように、複数の奥さんだって有りなんだ！　目指せ！　プチハーレム）」

失恋を乗り越えた俺には、もうショックなどない。

きっと、カルラさんを超える素晴らしい女性を奥さんにしてみせるのだ。

「ヴェル。参加者の中で素晴らしい女性は？」

「えっ……。もう大お見合い会は終了だけど……」

ようやく目覚めた俺に、ヴェルはとんでもない事実を突きつける。

「ほら。もう片づけを始めているだろう」

屋敷の庭では、テーブルなどの片づけが始まっていた。

その前に、参加者が一人もいない。

「みんな。相手が決まって町を案内されていたり、もう同居の準備を始めている人もいるし」

「えっ？」

「ゴメンな、エル。今回は、俺がもっと強引にでも手を貸していれば……」

「いや……。それはいいんだ……」

カルラさんが心に決めていた相手がいるのに、ヴェルが強引に俺と結婚させてしまうのは、俺のプライドが許せないし。

それよりも、ようやく我に返ったら大お見合い会は終了していた。

その事こそが、ショックじゃないか。

「その内にでも、またお見合いでも……」

「いや、俺は自分で素晴らしい女性を見つけるんだ！」

こうなったら、もう意地である。

絶対に、カルラさんよりも素晴らしい女性を見つけて結婚してや

る。
俺はそう心に誓い、それを宣言するが如くその場で絶叫するのであった。

「そういう夢のような高望みは、独身期間を長くしますわよ」

カタリーナが、かなり失礼な事を言っている。
自分だって、ヴェル以外に付き合った男などいない癖に。

「それでも、私にはヴェンデリンさんが居りますわ」

そして、反論できない自分が少し悔しかったが。

第七十五話　貴族は、結婚式も初夜も面倒だ！

「伯爵様。ガチガチじゃねえか」

「いや。それは緊張するでしょう」

ブロワ辺境伯家との紛争が終わり、エルが失恋したり、大お見合い会が開かれて、それから更に一ヵ月後。

遂に俺は十六歳となり、ようやく完成したバウマイスター伯爵家本邸において結婚式が行われる。

勿論、前世も含めて俺に結婚した経験などない。

前世で二十五歳で独身の奴など珍しくなので、これは仕方が無いのだと言い訳しておく事にする。

何度か、早婚の友人や親戚の結婚式に出たくらいである。

その時は、当事者でない気楽さから新婦の友人で可愛い娘に連絡先を聞いてみたり、披露宴のキャンドルサービスの時に自分のテーブルのロウソクの芯を水で濡らしたりと。

本当に、人様の結婚式とは気楽な物であった。

ところが、今の俺は貴族である。

しかも伯爵様で、王家の肝入りで未開地の開発を進めている。

当然、沢山の偉いお客さんを招待しなければいけない。

各地の大物貴族に、中央の大物法衣貴族に、縁ができた普通の貴族達にと。

相手がもう少し格が落ちる貴族だと跡取りが代理として出席するパターンも多いそうだが、今回は全員当主が出席すると返答したそうだ。

閣僚クラスの人達は、まだ見慣れているだけマシであろうか？

他の招待客も、なるべく漏らさず呼ばないといけない。

『呼ばれないと、臍を曲げる貴族もいますからな』

ローデリヒはリストの確認に余念が無かったが、貴族とはプライドが高い生き物なので、自分が呼ばれないだけで激怒して感情的に邪魔をしてくる可能性があるのだ。

彼からすると、第二のルックナー男爵はゴメンなのであろう。

『来ないのは自由ですので、なるべく招待はしたいと思います』

『面倒くせぇ……』

『実は大半の貴族が、内心では思っていますよ。お祝いも大量に包まないと駄目ですし、お返しとかも面倒ですから……』

『お返しが面倒なのはうちじゃないか』

『向こうの冠婚葬祭への出席もありますね』

『もう今から行きたくねえ』

『いや、絶対に招待されますから』

彼らを含めた招待客達と、その付き人や護衛などでバウルブルクの町は人で溢れていて、トリスタン達は何かがあってはいけないと警備に大忙しであった。

勿論、ローデリヒはもっと忙しい。

結婚式に関わる雑務全てを取り仕切っているので、新婚なのに全く休みが取れていない状態が続いていた。

結局彼は、八歳のルックナー財務卿の孫娘を正妻にして、他に商務族のレッチェ伯爵の長女カチヤを妻に迎えている。

これからバウマイスター伯爵領の開発が進むと商業関連の話が出て来るので、そういう形になったわけだ。

八歳の子の方はまだ結婚が出来ないので、今は王都で嫁入り修行中という扱いで、彼女の子供があのお騒がせ男ルックナー男爵家を継ぎ、カチヤの子が陪臣家を継ぐという事で話が纏まったそうだ。

その話し合いに、あまりローデリヒ本人が加われていない時点で、貴族とは面倒臭い生き物である。

こういう風に決めても子供が生まれないケースもあるので、またそれはそれで面倒になるらしい。

出来れば、ちゃんと子供を作って欲しいところである。

『あの。お館様も人の事は言えないのですが……』

エリーゼに男子が生まれないと、同じく面倒な事になるそうだ。

とは言われても、こればかりはその時になってみないとわからな

い。
平成日本では、よほどの田舎でもないと子供が男でも女でもそれほど問題にもならないので、あまりその辺の危機感が良く理解できないのだ。

『それにしても、結婚ラッシュで疲れましたな』

ローデリヒの言う通りで、この一ヶ月ほどは結婚式に出てばかりであったと思う。
あの大お見合い会ですぐに決めてしまったカップルの結婚式に、みんなで毎日駆け回る羽目になっていたのだ。

『エーリッヒ兄さん。二次会には出られません。ごめんなさい』

『忙しいのかい？』

『今日は、これから家臣の結婚式が二つ行われますので……』

『ご愁傷さま』

途中、王都で側室を迎え入れたエーリッヒ兄さんの結婚式に出たのだが、あまりゆっくり出来なかった。
なまじ『瞬間移動』が使えるので、鬼のローデリヒによってガッチリとスケジュールが組まれてしまったのだ。

『一日に三件の結婚式に出る貴族って、初めて聞いたな』

『ヘルムート兄さん。代理で出てくれませんか？』

『いやいや。ヴェルの家臣の式だから無理！』

同じく昨日に式を行ったヘルムート兄さんが、同情の視線で俺を見つめる。

側室を迎えるだけの式なのに俺絡みなので規模が大きくなってしまい、スケジュールにも無理があったので父、母、ヘルマン兄さん、パウル兄さんなどは俺が王都まで一緒に『瞬間移動』で連れて来ている。

さすがの両親も、もうこの手の付き合いからは逃げられない。

五十歳を過ぎて初めて大物貴族などに挨拶をして、色々と大変そうである。

俺もその役割りはまるでタクシーのような物で、しかも式に出れば、出席者の偉い貴族達から歯の浮くようなお世辞や未婚の娘を紹介されたりする。

ようやくそれが終わって席に座ると、ただ溜息しか出なかった。

『ヴェル様。これ美味しい』

『ヴィルマは変わらずに可愛いなぁ……』

『いい気持ち……』

こういう時には、いつもと全く同じ行動を取るヴィルマが可愛く思えて、思わず頭を撫でてしまう。

彼女がパーティーに出ると、ひたすら美味しい物を探して食べていたからだ。

連れている婚約者が彼女一人なのは、あまりにクソ忙しいので一人ずつ順番にという事になっていたからだ。
出席していないエリーゼ達も自分達の結婚式の準備で忙しいので、別にサボっているわけではない。

『バウマイスター伯爵は、もっと食べた方がいいぞ』

その義父であるエドガー軍務卿も、ヴィルマと同じようなタイプであった。
ヴィルマの隣で、義娘の勧める肉料理をまるで導師のように頬張っていた。

『エドガー軍務卿は良く食べますね』

『食うくらいしか趣味がないからな』

とはいえ、普段は太らないように体を鍛えて粗食に耐えているらしい。
これは、息子であるトリスタンから聞いている。
他の貴族から招待されたパーティーで食べる事で、己の欲望を発散させているそうだ。

『食っていれば、面倒なダンスの誘いとかをかわせるからな！』

『義父上。これ美味しい。食べる？』

『おお我が娘よ！　皿に一杯盛ってくれ』

『わかった』

多分、軍系の貴族だからそれが許されているのだと思う。
しかし、血が繋がらないのに良く似た親子である。

『パウル兄さんは、どんな感じですか？』

『奥さんが二人いると面倒。ヴェルは良く五人も貰うよな』

俺は、エドガー軍務卿と一緒にいたパウル兄さんにも声をかける。
彼は警備隊時代のツテで寄り親がエドガー軍務卿なので、側室もその縁であり、今日の付き添いも大切なお仕事というわけだ。

『この前、六人になりかけましたけどね』

『ブロワ家の末娘だっけか？』

『今は、元ですけど……』

『よくぞ突っぱねた！　褒めてやるぞ！』

エドガー軍務卿に思いきり背中を叩かれて、俺は一瞬息が詰まってしまう。
彼からすると褒めているのであろうが、力が強過ぎて俺の体にダメージが大き過ぎるのだ。

『ヴェルの友達のエルヴィンが失恋した話も聞いた。大丈夫なのか？』

生粋の貴族ならばエルを批判するのであろうが、パウル兄さんもあまり貴族らしくないので、同じ男として純粋に失恋したエルに同

情しているようだ。

『俺も、警備隊時代にあったからなぁ……。声をかけようにも、身分違いでそれすら不可能とか。それを思うと、今は隔世の感があるけどな』

『そうだったんですか』

普通に考えると、パウル兄さんが貴族になれる可能性は薄かった。だから、気になる女性が貴族の娘だとどうにもならなかったのであろう。

『エルは大丈夫だと思いますよ』

『確かに。彼は逞しいなぁ……』

『こんにちは。お嬢さん。私はバウマイスター伯爵家に仕えるエルヴィン・フォン・アルニムと申しまして』

エルは、綺麗目な未婚に見える女性に声をかけて理想の嫁探しに奔走していた。

ついこの前に失恋したとは思えないタフさである。

『そのくらい逞しくないと冒険者は出来ない』

『なるほど……』

パウル兄さんは、ヴィルマの意見に深く頷いていた。

『ところで、ヘルマン兄さんのところはどうなったんだ?』

元バウマイスター本家なのでルックナー財務卿などが気を使って側室探しをしたのだが、実は一つ問題があった。
ヘルマン兄さんの正妻であるマルレーネ義姉さんは、親族とはいえ陪臣の娘なので身分が低い。

次男であるヘルマン兄さんは元々陪臣家の跡継ぎとして期待されていたので、外から嫁を迎え入れなかったのだ。

『下手に外から側室を迎え入れると、側室の方が身分が高くなってしまうんですよ』

どんな貧乏騎士の娘でも、さすがに陪臣の娘よりは身分が高いからだ。

『うわっ！　その手の面倒な話かよ！』

パウル兄さんもその手の話はお腹一杯のようで、露骨に嫌な顔をしていた。

『それでも、ルックナー財務卿達は懸命に探したそうですよ』

『俺も探したぞ！　骨折りだったがな！　あははっ！』

肉料理のお代わりをヴィルマに頼みながら、エドガー軍務卿も話に加わってくる。

『例は少ないが、こういう状況だと普通は妻の序列の交換を要求するんだがな。バウマイスター伯爵の兄貴に断固拒否されてしまった。あいつ、意外と男気があるな』

大物貴族の陪臣の娘でもまだマルレーネ義姉さんの方が格が低いという現実もあり、ルックナー財務卿達は側室探しに思わぬ苦戦をしたそうだ。

名乗り出た家は多かったのだが、みんな口を揃えて『では、うちの娘が正室になるのですな』と言い始めたらしい。

『ルックナーのバカが一度折れて、バウマイスター伯爵の兄貴に一度奥の序列の交換を頼んでな』

『そんな事をヘルマン兄さんに言えば……』

ヘルマン兄さんは、次期当主であったクルトにも平気で逆らった人なのだ。

そんな要求を呑むはずがない。

『案の定、では側室はいりませんとキッパリと言われてな』

『ヘルマンの兄貴なら、そう言うよな』

現在、マルレーネ義姉さんは三人目を妊娠しているらしいし、領地の開発が進んで名主や陪臣が足らなくなれば領内で側室を探せばいいのだから。

『それで、どうなったんです？』

『ルックナーが、涙目で寄り子達を探してだな……』

『あの人、たまにチョンボするなぁ……』

『フォローの才能は凄いんだけどな』

とある男爵家の四女にあたる、義娘を嫁がせる事を決めたそうだ。

『義娘？』

『当主が、他所で平民の娘とだな……』

外で作ったので本家には入れられず、実の娘なのに養女としてヘルマン兄さんに嫁がせる。

養女だから、側室でも構わないですという事のようだ。

『嫌な話ですね……』

『そいつは知っているけど、本妻がえらくキツイ女でな。外に安らぎが欲しかったとか？　その娘も家に入れようにも本妻が虐めるのは目に見えていたしな。渡りに船だったようだな』

援助はしていたが平民として暮らしていたので、うちのような田舎貴族領ならばさほど苦労はしないで済むはずだという理由もあるらしい。

『本人は喜んでいたよ。子供が名主や陪臣になれるからな』

『となると、あとはマルレーネ義姉さんの機嫌か……』

『ヘルマンの兄貴なら何とかするよ』

俺とパウル兄さんは、あとは本人同士の問題であるとその話題に

ついて考えるのを止める。
決して、マルレーネ義姉さんが怖かったからではない。

『バウマイスター伯爵も、気を付けろよ』

『俺は、エリーゼ達の子供に不自由させないようにする義務がありますので』

全員に伯爵位はやれないが、それなりの生活を確保してやらなければいけない。
当主というのも、なかなかに大変なのだ。

『バウマイスター伯爵は、自分を殺そうとした兄の子供達にも爵位と領地を渡す剛毅な男だからな。心配はしていないぞ』

何か引っかかるエドガー軍務卿の物言いであった。
もしかすると、アマーリエ義姉さんとの件がバレているのであろうか？

『（バレてはいないはず……）』

心の中で必死に考えていると、不意に肩を叩かれる。
叩いていたのは、肉料理を大量に盛った皿を持ったヴィルマであった。

『エリーゼ様は、黙認するって』

『（バレてるぅーーー！）』

俺は冷や汗を流しながら、心の中で叫び声をあげていた。

もし声にしてしまえば、それはその事実を認める事になってしまう。

もうバレているが、あえて認める必要などないとバウマイスター伯爵っぽく格好つけてみる。

『何の事か良くわからないなぁ』

『（あのさ。ヴェル。週に五日も来てバレないはずがないだろうが……）』

『（いや、アレは仕事で……）』

『（うちの領地の開発が早過ぎるんだよ）』

どうやら、領地開発にかこつけて密会を行う方式が良くなかったらしい。

パウル兄さんに指摘されて、俺はようやく己の失態に気が付くのであった。

密会の回数は、意地でも減らさないと決めて。

そんな感じで、このところ忙しかったわけだ。

『この一ヶ月ほど、全く狩りをしていないな』

『スケジュール的に不可能ですな』

土木工事か結婚式への出席で、俺のスケジュールは９９％埋まっ

ていたほどだ。

そして今日は俺の結婚式というわけで、この日のために誂えた貴族専用の高価な礼服に着替えた俺は、様子を見に来たブランタークさんからガチガチに緊張しているのを指摘されてしまう。

「あの面子だと緊張しますって」

「確かに、うちのお館様でもあそこまでの面子にはならなかったらしいし」

貴族が沢山いるのは良いのだ。

家族も別に構わない。

どうせうちの家族は、エーリッヒ兄さん以外貴族のオーラに乏しいのだから。

閣僚クラスに、導師、ブライヒレーダー辺境伯、新ブロワ辺境伯と、既に知己なので問題ない。

「王太子殿下って、あまり顔を合わせた記憶が無いんですよね」

「俺なんて、一回も顔すら見た事が無いけど」

「えっ！　そうなんですか？」

将来、南部を統括する二大貴族家の一つになるバウマイスター伯爵家当主の結婚式に、王太子殿下が出席をする。

まだ未開地開発には時間がかかるので、将来の陛下が出席する事に意味はあるのであろう。

だが、あまり顔を合わせた記憶が無いので、陛下と会うよりも緊

張してしまうのだ。

「ヴァルド殿下は、あまり目立たないと評判だからな」

文武共に優れた人らしいのだが、どういうわけかあまり目立たない人らしい。

現代風に言うと、ステルス殿下とでも言うべきであろうか？

「殿下はまだ良いんですよ」

何しろステルス殿下なので、式が始まれば気にならないはずだからだ。

「なぜに総司祭が？」

この世界の結婚式は、限られた親族と厳選された出席者しか参加できない教会内での式と、屋敷などで行われる披露宴とに別れている。

この辺は、地球の結婚式と大差は無い。

だが、結婚式を取り仕切るのはカソリック教会で一番偉い総司祭様である。

地球で言うと、ローマ法王が結婚式で神父様をしてくれるわけだ。

これで緊張しない方がおかしいと思う。

「ホーエンハイム枢機卿は、孫娘の結婚式だから神父役は出来ないのさ」

身内の神父役は出来ないという、教会独特の決まりがあるのだそうだ。

本当ならば、次期総司祭に一番近いと言われている人物なので神父役をしても不思議は無いそうだが、今日は親族側の上座で大人しく座っていた。

式の時に新婦を誘導する役は、エリーゼは父親であるホーエンハイム子爵が、ヴィルマはエドガー軍務卿が、カタリーナはハインツが、ルイーゼとイーナはそれぞれの父親達がその役に決まっている。

そういえば、初めてルイーゼとイーナの父親に会ったのだが、彼らはあの出席者の中で娘とバージンロードを歩く大役のために緊張して顔が強張っていた。

気持ちは良くわかる。

俺だって、本来はそちら側の小市民的な人間なのだから。

『ヴェンデリンが娘でなくて良かった……』

うちの父は、自分がそれをやらないで済んで心から安堵の表情を浮かべていた。

「人生の墓場へようこそ」

「それを、新婚のブランタークさんが言うのですか？」

「へん。一応、俺は既婚者の先輩だからな」

「わずか数週間でしょう？」

「それでも、先輩は先輩さ」

死後の遺産相続で迷惑をかけるなという理由により主君から強制的に結婚させられたブランタークさんは、心なしか前よりもローブが綺麗だったり、身なりに気を使っているように見える。

仄かに香水の香りもして、やはり結婚すると男性には変化が訪れるようだ。

以前に、エリーゼ達から加齢臭を指摘されて気にしているのかもしれない。

「それよりも、奥さんが多くて大変だな」

一度に五人というのは、大物貴族でも多い方らしい。

その代わりに、最初は人数は少ないが後で増やす人も多いので、それほど多いというわけでもないのだが。

成功した大商人の中には数十人の愛妾を抱える人もいるそうで、その数の多さも自分がどれだけ商売に成功しているのかというパロメーターの一つとなっていた。

「アルテリオさんとか、実は何十人も居たりして」

「そんなにいませんがね。バウマイスター伯爵様」

「よう。大商人」

「よう。ようやく結婚した我が友よ」

式の前に控え室で話をしていると、そこにうちの御用商人の筆頭になっているアルテリオさんが挨拶にくる。

彼は、まだ人手が足りないバウマイスター家のために、商会から

手伝いの人達を出したりしてくれていた。

「うちは最近膨張が激しいからそういう話も多いけど、忙しいんですぜ。伯爵様」

それでも、アルテリオさんレベルの財力を持つ人の奥さんが一人だと周囲が五月蝿いそうで、彼も奥さんは三人いるそうだ。

「別に興味がないわけじゃないけど、仕事の方が面白いという現実もありますわな」

「俺はどっちなのかな？」

「若いのですから、新婚時代くらいは色に溺れていてください。子孫繁栄的な意味も含めて」

御用商人になったアルテリオさんは、その口調を丁寧な物に変えていた。

ただ、いきなり謙り過ぎると俺が引くと思ったのであろう。

少し中途半端にしているようだ。

ブランタークさんは俺の師匠なので、公式の場でもなければ今までのままである。

その方が気楽で、俺は良いと思っているのだが。

「ブランタークは、良く奥さんが一人だけで済ませているよな」

「この年で複数は辛い。アガーテは若いから、普通に子供は産めるだろう」

アガーテとは、ブランタークさんの奥さんの名前である。
ブライヒレーダー辺境伯領に接した、小領主混合領域にある小さな騎士爵家の長女で二十歳。
ブランタークさんが冒険者時代に仕事でそこを訪れた経験があり、その顔を知っていたそうだ。

「もっとも、十五年も前だ。『魔法使い様だぁーーー』と言いながらちょこまか付いて来た子供が女になっていて、更に俺の嫁になるとはな。世の中は不思議な物さ」

年齢差は三十歳以上であるが、この世界では別にロリコンだとかは言われない。
特に珍しい話でもないからだ。

「遂にバウマイスター伯爵も結婚か。感慨深いのである！」

最後に導師が、女性陣の着付けなどが終わったようで俺を呼びに来る。
彼の案内で領主館の隣に建設された教会正面の入り口に立ち、大きなドアが開くと事前の打ち合わせ通りに神父役の総司祭が待ち構えている。

教会の造りは、そうキリスト教の物と差は無かった。
聖餐台があって、中央の通路がバージンロードになっていて、招待客が座る長椅子なども設置されている。
まだ細かな装飾などは完成していないらしいが、教会の隣にバウマイスター伯爵領中に建設される教会の統括を行なう管区本部もあるので、天井や壁にあるステンドグラスなども合わせて非常に豪華な造りになっていた。

「（さすがは教会。金があるなぁ）」

その辺は、地球とそう差は無いようである。

一人で歩いて聖餐台の前に立つ神父の前に立つと、今度は新婦が父親などのエスコートを受けて入場してくる。

最初はエリーゼで、彼女は正妻なので一番豪華なウェディングドレスを着ていた。

父親であるホーエンハイム子爵に手を引かれて俺の隣まで歩いてきて、俺は彼からエリーゼの手を引く役割を引き継ぐ。

「（この辺も、親戚の結婚式が教会式だったけど同じだな）」

全く違う段取りなら緊張しまくりだったかもしれないが、その点では助かっていた。

続いて、ヴィルマ、カタリーナ、ルイーゼ、イーナと入場してきて、聖餐台の前がかなり混んでしまう。

普通は多くても三人くらいらしいので、仕方が無いとも言えた。

「さて。これより、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターの結婚を神に報告する旨をここに宣言する」

八十歳近い総司祭が、式の始まりを告げる。

俺の名前しか言われないのは、それが風習だからとしか言い様がない。

男性の伯爵が結婚する。

この事実だけで、十分というわけだ。

地球のフェミニストの人達が聞けば、それだけで憤慨物なのであ

ろが。

「汝ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターは、エリーゼ・カタリーナ・フォン・ホーエンハイム、ヴィルマ・エトル・フォン・アスガハン、カタリーナ・リンダ・フォン・ヴァイゲル、ルイーゼ・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェーク、イーナ・ズザネ・ヒレンブラントを妻とし、これを終生愛する事を誓いますか？」

「（言い切ったな……）誓います」

長い五人のフルネームを、まるで呪文のように総司祭はひと呼吸で言い切っていた。

多分、事前に懸命に覚えたはず。

なぜなら、俺だってたまにルイーゼとかカタリーナのフルネームが言える自信とかないからだ。

その時は何となく覚えるのだが、一週間もすると危うい。

フルネームなんて呼ぶ機会が無いので、すぐに脳が忘れてしまうのであろう。

「次に、エリーゼ・カタリーナ・フォン・ホーエンハイムは、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターを夫とし、これを永遠に愛する事を誓いますか？」

「はい。誓います」

続けて、四人にも同じ事を聞く。

妻達には、一人一人聞くようであった。

みんな『はい。誓います』で、突然某映画のように別の男性が来て連れ出すとかいう展開は無かった。

警備的に考えて、無くて当たり前とも言えるのだが。

「（ヴェル。何か変な事を考えてない？）」

勘が鋭いルイーゼに小声で聞かれてしまうが、小市民の俺にはこの空気が重たいので、他の事を考えて気を紛らわせていたのだ。

「次に、誓いの口付けを」

式の前にも結構していたが、ここでみんなの前でキスをする事によって『俺の妻だから手を出すなよ』と周囲に伝える意味があるそうだ。

ただ、神官の前なのであまり派手なキスは禁止である。

少し唇が触れる程度で順番にキスをしていく。

「（カタリーナ。大丈夫か？）」

「（さすがに慣れましたわ）」

見た目とは違ってこの手の事にまるで免疫が無いカタリーナを心配したのだが、さすがに慣れてきたらしい。

俺と普通にキスをしていた。

「次に、指輪の交換を」

これも、事前に準備していた五つの家紋入りの白金製の指輪をエ

リーゼ達に着けていく。

「以上をもちまして、神への報告が終わりました。新しい夫婦の門出に神もお喜びになるでしょう」

本当に神がいて喜んでくれるのかは不明であったが、俺をこの世界に送り込んだ奴がいるのかもしれない。

その前に決まっている文言なので、特に何も感じずに総司祭の言葉を聞き流していた。

「さて。最後にですが……」

教会から出て、地球の結婚式ではお馴染みのブーケトスが行なわれるのだ。

教会内に入れなかった参加者達の未婚の娘達が最前列に並び、大貴族の娘だと自分がはしたなくブーケを取りには動かない。

その代わりに、メイドや使用人などを動かしていた。

取った人が次に結婚できるというジンクスはこの世界にもあり、無事に取ってこれると褒美が貰えるケースが多いので、メイド達も真剣だ。

『取ったメイドが次に結婚できるんじゃないの？』と質問するのはご法度らしい。

自分で取りに行けないからこそ、メイドを使って取らせるのだから。

「では、投げ入れてください」

これが取れたからといって、本当に次に結婚できる保障も無いと思うのだが、彼女達は真剣に五つのブーケを取り合っていた。

まさしく、肉食系女子達の取り合いである。

ブーケは無事に五人のメイドの手に渡り、それぞれが仕えている令嬢の元に持っていく。

中には早速、褒美の入った袋などを貰っている者もいた。

そしてその中に、一人色物的な人物が混じっていた。

「良くぞブーケを取ってくれたの。褒美を与えよう」

どう見てもアラフォー以下には見えない豪華なドレスを来た女性が、ブーケを取って来たメイドに褒美を渡している。

初めて見るが、彼女があの噂のアニータ様のようだ。

ブライヒレーダー辺境伯は、どういう意図で彼女を連れて来たのであろうか？

かなり謎であった。

「（というか、まだ結婚する気あるんだな……）」

口には出せないが、周囲でそう思っている人は多いはずだ。

「式も無事に終わりましたので、披露宴に入りたいと思います」

結婚式は一時間もしないで終わったが、その後は日が暮れるまで披露宴とパーティーに拘束され、俺達は疲労困憊のまま夜を迎えるのであった。

「貴族の結婚式は公式行事と同じであるので、これは仕方の無い事なのである！」

長い拘束時間が終わり、完成した屋敷のリビングでみんなで寛いでいると、導師が俺に声をかけてくる。

「結婚式が一番楽だった……」

そんなにする事も無いし、地球とそうやり方に違いもなかった。
総司祭の手際も良かったし、時間もさほどかかっていない。
その代わりに、披露宴やパーティーでは面倒が多かった。

『私。アロイス・ヒルデブレヒト・フォン・ヴァルタースハウゼン子爵と申します』

主だった来客全てに挨拶に行き、しかもどういう順番で挨拶に向かうのかとか色々と面倒であった。
その辺はローデリヒが全て仕切ったのだが、良くあれだけの貴族を覚えられるものだ。

『さすがに、紋章官のイェフからレクチャーは受けていますよ』

『やっぱりそうか』

『でなければ、覚え切れません』

バウマイスター伯爵家は新興なのだが、未開地開発の件で多くの貴族と接する機会が増える。
そこで、急ぎ専門の紋章官を雇ったのだ。

名前はイェフといい、彼はブライヒレーダー辺境伯家の紋章官をしているブリュア氏の次男であった。
あの紛争でツテが出来たので、彼の子供を雇い入れたのだ。

「挨拶はまだ良いんですよ」

挨拶だけしておけばいいからだ。
気疲れはするが、それだけとも言える。

「人の結婚式に来て、『六番目以降の妻を迎える気は？』とか聞くか？」

自分の未婚の娘を連れて来てアピールしたり、お見合い写真を渡そうとする貴族が何名か存在していたのだ。

「未開地に加えてヘルタニア渓谷の鉱山利権も増えたので、みんな必死であるな」

娘を差し出してでも、もっと食い込みたいというわけだ。

何にしても、それもあって俺もエリーゼ達もヘトヘトである。
あのすぐにお茶を淹れたがるエリーゼがドミニクに一任している事からして、よほど疲れているのだ。

「だが、今日は初夜だよな？」

「ぶっ！」

突然ブランタークさんが妙な事を言うので、俺は口に含んでいた

マテ茶を吐き出してしまう。

「汚いなぁ。伯爵様はよ」

「ブランタークさんが、妙な事を言うから」

「別に妙な事じゃない。ドミニクが監視役なんだろう？　失敗しないように頑張れよ」

「それが一番キツイですよ」

そういえば、前世に何かの本で見た事があった。

初夜の時に、ちゃんとやれたのかを確認する役割の人が任命されるのだと。

この世界でも、貴族が結婚した時にちゃんと性交渉が持てたのかを確認する風習があるというわけだ。

「エリーゼ様が、遂に奥様となられるのですね」

男性に覗かせるわけにはいなかいので、この役割りは既婚の女性が務める。

先月にドミニクは、カスパルという庭師をしている二十歳の青年と結婚していた。

彼もホーエンハイム子爵家の庭師の次男で、ドミニクとは幼い頃から知り合いであったそうだ。

「ドミニクに覗かれるとは、恥ずかしいですね」

「すいません。エリーゼ様。これも、決まりですから」

普通の人は、エリーゼのようにそんなところを覗かれたくは無いはず。
俺の方も、見られて興奮するような性癖は持ち合わせていなかった。

「しかも、五日連続だろう？」

「エルヴィンさんは駄目ですよ」

「俺は普通に、主君や友達のそういうシーンは見たくないんだけど……」

何とか失恋から立ち直り、今は『恋の狩人』という恥ずかしい二つ名を掲げているエルは、ドミニクにからかうように質問していた。

「私もですが、他に人がいませんので」

雇ったばかりのメイドにいきなり初夜の監視役など任せられないようで、エリーゼから始まり、ヴィルマ、カタリーナ、ルイーゼ、イーナと。
五人全員の確認を、ドミニクがする事になっていた。

「（物凄い、羞恥プレイ……）まあ、仕方が無い」

と言いながら、俺は師匠が残してくれた魔法の本を捲り始める。
まだ六歳の頃に師匠から受け継いだ本であったが、実はこの本。
雑誌のように袋とじの部分があった。
師匠が細工していて、俺に渡す時に『結婚したら袋とじを開けてね』と言い含められていたのだ。

週刊誌のフロクでもあるまいし、だが師匠に相応しいやり方とも言える。

あの人は、意外と茶目っ気が多かったのだ。

「アルが結婚してから開けろって？」

「はい」

「むむむっ。もしかして」

「あの魔法か……。あんまり難しくないからな。伯爵様なら大丈夫だよ」

ブランタークさんと導師は、何の魔法か想像がついたようだ。

視線を合わせて苦笑いを浮かべていた。

「とにかく、開けますよ」

ペーパーナイフで綺麗に袋とじを切ると、そこには『水』系統の大人魔法『精力回復』の解説が書かれていた。

「こんな魔法。あったんですね……」

なるほど、当時まだ子供だった俺に教えても無意味だと思われたのであろう。

「そういう魔法とか薬とか。貴族には必須だろう？」

子孫繁栄のために？

それとも、多くの奥さん達を満足させるために？

いや、大半は『年を取っても、昔のままの自分で』という目的で使っているとしか思えなかった。
若い愛人相手などには重宝しそうである。
ブランタークさんも、実は愛用しているのであろうか？

「（魔法版〇イアグラ？）」

「その魔法を使って、五人の奥さんと子孫繁栄に励めよ」

「でも、あんまり子供が多いと……」

うちの実家のように、次男以下が悲惨な待遇になってしまう可能性があった。
さすがに、アレは無いだろうと今でもたまに思うのだ。

「身代がまるで違うし、そんな事は後で考えれば良いのである！子が出来ぬとまた面倒なのである！」

導師が珍しく貴族的な忠告を行い、俺とエリーゼを寝室に強引に押し込んでしまう。

「ええと……。これからも宜しく」

「はい。こちらこそ」

多分、エーリッヒ兄さんならこういう時に何か気の利いた事が言えるのであろうが、俺にはそんなスキルは存在しない。
普段は完璧超人ぶりを発揮するエリーゼも、経験が無い事には対応できないらしい。

二人は、ベットの上で挨拶をしたまま黙ってしまう。

「外に耳があるけど、気にしない方針で」

「はい。そうですね」

本当に、前世の経験とこのところの秘密の練習をしていて助かった。

でなければ、かなり手間取っていたはずだ。

「これからも苦労をかけると思うけど」

「ヴェンデリン様と過ごしたこの四年近くはとても楽しかったです。私は苦労だなんて思っていません。これからもきっとそうです」

「ありがとう」

「ただ……」

「ただ？」

「私達を蔑ろにして、あの方の所にばかり行かないようにしてくださいね」

「……」

前にヴィルマから言われていたように、エリーゼは鋭かった。

大貴族の娘なので、『あてがい女』の風習を知っていたのであろう。

あとは、ブロワ家との紛争で暫く行けなかったから、『瞬間移動』

が使えるのを良い事に、時間が空けば遊びに行っていたのも良くなかったのかもしれない。

魔法で匂いなどは消していたし、ほとんど外泊はしないので誤魔化せていたと思っていたのだが。

「ヴェンデリン様。今は私だけを見て、私だけに夢中になってください」

俺は返事代わりにエリーゼの唇を自分の唇で塞ぎ、そのままベッドに倒れこむ。

王都での出会いから四年近く、俺とエリーゼはようやく本当に夫婦になったのであった。

「ヴェンデリン様」

そして翌朝の早朝、長年の風習もあり二人はいつもの時間に目を醒ましていた。

ベッドの上で共に全裸であったが、やはりエリーゼの胸は凄い。

寝ていても、そのままの形を保っているのだ。

ちなみに、前世の彼女はここまで胸は大きくなかった。

「おはよう。エリーゼ。ええと、大丈夫かな？」

「私は大丈夫なのですが……」

共に若く、俺は師匠から袋とじ特別ページで伝授された『精力回

復』魔法の練習という大義が存在していた。
いや、ただ自分の欲望に忠実だったわけだ。

エリーゼも、最初は少し痛いとか疲れたとか言っていたが、彼女は治癒魔法が使える。
結果、共に眠くなるまで何度も試行錯誤を重ねたというわけだ。

「朝風呂に入ろうか？」

「はい」

外でドミニクが聞き耳を立てているのと、ベッド上のあまりの惨状に、急ぎガウンを着て二人で逃げるようにして風呂場へと移動する。

「ドミニクも新婚なのに悪い事をしました」

「いえ……。エリーゼ様が無事に奥様になられたという事で……」

部屋の外にいたドミニクにエリーゼは謝っていたが、ベッドの上の惨状に彼女は顔を引き攣らせていた。

「もしかすると、これが五日連続……」

信用するに足るメイドが彼女しかいないせいもあり、その後四日間ドミニクは慣習に従って、寝室で聞き耳を立てる仕事に従事していた。

「他の奥様達も、みなさん凄くって……」

「ヴェル様を満足させる」

「ヴィルマは意味がわかっているのか？」

「本で学習しておいた」

英雄症候群のために隔絶したパワーを持つヴィルマは、体力も隔絶していた。

「『精力回復』ですか？　女性には使えない魔法ですわね」

「その前に、カタリーナの頭が沸騰しないか心配だ」

「ヴェンデリンさん。私はこの中で一番の年長者で、大人の女なのですよ」

「（いや、あまりそうは見えないから心配しているんだ……）」

「ヴェンデリンさんの新魔法習得に協力いたしますわ」

カタリーナも治癒の魔法が使え、やはりエリーゼ同様に自身を回復させながら頑張っていた。

「つまり、体力勝負なんだね？」

「武芸の鍛錬じゃないんだけど……」

「おほほほほ。これも、ヴェルとボクとの男女の修行のような物！」

『瞑想』による治癒が使え、自身も優れた身体能力を持つルイーゼもエリーゼ達に対抗するかのように明け方近くまで頑張っていた。

「私は、他の四人みたいに凄くないわよ」

「俺だって、別に普通だと思うけど」

誤解を解くために言っていくが、『精力回復』とは精力が増大するわけではない。

ただ元の状態に戻すだけなのだから。

「それだけでも十分に凄いと思うけど。私は回復とか出来ないからね」

「はいはい。了解しています。俺は使えるけどね」

イーナは、素の身体能力ではルイーゼとそう違いがない。

加えて、俺が回復させてしまうのでやはり朝まで頑張ってしまう結果となってしまう。

早朝に風呂に行こうと寝室のドアを開けると、ドミニクが涙を流しながら心から安堵の表情を浮かべていた。

「やっと終わりました……。でも、ベッドの上が酷い……。ローデリヒ様にメイドの増員を頼まなければ……」

五日連続の夜勤に疲れ果てたドミニクが可哀想だったので、俺は彼女のメイド増員の陳情をローデリヒ直接伝える。

加えて、三日間の特別休養と特別ボーナスを支給してあげるのであった。

第七十六話　新婚生活で秘密が増える。

「その『精力回復』は、私に使わないでね」

「勿論ですとも」

「奥さんが五人もいるんだから、そちらをメインにしないと」

無事にエリーゼ達と結婚してから一ヶ月ほど。

時刻は夕方であったが、俺はアマーリエ義姉さんとの密会をそのまま続けていた。

「その前に、『あてがい女』の私は、ヴェル君の結婚と同時にお払い箱のはずなんだけど……」

「そこは、大貴族様の我侭作戦ですよ」

俺とアマーリエ義姉さんとの関係は、結婚後も終わっていなかった。

俺が強引に続けているのだ。

伯爵様である、今は飛ぶ鳥を落とす勢いの俺が言う我侭なので、周囲は何も言わない。

少なくとも表面上はだ。

裏で何を言われても、そんな事は気にしないのが大貴族。

という事のようだ。

前に、ローデリヒがそう言っていた。

『その程度の事で、文句を言う輩もおりませぬが……』

地球では大問題になるかもしれないが、この世界ではおかしいと思われなかったりする。

むしろ、『自分を殺そうとした兄の妻を養い、その子供に爵位と領地を与える約束までしていて、バウマイスター伯爵は剛毅な事だ』などと思う人の方が多いそうだ。

その価値観の違いに驚きであったが、そんなわけで彼女との週に一回の逢瀬は続いている。

週の内五日は順番に妻達との相手をして、残り二日は自由な日となる。

その自由な二日の内の一日で、彼女と数時間の逢瀬を楽しむのだ。

当然エリーゼ達は気が付いているが、この時間は黙認されている。

ただ屋敷に帰らないといけないので、そんなにガッつくような事はしない。

魔法で王都に移動してデートをしたりする事もあり、これは俺の気休めのためでもあった。

まあ、二回に一度はする事はしているのだが。

「ヴェル君も変わっているわね。五人も若くて可愛い奥さんがいるのに、こんなオバさんを相手にして」

本人が言うほど、アマーリエ義姉さんはオバさんでもない。

二十七歳で二人の子持ちにしては、むしろ若く見えるほどだ。

スタイルも悪くないし、肌も綺麗であり。

今までは、貧しいバウマイスター家での生活のせいで少し煤けて

見えていただけと思われる。

それと、二人だけで居る時には、彼女は昔のように俺を『ヴェル君』と呼ぶようになっていた。

これは、俺が頼んだ事である。

最近、『お館様』とか『バウマイスター伯爵様』と呼ぶ人ばかりが増えて、何となく嫌だったからだ。

精神の均衡を図るために、あえてアマーリエ義姉さんにそう呼ばせているとも言える。

「秘めたる愛人である私は、ヴェル君が飽きるまでお相手させていただくけど」

「貴族ってのは面倒ですね」

「うちの実家の父でもそうだもの。当たり前よ」

貴族が多くの奥さんを持ったり、多少の贅沢をする理由が何となくわかってきた。

普段が色々と大変なので、そのストレス発散もあるのであろう。

それが過ぎて評判が落ちたり、借金で首が回らなくなる奴も存在していたが。

「つまり、ここで息を抜いているとも言います」

「それなら納得できるわね。ええと、私の顔に何か付いている？」

互いに裸でベッドに寝て話をしていたのだが、アマーリエ義姉さ

んは俺の視線に気が付いたようだ。

「いえね。魔力を計っているのですよ」

「私は普通の人と同じよ」

何度も確認するが、確かにアマーリエ義姉さんの魔力は普通の人と同じであった。

極微量という感じで、この世界の大半の人がそうである。

「ですよねぇ……」

「何かあったの？」

「ええ。漏れると色々と大変な重要機密が。でも、じきにバレるかな？」

「聞かなきゃ良かったわ……」

アマーリエ義姉さんは口が堅いので、俺は結構ポロポロとあまり人に言えない事を漏らしている。

嫌な貴族の話や、寄生虫のような貴族の話や、しょうもない貴族の話などである。

あとは、上手く行っているとはいえ全く不満が無いわけでもないので、奥さん達への軽い愚痴もたまに聞いて貰っている。

そういう面でも、俺はアマーリエ義姉さんを必要としているわけだ。

「実はですね……」

俺は、新婚直後に発覚した事実を話し始める。

あれは、エリーゼとの初夜を終えた翌朝の事だ。

風呂から上がって朝食を取るために食堂へと向かうと、屋敷に泊まり込んでいたブランタークさん、導師、カタリーナが一斉にエリーゼに詰め寄っていた。

『あのよぅ。少し魔力が上がっていないか？』

『某もそう思うが……』

『私でも気が付きましたわ』

昨夜から完全に舞い上がっていた俺も、急ぎエリーゼの魔力を計り始めるが、確かにわかるくらいには魔力が上昇していた。

中級の上の魔力を持っているエリーゼは、幼い頃からの『治癒』と『浄化』の連続行使で、十一歳の頃には魔力の増加が止まっていたらしい。

『聖女』としての魔法による治療行為で忙しく、早めに魔力の成長限界が来てしまったわけだ。

それが、十六歳近くになってからまた魔力量が成長したのだ。

普通に考えれば、まずあり得ない事であった。

器合わせの定義をかなり無視しているからだ。

『『何をした？』って、『ナニ』をしたわけだな』

『あの……。その……』

ブランタークさんによる、年齢相応の下品なダジャレが飛び出していた。

恥ずかしさからエリーゼが顔を赤らめていて、実はその様子を見てニヤニヤしている俺も同類なのかもしれないが。

『お師匠様。下品ですわよ』

『すまないが、それが原因の可能性が高い』

カタリーナの非難を制しつつ、ブランタークさんは一つの可能性を提示していた。

『つまりだ。伯爵様とそういう事をすると魔力が増えるわけだな。なぜかとか、細かな条件は分からないがな。原理とかは聞くなよ。そういうのは、王都にいる骨董品のような魔導ギルドで調べる類の案件だ』

ブランタークさんの推論とその可能性の高さに、俺達の間で衝撃が走る。

「それで私の魔力を見ていたの？　でも……」

もう何ヶ月もこういう関係を続けているが、アマーリエ義姉さんの魔力量に変化は無かった。

という事は、微量でも魔法の才能が無いと魔力は増えないというわけだ。

「残念。魔法使いになって、何か出来たら面白かったのに。それで他の奥さん達は？」

俺に質問してから、アマーリエ義姉さんは魔法使いのように両手を出して『エイヤー』などとやっている。

その様子に、俺はちょっと可愛いと思ってしまう。

「大変だったんじゃないの？」

「まあ、それなりに……」

そしてその可能性が示唆されてから、俺は異常に忙しくなった。

『ヴェンデリンさん。遠慮なくどうぞ』

『魔法使いたい』

『魔力が増えれば、ボクにもファイヤーボールとか使えるかも』

『私だって、その可能性は……』

それが原因で、完全に肉食系にチェンジした四人の相手で大変だった話をアマーリエ義姉さんにする。

肝心の効果であったが、四人ともブランタークさんの予想通りに魔力の量は増えていた。

『ヴェンデリン様。あまり無理をなさらないでくださいね』

正妻であるエリーゼは唯一優しかったが、やはり胸が大きいので俺はその誘惑に負けてしまう。

間違いなく、胸がいけないのだと思うのだ。

『ヴェンデリン様。お疲れではないですか？』

『そのために、回復魔法もある』

そんな理由で、週に五日は夜も忙しかったわけだ。

「それは欲望に負けたヴェル君が悪いというか、エリーゼさんは正妻なのだから早く子供を作らないと」

「ですよねぇ」

「それでイーナさんもなの？」

「イーナは、無意識に魔力を槍術や身体能力強化に使っていましたから」

普通の人でもそれは無意識にするのだが、イーナはそれよりも少しだけ多く魔力を行使していた。

ブランタークさんによるとギリギリ魔法使いとも言えなくはないとの話で、翌朝には大分魔力が上がっていたのだ。

『イーナちゃんの増加量が多いね』

『魔力が少ない人の方が、同じ回数をしても増加量は増えるのでしょうか？』

カタリーナの推測は、ほぼ間違っていないはず。

同じ経験値を得ても、レベル（魔力）が少ない人の方がレベル（魔力）が上がりやすいのであろうと。

その行為で経験値が入っているのかは不明であるとして、実際にそうなっているのでそういう考え方で問題は無いと思う。

『ヴェル様。私も結構上がった。もっと魔力を上げたい』

ヴィルマもイーナと魔力の量にそれほど差が無かったので、初回からかなり増えていた。

『ボクも目指せ上級だね。勿論、新婚だから色々と頑張らないと』

ルイーゼも、まるで肉食獣のように俺を見ている。

『ヴィルマさん。ルイーゼさん。ヴェンデリン様の体力なども考慮いたしませんと……』

治癒魔法の名手で半分医者のような立場であるエリーゼが、元気一杯の二人に釘を刺していた。

俺が腹上死でもしたら大変だからであろう。

『イーナさんもですよ』

『あれ？　私ってガッ付いているかしら？』

『イーナちゃん。魔力が増えて物凄く嬉しそうだもの』

実際に効果があったのでというわけでもないが、この一ヶ月は新婚期間でローデリヒが休みを多くしている。

魔法の鍛錬と、普段よりも少なめな土木工事や魔の森での狩りの間に、またドミニクが絶句するような光景が展開されたのである。

『エリーゼ。それは？』

『ヴェンデリン様の体調なども考慮して、しっかりと予定を立てておきました』

色欲と自由と捕食の狭間で揺れていた俺に、エリーゼは笑みを浮かべながら夜の予定表を渡していた。

やはりこういう時には、エリーゼの内助の功が際立つわけだ。

『勿論、早く赤ちゃんが欲しいのもありますよ。でも、暫くは新婚気分もいいですね』

それが目的の大半であったが、魔力が増えるのを嫌がる人はあまりいない。

そのせいで、色々と大変だったような気がする。

悪くは無い一ヶ月だったと思うのだが……。

「ヴェル君が色に塗れたわけね」

「はっはっはっーーー。男は、女か、酒か、金の何かしらで身を持

ち崩す生き物ですから」

大変さと、己の色欲に塗れた一ヶ月であったわけだ。
更に、アマーリエ義姉さんとの密会も行っているので、人間の欲とはキリがないのかもしれないと俺は思う。

「それで、どうなったの？」

「それはですね」

この一ヶ月で、奥さん全員の魔力量は上がっていた。

エリーゼは、上級の真ん中程度にまで。
使える魔法の種類は増えなかったが、使える回数と威力が増しているので十分に凄いと言える。

『攻撃魔法が使えれば良かったのですが……』

『それは、他の人に任せなよ。回復魔法では、髄一の実力なんだから』

『それもそうですね』

エリーゼは俺の言葉に納得する。
次に、ヴィルマの魔力は中級程度にまで上がっていた。

『魔法。使えない……』

『使えているじゃないか』

ブランタークさんが基本的な魔力のコントロールなどを教え、『身体能力強化』と『武器付与』が使えるようになっていた。
才能の関係で属性魔法全てに適性が無く、無属性の魔法で体を強化し、武器に魔力を纏わせて威力を高める。
今までの戦い方を強化したとも言えた。

『ヴェンデリン様。ヴィルマさんが言う魔法とは、ファイヤーボールのような物では？』

『俺もそう思うけど……』

エリーゼの言う通りであろうが、こればかりは生まれ持った適性なので仕方がない。
十分に強くなったのだからそれで良いような気もするが、ヴィルマが心に抱く魔法とは、派手に炎などをぶっ放す物なのであろう。
世間一般ではそういうイメージが強く、見た目が重視されるわけだ。

『魔力は増えたんだけど……』

ルイーゼも、魔力量がブランタークさんとほぼ同じにまで増えている。

『でも、使える魔法は増えなかった』

『魔力量と、使用可能魔法の才能は別だからな。強くなったから良いじゃないか。魔力量でも俺に追い付いているし』

魔力量でほぼ追い付かれたブランタークさんは、苦笑しながらル

イーゼを慰めていた。

『カタリーナの魔力は凄くない？』

『ちょっと前の導師に匹敵しているな』

『ですが、使える魔法は増えませんでしたわ。魔力量の増大はありがたいですけど』

カタリーナの魔力も、かなり増えていた。

元から魔力量があると増える量も上がるのであろうか？

ただ、使える魔法は天性の才能に依るようで、カタリーナほど最初から魔力が多いと新しく使える魔法は増えないようだ。

最初から彼女ほど魔力があると、魔力不足で使えない魔法など無いのだから。

『そして、イーナか』

そして最後にイーナであったが、彼女が一番劇的に変化したかもしれない。

『ブランタークさん。この『火炎槍』って凄いですね』

『繰り返し練習して習熟度を増してくれよ』

中級レベルまで魔力が上がったイーナは、『身体機能強化』と『属性槍術』の魔法を覚えていた。

後者はその名の通りに、槍の穂先に属性魔法を纏わせて威力を上げるという物である。

彼女は『火』と『風』の属性魔法に適性があったが、放出系の魔法が覚えられなかった。
槍に魔法を纏わせるのは、苦肉の策でもあったわけだ。

庭にある岩に『火炎槍』『風斬槍』という技をぶつけて、既に岩は切り裂かれ、ドロドロに溶けている。

『凄い威力ね。もっと練習しないと』

『イーナちゃん。楽しそうだね……』

『魔法って、楽しい！』

いくつもの岩を破壊して喜ぶイーナに、親友であるルイーゼですら若干引いていた。

『でも、槍の消耗が激しいですね』

『回数をこなすと、鉄製や青銅製の槍だと劣化してしまうからな。純ミスリル製の槍なら大丈夫だ』

『早速に購入します』

ブランタークさんが、イーナに武器を変えるようにと指導する。
こんな感じで、新婚期間は『妻強化月間』でもあったわけだ。
俺も、『体力回復』と『精力回復』の魔法の名手になっていたが。

「それって、大変じゃない？」

「実は物凄く」

導師とブランタークさんの分析によると、微量でも魔法使いの素養がある女性が俺とすれば魔力が増える可能性が高い。

使える魔法の種類は、本人の才能に準拠する。

今までは魔力が不足していて発動しなかった魔法が使えたイーナを見れば、それは一目瞭然であった。

どの程度増えるのかは、これも本人の才能次第なのであろう。

器合わせで魔力量の増加が止まった人でも、糊代があれば魔力は増える。

一ヶ月ほどで五人の魔力量の成長は一回止まったが、また増える可能性もある。

要調査継続であったが、これは夫婦関係が続けば簡単に観察可能であった。

「外部に漏れると大変じゃない？」

「ええ……。内緒でお願いします」

「お義父様にも言えない……」

「父上には止めてください。卒倒します」

母と同じく小市民的な貴族なので、その話の重さに耐えられないであろうからだ。

『つうか、一ヶ月でこんなに上がったのか……。絶対に他の魔法使いが見ればバレるわ』

しかもブランタークさんの言う通りで、みんなかなり魔力が上がっているので見る人が見ればバレてしまう。
その前に、ブランタークさんは主君であるブライヒレーダー辺境伯に、導師はもう陛下に報告しているのだ。

「大丈夫？」

「逆に、おいそれとは漏らせないでしょう」

漏らせば混乱は必至だからだ。
よって、王国で知っているのは導師と陛下だけ。
ブライヒレーダー辺境伯家でも、知っているのはブランタークさんとブライヒレーダー辺境伯本人だけとなっていた。

「女性魔法使いが『抱いて』と殺到するのね」

想像するだけで身震いがする光景である。
創作物なら見ていて笑えるのかもしれないが、自分が実際に押し掛けられるのは堪らない。

魔法使いの半分は女性で、中には小母さんもお婆さんも沢山いる。
さすがの俺でも、まず勃たないであろう。

「もっと面倒な事があります」

イーナの例を見れば、今までは魔法使い扱いされていない人でも、僅かでも魔法使いとしての素養があれば魔力が上がる可能性があるのだ。

魔法使い志望者の女性が殺到する可能性があった。
勿論そこには、小母さんもお婆さんも混じっているであろう。

あとは、貴族が自分の娘を差し出して、魔力が上がらなければ『傷物にしたのだから責任を取れ』というパターンだ。
詐欺のような手法であったが、実際に俺が手を出していればおかしな意見でもない。

「それでも、まだ女性ならいいです！」

魔力が上がって欲しいのは、何も女性だけではないのだ。

『エルが一番弱くなった。前からだけど』

『良くぞ言ったヴィルマ！　ヴェル。俺の尻を！』

『冗談でも洒落にならんわ！』

ヴィルマの毒舌も大概であったが、冗談でも男の尻を掘る話など御免である。

『俺は、もう今の魔力でいいし……』

『某は、毎日修練して今も魔力が上がっているので問題は無いのである！』

第一、男を相手にそういう事をしても魔力が上がる可能性は未知の領域である。

というか、その前に試したくも無い。

『エルさん。同性愛は異端です。ヴェンデリン様にそういう噂が立つだけでも、処罰の対象になる可能性があるのです』

『すまない……』

教会関係者であるエリーゼは、冗談でもエルの発言を厳しく糾弾していた。

この世界では、同性愛は洒落にならないくらいに糾弾される。

貴族でも、下手をすると当主交代か改易の原因になってしまう。

教会が一部宗派を除いて婚姻が自由なのも、過去に男性神官同士の同性愛が問題になったからだそうだ。

『ヴィルマさんも駄目ですよ』

『エル。ごめんなさい』

『いいけど。どうするんだ？』

『隠すしかありません』

魔力が上がったのは器合わせをしたからで、理由は不明。

こういう事にしておかないと、男性魔法使いですら『俺の尻を掘ってくれ！』と押しかけかねなかった。

想像するだけで、悪夢としか言いようがない。

「本当に聞かなきゃ良かったわ」

「漏らさないでくださいね」

「軽々しく漏らせないじゃないの。あと、もう一つ問題があるわね」

「はい……」

それは、こんな奇妙な能力が判明した俺と魔法の素養がある妻達との間に子供が生まれたら、その子達は魔力を持っているではないかと。

「大変ねぇ……」

「だから、こうしてたまにここに来ているんです」

「納得できたわ」

そう、アマーリエ義姉さんは癒しなのだ。

俺はまた増えた難題を今は忘れるべく、そのままアマーリエ義姉さんに圧し掛かるのであった。

一時忘れたところで、逃げられるはずもないのだが。

第七十七話　レジャーに出かけてみる。

俺が、エリーゼ達と結婚してから一か月半が経過した。
結婚式や披露宴は面倒であったが、新婚生活は順調なのが幸いである。
周囲の、特にローデリヒ辺りは呪文のように『お館様。跡継ぎを早く』と呟いているが、俺達はまだ十六歳。
ヴィルマなどは十四歳なので、そこまで焦る必要も無いと思っている。

『とは思いますが、なるべくに早くとも焦ってしまうのです』

便宜上、相続権は兄達の子供に設定されているが、これは俺に子供が生まれると順位が下げられる予定になっている。
兄達は万が一という理由で引き受けているのに、既に『バウマイスター伯爵には何か持病とかありませんか？』などと聞いてくるアホな貴族がいたらしい。

大方、幼い甥や政治には疎いと思われている兄達を操って、自分がバウマイスター伯爵領の実権を握るとか、痴人の夢を抱いているのであろう。

『ヴェルの強烈な存在こそが開発を促進させているのにね。バカな貴族とは本当に多いものさ』

結婚式に参加したエーリッヒ兄さんは普段は王都にいるので、そういうバカな貴族と一番接する機会が多いらしい。
溜息をつきながら、俺に愚痴を溢していた。

『早く子供を作って欲しいね』

『エーリッヒ兄さんまで、それを言いますか』

『言うさ。私や他の兄さん達の子供達の将来にも関わるし』

相続順位が高いので、俺にもし何かがあると未開地利権の奪い合いや争いに巻き込まれてしまう。

父親としては、それは容認できないのであろう。

『頑張って、子作りをしないと』

『はあ……』

兄弟間の話題としては微妙であったが、貴族とはそういう物なのかもしれない。

子供がいないと相続で面倒な事が増える。

その争いの醜さや、それが原因で発生した事件や不祥事を考えると、まともな貴族ならば加わりたくないのであろう。

『あははっ。俺は頑張りますよ。師匠の魔法もありますしね』

というわけで、この一か月半は頑張ってきたつもりだ。

師匠が残した魔法の本の袋とじを開放し、精力を回復させながら毎日毎日貴族と夫としての義務を果たす。

今もベッドの上では、俺の隣に裸のイーナが横になっていた。

「子供ねぇ……」

「ヴェルは欲しいの？」

俺がエーリッヒ兄さんとの会話を思い出していると、イーナが申し訳なさそうに聞いてくる。

だが、まだ新婚一か月半なのでそこまで焦る必要も無いであろう。

子供が生まれないと妻は肩身が狭くなるらしいが、それはずっと先の事なのだし。

「それはいつかはね。というか、二十歳くらいまでに出来ればいいんじゃないの？」

「さすがに四年も子供が出来ないと、新しい側室を勧められるわね」

「なるほど。そういう事か。でも……」

下品な言い方ではあるが、する事はしているのでその内に自然と出来るはずだ。

ところが、イーナの表情は優れない。

「何か懸念でも？」

「ほら。私達って、最近魔力が上がったでしょう？　最初ははしゃいでいたんだけど、その副作用があるのでは無いかとね……」

魔力の上昇が妊娠を妨げる。

確かに、１００％そういう副作用が無いとは言えなかった。

「でもさ。魔力の伸びは止まったでしょう？」

「さすがに止まったわね。でも、一か月で中級クラスの魔力だから

大満足」

魔法使いの中で、中級は十人に一人くらいしかない。
使える魔法が少なくても戦闘力の嵩上げには貢献しているので、イーナは満足しているようだ。
そういえば、この前ローデリヒと槍で試合をして彼が負けていた。

『さすがは、奥方様ですな』

ローデリヒは笑っていたが、俺は知っている。
彼が少しでも時間が空くと、また槍の訓練を再開しているのを。
実は、ローデリヒは負けず嫌いだったのだ。

「魔力の上昇が止まった以上は、きっと普通に妊娠するはずだ」

「そうね。きっとそうよ」

「そういうわけだから、もう一回しておこう」

「ヴェル。もう少し言い方は無いのかしら？」

無いとは言い切れないが、普段イーナが読んでいる本の主人公のようには言えないのだ。
あんな恥ずかしい口説き文句、元日本人の俺には恥ずかしくて言えなかった。

「どうしようかしら？」

「おいおい。それはないだろうに」

自身の肉体年齢的にそれはないと思ってしまう。
俺の肉体はまだ十六歳なのだから。

「なんてね。嘘よ。アマーリエさんの所に予定以上に行かれても困るし」

「アマーリエ義姉さん？　何の事かな？」

「アマーリエさんの魔力は上がったのかしら？」

「それが全然」

「ヴェル。隠す気無いでしょう？」

カマかけをされているのには気が付いていたが、わざと引っかかった振りをしておく。
イーナは、すぐにそれに気が付いていたが。

「何だ。バレていたか」

「まったく。初めて出会った時には究極のお人好しだと思っていたのに」

「今も大概そうだと思うよ」

「それもそうね。私みたいなのを奥さんにしてしまうんだから」

それからすぐに、まだ夜は長いので頑張ってみるが、いざ始めると一回では済まないのは世間の法則かもしれない。
そして、またいつものように朝を迎える。

ベッドの上の惨状はいつもの事として、二人で朝風呂に入るのは習慣になっている。

『女と混浴とか。ヴェル。モゲちまえ！』

一人、エルが俺といる時だけ呪詛の言葉を吐いていたが、さすがに他の家臣がいる時には言わないだけの分別はあった。

彼らからすれば、早く子供が生まれるような奥さんとのスキンシップは望ましいのだから。

「イーナは、髪が綺麗だな」

「ありがとう。実は、女として唯一の自慢かも」

普段は束ねているが、イーナの燃えるような赤い髪は癖も無くサラサラである。

「カタリーナは、たまに髪が爆発しているからな」

「毎朝、時間をかけて整えているわね」

彼女のお嬢様ドリルヘアーは、実は物凄い癖っ毛だからという理由も存在している。

毎朝、強引にあの髪型にしているのだ。

魔法で熱を出して髪を整えている様は、地球ならばパーマ機械無しで美容室が開けるのにと思ってしまう。

「ヴェルが作ってくれた髪の調整剤が物凄くいいわ」

この世界にはシャンプーは存在していたが、リンスは存在してい

なかった。
貴族の子女などは、香油などでシャンプー後に髪を整えていたのだ。
そこで、俺は酢を材料に天然リンスを作製して妻達に渡していた。
評判は上々で、いつの間にかアルテリオさんが嗅ぎ付けて改良して販売する予定になっている。
相変わらずの嗅覚の鋭さであった。

「それは良かった。じゃあ、その髪を洗ってあげよう」

「自分で出来るわよ」

「週に一回くらいいいだろう」

「ありがとう」

他にも、体などを洗い合ってから風呂場を出てリビングへ行く途中に寝室の前を通ると、ドミニクが新入りのメイドにベッドメイキングの指導をしていた。

「いいですか？　現在のバウマイスター伯爵家には、このように秘する事案が多いのです」

「つまり、お館様は絶倫なのですね！」

「声が大きいです」

イーナと二人で聞き耳を立てていると、ドミニクが若いメイドに注意事項を語っているようだ。

「お館様が絶倫……。つまり、私やドミニク姉さんにもチャンスが！」

「私は既婚者ですが……」

「しかしながら、ドミニク姉さんの美しさにお館様が欲情して！」

「ふんっ！」

ドミニクは、不謹慎な発言をした若いメイドの頭に拳骨を落とす。

俺達は、彼女の意外な一面を見たような気がした。

「いいですか？　お館様は、そういう不道徳な事はしません」

人の妻に手を出さないくらいの分別はある。

俺はドミニクに随分と評価されているようであったが、アマーリエ義姉さんの件を考えるとそこまで評価してくれなくてもと思ってしまう。

「ヴェル？」

「エリーゼの幼馴染のメイドの過剰評価が辛いです」

「アマーリエさんの事はいいんじゃないの？　あの人、今は独身だから」

「ううっ。ありがとう」

「泣かないでよ……」

イーナの優しさに、俺は少し涙ぐんでしまう。

「いいですか？　レーア。あなたは私の従妹だから推薦されたのです。余計な噂を流してあなたが処罰をされると、私の評価も落ちてしまうのですよ」

コネで職を得たというと日本では非難される事も多いが、それで失敗すれば推薦してくれた人の顔にも泥を塗る事になる。

決して、単純に楽とか羨ましいというわけでもないのだ。

「それに、お館様が絶倫だという噂が流れると、余計な押し売りが増えます」

関係強化や利権欲しさに娘を差し出す貴族や商人が増えてしまう可能性があると、ドミニクは従妹である新人メイドに説明をしていた。

「それは即ち、エリーゼ様のお立場を悪くする可能性があるのです」

後から入ってきた側室が、寵愛を受けて正妻を蔑ろにする。

奥の和を乱す。

貴族社会では良くある話ではあった。

「私もレーアも。エリーゼ様がお館様の正妻になられたからこそ、こうして恵まれた待遇を受けているのです」

「確かに給金は良いですよね」

勤務地が王国南端の未開地なので、平均よりも大目に給金は給金は出していた。

俺に言わせると、遠隔地手当のような物だ。

「おほんっ。というわけなので、静かにベッドメイキングをして他の仕事も早く覚えてください」

「わかりました。ベッドの上の惨状を見るに、特別手当は口止め料ですね」

「ふんっ！」

再びドミニクが、レーアの頭上に拳骨を落とす。

「子供の頃の楽しい思い出とか、教えて貰った仕事の記憶が飛びそうです」

「だったら、余計な事を言わない！」

「ドミニク姉さんが厳しい……」

ドミニクに怒られてばかりだが、レーアというメイドは口は悪いが手際は良いようだ。

指示通りに、素早くベッドメイキングをこなしていた。

「シーツとか凄いですね。ドミニク姉様。でもここまで凄いと、もしかして私もお館様の側室になれたりして」

「ふんっ！」

三度、ドミニクがレーアの頭上に拳骨を落とす。

「痛いです。ドミニク姉さん。五歳の時に、レマン湖に泳ぎに行った思い出が消えそうです」

「消えていないじゃないですか。次の部屋に行きますよ」

俺とイーナはすぐに寝室の前からリビングへと移動するが、途中の話題は全て新しいメイドに関してであった。

「あの娘。大丈夫かしら？」

「口が軽い部分はあるけど、仕事は手際が良かったな。ドミニクが上手く教育するだろう」

「それもそうね」

二人でリビングに移動すると、朝食の準備が他のメイド達によって行われている。

しかし、屋敷にメイドがいて色々と世話をしてくれる生活とは、なかなかに慣れない物である。

元々の貧乏性のせいで、どこか落ち着かないのだ。

「お館様。本日はどちらを？」

「ご飯を」

「某はご飯を大盛りで！」

屋敷での食事は、ご飯かパンかを自由に選択できるようにしていた。

俺は大抵ご飯にしているが、最近王都に帰っている時間の方が少

ない導師も、自前の大きな丼を差し出しながらメイドにご飯を頼んでいた。
しかし、この人は王宮に出仕しなくてもいいのであろうか？

「導師。王城では公務などはないのですか？」

「正確に言えばあるのであるが、別に某が出なくてもいいのである！」

王国の『最終兵器』でもある導師は、最終局面が来なければ基本暇であるようだ。

「某に仕事が無いのは、この国が平和な証である！　ところで、今日はブランターク殿は？」

「お休みですよ」

ブランタークさんは、俺が『瞬間移動』で迎えに行かなければここにはすぐに来れない。
今日はその予定はなく、彼は最近働き詰めなので、暫くは新婚の奥さんと休暇を楽しむそうだ。

「バウマイスター伯爵の予定は？」

「今日は完全休養日です」

「なら、魔の森に狩りに行くのである！」

「いや、行きませんよ。休みだから」

確かに趣味も兼ねているが、魔の森での狩猟は俺の仕事でもあるのだ。
休みならば行く必要も無い。

「何と！　つまらんのである！」

「その代わりに、海水浴に行きますけど」

「海水浴ですか？」

実は予告無しのレジャー宣言なので、エリーゼ達にも話していなかった。
突然俺から今日の予定を聞いて少し驚いているようだ。

「ヴェンデリン様。海水浴とは、暑い時期に海に行く事ですよね？」

「そうだよ」

この世界にも、海水浴の習慣は存在している。
ただブライヒブルクや王都は海から遠いので、大半の人達は近場の川や湖で済ませてしまう。
金持ちの人は、わざわざ休みを取って海まで出かける事もあるそうだが。

「私は、七年ほど前に東の海に行きました」

「エリーゼの実家はさすがね」

イーナは、海水浴の経験があるエリーゼに感心していた。
わざわざ内陸部にある王都から海まで移動する時間と費用とを考

えると、そう海水浴の経験がある人はいなかったからだ。

「イーナは？」

「ブライヒブルク近くの川で泳いだくらいね」

「ボクも同じ。海なんて、そうそう行けないよ」

イーナとルイーゼには、海水浴の経験は無いそうだ。

「ヴィルマは？」

「王都近くの湖に魚を獲りに」

ヴィルマにとっての水遊びとは、魚獲りも兼ねないといけないみたいだ。

泳ぐとお腹が空くからであろう。

「カタリーナは？」

「西部では海も近かったので一度。ですが、そんなに楽しい物ですか？」

「それは、カタリーナが一人で行ったからだろうな」

「どっ、どっ！　どうしてそれを？」

なぜかと問われれば、俺も元はボッチだったからだ。

ボッチはボッチを知る。

俺と出会う前のカタリーナを見て思うに、彼女が友達グループ同

士で海に行く姿が想像ができない。
そして俺の中での海水浴とは、未開地南端の海岸で塩を作り、魚貝類を獲って食べる事だったのだから。

「（海水浴に一人で行くとはレベルが高いな……）」

人の事は言えないが、ある意味大した物だと俺は感心する。
カタリーナの孤独力の高さにだ。

「バウマイスター伯爵家のプライベートビーチがあるから」

「そんな物があるのですか？」

「俺が設定したんだ。お昼はバーベキューでもして休日を楽しもうよ」

「それは面白そうであるな」

導師がいち早く賛成したので、朝食後に早速『瞬間移動』でバウマイスター伯爵領南端にあるプライベートビーチに出かけるのであった。

「絶好の海水浴日和であるな！」

朝食後に準備してから『瞬間移動』でプライベートビーチへと飛ぶと、導師は白い砂浜と青い透明度の高い海に大喜びであった。
この中で一番年齢が高いのに、なぜか一番子供のようにはしゃいでいたのだ。

今は季節的には冬であったが、未開地は北側の大リーグ山脈沿いの北部でも朝方に少し涼しいくらい。
南部の海沿いは、一年を通して海水浴が可能なくらいに暑かった。
それでも日本ほどは蒸し暑くないし、気温も体感では三十度を少し超えるくらいだ。
日本ほど蒸さないので木陰に入れば涼しいし、過ごしやすい南国とも言える。

「ところで、エルヴィン少年はどうしたのであるか？」

「研修ですよ」

普段は俺の警護役であるが、やはり将来的には諸侯軍を率いる仕事も任せたいので、トリスタンの元に定期的に研修に行かせていたのだ。

「熱心であるな。某に軍隊の指揮など不可能であるが」

それは仕方がない。
なぜなら、導師は単体か高位の魔法使いと組んで戦うのが一番戦闘力を発揮するからだ。
陛下もそれがわかっているから、彼を普段は自由にさせているのであろう。

「さてと。海水浴といえば水着であるな」

「伯父様。ちゃんと準備はしてきましたよ」

「さすがは我が姪である！」

エリーゼ達は自分で水着を持参してきていて、導師の分もエリーゼが準備していた。
みんな早速、木陰に衝立を立てて着替えを始めるが、導師はいきなり俺の前でローブを脱いで着替え始めていた。
ボディービルダーも真っ青な鍛えに鍛えられた鋼の筋肉がこれでもかと視界に入るが、男の裸など見たくはない。
俺は後ろを向き、自分もローブを脱いで着替えを始める。

「変わった水着であるな……」

ある程度予想はしていたのだが、導師は男なのに地球で昔の人が着ていたような膝と肘くらいまで布で覆われた古風な水着を着ていた。
俺は、前に王都のお店で作らせていたトランクス型の水着である。

「着替え終わったよ」

「失格！」

「ヴェル。早っ！」

そしてエリーゼ達も、色気もへったくれもない膝と肘まで厚い布で覆われた水着なので、俺はすぐにダメ出しをする。
一番早くに着替え終わったルイーゼは、俺からの即時のダメ出しに驚いているようだ。

「ダメって……。水着ってこういう物だよ」

「色気がない」

「ヴェルの言わんとする事は理解できるけど、そう思うのなら新しい水着でも準備しておかないと」

「ほほう。言ったな。ルイーゼよ」

「ゲッ！　もしかして準備してあるとか？」

「正解です。ルイーゼさん」

俺は服には素人であったが、大体のデザインくらいは覚えている。
そこで、当世日本で女性が普通に着ている水着を王都で一流の服飾職人に作って貰っていたのだ。

「こちらに着替えてね。当主命令である」

「うわーーーっ。布が少ないなぁ。当主命令だから着るけど、ボクへの初めての当主命令がこれってどうなの？」

「俺は間違っていない。なぜなら、俺は当主様だからだ」

「別にいいけどね。ここはプライベートビーチで他に誰もいないし。でも、サイズは？」

「ルイーゼ。結婚してもう一か月以上だぞ。妻の体のサイズくらいは把握している」

「ヴェルのエッチ」

とは言いつつも、ルイーゼはノリノリの表情で他の妻達の水着も持って着替え用の衝立へと戻っていく。

「ルイーゼさん。ヴェンデリン様がこれを着ろと？」

「当主命令だって」

「ここで当主命令って……。ヘソとか丸見えね」

「肝心な部分は隠れているからいいんじゃないの？　イーナちゃん。似合うよ」

「ルイーゼ。あんたねぇ……」

「動きやすくていいかも」

「ヴィルマさんは、そういう考え方ができて羨ましいですわね」

「カタリーナはスタイルがいいから羨ましい」

「私は貴族なので、周囲から常に見られていますから注意しているのよ」

衝立の中からガヤガヤと話し声が聞こえてくるが、数分で着替え終わって俺と導師の前に姿を見せていた。

「なるほど。バウマイスター伯爵は、新しいファッショナブルな水着を普及させようと？」

「いいえ。純粋に趣味です」

どうせここはプライベートビーチであるし、俺が作らせた水着が

流行しようとしまいと関係ない。
ただ俺が、エリーゼ達に着せたかっただけである。
他に理由など存在しない。

「あの……。ヴェンデリン様。伯父様……。少し恥ずかしいのですが……」

「最初であるからそう思うのであろうが、某はじきに流行するような気がするのである」

エリーゼは、黄色のビキニタイプの水着姿で恥ずかしそうにしていた。
少し前かがみで、よく視線を送られる胸を隠していたのだ。
しかしながら、やはりエリーゼの胸は凄いと思う。
それでいて、ウエストなども普通に細いのでまるでグラビアアイドルのようなのだ。

「エリーゼは素晴らしいな」

「そうですか？」

「どうせ他には誰もいないし、もっと堂々としていなよ。綺麗なんだから」

「はいっ！」

俺が褒めると、エリーゼはとても嬉しそうであった。

「イーナも綺麗だな」

「ありがとう」

イーナは胸は普通であったが、体を良く鍛えているのでスレンダーでスタイルが良かった。

それが赤い髪と合わさって、少し格好良く見えるのだ。

それと、最初は新しい水着を渋っていたが、実際に着ると意外と堂々としている。

「イーナさん。あまり無駄な脂肪が無くて羨ましいですわね」

「そうかしら？」

プチダイエットの権化であるカタリーナが、イーナの体の細さを羨ましそうに見ていた。

「カタリーナ。ボクはもっと細いよ」

「ええと……」

「新しい水着も似合ってるでしょう？　ボクの大人の魅力が前面に出ていて」

「そうですわね……」

水色のビキニを着ているルイーゼは可愛らしかったが、エリーゼやイーナとは明らかにタイプが違う。

可愛らしいというのが適切であろうが、それは彼女の魅力でもあった。

「可愛いと思うよ」

「ボクは、エリーゼやイーナちゃんとは別の路線で行くからね。でも、ヴィルマはいいなぁ……」

同じ体が小さい枠に所属しているのに、ヴィルマは意外と胸が大きい。

その点を、ルイーゼはとても羨ましいと思っているようだ。

「これ以上大きくなると動き難い」

「ううっ……。一度でいいからそんな事を言ってみたい……」

ルイーゼは、ヴィルマの胸に強い視線を送っていた。

「ヴィルマも可愛いな。どうだい？　新しい水着は？」

「動きやすい。少し恥ずかしいけど」

ピンク色のビキニを着たヴィルマは、俺の前でクルリと回って水着姿を披露していた。

「動きやすいから、沢山エビや貝を獲る」

「そうだね……」

ただ、やはりヴィルマは食欲の方が優先なようだ。

このプライベートビーチは、前に海竜を倒した現場なので海の幸も豊富であった。

「あの……。ヴェンデリンさん」

「どうかした？　カタリーナは恥ずかしがりやだからワンピースタイプにしたんだが」

「ワンピースタイプでも、これは恥ずかしいではありませんか！」

カタリーナは一番の恥ずかしがり屋なので紫色のワンピース型の水着を用意したのだが、まだ文句があるらしい。

「似合っているじゃないか」

「それは素直に妻として嬉しいですけど、なぜこの水着は股の部分の切れ込みが激しいのですか？」

「俺がデザインしたから」

カタリーナの水着は昔の日本で流行したハイレグタイプで、加えて胸の部分の布を細くデザインしているのでほぼ胸の形がわかるようになっていた。

なぜそうしたのかと言うと、単純に俺の趣味だからだ。

他に理由などあるはずがない。

「似合っていると思うけど」

見た目、カタリーナは高飛車でSに見えるので、こういう水着がとても良く似合うのだ。

「ダメか？」

「ダメとは言いませんが……」

「じゃあ。当主命令で」

「なぜにそこで連発いたしますの？」

全員無事に水着に着替えたので早速に遊ぼうとすると、俺の肩を叩く人がいる。

それは、導師その人であった。

「某だけ仲間外れなのはどうかと思うのである！」

「つまり、導師も新しい水着を着ると？」

「何か無いのであるか？」

「一応、ありますよ……」

念のために男性用の水着も作って貰っていたのでそれをいくつか渡すと、導師はその中で一番あり得ないデザインの水着を選んでいた。

俺が洒落で作った、競泳選手が着けるような極小ブーメラン型のブリーフタイプ黒であった。

「これが、某には相応しいのである！」

いきなり目の前で最初の水着を脱いで着替え始めたので、俺達は全員が視線を逸らしていた。

あっという間に着替え終わった導師は、まるでボディービルダーのようなポーズを取りながらその着心地を確認していた。

「（エリーゼ達の美しい水着姿の記憶が、導師の水着姿の記憶で上書きされていくようだ……）」

地球でボディービルダーの大会に出ると優勝しそうな雰囲気ではあったが、生憎と俺はその方面には全く興味が無かった。

「さてと。着替えたので遊ぼうと思うのだが……」

続けて導師は、何か液体の入った瓶を取り出していた。

「日焼け止めを塗らないと、あとで大変であろう」

この世界には、日焼け止めが存在している。

地球のように二酸化チタンや酸化亜鉛などは手に入らないであろうが、植物由来で効果が高い商品が存在している。

その代わりに値段は相当な物で、よほど裕福で無いと手に入らない。

貴族の女性は見栄も兼ねて海水浴に行くが、肌が荒れるのは防ぎたいようだ。

「バウマイスター伯爵よ。某に塗ってくれぬか？」

導師からあり得ないお願いをされたので、俺は彼の姪であるエリーゼに視線を向ける。

「ええと……。エリーゼ……」

「お互いに塗り合いましょうか？」

「エリーゼの意見に賛成！」

「私も賛成よ」

「カタリーナには私が塗る」

「では、私はヴィルマさんに」

しかし、導師の姪であるエリーゼですら、彼の体に日焼け止めを塗るのは嫌らしい。

上手く女性陣同士で塗り合う作戦で、自分達のピンチを脱していた。

当然俺は、見捨てられる事となる。

「（俺も混ぜて欲しかったぜ……）」

エリーゼ達と日焼け止めを塗り合う計画が潰れ、逆に導師の体に日焼け止めを塗るという困難が待ち受けている。

導師にソッチの気は皆無だが、それでも何が悲しくて筋肉隆々の四十代オヤジの体にサンオイルを塗らないといけないのであろうか？

「某も、バウマイスター伯爵に塗ってあげるのである」

「（それも、物凄く嫌……）」

更にピンチに追いやられる。

俺だって普通に、エリーゼ達に日焼け止めを塗って欲しいからだ。

「（考えろ！　ピンチを脱する方法を……）」

どうにか最悪の事態を避けようと考える俺の脳裏に、あるアイデ

アが浮かぶ。
非情な方法ではあるが、それも俺がピンチを脱するため。
俺は心を鬼にしてから、すぐに水着の上からローブを羽織り、『瞬間移動』でバウルブルクにある警備隊の駐屯地へと飛ぶ。

「お館様？」

「エルに用事だ」

門番の検問を顔パスで抜けて研修室に入ると、そこでトリスタンから講義を受けているエルを発見する。

「お館様？」

「トリスタン。エルを少し借りるぞ」

「えっ？　何？」

事態を良く掴めていないエルの手を掴むと、俺はまた『瞬間移動』で砂浜に戻る。

「なあ。どういう用事で……。うひゃーーー。スゲェ水着」

エルは、エリーゼ達の水着姿を見て鼻の下を伸ばしていたが、彼女達はエルを窘めなかった。
なぜなら、俺の極悪な企みに気が付いたからだ。

「導師。エルがどうしても日焼け止めを塗りたいそうです」

「そうであるか。では、頼むぞ」

「えっ？　俺が何？」

エルが声がした方を向くと、そこにはブーメランブリーフ水着を着用した導師が立っており、加えて日焼け止めの瓶を彼から渡されていた。

「エルヴィン少年よ。某に日焼け止めを塗ってくれ。全身にくまなく頼むぞ」

「おい。ヴェル……」

ようやく俺の意図に気が付いたエルは、物凄く嫌そうな表情を俺に向けていた。

「エル。当主命令だ」

「お前は鬼だな。ヴェル……」

エルは、初めての当主命令が導師の体に日焼け止めを塗る事という事実に、心の中で打ちひしがれているようだ。

「実は、俺は男性の肌に一分以上触れると蕁麻疹がな」

「一発で嘘だとわかるわ！」

勿論、エルの言うように俺の嘘である。

「とにかく命令ね。俺は、エリーゼにでも日焼け止めを塗って貰おうかな？」

「地獄に落ちろ」

間違いなく、俺がエルの立場でも同じ事を言ったであろう。

他の家臣がいれば不敬罪も甚だしいが、軽く聞き流してエリーゼ達の元に直行する。

「万遍なく頼むぞ。エルヴィン少年よ」

「はい……」

エルは、半ば放心しながら導師に日焼け止めを塗っていた。

そして俺は、まだ日焼け止めを塗り終わっていないカタリーナに日焼け止めを塗る作業に入る。

エルに任せるという早めの決断をした俺の勝利である。

「どうだ？　気持ちいいか？」

「何か聞き方がいやらしいような……」

「夫婦の間で、いやらしいも何もねぇ……。お尻にも塗ってあげよう」

「ヴェンデリンさん。私は別に構わないのですが、周囲の視線も考えてですね……」

見た目とは違って、その手の方面で俺に押されるとカタリーナは大人しくなってしまう。

それでも特に嫌がらずに、俺に日焼け止めを塗られていた。

俺はカタリーナの全身に日焼け止めを塗り、俺もエリーゼ達全員

によって日焼け止めを塗られていく。

「ヴェル。ボクもお尻に塗って」

「喜んでお引き受けしましょう」

「はぁーーー。気持ち良いねぇーーー」

ルイーゼも、気持ち良さそうに日焼け止めを塗られていた。

「こういうのもいいな」

これを堕落というのか？

それとも、幸福というべきか？

などと思っていると、エルに日焼け止めを全身に塗らせた導師がボディービルダーのようにポーズを取っていた。

エルはちゃんと日焼け止めを塗ったようで、とても満足している様子だ。

「これで良し。あまり日に焼けると、肌が火傷をする事があるからな」

「導師なら、地獄の業火で焼かれても火傷一つ負わないと思いますが……」

「エルヴィン少年よ。某はそこまで頑丈ではないぞ」

導師はエルが冗談を言っていると思っているようだが、間違いなく本心から出た発言だ。

なぜなら、俺もエリーゼ達もエルの呟きに納得してしまっていたから。

「それで、俺の仕事は？」

「これで終わり」

「おい……」

俺はエルが文句を言う前に、再び『瞬間移動』でバウルブルクにある警備隊の駐屯地へと飛び、トリスタンにエルを引き渡してから砂浜に戻っていた。

可哀想だとは思うが、せっかく伯爵になれたのだ。

導師の体に日焼け止めを塗るなどという苦行は、他の人に任せたかった。

「エルがちょっと可哀想じゃない？」

「エルは明日休みだから。それとも、イーナが代わりに塗る？」

「さっ。早く遊びましょう」

イーナも、いくらエルが可哀想でも自分で導師に日焼け止めは塗りたくなかったらしい。

すぐに話題を切り替えて誤魔化していた。

「遊ぶぞ！　その前に……」

今度は屋敷に『瞬間移動』で飛んでから、朝の仕事を終えて待機していたドミニクと新人メイドのレーアを呼び出していた。

彼女達に、昼食や飲み物などの準備を任せる事にしたのだ。

「凄いですね。ドミニク姉さん。プライベートビーチとか」

海沿いに領地を持っている貴族だと小身でも持っている者は多いが、領地内に海を持っていない貴族だとよほどの大物でないと持っていない。

王都育ちのレーアからすると、物凄い贅沢に見えるのであろう。

「レーア。余計な事は言わずに飲み物と食事の準備です」

男手が少ないので、俺と導師で魔法の袋から取り出したパラソルを立て、リクライニングチェアーを並べ、バーベキューパーティーをするので竈の設置などを行う。

材料も準備していて、ドミニク達は肉や野菜を切ったり、魚を捌いたり、冷たいマテ茶を作ったり、フルーツでシャーベットやジュースなどを作っていた。

「野外のパーティーで高価な魔道具を惜しみも無くとは。お館様は凄いですね」

レーアは感心しているようだが、全て魔の森の地下倉庫から手に入れた品である。

あそこの魔道具は、日本の家電製品のようにコンパクトで使い勝手が良いのだ。

コードが付いておらず、自分で魔力を補充して使えるのが良い。

燃費も従来品とは段違いなので、あまり魔力の補充に手間もかからない。

そういえば、これを買い取って行った魔道具ギルドは成果を出し

たのであろうか？

「拾い物だけどな。仕事の合間に適当に飲み食いしてもいいよ。今日は、他のメイドもいないし」

屋敷内だと他のメイドや使用人達の手前もあって言えないが、ここには俺達以外誰もいないので今日は構わないであろう。

「ありがとうございます。お館様」

「今日はラッキーですね。ドミニク姉さん」

「まずは、お館様にお礼を言いなさい！」

「ふえい……。ありがとうございますぅ……」

またドミニクは、レーアの頭上に拳骨を落としていた。

「ああ……。今度は、六歳の時に家族でピクニックに行った思い出が……」

「覚えているじゃないですか」

「何と言うか、ドミニクは大変だな」

「仕事の覚えも手際も良いのですが、口の利き方に問題が……」

ドミニクは、年下の従妹のメイド教育に苦労しているようだ。

「それじゃあ、任せるから」

ドミニク達に食事の準備を任せて海に向かうと、俺達は全員で海に入って泳いだり潜ったりして遊び始める。
久しぶりの海水浴は心地よく、ヴィルマなどは深く潜ってエビや貝を獲り始めていた。

「この中で一番泳ぎが得意なのは、ヴィルマだな」

「そうみたいですね。あのヴェンデリン様。手を離さないでくださいね」

「エリーゼが泳げなかったのは意外だったなぁ……」

俺は、エリーゼの手を引きながら彼女にバタ足から教えていた。

「海水浴の経験はありますが、女性は砂浜付近で遊ぶだけでしたので……」

泳ぐという行為自体をした経験が無いそうだ。

「屋敷にプールでも作って、そこで俺が教えればすぐに覚えるさ」

「ありがとうございます。ヴェンデリン様」

「ヴェル。このクロールってスイスイ泳げるねぇーーー」

「平泳ぎも楽だわ」

俺がエリーゼに泳ぎを教えている横では、クロールを速攻で覚えたルイーゼがスイスイと泳いでいた。

イーナも、ノンビリと楽しそうに平泳ぎで泳いでいる。

この世界では、泳ぎは古泳法のような物しか存在していない。

重い鎧を着ても泳げるようにとか、水泳は男性だけの物という認識があったのだ。

「ヴェルは、良くこんな泳法を思いつくね」

「子供の頃は暇だったからな」

実は、前世で中学・高校時代と水泳部だったからだ。

勿論才能はなく、一通りの泳法は出来るがオール補欠でしたというオチはあったのだが。

それよりも、ルイーゼとイーナは凄いと思う。

一度泳ぎ方をレクチャーしただけで、すぐに俺よりも速く泳げるようになっているのだから。

運動神経に関しては、二人に一日の長があるようだ。

「そして、カタリーナは……」

「手と足の動きが難しいですわね……」

彼女も普通に泳げるのだが、新泳法の習得には苦労しているようだ。

「屋敷にプールを作るから、そこで教えるよ」

「ええと。手の動きがこうで……。足の動きがこうで……」

カタリーナの運動神経は、俺とそう違いが無いようだ。
クロールで手を動かすと足の動きが止まり、足の動きに集中すると手の動きが疎かとなり。
俺が子供の頃と同じような失敗を繰り返していた。

「泳げなくても、魔法使いには魔法がありますから問題無いですわ」

「それを言うと、それまでなんだけどな」

空気の泡を作ってその中で水中移動をする魔法があるので、魔力が尽きなければ泳げなくても問題は無いと言える。

「せっかくヴェンデリンさんが教えてくれるので、ありがたくお受けいたしますが」

「伯父様も、覚えるのが早いですね」

「導師はなぁ……」

エリーゼは、少し離れた場所で盛大な水飛沫をあげながら泳ぐ導師を羨ましそうに見ていた。
だが、彼はクロール、平泳ぎ、背泳ぎと全て無視してバタフライだけを素早く習得しただけだ。

「大型の魔物が泳いでいるみたい」

本人は楽しそうであるが、傍から見るとルイーゼの言う通りに水生の魔物が接近でもしてくるかのように見える。

「話題にしたら、こっちに来たな……」

恐ろしいスピードでこちらに泳いできた導師は寸前の位置で止まるが、大量の水飛沫が俺達を襲った。
全員が水浸しになってしまう。

「この泳法は便利であるな！」

導師は、バタフライをえらく気に入ったようだ。

「ところで、ヴィルマは？」

「確か、素潜りでエビや貝を獲っているはず……」

そうルイーゼに答えた直後に海面が大きく盛り上がり、ヴィルマが顔を出す。
その手には、獲物が入った網袋を持っていた。

「沢山獲れた」

「そうか。良かったな」

ヴィルマにとっては、新しい泳法を習うよりも遊ぶよりも、ただ漁の成果だけが何よりも楽しみのようだ。
そのまま砂浜へと上陸するが、袋の中には尋常ではない量のエビ、貝、魚などが入っていた。

「随分と一杯入っているけど全部食べられるのか？」

「魔法の袋に入れておけば鮮度は落ちないから、暫く楽しめる」

「シッカリしているなぁ……」

ここでちょうどお昼となり、ドミニク達が準備をしていた昼食を取る事にする。

メニューはバーベキューが主になっていて、網の上で焼いた肉、魚貝類、野菜などをタレに付けて食べていた。

「ショウユタレも、ミソタレも、シオタレも美味い」

全て俺が独自に配合をして完成させた物であったが、導師はかき込むようにして大量に焼いた肉や魚を食べていた。

「伯父様。お野菜はいかがですか？」

「野菜は後日でも構うまい。今は、肉や魚貝類を優先するのである」

「あまり健康に宜しくありませんよ」

導師はまるで子供のような事を言い、逆にエリーゼの方がお母さんのようであった。

「ヴェンデリン様は野菜も食べていますね」

「そのためのタレだもの」

前世で高級な素材を使ったタレを作っているメーカーの品をパクったのだが、予想以上に味の調合に難儀していた。

同じ材料が手に入らなかったり、入っても味などが違っていたり、大体の材料はわかっていたが配合比率で苦労したりと。

この三種類のタレは、俺の苦労の結晶なのだ。

『そんな細かい配合比率で味が変わるのか？』

人が苦労してタレの配合をしているのに、エルは横からよく茶々を入れていた。

タレの配合にケチを付けるとはとんでもない男である。

だからこそ、導師に日焼け止めを塗る刑を執行したとも言えるのだが。

「確かに、このタレは良く出来ていますね」

「アルテリオさんがレシピを売って欲しいだって」

「あの方は商売上手ですね」

「元冒険者だから目端が利くんだろうね」

「ヴェル様」

エリーゼと話をしていると、今度はヴィルマが俺に声をかけてくる。

「何だい？　ヴィルマ」

「お腹が溜まらない」

「某もである」

どうやら導師と合わせて、肉や魚貝類ばかり食べているので炭水化物が不足していると感じたのであろう。

「あれだけ食べて、まだ食べるの？」

イーナは、二人が焼いて食べたエビや貝の殻が山積みになっているのを見て呆れている様子だ。

「じゃあ。作るとするかな？」

「ヴェルが何かを作るの？」

「海に来たからには、ちょっと変わった物を食べないとな」

俺は魔法の袋から鉄板を取り出すと、空いている網と交換して加熱を始める。

続けて油を引き、刻んだ肉と野菜を入れて炒め、準備をしていた蒸した麺も入れる。

味付けにはタレと同じく自作したソースを使い、ほど良く炒まったら皿に載せて紅ショウガと青のりを乗せて完成。

俺は、夏の海の風物詩であるソース焼きそばを作っていたのだ。

これの再現にも苦労したが、屋敷にいる料理人が優秀なので助かっていた。

彼らにある程度の説明をすると、蒸し麺、紅ショウガ、青のりなどは準備してくれたのだから。

「別バージョンで具を魚貝にした塩焼きそばも完成」

「美味しそうですわね」

焼けたソースと青のりの香りに、カタリーナも吸い込まれたよう

だ。

「貴族らしくない料理だけどな」

「ヴェンデリンさん。貴族とは、いかに珍しい料理を食べてパーティーなどで自慢するかですわよ」

カタリーナは素早く焼きそばを皿に盛って食べ始めていた。

えらく大盛りだが、いつも気にしているダイエットは良いのであろうか？

「美味しいわね」

「塩味の方も美味しいよ」

「初めて食べる麺料理ですね」

イーナ、ルイーゼ、エリーゼも焼きそばを気に入ったようだ。

「美味しいけど、足りないからもっと作る」

「作り方は見ていたので、某がやってみよう」

やはり二人には、量が物足りなかったらしい。

ヴィルマと導師は、競うようにして焼きそばを焼き始める。

麺などの材料は多めに準備していたのだが、それらは全て鉄板の上で焼かれていた。

その量たるや、まるで縁日の屋台のようである。

準備していた全ての具材が鉄板の上で焼かれて、ジュージューと

音を立てている。
二人は、神妙な表情でコテを動かしながら焼き加減を見ていた。

「導師。全部食べられますか？」

「物足りないくらいであるな」

「導師様。前に義父が腹八分だと言っていた」

「エドガー軍務卿であるか。至言であるな」

などと導師は言っているが、何十玉分の焼きそばをヴィルマと競うようにして食べている人が言っても説得力は無かった。

「良く胸やけしないわね」

イーナの言う通りであったが、さすがに二人とも食後は、砂浜に置いたリクライニングチェアーに寝転がって昼寝を始めていた。
導師から爆音のような鼾が聞こえ、その音量たるや魔物除けにでも使えそうだ。
奥さん達は、どうやって一緒に寝ているのであろうか？

「ヴィルマさんは、見た目は可愛いですわね」

カタリーナの言う通りに、ヴィルマは小リスのように丸まって寝ていて保護欲を誘う可愛さだ。
とても、導師よりも食べるようには見えない。

「俺達も少し昼寝でもするか」

「はい。お腹一杯で少し眠くなりました」

「こういう時にダラダラ寝られるのもお休みの醍醐味さ」

「そうですね」

結婚式以来、色々とあって疲れたので、俺達もリクライニングチェアーに寝転がって冷たいお茶やジュースを飲みながらうたた寝を開始する。

「贅沢な時間ですね」

「そうだな」

共に十六歳なのに色々と忙しいせいで、エリーゼとはまるで老夫婦のような会話になってしまう。

地球なら高校生で遊んでいられる年齢なのに、この世界の人間は生き急いでいる人が多い気がするのだ。

「エリーゼがいてくれて助かっているよ。俺は王都の貴族連中の事なんて良く知らないし」

「ヴェンデリン様にそう言っていただけると嬉しいです」

俺に向けてニッコリと微笑むエリーゼは可愛かった。

そして、やはり寝転がっても形が崩れない胸は最強である。

「そうね。私は陪臣の娘だから、その方面ではヴェルに助言できないから」

「ボクもだね。今まで世界が違ったからね。カタリーナは見かけだけだし」

「私は没落貴族なので仕方がありませんわね。見かけも宣伝には必要でしてよ。ルイーゼさん」

「確かにそれは言えている」

イーナも、ルイーゼも、カタリーナも、エリーゼには一目置いている。

俺がそれを再確認した時には、既にエリーゼは眠りの世界に旅立っていた。

「疲れているんだろうな」

俺はエリーゼにタオルケットをかけ、自分も暫しの昼寝を楽しむ。

そして数時間後、砂浜は夕日で赤く染まり、その美しさを際立たせていた。

「綺麗だなぁ」

俺とエリーゼ達は、砂浜から見る美しい夕日に感動していた。

「本当に綺麗ですね。ヴェンデリン様」

「また来ましょうね。ヴェル」

「いやーーー。今日は休んだなぁーーー」

「美味しい物が沢山食べられた」

「プライベートビーチ。堪能いたしましたわ」

かなり長い時間夕日を見てから屋敷に戻ろうと、片づけをしているドミニク達に声をかける。

昼食後は、夕方までに片づけをしておいてくれたら、あとは自由に残った食材を調理して食べていていいからと任せていたのだ。

ドミニクなら暴走はあり得ないと思ったのだが、あの新人メイドレーアが片付いた荷物の元で座り込んでいた。

「この娘はどうしたんだ？」

「お恥ずかしながら、純粋に食べ過ぎです」

「えっ！　そうなの？」

「滅多に食べられない大量の海の幸。食い溜めを決行いたしました」

片付けはちゃんとしたようだが、そこで限界がきて座り込んでいるらしい。

「限度があるでしょうが！」

これで何度目か？

ドミニクは、レーアの頭上に拳骨を落としていた。

「ああ。七歳の時に高級なレストランに家族で行った記憶が……」

「だから消えていないではありませんか」

真面目なドミニクと面白キャラのレーアとの組み合わせは、まるで漫才コンビのようであった。

「食べ過ぎなら、胃薬でも飲んでおけば？」

魔法の袋から、生薬由来の胃薬を取り出してレーアに渡す。

「ああ。お館様のご慈悲がこの身に沁みます……」

「（この娘。面白いなぁ……）」

レーアに薬を飲ませた後、すぐに着替えてから『瞬間移動』で屋敷へと戻る。

塩が体に付着しているのでシャワーを浴びてから夕食を取るためにリビングへと入ると、そこでは分厚い紙の束を捲って読んでいるエルの姿があった。

「何を読んでいるんだ？」

「軍隊指揮の心得。まずは、座学からだって」

「なるほど」

トリスタンから、軍学書の中から必要な部分だけを束ねた物を貰ったらしい。

それを熱心に読んでいた。

「それにしても、今日は酷いじゃないか」

「アレはなぁ……」

誰もが筋肉ムキムキの導師に日焼け止めを塗りたくなかった結果、ふと頭にエルの存在が浮かんでしまっただけの不幸な事故であると俺は説明する。

「明日はお休みじゃないか」

「別に、導師の体に日焼け止めを塗らなくても明日は休みだ」

「やはり、それに気が付いたか」

「気が付かない奴を、むしろ俺は知りたいわ！」

確かに、エルの言う通りである。

「代わりに、一人女の子を紹介してやろう」

「本当か？」

「ああ。なかなかに可愛い娘だぞ」

俺は、嘘は言っていない。

新人メイドであるレーアはドミニクよりも二歳年下だそうだが、スタイルはドミニクにも負けていないし、亜麻色の髪で可愛らしい容姿をしている。

ドミニクに言わせると、『あの口の利き方が何とかなれば……』というくらい、実はメイドとしては優れていた。

「本当か？　誰なんだ？」

あまりに嬉しそうに聞いてくるので、俺はレーアの名前をあげる。
すると、途端にエルの顔色が曇り始める。

「えっ！　あれ？」

「知っていたのか？」

「まあな……」

教育係のドミニクに拳骨を落とされているのを、何度か実際に目撃しているそうだ。

「アレ。大丈夫か？」

「ちょっと口の利き方が微妙だけど、意外と良い娘だと思うよ」

メイドとしての能力は、ドミニクにもそう負けていないはずだ。
奥さんにするには良いと思うのだが。

「試しに、デートにでも誘ってみたら？」

「うーーーん。考えておく」

翌日、エルは一人でバウルブルクの街中に休暇に出かけてしまったが、実はレーアもうちに来て初めての休日であった。

「ドミニク姉さん。もし私が街中で男性に声をかけられでもしたら？」

「しつこかったら、警備隊の人に言いなさい。お館様の屋敷に勤め

てるといえば助けてくれますから」

いつも拳骨を落としているが、ドミニクはレーアを可愛がっているらしい。

初めての休日で街に出るレーアを屋敷の前で見送っていた。

「わかりました。では、早速に甘い物の探訪開始です」

「無駄遣いをしないように」

「わかっていますって。お土産を買って来ますね」

元気に駆け出したレーアの姿が見えなくなったところで、俺はドミニクに、エルにレーアを勧めた件を話す。

「えっ？　レーアをですか？」

「エルの親友としては、無理矢理に彼女を勧めたくないけど、選択肢の一つとしては選べるように」

「大丈夫でしょうか？」

ドミニクに言わせると、あの微妙な口の利き方が気になって仕方がないのであろう。

もう少し、自分が修正をしてからだと。

「可能性はあるかもとね」

「わかりました。一応、気にはしておく事とします」

果たして二人が結婚する事となるのか？
それは、今は神のみぞ知る未来であった。

第七十八話　親善訪問団。

「親善訪問団ですか？」

「うむ。某も十年前に参加したのだが、今回はバウマイスター伯爵も指名されているのである」

結婚式を挙げてから約二ヶ月後、バウルブルクにある屋敷において、導師から隣国アーカート神聖帝国に送られる親善訪問団の話を聞いていた。

「俺も参加ですか？」

「バウマイスター伯爵は有名人だから、陛下から必ず参加せよとの命令があってな。あとは、カタリーナ殿もそうであるな」

「私もですか？　ご期待に沿えるように頑張りますわ」

親善訪問団は、十年に一度二百名規模で双方から派遣されるそうだ。

ヘルムート王国側は前回が十年前で、アーカート神聖帝国側は五年前。

共に十年ごとだが、夏と冬のオリンピックのように五年ごとに、どちらかがどちらかを訪問するシステムになっているらしい。

そういう行事があるという事は聞いていたが、昔のうちの実家では話題にもなっていなかった。

うちが呼ばれるはずがないので、関係がなかったと言われればそ

れまでであったが。

きっと父も母も、頭の隅でも認識していなかったはずだ。

「もう戦争はしないから、共に仲良くしましょう的な物ですか？」

「それもあるが、ある意味戦争とも言えるのでもある」

互いに優れた産品や新技術などを持ち込んで、『うちの方が発展しているだろう。羨ましいか。ほら』という展開を双方が狙っているそうだ。

ある種の、国威発揚行事でもあるらしい。

交易交渉の改定などもあるので、これも政治交渉という名の戦争と呼べなくもなかった。

「当然、優れた魔法使いの披露もあるのである！」

ブロワ辺境伯家との紛争を見てもわかる通りに、広域上級魔法が使える魔法使いは時に戦況をひっくり返す。

実際に両軍がぶつかると、双方にほぼ同数・同質の魔法使いがいるのでそう簡単に片方が無双を出来ないようになっているが、優秀な魔法使いが多ければ戦況が有利になる。

その実力を披露して、相手に軍事的な圧力をかけて戦争を防ぐ狙いもあるらしい。

「前回は、某が魔法使い達を率いたのである！」

導師の実力を考えれば当たり前というか、彼の実力を見れば戦争を躊躇うと考えられたからであろう。

何しろ、この大陸では最高の抑止力なのだし。

「ブランタークさんは出た事が無いのですか？」

「勿論呼ばれたさ。アルが生きていれば奴が呼ばれただろうが」

導師と一緒に屋敷に来ていたブランタークさんが、俺の質問に答える。

基本的に魔法使いは、貴族自身か貴族のお抱えになっていないと呼ばれないそうだ。

ブランタークさんは師匠の代わりにブライヒレーダー辺境伯家に雇われていたので、それで呼ばれて導師と三週間ほど一緒だったそうだ。

「思えば、ブランターク殿とはその頃からの知己であるな」

「（その前から顔くらいは知っていたんだ。アルは友達だったみたいだし……）」

そして実際に親善訪問団で顔を合わせ、当時は導師のキャラの濃さに絶句したのだと、ブランタークさんは小声で俺に事情を説明していた。

「今回も、お抱えの俺は呼ばれたわけだ」

「そんなに魔法使いばかり抜けて大丈夫なんですかね？」

「今までは大丈夫だったな。それに、こういうのは国家の意地があるから」

簡単な魔法合戦や特殊魔法の披露も、歓迎会の席で行われるらしい。

その席でお互いの軍部が、現在仮想敵国に所属している魔法使いの数と実力を測る。

民間で稼いでいる魔法使い達は面倒臭がって来ないので、王国や貴族に雇われている魔法使いはほぼ強制らしい。

宮仕えは安定しているが、こういう命令に逆らえないのが弱点かもしれない。

「一種の戦争とも言えるわけだな」

「大変なんですね」

「とはいえ、今まではトラブルとか無かったからな。なあ、導師？」

「そうであるな。適当に魔法を披露して、あとは観光がメインであろう」

魔法使いなので、他の商工業関係の役人や貴族連中よりは暇なのだそうだ。

彼らには技術交流や輸出・入に関する協定の更新などがあるが、魔法使いは魔法だけを披露すればいい。

あとは観光でもして、ほとんど遊びがメインだと導師が説明していた。

「一種の観光旅行とも言えるのである。バウマイスター伯爵も、奥方達を連れて遊びに行くくらいの感覚で良いのである」

「家族連れで良いのですか？」

「貴族ならば、全く問題ないのである！」

約二百名の随員とはいえ、みんな部下やら秘書やら護衛を連れて行くので参加人数が増える。

特に大物貴族は、奥さんやら家臣まで連れて行くので数が増えるそうだ。

「それを見越して、大型魔導飛行船を二隻チャーターするので問題ないのである！」

国家的な行事なので、その辺には抜かりは無いようだ。

予備の魔導飛行船を動員して、親善訪問団を運ぶ事になっていた。

「新婚旅行にちょうどいいか。みんなもそう思うだろう？」

「そうですね。アーカート神聖帝国行きは貴重なキップですから」

みんなの空になったティーカップにマテ茶を注いでいたエリーゼが、俺の問いに答える。

まだ停戦中という事もあり、双方の人員は首都からは出られないが、唯一存在する外国への旅行なので親善訪問団は密かな人気を誇っていた。

民間ベースの交流が国家が一本化している交易だけなので、貴族や商人で行きたがる人が多いそうだ。

既に二十回以上も行なわれているが、特にトラブルなども発生していない。

安全に海外旅行が出来るというわけだ。

「ですが、随員には制限かかかるのでは？」

誰もが数十人も連れて行けないので、まずは申請を出してから随伴人数が決定されるそうだ。

大貴族ほど多くの人を連れて行けるらしいが、あまり自分ばかり多く連れて行くと周囲から白い目で見られる。

その辺の匙加減は、面倒なのでローデリヒに丸投げしておく事にする。

「某など、それが面倒なので前回は一人であったぞ」

「（それは、導師が一人旅を楽しみたいからでしょうが）」

外国に行くので、解放感を求めてなのかもしれない。

その前に、『究極単体戦闘兵器である導師に護衛が必要か？』という根本的な疑問が出てくるのだが。

「うちは、いつもの面子でいいと思うけどね」

順調に進んでいるが、未開地とヘルタニア渓谷の同時開発なので護衛だけでもあまり人を持って行くと、任せているローデリヒに負担がかかる。

俺とエルと妻達で十分であろう。

「そうですね。簡単な家事くらいなら私達でやってしまいますし」

冒険者として時には野宿までする俺達なので、無理にメイドを連れて行く必要は無かった。
ドミニクも新婚なので、今は暇な時間を増やしてあげた方が良いであろう。

ここのところ、大分迷惑をかけているし。

新人メイドであるレーアが行きたそうな表情を浮かべていたが、いきなり新人を外国に連れていけば他のメイド達との間に軋轢が起こるかもしれない。
それに、今回は特にメイドなど必要ないであろう。

「ヴィルマは、どう思う？」

「食事が楽しみ」

「それはあるな」

少し寒い北の国なので、この国とは違う料理や食材に出会える可能性が高かった。

「海の魚貝類は、アーカート神聖帝国産が圧倒的に優れているからな」

他にも、何か良い食材や料理があるかもしれない。
食べて気に入れば、輸入交渉をしてもいいだろう。

「ルイーゼは？」

「新婚旅行だね。護衛はボク達がいるから問題ないよ」

最近、強さが導師に類似してきたルイーゼがあまり無い胸を張りながら答える。
それでも、結婚してから少しは大きくなっているのだが、親しい人でも気が付いていない人が多かった。

「カタリーナは？」

「親善訪問団に選ばれるとは栄誉ですわ。私の魔法を存分に披露しましょう」

カタリーナなら、間違いなくそう言うと思った。
一度は没落したヴァイゲル家の当主が、普通の貴族ではなかなか指名されない親善訪問団の一員に選ばれたのだから。

「イーナ。何かいい観光スポットとかある？」

「ケルン大聖堂とか、下町の大朝市とか、他にも細かい観光スポットがボチボチね」

イーナは、ブランタークさんが持参した『ブライヒレーダー辺境伯バルデッシュ紀行』という本を見ていた。
前回の親善訪問団のメンバーにはブライヒレーダー辺境伯も選ばれていて、彼が見聞きした情報を独自に本に纏めた物らしい。

中身は、なかなかに良く出来た観光ガイドになっている。
ブライヒレーダー辺境伯は、やはり文系の人間のようだ。

「楽しみだなぁ」

「そうね」

「あのよぉ。一応、これって仕事なんだけど……」

珍しく唯一真面目な事を言っているブランタークさんであったが、留守の間の事もあるのでローデリヒと共に真面目に打ち合わせや必要な土木工事なども行なう。

特に、ヘルタニア渓谷の道路整備や採掘の手助けなどでは奮闘している。

これも、楽しい海外への新婚旅行のためだ。

参加者は、いつもの面子だけにした。

自分達の身の周りの事は自分で出来るし、船に乗れる人数も決まっているのであまり増やすわけにもいかない。

護衛一人でも、うちは人手不足なので出来れば避けたかったのだ。

「エルとルイーゼとヴィルマがいれば、ただの警備兵なんて不要だろう」

「だよねぇ」

「いない方が、新婚旅行っぽい」

あとは、うちの随員を増やすと他の貴族が割りを食うという物もある。

ヘルタニア渓谷から出るミスリルをメインとした鉱石でまた潤ったうちが新参者なのに随員を増やせば、『成り上がり者が生意気な！』と言われかねないという事情もあった。

本当に、貴族とは面倒な生き物なのだ。
基本的に護衛無しの提案をすると、ローデリヒは渋々ながら認めていた。

「何かがあったら、他の貴族など無視して魔法で逃げて来てください」

「それは、ありなの？」

「ありです。だから、人様の随員枠まで使って護衛を増やす貴族もいるのですから」

貴族の生死は自己責任で、自分の主君が死んで他の貴族が生き残った時に、それに公で文句など言えないらしい。
『お前達の護衛の手配が駄目だったからじゃないか』と逆に非難されて終わるそうだ。

「多少増やしても、アーカート神聖帝国側がその気なら全滅は必至だけどな」

敵中に孤立しているので、多少の護衛の差など無意味とも言えた。
それに、今までトラブルなどは一切発生していないそうだ。

「それでも、歴史のある大貴族はプライドがあるので随伴を増やそうとするものです。まあ、お館様とカタリーナ様は必要無いのですが……」

陛下の指名で参加しているし、俺が今まで挙げた功績をアーカート神聖帝国側が知らないはずもない。
本人達が来れば、向こうで勝手に騒いでくれるであろうとローデ

リヒは説明していた。

「そんな。何かが起こるかもというのは万が一だろう？」

「あくまでも万が一ですね。両国とも、一部の勢力を除いては停戦していた方が得ですから」

いつの世でも、戦争で利益を得ようとする人達は存在するそうで、そういう連中を除けば今の停戦状態は好ましい状態のようだ。

ギガントの断裂を超えて占領地を持つと、防衛でコストがかかり過ぎる。

何かあった際に緊急で兵を輸送しないといけないので、常に大型魔導飛行船を動かせるようにしないといけないからだ。

「アーカート神聖帝国としても、ギガントの断裂を超えた南部の領地を失ったのは採算的には都合が良かったのです。ただ、敗戦なので、軍部の一部には感情的な出兵論者が一定数いるみたいですな」

「どうせ、うちの国にもいるんだろう？」

「そういう輩は、どの国もいます。北方に領地を持つ貴族にもいますし、軍中央にも。出兵を王国が判断するほどの勢力ではありませんが……」

いつの世でも、そういう極端な意見を持つ人達など珍しくない。

気にしても仕方があるまいと考えた俺達は、急ぎ出発の準備を始めるのであった。

「おおっ！　スタッドブルクにも劣らない大きさだな」

それから一週間後、俺達は王国政府が準備した大型魔導飛行船の甲板上でアーカート神聖帝国の首都バルデッシュを一望していた。

資料によると、バルデッシュはスタッドブルクよりも広さも人口も少しだけ上であった。

見える建物などはヘルムート王国風の物が大半で差異は少なかったが、一部に地球で言う所のイスラム風の建造物や、インド風、中華風、そして和風に見える建物などもある。

どうやら、アーカート神聖帝国は色々な文化がごっちゃになっているようだ。

「多民族文化なのかな？」

「みたいね。アーカート神聖帝国は、沢山の小国が統合して成立したと本には書いてあるわ」

隣にいたイーナが、『ブライヒレーダー辺境伯バルデッシュ紀行』に書いてある内容を教えてくれる。

「選帝侯の称号を持つ七公爵家からも皇帝が選出されるのは、その名残りみたい」

一応中央にも皇族家が存在しているが、皇族家出身の皇帝が生まれるのは三～四回に一回くらいだそうだ。

あとは、貴族議会に所属する議員による投票で、立候補した選帝侯の中から選ばれる。

一部に選挙制度が存在しているわけだが、これはヘルムート王国ほど中央の力が強くない事の証明でもあった。

「国によって色々と事情があるってか。まあ、俺は自分の領地の事で精一杯だから気にしないけどね」

それからすぐに、大型魔導飛行船はバルデッシュ郊外にある港に到着していた。

船を降りると、アーカート神聖帝国からの出迎えを受ける。

軍楽隊がヘルムート王国の国歌を演奏し、多くの貴族達が次々と歓迎の言葉を述べる。

こういう部分は、地球の国家とあまり変わりはないようだ。

「今回は、魔法使いが強化されているようですね。アームストロング導師殿」

「若い才能が芽吹き始めたというところであろうか。ブラットソン殿」

「竜殺しの英雄殿ですか。お若いですな。おっと失礼。アーレイ・ブラットソンと申します。一応、この国の筆頭魔導師をしております」

俺を含めた魔法使い二十名ほどのグループに、アーカート神聖帝国側の魔法使いが声をかけてくる。

灰色のローブを着た、ロマンスグレーの髪をオールバックにした六十歳くらいの痩せ型の老人で、自分を帝国の筆頭魔導師であると自己紹介していた。

魔力の量は、ブランタークさんよりも少し多いくらいであろうか？
見た感じでは、かなりの実力を持っているように見える。
彼もブランタークさんと同じく、『器用で上手い』魔法使いなのであろう。

「しかし、魔法使いの数が多くないか？」

ブラットソンの視線は、俺と一緒にいる妻達に向いていた。
俺からしたら妻達の魔力が増えたせいで、実は行きの魔道飛行船の中でも一部の魔法使い達が五月蝿かったのだ。

『さあ？　なぜなんでしょうかね？　俺が知りたいくらいですよ。普通に器合わせはしましたけど』

こう言って誤魔化していたが、やはりエリーゼが上級の中、カタリーナが少し前の導師にも迫る魔力量に、ルイーゼですらブランタークさんとほぼ同等に、イーナとヴィルマですら中級にまで魔力の量が増えている。

その謎に魔法使い達は興味津々なようであったが、わざとはぐらかして誤魔化していた。
どうせ強引に検査などできないのだから。

『（絶対に墓場に持って行ってやる）』

なぜなら、随伴の魔法使いの大半が男性である。
俺は彼らの尻など掘りたくもないし、無理にそれをして効果が無かったら道化も良いところである。
それに、教会から異端扱いされるのも問題だ。

この件をそっとホーエンハイム枢機卿に相談したら、『適当にはぐらかしておけ。あと、女には注意するように』とありがたい忠告を貰っていた。

エリーゼの祖父としても、俺が手当たり次第に女性に手を出す、出さざるを得ない状況は好ましくないのであろう。

彼も、『墓場まで持っていく』と断言していた。

「実は、妻達も混ざっていますから。正式な団員ではありませんので」

「そういえば、奥方に『聖女』殿と『暴風』殿がいましたか」

やはり他国とはいえ、有名な魔法使いの情報くらいは事前に調べているようだ。

「魔法使いの方々への出迎えや滞在中のフォローなどは、私が実務責任者になっておりまして」

忙しい文化・技術交流や通商関連の団員達は、専門の役人や貴族達が行なうようだ。

彼らは時間が惜しいらしく、すぐに移動を開始していた。

「我らは、明日の魔法のお披露目以外は暇ですからな。それほど急ぐ必要もありませんし」

「ブラットソンよ。そろそろ妾も紹介してくれぬか」

「これは失礼しました。テレーゼ様」

「妾は魔法は使えぬが、お飾りでも最高責任者なのでな。そなた達の来訪を心より歓迎するぞ」

ブラットソンさんの後ろから姿を見せた女性は、誰が見ても高貴な身分である事がわかる人であった。

喋り方がその物であったし、服装や見た目もそうだ。

身長は百七十センチほどで、多民族国家であるアーカート神聖帝国らしく、ヘルムート王国では見た事が無い褐色の滑らかな肌が特徴の肉感的な美女である。

くすんだ金髪を肩まで伸ばしている彼女は胸はエリーゼに負けておらず、結婚して久しぶりに色欲に塗れた俺からすると、『是非一度お相手願いたい』などと不謹慎な事を考えてしまいそうな魅力的な美女であった。

「妾は、テレーゼ・ジークリット・フォン・フィリップ公爵と申す。一応選帝侯ではあるが、皇帝には興味が無いの」

「女性当主なのですか？」

「然り。我が国では、認められておるからの」

アーカート神聖帝国では、女性の皇帝や貴族家の当主が認められていた。

これは、イーナが持参した『ブライヒレーダー辺境伯バルデッシュ紀行』にも書かれている事実だ。

「そういう文化の違いを楽しんでこその親善訪問であろう？　もしかすると、バウマイスター伯爵殿はそういう風習が許せない口かな？」

「いえ。そういう事は無いですね」

前世で勤めていた商社にも、女性社員など沢山いたのだから。

というか、性別など関係ない。

要は、当主として務まっていれば問題ないのだから。

「簡単な考えとして、魔法使いは魔法が使えればよいわけでして」

「領主は、領地の統治が出来れば良いと？」

「性別や年齢は関係ないでしょう」

「それもそうじゃの。じゃが、それ故に妾はここの担当になったわけじゃが……」

選帝侯の中では女性当主はフィリップ公爵だけらしく、他の男性主体の我が国の団員の担当にすると、予想外の軋轢が起こるかもしれない。

そう考えられて、こちらの担当に回されたそうだ。

「魔法使いは、魔法が使えないと意味が無いですから。そこに、男も女もありません」

「そうじゃの」

魔法使いは、本能的な部分で性差別をする人が少ないと言われている。

ただ、生まれた家柄が高いとそうでもないし、実際に王国で雇われている魔法使いには男性が多い。

今回の親善訪問団の魔法使いの大半は男性であった。

実はもう一つ、女性の方が実利に聡いので、給料や社会的な身分が安定しているだけのお抱えよりも、稼げる冒険者稼業に進む人が多いという理由も存在しているのだが。

女性魔法使いの多くが、結婚するまでなるべく稼いでから、あとは子育てをしながら出来る範囲で仕事をするという選択肢を取る事が多かった。

「ここで話ばかりをしていても時間の無駄じゃの。宿舎に案内するから、暫く休んでから昼食会に招待したいと思う」

彼女の案内でバルデッシュの中央部にある皇宮近くの迎賓館へと馬車で移動するのだが、なぜか彼女は俺達と同じ馬車に乗り込んでいた。

「あの……。導師やブランタークさんの馬車でなくて問題ないのですか？」

「年寄り連中は、詮無い腹の探り合いや募る思い出話もあろうからの。若い者は、若い者同士の方がよかろうて」

「（ぶっちゃけてるなぁ……）」

フィリップ公爵のあまりの言いように、ルイーゼがボソっと本音を漏らしていた。

「あの二人は、前回も参加していたからの。ブラットソンは前回も筆頭魔導師であったし、色々とあるのであろう。そこに、まだ若い

妾が入るのもなんじゃしの」

「（まだ若いか……）」

女性に年を聞くのはどうかと思うので聞かないが、彼女は幾つくらいなのであろうか？

二十歳くらいに見えるのだが、それだと前回の親善訪問団の様子を知っているのはおかしいという事になってしまう。

「妾も、当時はわずか十歳でフィリップ公爵家を継いだばかりでの。子供なので飾りではあったが、前回もこの役目を果たしておる」

父親の急死で、一人娘であった彼女がフィリップ公爵家を継いだばかりの頃であったそうだ。

「そうですか」

「でなければ、いくら女性当主が認められているとはいえそう簡単には公爵にはなれぬよ」

結局のところ、アーカート神聖帝国でも男性の相続が優先されるそうだ。

女性の相続が認められるのは、養子や婿入りした者に任せると血が薄れるという考え方に基づくからしい。

他にも幾つか家によっては特例があるそうだが、その辺の詳しい事情はテレーゼ様は語らなかった。

俺も、初対面の人に聞くのはどうかと思って聞かないでおく。

「しかし、あの導師は相変わらずじゃの」

「まあ、ああいう人なので……」

この話題に関しては、全員の気持ちが初めて一致していた。

「十年前と、まるで変わっておらぬ」

しかも、見た目もあまり変わっていないそうだ。

昔から筋肉達磨で、ヤクザも逃げ出すような容姿をしていたのだろうと予想できる。

「そろそろ到着じゃの」

馬車が迎賓館に到着し、出迎えの使用人や執事達によってそれぞれの部屋に案内される。

俺は伯爵であったので、かなり広くて豪勢な部屋に案内されていた。

ただ一つ気になる事は、全員隣同士ではあるがエリーゼ達にも個室が与えられた点である。

「夫婦なら同室じゃないのかな？」

「そこは、歓迎の表れだと思ってくれて構わないぞえ」

部屋に荷物を置いて暫く休んでいると、フィリップ公爵自身が昼食会が始まると言って迎えに来ていた。

「それは光栄ですが、フィリップ公爵様じきじきに？」

「妾は、そなたに興味があっての。多少嫁き遅れではあるが、そう邪険にしないで相手をしてくれると嬉しいかの」

「いえ……。フィリップ公爵様は、お美しいではないですか」

「そう言ってくれると嬉しいの。では、参るとするか」

「えっ！」

そう言うや否や、突然彼女は俺の手を引いて食堂へと移動し始める。

当然、普通の公爵がするような行動ではないので、エリーゼ達も絶句していた。

「そうそう。妾の事は、テレーゼと呼ぶがよい」

「それはさすがに……」

「構わぬ。選帝侯で、皇帝陛下に継ぐ力を持つ妾の願いである。表だって非難をする人間などこの国にはおらぬ。陰口などは気にするに値せぬの」

普段はその身分に比べると気さくである彼女が、こういう時に限って選帝侯の身分を口にして名前で呼ぶ事を強要する。

間違いなく、俺など比べ物にならないほど貴族や皇族としては有能な人物のはずだ。

「わかりました。テレーゼ様」

「別に様もいらぬがの。まあ、周囲の目もあるが故に仕方が無いかの」

どうやら俺は、この女性公爵様に物凄く気に入られているらしい。
昼食会での席順も、主催者で所謂お誕生日席に座っているテレーゼ様の隣の席であった。
反対側の隣には導師が座り、その隣はブランタークさんのようだ。

「（いいの？　この席で、俺はいいの？）」

「（おかしくはないです。ヴェンデリン様の序列を考えますと）」

テレーゼ様とは反対側の隣の席に座るエリーゼが、そっと俺に教えてくれる。
魔法使いの中では、伯爵である俺は導師に次ぐ身分を持っている。
なので、導師と同じくテレーゼ様の隣でも何の問題もない。
導師は子爵なのだが、こういう席では王宮筆頭魔導師の身分は公爵にも匹敵するそうだ。

「（私も、教会では有数の治癒魔法使いという扱いですから）」

それもあって、正式なメンバーではないのに俺の隣なわけだ。
続けてカタリーナが座っているのも、彼女が名誉付きとはいえ爵位持ちであるからであった。

「それでは、乾杯するとしようかの。両国の永遠の友好を願って。乾杯」

「乾杯！」

テレーゼ様の指揮で乾杯が取られ、あとは話をしながらの食事の時間となっていた。
メニューは魚を使った料理のフルコースで、これは海の幸が豊富

な北方の料理であったはずだ。

「妾のフィリップ公爵領は、北方に存在しておる。故に、北の海の魚を使った料理が有名じゃの」

魚を食べ慣れているだけあって輸送や処理も完璧であり、全く生臭くなくて美味しかった。

「気に入って貰えたかな？　バウマイスター伯爵」

「はい。私は、魚も好きですから」

わざわざ高い金を払って輸入しているくらいなのだから、そこは元日本人の業という他はなかった。

「それは良かった。しかし、導師は変わらぬのぉ」

「某はまだ未熟な身故に、年など取っておれませんからな」

普段はアレであったが、さすがは法衣子爵家の当主。
完璧なテーブルマナーで料理を食べながら、テレーゼ様と話をしていた。

「テレーゼ様は、お美しくなられましたな」

「ブランタークは、よもや妾を口説くつもりかえ？　新婚の身で相変わらずよのぉ」

「いえいえ。そんな大それた事は」

「ブランタークが結婚するという驚愕の変化に比べれば、妾の成長など自然の摂理であろうよ」

「テレーゼ様は相変わらずですな」

十年ぶりだと言うのに、この三人はかなり親しく話をしている。

何か思い出深い出来事でもあったのであろうか？

「十年前は、妾も子供での。公式歓迎行事以外は暇なので、この二人に遊んで貰ったのじゃよ」

二人が護衛役を務めて、普段テレーゼ様が行けないような観光地などに連れて行って貰ったそうだ。

「随分と無茶をしましたね」

「言っておくが、俺は最初は止めたんだからな」

「何となく想像はつきます」

こういう遊びでノリノリになるのは、間違いなく導師の方であろう。

ブランタークさんは止め切れないので、ならばせめて安全を確保しようと護衛に付いたのが真相だと思う。

「おかげで、妾は安全に遊びに出かけられたというわけじゃ。本当に、魔法使い様々じゃの。ところで、一つ尋ねてもいいかの？」

「何でしょうか？」

「この中で一番魔法に詳しいであろうブランタークに聞くのじゃが。前に不思議な出来事があっての……」

それは、テレーゼ様がいつものように領内の視察に出かけた時の事であったという。

「ここ数年、北方の海の幸が全国で大人気での」

鮮度を保つ保存方法の普及に、輸送効率のアップもあって、バルデッシュも含めて取引量が増えているそうだ。

「輸出も好調での。じゃが、ただ獲ってばかりいれば漁獲量が減ってしまう」

獲って良い魚の大きさの制限や、禁漁期間の設定、魚礁の設置や簡単な養殖技術の開発に、密漁者の摘発など。

力を入れて行なっているので、現場の視察を良く行なっているそうだ。

「あれは、船に乗って沿岸の漁場の視察を行なっている時であった」

突然、テレーゼ様の下着が忽然と姿を消してしまったそうだ。

「（ヤバい……）」

「妾が脱いだのを忘れたのなら問題ないのじゃが、生憎と、妾はまだボケが始まる年でもないからの」

「不思議な事もあったものですね……」

完全に、あの魔導ギルドが試作した召喚魔法陣で呼び出された謎の下着の件であった。

確か、ベッケンバウアー氏もその下着が特注された高級品で、付いていた家紋がフィリップ公爵家の物だと証言していたはずだ。

「……」

ブランタークさんの方に視線を送ると、彼は一瞬だけ『やっぱり』という風な表情を浮かべ、すぐに慌てて元に戻していた。

ところが、他の随員には魔導ギルドの所属者も存在している。

ブランタークさんほど場慣れしていない彼らは、その件を思い出して表情を目まぐるしく変えていた。

「（動揺するな！　バレるだろうが！）」

まさか彼らに文句を言うわけにもいかず、俺は自身の平静さを保つのに必死であった。

「まさか船の上で換えの下着も持っておらぬでの。帰りはスースーして堪らなかったわ。どう思う？　ブランターク」

「何か転移か召喚系の魔法ですかね？」

『全く知りません』と言うと疑問を持たれる可能性があるので、ブランタークさんは本当の答えをわざとボカして答えていた。

「やっぱりの。ブラットソンもそう言っておったわ。しかし、不思議な事もあるものじゃの」

「本当に不思議ですね」

「そうだな。伯爵様の言う通りだ」

俺とブランタークさんでわざとらしい会話を交わす。

何とかこれ以上は追求されないままに昼食会は終了したが、あの動揺した魔導ギルド職員達のせいでバレてしまったかもしれない。

そう思うと、これからどうなるのか不安を感じてしまうのだ。

「あの時の下着ねぇ……」

部屋に戻ると、そこには端の席で話を聞いていた事情を知るイーナとルイーゼが待っていた。

前に俺の召喚魔法のせいで、ウサギ刺繍のバックプリントパンツを履いていたのがバレたイーナが苦い表情を浮かべていたのだ。

「ちなみに、コレです」

「ヴェル。実際に出さなくてもいいから」

同じく、無い乳なのに黒いアダルティーなブラジャーをしているのがバレたルイーゼが、魔法の袋から下着を取り出した俺を非難する。

「伯爵様。その危険なブツは仕舞え」

「了解」

ブランタークさんの命令で再び魔法の袋に紫の下着を仕舞ってか

ら、四人で顔を近づけて密談を始める。
もしこれから、テレーゼ様による追求があったらどうするかを決めるために。

「とにかくだ。シラを切り通すしかない。証拠の下着とて、取り出せるのは伯爵様のみ。帰るまでに見付からなければ問題ないのだから」

「ブランタークさん。あの時点で気が付かなかったんですか？」

「あのようぉ。いくらフィリップ公爵家の家紋入りとはいえ、あの家に女性が何人いると思っているんだよ」

「それもそうか……」

物凄い年寄りでも貴族だとああいう下着を着けたりするので、実はテレーゼ様の物で良かったと、俺は無意味な安堵感に襲われていた。

「というか、俺の記憶の中のテレーゼ様は子供だったんだ。あんな下着を見てもイメージが湧かない」

「確かに……」

十歳の子供が紫色の下着はどうかと思う。
テレーゼ様とていつまでも子供ではないので、その辺はブランタークさんの想像力の欠如であろうが。

「魔導ギルドのバカ達のせいで怪しまれているが、どうせ証拠なんてないんだ。シラを切るぞ」

「真面目に密談しているけど、内容はしょうもないなぁ……」

「ルイーゼの嬢ちゃんよ。そんな事はみんなわかっているって」

あまり長いと怪しまれる可能性もあるので、密談はこれで終わりとする。

魔法のお披露目は明日の午前であり、皇宮主宰の歓迎晩餐会も明日の予定で、今日は寝るまで自由な時間になっていた。

そこで、エリーゼ達を連れてバルデッシュ観光に洒落こもうと決めていたのだ。

「何を集まって話されていましたの？」

「ちょっとした観光スポットの話」

カタリーナには悪かったが、秘密は知る人が少ないほど漏れ難い。

そこで、魔導ギルドでの事件を知る四人だけの秘密にしていたのだ。

「観光に行こうぜ」

「そうですわね。楽しみですわ」

「ヴェル様。お腹が空いた」

「ヴィルマさん。先ほどあれだけ召し上がったじゃないですか」

「魔力量が上がったら、少し食べる量が増えた。食べないとすぐに

痩せてしまうから」

「羨ましいですわね……」

増えた魔力の行使により、ヴィルマは前よりもカロリーを必要とする体質になってしまったようだ。

その代わりに、地上戦闘ではルイーゼにも対抗可能な戦闘能力を保持するようになっていたが。

「カタリーナは、別に太っていないだろう？」

「そのわずかな油断が、あとで必ず後悔を生むのです」

カタリーナは常にそう言ってプチダイエットに励んでいるのだが、あまり効果があるようには見えなかった。

多分、間食でチョコばかり摘んでいるからであろう。

「魔力を使うとカロリーを使うじゃないか」

一部の例外を除き、魔法使いに太った人がいない原因であった。

「もう少しクビレがですね」

「そうか？」

「ヴェンデリンさん！」

実際にカタリーナのウエストを両手で触るが、俺には十分に細いように見える。

いきなりウエストを触られたカタリーナは、驚きと抗議の混じっ

た声をあげていた。

「いいじゃん。俺が触りたかったからだし」

「別に触るのは構いませんが、事前に相談をですね……」

あと、やはり咄嗟のこういう行為には弱いようであった。

「ヴェンデリン様。いきなりではカタリーナさんも驚いてしまいますよ。それよりも早く出かけましょう」

「それもそうだな。さてと。どこから行こうかな？」

珍しく積極的にエリーゼが俺の手を引き、迎賓館を出て町中へと移動していく。

どうやら、先ほどのテレーゼ様の積極的な行動に少しヤキモチを焼いたらしい。

「まずは、この近くで評判のジェラート屋に行こうか」

「はい」

二人で手を繋ぎながら本に記載されていた店へと向かうのだが、突然二人の人物によって進路を塞がれてしまう。

改めて見ると、それは導師と商家の娘が着るようなワンピース姿のテレーゼ様であった。

「伯父様？」

「テレーゼ様が、久しぶりの町での散策を希望なされておってな…

…」

導師は普段と違って言葉が弱々しく、その視線も泳いでいるようだ。

姪の新婚旅行を邪魔したくはないのだが、テレーゼ様の願いを断る事も出来ない。

導師なら余裕で断りそうな気もするが、若い頃は陛下のお忍びに同行するのが常であった彼からすると、同じレベルで普段は籠の鳥であるテレーゼ様の願いを断れないのであろう。

導師は見た目に反して、実は女子供には優しかったりするのだ。

「（まだ時間は一杯あるから）」

「（わかりました）」

どうせ遊びの時間の方が長い親善訪問団の旅なので、今日くらいは仕方がないとエリーゼを説得して、二人も観光に同行する事になった。

「新婚なのにすまぬの。妾はこういう時でもないと、自由に町に遊びに出る事など叶わぬからの」

テレーゼ様がすまなそうに言うが、言われた側のエリーゼは沸き上がる怒りで顔を半分引き攣らせていた。

なぜなら、テレーゼ様が反対側の空いている俺の手に腕を絡ませていたからだ。

「（この公爵様。なんで俺に興味津々なの？）」

俺の腕にテレーゼ様の豊満な胸の感触が伝わって嬉しいのと、反対側のエリーゼも対抗して腕を組んできたので同じく豊満な胸の感触が嬉しかったりするが、同時に二人の視線が激しく激突して火花を散らしていたので逃げ出したい気分になってくる。

「さあ。参りましょうか？　ヴェンデリン様」

「夫婦なのに、他人行儀な呼び方よのう。そうは思わぬか？　ヴェンデリンよ」

「（えーーーっ！）」

なぜか、テレーゼ様の俺への呼び方が『バウマイスター伯爵』から『ヴェンデリン』へと変化していた。

突然の事態に俺はうろたえるばかりであったが、エリーゼの方も反撃の狼煙をあげていた。

「テレーゼ様。格下の伯爵とはいえ、他国の貴族を軽々しく名前などで呼ぶべきではないと思います。そうは思いませんか？　あなた」

この瞬間から、エリーゼは俺を『あなた』と呼ぶ事にしたようだ。

俺に決定権などはないらしいが、前の堅苦しい『ヴェンデリン様』よりは良いと思う。

「では、参るとするか」

「（導師！　この責任の一端は導師にも！）」

「（すまん！　今日だけ、我慢して欲しい！）」

俺は、導師の懇願に根負けしてしまう。
こうして始まったバルデッシュ観光であったが、グループは既に二つに割れていた。
俺と腕を組んでいるテレーゼ様とエリーゼと、そのフォローに入る導師に。

あとは……。

「イーナちゃん。このオレンジのジェラートは美味しいよ」

「キャラメルのも美味しい」

「もう一つ欲しい」

「食べても太らないなんて羨ましいですわ」

「ジェラートか。魔法の袋に入れれば嫁さんの土産に出来るかな？」

「ブランタークさん。もう尻に敷かれているんですか？」

「結婚もしてないエルの坊主には言われたくねえ」

「俺には運命に人が現れるんですよ。綺麗なお姉さん。俺にはリンゴ味のジェラートを」

巻き込まれるのはゴメンだと感じた他の四人の妻達と、エルとブランタークさんは俺達を視界から外して、ただの観光に切り替えていた。

その素晴らしいまでの切り捨て能力は、さすがは一流の冒険者というわけだ。

「ヴェンデリン。妾のイチゴ味のも美味しいぞ。食べるか？　ほれ、あーーーん」

「あなた。メロン味も美味しいですよ。はい。あーーーんして」

俺は双方から、ジェラートを食べさせて貰っていた。
いや、この場合は食べさせられていたであろうか？

「バニラを十個」

「十個ですか？」

「うむ。ジェラートは、オーソドックスなのが一番美味しいのである」

そして導師は、次第に加熱する二人の争いから現実逃避するかのように大量のジェラートを購入して食べていた。

観光は続き、ケルン大聖堂やポトマック運河などの見物をするが、やはり二人は俺の腕を組んだままで激しく火花を散らしている。

エリーゼは、最近増えた魔力が体内で激しく蠢いている。
攻撃魔法が使えないのでテレーゼ様に何かするはずはないが、感情が高ぶっている証拠であった。

「（こんなエリーゼは初めてだな）」

もう一方のテレーゼ様も、エリーゼに対抗して形容し難いオーラで対応している。
もしかすると、名前の最後に『ゼ』が付く人は情熱的な人が多いのかもしれない。

皇帝になるかもしれない家の娘なので、下々を従えるオーラが半端ではないのだ。
王者の品格というか、元が庶民の俺では到底纏えない雰囲気であった。

「そうそう。買い物に行こうではないか」

「買い物ですか？」

「左様じゃ。行きつけのランジェリーショップが近くにあっての。いきなり消えた下着もあって、少し数が心許無くての」

「そうですか……」

どうやらテレーゼ様は、俺に疑いを持っているらしい。
下着を買いに行くのに付き合えとは、露骨な探りとも言える。

「（あくまでも冷静に……）エリーゼも何か買う？」

「そうですね。何か良い物があれば」

未婚で恋人関係でもないテレーゼ様の下着を買いに行くのは厳しいが、妻の下着を選びに行くのはセーフである。
俺は、動揺を隠しながらテレーゼ様行きつけのランジェリーショップへと向かう。

高級なお店が立ち並ぶ一角にあるランジェリーショップは、大物貴族・皇族御用達らしく豪華な造りになっていた。

「いらっしゃいませ」

「今日は、お忍びじゃ」

出迎えたオーナーらしき人物にテレーゼ様が告げると、店内から人の気配が消える。

恐ろしいまでに店員の教育が行き届いているようだ。

「さて。どれが良いかの……」

と言いながら、テレーゼ様が見せた下着は紫色であった。

前に俺が召喚した下着に良く似ているので、俺の反応を伺っているのかもしれない。

「似合うと思いますよ」

俺は、努めて冷静に返事をする。

ここで下手に動揺すれば、テレーゼ様に確信を持たせるだけだ。

「あなた。試着するので見ていただけますか？」

「奥方殿よ。妾が先に聞いているのじゃが……」

「テレーゼ様はまだ未婚。婚約者でも夫でもない男性に肌を曝してはいけません」

間違いではないのだが、明らかにテレーゼ様を挑発しているようにも見える。

二人の間に火花が飛び散り、俺が助けを求めて周囲を見回すと、エルとブランタークさんは店の外で無難に護衛役に徹していた。

「（確かに、男性がランジェリーショップには入り難いけどさ！）そういえば、導師は？」

導師に至っては、いつの間にか姿を消していた。

自己防衛本能が働いて、ランジェリーショップに入る前に逃走したのであろう。

「（導師。この人を連れて来たのはあんたでしょうが……）なあ……」

最後に、一縷の望みを託してイーナ達に視線を送ったのだが……。

「イーナちゃん。もっとセクシーなのにしたら？」

「ルイーゼこそ、何でそんなに黒とか好きなの？」

「だって、お色気を加算しておかないと。ヴィルマは、シンプル過ぎない？」

「動きが阻害されないのがいい。でも、最近胸がキツイ」

「ヴィルマは成長しているからだよ。ボクとは違って。うん……。こんな予感はしてた……」

「カタリーナは、こういうのが良いと思うわ」

「イーナさん。赤はさすがに……」

「そうかしら？　似合うと思うわよ」

「貴族たる者、貞淑さも必要ですわ」

「ヴェル以外見ないじゃないの」

「だからですわ」

「良くわからないけど、拘るわねぇ……」

こちらを無視して、四人で下着談義に花を咲かせていた。

普段はエリーゼにベッタリのヴィルマですらそうなのだから、今の彼女に近付くのは危険だと本能で察知しているのであろう。

「ヴェンデリンよ。これは、どうかな？」

「あなた。今度はこれを試着しますね」

結局、ランジェリーショップを出てからも二人の鞘当ては続き、初の海外旅行初日は散々な結果に終わるのであった。

「酷いですよ。二人とも」

夕食後に導師とブランタークさんに苦情を言うが、二人は『すまん』とは言いつつも上手くはぐらかしていた。

「テレーゼ様は、普段は選帝侯として苦労しておるが故に」

十年前に遊んであげた可愛い少女に保護欲でもあるのか？

二人は、テレーゼ様に甘いような気がするのだ。

「十年前は可愛い少女でも、今は女で露骨に誘惑されている節がありますが……」

「さすがに、あり得ないだろう。テレーゼ様は、からかっているだけだと思うぜ」

血統の保持のために公爵家当主に就任した彼女に、普通の恋愛など許されない。

子供を産むために婿を入れる必要があるのだが、その選定作業は膨大な手間と時間がかかるそうだ。

「下手な婿を入れると、旦那の実家絡みで混乱するからな。だから二十歳でも独身なんだよ」

外戚の専横の可能性というやつであろう。

そのせいで些か不自由な思いをしているから、少しくらいは大目に見てやれとブランタークさんは言う。

「それ、エリーゼにも言えます？」

「努力する」

努力するという事は、努力した結果駄目でも仕方が無いとも取れる。

溜息をつきながら自分の部屋に戻るが、今日は初日で疲れているからエリーゼ達とのそういう事は無しという風に決めていた。
それに、ここがよそ様の家という事情もある。
気にしないで奥さんや愛人と楽しんでいる親善訪問団員も多いそうだが、俺は根が小市民なので翌日ベッドメーキングをするメイドの事などを考えて遠慮していたのだ。

家に戻ればいつでも出来るのだからという考えもあった。

「（明日から、テレーゼ様は自重するのかな？）はい」

などと考えていると、部屋のドアがノックされる。
返事をするとドアが開き、すぐに誰かが部屋の中に入り込んできた。

「ヴェンデリンよ。酒でも飲もうではないか」

「（出たぁーーー！）」

部屋に入って来たのは、やはり自重していなかったテレーゼ様であった。
白い絹製のナイトガウンを纏った彼女は、酒瓶を手に部屋のベッドの上に座る。
風呂上りのようで、ナイトガウンの襟から見える褐色の肌が色っぽい。

「（誘惑されているのかも……）テレーゼ様。嫁入り前の女性が、あまり感心できる行動ではありませんよ」

「世間的に言えばそうなのであろうが、今この迎賓館はフィリップ

公爵家の支配下にある。余計な噂を流す輩はいないので安心せい」

「はあ……（そういう問題じゃないし！）」

とは思っても、相手は選帝侯で公爵様なので何も言えない。

どうにか上手く切り抜ける必要があった。

「我がフィリップ公爵領特産のアクアビットじゃ。毒など入っておらぬから安心して飲むが良い」

「いただきます」

フィリップ公爵領は、アーカート神聖帝国の最北端にある帝国直轄領に次ぐ広さを持つ領地で、主な産業は麦とジャガイモと魚貝類、鉱山なども多く金属加工業も盛んだそうだ。

勿論この知識は、『ブライヒレーダー辺境伯バルデッシュ紀行』から得た物であったが。

地球で言うと、ドイツ北部や北海道に似ているのかもしれない。

実際に、ジャガイモで作る焼酎アクアビットが存在しているのだから。

「成人したばかりなのに、普通に飲めるようじゃの」

「それなりにですね」

部屋に置いてあるグラスに水を注ぎ、魔法でお湯にしてからアクアビットを適量注いで飲む。

味は、商社員時代に試飲した輸入サンプルや、国内でもジャガイ

モ焼酎は存在するのでその味と良く似ている。

「スッキリとした味わいで美味しいですね」

「最近では、輸出もしておるぞ」

何とか貴族らしい話題に転換できたが、それもいつまで続くかわからない。

ここは、気を引き締めなければいけないところだ。

「しかし、魔法とは凄いのぉ」

俺が作ったお湯割りのジャガイモ焼酎を飲みながら、テレーゼ様は感心していた。

部屋には水しかなかったので魔法で暖めてお湯にしたのだが、俺はそれほど凄いとは思わない。

このくらいなら、フィリップ公爵家で雇っている魔法使いなら誰にでも出来るであろう。

「確かに、我が家のお抱え魔法使いならば誰でも出来る。じゃが、みんなお湯を沸騰させてしまうのじゃ」

焼酎をお湯割りで飲む時に、一番してはいけないのが沸騰したお湯を注ぐ事だ。

適温は七十五度とか言われていて、水をお湯にする時には微調整をして温度を調節していた。

このくらいのコントロールが出来ないと、ブランタークさんから怒られてしまうのだから当然だ。

「次に、先にお湯をグラスに注いだの」

これも、商社員時代に焼酎の蔵元を尋ねた時にそこの人から口を酸っぱくするほど言われた事だ。

大した違いには見えないが、これだけでも味と香りが全く違ってしまうのだから不思議だ。

「細かいようじゃが、意外とそれを知っている者はおらぬぞ」

「ブランタークさんから教わったんですよ」

勿論嘘だが、まさか前世で教わったとも言えないのでそれで誤魔化す事にする。

「あの男は酒好きじゃが、飲めれば良いみたいな部分もあっての。十年前はお湯の方を後に注いでいたが、進歩を遂げたというわけじゃの」

「（まずい……）」

生まれながらにしての大貴族とは、こうも油断ならない存在らしい。

十歳の頃の、ブランタークさんの細かな行動を覚えているのだから。

「ヴェンデリンは、ただ魔法だけの男というわけでもないようじゃの」

「いやあ。魔法だけですから」

「その割には、領地は順調に開発が進んでいるようじゃが」

「家臣が優れているからです」

「それも含めてそなたの功績じゃ。それが貴族という物でな。結果が全てとも言う」

本人が大バカでも、任せている家臣が上手くやれば評価される。その代わりに、家臣がバカな事をすれば自分が優秀でも一緒に非難される事もある。

それが貴族という生き物だと、テレーゼ様は語っていた。

「とは申せ。ヴェンデリンは、全て己の力で貴族にまでなったのじゃ。生まれた頃から将来が決まっていた妾とは違う。妾はただ小賢しいだけにしか過ぎぬ」

「テレーゼ様」

「妾は一人娘だと言われておるが、実は妾腹ながら兄達がいたのを知っておるか？」

「いえ。初めて聞きました」

「なのに妾が選ばれたのは、この肌の色のせいじゃからの」

フィリップ公爵家の起こりは、北方の異民族国家を中央から派遣されたフィリップ伯爵率いる軍勢が討伐した事から始まるのだそうだ。

「北方の主要な民族であるラン族は、妾のように肌が褐色なのが特徴でな」

征服者であるフィリップ家が、地元の有力者から婿や妻を受け入れながら、千年以上もかけて同化を進めて今がある。

だからこそ、後継者の条件に肌の色という物も存在しているのだと。

「兄達は母親が中央の貴族の出での。妾とは違って肌の色が白い。兄達では、領地に視察に出ても領民達から無視されるであろう」

だから、テレーゼ様がフィリップ公爵となった。

その子供が跡を継げるのかは、その子の肌の色も関係する。

継げなかった兄達の妻は地元有力者の娘で、子供達も肌が黒い。

もしかすると、その子達の誰かが次期フィリップ公爵になるかもしれないのだと説明する。

「肌の色だけで選ばれた妾からすれば、次が誰でも別に構わないのじゃ。選帝侯にして公爵など、言うほど素晴らしい物でもないからの」

「それはわかります」

生活の苦労もない癖に贅沢だと言われるかもしれないが、それほど素晴らしい物でないのも確かであった。

「妾の婿選びも難航しておってな。主に兄達の妨害じゃが」

テレーゼ様が地元の有力者から婿を取ると、子供の肌の色は間違いなく褐色である。

次は自分の子供をと考えている兄達が、色々と妨害しているのだそうだ。

「妾も結婚して子供くらいは産みたいのでの。別に地元の者でなくても構わぬわ」

加えて、自分の子供にこんな苦労を背負わせたくないのだそうだ。

「ええと。大変なのですね」

「ああ。大変じゃ」

二杯目のお湯割を飲み干しながら、若干顔を火照らせたテレーゼ様が話を続ける。

状況はいつの間にか、年上の女上司の愚痴を聞く年下の男性の部下という感じになっていた。

「それで、今回の歓待役のついでに婿探しをさせているのじゃが、碌なのがおらぬ」

フィリップ公爵家の権力と金目当ての、ひ弱な貴族のボンボンばかりであるとテレーゼ様は溜息をつきながら愚痴を溢す。

「政略結婚なので、ある程度は仕方が無いのでは？」

「それなりに妥協できる者すらおらんのじゃ。見付けても条件が合わぬとか、先約がいたりとかな。こうなると、もうあの手しかないの」

「あの手ですか？」

「結婚せずに子を産むのじゃ」

実は、アーカート神聖帝国の女性貴族当主にはよくある手なのだそうだ。

父親の名と存在を隠すか、子種だけ貰って子供を生む。

なぜそうするのかと言えば、やはり外戚の専横を防ぐのが目的らしい。

「（子種だけ提供して殺された奴がいそうな……）」

ゾっとする話ではあるが、俺には関係ないので気にしない事にする。

伯爵である俺が、無理に種馬などする必要はないのだから。

「子種だけ提供して殺される者もかなりおるの。父親不明で、ただ女領主の子供という扱いにするのだから、当たり前と言えば当たり前じゃ」

「（怖っ！）」

だが、それなら俺は関係ないという安堵の気持ちも浮かんでくる。

「あとは、優れた男に秘密と引き換えに金銭やそれなりの地位などを条件に子種の提供を頼む事もあるの」

「えっ」

まさかと思うのと同時に、テレーゼ様が目を潤ませながら俺の肩

に手を回していた。

「魔法の才能は遺伝しないとはいえ、貧乏騎士の八男から成り上がった度胸のあるそなたの子種ならば、妾の子の父親に相応しいと思うての。許可するので、妾に欲情したならば遠慮なく種付けをする権利を与えるぞえ。妾はこういう家の娘なので処女で病気の心配などない。いつでも好きに抱くが良い」

「……」

わずか二十歳の娘とは思えない発言に、俺はその場で絶句してしまう。

「その子を盾に、バウマイスター伯爵家の相続権なども要求せぬ。そなたの正妻殿はなかなかにおっかないが、上手く間男を演じてくれよ。さてと、今日は帰るとするかの。いきなり抱かれるのも良いと思うが、こういう事は徐々に進めた方が男は燃えると聞いておる。まあ、あまり時間は無いのじゃが」

三杯目のお湯割を飲み干したテレーゼ様は、静かに部屋を出て行く。

そして残された俺は、この国から帰るまでの苦労を想像し、酒の影響もありそのまま気絶するように就寝するのであった。

第七十九話　フィリップ公爵家の女当主。

「我が必殺の！　バースト・ライジング！」

「おおっ！」

「相変わらず凄いな」

親善訪問団と一員としてアーカート神聖帝国に到着した翌日、今日は両国の魔法使い達による魔法の披露会が行なわれていた。

皇宮傍にある、武芸大会などが行なわれるコロシアムには多数の観客がつめかけ、主賓には皇帝陛下の姿もある。

ここで順番に、自分が得意な魔法を順番に披露していくのだ。

普段はなかなか見られない攻撃魔法を見るチャンスだと平民達にも人気があり、チケットの入手は困難を極めるらしい。

中にはこれを、『手品ショーの延長』だと揶揄する人もいたが。

民間では、初級の魔法使い達による演芸扱いの魔法ショーは存在しているが、親善訪問団来訪の時には普段は見られない両国の高名な魔法使い達の魔法が見られるとあって人気がある。

まずは中級レベルの者から、見た目が派手な攻撃魔法が設置された標的や巨岩などに炸裂する。

決闘方式ではないのは、万が一にも貴重な魔法使いを死傷させないためであった。

魔法の披露が進み、今は導師がクルトに使った火柱の魔法で全高

十メートルほどの岩を全てマグマ状に溶かしていた。

観客はその威力に、大きな歓声と拍手をあげている。

「導師からすれば、欠伸が出るような実技だろうな」

導師が本気で自分の実力を見せれば、周囲に大きな被害が出てしまう。

そこで、二十メートルほどの火柱をあげてそれでお茶を濁していたのだ。

そしてその光景を、俺も貴賓席に座って見学していた。

「あの男なら、万の軍勢でも余裕で蹴散らすであろうからの」

「でしょうね」

「軍事の常識を根本からひっくり返す男じゃからの。それは、ヴェンデリンも同じであるか？」

「……」

その貴賓席の隣の席には、あのお騒がせ肉感美女であるテレーゼ様が座っていた。

俺はなぜか彼女に気に入られてしまい、好きに抱いても良いという権利までいただいている。

正妻なので俺の反対側の席に座っているエリーゼは、彼女に大きな危機感を抱いているようだ。

種付けの許可を貰った件についてはまだ話していないが、言えば余計にエリーゼがヤキモチを焼くので、今は秘密にするのと同時に、どうやってこの期間を無難に過ごすかで俺の心の中は一杯であった。

「（テレーゼ様と子供なんて作ったら、また面倒な事ばかり増える）」

俺は五人の美しい妻を持つ成功者のはずなのに、なぜか心が優れない。

しかも面倒な事に、前のカルラとは違ってテレーゼ様が俺の男心をくすぐる抱きたくなる女だから性質が悪い。

誘惑されないように近付きたくないのだが、彼女は俺達魔法使いの世話役になっている。

彼女が俺の傍にいても、何ら不思議はない。

というか、それが彼女の仕事なのだ。

「皇帝陛下もお喜びのようですね」

話が種付けの件にいかないように、俺は導師の魔法に拍手をしている皇帝陛下の事を聞いてみる。

事前に得た情報では、彼の名はウィルヘルム十四世であり今年で七十八歳、在位三十八年になるおじいさんであった。

「陛下はメッテルニヒ公爵家の出でな。貴族会議の投票で三十八年前に即位された」

この国の皇帝は、中央の皇家と七家の選帝侯に任じられている公爵家の当主から立候補した者達から、貴族議会の議員による投票で選ばれる。

こういうシステムになっているのは、多くの他民族国家を内包しているが故の苦肉の策でもあるようだ。
中央の皇家と公爵家で皇位を流動させて、なるべく権力を平等にという事らしい。

些か不安定にも見えるが、昔から統一が早かったアーカート神聖帝国の方が南部のヘルムート王国を圧倒していたので、さほど問題になっていない。
後にギガントの断裂よりも南部の領域を失うが、停戦によってヘルムート王国は北上をしなかった。

共に魔物の領域の開放や未開地の開発に労力を割き、今ではあまり国力に差が無く戦争をするにもリスクが大きい状態になったからで、今の平和は両国の均衡によって支えられているというわけだ。

「御歳なので、そろそろご引退も考えておられるそうじゃ」

もう一つ、ヘルムート王国の王位は死ぬまで放棄できないが、皇帝は病気や老齢による引退が認められている。
辞めても次の皇帝は選挙で決めれば良いのだし、その方が他の候補者達にも都合が良いからだ。

なお、引退した皇帝は上皇と呼ばれて年金を貰って余生を送る。
名誉はあるが、何の実権もない存在になるそうだ。

「そんな噂もあるので、他の公爵共は通商協定の改定や、技術交流などの世話役で忙しいようじゃ」

次の皇帝になるつもりなので、半分お遊びの魔法使いの実技披露会は女性であるテレーゼ様や年寄りの陛下に任せて、自分達は実利

のある交易技術促進の方に集中しているのであろう。
露骨な功績稼ぎともいえ、良くわかる話ではある。

「テレーゼ様は、ご出馬なされないのですか？」

「前の陛下は、我が曽祖父での。あまりうちの出身者ばかりが皇帝になるのも問題なのじゃ」

あまり一つの家ばかり皇帝が出ても問題になるので、立候補の段階で多少の談合も行なわれるそうだ。

「それよりも、次はヴェンデリンの番ぞえ」

「みたいですね」

伯爵様なので貴賓席にはいるのだが、魔法も披露しないといけないわけで、俺は急ぎ杖を持って競技場の中に移動する。
杖は別にいらないのだが、見世物なので杖を振るうアクションも必要というわけだ。

「あなた。頑張ってくださいね」

「あまり派手なのは出せないけどな」

妻らしく振舞ってテレーゼ様を牽制しているエリーゼから声援を受けつつ、俺は競技場の真ん中に移動していた。
先ほど導師が魔法でマグマ状にしたのと同じ大きさの岩が置かれ、それに魔法をかけて破壊すれば良いというルールで、魔法の系統や種類は問わない事になっている。

「（威力よりも、精度で……）」

杖を構えて精神を集中すると、数秒後に旋風が発生して岩に直撃する。

ただ大した威力には見えないので、一見岩には何の変化も起こっていなかった。

「失敗？」

「何も変化ないよな？」

観客達が騒ぐが、既に魔法は無事に発動している。

足元から拾った石を岩に軽く投げ当ててからその場を後にすると、岩が一センチ角ほどのサイコロ状に切れてその場に崩れてしまう。

「すげぇ……」

「これが戦争なら、兵士がみんなサイコロ状にカットされるのか……」

俺の魔法の結果を知った観客達からは、歓声と共に畏怖の声が上がり始める。

「へえ。少しは俺の指導の成果が出ているな」

均等にサイコロ状に切れた岩を見て、次に魔法を披露する予定のブランタークさんは一応の合格点を与えてくれた。

「次は、ブランタークさんですね」

「俺も、あまり派手なのは苦手でな……」

次は、ブランタークさんの出番であった。

彼も俺達と同じく杖を構えて岩の前に立つと、氷弾ではなくて冷気で岩を極限まで凍らせてから、そこに小さな氷玉をぶつける。

ほぼ絶対零度まで凍っていた岩は、氷玉が当たった衝撃で粉々に砕けて地面へと落ちていく。

砕けた岩はその途中でダイヤモンドダストのような輝きを見せて、一種幻想的な光景を観客に見せていた。

「些かも衰えておらぬか」

「テレーゼ様。まだそんな年じゃないですよ」

「新婚じゃからの」

「それに拘りますね。テレーゼ様は……」

貴賓席に戻ってきたブランタークさんにテレーゼ様が声をかけるが、その様子を見てアーカート神聖帝国側の魔法使いがヒソヒソと話をしていた。

一応敵国同士なので、不謹慎だとでも思っているのであろうか？

「次は、カタリーナだな」

「そなたの奥方の一人か。出来る魔法使いらしいの」

元々ヘルムート王国でもトップクラスの実力を持つ魔法使いなのに、俺との夜の生活で魔力が増えている。

軽く岩を包み込む竜巻魔法をかけ、それが止むと岩は細切れにされてその場から消えていた。
極限まで切り裂かれて砂になったので、風で周囲に飛び散ってしまったのだ。

「準備運動にもなりませんわね」

「それは仕方が無いよ。まさか、戦いをするわけにもいかないし」

「ヴェンデリンの言う通りよの。そなた達が決闘で魔法を駆使すれば観客にも被害が及ぶであろうし、一応両国は停戦中での。下手な怪我人や死人はいらぬ対立を増やす要因ともなる」

「それはそうなのですが……」

カタリーナとて、そのくらいの事は理解しているはず。
ただ、何食わぬ顔で俺の隣の席を独占し、俺をヴェンデリンと呼び捨てにしているテレーゼ様に含む物があるだけなのだと思う。

「次は、アーカート神聖帝国側か。それで、どうなんです？」

テレーゼ様とカタリーナとの間に広がる微妙な空気を察知したブランタークさんが、話をこれから魔法を披露するアーカート神聖帝国側の魔法使いの話に切り替える。

本当は俺がやらないといけないのかもしれないが、今の俺にはそういう精神的な余裕がなかった。

「十年前は、アームストロングショックがあったからの」

「導師がですか？」

「あの男の規格外な魔力が知れ渡ったというわけじゃ」

導師の魔力の成長パターンは、完全に大器晩成型である。

二十年ほど前の導師の魔力は中級程度で、しかも彼は放出系の魔法が苦手であった。

今は有り余る魔力で蛇の放出魔法を使うが昔は使えなかったそうで、親善訪問団に加われる実力を持っていなかったそうだ。

「そんな男が、十年後に化け物クラスの実力を発揮した。しかも、今も魔力が成長しているそうではないか。騒がれて当然じゃの」

そんな理由で、前回は導師が注目の的であったそうだ。

「今回はそれに加えて、お主と『暴風』殿も加わっておる。治癒・浄化魔法特化ではあるが『聖女』殿もおるし、ブランタークも相変わらずの実力を見せておる。ヘルムート王国の魔法使いの層は厚いの」

実力者が集まっているのでそう感じるのかもしれないが、言うほどアーカート神聖帝国側も劣ってはいないはず。

平均すれば、そう変わらないと思うのだが。

「うちも、この十年でそれなりに実力者も出ておるからの。まあ、良く見ておくがよい」

そうテレーゼ様から言われて魔法の実演を見学するが、アーカート神聖帝国側にも優れた魔法使いは多かった。

国家の威信もあるので、数を揃えたのであろう。

筆頭魔導師であるブラットソンさんから始まり、他の魔法使いも中級の上程度の魔力を持つ者が多い。

そして後半に入ると、会場が大きな歓声で包まれていた。

「ピーチュ四兄弟だ！」

「四兄弟が出るぞ！」

「有名人なのですか？」

「然り。ピーチュ四兄弟は、今の帝国で最も有名な魔法使いじゃからの」

俺の問いに、テレーゼ様が頷きながら答える。

「兄弟で魔法使いなのですか」

「正確に言うと四つ子じゃの」

魔法の才能は遺伝しないので、親兄弟が使えるからと言って自分が使えるわけでもない。

だが、ピーチュ四兄弟は四つ子なので、同じ才能を持ち魔法を使えるというのだ。

「（遺伝子が同じだから？　多分、二卵性とかだと駄目なんだろうな）」

会場に姿を見せた四兄弟は一卵性の四つ子のようで、確かに四人とも同じ顔をしている。

黒い髪に黒い瞳だが、日本人顔というわけでもない。
西洋系の顔でそれほど容姿に優れているわけでもなく、ハッキリと言えば普通の顔。
年齢は十八歳くらいに見え、身長は１７５センチくらいで痩せ型、どこにでもいる普通の青年に見える。

四人ともローブを着ていたが、なぜかその色は赤・青・黄・緑と全員が違う色であった。
それも鮮やかな原色系で目立つ色のローブなので、もし俺ならば恥ずかしいので遠慮したいところだ。

「（戦隊物みたい……）」

彼らを見て一番最初にイメージしたのは、前世で子供時代に見たヒーロー戦隊物のテレビ番組であった。
一人足りないとは思うが。

「あの四つ子は、それぞれに得意な系統魔法が違うのでの」

「そうなのですか」

魔法の才能は遺伝子も関係しているようであったが、同じ遺伝子なのに得意な魔法の系統が違ったりする。
もしかすると、そちらは後天的な原因で変わるのかもしれない。

「長男のアインスは、火の系統が得意であると聞いておる」

赤いローブを着た青年が杖を振るうと、火炎が岩を包んでからマグマ状に溶かしてしまう。

「次男のツヴァイは、水の系統じゃの」

青いローブを着た同じ顔の青年が杖を振るうと、水のカッターで岩をズタズタに切り裂いてしまう。

「三男の……」

「（もしかして、ドライなのであろうか？）」

「ドライは、土の系統魔法が得意じゃ」

この四兄弟の名前は、全てドイツ語の数字からきているようだ。

この世界にドイツ語があるのかは不明であったが、人の名前はドイツ系が多いので不思議ではない。

黄色のローブを着た青年は、高速の岩弾を多数ぶつけて岩を砕いてしまう。

「最後に、四男のフィーアじゃの」

緑色のローブを着た青年は、風のカッターで岩をズタズタに切り裂く。

なるほど、なかなかの実力の持ち主である。

「我が国も、それなりに粒は揃っておるわけじゃ」

「四男のローブが緑色なのは、風だからと言って青系統にすると次男の青と被るからかな？」

「お主は、しょうもない事を気にするのじゃな」

四人で全ての魔法実演は終わりを向かえ、観客からは大きな歓声と拍手があがる。
国に仕えている魔法使い達が凄腕ならば、今の平和は長く続くと思っているからであろう。

我が国の導師が強力な抑止力であると共に、あの四人を筆頭とした粒の揃った魔法使い達はアーカート神聖帝国の強力な抑止力というわけだ。

「……」

「あなた。どうかしましたか？」

「あの連中とは、顔見知りというわけでもないと思うのだが……」

実演を終えた四人が俺に視線を合わせてきたので、ただそれだけが気になってしまうのであった。

「ヘルムート王国にも、優秀な若い魔法使いが現れたようだの」

「確率論的から言えば、両国の人口比を考えると同じ数くらいは出てきますから」

「若いのに、うちの内務大臣のような事を言うの。面白い子だ」

その日の夜は、皇帝陛下主催の晩餐会が行なわれていた。
親善訪問団の中から選ばれた人のみが招待され、その中には俺と導師とカタリーナも入っていた。
エリーゼは正妻なので同じく招待されていたが、エル、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマは限られた招待客しか入れない皇宮パーティーには出られない。

その下の迎賓宮で行なわれる、身分が低い招待客専用のパーティーに出席している。

『護衛役は必要だと思うんだけどな』

エルが愚痴を溢していたが、皇宮でのパーティーに護衛を伴うのは禁止だそうだ。
少し危険な気もするが、国内外の大切な招待客に何かあればアーカート神聖帝国の威信は地に落ちてしまう。

ヘルムート王国側も、ここで国を代表している自分達が怯えてパーティーに出席しなければ臆病者のレッテルを張られてしまう。

この二百年間で特にトラブルも起こっていないそうで、エル達には迎賓宮でのパーティーを楽しむようにと言っていた。

『運命の可愛い娘とかいないかな？』

『エルには、一応私達の護衛の仕事があるんだけど……』

『わかっているけど、三人とも必要ないように感じるな』

『それでも、仕事なのよ』

真面目なのでちゃんとエルに仕事をするようにと言うイーナと、それを仕方なしに聞き入れるエル。

いつもの光景と言えば光景である。

『イーナ。失恋したエルに少しはチャンスを』

『それは思っても言うなぁーーー！』

ヴィルマの少し毒がある発言に、エルは半分涙目で怒鳴っていた。

やはりそう簡単には、カルラにフラれたダメージから回復はしないようだ。

そんな事情もあって分かれてパーティーに参加していたのだが、その席で俺はウィルヘルム十四世陛下から直接話しかけられるという名誉に与っていたのだ。

内心では、特に名誉だとは思っていない事は秘密である。

陛下は七十八歳の老人であり、そんな彼からすれば俺などまだ子供なのであろう。

ニコニコと笑う陛下から『面白い子』と呼ばれ、数分間世間話を中心に話をしていた。

内容は主に、俺の生い立ちとか竜退治の話である。

最近では良く聞かれるので俺も大分話に慣れていて、上手く要約して話せたと思う。

「陛下。ご歓談中のところを申し訳ありませんが……」

「もう時間か。これでも皇帝なので、声をかけねばならぬ所が多くての。バウマイスター伯爵はこの国を楽しんでいってくれ。テレーゼがそなたを気に入っているようだから、案内でもさせるがよい」

立ち去る陛下を四人で見送ると、今度は先ほどの四つ子の魔法使いが近付いてくる。

あの色分けされたローブ姿のままであったが、魔法使いにとっては正装なので別に問題ない。

カタリーナは女性なのでドレス姿になっていたが、俺も新しい綺麗なローブに着替えてそのまま出席していた。

「お初にお目にかかります。バウマイスター伯爵殿。私の名は、アインス・ジーモン・ピーチュと申します」

赤いローブを着た四兄弟の長男アインスは、自分に続けて三人の弟達を紹介していた。

「これはご丁寧に。ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターです」

確かアーカート神聖帝国では、お抱えの筆頭魔導師が黒で、上位者が灰色、見習いや下級者が白色のローブを着ける決まりであったと聞いていた。

なのに、この四人は特別な色のローブが認められている。

それだけの実力者という事なのであろう。

「話に聞くと、竜を退治したり、一万人の軍勢を瞬時に戦闘不能にしたとか？」

「一部大げさな噂もあるようですね」

一万人の軍勢を戦闘不能にしたのは、ブランラークさんとカタリーナの三人で成した成果であった。

なので、そこは間違いであると訂正する。

「素晴らしい成果ですな。同じ魔法使いとして私も頑張らなければと思いますよ」

アインスも他の兄弟達も、同じ顔で俺の功績を褒め称えていた。

「ですが……。そのくらいならば、私達にでも十分に可能でしょう」

しかし、すぐに話の流れが変わってしまう。

四人は、自分達でも竜退治くらいなら余裕で出来るのだと少し顔を歪めながら話していた。

「（ええと……。対抗心？　嫉妬？）」

どちらかはわからないが、あまり良い性格はしていないようである。

「我らは子供の頃から、帝国の秘蔵っ子と呼ばれていましてね」

どんな生まれかは知らないが、四つ子が生まれて全員が上級の魔力を持つ魔法使いなのだ。

帝国としても、是非に囲いたかったのであろう。

「そのせいで、討伐などに出させて貰えなかったのですよ」

別に聞きたくもないのに、青ローブの次男ツヴァイが話を続ける。
才能のある若い魔法使い達なので、最悪死ぬ可能性もある魔物の領域の解放などには使い難かったのであろう。

両国の人口と魔法使いが生まれる比率が同じならば、在野にいる高位の魔法使いに依頼すれば良いのだし。

「当然、やれと言われれば余裕ですがね」

「まあ、そうでしょうね」

「認めるのですか？」

「はい」

両国で魔法使いが生まれる比率が極端に違うという話も聞かないので、ヘルムート王国の魔法使いに出来ればアーカート神聖帝国の魔法使いでも可能であろう。

俺はそのように思い、その考えを正直に話していた。

「（というか、こいつらは何を言いたいんだ？）」

「我らも、これからはバウマイスター伯爵殿に負けないようにしないとな」

「すぐに追い抜きますとも」

「はあ……。そうですか……」

それから暫く、彼らは自分達の魔法がいかに優れているかとか、期待されているからこそ秘蔵されていたのだという話に終始していた。

「（貴族って、こんな下らない話を長時間聞かないと駄目なのかね？）」

心の中で欠伸をしたフリをしながら、表面上はにこやかに四兄弟の話を聞いていた。

前世でも、能力が微妙な癖に説教魔の上司がいたので、その人の話を聞き流すために覚えたスキルを発動させたのだ。

「じきに、バウマイスター伯爵殿をも超える功績を立てる事になると思いますよ。正直、少し悪いとは思うのですが……」

「そうですか……」

『頑張って』というと怒りを買いそうであるし、『負けませんよ』とか言うのはキャラに合わない。

曖昧な返事になってしまったが、彼らは俺にベストな回答など望んでいないようだ。

話すだけ話すと、別の来賓の下へと向かってしまう。

「何なのです？　あの方々は？」

「さあ？」

「年下であるあなたに功績で負けているから、嫉妬しているのでは？　その気になれば、すぐにあなたを超える功績をあげられると」

「それしかないよね」

「微妙な宣戦布告じゃの」

カタリーナが首を傾げ、エリーゼが彼らの考えを予想して話をしていると、そこにテレーゼ様が姿を見せる。

「ようやく挨拶が終わっての。あとは、ずっとヴェンデリンの元に居られるぞ」

やはり俺は、彼女に気に入られてしまったようだ。

またすぐに腕を組まれてしまうのだが、不意に後方から殺気のような物を感じてしまう。

視線を向けると、そこには鋭い視線を向けるピーチュ四兄弟の姿があった。

「彼らは、テレーゼ様狙いなのですか？」

「そんなところじゃの」

まだ貴族にはなっていないが将来はそれが確実であるピーチュ四兄弟は、上手くテレーゼ様の婿に納まろうと色々と画策しているらしい。

物凄い自信の表れと言えよう。

「あの者達ならば、妾の婿か子の父親になる条件に一致しておるからの」

魔法の才能があって貴族にはなれるが、新興貴族で家の力など皆

無に等しい。
逆に言えば、外戚の専横を防げるのでフィリップ公爵家としては都合が良いとも言える。

「同じ顔で、妾を取り合っているという噂じゃの」

「良い婿候補なのでは？」

「妾が嫌じゃ。せめて少しは選ぶ権利くらい欲しいわ」

テレーゼ様が言うには、たまに彼らが見せる露骨なまでの下心が嫌悪感を抱かせるらしい。

「それに、そなたの方が顔も能力も優れているからの。心根も素直であるし」

「そうですか？」

どう控えめに考えても、中身が四十歳近い俺が少年のような心を持っているとは思えなかった。
性格も、王都などに碌でもない貴族ばかりいるせいでひねくれているはずだ。

「ブロワ辺境伯家との紛争では貴族として大変であったようじゃが、初めてにしては上手く動いておるようだし、至らぬ部分もあるが可愛い物じゃて」

若干二十歳でフィリップ公爵領を支配する女傑から見れば、俺なんて半人前貴族が精々であるようだ。
更に四つも年下なので、半ば弟のような扱いなのかもしれなかっ

た。

「妾の気を引こうとしているのに、自分達よりも年下の若造に魔法使いとしての功績で負けておる。彼らにも不幸はあったのじゃが……」

上級レベルの魔力を持つ四つ子の兄弟という事で、彼らは子供の頃から帝国に囲われて訓練の日々を過ごしていた。

帝国としても、中途半端な実力の内に無理をさせて死なれても困るわけで、今まであまり上位の魔物などを狩った経験も無いそうだ。

「（温室育ちなのかよ……）それで、なぜ俺に対抗心を？」

「そなたが、十二歳から活躍しておるからの」

一方、実家がアレで自立が早かった俺は、偶然の要素が強かったが十二歳の時には竜を退治している。

彼らからすると、俺のせいで相当な焦りを感じたというわけだ。

「ピーチュ四兄弟の慎重な育成方法に批判的な者もおっての。彼らが、『ヘルムート王国のヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターは、十二歳で竜を二匹も退治しているのだがな』と嫌味を言ったそうじゃ」

失わないように慎重なのもいいが、過保護なのもどうかという意見が軍部などにはあるそうだ。

「（はた迷惑な……）」

それでも、どうせ向こうは伯爵である俺に表立って何か出来るわ

けでもないし、滞在期間が終われば最低十年は会わずに済む。
適当にあしらっておけば、特に問題はないはずだ。

「人に嫌味を言う暇があったら、今すぐにでも竜退治に行けばいいのに」

「それも、上から許可や命令が出ないと奴等は動けないからの」

義務で出たので特に面白くもなかったパーティーが終わり、俺達は迎賓館へと戻る。
いつの間にかテレーゼ様がいなくなっていたが、忙しいのであろうと思い自分の部屋のドアを開ける。

「遅かったの。ヴェンデリンよ」

「テレーゼ様？」

すると、ベッドの上で絹のナイトガウンを羽織ったテレーゼ様が待ち構えていた。
昨日と同じく酒瓶を持って。

「夜の退屈な時間を　妾と共に過ごすのも悪くあるまい。それとの……」

いきなり着ていたナイトガウンを脱ぐと、その下からはスケスケのネグリジェ姿が現れる。
色は紫色で、ブラジャーやパンティーも同色であった。

見てはいけないと思いつつも、つい見てしまう。
彼女の色気に、俺は完全に圧倒されていた。

「貴族や皇族でも、時にプライベートな時間は必要じゃからの」

「そうですね……」

「この部屋で何が起きても、妾の手の者達は口が堅いからの。安心して欲情するが良いぞ」

「（えーーーっ！　モロに誘惑されているやん）さすがに、互いの立場上拙いかと……」

「安心せい。子が出来ても、妾の子として育てるからの」

何が安心なのかは知らないが、そう言われながら彼女に近付かれると心臓がバクバクしてくる。

誘惑に抗わないといけないのだが、彼女の色気は本物である。

とても処女だとは思えないほどだ。

「（拙い……。誘惑に負けるかも……）」

そう思うのと同時に、突然部屋のドアが開いて複数の人間が雪崩れ込んでくる。

「テレーゼ様。さすがに看過できませんが」

部屋に入って来たのは、テレーゼ様と同じくナイトガウンを羽織ったエリーゼ達であった。

「公爵様ともあろう方が、はしたないですよ」

「旦那泥棒は感心しないね」

「いくら格下の伯爵相手でも国が違う。ヴェル様はもっと強く拒否しても構わない」

「テレーゼ様。高貴な身分の方とは思えないお姿ですわね」

イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、カタリーナにも続けて非難され、テレーゼ様は『邪魔が入った』という表情を一瞬だけ浮かべていた。

「思ったよりも、そなた達の結束は固いようじゃの」

「そのくらいしないと、いちいち奥さんにしていたらキリがない」

ヴィルマの言う通りで、今でも隙あらば愛人でもいいから押し込もうとする連中が後を絶たない。

俺からしても、元々一夫一妻制が当たり前の世界で生きていた人間なのだ。

俺だって普通にハーレムに憧れていた一般庶民であったが、実際には五人で限界なくらい。

それでもストレスが溜まるので、極秘裏にアマーリエ義姉さんと密会をしているのだから。

何とも矛盾した一言ではあるが。

「そういうわけでして、今夜は私達がお相手をしますので。これからも、ヴェンデリン様の夜の時間に空きはありません」

エリーゼはキッパリと言い放つと、テレーゼ様を部屋の外に強引に押し出してしまう。

「他の部屋からベッドを持って来て繋げば大丈夫ですね。あなた。今日からは六人で寝ましょう」

「はい……」

いつものように笑顔ではあるが、エリーゼから染み出る迫力に俺は逆らう事の無意味さを知る。

それに、テレーゼ様の色気のせいで妙に高ぶっていた事もあり、その日はベッドを繋いでそのまま夜の時間に突入する。

そしてその翌日……。

「これは酷い……」

ベッドの上の惨状を見て、ベッドメイキングに来ていたメイドがその場に絶句しながら立ち尽くす。

「メイドさん」

「はいっ！　すぐに綺麗にしますので！」

「ええと。頑張ってね」

俺はそっと、メイドに数枚の銀貨を握らせるのであった。

「妾の想い人は、見た目とは違って性豪であったか。それは、好都合」

朝食の席で、昨晩俺の部屋から追い出された事をおくびにも出さず、テレーゼ様は楽しそうに俺の事を話していた。

「魔法使いの男なら、使える人は多いですよ。『精力回復』」

実はこの魔法、魔力が初級クラスしかない魔法使いでも結構使える人が多い。

効果に差が出るが、元々自分にしか使えない人が大半なので難易度が低い魔法と見なされるのだ。

ただ、効果が効果なので未成年者への伝授が半ば禁忌とされているわけだ。

俺も結婚した時に、初めて師匠の本の袋閉じを開けたわけだし。

なお、『週刊誌のヌードグラビアの袋閉じでもあるまいし』と思ったのは、俺だけの秘密だ。

「まだ何かを企んでいらっしゃるので？」

「そう怒らないでくれ。妾はエリーゼ殿達との和解を望んでおるのだから」

「和解ですか？」

「そうよ。国内の貴族から婿を取る難しさは、エリーゼ殿にもわかろうて」

旦那の実家が、フィリップ公爵領の統治に口を出してくるからだ。

「ですが、それはバウマイスター家でも同じですわよ」

「カタリーナ殿。新興のバウマイスター伯爵家と、歴史が長いフィリップ公爵家では事情が違うのじゃ」

バウマイスター伯爵家は新興なので、これから親族・譜代による家臣団の形成を行なわないといけない。

中央や南部貴族の親族が大量に流入しているが、パイが大きいので今のところは席に不足は無い。

実家との縁も、次代以降になると薄れてバウマイスター伯爵家が優先になる。

元々跡継ぎでもなく余っていたから送られてきたので、実家が最優先というような者も少ない。

もし居ても、そういう者は次第に排除されるそうだ。

「新興故に、逆に融通が利くわけじゃ」

ところが、フィリップ公爵家は既に家臣団が完璧に整備されている。

利権なども割合が決まっていて、あまり余剰がない。

「妾が婿を入れたとして、それを盾に婿の実家が見返りを求めてくる。もし妾がそれを受け入れたとすると、そこから弾き出される者が出てくるわけじゃ」

家臣の人数や予算の枠などほぼ決まっているので、新しい人を入れれば今までの人が押し出される計算になる。

「親族や譜代で割を食う者が出るであろうの。実際にそれが原因で、過去に殺傷沙汰もあったの」

いきなり当主の婿の実家から来た人間に、己の職や利権を奪われるのだ。
追い詰められてそういう行動に出る者の気持ちも理解できなくもない。

「そんな事情もあり、妾は二十歳で嫁き遅れが心配される年まで婿が決まっておらぬ。そこで、ヴェンデリンじゃ」

元から正式に婿にはしないし、子供が生まれても俺の子供だとも公表しない。
ただテレーゼ様の子供であると発表すれば、周囲はそれで納得するであろうと。

「女当主とは、本当に面倒なのじゃ。どうせ次は兄達が自分の子供に継がせようと運動するであろうから、特に後ろ盾もない妾の子は分家の当主にでもして苦労させたくないものよの」

「それって、何かメリットがあるのですか？」

「あるぞ。妾が幸せになる」

「……」

予想外の返答に、全員がその場で絶句してしまう。

「そなたは、魔法で移動可能であろう？　妾も領主として忙しいからの。週に一度くらい遊びに来てくれれば十分じゃ。妾があまりに恋しくなった時には、もっと来てくれても構わぬぞ。夜は長いからの」

「テレーゼ様。あなたは……」

「エリーゼ殿達の序列は乱さぬよ。妾とて貴族なので、それくらいは理解しておる。それで、返答は？」

怒涛の勢いで攻めてくるテレーゼ様に、エリーゼは珍しく対応に苦慮していた。

エリーゼも上級貴族の娘としてなかなかの知恵を持っているが、テレーゼ様は上級貴族その物なのでそれを上回っている。

「ルイーゼ。どうする？」

「ヴェル次第じゃないの？　ヴィルマ」

「私は、元々下級貴族の娘だから。カタリーナは？」

「ついこの間貴族になったばかりの私には難しい問題ですわね……」

こういう問題をエリーゼに丸投げしてきたツケが出て来て、四人も回答に苦慮しているようだ。

「（ここで、もし俺が受け入れたらどうなるんだ？）」

口では面倒とか言いながらも、実はテレーゼ様の色香に迷いつつある俺としては、かなり悩ましい問題であった。

「（昨日のネグリジェ姿とか凄かったからな）痛ぇ！」

「ヴェルは、何を考えているのかな？」

などとスケベな妄想を浮かべていたら、ルイーゼに素早く蹴りを入れられてしまう。

「……。事は、外国の貴族同士の内縁婚になりますよね？」

「それが一番近いかの」

「ヴェンデリン様や私達が認めたとしても、陛下が認めるかどうかです」

「それはそうじゃの」

それ以前に、俺やエリーゼ達が認めなくても、陛下が命令を出せば俺とテレーゼ様はそういう関係にならないといけないという現実もある。

何しろそれは、主君命令なのだから。

「では、何とか許可を貰うとするかの」

「難しいと思いますが」

「一応、努力はしてみようと思う。許可が出たら、受け入れて貰うからの」

朝食と話が終わると、テレーゼ様は今日は予定があると素早く迎賓館を出ていく。

彼女の『言質を取ったぞ』という得意気な表情の理由が判明するのは、それから数時間後の事であった。

「エリーゼ殿は、してやられましたな」

アーカート神聖帝国滞在三日目で一番大きな予定は、自国の親善訪問団員達との途中経過を報告する会議であった。

メインである、通商や技術交流などを担当する役人や貴族達が交渉や交流会の途中経過を報告し、最後にオマケで魔法使いが技の披露会から得たアーカート神聖帝国の有力な魔法使いの個人情報や得意な魔法などの報告を行う。

この報告は、特に軍部などから切望されている情報だ。

席に座っている武官や軍官僚が真面目にメモを取っていた。

なお、なぜか報告をしているのは俺である。

本当は導師がしないといけないはずなのだが、面倒だからと押し付けられてしまったのだ。

『ブランタークさんがしてくださいよ』

『陪臣の俺はパス』

ブランタークさんにも逃げられ、俺はカタリーナが取っていたメモを参考に何とか無事に報告を終える。

報告を終えると、俺は隣の席に座っていたカタリーナにお礼を言う。

「メモは助かったよ」

「ヴェンデリンさんは、もう少し他の魔法使いに敏感になった方が良いですわ」

正論なのだが、自分がどんな魔法を使えるのか試しながら習得するのが好きなので、他の人がどんな魔法を使おうとあまり興味が無かったのだ。

「メモのお礼は、あとで肉体的に返すよ」

「言い方がいやらしいですわね」

「嫌なのか？」

「嫌とは言っていませんわよ。むしろ、嬉しく……って！　今のは無しです！」

真面目な報告が全て終わると、今度は世間話的に砕けた話が主流なる。

その中で最初に貴族達の話題の中心になったのは、露骨なまでにテレーゼ様からアプローチを受けている俺であった。

「あれほどの美人からアプローチを受けるとは、バウマイスター伯爵は女性にモテますな」

「羨ましい限りです」

「そうよな。ワシももう十歳も若ければ、声をかけられるのを待っていたかもしれぬの」

他人事なのをいい事に、中年以降の貴族達からえらくからかわれてしまう。

根堀り葉掘り聞かれ、続けて『どうするのか？』と聞かれたので、エリーゼが陛下の名前を出して断ったという話をすると、商務閥でアーカート神聖帝国との交易を担当しているシュルツェ伯爵がエリーゼに同情的な視線を向ける。

彼は、まだ二十代半ばくらいの線の細い金髪の美青年であった。口調も穏やかで、見た目は文系イケメンそのものである。

「してやられた？」

「陛下が許可を出す可能性が、無きにしもあらずなのです」

「まさか……」

「実は、水面下で通商の拡大が計画されていましてね」

もう二百年も停戦しているので、いい加減に不戦条約を結んで人と物の流れを拡大してはどうかという意見が出ているのだそうだ。

「軍部では、強硬派も結構な勢力を保持していますからね。一応慎重に話を進めていましたが、彼らも別に反対でもないんですよね」

今はお互いに首都しか入れないものが他の貴族領や都市に出入り出来るようになれば、戦争になった時の情報収集に役に立つし、戦争には金がかかるので税収が増える交易の拡大には賛成であると。

「それに、不戦条約があっても戦争になる時はなりますし」

かなりあけっぴろげな意見ではあるが、確かに条約があれば戦争が防げるという話でもない。
その気になれば条約破りなど普通なのが、人類の歴史なのだから。

「強硬派とは言っても、あまり極端なのは少ないですしね。結構、フリの人もいますし」

いつ戦争になっても大丈夫なように、常に隣国への危機感を説いて戦争の準備を怠らない。
という名目で、最近減り続ける軍への予算を確保しようと運動している者も多いのだそうだ。

「通商に限って言えば、反対する者なんてほとんどいませんよ」

両国の首都同士だけで、決められた回数の魔導飛行船を飛ばして貿易を行なう。
これに関わる商人も特別に許可を得た数名だけで、これでは経済の発展に寄与しないと、特にギガントの断裂と領地を接している貴族達から陳情が上がっているそうだ。

「ギガントの断裂の向こうと貿易をしたいでしょうし。まあ、実は密かにしていますけど」

たまにある亡命者の行き来や、夜中にロープを張っての密貿易などは少量ではあるが行われているらしい。

「最初は全て取り締まっていたんですけど、今は少量なら黙認ですね」

密入国者などに手を貸せば処罰の対象であったが、小規模の密貿易は黙認されている。
ただこういう状態は良くないと考えたようで、交易を行なえる港を増やしたり、首都限定になっている商人の行動範囲を正式に広げたいのだそうだ。

「あとは、他国の貴族同士の婚姻許可ですか」

友好の架け橋となるか、それとも外患の原因となるのか？
これも水面下では話し合いが行なわれていて、解禁される可能性があるらしい。

「試しに、フィリップ公爵の内縁の夫にバウマイスター伯爵が認められる可能性があるのです。交易促進推進派が賛成に回る可能性があるので」

反対派からすれば、バウマイスター伯爵家がヘルムート王家の後ろ盾を使用してフィリップ公爵家の相続に口を出してくるか、または逆のパターンがあると言って反対してくるはず。

だが、それさえクリアーしてしまえば、認められてしまう可能性があるのだ。

「フィリップ公爵閣下は、エリーゼ様が陛下の名を出すと予想していたのでしょうね。だから、それを言わせて言質を取った。陛下が許可をすれば、バウマイスター伯爵を内縁の夫に出来ますから」

エリーゼでもこれなのだ。
俺なんて、テレーゼ様からすれば簡単に落とせると思われているのであろう。

「相続直後はあの方は傀儡でした。ですが、五年ほど前からはほぼフィリップ公爵家を掌中に納めております。情報によると、兄達ですら表向きは逆らわない状態だと。あの方は女傑ですね」

シュルツェ伯爵からの情報を聞き、俺達は改めてテレーゼ様の強かさを知る事となる。

さて、帰国するまでどう逃げ切るとかと考えていると、そこに親善訪問団の一員である若い役人が血相を変えて駆け込んできた。

「どうかしましたか？」

通商目的が一番強いために親善訪問団の団長にも選ばれているシュルツェ伯爵が声をかけると、その役人は声を声を上ずらせながら報告する。

「大変です！　先ほど執務中にウィルヘルム十四世陛下が倒れられ、治療の甲斐もなく崩御なされたとの事！」

「それは、ちょっと前例の無い事ですね……」

この二百年で、親善訪問団が訪れている時に崩御した皇帝陛下や国王陛下は存在していないらしい。

シュルツェ伯爵は役人らしい言い方ながらも、その顔には驚きの表情を浮かべていた。

「これは困りました。もう通商交渉どころではありませんね」

せっかく話を纏めつつあるところに、それを承認する皇帝陛下が崩御してしまったのだ。

新しい皇帝が決まってその人が許可を出さないと、話がストップしたままになってしまう。
通商交渉の責任者であるシュルツェ伯爵からすると、困った問題のはずだ。

「滞在期間の延長を陛下に通信して、許可を得ないと……」

加えて新しい皇帝陛下の情報収集や、外交儀礼としての即位式典への参加などもある。
だがその詳しい予定は未定で、予想外の出来事に俺達はこれからどうなるのかと思案に耽ってしまうのであった。

第八十話　どこかで聞いたような眠たい政治の話

「ただいま」

「何か大変な事になったみたいね」

情報交換のための会議は、最後にウィルヘルム十四世陛下の崩御という大ニュースで幕を閉じていた。

昨日まであんなに元気だった人が突然死んでしまうなど、高齢ではあったとはいえ年寄りとは本当にわからないものである。

会議を終えて迎賓館に戻るとイーナ達が出迎えてくれるが、館内の使用人やメイド達も自国の皇帝陛下崩御でかなり動揺しているようだ。

数人で集まって、ヒソヒソと話をしている光景が目につく。

普段ならすぐに上司からに怒られるのであろうが、その怒るはずの偉い人達まで集まってヒソヒソと話をしているので、よほどの大事件というわけだ。

「それで、これからどうなるの？」

「親善訪問団の行事は、来年に延期だそうだ」

魔法使い達の仕事は終わっているが、他の通商や技術交流部門の仕事は終わっていない。

向こうの担当者も皇帝陛下の葬儀で忙しくなるし、親善訪問団が

来ている間は本来バルデッシュは賑やかになるはずが、今は亡くなった陛下の喪に服さねばならない。

親善訪問団の大半の人員は、これで帰国という決定が出されていた。

「それもそうか。ボク達が観光や買い物で騒いだりとか不謹慎だものね」

新皇帝が決まるまでは、バルデッシュ市街で遊べない事に気が付いたルイーゼは残念そうだ。

ただし、全員が帰国というわけではない。

両国は皇帝や王が死ぬと互いに弔問団を派遣しているので、一部は残ってそのまま弔問団を形成する事になっていた。

どうせ既にバルデッシュにいるので、時間と経費を節約するために親善訪問団の団員から選ばれるわけだ。

「他にも、新陛下の即位式典に出る人員とかね」

「時間がかかりそうね」

イーナは、『どれくらい拘束されるのやら』という表情を浮かべていた。

「長くても、二～三週間くらいだってさ」

「後継者選びに時間がかかれば、ヘルムート王国に隙を見せる事になる」

「そう。ヴィルマの言うそれだよ」

ヴィルマの言う通りで、ここで下手に時間をかけて皇帝不在という権力の空白を作ってしまうと、今の仮想敵国ではあるヘルムート王国に隙を作る事になってしまう。

皇帝陛下の葬儀が終われば、すぐに臨時の貴族議会が開かれて新皇帝の決定投票が行なわれるそうだ。

「皇帝を投票で選ぶのね」

「普通の一般庶民が立候補とかは出来ないから、王国とそう変わらないさ」

貴族議会を構成している議員の九割は貴族である。

残りの一割も政商クラスの大商人だったり、大規模な工房を営んでいる大親方だったりするので、特に波乱もなく決定される事が多いそうだ。

「中央の皇家当主と、七名の選帝侯からしか立候補できないから」

「という事は、テレーゼ様も？」

「前に言っていたじゃない。今回は辞退するって」

間隔が短かったり続けて同じ家から皇帝が出ると不平等になるので、今回もフィリップ公爵家は出馬しないとテレーゼ様が言っていた。

本人がそう言っているので、間違いないのであろう。

あとは、女当主なので立候補するとまた別の問題があるのかもしれないが。

「出身家のバランスとか……」

「完全に談合」

「だよなぁ……」

ヴィルマの指摘通りであるが、別に自分の国でも無いので気にしない事にする。

閣僚職の分け合いとか、うちの国でも普通にあるのだし。

「それで、俺達は残れるのか？」

状況が状況なので、既に一部の人員は帰国準備を進めている。

特に大物貴族が随伴させた妻や子供達などは、帝国中が葬儀の準備で忙しいうえに喪に服しているバルデッシュでのん気に遊んでいる光景を見せるわけにはいかないので、全員帰国の準備が進められていた。

「護衛だから残れる」

エルは純粋な護衛として、エリーゼ達も冒険者であるので半ば護衛扱いで残れる。

家族や随員を帰すとはいえ、他の貴族達も同じくらいの執事や護衛などは残すのだから当然の権利であった。

「楽しかった海外旅行が、お葬式と、緊張しかしない新皇帝即位式典に早代わりか……」

エルが溜息をつきながら愚痴を漏らすが、俺も気持ちは同じだ。

旅行先で葬式とか、雨男よりも性質が悪い。

少なくとも、俺が葬式男では無い事を祈るしかなかった。

「葬儀に使える正装を持って来て助かったね」

「確かに……」

ルイーゼが言うように、出発準備をしている時にローデリヒから言われて、魔法の袋に全員分の葬式にも使える正装を仕舞っておいたのだ。

俺は魔法使いなので別にローブでも構わないのだが、出来ればそちらに着替えて自分達と服装を揃えて欲しいと残る貴族達から言われていた。

「ローデリヒさんて、お母さんみたいね」

「言えてるなぁ」

確かに、イーナの言う通りだ。

そういえば、前世の母親も子供の頃に出かけようとすると、『天気予報だと雨になるかもしれないから、折り畳み傘を持っていけ』と良く言っていた。

それと良く似ているといえば似ている。

「ヴェル様。テレーゼ様が帰って来ない」

「さすがに戻って来れないでしょう」

それは致し方ない。

彼女は選帝侯にも選ばれている公爵なので、葬儀の準備を主導しないといけないのだから。

きっと、夜通しで準備に奔走しているのであろう。

「葬儀はいつなのでしょうか？」

「そう先でもないと思う。一応、皇帝陛下の葬儀だから」

エリーゼは、葬儀の日程が気になるようだ。

とはいえ、日本の葬式のように明日明後日の話ではない。

まさか外に遊びに行くわけにもいかないので、俺達は迎賓館の庭などで剣や魔法の修練に時間をかけるが、葬儀の日程は一週間後に決まる。

正式に使者が来て、招待状を置いていったのだ。

それとテレーゼ様は、相変わらず迎賓館に戻って来ない。

葬儀の準備で大忙しなのだと思う。

「地方の貴族の方々は間に合うのでしょうか？」

「全員は間に合わないでしょう」

葬儀後には次の皇帝を決める貴族議会の開催もあるので、議員になっている貴族などはそれに間に合うはず。

いや、間に合わないような奴は議員に相応しく無いと見なされる。

だから、一週間後の葬儀でも問題ないのであろう。

俺は、カタリーナに自分の考えを語る。

「貴族議員に選ばれると、屋敷に魔導通信機が置かれるそうである！」

「導師。今まで、どこに行っていたんです？」

「買い食いである！」

「そうですか……」

他の貴族ならば、遊びに行くと見せかけて実は何か情報種集をとか考えられるのだが、俺に会議の報告役まで押し付ける導師にその可能性は薄い。

普段は本当に道化に徹するのが、陛下のお気に入りである導師の処世術なのだから。

ただし、本人は心から楽しんでいるので、気を使う必要は一切無かった。

「携帯用の小型ではなく、過去に地下遺跡から大量に出土した魔導通信機で連絡をしていると聞いたのである！」

大型の無線機が魔道具化したような物で移動は難しいが、貴族議員に選ばれると貸与されて屋敷に設置されるそうだ。

緊急の連絡などはそれで受けられるので、彼らは葬儀や次期皇帝選出のための会議に間に合うというわけだ。

「遅れると、議員の資格無しで最悪資格剥奪もあるらしいな」

続けて、ブランタークさんも姿を見せる。

彼も、ブライヒレーダー辺境伯の代理として残留組に指名されていた。

「魔導通信機の所有権は帝国にある。議員になると貸与されて、議員から外れれば返還しないといけないからな」

毎年、数名ずつではあるが議員の交代は発生する。

家が繁栄して新たに指名される者と、逆に衰退して議員から外される者。

辞めた議員の屋敷から帝国の役人が魔導通信機を回収する光景は、帝国では本に書かれるほどの物悲しい光景なのだそうだ。

逆に、議員に指名されて屋敷に魔導通信機が来ると、パーティーやお祭りをする者もいるらしい。

まさに、栄枯盛衰というやつである。

「情報が早いから、議員連中は本葬儀に間に合う。中央の法衣貴族や領地がバルデッシュから近い貴族も間に合うな」

間に合わない人達は、葬儀終了後も予備葬儀が行なわれるのでそこに参列したり祈りを捧げにいくそうだ。

「そこで、上と下に分かれるんですね」

俺達は、本葬儀に招待されているのでそれに出るわけだ。

「それで、次の皇帝選出のための議会でしたっけ？」

「議員の投票で決めるわけだな」

議員の定数は、五百名だそうだ。

そこから議員でもある皇家と七つの公爵家から立候補者が出て、彼らは決められた時間の中で所信演説を行なう。

決められた時間内に内政・外交の方針を語り、それを聞いて議員

達が一番良いと思った人に投票を行なう。

「過半数を取れば勝ちだな」

票が割れた場合は、最下位の候補者を外してもう一度投票だそうだ。

この辺のルールは、地球でも良くある物であった。

「とはいえ、今回は四名しか出ないからそう時間もかからないだろうな」

亡くなった陛下は、メッテルニヒ公爵家の出だと聞いた。

その先代は、テレーゼ様の曽祖父なのでフィリップ公爵家も立候補はしないと言っている。

そうなると、六名が出ていないと駄目なような気もするが。

「二人は、老齢だから辞退したのさ」

当主しか立候補できないし、その当主が六十歳を超えていると辞退するという慣例があるらしい。

「すぐに死なれるとまた選定で手間がかかるし、一人の皇帝の統治期間が長い方が治世が安定するという考え方だな」

駄目な人が長期間政権を維持して国が衰退する可能性もあるのだが、それを排除するための投票なのであろう。

必ずしも絶対でないのは、どこの世界でも同じなのであろうが。

「それ、一日で終わるんですか？」

「さすがに三日はかかる」

演説・質疑応答で一人半日ほど持ち時間があり、四人なので二日間。

最終日に投票を行なって決めるので三日間の日程らしい。

「長いなぁ。別に参加するわけじゃないからどうでもいいけど」

どうせ新皇帝が決定するまでは、迎賓館に篭もる事になるのだ。

新皇帝が即位するまでは、アーカート神聖帝国中が喪中なので身分の上下に関わらず遊び目的の外出は自粛され、劇場や歓楽街なども休業となるのだから。

「いや、俺達も会議場に行くんだけど」

「どうしてですか！」

「隣国の皇帝が選出されるから、普通に情報収集だろう。伯爵様の大切なお仕事さ」

ブランタークさんが、『何を当たり前の事を……』と言った表情を浮かべる。

訪問親善団は王国が派遣した物なので、その団員が残る以上は新皇帝の政策や人と成りを調べて報告する義務がある。

「この国は、そこまで皇帝の力が強いわけでもない。落選した他の候補者だって、得票数によっては無視できない政治勢力なんだ」

有力野党のような物だから、これの情報収集も必要なのであろう。

「それはわかるんですけど、なぜそれに俺達が出ないと行けないんです？」

「親善訪問団の一員だから」

ブランタークさんの当たり前な意見に、俺達はガックリと肩を落とす。

前世では選挙にすら行った事が無い元無党派層の俺は、これから半月以上は続く退屈さを予想して、早く家に帰りたいと切に願うのであった。

「ふわぁーーー」

「寝るなよ。伯爵様」

皇帝陛下の急死から八日後、俺は皇宮の近くにある貴族議会会議場の見学席で欠伸をしながら長い演説を聞いていた。

昨日行なわれた葬儀は、テレーゼ様達の準備によって無事に終わっていた。

葬儀には貴族から平民まで多くの参列者が訪れ、俺達もヘルムート王国代表としてかなりの上座で神官の説教を聴く羽目になっていた。

こういう席では、どこの世界や国でも共通して坊主の説教が長い。

朝の鍛錬で汗をかき、風呂に入って朝食を食べて来た俺達には眠りの魔法の呪文にしか聞こえず、何度も居眠りをしそうになってい

た。

怒られるかと思ったのだが、良く見るとシュルツェ伯爵達も少し眠そうであった。

彼らは飾りの俺達とは違って、情報収集などで忙しかったので余計に疲れていたのであろう。

そして、今日の皇帝選出臨時議会でも同じだ。

まだ一人目のブランデンブルク公爵の時点で、みんな眠たそうであった。

良く見ると、ただの見学者である俺達とは違って議員なのに、平気で寝ている奴がいる。

葬儀で忙しかったのであろうが、当事者が寝ているのはどうなのであろうか？

帝国の政治が、少し心配になってしまう。

「議員が寝ていますね」

「悪い大人の見本だな」

「ブランタークさん。隣にも悪い見本がいるけど」

ルイーゼの指摘通りで、やけに静かだと思ったら導師が軽くいびきをかいて寝ていた。

「導師はいいんだよ」

「なぜなんです？」

「目が開いているじゃないか」

「こんな事を言うと失礼だと思うけど、本当に不気味ね」

確かに導師は居眠りはしているが、その目は開いたままであった。
随分と器用だなとは思うが、イーナの言うようにただ不気味だ。
その外見と合わさって、子供が見たら確実に泣くであろう。

シュルツェ伯爵達などは、導師に視線すら送らないで演説を眠気と戦いながら聴いていた。
導師に面と向かって居眠りを非難するリスクを避けたのであろう。

「別に聞かなくても、演説の原稿は貰えるけど」

後の質疑応答と合わせて、速記官が記載してから紙に纏められて議員や関係者には配られるそうだ。
こちらにも貰えるそうなので、一応居眠りをしても問題はない事になっていた。

「ただ、重要な事なんですけどね」

「とは言ってもな。誰がなっても、そんなに政策に変化は無いんだよ」

平和で安定している時代の皇帝選出なので、保守中流に寄って誰がなってもそう政策に変化は無い。
停戦を続けて、徐々に不戦条約の締結と通商の拡大を進めていく。

人の出入りも、もう少し解禁しましょうか？

魔物の領域を開放したり、未開地の開発を進めて、国力を増大させる努力は続ける。
魔法技術の開発も、今まで通りに進めましょう。

午後からはバーデン公爵が演説と質疑応答を行なうが、二人の政策にそう違いはなかった。
開発重点地域が違うのは、自分の領地のある地域を優先しているからだが、これはどの候補も同じ事を言う。
そうしないと、同じ地域出身の議員の票を得られないからだ。

人は、利権がないと動かないのだから。

それにしても、昼食を食べた後なので死ぬほど眠かった。
前世で居眠りをしている国会議員を『けしからん！』などと言っていたが、これは確かに眠い。
議場の議員も、ほぼ全員睡魔と戦っているようであった。

「明日もあるのかよーーー！」

エルは俺の護衛で一日中立っていたので、無駄に疲労していた。
立ちながら呪文のような演説を聞いているだけなのに、動いている時よりも疲れているようだ。

「話を聞くだけで丸一日は、冒険者には苦痛ですわね」

カタリーナも、眠い目を擦りながら迎賓館への道を歩いていた。

「眠いし、お腹減った」

「早く帰って何か食べましょうね」

「はい。エリーゼ様」

ヴィルマも途中で居眠りをしていたが、エリーゼは完璧超人なのでメモを取りながら最後まで話を真面目に聞いていた。

常人には真似できない偉業である。

「エリーゼは、眠くないの？」

「『聖』の治癒魔法には、眠気を醒ます魔法があるのです」

「知らなかった……」

この魔法は、神官が上司の説教などで居眠りをしないようにと開発されたそうだ。

なるほど、寄付以外では教会に近寄っていない俺には接する事が無かった魔法である。

それと、神官も所詮は人間という事らしい。

「明日は、一人気になる方の演説がありますから」

「気になる？」

「少し政策が違う方がいるそうです」

「そんな情報、良く知っているね」

「お爺様からなので、教会経由です」

ヘルムート王国の国教がカソリックで、アーカート神聖帝国の国

教がプロテスタントという違いはあったが、実はアーカート神聖帝国の国民の三割はカソリックである。
そこから教会は、独自に情報を得ているのであろう。

「ほう。ニュルンベルク公爵を知っておるのか」

突然後ろから声が聞こえ、それと同時に腕を組まれてしまう。
この腕に感じる素晴らしい柔らかさは、間違いなくあの人であろう。

「陛下の逝去からお久しぶりですね」

「妾は、葬儀の準備で皇宮に泊り込みだったのでな。久しぶりのヴェンデリンじゃの」

腕に更に胸を押し付けられ、俺はその柔らかさに至福の感覚を感じていた。

「（まるで、麻薬のような……）それで、ニュルンベルク公爵とはどんな人なのです？」

「少々過激な男じゃの」

他の皇帝候補者は軒並み三十代半ばから四十代半ばくらいで、政策は逝去したウィルヘルム十四世陛下の政策の踏襲でしかない。

ところが、ニュンベルク公爵は今年で二十二歳。
鍛え上げられた大柄の体に、短く刈り上げた金髪と、鋭い鷲のような青い目をした若き野望家なのだそうだ。

「領地は皇家直轄領に隣接していて、代々武門で栄えた家でな。当主は少しばかり元気なのが多いのじゃが、当代のマックス殿は純粋培養でガチガチの国粋主義者じゃの」

これ以上のアーカート神聖帝国の成長を望むのであれば、南征こそが必要で今はその準備を整えるべき。

こう周囲に発言して憚らないそうだ。

「危険ですよね」

「危険な可能性もあるの。じゃが、ブラフの可能性もある」

立候補者はみんな同じような事しか演説で言わないので、目立つために過激な事を言うかもしれない。

だが、現状では戦争など難しいので、もし実際に皇帝になっても戦争になる可能性は低いのではないかと。

テレーゼ様は、そのように予想していた。

「軍部の支持を得るために、予算の増額とか？」

「普通にあり得るかの」

それがわかるのは明日なので、これ以上俺達だけで予想しても無駄であろう。

話を切り上げて迎賓館に戻り、風呂に夕食と楽しんでから自室に入ると、またそこにはネグリジェ姿のテレーゼ様が待ち構えていた。

「テレーゼ様？」

「この部屋は落ち着くの。陛下が亡くなり、妾も葬儀に忙しくて戻れなかったからの」

テレーゼ様は、またアクアビットのお湯割りを飲みながら俺に話しかけてくる。

「亡くなられた陛下にはお世話になっての」

わずか十歳でフィリップ公爵家を継いだばかりで、何もわからないでいたテレーゼ様の後見役として、大変に良くしてくれたそうだ。

「でなければ、妾など今でも傀儡であったろうよ」

更に、自分の婿取りの件などで無駄に心労が重なって寿命が縮まってしまったのかもしれないと、テレーゼ様は表情を暗くさせてしまう。

「（カルラに続き、憂う美人は美しいか……）皇帝陛下の公務は激務と聞いていますので、何もテレーゼ様だけのせいではありませんよ。それに、陛下はテレーゼ様を可愛がっていたのでしょう？　そんな暗い顔では、陛下は安心して天国に行けません」

「ヴェンデリン。そなたは、優しいの」

そう言ってしなだれかかってくるテレーゼ様の感触に、俺は理性を奪われそうになってしまう。

「テレーゼ様。時期的に不謹慎では？」

何とかかわそうとするが、テレーゼ様からとんでもない発言が飛

び出す。

「陛下も、妾の婿の件は心配しておったからの。安心させるために、妾を存分に種付けする権利を与えるぞ」

「（またかよ！）」

またも飛び出す過激発言であったが、今日も乱入者達によってストップがかかっていた。

テレーゼ様に対抗して、絹のナイトガウン姿のエリーゼ達が室内に入ると一斉にそれを脱ぎ出したのだ。

「良くそんなスケスケなの持ってたね」

「この前、ランジェリーショップで買いました」

テレーゼ様に対抗すべく、エリーゼは黒、イーナは青、ルイーゼは赤、ヴィルマは緑、カタリーナは黄色と。

スケスケのネグリジェ姿を俺達に披露していた。

「テレーゼ様。これからは夫婦の時間ですので」

「残念でした」

「すいません。夫婦が優先です」

「そう。夫婦が優先。色が、この前の晩餐会にいた四つ子みたい……」

「割り込みは厳禁……。みなさん。これって恥ずかしくないですか

？」

五人のネグリジェ姿に圧倒されているテレーゼ様であったが、すぐに怪力を誇るヴィルマに抱えられて部屋の外に出されてしまう。

「あなた。これからもみんなでガードしますのでご安心を」

「助かるけど、大丈夫か？」

俺の、テレーゼに対する態度には迷いが多い。

前世から引き続き女慣れしていないので、あまり強く否定してしまうと悪いような気がしてしまい、同時に彼女は大物貴族なので両国の諍いの原因になるかもとも思ってしまう。

向こうがそれを利用しているのはわかるのだが、始末の悪い事に彼女は女性として魅力的なので困ってしまう。

実は最近になって気が付いただが、俺は思ったよりも年上の女が好きなのかもしれない。

「あなたはお立場上、テレーゼ様に面と向かって拒否し難いと思いますので、私達が排除したします。貴族同士としてではなく、純粋に女同士の争いだと思わせてです」

俺が直接テレーゼ様を排除すると貴族同士の関係と取ってしまう人が出るが、エリーゼ達が排除するのであれば女同士の争いの結果だと思わせる事ができる。

エリーゼは、俺にそう説明していた。

「その代わりに、あなたは私達を十分に愛していただかないと」

「エリーゼの言う通りよ。夫婦の不仲説はテレーゼ様に付け入る隙を与えるし」

「つまり、ボク達以外には目もくれるなという事だね」

「テレーゼ様はしつこい。徹底的にやらないと駄目」

「ヴィルマさんの言う通りですわ。あの方はヴェンデリンさんが思っている以上に強かですから、少しくらい強く言っても大丈夫ですのに」

迷いの多い俺を救ってくれたエリーゼ達であったが、当然それには恩で答えなければならない。

その日の夜は喪中なのも忘れて、五人からたっぷりと搾られてしまうのであった。

「ヴェルも、結婚という監獄に捕らわれたか。これじゃあ、新皇帝陛下が決まっても歓楽街に遊びに行けないな」

「エルヴィンさん。前にも言いましたが、ヴェンデリン様に遊びの女はいけません」

「エルも相変わらずね」

「そういう事を言うから、本命の女性にフラれるんだよ」

「エルには、誠意が無い」

「ですわね。もし来世で出会っても、あなたとは結婚しませんわ」

翌朝、風呂から上がると早朝の鍛錬を終えたエルから昨晩の事でからかわれたが、逆にエリーゼ達から言葉による反撃を食らって朝からノックアウトされてしまう。

「みんな。容赦なさ過ぎるぞ。俺は失恋のショックを癒そうと……」

また出かける支度をしてから貴族議会会議場の見学席に入ると、早速三人目の候補者が演説を開始する。

育ちの良さそうで、あまり派手ではないが高価な服を着た、落ち着いた感じの三十代半ばくらいの青年であった。

ブライヒレーダー辺境伯と同じくらいの年齢であろう。

「中央の皇家から立候補したワルター殿だな」

アーカート神聖帝国は皇帝を投票で決めるのだが、中央で直轄地を管理する皇家が存在している。

爵位は公爵よりも上の大公爵家という名称で、この家から皇帝が出ないと彼らは皇帝を支える官僚機構と同じ扱いになる。

皇帝は決められた予算内で自分が使う人材の雇用も可能であったが、それで全て賄えるわけではない。

帝国の統治には、皇家の協力が必要であった。

その部分は、皇家が有利な点かもしれない。

「他家から来た皇帝は、皇家に気を使うわけだな。これが」

彼らは直轄地を管理して予算を捻出する存在なので、かなり気を使うわけだ。

なるほど、投票で他の家の者が皇帝になっても、皇家からすれば

さほど問題でもないわけだ。

「あまり革新的な事は出来ないんですね」

「そういう事だな」

どうりで、立候補者達が皆似たような事を演説で言うわけだ。

「それでも、皇帝陛下だからな。皇家は取り戻そうとするし、他の家の者も名誉や利益があるから立候補する」

「なるほど」

中央のエリートであるワルター大公爵の演説は、前日の二人とさほど差は無かった。

今の政治状況で、斬新な政策というのも難しいのであろうが。

「彼が当選すれば、アーカート十七世陛下になるわけだ」

皇帝の名前であったが、これは中央の皇家の者が当選するとアーカートの国号に、他家の者がなると幾つかの候補の中から選ぶ。

先代の陛下は、無難に評価が高い皇帝が多いウィルヘルムを選んでいる。

逆に、前者の評判が悪くて二度と選ばれない皇帝名も複数あるそうだ。

「やっと最後のニュルンベルク公爵殿だな」

かなりのタカ派だと聞いているが、果たしてどんな演説をするのか？

少し興味があって耳を傾けるが、彼の演説は過激であった。

「我がアーカート神聖帝国は、現在重大な危機に直面している！」

いきなりの一言に、上座の議員席に座るテレーゼ様や、他の候補者達、更には立候補していないホーエンツォレルン公爵、マイセン公爵なども驚きで目を見開いていた。

「現在、隣国ヘルムート王国は大きく成長しようとしている！　それはなぜか？　英雄が現れたからだ！」

ニュルンベルク公爵がその鷹のように鋭い視線を向けた先は、見学席に座っている俺であった。

導師もかもしれないが、彼はこの状況に至っても目を開けたまま軽いいびきをかいている。

脅威の精神力と言えよう。

「（えっ！　俺？）」

「その英雄は十二歳で伝説の古代竜を倒し、老属性竜を倒してパルケニア草原を開放した。現在、パルケニア草原は大穀倉地帯として開発が進んでいる」

確かに、俺達が開放したパルケニア草原は大規模な穀倉地帯として開発が進んでいる。

ニュルンベルク公爵は、隙なく情報を集めているようだ。

「更に！　古代の名工イシュルバーグ伯爵の工房に、即時に稼動可能な大型魔導飛行船も増えている！　既にその数では、両国との間

に倍以上の差がついている！　加えて、この大陸の名を冠した超巨大魔導飛行船の試運転と訓練も行われているのだ！　これの正式配属は時間の問題であろう！」

両国ともそれに見合う大きさの魔晶石が無く、発掘されていても動かない大型魔導飛行船をそれなりの数保管している。
そのバランスが、俺達のせいで崩れているのは確かであった。

「南端部未開地の開発も始まっている！　更に、大鉱山地帯ヘルタニア渓谷の開放も成った！　この差を埋めなければ、我が国は将来的にヘルムート王国の北征を避け得ない状態となるであろう！」

歯に衣を着せぬヘルムート王国脅威論に、見学席にいたシュルツェ伯爵達も絶句している。
過去にも、たまにヘルムート王国の貴族達が議会の見学を行なっているそうだが、その席で堂々と我が国の脅威を論った者はいなかったそうだ。

「外交的に無礼になるというか、妙なのを刺激するからでしょう？」

「その通りだ」

停戦から二百年以上、既に実戦経験者など存在しない。
喉元を過ぎれば熱さを忘れるというか、非主流派や若い世代などから戦争を望む意見も無視できないくらいには育っていて、両国ともにその鎮火に労力を使っているのだ。

「年寄りや主流派の連中は、今の状態を良しとするからな」

逆に、非主流派でどうにか上に上がりたい者、軍部では出世の糸

口にしたい者、商人などでも戦争になれば儲かると考える人達も多い。

彼らに、全体の利益を考えろと言っても無駄である。

今の体制では自分達はのし上がれないので、戦争による現状の破壊を望んでいるのだから。

現に、軍部で強硬な意見を言うのは、中堅で燻っているような連中が多かった。

「国内の開発の促進に、交易の拡大などは当たり前である！　だが、同時に軍の強化も必要と考える！　現実に、ヘルムート王国の軍予算は微増傾向にある！」

パルケニア草原の開放で防衛管区が増えた分は兵士の数とポストも増加していたし、空軍は地下遺跡に隠されていた魔導飛行船用のドッグを本拠地にするために人員の増加を行なっている。

ヘルタニア渓谷も、警備隊の仕事とポストが増えた。

必要な事なので、僅かではあるが軍事予算が増えているわけだ。

「これに対抗すべく、我がアーカート神聖帝国でも軍備はその量と質を充実させなければならない！」

演説を聴いている中で、軍と関係の深い議員達から歓声と拍手が沸き起こる。

軍に携わっている者からすれば、予算が増えるのは大歓迎なのだ。

そこに、戦争をどうしてもしたいからという理由はあまり含まれていない。

軍の上の方にいる連中からすれば、予算が増えるのは結構だが、負けた時のリスクを考えると戦争自体は反対というスタンスの者達が多かった。

「（国力が増えている隣国への脅威論を理由に、軍の予算を増やして欲しいと。そういう事だろうな……）」

扇動的な演説ではあるが、支持を増やす手法はなかなかに強かである。

皇帝にならなくても、この若き野望家ニュルンベルク公爵はヘルムート王国が注意しなければいけない人物であろう。

「今までが安泰であったからと言って、それに胡坐をかいていては滅亡への一里塚である！　次の皇帝は、大きく変動する両国の関係に対応して、時には痛みを伴う改革を行う必要があろう！　私、マックス・エアハルト・アルミン・フォン・ニュルンベルクこそが帝国の真の繁栄を導くと約束しよう！」

ニュルンベルク公爵の演説に、かなりの割合の議員達が大きな拍手を送っていた。

前の三人の当たり障りの無い演説に比べれば、聞く価値はある物であったからだ。

後の質疑応答でも、ニュルンベルク公爵はテキパキと質問に答えている。

鋭い目付きと視線は気になるが、それも特徴となって目立っているし、若くて顔も悪くない。

何より演説が上手い。

質問への答え方を見ても、彼がとても頭が回る人物なのは確かであった。

「（ただなぁ……）」

地球には、過去にヒトラーとかムッソリーニとか演説が上手い独裁者が存在していた。

そして彼らを選んだ国民は、後に不幸に遭っている。

「（気のせいかもしれないし、ヘルムート王国の事ではないからなぁ……）」

多少の引っ掛かりを感じながらも、四人の候補者による所信演説が終わったので俺達は迎賓館へと戻るのであった。

「ニュルンベルク公爵の評判かえ？　悪くはないの」

夕食後、さすがに毎日ネグリジェで押しかけられても迷惑なので、リビングにみんなを集めて話をする事にする。

テレーゼ様に導師やブランタークさんも集まっていて、彼らと俺は酒を、エリーゼ達はお茶を飲みながら二日間の所信演説の話をしていた。

「彼の、過激な南進論をぶちまける姿は昔からじゃからの。ただ、自領であるニュルンベルク公爵領では財政規律をおかしくするような軍備の増強は行なってはおらぬよ」

その代わりに、精鋭化には自ら陣頭に立って積極的に取り組んでいるそうだ。

「軍の訓練内容に魔物狩りが入っておる」

冒険者達を先導役に雇って集団での狩りを行い、魔物の集団が活性化しない内に上手く撤退する。

他にも、陣地構築訓練と称して街道の整備や開墾の手伝いを行なったり、失業者を軍属に雇ってそれに参加させたりと。

そのおかげか、ニュンベルク公爵領の失業者は他よりも少なく、軍が訓練であちこち動いているので治安も悪くないそうだ。

施政も基本的には善政であり、領民達からの人気が高いとテレーゼは断言する。

「『軍は、団体で精強たれ』だそうじゃ」

「間違ってないな」

導師のような存在など滅多にいないので、軍は団体行動に慣れている方が戦争になれば強い。

別に個人の武芸鍛錬を怠っているわけでもないそうで、ニュルンベルク公爵家諸侯軍はアーカート神聖帝国一精強であると知られているそうだ。

「魔法使いの方はどうなんです？」

「それは、他の公爵家とあまり変わらん」

どうしても中央が優れた魔法使いを囲う傾向にあるので、公爵家でもなかなか魔力量が上級の魔法使いを雇えない。

限られた魔法使いを上手く回しているそうだ。

「それで、ニュルンベルク公爵は次期皇帝になれそうですか？」

「難しいであろう」

若くて有能なニュルンベルク公爵に期待をしている人達は多かったが、別に今までのアーカート神聖帝国の政治が極端に悪かったわけではない。

政策に関しても、今までの流れに少しずつ変化をつければ良いのではないかと考える人も多いわけで、大方の予想では大公爵が勝利して、久しぶりに皇帝の名がアーカートになるのではないと噂されているそうだ。

「確かに、賭けでは大公爵が一番人気であるな」

「賭けなんてしているのですか？」

「皇帝選出の際には、必ず行なわれる名物だと聞いたのである！」

そう言いながら、導師は一枚の木製の掛札を俺達に見せる。

見ると、意外と堅実に一番人気の大公爵に賭けていた。

「穴狙いで、他の人にしないのですか？」

「バウマイスター伯爵よ。賭けとは勝たねば意味が無いのだ！」

「納得の一言だけど……」

「その前に、色々と疑問が出てくるなぁ……」

導師の立場で賭けをしても良いのかとか、その賭け行為自体が違

法ではないのかとか。
イーナとルイーゼは、かなり気になっているようだ。
「賭け自体は、胴元が帝国なので問題ないぞえ」
「帝国主催なのですか？」
「然り。陛下の葬儀代やら、娯楽関連の施設が新皇帝即位まで営業を自粛するからの。下々には、多少の娯楽も必要であろう？」
テレーゼ様の説明に、カタリーナは驚きを隠せないようだ。
「全くもって、理解できませんわ」
「賭けは、胴元が一番儲かるから」
「ヴィルマはボソっと辛辣な事を言うの。面白い奴じゃ。逆に『暴風』殿は真面目じゃの」
実はヴィルマの一言にはお上に対する毒が混じっているのだが、それに気が付いたテレーゼ様は笑いながら彼女を褒めていた。
「何をするにしても、先立つ物が必要じゃからの。何しろ、予算は有限じゃからな」
「何かの間違いで、ニュルンベルク公爵が次期皇帝になるとか？」
「エリーゼ殿は、ニュルンベルク公爵を警戒しておるのか？」
俺と同じく、エリーゼもニュルンベルク公爵に警戒をしているよ

うだ。
彼女は祖父経由からの情報を基に、俺は前世からの知識と勘でしかなかったが。

「得票数では、上手くすれば三位にはなるかの？　今回はそう波乱は無いと思うぞ」

いくら人気があっても、投票するのは議員である。
地縁・血縁・派閥・利権などで他の人に入れざるを得ない人が多いと言うわけだ。

「さて、明日に備えて早めに寝るかの」

その日はテレーゼ様の夜這いも無かったので普通に寝た翌日、遂に次期皇帝を決める投票がスタートしていた。

「誰かが過半数の票を得るまでは、投票を繰り返すらしいが……」

まずは、最初の投票が行なわれる。
議員達が一枚の投票札を持ち、それに羽ペンで記載して投票箱に入れるのだ。
議員全員の投票が終わると、すぐに開票されて集計が始まる。
この作業は、不正を防ぐために全て議員達の前で行われる。

「結果は、もう一度投票です！」

集計係をしていた役人の宣言により二回目の投票に入る。
最初の結果は本命である大公爵が２２１票、ニュルンベルク公爵が１１１票、あとはブランデンブルク公爵が９７票、バーデン公爵が７１票であった。

テレーゼの予想が外れて、ニュルンベルク公爵の得票数は二位であった。
予想以上に、彼は人気があるらしい。
まずは最下位であるバーデン公爵が抜けて、残り三人で再投票が行なわれる。

「次で、大公爵が過半数を取って決まりか」

「テレーゼ様は、そう読んでいるようだな」

今日も目を開けたままで眠る導師を見ない事にして、俺はブランタークさんと話を続けていた。

「得票数の比率から言っても、そんな感じかな？」

ところが、次の投票で波乱が起こる。

「結果は、もう一度投票です！」

議場では予想が外れたせいであろう、ざわついている議員達が多かった。

大公爵が２４９票で、過半数を取れなかったのだ。
あとは、ニュルンベルク公爵が１５４票、ブランデンブルク公爵が９７票となり、ここでブランデンブルク公爵の脱落が決まる。

ブランデンブルク公爵が驚いているが、彼は自分が皇帝になれるとは思っていなかったらしく、むしろニュルンベルク公爵が二位になっている事態に驚いているみたいだ。

「うーーーん。大公爵の勝ちは確実だと思うが……」

問題なのは、テレーゼ様ですら票の流れを読み切れていなかった事だ。

最初の投票で四位であったバーデン公爵の７１票。

この半数以上がニュルンベルク公爵に流れたのは、大方の予想では勝ちが決まっていると噂されていた大公爵に投票をしても、別に優遇もされないであろうという考えなのかもしれない。

「あとは、商人票が流れたのか？」

議席の一割は、非貴族枠になっている。

下手な貴族など圧倒する財力を持つ大商人や大工房の大親方などが大半を占めていたが、彼らはニュルンベルク公爵の新しい経済政策などに期待したいという考えなのかもしれない。

「これで、最後の投票です！」

三回目の投票が始まり、また素早く開票と集計が進んでいくが、その結果に議場中から溜息が漏れていた。

大公爵が２６７票で、ニュルンベルク公爵が２３３票。

結果は最初の予想通りになっていたが、ニュルンベルク公爵の人気が侮れないという結果になっていたからだ。

「これは、今度の皇帝はニュルンベルク公爵に一定の配慮が必要ですね」

予想外の結果に、見学席にいたシュルツェ伯爵達は報告書の草案

の記載に入っていた。
まだ若く過激なニュルンベルク公爵の台頭に、警戒感を抱いての事であろう。
何しろ彼は、南進論者なのだから。
「まだ若いですから、次の皇帝選挙に出る可能性もありますね」
「無いとは言えないな」
とはいえ、その脅威は数十年後の事であろうし、それに対応するのはその頃のヘルムート王国である。
今から気にしても仕方がなく、俺達は早く即位式典を終えて領地に戻りたいと心より願うのであった。

第八十一話　騒がしい夜。

「何か釈然としないな」

「何がだ？」

ウィルヘルム十四世陛下の急逝から十一日後、予定通りに新皇帝の即位式典が行われていた。

テレーゼ様は準備で大忙しでまた前日には迎賓館に戻って来なかったが、準備には間に合ったらしい。

俺達も招待されて、厳かに式典が行われる。

議員や教会の有力者達も参加し、新皇帝アーカート十七世が即位するのだ。

三代ぶりに中央の皇家に皇帝位が戻ったそうで、バルデッシュの市民達も大喜びだ。

式典後にはパレードも行なわれるので、多くの人達が参道に姿を見せている。

先代陛下の治世が悪かったわけではないが、この辺の地元意識はどこの世界や国にでもあるのであろう。

「いえね。ニュルンベルク公爵がですね……」

三回目の投票で接戦にまで追い込んだ対抗馬ニュルンベルク公爵、彼の奮戦は安定はしているがどこか閉塞感もある帝国の状態に何か変化が欲しかった事の現れなのかもしれない。

だからこそ、候補者が二人になった時に予想外の接戦になってしまったのであろう。

「皇帝選挙はこういうルールだからな。次を狙うしかあるまいよ」

ブランタークさんの言う通りであろう。

この国の皇帝は引退が可能なので、ギリギリでニュルンベルク公爵は次の皇帝選挙に出られるかもしれない。

だが、間に合わない可能性もあるので、かなり悔しい思いをしているはずだ。

なのに彼は、いつものように堂々と迷う事なく新皇帝への協力と忠誠を誓っている。

内心に一物を隠してという意見が一部から出そうであったが、俺もどこか釈然としない物を感じていた。

彼は、皇帝になりたかったはずだ。

それに、思った以上に支持者も多い。

下馬評通りに大公爵家の人間が皇帝に選出されて、何も悔しくない素振りをしている事に逆に疑問を感じていたのだ。

「そりゃあ子供じゃないんだから、駄々を捏ねるわけにもいくまい」

「でも、普通の人間なら少しでもそういう態度や表情が滲み出るはず」

「それを隠せる逸材なんだろうな」

思わず、ブランタークさんに本音を漏らしてしまう。

この嫌な予感とは、あくまでも俺の勘でしかなく妄想の類かもしれない。
それでも、少しは悔しさというか、意地の悪さでも見せてくれれば安心できるのにと思ってしまう。

「何にせよ、新しい皇帝は決まった。来年にはまた親善訪問団が組まれるだろう。俺達が呼ばれるかは不明だがな」

既に魔法の披露は済ませているので、本当ならば呼ぶ必要は無いと思われる。
それでも、派手にはなるのでまた呼ばれるかもしれないが。

「あと三日間の辛抱だ。即位式典が終われば娯楽関連の店舗の営業も再開する。何か良いお土産でも買って帰ろうぜ」

式典が終わってからの三日間、特にする事もないのでバルデッシュの観光に出かけたりお土産の購入に時間を費やしていたが、ようやく明日にはヘルムート王国に帰国の途につく。

『ヴェンデリンよ。妾に早う種付けしてくれるかの』

『ヴェンデリン様は、私達への種付けに忙しいのです！』

テレーゼ様の勧誘は相変わらずであったが、エリーゼ達が上手くかわしていた。
特に昨晩のエリーゼの怒気に満ちた台詞は、普段の彼女からは想像も出来ない物であった。
イーナ達も、『エリーゼを本気で怒らせると怖い』と悟ったくらいである。

帝国最終日の夜は、帰宅前日なので普通に部屋で寝ていたのだが、不意に何か聞きなれない音が耳に入ったようで俺は目を醒ましてしまう。

時間はまだ夜中で外は真っ暗であったが、窓の外からカチャカチャと何かの金属が擦れるような音が聞こえる。

ベッドから起き上がって外を見ると、皇宮に沢山の兵士達が駆け込んでいる様子が確認できた。

それと同時に、この迎賓館も金属鎧を着た騎士や兵士達に囲まれているようだ。

「どういう事だ？」

まさか、親善訪問団を抹殺して宣戦布告とか？

いや、それよりももう一つの可能性が予想できる。

「クーデターですね」

「このタイミングでか？」

「はい」

ドアが開き、中に入って来たエリーゼが俺も予想していた最悪の事態を口にする。

この国では皇帝が選挙で決められるくらいだから、その結果に不満を抱いた他の候補者が定期的にクーデターを発生させるのであろうか？

別に好きにして欲しいが、隣国の親善訪問団が訪ねている時には勘弁して欲しいと思ってしまう。

「支度を」

「はいっ！」

いつ敵兵が雪崩れ込んでくるかもしれない。
俺は素早く着替えると、全ての荷物を魔法の袋に放り込んでいた。
エリーゼも、既に冒険者として活動する時の修道着に着替え、得物のメイスを握り締めていた。

「外は敵兵だらけかよ」

「敵というかクーデター軍だね。ボク達の敵になるのかな？」

「捕らえようと言うのなら反撃する」

続けてイーナ、ルイーゼ、ヴィルマも支度をして入って来るが、さすがは慣れているというか既に完全武装をしていた。

「ヴェンデリンさん。妙に手際が良いと思ったら、帝国軍もグルですわね」

「それで、首謀者は？」

「そんなの決まっているだろうが」

更に続けて、いつものドレス風装備のカタリーナと、ローブ姿のブランタークさんも入って来る。

「やっぱり、ニュルンベルク公爵ですか？」

「他に動機がある奴がいねえよ」

軍備増強と将来の南進論を唱える若き野望家ニュルンベルク公爵。
鷹のように鋭い目をした彼は、俺に視線を送っていた。
どうやら、彼の南進政策には俺が邪魔らしい。

普通なら、他国の人間である俺達に兵など差し向ける愚は犯さないであろうからだ。

「捕らえられたら、碌な待遇が期待できないな」

「クーデター政権承認のための人質にされかねないな」

それはシュルツェ伯爵達も同じなのだが、今は自分達の事が精一杯で他人を心配している余裕が無い。

「荷物を纏めて逃げよう」

「賛成なのである！」

最後に導師が顔を出していたが、全員で集まるために部屋を出ると廊下には気絶している数名の騎士と兵士達がいた。
どうやら俺達の身柄を確保しようとして、鉢合わせた導師に殴り倒されたようだ。
相変わらずの強さであったが、この人数で俺達を抑えるのはさすがに無理があるであろう。

「そういえば、シュルツェ伯爵達は？」

「隣館にも兵が入ったようであるな。シュルツェ伯爵達は文官なので捕らえられたであろう」

護衛はいるが、一人につき数名では抵抗しても無駄であろう。
となると、彼らは殺されたか捕らえられた事になる。

「まさか、助けようとは思っていないであろうな？」

「いや、無理でしょう」

導師の問いを、俺はすぐに否定する。
迎賓館と皇宮を囲う兵の数を見れば明らかである。
それに、親善訪問団に加わった時点で、こうなる覚悟はどの貴族でもしないといけない。
俺が助けなかったのが悪いと言うのは、完全に筋違いな意見なのだ。

「まあ、『瞬間移動』ですぐに逃げられますけどね。っ！」

「どうした？　伯爵様？」

全員が支度をしたのでその場で『瞬間移動』の魔法を使おうとすると、突然頭に激痛が走る。

「魔法が阻害されている？」

もう一度『瞬間移動』の魔法を使うが、また頭に激痛が走っていた。
発動するように念ずると、頭の中にまるで切り裂かれたように痛みが走るのだ。

「まさか、魔法が使えない？」

「魔法がであるか？　某は使えているが」

突入して来た兵士達を倒した導師は、普通に拳に魔力を込められたそうだ。

「どういう事だ？」

「バウマイスター伯爵がいたぞ！」

「やっぱり標的になってるな……」

先に突入した仲間が戻って来ないからであろう。

続けて数名の騎士と兵士達が、剣を抜いてこちらに迫って来る。

「正当防衛だからな」

「うぐぅ……」

俺は『エリアスタン』ではなく、容赦なく『電撃』の魔法を放って彼らの意識を奪う。

威力の加減をしていないので死んだかもしれないが、そこまで気を使う余裕などなかった。

「あれ？　魔法が使えますね」

「どうやら一部の魔法限定らしいな」

「一部だけ？」

頭に激痛が走ったようで、ブランタークさんが頭を手で押さえていた。

「試しに、『飛翔』で浮いてみようとしたんだがな……」

移動系の魔法が全て阻害されてるらしい。

魔法が発動せずに、頭に激痛が走ったそうだ。

「うーーーむ。通信系の魔道具も使えぬな」

緊急事態なので導師が携帯魔導通信機を使って陛下に連絡を取ろうとしていたが、これも全く繋がらないらしい。

試しに俺も自分の魔導携帯通信機を使ってみるが、全く駄目であった。

「全部の魔法ではなく、限られた種類の魔法を阻害する魔道具か？」

阻害する魔法の種類が少ない代わりに、ある程度の広範囲で作用しているのではないかとブランタークさんは予想していた。

物凄いオーパーツなような気がするが、ヘルムート王国にも古代魔法文明時代の遺産が多数眠っているのだ。

アーカート神聖帝国に、同様の物が無いはずがなかった。

「それって、つまり……」

アーカート神聖帝国の首都のど真中で、移動・通信系の魔法や魔道具が一切作動していない事になる。

これでは、乗って来た魔導飛行船も飛行は出来ないと考えた方が良いであろう。

「その前に、既に制圧されているのでは？」

エリーゼの言う通りであろう。

ほぼ事実であろうが、精鋭であるニュルンベルク公爵家諸侯軍と、国軍のかなりの勢力が通信を阻害してバルデッシュ中の重要拠点や人物を制圧している。

既に皇宮にも兵が入っているようで、新皇帝アーカート十七世の所在や生死なども不明であった。

俺は他所の国の詳しい政治・軍事事情など良く知らないが、良くもこう見事にクーデターなど起こせた物である。

多分、皇帝選挙に負けた時に備えて密かに準備をしていたのであろう。

「伯爵様。所詮は、他所の国の人間だ」

ブランタークさんが言うように、所詮は他所の国の人間。

彼らの無事などよりも、自分達の安全の方が優先なのだ。

「逃げるしかあるまい」

足が無いのは辛い所であるが、とにかく逃げるしかあるまい。

このまま捕まると首謀者が俺に警戒感を抱いているので、間違いなく碌でもない目に遭うはずだからだ。

「言いたくは無いけどな。女性がいるからな」

皇帝になれなかったからと言ってクーデターの首謀者になるニュ

ルンベルク公爵に理性など求めるだけ無駄であろう。
俺達など、新しい国造りのための生贄くらいにしか思っていない可能性がある。

ニュルンベルク公爵がもし理性的だったとしても、末端まで彼の考えが伝わっている保障も無いのだ。

「とにかく、この妙な魔法妨害がない場所まで逃げましょう」

俺は、魔法の袋の中からある物が大量に詰まった袋を取り出す。
それは未開地で空いている時間に集めた、タングステンなどを使用した銃弾に似せた物であった。
この世界には、銃が存在しない。
弓ならば大型のバリスタなども存在していたが、威力を上げる方法はこれを魔道具化する方向に進化していたからだ。

魔力で大型や特殊な矢を放つ魔道具は軍に配備されているが、銃という考えには至っていない。
火薬も無かったし、それならば魔力を火薬代わりにした方が良いとい考えなのだと思う。

「（エリーゼ達が捕まれば危ないな。それに、俺はヘルムート王国の人間だ）」

しょうもない貴族は多かったが、それでも俺の居場所はあそこにあるし家族は守らねばならない。
そもそも、最初に俺を攻撃して来たのは向こうである。
その報いは受けて貰わねば、ソロバンが合わないであろう。

「エリーゼの嬢ちゃん達もわかったな？　殺せ」

「エリーゼの治癒は逃走に一番必要な物である。最優先で守り、最悪他の人間が犠牲になるしかないのである」

ブランタークさんと導師の表情が鋭くなった。

二人は、現役冒険者時代などに人を殺した経験があるのかもしれなかった。

「エル。大丈夫か？」

「ヴェルこそ大丈夫か？」

「さあな」

実は、もう既に百人近く殺しているのだが、あの時は死体など見ていないので罪悪感などは感じていなかったのだ。

「イーナは？」

「やるしかないわ！　捕まったらどうなるかわからないし」

「ルイーゼは？」

「魔闘流は、戦場格闘技が元になっているんだよ。躊躇う理由が無い」

「ヴィルマ」

「私がヴェル様の妻になった理由は、こういう時のため。やれる」

「カタリーナは？」

「ここで死んでしまっては、せっかくのヴェイゲル家復興が泡と消えてしまいますわ。やるしかありません」

みんな、それぞれに覚悟を決めたようだ。

最後に、エリーゼに聞いてみる。

「今は時間が惜しいです。早く行きましょう」

「わかった」

俺達は周囲を警戒しながら、迎賓館の裏口からバルデッシュの市街地に逃げ込む事にする。

下の階に降りると、既に他の廊下は敵兵に占拠されていた。

数名の使用人やメイドが倒れていて、彼らは抵抗した際に斬り殺されたようだ。

「トーラスめ！　失敗したのか！」

「そりゃあ、するだろう。俺達相手に、あの人数では不足だぜ」

そう言うや否や、ブランタークさんが小さなウィンドカッターを複数発動させる。

標的となった兵士達は首を切り裂かれ、血の噴水をあげながら倒れ伏していた。

「酷い有様だな」

下の階は全滅であった。

少しだけ部屋を覗いてみるが、魔導ギルド本部などから来ていた魔法使い達が数名死んでいた。
いくら強力な魔法が使えても、不意を突かれれば意外と呆気なく死んでしまうのだ。

「ニュルンベルク公爵は、本気の〇チガイかもな」

普通ならば、ヘルムート王国の人間は移動を制限するとか軟禁するとかして、手を出さないのが常識であろう。
なのに彼は、我が国の貴重な魔法使いを複数殺してしまった。

「戦争になったら、強力な駒になるからであろう」

「クーデターに成功しても、いきなり戦争は無理なのに……」

大方導師の考え通りなのであろうが、こんな〇チガイに付き合っている時間が惜しい。
味方の救出は諦めて、すぐに外に出る事にする。

「バウマイスター伯爵だ！」

「手柄首だ！」

「大人気であるな」

「アームストロング子爵もいる！　殺せ！」

「導師も人気ですね」

「某は、女性と子供に人気がある男なのであるがな！」

冗談なのか、本気なのか？
そう言うのと同時に、魔力を纏わせた拳で次々と兵士達を倒していく。
良く見ると全員の首を一撃で圧し折っていて、彼からおかしな方向に顔を向けて倒れていた。

「ひぃーーー！」

その強さに恐れを成した兵士が剣をメチャメチャに振り回すが、その剣も導師の拳による一撃で簡単に折られてしまう。
剣を失った兵士は逃げようとするが、背中を向けた瞬間に頭を掴まれて首を圧し折られてしまう。

「某にも家族があるのでな。許せよ」

導師に掴まれたままの兵士の死体は、首が折れているのでマリオネットのようにダランとぶら下がっていたが、すぐに廊下の脇に投げ捨てられる。

「急ぐのである」

それからは、ブランタークさんがウィンドカッターで、導師は魔力を拳に込めて、俺は作ってあったタングステン製の銃弾を魔力で飛ばして兵士達を排除していく。

椎の実型で、先端をダムダム弾のようにしている銃弾は、兵士達の顔に当たればその顔を砕き、お腹に当たれば内臓をズタズタに切り裂く。
スプラッターな光景が広がるが、これも生き残るためだと視線を

逸らしながら進んでいく。

「意外と数が多いな」

「メインターゲットの皇宮の隣だからでしょう」

一緒に剣と槍を振るっていたエルとイーナの得物も、既に血の色で染まっている。

二人は得物の切れ味を戻すために、倒れている兵士が着ている服で素早く拭っていた。

意外と動揺が無いというか、動揺している暇が無いとも言える。

「粗方始末したな。外に出よう」

物資や食料を入れるための裏口から裏庭へと出ると、そこには今まで姿を見ていなかった人物がいた。

テレーゼ様が五名の家臣と共に、逃がさんとする敵の兵士達と小競り合いを続けていたのだ。

テレーゼ様の方には既に二名の犠牲が出て倒れていて、敵側は四名の兵士が倒れている。

奮戦してはいるようだが、敵側の兵士が多くて外に出して貰えないようだ。

「助太刀します」

ブランタークさんのウィンドカッターと俺の『銃弾』魔法で、裏門を中心に集まっていた兵士達は全て倒されていく。

首を切られ、顔や体に穴を開けられ、生存者は一人もいなくなっ

ていた。

「助太刀すまぬの」

ナイトガウン姿のテレーゼ様は、血の付いた剣を持ったまま俺達にお礼を言う。

「自ら兵を斬ったので？」

「本来あってはならぬ事じゃが、妾も数に入れないと厳しい状況であったからの。剣は、幼少の頃より最低限の鍛錬を受けておっての」

血が付いているという事は最低でも一人は斬っているはずで、俺は剣の腕前ではテレーゼ様に勝てないようだ。

「エリーゼ殿も済まぬな」

「いえ。まだ助かるでしょうから」

エリーゼは、倒れていたテレーゼ様の家臣達に治癒魔法をかけていた。

「助かりました」

「テレーゼ様。申し訳ありません。思わぬ不覚を取りまして」

「良い。妾を守るために盾となったのじゃ。名誉である」

彼らは無事に起き上がってから、エリーゼにお礼を言う。

テレーゼ様には不覚を取った件を謝っていたが、それを彼女は名

誉だと逆に褒めていた。
やはり彼女は、貴族として侮れないカリスマと能力を持っているようだ。

「さてと。逃げるとするかの。ヴェンデリンは魔法で逃げぬのか？」

「テレーゼ様。実は……」

通信や移動系の魔法が封じられていると話すと、彼女は一瞬だけその表情を曇らせる。
一瞬なのは、今一番偉い自分が不安そうな顔をすれば家臣達に動揺を与えてしまうからであろう。

「妙な物を……。では、味方の応援は当てにできぬな」

連絡不能で孤立している時に、クーデター軍が奇襲をかけてくる。
この攻撃のせいで、バルデッシュ内にある重要拠点は全滅であろうとテレーゼ様は予想していた。

「じゃが、数多ある重要拠点に兵を分散した。事前に通信不能なのは知っているし、ニュルンベルク公爵家諸侯軍は精鋭が多い。伝令などで連絡は万全であろうが……」

バルデッシュ全てを抑えられるはずがない。
上手く街中に逃げ込んでから、北方のフィリップ公爵領に逃げれば成功の目はあるとテレーゼ様は述べていた。

「では、俺達は南に」

「残念ながら、南はニュルンベルク公爵領じゃぞ。南部の貴族も怪

しいのぉ」

今回のクーデターに参加している可能性があり、徒歩や馬で逃げるのは難しいであろうと説明していた。

「我がフィリップ公爵領ならば、逃げ込めれば安全じゃ。駅馬車でも奪って逃げるかの」

ここバルデッシュにはフィリップ公爵領へと続く北方街道が整備されていて、更に大型の駅馬車もあるそうで、これを使えば脱出も可能であろうと。

「それしかないか……」

「では、行こうぞ」

方針が決まったので迎賓館を出ると、テレーゼ様は俺達を下水道へと案内していた。

「町中よりは、下水道の方が安全であろう？」

「良く知っていましたね」

「万が一の事に備えるのも貴族じゃからの」

先導している家臣に、普段から調べさせていたのであろう。

やはり、俺よりも遥かに貴族として優秀なのだ。

「もう少しで、駅馬車の停留所に着くぞ」

臭かったが、さすがにクーデター軍もここに兵士を回す余裕がなかったようだ。
一人の兵士とも遭遇しないまま地上へと顔を出すが、そこにはやはり敵兵達が待ち構えていた。

そして……。

「おやおや。バウマイスター伯爵殿ともあろう方が、ドブネズミの真似ですか？」

そこには、赤いローブ姿の魔法四兄弟の長男アインスが待ち構えていた。

「クーデターに賛同しておったのか」

テレーゼ様は、苦々しいような表情を浮かべていた。

「ニュルンベルク公爵様は、俺を筆頭魔導師にしてくれるってよ！なら、裏切って当然だろうよ！」

いきなりアインスの口調が変わる。
いや、多分こちらの方が素なのであろう。
子供の頃から皇宮に居た癖に、なかなかに下衆な奴に育っているようだ。

「筆頭魔導師は、ブラットソン殿が相応しいと思うがね」

魔力は多少アインスの方が上であろうが、知識・経験・人格と、比べるだけ無駄なくらいブラットソンさんの方が上であったからだ。
俺はわざと挑発するように、アインスに語り掛ける。

自分よりもブラットソンさんの方が筆頭魔導師に相応しいと言われて、アインスは一瞬だけ顔に怒気を浮かべていた。

「そうだな。ブラットソンの方が相応しいかもな。だが、もう死んだ奴は役職には就けないだろう？」

アインスはヘラヘラと笑いながら、俺達に前に何かを放り投げる。

「ひっ！」

「まさか……」

エリーゼ達から短い悲鳴があがる。

アインスが放り投げた物は、ブラットソンさんの首であった。

「お前が討ったのか？」

「ああ。俺が殺したのさ！　魔法使いが減れば、それだけ俺達の価値も上がるからな！　今の俺様は筆頭魔導師様というわけだ！」

「お前如きに、ブラットソンがだと……」

ブランタークさんは、今まで見た事が無いほどに顔を真っ青にさせながらアインスに問いかける。

「俺の方が少しだけ魔力が多いけどな。そこまで差があるわけでもない。だからちょっと、策を弄しただけさ」

「そう、四人で報告に行ってな。ニュルンベルク公爵が反乱を起こしましたと」

「驚いている間に、死角からナイフでズブリ」

「魔法を使わなければ、あんなジジイ。僕達の敵じゃないね。ジジイは引退できなきゃ、将来有望な僕達の噛ませ犬で十分さ」

アインスの後ろから、青、黄、緑のローブを着たツヴァイ、ドライ、フィーアの四人が姿を現す。

イメージ的には某戦隊ヒーローみたいであったが、その言動は悪役その物でしかない。

彼らに対しては、ただ嫌悪感しか浮かばなかった。

「テメェら！」

「ジジイ。あんまり怒ると卒中になって倒れるぜ」

「あのジジイは、弱いから殺されたんだよ」

「どうせ、ジジイも後を追うから安心しろよ」

「一緒に地獄で茶でも啜ってろ。ジジイ同士でな」

激高したブランタークさんをフィーアが小ばかにした口調でからかい、他の三人もそれに同調して下品な笑い声をあげていた。

「ブランタークさん。落ち着いて」

俺はブランタークさんに静かに声をかける。

「すまない。一瞬我を忘れた」

声をかけられて我に返ったブランタークさんは、すぐにまた冷静な表情に戻っていた。

「それに、もうすぐ死ぬ奴らの言葉です。精々、遺言だと思って聞いてあげましょう」

「何か言ったかな？　バウマイスター伯爵」

「言ったよ。まだ若いのに難聴か？　お前達はもうすぐ無様に死ぬんだよ」

優秀な魔法使いだから、殺すと惜しいという感情すら湧いてこない。

どうせ他国の魔法使いだし、こいつらは性根が最悪である。

ここで殺しておかないと、俺の人生にまた邪魔をしてきそうな予感しかしない。

その前に、手を抜いて戦闘不能にするのも難しいというか、俺が不覚を取りかねないので殺すしかないのだ。

「面白い冗談だな！」

「テメェの方が死ね！」

「女連れでイチャイチャしやがってよ」

「テメェを殺したら、みんなで死ぬまで犯してやるから安心して死ねや」

「やれやれ。本当にちゃんと皇宮で教育を受けていたのか？」

怒るのを通り越して、ただ呆れるしかない。

才能があるせいなのか、よほど甘やかされてきたのであろう。

「まあどうでもいいや。下衆の方が殺しても罪悪感が少ないし」

「はんっ！　俺達四人に勝てると思っているのか！」

アインスがそう吼えた瞬間、状況が動いた。

まずは、導師が瞬時に魔法で身体機能を強化してから、青いローブのツヴァイの前に瞬時に移動をしてその首を一撃で圧し折る。

更にほぼ同時に、ルイーゼも黄色いローブのドライの前に移動して大量の魔力を込めた正拳突きを放つ。

これにドライは何とか対応して『魔法障壁』で防ぐが、ルイーゼによる一点集中突破による拳の威力によってドライの『魔法障壁』がガラスが割れるようなパリンという音と共に砕け、『魔法障壁』を張るために前に出していた両手の平も砕き、対魔法防御力が高いローブすら打ち破ってその腹に大きな穴を開けていた。

「ひぃ！」

「化け物！」

「ボクはこんなに可愛いのに、化け物はないと思うんだ」

ドライは、後方に内臓と背骨の破片と血を大量にぶちまけながら即死する。

ルイーゼの一撃の威力が強過ぎて、彼女はほとんど返り血を浴びていなかったが、ドライの後方にいた兵士達は彼の血と肉片によっ

て血塗れになると同時に恐怖で悲鳴をあげていた。

だが、彼らが声をあげていられる時間は短かった。

まるでブーメランのように飛んで来た複数のウィンドカッターが、彼らを容赦なく切り割いていたからだ。

「私は淑女ですので、ヴェンデリンさん以外の男性のお相手はゴメンですわ」

一秒も経たない内に、アインスの手駒は無残にも壊滅していた。

慌てた彼は唯一生き残っているフィーアに縋るように視線を向けるが、既に彼もこの世にはいなかった。

緑色のローブを着た彼には既に首が無く、切り口から血が噴水のように吹き上がっていたのだ。

そして、それを成したのは……。

「ざまあねえな」

大半の魔力を使い果たしたブランタークさんであった。

「そんな！　フィーアも、お前よりも魔力が上で！」

「そうだな。だが、俺はここで魔力を使い果たしても困らないからな。全力で魔法が撃てたわけだ」

残り少ない予備の魔晶石でわずかな魔力を補充しながら、ブランタークさんはアインスに勝ち誇った表情を浮かべていた。

「ブラットソンを不意打ちした癖に、ゴタゴタと御託が長かったな」

いくら魔法に優れていても、撃つ前に殺されれば意味が無い。
導師とルイーゼの魔法使いとしての特性も忘れて偉そうに御託を並べていたアインスには、最初から負ける未来しかなかったのだ。

「さてと、残るはお前だけだな」

「ひぃーーー！」

「仲が良かった兄弟が死んだんだ。お前も地獄に付き合ってやれ」

「ひぃーーー！」

俺が一歩前に出ると、アインスは恐怖で足が縺ったのか？
尻餅をついて後退さるようにして逃げようとする。
だが、すぐに何かに当たって後ろを振り返り、その正体に恐怖で顔を引き攣らせていた。
それは、自分の殺された兄弟達と兵士達の無残な死体であり、それでも逃げようと後退りを続けると、彼の特別製の真っ赤なローブが血や血のせいで出来た泥によって汚れていく。
更に、股間の部分に染みが広がっていき、彼は恐怖のあまり失禁してしまったようだ。

「一人でも逃がすと面倒だな。それとアインスよ。お前が死ぬ間際に恐怖で失禁した事実は秘密にしておいてやる。安心して死ね」

「ざけるなぁーーー！」

勇気を振り絞ってアインスは、頭上に直径一メートルほどの巨大な火の玉を形成する。

「みんな燃えて死ねぇーーー！」

「無駄だ」

この期に及んで、まだ魔力の配分を検討して魔法を作っている。

この場面で起死回生を狙うのであれば、ブランタークさんのように魔力というチップを一気に張る必要があるのに。

俺は、すぐに水の玉を魔法で作ってアインスの火の玉を相殺して消し、瞬時に直径三メートルほどの火の玉を作ってアインスの頭上から落とす。

「俺の火よりも何でぇーーー！」

「俺に聞くな。あの世で神様にでも聞け」

アインスが最後の抵抗で『魔法障壁』を張るが、更に魔力を込めて力技で破壊。

守る物が無くなったアインスは火の玉に飲み込まれ、断末魔の悲鳴と共に焼け死んでいく。

同時に他の死体も焼け崩れていき、火の玉が消えた頃には何も残っていなかった。

「ふう……。では、行きましょうか」

今日は、散々な一日である。

大量殺人をしないと生き残れない最悪の日なのだから。

人を殺した事実を振り返ると精神的にドツボに嵌る可能性があるので、今はとにかく逃げるのを優先する事にしていた。

「みんな。空いている馬車に！」

すぐ傍に一台、十数名乗りの大型の馬車があるので、それに全員で乗り込む。

御者席にテレーゼ様の家臣が座り、その隣に前方の敵を排除するために俺が、あとはカタリーナが後方の警戒に当たる事になった。

走りながら敵を排除するので、ルイーゼや導師よりも向いているからだ。

ブランタークさんは残りの魔力が少ないので、それを回復させながら予備になっている。

「では、行きましょう」

「その前に……」

俺は巨大な火の玉を魔法で作り、それを駅馬車の待機場や、馬小屋へと放っていた。

大小数十台の馬車やそれを引く馬達が焼けていく。

馬は可哀想な気もするが、追跡の足に使われては逃走に失敗する可能性もあるからだ。

「バウマイスター伯爵！　あなたは！」

ところが、御者の若い家臣はそれが気に入らなかったようだ。

俺に食ってかかっていた。

「何か不都合でも？」

「馬車も馬も、帝国の大切な資産なのですぞ！」

馬車も馬もそれほど安い物でもないし、魔導飛行船以外では大切な庶民や商人の足でもある。
それを全て焼くなど、あなたは所詮は敵国の人間だと。

他国の貴族相手なので偉そうに人に説教を始めていたが、俺はその胸倉を掴んで静かに問い質す。

「一つ聞いてもいいか？　俺達は脱出に成功したが、フィリップ公爵一行はここで死んだ事にしてもいいのか？」

「どうしてそういう事になるのですか！」

俺と家臣の雰囲気が変だと気が付いたようで、すぐにテレーゼ様とブランタークさんが馬車の中から顔を出す。

「何事じゃ？」

「テレーゼ様！　バウマイスター伯爵は！」

御者役の家臣は、待機場に置かれた全ての馬車と馬小屋の馬が焼かれている光景を見るようにと、テレーゼ様に促す。

「鉄道馬車は帝国の貴重な資産なのにあまりに酷い！　これは、ヘルムート王国の我が国にダメージを与える策略なのでは？」

俺は、追撃部隊が使うかもしれない足を潰しただけなのだが、彼から言わせると俺はアーカート神聖帝国に害を成す存在のようだ。
腹が立って来るが、テレーゼ様は何も言わない。
それよりも、俺の対応を待っているような節がある。

「（やってやれるか！）」

さすがに少しキレてしまう。

他国の貴族とはいえ、公爵で選帝侯だからと下手に出ていれば、露骨な誘惑をしてエリーゼ達を怒らせるは、今は俺達のおかげで助かっているのに家臣がケチをつけてくる。

もう遠慮は止める事にする。

いくら女でも、彼女は他所の国の貴族なのだ。

「では、その可哀想な馬車と馬に殉じて死ね」

俺は、御者役の家臣を馬車から突き落とす。

それと同時に、テレーゼに宣言していた。

「降りていただきましょう。テレーゼ殿」

「いきなり無体な話じゃの」

テレーゼは、特に動揺するでもなく俺を興味深そうに見ていた。

「あなた達が邪魔になりました」

「フィリップ公爵領で匿うつもりじゃがの」

一見良い考えに見えるが、これには罠もある。

もしこの窮地を脱すれば、テレーゼはニュルンベルク公爵を討つ兵を挙げるはずで、俺達はその戦力として期待されているはず。

中央政府に雇われている高位の魔法使い達は、あの四兄弟を見る

にクーデター軍に合流している者が多いはずだからだ。

彼らに対抗するために、俺達をフィリップ公爵領に引き摺り込もうとしているのだ。

「偶然とはいえ、他国の貴族であるあなた達を助けたはずなのですが、それが気に入らない方がいるようで」

馬車から突き落とした家臣を見ると、彼は俺に反抗的な視線を向け続けている。

「そこまで行かなくても、普通にニュルンベルク公爵領を避けて南下すれば脱出は可能ですから」

ニュルンベルク公爵はクーデターを成功させるために、何らかの魔道具で移動と通信の魔法を使えなくしている。

新皇帝が決まった直後なので、バルデッシュに滞在している貴族の当主は多く、これを抑えていれば多くの貴族領はトップの不在に連絡不可能が重なって機能不全に陥っているはず。

フィリップ公爵は、そこを突いて素早く全土の平定作戦を行なうつもりであろう。

ならば、俺達だけで南に逃げた方がヘルムート王国に逃げられる確率は上がる。

平定作戦を考えると、フィリップ公爵もそう俺達にだけ兵は割けないし、多少の兵力であれば力技で排除可能である。

むしろ、テレーゼ達がいる方が困難が大きいであろう。

「我らは自力で戻りますので悪しからず。フィリップ公爵殿は、自

らの実力で領地に戻られるが良かろう。迎賓館の裏門から出られた件と、あの四兄弟の始末については祝儀だと思ってくれればいい」

俺とテレーゼの間に緊張が走る。

導師もブランタークさんも、止めには入れないと思っているようだ。

口を閉じたままであった。

「聞いたか？　エッボ」

テレーゼは、馬車から落とされたままの家臣に声をかける。

エッボとは、俺をテロリスト扱いした家臣の名前のようだ。

「この緊急事態に、帝国の資産がどうこうとは瑣末な問題じゃ。見よ。我らが無能なせいで、ニュルンベルク公爵とそれに賛同するバカ達がクーデターゴッコで大騒ぎじゃぞ」

クーデター軍は、兵力を分散して重要拠点の占拠や、貴族達の捕縛か殺害を行なっているようであったが、既に各所から火災の炎が立ち上っているのが確認できる。

「妾達だけでは、裏門の前で殺されていたの。どうやら、ニュルンベルク公爵は新皇帝の権力が大きい国を作りたいようじゃの」

来る南進に備えて、強大な軍備とそれを皇帝が一手に指揮する国家を造る。

そのためには皇帝を選挙で選ぶなど無駄であるし、大きな力を持つ選帝侯などは潰して中央の力を増したい。

だから、テレーゼは命を狙われていたというわけだ。

「ここまで助けて貰った恩人に、お門違いも甚だしい発言じゃぞ」

「テレーゼ様！　他国の貴族に借りなど作ってはいけません！」

作るというか、それを表明するなという事のようだ。

その貸し一つが、後でどれだけ利息を付けて圧し掛かってくるのか？

わからなくはなかったが、彼は今の状況を理解しているのであろうか？

「平時ならともかく、今は非常時である。いいか？　妾達はバウマイスター伯爵達に縋らねば領地に戻れないのじゃぞ」

「我らがいれば！」

「気合や忠誠心だけで、それが出来るかどうかを判断するでない。今、妾達が一番成さねばならない事は何か？　どれほど無様でみっともなくても、生きて領地まで逃げ帰る事である」

「テレーゼ様……」

「わからねば、バルトルトに代われ。時間が惜しい」

「いえ。私が御者を務めます」

正直代わって欲しいが、今は無事にバルデッシュを脱出する事である。

「家臣が無礼な口を利いてすまぬ。妾達を領地まで連れて行って貰えぬか。お礼はいくらでもしよう」

頭まで下げられてしまったので、ここで断るのも難しいと思ってしまうのは、やはり俺が甘いからなのであろうか？

「帝国の資産に道を塞がれたら、保全するのが当たり前なので？」

一応釘を刺しておく。

敵を排除しているのに、帝国のインフラや資産を破壊するテロリスト扱いでは気分が良くないばかりか、後に因縁でもつけられかねないからだ。

「そんな余裕はないの。それどころか全滅させないと駄目じゃ」

「どうしてですか？」

「逃走ルートが知られると、追っ手が厳しくなるからの」

北方の大街道は、フィリップ公爵領へと直通するルートだけではないらしい。

途中で幾つもの支線に分かれていて、他の都市や貴族領を経由してフィリップ公爵領へと続く。

中央のルートを使えば一番距離は短いが、当然追手はかかるであろう。

それならば、どこかの支線に入った方が追手は少なくなる。

いくらニュルンベルク公爵でも、どの支線経由でフィリップ公爵領に戻るかはそう簡単に予想がつかないからだ。

支線ならば、自然と追手の数が減るというわけだ。

「だそうだ。エッボ。お前の無駄な話で、前を塞ぐ国家資産が増えていない事を祈れ」

「ぐっ！」

「ムカついて裏切りたくなったらいつでも言えよ。その場で焼き殺してやるから」

「そう虐めてくれるな。エッボは、少し正義感が強い男なのじゃ。しかし、実戦のせいか高ぶっておるの」

「こういうテンションにでも持っていかないと、人なんて殺せないでしょう？」

前世の俺は、軍人や傭兵ではなかったのだ。
人を殺すのに普通でいられるわけがない。
自分でも、相当に荒れて気分が高ぶってるのはわかるが、今はそれを鎮めている余裕がなかった。
それと、こういう気分にしておけば俺は人を殺せるようだ。

「そうじゃの。では、沈静化と報酬の前払いじゃ。頑張ってくれよ」

そう言うやいなや、テレーゼは自分の唇を俺の唇に重ねてくる。
突然のキスに、俺は全く対応できないでいた。
エッボもブランタークさんも、驚きのあまり何も言えないようだ。

「では、早く行くぞ」

「俺は何も見ていない。俺は何も見ていない……」

とんでもない物を見たと思ったのであろう。
小声で繰り返し呟きながら、エッボは馬車を発進させる。

暫く街道を進むと、やはり検問をしている部隊が存在するようだ。
俺達の馬車を見付けて、すぐに阻止行動にはいってくる。

「国家の資産だけどどうする？」

「テレーゼ様の命令が全てに優先する！」

どうやら虐め過ぎたらしい。
エッボという家臣は馬に鞭を強く入れて馬車のスピードを増し、強硬突破を図るようだ。

「止まれ！」

完全武装の兵士達が前を塞ぐが、抵抗は排除して逃走ルートを特定される危険を残すわけにはいかない。
彼らが立っている範囲全てから魔法で『火柱』をあげる。
人間では生き残れない威力と温度に設定したために、兵士達はすぐに体に火が付いて全員が悲鳴をあげながら地面を転げ回る。
熱された金属製の鎧を脱ごうと暴れる者達もいたが、すぐに静かになって炭のように真っ黒になって体から火をあげていた。
彼らは、黒焦げになって全員が焼け死んでいた。

「生き残りはなしだ」

続けて馬車の通行の邪魔にならないように、炭のようになった兵士達の死体を風の魔法で道の外に吹き飛ばし、馬車はそのままのスピードで進んでいく。

エッボはまた何か言いたいようであったが、今度は口を閉じて馬車を走らせる事に専念しているようだ。

「文句があるなら、皇帝になれないからと言ってクーデターを起こす狂犬に言え」

狂犬とは、ニュルンベルク公爵の事である。

あの男が俺に睨みつけるような視線を向けたので嫌な予感はしていたが、こういう嫌な予感は当たってしまう。

本当に、嫌になってしまう。

「それで、どのルートで行くんだ？」

「『ミズホ伯国』経由です」

「『ミズホ伯国』？」

「独自の文化を持つ、古の民族が運営する自治領です。過去に何度も帝国の侵攻に対抗して大打撃を与え、敵に回すと厄介な事から領主に上級伯爵の爵位が与えられた経緯があります。外交権のみを帝国に委ねた保護国の扱いですね」

俺に含む物があるエッボであったが、ミズホ伯国については丁寧に説明をしてくれたようだ。

仕事だと割り切っているのであろう。

「そこで一旦休憩をしてから、フィリップ公爵領を目指します。あの国は半独立国なので、まだニュルンベルク公爵も手を出さないはずですし」

バルデッシュを脱出した俺達は、一路馬車で北方のミズホ伯国を目指すのであった。

第八十二話　ミズホ上級伯爵。

バルデッシュで起こったクーデターから逃れた俺達は、ただひたすらに北に向けて馬車を走らせていた。
ニュルンベルク公爵軍による追撃は、北方主要街道を走っている時に一回、ミズホ伯国経由の支線に曲がってからさらに一回受けていたが、これはカタリーナが全て『ウィンドカッター』の魔法で派手に切り裂いていた。

通信妨害のせいで、味方同士でも連絡が十分ではないのか？
反乱軍は、あまり有能な魔法使いを追撃に参加させていなかった。
ファイヤーボールなどを飛ばしながら追撃してきたが、全てカタリーナの『魔法障壁』によって防がれ、反撃されて殺されている。

『高位の魔法使いの方々は追撃に現れませんわね』

『中央の把握に忙しいのだと思う』

カタリーナは、倒した魔法使いの死体から装備品や魔法の袋などを回収しながら俺に話しかけてくる。
まるで追剥ぎのようだが、これも戦場の習いなのだとブランタークさんは言っていた。

『どんなに偉くて強い奴でも、死ねば首無しで下着だけになって、躯は腐るか獣の餌だ。弱い奴は殺されて全てを奪われる』

『ブランタークさんは、戦場の経験があるのですか？』

『某もブランターク殿も、冒険者として長年活動していたのでな。官憲の目が及ばない場所で、海千山千の冒険者が仕事をするとそういう事もあるのだと、バウマイスター伯爵には理解して貰うしかないのである』

どうりで、導師もブランタークさんも何の躊躇いもなく人を殺すわけだ。

経験者なのだから当然であり、俺達もこの丸一日ほどで随分と人殺しが上手くなった物だ。

「テレーゼ殿。『ミズホ伯国』ってどんな国です？」

「我らとは、かなり文化形態が違う国じゃな」

馬を休ませる時間以外は全て移動に費やしていたが、もう丸一日も走ればミズホ伯国に到着して一息つけるそうだ。

俺は馬車内の向かい側の席に座るテレーゼに、ミズホ伯国の事を聞いてみる。

「古の、まだアーカート神聖帝国が成立する前には存在していた古き民族の国よ」

黒髪・黒目の者が多く、独自の文化を持つ独立した国だそうだ。

「フィリップ公爵領の主要民族であるラン族よりも前から、帝国にはその存在が知られておる」

フィリップ公爵領と接しているアキツ大盆地を生存圏とし、人口

は百二十万人ほど。
盆地なので夏は暑く冬は寒いそうだが、水が豊富なのと寒暖の差の激しさから水田で美味しいお米が主食として栽培され、特産品としても有名らしい。
バウマイスター伯爵領以下の南方でも米は大量に採れるが、味で言うとミズホ泊国産の方が圧倒的に上という評価だそうだ。
そういえば、日本の有名な米の産地も寒暖の差が激しい北陸や東北地方が多かった。
加えて、手先が器用で工芸品や魔道具の製造技術では群を抜く存在だそうだ。

アーカート神聖帝国の臣民達の中でもかなり豊かな生活を送っていて、領内を訪れる客は丁寧にもてなす。
大商会や大工房で領外に進出して稼いでいる所も多く、彼らは地球で言うところの華僑のような存在になっていた。

「（日本人みたい……）」

「着る物、書物、食べ物、建造物と。全てが独特で、バルデッシュにも建っておるの」

最初に到着した時に見えた、瓦屋根や寺院風の建物がミズホ風と呼ばれる建築物なのだそうだ。
俺から見れば、普通に和風にしか見えなかったが。

「普段は大人しい者が多いの。じゃが、戦になると途端に凶悪になる」

サムライと呼ばれる騎士達が、刀という片刃の剣を振るって死に物狂いで己の領地を守るらしい。

というか、どう聞いても昔の日本その物である。

「ラン族の手前にいた連中じゃ。帝国は何度も討伐の兵を出しておる」

征服は全て失敗し、彼らも甚大な被害を出したが、帝国の方もその度に洒落にならない損害を受けたそうだ。

「当時の帝国は、東西南北全てで領域を拡大しておった。じゃが、ミズホ派遣軍の損害は毎度酷いので、その度に他の方面の進撃も止まっての」

それでも、フィリップ家がラン族の地を制圧するまで定期的に出兵は行われていたが、そろそろミズホ人によって冥土に旅立った味方兵士が数十万人に達しようかという時、遂に時の皇帝が折れて彼らの自治権を認めていた。

「彼らは、アキツ大盆地から外に領地を求めないからの。上級伯爵などという特殊な爵位を与え、領地は伯国と呼んで他の伯爵領とは違う扱いにした。年に一度の朝貢と、外交権をアーカート神聖帝国に委ねる条件でその存続を認めたのじゃな」

その外交権も、要はヘルムート王国と勝手に交渉するなという物である。

「帝国は、ミズホ人とヘルムート王国に組まれるのを恐れたのじゃ」

こうしてミズホ伯国は成立したのだが、一度講和を結べばミズホ人は大人しかった。

観光客も受け入れるし、高品質な織物、酒、食品、工芸品、魔道

具などは高級品として人気が高い。

「我がフィリップ公爵領で最初に漁をしたのもミズホ人じゃ」

海の無い盆地に住んでいるのになぜか海の魚が大好きで、フィリップ公爵領で漁を行う漁師の半分はミズホ人だそうだ。

「出稼ぎの者が多いのじゃ。食べられる魚の知識や、処理の仕方や保存・輸送方法にと詳しくての。漁獲量制限、漁礁の設置、養殖などの知識も全て彼らからじゃの。あとは、妙な海藻を干したり、カツオとか言う魚で木のように堅い棒を作ったりと。普段は温厚で変わっている連中じゃの」

「（来たぁーーー！　日本的文化来たぁーーー！）」

王都で人殺しばかりして心が荒みかけた俺に、久々のご褒美である。

この西洋風ファンタジーな世界に、日本風の文化を持つ国家があった。

観光に、食事に、文化にと。

これは滞在して楽しまねばならないであろう。

「フィリップ公爵領とミズホ伯領は隣接しているからの。一泊くらいしても構うまい。いや、何日か滞在する必要があるかの？」

「援軍の要請ですか？」

「そういう事じゃの」

突然のクーデターで、他の選帝侯や貴族達の生存や去就が不明な

ので、テレーゼはまず北方の近隣諸侯達を纏めるという仕事から始めないといけない。

「テレーゼ様。そのミズホ伯国は、ニュルンベルク公爵打倒に力を貸してくれるのですか？　お話を聞いたところ、ほぼ独立国扱いなような……」

エリーゼの懸念はわかる。

ミズホ伯国からすれば、皇帝がニュルンベルク公爵でも今の待遇を保障してくれれば良いのだから。

「ところが、そうでもない」

ニュルンベルク公爵は、テレーゼですら殺害しようとした。

皇帝の権力を一本化するために、選帝侯の排除を目論んだわけだ。

「あの男の国是は、強い一つに纏まった帝国なのじゃ。何千年も帝国に屈しないミズホ伯国など邪魔であろう。実際にニュルンベルク公爵領内では、在留ミズホ人の扱いでトラブルになった事がある」

貿易収支が大幅な赤字なうえに、ニュルンベルク領内で展開しているミズホ資本の商会や工房が国内業者の経営を圧迫しているという理由で多額の関税をかけ、双方で対立が先鋭化しているそうだ。

「彼ならば、ミズホ伯国の完全征服を狙うであろうな。そのうえで技術などを手に入れると」

「それって、考え方が甘いような……」

多分、帝国としても百万の軍勢で攻めればミズホ伯国の完全征服

も不可能ではないと気が付いているはず。
だが、その後に技術や生産力を持つ男手が大量に戦死し、荒れ果てた旧ミズホ伯国の領地の面倒を見ないといけない。
抵抗が過激なので、無理に征服しても何の意味もない。
だからこそ、帝国はミズホ伯国の存続を認めているのだろうから。

「ニュルンベルク公爵からすれば、破壊の後の再生をすれば良いと思っているのじゃ。数十年の歳月に多額の予算に手間をかけてミズホ人を屈服させて帝国に組み込めば、長い目で見れば新帝国のプラスになると」

「ガチガチの国粋主義者なんですね」

「自領・自国想いと思われていて、領内外に一定の支持層がおるから厄介なのじゃ」

国軍にも一定の支持者がいたからこそ、あそこまで鮮やかにクーデターが行われたとも言える。
加えて、移動と通信系の魔法と魔道具が封じられている。
帝国政府も貴族達も、未だに混乱からは脱していないはずだ。
それを思う間もなく、クーデター軍の軍門に降っている可能性も高い。

「これは厄介な……」

「前は、そこまで思い詰めているとは思わなんだがの。やはり、アレの報告を受けて危機感を抱いたのかもしれぬ」

「アレ？」

「ほれ。ヴェンデリンが稼動に協力したアレじゃ」

俺が偶然討伐したアンデッド古代竜の魔石を利用して再稼動に成功した遺跡の発掘品である巨大魔導飛行船、今は船名を『リンガイア』と名付けられていたが、全長四百メートルの巨大船は無事に就役して、現在は大陸外への探索を行うべく訓練に没頭している最中であった。

「通常の百メートル級の大型魔導飛行船の数でも、差をつけられたからの」

空軍戦力比が2．2対1にまで広がり、これがニュルンベルク公爵にかなりの危機感を抱かせたらしい。

「それは、つまり俺のせいだと？」

「少なくとも、ニュルンベルク公爵はそう思っておる」

なるほど、だから彼は俺を鋭い視線で見つめていたわけだ。
普段の目付きも鋭いので、ただ見ていただけかもしれないが。

「つまり、俺の将来の安寧のためにニュルンベルク公爵を殺せと？」

「出来れば傭兵扱いで参戦して欲しいと思っておる。ニュルンベルク公爵は殺すしかあるまい。彼は危険じゃ」

動く過激思想な上に、実力行使にまで出たのだ。
彼の行動で帝国にも大きな損害が出ているし、ニュルンベルク公爵家を潰してその補填に当てなければ、当然周囲から不満は噴出するであろう。

反乱の首謀者を生かしておく甘い国家など、どこの世界にも存在しないのだから。

「その前に、クーデターに成功したニュルンベルク公爵によって妾達が綺麗サッパリ討伐される可能性もあるがの」

「縁起でもない……」

「戦とは、水物な部分もあるからの」

中央・東西南部の貴族達の去就が気になるところであるが、ここでも通信の阻害が祟っていて、全く情報が入手できていなかった。

「当てにはできまい。新陛下即位のためにバルデッシュに居た連中は、クーデター軍に捕らえられるか殺されているであろう」

ニュルンベルク公爵が北方に向けて、討伐軍を送る前に北方諸侯の取り纏めをテレーゼが行う。

まずは、それを急ぎ行う事が肝要であろう。

幸いにして、北方諸侯の大半は新皇帝が即位した日か翌日には帝都を発っている者が多かった。

俺が思っているほど、在地貴族は暇ではないのだそうだ。

「しかし、困ったものじゃの。通信の妨害は」

俺達が持っている携帯魔導通信機は、大分帝都から離れたがいまだにウンともスンとも言わない。

妨害可能な魔法が限定されている分、かなり効果範囲が広かった。

この分だと、ヘルムート王国でも北部は通信機や魔導飛行船の運

用が不可能になっているはずだ。

「バウマイスター伯爵領が心配ね」

イーナの言う通りである。

もし魔導飛行船が動かせない事態になれば、開発に大きな支障が出るのだから。

「ローデリヒだから、何とかしていると思うしかないな」

通信が出来ないのが、こんなにもどかしいとは思わなかった。

無謀なクーデターに見えて、実はニュルンベルク公爵なりに勝ち目があるのかもしれない。

「本当、碌な事をしないな。あの目付きの悪い野郎は」

しかも、奴はイケメンだ。

そのせいで女性からも人気が高いそうだが、それだけで奴は信用するに値しない人間だと思ってしまう。

決して、顔で負けているからムカ付いているわけではないのだ。

「私は、あなたの方が一緒にいて楽しいですし落ち着きますから」

「エリーゼの言う通りよ。私もさすがに、ニュルンベルク公爵が旦那様だとしたら息が詰まると思う」

「イーナちゃんが駄目なら、ボクなんて窒息死しそう」

エリーゼ、イーナ、ルイーゼは、イケメンではあるが雰囲気が怖いニュルンベルク公爵は苦手だと話し始める。

「私も食事の量とかで注意されそう。あの鋭い目付きは、見下されている感じがして嫌」

「そうですわね。自分が正しいのだから、つべこべ言わずに俺に付いて来いという感じの方に見えますわ」

生まれ付いての独裁者気質とでも言えばいいのであろうか？

案外、ヴィルマとカタリーナの意見は、ニュルンベルク公爵の本質を突いているのかもしれない。

「ヴェル様が旦那様の方が断然いい」

「私もですわ」

「みんな。ありがとう！」

俺は感極まって、五人に次々と抱き付いていた。

俺にも、ニュルンベルク公爵に勝てる部分があったのだ。

「わけがわからん。ニュルンベルク公爵からすれば、ヴェルこそ嫉妬の対象だろうに……」

「そういう内面系の複雑な話はパス」

俺は、ボソっと自分の意見を述べたエルを無言で導師の方に追いやっていた。

「エルヴィン少年よ。男とは、筋肉と甲斐性が全てである！」

導師は、狭い馬車の中で無理矢理筋肉を強調するポーズを取っていた。
強引な論法だが、なぜか導師が言うと説得力を感じてしまうのだ。
「いや、年を取った男だけが持てる大人の魅力というやつだな」
続けて、既に魔力が回復したブランタークさんも話に加わってきた。
「正直、どうでもいいです。そう思いませんか？　テレーゼ様」
「そなたの主人には色々と問題も多いようじゃが、今はミズホ伯国で一息つこうではないか」
馬車の中でそんな話をしている内に、馬車はミズホ伯国との領地境に到着していた。
ミズホ伯国は、アキツ大盆地とそれを囲う山脈によって構成されている。
山脈はさほど標高がないので馬車も通行可能なように街道が整備されているが、山道の入り口には検問所が設けられていた。
簡素な砦のような建物の入り口に、警備兵が立っている。
黒髪・黒目で日本人に似ているが、体の大きさなどはこの世界の人達の平均と大差が無い。
良く見ると服装は江戸時代の侍のような格好で、腰には刀を三本差していた。
左には日本刀に見える長い剣を二本、右には短い脇差のような剣を一本である。
「三本刀か……。『抜刀隊』が警備に加わっておるの」

「『抜刀隊』？」

「帝国では、戦死者量産部隊と揶揄を込めて言われておる」

通常の兵士は刀を大小二本しか装備していないが、精鋭である抜刀隊には魔道具である『魔刀』を下賜されているので、三本の刀を差しているそうだ。

「『魔刀』は、高度な魔道具での」

汎用魔道具で、刀に好きな系統の魔力を纏わせて敵を斬り裂くそうだ。

「妾は諸侯軍の合同軍事演習で見た事がある。火の魔力を魔刀に纏わせたサムライが、袈裟斬りで標的の鋼製の鎧を斬り裂くのをな」

「何それ。怖い」

「過去には、千人の抜刀隊に攻撃されて二万人の軍勢が溶けて無くなったとかそういう話も聞く」

過去のミズホ国討伐で得た、帝国侵攻軍の末路らしい。

二万人の軍勢は、一万五千人が死傷して残りは敗走。

『抜刀隊』も半数が死傷したらしいが、どう計算しても損害比がおかしい。

誇張かと思ったが、損害を被った帝国軍側の戦史資料なので間違いないそうだ。

「アキツ大盆地の外の領地には興味が無いが、侵略者には容赦しな

いというわけじゃ」

「その魔刀を量産すればいいのに」

「無理じゃの」

帝国とてバカではないので、剣に同じ細工をした魔剣を装備している部隊が存在している。

だが彼らでは、魔刀の一撃を受け切れないそうだ。

何でも、装備品の性能に隔絶した差があるらしい。

「魔刀の一撃は避けるか、ヴェンデリンならば強固な『魔法障壁』が張れるであろう？　それしか手が無い」

「鹵獲品は？」

「一ヶ月もしない内に使えなくなる」

ルイーゼの問いに、テレーゼは苦笑しながら答えていた。

「構造が複雑なうえに、定期的に特別なメンテナンスが必要なようでな」

火・土・水・風とレバーで切り替えて自由な系統の魔力を纏わせる事が可能で、他にも込める魔力量を調整するレバーも付いている。

付属している魔晶石に魔力を込めれば暫くは使えるが、一ヶ月もしない内に突然使えなくなって普通の刀に戻ってしまうそうだ。

「刀身自体の手入れもあるらしいからの。帝国の魔道具職人も解析

と複製を試みておるが、大した成果もあがっておらぬの」

その辺の技術は厳重に秘匿されていて、ミズホ人の魔道具製造技術が優れている証拠でもあるようだ。

「そういう部分も、ニュルンベルク公爵は気に入らないらしいがの」

国内に巣食う獅子身中の虫なので、ミズホ伯国は排除せねばならない。

そういう考えを持っているらしく、テレーゼは共闘が可能だと思っているようだ。

「そのミズホ上級伯爵様は、バルデッシュにいなかったのですか？」

「ミズホ泊国は実質別国じゃからの。新皇帝が即位して暫く落ち着いてから、お祝いの品を持って謁見するのが決まりじゃ」

その場で、新皇帝から今のミズホ伯国の地位が再承認される。

これも、新皇帝が最初に行う仕事なのだそうだ。

「よって、他の貴族のように巻き込まれてはおらぬ」

クーデターは、新皇帝の即位から三日後に発生している。

先に領地に戻っていた貴族は難を逃れていたが、選帝侯で逃げ出せたのは自分だけであろうとテレーゼは語っていた。

「とにかく兵を挙げねばならぬ。妾が死ぬか、ニュルンベルク公爵が死ぬか。これしか、結論は無いのじゃからの」

俺達を乗せた馬車は、ミズホ伯国の国境沿いにある砦へと無事に

入る事に成功したのであった。

「成功ですな」

「多少の失敗はあるがな」

ちょうど同じ頃、バルデッシュの皇宮にある皇帝の玉座に一人の若者が座っていた。

彼の名前はマックス・エアハルト・アルミン・フォン・ニュルンベルクといい、このアーカート神聖帝国の選帝侯にして、今はクーデターの首謀者である。

「これも君のおかげだよ」

クーデターはニュルンベルク公爵家諸侯軍によって決行されたが、当然それだけでは成功の目がない。

そこで、帝国軍で同じ考えを持つ将校達にも密かに参加を呼びかけ、彼らも拠点の制圧などに協力している。

あとは、貴族の捕縛や殺害も行っていた。

「小物を殺す必要などない。軟禁しておけ」

「すぐにこちらに付くでしょうからな」

どうせ当主不在で、その領地は何もできない。

通信を妨害してるので、頭である当主を失って機能不全に陥って

いるからだ。

「その代わりに、全ての選帝侯には死んでいただきましたが」

ただし、この事実は隠している。

ニュルンベルク公爵は、中央集権で皇帝の力が強いアーカート神聖帝国を望んでいる。

そこに選帝侯など不要なのだが、今すぐ彼らを討伐できない以上は当主を人質に取っている形にしてその動きを封じていた方が楽である。

「第一段階としての、バルデッシュ周辺領域の平定が最優先だ」

南部の貴族達は、ほぼニュルンベルク公爵家に靡いている。

元々寄り親であるし、ニュルンベルク公爵が新皇帝になれば領地や役職等で優遇して貰えると思っているからだ。

欲のある人間は利用し易いというわけだ。

「捕らえた貴族達の中にも、既にこちらに靡いている者もいる。連中には領地に帰らせて、兵を整えるように命令しておけ」

南部と中央直轄地を制圧する第一段階が終わったら、次は最初に倒さなければいけない相手がいる。

ニュルンベルク公爵の視線は、見ている地図の北方に向いていた。

「テレーゼ。上手く逃げられたか」

唯一選帝侯で逃してしまった、フィリップ公爵その人であった。

「あの女の事だ。北方の諸侯を纏めて逆に攻めてこようぞ」

「ミズホ伯国もですか？」

「あの国は、俺の考えを良く知っている。組まねば、俺が兵を出す事など百も承知だ」

「強敵ですな」

「纏めて潰せば、後々都合が良い」

ニュルンベルク公爵からすれば、今までの皇帝が甘かったのだ。中途半端に兵を出して何度も負けたからといって、あの国の独立を認めているのだから。

おかげで帝国では、彼らの経済力と技術力によって生粋の臣民達が貧困に喘いでいる。

ミズホ人等を討ち、その技術や資産を奪って彼らに報いてこそ、真の一つの纏まった帝国が誕生する。

いや、生まれ変わるのだと。

「しかしながら、今の兵力ですと討伐に不安が……。西部と東部の鎮圧を進めて、その兵力も活用すべきでは？」

「勿論それは試みるが、武力での平定はしない」

当主を人質に取っている者には、兵を出してフィリップ公爵とミズホ伯国を討つのを助ければ解放すると伝える。

これで兵を出す貴族だけで十分であると。

「下手に平定を行うと、一番信頼できるニュルンベルク公爵家諸侯

軍と国軍に犠牲が出るからな。精鋭が一番数が多い内に、奴等を討つ」

現状で自分達に挑んで来るであろう人物は、フィリップ公爵一人だけである。

逆にいえば、彼女さえ討ってしまえば他は後でどうにでもなってしまうのだ。

「無理に平定して大量の兵を抱えても、テレーゼが健在ならば裏切ってしまう可能性もある。なあに、我が軍は精鋭揃いである。確実に討てるはずだ」

「ですが、一つ気になる事が……」

「バウマイスター伯爵か……」

ニュルンベルク公爵の、バウマイスター伯爵に対する考えは一つである。

将来、アーカート神聖帝国に対して害を成す存在であろうと。

現に今も、両国間の空軍戦力比や経済格差をつけた元凶として知られている。

もしヘルムート王国を裏切って自分のために働くのであれば良し、駄目なら殺せと命じたのだが現場で齟齬が発生していた。

「あの四兄弟は、本当にバウマイスター伯爵を説得したのか？」

「それがわからないのです」

現実問題として、迎賓館を担当した部隊は全滅であった。

全ての兵士と騎士達は、首を圧し折られ、体を斬り割かれ、頭が

吹き飛び、お腹に穴が開きと、現場は凄惨な状態になっていたと報告されている。

「しかもあの四兄弟は、駅馬車の待機場で殺されていたそうだな」

四兄弟は屋敷の傍で彼らと戦わずに、バウマイスター伯爵達がテレーゼを連れて逃走したと思われる駅馬車の待機場で殺されている。

一緒にいた兵士達と共に遺体はほぼ残っておらず、焼け焦げて炭化したローブの切れ端が唯一の証拠となっていた。

「期待の若手魔法使い達ではなかったのか？」

魔法使いではないニュルンベルク公爵に、その強さを判別する能力は無い。

報告で聞いている、魔法使いの技の披露会において披露された魔法で判別するしかないのだ。

あとは、その功績などからであろうか。

確かに、バウマイスター伯爵には竜殺しの功績がある。

だがそれは機会の問題で、四兄弟にも竜退治を命じればそれが可能であったはず。

ニュルンベルク公爵は、そのように考えていた。

「アームストロングの強さは昔からだ。リングスタットも高名な魔法使いであるし、竜殺しのバウマイスター伯爵と『暴風』もいたな。だが、その四人とあの四兄弟にそこまで差があるのか？」

「さすがに、全員が無事とは思えませんが……」

帝国軍の幹部であるこの初老の男も魔法使いではないが、それに

詳しい者からヘルムート王国で有名な魔法使い達の戦闘能力予想は聞いている。

確かに優れてはいるが、帝国にもそれに負けない優秀な魔法使いが複数存在していて、そう一方的に負けるはずはないと。

「確かに、お前の言う通りだな」

それに、いくら魔法使いが多いからとはいえ、たかが十人以下のグループにそこまでの力があるわけではない。

魔法使いの無双は魔法使いで止めればいいし、もしそうなればあとは通常の軍勢の質でケリがつく。

「上級以上の魔力を持つ魔法使いは民間にもそれなりの数おりますし、中級や初級の魔法使いを集めれば数で圧倒可能でしょう」

「ヘルムート王国の『最終兵器』と『竜殺し』は、数の暴力によって沈むか」

生粋の軍人であるニュルンベルク公爵からすれば、その作戦は十分に常識の範疇にあった。

いくら強くても、個が団体に勝てるはずがない。

ニュルンベルク公爵の頭の中から、バウマイスター伯爵一行への警戒感が薄れていく。

今一番の脅威は、テレーゼ率いるフィリップ公爵家諸侯軍であった。

「フィリップ公爵家諸侯軍は精強なれど、うちはそれを上回る。帝国軍の半数もこちらに付いているし、南部諸侯達やこちらに付くと

表明している貴族達の軍勢もある」

やはり、首都を押さえたのが強みになっている。
東部や西部の大半の諸侯は迷っていたが、一部は積極的に自分への支持を表明してくれたのだから。

「正統に選ばれただけの皇帝になど意味は無い。皇帝とは、揺るがない意志と力によって臣民達を導く存在なのだから」

自分は強者であり、だからクーデターに成功した。
これからすぐに新皇帝『聖アーカート一世』を名乗り、自分の在位中にこの大陸を統べるという目標に向かって邁進するのだから。

「今は帝国中央部の平定と、引きこめる貴族達のリストアップが優先だ。それが終われば、いよいよフィリップ公爵とミズホ伯国の討伐である」

それが成れば、あとは果実が木から落ちるのを待てばいい。
どうせ、自分とフィリップ公爵以外の選帝侯はもうこの世にはいないのだから。

「テレーゼは女ではあるが侮れない。他のボンクラ選帝侯達とはまるで違うのだ。気を引き締めて兵の準備を行うぞ」

「畏まりました」

とは言いながらも、ニュルンベルク公爵の頭の中には既に統一された新アーカート神聖帝国の姿が思い浮かんでいた。

「ところで、例の装置ですが……」

「例の装置が何か？」

せっかくの楽しい想像の時間を邪魔されて内心では頭にきたが、彼は大切な協力者である。

ニュルンベルク公爵は、笑顔を浮かべながら帝国軍幹部の質問に答えていた。

「アレは、暫く作動させ続ける」

「しかしながら、商人達などから経済行動に支障が大き過ぎると……」

「であろうな」

だが、ニュルンベルク公爵からすればメリットの方が大きいのだ。貴族間の通信手段を奪って孤立させて迷わす事が可能になり、装置を動かしている自分達が優位に立てる。

こちらは事前に早馬や密偵による偵察や連絡手段を強化しているので、その分有利であった。

経済活動も、大商人達の首根っこを抑えるのに有効であった。

それにすぐに気が付くはずだ。

荷の輸送費などは上がるが、それは大規模商人達を価格競争で優位に立たせる事ができる。

欲深い彼らは、表面上は文句を言いながら自分に従うであろうと。

「しかしながら、中小の商人達からは苦情が出ましょう」

「帝国は大陸の統一を目指す。そのためには、大資本の商人達の協

力が必要だ。中小の商人などは、潰れてもすぐに別の挑戦者が出る。浮かび上がった者だけ優遇すればいい」

「はあ……」

そして、あの装置を。

自分の運命を変えた、ニュルンベルク公爵領内にある巨大地下遺跡から発掘された古代魔法文明時代の技術を用いた『魔法阻害装置』を使用し続ける最大の要因は、戦場における魔法使いの力を落とすためであった。

「竜はなぜ強いか知っているか？」

「強力なブレスを吐くからですか？」

「それもあるが、空を飛べるからだ。人間は飛べないから、上からの攻撃に弱い」

魔導飛行船の数が、軍事力として計算される要因でもあった。

あと、ニュルンベルク公爵は軍人である。

二次元よりも、三次元で動く敵の脅威は十分に考慮していた。

「空を飛びながら魔法を放つ。好きな場所に一瞬で移動する。遠くの相手と一瞬で通信してしまう。これらを防いでしまえば、いくら強力な魔法を放つ魔法使いでも、ある程度対処は可能になる。我が陣営にも強力な『魔法障壁』を張れる魔法使いはいるのだからな」

そのために『魔法妨害装置』の稼働に手間をかけたし、妨害する魔法の種類を限定してまで効果範囲を広げたのだから。

「今頃は、ヘルムート王国北部でも大騒ぎであろうよ。北方で魔導飛行船が動かない以上は、王国の介入など簡単に排除可能だ。多少時間はかかろうが、俺の改革は必ずなる」

ニュルンベルク公爵は、己の計画に絶対の自信を持つのであった。

「それで状況は？」

「北部の国境寄りの地域で、魔導通信機及び魔導飛行船が使えません」

「何とも不思議な現象よの」

更に同時刻、ここ王都スタッドブルクの王城では、ヘルムート三十七世が北部から届く報告に首を傾げていた。

一昨日の晩から、突然通信の魔法や魔道具が使用不可能になり、魔導飛行船も動かなくなった。

王国で管理している大型船はその時刻に浮いていなかったので無事だったが、貴族などが運用している小型船は墜落している。

今のところ集まった被害報告によると、七隻が墜落して多くの荷物を失い八十九名の死者を出している。

あの重量の物体が、上空数十メートルから数百メートルで突然制御を失ってそのまま落下するのだ。

普通の人間が生き残れるはずがない。

加えて痛かったのは、二名の魔法使いの死亡報告である。

彼らは『飛翔』の魔法で墜落する船からの脱出を試みたが、それ

が発動しないで墜落死していた。

「通信系と移動系の魔法が妨害される範囲の特定は終わっています」

「原因はアーカート神聖帝国であろう？」

「その通りにございます」

帝都バルデッシュを中心に、半径二千キロメートルほどが同様の障害を受けている可能性が高い。

効果の大半は帝国側であったが、一部王国北部領域にもその影響が及んでいるのだ。

「被害を受けている地域へのフォローは確実に行うように」

「畏まりました」

不幸にも墜落してしまった魔導飛行船以外には直接的な損害は無いのだが、通信と魔導飛行船による交通と流通が潰されたのが痛い。

これをこのまま放置すると、効果範囲内で経済の停滞が起こる可能性があった。

「馬車便を増やす必要があるの。あとは、書簡や馬による伝令者の増員か……」

急に増やせるわけがないので、他の地域の魔導飛行船での輸送を増やして、余った馬車などを北部に割り振るしかない。

ところがそれをすると、今度は現状でも高稼働率を誇る南部方面への交通と輸送に影響が出かねなかった。

「思うに、間接的な被害の方が多いの」

「アーカート神聖帝国の謀略でしょうか？」

「その可能性は高いが、妙ではあるな」

国家に真の友人は存在しないが、アーカート神聖帝国も今はヘルムート王国との戦争など望んでいないはず。

だからこそ、今回の親善訪問団には交易拡大交渉を担当する役人や貴族を送り込んだのだから。

「もっとも、交易担当者の大半は既に帰国しておるがの」

皇帝が死去して新皇帝を決める選挙が始まるので、一部情報収集を担当する人員と、新皇帝の即位式典に参加する人員数十名を残して帰国させていた。

「残留組とも通信が途絶しました」

「通信が不可能だからの」

通信が妨害されているエリアからされていないエリアへの通信も、またその逆も不可能になっている。

「大使館との通信も途絶しています」

そこにも据え置き式の大型魔導通信機に、『通信』の魔法が使える魔法使いを置いていたが、これも連絡が取れていない。

「現地連絡員とも通信は取れぬか？」

「これも駄目なようです」

お互いに外国人は首都から外に出る事を禁止されているが、非合法なスパイや、彼らに組織された現地人によるスパイ網は当然存在している。

彼らとの連絡も、当然不可能というわけだ。

「陛下は、導師やバウマイスター伯爵と連絡可能かと思いますが……」

「これであろう」

ヘルムート三十七世は、バウマイスター伯爵から販売して貰った小型携帯魔導通信機を懐から取り出す。

高性能で重宝していたのだが、やはり連絡がつかない。

向こうが通信に出ないのではなくて、明らかに通信自体が妨害されているのだ。

「大丈夫なのでしょうか？」

王宮筆頭魔導師に、南部の経済発展の要であるバウマイスター伯爵との通信途絶。

もし彼らに何かあれば、王国南部は混乱状態に陥ってしまう。

「大丈夫であろう。それよりも、王国軍の警戒体制を準戦時レベルに上げておく必要があるの」

ヘルムート三十七世は、二人の安否をまるで心配していなかった。

彼らを殺せる者の存在が、どうしても想像できなかったのだ。

「準戦時レベルですか？」

いつ戦争になっても大丈夫なように準備をする。

このレベルが発動されるのは、実に二百年ぶりであった。

「状況を見るに、この通信の阻害は人為的な物であろうな」

高度な魔法使いにでも難しいし、持続時間の問題もある。

帝国の地下にも古代魔法文明時代の遺産が無いはずもないので、誰かがそういう物を発掘して使用した可能性があった。

「何のためにですか？」

「決まっておろう。反乱のためにとしか思えん」

新皇帝の即位直後だ。

誰かがそれを不服に思って兵を挙げた。

帝国軍との兵力差などを考慮すると、相互の連絡を絶つためと、外部の貴族の情報収集を遮断してその動きを封じる。

その間に、帝国中枢を占拠しようと目論んでいるのは間違いないはずだ。

「なるほど。今がチャンスなのですね」

「お主は、何を言っておるのだ？」

「帝国の中枢が麻痺しているので、碌な手も打てずに勝利が可能です」

ヘルムート三十七世は、目の前の貴族に向けて呆れたような表情を向けていた。
その貴族が、帝国との全面戦争を考えていたからだ。
「なぜ、火中の栗に手を出さねばならぬのだ？」
呆れつつも、これから帝国の情報が流れればこういう輩は増えると予想していた。
今から千年前から二百年前の停戦時まで、実はヘルムート王国はアーカート神聖帝国に劣勢であると言われていた。
成立と統一が早かった帝国は、ギガントの断裂南部、今の王国北方領域を占領支配していたからだ。
停戦時には帝国はギガントの断裂の北部にまで追いやられていたが、南部占領時代を不名誉な事だと捉えて、今度はギガントの断裂の北部領域を占領しようと言い始める貴族が増える可能性があった。
感情的には理解できるが、実は過去の帝国によるギガントの断裂南部占領は帝国自身の国力を奪った。
ギガントの断裂のせいで、ほぼ魔導飛行船による補給しかできないのだ。
占領した領域には、既に大物貴族の子弟や功績のあった者を貴族として任命していたのでこれを放棄するわけにもいかず、もしていたら議会で皇帝が糾弾される可能性もあった。
結局、戦争に負けて撤退するまで占領地の維持で無駄に予算と物資と人員を消耗したとも言える。
もし王国が、ギガントの断裂を越えて帝国南部を占領したとする。
占領した領域には、大物貴族の子弟や軍で功績があった者を貴族にして任命するであろう。
そして彼らがピンチになれば、王国軍はその度に援軍として出動

するわけだ。

「その予算を考えて言っておるのか？　そなたらは、次男以降を在地領主に押し込めると大喜びであろうが、王国の財政が傾く可能性には考慮しないのか？」

「しかしながら、今の空軍の戦力であれば」

「魔導飛行船か？　今そなたが、使えぬと報告してきたでないか」

そもそも、今の状況でどうやって兵を送るのかという問題がある。ギガントの断裂を越えるのに有効な魔導飛行船は使えない。無理矢理橋をかけて進むという手もあるが、もし戦況が不利になって撤退をしようにも困難を極める。通信も妨害されているので、碌に指揮すら執れない可能性も高かった。

「補給はどうするのだ？」

「現地調達にて……」

「本当に可能だと思っておるのか？」

占領して統治しないといけない土地で略奪を行う。現地に派遣した軍勢は、帝国の軍勢と地元の抵抗運動によって無意味にすり減らされていくであろう。

「机上の空論であるな」

ヘルムート三十七世は、この貴族の使えなさに心の中で溜息をつ

いていた。
やはり、閣僚をしている貴族達よりも相当に劣る。
それでも、こんなバカでも何とか使うのが王の仕事である。
「準戦備体制は、向こうが何かをして来ないという保障もないからだ」
通信が阻害されているので、向こうの様子がわからない。
いきなり通信の阻害が回復して、それと同時に敵の軍勢が攻め入ってくる可能性もゼロではないのだから。
「それとな。今攻めるのは政治的にもまずい」
「そうなのですか？」
やはり使えないと思いながら、ヘルムート三十七世は目の前の貴族に対して解説を始める。
「これが反乱だったとして、それに便乗したような形で兵を進めたら反乱者を利する可能性がある」
現在の戦況は不明であったが、今の時点で反乱者が帝国の全てを抑えたとは考え難い。
暫く帝国内では混乱が続くであろうが、そこに他国であるヘルムート王国が兵を出したらどうなるのか？
「『外敵には対抗しないといけない』と言って、一つに纏まるのを手助けする事になるやもしれぬ」
ヘルムート王国によって奪われた土地を奪還するためにという大

義の元、反乱者に同調する貴族が増える可能性があるのだ。

「もしそうなると、また戦争の時代になる可能性が高いの」

反乱者は、外敵を利用して国を一つに纏めようとするはず。

この辺の話は昔から良くあった事だ。

「そして我が国は、わずかに抑えた占領地の保持で国力を奪われていくの」

当然、南部の開発も停滞するはずだ。

「さて、バルデッシュにいる同胞は無事なのかどうか……」

使者として滞在している他国の貴族達に手を出すはずがないという考えは、今までの考察が事実だとすれば無意味になる。

なぜなら……。

「犠牲者があった方が、我が国の出兵論を補強するからの」

魔導飛行船の墜落による犠牲者もいる。

帝国への報復を唱える軍人や貴族が増えれば、出兵を抑えられない可能性もあるのだ。

「それを狙っているとすれば、反乱者が居たとしても厄介だの」

無法をしているように見えて、実はこちらの動きをコントロールしようとしているのだから。

「今は出来る限りの情報収集に、順番に対症療法を行うしかないの」

少しすれば出兵論を唱える貴族達も増えるであろうが、救いは軍の主流派が出兵を望まないという状況であろうか。
エドガー軍務卿、アームストロング伯爵共に、南部とヘルタニア渓谷の開発利権の手伝いで忙しい。

勝てるかどうかもわからない戦争に、そう容易に賛成するとも思えなかった。
寄り子や親族に言われて出兵論になる可能性もあるが、そういう連中も利権のお零れを保持するのに忙しい。

人間とは、満ち足りていればそう簡単に戦争などしない生き物であった。

「（バウマイスター伯爵のおかげか……）」

全て結果論であったが、冷静な支配者であるヘルムート三十七世はこう考える。
やはり、バウマイスター伯爵は使える男だと。

「（クリムトも一緒におるし、そう簡単にバウマイスター伯爵が死ぬはずもない）」

むしろ、彼らが帝国内にいる内に反乱を起こしてしまった首謀者に同情する。
その反乱者は、バウマイスター伯爵に何か特別な感情を持っているのかもしれないが、あの男が青臭い理想論を掲げた反乱に手を貸すなどありえない。

出来れば係わり合いにならないようにするし、もし危害を加えら

れそうになったら手厳しく反撃するはずだ。
それは、経済力などが以前の四分の三にまで落ちたと報告されるブロワ辺境伯家の末路を見れば明らかだ。

「（それでも、ブロワ辺境伯家は自国の貴族だからあの男は配慮している。他国の貴族や人間になど容赦はすまい）」

追い詰めようとした者は、その度合いに比例して手痛いしっぺ返しを食らうであろう。

「（さて、今後アーカート神聖帝国はどうなるのか……）」

ほぼそうであろうと自分が予想している反乱が成功するか、それとも失敗するか。
どちらにしても、アーカート神聖帝国の国力は落ちる。

ならば、我がヘルムート王国は南部の開発を進めて国力を増せばいい。
バウマイスター伯爵がいればそれが可能だし、国力比に差が付けばいつかはアーカート神聖帝国の併合も可能であろう。

別に、ヘルムート王国は戦争を完全否定する平和主義国家ではない。
現実的に可能ならば、リンガイア大陸統一戦争に躊躇いを見せたりはしないのだ。

「（とにかく、今は正確な情報をどうやって集めるかだな）」

ヘルムート三十七世はひとしきり考えた後に、為政者の義務として出来る限りの打てる手を打ち始めるのであった。

「ダンゴ！　ダンゴ食べたい！」

「伯爵様よ。お前は子供か！」

「ヴェル。後で食べればいいでしょう」

「イーナの言う通りではあるか……。あとでクサダンゴも、ミタラシダンゴも両方食べるんだ。俺……」

無事にミズホ伯国へと到着した俺達は、国境沿いにある砦で身分を証し、そのまま国内に入る事を許される。

魔刀を装備したサムライは、バルデッシュの異変を察知して急遽砦に派遣されていたようだ。

『テルアキ・ムラキと申します』

いかにも侍といった風貌の若い青年は、丁寧な口調で挨拶をしていた。

『やはり、首都の異変に気がついておったか』

『えっ？　どうやって？』

『これを使ってです』

ムラキというサムライが示した場所には、止まり木で休んでいる一羽の鳥の姿があった。
小型の鷹にも見えるが、大型のツバメにも見える。
見た目だけで、速く飛びそうに思える鳥ではある。

『ミズホ人は、帝国中に在住しておりますから。彼らの情報伝達網を侮らない事です。通信の魔法と魔道具も駄目みたいですが、ミズホツバメならばバルデッシュの異変も二～三日で届きます』

速そうな鳥は、ミズホツバメという名前らしい。
ミズホ伯国で品種改良が盛んな、伝書鳩代わりに使う鳥なのだそうだ。

『こういう時のために、通信手段は複数確保しています』

ミズホツバメの品種改良と繁殖とレースがミズホ人の間で趣味として広がっていて、確保も容易なのだそうだ。

『馬車よりは速いよな。やっぱり』

『そういうわけです。フィリップ公爵様におかれましては、やはりお館様との面会をお望みで？』

『然り。出来れば、すぐにでもじゃ』

『お館様もそれを望んでおります。拙者もお供します』

ローデリヒ以外で初めての一人称が『拙者』な人間の登場であったが、ムラキさんは侍その物なので違和感がない。

先頭の彼が馬に乗ってミズホ伯国内へと山道を進み、それに馬車がついていく。

暫くは山道を登っていたが、三十分ほどで山頂に到着していた。
するとそこには、時代劇などで良く見る峠の茶屋その物が建っていて、店先では和服風の服を着たミズホ人達がダンゴを食べながらお茶を飲んでいたのだ。

当然、元は日本人である俺は立ち寄りたかった。
ダンゴを食べながら、お茶を飲み干したかったのだ。

ところが、誰一人寄り道しないで領主館へと向かうのが当たり前だと思っている。
これに異論がある俺が騒ぐのは当然とも言えた。

「エッホ。ダンゴをダッシュで買って来い」

俺は、馬車内にいるエッホをパシリにする案を決行する。
人の攻撃に散々ケチをつけた嫌な奴なので、パシリにしても何の罪悪感も湧かないからだ。

「私はテレーゼ様の家臣なのでお断りします」

「……」

正論ではあるが、やっぱり嫌な奴である。
『了解っす！』とか言いながら走っていけば、少しは可愛気があるのだが。

「その前に、両替をしないと買い物が出来ませんよ」

「独自通貨なのかよ！」

ミズホ伯国が未だに独立国である証拠でもあった。

エッホの言う通りなのだが、やはり少しムカついた。

「ただ、帝国に従属する際に通貨改定は行っているのでな。そう面倒でもないぞ」

テレーゼが、もう一言加える。

ヘルムート王国とアーカート神聖帝国の間では、あまり貨幣に差などない。

単位も同じセントで貨幣のデザインは違っていたが、重さや金などの含有量は条約で決められていたからだ。

「ミズホ伯国では、一セントが『一モン』。百セントが『一シュ』一万セントが『一リョウ』となっておる」

貨幣の形も違うそうだ。

ただ重さや金などの含有量に変化はなく、換金比率に違いはないらしい。

「なら、ダンゴは買えるのでは？」

「大商店ならともかく、茶店くらいだとミズホ貨しか受け取らぬぞ」

「そんなぁーーー！」

「妙な事で我侭を言うの。そういう男は可愛げがあって好きじゃが

の。両替所で手数料無しで換えてくれるから安心せい。ヘルムート王国の貨幣でも両替してくれるぞえ」

現地の貨幣が無いのなら仕方がない。

馬車が領主館に到着するまで大人しくする事にする。

山道を下りると人里が見えるが、どう見ても昔の日本の農村である。

田んぼには、今は冬なので裏作の麦が植わっている。

家屋は木製と石造りで萱葺きは無かったが、造りが和風なので帝国の外の地域とはまるで違っていた。

農村から町に入り、更に馬車を進めると、ようやく領主館が見える。

「凄いお城ですね」

エリーゼが驚いているが、領主館というよりは三重の掘りに囲まれた、巨大な天守閣を備えた星型の要塞であった。

大阪城と五稜郭を合わせたような物に見える。

「ミズホ城はいつ見ても大きいの」

「難攻不落なのでは？」

「落ちない城や館はないが、落とすとなると犠牲が多そうじゃの」

篭城側の数倍の兵力で攻めても、この城を落とすのに甚大な被害が出そうではある。

「過去にはかなりの犠牲が出たのでしょうね」

「いや、このミズホ城を攻める事が出来た者はおらぬな」

「えっ？」

「攻め入られると国土が荒れるので、ミズホ軍は常に領地境で迎撃するからの」

山を越えて少数で大軍を迎撃する。

犠牲も多いが、大半は帝国軍が大敗して敗走するので、それを追撃しながら周辺領域で略奪に勤しんでいたそうだ。

犠牲が多いので、損害の補填のためらしい。

「略奪は帝国軍も勝てば行うし、先に攻めた帝国が負けたのが悪い。戦うとほぼ負けで、追撃されて略奪を受ける。帝国軍の物資だけなら文句は無いのであろうが、ミズホ伯国の周辺にいる貴族達は堪ったものではない」

普段は交易すら行っている温和な相手なので、中央の帝国軍が攻めなければ略奪などされないのだと。

遠征の度に非難轟々であったらしい。

「一度、強引に周辺諸侯に動員をかけて数箇所から同時に攻め入った事もあったらしいの」

結果は、ミズホ伯国軍も動員戦力の半数を失う大損害を受けたが、帝国軍はその八倍以上の兵を失ったそうだ。

「領地が隣接する諸侯軍では、全滅した所もあったそうじゃ。フィリップ公爵家も兵を出したが、三分の二が帰って来なかったと当時

の領主の日記に記載されておる」

「全滅じゃないか」

「どう糊塗しても、エルヴィンの言うように全滅じゃの」

フィリップ公爵家諸侯軍が、北方攻め口を単独で担当したが故の悲劇であったらしい。

「なのに、彼らは領地を広げぬ。アキツ大盆地から出て来ないのじゃ。そんなわけで、ミズホ伯国は保護国化の道を辿ったというわけじゃな」

テレーゼの説明が終わると、馬車はミズホ城の外苑入り口へと到着する。

先導しているムラキさんのおかげで、ノーチェックで三層の掘りを通り抜けて天守閣のある本丸へと到着する。

馬車を降りると、裃姿の初老の男性が現れる。

ムラキさんよりも偉い、上級の陪臣だと思われる。

「イエノリ・キラ・ミズホと申します。お館様の元に案内いたします」

さすがはテレーゼというべきか。

そのまま顔パスで、領主に会えるようだ。

「ミズホ？　ご一族の方ですか？」

「分家ですが」

ミズホ伯国の人間には、庶民も全員姓があるのだそうだ。
そして、イエノリさんのようにキラの後にミズホが付いている人間は分家の人間か、功績が著しいのでミズホ家から名誉姓を与えられた人間らしい。

「（本当、戦国時代とか江戸時代みたい……）」

功績があったので豊臣の姓を与えられたとか、松平の姓を与えられたとか、そういう話に良く似ているのだ。

「お館様の元に案内いたしましょう」

イエノリさんの案内で城内に入るのだが、やはり土足厳禁で中は畳敷きであった。
久しぶりに見る畳からは、懐かしい匂いがする。

「布のブーツ？」

全員靴やブーツを脱ぐと裸足だったので、イエノリさんが足袋を貸してくれたのだが、初めて履く足袋に全員が違和感を覚えているようだ。

「でも、蒸れるのを防げるな」

「ブランタークさんは、水虫防止に良いのでは？」

「伯爵様よ。俺は水虫じゃないからな」

ブランタークさんは、殊更自分が水虫でない事を強調していた。

「冒険者や軍人の職業病とも言えるのである。ブーツの中が長時間の移動や行軍で蒸れるからな。これは買って帰るとしよう」

導師は、自分が水虫である事を否定しなかった。

「草を編んだ床敷きですか？　変わっていますのね」

その上を歩きながら、カタリーナは畳を興味深そうに眺めていた。

「引くと開くドアなんだ」

「木枠のある紙を張ったカーテン？　本当に不思議」

「変わった花瓶」

ルイーゼは襖を、イーナは障子で、ヴィルマは飾られている生け花を見て不思議そうな表情を浮かべていた。

他にも欄間や、床の間とそこに飾られた掛け軸や焼き物など、今までに見た事が無い物に興味深々なようだ。

「多分、ヘルムート王国人でミズホ伯国に入ったのは、我らが最初であろうな」

導師の言う通りで、ヘルムート王国の人間はバルデッシュから出る事を禁じられていた。

中には破っている人間もいるかもしれないが、ミズホ伯国はまた別国扱いなのでそう簡単には入れなかったはずだ。

「うちのお館様の書いた紀行記にも書いてなかったな」

ブライヒレーダー辺境伯による、ミズホ伯国への記述はほとんどない。
バルデッシュで見かけた、ミズホ風の建造物などを見た感想が書かれていただけだ。

「こちらでございます」

天守閣の最上階に謁見の間があり、イエノリさんの案内で室内に入ると、まるで時代劇で見たかのようにミズホ上級伯爵が畳敷きの上座に座っていた。

年齢は五十歳くらいであろう。
姿勢良く上座に正座していて、いかにも出来ると言った感じの男性だ。

後ろの床の間には、高価そうな壷や墨で書かれた山水画に似た掛け軸もかけられていた。
主君の刀を預かる小姓もいて、まるで時代劇のようである。
まさに、日本の殿様といった風貌だ。
パっと見た感じで違うのは、誰もちょん髷を結っていない点であろうか。

「久しいの。フィリップ公爵殿よ」

「一年ぶりであろうかの？　妾がバルデッシュ詰めになった時に会ったキリであろうか」

「そうだったような気がする。帝都詰めの時にクーデターとは不幸だったな。我が伯国には、そんな義務は無いがな」

皇帝を支えるために、七名の公爵の内最低三名はバルデッシュに詰める義務があり、テレーゼの当番の時に先帝の崩御とクーデターが起こってしまったらしい。

もっとも、陛下の葬儀があったので選帝侯は全員が帝都に詰めていたのだが。

「羨ましい限りじゃ。妾などは命からがら逃げ出して、このように無様を曝しておるぞ」

「逃げ出せただけで合格であろう。おっと、お隣の客人達を紹介して欲しいものだな」

「妾の恩人達じゃ」

テレーゼによって俺達がミズホ上級伯爵に紹介され、続けてミズホ上級伯爵も自己紹介をする。

「ミズホ上級伯爵トヨムネ・ミズホである。ヘルムート王国の最終兵器殿に竜殺し殿であるか。なるほど、フィリップ公爵は運が良いようだな」

「でなければ、脱出は困難であったの。それでじゃ」

「兵なら出すぞ」

「早い回答じゃの」

今まで一度も外征の経験が無いミズホ伯国軍による初の出兵となる。

考慮する時間を想定していたテレーゼは、ミズホ上級伯爵の素早

い決断に驚いていた。

「あのニュルンベルク公爵は、我が国が憎いらしいからの」

強固な一つの帝国とは相反するミズホ伯国であり、愛国者でもある彼に言わせると、今まで散々に帝国軍に損害を与えたミズホ伯国は滅ぼすのが当たり前という考えらしい。

「いくら犠牲を出しても、ここで潰しておけば帝国の未来に繋がると考えているのであろうな」

元々ニュルンベルク公爵領では、ミズホ人とミズホ資本は彼の愛国政策によってかなり被害を受けている。

平時でも対立しているのに、戦時ならば余計にそうであろうと。

「ニュルンベルク公爵領内にあるミズホ伯国の資産は全て没収。ミズホ人もほとんど捕らえられて、女子供でも収容所送りだそうだ」

「徹底しておるの」

「ツバメ便による最新の報告だ。帝都でも同じ事が起こっている」

他にも、フィリップ公爵領の主要民族であるラン族の資本と人間も同じ被害を受けていて、外の少数民族なども同じ扱いだそうだ。

「狂ってますね」

「あの男には正義なのだよ。バウマイスター伯爵」

しかしまあ、帝国も良くこんな危険な男を公爵として飼っていた

と思う。
何とか廃嫡は出来なかったのであろうか？
「あの男は、フィリップ公爵領もうちも蹂躙する予定だ。各個撃破されるくらいなら、最初から手を組んだ方がマシだ」
「であろうな。しかし、あの男は本当にわかっておるのかの？」
「何がですか？」
「強い一つの帝国とは片腹痛い」
帝都バルデッシュ周辺にいる人達を便宜的にアーカート人と呼んでいるが、細かく言えば多数の民族の集合体であった。
言葉と宗教が同じなのであまり差が無いのと、帝国が統一感を見せるために勝手にアーカート人と呼んでいるだけなのだ。
「だからだよ。黒い髪のミズホ人と、肌の色が違うラン族が狙われた」
徹底的に滅ぼして、そこから取り上げた利益を自称アーカート人達に配分する。
そうすれば、日和見な連中の忠誠も期待できるはずだと。
「（生粋の国粋主義者というか……）」
どう考えても、友達付き合いは遠慮願いたい人であった。
「兵の準備を進めておく」

「妾も、フィリップ公爵領と北方諸侯に動員をかけよう」

同時に、東部や西部の諸侯にも声をかけておくともミズホ上級伯爵に説明していた。

「駄目元でも、少数の参加は見込めるからの」

みんながみんな、過激なニュルンベルク公爵に賛同するはずなどないのだから。

「互いに軍を整えて殺し合い、生き残った方が勝利か。わかりやすくはある。それで、導師殿とバウマイスター伯爵殿はどうするのかな？」

ミズホ上級伯爵の前なので、テレーゼは珍しく俺をバウマイスター伯爵と呼んでいた。

「そうですね。乗りかかった船ですし、傭兵扱いにしてください」

このままヘルムート王国への帰国を目論むのも良いのだが、陸路でも海路でも困難が予想されるし、一つ困った物もある。

ニュルンベルク公爵がバルデッシュで稼働中の、通信と移動魔法を阻害する魔道具の存在である。

どうやらかなり広範囲にまで威力があるようで、現在ヘルムート王国にも被害が出ているはずだ。

ここで強引に戻ってみたら、領地まで通信と移動魔法が使えない有様なら意味が無い。

未開地で魔導飛行船が動かないと、開発に大きな支障があるからだ。

となれば、これは木っ端微塵に破壊しなければならない。
テレーゼ達がニュルンベルク公爵に勝利したとしても、これがアーカート神聖帝国側に残っては意味が無いのだ。

「（あなた。やはり、あの魔道具の破壊を目指すのですか？）」

「（エリーゼには隠し事は出来ないな）報酬は、お持ち帰りが出来る物を出来高払いで」

エリーゼと小声で打ち合わせをしてから、俺達は傭兵としての参加を表明する。
例の魔道具の破壊については何も言わない事にする。
下手に言うと確保しようと目論むかもしれないので、あくまでも軍事作戦に便乗して破壊する事にしたのだ。

「（それでいい）」

「（某も賛成である）」

ブランタークさんと導師も同じ意見のようだ。
この二人が気が付かないはずもない。
あんなにヤバい魔道具を仮想敵国に委ねる事の危険性を、誰よりも理解しているはずだから。

「有力な戦力の参加であるか。助かったな。フィリップ公爵よ」

「しかし、報酬の条件が適当よな。もっと具体的に何かないのかえ？」

「それは実際に働いての事でしょう？　その働きを見て、テレーゼ殿が適切な報酬を与える。次期皇帝候補には必要な能力です」

俺達も、自ら戦いに赴く以上は負けるつもりなどない。

当然勝利を狙うが、それで得た戦功にテレーゼがどれだけの報酬を出すのか？

これは、自国の貴族達のみならずヘルムート王国にも伝わるのだ。

ケチって少なければ隣国には笑われ、自国の貴族達も新皇帝に失望する。

ある種の意地の悪い宿題でもあった。

「次期皇帝のぅ……。覚悟はしておるよ」

当時首都にいた他の選帝侯と、即位したばかりのアーカート十七世の生存は不明である。

生きて軟禁されている可能性もあったが、ここは殺されたと思って動かなければいけないであろう。

「災難な理由で初の女帝とは、テレーゼ殿も不幸だな。バウマイスター伯爵達の参戦もあるのなら、少し条件はマシであるか。早速兵を集めよう。兵を出す理由もあるからな。あの男、軍人でも無い同胞に手を出しおって」

南部と首都で行われているミズホ資本からの資産の没収と、ミズホ人の収容所送りを言っているのであろう。

「では、妾達はここで」

「気持ちはわかるが、どうせ軍を集めるには時間がかかる。フィリ

ップ公爵も一晩くらいは泊まってゆっくりしていけ。北方の山道を抜ければ、すぐにフィリップ公爵領に到着するのだから」

「そうですね。ここでテレーゼ殿に倒れられても困りますし」

「ほれ。バウマイスター伯爵殿もこう言っておるぞ」

「わかった。遠慮なく休ませて貰おう」

もっともそれっぽい理由を語ったが、俺の目的はただ一つ。
ミズホ伯国の観光がしたいからである。
特に、食の面では見逃せない物が沢山あるはず。

「実は一つ、約束して欲しい報酬があるのですが……」

フィリップ公爵とミズホ上級伯爵はすぐに俺の条件を受けいれたので、何の憂いもなくミズホ伯国観光を楽しむ事にするのであった。

第八十三話　ミズホ伯国観光。

「いきなり何を頼むのかと言えば。でも、良く受け入れたわね」

「だって、許可は無料だもの。利益もあるし」

到着したミズホ伯国においてテレーゼが行った援軍の要請は無事に受け入れられ、俺達はミズホ城を辞してミズホ観光に赴く事にする。

夜は露天風呂がある高級温泉宿を貸し切りにして提供してくれるそうなので、これも楽しみである。

温泉に、美味しい和食にと。

一体何年ぶりの贅沢であろうか？

その代わりに一晩しか泊まれないので、今は急ぎミズホ伯国観光とお土産物のチョイスを始めないといけない。

美味しい物も食べないと駄目なので、今は一秒でも時間を無駄にしてはいけないのだ。

急ぎ、両替所でヘルムート王国の貨幣をミズホ貨に両替する。

銅貨は丸くて穴が四角の銅銭で、銀貨は江戸時代の一分銀に似て長方形、金貨は小判その物で金貨十枚は『十リョウ』大判と呼ばれて大判その物であった。

形と単位名称に差はあるが、使用されている金・銀・銅の量に差は無いのであまりややこしくはない。

さて何を買おうかと街中を歩いていると、イーナが先程の報酬について聞いてきたのだ。

「どうせ勝たないと履行されないし、履行しても帝国には損は無いし」

俺が申し出た条件は、バウマイスター伯爵領とミズホ伯国との直接貿易の許可である。

距離や魔導飛行船の数もあって暫くは俺が『瞬間移動』で買い物に行くだけであろうが、その行動に合法性を持たせたというわけだ。

勿論、ミズホ上級伯爵は無条件で受け入れている。

売り上げが増えて万々歳なのだから当然だ。

「そんなにミズホ伯国の産物が欲しいの？」

「欲しい！　出来れば買い占めたい！」

気合を入れて一億セント分を両替したのが、思うにこれから出兵があるので食料や物資の大量買占めは良くない。

その代わりに、なるべく量を抑えて種類を増やす必要があるであろう。

「まずは、逃した茶屋だな」

「拘りますのね」

「朝から何も食べていないからな。カタリーナは食べないのか？」

「食べますけど……」

峠の茶屋ならぬ町中の茶屋に入るが、町の様子も茶屋の中もまるで時代劇の風景のようであった。

町人や行商人などが、お茶を飲みながらダンゴなどを食べているのだ。

「いらっしゃいませ」

店内から、着物によく似たミズホ服姿に前掛けをした看板娘が姿を現す。

年齢は俺達とさほど違わないであろう。

腰まで伸ばした黒髪を後ろで束ねている、正統派和風美少女であった。

看板娘というやつだ。

「ご注文は？」

「あなたの愛をください」

「ええと……」

「ふんっ！」

「痛ぇ！」

相手が美少女なので早速エルがナンパを始めるが、俺とブランタークさんが拳骨を頭に落として強引に席に座らせる。

「俺に恥をかかすな！」

「だって、愛が欲しい……」

「その男。何かあったのか？」

「少し前に失恋しまして」

「なるほどの」

テレーゼは、ナンパなエルに少しだけ同情的な視線を向けていた。

「顔は良いのに、ガッツキ過ぎるから引かれるのじゃな」

テレーゼの指摘は１２０パーセント正しかった。

ただし、他人の事はあまり言えないと思う。

「すいません。ご注文は？」

看板娘は、この手の客のあしらいに慣れているようだ。

気にした様子もなく、俺達に注文を聞いてくる。

「全員に茶を！　あとはメニューの端から端まで全部である！」

「全部ですか？」

「左様！　全部である！」

導師は別の意味でフリーダムであった。

お店のメニューを全て注文してしまうのだから。

看板娘もこの展開は読めなかったようで、かなり驚いている。

「導師。そんなに食えるのか？」

「心配ないのである！」

「大丈夫」

ブランタークさんが心配そうに聞くが、導師にヴィルマまでいるのだ。

茶屋のメニューくらいなら心配無いであろう。

「ダンゴからお持ちします」

シンプルな白ダンゴに、餡子が載った草ダンゴに、みたらしダンゴと。

久しぶりに食べる甘味が、俺を感動の渦に巻き込んでいく。

「美味しいですね。あなた」

「やはり、プロには負けるか」

「今度、私も挑戦しますね。材料を買って帰りましょう。気候や土質が違うと同じ作物でも味が違うと言いますし」

確かに米や小豆などは、冬に寒冷になるミズホ伯国の方が味が良いかもしれない。

さすがは、料理が得意なエリーゼである。

鋭くそれを指摘していた。

「ヴェルがたまに作る物ってミズホ料理だったのね。どうやって知

ったの？」

「ブライヒブルクの図書館で」

イーナに鋭い質問をされてしまうが、ブライヒブルクの図書館は領主の梃入れもあって蔵書数ならば王都スタッドブルクに次ぐ規模を誇る。

さすがのイーナも、図書館の蔵書全てを把握していないので俺の嘘に気が付かなかったようだ。

「ヴェンデリンは本と食に興味があるのか。妾と気が合いそうじゃの」

「テレーゼ殿は料理とかするのですか？」

「たまにじゃがの。あまり色々とは作れぬが、そうバカにしたものでもないぞ」

テレーゼはそう言うが、俺は彼女の料理の腕など知らないので何とも答えようがなかった。

実際に作らせると、とんでもない物を食べさせられる可能性がある。

今はそんな時間もないし、ここはスルーするのが賢明であろう。

「お汁粉が美味しいけど、砂糖とかはどうしているのかな？」

「砂糖はテンサイから取りますね」

ルイーゼの疑問に、看板娘さんが答えてくれる。

サトウキビ由来の砂糖は輸入品で高価なので、ミズホ伯国では砂

糖はテンサイから取るのが普通らしい。
絞りカスは、家畜の餌として利用されているそうだ。

「サトウキビの砂糖と変わらないな」

「同じく甘いので、また太ってしまいそうですわ」

「カタリーナは良くそう言うけど、あまりガリガリなのも……」

甘い物を食べると、カタリーナは必ず太るとかダイエットをしないと言う。
王都の有閑マダム達のように太っているわけでもないのに、本当に不思議だ。

「そうですの？」

「主に抱き心地の面で」

「ヴェンデリンさん……」

カタリーナに呆れられてしまうが、これは譲れない点でもある。
太り過ぎも良くないが、痩せすぎの女性に魅力がないのも事実であった。

しかし、女性が多いと姦しいとは良く言ったものだ。
エリーゼ達は話をしながら美味しそうに食べていたが、その中で異様な風景を作り出している二人がいた。

「どれも美味しいのである！」

「もう一回りいける」

「確かにそうであるな。お姉さん！　もう一回メニューの端から端まで！」

「もう一回ですか！」

大量の皿を重ねながら導師とヴィルマは大量の甘味を食い尽くし、挙句にお替りまで要求していた。

看板娘も、全メニューを二回頼んだ導師に思わず声をあげてしまう。

「二人とも、大丈夫か？」

一人羊羹を小さく切って食べているブランタークさんが、胸焼けでも起こしたかのような表情を浮かべながら二人を本気で心配していた。

「問題ないのである！」

「全然、余裕」

「そうかよ……」

羊羹を食べ終わったブランタークさんは、二人の食欲に呆れ顔であった。

多分、早く酒を飲みたいという気持ちも合わさっているのであろうが。

「初めて食べる物も多く、大変に美味しかったのである！」

「満足した」

「そりゃあ、あれだけ食べればな……」

茶屋で甘味を味わった俺達は、次のお店を目指して移動する。

恐ろしい量の甘味を食べた導師とヴィルマにブランタークさんは呆れていたが、俺からも色々と言いたい事がある。

「食事はまだなんだけど……」

確かに茶屋で出た甘味は、調理スキルが低い俺が作った物に比べれば美味しかった。

思えば、ボッチな子供時代に未開地で苦労して試行錯誤を重ねた物であったが、やはり餅は餅屋。

これは、ミズホ人のお抱え料理人を雇う必要があるかもしれない。

あとでミズホ上級伯爵に相談しようと、俺は決意していた。

「安心せい！　まだ腹は半分以上も空いているのである！」

「私も、全然余裕」

「ならいいか」

「いいのかよ！」

看板娘のナンパに失敗したエルが俺にツッコミを入れるが、まだ食事があるのでそこで食べられないとか言わなければ問題ない。

店内に入って注文しない奴は失礼なので、食べられれば問題ないわけだ。

支払いなど、さほどの額でもないのだから。

「次は……。あった！」

暖簾には『蕎麦』と書かれている。

この世界に来てからようやく蕎麦を食べる事ができる。

あまり騒ぐとみんなにおかしいと思われるので、自然にこの店を見付けた風に装って店内に入る。

「かけと盛りを両方」

俺は両方頼んだが、エリーゼ達は片方しか頼まなかった。

「メニューの端から端まで」

「楽しみ」

「全部ですか？　お客様」

「問題無く食べられるので安心するのである！」

「わかりました……」

この二人は、また注文を取りに来た蕎麦屋のお姉さんを驚かせていた。

「美味いなぁ」

蕎麦は南方にもあったので入手して打ってみたのだが、俺の腕では太いパスタのようになってしまう。

麺つゆも試作はしてみたのだが味がイマイチで、ある程度の知識はあっても蕎麦は美味く作れない食べ物であった。

それが、このミズホ伯国では普通に食べられるのだ。

この様子だと、他の和食も大いに期待できるはず。

ただ、一つ問題がはある。

「せっかくのミズホ料理も、明日の朝までしか食べられない」

夕食はミズホ上級伯爵が準備した高級温泉宿なので、酒と食事は期待できるはず。

だが、夕食と朝食を固定されてしまうという罠も存在している。

出来れば戻るまでに色々と食べたいが、あまり食べ過ぎると夕食が入らなくなってしまう。

大変に悩ましいところだ。

「限られた胃袋で、何を食べるのかが問題だな」

「何で、そんな事で深刻に悩むんだよ……」

エルは俺に、わけがわからないという表情を浮かべていた。

「俺も、導師やヴィルマくらい食べられたらな」

「あの二人を真似するのは危険だ」

エルに変な奴だと思われてしまうが、この蕎麦屋でも女給さんにナンパして無視されているエルには言われたくなかった。

「じゃあ、ヴェルもナンパしてみろよ！　絶対に失敗するから！」

そんな事をするはずがない。

食事をしに来ているのに、なぜナンパなどをしないといけないのだ。

それはそれ、これはこれであろう。

そして、エルは一番大切な事を忘れている。

「お前は、何をバカな事を……」

しまったと思って止めたのだが、既に手遅れであった。

「エルヴィンさん。他国で伯爵様がナンパなどをしては風聞に関わります」

「エル。それで本当に誰か引っかかったらどうするのよ」

「奥向きの騒動を増やして欲しくないね」

「駄目家臣。ナンパも成功していないし」

「ヴェンデリンさんがナンパなどしたら、多くの女性が押しかけると思いますけど……」

「畜生！　俺の愛はどこにあるんだぁーーー！」

エリーゼ達にボロクソ言われたエルは、蕎麦のヤケ食いを始めていた。

「麺つゆと乾麺が売っていれば、いつでも食べられるのに」

「そんなに気に入ったのか？」

「ええ。ブランタークさんはお酒ですか？」

「この冷酒。美味しいわ。買って帰ろう」

ブランタークさんは、蕎麦よりも追加で注文した日本酒らしき酒を気に入ったようだ。

ツマミにソバガキを食べながら、冷酒をお替りしていた。

「（こういうオジさん。休日の蕎麦屋で見たことがある）」

勿論、日本での出来事である。

「伯爵様。何か失礼な事を考えなかったか？」

「いいえ（鋭いな……）お姉さん。このお酒ですけど」

誤魔化すため、若い女給さんに酒について聞くと、米を原料としたミズホ酒というらしい。

「（そのまんま、日本酒だな）」

味見をしてみるが、味は日本酒その物であった。

「さてと。某は大変に満足である」

「ご馳走様。腹八分が健康に良いと聞くから、この辺で止めておく」

ヴィルマが何か凄い事を言っているが、聞こえなかった事にした。
蕎麦屋での食事を終えて店を出ると、ここでも大量に食べたヴィルマと導師は腹をさすりながら満足そうな表情を浮かべていた。

「あれだけ食べれば当然だと思うけどな」

この点に関しては、エルの言う事はごもっともである。

「次は、買い物だな」

女性が多いのでまずは服になってしまうのだが、ここはミズホ伯国である。
基本は着物と同じ着方をするミズホ服と呼ばれるもので、これは着付けを覚えないとどうにもならない。
『呉服店』と書かれた高級そうなお店で、エリーゼ達が綺麗な柄のミズホ服や高価な宝石がついた簪などを楽しそうに見ているが、購入は次の機会にする事にした。

「残念だなぁ。着付けが出来るメイドも雇うか」

「贅沢な話だな」

「金はありますから」

着付けの出来るメイドも、後でミズホ上級伯爵と要相談であろう。

「伯爵様は、普段はあまり贅沢しないからな」

ブランタークさんの言う通りで、俺達の普段の生活はさほど贅沢

でもない。
伯爵家一家なので最低限の外面は整えているが、中身はそうでもなかったりする。
冒険者稼業もしているので、野営の時には他の冒険者と大差無いし、チョコや魔の森産フルーツや魔物肉などの食材も、実は自己調達しているのでお金は払っていなかった。
食料の輸入や購入が、一番お金を使っている項目であろう。

「ヴェンデリンは、嫁達に優しいの」

「そうですか？」

「妾など女公爵故に、妙に傅く連中ばかりでつまらぬわ。試着した服を褒めるのは、まさか似合わぬとは言えぬ家臣や買って欲しい商人ばかりでの」

せめて服を着た時に、普通に似合う似合わないを言ってくれる男性が欲しい。
今のテレーゼの立場では、まず望めない願いでもあったが。

「ミズホ服は無理でも、小物なら買えるか」

隣のお店には、漆塗りで高価な装飾の施された櫛や小物入れなどが売られていた。
他にも、高価な茶器や、漆器、掛け軸など。
いかにも和風な品が多数売られている。

「エリーゼ。この櫛とかどう？」

「使いやすいですね。髪がすっと入ります」

それほど高くもないので、エリーゼ達が気に入った品を次々と購入していく。

「時にヴェンデリンよ。妾には買うてくれぬのか？」

「いや……。無理でしょうに……」

いきなり他国の貴族に、しかも恋人や妻でもない女性に物など贈ったら、周囲が妙な噂をしかねない。

それに、今の俺の立場はテレーゼに雇われた魔法使いでしかないのだ。

偉い人にプレゼントなどするはずがなかった。

「別に噂になっても、妾は一向に構わぬがの」

「俺がとても困るんです！」

もしヘルムート王国の貴族に知れたら、『バウマイスター伯爵はアーカート神聖帝国の選帝侯に籠絡された』とか、『色香に迷わされた』とか言い始める奴が絶対にいるのだから。

「次は、魔道具の店か……」

別の魔道具店に入ると、そこには多くの品が並んでいた。

外見が和風なのに、まるで大型家電ショップのように広いのだ。

「いらっしゃいませ」

陳列されている品を見ると汎用品が多く、どれも王国の物よりも

小型で値段も二割ほど高い。
だが、店員に説明を聞くと魔力消費効率も良いようで、同じ魔力を込めても王国製の物より三割ほど稼働時間が多いそうだ。
小型化と省エネ技術に長けている。
まさしく、メイド・イン・ジャパンのようであった。

「ミズホ伯国製の魔道具は、帝国製の物よりも高性能でございます」

帝国産と王国産の魔道具にそれほど性能差はない。
つまり現時点で、大陸一と呼んでも過言ではなかった。

ただ、購入はしなかった。
魔の森の地下倉庫で見付かった魔道具類の方が高性能であったからだ。

「（でも、形状とかスイッチの配置とか似ているな……）」

ミズホ伯国は、帝国が南部の小王国であった頃から存在しているらしい。
ミズホ一族の極一部のみがそのルーツを知っているそうだが、もしかすると魔の森辺りから流れて来たのかもしれない。
だとすれば、独自に高度な魔道具製造技術を持っている事も納得できるというわけだ。

昔よりも技術が落ちているのは、流浪の際に失った技術が多かったのかもしれない。

「買わないの？　ヴェル」

「魔の森にあった地下倉庫の産物の方が性能が良いから」

「そう言われるとそうね」

「ああっ！　でも買って行こう」

「もしかして、魔道具ギルドに売るとか？」

イーナの考え通りで、彼らに売れば多少は利鞘を稼げるはずだ。

魔道具ギルドは、俺達が魔の森の地下倉庫で発掘した品や、ロックギガントゴーレムの残骸一式など、あり余る財力に任せて大量に購入している。

全ては新しい魔道具技術開発のためであったが、その成果については正直微妙である。

彼らも周囲から成果が無いと言われているのは重々承知で、だからこそ余計にミズホ伯国製の魔道具も見本として高く購入してくれるはずだ。

「一応、外国に持ち出し禁止みたいだよ」

「いいの？」

「帝国には流通しているのだし、王国の貴族で持っている者もいるだろう」

帝国では金を出せば買える物なので、一つも王国に流出していないはずがない。

それに、帝国でもミズホ伯国製の魔道具に性能が追いついていない。

製造技術が秘匿されている証拠でもあった。

「魔道具ギルドの連中。金はあるから買うだろう。ちょっとした小遣い稼ぎだ」

買ってくれなくても、他に転売すれば儲かるであろう。

関税がかからない分、バウマイスター伯爵領内なら安く売れるのだし。

「全種類」

「あのお客様？」

「だから全種類」

「あの……。本当にですか？」

「本当に」

「実は、展示品以外にもお勧め品がございまして」

俺が大量の大判を店員の前に置くと、彼は満面の笑みで応対してくれた。

店頭に並んでいなかった物まで出してきて丁寧に説明をしてくれる。

「またの来店をお待ちしております」

魔道具屋の商品を全種類購入した俺達は、その足で食料品店へと向かう。

実は、魔道具などどうでもいいのだ。

ここは日本風な文化を有するミズホ伯国であり、ならば俺が求め

る物はこれしかない。

「やはり、負けているか……」

「あっ。ヴェルが作っている『ミソ』と『ショウユ』がある」

ルイーゼが、沢山の種類がある醤油と味噌に驚いていた。

「ヴェルって、ミズホ伯国の調味料を再現したんだね」

「ミズホ伯国製だったんだな。図書館のボロい本に記載されていたから気が付かなかった」

もう一度言うが、勿論嘘である。

ルイーゼの場合、図書館に行って本を読むなどという趣味は無いので永遠に気が付かないであろう。

「『濃口』『薄口』『溜まり』と種類豊富だな」

醤油もそうだし、味噌も甘口から辛口に白味噌や八町味噌に似た物まで、俺は当然全種類を購入していた。

「昆布、カツオブシ、麺つゆ、ポン酢、漬物、海苔、米も品質がいいなぁ……」

ここは宝の山であった。

もうすぐ戦争なのであまり大量には買えないが、自分達で消費する分だけなら暫くは大丈夫であろう。

「乾麺もあるじゃないか！」

蕎麦と饂飩の乾麺も販売していたので、これもある程度購入しておく。

「おっと！　ミリンも忘れては駄目だな！」

酒もミズホ酒に、米・麦・芋などの焼酎も多数販売されていた。
飲むばかりでなく、これは料理にも使える。
なるべく購入しておきたいところだ。

「お師匠様。ヴェンデリンさんは、どうしてこんなに喜んでいるのでしょうか？」

「昔っから、こういう男だから。女漁りをしているわけでもないし、良いじゃねえか」

「そうですわね。可愛らしいとは思いますけど……」

後ろでブランタークさんとカタリーナが何かを話しているようだが、気にしない事にして、それからも大量のミズホ伯国製の食材や調味料を買い占めるのであった。

「バウマイスター伯爵殿は、ミズホ伯国が気に入られたようだな」

「ええ。だから、自由に来られるようにしてください」

「フィリップ公爵殿や帝国との調整もあるが、買い物でお金を落としてくれる分には大歓迎であるよ」

「景気を良くして領民の生活を守りたいでしょうしね」

「バウマイスター伯爵殿は、理解が早くて助かるな」

夜になり指定された高級宿に向かうと、そこではミズホ上級伯爵主催の宴会が開かれていた。

温泉宿なので、俺達も宿が準備した浴衣に着替えている。

風呂は源泉かけ流しの天然温泉で、効能は神経痛とリウマチ。

加えて子宝に恵まれるという伝承もあるそうで、エリーゼ達も早く入りに行きたいと言っていた。

露天風呂もあり、今日は混浴も可能だそうだ。

まずは食事という事で、畳敷きの宴会場に入るとお盆に載った数々の料理が並んでいた。

刺身、天ぷら、高価な牛や豚の肉を味噌で焼いた料理に、一人一人に小さな魚介類の鍋も付いている。

前世の社員旅行で温泉宿に行った時に出たメニューの豪華版である。

「料理人も欲しいなぁ……」

「人の移動は、帝国政府の領分だからな。何とも言えんよ」

「テレーゼ殿？」

「ヴェンデリンは、拘る部分が貴族的に変わっておるの」

とは言われても、これからエリーゼ達に着物や浴衣を着せたり、腕の良い料理人にミズホ食を作らせるにはミズホ人を雇う必要があるのだ。

これだけは譲れない。

いや、このために俺はまた人を殺すのだ。

もしその事実を知れば、俺は間違いなく鬼畜扱いされるであろう。

少なくとも、表面上は両国の安定のために動いているのだから。

「では、乾杯といこうか」

ミズホ伯国では、あまり格式ばった晩餐会などは行わないらしい。

誰が来ても、こういう形式で宴会を行うそうだ。

「妾は気に入っておるのじゃが、皇帝陛下を床に座らせるのかと騒ぐ者が多くての」

座布団があるのに、帝国の中枢では畳は床扱いらしい。

土足厳禁なので、俺はそうは思わないのだが。

「どうせ来ても堅苦しいだけだ。それで来ないのなら逆に好都合」

ミズホ上級伯爵が隠しもせずに本音を語る。

そのせいか、皇帝のミズホ伯国行幸は行われた試しがないらしい。

半独立国なので警備なども面倒であり、計画がその都度立っては結局消えてしまうのだそうだ。

「選帝侯も同じよな。妾くらいであろう。ここに来た事があるのは」

熱燗のミズホ酒を飲みながら、テレーゼが続けて語る。

「観光で、ここほど面白い場所は帝国にはないからの」

帝国は多民族国家なのだが、意外と文化的に差異がある地域は少ない。

ここ二千年ほどで、かなり同化されてしまっているからだ。

その中で唯一独自性を保ち続けるミズホ伯国は、庶民や選帝侯以外の貴族から見ても人気の観光スポットであった。

「うちは観光も主産業なのに、今回の戦乱で客が目に見えていなくなっていったわ。まったく、あの若き野望家である公爵殿は空気が読めぬの」

実入りが減ってしまったと、ミズホ上級伯爵は愚痴を零していた。

今日の宿泊先がこの高級温泉宿になったのも、クーデター騒ぎのせいで富裕層の客が来なくなってしまったからしい。

この状況で、そういう階層の人達は観光どころではないので当然であったが。

「戦乱が長引けば、逆に帝国は衰退しますよね？」

「短期的には、どう動いても衰退するであろうな。ニュルンベルク公爵には高度で精密な長期計画があるらしいがの」

テレーゼも、ニュルンベルク公爵に辛辣であった。

中央集権が強い一つに纏まった帝国など、そう簡単に作れるはずもない。

ニュルンベルク公爵が無茶をすればするほど、帝国が衰退する可能性もあるのだ。

「面倒な人ですね」

「やる気が余っているのであろうな」

宴会とはいえどうしても話す内容は、クーデターや首謀者であるニュルンベルク公爵の話題になってしまう。

だが、じきに話す事もなくなって次第に宴会はお開きになっていく。

「明日は早い。早めに風呂に入って寝るとするかの」

温泉、しかも露天風呂とは前世ぶりである。

子供時代に未開地で岩を掘って張った水を温めて風呂にした事もあるが、あれは厳密には露天風呂ではない。

ただの野外風呂なので除外する事にする。

「エル。風呂に行くぞ」

「おっ、おう……」

夕食も満喫できた事であるし急ぎ露天風呂に向かおうとするが、誘ったエルの視線がまた上の空であった。

視線の先を見ると、そこには一人の女性が立っている。

「エル。彼女？」

「うん」

これだけで通じてしまうのが、何とも言い様が無い。

つまり、エルはまた出先で会った女性に一目惚れをしてしまった

ようだ。

「（あいつは、行く先々で女に惚れるな）」

「（若いのであろう）」

ブランタークさんと導師が小声で話をしていたが、間違いなくまたフラれると思っているのであろう。

確かに、良く見るとかなりの美少女であった。

身長は百六十センチほど、水色の袴下と羽織姿で姿勢良く部屋の隅に立っている。

腰まで伸ばした黒い髪をポニーテール状に纏め、年齢は俺達とそう変わらないであろう。

和風女剣士風美少女で、俺はその顔を見てカルラを思い出していた。

それほど似ているわけではないが、雰囲気が良く似ていたのだ。

「彼女かえ？」

「護衛ですか？」

「妾達は女性が多いからの。ミズホ上級伯爵が付けてくれたのじゃ。見よ、三本刀であろう」

『魔刀』持ちで抜刀隊に所属しているという事は、かなりの腕前のはず。

そう、彼女は美少女剣士様だったのだ。

「『抜刀隊』は、基本的に男所帯じゃからの。女性は三名しかおらぬと聞いている。その三名の中でも、彼女が圧倒的に強いそうじゃ」

テレーゼの説明によれば、彼女は『フィリップ公爵様御一行』を護衛するために明日から同道するそうだ。
まあ、俺達の事なのだが。

「あの娘は、ハルカ・フジバヤシという名で十六歳だそうじゃ。妾くらいの年齢になれば、なかなかの美女になるであろうな」

雰囲気がカルラに似た和風女剣士美少女なので、エルが惚れるのも仕方が無いかもしれなかった。

「ヴェンデリンよりも、エルヴィンが惚れたのかえ？」

「かもしれません」

「悪くない組み合わせじゃの。共に剣を使うし、ハルカ・フジバヤシの実家は小身の陪臣家だそうじゃ。類稀なる剣の腕前で抜擢されたわけじゃな」

テレーゼ様の言葉が耳に入った瞬間、エルの全身に気合がみなぎってきたようだ。
彼女ならば、自分が嫁に貰っても何の障害もないはず。
それがわかると、エルの目に再び闘志が燃え始める。

「初めまして。私は、バウマイスター伯爵の警護をしているエルヴィン・フォン・アルニムと申します」

脈があるとわかるやいなや、エルは脱兎の如くハルカの元に駆け寄って自己紹介をしていた。
俺の護衛のはずなのに、既に俺は眼中にも入っていない。

「共に警護で協力する者同士、少し打ち合わせをしましょう」

「打ち合わせねぇ……」

勿論ちゃんとやっているのだが、女性陣にはチャランポランに見えてしまう部分もあり、ルイーゼに言わせれば打ち合わせ目的のナンパにしか見えていないようだ。

「ハルカ・フジバヤシと申します。アルニム様」

「共にフィリップ公爵様を警護する者同士、様なんて付けないでください。あと、親しい人達は私をエルと呼びます」

「エルさんですか？」

「はいっ！　宜しくお願いします。ハルカさん。早速ですが、警備の打ち合わせを。この宿内の警備は万全でしょうが、ミズホ伯国を出れば警戒を強める必要が」

「そうですね」

ハルカという美少女剣士は、基本的に真面目なようだ。

エルからいきなり名前で呼ばれても、仕事の話が出ると全く気にしていない。

仕事の打ち合わせ名目だと言われると、素直にエルと打ち合わせを始めていた。

「こんなに真面目なエルって、初めて見たわ」

「俺も」

イーナの指摘に俺も賛同する。

ハルカという少女が大役に抜擢されて真面目に頑張ろうとしているのに気が付き、それをフォローする事で惚れられようという作戦なのであろう。

素晴らしい観察眼と作戦だと思うが、それが恋愛の成就に結び付いた事は今まで皆無である。

「ところでハルカさんは、フジバヤシ家の長女なのですか？」

「いえ。嫁いだ姉がおりまして、後継ぎの兄もおります」

「そうですか」

途端に、エルの顔に満面の笑みが浮かぶ。

彼女ならば、何の問題もなく嫁にできると思っているのであろう。

まあ、気持ちはわかる。

俺から見ても、そう滅多にはいない美少女であったし。

「（しかし、ここに来て美少女剣士か……）」

しかも彼女、何気にスタイルが良い。

剣を習っているので姿勢が良く、着ているミズホ服の胸の部分はかなり盛り上がっていた。

カタリーナよりも、少しだけ小さいくらいであろうか？

「ハルカさんは趣味などは？」

「えっ？　それが警備と何か関係が？」

「直接は関係ありません。ですが、警備というのは永遠に緊張が続くわけではありません。合間に共に警備する人間とのコミュニケーションが大切なのです」

「なるほど。そういう事ですか。お休みの時は料理などを……」

「なるほど、ハルカさんは剣だけではなくて女性としての嗜みも心得ているのですね」

「そこまでは上手ではありませんけど……」

ハルカは、エルから褒められて満更でもない表情を浮かべている。
もしかすると、あまり男性に免疫が無いのかもしれなかった。

「口説きの経験値が増してきましたわね」

剣の腕は認めるが、基本彼をナンパ野郎だと思っているカタリーナは呆れ顔だ。
ただ、警備に関する発言で間違った事をいっているわけでもない。
それに今まで、エルは俺に何の襲撃もないように護衛役を果たしていたのだから。

「ヴェル。お風呂行こう」

「ヴェル様。お風呂」

「そうだな」

エルとハルカの事は、本人同士に任せておけば良いであろう。
ルイーゼとヴィルマに手を引かれたので、すぐに露天風呂へと移動する事にする。

「男性風呂、女性風呂、混浴とございますが」

「男性……」

「混浴で！」

「混浴よ！」

「混浴だね！」

「混浴」

「混浴ですわ」

男性風呂と言おうとした俺を、エリーゼ達が混浴だと言って塗り替える。
別に導師とブランタークさんの裸に興味など一欠片も無かったが、男同士で入った方が気楽だと思っていたからだ。

「お連れ様なら、先程男性風呂の方に行かれましたよ」

従業員の中年女性によれば、二人は急ぎ男性風呂へと向かってしまったらしい。

「混浴で良いではないか。妾も……」

「テレーゼ様。これからは夫婦の時間ですので、ご遠慮を」

混浴と聞いてテレーゼが割り込もうとするが、すかさずエリーゼが釘を刺していた。

間違いなく導師とブランタークさんは、これを予想して先に逃げたのであろう。

「バウマイスター家の貸切でもあるまいて。妾が入って何か問題があるのかえ？」

「それは……」

「あるではないですか。帝国のフィリップ公爵と、王国のバウマイスター伯爵が同じお風呂に裸で入る。周囲に漏れたら大変ではないですか！」

カタリーナの言う事は正論であった。

外聞が悪いだけではなく、下手をすると俺とテレーゼが組んで帝国を盗もうとしていると、ニュンベルク公爵から宣伝される可能性があるのだ。

「（テレーゼとの混浴は魅力的だけど……）」

下手をすると、王国側にも懸念を抱かれかねない。

テレーゼに、それに目を瞑ってまでの魅力があるとは俺は思えなかった。

内心ではかなり惜しいとは思いつつであったが。

「大切な大義の前ですので、テレーゼ様はご遠慮くださいませ」

カタリーナからピシャリと言われてしまい、俺達は混浴風呂へ、テレーゼは諦めて女風呂へと向かったようだ。

「テレーゼ様もしつこいね」

ルイーゼが露天風呂に浸かりながら溜息をつく。

露天風呂は、さすがは高級宿というだけあって豪華で広い造りとなっていた。

六人で岩で囲まれた露天風呂に浸かっても、まだ広さに余裕がある。

周囲は竹垣で覆われていたが、その上から満月と山々の稜線が見えて美しい風景を形作っていた。

隣接する日本庭園風の庭には、獅子脅しもあって定期的に竹の音を鳴り響かせる。

「もしかすると、テレーゼ様は魔力の増加を狙って…」

「ルイーゼ。しっ！」

イーナが慌ててルイーゼの発言を止める。

既に魔力量が限界を迎えていたはずの五人の魔力が上がり、しかもその原因が俺との夜の生活かもしれないという事実は秘密であった。

同じくそういう事をしているアマーリエ義姉さんには元から魔法使いの素養が無かったようで、一切魔力は増えていない。

だが、初級以下ながらも無意識に魔力を行使して槍や戦斧を使っていたイーナとヴィルマは魔力が増えている。

ブランタークさんの予想によると、今までは千人に一人と認識されている魔法使いの数が、数百人に一人になる可能性を秘めているそうだ。

『ただし、伯爵様とした場合な』

修練や器合わせで魔力量の限界を迎えたはずのエリーゼ、ルイーゼ、カタリーナの魔力量も増えている。

もしこれが世間に知れれば、俺の元に大量の女性が押しかけるであろう。

『へへへっ、五十年ぶりの殿方との逢瀬ではあるが、これで魔力も増えるのだからご褒美よの』

『ほんに、楽しみよの』

八十歳超えの老婆魔法使いなどが、俺に抱かれようと押し寄せてくる。

これはもう、完全に悪夢としか思えない。

それでも、まだ女性ならばいい。

『ウッス！　俺の魔力を上げて欲しいっす！』

男が尻を差し出した日には、俺は確実に発狂するであろう。

教会ではタブー視されているが、魔法使いが増える、魔力量が限界を超えて上がるという魅力の前に、儀式扱いして教会が黙認する可能性だってあるのだ。

ルイーゼが口に出そうとしたのをイーナが止めたのは、ナイスタイミングだと思う。

「ルイーゼ。口が軽いわよ。ここには、目と耳があるのだし」
「確かに失言だね」
ミズホ伯国としては、俺達に何かがあると困るのであろう。
『探知』で探ると、周囲には護衛をする人達の反応が見える。
「（もしかすると、『ニンジャ』とかいるのかな？）」
「覗き？」
警備目的でも、もしかすると裸を見られたのでは？
そう感じたヴィルマが身構える。
「大丈夫だよ。ヴィルマ。全員女の人だから」
「良くわかるな……」
『では、クノイチなのか？』という考えよりも、ルイーゼの超探知の方が気になってしまう。
「男性と女性って、微妙に魔力に違いがあるんだよ」
「知っているけど……」
子供の頃に師匠から教わっているが、実際にそれを見分けられる者などほとんど存在しないと教わっていたからだ。
師匠やブランタークさんでも不可能だと言っていた。
二人は一度魔力を覚えた個人の特定は可能だが、初見の魔力だけ

で、それが男子か女子かを見分ける技はルイーゼだけの特技であった。

「ルイーゼは凄い。今度、教えて」

ヴィルマは素直に感動していた。

「最近、ますます凄くなってきたな」

もはや導師ともタメを張れそうな能力に、俺は驚きを隠せないでいた。

「でも、最近になって魔力が上がってからだよ。同時に、魔力の探知能力が上がったような気がするんだ」

「その気になれば、独自に爵位を得られそうですわね」

カタリーナも、ルイーゼの実力に太鼓判を押す。

「いらない。領地の運営とか面倒そうだし。ボクはヴェルの奥さんのままで、子供達と共に魔闘流を世間に広めるのさ」

「ヴェンデリンさんとルイーゼさんの子供ですか……。私達の魔力が増えた点も合わせてですけど……」

もしかすると、導師のような子供が生まれるかもしれない。

カタリーナは、そんな風に予想したらしい。

「お話を戻しましょうか。素晴らしい露天風呂ですね」

確かに、他人に聞かれると面倒である。
エリーゼの言う通りに、話題を露天風呂の方に戻していた。

「定期的に来たくなるな」

「今度は、ゆっくりと何泊かしたいですね」

そう微笑みながら話しかけてくるエリーゼであったが、さすがはエリーゼ。
その胸は、湯船にドプンと浮いている。
結婚後に一緒に風呂に入った時から気が付いていたが、胸は脂肪なので浮くというわけだ。

「（素晴らしい光景だな）」

カタリーナの胸も浮いているし、イーナとヴィルマの胸はお湯を通して見ると、直接見るのとは違ってオツである。
きっとこれは、嫌な人殺しまでして生き残った俺に対する神様からのご褒美なのであろう。

罪悪感がなくもないが、あまり気にしているとこの世界では生き残れない。
そう割り切る事にしたのだ。

「ぶぅーーー！　ボクの胸はこれはこれで個性なんだぁーーー！」

一番胸が無いルイーゼが俺の背中に飛びついてくる。
さすがに十二歳時から成長はしていたが、やはりルイーゼの胸はAカップであった。

「そうだな。個性だな。俺は好きだよ。ルイーゼの胸」

背中にルイーゼの微乳を感じながら、スケベ親父のような事を言ってみる。

中身の年齢から考えると、そうおかしくないのだが。

「そうでしょう。ボクの胸は希少価値なんだよ。それに誰とは言わないけど、ボクは嫁き遅れてないしね」

「おいおい……」

誰の事かと言われれば、勿論二十歳で未だ独身なあの人の事であろう。

「ほう。誰が嫁き遅れなのか？　是非とも妾に教えて欲しいものじゃな」

しかし、ルイーゼもなかなかに意地が悪い。

俺にちょっかいをかけてくるテレーゼにわざと嫌味を言うのだから。

ルイーゼの実力から考えて、すぐ近くまでテレーゼが来ている事に気が付かないはずはないのだから。

「（おいおい。ルイーゼ）」

「（女性の気配には気が付いたんだけど、テレーゼ様とは思わなかったよ）」

「（嘘つけ）」

などど言い訳をしているが、間違いなく嘘であろう。
彼女は、もうとっくにテレーゼの魔力を覚えているはずだからだ。

「あの……。テレーゼ様？」

「安心せい。初心なヴェンデリンのために、湯着を着てきたぞえ」

さすがは観光地の温泉、他人と裸で風呂に入る風習が観光客のために湯着まで準備しているらしい。
テレーゼは白い湯着姿であった。

「共に命をかけて戦う戦友同士になるのでな。こういう付き合いも必要であろう？」

そう言いながら湯船に入るが、元々湯着は薄くて体のラインが出やすい上に、お湯でテレーゼの体に張り付いて乳首などが透けていた。

俺は慌ててテレーゼから視線を逸らす。

「テレーゼ様。高貴な身分の女性がはしたないと思いますが」

「エリーゼ殿は裸ではないか」

「夫婦が一緒にお風呂に入って何か不都合が？」

「無いの。早く子が出来るかもしれぬの」

エリーゼからの攻撃を、テレーゼは前と同じようにのらりくらりとかわしていた。

さすがは、選帝侯で皇帝候補である。

「妾はふと思うたのじゃが、妾がヴェンデリンと結婚すれば、このエリーゼ殿との不毛な言い争いは消えるの。それなれば、平和じゃな」

「いや、俺の立場と胃袋が常に戦時に曝されます」

間違いなく、両国から要注意人物にされてしまう。

それだけはごめん被りたかった。

魅力的な女性ではあるが、年上属性はアマーリエ義姉さんがいるのでもう必要ないのだ。

「テレーゼ様は、これから集める貴族達に餌を与えないといけないでしょうに」

イーナの言う通りである。

新皇帝アーカート十七世と他の選帝侯の生存を確認できない以上、反逆者ニュルンベルク公爵を倒そうとしているテレーゼこそが次期皇帝候補の最有力者なのだから。

「妾の婿になれるかもと言って仲間を集める。常套手段なので勿論使わせて貰うがの。じゃが、必ず誰かを婿にするという保障も無いの」

「では、テレーゼ様は独身を貫くのですか？」

「女帝の夫君は、扱いが面倒での」

帝国でも男尊女卑の気が強く、下手をすると女帝による統治の邪

魔にしかならない。
今までにも女帝は候補にはなったが、実際に即位した例はゼロであった。
必ずこの問題で躓くので、皇帝選挙で勝てないのだそうだ。

「外戚の扱いも面倒じゃ。だからの」

俺の隣で湯に浸かっていたテレーゼは、俺の腕にしがみ付いてくる。
二の腕に感じる豊満な胸の感触が素晴らしい。
ではなくて、これは拙いと思ってしまう。

「たまに妾に子種を提供するだけで良いぞ。ただそれだけでは色気も無いので、夫婦の時間も楽しもうではないか」

「いや、それは……」

「いい加減にしてください！　ヴェンデリン様が困っているではありませんか！」

怒ったエリーゼが俺をこちらに引き寄せ、テレーゼは俺と引き離されてしまう。
今度は、エリーゼの胸の感触が二の腕に当たってくる。

「困っておるのかは、ヴェンデリン自身が決める事じゃの。のう、ヴェンデリンよ」

ここで怒って傭兵としての仕事を放棄しても良いのだが、次第にニュルンベルク公爵の危険な思想が公になってくると、彼に勝たせるわけにはいかなくなった。

フィリップ公爵領とミズホ伯国を滅ぼした帝国が、ニュルンベルク公爵の下で一つに纏まり、王国に敵対してくる可能性が高いからだ。

下手をすると国内を纏めるために、わざと準戦時状態に持っていく可能性もある。

内戦で疲弊して増えた民衆や貴族からの不満を敵を作ってそちらに向けるのは、どの世界やどの国でもたまに行う行為であった。

それで常時増員した戦力を国境際に張り付けるとなると、王国全体の経済や未開地の開発状況に影響が出るであろう。

王国貴族としての俺は、テレーゼに勝って貰わなければいけないのだ。

彼女はそれを見通しているだけでなく、もし自分が皇帝になった場合の支持基盤の強化にも乗り出している。

外戚の専横を防ぐために、あえて外国貴族である俺の子を産もうとしている。

もしその子が次の皇帝になってもならなくても、帝国に親王国派という派閥の源流が生まれるわけだ。

彼女はそれを利用して、自分の子孫を守ろうとしているのかもしれない。

「ヴェンデリンが望めば、この湯着を脱いでも構わぬぞえ」

「いえ。いいですから！」

テレーゼの誘惑に、それをけん制するエリーゼ達にと。
そのせいで俺はあまり露天風呂を楽しめず、揚句に長湯だけして逆上せかけてしまうのであった。

「人がえらい目に遭っているのだから、助けてくださいよ」

風呂上りに、ブランタークさんと導師に助けてくれなかった文句を言う。

「伯爵様は誘惑に負けないと思っているのさ」

それもあるが、ブランタークさんとしては十年前に出会った可愛いテレーゼに強く言う事が出来ないのであろう。
年齢的に考えても、娘のように思えてしまうのかもしれない。

「某としては、どちらになってもあまり結果が変わらないような」

フィリップ公爵家に俺の血が入れば、建国以来初の王国による血の侵略に成功した。
大げさではあるが、貴族とはそういう風に考える生き物であるらしい。

「中央の役人貴族共は、前例が無ければ『前例が無い』と断るのであるが、前例が出来てしまえば『前例がある』で物事を進めるのである！」

テレーゼは、クーデター前に進めていた両国間の交易と人の出入りを増やす政策を進めるはず。

ニュルンベルク公爵に勝利しても内戦で国内が疲弊するので、交易の増大によってそれを補うはずだ。

民衆や貴族は一部を除けば、そこまで右左の政治思想に拘らない。交易によって少しでも金回りが良くなれば、新政権成立後の夢から醒めた彼らを繋ぎとめられるかもしれないのだから。

もっとも、それで職や利権を奪われて国粋主義に走る者が出るのも政治の世界というやつなのだが。

「貴族からしても、娘の嫁ぎ先や息子の婿入りの選択肢が増えるのは悪くないのである！」

両国の貴族の血が混じった子が増えれば、それも戦争の抑止力になるかもしれない。

侵略の理由にするのも人間という生き物であったが、そういうのは後世の貴族に任せるしかないであろう。

「だからって、人を見捨てないでくださいよ」

「ただなぁ。彼女の誘惑をかわすのは意外と簡単なんだぜ」

「是非に聞いておきましょう」

俺は、ブランタークさんの忠告に耳を向ける。

すると、彼は予想外の事を口にするのであった。

「なるほど。そういう手があったか」

「そういう手って？」

オヤジ二人との話を終えて部屋に戻る。

俺達に割り振られている部屋は、六人でも余裕で寝られる広い和室で、この宿では最高級の部屋だそうだ。

大物商人や貴族が、複数の妻や愛人を連れて楽しむための部屋らしい。

どうやら俺は、ミズホ上級伯爵にとって上客だと思われているようだ。

「テレーゼの誘惑をかわす手だ」

「それはいいわね」

早速イーナが飛びついてきた。

彼女も、『諦めない女』テレーゼに辟易していたのであろう。

「それで、どんな手なの？」

「こういう手です」

俺は素早くイーナの浴衣の帯を引っ張って取る。

時代劇のように回転はしないし、イーナも『あ～れ～』とは言わなかったが、浴衣の前の部分が全部開いて前の部分がほとんど丸出しになってしまう。

見えそうで見えない胸が、大変に素晴らしいアングルだと思える。

「ちょっと！　ヴェル」

「答えは、全員で夜の時間を楽しむでした！」

二十歳で肉感的な色気の漂うテレーゼであったが、彼女には欠点があった。

未経験の処女なので、そういう現場に堂々と自分も混ざるほど経験と度胸があるはずがない。

だから、彼女が夜に忍び込んで来るのを防ぐには、毎日嫁達の相手をしていろ。

この手の事に経験豊富そうな、ブランタークさんらしいアイデアであった。

「この部屋は、そういう事に都合がいい」

ベットではなく、畳に布団なので布団を繋げてしまえばすぐに準備は終わってしまうのだ。

しかも布団で高級品らしく、恐ろしいほどにフカフカで軽かった。

「ボクは良いアイデアだと思うな」

「だろう？　えいっ！」

「あれぇーーー！」

すぐに賛同して俺の傍にきたルイーゼの浴衣の帯を取るとノリが良い彼女はクルクルと回りながらお決まりの声をあげていた。

「それ何？」

「ミズホ式では、こういうシチュエーションもあるんだって」

「なるほど。ヴェル様」

「えいっ！」

「あれぇーーー！」

若干低音であったが、ヴィルマの浴衣の帯を解くと、彼女もお決まりの声をあげる。

しかし、ルイーゼはその情報をどこから得たのであろうか？

「にゃはは。面白いね。じゃあ、次はカタリーナね」

「私ですか？　私は恥ずかしいので……」

「駄目駄目。見せ付けて、テレーゼ様をかわすという崇高な目的があるんだから」

「逃げられない」

カタリーナはノリノリのルイーゼとヴィルマに捕まり、俺の前に引き出される。

「ノリ良く行こう！　えいっ！」

「あれぇーーー！」

恥ずかしいと言いながらも、カタリーナもテレーゼの露骨な誘惑に含む物があったのであろう。

素直に帯を解かれて、クルクルと回りながらお約束の声をあげて

いた。

「ところで、これは何なのですか？」

「ええと。悪代官と襲われる若い娘のプレイ」

俺は、田舎のお爺さんと子供の頃に見た時代劇で、悪代官が宴会でお酌をしている若い芸者に襲いかかるシーンの説明をする。

「帯を解かれて、そう都合よくクルクルと回るのですか？」

「このシチュエーションは、ミズホ服でやるのが普通だからなぁ、あとは、帯を解かれたらノリ良く回るのがお約束？」

「奥が深いのですね」

カタリーナは、妙な部分でミズホ文化の奥深さに感心していた。

「しかし、何でルイーゼは知っていたんだ？」

「これを買ったから」

町に書籍などを売っている店があったのだが、その中に浮世絵に似た絵も販売されていて、更にルイーゼは春画に似た未成年お断りの絵を密かに物色していたようだ。

彼女が開いた春画集のページには、お代官プレイの春画が文章付きで描かれていた。

「前にブライヒレーダー辺境伯様から聞いたんだ。男の人って、飽

きる生き物だって」

だから、変わったシチュエーションで男性を飽きさせない事が肝要だと教わったそうだ。

「あの人は、何を言うのかと思えば……」

「そうですね。あなたは、私達の他に……おっと。失言でした。伯爵としての義務に一生懸命ではありますが、子供が生まれるまでは頑張っていただきませんと」

少しエリーゼが怖い。

アマーリエ義姉さんとの関係は黙認という形になっていたが、やはりエリーゼからすると面白くないのであろう。

見事に釘を刺されてしまう。

「最後は私ですね」

エリーゼに促されて帯を引っ張ろうとすると、彼女の隣にりもう一人帯を結び直したイーナが現れる。

「ヴェル。さっきはちょっとイマイチだったから、もう一回……」

顔を赤くさせながらお願いをするイーナは、かなり可愛かった。

「了解だ。えいっ！」

「あーーーれーーー！」

間違いなく、第三者から見れば『何が面白いのか？』という状態

なのであろうが、俺が楽しくて興奮できれば勝ちなのである。
テレーゼの横槍を防ぐという大義名分もあり、その夜は六人で貴族らしい夜を過ごすのであった。

「うわぁ。凄いなぁ」

「ちょっと、仲居さんが可哀想」

翌朝、一番早く起きた俺とイーナは布団の上の惨状に絶句していた。
屋敷でドミニクを絶望に叩き落した悪夢の出来事を、旅の恥はかき捨てとばかりに繰り返してしまった。
いやはや、『精力回復』魔法とはなかなかに罪深い物である。

「ヴェル。動けない……」

「ヴェル様。エリーゼ様が目を醒まさないから」

ルイーゼとヴィルマに促されて、俺は治癒魔法を自分も含めて全員にかけていく。

「思うに、俺の治癒魔法ってこういう時にしか使っていないな」

普段はエリーゼに任せているし、まず滅多に負傷しないのであまり使う機会が無かったのだ。

「カタリーナ。起きて」

「ふぁい……。この惨状は……」

いつもの事と言えばそれまでであるが、なまじ環境が変わって新鮮味があったために酷い惨状で、カタリーナも絶句してしまう。

「これは、淑女として見逃せませんわ」

宿の仲居が布団を降ろしにきて、ドミニクと同じ状態になるのは明白であった。

カタリーナからすれば、貴族として恥ずかしいと思ってしまう。

「ヴェンデリンさん」

「『洗浄』くらい覚えなよ」

「私、そういう系統の魔法が苦手ですから」

裸のまま、胸を張って自慢気に言う事ではないと思う。

ブランタークさんによると、カタリーナは生活に密着した魔法が苦手であった。

「まあいいけど。エリーゼ。起きて」

「はい……」

治癒魔法をかけてあげながらエリーゼを起こし、布団一式を魔法で『洗浄』してから、朝風呂へと向かう。

部屋を出ると部屋担当の仲居がいたので、一両小判をチップに渡して部屋の片づけを頼んでいた。

ほぼ綺麗にしたので、ドミニクのようにはならないはずだ。

「伯爵様。お盛んだったようだな」

風呂を上がってから、朝食を取るために昨晩宴会をした部屋に入ると、既にブランタークさんが朝食を食べていた。

ミズホ式の朝食は、やはり日本の温泉旅館の物とそう違いが無かった。

ご飯、味噌汁、焼き魚、お浸し、漬物、納豆、焼き海苔など。

どれも懐かしい物ばかりであった。

「（ミズホ伯国。最高！）」

急ぎ、ご飯を茶碗によそって食べ始める。

米は南部でも盛んに食べられていたが、味はこちらの方が格段に良かった。

ミズホ泊国があるアキツ盆地は夏が暑く、冬は寒くて温度差が大きい。

つまり、四季がちゃんとあって、それが米の味を良くしているのだ。

ここは水も綺麗で美味しいので、良い米が採れる条件を整えているのであろう。

「もっと大きな茶碗でよそって欲しいのである！」

俺達とほぼ同時に入ってきた導師は、丼にご飯を山盛りよそってかき込むように食べていた。

相変わらず、凄い食欲であった。

「お盛んにした結果、テレーゼ様は乱入して来なかっただろう？」

ブランタークさんの言う通りであった。
あそこに加わるには相当の覚悟と経験が必要で、テレーゼには前者はあったが後者は無かった。
無念だと思ったのか？
部屋に入って来たが、大人しく俺の隣の席に座ってご飯を食べ始める。

「年下の癖にやってくれるではないか」

「バウマイスター伯爵。ハーレム伝説のスタートですよ」

「言う割には、数は少ないがの」

色気はあるが、未経験のテレーゼが負け惜しみのように言う。
それと、テレーゼの言う通りに貴族の妻が五人いるくらいだとハーレム扱いされないのも事実であった。
少なくとも二桁は揃えないと言われないと聞いている。

「五人もいれば十分でしょうに」

「ヴェンデリンほどの身代ならば、最低でももう五人は必要じゃの」

「その時は、王国で探しますから」

「そなた。案外、意地悪じゃの」

朝食後、出発の準備を終えた俺達は再び馬車でフィリップ公爵領を目指す。

「フィリップ公爵殿。バウマイスター伯爵殿。兵を整えて待っておるぞ」

ミズホ上級伯爵の見送りを受けて、馬車は北へと走っていく。

アキツ盆地の北方にある山道を抜ければすぐにフィリップ公爵領に入れる。

地理的に考えても、もうニュルンベルク公爵からの追撃は無いはずだ。

「ここでも駄目か……」

『飛翔』魔法で少しだけ宙に浮こうとするが、頭に激痛が走ってすぐに中止する羽目になる。

この北方にまで効果があるとなると、帝国全土はほぼ妨害装置の影響下にあるといって良いであろう。

下手にバルデッシュで稼動中の装置を解析・量産でもされたら目も当てられない。

これは、意地でも破壊するしかなかった。

「しかし、ニュルンベルク公爵はどうやってその装置を手に入れたのかの？」

「未発見の遺跡でしょうね」

俺達だって見つけられたのだから、帝国側でも見つけられないはずがない。

古代魔法文明は、大陸全土で栄えていたのだから。

「戦争になるの。人が沢山死ぬ」

「はい」

嫌な事ではあるが、ここでニュルンベルク公爵を討たなければ戦火が王国にも広がる可能性があった。

だから、俺は人を殺す戦争へと参加する事を決意したのだ。

「フィリップ公爵の地位は重たいの……」

そう言いながら俺の肩に身を預けるテレーゼに俺は何も言えなかった。

正面にいるエッボは何か言いたそうであったが、さすがに邪魔をするとテレーゼの不興を買うと思っているのであろう。

静かに俺を睨んでいた。

彼は、テレーゼが第一の忠犬君なのだ。

「頼り甲斐のある殿方がいると、妾の負担も少ないのじゃがな」

憂いの表情を浮かべながら俺の肩にのしかかってくるテレーゼは色っぽかったが、やはりすぐに現実へと引き戻される。

俺が、反対側の隣に座るエリーゼに引き寄せられてしまったからだ。

「エリーゼ殿。酷いではないか。ここは、重責に苦しむ妾が憂いを見せてヴェンデリンの気を引く大切なところであるのに」

「そういう露骨な部分が信用できないのです。その前に、ヴェンデリン様は私達の物ですから」

エリーゼがそう言うのと同時に、俺とテレーゼの間にルイーゼが

割り込み、ヴィルマが俺の膝の上に座る。
更に、俺の後方に座っていたイーナとカタリーナが背中の部分もガッチリとガードしていた。

「テレーゼ様は、同国の貴族様からご自由にお選びください」

「泥棒猫は感心しないね」

「年齢的に釣り合いが取れない」

「人様の物に手を出すのは感心いたしませんわ」

テレーゼが現れてから、エリーゼ達のガードは余計に固くなっていた。
微小でも魔法使いとしての素養があって俺に抱かれると魔力が増える可能性があるという秘密もあるので、余計に女性を近付けたくないのであろう。

「ガードが固いの。こうなれば、作戦の話があると偽って……」

「ご一緒にお供させていただきますわ。従軍神官として」

エリーゼにピシャリと釘を刺され、テレーゼは残念そうな表情を浮かべる。
この様子を見ていたエッボは、ホっとしたような顔をしていたが。

「（しかし、人がこんな目に遭っているのに……）」

ブランタークさんは御者席で警戒に当たっていたし、導師は朝風呂と大量の食事が原因のようでまた目を開けながらイビキをかいて

寝ていたし、エルなどはあろう事かハルカと話をしながら楽しそうにしていた。

「（文句は言えないが、何か理不尽だな……）」

テレーゼの家臣達と交代で馬車の窓から周囲の警戒を続けていて、規定の休み時間に入っているだけなので何も問題はなかったからだ。

「南にある魔の森ですか。一度行ってみたいですね」

「この戦争が終わったら招待しますよ。あそこには、南国の果物が沢山ありまして」

「私。甘い物が大好きなんです」

「チョコレートの材料も取れますし」

「『ちょこれーと』というお菓子は、食料品屋の小父さんから噂だけ聞いています」

「少しさしあげますよ」

「本当ですか！　ありがとうございます」

「（あれ？　物凄く上手くいってないか？　エルって）」

テレーゼとエリーゼ達の対立が続くなか、馬車は半日ほどで無事にフィリップ公爵領へと到着するのであった。

第八十四話　ついに出陣。

ミズホ伯国を出た馬車は、無事にフィリップ公爵領内に入る。
大陸の最北にあるフィリップ公爵領は現在真冬で寒く、広大な畑には雪も積もっていたが、馬車の通行を妨げるほどではないのが救いであろうか。

順調に、領主館がある中心都市フィーリン近郊まで馬車は進んでいた。

「広い畑ですね」

「北方にあっても、フィリップ公爵領は大農業地帯じゃからの」

小麦、大麦、ライ麦、ジャガイモが主要栽培作物で、砂糖もテンサイから精製しているそうだ。
二毛作なのであろう。
畑には真冬なのにも関わらず、作物が植わっている。

「もっとも、南方のサトウキビに比べると効率が落ちるのでな。大規模な畑で栽培しておる」

地球ほど品種改良が進んでいないそうで、糖分の含有量が低く、大量に栽培しないと駄目らしい。
それでも距離の関係で輸入するよりも安いので、テンサイからの製糖はフィリップ公爵領の重要産業になっているそうだ。

「あとは、漁業と牧畜なども盛んじゃ」

「牧畜をしているのですか？」

「土地は大量にあるのじゃが、寒いのでな」

古からのラン族達による弛まぬ努力によって、フィリップ公爵領にはあまり魔物の領域が存在しない。

だからこそ可能な芸当とも言える。

他の土地では、牧畜で得た牛、豚、鳥の肉は高級品であった。

土地が大量にあるので農業が盛んなのだが、北端には冬になると極寒になる土地があるので、そこで『毛豚』という大型の豚を放牧しているそうだ。

「イノシシが、少し豚に近づいたような家畜じゃの。テンサイの絞りカスも食べさせて育てる」

大型で寒さに強く、繁殖力も旺盛で、何でも食べるので盛んに放牧されているそうだ。

フィリップ公爵領では、『毛豚』の肉が庶民にも盛んに食べられているとテレーゼは説明していた。

ベーコンやソーセージ加工して保存性を高め、これも輸出品になっているそうだ。

「あとは、荷馬車用や軍馬の繁殖も盛んじゃの」

「軍事も経済も精強であると？」

「一応、選帝侯の中では一番力を持っていると言われておる」

他にも鉱山が多く、工業なども発展しているらしい。

確かに、次第に見えてくるフィーリンはブライヒブルクにも負けない大都市であった。

「経済規模と兵力でいえば、ニュルンベルク公爵領よりも上であるからの。そこまで差があるわけでもないが」

帝国に臣従して支配層の混血は進んでいるが、北方の覇者であったラン族の独立心は強い。

支配者であるはずのフィリップ公爵家の当主に褐色の肌色が求められる事から見ても、帝国北部はかなり特殊な地域のようだ。

「ミズホ伯国もあるからの」

テレーゼが笑いながら説明している間に馬車はフィーリンの町に入り、領主館へと向かう。

城塞のような館へと到着すると、中から二十代後半と二十代半ばくらいの若い男性二人が飛び出してくる。

「ご無事でしたか。お館様」

「安堵いたしました」

「悪運の賜物じゃの。それよりも、客人がおるのでな」

若い男性二人の差配で俺達は部屋を宛がわれて落ち着くが、一緒にいるテレーゼがそっと教えてくれる。

「我が兄君達じゃよ」

「それは複雑ですね」

「そうさな。腹の中では何を考えておるのか？」

見た感じは能力不足に見えないのに、肌の色が白いという理由で公爵位を継げなかったのだ。

色々と胸に仕舞っている感情もあるのであろう。

「某が考えたのは、ここに到着した直後にテレーゼ様が兄達の反乱によって捕らわれるか殺される可能性である」

体を暖めるために貰ったアクアビットのお湯割りをチビチビと飲みながら、導師が物騒な事を言い始める。

もしそんな事をしようと考えても、すぐに導師によって防がれてしまうのであろうが。

「もしそれを考えても、みんな導師や伯爵様に殺されて終わりだろうな」

ブランタークさんも、俺と同じ考えであった。

導師に魔法使いでもないのに少人数で逆らうなど、ただの無謀の極みである。

「いや、ブランタークよ。その前にそれは出来ぬのじゃ」

「肌が白いからですか？」

「そういう事じゃの」

帝国に支配されてしまったラン族にとって、肌が褐色の当主は絶対に譲れない条件らしい。

なので、テレーゼの兄達がクーデターを起こそうとしても誰も付いて来ないのだそうだ。

「兄達の子供達は、肌が褐色であるがの。我が甥達を当主に立てても、それが傀儡なのは誰の目から見ても明らかじゃ」

更に、子供が総大将では勝てる戦争も勝てなくなってしまう。

余計に誰も付いてこないはずだとテレーゼは説明していた。

「でも、ニュルンベルク公爵が調略を仕掛けてくる可能性はありますよね？」

「それは防げぬが、そこはお互い様であろう？」

テレーゼはこの部屋に来る前に、兄達にニュンベルク公爵を倒し帝都を奪還するための兵の召集に、北部やその他地域の諸侯への通告を命令している。

『ニュルンベルク公爵に組して反乱に参加するか、それを打倒せんとする我らフィリップ公爵家に付くか』と。

かなり過激な檄文を添えさせて送ったらしい。

「『ミズホ伯国はこちらに付いた』という情報と共にの」

帝国の統一過程で、多くの民族が家臣化してその下に付いている。

その中で唯一、半独立国の形態を維持しているミズホ伯国は他民族である貴族やその領民達から畏怖の目で見られていた。

しかも、彼らが防衛以外で軍を出すのは初めてであり、その伝説的な強さと相まって、多くの味方が得られるであろうとテレーゼは考えているようだ。

「他民族を抱える貴族達は、ニュルンベルク公爵の動きに戦々恐々であろうからの。ほとんど参加すると見て良いはずじゃ」

「そんなに異民族がいるのですか？」

バルデッシュにはどう見てもアラブ系や中華系の建物などもあったが、見てすぐにわかるのは肌が褐色のラン族くらいであった。

ミズホ人は、ミズホ服を着て髪と瞳が黒いからわかるのであって、外見は西洋人と日本人のハーフみたいなので実は良く見ないとわからない人も多いのだ。

「ここ千年ほどで混血と混在が進んでの。大半の民族はそこまで外見に差があるわけでもない。言語も、古代魔法文明時代から大陸で統一が進んでおるし」

一応、帝国がまだ王国を名乗っていた頃から中央に生活している民族をアーカート族と呼んで、これを主要民族としているらしい。

ニュルンベルク公爵は、彼らを中心に帝国の中央集権を進めようとクーデターを起こしたのだと。

「ところが、このアーカート族の定義も曖昧での」

ただ中央にいる人達といった感じで、この辺は中国の漢民族に扱いが似ているのかもしれない。

生物学的に、アーカート族が存在するわけでもないのだ。

「要するに中央集権を進めるけど、見てすぐにわかる邪魔なラン族とミズホ族を先に屈服させるぞと？」

「潰して隷属化に置けば、東西の連中も恐れて言う事を聞くであろうからの」

ラン族とミズホ族はわかりやすい敵だから潰す。

強いので、屈服させてしまえば他の他民族も簡単に靡くであろうとニュルンベルク公爵は考えているようだ。

「それで、これからのスケジュールはどうなるのですか？」

「明日にでも先遣隊を出す予定じゃ」

兵力数では不利になるはずなので迎撃戦を行うが、敵を領内に入れて領地が荒れるのを防ぎたいとテレーゼは語る。

「北方諸侯の離反を防ぐためにも、彼らの所領内での戦闘もご法度じゃの。そこでじゃ……」

テレーゼは、一枚の地図をテーブルの上に広げる。

帝国の詳細な地図で、ちょうど中央直轄地と北部領域の中間点に赤い丸が描かれていた。

「『ソビット大荒地』ですか……」

フィリップ公爵領に続く北方街道沿いでしか見ていないが、『ソビット大荒地』とはその名の通りに広大な荒地である。

帝国直轄地になっているが、北方領域との境目にあり、水は井戸を掘らないと確保できず、昔の鉱山や鉱床が廃鉱として点在していたりと、開発が後回しにされている場所であった。

「ここに拠点を築いて、ここでニュルンベルク公爵の北上を防ぐ」

「短期決戦ではないのであるか？」

「然り」

導師の問いに、テレーゼが頷く。

「これは内戦なので、出来れば短期決戦が好ましいがの……」

南部を完全に掌握し、今は中央部の平定を行っているニュルンベルク公爵よりも、いまだ北方諸侯全てを纏めているわけではないテレーゼの方がどう考えても不利なので、そう簡単には帝都に兵を進められないわけだ。

「ソビット大荒地でニュルンベルク公爵の攻勢を防いで打撃を与えた方が、彼の地盤に皹を入れられるからの」

忠誠心が強い、クーデターに参加した帝国軍と南部諸侯軍に打撃を与えられるし、そうなればやむを得ずニュルンベルク公爵に従っている諸侯に動揺を与えられる。

「帝都を抑えているのは強みではあるが、逆に弱みでもある」

特に、あの通信と移動の魔法と魔道具の稼動を阻害する装置が良くなかった。

交通と流通にダメージを与えるので、むしろ帝都を持っているニュルンベルク公爵の方がダメージを受けるのだから。

「碌な事をしない公爵様だな」

ブランタークさんはそう言うが、実はこの装置のせいで王国は内乱に関与できない。
王国北部にもこの装置の効果が及んでいるはずなので、内乱に乗じて兵を出すなど不可能なのだ。

ギガントの断裂に臨時で渡した橋なりロープウェイで兵を送ったとしても、現地の帝国軍や貴族達は侵略者に徹底的に抵抗するであろう。
占領が出来たとしても、今度はその土地の統治が必要である。
暫くは持ち出しが続くが、それを運ぶのに魔導飛行船が使えない。
補給に重大な欠陥を抱えて勝てるほど戦争は甘くは無いのだから。

「下手に王国が内乱に手を出すと、逆に王国が消耗するでしょうね」

喜ぶのは、自分だけは戦功を挙げたい軍人や、軍に物資などが売れれば良いと考えている一部商人だけであろう。

「内乱の長期化は帝国を疲弊させるが、現状で短期決戦は不可能なのじゃ。無理をして滅亡する気は妾もないからの。もっとも、底意地の悪い妾なので負けたら諦めて亡命でもするであろうな」

別に、テレーゼの考えは間違ってはいない。
潔く滅びるなど、歴史物語の記述では感動するかもしれないが、現実ではただのバカだからだ。
他国に亡命してでも次の機会を待つ。
これが普通の権力者と言えるのかもしれない。

「もしそうなると妾は疲れているであろうから、ヴェンデリンの側室にでもなってあとは子供に任せるかの」

王国が北進する際に、その子か孫か子孫を利用してくれればフィリップ家は再興されるかもしれない。
あくまでも可能性であるが、その可能性のために貴族は家を繋ぐのである。

「テレーゼ様は相変わらずだねぇ……」

ルイーゼが呆れているが、今はそんな話よりも重要な事があった。

「それで、俺達の仕事は？」

「無論ソビット大荒地の確保と、持久戦に備えた恒久野戦陣地の構築よな。土木冒険者と呼ばれているヴェンデリンに相応しい任務じゃ」

「そのあだ名、帝国にまで知られているのかよ」

方針は決まったので、明日には急ぎ出発しなければいけない。
『飛翔』や『瞬間移動』が使えないので、何をするにも時間がかかるのだから。

「大きな馬ですね」

「北方特産の『ドサンコ馬』と言います。あまりスピードは出ませんけど、パワーと持久力は素晴らしいですし、粗食にも耐えます」

フィリップ公爵領に到着した翌日の朝、すぐに俺達はソビット大

荒地を目指して北方街道を南下していた。
兵力は、フィリップ公爵家諸侯軍と、帝都の異変を察知して事前に兵力を整えていた貴族数家の諸侯軍で合計五千名ほど。

軍を動かすのに必要な軍需物資は、全て俺とフィリップ公爵家や他の貴族家がお抱えにしている魔法使い達が魔法の袋で運んでいる。
馬や馬車も大量に動員して移動速度を早める工夫はしているが、どうしても徒歩の兵が半数以上も出るので彼らは武器だけ持たせて防寒着だけ着せていた。
重たい防具は、全て馬車か魔法の袋の中である。

もし敵軍が前に塞がれば、俺達が魔法で排除する予定になっていた。

「なるべく急いでも二日……。いや三日か？」

俺達は馬を与えられているが、その馬は普通の馬よりも二周り以上は大きかった。
ここまで大きいと何か別の動物にも見えるが、この馬は『ドサンコ馬』といって北方固有の馬なのだそうだ。

「馬で移動とは言っても全力では駆け抜けられませんし、それならスピードの遅いこの馬でも問題ありませんから」

重い荷駄を引いたり、農耕に使う馬らしいが、それでも人が歩くよりは早い。
物資の輸送を行う馬車を引くために、テレーゼの兄達が事前に準備していたのだ。

「ちゃんと仕事をしているのか。裏切りとか模索すると思ったけど」

「あなた。さすがにそれは言い過ぎかと……」

テレーゼはあり得ないと言っていたが、俺は彼女の兄二人を疑っていた。

ニュルンベルク公爵の調略で、『新しいフィリップ公爵は肌が白い方が望ましい。もしそうなれば、新帝国で重用しよう』とか言って裏切りを唆す可能性があったからだ。

「従兄達はそこまでバカではないですよ。もし裏切りに成功しても、次にニュルンベルク公爵に粛清されるのは自分達だと理解していますし」

馬には俺とエリーゼで乗っていて、併走する通常の馬には一人の褐色の肌色の若者が乗っていた。

テレーゼの従兄で分家の当主でもあり、この先遣隊の大将であるアルフォンスという名前で、まだ二十歳だそうだ。

「肌の色は重要なのですね」

「ええ。他の人達から見れば下らない事なのかもしれませんがね」

帝国には屈したが、フィリップ公爵家の当主にはラン族の血が濃い者を。

これは絶対であり、過去に強引に白い肌の者が当主になった事もあったが、決して上手くいかなかったそうだ。

「それに、従兄達のお子は共に褐色の肌ですしね」

ニュルンベルク公爵を打倒すれば、状況から見て次の皇帝はテレ

ーゼに回ってくるはず。
皇位とフィリップ公爵位の兼任は不可能なので、自然と自分の子供に公爵位が回ってくるというわけだ。

「なるほど。なら安心だ」

「でしょう？」

決して崩れない信念や狂信的な忠誠心よりも、よっぽど信用できるというものだ。

「それにしても意外なのは、バウマイスター伯爵が馬に乗れない事ですかね」

「貧乏騎士の八男に、乗馬訓練の時間なんてありませんよ」

昔のバウマイスター家には、軍馬が数頭しかいかなった。
それも、他の貴族家みたいに専用の軍馬を購入して維持しているわけではない。
農耕馬の中から程度の良い物を選んで、それに馬具を載せてらしく見せているだけであった。
外を知らない領民達には、その程度でも綺麗な軍馬に見えてしまうのだ。

実際にブライヒレーダー辺境伯家が所持している軍馬と比べると、物悲しくなるほどの駄馬に見えてしまう。
ところがそんな一見駄馬でも、過去の魔の森遠征では役に立ったらしい。
農耕馬ゆえに粗食に耐え、スピードは遅くても持久力は上回っていたからだ。

遠征軍に生存者がいたのも、途中でこの馬を潰して食料などにしていたためであるらしい。

俺の子供時代には、馬不足で八男に乗馬訓練の時間など巡ってこなかった。

それに、『飛翔』と『瞬間移動』があれば魔法使いに馬など必要もない。

前世では、学校の遠足で行った遊園地と牧場がくっ付いた施設で乗馬体験をしたくらい。

良くある、馬に乗って決められたコースを係りの人に引いて貰って一周するアレである。

その程度の経験で、いきなりこんな大きな馬に乗れるはずがない。

そんなわけで、今はエリーゼが馬を操っていて、俺は彼女の後ろでしがみ付いているだけだ。

「奥方殿は、馬の扱いが上手ですね」

「この馬は大人しいですから。少し教わっただけの私でも大丈夫です」

謙遜でそう言っているが、エリーゼは乗馬も上手であった。

教会の奉仕活動で王都近辺に出かける事もあり、必要なので覚えたそうだ。

それで覚えられるのだから、やはりエリーゼは完璧超人なのであろう。

「ちょうど良い機会だから、合間にエリーゼに教えて貰いますよ」

「そうですね。上級貴族に乗馬は必須ですから」

移動魔法や魔導飛行船はそう簡単に使える物でもなく、普段の移動では馬を使うのが一番便利だ。

ただ、馬は維持と調教で金がかかる。

特に軍馬になるような馬ではその費用が跳ね上がり、良い馬に乗れるというのは上級貴族の証でもあった。

あの自他共に認める運動神経がマイナスのブライヒレーダー辺境伯でさえ、ちゃんと訓練をして馬に乗れるのだから。

「男的には、エリーゼに引っ付いて馬に乗っていると素晴らしい」

言うまでも無く、主にお尻の感触がである。

「気持ちはわかりますが、バウマイスター伯爵が乗馬を覚えて奥方殿を後ろに乗せれば、もっと素晴らしいと思いますよ」

なるほど、確かにアルフォンスの言う通りである。

国と民族は違えど、彼は男のロマンを理解する素晴らしい男であった。

「アルフォンス。君は素晴らしい男だな」

「バウマイスター伯爵。いやヴェンデリンよ。君もそれを理解する男であったか」

俺とアルフォンスは、馬上から熱い握手をする。

まさに終生の友を得た思いであった。

「あなたは、そういう事も嬉しいのですか？　私達は夫婦なのに……」

エリーゼが恥ずかしそうに俺に聞いてくる。
既にお互いの裸を見合っている夫婦なのに、服の上からのお尻や胸の感触の何が嬉しいのかと思っているのであろう。

「エリーゼ。それはそれ。これはこれなのだ」

「はあ……」

それは、男と女の間にある永遠の壁なのかもしれない。
エリーゼには理解できなかったようで首を傾げていたが、その様子もかなり可愛かった。

「実は、俺の奥さん達も理解できていないからなぁ」

アルフォンスはテレーゼの従兄で分家の当主なので、既に奥さんが三人もいるそうだ。
先遣隊の総大将に任命されるほどなので、大身なのは当然とも言える。

「この前の休日に、俺は夢を叶えた」

「夢とな？」

「そうだ。『夢の三人裸エプロン作戦』をな……」

大身である分家の奥さんなのに、彼女達に裸エプロンで料理をさせてそれを後ろからニヤニヤと見ていたそうだ。

恐ろしいまでの俗物ぶりであったが、同時に俺は大切な事を忘れていたのに気が付く。

「しまった！　俺はまだやっていない！」

「五人の奥さんでやれば、もっと絶景なのに勿体無いぞ」

「確かにそうだ！　今度やってみよう」

「是非に勧めるぞ」

アルフォンスも後押ししてくれたので、俺は絶対にやろうと心に決める。

「それでこそ。我が心の友だ！」

「あなた。裸でエプロンを着けると何か良い事でもあるのですか？」

良くわからないといった表情で、エリーゼが俺に聞いてくる。

彼女は教育で基本的な男女の事は知っているが、ブライヒレーダー辺境伯から妙な本を借りて耳年増なイーナに比べるとその手の知識は皆無であった。

「子供が生まれやすくなる」

「知りませんでした。そんな方法で子供が生まれやすくなるとは」

別に、俺は嘘はついていない。

真面目なエリーゼは、それならば協力しないとと心に決めたようだ。

「ヴェル。あんたねぇ……」

その耳年増なイーナは何か言いたそうであったが、今は乗馬を覚えようと懸命でその余裕が無いようだ。

何しろうちのパーティーには上級貴族出身者が少ないので、乗馬ができるメンバーが少ない。

エリーゼに、エドガー軍務卿の援助で乗馬を覚えたヴィルマに、あとは意外なところでカタリーナも馬に乗れる。

彼女の場合は、貴族は馬に乗れて当たり前だと思って密かに練習をしていたようだが。

乗馬の練習でもボッチ。

彼女は、実は俺を上回るボッチの達人なのかもしれない。

「ヴェンデリンさん。、何か失礼な事を考えておりませんか？」

「無いに決まっているじゃないか。ただカタリーナの華麗な乗馬姿に見惚れていただけ」

「最低限の嗜みですし……。恥ずかしいじゃないですか。ヴェンデリンさん」

どうやら、上手く誤魔化せたようだ。

カタリーナは、俺の御世辞に顔を赤く染めている。

実際に、馬に乗っている姿はとても似合っているので問題は無いであろう。

「ヴィルマ。イーナはどう？」

「運動神経が良いから、すぐに覚えると思う」

間違いなく、俺が一番乗馬を覚えるのに時間がかかるはずだ。

俺の運動神経は、どう贔屓目に評価しても普通であった。

「おおっ！　カタリーナの胸が背中に当たる！　ヴェル。交代すると天国だよ」

「ルイーゼさん！　恥ずかしいじゃないですか！」

ルイーゼに乗馬を教えているカタリーナは、彼女のオヤジ発言に顔を真っ赤にして文句を言っていた。

「ヴェンデリンの奥方にも、男のロマンが理解できる者がいたのか」

「アルフォンスさんは、余計な事を言わないでください！」

カタリーナは、ルイーゼを同志認定したアルフォンスにも文句を言う。

「全く……。心配になる大将ですわね……」

カタリーナはそう言うが、俺はアルフォンスの大将の資質に全く疑問を抱いていない。

常にバカみたいな事を言っているが、先遣隊は良く纏まっている。

『アルフォンスはの。普段はバカみたいな事ばかり言っておるが、なぜか皆が良く纏まるのじゃ』

妙なカリスマがあって、部下が喜んで働く。

実際に、先遣隊はそういう状態になっている。
だからこそテレーゼも、彼を先遣隊の総大将に任命したのであろう。

「しかし、あそこは見苦しいね……」

アルフォンスの視線は、一頭のドサンコ馬に乗ったブランタークさんと導師に向いていた。

「確かに……。ムサいな……」

前でブランタークさんが手綱を握り、その後ろに導師が乗っているのだが、見ていて心に響く何かはない。
この組み合わせなのは、一応年の功で馬には乗れるが通常の軍馬は厳しいブランタークさんと、体が大き過ぎて普通の馬だと潰れてしまう導師だからだ。

「ドサンコ馬でも、導師だと辛いのかな？」

実質三人分の重さなので、二人の乗る馬のスピードは少し遅めであった。

「お前ら。言いたい放題だな……」

「ブランターク殿の背中には、アームストロング導師のただ硬い胸板が。私には無理です。あり得ません。交代を強く要求するでしょう」

「噂通りだな。アルフォンス殿よ」

ただ、アルフォンスの言う事ももっともである。
導師の百%筋肉の胸板の感触など、特殊な趣味でもないと嬉しくないのだから。

「某とて、我慢しているのである」

「言ってくれるな。導師よ」

しかも、何気に導師も酷い事を言う。
自分は馬に乗れなくて、ブランタークさんに運んで貰っているのに。

「でも、導師が馬に乗れないのは意外でした」

アームストロング家は軍家系なので、乗馬の訓練くらいは普通にすると思っていたからだ。

「アームストロング伯爵家の者は代々体が大きいのでな。馬体の大きな馬を独自に育成・調教してはいるのだが……」

実家にいた頃は訓練できたが、家を出ると大きな馬を手に入れて維持するのが難しくなった。
それに、導師は魔法使いである。
無理に馬に乗る必要もなく、乗れないというよりは久しぶりなので無理をしてないといった方が正解なのかもしれない。

前世的にいうと、ペーパードライバーの感覚なのであろう。

「この馬ならば、あとで購入しても良さそうであるな」

導師は、自分が普通に乗れる馬を見付けて嬉しそうであった。

「ドサンコ馬は輸出禁止品目ですけどね」

荷駄や馬車を引くのにこれほど良い馬は無いので、フィリップ公爵領から外に出すのを禁止されているらしい。

唯一の例外として、去勢された雄馬は帝国内で使われているそうであったが。

「実際に、私達が乗っているドサンコ馬も去勢された雄馬ですしね」

アルフォンスの言う通りで、確かに全てのドサンコ馬には去勢された跡があった。

軍馬として徴用する個体は、戦場での鹵獲を考慮して全て去勢馬にするのが決まりだそうだ。

「その前に、ドサンコ馬は暑い場所では生きていけないのですよ」

体が大きくて熱が篭もりやすいので、精々で王国北部が生存限界点であろうとアルフォンスが予想していた。

「残念であるな。しかし……」

導師は一つ気になっている事があるようだ。

不意に視線を他に向けると、その先には同じドサンコ馬に乗るエルとハルカの姿があった。

「うちも貧乏貴族だったからなぁ……」

「あまり無理に手綱は引かないでくださいね」

「馬に任せる感じで？」

「そうですね」

俺と同じくエルも貧乏貴族の五男なので、彼にも乗馬の経験がほとんどなかった。

ハルカも条件は同じなのだが、彼女は抜刀隊に抜擢される腕前なのでそこで訓練を受けている。

そこでエルは、彼女と一緒の馬に乗って乗馬の訓練を受けていたのだ。

「お上手ですね」

「いや、まだ一抹の不安があるなぁ……」

「そこは慣れですから」

真面目なハルカはエルに丁寧に乗馬を教えていて、彼も彼女の指導を真面目に受けていた。

だが、俺は気が付いている。

導師もブランタークさんもアルフォンスも同様で、それは指導が熱心なあまりに後ろからエルの背中に体を押し付けているハルカに、エルが心の中で歓喜している事をだ。

「（主に胸だな……）」

「（であろうな）」

「（他にあるか）」

「（押し付け設定だね。ハルカ君はポイント高いなぁ……）」

男の考える事にさほど違いなどなく、俺達は同時に同じような事を小声で呟く。

そしてそれから二日間、俺達は乗馬の訓練を続けながら無事にソビット大荒地へと到着するのであった。

「やれやれ。向こうも熱心だな……」

フィリップ公爵家諸侯軍の先遣隊がソビット大荒地に到着してから三日後、俺は南側で土木工事をしながら遠方に見えるニュルンベルク公爵家軍の偵察隊を発見していた。

「バウマイスター伯爵よ。うちの者が仕留めるので安心して工事を続けられるが宜しかろうて」

「それは心配していませんけどね」

俺はニュルンベルク公爵家軍以下の反乱軍の北上に備えて、ソビット大荒地の南側で馬避けの堀を幾重にも張り巡らせ、野戦陣地の構築にも協力していた。

帝国の交通と流通を担う北方街道を塞ぐ行動であったが、先に反乱軍側が商人や旅人の北部への移動を禁止していたので問題ない。

こちらも、北方にいる商人や住民の移動を禁止しているのでお互い様だ。

内乱で帝国内の流通が南北に分断している状態であったが、別に俺のせいではないので仕方が無い。

そしてそんな工事の様子を定期的に敵の偵察隊が見にくるのだが、それもすぐに排除されている。

なぜなら……。

「我がミズホ伯国自慢の抜刀隊がいるからな」

ソビット大荒地に点在する岩などに潜んでいた、ミズホ伯国の精鋭抜刀隊が数名、偵察隊の騎士や兵士達に斬りかかる。

彼らは剣やシールドでそれを防ごうとするが、装備している魔刀によって体ごと切り裂かれてしまう。

あとには、切断された数体の死体だけが残された。

彼らを斬り殺した抜刀隊の面々は、その死体と馬などを回収して戻ってくる。

「何度目であったかな？」

「五度目にございます。お館様」

「しつこいの。来る度に始末するのを忘れないように」

「畏まりました」

抜刀隊の面々はミズホ上級伯爵に報告を行うと、馬と死体を置いて再び隠れて敵を待つ。

気配を消した敵にいきなり魔刀で切りかかられ、鋼の剣やシール

ド程度では防いでも切り裂かれてしまう。

この魔刀、燃費や整備性などに欠点があるようであったが、その凄さは過去の歴史から見ても明らかである。

彼ら自身も厳しい選抜と訓練を乗り越えているエリートであり、俺はなぜミズホ伯国の兵士達が帝国人から恐れられるのかを実感していた。

「しかしながら、戦況はこちらが不利であるかな」

ソビット大荒地に、反乱軍の北上を防ぐための防衛野戦陣地の構築には成功しつつある。

これには俺も土木魔法で参加しているので『墨俣の一夜城』には負けるが、この三日間で大まかな部分は仕上げていた。

防衛戦力も、フィリップ公爵家から追加で援軍が来ていて一万人を超えているし、ミズホ上級伯爵も自ら一万人の軍勢を率いて参加している。

北部諸侯も一部を除けばこちらに付くと明言していて、既に軍を送り込んでいる貴族もいた。

東部や西部の諸侯でも、北部に領地がある貴族の大半がこちらの味方だ。

しかし、次第に状況が知られるにつれて、こちら側の不利が判明している。

南部と中央部はほぼ反乱軍の手に落ちていて、今では一部の面従腹背の貴族達と、地下に潜ったラン族とミズホ人が少数だけのようだ。

何しろ、ニュルンベルク公爵はラン族・ミズホ資本の接収や、収容所送りまでしているのだから。

経済的には褒められた事ではないが、情報の漏洩や例の通信と移動を防ぐ魔道具の破壊を防ぐためであろう。

「まさか、残り全ての選帝侯家が裏切るとはな」

裏切るというか、当主を人質にされてそうせざるを得ないというか。

よほど抵抗しなければ殺された貴族は少ないようだが、軟禁状態にある貴族は少なくない。

なぜわかるのかと言えば……。

「当主を見捨ててこちらには付けないでしょうし」

「であろうな」

ミズホ上級伯爵に報告を行う、黒装束に身を包んだ男性。

顔は見えないが、年齢は三十歳くらいだと思う。

彼こそは、代々『ハンゾウ』の名を受け継ぐミズホ伯国の諜報機関の長であるらしい。

見た目は、時代劇に良く出てくる忍者その物であるが。

「通信と移動を阻害され、情報の伝達速度が格段に落ちて困っております」

「それは向こうも同じだけど……。面倒な事になったなぁ」

ニュルンベルク公爵はそれを生かして、当主からの連絡不在で混乱している中央と他の選帝侯家を落としたのだから。

物理的に全て落ちたわけではないが、動けないで実質的に反乱軍を利している選帝侯家もあった。
ハンゾウさんからの報告を聞いて、アルフォンスは溜息をついている。

「ハンゾウさんは、どうやって帝都などの情報を？」

「勿論馬とこの足にて。我ら『クサ』の者は、こういう事態も想定して日頃から備えておりますれば」

早馬と走りで、敵地からの情報を集めているらしい。
お互い様だが、こうなると何をするにも時間がかかって困ってしまう。

「バウマイスター伯爵は、『瞬間移動』と『飛翔』が封じられているかの」

逃げ帰るにも、大陸縦断をしないといけないので困ってしまう。
できれば、そういう最悪の事態を避けたい気持ちはあるのだが。

「その代わりに、他の魔法で圧倒していますな。わずか三日で、野戦防衛陣地の基礎工事が終わっていますし」

ハンゾウさんは驚いているようであったが、こちらも陣地の完成が遅れて反乱軍に攻め込まれても困るので必死であった。

まずは防衛で、反乱軍の勢いと主義・主張に染まっているアレな連中を殺して数を減らすのが目的なので、馬避けの堀りや柵を設置し、長対陣に向けてテントではなく石造りの兵舎、櫓、塀などの設置も進めている。

その材料は、ソビット大荒地が元々廃鉱山が多い土地なので容易に入手可能であった。
使えそうな鉱物を回収してから、残った岩などをカットしたり固めて石材にする。
廃鉱になるレベルなので含有量は微々たる物であったが、これを集めて他の魔法も毎日ギリギリまで使って魔力の量も上げる。

王国と対を成す帝国には、もっと凄い魔法使いが多数存在するはずなのだ。
彼らに殺されないためにも、毎日の訓練は大切であろう。

「うぬっ！　ルイーゼ嬢も強くなったようであるな」

「三対一でボク達を押している導師の方が凄いんだけど……」

「魔力が増えて増した自信が消えていくわ……」

「導師。強すぎ……」

魔法使いとして強大な魔力を持ちながらも、俺のように生活に使える魔法が一切使えない導師は、魔力が増したルイーゼ、イーナ、ヴィルマの三人を同時に相手にして実戦形式の稽古を続けていた。

ルイーゼの拳も、イーナの槍も、ヴィルマの大斧も。
当たってはいるようだが、全て導師の『魔法障壁』によって弾かれていた。

「あまり攻撃されると、『魔法障壁』が壊れそうである」

「手がジンジンするんだけど……」

「練習用だけど、槍が欠けちゃったわね」

「私の大斧もそう……」

特殊な事情により俺の妻達はみんな魔力が増えて強くなったのに、導師はまだ大分先の強さを誇っていた。

「『暴風』なんだから、ちゃんと綺麗に石材を切れよ」

「ただ風で吹き飛ばし、切り裂くのは得意なのですが……」

「伯爵様は綺麗にやるぞ」

「先行されている分、ヴェンデリンさんに魔法の精度で勝つのはまだ大分先の予定ですわ」

「勝つ気はあるんだな。というか、こういう魔法を覚えないと導師みたいになってしまうぜ」

「私には、あそこまで極めるなんて不可能ですわ」

カタリーナも、ブランタークさんの指導で石材の切り出しを手伝っていた。

彼女は、まだこういう魔法の細かい精度に少し問題があって要訓練なのだ。

「カタリーナ。何気に導師の事を……」

導師は間違いなく、単体戦闘力では世界最強のはずだ。
ただし、俺やブランタークさんとは違い、『土木』などの生活系の魔法は出来ない。
『聖』治癒魔法を習得できた事すら、実はブランタークさんは驚いていたりする。

カタリーナとしても、導師ほど戦闘特化になるのは不可能だと思っているはずなので、領地開発にも使える魔法の習得を優先しているのであろう。

『バウマイスター伯爵達のおかげで、野戦陣地の構築は順調であるな。となれば、あとは迎撃するのみ』

『反乱軍は来ますかね？』

『絶対に来る。現地では努々準備を怠らぬようにな』

大量にある政務を片付けてからここに来る予定のテレーゼは、自分達に味方する貴族達の士気をあげたいのであろう。
クーデター軍、ニュルンベルク公爵家軍などとバラバラに呼んでいた物に、『反乱軍』と正式に名称を定めていた。

『ニュルンベルク公爵はしてはいけない事をしてしまった。反乱軍で十分であろう？』

テレーゼは、自分に味方する貴族達に向かって言い放ったそうだ。
アルフォンスが、昨日俺にそっと教えてくれた。

「反乱軍はまずはひと当てして、この野戦陣地を落とさずとも士気をあげて戦況を優勢にしようとするはず」

反乱軍の方が戦力は大きいが、如何せん反乱軍なので仕方なく従っている者が多い。
なのでここで勝利して、そういう連中を一気に反乱軍側に引き寄せたいのだと。
アルフォンスも、さほど遠くない時期に最初の攻勢があると予想していた。

「逆に負けると、向こうの士気が落ちませんか？」

「負けるとは思っていないのであろうな」

「なるほど」

ミズホ上級伯爵とも話をしながら、俺は夕方まで野戦陣地の構築に尽力する。
ほど良く魔力も消費したので、俺は自分の家に戻っていた。
自分でカットした石材で造った石造りの家は急造にしては良く出来ていて、内部もカタリーナに魔法の練習代わりに仕上げさせたり、室内には持参した魔道具を置いているので快適な生活を送れるようになっていた。

料理なども、エリーゼ達が交代で作っているので問題ない。

「奥さん。俺の分もお願いします」

なぜか、この野戦陣地と派遣軍の責任者であるアルフォンスもテーブルに座ってうちの飯を待っていたが。

「我が友よ。なぜうちに？」

「単純に飽きたから」

フィリップ公爵家の家訓で、戦時にはみんなで同じ食事を取るというルールが存在するらしい。

俺達は傭兵扱いだし、食材から調味料、料理人まで自前なので問題は無いのだが、アルフォンス達は毎日同じ食事を食べ続けないといけないのだそうだ。

「ライ麦パン、ジャガイモを蒸かした物、ザワークラウト、ベーコンかソーセージが入った野菜のスープ。あとは、非番時にカップ一杯のアクアビット。さすがに三日も続くと飽きる」

「ミズホ伯国は？」

「あそこは特殊だから」

ご飯を炊いて、漬け物、梅干、味噌汁に魚や肉も普通に出ている。どこから見ても和食だが、魔道具の製造技術が高いミズホ伯国なので食材の輸送には困っていないようだ。

「行けば変わった物が食べられるぞ。美味しいし」

「それも物凄く食べたいけど、俺がミズホ伯国の陣地に行くと表敬訪問扱いになって面倒だから」

俺達は傭兵扱いなので、逆に応対が簡単で美味しいミズホ料理が簡単に食べられた。

基本的に和食なので、俺には美味しい食事であったのだ。

「そんなわけで、ここでご馳走になる事になった」

アルフォンスは何食わぬ顔で導師とブランタークさんの間の席に座り、エリーゼが作ったシチューを食べていた。

「我が友の奥方達は料理が上手だね」

「冒険者もしているから、自炊が出来ないと」

「なるほど。そうやって我が主君を避けていると」

それが原因なわけがない。

ただ、他国の公爵様など嫁にしても面倒でしかないからだ。

「アルフォンスが貰ってあげれば？」

従兄で力量もあるので、十分にその資格はあると思うのだ。

「俺とテレーゼは幼馴染で仲が良い。だが、そういう関係でもないな」

「貴族の結婚だからそれで良いのでは？」

「いやぁ……。この状況だと、戦後の負担も大きいし……」

アルフォンスは、内戦に勝利したテレーゼが次期皇帝になるはずであり、その時には反乱のせいで宮廷内もグチャグチャなので、自分も皇宮に出仕しないと駄目であろうと予想していた。

「面倒だけど、新しい政権がまた倒れるのも何だし。テレーゼが皇

位を継いで彼女の甥が新フィリップ公爵になると、これの後見もあってね。父親達がいるけど、肌の色の関係で俺も手を貸さないとフィリップ公爵領の政治も動かない」

「大変だな。我が友よ」

「こうなれば、メイドのスカートを短くして楽しむしかないかな？ところでエルヴィンを見ないな」

「ああ。エルなら……」

実は、ハルカから剣術を習っていた。

剣が好きで金も持っているエルは、せっかくなのでミズホ刀をコレクションとして入手しようとハルカに相談したのだが……。

『刀と剣はまるで違う物ですよ。使わない刀など、可哀想ではありませんか』

帝国では美術品扱いで集めている人もいるそうなので、別に適当な刀でも紹介して買わせればいいのに、そこで真面目にそう言い放ってしまうのがハルカという少女であった。

普段も俺達の護衛に徹していて、エリーゼ達がお茶などに誘っても『任務中ですから』と言ってなかなか参加しないほどの真面目人間なのだ。

それでも、俺が命令だと言って誘うと参加して、幸せそうな顔をして甘い物を食べている。

やはり女性なので、甘い物が大好きなようだ。

『じゃあ。刀術を覚えるか』

そういうわけで、エルは時間が空くとミズホ伯国の陣地に行ってそこで刀を習っていた。
ミズホ上級伯爵に言わせると、筋は良いらしい。

「彼は、ハルカ君が目当てなのかい？　それとも？」

「両方でしょう」

美少女も好きだが、剣や刀も大好きなのだ。
俺も刀は欲しいと思っているが、自分で使いこなせるようになるとは到底思えなかった。

「それで、脈はあるのかい？」

「あるような。無いような……」

家柄などで問題になるはずはないが、問題はハルカが真面目過ぎてエルをどう思っているのかがサッパリわからないのだ。
あともう一つは、ハルカの兄の存在であろう。

「ハルカの兄貴も、抜刀隊にいてね」

この跡取り兄貴は、ハルカよりも優れた剣士であった。
しかも、ハルカを異常なまでに可愛がっている。
主命だから妹が俺達の護衛役になった件に文句は言わないが、この陣地でエルが何かにつけてハルカに話しかけたりしているのが気に入らないらしい。

おかげでエルは、その兄貴から毎日のように厳しく扱かれていた。

『つまり、あの兄貴に勝てれば問題ないわけだ』

もっとも、性格的に負けず嫌いの面もあるエルからすれば、その兄貴は打倒すべき中ボス扱いのようだが。

『さすがは、抜刀隊！』

『この男。思ったよりも強い……』

剣も刀でも、実戦で人を斬るのには違いない。

ハルカの兄貴は、自分で思っているよりもエルに対して剣術で優勢でない事実に危機感を募らせていた。

「そんな青春をしているんだ」

「我が友は、随分とドライというか……」

「俺はそういう展開にならないもの。武芸はサッパリだし」

指揮官としては優れているのだが、アルフォンスの剣の腕前は俺と良い勝負である。

好きな女のために、その兄貴と剣を交えるという発想が理解できないのであろう。

どうにか苦労して勝利したり、負けてもその腕前を認められるのなら物語としては素晴らしいのだが、俺やアルフォンスだと瞬殺されてしまうであろうし。

「エルの坊主の事はともかく、そろそろ来るよな？」

「もう数日であろうよ」

「導師。戦場の勘みたいなものですか？」

「ただ帝都バルデッシュからの距離と、行軍の速度からの計算であるな」

導師の鋭い予想に、アルフォンスは感心している。

自分の考えとほぼ同じだったのであろう。

ブランタークさんも同様で、二人はバルデッシュ脱出の時に兵士達を殺しても全く動じなかった。

若い頃に、相当な修羅場を切り抜けているはずだ。

師匠も、過去に人を殺した経験があるのであろうか？

「バウマイスター伯爵殿の活躍に期待しているよ」

「それをわざわざ言いに？」

「そういう事にしないと、ここで飯が食い難いしな」

結局アルフォンスは三人前ほどの食事を平らげ、俺が魔法の袋に貯蔵していた王国産のワインまで貰って本陣に戻っていく。

「いい根性しているわね。アルフォンス様って」

アルフォンスの図々しさに、イーナは呆れているようだ。

「ああいう人が大将なら、俺達は傭兵のままで楽できるから」

どうせ前線で魔法を行使しないといけないのに、軍勢の管理まで任されたら堪らない。
やった仕事に対して現金や物資などで報酬をいただいて、戦後の帝国に俺、バウマイスター伯爵の影響が少なくなるようにする。
それが、余計な面倒を防ぐのにベストな方法なのだから。

「ヴェルは、自由にミズホ伯国で買い物が出来れば問題ないんでしょう？」

「そういう事だね」

あの国には、俺が独学で造った醤油や味噌の上位互換種が販売されている。
食には拘る俺なので、是非に定期的に入手したかった。

「醤油のために戦争に？」

「さすがに、それだけじゃないよ」

ルイーゼの質問を、俺は笑って否定していた。
この内乱はとにかく終わらせるに限る。
早く終わるかは不明だが、終わらせないと色々と不都合が多過ぎる。
もし王国が引き摺られて介入などしたら、余計に帝国が荒れてしまうからだ。
王国とて、費用と手間の割りに得る物は少ないはず。
国内の開発も遅れてしまうし、喜ぶのは一部の人達だけであろう。

「ですが、あまりお安くお仕事を受けるのは……」

エリーゼは心配しているが、実はもうかなり報酬を得ている。
食事が終わったので食器が片付けられたテーブルの上に、俺は金と銀のインゴットを魔法の袋から出して積んでいく。

「結構な量があるな。しかしどうやって？」

「廃鉱から拝借してきました」

「テレーゼ様の許可は？」

「当然貰っていますよ」

ブランタークさんと導師に、俺は底意地の悪そうな笑顔を浮かべながら答える。
このソビット大荒地に点在する廃鉱には、当然最後に帝国で『抽出』と『採集』の魔法が使える魔法使いによって最後のひと絞りが行われる。
なので地表や地下数十メートルには、全く使えそうな金属類は残っていない。

だが、その下はどうであろうか？
しかも、このソビット大荒地には死火山なども存在している。
金は地下のマントルから噴き出してくるので、実際に火山国である日本は黄金の国であった。

俺はその大量の魔力を使って、地下数百メートルまで『抽出』の範囲を広げたのだ。
大量の魔力を使うが魔力量を増やす訓練には最適なので、家に戻る前に必ず実行していた。

「これで、テレーゼに報酬を踏み倒されても損はしない」

「さすがに踏み倒さないだろう」

「義父が言ってた。死んだ英雄は良い英雄だって」

あの見た目に反して、エドガー軍務卿は意外と歴史書などを読んでいるらしい。

義娘であるヴィルマに知的な話をしているのだから。

「あの装置さえぶち壊せば、最悪『瞬間移動』で逃げるから大丈夫」

「わかった。ヴェル様から離れないようにする」

ヴィルマがそっと俺の膝の上に座る。

「ヴィルマさんの言う事も、あながち間違いではありませんわよ」

「そうだな。結局、同胞殺しになるわけだし」

カタリーナの指摘に、ブランタークさんも賛成していた。

俺達が活躍して功績をあげると、それを恨む帝国人も増えるという寸法だ。

「エッボさんでしたっけ？　ああいう方は一定数いますわよ」

帝都から逃走する際に、敵に足を与えないように他の馬車を破壊したら五月蝿かったのを思い出す。

「反乱終了後に、報酬をあげたくないから軍令に反したと言って処刑というケースもあり得ます」

反乱で多くの犠牲が出て不満がある帝国人に対して、外国人の傭兵で多くの同胞を殺した俺達をスケープゴートにする。

絶対に無いとは言えないかもしれない。

「テレーゼに限ってそういう事はないと思うけどね。あったら……」

「あったらどうしますか？　あなた」

「相応の仕返しをするけどね」

少し恐ろしい話になってしまったが、そろそろ寝る時間なので寝室へと移動する。

野戦陣地内に自力で石材を積んで造った家は、丁寧に隙間を塞いだので外の寒い外気が入って来ないで温かい。

だが、そんなに沢山部屋を造るわけにもいかなかったので、基本的に寝室は二つであった。

「男性部屋と女性部屋ねぇ……」

「貴族として、バウマイスター伯爵には子作りが必須ではあるが……」

今は戦時なので、避けた方が無難であろう。

俺も、導師やブランタークさんに聞かれながらする趣味はない。

「ただいま」

「エル。また訓練か？」

「それもあるけど、刀の注文をね」

エルとハルカは、交代で夜間警備でこの家の警備を他の兵士達と行っている。

今日はハルカの番なので、エルは自分が使う刀の注文に行ったそうだ。

「それで、砂鉄を欲しがったのか」

ミズホ伯国軍の中には、従軍している刀鍛治が十数名存在している。

彼らは新しく戦闘に使うミズホ刀を打ち、手入れなども丁寧に行う。

特に魔刀は特殊なメンテナンスが面倒なので、専用の魔道具職人と共に毎日忙しいそうだ。

「物凄く質の良いやつは、ミズホ伯国内で買わないと駄目だけどな」

戦場で使う分には、ここで打って貰える物で十分だそうだ。

「魔刀は手に入らないのか？」

「あれは、メンテが面倒なの。値段を聞いたら腰が抜けそうだったし」

鹵獲しても、特殊なメンテナンスをしないと良くて数週間しか使えないそうだ。

そして、そのメンテナンス技術は門外不出らしい。

値段も、魔道具なので恐ろしい価格なのだそうだ。

「エルの坊主がハルカを嫁に貰えば手に入るのか？」

「いやあ。無理じゃないですかね？」

エルの言う通りに、そう簡単に入手はできないであろう。

ミズホ伯国軍の質の優位を支えている技術なのだから。

「ハルカを嫁には貰うつもりなのか」

「ハルカさんには、結婚を約束した男性とかはいないってさ」

過去の教訓から、今度はそういう話をちゃんとしているらしい。

「刀術も覚えて、ハルカさんの兄貴をぶちのめせば……」

そんなに簡単に行くのかは不明であったが、エルは俺よりも才能はあるはずなので大丈夫であろう。

「ははははっ！　俺の恋は今度こそ成就するのだ！」

「そういう事を言われると、逆に嫌な予感がするのである」

「そんな事はあり得ませんよ」

その後は四人はベッドで就寝をするのだが、ここで一つ問題が発生していた。

「グゴォーーー！　ふぬっ！　その首を圧し折ってくれようぞ！」

「ギリギリギリリリ！」

「やっぱり五月蝿いな……」

「ああ」

せっかく新婚なので男心としては妻達と一緒に寝たかったのだが、女性部屋にはハルカのベッドもあるのでそれもできず、しかも導師は鼾と物騒な寝言が、ブランタークさんは歯軋りが五月蝿かった。

一緒に寝るようになってからこの三日間ずっとそうで、慣れない場所だから初日くらいはと思う俺達の淡い希望を打ち砕いていたのだ。

「結婚した奥さんは、良く一緒に寝られるよな」

「本当、寝不足になりそうだな」

俺とエルは、かけ布団を被って何とか寝ようと懸命に努力を始めるのであった。

すぐに諦めて、『睡眠』の魔法をかける羽目になっていたが。

第八十五話　第一次ソビット大荒地会戦。

「絶景であるな！」

「いや、絶景とか言っている場合じゃないだろうに……」

ソビット大荒地に陣を張ってから一週間、遂に反乱軍は先鋒隊を送り出していた。

南端の街道沿いに俺達が設置した馬避けの塹壕や石造りの柵などを挟んで、両軍が睨み合う。

反乱軍の推定戦力は四万人ほどで、味方は合計で二万五千人ほど。数では不利であったが、質ではそう負けていないはず。

それに防衛戦なので、よほどのヘマをとしないと負けないはず……だと思いたい。

初めての戦争なので俺達はガチガチに緊張していたが、導師はど こ吹く風といつも通りのままであった。

ブランタークさんも、その神経の太さに呆れているようだ。

きっと、導師の心臓には竜の体毛でも生えているのであろう。

「帝都の『青白ダイコン』共を切り裂いてくれようぞ！」

「おおっーーー！」

更に味方の中で一番戦意が高いのは、今回初めて防衛戦闘以外で出兵しているミズホ伯国の面々であろう。

彼らからすると、帝国中央部や南部にいるアーカート族至上主義

者は許しがたい存在で、攻めてくるのであれば皆殺しにしてやるまで、という気持ちが強い。

防衛陣地の東側にいる彼らは、ミズホ刀を抜いて掲げながら反乱軍を挑発していた。

なお『青白ダイコン』とは、ミズホ人が帝都などにいる中央の人達を指して言う侮蔑の名称である。

個人的には大根は大好きなので、あまり侮蔑には使って欲しくないのだが。

昨日の晩にミズホ上級伯爵からご馳走になった『おでん』にソックリな料理と、『沢庵』に似た漬け物は美味しかった。

これとミズホ酒の熱燗とが、今の寒い季節と相まって良く合うのだ。

「戦意は高いか。救われるねぇ」

そして陣地の中央部に、総大将代理のアルフォンスがフィリップ公爵家近衛騎士隊と共に陣取っている。

「数では不利だけど、防衛戦闘で数を減らす戦いなら何とかなりますか？」

「犠牲を減らすために、バウマイスター伯爵に期待しているよ。導師とブランターク殿も宜しく」

「わかったのである！」

「まあ、俺達は中央にいるしかないよな」

こういう本気の戦の際には、魔法使いの配置が重要であったりする。

魔法使いは魔力が残っている間は、一般兵士を虐殺可能なジョーカーのような存在だ。

当然、本陣には一番数を置く。

総大将が殺されてしまうと、一気に軍勢が瓦解してしまうからだ。

ところが逆の手を打って本陣の守りをあえて薄くし、右翼や左翼に強力な魔法使いを配置して一気に数を減らすという奇策に出る可能性もある。

その辺の配置は軍略の一種なのだが、実は例の『通信』と『移動』の魔法を抑制する装置のせいで、魔法使いの配置に悩む事態になっていたのだ。

飛んで応援にいけないので、安全策を取って中央には俺達を、残りの魔法使いは満遍なくと言った感じだ。

フィリップ公爵家は一名の上級レベルの魔法使いに、四名の中級レベル、十五名の初級レベルと実はブライヒレーダー辺境伯などとは比べ物にならない数の魔法使いを抱えていて、他の貴族家でも意外と多くの魔法使いを抱えている。

これに加えて冒険者ギルドにも、臨時で魔法使いの徴集命令を出していた。

戦時に備えてそういう制度があるらしく、これに応じた魔法使いも多い。

帝国の冒険者ギルドは、現在二つに割れている。

北方の支部は、内戦勝利後に帝都本部へ栄転できるというテレーゼからの餌に釣られてこちらに味方している。

中央や南部の支部は、反乱軍に完全協力しているようだ。

中には中立を宣言している支部もあり、他のギルドもそれぞれに対応がマチマチで分裂状態にあった。
戦後に再統合する際に、テレーゼは苦労する羽目になるであろう。

「どちらの勢力も、可能な限り魔法使いを集めているか。そういうのが嫌いで拒否する連中も多いが、暫くは魔物の素材や魔道具の供給が減るな」

ブランタークさんは経済への影響を心配しているようだが、これぱかりは内戦が終わらないとしょうがない。
それに、それを考えるのはテレーゼ達帝国人の仕事である。

「ラン族とミズホ人の魔法使いが多いかな？」

「自民族の危急存亡の瀬戸際だからな」

ニュルンベルク公爵のやり口を見れば、危機感を感じて当然かもしれない。
褐色の肌色をしたラン族とミズホ人の魔法使いが多く、特にミズホ伯国が独自に抱えている魔法使いは多いようで、その質でも中央には負けていないはずだ。

「救護部隊の質も良いからね」

「バウマイスター伯爵の奥方は、優れた治癒魔法使いだし」

アルフォンスは、エリーゼの治癒魔法使いとしての力量に期待しているようだ。
兵士の怪我が早く大量に治れば、それは軍の力を大幅に引き上げるからであろう。

エリーゼは教会から派遣された治癒魔法の使い手と共に、少し後方で救護部隊に所属している。
前線に出ても攻撃手段が乏しいので、後方で治癒に専念して貰うためだ。

ところが、そこでひと騒動起こってしまったのだ。

『ええっ！　ミズホ伯国とは救護部隊を分けるのですか？』

『エリーゼ殿。あなたが教会の司祭でもある事実は知っていますけど、ここは大人の配慮でね』

『噂には聞いていましたが……』

帝国がミズホ伯国を保護国にする際に一番揉めた問題が、この宗教の問題であった。
実は、ミズホ伯国は教会とは別の宗教を信仰していたからだ。
日本風だからかは知らないが、仏教と神道が混じったような宗教で、俺達も鳥居のある寺院のような建物を幾つかミズホ伯国内で見ている。

『教会でも過激なのは、ミズホ人に改宗させろと迫ってね』

もしそんな事をすれば、ミズホ人が一丸となって宗教戦争を仕掛けかねない。
双方に多大な犠牲が出てしまうであろう。

『帝国が国教をプロテスタントにする時に、物凄い血が流れたから』

カソリックの信徒で強硬な連中がプロテスタントへの襲撃を行い、プロテスタント側も仕返しに走って内乱寸前にまでいったらしい。
同じ宗教でもこれなのだ。
ミズホ人に無理矢理改宗など迫れば、大変な事になってしまう。

『そこで、妥協策が出てね』

同じ神を祭っているけど、少し形態が違う。
ミズホの宗教は、教会の分派のような物。
という事に、強引にしたそうだ。

『秘密協定で、教会はミズホ伯国内で布教を行わない。ミズホ教側も、他の帝国領内で布教を行わないというね』

外地にいるミズホ人で教会の信者になったり、ミズホ伯国を生活の拠点にしている他の民族でミズホ教の信者になる者達もいるそうだが、これは極少数なのであまり気にもされていなかった。

『わかりました……』

エリーゼは、バカでもないし狂信者でもない。
他の宗教を信仰する人達を理解はしていたが、どこか納得できない部分もあるのであろう。
子供の頃から教会に関わっているので、仕方がないのかもしれない。

『自分と宗教が違うから認められないだと、ニュルンベルク公爵と大差ないからなぁ……』

『すいません。あなた』

『エリーゼは子供の頃から教会しか見ていないから、どこか納得できないのも理解しているんだけどね』

偉そうな物言いだが、これも宗教観が曖昧な元日本人らしい考え方なのかもしれない。

『そうであるぞ。エリーゼよ。宗教などとは方便なのだから』

『導師は一応は王宮筆頭魔導師だから、それなりに配慮しろよ』

俺とは違う意味で宗教など全く信じていない導師の本音に、ブランタークさんが苦言を呈していた。

『伯爵様はどうなんだ?』

『全く信じていないわけでもないですよ。ほら、こういう戦いの前には祈りたくもなる』

『イワシの頭も信心』の類だが、普段から献金だの利権で教会に貢献しているのだから、たまには役に立っても良いはずだ。

『私は、頭が固いのでしょうか?』

『それは無いんじゃないのかしら?』

『そうだよね。本当に固い人なら、強引に改宗を迫ったりすると思うし』

俺と同じく教会に対してはドライな感覚を持つイーナとルイーゼが、エリーゼを慰めていた。

『それに、戦争が始まればそんな事は気にしていられない』

『宗派が違うから治療しないとか言えませんからね』

ヴィルマとカタリーナの言う通りで、戦争が始まると治癒を担当する神官や魔法使いなどは大忙しとなる。

負傷者を素早く治すのは戦力の保持に必要な事であったし、実は治す順番なども時には考慮しないといけない。

ある魔法使いの魔力が残り治癒魔法一回分だったとして、目の前に二人の負傷者が運ばれてくる。

片方は普通の兵士で、もう一人は高名な騎士であった。

戦闘力から考えると騎士の方を優先するとして、もし兵士の方が瀕死の重傷であったらどうするのか？

治療しなければ死んでしまうが、戦況を考えれば騎士を復帰させた方が後の死傷者が減る。

兵士を見殺しにして、騎士を治療する決断も必要だというわけだ。

『柔軟にミズホ伯国にも頼まないと駄目なのですね』

『向こうも余裕がないかもしれないけど、頼めないと死ぬ人が増えるケースもある。その辺は柔軟に動かないと』

『わかりました。あなた』

こんな会話の後に、エリーゼは後方の野戦治療所へと向かっていた。

それにしても、宗教とはなかなかに面倒である。

「しかしながら、戦争とは残酷な物だね」

負傷者だと治療されて戦線復帰される危険があるので、本当の戦争では相手を必ず殺す事が要求される。

この前の紛争などお遊びにしか見えないのが、二百年前に終わった本当の戦争なのだ。

なかなか戦争にならないのには、こういう事情もあった。

「一応は、敵軍の大将が名乗りをあげるようだね」

アルフォンスが顎で示した先には、豪華な鎧を着て綺麗な馬に乗った太っている中年男性と、護衛役と思われる二騎の若い騎士達の姿があった。

彼からこちらに馬を走らせていたが、俺が作った馬避けの溝の前で立ち往生する。

「騎士の美学を心得ない野蛮人どもが！　いいか良く聞け！　我こそは、陛下よりソビット大荒地の開放を命じられた帝国軍のクラーゼン将軍である！」

「美学ねえ……。戦は勝たないと意味が無いでしょうに」

「ふんっ！　あの黒豚女の惰弱な従兄か！」

テレーゼを黒豚扱いとか、普段からよほど彼女が気に入らなかったのであろう。
人に美学だのと言っておいて、その悪口は無いと俺は思うのだが。

「クラーゼン将軍。管理職で偉そうにばかりして運動しないから白豚になっちゃって」

反乱軍の大将は、帝国軍からの裏切り者らしい。
口調からしてニュルンベルク公爵のお友達のようだが、彼の挑発にアルフォンスは同じ挑発で返していた。

「ぬぬっ！　今なら降伏すれば命だけは助けてやる」

怒りで顔は真っ赤であったが、どうにか降伏を促すという戦闘前の儀礼だけは忘れずに行えたようだ。

「命だけ助けられてもねえ……」

「我らアーカート族の生存権を汚す野蛮人どもが！　生かして貰えるだけありがたく思え！」

「そのアーカート族とやらが幻なんだよ。そんな民族はいないから」

「ああ言えばこう言うか！　若造の癖に！」

「その若造に論破されないでよ。あんたは無能なんだからさ」

「若造の癖に偉そうに！」

挑発するつもりが逆に挑発されて、クラーゼン将軍の顔は真っ赤であった。
それと、もう少し挑発と悪口にセンスが欲しいところである。

「知っているのか？」

「有名なおバカさんだね」

血筋が良いから将軍になれたが、でなければ兵長くらいが関の山くらいの人物らしい。
実家が帝国成立前からの名家なのが自慢で、それが縁でニュルンベルク公爵についた物と思われる。
アルフォンスの説明で、俺はこのクラーゼン将軍について理解した。

「お前らは皆殺しにしてやる！」

四万人で二万五千人に勝つのならともかく、全滅させるのは不可能なはず。
その程度の事もわからないから、アルフォンスに無能扱いされているのであろう。

クラーゼン将軍は、戦闘を開始すべく後方へと下がっていた。

「魔法で殺せば楽じゃない？」

「礼儀に反するからね。向こうも一応はルールを守っているから、今は見逃がしてあげようよ」

反乱を起こした時点でルールもクソもないような気もするが、こ

こはアルフォンスの命令に従っておく。
暫くすると、歩兵が前に出て俺が掘った馬避けの溝に板をかけて前進を開始していた。

「全軍！　射撃開始！」

射程距離内に反乱軍が迫ったのでアルフォンスが射撃を指示するが、放たれた弓は全て弾かれてしまう。

「あーーーはっは！　我が軍の『広域魔法障壁』を見たか！」

自分でかけたわけでもないのに、最初の矢による一撃が全て弾かれてクラーゼン将軍はご機嫌のようだ。
多分、ほぼ全ての魔法使いに『魔法障壁』を使わせ、このまま前進を続けようとしているのであろう。

「上手くいけば、無傷でこの野戦陣地に取り掛かれるからね」

こちらの攻撃を防いでしまうので、上手くすれば損害を出さずに先制可能かもしれない。
だが、この戦法には罠がある。
こちらの攻撃を『魔法障壁』で防いでいるので、自分達も一切攻撃できないのだ。

「こういう戦法を考える人はたまにいるんだけど、普通は妄想に留めるんだよねぇ……」

確かに『魔法障壁』を解くまでは攻撃を受けないが、逆に自分達も全く攻撃できないし、魔力の大量消費で後が辛くなるはずだ。
そういう考えに至らないからこそ、クラーゼン将軍は無能なので

あろうが。

「それでも、これはチャンスか」

俺は魔法の袋から双眼鏡を取り出すと、敵陣にいる魔法使いを探し始める。

初級・中級と満遍なく配置されていて、攻め寄せる反乱軍をほぼ均等に『魔法障壁』で覆っている。

数において有利で、初戦の勝ちを狙っている反乱軍に相応しい魔法の使い方であろう。

魔法の持久力を考慮しなければだが。

「上級クラスは……」

数秒後に、ブランタークさんレベルの魔力を持つ魔法使いを一名見付ける。

やはり中央を抑えているので、質の良い魔法使いを一定数を揃えているようだ。

「（まともにやれば、なかなか倒せないが……）」

大軍全体を覆う『広域魔法障壁』の要となっているので、彼らは自由に行動できない。

その証拠に、彼らは通常の兵士の格好をしている。

こちらからの魔法による狙撃を防ぐために、わざとそういう格好をしているのだ。

「ヴィルマ」

俺はヴィルマに顔を寄せると、双眼鏡を渡してその兵士に扮した魔法使いを教える。
彼女に狙撃を頼むためだ。

「まだわからない……」

「魔力が増えて時間が経っていないからだ。じきに覚えるよ」

ヴィルマは、まだ魔法使いを見分けるのに慣れていない。
そこで、俺が彼女に指示する事にしたのだ。

「うーーーん。難しい」

ヴィルマはそう言いながら、例の鉄弓に鉄製の矢を番えてその魔法使いを狙撃する。
普通ならば『魔法障壁』で弾かれるし、フリーの上級魔法使いを狙撃できるはずもない。

ところが今は、ほとんどの魔法使いによる共同作業で『広域魔法障壁』を展開中なのだ。
それに全力を傾けているので、突然飛んできた鉄矢に反応できるはずがない。

『広域魔法障壁』は強固な防御力を持つが、当然欠点はある。
防御力を上回る攻撃力で突破すればいいのだ。

ヴィルマが放った鉄矢は、俺が重ねがけした『ブースト』によって反乱軍の『広域魔法障壁』を貫通し、そのまま兵士に化けた魔法使いの頭部を木っ端微塵に砕く。
見た目は地味な魔法だが、かなり強固な『魔法障壁』を貫くので

大量の魔力を持って行かれる感覚を覚えていた。

標的を貫いた鉄矢は、更に後方の兵士数名も貫通して死傷させていく。

「ひいっ！」

上級魔法使いの死で混乱したようで周囲の隊列が乱れるが、『広域魔法障壁』は消えなかった。

一人や二人の戦死で消すなと言われているのであろう。

いくら素晴らしい魔法使いでも、その行動を縛れば呆気なく死んでしまう。

そんな事もわからないクラーゼン将軍の能力はお察しであろう。

「ちっ！」

ブランタークさんが舌打ちをする。

『広域魔法障壁』が消えたら、すぐに手旗信号で味方に合図を出して弓と魔法を打ち込むつもりだったからだ。

「伯爵様。もっと殺せ」

「了解」

『広域魔法障壁』を崩すには、そのかなりの部分を担っている上級レベルの魔力を持つ魔法使いを殺すしかない。

「イーナさん。あの人ですわ」

「変装していてわかり難いわね」

カタリーナも、ブランタークさんの特訓の成果が出ているようだ。
イーナに変装している魔法使いの位置を教え、彼女も向上した魔力を使用して槍を投擲する。
これにもカタリーナの『ブースト』が入り、魔法使いは胴体の真ん中に穴を開けて倒れていた。
間違いなく即死であろう。

「可哀想だが、負傷だと治療されて復帰するからな。絶対に殺せ」

ブランタークさんの役割は、絶対にアルフォンスを死なせない事と、俺達への指示であった。
やはりこういう時には、どうしても経験の差が出てしまう。
導師ですら、大人しく彼の命令に従っていた。

「エルの坊主が未婚のままで死ぬと可哀想だからな」

「ブランタークさんこそ、新婚では死ねないですからね」

「そういうのは、結婚してから抜かせ」

「じきに結婚しますよ」

俺の護衛をしているエルが、カタリーナを護衛しているハルカを見ながらブランタークさんに言い返すが、正直なところ脈があるのかは良くわからなかった。

「とにかく、魔力量が高いのを狙え。変装しているのは間違いなくそうだ」

「ねえ。ボク達の出番は？」

「某も退屈である」

「追撃が必ずあるからね。二人は、一人でも多く殺せるように温存しておくよ」

冷徹に言い放つアルフォンスであったが、この意見は正しい。

反乱を起こしたニュルンベルク公爵は悪で、それを打倒せんとするテレーゼは正しいのだが、南部と中央をほぼ把握しているニュルンベルク公爵に従わざるを得ない貴族は多いのだ。

ここで大勝して、ニュルンベルク公爵の箍を外す必要があるというわけだ。

「戦争なんて損害しか出ないから、本当に困るけどね」

既に俺達の狙撃で、上級レベルの魔法使いが二名、中級も八名が死んでいる。

俺とカタリーナが指示して、ヴィルマとイーナが狙撃、『ブースト』をかけて『広域魔法障壁』をぶち破る。

下手な戦略級攻撃魔法よりも多くの魔力を消費するが、ここで上位の魔法使いを殺しておけばあとが楽になるというわけだ。

「向こうは、大損害だな」

「アレの命令で、実力を発揮できないまま死ぬ魔法使いが憐れであるな」

導師は、戦死した魔法使い達に憐憫の言葉をかけていた。
なぜこんなバカな結果になるのかというと、クラーゼン将軍が臆病者で無能だからである。
自由に行動させてこそ効果を発揮する魔法使いを、兵士達の損害を減らすために『広域魔法障壁』役として固定してしまったのだから。

「過去の戦争は、魔法使いの使い方で勝敗が左右した事が多かったみたいだね。敗軍にそれなりの力量の人が一人でも残って奮戦すると勝った方でも被害は甚大だったみたいだし」

おかげで、戦争の頻度は低くなった。
勝っても被害が甚大なのだから、損害の回復に時間がかかるからだ。

あのブロワ辺境伯との紛争がああいう形になっていたのも、本当の戦争になると出る甚大な損害への忌避感からなのかもしれない。

「魔法使いへの狙撃を続けます。ヴィルマ。あいつ」

「わかった」

俺が双眼鏡で探している魔法使いを、ヴィルマは目が良いので裸眼で簡単に確認してしまう。

「最近、また目が良くなった」

英雄症候群のせいで常に体が魔力で強化されているため、魔力が増えた結果余計に身体能力が増しているようだ。
その中には視力や聴覚もあるらしく、これは不思議な現象ではあ

る。

ヴィルマは、五感が鋭くなったと言っていた。

「大分威力が落ちたな」

ブランタークさんは、反乱軍に張られている『広域魔法障壁』がかなり弱まったのを確認していた。

「普通なら、解除して突撃じゃありません？」

「だから、バカなんだろう。クラーゼン将軍は」

大分こちらとの距離も稼げたのだし、あとは『広域魔法障壁』を解いて突撃すべきだと思うのだ。

残された魔法使いを自由にすれば、塀や柵を破壊し、兵士もかなり殺せるはずなのだから。

「今のところは、損害は少ないからだろう」

「いや、魔法使いは被害甚大だろうが」

死傷者は少ないが、大半は魔法使いなのだ。

貴重な魔法使いの動きを封じて殺させているのだから、やはりクラーゼン将軍は無能なのであろう。

「ニュルンベルク公爵って、有能なんじゃないの？」

「さあな」

イーナの言う通りに有能だったとしても、中央の帝国軍の助力を

得るためにそれなりの譲歩が必要だったのかもしれない。
そんな事を考えながら魔法使いへの狙撃を続けていると、遂に戦況が動いた。

突然、左翼のミズホ伯国軍から、何かが弾けるような音が一斉に聞こえたのだ。

「アレは何だ？」

「まさか、『魔銃』を完成させたのか！」

アルフォンスが驚きながらも口にした『魔銃』という単語で、俺は理解していた。
戦国時代から江戸時代くらいの日本風文化を持つミズホ伯国なので、魔力で弾を撃つ火縄銃のような物を開発したのであろう。

「第一列交代！　第二列前へ！」

ミズホ伯国軍と対峙している左翼反乱軍を見ると、その前衛が壊滅状態になっていた。
俺達のせいで『広域魔法障壁』が弱体化したところに、魔力によって撃たれた銃弾が貫通して兵士達を襲ったからだ。

しかも『魔銃』は、火縄銃とは違って射撃間隔が短いようだ。
前込め式で銃身に弾だけ入れれば良いようで、魔力は付属している魔晶石から供給しているので、火薬式よりも連射性能には優れている。

五発ほど撃つと銃身が加熱するので、そうなると交代して次の人員と交代するらしい。

こんな高性能な新兵器なので、当然相対していた反乱軍の動揺は大きい。

だが撤退命令は出ていないようで、左翼反乱軍は前進を続けて無駄に犠牲を増やしていた。

「伯爵様。『広域魔法障壁』が消えたな」

「ええ」

ようやく残っている魔法使いを自由に動かすために『広域魔法障壁』を解除したらしい。

ブランタークさんがそれに気が付かないはずもなく、アルフォンスに目線を合わせると、中央の本陣に赤い旗が上がった。

攻撃開始の合図を出す旗で、接近していた反乱軍に弓矢や魔法が容赦なく発射される。

反乱軍からも反撃が始まって、遂に双方による本格的な死闘が始まる。

この野戦陣地を落とさんと前進と攻撃を続ける反乱軍と、それを阻止しようとする味方の軍勢にと、犠牲は攻撃側である反乱軍に多く出ているようだが、向こうにも魔法使いは残っているのだ。

「第七櫓が完全に破壊されました！　死傷者多数！」

「フォーゲル大隊長が戦死！　リンツ中隊長が指揮を引き継ぎます！」

味方の犠牲が次々と報告されるが、応援には行けない。

そこにも中級や初級の魔法使いが一定間隔で配置されているし、こちらの狙撃で魔法使いの数と質については優位に立っている。
俺達は本陣の守りもあるし、正面の軍勢の撃破も手伝わないといけない。

初めての殺し合う戦争で、俺達に余裕など一つもなかった。

「伯爵様。あまりデカイ魔法を打つな」

「了解しました」

小規模の『ウィンドカッター』や『ファイヤーボール』を作り、次々と石塀を越えようとする反乱軍の兵士達にぶつけていく。
切り裂かれ、焼け焦げて死んでいくが手加減は出来ない。
負ければ殺されて終わりなのだから。

「全体的には優勢だよね」

反乱軍の攻撃が始まってから三時間ほど、俺達の眼前には反乱軍兵士達の死体が多数倒れていた。
正確に数えてはいないが、間違いなく数千に達する損害であろう。
味方にも数百名の死傷者が出ていたが、攻撃側で魔法使いの数が減り、力押しなので反乱軍側の損害が大きい。

「クラーゼン将軍も今さら退けないのだろうな」

突然、眼前に『ファイヤーボール』が飛んでくる。
一発逆転の狙撃を試みたのであろうが、威力は低いし、ブランタークさんによって簡単に防がれてしまう。

「あいつだ」

「はいっ！」

カタリーナが『ウィンドカッター』を飛ばして、その魔法使いを狙う。

初撃は『魔法障壁』で弾いていたが、次に俺が銃弾を魔法で飛ばすと頭部に穴が開いてそのまま倒れてしまった。

確実に殺したはずだ。

「その魔法は、『魔銃』を再現したのですか？」

「そうだよ」

俺は銃の構造など知らないので、ただ魔力で前部をひしゃげさせた銃弾を魔法で撃ち出しているだけだ。

材料は鉄と、一部にタングステンなどの金属も用いている。

最近、『探知』で鉄と銅以外の金属もわかるようになったのだが、クロム、ニッケル、ボーキサイトなどは使い方がわからないのでただ『抽出』して死蔵していたのだ。

銃にはライフリングとかをすると威力が上がるそうだが、魔銃にもそういう仕組みがあるのかはわからない。

向こうも、今まで隠していた秘密兵器の詳細をそう簡単には教えてくれないであろう。

「私も覚えたいですわね」

「人殺しにしか使えない魔法だけど」

「それは今さらでしょう」

カタリーナの言う通りで、目の前はえぐい死体だらけ。

数千人もの損害が出ているのに反乱軍は攻撃を止めず、『広域魔法障壁』のために前進されていたので、既に味方の一部が石壁を登ってくる反乱軍の兵士や騎士達を槍で突いて落としている。

「キリがないな」

「そうですね」

エルとハルカも、イーナから予備の槍を借りて石塀を登ってくる敵兵を落とし始めていた。

「指揮官を発見」

ヴィルマも、鉄弓で指揮官を狙って狙撃を続けている。

「エリーゼは大丈夫かな？」

まさか見にもいけず、俺は後方で負傷者の治療を続けているエリーゼが心配になってしまう。

「エリーゼ様は強いから大丈夫」

「そうか」

彼女を慕っているヴィルマが弓を放ちながら、俺の懸念を払拭していた。

「しかし、変だな……」

反乱軍の攻撃は、既に六時間近くも続いていた。
既に万に近い死体が折り重なり、おかげで敵軍は石塀を登りやすくなっている。
損害比でいえば圧倒的に不利なのに、彼らは攻撃を一向に止めないのだ。

「簡単な事ですよ。主力は選帝侯の諸侯軍なのだから」

主君を人質に取られていて、彼らは退く事が出来ない。
失敗は主君の処罰に繋がるので、相手と刺し違えてもこの野戦陣地を落とすのだと無理をしている。

「だから、クラーゼン将軍が大将なのか」

中央の法衣軍系貴族である彼からすれば、他の貴族の諸侯軍などいくら磨り潰しても腹は痛まない。
しかも、クラーゼン将軍は帝国軍の重鎮ではあるが無能でもある。
失敗したら処断してニュルンベルク公爵の独裁性を強められるし、選帝侯の軍勢が潰されればその領地の完全制圧も容易なのだから。

「俺達に、選帝侯の軍勢を始末させているのか……」

選帝侯本人達は人質だが、名目上は責任者なので敗戦の責任を取らされて処断される。
領地は没収で、ニュルンベルク公爵に吸収されるというシナリオなのであろう。

「だから意地でも退かないであろうな」

その結果が、この万を超える死体の山である。
双方から大量の弓や魔法が飛び交い、ミズホ伯国軍は魔銃を連発している。
味方の死傷者は千人ほどであるが、これはこちらが防衛側なのと、エリーゼ達の治癒部隊が頑張っているからに他ならない。
敵軍は、負傷者を後方に下げようとする時にも狙われて損害を増やしているのだから。
「夜戦に突入するかな？」
「出来れば避けたい」
「なぜ？」
「ニュルンベルク公爵軍なら可能かもしれないけど、夜は警戒に集中したい」
反乱による皇位奪取を狙っている以上は、そういう訓練を領軍に課していてもおかしくないとアルフォンスは考えているのであろう。
元々、ニュルンベルク公爵軍は精強で有名だそうだし。
「なら早く決着をつけないと」
「それには、クラーゼン将軍を討つ必要がある。出来るか？」
損害が大きいので、クラーゼン将軍はかなり前に出て狂ったように督戦を行っている。
だが、その両脇にはとっておきの上級クラスの魔法使いが二名い

て、彼らはクラーゼン将軍の護衛のみに専念しているので魔法による狙撃も難しかった。

彼らがクラーゼン将軍と自分達だけを守る強固な『魔法障壁』を展開すると、そう簡単には打ち破れないからだ。

「魔力を枯渇するほど使えば可能だけど……」

戦場では何が起こるかわからないので、出来れば魔力はある程度温存しておきたいものである。

「すまんがやってくれ」

「わかった。だそうです」

「後ろでふんぞり返って駄目な将軍であるな！」

俺が合図を出すと、退屈なのか敵軍に岩を投げていた導師が膨大な魔力を込めて巨石を数百メートルも離れたクラーゼン将軍達に投げる。

「良くあんなに飛ぶよねぇ」

「ルイーゼ。いいから早く！」

「当てるのはそう難しくないけど……」

他にも、ルイーゼも導師ほどではないが巨石を、イーナも投擲用の槍を連続して、ヴィルマも鉄弓を連射し始める。

狙いは正確で次々とクラーゼン将軍の元に到達するが、護衛の魔

法使い二人が使う『魔法障壁』によって全て防がれてしまう。

「カタリーナ！」

「はいっ！」

だが、それは囮である。

その直後に俺が複数の銃弾を魔法で発射し、それに強固な『ブースト』をかける。

更にタイミングを合わせて、カタリーナも『ブースト』を重ねがけしていた。

いきなりは不可能な芸当なのだが、前にたまたま練習をしていて良かったと思う。

複数の銃弾が、とてつもない貫通力を得てクラーゼン将軍達に向かう。

「いくら攻撃が来ても、『鉄壁』『硬壁』の我ら兄弟の前には！」

「兄者！　まずい！」

いくら強固な盾でも、それを上回る攻撃力で攻撃すれば壊れてしまう。

小さな銃弾によって『魔法障壁』が一点突破され、立て続けに二人の魔法使いとクラーゼン将軍の体を貫通する。

しかも、銃弾には回転も加えてあり、対人用にダムダム弾仕様にもなっているのだ。

体の内臓を大分持っていかれて、血反吐を吐きながら三人は倒れていた。

「クラーゼン将軍が！」

「総大将が！」

周囲にいた兵士達に動揺が広がり、それが全軍へとウェーブのように伝播していく。

いくら無能な総大将でも、一応総大将ではあるのだ。

戦死すれば、当然士気は低下していく。

「撤退だ！」

加えて、今まで合同訓練もした事がない複数の諸侯軍の混成部隊である弱点も出ていた。

一部の指揮官が勝手に退却を始めてしまう。

こうなると、この流れが全軍に広がるのも時間の問題であろう。

「アルフォンス。魔力切れだ」

「私も駄目ですわ」

俺とカタリーナは、その場に背中合わせにしてへたり込んでしまう。

気絶まではいかないが、もう碌な魔法は使えないであろう。

「助かった。これでこちらの勝ちだ。追撃部隊を出す！」

「伏兵の危険は？」

「無いな。『探知』を使える魔法使いも連れていくから」

「『遮蔽』の魔法に気をつけろよ」

やはり戦争なので、綺麗事は存在しないようだ。

アルフォンスは、温存していた騎士隊などに追撃命令を出していた。

「追撃が必要なのですか？」

「必要だな」

貴族になる事を目指していたカタリーナからすると、背中を見せる敵を追撃する行為が貴族に相応しく無いと思っているのであろう。

「追撃が一番敵を減らせる。背中を向けているからな」

それに、逃げられれば再編されてまた俺達に立ち向かってくる。

減らせる時に減らすのが、未来の味方の犠牲を減らす最善の方法なのだから。

「私が言っているのは綺麗事なのでしょうか？」

「普段はそれでいいんだと思う」

「今は戦争だから、仕方が無いと？」

「そう思わないと、人なんて殺せないだろうに」

「そうですわね……」

今までに大量の魔物を殺してはいるが、目の前で本格的に人間を殺したのは帝国に来てからだ。

クーデター軍から逃げるために兵士達を殺し、今日も攻め寄せる敵を大量に殺している。

戦っている時には夢中で何も思わなかったが、眼下に広がる血塗れの死体を見ていると、途端に震えが止まらなくなるのだ。

俺でもそうなのだから、女性にはもっと辛いであろう。

いつの間にか、俺は四人を抱き抱えるようにして座り込んでいたのだから。

「すまないね。うちの事情で」

「仕事だからな。死体を見て震えている駄目な傭兵だが」

「いや。うちも似たようなものだ……」

良く見ると、アルフォンスも指先が震えている。

周囲の兵士達も気が抜けて槍を杖のようにして立っている者もいたし、負傷した戦友に泣きながら声をかけている者もいる。

唯一元気なのは、準備を整えて出撃した追撃隊のみであろう。

「それもカラ元気さ。本当の戦争の経験者なんて一人もいないからね」

武勲を挙げて出世と褒美を得るため。
そう自分に言い聞かせながら、表面上は勇んで出陣していく。
だが、実際にはみんな怖くて仕方がないのだ。
人殺しが大好きな人など、滅多に存在しないのだから。

「ヴェル。俺も行くぞ」

「いいのか？」

「まだ馬にも慣れていないし、あまり無理はしないよ」

エルとしても、ここで武勲を挙げておきたいのであろう。
バウマイスター伯爵家が大きくなり過ぎたので、エルを縁故だけの男だと批判する人も増えていたのだから。

「未帰還とかは勘弁してくれよ」

「気を付けるさ。それに、ハルカさんも一緒だし」

「血生臭いデートだな」

「言ってくれるな。じゃあ俺はいくから」

エルはハルカの縁で、ミズホ伯国軍の追撃隊に加わるようだ。
新しく作って貰ったミズホ刀を掲げながら、例の『抜刀隊』の面々と追撃に出かけていた。
その隣には、ハルカも一緒にいるようだ。

「バウマイスター伯爵。もう休んでくれていいよ」

「大丈夫か？」

「今日はね」

戦闘に参加しているのは追撃隊だけになってしまったし、今は敗走した敵軍による逆襲や、他の敵軍による夜襲などに備えて斥候を出しているだけらしい。

「戦場の後片付けはこちらでやっておく。有効な戦力であるバウマイスター伯爵達をこういう作業で疲れさせるわけにはいかないし」

「わかった。エリーゼの元に行くか」

魔力が無い俺が役に立つとも思えないが、とにかく今はエリーゼの顔が見たかった。

いくら勝ち戦とはいえ、あまり気分が良くない。

アルフォンスの護衛をブランタークさんに任せて、俺達は後方へと下がるのであった。

第八十六話　テレーゼ様、前線に出る。

「フランク！　しっかりするんだ！」

「ううっ……。母さん……」

凄惨な戦闘が終わってから数時間後、俺はエリーゼがいる野戦治療所において治療の手伝いをしていた。

魔力が枯渇していたので数時間の仮眠である程度回復させ、あとは手持ちの魔晶石も用いて数多くいる負傷者の救護に当たっていたのだ。

治癒魔法はエリーゼ頼りであまり練習していなかったのと、魔晶石も全て使うわけにもいかない。

どうしても治療には優先順位ができてしまい、中には間に合わないかもしれない者が出てくる。

今もこうして、重傷者の意識が朦朧としてきて、戦友達が励ましの声をかけている場面に遭遇していた。

俺とあまり年齢も違わない少年が、迫り来る死と戦っていたのだ。

「伯爵様！　フランクを助けてください！」

「……」

助けたいのは山々なのだが、既に仮眠して回復した分の魔力も無く、魔晶石もかなり使用してしまった。

これから先に何があるかわからないので、アルフォンスからも決

められた魔晶石の保持が厳命されている。

悔しいが、彼の生命力にかけるしかないのだ。

「すまないが、魔力が……」

「そんな……。フランク！　しっかりするんだ！」

今にも死にそうな戦友に声をかけている少年を見ていると、ただ罪悪感だけが湧いてくる。

助けられない事もないが、彼を助けると他の負傷者達も助けないと不公平になってしまう。

魔晶石を消耗し尽したところで、もし再び敵軍の襲来があったとしたら？

可哀想ではあったが、今は冷酷に彼を見捨てるしかなかった。

冷たい、戦場における計算だ。

「あなた……」

「すまない」

隣にいるエリーゼも、既に魔力が枯渇している。

魔晶石や、前に俺が贈った指輪の魔力すら全て使い切っていた。

良くみると修道着は血で汚れていて、彼女は今まで懸命に治療に専念していたようだ。

「フランク！　気を確かに！」

「ああ……。亡くなった母さんが……」

フランクという重傷の少年は、既に母親を亡くしているらしい。
その幻影が見えるという事は、彼が天に召される時が迫ってきたのであろう。

付き添っている戦友の少年達が声をかけ続けるが、彼の意識は徐々に遠のいていく。
フランク少年の死は、すぐそこにまで迫っていた。

「すいません。私がもっと強力な治癒魔法を使えれば……」

「いや。使える魔法はその人の個性なんだ。カタリーナは悪く無い」

「ヴェンデリンさん……」

これぱかりは、向き・不向きがあるので仕方が無い。
カタリーナも魔力が枯渇していたし、彼女の治癒魔法では軽傷の治療で精一杯だ。

「あなた……」

「ヴェンデリンさん……」

三人とも申し訳ない気持ちで一杯になってしまい、俺はただ二人の肩を抱いて慰めるしか術がなかった。

「母さん……」

「フランク！」

いよいよ駄目だと思ったその時に、一番良いタイミングであの人物が現れた。
主人公には見えないが、常に騒動の中心にはいそうなあの人物である。

「負傷者はここであるか！」

作戦の都合上で魔力を温存していて、更に誰も頼んでいないのに追撃戦に参加した導師が姿を現したのだ。

「導師？」

「伯父様？」

「話はあとである！」

なぜ、導師が追撃戦に参加したのかは不明である。
どこかから手に入れたアームストロング伯爵家の者が良く使う六角棒を片手に、ドサンコ馬に乗って勢い良く飛び出していく。

突然の事にアルフォンスは唖然としていたが、こうして無事に帰還には成功している。
ただし、ローブは血塗れでエリーゼは素で引いていたが。
移動系魔法の制限により三次元を利用した戦闘が不可能だったので、色々とストレスが溜まっていたのではないかと俺は予想する。

「若者よ！　しっかりするのである！」

導師は『聖』の治癒魔法を覚えたが、効果を発揮させるためにその相手に抱きつかないといけない。

導師は青白い『聖』の光に包まれながら、両手を思いっきり広げていた。

「急いでください（何だろう？　物凄く良い話なのに見た目が……）」

「ええと……。お願いします。伯父様」

同性愛禁止の教会で育ったエリーゼからすると、自分の尊敬すべき伯父が少年に抱き付くなど悪夢のような光景であろう。

だが、これも少年の命を救うためである。

彼女も、余計な事は考えずに導師に治療をお願いしていた。

導師が『聖』の青白い光を全身から発しながら少年に抱き付くと、次第にその傷が消えていく。

相変わらず抱き付かないと発動しないが、元の魔力が凄まじいのでその効果は素晴らしい物があった。

「ううっ……。母さん」

今にも死にそうであった少年は導師からの治療の甲斐もあって、次第に意識も戻ってきたようだ。

ただ、一つだけ可哀想な現実がある。

「フランクさん。あなたに抱き付いているのはお母さんでは……」

「駄目ぇーーー！　それは言っては駄目ぇーーー！」

真面目なエリーゼは事実を語ってしまうが、この場でそれを言っては駄目なのだ。

「あの少年は助かったんだ。それ以上は……」

「わかりました」

今にも死にそうな少年を治癒魔法で救う導師。
エリーゼのような教会関係者から見ると、本に残したくなるような奇跡なのであろうが、絵面からして記憶を封印したくなるような光景である。

筋肉オヤジが、少年に思いっきり抱き付いているのだから。
間違いなく本に残そうとすると、教会から禁書扱いされるであろう。

「導師。普通に治癒魔法が使えればいいのに……」

「はい……」

先ほどの悲しみから一転して、俺とエリーゼからは乾いた笑いしか浮かばない。
そして、助かったフランク少年にも悲劇が及んでいた。

「母さん？」

「ふむ。母さんではないが、助かって良かったな」

「……」

少年が絶句するのも当然であろう。
死に掛けて意識が朦朧としている時に亡くなった母親の姿が頭に

浮かんだのに、目を醒ませば筋肉の塊でヤクザも真っ青な強面に抱き付かれているのだから。

同時に導師はその少年に笑みを送っていたが、やはり導師なので額面通りには受け取れない。

彼からすれば、導師は筋肉質な死神に見えるのかもしれない。

暫くは、硬直したままであった。

「硬いぃーーー！　母さんが硬いぃーーー！」

どうやら彼は、自分の身に起こった現実に耐えられなかったようだ。

耳を切り裂くような悲鳴をあげていた。

「あははは っ！　これだけ元気ならばもう大丈夫であろう！」

「ねえ、リヒテル！　コンラート！　これはどういう事なの？」

負傷が癒えたフランク少年は周囲の友人達に尋ねるが、まさか導師の前で妙な事を言うわけにもいかず、友人達は視線を外して下を向いていた。

「導師様が助けてくれたのさ」

ただ一言だけ、小声で事実だけを伝えて。

「フランク。助かったんだから良かったじゃないか」

「そうであるぞ。少年！　生きてさえいれば、人生はまだまだ楽しめるのである！」

せっかくの感動のシーンも導師のせいで台無しとなり、助かった少年は他の負傷者達から同情的な視線を送られる。
だが、彼らはすぐに気が付く事となる。
自分達もすぐに導師に抱き付かれて、声にならない悲鳴をあげる事になるのだという事に。

「導師。魔力は大丈夫なのですか？」

「追撃ではほとんど使っておらぬよ。後ろから追い付いて、この棒で殴り殺しただけなのである」

「そうですか……」

魔法使いが追撃に出て、敵兵を六角棒で殴り殺す事の是非はともかくとして、導師のおかげで多くの負傷兵達が助かったのは事実であった。

みんな抱き付かれて、心の中でも悲鳴をあげていたと思われるが。

「そのまま死ぬか、導師に抱きつかれて助かるか。後者を選んで当然なのに、心情的には迷うよな」

「唯一の救いは、恋愛感情が皆無な点ですわね」

「何気に酷い事を言うな。カタリーナの嬢ちゃんは」

「お師匠様。私はもう人妻なのですが……」

「おっとすまねえ。だが、それでも抱き付かれるのは年頃の女性としてはどうよ？」

「負傷しないようにして、してもエリーゼさんかヴェンデリンさんに任せますわ」

「極めて普通の回答だな」

「お師匠様は、私に何を求めておいでなのです？」

戦いのあった翌日、俺、ブランタークさん、カタリーナの三人は野戦陣地の修復と増改築を行いながら話を続けていた。

敵兵を防ぐのに役に立ったものの、戦いの後半では死体が折り重なって高さ不足になったので、増築をアルフォンスに頼まれていたのだ。

あとは、騎馬隊を防ぐ堀の深さや数を増す工事も頼まれているが、これは明日以降の予定になっている。

なぜなら、今はそこに敵軍の大量の死体が散乱していて、兵士と雇われた地元の住民達によって埋葬されていたからだ。

今は冬なので腐敗の進行は遅いが、そういつまでも大量の死体を放置できない。

参戦していた他の魔法使いが穴を掘り、身元が確認できる者はメモを取ってから、使える物を剥いで穴に放り込む。

最後に、燃える物や油を撒いて魔法使いが火を付けて火葬にした。

火葬にして嵩を減らさないと、万を超える死体の処理などそう簡

単に終わるわけがない。
死体から戦利品を漁る行為も、これも戦費や褒美の一部なので綺麗事ではすまなかったので普通に行われていた。
見ていて、あまり良い光景ではなかったが。

野戦陣地が築かれた石塀の前では、死体を燃やす臭いが鼻につく。
これも戦場の現実であった。

「それでも、負けてあの死体の仲間入りだけはゴメンだな」

「新婚ですからね」

「俺も伯爵様もな。ところでエルの坊主は？」

「デートなのかな？」

護衛はアルフォンスが新たに手配してくれたので、エルとハルカはそこまで護衛に徹する必要がなくなっている。
そこで、早くに刀術を覚えようと鍛錬に没頭していたのだ。
ハルカは教師役で、一緒に鍛錬に参加している。

「追撃戦に続いてご苦労さんだな」

フィリップ公爵家軍の精鋭、ミズホ伯国軍の抜刀隊を含めた精鋭によって行われた追撃で、反乱軍四万の内半数の二万人ほどがその屍を曝していた。
負傷者や捕虜も出たが、これは二千人ほどしかいない。

負けて戻ると主君が処刑されるかもしれないし、自分だけ降伏すると家族に害があるかもしれないと、最後まで奮戦して戦死する兵

士達が後を絶たなかったからだ。

治療も味方優先だったので、昨日の内に死んでしまった負傷者も多い。

あまりの死体の多さに、みんなゲンナリとしながら処理をしている状態であった。

「味方も結構死んだらしいな」

「ええ」

味方の戦死傷者は、合計で二千五百六十七名であった。

キルレートで考えると圧倒的に有利であったが、今回の反乱軍はそこまで精鋭でもなかった。

駄目なら使い捨てにする軍勢で、こちらに十%以上の損害を与えている。

ニュルンベルク公爵は、決して自分達が不利だとは思っていないであろう。

「アルフォンスさんは頭を抱えていると？」

「そういう事だな」

手を抜けば殺させるので本気で戦わざるを得ないが、殺せば殺すほど帝国の国力は落ちる。

テレーゼからしても、頭が痛い懸案なのであろう。

「戦うよりも、石塀の増設の方がマシですわね」

「だよなぁ……」

頼まれた修復と増設工事が終わったので、今度は後方に下がって荒地を耕す。
屯田兵というわけではないが、ある作物の種を植えるためであった。

「ヴェル！」

「待ってたよ」

現場の荒地を魔法で掘り返していると、種蒔きを手伝っていたイーナとルイーゼが姿を見せる。

「何の種を蒔いているんだ？」

「バカダイコンだって」

「これが現物よ」

イーナが、桜島大根ほどの大きなカブを見せてくれる。
名前はバカダイコンなのに、実際にはカブの仲間のようだ。

「馬の餌になるそうよ」

バカダイコンとは、馬の餌用の作物らしい。
硬くて人間が食べると不味いが、どんな荒地にでも簡単に育つ。
水はある程度必要であったが、これは井戸を大量に掘って対応していた。
『どんなバカにでも育てられる』から、バカダイコンという名なのだそうだ。

「原産はミズホ伯国だって。カブの品種改良の過程で生まれたそうだよ」

「ふーーーん」

俺は、ルイーゼからの説明を静かに聞いていた。
大根と聞くと、おでんや沢庵が食べたくなってくる。
焼いたサンマに大根おろしや、シラスとの組み合わせも思い出して、どうやってミズホ伯国から手に入れようかなどと思案に耽っていた。

「種を蒔くと二ヶ月で出来る。寒さにも強い。荒地でも大丈夫。唯一不味いのが欠点かな？」

馬が食べる分には問題は無いようだ。
荒地でバカダイコンを収穫してから牧草の種を蒔き、今度は馬糞を土に混ぜて稗・粟・蕎麦などを植える。
こうやって徐々に、麦などが作れる土に改良していくのだそうだ。

「バウマイスター伯爵領でも栽培可能かね？」

「駄目みたい。暑さに弱いそうよ」

俺の問いに、種を蒔いていたイーナが答える。

「それは残念だな」

「そんな回りくどい手を使うよりも、ヴェルが開墾した方が早いと思うよ」

「いやいや。俺もそう開墾ばかりしてられないから」

元々兵士の大半が普段は農民などをしているのだから、屯田は彼らに任せるべきであろう。

俺には、井戸を掘るとか道を舗装するなどの仕事があるのだから。

「バウマイスター伯爵領にいる時と、あまり変わらないわね」

「プラス人殺しだが、これはしょうがない。あとは長引きそうだな」

「ええ。でも完全に持久戦なのね」

いきなり四万人の軍勢を磨り潰し、それがダメージだとも思っていない連中と戦うのだ。

一発逆転で、帝都侵攻という博打は打てないのであろうと推測される。

「馬の飼料を栽培しているからな」

補給の負担を減らすためなのであろう。

いきなり麦などは不可能なので、バカダイコンで代用している。

野戦陣地も、一種の防衛要塞としての機能拡大が続いている。

魔法使い達が加工した石材と木材を積み上げて、兵舎や見張り用の櫓などが増設中であった。

「持久戦にも限界があるからね。さすがに、数ヶ月以内には何とかする予定だ」

そこに、ブランタークさんを伴ったアルフォンスが姿を見せる。

総大将である彼には、常にブランタークさんが護衛につくようになっていた。

「テレーゼが、本軍をここに出すそうだ」

「ある程度は味方を纏めたのですかね？」

「みたいだな。ねえ。アルフォンス様」

「北部の全諸侯と、東部と西部の北側の大半に、あとは個別に参加したり中立を宣言したりかな？」

国内を二つに割っての内乱なので、どちらが勝ち組かを判断して付く方を決める。

建て前は別として、本音では勝つ方を判断して付かなければいけないので、貴族というのも大変だ。

関が原と同じで、判断を誤れば最悪改易なのだから。

貴族によっては数千年も続いた家が消滅してしまうわけで、どちらに付くかの選択で胃が痛いはずであった。

「それで、いつ来られるのです？」

彼女が総大将として陣頭に立てば、それだけ味方の士気もあがる。

危険度は増すが、何も最前線で剣を振るえと言われているのではない。

ここは覚悟を決めて前に出る事も必要であろう。

「明日の早朝だそうだ。結構な大軍だそうだから」

「了解」

その日は野戦陣地の拡張工事に魔法を振るい、その翌日の朝には無事にテレーゼが率いる軍勢が姿を見せていた。

「防衛戦とはいえ、数に勝る敵を敗走させたアルフォンスの功績は大きい物があるの。ここに褒美を」

「はっ！」

前にカルラが着ていた物よりも豪華なミスリル製のチェインメイルに身を包んだテレーゼが、出向かえに出たアルフォンスに直接声をかけ、続いて金貨の詰まった袋を渡していた。

「他の者にも褒美があるが、これは後で渡すゆえに」

「はっ！」

テレーゼはすぐに、石材を積んで作った砦に本陣を置く。
更にそこに諸侯や家臣達を集め、簡単な作戦会議を開始する。

「二万人近くを討ったのか。大戦果じゃの」

敵軍の半数が死傷者などという戦いは、まず滅多にない大戦果なのだから褒めて士気を上げるのは当然であろう。
ただし、必ずしも手放しで喜べる状況ではなかったが。

「こちらが防衛側だったのと、魔法使いの質の差が出ましたね」

アルフォンスの発言で、テレーゼを含めた主だった連中の視線が

全て俺達に向く。

「敵の魔法使いもかなり討ちました。ですが、大半は選帝侯家のお抱え達です」

事前に報告書は読んでいるようであったが、テレーゼの顔は暗い。

「王国と帝国は、国力比で差が広がりつつあるのじゃがな。のうバウマイスター伯爵」

「さあて？　私は傭兵ですので」

「いや、そなたを責めてはおらぬよ。ヘルムート王国にはそなたがいて羨ましいと思っただけじゃ」

テレーゼは、さすがに普段のように俺をヴェンデリンとは呼ばなかった。

「貧乏貴族の八男が足掻いただけですが」

「そなたの足掻きが、王国には恵みの雨となって降り注いだの。その上に、帝国は反乱で国力を消耗する。なるべく早く終わらせて、貿易も含めて国力の増大を行うしかない。本当に骨が折れる話じゃ」

「とにかくも、今の俺は傭兵ですので」

バウマイスター伯爵として参加して功績をあげると、褒美の問題が出るので面倒なのだ。

『両国の爵位と領地を、一人の人間が兼任可能なのか？』という、有史以来両国が経験した事がない議題のせいで政治が混乱しかねな

い。

傭兵として金だけ貰って貸し借り無しが、双方にとって一番幸せであろう。

「とにかくも、ニュルンベルク公爵には困ったものじゃ」

「先の四万人の敵軍を送った意図は何なのでしょうか？」

最近では、良くハルカと一緒に刀術の訓練をしているエルが、珍しく真面目な質問をしていた。

少しは家臣としての自覚が出来たのであろうか？

「（ハルカに良い所を見せようとしているのか？）」

どちらにしても、俺もそれは聞きたかったのだ。

「勝っても負けても、ニュルンベルク公爵には得になるからの」

もしテレーゼ達の準備が遅くて勝利を挙げられれば、内乱で対立した双方の天秤はニュルンベルク公爵側に傾いたであろう。

北方諸侯の領地では、ラン族ばかりが住んでいるわけではない。

力の差を見て裏切る者も多かったはずだ。

「負けて半数を失っても勝ち？」

「それはな。あの四万人の内訳のせいだ」

俺は、エルに持論を説明する。

「帝国軍中央で無能ではあるが力があるクラーゼン将軍に、当主を人質にされている各選帝侯の軍勢で構成されているからな。いくら死んでも、ニュルンベルク公爵の懐は痛まない」

クーデターにより帝国中枢を掌握しているニュルンベルク公爵の命令で出兵して失敗している。

兵力を失った挙句に作戦の失敗を責めて処罰をされれば、自分は何もせずに彼らの力を落とせるのだから。

「それで、兵を出した選帝侯は処刑でもされましたか？」

「いや。密偵からの情報によれば総大将のクラーゼン将軍は改易されたそうじゃが、あとの連中は罰金となっている」

テレーゼがここに来るのが遅れたのは、魔法や魔道具に頼らない諜報網の再構築に忙しかったからというのもあるのであろう。

「クラーゼン将軍は戦死しましたからね。処分も楽であったと？」

「あの伯爵家は、当主も跡取りもバカであったからの。ニュルンベルク公爵からすれば、何の躊躇いもなく処分したのであろう。幸いというか、兵力の半数を失う大失敗も犯している」

「それで、他の選帝侯家は罰金ですか？」

「中枢たる兵力や家臣を大量に失って、挙句に作戦の失敗で罰金を取られる。戦争をしていた時代には罰金で敗戦の責を償う事は良くあったらしいからの。そう無法でもないから文句も言えまいて」

当主を人質に取られている時点で、断る事も出来ないのであろう。

「戦死者への保障などもあるのですから、選帝侯家の屋台骨に皹が入ったのでは？」

「好都合であろう。払えなければ、利権や領地で補填せざるを得ない。形式上は帝国政府に払われるが、その主人は今やニュルンベルク公爵なのじゃから」

中央集権を目指す、ニュルンベルク公爵らしい手法と言える。

「えげつな」

「エルの言う通りに、本当にえげつないわ」

「幸いにして、中央の皇家の一族は処刑はされておらぬようじゃの」

一族皆殺しなどにすると中央の法衣貴族や帝国軍の反発があるので、今のところは軟禁に留めているらしい。

彼の言う中央集権が進めば、処分される可能性は大であったが。

「では、選帝侯家はどこも味方してくれませんか」

「いや、そこに居るアンスガー殿はこちらに付いてくれた」

テレーゼは、隣にいる身なりの良い青年を紹介する。

「アンスガー・ヘルガー・フォン・バーデン公爵公子と申す。バウマイスター伯爵の高名は良く耳にしているよ」

まだ二十歳前後の金髪の青年で、とても育ちが良い貴公子然とし

た風貌が特徴の人物であった。

「あれ？　バーデン公爵公子殿ですか？」

確か、皇帝選出の選挙に父親のバーデン公爵は出馬していたはずだ。

眠たい目を擦りながら演説を聞いていたのを記憶している。

「父であるバーデン公爵や、一部重臣達は捕らえられたままさ。だが、うちはあの四万人の軍勢には兵を出していないよ」

バーデン公爵領は、帝国の東北部に存在している。

下手に兵を出せば、その留守をテレーゼに攻められる可能性があった。

「最初に不法を行ったのはニュルンベルク公爵であるし、彼に一時的に付いても将来が不安でもある。我がバーデン公爵家はテレーゼ殿に付くとして、父や重臣達は我がバーデン公爵の礎になって貰わないとな」

見捨てるという事なのであろうが、親子二人だけの問題でもないので仕方がない。

そういう決断が出来なければ、選帝侯家の当主にはなれないというのも辛いかもしれないが。

「（聞いてはいけないんだろうな……）」

実の父親を見捨てるのだ。

平静でいられるはずが無いのだから。

「バーデン公爵家の参加で、かなり勢力比的には近付いたので助かったの」

暫く話をしてから、今度は主だった貴族達との顔合わせも兼ねた夕食会が行われ、その席でテレーゼは全員に自身の考えを述べていた。

「この内乱で、帝国貴族の再編がおきようの」

公式には宣言していないが、反逆者ニュルンベルク公爵に対抗するテレーゼは次期皇帝の有力候補である。

先日に決まったアーカート十七世は、生きて救出されても捕らえられた無様のせいで皇帝として用を成さないであろうからだ。

そして、その次期皇帝候補が貴族の再編が起きると明言しているのだ。

内乱の当事者であるニュルンベルク公爵家は当然改易として、他にも改易や、減封される者や内乱で有力な一族が全て滅ぶ者も出てこよう。

そうやって得た領地は、当然勝者に配分されなければいけない。

テレーゼに味方する事は、その権利を得たにも等しいと宣言しているのだ。

「（まあ。当然だよな）」

いくら内乱でも、無料奉仕で働く貴族どころか人間などまず存在しないのだから。

「果たして、ニュルンベルク公爵がいつ全軍を挙げて攻めて来るの

かは知らぬが、その戦いが天下分け目の戦いになろうの」

夕食後、貴族達はそれぞれの陣地に戻っていた。
野戦陣地の拡張や屯田を続けながら、彼らは北上するニュルンベルク公爵の軍勢を待ち受けるのだ。
ニュルンベルク公爵は、テレーゼを討たなければ帝国を統一できない。
必ず北上するはずだ。

状況が変われば作戦も変化するかもしれないが、今のところはそういう方針になっている。

「それで、ここがヴェンデリンの家か？」

「ええ。自分で造りました」

夕食後に他の貴族がいなくなったので、テレーゼは俺をまたヴェンデリンと呼び、更に家に押しかけてきた。
一応、口実は存在している。
俺達への報酬の確認という物で、勿論それが名目上だけなのは誰の目から見ても明らかである。

なぜなら、ブランタークさんはアルフォンスの護衛役だからと出かけてしまい、導師もどこかに出かけてしまったからだ。

「えらく豪勢じゃの」

傭兵は、基本的には衣食住は自己負担である。
一応アルフォンスから土地は分け与えられていて、そこに廃鉱などから切り出した石材を積んで広さはかなりの物になっている。

暖房は暖炉ではなくて魔道具のヒーターのような物やエアコンを使い、風呂も台所なども完備されている。
家の中の壁塗りなどの内装も丁寧に行ってから家具や他の魔道具も置かれ、テレーゼはその豪華さに驚いているようであった。

「見た事がない魔道具じゃの」

「発掘品ですから」

エアコンやヒーターは、例の魔の森の遺跡で見つけた物だ。

「妾の屋敷はストーブと暖炉じゃがの。それでも、兵士達よりは遥かに恵まれておる。その魔道具は売って貰えるのかの？」

「残念ですが、王国の許可が必要ですね」

魔の森産の魔道具は、また魔道具ギルドが大金を叩いて購入して行ったが、量産には相当な時間がかかると予想されていた。
現物があっても、そう簡単には作れないのが魔道具だからだ。

「やれやれ。帝国は魔道具でも劣勢になる可能性があるの」

「ミズホ伯国はどうなのです？」

「あそこは、独立独歩の気運が高いからの。侵略はせぬが、わが道を行く。今回の内乱で勝てたら、選帝侯にでもして縛るかの」

帝国が乗っ取られる可能性があったが、テレーゼは内側に入れた方が利益があると思っているのであろう。

「ところで、そなた達への報酬であるが」

契約では、基本的には金銭で払われる。

人殺しから、野戦陣地の工事、井戸掘り、畑の開墾、怪我人の治療などと。

アルフォンスが作業量を記載して認定し、相場に基づいた額がプラスされていく。

今の時点でも、かなりの金額にはなっていた。

「あとは、ミズホ伯国とバウマイスター伯爵領との貿易許可と……」

このソビット大荒地にある廃鉱から、鉱物を取る許可である。

当然、過去に帝国の魔法使いによってそれは行われていたので、この条件はすんなりと許可が出ていた。

「金や銀は沢山採れたかの？」

「まあまあですよ」

「まあまあか。それは良かったの」

こういう時に魔力が多いと得である。

廃鉱の地下数百メートルにあるような、今の帝国の技術では採掘不可能な鉱脈から自由に魔法で抽出できるのだから。

今までに回収した金と銀で、報酬をチャラにされても困らないほどであった。

「（まさに知らぬが仏。どうせ、あんな地下の鉱脈には手が出ないだろうし）」

出ていれば、とっくに採掘されていたであろう。

「アルフォンスから聞いておるが、活躍したそうじゃの」

「それなりには」

「謙遜するでない。敵の先手には上級レベルの魔法使いが複数存在していたと報告を受けておる。先の四兄弟も同じく帝国では凄腕だと言われていた連中だ」

俺は自分を、戦闘では威力のある放出系魔法と強固な防御力だけで対応するガサツな魔法使いだと思っている。

師匠の境地に達するには、まだ相当な時間がかかるはずだ。

ところが、帝国の魔法使いには魔力がある事に安心して俺よりもガサツで引き出しが少ない魔法使いが多かった。

だからこそ俺にみならず、カタリーナ、ブランタークさん、導師によって一方的に撃破されているような気がするのだ。

「帝国の魔法使いのお手本は導師じゃよ」

「つまり、何かに特化すると？」

「左様じゃ。何でも昔に高名な魔法使いが言ったそうじゃ。何か一つを極めると、その魔法が強固になると」

間違っているとは思わない。

実際に一つの魔法を極めると、消費魔力効率や威力が上がるからだ。

ただそれで、絶対的に強くなるという保障も無い。
導師ほど極めれば最強になれるが、俺のような魔法使いは多くの引き出しを持っていた方がいいわけで、その人によるとしか言えないからだ。

「これから、多くの魔法使いが死ぬの」

更に言えば、帝国内での内乱なので俺達を除けば全て帝国の魔法使いである。
テレーゼとしては頭が痛いのであろう。

「嘆いても仕方がないがの。早く内乱を収めて、帝国の国力増強を進めなければなるまいて」

「初の女帝陛下ですか」

「この状況で回ってくるとはの。それに、ニュルンベルク公爵に勝てたらという条件もある」

「俺は勝つ気でいますよ。死にたくないし」

こんな内乱で死ぬのはゴメンである。
そのために、やりたくもない人殺しをしているのだから。

「正論じゃの。話を戻すが、功績の大きいそなたに妾から特別に褒美があっての」

「あの夜伽とかはいらないですよ」

「おおっ！　ヴェンデリンは冷たい男じゃの。仕方なしに皇帝にな

らざるを得ない妾にお情けをくれぬとは……」

「同じ国内から夫は探してください」

「ヴェンデリン様の仰る通りです。テレーゼ様は次期皇帝陛下の最有力候補なのですから、妻がいる男性との醜聞は避けるべきです」

俺がテレーゼと話をしていたリビングの隣にある寝室の扉が開き、そこからはネグリジェ姿のエリーゼが姿を見せていた。

テレーゼの露骨な誘惑に、また腹を立てたのであろう。

「エリーゼ殿か。妾が女帝になると夫君の人選が難しくての。少しだけ貸してくれればよい」

「男性の貸し借りとは、とても帝国淑女たるテレーゼ様の発言とは思えませんが……」

「未婚を貫くにしても、妾も子供くらいは欲しいからの。ヴェンデリンの種だとは決して漏らさぬ事を約束する」

「詭弁ですね。政治状況によっては、躊躇わずに公表するのでは？」

エリーゼの問いに、テレーゼは答えなかった。

「もしこの内乱で敗北が決定した時には、テレーゼ様は亡命なさるおつもりでしょう？」

その時に俺と関係があって、更に子供まで妊娠していたら？

その子は、バウマイスター伯爵家を継ぐ資格を持つ。

テレーゼが亡命すれば、その家臣や家族達も集まってくるはずで、俺は立場上彼女らを保護しないといけない。
家臣になって出世する者も多いはず。
そして、そんなテレーゼ一派が王国内で祖国奪還に向けた政治闘争を始める可能性があると。
エリーゼの推測は、決して現実からは遠い物ではないはずだ。

「（なるほど。テレーゼといたすのは、どんな高級娼婦よりも高く付くんだな）」

女帝になれたとしても、その子を口実に王国に何か外交的な要求をしてくる可能性もあるのだ。
つまりそれだけ、テレーゼの誘惑は危険なのであろう。

「それにですね」

エリーゼは、俺に背中に抱き付きながら話を続ける。
テレーゼにも負けない胸の感触が、俺の意識をそちらに向けていた。
我が妻ながら、実に大した物である。

「ヴェンデリン様は毎晩お急がしいのです」

エリーゼがそう言うと、寝室から同じくネグリジェ姿のイーナ達も姿を見せていた。

「テレーゼ様。横入りは感心できませんよ」

「五人も六人も同じだと思うのじゃがな」

「ヘルムート王国内なら、将来的にはそういう事もあるかもしれませんね」

テレーゼに対しても、イーナはきっぱりと謝絶の意志を表す。

「テレーゼ様。夜這いはボクとヴィルマがいるから不可能だよ」

「そう。テレーゼ様は、アルフォンスとかに狙いを絞った方がいい」

「アルフォンスは、妾を女としてなど見ておらぬわ」

ルイーゼとヴィルマが監視している状態で、テレーゼが夜這いなど出来るはずがない。

彼女の実力では、どう足掻いてもルイーゼやヴィルマには勝てないのだから。

「それでは、バーデン公爵などはいかがなのです？」

「あの者の正妻は、あのアーカート十七世陛下の姪御なのじゃぞ。向こうでお断りであろうよ」

やはり、選帝侯家と皇家による政略結婚は普通に行われているようだ。

「色々と大変なようですが、帝国内でお探しくださいませ」

「カタリーナよ。そちの言い様が一番残酷じゃ！」

「そう言われましても。それに、ヴェンデリンさんはお忙しいので

すから。我がヴァイゲル家の跡取りを作っていただかないと」

そう言うないなや、カタリーナは俺の腕を引いて寝室へと移動を開始していた。

「そなたら。まさか……」

「はい。私達は毎日全員でヴェンデリン様のお相手していますが何か？」

「ううっ！」

エリーゼの真顔による返答に、テレーゼは若干引いてしまったようだ。

昔のカタリーナと同じでその手の経験が無いので、本能的に引いてしまったのであろう。

「ヴェンデリンよ。毎日で大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ」

師匠からの魔法もあったが、別に毎日そういう事をしているわけでもない。

要は、テレーゼに対してエリーゼ達が隙を作らない事が重要なのだから。

眠るまで話だけをしたり、ゲームなどで遊んでいる日も多いのだから。

「一対五でか？」

やはりその手の経験が無いらしい。
テレーゼ本人の気丈さで声には出していたが、彼女の顔はのぼせ上がっているように見える。
内心では恥ずかしくて堪らないのであろう。

「テレーゼ様も六人目として加わりますか？　五人も六人も同じなのでは？」

エリーゼの止めの一言が放たれると、それを聞いたテレーゼは反射的に席を立っていた。

「いや……。そういう事は……。初めての時には、二人きりでこうな……」

次第に口調がしどろもどろになり、最後には大きな声でこう宣言していた。

「必ずや、ヴェンデリンと二人きりになって既成事実を作るからの！」

そこまで言うと、逃げるようにして家を出て行ってしまう。

「少し可哀想な事をしたかな？」

「あなた。このくらい割り切らないと、第二・第三のテレーゼ様が現れますよ」

「だよなぁ……」

既に、エリーゼ達の魔力が増えた件もあるので、下手に妻や愛人

を増やすわけにはいかないのだから。

「あなた。そろそろ寝室に行きましょう」

「そうだな」

外に出ても兵士ばかりで娯楽にはならないし、とっとと寝室に篭もった方が魔力も早く回復して生き残れる可能性も上がるのだから。

という事にしておこうと思う。

「今にして思うと、ドミニクは大変だったのですね」

「ここ最近は、毎日結局こういう感じになるわね」

「ある種の現実逃避？　違うね。ボク達には子供が必要だし」

「戦争だから、そういう感情が高ぶっても仕方がない。前に義父が言っていた」

「ヴィルマさんは良くご存知ですわね」

「ベットの上は、俺が『浄化』の魔法で証拠を消しておくか……」

翌朝に一緒に風呂に入りながら、ベッドの上の惨状を忘れるかのように話をする俺達であった。

第八十七話　シスコンサムライとの決闘。

「えいっ！　とうっ！」

早朝に身支度を整えてエリーゼ達と共に家を出ると、庭に相当するスペースでエルが熱心に刀を振っていた。
いつの間にかミズホ服などを手に入れていて、見た目は外国人剣士のようである。

俺から見ると、刀を振る動作はかなり様になっているように見えた。
素人の判断だと言われればそれまでだが。

隣で指導するハルカも、特に何も言わないでその様子を眺めていた。
しかしさすがは美少女サムライガール、立っているだけで様になっている。
良くエルが顔をにやけさせないものだ。

「おーーーい。エル」

「ヴェルか。俺の刀筋はどうだ？」

「まあまあ？」

素人の俺に、正確な論評を求めるのは勘弁して欲しい。
俺に刀の才能など無いし、剣の方ももうとっくに諦めて鍛錬していないのだから。

そんな時間があったら、魔法か弓でも訓練した方がよっぽど効率が良いであろう。

「これでも結構良い感じなんだぜ」

「そうなのか？」

傍にいるハルカに聞くと、彼女はパっと笑みを浮かべながら説明を始める。

「エルさんは、もう抜刀隊に入隊可能なくらいに強くなりましたよ。兄ともかなり互角に近い戦いが出来るようになりましたし」

「それは凄いな」

ハルカによると、エルは剣よりも刀の方に才能があるらしい。今まで知らなかったのは、ヘルムート王国に刀など存在しないからであろう。

極少数は所持している人がいるそうだが、一部好事家が密かにコレクションしている程度らしい。

しかし、良くぞ短期間でここまでと思う。

と思っていたら、エルはハルカから汗を拭く手拭いのような物を渡されてご機嫌そうであった。

エルも元の顔の造りが良いので、部活の練習後にエースにタオルを渡す美少女マネージャーのような絵面になっている。

元々刀の才能があり、更にハルカに良い所を見せたいのであろう。

動機は邪であったが、真面目に鍛錬して実際に強くなっているので問題は無いと思う。

「（リア充がいるな……）刀か。それが最初に購入した奴か？」

「ああ。数打ちの量産品だけどな」

エルが、自分が振っていた刀を俺に見せてくれる。

日本刀には全く詳しくないので『分析』魔法で材質を探ると、かなり高純度な鋼が材料であった。

「ミズホ伯国軍の従軍鍛冶師が作ってくれたんだ。材料は、前にヴェルがくれたやつ」

「ああ。俺が準備したやつか」

「忘れるなよ」

エルが刀を作るというので、地面から適当に砂鉄を集め、余分な成分を抜いて鉄の塊にして渡したのを思い出す。

「バウマイスター伯爵様には、鍛冶の才能もお有りなのですか？」

「いや。魔法で普通に集めただけ」

自慢ではないが、前世で美術・技術・体育などの実技系教科は全て平均的な評価しか貰えなかった。

そんな俺に、作刀の才能などあるはずがない。

ただ魔法を使って、地面から材料を抽出しただけである。

俺はハルカの問いにそう答えていた。

「廃鉱や鉱毒の池から金属を集めるのは得意だけど、加工は無理だ

な」

それが出来ていれば、魔道具職人として活躍できたのに残念であった。

そう思う理由は、俺が勝手に職人という字面が格好良いと思っているからだ。

「ですが、素晴らしい素材であったと刀鍛冶の方が褒めていましたよ」

ミズホ刀も、なるべく鉄の純度が高い素材を使って打つと高品質の品になるようだ。

ところが、鉱山由来の鉄鉱石からこの世界の技術で鉄を作ると、チタンなどの混ぜ物が入って合金のような金属になってしまう。

それはそれで硬くて武器には向いてるそうだが、ミズホ刀はしなりも重要だそうで、高価な刀はわざわざ川原などから高純度の砂鉄を集めて作るらしい。

昔の日本でも、そんな事をしていたと聞いた事がある。

会社の上司に日本刀が趣味の人がいて、忘年会の時にそんな話を聞いたのだ。

「本当ならば、数打ちの刀には使わない高品質の鉄ですからね」

「へえ。そうなんだ」

いくら技術に優れているミズホ伯国でも、そう簡単に高品質の鉄を刀の材料にはできないようだ。

鉄から不純物を抜き鋼に加工する工程は、どうしても魔法に頼る事が多くなるからであろう。

王国や帝国では、末端の兵士が使うような剣は叩き付けるのがメインの頑丈なだけの鍛造品である。
鍛冶屋が自らハンマーを振るって打つ高性能な剣というのは、下級貴族でも金を貯めて買う物なのだから。

「この刀も凄いけど、もっと腕が上がったらオリハルコンで刀を作りたいな」

「オリハルコンで？　作れるのか？」

ミズホ刀が日本刀と同じであったら、硬い鉄と柔らかい鉄の組み合わせで出来ている刀をオリハルコンだけで再現可能なのであろうか？
俺は、少し疑問に感じていた。

「ミズホ伯国の秘伝で、ミスリルとオリハルコンを一定の割合で混ぜた軟秘鋼と、純粋なオリハルコンを特殊加工した硬秘鋼を組み合わせたミズホ刀が最高級と言われています」

さすがは美少女サムライガール。
知識があるハルカは、その見た目と相まってミズホ刀の解説役に最適であった。

「そういうのは、秘伝であまり他国の人に言ってはいけないのでは？」

「このくらいの知識なら、帝国の鍛冶屋ならみんな知っていますよ。具体的な混合率や特殊加工の方法は門外不出ですね。私にも皆目見当がつきませんし」

「なるほどねぇ……」

ミズホ伯国には、とにかく秘伝の技術が多過ぎる。
魔刀はともかく、あの魔銃には驚かされた。
ガチガチの国粋主義者であるニュルンベルク公爵からすれば、滅ぼすか支配すべき脅威に見えたのであろう。
俺の場合は、日本を感じさせる遠方の半独立国なので仲良くしておくに越した事はなかったのだが。

「オリハルコン刀は、魔力を注いだり、職人が定期的に高度な手入れをしなくても魔刀に匹敵する攻撃力を持っているのです。なので、ミズホ人で欲しがる人は多いですね」

エルが手に入れたオリハルコンの剣は、ヘルタニア渓谷で多くのゴーレムを豆腐のように切り裂いた。
オリハルコン刀なら、もっと切れ味が良いのだとハルカは言う。

「エル。大小のオリハルコン刀を作って貰え」

「いや、無理だろう」

「そうですね。代金はともかく材料がありません」

ハルカが言うには、材料のオリハルコンが無いそうだ。
あればミズホ家や重臣の家で刀にしてしまうそうで、今でも在庫はほとんど無いとハルカは語っていた。
ミズホ伯国内には現在、新規のオリハルコン鉱山は見付かっていないらしい。

「材料ならある！」

未開地、ヘルタニア渓谷などの鉱山で採掘されたオリハルコンは全て俺に届いていたし、子供の頃には微量でも反応があれば無駄に魔力を使ってでも集めていたからだ。

オリハルコンは、とにかく量が採れない。

有望な大規模鉱床を見つけて、数十年かけて採掘をしてやっと二百キロほど採れた。

今回の鉱床は大当たりだったな。

こういう会話が、鉱山関係者の間で交わされるほどなのだから。

むしろ、古代遺跡などから出土したオリハルコン製品の方が多いほどなのだ。

「二本分の材料を出すから、代わりにエルのオリハルコンの剣をくれ」

「いいのか？」

材料のみとはいえ、ミズホ刀の大小が二本作れる量と、剣が一本である。

加工賃を考慮しても、エルは俺の方が損をすると気が付いているようだ。

「俺が刀を持ってもな……」

剣ならば、最悪兵士の一人くらいは斬れる可能性がある。

ところが刀など無理に持っても、今の俺では使いこなせない事は確実であった。

元日本人なので憧れはあったが、使えないのでは意味が無い。
エルに持たせるのが一番効率が良いわけだ。

「それに、俺の最終防衛ラインはエルだからな」

「確かにそれは俺の仕事だ」

「じゃあ、受け取れ」

俺はエルにオリハルコンの塊を渡す。
在庫の半分ほどであったが、これならば必要な数の刀が打てるはずだ。

「多くないか？」

「三本くらいは打てるか？　とりあえず、作れるだけ作ってみてくれ」

俺はエルに、作刀の注文を頼んでいた。

「ヴェルも、鍛冶師の所に来ないか？」

「見学か。いいな」

俺はエルとハルカの案内で、ミズホ伯国軍本陣に隣接する野戦工房へと移動していた。
ここでは、従軍鍛冶師や魔道具職人が武器や防具の製造や手入れなどをする。

数十名の鍛冶師や魔道具職人達が、刀を打ったり、魔銃の手入れ

を行っていた。

「エルヴィン殿ですか。私の打った刀はいかがですか？」

エルに声をかけてきたのは、初老でいかにも熟練の刀鍛治といった風貌の人であった。

作務衣に似た服を着て、流れる汗を手拭いで拭きながらこちらに歩いてくる。

「手に馴染みます」

「それは良かった。ところで、バウマイスター伯爵様ですよね？」

「そうです。実は私の主がお願いがあるそうで……」

「刀の作成依頼ですか？　ああ、申し遅れました。私は、ミズホ家のお抱え鍛治師である八十七代目カネサダと申します」

名前からして、物凄い刀を打ちそうな人である。

ミズホ伯国にも、代々作刀を家業にしている人がいるようだ。

「ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターです。実は、オリハルコンで刀を打って欲しくて」

俺がそう言うと、エルはオリハルコンの塊をカネサダさんに渡す。

「良くぞこれだけの量を。大小が二組に、懐刀が一本ですかね」

さすがは、名職人というべきであろう。

オリハルコンの塊を見て、作成可能な刀の数をすぐに言い当てて

しまうのだから。

「それで、エルの刀を打ってください」

「承りましょう」

「カネサダさん。宜しいのですか？」

エルは、カネサダさんに敬意を持っているようだ。

丁寧な口調で話しかけていた。

「エルヴィンさんは、素晴らしい速度で上達していますからね。すぐに必要になると思います。それに、私としてもオリハルコンを打てるとあらば。こう見えて、私は欲深い鍛冶師なので」

オリハルコン自体が稀少なので、そう滅多に打てる物でもないらしい。

鍛冶師からすれば、憧れの素材なのだそうだ。

「自惚れかもしれませんが、私は初代カネサダと互角と言われている鍛冶師です。必ずや名刀を打ってご覧にいれましょう」

「それは心強い。では、大サービスです」

魔法の袋から、もう半分のオリハルコンを取り出す。

「大小五組に、懐刀一本ですね」

「期間は指定しません。納得のいくまで打ってください」

「ありがとうございます」

あとは、同じく少量だけ材料として使うミスリルと、代金として俺が成分を調整した鉄の塊を要求されたのでそれも幾つか渡しておく。

「バウマイスター伯爵様は、魔法で高品位の鉄を精製できるのですな。この鉄ならみんな喜びます」

「では、頼みます」

作刀も無事に頼めたので家に三人で戻ると、入り口の前には数名のミズホ人達が待ち構えていた。

服装からして、かなり高位の重臣達のようだ。

「バウマイスター伯爵様。貴殿が材料持参で作刀を依頼したミズホ刀を売ってください！」

「私にこそ売って欲しい！」

「お金なら出しますから！　三十万リョウでいかがでしょうか？」

「私は四十万リョウで！」

俺が大量のオリハルコンを野戦工房に持ち込んだ情報を素早く掴んだようで、完成する予定の刀を売って欲しいと物凄い勢いで迫られてしまうのであった。

「へえ。そんな事があったのか」

その日の夕食の席でその話をすると、ブランタークさんが興味深そうに詳細を聞いてくる。

「ミズホ刀は、剣士の誇りであり魂なのです」

「大切にするのはわかるけど……」

オリハルコン製の刀を手に入れようと必死な同胞の心情を、ハルカがわかり易いように説明する。

イーナは、自分の命を救う武器を大切にするのは理解できたが、誇りとか魂とか言われると意味不明らしい。

一人首を傾げていた。

「エリーゼはわかる？」

俺が知っているのは、昔の日本で武士が刀を大切にしていたのを知識として知っているくらいだ。

これはあくまでも知識で、俺自身は刀にそこまでの感情は持てない。

多少の憧れと、『大切にしないと』と思うくらいだ。

「例えば、修道着や聖書を大切にするというか」

「そうですね。大切にはしますけど、神は『物に固執するなかれ』とも説いていますし……」

物欲を抑制するための説話なのであろうが、この時点でミズホ伯

国とは宗教的に反りが合わない事が理解できてしまう。
実際には、神官でお金や高価な品が大好きな人は多いのだが。

「ミズホ伯国でも、別に物に固執しているわけじゃない。むしろ、一度打って貰った刀を出来る限り大切にするという意味だと思うんだ」

「そういう考え方なら理解できます」

宗教とか哲学とかの話は、俺にはサッパリ理解できない。
俺も適当に言っただけだが、イーナ達はやはり理解できないようで首を傾げていた。
導師に至っては、食事に集中している有様だ。
完全に興味が無いのであろう。
導師が大切にするのは、己の肉体なのであろうから。

「刀は、己の命を預ける相棒だと言った方がわかりやすいかもな」

「それですよ。エルさん」

ハルカは、普段は物静かな女性である。
一流の剣士として隙の無い部分と、大和撫子的な部分を合わせ持っているわけだ。
ところが、エルが絡むと楽しそうに色々と話をする。

「（エルに脈アリか？）」

エルの親友としては好ましく、同時にミズホ伯国との縁もつながる。
何しろあの国には、俺が望む懐かしき日本的な物が多いのだから。

「それでどうなの？　ハルカとは？」

「俺の勝利は目前だと思う」

夕食後、エルを呼んで二人きりになって聞いてみたところ、予想通りにかなり脈はあるようだ。

「ただ、一つ問題があってな……」

ハルカの兄が、『少なくとも、俺と互角でなければ話にならん！』と騒いでいるらしい。

俺は、どこの頑固オヤジだよと思ってしまう。

「それは、陪臣家の次期当主としてどうなの？」

とんでもない陪臣家の次期当主がいた物だが、ハルカの実家は元々小身の陪臣家であり、今優遇されているのは抜刀隊に選抜されるほど刀に優れた兄と妹がいるからである。

自分の子供が抜刀隊に入れるほどの実力になる保証もなく、元々小さな家だからそこまで妹の嫁ぎ先に拘っていないそうだ。

「ハルカは、結婚相手としては微妙なんだよね」

家柄が低いから大家の陪臣家には正妻として嫁げないし、受け入れる夫よりも刀に優れている。

刀の腕前が重視されるミズホ伯国で、夫よりも遥かに刀に勝る妻

というのは扱いに困る存在らしい。

「だから、抜刀隊に所属する他の女性もみんな独身だって」

加えて、兄の存在もある。

彼は妹を可愛がっていて、『変な所に嫁いで苦労するくらいなら、うちにずっといなさい』と常々口にしているそうだ。

つまり、彼は俗に言うシスコンであった。

妹が可愛くて仕方がないので、出来れば嫁にやりたくないのであろう。

「ハルカの兄貴って、俺も何度か顔を合わせたよな？」

「ああ」

若手でトップクラスの実力を持つとかで、前にミズホ上級伯爵から紹介された事があった。

とても真面目そうな青年に見えた記憶があるが、まさかシスコンとは人は見かけによらない物である。

「ハルカの兄貴に聞いてみるか……」

「頼むよ。今の俺の実力から換算すると、俺がハルカの兄貴と競えるのは数年後だし」

エルは、ハルカの兄貴に刀で追い付ける自信はあるらしい。

実際に才能もあるので、あながち法螺でもないのであろう。

「そこまで待っていたら、ハルカが嫁き遅れてしまうからな」

「ちょっ！　お前！」

もしテレーゼの耳にでも入ったら、エルの舌禍事件になってしまう。

俺は慌ててエルの口を塞いでいた。

「とにかくだ。ハルカの兄貴本人に聞いてみればいい」

「頼むよ。ヴェル」

翌朝、俺はエルとハルカを伴ってミズホ伯国軍の陣地へと向かう。

その中にある抜刀隊の陣屋に向かうと、そこではハルカの兄貴が刀の稽古をしていた。

「これは、バウマイスター伯爵様ではありませんか。ハルカがお世話になっております」

「どうも」

やはりシスコンには見えない、真面目でさわやかに見えるハルカの兄は、稽古を止めて俺に朗らかな声で挨拶をしていた。

「ハルカは役に立っていますか？」

「良い腕をしていますからね。私の剣の腕では永遠に勝てないでしょう」

俺がハルカの刀の腕を褒めると、彼は上機嫌であった。

更に、妹の普段通りの姿を確認して安堵しているようだ。

やはり彼は、妹スキーのシスコンのようであった。

「実は、少しお話が……」

「駄目ですよ！　とにかく駄目です！」

早速に俺が話を切り出そうとすると、その前にいきなり拒絶されてしまう。

俺が何を頼もうとしているのかを、半ば本能で察知したようだ。

「兄様？　何が駄目なのですか？」

「ハルカはわからなくても良い！」

「？？？」

「（えっ？）」

ここで俺は、ある事実に気が付く。

どうやらハルカは真面目過ぎるばかりに、そういう方面の知識があまり無いらしい。

いや、ただ単に気が付いていないのであろうか？

自分がエルに嫁ぐかもしれないという事実に、いまだ気が付いていないようだ。

エルに好意的なのは、彼女が単純な剣術バカで、自分が関わっているエルの腕前の上昇速度に喜んでいるだけの可能性があった。

「とりあえずは話をですね」

「いや！　それは駄目です。可愛い妹を外国にやるなんて！」

兄としては、可愛い妹を外国に嫁にやりたくないのであろう。
こういう場合、俺がミズホ上級伯爵に頼んでも良いのだが、上から強引に命令を出しても感情の面でシコリが残る。
彼に納得して貰った方が良いであろう。

「エルの何が悪いのです？」

「才能はあるが、まだ未熟だ」

「とはいえ、あと何年も待たせるので？」

「それは……」

可愛い妹には傍にいて欲しいが、かと言って自分のせいで結婚を阻害するのも兄としてどうかと思う。
ハルカの兄は、心の中で葛藤を続けているようだ。

「……。ハルカが海外で暮らす。文化の違いとかもあるし……」

「そこまで心配する事もないと思いますが……」

言葉にそう違いがあるわけでもないし、食文化も俺のせいで大分ミズホ寄りでもある。
それに、俺は帝国の内乱終結に協力したお礼に、ミズホ伯国との交易を条件に入れている。
定期的に買い物に行くし、その時にハルカは良い案内役になってくれるはずだ。
『瞬間移動』があれば、彼女の里帰りなどすぐに出来るのだから。

「しかし……」

「あなたが、あまり子供のように駄々を捏ねても仕方が無いのでは？」

俺としては、ハルカ本人が嫌がれば強制はしない。
他に候補は沢山いるし、エルもそれを望まないからだ。
だが、兄の反対という理由では引くつもりはなかった。

「ハルカを預ける男は強くないといけないのです」

「ですがね……」

俺の妹が欲しければ、兄である俺を倒していけ。
物語としてはともかく、現実には面倒くさいという事実だけが判明していた。
ハルカの兄貴よりも強い男で、現時点で彼女に惚れていたり、彼女を嫁に迎え入れるメリットがある家が存在しているとは思えない。
ならば、バウマイスター伯爵家とミズホ伯国との最初の繋がりとしては悪くないと思うのだ。
もしミズホ上級伯爵に言えば、すぐにオーケーが出るはずである。

「私に勝てる男でないと駄目なのです」

もう数年もすれば、エルはハルカの兄と最低でも互角に近い腕前になるであろう。
そういう見立てではあるが、そのまま数年待つのもどうかと思う。
せめて、将来性を買って欲しいと思うのだ。

「エルなら、数年後にはいけるのでは？」

「今でないと駄目です！　とにかく駄目です！」

ハルカの兄は頑なであった。

感情面が大きいが、小身の陪臣家なので無理に政略結婚で家を大きくするという発想が無いのかもしれない。

さて、どうやって本人に納得して貰うべきか。

「エルが刀でなくて剣で戦うとか？」

「いや。今の俺だと剣でも勝てないから」

俺からするとエルの剣は相当な物に見えるのだが、ハルカの兄はもっと上で、ミズホ伯国にはそのハルカの兄貴すら上回る名人が数十名もいるそうだ。

「（一応、やってみたら？　もしかしたらという可能性もあるし）」

「（それで負けると、また話は振り出しだぞ）」

「（そうなんだよなぁ……）」

勝てなければハルカを嫁に出さないと言っているのだから、どうにかしてハルカの兄を倒す必要があるのだ。

「バウマイスター伯爵様でも宜しいのですが」

「えっ！　俺？」

ハルカの兄貴の突然の申し出に、俺は困惑してしまう。

「バウマイスター伯爵様は、エルヴィン殿の主君ではありませんか。貴殿が強ければ、私は安心できますので」

なぜ、俺でも良いのかがまるでわからない。

別にハルカを嫁にするつもりはないし、俺の剣の腕ではエル以上に脈が無いのだから。

「俺の剣の腕前をご存じで？」

「いや。私はバウマイスター伯爵様の魔法と戦いたいのです。それがあなた様の一番強力な武器でございましょう？」

「魔法ですか？」

俺は、ハルカの兄が実は物凄い戦闘ジャンキーなのではないかと思ってしまう。

刀で魔法に対抗する。

異種格闘戦なのであろうが、まさかこんな勝負を挑んでくるとは思わなかった。

「ヴェル。頼むよ」

「ううっ……。わかった……」

親友で家臣でもあるエルの願いだ。

俺は、ハルカの兄貴との決闘を了承するのであった。

「あまりデカい魔法は使うなよ」

「あとは、殺しては駄目であるな」

「わかっていますよ」

「一応釘を刺しておかないと、伯爵様の魔法はたまに洒落にならんからな」

「左様。災害クラスの威力があるのである」

「二人の中で、俺はどの程度のデストロイヤーだと思われているので？」

「「……」」

「そこは冗談でも普通に答えてくださいよ」

エルとハルカの婚姻を認めて貰うためにハルカの兄に会いに行ったのに、俺はなぜかミズホ伯国軍の練兵場がある草原で、彼と決闘をする羽目になっていた。

どこから聞きつけたのか？

草原には、テレーゼ、アルフォンス、ミズホ上級伯爵他、多くの観客が集まっている。

ブランタークさんと導師も、いつの間にか俺のセコンド役になっていた。

野戦陣地や屯田を広げながらの持久戦で、全員娯楽に飢えているようである。

みんな思い思いに飲み食いしながらの見学で、俺は微妙に殺意が湧いていた。

「油断するなよ」

「それは勿論」

あまり強力な魔法は使えないし、ハルカの兄は魔刀持ちである。まだ実際に斬りかかられた事がないので、どの程度まで『魔法障壁』を打ち破れるか予想が困難であったからだ。

「魔刀の性質を見るに、初級魔法使いでは下手をすると斬られるのである」

「魔法使い殺しですか？」

「戦争でもないと貴重な魔法使いを斬る機会など無いであろうからわからぬが、可能性は高いのである」

導師の言う通りではあるが、という事はハルカの兄は俺との実戦形式の決闘でそのコツを掴みたいのかもしれない。

どうやら、俺は実験台でもあるようだ。

「あなた。お怪我に気を付けて」

「エリーゼが治せる範囲の負傷に留めるよ」

エリーゼは、心配そうに俺に声をかけていた。

「ヴェル。ハルカのお兄さん。エルとは格が違うと思う」

「なるほど。俺には何となく凄そうくらいにしかわからん」

刀と槍の違いはあるが、イーナはハルカの兄の実力の高さに驚いていた。
俺には、何となく凄そうくらいにしかわからない。
魔法使いの力量はほぼ計れるようになったが、刀術に関しては門外漢であったからだ。

「ヴェルも昔は、剣の訓練とかしてたのにね」

「才能が無い以上は仕方がない」

「魔法ならそう負ける事は無いと思うけど、ヴェルは『魔法障壁』の魔力をケチらない方がいいよ」

ルイーゼも、俺と二十メートルほど離れて対峙するハルカの兄の実力に警戒感を露わにしていた。

「懐に入り込まれると駄目」

「小さな魔法を連発して、とにかく相手に先制させない事ですわね」

ヴィルマとカタリーナからもアドバイスを受け、俺はハルカの兄と戦う事になる。

「理由がまるで理解できないが……。普通ならエルが戦って奇跡を見せて、ハルカの兄さんが『やるじゃないか』で締めくくる場面だろう」

それなのになぜか、俺がエルの主君だからという理由で戦わされる羽目になっている。
完全に意味不明であった。

「あの人。戦闘ジャンキーか何かか？」

「自分の目標を高く持っている人である事は確かだな。魔法使いともそれなりに戦える力が欲しいのかも」

「俺はその実験台か……」

「すいません。兄様が……」

思わずエルに愚痴ってしまうが、隣で謝っているハルカを見ると勝負を投げるわけにもいかない。

俺が勝てば、少なくともハルカとエルの結婚にハルカの兄貴の賛同は得られるのだから。

「まあいいさ。俺が勝てばいいのだから」

ハルカのために軽口を叩きつつ、内心でも実は勝利は確信している。

こちらに『魔法障壁』がある以上は、どう考えても向こうの攻撃は通用しないのだから。

「じゃあ。始めますか」

「バウマイスター伯爵様。いざ尋常に勝負」

俺の周囲からエリーゼ達が離れ、ブランタークさんが合図の火の玉を上空に打ち上げるのと同時に勝負が始まる。

相手が刀を使う以上は、俺に接近しないと意味が無い。

俺の方は魔法のアウトレンジでダメージを蓄積させた方が良いわ

けで、まずは大量の石礫を魔法で発生させると次々と時間差をつけてハルカの兄に向けて放つ。

何発か命中すれば戦闘不能になるはずだ。

さすがに、妹の前で彼を殺すわけにもいかない。

主君であるミズホ上級伯爵の手前もあるのだし。

「甘いっ！」

ところが、ハルカの兄は電光石火の動きで刀を抜いて、石礫を次々と切り裂いて落としていく。

その動きは、まるで某三世に出てくる斬鉄剣の使い手のようであった。

「マジで！」

石礫を全て切り裂かれてしまった俺は、今度は小さな火の球を連発でハルカの兄にぶつけていく。

すると今度は、切り札である三本目の魔刀を抜いた。

ハルカの兄が青白く仄かに光る刀身を振るうと、火の球は次々と『ジュワ』という音を立てながら消えていく。

「水属性か！」

「魔刀は、使用する属性と魔力の量が調節可能ですからな！」

続けて、小型のウィンドカッターを連続して放つ。

帝都や逃走途中に多くの兵士を殺傷した物だが、これも黄色く光る刀身によって次々と消滅させられていく。

土の属性の魔力を刀身に這わせて、ウィンドカッターを消滅させ

てしまったのだ。

「（ミズホの魔刀って、ヤバくないか？）」

下手な初級魔法使いくらいだと、達人の魔刀使いなら容易に殺せてしまいそうである。

これは、ニュルンベルク公爵が警戒するはずだ。

「（これは、接近させるわけにはいかないな）」

魔刀の欠点は、内蔵する魔晶石の魔力が尽きるとただの刀になってしまう点にある。

ならば、なるべく消耗させてこちらに近づけさせなければいいのだ。

火の球などでは切り裂きつつも接近されてしまうので、今度は魔法の袋から昔に師匠から貰った刀身の無い剣を取り出す。

すぐに炎の刀身を出すと、地面に突き入れてからハルカの兄に向けて地を走る『火の蛇』を連発して発射する。

「ちっ！」

当然当たるはずはないが、ハルカの兄は回避のために前進を止められてしまう。

その間に、俺は徐々に後方に下がっていった。

「『氷の蛇』と『地走り』と『カマイタチ』とどれが良い？」

ハルカの兄の答えなど期待していないので、次々とフェイントをかけながら連発していく。

とにかくカタリーナとヴィルマの言う通りに、懐に入られないよ

うに。
万が一にも『魔法障壁』の展開が遅れれば、俺の負けは確定なのだから。

「魔刀に不可能はない」

俺の魔法の回避を続けていたハルカの兄であったが、大きく横に移動してから魔刀を地面に突き刺す。
一瞬刀身が赤く光ると、まるで火が着いた導火線のように火炎が俺に向かってくる。
どうやら、俺の魔法を真似したらしい。

「（魔法使いでもないのに、魔刀とは恐ろしい代物だな。だが……）」

俺はこれを待っていたのだ。
凄いとは思うが、こういう攻撃は貴重な魔刀に残った魔力を消費させる。
魔法使いではないハルカの兄が魔刀の魔力を失えば、ただの優れた剣士に戻ってしまうのだから。
実際に何発かを『氷の蛇』で消してしまうと、彼の魔刀から光が消えていた。

「ふふっ。魔刀の魔力が無くなったからって！」

突然ハルカの兄は、魔刀の柄を開けて魔力が空になった魔晶石を外し、懐から取り出した予備の魔晶石に入れ替える。
衝撃の事実であった。
何と魔刀に内蔵された魔晶石は、魔力が尽きたら電池のように交換可能であったのだ。

「しかしながら、このままでは埒があかぬ。これより、私の渾身の一撃でお相手しよう」

と言うや否や、ハルカの兄は一直線でこちらに突進してくる。

俺は慌てて火の球を連発して接近を防ごうとするが、それは魔刀による大振りの一撃で全てかき消されてしまう。

「なっ！」

魔力の節約を行わずに、俺に一気に接近を試みたのだ。

元の身体能力の差などもあり、俺の後退は間に合わなかった。

ハルカの兄が至近に迫ったので今度は直径一メートルほどの火の球で防ぐが、これも水属性を纏わせた魔刀の一撃で真っ二つに切り裂かれてしまう。

「『魔法障壁』！」

もう俺とハルカの兄との間に距離はほとんどない。

ここまで接近されると、あとは『魔法障壁』で攻撃を防ぎ続けるしかないのだ。

故に『魔法障壁』なのだが、なぜか一瞬嫌な予感がした。

勘の類であったが、こういう物を無視すると大抵酷い目に遭うような気がする。

そこで、いつもよりも『魔法障壁』を厚くしてみると俺の勘は正しかったようだ。

「ミズホ新陰流奥義『牙狼突』！」

ハルカの兄は、斬るのではなくて一点集中による突きの技を繰り

出してきた。
魔刀の先端のみに魔力を込めて一点突破を図る。
この判断は正しく、彼の一撃は普段よりも厚く張った『魔法障壁』の大部分を貫通してほぼ薄皮一枚という状況であった。
勘に従っていなければ、俺は急所に刀を突き付けられて負けていたであろう。

殺し合いではないのでハンデで魔法の威力は落としていたが、それでも敗北してしまうところであった。

「私の負けですね」

渾身の一撃が届かなかった時点で、ハルカの兄は魔刀を鞘に納めて自身の敗北を認めていた。

「何か嫌な予感がして『魔法障壁』を厚くしていなかったら負けていたな」

「その勘は、バウマイスター伯爵様が自身の研鑽によって得られた物です」

「あなたは強いですね」

「いえいえ。私などまだまだ未熟者です。それはそうとハルカの件ですが、勝負に負けた以上は認めてあげたいと思います。バウマイスター伯爵様の元にいればハルカも安全でしょう。エルヴィンもじきに強くなるでしょうし」

「それは良かった」

わざわざ決闘までした甲斐があった。
これでようやく、ハルカとエルの結婚に障害が無くなったのだから。

「ハルカさん」

「エルさん」

そして当事者同士であるエルとハルカは、お互いに見つめ合っていた。
あとは、エルが甲斐性を見せるだけであろう。

「この戦いが終わってからになるけど、ハルカさんはバウマイスター伯爵領に来てくれるかな？」

「はい。喜んで」

エルのプロポーズに、ハルカは躊躇う事なく了承の返事をする。

「ようやくエルの坊主も結婚か」

「良かったであるな」

「ヴェデリンも、妾にこういうプロポーズでもしてくれぬかの？」

「いや、それは無理でしょう」

「アルフォンスよ。何もこういう時だけ冷静に答える必要はあるまいて」

一部外野が五月蠅かったが、何にせよ無事に事が収まって良かった。

周囲の視線は、無事にプロポーズを終えたエルとそれを受けたハルカに向かっていた……。

はずだったのだが、なぜかここで予想外のアクシデントが発生する。

続けてハルカが、とんでもない言葉を放ったのだ。

「はい。エルさんの剣術指南役ですね。喜んで！」

「はい？」

エルはプロポーズをしているつもりだったらしいが、ハルカはエルの剣術指南役としてバウマイスター伯爵領行きを認めて貰ったという認識しか持っていないらしい。

自分の兄は、ただ妹が国外に行くのを反対しているだけなのだと。

ハルカの予想外の返答に、エルは目を点にしていた。

「そういえば、誰かハルカにエルへの嫁入りの話をしたのかな？」

翻って考えてみるに、直接婚姻の話をした事は無かったような気がする。

少なくとも俺はという条件はつくが。

「それで、お兄さんはどうなのです？」

「すいません……。言葉では、バウマイスター伯爵領行きへの反対をしただけです……」

剣の才能の問題もあったが、基本シスコンであるハルカの兄は妹が嫁に行くという事実が許せなかったようで、その手の教育を一切行わせないようにしていたらしい。

美人で剣の才能があって料理や裁縫なども上手で、これが大和撫子かというイメージの女性なのだが、恋愛とか結婚とかそういう知識がほとんど頭の中に入っていないようなのだ。

「妹さん。抜刀隊の同僚とかに口説かれたりとかは？」

「そういう不逞の輩は、私が訓練でわからせてあげました」

兄妹で共に抜刀隊にいるので、ハルカにおかしな虫が付かないように奮戦していたようだ。

まさに、シスコンの鏡と呼ぶに相応しい男である。

「ミズホ上級伯爵に許可を取るから、兄として次期当主として妹さんにちゃんと説明するように」

「それは御免蒙ります」

「（さすがはシスコン……）認めない。やれ！」

俺は勝ったのだ。

それだけは譲れないと、口調を強めてハルカの兄貴に命令する。

「承りました……」

俺はハルカの兄の両肩を強く両手で掴み、彼の説得に成功する。

しかし、他国のとはいえ伯爵からの要請を拒絶するなど、この男は恐ろしいまでのシスコンである。

見た目は古風な剣士で普段もそういう風に振る舞っているから、この男の心の内に流れるシスコンの本能に気が付いている人は少ないのであろう。

「あとは、ミズホ上級伯爵の許可を得るだけだな」

ようやくエルとハルカの結婚に障害が無くなり、俺は心から安堵の溜息をつくのであった。

第八十八話　船頭多くして、船山に登る。

「うーーーむ。普通に食べられるのである」

「美味しくはないですね」

「所詮は馬の餌だからな」

ハルカの兄との決闘から二週間後、長滞陣が続く中で俺は今日も魔法の訓練を終えてから趣味の料理研究に勤しんでいた。

なぜそんな事をするのかと言うと、決められた仕事と訓練を終えると暇だからだ。

とはいえ、それほど難しい事はしていない。

ミズホ伯国軍陣地の中にある鍛錬所の端で、三人で携帯魔導コンロに大鍋をかけて煮込み料理を作っているだけだ。

最近の課題は、例の馬の餌として駐屯地にも畑が大量に作られているバカ大根の活用方法であった。

この不味いバカ大根をいかに美味しく料理するか。

なかなか成し得ない難題だからこそ、時間を潰せる……いや燃えるというものだ。

『ヴェンデリンは、変わった事をするものよ』

『人間は食べないと生きていけませんよ』

既に拡張が終わった野戦陣地に常駐するテレーゼに呆れられながらも、俺の試行錯誤は続く。

ニュルンベルク公爵率いる反乱軍側も、この野戦陣地を警戒する数千人の部隊を幾つか近辺に配置しているが、いまだ大軍を繰り出す気配はない。

密偵の情報によると、思った以上に中央と南部寄りの東西部の把握に苦戦しているようだ。

いくら当主を人質にしているとはいえ、選帝侯家が素直に言う事を聞いてくれないのであろう。

『こちらも似たようなものだがな』

フィリップ公爵家以外で唯一こちらについた選帝侯バーデン公爵家が、主導権を握ろうと色々と画策を始めたらしい。

反乱軍を討った後の皇帝候補が二人しかいないせいで、次第に欲が出てきたようなのだ。

今のところは目標が同じなので足の引っ張り合いにはなっていないようだが、バーデン公爵公子はこの状況に焦れてきて幾つかの拠点や町を攻略しようと言うようになっていた。

初戦のみならず、更に幾つかの軍事的な勝利を重ねて反乱軍への優位を確立する。

元々反乱行為なので躊躇いも多い貴族家の離反も誘えると、バーデン公爵公子は他の軍を出している複数の貴族家の支持も受けて、定例会議でこの作戦案を提案するようになっていた。

テレーゼはそれこそが誘いの可能性もあるし、ニュルンベルク公爵が待ちの姿勢になった以上は兵力を小出しにすると思わぬ奇襲を

受ける可能性があると、その作戦案を否定している。

俺には軍事的才能など無いのでどちらが正しいのかはわからないが、個人的な意見としてはテレーゼの方針を支持している。

なぜなら、バーデン公爵公子から焦りのような物を感じていたからだ。

きっと内乱が終わるまでに、自分とテレーゼが公平に皇帝選挙を行えるように功績を稼いでおきたいのであろう。

支持する貴族達は、バーデン公爵公子が皇帝になってくれれば利益があるか、単純に軍事的な功績を稼いで褒賞を得たいと考えている貴族も多い。

戦後に、大幅な貴族勢力図の変更が確実視されている以上、自身の爵位と領地を増やす最大のチャンスであったからだ。

「この煮込み料理。普通の大根を使った方が美味いな」

「味噌煮込みだからいけると思ったのに……」

携帯魔導コンロにかかっている大鍋の中には、味噌仕立てのモツと野菜の煮込みがグツグツと音を立てて煮えていた。

「確かに普通の大根の方が美味いが、不味いわけでもあるまい」

導師は、大鍋から煮えた味噌煮込みを丼によそって食べ始める。

ブランタークさんは、少しだけ味見をしてから食べるのを止めていた。

「やっぱり、バカ大根自体の味が悪いんだな」

俺は今日も失敗だと思いながら、別の携帯魔道コンロを魔法の袋から取り出し、同じく取り出した大鍋を温め始める。

中身は甘酒であり、上からも魔法で加熱した甘酒は数分でほど良い温度に温まっていた。

「ブランタークさん。飲みますか？」

「飲む。朝から酒を飲むわけにはいかないから、甘酒はありがたい」

まだ寒いので粕煮にでも使おうと、ミズホ伯国軍陣地にいた行商人から酒粕を購入していて良かった。

ミズホ料理はほぼ和食なので、俺も口に合って万々歳である。

「あまり飲み過ぎないでくださいね。エリーゼ達が朝食を作って待っていますから」

「わかっているさ」

「某にも一杯」

俺とブランタークさんが失敗作だと判断した味噌煮込みを完食した導師は、甘酒も要求していた。

導師の場合は、別にここで大食いしても朝食に影響はないので誰も注意などしないのだが。

「どうぞ」

「冷えた朝には、これが一番であるな」

「三人で何をしているんです？」

「普通にエルを待っている」

「恥ずかしいから止めてくれーーー！」

多くのミズホ伯国軍兵士やサムライ達が懸命に稽古をしている端で、俺達三人は周囲の視線など気にしないで携帯魔導コンロに鍋をかけて煮込みを作っていた。

これを堕落と言われてしまえばそれまでなのだが、そのくらい反乱軍の反応が無くて暇であったのだ。

「別に、バーデン公爵公子のように主戦論を煽っていないから構わないだろう」

「そうだな。伯爵様の言う通りだ。甘酒お替り」

「某達の事など気にせずに訓練を続けてくれ。某もお替り」

「気にします！」

エルは、俺達の存在が恥ずかしいと思っているようだ。

別に、鍋で煮込みを作っているくらいでそこまで気にする必要も無いと思うのだが。

「甘酒飲むか？」

「……。飲む……」

それでも甘酒は飲むらしい。
そっと導師から、甘酒を注いだカップを受け取っていた。

「ハルカも飲むか？」

「はい」

エルの傍にいるハルカも、ブランタークさんからカップを受け取る。

「まあ何だ。待ちが必要な以上は、適度に気を抜く事も必要だよな」

ブランタークさんの言う通りで、戦争が早く終わるに越した事は無いが、焦って敗北しても意味が無い。
時には待つ事も、戦には必要であった。

「エルは内乱が早く終われば結婚が早まるから、急ぐ気持ちも理解できるがね」

俺の指摘に、ハルカは顔を真っ赤に染めていた。
美少女サムライガールの赤面する顔は、なかなかに絵になる物である。
エルの方は、表面上は平静さを保っていた。
多少は女慣れしているので、あからさまな恥ずかしさは見せないのであろう。

「いや。結婚前に焦って戦死するのも嫌だから、待つのは理解できるさ。俺が言いたいのは、鍛錬所の端で鍋を煮るなという事なんだけど……」

「腹が減っては戦ができぬ。家畜の餌にしか出来ないバカダイコンの有効活用の研究だ」

「一見正論だけど、見た目がそうは見えないな」

ただ大鍋の煮え具合を見ている少年、中年、初老入口トリオに、エルは呆れた表情を浮かべていた。

結局、エルの結婚についてはミズホ上級伯爵とハルカの兄が認めたので、正式に婚約は成立している。

ただ、当初はハルカがえらく動揺して大変だったのだ。

『私が、結婚ですか？』

ハルカ本人は、エルの気持ちに全く気が付いていなかった。

元々恋愛の機微に疎いようだし、自分は剣を極めて一生独身であると思っていたようだ。

自分など、妻にする男はいないと思っていた節もあった。

『エルが嫌なら強制はしないけど』

『いえ。嫌では……。逆にエルさんは、私のような女では……』

抜刀隊の中でのハルカは、美人ではあったが口説こうとする不埒な輩は兄によって排除され、稽古なども女に負けると嫌だという隊員からは敬遠されていたらしい。

稽古の相手は同じ数少ない女性隊員に、兄に、ハルカよりも強い隊員だけであったそうだ。

そんな彼女からすれば、自分が女でも真面目に剣を教わるエルが好ましい男性に見えたのであろう。

例え、エルからすればハルカから剣を教わること自体がご褒美でしかないとしてもだ。

『エルが良いと言っている以上は、あとはハルカがどう思うかだよね』

『私ですか……』

『そう。ハルカ自身がどう思うのかだ』

『バウマイスター伯爵様は変わっておられますね。強制的に命令しても構いませんのに』

『俺は小心者だからな。不満を抱えた家臣の妻に不意打ちでもされたら堪らない。無理強いはしないさ』

『そうですか。このお話はお引き受けしようと思います』

『それは重畳』

『今まで私の事を女性扱いしてくれるのは、抜刀隊の女性の同僚達と兄とエルさんだけでした。エルさんは、普段は私に優しいですから』

エルはミズホ美人であるハルカにベタ惚れしているので、優しくしても当然だと思う。

だが、その当たり前が彼女には嬉しかったのであろう。

少し顔を赤らめながら、嬉しそうに俺の要請を受け入れていた。

『では。決まりだな』

こうして、エルとハルカの婚約はすんなりと決まっていた。

ミズホ上級伯爵は『もっと身分の高い陪臣の娘でも良いのだが』と貴族的な意見も述べたが、エルがハルカが良いと言うとすんなりと引いていたし、ハルカの兄も上からの命令には逆らえない。

俺と決闘をして負けたという事実もあるので、表面上は快く妹の結婚を受け入れている。

その代わりに、婚約が決まったので毎朝楽しそうに一緒に鍛錬をする二人を端から恨めしそうに見つめる光景が名物になっていたのだが。

俺達三人の調理よりも、彼をどうにかした方が良いと思うのだ。

あとは、結婚が決まって幸せ一杯のエルが少々ウザかった。

俺も新婚当初はそうなので何も言えないが、ハイテンションで俺に刀でも習ったらどうかと勧めるのだ。

『ヴェルも、ハルカさんから刀を習えばいいのに』

『嫌だ』

エルは刀の才能があるから良い弟子になれているが、俺が彼女から刀を習っても無駄に疲れるだけであろう。

俺に刀の才能など皆無なのだから。

『浮かれ過ぎて戦死するなよ。古来より兵士などが『俺、この戦争が終わったら結婚するんだ……』とか言うと、実はかなりの確率で戦死する』

『そんな話、聞いた事がないぞ』

『そうなのか？』

『何の本の知識だよ……』

どうやら、地球では良くあると言われている死亡フラグなどは存在しないようだ。

少なくとも、エルは知らなかった。

『私は知っているわ』

『イーナは知っているぞ』

『どうせ何かの物語だろう』

『でも、過去の経験から作者は書いたと後ろ書きに書いてあったわ。他にも、子供が生まれるとか……』

俺は見た事が無かったが、イーナはやはりそういう物語の設定を見た事があるらしい。

世界が違っても、やはりそういう法則のような物を感じる人はいるのだ。

『夫婦して縁起でもない事を……。俺はハルカさんと戦後に幸せに式を挙げるんだ』

幸せ絶頂のエルは、俺とイーナの発言を完全に無視していた。

自分でも物騒だと思うので、あまり浮かれないようにしてくれれ

ば全く無視してくれても構わないのだが。

「俺達の調理よりも、あの辛気臭いのをどうにかしろよ」

俺達の調理は悪くないのだ。

今も、導師が希望者に甘酒を配って好評であるし、鍛錬後に栄養豊富な甘酒は健康に良いのだから。

そう、甘酒は健康食品なのだ。

部活後にスポーツドリンクを飲むのと変わらない。

「それは抜刀隊の偉いさんにも言われているけど、どうにかなるのか？」

今もハルカの兄は、エルとハルカを恨めしそうに見ている。

鍛錬や仕事はちゃんとしているのだが、抜刀隊の幹部から『雰囲気が悪くなるので何とかしてくれ』とエルに苦情が行くようになっていた。

導師が可哀想に思って甘酒を配るが、飲み干すとまた恨めしそうな表情でエルを見つめている。

「ハルカ。お兄さんって何が好きだ？」

「ええと。刀です」

物凄くわかりやすい回答ではあった。

似たもの兄妹なのであろう。

「ならば……。おーーい。ハルカのお兄さん」

「バウマイスター伯爵様。私の事はタケオミで構いませぬが……」

ハルカの兄は、可愛い妹を奪ったエルには恨めしそうな視線を向けるが、普段は伯爵であり決闘で自分を下した俺に敬意を表している。

俺が呼ぶと、恭しく頭を下げていた。

「実は、この前頼んだオリハルコン刀の試し切りを頼みたいのですが」

カネサダさんは、この短期間で既に二組の大小を完成させたそうだ。

『一度打ち始めると、他の刀の事など忘れてな』

さすがにそれだけに集中すると他の仕事に差し支えるので、まずは二組分のオリハルコン刀を完成させたようだ。

「エルはまだ刀は未熟ですからね。ここは、タケオミさんに試し切りを……」

「任せてください！　まさか、生きてオリハルコン刀の試し斬りが出来るとは……」

ミズホ人のサムライにとって、オリハルコン刀とはいつか手に入れたい至宝であると聞いている。

タケオミさんのように小身の陪臣からすると、触れるだけで幸運という代物だそうだ。

「朝食後に、またこの鍛錬所で行います。カネサダさんが完成したオリハルコン刀を持ってくるそうなので」

「お任せあれ」

タケオミさんの不機嫌そうな表情は完全に消え、逆に完成した直後のオリハルコン刀の試し斬りが出来るとあってその顔は喜びに満ち溢れていた。

「（剣術ジャンキー……）あの。それでですね……」

エルに対して、不機嫌そうな表情をしないようにと一応頼んでおく。

多分駄目だとは思いながら。

仕事はちゃんとしているし、俺に対してそういう表情を向けているわけでもないので、実は注意をする根拠が無かったりするのだ。

「いくらバウマイスター伯爵様の命令でも。これは本能ですから」

「そうですか……」

彼の迷い無き回答に、俺はシスコンの業の深さを心から理解する事になるのであった。

「綺麗な刀ですね」

「見ていると魅き込まれるような刀身だな」

エリーゼ達が作った朝食を食べた俺達は、再びミズホ泊国軍陣地にある鍛錬所に集合していた。

そこには、先の戦いで鹵獲した反乱軍戦死者のプレートメイルやシールドが数十体分訓練用の案山子に装着されて配置されている。

損傷が激しく、鋳溶かして再利用するしかないクズ鉄扱いなので試し斬りのために提供されたのだ。

案山子の前には、俺、エリーゼ達、ブランタークさん、導師、ハルカ、タケオミさんと、いつものメンバーが揃っている。

他にも、ミズホ上級伯爵やその側近達に、カネサダさんが完成した二組のオリハルコン刀を三方のような物に載せて弟子達と共に控えていた。

早速に、カネサダさんが一本のオリハルコン刀を抜いて刀身を見せてくれるが、その美しさに刀に縁の無いエリーゼですら見惚れている。

ミズホ上級伯爵達も、感嘆の溜息を漏らしていた。

「さすがはカネサダよ。初代作のカネサダと比べても劣る点が見つからない。しかし残念なのは、私の刀で無い事かの」

この二組の大小の所有者は、エルであった。

その代わりに、ヘルタニア渓谷で岩ゴーレムを豆腐のように斬っていたオリハルコン製の剣は今現在は俺の腰に刺さっている。

俺はまだ剣の方が普通に使えるので交換したからだ。

「魔法使い殺しに使えるな」

「ええ。初級の魔法使いには脅威でしょうね」

ブランタークさんが輝く刀身を見ながら、複雑な笑みを浮かべていた。

オリハルコン刀は、下手な『魔法障壁』などは突破できる力がある。

魔刀と同じような性質を持ち、初級魔法使いが張る程度の『魔法障壁』なら突破が可能だ。

オリハルコン製の剣では難しい事が、オリハルコン刀ならば出来る。

これらの技術が、ミズホ伯国の独自性を保てた最大の要因なのであろう。

「バウマイスター伯爵よ。あと三組の作刀を依頼しておるそうだが……」

「はい」

「やはり、売っては貰えないのかな？」

「売ると言いますか、戦後に結ぶ通商協定とか色々とありますよね？」

ただ相場で売るのは簡単であったが、それでは脳が無い。

バウマイスター伯爵家のために、それ以上の価値を持たせるのが貴族という物であろう。

「（と、エリーゼが言っていたな）」

「段々と、貴族らしくなってきたな。バウマイスター伯爵は」
「あれだけ人が死ぬのを見ましたからね」
自分や妻達の身もそうだが、この内乱が収まっても、戦後は帝国と王国の著しい国力比の格差が是正されるには時間がかかる。
俺達が傭兵扱いで帝国で戦っている点も含めて、王国で俺を利用したり敵視する貴族も増えるであろう。
王族の反応も怖く、帝国やミズホ伯国と縁を結んでおく事も必要だと思っていたからだ。
オリハルコン刀がその道具に使える以上は、なるべく高く売る必要があった。
「今強引に頼んでも、バウマイスター伯爵の機嫌を損ねるだけかな」
俺とミズホ上級伯爵が話をしていると、カネサダさんからオリハルコン刀を預かったタケオミさんが静かに構えてから案山子を連続して切り裂く。
袈裟斬りにされたプレートメイル装着の案山子は、見事な切り口を曝していた。
「鋼製のプレートメイルを真っ二つですか……」
「タケオミは期待の若手剣士だからな。ちょっと妹が絡むと暴走する癖はあるが……」
主君にまで知られているほど、タケオミさんの剣の腕は優れているようだ。
同時に、シスコンである件も有名なようであったが。

「タケオミも、バウマイスター伯爵に暫く預ける事にする」

「どういう事ですか？」

「今。テレーゼ殿が何をしているか知っているか？」

「会議だと聞いています」

そのおかげで言い寄られないのは素晴らしいが、その会議こそがミズホ上級伯爵に言わせると頭痛の種だそうだ。

「勿論、テレーゼ殿やアルフォンスの頭痛の種でもある」

この一か月ほど戦闘が無かったので、いよいよバーデン公爵公子達が焦れてきたらしい。

他の貴族達からも支持者を集めて、一部都市や城塞などの占領を主張しているそうだ。

「ここで兵力分散の愚を犯すのですか？」

「この一か月、攻め寄せて来ないとなると、罠の可能性も考慮する必要があるな」

「欲しいのは、戦功と略奪品ですか？」

「さすがに内乱なので、一般市民への略奪や婦女子への暴行は打ち首だな」

タコが足を食う行為なので、テレーゼが厳格に禁止を通達してい

る。

バーデン公爵公子も皇帝を目指しているので、下手な悪評は防ごうとするであろう。

「ただし、例外がある」

反乱軍を撃破して得られる鹵獲品や、反乱軍の備蓄物資や軍用資金などである。

これが結構バカにならない稼ぎになるのだ。

「ここより南に三十キロ。商業都市ハーバットの攻略を主張しているようだな。あとは、その近辺などに付属する城塞などもか」

バーデン公爵公子達は、このソビット大荒地にある野戦陣地を安全な後方拠点にして、前線をハーバットとその周辺にある複数の城塞のラインにまで前進させたいようだ。

テレーゼとアルフォンスは拒否をしているが、思いの外攻勢案に賛同する貴族が多く、今行っている会議はそのための物であるらしい。

「ミズホ上級伯爵は参加しないで宜しいのですか？」

「我らは、見事にハブられたからな」

伝説にまでなっているサムライの奮戦、魔銃や魔刀による高威力の攻撃、魔法使いの数や質も劣っておらず、追撃戦でも精強な騎馬隊のおかげで多くの戦果をあげたミズホ伯国軍は、今回は遠慮して欲しいとバーデン公爵公子から言われたそうだ。

「別に、私が皇帝になるわけでもないのにな」

「戦後の領地分けとかでしょうね」

ミズホ上級伯爵の顔に、一瞬苦み走った物が浮かぶ。

テレーゼは、参戦してくれたミズホ伯国には領地の加増を約束していた。

あとは選帝侯家への任命もである。

これは一見名誉に見えるが、要はミズホ伯国を帝国に縛り付ける物でもあった。

領地は、ご丁寧に海に面した場所をくれるらしい。

海産物が大好きなミズホ人には嬉しいはずだが、同時にアキツ盆地以外に守る土地が増えるので防衛が面倒になる。

新しい領地に住む人達への統治の問題もある。

異民族を抱えてしまうので、色々と面倒な事が起こりそうだからだ。

本音では断りたいが、断るわけにもいかず、ミズホ上級伯爵としては痛し痒しなのであろう。

「時代が変わるというわけだな。変化の進め具合の匙加減が難しいが……」

ミズホ伯国も、難しい舵取りを迫られるというわけだ。

勝っても負けても、王族や貴族とは仕事が増えて面倒であった。

「テレーゼ殿を女如きと侮ると危険ではあるな。だが、バーデン公爵公子達の攻勢案を却下できるかな？」

いつの間にか、オリハルコン刀の試し斬りはハルカへと移行していた。

彼女の腕前はタカオミさんには少し劣るようであったが、名人には違いない。

まるで紙でも切るかのように、フルプレートを着せた案山子を真っ二つに切り裂いていた。

「妹も良い腕をしている。バウマイスター伯爵の護衛には最適であろう」

「護衛は前からそうですが、何か我々に仕事でもあるのですか？」

「ある可能性が高い。全く、自分達だけで攻めれば良いものを……」

試し斬りは無事に終わり、二組のオリハルコン刀はエルとハルカが使う事になった。

三日後にはもう一組が完成するので、これは俺付きになったタカオミさんに貸与する予定だ。

「貸与でも素晴らしい」

タケオミさんは大喜びであったが、やはりエルを見ると顔の表情が怖くなる。

シスコンもここまで拗らせれば、ある意味素晴らしいのかもしれない。

そしてミズホ上級伯爵の言う通りに、家に戻るとそこにはテレーゼが申し訳無さそうな表情で待ち構えていた。

「すまぬ。反対し切れなかった」

「俺達にも出番が？」

「ミズホ伯国軍にもな。目標はターベル山地砦じゃ」

テレーゼ様は、一枚の地図をテーブルに広げていた。

「場所は、ここから南東に二十キロほど。標高六百メートルほどの台形型の岩山の上にある砦じゃ」

「メインの商業都市は、バーデン公爵公子達の獲物ですか」

派手な戦果は自分達で独占して、オマケのような砦は俺達に押し付ける算段らしい。

その前に俺達は、この砦を落とす意義を見出せないでいたが。

「山登りかよ」

「ブランタークさんの年齢を考慮して、他の砦にしませんか？」

「人を年寄り扱いするな！」

余計な事をほざいたエルに、ブランタークさんの拳骨が落ちる。

「地図だけで判断しても、何ら軍事的な意義を見出せないが……」

導師も、ターベル山地砦攻略の意図を掴み切れないようだ。

「この砦は、帝国が北方攻略をしていた頃の前線基地であったからの」

当にその役割を終えていて、今では山賊対策などのために存在し

ている事になっている。

「とはいえ、北方街道に山賊など出ないがの。たまに強盗が出るくらいじゃ」

常に警備隊の巡回があるので、徒党を組んだ山賊では逆に捕まりやすくなってしまうそうだ。

では、なぜこの砦が存在するのかと言えば……。

「下手に放置して、変な連中に住処にされてもな。それと、帝国軍でもあるのじゃ。ポスト削減に反対する勢力が」

ターベル山地砦の長は重要なポストなので、これを無くそうとすると軍内の反発が大きいらしい。

自分達が就けるポストが減る事に軍内からの反発が大きく、今まで削減できなかったようだ。

「どこかで聞いたような話ですね」

「軍事予算の無駄遣いは誰にでも理解できるが、その削減で自分の役職や給金が消えるのは嫌だからの」

その辺は、王国も帝国も差は無いようだ。

「それにな。今の戦況では使い道が無いわけでもない」

位置的に、我々が帝都に向けて前進をすると、ここから兵を繰り出して補給を絶つ戦法に出る可能性があるとテレーゼは説明する。

なので、一応占領して守備兵を置く必要があると。

「あのバーデン公爵公子。物凄くバカでもないのですね」

「普通に公爵家の跡取りは務まる器じゃの。だから逆に困るのじゃ」

カタリーナの毒舌に、テレーゼは困惑した表情を浮かべていた。

実際に短期間で、自身の派閥とも言える攻勢案に賛成のグループを結成してしまうのだから。

「それで、俺達だけで落とせと？」

「さすがにそれはない。我々との共同作戦だな」

前回のソビット大荒地野戦陣地攻防戦において、新兵器である魔銃まで繰り出したミズホ伯国軍の功績は巨大であり、メインであるハーバット攻略の任からは外されてしまったらしい。

「千五百人ほどを出す。指揮は弟に任せるが、なるべく犠牲を出したくないの」

ミズホ上級伯爵が独自に出している偵察によると、ターベル山地砦には元々百名ほどの守備兵がいたそうだが、今はニュルンベルク公爵がもう百名ほど追加で援軍を送っているそうだ。

ターベル山地砦はターベル山の山頂にあり、攻め入れるのは唯一山頂へと続く山道だけ。

砦の正面入り口はその山道からの一か所だけで、あとは断崖絶壁で囲まれているとの事前情報であった。

「損害が出そうですね」

「そうだな」

守備兵は二百名で、魔法使いもいないし、特に精鋭が守備しているわけでもない。
だが、バカ正直に千五百名で砦正面門に殺到すれば、弓矢などで大きな犠牲を出すであろう。

「魔銃で狙撃するとか？」

「距離にもよるが、まだ精密な狙撃は不可能だ。有効射程は百メートルほどで、それくらいだと弩や大弓での反撃もある」

ミズホ上級伯爵としては、あまり意味の無い小砦の攻城戦で犠牲を出したくないのであろう。
まだニュルンベルク公爵との決戦が残っているのだから。

「魔法で何とかするしかないのかな」

「是非に頼む。報酬に関しては、テレーゼ殿が特に加算すると言っていたぞ」

「はあ……」

ただ働きは嫌だが、テレーゼの場合、自分の体で支払うとか言いかねない。
男としては有りだと思ってしまいそうだが、戦争の報酬としては安いような気がしてしまう。
むしろ、デメリットを考えるとマイナスであろう。

「バウマイスター伯爵は、えらくテレーゼ殿に気に入られておるの。お互いに立場があって大変であるか」

「ええ」

「公爵でなければ、美しい女なのだがな」

その日の試し斬りは無事に終わり、それから二日後にはバーデン公爵公子と十数名の貴族による混成軍一万五千人がハーバット攻略に向けて出撃していた。

他にも、四か所の城塞や拠点を落とすために一万人ほどの兵を貴族達が出していて、最後にミズホ伯国軍と俺達もターベル山地砦攻略に向けて兵を出していた。

テレーゼは、後方から得た追加の援軍と共に三万人ほどでソビット大荒地野戦陣地に留守番である。

総大将なのでバーデン公爵公子から前に出るなと言われたらしいが、手柄の取り合いと、やはり女性当主なので戦場に出ようとすると嫌がられるらしい。

「急ぎ落として戻るか」

偵察によると、出している戦力でどこも簡単に落とせる予定になっている。

だが、兵力を分散しているのには違いが無い。

思わぬ奇襲を受けて敗北する可能性だってあるのだ。

俺達だけでも手早くターベル山地砦を落として、それに備える必要があった。

「ヴィルマ。新型の試作品魔銃はどうだ？」

「使ってみないとわからない」

ターベル山地砦への行軍は、丸二日ほどで終わっていた。
ミズホ伯国軍は砦正面門から、弓矢が届かない位置まで離れて待機していて、先ほど伝令が降伏勧告を出しに行っていた。
奇襲をしない点でまだ甘い部分があるのかもしれないが、山道以外に攻め上る方法が無いのでどうせ奇襲など出来ないという理由も存在している。

もし素直に降伏してくれれば犠牲が出ないので、試しても損は無いというわけだ。

『降伏勧告はありがたいが、死守が命令ゆえに』

もっとも、砦の守備隊長からこう言われて見事に断られてしまったようだが。

「魔法で狙撃しようかと思ったけど、まさかこんな試作品があるとはね」

俺がヴィルマに調子を聞いているのは、ミズホ上級伯爵から貸与された新型の魔銃であった。
砲身が長く、初めての試みであるライフリングに、照準に使うスコープ、銃床の形も改良されている。
理論値では三百メートルくらいの距離は狙撃可能らしいが、この狙撃魔銃は所謂不良品であった。

魔力の消費効率が悪く、付属の魔晶石では一発しか撃てないそうだ。

「ヴェル様。これを使うのと、魔法で撃つのはどちらが効率的？」

「実は、この試作狙撃銃の方」

前のように自作したタングステン入りの椎の実型銃弾を魔法で飛ばしてもいいのだが、この距離で狙撃をするとなると魔力の消費が大きくなる。

大規模な魔法をぶっ放そうかとも考えたのだが、なるべく無傷で占領して後続の守備隊に渡さないと防衛拠点としての意味を成さない。

そこで、俺が魔力を補充して武器の扱いに慣れているヴィルマに任せる事になったのだ。

実は、魔銃に関してはエルとハルカとタカオミさんにも貸与されている。

貸与なので貰えたわけではないが、どうせ定期的に謎メンテをしないと使えなくなるので、貰っても意味が無いはずだ。

先日、バーデン公爵公子達も、魔銃を手に入れ損なって残念そうにしていたようであったが。

「ヴェル様。誰を狙うの？」

「ええと……」

俺とヴィルマは、ミズホ伯国軍から少し後ろに下がった、山道から外れた巨大な岩の上で双眼鏡とスコープで砦の様子を観察していた。

城壁の上には五十名ほどの兵士達が弓を構え、防衛用のバリスタを準備している。

そして、彼らを指揮する数名の隊長やその部下の姿もあった。

「まずは、指揮官をだな」

「了解。まずは撃ってみる事にする」

事前の試射では、並み居るミズホ伯国軍魔銃隊の猛者達にも匹敵する実力を見せたヴィルマであったが、今度の標的は的ではなくて人間である。

思わぬ動揺を見せて失敗する可能性もあった。

「大丈夫か？」

「大丈夫」

「無理をするなよ」

「私はヴェル様の妻であり、盾と矛でもある。だから大丈夫」

ヴィルマは、狙撃用の魔銃を構えながら珍しく言葉を続ける。

「ヴェル様は、私に楽しい時間と居場所を作ってくれた」

ヴィルマは、英雄症候群のせいで普通の貴族家には嫁げない身であった。

運良くエドガー軍務卿に拾われたが、それでも俺以外には嫁ぐのは難しかったであろう。

いくら腕っぷしが良くても今の王国軍には仕官できないし、エドガー軍務卿の隠された子飼いの部下として裏仕事をするか、冒険者でもして己の食い扶持を稼ぐしかなかったのだから。

「ヴェル様と一緒にいると毎日楽しい。だから私は、この居場所を守るために顔を知らない人達を殺す罪悪に身を染める。私はエゴで、自分とヴェル様と知っている人達のために人を殺す」

「そうか。俺も実は同じだな」

俺が唯一得意な魔法を阻害する装置まで駆使して反乱を起こしたニュルンベルク公爵を殺し、その装置をバラバラに破壊する。
そのために、俺は既に数百名の人間を殺し続けているのだから。

「エルも、エリーゼ様も、イーナも、ルイーゼも、カタリーナも同じ」

最初は打算で俺の仲間になったのであろうが、今は運命共同体である。
だからこそ、エリーゼですらターベル山地砦攻略についてきているのだから。

「さっさと終えて、夕食のメニューでも考えようか」

「それがいい」

ヴィルマは、狙撃銃に俺が大きさを調整した銃弾を詰める。
魔銃は全て前込め式で、本来の銃弾は火縄銃と同じく丸い。
だが、丸い弾ではライフリングの意味が無いので、今回は自分が魔力で飛ばすのに使っていた椎の実型の銃弾を銃身に合わせて魔法で大きさを調整したのだ。

「スルリと入る」

ヴィルマは、俺から貰った銃弾を銃身に込めていた。
銃身はともかく、魔銃には奇妙な仕組みが多い。
火薬の代わりに魔力で弾を飛ばすので、全て魔晶石が内蔵されている。
引き金を引くと弾が発射されるが、なぜ引き金を引くと魔力が銃弾を飛ばすのかが不明である。
今までに類似品の研究は両国で行われていたはずだが、完成していないのはその辺の仕組みの難しさから来ているのかもしれない。

「引き金を引くと弾が飛ぶ魔法の仕組みが意味不明だな」

火薬なら着火させれば爆発するが、魔晶石に蓄えられた魔力が銃弾を発射する魔法に変化する仕組みを人工的に再現しているのだから魔法使いである俺には意味不明であった。
これを解決したミズホ伯国が、ニュルンベルク公爵から警戒される理由であろう。

「今は弾が飛べばいい」

「ヴィルマの言う通りだ。指揮官からやる」

俺も双眼鏡で、砦の城壁の上で指揮を執る守備隊長の姿を確認していた。
他にも副官や部隊長などもいるが、これも標的とする。

「上を殺して士気を殺ごう。結局、一番これが効率が良い。無駄な犠牲も出ない」

「わかった」

狙撃魔銃を構えていたヴィルマが引き金を引くと、双眼鏡に映っていた守備隊長が勢い良く後ろに吹き飛ばされて倒れる。
隣にいた副官達が慌てて助けようとするが、ヴィルマの狙撃は経験が少ないにしては正確だ。
頭部に銃弾が命中して血と脳漿をぶちまけて死んだ上官を見て、彼らは恐れ慄いているようであった。

「ヴィルマ」

「続ける」

続けて、副官らしき人物、二名の部隊長、少し離れて弓隊を指揮している男性も標的にする。
全員、頭部や胴体部分を撃たれて、即死か戦闘不能になっていた。

「銃身が……」

不思議な事に魔銃は、五発ほど撃つと銃身が熱されて冷ますまで撃てなくなってしまう。
ミズホ伯国軍では水をかけて強制冷却しているが、俺はヴィルマから受け取った狙撃魔銃を『冷却』の魔法で素早く冷ましていた。
これならば、銃身が濡れる心配もない。

「続けて、バリスタを操る人員だ」

ヴィルマの射撃は続き、今度は城壁の上でバリスタを操っている兵士達を標的にする。
最初は撃たれてもすぐに交代の人員が駆け寄ってきていたが、そこに移動すると狙撃される事に気が付き、次第に誰もバリスタに近寄らなくなる。

続けて弓兵への狙撃が始まり、三名ほどが撃たれると全員が弓を捨てて城壁の上から逃げていた。
止める兵士もいたが、あまり偉くない人のようで誰も耳を貸さない。
何しろ偉い人達は、既に大半があの世に旅立っていたのだから。

「ヴェル様。撃てる人がいなくなった」

「まあ。必要が無いみたいだけど」

一方的に遠距離から偉い人達を撃たれ、自分達には成す術がないのだ。
彼等の士気は砕かれ、城壁には数本の白旗が舞っていた。

「降伏してくれたか」

こうしてターベル山地砦は、味方の死傷者を出さずに攻略に成功するのであった。

「これが成功？　いや失敗でしょう」

「でも、ヴェル。普通に砦は落ちたぜ」

「エルさんの言う通りです。しかも、味方の死傷者はゼロですよ」

「ハルカさんの言う通りだ。犠牲がゼロなのは素晴らしい」

白旗が上がったターベル山地砦は、特に大した混乱もなくミズホ

伯国軍によって占領されていた。
狙撃とはいえ部隊長以下の幹部を討ち、もし攻城戦を行ったとしたら犠牲が出る最大の要因であろうバリスタと弓隊の無力化にも成功、オマケにターベル山地砦は無傷で修復なども必要ない。

俺達の功績は一番であったが、実は褒美を出すのはテレーゼである。
なぜなら、俺達はテレーゼから雇われた傭兵であるからだ。

一応戦功を記録する武官が同伴しているので、戦功と恩賞の誤魔化しは発生しないはずだ。
ミズホ伯国軍を率いる、ミズホ上級伯爵の実弟にして分家当主のトヨツグ・タムラ・ミズホさんの表情は険しいが、別に俺の戦果に嫉妬しているわけではない。
別の理由が、彼を不機嫌にしているのだ。

「俺らはハメられたんだよ」

「であるな。倉庫が空であった」

ターベル山地砦にある倉庫や、司令部の建物にあるはずの金庫に入っている活動資金などはミズホ伯国軍に権利が発生するのだが、そこをトヨツグさんが家臣に改めさせたところ、ほとんど何も入っていなかったらしい。
食糧が保管されている倉庫も、守備兵の一週間分くらいしか保管されていなかったそうだ。

「ハメられた？」

「そうだ。こういう山頂にある砦の備蓄食料が残り一週間分とか普

通あるか？」

「でも、山賊とかも特にいない山の砦だったんでしょう？」

「ポスト目当ての砦だったそうだが、今は反乱軍の防衛拠点になっている。食料くらい普通は運び込むだろう？　それにな。普段だってこんな山頂に細々と物資なんて補給しないさ。経費がかかるからな」

ブランタークさんの推論に、エルは納得したような表情を見せていた。

「それよりも問題なのは、ここと同じ対応を他の拠点の反乱軍がしていた時の事であるな」

「伯父様。誘いの罠という事ですか？」

戦闘後に敵軍には死者しかいなかったので、エリーゼは治癒魔法を使う必要がなく導師と一緒にいた。

イーナ達も特にする事が無かったのでここにいるが、暇つぶしのはずの話が次第に深刻になっていく。

「わざと食料や物資を少なく、守備も薄くして味方を引き入れた？」

「イーナが予想している通りだろうね」

簡単に攻略はできたが、この時点で兵を出したこちらが消費した食料や物資を考えると赤字である。

何しろ、わずかな食料しか接収できていないのだから。

それでも占領した町や砦を維持出来れば黒字になるが、それには

補給が必要でありまた経費もかかる。

「というか、その前に食料不足の状態で囲まれるよね」

ルイーゼの言う通りで、我々は急ぎ攻勢に出たのであまり食料を持っていない。

それは後発の補給部隊に任せる事になっていたが、反乱軍に補給路を断たれれば万事休すである。

我々がその補給部隊を守ろうとしても、その前に砦を敵軍に囲まれれば終わりであろう。

特にこのターベル山地砦は、本来であれば堅牢で守りやすい砦である。

山頂にあって攻略ルートが一本しかないからであるが、逆に言えばその山道を抑えられれば出口が無くなる。

「二百名分で一週間分の食料しか倉庫になくて、こちらもそれほど手持ちがあるわけではない」

ヴィルマは事実だけしか語らない。

だが、逆に事態は深刻とも言えた。

俺の脳裏にある悪い予感が浮かぶが、それはすぐに現実の物となっていた。

「ヴェンデリンさん！」

城壁の上で警戒を行っていたカタリーナが、こちらに大急ぎで駈け込んできたのだ。

「私達。反乱軍に包囲されているようです」

「やっぱりなぁ……」

こちらがターベル山地砦を占領したのを見計らったかのように、正門前の山道に多数の反乱軍が出現したとカタリーナが報告する。

「つまり、これで出られなくなったというわけだ」

反乱軍は味方よりも多いはずだが、多分無理攻めはしてこないはずだ。

何しろこちらは、食糧に余裕がないと思われているのだから。

山道だけ塞いで待っていれば、こちらは一週間ほどで食料が尽きてしまう。

テレーゼが補給を送ろうにも、届くはずもない。

「ターベル山地砦にいる私達は極端な例として、他の攻略に向かった味方は敗北必至なのでは？」

他の城塞攻略組も同じ事をされている可能性があるし、ハーバット攻略組のバーデン公爵公子達は単純に優勢な反乱軍に包囲されているかもしれない。

どうやらせっかくの先の大勝も、今回の敗北で無駄になってしまう可能性があった。

「テレーゼめ。バーデン公爵公子を抑えきれないから」

バカな事はしてくれたが、このままバーデン公爵公子達が戦死するとまずい。

だが、今の俺達は自分の事で精一杯である。

「トヨツグ殿と対応を協議する。しかし、困ったな」

外の反乱軍の数がわからない以上は、下手に動くとかえって犠牲が増えて危険だ。

俺達は急ぎ足で、トヨツグ殿の元へと急ぐ。

少しでも、俺達を包囲する敵軍の情報を得るために。

第八十九話　戦術的勝利、戦略的敗北。

俺達がターベル山地砦を落としてから一週間、いまだに反乱軍の新手に包囲されたままであった。

こちらを包囲する反乱軍の数は、推定で一万人ほど。

攻城戦は仕掛けてこず、最初は儀礼通りに降伏の使者を送ってきて、次はヴィルマの狙撃魔銃の射程外からこちらを窺っている。

開戦後に、初見殺しをするべくヴィルマに魔力の多い順に魔法使いを狙撃させたのが原因であろう。

当然上位の魔法使いは『魔法障壁』で防ごうとしたが、俺が銃弾に『ブースト』を重ねがけして貫通させた。

彼らの多くは頭部を粉砕されて死亡し、残された魔法使いから報復の魔法が飛んでくるが、これはブランタークさんと導師とミズホ伯国軍の魔法使い達によって防がれる。

こちらが狙撃以外は防衛に徹したので、反乱軍の魔法使いは味方よりも遥かに劣勢になっていた。

元々上級の魔法使いがいなかったせいもあり、魔法戦に負けた反乱軍は狙撃魔銃の射程外まで退いて、本来の作戦である包囲作戦に戻っていた。

「近寄って来ないな」

「飢えさせて弱らせてから落とす。もしくは、降伏を促すですな」

タケオミさんと共に城壁の上から遠方の敵軍を見るが、彼らは動かない。

時期的にうちの食料が尽きると計算しているので、無理はしない方針なのであろう。
今は俺付きになっているハルカの兄であるタケオミさんであったが、この人は妹が絡まなければ至極まっとうな人であった。
その発言に、何らおかしな点はない。
「もっとも、食料は尽きていないけど……」
テレーゼがそれを見越して俺に参加させたのかは不明であったが、魔法の袋に入っている食料で不足分を凌いでいたのだ。
『伯爵様は、大量に食料を持っているんだな。昔に、ブライヒレーダー辺境伯家遠征軍の分は返したじゃないか』
『別に買い溜めた物です』
『備えあれば……、というやつか？』
『ブランタークさんは、どうなのです？』
『俺と導師とカタリーナの嬢ちゃんは、自分の分くらいだぜ』
人間何があるかわからないし、どうせ腐らないのだから溜め込んでも問題ない。
それに、お金があるとどうしても衝動買いが発生する。
魔の森での狩猟や採集で手に入れた食材などで売却していない物もあるし、帝国に来てから大量に購入した物もある。
そのおかげで、今現在も味方は飢えていない。
師匠に習って、魔法の袋に大量の食料を保持していたおかげであ

ろう。

ただし、それは個人単位で圧倒的に多いだけだ。

千五百人に食べさせるとなると、さすがにそろそろ限界であった。

『それでも、千五百人に一週間以上も食べさせるのだから凄いけどな』

『俺は食事には気を抜かないタイプなんです』

『それは見ていてわかるけどよ』

元から軍で持参した食料に、砦に残された食料も少しはあってこれも確保しているが、さすがにあと一週間が限界であろう。

作戦案では、砦を落とした直後に専用の守備兵と食料が到着する予定であったが、この完全包囲下で来れるはずがなかった。

「そろそろ気が付くかな？」

「もう数日は気が付かないはずです」

タケオミさんは、妹のハルカが絡まなければ普通に優秀な武官であり剣士でもある。

食料が不足しているかのように見せているのは、下手に余裕があるのがわかるといらぬ攻勢を生んでしまうからだ。

最終的には戦わなければいけないのであろうが、今はその前に籠城戦の準備なども必要であった。

このターベル山地砦は、あまり予算が貰えていなかったらしい。

遠方からの見た目に反して補修不足で防衛力に不安がある箇所もあり、俺が魔法で色々と直す羽目になっていたのだ。

「捕虜を返した時点で、疑われてはいないはずです」

最初に反乱軍に包囲された時に、先の攻城戦で捕虜になった全員を解放している。

残しても管理が面倒であるし、彼らも食料を消費してしまう存在だからだ。

無条件の解放なので、トヨツグさんは『奮戦した敵軍の兵士達に対する敬意の表れである』というそれらしい口上を反乱軍の指揮官に述べていたが、敵軍は食料を無駄に消耗する捕虜を負担に思えたからだと確信したはず。

身代金や捕虜交換も経ずに帰しているので、向こうは俺達が食料消費を抑えるために苦渋の決断をしたと思っているはずだ。

「もう少し油断させないとな」

俺達がターベル山地砦を占領した直後に突然現れた反乱軍によって逆に包囲されたという事は、他の占領地でも同じ事が起こっているはずだ。

テレーゼは、間違いなくその後詰めで兵を出さないといけない。

兵力数や重要度的にうちが後回しになる可能性は高く、ならば時間を稼いでおくのが上策であろう。

「バーデン公爵公子達を優先するだろうからな」

「ええ……」

余計な攻勢案を出して自爆したバーデン公爵公子であるが、有力な味方なので見殺しにも出来ない。

彼が戦死をすると、ニュルンベルク公爵に囚われているという彼

の父親バーデン公爵の身を案じて、バーデン公爵家が反乱軍側に寝返る可能性もあったからだ。

「それに、ここはすぐには落ちない」

「そうですね」

既に修理と強化を終えた城壁を降りて二人でミズホ伯国軍の陣地に行くと、そこではトヨツグさん以下の幹部が食事を取っていた。

メニューは、焼いたパンに野菜と肉をショウユで煮た物がメインになっている。

あとはこれに、魔の森産のフルーツやチョコレートなども支給していた。

通常であると、軍の食事は兵士と騎士以上で大きな差が存在している。

貴族の中には専門の調理人まで連れて来る人もいるそうだが、今回はみんな同じ食事を取っていた。

兵士達の士気や精神状態が重要となる籠城戦なので、幹部だけで酒や美味しい物を食べていると思わぬ敗北を迎えてしまう可能性があるからだ。

「魚が食いたいな」

「早くあの連中をぶち殺して、一杯やりたいものじゃ」

「十分に食えるだけで贅沢であろう。バウマイスター伯爵様がいなかったら、今頃は食料は尽きておったぞ」

ミズホ伯国軍の幹部達は、出された食事を早食いで食べている。

戦争中なので、早く食べる事が肝要でマナーでもあるからだそうだ。

「明日は、米を提供していただけるそうで？」

「ええ。南方産の米ですが……」

トヨツグさんの問いに、俺は答える。

子供の頃に初めて手に入れた時には美味しいと思ったブライヒブルク産の米であったが、ミズホ伯国産の米に比べるとどうしても味が落ちてしまう。

南方は気候が温暖で水も豊富なので二期作が可能なのだが、年に一回しか米を作れない北方に比べると味では負ける。

寒暖の差が激しい方が米は美味しくなる。

これは商社マン時代から、良く聞いている話だ。

新潟や東北地方産の米の評価が高く、西日本の米がさほど有名でないのにはそういう理由も存在するのだ。

他にも水の質なども左右するが、これも雪解け水などが使えるミズホ伯国の方が有利である。

更に収量は落ちるが、実は山地で作られる米も味が良くなりやすい。

実際に、ミズホ伯国産の米で山地で作られている米は収量が少ない分値段が高かった。

俺も購入していたが、試しに炊いてみると本当に美味しい。

まるで、コシヒカリでも食べているようなのだ。

その代わりに、値段は十キロで二シュ、日本円で約二万円であったが。

高級品として帝国中に輸出されているので、この値段になってし

まうそうだ。

「米が食えれば文句はありません。それに、酒まで提供して貰って感謝しております」

一度だけ例外処置として、全員にコップ一杯分の酒も提供していた。

大量に持っていた砂糖を材料に、魔法で強引に醸造したラム酒のような物であったが、いきなりの籠城戦で酒の準備が出来なかった兵士達には好評であった。

「本当は、もっと色々とあるのですが……」

兵士全員に分配できない品は、全て封印していた。

自分達だけで美味しい物を食べていると、兵士達の不興を買ってしまうからだ。

籠城戦という閉鎖空間の中での不協和音は些細な事から爆発的に広がるので、幹部だけで特別な物を食べたり酒を飲んだりする行為は禁止となっていた。

「バウマイスター伯爵様秘蔵のワインを、相場の五倍でもいいから買って飲みたいのが心情ですがな。それはここを切り抜けてからにしましょう」

「切り抜けられたら、もっと安く売りますよ。いや、一本提供しましょう」

「それはありがたい。そのワイン分は後で暴れましょう」

それに、実は既に利益も出している。

籠城に必要な食料は大部分俺が提供していたが、別に無料ではない。
請求は全てテレーゼに出すし、その額は相場よりも大分高くしている。
輸送費分を上乗せして請求しているからだ。
『ヴェル。相場の三倍で本当に構わないの？』
請求書を書くのに必要な、提供した食料の帳簿をつけているイーナが俺の指示に確認を求めた事があった。
きっとボッタクリ過ぎだと思ったのであろう。
『この事態を招いたテレーゼの失態だからな』
補給の失敗は総大将であるテレーゼが負うべき責任であり、その尻拭いをしているのは俺なのだから増額報酬は当たり前であった。
それに、あまりテレーゼが俺に借りを作るのは良くない。
『他の家臣や貴族達に、戦果は挙げたがガメつい男だなと思われた方がいい』
向こうで、勝手に貸し借り無しだと思ってくれるからだ。
今までの戦況から見るに、テレーゼが勝っても帝国は暫く国内の立て直しに苦労する羽目になるであろう。
その帝国に、俺が手を出すなどと思われると面倒であった。
傭兵としてガメつく報酬を取った方が、実は彼女のためになるわけだ。
『テレーゼ様だからヴェルの思惑は理解していると思うけど、出費

が嵩んで泣いているでしょうね』

『そこまでは責任は持てないな』

こんな会話もあり、俺達への報酬の捻出にテレーゼは苦労しているはずだ。

下手に土地や利権を与えれば周囲から反発が出るし、借金にするとまた俺達に借りが出来てしまう。

テレーゼは、俺達への報酬を一括で支払う義務があるのだ。

「ミズホ伯国の人間としては、帝国政府が多少弱っていた方が好都合ですからな」

保護国とはいえ、ニュルンベルク公爵のような人物には枚挙にいとまが無い以上は、ミズホ伯国は常に帝国を仮想敵国として生き残らなければいけないからだ。

今回の参軍も、決して善意だけで引き受けているわけではなかった。

「何にしても、その報酬は勝てないと貰えないですからね」

「確かに、勝たないと意味がないですね」

そんな話をしてから数日後、遂に反乱軍は動いていた。

少しずつ様子でも見るかのように、ターベル山地砦正面門前の山道を登っていたのだ。

山道の幅の関係で、正面門に一度に襲いかかれる軍勢は二千人ほどであろう。

だが、交代で攻められれば反乱軍は一万人なのでターベル山地砦を落とされる危険性があった。

「魔法使いは要人警護か……」

先のヴィルマによる狙撃に警戒して、人数が減った彼らは貴族などの護衛にあたっていた。

軍勢を詳しく観察すると、彼らは反乱軍に参加した諸侯軍の混成部隊のようだ。

狙撃された魔法使い達の最期を直接目にして、自分の身を守る事に専念させているらしい。

「間違ってはいない。貴族の当主が死ぬと面倒だから」

トップが消えるので、諸侯軍の混乱は必至だからだ。

自分だけ戦死傷を避けようと見られてしまう者も多いが、それは今までの行いの差であろうから俺からは何も言えない。

「どうするの？　ヴェル」

「新兵器の実験をする」

「この巨大な麻袋を投げればいいの？」

「ルイーゼの怪力で頼むよ」

「ボクは魔力で力を増やしているだけで、普段はそうでもないけど……」

俺から怪力扱いされて少し不満なようであったが、ルイーゼは足元に準備していた直径ニメートルほどの巨大な麻袋の球を行軍中の敵軍に向けて投げていた。

魔力のせいで数百メートルも飛んだ麻袋を兵士達は慌てて避けていたが、俺は地面に落ちる直前の麻袋に魔法で着火を行う。
なぜか中心部から大爆発を起こした麻袋からは、岩の鋭い破片や鋳溶かすしか使い道が無い金属片、俺が作成した銃弾などが詰められていて、周囲に飛び散って多くの兵士達を死傷させる。
威力の関係で、貴族に降りかかった破片は護衛の魔法使いによる『魔法障壁』で防がれていたが、別に目標は貴族ではない。
なるべく多くの兵士達を死傷させる事にあり、攻城戦を断念させる事にあった。

「全部投げちゃって」

「こういう武器なんだ。凄い威力だね」

準備していた破片入りの麻袋は合計で十個、全て無事に行軍中の兵士達の近くで破裂して多くの死傷者を出す。
死者はそれほど出ていなかったが、破片で負傷した兵士は多い。
重傷者は無事であったり軽傷の兵士達によって後方に下げられていく。

「治療が終わるまで攻撃には参加できないわけだ」

加えて、あまり充実していないはずの従軍神官達への負担も増す事になる。
多くの怪我人を治療して魔力を失い、魔力が回復しない内に無理に攻勢を強めれば、負傷者が治療できないで助けられない事態も考えられる。
完全に時間稼ぎのためだけに準備した物であった。
死者も三桁以上は確実に出ているので、攻撃兵器としても有効であったが。

「悪辣だねぇ。ヴェルは」

「うん。褒め言葉だと思って受けておこう」

「旦那様としては、頼もしい限りだね。でも、何で爆発したの？」

「使わないクズ魔石を使ったんだ」

地球ならば火薬を使うのであろうが、俺に火薬製造の知識は無い。木炭、硫黄、硝石が原料だと聞いたような気もするが、実際に配合するのも面倒だし、配合中に爆発でも起こせば面倒だ。

それに、この魔法優位の世界で魔法が使える俺がなぜ火薬を普及させなければいけないのか？

誰かが発明してしまえば仕方がないが、実はその点も心配していない。

ミズホ伯国が、魔力で弾を撃ち出す魔銃を実用化してまったからだ。

間違いなく、両国はこれの普及に全力を注ぐようになるはずだ。

「魔石を？」

「多少の工夫は必要だけどね」

魔物を狩って得られる魔石には、小さかったり籠っている魔力が少なかったりであまり値段にならない物も多い。

魔道具作りで薪や炭のように消耗品扱いする使い方もあるのだが、需要がそこまで無いので冒険者ギルドに買い叩かれてしまうのだ。

古代魔法文明時代ならば、大量のクズ魔石から魔晶石を製造する

技術もあったそうだが、生憎と今は研究中である。
魔道具ギルドと魔導ギルドが試作する量程度で需要が増えるわけもなく、俺は集めたクズ魔石を無駄に死蔵していた。

このクズ魔石を麻袋に入れてドッヂボール大ほどのコアを作り、そこに『同調』の魔法をかけて魔力の質を変質させておく。
次に、大量の石片やクズ鉄、銃弾などの中心に入れて先ほどの巨大な麻袋を作り、遠方に投げさせてちょうど良いタイミングで爆発魔法を発生させる。
炸裂弾と同じ効果を狙った物だが、ここで鍵となるのは魔力の『同調』である。
わずかに違う自分の魔力とクズ魔石の魔力の質を『同調』させる。
これをするとクズ魔石の魔力量が半分ほどに減ってしまうが、これをしないと遠方から着火させる事は出来ない。

胡乱な方法に見えるが、今は戦争で相手は大軍なので魔力は出来る限り節約したい。
この方法だと、遠距離に同程度の魔法を放つよりも圧倒的に魔力が節約できるのだ。

「某も使えたら良いのにとしか思えぬな」

移動系の魔法が封じられているせいで、『高速飛翔』が使えない導師は魔力で腕力を強化して石を投げ続けていた。
投げる石はいくらでもあるので、それを選んだのであろう。
石が直撃した兵士は動かなくなっていたが、あまり効率が宜しくない。
導師が使える蛇の放出魔法は、威力の割に魔力の消費が激しいそうで今は使っていなかった。
反乱軍との距離もあるので、投石で十分だと思っているようだ。

「あいつら。進撃を止めないな」

俺の自家製炸裂弾に、導師の投石で数百名の犠牲を出しつつも反乱軍は次第に正門前に近づいてくる。

貴族達は数少ない魔法使いによる『魔法障壁』で守られているので危機感がなく、攻撃を続行するつもりのようだ。

ブランタークさんは味方の弓矢による攻撃を魔法で強化しながら、魔法使い達の動向に注目している。

「魔法使いが、攻撃に転じませんかね？」

「自分の守りを解いてまで攻撃命令を出せる連中がいないようだな」

反乱軍は混成部隊で、前に戦った帝国軍と選帝侯家諸侯軍の混成部隊よりも練度や装備が劣る。

ついでに、あまり軍勢の指揮にも慣れていないようだ。

ただ多数で正門に殺到できれば勝ちだと思っているのかもしれない。

「向こうも酷い物だな」

ブランタークさんは呆れ顔だ。

味方はテレーゼが完璧な主導権を取るのに苦心しているし、反乱軍は一見ニュルンベルク公爵が主権を完全に把握しているように見えるが、邪魔な貴族や帝国軍幹部の力を落とすのに犠牲を厭わぬ無理攻めを強行、いや誘導しているのであろう。

少しでも敵を削れれば良しで、駄目でも犠牲を出して力を落としてしまうのでニュルンベルク公爵にとっては好都合だ。

「短期的には良い手だと思うがな」

「長期的には最悪ですよね」

出した犠牲の回復で、帝国は膨大な時間と金を必要とするからだ。
破壊の後の再生というやつかもしれないが。

「ヴェンデリンさん。近づいて来ましたわよ」

「そろそろだな」

「魔銃隊！　ちゃんと狙えよ！　撃てぃ！」

いつの間にか城壁の上に集合していた魔銃隊による射撃が始まり、鹵獲されたバリスタや普通の矢なども大量に発射される。
正門前で多くの兵士達が撃たれて地面に倒れ、少し後方から反乱軍による弓攻撃も始まるが、これはカタリーナが一人で防いでいた。

「あまり多用は出来ませんわよ」

カタリーナは、『強風』の魔法を駆使して反乱軍からの弓矢攻撃を反らしている。
風魔法に煽られた大量の矢は、パタパタと地面に落下していった。

「治療します」

「すいません」

たまに矢が命中してしまう者もいたが、反乱軍に比べれば圧倒的

に数が少ないのでエリーゼ他数名の治癒魔法使いによってすぐに治療されていた。

「圧倒的に味方が有利ではあるが、諦めないな」

エルも、俺の傍でハルカやタケオミさんと共に弓矢で敵を攻撃していた。

まだ城壁を登って来た敵はいないので、刀を振るう機会はまだ訪れていなかったからだ。

「エル。魔銃は使わないのか？」

「すまないけど、足りないから貸してくれと言われた。元々向こうのだし、まだ扱い慣れていないから仕方が無いな」

「どうしてもミズホ伯国軍が優先されますからね」

メンテナンスは向こう持ちで魔銃を借りていたのだが、エル、ハルカ、タケオミさん共に腕前はヴィルマに遠く及ばない。

今回はミズホ伯国軍が持って来た魔銃が少ないそうで、より有効的に使える向こうに返してしまった。

同朋であるハルカとタケオミさんも同じなので、エルも素直に返すしかなかったのであろう。

「となると、あとはヴィルマの物だけか……」

ただ、ヴィルマも狙撃魔銃は使っていなかった。

一発ごとに魔力の補充が必要だし、貴族を狙っても魔法使いの『魔法障壁』によって防がれてしまうからだ。

「こちらの方が効く」

ヴィルマは、事前に集めていた岩を反乱軍に次々と落としていた。
彼女は怪力で直径二メートルほどもある岩を、軽々と城壁の下に落としていく。
当然、下敷きになった奴が生きているわけがない。

「なかなか諦めない」

既に相当の犠牲も出ているし、先ほどの炸裂弾の攻撃で出た負傷者への治療で治癒魔法使いの魔力は枯渇しているのであろう。
後方に下げられた負傷兵達は、数時間後も戻って来なかった。

「そろそろ諦めればいいのにな」

「それが出来るのなら、最初から攻めて来ないであろう」

「導師。急に正論を吐くなよ。冗談なんだから」

ブランタークさんの気持ちはわかるが、いくら落とし難い山頂の砦でも七分の一ほどの守備兵しかいない砦を奪還できなければプライドに関わるのであろう。
貴族らしい指揮官達は、犠牲も厭わずに攻撃命令を出し続けているようだ。

良く見ると、遠方から激しい身振り手振りで攻撃命令を出している。
本人は、傍にいる魔法使いに常時『魔法障壁』で守られているので危険は少ない。

兵力の無駄な消耗に何も感じず、自分は安全な場所から命令だけ出している。
こういう連中だからこそ、数で押す戦法には使えると思ってニュルンベルク公爵が彼らを指名したのかもしれない。
消耗しても特に惜しいとは思われていないのであろう。

「こちらの犠牲を抑えつつ、防戦ですね」

他の攻略部隊がどうなっているのかを確認しようがないが、この人数では助けにもいけない。
命令されても、断固拒否するしかないであろう。
負けないようにして、どうにかテレーゼがいるソビット大荒地の陣地に逃げ帰らなければいけない。
当然、このターベル山地砦は放棄するしかない。
補給も無いのに、こんな山頂の砦など維持できないからだ。

「魔銃隊！　第二小隊と交代！」

反乱軍は相変わらず勢いよく攻め寄せ、こちらの手痛い反撃を受けて死傷者を増やしている。
負傷者は回収して後送しているが、死者は放置していて、正面門や城壁の前に折り重なっていた。

「良く狙って撃てい！」

味方は、攻城部隊の後方から飛んでくる弓矢を避けながら銃弾と弓を撃ち続けている。
たまに犠牲者も出ていたが、損害比率は比べるのも可哀想なくらいだ。

「新兵器その２」

味方は数が少ないので、なるべく休養を取らせてあげたい。
そのために犠牲者の上乗せが必要だと思った俺は、魔法の袋からミズホ伯国製の新兵器を取り出していた。

「魔砲か……」

ダジャレやオヤジギャグではなく、魔法で砲弾を撃ち出す大砲の事であった。
実はこの兵器は、似たようなコンセプトの物が王国でも開発されている。
前に、そんな話を聞いた事がある。
ただ砲弾はあまり飛ばないし、魔力効率も悪くて今も採用には至っていない。
ミズホ伯国でも多少性能がマシ程度で、俺に貸与されたという事は使い道が無いと判断されたからだ。
砲身が一メートルほどもある魔砲は、照準をつけやすいようにと大八車のような木製の台車に乗っている。
これも魔銃と同じく、前込め式であった。

「ヴェル。弾は？」

「これから装填する」

ここで普通ならば、砲丸投げで使うような砲弾を装填する。
だがそれだとあまり威力がないので、先に数キロ分のクズ魔石を、続けて布袋に入れた大量の銃弾や鉄クズを装填する。
次に、魔砲に付属している魔晶石に触れて砲身内のクズ魔石を『同調』して、これで発射準備完了だ。

「照準は、なるべく敵兵の密度が高い所」

「了解」

「俺も手伝う」

イーナとエルが台車の上に乗った魔砲を動かして、その砲身を次に城壁に迫るべく集結していた後方部隊に合わせる。

「イーナ。ここでいいのか？」

「今城壁に取り付こうとしているのは、味方で十分に対応できている。次に攻め寄せようと集結しつつある敵部隊を撃った方が効率的よ」

「なるほど」

イーナの意見に俺は納得していた。

「エル。頑張って勉強しないと」

「イーナって、実は将校としての才能有り？」

「そんな物は無いと思うけど……」

二人によって魔砲の照準が無事に定まり、俺は素早く砲身内のクズ魔石を爆発させる。

爆音と共に銃弾やクズ鉄が標的へと飛んで行き、次に城壁攻撃をするために集結していた敵軍部隊の前衛をズタズタに切り裂く。

「従軍神官！　治癒魔法を！」

「さきほどの炸裂弾による負傷者の治療で魔力が尽きたそうです」

「なぜお館様は攻撃を明日にしなかった！」

クズ魔石で嵩上げして威力を増した砲撃により、反乱軍は更に死傷者を増やしていた。

丸い砲弾よりも、炸裂タイプにした方が効果があるようだ。

信管など望めないので、丸い砲弾だとどうしても効果が限定されてしまうからだ。

「次！」

「わかったわ」

「おう！」

続けて、炸裂弾による攻撃を行う。

なるべく反乱軍兵士達が集まっている場所に砲撃を行うが、弓も届かない場所で安全だと思って部隊を整えていた反乱軍は混乱し、魔力切れで治療も侭ならない。

増え続ける犠牲にようやく心が折れたのか？

昼過ぎになってからようやく撤退を開始していた。

「ヴィルマ！」

「任せて」

勿論、反乱軍の方が圧倒的に数が多いので追撃は行わない。
だが、ヴィルマに狙撃を行わせて敵を減らしておく必要があった。

ヴィルマは狙撃魔銃を構え、俺はそれに魔力を供給しながら背中を向けた魔法使いの中で一番魔力量が高い奴を探す。
とはいっても、そういう奴は貴族指揮官の傍にいるのでわかりやすかった。

「あいつだ」

ヴィルマに指示を出すと、すぐに標的に照準を合わせて引き金を引く。
既に弓矢の有効射程距離の数倍も距離が離れていたが、俺の魔力で威力が強化された銃弾は魔法使いの頭部を柘榴にように破壊していた。

「次はあいつだ！」

「わかった」

あり得ない距離からの狙撃に、反乱軍は撤退の速度を早めた。
どうやらあと一人が限界のようだ。

「逃がさない」

ヴィルマの射撃はもう一人の中級魔法使いの頭部を吹き飛ばし、これでようやく今日の戦闘が終了するのであった。

「エリーゼ。すまないが」

「いえ。これは、神官でもある私の役目です」

戦闘終了後、俺達は反乱軍が大分後方まで下がったのを確認してから門を開けて死体の処理を行う事になる。

とはいっても、いつ反乱軍が攻撃を再開するかもしれないので、遺体の埋葬などは行えない。

使える物を剥ぎ取り、ある程度纏めてエリーゼ達神官が事前に作っていた聖水を振りかけてお祈りを捧げる。

これをしておかないと、魔物の領域で無くても稀に死体がアンデッドになってしまう事があるからだ。

「戻ろうか？」

「はい」

数時間後、一緒に作業を行ったミズホ伯国軍の兵士達と共にターベル山地砦に戻る。

エリーゼと手を繋ぎながらであるが、こうでもしないと死体の山で陰気な考えしか浮かばなくなってしまうからだ。

「ヴェル。夕食が出来ているわ」

「ありがとう。イーナ」

明日も攻撃があるはずなので、食事を取って早めに寝てしまうに限る。

それでも、俺達には夜警などが割り振られていないだけマシであろう。

地形的に夜襲を試みてもすぐに見付かってしまうので意味は無いが、こちらの士気を落とすために攻めるフリくらいはしそうなので警戒はしていたのだ。

「無理をさせているなぁ……」

この状況で妻達と夜の生活などあり得ない。

俺達は、男子用と女子用のテントに分かれて寝ていた。

魔法使いは寝ないと魔力が回復しない。

いつ魔力が必要になるかわからないので、常に休む事を優先される。

エル、ハルカ、タケオミさんは、貴重な魔法使いを失わない盾としての役割を期待されているので交代で俺達のテントを護衛している。

ミズホ伯国軍からも人を出しているし、彼らは三交代制で反乱軍への警戒も怠っていない。

休む時間は十分に与えられているのだが、慣れない戦闘と死体の山ばかりで精神が休まらなかった。

だが、男である俺が弱音を吐くわけにはいかない。

エリーゼ達は、女性の身でそれに耐えているのだから。

「みんな。伯爵様が旦那だから付いて来ているんだ。辛いとは思っても、表面上は口には出さないさ」

「なら。それを聞かないのが情けですか……」

「伯爵様といると恵まれた待遇は受けられる。だが、こういう不測の事態に巻き込まれやすい。それに耐えられない奴は、伯爵様からの恩恵を受ける資格は無い。エリーゼ達は、それがわかっているから戦っているんだぜ」

この世界は、そんなに甘くない。

俺が養える人間の数には限度があり、こちらからの恩に奉公や忠誠で答える必要がある。

それは妻も同じで、そこに甘い色恋沙汰など関与する余地は無い。

地球の恋愛創作物の世界から見れば、ブランタークさんが語る価値観はおかしいと思われるのであろう。

「（日本も、昔はそうだったみたいだけど……）それにしても、このアホみたいな作戦の結末ですよ」

「テレーゼ様は、軍の指揮権を纏め切れなかったな。バーデン公爵公子達の勇み足を防げなかった」

冷徹な貴族としてのテレーゼは、ある程度の失敗は織り込んだのであろう。

致命傷になる前に救出して、その貸しを利用してバーデン公爵公子よりも優位に立つ事を考えている可能性が高い。

だが、別に好んで兵を出しているわけでもないミズホ上級伯爵は面白くない。

無駄な犠牲を出しているし、俺達だって言いたい事が山ほどある。

「それを言えるかどうかもわからないがな。言えるように寝ようや」

「導師って、どんな時でも良く寝てますよね」

「神経にオリハルコンの芯が通っているんだろうな……」

俺とブランタークさんは、導師のイビキに耐えながらも疲れているので就寝してしまう。

そして、それから三日間は防衛戦闘に従事し続けたので詳しい描写は割愛しようと思う。

弓、魔銃、魔砲によって次々となぎ倒されるも、なぜか攻勢を止めない反乱軍の兵士達。

既に損害は数千人にも達しているはずであったが、一向に攻勢を止めないのだ。

「頭がおかしいのと違うか？」

「いえ。もう少しで落とせると思っているのでしょう」

その日の夕方、全員で夕食を取っていると救護を担当しているエリーゼが自分の意見を述べる。

「現時点で、ミズホ伯国軍の戦死者は百二十三名にも達しています」

「もう少しで一割か……」

俺達の中には、当然死者はいない。

たまにエルやタケオミさんが負傷していたが、軽傷なのですぐにエリーゼが治してしまうからだ。

「一割はキツイな」

ゲームでならともかく、実際の軍勢で一割以上の犠牲を出すとかなりキツイ。
士気が落ちてしまう事も珍しくない無いのだが、それがないミズホ伯国軍は真の精鋭と言っても過言ではなかった。

「はい。向こうは既に四割くらいは失っているはずなのですが……」

最初の、反乱軍の総数は一万人という数値はあくまでも推定だ。
なぜなら、地形の関係で反乱軍は全軍でこのターベル山地砦を攻められない。
最高でも三千人までしか一度に攻められないので、それが余計に損害を増やしているのかもしれない。
だが、いくら殺しても次々と新手を投入する反乱軍に、ミズホ伯国軍の中でも懸念の声が上がり始めていた。
いくら殺して大戦果を挙げても、最後には数に押し潰されるのではないかという不安が広がりつつあるのだ。

「すまないな。苦労をかけて」

「いえ。私は、戦闘には参加していないので」

「参加しているじゃないか。後方支援が無い軍なんて瞬時に崩壊するから。それに、エリーゼがいなければ死者は倍以上になっていたはずだ」

普通の男でも後ずさってしまいそうな重傷者を、彼女は血塗れになりながら治療を続けていた。
そのおかげで、ミズホ伯国軍兵士達の間でもエリーゼは聖女扱いされている。

同時に、『あんなに美しい聖女様を妻にしているバウマイスター伯爵はいいな。代わって欲しい！』という風聞も流れ始めていたが。

「あなたにそう言っていただければ嬉しいです」

エリーゼの治癒魔法は、かなりの重傷者でも治せてしまう。

ミズホ伯国軍本軍ならともかく、トヨツグさんが指揮するこの別働隊の中でエリーゼに匹敵する治癒魔法使いなど存在せず、だからこそここまで戦死者を抑えられたのだから。

「私は、利き腕にだけ余分に筋肉がついてしまったわ」

イーナは、俺の傍で魔砲の照準を手伝ったり、投擲機を使用して槍を大量に放っていた。

反乱軍が引き揚げると、戦死者が持っていた槍を大量に回収してそれを投擲していたのだ。

血塗れで何度も回収されているのでボロい槍ばかりであったが、投げるのには不都合は無かった。

魔力で強化された槍は多くの反乱軍兵士達を死傷させていたが、もう一つ、イーナには戦術眼のような物があるようだ。

魔砲の照準を、攻め寄せる反乱軍の攻勢を崩壊させる位置に的確に合わせたり、各部隊の連携を阻害する位置に合わせるのが得意であったからだ。

『イーナ。何でここに攻撃するの？』

『この部隊が次に正面門の破壊を試みているからよ。今正面門の破壊を試みている部隊は、既に損耗も激しいく足を止められている。

撤退は時間の問題だから、これは他の味方に任せればいい』

『イーナは凄いな。なぜわかるのかが不思議だ』

『このくらいの判断は、指揮官なら普通にするでしょう』

『でも、イーナには指揮官の経験が無いじゃないか。本を読んでいたからか？　妙な恋愛物だけを読んでいたんじゃないんだな』

『エル。気を悪くするわよ』

『すまん。俺にちょっとそういう事を教えて。トリスタンさんの教育は戦争のせいで中断しているから』

こんなやり取りがあったようで、エルは夜にイーナから戦術論などを教わっていた。

意外にも、彼女はそういう本をかなり読んでいたようだ。

イーナはエルの良い先生になっていたが、一人だけ気を悪くしていた人がいる。

『確かに、私では教えられませんけど……』

ハルカがヤキモチを焼いてしまったのだが、彼女もエルと同じで剣の技量優先で軍の指揮などは知識が無かったので教えられなかった。

イーナにも無いが、彼女は知識をちゃんと得ている。

これは、勉強をしていなかったハルカのミスであろう。

『兄様は、エルさんに教えられないのですか？』

『ハルカよ。サムライは、ただ刀を振るえば良いのだ』

『……』

ならばと、自分の兄に頼んだらしいが、この兄もその方面では頼り無かった。

元々使用人くらいしか雇えない小身の陪臣家の出であるし、抜刀隊はただ目の前の敵を斬れば良いという教育しか受けていない。

少し普通の軍隊とは性格が違っていたのだ。

『兄様は、まるで頼りになりません』

『なっ！』

ハルカは珍しく毒舌を吐き、タケオミさんはそれに物凄いショックを受けていた。

シスコンには、厳しい一撃だったかもしれない。

『ハルカさん。俺は人の奥さんに手を出すような真似はしない！それにもしイーナが独身でも、イーナはありません。だって、あいつ怖いし』

『どういう意味よ！』

エルは上手くハルカを宥めたようだ。

逆に、イーナの機嫌は思いっきり損ねていたが。

『どうって、そのまま』

『ヴェルからは、そういう事は一回も言われた事は無いわよ！　ヴ

エルは私の髪が綺麗だとか、肌が綺麗だって褒めてくれるし』

『いや、そんな人様のノロケとかいらんわ』

イーナにも色々とあって大変であったし、今の彼女の目下の悩みは槍の投擲で腕に導師のように筋肉が付いてしまうのではないかという事のようだ。

両腕を見比べながら溜息をついていた。

「大丈夫じゃないの？　ルイーゼとかヴィルマは全然そういう様子も無いし」

「ボクの悩みは、『その筋肉を上手く胸に集めて大きく出来ないのかな？』という事だね」

戦闘の悲惨さなど、今さら言うまでもない。

あえて口に出さないのは、一時でもそれを忘れるためであった。

「ボクも、ヴィルマも、導師も。石ばっかり投げているから」

移動系の魔法を封じられたので、導師とルイーゼは空中戦闘を封じられている。

まさか反乱軍が押し寄せているのにターベル山地砦から一人で出るわけにもいかず、『魔法障壁』や巨大な岩を投げるだけの仕事に従事していた。

この三人が投げる岩なので、攻め手からすれば災厄でしかないのだから。

実際に、多くの反乱軍兵士が岩に潰されて死傷している。

「戦いはまだ何とかなるけど、外の情報が入って来ない」

「ヴィルマさん。その情報の元が来ましたわよ」

カタリーナの視線の先には、先ほどトヨツグさんのいる本陣に向かったタケオミさんの姿があった。

彼は席に座ると、早速に報告を始める。

「バウマイスター伯爵様。ようやく本陣からツバメ便が来ました」

孤立しているターベル山地砦に伝令など送っても無駄なので、通信用のミズホツバメが手紙を送ってきたらしい。

「それによりますと、我々以外は惨敗したようです」

わざと兵員と物資を引き揚げた手薄な拠点を簡単に落とせて油断したところに、補給を絶って大軍で包囲する。

食料が不足しているので籠城は不可能であり、脱出を図ったところを攻撃されて惨敗したと文に書いてあったそうだ。

「壊滅は、テレーゼ様が後詰を出したので防げたようです。反撃でかなりの損害を与えたとも」

「よそ様は良かったようだけど、うちはどうしようか？」

俺達は敗北はしていないが、いまだに反乱軍の包囲下にある。

食料の問題もあってそういつまでも籠城など出来ず、どうにか撤退する方法を模索しないといけない。

「幸いにして、援軍が向かっているそうです」

「では、挟み撃ちか？」

援軍と俺達を攻撃している反乱軍が激突したら、こちらも打って出て敵を挟み撃ちにする。

誰でも思いつきそうな策であったが、現実の戦争とはそういう物であった。

そう簡単に、奇策など使えないのだから。

「ここを出る準備をしておくか……」

夕食後にトヨツグさんと作戦会議を行い、いつ援軍の戦闘が始まってもいいように撤退の準備だけは進めておく事にする。

砦は持って帰れないが、他の物はなるべく全て持って帰ろうとしたのだ。

今の戦況で、このターベル山地砦を保持すること事が無謀であった。

「時間的に言うと、今夜か明日の早朝だな」

最悪な事に、味方は商業都市ハーバット攻略を目指した主力以下全てが敗北している。

手をこまねていると、勝利の余勢で更に大軍がこのターベル山地砦の包囲に参加する可能性が高い。

「私達。全滅の危機にあるの？」

「ある」

イーナの言う通りで、俺達は全滅の危機にある。

いくら俺達が奮戦しても、徐々にトヨツグさん以下のミズホ伯国

軍の損害は増えている
食料だって、たまたま俺が大量に魔法の袋に入れてあったから今は飢えていないだけ。
このままでは、あと一週間ほどで食料が尽きる計算であった。

「援軍は、今夜に夜襲をかけてくる可能性があるな」

「夜襲が出来るほど練度が高いの？　フィリップ公爵家の軍勢は」

「最低限の訓練はしているはず」

大敗北はしたが、あのブロワ辺境伯家諸侯軍でも夜襲は行えていた。
ターベル山地砦に目が向いている反乱軍の後方から襲い掛かるくらいは可能なはずだ。

「主力を救うのに傾注しているはずだから、私達への援軍はそれほど多く無いと思う。ヴェルの考えが正しいかも……」

「俺も出まかせ言っているかもしれないぞ」

「いや。それほど荒唐無稽な意見でもないのである」

「導師の言う通りだな。荷物を纏めておこう」

トヨツグさん達も、俺達と同じ結論に至ったらしい。
夜になるまでに全ての荷物を纏め、全ての馬に馬具を装着して見張り以外はゴザの上に寝て夜戦に備える。
ウトウトしながら日が変わる直前になると、突然ターベル山の麓から火の手があがる。

続けて、馬の走る音や、人の掛け声、悲鳴などが混じって聞こえてきた。

「バウマイスター伯爵様。行きましょうぞ」

「敵の策で偽装と言う可能性は？」

「無いと存じます」

「では、本陣に帰りましょうか？」

俺達は全軍をあげ、一気にターベル山地砦から出て唯一存在する山道を麓に向かって下っていく。

すると、俺達を何日も攻め立てていた反乱軍が後方から味方援軍の夜襲を受けて大混乱していた。

陣地に火矢を放たれ、騎馬隊によって踏みにじられ、死傷者が増大して既に軍隊の呈を成していない。

「壊滅させろ！」

この中で一番爵位が高い俺が、自然と命令を出す事になる。

今俺達がすべき事は、援軍の夜襲を助けて反乱軍を壊滅させ、その追撃を防ぐ事にあった。

「了解なのである！」

今までは防衛戦で投石しか出来なかった鬱憤を晴らすためなのであろう。

導師は『魔法障壁』を体に纏わせると、単独でまだ敗走していな

い敵軍へと突入していく。

「何だ！　あの化け物は！」

「下らぬ戦を先に起こした己等に言われたくないわ！」

導師がパンチや蹴りを放つと、フルプレートを纏う騎士ですら首をへし折られ、頭部や服部のプレートがあり得ないほど凹んで地面に突っ伏してしまう。

あれでは脳や内臓に致命的なダメージを受けて即死であろう。

兵士達については、言うまでもない。

導師に殺されないようにするには、彼の進路を塞がないで逃げる事だけなのだから。

単純な戦闘力では、間違いなく師匠でも勝てないはずだ。

「伯爵様。感心しないでいくぞ」

「はい」

俺達は、ミズホ伯国軍と共に援軍と同士討ちにならないように反乱軍へと斬り込んでいく。

抜刀隊と、タケオミさん、ハルカ、エルもオリハルコン刀を試すべく先陣で切り込んでいく。

「やあやあ！　我こそは！」

「チェスト！」

バカな事に、この状況で名乗りを上げたバカな貴族がいた。
ブロワ辺境伯家とのような紛争であったら礼儀に則った行動であったが、今はただのバカである。
エルの一撃で、剣を斬られて武器を失っていた。

オリハルコン刀の威力が証明されたわけだが、金属を斬るには相応の技量が必要であり、エルも厳しい訓練で腕を上げているようだ。

「ワシはヒルデスハイム子爵だぞ。捕虜としての待遇を」

剣を斬られた敵貴族が降伏しようとするが、この状況で捕虜など取る余裕はない。
エルに一撃で首を刎ねられていた。

「逃げればいいのに」

「ハルカさん。前に行くぞ」

「はい。エルさん」

「妹よ。俺もいるのだが……」

三人は俺達の前に出て次々と敵兵を切り殺していく。
ブランタークさんもカタリーナと共に、小規模な『ウィンドカッター』で敵兵を次々と切り裂いていた。

「させるか！　我こそは、『突風』のアレン！」

「知らねえな。逃げなきゃ殺さざるを得ない」

「はんっ！　貧乏なフィリップ公爵家に雇われた冒険者崩れの癖に！」

自分こそが半端な雇われ者の癖に、ブランタークさんの前に立った魔法使いは偉そうに口上を述べていた。

「お師匠様を知らないなんて……」

「カタリーナの嬢ちゃんよ。俺は別に男に顔を知られていなくても構わないさ。それにな……」

「ジジイ！　余裕そうだな！」

「ああ。お前はもう死んでいるし」

「死んで？」

ブランタークさん密かに放っていた『ウィンドカッター』が、後方からその魔法使いの首を斬り飛ばす。

『突風』が気が付かない内に、ブーメランのように『ウィンドカッター』を飛ばしていたのだ。

「初級か。後ろに『魔法障壁』を張る余裕はないのはすぐにわかったさ」

ブランタークさんは、首の無い『突風』を一瞥してからすぐに別の標的を探し始める。

攻撃は更に続いてたが、それから一時間もしない内に反乱軍はほぼ全て討たれるか、陣地から敗走していた。

「俺の出番が無い……」

「ヴェルは、魔力を残しておかないと」

「無事に戻るまでが戦争だからね」

ルイーゼが、小学校の先生のような事を言う。

確かそれは、『遠足は家に帰るまでが遠足です』だったような気がするけど。

「いや。ルイーゼ。戦争自体はまだ完全に終わっていないから」

「そうだった。戦闘に修正しておくよ」

ターベル山地砦を攻めていた反乱軍は壊滅したが、無事に本陣まで撤退できるかどうかはまだ不透明であった。

こちらを討つために、反乱軍の新手が追撃してくる可能性もあったからだ。

「やあ。無事だったかい？」

「何だ。援軍の指揮官はアルフォンスか」

「テレーゼから言われてね」

残敵の掃討をほぼ終えた頃に、俺達はようやく援軍を指揮していたアルフォンスとの再会を果たす。

彼は、テレーゼの命令で四千人の援軍を率いて来たそうだ。

「意外と指揮官振りが板についているな」

「全部部下がやってくれるからね」

本人の武芸はからっきしであったが、やはりアルフォンスは優れた指揮官の資質を持っているようだ。

「では、とっとと逃げようか。その前に、十五分だけだぞ！」

何が十五分かと言えば、戦場での戦利品の収集行為で使える時間であった。

死体から、武器や防具、持ち物、陣地に燃え残っている物資などを持って帰るのだ。

戦争には金がかかるし、戦利品は命をかけて戦う兵士達に認められた正当な権利である。

特に今回は内戦なので、もしこれから町などを占領して住民達からの略奪は禁止されている。

違反者は首を刎ねるとテレーゼが布告しているので、あとは敵軍から奪うしかないというわけだ。

「バウマイスター伯爵達は、人数が少ないから大儲けでしょう？」

「まあ。儲かるけどね」

貴族や騎士が持つ高価な武具や所持品に、魔法使いには魔法の袋を持っている者も多い。

当然、討った人間に権利があるので、傭兵としての俺達は儲かっている。

「儲かればいいというわけにもいくまい。今回の作戦は特に……」

無駄な作戦で包囲殲滅されかけたのだ。
俺達も怒っているが、特にトヨツグさん以下のミズホ伯国軍に不満の種が広がっている。

「テレーゼが、ミズホ人を戦後の帝国統治のためにわざと減らしている。諸侯軍の力を奪っていると憤っている者もいる」

「まずいな……」

トヨツグさんがアルフォンスに挨拶に来ないのには、そういう事情もあったのだ。
公式には、撤退に向けた軍の再編成と死傷者の確認のためと言っているが、そんな言葉を信じている者は一人もいなかった。

「ニュルンベルク公爵の謀略に乗せられているな」

「何でもかんでもニュルンベルク公爵のせいにするなよ」

有能な敵なのであろうが、今回はテレーゼがちゃんと軍の単独指揮権を確保できなかっただけの事である。
こちらの不協和音を煽る謀略の類については、これはお互い様なのだから。

「戦争はミスが少ない方が勝つ。これからは、テレーゼのミスの方が少ない事を祈るよ」

「うむ。至言であるな。どこかで聞いた事があるような気がするが……」

単独で戦っていた導師が戻ってくるが、彼のローブは血塗れであ

った。
俺は『洗浄』の魔法で返り血を取ってあげる。
導師はなぜかこういう細々とした魔法が苦手なのだ。
いや、なぜかというのはおかしいのか？

「すまぬな。バウマイスター伯爵。テレーゼ様には手厳しい意見であるか」

「導師様の言う通りだ。確かにテレーゼには厳しい意見だねぇ」

「総大将なら仕方がないでしょう」

導師とアルフォンスはテレーゼを庇おうとするが、俺はそれに釘を刺しておいた。
女性だからと甘やかすと、また同じ失敗をする可能性があるからだ。

「さてと時間だ」

「逃げるとしようか」

戦利品を漁る時間が終わると、援軍とミズホ泊国軍は急ぎ寝る時間も惜しんで本陣へと移動を開始していた。

「敵軍の追撃は」

「今のところはなし」

眠い目を擦り、時おり馬の上で船を漕ぎながらも撤退を続ける。
俺達は後方で殿を務めていて、たまに馬に同乗しているヴィルマ

に後方を確認させていた。
もし追撃部隊が来たら、容赦なく魔法をぶっ放して追撃の意志を挫くのが俺の役割だ。

「追撃は来るかな？　ヴィルマはどう思う？」

「多分来ない」

「だといいな」

「敵軍は壊滅したから、後詰が来ても躊躇するはず」

ターベル山地砦に籠っていた俺達を攻撃した反乱軍は、無謀な攻城戦で三千名以上を失い、続けて夜襲でも二千人は討っているはずだ。
更に言えば、夜襲で援軍が火矢を放ったのだが、それが彼らの逃走先である冬の枯れた森林や草原地帯に火災を発生させていた。

近隣に人はほとんど住んでいないらしく、また余裕も無いので消火は行っていない。
そう簡単に焼け死ぬとは思えないが、あそこから立て直して追撃をかける余裕はないはず。
陣地が燃えて食料などの物資を全て失ったのも痛いはずだ。

「貴族も沢山討った」

「魔法使いもな」

攻城戦では魔法使いが、夜襲では貴族と魔法使いが共に多く討たれている。

指揮官と最大戦力が不在では、再編成すら侭ならないであろう。

「とにかく、早く帰って寝たいな」

「ヴェル様。一緒に寝よう」

「そうだな。みんなで寝ようか」

「エリーゼ様」

「そうですね。みんなで一緒に寝ましょうか」

隣で馬を操っているエリーゼが、ヴィルマに意見に賛同していた。

「そういう寝るじゃなくて、本当に普通にベッドに入って寝たい」

「イーナちゃんの意見に賛成」

「私も、今にも瞼がくっ付きそうですわ」

今日は、六人で一緒に寝る事になりそうだ。

無事に辿り着ければ、それも良いであろう。

「あのハルカさん。一緒に寝ませんか？」

「えっ！　ですが、まだ結婚もしていないので……」

「エルヴィン。刀の錆にしてもいいか？」

「冗談ですって！」

半分寝ぼけているせいか？
冗談なのか？
エルが妙な事を口走って、タケオミさんの怒りを買っていた。
多分、添い寝くらいの感覚なのであろうが、ミズホ人に言わせるとそれでも結婚前には御法度なのであろう。
タケオミさんが怖い顔で刀を抜いてエルに向けていた。

「私達はまだ結婚していませんし。でも、そういう事は嫌いではないですよ。少し憧れのような物が……。それで、朝に優しくエルさんを起こしてあげてとか。前に見ました『若奥さん奮闘記』という物語本で……」

人間、眠気が酷いと寝言のような事を口走る物らしい。
ハルカ本人は、顔を赤く染めながら自分の世界に浸っていた。

「眠いが、我らは何とか生き残れたか」

「だが、前途は多難だぜ。導師」

「であるな」

導師とブランタークさんの表情は暗い。
俺達とミズホ伯国軍は、今回の作戦で勝利して唯一大戦果をあげた。
だが、戦略的には大敗北であり、結局千五百名中三百二十一名の戦死者を出したトヨツグさんなどはアルフォンスと必要以上に口を利かなくなった。
生き残ったバーデン公爵公子達からしても、勝った俺達は面白くないはず。

理不尽ではあるが、人間の感情とはそういう物なのだから。

「敵を大量に討ったのに、大惨敗したように疲れたな」

「まだ竜の大軍の方が楽であるな」

「言えてる」

人間同士の戦争はとにかく疲れる。

早く魔物を狩る冒険者生活に戻りたいものだ。

そんな事を俺が思っていると、その後方で導師とブランタークさんも暫く愚痴を言い合い続けるのであった。

第九十話　貴族は戦争（戦闘）で勝つとデカい顔ができる。

結局、俺達は無事にソビット大荒地にある野戦陣地へと戻る事に成功していた。
勝ちに逸る反乱軍からの追撃も予想されたが、賢明にもそれはしなかったようだ。
もしそれを行っていたら、俺やブランタークさんによる広域上級魔法の餌食にしてやったのだが。

ターベル山地砦に俺達を閉じ込めようとした反乱軍混成部隊は壊滅状態であろうし、他の軍勢も奪還した町や城塞の守備で忙しかったのかもしれない。
テレーゼもけん制のための軍勢を残したようで、俺達は馬の上で船を漕ぎながら本陣に戻る事に成功していた。

「損害を考えると思うところも多いが、他よりはマシという他はないな」

本陣の入口前では、フィリップ公爵家の家臣達やミズホ上級伯爵が出迎えてくれた。
ミズホ上級伯爵の発言は、隣にいるフィリップ公爵家の家臣達に向けた嫌味であろう。
彼らからテレーゼの耳に入る事を予想し、わざと言っているのだ。

「……（空気が悪いな……）」

内心では怒り心頭であろう、ミズホ上級伯爵とフィリップ公爵家の家臣達との間にはピリピリとした空気が広がっている。

送り出した兵力の二割以上が戦死すれば、それは色々と言いたい事もあるのであろう。

「あのクソガキは生き残ったぞ。厄介な事だ……」

続けて、ミズホ上級伯爵は爆弾発言を投下する。

ミズホ上級伯爵が言う『クソガキ』とは、バーデン公爵公子の事である。

商業都市ハーバットを一度は攻略したものの、すぐに新たな敵勢に包囲され、更に占領したハーバットには碌に食料もなく、だからと言って住民から略奪するわけにもいかずに逃げ出して撤退中に散々に追撃を受けた。

途中でテレーゼとミズホ上級伯爵が指揮する援軍によって救われたそうだが、全体の三割の戦力を失う大敗北だったそうだ。

「あのクソガキ。負けて戻って来た癖に偉そうに」

偉そうにしている理由は簡単で、もしここでテレーゼやミズホ上級伯爵に頭を下げるとバーデン公爵家の沽券に関わるからだ。

例え本人が謝りたくても、家臣達に反対されてしまう。

なるほど、アホ貴族の兵力を使い潰そうとしているニュルンベルク公爵以下の反乱軍に、水面下で主導権争いが始まったテレーゼ達にと、戦争とはミスが少ない方が勝つという格言は事実なのであろう。

本人の能力以外の理由で足を引っ張られたり、ミスをして負けてしまう事もあるのだと。

全く勉強になる物である。

とでも言わなければ、俺達は何のために山の砦を落としに行ったのだという事になってしまうのだが。

「緊急に会議があるそうだぞ。バウマイスター伯爵」

「俺に参加資格がありますか？」

「そういう形式論など、もう言っていられなくなったのであろうな」

「テレーゼ様の意図が透けて見えますね。わかりやすいほどに」

「まあ。そう言ってやるな。バウマイスター伯爵よ」

ミズホ上級伯爵と共に会議の会場に指定された総司令部のある建物に向かうと、入り口でテレーゼが待ち構えていた。

「おおっ！　大戦果であるな！　ヴェンデリンよ」

結局、一度落としたターベル山地砦からは撤退したが、少なく見積もっても戦った敵軍の半数近くを討ち取っている。

戦死を確認した貴族や魔法使いも多く、他の方面に比べれば大戦果である。

「それはどうも……」

だが、俺は憮然とした表情を崩さなかった。

元々の作戦が無謀で、もしアルフォンスの援軍が無ければ俺達は全滅か降伏するしか手が無い可能性もあったのだ。

いくら多数の攻城部隊を撃退できても、包囲されたままで食料が尽きれば万事休すだったであろう。

賭けに出て単独で敵軍の撃破と逃走を図ったとしても、それが失敗して全滅する可能性もあった。
俺達だって、下手をすれば犠牲者が出る可能性もあったのだ。

テレーゼは俺に握手を求めて来たのだが、それをわざと無視してエリーゼとカタリーナの肩を抱いて建物の中に入っていく。

「あなた」

「ちょっと！　ヴェンデリンさん！」

見た目は女好きの駄目貴族にしか見えなかったが、『両手が塞がっていてすいませんね』という挑発でもある。
エリーゼが気が付いたようで何も言わないが、カタリーナは不謹慎だと思ったらしく声をあげて驚いていた。

「貴様！」

「まずは会議の方が重要だと思うが、何か？」

テレーゼについていた家臣が俺の無礼を咎めるが、そこは建前で強引に押し切ってしまう。
向こうだって、俺が外国の貴族なのをいい事に貴様扱いなのでお互い様であろう。
大戦果とはいうが、一緒に戦って犠牲が多かったミズホ伯国軍の手前もある。
素直に彼女の握手を受ける気にはならなかった。

それに、今の状況で特別扱いなど受けても碌な結果にならない。

「テレーゼ様。俺達は本来は傭兵なんですがね」

「王宮筆頭魔導士が他国の作戦会議に出るだけで、本当ならば色々と問題があるのである」

いくらテレーゼに甘いブランタークさんと導師でも、一言釘を刺すのを忘れなかった。

「まずは会議ですよ。テレーゼ様」

「わかった。始めようではないか」

会議とは言っても、実態は軍法会議に近い。

俺が建物に入ると、中にいた貴族達があからさまに嫌そうな表情を浮かべていた。

いくら戦果を挙げようとも、俺達は所詮はよそ者なのだ。

それでも、今回の敗戦の当事者ではある。

テレーゼに求められれば、自分の考えを言うつもりではあった。

「では。会議を始めるとするかの」

まずは、珍しく真面目な表情を崩さないアルフォンスが戦況の推移と、味方の損害、推定ではあるが敵軍の損害などを発表していく。

バーデン公爵公子達は、碌に敵軍に損害を与えられずに合計で五千三百六十七名の戦死者を出していた。

ハーバットの攻略戦とその後の撤退戦で三千人以上、他の町や城塞の攻略に向かった貴族達の軍勢からも二千人以上の戦死者が出て

いる。
唯一の救いは、テレーゼによる援軍の投入が適切で反乱軍の方が損害が大きい点かもしれない。
推定で、九千名ほどを討ち取っている。

ただし、その内の五千名は俺達とミズホ伯国軍の戦果であった。
俺達やミズホ伯国軍の戦果が報告されると、露骨に嫌な顔をする貴族が三分の一ほどいる。

彼等からすれば、他国扱いのミズホ伯国が内乱で活躍して、戦後の帝国で重要な地位を占めるのが嫌なのであろう。
敗戦の責任者であるバーデン公爵公子に至っては、まるで能面のように無表情だ。

自分が大失敗をしたのは事実だが、それを原因に解放軍の主導権をテレーゼに奪われるのが嫌なのであろう。
なお解放軍とは、テレーゼ達の軍勢に通称が無いので自然とそう呼ぶようになったらしい。

敵の反乱軍という呼称は、これは正式に定められて公文書にも記載されているようになっていた。

「（みんな。静かだな……）」

以上のような経緯があり、会議とは言ってもみんなが口を噤んでいた。
テレーゼは、バーデン公爵公子の敗戦の責を問うて解放軍の指揮の一本化を図りたいが、あまり責めて裏切られでもしたら困るので切り口をどうしようか迷っている。
バーデン公爵公子は、自分への責任を少なくしてまだ主導権を握

るという希望を捨てたくない。

貴族達は、それぞれにどちらかに味方したり、どちらに付くか悩んで右往左往している。

戦争中の会議には初めて出席したが、こうも内部がグダグダだとは思わなかった。

もしかすると、反乱軍も内情は似たような物なのかもしれない。

俺は呆れつつ、同じく会議に出席している導師やブランタークさんと静かにマテ茶を飲みながら、エリーゼが以前に焼いて魔法の袋に入れてくれたクッキーを食べていた。

本陣に戻って来たばかりでお腹が空いていたのと、疲れているので甘い物を欲していたからだ。

「導師。何も決まりませんね」

「そもそも、傭兵扱いである某達には出席する必要の無い会議であるな」

「導師よ。それを言ったらお終いだろうに」

「しかし、事実であろう？　ブランターク殿」

さすがに酒を飲むわけにはいかないので、ブランタークさんはミズホ伯国で購入した煎餅を齧りながらお茶を飲んでいる。

甘いクッキーよりも煎餅の方が気に入ったようで、大量に購入していたのを見た事がありまだ在庫があるのであろう。

「（ヴェル。ブランタークさんは年寄りみたいだな）」

「（聞こえているぞ。エルヴィン）」

「すいません！」

煎餅を食べながら茶を啜るブランタークさんを見てエルが俺に小声で指摘していたが、それを聞かれて懸命に謝っていた。

とても会議に出ているようには見えない風景だが、テレーゼも含めて誰も何も言わないので逆に不気味だ。

「ヴェル。マンゴーが食べたいわ」

「あいよ」

俺が魔法の袋から魔の森で採れたマンゴーを取り出してイーナに渡すと、彼女はすぐにナイフで食べやすい大きさに切って皿に盛ってテーブルに置く。

「お腹空いたね」

「会議なら、食事の後にして欲しかったな」

「それだとお腹が一杯になって眠っちゃうかも」

ルイーゼの言う通りかもしれないが、こんな実りの無い会議に出るよりはマシだ。

会議の主役であるテレーゼ達は、お互いを見合いながら黙っている。

傭兵扱いなので俺達の席は端であり、どうせ目立たないだろうと

周囲の視線も気にしないでお茶とオヤツを楽しんでいた。
退却の際にあまり食べ物を口にしていなかったので、とにかくお腹が減っていたのだ。

「本格的にお肉が食べたい」

「そうだな。ヴィルマは大活躍だったからな。早く会議が終わって食事が出来るといいな」

ヴィルマは、試作品である狙撃用の魔銃で多くの指揮官や兵士を討ち取って大きな戦果を挙げた。
こんな下らない会議で時間を潰すよりも、早く食事を取らせてあげたいものだ。

「えらい。えらい」

「気持ちいい」

俺が褒めながらヴィルマの頭を撫でてあげると、彼女は目を細めてウットリとしていた。

「すまん。カタリーナを忘れていた」

優れた魔法使いである彼女は、ほぼ単独で魔法を駆使して大活躍していた。
これが王国の内乱ならば、領地の加増と陞爵は確実であったであろう。

「私は別に、頭を撫でて貰う必要は……」

「嫌か？」

「ええと……。ヴェンデリンさんがそうしたいのであれば……」

「したいから頭を差し出しなさい」

「仕方がありませんわね」

などと言いつつも、実際に頭を撫でてあげるとカタリーナは満更でも無い様子で、目を細めていた。

彼女は恥ずかしがり屋さんなので、こちらから言ってあげないと駄目なのだ。

と言うのは冗談で、実際には会議が進まないのでわざとこういう事をして挑発しているだけである。

『不謹慎な！』とか騒ぐ貴族を期待したのだが、彼らは俺達に一瞬だけ視線を送ってからだんまりだ。

「あっそうだ。エリーゼにお願いが」

「はい。何でしょうか？」

「食べさせて」

「わかりました。あなた。あーーんしてください」

「戦で疲れた体にフルーツは最高だな」

「エリーゼも。はい。あーーんして」

「美味しいですね」

更に挑発を続けるが、エリーゼは俺の意図に気が付いてくれたようだ。

マンゴーをカットした物を俺に食べさせてくれる。

彼女も、今回の戦いでいくら俺達が大戦果をあげたにしても、それが戦況に何ら貢献していない事を承知している。

俺の抗議を込めた挑発に、彼女も協力してくれていた。

「ボクも、ヴェルに食べさせる。はい。あーーーんして」

「私も。はい。あーーーんして」

ルイーゼとイーナも参加して、会議が行われている室内は一種異様な雰囲気に包まれていた。

憮然とした表情で何も語らない貴族達に、発言を切り出す糸口を掴めないテレーゼ、六人でフルーツやお菓子を食べさせ合っている俺達に、マテ茶を飲みながらお菓子やフルーツをドカ食いしている導師に、静かにマテ茶を啜っているブランタークさんと。

ただ時間だけが経過するが、遂に一人の貴族が堰を切ったかのように俺達を非難し始める。

ようやく堪忍袋の緒が切れてくれたようだ。

「権威ある会議に、傭兵風情が何をしているか！」

悪趣味で派手な装飾のついた服を着た中年の太った貴族で、推測では伯爵くらいであろうか？

貴族を、それも沢山いる他国の貴族をなかなか覚えられないで困ってしまうが、多分覚えなくてもそう問題は無いかもしれない。

何しろ、俺達は傭兵なのだから。

「何をと聞かれれば、あまり飲み食いも出来ない状態で撤退して来たので、食事の前の軽食ですよ」

「そういう事は会議の後にしろ！　貴様は会議の権威を何と心得る！」

「権威ですか？　この一向に誰も喋らない会議にですか？」

俺の指摘に、全員が顔の表情を渋くしていた。

敗戦なので戦訓を得たり責任者の処罰や叱責を行う会議は必要だが、誰も処罰されたくないし、バーデン公爵公子は今回の敗戦の責任を取らされて次期皇帝争いのレースから降ろされる事を恐れて何も言わない。

テレーゼも、下手に処罰するとバーデン公爵公子が離反すると思って発言を躊躇している。

こんなところであろう。

だからと言って、何も発言しないでだんまりでは、会議を開いた意義が無いというものだ。

「一部戦術的には勝ったような気もしますが、戦略的には大敗北なのでとっとと反省して次に挑みませんか？」

「損害は、反乱軍の方が多い……」

「ニュルンベルク公爵には、織り込み済みの損害ですよ」

この二回の戦闘でわかった事だが、ニュルンベルク公爵は一番信頼できる自身の諸侯軍の精鋭、同調する帝国軍や貴族の軍勢をほとんど出していない。

ターベル山地砦を囲んだ軍勢など、あきらかに当主がバカだが兵力や経済力は侮れない連中を潰そうとした意図がある。

テレーゼ達が出した援軍が予想以上に成果を挙げているのも、彼らは数は多いが二線級以下の軍勢で弱いからだ。

「弱いですけど、戦えば確実に味方は損害を受ける。それを蓄積させればこちらは消耗した状態で、ニュルンベルク公爵は信頼できる軍勢が無傷のままで決戦になりますね」

元々、中央と南部を抑えている反乱軍の方が優位なのだ。

兵員の動員能力では、向こうの方が上であった。

「ニュルンベルク公爵がいまだに出て来ない最大の理由ですね。彼は冷静に自勢力とこちらとの兵力差を計算して兵を出している」

「しかし、我ら高貴な貴族達がこうも簡単にニュルンベルク公爵の意図に乗せられて……」

「乗せられそうな方々を選んでいるのでしょう」

貴族だからと言って、全員が優秀なわけがない。

俺も今までに、優秀な貴族とそうでない貴族の両極端を見てきた。

教育環境は平民よりも良いので、多分知識のある人の割合は多い。

だが知識だけで、応用力の無い人や、生まれのせいで傲慢で自分勝手な人も多く、彼らは自分達だけ『魔法障壁』で身を守りながら戦闘を行って犠牲を多く出した。

案外、貴族以外の人と資質はそう変わらないのかもしれない。

「地理的な理由などで、反乱軍に付かないとまずいと思った。付いた以上は、功績をあげて己の領地や権力を増やしたい。結果、数は多いからと戦いに参加して兵力を失っている」

彼らの敗北で、ニュルンベルク公爵は損をしない。

敗戦の責任を問えるし、今回は拠点を再奪還しているので罪は問えないが、無駄に兵力を失った。

今の状況で兵力の大量喪失など、ニュルンベルク公爵の独裁権に手を貸しているような物だ。

逆らえば潰されるし、実際に当主が戦死している貴族家などには既に手を出しているかもしれない。

後継者に、自分の意図する人物を就かせてコントロール下に置くのだ。

「ニュルンベルク公爵は一つの美しい帝国を目指しているので、その邪魔になる貴族の排除に躊躇わないでしょう」

バカな貴族でも自分に従順なら生き残らせるが、少しでも反抗的なら意図的にこちらとの相討ちで始末させる。

利口な貴族は冷静に彼の覇権に力を貸すか、まだどちらが勝利するかわからないのでほぼ中立状態を保つはずだ。

ニュルンベルク公爵に逆らわず、好意的中立で様子見であろう。

ニュルンベルク公爵からすれば、それで十分なのだ。

もしこちらが負ければ、彼らはバカではないから今度こそ本当にニュルンベルク公爵に付くであろう。

賭けに出て領地や爵位を上げるも良し、堅実に家と領地を守るのも良し。

どちらでも、貴族としては正解なのだから。

「それで、貴殿はどうせよと言うのかね？」

「別に無いというか、意見を言う権利がありませんね」

俺は傭兵で、この会議で意見を言う資格が無い。

完璧な建前を述べて、俺を非難した貴族を煙に巻く。

他の参加者達は、一瞬ガックリとしたような表情をした。

「今、好き勝手に言っていたであろうが」

「これは、売り言葉に買い言葉です」

「プッ！」

俺の発言に、俺の近くの席に座っていたブランタークさんが懸命に笑いを堪えていた。

「会議には参加しているのだ。意見を言う資格はある！」

どうやらこの貴族は、俺の意見を皮切りにこの停滞した会議をどうにかしたいようだ。

部外者に頼るのはどうかと思うが。

「兵力差があるのに攻めるからこうなるのです。後方を遺漏無く抑えながら、準備を終えたニュルンベルク公爵が全軍を挙げて攻めてくるまで待つしかありませんね」

この野戦陣地で守りながら最終的には勝利して、反乱軍の瓦解や切り崩しを行う。

大勝利できれば、元々クーデター政権なので一気に崩れる可能性もあった。

「守るのか」

「数が少ないのに、下手に分散して支配領域を広げようとするから付け込まれるのです」

軍記物でもあるまいし、派遣した少数の味方が多数の敵を討てるはずがない。

常識で言えば、戦争は数が少ない方が負ける。

それを補うための戦術や情報収集であろうが、通信魔法が阻害されている以上は待ち構える反乱軍の方が優位であろう。

地の利も、攻められた反乱軍の方にあるのだから。

「難しい理屈や兵法などいりません。解放軍が総大将の指揮で一つに纏まり、全軍で攻め寄せるニュルンベルク公爵を討てば宜しい。まずは、負けない事に徹しないと。負けたら御家断絶に一族滅亡ですよ」

「……」

ニュルンベルク公爵は、解放軍に属した貴族達を許さないはずだ。

裏切りからの瓦解を狙って一部貴族くらいは許すかもしれないが、少なくとも二つの選帝侯家とミズホ伯国は攻め滅ぼそうと思っているはず。

俺達は最悪逃げる事も可能だが、彼らは領地を背負って逃げるわけにもいかない。

厳しい現実に、貴族達は次第に顔を青ざめさせていた。

もうこれ以上は負けられないのだと。

「そのために、今回のような方針の分裂と総大将が曖昧な状況は良くないですね」

「確かに、バウマイスター伯爵の言う通りだな」

数が少ない方が主導権争いをして、意味の無い攻勢をかけて兵力を失ったのだ。

これを改善しないと、解放軍は敗北へと一直線であろう。

「あと今回は敗戦です。総大将には、敗戦の責任がある」

「責任……」

貴族達は、テレーゼとバーデン公爵公子を交互に見る。

どう考えてもテレーゼが総大将なのだが、彼女は女性なのでバーデン公爵公子に期待する貴族も決して少なくない。

だから、こういう状態になってしまうのだ。

「テレーゼ様。今後このような事が無いようにしていただきたいですな」

「バウマイスター伯爵っ！」

俺の発言に多くの貴族たちが驚き、中には表情が凍り付いている者もいた。

傭兵扱いではあるが、過去二回の戦の殊勲者で他国とはいえ大貴族である俺がテレーゼが総大将だと言っている。

この事実に、バーデン公爵公子を支持している貴族に俺を窘める

者さえいた。

「時間が勿体ない。帝国では女帝が駄目という法は無いのでしょう？　今は内乱で非常の時なのですから、こういう事もありますよ。そう。反乱だから仕方がないのです」

「反乱だから仕方がない……」

「そういう事です」

安定していた国や統治機構は前例がない事柄を嫌がる。日本だと官僚などがそうだが、非常時だからという理由があれば案外納得する物なのだ。

「バーデン公爵公子殿」

「何でしょうか？」

「今回は、運が悪かったですな」

「いや。私はニュルンベルク公爵に己の欲を読まれた……」

「でしたら、敗戦後のフォローを確実になさる事です」

「フォロー？」

「ええ。今回の敗戦で戦死した貴族家にね」

当主が戦死したので、速やかに後継者を定めて彼らへのフォローを行う。

「それを怠ると、不安からニュルンベルク公爵の調略にハマる可能性があります」

後背で反乱でも起こされると、鎮圧に余計な手間がかかるし、補給などを絶たれる可能性がある。

「テレーゼ様は、バーデン公爵公子殿に罰金などは科さないでしょうから、その辺のフォローを確実に行うべきかと」

「バウマイスター伯爵の言う通りだな」

「今回は残念でしたが、テレーゼ様の次の皇帝はバーデン公爵公子のお子かお孫さんの可能性が高いですね」

慣例で続けてテレーゼの子供に皇位を継がせる事は難しいし、それを強行するとトラブルになる。

テレーゼ自体も、それは望んでいないであろう。

「しかし、そう上手く行くものか？」

「確率は高いですね。何しろ他五つの選帝侯家は、暫くは皇帝選挙どころじゃないでしょう。選挙に出られるかすら怪しいですね」

内乱の結果如何では、御家断絶や降爵されて選帝侯家から外される可能性もあった。

「ミズホ伯国はどうする？」

「帝国統治の安定化のために選帝侯になっていただく必要はあるで

しょうが、果たしてミズホ家の当主が皇帝選挙に出ますかね？」

「いや。貰える褒美に、ミズホ家存続のための立場は貰うが、皇帝などは御免蒙りたい」

ミズホ上級伯爵は、きっぱりと皇帝位に興味など無いと宣言する。
絶対にとは言えないが、暫くはそれが事実であろう。

皇帝選挙に出ない選帝侯になって議会の議席も得る。
中途半端な独立国ではなく、帝国の政治に参加する姿勢を見せた方が他の貴族達の警戒感も薄れるというわけだ。

「テレーゼ様。こんな感じで如何でしょうか？」

「バウマイスター伯爵の意見通りでよかろう」

このくらいの事は、誰にでもわかっているのだ。
それを、あえて火中の栗を拾うかのように部外者である俺が言う事に意義がある。

テレーゼの意図はそれで、俺はその通りに動いただけである。
勿論打ち合わせをしている時間など無いので、全て俺の勝手な考えであったが。

「しかしテレーゼ様。戦後は選帝侯家は幾つか減っているのでは？」

「人質にされているという当主達だが、誰も姿を見てないらしいからの。もし殺されていても妾は驚かぬよ」

「帝国の安定した統治のためには、同じ数くらいは必要ですか？」

「であろうな」

テレーゼの返答に、貴族達の顔色が変わる。

特に伯爵や辺境伯などは、これからの活躍如何では自分が選帝侯になれる可能性があると理解したからだ。

選帝侯家は公爵家なので皇家の親戚筋ではあるが、実は長年の帝国貴族同士の婚姻政策で同じくらい皇帝家の血を引いている貴族家などいくらでもいるのだ。

それに、反乱軍に参加している以上は状況によっては取り潰しもあり得る。

後釜に座れる可能性は十分にあるというわけだ。

「（精々、勝手に夢見て頑張ってくれ）」

あくまでも可能性の問題で、必ず選帝侯になれるとは言ってはいない。

要はテレーゼの権威が認められて、彼らが来る決戦で戦力になればいいのだから。

「味方兵力の集結と再編成を進め、ニュルンベルク公爵が自ら兵を出すのを待ち受けて撃滅するしかないの」

「しかし、そう都合よく来ますか？」

「必ず来る。ニュルンベルク公爵は己の覇権を確立するために、妾達を撃滅せねばならないからな。帝国が分裂状態では、未来にあるやもしれぬヘルムート王国征服も叶うまいて」

テレーゼは質問をして来た貴族に自信満々に語り、これでようやく解放軍の指揮の統一と作戦方針が一つに纏まったのであった。

「ヴェル様。お肉が焼けた」

「タレはどの味にする？」

「塩」

「ヴィルマのチョイスは渋いな」

ようやく会議が終わったので、俺達は陣地内にある自宅の庭でバーベキューをしていた。

常夏の海ではなくまだ冬の荒野でのバーベキューであったが、別にレジャーというわけでもなく、ただ単に調理時間の短縮とエリーゼへの負担の軽減に、とにかく肉が食べたかったからだ。

魔法で熟成させた魔物の肉が大量にあるので、それと野菜を切って炭火で焼く。

金網の上で焼いたお肉にタレを付けて食べると、あの凄惨な戦争も忘れられるという物だ。

「戦の後で肉なのか……」

とは言いながらも、エルはお腹が減ったようで肉を沢山食べていた。

死体と肉を関連付けても意味が無いし、あまりに人死にを見過ぎたせいでその辺の感覚も麻痺しているのであろう。

残酷だが、所詮は顔も知らない他人である。
気にしていても仕方が無い。

「（そう思わなければやってられない部分もあるな）」

とにかく、ニュルンベルク公爵が動かしているあの装置の破壊が第一だ。
あれをどうにかしないと、色々と不利益が大きいのだから。

「あなた。あれで宜しかったのですか？」

「仕方がないでしょう」

一緒に焼いた肉を食べながら、エリーゼが俺に会議での言動について聞いてくる。
本来口を出すのは筋違いなのだが、俺達はニュルンベルク公爵に付くわけにはいかない。
とにかく、テレーゼに勝って貰わないといけないのだから。

「俺は怖くて黙っていたけど、ヴェルは言ってしまったよな」

「いいんだよ。俺達は功労者だから」

エルからすれば、俺が会議で好き勝手にしていた風にしか見えないのであろう。

戦術的には多くの敵兵を討っている功労者なので、下手に処罰しようとして逃げられでもしたら目も当てられない。
テレーゼは俺の目的を知っているはずなのでその可能性は考慮していないが、俺の発言を上手く利用したわけだ。

「それよりも、オリハルコン刀はどうだった？」

「凄い切れ味だな」

切れ味に関しては、魔刀とほとんど差異が無いようだ。

ただ、俺が打たせた三組を合わせても全世界に二十組ほどしか存在していない。

残り二組が完成しても二十二組で、その内十七組はミズホ人が所有している。

そのくらい貴重で誰もが欲しがる刀であった。

「ハルカとタケオミさんはどう？」

「凄い切れ味ですね」

「借り物なのが惜しいくらいです」

兄妹共に肉を食べながら、俺にオリハルコン刀の素晴らしさを語っていた。

専門的な用語が多いのと、二人のミズホ刀好きが凄いのでみんな少し引いてしまっていたが。

熱心に聞いているのはエルくらいであろう。

「俺の護衛に入っている間は貸与を続けますので」

「ありがとうございます」

「刀に恥じぬ活躍をいたしましょう」

どうせ、腕前がヘボな俺が使っても意味が無い。
俺にはエルから交換で貰ったオリハルコン剣があるので、それで十分であろう。

「ところで、うちのお館様がなぜここに？」

「肉が食べたいそうだ」

ミズホ上級伯爵、ブランタークさん、導師の三人は肉を食べながら酒を大量に飲んでいた。
みんなこれでも社会的な地位は高いのだが、見た目は酒場でくだを巻いているオヤジ達にしか見えない。

「ヘルムート王国製の酒は美味いのぉ！　肉と良く合うわ！」

「三十年物のワインの逸品もありますよ」

「ブランターク殿。それも注いでくれ」

「ここは、某秘蔵のブランデーも出そうではないか」

「ふふふっ、見るがいい！　ワシも大吟醸『満月の滴』を持って来たぞ」

「おおっ！　凄そうな名前であるな！」

「滅多に手に入らない、ミズホ酒の逸品でな」

「是非に、某にも」

中年以上の三人が酒を飲む姿は、サラリーマンの宴会その物であった。

「ターベル山地砦の戦闘で大変でしたからね」

「いや。ターベル山地にミズホ上級伯爵は行かなかったじゃないか」

「そういえばそうでした……」

それでも、別の援軍の指揮を執っていたのでハルカの意見もそう間違いではない。

ただ何も渡さないと戦友達に失礼になると思って、トヨツグさんには高価なワインやブランデーを。

兵士達にもワインやラム酒などを渡し、戦死者には少ないが見舞金も渡していた。

もし彼らがいなければ、俺達は戦死していたかもしれないからだ。

「お館様は、そのお礼にいらしたのですよね？」

「ハルカさん。あそこの酒盛り席は気にしない方がいいよ」

エルの言うように、酒好き中年の酒盛りなど気にするだけ無駄である。

ただ中年三人で酒を飲んでいるだけのように見えるが、俺が見舞いを出した件でトヨツグさんはとても感動していたと、ミズホ上級伯爵は話していた。

『バウマイスター伯爵様はお若いのに、素晴らしいお気遣いである。

お礼に、私の娘をさしあげましょう』

と言ったそうだが、さすがにそれはミズホ上級伯爵が全力で断ったそうだ。

彼は、エルとハルカくらいの繋がりで様子を見たいのが本心であったのだから。

『テレーゼ殿はバウマイスター伯爵に興味があるようだが、その件で五月蠅い貴族も多いからな。私の娘とバウマイスター伯爵の婚姻など言い出したら、ミズホ伯国とヘルムート王国で帝国を挟撃する可能性がとか抜かす奴が現れるであろうな』

そういう警戒感を抱かせないために、エルとハルカとの婚姻に、交易の促進で様子を見るくらいで十分だとミズホ上級伯爵は考えているようだ。

「しかし、前途多難だな」

俺は、自分自身のためにニュルンベルク公爵が稼働させている移動・通信魔法の阻害装置を完全破壊しないといけない。

そのためには、テレーゼに協力して解放軍を勝たせないといけないわけだが、解放軍の内情は酷い物である。

反乱軍も良い勝負かもしれないが、あまり両者でクダクダと内戦が続くと王国の方でも出兵論が出るかもしれない。

勝って占領地を得たとしても、その統治に失敗すれば王国も疲弊する。

嬉しいのは、領地を得た貴族くらいであろうか？

統治に失敗すれば、あとで泣く羽目になるのだが。

「テレーゼ様には頑張っていただかないと」

あくまでも自分のためであったが、妙齢の女性が内戦に敗北して戦死する絵面を見たくはないのも本心ではある。

「ヴェンデリン。今日は色々とすまなかったな」

「はっ？」

テレーゼの事を考えていると、突然彼女の声が聞こえて顔面を柔らかい感触に包まれる。

「テレーゼ様……」

俺の隣にいるエリーゼの声が冷たいが、その理由が次第に明らかになった。

薄手のシルクドレスを着たテレーゼが、俺の顔に胸を押し付けて抱き付いていたのだ。

「（アーーー。柔らけぇ……。じゃない！）」

「あなた。そんなに気持ちが良いですか？」

一瞬その気持ち良さに正気を奪われそうになるが、エリーゼの冷たい声によって目が覚める。

「ええと。それなりにです……」

エリーゼが少し怖かったが、ここは威厳？を見せて堂々と答えておく。

「テレーゼ様。はしたないと思いますが……」

「ヴェンデリンが妾のために、あそこまで会議で啖呵を切ってくれたのが嬉しくてな」

「別にテレーゼ様のためだけではありませんし、そこまで喧嘩腰ではありませんが……」

言いたい事を言った記憶はあるが、喧嘩を売るまでには至っていないはずだ。

それに、あくまでも自分のために言っただけの事であった。

「テレなくても良いのじゃぞ。今はお礼に、存分に妾の胸を堪能するがよい」

いつもよりもテンションが高いテレーゼは、俺の顔に胸を押し付けたまま、わざとグリグリと動かしていた。

動く度に彼女の柔らかい胸の感触が顔面を襲い、俺の正気が遠のいて行くような感触に襲われる。

「あの連中は、妾が女なのをいい事に侮ってくれていての。そなたの発言が役に立った」

「俺は帝国貴族ではありませんが……」

「ヘルムート王国では大貴族で、そなたには不敗の武勲がある」

二度の竜退治、ブロワ辺境伯家との紛争、テレーゼを連れての帝都脱出、最初の野戦陣地攻防戦、最後に今回のターベル山地砦にお

ける戦果など。

どの国においても、武勲のある貴族は尊敬される。

戦争が久しく無かった時代だからこそ余計にその傾向は強く、バーデン公爵公子が焦ったのも、武勲を手に入れて次期皇帝選挙で有利に立とうとしたせいでもあった。

皇帝選挙の有権者は貴族が大半なので、武勲は票獲得に大きく貢献してくれるからだ。

「ヴェンデリンがまだ若いのに正々堂々と持論を展開して、妾の総大将としての権威を認めたからの。解放軍の危うさを直言してくれたおかげで連中も肝が冷えたであろう。指揮がしやすくなったお礼じゃ。妾の胸を存分に楽しむがよいぞ。減る物でもなし、遠慮せずに堪能せい。その先も自由に……」

「いい加減にしてください！」

だが、そんな事を続けていればエリーゼが面白いはずがない。

彼女は強引に俺とテレーゼとを引き剥がすと、今度は自分がその胸を俺の顔に押し付けていた。

「エリーゼの方が少し弾力があるな」

「ヴェンデリンよ。大きさは妾に匹敵するとはいえ、エリーゼ殿の硬い胸など面白くないであろう？」

「胸がタレているテレーゼ様よりはマシですわ」

「これは異な事を。妾の胸はまだタレてはおらぬぞ。証拠が見たいなら、ヴェンデリンであれば遠慮なく見るがよい」

「その必要はありません！」

エリーゼとテレーゼの両巨頭というか、両巨乳は激しく火花を散らせながら睨み合いを続ける。

「それで、テレーゼ様は何をしにいらしたので？　まさか、私達の旦那様に胸を押し付けるためですか？」

すかさずイーナが、テレーゼに向けて嫌味交じりの質問をぶつけていた。

彼女も、テレーゼの行為に激怒しているようだ。

「胸は報酬の前渡しじゃの。今回の件で、ヴェンデリンに報酬がある」

基本的に、俺達への報酬は出来高払いとなっている。

活躍すればするほど報酬が加算されるので、既に戦功や陣地構築などで相当な額になっていた。

戦後に一括して支払う事になっているが、多分額が膨大になるので分割払いになる可能性も秘めている。

本当は俺に対して借りを作るので良くないのだが、内戦で帝国へのダメージが大きそうなので、利息も付けて分割払いにするというわけだ。

俺達がいないと苦戦するが、いれば報酬で高く付く。

支払いを拒否すれば内外に大恥を曝すわけで、テレーゼは金勘定でも相当に苦労しているはずだ。

俺への胸攻撃には、何とか報酬を減らせないかという意図もあるのかもしれない。

「報酬ですか？」

「先払いが可能な物を渡す。名誉爵位をな」

「名誉爵位？　カタリーナのような？」

「似たような物じゃな」

テレーゼの説明によると、帝国では功績を挙げた者に対して一代限りの名誉爵位を与える事が多いそうだ。

「本当は、そなたに法衣でも正式な爵位を与えたいのじゃがな」

「それは受け取れません」

「であろうな」

正式な爵位であると、『相続者を誰にするか？』という問題が発生してしまう。

そこで一代限りの名誉爵位にしてしまえば、俺が死ねば消えるので何の問題もないわけだ。

いや、本当はあるのだが、今の状況では陛下に確認も取れない。

名誉爵位を他国の貴族に与えるという点で問題があるような気もするが、この手の褒美を断るのは無礼にあたる。

現状では、受けざるを得ないのであろう。

「本当は、ブランタークや導師にも渡したいのじゃがな。あまりやるとまた面倒が増える。ヴェンデリンが帝国でも貴族扱いになれば、

これからの軍事作戦にも意見が言える」

先日のような、わけもわからない状態でターベル山地砦攻略などに駆り出されないで済む。

今になって考えると、傭兵という立場は実に不安定な地位である。敵意ある者に使い捨ての道具扱いされる可能性もあって、俺は引き受けざるを得ない。

色香で攻めてくると思ったら、実に嫌な搦め手で攻めてくるものだ。

「正式な叙勲は明日にするが、名誉伯爵の地位を与える。死ぬまで年金も出るので、受け取って損は無いと思うがの」

「全く……。俺が引き受けざるを得ない状態にしておいて……」

「妾はフィリップ公爵として動かざるを得ないからの。じゃが、ヴェンデリンを一人の男として気に入っておるのも事実じゃ。ゆめゆめ疑うでないぞ」

テレーゼからのお話は、それで終りであった。

あとは、そのドレス姿からも想像できるように、俺達が主催しているバーベキューパーティーに参加するつもりのようだ。

すぐにハルカから、酒の杯と焼いた肉を載せた皿を受け取っていた。

「こういうくだけた食事の席は面白いの」

テレーゼは、エリーゼの反対側の席に座ってワインを飲んでいる。

後ろで護衛をしているエッボが、誰にでもわかるくらいしかめっ

面をしていた。

元々こいつは、テレーゼ命で俺が大嫌いなのだ。

俺のプライベートな宴会にテレーゼの方がその玉体を運び、叙勲の話を自らして、あまつさえ抱き付いて胸を押し付けたりしている。

もし敵同士であったら、こいつは間違いなく俺の首を狙ってくるであろう。

だが、もし今の状況でそれを狙ったらテレーゼの不興を買うどころか処罰の対象になる。

底抜けのバカではないために、エッボはテレーゼの忠実な御付きとして動く事を自分に課していた。

内心では、腸が煮えくり返っているであろうが。

「（エッボは、空気だと思って無視だな）このような席に出て大丈夫なのですか？」

「アルフォンスに、かなりの仕事を任せているからの」

「それは、ご愁傷様で……」

通りで、アルフォンスの姿が無いはずだ。

少し前ならば、喜んでこういう席に参加していたであろうし。

「全く、妾を女帝とやらにしたいのか？　それともしたくは無いのか？　こういう席で息を抜かねばやってられぬ」

地位に伴う重責と、女だからと侮る貴族達の制御でテレーゼは疲れているのかもしれない。

「大変なのですね」

「統治を丸投げしてる私には何も言えませんわ」

エリーゼとカタリーナが同情的な視線を向けるが、それはすぐに終わる事となる。

テレーゼが、いきなり俺の腕にしがみ付いてその胸を押し付けたからだ。

「本当に妾は大変なのじゃ。これからは、名誉伯爵として妾の傍で支えてくれよ」

「いきなり何をしているのですか！」

「『暴風』か。ヴェンデリンは目出度く帝国貴族も兼ねる事とになったからの。前例が大好きな両国の小役人共が五月蠅かろうが、こういう事は妾とヴェンデリンが仲良く功績を挙げれば自然と静かになるものじゃ。妾達は、仲良くしなければいけないのじゃ」

「周囲の目を考えてください！」

「この席でか？」

この席は俺の家の中での食事扱いなので、爵位や社会的な地位などは基本的に無視である。

現に、ミズホ上級伯爵とブランタークさんと導師は仲良く酒を大量に飲んで騒いでいた。

「良い酒ばかりで最高だな」

「五臓六腑に沁み渡るのである！」

「二人とも強いな。よし！　ここで飲み負けてはミズホ上級伯爵の名が泣くというもの！」

もしかすると関わりたくないので、余計に無礼講で騒いでいるのかもしれないが。

「エルヴィン。お前も飲め！」

「大人になるとある程度は飲めないと面倒であるぞ。さあ、この杯を三数える間に飲み干すのだ」

「酒精が高い焼酎を持参した。カボス果汁で割ってやるから飲み干すのだ。バウマイスター伯爵一の家臣よ」

「いきなりこんなに飲めませんよ……」

三人に捕まったエルが、酒を大量に勧められて顔が真っ赤であった。

まるで会社の新人歓迎会で上司に捕まった新人君のようである。

「あそこは、例外です」

エリーゼは周囲に救いを求めるエルから視線を外した。

彼女は、実は良い性格をしているのかもしれない。

「公的な場でするとお堅いのが五月蠅いからの。だからこうして、こういう席でスキンシップを図っておる。何ぞ、文句があるか？」

「それは……」

テレーゼの問いに、最初カタリーナは言葉を濁らせてしまう。
だが何かを思い付いたようで、すぐに反撃に出ていた。

「ありますわ！　人の夫を妻である私の前で誘惑とは！　身分の差を考慮してもそれは不逞！　許し難き暴挙です！」

「おおっ！　正論じゃの」

カタリーナの強い批判に、テレーゼは怒るでもなく賛同していた。

「でしたら！」

「気にするでない。ヴェンデリンの周囲に何人女がいても妾は全然気にしないぞ。こういう男は元々女達が取り合う物だからの。それに正式に妻なり愛人になれば、不逞でも何でもないわ」

「なっ……」

テレーゼが堂々と言い放った発言に、カタリーナは毒気でも抜かれたかのような表情になる。

「全く。もし妾が男ならば誰も騒がない癖にの」

確かに、テレーゼの言う通りではある。
男の選帝侯が、気に入った女性貴族をどうにか妻にしたいと願う。
それならば貴族達は、『〇〇公爵に気に入られるとは、そのご令嬢は光栄ではないか』で済んでしまうのも事実であった。

「ニュルンベルク公爵は、ガチガチの保守派で懐古主義者でもある。あの男が皇帝になると、女当主などは余計に息苦しくなるであろうな。それだけで討伐に値するし、とっとと終わらせたい物よ」

テレーゼは、若い身で苦労を背負い込んでいる。

それがわかると、エリーゼ達は何も言えなくなってしまったようだ。

「（でも、女狐でもある）」

人の同情を誘っておいて、テレーゼはそれから二時間ほど俺と腕を組みながら酒や食事を楽しんでいた。

「テレーゼ様」

テレーゼの意図に気が付いたイーナが俺と引き剥がそうとすると、今度は別の大変さをアピールする発言が飛び出す。

「明日の叙勲の義では、反対する輩を防がなければのぉ」

「……」

例の装置破壊のために帝都に行かなければならないと考える俺の心情を知っているために、イーナも歯ぎしりをしながら彼女の行動を止められないでいた。

「イーナちゃん。意外と粘るね」

「ここは、ヴェル様を信じる事も必要」

ルイーゼとヴィルマは完全に諦め顔だ。
俺が懸命にかわそうとする様子を見て、テレーゼは台風のような物だと思っているのかもしれない。

「多少のスキンシップは我慢するよ。ボクは大人の女だから」

「でも、既成事実の獲得などを目指したら強制排除」

だが、もし強引に実力行使を行おうとすれば強制排除すると宣言もしていた。
いくらテレーゼが多少剣を使えるとはいえ、ルイーゼとヴィルマの戦闘力に勝てるはずがない。

「ヴェンデリンの妻は、小さい順に怖いのかもしれぬの……」

テレーゼは、二人の発言に少し引いていた。

「今日は楽しかったの。また遊びに来るからの」

無事かどうかは微妙だが、乱入者もあったバーベキューパーティーは無事に終了した。
今日は色々とあったが、とにかく疲れたので今日は早く寝たい心境である。

「あなた。テレーゼ様は油断なりません。これからは、お一人でお寝にならないように」

寝室に入るとエリーゼがネグリジェ姿で待ち受けていて、今日からはまた妻達と順番に一緒に寝る事になってしまう。

「時が時なので、普通の添い寝でも構いません。ヴェンデリン様がお一人だと、夜這いをしかけてきそうな方がいますから」

テレーゼ以外に該当者はいなかったが、確かにその可能性は高い。陣地内の警備の最高責任者なので、どうとでもなってしまうからだ。

「じゃあ一緒に寝ようか。今日はさすがに眠いから寝るだけだけど」

「私も今日はそれでいいです。ですが、一つお願いがあります」

「お願い？」

「はい。前にイーナさんから聞いた事があります。こういう時には、女性は男性から腕枕をして貰って寝ると……。駄目ですか？」

恥ずかしそうに上目づかいで聞いてくるエリーゼは、テレーゼとは別のタイプで可愛かった。

「駄目じゃないさ。じゃあ、明日に備えて早めに寝ようか」

「はい」

俺がエリーゼに腕枕をしてあげると、彼女は安心したようにすぐに寝入ってしまう。

直接戦闘に参加していないが、負傷者が出ない戦闘などないので、治療担当のエリーゼは忙しかったはず。

「おやすみ。エリーゼ」

魔法の連続行使で疲れた俺も目を瞑ると、すぐに夢の世界へと旅立つのであった。

幕間二十六　長対陣で暇だからウナギを焼いてみる。

「これが代金だ」

「いつもありがとうございます。バウマイスター伯爵様」

「貴重な物をすまないな」

「もう三か月もすると漁が始まるのでここまで高価では無いのですが、今は在庫が少ないのでお高くなってしまいます」

「いや、手に入っただけでも上出来だ」

解放軍の攻勢失敗後、ソビット大荒地にある野戦陣地では平和な日々が続いていた。

平和というと語弊があるかもしれないが、解放軍反乱軍共に決戦のために準備をしている状態だ。

そんな時間に余裕がある日、俺は出入りのミズホ人商人からある物を購入していた。

「ヴェル。それは何だ？」

俺が代金を商人に払っていると、そこに珍しくエルが一人で姿を見せる。

「少し時期からは外れているが、実はこれを買ったのさ」

「おおっ！　ウナギじゃないか！」

「これを蒲焼にして、ウナ丼にして食べる」

「いいねぇ。最高の贅沢じゃないか」

この世界にもウナギは存在する。

寒い時期は動きが悪いのであまり獲れないのだが、ミズホ商人が捌いて串に刺した状態で売っていたのでこれを購入したのだ。

魔法の袋に入っているので鮮度は最高だが、需要に対して供給が少ないので値段は高めになっていた。

かなりの金額を払ったが、ウナギの状態は最高で脂も乗っているように見える。

「焼くための炭と台は準備してある。蒸し器の準備もオーケーだ。そして！」

俺は、魔法の袋から一抱えほどの甕を取り出す。

この甕の中には、下手な宝石など及ばない価値があるとても大切な物が入っていた。

「ヴェル。それはタレなのか？」

「ははははっ！　こういう事もあろうかと、リバーの店主さんからタレを分けて貰ったのだ！」

「楽しみだな。俺も手伝うから早く焼こうぜ」

なぜ俺が、蒲焼のタレを持っているのか？

それは、伯爵になって暫くしてからの出来事が原因になっている。

「ヴェル様。このお店」

「川魚料理店『リバー』か……」

伯爵になってから数か月後、俺はみんなを連れて所用で王都に来ていた。

用事自体はすぐに済んだのでどこかで昼食でもと思い、たまには何か変わった物が食べたいと言ったところ、ヴィルマが良く通っていたお店に案内して貰う事になる。

王都郊外にあるそのお店は、かなり古びた造りで伝統がありそうに見える。

「川魚料理ですか」

「ヴェル様と出会う前は、ここに良く川魚を卸していた」

ヴィルマは、アルバイトで川魚を取ってここに良く卸していたのだとエリーゼに説明する。

「材料を卸すと、無料で食べさせて貰えたから」

「ヴィルマさんは苦労していたのですね」

「お腹一杯食べるのは大変だった」

ヴィルマの食べる量を考えると、相当な量を獲らなければいけなかったはずだ。

よほどの漁の名人でもないと満腹にはならなかったはず。

ヴィルマの腕が良いのか、お店の人が優しかったのか、両方なのかもしれない。

「ヴィルマは漁が上手だったのか？」

「結構上手だと思う。でも、なかなかお腹一杯にならない」

「ヴィルマが常にお腹一杯なほど獲れたら、その辺の魚がいなくなるのと違うか？」

「魚種ごとの禁漁期間設定に、小さな魚のリリースは漁をする者の義務。そんなに都合よく獲れるはずがない」

エルの軽口に、ヴィルマは少しだけ不機嫌そうな表情で答えていた。

しかし、まさかこの世界に自主的な禁漁期間やリリースのルールがあるとは驚きではあった。

「えっ？　そんな制限があるの？　うちの実家の領地にはそんなルールはないぞ」

「エルの故郷の人口と、王都の人口との差なんだろうな」

エルの実家の領内にある川で魚が獲れるのは、そこの領民達だけである。

獲り過ぎなければ、そう簡単に漁獲資源が減るはずもない。
余所者が密漁などしたら最悪殺されても文句は言えないので、魚が目に見えて減る事も無いのであろう。

だが、王都周辺では魚の消費量が違う。
漁獲制限をかけないと、魚がすぐに獲れなくなってしまうのであろう。

ただ、こんな制限があるのは王国でも王都周辺のごく一部の地域と、各貴族が独自に設定をしているケースだけだそうだ。
そういえば、ブライヒレーダー辺境伯領にそんな制限は無かった。
せいぜい、子供の魚を獲らないというマナーくらいであろうか。

バウマイスター伯爵領に至っては、魚は山ほどいるし、動物に至っては数が多過ぎて人が危なくて住めないので容赦なく狩ってくれという状態であった。

「漁をする者は、事前に登録料と年会費が必要。払わないで密漁をした者は……」

「した者は何だ？　ヴィルマ」

「次の年に、川エビとウナギが豊漁になる」

「えっ……。それってもしかして？」

「密猟者には天罰が下る」

「それは洒落にならないぞ……」

さきほどの仕返しなのか？
ヴィルマは、エルに恐ろしい話をして彼を怯えさせていた。

「でも、王都から離れれば大丈夫。その場合は何日かかけて漁を行う」

ただし、距離が離れると今度は魚の鮮度が問題になる。
生かしたまま卸さないと値が下がるので、ヴィルマは獲る川魚の種類を制限していたそうだ。

「魔法の袋を使えばいいじゃないか」

「そんな高価な物。普通の漁師が買えるはずがない。エルはヴェル様とずっと一緒にいるから感覚がマヒしている」

「そうだな。汎用の魔法の袋なんて、よほどの金持ちじゃないと買えないぞ」

俺が魔法使い用の袋を良く作るから誤解されるのだが、それは魔法使いにしか使えないし、使用者の最大魔力量に比例して収納可能な量が変わってしまう。
容量が一定している汎用の魔法の袋は、入る量によって値段が恐ろしい勢いで上昇していく。
一般庶民に手が届く物ではないのだ。

「漁師も大変なんだな。それで、どんな魚を獲るんだ？」

「コヌルは丈夫だけど、あまり高値で売れない。ナマサは意外と死にやすいから近場でしか獲らない。ポンカメとウナギが主力」

コヌルとは鯉の事である。
洗いや鯉こくは前世で食べた経験があるが、俺はあまり美味しいとは思わなかった。
ナマサはナマズの事で、これは俺は食べた経験が無い。
白身で、天ぷらなどにすると美味しいと聞いた事があるのだが。

「ポンカメって、どういうカメだ？」

「噛みついて離さないやつ」

ヴィルマに特徴を聞くと、どうやらスッポンの事らしい。
ウナギはそのままウナギであろう。
スッポンは食べた事があるが、なぜ精力が付くと言われるのか理解できなかった。
まる鍋は普通に美味しいと思ったが。
ウナギは、日本で上司に奢って貰った特上の蒲焼が美味しかったのを今でも覚えている。
肝吸いと肝の串焼きもとても美味しかった。

「（ウナギの蒲焼が食いたくなったな……）どんな料理が出るのか楽しみだな」

店先で話ばかりしていても意味が無いと、早速俺達はお店に入る。
するとまだ準備中なのか？
店内には客が一人もいなかった。

「いらっしゃいませ……。あっ！　ヴィルマさんじゃないですか！
お久しぶりです！」

「久しぶりに食べに来た」

「大歓迎ですよ。さあ、お席にどうぞ」

店の奥から出てきた四十くらいの店主は、最初は元気が無かったがヴィルマを見ると嬉しそうに駆け寄ってくる。

「今日は魚を卸しに来たのですか？」

「純粋に食事のために。お客さんも連れて来た」

「ええと。こちらの方々は？」

「バウマイスター伯爵様」

「おおっ！　噂には聞いておりました！　伯爵様ほどのご高名な方がうちの店にいらっしゃるとは光栄です」

店主は、俺達が客として来てとても嬉しそうだ。

もしかすると、何か一筆でも書くとお店に飾るのであろうか？

お店に芸能人のサインが飾ってあるのと同じく。

「噂に聞くと、ヴィルマさんはバウマイスター伯爵様の奥方様になられるそうで。あっ、なら魚を卸しには来ませんよね。これは失言でした。すぐに料理をお出ししますね」

店主は俺達を席に案内してお茶を出すと、すぐに厨房に入って料理を始めていた。

他に店員などはいないようだ。

「そういえば、俺は川魚は……」

苦手だったのを俺は思い出していた。
実家で食わされた泥臭い煮込みを思い出す。
それでも、せめてウナギやスッポンなら何とかなるかもしれない。
そういえば、蒲焼は存在するのであろうか？
気になるのはそればかりだ。

「ヴェル様は川魚は苦手？」

「食べてみないとわからない。魚の扱い方や、調理方法で全然違うから」

「このお店は、二百年以上も続く老舗だと聞いている」

王都郊外にあり、伝統的な川魚料理を出すので古くからの客がとても多いのだそうだ。
ヴィルマは、この店に魚を卸す代わりに沢山食べさせて貰っていたらしい。

「老舗という割には、あまりというか全く客がいないな」

エルの言う通りで、お昼時なのに周囲を見ても客は一人もいない。
お休みというわけでもないようなので、それは少し気になった。

「穴場的な名店の可能性もあるかもしれないし。エルは川魚は好きか？」

「実家の近くの川で、冬にフナやハヤを獲って焼いて食べたな。味は普通？」

寒バヤと寒ブナは、日本でも地方によっては名物になっていた。
今は秋なので、もしかすると美味しい物が出るかもしれない。

「イーナとルイーゼは？」

「道場でコヌルを輪切りにして大鍋で煮込んで門下生に振る舞うのよ。私は泥臭いから苦手だったわね」

「どんな調味料で煮込むんだ？」

「塩だけで。栄養があるから修練の後に良く出すのよ。母や師範の奥さん達で捌いて大鍋に煮込むの」

鯉を味噌も使わずに煮るのだ。
少なくとも俺は食べたいとは思わなかった。

「そういえば、イーナちゃんの所はコヌルだったね。うちはポンカメを捌いて煮込むんだけど、泥臭くてボクも苦手だった」

ルイーゼの実家は、スッポンを煮込んだ鍋を門下生に出すらしい。
ただ、泥臭いという時点で碌に泥抜きもしていないのであろう。
生姜醤油で煮込むはずもないので、これも俺は食べたいとは思わなかった。

「小魚の内臓を取って油で揚げたのは美味しいわね」

「小魚の方が味に癖がないからね」

イーナとルイーゼも、あまり川魚は好きではないようだ。
それでも、ブライヒブルクで出た小魚のフライなどは好んで食べ

ていたのを思い出す。

「エリーゼは？」

「私も少し苦手です。王都は海から遠いので、貴族家の晩餐メニューにも川魚を使った物があるのです。ホーエンハイム家にも伝統の川魚料理があるのですが……」

フナを使ったパイ料理があるのだが、あまり美味しくないのでパーティーでもあまり箸を付けられずに残されているそうだ。

「あれ？　俺は食べた記憶が無いな」

「ヴェンデリン様は食べる物に五月蠅いと、父とお爺様から思われていますから」

今までにホーエンハイム家の晩餐会に何度か呼ばれた事があるが、俺の機嫌を損ねないようにと、最初から美味しくないとわかっている料理は出さなかったのだとエリーゼは説明していた。

「カタリーナはどうなの？」

「私ですか？　そうですわね。冒険者時代に良く山の渓流で魚を獲って焼いていましたわね。獲ったばかりのイワウオとヤマウオの内臓を抜いて、塩を付けて焚火でじっくりと焼くと美味しいですわよ」

「意外と贅沢な事をしているんだな」

イワウオとヤマウオとは、イワナとヤマメの事である。

王都では高級品だが、『飛翔』で簡単に渓流に行けるカタリーナ

ならば手に入れるのにさほど苦労はしないはずだ。

「予備校生時代には、イワウオとヤマウオの採集で稼いでいましたので調理も得意ですわ」

獲ったばかりの魚は、魔法の袋に入れれば新鮮なままなので高級レストランなどに高く売れる。

俺も前に食べた事があるが、新鮮なイワウオとヤマウオを使った料理は平気で一皿百セント近くするので、それだけ高級品だという事だ。

「普通の漁師や冒険者の方では、焼き干しにして持ち帰るしかありませんから」

王都に一番近いイワウオとヤマウオがいる渓流に行くには、普通に歩けば五日はかかってしまう。

そこで、現地で内臓を抜いて焼き干しにして持ち帰るのが普通らしい。

これなら長持ちするし、それでも一匹三十セント以上で売れるので良い儲けになるのだそうだ。

これを出汁にして作ったスープや煮込みも、王都では高級な料理とされている。

ただ、山奥なので魔物はいなくても熊や狼が出る。

だから一般人でこれを生業としている人は少なく、味が良い渓流魚の値段は高かった。

気軽に食べられるのは、渓流の近くに住んでいる地元住民くらいであろう。

「魚一匹で三十セントは凄いな」

「私は生で持ち帰れたので、魚屋やレストランが一匹五十セントで買い取ってくれましたわ」

「いいなぁ……」

渓流で魚を獲るのは大変だと思うが、カタリーナならば『飛翔』で現地に飛んでいけるし、他の魔法を駆使すれば魚を獲るのも楽だったと思う。

予備校生時代に一人で稼ぐには最適な仕事だったのであろう。

「カタリーナは、予備校生時代のアルバイトですら一人なんだな」

カタリーナが一人で渓流まで『飛翔』で飛んで行き、魚を獲って魔法の袋に仕舞い、食事代わりに焚火で焼いて食べる光景を思い浮かべる。

何人かでやるとレジャーみたいで楽しいのであろうが、カタリーナに限ってそれはない。

俺の脳裏に浮かぶ、一人で魚を獲ってから焼いて食べるカタリーナはとても男前であった。

「ヴェンデリンさん。私が一人で魚を獲って、あなたに何か不都合でも？」

「いいや。他の人を連れて行っても足手まといだろうし。今度、獲りに行こうよ。塩焼きとか食べたいし」

「何か引っかかりますけど……。まあいいですわ」

ただ、同じ元ボッチとしてシンパシーを感じただけである。

俺も子供の頃は、一人で未開地を縄張りとしていたのだから。

「ヴェンデリンさんも食べたいのですか？　ですが、バウマイスター伯爵領にはあまり渓流はありませんわよ」

「その代わりに、バウマイスター伯爵領には海から川を遡上するマスがいる。これを特産化すれば良い商売になるかもな」

稚魚の人工孵化で漁獲資源の保護と増産を図り、燻製、スモークサーモン、鮭とば、新巻鮭、塩辛のような保存食が作れれば輸出も可能であろう。

世間に流通させるのに、そうそう魔法の袋だけに頼ってはいられないのだから。

「ヴェンデリンさんは、領主らしい事も考えているのですね」

「一応伯爵だから」

「自分で一応とか言わないで欲しいのですが……」

と言われても、前世では貴族などテレビの向こうかお伽噺の話であったし、自分がなりたかったわけでもなく勝手に任命されてしまったので、実感などゼロに近かったのだから。

「ヴェルって、食べ物の事だけは真面目にやるよね」

「ルイーゼ。俺は魔法も真面目に練習しているぞ」

ルイーゼの指摘に、俺は素早く反論していた。

毎日魔法の修練は欠かした事が無いのだから。

「マヨネーズ混ぜる魔法とか、肉や魚を熟成させる魔法とか、『わざわざこの魔法を？』というのが多い」

マヨネーズを混ぜる魔法をバカにしてはいけない。

混ぜるスピードや角度などが重要で、俺は試行錯誤を重ねてようやく取得したのだから。

最初は混ぜている材料を周囲に飛ばして無駄にしてしまったりと、とにかく苦労の連続だったのだ。

「魔道具で混ぜればいいような……」

「魔道具よりも、俺の魔法の方がマヨネーズの肌理が細かくなる。味に違いが出るんだ」

実は途中でその事実に気が付いたのだが、もし魔道具が壊れでもしたらマヨネーズが作れなくなってしまうと言い聞かせて、結果的に魔道具を使うよりも美味しいマヨネーズが作れるようになったのはルイーゼには内緒である。

「役に立っているから問題ないと思うけど」

「あまり格好良くないよ」

「恰好良さは問題じゃない。美味しいかどうかが重要なんだ」

『ウィンドカッター』は敵や魔物を切り裂くだけだが、マヨネーズを混ぜる魔法はメレンゲや生クリームにも対応していてエリーゼが美味しいデザートを早く沢山作ってくれるし、ジュース作りやハンバーグのタネを捏ねるにも応用できる。

魔法は人に役に立ってナンボなので、俺は正しく魔法を習得している。
誰に憚る必要も無いのだ。

「人は食べないと生きていけないからな。この法則に身分など関係ないわけで、その役に立っている俺の魔法は凄い」

「妙な自画自賛だなぁ……」

他にも、俺の前世の仕事にも関係している。
とにかく色々な食べ物に興味を持ち、調べて動かないと仕事にならなかった。
その癖と、この世界の食文化はまだまだだという現実が、俺を食の探求へと誘うのだ。

「本当に食べ物の事だとヴェルは引かないよね」

「俺は食べ物のためなら、大貴族でもその過程で潰す覚悟がある」

「それは止めようよ……」

今のところは大丈夫であったが、将来俺の快適な食生活を邪魔する貴族が出るかもしれない。
もしそうなれば、その家を潰す覚悟くらいは必要だと思うのだ。
ルイーゼが珍しく、常識的に反対にまわっていたが。

「料理が来た」

「わーーーい。食事だぁ」

みんなで話をしている間に、店主が出来上がった川魚料理を運んでくる。
お腹が減っていたのか、エルが子供のようにはしゃいでいた。
「小魚と川エビの炒め物、コヌルのウロコ煮、フナの塩焼き、ナマサの煮込み、ウナギとポンカメの鍋になります」
次々と料理が運ばれてくるが、この時点でイーナとルイーゼは駄目だと感じたらしい。
下処理と調理で消しているのであろうが、わずかに川魚特有の臭いがしてきたからだ。
「ハーブを利用して、川魚特有の匂いと泥臭さを消しているのか」
食べてみると、意外と普通に食べられた。
だが、美味しいかと聞かれると美味しくはない。
不味くもないが、俺から言わせると客が『不味くない』物を食べるためにお金を払うわけがない。
客がいない理由が何となく理解できた。
「店主さん。イワウオとヤマウオは仕入れないのですか？」
「うちは、庶民的なお店ですから……」
高価な魚は仕入れられないと、店主はカタリーナに説明していた。
「ヴィルマさん。お味はどうですか？」

「うーーーん。前と変わらない」

ヴィルマはこう見えて、食べ物の味に五月蠅い。

彼女が昔と変わらないというのであれば、間違いなくそうなのであろう。

「私はヴェル様の元で色々と新しい食べ物を食べた。エリーゼ様の作るデザートはとても美味しい。舌が肥えてしまったので、この川魚料理は……」

「ヴィルマ。それは言い過ぎじゃないのか？」

普通に料理を食べていたエルがヴィルマを窘める。

前に世話になっていた人に対して、それはないのではないかと思ったようだ。

「いえ。そう言われる事は覚悟はしていたのですよ。エルヴィンさん」

店主の方は、ヴィルマの指摘に怒っていないようだ。

そう言われても当然という顔をしている。

「ヴィルマさんは味がわかる人ですからね。私の腕が衰えたと言っているわけではないのです」

「調理の腕前は、前と同じで素晴らしい」

ヴィルマは、店主の料理の腕前を褒めていた。

「確かに、川魚の弱点である臭い消しは熟練の域に達していますね。

ホーエンハイム家の調理人よりも上だと思います」

エリーゼも、店主の調理の腕前を褒めていた。

「ですが、変わらない味というのは時代の流れに対して無力な事もあるのです。実際にお客さんが減っていまして……」

「前はお客さんが多かった」

「お昼時には日替わりメニューがあって、結構お客さんがいたものです。今はこの有様ですけど……」

そういえば、お昼も大分過ぎたのに俺達以外に客が一人も来ていない。

このお店の経営状態を心配してしまうほどだ。

「経営は大丈夫？」

「夜になると、古くからの常連さんがコースメニューを召し上がっていきますから。ですが、お年寄りばかりなのです」

店主は、ヴィルマに今のお店の状態を話す。

今のこのお店を辛うじて支えているのは懐かしい味を求める年寄りばかりで、若い人はほとんど来なくなってしまったそうだ。

「そうか。新しい客層が全く獲得できていないのか」

「今は何とかやっていますけど、じきに売り上げは細っていくでしょうね」

年寄りの客がいなくなれば、ただ売り上げが落ちていくだけだ。
将来の見通しは明るくなかった。

「店主さん。こうなった原因は何なんだ？　味は変わっていないのに、そう簡単に客が減るのはおかしいだろう」

エルが、店主に客が減った原因を訪ねる。

「お昼のお客さんが減った原因は、あの料理でしょうね」

「あの料理？」

「はい。何でも王都では、アルテリオ商会がから揚げだの串揚げだのと、新しい料理を出すお店を続々とオープンさせているそうで……」

「アルテリオ商会ねぇ……」

店主から客が減った原因を聞いたエルの視線が泳いで俺へと向かった。
そしてその顔が、『お前のせいじゃん』と言っている。

「確かに、アルテリオさんに商売のネタを売ったのは俺だけど……」

それでも、ちゃんと法に則って商売をしている。
実際に経営をしているのはアルテリオさんだが、そこは競争なので仕方が無い部分もあった。
などと思っていると、突然腕を引っ張られる。
視線を向けると、そこには目を潤ませたヴィルマの姿があった。

「ヴェル様。このお店を助けて」

「えっ？　俺が？」

確かに、アイデアなどは現代日本からのパクりで大量にあるが、その通りにして上手く行く保証などない。

第一、俺にそこまでの料理の腕前は無いのだから。

「私の料理の腕前では助けてあげられないから。昔お世話になったから助けてあげたい」

魚を卸していたとはいえ、ヴィルマの食べる量を考えるとこの店主は彼女を食事の面で助けていたのであろう。

「ヴェンデリン様。何とかなりませんか？」

「エリーゼ。俺はそんなに料理は上手くないんだが……」

「新しい料理を考える能力では、王宮の料理人でも勝てないと思います。私も手伝いますから」

「そうね。このまま放置するのも目覚めが悪いし」

「このお店が蘇ったら、通えるお店が増えるよ」

イーナとルイーゼも、俺がこのお店の手助けをする事に賛成のようだ。

「ヴェンデリンさん。試しにやってみればいいじゃないですか」

「試しにか……」

ここのところ、領内の開発と狩猟・採集ばかりだったのでカタリーナも少し飽きがきていたらしい。

珍しく賛成にまわり、こうして俺のコンサルティング業務がスタートするのであった。

「俺は、謎のインチキコンサルタント。バウマイスター伯爵」

「インチキって、自分で言う？」

イーナに呆れられてしまうが、俺のコンサルタントに対するイメージはそんな物だ。

とにかく海千山千でピンキリだと思う。

食材を取り扱っている関係で飲食店関連のコンサルタントとは良く仕事をしたが、極一部に恐ろしいほど優秀なカリスマがいて、そこそこ優秀なのがいて、当たり障りの無い事を心理カウンセラーのように顧客に言う人がいて、奇抜な意見イコール素晴らしいと思っている詐欺師レベルの奴もいた。

素晴らしい人に任せれば絶大な効果があるが、駄目なのに任せればお金の無駄になってしまうばかりか破産への一里塚である。

本当に評価が難しい職種なのだ。

世間で胡散くさいと思われる最大の原因は、詐欺師に近い奴が悪目立ちをしているせいであると俺は思っている。

「ヴェル様。ありがとう」

「面白そうだからいいよ」

俺はヴィルマの頭を撫でながら答える。

それに、普段のヴィルマは沢山食べるくらいで大人しくて良い子なので、彼女のたっての願いくらいは聞いてあげようと思ったのだ。

「それで、まずは経営をどうするかだな」

「それは、今王都で流行しているから揚げなどにメニューを変更するとかですか？」

「いや、それは危険だ」

現在、王都ではアルテリオさんが食材や調味料を卸すフランチャイズ形式の店舗が全盛を誇っている。

儲かると知って他の店も参入しているが、材料と調味料の一括仕入れによるコストの安さと味の安定化でアルテリオ商会に勝ち切れていないのが現状だ。

そんな状態でこんな辺鄙な場所で同じ物を出しても、勝機などあるはずがなかった。

「このお店の売りは何だ？」

「川魚」

「川魚ね」

「川魚だね」

「川魚ですね」

「川魚ですわね」

「川魚だな」

「という風に、エルにでもわかるくらいに」

「おいっ！　俺はヴェルの中でどれほどバカ扱いなんだよ！」

「この特色を利用しない手は無い。から揚げという調理方法は利用するけど」

「俺は無視かよ……」

早速店の奥にある厨房へと移動するが、このお店の店主は本当に腕が良いようだ。

古い厨房ながらも、とても綺麗に掃除されていて、包丁などの道具の手入れも完璧であった。

魔道具なので高価なはずの冷蔵庫も完備している。

魚を扱うので、食材の鮮度を保つためであろう。

「鶏肉ではなくて、川エビと小魚をから揚げにする」

同じから揚げでも、この店ならば川魚のから揚げが食べられる。

という風にした方が、それを求める客が増えるはずだ。

「塩で揉んでぬめりを取り、内臓を取り除く。水気を良く切ってから粉を付けて……」

調理方法を指示すると、店主とエリーゼが材料から素早く調理していた。
小魚と川エビをから揚げにして皿に盛ると、とても美味しそうに見える。

「では、試食を……」

全員で試食すると、とても美味しい。
から揚げだから川魚特有の匂いが飛んでいるのと、思えばこの世界の川はほとんどが日本でいうところの清流レベルの綺麗さだ。
調理方法を間違わなければ、それほど臭くないのであろう。

「ただ、川エビは綺麗な水で二～三日泥抜きした方がいいかな」

泥抜きとは言うが、基本的には胃の中を空にするためである。
内臓ごと揚げて食べるのに、胃の中にエビが食べた物が残っているのも嫌であろうから。

「次に、フライと天ぷらを……」

粉、つゆ、ソースなどを仕入れないといけないが、これはアルテリオさんから仕入れれば良い。
俺が再建を手伝ったと言えば、アルテリオさんも無茶は言わないはずだ。

「天ぷらも美味しいな」

小さな魚の身を三枚に下ろし、身と野菜を混ぜて揚げたかき揚げも美味しかった。

川エビのかき揚げなどは人気が出るはずだ。

「これをつまみに酒も出して、客単価を上げるわけです」

「ヴェル。客単価って何？」

「いや、そのままの意味だけど……」

エルは、客単価という用語が理解できないようだ。

「お客さんが一人当たりいくらお金を使ったかの平均ですね」

「さすがはエリーゼ。そして、エルはバカだな……」

「五月蠅いやい。俺は武官担当の家臣だもの」

俺にバカ扱いされたエルは、試作品であるかき揚げを食べながら少しいじけていた。

「これの調理は大丈夫ですよね？」

「はい。でも、こんな料理があるのですね」

店主はメモを取ってから、自分も料理の試作を始める。

さすがというか、店主はエリーゼよりも素早く綺麗にから揚げや天ぷらを仕上げていた。

「プロは凄いな……」

一回教えてしまえば、あとは調理経験が長い店主の方が上手に作

れてしまう。
エリーゼも上手であったが、店主はその上を行くようだ。

「ヴェル様。凄い」

「結構楽な仕事かも。ここの店主は料理の腕が良いから、新しい料理方法を教えるだけで済む」

次に、南蛮漬けや、甘露煮、味噌漬け、味噌煮なども紹介していく。

「結局、味噌や醤油で煮ると美味しいし食べられるけど、それって味噌と醤油の味なんじゃないの？」

「ふっ……。エルは味覚がお子様だな」

「お前。今日は言いたい放題だな」

「なあ、エル。前にエリーゼが山菜を調理してくれた事があっただろう？」

「あれは美味しかったな」

未開地にある山地から取ってきた物を、エリーゼが調理してくれたのだ。

「エリーゼは調理前にアク抜きをしてしたが、全部アクを抜いてしまうと山菜は不味くなるんだぞ」

「そうなのか？」

「はい。アクもある程度は残しておかないと、山菜自体の味が飛んでしまうのです」

さすがは完璧超人であるエリーゼ。

俺の意図に沿ってエルに説明してくれる。

「川魚の癖も、ほんのりと残る程度なら逆にこれを好む人もいるんだ。その辺のバランスは、実際に調理する店主さんの腕前にかかっているわけだ」

「でも、それだと客を選ばないか？」

「選んで何が悪い」

「えっ！　それでいいのか？」

「いいんだ。九割が『まあ美味しいんじゃないの？』という味よりも、三割が『絶対また食べに来よう』という味だ！」

飲食店が成功するポイントは、リピーターの確保にある。

調理方法が陳腐化し過ぎた川魚店に、新しい調理方法で新しい客層を掴むのと同時に、今日はこれを食べたいと思うリピーター客を増やすというわけだ。

「客数が落ちたとはいえ、このお店が何とかやってこられたのは夜のコースを頼む常連客がいるからだ。コースメニューは客単価が高くて利益率も高い」

「確かにバウマイスター伯爵様の仰る通りです。今は夜のお客さん

のおかげで何とかなっています」

「そうなのか。ところで、利益率って何？」

せっかく説明してあげたのに、エルは利益率が何たるかを理解していなかった。

「何って、そのままの意味じゃないの。利益が何割出たかよ」

すかさずイーナが、エルに利益率の説明を始めていた。

「ヴェル。難しい専門用語ばかりでわかり難いぞ」

「専門用語でもないし、難しくも無いだろうが」

どうやら、エルに金勘定や領内の内政関連の仕事は任せられないようだ。

この手の分野にまるで適性が無いらしい。

「料理はこんな感じかな？　あとは店主さんが細かな味の加減や調理方法を確立しないと駄目だから」

「現在、王都中心部ではこんな新しい調理方法が流行しているのですね。新しい調味料も素晴らしいです。早速購入して試作を繰り返しますよ。私は伝統に拘るばかりで、新しい味の創作に手を抜いていました。両方を上手く両立させながら頑張ってみます」

店の存続に光明を見い出した店主は、俄然やる気を出したようだ。

良い物は残しながら、新しい事にも挑戦する。

老舗の料理屋が永遠に同じ物を出していると勘違いしている人が

多いが、人の味覚は時代でうつろうので実は微妙に味を変えている店が大半だ。
それさえ理解してくれていれば、このお店はあと百年は大丈夫なはず。

「（とても良い事をしたな。俺）あとは、何があるかな？　ところで魚はどこの生簀に？」

「池なら裏庭にありますよ」

他にも改善すべき点を見い出した。
店主の案内で厨房から裏庭に出ると、郊外という事もあって広めの池が複数掘ってあった。
覗き込むと、鯉やナマズが数十匹も泳いでいる。

しかし、なぜ一部の魚だけが呼び方が日本と違うのであろうか？
少し面倒くさい。

「池の水は綺麗ですね」

「うちの敷地から、良い湧水が出るんですよ」

「へえ、どのくらい泥抜きをするのですか？」

「えっ？　泥抜きですか？　しませんよ。臭みはハーブで消しますから」

「アウト！」

「えっ！　駄目ですか？」

鯉も含めて泥抜きをしないとは良い度胸である。
そのくらいの事ならば、川魚について聞き齧った程度の俺にでもわかるのだから。
というか、それをしないでもソコソコ食べられたという事は、この世界の自然は本当に汚染されていないのであろう。

「地面に池を掘って、そこに入れているのは？」

「生かしておくためです」

ただ生かしておくために池に入れているので、普通に餌をあげているらしい。
消化器官を空っぽにするのは、調理する時に捌きやすくするためでもあるので、これでは意味が無い。
臭みは、基本的にハーブで消すというのが伝統だと店主は語っていた。

「敷地内から湧水が出ていると聞きましたが」

「はい。それも大量に。おかげで、料理に良い水が使えるのです」

「魚の泥抜きにも使ぇーーー！」

「すいません！」

というわけで、急遽泥抜き専用の生簀を魔法で強引に作成する。
地面に掘った池では泥臭さが抜けないからだ。
常に湧水が流れ込むようにして水替えの手間がかからないように

し、数十にも区切った石造りの生簀がわずか一時間ほどで完成していた。

「魔法って、凄いんですね」

店主は、広い裏庭に完成した石造りの生簀群に感動しているようだ。

「当然指導料金はいただきますが、ここまで深入りした以上は再び人気店に戻って貰うので」

「はい……。それで、餌をやらずに一週間ほどですか？」

「試しにそのくらいですね。細かな日数は自分で研究してください。産地とか、個体の状態で違うから。ウナギは食べる三日前くらいに逃げられないように籠に入れて上から水を掛け流せば大丈夫」

これは、ウナギの養殖場で見た事がある。

専用の桶にウナギを入れて、その上から体表が濡れる程度に水を流して生かしておく。

当然絶食はさせるが、こうする事で生簀に入れるよりも活きの良い状態を維持できるのだ。

「では、一週間後に会いましょう」

さすがに魚の泥が抜けるまでこの店にいるわけにもいかないので、初日のコンサルティング業務はこれで終わった。

そして約束の一週間後。

「川魚料理店ですか？　王都の郊外にあるお店ですよね？　拙者も昔魚を売りに行った事がありますが、なぜそんなお店の梃入れを？」

「ヴィルマに頼まれたのと、何か面白そうだったから」

「そうですか……。領内の開発は予定よりも早く進んでいるので別に構いませんが……」

俺の拘りを理解は出来ないが、開発の足を引っ張っているわけでもないので、ローデリヒは俺達の王都行きに反対意見を述べなかった。

魔の森に狩りに出かける時と同じように見送りをしてくれる。

素早く『瞬間移動』で川魚料理店に行くと、包丁を研ぎながら店主が待ち構えていた。

店の入り口には『臨時休業』の札がかかっていて、相当に期待をしているようだ。

俺の、インチキコンサルタント業務二日目のスタートだ。

「まずは、コヌルから」

俺の指示通りに、鯉こく、うま煮、味噌焼きなどを丁寧に作っていく。

刺身や洗いなどは寄生虫の問題などもあるので、今回は止めておいた。

調理方法は大まかで適当なのに、店主は自分なりに上手くアレンジして作っていく。

「美味しいな」

「調理方法なのかしら？　うちの道場のは本当に泥臭くて」

「泥抜きは効果的ですね」

元々綺麗な水に住んでいたので、泥抜きをすると臭みも無く美味しくなった。

多分日本だと、よほど管理して養殖しないとこうはいかないのであろう。

「次は、丸揚げ甘酢あんかけだ」

これは、昔は中華料理屋で良く提供されていたのだと両親が言っていた事がある。

内臓と鱗を取り、粉を丁寧につけてから低温・高温の順に丁寧に油で二度揚げした鯉に、甘酢と野菜の餡をかける料理だ。

調理方法の記憶はかなり曖昧であったが、店主が手馴れた手つきで鯉を大きな鍋でまる揚げにする。

片栗粉も、教会経由で既に仕入れていたようだ。

「ヴェンデリン様。これでいいですか？」

「良い味の餡だな。さすがはエリーゼ」

二度揚げした鯉のから揚げに、エリーゼが作った甘酢餡がかかってとても美味しそうだ。

「凄い料理ですね。手間はかかりますけど」

頭から骨まで食べられるように長時間揚げないと駄目なので、調理に手間がかかる。
そういえば両親は、値段は時価と書かれていたと話していたのを思い出す。

「予約制で出せばいいじゃないですか」

「大皿料理で、宴会で出すと盛り上がりそうですね」

試食をしてみたが、手間をかけた分とても美味しかった。
中華料理屋で昔はヒーローだった理由が良くわかる。

「お腹が一杯になりましたわね」

「カタリーナは食べているだけ」

「ヴィルマさん。ここで私に出る幕など無いではありませんか。そもそも、ヴィルマさんも何もしていませんし」

「いや、ヴィルマは裏庭の生簀から型の良い鯉を掬ってきたけど。じゃあ、次はカタリーナがナマサを掬ってきて」

「えっ！　私ですか？」

俺が大きな網を渡すと、カタリーナはかなり躊躇している様子であった。

「ナマサは、少し見た目が……」

「ワイバーンも倒せるカタリーナが、なぜナマサ如きを怖がるんだ

？」

ナマズよりもワイバーンの方がよっぽど女性受けしなさそうなのに、カタリーナが竜を見て怖がった事など一度も無かった。

それなのにナマズが苦手とは、女性とはよくわからない生物である。

「見た目が生理的に駄目なのです」

確かにナマズなので、女性のほとんどは生理的に苦手かもしれない。

「意外とカタリーナにも女らしい部分があるんだな」

「ヴェンデリンさん。私ほど女性らしい人はそういませんが」

「ええと、エリーゼとか？」

「ヴェンデリン様。ナマサを掬ってきましたよ」

いつの間にか、エリーゼが大きな網でナマズを掬ってきた。

エリーゼは平気なようだ。

思えば、アンデッドの方がよほど気持ち悪いので、かなり耐性がついているのかもしれない。

「大将。景気良く捌いてね」

「調理人歴二十五年の腕前をご覧あれ」

色々な料理を学べて店主はテンションが上がっているらしい。

まな板の上で目打ちをしてから、素早く華麗に大きなナマズを三枚に下ろしていた。

「ほほう。目打ちとな」

「ナマサはヌルヌルしますからね」

店主が手際よくナマズを捌き、天ぷら、から揚げ、照り焼き、フライ、味噌仕立ての鍋などを作っていく。

「胃袋は珍味になりそうだな」

「裏返して良く水で洗ってから塩を付けて焼きましょう」

他にも店主は、中落ちや頭、骨、肝などを包丁で良く叩いてから味噌を混ぜて団子を作り、汁に浮かせて団子汁を作っていた。

「味噌という調味料は便利ですね。この料理は色々な川魚で試したのですが、塩とハーブだけだと味がいまいちで……」

店主も独自に調理方法の研究は行っていたようで、俺が言わなくても何種類か独自に料理を作っていた。

発酵調味料である醤油と味噌の存在が大きいらしい。

「ショだと材料が同じ魚なので、あまり良い味にならないのです」

ショは魚醤なので、同じ魚の生臭さが被ってしまうのであろう。

「次はポンカメを調理しよう」

「あの亀を食べるのですか？」

「カタリーナの故郷では食べないのか？」

「生憎とそういう習慣はありませんでしたわね……ひっ！」

カタリーナは、ヴィルマが生簀から掬ってきた大きなスッポンの首を店主が切り落とすのを見て小さな悲鳴をあげていた。

「ワイバーンの首は平気で魔法で刎ねる癖に」

「それとこれとは別ですわ。ポンカメは見ていると可愛いではないですか」

そういえば、日本ではペットとして飼っている人もいたのを思い出す。

そして話をしている間に店主はスッポンを見事に解体し、これを材料に俺はから揚げ、鍋、焼き、雑炊などの定番料理を紹介して作らせる。

ここでも店主は、その腕前を生かして初めてとは思えないほど上手に料理を作っていた。

「さて。味見しようか」

時間はそろそろ夕方になっていたので、夕食にちょうど良いであろう。

お店は休みで、俺達はここに泊まって明日もコンサルティング業務を行う予定なので、店内の個室でまったりと夕食を取る事にする。

「美味いなぁ」

素材も調理も優れているので、川魚料理はどれも美味しかった。綺麗な水で育ち泥抜きもさせたので、川魚臭さが無いのが良いのであろう。

「これなら、お客さんも一杯来てくれます。醤油と味噌を大量に仕入れないと駄目ですね」

出来上がった料理を出しながら、店主はとても嬉しそうだ。

「大人の味で美味しいな」

エルも満足そうに大量の料理を食べていた。

「薄利多売でやっているアルテリオさんの大資本に挑戦しても勝利は難しいから、川魚という特徴とメニューの多彩さで勝負する。から揚げや甘露煮は店先で売ってもいいし、お昼の定食メニュー、単品に酒を楽しむ人、宴会用に数種類のコースメニューなども設定して……」

「なるほど。お客さんの目的別にメニューを設定するのですね」

「ああ。でも、人手の問題があるか」

「大丈夫です。両親と妻と子供達がいますから」

今は店が暇なので、奥さんは夜だけ、息子さん達は他の飲食店にアルバイトに行っているらしい。

「お店が忙しくなるのであれば、みんなこのお店に集中してくれますとも」

「ならば、明日が本番ですね」

「明日ですか？」

「そう。明日は本番のウナギです」

川魚料理が予想以上に美味しかったのは想定外であったが、俺がわざわざ好きでも無い川魚料理を教えて作らせたのには理由がある。

それは、このお店の店主の腕前を見るためだ。

ウナギといえばあの料理。

技術を必要とする蒲焼を作らせるのに値する人物であるのか？

それを見極めるために、俺は時間を費やしてきたのだから。

「店主は、ウナギをどう料理しますか？」

「そうですね。輪切りにしてから湯通しをし、塩とハーブで煮込んで……」

「不味そう……」

正直なところ、全く食指が動かない料理にしか感じられない。

「不味そうって……。一応、この近辺の郷土料理ですけど……」

この世界では、泥抜きもない川魚をハーブなどで臭みを取り、塩で煮込むか焼くのが大半なのが頭にくる。

「伝統も大切だけど、新しい料理に挑戦しないと！」

俺は、思わず店主に力説してしまう。

「ヴェルは、どうしてそこまで料理に五月蝿いんだ？」

「趣味だからかな？」

「だとしても、半分病気だな」

「間違ってはいないね」

外野でエルとルイーゼが失礼な事を言っているが、人間食べる事は大切である。

みんなが美味しい物を食べられれば、それだけでこの世の争いのネタは減るのだから。

「とにかく、料理を食べたら明日に備えて早めに寝るぞ」

「明日も頑張る」

「ヴィルマよ。もし明日に店主が調理人の神髄を見せたら、川魚業界に異変が起こる。店主は、『ウナギ王』と呼ばれるかもしれない」

「そんなに凄い料理を。明日に備えて早く寝る」

「そうだな。早く寝て明日に備えよう」

俺とヴィルマは、隣同士で毛布に包まりそのまま目を瞑る。

場所は、店に二階にある部屋を借りていた。

「えっ？　こんなに早くから寝るの？」

イーナが不満そうだが、明日は早朝から忙しいのだ。

なぜなら、明日は蒲焼作りに全力を注がないといけないのだから。

「俺は、明日も美味しい物が沢山食べられたらそれでいいや」

「私も手伝いがありますから」

「ウナギなんて、脂っこいだけであまり美味しくありませんのに……」

エルとイーナも乗り気であったが、唯一カタリーナだけはウナギに苦手意識があるようだ。

「だが、明日にはカタリーナはウナギ好きになっていると断言する！」

「その自信の根拠が良くわかりませんわ……」

その日はは早めに寝てしまい、翌日の早朝。

軽く朝食を取ると、休業中のお店の前庭に特設の調理スペースを作っていた。

エルが主体となり、ウナギを捌くための調理台に、炭火で焼くための台も店内の設備を利用して大工仕事で仕上げていた。

「炭は焼き魚用のがあるから、あとは強火の遠火で焼ける台を作る

んだ」

ウナギを焼くには強火の遠火が良い。
某グルメ漫画でもそう言っていた。

「それはいいけど、ヴェルの設計図が下手」

「大体わかるから問題ないだろうが」

「そんなに難しい物じゃないからな。でも、絵が下手」

大きなお世話とは思いつつも、エルは順調にウナギ焼き台を仕上げているので不問にしておく。

「イーナ。ルイーゼ。ご飯はどうだ？」

「大丈夫だけど、こんなに炊いて大丈夫なの？」

「同感だね。ちょっと量が多く無い？」

「みんなお替りをするかもしれないから」

「自信満々ね」

暫くすると臨時調理スペースが完成し、そこにヴィルマが湧水で締めたウナギを大きな桶に入れて持ってくる。

「店主！　背開きで！」

「任せてください」

ウナギをまな板の上に乗せてからナマズと同じように目打ちをし、背中から内臓を傷つけないように開いていく。
俺だけなら完全にお手あげであったが、さすがは長年ナマズなども捌いてきたプロ。
実に手際よくウナギを捌いていく。

内臓を取り出してから、背骨と頭も切り離してから木製の串を刺せば、あとは白焼きにするだけだ。

「エリーゼは、タレを作ってくれ」

「はい」

エリーゼが、醤油、ミリン、酒を材料に鍋でタレを煮込んでいく。
続けてその中に良く焼いたウナギの骨と頭を入れ、暫く煮込むとこれでタレは完成だ。

「ウナギの骨と頭で出汁を取るのですね」

「このタレは重要なんだ」

店主は丁寧に時間をかけてウナギの白焼きを作り、その間にエルはウナギを蒸すための蒸篭を作製していた。

「エル。しっかり作るんだぞ」

「冒険者の仕事じゃないような気もするけど、美味そうなウナギ料理も出来ているから頑張るか」

エル手作りの大鍋の上に載せる蒸篭が無事に完成し、それを使って白焼きしたウナギを蒸す。
これで余分な油を落としてスッキリさせるのだ。
いわゆる関東風であるが、天然物のウナギは養殖物より身が固いそうで、こちらの方が良いと聞いた事があったのでそうしている。

「そして最後に、蒸したウナギにタレを付けて焼く」

「おおっ！　こんな料理があるとは。焦がさないように慎重にいきます」

店主が最後の焼きを行い、ウナギの蒲焼は無事に完成していた。
あとは、炊いたご飯にもタレをまぶし、最後に串を抜いたウナギを載せて完成だ。

「カタリーナ。あとは山椒なんだけど」

「はいはい。ちゃんと摩り下ろしましたわよ」

蒲焼には必須の山椒もこの世界には存在していたので、カタリーナに摩り下ろさせていた粉を添えてあとは食べるだけである。

「まずは俺が試食を……」

早速一口分だけ口に入れるが、久しぶりに食べるウナギは天にも昇るような味であった。
プロとはいえウナギの蒲焼を調理した経験が無いので日本のお店の物には劣るかもしれないが、これは店主が腕を上げていけばいいのだ。

数さえこなしていけば次第に日本の物と大差は無くなり、そうすれば俺はいつでも美味しいウナギの蒲焼を食べる事が出来るのだから。

「こういう食べ方があるのですか……」

続いて、店主も試食しながらその味に感動していた。

「普段はどんな感じで料理を？」

「腹から割いて内臓を抜き、塩でヌメリを取って輪切りにして煮込みます。煮凝りが美味しいと言われていますね」

イギリス名物の、ウナギのゼリー寄せみたいな料理なのであろうか？

俺は試食したいとは思わなかった。

「これ。物凄く美味しい！」

「もっと食べたい！」

「ルイーゼ。ずるい。食べ過ぎ」

「タレを付けて焼いている時の匂いが堪りませんわね。ヴェンデリンさん。量が少ないようですが……」

最初に作られたウナギ丼は、イーナ達によって一分と保たないで全て食べられてしまう。

「俺。一口も食ってないぞ！」

そして出遅れて食べられなかったエルが文句を言っていた。
もう一人、エリーゼも食べられなかったが、さすがに食べられないで文句を言うような事はしなかった。

「店主。今日は、とにかくウナギを捌いて蒲焼を作りまくるんだ」

「練習のためですね」

「それもあるけど、最大の理由はタレだ！」

俺はエリーゼが作ったタレの入った大きな壺を指さす。

「焼いて蒸したウナギに、タレを付けてまた焼くだろう。その時にウナギの脂や旨みがタレに溶け込むんだ」

「つまり、段々とタレにウナギの旨みが凝縮すると？」

「減ったら新しいタレを注ぎ足す。さすれば、このタレは徐々に旨みを増していく」

「とんでもない財産になりますね」

「火事になっても、戦争になっても、このタレさえ持っていれば店の再建は簡単に行える」

「なるほど。タレがお宝なんですね。よーーーし。一杯焼いて腕を上げるぞ！」

店主は急ぎ奥さんと子供達を呼び寄せて、ウナギを大量に焼き始

めた。
彼には既に成人した息子が三人もいたので、四人で交替しながら捌き、串刺し、焼き、蒸しを行い、奥さんは米を炊いて丼によそい始める。
そして、三十分ほどで追加のうな丼が完成する。
「エル。遠慮なく食うぞ」
「良い匂いだな。ウナギとご飯の組み合わせか」
ウナギ焼き台と蒸し機をもう一組作り終えたエルは、ウナギ丼を美味しそうに食べ始める。
「ウナギはしっとり柔らかで美味しいし、タレの染みた米が最高だな」
「骨を揚げた物と、肝焼きも上手いぞ」
店主の息子に指示を出して骨煎餅と肝焼き、肝吸いなども作らせたので、これも一緒に食べながら俺は久々のウナギを楽しんでいた。
「お替り！」
「俺もお替り！」
美味しいのでついお替りをしてしまったが、それでも二杯が限界であった。
あとは、肝吸いを啜り、肝焼きや骨煎餅を食べながら店主達を見ていると徐々に蒲焼を作る手際が良くなってくる。

「お替り」

ただし、全て出した途端にヴィルマに食べられてしまっていたが。

「ヴィルマ。美味しいか？」

「美味しい。これでこのお店は大丈夫だと思う」

「そうだな。俺が助言するのはここまでだ。あとの商売のやり方は店主さん達が考える事だ」

「お替り」

結構恰好良く締めたつもりなのに、ヴィルマはいつも通りに空の丼を店主の奥さんに差し出していた。

少し空ぶった気分だ。

「ヴィルマ。それ何杯目？」

「六十杯目。でも、そろそろ止める。腹八分目くらいが健康に良いと聞くから」

「うん。そうだね……」

店主達はまだウナギを焼き続けていたが、これは俺の計算の内だ。

外に設置した焼き台でウナギにタレを付けて焼いていると、次第に良い匂いが周囲に広がっていく。

ここは郊外であったが、帝都中心部に続く街道の脇なので多くの人の出入りがあり、匂いに釣られて徐々に人々が集まってきたのだ。

「『リバー』さん。それは新しいメニューか？　物凄く良い匂いだな」

「はい。新しいウナギ料理ですよ」

「昼飯がまだなんだ。それはいくらだ？」

「ええと。今日は……」

「はい。ウナ丼は十五セントです。半分のやつは八セント。肝吸い、肝焼き、骨煎餅も五セントです」

「じゃあ。ウナ丼に肝吸いと骨煎餅も付けて」

「まいどあり。お客様のご案内です」

俺は強引に値段を決めて、客を店内の席に案内してしまう。

「バウマイスター伯爵様？」

「俺が外でウナギを焼かせた理由がわかるでしょう？」

「匂いですね」

「せっかく大量に焼いて練習するんだから、ついでに販売してしまいしょう。店主。一杯焼かないと」

ウナギは匂いで食わせる。

外でウナギを焼き続けていたので、街道を通る人達から一定の割

合で様子を見に来る人が現れ、彼らはそのままウナ丼を食べていく。
王都に戻ってその美味しさを宣伝してくれれば、明日からもお客が沢山詰めかけるという寸法だ。

せっかくの材料を無駄にしないための配慮でもある。

「ウナギの新しい料理か。初めて食べるけど美味しいな」

「俺はウナギの煮凝りは嫌いだけど、これは本当に美味いよな」

「匂いに釣られて来て大正解だったな」

お昼を大分過ぎても客足は途絶えず、いつの間にかお店は満席になり、俺達も注文を取ったり食器を洗ったりして手伝っていた。

「たまにはこういうのも面白いな」

「そうですね。ヴェンデリン様」

学生時代に、ラーメン屋やファミレスでアルバイトをしていたのを思い出す。
エリーゼも楽しそうに注文を取りに行っていた。

「しかし、凄い客の数だな」

「ヴェンデリンさんは、妙な才能がありますわね」

エルとカタリーナは食器を洗いながら、客の多さに感心している。
俺の商売の才能があるというのは間違いで、本当は後出しジャンケンの類なのだが。

この世界にウナギの蒲焼が存在せずたまたま俺が知っていただけで、商売で一番稼げるのは先駆者というのは間違いではなかった。

「良い匂いだな。俺はご飯は抜きで、肝焼きと骨煎餅と酒ね」

「ブランタークさん？」

「伯爵様。こんな場所で何をしているんだ？」

ここのところ、ブライヒレーダー辺境伯の命令で別行動をしていたブランタークさんが、何食わぬ顔で客として来てウナギを注文していた。

「ちょっとしたアドバイザー的な仕事です」

「それは、冒険者の仕事なのか？」

「たまにはこういう仕事も面白いでしょう？　ブランタークさんは郊外で仕事だったのですか？」

「お館様のお使いさ。しかし、また新しい料理か。どれどれ……。酒が進むな」

ブランタークさんは、冷やした麦蒸留酒を飲みながらウナギの蒲焼や骨煎餅を食べて満足そうだ。

「肝焼きも上手いな。ここは、酒と良いツマミが楽しめる大人のお店だな。今度、アルテリオを誘って……。あいつを嚙ませていないんだな」

「材料が特殊ですし、あまりアルテリオさんばかりに任せても健全な競争が起こらないでしょうし」

「それもそうか。そういえば、ここは古い川魚料理店だったよな。漁師達とも繋がりは深いわけだ」

「アルテリオさんだと、ウナギの仕入れで交渉が面倒でしょうし」

「そうだな。値段はここよりも高くなるよな」

漁師達は正式にギルドを結成していないが、結束が強くて内情はほぼギルドと変わらない。

もし老舗であるリバーでウナギや他の川魚料理がヒットすれば、それは彼らの生活の向上にも寄与する。

新規のアルテリオさんよりも古い付き合いがあるリバーを優先して、良い材料を安めで納入してくるはずだ。

「ウナギはアルテリオは除外した方がいいか」

「新しい商売の匂いが！　って！　バウマイスター伯爵様！　俺は伯爵様の御用商人なのに！」

どうやら今日は王都にいて、しかも素早くウナギの匂いを嗅ぎつけてきたらしい。

話題の主のアルテリオさんは、美味しそうなウナギの蒲焼と手伝う俺の姿を見て絶句していた。

「俺にも噛ませてくれぇーーー」

「ウナギの仕入れ。大丈夫ですか？」

「ううっ……。この店ほど安くは出せない……」

面倒な漁師達との交渉を予想して、アルテリオさんは尻込みを始めていた。

「タレの材料である醤油と味醂は、アルテリオさんはほぼ独占しているじゃないですか。ここは、顧客の商売繁盛を祝わないと」

それに、バウマイスター伯爵領でウナギ屋を開く時に、店主は骨惜しみをしないで助けてくれるはずだ。

『情けは人のためならず』である。

「この香ばしい匂いは、醤油原料のタレなのか」

「他にも、陳腐化した川魚料理で大量に味噌を使う料理法を勧めたので注文が増えますよ」

「味噌もか！」

「このタレは他の食材でも応用可能です。蒸した鶏肉にタレを付けて焼いた物とか。ナスや豆腐などをタレで焼くと、肉や魚が駄目な人でも食べられますから」

「なるほど。それは良い手だな。初めまして。アルテリオ商会の者ですが」

アルテリオさんはすぐに機嫌を直し、店主に挨拶をしてからうな丼や肝焼きを頼んで美味しそうに食べ始めていた。

この辺の切り替えの早さは、さすがというべきであろう。

「これならば、醤油が大量に売れる！」

店内は相変わらず満員のままで、前庭に臨時でテーブルと席を置いてそこに客を誘導する有様だ。

そして、遂にあの人物が姿を見せる。

「某の嗅覚に美味しい匂いが入って来たのである！　とう！」

突然店先に高速で着陸をした物体は、王都中心部から飛んできた導師であった。

着陸と同時に轟音がしたので、客達の中には何事かと丼を持ったまま店に外に出て来た人もいたほどだ。

「バウマイスター伯爵よ。なぜこういう面白い行事に某を誘わないのであるか！」

「いや……。さすがに導師にこうい仕事は……」

王宮筆頭魔導師である導師に、こんな仕事をさせるわけにいかない。

表面上の理由はそれであったが、本音は導師が役に立つとは思えなかったからだ。

「試食で貢献できるではないか！」

「（それは、ヴィルマがいるから……）今度は誘いますから」

「必ず次は某を誘うのであるぞ！　さて、早速新しいウナギ料理という物を食べてみるか。ウナ丼二十杯ご飯大盛り、肝吸い十杯、骨

煎餅二十、肝焼きを三十本」

「本当にそんなに食べるんですか？」

「当然である！」

導師は自信満々に大量注文を行い、運ばれてきた料理を貪るように食べ始めていた。

「大変に美味しいである！　タレが食欲を誘うのである！」

「見ているだけで胸やけしそう……」

「導師様は小食な方」

「それは、ヴィルマに比べての話じゃないか……」

導師の食べっぷりにエルがゲンナリとした表情を浮かべ、ヴィルマ以外はそれに賛同の視線を向けていた。

「バウマイスター伯爵様のお知り合いには、凄い方々が多いのですね」

「凄いですけど、普通に美味しい料理を出していれば問題ありませんから」

ブランタークさん、アルテリオさん、導師と三人も続けて王都では名が通った人が来たので、店主は緊張しているようだ。

それでも、スピードを落とさずにウナギを焼き続ける。

なぜなら、そうしないといつまで経っても客が減らないからだ。

「明日から大丈夫ですか？」

「仕入れや人手の方は大丈夫ですよ」

老舗というだけはあって、店の規模以上に色々と融通が効くようだ。

店主は、俺達がいなくても大丈夫な経営体制をなるべく早く構築すると断言する。

「教えていただいた川魚料理とウナギ料理を中心に、リバーがもう千年続くように頑張ります」

結局、夕方までに全てのウナギが売り切れ、その日の夜は座敷で俺達に色々な料理を出してくれた。

俺が教えた物が多かったが、この一週間で練習を重ねたようで味は洗練されて美味しくなっていた。

「美味いな。酒が進むぜ」

「醤油や味噌の他にも、フライ料理用のソースや甘酢餡用のケチャップなどでもこのアルテリオ商店をお願いします」

「バウマイスター伯爵。ここに出ている料理は全て美味しいのである！　某も次からは必ず呼ぶのであるぞ！」

三人ほど無関係な人達も無料飯にありついていたが、これ以降リバーは川魚料理の旗手として支店を増やし、特にウナギの蒲焼では他者の追随を許さず、後に店主は『ウナギ王』と呼ばれるようにな

るのであった。

「なるほど。これが話に出たタレか……」

「ミズホ伯国ならあると思っていましたが」

「我が領では、ウナギは白焼きにしてワサビ醤油が定番でな」

両軍による戦いは今日も無く、あまりやる事も無かったので俺は久々にウナギの蒲焼を作っていた。

俺は素人ではあるが、少人数分を作るのであればさほど難しい物でもない。

お店に出すわけでもないので、多少見た目が悪くても問題が無いからだ。

ところがそこにミズホ上級伯爵が姿を見せ、俺から蒲焼の話を聞くと調理人を連れてきた。

ウナギ料理を作れるそうなので任せると、彼は丁寧にウナギを白焼きにして俺の前に差し出す。

「一旦蒸してからタレを付けて焼くのと、蒸さないでタレを付けて焼く方法があります」

関東風と関西風の差であったが、前者は柔らかくふっくらとしたウナギが、後者は皮がパリっと焼けてウナギのしっかりとした身が楽しめる。

それにしても、ミズホ伯国に蒲焼が無いのは驚きであった。
だが、日本でも蒲焼は江戸時代中期にならないと出て来ないのでおかしな話ではない。

「両方作って食べ比べようではないか」

「そんなに沢山ウナギがあるのですか？」

「今は時期ではないが、ウナギは力が付く食材だからな。魔法の袋に保存してあるのだよ」

捌いて串を刺した状態で保存してあるそうで、それを取り出すと俺の指示通りに調理してご飯をよそった丼に載せてくれた。

片方は関東風で、もう片方は関西風だ。
タレは、リバーの店主から分けて貰っていたのでそれを提供している。
減ったら、新しいタレを作って補充していた。

「暴力的に美味しそうな匂いだな。味も最高じゃないか！　今日は蒲焼を大量に作るのだ！」

ミズホ上級伯爵の指示でウナギの在庫が大量に放出され、それを材料にウナ丼が作られ、多くのミズホ人達に配られていく。

「物凄く良い匂いですね。これはバウマイスター伯爵様が？」

「そうなんだよ。ハルカさん」

「誘われる匂いですね」

匂いに釣られてハルカも姿を見せ、作業を手伝っていたエルが彼女に駆け寄って説明をしていた。

「バウマイスター伯爵様は、なぜこうも新しい料理を思い付けるのでしょうか？」

「さあ？　前世が料理人だったとか？　ハルカさんも食べようよ」

「はい」

エルとハルカに、エリーゼ達や導師も集まってウナギを食べ始めるが、そこに匂いに釣られてアルフォンスが姿を見せる。

「ウナギだね。帝国だと炒め物にするんだよ」

輪切りにして茹でた物を野菜と一緒に炒めるらしい。

美味しいのかは不明である。

「対陣が長いから、こういう料理はスタミナがついていいかも」

「そうじゃな。これを食べたヴェンデリンが妾に手を出してくれる可能性に期待じゃの」

「いえ。それはありません」

「そこで急に素に戻るでないわ」

テレーゼも姿を見せて、美味しそうにウナ丼を食べていた。

今日は他に何も無かった日であったが、ソビット大荒地の野戦陣地の広範囲に蒲焼の匂いが広がった事だけは確かであった。
そして内乱終了後、ミズホ伯国でウナギの蒲焼が帰還兵達によって爆発的に広がっていく事になる。
ただ、その前にひと悶着あったのだが……。

「バウマイスター伯爵。そのタレを千リョウで売ってくれ！」
「そんな値段では売れません。これは大繁盛店リバーで大量にウナギを浸したタレなのですから」
「それを聞くと余計に欲しい！　今日はうちもウナギを提供したではないか！」
「みんなに食べさせたいと言ったのは、ミズホ上級伯爵ではないですか。俺はタレを提供して貢献しましたよ」
「こうは考えられないか？　バウマイスター伯爵のタレは、ワシが提供したウナギの旨みを吸収して更に味が良くなった。今のタレの美味さに貢献していると。ならば、せめて半分は売ってくれても構わないのでは？」
「いやいや、この系統のタレの作り方はミズホ伯国では珍しくも無いでしょう。自分で作って新しいタレから始めれば」
「それでは、我らのタレがバウマイスター伯爵のタレに後れを取っ

てしまうではないか」

「大丈夫ですよ。ミズホは伯国はウナギが名物なのですから、すぐにタレが追い付きますって」

「売ってくれ。そのタレが欲しいんだ！　半分でいいから！」

「半分も無くなったら、旨みが薄まるし」

「ワシが今日提供したウナギの旨みが半分を占めるから、結局は同じではないか！」

「半分なわけないでしょう！　ウナギの有名店が毎日ウナギを焼いて漬けた貴重なタレを、俺だから譲って貰えたのに！」

「四分の一でいいから！」

蒲焼の試食は大好評の内に終わっていたが、そのあと俺とミズホ上級伯爵との間でタレを巡って壮絶な駆け引きを行う羽目になる。

結局熱意に負けて四分の一を譲る事になり、このタレがミズホ伯国中に生まれるウナギ屋のタレの基本となるのであった。

第九十一話　これは偽善か、奉仕活動か？

「今までの功績をもって、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターに帝国名誉伯爵の爵位と解放軍参謀の地位を授けるつもりだが、諸卿のお考えは如何に？」

翌日、再び開かれた会議でテレーゼは集まった貴族達に俺への叙勲と、正式な地位への任命を発表していた。

「いえ……。特に反対意見などはございません」

「バウマイスター伯爵は、実際に功績を挙げておりますれば……」

「両国の爵位の兼任とは聞いた事がありませんが、名誉爵位ならば一代限りですし……」

内心ではどう考えているのか知らなかったが、貴族達の中で露骨に反対した者はいなかった。

他国の貴族である俺が、解放軍で力を持つようになるのが気に入らない奴は多いはず。

だが、解放軍内で有力な戦力である俺達を今の時点で排除してしまうと、反乱軍との決戦で敗北してしまう可能性が高い。

間違いなく、心の中で複雑な感情がせめぎ合っているはずだ。

「任命はどうされますか？」

「と申すと？」

「帝都皇宮は、ニュルンベルク公爵が抑えておりますれば」

一人の老貴族が、唯一の懸念を口にしていた。

爵位を任命できるのは皇帝のみであり、反乱軍に囚われたアーカート十七世帝は軟禁されていると言われていて、ニュルンベルク公爵は独自に皇帝位を僭称している。

クーデター政権なので反乱軍の中でもあまり浸透していない呼び方であったが、それでも独自に爵位や地位などを与え始めているという情報も流れていた。

クーデター時に始末したり解放軍にぶつけて殺した貴族の爵位や領地を、己の子飼いの家臣達に与え始めたらしい。

「あの男がいかに皇宮を抑えて皇位を自称しても、それは偽りの物でしかない。こちらは帝都を解放後に正式に叙勲すればよい。今は戦争の時間なので、仮の叙勲というわけじゃ」

こうして、一代限りという条件で俺は帝国の貴族になった。

本当は王都の陛下にお伺いを立てないといけないのだが、例の妨害装置のせいで連絡の取りようがない。

阻害される魔法が限定的な分、妙に効果範囲が広いようで、内戦開始から一か月以上も経つが王国からは何の情報も入って来ない。

ここに使者を送るにしても、帝国南部と中央は反乱軍のテリトリーなので難しいはずだ。

そういえば、帝都に置いて来てしまったシュルツェ伯爵達はどうなったのであろうか？

魔法使い達は数名殺されてしまったようだが、貴族に手を出すほどニュルンベルク公爵が愚かではないと信じたい。

皆殺しにでもされていたら、さすがに陛下も懲罰的な出兵を検討せざるを得ない状況になってしまうからだ。
利益以前に国家としての面子もあるし、長期的に考えれば懲罰を与えた方が利益になるというのも国家運営である。
綺麗事だけで済む世界では無い事だけは確かであった。

「密偵の情報によると、遂にニュルンベルク公爵が自ら軍を率いるようじゃな」

テレーゼは、真面目に反乱軍の情報を集めていたようだ。
二度の大規模戦闘で数万の屍を作り出した両軍であったが、このままだと埒が明かないと思ったのかもしれない。
反乱軍は大規模な動員をかけているとの報告であった。

対する味方解放軍も、出来る限りの戦力を集めようとしている。
ただし早馬を使った伝令が主力となったので、どうしてもリアルタイムで情報が入らない。
時間がかかる点がもどかしかった。

「それで、戦力比は？」

「反乱軍が十二万人で、我らが九万人ほどかの」

帝国の最大動員兵数など知らないので、俺にはこれが多いのか少ないのかが判断できなかった。

「これは限界ギリギリの戦力なのでしょうか？」

「そこまでは、双方共に兵力を出せぬよ」

帝国の人口数で考えれば、百万人の兵士の動員も理屈では可能である。

だが、そこまで兵力を増やすためには、普段は農民や職人などをしている一般庶民を徴兵しないといけない。

ところがそれを行うと、その貴族の領地や帝国直轄地の生産力が落ちる。

徴兵された人達の稼ぎが減って、税金を納められなくなるからだ。

兵士として徴兵された人達は、最低限の衣食住は保証されているが給金はお小遣い程度しか貰えない。

戦争で活躍すれば褒美が出る事もあるが、活躍できるほど強い人は元から職業軍人などになっているという罠もあって、正直なところは堪った物ではないはず。

過去の戦争で略奪が認められていたのは、彼らの収入減を補う必要があったからだ。

女性への暴行なども、口の悪い奴に言わせると風俗代の節約らしい。

酷い話だが、戦争なんてこんな物である。

「なるべく生産力を落とさないように集められる、ギリギリの戦力というのが正解じゃの」

それでも、両勢力共に頭の痛い問題であろう。

生産力の低下に、両勢力が敵対勢力圏への流通を停止させているので、交通・流通の麻痺による経済活動の低下という問題もある。

「妾達は戦力不足で、ニュルンベルク公爵もクーデター政権故に想

像以上に地盤の強化に苦戦しておる」

邪魔な貴族を解放軍に始末させる作戦はある程度成功したが、今度は敗戦のせいでニュルンベルク公爵の軍事的才能を危惧する声が上がっているようだ。

先の戦いでも、戦略的には一度奪われた拠点を全て取り戻しているので勝利であったが、戦術的には戦死者の数は圧倒的に反乱軍の方が多かったという事実がある。

今回の大規模動員は、その懸念を払拭するための物らしい。

「ニュルンベルク公爵としては、思ったよりもこちらの戦力を殺げなかったというわけじゃの。まあ、迎え撃つしかあるまいて」

テレーゼの作戦方針は、この野戦陣地での迎撃と、損害を蓄積させて撤退を促すという物であり、これに異を唱える者はいなかった。

「明日には配置などを発表するので、各々で準備を怠らぬように」

会議は、俺への叙勲と反乱軍の迎撃を行うという二点の発表で終了していた。

俺が部屋を出ようとすると、ニコニコと笑顔を浮かべるテレーゼによって拉致され、なぜか彼女の執務室で大量の書類と格闘する事になっていた。

「なぜ？　しかもこんなに一杯？」

俺の目の前には、大量の書類が積まれていた。

商社マン時代にだって、こんなに大量の書類と格闘した事などない。

「そなたは参謀であろう？」

「それは、お飾りでは？」

「お飾りでも、妾の書類が減ればそれで良いのじゃ」

「その前に、書類の処理は参謀の仕事じゃねえ！」

「解放軍で一番偉い妾が命じれば、その瞬間から参謀も書類の処理をしなければいけないのじゃ」

「（何という傲慢な思想……）」

当たり前と言われればそれまでだが、大軍が動けばそれだけ大量の書類が発生する。

反乱軍は帝都を抑えているので、協力的な中央の官僚達に任せておけばいいが、解放軍はフィリップ公爵家の家臣達に負担が重く圧し掛かる。

ミズホ上級伯爵家やバーデン公爵家も手伝っているが、他の貴族家はここまで大規模に集まって軍を編成した経験などない。

慣れない軍事行動に右往左往して、とても手伝える状態ではなかった。

「あまり役には立てないと思うけどね……」

それでも、サラリーマン時代の癖ですぐに書類を読み始めてしまう。

一緒に手伝えそうなのはイーナとエリーゼなので、分担して書類に書かれている内容から確認を始める。

「イーナ。ルイーゼは？」

「逃げたわ」

「だと思った」

頭は悪くないが、半ば直感で生きているルイーゼに書類仕事など不可能である。

性格的にもこういうチマチマした仕事は苦手で、既に脱兎の如く逃げ去っていた。

「エリーゼ。ヴィルマは？」

「ヴィルマさんには難しいかと……」

ヴィルマは字は上手であったが、基本的に書類仕事など経験が無かった。

義父があの人なので、間違いなく教えてもいないであろう。

「カタリーナは？　あいつは意外と大丈夫そう」

「他の仕事だそうです」

エリーゼによると、ブランタークさんと共に魔法使い達に訓練などを行う仕事を任されたそうだ。

今から魔力など上がらないが、ベテランのブランタークさんに指導させて効率良く戦わせたい。

テレーゼから頼まれて。カタリーナはブランタークさんの補佐だそうだ。

「導師は？」

「ヴェルは、本当に導師様に書類仕事を任せたいの？」

「あなた。伯父様には一番不向きな仕事だと思います」

二人に真顔でそう言われると、俺は黙って頷くしか無かった。
確かに導師が素早く大量の書類を処理する様子など、頭の中に思い浮かべるだけでもおかしいと感じてしまう。
すぐに面倒になり、その書類で鼻でもかみそうな感じだ。

「伯父様は、陣地の外に馬除けの溝を掘りに行っています」

前の防衛戦でも役に立った、騎馬隊を近付けさせない溝を増やす工事に駆り出されているらしい。
しかしながら、イメージ的には一番導師に似合う仕事とも言える。
ガテン系の格好をして溝を掘っている導師が容易に想像できた。

「それで、この三人か」

一番真面目に勉強しているイーナに、完璧超人のエリーゼと。
三人で簡単そうな書類から見ていく事にする。

「軍編成への具申？　ローザス伯爵とハイネン子爵は仲が悪いので近くに配置しない方が……。シンジェロルツ子爵からの具申書類？」

「現在、九万人を三つの軍団に再編成しようと考えておってな」

テレーゼの作戦案では、自らが中央の軍団の大将となり、左右の

どちらかをバーデン公爵公子に任せる計画らしい。

「残り一つは、ミズホ上級伯爵ですか？」

「いや。中央に組み込む。あの家は特殊だからの。いきなり上位指揮権を与えても、下にいる貴族が反発するであろう。逆にミズホ伯国軍とて、顔も見た事が無い貴族に指揮されるのは嫌であろう」

貴族の諸侯軍を纏めて指揮する事の難しさがここにある。

率いている軍勢の数や練度はバラバラで、上位指揮官を置くにしてもあまり特定の諸侯軍ばかり消耗させてしまうと、これは後の諍いの種になる。

その前に、上位指揮官がわざと仲の悪い貴族の軍勢を消耗させようとしたり、逆にそれに反発して命令を聞かなかったりと、解放軍は全て諸侯軍から成っているので、編成案を考えるだけで頭の痛い問題であった。

「反乱軍の方が楽であろうが、程度の問題じゃな」

仕方なしに従っている貴族も多いので、下手に苦戦すると戦場で裏切られる可能性もある。

それに警戒した編成にすると、今度は軍の強さや指揮の効率が落ちてしまう。

反乱軍であてになるのは、ニュルンベルク公爵家諸侯軍と一部帝国軍だけであろうとテレーゼは予想していた。

「ただ、それでも数も練度も反乱軍の方が上じゃ」

「帝国軍がいますからね」

常設で、実戦経験は治安維持くらいであろうが、定期的に集団で訓練は受けているのでマシな部類に入るからだ。

「結局、フィリップ公爵家諸侯軍と、ミズホ伯国軍だけが頼りか……」

先の具申書類など、困難の一部でしかない。

組み合わせの配慮が多すぎて、約九万人の軍勢を三つに割るのに三万人ずつにならない。

中央ばかり四万人になってしまい、一番少ない二万人ほどの軍団が苦戦すれば援軍を出す羽目になるであろう。

放置すれば、野戦陣地の土壁に取り付かれてしまうのだから。

「他にも、食糧の備蓄状況に、備品購入リスト……。何でこんなに高いんだ？」

素人の俺でもわかるほどに、日用品の売買なのに単価が物凄く高かった。

「こういうネズミは多いの」

テレーゼは、俺が見付けた書類に朱で印を付けると、すぐに呼び鈴で担当の家臣を呼んで責任者を処罰しておくように命じる。

人間が十万人近くも集まっていると、一定数の悪事を働く人間がいる。

他にも、部隊内での窃盗事件、兵士同士の喧嘩、陣地を訪れた行商人に金を払わなかったとか、数名で近隣の村に侵入して強盗をしたり村の娘を犯したりと。

これの最終的な判決もテレーゼが出さないと駄目で、彼女の顔に

は疲労の色が浮かんでいた。

「この困難を乗り越えてから、あのニュルンベルク公爵との決戦がある。一度で終わるはずもなく帝都とニュルンベルク公爵領を落とすのにどれだけ犠牲が出るか……」

そして戦後には、新皇帝を選出しないといけない。

ほぼテレーゼが女帝で決まりらしいが、即位すればボロボロになった帝国の立て直しでまた苦労する羽目になるはずだ。

可哀想だとは思うが、ここで変に同情すればテレーゼが既成事実の履行でも求めてきかねない。

ここは心を鬼にして、ビジネスライクに動くべきであろう。

つまり、この大量の書類の処理を黙々と行えばいいのだ。

「ようやく終わったか……」

「ヴェンデリンは、領主としても十分にやれそうじゃの」

「今も一応は領主だけどね。お飾りだけど」

そういえば、ローデリヒは上手くバウマイスター伯爵領の開発を進めているであろうか？

情報がまるで入って来ない事が、これほど不便だとは思わなかった。

「そういえば、エリーゼ殿は救護所に行かぬのか？」

「今日は、怪我人が出たら伯父様が担当するそうですので」

テレーゼは、エリーゼを本来の担当である野戦救護所に行かせて、その間に俺を口説こうとでも考えているのであろうか？
その考えが透けて見えるからこそ、エリーゼは俺の傍から離れなかった。

「導師がか？」

「実は、最近『聖治癒』魔法を覚えまして」

「あの者は、魔法界の常識を色々と覆すの」

テレーゼが驚くのも無理はない。
普通ならば二十歳前後には止まる魔力の成長が四十歳を超えても続いているし、今までは辛うじて発動だけはしていた『聖』魔法をいくつか使えるようになっていたのだから。
ただ、攻撃も治療も相手に抱き付かないと行えないので、導師の練習も兼ねた治療は兵士達には不評であった。

『エリーゼ様に治して貰いたいだ』

『オラも。同じ効果でも、導師様とは色々と違うよな』

『言えてる』

兵士達の気持ちは良く分かる。
俺だってもし魔法で治療して貰うのであれば、絶対にエリーゼの方を選ぶであろう。
誰だって、四十過ぎで筋肉達磨の、ヤクザも真っ青な強面をした導師に抱き付かれたくはないであろうからだ。

「俺は、ある程度自分で治せるけど」

師匠が言うにはかなりの才能らしいが、俺の治癒魔法は『水』の系統なのでエリーゼや導師のとは少しだけ違う。

怪我などが治るのには違いが無いのでどうでも良いとも言えるが、なかなか練習する機会が無いので少し不慣れな点が問題であろうか？

「近々、大規模な戦闘があるから練習しようかな？」

「それが良いと思います。私も手伝いますから」

「それは心強いな」

エリーゼの治癒魔法は、本当に優れていた。

前に治療を見た事があるのだが、怪我人も病人も、軽傷ならば所持している効果拡大の魔法陣が記された特殊な織り方をした敷物の上に集めて一気に治療してしまうからだ。

魔力も上がったので一日に対応できる人数も増え、兵士達の間ではエリーゼは大人気になっていた。

『聖女様』と呼び、中には崇める兵士までいたが、それに比例して俺の評判は落ちている。

『エリーゼ様と結婚しているバウマイスター伯爵は死ね！』と、主に独身の兵士達の間で広まっていた。

ついでにもう一つ、『他に四人も綺麗どころばかり嫁を連れて来やがって！　やはりバウマイスター伯爵は死ね！』という物もあった。

勿論表だって言う者はいないが、この世界でも男の嫉妬には根深い物があるようだ。

しかし、『やはり』って何なのだと思う。

「私達は夫婦なのですから当然です。共に治癒魔法も使えるのですから」

エリーゼの発言には棘があった。

間違いなく、テレーゼに向けて言っているのであろう。

「確かに、妾には魔法は使えぬ。じゃが、エリーゼ殿は『聖』魔法で、ヴェンデリンは『水』の治癒魔法。素人でも、大分違うとわかるぞ」

しかし、エリーゼに負けじとテレーゼも言い返していた。

「素人のテレーゼ様にはわからないと思いますが、系統が違っても同じ治癒魔法です。イメージの仕方や魔力のコントロールなど、共通する事柄も多いので」

「それは知らなんだ」

「では、そろそろ失礼します」

エリーゼはそう言うと、俺と腕を組みながらテレーゼの執務室をあとにする。

エリーゼが露骨に腕を組んだので後ろのテレーゼがどんな表情をしているのか気になったが、怖いので敢えて後ろを見ないようにしていた。

「（私。何も言えなかったわ。怖くて……）」

「（俺も怖いけど……）」

イーナが俺だけ聞こえるように俺に呟き、俺もその意見に賛同する。

エリーゼとテレーゼのぶつかり合いに、イーナは退室するまで静かに書類の整理を続けていた。

やはり、こういう時に本人の性格が出てしまうようだ。

「あの方は、油断なりません」

「結局、ヴェルを帝国貴族にしてしまったものね」

一代限りとはいえ、貴族は貴族である。

報酬を誤魔化される可能性も考慮したのだが、テレーゼはそれを理由に断られると考えたのか？

今の給与体制の継続も認めてのこの条件だ。

財政の関係で、俺達への給与はどうせ戦後になってからである。

勝てれば帝国政府や取り潰すニュルンベルク公爵領の資産があるので十分であろうし、負ければ考慮する必要が無いわけでこういう部分がテレーゼが貴族であると実感する部分だ。

「どうせ、爵位は受けざるを得なかった」

「そうですね……」

先のターベル山地砦への出兵は、俺達が傭兵でなければ断れていた。

一体どういう意思決定をするとああいう命令になるのか不明であ

ったが、今の俺は帝国伯爵で解放軍総大将であるテレーゼの参謀の一人で側近だ。

彼女が俺を傍においておけば、無謀な命令で使い潰される可能性は少ない。

その分、エリーゼは誘惑が増えると思っているようで、実際にそうなりつつあったが。

「ヴェルの今の状況を見て、受けざるを得ないのを理解して言っているから悪辣よね」

イーナの言う通りで、俺への名誉爵位授与はテレーゼと共に利益があるので受けざるを得ない。

だからこそ、テレーゼの貴族としての手腕に翻弄されているとも言えるのだが。

「気にしても仕方がない。導師の元に行こうか？」

「そうね。患者になった人達の悲鳴が予想できるけど」

イーナの予想通りで、野戦救護所に三人で行くと、そこでは青白い光を全身に発しながら次々と患者に抱き付いて治療を行っている導師と、悲鳴をあげる患者達の姿があった。

「ぬぁーーー！」

「大した怪我ではないのだ。男がそれくらいで悲鳴をあげてはいかんぞ」

「（ただ単に、導師に抱き付かれるのが嫌なんだと思うけど……）」

それと、導師は軽く抱き付いている認識なのであろうが、兵士達からすると万力で絞められたような感覚を覚えているはず。
骨折患者からすれば、『逆に怪我が酷くなってしまうのでは？』というイメージを抱かれても当然であろう。

治療を待つ兵士達は、一カ所に集まって子猫のように震えていた。

「導師。代わります」

「バウマイスター伯爵か。大丈夫であるか？」

「エリーゼ先生に教わりながらやりますので」

「ならば、安心であるか」

導師はそう言うが、俺はそこまで治癒魔法が下手ではない。
少なくとも抱き付いたりはしない。
導師と交代すると、三度始まった野戦陣地工事で負傷した兵士や病人などが十数名いる。
戦闘は無いし、先に導師や他の治癒魔法使いが治しているのでこんな物であった。

早速、腕に切り傷を負った若い兵士の治療から始める。
傷口を焼酎で消毒してから軽く治癒魔法をかけると、すぐに完治してしまう。

「軽傷患者ならこんな物か……」

続けて、木材の下敷きになって骨折をしてしまった患者を治療す

る。
　単純骨折なので折れた部分を添え木で固定してから治癒魔法をかけると、これもすぐに治ってしまった。
「ありがとうございました」
　更に十数名の患者を次々と治していくが、重傷者などいないのでそれほど苦戦はしなかった。
「教える事がありません」
「その内に、ちゃんと教えて貰う事があると思うから」
　俺は、教える事がなくて拗ねていたエリーゼへのフォローを行う羽目になる。
「あんまり、治癒魔法の練習にならなかったな……」
「それでしたら、巡回看護に参加されませんか？」
「巡回看護？」
「はい。この近辺の小さな町や村に治療に赴くのです」
　野戦看護所を管理する初老の神官から、巡回看護なる物を勧められる。
　戦争で迷惑をかけているので、普段は治癒魔法使いなどいない村や町などを訪問して無料で治療を行い、ついでに解放軍の支持率を上げていこうという意図もあるらしい。
　テレーゼなら考えそうなというか、ある程度目端の利く貴族なら

考える事だ。

「そんなに遠くなければ行きます」

「ここから往復で半日ほどですよ。馬を使ってですけど」

治癒魔法の練習になるし、戦闘よりは遥かにマシである。

俺達は、馬に乗って巡回看護に向かっていた。

「ヴェルは、あの野戦陣地にいなくていいの？」

「まだニュルンベルク公爵の軍勢は到着していない」

ようやく乗るのに慣れてきたドサンコ馬の上で、俺は同乗するルイーゼの問いにそう答えていた。

巡回看護には、俺とルイーゼ、エリーゼとイーナ、エルとなぜか導師も付いて来て、ドサンコ馬三頭で村を目指している。

他のメンバーは、みんな忙しいので野戦陣地に残って他の仕事をしていた。

「なまじ通信魔法が使えない分、真面目に偵察しているからいきなり襲撃はないそうだ。今日くらい巡回看護に出ても問題ない」

「テレーゼ様に呼び出されると面倒だからね」

「参謀なんてお飾りだと思ったら、今日はいきなり書類整理だものなぁ……」

「ヴェルが気に入っているのと、ヴェルくらい凄い魔法使いを側に置く事で、テレーゼ様は周囲に自分の力がアピールできるからね」

ルイーゼの言う通りで、俺は男としてもテレーゼからロックオンされているわけだ。
ここは、仕事名目で離れていた方が無難であろう。

「馬にも大分慣れたけど、魔導四輪が使えないのは辛いね」

「本当にな……」

『魔導四輪』とは、あの魔の森の地下倉庫から出た車の事であった。
他にも、正式名称が『魔導二輪』であるバイクに、『魔導工事機』と呼ばれるショベルやブルトーザーのような物に、『魔導農作業機』と呼ばれる耕運機などがある。

全て王国の魔道具ギルドに販売していたが、技術格差が酷いので再現に相当な時間がかかると予想されている。
俺も魔法の袋に入れていたのだが、例の装置のせいで全く動かない。
どういう仕組みなのかは知らないが、実に困った装置でもあった。
魔道具の走行が、『移動』系魔法と認識されているのかもしれない。

「帝国領であるここで使うと、手に入れようと貴族や商人が五月蠅いかもよ」

「そうだな」

魔導四輪がここで使えるかの実験は、エルとハルカがいない時に密かに行うくらいであったから当然と言える。

もし使えていたら移動に便利なので、五月蠅い連中をあしらいながら使おうと思ったのだが、移動する魔道具の作動さえ止めてしまうとは、ニュルンベルク公爵はとんでもない装置を開発した物である。

いや、発掘したというべきか？

「あなた。もう少しで到着します」

「いきなり死にそうな重傷者とかはいないよね？」

「さすがに、そういう方は滅多にいませんけど……」

「エル。敵とかはいないよな？」

「解放軍の完全なテリトリー内で敵襲があったら、それはテレーゼ様の責任になってしまう。ここは野戦陣地からも近いし、あり得ないよ。警戒は続けているけど」

エルの言う通りに道中で敵襲などもなく、村の入り口に到着すると村人達が大勢で出迎えていた。

「本日は、魔法で治療を行っていただけるそうで。大変にありがたい事ですじゃ」

七十過ぎに見える村長とおぼしき白髪の老人が、村人達を代表して挨拶を述べる。

「この村には、治癒魔法使いなどはおりませんで……」

教会に神官はいても、全員が治癒魔法を使えるわけがない。
魔法を使えない神官は薬学などを独自に勉強して薬草を配合し、それを投与する人が多い。
田舎の村で教会が支持を得るためには、ただ説教だけしていればいいわけではないのだ。
だが、薬は高価であり、村は今回の戦争で経済的に困窮している。

せっかく北方街道の近くにあるのに、人の行き来が減って実入りが無くなってしまったからだ。
巡回看護を行うのは、彼らの批判を避ける狙いもあった。
不満をそのままにしていくと、いつの間にか反乱軍に協力していたという事もあり得るのでフォローは必須であろう。

「それでは、早速に始めるとしようか」
「あなた様も治療を行えるのですか？」
「まだ未熟ではあるが、任せるのである！」

村長は、俺達に同行している導師を護衛だと思っていたようだ。
ローブ姿なので魔法使いなのは一目瞭然であったが、第一印象は完全なデストロイヤーで治療魔法を使うようには見えない。
普段から神官の格好をしているエリーゼと、何とか俺も治癒魔法の使い手として見てくれていたようだが。

「人数が多いのは大歓迎です」
「そんなに怪我人や病人がいるのですか？」
「うちの村だけではありませんで。事前にフィリップ公爵様からご

連絡がありまして、周辺の村や町からも患者が集まっているのです」

「それもそうか」

俺達がいちいち各村を巡回するよりも、一箇所に集めて纏めて治療した方が効率は良いのだから。

テレーゼも、そう考えて通達を出したのであろう。

「では、始めますか」

早速に、集まった大量の患者を二つのグループに分ける。

一つは女、子供、老人のグループであり、もう一つは男性のグループである。

なぜかと言われれば、当然この人がいるからだ。

「足を捻挫したのか。某が速やかに治療しよう」

「うぎゃぁーーー！」

「大の男が、この程度の怪我で悲鳴をあげるでないわ！」

「いえ。この人は別の理由で悲鳴をあげていると思います」

捻挫くらいで、導師に思いっ切り抱き付かれながら治療を受ける男性は不幸という他は無い。

普通に完治するので文句を言うわけにもいかないが、治療を受けている男性が悲鳴をあげているのは、エルの言う通りで怪我の痛みが原因ではないとだけ明言しおこうと思う。

「エリーゼの言う通りに、女性、子供、老人はヴェルの担当にして良かったね」

治療待ちの患者を順番に並ばせながら、ルイーゼが俺に声をかけてくる。

女性に導師が抱き付くのは倫理的にどうかと思うし、子供はトラウマになるであろうし、老人はお迎えが早まりそうなので俺が担当する事になった。

俺は時おりエリーゼから助言を受けながら、次々と治癒魔法をかけていく。

「痛いぃーーー！」

「ははははっ！　仕方がないであるな！　エルヴィン少年よ、もっと良く押さえておくのである！」

「はいはい……」

男性患者は、次々と導師に抱き付かれながら治療されていく。

中には暴れる者もいたので、それらは全てエルが押さえつけるのを手伝っていた。

「何か。悪い事をしているみたいだな……」

エルの言い分に、俺達は心の中で『わかる』と答えていた。

「こちらの治癒魔法使い様は、静かでいいですね」

俺から治癒魔法をかけて貰った老婆が感想を漏らすが、治癒魔法

は俺がやっているような感じで行うのが普通なのだ。
導師みたいなのは、滅多にいない例外なのだから。

「大分慣れてきたな」

「あの……。宜しいでしょうか？」

数百人の治療を無事に行い、いよいよ最後の人となる。
患者は若い女性で特に怪我人や病人には見えなかったが、彼女の顔にはかなり目立つ火傷の跡があった。
何でも、数か月前に火事で顔を火傷してしまったそうだ。

「命には関わらないのですが、この娘は来月には嫁入りをする予定でして……」

「でしたら、お顔は綺麗な方が良いですね」

同じ女性として、エリーゼは彼女の治療に乗り気であった。

「俺も賛成だが、どうやって治療するの？」

実はこの火傷跡は、一度治癒魔法で治した物らしい。
火傷は治ったが、酷い跡が残ってしまった。
こういう事例は多いそうだが、ここに追加で治癒魔法をかけても跡が消えるはずもない。

困っていると、エリーゼが治療方法を教えてくれる。

「最初に、しなければいけない事があるのです。切れ味の良いナイフをお願いします」

エリーゼにナイフを渡すと、彼女は火傷のある女性に声をかける。

「火傷跡を一度削るので、我慢してくださいね」

そう言うと、麻酔とまではいかないが怪我の治療の時に傷口にかけると痛みが和らぐ薬を火傷跡にかけ、ナイフでケロイド状の火傷の跡を削り始める。

時おり痛みで女性が体を動かすが、エリーゼはそれを気にしないで全てのケロイドを削ってしまう。

患部とエリーゼの両手は血塗れであった。

「あなた。強力な治癒魔法を」

「わかった」

考え方としては、ケロイド状の部分を削ってしまい、一から治癒魔法で皮膚を再生させるという事なのであろう。

少し多めに魔力を持っていかれたが、次第に傷口から綺麗な皮膚が再生していく。

数分後にエリーゼが濡れた布で患部を拭くと、火傷の跡は完全に消えていた。

「おおっ！　凄い」

「凄いって、ヴェルの魔法じゃない」

ルイーゼはそう言ってくれるが、一度傷口を削るという方法を知らなければ治療に失敗していたところだ。

「でも、綺麗に治る物だねぇ……」

ただ治癒魔法をかければ、それで全ての怪我や病気が完璧に治るわけでもないようだ。

こういうノウハウの蓄積が、教会の強みという物なのであろう。

「これで安心して結婚できますね」

「ありがとうございます」

火傷が完治した若い女性は、俺とエリーゼにお礼を述べていた。

「旦那さんも安心するでしょう」

「実は、彼も一緒にここに来ているのです。火事の時に私を庇って、もっと酷い火傷を負っていたので……」

「えっ？　そうなの？」

全員の視線が急ぎ導師への向かう。

その婚約者の男性の安否がとても気になったからだ。

「火傷の跡であるか。某が治してしんぜよう」

「導師。普通に治癒魔法だけじゃ無理だから！」

「物は試しという奴であろう。某の奥義を見るがよい。ふんっ！」

導師は今まで以上の青白いオーラを体に発生させ、それと同時に顔に酷い火傷の跡がある若い男性に抱き付いていた。

とても治療行為には見えず、何か強大で禍々しい魔物でも倒すかのような雰囲気だ。

「ひっ！　ふぬぁーーー！」

「結婚するのであろう？　男ならば、我慢するのである！」

俺達は、その非常識な光景に絶句してしまう。

治癒魔法だけでは駄目だと専門家であるエリーゼが言っているのに、それを無視して今まで以上の魔力と力で患者を拘束したのだ。

一応治療なのだが、どう見て治療に見えない。

あまりの締め具合に若い男性は悲鳴をあげ続けるが、それを止められる者などいなかった。

婚約者があんな状態なのに、ショックが大き過ぎて女性は何も言えないでその場に佇んでいた。

そして数分後、ありえない光景が目撃される事となる。

男性の顔から、火傷の跡が完全に消えていたのだ。

「何で？」

「よほど強力な『聖』治癒魔法なのでしょう」

「でも、もしボクならエリーゼの方法を選ぶよ」

「そうだな。少し痛いくらいだろうし……」

どんな負傷でも治るが、その度合いが強ければ強いほど導師に抱き付かれる強さと時間が増えていく。

よほどの緊急時以外は、あまりお世話になりたくない魔法であった。

「センドリック！　大丈夫？」

火傷は治ったが意識が飛んでいる若い男性に、同じく火傷が治った婚約者が詰め寄って懸命に介抱していた。

彼はそれから一時間ほどで目を覚ますが、せっかく二人とも火傷が治ったのに、誰も導師に対して尊敬の念を向ける者はいなかったのであった。

「あのセンドリックさんという人。大丈夫かな？」

「火傷の跡は完璧に治ったじゃないか」

「いやさ。心の傷の方が……」

巡回看護は、好評の内に無事に終わっていた。

全ての患者が俺やエリーゼの治癒魔法によって治療され、今日はもう暗くなったので村に宿泊する事となる。

幸いにして空いている民家が一件あったので、そこを村長の許可を取って借りる事にした。

『あの……。何も無い空き家ですけど……』

『家具は持参しているので、お構いなく』

ベッドも、椅子も、調理器具も家具も全て魔法の袋に仕舞ってあるので、俺達は手間のかからない客だと思う。

内戦のせいで村人達は収入が落ちているので、あまり何もかも要求しては彼らを余計に困窮させてしまうからこれで良いのだと思う。

ただ、あまりに何もしないと心苦しい物があるようなので、食料だけは供出して貰っていた。

エリーゼとルイーゼは、それを材料に夕食を作っている。

魔導コンロに大鍋をかけて『ミソシチュー』を、これはエリーゼが独自に開発した料理である。

元日本人からすると色物に見える料理であったが、実際に食べると美味しい。

パンにもご飯にも合う不思議なシチューなのだ。

他にサラダを作り、魔法の袋に仕舞っていた魔物の肉を焼いたり、出来合いのデザートなども準備しているが、二人だけに任せて大丈夫そうなのでエルと先ほどの導師の治療の話になっていたのだ。

「心の傷って、別にそこまで……」

「じゃあ。ヴェルがセンドリックさんの立場だったらどうだ？」

「嫌に決まっているだろうが」

導師は村の見物を兼ねた散歩に出ていたので、俺は正直に自分の心境を漏らしていた。

いくら死にそうになっても、出来れば導師の治療は避けたい物がある。

本当に死んでしまうとなると、受け入れるしかないのだが。

「嫁さんの方も、微妙な顔で導師にお礼を言っていたじゃないか」

とある村で、子供の頃から幼馴染の関係にあった男女が火事に遭い、男性は婚約者を庇って大火傷を、女性も顔に酷い火傷の跡を負った。

火傷は神官の治癒魔法で治ったが、火傷の跡は担当した神官ではどうにもならなかった。

村にいるような神官に、そこまでの腕前を求める方が酷である。

むしろ、村に治癒魔法を使える神官がいた奇跡をありがたがるのが普通だ。

だが、これから結婚する若い男女に火傷の跡が残ったままでは可哀想だ。

これが、二人がここに来た理由である。

「女性の方はエリーゼが綺麗に治して、男性の方も導師が綺麗に治した。美談なのに全く感動できない」

「ヴェルの言う通りにこれは美談だよな？　普通は……」

エリーゼの治癒方法は見事であった。

魔法による治癒魔法は、極論すれば膨大な魔力と術者のイメージ力があれば、下半身が吹き飛ばされても再構築が可能である。

そんな人は、百年に一人もいれば良い方だが。

限られた魔力で、いかに程度の重い患者を沢山治していくか。

ここに治癒魔法の極意があり、そのノウハウを一番蓄積しているのが実は教会である。

村ごとにある教会で、特に地方に赴任する神官は薬学や簡単な医

術を習得している物が多い。

軽い怪我や病気ならば、治癒魔法を用いずともある程度治してしまうのだ。

応急処置で保たせて、その間に現地の神官が周辺の治癒魔法を使える神官を呼ぶという手もたまに使うようだ。

近年、腐敗が問題になっている教会ではあったが、こういう実務面の助けがあるので今も強大な権力を保持していた。

役に立つので、一定の支持を得られるからだ。

「エリーゼは、凄い事をしたようだな」

「教会では普通に使う手みたいだけど、俺は魔法には詳しくないし」

一度治療してケロイドになってしまった皮膚を、元の美しい状態にするのは意外と難しい。

それこそ膨大な魔力が必要で、そこで一度その部分を切り落としてから治癒魔法をかけるという独自の方法を使う。

骨折などは、当然一度折れた骨の位置を元に戻す。

これをしないで普通に治癒魔法をかけると、骨が妙な形でくっ付いてしまうからだ。

「エリーゼは、簡単な医術の心得もあるわけだ」

「それは凄いな」

「ああ。エルの一万倍くらい賢いかもな」

「反論できねぇ……」

将来のために軍の指揮方法などを独学しているエルであったが、少し覚えが遅いという欠点があった。
あとから資料を読んだイーナの方が理解度が圧倒的に早く、今では彼女の解説を聞きながら勉強している有様なのだから。

「どうせ俺は、剣術バカですよ」

ただ、エルに軍指揮官としての才能が無いわけではない。
今でに何度か前線に立って戦っているが、素早く敵軍の弱い部分に斬り込んで崩すのは得意である。
前線指揮官としては、この上なく優秀であろうというのがトリスタンなどの評価であった。

「エリーゼって、案外血を見ても動揺しないよな」

「俺でも最初は吐きそうになったがな」

戦場跡で死体の山を見てみんな最初は等しく吐いていたが、エリーゼはそうでもなかった。
彼女は、治療の過程で死体を見た事があるのかもしれない。
過去には冒険者ギルドから依頼を受けて、魔物に襲われた冒険者などの治療もしていたと語っていたし。

「エリーゼは、俺達よりも芯が強いのさ」

「それよりも、色々な部分が強過ぎて常識外れなのは導師だな」

全身にケロイドがある患者に抱き付いて、『聖』の治癒魔法だけで完全に元に戻してしまったのだ。

今になって考えると魔力の無駄遣いのような気もするが、治れば問題無いとも言える。

勿論俺やエリーゼが同じ方法を用いても、あの男性のケロイドは完全には治せなかったであろう。

そこが導師の非常識な部分なのだ。

「導師は、『ただ強力』としか言いようがない」

戦場に出ても、普段の言動も、今日は治療魔法ですら強力であった。

強烈過ぎて周囲が引くのは、まあいつもの事であろう。

「お腹が減ったのである。早く食事を」

そんな話をしている間に導師が戻ってきて、既に食事の準備を終えていたエリーゼとルイーゼによってテーブルに料理が運ばれてくる。

「慣れない事をしたからお腹が減ったな」

「あなた。沢山食べてくださいね」

伯爵の正妻なのだから料理などしなくても良いという人も多いが、エリーゼは自分で料理をする事を止めなかった。

他の妻達も同じで、テレーゼもそれを不思議がっている。

俺は冒険者稼業も兼任なので当たり前だと思っているのと同時に、変な女を避ける意味でも役に立っていた。

『妾も、それなりに出来るぞ』

などとテレーゼは言っているが、正直なところかなり怪しい。
忙しい公爵様がじきじきに料理など本当に作るのか、疑問に思ってしまうのだ。

「今日はもう寝て、明日の朝に戻ればいいよね」

「そうだな。もう患者はいないだろうし」

ニュルンベルク公爵の軍勢の動きもあるので、念のために早めに戻った方が良いであろう。
その前に、この村には一切の娯楽が無いという問題もあったのだが。

「寝るまでトランプでもしようよ」

風呂も無いので今日は『洗浄』の魔法で済ませ、ベッドを並べて全員で寝る事になった。
一応の警戒も込めて、全員で同じ部屋に寝る事にしたのだ。
まだ時間が早いので、ルイーゼの希望でトランプ遊びをする。

「ルイーゼは、言いだしっぺの癖にまた大貧民だな」

「貧民のエルに言われたくないね」

この世界にもトランプは存在していて様々な遊び方も普及していたが、大貧民だけは存在しておらず、俺が考案した事にしていた。
暇な時間にやると盛り上がるので、狩りに出た夜にする事も多い。

「ヴェルは強いねぇ……」

「考案者が弱いと問題だろう」

暫くずっと一位で勝ち続けていたが、急に導師がカードを四枚出す。

「クーデターであるな」

「なっ！　それに何の意味が？」

「やったーーー！」

「逆転だぁ！」

導師による意味不明な『クーデター』によってエルとルイーゼだけが喜び、俺は大貧民へと転落していた。

大貧民なので本当は『革命』というのが正解なのであろうが、あまり馴染みの無い単語なので『クーデター』に変更している。

クーデターならば、『王宮内のクーデターで、軍務卿であった○○伯爵が没落』とかそういう歴史もたまにあるので、理解して貰えたからだ。

帝国で起こっている反乱も、テレーゼ達に言わせるとクーデターなのだそうだ。

あまり革命という単語に馴染みが無いようであった。

「畜生。俺の持っている2が……」

結局、俺はゲーム終了まで大貧民のままであった。

再びクーデターを起こせるほどカード運に恵まれなかったからだ。

「珍しく大勝だから、ぐっすり眠れるね」
「俺もそうだな」
珍しく勝ったルイーゼとエルの表情は明るい。
普段は俺やイーナに鴨にされているので、よほど嬉しかったとみえる。
別に賭けなどはしていないが、勝てたこと自体が嬉しかったようだ。
「そろそろ寝ようぜ。ヴェル。あれを」
「わかった。導師。失礼」
俺は導師に、『静寂』の魔法をかける。
これをかけておかないと、導師と同じ部屋で寝るなど不可能であったからだ。
そのくらい、彼のイビキは酷かった。
「某はまるで感じないのだが」
「自分のイビキが五月蠅くて起きる人って聞いた事がありません」
「まあよかろう。『静寂』の魔法には、周囲の騒音を防ぐ効果もあるのでな」
そう言うと導師はベッドに横になり、十秒と経たない内に夢の世界へと旅立っていた。
恐ろしいまでの寝入りの早さである。

冒険者でもあったので、早寝、早起き、早食い、早糞が身に付いているのであろう。
下品に思われるが、実はこの言葉、冒険者予備校ではかなり初期に教えて貰える事だ。

「羨ましいほどの寝入りの早さだな」

エルが、導師の寝入りの早さを感心していた。
イビキはかいているのであろうが、『静寂』の魔法のおかげで何も聞こえない。
これで、俺達も安心して眠れるであろう。

と思ったところに、突然ドアがノックされる。
エルが警戒しながら開けると、そこには村長と十二～三歳の少女の姿があった。

「村長さん。何か用事でも？」

「はい。本日は私共の村ばかりか、周辺の村落の怪我人や病人を治していただき感謝に絶えません。現在村は内戦によって流通が絶たれている状態なので、お礼できる物も少ないのですが……」

「お礼は不要ですよ」

エルの代わりに、俺がきっぱりと謝礼を断る。
内戦で迷惑をかけている帝国臣民達への慰撫が目的なのに、ここで謝礼を受け取ると本末転倒になってしまうからだ。

「ですが、何も無しというわけには。そこで、このフィリーネを名誉伯爵様の傍でお仕えさせようかと」

「フィリーネと申します。よろしくお願います」

「あの……。人手は十分に足りている……「それはご丁寧にありがとうございます」」

俺が断ろうとすると、エリーゼが強引に割り込んでその娘を引き取ってしまう。

まさかの展開であったが、村長は受け取って貰えて安心したようで、すぐにドアを閉めていた。

「エリーゼ？」

「ええと。フィリーネさんでしたね？」

「はい。エリーゼ様ですね」

「今日はもう皆眠る時間ですので、詳しいお話は明日にしましょう。おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい。エリーゼ様。旦那様。皆様方」

フィリーネはまだ子供なので、エリーゼがベッドに寝かせると、すぐに寝息を立て始めていた。

きっと緊張して疲れていたのであろう。

「まさか。エリーゼが受け入れるとは思わなかった」

「俺もルイーゼの意見に賛成」

ルイーゼとエルも、エリーゼの決断には驚いている。
俺からしても、ある推測しか浮かばない。
村に、名誉付きでも治癒魔法が使える貴族が来たので、謝礼にその娘を差し出した。
仕えるとは、メイドでも、愛人でも村側は関与しませんという事なのであろう。

「貴族が来た時に、その村が女性を差し出すとか聞くけど」

「昔はありましたね」

帝国では知らないが、王国の領域がもっと狭かった頃はそういう事もあったらしい。
勿論直轄地だけであったが、貴族様が来るので歓迎をしないとという理由と、外の血を入れるためにという理由も存在していた。
今は、そこまでしなくても外部との交流はある程度あるし、下手な隠し子は相続を面倒にするので逆に貴族の方が避けている。
女と遊びたければ、自分で見付けた愛人を囲うか、娼館などに行けば良いという考えだからだ。

「じゃあ。何で俺に？」

「この村に余裕が無い証拠でしょう」

要するに、今スヤスヤと寝ているあの娘はこの村ではいらない人員という事になる。
俺に預けて、食い扶持を一人でも減らす算段なのであろう。

「男なら畑を耕せるし、狩りにも行けるからな」

子供を生む若い女性は貴重だが、逆に生産性が低いので外に出されるケースもある。
エルの言う通りに、最悪娼館に売られてしまう女の子も多いのだ。

「この娘。孤児とかなんじゃないの？」

「かもしれないなぁ……」

ルイーゼの言う通りかもしれないし、そうでなくても村ではいらない者扱いされた娘だ。
受け入れを断ると、もっと悲惨な待遇に置かれるとエリーゼは気が付いたのであろう。

「この状況でメイドを増やすか……。見習い扱いにして、成人後にどこかに嫁に出してしまおう」

まだ未成年なので、見習い扱いで構わないであろう。
家事などはエリーゼ達が教えるであろうし、衣食住を保証して小遣いくらい出しておけば経費もそうかからない。
内戦で負けて領地に戻れない可能性については、これは考えていなかった。
考えるだけ無駄だからだ。

「でもさ。今のヴェルにメイドが必要かな？」

「私達がいますからね」

俺は五人の妻達によって交代で面倒を見られているので、確かにフィリーネは必要ないかもしれなかった。
それと、まだ未成年にしても俺が手を出す可能性についても考慮

されていると思われる。

「まだ子供じゃないか」

俺が竜を退治した年齢と同じくらいのはずだが、こうも幼く見えるとは俺も年を取った物だと感じてしまう。

「まだ十六歳だけどな。俺達」

「年齢に似合わない困難さに直面しているけどね」

「そうだな。ルイーゼは余計にそう思うな」

「何か引っかかる言い方だね。大人でセクシーなボクは、エルの戯言なんて気にしないけどねっ！」

「じゃあ。殴るなよ……」

ルイーゼを子供扱いしたエルは、軽く彼女に殴られていた。

フィリーネとルイーゼの見た目年齢に、そう違いが無かったからとも言えるのだが。

むしろ、フィリーネの方を年上だと思う人の方が多いであろう。

「それで、どうしますか？　あなた」

「見捨てていくと、夢見が悪いよなぁ……」

これがオッサンとかなら余裕で放置するかもしれないが、可愛らしい女の子なのが良くなかった。

だが、下手に周囲に置くと他の女を誘発しそうな気配もあり、正

直扱いに困る娘であった。

「要は、俺の専属だと思われなければいいわけだ」

「そんな方法があるのか？」

「ある！　あるぞ！」

「どんな手だ？」

「俺の家臣で、重臣候補の癖に碌にメイドすら雇っていないのがいる」

「そんな奴がいたっけか？」

「いる。俺の目の前に！」

俺が受け入れると問題になるのなら、エルに任せてしまえばいいわけだ。

成人して嫁に出すまで面倒を見るも良し、気に入って妾や側室にするのも良し。

実に素晴らしいアイデアといえた。

「俺？」

「そうだ。エルも領地に戻れば、屋敷でも建ててハルカと生活を営まなければならない。その練習だと思え」

「ヴェル。俺に押し付けようとしていないか？」

「そんな事は無いさ。お前もフィリーネが可哀想だと思うだろう？なあ。エリーゼ」

「あの娘は、生贄のような存在です。私達が何とかしてあげないと。勿論、全てのああいう娘を救う事は出来ませんが、これも何かの縁だと思って」

フィリーネを受け入れたエリーゼに話を振ると、彼女は見事な論法でエルを説得していた。

エルの力量では、それに反論など出来ないはずだ。

「エルは、ハルカさんが怖いんだと思う」

「なるほど。もう尻に敷かれていると」

「ハルカさんって、結構シッカリしているからね」

ルイーゼも、エルがメイドとはいえ他の少女を連れて帰ると、ハルカに怒られるからだと上手く彼を挑発していた。

「そんなわけがあるか！　事情さえ話せばハルカさんは優しいから受け入れてくれるはず！」

「じゃあ、メイドの一人くらいいいじゃない」

「ううっ……」

見事にルイーゼの誘導に引っかかり、エルは少女の受け入れを認めてしまう。

「気に入ったら、本当に愛人にでもすればいいしな。ハルカが怖くて言えないだろうけど」

「ヴェル。お前なぁ……」

「この娘。結構可愛いし、エルは女好きだから有りだよねぇ」

「ルイーゼ。女好きはお前の夫だろうが」

「なぜそうなるよ」

「五人も奥さんがいるから」

エルの回答に、俺は何も言えないで黙ってしまう。

だが、次第にエルが受け入れる考えに纏まりつつあると信じ、俺はここで切り札を出していた。

「エル。主君命令な」

「お前の主君命令は、常にある意味最悪だ。ハルカさんに聞いてからな」

条件付きの受け入れであったが、ハルカに聞いてからというのがエルの現状を示しているようにも見えた。

「ヴェル。ボクの言う通りでしょう？　エルはもう……」

「本当に、尻に敷かれているんだな」

「違うわ！　夫婦になるからちゃんと相談しているだけだ！」

こうしてなし崩し的にフィリーネの受け入れが決まっていた時、一番の年長者である導師は一人豪快にイビキをあげて寝ていた。

『静寂』の魔法のおかげで、その音は全く周囲に漏れていなかったが。

第九十二話　新たな仲間？と、意外な人達との再会。

「私。村の外に出た事が無いので楽しみです」

「今は内戦中で、あまり素晴らしい場所には行けないけど」

「大丈夫です。フィリーネは、旦那様に付いて行きますから」

「なあ。ヴェル……」

「旦那様。頑張れよ」

「今。お前に少しイラっときた」

巡回看護を行った翌日の早朝、俺達はまた馬に乗って野戦陣地へと戻っていく。

人数は、昨晩に村長に押し付けられたフィリーネという少女が加わって一人増えている。

帰りの道のりでは、エリーゼと一緒の馬に乗りながらえらくはしゃいでいた。

何でも、生まれてから一度もあの村を出た事が無かったようで、外の景色は何でも珍しいらしい。

エリーゼと楽しそうに話をしながら、楽しそうに途中の景色を楽しんでいる。

「フィリーネのご両親は？」

「お母さんは私が生まれてすぐに死んだって村長さんが言っていました。お父様は遠い場所にいるって」

「そうですか。フィリーネは一人で大変だったのですね」

優しいお姉さんであるエリーゼは、教会で孤児達の相手をしていたので子供の扱いに慣れていた。

一緒に話をしながら、上手くフィリーネの事情を聞き出している。

そして彼女を俺に押し付けられたエルは、果たしてハルカにどう説明しようかと思案中だ。

俺からすると二人はまだ婚約状態で、今は状況が状況なのであまりイチャイチャしているような光景は見た事が無い。

精々で、一緒に刀の鍛錬をしているくらいであろうか？

あまり恋人同士のような事をしていると、間違いなくタケオミさんが邪魔しに来るはずなので物理的に不可能なのであろうが。

あの人は『今は戦時である』とか良く言って二人を牽制しているが、本音は重度のシスコンなので妹とエルが仲良くする光景を見たくないのであろう。

「普通にメイド見習いとして扱えば問題無い。違うか？」

「正論だけに反論できねぇ……」

フィリーネに途中で手を出し、側室にするとかそういう話はエル自身の責任になる。

俺が関与する余地などないのだ。

「ヴェル。調子に乗っていると、その内に罰が当たるからな」

「忠臣の諫言に留意しておきましょう」

特にトラブルも無く、俺達は野戦陣地に戻る。

無事に巡回看護を終えたのでテレーゼに報告に行くと、彼女はフィリーネを見た途端にとんでもない事を口走っていた。

「何じゃ？　新しい妾かえ？」

「違いますよ。エリーゼが引き取ったんです」

「別に気にせぬでよいぞ。ヴェンデリンに何人妻がいようと、妾の気持ちは変わらぬ」

「そっちは、普通に諦めてください」

「それは不可能じゃの」

「不可能なのかよ……」

追うテレーゼに、かわす俺。

最近では、フィリップ公爵家の家臣達も生暖かい目で見るようになっていた。

さすがに慣れたのであろう。

「妾は、へこたれない女じゃからの」

「その根性を、内戦の終結と帝国統治に生かしてくださるように」

「ヴェンデリン。その辺の連中が言うような言動では興ざめじゃぞ。

もっと、妾を楽しませい」

「俄か参謀にそういう仕事はありません」

テレーゼに俺に罵られて喜ぶ趣味があるというわけではなく、どうせ便宜上の名誉爵位持ちなので王様に付いている道化のような役割をして楽しませろという事のようだ。

勿論、俺にそんな才覚は無いのでお断りである。

王様の道化になれるような人とは、とんでもない才能と持つ人物だけなのだから。

でなければ、すぐに王様の怒りを買って処刑されてしまう。

ただ、皮肉や毒舌を吐けば良いというわけではないのだから。

「なかなかに可愛い娘じゃの。年は幾つじゃ？」

「はい。フィリップ公爵様。九歳になります」

「そなた。大きいの……」

道中でエリーゼが色々と聞いていたのだが、実はフィリーネはまだ九歳らしい。

どおりで、見た目に反して言動に幼い部分があるわけだ。

「それに、髪の色も特徴的じゃの……」

フィリーネは、俺達が帝国ではまだ一度も見た事がない銀色の髪をしていた。

「亡くなったお母様が、お父様が銀色の髪をしていたと言っていました」

「そうかえ。帝国には、銀色の髪の人間は滅多におらぬがの」

テレーゼの発言で、その場が一気に沈黙に包まれた。

帝国に銀色の髪の人間がいないとなると、残りは王国の人間という可能性が高くなるからだ。

「もし王国人だとしても一般庶民じゃないよね？　親善訪問団と決められた交易しか両国間には交友が無いし……」

ルイーゼが言うように、父親は商人か貴族かその随員という事になるが、王国でも銀髪の人間はそんなに多く無い。

貴族の中でも少なく、その中でも一番有名な一族となるとあの人物しかいなかった。

「ブライヒレーダー辺境伯様だね」

「ルイーゼ。他に候補者は？」

「親善訪問団に選ばれるくらい大物になると、ブライヒレーダー辺境伯様だけ」

「あなた。この娘の髪の色合いは、ブライヒレーダー辺境伯様にそっくりです……」

確かに、フィリーネの銀髪はブライヒレーダー辺境伯とほぼ同じに見える。

エリーゼにみならず俺にも、彼くらいしか似た髪色の人を思い付

かなかった。

「フィリーネ。ちょっとお話があるんだけど……」

「何でもお聞きください。旦那様」

「（俺も旦那様か……）」

ここで話をしていても埒が明かないので、俺達は屋敷に移動してからブランタークさんも呼び出して話を続ける事にする。

「何だ？　この娘っ子は？」

カタリーナと共同で行っている魔法使いへの訓練を抜け出して来たブランタークさんは、フィリーネを見て怪訝な表情を浮かべていた。

殺伐とした野戦陣地に、幼い少女は相応しくないと思っているのであろう。

一緒に戻って来たカタリーナと導師も不思議そうな顔をしていた。

「ヴェンデリンさん。新しい奥さんですか？」

「いや。そこでカタリーナがそれを言うかよ……」

「あははっ！　バウマイスター伯爵は若くて羨ましい限りである！」

「導師。勘違いも甚だしいですよ」

別に、カタリーナと導師は戻って来なくても良かったのにと俺は

思った。

「それで、この娘っ子は誰なんだ？」

「あのお爺さん。怖いです」

フィリーネは顔を近付けたブランタークさんが怖かったようで、エリーゼの後ろに隠れてしまう。

「俺。導師ほど怖くないと思うけどな……」

「導師様は怖くないです。このお爺さん怖いです」

「ブランターク殿。まだ幼き娘を怖がらせてはいかんぞ」

「珍しく子供に好かれたからって……」

ブランタークさんは、フィリーネに怖がられてしまい不満そうな表情を浮かべていた。

実は、お爺さん扱いされたのが一番不満なのかもしれないが。

逆に導師は、珍しく子供に怖がられなかったのでご機嫌だ。

「お話が長くなるので、これをどうぞ」

「うわーーー。美味しそうですね」

フィリーネは、エリーゼが準備したケーキを目を輝かせながら見つめていた。

王都の名店で買った物であったが、こういう時に魔法の袋は大いに役に立つ。

フィリーネは、大量の生クリームがホイップされたフルーツケーキを美味しそうに食べていた。

「まずは、これです」

俺は、フィリーネが持っていた一冊の古い日記帳をみんなに見せる。

俺達は、最初はあの村長が食い扶持を減らすためにフィリーネを差し出したのかと思っていた。

ところが、エリーゼが帰り道でフィリーネ本人から事情を聞くと、どうも他に事情があって俺達に押し付けたのが真相なようだ。

『なら、説明しろよクソ村長！』という気持ちが沸いてくるのだが、立場は俺達が圧倒的に上なので断られる事を恐れたのかもしれない。

ここに戻るまでに、フィリーネの持ち物にその事情とやらが書かれてあるのを知るのが精一杯であった。

「ちくしょう。あのクソ村長」

「まあ、そう言うでない。寒村の村長がこの娘を連れて親善訪問団が滞在していた迎賓館に訪問しても、まず門前払いが普通なのじゃから」

『ここに、王国の大貴族様の隠し子がいるのでお目通りを』などと言っても、普通は詐欺師扱いされるのが普通であろう。

頼まれもしないのに付いて来たテレーゼが、珍しくフォローを入れる。

それは、俺にもわかるのだが……。

「今回はまたとないチャンスだと、あのジイさんは考えたんだな」

「だから事情を言え！」

「下手に事情を言うと、俺達も内戦に参加していて面倒だからと断る可能性もあった。とか考えたのかも」

「こんなに小さい娘を戦場のある外に出して、危険だとは思わないのか？」

「それでも、ヴェルならブライヒレーダー辺境伯様に会わせてくれると思ったのでは？」

「妙に評価されているな」

「ヴェルは戦争で負けた事が無いからな。そういう評判は平民にも自然と流れるんだ」

俺は、エルの推論に妙な説得力を次第に感じ始めていた。

「ヴェル。その日記は読まなくてもいいのかしら？」

「読んでおくか。確認のために」

フィリーネはほぼ間違いなくブライヒレーダー辺境伯の隠し子なのであろうが、イーナにも促されたので、一応確認のために日記を読んでおく事にする。

一冊目は、フィリーネの亡くなった母親の物だ。

彼女は、前回の親善訪問団の時にブライヒレーダー辺境伯のお世話係りの一人に指名され、その時に彼と恋愛関係になったようだ。

その辺の細かな私小説のような話は省いて、ブライヒレーダー辺境伯が王国に戻った直後にあの村に戻って来て、その時には既に妊娠していた。

未婚の母としてフィリーネを産むが、彼女が幼い時に体調を崩してそのまま亡くなってしまう。

日記帳の最後には、残される幼い娘が心配だと書かれていた。

「親善訪問団の貴族の世話をしていて、担当がブライヒレーダー辺境伯だったそうです」

俺は、日記の簡単な内容をみんなに説明する。

「なんてこったい。紀行文だけじゃなくて、隠し子まで作るとか……」

「ブランタークさんは、気が付かなかったんですか？」

「前回は、導師やテレーゼ様とばかりいたからな。そんな俺にお館様は何も言わないどころか、『フィリップ公爵殿の護衛とは、光栄じゃないですか』とか言っていてな」

「それ。自分の逢瀬に邪魔だったからだと思う」

「だよなぁ……」

ルイーゼの指摘に、ブランタークさんはガックリと肩を落としていた。

「それで、証拠はあるのか？」

「それがあるんです……」

フィリーネは、村長からバッグ一つ分の荷物を持たされていた。

その中には、ブラヒレーダー辺境伯がフィリーネの母親に宛てた恋文、一週間ほどの逢瀬ではあったが子供が出来たら自分の子供であるという証明の手紙、ブライヒレーダー辺境伯家の家紋入りの豪華な装飾が施されたナイフなどが入っていた。

というか、そこまでするのなら連れて戻ればいいのにと思ってしまう。

もしかすると、本妻が怖かったのであろうか？

「言いたくはありませんけど、最低ですわね」

自身が高名な魔法使いなのであまり貴族に遠慮しないでいい立場にあるカタリーナなどは、結構露骨にブライヒレーダー辺境伯の所業を非難していた。

多分、エリーゼ達も同意見だと思われる。

文系好青年に見えるブライヒレーダー辺境伯の評価が大暴落した瞬間だ。

「恋文って、ブライヒレーダー辺境伯はこういう時でも文系だよなぁ……」

申し訳ないが中身を確認してみると、そこには『太陽のように美しい君』とか、『この胸の高ぶりを、君にどう伝えようか？』とか見ているだけで恥ずかしい文言が書かれている。
導師とエルも中身を見て、あまりの恥ずかしい内容にその場で腹を抱えて笑い出していた。

本人は真剣なのであろうが、第三者が見れば一種の喜劇で公開処刑でもある。
女性陣の冷笑と、男性陣のバカ笑いの差がシュールであった。

「ヴェルは、あまり手紙とか書かないよね？」

「苦手だから。ルイーゼよりは書く機会は多いけど」

「ボクも面倒だから、手紙とか嫌い」

前世では、メールすら億劫であった男だ。
必要も無い手紙をわざわざ書く趣味などない。

「それで、これは？」

続けてもう一冊の日記帳が出て来たが、そこにはもっと恥ずかしい物が書かれていた。

「『アマデウス・フライターク・フォン・ブライヒレーダーが愛しき君に送る。愛の詩』完全に空ぶってるな……」

その日記のページには、ブライヒレーダー辺境伯が自作した物と思われる恥ずかしい詩が記載されていた。
どうやら紀行文などは得意なようだが、恋文や詩などの才能は圧

倒的に無いようだ。

俺にはどう見ても、ブライヒレーダー辺境伯の黒歴史にしか見えない。

もし俺がこんな物を書いてそれが世間に漏れたら、間違いなく自殺を考えるであろう。

そのくらい恥ずかしい出来の詩であった。

「ブライヒレーダー辺境伯様も意外と無責任ね」

「あまり感心できる行為ではありませんね」

常識人なので身分の高い人を非難するのを普段は避けるイーナに、あまり人の悪口を言わないエリーゼでもそうなのだから、今の時点でブライヒレーダー辺境伯の男と父親としての評価は地に落ちている状態だ。

庇っても無駄だと考えているブランタークさんは、何も言わずに黙っていた。

唯一の救いといえば、フィリーネが女性陣の同情を一身に受けている事であろうか。

「普通の女性って、こういう詩とかを貰うと嬉しいのかしら？」

「ええと……。恋は盲目と聞いた事があります。あくまでも本の内容なのですが……」

イーナは手紙や詩に書かれたブライヒレーダー辺境伯独特の恥ずかしい文章表現を見てから、一人ボソっと感想を述べる。

エリーゼも、自分がこの詩を貰っても嬉しくはないと思っているのであろう。
イーナにかなり曖昧な返答をしていた。

「ブライヒレーダー辺境伯様。詩人の才能はゼロね」

「お笑い芸人としての才能はあるかも」

「ルイーゼ。あんたねぇ……」

貴族のサロンなどで公開されれば絶対にウケるはずだが、それは笑いの才能では無くてただその詩を笑われているだけである。
笑われているようでは、お笑い芸人としての寿命は短いであろう。

その前に、お笑い芸人扱いでは本人も不本意であろうし。

「それで、あの娘がブライヒレーダー辺境伯の隠し子だと？」

「証拠が全て揃っているからな。フィリーネ」

「はい。旦那様」

俺もエルも、今のフィリーネからすれば旦那様のようだ。
声をかけられると、純真な笑顔と共に答えていた。
口の周りに少し生クリームが付いていたが、ブライヒレーダー辺境伯の血を受け継いでいる美少女なので余計に可愛かった。

「フィリーネ。クリームが付いていますよ」

「ありがとうございます。エリーゼ様」

エリーゼに口に付いたクリームを拭いて貰って、フィリーネは嬉しいようだ。
ヴィルマにも慕われる彼女の特性は、フィリーネにも発動していた。

「ええと。亡くなられたお母様の髪の色は何色だったのかな？」

「茶色でした」

「そうか。教えてくれてありがとう。ケーキの御代りが欲しいのならエリーゼに言ってね」

「はい」

フィリーネ本人は初めて食べるケーキに夢中なようで、自分の父親の事などどうでもいいようだ。
決して薄情なのではなく、生まれてから一度も見た事が無い父親の話をされても実感が湧かないのであろう。

「それでどうする？」

「それは勿論、ブランタークさんに」

「俺？」

まさか自分が指名されるとは思わず、ブランタークさんは目を丸くさせてしまう。

「だってほら、主君のご令嬢ですよ」

「それはそうなんだけど、俺は嫌われたっぽいしなぁ……」

フィリーネは少し変わった娘で、女性・子供受けが良いブランタークさんよりも導師の方を気に入っている。

なので、自分では面倒を見れないと彼から断られてしまった。

「というか、女の子なんだからそっちのお嬢さん達で面倒見てくれよ」

ブランタークさんは、エリーゼ達にフィリーネの面倒を頼みたいようだ。

「導師は……。無理だな……」

気に入られるのと、面倒を見られるというのは別問題だ。

それに、もしフィリーネが導師のようになってしまうと問題になるので、それは止めた方がいいかもしれない。

あとで、ブライヒレーダー辺境伯に恨まれでもしたら嫌だし。

「フィリーネよ。ケーキは美味しいかな？」

「はい。導師様」

「それは、良かったのである」

「変わった娘だなぁ……」

子供と女性ウケが良いブランタークさんが怖がられてしまい、逆

にウケが悪い導師を怖がらないどころか、逆に気に入っている節もあるのだから。
　可愛い容姿をしているのに、意外とゲテモノ好きなようだ。

「ここはやっぱりブランタークさんが？　ほら、娘が生まれた時に備えて」

「それは、嫁さんが妊娠してから考慮する。というか、伯爵様はエルの坊主に預けるんじゃないのか？」

　ただの庶民の娘ならそれでも良かったのだが、今ではブライヒレーダー辺境伯の娘である事が判明している。
　となれば、それなりの対応が必要になるであろう。
　このタイミングで、俺達はまた難儀を背負い込んだわけだ。

「そうですね。お館様の仰る通りです」

　公の席でも無いのに、エルが俺をお館様と呼ぶ時は大抵碌でもない理由だ。
　エルの顔には、してやったりという表情が浮かんでいた。

「家臣の身で、王国南方の雄であるブライヒレーダー辺境伯様のご令嬢を見習いメイドとして扱うなど非礼に当たります。ここはお館様にお任せするしか」

　正論だが、エルの意図は一度俺が押し付けたフィリーネをお返しする口実が出来て嬉しくて堪らないのであろう。
　まさかのフィリーネの出自に、俺が手痛いしっぺ返しを受けたわけだ。

「エル。本音を言ってごらん」

「どう考えても、ヴェルが預かるしかないじゃん。ざまぁ」

「反論できねぇ……」

エルはわざと恭しく頭を下げながら意見を述べていたが、その顔には清々しい笑みが浮かんでいる。

明らかに、厄介のタネを俺に押し付けられて嬉しいという風にしか受け取れなかった。

「お前のその爽やかな笑みに、ちょっと殺意が沸いた」

「現実問題として、ヴェルが預かるしかない」

「だとしてもだ……」

エルとのこの手のやり取りは、俺がバウマイスター伯爵で無くてヴェンデリンとしての自我を保つために必要なので問題ない。

エルも公式の場では弁えるので、問題になった事も無い。

それよりも、俺がフィリーネを預かって後にブライヒレーダー辺境伯に返しに行くと確実に嫁として押し付けられるという点にあった。

「フィリーネが十五歳になると、ヴェルは二十二歳。全く違和感がないな」

「しかも、隠し子だから序列が低くても何の問題もないわね」

エルとイーナの見解に、俺は溜息しか出なかった。
確実にブライヒレーダー辺境伯がそう言うであろうからだ。

「旦那様。私。邪魔ですか？」

つい熱を入れて話をしていると、いつの間にかケーキを食べ終わっていたフィリーネが目を潤ませながら聞いてくる。
どうやら話の流れから、自分がいらない人間なのではないかと思ってしまったようだ。

「そんな事は無いよ。ちょっとフィリーネをお父さんと会わせるのに時間がかかるから、その間にフィリーネに色々と習って貰おうと思って」

「お父様に会えるのですか？」

「外国に居るし、今は事情があって会わせる事が出来ないから、その間にフィリーネには少しお手伝いをして貰おうと思って。エリーゼ」

「はい」

「そういうわけだから、基礎的な教育を空いている時間にお願い」

「わかりました」

俺はエリーゼの両肩に手を置いて、フィリーネへの教育を頼んでいた。

「貴族の令嬢として、最低限の礼儀とかですかね？」

「エリーゼも忙しいだろうから、あとはメイド見習いでも構わないと思うけど」

父親がブライヒレーダー辺境伯なので、会わせるにしても最低限の儀礼などは必要なはずだ。

それっぽい衣装などは後でどうとでもなるし、今は内戦の終結が最優先である。

「それでしたら、私も手伝いますわよ」

どうやら、貴族としての行儀作法を教えるという話がカタリーナの心の琴線に引っかかったらしい。

彼女は、自分もフィリーネの教育に参加する事を希望した。

「ケーキ。美味しい」

ずっと静かにしているヴィルマは、自分もエリーゼからケーキを貰って美味しそうに食べているだけだ。

自分に、貴族としてのマナーを教えるなど出来ないと思っているのであろう。

「えっ？　カタリーナが？」

「私は一度は没落したものの、諦めずに貴族として必要な事を学び、今にそれが生きておりますもの。フィリーネさんの事も安心して任せると良いですわ」

「そうか？」

「ヴェンデリンさん。私の貴族としての振る舞いに何かご不満でも？」

「カタリーナの貴族としての振る舞いは、少しわざとらしい」

形式に捕らわれ過ぎているし、常に前屈みで全力投球しているように見えるので、どこか一杯一杯で余裕が無いように見えてしまうのだ。

あとは、たまに思いっきり空回りしているのも問題であろう。

「ヴェンデリンさんは大人し過ぎるのです。貴族とは本来はこういう物でしてよ」

俺も俄か貴族なので良くわからないが、貴族が全員カタリーナみたいだと、それはそれで困ってしまうような気がする。

「それに、フィリーネが俺やカタリーナに似てボッチ体質になっても困るし」

「ですから、私はボッチではありませんのに！」

「ボッチな人ほど、自分はボッチでは無いというんだよ」

「旦那様。ボッチって何ですか？」

「カタリーナみたいな人の事さ」

「ですから、私はボッチではありませんのに！」

俺とカタリーナの掛け合いに、フィリーネは一人首を傾げる。

そして静かにしているルイーゼであったが、彼女は一人しょんぼりとしていた。

「どうしたの？　ルイーゼ」

「あのフィリーネって娘。ボクより七歳も下なのに、ボクよりも身長が十センチ近くも高いんだ……」

理由を尋ねたヴィルマに、ルイーゼは己の成長速度の遅さを嘆く。

確かに、ルイーゼとフィリーネを比べると大半の人がフィリーネの方が年上だと思うであろう。

「でも、小さい方がヴェル様に撫でて貰いやすい」

「ボクは大人の女だから、撫でて貰っても嬉しくない」

「そう？　カタリーナは、たまに撫でて貰って喜んでいる」

「似合わないね」

「大きなお世話ですわ！」

二人の会話がカタリーナに漏れ、彼女はルイーゼの発言に大声でツッコミを入れる。

結局フィリーネの扱いは、表面上は俺の見習いメイドとして傍に置く事にして、教育はエリーゼ達が交代で行う事が決定する。

当然周囲には秘密で、テレーゼにも秘密にして貰っている。

テレーゼも大貴族なので、その手の話を漏らさないのは国は違えど貴族としてのマナーのようで快く引き受けて貰った。

「その代わりに、貸しが一つじゃの。何で返して貰おうかの」

「……」

俺は、この場にいないブライヒレーダー辺境伯をわずかながらも恨んでしまうのであった。

「テレーゼ様。お茶をお持ちしました」

「すまぬの」

フィリーネを受け入れて一週間、テレーゼが言うにはそろそろニュルンベルク公爵が軍勢を集めて攻め寄せて来るはずであったが、なぜかその気配が無い。

エリーゼが調整したメイド服を着たフィリーネは、俺達の家の中で家事手伝いや貴族の令嬢としての最低限のマナーなどを習いながら生活していた。

元々、あの村でも居候だったので最低限の家事などはしていたようだ。

思ったよりもテキパキと仕事をしている。

そんなフィリーネは、なぜかうちを訪ねて来たテレーゼにお茶を淹れ、彼女はそれにお礼を述べる。

何をしに来たのかは知らないが、間違いなく碌でも無い事であろう。

彼女の言動が俺の胃に良くないのは、もはや決定事項であった。

「これは、極秘情報なのじゃがな……。ヘルムート王国派遣軍とやらが、壊滅したようじゃぞ」

「はあ？」

最初、俺はテレーゼが言っている事の意味がわからなかった。

「例の装置のせいで、ヘルムート王国北部も魔導飛行船の運行と通信が阻害されておるようじゃな。親善訪問団の消息も不明じゃし、『ヘルムート王国の王宮は、出兵論を抑えられなかったのでは？』というのが、妾と他の貴族達の推論じゃの」

「陛下……」

手柄や領地欲しさの貴族に、予算増を狙う軍部に、今の今まで親善訪問団の消息が不明という点も大きいのかもしれない。

通信が不可能なので諜報網が不全で情報もほとんど手に入らず、不安に思った貴族から限定的な出兵論が出て、それを抑えられなかった可能性もある。

ただ、これらの意見は全て推論である。

通信が不可能なだけで、ここまで何も情報が入って来ないとは困った物であった。

テレーゼも、従来の早馬や伝書鳩による諜報網の構築でどうにか情報を集めているが、その速度と精度の劣化は著しかったからだ。

お互いの密偵が殺し合っている事もあり、時には全く情報が入って来ない事もあった。

「完璧な情報ではないがの。様子見と、隙あらばギガントの断裂北部の占領でも狙っていたのであろう」

即席のロープウェーによる人海戦術で、推定五千人から八千人ほどのヘルムート王国軍が帝国領内に侵入して一部領地を占領するも、疾風の如く夜襲をかけてきたニュルンベルク公爵自ら率いる騎馬隊によって王国軍は壊滅したそうだ。

「王国軍。弱いなぁ……」

味方とはいえ、情けなくなるほどの弱さである。

「ニュルンベルク公爵は、普通に軍で活躍しておれば名将じゃからの」

足の遅い歩兵を後方に置き去りにしてでも、ギガントの断裂を渡ったばかりで疲れていた王国軍に速攻で夜襲をかけたかったようだ。騎馬隊のみで戦力に不安があっても、時の利を逃したくなかった。ニュルンベルク公爵が名将である証拠とも言えよう。

「それで、王国軍は？」

「かなりの貴族が討たれたようじゃな。誰かまでは情報が不足しておるが」

王国軍の指揮官に、北部の貴族でも兵を出していた者がいたのかもしれない。

何にせよ、聞くまでも無く王国軍は壊滅だ。

戻ろうにもロープウェーを渡らないといけないし、敗走してもギ

ガントの断裂を渡らないと安全圏など無い。

「敗残兵狩りでやられるか、落ち武者狩りでやられるか、諦めて降伏するかじゃの」

「でしょうね……。それで、こちらに攻め寄せるのが遅れていると？」

「ヘルムート王国による次の出兵があるのか？　全滅したので萎縮して様子見するか？　見極めてから、こちらに攻め寄せてくるであろうな」

あとは、あまり敗残兵を放置すると治安が悪化してしまう。

ヤケになった敗残兵が、食料欲しさなどに村や町を襲う可能性があるので、ニュルンベルク公爵はそれらを掃討する義務があるからだ。

「クーデター政権だからこそ、民衆の支持を得られるように動くと？」

「どの程度が逃げおうせたのかは、全くの不明じゃからの。意外と手間取るかもしれぬ」

「反乱軍を、何人道連れにしてくれますかね？」

「そなた。味方なのに恐ろしい事を言うの」

俺にとって、王国軍は味方ではある。

だが、この状況で南に千五百キロも離れた敗残兵に手を差し伸べる余裕などない。

この混乱した状態で、ギガントの断裂をロープウェーで渡って中途半端な数の軍を侵攻させること自体が無謀なのだ。
更に、こちらとしては余計に情勢が混乱してしまって、下手をすると解放軍の敗北要因にもなりかねない。

数千人の王国軍を一撃で粉砕したとなれば、ニュルンベルク公爵は己の武勲を高々に語り始めるであろう。
それにより、彼に付いて行ってしまう貴族や民衆が増える可能性があるのだ。

それを考えると、誰が率いたのかもわからない王国軍を助ける気など一切沸いてこなかった。
俺達の足を引っ張る存在だからだ。

「主戦派を抑えきれなくなって、ニュルンベルク公爵に抹殺させたのかな？」

帝国内乱の情勢がほとんど入ってこない事で、王国で無謀な出兵論を唱える貴族が増えた。
そこで、『じゃあ、お前らだけで先遣隊を組んで行け』という話になったのかもしれない。
確率は低いが成功すれば万々歳で、失敗しても帝国軍が始末してくれるとか考えたのかもしれなかった。

王国政府にいる、怖い方々が。

「ギガントの断裂から、ここまで直線でも千五百キロですよ。反乱軍と解放軍の現在の勢力図と軍の配置状況を掴んで、ここまで組織的に敗残兵を纏めて逃げてくる指揮官の存在は期待薄ですね」

「そんな凄腕の指揮官がいたら、そもそも最初から全滅せぬであろう」

「それを言われるとなぁ……」

「ニュルンベルク公爵による適切な夜襲で、王国軍はホウセンカの種のように一撃で飛び散ったようじゃの。ただ、その夜襲で討たれた兵力は半数にも満たないらしい。よって反乱軍は、バラバラに別れて敗残兵狩りをしているようじゃ」

テレーゼからの情報はそこまでであった。

帝国南部に潜伏・逃走している敗残兵を壊滅させるまでは、ニュルンベルク公爵は動かない。

そんな事情もあって、俺達はソビット大荒地の野戦陣地に籠る事になる。

また手薄だからと城塞や町を占領しても、そこを占領した軍勢がモグラ叩きのように叩かれてしまうので、今度は素直に籠っているようだ。

軍勢が増えたので、陣地、土壁、防馬用の溝などの工事が進み、軍団の編成と訓練なども行われる。

兵士が増えたので、彼らの目当てにした商人が集まって町のような物も出来ていて、他にも戦地では付き物である色町などの管理も必要であった。

当然、その負担は全てテレーゼに行く事になる。

「妾に色町など必要ないのじゃがな。放置すると密偵が入ってくるし、病気でも蔓延させられたら戦力が落ちる。全く、未通女である妾がどうして……」

王国軍の潰滅からおよそ一か月半、テレーゼは執務室で娼婦に安く販売する性病予防薬の予算書にサインしながら溜息をついていた。

「俺にも、色町なんていりませんけど」

「ヴェンデリンは、五人も嫁がおるからの」

俺は、新しく開設される娼館の営業許可証を見ながら、書類の不備などを探していた。

最初は少し戸惑ったが、こうして実際に書類仕事をしてみると前世の記憶も役に立つ物である。

「うちの嫁さん達に襲い掛かるバカがいるかもしれないから、娼館は必要悪かな？」

「それは愛妻家で結構じゃの。何なら、妾も混ぜてくれて一向に構わぬぞ」

「ははははっ。面白い冗談ですね」

「サラリと流しおって。しかし、頭の痛い問題ばかりじゃの」

軍勢が集って編成も終わり、訓練もしているし、野戦陣地の拡張も順調である。

だが、数万人の軍勢が戦わずに長滞陣しているのだ。

消費する食料だけを考えても、テレーゼと解放軍の経理担当者は頭を抱えているであろう。

「戦功による褒美は後回し。余裕のある貴族には食料や金銭の供与

まで頼んでいる。中央を抑えているニュルンベルク公爵が羨ましいの」

援助をして貰っている貴族には、色を付けてお返しをしないといけない。

貴族の世界に、ボランティアとか寄付という言葉は無いのだ。

教会や貧民に対する寄付は、寄付によって名声などの利益を得ているのでアレを純粋な寄付とは誰も思わない。

もう一度言うが、貴族の世界にボランティアとか寄付という言葉は無い。

「反乱軍は、中央の国庫で何とかしているであろうからな」

一見良くは見えるが、それは大切な帝国資産の切り崩しという犠牲の元に成り立っている。

外征ならば領地なり略奪した物資や金銭で利益が出る事もあるが、内乱なので帝国内の金と食料と物資を食い潰しているだけである。

内戦が終わって、テレーゼ達が帝都の皇宮にある蔵に入ったら空でしたという可能性も十分にあるのだから。

「ヴェンデリンがいて助かっておる」

「そうですか？」

「他の貴族連中も、ヴェンデリンの手前、あまり強欲な事も言えないからの」

解放軍の中で一番武勲を挙げていて、他にも野戦陣地の構築、周辺の占領地域への治療魔法による巡回看護、更には参謀としてテレ

ーゼの補佐を行っているし、食糧や金銭なども相当に持ち出している。
そんな俺が、名誉伯爵への叙勲以外で特に恩賞も貰っていないので、他の貴族も言い難いという事情があるそうだ。

「あとでちゃんと恩賞を出さないと、第二の内乱発生ですね」

「厳しい事を言うの。当然恩賞はちゃんと出す」

帝国の国力であれば十分に可能であろうが、財政への負担で暫く帝国はガタガタであろう。
解放軍に参加した貴族で新しい帝国の権力図を作らなければならず、そのためにはなるべく反乱軍に参加した貴族の領地や爵位を削らないといけない。
だが、あまりそれをやり過ぎると、また第二の内乱だ。

その匙加減の難しさに、俺ならばとっと逃亡して亡命しているであろうなと思っていた。
地球で言うと、褒賞の分け方の失敗で滅んだ項羽のようになってしまいそうだからだ。

「本当に、他に最適な人物がいたらとっくに譲っておるわ」

「それはご愁傷様です」

「何を他人事な。ヴェンデリンへの褒賞にも関わってくるのだぞ」

まだ銅貨一枚貰っていなかったが、名誉伯爵の年金と、あとは傭兵としての個別の依頼達成などで結構な現金を貰う予定になっている。

あとは、ソビット大荒地周辺の廃坑からの金属資源の回収で大分潤っている。
魔力を大量に使うが、魔力量を増やす鍛錬には便利だし、他の魔法使いでは届かない地下の新鉱脈から金属資源が採れるので、少なくとも損はしていなかった。
テレーゼは何も採れない廃坑だと思っているが、俺にとっては宝の山なので双方の利害が一致していたのだ。

「なかなかの金額なので、別の褒美も考えてあるがの」

「現物支給ですか？」

「察しが良いの。試しに書類を正式に認めたぞえ。欲しければ、サインをするが良い」

「どれどれ……。おいっ！」

その書類には、俺にテレーゼを差し上げるという内容が書かれていた。
しかもご丁寧に、公的な効力を発揮するように正式な文体で書かれている。

俺がサインをすると、正式にテレーゼが俺に譲渡されてしまうのだ。

「おいっ！　次期皇帝」

「アーカート十七世が生きていて、まだ自分でやると言うかもしれぬではないか」

「無理に決まっているじゃないか」

生きていても、在位直後にクーデターで政権を追われた皇帝になど誰も付いていかない。

何よりも困るのは、解放軍の戦功など無視して自分の都合で褒賞や貴族の再編成などを決めてしまう事だ。

中央で反乱軍に組していたり、捕まっていたり、中立を保った貴族に配慮して解放軍に参加した貴族を蔑ろにすれば、間違いなく第二の内乱が発生するであろう。

「冗談じゃよ。妾に精一杯種付けをしたければ、いつでも妾の部屋に来るがよい」

「テレーゼ様は、相変わらずですね」

「いい加減に諦めたらいかがですか？」

「妾は、しつこいのが生来の気質でな」

俺とテレーゼの会話を聞きながら静かに書類を処理していたエリーゼとイーナが、いつものように静かに切れていた。

ここ一か月ほどの風物詩になっていたが、テレーゼは全く諦めるつもりはないようだ。

「エリーゼとイーナに手伝って貰えて、仕事が減って大助かりじゃ」

そしてこの一か月で、テレーゼは妻達を呼び捨てで呼ぶようになっていた。

本来自分が処理すべき書類の一部を回しているのも、エリーゼ達を信用しての事である。

強かにもテレーゼは、俺達がどう転んでもニュルンベルク公爵側に付かないと理解して、こういう仕事を振って傍に置いているのだ。

「さてと。今日の書類はこれで……「失礼します！」」

大量の書類が無くなるのと同時に、突然フィリップ公爵家の若い家臣が一人飛び込んでくる。

どうやら、火急の用事があるらしい。

「ニュルンベルク公爵でも攻めて来たのか？」

「いえ。外にみずぼらしい乞食のような集団がいるのですが……」

男性ばかりで風呂にも入っていないようで汚いが、馬に乗っている者もいるし、全員武装して目がギラギラとしている。

人数も千人以上はいるようで、敵襲かと思えば『自分達は、ヘルムート王国軍である！』と言っていて、どう対処したものか守備兵がお伺いを立ててきたのだ。

「味方なのか？」

千五百キロを一か月で移動する事は、地球よりも少し体が頑丈なこの世界の人間ならば不可能ではない。

だが、山道や魔物の領域を含む敵地を超えて、ここまで千人以上の集団を保っている事の方が異常であった。

「偽装かな？」

「知己がいるのか、顔を出せば良いではないか」

「それもそうですね……」

俺よりも王国の貴族に詳しいエリーゼを連れて、俺は野戦陣地の正面門近くの土壁の上へと登る。

眼下には、髪も髭も伸ばし放題で、王国軍だとわからないように紋章の入った鎧や盾を捨てて来たので汚い服装の男性が多数集まっていた。

見ようによっては山賊にも見え、なるほど警備兵達が緊張しているわけだ。

もしかすると、王国軍の敗残兵に見せて実は反乱軍という可能性も否定できないのであろう。

「指揮官はいるのか！」

俺が大声で叫ぶと、集団が割れてそこから二名の男性が現れる。

「あれ？　どこかで見たような……」

過去に会っているような気がするが、なぜか思い出せない。

髪も髭も伸ばし放題なので、余計に見分けがつかないのだ。

「エリーゼは、わかる？」

「ええと……。何名かは、治療した事があるような……」

子供の頃から王都の教会で治療をしていたエリーゼは、とにかく顔が広い。

彼女に治療されて感謝している人も多く、それが彼女の『聖女』という二つ名にも繋がっていたのだ。

「エリーゼ様！　昔に治療をしていただいたアレクシスです！」

「聖女様！　俺は五年前に治療していただきました」

数十名の男性が、エリーゼを見付けて大声でお礼を述べている。

偽装という可能性も捨てきれないが、その内の何名かをエリーゼ自身が覚えていたのが大きかった。

そして、先に前に出て来た二名の男性が俺に声をかけてくる。

「バウマイスター伯爵。よもや忘れたとは言わせないぞ！」

「紛争で私達を散々に打ち破っておいて、忘れたでは立つ瀬がありません！」

「出た！　元ブロワ兄弟！」

二人の指揮官はかつてブロワ辺境伯家との紛争で争った、今は元ブロワ家の人間になっている、兄フィリップと弟クリストフであった。

「お代り！」

「私も！」

野戦陣地に押し寄せた山賊のように汚い集団は、本当に敵中を突破してきた王国軍の生き残りであった。

念のために反乱軍の密偵がいないかを数時間かけて確認してから

彼らは収容され、髪を切り、髭を剃り、風呂に入って出された食事をマナーも忘れて貪るように食べている。
他の兵士達も、他の場所で食事の最中であった。

「まさか。元ブロワ兄弟とは……」

「バウマイスター伯爵。過去の因縁はともかく、その呼び名は止めてくれ」

「私達の今の家名は、フレーリヒなので」

辺境伯の次期当主候補から、王都の名ばかり法衣騎士家の当主と家臣へと転落した兄弟は、あまり貴族同士の交流にも呼ばれず、エドガー軍務卿などのツテで軍や役人の仕事をしていたはずだ。

「なるほど。帝国の内乱に乗じて領地を得ようと軍を出したと」

「バウマイスター伯爵は、何か勘違いをしているようだな」

「今のうちに、これだけの兵力を出せる余裕などありません」

フィリップとクリストフに指摘され、俺はこの二人の財力では軍勢など出せるはずがないという事実に気が付く。

「では、なぜに兵を？」

「レーガー侯爵家だ」

「レーガー侯爵家？」

「軍系法衣貴族の名家です。あなた」

相変わらずなかなか貴族の名前が思い出せない俺に、エリーゼがそっと教えてくれる。

「バイマイスター伯爵よ。奥方が聖女殿で良かったな」

フィリップは、なかなか貴族の名前と顔を覚えない俺に呆れたような表情を向けていた。

「その件については賛同する」

「話を戻すぞ」

このレーガー侯爵家は、対帝国強硬派で有名なのだそうだ。
何でも、過去に当主を戦争で七名も戦死させているらしい。
帝国への恨み骨髄というわけだが、既に最後の戦死者が出てから二百年以上も経っているので恨みの実情は怪しいところだ。

「今は仇討ちというよりは、停戦維持派であるエドガー軍務卿やアームストロング伯爵家へのアンチテーゼであろうな」

これは俺も知っていたが、実はこの両家は見た目とは違って停戦を保持したい穏健派であった。
いつあるかわからない戦争に向けて準備は怠らないが、出来れば戦争などしたくないと思っているのだ。

「軍上層部の本音としては、戦争なんて本当は嫌だからな」

フィリップの言う通りで、実は軍の偉い人ほど戦争を嫌がる傾向

にある。
戦争が無ければ決まった年数は今の地位で安泰でいられるのに、もし戦争になって負けでもしたら責任を取らされてその地位を追われてしまうからだ。

「戦争を望むのは、一部の野心的な中堅とか、今は主流派から外れているレーガー侯爵家とかだな」

「もう一つ。レーガー侯爵家を追い詰めたのは、バウマイスター伯爵ですよ」

「俺？」

クリストフが話に加わってきて、レーガー侯爵家が暴走した原因は俺だと言い始める。

「なぜ俺が？」

「軍はこのところ軍縮傾向にありました。王国政府としては当たり前の選択でしたが、軍の幹部達は面白くなくて当然です」

陛下は、徐々に軍縮を行っていた。
だが、ポストなどのパイが減れば当然軍系の貴族達は不満を述べる。

「その不満が、対帝国出兵論に化ける未来も可能性としてはありました」

それを防いだのが俺だと、クリストフは言うのだ。

「わかりませんか？　パンゲニア草原とヘルタニア渓谷ですよ」

治安維持を行ったり警備をする場所が増えたので、実質的には軍の予算とポストは増えている。

帝国と戦争をしないでも予算が増えたので、ほとんどが元の停戦派に戻ってしまったのだ。

「レーガー侯爵家が嬉しいはずもありません」

そこで、賛同者をある程度集めてから陛下に出兵案を提案したらしい。

「普通ならば突っぱねて終わりですが、北部の魔導飛行船や通信の停止に、親善訪問団の消息不明がありました」

いくら帝国に問い合わせても、碌に返答すら来ないのだ。

国家の威信を考えると、様子を見るために兵を出さざるを得なかったというのが真相のようであった。

「それで？」

「レーガー侯爵家が総大将になって、八千人の先遣隊がギガントの断裂を渡りました」

様子見なので静かに偵察部隊を出しながら慎重にやれば良かったのだが、無能にもレーガー侯爵はロープウェーを守る部隊と偵察で見付けた町などを占領する部隊に軍を分けてしまった。

「自ら陣頭に立って、嬉々として略奪をしていたそうです」

「それで、あなた達も兄弟して略奪に勤しんでいたと？」

「言ってくれますね。バウマイスター伯爵殿」

クリストフの目が釣り上っていた。

俺とこの兄弟の過去の因縁を考えると、いくら遠い帝国領内で再会したにしてもそれを喜べるはずがない。

いくら落ちぶれてもフィリップは法衣騎士ではあるし、クリストフも俺に謙りたくないのであろう。

「俺達は、エドガー軍務卿に言われて従軍したのさ。バカなレーガー侯爵の御守りのためにな」

そういえば、前にエドガー軍務卿から聞いた事がある。

フィリップは、軍人としては優れていると。

厳しい条件ではあるが、上手くやれば功績は大で昇爵の可能性もある。

弟のクリストフも、功績稼ぎのために軍官僚として従軍したのだそうだ。

「そんな事情もあって、いきなりレーガー侯爵に煙たがられてな」

「レーガー侯爵も相当に無能ですがね。私達の経歴を見れば、下がいて大いに安心したのでしょうね」

『家と領地を失った無能兄弟は本陣でも守っていろ』と、後方の本陣で王国軍五百名ほどを率いて待機していたらしい。

後方にいたからこそ、ニュルンベルク公爵の夜襲を防げたのは皮肉としか言いようがなかった。

「それで、レーガー侯爵は？」

「ニュルンベルク公爵自身に斬られたそうだ。逃げて来た兵士達がそう言っていた」

馬に乗ったニュルンベルク公爵自らの剣による一閃で、クビがポンと上空に飛んだらしい。

総大将の討ち死にで、派遣軍は大混乱に陥る。

しかもご丁寧に、他の参陣した貴族達も軍勢を割って略奪に勤しんでいたようで、彼らも各個撃破の対象になっていた。

「俺達は、生き残りの敗残兵を収容しながら北方に逃げたわけだ」

南方のロープウェーは臨時で作った貧弱な物であったし、すぐにニュルンベルク公爵によって落とされてしまったそうだ。

敗走ルートの予測も簡単であろうから、ロープウェーに逃げた将兵は討たれるか降伏して捕虜になったはずだとフィリップは説明していた。

「何で、北方に逃げるかね？」

「帝国が内乱状態なのは知れていたからな。何とか中央を押さえている反乱勢力の対抗勢力と合流できないかなと」

「ギガントの断裂のどこかで、またロープウェーを張って逃げるという手は？」

「誰がロープを張るんだ？」

最初に帝国領に侵攻する時に張ったロープウェーのロープは、貴

重な諜報員が張るのを協力してくれたらしい。
だが、帝国側にいる敗残兵が王国側にロープを張る手段が無い。
騒いで対岸の人に頼もうにもその人がいないし、騒げば敗残兵がいると地元の住民達に通報されてしまうからだ。

「あれ？　北方千五百キロ横断は意外と好判断？」

「魔法具や魔法の通信が阻害されていたからな」

フィリップはクリストフと共に、半ば本能的に軍勢を北上させた。
途中で味方の敗残兵を収容し、時には小規模な捜索隊や地元貴族の指揮する捜索隊を撃破する。
食料は、王国軍に所属している魔法使い達が魔法の袋を持っていたので、それを細く食い繋ぎながらなるべく人気の無い山道などを進んだ。
鎧や盾には王国の紋章があるので途中で廃棄し、道がわからなければ見付けた地元住民を拉致して道案内をさせる。
可哀想ではあったが、案内を終えたら一応は金貨などを渡して解放したそうだ。

「通信魔法の阻害のおかげで助かったな。あれが無ければ、途中で捕まるか全滅であったと思う」

反乱軍の動きの遅さを見るに、自分達も通信魔法の阻害で被害を受けているようだ。

「さてと。どうしようかな？」

「おい。どういう事だ？　バウマイスター伯爵」

遠く孤立した帝国領での再会であったが、その相手は過去に因縁のある相手であったし、解放軍の貴族や兵士達から見ても内乱のドサクサに紛れて自国に侵攻した敵軍の敗残兵など温かく迎え入れる理由が存在しない。

まず味方では無いし、自分達は直接戦闘はしていないものの誰がどう見ても侵略者なので、このまま処刑したい心情もあるであろう。

「交戦したのは反乱軍方とはいえ、あんたらは侵略者だから」

助け舟を出した結果、出した俺達まで恨まれてしまう可能性がある。

今、風呂に入れて飯を食わせているが、解放軍の兵士や貴族で厳しい視線を向けている人は多かった。

「バウマイスター伯爵達も、同じ王国人だがな」

それでも、傭兵扱いとはいえ解放軍に所属して戦功をあげた。

名誉爵位も貰っており、少なくとも表面上は受け入れられている。

「あんたらは、扱いが難しい」

「まさか、俺達を見捨てるつもりか？」

「それも出来ないから面倒なのに……」

それをすると、今度は王国に戻った時に問題になってしまう。

気に入らない相手でも、どうにかして保護しないといけないのだ。

「食事を終えたら、俺に付いて来て貰おうか」

「フィリップ公爵閣下との面会か？」

「そうだ。テレーゼ様の判断一つであんた達の待遇が決まる」

俺は、その辺をプラプラしていた導師を捕まえてから、兄弟を連れてテレーゼの元に向かう。

なぜ導師なのかといえば、これでもこの人は王国では物凄く偉い人だからだ。

立場上まずいので今は傭兵扱いだが、普段解放軍の兵士達に混ざって訓練に参加したり、陣地の構築工事などに参加していても違和感が無いのが不思議だ。

『一応、魔法使いってのは知的なイメージがあるんだが、導師はその対極にいるな。実力は大陸有数なのに』

これがブランタークさんの、導師への印象であった。

「おう！　バウマイスター伯爵にボロボロに負けて没落した元ブロワ兄弟ではないか」

導師は兄弟を見るやいなや、俺でも直接言わないような言葉を彼らに向けて吐いていた。

「導師は容赦ないですね」

「言葉を偽っても仕方がないであろう。事実なのだから」

こう見えて、導師は陛下への忠誠心が厚い。

王国の足を引っ張りまくった兄弟への言葉が辛辣なのには、そう

いう理由もあるのであろう。

「フィリップ公爵様の元に行かなくても良いのですか？」

言い返そうにも事実なので何も言えないらしく、クリストフが顔を引き攣らせながらテレーゼの所に早く行こうと急かしていた。

「それもそうであるな。早く行くとしよう」

合計四人でテレーゼの元を訪ねると、既に事情を知っている彼女は笑顔で二人を出迎える。

「色々と大変であったようじゃの。しかし、北に逃げるとは大胆な考えじゃな」

「王国北部地域も魔導飛行船が動きませんので、ギガントの断裂を渡るには簡易ロープウェーが必須なのです」

ただし、ギガントの断裂の幅の関係でそう簡単には張れない。お目溢しの密貿易に使っていた物は反乱軍によって切られてしまい、フィリップ達が帝国在留の諜報員と共に苦労して張った物もとっくに切られてしまっている。

「敗走時点で二千名ほどはいたのですが、敵軍の探索を逃れながらロープウェーを張り直し、そこから全員でロープウェーを渡って戻るなど不可能です」

降伏や玉砕も考えたそうだが、どうせ死ぬなら最後まで足掻いてみようと思ったらしい。

「王国側が得た帝国内戦に関する情報は少ないのですが、北部に反乱勢力と対立している勢力があると聞いていました」

合流できれば、受け入れて貰えて戦えるかもしれない。

駄目ならそこで全員玉砕だと、決死の北上を続けたのだそうだ。

「フィリップ殿は……。妾とフィリップ殿は名が同じじゃの。ファーストネームと家名の差があるにしても。しかし、そなたは優秀な指揮官のようじゃの」

テレーゼは、合計千五百六十七名を率いて敵領地を千五百キロも突破したフィリップの指揮官としての手腕を褒めていた。

確かに、そう誰にもでも出来る事ではないと俺も思うのだ。

「その割には、酷い没落劇だったけど」

「ヴェンデリンは辛辣よな」

「被害者ですからね」

「巨大な領地などというものは、新米の領主や次期領主が簡単に全てを御せる物ではないからの。フィリップ殿もクリストフ殿も結果的には大失敗したが、妾にもその可能性はあったはず。既に罰は受けているし、今回はとんだ貧乏クジじゃ。ヴェンデリンも、あまり苛めてやるな」

人の集まる組織とは本当に難しい。

優れたリーダーが率先して引っ張る組織はその時には良いが、そのリーダーがいなくなると一気に崩壊する事がある。

逆に周囲の意見を調整しながら物事を進めるリーダーは、大切な

決断が出来なくて失敗する事もあるし、成果をあげても中途半端になってしまう事がある。
組織の崩壊を防ぐために、時には周囲の意見を尊重する必要もあった。
それでも、リーダーが入れ替わっても特に混乱する事も無く続くというパターンもあるので、どちらが正しいとはいえないのだ。

テレーゼからすると、この兄弟はブロワ辺境伯家という巨大な組織に引き摺られて失敗した被害者という見方も出来るらしい。

「はあ……」

「そなたの子や孫が、同じ事をせぬ保証はないのじゃぞ」

「それは本人の責任ですから。もし能力が無いのなら、領主にならない方が多くの人達が幸せになりますし」

「ヴェンデリンは相変わらず辛辣じゃの。まあ、過去の因縁などはどうでも良いのじゃ。フィリップ殿達への待遇が問題であっての。身分が王国軍人のままでは拙いのじゃ」

帝国の内戦なのに、王国軍の軍人が参戦している。
しかも解放軍の方にしかいないので、反乱軍から『解放軍は、ヘルムート王国に国を売った！』と宣伝されると厳しい物があった。

「傭兵扱いで、王国軍組は全てヴェンデリンの指揮下に置く」

「軍の指揮なんて未経験ですが……」

いきなり、未経験の俺に千五百名以上の軍勢を指揮できるはずが

なかった。

「何のためにフィリップ殿がいる。任せておけ。そもそも、ヴェンデリンは妾の傍で控えて貰わないと困る」

決戦になれば、双方の魔法使いが魔法を撃ち合う事になる。

下手をすると一瞬で総大将を吹き飛ばされて敗北というケースもあるようで、テレーゼは俺達を傍に置いておきたいらしい。

これは決して自分の身ばかりを案じているわけではなく、テレーゼが死んでしまえば解放軍は一気に瓦解してしまうからだ。

「ニュルンベルク公爵も、傍に高位の魔法使いを複数置くはずじゃ」

「高位の魔法使いねぇ……」

「ブラッドソンとあの四兄弟が宮仕えでは最高峰であったが、中級レベルの魔法使いはまだ層が厚い。在野にも優れた魔法使いはおるし、彼らを高額でスカウトしている可能性もあるからの」

また、魔法使いの殺害をお互いに図らないといけない。

勝つためには仕方が無いが、共に帝国の魔法使いなので内戦後のダメージを考えると頭が痛いのであろう。

テレーゼはつまらなそうな表情を浮かべていた。

「元王国軍も妾の中央軍に置く。千五百名ほどで練度高いから大いに役には立つが、帝国人で彼らの指揮を受けたい者はないないであろうし、逆にすると使い潰そうとするやもしれぬ。そなたの下なら、いらぬ騒動も少ないであろう」

「そういうのを、押し付けとも言いますがね」

「能力のある指揮官に精鋭じゃ。貴族ならば、上手く使いこなせよ」

「わかりました」

どうせ断れないし、最悪盾にすれば良い。

酷い言い方だが、戦争なので自分の身は自分で守らなければいけないのだから。

「では、これで……」

俺と導師は、兄弟を連れてテレーゼの元を辞する。

結局俺は、中央軍の一軍となった王国軍の指揮官も兼任する事になってしまう。

傭兵扱いながらも、帝国名誉貴族で参謀でもあり、同じく傭兵扱いの王国軍残余兵も指揮する事になったのだ。

実際の指揮はフィリップに任せて、クリストフは王国軍に関わる雑事を担当する軍政官兼参謀や副将の扱いになる。

間違いなく俺の事など大嫌いであろうが、その辺は大人なので何とか対応して欲しいどころだ。

「バウマイスター伯爵様だ！」

「導師様もいらっしゃるぞ！」

「俺達は、まだ戦えるぞ」

王国軍兵士達は、俺や導師の姿を見ると大きな歓声をあげていた。

何とか苦労して生き延びたとはいえここは敵地であり不安だった

が、そこに有名な味方がいたので心強かったのであろう。
ただ一番の問題は、俺と指揮官である二人の仲が最悪という点にあった。

「ところで、装備の件なのですが……」

それを公にすると兵士達が不安がるので、クリストフはお飾りとはいえトップの俺に丁寧な口調でお願いをしてくる。

「防具か……」

「確か、王国軍の装備品なので捨てて来たのであったな」

導師は、みずぼらしい恰好をしていた兵士達を見て溜息をついていた。
武器はさすがに手放していなかったが、王国の紋章入りの鎧や盾などは脱ぎ捨ててきていて、全員ボロい普段着姿であった。
この一か月、着替えも洗濯もしていないので服はボロボロだ。
一部鎧を着けている者もいたが、彼らは諸侯軍の兵士や騎士らしい。
どうせ王国貴族の紋章など帝国軍は知らないであろうと、そのまま装備しているようだ。

「数が少ないのは、盾になったからであるか」

導師の問いに、フィリップは首を縦に振る。

諸侯軍の敗走兵とはあまり合流できなかったし、防具があるので矢面に立つ場面が多くて戦死した者も多く数が少ない。

急ぎ、千五百名分の防具や予備の武器が必要だとクリストフは説明していた。
金がかかるので、担当者である彼が俺にお伺いを立てているのだ。
「新品は無理だが、鹵獲品を補修した物がかなりある。担当者に言っておく」
「助かります」
帝国の紋章が入った物が多いが、どうせ王国軍人と名乗れない以上は問題ない。
戦死者の物なので嫌だと言うかと思ったが、それはあまり感じていないようだ。
もしかすると、日本人特有の感覚なのかもしれない。
他にも、着た切り雀の者が多いので下着や服も必要である。
寝泊まりするテントの確保も必要であった。
俺の隣でクリストフが経費の計算をしながら顔を青くさせていた。
気持ちは何となくわかる。
戦争とは、とにかくお金がかかるものなのだ。
「最低でも、これくらいはかかります」
「だろうね」
かなり大きな金額が書かれていたが、俺は見積もりに不備が無い事を確認してからそこにサインを入れていた。
「補給担当者に見せれば、準備してくれるはずだ。他の業務の邪魔

にならないように、サイズ合わせをしてから受領してくれ。下着などはサイズを言えば在庫から出してくれるはず。他のが欲しければ、商人達が市を作っているから、そこで買うしかないな」

「私達は多少は持っていますが、兵士達には無一文の者が多いです」

国内の任務ならば末端の兵士でもサイフくらい持って行くが、敵地への侵攻だったのでフィリップとクリストフが少額の公金くらいしか持っていなかったそうだ。

「逃走途中にいかにもな値段で食料を売ってくれた村などがあったのですが、ワケありの食料は高額でしたので」

道案内への謝礼などもあって、今はあまり残っていないそうだ。

「支度金を、一人につき金貨二枚出す。適度に節度を守って羽を伸ばし、決戦時に恥ずかしくないように恰好を整えさせてくれ」

「わかりました」

「王国の金貨でも、商人は受け取るから」

金の含有量も重さも条約で同じなので、俺達も普通に王国の貨幣で買い物をしていた。

俺はクリストフに人数分の金貨を渡す。

兄弟には別口で多目に金貨を渡していた。

「バウマイスター伯爵よ。また金がかかるな」

「テレーゼは渋いからなぁ」

解放軍の一番の弱点は、とにかく金が無い事である。
参加している貴族達は全員が自前で戦争に参加していて、報酬は勝利後の出世払いである。
総大将であるテレーゼはまだ皇帝ではないので、この方法は特に間違っているわけでもない。

ただし、戦後に色を付けて報酬を出す必要はあった。
俺も今までに相当な額を立て替えている。

だからこそ、たまにテレーゼは体で払おうと意図しているのかもしれない。

「色々とすいません」

「すまん」

俺の事など嫌いであろうに、二人は頭を下げていた。
ブロワ辺境伯家の後継者候補の時にはこんな事は出来なかったのであろうが、優秀な指揮官としてなら頭は下げられる。

もしかすると、立場や地位とは俺が思っている以上に重いのかもしれない。

「しかし、意外にも兄弟の仲が良い」

「ここまで落ちぶれれば、争うのも疲れてしまいますので……」

「煽る家臣もいないからな」

本人達だけなら、あの不毛な兄弟喧嘩は無かったのかもしれない。
そのくらい、今の二人はいがみ合う事もなく普通に仕事をしているのだから。

「お礼に、バウマイスター伯爵の所のエルヴィンを貸してくれ。あいつは、指揮官として物になるはずだ」

フィリップは、エルを預かって指揮官としての心得を実地経験込みで教える事を提案していた。

「エルヴィンには、後方で大御所に立って冷静に大軍を指揮するような才能はない。だが、前線や少し後方で自分も汗をかいて一万人くらいまでの軍勢なら上手く動かせる将になれるはずだ。バウマイスター伯爵の護衛ならうちから出す」

フィリップは、エルを俺の護衛としてではなく指揮官見習いとして教育する案を出していた。
彼なりに、俺に恩を返そうとしているのであろう。

「それならお願いしようかな」

「どのくらいの期間になるかはわからないが、出来る限り教えよう」

こうして、エルがフィリップ付きとなって彼から軍の指揮の仕方を実践形式で習う事になる。

「突然な感じもするけど、良い機会ではあるな」

エルはフィリップの傍で、彼と共に軍の指揮を学び始める。
新しい武器や防具の支給が終わり、貰った慰労金で必要な物を購

入したり英気を養った王国軍は、俺達の屋敷の周囲にテントを張ってそこで寝泊まりするようになっていた。
俺をトップとする部隊なので、その中心に纏まったわけだ。

「装備が整えば精鋭か」

「一部諸侯軍の残存兵を除くと、普通に訓練を続けていた王都軍ですから。エルヴィンさんにも動かしやすいと思いますよ」

そのまま王国軍を名乗れないので、今は俺が指揮官の傭兵軍という扱いになっている。
千五百名もの人達が部隊として機能すると、その瞬間から大量の書類が発生するのが常で、クリストフはそれを物凄いスピードで処理していた。

「エル。俺はテレーゼ殿の傍を離れられない。フィリップ殿と上手く協力して王国軍組を指揮してくれ」

「フィリップ殿がいるから、何とかなるかな」

「エルさん。私もお手伝いしますから」

ハルカも、エルを手伝う事を志願していた。

「綺麗な女性だな。エルヴィンの婚約者か？」

「はい。そうです」

「そうか。少しカルラに似ているか？」

「おい……」

「兄さん。さすがにそれは……」

当たり障りの無い自己紹介でもしていればいいのに、ここでフィリップが余計な事を口にしてしまう。

クリストフも、自分の兄に顔を顰めさせながら注意していた。

「エルさん。カルラさんとは？」

「ええと……」

前に好きになったがフラれた女性だとは、エルも男の意地で言いたくなかったようで口を濁らせてしまう。

だが、逆にその態度がハルカの疑念を抱かせた。

「エルさんには、他にも婚約者がいるのですか？」

「勿論、いないよ」

この世界にも嫉妬深い女性は一定数いるが、貴族の妻などはそれを表に出すと恥ずかしいという風潮がある。

他の婚約者の有無も、序列の問題や結婚生活の条件などに関わるから聞いてくるだけ。

のはずなのだが、ハルカの背後に初めて感じるドス黒いオーラに俺達は顔を青ざめさせていた。

怒らせれば、今のエルでも刀では勝てないのだから。

そして、エルが浮気をした可能性にあの人物も反応していた。

「エルヴィン！　私の可愛い妹を差し置いて浮気かね！」

疾風の如き風が舞うのと同時に、タカオミさんが刀を抜いてその刀身を一瞬でエルの首筋に当てていた。

元々達人なのに、妹の事になると更に強くなるようだ。

「君は独身だと聞いているが、うちのハルカ以外に愛人や婚約者がいるのを隠しているのは不義理だよねぇ？　普通、先に言うよねぇ！」

「タカオミさん！　少し切れているから！」

興奮のあまり、タカオミさんがエルの首に当てた刀身を動かしてしまい、エルの首筋から少し血が流れていた。

「フィリップ殿」

「兄さん。責任をもって説明を……」

「口が滑ってすまないとは思うが、この男は何なのだ？」

フィリップは、いきなり刀を抜いてエルの首筋に当てたタケオミさんに驚いていた。

エルの剣の腕前を知っていたので、余計に驚いたのであろう。

「ミズホ伯国の剣士、タケオミ・フジバヤシ」

「俺の義兄になる人です」

「そうか、何か大変そうだな……」

それからフィリップがカルラの事情を説明したので、タケオミさんはようやく刀を引いていた。

「そういう事でしたか」

ハルカも安堵の表情を浮かべていたが、俺達はみんな気が付いていた。

彼女が意外とヤキモチ焼きで、もうエルは浮気や女遊びが出来ないのだと。

「可哀想にな」

ブランタークさんは、エルにぽんと手を置いて慰める。

「ブランタークさん。結婚してから一度もそういう店に行っていないでしょう？　噂だと、奥さんの尻に敷かれていると……」

「無責任な噂だな。俺は結婚しても自由人だし」

「ブライヒレーダー辺境伯家のお抱えで、結婚までしていて。そんな自由人いませんよ」

「他人事みたいに言うな。エルの坊主だって、結婚すれば今まで通りにはいかないからな！」

なぜかしょうもない言い争いを始めてしまう二人であったが、もう少し周りを考えてそういう発言はした方がいいと思う。

ふとハルカを見ると、また背後からドス黒いオーラが復活していた。

「エルさんは、そういうお店に頻繁に行くと？」

「いえ。そんな事はありません」

必至に否定していたが、ハルカは信じてくれなかったようだ。

「エルさん。私達は夫婦になるのです。お互いに秘密を抱え合うのは良くありませんので」

「すいません！　今は絶対に行っていませんから！　ブランタークさんとは違って！」

「俺も行っていないぞ！」

そう言うのと同時に、ハルカは話があると言って彼を引き摺っていく。

エルのあまりの哀れさに、誰も声を出せないでいた。

ブランタークさんだけは己の無実を主張していたが、人は結婚すると変わるようだ。

独身時代なら、平気で色町に遊びに行った話をしていたのに。

「完全にとばっちり。フィリップ殿は残酷だな。いくら妹に追い落とされたからといって」

カルラは、自分が自由の身になるために兄達を追い落とす工作に全面協力した。

多分その件で、二人に恨まれているのであろう。

「バウマイスター伯爵。兄さんは知りませんが、私はカルラをもう

恨んでいませんけど」

最初は酷い妹で恩知らずだと思ったそうだが、自分がカルラと似たような立場になってみると、ようやく彼女の苦悩が良くわかったのだそうだ。

「ブロワ家に恩など無いのに利用されていましたからね。私も利用していましたけど。あの才覚を私達を叩き潰す時だけに利用して、今は慎ましい生活でも文句を言わずに喜んで受け入れている。私達の没落には因果があったというわけです」

最近、手紙を貰ったそうだ。

「ホールミア辺境伯家の弓術指南役の妻として一生を終えるそうです。そのために色々と画策して申し訳なかったと。この点に関しても、私達が無能なのが悪いので何も言えません」

「クリストフ。別に、俺ももうカルラにどうこう言う気は無いのだが。そんな事よりも、ここで功績を挙げて褒美でも貰った方が前向きであろう」

「その褒美のタネが、フィリップ殿のせいで婚約者に引き摺られて行ったけど……」

「バウマイスター伯爵。それは心配ない」

「何で？」

「良い指揮官とは、人に指揮されても優秀だ。エルヴィンも、すぐに嫁に上手く指揮される男になれるさ」

「物凄く強引な持論だなぁ……」

変なトラブルはあったが、王国軍は衣食住を整えると翌日から訓練を開始していた。

実地でエルは百名ほどの部隊を預けられ、慣れない仕事に四苦八苦しているようだ。

「今回はさわりくらいでいい」

「今回は？」

「ああ。時間が無いからな。この一回でケリが着くかは不明だが、決戦が近い」

フィリップは、自分が指揮する部隊の訓練を見ながら、ニュルンベルク公爵との決戦が近いと予想していた。

「王国軍残党の捕縛と殺害は終わっているはずだ。だから、そう遠くは無い」

そうフィリップが予想してから三日後、彼の予言通りにソビット大荒地を埋め尽くすかのような反乱軍の大軍が姿を見せる。

クーデター後から初めて、直接に総大将同士が戦う事になるのであった。

第九十三話　なぜ敵の親玉は、決戦前にこちらと話したがるのか？　そして、ヴェンデリン最大の危機。

「まさに、決戦の時迫るじゃの」

テレーゼは、野戦陣地に更に嵩上げ増設された土壁の上から、眼下に見えるニュルンベルク公爵が率いる反乱軍を見下ろしていた。

逃げ込んできたヘルムート王国軍残党を受け入れて装備の支給と編成が終わったばかりのところで、徐々に反乱軍の軍勢が集結しているのが確認できたのだ。

「何人くらいいるんだ？」

「そうだな。十五万人くらいだな」

王国軍組を率いるフィリップが、俺の問いに答えていた。

相続争いではポカをしたが、優秀な戦術指揮官である彼は反乱軍の戦力をほぼ正確に見抜いていた。

「多いな……」

「前線にいる連中は捨て駒だな」

「えっ？」

「損害担当とも言うな。過去の戦争では良くあった事だ。気にするな」

「損害担当って……」

フィリップの発言に、俺のみならずエルやイーナ達も不快感を隠せないようだ。

「ニュルンベルク公爵は手駒の損傷を抑えたい。と同時に、帝国統治の邪魔になる連中も戦闘で合法的に始末か消耗させたいわけだ」

「確かに、前線の連中は装備品も練度も二線級じゃの。フット子爵がおるな。ニュルンベルク公爵とは犬猿の仲なので始末されたかと思ったら、先鋒で使い潰されるか。世知辛いのぉ」

そんな事を言いながら、テレーゼは自分の首にかけた遠眼鏡を俺の前にもっていく。

俺とテレーゼの顔がくっ付いて彼女の良い匂いが鼻をくすぐるが、気にしないようにして敵軍の前衛を観察していた。

「隊列が凸凹ですね。一部精鋭っぽい連中もいますか」

「忠誠心の怪しい貴族や、ニュルンベルク公爵がいらないと判断した連中であろうな。かの御仁は、物事を合理的に進めたいのであろう」

俺や他の魔法使い達に、多数の兵士も動員して、ソビット大荒地には大規模な野戦陣地が完成していた。

北上する反乱軍を防ぐために、土や岩を使って大規模な城壁にも匹敵する城壁が大きく長く出来上がっていたのだ。

城壁の前にも馬避けの柵が幾重にも立ち、堀も沢山掘ってある。

解放軍は、どう足掻いても反乱軍よりも兵を揃えられない。

そこで、一旦ソビット大荒地で防衛主体の戦闘を行って敵軍を殺

ぐ戦略をテレーゼは選んでいた。

反乱から既に五か月ほど。

ソビット大荒地は、解放軍の一大軍事拠点となっている。

テレーゼは軍事拠点化の指揮、長期戦に備えた後方の統治と貴族達の統制、解放軍の編成と補給体制の維持にと、忙しく働いていた。

俺も参謀にされたので、なぜかイーナとエリーゼと一緒に書類の処理を手伝っている。

カタリーナは野戦陣地の工事に、他の魔法使い達へ指導を行っているブランタークさんの補佐。

ルイーゼとヴィルマは戦闘訓練の手伝い。

エルは、フィリップの下で軍の指揮を学んでいる。

あとは、ハルカと共に刀の訓練もしていた。

そういえば、導師は普段は何をしているのであろうか？

なぜか野戦陣地の工事や開墾などに汗を流したり、近場で狩猟などをしているようであったが。

タケオミさんは、俺の傍で控えて護衛役に徹している。

たまに時間が空くとエルとハルカに憤怒の表情と視線を向けているが、エルとハルカはまるで気にしていない。

二人だけの世界を作っていた。

『ハルカは、小さい頃はお兄様と私に良く付いてくる子で……』

『その子も、いつかは大人になるよな』

『そんな事は認めないぞぉ――！』

ブランタークさんがタケオミさんの思い出話に茶々を入れてしまうから、彼は泣きながら走り去ってしまう事もあった。
いい加減に大人になれよという事なのであろうが、シスコンはそう簡単には治らないであろう。

『俺の護衛……。今は書類の処理だからいいけど……』

俺は、タケオミさんが走り去った後にも冷静に書類の処理を行っていた。
隣にイーナもいるし、テレーゼの執務室に刺客が現れるようでは解放軍は終わりであろう。

『伯爵様は、いつの間にかそういう仕事をしているのな』

『何とかこなせますからね。ブランタークさんもいかがです？』

『俺は、魔法使い達への指導で忙しいから』

ブランタークさんは、帝国でも若い魔法使い達に魔法を教えていた。
短い期間なので魔力などはそう上がらないが、魔法の精度や魔力使用量の効率化などでブランタークさんの右に出る者はいなかったからだ。

本当はこういう仕事はブラッドソンさんの仕事なのであろうが、彼は非業の最期を遂げている。
だからブランタークさんはこの仕事を引き受け、遠く帝国の地でまた彼の弟子が増えたというわけだ。

『伯爵様は、もはやテレーゼ様の腹心だからな』

『今でも、それでいいのかと思いますけど』

俺は外国の貴族なのに解放軍に組み入れられてしまったが、帝国の名誉伯爵なる爵位を貰ったので問題はないようだ。

あとは、これが一番大きい。

『バウマイスター名誉伯爵には武勲がある。その地位に取って替わりたいのなら、次の戦いで武勲を挙げるがよい』

テレーゼはこう言って、他の貴族達からの干渉を排除してくれたようだ。

しかし、あまり煽るのは止めて欲しい物だ。

士気の向上には繋がるが、下手をするとニュルンベルク公爵の策に乗せられて敗北の要因にもなりかねない。

『戦争が久しく無かった時代じゃが、貴族にとって武勲ほど評価に値する物などない』

テレーゼの言う通りで、そのおかげで表面上は俺の力は強まっていた。

しかし、陛下と連絡が取れないとはいえ、爵位を兼任して大丈夫なのであろうか？

前例が無いと、官僚系の貴族達が騒ぎそうではある。

『気にしても仕方があるまい。今は勝つしかないのである』

それでも、傍に導師がいるのがありがたかった。

彼があとで陛下に説明してくれれば、正しい事情が伝わるであろ

うからだ。
勿論、戦力としても大いに期待できるわけだが。

『そうですね。今は勝つしかありません』

『戦の時である。余計な邪念を振り払い、ただ目の前の敵を討つのである』

導師は眼光鋭く敵反乱軍を見つめ、それはまるで敵全軍を威圧しているかのようであった。
というようなやり取りなどもあったが、今の俺はテレーゼの隣で迫りくる反乱軍の陣容を見ているわけだ。
一つの双眼鏡で顔をくっ付けながら。

「ほぼ全軍ですか？」

「さすがに今の時点では、ほぼ限界であろうな」

間違いなくエリーゼの機嫌は急降下していると思うが、今は臨戦態勢下にある。
あとでご機嫌を伺うとして、俺は反乱軍から視線を反らさないでいた。

決して、エリーゼが怖かったからではない。

「帝都周辺の地固めに、侵入した王国軍の始末で時間があったからの。その間にこの野戦陣地は完成した。ここを抜くには犠牲が必要であろう。自分の手駒の犠牲は避けたいであろうから、前線にいるのは使い潰す事が前提の連中というわけじゃ」

テレーゼは、前線にいる貴族で顔を確認できた連中を見て確信している。
フィリップの言う通りに、前線にいる連中は被害担当部隊というわけだ。
だから装備が悪くても、訓練不足でも問題ないという事になる。

「撃退や殲滅も可能でしょうが……」

「そうさの。我が軍も消耗するの」

犠牲は出るし、疲労もする。
弓なども大量に消耗するであろう。
消耗し尽したところで本命の精鋭によって攻められると、野戦陣地が陥落する危険性もあった。

「酷い策ですけど、大いに有効ですね」

「防ぐ手も無いの」

いらない貴族や兵士を消耗品としか見ない、恐ろしいまでの合理的思考とも言える。
その犠牲の中に自分やその関係者がいないから、あまり痛痒に感じていないのかもしれないが。

「迎撃準備！」

テレーゼの命令が全軍に伝わるのと同時に、反乱軍は……動き出さなかった。
臨戦態勢にはあるが、そこから三人騎士が白旗をあげながらこちらに近づいてきたからだ。

「フィリップ公爵様はいずこに！」

「ここにおるぞ！」

白旗を持った騎士達は軍使であった。
テレーゼを呼び出し、彼女はそれに応えていた。
相手は反乱軍とはいえ、それが礼儀であったからだ。

「降伏でもせよと？」

「出来ればそれが望ましいと、陛下は仰せです」

「ふんっ！　反乱で国を奪って陛下気取りか。思った以上に器が小さい男でガッカリじゃの。ニュルンベルク公爵殿は」

テレーゼの嫌味の混じった返答を、騎士達は何も言わずに聞いていた。

「となれば、あとは戦にてケリをつけるまで」

「その方が手っ取り早いであろうな。出来れば犠牲を避けたいところであるが」

「陛下も同様に考えております。ところで、話は変わりますが……」

軍使は、テレーゼに予想外の提案をしてから自軍の陣地へと戻っていく。

「会食とは、どういうつもりなのかの？」

軍使がテレーゼに出した条件とは、戦いの前にトップ同士で会食を行うという物であった。
一体、そんな事をして何になるのであろうか？
これはこの手の物語などで良くある、実際に話してみたら敵の親玉が自分語りなどをして、『敵にも事情があるし、完全に悪い人なんていないよね』フラグなのであろうか？

というか、今さらそんな物はいらない。
俺からすればニュルンベルク公爵など、滅ぶなら勝手に滅んで欲しいと思っているからだ。

「普通に考えれば、謀殺を注意する案件であるな」

珍しく導師がまともな意見を言っていて、俺を含めて全員が驚きの表情を浮かべていた。

「いや。某でもそのくらいは思い付くぞ」

「でもよ。会場と食事はこちらで準備して良いんだろう？」

ブランタークさんもテレーゼの傍にいるので、軍使の会食における条件は聞いてる。
双方共に、参加者はトップを含めた三名まで。
場所は両軍が睨みっているちょうど中間地点となっていた。

更に、食事はこちらで準備してもいいという。
こちらが毒を入れる可能性もあるのに、それでも構わないというのだ。

「己の剛毅さを、反乱軍の兵士達に見せるのか」

「ですが、有効ではありますよ」

今回の反乱劇では、最悪俺達が魔法で殺害するという手もあったのだ。

ただ、その方法は実はテレーゼに止められていた。

「貴族とはプライドが高い生き物じゃからの。いくら反乱分子でも、そういう方法で始末すると風聞が悪くなる。今後の統治に影響が出かねない」

「ニュルンベルク公爵はその能力ではフィリップ公爵に負けていなかったのに、志半ばで倒れてその生涯を終えられた。正当な勝者であるはずのフィリップ公爵のはずが、彼女の政治では帝国は悪くなる一方だ。そこで、英雄ニュルンベルク公爵様の意思を継いだこの私が！　となると？」

次に反乱を起こす奴からすれば、謀殺されたニュルンベルク公爵の存在は利用しやすいというわけだ。

「偶像崇拝の道具にされてしまうと、あとあと厄介じゃの。短期的に見ると犠牲は多いが、完膚無きまでに叩き潰した方が、長期的には次の反乱の芽を摘めて最終的な損害が少ないかもしれぬ」

納得しない残党や、他の貴族が反乱の旗印に彼を使ってしまう可能性があった。

ニュルンベルク公爵に組していた連中が他の反体制派と組んで、テレーゼによる統治を邪魔してくる懸念もある。

「誰の目から見ても、ニュルンベルク公爵が戦で敗れて死んだという事実が必要になる。今さら話し合う余地などないが、受けぬと器の小ささを疑われるか。案外、妾達が断ってくるのを期待しているのかもしれぬな」

敵味方に、テレーゼの臆病ぶりを宣伝するつもりなのかもしれないと。

「受けるとしよう。さて、野外でのランチかディナーになるのじゃが……」

テレーゼは、同じく中央に軍を置いているミズホ上級伯爵に使者を送る。

「フィリップ公爵領の郷土料理でも、ニュルンベルク公爵領の郷土料理でも不公平になるからの。ミズホ料理を作って貰う事にする」

数分後、ミズホ上級伯爵が姿を現し、彼はテレーゼの要請を受け入れていた。

「テレーゼ殿。頼まれれば引き受けるが、ニュルンベルク公爵がミズホ料理など食べるのか？」

ミズホ上級伯爵は、早速家臣に命じて両軍の睨みあう中間地点に会食用のテントを張り始めていた。

更に調理用の魔道具なども移動させ、ミズホ家お抱えの料理人が調理を始める。

どうやら懐石料理のような物を作っているらしいが、ミズホ上級伯爵の心配はあのミズホ人嫌いで有名なニュルンベルク公爵がミズホ料理を食べるのかという事のようだ。

「食べねば、自分から度胸を見せるために会食を提案したのに、実は緊張感に負けて何も食べられなかったと宣伝してやればいい。それに実はあの男、地元の料理が苦手なのじゃ」

「それは初耳ですな」

ミズホ上級伯爵は、初めて知るニュルンベルク公爵の個人情報に意外だという表情を浮かべていた。

確かに普段は、地元大好き、地元最優先なイメージを感じさせられるからだ。

「ニュルンベルク公爵領って、どのような料理が食べられているのですか？」

「味が濃いの」

「味が？」

「味が極端なのじゃ。甘いのも辛いのも、とにかく調味料を一杯使ってあれば贅沢だという思想でな。うちも魚料理が普及するまでは、ジャガイモと、ベーコンと、ソーセージと、ザワークラウトだけだと揶揄されておったがの」

「地元料理が嫌いな領主様って……」

選帝侯やその後継者は、帝都に詰める期間が長い。

そのせいで、余計に地元の料理が苦手になったのかもしれない。

「本人は薄味の料理が好きなようじゃの。地元で『あまり味の濃い

料理は健康を損なう』と薄味を勧めておるが、これは唯一領民達には不評での」

『味を薄くなど貧乏くさい』、『調味料は沢山使った方がいいのだ』という主に年寄りの意見が根強いらしい。

「そんなニュルンベルク公爵であるから、ミズホ料理とは相性が良いであろうよ」

それから数時間後、無事にテントの設営と料理の準備が終わっていた。

「お抱え料理人による、最高級のミズホ料理か。惜しいな」

食べたいとは思うが、互いに随伴は二名のみである。
外国貴族である俺が選ばれるはずがない。

「味がわからないと思うから、選ばれないで正解だよ」

ルイーゼの言う通りだ。
あのニュルンベルク公爵と食事などしても、碌に食べ物の味はわからないであろう。

「この戦争が終わったら、美味しいお店に食べにいけばいい」

「そうだな。一杯食べるか」

「ミズホ伯国には、行きたいお店が一杯ある」

試作型狙撃銃を抱える姿がすっかり様になっているヴィルマは、

ミズホ料理店巡りを楽しみにしているようだ。
その手には、ミズホ伯国名店ガイドという小冊子も握られていた。
いつの間に手に入れたのであろうか？
「それで、どなたが随伴に選ばれますの？」
「そうだな……。カタリーナが行くか？」
「その前に、絶対に選ばれませんわ」
突然の向こう側からの提案だったので、テレーゼはまだ随伴を発表していない。
だが、外国貴族でもある俺が選ばれるはずがなかった。
その妻であるカタリーナなど、候補にも入らないであろう。
「いや、カタリーナの華麗な作法でニュルンベルク公爵の度肝を抜くという手もある」
「ヴェンデリンさん。それ、絶対に褒めていませんよね？　そういう席は、ウケを狙ってする物ではないのですが……」
カタリーナは、前の俺が彼女の作法が仰々しいと言った事を覚えていたようだ。
「候補としては、バーデン公爵公子とあとは誰か伯爵くらい方が妥当なところ？」
イーナの予想が、ほぼ妥当というところであろうか？
ところが、エリーゼの意見は違うようであった。

「あなた。お出かけになる支度を」

「俺が？」

「はい。必ず選ばれると思います」

「ニュルンベルク公爵が美女とかなら見るくらいはしてもいいけど、野郎なんて興味無いな」

「お前は、その辺のオッサンか」

エルに呆れられてしまうが、ニュルンベルク公爵は眼光鋭い美男子なのを一度だけ見ているので、俺にとってはただの敵でしかない。挙句に人に迷惑ばかりかけているし、出来ればエリーゼの予想は外れて欲しい物だ。

「バウマイスター伯爵様。フィリップ公爵閣下がお呼びです」

「エリーゼの予想は当たったなぁ……」

だが、期待に反してエリーゼの予想は当たっていた。

俺はテレーゼから随伴を命じられ、見たくもないニュルンベルク公爵の顔を拝みに行く羽目になるのであった。

断るという選択肢が無いのは、いくら嫌な相手でも接待しなければいけなかったサラリーマン時代の癖が残っていたからであろうが。

「久しいの。ニュルンベルク公爵」

「壮健で何よりだ。フィリップ公爵」

「誰かに殺されそうになったが、悪運が強いようでな。こうして今も現世に留まっておるよ」

「それは良かった。貴殿がいないと、世の中は色々と面白みに欠けるであろうからな」

「よう言うわ」

「いやいや、これは本音であるよ」

両軍が睨みあう中間地点において、ニュルンベルク公爵とテレーゼは挨拶を交わしていた。

互いに皮肉交じりな言葉の応酬があったが、双方は怒りもしないで笑顔で言葉を続ける。

俺は、この生まれついて大貴族である二人の応酬を小市民的な視線で観察していた。

歴史ドラマなどでありそうな光景だと思いながら。

「バーデン公爵公子殿も加わらないので？」

「いや。私はいい……」

この前の敗戦で、バーデン公爵公子は大人しく解放軍のナンバー2として黙々と仕事をする人に戻っていた。

また何かやらかせばネタ的には面白いのであろうが、実際に被害

を受ける俺達とからすれば堪った物ではない。
今の大人しさが続いてくれる事を俺は祈る。

彼自身も、ニュルンベルク公爵と進んで関わるのが嫌なようだ。
軽く社交辞令に則った挨拶だけをしていた。

「では、食事にでもするか」

時刻は、準備もあったので夕食になっていた。
テントの中にはテーブルや椅子がセットされ、生け花や掛け軸なども飾られている。
畳敷きではないが、これはニュルンベルク公爵に配慮したのであろう。
それぞれの席には、箸、スプーン、フォークなどが置かれ、全員が席に着くとミズホ人の給仕係が最初の皿を持ってくる。

「最初に、お互いの随伴を紹介しておこうかの」

「そうだな。テレーゼの言う通りだ。おっと失礼……」

「マックス。妾達はこの呼び方の方が良いのかもしれぬな」

「では、そのままにするか。俺の随伴は、従士長のザウケンに参謀兼魔法使いのターラントだ」

ザウケンは五十歳ほどに見える、右頬に走る傷が特徴の良く鍛えられた体躯をしている男性だ。
ターラントは、三十歳ほどの特徴が無い男であった。
中肉中背で、顔にも印象に残る部分が無い。
どこの町にもいそうな普通の男性である。

「（あれ？）」

特徴は無いのだが、逆に無さ過ぎて何か底の知れない恐怖を感じてしまう。

ブランタークさんがいないので懸命に魔力を探るが、推定では前のカタリーナよりも少し多いくらい。

十分に対処可能だとは思うが、明らかにあの四兄弟よりも実力は上であろう。

何よりも怖いのは、いくら観察をしてもこの男が読めない点にあった。

「ターラントは、バウマイスター伯爵に興味があるそうだ。それで連れて来たのだ」

ターラントは、無表情なまま俺に一礼していた。

決して無礼さを感じさせないが、相手に好印象を与える物でもない。

「（何だろう？　この嫌な感じは……。そうか！　この男には、何も無いんだ！）」

そこに、かなりの魔力を持つ男性魔法使いがいるのに、なぜか俺に何も印象を与えないのだ。

俺は、ただそんな彼に不気味さを感じている。

果たして、テレーゼはターラントについてどのように感じたのであろうか？

今は聞けないが、俺は物凄く気になっていた。

「お腹が減ったの。始めるとするか」

テレーゼの合図で、ミズホ服姿の若い男性兵士が給仕役となって食事が運ばれてくる。

やはり内容は、懐石料理に似た物のようだ。

テーブルの上には、和紙に似た紙に達筆な字でメニューが書かれていた。

先付：豆腐、アワビ、フキ、卵の花

お椀：鯛の湯葉包み、焼き唐墨、舞茸

差味：黒マグロ、イカ、平目、エビ、赤貝

八寸：ハマグリ、水菜、アナゴ浸し、タケノコ山椒焼き、イワシ旨煮、子持昆布

焼物：サワラ西京漬け、ふきのとう

煮物：小かぶ鮟肝玉子茶巾、白菜、小芋

酢の物：サヨリ、赤かぶ、木くらげ

食事：マツタケご飯

止椀：赤出汁

香の物：白菜　柴漬け

デザート：水羊羹、ナシ、お抹茶

「（見事なまでに懐石料理……）」

商社員時代に一度だけ連れて行って貰った高級懐石料理に、メニューが良く似ている。

食材の季節感がバラバラであったが、これは魔法の袋に入れておけば新鮮な状態で保てるからであろう。

その点は日本よりも有利で、順番に出て来る料理も美味しかった。

「バウマイスター伯爵は、箸の使い方が上手いな」

「そうですか？」

料理に集中して静かにしていようと思ったのに、早速ニュルンベルク公爵が声をかけてくる。

ミズホ人でもない俺が箸を上手に使うので、それを不審に思ったのかもしれない。

「前世がミズホ人なんですよ。きっと」

本当は文化・風習がよく似た日本人なのだが、まさか教えてあげるわけにもいかない。

言ったところで、信じて貰える可能性も少なかったが。

「なるほど。そういう切り返しがあったか」

「たまたま覚えが早かっただけでしょうね」

「バウマイスター伯爵は、魔法と共にミズホ文化の習得も得意というわけか」

「他には取柄はありませんが」

ニュルンベルク公爵は、なぜか俺に良く話しかけてくる。

テレーゼと降伏するしないの条件交渉でも始めるのかと思えば、テレーゼはたまに話をしてあとは料理に集中している様だ。

バーデン公爵公子も食事に集中しているし、向こう側のザウケンは出される料理を持て余していた。

素材を生かす味付けなので、生粋のニュルンベルク公爵領の人間

には薄味に感じてしまうのであろう。
ターラントは、まるで機械のように黙々と料理を口に入れていた。

「（これは、駆け引きなのかな？）」

「今さら、お互いに降伏などと言っても無駄なのだ。だから、実際に会うと意外と話す事がないな。ミズホ料理は、私にはとても美味しく感じる。ザウケンは、北部と南部の味覚嗜好の差があるので勘弁していただこう」

思ったよりも、ニュルンベルク公爵は常識人のようであった。
ミズホ料理が苦手そうな部下のフォローを入れられるくらいなのだから。

「ただ、こういう差の積み重ねが各地方や領地の間での対立を生む。それを正すための決起である」

「自然と時間に任せれば良いのでは？」

「俺はせっかちなのだ。この大陸は一つに纏まった方がいい」

ニュルンベルク公爵は、堂々と自分がこの大陸を統一するのだと述べていた。
雄弁に語る様子は、とても様になっている。
これに魅かれて彼に味方している者も多いのであろう。

何事でも、見た目がに優れている者は有利なのだ。

「壮大な夢ですね」

「バウマイスター伯爵が俺の腹心となれば、案外簡単に行くかもしれぬぞ」

予想はしていたが、ニュルンベルク公爵からの引き抜きにテレーゼの顔が一瞬歪むのを俺は見てしまう。

「マックスよ。その発言は重大な違反行為であるぞ」

「すまぬな。テレーゼ。つい欲しくなってな」

テレーゼがニュルンベルク公爵の発言を窘めると、彼は素直に謝っていた。

「バウマイスター伯爵は、妾が必要な男なのでな」

「臣下ではなくて、男か。だが、上手くいっておらぬようだな」

「バウマイスター伯爵は少し恥ずかしがり屋なのじゃ。すぐに妾の元にくるはず」

「テレーゼがそう言うのであればそうか。昔から、諦めが悪い」

「マックスもであろう」

反乱を起こしてまで帝国の覇権を目指す男なので、テレーゼの言う通りに諦めは悪いと思われる。

「バウマイスター伯爵は、俺についてどう思う？」

「その軍事的才幹があれば、帝国軍の重鎮として安泰でしたのに」

このくらいしか思い付かない。
それと、『あんたのせいでもう大量に犠牲者が出ているが、それについてどう思っているんだ？』という物もあったが、これは胸に仕舞っていた。

「君は若いのに、考え方が守勢の人だな」

「そうですか？　世の中の大半の人達は普通に暮らしたいと思いますけど。野心があるといっても、精々人臣位を極めるとか、商売で成功するとかでしょう？」

「俺は帝国の覇権を、後には大陸の統一を目指したい。このくらい言っておかないと、帝国の覇権を握るのも難しそうなのでな。帝国軍の重鎮として人臣位を極める。君は、天才だからそう考えられるのだ」

「天才？　俺が？」

ニュルンベルク公爵は、俺を天才だと言い切っていた。
魔法では頷ける点はあるが、他は普通だと思っているのであまり実感は無い。

「君は魔法の天才だ。だから、私の気持ちなど理解できない。いいかね？　今の状況を変えようとするのに必要な要素とは何か？　それは、諦めが悪いという事だ」

「諦めですか？」

「天才は苦労無くその社会で生きていける。だから社会の変革など

望まない。俺は諦めが悪い。だから、反乱を起こしてまで帝国の覇権が欲しかった」

皇帝選挙に勝とうと努力を続けたが、あと一歩で及ばなかった。だから、反乱を起こしてまで帝都を占領したのだと。

ニュルンベルク公爵は、己の考えを語る。

「別に、今までの犠牲者達に謝ろうとは思わない。俺は背水の陣でこの戦いに臨んでいる。勝てば帝国の覇権が手に入り、負ければ愚かな反逆者として無様に死に、後世で愚か者だと批判されるだけだ」

「もう少し、妾の事を考えて欲しかったの」

「俺が負ければ、テレーゼが女帝か。帝国の統治は面倒だからな」

「陛下は生きておるのか？」

「生かしてあるが、あの男は凡庸だ。反乱後に復権しても傀儡になるだけだな。テレーゼが何とかするしかない」

テレーゼとニュルンベルク公爵の視線がぶつかる。

この二人は、能力だけで選ぶと次の皇帝に相応しいのはお互いだと思っているからだ。

「どちらか勝った方が次の皇帝になる。素晴らしく簡単な事ではないか」

「ふんっ！　マックスは勝ちを確信しておろう。でなければ、こんな席など開かない」

「ああ。確信しているよ。テレーゼには、優れた魔法使いが複数付いているな。だが、うちのターラントもそう捨てた物ではないよ」

この会食に連れてくるだけあって、やはりターラントはニュルンベルク公爵期待の魔法使いのようだ。

彼は一言も発しないで、丁寧に静かに料理を口に運んでいる。

『美味しい』も『不味い』もない。

ただ黙々と料理を食べているので、俺も暫く彼の存在を忘れていたほどだ。

「（それが逆におかしい……）」

彼の存在感の無さに、俺は違和感しか感じない。

ただ目立たないというレベルを逸脱して、何か魔法的な才能が原因でこういう状態なのではないかと思っているのだ。

しかし、彼が魔法を使っている形跡は無かった。

「ターラントは、少し特殊な魔法使いなのでな。バウマイスター伯爵。君がターラントに敗北する未来を私は確信しているのだよ。死なない内に降伏してくれれば、それ相応の待遇を約束しよう」

それから十分ほどで、最後の抹茶まで楽しんだニュルンベルク公爵は帰途につく。

俺達もテントなどの片づけをミズホ上級伯爵に任せて帰途に着くが、馬が使えないので徒歩になっていた。

テレーゼが俺の横で頻繁に話しかけてくるので、居心地が悪いバーデン公爵公子は先に駆け足で陣地に戻っている。

過去の経緯もあり、俺とは特に仲も良くないので助けてはくれなかった。

「ヴェンデリンよ。ターラントとかいう魔法使いが気になるのか？」

「明日までに対策を……。いや、あの男が使う魔法がわからない」

「夜戦でなくて良かったか」

開戦は翌朝早朝だと、ニュルンベルク公爵は宣言していた。

別に彼が、正々堂々とした戦いを望むフェアな男だからではない。

帝国でも、組織だって夜襲をかけられる部隊が極端に限られているからだ。

野戦陣地城壁前に幾重にも張り巡らされている、馬避けの堀や柵を越えて夜襲をかけても無駄に犠牲が増えるだけなので意味が無いと判断したのであろう。

夜襲可能な部隊は、ニュルンベルク公爵の手駒なのだから。

「臨機応変に対応していくしかあるまいて。それよりも、大切な事があるぞ」

「大切な事ですか？」

それが何のかわからずに、俺は首を傾げてしまう。

「妾は、知己であるマックスと殺し合いをする不幸な女なのじゃぞ。ここは、男として慰めるのが当り前であろう？」

「そんなに親しかったのですか？」

「ファーストネームで呼び合っていたであろうが。子供の頃は、何度か一緒に遊んだ事もある」

年齢も近いし幼馴染とでも言いたいのであろうか？
その割には、最初はそんな素振りは見せなかったのだが。

「ここ数年は、マックスがああいう感じだったのでな。疎遠になって当然であろう？」

「そうなのですか」

本当なのかどうかわからず、俺は適当に相槌を打って誤魔化す。

「そんなわけで妾は不幸な女なのじゃ。慰めておくれ」

そう言うや否や、テレーゼは俺と腕を組んで顔を肩に載せてくる。
それも、野戦陣地の正門前でだ。
当然、城壁の上の兵士達は驚愕の表情で俺達を見ていた。

「テレーゼ殿……」

「決戦前に、総大将と参謀の仲の良さをアピールじゃ」

だからと言って、これは無いと思う。
殺気を感じたのでその方向を見ると、そこには冷たい表情を浮かべたエリーゼが立っていた。

「エリーゼが怒っている」

滅多な事では怒らないエリーゼであったが、ここ最近は良くテレーゼに対して怒っている。
今日も無表情なので、愛想笑いを忘れるほど怒っているという事であろう。

続けてエリーゼは、そっとルイーゼとヴィルマの肩に手を置いた。
すると二人は、その驚異的な身体能力を生かして高さ五メートル以上はある城壁から飛び降り、そのまま俺の元に駆け付けていた。

「おかえり。ヴェル」

「ヴェル様。料理美味しかった」

二人は、テレーゼを引き剥がして俺の両脇を固めてしまう。

「ただいま。料理は、今度ミズホ伯国に行った時に似た料理を出すお店を探そうか？」

「そうだね。うわぁ。色々とあるんだねぇ」

「高級そう」

ルイーゼはヴィルマと一緒に、今日の料理メニューが記載された和紙を見ていた。

「のう。妾をいきなり弾いて何か無いのか？」

「テレーゼ様。はしたないよ」

「別に。私達はヴェル様を迎えに出ただけ」

テレーゼの抗議に、二人は冷静に言い返す。
こういう事が良くあるので、既にテレーゼの家臣達も『不敬だ！』などと騒がなくなったのだ。

彼らは、俺とテレーゼがくっ付く事を望んでいないのだから。

「ヴェル。明日に備えて寝よう」

「さすがに今日は駄目でしょう」

「それはわかっている。ただ一緒に寝るだけ」

みんなでベッドを繋いで普通に寝る。

確かに、それはそれで俺は楽しみにしていたのだ。

「妾も混ぜて欲しいの」

「総大将は孤独が定め。独り寝で十分」

「ヴィルマ。そなた毒舌に磨きがかかったの……」

三人の言い争いを聞きながら開かれた正門を通るのだが、俺の護衛役であるタケオミさんはまた目を潤ませていた。

またハルカの件であると思われる。

「タケオミさん？」

「ううっ……」

少し離れた場所では、俺が戻って来るのをハルカと待っていたエルが彼女と楽しそうに話をしていた。

「ミズホの高級料理か。どのくらいするの？」

「そうですね。お館様が行くようなお店ですと、一人前コースで五シュからです」

「美味しいのかな？」

「美味しいと評判ですね」

「なら、今度一緒に行こうか？」

「でも、高いですよ」

「たまにはいいじゃないか。戦争だからあとでご褒美もないと。初デートくらい良い所に行こうよ」

「デート、……初デート……。そうですね。楽しみにしています」

エルからのデートの誘いに、ハルカは嬉しそうに答えていた。

「ハルカぁーーー！」

勿論シスコンのタケオミさんは、獣のような絶叫をあげていた。当然、周囲にいる兵士達は怖い物でも見たかのように後ずさっている。

「妹が可愛い過ぎるんだね」

「そうなんだが、俺には妹がいないから理解できない……」

前世では弟しかいなかったし、この世界では俺は末子であった。他に父のご落胤がいる可能性も否定できなかったが、いたからと

言って妹という保証もないのだが。

「あなた。おかえりなさい」

「ただいま。エリーゼ」

その後は、みんなで家に戻って普通に寝て明日に備える事にする。
疲れを残さないようにして、明日は全力を出さないといけない。
なぜなら、やはり俺の脳裏にはあの不気味なターラントの姿が浮かんでいたからだ。

そして翌朝、遂に両軍の間で決戦が始まる。

「お師匠様。結局、あの会食って何だったのでしょうか？」

「俺に聞くなよ……。そもそも参加してないし、伯爵様に聞け」

「ヴェンデリンさんは、『久しく疎遠になっていた幼馴染同士の最後の邂逅』と言っていましたが」

「伯爵様がそう言うのなら、そうなんだろうな。偉い人にも色々あるんだろう」

ブランタークさんとカタリーナが雑談をする間に、反乱軍が大きく動いていた。
例の会食の翌朝、前衛部隊が一斉に野戦陣地に向けて突撃を開始したのだ。

「反乱軍前衛は推定で四万人。こちらの迎撃能力を飽和させるつもりだな」

中央の本陣を正面門の上に移し、テレーゼは優雅に迫りくる反乱軍前衛部隊の突撃を眺めている。
当然矢や魔法が飛んでくるが、そのためにブランタークさんとカタリーナが待機して『魔法障壁』で防いでいる。
魔法は、初級レベルの魔法使いが放った物ばかりなので軽く二人に防がれていた。

テレーゼが指揮する中央軍にはミズホ伯国軍もいるので、彼らは早速魔道具仕様のバリスタや魔大砲をぶっ放している。
使用限界やコストにまだ問題がある兵器であったが、それでも射程内に入った多くの兵士達を薙ぎ払っていた。

堀や柵で足を止められた所で、矢や銃弾が飛んでくるのだ。
兵士達は倒れ、負傷者は後方に、死者はそのまま放置される。

一番前にいた小部隊がほぼ壊滅するが、すぐに次が投入された。
犠牲は多いが、次々と堀に板がかけられて、柵は馬によって引き倒される。
反乱軍前衛部隊は多くの犠牲を出しつつも、次第に城壁へと迫っていた。

「城壁に取り付くまでに、どれだけ殺せるかだな」

王国軍組を預かるフィリップは、俺とエルに簡単に解説をしながら王国軍組にも弓を使うようにと命令していた。
相変わらずぞんざいな口調だが、それは過去の経緯を考えると仕方がない部分もある。
彼は指揮官の任を全うしているし、短期間ながらもエルにちゃんと教育を施していた。

「兵士の無駄遣いのような……」

「別にそうでもないさ」

フィリップは、ニュルンベルク公爵の戦法に全く疑問を感じていないようだ。

「先に精鋭を出そうが、捨て駒を出そうが、この野戦陣地を落とさないと反乱軍は北に攻め上がれない。なら、捨て駒でこちらを先に消耗させるのが普通だろう？」

戦力を数値でしか見ていないドライな感覚。

指揮官には必要なのであろうが、俺にはそこまで割り切れない。

つまり、俺は軍人に向いていないというわけだ。

「無理に正面から攻めなくても、例えば迂回して奇襲するとか……」

「バウマイスター伯爵。簡単に言ってくれるが、奇襲などそう簡単には出来ないのだぞ」

「そうなの？」

「この野戦陣地よりも北の諸侯は、大半が解放軍に属している。迂回しても、すぐに通報されて逆撃を食らうであろうな。ついでに言うと、フィリップ公爵とミズホ上級伯爵の索敵網に簡単に捕まる」

戦記物語のように、そう簡単に奇襲で戦況が変わるわけがないようだ。

それは、奇襲に成功した人が歴史書で評価されるわけだ。

「では、あんたはなぜ負けた？」

「ニュルンベルク公爵が優秀で地の利があったのと、レーガー侯爵が恐ろしいまでに軍人として無能だったからだ。本隊が奇襲で溶けた以上は、犠牲を少なくするために残った兵を纏めて逃げるしかあるまい」

そんな状況で、フィリップは北上までしてここに逃げ込んできた。今も指揮振りは大した物であったし、エドガー軍務卿の人物評価は間違っていなかったというわけだ。

「その軍人としての能力を、先の紛争で使えたら良かったのに」

「全くだ」

「兄さん。それが最初から出来ていたら紛争に負けていませんし、その前に紛争自体が起こっていません」

王国軍組の後方を支えるクリストフが、ボソっと漏らす。

この二人は、抱えている外戚や家臣に押し潰されて道を誤ってしまったのであろう。

もし相続問題で揉めていなければ、最初からあの出兵など無かった。

カルラを俺に押し付ける算段でもしていた方が、よほど建設的でコストもかからないのだから。

「これで勝てれば爵位くらいは分割して貰えるかもしれません。精々殺しましょう。矢の在庫については暫くは大丈夫です」

クリストフの言い方は感情ではどうかと思うが、言っている事に間違いは無い。
俺達は、ただ反乱軍の将兵を殺すしかないのだ。

「バウマイスター伯爵は魔力を温存でいいぞ」

三時間ほどもすると、城壁に敵部隊が取り付きつつあった。
捨て駒部隊にしては奮戦していると感じていたが、その理由は簡単である。
後ろに督戦部隊がいて、大量の矢をいつでも放てるようにしていたからだ。
ついでに、ニュルンベルク公爵は高位の魔法使いを自分の直衛部隊に集めてもいた。
逃げたり裏切ったりすると、魔法も飛んでくると脅かされていると思われる。
あとは、家族なりが人質にでもなっているのであろう。

「外道の極みであるな！」

「まあ有効な手ではあるな」

ニュルンベルク公爵としては、前衛部隊が全滅しても予備兵力が少ない解放軍に損害を与えられれば勝ちである。
ついでに彼らが消えれば、その領地や爵位を自由にできる。
自分の子飼いに与えれば、ニュルンベルク公爵の支配権が増大するのだから。

それがわかっている導師とブランタークさんは、いつも通りの口調では会話をしているが内心では面白くないと思っているようだ。

ブランタークさんの相槌と共に、導師が巨大な岩を督戦部隊に向けて放り投げていた。
直撃した弓兵達が、まるで虫のように潰されて死んでいく。
まさかその距離で届くと思っていなかった指揮官が後退しようとするが、次に導師が投げた岩で潰されていた。

「腹立たしいが、全ての督戦隊を始末できないのでな」

投石で潰した督戦隊は一つだけであったが、反乱軍の肝を冷やさせる事には成功したようだ。
最前線の部隊も攻撃の勢いが落ちていた。

「あのブランタークさん」

「伯爵様は、まだ魔力を温存だ」

本陣では、テレーゼが優雅に椅子に座って戦いを督戦して味方の士気を上げている。
飛んで来る魔法や矢は、全てブランタークさんとカタリーナが『魔法障壁』で防いでいた。
二人はこの仕事に集中して必ずテレーゼを守る作戦になっており、その代わりにフィリップ公爵家お抱えの魔法使い達は各部隊に配置されて攻撃と防御を魔法で強化していた。

「エリーゼは大丈夫かな？」

「怪我人は、まだそれほど出てないそうだ」

攻撃手段に乏しいエリーゼは、今回も後方で兵士達の治療に当たっている。

イーナは投擲用の槍を投げ続けているし、ルイーゼもその辺で大量に集めてきた石や岩をひも状の投石器で投げている。
戦争において石は意外と有効な兵器だ。

少しの魔力で威力を強化して、器用に兵士の顔面に当てている。
顔に直撃すると、額を割られて後方に搬送されたり、最悪死ぬ兵士もいた。

「なかなか攻勢が弱まらないわね」

「本当にしつこいな」

同じ作業の連続で、二人は気疲れをしているようだ。

「見付けた」

ヴィルマは、ミズホ上級伯爵から貸与された試作狙撃用魔銃で、指揮官や魔法使いの狙撃を続けている。
結局この魔銃は、遠距離狙撃に多くの才能と技量を必要とし、使いこなせるのが今のところはヴィルマだけだったので、彼女だけが運用していた。
次々と狙撃を行い、魔力が不足すると予め準備してあった魔晶石で補充を行う。

寡黙なヴィルマは、某〇ルゴ１３並に狙撃を続けている。

「ヴェンデリンさんは温存ですか」

「一人気になる奴がいる」

昨日の会食で会った、ターラントという魔法使いの事だ。
あの四兄弟よりも少し魔力が多いくらいだが、なぜか彼から何か不気味な物を感じて俺の勘が警鐘を鳴らすのだ。
あの後、導師とブランタークさんに相談すると、二人も俺の意見を支持していた。

「そういう勘を侮ってはいけないのである！」

「導師と同意見だな」

俺が待機なのは、二人の賛成もあっての事だ。
暫く城壁を登ろうとする反乱軍と、それを阻止する解放軍の間で死闘が続く。
損害比は守備側である解放軍が圧倒的に有利であったが、次第に槍で突かれ、矢や魔法を受けで犠牲者が増えていく。

「前に出るわ！」

イーナが前に出て、城壁を登ってくる兵士達を次々と槍で突き落としていた。
そんな状態が暫く続いた後に、反乱軍の方で何か騒ぎが起こる。

遂にあの男が、まるで幽霊のように歩きながら俺との距離を縮め始めたのだ。
この戦場で、ターラントは敵も味方も気にしていない。
ただゆっくりと、俺達がいる正面門へと歩いていく。

彼には不気味な点がもう一つあった。
味方の守備兵が、なぜか接近する彼に向けて矢や魔法を放たないのだ。

「（ターラントを認識している人が少ない？）」

俺は、彼の不気味さに冷や汗をかく。

「何者？」

「何か変な奴が来た！」

ヴィルマが狙撃を、ルイーゼも大岩を放り投げるが、それらは全て彼の『魔法障壁』で簡単に防がれてしまう。

やはり、彼は優秀な魔法使いであった。

「あのターラント殿……」

味方ですら彼から遠のく中で、遂に正面門前に立って静かに声をあげていた。

「バウマイスター伯爵。あなたを殺してあげよう」

小さな呟くような声なのに、様々な音で溢れる戦場でも俺の耳にハッキリと届いていた。

会食では無言だったので初めて聞くターラントの声であったが、やはり何も特徴が感じられない。

ただ淡々と話すだけなので、俺は余計に不気味さを感じてしまう。

「本当に不気味である」

あの導師ですら、ターラントに何か言いようのない不気味さを感じているようだ。

「伯爵様。受けるのか？」
「受けますよ。どうせ戦わないといけないのなら、先に済ませましょう」
「そうか。気をつけろよ」
ブランタークさんは、俺を止めなかった。
俺とターラントとの戦闘を不可避だと思っているのであろう。
「ならば、某は余計な邪魔を防ぐ事にするか！」
俺はハシゴで城壁を降り、正面門前に立つターラントと対峙する。
既に正面門前の反乱軍は、その場から離れていた。
ターラントが偉い人であるのと、反乱軍でも彼は不気味だと思われているようで誰も近寄らなかったのだ。
「一種、不気味な光景であるな」
正面門付近だけが、両軍を戦闘を止めて俺達の戦いを見守っていたからだ。
他は今までと同じように死闘が続いているので、その差がとにかく不気味であった。
なぜこういう状態になったのかといえば、やはりこのターラントという男から出る不気味さのせいであろう。
他に説明がつかない。
「某は、一対一の決闘の邪魔を防ぐためにここにいるのである」

導師は俺と一緒に梯子で降りてきて、後ろで反乱軍側からの妨害に対応してくれていた。

「では、始めるのである！」

俺が魔法の展開を準備し始めると、突然ターラントが抑揚と特徴の無い声で語り始める。

「私は子供の頃から魔力があったのに、なぜか存在感が薄かった」

誰に話すでもなく、ただ独語しているだけなのに不気味で、俺はつい攻撃を躊躇ってしまう。

何か特殊な魔法でも飛び出すのかと、『魔法障壁』の準備を急いでしまったのだ。

「高位の魔法使いになっても同じです。私に仕官などの声をかける人が少ない。なぜかと悩む日々があったのですが、それがある日に解決しました」

「お前は何を？」

「私の存在の薄さは、ある特殊な魔法の習得条件だったのです。ターラントという男は、ただその魔法を使える体でしかないと」

「特殊な魔法？」

「そうです。私の魔法は、『聖』魔法の一種。『英霊召喚』。過去の英雄に殺されて、その人生を終えなさい。バウマイスター伯爵」

ターラントが両手を天にかざすと、直後に空から雷が落ちて彼の

体を直撃する。
思わず目を瞑ってしまうが、次に目を開けた時にはそこにターラントの姿は無かった。

代わりに、とても俺の知り合いによく似ている人物が立っている。
巨体でその体は筋肉の鎧に覆われ、紫色のローブに両手にはナックルが装着されている。
そして、パイナップルのヘタのような髪型にガイゼル髭が特徴の、導師にソックリな人物が立ち尽くしていたのだ。

「導師！」

思わず後ろを確認してしまうが、導師は立ったままなので別人という事だ。

「我が名は、アーハント・ミハイル・フォン・アームストロング」

声も、とても良く導師に似ている。
唯一の違いは、杖を持っていないで両手にナックルを装着しているくらいだ。

「ご先祖様であるか！」

「ご先祖様？」

「左様。実は、初代アームストロング伯爵は魔法使いだったのである！」

初めて聞く衝撃の事実であった。

「貧乏騎士の跡取りがたまたま魔法使いであった。そのおかげで伯爵となったというわけであるな」

「それにしても良く似ているな」

同じ恰好されてしまったら、全く見分けがつかないほどだ。

「初代は、某以上のパワーファイターであったそうだ」

「相性最悪だぁーーー！」

それでも何とか倒さないといけない。

既に戦いは始まっているので、最初は牽制で数発のファイアーボールを放ってみる。

ところが、初代アームストロング伯爵はそれを『魔法障壁』を纏わせた拳で弾いて一気に距離を縮めてくる。

あっという間に目の前に立たれて、その強烈な一撃を食らっていた。

咄嗟に『魔法障壁』の重ねがけと両手を前に出して防ぐが、直後に手の甲に激しい痛みを感じていた。

「導師よりも、攻撃力が高い！」

初代アームストロング伯爵は、導師よりも更に魔法格闘に特化したタイプのようだ。

それから次々と魔力を乗せた突きや蹴りを連発で食らうが、その度に体にダメージが蓄積する。

腹に入れられた一撃で肋骨にヒビが入ったようで、腹部に激痛が走った。

「幸いにして、放出魔法が苦手なようだな」

最初の攻撃で、手の甲の骨にもヒビが入ったようだ。

両方を治癒魔法で治しながら、俺はこれからの方策を考える。

「今は時間を稼ぐしかない」

連続して、初代アームストロング伯爵の攻撃は続く。

最初は全て食らっていたが、暫くするとその攻撃パターンに慣れてきたようだ。

こうなると、王都時代に無理をして導師に修行をつけて貰ったのは正解のようだ。

魔力の節約のために、今まで全身にかけていた『魔法障壁』をシールド状にして腕に集中させ、それを傾斜装甲にように駆使して初代アームストロング伯爵の攻撃をいなしていく。

「激流を制する物は清流」

「意味不明である」

後方の導師の呟きは無視して、敵の攻撃をいなし続ける。

また目が慣れてきたので、今度はいなした直後に反撃を試みた。

パンチをかわして、ガラ空きの腹に魔力を込めた一撃を入れる。

「ぐふっ」

一点に魔力を集中させた攻撃により、初代アームストロング伯爵は口から血を吐いていた。

内臓にダメージを与えられたようだ。

続けて上段から蹴りが飛んでくるが、これもいなしてからもう片方の足に魔力を込めて足払いをかける。

初代アームストロング伯爵は、バランスを崩して倒れてしまう。

足に魔力を込めて顔を踏み抜こうとしたが、これはギリギリで回避されてしまった。

「やるな」

「あまり強くないな」

『英霊召喚』という魔法の特性がよくわからないので断言は出来ないが、この初代アームストロング伯爵は本人よりも弱いような気がする。

パワーや技などは同じであろうが、それを使いこなす技量が追い付いていないような気がするのだ。

それとも、体が完全に同期していないのであろうか？

「ご先祖様は、そんなに弱くないのである」

「少し遊び過ぎたか。やはり同じ系統の英雄でなければ力が発揮できない」

初代アームストロング伯爵の恰好をしたターラントは、素早く治癒魔法で傷を治すと再び両手を天にかざす。

再び稲妻が落ち、それが消えるとターラントは別の人物に変化していた。

「同じ魔法使いでも、この男の方が戦闘タイプは似ているであろうからな。さてと、始めるとしようか。ヴェル」

「まさか……」

稲妻が晴れてターラントが新しい姿を見せた時から、俺の時は止まっていた。

彼が変身を遂げた人物に、激しく心を揺さぶられていたからだ。

そう、忘れはしない。

あの十年以上前の子供の頃に、俺に魔法を教えてくれたあの人物。

俺の師匠であるアルフレッド・レインフォードが以前と同じ姿で立っていたのだから。

「アルフレッド！」

「アル！」

突然現れた弟子に、ブランタークさんも城壁から身を乗り出して叫んでいた。

導師も、親友の登場に驚きを隠せないようだ。

そして俺も、その場にただ立ち尽くしていた。

「いや……。姿格好だけを似せた偽物……」

「違うね。ヴェル。『英霊召喚』とは、存在感が薄く無に近い私ターラントと、過去に死んだ人物との融合魔法だからね。だから私は、ターラントでもありアルフレッドでもある」

姿・恰好・声の全てが、師匠とまるで同じであった。
更に続けて、ターラントが俺に新たな衝撃を与える。

「ヴェル。君は、利き手の方に僅かに魔力を多く込める癖があるね。大分改善されたけど、まだまだ努力が必要だね」

「バカな……」

そのアドバイスは、俺が師匠と二人だけで修業していた時に言われた物であった。
同じ事はブランタークさんからも言われているが、ここまで師匠と一字一句まで同じ風に言われてしまうと、目の前の人物が本物の師匠であると認めざるを得なかった。

「さて。弟子であるヴェルが師匠である私に勝てるかな？　安心するといいよ。ヴェルが死んでも、私があの世で魔法の稽古をつけてあげるから」

俺は、否応無しに再会した師匠との戦いに突入してしまうのであった。

オマケ四話　久々に風邪を引いた話。

「装備が揃ったら見違えたなぁ」

「大半が、常時訓練を受けている王国軍だからな。やる気の無い諸侯軍とかだと、隊列させた時点で揃っていないとかザラにある。それに比べれば雲泥の差さ」

ニュルンベルク公爵に負けた後に逃げ込んで来た王国軍先遣隊の生き残りは、指揮官であるフィリップの指揮で綺麗に隊列を組んでいた。

休養を取り、失った装備を与えられて軍の体裁を整えたので、お飾りとはいえ大将である俺の前で閲兵式を行っていたのだ。

「士気はどうなんだろう？」

王国の命令とはいえ、二百年も停戦していた帝国に反乱に乗ずる形で攻め込み、呆気ないほど簡単に破れて一か月以上も山中を敗走する羽目になったのだ。

いくら俺達と合流できたとはいえ、これからの戦いにやる気が出るのかと考えてしまう。

別に過剰に気合を入れる必要は無いが、命令くらいは聞いて貰えないと困ってしまうからだ。

「敵中突破の成功で士気も上がっていますし、このままバウマイスター伯爵の下で働けば普通に功績を得られますからね。その心配は不要かと思いますよ」

クリストフがそう言うのであれば、そうなのであろう。
と思う事にする。
どうせ、俺ではどうにも出来ないのだから。

「いいですか。エルヴィン様」

「はい」

そしてエルは、軍勢の指揮の仕方を習うためにまずは百人程度の集団を隊列させていた。
教導役は、フィリップが推薦した中年のベテラン士官である。
平民の出だが、一兵卒から数少ない枠を勝ち残って士官の地位を得ているいわゆる『兵隊元帥』と呼ばれる人で、若い軍人への指導も上手なのだそうだ。

能力のあるベテランなので、今回の敗戦でも上手く生き残れている。
エルの指導役として十分な人材であった。

「指揮官が疑問を持ちながら命令を出すと、兵もそれに釣られて動きがおかしくなりますので」

「自信満々に命令を出して、それが間違っていたら?」

「何食わぬ顔で、新しい命令を堂々と素早く出してください。指揮官がドッシリとしていれば、兵達はさほど気にしません。出来れば命令は間違えない方が良いですけど」

「なるほど」

エルは真面目にメモを取りながらベテラン士官の指導を受けていた。

ハルカも一緒にメモを取りながら、何か聞き洩らしが無いかチェックを入れているようだ。

「バウマイスター伯爵の奥方も、エルヴィンの婚約者も、内助の功で微笑ましい限りだな」

フィリップはエルを羨ましそうに見ていた。

彼の正妻は戦犯として処刑されたブロワ辺境伯家従士長の娘なので、先代ブロワ辺境伯の未亡人と共に教会に送り込まれている。

その後正妻を迎え入れた話を聞いていないので、家庭の方が色々と大変なのであろう。

「まあね。うちのエリーゼ達は……ふぇくしょい！」

エリーゼ達の自慢でもしようかと思ったら、突然クシャミが出た。

普通は、噂された方がクシャミが出るのに変だ。

「へくしょい！」

最初は誰かが噂でもしたのかと思ったが、すぐに鼻と喉に違和感を感じた。

どうやら、久々に風邪を引いてしまったようだ。

「バウマイスター伯爵。風邪か？」

「ここ数年、風邪なんて引いた事が無いのに」

「バウマイスター伯爵領は南方で暖かく、帝国は比較的冬は寒冷ですからね。そういう事もあるのでしょう。兵士達にも風邪を引いた者がいましたし。バウマイスター伯爵は大将なのですから、早めに治しておく事です」

「そうするよ」

俺は、クリストフから早めに治すようにと言われてしまう。

「ヴェルが風邪？　俺と出会ってから風邪なんて引いた事があったっけ？」

こちらの様子がおかしいので見に来たエルは、俺が風邪を引いたと聞いて驚いていた。

なぜなら俺が前に風邪を引いたのは十歳の時で、エル達と出会ってから病気で寝込んだ事など無かったからだ。

「昔には引いた事があるさ」

あれは、未開地を探索していた時の事だ。

急に寒気がしたので、急ぎ家に帰ってベッドに潜り込んで寝ていたはず。

なお、その事を母に話したら食事が野菜を極限まで柔らかく煮たスープだけとなり、俺にとっては余計に拷問であったのを覚えている。

消化に良い物をという気持ちはわかるのだが、どこか食材費をケチっているようにも思えてしまうからだ。

結局、お腹が減ってどうにもならず、自分でお粥を作って食べる羽目になっていた。

誰もそんな物は食べさせてくれないので、いわゆるボッチ療養を行ったわけだ。

「そうなんだ……」

「なぜ口籠る」

「いやさ。何とかは風邪を引かないって」

「エルには、言われたくないな」

この世界にも、『バカは風邪を引かない』という格言が存在するらしい。

エルが失礼にも、風邪を引いた俺を驚愕の目で見ていたからだ。

「エルも、人の事は言えないだろう」

「残念だが、俺は十三歳の時に風邪を引いたからな。ヴェルは覚えていないのか？」

エルだけでなく他のメンバーも、エリーゼも含めて風邪などで体調が悪くなった事があったのを記憶している。

みんなの前で風邪を引いていないのは、俺くらいかも知れない。

「戻って寝るかな」

「そうしてくれ」

「まだ戦闘は始まらないでしょうが、それまでに体調を万全にして

おいてください」

「わかった」

ニュルンベルク公爵との決戦で体調不良では大変な事になってしまう。

フィリップとクリストフにも促されたので、俺は急ぎ自分の屋敷に戻ってからすぐに寝巻に着替えてベッドに潜り込んでいた。

「あなた。大丈夫ですか？」

「喉が痛くて鼻が詰まっているけど、そこまで酷くは無いと思う」

「ええと。お熱は……」

エリーゼがオデコを合わせてくると、少し冷たいような気がした。

もしかすると、熱があるのかもしれない。

「少しお熱がありますね」

エリーゼも、俺と同じ考えに至ったようだ。

「何か風邪に良い物を作りますね」

エリーゼは、俺に毛布をかけ直してから台所へと向かっていた。

職業上看病慣れしているからかもしれないが、まるでお母さんのようである。

「お粥を作りましたよ。あなた」

王国で風邪を引くと柔らかく煮た麦粥を食べさせる事が多かったが、エリーゼは俺の影響でお米のお粥を作るようになっていた。
俺もそっちの方が好きなのでありがたい。
お粥はエリーゼの腕前もあって、とても美味しそうに出来上がっていた。

「はい。あーーーんしてください」

「自分で食べられるから」

「あなたは病人なのですから、無理をしてはいけませんよ」

エリーゼは、医者であり、看護婦であり、奥さんであるので逆らえない。
こういうシチュエーションもたまには良いであろう。
俺は、エリーゼにお粥を食べさせて貰っていた。

「こうして見ると、新婚さんらしいな。伯爵様」

「風邪を引いたと聞いたので様子を見に来たのである」

お粥を食べさせて貰っていると、そこにブランタークさんと導師が様子を見にくる。

「風邪なんて珍しいな」

「たまにはそういう事もありますよ」

「俺もたまにはあるがな。それよりも、二日酔いの方が圧倒的に多いけど」

ブランタークさんは、たまに酒の飲み過ぎで二日酔いになる事がある。
独身時代には、その度にうちに来てエリーゼから軽い朝食を作って貰ったり、『解毒』の魔法で二日酔いを緩和させて貰っていた。
聖治癒魔法の『解毒』は、体内に残る酒精を分解して二日酔いの症状を抑える効果があるからだ。
ただ、貴重な治癒魔法に使える魔力を時間が経てば治る二日酔いに使うのは、外部に対してあまり良い印象を与えない。
特に教会関係者などからは、『過ぎたる酒は過ぎたる欲望』という考えがあるから余計であった。
エリーゼも俺が世話になっている人だからと渋々魔法を使っていて、魔法使いとしては優秀なブランタークさんの唯一の欠点かもしれない。
「風邪も治癒魔法で治せれば良いんだがな」
「風邪はさすがに無理ですね」
「さすがに風邪は奥方様でも無理か」
「風邪を治癒魔法で治せる人がいたら、教会から聖人認定されると思います」
治癒魔法による怪我の治療方法は確立していたが、病気の治療はこれは研究途上であった。
下手に魔法をかけると、病原菌が活性化して余計に症状が重くなるからだ。

魔物の領域で採れる薬草を使った特効薬や、自然治癒に任せたり対症療法で対応するしかないというわけだ。

「風邪、虫歯、水虫は治癒魔法使い永遠のテーマか」

「水虫と虫歯は治せますよ」

「いや、あの方法だと嫌がるのが多いだろう」

「嫌がる？」

「前に奥方様が、酷い火傷の女性を治療しただろう？」

水虫は、足の裏だとナイフで患部のある皮膚を全て剥いでから治癒魔法をかける。

虫歯も、虫歯の部分をナイフで削ってからそこに治癒魔法をかけるのだと言う。

「いい年をした大人でも嫌がって、水虫や虫歯を放置するのがいるくらいだからな」

「導師の治癒魔法ならどうなんです？」

患部を削らないでケロイドを治せてしまった導師なので、もしかしたらと俺は考えてしまう。

「伯爵様よ。導師クラスの治癒魔法を直接患部にかけたら全身が水虫に犯されると思うぞ。歯なんて、虫歯が広がって全部ボロボロになるんじゃないのか？」

予想しただけで、背筋が凍るような光景だ。
いくら治療が痛そうでも、手を抜いてはいけないというわけだ。

「バウマイスター伯爵よ。風邪とは大変そうだな」

「『大変そう』ですか？　導師は風邪とかは引かないのですか？」

俺は、導師の言い方に何か引っかかる物を感じていた。

「うむ。某は生まれてこの方、病気一つした事が無くてな。病気で寝込むという経験が無いので、本当に大変なのか良くわからぬのだ」

「そうなんですか……」

生まれてから四十年以上も病気知らずとは、ある意味導師らしいかもしれない。
導師が病気で寝込む光景が思い浮かばないという点も大きかったが。

「一度も病気になった事が無いってのは凄いな」

「これも、弛まぬ鍛錬の成果である！」

ブランタークさんは表面上は感心しているようであったが、実際には『バカは風邪を引かないんだな』と思っているのであろう。
俺と視線を合わせると、意味ありげな笑みを浮かべていた。

「ヴェル。風邪を引いたんだって？」

「お見舞いに来たわよ」

続けてルイーゼとイーナも姿を見せるが、イーナはその両手にミカンに似た果物を抱えていた。

「風邪には、こういう果物のジュースが良いわよ」

なるほど、この世界でも風邪にはビタミンCという考え方があるようだ。

勿論ビタミンCを認知などしていないが、過去からの経験則でわかっているのかもしれない。

「絞る道具が無いな」

「ボクがいるから大丈夫だよ」

ルイーゼは手を洗うと、両手にミカンを持ちそのまま絞り始める。

少し魔力を使っているようで、みるみるジュースが絞られてコップを満たしていく。

両手を広げて絞ったミカンの残骸を見せてくれるが、まるで梅干しのように小さく萎んでいた。

「道具いらずだな」

「ジュース屋の開業も夢ではないかもね。はい、ヴェル」

俺はルイーゼからミカンジュースを貰い、それを飲んでみる。

味は百パーセント果汁のミカンジュースと全く同じであった。

風邪の時にこういう物を飲むと美味しく感じられる。

「へえ。大した技だな」

「そうかな？　このくらい武芸の基本でしょう」

ブランタークさんは極限にまで縮んだミカンを見て感心していたが、ルイーゼはさほどの難事とも思っていないようだ。

「俺はその方面はさほどでもないからな。という事は、イーナの嬢ちゃんでも出来るのか？」

「ルイーゼほどではないですけど……」

ちょうど一杯目を飲み干したので空のコップをイーナに渡すと、彼女もルイーゼと同じ方法でジュースを絞ってくれた。

少しだけ魔力を篭めてミカンを両手で絞る。

「ルイーゼほど効率良く絞れないですね」

両手を広げると、先ほどよりは大きめの絞りカスが残っていた。

「ミカンジュース。美味しいな」

「ヴェル。あまり飲み過ぎるとお腹を壊すわよ」

「これで終わりにするさ」

ジュースを飲みながらふと思ったのだが、女の子が手で絞ったジュースとか、もしかしたら商売になるのでは？

などと考えてしまうのは、俺が熱で頭をやられているせいであろうか？

「某も絞ってみよう」

「なぜそんな事で対抗心を燃やす……」

ブランタークさんの呟きを無視して、導師も両手でミカンを絞り始める。

手の平が大きいのでミカンがキンカンのように見えるが、ちゃんとシュースは絞れたようだ。

ただ、両手を開くと絞りカスはルイーゼの物よりも大きかった。

「うーーーむ。某もまだ未熟であるな」

導師はそう言いながら、俺にジュースの入ったコップを渡す。

心なしか、ルイーゼとイーナが絞った物に比べると色が暗いような気がする。

「さすがに三杯はいらないです」

「そうであるか」

導師は少し残念そうだ。

実は、『導師汁』も混じっていそうなジュースを飲みたくないという部分の方が大きかったのは内緒であったが。

「ヴェル。ちゃんと寝ているか？」

「ヴェンデリンよ。見舞いにきたぞ」

更に続けて、エルとテレーゼという珍しい組み合わせが姿を見せ

ていた。
部屋の入り口ででも顔を合わせたのであろうか？

「ハルカは？」

「俺はちょっと様子見で訓練を抜け出して来たんだ。フィリップさんとクリストフさんに様子を見て来てくれと頼まれてな」

「大将が病気なので心配なのであろう。ヴェンデリンがいないと、王国軍組は機能せぬからの」

神輿兼スポンサーなので、一応はいないと困るのであろう。
どんな精鋭でも、『腹が減っては戦はできない』のだし。

「柑橘類のジュースか。定番の風邪に効くとされる物じゃな」

テレーゼは、コップに入ったミカンジュースに視線を送る。

「ヴェル。飲まないのか？」

「実はもう二杯飲んだからさすがに……」

導師が絞ったから何となく嫌とはいえず、あくまでももう二杯も飲んだからという理由を強調した。
実際にもう一杯飲もうとは思わないので、嘘は言っていない。

「そうか。じゃあ、俺が飲んでいいか？　少し喉が渇いていて」

「いいぞ」

「じゃあ。遠慮なく」

エルは、導師が絞ったミカンジュースを美味しそうに飲んでいた。
わずかに罪悪感を感じたが、別に毒では無い。
本人も飲みたがっていたし、需要と供給が噛み合っただけだと自分を納得させる。

「ヴェンデリンよ。妾もそなたに早く治って欲しいからの。見舞いを用意したぞ」

「添い寝とかはいらないです」

「いきなり第一の矢が折られたの。などと冗談じゃ。妾は総大将なので病気にはなれん。風邪が染つるリスクは避けて当然じゃ。見舞いは、我がフィリップ公爵家直伝の風邪薬じゃ」

テレーゼは、空いているコップに水筒から出した液体を注いでいた。
色は黒と緑の間くらいか？
常温の液体のようだが、なぜかコポコポと泡を立てている。

更に、泥臭い青汁が強化されたような臭いが部屋に漂い始めていた。

「テレーゼ様。何なのです？　この臭いは？」

「風邪の特効薬だからの。薬じゃから当然美味しくはないぞ」

「味の問題では無くて、もっと根本的な安全性に疑問を感じるのですが……」

俺が万が一毒殺でもされたら大変なので、ブランタークさんはコップに入った液体を怪訝そうな目で見ていた。

「ブランタークよ。ヴェンデリンに何かあれば妾達も困るのじゃぞ。見てくれは悪いが、これは風邪を引いたフィリップ公爵家の人間は全て飲む薬。安心して飲むが良いぞ」

「テレーゼ様。ちなみに、どのような材料を使っているのであるか？」

「我がフィリップ公爵家秘伝なので秘密になっておる。効果は絶大じゃから余計にの」

「そうであるか……」

さすがの導師でも、この薬だけは飲みたくないという顔をしていた。

「（本当に毒は無いんだな……）『良薬は口に苦し』か……」

「ミズホ伯国の格言を知っているとは、ヴェンデリンは本当にミズホ文化好きじゃの」

俄かでも貴族になったので、これでも食べる物には警戒するようになった。

とはいえ、『毒探知』の魔法で事前に探るだけだし、今までに毒入りの食べ物など貰った事も無い。

もし口にしても、水系統魔法の『毒消し』があるのでそれほど問題にもしていなかった。

「せっかくですので……」

不味そうではあるが、説明されると薬っぽく見えるから不思議だ。

俺は一気にコップに入った液体を飲み干す。

「ううっ……」

「ヴェル。どんな味なのかしら？」

「物凄く青臭いし苦い。まるで畑の青野菜を土ごと食べているみたい」

「それは不味そうね……」

イーナに味の感想を述べると、絶対に飲みたくないという顔をしていた。

「あなた。お口直しにどうぞ」

さり気なくエリーゼが口直し用の水を渡してくれて、こういう部分は良く出来た奥さんだと思ってしまう。

「あとは寝ていれば大丈夫。何しろこの薬は良く効くからの」

なぜかフィリップ公爵家伝来の薬に絶大な自信を持つテレーゼであったが、本当に翌朝になると俺の風邪は完全に治っていた。

本当に薬が効いたのか、たまたま早く自然治癒したのかは不明であったが。

「本当にうちの薬は良く効くのじゃぞ」

「なら、製法を秘密にして売ればいいのに」

「一度売り出したのじゃが、不味いのがネックで売れ無くての」

「甘くして、不味さを薄めればいいのに」

子供用の甘い薬と同じである。

不味ければ、甘くしてマシな味にすればいい作戦である。

「なるほどの。内乱後にそうやって売り出すとするかの」

後日、フィリップ公爵家秘伝の薬は甘くしてから発売される。

風邪と疲労などに絶大な効果があり、フィリップ公爵領の新たな特産品となるのであった。

そして、俺の風邪が治ったのと対照的に、一人だけ具合の悪くなった人間がいる。

「エルさん。大丈夫ですか？」

「おかしいな？　変な物を食べた記憶が無いのに、朝からお腹が痛いんだよなぁ……」

導師汁入りのジュースを飲んだエルは、翌日に原因不明の下痢に悩まされる事となる。

「やはり、導師汁のせいか」

「ヴェル。そんな物が存在するわけないでしょう。私もルイーゼも、ミカンを絞る前にちゃんと手を洗ったわよ。導師様はそんな事はしていないけど」

「単純に手が汚かったんだね」

それ以降、導師が手で絞ったジュースは本人以外誰も飲まなくなってしまうのであった。

世界が変わっても、食べ物を触る前には手を洗いましょう。

第九十四話　師匠との死闘。

「師匠！　どうしてですか？」

「ヴェルは妙な事を言うね。私の今の立場を考えればわかるだろうに」

およそ十年ぶりに再会を果たした師匠であったが、俺は彼との戦いを強いられていた。

会食の時に顔を合せたターラントという魔法使いは『英霊召喚』という特殊な魔法を使い、既に鬼籍に入っている過去の偉人や達人を呼び出せるようだ。

最初ターラントは、導師のご先祖様である初代アームストロング伯爵を召喚するが、これは術者との相性が悪くすぐに別の人物に切り替える。

次に彼は、俺の師匠であるアルフレッド・レインフォードを召喚し、俺に容赦ない魔法攻撃を加えてきたのだ。

「（本物の師匠なのか？）」

『英霊召喚』の仕組みがわからない以上は、その答えが出せなかった。

もしかすると、ターラントが師匠に変装しているだけなのかもしれないのだ。

「さて、どれほど上達したのか見てあげよう」

師匠は、頭上にドッヂボール大の『氷弾』を数十個も浮かせると、それを次々と俺にぶつけてくる。

「くそっ！」

慌てて『魔法障壁』で防ぐが、その中に一つに罠が潜んでいた。『氷弾』の貫通力にわざと強弱をつけ、その中の一つだけが『魔法障壁』を貫通して俺の顔に向かって飛んできたのだ。

俺は咄嗟に回避をするが、『氷弾』が頬を掠って切り傷ができる。軽傷ではあったが、俺はショックを受けていた。

「（氷弾一個だけに魔力を篭めて、あとはダミーか！　魔力を節約しながら俺の強固な『魔法障壁』を少ない魔力で破る。こんな事が可能なのは……）」

こういう魔法の使い方と攻撃方法の組み立て方の上手さは、師匠でしかあり得なかった。

あとは、ブランタークさんが可能なくらいか。

いくら魔力が高くても、若い俺やカタリーナにはまだ到底できない芸当なのだ。

「ヴェル。君はただの変装だと思ったのかな？」

続けて、また数十個の岩弾が展開した『魔法障壁』に炸裂する。

同じくまた一つだけが『魔法障壁』を貫通し、今度は右肩に命中して激痛が走った。

『魔法障壁』を貫通した時に威力が落ち、装備しているローブのおかげで助かっている。

師匠からの攻撃を、師匠からの遺品であるローブが軽減してくれた。
何という皮肉であろうか？
「それよりも……」
師匠は続けて二回も同じ攻撃パターンを繰り返したのに、俺はそれを回避できなかった。
魔法自体はそれほど難しい事はしていないし、師匠の魔力量からいえばそれほど消耗もしていない。
なのに、俺は既に二か所も負傷している。
「魔法はイメージだよ。出会った頃よりも圧倒的に魔力は増えているけど、まだコントロールが足りないね。若いから仕方がないとも言えるけど、戦場ではそういう言い訳は通用しない。惜しいね。私がまた教えたくなってくるよ」
師匠は本物の可能性が強くなった。
死んだはずの弟子の復活で食い入るようにこちらを見ているブランタークさんに対し、嫌味なほど爽やかな笑みを浮かべながらそう言い放ったのだから。
「お久しぶりですね。お師さん」
「その呼び方は……」
「私が二十歳になるくらいまでは、ずっとそう呼んでいたではないですか」

「そんなバカな……。ターラントとかいう奴が、アルが俺を何と呼んでいたのかなど知るはずがない……」

ブランタークさんは、師匠が本物であると知って顔面を蒼白にさせていた。

「お師匠様……」

「カタリーナの嬢ちゃん。暫く済まない」

「いえ。お気持ちはお察しいたします。しかし、あの方は……」

「カタリーナの嬢ちゃん。気持ちはわかるが下手に助けに入るな。それすらあの男は利用するからな。それよりも……」

「はい。本陣の守りはお任せください」

「すまん」

「本当は、ヴェンデリンさんを助けたいのですが……」

「本当にすまない。アルに化けたターラントだけに関わっていられないんだ」

ターラントが師匠に化けた効果は絶大であった。

俺、ブランタークさん、導師を戦場から引き剥がしているからだ。

ここでカタリーナも抜けると、解放軍の本陣が危なくなる。

「ですが、これでヴェンデリンさんに何かがあればいくらお師匠様でも……」

「最悪、俺が犠牲になっても伯爵様は死なせない」

「わかりました」

カタリーナは納得して味方本陣の守りに専念し始める。

「とはいえ、アルが相手か……。一番厄介なタイプの魔法使いなのに」

俺達の決闘以外でも戦況は進んでいる。

テレーゼのいる本陣には大量に矢と魔法が襲い掛かるので、カタリーナは暫くは一人で対応する事を決意していた。

ただひたすら、『魔法障壁』を順次展開して反乱軍からの攻撃を防いでいる。

テレーゼ達やフィリップなどはこちらが気になるようであったが、他の場所では攻防戦が続いている。

こちらに声をかけずに、懸命に指揮を続けているようだ。

「こうなると、お師匠様からの特訓を受けていて幸運でしたわね」

以前の魔法の使い方では、大量の矢と魔法にいつか押されていたかもしれない。

あとはテレーゼの前なので口にしないが、結婚後に魔力も増えていて良かったという考えなのであろう。

ブランタークさんが抜けても、カタリーナは鉄壁の守りでテレーゼと本陣を守っていた。

「アル」

「『英霊召喚』などという魔法は聞いた事が無いですか？　ええ、こんな魔法が使えるのはターラントだけです」

師匠はブランタークさんに話しかけながらも、俺への攻撃を止めない。

火炎魔法で俺の周囲だけを攻撃し、それを『魔法障壁』で防いでいると突然地面から尖った岩が大量に飛び出てくる。

慌ててかわしつつ、小型の『ウィンドカッター』で切り裂くが、一つ対処し損ねて右フトモモを切り裂いていた。

ズボンと一緒に皮膚と肉が裂けて激しく出血する。

本来であれば縫わなければいけない深さの傷であったが、先の二か所と合わせて急ぎ治癒魔法で治していた。

俺と師匠との戦いは、俺が圧倒的に不利であった。

魔法を教えて貰った頃の俺と今の俺とでは、魔力量も使える魔法の種類もまるで違う。

だから、実はもし師匠が本物だとしても勝てると慢心をしていた。

それなのに、実際に蓋を開ければこういう結果になっている。

今の師匠の魔力量は俺よりも遥かに低いが、それでも一般の魔法使い基準で言えば上級の上である。

一定以上の魔力があるのでそれを効率良く駆使し、俺の隙を上手く突いてダメージを与えてくる。

ブランタークさんと導師は、動揺しているのもあるが下手に俺達の勝負に割り込むと、それを利用されて致命的な結果をもたらすと考えているみたいだ。

外縁部の敵に遠距離攻撃をかけながら、二人の勝負に割って入る

隙を突こうと観察を続けていた。

「このターラントという男は、生まれた時から極端に存在感が薄かったのです」

師匠なのかターラントなのかはわからないが、彼の一人語りは続く。

「親にもなかなか気が付いて貰えなかった。魔力があると知れば普通親は喜びます。それすらなくて、彼は家を出て冒険者になった」

冒険者になっても、ターラントは存在感が薄かったそうだ。

「いくら稼いでも、なぜか誰からも注目されませんでした。不思議な事ではありましたが、これが『英霊召喚』を習得する条件でもあったのです」

自分が無に近いから、過去に死んだ人間の魂を自分の体に簡単に降ろせるというわけだ。

「条件は、その対象が死んでいる事と、名前くらいは知っている事です。その人について詳しく知る必要はない。だから初代アームストロング伯爵を降ろせた。逆に生きている人はいくらその人の事を知っていても降ろせません。生きているから当たり前ですか」

「だから、さほど有名でも無いアルを降ろせたのか……」

「『英霊召喚』はあくまでも魔法名ですね。死んでいる人を下ろしてその能力を駆使させる。ターラントが私を選んだのは、歴史に残る偉大な魔法使いと実力に差が無く、ヴェル、お師さん、クリムト

の動揺を誘えるからですね」

「ふんっ！　底意地の悪い！」

「最高の褒め言葉です」

説明を続けながらも、師匠の攻撃は続く。

基本は俺の目を晦ませてから、フェイントで嫌らしい一撃を加える。

それがわかっているのに、俺はそれを防げないで負傷し続けていた。

ローブは頑丈なので切れないが、その下のシャツやズボンは切り裂かれて血で染まっていた。

負傷は治癒魔法で治せるが、負傷ばかりしているので精神的な疲労感が強い。

出血量も徐々に増えていて、失った血は治癒魔法では回復しないので体が少し重くなってきた。

「意外としぶといな。私の予想以上に揉まれたのかな？　だが……」

俺は肩で息をしているのに、師匠の方はブランタークさんに話しかけながら余裕の表情を浮かべていた。

「お師さん。ヴェルは成長していますね。唯一惜しいのは、これ以上成長する時間が無い事ですか」

「お前。自分の弟子を殺すつもりか！」

「殺します。仕方がありません。今、ターラントは引っ込んでいる

のですが、主導権は彼にあるのですから、私は逆らえないのです。しかし惜しい。ここまで素晴らしい魔法使いに育っているのに」

「アルフレッド！」

ここで、今まで静かにしていた導師が突然大声をあげる。

親友との再会と、俺への容赦ない攻撃に爆発してしまったのであろう。

「クリムト。あなたが、体捌きなどを教えたので？」

「何か至らぬ点でもあったか？」

「いや。ヴェルはまだ若い。全て時間が解決可能な問題です。ですが、その時間はもう無いのです」

「時間が無い？　残念ながらここは戦場で、師匠と弟子の再会対決ゴッコが許される場所では無いのだがな。アルこそ、何か考え違いをしているのではないのか？」

「左様、ブランターク殿の言う通りであるな。色々と思う所はあるが、ここは三人でアルフレッドを再びあの世に送るべきであるか」

俺の苦戦を見て、ブランタークさんと導師も参戦を決意したようだ。

ただし、この二人が抜けた分、解放軍の魔法使い達は忙しさを余儀なくされていた。

そのくらいこの二人は圧倒的で、数が多い反乱軍との戦闘を支えていたというわけだ。

「（しかし、変だ？）」

俺は肩で息をしながら疑問を感じていた。

師匠が俺に一対一の勝負を挑んでも、ここは戦場なのですぐにブランタークさんと導師が助っ人に入ってくる事くらい理解しているはず。

それなのに、この余裕は何なのだと。

「いくらアルでも、三対一では苦しいよな」

「一対一の正々堂々の勝負を見守るのが人情であろうが、そうも言っていられないのである」

ブランタークさんと導師が師匠との距離を縮めると、それを見た師匠は突然大きな声で笑い始める。

「お師さんとクリムトこそ甘い。私が三対一で戦う理由がどこにあるのです？　その前に、勝てるわけがありませんよ」

「では、降伏するか？」

「お師さん。それは絶対に出来ないのですよ。私は、ターラントの支配下にあるのですから。そして、解決策もターラントが準備してくれています」

そう言うのと同時に、師匠は懐から出した二つの物体を二人の前に放り投げる。

地面に落下したそれを見ると、拳大ほどの黒光りのする魔晶石に

見た事もない幾何学的な文様が掘られた銀色の枠が付いた装飾品のように見える。

「魔道具？　見た事が無いがもしかして……」

「さすがはお師さん。正解です。これは、ターラントが私にこれ以上喋るなと言うルートから仕入れた物」

つまりは、ニュルンベルク公爵が地下遺跡から入手した古代魔法文明時代の遺産なのであろう。

「少し設定に時間がかかりますがね……」

師匠が目を瞑りながら何かの呪文を呟くと、二つの魔道具の形状が変化を始める。

徐々に人型になっていき、遂には師匠とまるで同じ恰好になっていた。

「これで三対三ですよ」

「そんな木偶に負けるか！」

「確かに木偶ですけどね。これが意外と性能が良いのですよ」

二体の木偶は、それぞれにブランタークさんと導師の前に立つ。

そして、躊躇う事無く二人に攻撃を開始していた。

「それに、別に勝つ必要など無いのです」

「俺を殺すまでに、二人を釘づけに出来ればいいから？」

「正解だよ。ヴェル」

木偶は、師匠の戦闘パターンと魔晶石に込められた魔力によって戦うコピー兵器のようだ。

今の師匠が木偶の方に意識を集中しているのは、自分のデータを木偶に反映させるのに時間がかかるからであろう。

「（木偶の操作はターラントがやっているのか？　それでも、今は俺に目を向けていない）」

このまま師匠の行動を座視すると、こちらが不利になってしまう。

一対一の決闘などという綺麗事は捨てて、俺は密かに『ウィンドカッター』を師匠に向けて放っていた。

戦場で卑怯もクソも無いと言ったのは師匠自身である。

「良い判断だ、ヴェル。だが、私には効かないね」

師匠は木偶を操作しながらも、俺が放った『ウィンドカッター』を『ウィンドカッター』で相殺していた。

しかも、瞬時に自分に当たるとダメージになりそうな部分にだけ当てて相殺している。

この状況でも、自分の魔力を節約する事を止めない。

恐ろしいまでの冷静さだ。

「私はヴェルよりも魔力が少ないからね。節約は基本だよ」

自分と俺との魔力量の差を理解しつつ、自分は効率良く魔法を駆使して俺を追い込んでいる。

全く隙が無く、段々と打てる手が思い付かなくなってきた。

「ヴェル。見てごらん」

木偶の設定は完全に終わったようだ。

一体はブランタークと戦っている。

「ちっ！　今の俺では偽物でもアルには勝てん！」

師匠の木偶は、ブランタークさんを防戦一方にしていた。

魔力の量では負けていて、ブランタークさんに有利だと思われていた技術でも、既にほとんど差は無くなっている。

二人は様々な魔法を放ち合って相殺していたが、ブランタークさんの方が押されているのが現状だ。

「木偶だから何とか戦えている。これがもし本物のアルなら、俺はもう死んでいるな」

咄嗟の判断力や対応力が欠けている木偶だからこそ、ブランタークさんがこれまでの経験で何とか対応している。

前にブランタークさんが言っていた、もう魔法使いの力量では師匠に抜かれているという発言は事実であったようだ。

「お師さん。木偶を倒さないとヴェルの救援に来れませんよ」

「そうだな」

ここで激高して自分を見失わないのは、さすがはブランタークさんであろう。

ただ、徐々に呼吸が乱れて追い込まれているのも事実であった。

「こんな物を大量に使われたら俺達は負けるな」

「でしょう。ターラントの雇い主はこれを絶賛量産中ですとも。私の軍団が大陸を席巻するのです」

「ほほう」

師匠の軽口に、ブランタークさんは意味ありげな笑みを浮かべていた。

わざとふざけたような口調で師匠がそう言うという事は、木偶を発生させる魔道具はこれだけしかないという事なのであろう。

「さて。クリムトは頑張っているのかな？」

「ちっ！　この手数の早さと魔法の威力と収束力は、アルフレッドの能力をコピーしているだけはあるのである！」

今度は導師の方に視線を送ると、そこでは導師が木偶から大量の魔法を連発されて防戦一方の状態であった。

「ヴェル。クリムトの魔法は常に激流だ。こういうタイプの魔法使いに、タイプの違う受け流すタイプの魔法使いが対応する。すると、どうなると思う？」

「戦況が膠着する？」

「そんな物語のような話は滅多に無いね。クリムトの攻勢を受け流せる者など滅多にいないさ。これに対抗するには、それよりも強力な攻撃で圧倒する」

実際に、導師と戦っている木偶は師匠と同じレベルで大量の魔法を連続して放っていた。
これには導師も防戦一方で対応するしかない。
下手に攻勢に入ろうとすると、大量の魔法を叩き付けられていくら導師でもズタズタにされてしまうはずだ。

「いや、しかし……」

師匠の魔力量では、今の魔力が増大した導師に勝てるはずもない。
いくら初手で圧倒しても、魔力が尽きてしまえばあとは負けるだけなのではと思ってしまう。

「そんな心配はいらないさ。私がヴェルを殺すまでのわずかな時間、お師さんとクリムトが手を出せなければ良いのだから」

いくら師匠の能力をコピーしたとはいえ、所詮は木偶。
だから足止めだけに使って、俺を殺すのは自身がやる、という事のようだ。

「えらく評価されていますね」

「まだそんな事を言う余裕があるんだね。助っ人は自分の身を守るので精一杯だ。さて、ヴェルはどう戦うのかな?」

木偶の設定が終わり、再び全ての意識を俺に集中する師匠。
その整った顔を見た俺は、心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚えるのであった。

「駄目だ！　俺では木偶でもアルに勝てない！　導師！」

「ふぬぅーーー！　少しでも防御に手を抜くと、某でも一瞬であの世行きである！」

ブランタークさんと導師は、師匠の戦闘データと魔道具に付属していた魔晶石の魔力量によって防戦一方であった。

「なかなか致命的なダメージを与えられないね」

そして俺は、師匠の攻撃を受け続けて体中から出血している。
致命傷はどうにか避けているが、必ずダメージを受けてそれが俺の体力を削っていく。
こちらも攻撃を仕掛けるが、それは綺麗にかわされてしまう。

「ヴェル。ちゃんと相手の攻撃パターンを見てから魔法を放たないと、無意味に魔力を消費するだけだ」

「……」

「ここまで良く頑張ったね。では、そろそろ終わりにしようか」

師匠がそう言うのと同時に、俺の視界からその姿が消えてしまう。
そして、次の瞬間に俺は後ろに気配を感じていた。

「バカな！」

慌てて『魔法障壁』を強化するが、その前に師匠は俺に致命的な

一撃を加えていた。
俺の腹から、火炎の刀身が突き出ていたのだ。
彼は魔法剣の柄など持っていない。自分の手からイメージだけで炎の刀身を出していた。

「ヴェル。魔法はイメージとコントロールだよ」

昔に、師匠が十本の指先全てから『火種』を出し、それを数字の形にしたのを思い出す。
０から１０までの数字の炎を、カウントダウンしながら順番に指先に再現したのだ。
俺も出来なくはないが、まだ数字の炎を出すのに時間がかかっている状態だ。

「そんな……、早い……。それに師匠は、『瞬間移動』は使えないはず……」

その前に、あの装置の影響で移動系の魔法は使えないはず。
だが、実際に俺は腹を貫かれて、徐々に意識が遠のいている状態であった。

「私は極めて短距離での『移動』しか出来ないのでね。もう一つの手品のタネについては秘密という事で」

「ぐほっ……」

腹を焼き貫かれた俺は、口から血を吐きながらその場に倒れてしまう。

「バウマイスター伯爵！」

「クリムト。人の心配をしている場合ではないと思うけど」

「アルフレッドぉーーー！」

導師が俺の救援に入ろうとするが、彼も師匠の木偶が放つ大量の魔法の前に防戦一方であった。

助けになど入れるはずもない。

「戦争だから、私というかターラントが準備を怠るはずもない。少し考えが甘かったのでは？」

「クソっ……」

師匠の意識が導師に向いている間にどうにか少しだけ身を起こすが、体中に焼けるような激痛が走り、大量の出血で体が重かった。

これでも脳内にアドレナリンが放出されて痛みは和らいでいるはず。

おかげで、気絶はしないで済んでいた。

地面が俺の血で染まっている。

幸いにして急所や内臓は逸れているようだが、出血が酷くて意識が遠のいていく。

「治癒魔法もそれなりに練習したようだね。体は重いようだけど」

何とか治癒魔法で傷を塞ぐが、大量の血を失ったのでとにかく体が重い。

魔力はまだ十分に残っている。

それなのに、師匠にはまるで手が届かない。

魔力が多い俺の方が圧倒的に有利なはずなのに、実際には師匠の巧みな技術で一方的に打ちのめされている。

次第に絶望感に襲われてくる。

師匠が大き過ぎて、俺には永遠に勝てないような気がしてきたのだ。

「アル……」

いつも頼りにしているブランタークさんですら、師匠の木偶に押されてピンチに陥っている。

今の彼は、自分が殺されないようにするのが精一杯だ。

導師も同様で、ただ師匠の木偶が放つ大量の魔法を防いでいる。

「アルフレッド！」

「ちゃんと防がないと、後方の味方が大量に死ぬね」

「貴様ぁーーー！」

「言っただろう、クリムト。これは戦争だと」

師匠とターラントは、俺を殺すばかりでなく冷静に解放軍の戦力の要であるブランタークさんと導師の動きを封じている。

もし二人が逃走を図ると、後方の味方陣地が木偶の魔法で蹂躙されるという寸法だ。

これに気が付いた二人は、余計にこの場から動くわけにはいかなかった。

「師匠は……。偉大な魔法使いであり、優秀な参謀の才能も秘めて

いる？」

「さあ？　どうなのかね？」

あとは、魔力量だけでは測れない師匠の驚異的な強さであろうか？
決して自分の力だけに奢らず、どんな物でも利用して俺の命を狙っているのだから。

「お師さん。クリムト。このような再会で非常に申し訳がないね」

「本当にクソったれだな！」

「久々に会ったら、嫌な奴になっていたのである！」

ブランタークさんと導師の動揺が俺にでもわかる。
やはり、師匠はこの二人にとって重要人物なのであろう。
俺も勿論そうだが、この中で一番付き合いが短い。
俺が知らない、色々な友情や思い出があるのかもしれない。

「三人も優秀な魔法使いがいて、私相手にこれでは情けなくなるね」

師匠の言葉で、俺達はますます気持ちが沈んでしまう。
特に俺は出血による体の重さもあり、このまま負けを認めてしまいそうになっていた。

「師匠……」

「諦めて素直に私に殺されるのかな？　それも賢い選択ではあるよ。
さっきも言ったが、あの世で私が魔法を教えてあげよう」

「……」

もし本当にあの世という物があるのなら、それでも良いのではないか？

気持ちが完全に諦めに傾こうとした瞬間、後方から若い女性の声が聞こえてくる。

「あなた！　いけません！」

「エリーゼ？」

それは、城壁の上から叫ぶエリーゼの声であった。

普段の可愛らしく大人しい声からは想像もつかないほど、凛とした声で俺の耳から入って脳天を刺激する。

「声に『聖』魔法が混じっている？」

師匠の意識は、一瞬にしてエリーゼへと向かっていた。

「『聖』系統の『英霊召喚』とはいえ、死者を呼び出しているのには違いがありません！　死者がのたまう死の呼びかけに騙されないでください！」

エリーゼの声には、『聖』魔法が織り込まれているらしい。

次第に今まで重かった気持ちが晴れやかになっていく。

体の方も、徐々にではあるが元に戻りつつあった。

「やはり！　死者の攻撃は、生者に極度の疲労感を与える物もあるのです。あなた！」

エリーゼは、フルスイングで俺に向けてドッジボール大の青白い魔力玉を飛ばしてくる。
いつものおしとやかなエリーゼでは考えられないほどアクティブな動きであった。

「くっ！　あの女性は治癒魔法を飛ばせるのか！」

師匠は舌打ちをすると、俺から少し距離を置いた。
その直後に青白い治癒魔法の玉が俺に当たり、体の重さなどがスっと消えていく。
他にも、僅かに残っていた傷や治しきれていなかった部分も元に戻っていく。
やはり治癒魔法では、エリーゼの方に一日の長があるようだ。

「師匠が引いた？　そうか！」

師匠は既に死んでいるので、『聖』系統の魔法を食らうとあの世に戻されてしまうのであろう。
なので、それを阻止すべく中のターラントが師匠を引かせた。

「（待てよ。師匠はターラントの体を利用してここにいるわけで、それでも優先権はターラントにあるから、咄嗟の時にはターラントの意思が優先されるのか）」

俺は、何とかこれを利用できないかと頭の中で考えていた。
そして、一つの考えに至る。

「師匠。二度目で申し訳ありませんが、天にお帰りください」

「女性の助太刀を得ておいて、偉そうな事を言うね」

「女性に煽てられると弱い性質なので。それに、これが必ず一騎討ちでないと駄目な理由は？」

「無いね。そう、これは戦争で騎士様の一騎打ちゴッコではない。お師さんとクリムトの動きを木偶が封じている間に決着をつけよう」

師匠は、再び俺に向けて魔法を放ち始める。

先ほどはエリーゼが助けてくれたが、今からは俺が一人で何とかするしかない。

再びフェイントを混ぜた魔法で負傷していくが、さすがに負傷にも慣れてきたようだ。

体の重さも無く、怪我の痛みにも慣れた。

何とか踏ん張りながらチャンスを待ち続ける。

「私の攻撃に慣れてきたようだね。でも、私は君を殺さないといけない。私がそれを望んでいなくても、今の私はターラントの支配下にある存在なんだ。せめてもの情けだ。あの世で一緒に魔法を練習しよう」

「それがありがたいですが、まだ最低でも七十年は先です」

日本人としては二十五歳という短命だったので、この世界で俺は早死にするつもりなどなかった。

「贅沢だね。ヴェルは」

このままでは埒が明かないと、今度は俺の方が先制した。

大量のソフトボール大の火の玉を作って次々とぶつけていく。

その数は数百に及ぶが、師匠はそれを『魔法障壁』ではなくて短

距離の『瞬間移動』でかわしていた。
だが、どこに逃げても次々と火の玉を追尾させていく。
残念な事に師匠には一発も当たらないが、俺はその戦法を止めなかった。

「どこを狙っているんだい？」

「あなたの立場ですよ」

師匠に当たらなかった火の球は、後方に着弾して多くの兵士達を焼き払っていた。
それを見ても、師匠は顔色一つ変えていない。
多分、ターラントの方でもどうでもいいと思っているのであろう。
なぜなら、彼はニュルンベルク公爵の子飼いで、前衛の捨て駒部隊など全滅しても構わないと思っているからだ。

「さすがに、少し犠牲が多いかな」

だが、増え続ける犠牲に心境の変化が出たようだ。
師匠はかわせばいいが、兵士達はそうもいかない。
『魔法障壁』が使える魔法使いは全ての部隊に配置されているわけでも無いし、野戦陣地の攻撃に集中しているので、咄嗟の流れ弾に対応できるはずがない。
師匠というよりも中のターラントが、攻撃担当が減ると大変だと思ったのであろう。

今度は、俺のファイヤーボールに小さな氷弾をぶつけて相殺するようになっていた。

「ちっ！」

「師匠。魔力の無駄遣いですね」

「尊い味方のためさ」

などと師匠は言っているが、間違いなく魔力の消費配分を横入りしたターラントに駄目にされて激怒しているはずだ。

それを顔に出さないのはさすがは師匠であったが、心なしか少し焦っているようにも見える。

ようやく、師匠を倒す足がかりを掴めた。

俺は師匠よりも圧倒的に多い魔力を使って、更に攻撃の手数を増やしていく。

「（やはり、魔力の使用配分を妨害されて動揺している）」

師匠は最小限の魔力で味方への魔法攻撃を防いでいたが、それでも彼の魔力量ではすぐに頭打ちになってしまう。

「（俺が唯一師匠に勝てる物は魔力。ならば、それを利用して勝てばいい）」

ようやく攻勢に出た俺は、何とか逆転可能な作戦をようやく考え付く。

そしてそれを実行するために、師匠に心理的な誘導をかけた。

「忘れていましたよ。師匠。今、何が一番大切なのかを」

「是非に教えて欲しいな。ヴェル」

「久しぶりに再会を果たした師匠に情けなく動揺しながら、物語のように一騎討ちをするのではなく、この戦いに勝てば良い」

「正解だね」

師匠は、昔の癖で俺の問いに素直に答えてくれる。

これも隙といえば隙かもしれない。

「そういうわけですので、お覚悟を」

そのためにも、今はとにかく大量の火の球を放ち続ける。

当たらなくても後方にいる敵にぶつかるように調整を行い、その合計が数千を軽く超えたところで遂に師匠にも数発が命中していた。

『魔法障壁』によって弾かれるが、『瞬間移動』のパターンを読まれた師匠には動揺を与えたはずだ。

「ヴェル。非効率な魔力の使い方だね」

「ええ。ですが、このままです」

ようやく百発に数発は命中するようになっていた。

やはり『魔法障壁』によって弾かれるが、その度に師匠の魔力は減っていく。

それ以上に俺の魔力も減るので非常に効率の悪い魔力の削り方であったが、それでも計算では先に師匠の方が魔力が尽きる。

いくら師匠でも、魔力が尽きればただの人だ。

「ヴェル……。君の魔力は……」

「約十一年です。魔力はまだ伸び続けていますよ」

「クリムト！　ヴェルは！」

「恐ろしい男であろう。某の魔力も増えているが、もう追い付けぬよ」

大量の火の玉を飛ばしながら、俺は別口で極大火炎魔法の発射準備を終えていた。

上空に直径十メートルほどの巨大な火の玉が誕生し、それに他に小さな火の玉が合流していく。

狙いは師匠ではない。

前線部隊を督戦して良い気になっている、ニュルンベルク公爵が指揮する本隊の場所である。

そこに、超巨大な火の玉をぶつけるのだ。

「ニュルンベルク公爵の傍にいる魔法使いが防げるといいですね！」

距離は何キロも離れていたが、そこまで高速で飛ばす魔力は残っている。

師匠と昔を懐かしんで一対一で戦うよりも、あの男を殺してしまった方が早く内乱は終わる。

その考えに至ったのは、俺がやはり貴族だからなのであろう。

「ターラント。主君の傍を離れて不幸だったな」

俺は師匠がいる方向にではなく、ニュルンベルク公爵に向けて極大の火の玉を放っていた。

「やらせん！」

すると、咄嗟に師匠がそれを止めに入る。

『魔法障壁』と『氷玉』を発生させて、俺の火の玉を打ち消そうとしたのだ。

徐々に火の玉が小さくなるが、そこに俺は追加で火の玉を加えていく。

師匠はまた『氷玉』を作って火を消していくが、目に見えて師匠の魔力は減っていた。

「やはり、純粋な師匠ではないな」

もし百パーセント本物の師匠ならば、火の玉の阻止などしない。

この行動は、ターラントの支配力の方が強いからこそ起こり得る現象であった。

「ターラントは飼い主の安全が第一。師匠は、ニュルンベルク公爵の命などどうでもいいからな」

暫く火の玉を挟んで押し合いが続いていたが、ここで師匠が強引に巨大な『氷玉』を発生させて火の玉を完全に消していた。

師匠が安堵の溜息をつくが、これは師匠ではない。

ターラントがニュルンベルク公爵に害が無くて安心しただけだ。

「（師匠。魔力も残り少ないですね）」

これはチャンスであった。
もし魔晶石などで魔力を回復させられると、また面倒な事になってしまう。
どうせ、技巧を凝らして戦おうとしても怪我ばかりするのだ。
ならば……と、魔法の袋から魔力剣の柄を取り出して一気に師匠との距離を詰める。
師匠はやはり予備の魔晶石で魔力を回復させようとしていた。
だが、その隙を突かれて懐に入れたので、急ぎ自分も手から『魔力剣』の魔法を出して俺にその火炎の刃を向ける。

「覚悟！」

俺が咄嗟に氷の刃を出した魔力剣は、師匠の心臓の部分に突き刺さる。
ほぼ同時に師匠が出した火炎の刃は、俺の右肩口に突き刺さって貫通していた。
再び右肩に焼けるような激痛が走るが、心臓を突かれた師匠の方が負けなのは誰の目から見ても明らかであった。

「ヴェル。お見事」

「師匠！」

心臓を突かれて、既にターラントは即死状態のはずだ。
師匠が喋れるのは、彼の本体が『英霊召喚』で呼ばれた魂だからであろう。

「大きくなったね。強くもなった」

「いえ。正当な方法では俺は勝てずに……」

「それでいいんだ。魔法なんて道具に過ぎないのだから、どんな使い方でも勝てばいい。私はターラントに逆らえないから、本気でヴェルを殺しにいった。ヴェルがそれを見抜いて敵本陣を狙って極大魔法を放ったから、ターラントはいつもの癖で守りに入ってしまった。それを考えて実行したヴェルの勝ちだよ」

「師匠……」

「ターラントが私に任せたままだったら、ヴェルを殺していたかもしれないね。だが、あの男は咄嗟に体のコントロールを奪って主人を庇う動きをした。それで余計な魔力を削られてしまったから私はヴェルに負けたんだ」

十年ぶりに会えたのに、俺はまた彼を強引に成仏させようとしている。

それを思うと、自分の酷さに涙が出てくるのだ。

「アルフレッド！」

「アル！」

「やあ。お師さんにクリムトか。今のうちに謝っておきます。すいません」

「いいんだ。もうそんな事は」

勝負がついたとわかると、導師とブランタークさんも駆け寄ってくる。

二人を翻弄していた二体の木偶は、操作をする師匠が倒されたの

と同時に元の魔道具に戻っていた。
そして使用限界が来たのか？
ボロボロになって崩れ去ってしまった。

「発掘品で、経年劣化による品質低下もあったのかな？」

「お前はいつも冷静だな」

「相変わらずの博識よ」

「私はただあの世から呼ばれただけさ。ターラントと知識が同化して一部の情報を得たに過ぎないのさ」

横たわる師匠に、右肩口の出血を手で抑える俺と、ブランタークさんと導師が囲む。

「今だ！　あの三人を殺せ！」

「邪魔だ！」

「引っ込んでいるのである！」

ターラントの死で、彼の存在感の無さが消えたからなのか？
一部敵部隊がこちらに押し寄せてくるが、それらは導師が火の蛇でブランタークさんは『ウィンドカッター』で切り裂いて虐殺していた。

更に……。

「例えそこが戦場でも、それは無粋よ」

「大切なお話があるから侵入禁止だよ」

「近付けさせない」

イーナは槍の投擲、ルイーゼは投石、ヴィルマは容赦の無い狙撃で敵軍の接近を防ぎ始める。

「今だ！　討ち取れ！」

それでもまだ押し寄せる部隊があったが、それらは全て轟音と共に地面に倒れ伏していた。

「帝国の野蛮人は、人の心を解せぬのか？」

ミズホ上級伯爵が命じた魔砲隊による射撃で、彼らは血に染まって地面に倒れ伏す。

彼は、俺達と師匠のと別れの時間のために貴重な魔砲を連発してくれたのだ。

「これは、反乱軍とやらの負けだね」

「まだ戦力比で不利だがな」

「可愛そうに、私も切り札の一つだったのに失敗しましたからね」

「自分の事を、良くそこまで冷静に言えるな」

「もう死んでいますから」

三度目の死が近いのに、地面に寝かされた師匠はブランタークさんと仲良く話を続けていた。
今は普通に話が出来るが、本体であるターラントは即死しているのでもうすぐ再びあの世に召されてしまうようだ。

「クリムト。ヴェルに教えてくれたのかい？」

「さわりだけであるがな」

「そうか。感謝するよ。本当は一杯奢ってやりたいけど、もう時間が無い」

「残念であるな」

導師の声が、いつもよりも暗いような気がしていた。
久しぶりに親友に会えたのに、もうすぐ別れなければいけないからであろう。

「あなた！」

更にそこに、俺を助けてくれたエリーゼが数名の王国軍人の護衛と共に姿を見せる。
護衛は、野戦陣地を出るのでフィリップが付けてくれたのであろう。

「エリーゼ。ここは危ないぞ」

「あなた。物凄い怪我ではありませんか」

エリーゼから指摘されて、俺は右肩を貫かれていたのを思い出す。

不思議な物で、気が付くと同時に右肩に激痛が走っていた。

「すぐに治します」

エリーゼの治癒魔法により、俺の肩の傷は数秒で治っていた。

元々精度は完璧なのに魔力も増えているので、今のエリーゼは間違いなく大陸有数の治癒魔法使いであろう。

「素晴らしい治癒魔法だ。これほどの達人はそうはいない」

その様子を見ていた師匠が、エリーゼの腕前をベタ褒めしていた。

「しかも美人だ。治して貰う方も嬉しい」

ついでに、ジョークも忘れない。

師匠はイケメンなので、こういう発言をしても厭らしさを感じないので得かもしれない。

「ありがとうございます。ヴェンデリン様の妻のエリーゼです」

「ヴェル。綺麗な奥さんだね」

「自慢の奥さんですよ」

「少しヴェルに嫉妬したのと、私も結婚くらいしておくんだったね」

師匠は俺とエリーゼを交互に見ながら、穏やかな笑みを浮かべていた。

「そうであるな。アルフレッドよ。ブランターク殿まで今は結婚し

ているのであるから」

「お師さんがか。それが一番驚いたね」

師匠から見ても、究極の独身主義者であったブランタークさんの結婚は驚愕の事実であったようだ。

「お前も、あの世で結婚しろ」

「それもいいかな？　あの世には、歴史に残る美女もいますから」

「お前はモテるんだから、上手く口説け」

「頑張ってみましょう」

死者と、その知己や友人達で和やかに話をする。

周囲は過酷な戦場なのに奇妙な光景だと俺は思っていた。

それでも、俺は師匠に会えて心から嬉しかったのだ。

「ヴェル。大分怪我をさせて済まなかったね」

「いえ。その気になれば、俺を殺す事も出来たのでは？」

特に、あの背後からの一撃だ。

師匠はターラントの支配に懸命に逆らいながら、機会を待っていたのであろう。

「今の私とヴェルにそこまでの実力差は無いよ。こういう戦闘方法は初回だからヴェルに通用したんだ。次からはヴェルも魔力を大量

に用いて防御を行うから、私もそこまで優位に立てない。それに、ヴェルは必ず致命傷を避けていた。無意識にやっているから、クリムトのおかげなのかな？」

「某にも、良い修行相手であったぞ」

「あはは……。それは災難だったね」

「酷い言い方であるな」

「君は時に極端すぎるのだよ」

師匠も、過去に導師の鍛錬に付き合って酷い目に遭ったのかもしれない。

乾いた笑顔を浮かべていた。

「さて。もう時間だね」

師匠の体から青白い光が立ち昇っていき、徐々に師匠の顔が薄まってターラントの顔に戻っていく。

「この男の付けているペンダントは使える。ヴェルにあげよう。人の物なのに偉そうに言っておくけどね」

「師匠！」

「お師さんも、クリムトも、エリーゼさんもお元気で。ヴェル。大きくなった君に会えて良かったよ」

最後にそう言い残すと、師匠の顔は完全に消えてターラントの死

体に戻っていた。
やはり心臓を突かれたので即死状態であったようだ。
全く呼吸をしておらず、既に息はなかった。

「師匠。俺は泣きませんよ。ただ、あなたの死を弄んだニュルンベルクに一撃を与える」

師匠の言う通りに、ターラントは青い宝石の付いたペンダントを首にかけていた。
どういう効果なのかは簡単に予想がつく。
移動魔法の阻害をキャンセルする装置なのであろう。

自分の首にかけて早速『飛翔』で浮かんでみる。

「完璧じゃないんだな」

試作品なのか不完全品なのか。
上空二十メートルほどまで浮かぶと、そこで止まってしまう。
師匠の言う通りに、ある程度決められた範囲内でしか『移動』できないのであろう。
どうやら師匠の魔法特性の話ではなく、この魔道具の効果の限界でもあったようだ。

「それでも、今はこれで十分だ」

両軍の戦いが続いている上空で、俺は再び極大火弾魔法の準備を開始する。
俺の更に上空に巨大な火の玉が徐々に生成され、それを見た敵軍から魔法や矢が飛んでくる。
『魔法障壁』で防ぐが、先ほどの師匠の攻撃に比べれば何の工夫

も無い普通の魔法でしかない。
全てそのまま弾いていた。
「（目標は……）」
俺は、双眼鏡でこの火の玉を飛ばす場所を探し始める。
ニュルンベルク公爵がいると思われる本陣では、先ほど師匠に消された巨大火の玉に警戒したのであろう。
複数の魔法使いによって、強固な『魔法障壁』が張られているのが確認できた。
「（残念ながら、そこじゃないよ）」
先に本陣を狙った魔法で、あの聡いニュルンベルク公爵の事だ。
俺からの暗殺に警戒して、とっくに対策を施しているであろう。
既に、影武者に入れ替わっている可能性があった。
「（標的はあんたじゃない！　これだけの大軍の弱点となる……）見付けた！」
かなり遠方に、それはあった。
反乱軍十五万人に補給を行うために、食糧などの物資が山積みにされた臨時の一大補給所が。
ここにも魔法使いが守っている可能性があるが、実力や人数は本陣ほどではないはずだ。
全ての拠点に優秀な魔法使いを大量に配置できるほど、どちらの陣営にも余裕などないのだから。
「まさか、現地調達もできない」

ソビット大荒地周辺に、十万を超える軍勢に食料を補給可能な拠点などない。
つまり、この食料を焼いてしまえば反乱軍の行動に大きな掣肘を加える事が可能であった。
帝都などから補給は来るであろうが、敵に大きな手間をかけさせる事は出来る。

「師匠の弔いだ。食事でも抜けニュルンベルク公爵！」

俺は、推定二キロ後方にある反乱軍の補給所に向けて火の玉を放つ。
着弾寸前に一人の魔法使いが『魔法障壁』を張って防いでくるが、俺は予備の魔晶石を使って魔力を補充しながら『ブースト』をかけていく。
威力が増した火の玉を、補給所を守る魔法使いは懸命に『魔法障壁』で防ぎ続ける。
応援が欲しいところであろうが、本陣の魔法使い達にはどうでも出来ない。

なぜなら、『移動』系の魔法を封じてしまったのは自分達であったからだ。

遂に『魔法障壁』は粉砕され、その魔法使いごと補給所は焼かれて積み上げていた物資が火炎に包まれる。
最近では雨も少なく乾燥しているので、火の回りは相当に早いようだ。

後方にいる反乱軍の間に、見てわかるほど動揺が広がっていた。

「成功だ！」

あとは、城壁に戻って防戦を続けるだけである。

後方の様子がわからない前衛部隊は変わらず攻めていたが、徐々に後方の動揺が伝染して勢いが落ちていく。

次第に補給所の火事が草原にも広がってそれに気が付く反乱軍兵の数が増え、遂には後退命令が下されたようだ。

補給所の鎮火に失敗した後方部隊から順に撤退していく。

そして、前衛部隊はそのまま殿としてこちらの追撃を防ぐ事になる。

「減らせる時に減らさないとな」

「抜刀隊準備！」

「バウマイスター伯爵。エルヴィンを連れていくぞ」

テレーゼの命を受けたアルフォンス、ミズホ上級伯爵、フィリップなどは追撃を即断していた。

なぜなら、今こちらに背中を見せて敗走している時こそ、反乱軍に打撃を与えるチャンスだからだ。

「俺も行きます」

「付き合おう」

「某も、魔法ばかり防いでいて消化不良である！」

「馬を借りて急ぎましょう」

「伯爵様。あの魔道具はどうなんだ？」

「あはは。これも完成品ではないようですよ」

師匠が連続使用し、最後に俺も使った『移動』魔法阻害キャンセラーのペンダントは青い宝石の部分が割れて使えなくなっていた。

そこで、急ぎ馬を借りて追撃を行う事にする。

「ひいっ！　バウマイスター伯爵！」

「ここで死ぬか。武器を捨てて降伏するかだ」

「降伏する！　命は助けてくれ！」

俺達三人は、三百名ほどの王国軍組を連れて追撃を開始する。

だが、殿は元々捨て駒部隊で士気も低く、加えてニュルンベルク公爵の督戦部隊も撤退したので大半が呆気なく降伏していた。

先に出たエル達は、その督戦部隊を中心に斬り込みをかけているようだ。

前方では、激しい剣撃の音が聞こえてくる。

「武器を地面に捨て、両手を頭に抱えてそのまま！　後方から捕虜を管理する部隊がすぐに来る。変心して戦いを挑んだら、容赦なく骨まで焼く」

「しません！　言う通りにします！」

「ニュルンベルク公爵にそこまで義理は無い！」

師匠との戦闘で大量に出した火の玉に、補給所を全て焼き払った俺に武勇自慢の傭兵や貴族でも大半が震え上がって降伏を受け入れていた。

「アルの件で頭にきていたんだが、思った以上に楽だな」

「みんな。バウマイスター伯爵の火炎魔法で焼かれたくないのが心情なのである。降伏でも相手の戦力は殺げるのだから、このまま追撃は続行である！」

結局夕方まで追撃を行い、俺達だけで一万人近い捕虜を得たはずである。

ただ敵も然る物、ニュルンベルク公爵子飼いの部隊はあまり犠牲を出さずに撤退に成功し、まだまだ戦況は安心できるような状態にはなっていなかった。

それでも、勝ちは勝ちである。

野戦陣地に、解放軍の歓喜の声がコダマするのであった。

第九十五話　南進開始、軽い神輿に人は集まる。

結局、テレーゼとニュルンベルク公爵による初の決戦は、完全な決着がつかずに終了した。
ニュルンベルク公爵が子飼いの魔法使いターラントを使って俺を殺そうとしたのだがそれに失敗し、その卑劣な方法に激怒した俺が後方の物資集積所を魔法で焼き払ったので撤退してしまったのだ。

『腹が減っては戦ができない』の言葉通りに、ニュルンベルク公爵は捨て駒の前衛部隊を残して速やかに撤退している。
そのせいで、彼の頼れる精鋭十一万人は督戦隊数千人以外はそれほど犠牲は出ていない。

見捨てられた四万人は、テレーゼの追撃命令により一万五千人ほどが戦死し、二万人ほどが捕虜になった。
残りの五千人は逃走したようだが、解放軍も二千人を超える戦死者を出している。

損害比で言えば解放軍の完全勝利であろうが、ニュルンベルク公爵の頼れる軍勢に致命的なダメージを与えたとは言い難い。
果たして、これが勝ちと言えるのかは疑問なところであろう。

「アルは再び逝ったな」

「もう死んでいるので、また元の場所に戻されたというのが正解であろうか？」

「どうなのでしょうかね」

本陣が置かれたままの城壁正門前の上から、俺とブランタークさんと導師は戦闘の後片付けをしている味方を眺めながら話をしていた。
本当は手伝わないといけないのだが、今回は負担が大きかったので免除されていたのだ。

「『英霊召喚』か。妙な魔法があるんだな。伯爵様の嫌な予感も当たるし」

「たまにはそういう事もありますよ」

あのターラントという男はとにかく不気味であった。
会食の時から、名前をニュルンベルク公爵から紹介され食事をしているのに、なぜか彼から何も感じないのだ。
そこにいるのに、なぜかいるという認識しか感じない。
少し気を抜くとすぐにその存在を忘れてしまうのではないかという不安もあって、俺はただターラントという男が怖かった。

その勘が当たり、俺は彼の魔法のせいで一日に何度も負傷する羽目になっていたのだが。
正直、あの後方からの一撃はヤバかった。
無意識に急所や内臓を避けたみたいだが、それは導師の指導が役に立ったのであろう。
嫌々ながらも訓練を受けておいて良かったというわけだ。

「師匠は、本当に強いですね」

「今となっては、魔力は伯爵様の方が圧倒的だがな。それでも、アルにはああいう怖さがあった。俺なんかよりも、圧倒的に強いわけ

だ」

師匠の木偶にすら押されてしまっていたブランタークさんは、己の魔法使いとしての力量を完全に悟ってしまっているようだ。

教え方の上手さと弟子の多さでは、間違いなく大陸有数だと思われるが。

「某の近接戦闘とはまた別の、巧妙な戦い方であろう？　自分の方が魔力は多いなどと安心していられないのである」

三人で椅子に座って話をしているが、テーブル上には師匠の遺品である杖とコップに注いだ王国産高級ワインが置かれている。

師匠をあの世に送るのは二度目なので、辛気臭いのは止めて酒だけお供えをしていたのだ。

ブランタークさんと導師に聞くと、師匠はワイン派であったらしい。

そういえば、あの屋敷の地下にも大きめのワインセラーがあった。

「死者の眠りを冒涜するとはな」

「皇帝には相応しく無い男であるな。バウマイスター伯爵はどう思う？」

「無理が祟っての、こういう戦い方でしょうね」

「無理か。伯爵様の言い方は、言い得て妙だな」

もし彼が皇帝選挙に勝っていれば、こうはならなかったはずだ。

もっと穏便に真綿で首を絞めるような方法で、ラン族とミズホ人

の力を殺ぎつつ帝国の中央主権化を進めていたであろう。
ところが彼は、クーデターで政権を獲得している。

「ニュルンベルク公爵にとって、ニュルンベルク公爵家諸侯軍と、支持を表明してくれている帝国軍は有力な支持母体なのです」

だからこそ、常に彼らに対する配慮が必要となる。
無駄に犠牲を出せないので、他の面従腹背な貴族や仕方なしに従っているような帝国軍を利用して、解放軍を減らすような嫌らしい作戦を多用する事になるのだ。

「全滅でもすれば、その貴族の領地を子飼いにでも与えて支持基盤を増やせると思ったのでしょうね」

鬼畜・外道の戦法だと未来の歴史書には書かれるであろうが、上手くいけばそれが正義であろう。
あくまでも、上手く行けばであるが。

「降伏した兵士が二万人か……」

「テレーゼ様が管理に頭を抱えていたな」

使い捨て要員にされたので、ニュルンベルク公爵が軍を退いたら簡単に降伏してしまったのだ。
ニュルンベルク公爵に怒っている貴族達も多かったが、だからといって彼らをそのまま味方扱いするのも難しい。
領地や家族を人質に取られているので、いざ戦闘になると再び裏切る可能性があるからだ。

「捕虜すら罠なのか……」

「あまりの悪辣ぶりに、ある意味感心するのである」

確かに、導師の言う通りであった。

「ですが、これからどうするのでしょうか？　また睨み合いとか？」

「さすがにそれはないの。勿論討って出るぞ」

三人の話に、今度はテレーゼも加わってくる。

政務を処理しながら戦闘後の後片付けを督戦していた彼女は、ようやく書類の処理にひと段落をつけたようだ。

「弔いか？」

続けてテレーゼは、テーブルの上に載った師匠の遺品とグラスに注がれたワインを見つける。

「師匠は十年前に無事に成仏しているはずなのです。だから……」

たまたま顔を見せにきて、俺に厳しい訓練をしたのだという考え方で三人は一致している。

そして、それを終えてまた天に戻って行ったのと。

「既に死んでいる者に葬儀は不要ですから。お供えですな」

導師の発言に、ブランタークさんも頷いて賛同している。

「妾は遠くから姿を見ただけであったが、素晴らしい人物であったようじゃな。『英霊召喚』で呼ばれるに相応しい人物であったと」

「長生きしておれば、王宮筆頭魔導士はアルフレッドが任命されていたでしょうな。しかし、某のご先祖様まで呼び出すとは。あまり活躍はできなかったようですが」

「ターラントとやらの素養や戦闘スタイルとかけ離れておったから、実力を存分に発揮できなかったのでは？」

いくら無に近い自分に死者を召喚して被せるとはいえ、身長ニメートル超えのパワーファイターと、身長百七十五センチほどの痩せ型の魔法使いでは、相性が悪かったのであろう。

だから、俺程度にも簡単に撃退できてしまったのだ。

逆に師匠のようなタイプとは相性が良いらしく、俺は大苦戦していた。

「かもしれませぬな。ところで、あのターラントとかいう魔法使いですが……」

「あれほどの魔法使いじゃ。世間に知られていて当然だと思うのじゃが……」

解放軍にも、降伏して捕虜になった貴族や魔法使いの中にも彼を知っている者は少なかった。

「『そういう名前の者はいた』、『いたのは覚えているが、どういう魔法使いだったのか記憶にない』。こう証言する者ばかりでの……」

「ニュルンベルク公爵が、どうやってターラントを見出して雇用したのかが一番疑問だな」

ブランタークさんの言う通りだ。
存在が希薄な高名な魔法使いを雇うのは、かなりの難事であったからだ。

「既に死んでいる者の事を考えても仕方があるまい。それよりもじゃ」

ターラントの話を切ると、テレーゼは俺の前で両腕を広げてとんでもない事を言い始める。

「師匠と相打つ羽目になって色々と心に負担がかかったであろう。妾の胸に飛び込んでくるといいぞ」

「はあ？」

「さあ、妾の胸に遠慮なく飛び込んでくるのじゃ」

師匠を討って落ち込んでいる俺を慰めて、そのハートをキャッチという作戦のようだ。
俺は勿論、ブランタークさんと導師ですらどうしていいのかわからないで、無言のままであった。

「周囲の目を気にしておるのか？　そんな事は遠慮せずにほれ」

テレーゼは両手を広げて、俺に早く胸に飛び込んでくるようにと促し続ける。
一体どこから得た知識か知らないが、周囲にいるテレーゼの家臣達の表情は暗い。
俺の事を縋るような目で見つめている。

「（拒否し続けて欲しいんだろう？　お前達の思う通りにしてやるよ！）」

家臣達からすれば、俺がテレーゼの婿になるなどあってはならないのだ。

帝国人なので、上手く同じ帝国貴族から婿を探して欲しいと願っているのだから。

「あなた。そろそろお食事の時間ですか……」

両手を広げているテレーゼに困惑していると、そこに昼食の準備が終わったとエリーゼが姿を見せる。

俺はチャンスとばかりに、彼女の胸に飛び込んでいた。

「師匠！」

「えっ？　えっ？」

エリーゼはわけがわからないらしく、俺に抱き付かれたまま周囲を見回していた。

「ヴェンデリンよ。なぜ近くにいる妾に抱き付かぬ？」

「奥さんじゃないから」

「ほほう。正論よな」

俺とテレーゼとのやり取りで、エリーゼはようやく事情を察したようだ。

テレーゼに冷たい視線を向ける。

「テレーゼ様もしつこいですね」

「妾の人生訓は『諦めない』じゃからの。この言葉により、妾はフィリップ公爵として一本立ちしたのじゃ」

傀儡にされまいと、諦めないで奮闘して独裁権を得たというわけだ。

素晴らしい資質かもしれないが、俺はその被害を蒙っていた。

「とにかく、食事なので失礼します」

俺達は、昼食を取るために自分の家へと向かう。

テーブルの上の杖を魔法の袋に入れ、ワインは導師が一気飲みしてから空のグラスを俺に渡す。

「良いワインであるな」

「お供えを飲むなよ。導師」

「このまま捨てては、ワイン好きのアルフレッドも悲しむであろうからな」

「俺も飲みたかったんだぞ」

ブランタークさんは、自分が飲もうと思っていたワインを導師に先に飲まれて、それが不満なようだ。

「苦情の内容はそっちであったか。しかしブランターク殿よ。こう

いう事は早い者勝ちである」

人は、健康のためにも食事の時間は守らないといけない。

エリーゼが知らせにきたので、俺達は家へと話しながら歩き続ける。

「あなた。テレーゼ様は、何か別の用事があったのでは？」

「そういえば、あったような……」

『打って出る』とか言っていたような気がしたが、今は食事の方が大切である。

あとで聞く事にして、俺はエリーゼと手を繋ぎながら家へと戻るのであった。

「ヴェンデリンよ。そなたは最近冷たいぞ」

「そうですか？」

家に戻った俺達は、揃って昼食を食べていた。

メニューは、前にミズホ伯国で購入したウドンの乾麺を茹でて釜揚げ風にして、おかずに天ぷら、他にもおにぎりも付いている。

具は梅干しで、これは戦場なのでお腹を壊さないための処置だ。

みんなで大量に茹でたウドンを食べていると、なぜかテレーゼが姿を見せて自分もウドンをフォークで掬って食べていた。

「妾が諦めない性質で、放置されても人様よりも心が少しだけ強いから問題になってはおらぬが」

いや、テレーゼの心は少し強いどころじゃない。

オリハルコンのように固く、神経はワイヤーロープのように頑丈であろう。

「やはり、年上なのが良くないのか？」

「そういう事ではなくてですね……」

立場が問題だと何度も言っているのに、いい加減徒労感も出てくるというものだ。

「よし。今日から妾は十五歳だという事にしよう。『テレーゼ永遠の十五歳作戦』じゃ」

「（何だよ。その芸能人の年齢サバ読みみたいな作戦……）エリーゼ。もっとウドンが欲しい」

「すぐに追加で茹でますね」

あまりにバカバカしいので、俺は無視してエリーゼにウドンのお替りを頼んでいた。

勿論、エリーゼも聞いていないフリで逃げるように台所へと向かう。

彼女もコメントに困ったのは確実だ。

「十五歳はないわぁ……」

「ボクなんて、逆に『ルイーゼ永遠の二十歳作戦』とかにして欲しい」

「返答に困る」

「私、実年齢よりも少し上に見られるのですが、テレーゼ様よりも年上には見られませんわよ」

他の女性陣達からも、散々に言われてしまう。

ブランタークさんも顔の表情が固まったまま無言で、導師は我関せずと大量のウドンを豪快に啜っていた。

「これ。そこで真面目に反応するでない！　冗談くらい解せる余裕を持て！」

「いや、冗談なのか本気なのか判断に迷いまして」

「冗談に決まっておろうが！」

それから十数分後、昼食も終わったので全員でお茶を飲んでいると、ようやくテレーゼが作戦の話を始めていた。

そういえば、攻勢に出ると言っていたのをようやく全員が思い出したからだ。

「アルハンスを落とす」

「重要拠点ではないですか」

一応俺も、帝国の地図くらいは確認していたので知っている。

このソビット大荒地と帝都との中間地点くらいにある、帝国軍の重要軍事拠点だ。
巨大な城塞と軍事基地に、人口が三十万人を超える都市も隣接している。

公式ではないが帝国人は副都扱いしている重要都市で、ここを取れば帝都を窺えるかもしれない。

「戦力が足りないのでは？」

「その戦力を増やすためでもある」

前の無理な攻勢で犠牲も出ているので、兵力差を考えても勝ち目があるとは思えない。
俺の心配を、テレーゼは例の捕虜達で補うのだと語っていた。

「アルハンス以北の貴族達の離反を誘うのですか？」

「ニュルンベルク公爵のやり方に反感を覚えているからの。彼らの領地が解放軍の勢力圏に入れば、裏切りを心配する必要が無くなる。後方から、また新規で援軍も来ておるからの。数の不利も縮小したはずじゃ」

「それはそうでしょうが……」

「ニュルンベルク公爵は大量の食料や物資を失った。暫くは、全軍で攻勢というわけにはいかぬ」

俺が先の戦いで、反乱軍の大規模補給所を焼き払ったせいらしい。

「再び、十万人以上の軍勢が長期間動けるほどの物資を集めるのには時間がかかる。補給切れを考慮して、帝都付近に下がっているはずじゃ」

「魔法の袋で補給を行えば大丈夫では？」

「その魔法の袋を焼き払ってしまったのは、ヴェンデリンではないか」

軍は消費する物資の量が多いので、魔法の袋と通常の荷駄を並行して利用する。

片方だけに依存しないのは、単純に安全保障のためである。

あの集積所には、通常の方法で輸送された物資と汎用の魔法の袋も置かれていた。

それらは全て、俺の魔法によって焼き払われてしまったのだと。

「かなり後方にあった集積所を焼き払う魔法を使えるヴェンデリンの力に、ニュルンベルク公爵も肝を冷やしておろう」

「そうですか？」

予想外とは思っているが、別に俺は軍人として優れているわけではない。

そこまで警戒はしていないのではないかと思ってしまうのだ。

「とにかく、先遣隊と共に出陣をして欲しい」

「わかりました」

テレーゼの命令を受け、俺達は六万人規模の軍勢で南下を開始す

る。
ただし、俺達王国軍組千五百名は遊軍扱いで別行動だ。

「エルヴィン隊長殿。今はそんなに緊張しなくても大丈夫ですぜ」

フィリップに預けたエルは、王国軍組の内五百名ほどを預かり、中隊長として軍勢を指揮していた。
数は少ないが、わずか十六歳でこの重責なので、馬上で緊張のためガチガチになっている。

「エルさん。リラックスです」

「ハルカさんも緊張でガチガチなので、リラックスしてください」

婚約者だからというだけではなかったが、ハルカはエルの補佐役のような仕事をしている。
緊張するエルを解そうとして、自分もそうじゃないかと副隊長をしている中年の王国軍人に指摘されていた。

「緊張などしてませんよ」

「自分も若い頃に経験があるので、今は深呼吸をしてから落ち着きましょう。戦闘なんて暫く無いのですから」

「彼は、あんな事を言っているけど……」

エルを補佐する中年副隊長の予想に疑問を感じた俺は、隣で堂々と馬を進ませるフィリップにその真意を聞いてみる。
王国軍組は、どう見ても彼が指揮官にしか見えない。
若造の俺では、どう頑張っても貫録不足であった。

「自分の子飼いで無い貴族の軍勢にあんな無茶を強いたからな。この辺に領地がある貴族はニュルンベルク公爵に怒り心頭だろうな」

だから、作戦目標であるアルハンスまではほとんど戦闘は起きないであろうとフィリップは予想していた。

「六万の軍勢の内、かなりをアルハンス以北に領地を持つ貴族達が占めている。彼らは、領地に戻ってから解放軍への参加を表明するはずだ」

解放軍に味方を多数殺されたとはいえ、ここでノコノコ反乱軍に合流してもまた使い捨てにされるだけ。

かと言って、今まではニュルンベルク公爵が怖くて従うしかなかった。

俺は、貴族達の悲哀を直接感じてしまう。

「その辺の帰属交渉とか占領後の軍政とかはアルフォンス殿に任せて、我らは前進だな。どうせ、一番前に出ているわけでもないし」

「補給路を断つゲリラ戦とかに対応しないのか？」

「それは勿論しているが、千五百名では出来る事と出来ない事がある。それに、この部隊は余所者で傭兵扱いだからな。クリストフ」

「はい。兄さん」

「例の地図を」

「どうぞ」

クリストフは、俺に一枚の地図を渡す。
そこには、かなり詳細なこの近辺の道などが細かく記されていた。
「荷駄による補給は一応確保されているが、これは絶たれる可能性を考慮している。バウマイスター伯爵が大量の食料を持っているのはそのせいだ」
これは、先の戦いの教訓から魔法の袋に入れる食料を増やしていたのだ。
あとは、カタリーナの方も同様に強化している。
「念のために、何かあった際の逃走ルートは五か所を想定している」
「過去の教訓を生かして、あまり人が通らない山道ルートも調べてあります」
「それなら安心だな」
フィリップとクリストフの説明に、俺は納得する。
駄目ならとっとと逃げるという彼らの方針に大賛成であったからだ。
「その能力を、紛争で生かせたら良かったのにね」
「だからそれを言うな」
俺の余計なひと言に、フィリップは顔を曇らせていた。
それからも、俺達による進撃は続く。
途中で幾つかの貴族領や町を通過すると、そこで足を止められて

しまう。
なぜなら、彼らはあまり食料を持っていないので売って欲しいと頼まれてしまったからだ。

「食料が無い？」

「はい。先日に行われたと聞いている戦いの前と、その後にもお上の軍勢が買っていってしまいまして……」

さすがに略奪はしなかったようだが、相場よりもかなり安い金額で強制的に買い取られてしまったそうだ。

「収穫までかなりギリギリという事もありまして、少しでもお持ちならば売って欲しいと……」

「微妙な焦土戦術ですねぇ……」

内乱で同じ帝国領のため、露骨な略奪は避けたのであろう。
余剰の食料を全て買い取っているので、進撃する解放軍への妨害工作としか思えない。
解放軍が食料を強引に現地調達して、現地住民の反発を買うのを狙っているとしか思えなかった。

「すまないな。俺達も食料に余剰は無いんだ」

要請を断り続けながら前に進んでいく。
領主の軍勢が戻り解放軍に参加した領地も多いが、戦いで領主が戦死して所属不明や、この期に及んでニュルンベルク公爵に味方して攻撃を仕掛けてくる貴族も存在していた。
地元なので地の利を利用して、こちらに奇襲をかけようとしたの

だ。

「あまり犠牲を出すわけにはいかないな」

山道の横合いから数十名が奇襲をかけてくるが、既に察知していたので素早く対応していた。

「騎士爵くらいか。エルヴィン。包囲するから左翼を担当せよ」

「了解」

潜んで俺達に奇襲をかけようとしたようであったが、先に見付かって包囲されてしまう。

エルもハルカと副隊長の補佐を受けて、ちゃんとフィリップの指示通りに部隊を動かしていた。

「一気に押し包むか？」

「いや、『窮鼠猫を噛む』と言うだろう？」

「一回も戦わないで降伏するか？」

「するさ」

フィリップは懐疑的であったが、俺は前に出て極微弱の『エリアスタン』を潜んでいる敵軍にかける。

威力は低周波治療器ほどなので、彼らは驚き叫んでその位置を完全に曝してしまう。

「降伏しない場合は、俺達に斬りかかる間もなく全員死んで貰うが」

「降伏する！」

奇襲が失敗に終わると、指揮官の貴族はすぐに武器を捨てて降伏していた。

初老の騎士と思われる下級貴族に、兵士などは大半が装備が粗末な農民などを徴集して諸侯軍を編成したようだ。

「戦っているフリくらいはしませんと……」

初老の貴族は貧乏騎士で、この内乱に大きく翻弄されていた。

最初は反乱軍に参加を表明し、あまりに小身なので前線に出ないで街道の警備などを命令されていたそうだ。

そのおかげで、解放軍の野戦陣地に攻め入らないで済んだので犠牲は出さずにいる。

「降伏した身でこういう事を言うのはどうかと思うのですが、内乱はどうなるのでしょうか？」

「ええと……」

両勢力の境目にいる、小領主の悲哀というやつなのであろう。

下手に付く勢力を間違えると、自分達のみならず領民達すら皆殺しにされる可能性もあるのだから。

「まだ南下を続けるから、じきにここも解放軍の勢力圏になるはずだ」

「はあ……。アルハンスですか」

「作戦中なので、それは言えない」

妙に勘のいい老人だ。

はぐらかしてみたが、普通に考えればアルハンスが当面の目標になるのはニュルンベルク公爵も気が付いているはずだ。

守り切るか、戦力の集中のために放棄してしまうか。

それはわからないが、俺はアルハンスだけ死守してそれ以外の北部領域は一時放棄すると思っている。

帝国中央北部から北部領域南部は、細切れの直轄地と小領主が多数モザイクのように混在してその管理が面倒だからだ。

軍勢を連れていけば、すぐに降伏して味方すると言う。

だが、実は裏切るかもしれないし、それを防ぐために警戒を強めれば余計な人員を使ってしまう。

信頼する子飼いの軍勢を割く必要があるからだ。

そんな面倒な地域なので、俺は後方の軍政担当の連中に降伏した彼らを任せて前進を続ける予定であった。

「そういうわけなので、余計な事を考えずに領地で大人しくしていてくれ」

「あの……。連れて行ってくれないのですか？」

「えっ？」

俺は、思わずフィリップに視線を向けてしまう。

降伏したばかりの軍勢を加えて前進する。

戦記物では良くあるパターンだが、信用できるかどうかわからない。

もし更に南下したところで裏切られでもしたら？

判断がつかないので、俺はフィリップに助言を求めた。

「バウマイスター伯爵はどう思っている？　総大将である貴殿が判断しないと話は進まない」

「軍勢が増えるし、道案内役にもなる。アルハンスを確実に落とせばこの辺も安全圏になるので、多分大丈夫かなと」

「俺も考えが同じだ」

「道案内ですな。お任せください。改めて自己紹介をば。ヴェルナー・ギュンター・フォン・ポッペクです、しがない貧乏騎士爵家の当主をしております。ところで、私の随伴の件なのですが……」

それから数時間後、再び俺達は南下を続けていた。

道案内役としてポッペクという騎士の爺さんが付いて来たのだが、一時領地に戻ってから連れて来た軍勢も爺さんばかりであった。

「余剰の食料はニュルンベルク公爵に安く買い叩かれてしまいましたし、若い者には畑仕事がありますからな」

三十名ほどの軍勢の大半は、老人という編成になっていた。

「バウマイスター伯爵殿。私の近所の領主達も合流させたいのですが」

「フィリップ殿？」

「集めた方が面倒が無くていい」

フィリップの賛成により、次々と近辺の領主が軍勢を率いて合流してくる。

「彼は、直轄地の代官です。細切れで狭い場所の代官なので、ほぼ世襲貴族みたいなものですがな」

見た目は普通の爺さんであるポッペクは、意外と顔が広いようだ。

彼の参加から一週間で、多くの貴族や直轄地の代官たちが手勢を率いて参加し、軍勢は三倍近くの四千人ほどにまで増えていた。

しかしながら、兵士の大半は老人であった。

動けないような者は参加していないので問題は無いと思うが、クリストフの予想が実現しつつあったのだ。

『食料がギリギリなので、老人が率先して兵役を務めているようですね』

体の良い姥捨てのような気がしなくもないが、思ったほど弱そうには見えない。

みんな若い頃に領地や利権争いで紛争には参加しているので、隊列を整えて歩くなどの行動には慣れていたからだ。

「後方からの補給も予定通りに来ていますから、今は問題は無いという事で」

軍勢の数が増えると、それが目立ってまた他の貴族の参加を呼ぶ。

ただし、老人が多い事を見抜くと、その貴族も老人兵ばかり連れてくる。

「戦闘にならない事を祈るしかないな」

「それは無理だろう。それに、新兵よりはよほど使えるから」

老人兵達は、食事の支度も寝るためのテント作りにもとても慣れていた。

更に二週間ほど南下を続けてアルハンスの東側に到着した時、老人達のリーダーのようになっているポッペクがとんでもない事を言い始める。

「サーカットを落としましょう」

「サーカット？」

俺達が慌てて地図を広げて探すと、ここから十キロほど南にそういう名の町があるのを見つける。

「こんな町を落としてどうするんです？」

エルの疑問ももっともであった。

むしろ、これ以上の南下を止めてアルハンス攻めに参加した方が楽であろう。

こちらは老人ばかりなのだから、後方で待機させてくれるであろうし。

「この町の隣には、廃棄された砦がありましてな」

「廃棄された？」

「ほれ。昨今のアレですよ。予算節約のために軍事施設の統廃合を行ったと」

サーカットの町に隣接する砦は、昔は重要防衛拠点として機能していた。

「大昔、まだ帝国が小国で中央北部領域に敵国がいた頃に、重要防衛拠点だったのですよ」

その後、帝国の北伐は無事に進んでサーカットの町に隣接する砦はその価値を大幅に減じてしまう。

数百年前から破却の話が持ち上がっていたが、それが実現したのは三十年ほど前だそうだ。

「帝国軍がコスト削減に反対したのか……」

それでも、時間をかけて既得権益を持つ帝国軍上層部と粘り強い交渉の後にサーカットの砦は廃止という事になる。

王国でも良くある事例であったが、徐々に萎む軍に危機感を覚えてニュルンベルク公爵の反乱に参加したのではと、個人的には下種な勘繰りをしてしまうのだ。

「でも、破却したのでしょう？」

「予算が無いとかで、民間に貸していますよ」

頑丈で防犯性に優れた石造りの倉庫があるので、これを町の商人達が借りているそうだ。

浮浪者や犯罪者が入り込まないように、定期的に警備の人間を動かして管理しているらしい。

「サーカットの町にはたまに買い物に行くので、知っているのですよ」

「一つ質問！」

「何でしょうか？　ルイーゼ殿」

「サーカットの町って、アルハンスのように栄えなかったの？」

「人口が五万人はいるはずですから、中堅の商業都市ですかね。色々と理由があって、アルハンスに繁栄を奪われたと聞きます」

「ヴェル。どうする？」

「イーナはどう思う？」

俺は地図を見ながら、これからの行動をどうしようかと悩んでいた。

アルハンス攻めは主力に任せるというテレーゼの話なので、このまま無視してアルハンス攻めを後方から見学しているだけでも手柄は十分であったからだ。

俺に付いて来ている貴族は五十名近いので、これで十分に功績になるのだから。

「偵察して、駄目ならアルハンスに行けば？」

「それが無難かなぁ……」

試しに行ってみようという事になり、王国軍組とポッペク達が出

す老人兵を組ませて偵察部隊を前に出しながらサーカットの町へと進んでいく。

三日ほどで偵察部隊が戻り現地の状況を伝えてくるが、反乱軍は百名ほどの駐留部隊を残して全て後方に下がってしまったそうだ。

「また食料の買い取りとかしてそうだな」

「しているでしょうが、サーカットの商人なら隠匿も上手でしょうし、無理強いも出来ませんでしょう？」

「反乱軍が強要するかも」

「不可能じゃないかな？」

ポッペクの意見に、エルも賛成のようだ。

「どうしてそう思う？」

「確実に食料を引き揚げるために、反乱軍は弱いポッペクさん達を狙い撃ちしたのだろうけど、サーカットの住民は五万人もいる。千や二千の軍勢で食料を買い取ろうとすると、反抗するんじゃないのか？」

「五万人の半数は男性で、子供や年寄りを除いても万はいるな。どうせ大量に食料を消費をして足を引っ張る存在だし、少数の守備兵だけ置いて放置したんだな」

フィリップも二人の意見に補強を行い、部隊内の意見はサーカット攻めで一致していた。

「サーカットの住民が敵に回らない事を祈るよ」

「バウマイスター伯爵殿。こういう内乱などの時には、庶民は冷静に勝者へ付くだけです」

反乱軍が居座っていれば反乱軍だが、俺達が追い払えば解放軍につく。

ただそれだけなのだとポッペクは言い切る。

「それを卑怯だと言ってはいけませんよ。彼らには彼らの生活があるのですから」

別に俺は、嫌悪感は抱いていない。

『勝てば官軍』だし、わざわざ強者に無謀な挑戦をする事もないのであろうから。

「つまり、勝てばいいと？」

「サーカットの砦を補修しながら粘れば、アルハンスとのラインで帝都にプレッシャーを与えられますぞ」

「ポッペクさん。あんたは……」

間抜けな奇襲をかけたかと思えば、降伏してからは有能な参謀に早変わりしている。

軍の事にも詳しいようだし、田舎の騎士にしてはかなり違和感のある人物だ。

「私はただの貧乏騎士ですよ。昔は帝国軍にいましたけどね」

次男なので帝国軍に勤めていたが、兄が早死にしたので領地に戻ったのだそうだ。

「兄には娘がいたので、私の息子と結婚させて領地を継いだわけです。昔は、これでもエリートコースに乗っていましてね」

簡単に自分の事を語ってから、ポッペクさんは俺の肩に両手を置く。

「最初は反乱軍に組せざるを得ませんでしたが、良い時にバウマイスター伯爵が来てくれました」

「えっ？」

「他の貴族と兵士達もみんなジジイで、失敗して死んでも跡取りはいますから、頑張ってサーカットを落としましょうか。フィリップ公爵閣下へは良い手土産でしょう？」

元は帝国軍のエリートであったが、兄の病死のせいで貧乏騎士になった男ポッペクさんは、ここで功績を稼いで最後の一花を咲かせるつもりらしい。

彼の後ろにいる貴族達も、全て同じ気持ちのようだ。

だから、みんな死んでも惜しくは無い年寄りばかりなのかもしれない。

「バウマイスター伯爵殿におきましては、公正な手柄の報告をお願いしたい次第でして」

「はあ……」

俺は、爺さん達の迫力に辛うじて返事をするしか出来ないでいた。

ようやくサーカット町の近くに到着した俺達であったが、町に駐留する反乱軍の兵士数に変化は無かった。

町の治安は元々警備隊の管轄で、彼らは居候状態である。

一番防御力が高い砦に籠ればいいのに、そこだと倉庫内の食料や物資が横領される可能性があると商人達に反対され、仕方なしに町に居候していた。

ただ、あまり質もよろしく無い連中なので、買い物や遊びに行ける町を好んでいるようで、この時点でニュルンベルク公爵はここをまともに防衛するつもりがないのかもしれない。

「重要拠点だと思うのですが……」

エリーゼは、反乱軍の陣容に呆れ顔であった。

「すぐに取り戻せると思っているからでしょう」

「そうでしょうか？」

エリーゼは、町と砦の南を隣接するように流れている川を見て、奪還はそう容易ではないと思っているようだ。

「解放軍に入り込まれても、帝都周辺と南部だけ死守すれば反乱軍は痛くも痒くも無いからね」

ニュルンベルク公爵にとって重要なのは、十一万人の子飼いの部

隊なのだ。
彼らさえいれば、帝都解放を目指して南下を続ける解放軍を誘引して、帝都周辺で撃破も可能である。
だから、ここで町の一つや二つくらい一時的に無くしても何の問題も無いと思っている。

「補給は南部と帝都周辺から受けられる。解放軍は余剰の食料を引き揚げられているので、暫くは補給体制の維持で時間を潰すな」

その間に訓練を施して、使える子飼いの戦力を増やそうと思っているのであろう。

「若いのに、良くニュルンベルク公爵の戦術を見抜くな」

フィリップも俺と考え方が同じようで、珍しく俺が適当に予想した戦術論を褒めていた。

「帝都北部付近を遊撃しながら、長躯した解放軍の息の根を一気に止めようとしている。解放軍の陣容から見て、ほぼ全力で決戦を挑まないと負けるからな。反乱軍は、そこでフィリップ公爵殿や主だった者達を討てば、あとはドミノ倒しであろうな」

指導者や幹部達を失った解放軍など、それこそ簡単に反乱軍によって鎮圧されてしまうであろう。

「勝利後の帝国領内について何も考えていませんね」

「ニュルンベルク公爵は、どうしても軍人の思考に片寄りがちですからねぇ……。不満は北部からの搾取などで中央と南部を優遇しつつ。帝国の一本化を計り、ある程度経済を建て直してから南下を試

みるとかそんなところでしょう」

クリストフの予想に、俺も含めて全員が納得しながら頷く。

「先の話よりも、まずは目の前の拠点を落とす事だな」

とはいえ、もう策は決まっている。

「反乱軍ども！　とっととサーカットと砦を寄越せ！」

「何だぁ？　ジジイが何の用事だ？」

ポッペクさんが、選りすぐりの老人兵達を連れて町の入口で守備隊を挑発し始めた。

彼らが顔を出すと、そこには七十歳を超えた兵士ばかりが自分達を挑発している。

数に差は無いが、『こんなジジイ達に負けるか！』と激怒しながら町から出て彼らを追撃し始めた。

「逃げるなジジイ！」

「落ちこぼれで置いていかれたのに、声と態度が大きいの。町でも厄介者扱いの癖に」

「ジジイ！　絶対に殺す！」

図星を突かれたようで、守備隊の兵士達は我を忘れてポッペクさん達を追いかけていた。

暫く鬼ゴッコが続くが、とある岩場に入り込んだところで彼らは自分達が包囲されている事に気が付く。

「ごきげんよう。お客様は丁重におもてなしをしないと」

彼らの前に姿を見せたカタリーナは、『ウィンドカッター』の魔法で巨大な岩を綺麗に切り裂く。

あまりの威力に、彼らは口をあんぐりとさせたままだ。

「戦うと仰るのでしたら止めはしませんが、その時にはみなさん顔と胴体が永遠にお別れですわね」

半ば見捨てられた拠点に、カタリーナと対抗可能な高位の魔法使いなどいるはずがない。

守備兵達は、全員武器を捨てて降伏する。

「かなりの重要拠点のはずなのに……」

武装解除を指揮するハルカは信じられないといった感じであったが、それでも無事にサーカットの町と砦を落とす事に成功するのであった。

「無防備都市宣言ですか？」

「そう。戦時には俺達は砦に立て籠もるから、そちらに配慮とか出来ないし。治安維持は警備隊に、行政は代官殿に任せます。今まで通りでしょう？」

「はあ……」

犠牲も出さずに占領したサーカットの町の役所で、俺は代官に軍政は敷かない旨を伝えていた。

理由は、そんな人手があったら砦の強化工事でもしていた方がマシだからである。

サーカットの町の南部には川が流れているし、砦の方も思ったよりも傷んでいなかった。

それでも、一秒でも早く補修や改築を行って防衛能力を強化する必要があったのだ。

「あとは、商人の方々へ」

「倉庫の食料と物資でしょうか？」

「ええ。出来れば売って欲しいですね。相場で」

「相場でですか？」

商人達は渋っていた。

今は戦時なので、粘れば相場以上で売れると思っているからであろう。

「この町と解放軍との補給ルートが繋がれば、そこまで値上がりはしないと思いますけどね」

後背に領地がある貴族達も味方なので、食料の不足は無くなるはずだ。

それに、俺達に高値で食料を売って一時の利益を得ても、あとで

テレーゼに睨まれれば意味が無い。
ニュルンベルク公爵のように安値で買い叩くわけでもないので、俺は相場で売る事を強く希望していた。

「無理強いはしませんが」

「……」

商人達は、渋々といった表情で余剰の食料を相場で売ってくれた。

「それと、わかっているとは思いますが……」

反乱軍側への情報提供や、密偵の匿いなどを行えば死刑だという脅しをかけてから、四千人までに膨れ上がった軍勢は砦に入る。
昔は重要拠点だったので、全軍が砦に入る事ができた。

「不要な部分だけ壊して、町の拡張に使えば良かったのに」

「お上からの意向で、有事の時に使うかもしれないからそういう使い方や改装工事は止めてくれと言われたそうですよ」

いつの間にか、老人達のリーダーになっていたポッペクさんはその辺の裏事情に詳しかった。
何にしても助かったのは事実だ。
すぐに長期籠城に備えて、全員がテキパキと動き始める。

「何か。平均年齢が高いのな」

エルがボソっと漏らすが、老人達は物凄く役に立っていた。
紛争レベルではあるがみんな従軍経験があり、田舎の領地で生活

しているので色々な事が出来る。
早速、長年放置されて崩れかけていた壁と塀を漆喰で補強し始めたり、捕虜の管理なども自発的に開始していた。

「俺やエルよりも役に立っているみたいだぞ」

「内部は任せるか」

フィリップは王国軍組を警戒に回し、残りの老人達に砦の補修を頼んでいた。
俺とカタリーナも近場の岩山に出かけて、使える石材の確保を行う。

「サーカットの町が発展できなかった理由がわかりましたわね」

南の川は良しとして、残りの周囲に点在する湿地帯と岩山、小規模ながら魔物の領域もあって、町の拡張がこれ以上は不可能だった。
その気になれば開発は可能であろうが、多分アルハンスの方が優先されて放置された物と思われる。

「ヴェンデリンさんなら、短期間で埋め立てられそうですが」

「土砂が無いから。取りに行くのに移動魔法も使えないし、ここは他所の国だからな。面倒なのでパス」

二人で石材を採集してから砦の拡張と強化を行う。
もし反乱軍が攻めてきても、俺達だけで防衛可能なように砦の工事を行うのだ。
サーカットの町にいる代官には、その時には俺達と無関係であると宣言するようにと言っている。

物理的に町まで防衛できないし、反乱軍も同じ帝国人なので住民の殺戮や略奪などはしないであろう。
それを行えば、悪評を利用される事くらいはニュルンベルク公爵も理解しているはずだ。

「何いうか、慣れているのな……」

エルが城壁増築工事の監督を行っているのだが、老人達は故郷で家や道の修復くらいは自分でやっているので、積んだ石材に器用に漆喰などを塗っていた。
力仕事に難があるが、これは若い者達に任せるか、石材の積み上げはほぼ俺が魔法で行っている。
作業は順調に進んでいた。

砦の中でも、老人達は器用に丸太小屋などを建設していた。

「老人パワー恐るべし！」

前世の日本のみならず、この世界にも元気な老人は多いようだ。

「とにかく、いつ反乱軍が再奪還を図るかわからない。警戒を続けながら作業だ」

主だった者達の意見が一致したので、早くに砦の強化工事を終えようと懸命に作業を進める。
ただし、老人が多いので定期的に休みをちゃんと入れつつだ。

「なあ。反乱軍が来なくねぇ？」

サーカットの砦に居を置いてから一週間、なぜか川の向こうに反乱軍の姿は見えなかった。
二十四時間体制で警戒を続けているのに、一向に姿を見せないのだ。

「ヴェル。ここって本当に重要拠点なの？」

「地図だとそうなんだが……」

帝都との間を川が遮っているが、直線距離でいうとアルハンスと距離でもそう違いは無いのだから。
俺はルイーゼに地図を見せながら説明をする。

「それよりも、町の代官がまた来ているわよ」

「またかよ……」

イーナの視線の方向には、また代官の姿があった。
軍政を敷かないと宣言しているサーカットの町であったが、南との交易が途絶えたので数日で苦情は入ってきた。
そのために、俺は砦の工事をフィリップ、クリストフ、ポッペクさんに任せて北部との街道整備を行う羽目になる。

『バウマイスター伯爵様。北方との交易が始まらないと、我らは飢え死にですぞ』

『わかった』

既に街道はあるのだが、実はサーカットの町の北部は広大な湿地帯である。

それを避けて曲がりくねった道なので、回り道の分だけ北部との交易が落ちるらしい。

『南部との交易が途絶している以上は、北部との交易を……。砦にいるポッペク様達領主連合との交易の促進を進めませんと……』

『そういう理由なら仕方がないか』

俺は、サーカットの町から真っ直ぐ北に伸びる街道の整備を行う。

『ここって、何で湿地帯なんだ？』

『南を流れる川の水が流れ込んでいるようですわね』

共に駆り出されたカタリーナと共に工事を始めるが、まずは湿地帯をどうにかしないと道など作れるはずがない。

先に川の治水・護岸工事をして、湿地帯に川の水が流れないようにする工事から始める羽目になっていた。

洪水対策で土による堤防を作り、続いて湿地帯に次々と『ファイヤーボール』を撃ち込んで強引に乾燥させていく。

もし地球の環境保護団体がこの光景を見たら、『湿地帯の生態系の破壊だ！』と大騒ぎであろう。

『あまりエレガントではありませんわね』

『じゃあ、カタリーナが華麗で手間がかかる方法でやる？』

『さあて。工事を続けましょうか』

カタリーナは、自分も次々と『ファイヤーボール』を連発して強引に湿地を乾燥させ始める。
道を作る部分だけ念入りに乾かし、表面の土を剥いでから石材を敷いてこれで完成だ。
暫くは地盤の沈下があるかもしれないが、それは後でサーカットの町の連中がどうにかする事である。

『いやあ。予想以上に素晴らしい道ですねぇ』

代官は褒めてくれたが、それよりも気になるのは道の端で排水避けの溝を掘る工夫達の存在だ。

『あくまでもついでに、街道の完成度を高めています』

『ついでねぇ……』

代官が独自に人を雇って工事させているらしい。

『あの連中は？』

ある程度乾いた湿地を耕し、雑穀の種を撒いている農夫らしき人達もいた。

『この湿地帯は地下水由来の水が原因ではないので、バウマイスター伯爵様が河川の工事をしてくれたおかげで、じきに住宅地の開発が進められます。ありがたい事で。ただ、地面の完全な乾燥には時間がかかると思いますので、食糧確保の観点からも雑穀を栽培しておこうと。水分も作物に吸収されますしね』

『そうなんだ』

この代官、地味に農業などにも詳しいようだ。

『バウマイスター伯爵様のお手は煩わせません。私達が勝手にやっている事ですので』

『はあ……』

そんな経緯もあり、一週間ほどで北方へと続く石畳の街道は完成していた。

「それで、今日は何か用事で？」

「実はですね……」

湿地帯のため、無駄に西に迂回している街道の整理をお願いしたいのだそうだ。

「バウマイスター伯爵様は、西にあるアルハンスとの連絡を強化して、そのラインで帝都に圧力をかけるそうで」

「軍事機密なので言えない」

とは言ってみるが、少し知識があれば子供にでもわかる作戦方針である。

この代官が気が付かないわけがない。

「ええ、わかりますとも。バウマイスター伯爵様は、この方面の軍勢を任されている指揮官様でございますからね。軍事情報の秘匿にご熱心でいらっしゃる事は重々承知しております」

この方面の指揮官というのは誇張であろう。
メインはアルハンス攻略の大軍で、俺達は遊軍みたいな扱いなのだから。
サーカットの町に来たのも、ポッペクさんの入れ知恵のせいであった。

「つまり、西にも真っ直ぐな街道を作れと？」

「実は、町の人間も西の開発を切望しておりまして……。南部との交易が絶たれましたでしょう。北部はバウマイスター伯爵様のおかげで良い街道が出来ましたので、交易も進むでしょうが……」

「はいはい、西ね」

「アルハンスとの交易が促進されれば、この町の戦略的な価値も上がりますでしょう？」

「……」

俺は、またカタリーナを連れて町の西へと向かう。
そして、なぜこの町の規模が小さいのかを理解してしまう。

「北は湿地で、西は丘陵地帯になぞの岩山か……」

とにかく、平坦な土地が一平方メートルも存在しない。
町を拡張しようにも、場所が無いのだ。

「湿地よりは楽か……」

俺とカタリーナは、地面を平らにしながら西にも道を広げていく。丘を削って出た土は川の西側の堤防の材料に、石材は堤防の強化に、町でも需要があるとかで商人が購入していった。

あとは……。

「砦の第二期工事？」

「なぜ？」

「人員が増えたから」

北の街道が完成した直後から、町に北方の貴族で解放軍に軍を出していなかった貴族が兵を送ってきたそうだ。

他にも、サーカットの町からも義勇兵が志願してきたらしい。

「志願兵？　それはまずくないか？」

戦闘時にはサーカットの町は中立を宣言するのに、そこから兵士が出てはまずいと俺は思ったのだ。

「だからこその、義勇兵なのですよ。個人で志願しているから、町は関係ありませんよというスタンスです」

クリストフは、そういう事情なので受け入れたと事後報告してきた。

「扱いが面倒なので、もしここに反乱軍が攻めてきたら防衛戦には参加する。ただし、我ら進軍後には、ここを守る防衛軍として再編成するですか。それは、ご老人達も同じですね」

確かに思ったよりも役に立つが、ニュルンベルク公爵が率いる精鋭達との決戦には使えない。
彼らも、この時点で十分に功績を挙げているので無茶をしないはずだ。

「テレーゼが軍監を送ってきたら、そいつに指揮させてここの防衛を任せるさ」

「その前に、バウマイスター伯爵が見事にこの町の代官に利用されていますが、ここは精々利用されてください。我らの安全のために」

「ちくしょう！　十分に自覚していたよ！」

そんなわけで、俺とカタリーナはまた一週間かけて町の西に石畳で立派な街道を整備した。
さすがにアルハンスまでの街道全てに工事は行っていないが、余計な迂回路が減って距離は大分短縮されたはずだ。
他にも町の西に広大な平地が広がり、川の堤防も西に伸び、平坦にした町と隣接している箇所では、代官が大工達に住宅地を作るように指示していた。

「住宅地の造成？」

「この町では、最近住宅の不足が問題になっておりましてですね。土地も無いので困っていたのですが、大変にありがたい事です」

俺とカタリーナの工事のおかげですと、代官は嬉しそうにしていた。
大工達も早速土台から工事をしている。

ちなみに、家の材料は俺達が切り出して売った石材がメインになっていた。

「お礼と言っては何ですが、フィリップ様とクリストフ様が砦の拡張工事を行っておりますので義勇工夫達を送り出しておきました」

クリストフが言うまでも無く、俺は代官に利用されている。

だが、そのおかげで食料などは適正価格で売って貰えるし、工事用の人足達も町が日当負担で出している。

統治に手間もかかっていないし、お互いのために俺は魔法で工事を続けないと駄目なのであろう。

「こうなれば、どんどんやるぞぉーーー！」

「あなた。あまり無茶をしないでくださいね」

「エリーゼは優しいな。戦闘じゃないから全然無茶じゃないけどね」

北、西と来て、今度は町の東部もある。

こちらも地形が悪く、全長二十メートルほどの岩が大量に突き出している場所が川にぶつかるまで続いているので、これも魔法で強引に切り取って平らにし、道を整備して、東側の河川の堤防工事も行っていた。

これら全ての工事が終わるまでに一か月、なぜか反乱軍は再奪取に向けて攻めて来ない。

おかげで、工事は予定通りに全て終了していた。

三方が開けたサーカットの町には建設の槌音が響き、周辺の解放軍に帰順した領地から多くの人達が交易や建設工事で仕事を行うためにやってくる。

そしてその頃になると、テレーゼから定期的に最新の情報が届いていた。

『アルハンスは包囲中じゃ。暫しそのサーカットの町で待て』

ニュルンベルク公爵の子飼いではないが、反乱軍二万人ほどが籠城しているので包囲して犠牲を減らして落とす方針にしてしまったそうだ。

すると、包囲中の解放軍にニュルンベルク公爵が別働隊を編成してちょっかいをかけてくる。

解放軍を消耗させるつもりなのは目に見えているので、テレーゼも援軍を率いてアルハンスの包囲戦に参加していると手紙で知らせてきた。

『ニュルンベルク公爵はこちらに夢中で、ヴェンデリンにちょっかいを出せぬようじゃの。油断せぬように、サーカットの強化を頼むぞ』

「強化って、何をすればいいんだ？」

「もうしているじゃないか」

「もうしていますね」

「代官殿が、旧下町の取り壊しをバウマイスター伯爵殿に依頼してきましたが」

「あのクソ代官。俺を利用し尽す腹だな！」

一応表面上は激怒しておくが、依頼を受ける事は身の安全にも繋がるし、よくよく考えるとバウマイスター伯爵領にいた頃とあまりやっている事に変わりはない。

軍や貴族の管理は、フィリップ、クリストフ、ポッペクさんにお任せなので、あとは飯を食べて風呂に入って嫁達と戯れるくらいしかする事がないのだから。

「町人達がありがたがってこちらにえらく協力的だし、砦の拡張に川の船着き場の整備も終わっている。軍勢も六千人まで増えたし、フィリップ公爵閣下の期待には応えているぞ。良かったな。あとで沢山褒美が貰えるぞ」

フィリップ達はそれで良いのであろうが、俺としては早くバウマイスター伯爵領に帰りたいものである。

「ところで、エルは？」

俺は、フィリップにエルの所在を尋ねる。

今ではハルカの補佐を得て、それなりに軍勢を指揮できるようになっていた。

「あいつなら、今日は非番だから。ハルカ嬢と町にデートに行ったぞ」

「何ぃ！　あのエルが！」

人が毎日コツコツと工事をしているのに、自分は婚約者とデートとか。

許されざる暴挙であろう。

「工事に嫁同伴、夜は嫁達とお戯れ。バウマイスター伯爵こそ許されざる男だな」

「兄さんの見解に賛成ですね」

「羨ましい限りですな。私ももっと若ければ努力するのでしょうが」

それから一週間後、ようやくアルハンスの反乱軍が降伏したという連絡が入る。

アルハンスとサーカットを繋ぐラインを確保し、その後背を解放軍の勢力圏にする事に成功したわけだが、アルハンスの商人が仕事を再開してサーカットに来ると、みんな驚いた表情を浮かべていた。

「西の街道が真っ直ぐで、石畳で舗装されていて、町の拡張工事が進んでいる！　なぜだ！」

「理由は簡単だ。俺が工事担当なのと、ここの代官の人使いが荒いからだ」

ついでに言うと、この代官は帝国の官僚で、反乱軍が勝とうが解放軍が勝とうが代官職を世襲しているサーカットの町が栄えるためなら何でもするという事なのであろう。

「あなたは、頑張りましたものね」

「うん。人様の国で頑張った」

驚く商人の声を聞きながら、俺と嫁達はようやく休暇を取って買い物に出かけるのであった。

第九十六話　連日の大会戦。

サーカットの町の拠点化を終えた俺達は、テレーゼから解放軍が落としたアルハンスに呼び出されていた。
無事に帝都を窺える拠点を得たので、参謀でもある俺に傍にいて欲しいのだそうだ。

俺達の留守中はブランタークさんと導師が護衛をしていたので寂しくは無いと思うのだが、やはりテレーゼは俺に執着しているのかもしれない。
大体の工事を終えたサーカットの町を他の帝国貴族とポッペクさん達に任せて、俺達はフィリップとクリストフも連れてアルハンスへと到着した。

さすがは副都扱いされているだけあって、アルハンスはブライヒブルクよりも規模の大きい都市であった。
テレーゼは、包囲作戦で補給を絶ってから降伏交渉で落としたと聞いている。

そのおかげで、アルハンスに目立った損害は見受けられなかった。

「良い場所を落としたようだね」

「まあ成り行きで？」

俺達を迎えに来たアルフォンスは、サーカットの町と砦を確保した俺達に感謝していた。
そのままだと大して役にも立たないのだが、町と砦の拡張工事を

行ったので反乱軍を圧迫できる条件が揃ったようだ。

「サーカットの町とはね。砦は三十年も前に実質地元の商人達が倉庫にしていたから、報告を受けるまでは誰も気が付かなかったんだよ」

修復すれば使えるかもしれないが、修復しないと防御が覚束ないので無理に落とす必要を感じていなかった。

その前に、解放軍の将兵と貴族に気が付いている者がいなかったそうだ。

テレーゼとアルフォンスからすれば、生まれる前に整理されてしまった砦なので思い出す以前の問題であったそうだ。

「アルハンスとの道を繋げば、戦線で帝都を圧迫可能なので助かったよ。街道もかなり整備してくれたみたいだね」

「戦闘が無くて暇だったからな」

今回の進軍で、俺はほとんど戦闘をしていない。

『低周波治療器』魔法で、ポッペクさん達を脅して降伏させたくらいだ。

というか、ポッペクさん達は最初は間抜けに見えたが、全て計算して俺達に付いている。

サーカットの町が解放軍側になり、町と砦が強化された。

その経済圏に自分達の領地も入っているので、そこまで考えて動くとはさすがは元帝国軍のエリート軍人である。

サーカットの町にいる間は、ほぼ工事しかしないでも仕事が回るわけだ。

あとは、王国軍組の指揮はフィリップとクリストフに任せている

し、その過程でエルの教育も頼んでいる。
ハルカの補佐を受けながら、エルは忙しいながらも充実した日々を送っていた。

『俺は結構暇なんだけど……』

『ヴェルは工事に行けよ。俺はハルカさんと部隊の指揮の勉強で忙しいから』

『前とさほどやっている事に差が無いな……。エルはまたフラれそうとか？　実はハルカさんに秘密の恋人がいたとかで』

『あるか！　縁起でも無い』

砦や町の工事内容を考えると、土木冒険者と言われていた頃とさほど違いは無いと思うのだ。
それにしても、婚約者と毎日仕事も私生活も一緒に仲良くとか、エルの奴も羨ましい日々を送っている物だ。

「大活躍であったな。ヴェンデリンよ」

「大活躍？」

テレーゼは、アルハンスの町の政庁で大量の書類と格闘していた。
ここは直轄地で大都市でもあるので、占領して統治するとなると膨大な仕事量になってしまう。
降伏した捕虜の管理もあるので、大量の書類が発生しているのだ。

「ブランタークさんが、書類の整理？」

「伯爵様達がいないからな……」

エリーゼとイーナもいなかったので、その一部をテレーゼの護衛をしているブランタークさんもこなす羽目になったようだ。

彼は教育も受けたインテリなので、こういう仕事も普通にこなせる。

ブライヒレーダー辺境伯に厚遇されて当たり前の人材なのだ。

「あの。伯父様は？」

「奥方様よ。あの導師が書類の処理なんてすると思うか？」

「ええと……。極たまにはしているかと……」

ブランタークさんの問いに、エリーゼは自信なさ気に答えていた。

世間において魔法使いは頭脳労働者と見られるし、その割合が多いとされている。

だが実際には、イメージ力だけで魔法をこなす人も多いので、意外と無学な人も多いのだ。

導師は、見た目だけで周囲の貴族達から頭が悪いと思われている。

実はそんな事は無いのだが、性格的にチマチマとした書類仕事など苦手だし、本人もそういう仕事を任されるのが嫌なので出かけてしまっているようだ。

「テレーゼ様の護衛じゃないの？」

「今の状態ならば、ブランターク様一人でも大丈夫だと思いますが……」

護衛なのにテレーゼの傍にいない導師に、エルとハルカは不思議そうな表情を浮かべていた。

「某なら、ここにおるぞ！」

「出たぁーーー！」

エルは、突如現れた導師にビックリしたようだ。

「隣の部屋で待機していたのである。エルヴィン少年よ。いくら何でも、護衛の仕事は全うしておるぞ」

「そうだったのですか。ですが、なぜテレーゼ様の傍にいないのです？」

「決まっておろう。書類仕事が嫌だからに決まっているのである！」

「堂々と言い切った……」

ハルカは、常に本音で生きる導師の言動に絶句していた。

ミズホ伯国は日本に似ているので、導師のような人間にカルチャーショックを受けているのであろう。

「何はともあれ、ヴェンデリン達が戻って良かった。まずは、この大量の書類を手分けして片づけるとしようかの」

「俺達もするのかよ！」

本当に色々と切羽詰まっていたようで、俺達はそれぞれに理解で

きそうな書類を渡されてチェックを行う事になる。
勿論、最後の確認とサインはテレーゼの仕事であった。

「アルフォンスさんがいない」

ヴィルマが、いつの間にかアルフォンスの姿がいない事に気が付く。
急ぎ執務室前の衛兵に聞くと、所用で町に出かけたそうだ。

「さすがは、俺の心の友。逃げるのが早いぜ……」

俺は、これまでの戦いの戦功判定を記した書類をチェックしながらアルフォンスの逃げ足の早さを称賛していた。
これこそ、今の俺に必要なスキルだと思うのだ。

「ふと思うけど、外国人の俺達がこういう書類を見て大丈夫なのだろうか？」

「情報が漏れると考えておるのか？」

俺の呟きは、テレーゼに聞こえていたようだ。
逆に俺に聞き返してくる。

「まあそういう事です」

「戦後にこの書類の情報を王国に渡しても、既に鮮度が死んでいるから役に立たぬぞ。さすがに、漏れるとまずい書類は渡しておらぬからの」

さすがに、そのくらいの事は考えているようだ。

「もっとも、ヴェンデリンが妾の夫として帝国に残るのであれば、最重要機密情報にも触れる機会が多いであろうな」

「テレーゼ様。書類の間違っている箇所はここです」

「テレーゼ様。この書類の予算項目は合算が間違っています。あと、この領収書は怪しいですね。出した人に釘を刺しておくべきです」

またテレーゼが俺を口説きに入ったので、エリーゼとイーナが不備のある書類を彼女の前に突き付けて遮ってしまう。

「主ら、妙に優秀じゃの」

エリーゼは完璧超人なので書類仕事も上手だし、イーナもこの手の仕事が得意だとこの内乱で周知されるようになっていた。

「ええと……。七と五を足すからここで一桁繰り上がって……。あれ？　合っているよね？　何か心配になってきたな。もう一度……」

逆に感覚で生きている部分があるルイーゼは、大量の書類の前で四苦八苦していた。

やはり、何事にも相性という物があるようだ。

「カタリーナ。ここ間違ってる」

「おかしいですわね」

カタリーナは書類仕事もある程度早めにこなせるが、結構ミスが多い。

逆にヴィルマは、遅いが正確でカタリーナにミスを指摘する事が多かった。
この二人、性格は正反対かもしれないが、実は相性がいいのかもしれない。

「こういう仕事も必要なんだろうけど……」

「エルさん。頑張りましょう。あとで大福をオヤツに作りますから」

「そうだな。頑張ろう」

エルは、ハルカと二人で違う世界を作っていた。
基本的に、ハルカが上手くエルに仕事をするように促している。
既に尻に敷かれているのだが、エル本人はそう思っていないので問題は無い。

「（これが、上手く旦那を立てつつコントロールする女性か……）」

などと感心してから一時間ほど、ようやく書類が片付いたので、俺達はオヤツを食べながらテレーゼと話をする事にした。

「あまり上手ではないのですが……」

オヤツは、ハルカの予告通りに大福であった。
作った本人がその出来を謙遜しているが、店で売っているのと差が見つからない。

「甘さが控えめで美味しいよ。ハルカさん」

「そうですか。安心しました」

「ハルカさんは料理もお菓子も上手なんだから、俺は全然心配していないって」

二人を見ていると、まるで新婚の夫婦が食卓を囲んでいるように見える。

ふとテレーゼを見ると、とても羨ましそうな顔をしていた。

俺は見なかった事にする。

「豆大福と塩大福も美味いな」

「甘い物に塩って大丈夫かと思ったけど、甘じょっぱいのが癖になるね」

ルイーゼも、初めて食べる塩大福が気に入ったようだ。

「ところで、イチゴ大福は？」

「えっ？」

「イチゴと大福ですか？」

俺の問いに、エルとハルカが絶句していた。

二人の中では、大福とイチゴの組み合わせはあり得ないのであろう。

「妙な組み合わせね。大丈夫なの？」

イーナは味を心配しているが、実は俺は知っている。

イチゴと大福の組み合わせが最高であるという事にだ。

この世界でイチゴは、栽培に手間がかかる作物なので高級品扱いである。
日本の物より小粒で酸っぱいのだが、逆に爽やかさを引き立ててくれるはず。

「バウマイスター伯爵様がそう命令なさるのなら……」

ハルカは、俺の命令通りにイチゴ大福を作り始める。

「味が不安であるな」

導師が珍しく心配していたが、少々不味い物でも、腐った物を食べても腹を壊しそうに無いので、無用な心配だと俺は思うのだ。

「完成しました」

大福の材料が残っていて、イチゴも俺が魔法の袋にとっておいてあったのでイチゴ大福は無事に完成していた。

「ヴェンデリンさん。本当に大丈夫なのですか？」

カタリーナが心配そうに口に運ぶが、甘い物なので拒否をする事はなかった。
ダイエットは良いのであろうか？
それだけが心配である。

他のみんなも一斉に試食を始めるが、最初の不安はすぐに吹き飛んでしまったようだ。
イチゴ大福の味を絶賛し始めていた。

「あなた。美味しいです」

「あれ？　組み合わせは変なのに美味しいですね」

料理が得意なエリーゼとハルカは、イチゴ大福の味を絶賛していた。

「でも、良く思い付くよね。ヴェルは」

「本当。不思議」

「ふっ。俺には、食の神が付いているのさ」

ルイーゼとヴィルマも、感心しながらイチゴ大福を食べていた。

ただのパクリであったが、それは知られなければパクリではない。

それとこの世界の人達は、神からの啓示だとか言うとかなりの確率で信じてしまう。

はぐらかすには、体の良い隠れ蓑なのだ。

「それよりも、これから先の話なんじゃないのか？」

甘い物にはあまり興味が無いブランタークさんからの指摘で、ようやくテレーゼからこれからの方針を聞く事となる。

「テレーゼ様」

「おう。このお菓子は美味しいの」

テレーゼ本人はイチゴ大福に集中し過ぎて、ブランタークさんに声をかけられるまで忘れている有様であったが。

「なるべく多数を率いて、帝都方面に進撃じゃの。途中でニュルンベルク公爵が手ぐすね引いて待っておるよ」

ニュルンベルク公爵は自分が得意な野戦に持ち込んで勝利を得たいようで、アルハンス攻略後に挑戦状を送られたそうだ。

「ニュルンベルク公爵は、籠城戦が苦手なのかな？」

「というよりも、そちらの方が早く片付くからの」

そろそろ春なので、出来れば一日でも早く内戦を終えて国家の再建を行いたいのであろう。

理由は違うが、双方共にこれに付いては意見を同じくしているみたいだ。

「そう思うのであれば、最初から反乱など起こさねばよいのである！」

大福を頬張りながら、導師がニュルンベルク公爵に文句を言う。

「それは今さらとも言うがの。帝都の手前には大規模会戦が可能な平地が数か所ある。そこで、妾達を待つのであろう」

そのために、今までニュルンベルク公爵は子飼いの戦力をなるべく消耗させずに、解放軍の主戦力であるフィリップ公爵家諸侯軍とミズホ伯国軍に消耗を強いてきたのだから。

「そのせいで、捨て駒にされた貴族には恨まれていますけどね」

消耗品扱いでダメージを受けたのだから、ニュルンベルク公爵を恨んで当然であろう。
だが、表だって文句を言えば潰されかねない。
ニュルンベルク公爵が精鋭を帝都周辺に集めているのは、彼らに対する牽制も含めてなのであろうから。

「妾達も調略を進めておるのでの。ニュルンベルク公爵は裏切りを予想してあてにはせぬはずじゃ」

「まあ。こっちも人の事は言えないけどな」

ブランタークさんの言う通りに、両勢力が未だに内戦を続けている影響で日和見な貴族がとにかく多い。
家の存亡に関わるので勝者を見極めたいのであろうが、解放軍に参加している貴族の半数以上があてにならない。
数は反乱軍よりも増えていたが、戦況によっては戦場で裏切っても不思議ではないのだ。

「一方、ニュルンベルク公爵は精鋭のみで戦いを挑んでくるはずじゃ」

いくら数に勝っていても、軍の質が低い弱点を突いてくるかもしれない。
当然対策は取っているが、色々と不安要素の多い戦いになりそうである。

「どちらにしても、解放軍の再編が進めば帝都を目指さねばなるまいて」

その準備は一週間ほどで終わり、解放軍は拠点と補給路を守る最

低限の軍を除いてほぼ全軍で帝都に向かって進撃を開始する。

総勢十五万人。

大分増えたが、やはりアルハンス攻略が大きかったようだ。

それを機に、軍を率いてきた貴族が多かった。

「あまりアテにはならないけどね」

「しっ！」

俺は慌ててルイーゼの口を塞ぐ。

特に抵抗も無いまま解放軍は進んでいくが、遂に密偵と先遣した物見の部隊が反乱軍の大軍がシーナ平原に陣取っているという報告をしてくる。

それを聞いて、テレーゼは顔を顰めさせていた。

「早くにケリをつけないとな」

「なぜです？」

「あのバカ者が！　帝国最大規模の穀倉地帯で戦だと！」

まだ冬麦が収穫できる状態ではないのに、そこで畑を踏み荒す大規模な会戦を行うのだ。

土地を所有する農民達から恨まれる事は確実であった。

「反乱軍は、平原の真ん中に陣取っているようです。総勢で九万ほどかと」

「少し少ないの……」

密偵からの報告に、テレーゼは何かを考え込んでいるようだ。

「精鋭中の精鋭だけとか？」

「かもしれぬが、あの男の事だ。何か良からぬ事を考えておろう」

もしかすると別働隊がどこかに潜んでいて、こちらに奇襲をかけてくるとかであろうか？

解放軍の練度を考えると、一撃で戦線崩壊の危険性もある。

「では、様子見ですか？　テレーゼ様」

「ブランタークよ。それに何の意味がある？　ただ事態を停滞させているだけではないか。奴らを倒すと決めた以上は前に出るしかあるまいて」

テレーゼの決断により、解放軍は全軍で反乱軍が陣を敷く場所へと向かう。

進むにつれて、まだ収穫するまで育っていない麦畑を踏み潰していく必要があったので、これはテレーゼの機嫌を再び損ねていた。

「あとで、補償なりしないと駄目じゃの……」

そして、ようやく両軍は広大な麦畑の中で対峙する。

反乱軍はほぼ均等に軍勢を三万人ずつに割って、解放軍もほぼ五万人ずつと同じ陣形であった。

数で言えばこちらが圧倒的に有利なのだか、解放軍には爆弾が存在している。

「右軍のバーデン公爵公子達は良いが、問題は左軍を率いるレーメー伯爵かの……」

解放軍は数は多くなったが、余計に寄り合い所帯になっている。前の敗戦で懲り、最初から解放軍に参加している貴族の軍勢を纏めているバーデン公爵公子が指揮する右軍は普通に戦えるはずだ。問題は、レーメー伯爵が率いる左軍である。

レーメー伯爵自身は爵位継承のために領地に戻ったが、元は帝国軍で将軍を務めていた。

評判も悪くないし、爵位も伯爵なので左軍を任せるに相応しい人物だ。

ところが、そこに参加している貴族達には色々と問題がある。

「何とも、困った話であるがの」

新規参加の日和見組が多いので、戦力として大してあてに出来ないのだ。

「かと言って、そういう連中を全軍に分散して配置するとしよう。どうなると思う？」

「そこを突かれると、全軍崩壊の危機ですね」

「そこで、左軍は崩壊する物として作戦を立てておる。中央軍の左軍側にはミズホ伯国軍を配置しているからの」

中央軍の崩壊は防げるであろうし、レーメー伯爵自身が左軍の状態については良く理解している。

最悪、当主のおかげで精鋭であるレーメー伯爵家諸侯軍と、一部

信頼できる部隊を纏めて中央軍に合流する手はずになっていた。

「半分残れば、少なくとも九万人の反乱軍に負けはせぬからの」

ニュルンベルク公爵の軍事的才能のせいで、完全に撃破できますとは言えない状態なのが解放軍には辛いところであった。

「こちらも辛いが、向こうも辛いはず。出来る限りの準備は行った。あとは、どちらが神の恩恵を受けられるかじゃの」

広大な麦畑を踏み潰しながら両軍は対峙を行い、まるで堰を切ったかのように戦闘を開始する。

特に複雑な作戦などもなく、ただ両軍が戦っているだけだ。

兵士や騎士達が斬り合い、魔法使いがお互いに魔法を駆使して味方を有利にしようとする。

『広域魔法障壁』などは使わずに、敵の数を減らす攻撃魔法の連発に傾注しているようだ。

前線では弓に射られ、剣で斬られ、槍に突かれ、魔法で焼かれて徐々に死傷者が増えていく。

負傷者は、運が良ければ後方に運ばれる。

そこで従軍神官から治療を受けるのだ。

ただ、それで治ったからと言って、必ずしも幸福とはいえない。

また前線に戻っても、今度は戦死してしまう可能性もあるからだ。

「それにしても、左軍は駄目じゃの」

戦闘開始から一時間ほど、俺達はフィリップが指揮する王国軍組と共にテレーゼのいる中央の本陣で待機していた。

椅子に座りながら定期的に戦況報告を受けるテレーゼは、徐々に押されつつある左軍に苦言を呈している。

「レーメー伯爵は良くやっているとは思うが……」

問題は、前線でぶつかる前衛部隊の質にある。

レーメー伯爵としては常に精鋭をぶつけたいが、それをすると戦いが長引くにつれて左軍の戦闘継続能力が落ちてしまう。

仕方なしに交代制で駄目な貴族の諸侯軍もぶつけるのだが、こういう連中は最初からやる気がない。

自分の軍勢が擦り減ると戦後に領地の働き手が減るので、損害を減らすためにすぐに後退してしまう者が多かった。

左軍が下がり過ぎると、陣形に不均衡が生じてそこをニュルンベルク公爵に突かれる可能性がある。

テレーゼは、息を合わせて中央軍と右軍を少しだけ下げる作業に苦労していた。

「テレーゼ様。反乱軍の後背を突くために、別働隊による奇襲をかけては？」

ずっと待機で暇であったエルが、テレーゼに意見を具申する。

「攻め込んだ王国軍の顛末を見るに、必ず見付けられて各個撃破されるであろうな。ニュルンベルク公爵はそういう才能に長けておる」

「駄目ですか……」

「エルヴィンには済まぬが、あの男相手に短慮は危険じゃ」

「それで、俺達がここにいると？」

俺達が前線に出て戦えば確実に有利になるのに、なぜか温存されている。

様子見の他に、テレーゼは何か嫌な予感を感じているらしい。

「テレーゼ様。反乱軍側に動きがあったようです」

テレーゼの勘は当たり、敵陣に何か動きがあるようだ。

警戒していると、何か金属の塊のような物がこちらに向かって走ってくるのが見える。

前線の部隊は、その金属の塊の足が速いので対応できないようだ。

乗馬している騎士が前に出ると、相手は金属の塊なので弾き飛ばされて落馬してしまう。

更に良く見ると、その金属の塊は四足で走っていた。

「見覚えがあると思ったら……」

「ゴーレムじゃねえか……」

前に散々な目に遭ったゴーレムが、大量にこちらに向かって来ていたのだ。

形状は虎や狼に似ていて、俺とブランタークさんはその姿にデジャブを感じていた。

「面倒なのがきたわね」

イーナの言う面倒がもっと面倒になったのはその直後だ。

前線の魔法使いが足止めに『ファイヤーボール』を放ったのだが、それに触れた途端にゴーレムが爆発する。

大量の金属片が散弾銃のように飛び散り、大量の負傷者を出していた。

「よっぽど運が悪く無いと死にはしないんだな……」

ただし、怪我人は大量に出ている。

負傷者は自分で後方に下がるか、仲間に運ばれて治療をするわけだが、その分戦闘力が落ちてしまう。

部隊の交替をスムーズに行おうにも、既にゴーレムによって陣形に穴が開いているのでそう上手く行くはずもない。

テレーゼは、悔しそうに一旦後退して部隊を再編するようにと命じていた。

「困ったのぉ……」

続けて、ニュルンベルク公爵は次の手を打ってくる。

ゴーレムの襲撃は中央軍と右軍に集中していたのだが、突然解放軍の弱点である左軍にそのほとんどを集中させていた。

当然、左軍は大パニックに陥った。

「テレーゼ様。救援を出されては？」

「それどころではないわ」

今度は、中央軍と右軍に反乱軍のほぼ全軍が殺到している。

兵数の不足を、左軍の潰滅に拘らず動きだけを止めて解決してしまったのだ。

「これはまずいな」

反乱軍八万人以上と、解放軍の中央軍と右軍約十万人が激突する。
常に先手を打つ反乱軍に、解放軍は押され気味であった。

「なるほど。九万で十五万に勝つ策か。奴は軍事の天才じゃの」

テレーゼが左軍の方に視線を向けるが、大量に殺到するゴーレムのせいでレーメー伯爵の精鋭以外軍としての体を成していない。
ゴーレムに魔法をぶつけて破裂させてしまい、負傷者続出で大混乱している軍勢の方が多かったからだ。
中央軍と右軍ですら、ゴーレムによって作られた混乱と陣形の隙を突かれて、戦況は誰が見ても不利にしか見えなかった。

「どうします？」

俺がテレーゼに解決策を問うと、彼女は暫く考えた後に次の作戦を説明していた。

「当初の通りに数の有利を生かす。それしかないからの。ブランターク。導師」

「出番ですか？」

「出番であるか？」

「ブランタークは私の身の安全を第一に。ここで妾が負傷したり死ねば負ける」

「ですな」

ブランタークさんが咄嗟に『魔法障壁』を張る。

俺も気が付いていたが、味方をかき乱していたゴーレムでまだ爆発していなかった個体が一斉に爆発して破片がここまで飛んできたからだ。
時限式の爆破装置でも付いてるのであろうか？

ミズホ伯国には魔銃があるので驚きは無いが、もしかすると遺跡からの発掘物かもしれない。

「本当に嫌らしいゴーレムじゃの。導師は前線で好きにせい」

「任された。久々に暴れるとしよう」

導師は自分専用のドサンコ馬に跨ると、杖をハンマーに変えてからそのまま前線へと走り出していた。
慌てたように、護衛の騎士達が馬で導師を追いかけていく。

「さてと。ヴェンデリンは」

「左軍の立て直しと、反乱軍側面からの攻撃でしょうか？」

「よくわかっておるの」

それが可能ならば、また戦況はひっくり返るはずだ。

「応援に行くぞ！」

とにかく、大混乱している左軍をどうにかしないといけない。
俺はフィリップとクリストフにも声をかけて、王国組と共に左軍への応援に向かう。

「新手だぞ！」

左軍は、わずか数千の反乱軍とゴーレム達によって混乱し、足止めされていた。

数に差があるために反乱軍は無理に殲滅を行わないで、左軍の混乱を維持・拡大するのに全力を傾ている。

とても良く訓練されており、俺達の参入にもすぐに気が付いて対応の小部隊を送り込んでいた。

「悪いが、時間が無いのでね」

いつの間にか魔銃による騎射を覚えたヴィルマが指揮官らしき人物を狙撃し、ルイーゼは敵の馬に飛び移って騎士を叩き落としてから自分の馬に飛んで戻り、イーナも馬上で槍を巧みに操って敵兵を倒していく。

みんな、この内戦のせいで大分対人戦闘に慣れてしまったようだ。

「邪魔ですわ」

カタリーナは、俺達を見つけて襲いかかってくるゴーレムを『ウィンドカッター』で破壊し、破片が飛んでくると『魔法障壁』で防いでいく。

それにしても、ダメージを与えれば爆発し、黙っていても時間がくれば自爆するゴーレムなど迷惑のタネでしかない。

「ヴェンデリンさん。良いアイデアを思い付きましたわ」

『岩壁』の魔法で囲ってしまうと、その中で勝手に自爆して破片も岩壁に阻まれて飛び散らない事をカタリーナが発見していた。

味方の他の魔法使いも真似をし始めるが、たまに魔力をケチって

『岩壁』を薄くしてしまい、岩壁の破片も飛び散らせて損害を増やしてしまう者もいる。

「魔力をケチらないでください！」

カタリーナに怒られて、初級・中級レベルの魔法使いは身を震わせていた。

見た目と普段の行動からは想像がつかないが、カタリーナは俺と導師がいなければ大陸でも五本の指に入る魔法使いなので、みんな畏怖の目で見ているのだ。

「ようやく到着か……」

左軍は、その中心部でレーメー伯爵が自分の諸侯軍に、信用できる数名の貴族の軍も纏めて防衛戦闘に移行していた。

その数は一万人ほどで、他の約四万がその周囲で混乱している。

レーメー伯爵が懸命に混乱の鎮静化に努めるが、ゴーレムと敵軍にかき乱されて上手くいかないようだ。

「バウマイスター伯爵殿か。混乱している部隊の方が多いので苦戦しておるよ」

それでも中核の部隊を混乱させていないだけ、レーメー伯爵は優れた軍人であると言える。

「とにかく時間が欲しい。反乱軍の部隊に隙が出来れば……」

「やってみましょう」

俺に考えがあった。

数の少ない反乱軍は、左軍をかき乱すためのゴーレムを減らさないように定期的に補充している。
その流れを絶ち、逆に彼らに混乱を与える方法を思い付いたのだ。

「（失敗しても怒らないでねと）」

かなり大量の魔力を使って、『石つぶて』の魔法を敵左軍上空に展開する。
たかが『石つぶて』と思うかもしれないが、距離と範囲を考えると相当に魔力を消費してしまうのだ。

「なぜ、こんな地味な魔法を？」

「ゴーレム対策です」

数秒後、左軍を担当する敵左軍の中心部に『石つぶて』が降り注ぐ。
ゴーレムの破片よりも威力は低かったが、直後に大量の爆発を確認していた。
こちらに送り込む前のゴーレムに石がぶつかり、そのショックで大爆発を起こしてしまったのだ。
至近な上に数も多かったようで、反乱軍左軍は大混乱に陥っていた。

「今です！」

反乱軍は精鋭部隊が多いので、あまり時間をかけられない。
レーメー伯爵にフィリップが協力して味方左軍の混乱がある程度鎮静化し、逆に敵左軍に襲いかかっていた。

「数はこちらの方が多い！　押せ！」

フィリップがなし崩し的に、幾つかの諸侯軍と協力して敵左軍へと攻撃をしかける。

前線に立った俺とカタリーナは魔法を連発し、エルとハルカは刀で斬りかかり、イーナは槍で、ルイーゼも前に出て敵兵を倒していく。

「ヴィルマ。アレだ」

「わかった」

ヴィルマも、馬上から狙撃用の魔銃で指揮官や魔法使いを次々と狙撃して始末していた。

魔法使いの中には『魔法障壁』で防ぐ者もいたが、それは俺の魔力で『ブースト』をかけて強引に突き破って始末している。

いくら精鋭揃いでも、魔法使いや指揮官が戦闘不能になれば統制が取れなくなる。

次第に前衛部隊から混乱し始めた敵左軍は、数が多い味方に押されて徐々に後退していった。

「押せ！　押せ！」

フィリップがいつの間にか前衛部隊の総大将のような扱いで、敵左軍に打撃を与えながら押していた。

なるほど、素晴らしい指揮官ぶりである。

「なぜ紛争では役に立たなかったのか」

「それを言わないであげてください。せめてもの情けです」

俺の傍にいるクリストフが、そっと自分の兄にフォローを入れる。
敵中央軍と敵右軍との戦闘はほぼ互角であったが、ようやく敵左軍を追い込む事に成功していた。
フィリップがレーメー伯爵と協力して、他の練度と士気の低い味方の尻を叩いて攻撃を続ける。

「ヴィルマ。あいつだ」

俺達も前線に出て、積極的に指揮官や魔法使いを始末する。
指揮官の戦死で指揮を引き継ごうとした騎士を見つけ、ヴィルマに狙撃を依頼する。
ほぼ百発百中の腕前を持つヴィルマの狙撃で次席指揮官も戦死し、なかなか前衛部隊の立て直しを図れない敵左翼は、徐々に纏まりを欠くようになっていた。

「ヴェンデリンさん。油断大敵ですわよ」

「カタリーナが防いでくれると思ったんだ。カタリーナは、優しいから」

「褒めても何も出ませんわよ」

前線に出た俺を狙って弓と魔法が飛んでくるが、それらは全てカタリーナによって防がれてしまう。
更に、彼女の反撃を食らって次々と魔法使いや騎士達が殺されていく。
『暴風』の名に相応しく、全て風によって切り裂かれていた。

「ヴェルもカタリーナも、容赦が無いのね」

「しょうがないさ」

初級でも魔法使いを一人失えば損害は大きいのに、既にこの内乱で多くの犠牲を出している。

戦後に影響は大きいはずだが、手加減をして自分達が殺されていれば世話は無い。

それに、戦場で殺せばそいつは二度と魔法を使えない。

派手な広域魔法よりも、敵魔法使いの『魔法障壁』を打ち抜く『ブースト』に俺は多大な魔力を割り当てていた。

「私も死にたくないから同じか……」

イーナが魔力を込めて投擲用の槍を投げると、少数の騎馬隊を率いていた騎士の体に突き刺さる。

その騎士は、落馬して地面の落ちピクリとも動かなくなった。

「左軍を率いている大将がいるはずだ」

フィリップが指揮する王国組と、レーメー伯爵が完全に把握している部隊以外は相変わらず烏合の衆であったが、今は敵を押しているので、連携もクソも無かったが一応は攻撃に参加するまでには混乱は鎮静化していた。

「もうひと押しだ！」

敵左軍は混乱して後退を続けるが、数が少ないのになかなか決定的な崩壊を見せない。

さすがは、ニュルンベルク公爵が鍛えている軍勢とでもいうべき

であろうか？
それでも、視界に敵左軍を指揮している軍人の姿を確認していた。
「誰なのかはわからないけど……。ヴィルマ」
「了解」
ヴィルマが馬上で魔銃の照準を合わせると、すぐに引き金を引く。
それに気が付いた二名の魔法使いが『魔法障壁』を展開するが、さすがに魔法使いの数が払底してきたらしい。
中級の上レベルが二名だったので、これもヴィルマに狙撃させて一気に『ブースト』で『魔法障壁』を貫通させて倒す。
この三名の死で、敵左軍はその混乱をまた増加させていた。
「レーメー伯爵にあとは任せる。バウマイスター伯爵。行くぞ」
敵左軍はまだ完全には崩壊していないが、暫く攻勢には出られないはずだ。
そこで敵左軍への対処はレーメー伯爵に任せ、フィリップが指揮する一万名ほどで、敵左軍の後退によって横合いを曝した敵中央軍に攻撃を開始した。
「敵中央軍を前後に割ってしまうのか」
カタリーナと共に先頭を馬で走るフィリップの脇を固めながら、ニュルンベルク公爵自身が指揮している中央軍へと突入を開始する。
横合いから攻撃されて、敵軍は綺麗に前後に分断されてしまう。
これにより、敵中央軍の前の部分はテレーゼが指揮する味方中央軍に挟まれる格好になっていた。

「このまま、テレーゼ達と挟み込んで勝利とか？」

「そんなに甘くない」

確かに分断しつつはあるが、包囲となると難しい。

俺達はその場を素早く駆け抜けないと、逆に前後を敵軍に挟まれて壊滅という危険もあったからだ。

フィリップは、俺の考えを否定していた。

「敵右軍も前後に切り裂きつつ、俺達は右側に抜ける」

敵中央軍を前後に分断したあと、すぐに敵右軍にも突撃をかけてその軍勢を前後に割ってしまう。

その際に出来る限りの攻撃を行って損害を増やしていくが、あまり長居も出来ない。

この状況で反乱軍は瓦解せずに、それぞれが部隊ごとに対応を行っているのが凄かった。

「羨ましいくらいに精鋭だな」

それでも、フィリップの敵軍横断策によって暫くは味方が有利になった。

「横合いから切り裂いても瓦解しないか……。烏合の衆の解放軍とはえらい違いだな。もう一度行くぞ」

「えっ？　もう一度？」

「俺達は左軍の応援に来たんだ。まともな軍勢をレーメー伯爵から預かっているし、もう一度横断すれば元の場所に戻れる」

「正論だけど、物凄い事を考えるなぁ……」

フィリップは手早く軍勢を纏めると、もう一度敵右軍の横合いから突撃を開始する。

「まともに考えると、敵は俺達が右軍の包囲戦術を行うと思っているはずだ。意表を突くと共に……」

「共に？」

「反乱軍の練度が尋常ではない。左軍が危ないかも」

「なるほど」

既に建て直して、元々一番弱い味方左軍を圧迫している可能性があるとフィリップは言うのだ。

俺とカタリーナは中規模の『カッタートルネード』で敵右軍横合いに穴を開けてから、再び突撃を開始する。

前に塞がる敵だけを俺とカタリーナの魔法、エルとハルカの刀、イーナの槍、ルイーゼの投石や打撃、ヴィルマは久々に馬上で大斧を振るって倒していく。

反撃も激しくかなり犠牲は出ていたが、それでも横合いを突かれた反乱軍の方が犠牲は大きいはずだ。

「腸を食い破られているのだからな。普通の軍勢なら崩壊しているはずなんだが……」

自ら剣を振るいながら、フィリップはニュルンベルク公爵が鍛えた軍勢の強さに半ば呆れているようだ。

「バウマイスター伯爵。もっと大きな魔法で一気に敵を吹き飛ばせないのか？」

「無駄だと思うよ」

フィリップは優秀な指揮官であったが、やはり魔法使いには詳しくないようだ。

試しに巨大な『ファイアーボール』を作って敵にぶつけようと頭上で準備をしていると、そこに様々な方向から氷の矢が飛んできて打ち消されてしまう。

「ほらね」

ベテランの魔法使いならば、俺が巨大な魔法を発動させようとするとすぐに気が付く。

ニュルンベルク公爵の軍勢は連携も優れているようで、自分だけで打ち消せ無くても複数で俺の『ファイヤーボール』を打ち消してしまった。

これを防ぐには、小規模の魔法を連発して少しずつ数を減らしていくしかないのだ。

「すまない。また押されている」

もう一度反乱軍を左右に切り裂いてから左軍の位置に戻ると、再び混乱を回復させた反乱軍に押されていた。

レーメー伯爵が懸命に応戦するが、どういうわけか数の少ない敵に押され続けている。

「先ほど、大将らしき人物を討ったのになぁ……」

「次席指揮官への継承か完璧なのか、もしかすると恰好だけで別に兵士の恰好をして指揮しているのかもしれない」

それを行われると、こちらとしてはお手上げである。

魔法使いならば変装してもわかるが、変装した指揮官を見分けるのは難しいであろう。

「全体的に押されてきたな」

フィリップは、テレーゼとアルフォンスが指揮する中央軍と、バーデン公爵公子は指揮する右軍も押されているのに気が付く。

「損害を抑えるために徐々に引いているから崩壊の心配は無いが……」

自爆ゴーレムを潰したのに、元の軍勢の練度の差で押されているとは笑えない。

テレーゼが指揮するラン族と、ミズホ上級伯爵が指揮するミズホ伯国軍は精強さを知られるが、他の諸侯軍との連携の甘さを突かれて後退を余儀なくされているらしい。

「ミズホ伯国軍の魔銃部隊は？」

「あれは接近戦に弱い」

前線が乱戦状態である以上は、そう簡単に使える物ではない。

「ついでに言うと、ニュルンベルク公爵はもう対策を立てたそうです」

腕っ節がイマイチなので俺達の傍を離れないクリストフが、中央軍から来た伝令経由で情報入手していた。
すぐに金属製の盾を準備して、魔銃を防ぐようになったそうだ。

「抜刀隊は？」

「そちらも苦戦しています」

敵軍に『魔剣』を装備している部隊がいて、しかも彼らが持つ魔剣の質が以前よりも圧倒的に優れているらしい。

「ニュルンベルク公爵が秘匿していたのでしょうね。以前の帝国軍が装備していた魔剣よりも圧倒的に優れているようです」

まだ『魔刀』には及ばないそうだが、装備している人数が多くて抜刀隊と膠着状態になってしまった。
戦死者量産部隊が機能しないのであれば、中央軍が苦戦している理由もよくわかるという物だ。

「導師は？」

「これも、苦戦中」

『ふぬぁーーー！　またゴーレムであるか！』

彼と軍勢をぶつければ、軍勢の方が溶けるとニュルンベルク公爵は理解しているのであろう。
そこで、準備していた大量の自爆タイプゴーレムを導師にぶつけているようだ。

どおりで、景気の良い戦果が聞かれないわけだ。

「つまり、完全にこちらの戦力に対抗する手段を考えていたわけだな」

「それでどうなる？」

「このまま少し押され気味で夕暮れになると、双方兵を退くわけだ」

フィリップの予言どおりに、日暮れ時になると両軍は兵を退いていた。

反乱軍は、帝都方面に向けて徐々に後退を始める。

「誘うのが上手いな」

左軍は疲労でボロボロの状態なので、フィリップもレーメー伯爵も追撃などは考えていなかった。

テレーゼもそうであろう。

ところが、ここに来て混成部隊の弱みが出た。

「追撃して戦果を！」

一部貴族が誘いに乗って、勝手に軍を率いて追撃を開始してしまったのだ。

「止めさせないと」

「無駄だ」

ここで、諸侯混成軍の弱みが露呈する事となる。

一応テレーゼ、レーメー伯爵、バーデン公爵公子に上位指揮権があるのだが、それに強制力があるわけではないからだ。
諸侯軍は一種の独立した軍なので、ここで単独で追撃をかけても厳罰にする根拠が無かった。

実は統一指揮権に関しては、王国でも曖昧な部分がある。
常識的に従う貴族が大半であったが、別に従わなくても罪というわけでもないのだ。

「さすがに、王国軍や帝国軍は罰せられるけどな」

フィリップは生暖かい目で追撃に向かう部隊を見送り、大方の予想通りに逆撃を食らい大損害を出して退却してくるのを確認していた。

「敗戦の責任は、自分に帰するのが諸侯軍というわけだ」

失った兵は、全て領内の領民達である。
貴重な労働力を失った時点で、既に大きな罰を受けているというわけだ。

「明日からどうなるんだろう?」

「このままだと思うがね」

「そこまでわかるのなら、テレーゼに進言したら?」

「王国貴族の俺が余計な差し出口をすると危ないぞ。バウマイスター伯爵がフィリップ公爵殿のお気に入りというだけで、妙にピリピリしているのもいるからな」

これまでは全て勝っていたので、解放軍に参加している貴族達の間で内戦後の政治状況を巡って駆け引きが始まってしまったらしい。
出来ればテレーゼの婿になって女帝夫君になどと、欲の皮を突っ張らせているのが多いのだと。

「勝てるかどうかわからないのに、もうそんな相談かよ」

「アホな奴ほど、頭の中に浮かんだバラ色の未来図に酔うものさ。昔の俺がそうだった」

過去に失敗しているフィリップが言うと説得力がある。

その日は呆れて早めに寝てしまったが、それから五日間。
解放軍は、毎日同じ戦いを繰り返していた。
数の少ない敵に押され、俺、導師、ミズホ伯国軍への対処も完璧で、夕方まで無駄に戦いを続ける。
さすがに、徐々に帝都に向かって後退を続ける反乱軍を追撃するバカは一日目でいなくなっていた。

ところが、ニュルンベルク公爵の軍勢は夜襲を行える精鋭なので、その対処にテレーゼは余計な手間をかける事になった。
そして夜襲は行われずに、解放軍は無駄に疲労を溜めていた。

「イライラするの」

都合六日間の戦いで、反乱軍は帝都近郊まで軍を退いていた。
遺棄された死体から一万三千人もの戦死者を出していると推測されたが、解放軍は二万五千人もの犠牲者を出している。
なぜこういう結果になるのかと言うと、反乱軍は精鋭で、最初に

度肝を抜いたミズホ伯国軍への対処も完璧で、地下遺跡から発掘したと思われるゴーレムなどを有効に使っているからであろう。
俺の魔法も、何かあった時のために温存という指示のせいであまり貢献しているとは言えなかった。

何でも俺達でゴリ押しすると、他の貴族達からの不満も出る。
組織のトップであるテレーゼは、それにも配慮しないといけないわけだ。

「このまま帝都に籠られて、攻略戦になるのかな？」

「それをされると負けるな」

エルが予想した籠城戦でこられると、野戦でも勝てないのに攻城戦など以ての外という話になる。
解放軍は徐々に参加貴族も増えて兵力の補填も完璧であったが、いまだに反乱軍の主力を瓦解させていない。
決して油断できる相手ではなかった。

「明日に備えて寝るか……」

「一週間連続で会戦かぁ」

エルの嘆きに賛同しながら、明日に備えて寝る事にする。
ところが朝に起きると、俺が予想もしていなかった事態が訪れる。

「ヴェンデリンよ。反乱軍は昨夜の内に帝都を放棄して南部に撤退したそうじゃ」

「ええと。意味がわかりません」

「そうか？　妾が言ったままであるぞ」

「えっ？　何で？」

「そんな事は、妾が知りたいわ」

テレーゼから緊急に呼び出して本陣に向かうと、反乱軍が帝都を放棄して撤退したという信じられない報告を受ける羽目になっていた。

解放軍の最大の攻略目標を、ニュルンベルク公爵が呆気なく放棄してしまったのだ。

「貴族達の中には、無邪気に喜んでいる者も多いがの……」

こうも簡単に帝都を放棄した以上は、何か策があっての事なのであろう。

そう考えると、俺とテレーゼは素直に喜べずにいた。

そしてその懸念は、すぐに現実の物となる。

第九十七話　帰りたいのに帰れない。

「この手でくるとは予想外だったのである」

「さあてと。身動きが取れなくなってしまったな」

導師とブランタークさんも困惑気味のようだ。

六日間にも及ぶニュルンベルク公爵率いる反乱軍本隊との死闘は、結局引き分けに終わった。

兵数、魔法使いの質と数、魔銃という新兵器、精強なミズホ伯国軍。

これだけ有利な条件を揃えていたにも関わらず、解放軍は多くの犠牲だけを出してニュルンベルク公爵を討てなかった。

反乱軍にもかなりの損害は与えているが、致命傷にはほど遠い。

逆に、練度の低い解放軍は、夜は反乱軍の夜襲に怯えて動けない状態にあった。

そして反乱軍は、帝都近郊まで下がると呆気ないほど簡単に帝都を放棄している。

テレーゼ達は唖然としてしまったようだが、それでも帝都を奪還しないわけにはいかない。

解放軍を再編して帝都に入って行き、外様である俺達とミズホ伯国軍は郊外に止め置かれていた。

テレーゼ自身がどう考えているのは不明だが、戦争にはつきものの略奪・婦女子への暴行などを防ぐためと、そろそろ内戦勝利後の

政治勢力図が気になる貴族達に説得されたのであろう。

「我らが帝都の住民達に注目されると困る貴族が多いのであろう。全く、ミズホ人達は帝都の政治になど興味が無いというのに……」

俺達の隣に陣を敷くミズホ上級伯爵が、こちらの本陣でエリーゼの淹れたお茶を飲みながら愚痴を溢す。

別に無理に入れて貰う必要も無いし、他にいくらでも仕事があるのでいらぬ勘繰りだと思っているようだ。

「帝都はお荷物というわけだな。ニュルンベルク公爵は」

テレーゼ達が帝都に入ってから三日が経つが、いまだに混乱は続いているようだ。

何でも、選帝侯や大物貴族はかなり殺害されていたが、肝心の皇帝と皇族は全員生きていたらしい。

クーデターを起こされた間抜けな皇帝なので退位を願いたいところではあるが、本人は『自分は皇帝選挙に勝って正式に即位した皇帝であるし、退位するかどうかは本人が決める』と言っているそうだ。

困った事に、皇帝の言っている事は法的に間違っているわけでもない。

むしろ強引に退位させてしまうと、それこそが違法行為になってしまう。

ニュルンベルク公爵がやった事と大差が無くなってしまうのだ。

結果、テレーゼは皇帝に手が出せない。

皇帝自身も、解放軍のトップが女のテレーゼなので自分は退位す

る必要は無いと思っているようだ。
勝手に帝都回復を布告してしまい、テレーゼ達との対立が深刻化している。

ニュルンベルク公爵は、自分に組する人達とその家族は全て自分の領地に連れて行ってしまった。
残されたのは、ニュルンベルク公爵がいた時には顔色を窺って従っていた連中と、軟禁されていた連中だけである。

彼らと皇帝には、反乱を起こしたニュルンベルク公爵に対して無力であったという危機感と罪悪感があった。
同時に、テレーゼ政権下では冷や飯食いになる事も理解している。

これに、せっかく解放軍に参加したのに、地位や利益の分配で当てが外れたと思っている解放軍貴族からも裏切り者が出て、双方の対立が先鋭化するのに二日とかからなかったわけだ。

皇帝派は皇宮で、テレーゼ達は帝国軍本部に居を置いて帝国を二分する争いになりそうだと、アルフォンスが深刻な顔で報告に来ていた。

「ニュルンベルク公爵は、今はテレーゼと直接対峙するのを避けたみたいだね」

「死に体の皇帝を利用して、テレーゼとの政治的な対立を画策するか」

「そういう事。あーーーあ。これで今までの苦労が全ておじゃんだ」

アルフォンスが帝都に戻ってから、いつもの面子で鍋を囲んでい

た。
俺達に、ハルカ、タケオミさん、導師、ブランタークさん、ミズホ上級伯爵、フィリップ、クリストフ。
そして、シュルツェ伯爵一行もであった。

俺は最悪殺されている可能性も考慮していたのだが、彼らは魔法使い以外は全員無事であった。
帝都が解放され俺達が郊外に陣を張っている事を知ると、こちらを頼って移動してきたのだ。

『申し訳ない。軍を率いていて大変なのに……』

『いえ。同じ王国貴族ではありませんか』

長期間軟禁されていたシュルツェ伯爵達は、疲れ切った表情で俺にお礼を述べた。
そんなシュルツェ伯爵は、物珍しそうに鍋を食べている。
そろそろ春になるが、北部にある帝都近郊はまだ朝晩と冷え込む事も多い。
ミズホ上級伯爵が準備した『フグチリ』は、身に沁み渡る美味さだ。

「あっさりしていて美味しいですね」

「いい出汁が出ているわね」

「高価そうなのもまた」

「一杯食べられる」

「珍しい物が食べられて得をした気分ですわ」

フグチリは、女性陣には好評であった。

「エルさん。はいどうぞ」

「ありがとう。ハルカさん」

エルは、ハルカから鍋をよそって貰って嬉しそうな顔をしていた。

そろそろ何かありそうな気がするなどと考えるのは、俺がひねくれているからなのであろうか？

「ところで、これの内臓などは無いのであるかな？」

「導師。食べると昇天してしまうそうだぞ」

「天にも昇る味なのであるか？」

「いいや。文字通りに昇天するんだよ。毒があるから」

「えーーーっ！　大丈夫なの？」

導師とブランタークさんの会話を聞いていたルイーゼが、毒と聞いて大声をあげてしまう。

「心配は無用だ。我が家の調理人は、みなフグの調理免許を持っているからの」

「フグを捌くのに免許がいるんだ」

「毒の部分を提供すると死人が出るからな。過去のフィリップ公爵領では、美味しいが死人が出る事が多いので運試しで食べる物とされていた。それを、我がミズホ伯国で完璧な調理体系を確立したわけだ」

昔から多くの犠牲者を出しながら、食べられる部位の研究や調理技術の研鑽を怠らなかったからこそ、今こうして美味しいフグが食べられるのだとミズホ上級伯爵は説明する。

「（フグなんて一回しか食べた事が無いけど、美味しいなぁ）」

俺のフグ経験は、会社の接待の席で食べたのみである。
久々のフグを、俺は堪能していた。

「ミズホ伯国には、全ての分野において独特の文化があるのですね」

フグチリ、焼きフグ、から揚げ、白子、雑炊と全てを食べたシュルツェ伯爵は初めてのミズホ料理に大満足のようだ。
食後の饅頭とお茶を楽しみつつ、早速に帝都の様子を話し始める。

「現在の帝都は、一言で言えば混乱しています」

「想像はつきますけどね」

シュルツェ伯爵の話によると、テレーゼ派と皇帝派がそれぞれに帝都の統治を行おうとして一部で睨み合いも発生しているらしい。

「末端の小貴族から、大物まで。『誰が皇帝についた。誰がテレーゼ殿を裏切った』とか。噂や怪文書レベルなので、真偽のほどは不明ですけどね」

行政、司法、軍事と全てでテレーゼ派と皇帝派に分かれてしまい、当然統治の効率は落ちて帝都の住民達の反発は大きかった。

「クーデター時には混乱を起こしましたが、その後の帝都統治でニュルンベルク公爵は隙を見せていません」

自分に従わない貴族には厳しかったし、ラン族やミズホ人を収容所送りにしている。

だが、普通に生活している住民達はニュルンベルク公爵にあまり不満を覚えていなかったそうだ。

「例の装置のせいで流通に多少影響は出ましたけどね。物価の上昇は強引な方法とはいえ抑えていましたし」

少し悪化した状態が数か月続いたが、人間とは意外と慣れてしまう物だ。

だが、そこに仲間割れをして統治に隙のある皇帝と解放軍が帝都に居座っている。

「フィリップ公爵閣下と共闘していたみなさんには悪いのですが、帝都の住民達に評判が悪いのは解放軍の方です」

「末端にいる諸侯軍兵士達の悪行を抑え切れないのであろう？」

「導師の仰る通りです」

勝者として帝都の入った解放軍の一部が、帝都内で略奪や婦女子への暴行を行っているらしい。

テレーゼは厳しく取り締まっているが、皇帝派との対立が原因で

それに割ける労力が減っていた。
ついでに言えば、そんな悪徳兵士と貴族でも政治的にはテレーゼの味方である。
裁けば裁くほど、テレーゼの力を落とす結果になっていた。

「皇帝派からの糾弾の原因にもなっています。私達が逃げて来たのも、その被害を恐れての事ですよ」

テレーゼがすぐに保護してくれたそうだが、同じく内戦中に軟禁されていた大使館に解放軍の一部が侵入しようとして騒ぎとなり、そこの職員達と在留王国人も連れてここに逃げてきたそうだ。

「明らかに略奪目的だったと思います。同じ理由で、収容所に入れられていたミズホ人もすぐに保護を受けましたよね？」

「ああ。すぐに保護したな」

ミズホ上級伯爵は、シュルツェ伯爵の問いにすぐに答えていた。

「在留ミズホ人には女子供もいるのでな。テレーゼ殿やバーデン公爵公子の息のかかった連中は大丈夫だが……」

急速に勢力が拡大した解放軍の末端には、碌に顔も知らない信用ならない貴族とその諸侯軍がいる。
現在帝都で、味方であるはずのテレーゼの足を引っ張っている連中だ。

「他国との戦争ならともかく、同じ帝国人にですか？」

「その認識は甘いですよ。バウマイスター伯爵」

「どういう事ですか？　クリストフ殿」

「同じ帝国人でも、ニュルンベルク公爵のミズホ人やラン族への対応を見ればわかるでしょう？」

確かに、同じ帝国人なのに扱いが酷いと感じてしまう。

「それに、同じ帝国人と言いますが、大半の田舎領地の領民は買い物で隣の領地に行くだけとかそんな感じなのですよ。領主から『お前は帝国の臣民だ』などと絶対に言われません。『～領の領民だ』と言われてそこで一生を過ごすのです」

そういえば、うちの実家でも王国の臣民だと自覚している者は少なかった。

バウマイスター騎士爵領の領民であるという感覚だけだ。

「彼らは、その狭い領地の景気や自分の懐具合だけが気になるわけです。そして、反乱とはいえ戦争になって出兵しました。彼らは、こう考えるわけです……」

「命を張って戦ったのだから、略奪や暴行は褒美であると？」

「そういう事です。彼らからすれば帝都は敵の牙城で、そこで家族のために金銭や物資を奪って何が悪い。女を襲うのは、買って無駄遣いをしたくない。勿論全員ではありませんよ。そういう者達もいるのです」

さすがは、元大貴族家の跡取りとでも言うべきか？

クリストフは、末端の兵士達の心情が良くわかっているようだ。

「ですが、普通に軍規違反ですよね？」

「だから、帝都に入るまでは軍規が機能していた」

その手の犯罪が起こると、テレーゼは厳格に裁いて処分していた。

「帝都に入ったので箍が外れたのだろうな。フィリップ公爵殿の把握可能な範囲を越えてしまったのであろう。皇帝派との対立で罰する能力が落ちたとも言う。下手に処罰して皇帝派に付かれてしまったらと言って弁護する貴族がいたのかもしれない」

「グダグダだな」

「こういう時には、可哀想だが違反者全員公開で首を刎ねるくらいしないと軍規が機能しなくなる。戦争で兵士のモラルを保持するのは本当に大変なんだ」

フィリップは、暗にテレーゼの事を批判していた。

「しかし、上手い手ですね」

「そうだな」

こうなってしまうと、帝都に住む人達の批判は前にクーデターを起こしたニュルンベルク公爵よりも、今帝都の治安を悪化させている皇帝とテレーゼに向かってしまう。

ニュルンベルク公爵は、自分が撃破すべき敵に仲間割れを起こさせて弱体化させ、時間差をつけて撃破しようとしているのであろう。

「もう一つ、問題があります。現在の帝都にはお金がありません」

シュルツェ伯爵達は、ニュルンベルク公爵の手の者達が急いで荷を南方に向けて運ぶのを目撃している。

間違いなく、皇家と帝国政府が有する移動可能な資産を全てニュルンベルク公爵領に持ち去ってしまったのであろう。

「だから、弱い軍勢を解放軍にぶつけて時間を稼いでいたのか……」

その間に、金、財宝、物資などを全て運び去ってしまった。

だから帝国は、これまで苦労してきた解放軍の貴族達に褒賞が渡せない。

無い袖は振れないわけで、これも末端諸侯軍兵士達の略奪を助長しているのであろう。

命をかけて無報酬では、彼らもやっていられなくて当然だ。

「もっと悪い事があります」

「帝国中央部北部地域と同じだろう。余剰の食料が無いと」

フィリップの予想通りであった。

帝国保有の余剰食糧は麦一粒残っていなかった。

凶作に備えて備蓄していた分まで、全て無くなっていたそうだ。

「住民からは一切徴発していないが、ニュルンベルク公爵は商人達に余剰分を一定価格で放出させたそうだ」

つまり、暫くは帝都の住民が飢える心配は無い。

その代わりに、あとひと月もすれば帝都の食料不足は深刻な物と

なる。
　他の地域から上手く輸送すれば問題ないが、今はそれを行える政治環境に無い。
　皇帝派とテレーゼ派で無用な争いを続けているからだ。
「解放軍は、多少の資金や食料を持っていたよな？」
　原資は、フィリップ公爵家とバーデン公爵家や他の貴族達の持ち寄りである。
　決して余裕は無いが、現在の皇帝と帝都よりは遥かにマシな財政状態であった。
「皇帝派が、それを供出しろと言って大問題になっているんだ」
「えーーーっ！」
　金も食料も後ろ盾も無い皇帝なので、どうにか帝都から立て直したいのであろう。
　その気持ちはわかるが、帝都解放の功労者達に銅貨一枚褒美を渡さず、逆に手弁当で準備してきた金と食料を差し出せと言うのだから恐れ入る。
　テレーゼ達からすれば、『そのくらい自分で何とか出来ないでどうする』という事になるわけだ。
「もしかして、俺達への報酬もゼロ？」
「前にも言った。無い袖は振れないと」
　フィリップの冷たい言葉が、俺の心に突き刺さる。

「これは困った……」

廃坑漁りで、ある程度の金・銀などはある。
食料も、今のところは魔法の袋の中に入れてある分で何とかなるはずだ。
だが、このまま放置しておくと食料不足で詰んでしまう。

「人数的には、前と変わらないんだよなぁ……」

千五百名ほどいた王国軍組も、これまでの戦闘で二百名ほどを失っている。
だがここに、シュルツェ伯爵達が入って人数的にさほど変化が無い。
食料は念には念を入れて在庫量を増やしていたが、それでも千五百名なら二か月ほどで空になってしまう。

「テレーゼに食料の補給を頼まないとな」

「そうですね。人数も増えていますし」

「まあ、前とそんなに変わらないですが……」

「いいえ。約三倍に増えますよ」

「えっ？」

俺は、シュルツェ伯爵の言葉に耳を疑ってしまう。
一体どこにそんな謎の王国人の集団がいるというのであろうか？

「フィリップ殿とクリストフ殿には申し上げ難いのですが……」

「捕虜を取っていたのか！」

二人が俺達に合流する羽目になった、王国軍先遣隊の潰滅。
兵員八千人の中から、三千五百名ほどが捕虜になって収容されているそうだ。

「捕虜として認められたようで、郊外の粗末な施設に置かれていると聞きました。食料事情などもあまり良くないそうで……」

シュルツェ伯爵からすると、同朋なので何とか保護して欲しいという気持ちなのであろう。

「それも含めて、明日テレーゼに直訴しに行きます」

翌日、俺は導師とエルを護衛に久しぶりに帝都に入る。
住民に人的被害はほとんど出ていなかったが、食糧備蓄に不安があるのでクーデター前ほどの活気は無い。
解放軍兵士の悪行に怯えて、家を閉ざしている住民も多かった。
先に皇宮前に行ってアポイントを取ってみるが、帝都の安定化に忙しいようで会ってはくれないそうだ。

「あからさまに、『他国の人間が何をしに来た?』という感じだな」

「会えば、これまでの報酬の話になるからであろうからな」

「ケチくさいですね」

「ケツの穴の小さい皇帝であるな」

導師の皇帝批判は容赦ない。
俺達を雇用しているのはテレーゼなので、そちらで何とかしろという考えが透けて見えるほどだ。
すぐにテレーゼが本陣を置く帝国軍本部の建物に入ると、こちらはすぐに彼女と会う事が出来た。

「ヴェンデリンよ。今生陛下に褒美を強請りに行ったのか？」

テレーゼの『今生陛下』という言い方で、彼への思いが良くわかるという物だ。
褒美の件は、皇帝が生きているために大半の権限が彼に移ってしまっている。
勿論彼女も出さないと駄目だが、今の財政状況で俺に褒美など出せば財政が破綻する。
他の貴族達から不公平だという不満が出れば、今度は解放軍勢力が崩壊するであろう。

だから、今の彼女は俺に褒美を出すとは決して言わなかった。

「ええ。駄目元で」

俺はテレーゼに、皇宮の入り口で門前払いを食らった事を教える。

「陛下は、妾が勝手にヘルムート王国の魔法使いや軍人を雇用した事をそれはお怒りになっておってな。ヴェンデリンへの報酬など、舌を出すのも嫌であろうな」

「予想通りとはいえ……」

俺は、一瞬だけ導師に視線を向けるがその表情はかなり渋かった

と思う。
皇帝がニュルンベルク公爵に嵌められて金や食料が無い帝都を押し付けられたのと、働いた俺達へ報酬を出す話はまるで別だからだ。
しかし、テレーゼもいい根性をしている。
自分達も苦しいのはわかるが、これまで俺達は散々苦労して来たのだ。
その報酬を出さないのでは、皇帝の事など言えないのではないかと。

「領地ならば、妾は考慮可能なのじゃが……」

「他国の飛び地などいりませんが……」

俺には、既にバウマイスター伯爵領がある。
他の飛び地など、管理する手間が面倒臭かった。

「我らが皇帝陛下は、ヴェンデリンと同じ考えのようじゃな。他国の者や、ましてや仮想敵国であるミズホ伯国に領地などやれぬと仰せだ」

「じゃあ、何をくれるのですか？」

「原資が無いからのぉ……」

その原資は、全てニュルンベルク公爵が持ち去っている。
おかげで、反ニュルンベルク公爵派は皇帝派、テレーゼ派、外様派に三つに割れている。
外様派というのは、数は少ないが両方について行けないと考えている俺達の事だ。

現状で、俺達外様派はテレーゼの下に素直につけるはずがない。
完全に第三勢力と考えて貰って結構なほどだ。

「砂上の楼閣に居座っている皇帝陛下の、これからの戦略に興味があるのである」

「導師も辛辣じゃの」

導師の言う通りに、皇帝アーカート十七世の権力基盤は弱い。
解放軍に参加している貴族達は全員、彼がクーデターを起こされた責任を取って引退すると考えていた。
それが自由になると、平然と皇帝として振る舞おうとする。

そのせいで、テレーゼは足を引っ張られている。
帝都の統治すら分割してしまい、いまだに混乱から脱せないでいた。

「金銭は、ニュルンベルク公爵領を落として取り戻すしかないの。ただ、焦りは禁物じゃ……」

ニュルンベルク公爵は帝都を放棄する過程で多数の精鋭を失ったが、致命的な人数ではない。
むしろ、帝都から自分に組みする人達を連れて行っているので、戦力的には増している可能性があった。
金銭も物資も食料も豊富なので、数年は余裕で戦えるはずだ。

「そこに無策で攻め込めば、南部はニュルンベルク公爵の庭じゃ。いいようにやられるであろうな」

あの六日間の戦闘で、ニュルンベルク公爵の軍人としての能力は

世間に知れ渡った。
それと、南部にはやはり巨大な地下遺跡などがあるのであろう。
古代魔法文明時代の遺産を利用して、ミズホ伯国の戦闘力まで封じてしまったのだから。

「爆発するゴーレムか。厄介じゃの……」

加えて、例の移動と通信魔法を封印する装置は帝都には残っていなかった。
元から無かったか、南部に持ち去ってしまったのであろう。

「（あの装置が無ければ、とっくに損切りをして王国に戻るのに……）」

更に、古代魔法文明時代のゴーレム駆使した戦術で将来王国に攻められでもすると、俺の後半生が詰んでしまう可能性がある。
何しろ、ニュルンベルク公爵は俺を敵対視しているのだから。

「（討たねばならないが……）」

王国に戻って対策を考えるという手もあったが、やはり現地に残って対策を立てた方が良いであろう。
フィリップ、クリストフ、シュルツェ伯爵もまだ王国に戻るつもりはないらしい。
あまりに状況が流動的なので、このまま放置は出来ないそうだ。

俺は自分本位の考え方だが、三人は王国の臣として隣国の混乱をどうにかしようとしているわけだ。

『通信が阻害されたままです。これでは、現地協力者や密偵を使っ

た情報収集すら難しい』

シュルツェ伯爵の意見により、総勢五千名弱にまで増えた王国軍組は郊外に陣を張って状況を見守る事になる。

魔導飛行船も動かないので、彼らを王国に帰すには船か徒歩か馬車しか手段が無いという理由もあるのだが。

「その前に、魔導飛行船は全て魔晶石は抜かれておったの」

「どうせ碌な事に使わないでしょうね」

動かないから一緒という意見もあったが、ニュルンベルク公爵は帝都のあった魔導飛行船全ての魔晶石まで抜いて持ち去っている。

あの大きさの魔晶石を兵器に転用でもされたら、今の分裂状態である帝国軍は簡単に負けてしまうかもしれない。

帝都解放で全体の兵力数は上がった。

ニュルンベルク公爵に当主が軟禁されていたり、面従腹背であった貴族の兵が合流しているからだ。

帝国軍も同様で、ニュルンベルク公爵に付いていかなかった連中が再び皇帝陛下に忠誠を誓っている。

「皇帝派は数が増えたが、軍の質は当てにならぬ。うちから裏切った微妙な者達も多いしの。ニュルンベルク公爵に従わなかった者の大半は、ニュルンベルク公爵からいらない奴扱いされた者も多いという事実もある」

「役に立つ人なら、ニュルンベルク公爵も勧誘くらいはしますよね？」

「厚遇も約束するであろうからの。それに皇帝派は妾達と分裂状態

なので数が揃わぬ。軍資金も食料も無いのですぐにニュルンベルク公爵領へ攻め入るわけにもいかぬしの」

現状では、全く身動きが取れない状態のようだ。

「それよりも、解放軍の悪評を聞いていますが」

「略奪に、婦女子への暴行であろう。少し処罰するのに手間がかかっての。これも妾の不徳の致すところであるな」

軍規に照らし合わせて、数百名を処刑したそうだ。

ところが、その兵を抱えている貴族とは決定的に揉めてしまったらしい。

「領地に帰れば、良い父で夫なのだそうじゃ。刑の軽減を求めてきたが、それは出来ぬと突っぱねた」

当然双方にシコリは残り、彼らは皇帝派に付いてしまった。

味方を増やしたい皇帝派は、彼らを喜んで受け入れたそうだ。

「終わってるな」

「エルヴィンのように考えるのが普通であろうな。じゃが、皇帝陛下は支持基盤が弱いのでな」

他にも佞臣のような連中が集い、段々と帝都の政治が駄目になっているのをテレーゼは実感しているそうだ。

皇帝を抑える役目をする議会も、今は議員の死亡と皇帝派とテレーゼ派への分裂で機能していない。

「ニュルンベルク公爵は悪辣ですね」

「ここまで読んでの、帝都放棄であろうからの」

このまま推移すれば、帝都のどころか帝国の臣民の多数が皇帝に失望してしまう。

そして、ニュルンベルク公爵に期待してしまう未来すらあり得るのだ。

「それで、テレーゼ殿はどうするのですか？」

「一度領地に戻るであろうな」

今の皇帝が退位しない以上は、テレーゼには何も出来ない。

周囲が自分と皇帝との確執を囃し立てるが、それは迷惑なのだという。

「いまだ時の利きたらずじゃの。もう少しで皇帝陛下が褒美を出すそうじゃ。もっとも、金銭は無いので勲章、役職、あとは領地で済ますであろうな。ヴェンデリン達については妾も読めぬ」

それからすぐに、俺達はテレーゼの元を辞していた。

「テレーゼ様は苦悩しておられるのである」

「現状ではどうにもなりませんしね」

まさか、皇帝が退位しないという予想はしていなかったのであろう。

俺が最初に感じたアーカート十七世像は、育ちの良い調整型の無

難な皇帝としての資質アリであった。
平和な世なら、特にトラブルも無く普通に統治をしていたはずだ。
それが、ニュルンベルク公爵のせいで無理をして壊れつつあるのだから、ある意味あの人も反乱の犠牲者なのであろう。
「ヴェルはそう言うけど、巻き込まれる身としては堪らないぜ」
「エルヴィン少年の言う通りであるな。末端ほど死が現実の物となっていく」
間違いなく、褒美と言う名の領地変えで皇家の力を増し、秋の収穫後にニュルンベルク公爵領に大軍を派遣して勝利を収めるつもりだと思われる。
「俺が気が付くくらいだから、ニュルンベルク公爵が気が付かないわけがないよな」
「またゴーレム集団であるか……」
例の装置のせいで飛べない導師は、大量のゴーレムに囲まれて難儀していた。
壊すと自爆するので自然と『魔法障壁』を使ってしまい、予想以上に魔力を消費して早めに戦闘力を落としてしまったのだそうだ。
「最終兵器と呼ばれた某が面目次第も無いのである」
大量の自爆型ゴーレムばかり倒して戦闘が終わった導師が、すまなそうな表情を浮かべる。

「それはこちらでも対策を考えるとして、今は褒美がどうなるかですね」

などと話しながら帝都郊外の陣地に戻ってから一週間後、俺達は突如皇宮に呼ばれた。

身なりの良いアーカート十七世が座る玉座の前に跪くと、彼は侍従にある物を持って来させていた。

「聞けば、テレーゼが勝手にこの国の名誉伯爵にしたとか？　一代限りなので認めはするが、テレーゼももう少し考えて欲しかったものだな」

「左様にございますな。まあ、所詮は女の浅知恵です」

アーカート十七世は、いきなりテレーゼの批判を始めた。

こういう公式の席では『フィリップ公爵』と呼ぶのが普通なのだが、それすら無視してテレーゼと呼び捨てにしている。

対立しているし、彼女が女なので侮っている部分もあるのであろう。

隣にいる金キラに着飾った貴族が追従するが、どう見てもただの腰巾着にしか見えない。

「正式な褒美は、反逆者ニュルンベルク公爵を退治して後に支払ってやろう。それまでは、そうだの。サーカットの町にでも駐留して待っていてくれ」

そう言うと、俺にボロい上着を渡した。

侍従の一人が恭しくお盆の上に載せて持ってきた物だ。

「七代前の皇帝が愛用していた上着だ。これを賜るとは大変に名誉

なので、心して受け取るように」

「ははっ」

それだけで、俺達の謁見は終了していた。

他が詰まっているので、とっとと終わらせたみたいだ。

「伯爵様。その上着に何かあるのか？」

俺が上着の質を確認していると、ブランタークさんはその意図を尋ねてくる。

「ええと。皇帝から下賜された物だから実は高価な魔道具とか？」

「そうでは無いのは、伯爵様ならわかると思うが」

「それはそうなのですが、実は過去に高名な職人が作って希少価値があるとか、材料に高価な材料とか……」

「作りは良いと思いますが、普通の古い上着です」

「やっぱり……」

自分も服を作るので、エリーゼはその分野には詳しい。

すぐに、普通のオーダーメイド服だと鑑定する。

「昔から良くあるのである。金が無い王様や皇帝が、自分や先祖の日用品を名誉だといって下賜するのが」

「やっぱりそういう事か」

導師の発言にガッカリしながら、俺達は野戦陣地に戻ってくる。
すると、そこでミズホ上級伯爵が薪割りの台の上で何かを真っ二つに斬っていた。

「ミズホ上級伯爵？」

「バウマイスター伯爵は、そのボロい上着か。ワシは粗悪な兜であったぞ」

俺達の前に、ミズホ上級伯爵も皇帝に呼ばれていたようだ。

「ありがたくも、ミズホ上級伯爵の爵位と、ミズホ伯国の臣従を認めるだそうだ。褒美は、ニュルンベルク公爵討伐後に。今は五代前の皇帝が愛用していた兜を下賜するだとよ！」

一万五千人からの兵を出してかなりの犠牲も出しているのに、ミズホ上級伯爵への恩賞も俺達と似たような物であった。
激怒して当然かもしれない。

「あとは、バウマイスター伯爵と共に同じくサーカットの町で待てだそうだ。帝都近郊にワシらが陣を張っていると臣民達が不安になるとな。自分の無能さを棚に上げて良く言うわ！」

「まあまあ。こんな景気の悪い場所はとっとと引き揚げましょう」

「それもそうだな。これ以上、あのバカの顔を拝んでも意味がない」

俺達王国軍組と、ミズホ伯国軍は帝都近郊から急ぎ指定された駐屯地であるサーカットの町へと向かう。

ようやく帝都は解放されたのに、それはニュルンベルク公爵の罠で戦況が不利になってしまった。

テレーゼとも隔意を感じた俺達は、今は臥薪嘗胆の時期であると今は怒りを奥底に仕舞うのであった。

第九十八話　軍資金を稼ぐ。

結局、俺達王国軍組とミズホ伯国軍は、帝都周辺から追い出されるようにサーカットの町に移動していた。
皇帝陛下の下の、そのまた更に下の腰巾着が偉そうに事情を説明しに来たが、来る収穫後のニュルンベルク公爵討伐に備えて統治体制の強化と準備が必要なので、帝都周辺に怪しげな外国人がいては困るのだという。

俺達はそう言われても我慢できるが、ミズホ上級伯爵にそれを言うとはバカの極みであろう。
その使者が帰った後、彼は先に真っ二つにしてから御用職人に修復させていた昔の皇帝陛下御愛用の兜を、再びミズホ刀で真っ二つに切り裂いていた。
相変わらず、惚れ惚れするほどの刀の腕前である。

『その兜。直していたんですね……』

『イーナ殿よ。直さねば、また真っ二つに出来まいて』

『それはそうですね……』

『さすがに、四つに割ると修復が困難なのでな』

『はあ……』

イーナが再び真っ二つになった兜を見て顔を引き攣らせ、ミズホ上級伯爵の方は満面の笑みで答えていた。

兜を斬って、ストレスが大分緩和したのであろう。

しかし、ミズホ上級伯爵家お抱えの職人は優秀だ。
短い期間で、真っ二つになった兜を完璧に修復したのだから。
さすがに、皇帝から下賜された物を壊すのは風聞が悪いので直させているのであろう。
いや、正確には壊れているのを外部の人間に見られると、風聞が悪いというのが正解であろうか？

それを俺達の前で見せるとは、どうやら仲間扱いしてくれているようだ。

『でも、いくら真っ二つにしても安心だね。優秀な職人さんが直してくれるから』

『確かに継ぎ目がわからないほど完璧に直してありますが、そういう問題ではないでしょうに……』

ルイーゼからすると、直せるのであればミズホ上級伯爵がストレス発散で兜を真っ二つに切り裂いても問題ないと思っているわけだ。
カタリーナからすれば、皇帝から下賜された品に何て事をという考えなのであろうが。

『私達には優秀な職人がいないから、その上着を真っ二つに出来ない』

『そうか。それは残念であるな』

ヴィルマと導師が、とんでもない事を口にしている。

俺への名誉の下賜品は、少しボロい上着一着である。
確かに素材は良いのだが、もう古いし、デザインも今風ではない。
着る事も出来ないので、昔にエーリッヒ兄さんが誕生日にプレゼントしてくれた服の方がよっぽど気が利いているくらいだ。
俺も燃やしてやりたい心境にはあったが、さすがにそれをすると皇帝に無礼を働いたという攻撃の材料にされかねない。

半永久的に、魔法の袋の肥やしにする事を決意する。

『ヴィルマさんも、伯父様も。こういう品はちゃんと保存しないといけませんよ』

昔から、金の無い貴族や王様などが名誉だからと言って愛用の品を渡して褒美を誤魔化すケースがある。
江戸時代に、商人から借りた金を返せない大名がそれを帳消しにするために、殿様が着ていた服や愛用品を渡すのと同じだ。

『今は価値がありませんが、後世では名誉になるかと』

貰った方も、まさかくれた相手の前でガッカリするわけにもいかない。
ここは喜んで貰っておいて、今は損でも何世代か後に屋敷に飾って名誉だと言って自慢したりするのだとエリーゼは説明していた。

『長期的には、少しは取り戻せるのか？』

『あなた。その考え方は商人の物ですが……』

『現実問題として、食料と金の問題がある』

皇帝は、秋の収穫後にニュルンベルク公爵の討伐軍を起こし、その戦利品で俺達に褒美を支払うという考えを持っている。
今は出せないので、こんなボロい兜なり上着で誤魔化しているのであろう。

『テレーゼから食料の補給はきているが、これもギリギリの量だし、フィリップ公爵家の財政も相当に厳しいはずだ』

こういう時に備えて普段から節約に励む貴族だが、数か月も帝国北部の諸侯を率いて内乱を戦ってきたのだ。
内情は火の車のはずだ。

『秋の収穫まで兵を動かさないのであれば、我がミズホ伯国軍も兵数の削減をしないと財政が厳しいな』

一万五千人ほどを連れていて、その内千二百四十七人を戦死させたそうだ。
ニュルンベルク公爵に攻撃手段をかなり防がれたとはいえ、その精強さで犠牲は少ない諸侯に数えられる。
ミズホ上級伯爵は、何かあった時のためにこのサーカットの町に五千人ほどを残して一時領地に戻ると宣言していた。

『職人達に発破をかけないとな。鹵獲したゴーレムの残骸の解析もある。魔銃も出来る限り改良して数も増やさなければ』

ミズホ上級伯爵は、ニュルンベルク公爵を討てなかった事が相当に悔しかったようだ。
秋までに、ミズホ伯国軍の戦力を更に強化すると宣言していた。

『テレーゼ殿も、一度フィリップ公爵領に戻ると聞いている』

ミズホ上級伯爵からの情報によると、テレーゼと皇帝は対立はしたものの、さすがに内紛ともなればニュルンベルク公爵を利するだけだと互いに妥協点を見い出したそうだ。

『帝都を押さえたとはいえ、皇帝の権威と統治能力は地に落ちているからな』

今は帝国中央部の統治すら完璧に行えていない。

そこで、ソビット大荒地以北の統治をテレーゼに一時委託するそうだ。

『一応、領地の加増転封などの布告は出ているそうだ。実際に行うのは、ニュルンベルク公爵討伐後だそうだが……』

今でも混乱しているのに、領地の変更など行ったらそれを助長するだけなので当然であろう。

ただし、それは褒美の凍結でもあるので解放軍に参加していた貴族達の不満は溜まっている。

『今でも、持ち出しばかりで借金で首が回らない貴族もいるのに……』

『だから、ソビット大荒地以北はテレーゼ殿に任せるのだ。解放軍に参加していた者も多いからな』

皇帝が、その不満をテレーゼに向けさせようとしている意図は明白であった。

『それって、東部と西部もですか?』

『当然そうなる。何しろ、選帝侯家が碌に機能しておらぬのでな』

当主を人質にされていたと思ったら殺されていて、家臣や兵員は俺達や解放軍との戦いで擦り減らされている。

戦費で財政も悪化し、フィリップ公爵家とバーデン公爵家以外はほぼ死に体の状態らしい。

『バーデン公爵家は公子殿が正式に家督を継いだが、あそこも損害を出しているからの』

反乱軍との戦闘による兵員の消耗に、彼は帝都にいる父親を非情の決断で切って解放軍に参加した。

やはり、帝都にいたバーデン公爵家の関係者は全て処刑されていたそうだ。

『それでもマシだと思うが、彼はテレーゼ派と見られて皇帝に嫌われたからな』

テレーゼと同じく東部の領地に戻って諸侯の取り纏めをするそうだが、南部寄りの東部諸侯の中にはニュルンベルク公爵に付く事を表明している貴族がいる。

既に、反ニュルンベルク公爵派の貴族との小競り合いが始まっているそうだ。

『大丈夫かな？　新バーデン公爵殿は？』

『前は無理な侵攻作戦のせいで小僧扱いしたが、少し可哀想になってきたな』

一度失敗してからのバーデン公爵公子は、真面目に堅実に解放軍の一翼を指揮して戦果を挙げている。
苦労もしているので、もうミズホ上級伯爵もわだかまりを抱いていなかった。

『東部はまだ何とかなるな。問題は西部であろうな』

西部領域には、選帝侯家が三つも存在している。
大ダメージを受けた彼らに西部の安定した統治など不可能で、東部と同じく南部寄りの諸侯にはニュルンベルク公爵に味方している者も多い。
当然小競り合いは始まっていて、現在一番混乱している地域だそうだ。

『その前に、当主争いで揉めている家もあるからな』

亡くなった当主が次期後継者を指名しないまま、ニュルンベルク公爵に殺されてしまった公爵家もあるそうだ。
複数の候補者が『自分に継がせろ！』皇帝に直訴し、他の貴族達と組んで醜い家督争いを始めてしまった。
当然、自分の領地も混乱しているのに西部の統括など不可能である。

『皇帝が当てにならないから、テレーゼ殿に後ろ盾を頼む後継者候補もいてな。それを知った皇帝がお冠なのだよ』

自分に調整能力が不足しているからなのに、テレーゼが差し出口を利いていると激怒しているそうだ。

『頭が痛くなってきた。ニュルンベルク公爵は恐ろしい人だな』

『ああ。目的のために手段を選ばぬ』

帝都を放棄した時点で、普通ならば不利になるはずなのに逆に有利になっている。

なぜ選帝侯とは違って皇帝を生かしていたのか、彼の策士ぶりが今になって理解できてしまう。

『バウマイスター伯爵。これはもうひと波乱あるぞ』

『ですね』

皇帝は、じきにニュルンベルク公爵に叩き潰される。

帝都、帝国中央部、西部の大半も再び彼の手に落ちるであろう。

『魔法使いの不備を、古代魔法文明時代の遺品で補って強化された軍勢を持ってしてな』

それは、俺も、テレーゼも　ミズホ上級伯爵もわかっている。

だが、帝都に皇帝がいる以上は対策が取れない。

それこそ、クーデターでも起こして彼を皇帝の椅子から引きずり降ろすしかないであろう。

それをすれば、ニュルンベルク公爵と同じく反逆者の汚名を背負う事になるが。

『よって、ワシは領地で準備を整える』

色々と準備が必要であるし、全軍をここに駐屯させるとサーカットの町への負担が大きいからだ。

さすがに何も支援が無いのは問題なので、皇帝はサーカットの町から中央に納める税を秋まで免除すると言ってきた。
その資金を用いて、何とか秋まで凌いで欲しいという意図のようだ。

ただ、元から五万人しかいない町と砦に二万人の軍が駐屯すれば問題になる。
うちは減らせないので合計で一万人、半数にしてあとはテレーゼと共同で補給を送るそうだ。

『食料と交易品を持ってくるから、その販売益で一万人を秋まで養って欲しい』

『何とかしますけどね』

『バウマイスター伯爵殿は、我らの文化や気質に理解が深い。家臣や兵達にも人気があるので、安心して任せられる。こうなれば秋以降に暴れてやるわ』

『そうですね。もう少しこちらに行動の自由があれば』

どうせ命がけなのだから、もう少し自由に動きたい物だ。
そのためにも、可哀想だが邪魔な皇帝はニュルンベルク公爵に消して貰うとしよう。
しかし、本当にいるとマイナスになる皇帝が存在するとは。
せめて、お飾り程度の価値はあって欲しい物だ。

「ふーーーん。ミズホ上級伯爵がここを発つ前にそんな事をね」

ミズホ上級伯爵達がサーカットの町を発った一週間後、いきなり訪ねてきたアルフォンスは俺の話に納得した表情を浮かべていた。

彼はテレーゼ達が軍勢と共にフィリップ公爵領に戻るので、途中自分だけが挨拶に来てくれたのだ。

「テレーゼはヴェンデリンに会いたがっていたけど、さすがに今はまずい」

「皇帝が五月蠅いだろうからな」

テレーゼが自分を追い落とすために、俺と密会している。

そんな噂が出ないために、彼女は帝都に入ってから俺と一回しか会っていなかった。

「帝都での混乱はまだ続いているからね。何が起こるか想像もつかない。行動は慎重に」

「それで、食糧くらいは送ってくれるのか？」

「量は大分減る」

「ミズホ上級伯爵の分も合わせて、あとは自力だなぁ……」

現在、一万人の軍勢は手分けして働いている。

幸いにして、サーカットの町にいる代官以下の役人達は俺に好意的であった。

短い軍政時代に、開発に魔法で協力をしたからだ。

中央に税を納めないで、こちらを養う案も理解してくれた。

帝都から、その件を記した指令書もきたので法的な根拠もある。
代官達への給金が出ていれば、彼らも反対する理由は無いというわけだ。

「王国軍組で、書類仕事などが得意なのはクリストフとシュルツェ伯爵に預けて代官達の統治に協力させている」

俺が土地を切り開いたので、そこに移住をしてくる人が増えたそうだ。
その分行政の仕事が増えたのに、中央は増員を寄越さず困っていた。
俺達への嫌がらせか、お役人特有の仕事が遅いせいか、いまだに帝都が混乱しているのでそれが出来ないのか？
どれもありそうな気がするが、そこでこの手の仕事が得意なクリストフ達に任せる事にしたのだ。

あとは、兵士達に俺が切り開いた土地に家屋を建てさせている。
材料は俺が切り出した石材で、戦時以外は砦の守備兵以外はなるべく普通の生活をさせるためだ。
当然訓練もちゃんとするし、建築した家は俺達がいなくなった後は移住者に提供する。
自分達以外が住む住居も、出来る限り建設させる予定であった。

「周辺の土地の開墾もさせている」

いきなり小麦は不可能だが、馬の餌用にバカ大根と、蕎麦、稗、粟などを作らせる。
秋までに一回は収穫できるであろう。

他にも、交代で近隣の魔物の領域に狩りにも行かせている。
肉を確保して、毛皮や採集物なども販売して利益を得るためだ。
これの統率は、導師、ブランタークさん、カタリーナ、ヴィルマが担当していた。

エルとハルカはフィリップの元で指揮官としての訓練を受けている。
帝都の大使館にいた王国軍人もいるので、彼らも手を貸してくれていた。

『王国軍組が増えた。最低でも千人は任せる。秋までに覚えろ』

最初の紛争での対応でケチは付いたが、フィリップは優秀な指揮官として俺達からの評価を上げていた。
エルの教官としては最適でもあったのだ。

「ヴェンデリンは何をしているのかな？」

「廃坑漁りをね」

この近辺の廃坑に行って、また金属収集に精を出していた。
許可は、サーカットの町の代官が帝都に書類を送るそうだ。

「あとは、鉱毒の受け入れかな」

廃坑漁りと、鉱毒から使える金属を抽出する魔法使いは多いので許可は簡単に出るそうだ。
それほど儲かる物でも無いのが常識なので、テレーゼも簡単に許可を出している。
俺が担当すれば予想以上の副収入になるのだが、それをわざわざ

あの皇帝に教えてやる義理もない。

「ヴェンデリン。君は逞しいね」

「そうかな？」

「ああ。あのテレーゼが君を気に入るわけだ」

「テレーゼねぇ……」

最近は疎遠ではあるが、元気なのであろうか？

「彼女も相当に参っているね」

「そうなのか？」

「わずか十五歳でフィリップ公爵家の独裁権を確立した女傑だけど、私は付き合いが長い従兄だからわかるんだ。彼女は本当はそんな生活を望んでいない。可能ならば、公爵位も次期皇帝候補も投げ出して、ヴェンデリンの奥さんにでもなりたいんだよ」

だが、他に候補がいないからそれが出来なかった。

「ああ見えて責任感があるからね。嫌なら放棄すればいいのに、フィリップ公爵領の領民達と、今は帝国の臣民達が見捨てられない。以前からヴェンデリンに無理に迫って細君達に派手に妨害されているけど、実はああいうやり取りですらテレーゼは結構楽しんでいてね……」

「そうなのか？」

かなり手酷く拒否しているように見えるのだが、テレーゼはマゾなのであろうか？

「彼女はフィリップ公爵で、領内で彼女の意向に逆らう人なんていない。それが独裁権のある領主なのだけど、彼女は心の中でそれを疑問に感じている。無理にヴェンデリンに迫って拒否されるのは、彼女が人間としてバランスを取ろうとしているからなんだ」

「それは知らなかった」

「それだけの重責だからね。そして、今回の件で打ちひしがれていると思う」

「皇帝の件か？」

「そうだね。これはヴェンデリンにしか言わないけど、テレーゼは皇帝の器じゃない」

「おい……」

あまりに不謹慎な発言なので、導師ですら目を見開いて驚いていた。

「彼女はフィリップ公爵までが限界だと思う。北部諸侯を纏めてここまで頑張ってきたけど、自分が女だからと遠慮してニュルンベルク公爵みたいに非情の決断が出来なかった。まずは、バーデン公爵公子の暴走を防げなかったよね？」

「あれは、他の人が総大将でも同じ結果なのでは？」

「かもしれないけど、ニュルンベルク公爵が同じ立場なら許すと思うかい？」

「いや……。許さないはずだ……」

確かに、アルフォンスの言う通りだ。

あのニュルンベルク公爵が、自身の戦略構想を邪魔する軍事行動など許すはずがない。

強権を発動してでも、作戦を中止させたはずだ。

「皇帝が引退しなかった件もだ。もしテレーゼが男なら、多分皇帝は諦めていた」

テレーゼが女だから、皇帝は自分の復権を夢見て引退しなかった。

そのせいで、今の帝国は混乱しているとも言える。

元が日本人の俺からすると女性差別的な発想ではあったが、これがこの世界の現実なのだ。

「テレーゼは強引にでも皇帝を押し込めるべきだった。実は、私もバーデン公爵公子……、今は新バーデン公爵か。それを勧めたけど、彼女は法秩序は乱せないと言ってその策を実行しなかった。彼女は甘いんだ。ここ一番の時に。平時の皇帝ならそれでも構わないけど、今は緊急事態だ」

顔に苦悩を浮かべるアルフォンスの話に、俺は相槌を打つのが精一杯であった。

「そうか……」

「あの……。どうぞ」

「すまない。エリーゼ殿」

珍しく真面目に語り続けるアルフォンスに、エリーゼが気を利かせて濃い目のマテ茶を出し、彼はそれを一気に飲み干す。

「皇帝は、秋までにニュルンベルク公爵討伐の準備を進める。食料も、収穫があれば不足はしないからね」

「それで、どの程度の兵数で攻めるつもりなのであるか？」

「動員予定は、三十万人」

「多いな……」

導師は、その動員数の多さに驚いているようだ。

「それほど問題無く集められます。帝国の統治機構は麻痺しているのであって、崩壊したわけではない。遠征軍を食わせられる食料を確保すればいい。褒美は、南部諸侯が消えるので土地があるし、ニュルンベルク公爵が持ち去った金銭と財宝に、ニュルンベルク公爵家が保持している分もある。あの家は金持ちですからね」

「人の財布で戦争とは恐れ入る」

「皇帝としては、そう言うしか無いでしょう。現実問題として皇宮の金庫は空なのですから。それよりも、相手はニュルンベルク公爵です。しかも、領地防衛なので地の利もあります。五倍揃えても負けるでしょうね。ついでに言うと、我々は不参加です」

俺達とミズホ伯国軍は論外だし、テレーゼとバーデン公爵は留守中の帝国の治安維持のためだそうだ。
勿論それは表向きの理由で、実際にはこれ以上の戦果を挙げられては困るというわけだ。

「損害が出ないと思えばラッキーだろう？」

「ヴェンデリンの言う通りだな。とにかく、ほぼ百パーセント皇帝は負ける。周囲にはイエスマンの無能しかいないからな。負けてから、我々が再び動くしかない。ただ……」

「また女のテレーゼだと同じ事の繰り返しか」

「こんな事はフィリップ公爵家では言えないが、この国では女帝は数百年早い。せめて平和な時代の継承なら……」

「だが、他に候補者もいないよな。バーデン公爵はどうだ？」

「彼は最初の敗戦で自覚している。自分の皇帝としての才能はテレーゼに劣ると。とてもこの重責を受ける余裕はないそうだ」

父親の死で受け継いだバーデン公爵家の運営だけで精一杯という認識のようだ。
となると、今は暫定でもテレーゼをトップに頂いて動くしかないわけだ。

「秋までは兵の訓練と、サーカットの強化に奮戦するしかないな」

「ヴェンデリンが防衛している拠点にいきなり攻め込むほど、ニュ

ルンベルク公爵もバカだとは思わないけどね。とにかく頼むよ」

アルフォンスは自分が言いたかった事を全部話すと、フィリップ公爵領に向けて出発していた。

「帝国の前途は多難だなぁ」

「俺達の前途もですよ。ブランタークさん」

「まさか、一年以上も帝国に残る羽目になるとは思わなかった」

みんな、それぞれに自分の仕事に戻っていく。

俺も、今日は空いている土地を開墾する仕事が忙しい。

今ならば、秋に収穫可能なように種を植える事が可能だからだ。

食料は足りているが、この先何があるかわからない。

困窮作物でも無いよりはマシだと考えて、兵士達に栽培するように命令していた。

「バウマイスター伯爵様。肥料が出来ましたよ」

ミズホ伯国軍の魔法使い達が、大量に肥料を作っていた。

開墾で発生した草木、糞尿、生ごみ、狩猟で得た動物や魔物の使わない部分。

これらを混ぜながら発酵させ、混ぜてからまた発酵という作業を繰り返して数時間で使える肥料を生成するのだ。

「手馴れているな」

「ええ。攻撃魔法の練習ばかりしても生産力は上がりませんからね」

ミズホ伯国の魔法使いは、食糧の増産と品質向上のためなら魔法の行使を躊躇わないのが伝統だそうだ。
開墾をしている魔法使いの仕事ぶりも手馴れていた。

「二年あれば、米が作れるんですけどね」

「そうだな」

「米は、お館様が優先的に送ってくれるそうです」

戦場でも、ミズホ人は米を食べる事に拘っていた。
パンだと力が出ないと言っていて、俺もそれには納得が出来た。
今では俺も、ほぼ米を食べる生活になっている。

「食糧は何とかなるとして、問題は金ですかね……」

一万人に無給というわけにもいかない。
いや、ミズホ伯国軍人はミズホ伯国が面倒を見るので、実質は五千人か。
貧しさから犯罪に走られると、サーカットの住民に恨まれてしまうからだ。
ミズホ伯国軍には給金が出ているが、うちにはミズホ伯国のような供給先は無い。

「捕虜になっていた連中は、ようやく虚脱から脱して真面目に訓練や仕事をしているからなぁ……。小遣い程度でも与えないと」

シュルツェ伯爵が僅かに生き残っていた密偵に、今までの状況を記した手紙を託して王国へと送り出していた。
生存者名簿もあるので、王都にいる陛下に届けば対応してくれる

であろうが、彼らの給金は王国にいる家族にでも渡すしかない。
本人が金を使おうと考えても、銀行のＡＴＭがあるわけでもないので引き出す事も不可能であった。

「衣食住は出来る限りこちらで負担して、あとは小遣い銭くらい渡して何とかするか……」

住居は自分達で作っている、衣服は最低限の物を一括購入して支給、食事は三食出す。
あとは、週に一度二百セントくらいを渡す事にした。
これは一般の兵士で、他の指揮官や貴族もいるので金額は考慮しないといけない。

全部手弁当で出している俺も大概だが、幸いにして王国軍組の纏まりは良かった。

『そりゃあ、ヴェルに逆らうと小遣いが出ないからな』

フィリップ、クリストフ、捕虜になっていた連中はほぼ無一文なので、金をくれる俺に逆らわないで当然だとエルが言っていた。

「何か金を稼ぐ手段は無いかな……」

ミズホ伯国産の物産販売益の一部、魔物の素材、採集物、町から依頼を受けた建設・整地工事の依頼、道路建設、廃坑からの採集物。
収入が支出を超えずに、俺の資産が減る一方である。
何とか金を稼ぐ手段を考えないといけない。

「うーーーん」

考えながら歩いていると、ミズホ人の職人達が輸送されてきた物品を確認している最中であった。
よく見ると、伊万里焼に似た磁器のようだ。

「バウマイスター伯爵様。何かご用件でも？」

「ただの散歩さ。ところで、その焼き物は前にミズホ伯国の店で見たような……」

「はい。ミズホ磁器ですね。高級品として輸出もされています。貴族や商人などの富裕層に人気なのですよ」

現金を稼ぐために、ここまで輸送してきたのだそうだ。

「ただ、この情勢下で買ってくれるお客さんがいるかですね……」

財政状態が厳しい貴族も多いし、既に持っている貴族も多いので売れない可能性もあると職人達は心配していた。

「デザインが、帝国人に合っていないのでは？」

伊万里焼に似ているので、和風な皿や壺や徳利などが多い。
使用するためではなく、観賞用に購入されているようだ。

「ポットとかティーカップを作ればいいのに」

王国も帝国も、お茶を飲む時には洋風のティーセットを用いる。
共に磁器ではあるが、質は日本のお店に売っていた量産品に劣っていた。
磁器は、いかに薄く乳白色に製造するかがポイントである。

エリーゼがいつも使っているティーセットは嫁入り道具なので高級品だと聞いているが、肉厚で色も少し薄暗い。
全体的に野暮ったく、材料の白色粘土の質が悪いのかもしれない。
絵柄を入れる技術も無いようで、だから飾りでも絵が描いてあるミズホ磁器が売れるのであろう。

ただし、こちらはデザインの関係で実用性が無かったが。

「作る技術はありますけど、あまり売れないんですよね」

確かに絵は入っているが、元地の色は帝国産と王国産の磁器とあまり変わらない。
これでは、ティーセットを作っても売れないのであろう。

「ティーカップに絵を付けてみたのですが、あまり売れなかったですね」

「そりゃあ、ミズホ磁器と同じような絵を付けるからだろうに」

和風や中華風の花や鳥、唐草模様などを付けたティーカップが売れるはずもない。
一部コレクターの貴族が購入していったのみだそうだ。

「ならば、改良の余地はあるか」

「バウマイスター伯爵様は、焼き物を焼かれた経験が」

「ええと。魔法で作った」

俺は、未開地時代に作った塩を入れる壺を職人達に見せる。

「ええと……。造形は駄目ですね……」

素人の作で、塩が漏れずに入れば良かったのだ。

職人達に壺の造形を否定されても、俺は心の中だけで泣いて誤魔化していた。

「粘土の質も、まあまあですかね」

色も別に乳白色である理由は無いので、普及品とさほど違うわけでも無かった。

「この壺を売るのですか？」

「芸術品としては微妙ですけど……」

「俺。芸術家の素養ゼロだなぁ……」

などと、悲しんでいる暇はない。

俺は窯が無くても焼き物が作れる。

造形には問題があるし絵心も無いが、目の前にいる職人達はその道のプロなのだ。

彼らに粘土を渡して造形と彩色を任せていまえばいい。

「ですが、帝国産と差異が出ませんので値段が……」

「そこで、俺が独自に開発した粘土を使います」

勿論、俺に磁器製造の技術などあるはずがない。

ただ、地球で十八世紀にイギリスで発明された技術を用いるだけだ。

『ボーンチャイナ』という、白色粘土が入手困難なので代用品として牛の骨灰を陶土に混ぜて製作した磁器の事を。

粘土は従来の物を使い、これに骨灰を混ぜて粘土を作り成形して焼けば乳白色の綺麗な磁器が出来るはずであった。

「早速、実験だな」

実は、骨灰は導師達が毎日狩ってくる魔物の骨から製造していた。肥料に使えるので、肥料作りを担当している魔法使いが魔法で製造していたのだ。

「（確かボーンチャイナは、リン酸三カルシウムが三十パーセント以上含む磁器であったはず。牛の骨は無いから適当だな）」

配合比率を変えて骨灰入り粘土を沢山製造して板状にし、壺の時のように魔法で焼成反応を再現して磁器を製造する。

技術が無いので形は歪であったが、従来のミズホ磁器よりも乳白色の磁器の製造に成功していた。

「（これが一番いいな。細かな配合比率は覚えたぞ）」

続けて、その配合比率で大量の粘土を作り、それを職人達に渡してティーカップ、ソーサー、ティーポット、皿、花瓶などを作らせる。

さすがはプロの職人、製造経験があった事もあり素晴らしい磁器を作っていた。

「そして、これを魔法で焼成すると」

数分で、日本で見た乳白色の透明感のある磁器が完成していた。

「おおっ！　白い！」

「これなら売れますよ！」

従来の帝国製の磁器や、ミズホ磁器よりも乳白色で透明感のある磁器。

『なんちゃってボーンチャイナ』は、無事に完成していた。

まだ改良点はあるが、その辺はプロである職人達に任せてしまえばいい。

俺が粘土と骨灰を魔法で配合し、職人達が成形と絵を付ける。

数日は、朝に粘土を作って職人に渡し、昼は町周辺の開墾や工事に没頭し、夜に余った魔力で磁器を焼成する日々が続く。

「ティーカップに梅の絵か……。悪く無いけど、帝国風の草木とかも描けないかな」

やはり、洋風なティーカップに伊万里焼や有田焼のような絵柄は奇妙である。

この大陸で普通に繁茂している草花などを描いた方が良いであろう。

「やっぱり、そちらの方がいいですかね？」

「お客さんは帝国の人だから。珍しいからミズホ風の絵の品も少し混ぜよう。あとは、帝国風の絵柄にして欲しいけど、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。輸出品研究のために勉強していますから」

一週間ほど職人達と奮闘した結果、かなりの数の無地の白磁に、ミズホ磁器の絵師が奮闘して作絵された磁器も完成していた。

「伯爵様も変わった事をするよな」

「見てくださいよ。この乳白色の磁器を」

「確かに、王宮にある物よりも白い……」

「こんなに複雑で色取り取りの絵が付いているなんて凄いですね」

実際にエリーゼが、ティーポットでマテ茶をティーカップに注いでみんなに配っていた。

綺麗な乳白色のティーカップにマテ茶の黄緑色が良く映え、ブランタークさんとエリーゼは磁器の白さに驚いていた。

粘土の成分調整にも慣れて、他の帝国産と王国産のように厚ぼったいマグカップのようなティーカップとも違うので、これは売れるはずであった。

「窯無しで磁器を作れるのか。前に壺とか作っていたからな」

「この白は、魔物の骨ですか」

ボーンチャイナの原料である牛の骨が無いので半分賭けであったが、実に上手くいった。

もしかすると、魔物の骨が幸いしたのかもしれない。

日本で見た磁器よりも、白さが上のような気がするのだ。

「魔物の骨には少量の魔力が残留している。だから薬剤や魔道具の材料としても使われるんだな。ここではそんなに需要が無いから肥料にしていたけど」

少量の需要分だけ販売して、あとは肥料にしていた。

それを、普通の動物の骨は今まで通りに肥料にして、魔物の骨は磁器の材料にするわけだ。

「これをミズホ磁器の職人と協力として、秋までに大量に売り捌いて軍資金を稼ぐ作戦です」

骨灰と粘土の調合比率に、焼成の条件はミズホ側にも秘匿する。

だが、向こうにもプロはいるので、研究すれば同じ物が作れるようになるはずだ。

それでも、秋までに作れるだけ作って売り捌けば、一番最初に真っ白な磁器を作った者として多額の利益が得られるはず。

「他にここまで白い磁器が作れる者が出る前に、高額で売り捌いて金を儲けるのか」

「これ以上、手持ちの資金を減らすのはまずいですからね。まだ何があるのかわかりませんし」

俺がこんな事をしているのは、バカな皇帝が一時報酬すら寄越さないからである。

あの装置を破壊するまで帰るわけにもいかないし、報酬が当てにならない以上は自分で稼ぐしかなかった。

「伯爵様の言う通りか。よし、魔物の骨だな」

「食用に大量に狩っておるが、こんな使い方があるとは知らなんだ」

導師は、軍の訓練や町の工事などが出来ないので毎日魔物の領域に籠って狩りを続けていた。

その成果たるや、その領域の魔物が絶滅するかのような勢いである。

食肉の確保に貢献しているので、俺達からすれば大歓迎なのだが。

「ミズホ上級伯爵に頼んで、もっと職人を借りようかな」

秋までの限定で、大量に製造して高値で売り捌く。

こうして、俺は新しい商売を考え付き、軍資金を稼ぐべく奮闘を開始するのであった。

第九十九話　本当にそんな事をしていいのか？

「随分と賑やかだな。バウマイスター伯爵」

「白磁の製品が大ヒットしましたからね」

前に工事などで梃入れしたとはいえ、人口五万人ほどの町の税収で合計一万人もの駐留軍が養えるはずもなく、俺は後の事も考えて手持ちの資金を減らさずに逆に増やす作戦を実行していた。

ミズホ伯国軍の中に、磁器を作る職人達がいたので彼らと協力していわゆる『ボーンチャイナ』の作成を行ったのだ。

彼らは輸出用のミズホ磁器を作っていた職人達で、この戦乱でミズホ磁器が売れないのでわざわざ営業に来ているほど暇であった。

そこで彼らと協力して、食肉確保のために軍に行わせている魔物狩りで得た骨を磁器の材料にし、高品質な白磁を作る事に成功したのだ。

「魔物の骨灰か。意外な材料だな」

「配合比率は秘密ですよ。優秀なミズホ磁器の職人なら、すぐに研究してしまうのでしょうが……」

「そうだな。もう試作はしているよ。焼成も、うちは高性能の魔導窯があるのでな。バウマイスター伯爵は魔法で出来て羨ましい限り

だが」

「魔法も魔導釜も、燃料は同じ魔力ですけどね」

魔導窯は、電気窯に性質が似ている。

導入コストが高く魔力を大量に消費するが、高温で長時間安定した焼成が可能で質の良い焼き物や磁器が作れるのだ。

田舎貴族領などでは今でも薪を焚く竈が主力なので、ミズホ伯国は焼き物の分野でも先端を行っているというわけだ。

「研究はしているが、暫くはここでしか作らぬよ」

俺が関わらないと作れ無いと言う事にして、この町でなるべく情報を封鎖しながら高く売れるだけ売ってしまう。

魔骨灰の件などは情報を秘匿するにも限度があるので、今だけのボーナス期間というわけだ。

「戦後にでも、改良したミズホ磁器で帝国市場に攻勢をかけるさ。バウマイスター伯爵も自分の領地で作らせるのであろう？　バウマイスター伯爵領は南端で遠いから、我らはあまり競争も発生しない。仲良くやろうではないか」

既に、ミズホ伯国とは共犯関係にある。

磁器の成形と絵付けは、全てミズホ磁器の職人に任せているからだ。

粘土の製造と焼成は俺一人で一度に出来るので、今は機密保持も兼ねて砦の中にある建物の中で行っている。

成形と絵付けは、本業が暇な職人がミズホ上級伯爵の命令で大勢きて、同じく砦の中の建物で大量生産されていた。

無地の物や簡単な絵の付いた量産品でも、価格は従来の磁器の五倍から十倍ほど。

イギリスのボーンチャイナのように、色取り取りの繊細な絵が付いたり、今では金箔などを施す職人も出ていて、豪華なケースを作る職人も参加して高級品はとんでもない値段になっていた。

これらの磁器が、この三か月ほどで飛ぶように売れているのだ。

今までに無い白さで誰も真似ができず、技術力が高いミズホ職人が仕上げを担当してる。

作っても作っても足りない状態で、俺も魔力を使う主力をこちらに置いている。

食肉確保のための狩りは軍の参加比率を上げ、砦や町とその周辺の公共工事はブランタークさんとカタリーナに任せていた。

エリーゼは、毎日教会で病人や怪我人の治療を担当している。

「帝都の連中。我らに何も言えなくて歯ぎしりをしておるらしいぞ」

今までの戦の褒美は、秋の収穫後にニュルンベルク公爵を討伐してから。

それまでは、サーカットの町に駐留してそこの税収で何とかして欲しい。

皇帝とその取り巻き達は、俺達への嫌がらせでそういう処置を取っていたので、白磁器製造と販売で稼いでいる俺達に何も言えない。

商売を行うのでちゃんと代官に頼んで許可は得ていて違法ではないし、何より税金がゼロなのが嬉しい。

いや、正確に言うとサーカットの町に法定の税収は入っているのだ。

ただ、この税金は町の統治と駐留軍の維持費に使えと皇帝自身から許可を貰っている。
代官達の人件費などを含めた町の予算に、軍の維持費を全て賄えて黒字になっていた。
税金以外の利益は全て、俺とミズホ上級伯爵の懐に入っている。

「言われた通りに、町の税収で細々と一万人の軍勢を養っていますからね」

白磁は全て高級品で、この内乱時の不景気にも関わらず毎日仕入れの商人が来て大量に仕入れていく。
彼らを対象にした商売も始まり、町は白磁特需に湧いていた。
町の拡張も常に行われて農地の開墾なども順調、町の財政が黒字なので予算の関係で後回しにしていた公共工事などを前倒しで行う。
当然人手が足りないので、近隣から出稼ぎに来ている人も増えた。
町は日ごとに拡張を続けている。

「サーカットの町は拡張しているのだ。皇帝も文句は言えまい」

直轄地なのに、その開発を怠っていたという罪が帝国にはあるのだから。

「しかし、貴族は新しい物が好きですね」

少し羽振りの良い庶民には無地の白磁の食器が、貴族は最近では細かな絵画風の絵まで付けられるようになったミズホ磁器職人のおかげで高級品が、注文が間に合わないほど売れている。
ほとんどが貴族に販売されているそうだ。

「皇帝としては、白磁で無駄遣いをする貴族が嫌なのであろうな」

内乱で滞る領地の経済建て直しと、収穫後のニュルンベルク公爵討伐に備えて軍備を整えて欲しいのに、その金で白磁を買っている貴族が多いので相当に不満なようだ。

しかし、こういう高級品はどんなに不景気になっても一定数いる富裕層が当たり前のように買っていく。

一部、高品質磁器の市場を奪われた、窯を領地に抱えている貴族が怒っていると聞いたが、こちらとて財政が赤字なのだ。

こういうのは競争なので、自分達の力で磁器の品質を上げてくださいとしか言えなかった。

「皇帝は何も言えないさ。何しろ、南部貴族からも金を奪っているからな」

内戦状態なのに、どういうルートかサーカットの町で磁器を仕入れて南部に売り捌いている商人達がいるそうだ。

彼らなりの、特別なルートがあるのであろう。

「南部の貴族達は金を持っているからな」

帝都を放棄した時に、ニュルンベルク公爵は膨大な帝国資産を持ち逃げした。

その一部を、彼は味方をしている貴族に恩賞としてばら撒いている。

ニュルンベルク公爵としても領内の開発や軍備に使って欲しいのであろうが、一セント残らず全てそれに使えと強制できるはずもない。

懐に余裕が出来た貴族が、高品質な白磁に手を出すのは時間の問

題であった。

「結果として、南部の財力も痩せさせているから皇帝は何も言えないと？」

「そういうわけだ。そんな事を気にする前に、帝都の統治状態でも気にかければいいのに」

皇帝とその取り巻きが微妙でも、統治機構が崩壊したわけではない。

麻痺から回復すれば、ある程度は元通りに戻る。

税収を上手く回したり、大商人から借り入れたり、帝国債を発行したりと。

常識的な手段で資金を確保し、西南部と東南部の騒乱もある程度落ち着いていた。

ニュルンベルク公爵も今は力を蓄える時期だと判断したようで、少数の即応部隊以外は動員を解いているようだ。

防衛体制の構築、諸侯軍の再編成と訓練、領内の内政にと。

領主として忙しい日々を送っているはずだ。

「金が無いと戦争が出来ないからな。大分助かったよ」

「こちらは大黒字です」

粘土と焼成で俺の方が有利なので、磁器販売の利益はミズホ上級伯爵と折半である。

フィリップ以下の王国軍組やエル達に小遣いを渡しても、金は増える一方であった。

「戦争になれば飛ぶように消えていくから貯めているのですが」

「本当に、戦争って金がかかるよなぁ……」

それでも、俺とミズホ上級伯爵はマシな部類であろう。

一部の貴族家以外と帝国政府は、財政に致命的なダメージを受けている。

戦後に経済の建て直しで苦労する事は確実だ。

「それでも、白磁は買うのですか」

「貴族は借金が可能だからな」

こんな時にでも、『うちの客に出すティーカップは綺麗な絵が施されていて、素地も乳白色で綺麗』という事に拘る。

貴族は、何よりもプライドを大切にする生き物というわけだ。

「自分と同じくらいの懐事情の貴族が持っていて、自分は持っていない。そんな状態に耐えられる貴族などいないさ」

帝国貴族を良く知るミズホ上級伯爵は、してやったりという笑みを浮かべる。

「売れる間は高く売らないと。他に同業者が出たら……」

「値下げするかね？」

「それも手ですけど、やり過ぎると共にあまり儲からないで共倒れの危険性がありますよ。元々ミズホ磁器は人気が高いのですから、もう少し帝国人に合わせた改良なども行って質で勝負すればいいの

です」

「そうだな。他の産地と値下げ競争をしてもあまり意味が無いからな」

向こうが技術的に追い付く前に、また技術力を上げて突き放すか、ブランド化して老舗として世間に周知させてしまえばいいのだから。

「バウマイスター伯爵は、商売にも詳しいようだな」

「本の知識ですよ」

前世の経験から来ているのかもしれない。

食品も、外国から安い材料を輸入して出来る限りコストを抑えた品に、材料から製法まで拘って作られる物もある。

両者は住み分けがされているので、下手に競って競争する意味が無いのだ。

「秋以降も、空いている時間に作れそうだな」

「それをすると、職人達の護衛の問題が出ますね」

「兵士を増やせばいい。そのための金を稼いでいるのだから」

「その時が来たら、臨機応変で良いと思いますよ」

「それもそうだな。いやーーー、財政的に助かったよ」

ミズホ上級伯爵は、嬉しそうに自分の領地へと戻っていく。

そして、入れ替わるようにアルフォンスも姿を見せていた。

「テレーゼはフィリップ公爵領の統治に忙しいからね」

これに加えて、秋の収穫以降の破綻に備えて軍備も整えていた。

皇帝とは政治上のライバルになってしまい、テレーゼでは無謀なニュルンベルク公爵討伐を阻止する事が出来ない。

取り巻き達も含めて、沢山の兵士を集めて討伐を行えば勝てると思っているようだが、ニュルンベルク公爵がそんなに甘いはずもない。

かなりの高確率で皇帝が負けると、テレーゼやその賛同者達は予想している。

ニュルンベルク公爵が皇帝を討つ時に備えて、俺も含めてみんな準備に忙しいのだ。

「ヴェンデリンは景気が良いから羨ましい」

「フィリップ公爵領は不景気か？」

「うちはマシな方だね。食料の輸出が主産業だから」

不足気味の食料を、帝都周辺に輸出しているそうだ。

「もっとも、皇帝陛下から価格統制令が出ているからそれほど儲からないけど」

内乱が継続中なので、特別処置で出た布告なのだそうだ。

当然商人達から不満が上がっているが、彼らが売り惜しみや談合で食料価格を吊り上げれば帝都の治安が危うくなる。

食料を確保しようと、貧しい臣民達が帝国政府や商人の食料倉庫を襲撃する可能性があるからだ。

「今の状態で食料の価格が高騰したら危険だぞ」

「テレーゼもそう言っていたさ」

テレーゼとしても、今は賛成するしかない。

断れば、皇帝から業突く張りだという評価を受ける羽目になるであろう。

その悪評を利用して、政治的なライバルであるテレーゼに何か仕掛けてくる可能性もあった。

「実際にもうやっているよ。テレーゼの兄達に、彼女を引退させて自分の子供に継がせるチャンスだと」

「無意味な事を……。もしかして仲間割れを目的にして？」

しかしながら、テレーゼが皇帝になれば自然とフィリップ公爵の地位が空くのだ。

そう時間もかけずに貰える物を、今現当主に反抗してまで手に入れる価値は無い。

皇帝派の策に、彼女の兄達が乗る心配は少なく思える。

「そんなところかもね。そんな暇があったら、南部に送る密偵でも増やせばいいのに……。皇帝陛下がニュルンベルク公爵に勝つのは既定の路線なんだよ。だから、戦後を見据えてテレーゼに嫌がらせをしている」

「末期だな……」

即位直後にクーデターを起こされた皇帝は、とにかく政治基盤が

弱い。
　ニュルンベルク公爵と互角以上に戦っているテレーゼが邪魔だが、帝国のために働いている彼女に表面上は配慮しなければならない。
　そのストレスかもしれないが、兵数だけは立派なニュルンベルク公爵討伐計画と、自分に従うコバンザメのような取り巻き連中なのであろう。
　大兵力の安心感と、彼らのおべっかが精神安定剤なのだ。
「こう言っては失礼だけど、あの取り巻き連中は酷い」
「おべっかだけを武器にしているんだ。優秀な人がいるはずもない」
　解放軍を裏切った貴族にしても、禁止していた略奪や暴行を指揮下の兵士達が行ったので処罰したら、逆ギレするような奴らばかりなのだから。
　前世で勤めていた会社にも、そんな人はいた。
　これは、ある程度大きな組織の宿命なのかもしれない。
「テレーゼが、ヴェンデリンに会いたがっていたよ」
　だが互いに暇も無いし、今俺とテレーゼが顔を合せると余計な推察をして騒ぐ輩が増える。
　それは、今のところは不可能であった。
「俺とテレーゼが組んで、皇帝陛下を引き摺り下ろす工作の可能性か？　こう言っては何だけど、俺は帝国の未来になど何ら興味が無いからな。早く報酬を払えだ」
「ヴェンデリンの立場ならそうだよね」

それから秋の収穫を迎えるまで、ミズホ上級伯爵とアルフォンスは定期的に俺達を訪ねてきた。
様子見もあったのであろうが、後はほぼ愚痴である。
力の無い皇帝は、懸命にやり繰りをしてニュルンベルク公爵領に攻め込む軍勢の動員数の確認や、必要な食料などの物資確保を命令していた。

そういう仕事は、帝国軍に人材が残っているので問題なく進んでいる。
金が無いという致命的な弱点はあるが、まだ帝国の力は強大で生産力も残っている。
権威と税収もあるので、商人達はこぞって金を貸していた。

「久々の借金財政だね。帝国は」

国家統合戦争の間は数年に一度、困ったレベルの赤字が発生した事があったそうだ。

「我がフィリップ公爵領もギリギリで金を回している。ヴェンデリンが羨ましくなるよ。それで、だから見習いメイドに新作のメイド服を？」

ブライヒレーダー辺境伯の隠し子フィリーネは、俺達が戦場に出ている間は従軍神官の女性達に預かって貰っていた。
彼女自身がまだ九歳で、戦闘力と呼ばれる物が皆無なので仕方がなかったのだ。
今は、エリーゼが貴族の令嬢としての教育を施しつつ、簡単な手伝いなどをしている。
俺達の身の回りの世話を手伝うので、普段はメイドの恰好をさせ

ていた。

「そのメイド服。妙に気合が入ってるね」

「やはりわかるか。我が友よ」

この世界のメイド服は、スカート丈が踝近くまであったり、生地がゴワゴワであったりとまだ発展途上であった。

そこで俺の適当な意見を参考に、エリーゼと町の服飾職人とで改良型の試作を行い、試しにフィリーネに着させていたのだ。

「短いスカート丈、フリルの多用、色も黒じゃないんだな」

「アルフォンスよ。メイド服は黒が基本だが、黒だけというのは思考停止だと思うぞ」

「なるほど！　それは盲点だった！」

実は前世で、会社のメイド喫茶好きの先輩にそういうお店に連れて行かれただけなのだが。

多分、黒なのは汚れの関係だと思う。

俺は魔法で綺麗に出来るし、その前に汚れたら洗濯しやすいようにして予備を作れば問題ないと思っていた。

今日のフィリーネは、水色のメイド服を着ていた。

他にも、ピンク、赤、ベージュ、ライトグリーンなども作って日替わりで着せている。

スカート丈が短いので、ニーソックスも履かせている。

これも、ストッキングを編む技術が無いので苦肉の策であった。

「お客さんには好評だよ。売って欲しいという商人や貴族もいるから、エリーゼに協力した服飾屋は大忙し」

それほど儲かるわけではないが、町に新しい商売のネタを増やしたので俺達の評判は悪く無かった。

よそ様の土地に駐屯しているわけだから、それなりに気を使わなければいけないわけだ。

「いや、ヴェンデリン達は物凄く評判がいいけどね」

「そうなのか？」

「それはそうでしょう。兵士が多いから治安は良いし、ヴェンデリンが作る新しい磁器で景気はいい。町や農地は拡張して、道と川の堤防も整備された。みんな予算不足で放置されていたそうだから。食肉や魔物の素材も町に出回る量が増えたし」

軍の訓練も兼ねて、導師、フィリップ、エル、ハルカ、タケオミさん、ルイーゼ、ヴィルマが主体になって町の北部にある魔物の領域で討伐が進んでいたのだ。

「いきなり全軍で攻め入るとそれを凌駕する魔物の大群に囲まれて死ぬから、時間差で陽動をかけながらね」

十名ほどのグループを作らせ、分散して突入させて魔物を狩らせる。

導師達も分散して援軍に入るが、基本的には無理はしないで危なくなればすぐに領域を出るように命令している。

「エルには良い訓練だ」

小規模の部隊の動きを幾つも見ながら指示を出していく。
軍の指揮を習い始めたエルには、良い訓練になっていた。
フィリップが使える指揮官を増やすべく、懸命に指導を続けている。

「王国軍組は元が軍人だから精強。ミズホ伯国軍の強さは元々だし、うちも悪くはない。今も訓練は続けているから」

だがそれ以上に、ニュルンベルク公爵家諸侯軍とその寄り子である南部貴族諸侯軍は精強であった。
彼らが守る領地に攻め入る帝国軍は相当に苦戦するはずだ。
いや、負ける事を見越してみんな準備をしているのだから。

「アルフォンス殿。お久しぶりですな」

アルフォンスは、ただ俺の所に遊びに来たわけではない。
テレーゼからのメッセンジャーでもあったので、その日の夜は関係者が集まって一緒に食事がてら情報交換を行っている。
テレーゼは直接これないので、彼女の代理でもあるのだ。

「シュルツェ伯爵殿は、大分お忙しいようですね」

「居候で、急激に拡張を続ける町の内政担当ですからね」

色々と事情があって戻れないシュルツェ伯爵達は、サーカットの町の王国側内政担当として毎日の仕事に励んでいる。
クリストフが軍政関係で忙しいので、自然とそういう地位になってしまったのだ。

「今のサーカットの町は不思議ですからね」

帝国の直轄地で、住民もほぼ全て帝国人である。
だが、統治をしている代官達は既にシュルツェ伯爵達に従って働いているような有様だ。

なぜこういう事になるのかと言うと、皇帝が俺達の動きを封じるためにサーカットの町の税収の優先権を与えてしまったからだ。
代官達は、俺達から給金を貰う奇妙な状態に陥っている。
人口が増えて仕事が増えたのと、俺が期間限定で磁器の販売で得た利益から一時ボーナスを払っていて、それが理由で余計に逆らえなくなっているのだと思う。

軍が、元の警備隊を除いて大半が王国人とミズホ人なのも大きいであろう。

「金の力は偉大だという事ですか」

「そうとも言いますね。ところで、こんな物があるのですが……」

アリフォンスは、一枚の羊皮紙を俺に手渡していた。
読むとそこには、『ニュルンベルク公爵領討伐作戦に関する概要と、動員兵力数に関するレポート』と書かれていた。

「これって、機密書類なのでは？」

内容自体は概要なので数分もあれば読める。
全員で回し読みしてからアルフォンスの手元に戻ると、イーナがみんなが思っている懸念を口にした。

「入手先は極秘に」

「えっ！」

「嘘だよ。イーナ殿。帝国軍本部に行けば普通に手に入るから」

「それって、機密の保護が甘いのでは？」

「甘いと認めるけど、どうせ隠せないという現実もあるしね」

どうせ大規模に軍勢を集めるし、どこから攻め入るかなど偵察で簡単に知られてしまうそうだ。

「陣借りの方々が多いですね」

エリーゼは、動員兵士に占める陣借り者の多さに驚いていた。

確かに軍事費削減には役に立つのだが、それにしても多過ぎだと思ったようだ。

「動員数が約三十万人で、その半分が陣借り者。多く無いかな？」

「勝手に志願しているからね。それも私からは何も」

元々、俺達王国軍組、フィリップ公爵家、バーデン公爵家、ミズホ伯国などは参加を拒否されている。

これ以上手柄をあげられるのを防ぎたい意図があるのであろう。

それを補う大兵力と、経費を削減するための陣借り者というわけだ。

「北部諸侯もほとんど参加していない」

大半がテレーゼ派なのと、距離的な問題からだそうだ。

「主力は、帝国軍、中央領域の諸侯、何とか新当主を立てた選帝侯家だね」

復讐戦であり、褒美で何とか財政を建て直したい意図が見え隠れする。

帝国軍はクーデターに助力した勢力が多く、今もニュルンベルク公爵に付いて行ってしまった者達が多い。

皇帝からの信頼を回復したいのであろう。

「取らぬ狸の何とやらだなぁ」

ルイーゼは、もう勝った気でいる皇帝達に呆れているようだ。

「実際に、下も勝てると思っているんだよね」

だから、実際の戦争なのに過去に例が無いほどの陣借り者の多さともいえる。

「この戦争で戦功をあげてですか。これも、取らぬ狸の何とやらですわね」

カタリーナも呆れていたが、南部の諸侯達は全員爵位と領地没収がほぼ確定している。

その分け前を巡って、色々と水面下で争いが起こっているのであろう。

「功績を挙げた順とはいえ、皇帝は自分の子飼いに優先して領地などを与えたいはず。大規模な帝国貴族の再編があるのさ」

陣借り者達からすれば、仕官のチャンスというわけだ。

中央の軍、役所、加増された貴族家の家臣にと。

最大のチャンスだと考えて、大量に志願しているのであろう。

「貴族の子弟だけじゃない。過去に貴族から没落した平民の子供に、平民の次男三男だってチャンスだと考える」

そういう連中の欲を利用して、大規模な兵力を低コストで集めているというわけだ。

「連携もへったくれもない」

「ヴィルマの言う通りだな。それで、作戦案には三方向からの同時侵攻とあるけど」

「ヴェンデリンはどう思う？」

なぜかアルフォンスは、俺に逆に質問をしてくる。

「どこから攻めるのかとかは、地元の地理に詳しい帝国人に任せるとして……。三つに割るから十万ずつと想定して。さすがに侵攻ルートは機密だけど、ニュルンベルク公爵にはわかっているだろうね」

十万人が纏まって進撃可能なルートは限られているので、南部の地理に詳しく軍事に精通しているニュルンベルク公爵なら簡単にわかってしまうはずだ。

「でも、別に不利にはならないよね。兵力分散は」

同じく向こうも、軍勢を三つに割る必要がある。
むしろ、軍事能力に優れたニュルンベルク公爵が関われない軍団を二つ作れるから有利かもしれない。
南部の広さを考えると、全軍を一つに纏めたニュルンベルク公爵が時間差をつけて撃破というわけにはいかないからだ。

「それでも防衛戦だから、ニュルンベルク公爵の方が有利なんだよなぁ……」

「某を相手に散々時間稼ぎをした自爆型ゴーレム。アレを大量に配備してあったら。他にも防衛なので拠点などに据え置きの魔道具があると困るのである」

導師も、その数と投入タイミングのせいで苦戦を強いられた。
戦闘経験に乏しい討伐軍ならば混乱は必至だ。

「テレーゼは負けると予想して準備に余念がない」

本当ならば、事前に可能性を指摘して損害を減らす努力をすべきなのであろう。
だがそれは、皇帝の力と能力の無さを証明する事にもなる。
言えるはずが無いし、言ったところで否定されるだけだ。

「実際に負けないとわからないんだろうな」

「それで死ぬ方々は哀れですね」

「確かに哀れだなぁ。その後にニュルンベルク公爵に敗北したらも

っと哀れだけど」

皇帝が敗れてもテレーゼは健在で、必ずニュルンベルク公爵を討ち破る。

そうさせるために、アルフォンスを俺達の元に派遣しているのであろうから。

「あっそうそう。皇帝がヴェンデリンに新しい嫌がらせを始めるから」

「今度はどんな手で？」

「最近羽振りがいいから、負担の増加策だね」

アルフォンスがサーカットの町を離れた翌日、今度は皇帝からの勅命を持った使者が姿見せる。

そして金貨百枚ほどが入った袋と、臨時防衛警備隊隊長への任命書を手渡していた。

「臨時防衛警備隊長って、どういう役職なんだ？」

「使者の話によると、特に仕事は無いみたい」

サーカットの町周辺で、皇帝が出兵中は治安維持を頼むという事らしい。

今までと同じような気もするが、一応正式な役職ではある。

「なんでそんな回りくどい事？」

エルは首を捻っていたが、すぐにその答えはわかってしまう。

「バウマイスター名誉伯爵様。俺を雇ってくれ！」

「私は槍に自信が！」

町に多数の陣借り者が押し寄せてきたのだ。

「そういう事か……」

皇帝親征で行われるニュルンベルク公爵討伐の時に、定員過剰で参加できなかった者達を俺が纏め、治安維持という名の警備を行う。

思った以上に陣借り者の数が多過ぎたようだ。

もう志願兵と呼んで差し支えないようにも見えるが、彼らを組織化して軍を作り、後方の治安担当と予備兵力扱いなのかもしれない。

「あなた。磁器の販売益が無ければ大変でしたね」

「本当だな」

最大の狙いは、テレーゼの協力者と見なされている俺の財力を殺ぐ事なのかもしれない。

陣借り者なので給金は必要ないが、食、居は負担しなければいけない。

「あの皇帝。ムカ付くな」

ニュルンベルク公爵がああいう思想でなければ、彼に協力したくなるほど酷い統治者であった。

「住む所は、また空き地に石材で組めばいいよ。軍の訓練も兼ねて

いるし」

「そうだけど、今から陣借り者を引き受けるのか？」

「それがねぇ……。さっき王国軍の人に聞いたんだけど……」

あまりに陣借り者が多いので、ルイーゼが軍人で詳しそうな人に世間話がてら聞いてみたそうだ。

「陣借り者を称しているけど、ただの農家の三男とかね。五代前は貴族だったとか自称しているけど、経歴が怪しいとか」

所謂、戦に乗じて一旗揚げようとか、職が無いからとかそういう人も多いそうだ。

「というか大半？　訓練しないと使えないよ」

「ルイーゼと私でやる事になった」

「俺が頼んだんだ」

フィリップが二人に依頼したらしい。

基礎訓練を一か月ほどしてみて、駄目な奴なら脱落するであろうと。

それを潜り抜けた者達だけを部隊編成して、残り二か月から三か月で本格的な訓練を行うそうだ。

「そのくらいで皇帝は兵を出すはずだ。最低限は使える軍勢が何とか完成する予定だな。あと、全く無給なのも問題だと思うぞ」

「フィリップさんの言う通りだと思う」

「エルも賛同するか」

指揮官教育で世話になっているからなのであろうか？

エルは、フィリップの意見に賛同していた。

「単純に、陣借り者には無報酬だと昔から決まっていると割り切るのもいいけど、不公平感が出るから」

傭兵扱いである王国軍組には、小遣い程度だが手当を毎週支給している。

金が無いからという理由で、町で略奪、窃盗、無銭飲食などをさせないための処置だ。

「いくら陣借り者扱いでも、実際は傭兵みたいな物だろう？　少しは出さないと、町で悪さとかをするかもしれない」

その悪行は俺に付いて回るわけで、エルはそれを心配しているのであろう。

皇帝派の攻撃材料にされて、報酬無し、最悪軍規違反で処刑という事態を避けたいわけだ。

「あの皇帝。本当にムカつくな。見習い扱いで生き残っている間は手当を支給する」

「そうですね。ミズホ伯国の兵士達も手当は別に出ていますし」

「俺も、バウマイスター伯爵様付きになったら増額されたな」

ミズホ伯国軍の兵士達も、給金や俸禄以外に遠隔地手当などのような物を貰い、それで非番の時に買い物などをして町の経済に貢献している。
ハルカもタケオミさんも、かなりの額を貰っているそうだ。
俺にも、そういう事を求められているのであろう。

しかし、ここまでやらせてあとで報酬を踏み倒されたら笑うしかない。

「まあいい。今の時点で信用できる人が少ない以上は、兵力を蓄えておいて損は無い。皇帝が自ら許可しているのだからな」

俺とテレーゼとの接触を危険視する勢力がある以上は、最悪フィリップ公爵家も当てには出来ない。
独自に力を蓄えておく必要があるであろう。

「バウマイスター伯爵の考えに賛同だ。ところで兵はそれで集まるとして、問題は指揮官だな」

「王国軍や、大使館から逃げてきた人達は？」

「王国軍組は、元が八千人規模の軍勢だったからな。偉い連中は軒並み戦死するか捕まって処刑されていてな。五千人規模の指揮でも結構無理をしているんだ。若い幹部候補とベテランの下士官を選抜して俺が教育を施して何とか目途が付いている。引き抜けば、普通に弱体化するな」

フィリップの説明に、俺は何も言えなかった。
ようやく再編と訓練を経て精鋭になった王国軍を再びバラせば、ただ数だけ増えて使えない烏合の衆が出来上がってしまう。

軍人を育てるというのは、本当に時間がかかるのだから。

「大使館にいた連中も駄目だ。一部俺が引き抜いて再編したし、元々あそこには軍政畑の人間が多い。クリストフとシュルツェ伯爵に預けているから、もう回す人間がいない」

軍人は、ただ戦ったり訓練をしているだけではない。

後方支援要員も必要で、その人員を纏めているのはクリストフであった。

シュルツェ伯爵に至っては、臨時に付けた適当な役職でサーカットの町の統治を半分担当している有様であった。

仕事が増えたのに、皇帝が人手不足を理由に代官からの増員要請を無視していたからだ。

「エルは？」

「駄目だ。エルヴィンには千人規模の部隊を任せている。今さら他に移せない。いいか。確かにエルヴィンにはそういう事をこなせる才能があると俺は思う。だが、いきなり何でも出来る天才肌の人間ではない。俺も同じだ。三十歳の半ばを過ぎて、ようやく数千人規模の部隊の指揮に自信が持てるようになった。今のエルヴィンは、ハルカとベテランの幹部が補佐をしてようやく指揮官としての目途が立ち始めている。だが、やはりまだ十七歳の若造なのだ。無理をさせ過ぎて、彼の将来を潰すつもりか？」

「いや、俺はそんなつもりは……」

俺にそんなつもりは無い。

ただ本人が望むので、将来はバウマイスター伯爵家諸侯軍を指揮するために仕事を覚えて貰おうと思っただけであった。

「前にバカな男がいた。本人は数千人を指揮する程度が限界の人間なのに、妻の実家や周囲の家臣に推されて、辺境伯の地位を求めて弟と下らない争いをした。結果は、多くの犠牲を出して王国中に恥を曝し、それでも何とか爵位を貰って生き延びている。人間には努力も必要だが、それは出来もしない事を出来ると言って周囲に迷惑をかける事ではない」

「フィリップ殿……」

「そのバカな男にも欲があって、周囲の期待の大きさに何も言えないで争いを始めたという罪があるがな。結果、弟も巻き込まれて一緒に没落する羽目になった。元々文官なのに、こんな無謀な出兵に付き合わされて可哀想な弟だ」

「兄さん……」

フィリップの意外な告白に、クリストフは目を潤ませていた。

「愚痴が過ぎたな。エルヴィンはまだ半人前だから俺が預かる。バウマイスター伯爵よ。王国軍の十七歳の軍人は、どんなに良い家の出でも雑用と基礎訓練だけだぞ」

「すまんな。エル。無理をさせ過ぎてしまって」

エルは俺の護衛役を離れ、懸命にフィリップから軍の指揮について学んでいる。

ハルカもそれを補佐し、刀の訓練も前と同じくらい厳しく行っているのだ。

そのせいで、最近では顔を合わせる時間が減っているほどなのに、

悪い事を言ってしまったと思っていた。

「いえ。お館様。俺が自分で望んだ事ですので」

みんながいるので、エルは家臣としての口調で俺に話しかけてくる。

「フィリップ様にも気を使っていただいて」

「エルヴィンの教育は、バウマイウター伯爵から依頼された正式な仕事だからな。教育相手に潰れられてしまったら意味が無い。気にするな」

フィリップは照れくさそうにエルに答えていた。

「それと、もし俺に才能があったとしても、この仕事には向かないと思いますけど」

「どうしてだ？　エル」

「俺は王国人で、預かる部隊は百パーセント帝国人です。反発は必至かと」

「そう言われるとそうだな……」

能力や適性以前に、感情的な問題なので性質が悪い。

気にしない人もいるはずだが、全員ではない。

これが部隊の結束を乱して、戦場で致命的なミスに繋がる可能性もあった。

「こうなると、帝国人も雇うか」

面倒な仕事なので高給を払う必要があるが、その方がトラブルが少ないかもしれない。

「問題は、候補がいるかですね」

シュルツェ伯爵も、指揮官を帝国人で補う意見には賛成している。だが、一番の問題がどこから探してくるかという点にも気が付いていた。

「当てはあります」

「俺は誰だかわかったな」

「某もである」

俺の指揮官の当てとやらに、ブランタークさんも導師も気が付いたようだ。

「それは誰なのだ？」

「フィリップ殿は、前に会っていますよ」

それから数日後、サーカットの町の外れで陣借り者達の受け入れが始まっていた。

氏名、出身地、年齢などを聞いてから、最初に一人につき五組の下着と服を渡す。

ただの緑色の上下の服であったが、見た目はジャージその物である。

最初はこれを着て、ルイーゼとヴィルマの元で基礎訓練を始めるのだ。
ランニングや、各種基本トレーニングを行う。
メニューは、俺が学生時代にしていた部活の強化バージョンである。

「まずはランニング」

「指導教官が、こんな小娘？」

「へえ。偉そうな口を叩くね。という事は、ボクやヴィルマよりも体力があるんだね」

ほぼ全員見た目だけで二人を侮り、最初の耐久ランニングでその鼻をへし折られた。
みんな汗まみれで息が乱れているのに、同じ距離を走った二人は涼しい顔をしている。
二人からすれば、この程度は本当に基礎訓練なのだ。

「ボク達に不満があるのなら、あそこにいる導師様はどう？」

「若人達よ。某と共に魔法格闘技を極めようではないか」

なぜか同じくジャージに着替えた導師が、ボディービルダーのようなポーズを取りながら彼らに話しかける。

「……。ルイーゼ様とヴィルマ様の指導でいいです……」

導師との特訓に地獄の光景しか想像できなかった陣借り者達は、

それからは素直に訓練に応じていた。
基礎訓練を行い、その過程で優れた者はすぐに本採用となって本格的な訓練を始める。
王国軍組と共同で、部隊を編成しながらである。
本当に貴族の子弟である陣借り者もいたので、彼らは最低でも十名程度の部下は持つ事を前提に訓練を続けていた。

「思ったよりも、予算が厳しいです」

公共工事や磁器作りの合間に視察をしていると、そこにクリストフが姿を見せる。
補給や人事などの後方支援要員は、陣借り者の中からそういう系統に才能がある者達を探して抜擢している。
だが、やはり上が決まっていないので、今はクリストフが全体の面倒を臨時で見ていた。

「追加で出す事はやぶさかでないけど、何で？」

「こちらの想定を超えて多いからです」

「あのクソ皇帝、もっと面倒見ろよ」

全て討伐に連れて行けない事情はわかるが、こちらに余ったのを全て押し込むのは止めて欲しいと思う。

「でも、思ったほど掃き溜めでもないな」

むしろ優秀な人間も多い。
勿論駄目なのもいるが、比率は帝国軍側とさして違わないように感じた。

「それはそうでしょう。上なんて、いちいち一人一人陣借り者の適正なんて見ませんから」

よほど酷く無ければ採用されて、数が埋まればあとの優秀な者ですら不採用にされる。

そういう採用事情なのだそうだ。

「もっと人を見て決めるのだと思った」

「何十万人も帝国中から来ているのです。全員見ていたら採用担当者が過労死します。それに、枠もありますしね」

「枠？」

「コネとも言います」

陣借り者程度なのだから俺が推薦した奴を入れろよと、貴族や軍人で採用担当者に採用を強制するケースが多いようだ。

「遠い親戚とか、ちょっとした知り合いとか、そういう人を優先するのですね。勿論、能力など見ません」

微妙なコネとも言えるが、彼らはまだマシな人間なのだそうだ。

「酷いのになりますと、賄賂を貰って採用させる貴族や軍人もいます」

陣借り者なので、それほど金額が出せるはずもない。

他の仕事で稼いだ中から、五十セントから百セントくらいを賄賂

として渡し、採用を確実にするというわけだ。

「金額が微妙だな」

「一人百セントだとしても、千人の裏推薦枠を持っていれば十万セントです。良い小遣い稼ぎでしょう？　私の下にいる採用された軍政担当の方に聞きましたけど、面白い方がいましたよ。カーヴィン伯爵です」

帝都在住で、代々軍家系の法衣伯爵家の当主だそうだ。

クーデター時にはニュルンベルク公爵に擦り寄り、帝都解放後はいち早く皇帝に媚びてその地位を保全した。

今回の出兵で、陣借り者の採用を皇帝から一任されている。

「それは、皇帝に媚びた甲斐があったな」

「彼は裏で採用者に賄賂を要求しています。一人二百セントなのは、協力してくれた家臣や寄り子達にも配分が必要ですからね。十万人の裏推薦枠を持っていると噂されていたそうです」

払えば確実に採用されるので、貧しいのに陣借り者達は泣く泣く支払った者が多かったそうだ。

結局、五万人ほどが二百セントを支払ったらしい。

「合計で一千万セントです。半分を協力者に払ったとしても、カーヴィン伯爵は五百万セントが懐に入りました」

「悪党だなぁ……」

「皇帝の取り巻きには、こういう人材に事欠きません」

恐ろしいほど無能な奴は少なく、小悪党で利益や利権を嗅ぎ分ける能力に優れた人間が多いというわけだ。
ニュルンベルク公爵などに言わせると、ゴミ虫のような連中であろう。

「そんなわけでして、優秀なのに賄賂が嫌でこちらに来てくれた人材もいるので、これは幸運でもありますね」

本当に意味で、余り者ばかり来れらていたら詰んでいたので、ある意味カーヴィン伯爵に感謝しないといけないのかもしれない。

「下と中間はある程度揃いますけど、問題は指揮官ですよ」

陣借り者の応募数は、どういうわけか予想を遥かに超えている。
確実に一万人は超すであろう。
となると、それを指揮する人材の確保が必要だというわけだ。

「今日に来る予定で……。来た」

その人物は、約束通りの時間に姿を見せていた。

「ポッペク殿でしたか」

クリストフは、俺が言う指揮官候補がポッペクさんだと知って安堵の表情を浮かべていた。
彼の手腕に付いては、既に確認済みであったからだ。
彼は俺達がサーカットの町に戻るのと同時に、あの老人主体の混成諸侯軍を解散して領地に戻っていた。
今は、サーカットの町との交易促進で忙しいはずなのだが、俺が

無理に指揮官としての仕事を依頼。

それを快く受け入れて貰えたのだ。

「帝国軍人時代のコネで、元軍人も集めて来ましたぞ」

彼の後ろには、十数名の年配の元軍人達が立っている。

大半が彼と同じく五十～六十代の老人達であったが、その中に一人だけ導師にも匹敵する体格を持つ屈強な中年男性が一人立っていた。

全身が鋼のような筋肉に包まれていて、軍人の定型を絵に描いたような人物である。

岩石を切り出したような厳つい顔に、金髪を軍人定番の角刈りにしていた。

そればかりではなく、背中にバスターソードを背負っていてその腕前も凄そうだ。

見様によっては、凄腕の冒険者にも見える。

「元帝軍人で、『剛力将軍』と呼ばれたギルベルト・カイェタン・フォン・ボンホフ準男爵殿です。私が爵位を継いで領地に戻る前の数年ほど、先輩として指導していました」

「先輩には大変お世話になっていました」

「彼も将軍にまで上り詰めたのですが、数年前に実家のボンホフ準男爵が疫病で当主以下の家族を失いましてね。彼が急遽戻ったのです」

軍人としては優秀で三男なのに独自に騎士爵まで得ていたが、実家の断絶を許すわけにもいかずに領地に戻って準男爵位を継いだそ

うだ。
中央の将軍位よりも、地方の領地。
俺は前者の方が良いような気もするが、貴族にとって家の断絶とはトラウマに近いのかもしれない。

「ようやく領地の建て直しに成功したらこの内乱です。ニュルンベルク公爵には正直なところ反乱軍に誘われていました」

「断ったから、ここにいるのですけどね」

先に、サーカットの町で軍政を敷いていた時には顔を出していなかったと思う。

「彼は当主ですし、ニュルンベルク公爵の誘いを熱心に受けていた件もありまして、最初はバウマイスター伯爵殿に顔を見せていなかったのです」

「今は、俺に手を貸していただけると？」

「私はニュルンベルク公爵からの誘いに迷っていました。ささやかな準男爵領と、力で帝国を支配するかもしれない反逆者ニュルンベルク公爵の腹心のどちらが良いのかと……」

どんな人間にも欲はある。
ボンホフ準男爵は実力で将軍にまで登りつめたのに、実家の都合でそのキャリアを捨てる羽目になった。
領地のためとは思いつつ、色々と思うところがあったのであろう。

「私は帝国軍幹部の大半が嫌いです。疎まれてもいました」

準男爵の三男が、将軍の席を一つ埋めていたのだ。
『下級貴族の分際で生意気な！』と、他の家柄自慢の軍系貴族家に疎まれていたのは想像に難くない。

「それでも、ニュルンベルク公爵に付く決断が出来ませんでした。反乱軍についてまで、大軍を指揮する自分が正しいのかとの疑問に答えが出なかったのです」

ニュルンベルク公爵に付かず、帝都解放後は人手不足のはずなのに帝国軍にも相手にされず、腐りつつ領地を運営していたところをポッペクさんに誘われたそうだ。

「聞けば、千人以上の軍を指揮させてくれるとかで？」

「こう言うと帝国の人達に失礼かと思うけど、陣借り者と食い詰め者ばかりの集まりで、俺は苦労を他の人に押し付けているだけだよ。金は出すけど」

治安悪化の要因になるかもしれない連中を俺に押し付けて、ニュルンベルク公爵討伐中に悪さをしないために纏めているような連中だ。
採用してみると優秀な人も多かったが、討伐には参加できないで冷や飯食いとも言える。

二つ名まである元将軍様が指揮するような軍勢ではなかった。

「それで構いません。バウマイスター伯爵殿は、もうひと波乱あると予想しているのでしょう？」

「ええと……」

ポッペクさんに視線を向けると、彼は意味ありげな笑みを浮かべていた。

「ギルベルトを見た目で判断してはいけませんよ。私は、ニュルンベルク公爵にも負けない軍人だと思っていますから」

「それは先輩の買い被りでしょう」

「いいじゃないですか。私が勝手にそう思っているのですから。それで、彼を指揮官にして私は参謀に回ろうと思うのです」

「えっ？　それでいいんですか？」

ボンホフ準男爵の方が指揮官としての才能があるとはいえ、ポッペクさんは二十歳近くも年下に付く事に抵抗は無いのかと思ってしまうのだ。

「そんな理由でギルベルトの才能を潰したら、それは帝都のバカ達と同じではないですか。それに、私は元々参謀畑の人間です。大軍を指揮するには『将器』が必要ですから。私だと、数千人で限界でしょうね」

「そういう物なのですか……」

「そういう物だな」

声のした方に振り返ると、そこには導師を連れたフィリップの姿があった。

「久しぶりに見た。将の将たる軍人がいる」

「将の将たる？」

「軍人の才能の限界だな」

フィリップによると、人は軍人としての努力を続けるとある到達点にみんな到着するのだと言う。

「まるで人を率いる才能が無い奴、数名が限界の奴、数十名、数百名。ある程度は教育で何とかなるが……」

軍系の貴族家では、代々受け継いだ教育によってよほどのバカで無ければ数百人くらいは指揮できるようになるそうだ。

たまに救いようの無いバカがいるので、それはお飾りの指揮官にして部下に任せてしまう。

平和な世の中だと、別にそれでも不都合はないわけだ。

「うちの若い連中も？」

「エルヴィンより数歳年上くらいだから数百人が限界さ。もう十五年もすれば、数千人は大丈夫になる。王国の名だたる軍系貴族家の子供だからな。経験不足の間は家臣が何とかするんだよ」

そういえば、トリスタン、コルネリウス、フェリクスらには実家に仕えている家臣の子供や親族などが陪臣として彼らの補佐を行っていた。

下級貴族や平民出身者は、最初の教育と補佐する人材がいないのでなかなか数百名の軍勢を指揮できるようにならない。

高級指揮官に上級貴族家の者が多いのには、そういう理由がある

のだそうだ。

「それで、ボンホフ準男爵殿は？」

「だから、将の将たる器だ。俺はもう十年ほどで二万人くらいまでは何とかする自信がある。クリストフや優秀な部下が複数いれば五万人くらいまでは何とかなるかな？　ところが、ボンホフ準男爵なら十万人の軍勢を率いていても誰も不思議に感じない。それが『将器』という物だ」

軍記物語で聞いたような設定であったが、俺は軍事に素人なので何となくしか理解できなかった。

「直接は見ていないが、ニュルンベルク公爵もそうだな。彼は少数から大軍まで巧みに指揮をする。軍事においては天才だな」

「そう言われると、そんな感じがする」

そこで踏みとどまって優秀な軍人で終わっていてくれたら、俺がこんなに苦労する羽目にはならなかったのだが。

「ボンホフ準男爵が指揮官で、参謀として能力が高いポッペク殿が補佐するのが一番シックリくる」

「ポッペクさんがそれで納得ならそれで構わないけど」

フィリップの助言もあって、陣借り者達を集めた帝国軍の指揮はボンホフ準男爵とポッペクさんに任せる事にした。

さて、これからどのくらい兵が集まるのかは知らないが、とにかく養っていかなければならない。

磁器の量産に、魔物狩りによる食肉の確保、交易の促進で食料の輸入体制を維持、人数が増えた分は町の開発も進めないと駄目であろう。

「フィリップ殿の言う通りに、ニュルンベルク公爵やギルベルト殿は素晴らしい軍人なのであろうが、それよりも怖いのはバウマイスター伯爵だな」

「導師の意見に賛同だ」

導師とフィリップの発言で、その場にいた全員が俺の方に視線を向ける。

「陛下は、バウマイスター伯爵に払う報酬を惜しんで対ニュルンベルク公爵戦から外したが、ニュルンベルク公爵にとって一番のジョーカーは貴殿なのにな」

「えっ？　俺？」

俺は、ボンホフ準男爵の発言内容が理解できなかった。

魔法で無双は可能かもしれないが、それも敵に魔法使いが複数いれば威力が落ちる。

軍の指揮能力など無いし、剣の腕もサッパリで、とても指揮官として役に立つとは思えなかった。

「貴殿は優秀な魔法使いなので殺すのが難しい。稼げるから勝手に兵士が集まるし、その中から使える軍人も出てくる。それに任せて金だけ出して平然としている。小悪党でも怖かろうな。一見隙があるから金や物資でも誤魔化して蓄財しようとか考えても、すぐに何で泰然自若としていられるか理解できなくなる」

「任せているだけなのに、勝手に軍勢が出来上がるからな。ニュルンベルク公爵はバウマイスター伯爵が怖いだろうな」

「そうなのか……」

怖かろうが何だろうが、俺の敵に回ったので死んでいただかないといけない。

ああいう手合いは、生かしておくと碌な事にならないからだ。

「とにかく、ボンホフ準男爵に帝国人達を任せますので」

「時間は短いが、何とかする」

ボンホフ準男爵は、ポッペクさんを補佐に陣借り者達の指揮官に就任した。

皇帝からの命令書によると、この軍は『帝国中央領域における、治安維持を担当する独立部隊』だと書かれている。

独立なのでよほど大軍を集めないと問題にはならないはずで、同じく独立なので暫くは俺が手弁当で金を出している。

独立採算性とか抜かしたら魔法でもぶっ放してやろうかと思ったのだが、経費は全て後で清算してくれるそうだ。

当然、功績に見合った褒美も出ると書いてあった。

解放軍時代のと合わせて今までに銅貨一枚も貰っておらず、唯一貰ったのは昔の皇帝が着ていた古い服だけという時点で、色々と不安になってしまうのだが。

「しかし、予想以上に集まっているな」

ボンホフ準男爵が通称『帝都周辺警備軍』の指揮官に就任してから二週間ほど、サーカットの町には多くの陣借り者がいまだに詰めかけていた。
どうやら、ボンホフ準男爵の軍人としての名声は物凄く高いらしい。
退役して数年経っているにも関わらず、多くの志願兵が詰めかけていた。
指揮の補佐をする幹部達も、昔のツテで順調に集まっているようだ。

基礎訓練、軍事調練、町と砦の拡張工事、野生動物と魔物の狩猟と、参謀長になったポッペクさんが立てた綿密な計画によって全て順調に進んでいた。

「しかし、二万人も集めて大丈夫なのかな？」

「あの皇帝。どれだけ人気が無いんだろうな」

王国軍組の指揮だけに専念できるようになったフィリップは、次から次へと来る陣借り者や志願兵の多さに驚いていた。

「食わせる力があると、人は集まって来るのか」

経費も、磁器や服飾製品の販売で何とかなっている。
衣食住を効率良く支給して小遣い程度しか与えていないので、辛うじて収支を黒字にしていたのだ。
勿論、後で経費を請求するために詳細な請求書は、テレーゼ時代の物から含めて保管してあるのだが。

「ギルベルトが陣頭に立つと、軍が上手く収まる。なるほど、将器

とはよく言った物である」

最近は強力な魔物を多数狩って財政に貢献している導師が、軍事調練で陣頭に立つギルベルトさんを見て感心していた。

共に似たような風貌で、片や大軍を指揮する才能に長けた男、もう片方は個人で世界一の戦闘能力を持つ男と。

俺も含めて全員が気が合わない可能性を考慮したのだが、最初の顔合わせの時に……。

『貴殿の名は？』

『クリムト・クリストフ・フォン・アームストロング』

『王国の最終兵器と呼ばれている男か』

『そなたは、ギルベルト・カイェタン・フォン・ボンホフであったかな？』

『そうだ』

お互いに自己紹介をすると、二人はその場で伏せてなぜか腕相撲を開始していた。

導師は魔法を使わずに、己の筋力だけで勝負している。

『なぜ腕相撲なのか？』という俺達の疑問を他所に、二人はほぼ互角の勝負を繰り広げていた。

とはいっても、そのまま動かないだけなのだが。

そして数分後、二人は腕を離して勝負を止める。

『やるな。貴殿』

『そなたもな』

武闘派には、武闘派なりの友情の構築方法が存在するようだ。

俺には一生理解できないと思うが。

『よくぞ来てくれた。今日は某が一杯奢るとしよう』

『遠慮なく受け取ろう。俺は大量に飲むがな』

『某もそうである。気にするな』

既に指揮官就任が決まっているので良かったのだが、二人はまだ夕方なのに町にある酒場に向かって歩いて行ってしまう。

『仲良き事は美しい？』

『さあ？』

俺と同じく文系人間であるクリストフは首を傾げていたが、二人はあれから明け方まで飲んでいたらしい。

それでも次の日の仕事に支障が無い点は素晴らしかったが、一つとんでもないお土産を俺に渡してくれた。

翌朝、簡単に書類のチェックをしていると、そこに町の酒場のオヤジが請求書を持って現れたのだ。

『導師様と、お連れの方の分です。何でも、バウマイスター様が払ってくださるそうで……』

『俺が？』

なぜか二人の飲み代は、全て俺が負担する事になっていた。
と言うか、そんな許可を出した記憶が無い。
酒場の親爺に渡された請求書を見ると、そこには二万五千六百七十セントというとんでもない数字が記載されていた。
なるほど、どうせ俺が払うから何も問題ないわけだ。
『飲み代で一万セント超え？』
『お二方は、我が店秘伝の五十年物のブランデーをひと樽空けてしまいましたので』
『……。あの二人、遠慮という言葉を知らないのか……』
導師は魔物狩りで財政に貢献しているし、ギルベルトさんは得難い人材である。
一回くらいならと考えて、俺はその請求書の金額を支払った。
これで調子に乗って何回も同じ事をすればバカだが、引き際を弁えているのでそれ以降はそんな事はしていない。
なるほど、これが優秀な軍人なのかと俺はある意味納得してしまったのだ。
「バウマイスター伯爵が奢ってくれた、五十年物のブランデーは美味しかったのである」
「そんな貴重な物を樽で飲まないでくださいよ」
代金は支払って貰ったものの、酒場の親爺は他の客に出せなくな

ったと少し落ち込んでいたのだから。
物が物なので、金さえ払えば手に入る品ではないのであろう。

「バウマイスター伯爵よ。お主ほどの男が、細かい事を気にしては駄目なのである」

「痛い。導師。肩が痛い」

「あははははっ！　まだ鍛え方が足りないのである！」

紆余曲折があり、俺はほぼ独力で帝国内に兵力を保持する事になった。
これが後にどのような形で俺の未来に関わって来るのか？
それは、まだ誰にもわからないのであった。

第百話　ダークホース現る。

「さてと。皇帝陛下は俺達に何の用事かな？」

「ヴェンデリン。間違いなく大した事が無いか、碌でも無い事だと思うよ」

「だろうね」

季節は秋になり、既に作物の収穫が始まっていた。

これが終わって税が国や貴族に納められると、いよいよニュルンベルク公爵討伐に向けた動員が行われる。

帝国軍は、正面戦力だけで三十万人を動員する。

これに、補給部隊や情報収集のための部隊、占領地の軍政を担当する部隊などもあるので実数はもっと多い。

財政が苦しかろうと、皇帝が無能だろうと、帝国の官僚システムが優秀である証拠とも言えた。

だが悲しいかな、戦争は軍人の能力で決まってしまう。

軍の練度や補給状況は一定に保たれているが、ニュルンベルク公爵には地の利があり、軍はもっと精強で、資金も物資も豊富である。

指揮官の質は完全に向こうが上であろう。

中級以下の指揮官も、彼が独自に選抜して鍛えているのだ。

三倍の数があっても、帝国軍が勝てる未来が俺には思い浮かばなかった。

そんな中で、俺とアルフォンスは再び皇宮に呼び出されていた。
そんな暇があったら磁器を作りたかったのに、面倒な事をしてくれる御仁である。

奏者に案内されて玉座の間に行くと、前と同じく育ちが良さそうな皇帝陛下が待っている。
周囲にいるコバンザメのような取り巻き連中も前と同じだ。
もう少し、マシな人材を集められないのであろうか？

早速に二人で挨拶をすると、皇帝はこう切り出した。

「二人には、帝都周辺に陣を張って現地の治安維持に努めて貰いたい」

「はあ……」

なぜそんな事を命令するのかが意味不明である。
サーカットの町に置いたままか、せめて帝都内に入れて予備兵力にでもしてくれと思ってしまう。
多分、俺達を帝都内に入れたくないのであろうが。

「私は兵力を保持しておりませぬが……」

「テレーゼから数千も借りれば良いであろう」

テレーゼに大軍を率いさせて帝都に入れると、自分の留守中に何か企むかもしれない。
だが、それを恐れているように周囲には見られたくない。
猛将という評価が薄いアルフォンスが帝都周辺で陣を敷けば良いと、腰巾着の誰かが進言したのであろう。

小賢しいというか、中途半端な命令である。

「早速に兵の準備を始めます」

「任せるぞ」

わずかな時間で皇宮を辞してあとはサーカットの町に戻るだけだが、時間的に帝都で一泊しないと駄目であろう。

俺とアルフォンスにエルが指揮する護衛達もやはり男ばかりであったが、十名ほどで帝都内を歩いて宿を探す。

「皇帝陛下は、皇宮に泊まって行けとは言わなかったな」

「ヴェンデリンは、皇宮に泊まって行きたかったのかい？」

「堅苦しいし、明らかに歓迎されないだろうし、食べ物に毒が混じっている可能性も考慮しつつ嫌だ。言ってみただけ」

「私も同意見だな」

帝都の商業街を歩いてみると、初春の帝都奪還直後からは大分回復したようだ。

町を歩く人々の表情もほぼ戻っている。

実際には魔導飛行船が使えず、その分流通量が落ちて以前よりも景気が少し落ち込んでいるそうだが。

帝国の経済官僚達は、何とか戦費と共に景気対策の資金を捻り出そうとして皇帝の腰巾着共と言い争いをしているらしい。

皇帝が凡庸でもシステムで何とか帝国が動いている証拠とも言えるが、やはり皇帝が凡庸で力が無いと国に力が無くなる。

みんな、心中では有能な指導者を欲しているはずだ。

「エル。先に商談を済ませよう」

「帝都で磁器を販売して、皇帝に睨まれないかな？」

「睨まれても何ら問題は無いな」

皇帝陛下に言われた兵を整えるために、俺は苦労して稼いでいるのだから。

彼としては俺の資金力を削りたいのであろうが、バカ正直に向こうの言いなりになるつもりもない。

「怖い事を言うな。ヴェルは」

サーカットの町と帝都との往復で、一週間以上は時間を食ってしまう。

その間磁器の製造が出来ないために経済的には打撃なので、俺は魔法の袋に大量に製造した磁器を入れて持ってきていた。

エルは、他の窯元やそれを保護する貴族、更には皇帝に睨まれないか心配しているようだが、こちらには食べさせないといけない者達が大量にいるのだ。

押し付けておいてそんな文句を付けるのであれば、俺はいくらでも反論してやるつもりだった。

「同品質の物を売って市場を圧迫しているわけでもない。値段も違うから購買層も違うし、他の窯元の磁器なんて商売仇にもならない」

白い磁器は人気で、商人達はこぞってサーカットの町まで来ている状態である。
帝都の大商会に持ち込めば高額で購入してくれるはずだ。

「足元見やがったら、サーカットの町に持ち帰って売ればいい」

「何でそんなに喧嘩腰なんだよ」

俺の言い方に、エルは顔を顰める。

「アルフォンスには悪いけど、帝国の連中の方が俺に喧嘩腰だから」

「言い訳できないねぇ……。皇帝陛下は、君を有力な外様勢力の一つだと認識してしまったからね」

だからと言って、今までの働きに対する報酬も支払わず、後で払うからと言って更なる負担を押し付ける理由にはならない。
挙句に人が苦労して金を稼いで帝国人主体の軍隊まで養っているのに、偉そうに呼び寄せてまた外で駐屯していろと命令するのだ。
これで、好意的になれるはずもなかった。

「テレーゼとも、現状では友好寄りの別勢力という認識だな」

「やっぱり……」

皇帝派と対立しているせいか知らないが、最近では食料すら補給して来ない。
導師と軍主体の合同狩猟、周辺領域やミズホ伯国からの友情価格での輸入で少しずつ備蓄を行っている状態だ。

「テレーゼには文句を言ったんだ。いくら苦しくても、ヴェンデリンへの食料補給は止めるなと」

「なぜ止まったんだ？」

「ヴェンデリンなら何とかしてくれると……」

アルフォンスは反対したのだが、皮肉な事にフィリップ公爵領で内政を担当している兄二人が賛成に回ってしまったそうだ。

「その分を、北部諸侯への貸与や援助に回した方がいいとね」

テレーゼからすると、兄達の意見は無視できない。
下手に敵に回すと、皇帝派からの調略が及ぶと思っているからであろう。

「俺達はあくまでも外様。外国人だな」

それでも、ここでめげるわけにはいかない。
ニュルンベルク公爵を討ち、例の装置をバラバラに破壊する必要があるのだから。

「ふぇーーー。凄い屋敷だなぁ」

話をしている内に、帝都でも有数の大商会本部へと到着していた。
正面を警備する門番に俺の身分と用向きを伝えると、すぐに応接室に通されて高価なお茶とお菓子が出される。

「さすがだなぁ。帝国有数の大商会ともなると」

「これ、普段エリーゼが淹れてくれるマテ茶よりも美味しいよな」

アルフォンスとエルは、メイドが淹れてくれたお茶の美味しさに感動していた。

エリーゼが淹れるお茶よりも美味しいという事は、普段うちが使っている茶葉よりもかなり高価だという事だ。

「さすがは、フィリップ公爵閣下の腹心であらせられるアルフォンス様と、バウマイスター伯爵家一番の重臣の方。お口が肥えていらっしゃいますな」

そこに商会の当主と思われる恰幅の良い中年男性が姿を現し、アルフォンスとエルの味覚を褒めた。

「そして、現在勢力を急激に拡張中のバウマイスター伯爵様」

「好きでやっているんじゃないよ。マイヤー商会の主ともなれば、皇帝陛下からさぞや無心があっただろう？　それと同じさ」

「はい。ニュルンベルク公爵討伐で得られる利益で返済すると、無利子・無期限で結構な額の帝国債を。私どもは、子供達の食事代にさえ事欠きそうですな」

「面白い冗談だな。購入分だけ税金がお安くなっているとかあるんだろう？」

「これはこれは。バウマイスター伯爵様は、お若いのになかなかに博識でいらっしゃる」

別に博識というわけでもない。

前に、そんな条件で債権を販売した事例があったのを聞いた事があるだけだ。

「俺も同じでな。あとで褒美と合わせて補填すると言われて収入が無いから、副業で稼いで多くの人を養っているというわけだ」

「帝国内において、ヘルムート王国貴族であるバウマイスター伯爵様が、新しい磁器で稼いで大兵力を養っていると評判となってございます」

「大兵力？　大兵力というのは、最低でもニュルンベルク公爵くらい揃えてからだと思うけど」

「我が商会でも、万を超える兵力を養うなど難しいですから」

「その気になれば、何十万人も養えそうだけど」

「あくまでも短期間ではですな」

「俺も同じだよ」

今は磁器が高値で売れるし、養っている兵にも小遣い程度しか出していなかった。

正式に雇ったボンホフ準男爵以下は高額な給金を出しているが、それは全員ではない。

もし出していれば、俺はとっくに万歳していたであろう。

「そんな憐れな俺が、天下のマイヤー商会に磁器を売りに来たというわけだ」

「これは大変に助かります。バウマイスター伯爵様がミズホ磁器職人と手掛ける白磁器は大人気でございまして。内戦中ではありますが、世の中にはそういう時でも心の潤いにお金を使う方々がいらっしゃるのです」

「輸送費分と、友情価格でお願いするよ」

「はい。お願いされました」

それからすぐに、魔法の袋から大量に商品を取り出してマイヤー商会の当主に見せる。

「いいですね。高級品でございますか」

低価格品の無地の物は止めて、ミズホ職人が豪華で繊細な絵付けをしたり、縁に金箔を施し、高価なケースに入れたティーセットや芸術品としても通用する花瓶などに当主は顔を綻ばせていた。

「帝国政府にはお金がございませんが、ある所にはございまして。そういう方々は、このような商品を待ち望んでいるのです」

マイヤー商会の当主が提示した金額は、予想以上に高かった。念のために少しゴネてみると、それからまた二割上がっている。どれほど利益を見込んでるのかは知らないが、その金額で仕入れても売り切る自信があるのであろう。

「その金額でいい」

「もし同様の商品がございましたら、是非とも我がマイヤー商会にお願いいたします。ところで、今夜はどちらにご宿泊で？」

魔法の袋から取り出した商品を倉庫に入れ、代金を受け取りマイヤー商会を後にしようとすると、当主から今日の宿泊先を聞かれる。

「まだ決めていないが」

「それでしたら、私が懇意にしている宿を紹介いたしましょう」

当主は、俺達に今夜泊まる宿を紹介してくれる。

若い使用人の案内で宿に到着するが、やはりセレブ御用達の高級そうな宿であった。

「案内してくれてありがとう」

使用人に銀貨をチップとして渡して、俺達は宿にチェックインする。

豪華な宿は中身も豪華で、風呂に入ってから夕食となるが、食事も高級宿に相応しいご馳走ばかりが並んでいた。

部屋で食べる方式ではなく、宿の中にあるレストランで食事を取るのだ。

「あの……。私達もこんな豪華な食事を取って宜しいので？」

「どうせ経費で出しているんだから、こういう時は遠慮なく食べてくれ」

恐縮する護衛達であったが、これは必要経費である。

こういう時には遠慮をするなと言って俺達も食事を始め、護衛達もそれに続いて食事を始めていた。

「良いワインだ」

「ハルカさんにお土産に出来ないかな？」

三人でテーブルを囲み、護衛達も周囲のテーブルで食事をしていると、そこに一人の若い騎士と思われる青年が姿を見せる。

エルと護衛達は剣と刀に手を掛けて警戒を始めるが、その騎士は両手を挙げながら俺に話しかけてきた。

「バウマイスター伯爵様ですね？　私はとある方の随伴でこのレストランで食事をしておりまして。それで、そのお方が是非ご一緒に食事をしたいと」

「その方は、帝国貴族の方ですか？」

「いいえ。皇帝陛下のご三男であるペーター・オスヴァルト・デリウス・フォン・アーカート様です」

「（皇帝陛下の三男ねぇ……）」

さて、どうしたものかと思ってしまう。

何しろ、あの皇帝の子供なのだ。

もしかすると、父親に命じられて俺の失言でも引き出しにきたのかもしれない。

「（アルフォンス。知っているか？）」

皇帝の三男がどんな人物かは知らないので、その知識がありそうなアルフォンスに聞いてみる。

「（世間の評判は悪いよ）」

「（悪いのか？）」

「（『皇家の恥さらし』と呼ばれている）」

武芸の稽古や勉学はそれなりにやっているが、時間が空けば自分と同じような境遇の貴族の子弟達と共に徒党を組んで町に出かけ、町の子供達と遊んだり、下町の安いお店で買い食いをしたり、帝都近郊の森に出かけて戦争ゴッコや狩猟して遊び、その成果を焼いてバーベキューをしたりと。

とても皇族の子供とは思えず、常に皇帝から叱責され、行儀の良い長男・次男からも嫌われて無視されている。

そんな情報を、アルフォンスは俺に耳打ちした。

「（どうせ皇家を継げないから自由に行動してるのか？）」

「（自由ねぇ……。評判が悪い原因は、高貴な生まれなのに行動が庶民的過ぎるからだけど……。まあ、そういう言い方も出来るかな）」

アルフォンスも、そこまで皇帝の三男について詳しくもないようだ。

好意も抱いていないが、悪意も抱いていない。

そんなところであろう。

「（会ってみようじゃないか）それで、殿下はどこにいらっしゃるのかな？」

「こちらです」

若い騎士は、レストランの奥にあるＶＩＰ用の部屋に俺達を案内しようとする。

すると、エルが俺の前に立って目配せをして護衛達に合図を送った。

すぐに俺の周囲を取り囲み、エルは先に部屋に入っていく。

「おい。エル……」

さすがにそれは失礼だろうとエルに声をかけようとした瞬間、彼は素早く刀を抜いて部屋のドアの奥にいた、二十代前半くらいの別の若い騎士にその切っ先を向けた。

「面白い趣向だな。帝国の殿下様ともなると」

「エル。良くわかったな」

「ハルカさんと抜刀隊の訓練は役に立つな。ドアを開ける前から殺気がビンビン伝わってくる。ヴェルは、気が付かなかったのか？」

「いやあ、剣士の殺気とかはね。一人、結構凄い魔法使いがいるのはわかったけど」

試しにエルが刀の切っ先を向けている騎士をすり抜けるように氷の矢を部屋の奥に向けて放つと、『魔法障壁』の反応と共に共に氷の矢が弾かれて床に落ちていた。

「安い物語じゃないんだから、こういう試し方は止めてくれないかな？」

俺達を部屋に案内しようとした騎士に苦情を言うと、彼は申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「主君の命令か？　イタズラ好きなのかな？」

「……」

続けて質問をすると若い騎士は黙り込んでしまうが、すぐに反応があった。

部屋の奥から一人の若者が姿を見せたのだ。

素材の良い服は着ているが、ラフな格好をした俺と同年代くらいの少年はまずはエルの声をかける。

「ごめんなさいよ。へえ。うちのゴルツに先制して剣を……。これはミズホ刀か。バウマイスター伯爵はミズホ上級伯爵と仲良しって本当なんだ。クソ親父の情報もたまには当てになるんだね」

「あなたは？」

「ゴルツ。剣を納めて手を離さないと、バウマイスター伯爵一の家臣であるエルヴィン君に額に穴を開けられちゃうよ」

どうやら、この少年が皇帝の三男のようだ。

しかし、皇帝の息子とは思えないほど言動が軽い。

「殿下。申し訳ありません」

「僕の方こそ、ゴルツに変な事を試させてすまないね。エルヴィン君。ここは僕に免じて刀を納めてくれないかな？　ゴルツは、僕の

命令でこういう事をしたんだよ」

「だとよ。ヴェル。どうする？」

「許してやれ」

「へえ。エルヴィン君は本当にバウマイスター伯爵の親友でもあるんだね。冒険者仲間か。いいね。僕も普通の狩猟じゃなくて魔物狩りに行きたいなぁ」

皇帝の三男は、ゴルツという男とエルの戦闘態勢を解いてから俺の前に歩いてくる。

そしてその後ろには、二十歳ほどに見えるライトグリーンのショートカットが特徴の若い女性が同伴していた。

その恰好は、このレストランに相応しいドレスコードを順守した姿であったが、俺にはわかる。

彼女はカタリーナにも匹敵する魔力を持つ魔法使いだ。

俺はいつでも『魔法障壁』を張れる準備をする。

「エメラ。警戒されちゃってるよ」

「殿下。バウマイスター伯爵様は、王国の最終兵器アームストロング導師に匹敵する魔法使いと評判です。私の存在に気が付かないはずがありません」

「魔法使いは魔法使いを知るというやつだね」

皇帝の三男は、エメラという魔法使いの発言に素直に感心していた。

「勝てそう？」

「いいえ。９：１の確率で負けると思います」

「うーーーん。分が悪いね。さすがは、あのバカ四兄弟を瞬殺しただけはあるね」

俺は一人しか倒していないが、今は無理に訂正する必要も無いであろう。

「本当に勝負したいので？」

「まさか、個人的な興味ってやつ。うちのエメラは凄い魔法使いだと思うんだけどなぁ……」

俺の問いに、皇帝の三男は無邪気な表情のまま答えていた。

「凄い魔法使いでしょう。良くこの内乱で温存できたな……」

魔力はカタリーナに匹敵し、勘ではあるが彼女よりも練達の魔法使いに感じる。

暴風魔法に片寄りがちなカタリーナよりも、魔法使いとしての性質はブランタークさんに近いはずだ。

正面から戦えば勝てるだろうが、ブランタークさんと同じで正面から戦わないで他の手で来るか、勝てないとわかればとっとと逃げ出しそうなタイプである。

「エメラは綺麗でしょう？　でも、駄目だよ。僕の物だから」

「殿下っ！」

「ははははっ。冗談じゃなくて本気だけど」

これだけの魔法使いを臆する事なく自分の物だと言い切る皇帝の三男に、俺達は困惑していた。

掴み所の無い人物で、どう接していいのかわからなかったからだ。

「（それでも、家臣には恵まれているのか？）」

皇帝の三男ともなれば、これだけ優秀な魔法使いが傍に仕えるものなのであろうか？

「立ち話も何だし、食事にしようか？」

「ええ。そうですね」

このままでは埒が明かないのも確かだ。

俺達は皇帝の三男の案内でＶＩＰ室に入る。

室内には他にも数名の若い騎士達がいたが、彼らは俺の護衛と共に部屋の外のテーブルで食事をするようだ。

ＶＩＰ室に他の人が入って来たり、聞き耳を立てられるのを防ぐためなのであろう。

こちらは俺、アルフォンス、エルの三名で、皇帝の三男はエメラという魔法使いと、先ほどのゴルツという騎士ではなくて、別の若い騎士がその両脇の席に座っていた。

「ヴェル。俺だとあいつに勝てない」

「そうなのか？　確かに凄そうには見えるけど」

「俺達がこの部屋に入るまで、彼は完全に気配を消していた。さっきのゴルツという人には気が付いたけど、彼には気が付かなかった」

「バウマイスター伯爵。僕の剣士も結構凄いでしょう。みんなで自己紹介でもしようか。まずは、マルクからだね」

「マルク・ライヒアルト・フォン・カウフマンです」

エルが勝てないと断言する凄腕の剣士は、男性にしては珍しく肩まで伸ばした黒髪を後ろで束ねていた。

鋭い眼光を放つ、三十歳前後に見える歴戦の剣士といった感じだ。

そして、その腰に差してある剣はオリハルコン製の逸品であった。

「帝国でマルクに勝てる剣士はそうはいないと思うよ。凄いから、僕が秘蔵の剣を貸しているんだ」

オリハルコン製の剣は、皇帝の三男の持ち物らしい。

しかし、どうやって入手したのであろうか？

「彼は、帝国軍でも重鎮なのでは？」

「それがねぇ……。彼は庶子だから」

カウフマン子爵家の庶子で、更にこの家は元々は司法を担当する法衣貴族であった。

「官僚の家に優秀な剣士で庶子。ミスマッチだから彼は不遇でね。

僕がスカウトして護衛を任せている。これで僕の安全は保証されたわけだ」

「確かになぁ……」

エルが俺の横でボソっと呟いていた。

確かに、彼を抜いて皇帝の三男を暗殺するのは困難であろう。

「魔法使い殿もいますからね」

「そうだよ。彼女は僕の恋人兼お抱え魔法使いのエメラ」

「エメラ・ヨハナ・ゲヌイトです。それと、私は殿下の恋人ではありませんから」

「つれないなぁ。エメラは」

「殿下。私は平民の娘ですから」

「エメラほどの魔法使いなら何の問題も無いって」

「そういう問題では無いのですが……」

何と言うか、良くわからない関係に見える。

本当にそういう関係なのか？

それとも、エメラの方が皇帝の三男を拒否しているのか？

身分差があるからと、彼女の方が遠慮しているようにも見えるのだ。

「エメラは、僕と二人きりの時は優しいんだよ」

「殿下」

皇帝の三男の言葉で、エメラは顔を真っ赤にさせて俯いてしまう。

「なるほど。殿下は年上好きなのですね」

「アルフォンスは、いきなり喋り出したかと思えば……」

「正解。バウマイスター伯爵も、テレーゼ殿に言い寄られているから仲間だね」

皇帝の三男はアルフォンスの軽口に怒るでもなく、逆に俺をからかう始末だ。

「あれはですね……」

「皇宮の中でも噂になっていたんだよ。クソ親父は、テレーゼ殿とバウマイスター伯爵が組んで帝位を奪うと怯えていたけど。可哀想にね。凡庸で小心だから玉座の重さに怯える事になる。とっとと手放せば幸せなのに」

「殿下……」

「殿下は止めてよ。せっかくの密室なんだ。僕の事はペーターと呼んでくれていいよ。僕は君をヴェンデリンと呼ぶから。あと敬語も禁止ね」

「はあ。わかりました」

テレーゼと同じく、ペーターは俺をヴェンデリンと呼ぶようだ。

「敬語は禁止だよ」

「わかった。それで、自分の父親である皇帝陛下をクソ親父呼ばわりで大丈夫か？」

「実際、クソ親父だから仕方がない。ヴェンデリンもそう思うでしょう？」

「反乱が無ければ、普通の皇帝で終われたとは思うよ」

「ヴェンデリンの意見に、僕も賛成だな」

反乱さえ起らなければ、無難に帝国を統治して七十歳くらいで引退、これで良かったはずだ。

「ニュルンベルク公爵にしてやられたのだから、素直に引退してテレーゼ殿に譲れば良かったのにね。変に欲を持つから晩節を汚す事になる」

「そこまで言うか？」

ペーターの過激な意見に、さすがのアルフォンスも顔を顰めさせていた。

「だって、もう少しで始まる討伐で失敗するし」

どうやらペーターは、俺達と同じ見解を持っているようだ。

「後方支援要員も合わせて五十万人は凄いけどね。その大軍を指揮できる人がいないよね」

「皇帝陛下は？」

「馬にも長時間乗れない人に何を期待しているの？」

「そうなのか？」

馬に乗れなくても優秀な軍人はいるかもしれないが、あの皇帝に限って言えばその可能性がゼロとしか思えない。

「馬に乗ると股ずれが痛いんだって。兄達も従軍するけど、あんなんで大丈夫かな？」

「ペーターの兄二人も出陣するのか？」

「腰巾着共もね。みんな、戦功が欲しいからね。あと分不相応な夢も持っているし」

「夢？」

「皇家だけで皇帝を独占可能にする事」

皇帝は今回の反乱を糧に、強い中央集権的な帝国を作りたいと周囲に漏らしているそうだ。

とてもニュルンベルク公爵の考え方に似ていると思うが、今は半数以上の選帝侯家の力が落ちたのでチャンスだと思っているらしい。

人間とは、案外同じような事を考えるものだ。

「だから、解放軍を目の敵にしているのか」

「テレーゼ殿はライバルだからね」

そこで、自分達だけでニュルンベルク公爵を討ち、皇家の力の源泉たる直轄地を増やし、自分達に従順な貴族に加増するために大規模な討伐作戦を計画したのだそうだ。

「それで、ペーターはお留守番と」

「クソ親父も、兄達も、僕に期待なんてしていないから。みんなニュルンベルク公爵に幽閉されていたのに、自分達は彼に勝てると思っているようだよ」

「数を揃えるという条件は満たしているから勝てるかも」

「面白い冗談だね。ヴェンデリン。君もそんな事は微塵も思ってもいない癖に」

実際にニュルンベルク公爵の軍勢と戦ってみたが、その精強さのおかげで遂に一度も崩す事が出来なかった。

討伐軍はいくら数が多くても、ミズホ伯国軍とフィリップ家諸侯軍がいない状態なのだ。

寄せ集めで練度も低いし、かなり難しいとしか言いようがない。

「公称五十万とはいえ、実戦部隊は三十万。全員が一斉に戦えるわけもなく三つに分かれるし、行軍が伸び切ったところで地の利があるニュルンベルク公爵に奇襲されないといいね」

「確かに、その可能性はあるんだよなぁ……」

ペーターは、俺達と同じく討伐作戦の失敗を予感しているようだ。

「それで、ペーターはどうしたいんだ？　敗戦後にニュルンベルク公爵に降伏して生きながらえるとか？」

「無理に決まっているじゃない。ニュルンベルク公爵はなぜ一度は僕達を生かしたと思う？　無様に負けて、帝国臣民や貴族達の心を折るための道具だからさ」

反乱を起こされて一度は幽閉された相手に情けをかけられ、それなのに皇帝に踏みとどまって討伐で大軍を出して敗北。

確かに、皇家の権勢は地に落ちるはずであった。

「反ニュルンベルク公爵派を二つに割る効果もあったね。テレーゼ殿が法秩序に拘って、クソ親父を帝位から引き摺り下ろさないから」

「……」

前に自分が思っていた事を他に人に言われて、アルフォンスは表情を曇らせていた。

「ペーターの見解はわかった。それで、何をしたい？」

「一言で言うと、僕が皇帝になって帝国を統べるからヴェンデリンに協力して欲しいなと」

エルとアルフォンスの体に緊張が走る。

今の時点でその発言が皇帝にバレれば、反乱の共犯で共に処罰されかねないからだ。

ただ、俺は特に警戒もしていなかった。
ここで皇帝の耳を機能させてしまうくらいの男なら、そもそも帝位への野心など口にしないであろうからだ。

「俺は目下、皇帝陛下にも野心を疑われている外国の貴族だがね」

「でも、ヴェンデリンは帝国の領地なんていらないよね？　大陸南端の小国にも匹敵する大領の開発が忙しいでしょう？」

ペーターは、バウマイスター伯爵領の状態を把握しているようだ。
つまりは、そういう耳を持っているのであろう。

「それで、俺を使い潰して自分は皇帝になって万歳か」

「まさか。僕は君を買っているんだ。プライベートでは友達にもなれると思っている。報酬は確実に支払うさ。現金とか宝物とか鉱物資源とかでもいいかな？　ちゃんと計算するし、分割払いを検討してくれると嬉しいな」

「ちゃんと払うなら、一括で取り立てようとは思わないさ」

勿論、払わなければあとで軍勢を率いてでも徴集しに行くが。
そう、帝国の領地やテレーゼなどいらないのだ。

稼いだ資金を全てバウマイスター伯爵領に投入し、時間をかけて大規模に発展させる。
今頃は陛下も、バカな出兵論者達を抑えるのに忙しいであろうが、王国政府とて占領しても住民が靡かないかもしれない帝国領よりは、自国領土の発展の方が優先課題であろう。

それに成功して国力で帝国を引き離せば、あとでいくらでも選択肢が出てくるのだから。

「本当に？　ありがたいな。交易での優先権とか、関税とかでも優遇しちゃうから。細かい条件は戦後に担当者に任せるとして」

「その条件が無事に履行される事を祈っているよ」

「大丈夫、そのために努力しているから」

一応釘を刺しておくと、ペーターはアルフォンスに向けて渋い顔を向ける。

「うちのクソ親父も大概だけど、テレーゼ殿にも困るよね。アルフォンスや他の家臣や北部諸侯達には、少しでも先渡しで褒美を渡しているのに」

「なぜそれを……」

ペーターの指摘は図星だったようだ。
アルフォンスの顔色が、徐々に青くなっていく。

「アルフォンス、僕が情報源を教えるとでも？」

「いや……」

フィリップ公爵家の家中と解放軍内の結束を強固にするためであったが、なぜか俺はテレーゼの誘惑しか受け取っていない。
確かに、ペーターの言う事は正しい。

「アルフォンス様」

「すまない。私にも考慮しないといけない陪臣達がいるんだ」

エルの追及に、アルフォンスは心から申し訳なさそうに弁解した。

テレーゼから褒美を貰っていた事実を俺達に隠していたからだ。

「こういう言い方は嫌なんだけど、テレーゼ殿はやっぱり女なのさ」

「殿下。それ以上は……」

アルフォンスがペーターの発言を止めようとするが、彼はそのまま話を続ける。

「君も十分に理解しているんだろう？　女であるテレーゼ殿は、好きな男であるヴェンデリンに甘えている。だから、名誉伯爵の爵位と解放軍における参謀の地位を与えただけ。ヴェンデリンが決して自分を見捨てないと思っているんでしょう？　でも、そういう態度がヴェンデリンの不信感を募らせているんだけどね。この件に関しては、うちのクソ親父を笑えないでしょう？」

「……」

ペーターの指摘に、アルフォンスは口を閉ざしてしまう。

「ここまで状況が悪化した以上は、僕も苛烈にやらせて貰う。犠牲も出るし、多くの貴族が没落するだろうね。でも、このまま内乱が続けばもっと犠牲が出る。僕が前の皇帝選挙に出ていない？　今は非常時だ。摂政でも、代皇でも呼び方なんてどうでもいい。反ニュルンベルク公爵勢力を結合して、奴の首を討つ。僕よりも年上なの

に、甘い幻想に酔っているあのバカを生かしておく理由が無い。優秀な軍人で満足していれば良かったのに不幸な事だね。ニュルンベルク公爵家千四百年の歴史も彼の代で終わりさ」

自分と同じ年なのに、俺は彼に圧倒されていた。

この魔法も使えず、軍事や内政の手腕も未知数の少年が、とてつもなく大きな存在に見えたのだ。

「ようやく、帝国を纏められそうな人物が出たな」

「おい。ヴェルっ！」

「このままグダグダやっていても、時間と金と人材の無駄だ。大言壮語で無い事を祈ろうぜ。エル」

「ううっ……。俺は、何でこんな反乱モドキの席に……」

エルからすれば、この席にいること自体が苦痛なのであろう。

一人、頭を抱えていた。

「エルヴィンは真面目なんだね。でも、反乱じゃないから大丈夫」

「殿下。それは、どういう事で？」

今いる皇帝を排除するのに、それは反乱では無いとペーターは言う。

エルは、その理由が理解できないようだ。

「クソ親父は、戦争なのに馬に長時間乗ると股ずれで痛いから特製の輿を準備しているんだ。兄達も、張り切って出陣するしね。僕は

お留守番を命じられたけど」

「それって、もしかして？」

「クソ親父は戦死すると思うよ。皇帝が戦死すると帝位が空くわけで、そう簡単に皇帝選挙など行えないから、権力に空白が出来るよね？　そこを僕が埋めるというわけ」

「実の父親を見捨てるのか？」

エルは、自分の父親が戦死すると断言して表情一つ変えないペーターに驚いていた。

「エルヴィン。僕はこの可能性を、何度も口が酸っぱくなるほどクソ親父にも兄達にも言ったんだよ。でも、受け入れるどころか子供の言う机上の空論だと怒られてね。軍部でも賛同してくれた人が結構いるんだけどね。彼らも進言したら、討伐軍から外されちゃった」

「それってまさか……」

皇帝が戦死したとして、その空白を疎まれている皇帝の三男がどうやって埋めるのか？

ペーターは、既に多くの協力者を得ているのであろう。

討伐作戦案に反対して外されたような連中が、その主力なのだと思われる。

「もし運良く皇帝が逃げ帰ったら？」

「大丈夫、それはないから」

つまり、もしそうなっても戦死に見せかけて暗殺する準備もしているのであろう。

「俺が磁器を売りに行ったマイヤー商会もグルか？」

「だから、この宿を勧められたでしょう？」

「そうだな」

ペーターが俺と会談をするために、マイヤー商会の当主に頼んでこの宿に誘導したというわけだ。

「彼も、クソ親父には辟易させられていたからね。金蔓にだけされるのは堪らないでしょう？　苦労して稼いだお金なのに」

貴族の中には、商人を金があるだけの卑しい人種だとバカにする人がいる。

確かに感心できない人も沢山いたが、彼らは実力でそのお金を稼いでいるのだ。

そのお金を、貴族や皇族の権限で好き勝手に使っても良いという法も無いであろう。

「スポンサーがいるなら事は成就しやすいかな」

「先立つ物が無いと難しいでしょう？　ただこれでまた僕の借金が増えたね」

「借金はチマチマした金額だと返済に苦労するだけだけど、逆に多いと案外安心できるぞ」

「ヴェンデリンはわかっているね」

貸した相手がちゃんと返済するように貸した側も協力を惜しまないし、それだけの大金を借りられるという事は、ペーターがマイヤー商会の当主に評価されているという事でもあった。

「ニュルンベルク公爵は、例の妙な装置のせいで魔導飛行船や通信を阻害して商人に打撃を与えた。クソ親父は金の無心だけしてる。商人から嫌われて権力者の地位を維持するのは難しいね。確かに表面上は逆らわないけど、裏で暗躍されると足を引っ張られる」

マイヤー商会が力を貸しているという事は、他の商会にも協力者がいるのであろう。

「何とかペーターが事を成就するのを祈っているよ。俺達は帝都の外でお祈りしているから」

「えっ？　手を貸さないのか？　なぜ？」

俺が、ペーターが権力を完全に掌握するまで力を貸さないと言うと、エルは驚きの表情を浮かべながらその理由を聞いてくる。

「俺達外国人勢力が手を貸すと、あとで色々と面倒だから。もう一つ、このくらいは自力でやってくれないと困るから」

「ヴェンデリンは良くわかっているね。色々と助かるよ。討伐軍の惨敗後に事を起こすから、僕が帝都を完全制圧したら帝都に入って来てね」

「わかった」

「じゃあ。それまでは互いに努力しないとね。僕は、もっと有能な賛同者を集める。ヴェンデリンは、軍の徴募と訓練をギリギリまで続ける。磁器の販売で金稼ぎもか」

それからは、密談ではなくて普通に世間話をしながら運ばれて来る料理を食べたりお酒を飲んだりして時間を過ごす。

やはり、テレーゼよりもペーターの方が皇帝に向いている。

彼自身も周囲の悪評を隠れ蓑に密かに同志を集めていて、それにあのバカ皇帝は気が付いてもいない。

残念ながら、テレーゼとは皇帝の器が違うのであろう。

「しかし、皇帝陛下の三男ともなると違うな。良い家臣が付いてくる」

貧乏騎士の八男であった俺に付いて来る家臣などいなかった。

何しろ俺は、実家を出るまでは常にボッチだったのだから。

「ヴェンデリンは逞しいという事でいいじゃない。魔法使いってこういう時に得だよね。僕が一人なら何も出来ない」

「そうですね。殿下には取り立てて得意な事もございませんし」

「聞いたでしょう？　ヴェンデリン。エメラって、結構キツイんだよ。みんなの前だと」

「主君なんだから、特技がある部下を使いこなせればいいと思うけどな。エメラさん」

「ヴェンデリンはわかっているね。王や皇帝ってのは、上手く人が

使えればいいんだよね。そして、それに見合う報酬を与える」

あとは、その人が欲しがる物を与えるだ。

俺の場合には、帝国領地やテレーゼなどはむしろいらない類の物であった。

それがわかってくれているペーターの存在はありがたい。

「ヴェルもそういうタイプか？」

「いや、俺は放任しているだけ」

本当の意味で、人に任せて金を出しているだけだ。

ペーターほどの把握能力があるとも思えない。

「ローデリヒがいないと、駄目だったろうな」

そういえば、ローデリヒは上手くやっているのであろうか？

「ヴェンデリンは、魔法が突き抜け過ぎているからそれでいいと思うよ。気前が良くて鷹揚だから家臣達も良く働くと思うし、怒らせれば魔法で吹き飛ばされそうだから悪さもあまりしないと思うし。楽でいいじゃない」

エルも交えて三人で話をしていると、珍しくアルフォンスが落ち込んでいる。

どうやら、何か考え事でもしているようだ。

「何を悩んでいるんだ？」

「それは、殿下に聞いてくれ」

テレーゼの皇帝としての器の限界。
自分もそうだとは言っていたが、他の人に言われるとというやつだと俺は思っていた。

「あとはね。僕は確実に帝国を統治したい。そのためには補佐する人材が必要なわけで、その候補は当然ミズホ上級伯爵とフィリップ公爵とバーデン公爵だよね」

他の選帝侯家の落ちぶれぶりは凄いので、ペーターとしてもあまり頼りにはならないと思ってるのであろう。

「（うん？　待てよ。フィリップ公爵？）」

今まではテレーゼ殿と言っていたのに、なぜか今はフィリップ公爵と言っている。
細かいが、ペーターのその呼び方が俺は気になっていた。

「もしかして……」

「アルフォンスは気が付いたから悩んでいるんだよ。アルフォンス。君が新しいフィリップ公爵になるんだ」

「やはりそう来たか……」

テレーゼが一番信用している家臣はと言えば、間違いなくアルフォンスであろう。
従兄で分家の当主で、武芸以外は何をやらせても卒なくこなすし、人を使うのも上手い。

『アルフォンスがフィリップ公爵なら、もっと上手く行ったかも』と思う事も少なくなかった。

帝都奪還の時点で、皇帝が諦めた可能性が高いからだ。

「テレーゼでは駄目ですか？」

「うん。中途半端だから。テレーゼが女である以上は、アルフォンスの倍優れていないと駄目。可哀想だけど、テレーゼが女だから解放軍は損をしている」

地球でこんな事を言えば大問題になると思うが、この世界では何ら問題ではない。

それに、今回は戦争で命がかかっている。

女性の社会進出のために命を落としてもいいと思っている人はほとんどいないであろう。

「うちのクソ親父と同じさ。内乱が無ければ、良い公爵様で一生を終えたと思うよ。実際、前皇帝の助け有りとはいえ、独裁権を獲得して内政能力にも長けている。軍の指揮能力も悪く無い。ニュルンベルク公爵を除けば、選帝侯の中で一番優秀だと思うね」

「その意見の是非はともかくとして、現当主を強制引退に追い込むなんて出来るのか？」

「出来るよ。ねえ、アルフォンス？」

「そうだな」

アルフォンスは自分のグラスに注がれたワインを飲み干すと、言葉を続けていた。

「『女だから』。ただこの理由だけで、俺が声をあげると可能性はある」

「ヴェンデリンは知らないと思うけど、実はアルフォンスもフィリップ公爵候補になった事があるんだよ。テレーゼ殿の兄二人よりも領内では支持が強かった。アルフォンスは血筋もいいからね」

アルフォンスが公爵位を継がなかったのは、やはり本家の人間じゃないからという理由にあったそうだ。

「例の甥達はどうする？」

「それは殿下が何とかすると思う」

「そうだね。別家の当主にして、新しい領地貴族家なり法衣貴族家としてご活躍を願うかな」

ペーターが兄達に、他の領地なり爵位を与えて上手く懐柔するようだ。

「アルフォンス。決断して欲しいな。君もわかっているんだろう？テレーゼ殿が、本当は当主なんてやりたくない。嫌々やっているんだって」

「良く知っていますね」

「見ればわかるよ。だから、君が新しいフィリップ公爵になって僕を支えればいい。テレーゼ殿は年金でも貰って本当に夫を探せばいいじゃない。それが彼女にとって幸せだと思うよ」

「大した情報収集能力だ。殿下は」

テレーゼが、本当は貴族家の当主などやりたくないと思っている。俺達の前で見せた結婚への願望や無茶な要求は、本当は冗談では無くて叶えたくて仕方がない本音なのだと。

そして、ペーターはそれに気が付いている。

彼の説得に、アルフォンスは長い間苦悩の表情を浮かべていた。

「それで、どうするのです？」

「いきなり今とは言わないよ。反ニュルンベルク公爵派が全て集結した時だね。僕が直接引導を渡す。それまでに仲間を集めておいてくれ」

「承知しました」

それから一時間ほど食事会は続き、その日は全員でその宿に泊まる。

翌朝、サーカットの町に戻ろうと馬を預けていた厩舎に行くと、そこには馬を準備したペーター達が待ち構えていた。

エメラという魔法使いと、マルクという凄腕の剣士もいた。

「ペーターは何を？」

「視察という名の、色々と渡りを付けるための行脚。そろそろ時間が無いからね」

「この時期にか。皇帝が何と言うか……」

「クソ親父は、僕を無能だと思っているから安心して。ヴェンデリンの所に遊びに行くと言ったら、『精々足を引っ張って欲しい』って顔をしていたから」

とても笑顔で言うような事でも無いが、この部分がペーターの怖さなのかもしれない。

「じゃあ、時間は有限だから急ごうか」

こうして帰りの人数が増加し、俺達は所定の目的を終えてサーカットの町に戻るのであった。

「なあ。ヴェル。あの殿下怖くないか？」

「深く付き合わなければいい」

「そうだな。俺は遠慮しておくわ」

エルは俺にそっと、ペーターという人物が怖いと感想を漏らしていた。

俺は、やっと内乱終結の糸口が見えたと安堵していたのだが。

第百一話　陸亀王レインボーアサルト

自らの野心を俺達に対して隠しもしない現皇帝の三男ペーターは、屈強な剣士と凄腕の魔法使いの他に、十名ほどの護衛を連れて共にサーカットの町に到着した。

公的には、俺達余所者がサーカットの町で悪さをしていないか皇帝陛下の御三男であるペーター殿下が視察を行うためだそうだ。

ただ、皇帝も兄達も取り巻きの連中も、彼には何も期待していないそうだ。

『兄達は、それはクソ親父に対して猫を被っているからね。人を見る目が無いクソ親父には孝行息子に見えるのさ』

帰りの街道上で、ペーターが馬に乗りながら今回の同行について事情を説明する。

ペーターを視察に出す事を皇帝に提案したのは、その優等生な兄達らしい。

『僕は母親が平民だし、元から期待されてもいない。同じような連中を連れて下町で遊びながら串焼きを食べていたら侍従が卒倒してね。クソ親父も、生まれた家が何たらとか五月蝿いからさ。無視したら嫌われてね』

皇家の子供がそんな言動をすれば、間違いなくおかしいと思われるはずだ。

『僕の取り巻きだってみんな妾腹で、十五男とかもいるし。見栄を張る余裕も無いのに五月蝿いよね』

おかげで、ペーター達のグループは不良集団という評価を皇宮内で受ける事になる。
ただ、皇族や貴族から見て粗野で素行が悪いだけで、別に帝都の臣民達に嫌われているわけはないそうだ。
むしろ、気さくで付き合い易いという評価を受けている。

これは、マイヤー商会の当主が帝都を離れる時に見送りに来て俺に言った事であった。

『別にいつも羽は伸ばしているけど、帝都の外に行けるのはいいね。クソ親父や兄達がいないから』

サーカットの町に到着すると、出迎えてくれたみんなは付いて来たペーターとその一行に驚いているようだ。
まさか、皇帝の三男が来るとは思っていないかったのであろう。

魔導通信機も使えないので、こういう点でもあの装置は不便であった。
みんなに事情を説明してからまずは護衛達を宿舎に案内し、ペーター、マルク、エメラの三人は俺達が寝泊まりしている屋敷に案内する。

俺達は野戦陣地にいた時と同じように、砦の中に石造りで大き目の家を建てて引っ越していたのだ。

「初めまして。ヴェンデリン様の妻のエリーゼと申します。殿下におかれましては……」

「そういう堅苦しい挨拶はいいよ。ここには、ヴェンデリンの私的

な関係者しかいないのでしょう？　それにしても、噂通りに美しい人だな。というか僕と同じ年なのに、もう奥さんが五人もいるんだ。羨ましいなぁ」

「ええと、随分と砕けた人なのね。ヴェル」

「会う度に息苦しいよりはいいじゃない」

イーナからすると、彼女の中の殿下像が崩れてしまうのであろう。

それほど、ペーターは変わり者というわけだ。

ルイーゼは、堅苦しい奴よりは好きという感覚だ。

「現皇帝の三男だから婚姻が面倒なだけで、その気になれば何人でも妻を持てる」

「ヴィルマちゃんの言う通りなんだけど、僕としては皇宮にいる飾り人形に興味は無いんだよね」

ペーターは先ほど自己紹介したばかりのヴィルマを、すぐにちゃん付けで呼んでいた。

ヴィルマは少しだけムスっとした表情を浮かべていたが、すぐに興味を隣に控えているマルクに向ける。

「強そう」

「マルクは帝国最強の剣士だからね。それで、マルクの方は勝てそう？」

「難しいですな。その……。ここは何なのですか？」

マルクは、俺の妻達を見て珍しく表情をわずかに崩した。

「エルヴィンも相当に曲者なのにね。戦闘能力が尋常で無い人ばかりで、ちょっとビックリだよね」

私的な空間なので、ここには普段のメンバーしかいない。

凄腕の剣士マルクは、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、ハルカと見て溜息をついていた。

エメラも、カタリーナ、ブランタークさん、導師と視線を送って警戒感を露わにしている。

「エメラ、模擬戦闘とか腕試しとかは無いから大人しくね」

「はあ……」

「エメラは、僕に対する忠誠心と愛情に満ち溢れているからちょっと過敏になっているんだ」

「あくまでも仕事です。特に愛情などはあり得ません」

「二人きりにならないと普段はちょっと冷たい口調になるけどね。本当は僕に対する愛情が一杯なんだよ」

「殿下の妄想も相変わらずですね」

相変わらずこの二人の関係が良くわからないが、自己紹介も終わったので俺はペーターからの提案をみんなに説明していた。

「伯爵様、テレーゼ様を見捨てるのか？」

「見捨てませんよ。ただペーターが皇帝の方がしっくりとくるからです」

ブランタークさんは、十年前に出会った少女の頃のテレーゼに引き摺られている部分がある。

自分では気が付いていないかもしれないが、これは実は導師も同じであった。

「某も、テレーゼ様に甘いと？」

「ええ。他に候補者がいなければテレーゼでも良かったのですが……。俺はペーターを知ってしまいましたからね」

能力以前に、こいつは『いい性格』をしている。

時には他の人達の思惑など無視して自分の思う通りに事を進められないと、皇帝など務まらないというわけだ。

特に、今は戦時なのだから。

「運命の恋人同士が出会った時のような言い方だけど、僕にそういう趣味は無いから」

「それは、言わなくてもわかるだろうに……」

俺だって、男性に性的な興味などない。

「ヴェンデリンには綺麗な奥方が五人もいるからね。誤解を招くような発言は訂正していかないと」

「そいつはありがとうよ」

「伯爵様、本当に殿下でいいのか？　テレーゼ様は北部諸侯達の支持も厚いぞ。初の女帝かもと期待している人達も多い」

「初の女帝か。いい響きだね」

ペーターが言うように、地球でもこの手の話はよくあった。

女性が政財界などで偉い肩書きを得ると、みんなが無条件に何かが変わると思って期待をする。

女性ならではの視点とか、必ずそういう話が出る。

この世界でも、そういう風にテレーゼを見て支持している人達がいるというわけだ。

「女性だからと肯定的に捉える人と、否定的に捉える人がいますけどね。性別の問題ではなくて、単純に能力と気質の問題からです。そもそもこの混乱の責任は、皇帝を引き摺り下ろせなかったテレーゼの甘さにある」

北部諸侯達の中にも、それを感じている連中は多いはずだ。

「その責をテレーゼに問おうとしても、皇帝には微妙な腰巾着連中がいますからね。彼らは、皇帝の対抗馬としてのテレーゼに今は縋るしかない」

今さら皇帝に擦り寄っても、美味しい思いは出来ないからだ。

「問題は、この流れを全てニュルンベルク公爵が理解して仕掛けている事ですね」

反ニュルンベルク公爵派が割れてしまっているのだ。
彼からすれば、あとは時間差をつけて倒していけばいい。

「これを再統合するのに、テレーゼでは中央の連中が納得しませんよ」

「かと言って、殿下でも北部の連中が納得すまい」

「しますよ。アルフォンスがさせます」

「伯爵様。まさか……」

「テレーゼには、フィリップ公爵位から引退していただきます」

「正気か？」

「正気です。彼女としても、他に候補がいるのならこんな事からは降りたいのでは？」

みんなが期待しているから、懸命に努力して良い選帝侯、次の皇帝候補として頑張ってきた。
だが、そこに彼女の意思はあったのかと思ってしまう。

「テレーゼしかいないのであれば、可哀想ですが無理矢理にでもやらせます。ですが、ここに皇帝になりたい野心家がいるのですから」

「ヴェンデリンが言うと、皇帝の座すら面倒な義務にしか聞こえないね。僕には野心もあるけど、今の帝国の状況が極めて良くないと理解しているんだ。反乱さえ起らなければ、僕は出来損ないの三男で終わったのにね」

「というわけですが、ここにいる人達以外への情報漏えいは禁止です。ハルカ。悪いが、ミズホ上級伯爵に知らせないで貰えると嬉しい。エルの婚約者である以上は理解しているよね？」

「はい。私はエルさんの婚約者で、バウマイスター伯爵家の人間になるのですから」

ハルカは、俺の要請を受け入れた。

最悪漏れる事も覚悟しているが、ミズホ上級伯爵ならバカな真似はしないであろう。

彼らとて、早く内乱を終わらせて普段の生活に戻りたいのだから。

「おおっ！　これが噂に聞く『ミズホ撫子』か！　エルヴィンもいいな。綺麗な奥さんで」

「ええと。まあ……」

エルは、基本的にペーターの底の知れ無さに恐怖しているので、彼の軽口にも口籠る感じで答えている。

「私が『ミズホ撫子』……」

その隣にいるハルカは、恥ずかしそうに顔を赤く染めていた。

俺も初めて知ったが、『ミズホ撫子』とは相当な褒め言葉のようだ。

『大和撫子』と同じなのであろう。

「クソ親父が情けなくも輿に乗って帝都を出る一週間前に、僕もヴェンデリンが出す軍勢と一緒に帝都に戻るから」

そういえば、軍を率いて帝都近郊に駐屯する必要があったのを思い出していた。

「あとは、僕達で全てやるから。もう帝都に残留している人達で動いているんだけど、僕はここで適当に視察のフリをして遊ぶ事にするよ。クソ親父は甘いけど、腰巾着の中には僕に疑念を抱いているのがいるし。猜疑心だけ強い腹心とか嫌だね」

ペーターの話はそこで終わり、夕食の時間になったので、彼らはそのまま屋敷に残ってエリーゼが作った料理を食べ始める。

懇親の意味も込めて食事に招待したのだ。

「久しぶりだから余計に美味しく感じるな。帝都の高級料理も良かったんだけど」

「ありがとうございます。あなた」

最近ではミズホ料理も徐々に習得しつつあるので、俺はエリーゼの料理の虜になっていた。

たまに自分で新料理を開発したり、男の料理をしてみるのだが、やはり腕前の差でエリーゼに軍配が上がってしまうのだ。

「エメラも結構上手なんだけど、エリーゼ殿には勝てないかな。ヴェンデリンの奥さんは凄いな」

ペーターは何度もお替りをしながら、エリーゼの料理を食べ続けていた。

「料理は雇っている料理人に作らせるのが貴族だとよく言うけど、

出来ないよりも出来る方が単純に凄いよね」

「ありがとうございます。殿下」

エリーゼも、ペーターから褒められて満更でもないようだ。

「マルクが普通に食べているからね。彼の奥さんは料理が上手だから、少しでも気に入らないと全然手を付けないんだよ」

寡黙な眼光鋭い剣士マルクは、ゆっくりと味わうようにして料理を食べ続けていた。

「ハルカ、タケオミさんなら勝てるかな？」

「いいえ。私は勿論、兄様でもわずかに及ばないかと」

ハルカもマルクの剣の腕前を見切って、とても自分では勝てないと思っているようだ。

「僕の自慢の家臣なんだ」

「それで、ペーターの剣の腕前は？」

「うん、さすがにヴェンデリンよりは上手だよ。僕の剣の師匠はマルクだから」

「俺に剣など不要さ」

「完全に負け惜しみだね」

悔しいが、正解である。
ペーターはどう見ても剣の達人には見えないので、俺では勝てないと言われると微妙に腹が立つのだ。

「五月蠅いやい。武芸大会予選一回戦負けを舐めるなよ」

「僕が出たとして、三回戦くらいまで行けるかな？」

ペーターが気さくな人物であったために、その日の夕食はとても楽しい時間となったのであった。

「私は、事が起こるまでは冷静に普段の仕事と魔法の鍛錬に励むだけですわ」

「カタリーナの殊勝な一言」

「ヴェンデリンさんは、最近少し稽古をサボリ気味では？」

「サボリというか、魔力をほぼ全て使ってしまうから稽古が出来ない？」

翌朝、早く起き出してカタリーナと共に魔法の鍛錬を久しぶりに行う。
このところ、磁器造りに全ての魔力を持っていかれてあまり鍛錬をしていなかったのだ。

「魔力はまだ上がっているんだ」

「相変わらず、魔力の量がデタラメですわね」

二人とも、五十メートルほど離れた場所に置いた岩を狙って『ウィンドカッター』を放つ。

命中するのは当然として、どう綺麗に岩を切り裂くかで魔法の精密さを訓練しているのだ。

「本当、羨ましい限りだ」

「お師匠様、おはようございます」

「俺も土木工事ばかりしているけどな。だからたまには練習でもするかなと思ってな」

ブランタークさんも姿を見せ、彼も『ウィンドカッター』で岩を狙う。

岩は、まるでアーモンドをスライスしたように均等に切り裂かれていた。

「薄いですね。しかも全部均等だ」

「伯爵様やカタリーナの嬢ちゃんがこの域に達するには、まだ時間がかかるな」

岩を、向こう側が透けて見えそうなほど薄く切り裂き、しかも全て同じ厚さにすべてに揃えている。

亡くなる直前の師匠ですら、ここまでの精度を持っていなかったはずだ。

数十年も鍛錬を続けた成果が出ているのだ。

「伯爵様は厚ぼったいな」

「ううっ……」

前に魔法の披露で岩をサイコロ状にしたが、ブランタークさんのように極限まで薄くスライスするのは難しい。

その細かいコントロールが、俺への課題というわけだ。

「カタリーナの嬢ちゃん。横に切り裂くはずが、斜めだの縦だのとバラバラじゃないか。もう少し精進しないとな」

「なかなか上達しませんわね」

共に、まだまだだとブランタークさんに注意されてしまう。

普段は酒ばかり飲んでいるように見えるブランタークさんであったが、伊達に師匠の師匠ではないのだ。

簡単に教えた程度の人を合わせると、王国内に彼の弟子は数百人もいるのだから。

「おはようございます」

「おう。おはようさん。お嬢さん」

暫くブランタークさんから指導を受けていると、そこにエメラが姿を見せる。

今は一人のようで、こちらの訓練の様子を興味深そうに見ていた。

「やってみるか？」

「宜しいのですか？」

「普通の訓練だ。特に秘密にするものでもないよ」

「ありがとうございます。では」

今朝もエメラは、クールビューティーさを貫いていた。

ブランタークさんに勧められて訓練に参加する。

涼しい顔で『ウィンドカッター』を放つと、風の奔流が標的の岩を切り裂く。

切り裂かれた岩を見に行くと、少しブランタークさんの物よりも厚かったが岩は均等に切り裂かれていた。

「やるな」

「まだまだです」

「いや。お嬢さんは二十歳前だろう？　その若さでその精度は凄いよ。しかし、魔力の量といい、ブラッドソンは気が付いていなかったのかな？」

ブランタークさんは、なぜこれほどの魔法使いが今まで自分の目に留まらなかったのかを疑問に思っていた。

魔法の披露会にも顔を出していないので、それを不思議に思っているようだ。

「いえ。短い期間でしたが、ブラッドソン様には親切にしていただきました」

エメラは、帝都から少し離れた魔物の領域近くの村で生まれたそうだ。

両親は冒険者が狩ってきた魔物を解体販売する解体屋を営んでいて、子供の頃に魔力があるとわかった時でも、自分は魔物に携わって生きていくと思ったらしい。

「一年ほど前までは、実家に住んで狩りばかりしていましたね」

近隣の冒険者予備校に通い、卒業後は狩りばかりしていたそうだ。

「両親は解体する魔物が沢山あると喜んでいました。父も母も兄も、魔物を解体するのが大好きなので」

「そうなんだ……」

解体マニアという人種の存在を初めて知ったような気がする。

「私も、貴族様に仕えるとかは苦手でして……。狩りは黙々と出来ますし……」

性格的に宮仕えが合わないので、一人冒険者として黙々と狩りをしている間に魔力が増え、魔法の精度も上がっていった。

確かに、彼女ほどの実力があると、貴族に仕えて堅苦しい日々を送るよりも魔物でも狩っていた方が金になるのは事実であった。

「でも、その生活を捨てたと？」

「ペーター様が何度も勧誘してきまして」

直接何度も家に来て勧誘されてしまい、遂に根負けして受け入れ

てしまったのだそうだ。

「私は、『あなたの護衛しかしませんよ』と言ったのですが、本人は『僕だけ守ってくれるんだ。僕って愛されているね』と一人喜んでいまして……」

「ヴェンデリンさん、あの殿下は本当に大丈夫なのですか？」

カタリーナは、脳内がピンク色の妄想で溢れているペーターに不安を抱いているようだ。

俺は、彼がこうなるのはエメラに対してだけなので大丈夫だと思っているのだが。

「私は無愛想で、バウマイスター伯爵様達が出た魔法の披露会にも出るのを断りましたし……」

エメラは美人で、魔法使いとしての実力も高い。

帝国政府としては売り出したい逸材だったのであろうが、ようやく仕えたのが皇宮では評判の悪い三男坊で、常に彼の傍を離れないので宣伝のしようがない。

実力的には格下の、あのクソみたいな四兄弟を推していたのにはそういう事情があったのであろう。

「ブラッドソン様だけは、『魔法使いなんて好きにやればいいのさ』と仰ってくださって……」

ブラッドソンさんはエメラの実力を認めていたが、彼女があまり表に出たくない性格をしているのに気が付いて、それを尊重してくれたようだ。

「ですから、ブラッドソン様を討ったあの四兄弟を倒したバウマイスター伯爵様達に感謝しているのです。本当にありがとうございました」

エメラが神妙な顔でお礼を言うが、やはり美人はどんな表情をしても美人だなと感心してしまう。

「（イテテッ！　カタリーナ、なぜに？）」

「（顔がにやけていますわよ）」

ヤキモチでも焼いたのか？

俺は、カタリーナに腕をつねられた。

「あの兄弟は、狂犬が噛みついてこようとしたから返り討ちにしただけだし、俺は一人しか倒していないしね」

「それでも、バウマイスター伯爵様には余裕があったのでは？　私やブランターク様やカタリーナさんでは、一人か二人を倒すのが限界だと思いますから」

エメラの言う通りに、あの四兄弟ならば俺一人でも余裕で倒せたはず。

彼らと同じ魔力量を持つ魔法使いでもっと手強い人は沢山いたのに、彼らの弱さは何だったのであろうかと思うほどだ。

きっと、甘やかされていたからなのであろうが。

「ブランターク様の精密さに、バウマイスター伯爵様の器用さと強力さにと。私もまだ学ぶ事が多いと思います」

それからは、朝食まで四人で訓練を続けていく。

「そういえば、導師様はどちらに？」

「導師は、こういう訓練は性格的に合わないから」

性に合わないのと、自分の長所を殺す事になると、朝から馬に乗って魔物の領域に出かけてしまっている。

現地では兵士達が交替で寝泊まりしているので、それに合流する予定だ。

訓練で兵士に犠牲が出ないように、彼がフォローを行っているというわけだ。

「物凄い方なのですね」

「物凄いね。他にあんな人はいないし」

「真似は不可能ですわね……」

真似したいとも思わないけど。

カタリーナも、きっとそうであろう。

「是非、一度一緒に狩りに行きたいですね」

「えっ！」

「何か不都合でもあるのですか？」

「そうじゃなくてね……」

俺もブランタークさんも、導師主導の狩りのせいで複数回酷い目に遭っているので、つい身を引いてしまうのだ。

「試しに一緒にやってみればいいさ」

「（ブランタークさん？）」

「（実際に経験しないとわからないって）」

「（そうですわよ。私も被害者の一人として言わせて貰えば）」

カタリーナは俺に狩猟勝負を挑んだのに、いつの間にか参戦した導師に主導権を奪われて勝負自体が有耶無耶というか、どうでも良くなってしまっている。

とにかく自分のペースに他人を巻き込むので、心身ともに疲れてしまうのだ。

「楽しみですね」

普段は無表情のエメラの顔に笑みが浮かぶ。

どうやら、相当に狩りが好きなようだ。

「（狩猟ジャンキーなのか？）」

それを確認するためではないが、俺達は朝食後に魔物の領域に出かけてみる事にする。

その前に、帝都行きの間に減った白磁用の粘土を調合し、成形と絵付けを終えた磁器を魔法で焼成する。

全てをこなすと魔力の量は半分ほどまで減ってしまうが、狩猟に

はあまり影響はないはずだ。

「噂通りの魔力量ですね。凄いです」

行きの馬の上でも、エメラは俺の魔法に感心していた。
現場に到着すると、そこでは数千名の兵士達が陣を張っている。
彼らは順番に二十名ほどで領域に入って魔物を狩るのだ。

訓練にもなり、食料も確保でき、素材や採集物も売れるので一石四鳥くらいの効果があると思う。

「怪我をした方は？」

「エリーゼ様、ここに」

怪我人は多いが、それは治癒魔法使いを常時置いて対応していた。
今日はエリーゼが付いて来ていたので、早速彼女が治療をしている。

「聖女の二つ名は伊達じゃないね。凄い腕だ」

エメラと共に付いて来たペーターが、エリーゼの治癒魔法の腕前に感心していた。

「それはいいが、ペーターは狩りに参加するのか？」

「するよ」

「大丈夫か？」

「大丈夫だって。マルクもいるから」

肝心なのは、護衛の実力では無くて本人の強さだ。

不意を突かれるという可能性もあるので、本人もある程度の実力が無いと安心して連れていけない。

「マルク殿、本当に大丈夫なのか？」

「殿下は剣の達人なので」

「そんな話、聞いた事が無いぞ」

ブランタークさんは、ペーターの情報を少しは持っているようだ。

ペーターの武芸や勉学の成績は、真面目にはやっているが並程度。

これが周囲からの評価であった。

「何を言っているの。僕が兄達よりも剣や学問に優れていると評価されて何かいい事ある？」

「無いけどな」

下手をすると暗殺でもされかねないので、完全に見捨てられない程度の成績を示していたそうだ。

「それに、狩りには慣れているし」

導師の行方を聞くと、彼は大物を求めて森の奥に入っているそうだ。

早速入ってみるが、ここ数か月毎日狩りをしていたせいであろうか？

えらく獲物が少ない。
たまに出没するが、それらは……。
「取り過ぎじゃない？」
猪型の魔物は、俺達に突進する前にルイーゼが上空からひじ打ちを落として一撃で倒した。
相変わらずの早業である。
「このくらいの密度の方が安全に訓練できる。全部、導師のお仕事」
もう一匹の鹿型の魔物も、ヴィルマが狙撃用の魔銃で脳天を撃ち抜いて倒していく。
彼女は、何度か細かい改造を重ねた狙撃型の魔銃を上手く使いこなせるようになっていた。
「それが噂の魔銃だね。僕も欲しいな」
「それは、ミズホ上級伯爵に言ってくれ。俺達も簡単な仕組みはともかく、製造に関してはチンプンカンプンだから」
こちらもデータ収集のために、何とか借りている状態なのだから。
俺に貸しておくと、魔力が補充し放題でヴィルマがバンバン撃ってくれるから貸してくれているわけだ。
一見、仕組みが簡単で帝国にもコピー可能なように見えるが、その試みは全く上手くいっておらず、だからニュルンベルク公爵も戦場に出していなかった。
「普通の魔銃でも週に一度、この試作型は三日に一度はメンテが必

要だから」

「撃てなくなるの？」

「ただ撃つだけなら一週間は大丈夫だと思う。でも、暴発の危険性があるから駄目だとさ」

「ちなみに、暴発するとどうなるの？」

「腕とか頭が吹き飛ぶかもって」

「そうなんだ……」

多分、魔銃普及のネックの一つに素材の強度問題があるのだと思う。

ミズホ伯国でも、実験中に暴発して多くの死傷者を出し、その犠牲の上に普及しているのだと前に話を聞いた。

「残念だね。じゃあ、僕も狩りをしようかな」

ペーターは持参した弓を番えてから、木に止まっていた『ハクレイドリ』を一撃で射ち落とす。

一応魔物のカテゴリーに入っていてたまに嘴で頭を突かれるが、それで大怪我をする事もない。

この地方独特の魔物だそうだが、肉が美味しいので初心者には人気の獲物であった。

「良い腕だな」

「こうやって小遣い稼ぎをしていたのさ」

ペーターは皇家の三男なので、それなりにお小遣いは出ている。だが、取り巻きや御付きの人数を増やすには全然足りなかった。

「狩猟は副業なのさ」

同じような立場の、貴族の次男・三男以下に商人の子供などで集まって帝都郊外の森などで狩りをしていたそうだ。

「満足に給金も出せないからね。みんなで集団で狩りをする」

「一種の軍事教練にもなり、肉は食べられるし、素材も売れるか」

「皇家のバカ息子が愚連隊を連れて遊んでいる設定だから、素材の売り先はマイヤー商会だったのさ」

「あの当主、やっぱり曲者だな」

「一年ほど前から僕は援助して貰っている。向こうは、保険のつもりなんだろうけどね」

帝都でも有数の豪商で政商な彼はペーターの器量に気が付き、あとで何かの役に立つかもしれないと密かに援助していたのだから。

素材の売却益に、他にも彼は同志兼家臣達に命じて副業を行わせて金を貯めていたと思われる。

実家に気が付かれると困るので、偽装とマネーロンダリングはマイヤー商会の仕事だったのであろう。

「町中で磁器を売るならマイヤー商会がいいと聞いたが、俺は上手く誘導されたな」

「マイヤー商会は貴族相手にはえげつなく稼ぐけど、庶民には薄利多売でそう嫌われていないよ。クーデター後に、火事場泥棒をほとんどされていないし」

あの規模のクーデター騒ぎともなれば、貧民街の住民などがドサクサに紛れて商家などに盗みに入るのが普通だ。

それで被害を受けた商会は多い。

商売あがったりなので、商人が政権の安定を望む最大の理由であった。

そのために政権に癒着していると思われて、権力者が没落すると時に運命を共にしてしまう政商も多いのだが。

「貴族、軍人、商人とシンパはいるのか。ペーターが成功する事を祈るよ」

「勿論成功させるよ」

どんどんと魔物の領域がある森を進んでいくが、やはり獲物の数はまばらであった。

元からそれほど大きい領域では無いのと、常に数千の軍勢が駐屯して訓練がてら魔物を狩り続けたのだ。

導師が率先して間引きを続けていた事もあって、俺達一行は話をしながらでも余裕で奥まで移動する事に成功していた。

「導師……」

「暇そうにしていたからな」

王国人なので、帝国人主体で増加した軍や統率は任せられないし、

かといって王国軍を任せるのもどうかと思ってしまう。
治癒魔法が使えるのでそちらにとも思ったが、それはエリーゼ達でも十分にこなせるし、統治の手伝いや工事などにも適性が無く。

ここ暫くは、この領域での討伐に集中していたようだ。

「噂に聞いたけど、王国の筆頭魔導士殿は凄いな。この領域の魔物が絶滅寸前だよ」

「あの……、それで宜しいのですか？」

常識人であるエメラが、俺に心配して聞いてくる。

「この領域自体はなくなってもいいみたい。代官がそう言っていた」

「町の拡張に邪魔だからね」

町自体の拡張に邪魔というよりも、この領域が中央北部にある直轄地や小領主連合地域とのアクセスを邪魔している点が問題なのだそうだ。

「それなら、ボスを倒して解放すればいいのに」

「予算の問題とか、優先順位とか色々あるんだろう」

「ブランターク殿の言う通りだね。今までは副都扱いされているアルハンスが優先だったから。サーカットは、ヴェンデリンが広げるまではイマイチな町だったからね」

「なるほど。この領域を解放すれば、サーカットの町と南を流れる

川との水運、そして開発が遅れ気味の中央北部が一丸となって開発が進むと」

さすがというか、エメラはお抱えに相応しくその分野の勉強もちゃんとしているようだ。

「というわけなので、バウマイスター伯爵よ。戦いの時間であるぞ」

「導師……」

そこに今まで姿が見えなかった導師が現れ、みんなの顔を見て満面の笑みを浮かべていた。

「この数か月、某は毎日率先して魔物を狩り続けて数を減らしたのである。あとは、某が把握済みのボス『陸亀王レインボーアサルト』を始末するのみ」

「この領域のボスって、竜じゃないんですね」

「本来、大亀系のボスは入門編扱いの一番弱いボスなのであるが……」

「ああ、わかります。ひっくり返せば良さそうに見える」

アンデッド、老成、金属、巨岩と。

竜は竜でも常識外れの個体ばかり相手にしてきたので、陸亀くらいなら簡単にいけてしまうのではないかと思ってしまったのだ。

「あの、お二方……。領域のボスに入門編も何も……」

「嬢さんよ。俺も含めて、三人で竜は複数相手にしているから」

「私は、飛竜までしか相手にした事がありません」

「普通はそうだろうな。それで別に変じゃないし」

エメラは、俺達の魔物討伐経歴の濃さに絶句していた。

「それよりも、俺達はただ視察に来て『軍の訓練の状態はどうかな？』とか、『ちょっと狩りをして帰りましょう』とかで終わる予定だったのに。そういう大行事があるなら先に言ってくださいよ」

無駄だとは思いつつも、一応導師に苦情を述べておく。

「バウマイスター伯爵、今伝えたので宜しくなのである」

「俺の魔力は、今半分くらいの量なのですが……」

「『陸亀王レインボーアサルト』の討伐は、明日の予定である」

「計画が既に立っている！」

「我が親友ギルベルトと共に立てた計画である」

編成・訓練途上の帝国軍を率いるボンホフ準男爵が、その達成度を見たいと今回の計画を立てたらしい。

「一万五千人を動員してこの領域を囲み、我らが『陸亀王レインボーアサルト』を倒した後に散ってしまう魔物を討つ予定になっておる。魔物自体は、大分減らしたのでそう犠牲も出ないであろう」

導師が数か月も討伐に専念したのだ。
この狭い魔物の領域では、絶滅寸前にされても不思議は無かった。

「まあいいですけど、その陸亀王レインボーアサルトってどんな魔物です？」

「少し甲羅が特殊な大陸亀なのである」

齢千年を超える老陸亀で、全長は三十メートルほど。
常に甲羅がレインボー色に輝いていて、それが全属性魔法を完全に防いでしまう。
更に、甲羅には百を超える突起が付いていて、そこから魔法の矢を大量に発射するらしい。

「この特性のせいで、今までに何度も討伐が失敗しているのである。防御力が恐ろしく高いわけであるな」

「対物理、対魔法。共に対応する甲羅ですね」

「亀ゆえに行動範囲が極端に狭いので、こんな町近くの領域で君臨しておるわけであるが……」

領域のボスの強さは、ほぼ領域の面積に比例する。
この程度の広さの領域だからこそボスは陸亀であったが、彼は王と呼ばれるほど長生きして君臨し続けているというわけだ。

「レインボー色に輝く魔法を跳ね返す甲羅か。導師。魔法以外の攻撃はどうなのです？」

「元々、陸亀の甲羅を武器や打撃で壊すのは困難である。過去には巨大な投石器を運用した例もあったそうだが、それでも失敗したそうである。魔法も『ファイヤーボール』を連発した程度では甲羅に閉じこもって終わりであるから、我ら高威力の魔法が使える魔法使いが重宝されるわけであるな」

威力の高い魔法で攻撃する。

甲羅を破壊可能なほど強固な魔法で攻撃するか、高温の魔法で蒸し焼きにした偉大な魔法使いが過去にはいたそうだ。

「ところが、甲羅がレインボーに輝く陸亀王レインボーアサルトには魔法が通じないゆえに」

虹色に輝く甲羅は、全ての系統魔法を完全に無効化してしまうらしい。

治癒魔法は効くそうだが、陸亀王レインボーアサルトはアンデッドでは無いのでダメージは与えられない。

「また厄介な魔物を……」

「ねえ。面倒だから止めない？」

「この際、それも有りよね」

面倒ならば討たなければいい。

いつもならズっこけてしまいそうなルイーゼの意見であったが、今は時期も時期なので無理をする必要が無い。

他の魔物を討伐し続ければ軍の訓練にもなるので、イーナも作戦の中止に賛成していた。

「えーーー。倒さないの？」

「今ふと思ったんだけど、ペーターが邪魔だった」

「あっ！　僕か」

「そう。魔物の特性を考えると、ペーターがいると邪魔。マルクさんも、今回に限っては役に立たない」

物理攻撃無効の陸亀王レインボーアサルトに、いくら剣の達人でもダメージを与えられるはずがないからだ。

「オリハルコン製の剣でも駄目かな？」

「過去にとっくに試した奴がいると思うが……」

「じゃあ。エメラは？」

「えらく拘るな」

「だって、あの亀の甲羅を僕が事を起こした後に帝都の広場にでも飾ったら効果絶大でしょう？」

こすい手ではあるが、俺もバウマイスター騎士領でヴィルマが仕留めたサーペントの頭を飾って領民達の関心を得た。

陳腐な手であるがゆえに、効果も絶大というわけだ。

「新しい帝都の主は、討伐した陸亀王レインボーアサルトの甲羅と共に臣民達の前に姿を見せるというわけだ」

「ペーターは倒していないけどな。倒すにしても、俺達が倒すだけで」

「ヴェンデリン。そこは、僕の有力な支持者である君の成果は僕の成果作戦でね？」

「ああ。いいよ」

「助かるよ」

「ちゃんと金払えよ」

ペーターも、あの皇帝の血を引く息子である。
完全に信用してはいけない。
代金は払えと、念を押しておく。

「勿論払うさ。でも、エメラを手伝わせるから値引きして」

「わかったよ」

こうして、俺達と訓練途上である軍と共同しての、領域解放と陸亀王レインボーアサルト討伐作戦が決定する。

「ああ。でも、導師が殴り殺せば済む問題では？」

「いやいや、それはもう試して失敗したのである」

「えっ！　マジで？」

「エルヴィン少年が疑う気持ちもわからないではないが、事実なの

で直接目で確認するがよかろう」

俺達は、導師の案内でそのまま領域の奥へと向かう。

「導師、道に詳しい」

「ここ数か月、毎日のように探索して庭のようなものである」

「どうりで、昼間は見ないと思った……」

軍が訓練で領域に入る時に、大量の魔物に囲まれないように間引きを続けていた。

といえば聞こえはいいが、それは結果論で、毎日冒険者時代に戻ったかのように討伐に精を出していただけとも言える。

みんな、サーカットの町の開発や統治で忙しかったのに、唯一自由に行動できた人物でもあったというわけだ。

「さて。ここがそうである」

森に囲まれた領域の中心部には、開けた草原と岩場が存在していた。

そして、導師の話どおりに虹色に輝く大量の突起が付いた甲羅を持つ巨大な亀もいる。

亀は、ノンビリと草を食んでいた。

「あまり強そうには見えないね」

「みんな、最初は殿下と同じような感想を抱くのである」

草を食べ終わると、亀は岩場に移動して甲羅干しを始める。
見た感じでは、甲羅の色が派手なただのデカい亀にしか見えない。

「本当に強いの？」

「殿下の疑念を解消するため、某が戦いを挑んでみるとしよう」

導師は亀の様子を伺っていた大木の影から出ると、そのまま亀に向かって全力で走り出す。

「伯父様！」

エリーゼが思わず声を挙げるほどの危険な行動に見えるが、亀の方は導師を確認しても何もせずに甲羅干しを楽しんでいた。

「亀、余裕だな」

「ああ」

導師に攻めかかられているのに、亀は全く警戒していない。
俺とエルは、亀の度胸の良さに感心していた。

「ふんっ！　『魔導機動甲冑』！」

「あっ、久しぶり」

王都で修業していた時以来である。
ルイーゼが懐かしげな声を出していた。

「あれが噂の……」

「そう、アレが噂のです。普通の属性竜くらいなら、魔力が尽きる前に撲殺可能だと思うよ」

「あの……、属性竜を殴り殺せる人はそう世の中にいないとは思うのですが……」

「そう言われるとそうだね」

「……」

隣で驚きを隠せないエメラに声をかけると、彼女は更に続く導師の行動に視線を外せないでいた。

ハンマー型に変えた杖で、連続して陸亀王レインボーアサルトを殴り始めたからだ。

一撃ごとに、爆音のような衝撃音がこちらにまで響いてくる。

「威力が上がっているな」

「魔力が増えていますからね」

ブランタークさんの解析は正しい。

パンゲニア平原でグレードグランドを倒した時よりも導師の魔力は増えていて、ルイーゼから効率の良い格闘術まで習っているのだ。

攻撃力が増して当たり前であろう。

「凄い威力だけど、全然効いてないな」

「そうですね」

亀は攻撃されるギリギリまでノンビリしていたが、己の危機が迫ると甲羅に頭と足を引っ込めてしまった。
亀らしい防御方法であったが、強固な甲羅が導師の攻撃を全て防いでしまっているようだ。

「あの攻撃を防ぐとはな」

「ちょっと特殊な甲羅ですね」

魔法のみならず、物理的な衝撃まで全て防いでしまっているようだ。

「俺はこう考えるんだ。あの甲羅は、物理攻撃も完全に防いでしまっているのだと」

「例えば、亀をひっくり返してその下で薪をくべながら火の魔法を長時間発動させるとどうなるのか？」

普通の陸亀なら蒸し焼きにされてしまう。
陸亀王レインボーアサルトの甲羅が魔法しか防がないとしても、いつかは蒸し焼きにされてしまう可能性が高い。
なぜなら、魔法自体は防いでもそれによって発生した熱を防げる可能性は低いからだ。

「この方法を試さなかった奴はいないと思うんだ」

「あとは……。あの方法も駄目か……」

導師が大量の魔力を全身に流して身体機能を強化し、巨大な亀の甲羅を持ち上げて上空へと放り投げた。

あの巨大な亀を数十メートル上空まで放り投げる導師のパワーは、デタラメとしか言いようがない。
引っ込んだままの亀の甲羅は、下にある岩場に落ちて派手な激突音を立てる。
岩の方は粉々に砕けたが、甲羅には傷一つ付いていなかった。

「限界であるな」

今の攻撃で、導師の魔力は限界に達してしまったようだ。
急ぎこちらに走って来てから、『魔導機動甲冑』を解いて元の姿に戻る。

「あれでも死なないのですか？」

「死なないどころか、ノーダメージであるな」

あの高さから、あれほどの巨体が岩に落ちてダメージが無いとは。
どうやら、俺達の想像を上回る防御力をあの甲羅は持っているようだ。

「一種の魔道具になっているのかもな」

「それだ」

ブランタークさんの言い方が一番シックリと来ると思う。
突然変異か、数多の討伐を乗り越えて進化したのかはわからない。
だが、あの甲羅に引っ込んでいる間は、とにかく陸亀王レインボーアサルトはダメージを受けないのだ。

「となると、対策が必要だね」

「全員で魔法を大量にぶっ放しても無駄だからな」

ペーターの意見に全員賛同するが、それと同時に導師が俺の肩を手で叩き始める。

「まだ何か？　導師」

「実は、まだ終わっていないのである」

導師が陸亀王レインボーアサルトの方を見ているので視線を合わせると、そこでは絶句するような光景が広がっていた。

例の虹の甲羅が眩いばかりに光り輝き、百以上もある突起に大量の魔力が集まり始めていたのだ。

「これは……」

「前に攻撃した時もこうなったのである。あの甲羅は全ての攻撃を魔力に変換して、自分を攻撃した者に強かな反撃を加えるのであるな。自分からは攻撃はしてこないのであるが、大量の属性魔法の槍がまるで夕立のように……」

「えっ？」

全員の視線が同時に、導師へと向かう。

普段の陸亀王レインボーアサルトは危害を加えなければ攻撃してこないが、攻撃をすればその攻撃を甲羅が魔力に変換して属性魔法の槍を降らせるというのだ。

「導師様のお話を総合しますと、これまでに導師様が加えた攻撃が

全て魔力に換算され、それがそのまま導師様に降りかかると」

「左様。この前は、死ぬ気で逃げ出す羽目になったのである。今日は、みんながいてくれて助かったのであるが」

「それってつまり、僕達が巻き添えになるって事？」

「そうとも言うのである。幸いにして、多くの『魔法障壁』を使える魔法使いがいるので安心ではあるが」

「あーーー。全員、俺の周囲に集合」

ブランタークさんの命令で全員が円を作り、彼による『魔法障壁』が展開した瞬間。

甲羅の突起から発射された火、氷、風、岩の槍が、まるでゲリラ豪雨のように降ってくる。

「逃げるぞ！」

領域の外に向けて全員で固まって逃げる。

隠れていた森の木々はとっくに魔法の槍によってズタズタに切り裂かれ、俺達を見つけた魔物ですら無残に魔法の槍で切り裂かれて殺されていく。

「普段は大人しいのに、恐ろしいボスであるな」

「「「「「あんたが言うな！」」」」」

その前に、先に口で説明すれば済む話だったのだ。

いくら逃げても亀は導師をロックオンしているようで、その周囲

にいる俺達にも容赦なく魔法の槍が降ってくる。
俺達の逃走ルートは、槍に切り裂かれて倒れた木と魔物の残骸だらけになっていた。

「しかし、止まないな」

「止むはずが無いだろう」

「どうしてだ？」

「導師の魔力の大半が亀の甲羅に蓄積されているから」

「それって、相手の攻撃力や魔力が強いほど反撃がキツイって事？」

「良く出来ました。エル君」

「そんなの正解しても嬉しくねぇーーー！」

結局、亀の反撃は領域を出るまで続き、ブランタークさん、カタリーナは『魔法障壁』で魔力を使い果たし、エメラも半分以上の魔力を『魔法障壁』で使用する羽目になってしまうのであった。

正直、とんでもない偵察行になってしまった。

第百二話　あの亀を撃て！

「こんなに狭い領域に、あんなに強いボスがいるとはな」

「本当、甲羅に籠ると物理・魔法攻撃一切無効とか反則だろう」

俺が徴募して訓練させていた軍の仕上がりを見るために、そこの領域を解放しようとボスの偵察に赴いたのだが、まさかの強さに領域の外まで逃げ出す羽目になっていた。

どうにか領域の外に出ると、エルが乱れた呼吸を整えながら文句を言う。

「甲羅に攻撃すればするほど反撃が酷いね。どういう仕組みなのかな？」

「多分、物理攻撃の衝撃も吸収して魔力に変換していると思う」

「なるほど。イーナちゃんは頭いいね」

前世の日本では、敷いてあるマットを踏むと発電するシステムが開発されていた。

それと似たような仕組みだと思われる。

すぐそれに気が付いたイーナは凄いと思う。

ルイーゼが感心するわけだ。

「あの……、それでしたら、伯父様が試すのは一番良くなかったのでは？」

「元々強烈な打撃を多量の魔力で補強しているのですから、さぞや魔力が溜まったと思いますわ」

そのせいで、みんなで固まりながら『魔法障壁』を張って逃げる羽目になっていた。

大量に魔法の槍が降ってくるので、カタリーナはブランタークさんと共に魔力を使い果たしてしまったのだから。

「導師、前はどうやって逃げたの？」

ヴィルマが、前回はどうやってこの魔法のゲリラ豪雨を逃れたのかと導師に質問する。

「ふむ。前はそれほど攻撃は加えておらぬよ。それでも、魔法の槍が大量に降ってきて難儀したのであるが」

「「「「「だったら、それを先に言え！」」」」」

相手は導師なのに、全員が容赦なく怒声を浴びせかけていた。

そのくらい、俺達は酷い目に遭ったのだ。

「それで、どうやって倒すのであるか？」

勿論導師は軽くスルーして、強引に次の話に持っていくわけだが。

この人に、反省とか自重という言葉はほぼ無いのだ。

「あれを倒すの？　攻撃が効かないから無理じゃない？」

ルイーゼの意見に、同時に全員が首を縦に振っていた。

導師の攻撃が一切通用しないとなると、ルイーゼが前に見せた必殺技を駆使しても亀の甲羅は砕けないであろう。
むしろ、反撃魔法で俺達が串刺しにされかねない。

「魔法使いを揃えても無駄でしょうね」

攻撃回数が増える分、その反撃も手酷い物となろう。
カタリーナの意見は正しい。

「『過治癒』で何とかなりませんか？」

「多分、駄目だと思うぞ」

「どうしてでしょうか？　ブランタークさん」

「甲羅に閉じ籠ると、一切の魔法の効果が届いていないみたいだからな。魔力に変換されて甲羅に溜まるだけみたいなんだ。どのみち、敵に塩を送っているに等しい」

ブランタークさんの分析によれば、甲羅の中は亀本体への危害を全て阻害する仕組みになっているらしい。
『過治癒』とは、簡単に言えば花に水をあげ過ぎて腐ってしまう現象に似ている。
治癒魔法を過剰に照射して逆に生体にダメージを与える魔法なのだが、亀がそれに気が付いて甲羅に閉じ籠ってしまえば意味が無い。
元々、そんなに急激に効果を発する魔法でもないし、ぶっちゃけるとただの治癒魔法のかけ過ぎなので、そう魔力効率が良い魔法でもない。

エリーゼも昔は使えず、俺と結婚して魔力が増えたから使えるよ

うになった魔法だ。
ただ、使えるようになっても魔法の性質上あまり使い道の無い魔法であった。

「駄目ですか」

「この案は駄目だったが、こういう奇策でいかないと駄目だろうな」

エルの意見に、全員が首を縦に振る。

「じゃあ。亀の甲羅が欲しいペーター」

「僕？」

「帝都民達の度肝を抜いて、一気に政権を継承するんだろう？　甲羅が欲しい本人が考えないと」

元々、あの亀の甲羅が欲しいと言い始めたのはペーターだ。
欲しい本人が、責任をもって討伐案を出すべきであろう。

「ええと。奇策かぁ……。エメラが加わってもあまり変わらないか」

「はい。跳ね返ってくる魔法の槍の量が増えるだけです」

エメラは冷静な口調で、ペーターの作戦案を否定する。

「困ったなぁ……。ねえ、これまでずっと静かなマルクは？」

ペーターは無言で傍に控えるマルクに、何か良い作戦は無いかと尋ねる。

護衛である彼は無言でペーターの隣に控え、共に魔法の槍から逃れてここにいた。

『魔法障壁』が無ければ、自慢のオリハルコン剣でペーターに降りかかる魔法の槍を切り払っていたかもしれないが、今回は息も切らせずにペーターと共に逃走していただけだ。

「私が考えますに、甲羅に閉じ籠る前に頭部なりに強烈な一撃を加えて殺すしかないのでは？」

「おおっ！　物凄くいい意見だ！」

俺達は、どうやって甲羅に閉じ籠った亀を討とうかと考えていた。

それをマルクは、甲羅に頭を引っ込める前に討てばいいと言ったのだから。

ある意味、発想の転換とも言えた。

「ああ。でも、どのくらい離れていると亀に気が付かれないものなのかな？」

「あの亀は鈍そうに見えて、案外周囲の敵意に敏感でな。前にかなり遠方から魔法をぶつけてみた時には、素早く頭を引っ込めてしまったのである」

ルイーゼの疑問に、前にも攻撃を仕掛けた事があるようで導師が答えていた。

「となると、遠距離からの狙撃か……」

ところが、ここで一つ問題がある。

何を使って、亀の頭を狙撃するかであった。

「魔法は駄目なの？」

「殿下。私の計算でも、最低でも八百メートルは離れたいところです。その距離で魔法で狙撃というのは難しいですね」

「当然、ボクの投石も」

「私の槍の投擲も」

「私の魔法も駄目ですわ」

「鉄弓でも無理」

エメラも、ルイーゼも、イーナも、カタリーナも、ヴィルマも。揃って不可能だと断言する。

「俺も無理だからな」

「導師は？」

「某の真骨頂は、近接戦闘にあり！」

「つまり無理なんですね」

ブランタークさんや導師でも無理となると、残るは俺だけになってしまう。

「ヴェンデリンなら余裕じゃないの？」

「そんな遠距離から狙撃するとして、練習もしないで当てる自信が無い」

そんな遠距離からの魔法など練習した事が無い。

皇帝の出兵まであまり時間が無い以上、無駄に練習などで時間をかけている場合ではなかった。

双眼鏡や望遠鏡で標的を見ながら標的を狙撃するとして、狙撃銃と同じく照準の同調作業でどれだけの時間と手間がかかるのかが未知数だ。

「そんなぁ。僕は、あの虹色の亀の甲羅が欲しいんだけど。ちゃんと相場の代金を支払うよ」

「うーーーん。あっ！　あの手があったか！」

「頑張れぇーーー。ヴェンデリン」

一つもしかしたらという案を思い付くと、ペーターがいつもの軽い口調で俺の応援を始める。

「策は思い付いたが、実行するのはヴィルマに任せるから。駄目元くらいに考えて頑張れ。ヴィルマ」

「ヴェル様。私、頑張る」

俺が考えた作戦により、陸亀王レインボーアサルトを遠方から狙撃する作戦が始まるのであった。

「作戦は単純だけど、規模は結構な物だね」

「軍の訓練の仕上げが、メインの目標だからな」

翌日、俺とペーターは樹木や草木が全て切り払われた領域で作戦の開始を待っていた。

頭を甲羅に引っ込めると一切の攻撃が効かなくなる陸亀王レインボーアサルトに対して行われる作戦は、彼がこちらを認知できないであろう距離から、その頭を狙撃して撃ち抜くというものであった。

ここは魔物の領域なので、ボスを失った魔物が周囲に逃げ散らないように、既にこの数か月で集めて訓練した帝国軍に、王国軍とミズホ伯国軍も集合して取り囲んでいる。

少数のグループずつで領域に侵入し、寄ってきた魔物を狩ってから撤退。

これを際限なく繰り返して、更に魔物を減らしていく。

領域への行軍、配置、野戦陣地の設営、作戦通りの行動に戦闘と。

ギルベルトさん、ポッペクさん、フィリップ、ミズホ伯国軍の指揮官が共同し、行動に齟齬や混乱を起こさないようにする。

訓練期間の短さが気になったが、今のところは特に問題なく作戦は進んでいる。

エルとハルカも、千人ほどの軍勢を率いて領域を囲んで魔物を徐々に狩っていた。

「そして、ヴィルマちゃんの狙撃か」

ボス以外の魔物は軍に任せるとして、本命の陸亀王レインボーアサルトは俺とヴィルマで担当する事になっていた。

まず狙撃に使用する武器であったが、これは遠距離の目標に対しての貫通力を確保するために、ミズホ伯国軍から新しい試作型の魔銃を借りている。

ミズホ伯国軍には、前のニュルンベルク公爵軍との戦闘で魔銃を強固な盾で防がれてあまり戦果を挙げられなかったという苦い過去が存在している。

戦国時代に火縄銃の弾を竹束で防いだのと同じだと思うが、今度こそはとミズホ伯国は魔銃の貫通力を上げる方法を模索していた。

幾つもの試作品が完成し、その中の幾つかをヴィルマが試験してデータを集めている。

ミズホ伯国人にも魔銃の名人はいたが、ヴィルマも彼らに劣らないのでデータ収集をよく頼まれていたのだ。

「それで、これが最新式なの？」

「そう。対大型魔物用、及び遠距離狙撃専用魔銃甲七型だ」

七番目の試作型という事らしい。

甲九までナンバーが進むと、乙一になるそうだ、

試作ナンバーまで付くとは、ミズホ職人達はそういう細かいところにも拘るようだ。

「格好良いね。僕も使ってみたい」

ペーターは、新型魔銃の恰好良さに子供のようにはしゃいでいた。

「でも、銃身が長いね。あと、色々とゴチャゴチャ付いている」

「試作品だからな」

試作品でも、威力と射程距離は折り紙付きであった。
実際に試験した俺とヴィルマが言っているのだから間違いない。

その代わりに、まずは銃身が異常に長かった。
三メートル近くあるので当然手に持って狙撃するタイプの魔銃ではないく、特殊な三脚に載せて、ヴィルマも伏せて狙撃をしないといけない。

「ここ、魔物の領域だけど大丈夫？」

「そのために、周囲を軍で囲んでいる」

狙撃地点を計算したところ、そのポイントは領域中心部から八百メートルの地点となった。
当然魔物は出没するが、元から導師が大分減らしていたし、二千人からなる王国軍が狙撃地点周辺の魔物を全て駆逐して守りを固めている。
更に、狙撃地点までの障害物も問題となったが、これは昨日の陸王亀レインボーアサルトからの反撃で木々が倒された道を利用して草木を全て刈って視界を確保していた。

見通しが良くなる分、やはり遠距離から射撃をするのが良いというわけだ。

「視界、距離、狙撃する武器の性能と、全て良しか」

「あとは、狙撃手も優れている」

鉄弓でも、魔銃でも、ヴィルマの狙撃の腕は天才的であった。
ミズホ伯国が試験を頼むほどなのだから、その才能は本物というわけだ。

「というわけだから、頑張ってくれ」

「大丈夫、いける」

「凄いな、ヴィルマちゃんは」

「殿下、私はレディー」

「あはは、ごめんね……」

ペーターはまたヴィルマをちゃん付けで呼んでいたが、それを彼女にキッパリと否定されてしまう。

「あの、バウマイスター伯爵」

「エメラさん、まだ何か？」

「魔銃というのは、こんなにゴチャゴチャした武器なのですか？」

「これは特別なんだよ」

エメラは、魔銃の銃床部分に大きな箱が複数付いているのが気になるようだ。
これも大き過ぎて、特注で作られた台に載せられているほどなのだから。

「銃弾の威力を上げるには、銃身を長くして、銃弾を加速する魔力量を上げればいいのだけど……」

火薬と同じで、量が多過ぎて銃身の強度が耐えられないと破裂して使用者に害が及ぶ。

そこで、安全装置を兼ねて狙撃手周辺の銃身部分は堅牢に作られている。

この狙撃銃が手に持てない理由であった。

普通の魔銃はこの問題を解決するために、刀は苦手だが力のある若い男性ばかりが配属されている。

ヴィルマにはパワーがあるので、更に重たい狙撃銃のデータ取りを任されているというわけだ。

「銃身の加熱の問題もある」

魔力を使って銃弾が恐ろしい速度まで加速するので、銃身が一気に加熱する。

放置すると銃身の強度が落ちるし、狙撃手が火傷をしてしまう。

これも、普通の魔銃は消費魔力量と威力を落としているので連続で五発の発射が可能になっているが、試作品にはそういう制限がついていない。

一発撃っただけで駄目になるをの防ぐために、特殊な冷却装置が必要であった。

「氷魔法を具現化する魔道具を組み込んだ、冷却装置も付いているわけだ」

「あの……。理論上の威力は凄いですけど、魔力の使用量が……」

帝国で魔銃が普及しない理由である。

銃身の素材と冶金・加工技術に、魔晶石と冷却装置の小型化。

これが解決できず、簡単に持ち運べないのでまだ改良の進んでいる魔剣の方がマシだと思われていたのだ。

「さすがの俺でも、一日で四発しか魔力が保ちません」

魔力を食い過ぎなように思えるが、試作品なので燃費の悪さは勘弁してくれという事らしい。

その代わりに、威力についてはミズホ職人達が保証してくれている。

「私なら一発が、それも従来の威力を発揮しませんね」

試作品ならではの魔力燃焼効率の悪さに、エメラは呆れかえっていた。

「それで、ヴェンデリンにコードが付いているんだね」

「俺が魔晶石替わりなの」

試作用の狙撃魔銃にも魔晶石は付いているが、これだと一発だけ撃って冷却装置が少しだけ機能して終わりだ。

一発目を失敗した時の保険が欲しいので、俺が魔力を伝達するコードを持って二発目以降の魔力を補填する必要があった。

「というわけで、俺は動けない」

「では、私がお二人の護衛役に入ります」

エメラが、俺とヴィルマの護衛に入ると宣言する。
特に俺は魔力の補給役なので、他の魔法が一切使えないからだ。

「ヴェンデリンは、ひも付きで動けないしね」

コードは、地球の電線に良く似ていると思う。
今のところ一番魔力を効率よく伝達する金属はミスリルだが、それではコストが嵩んでしまう。
代わりに銀を使用しているが、それでもコストは恐ろしく跳ね上がる。
細い大量の銀線を大人の親指ほどの太さに束ね、外部をゴムに似た物質で覆っている。
このゴムモドキの材料は、北方の森に住む巨大ナメクジの粘液を加工した物だそうだ。

極寒の地でも凍らない粘液が材料なので、温度による劣化が恐ろしく少ないのだそうだ。

「不思議な素材だね」

ペーターは、コードを覆うゴムモドキを見て感心していた。
ちなみに加工方法は秘密で、ミズホ伯国の秘匿技術というやつだそうだ。

粘液だけ集めて固めようとしても粘液のままらしい。
他の材料をどのくらい加えて、どのように加工するかは不明であった。

「もう一つ質問をいいかな？」

「何だ？」

「こんな遠距離から、亀の頭を狙うのかい？　というか、どうやって？」

「そっちは、俺が装置を提供している」

とは言っても、俺が開発したわけではない。

前に、魔の森の地下倉庫から見付けた魔導望遠鏡を提供しただけだ。

これは、その名の通りに魔力を使って遠方の物を詳細な映像で見る装置である。

電子顕微鏡や、電子双眼鏡の魔力バージョンであった。

「そのままだと狙撃に使えないから、多少ミズホ職人達に改良して貰ってね」

狙撃用のスコープにするために少し形状を改良し、照準器リアサイトとの同調作業もある。

あとは、銃弾の改良もあった。

「これが弾ね」

「大きいね」

大きさで言うと、三十ミリ機銃砲ほどもある。

材質は全てタングステンで、俺が魔法である程度の形を作ってからミズホ職人が椎の実型の尖った形状に削って仕上げている。

銃弾を大きくしたのも、先端を尖らせたのも、全て貫通力を上げ

るためだ。

「人間でも、動物でも、魔物でも。頭を撃ち抜けば死ぬからな」

「なるほど」

「ペーターは大人しくしていてくれよ」

大軍で領域を囲んで魔物を少しずつ狩り始めているし、狙撃地点も数千人の軍勢で囲って俺達を護衛している。
だが、作戦が始まれば何が起こるかわからないのだ。
自分の身くらいは自分で守って貰うしかない。

「大丈夫。僕もそこそこ戦えるし、マルクがいるから」

「ならいいさ」

俺が傍にいる魔法使いに声をかけると、彼は上空に『ファイヤーボール』を打ち上げる。
これが、作戦開始の合図であった。

「ヴィルマ。頑張れよ」

「任せて」

作戦開始の合図と共に、俺はコードを握っていつでも魔力を流せる体制にした。
ヴィルマは魔導スコープのスイッチを入れ、早速八百メートル先の陸王亀レインボーアサルトの頭部に狙いをつけ始める。

「全然見えないね」

八百メートル先の物が裸眼で見えるはずがない。

全ては、ヴィルマの狙撃と魔導スコープの性能にかかっているわけだ。

「殿下、お静かに」

「そうだね」

エメラに注意されて、ペーターは静かになっていた。

ペーターはエメラに惚れているし、彼女の方が二歳ほど年上なのでよく言う事を聞くみたいだ。

まるで、姉に諭される弟みたいに見えてしまう。

「ヴィルマ、亀は頭を出しているのか？」

「大丈夫、狙える位置にある」

それから数十秒ほど、伏せて試作型狙撃魔銃を構えるヴィルマは細かく銃身を動かして照準を合わせていた。

その真剣な表情を見ると、いつも通りに可愛らしいままなのに、まるで某サーティーンに見えてしまうほどだ。

「撃つ」

ヴィルマはそう短く言った後に、静かに引き金を引いた。

狙撃銃というよりも対戦車ライフルに近いそれから、爆音と共に銃弾が発射される。

続けて、異常加熱した銃身を冷やすために冷却装置が働き、銃

身が一気に冷やされて周辺に強烈な水蒸気が叩き付けられる。
一番近くにいるヴィルマにも水蒸気がふりかかるが、それを予想して彼女はミスリルコーティングされたコートを着ていたので問題なかった。
これは、データ取りに貢献している彼女がミズホ職人達からプレゼントされた物である。

「当たったか？」

狙撃地点にいる全員の視線が、一斉にヴィルマに向く。
裸眼や普通の双眼鏡でも確認できないので、彼女に結果を聞くしかないのだ。

「亀、倒れた」

「おおっ！」

俺は急ぎヴィルマの隣に伏せてから、魔導スコープを覗き込む。
すると、陸王亀レインボーアサルトは頭部から血を流して動かなくなっていた。
暫く観察を続けるが、頭部への一撃が致命傷であったようだ。
死亡判定をしても、問題ないであろう。

「やったぁーーー！」

陸亀王レインボーアサルトが死んだ事により、ペーターとエメラも大喜びであった。
周辺ではまだ魔物の駆逐が続いているが、ボスが死んだために更に組織力は弱体化するであろう。

「あとは、大分減った魔物を壊滅させれば……」

と思ったところに、とんでもない映像がスコープから入ってくる。

突然、死んだ陸亀王レインボーアサルト近くの岩場が地響きを立てて崩れ落ち、そこからもう一匹の虹色甲羅を持つ陸亀が出現したからだ。

しかも二匹目は、一匹目よりも体が一回りほど大きかった。

「大きいな」

「旦那さん？」

ヴィルマが、俺に顔をくっ付けて魔導スコープを覗き込みながら言う。

「親という事は無いか？」

「お兄さんかお姉さんかもしれない」

「二人とも、そんな事はどうでもいいから！」

妙にペーターが動揺しているが、もう一度狙撃すれば済む問題だ。

俺が立ち上がると、素早くヴィルマが銃身に弾を込めてから照準を合わせて発射する。

今度は魔晶石の魔力が尽きたので、コードを握る俺の魔力が大量に吸われていく。

これで、残り三発しか撃てない計算だ。

「どうだ？」

「倒しきれていない」

「本当か？」

再び伏せて魔導スコープを覗き込むと、そこには頭から血を流しつつも生きている陸亀の姿があった。
どうやら、一匹目よりも頭が頑丈に出来ているらしい。
大きい分、頭がい骨が頑丈なのであろう。

「お父さんだから、頭が頑丈なんだ」

「お兄さんだからかもしれない」

「だから、そんな事はどうでもいいって！」

またペーターが五月蠅いが、いちいち気にする時間は無い。
しかし、亀が二匹いるとは予想外のアクシデントだ。
しかも頭が固いようで、一撃では頭を撃ち抜けていない。

「導師、偵察は正確に」

俺は思わず、この場にはいない導師を愚痴ってしまう。
更に、俺達にとってあまり好ましくない行動を亀が取り始める。
相棒を殺され、自分も頭に怪我をさせられたので頭にきたようだ。

こちらに向かって突進を開始していた。

「亀、意外と歩くのが早い」

「本当だ」

「君達、本当に冷静だね！」

「ペーターよ、こういう時だからこそ逆に冷静に対処しないといけないのだ。おい」

俺は、近くにいた王国軍人に声をかける。

「はっ！」

「亀は、狙撃をした俺達が狙いのようだ。亀の進路上にいる部隊があれば引き揚げさせるように」

「了解しました」

怒り狂った亀は、俺とヴィルマの方向に向かって怒涛の進撃を開始していた。

思った以上に足は早かったが、所詮は亀なのでそれでも限界がある。

冷静に対処すれば、軍勢に犠牲は出ないであろう。

「ヴェル様、どうするの？」

何より、ヴィルマが全く動揺していない。

彼女の素の性格といえばそれまでだが、まだ決定的な危機だとは思っていないのだ。

俺だって、最悪逃げるくらいなら何とでもなる。

喚きたてて、恥ずかしい姿を周囲に見せるわけにはいかなかった。

「こうなれば、もう一度同じ場所に狙撃するしかないな」

一度命中して弾がのめり込んでいる場所にもう一度命中させる。
そうすれば、最初に命中した銃弾が頭の奥にのめり込んで脳に致命的なダメージを与えるはずだ。

「なるほど、いいアイデアだと思う」

「そういうわけなので、俺とヴィルマとエメラ以外は全員退避」

この中で一番偉い俺が命令すると、軍勢は亀の進路上から離れていく。
試作狙撃魔銃の傍に残ったのは、俺とヴィルマとペーター達だけであった。

「あれ？　ペーターは退かないのか？」

「ヴェンデリン。さすがにこれは物凄く危険だと思う。導師や奥さん達を呼んで逃げないと」

「いや。大丈夫だろう」

「その根拠は？」

「ヴィルマは自信があるみたいだし」

ヴィルマは普段から冷静で、自分が出来もしない事を出来るなどとは絶対に言わない。
間違いなく、俺の嫁達の中で一番合理的な思考を持っているはずだ。

その彼女が大丈夫だと言うのだから、必ずや狙撃を成功させてくれるであろう。

「信じているのか？」

「俺は彼女の夫だからな。それに、ヴィルマなら駄目だと思えば駄目だと言うし、そうしたら次の策を考えればいい」

そう言っている間に、ヴィルマが二射目を発射した。

再び爆音と強烈な水蒸気が周囲に叩き付けられ、今度はエメラが『魔法障壁』でそれを防いでくれる。

「どうだ？」

「少し外れた。次で成功させる」

「よーーーし、ヴィルマに任せちゃうぞ」

「任された、ご褒美が欲しい」

「二人だけで町に遊びに行こう」

「やる気出てきた」

ヴィルマは再び弾を込めると、更に真剣な表情で照準をつけ始める。

そのあまりの集中ぶりに、既に俺達の声も聞こえていないようだ。

「やはり出ましたか……」

そして、二匹目の亀接近に備えて軍勢を退避させた影響が出てくる。
数匹だけであったが、猪型と熊型の魔物がこちらに襲いかかってきたのだ。

「エメラさん、助けはいるかな？」

「いえ、バウマイスター伯爵様は狙撃以外で魔力をお使いにならないように願います」

エメラが魔物に両手を向けると、突然地面から鋭い岩棘が飛び出して魔物を串刺しにする。
魔物は岩棘のせいで宙に浮き、それが刺さった場所から大量に血を流して死んでしまう。

その魔法は、まさに『串刺し』と呼ぶに相応しかった。

「私の二つ名は『串刺し』です。土系統が得意なのです」

一見地味に見える魔法だが、この程度は彼女からすれば余技のはず。
続けてまた数匹の魔物がこちらに襲いかかってくるが、かなり前で同じく串刺しにされて倒された。

「エメラ、私にも少し寄越せ」

「失礼しました。マルク殿」

ここで寡黙な剣士マルクも参戦し、自分に向かってくる魔物を流れるような動作でかわしつつ、すれ違いざまに自慢のオリハルコン

剣で切り捨てていた。
その強さは、まるで時代劇に出てくる剣豪のようだ。
素人目にも、エルが勝てないと断言した理由がよくわかる。
そして、その間にヴィルマが第三射目を発射していた。
「今度はどうだ？」
「命中したけど倒れない」
既に大分接近していたので、自前の双眼鏡で観察する。
すると、最初に命中した箇所の穴が広がり、額にも大きな亀裂と滴り落ちる大量の血液は確認できたが、まだその生命活動を止めていなかった。
「もう一撃必要か？」
「さすがに、もう一度同じ場所に当てれば死ぬ」
「そうだな。もう一撃だ」
「えっ！　まだやるの？」
ペーターには、作戦続行が無謀に見えるらしい。
否定的な口調で、俺達に聞いてくる。
「近いから、更に当てやすいじゃないか」
「もうかなり近いけど……その前に同じ場所に三回も？」

「だから大丈夫だって」

確かに、亀との距離は既に百メートルを切っている。

亀は最初は銃弾が飛んできた方向に突進していただけだが、俺達を見つけて相棒の仇が取れると喜んでいるようだ。

更に速度を上げて、こちらに向かってくる。

「ヴィルマ、俺の魔力はあと一回分だけだ。一応、魔晶石分もあるけど」

「そうなると、今度は狙撃自体が出来なくなる」

亀とほぼゼロ距離になるので、『魔法障壁』を張って撤収するしかなくなるであろう。

「君達は、本当に冷静だね」

「俺はペーターよりも臆病者だと思う。ただ死なない確証があるからここに残っているだけだぞ」

ギリギリまで射撃を続けて自分に魔力が無くなっても、予備の魔晶石で『魔法障壁』を張りながら逃げればいいので問題ないだけなのだ。

エメラもいるので、まず死ぬ事は無いはず。

「ヴィルマが大丈夫だと確信しているから安全だしな」

「ヴェンデリン。君はもしかしたら、僕よりも皇帝の資質があるのでは？」

「はあ？　何でこんな事で？　皇帝ってのは、もっと責任感がある人がなるものだ」

「かもしれないけどね……」

二人で話をしている間に、亀は俺達から五十メートルほどにまで迫っていた。

亀は大きいので、まるで小山が迫っているかのように見える。

「まだ撃たないのかい？」

ペーターは不安そうであったが、ヴィルマは確実に当てるために慎重に照準を合わせているだけだと思う。

これが常人ならば、迫りくる亀に恐怖して早めに引き金を引いて失敗してしまうはずだ。

「撃つ」

結局ヴィルマは、三十メートルほどの位置で引き金を引いた。

爆音と大量の水蒸気と共に俺の魔力の大半を持っていく。

少し眩暈がしたが、それと同時に前方から今までに聞いた事がないほどの断末魔の声が響く。

視線を向けると、頭部をかち割られて血塗れの亀の頭が目前にまで迫っていた。

ヴィルマは、俺達に害が無いギリギリの距離で射撃をしてくれたようだ。

「頭部の着弾痕は二か所か。その内の一つは、二射目で外してしまった物だな」

穴の奥に目視可能な銃弾の尻が見える。
やはり、一匹目に比べて頭蓋骨が丈夫に出来ていたようだ。
そして、本命の着弾痕からは蜘蛛の巣状に亀裂が広がっている。

同じ場所に着弾のエネルギーが三回も集中したので、脳と頭蓋骨の外側にもダメージがあったのであろう。
大量に出血して、地面に血溜まりが出来ていた。

「しかし、二匹いるのは反則だよなぁ」

文句を言おうにも、導師はブランタークさんや妻達と分散して魔物狩りをしてるのでまだ戻って来ていなかった。

「まさか、もういないよな？」

「大丈夫みたい」

立ち上がったヴィルマが狙撃銃から外した魔導スコープで中心部を確認するが、他の陸亀の姿は無いようだ。

「あとは、残り少ない魔物を駆逐して、二匹の陸亀の解体もあるか」

後始末は面倒そうだが、二匹いた陸亀王レインボーアサルトの討伐と領域の解放は成った。
また始まる戦争に向けて、良い成果になったと思う。

「ところで、この二匹は兄弟なのかな？　親子なのかな？」

「夫婦かもしれない。だから怒った」

「なるほど、妻なり夫を殺されて激怒したのか。でも、友情に厚い親友同士かもしれないぞ。夫婦ではなくて、恋人同士という線もある」

「仲の良いご近所さん同士かもしれない」

「なるほど、お隣だからおすそ分けとかしていて仲が良かったと」

俺とヴィルマは、二匹の陸亀の関係を考察し続ける。

「君達はある意味大物だね」

「そうか？」

「私達のパーティーでは普通にある事」

「そうなんだ……」

俺とヴィルマが大物を倒した余韻に浸っていると、ペーターが何か不思議な物でも見るかのように俺達を見ている。

「皇帝になる男がこのくらいの事で動揺するなよ」

この程度で動揺されてはこの先大変なので、ペーターにちゃんと注意しておくのを忘れないようにするのであった。

幕間二十七　とある殿下の事情。

「殿下、帝都の様子が変です」

「変？　変ってどんな風に？」

「軍隊が動いているようです。他にも、一部の施設や建物からは火の手も」

いつものようにクソ親父と優等生な兄達の嫌味を聞き流し、帝都郊外の森で狩猟の後にバーベキューパーティーとキャンプと楽しんでいたら、夜番をしている家臣がテントに飛び込んで来た。

外に出ると、帝都から火の手が上がっている。

こんな時間にもかかわらず、かなりの数の軍隊勢も動いているようだ。

軍の夜間演習……のわけないよね。

「殿下……」

「やあ、エメラは寝起きでも綺麗だね」

「殿下、そのような冗談を言っている場合では無いのでは？」

僕が個人的に雇っている魔法使いのエメラが自分のテントから出てきたけど、僕の褒め言葉を聞いて冷たい表情になった。

僕は、場を和ませようとしただけなのにね。

それにお世辞じゃなくて本当に綺麗だと言っているのに、エメラは冷たいんだから。

まあ、そこが良いところでもあるんだけど。

「殿下、クーデターのようです」

「ああ、やっぱりそうだよね」

いつの間にか横に控えていた護衛のマルクが、一言だけ言葉を発する。

マルクは凄い剣士だけど、言葉数が少ないからね。

気配も掴みにくいので、たまに傍に居ても気が付かない事があるんだ。

僕を守る仕事で、手を抜くような人じゃないんだけど。

「誰がクーデターを起こしたのかな？」

「ニュルンベルク公爵しかあり得ません」

「だよね」

皇帝選挙では、惜しいところまで行ったからね。

若い野心家である彼からすれば、あの結果は満足できなかったのかな？

でも、どう得票数を予想をしてもうちのクソ親父には勝てない。

皇帝としての素養は圧倒的にニュルンベルク公爵だけど、今は乱世でもないからね。

改革という名の混乱を嫌った保守派のせいで、無難にうちのクソ親父に決まったわけだ。
若いニュルンベルク公爵からすると理不尽に感じるのかもしれないけど、改革は失敗すると今よりも状況が悪くなるからね。

一国の政治の問題だから、そう博打も打てないと感じている貴族が多いんでしょう。

ニュルンベルク公爵からすると、惰性で流されたと感じるかもしれない。
そこは、世代間や身分間で発生するギャップというやつかな？

「これは困ったね」

明日、どうやって帝都に戻ろうか悩んでしまうね。
いきなり捕まって処刑されるのも嫌だし。

「とりあえず、ここは安全ですが……」

「エメラ、僕達は根無し草になってしまったのかも」

今から皇宮に戻っても、もうとっくにクーデター軍に占拠されているだろうし。
そういえば、クソ親父と兄達はどうなったのかな？

「どこかに逃げますか？」

「それも芸が無いね。暫く様子を見よう。その前に、最低限の見張りを立ててもう一眠り」

この狩猟場は、僕達だけしか使っていない秘密のポイントだからね。

クーデター軍も忙しいだろうし、朝になってから帝都の様子を確認してもいいでしょう。

「殿下……」

「どうせこんな場所にクーデター軍は来ないし、来ても逃げる場所はわかっている。明日からに備えて寝ておくのも生き残るコツだよ。それとも、エメラは僕と寝たいとか？」

「面白い寝言ですね」

「うわーーー、エメラのキツイ一言。じゃあ、僕は寝るから」

そのまま就寝して翌日の朝、僕は何名かの密偵を放った。

密偵とはいっても、僕の子分で酒場の主とマフィア幹部の息子なんだけど。

クーデター直後で帝都の警戒態勢が厳しいから、貴族の子弟が入ると捕まってしまう。

その点、帝都の裏道などをよく知っている彼らは情報収集には最適だ。

「暫くはここで待つしかないね」

数日後、更に帝都から離れた森の奥深くに移動して彼らを待っていると、欲しかった情報を持って来てくれた。

さすがは酒場の主とマフィア幹部の息子、クーデター後でも上手く動いて情報を持って来てくれる。

「皇家と選帝侯家の人間で、帝都にいた連中は軟禁状態にある？」

「殺されている可能性も、無きにしもあらずですが」

「クーデターの首謀者がニュルンベルク公爵なのは今さらとして、帝国軍はどうなの？」

「およそ、四割が参加した様子です」

「ふぇーーー、これはうちのクソ親父のせいばかりとも言えないか」

手堅い内政家であった先帝陛下は、あまり軍事には詳しくなかったからね。

間違いなく、彼の生前からニュルンベルク公爵は動いていたのだろう。

でなければ、ここまで鮮やかにクーデターは起こせない。

となると、これは先帝陛下の責任でもあるわけだ。

「それで、どうしましょうか？」

「どうするも、もう少し情報が欲しいね」

それから一週間ほど、僕達は森の奥地に籠りつつ情報を集めた。

ニュルンベルク公爵は、帝都の掌握にほぼ成功したようだね。

普段は家柄自慢で威張っている癖に、命が惜しくてニュルンベルク公爵に尻尾を振る貴族の多いこと。

ただし、一部失敗もしているようだけど。

「親善訪問団として来ていたヘルムート王国の使節団を軟禁、魔法使い数名を殺害か……」

「思いっきり外交問題だよね」

せっかく二百年も停戦が続いていたのに、バカなんじゃないかと思う。

こんな理由で仮想敵国に喧嘩を売ってどうするのだろうか？

「もし将来ヘルムート王国と戦争になるにしても、内乱終結までは手を出しちゃいけないのに」

「殺されたのが魔法使いなら納得できます」

「エメラ、その心は？」

「魔法を使えない兵士達からすれば、いきなり魔法を放たれるのは嫌なのです。過剰に反応して殺してしまったのでは？」

「魔法を撃たれるくらいなら、先制して斬ってしまえと？」

「はい」

エメラは、魔法使い達がニュルンベルク公爵の命令で殺されたのではなく、兵士達が過剰防衛で殺してしまったのではないかと推論する。

どんなに慎重に立てた作戦でも、実行すれば思わぬ齟齬も出るというやつかな？

ニュルンベルク公爵がいくら優秀でも、末端の兵士達の行動を全てコントロールできるはずもないし。

「魔法なんて食らったら、軽くても重傷だものね」

「軽い『ファイヤーボール』でも、当たれば大火傷です」

「確かに、それは嫌かも……」

相手が魔法を放つ前に斬り殺してしまったか。

でも犠牲は数名で、当然逃げ延びた者達もいる。

「バウマイスター伯爵とその一行の行方をニュルンベルク公爵が追っています。何でも、相当に派手にやったそうで」

「オズベルト、よく調べてくるね」

「鼻つまみ者のマフィアですけど、光ある所には影もある。影は、帝都の至る所に存在しますから」

さすがは、マフィア幹部の息子。

彼は、情報を集めてくるのが本当に上手だ。

「選帝侯ではフィリップ公爵だけが逃げ延びたようです。彼女が詰めていた迎賓館ですけど、地獄の惨状だそうで……」

正視に耐えないクーデター軍兵士達の死体が散乱していて、その床は血で真っ赤に染まったそうだ。

「死体の片付けを、クーデター軍は乞食に頼みますからね」

その乞食から情報を得るくらい、マフィアからすれば児戯に近いというわけさ。
いくら優秀なニュルンベルク公爵でも、そこからの情報漏えいは防げない。
彼も高貴な生まれだから、乞食やマフィアのような下々の行動は理解できないというわけだ。

「あとは、帝都北部にある駅馬車の待機場が壊滅しました」

とてつもない高温に焼かれて、馬車も馬も全滅だとオズベルトが報告を続ける。
何もかもが完全に焼けてしまったために、逆に後片付けは非常に楽だったらしいけど。

「クーデター軍からすれば、そんなことをする意味が無いよね」

他の抵抗された軍事拠点でもあるまいし、馬と馬車を無事に抑えて輸送力を確保するのが普通なのだから。
という事は、実行者はクーデター軍に対抗する者達の可能性が高い。

ほぼ間違いなく、バウマイスター伯爵一行の仕業であろう。
彼の魔法ならば、このくらいの事は十分に可能なはずだ。

「逃げる際に、他の追跡用の足を潰したと？」

「そういう事になります」

無事に、フィリップ公爵とバウマイスター伯爵一行は逃げ延びた

というわけだ。
状況から見て、両グループは合流したと考えるのが合理的だと思う。

「それはとんでもない獲物を逃がしたね。ニュルンベルク公爵は」

ここでフィリップ公爵を捕えるなり殺していれば、クーデターは大成功だったのに。
逃げられたのであれば、フィリップ公爵も生き残るために兵を集めるからね。
自然と内乱に移行するわけだ。

「外国貴族であるバウマイスター伯爵のせいで、ニュルンベルク公爵のクーデターは躓きを見せるか」

フィリップ公爵は北方諸侯を集めてニュルンベルク公爵に対抗する公算が高く、それにはバウマイスター伯爵一行も参加するのかな？

「船で帰るという選択肢もあるかな？」

バウマイスター伯爵からすれば、帝国の内乱に参加する意義なんて無いからね。
早く戻って領地の開発を進めたいだろうし。

「殿下、それはありません」

「どうしてそれがわかるんだい？　エメラ」

「先ほど『飛翔』を用いて偵察を行おうとしたのですが、頭に激痛が走って発動しませんでした」

「魔法が使えない？」

「いいえ、正確には一部の魔法が発動しないのです」

それは厄介な話だね。

そういえばクーデター以降、帝都から飛び立つ魔導飛行船が一隻もない。

エメラが『飛翔』を使えないのと同じ理由であろう。

「そういう魔法じゃないよね？」

「広範囲に一部の魔法が永続的に使えないようにする魔法なんて、少なくとも私は聞いた事がありません」

魔力の消費量も凄そうだしね。

エメラは帝国でも有数の魔法使いだけど、さすがにそんな芸当は不可能だろう。

「確か、ニュルンベルク公爵領には古代魔法文明時代の地下遺跡が多数あったよね？」

何かいいお宝でも見付けて、それが自信の根拠になっているのかも。

とにかく、今は安易に動けない。

と思い、更に数日情報収集に努めたけど、これはどうにもならないね。

「ニュルンベルク公爵も、クソ親父と兄達を殺してくれれば良かっ

たのに」

「殿下、不謹慎です」

「そうなっていれば、僕もニュルンベルク公爵討伐の兵集めが出来るのに」

亡くなった父親にして皇帝の意志を継ぎ、ニュルンベルク公爵を討つのに全力を尽くす。

皇帝の子に継承権は無いけど、今は帝国全体が混乱しているからいくらでもやりようがあったのに。

「では、北に逃げてフィリップ公爵様と合流しますか？」

「マルク、そういうのを昔に『船頭が多いと、船が山を登る』とか言ったそうだよ」

僕なんかが行っても、それは新たな混乱を引き起こすだけだ。

主導権争いで滅びる反抗軍か。

歴史の教科書でバカにされそうだね。

向こうもありがた迷惑でしょう。

クソ親父や兄達ならともかく、三男で母親が平民の僕なんて。

「それでは、いかがなされます？」

「決まっているじゃないの。帝都に戻る」

「ニュルンベルク公爵に捕まってしまいますけど……」

「でも、殺されないから」

そう、クソ親父や兄達が殺されていないのに、僕如きが殺されるはずがないじゃないか。

ニュルンベルク公爵は、皇家の人間に何らかの利用価値を見付けたのだろうね。

だから、それを探るためにも戻るとしようか。

「ただし、エメラやマルクは駄目だよ」

優秀な人材だからね。

僕を人質にして、きたるフィリップ公爵との戦いに駆り出される可能性がある。

ここは、一旦僕を見捨てた事にして貰わないといけない。

「他のみんなもね。ここは忍耐の時でしょう」

大半の家臣や遊び仲間達はこのまま森の奥で待機するとして、僕達は数名で帝都へと戻る。

その前に、小汚い恰好に着替え、酒を大量に飲んでおく。

「何だ？　お前は？」

「僕は皇帝陛下の三男で、彼らは僕の遊び友達だよーーーん」

帝都の正面門で、僕は酔っ払いながら自分の身分を明かした。

すぐに連行されてニュルンベルク公爵の前に引き出される。

前に見て印象に残った鷹のように鋭い目と、帝都の掌握に成功し

て余裕の笑みも浮かべているようだ。
でも、まだフィリップ公爵との戦いがあるんだけどね。
僕は出ないけど。

「何をしていたのだ？」

「帝都の外でバーベキューをしていたんだけどね」

夜に、帝都で騒ぎがあった。
家臣達が地方に逃げて兵を集めようと進言したけど、それを無謀だと断った。
そうしたら、みんな自分から離れてしまった。

そう説明すると、ニュルンベルク公爵はなぜか満足している。
僕に人望が無いのが嬉しいんだろうね。

「兵を集めれば良かったではないか」

「皇帝の三男で、母親が平民の僕なんて旗頭にもならないよ。それに、帝都にはアーヤちゃんやミレイちゃんもいるし」

「それは誰なのだ？」

「僕のお気に入りの娼婦です。ニュルンベルク公爵、早く色町の通常営業を認めてよ」

「……、その内にな」

ニュルンベルク公爵は僕をさげずんだ目で見つめるけど、これは本当にそう思っているのかな？

それとも、まだ疑っている？

ならば、もっと油断させないとね。

というわけで、僕も他の家族と共に軟禁されたけど、外出は監視付きならば認めて貰った。

勿論、外出先は全て馴染みの娼館という設定なんだけどね。

「監視員君、僕がミレイちゃんを満足させているシーンも見るかい？　僕にそういう趣味は無いんだけど、君もお仕事だからね」

最初にそう言ったら、監視員君は娼館の入り口で待つようになったけど。

「殿下ちゃん、こういうお店に来てそういう事をしないの？」

「君は魅力的なんだけど、僕にはエメラがいるから」

「あら、案外真面目なのね」

「真面目も真面目。僕は常に真面目に生きているよ」

「まあ、お金は貰っているからいいんだけどね」

この娼館は、オズベルトの父親であるマフィアの幹部が仕切っているから、ナンバーワンの娼婦を指名して、その広い個室で体が鈍らないように剣の稽古をしたり、集めた情報を分析したり、知己で援助してくれるマイヤー商会に連絡を取ったりする。

「この部屋の中で何があったのかは、娼婦の仁義で話さないから安

心して」

安娼婦なら金で転ぶ可能性もあるけど、伊達にナンバーワン娼婦じゃないというわけさ。

実質的なオーナーであるオズベルトの父親の意向もあって、彼女は監視員に聞かれても僕が頑張って腰を振っていたと言ってくれる事になっていた。

「僕がいかにテクニシャンであるかを報告しておいて」

「任せて、殿下ちゃん」

そして、帰る時には酒を大量に飲んで酔っ払った。

本当、僕が酒に強くて幸いしたよ。

「代金は、皇家に請求してね」

極めつけがこれだ。

娼館での代金は全て皇家へと請求、クソ親父は大激怒しているけど、ニュルンベルク公爵は笑いながら『娼館の代金とはいえ、払わなければ商売人も困るであろう。払ってやれ』とクソ親父に言い放った。

国家予算となる税収などではなく、皇家の私財から払えと言ったのだ。

僕が親や家族の目を盗んで遊び、その代金をクソ親父が払わされる。

ニュルンベルク公爵からすれば、僕は皇家の資産を痩せさせる便利な駒というわけだ。

まあ、大した金額でもないけどね。

「あーーー、毎日酒ばかり飲んで疲れた」

「殿下は、酒精の中毒になって駄目人間になったのですね。あとは、娼館で色に塗れていたとか？」

数か月後、帝都はフィリップ公爵率いる解放軍によって解放された。

その前に、ニュルンベルク公爵は何もかも持って逃げてしまったけど。

それに合わせて潜伏していたエメラ達が戻って来たけど、数か月ぶりの再会なのにエメラは冷たいね。

僕を酒精中毒扱いなんて。

「ペーター！　よくも皇家の資産で遊びまくってくれたな！」

せっかく家臣達との再会を楽しんでいるのに、クソ親父が五月蠅いな。

どうせ僕が散財しなくても、ニュルンベルク公爵に持っていかれたんだから同じじゃないか。

本当、細かい事で五月蠅いんだから。

「お前はもう大人しくしておれ！　余は……」

「退位するよね？　当然」

即位直後にクーデターをかまされた皇帝なんて、何の役にも立たないどころか害悪でしかないと思うけど。

ここは潔く退位して、フィリップ公爵に譲る方が帝国のためというやつさ。

「ふざけるな！　余にもプライドがあるのだ！　女のテレーゼ如きに皇帝の座は譲れん！　それに、ニュルンベルク公爵はこの手で討つ！」

随分と勇ましいね。

ニュルンベルク公爵がいた頃には、殺されないようにヘコヘコしていた癖に。

結局、クソ親父は退位しないでテレーゼ殿と揉めている。

ニュルンベルク公爵は、僕達を殺さないわけだ。

「余自らが、ニュルンベルク公爵を討つのだ！」

「父上、私も参加したします」

「ペーター、お前は留守番だ！」

クソ親父も兄達も、ニュルンベルク公爵がいないと勇ましいな。

そして、ニュルンベルク公爵の思惑通りに討伐軍を編成しようとしている。

商人達から借金までして、どう考えても勝てる要素が見当たらないんだけど。

「僕は、留守番で良かったと思うよ」

クソ親父達はバラ色の未来のために忙しいようで、また僕がフラフラしても何も言わなくなった。

遊んでいるように見せかけて、少しでもお金を貯めつつ人脈も作る。
幸いにして、当座の資金は潜伏していたエメラ達が隠していた物に、潜伏中に魔物などを狩って得た素材などもあるんだけど……。

「ありがたいけど、僕の資金力だとねぇ……」

第三の基軸にもなり得ないか。
となれば、ここは大きく借金でもしないと駄目なんだけど、問題はスポンサーかな。

「そういえば、バウマイスター伯爵様ですけど」

「ああ、彼はやっぱり解放軍に参加していたね」

僕と同じ年なのに、魔法使いとしても、冒険者としても、軍人としても大活躍していて羨ましい限りさ。
領地も資金も豊富で、奥さんも沢山いる。

しかし、その生まれは貧乏貴族の八男だとか。
そういえば、ニュルンベルク公爵が妙に意識していたような……。

クソ親父達は、成り上がりの下賤な貴族で相手にする必要は無いという評価だったな。
諸々を押し付けてたかっている状態に等しいのに、自分達の思惑を外れて稼いでいるから腹が立っているんだろうね。

「新しい磁器の販売ですか」

「よく思い付くよね」

サーカットの町も開発も進んでいるし。

あの町の住民からしたら、バウマイスター伯爵が帝国の皇帝になった方がいいと思っているだろうね。

僕だって、あの町の住民ならそう思うよ。

「外国貴族が皇帝にですか？」

「エメラ、ここまで帝国が混乱すれば可能性が無いという事もないさ」

まだサーカット周辺だけだけど、彼は帝国臣民に希望を与えている。

実利と共にね。

ニュルンベルク公爵は、南部と自分に従う軍人、貴族だけ。

テレーゼ殿は、北部と解放軍に参加した貴族だけ。

クソ親父は、どちらにも相手にされなかった残りカスだけか。

「殿下の出番は無いかもしれませんね」

「いやいや、必ずしもそうとは言えないさ」

サーカットの町にいるバウマイスター伯爵は、当初参加していた解放軍と距離を置いている。

クソ親父なんて、本当なら顔も見たくないだろう。

第三の勢力になった？

正しくはあるけど、みんなは彼が願っている事を正確に把握して

いない。

「テレーゼ殿は、バウマイスター伯爵にえらく執心だったとか？」

「女帝夫君ですか？」

「そんな事は、バウマイスター伯爵は望んでいないよ」

広大な、まだ開発しないといけない領地がある。

資金は豊富だけど、開発には時間がかかるよね。

それなのに、帝国に足を縛られるのを良しとするはずがないじゃないか。

帝国の領地なんて欲しがらないだろう。

「ほぼ無人だった大陸南部最南端、全てのリソースはそこに注ぎたいよね」

集中すれば、バウマイスター伯爵が死ぬまでには小国にも匹敵する豊かな領地になるはずだ。

「帝国にある飛び地なんて、邪魔だろうね」

貰った以上は統治しないといけないからね。

しかも、千年以上も帝国の統治下にあった土地に王国貴族が領主となる。

そんな面倒な土地、いらないでしょう。

「だから、解放軍では当初傭兵扱いであったと？」

マルクの考えているとおりさ。
報酬を金や財宝に限定したのは、それを持ち帰って領地開発に使えばもっとはかどるからだ。

「貴族ならば、領地が増えて喜ぶと思っていましたが」

「バウマイスター伯爵は、ちょっと帝国の古い貴族とは違うようだね」

普通の貴族なら、領地が増えるのを喜ぶからね。
領地の広さイコール、自分の権威に繋がると考えているから。
元々家を出て魔法使いで身を立てる予定だったみたいだから、土地よりもお金の方が使い勝手がいいと思っているのかも。

「バウマイスター伯爵は、領地の質に拘っているんでしょう」

飛び地を得て、そこに開発のリソースを割きたくない。
それをすると、どっちも中途半端になってしまう。
そういう風に考えているのだと思う。

「だから、鉱山利権とか港湾利権しか受け取らないかも」

これならば、適当に代官を置いてその利益だけ得ればいいし。

「欲の無い方ですな」

「それは正しい認識だけど、だから逆に怖いんだよ」

何の拘りも無い帝国に対し、彼は確実にその痕跡を残しつつある。
ミズホ伯国とはえらく懇意なようだし、サーカットの町の住民は

完全にバウマイスター伯爵派だ。
彼は帝国の領地を一寸も得ていないけど、そのシンパは増やしている。

「このままだと彼に払う報酬は莫大な物となるね。それを絞られた帝国は痩せ衰え、逆に得たバウマイスター伯爵はそれで自分の領地を肥えさせる。戦後には、ミズホ伯国とも直接交易をするだろうね。他にも、彼と交易を望む貴族は多いはずだ」

「殿下、それって……」

「経済的な侵略とも言えるね、エメラ」

大体クソ親父は、ヘルムート王国がニュルンベルク公爵に壊滅させられた先遣隊の派遣しか行っていない理由を理解しているのかな？
どうせ、現地の混乱に巻き込まれたくない、先遣隊の潰滅で臆病風を吹かせているくらいにしか考えていないのだろうけど。

「ヘルムート王国は、待てばどんどん国力が増すからね」

バウマイスター伯爵がいるからね。
最南端開発で金をジャブジャブ回しているから、その影響で王国経済も右肩上がりだ。
他にも、王国は不要な魔物の領域を積極的に解放させるだろう。
可住領域と人口の増加もある。
戦争で柵のある帝国領地を奪うよりも、新規に開発した方が統治は楽なのだし。

「このままにしておくと、二十年、三十年後には両国の差は絶望的なものになるだろうね」

だから、それに気が付いたニュルンベルク公爵は焦ったのかもしれないけど。

「内乱の隙を突いて攻めるよりも、後で攻めた方が楽じゃない」

国力比が圧倒的なんだから。

それに、バウマイスター伯爵が帝国侵攻軍に参加すれば……。

「ミズホ伯国は呼応するんじゃないのかな？」

それは彼らが不義理だからじゃない。

彼らとて、生き残るためにそういう選択肢をしなければいけないというわけだ。

その前に、彼らは一応独立国でもあるんだよね。

「サーカットの町の住民などは喜ぶだろうね」

昔の良き時代が帰ってくると思うだろうからね。

歓喜の声で、バウマイスター伯爵を迎えるかも。

「思った以上に帝国は大変な事になっているのですね。ならば、バウマイスター伯爵の暗殺も視野に入れるべきでは？」

「それは一番の悪手だよ、エメラ」

王国発展の希望を帝国人が殺してしまう。

こうなれば、今は冷静な王国政府もぶち切れるだろうね。

「失った未来の収入を取り戻すために、帝国侵略を躊躇わないだろ

うね。バウマイスター伯爵を殺害した時点で、大義名分は立つし」

「ううっ……」

エメラは、悩むとちょっと視野が狭くなるのが短所かな。

「エメラ殿、その前にどうやって暗殺するのだ。バウマイスター伯爵の周囲には手練れだらけだぞ」

王国の最終兵器に、ブランタークもいるからね。

奥さん達も現役の冒険者で、腕が立つという話だし。

「そうですね、殿下が揃えられるくらいの戦力では暗殺も難しいですか」

「エメラ、それは微妙に傷つく！」

エメラ自体は帝国でも三本の指に入る魔法使いで……内乱で魔法使いは一杯死んでいるからな。

もうトップかもしれないね。

マルクは凄腕の剣士だし、駒の質は揃っていると思うけど、問題は資金と人数か。

「どうなさるおつもりで？」

「クソ親父は失敗すると思うから、その後だね」

僕の忠告にも関わらず、クソ親父は集められる予定の軍勢の数に安心している。

ほぼ間違いなく敗北するとして、まずは僕と同じ考えを持ってい

る軍人、官僚、貴族に声をかけて勢力を形成するべきか。

更に僕は、バウマイスター伯爵が欲しがっている物を知っている。
だから、それを恩賞に彼を引き入れる。
幸いな事に、バウマイスター伯爵はテレーゼ殿を鬱陶しいと思っているからね。

いい女ではあるんだけど、彼女は立場と身分が面倒臭い。
僕だって、彼女はゴメンだね。

「バウマイスター伯爵にも、一つだけ弱みがあるからね」

「弱みですか？」

「この帝国の大半を覆う奇妙な装置さ」

『移動』と『通信』魔法を阻害する装置か。
クーデターなんて違法行為を企むニュルンベルク公爵には良い装置なんだろうけど、これをそのままとか頭がおかしいと思ってしまう。

「まあ、バウマイスター伯爵達が怖いのはわかるけどね」

精鋭魔法使いだけで帝都上空に飛来、魔法で奇襲攻撃なんて手を恐れているんだろうね。
ニュルンベルク公爵は軍人だから、思考が軍人の方に寄ってしまう。
本人は意地でも、表立ってはそれを認めないと思うけど。

「あの装置は僕達も欲しくはない。彼らに破壊の自由を与えればい

いさ」

「宜しいのですか？」

「構わないというか、アレが王国に渡ってもねぇ……」

将来、帝国に侵攻するとして、その装置を復元して使ったとしても、今度は王国軍が足を縛られてしまうからね。

ギガントの断裂を、魔導飛行船で超えられないし。

「古代魔法文明時代の遺産なんでしょう？　明らかに欠陥兵器だと思うけど」

「その技術を元に、何か他の兵器を開発される可能性もあるのでは？」

「それはさ。うちも同じでしょう？」

ニュルンベルク公爵領を抑えれば、かの地の地下遺跡から見つかったロストテクノロジーの現物が手に入る。

これを研究して配備、王国への抑止力にすればいい。

「案山子の代わりにはなるさ」

今の帝国は滅茶滅茶だけど、逆にチャンスとも言える。

破壊の中からの再生というやつだね。

そのためにも、上手くバウマイスター伯爵を引き込んで政権を取らないと。

「ですが、バウマイスター伯爵様と会えるツテがありません」

「どうせクソ親父が偉そうに呼び出すだろうし、それが駄目でもマイヤー商会があるから」

高級な磁器を販売している以上は、マイヤー商会に卸した方がいいからね。

あの当主ならば、上手く渡りをつけてくれるでしょう。

「どうせ僕達は何も持っていないんだ。ここで賭けに出てもいいでしょう」

「私は殿下の護衛ですから」

「同じく、魔法で護衛しているだけですので、ただ殿下についていくのみです」

ならば、行こう。

『皇家の恥さらし』が、皇帝に成り上がるか、失敗して死ぬか。

その結果は、まさしく神のみぞ知るのであろうから。

第百三話　討伐軍出陣す。

「へぇーー、大きいねぇ」

「甲羅がとても綺麗ね」

ヴィルマの狙撃によって頭を撃ち抜かれた巨大陸亀はその活動を停止させ、急ぎ戻ってきたイーナとルイーゼはその死骸を見上げている。

しかし、まさか陸亀王レインボーアサルトが二匹いるとは思わなかった。

普段は一匹しか表に出ていなかったのであろうが、せめて導師は気が付いて欲しかった。

「あの甲羅のせいで魔力が感知できなかったので、仕方がないのである」

あの虹色の甲羅の厄介な部分は、亀が頭と足を引っ込めると『探知』が不可能になる点である。

攻撃を加えないと、あの虹色の甲羅は魔力を探知させてくれないのだ。

甲羅が虹色に輝いているので目視なら簡単にわかるが、地面に埋まっていたのでは確認のしようがない。

「この数か月、見事に騙されたのである」

「どちらか一匹しか表に出ていなかったとしても、大きさが違うんだから気が付いて欲しかったな」

「ブランターク殿、人間あまり細かい事は気にしない方が長生き出来るのである」

「この場合は、気にした方が長生きできるけどな……」

続けて戻ってきたブランタークさんも導師に苦情を言うが、精神がワイヤーロープ並に丈夫な導師が反省などするはずがなかった。

「もう一匹か。解体は大変じゃないの？」

「人手はいるから」

これを持ってサーカットの町に凱旋すると、帝都の皇帝が噛みつく可能性がある。

変に警戒されても嫌なので、現地で解体して魔法の袋に仕舞い、必要な時にペーターが帝都の臣民達に見せて力を誇示するわけだ。

「ヴェル、この甲羅ってかなり特殊だよね？　殿下はお金を払えるの？」

「払えるとも。出世払いで」

ルイーゼの疑問に、ペーターは堂々と胸を張りながら答えていた。

これまでは隠れるようにして同志達と金を貯めていたようだが、当然その程度では雀の涙なので、今の彼は借金だらけである。

しかしながら、相変わらずまるで悪びれていない。

「（ペーターが、ユリウス・カエサルのような大物だといいがな…

…）」

暫くすると、二匹の陸亀王レインボーアサルトの解体が始まる。
場所は領域内であったが、既に大半の魔物が倒され、これも解体が進んでいた。
肉を食料として確保し、他の素材は売却して軍資金にあてる予定だ。

「おっ、美味しそうな料理だな。さすがはエリーゼ殿」

試しに、一部の素材でエリーゼが料理を作っていた。
亀の肉は初めてであったが、果たしてどんな味がするのであろうか？

野菜と共に煮込んだうま煮に、醤油と味噌ダレで焼かれた肉なども出てくる。

「亀、美味しい」

「好きなだけ食べていいから」

「ヴェル様、太っ腹」

既にヴィルマが食べていたが、彼女は今回の功労者である。
食べたいだけ食べて欲しい物だ。
エリーゼが、次々と焼いた肉やうま煮をお椀によそってヴィルマに差し出していた。

「普通に美味しいな」

「いやあ、今日は美味しかった……ではなくて、大変であったな」

陸亀の肉を大量に食べながら、導師が今日の出来事を思い出していた。

陸亀が二匹いる事に気が付かず、自分は他の魔物狩りに集中していたという事実は指摘してはいけない。

不可抗力の面もあったし、導師が暴れたので軍に犠牲があまり出なかったという点もあったからだ。

「他の魔物は、明日にもう一度虱潰しにして全滅させるのである」

「あとは、私が『ウィンドカッター』で木を切り倒していきます」

同じく陸亀王レインボーアサルトとの戦闘に間に合わなかったカタリーナであったが、彼女は残存する魔物の始末と、この領域の木を切り倒す仕事を請け負う予定であった。

「ここに農村を作ると聞いていますが」

「サーカットの町に食料を供給する農村連合みたいな物？」

この魔物の領域は、サーカットの町と北部の小領主連合の領地の間を塞ぐような形で存在していた。

魔物の肉と素材で冒険者も集まっていたが、規模が小さいのでむしろ開発と通行を阻害する面の方が強かったそうだ。

「この魔物の領域が解放された事により、サーカットの町と帝国中央部北部領域とが繋がって開発が促進されるわけだね。虹色の甲羅という希少価値の高い物も手に入った事だし、これをもって僕は帝都に凱旋する」

「そうか、それは良かったな」

力説するペーターに対し、俺はこれまでの分も合わせて仕事の報酬に関する詳細な請求書を手渡していた。

「うーーーん。テレーゼ殿は、ヴェンデリンに甘え過ぎ」

ペーターがその金額を見て、今まで俺に報酬を払っていないテレーゼを批判する。

「殿下もあまり人の事は言えません」

「エメラ、こういう時くらいは僕の味方になってよ」

ペーターは、主君に毒舌を吐くエメラに苦笑を浮かべていた。

「時に主君に厳しい事を言うのも、臣下としての役割です」

「正論だねぇ。僕は全て支払うよ。勿論後払いだけど」

「後で支払うというのは、テレーゼも皇帝も言っていたがな」

この二人は、別に支払いを正式に拒否したわけでもない。
ただ俺が勝手に、二人の皇帝としての資質に疑問を抱いただけだ。

「勿論分割になるけどね。同志に財務系で優秀なのがいるから、帝都に入ったら計算させる。僕の目が白い内に必ず返済するさ。だって、返済しないと帝国がヴェンデリンとその後ろにいるヘルムート王国に経済支配されてしまう」

「ほう……」

そこまでわかっているのなら問題ない。
もし支払えなければ後で設定する予定の担保を取り上げるだけで、それは帝国の領地と鉱山や港などの利権である。
だから、返さなければ帝国が王国に侵略されてしまうのだから。

「きっと僕は、後世では借金帝とか呼ばれるね」

ペーターは、笑いながら亀肉を食べていた。
そしてその翌日、現場ではまだ後始末の最中であったが、王国軍組、帝国軍の中から五千人、ミズホ伯国軍五千人の合計一万五千人で帝都へと進軍を開始していた。

帝国軍組はギルベルトさんが自ら指揮を執り、王国軍組はフィリップが、エルもその中の千人を率いている。
ミズホ伯国軍は、ムネカズ・タチバナ・ミズホという重臣が指揮していた。

導師、ブランタークさん、エリーゼ達も俺に同行し、サーカットの町の管理は代官とクリストフとシュルツェ伯爵に任せる。
残存する兵力の統率は、ポッペクさんと彼にスカウトされた人材に任せれば問題ない。

「どうせ全員、すぐに帝都に来る羽目になるけどな……」

さすがに訓練の効果もあって、軍勢は整然と素早く帝都近郊に陣を張っていた。
早速に皇帝に呼び出されるが、これは割愛しておく。

呼び出されて、すぐに自分達はすぐに出陣するので後ろで大人しく警備でもしていろと言われただけだ。

口調はもう少し丁寧であったが、俺達を連れて行くつもりは無いようだ。

「父上は、豪華な特製の輿が完成してウキウキなんだろうね」

「馬に乗る練習をすればいいのに」

さすがの俺でも、もう普通に馬には乗れた。
その努力すらしない皇帝に、ただ呆れるばかりだ。
まだ初老にも達していないのに。

「その豪勢な輿も、もうすぐで棺桶に早変わりか」

皇帝に謁見した日の夜、帝都郊外に張った陣地で俺達は夕食を食べながら話をしていた。
付いてきたペーターは、密かに帝都在住の仲間から情報を得ているらしい。
それによると、華美に装飾された特注の輿を見て皇帝は満更でもない笑みを浮かべていたそうだ。

「総大将が馬にも乗れないって、どうなんだ？　ペーター」

「そうだよね。長年戦場で戦って功績のある老軍人とかならともかく」

過去の帝国軍には、そういう軍人もいたそうだ。
だが、あの皇帝は軍の訓練にも碌に参加した経験が無い。

皇家直属の諸侯軍の訓練も、今では跡取り息子達に任せてしまっているそうだ。

「ペーターのお兄さん達は優秀なんだな」

「優秀というか、言われた事を無難にこなすのは得意かな？　さすがに馬に乗れないとかは無いけど、どうやってニュルンベルク公爵に勝つんだろうね？」

今の帝都は討伐軍の出陣前という事もあって、ある種の熱気に包まれている。

皇帝から兵士達に一時金が下賜されたので、それを使って命の洗濯とやらをしているのだ。

最後になる人もいるので、それ自体に俺はどうこう言うつもりはない。

というか、俺達はほぼ間違いなく彼らは負けると予想している。

止められれば良かったのであろうが、結局彼らは数が多いという自信に基づいて一部貴族やペーターからの忠告を無視している。

可愛そうだが自業自得とも言えて、こちらとしては複雑な心境を抱かざるを得なかった。

「最初は順調に進むだろうな」

「ほう、ヴェンデリンの戦術論か。聞いてみよう」

「そこまで大層な物じゃないよ。皇帝を討って、同時に大きな損害を与えればニュルンベルク公爵はずっと楽になる。だから、ニュルンベルク公爵領奥まで引き寄せてから、地の利を生かして一気に討つ方が楽だろうと」

侵攻ルートが三つもあるので反撃するタイミングが難しい戦術ではあるが、その能力をニュルンベルク公爵は十二分に持っている。
まず失敗はしないであろう。
皇帝以外の息子達や幹部クラスも、なるべく討つか捕えるかしたいところだ。
犠牲が多ければ多いほど帝都は混乱する。
上手くすれば無血開城すら可能かもしれないと思えば、討伐軍の潰滅に力を注ぐであろうと。

「討伐軍の幹部達もそれは重々承知しているからね。『我らが無能だとでも？』と言われてしまえばね……」

「待つしかないさ」

どのみち、俺だって皇帝の戦死を期待している部分があるのだ。
ペーターにどうこう言えるはずもない。

「ペーターか。お前は、帝都周辺に騒動が起きないようにバウマイスター伯爵を上手く使って頑張れよ」

「それこそが、三男であるお前の役割だ」

遂に、帝都の巨大な正面門から討伐軍が出陣する。
最初に帝国軍の精鋭である騎馬隊が列をなして歩いて行き、次に豪華な輿に乗った皇帝が見送りの貴族や臣民達に手を振って応える。
その中にペーターもいるのだが、彼は一度目を合わせただけで何も言わなかった。

行軍も中盤に差し掛かると、皇帝の後継ぎである長男と次男、つ

まりペーターの兄達が馬に乗って姿を見せる。
彼らは皇家の諸侯軍を指揮していて、随分と気合が入っていた。

彼らは次期皇帝ではなく、あくまでも皇家の後継ぎである。
だが、他の選帝侯家の混乱に、今回の戦功も含めて皇家の継続的な皇帝位継承を狙っているそうで、今回の討伐は失敗できないというわけだ。
もっとも、勝利後の甘い夢を見ているようで、嫌らしい笑みを浮かべながらペーターに目の上目線で話しかけていた。

「兄上達の勝利を願っています」

「我らの栄光は、お前のためにもなるからな」

そう言い放って行軍の列に戻る兄二人に対し、彼らが見えなくなるまでペーターは恭しく頭を下げ続けていた。

「よく頭にきませんね」

「兄達の母親は大貴族の娘で、僕の母親は平民だからね。さすがに慣れたよ」

そう言いながらペーターが下げていた頭を上げると彼は舌を出していて、イーナがぎょっとした表情を浮かべる。
これまで誤魔化し我慢しながら駄目な弟を演じてきたので、特に思う事も無いのであろう。

「それで、俺達は何を？」

討伐軍の最後尾を見送りながら、ブランタークさんがペーターに

聞く。

「帝都には入れないから、僕達はその周辺で人気取りをするのさ。公式には、治安維持担当？」

ニュルンベルク公爵が帝都を一時放棄し、幽閉されていた皇帝が再び政権を握って半年ほど。

いまだに治安が悪化している地域なども珍しくなかった。

そこで俺達は、その解消のために動いて様子を見る事になったのだ。

「軽傷の方は、こちらですわ」

「骨はくっ付きましたが、数日は安静にしていてください」

「某の治療を受ける者はいないのであるか？」

カタリーナ、エリーゼ、導師は、各地の農村などを回って巡回治療を行い。

「作物泥棒は駄目だよ。自分で買わないと。あっ、抵抗する？　じゃあ、気絶して貰うね」

「作物泥棒は、私の中では極悪人扱い」

「何で、こんな娘っ子二人に俺達が？」

ルイーゼとヴィルマは、なかなか捕まらない犯罪者の摘発に精を出し。

「大分練度も上がったな」

「そうですね。エルさん」

「エル、この食料申請の書類。計算が間違っているわよ」

「えっ？　本当？」

「最後の合算で間違って台無しなのよ。ほら、ここ」

「本当だ……」

エルとハルカは、フィリップの下で懸命に部隊の訓練に励んでいた。

イーナは、軍の運営に力を貸している。

「この道をまっすぐにねぇ……。長いな……」

「しかし、俺らはいつまで工事をするんだろうな？」

「さあ？」

俺とブランタークさんは、土木冒険者としての生活を送っている。

治安維持とは何も関係ないような気もするが、これも討伐軍の状況次第であろう。

今のところは、境界線を無傷で超えたとか、幾つかの村や町の解放に成功したなどの戦果が次々と入ってくる。

自分達の功績を派手に宣伝したいからなのであろうが、詳細を聞くとほとんど戦闘を行っていない。

討伐軍首脳部の考えでは、彼らは領地の奥でほぼ全軍を集めて最終決戦に臨むと思っているようだ。
そしてそれが行われると、三倍の戦力を持つ自分達の勝ちであろうとも。

「ただ結果待ちなのがもどかしいな」

「ええ……」

それでも、皇帝に付いて出兵しなくて良かったと思う。
土木工事などに勤しんでいると、それを手伝う人夫達から良くない噂を聞いていたからだ。

「（ニュルンベルク公爵様が反逆者なのはわかるし、その討伐の必要があるのはわかるけど……）」

「（何かあったのか？）」

「（俺の友達が聞いた話なんだが、占領された村や町は地獄の惨状らしいぞ）」

「（それって……）」

「（そういう事だ。あんまり偉い人の前で言うなよ）」

討伐軍は寄せ集めなので、兵員の統制が取れていないのであろう。
戦争では定番の、民間人への略奪や虐殺が行われているらしい。

「そんな事だろうとは思ったけどね」

その日の夜、ペーターに人夫達からの噂話を伝えると、彼はそれを不思議に思っていなかった。
当然という表情をしている。

「皇帝は禁止の通達を出さなかったのか？」

「出しているよ。当然じゃないか。でも、決まり事って守らせるのが一番難しいでしょう？」

「そうだな。俺も実際に兵を斬っているからな」

フィリップは、この遠い帝国で王国軍組の規律を守らせるのに苦労している。
命からがら逃げたり捕虜になっていたせいで、その恨みを晴らそうと強盗や強姦に走った兵士が何名かいたのだ。

これは、帝国人達を率いるギルベルトさんも経験している事だ。

「同じ帝国人とはいえ、住んでいる領地や地方が違えば同朋意識は薄いからな」

昔の戦争をしていた時代ならば、もう少しそういう意識も強かったのかもしれない。
だが、今の時代だとどうしても自分の家族や地元が最優先で、こういう非常時に他所の土地で悪さを働いてもと思う輩は一定数発生してしまう。
これは、どこの世界の軍隊でも避けえない現実であった。

「ほぼゼロまで減らす方法はあるけどね」

フィリップとギルベルトさんは、自らその兵士の首をサーカットの町の住民達の前で刎ねた。
残酷だが、俺達は町に間借りしている状態なのだ。
軍規を正さなければ、こういう犯罪はますます増えてしまうであろう。

「クソ親父と兄達は、綺麗事だけ言って何もしていないんだろうね」

「取り巻き連中も、皇帝陛下からの叱責と罰を恐れて耳には入れないであろうからな」

そんな理由で失脚でもしたら、ニュルンベルク公爵討伐後に訪れる栄光を逃してしまう。
結果、そういう都合の悪い不祥事を彼らの耳に入れないという結論に至ったらしい。

「導師殿は、国王陛下にでも直言しそうだね」

「遠慮なく言うであろうな」

「ヘルムート王国の国王陛下は羨ましいね」

陛下と導師は親友同士である。
だからこそ、導師は親友のために耳が痛い忠告でもするつもりなのであろう。

だが、皇帝にはそんな家臣がいない。
それがわかるからこそ、ペーターは自分の父親を少し憐れんでいるのかもしれない。

「ニュルンベルク公爵の工作が静かに広がっているな」

「そうだね。ヴェンデリンの言う通りだ。討伐軍の悪行は事実だとしても、味方からはこんな不祥事は漏れない」

ニュルンベルク公爵が残した残留諜報員達によって、徐々に皇帝達の悪行が帝国中に広がるようにしている。

皇帝が内乱討伐で罪も無い住民を虐殺しているとも取られかねず……実際にそうだが、ニュルンベルク公爵は討伐軍との戦闘後の事も考えて動いているようだ。

「やはり負けますか？」

「エリーゼ殿、その町や村には教会もある。神官達のネットワークを舐めてはいけない」

教会はニュルンベルク公爵の反逆に抗議する立場を取り、解放軍や討伐軍に従軍している神官も多い。

だが、南部の教会には反乱軍に参加していたり、中立の立場を宣言して普段通りの活動を続けている神官も多いのだ。

「帝都の教会が正義と信じる討伐軍の悪行を見て、彼らはどう思うかな？　教会でも動揺が大きいと思うよ」

「そうですか……」

「さすがだな。ニュルンベルク公爵は。なるほど、テレーゼ殿だと倒し難いから、クソ親父を帝位に戻して力を割って倒すか……」

「生まれてくる時代を間違えたな。ニュルンベルク公爵」

「乱世にこそ、ああいう男は相応しいんだろうね」

ペーターは、今の自分にはこの状況をどうにも出来ないともどかしい思いをしているらしい。

口の端を歪ませているのを、俺は見付けてしまう。

しかし、今の時点で下手に介入して皇帝を助けてしまうと、今度は上を抑えられたままの状態でニュルンベルク公爵と戦わないといけない。

一時の犠牲に目を瞑って、皇帝には死んで貰わないといけないのだ。

「それで、その裸の皇帝陛下様は？」

「三日もすると、皇帝が率いる本隊はニュルンベルク公爵自身が自ら率いる部隊と激突するらしい。半分ほどの兵力で待ち構えているのだから、さぞや対策が一杯なんだろうね」

「地下遺跡の遺物かね？」

前にも、爆発するゴーレムによって導師までもが翻弄されてしまった。

魔法使いの数と質が落ちている討伐軍では、対策が遅れて致命傷を受けるかもしれない。

「今は、結果を待つしかない……」

ほぼ負けるのがわかっている戦いの結果を待つというのは辛い物だ。

それでも、時間が経てば結果は自ずと訪れる。

それから十日後の夜、ペーターにより密かに討伐軍に潜らせていた密偵が早馬で彼の元に駆け込んでくる。

「お味方惨敗！　皇帝陛下は討たれました！」

「やはり……。それで詳細は？」

急遽主だった者達が集められたテントの中で、息を切らせた密偵が詳細な報告を始めようとする。

「あの。これを……」

「ありがとうございます。奥方様」

密偵は、エリーゼが急ぎ淹れたマテ茶を飲み干してから報告を始まる。

細かい事だが、こういうタイミングにわざとぬるいお茶を淹れるとは、さすがはエリーゼというところであろう。

「敵は少数と、全軍で突撃をしましたところ……」

「大量の自爆するゴーレムによって軍列を崩されたか？」

「それは後です。金属製の竜のゴーレムが配置されていまして……」

「そんな物まで発掘していたのか！」

王国の地下遺跡で出た以上は、帝国の地下遺跡でも発掘される可能性があったという事だ。

そしてそれを自陣地に配置して、攻め寄せた討伐軍数千人が数発のブレスで溶けて無くなったと、密偵は報告する。

「その後に、大量の自爆型ゴーレムが……」

十万人の大軍とはいえ、そこまでされたらあとは崩壊するだけだ。

そこにニュルンベルク公爵が自ら攻め寄せて、皇帝の乗った輿がひっくり返された。

泥に塗れた皇帝は剣を構えるニュルンベルク公爵に命乞いをしたが、『見苦しい』と一撃で首を刎ねられたそうだ。

「よくそこまでわかったな」

「私は後方にいまして、そこに真っ青な顔で取り巻きの一人が逃げて来ましたからね」

その取り巻きは貴族なので、何とか皇帝を失って崩壊しつつある軍勢を纏めようと現地に残留した。

密偵は、そのまま馬で飛び出してここまで逃げてきたそうだ。

「見事なまでの逃げっぷり。ガトラの早馬の技は称賛に値する」

密偵の名は、ガトラというらしい。

当然彼も、ペーターの同志でもあった。

「兄達はどうだ?」

「他の二つの軍の指揮を執っていたようですが、多分同じ結末でしょう」

「だろうね」

何の事はない。

ニュルンベルク公爵が一旦帝都から兵を退いたのは、地元に誘引すれば地下遺跡の遺物で勝てる自信があったからだ。

ドラゴンゴーレムは重たいので、設置するなら工事に人手を使える地元という事なのであろう。

当然、他二つの軍勢と指揮官であるペーターの兄達も無事ではないはず。

「予想通りになったね」

ペーターの言う通りだ。

ここにいる連中の大半は、そうなると予想して数か月も前から動ていたのだから。

「討伐軍は、半分は生き残れるかな？」

「そのくらいは生き残って欲しい。再編すればどうにかニュルンベルク公爵に対抗できるから」

これから、勝ちに逸ったニュルンベルク公爵が軍勢を帝都に進める可能性が高い。

それまでに、ペーターは帝国の実権を握って軍勢を再編しないといけないのだから。

「今のところ頼りになるのは、残留していた帝国軍と留守番に回された同志達か。あとは、ヴェンデリン」

ペーターは、俺の肩に両手を載せる。

「君の王国軍組と、サーカットの町で編成した帝国軍。あとはミズホ伯国軍も当てにしている。外国の軍勢だからと騒ぐバカが多いと思うけど、今はスピードが勝負だ。クソ親父の死を公表して、一気に政権を握るぞ」

やはり、朝まで一眠りというわけにはいかないようだ。

全軍に出動命令が下り、陣地の中に兵士達の喧騒の声が広がっていく。

「ガトラ」

「はっ！」

「帝都に入って、バイエルラインとランズベルク伯爵に同じ報告をしろ」

「了解しました」

「ヴェンデリン。気になるかい？　僕の同志達だから、今は閉まっている帝都の正面門を開けてくれるわけさ」

正門が開くのと同時に全軍で皇宮や帝国軍の施設を接収して、そのままペーターが帝国の実権を握る。

これもクーデターではあったが、この際は仕方がないであろう。

皇帝が死んだ以上は、誰かが権力を継承しないとニュルンベルク公爵に再び帝都を奪われてしまうのだから。

「ヴェンデリンは、僕の近くで見ているだけでいいよ。さすがに、この手の仕事は僕達が主導でやらないとね」

「そうか。でも、俺が傍にいると……」

俺でも、看板の一枚くらいにはなると思うのだが……。

事前の計画では、俺達は待機の予定だったはずだし。

「実際に事を起こすとなると、やはり手札を多くしたいのが心情でね。計画変更さ」

ペーターは、俺を利用する気が満々なようだ。

「貸し借り無しを実現するために、お代はいただくけどね」

「それは勿論。じゃあ行こうか」

それから数分後には準備が整い、少数の留守番だけ野外陣地に残して全軍で帝都正面門へと向かう。

クーデター以降、死ぬまでニュルンベルク公爵に操られた憐れな皇帝アーカート十七世は、半年ほどという短い在位期間を終える。

後に本で調べたのだが、彼の在位期間は二百七十八日。

歴代の皇帝の中では二番目に短い数字である。

なお、一番短い在位期間を持つ皇帝は、千百年ほど前に在位十七日で卒中で倒れたアーカート三世であった。

第百四話　俺達は歴史の目撃者になる……が、基本何もしない。

討伐軍を率いた皇帝は、俺達の予想通りにニュルンベルク公爵によって殺された。
その報告をいち早く入手したペーターは、帝都郊外に駐屯していたほぼ全軍と共に帝都への入場を図る。
皇帝の死で混乱が広がる前に、強引に政権を奪うためであった。

法的な根拠も無くほぼクーデター状態ではあるが、皇帝の死によって皇帝選挙に出馬した人物は全て死んだことになる。
内乱で議員の半数が死んだり交替した議会はいまだその動きは鈍く、ここで時間をかけて皇帝を選んでいる間にニュルンベルク公爵の軍勢が帝都に迫るであろう。

緊急事態という事で、ペーターが事態の収拾に入る。
早速帝都に入ろうとするが、当然門番によってそれは止められていた。
現在の帝都には、治安悪化に伴う夜間入場禁止命令が下っていたからだ。

「駄目です！　夜間に人を入れるわけにはいきません！」

「緊急事態なんだけどね」

「殿下、如何に緊急事態とはいえ……」

門番や彼らを統率する門の守将は、決まりなので入れられないと門の守りを固めていた。

彼らは軍人であり役人でもあるので、上からの命令には忠実だ。
いくらペーターの頼みでも、そう簡単に門を開けるはずがない。
誰しも、その事で自分が上から処分されるのが嫌だからだ。

「強引に突破するのか？」

「そうすると職務に忠実な彼らが困るからね。当然手は打ってあるよ」

ペーターが自信満々に言うので暫く待っていると、門の奥から守将よりも偉く見える軍人が現れる。

「門を開けて、殿下達を中に入れてくれ」

「バイエルライン様、本当に宜しいのですか？」

「俺が責任を取る。だから早く中に入れてさしあげろ」

「はあ……、了解しました」

バイエルラインという、いかにも軍人然とした人物の命令で、渋々ながらも守将は門の扉を開けた。
軍人や役人のもう一つの特質として、上からの命令には逆らわないという法則が発動したのだ。
『自分が責任を取る』と、バイエルラインなる人物が断言したのも大きい。
人間誰しも、責任など取りたくないのだから。

「殿下、では参りましょうか」

「僕は先に皇宮に行くから。帝国軍本部の掌握はボンホフ準男爵に任せるよ」

「私にですか？」

突然の指名に、ギルベルトさんは少し戸惑っている。

更に言えば、彼は俺が雇っている傭兵扱いであったから命令系統的にもおかしいのだ。

「そこは緊急事態という事で。僕も、ボンホフ準男爵は人材として狙っていたんだよ。ヴェンデリンが先を越して高給で雇ってしまったけど。君、本当に金持ちだよね」

「皇帝から妙な仕事を経費と報酬後払いで強引に任されたからな。楽をして何が悪い」

「数か月前も今も、あまりお金が無い僕達は、彼を引き入れられなかったのさ。だが、今ならボンホフ準男爵を帝国軍最高司令官に任じる事も可能さ」

「私が最高司令官……。殿下、何かの冗談ですか？」

「あれ？　駄目？」

「私はこの数か月、二万を超える軍勢の調練と指揮を一任してくれたバウマイスター伯爵殿に恩義があります。ですが、帝国軍には退役時に義理は果たしております」

ギルベルトさんからすると、帝国軍とはあまり居心地が良くない場所だったのであろう。

ペーターからの誘いに、彼は冷たく否定的な口調で答えた。
要するに拒否したいようだ。

「これからニュルンベルク公爵の軍勢を迎撃するのに、互角の力量を持つ指揮官を任じたいのだけど」

「準男爵の最高司令官など前代未聞ですな」

ギルベルトさんは、それ以上は何も言わなかった。
強引に最高司令官とやらになっても、他の家柄自慢の軍人達に反抗されて統一した指揮など困難だと言いたいのを、あえて口を噤んで示したと思われる。

「非常時なんだけどなぁ……」

「派閥や家柄に非常時はありませんからな」

ギルベルトさんの嫌味は、実はかなり当を得ている。
戦時に能力に準じた柔軟な人事制度を行えた国が勝利する事は多いが、平和な時代だとどうしても安定化を求めて波風立てない年功序列で家柄順の人事制度が蔓延る事が多い。
帝国は暫くは平和だったので、能力はあったが家柄が低いギルベルトさんは帝国軍を辞めて領地を継いだ。

その風潮が、そんなに簡単に変わるとは思っていないのであろう。

「軍の編成は全て任せるから。それに、家柄自慢で皇帝に付いて行った連中は死ぬか逃げるかしているから指揮に口出しさせない事を約束する」

「ああ。戦死していればそれどころじゃないし、逃げてきても無罪放免でそのままの役職というわけにはいかないか」

前者なら家の継承などで時間がかかり、後者でも役職の解任や降格が待っているので再編した軍の指揮など出来るはずもないというわけだ。

「兵を出していない非主流派と僕の同志達は、ボンホフ準男爵の指揮権に異議を挟まない。存分に再編した帝国軍を指揮してニュルンベルク公爵を倒して欲しい」

「私も殿下と同じ意見です。一軍の将としては動けるでしょうが、最高司令官は私には無理です。先輩、戻って来てください」

「バイエルライン……」

どうやら、バイエルラインとギルベルトさんは知り合いであったようだ。

共に帝国軍所属か所属だったので、特に不自然ではないのだが。

「ダミアンもアルミンもゲオルクも。みんな、先輩の指揮なら喜んで従いますから」

「しかしだな……」

ギルベルトさんは、俺に視線を向けていた。

今の雇用主である俺がどう思うのか気になっているのであろう。

「この二万人の軍団を永遠に維持するわけにもいきません。俺は内乱が終われば王国に帰る身ですし。遠慮なく引き受けてください」

内乱が終結すれば、俺からギルベルトさん以下を雇う名目が消失してしまう。
今の内に、正式な帝国軍人になって身分を保証して貰う方がいいわけだ。

それに、帝国の軍高官が俺の息のかかった人物になる。
ペーターに、借金を踏み倒すなよと牽制にもなるはずだ。

「指揮者の格の件も、きっとペーターが爵位と領地を出して釣り合うようにしてくれますよ。今俺が支払っている給金もくれるでしょうし、褒美も沢山貰えるでしょう。ここは、『ボンホフ伯爵家』の栄光のために誘いを受けてしまいましょう」

「なるほど。『ボンホフ伯爵家』のためですな」

見た目とは違って察しの良いギルベルトさんは、俺の意図に気が付いたようだ。
帝国貴族である彼を王国貴族である俺がいつまでも雇うわけにはいかない。
ペーターの誘いを受けて帝国軍最高司令官となり、爵位、領地、褒美、追加の給金などを条件に受けてしまえば良いと。

「えっ？　今ヴェンデリンが出してる給金も？」

「新しい帝国の支配者が、軍の最高司令官を迎え入れるのにケチケチしない方がいいと思うぞ。これだけ優遇されて迎え入れられたのだと兵士達が知れば、みんな安心して新しい最高司令官を受け入れられるというものだ」

「ボンホフ準男爵は元から評価の高い将軍だったけど、それを更に補完するのか。上手い手だな。ボンホフ準男爵、受け入れてくれるかな？」

「そこまでしていただけるのなら喜んで。全力をもって戦い、必ずやニュルンベルク公爵の首を」

「帝都軍本部の掌握と、帝都の治安維持に。その内に敗残の討伐軍が逃げてくるけど、その再編なども頼む。これを先に渡しておく。役に立つかは不明だけど」

「ありがたく頂戴します」

ペーターは、自分の個人紋が入った剣をギルベルトさんに渡す。現状では皇帝の三男に何の権限も無かったが、何も無いよりはマシだと手渡したようだ。

「借金がまた増えたな。細かい事を気にしても仕方が無いから、僕は皇宮に行くか」

軍勢の大半は、帝国軍本部の掌握や治安維持のために俺達と別れて行動を開始する。

「俺も行くからな」

「適度に頑張れよ」

「妙な励ましだなぁ……」

エルも軍勢を率いてギルベルトさんに付いて行った。

ペーター達を護衛する人数は数十名ほどになっていたが、これから向かう皇宮に大軍を引き込むのは御法度のようで、ペーター自身も気にしていないようだ。

「さあてと。あの頭に生クリームとババロアが詰まっている女の顔でも拝みに行くか」

「殿下、その頭悪そうな女って誰です？」

「僕の義母だよ。兄達を生んだ女だね」

「容赦ないですな」

「どう繕っても、救いようがないクソ女だからね」

ブランタークさんの問いに、ペーターは誰はばかる事も無く堂々と答える。

現皇帝の正妻をクソ女扱いとは、周囲に聞かれれば大問題になってしまうのに、よほど嫌いなのであろう。

「あまり良い感情を抱いていないのであろうな」

「導師殿、あまりどころか大嫌いだね。アホで性格が悪いし、家柄の良さを自慢ばかりして五月蝿いから。あの女の話を聞いていると、貴重な時間が無駄になるからね。早めに済ませるとしよう」

ペーターが先頭となり、数十名の一団は皇宮へと向かう。

こちらの警備兵達は、意外にも俺達をすんなりと皇宮に入れていた。

「事前の工作が効いていた？」

「はい、ランズベルク伯爵様だと思います」

俺の疑問にエメラが簡潔に答えてくれる。

確か、先にペーターが名前を出した協力者であったはずだ。

「どういう人？」

「ええと……、大変に女性が好きな方でして……」

「おおっ！　これは殿下ではありませんか！　かねてからの手筈通りに皇宮の掌握は行っておきましたぞ。ところで、エメラ殿以外にもこんなにもお美しい女性が沢山。可憐なお嬢様方。私の名は、ハルトムート・カイザー・フォン・ランズベルクと申します」

ランズベルク伯爵は、二十代前半の貴公子そのものと言っていい人物であった。

ルイーゼよりも濃い青い髪を無造作に伸ばしているが、手入れはいき届いていて光沢を放っている。

服装も一見地味に見えたが、かなりお金をかけて良い素材を使い縫製をしているようで、その個性が際立っていた。

顔も、師匠やエーリッヒ兄さんよりも上かもしれない。

完全無欠の、ロンゲ系爽やか貴公子と呼ぶのが相応しいであろう。

「先ほど殿下より連絡を受けて、五月蝿いのを部屋に閉じ込めました。香水臭いババアが一名、一際騒いでおりましたが」

「大変だったね」

女性好きでイケメンのランズベルク伯爵からも、ペーターの義母はボロクソに言われている。
よほど普段から言動が酷かったのであろう。

「はい、殿下。しかしながら、ここに五人も華麗なお嬢様方がおられる。私にそのお美しい声で、是非ともそのお名前をお聞かせ願いたい」

歯が浮きそうなお世辞であったが、不思議とランズベルク伯爵が言うと様になってしまう。
やはり、イケメンは何をしても言ってもイケメンなのだ。
師匠やエーリッヒ兄さんでわかっていた事なのに。

「エリーゼと申します。バウマイスター伯爵様の妻です」

「イーナです。同じくバウマイスター伯爵様の妻です」

「ルイーゼです。同じく」

「ヴィルマ。私も同じく」

「カタリーナと申しますわ。私もバウマイスター伯爵様の妻ですわ」

今はこういう時なので、五人の自己紹介はかなり省かれたものになっている。
ランズベルク伯爵は、エリーゼ達の挨拶が省略された点はどうでもいいようであった。

「おおっ！　自他共に認める帝国一の愛の狩人たる私の目に留まっ

たお美しい五人の女性全てが、バウマイスター伯爵の奥方とは！
このランズベルク伯爵。感嘆の極み」

「はあ……」

まるで芝居のように大胆に驚いてみせるランズベルク伯爵。
普通の人がやれば失笑されるのがオチであろう。
だが、不思議と彼がやると絵になってしまうのだ。

「とても残念な気持ちで一杯ですが、今宵は美しい女性に多く出会えて私の目の保養となりました。私は愛の狩人。常に新しい愛を求めて流離う者ですが、他人の大切な方に手を出す無粋は行いません。今宵は挨拶だけでご勘弁を」

何がご勘弁なのかはわからなかったが、ランズベルク伯爵は片膝をついて五人の手の甲に礼儀に則って軽く口づけをして挨拶をする。
その様子は非常に優雅で、俺は全く厭らしさを感じなかった。
エリーゼ達も心から不快ならば挨拶を拒否したであろうが、素直に受けている点からしてランズベルク伯爵に悪い印象を持っていないのであろう。

「ランズベルク伯爵、僕もここにいるんだけど」

「殿下。あいすみませぬ。何しろ、あの方の毒で我が眼が濁ってしまいまして。エメラ殿を含めて、お美しい方々で回復を図っていたのです」

「相変わらずですね。ランズベルク伯爵様は」

「エメラ殿が私の妻になってくれるのであれば、私はいつでも愛の

狩人を辞められるのですが」

「信用なりませんね」

「これは手厳しい。ではご案内いたします」

エメラは、ペーターのみならずランズベルク伯爵にも好かれているようだ。

その対応は、ペーターと差が無いようであったが。

ランズベルク伯爵に案内された部屋は、現皇帝の正妻が住んでいる私室であった。

「うわぁ。ドレスとか装飾品が一杯」

五十畳ほどもある部屋には、多くの高価な服飾品が置かれていた。

その量の多さに、ルイーゼは感嘆の声をあげる。

「無駄遣いの賜物だね。頭の中が生クリームだから、欲しければすぐに買ってしまうんだよ」

義理の母親だからというわけではないが、ペーターは皇后をボロクソに貶していた。

「ううっ……、そういう人に聞き覚えが……」

「聞き覚え？」

「ええ、ブライヒレーダー辺境伯様の叔母にあたる方が……」

頭のネジが緩い浪費家の女性、イーナはブライヒレーダー辺境伯の叔母がそういう人で、甥であるブライヒレーダー辺境伯が困っているのだという話をする。
彼に未婚の叔母がいるのは知っていたが、そういう人物だとは知らなかった。

「どこにでもある話なのね……」

「王国でも、帝国でも、一定数はいるよね。そういう人は」

ペーターはイーナに、特に珍しい話でもないと述べる。

「ペーター殿、今宵は何の騒ぎなのです？」

部屋の主である皇后は、ペーターの姿を見付けると顔に怒気を表しながら彼に詰め寄っていく。

「報告は入らなかったのですか？　義母上」

「あなたのような下賤な男に義母と呼ばれたくありません。陛下がお留守の時にこの騒ぎ。いくらその御子でも許されるものではありませんよ。あとで存分に罰を食らいなさい」

幸いというか、皇后の方もペーターの事が嫌いなようだ。
片方だけが好意を寄せる関係というのも可哀想なので、それで良かったと俺は思ってしまうのだ。
騒ぎを起こした彼をあとで皇帝に処罰して貰えると思って、皇后は嬉しそうに威張っている。

「（厚化粧ババア）」

「（ぶっ！）」

ヴィルマが皇后を見てボソっと毒を吐き、俺も思わず吹き出しそうになってしまう。

昔は綺麗だったのかもしれないが、今の皇后は厚化粧に派手な衣装と装飾で水商売の女みたいであった。

ランズベルク伯爵が嫌がるはずだ。

「僕も、あなたのような家柄しか取柄がない女を公式の場では義母と呼ばないといけない事に色々と思う所がありましてね。それは後でいいでしょう。皇帝陛下はニュルンベルク公爵に討たれました。兄達も行方不明ですが、ほぼ戦死したと見ていいでしょうね」

「そのような事はあり得ぬ。そう偽って内乱でも起こすつもりであろう。これだから、下賤な生まれの子は困ってしまうの」

自分の夫と腹を痛めて生んだ子共二人の死が信じられない皇后は、ペーターの発言を不謹慎であるとなじり始める。

「あなたがどう思おうと僕は構いませんが、これは純然たる事実です。というか、僕はこの可能性を何か月も前から言っていましたが」

「そなたの妄言になど付き合いきれぬわ！」

「妄言ですか……。だったら良かったのですがね。バールトンから報告は来ないのですか？　彼は諜報部門のトップなのに何をしているのですかね？　ある筋からの情報だと、新しく妾にした娼館の元ナンバーワンの相手が忙しいそうですが。この非常時に、報告にも来ないで腰を振っていますか」

「下賤の身で、我が兄を侮辱するのかえ！」

典型的なざーますおばさんである皇后は、自分の兄を批判されて般若のように怒った。

皇家の当主に正妻を押し込んでその縁で重職を得る兄、こういうのを世間では外戚の専横というのかもしれない。

「これ以上、あなたと話し合いをするだけ時間の無駄です。どうせ二～三日もすれば報告は入ってくるでしょうし。皇后様を監視しておいてくれ」

ペーターは皇后を一瞥してから、連れて来た兵士達に部屋に閉じ込めて軟禁しておくようにと命じた。

それを見送ると、すぐに玉座の間へと移動する。

するとそこには、十数名の貴族や軍人が待ち構えていた。

「さてと。『皇帝の羽ペン』は？」

「こちらにございます」

ペーターの行動に賛同した宮廷貴族の一人が、豪華な装飾のされた羽ペンを差し出す。

「羽ペン？」

「特殊な魔道具でね。これでサインをするとその書類が有効になるのさ」

偽物の皇帝からの命令を防ぐために、昔に作られた魔道具なのだ

そうだ。
皇帝になるとこれを唯一使える存在となり、サインした書類に公的な効果が発生する。
他のペンでサインした物は、簡単な魔道具ですぐにわかってしまうらしい。

ちなみに、皇帝の書類とサインを偽造した者は死刑と法で定まっているそうだ。

「凄い魔道具だな」

「そうだね。もう二度と作れないとも言われているね。これは暫く僕が使うとして……。いや結構長く使うのかな？」

「それは宜しいのですが、本来存在する閣僚の方々はいかがしますか？」

「一応、呼び出しておいて。どうせクビにするけど。議会も朝一で徴集する。まずは来れる人だけでいいよ」

玉座に腰を降ろしたペーターは、次々と集まっていた貴族や軍人達に命令を出していく。
事前に隠れて詳細な打ち合わせをしていたようで、すぐに皇宮内の喧騒は収まっていた。
帝国軍本部の掌握にも成功して、これは無血クーデターとでも言えばいいのであろうか？

俺達は、ただその様子を眺めているだけだ。
あとで、歴史の目撃者であったと日記にでも書こうかと思う。

日記なんて、いつも三日坊主で続いた事は無いけど。

「五人のお美しい奥方を持つ、我が友バウマイスター伯爵よ」

「ええと。ランズベルク伯爵でしたか？」

「親しい人は、私をハルトと呼びます。国は違えど、共に伯爵同士。仲良くいたしましょう」

みんなが忙しい中で、なぜかランズベルク伯爵だけは暇そうで俺と友好関係を結ぶ事に集中していた。

「あの……、ランズベルク伯爵様はお手伝いをしなくても宜しいのですか？」

「エリーゼ殿、皇宮で生きる愛の狩人たる私に、軍事だの政治だのは不可能なのです」

ランズベルク伯爵家は、長年皇宮周りの仕事を任されている法衣貴族家らしい。

軍事、内政、財務などの仕事には一切関わらず、ただ皇宮内やその周辺の様々な仕事に携わる。

職務上、使用人から貴婦人まで様々な人を相手にするので、コミュニケーション能力に長け、高貴な人を相手にするので文化や芸術などにも詳しい。

そして、女性受けが良い当主が多いのだそうだ。

確かに彼は、誰が見ても美男子であった。

「私は、皇宮を縄張りに生きる男なのです」

ペーターは、いい人材を引き込むなと俺は思う。
確かに政・軍事上では何の意味も無い人材であったが、あのヒステリー皇后の暴走を上手く抑えた手腕は見事だ。
多くの女子供に、ただのメイドや使用人などが多数行き交う皇宮内での様子を良く知る彼を引き込むとは、これほど理に適った行動は無い。

ついでに言えば、例の羽ペンの所在も彼ならばよく知っているというわけだ。
守っている警備兵や貴族への説得でも、彼は存分に力を発揮したのであろう。

「殿下達は忙しいようだね。ヴェル達は迎賓館の方へどうぞ」

いつの間にかランズベルク伯爵からヴェルと呼ばれていたが、不思議とそれに違和感を感じなかった。

「いいのかな？」

「構わないさ。明日になればまたヴェル達の力を借りるけど、その時には魔力が満タンで疲れていない方がいい」

明日には、呼び出された閣僚や議員達との話がある。
中には、ペーターの行動に異議を唱えて少数ながらも兵を出してくる者がいるかもしれない。
その対策には、魔法使いが役に立つというわけだ。

「ならば、遠慮なく休ませて貰うよ」

「それがいい。明日は不必要に騒ぐ人が多いだろうからね」

「結局、殿下に利用されてしまったわね」

「そういえば、そうか」

ペーターは自分達だけで政権を奪取すると言っていたが、結局俺達も帝都に入っている。

それをイーナから指摘されてようやく気が付いた。

「お美しく賢いイーナ殿、ここはこう考えてはいかがであろうか？殿下は万全を期するためにヴェル達にもご参加を願った。ヴェル達が参加して上手くいけば、後の褒美や報酬を帝国予算から出すのに大義が立つ。更に言うと、王国政府が帝国中枢にヴェルの影響力を残せば、それはすなわち王国の影響力でもある」

「自ら、王国の影響を受け入れた？」

「殿下がいくら善政を敷いても、帝国の国力は最低数十年王国の後塵を拝す事になる。ならば、王国に帝国の経済支配を夢見させて平和を維持する方が良いのではないかと」

「ランズベルク伯爵、あなたは……」

「イーナ殿、私は皇宮の住民にして、愛の狩人ですよ」

その気になれば、ランズベルク伯爵は優秀な政治家になれる資質を有している事がわかった。

ただの皇宮の住民ならば、ペーターに付くという選択肢も不可能であろう。

「それと、殿下に対してはもう一つ」

「政治家は言っている事がよく変わる。それでも、結果が伴えば良い政治家か？　ハルト」

「正解だよ、ヴェル」

ランズベルク伯爵は、俺の発言を肯定した。

そして翌朝、俺達は起床後に朝食を取ってから再び玉座の間へと向かう。

するとそこには、既に多くの閣僚や軍人達が集まっていた。

「このような不法な行いを認めるわけにはいかないのです！」

昨晩騒いでいた皇后もいて、彼女は玉座に座るペーターに罵声をあげていた。

「この際は非常時ですから。それよりも、バールトン。君は討伐軍が敗戦した報は受けていないのか？」

「ええと……。理由は不明ですが、定時連絡が途絶えておりまして……」

皇后の兄は、皇帝が他の者は信用できないと諜報関連を取り仕切る地位を与えられていた。

ところが能力も適性も無いので、いまだに討伐軍壊滅の事実を把握していなかったようだ。

汗をハンカチで拭きながら、しどろもどろでペーターの問いに答えている。

「だから、こちらの情報では三方から侵攻した軍勢が全部撃破されて敗走中なんだよ！　何で、あんたが把握していないんだ！　ザウケン軍務大臣。あなたは当然把握しているよね？　軍にも諜報機関があるんだから」

「陛下と皇子達の消息が不明というところまでは……」

「というわけで、後方支援要員も含めた五十万人中どれだけがニュルンベルク公爵が帝都に攻め寄せてくるまで戻って来るかね？」

意地悪そうな笑みを浮かべながらこれからの事を話すペーターに、集まった貴族達はほぼ全員顔を青ざめさせていた。

「ちなみに、ニュルンベクルの軍勢はほとんど損害を受けていないから」

十万人を超える精鋭が帝都に押し寄せる。

この事実に、もはやペーターの実権掌握などどうでも良くなっているようだ。

なぜなら、ここでケチを付けて『じゃあ、お前がやれ！』と言われても勝算が全く思い付かないのだから。

「陛下が戦死した情報は掴んでいる。それで、次はどうしますか？」

「そんな事は決まっておる！　アレクサンダーかユリアンが！」

「彼らの生存はほぼ絶望かと。その前に、僕と同じく法的な根拠がありませんよ」

「……」

そう、帝国では皇帝を選挙で決めるために、皇帝が死んでもその子供には何の権限も無いのだ。
それを得るためには、皇帝選挙に勝たなければいけない。

「彼らが奇跡的に生きていたとして、帝都に戻ってくる前かほぼ同時にニュルンベルク公爵の軍勢が迫ってくると思いますが……」

誰かが戦力を纏めてニュルンベルク公爵と戦わなければならない。
ペーターは、集まった全員にその意思を問うていた。
自信があるのなら、他に立候補者がいるのかと。

「義母上はどうです？　討たれた陛下と御子息達の弔い合戦です。もっとも、敗北すると後を追う事になりますが。いや失礼。アーレ侯爵家の方々が死など恐れないのを忘れておりました。兄君の力を借りて、是非にニュルンベルク公爵をお討ちください」

「私がですか？」

「はい。お兄様の力を借りれば大丈夫ですよ」

「私が！」

皇后とその兄バールトンは、ペーターからの提案に顔を青くさせていた。
今までは勝てる戦いだと思って余裕でいられたのに、討伐軍の潰滅で帝都防衛に自信が持てないからだ。
もし自分がトップにいて敗北すれば、ニュルンベルク公爵は間違いなく自分達を処刑する。
それがわかるから、自分では受けたくないのであろう。

特に皇后の方は、さきほどの勇ましい態度から急に弱弱しくなっていた。

「私は、夫の喪に服するために部屋に戻ります」

「私は、諜報の任務を全う出来なかった責任を取って辞職を……」

二人は、それだけ言い残すと逃げるように玉座の間を出てしまう。

「私も……」

「急に具合が……」

更に、ここに集まった貴族の大半はクーデター時にはニュルンベルク公爵に、今までは皇帝に媚びてその地位を得た連中ばかりである。

沈みかけた船からは逃げ出したいようで、ほぼ全ての閣僚が辞意を示して玉座の間から姿を消していた。

「ヴェンデリン、酷いものだろう?」

「それは、王国も同じ状態になってみないとわからないな」

平時では優秀でも、こういう非常時には駄目になってしまう人も多いのだから。

「バカが自発的に辞表を出したのは好都合。あの連中は、僕の目が黒い内は二度と役職にはありつけないから。爵位が低くても、優秀な人材に役職手当を出して任せれば問題ない。では、次は議会だな」

急ぎ議会場へと向かうと、そこには半分以下の議員しか集まっていなかった。

「議員諸君！　まずは現状を説明しよう」

ペーターが議員達にこれまでの経緯を説明すると、ほぼ全員が黙り込んでしまう。

正直なところ、どうしていいのかわからないのであろう。

皇帝選挙を行おうにも、立候補者が集まる前にニュルンベルク公爵の軍勢が殺到するからだ。

「そこで、このペーター・オスヴァルト・デリウス・フォン・アーカートが摂政の地位に就いて迎撃を行おうと思うがいかに？」

ペーターからの問いかけに、議員達は黙ったままであった。

法律でこういう事態を想定していなかったので、どう判断して良いのかわからないのであろう。

「私はそれで構いません。今は一秒でも早く迎撃態勢を整えるべきです」

ここで、貴族議員でもあるマイヤー商会の当主が賛同の意見を述べる。

「そうだな。今は形式論を言っている場合じゃない」

「時間が惜しいな。少しでも帝都の防衛体制を整えないと」

更に数名の賛同者が現れ、他に意見も無かった議員達の決議でペ

ーターは無事に摂政に就任していた。
彼が事実上のトップとなって、帝都に迫るであろうニュルンベルク公爵を迎え撃つ事にしたのだ。

「ここまでは良しとしてだ」

摂政に就任したペーターは、忙しく働いていた。
帝国軍の指揮をギルベルトさんに一任し、他に任命された実力重視の閣僚達も忙しく働いている。
北部を含めて現状の報告と援軍の要請も送っていて、早期にこの事態を予想していたミズホ伯国はすぐに二万人の軍勢を送るそうだ。

「ミズホ伯国軍は間に合うね」

俺達がサーカットの町を出た時には既に先遣隊を出す予定になっていたので、これは間に合って当然かもしれない。

「北部諸侯はどうかな？」

「アルフォンスなら何とかするでしょう」

テレーゼは間違いなく間に合わない。
ソビット大荒地の野戦陣地から兵を出しても、ギリギリという線であろう。

「助っ人はともかく、帝国軍はどうなんだ？」

王国軍組は別として、俺が集めた二万人と帝都留守部隊の二万人しかいない。
侵攻作戦に反対した幹部や将校は討伐軍から外されていたので人

材は揃っている。
だが、残留部隊の練度はお世辞にも優れているとは言えない。
「後方支援組や、中には優秀で上手く逃げだしている連中がいるかもしれない。それを再編できれば……」
他にも、討伐軍が大量に持って行ってしまった食料を集めたり、帝都南部から守備兵を帝都に引き揚げさせる作業でペーターは忙しそうである。
「南部の守りを薄くするのか？」
「集まっても勝てる保証が無いのに、兵力を分散する意味が無い」
「でも、大丈夫か？」
討伐軍は、南部で略奪や婦女子への暴行を行っている。
それに恨みを感じたニュルンベルク公爵軍が同様の事をする可能性があった。
「それは、クソ親父が無能だったからだよ。ニュルンベルク公爵に徐々に噂を流され、揚句に首を獲られて帝国中の笑い者だろうね。彼が同じ愚を犯すとは思えないけど」
帝都に迫るまでに同じ事をすれば、逆にペーターから噂を流されてニュルンベルク公爵の評判が地に落ちるというわけだ。
「そんなわけで、帝都で迎撃を行うのだけど。ヴェンデリンに頼みがあるんだ」

「わかった」

ペーターによる無血クーデターによって、帝国の新体制は定まった。

だが、これからの戦況がどうなるのかはまだ誰にもわからない。

第百五話　交渉のお仕事。

アーカート神聖帝国皇帝アーカート十三世はニュルンベルク公爵討伐に失敗して戦死し、その跡をその三男であるペーターが強引に継いだ。

誰が見てもクーデターであったが、思ったよりも反発は出ていない。

皇帝を討ったニュルンベルク公爵の軍勢がいつ押し寄せるか不安なので、誰もが頼れるトップを期待した。

いや、半ば敗戦を覚悟しているが故に、ニュルンベルク公爵と直接矛を交える危険を犯したくないのであろう。

皇后の実家であるアーレ侯爵家を始め、ペーターが脅かすと呆気ないほど簡単に役職を降りている。

ニュルンベルク公爵が帝都を落とした後に、また媚びて役職を得ようと考えているのであろう。

彼らは爵位を奪われたわけではないので、今職を辞しても生活に困る事は無いのだから。

『そこで、その穴を僕が選んだ人材で埋めるわけだ』

ペーターが密かに引き入れていたり、抜擢した貴族には爵位が低い者が多い。

実力本位で選んだ連中であったが、こんな無茶は今のような戦時だから通用するとも言える。

『そう。今は通用する。そして功績を挙げてしまえば、あのボンクラ共は戦後も無役だ。爵位と年金はあるんだ。生かして貰えるだけありがたく思って欲しいな』

ペーターの言い方は酷いが、もしペーターが負けたとしてニュルンベルク公爵が彼らを生かすとも思えない。

今の状況の方が幸せという考え方もあった。

現在の帝都では、夜間外出禁止命令が出ている。

迎撃に向けた準備も摂政に就任したペーターが中心となって進んでいて、帝国軍の再編も進んでいる。

帝都南部の拠点やペーターを支持する貴族が諸侯軍などを送ってきて、徐々にその数を増やしていた。

ニュルンベルク公爵軍の追撃を避けて上手く逃げてきた部隊もあり、そういう人達は最高司令官に就任したギルベルトさんが昇進させて配属させている。

『こういう目端の利く将校や指揮官は使える』

なぜか爵位が高い上級指揮官が少なかったが、彼らは数が多いので勝てると志願して前線で略奪などをしながら進み、ニュルンベルク公爵軍に呆気なく殺されるか捕縛されたそうだ。

その悪行により恨まれているので、味方の士気を上げるために被害を受けた領民達に向けて首が曝されているらしい。

あとは、敗走した軍勢に落ち武者狩りも行われているそうだ。

勝ちに逸って奥地にいた指揮官や兵ほど、生きて戻れる可能性は少なかった。

『地元の領民を敵に回すとはな。バカ以外の何者でもない』

ギルベルトさんによると、いくら兵力数に差があったとはいえ、地元の住民に恨まれればその地域に住む女・子供・老人までもが全て落ち武者狩りになって、兵力差など簡単にひっくり返されてしまうそうだ。

『奪われまい、犯されまいと必死に抵抗するし、敗走してきて疲れているのに、地の利のある連中にいつでも好きな時間に襲撃されるのだ。眠っている暇すら無いだろうな……』

どうしてこんな事になってしまったのかと言えば、一言で言えば皇帝の力が無かったからだ。

いくら略奪などを禁止しても、それが守られなければ意味が無い。

『取り巻き連中は、皇帝に報告しなかったんだろう。気が付かない皇帝も悪い』

亡くなったとはいえ皇帝相手に酷い言い方だが、この大敗戦の責任者なのでギルベルトさんの論評は帝国軍中で支持を受けていた。

彼らのせいで不利な防衛戦を行わなければならないので当然であろう。

『バウマイスター伯爵達の戦力も頼りにしている。フィリップ殿もいるからな』

俺の中ではまだ評価が微妙なフィリップであったが、周囲の評価は高い。

エルとハルカは軍の指揮について色々と教えて貰える良い教官だ

といい、ペーターも良将だと評価しているし、ギルベルトさんや同じく抜擢で参謀長に就任したポッペクさんなどは、五千人の王国軍組と共に精鋭として当てにしている。

ミズホ伯国軍と共に、帝国軍駐屯地の幾つかを割り当てられて帝国軍と同じ扱いを受けていた。

エルとハルカも、フィリップの手伝いで忙しかった。

「そして俺達は、再び土木工事の仕事をね」

「ヴェルは、結局引き受けたのね」

「退屈な皇宮にいるよりはいいさ」

そんな中、俺達一向は帝都西部にある城壁近くへと向かっていた。

ペーターからの依頼内容は、西部城壁の崩れた部分を急ぎ修復して欲しいというものである。

「城壁が崩れているんだ。でも、何で今まで直さなかったのかな？」

「一番の理由は予算不足ですね」

ルイーゼの疑問に、俺達と行動を共にしているエメラが答える。

「予算不足？」

「はい。他に優先すべき工事などがありますから」

「でも、帝都だよ」

「帝都は、成立以来敵勢力に攻められた経験がありませんから」

エメラの説明は続く。

帝国が成立以降、領地を東西南北に広げるために攻めるばかりであったので、帝都の防衛能力の低さを問題にする人がいなかったそうだ。

工事予算も、他に回されてしまう事が多いと言う。

「商業地の再開発、皇宮北部居住区の拡張がここ十数年は優先されておりまして」

「ですが、壊れた城壁では治安を乱す方々も入ってくるでしょう」

「城壁が壊れているのは、他にも原因があります」

エリーゼに答える代わりに、エメラは前方に視線を送る。

次第に西部の城壁に近づくと、周辺の空気が悪くなったような気がする。

石造りの家が減っていき、ボロい木造の簡易的な造りの家が増えていったからだ。

「スラムがあるのですか？」

「はい。彼らは城壁の内と外を勝手に出入りしておりまして……」

エメラの答えに、カタリーナは納得したような表情を浮かべていた。

「スラムの問題はどこでも同じですか……」

農村で自分の農地が貰えない農民の子が、一旗あげようと夢を抱いて帝都に上京する。
地元で不始末を起こして、逃げるように帝都へと向かう。

ところが平民でも、紹介状やツテが無ければ碌な仕事に就けない。
日雇い仕事などしか出来ず低収入のため、スラム街を形成してそこに住む羽目になってしまうのだ。

「スラムか」

「ブライヒブルクにもあるものね」

スラムは、ある程度の都市になれば必ず発生する。
王都にも当然あるし、ブライヒブルクに住んでいたルイーゼとイーナは当然知っている。

「最近は減ったらしいけどね」

バウマイスター伯爵領の開発が進んでいるので、そこに送り込んでいるからだ。
だが、もう百年もすれば今度はバウルブルクにもスラムは出来るであろう。
為政者は無くしたいのであろうが、完璧にゼロにするなど神様でも難しいはずだ。

「要するに、スラムの住民が生活のために城壁の一部を壊してそこから出入りしているわけだ」

「はい」

城壁の外に畑を作ったり、狩猟や採集などをして食料を得ている連中がいるのだそうだ。

「よく今まで放置してきたな」

「無理に城壁の工事をしても、またすぐに壊されるからです」

スラムの住民達からすれば、そこが開いていないと農作業や狩猟に行けないのだから死活問題というわけだ。

「待ってくれ。西部に入り口は無いのか？」

「当然ありますが、スラムの住民には出入りは不可能です」

身分を証明する物を持っていないので、門からの出入りは不可能だそうだ。

身分証を発行しようにも、スラムの住民にそんな物は発行できない。

低収入なだけならともかく、犯罪者や犯罪組織の一員も多いので、彼らにその身分証を使って堂々と悪事を働かれても困るからだ。

「じゃあ、放置しよう」

「開いている城壁ですよ。防衛に重大な支障が出ます」

「ボク達が強引に塞いでも、すぐに壊されるんじゃないの？」

「それは……」

ルイーゼの指摘に、エメラの表情は曇る。

「つまり、それを含めて解決しろと？」

俺と手を繋いで歩いているヴィルマが、更に踏み込んでエメラに質問をぶつける。

先日、亀の狙撃で活躍して二人だけのデートを約束したものの、時間が無くてなかなか実行できないために、今日は手を繋いで歩いていたのだ。

「そういう政治的な案件は、そっちでやれよ」

「そうであるな。王国人が手を出しても碌な事にならないのである」

スラムの露店で売っている何の肉かわからない串焼きを食べながら、ブランタークさんと導師も続けて文句を言う。

串焼きの他にエールが入ったボトルを交替で回し飲みしていて、タケオミさんが渋い顔をしていた。

真面目な彼からすると、仕事中に堂々と飲酒する二人の行動が信じられないのであろう。

「しかしながら、他に解決できそうな人がいませんので……」

「というか、誰も解決できないだろう」

「そうであるな。強引に城壁を補修して戻っても、ニュルンベルク公爵が攻めてくる頃には元の木阿弥という可能性も高いのであるからして」

城壁を直すのは簡単だが、それを壊させないようにする方法に責任が持てない。

導師の意見に、エメラは困ったような表情を浮かべていた。

「そうよね。外の畑の作物や、狩猟の成果が生活の糧なんでしょう？」

「しかしながら、当然お上の許可も得ないで違法状態なのです」

スラムの住民達は、許可も得ずに勝手に城壁の外に畑を作り、狩猟や採集を行っている。

当然納税などしていないが、彼らは元々貧しいのでそれでも生活はギリギリだ。

役所が徴税に行こうにも、それをするとスラムの住民達が反発して騒乱になりかねない。

それを抑えるために兵士達を連れて行っても、手間やコストを考えると見て見ぬ振りの方が効率が良いと判断して放置していたのが、今までの帝国政府であった。

ニュルンベルク公爵を帝都で迎え撃つに当たって、今まで放置していたスラム問題が一気に顕在化したわけだ。

城壁が崩れて存在していないので最大の弱点となり、それをニュルンベルク公爵が知らぬはずが無いのだから。

「今まで放置していたツケをボク達に押し付けないで欲しいな」

ルイーゼの発言に、エリーゼまでもが首を縦に振っていた。

「それで、何か新しい方針でもあるの？」

「方針ですか？」

「前の皇帝ならいざ知らず、ペーターが何の策も無しに俺達をいきなりここに送り込むのか？」

「実は、ここのスラムのボスがバウマイスター伯爵様に会いたいと言ってきまして」

「俺に？　知り合いかな？」

「多分、それはないかと。スラムのボスは、通称『男爵様』と呼ばれています」

「貴族なのか？」

「いえ。あくまでもあだ名です。ただ、貴族の私生児だという噂はあります」

そのスラムの主『男爵様』は、数年前にフラっとスラムに姿を現したそうだ。

「魔力量は中級ながら、治癒魔法の使い手です」

「どうしてそんな人がスラムの主に？」

「さあ？」

真面目で常識的なエメラには理解できないはずだ。

それだけのスキルがあれば、スラムになど住まなくてもいくらでも豊かな暮らしを送れるのだから。

「『男爵様』は、薬学にも長けているそうです。スラムの真ん中で

治療院を開き、貧しい人達からはお金を取らずに治療をするとか。最初はならず者達や犯罪組織と対立しました」

手駒というか、自分達のためだけに利用しようと拉致などを企んだ。

だが、彼はスラムの希望の星である。

男爵様が奪われるのを座視できない住民達が集まって自警団を形成し、命がけで彼を守ったそうだ。

「男爵様に人を統べる能力があるのかはわかりません。ですが、結果的に男爵様はスラムの主に収まりました」

そして、その体制をお上は黙認した。

なぜなら、男爵様のおかげで帝都の治安が改善されたからだ。

「万が一の怪我や病気が無料で治るのは、スラムの住民達にとっては大きな救いでしょう。城壁を壊して農業や狩猟・採集を強化したのは男爵様の命令だという噂があります。これによってギリギリで飢えなくなり、スラムの住民による犯罪は減っているのです」

更に言うと、一部犯罪者や犯罪組織と男爵様達は対立関係にある。

たまに非公式でそういう連中の情報が警備隊に流れて、摘発率は上がっていたそうだ。

「警備隊の機密費から、情報提供料の名目で男爵様に支払われていますね」

お上がスラム街の徴税を行わないのには、そういう事情も存在するようだ。

「行政的にはグレーゾーンばかりだな。皇帝は決着をつけずか……」

「元々代々の皇帝陛下も手を付けませんでしたから、この件に関してはアーカート十七世陛下だけが悪とは言えません」

「世の中は白黒だけでは判断つかないってか。男爵様に会うだけ会ってみよう」

エメラは、男爵様の居場所を知っているらしい。

暫く彼女の案内で歩くと、古びた石造りの家が見えてくる。

スラムの住民が独自に石を積んで作った歪な物であったが、周囲には木造のボロ家屋しかない。

対比で、男爵様のお屋敷にも見えてしまう。

「患者が並んでいるな」

男爵様の家は治療院でもあり、老若男女の患者が多数列を成していた。

スラム街で唯一まともな治療院なのであろう。

その数は数十人にも及んでいた。

「大人気だな」

「摂政の飼い犬の女か」

「随分な言い方ですね」

俺達の姿を見つけて、医院を警備している十数名の男達が集まってくる。

リーダーは、赤銅色の肌と筋肉に包まれた逞しい体が特徴の五十

歳くらいの男性で、エメラの事を知っているらしい。
彼女をペーターの飼い犬と呼んで、二人は睨み合いを始める。

「おいおい。バウマイスター伯爵様との面会希望なんじゃないのか？　あんたらのお館様は」

ブランタークさんが場を和ませようと二人の間に割って入った。
こういう対人折衝能力では、やはり人生経験豊富なブランタークさんに軍配が上がる。

「すまんな。俺としては、帝都の皇宮に住んでいるのは総じてクソだと思っているんだが、帝都の住民の中には三男坊を英雄視する頭の弱い奴らが多くてな」

その原因は、彼が摂政に就任するのと同時に帝都中央の広場に飾られた陸亀王レインボーアサルトの虹色の甲羅にある。
結局二つになってしまったが、あの大きさの甲羅二つのインパクトが大きかった。
あの大亀を倒せるのならと、民衆からペーターへの支持が集まっていたのだ。

「あの詐欺師はお笑いな事をする。全部バウマイスター伯爵様のおかげじゃねえか」

「殿下を詐欺師扱いですか！」

「うちの男爵様が言っていたぜ。テレーゼもペーターも、外国貴族であるバウマイスター伯爵様に頼って帝国の再統一とは笑えるとな」

「では、反逆者であるニュルンベルク公爵に帝国を委ねろと？」

「別に、俺達はそれでも構わないよ」

「そんな……」

普段はペーターに冷たそうに見えて、エメラは彼の人格と能力を評価しているようだ。

警備隊リーダーの悪口に、珍しく感情を表に出して反論していた。

「（バウマイスター伯爵、これは思った以上に難儀な仕事であるぞ）」

「（ですよねぇ……）」

逆上しているエメラは、この事実に気が付いているのであろうか？

これはただの城壁の修繕の話ではなくて、ペーターにもニュルンベルク公爵にも組していない男爵様以下スラムの住民達の引き抜き工作なのだと。

「俺達は、帝国に捨てられた人間だぜ。口先摂政にも、前の皇帝にも、その前の皇帝にも恩なんて何も無いわけだ」

反乱前から棄民扱いの彼らからすれば、テレーゼとペーターは味方でも何でもない。

そもそも、帝都の住民にもカウントされていないのだから。

「それはそうだな。君達は、ニュルンベルク公爵に破れた城壁を売って褒美を得る事もできる。男爵様は優秀な治癒魔法使いとか？彼の配下になれば、子爵以上は堅いな。どうせ、帝都の貴族は大掃除で消える。男爵様に与える領地も沢山あるわけだ。スラムの住民

を連れて新領地の開発も可能と。なるほど、君達は交渉がしたいわけだ」

「何でぇ、一番若いバウマイスター伯爵様がよほど理解しているじゃねえか」

警備隊のリーダーは、エメラをバカにしたような顔で一瞥してから俺に笑顔を向けていた。

「しかし、何で俺に交渉させるかね？　まあいい。まずは会って話を聞こうじゃないか」

「バウマイスター伯爵様は、彼らと交渉するのですか？」

「しないと、いくら防衛体制を整えても西側城壁から攻められるけどね」

多分、ペーターが俺に交渉させるのは、普通の帝国貴族や役人だと向こうが感情的になってしまうからだと思っているのかもしれない。

しかし、俺達に真の目的を教えないとは、人を試しているようであまり感心はできない。

「案内はするが、男爵様は忙しいから少し待って欲しい」

警備兵のリーダーの案内で建物の中に入ると、そこには三十歳前後でローブ姿の細身の男性が順番に患者の治療を行っていた。

椅子に座って治療をしているが、身長は百九十センチ以上はあるであろう。

顔は知的で、眼鏡をかけているのでまるで学者のようにも見える。

そんな彼は魔力の節約のためであろう。
治癒魔法の必要性が低い患者には、助手である数名の神官に投薬などの指示を出している。

「男爵様は、医者の知識もあるのか」

「そうだ。俺の部下達が交替で城壁の外に薬草を摘みに行っていてな。それを材料に色々と作るんだ。これが良く効くと評判でな」

魔法だけの俺とは違い、薬学に長けている秀才肌の人物のようだ。

「おばあちゃん、腰の具合は大丈夫かな？」

「はい。男爵様の湿布のおかげで大分良くなりました」

「追加で貰って帰ってね。腰は冷やしては駄目だよ」

「ありがとうございます。あのこれを……」

「お金はいいんだよ。おばあちゃん」

「そんな事を言わずに。男爵様と新天地に向かった時に開発の足しにしてくだせぇ」

「ありがとう。じゃあこれは全額貯めておくからね」

男爵様は緑色のローブ姿が良く似合っている。
俺などよりも、よほど高名な魔法使いに見えてしまうほどだ。

「（ブランタークさん。これって……）」

「（あの殿下、厄介な案件を押し付けやがって……）」

このやり取りだけで、俺はこの男爵様が恐ろしく有能な事に気がついてしまう。

彼がスラムの真ん中で治療院を開いただけで、スラムの住民の大半は彼を神様のように崇めている。

貧しいながらもスラムに規律と安定を作りつつ、帝国政府への納税義務は、敵対する犯罪組織の情報を警備隊に売るという方法でかわしていた。

更に、彼はスラムのリーダーで人生を終えるつもりないようだ。

いつか彼らを連れて新天地に向かいたいと願っている。

領主になって、領民として彼らを養おうと考えているのだ。

あのリーダーが率いる警備隊は、かなり訓練されている。

男爵様のおかげというよりも、口は悪いがあの赤銅色の肌の男の功績であろう。

そして、彼は男爵様に主君と同じように仕えている。

要するに、このスラムには事実上の男爵様の領地があるのに等しいのだ。

「実質、第三勢力に近いのである」

導師の発言を否定する者はいなかった。

「（油断はならないが……）」

彼は善性の人だと思う。

領主でもないのに、スラムの住民達の生活と安全に常に気を配っ

ている。
彼に魅かれた人達は、自然とその下について手を貸しているのだから。

そして、独りよがりでも偽善でもない。
その最終目標に、スラムの住民達を領民とした領地の確保を目論んでいる。
彼らの生活のために、ニュルンベルク公爵に破れた城壁を売ってもいいと考える潔さまで持っているのだから。

「ねえ、どうしてここに神官がいるの？」

などと考えていると、ルイーゼがエリーゼに質問をしていた。
そういえば、スラムには教会の神官達も入らないと聞いていたからだ。

「あなた。あの人達はカソリックの神官です」

「なるほど。そういう事か……」

国教に指定されているプロテスタントの神官達は、国の意向に従ってスラムに人を派遣していない。
王国の教会はスラムにも人を派遣して定期的に奉仕活動を行っているので、これは自分達が見捨てられていると思われても当然であろう。

一方、信者数の少ないカソリックの教会は、男爵様の手伝いに神官を派遣しているようだ。
手伝いをする事で信者を増やし、帝国では劣勢なカソリックの勢力拡大を図りたい。

男爵様とはお互いに利益があると判断したのであろう。
生粋の皇族や貴族なら国教に認定されているプロテスタントへの配慮が必要だが、男爵様にはそういう縛りがない。
利用できるものは利用したい彼からすると好都合なわけだ。

「交渉で公正を期すために神官とか派遣したら、その時点で交渉決裂ね」

イーナの言うとおりで、だから外国人である俺が交渉の使者に任命されたのであろう。
向こうも、俺を指名したのだけどけど。

「あなた、私もお手伝いをします」

「そうだな、俺達も手伝おう。その方が早く話し合いが始まる」

俺、エリーゼ、カタリーナの三人は、魔法で男爵様を手伝う事にする。

「某も……」

「伯父様は大丈夫ですよ」

「そうであるか？」

エリーゼがやんわりと断る。
女、子供、老人が多いので、彼に抱き付かれると大変な事になってしまうかもと思ったのであろう。

「あなたは……」

「まずは、仕事を終えた方が話し合いがしやすいでしょう？　手伝います」

「助かります」

これで治癒魔法使いは四人になったが、全員が能力に差があるので別れて仕事を行う事にする。

「ホーエンハイム家の聖女様ですか。お噂はかねがね」

「今は共に神のために奉仕を行う身。それで宜しいではありませんか」

「それはそうですね。エリーゼ殿の手助けに感謝します」

エリーゼは、同じカソリックの神官達と挨拶をしてから、主に重症患者達の治療を始める。

帝国に来てから、あまり同宗派の人達と話をしていなかったので少し安心しているようだ。

国の仕事で来ていたので、国教ではないカソリックの教会を訪ねたり神官と話をするのを避けていたのだ。

「私が重症の方を見ましょう」

エリーゼの治癒魔法の実力から言えば当然であった。

「男爵様と同じくらい凄い……」

エリーゼの治癒魔法に、男爵様も神官達も驚いているようだ。

男爵様もかなりの実力を持っているようだが、魔力量で劣る彼は効率を重視した魔法の使い方でなるべく多くの患者を助けるという手法だ。
次々と治癒魔法をかけて患者を治してしまうエリーゼの存在は驚異的なのであろう。

「あまり重傷じゃない人はこちらです」

次に俺であったが、やはり治癒魔法の腕前ではエリーゼに劣ってしまう。
それでも数はこなせるので、それほど重傷でない患者ばかり次々と治癒魔法をかけて治していた。

「やはり、治癒魔法は苦手ですわ……」

最後にカタリーナであったが、彼女の治癒魔法能力は低い。
練習も兼ねて、軽傷の患者を中心に治している。

「おばちゃん。膝をすりむいたの」

「おっ！　おばちゃん！」

「大丈夫、テレーゼよりは若く見えるから」

「ヴェンデリンさん、それは慰めになっていません！」

「おばちゃん、早く治して」

「はい……」

カタリーナは、小さい子供に『おばちゃん』呼ばわりされて盛大に凹んでいた。
彼女は二十歳くらいに見えるので、小さい子供だとおばちゃんと呼んでも不思議はないというわけだ。
言われた本人は、盛大に落ち込んでいたが。

「いやあ、助かりました」

今まで一人でやっていた治療を四人で行ったので、お昼までには並んでいた全員の治療を終えていた。
男爵様は丁寧にお礼を言い、ようやく時間が空いたので話し合いを始める事にする。

「ささやかな食事ですが、一緒にいかがですか？」

「ご馳走になりましょう」

俺達は男爵様の案内で、治療室の奥にある部屋に案内される。
一度に十数名が食事可能な部屋になっているが、壁は石のままで調度品も粗末であった。
すぐに食事が出されるが、このメニューには見覚えがある。

「昔の実家の食事だな」

野菜と細切れ肉が入った薄い塩スープ、ジャガイモを蒸かした物に、硬いライ麦パンと。
悪く言うと質素、よく言えば健康に気を配った食事と呼ばれるものだ。

いや、ジャガイモがあるから向こうの勝ちか……。
というか、昔の実家の飯はスラムにも負けていた。
客が来たから品数を増やしたのであろうという事情を差し引いてもだ。

「これでも、以前よりは大分マシになったのですよ」

質素な食事をしながら、男爵様が昔の話を始める。

「昔は一日一人パン一個とか。それも、時間が経って硬くなっていまして。薪代節約のために一度に大量のパンを焼くのです。その硬いパンを水を飲みながら食べましてね」

栄養不足に、水の衛生面にも不安があるので、子供や年寄りがよく病気になった。
当然、死んでしまう者も多かったそうだ。

「死んでも、スラムの住民は減りません」

他所からすぐに供給されるからだ。

「我々は、帝国に見捨てられた棄民なのです。だから、素直に城壁を塞ぐと思いますか？」

「いいえ、俺が同じ立場でもニュルンベルク公爵に高く売る案を考えます」

「バウマイスター伯爵！」

「エメラはなぜ怒るんだ？　人はそれぞれ事情や立場が異なるのに

？」

「あなたがそんな考えでは交渉は纏まりません！」

「そうか？」

俺がペーターに選ばれたのは、他所の国の人間だからだ。

これを帝国貴族や役人に任せると、エメラと同じような事を言って平行線を辿るだけ。

強引に排除して城壁を修理する案は、スラムの住民数を考えると愚策である。

数万人もいる彼らを完全に排除など出来ない。

双方の戦いが長引けば、彼らは帝都中に散ってゲリラのように抵抗する可能性が高い。

生き残るために、ニュルンベルク公爵に内応する可能性だってあるのだ。

「しかし、エメラは意外とペーターラブなんだな。ツンデレさんだ」

「あの……。ツンデレって何ですか？」

「ヴェルが作った謎の言葉よ」

「はあ……。そうですか……」

イーナの説明に、エメラは溜息をついた。

理解できないと言った感じだ。

「帝国人同士で交渉すると、ただ城壁を工事するから邪魔するな。

最悪立ち退けという話になってしまう。他に行き場の無いスラムの住民達からすれば堪ったものじゃない」

「そういうわけです。続けていいですよ。バウマイスター伯爵」

男爵様は、俺に話を続けるようにと促す。

「せめてどこかに領地でもくれると約束でもしてくれたら、これから始めるニュルンベルク公爵との戦闘で協力する事もやぶさかではない。勿論、食料や資金の提供を条件に。何しろ、城壁を塞ぐと外の畑や狩猟と採集が困難になるので」

「その通りです」

「しかしながら、領地を貰うと言っても既存の領地では自分に付いてきてくれる人々全員を養えない。昔からの住民がいますからね。彼らを追い出すわけにもいかないし」

「はい」

「そこで、俺達が解放した領域が重要となる。あの町はサーカットの町とのアクセスがいい。開発できれば、いい領地になる。そこが欲しいな。出来れば資金や食料の援助も欲しいと」

「正解です。バウマイスター伯爵」

男爵様は、拍手をしながら俺の推論を褒めていた。

「あの領域を全部？　あの領域は帝国の物で！」

「違うね。俺達の物だ」

領域のボスである陸亀王レインボーアサルトは、俺とヴィルマが共同して倒した。

他の魔物狩りに帝国軍も出ていたが、あの軍勢は俺が養っていたものだ。

ペーターはレインボーアサルトの甲羅の報酬に関しては条件を提示したが、領域については何も言わなかった。

つまり、あの領域の権利は俺にあるわけだ。

ペーターは意図的に領域の領有権をボカしていた可能性がある。

彼が油断ならない人物である証拠でもあった。

「私も少しは手伝いましたが」

「後で、報酬を俺から貰ったよね？」

狙撃の間に襲ってきた魔物を駆逐するのに貢献したので、俺は既定のお礼をエメラに払っている。

これは、彼女が正式に冒険者登録をしているからだ。

こういう事は、国が変わっても怠ってはいけない。

「エメラは受け取ったよね？　異議があるのなら、その時に言わないと」

逆に言うと、報酬を貰った時点で彼女に領域の権利は無くなる。

それを見越して、俺は報酬を支払ったのだが。

「それは、私が殿下の護衛だからで……」

「ならば、あの領域の権利は俺にあるのでは？」

エメラが冒険者では無くペーターの護衛だと言うのであれば、余計に領域への権利は無い。

なぜなら、陸亀王レインボーアサルトの討伐に参加していないと自ら宣言したに等しいのだから。

「最初から、ペーターはこの条件で狙っているんだろうな。男爵様を領主に、サーカット北部の解放された領域を領地に与える。スラムの住民の移住を認める。開発に関しては、帝国が援助を行う」

「それで、我々は城壁の外の畑などを放棄ですか。食料援助はいただけるので？」

「大丈夫でしょう。その代わりに、男爵様は治癒魔法使いとして従軍。リーダー殿が率いている警備隊は、諸侯軍扱いで参加かな？」

「妥当なところですか。詳細な条件は？」

「今日俺が戻れば、ペーターが寄越すはずです」

「なるほど。わかりました」

やはり、男爵様はただの慈善活動家では無かった。

だが逆に、慈善活動家ではないからこそ、交渉の余地があったとも言える。

「私は名は言えませんが、これでも貴族の私生児でしてね。普通に欲はありますよ」

「男爵様が、スラムの住民達をよりよく導けるように願っています」

「鋭意努力します。ランドルフもそれでいいですね？」

男爵様は、警備隊のリーダーに賛同を求める。

「俺は構いませんよ。そのために警備隊を率いてきたのですし」

「なあ。ランドルフ殿はラン族だよな？」

「正確に言うと半分そうだな。まあ、色々とあって今はスラムの住民だが」

ブランタークさんの問いに、その名がランドルフだと判明したリーダーは素直に答える。

「半分？」

「ハーフなんだよ。そのせいで、兄妹による主導権争いのとばっちりを受けてな」

ランドルフさんは、フィリップ公爵領でそこそこの家格の陪臣家の出だそうだ。

「テレーゼと兄二人が、彼女達の父親の死後に主導権争いを始めた」

当主はテレーゼになったが、最初、兄二人は彼女を傀儡にしようと暗躍した。

「俺は、半分中央の血が混じっているからな。珍しく兄二人の方に

付いていたわけだ」

純粋なラン族の人間は、ほぼ百パーセントテレーゼ側に付いた。兄二人の方には、ランドルフさんのように混血の人間が付いたそうだ。

「さすがに死者は出ていないが、裏ではかなり激しい主導権争いがあったのさ」

結局、先代の皇帝がテレーゼの後ろ盾になったり、テレーゼ自身の才覚もあって、彼女が独裁権を確保している。

兄達は保身と自分の子供達のために膝を屈したが、彼女は再びの争いを恐れてその力を殺いだ。

「俺のように、運悪くフィリップ公爵領を追い出されたのがいるわけだ」

そういう事情で追い出されたため、そう簡単に他家に仕官できるはずもなく、そのまま帝都のスラムに流れてきたそうだ。

「力はあるから、日雇いの仕事で家計を維持したんだがな……」

三年ほど前に、妻と子供達が病気になってしまった。

お金が無いので困っていたところに、男爵様が無料で治療をしてくれたのだとランドルフさんは語る。

「もし俺がテレーゼだとしたら、やはり俺を追い出しただろうな。小国に匹敵する公爵領の政治だ。綺麗事では済まないのはわかっているさ。だが、今の時点でテレーゼに様を付ける気にはならん。俺の仕えるべき人はここにいる」

男爵様は多くの患者を無料で治していたが、それで犯罪組織に目を付けられた。

「最初は男爵様に頼まれたわけではない。ただ犯罪組織に奪われるわけにはいかないと思った。武具は古いが、ちゃんと手入れはしている。剣の訓練もサボってはいない。これでも、ある程度の諸侯軍を率いた経験もある。俺にも出来る事があったんだ」

自分と同じように落ちぶれてスラムの住民になっている軍人経験者と、未経験の若者を鍛えて、今ではかなりの精鋭になった。

男爵様を守るだけではなく、スラム全体の治安もある程度維持できるようになったのだと。

「男爵様が本物の男爵様になれるかの瀬戸際だ。俺も兵を率いて参加するさ」

「それは助かるな」

何しろ、兵力が不足している。

ある程度訓練された軍勢は貴重であった。

「だが、装備が心許無いぞ」

ランドルフさんのように元々持っている人達はともかく、未経験組は粗末な武具を使っているので何とかして欲しいと彼に頼まれてしまう。

「それも大丈夫」

帝国軍の倉庫に予備の武具があるはずである。
他にも必要な物は支給していけばいい。

「伯爵様は太っ腹だな」

「なあに。どうせ摂政殿下の財布だからな」

「それもそうだな。俺達の腹は傷まない」

俺とランドルフさんは笑い合う。
こうして無事に交渉が纏まったのであったが……。

「ペーター、これ請求書ね」

「うわお。領域の代金も含めて、僕の借金もある意味偉業を達成したね」

俺への借金が更に増えたペーターは、空元気なのか請求書を見ながら大笑いする。

「殿下、物凄い額ですけど……」

「大丈夫だって。借金を返すまで、貸主は僕を殺そうとなんて思わないから」

「ペーターを殺しても、俺は一セントも得しないからな。罪悪感も少しは感じるだろうし」

「でしょう？　生かして搾り取った方がいいよ」

エメラは請求書を見て顔を青ざめさせていたが、ペーターの方は全く気にしていない様子だ。
やはり、彼は大物なのかもしれない。

第百六話　帝都防衛決戦。

「ペーターの奴。何が城壁が崩れているのはスラムのある西側だけだ。老朽化でどこも等しく駄目じゃないか……」

押し付けられたスラムの主を引き抜く工作を成功させた俺は、ブランタークさんとカタリーナを連れて城壁の補修を行っていた。

城壁の外と出入りするために破壊されていた西部城壁は数日で応急処置は終えている。

狩猟や農作業に行けないスラムの住民達のために、ペーターが食料援助や日雇いの仕事の確保などを約束したので、彼らは素直に城壁の閉鎖に協力した。

主である男爵様の説得が有効に作用したのだ。

それらを、切り出して魔法の袋に入れた石材で補修を開始するが、何しろスタッドブルクよりも人口が多い帝都を囲む城壁の修理だ。

最低限の補修が精一杯である

残っている城壁の状態も酷い。

最低でも何十年、下手をすると百年以上手をつけていないのでボロボロであった。

いきなりニュルンベルク公爵軍に侵入はされないが、防御戦闘にそう長いこと耐えられる造りではない。

西部を終えて他の城壁のチェックにも入るが、どこも同じく酷い。

ボロボロの場所も多く、一部には裂け目があってそこから人一人くらいは出入り可能な場所もある。

ここも三人で塞いだが、これからの帝都防衛に不安が残る状態である。

「ペーターさんは、こんなに酷いと言っていませんでしたけど」

ブランタークさんからの指導の成果が実り、工事関連の魔法も上達したカタリーナが文句を言いながら城壁を直していく。

数十メートル離れた場所では、急遽雇われた職人などが同じ城壁の補修作業に従事している。

「全部を把握していなかったんだろうな」

「これでは、防衛戦でもあまり頼りになりませんわよ」

「壁があればいいさ」

とにかく、東西南北と城壁が長過ぎるので全部を守り切れるわけがない。

ニュルンベルク公爵軍が攻め寄せた場所に素早く対応するしかない。

「逆に、向こうが戦力を割ってくれた方が助かるな」

「なぜですか？　お師匠様」

「いくら精鋭揃いのニュルンベルク公爵軍でも、一カ所に当てる戦力が少なければ防衛側の方が有利だからさ。それよりも、例の物を出されると困るよな」

例の物とは、地下遺跡の遺物で討伐軍を完膚無きまでに粉砕した自爆型ゴーレムの集団と、強烈なブレスを叩きつけたドラゴンゴーレムであった。

「どのくらい数が残っているのかは知らんが、ゴーレムが爆発すれば城壁がヤバい。ドラゴンゴーレムのブレスもな」

ペーターの摂政就任後に諜報部門で出世したガトラが、その能力を駆使してニュルンベルク公爵軍に関する情報を追加で送ってきている。

やはり帝都を目指してほぼ全軍で行軍中で、例の自爆型ゴーレムとドラゴンゴーレムを持参していると思われる。

なぜ思われるなのかというと、切り札なのでニュルンベルク公爵家が所持している魔法の袋に仕舞われているからだ。

『ドラゴンゴーレムは固定型ですが、人が紐を付けて引けばある程度は移動可能ですから』

『城壁近くまで持ってこられてブレスを吐かれたら、ヴェンデリンの修理が無駄になっちゃうね』

『自爆型ゴーレムに関しては、もうさほど数は残っていないかと』

敵を感知してから自爆して破片をまき散らすという現代では失われた機能のために、ニュルンベルク公爵家では量産に至っていないらしい。

発掘した物を、最初に解放軍との戦闘で運用試験を行い、討伐軍に向けて大量に運用したというところか？

使用のタイミングは見事という他は無い。

『やれやれ、古代魔法文明時代の負の遺産か。ヴェンデリン達はドラゴンゴーレムとの戦闘経験があると言っていたね。情報提供を頼むよ』

『またアレと戦うのか。難儀だな』

ただ、一つ救いはあった。

ニュルンベルク公爵が保持するドラゴンゴーレムは、俺達が戦ったドラゴンゴーレムよりは性能が劣るらしい。

素材やブレスの威力なども、報告を聞く限りでは三割ほど性能が落ちる。

『その代わりに、最低でも六体の稼働を確認しました』

『高性能単体機か、性能は落ちるが数ある安価量産機との戦いか……』

あのドラゴンゴーレム戦に参加した全員が同時に溜息をつく。

『バウマイスター伯爵様は、よくそんな化け物と戦いましたね』

『タケオミさんなら、喜んで戦いそうなのに』

『さすがに、ドラゴンゴーレムの広範囲ブレスは魔刀では切り裂けませんから。私よりも、もっと楽しみにしておられる方が……』

タケオミさんの視線の先には、まるで遠足が待ち遠しいような笑顔を浮かべる導師がいた。

『ドラゴンゴーレム戦に参加できなかったのは、某の魔法使い人生において最大の不覚であったのでな。大変に楽しみである』

何が楽しくてあんな化け物と戦いたいのかは知らないが、導師があの時にいればあそこまで苦戦する必要は無かった。

今度は味方なので、是非その戦闘力をニュルンベルク公爵軍のカラクリ集団に向けて欲しいものだ。

「導師が妙に張り切っているから何とかなるだろう」

「導師だけで戦争に勝てるというわけでもありませんがね……」

それは、今回の内乱でよくわかった。

戦争が無い時代故に、演習で活躍する導師を敵味方が過剰に評価し過ぎた面があったと思う。

相手はバカではないので、俺や導師に対抗する手段を研究して当然なのだ。

ニュルンベルク公爵は、効率的な軍の運用と地下遺跡の遺物でそれを補ったというわけだ。

それでも、導師の戦闘力は相変わらず常識外れなのには違いがなかったが。

「準備の方は予定通りだが、問題は軍の再編の方だろうな」

現在、帝都まで敗走してきた帝国軍の収容と再編が行われている。

ただし全く問題が無いわけでもない。

彼らがニュルンベルク公爵側に裏切っていて、防衛戦闘時に裏切る可能性だ。

「今のところは大丈夫だろうな。後方にいたニュルンベルク公爵軍とあまり接触していない部隊だし」

問題となるのは、ここに姿を見せたニュルンベルク公爵軍とそう時期を違わずして敗走してきた連中である。

ニュルンベルク公爵の仕込みであるという疑念が拭い切れないというわけだ。

「その辺の判断は殿下に任せるしかあるまい」

どうせ俺達がどうこう言っても反発が出るだけなので、同じ帝国人に任せるしかない。

第一見分ける方法も知らないし、そこまで人を見抜ける目もないのだ。

「あとは、テレーゼ様の動向だな」

北部諸侯が応援に来てくれれば、戦況がずっと楽になる。

最初は間に合わなくても、後詰をしてくれればニュルンベルク公爵軍へのけん制にもなろう。

そう思ってペーターは、自身が臨時で宰相に就任して帝都防衛を指揮している旨をテレーゼに送っていた。

「どうなんでしょうかね？」

「テレーゼ様本人はともかくとして、北部諸侯は不満なんじゃないのかね？」

「次期皇帝の座を殿下に奪われた形ですものね」

極論すると、カタリーナのこの一言に尽きる。
テレーゼこそが次期皇帝だと期待して解放軍に参加したのに、帝都解放後に皇帝が我が物顔で帝都の政治を乱した挙句に戦死してしまった。
今度こそはと思ったら、突然ペーターが非常識な方法で宰相に就任してしまったのだ。
これで怒らないはずはない。

「殿下がニュルンベルク公爵に負けた直後に参戦して、漁夫の利を得るとかという可能性もあり得る」

「考えとしては有りでしょうが、机上の空論では？」

「かもしれないな」

「それよりも、テレーゼ様はヴェンデリンさんに怒っているのでは？」

解放軍の参謀だった俺が、流れに流れてペーターの腹心になっているのだからそれもあるかもしれない。
俺に公式の肩書は無かったが、常にペーターは俺を呼び出して重要な仕事を任せているのだ。

皇宮にいる貴族や役人で、俺の実質的な地位の高さに疑問を持っている者はいないであろう。

「碌に援助もしないで放置していたツケだな」

テレーゼは、皇帝の目もあって北部諸侯達の取り纏めに奔走して

俺達との関係を薄くした。
それで俺達がペーターに接近したのを怒っているというのなら、それは彼女の自業自得というものだ。
俺が関与する話ではない。

「それに、テレーゼの誘惑が無いのが素晴らしい」

一人の女としては好みでも、それに付随する立場のせいでテレーゼはウザったい女である。
俺には嫁達がいるので、出来ればこのままにして欲しかった。

「もう少しで帝都防衛戦ですか」

「踏ん張りどころだな。勝てれば内乱の終結も早まるさ」

内乱が早く終わるには、帝都を無事に守り切ってペーターの権威を確立する必要がある。
俺達はそれを成すために、今は城壁の補修に勤しむのであった。

「敵兵力が予想よりも多いか？」

「こんなものじゃないの？」

討伐軍敗戦の報から二週間、遂に逆撃に転じたニュルンベルク公爵軍が帝都に迫っていた。
偵察によると、推定戦力は二十二万人ほど。
かなり多いが、これは最初は討伐軍に参加していた陣借り者達がニュルンベルク公爵に鞍替えしたからだ。

眼下に見える敵反乱軍を、俺達は修復が終わった城壁の上から眺めていた。

「陣借り者が多く裏切ったんだね。あの待遇だとわからなくもないけど」

彼らからすれば、今の帝国政府だろうとニュルンベルク公爵だろうと自分を仕官させてくれれば問題は無いというわけだ。

むしろ、今まで自分達を蔑ろにした帝国よりも、ニュルンベルク公爵の新体制下で栄達をと望んでいるのであろう。

「僕達が負ければ、沢山席が空くからね」

皇家を含めて大半の大貴族家が消滅するので、その領地・利権・資産・爵位。

それらを活躍した彼らに分配してあげればいい。

それを仕切るニュルンベルク公爵の権力は強大なものとなるわけだ。

「弱肉強食だな」

「本当、嫌になってしまうね」

「それよりも、裏切った貴族も多いのでは？」

導師は双眼鏡で、討伐軍に参加していた貴族の姿も複数発見していた。

陣借り者達と合わせて、彼らは先鋒として攻めてくるようだ。

「逃げきれないから、今度こそはニュルンベルク公爵のために働く

とか言って降伏したんだね」

命は誰しも惜しいのであろうが、帝都にいる家族や家臣の事を考えなかったのであろうか？

貴族としてのプライドや矜持にも関わる問題だと思うが。

「先鋒なのは、自分のために働くのであれば命をかけろという事か」

ニュルンベルク公爵とて、簡単に裏切るような連中を信じていないのであろう。

だからこそ、危険な前線でその覚悟を試すというわけだ。

自分の軍勢の損耗も防げて一石二鳥の策である。

「例のドラゴンゴーレムも存在するのである」

導師は、先鋒隊の後方にドラゴンゴーレムの姿を見つけていた。

第二陣イコール、もし裏切ったらブレスがお前達を襲うぞという事らしい。

「段々と世知辛くなっていくね」

「内心は知らないけど、死に物狂いで攻めてくるからな」

「ニュルンベルク公爵は帝国をどんどん擦り潰していく。早くに決着をつけないと駄目だね」

今回、ニュルンベルク公爵はこちらに顔を出さないようだ。

ペーターなら、俺に狙撃させるくらい平気でやると悟っているのであろう。

前衛の先鋒部隊が南の城壁目指して殺到してくる。
ある程度距離が縮むと、双方から矢と魔法が大量に飛んでいた。
場所によっては魔法使いや盾によって防がれるが、それがない者達には命中して倒れていく。

犠牲は攻撃側に大きかった。

「裏切った連中や陣借り者を使って数が少ない味方を消耗させるか。相変わらず合理的だぜ」

今回も総大将であるペーターの傍に控えるブランタークさんは、適時『魔法障壁』を展開して矢や魔法を防いでいた。

「こちらとほぼ同数の使い捨て要員か……」

この二週間でペーターが再編できた戦力は思ったよりも少ない。
ミズホ伯国軍の援軍が間に合い、これが合計三万人。
ギルベルトさんに俺が徴募と訓練を任せたサーカット軍が二万人。
王国軍と、スラムのボスである男爵様が所持していた軍勢で合計七千人。

あとは、一部帝都南部の町を守る守備兵を引き揚げさせたり、素早く逃げてきた討伐軍の残存戦力も纏めているが、それでも合計で十三万人ほどだ。
外様の戦力の方が質的に当てになるくらいなのだから、ペーターは危うい状況で防衛戦を指揮している。

「ヴェンデリン。今回は時間が無いよ」

「みたいだな……」

前衛に続いて、既にニュルンベルク公爵が直接指揮している軍勢も前に出ている。
例のドラゴンゴーレムも十体、情報通りならこれで全てだ。
まだ残っている自爆型のゴーレムも、数千体ほどこちらに向かって走り出していた。

「せっかくある程度補修したのに……」

ぶつけて城壁を破壊するつもりなのであろう。
そしてその穴から軍勢を侵入させる。
混戦になれば、精鋭が多いニュルンベルク公爵の方が有利になってしまうので確実に防ぐ必要があった。

「導師、新兵器を行きましょう」

「了解したのである！」

そう言って導師が取り出したのは、彼の身長ほどの高さがある巨大な壺であった。

「壺？」

「まあ見てな。導師！」

「了解したのである！」

導師は魔力で身体機能を強化すると、次々と準備していた壺を攻め寄せる敵軍に向かって投擲する。
そして、彼らの頭上でそれを炸裂させた。

「『操作起爆』の魔法。大成功！」

壺の中身は火薬であった。

この世界ではまだ開発されていないものだ。

種類は黒色火薬で、材料である木炭と硫黄は簡単に手に入ったが硝石の作り方がわからない。

前は諦めていたのだが、実は帝国ではソーセージの殺菌・発色剤として普通に流通していたというオチがあった。

硝石鉱山があるそうで、他にも家畜のし尿などから製造していたのだ。

目的の物が見つかったので、これらを配合して黒色火薬を作り、壺に大量の金属片や釘と共に入れる。

中心部には小さな魔晶石を入れて、これには俺の魔力を篭めておいた。

時限信管など作れ無いので、俺の魔法で起爆させる事にしたのだ。

「成功であるな！」

導師が絶妙なポイントに投げた壺爆弾は、俺が内部の魔晶石を使って着火すると大爆発を起こして破片や釘を大量にまき散らした。

敵軍の魔法使いは壺の正体がわからずに様子見をした結果、『魔法障壁』を張るタイミングを外して余計に死傷者を増やす結果となったのだ。

「撃てい！」

更にそこに、ミズホ伯国が何とか実用化させた魔力で弾を飛ばす

大砲『魔砲』で攻撃を開始する。
実用化されたばかりなので発射速度は低かったが、これでも敵軍は大きな犠牲を出している。

「導師、どんどんいきましょう」

「任せるのである！」

それからも、導師は準備した壺爆弾を次々と敵軍に放り投げていく。
着火と爆発の度に敵前衛部隊は大きな犠牲を出していくが、後方のニュルンベルク公爵軍に動揺などは発見できなかった。
逃げられない前衛部隊も進撃を止めようとしない。

「憐れであるな」

導師は、いくら犠牲が出ても攻撃を止めない敵前衛部隊に同情していた。
背を向ければニュルンベルク公爵軍に攻撃され、どうせ逃げ切っても陣借り者は結局どちらにも仕官できないし、裏切った貴族達も爵位と領地を失うだけだ。

そこまで心理的に追い込んで俺達をすり潰すために利用しているのだから、ニュルンベルク公爵は相当な人物であった。

「こういう残酷な事を平気で出来る人は強いですね」

「味方は優遇しているから余計に厄介であるな」

南部貴族の中には、討伐軍によって領地を壊滅状態に追いやられ

た者も多い。
それでも彼らは帝国側に裏切らなかった。
ニュルンベルク公爵の統率能力が優れている証拠であろう。

「さて。次はどう出る？」

定期的に火薬壺を爆発させながら防戦していると、今度は西部城壁に新手の反乱軍が現れたと伝令から報告が入る。

「遂に来ましたね」

俺達と同じく南部城壁に配置されている、スラム組の指揮官男爵様がやはりという感じで声をあげていた。

「遂に？」

「ええ。ニュルンベルク公爵から調略が来ていたので、『お待ちしております』と返事をしておきました」

『城壁は修理されてしまったが、上手く門を開けて中に入れるので』と返信を送ったのだそうだ。

「悪辣な策ですね」

「どうせバレバレですから。ニュルンベルク公爵がこんな手に引っかかったら、今頃は内乱も終わっているでしょう」

西側に出現した新手は、自分達スラム組が敵になった事を確認すれば無理攻めはしないであろうと男爵様は断言していた。

「西側の反乱軍。撤退しました！」

「ほらね」

十数分後に続けて入った報告に、男爵様は納得したような表情を浮かべる。

門を開けるからと攻撃もしないで城壁近くに反乱軍を引き寄せようとしたそうだが、引っかからないで撤退してしまったそうだ。

「城壁に顔を出して反乱軍を引き寄せても良かったのでは？」

「それは考えましたが、私も外様組なので、本当に裏切るかもと思われると混乱してかえって不利になるかもしれませんので」

そういう詐術は、もっと連携と練度が高い軍勢が行わないと余計に混乱するだけだと男爵様は言う。

「難しいものですね、男爵様」

「ええ」

それから数時間、両軍は死闘を繰り広げていた。

元は味方同士であったのに、今は互いの犠牲も気にせずにただ殺し合いを続ける。

「そろそろかな？」

ペーターは本陣から城壁を巡って膠着状態になった両軍を観察しながら、ニュルンベルク公爵の次の一手を待っていた。

暫く双眼鏡で後方を見続けるが、予想通りの反応を見つけて嬉し

かったようだ。

俺に双眼鏡を渡す。

言われた場所を見ると、確かにニュルンベルク公爵軍は次の手を打とうとしていた。

ニュルンベルク公爵軍の前にいる自爆型ゴーレムとドラゴンゴーレムが前進を開始したのだ。

「阻止せよ！」

城壁の上からそれを確認した各部隊の長が、まずは走ってくる自爆型ゴーレムの撃破を命じる。

弓矢、魔銃、岩などが叩き付けられて数百体は爆発して前衛部隊を巻き込んだが、残り半分ほどが城壁に激突。

爆発の衝撃で、城壁に損傷や穴が生まれた箇所が発生する。

その中でも五か所ほどには、既に反乱軍の前衛部隊が入り込んで奥の帝国軍守備隊と交戦を開始していた。

「ふう……。大体予想通りだね」

崩れた城壁と共に落下して死傷する味方兵が多かったが、予想はしていたので思ったよりは混乱が発生していない。

穴や裂け目が出来て反乱軍が侵入した箇所も、事前に城壁と隣接する地区の住民は避難させていたのでその地区を利用してわざと戦闘を膠着状態にして防いでいた。

「さてと。自爆型ゴーレムはこれで終わりかな？」

ただ、今度はドラゴンゴーレムが巨大な台車に乗せられ、数百名の兵士達によって引かれてくる。
もし射程距離内でブレスを吐かれると、城壁が崩壊して防衛で不利になる可能性があった。

「殿下」

「もし城壁が崩されたら、ギルベルトは防衛できないかな？」

「出来なくも無いですが、その場合は市街地で大規模に防衛戦闘を行う必要があります。ニュルンベルク公爵に負けるとは思いませんが、帝都にダメージが出ますが」

帝国軍全軍を指揮するギルベルトさんの見解に、ペーターは暫し考え込んでいた。

「なら、切り札を使おうか。ヴェンデリン。導師。ドラゴンゴーレムを破壊してきて」

「某は別に構わぬが……」

導師が俺の方を見るが、現状ではあのドラゴンゴーレムを破壊しなければ苦戦は必至である。
受けざるを得ないというのが本音だ。

「それに、グダグダと時間をかけないで済む」

それに、今ドラゴンゴーレムが破壊できれば、ニュルンベルク公爵は帝都攻略の切り札を失う。
無駄に時間をかけて攻防戦を行うよりかは犠牲が少ないというわ

けだ。

「だが、守り切れるか？」

俺はペーターにそれだけを問い質す。

テレーゼは、とにかく俺や導師を傍に置きたがった。

総大将の死は解放軍の潰滅を意味するので、とにかく自分の安全を優先したのだ。

その結果、戦況は有利には進んだが、結局はニュルンベルク公爵を逃す事になった。

「テレーゼはやっぱり女だね。女ってのは、実は男よりも現実的で堅実な手法を好むからね」

「ペーターはどうなんだ？」

「この戦いに勝つのは、実はそう難しくないんだ。切り札である君達が、攻撃に転ずればいい。本陣や帝国軍の方は二人がいなくても負けはしないよ。ブランターク殿に、エメラとカタリーナ殿。他にも、魔法使いが複数いる。任せて、二人は攻撃に転じてくれ。テレーゼが早くにこれを命令できればね。もっと早く内乱は終わったかもしれないのに」

ペーターは、俺と導師を攻撃に使って帝国軍の打撃力を増やす戦法に出るようだ。

どちらかというと安全策が多かったテレーゼとは違って、ここぞという時には勝負に出る気質であると思う。

「それに、これもあるし」

ペーターは、例のレインボーアサルトの甲羅を加工した材料で組んだテントのようなものを兵士達に用意させる。

「よく加工できたな」

「帝国にも魔道具ギルドはあり、一応独自の技術もあるんだよ」

ただし、正面、左右などは視界確保のために開いている。

「あの甲羅に自分達だけで閉じ籠って安全を確保すると、士気に関わるしね。もし魔法で狙撃されて戦死したとしたら、これは僕の運が悪かったという他は無いというわけだ」

「そうか」

ペーターがそこまで覚悟しているというのであれば、早く終わらせるために戦場に出るしかない。

俺も覚悟を決める。

「そうそう、いい馬を準備したんだ。導師の巨体でもスピードが出るよ」

今回の内乱で魔法使いの力がいまいち発揮できない理由は、移動と通信の魔法を阻害されているからであろう。

以前ならば現場まで飛んでいけばいいのに、今回は馬に乗ってドラゴンゴーレムに向かわないといけないのだから。

「全部で十体。バウマイスター伯爵よ。表か裏か？」

「裏で」

俺が答えるのと同時に、導師はコインをトスして掌の上に落とす。
銅貨は、裏を示していた。

「右側か左側か。好きな方を選ぶのである」

「利き手なので右を」

「では、某は左手だな」

俺と導師が本陣がある城壁から降りると、帝国軍の若い将校が二頭の馬を準備していた。
共に体躯に恵まれた、走るとスピードが出そうな駿馬であった。

「導師様の体の大きさにも耐えられる、選りすぐりの駿馬です」

「では行くとするかな」

導師は先に馬に跨ってから、先に城壁が壊された場所から外に向かって駆け出していく。

「敵だ！」

「時間が惜しいので失礼するのである！」

それに気が付いた前衛部隊の兵士達が導師を倒そうと駆け寄っていくが、彼らは導師が展開した『魔法障壁』によって弾かれていた。
更に、倒れたところを城壁の上から矢で狙撃されて命を落としてしまう。

「さあ。バウマイスター伯爵様」

「おうっ！　って！　俺はそんなに馬は上手くないぞ！」

導師は、暇な時間を使って乗馬技術をペーパードライバー状態から脱する事に成功していた。

だが、俺は辛うじて馬に乗れるだけ。

これでは、敵陣を突破してドラゴンゴーレムの場所に辿り着けるはずがない。

「そのために、ボクがいるんだよ」

すぐにルイーゼが城壁から降りてきて、まるで軽業師のように軽快に馬に跨る。

ルイーゼが軽いからなのか？

馬は全く動揺する気配すら見せなかった。

「ルイーゼって、俺と乗馬歴は同じでしょう？」

「でも、ボクの方が圧倒的に上手いよ」

「ですよねぇ……」

運動神経のよさで、ルイーゼの右に出る者はいない。

俺の何十倍もの速度で、この内乱中に乗馬の腕を磨いていた。

「さあ。急ぎ出発だ」

俺がルイーゼを前にして馬に跨ると、彼女は手綱を引いて猛スピードで馬を走らせていた。

「もう一頭出たぞ！」

壊れた城壁の部分で反乱軍の前衛部隊に見付かるが、俺も馬を包むように『魔法障壁』を張って彼らを弾き飛ばしていく。

「ルイーゼ、攻撃はドラゴンゴーレムだけでいい」

「了解。魔力の無駄遣いだものね」

こんな前衛の兵士達を何人倒しても、ニュルンベルク公爵軍は微動だにしないはず。

彼らが準備をしているドラゴンゴーレムの破壊こそが、今回の作戦における重要目的なのだから。

「一直線に行くよ！」

ルイーゼは更に馬のスピードをあげていく。

途中で多くの反乱軍将兵が妨害に入るが、全て『魔法障壁』だけで弾き飛ばしていた。

「ヴェル、ボクもドラゴンゴーレムを破壊していいのかな？」

「その方が効率的じゃないか」

「久しぶりに拳を使うような。今までは、石ばかり投げていてさ」

近接戦闘特化のルイーゼは、『飛翔』を封じられたためにこの内乱ではほぼ石ばかり投げさせられていた。

敵に命中すればほぼ即死の恐ろしい威力の石礫であったが、なか

なか近接戦闘に参加できないで不満を感じていたのかもしれない。

「エルには弓と軍勢の指揮があるし、イーナちゃんは槍の投擲で、ヴィルマは狙撃魔銃があるからねぇ……」

「投石があるじゃないか」

「ううっ……。投石だけだと、『ボクの存在意義って何？』って考えてしまうから。そりゃあ、人殺しだからあまりやりたくはないけど、ボクもヴェルの奥さんとして役に立たないとなと思うし」

「そんな事を気にしていたのか。今は生き残れれば勝ちだし、ルイーゼが付いて来てくれてよかったと俺は思っているぞ。何しろ、ドラゴンゴーレムが十体もあるし」

導師と半々と事前に決めてあったが、ルイーゼがいれば三分の一ずつになって負担も軽くなるのだから。

「当てにしているぞ。ルイーゼ」

正直なところ、ルイーゼのおかげで作戦に余裕が出来て俺は心から安堵していた。

敵中で魔力切れの危険性が大分減ったのだから当然だ。

「任せて。久しぶりに物凄い一撃を繰り出すよ。あっ……、でも……」

「えっ？　何？」

「馬に乗る時に、ボクが後ろの方が良かったかな？」

「えっ？　ルイーゼの方が上手なんだから、これでいいだろう？」

俺は、何を急に関係の無い事をと思ってしまう。

「ボクが後ろの方が、ヴェルの背中に胸とか当たって嬉しいじゃない」

ルイーゼはいきなり、どこかの高校生のような事を言い始める。

「今さら背中に奥さんの胸が当たっても……。というか、ルイーゼだと当たらないじゃないか。ははは。ナイスジョーク」

俺がルイーゼの肩を叩きながら笑っていると、次第に彼女の背中から殺気のような物を感じてしまう。

「ジョークは言い過ぎだぁーーー！」

「のわぁーーー！」

どうやら、俺はルイーゼを怒らせてしまったようだ。

彼女は馬に強く鞭を入れると、更にスピードを上げてドラゴンゴーレムに迫っていた。

俺は、思わず馬上でのけ反ってしまう。

「防げ！」

反乱軍はもう突進を続ける俺達を阻止しようとするが、全て『魔法障壁』によって弾き飛ばされていた。

目視は不可能であったが、導師も同じような感じでドラゴンゴー

レムに迫っているはずだ。

「早速一体目だ」

視界に一体目のドラゴンゴーレムが見えてくる。

稼働状態にはあるようだが、味方と混戦状態にある以上は俺達に向けてブレスは吐くまい。

などと楽観視していたら、ドラゴンゴーレムの口の部分に膨大な魔力を感じてしまう。

「まさか！」

俺が慌てて『魔法障壁』を強化した直後に、ドラゴンゴーレムは強力な火炎を吐いていた。

「凄い威力だね」

俺とルイーゼは『魔法障壁』のおかげで無事であったが、その周囲にいた反乱軍前衛部隊は容赦なくドラゴンゴーレムの火炎で焼かれていく。

完全な同士撃ちに、俺とルイーゼは発する言葉も無くただ馬を走らせていた。

「使い捨ての前衛部隊だからか……」

降兵な上に陣借り者が大半なので、殺しても惜しくはないと思っているようだ。

俺は、ニュルンベルク公爵の冷徹な判断力に背筋が凍る思いであった。

「急ぐよ」

「ああ」

一体目のドラゴンゴーレムに近寄るまでに、俺達は数体のドラゴンゴーレムから幾度もブレスを受けていた。

火炎、吹雪、石礫、カマイタチと、前に俺達が倒したドラゴンゴーレムとは違って、ブレスの属性に差を付けているようだ。

「ねえ。これって壊せるの？」

「大丈夫だ」

もう一つ、近づいて確信した事実もある。

これらのドラゴンゴーレムは、量産性を重視しているようでブレスの威力は前の物よりも低かった。

素材も、鋼に少量のミスリルを加えたのみだという『探知』の結果が出ている。

過去の伝説的な魔道具職人イシュルバーグ伯爵が、己の資産を惜しみなくつぎ込んで作った物だからこそ、大量のミスリルとオリハルコンを使用したのであろう。

こちらのドラゴンゴーレムは、数を揃えるためにブレスの威力と防御力を抑えて生産コストを抑えた物だと思われた。

「ならば、遠慮なく壊させて貰う」

俺は一瞬だけ『魔法障壁』を解いてから、極限にまで圧縮した『ファイヤーボール』をドラゴンゴーレムに叩きつける。

口から内部に『ファイヤーボール』を送り込まれたドラゴンゴー

レムは、真っ赤に加熱するとドロドロに溶けて地面に水溜まり状の溶岩溜まりを作っていた。

「熱っ！」

「火を消せ！」

その溶岩によって周辺の草が燃えたり、ドラゴンゴーレムを引いていた兵士で火傷を負った者もいる。

「次に行こう」

二体目に向かおうとすると、導師が担当している反対側から金属が壊れる悲鳴のような音と、何か巨大な物が倒れるような音が聞こえてくる。

どうやら、導師も一体目の破壊に成功したようだ。

「次はボクだね」

「ああ。任せる」

俺達は、前衛部隊とニュルンベルク公爵本軍との間を堂々と馬で横断していく。

次々と矢や魔法が飛んでくるが、これはひたすら『魔法障壁』で防いでいった。

自分達に当たる事は無いとはいえ、とてもストレスが溜まる行動だ。

魔力が尽きればハリネズミのようになって死ぬしかない。

それを考えると胃が痛くなってくるが、まだ大丈夫だと自分に言

い聞かせて横断を続ける。

「ヴェル！」

「ああ」

わずかに『魔法障壁』を解くと、ルイーゼはそこから飛び出して魔力を篭めた拳の一撃でドラゴンゴーレムを破壊する。

そのすさまじい破壊音と周囲に飛び散る破片で、周囲の兵士達は一斉に逃げ散った。

「次！」

そこからは、順番に右側からドラゴンゴーレムを破壊する作業を順番で繰り返す。

常に張られる『魔法障壁』によって魔力は減っていくが、既に導師は二体、俺とルイーゼは三体ずつ破壊している。

あと二体破壊すれば、少なくともこの戦いで負ける事は無いのであろう。

「ヴェル……」

戦場を横切る最中、ルイーゼはニュルンベルク公爵軍の本陣を発見したようだ。

こちらにいつもの鋭い表情を向けるニュルンベルク公爵の姿を確認する。

「ここで討てれば、内乱が早く終わると思うけど……」

「いや、止めておこう」

あくまでも、俺達の第一目標はドラゴンゴーレムの全機破壊である。

一体でも残せば、城壁にブレスを吐かれてそこから反乱軍の大攻勢を呼んでしまうであろう。

「今一番成すべき事を止めて、無理に総大将のクビを狙うのは危険だ」

先ほどから、結構な威力の攻撃魔法を飛ばしてくる魔法使いが複数いる。

彼らは、ニュルンベルク公爵が本陣に置いている魔法使い達だ。

もしニュルンベルク公爵に攻撃魔法を放っても、共同で『魔法障壁』を張られて失敗するであろうし、攻撃魔法の威力を上げ過ぎれば最悪敵中で魔力が尽きてしまう。

もしそうなれば、俺達はここで戦死だ。

「そういう理由でドラゴンゴーレムを優先する」

「そうだね。ここでハリネズミは嫌だものね」

そのまま最高速度でニュルンベルク公爵軍の本陣をも突っ切り、ルイーゼが四体目のドラゴンゴーレムを破壊するのとほぼ同時に導師も三体目のドラゴンゴーレムを破壊していた。

「作戦成功である！」

敵中で導師と合流した俺達は、今度はまた敵中を渡って帝都への帰路につこうとするが、ここでさきほどのルイーゼの発言を思い出していた。

既にニュルンベルク公爵の本陣には届かないが、まだ魔力は残っていて近くにほぼ無傷のニュルンベルク公爵軍の姿があった。

「ニュルンベルク公爵！　次はお前だ！」

俺は一気に魔力を練ると、魔法使いがいない場所に『ファイヤーボール』を数発連続して撃ち込む。

すぐに近くの魔法使いが『魔法障壁』を展開して防ぐが、それをすり抜けるように導師も『火の蛇』を放って後方で爆発させる。

近距離ならではのフェイント方法に数百名が焼かれ、鉄の規律と練度を誇るニュルンベルク公爵軍の一部が混乱していた。

「いつまでも安全圏だと思うなよ！」

「いい気味である！」

最後っ屁のような一撃であったが、これでニュルンベルク公爵に不快感くらいは与えたと思う。

ドラゴンゴーレムも全て破壊され、捨て駒の前衛部隊もギルベルトさん指揮の帝国軍に阻まれて大半が城壁の前で混乱している。

ニュルンベルク公爵は帝都攻略の当てを全て失ったと判断し、俺達は今度は敵陣を縦断して帝都へと戻る。

混乱している前衛部隊は、『魔法障壁』を張った俺達に蹴散らされ、碌な反撃も出来ないまま混乱を助長していた。

城壁の壊れた部分から中に入り、背中を見せている敵兵をルイーゼが駆逐しながら城壁上の本陣に戻ると、ペーターが嬉しそうに話しかけてきた。

「作戦成功だね。これで何とかなるはずだよ」

「いえ。戦況は何も改善しておりません」

ペーターの楽観論に、ギルベルトさんが冷静に釘を指していた。

「何も変わっていない？　さすがにそれはないでしょう」

「いえ。これでもしニュルンベルク公爵が軍を退けば、彼らはまた領地に籠って有利な防衛戦闘を行えますから」

帝都を攻めている前衛部隊の大半は、壊滅した討伐軍の降兵と貴族である。

「要するに、常にこちらを同士討ちさせて自分達の戦力を温存して、最後に自分の兵力が残れば勝ちというわけです。ニュルンベルク公爵の戦略はクーデター直後から何ら変わりはありません」

「打つ手が無いね」

「いいえ。あります」

「じゃあ、その手でお願い」

「前提条件は、導師とバウマイスター伯爵が整えてくれましたので……」

ギルベルトさんが傍にいる副官に指示を出すと、本陣に大きな赤い旗があがる。

そしてそれと同時に、味方の兵士が大型のメガホンのような物で何かを叫び始めていた。

「仕方なしに降伏した討伐軍兵士諸君！　ニュルンベルク公爵軍は、切り札である自爆型ゴーレムとドラゴンゴーレムを失った！　降伏せよ！」

帝国軍からの降伏勧告に、次第に敵前衛部隊の動きが弱くなっていく。

「待て！　俺達は降伏する！」

特に、壊れた城壁から市街地に入って戦闘を行っていた兵士達はすぐに武器を捨てて降伏していた。
他にも、部隊単位、貴族単位で降伏する者が相次ぐ。

「よし。敵前衛部隊から戦意が消えた。チャンスだ！」

ギルベルトさんは駆け足で城壁から降りて自分の馬に乗り、そのまま護衛の近衛騎士隊、魔法使い部隊と共に外に飛び出した。
これに、慌てるように他の帝国軍も追随して外に飛び出していく。

「降伏した兵士諸君よ！　現在の帝国軍は数の上で不利である！もしここでニュルンベルク公爵軍の兵士を一人斬れば、その時点で正式な入隊を約束しよう！」

ギルベルトさんは降伏した陣借り者達に、その情報を大声で流していく。

「討伐軍に、ニュルンベルク公爵軍と、共に捨て駒にされたが……」

「内乱で多くの戦死者が出ている今がチャンスだ！」

ギルベルトさんからの勧誘を聞いた陣借り者達は、殺気を漲らせつつ一斉にニュルンベルク公爵軍へと襲いかかった。
その先陣には、剣を構えたギルベルトさんがいる。
陣形もクソも無かったが、勢いと戦機は完璧に掴んでいると俺は感じた。

「ようやくニュルンベルク公爵軍に対して攻勢に出られたな」

ギルベルトさん指揮の帝国軍は両脇に殺意がみなぎった陣借り者達を従えて、ドラゴンゴーレムの残骸を回収しようとしていたニュルンベルク公爵軍に襲い掛かる。
戦況は、最初に先制した帝国軍が有利となっていた。

「確かに、練度ではニュルンベルク公爵軍の方が上だ。だが、ギルベルト殿は降伏した陣借り者達を一瞬で戦力に変えて叩きつけた」

彼らは必死に仕官先を求めている。
それを利用されて討伐軍、ニュルンベルク公爵軍と散々な目に遭っていたが、そこにギルベルトさんが回答を出した。

「帝国軍の再編は急務だ。ニュルンベルク公爵軍にぶつかって生き残れた連中を雇えば即戦力として期待できる」

「随分と汚い手に見えるけど……」

「戦争に綺麗事なんてないな。バウマイスター伯爵はそれが理解できないと？」

「そんな事は無いが……」

フィリップの発言に、俺は賛同せざるを得なかった。

「それで、どうしてフィリップ殿はここに残ったのかな？」

「それはですね。殿下」

「伝令！　西部城壁にニュルンベルク公爵軍別働隊が襲いかかりました！」

西部を守る男爵様達から、先ほど西部城壁の様子を伺っていた敵別働隊が攻撃を開始したと連絡が入ってくる。

「そういえばいたよな。別働隊」

少しだけ西部城壁を伺ってから姿を消していたので、俺はその存在をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「これを討つ。数を減らすいい機会だ」

「ギルベルトさんに予め指示を受けていたと？」

「そういう事だ。別働隊が西部城壁を襲い始めたのは、本体であるニュルンベルク公爵軍本隊への圧力を減らすためだ。帝都が危機になれば、ギルベルト殿も援軍を送らざるを得ないからな」

本隊を逃がすために死兵となる可能性が高いが、これを倒さないわけにもいかない。

「正面から出て、西部に回り込んで城壁と挟んで倒すぞ」

「西部防衛部隊と挟み撃ちにするのか……」

「バウマイスター伯爵殿達にも協力して貰うぞ」

帝都南方でニュルンベルク公爵軍本軍と帝国軍が死闘を繰り広げている中、俺達も王国軍組を主力とした一万人の軍勢で南部正門から出陣、そのまま迂回して西部城壁に襲いかかる反乱軍別働隊へと襲いかかる。

「エル。無茶するなよ」

「しないさ。見習い指揮官だし、指揮官が戦死すると指揮系統が混乱するからな」

王国軍組の中から千人ほどを率いているエルは、ハルカと共に先陣として反乱軍別働隊に斬り込んでいく。

別働隊はこちらの存在に気がついて応戦体制に入っていたが、西部城壁から矢や魔法を撃たれている状態なので最初から苦戦していた。

兵力数でも、西部守備隊と合わせれば不利なので次々と死傷して数を減らしていく。

「ふんっ！」

「今日は忙しいね」

導師とルイーゼは、魔力を篭めた拳を振るい。

「えいっ！」

「降伏しなければ斬る」

イーナは槍を、ヴィルマは乱戦なので今日は大斧を振るって敵兵を倒していく。

そして俺も魔法で敵兵を減らしていくが、暫く戦っていると視界に顔を見た事がある人物の姿を確認した。

「ザウケンとか言ったか」

「高名なバウマイスター伯爵様に名を覚えていただけるとは光栄の極み」

「ザウケン様！」

別働隊の指揮は、ニュルンベルク公爵の腹心であるザウケンが執っていたようだ。

だが、そうなると一つ合点がいかない点がある。

「なぜ、俺達の攻撃をわざわざここで受けた？」

「俺に、バウマイスター伯爵様ほどの方が認めるような軍事的才能はありませんよ」

間違いなく嘘であろう。

ザウケンはこの別働隊と自分の身を犠牲にして、ニュルンベルク公爵家本隊と戦っている帝国軍に援軍を送らせまいとしているのだ。

現在拮抗している両軍に俺達が混ざれば、ニュルンベルク公爵軍は一気に崩壊してしまう可能性がある。

別働隊がここで全滅しても時間を稼いで、本軍が撤退する時間を稼ぎたい。

彼がそれを口にしないのは、ニュルンベルク公爵の考えを俺に悟らせないためであろう。

「ニュルンベルク公爵は、駄目だとわかればとっとと兵を退かせたいわけだな」

「……」

「悪いが死んで貰う」

「あなたが死ななければいいがな」

ザウケンがそう言った瞬間に、彼に従っていた魔法使い二名が俺に『ファイヤーボール』を連続して放っていた。

だが、この程度の魔法は予想済みである。

『魔法障壁』で防いでから、すぐに二人の周囲にある岩を尖らせて何十方向から攻撃させる。

「早い！」

二人の魔法使いは慌てて『魔法障壁』で防ぐが、当たった岩の棘が数百発にもなった時に遂に限界がきて『魔法障壁』が割れてしまう。

そのまま多くの岩の棘が体に突き刺さり、二人は血塗れになって絶命した。

「殺しに躊躇いが無くなったのか……」

「お前の主君のせいだ。残念だったな」

「俺を討つがいい！」

ザウケンが剣を抜いて俺に斬りかかろうとするが、瞬時に『ウィンドカッター』を展開してその首を刎ねた。

「大将を討ち取ったぞ！」

ザウケンの死に気がついた味方騎士や兵士達が大声をあげると、前後で挟まれて戦っていた別働隊は加速度的に崩壊してしまう。

次々と降伏するか討たれていき、二時間ほどで完全に消滅を迎えていた。

「よし！　このまま本軍に！」

「無駄だよ」

「えっ？どういう事で？」

「この別働隊がなかなか壊滅しなかった理由。それは、本軍を逃すためなんだからな」

勢いのある帝国軍相手に不利を悟ったニュルンベルク公爵は、徐々に後退しながら帝国軍からの攻撃を受け流していき、損害を許容範囲内に納めて撤退に成功してしまったらしい。

「追撃は、仕官を餌に気力を爆発させた降兵達が主力だったからな。元から統率なんて取れていないから追撃は逆撃を食らう可能性が高

い。帝都を守れた時点で欲をかく必要はない」

反乱軍別働隊の潰滅と、本軍の撤退をもって帝都防衛戦は帝国軍の勝利で終わっていた。

帝国軍の戦死者は約八千人、反乱軍の死傷者は約二万六千人、他にも捕虜・降兵多数と。

まさに、文字通りの死闘であった。

第百七話　政治闘争で魔法は役に立たない。

帝都を巡る攻防戦は、帝国宰相に就任したペーターが無事に防衛に成功して勝利を収めた。
またニュルンベルク公爵に逃げられたではないかと思う人も多いが、彼はこの戦いで精鋭であった別働隊と、それを率いていた側近中の側近であるザウケンを失っていた。

皇帝を屠るのに効力を発揮した、自爆型ゴーレムとドラゴンゴーレムも全て失っている。

今、その残骸を帝国とミズホ伯国の魔道具職人が共同で調べている最中であるが、最初の報告でこれは発掘品を利用した物であると判明していた。
現状では、どこも量産どころか試作すら不可能だという結論に至っていたのだ。

もし残っているとしても、数はそう多くは無いであろうという結論であった。

『今回の戦略的な勝利は大きい』

ギルベルトさんは、これで帝国軍が逆に攻勢に出られるようになったと発言していた。
ニュルンベルク公爵が失った切り札が多いと判断されたからだ。

『戦上手で知られたニュルンベルク公爵軍に一定の犠牲を与え、彼の戦略目標であった帝都の防衛に成功した。これで殿下の優位は完

全に決まった』

現在、再び降伏した陣借り者や貴族の軍勢を帝国軍に編入している最中であるし、ペーターが帝都やその周辺部を抑えているという事実が債権の発行を可能とし、それを引き受ける大商人達の心象も良くしている。

財政的には苦しい状態が続くが、何とか自転車操業ながらも政権が運営できるようになった点も大きい。

『あとは、防戦に回るであろうニュルンベルク公爵を攻め押していくだけだな』

ニュルンベルク公爵が帝都侵攻の際に一部占領した帝国中央部南部領域は、これは防衛に不向きと撤退と同時に全て放棄してしまったらしい。

現在では、ペーターが派遣した帝国軍と役人達が統治を行っている。

『元々、補給に必要な箇所以外は占領していなかったようだけど』

『ですが、ニュルンベルク公爵領に攻め入るには準備が必要ですぞ』

『全く……。うちのクソ親父は……』

討伐軍の悪行を皇帝が阻止できなかったせいで、現在の帝国南部北は荒廃が酷いらしい。

人口も減っているし、再び帝国軍が軍を進めれば彼らはその怒りを間違いなくこちらに向ける。

『補給路の襲撃などをされると骨ですな』

彼らを味方につけるために、被害の弁済や食料や資金の援助も必要になる。
これをしないと、間違いなくニュルンベルク公爵によって後方攪乱要員にされてしまうであろう。

『凄い話ですよね。この件は、ニュルンベルク公爵も予想していなかったはずだし』

まさか、いくら反乱勢力相手でも、皇帝が民衆に手を出す事はしないと思ったのであろう。
実際にニュルンベルク公爵軍は鉄の規律を維持していて、民衆には出来る限り手を出していない。
ゼロではないが、それは解放軍も同じ。
人が多数集まって犯罪がゼロというのも不可能であろう。

『残念ながら、知られたら上手くニュルンベルク公爵に利用されたけどね』

噂を帝国中に流されてしまい、現在死亡したアーカート十七世は『残虐帝』の名を欲しいままにしている。
二人の息子達も、その共犯だと民衆から非難轟々であった。

『こういう事は言ってはいけないんだろうけど、死んでくれてよかったよ』

勿論皇帝は、軍規を正すように命令は出していた。
だが、それは皇帝に見えない場所で行われ、それに気がつけずに処罰も行われなかった。
あくまでも愚かなだけで悪逆ではなかったが、そんな事は被害に

遭った民衆にはどうでもいい事だ。

『器でない者が皇帝になったのが悲劇だと思うよ。僕は……』

それでも実の父親と兄達の死なので、ペーターは思うところがあるのかもしれない。

神妙な表情を浮かべながら独り言のように呟いていた。

『勿論、この件は利用させて貰うけどね』

討伐軍の愚行と敗戦の責任者である皇帝は死んでいるが、処罰者がゼロというわけにもいかない。

これから南部に攻め入る時に、犠牲者達の心情を落ち着かせるための生贄の羊が必要となるからだ。

『略奪などに参加していた貴族については、罰金や一部領地の返還に爵位の降格で済ませるとして……』

全員処刑では混乱が広がってしまうので、被害者への補償や支援を厚くする事で許して貰うしかないとペーターは考えているようだ。

ただし、処刑や爵位の剥奪も見せしめとして行わなければいけない。

その白羽の矢が立ったのは、皇帝の腰巾着として討伐軍に参加していたり、留守番でも権勢を誇っていた大物貴族達であった。

『君達くらいは処罰しないと、被害者達が納得しないから』

『この皇家の恥さらしがぁーーー！』

『採用されたければ銀貨を払えだっけ？　そういうお小遣い稼ぎをするから困窮した陣借り者達が略奪に参加するんだよ。お前が責任を全て負って死ね』

同じ年なのに、こういう部分ではペーターは怖い男であった。

皇家の生まれで、貧乏貴族の出である俺とは色々と違うのであろう。

『財産は全て没収、家族は追放と死ぬまで教会とどっちがいいかな？』

『地獄に落ちろ！』

『お前がな。他の腰巾連中と地獄で仲良くね』

皇帝の側近で露骨に足を引っ張った連中には全て罪があるとされて、爵位と財産を没収されて死刑となっていた。

『よくも私の兄を！』

『お義母様、あなたは前皇帝の妻でよかったですね。首を刎ねられないから。教会で余生をどうぞ。陛下の供養も必要でしょう？　ああ。何かを企んだら、若死にするのでしょうね』

ニュルンベルク公爵に勝利して名と力を誇示したペーターは、二度と同じ轍を踏まないように前政権の負の部分を全て排除した。

可哀想だが、このくらいやらないとまたニュルンベルク公爵に足を引っ張られてしまうからだ。

そして、これらの処置を再編された帝国軍を背景にわずか二日で

終えたペーターは、帝国の摂政として皇帝と同じ政務をこなしていた。

帝国を纏め、南部に攻め入る準備をしなければいけないからだ。

「ただなぁ……、もうひと波乱あるぞ」

先の戦闘で壊れた城壁を補修していると、同じ仕事を請け負ったブランタークさんが急に予言めいた事を言う。

「テレーゼ様ですか？」

「ああ、このまま黙ってはいられないだろう」

解放軍のリーダーである彼女は、次期皇帝の最有力候補であった。

それが、復活した皇帝に疎まれて領地で様子を見る羽目になり、ようやく皇帝がしくじって死んだかと思えば、ペーターが電光石火で帝国の実権を握ってしまった。

本人がどう考えているのかは知らなかったが、周囲にいる北部諸侯達が納得するはずがない。

彼らは、テレーゼが皇帝になった時の利益に釣られて解放軍に参加しているのだから。

「ですが、結局援軍が間に合いませんでしたし……」

「間に合わないはずはないがな」

「そうなのですか？」

「フィリップ公爵自身は間に合わないにしても、ソビット大荒地の

陣地にはアルフォンス殿がいたんだ。一～二万人の兵力くらい間に合ったはずだ。それがあれば大分楽だったのだがな。ちゃんと訓練された兵士達だから」

同じく城壁の補修作業に参加している王国軍組を指揮するフィリップが、テレーゼは意図的に援軍を送らなかったのであろうと予想していた。

「そんな事をして負けたらどうするのです？」

「負けて欲しかったんだろう。負ければ、合法的に殿下が排除されるから」

戦死すればそれまでだし、北部に逃げてくればまたテレーゼが次期皇帝候補として返り咲きが可能となる。

敗北の原因はニュルンベルク公爵であり、テレーゼの責任ではないというわけだ。

「テレーゼがそんな策をですか？」

「俺は言ったはずだ。フィリップ公爵殿が援軍を送りたくても、周りが強硬に反対すればそれは不可能だと」

ブロワ辺境伯家の相続争いとそれに関わる騒動で、全てを失ってしまったフィリップだからこそ気がつける事実なのであろう。

「テレーゼ殿から見れば、バウマイスター伯爵は裏切り者扱いかもしれませんね」

クリストフの言う通りかもしれないが、そればかりは仕方が無い

としか言いようがない。

「一時の関係や感情に足を引っ張られず、冷静に帝国の内乱終結を早める努力をしたまでと言っておく」

「でしょうけど、向こうはテレーゼ殿から殿下に鞍替えをしたと思うわけでして」

「自分からほとんどの支援を切っておいて、今度は裏切り者扱い？」

俺はペーターの方が皇帝に相応しいと思ったし、向こうが皇帝との軋轢を恐れてこちらとの関係を閉じてしまったのだから。

解放軍の関係者でお忍びでも会いに来たのは、アルフォンスだけというのが笑えない。

「俺が磁器を作製しなかったら、財政的に詰んでたのに」

「人って、結局自分の都合を一番優先しますからね。そういう人達に支持されるために無理を通そうとするわけです。私とフィリップ兄さんの末路を見ればわかるでしょう？　バウマイスター伯爵や世間から見たら私達はバカでした。ですが、世の中の人達はそう簡単には我を通せませんから」

実際に失敗しているクリストフの発言なので、みんな真摯に話を聞いていた。

「テレーゼが帝都に来てから判断するしかあるまい」

「導師殿、間違いなく何かありますよ。百万セント賭けてもいいです」

「残念だなクリストフ殿、それでは賭けが成立しないのである」

「帝国の混乱はまだ終わらずですよ」

そしてその翌日、クリストフの予言通りに物々しい雰囲気を纏ったフィリップ公爵家諸侯軍が主体の北部諸侯連合軍八万人が帝都郊外に陣を張る。

事前に何の連絡も無かったので、帝都の住民達には不安が広がっていた。

「多いですね」

「内戦終結のために多くの戦力を揃えたのでは？」

今日も城壁を補修しているとそこにエメラが姿を見せるが、彼女は露骨にテレーゼ達を警戒していた。

ギルベルトさん以下の帝国軍も同様で、警戒態勢を敷いている。

なぜなら、北部諸侯軍が今にも戦闘を行いそうなほどピリピリとした空気を纏わせていたからだ。

「まさか、ペーターの政権をひっくり返そうと帝都に攻め込むと？」

「無いとは言えません」

エメラは、自分が持っている装飾が豪華な杖を握る手に力を込めていた。

無意識にやっているのであろうが、仮とはいえ帝国の筆頭魔導士に任命されているので、テレーゼ達を仮想敵として認識しているようだ。

「（普段は冷たいように見えて、ペーターへの忠誠心に厚いからなぁ……）とにかく早合点は良くない。ここで争いになったら、またニュルンベルク公爵の思う壺だし」

「それはわかっていますが……」

八万人という大軍も良くなかったのかもしれない。

見ようによっては、ペーターに抗議して圧力をかけるためだと思われてしまうからだ。

「あくまでも内乱終結のための戦力だろう？」

「だといいですね。ここのところ、大規模な戦闘が多過ぎて帝国軍の再編は途上のままです。使える戦力は旧解放軍と大差ありませんから」

旧討伐軍は、戦死傷、捕虜、逃亡などで半数以下にまでなっている。

俺がギルベルトさんにサーカットの町で編成させた二万人と帝都留守部隊を中核にして、身分は低いが能力のある若手将校や陣借り者達の抜擢で、何とか形を保てている状態だ。

特に酷いのが、選帝侯家や中央の領主貴族達の諸侯軍である。

ニュルンベルク公爵と皇帝に翻弄されて兵士を出し、それらをかなり失った。

領主、後継ぎ、主だった家臣や一族を失って領地の治安維持すら怪しい場所もあり、そういう所にはペーターが代官や警備隊を送り出す羽目になっている。

末端の縁戚が、爵位と領地を巡って争っているところも多い。

みんな死んでしまったので、自分にもチャンスが巡ってきたと騒いでいるのだ。

「おかげで、ケリがつくまでは南部に攻め入る事も出来ません」

エメラのいうケリとは、帝国軍の再編とテレーゼの立ち位置の決定が終わるまでであろう。

現在の帝国は、帝国摂政であるペーター派、テレーゼ率いる北部諸侯連合、ニュルンベルク公爵とその支持者達という奇妙な構図になっていた。

「本当に面倒だなぁ……」

かと言って、このまま放置すると大陸全土が戦乱となってしまう。帝国が再統一されて王国と均衡してくれなければ、王国貴族達が声高に対帝国戦争を言い出すからだ。

「王国がサクっと大陸を統一してくれればいいけど……」

そんなに甘い話ではない。

祖国防衛のために帝国側は苛烈に抵抗するであろうし、占領した土地で反王国活動でもされたらその鎮圧のために余計に金と労力を使うと、何のために帝国に攻め入ったのかがわからなくなってしまうからだ。

そして何よりも怖いのが……。

「侵略者に対して、三派共同で迎撃でもされたら目を当てられない」

あり得ないとは、政治の世界では決して言えない。
最初の先遣隊の潰滅以降、陛下が兵を送っていないのはそれを考えての事なのかもしれなかった。
内乱で帝国が更に疲弊するのを待っているという可能性もありえるが。

「フィリップ公爵様は、今日の夕方に皇宮を訪ねるとか」

「表敬訪問か？」

「表向きの理由はそんなところですね」

「それで、俺達にも顔を出せと？」

「はい」

「ペーターは意地悪だな」

俺達は既に自分達が取り込んだと、テレーゼにアピールするつもりなのであろう。

「拒否はしないさ。テレーゼとは久しぶりに会うか」

工事を区切りの良いところで終えてその日の夕方、主だったみんなで皇宮に行くとそこには既にテレーゼ達も集まっていた。

「久しいな。バウマイスター伯爵」

テレーゼの方から挨拶をしてくるが、その表情は少し暗いような気がした。

彼女はアルフォンスの他に、二十代後半くらいの若い男性二人を連れていた。
ラン族では無いのに高価な服を着ているので、彼らがテレーゼの兄達なのであろう。

「お久しぶりです。フィリップ公爵閣下」

「先ほどから、ペーター殿にバウマイスター伯爵の話を聞いていたところだ」

テレーゼの表情の暗さは、前から知り合いで無かったら気がつかなかったかもしれない。
立場上、ペーター派に寝返ったと噂される俺に不快感や怒気を向けるわけにはいかないからであろう。

だが、後ろの兄達は俺に対して露骨に嫌悪感の混じった表情を向けてくる。
この辺の差が、彼女と彼らの立場を決めている要素なのかもしれなかった。

「今は亡き前皇帝陛下の無茶な命令で苦労させてしまったけど、サーカットの町の開発や新しい磁器の販売で兵力を養ってくれた件には心から感謝している。この兵力が無かったら、確実に今頃帝都はニュルンベルク公爵の物になっていたからね。何しろ急な事で、各地からの援軍が間に合わなかったし」

ペーターはさり気なく、『先の戦闘でテレーゼ達がわざと援軍を遅らせたのでは？』という疑惑を言葉の端に表していた。

「まさか、三倍もの戦力を持つ討伐軍が敗北して陛下が討たれると

は。我らも想像がつきませんでしたので。軍は収穫が終わるまではその大部分の動員を解いていたので、全軍揃うのに時間がかかりまして」

テレーゼの兄の一人が言い訳めいた事を言ってくるが、それならソビット大荒地に駐屯していた戦力を一万人でも先に回せば良かったのだ。

それをしない時点で、北部諸侯連がわざと援軍を送らなかった疑惑は本物になっていた。

「終わった事は仕方が無い。それよりも未来の話だ」

摂政なのに、ペーターは露骨に皇帝の玉座に座ってわざと相手の動揺や不快感を煽っていた。

これまでの経緯を考えれば、帝都の住民の大半は既にペーターが次期皇帝だと思っているはず。

内乱終了後に皇帝選挙を行っても結果は同じはずだ。

それがわかっているからこそ、特にテレーゼの兄達は爆発寸前になっている。

テレーゼについて来た他の貴族達は、双方の顔を見ながら次第に判断に迷うようになっていた。

このままテレーゼを支持するか、それともペーターに切り替えるか。

どこの世界でも、メインプレイヤー以外は勝ち組を見分けようと苦労する羽目になるようだ。

「あと一か月ほどで帝国軍の再編は終わるから、再びニュルンベルク公爵の討伐再開だね」

「ペーター殿、勝算はあるのか？　言っては悪いが、そなたの父は大失敗したのじゃぞ」

テレーゼは、ペーターの作戦に早速ケチをつけた。

兄達や北部諸侯の手前、素直に賛同するわけにもいかないのであろう。

「その辺はギルベルトと相談したんだけど、まずはいきなり攻め入らないで圧迫する方向でね」

いきなり南部領域に入らず、ジワジワと真綿で首を絞めるかのように動く。

それにより、現在ニュルンベルク公爵に従っている諸侯の裏切りを促す作戦のようだ。

「東・西部領域南部の諸侯をこちらに引き寄せないとね。中央部領域に近い南部諸侯もだね」

こういう境界線上にいる貴族の生き残りが難しいのは、どこの世界でも同じだ。

風見鶏のように所属先をフラフラと変えて後世で批判される人も多いが、彼らは生き残るのに必死なのだから当然とも言えた。

綺麗事では済まない世界なのだから。

「どのみち、腹心と一部精鋭を壊滅させただけだ。いきなり決戦をするなんて、ニュルンベルク公爵の思う壺だと思うけどね」

ペーターは、ニュルンベルク公爵の軍事的才能を恐れている。

だからこそ同じ土俵の上で戦わないで、兵力と国力の差で勝とう

としてるのだから。

「ペーター殿の策は理に適っておるな」

テレーゼは絶対にペーターを宰相殿と呼ばない。

本人か兄達かは知らないが、北部諸侯全体でそう呼んではいけない空気なのだと思う。

それでも、無条件にペーターの策を非難しなかった。

この場合は、ここで批判をすると代わりの策を求められてしまうからだ。

そこで前皇帝のような作戦を言えば、一緒にいる北部諸侯達に不安を与えてしまうであろう。

「フィリップ公爵殿達の兵も合わせて戦えば、何とか軍事の天才ニュルンベルク公爵の首に手が届くでしょう」

「何とかか」

「フィリップ公爵殿も、そんなに甘い相手ではないと理解しているでしょう?」

「それはそうであるな」

会見は三十分ほどで終わったが、双方の態度はギクシャクしたままであった。

テレーゼは能面のように無表情なままで時おり影が見え、彼女の兄達はペーターの最後の言葉で顔を真っ赤にさせていた。

『内乱が終われば、次期皇帝たる僕からフィリップ公爵家に多くの

恩賞を約束するよ』

『殿下……、その次期皇帝というのは……』

『ここで言い繕っても仕方が無いでしょう。便宜上宰相になっている僕が全軍を率いてニュルンベルク公爵を討って帝位につく。それからすぐに王国との難しい交渉がある。既に戦端も一度開いているしね』

『皇帝は選挙で決めるものですが』

『だから、ニュルンベルク公爵を討った後に皇帝選挙は行うよ。当然、僕も立候補するけど』

『……』

ペーターの発言に、テレーゼの兄達は何も言い返せないで皇宮を去っていた。

もしこのままペーターが宰相としてニュルンベルク公爵討伐を主導するのであれば、皇帝選挙など信任投票に近くなってしまうであろう。

それに気がついたので、何も言えなかったのだと思う。

「問題は、いつどのようにテレーゼ殿の兄達が動くかですね」

俺達も急ぎ迎賓館へと戻るが、そこでクリストフがテレーゼ達とペーターとの会見の種明かしをしていた。

「あの兄達からすれば、テレーゼ殿が次期皇帝になってくれないと困るのですから」

そうすればフィリップ公爵位が空き、そこに自分の子供を押し込められる。
自分では無いが、子供は成人するまではお飾りでしかない。
その間は、自分が実質的なフィリップ公爵家の支配者というわけだ。

だが、テレーゼが皇帝になってくれないとその芽が潰えてしまう。
彼らからすれば、何が何でもテレーゼに皇帝になって貰わなければいけないのだ。

「おわかりでしょう？　テレーゼ殿は本心では皇帝位などいらないと思っている。ですが、親族や北部諸侯達の手前それを口に出来ない。貴族が一人で何でも自由に決められたらどんなに楽か。それはそれで、失敗した時に一気に責任が圧し掛かりますけどね。独裁型と協調型。主君のタイプには大まかに分けると二つあって、どちらも結局は一長一短があるわけです」

やはり、経験者の発言には重みがある。
それも失敗した経験なので、余計に説得力があった。

「ところで、明日のお昼に珍しい方からお茶のお誘いとかで？」

「珍しいというか、なぜこの人がという感じかな？」

それは、北部諸侯ではないがテレーゼの支持者であったバーデン公爵公子であった。
表向きの理由は、久しぶりなので色々と募る話がしたいのと、少し私的な相談があるという事になっている。
過去の経緯から考えると、そこまで仲がいいわけでもないのだが。

「それで、奥方達を連れて行くのですね」

「出来れば、クリストフ殿も付いて来て欲しいけど」

貴族的な話になってしまうと思うのでエリーゼ以外はその手の話に弱いし、彼女一人だけだと思わぬ不覚を取る可能性がある。

そこで、立っている者は親でも使えとの言葉通りに、昔に争っていたクリストフを使うというわけだ。

「エルヴィン君とハルカさんは軍の訓練があるでしょうからね。私なら途中で適当に抜けられるから適任ですか」

クリストフはすんなりと受け入れ、翌日の午後に帝都バーデン公爵家邸へと向かう。

ニュルンベルク公爵が帝都にいた頃には色々とあったバーデン公爵家邸も、今では前と同じように正門には門番が立ち、使用人やメイドがいて俺達を客間へと案内してくれた。

昼食後という事もあって軽く食べられるお菓子とマテ茶が出され、それを楽しんでいるとバーデン公爵公子が入ってくる。

「噂は聞いたよ。ほぼ独力で万を超える兵力を養ってペーター殿に献上してしまったと」

「献上は言い過ぎですよ。経費と褒美は全額請求しますから」

「貴殿らしいな」

それからは、バーデン公爵公子が一方的に色々と話を始める。

「あの殿下が、突然ああいう動きに出るとはね。だが、それがあったからこそ帝都は守れたし、ニュルンベルク公爵は結構な犠牲を出した。世間ではそういう風に見ている」

「北部諸侯の中には、今度はペーターに擦り寄りたい者もいるとか？」

「いるだろうね。みんな、テレーゼ殿に絶対の忠誠心があるわけでもない」

バーデン公爵公子は、ハッキリと先の会見のせいで北部諸侯の間に亀裂が入り始めたと認めていた。

彼も東部の諸侯なので、何が何でもテレーゼ支持というわけでもないのであろう。

「バーデン公爵公子殿は、正式バーデン公爵位を襲爵なされないので？」

ここでクリストフがわざと話を反らしたかのように見えたが、それを聞いたバーデン公爵公子は渋い顔を浮かべていた。

「クリストフ殿、貴殿は結構鋭く突いてきますね」

「どういう事？」

「あなた、正式に襲爵するにしても、それを認めるのは……」

「ああ、そうか」

エリーゼからの指摘で、この件が次期皇帝を巡る争いに関係しているのだという事に気が付く。

「前の皇帝が生きている時に襲爵しなかったのですか？」

「さすがに、あの陛下に承認して貰うのはなぁ……」

当時のバーデン公爵公子は、テレーゼ派につく姿勢を隠しもせずに見せていた。

だから、死んだ皇帝からは嫌われて襲爵の儀式をまだ行っていない。

討伐軍の準備に統治と双方共に忙しかったので、自然と行わない空気が出来てしまったそうだ。

「だから、今になってそれを行うと？」

「それも有りであろうなと。実際に貴族達の、襲爵、昇爵、降爵、改易と全て帝国宰相の名で行われている」

本来であれば、皇帝が不在なのでそれは出来ないはず。

なのに大半の人達は、ペーターが出した許可や命令を元に家を継いだり、新しい貴族になっている。

それに異議を唱える人は少なく、いずれは皇帝になる人だからという理由でそれらは公の効果を発揮していた。

実はみんな、ペーターの権威と権力をほぼ認めているというわけだ。

「あの殿下は、実際に勝ってしまったからな」

誰もがいまいち勝ち切れなかったニュルンベルク公爵に、ペーターだけが誰もがわかる形で初めて泥をつけた。
帝都は守られ、今度は逆襲に転じようとしている。
となれば、テレーゼ派の中にもペーターに寝返る貴族も多かろうと。

「どうせ次は無いバーデン公爵公子殿は、別にどちらが次の皇帝でも構わないと？」

ここで先手を打って、ペーターに寝返って次期政権下で優遇されるようにする。
卑怯だという人がいるかもしれないが、そんな事は百も承知であるし、元から貴族とはそういう生き物だといわれればそれまでとも言えた。

「私もいい加減に襲爵しないとまずいだろうからな。バウマイスター伯爵殿、帝都も色々とあって品不足の感も強いが、ようやくいい茶葉を手に入れてね。遠慮くなくどうぞ」

「それはありがたい」

それからは、一言も政治臭い話は出なかった。
一時間ほど世間話をして終わりで、この場で初めて彼の奥さんの紹介もされている。

「バーデン公爵閣下の正式な襲爵の儀ですか？」

「そうだ、一日でも早くだ」

「殿下にお知らせしておきます」

屋敷に戻ると、俺はエメラを呼び出してバーデン公爵公子とした話の内容を彼女に伝えた。
ここまで教えたのだから、あとはどう判断するかはペーター自身が決める事だ。

「殿下にバーデン公爵の襲爵の儀を仕切らせてって事？」

「マフィアの手打ちのようなものだな」

ペーターが襲爵の儀を仕切れば、その瞬間からバーデン公爵公とその一派は彼の派閥に鞍替えをするというわけだ。
テレーゼが知れば、裏切ったと思って激怒するかもしれない。
例え、それが権力闘争の一環であったとしてもだ。

「こんな事をしている場合じゃないと思うけど……」

イーナの言う事は正論だと思うが、人間とは貴族とはこういう生き物である。

「皇帝の座は二つ無い」

「ヴィルマはズバっと言うな。でも、テレーゼ様は本当は皇帝にはなりたくないのでは？」

「そうは思っても、今回は兄達までついて来ているからな。油断できないぞ」

俺の護衛をしているエルとしては、起こるかもしれない新たな騒乱に警戒しているのであろう。

そして二日後、バーデン公爵公子を正式に公爵に襲爵させる儀式を行うという連絡が入ってきた。
当然儀式を仕切るのはペーターで、この事の意味に気が付かない貴族はいない。

「明後日に行うか。予想よりも早いな」

よほど気合を入れて準備を行っているようだ。
当日には俺達も顔を出し、バーデン公爵公子はようやく正式に公爵になった。

「テレーゼ様や、彼女を支持する貴族達は顔を出しておらぬな」

選帝侯の正式な襲爵の儀なのに、ここで顔を出さないというのは本来あり得ない。
つまり、今回の処置をペーターの引き抜き工作の一環だと知って抗議しているのだ。

「導師は、やはりテレーゼの味方をしたいですか？」

「本音では。だが、某達もいい加減王国に戻りたいではないか。帝国の内乱が続けば、いつまでも縛られたままになってしまうのである」

長引く内乱に、導師もいい加減に疲れているのかもしれない。

「バウマイスター伯爵は、ペーター殿の方が皇帝に相応しいと思っているのであろう？」

「そうですね」

テレーゼを支持する貴族連中の内情はバラバラだ。
初女帝で歴史的な快挙だとそれだけを理由に指示している者、女だから自分達が裏で好きに操れるかもと考えている者に、彼女の兄達のように自分の子供をフィリップ公爵にしたいからなどといういい加減なものもあった。

俺達への褒美に対する姿勢もある。
ペーターは自分が借金王になったと言いながらも、必ず全額払うと明言した。
テレーゼも払うとは言っているのだが、どこか帝国の財政規律に気を使い過ぎていて、その結果が例の誘惑に繋がっているという疑念が払拭できない。

「大物とは、大きく借りてそれを返してしまうのですよ」

「返せないで、稀代の詐欺師と言われるかもしれぬが」

「その時はその時でしょう」

判断材料は勘のみであったが、俺はペーターの方が皇帝に向いていると感じた。
だから協力もするし、その過程でテレーゼを追い落とす事になっても仕方が無いと思っている。
ただそれだけなのだ。

「ブランタークさんは不満かもしれませんが……」

「いや。そうでもない。少しヤバい情報が入ってきた」

「ヤバい情報？」

「ああ。テレーゼ様達が、前皇帝の皇后や役職を辞めた大物貴族達と接触しているそうだ」

「よくそんな情報を集められましたね」

「嫌な予感がしたからだ。俺は別にテレーゼ様に皇帝になって貰いたいわけじゃないからな」

ブランタークさんが入手したとなれば、もうとっくにペーターの耳にも入っているのであろう。

バーデン公爵とその一派の離脱した穴を、ペーターの義母や前皇帝の死で動揺して役職を放棄した大物貴族達で埋める。

数を補うには良い手かもしれないが、今の状況だと悪手としか言いようがない。

「テレーゼめ。一体何を考えているんだ。一緒に潰されるぞ」

そうでなくても、フィリップ公爵家には前にペーターが埋伏の毒を行っている。

アルフォンスは迷っていたが、もしテレーゼが愚かな事をすれば最悪の状況を防ぐために彼が立つ可能性もあるのだから。

「問題は、既に死に体の義母を焚きつけて何をするかだね」

襲爵の儀が終わった日の夕方、何食わぬ顔で夕食を食べに来たペーターは笑顔でテレーゼの悪巧みについて語っていた。

「もしかすると、殿下の義母様に後ろ盾になって貰ってテレーゼ様

が宰相に就任できるように工作しているとか？」

エリーゼの予想は、権力闘争ではよくある事例であった。

テレーゼの宰相就任を支持する代わりに、自分達の地位の復権を約束する。

前皇帝の死後、帝都にニュルンベルク公爵軍が押し寄せると知ると役職を放棄して逃げた癖に、ペーターがそれを退けると何食わぬ顔で元の役職に戻せと言う大物貴族が多くて彼は辟易していた。

その地位は、既に爵位や家柄が低くても能力がある者に代わっていたし、彼らは帝都防衛戦で活躍している。

失敗したならいざ知らず、なぜ功績があった者から地位を取り上げなければいけないのだとペーターは激怒していたのだ。

それも、ただ爵位が高いだけの卑怯で無能な者達にだ。

更に腹が立つ事に、彼らは教会に押し込めたはずのペーターの義母を神輿にして派閥を形成しつつあるらしい。

「僕の帝国宰相への就任は議会が認めたものなのだけどね。その前に、あのクソ女にそんな権限はない！」

「それはさ。ペーターも結構緊急避難的な方法で政権を握ったから自分達も有りだと思っているとか？」

「だとしたら、僕はテレーゼ殿を過大評価し過ぎたのかね？」

「ええと……。それは……」

これこそが、フィリップとクリストフが言うところの『自分一人ではどうにもならない』という奴なのかもしれない。

「テレーゼ殿の兄二人、クソババア、使い物にならないバカ法衣貴族達。このくらいで済ませるか……。あとは、クソババアの監視を怠った教会の連中にも責任を取らせないとな」

ペーターはそこまで呟くと、あとはエリーゼが作った料理を美味しそうに食べてから皇宮へと戻っていく。

「ヴェル、殿下って結構物騒な事を言っていたような……」

「イーナ、俺達はバーデン公爵の件でもうペーターに十分に協力したんだ。もうあとは静観するだけだな」

もはやテレーゼは、自分でこの次期皇帝レースから降りれなくなっている。

いくら嫌だと言っても、周りがそれを許さない状態なのだ。

そして、その止まらないジェットコースターの動力源には、帝都防衛で戦うのを嫌がった貴族達も入っている。

味方にするだけ損な連中であったが、彼女の兄達が数は力だと信じて引き入れたのであろう。

勿論その行為は、ペーターの怒りを買っただけなのだが。

「お茶を一杯」

その日の夜中、アルフォンスが突然迎賓館を訪ねて来た。

お茶を所望するのでエリーゼが淹れると、それを飲みながら俺に言う。

「ヴェンデリン、恨むよ」

「俺のせいか？」

「バーデン公爵の裏切りで、テレーゼの兄達は壊れたようなものだ。今も殿下から政権奪取をする密談なんてしているし、そこに喪に服しているはずの前皇后もいる。こうなれば、事は秘密裏に……。行くわけないか。とにかく、兵を挙げられたら手遅れだ。私も動かないといけない」

「そうか。すまんな」

俺は、魔法の袋から一本の高級ワインを取り出してアルフォンスに渡す。

「なるべく穏便に処理しないと、またニュルンベルク公爵に付け込まれるかもしれないからなぁ……」

お茶を飲み干したアルフォンスは、ワインの瓶を抱えながら迎賓館をあとにする。

「とりあえず、もう寝ようか？」

「そうだな。もう俺達に出来る事は無い」

「ところで、バウマイスター伯爵」

「何ですか？」

「アルフォンス殿に渡した高級ワイン。某の分は無いであるか？」

「ありますけど……」

なぜか導師にも高級ワインを進呈する羽目になってしまったが、翌朝目を覚ましてから食堂で朝食を食べていると、外が大分騒がしい。

窓の外から見ると、帝都各地に帝国軍が分散して配備されているようだ。

「何があったのかな？」

などと思っていると、そこにエメラが顔を出す。

そして、とんでもない事を報告し始めた。

「フィリップ公爵は健康上の都合を理由に引退。後継はアルフォンス様になります。あとは、テレーゼ様のお兄様お二人と前皇后様が病死なされたそうです」

「ペーターは決断が早いな」

テレーゼを神輿にした北部諸侯達と、前皇后を神輿にした役職を失った中央の貴族達。

彼らが組んでクーデターを起こす前に、ペーターが先に手を打ったのであろう。

「テレーゼは、公爵からの引退か」

「功績があるお方なので、殿下から名誉伯爵位が贈られます」

さすがにテレーゼを殺すと世論に影響が出そうなので、彼女は爵位の剥奪だけに留めたようだ。

その代わりに、バカな義母と裏の主犯であるテレーゼの兄達には

容赦しなかったようだが。

そんなに都合よく三人同時に病死するわけがないので、まあそういう事であろう。

「他の貴族連中は？」

「みなさん。引退の後に、後継者は爵位を一つ落としての相続となります」

それ以上の血の粛清も周囲に与える動揺が大きいので、爵位の降格と引退だけで済ませたらしい。

神輿にするテレーゼと前皇后が消えたので、既に役職も無い彼らは何も出来ないというわけだ。

「これで、帝国軍は一本化できました」

「そうか」

エメラの冷静な声による報告を聞きながら、俺はテレーゼの事を考えていた。

果たして、彼女はこの結果をどう思っているのであろうかと。

何にしても、これでようやくニュルンベルク公爵領に攻め入る体制ができた事だけは確かであった。

幕間二十八　とある政変後の午後。

「ヴェンデリン、やってくれたの」

「何をです？」

「そのとぼけ方は、ヴェンデリンが好きではない貴族そのものだがの。その点についてはどう思う？」

「王国に戻るために、俺も足掻いた結果です。望郷の念の結果というやつかな？」

「まあいい。結果的に、妾はフィリップ公爵では無くなっただけの事じゃ」

ペーターによって過激に極秘裏に行われた粛清劇によって、帝国はようやく一つに纏まった。

俺達も協力はしたが、実行には一切関わっていない。

ペーターもそれを望まない事は明白であったから、ただ迎賓館で寝ていただけだ。

その間にペーターは兵を動かし、テレーゼを強制引退に、対立を煽りクーデターを目論んだ兄二人と前皇后は病死という事でケリがついた。

同じ日のほぼ同じ時刻に三人もの高貴な方々が病死した件については、あとで歴史学者が解説をしてくれるであろう。

ただ一つ言えるのは、帝国を一つに纏めるために彼らは邪魔であ

った。
　こういう権力闘争で死者が三名しか出なかったのは幸運というべきか、本来は出てはいけないものなのかもしれないが、表向きはそういう事は起こっていないというのが帝国の公式の見解なので、殺された者などいないというわけだ。

「テレーゼ様は独裁権を持っていたのでは？」

「エリーゼ、そんなものは意外と簡単に移ろうものよ」

　現在のテレーゼは、急遽ペーターから下賜された屋敷へと移っている。
　屋敷自体は、今までの一連の反乱劇で御家断絶が確定したり、改易をされたり、ニュルンベルク公爵に組した貴族の帝都屋敷が接収されて余っていたので問題ない。

　すぐに引っ越しを終えて、俺達を客として出迎えるくらいの余裕は存在していた。

「遠征が仇となったようじゃな。兄達に領内の統治を任せる結果になったからの」

「あとは、テレーゼ様が皇帝になる事に対する期待ですか？」

「それもある。人間の欲とはキリがないからの」

　テレーゼは軍を率いて長期間領地を離れていて、そのせいで兄達のコントロールが甘くなっていた。
　ついでに言うならば、別に彼らはテレーゼに逆らったわけではない。

ただ彼女が、次期皇帝になるのを後押ししていただけだ。

「ペーター殿が政権を掌握した方法も問題になっての。妾が潔く身を引くなどと言ったら大騒ぎになるからの」

彼女を支持する貴族や家臣が暴走して、本当に内乱になりかねない。

テレーゼがペーターと対立したフリをしていたのには、そういう理由があったのだと語る。

「さてどうしようかと思った時に、まさにヴェンデリンがやってくれたの」

まずは、テレーゼの有力支持者であったバーデン公爵の裏切りを俺が促した。

まだ行っていなかった襲爵の儀を、ペーター主催で行うように勧めたのだ。

「ヴェンデリン、そなたは勢力が落ちた妾達が諦めると思うたのか？」

「いいえ。派閥は小さい方が先鋭化しますからね。自己保存本能に従って、勝手に生存競争を開始しますし」

「そなた。難しい事を言うの」

組織や派閥は、小さい方が活動が活発になる。

その結果、仲間割れや分裂が起こる可能性も高い。

俺がバーデン公爵を引き抜いたのは、状況の変化を狙っての事だ。

「兄達は、減った分を前皇后とボンクラ貴族達で補おうと考えたわけじゃ」

「殿下と対立している連中ですから、間違った選択肢ではないですね」

「表面上はな」

内情は、これはという有能な者など一人もいないので役に立たないどころか、逆にペーターに悟られる要因となってテレーゼ派は崩壊している。

欲をかいた兄二人を抑えられなかったテレーゼも悪いが、彼女も今回の件では蚊帳の外に置かれていた。

だからこそ、テレーゼは処刑もされずに穏便に引退が出来たのだが。

「皇帝の座か……。あれは麻薬に近いものがあるの。自分達がなるわけでもないのに、兄達はそれに酔って自滅した。まあよい、それが運命だったのであろう」

別段皇帝になりたいわけでもなかったテレーゼは、失った皇帝候補の座に未練もないようだ。

「帝国初の女性皇帝即位を阻止した、既得権益の権化バウマイスター伯爵ですか」

「ふん。若い指導者、生まれもわからぬ実力だけで成り上がった権力者、女性の身で皇帝候補に成り上がった妾。後世の歴史家達が喜んで題材にするであろうな。そして、妾は負けたからこそ彼らの興

味を余計にそそる」

この世界にも、判官びいきのようなものがあるのかもしれない。あと、政治とは能力がある者がやればいいのだ。日本でも、若いから、女性だからという理由でえらく持ち上げられ、実際に地位に就くと失敗する人が多かった。年寄りで男性がいいというものでもないが、ミスコンの投票でもあるまいし、選抜を人気投票にすると、選んだ本人達にも不幸が襲うというわかりやすい例だったと思う。

「ペーター殿は普段はあんな感じではあるが、自分の義母すら平気で切った。妾には真似できぬ。ヴェンデリンの皇帝を見る目が正しかったというわけじゃの」

「さあ？　それはどうなのでしょうか？」

もしかすると、俺の人を見る目が思いっ切り間違っているかもしれないからだ。

そんな事は、後にならないとわからないのだから。

それに、ペーターは皇后が嫌いだったのでそこまで悩んだとも思えないし。

「どちらにしても、妾はこれで自由の身。名誉伯爵位のおかげで年金も出るし、アルフォンスが気を使って多少の慰労金のようなものもくれた。私財もそれなりにあるからの。最低限の人員さえあれば屋敷は回るし、本当に気楽な生活じゃ」

今のテレーゼは、執事一名、メイド二名、調理人一名、警備兵五名と、たったこれだけで生活を送っている。

年金の額は法衣貴族に準じているからそんなに人を雇えないし、

アルフォンスのためにフィリップ公爵家から人を連れ出すのを抑えたい。

あとは、ペーターの猜疑心をかわそうという目的もあると思う。

いくら彼がテレーゼを疑わないとしても、思わぬ所から讒訴される可能性もあるからだ。

「あの書類の山とも縁を切れたしの。面倒臭がりのアルフォンスが、どんな顔で処理をしているか見物ではあるの。もっとも、様子を見に行くとあいつは手伝えと平気で言いそうなので、触らぬ方がいいわけじゃが」

「さすがにそれはないでしょう」

「冗談じゃよ。さて、妾も暇になったからの。ヴェンデリン、どこかに連れて行ってくれぬか？」

確かに、今のテレーゼは暇人であった。

政治に関われない、関わると余計な猜疑心を抱かれるので、わざと距離を置いて日々の暇潰しに余念がないわけだ。

もう一方も俺も、そこまで忙しくなくなっていた。

毎朝魔法の鍛錬をしてから、磁器作りの作業も午前中までで終わる。

抱えていた兵員も、王国軍組と少数の傭兵達だけで七千名まで減っていた。

管理はフィリップ、クリストフ、エルに任せてある。

サーカットの管理も全て帝国の手に戻り、シュルツェ伯爵達は王国軍組の管理や、ようやくまともな政権が出来たので、王国との交

涉を再開しようと忙しく働いていた。

ちなみに、俺に政治的な仕事はあまり回されなかった。

何でも、『バウマイスター伯爵様がずっとここを治めてくれればいいのに』とサーカットの住民達から言われる事が多く、その危険性を察知してペーターが素早く手配してくれたようだ。

他の国の土地を治めるなど面倒だったので、俺には好都合であった。

今は魔法の鍛錬と、磁器だけ作って資金稼ぎを行う生活というわけだ。

「あなた、少し出かけられてはいかがですか？」

「えっ？　いいの？」

今までは散々にテレーゼと揉めていたのに、なぜか今になってエリーゼは俺がテレーゼと出かける事を許可していた。

「まあ、たまには宜しいでしょう」

「はあ……」

「というわけで正妻殿の許可は得た。出かけようではないか」

俺はあっという間に庶民的な服装に着替えたテレーゼに腕を引かれながら、屋敷の外へと連れ出されていく。

「えっ？　エリーゼ達は？」

「今日は二人きりのデートじゃ。せいぜい楽しもうではないか」
俺とテレーゼは、二人で帝都市街へと歩き始めるのであった。

「えっ？　テレーゼ様とヴェンデリンさんだけでデートですか？」
「よく許可したよね」
ヴェンデリン様とテレーゼ様を送り出した私は、一人自分の屋敷へと戻りました。
すると、ブランタークさんと共に魔法使い達の鍛錬に行っていたカタリーナさんが戻って来ていて、私の行動に驚いたようです。
ルイーゼさんも事情を聞いて驚きの声をあげます。
「二人きりで大丈夫なのかしら？」
「大丈夫ですよ、イーナさん。ペーター様が、あの二人を監視していないわけがありません。帝都の治安も回復してきていますし」
私が一人で屋敷まで戻れたのも同じ理由です。
もし私に何かがあれば、ペーター様の権威が大きく失墜するのですから。
「エリーゼ、私の心配ってそういう事じゃないんだけど……」
「テレーゼ様の事だから、一気にヴェルとの距離を縮めようとするはず。ちょうど身軽になった事だし」

「ルイーゼさんの仰る通りですわ。あの方は油断がなりません」

イーナさん達の懸念は理解できます。

自由の身になったテレーゼ様が、ヴェンデリン様を口説こうとするに違いない。

ですが、私はそれを認めてもいいと思っているのです。

「エリーゼ様、テレーゼ様はバイマイスター伯爵領に移住するの？」

「そうなると思います」

ヴィルマさんは、私の考えている事に気がついたようです。

「そんな事があり得るの？」

「ペーター様なら、そう考えるでしょうね」

ペーター様は、テレーゼ様を権力の座から追い落としました。

普通なら敗れたテレーゼ様は殺されても文句は言えないのですが、ペーター様の理性と後ろめたさが彼女を穏便に引退させたのでしょう。

ですが、名誉爵位持ちとはいえ内乱終了後にも帝国に残れば、余計な事を考える方々に利用されるかもしれません。

もしそうなれば、ペーター様は最悪彼女を殺さなくてはいけなくなる。

それが嫌なペーター様は、間違いなくテレーゼ様をヴェンデリン様に下げ渡すつもりでしょう。

「外国貴族であるヴェンデリン様への褒美に最適ですから」

「嫌な考えですけど、理には適っていますわね」

血筋は皇家にも連なる元公爵閣下ですが、彼女が引退した経緯を考えるとそこまで配慮は必要ないわけです。

「領地は最南端で、帝国もおいそれとは手が出せず、出され難い。ほぼテレーゼ様単身で移住でしょうから、バウマイスター伯爵家の相続に口も出せないと」

「そういうわけです」

イーナさんが考えているような事を、ペーター様は考えたわけです。

「でも、将来的には不安定要素にならない？」

「ルイーゼさん、貴族の血縁は可能性なのですよ」

「可能性？」

そう、可能性なのです。

帝国としては、安定した統治の邪魔になる血筋はいいテレーゼ様を送り出して、王国貴族に帝国貴族の血を混ぜようとしている。

これが、数十年・数百年後にどう両国の政治に影響するのか。

それを考えるのは、その時の当事者というわけです。

血縁は、正逆どっちも可能性も秘めている。

もっとも、これはお爺様の受け売りですけど。

「逆に考えますと、将来王国がテレーゼ様の子孫を押し立てて、帝国に攻め入る可能性もあります」

「凄い未来図だなぁ」

「ですが、どういう未来になったとしても、それはその時の人達が考えればいい事。ただそれだけなのです」

「だから、エリーゼさんはテレーゼ様を受け入れると？」

「今のお立場は、決してよくはないですからね」

テレーゼ様の厄介な点は、その気になれば十分に皇帝の資質を秘めている点かもしれません。

本人はそれに気がついていないのか、捨て去って自由に生きたいと願っているのか。

ヴェンデリン様は彼女の資質を甘いと感じてペーター様を支援したのでしょうが、十分な補佐がつけば彼女も皇帝となる事が可能です。

少なくとも、アーカート十七世陛下よりはよっぽど有能な皇帝になるでしょう。

「その危険を避けるために、あえて身一つでヴェンデリンさんに嫁ぐのですか？　エリーゼさんは、それで本当に宜しいので？」

「前ならば、意地でも阻止したのでしょうが……」

テレーゼ様は、女性の身でフィリップ公爵閣下として苦労してきました。

『女の身で俺よりも治癒魔法が得意だと！　生意気な！』

私でもこんな事を言われたりしているのに、テレーゼ様はもっと苦労しているはず。

その重荷が消えて自由になった以上は、ヴェンデリン様が受け入れると宣言すれば私は受け入れてもいいと思うのです。

「あのしつこい誘惑は、重責によるストレスからって事かしら？」

「私、思いっ切り素の性格だと思うのですが……」

「私達が変に血筋などで勘繰らなければ、許容範囲内かと」

「でも、ヴェルが『うん』と言うかな？」

ルイーゼさんは、ヴェンデリン様がテレーゼ様を受け入れるかどうか疑問視しているようです。

「大丈夫、ヴェル様は結構テレーゼ様が好き」

「ヴィルマはそう思うんだ」

実は、私もそう思っています。

「ヴェル様は、意外と年上が好き」

「そういえばそうだね……」

ルイーゼさんが言葉に詰まりますが、それは私達とヴェンデリンさんがあえて口に出さない『あの人』の事を言っているのでしょう。
今はヴェンデリン様も会えない、いまだに続いている彼の義理のお姉さん、アマーリエさんの事を。

「ヴェルは、少々マザコンの気がある？」

「どうなのかしら？　ヴェルって、妙に両親と距離感があるような気がするわ」

イーナさんと同じく、それは私も感じました。
仲が悪いわけではないのですが、お互いに距離を置いているというか。
貴族の家ではそう珍しくもないですし、ヴェンデリン様は魔法使いの素質があったので、それが原因かもしれまんが。

「お母さんとは疎遠だけど、義理の姉さん達とはみんな仲が良いですわね」

アマーリエさんは除くとして、他の兄弟の奥さん達とも仲がいいような。
遊びに行った時には、お土産を持って楽しそうにお話をしていますし。

「それって、ヴェルが単純に女好き？　男好きじゃないからいいけどね。でも、そんなに年上好きに見える？」

「それは、私がいるからかもしれませんわね」

「カタリーナは関係ないんじゃないの？」

「ルイーゼさん、それはどういう意味で？」

「カタリーナはヴェルの一歳上だけど、見た目だけで包容力が無いから」

たまに、ヴェンデリン様にからかわれていますしね。

「ルイーゼさんは何を言うのかと思えば。私は、年齢も経験も重ねた大人の女ではないですか」

「えーーー、そう？」

「ルイーゼさんはそう感じなくても、ヴェンデリンさんはそう思っているのです」

ルイーゼさんとカタリーナさんが言い争っていますが、確かにカタリーナさんはたまに言動が幼くなるような……。

「包容力なら、エリーゼの方が上だって」

「ルイーゼさんは胸の事を言っているのですか？　私だって、そうエリーゼさんに劣るものではありませんわよ」

カタリーナさんは私とそう変わらない胸の大きさですけど、それって包容力と関係あるのでしょうか？

「いや、胸の大きさイコール包容力って、その辺のオジさんじゃないんだから……」

「物凄く不毛な論争ね……」

「イーナ、私も包容力ある？」

「えっ？　胸の大きさは関係ないんじゃないの？」

二人の言い争いに、イーナさんは呆れているようです。

あとヴィルマさんは、もう少し大人にならないと包容力が出ないような……。

「とにかく、ヴェンデリン様が年上好きとか、胸が大きい人が好きとかそういう事はどうでもいいのです。暫くは、テレーゼ様とたまに遊んでいただければ」

「それはどうして？」

「ルイーゼさん、それはですね……」

ヴェンデリン様の帝国内乱での功績は、既に他の帝国貴族が追いつけないほど巨大な物になりました。

このまま真面目に働いてペーター様との緊張関係を作るよりも、あとは彼らに任せて遊んでいるように見せた方がいいのです。

ペーター様からすれば、テレーゼ様を口説いて王国に連れて行くヴェンデリン様は、とてもよい行いをする親友というわけですから。

「ヴェンデリン様はこう仰っていました。『狩るウサギがいなくなると、ウサギを追っていた犬は煮て食われる』と」

「それは疑い過ぎのような気もするけど、わかる気もするな。ヴェルって臆病な部分もあるし」

ルイーゼさん、さすがはヴェンデリンさんと長い付き合いですね。あの方の内面をよくご存じです。

「それはあるわね。でも、ただ単に遊んでいたいだけなのかも。テレーゼ様に関しては、あの人の押し次第だと思うわ」

「ヴェル様は、押しが強過ぎる女性は苦手。上手くかわそうとする」

「あははっ！　ヴィルマの言う通りだ」

それからは女性だけのお茶会となり、色々とお話などをして久しぶりに休暇を楽しんだような気がします。

ですが、ヴェンデリン様はテレーゼ様をどう思っているのでしょうか？

私の予想は、そう外れていないと思いたいのですが。

「テレーゼ様、この辺の地理が全然わからないぞ」

「ヴェンデリン、様はいらぬ。妾もヴェンデリンも、今は帝国のお飾り伯爵なのじゃから」

「テレーゼ、俺の王国伯爵の方は実があるぞ」

「それは統治でご苦労な事じゃの」

「大丈夫、優秀な家宰がいるから」

エリーゼと別れた俺とテレーゼは、二人だけで帝都市街を歩いていた。

共に仕事も無いので、取りとめのない話をしながら何か楽しい物でもと、探しながら歩いていく。

特に目的も無く、ただプラプラと歩いていく。

こんな事をしたのは、何年ぶりであろうか？

「ペーター殿は、色々とご苦労な事じゃの」

視界に、こちらを監視する者達が見える。

護衛と監視を兼ねた、諜報部などから派遣された連中であろう。

トップが前皇后の駄目兄貴から変わって、真面目に仕事をするようになったのであろう。

俺にやましい点など無いし、今のテレーゼには何の力も無い。

利用しようとする勢力との接触が無ければ、護衛をしてくれる便利な連中である。

俺はすぐに視線を逸らして、テレーゼの顔を見た。

「ペーター殿には野心も能力もあるというわけか。もうじき内乱も終わるの」

「ニュルンベルク公爵はまだ粘りそうだけど」

「程度の問題じゃの。奴は所詮は反乱者という世間の評価があり、今は間抜けな前皇帝ではなく、実力がある人物が帝都を抑えておる。この効果は大きい……。お茶でも飲むとするか」

話の途中、テレーゼに促されて一軒の喫茶店に入った。
そのお店の店内は、なぜか多くのカップルで賑わっている。
すぐにウエィトレスが注文を取りにくるが、メニューの選定はテレーゼが素早くして俺は関与できなかった。

「解放軍のトップであったフィリップ公爵家は当主がアルフォンスとなり、あいつは皇帝などにはなりたくない口じゃ。彼がペーター殿に協力すれば他の貴族も協力する。これにて、ニュルンベルク公爵による勢力分断策は終わりじゃの」

ニュルンベルク公爵は帝国南部に孤立した。
勢力を伸ばしていた西・東部の南部地域諸侯も、一度ペーターが南下を始めれば簡単に裏切るであろう。
小勢力とは、強い方に簡単になびくものなのだから。

「中央の統制も進んでおるぞ。選帝侯家は数を減らす事が決まったはずじゃ」

解放軍で活躍したフィリップ公爵家と、バーデン公爵家、新しく選帝侯になる予定のミズホ家。
これ以外の選帝侯家は、全て侯爵家に転落する事になった。

原因は沢山ある。

まずは、いくら当主が人質に取られていたとはいえニュルンベルク公爵に組した事。

次に、解放軍との戦闘で家臣、兵員に致命的な損害を受けた事。まだある、帝都解放後に当主の死亡が確認されたが、後継を巡って殺傷沙汰まで起こした家があった事。

まだまだある、大量に家臣団を失ったので現在の領地を統治できず、現地で無用な混乱を巻き起こして周辺の諸侯に迷惑をかけた事、いやまだ混乱は続いている。

当然、降爵される各選帝侯家は苦情を言ったが、隠しようの無い失態の数々に、家臣団の減少で今までの領地を維持できないし、ペーターの決定に反抗しようにも兵力も無い。

逆らえば問答無用で討伐されるであろうから、彼らは渋々と受け入れざるを得なかった。

「爵位は侯爵じゃが、ペーター殿は各旧選帝侯家に残った家臣に見合った領地しか与えておらぬ。中には子爵レベルにまで勢力が落ちた家もある」

「上手く、ニュルンベルク公爵の粛清を利用したような」

「結果的にはそうなったの。絶好のタイミングで帝国中央の力を増したわけじゃ。世間の恨みの大半はニュルンベルク公爵に向いておるから、妾などはペーター殿がわざとそのように謀ったのではないかと勘ぐってしまいそうになる」

「まさか」

「立ち上がったタイミングに関しては、これ以上のものはないの。いくら皇帝選挙になかなか勝てない皇家の者とはいえ、昔は皇帝位を独占していた家じゃ。この混乱期にとんでもない男が出たものよ」

確かに、ペーターが蜂起したタイミングは絶妙だ。
もっと早くに立ち上がればとも思うが、それだと失敗する可能性は高かった。
それでも犠牲を減らすためにと思わなくも無いが、彼は帝国中枢に力が無いまま内乱が終わるのを危険視していたのかもしれない。

内乱で発生する犠牲者に目を瞑り、冷静に一番的確なタイミングで蜂起した。
ペーター自身は付き合いやすい善性の人であるが、冷徹な権力者という二面性も持っていて、義母、義伯父や怠慢な貴族達には容赦しなかった。

その二面性が、俺にはペーターが皇帝に最適だと思ったのかもしれない。

「テレーゼだと、自分が選帝侯だから他の選帝侯家に配慮し過ぎるかもね」

「それはあるの。明日は我が身だと考えるから、同格の選帝侯家に対してどうしても厳しい処分を避けようとしてしまう。その点ペーター殿は、皇家の当主でも次期当主でもない三男じゃ。案外、抵抗が無いのかもな」

「後継ぎではないからか……」

一瞬だけ、結果的に殺してしまった兄の顔が浮かぶ。
もう少し上手くやっていれば、俺はクルトを殺さないで済んだのであろうか？
実際に殺したわけではないが、結果的には殺してしまったも同じなのだから。

前はそんな事は思わなかったのだが、帝国で人の死ばかりを見ているせいかもしれない。

「ペーターは兄達を殺さないで済ませた分、俺よりはマシな人間かな？」

「ヴェンデリンの兄の話は帝国でも情報はあったがの。ペーター殿とて、父親と兄二人の無謀な出兵を止められなかったと考えれば同罪じゃ。それにの……」

「それに？」

「帝国の皇帝になろうとする者など、いくら元の本人が善人でもロクデナシじゃからの。妾を可愛がってくれた先々帝も仰っていた。『皇帝に君臨した時点で、どんな聖人でもロクデナシとなる。あとは、いかにマシなロクデナシになるかだな』と」

「なるほどな」

我が国の陛下も、同じような事を考えているのであろうか？

「と、いつまでも難しい話を続けても意味があるまいて。注文した品も来た事だしの」

「テレーゼ。これって……」

テーブルの上には、大きめのグラスに多目のジュースが注がれていた。

色を見るに柑橘系の果汁だと思うが、問題はジュースの方ではな

い。

グラスに二本、ストローらしき物体が差してあったのだ。

「（何というベタな展開……）」

カップルが、一つのグラスに二本のストローを差して一緒に飲む。近年の日本では、どの媒体でも滅多に見かけなくなったシーンである。

しかし、このお店はそれがウリなようだ。

席にはカップルばかりが座っていて、一緒に顔を近づけながらストローを使ってジュースを飲んでいた。

「このストロー……」

「内戦前くらいから流行しておってな。しかし、よく知っておったのストローを。熟練の職人しか作れないから高価なのじゃぞ」

この世界にプラスチックなど無いので、ストローは木製であった。更に、この世界のストローにはジャバラの部分もあってちゃんと曲がる。

その部分の材料には、魔物の素材が使われているようだ。

木製部分と曲がる部分の繋ぎ合わせなども考えると、俺が考えている以上に高度な技術が使われているらしい。

「使い捨てじゃないんだ」

「一個百五十セント以上もする物を、使い捨てに出来るわけがなかろう」

「高いな！」

日本円にして約一万五千円のストローに、俺は思わず大声をあげてしまう。

「使ったら洗わないといけないからの。専用の洗浄ブラシと組でその値段じゃ。ある程度作業を分担しても、平均すれば一日に二個作れるかどうかじゃ。オマケに作れる職人も少ない。ストロー工房は、内乱中も在庫を溜めるのに大忙しだったらしい」

使い捨ての量産品ではなく、繰り返し使うために別方向に進化したストローというわけだ。

よく見ると、熟練の加工技術が確認できる。

「さあ。一緒にジュースを飲むのじゃ」

「テレーゼ。さも初めてのフリをして、このお店をちゃんと事前に調べていただろう？」

「さあての？」

別にどちらでも構わないので、俺は自分の近くにあるストローに口をつける。

ジュースはオレンジジュースに似た味で、よく冷えて美味しかった。

テレーゼの顔が近くにあるのでドキドキしてしまい、すぐにその冷たさがわからなくなってしまったが。

「ヴェンデリン、今日はえらく素直じゃの。今までは妾を避けていたのに」

「それは勘違いだな。別に、俺はテレーゼが嫌いじゃない。むしろ魅力的な女性だと思っている。避けていたのは、フィリップ公爵で次期皇帝候補だったからだ」

そう、彼女の立場が面倒だから避けていただけで、純粋な女性としての魅力が無いわけではなかった。

むしろ魅力的だからこそ、余計に無下にしていた点もあるのだから。

「お主、きゅきゅっ、急にどうしたのだ？」

意外にも、テレーゼは顔を赤くしながら声を上ずらせていた。

俺から魅力的だと言われて動揺したのかもしれない。

「どうもこうも。思ったままの事を言っただけだ」

「ヴェンデリン、それは妾を口説いておるのか？」

「さあ？　どうなんだろうな？　というか、今までは平気で種付けとか言っていた癖に」

「それは、妾がフィリップ公爵だったからこそ言えた事じゃ。考えてもみよ。その手の経験が皆無な妾がいきなりそんな大胆な事を言えると思うたのか？　そういう立場だからこそ、大胆に自然に言えた事もあるというのに……」

女当主だからこそ、自分の夫や子供をどうするかと権力者の思考で考える事ができ、恥ずかしい事も平気で言えた。

だが、今のテレーゼは普通の二十歳の未婚女性に戻ってしまった。

この世界では年増の入口らしいが、地球なら小娘扱いの年齢である。

加えてその手の経験も無いので、余計に恥ずかしくて堪らないようだ。

更に顔を赤くさせながら俯く姿が可愛かった。

「（思えば、俺の中身はテレーゼよりも年上なんだよな……）この後は、下着でも選んであげようか？」

「夫でもない男性に下着選びなどさせられるか。もっと普通の場所に連れていけ」

「（随分と常識的になったな……）」

喫茶店を出たあとは、普通に昼食を取り幾つかの店舗で買い物などをしてから屋敷に戻る。

「楽しかったの、ヴェンデリン」

「そうだな」

「妾は暇じゃからの。いつでも誘ってくれ」

「わかった。俺も楽しかったからな。うちの屋敷にも遠慮くなく遊びに来てくれ」

俺はテレーゼと別れて自分の屋敷に戻る。

そしてその日の様子をエリーゼ達に話すと、彼女達は驚きの表情を浮かべていた。

「普通に恥ずかしがるテレーゼ様？　新鮮な響きだなぁ」

ルイーゼは、かなり失礼な事を言っていた。

「普通の未婚女性は、大体の方がそんな感じですけど」

エリーゼから言わせると、豪胆な女性公爵様を演じないで済むようになったので元に戻っただけでしょうという事のようだ。

特に驚いたような顔は見せなかった。

「それで、普通にデートをしてきたと？」

「男女が二人で出かけると、みんなデートなのか？」

「えっ？　デートじゃないの？」

イーナが俺に驚愕の表情を浮かべる。

そういえば、日本とこの世界との差を忘れていた。

俺は知己の女性と遊びに出かけただけの感覚だったのだが、この世界では男女二人で遊びに出かければデートになる。

エリーゼのように、傍にセバスチャンがいてもデートが成立するのがこの世界のやんごとなき身分の方々なのだから。

「周囲の人がデートだと言うのならデートなのかな？　あっ、お土産を買ってきた」

「アッサリと流したわね。それでこれは？」

「恋人・夫婦専用のアイテム、ストローです」

あの喫茶店で売っている店を聞いて、テレーゼと一緒に買いに行ったのだ。

ペアで無いと意味が無く値段も三百セントで高かったが、とてもよく売れるようで店内にはカップルの客が一杯いた。

内乱に巻き込まれていなければ、仲のいい恋人同士や夫婦には関係の無い世界なのかもしれない。

「ストロー」

「使い方は実践した方が早いな」

試しに大き目のコップにジュースを注ぎ、ストローを二本差す。

「あとは、二人でジュースを吸うと」

「そういうアイテムなのね。これを考えた人ってある意味凄いわね」

イーナが俺と顔を近づけながら感心したように言う。

何だかんだ言いつつも、実際に試すのがイーナの可愛い部分かもしれない。

確かに色々と妄想力に長けた人物かもしれず、実利面でもストローの生産で稼いでいるのだからその人は有能なのであろう。

「あの。私も」

「ボクも」

「ここは平等に」

「不公平はよくありませんわよ」

結局、エリーゼ達全員とストローでジュースを飲む羽目になり、俺のお腹がチャポンと鳴る。

こういう事で不公平なのはよくないが、夕食前にお腹が一杯になって少し後悔した。

「伯爵様、妙な事をしているな」

「帝都で流行している新製品を試していたんです」

「妙な物が流行しているんだな……」

所用を終えて戻ってきたブランタークさんにもストローを二本渡すと、否定的な事を言いながらも素直に受け取っていた。

もしかすると、王国に戻ってたら奥さんと使うのかもしれない。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

「エル、ハルカ、いい物をあげるよ」

仕事を終えて戻ってきたエルとハルカにも、二本のストローを渡してその使い方を教える。

「おおっ！　何と素晴らしいアイテムなんだ！」

「帝都では、このような物が流行しているのですね」

エルもハルカも感動しつつ、急ぎコップに二本のストローを差して試そうとしていた。

「なるほど……。ジュースをストローで吸うと、ハルカさんの顔が……」

ところが、急にエルが黙り込んでしまう。

よく見ると、ハルカを押しのけてタケオミさんがストローを加えていた。

シスコンとしては、エルと可愛い妹が顔を近づけてジュースを飲む光景が我慢できなかったのであろう。

しかし、エルとタケオミさんが顔を突き合わせてジュースを飲む光景は大変にシュールである。

「というか、全く気配を感じなかったわね」

「この人、普通に達人だからね……」

イーナとルイーゼは、まるで気配を感じさせずにハルカと入れ替わったタケオミさんの実力を再確認したようだ。

「ううっ……。ヴェル、全然楽しくない。ドキドキもしないし、むしろ殺意を覚える」

「ほほう、言うようになったな。エルヴィンよ」

エルとタオオミさんは、互いに殺気をぶつけながらジュースをあ

っという間に飲み干してしまう。
共に喉が渇いていたようで、あっという間にジュースは無くなっていた。

「それに関しては、俺のせいじゃないから」

その日の夜になってから、屋敷に戻ってきた導師にも一応念のためにストローを渡しておく。
だが、彼の答えはある程度想定の範囲内であった。

「コップに入ったジュースなど、普通に飲み干せばいいのである」

導師が奥さんや恋人とそんな事をしている光景が予想できないので、ある意味納得してしまう俺達であった。

「ふーーーん。恋人同士の距離を縮めるアイテムねぇ……」

翌朝、俺は皇宮のペーターを訪ねていた。
特に用事があるわけでもないが、対外的にも俺と彼はとても仲がいい事をアピールしないといけない。
仕事ばかりで大変らしいので、息抜きのために定期的に顔を見せて欲しいとエメラから頼まれていたのだ。

こういう部分は、エメラの優しさなのかもしれない。

彼女はこの前、臨時が取れて正式な筆頭魔導師に就任し、常にペーターの傍から離れなかった。

まだ政情や治安が完全に回復しておらず、前皇后派や旧テレーゼ派のテロや暗殺の可能性もあったからだ。

顔を出すと、そこにはペーター、エメラ、ランズベルク伯爵の三名しかいなかった。

皇宮の管理者であるランズベルク伯爵は、皇宮の中で起こった出来事は絶対に周囲に漏らさない。

ペーターの私的な相談を受ける経験と頭脳も持つので、最近では常に傍に控えるようになっていた。

「それを奥さん達と試したのかい？」

「当然」

「それは羨ましいね。でも、こんなアイテムが流行していたんだ。早速エメラと……」

「お断りします」

「断るのが早いなぁ。でも、後でちゃんと受け入れてくれるのがエメラのいいところ」

「バウマイスター伯爵様に、妙な誤解を与える言動はおやめ下さい」

エメラはいつもの口調で否定するが、そういえばペーターには浮いた話題が一つもない。

摂政の地位に就いているので多くの貴族が婚姻を言い出しそうだが、そんな噂を聞いた事もないのだ。

となると、やはりエメラとはそういう関係なのであろうか？

真相がわからない点は、さすがはペーターなのかもしれない。

「誰が考えたのかは知らないけど、凄いアイテムだね」

「売れに売れて大儲けらしいよ」

「借金王たる僕には羨ましいほどの話だね」

「いえいえ。新しい磁器で大儲けしている我が友ヴェンデリンに比べれば、ささやかな稼ぎですから」

「えっ？　これってハルトが考案したの？」

何と、このストローを考案したのはランズベルク伯爵らしい。

「然り。私は愛の狩人ゆえに、恋人同士がどうすれば仲良くなるのかを常に考えているのさ」

「そうなんだ」

「勿論、皇宮の管理も怠っておりませんとも」

ランズベルク伯爵はペーターからの昇爵を断り、公的には政治に一切関わらずに皇宮の管理のみに人生を費やした。

他には副業で、ストローの他にペアルック、デートマニュアル本、お勧めのデートスポット最新速報などの開発や編集なども行い、帝都内で有数の資産家としても有名になるのであった。

「妾よりも、ペーター殿よりも、一番賢い生き方かもしれぬの」

後にテレーゼが、ランズベルク伯爵に関してこう漏らすのであっ

たが。

幕間二十九　ニュルンベルク公爵の事情。

「ニュルンベルク公爵、貴殿は遂に滅びるのであるか？　無謀な反乱と無用な殺戮の果てに、後世にまでその悪行を残す。貴殿は歴史的大悪人として、後世の歴史学者や小説家の人気を集めそうであるな」

「言ってくれるな、魔族。お前はもう千年も生きて俺の悪口を収集するつもりか？」

「お勉強は出来るニュルンベルク公爵らしくもない。魔族といえどそこまでは生きないのであるな。我が輩は今年で百八十七歳。もう百年も生きれば平均寿命であるな」

「ふんっ！　それだけ生きれば十分だろう」

俺、ニュルンベルク公爵は今滅亡の淵にある。

家臣や従う貴族達の中には、まだ諦めるのは早い、縄張りである南部地域で防衛戦闘を行えば十分に生き残れると考えている者も多い。

まずは帝国軍の侵攻を防ぎ、次にヘルムート王国との軍事同盟で生き残りを図る。

そう考えて、既に私的に使者まで送っている者もいるようだ。

ヘルムート王国にも賢者ばかりがいるわけでもなく、様々な考え方をする貴族が派閥を作っている。

帝国併合を目指して、こちらとの同盟に動く勢力もいるはずだ。

そのせいか、ヘルムート王国側の兵の動きは予想よりも少ないような気がする。
先遣隊を壊滅させた俺といきなり組むのは嫌だとしても、俺との同盟を提案する貴族のせいで王宮の決断が停滞しているのかもしれない。

その点に関しては、この胡乱な同盟案も役に立っているというわけか。

だが、ヘルムート王国との同盟などあり得ない。
帝国を統一する過程で外国勢力に介入などされたら、大陸の統一など不可能だからだ。

「あくまでも、独力での帝国統一を目指さねば反乱など起こした意味がない」

「そういう無駄なプライドが、貴殿の寿命を縮めるのであるな」

「そうお前の予想どおりに行くかな？」

腹は立つが、かなりの確率でそういう流れになるのであろうな。
このまま状況が推移すれば、俺は滅ぶ。
思えば、反乱を起こした当初から色々とミスがあった。

まずはテレーゼ、お前を殺せなかった。
他の選帝侯やその跡継ぎなど、お前に比べればボンクラでしかない。
女に生まれて不利な点もあったが、お前は皇帝になれる才幹を持っていた。

女なので少々甘い部分もあるが、それは家臣で補えばいい。
そのお前を殺そうとした時に、それを阻止した奴がいる。

ヘルムート王国でも若手随一の魔法使いと評判のバウマイスター伯爵、こいつがテレーゼを死地から救った。
まったく、若造の癖にやってくれたものだ。
恩賞を匂わせたのに、予定外の事をしてくれたバカ四兄弟の失点があるにしても、テレーゼには運があった。
結局、テレーゼを逃したので解放軍が作られる羽目になった。

解放軍との戦闘でも、必要以上に犠牲が出てしまった。
無用なバカ貴族も大量に処分してくれたが、他の犠牲が多すぎる。
特に魔法使いの犠牲が大きい。

その損害を地下遺跡からの発掘品と、一時帝都を放棄して二虎を共食いさせる策で乗り切ろうとした。
あのバカ皇帝に虎とは言い過ぎか、野良ネコで十分だな。

野良ネコと雌虎テレーゼが策通りに分裂して、野良ネコの方だけがこちらに遠征軍を送り、俺の予想通りに評判だけを落として敗死した。

そこまでは上手く行っていたのだがな……。

「歴史とはーーー、時に予想外の英雄を生むぅーーーのであるな」

「五月蝿いぞ、魔族」

野良ネコの三男、ペーターという若造が出て来た。

平民の母親から生まれ、その母親に相応しく帝都で遊んでばかりいた小者だ。

同じような生まれの悪い駄犬ばかり連れて遊び歩き、俺が兵を起こした当日も帝都の外に出ていた。

暫くすると帝都に戻ってきたが、酒に酔っ払い、大半の家臣に逃げられ、俺が軟禁を命じると娼館に行きたいと駄々をこねた。

許可をすると、監視がいるのにそれを気にもしないで遊んでいる。

しかも、その代金は皇家へのツケにしてしまう有様だ。

優等生ではあった二人の兄達と違ってどうしようもない小者だと思ったが、この俺を騙すほどの芝居だったとはな。

そしてこの若造に、テレーゼと距離を置いていたバウマイスター伯爵がついた。

両者が距離を置いた時点で、俺は勝ちを拾えたと思っていたのにな。

バウマイスター伯爵と野良ネコとの相性は最悪で、俺は彼がその息子に手を貸すとは思えなかった。

結局ペーターは、野良ネコの死後に蜂起して帝都中枢の政権をいち早く掌握し、俺が帝都に押し寄せる前に軍備を整え、初めて俺の精鋭に大きな損害を与えた。

別働隊を任せていた、腹心のザウケンを討たれたのだ。

逃げ延びてきた少数の兵達に聞くと、彼はバウマイスター伯爵の魔法で首を刎ねられたそうだ。

あの若造が再び俺の邪魔をした。

ザウケンは俺の片腕だから安心して別働隊を任せていたのに、その彼を失うと軍勢を分ける事が難しい。

戦術の幅が狭まってしまうのだ。

「バウマイスター伯爵か。祟ってくれるな。魔族、奴はお前達の血でも引いているのか？」

あの若造と、王国の最終兵器もか。

あいつらは本当に普通の人間なのかと疑ってしまう。

「魔族と人間のハーフは一万年近く前にこの大陸から消えたのであるからして、可能性としては先祖返りであるな」

「先祖返り？」

「大昔に滅んだ、貴殿達が古代魔法文明と呼んでいる時代であるな」

「説明しろ」

魔族は何かを知っているようなので、俺は説明を求める。

今は、どんな情報でも得ておきたい。

「古代魔法文明時代には高度な魔法技術が発展していて、我が魔族の国とも交易をしていたのであるな」

「そういえば、お前は遥か西部から来たのであったな」

見た目は白いタキシードにシルクハット、モノクルとちょび髭が特徴のどこにでもいる中年紳士であったが、魔族は耳が長い。

奴は、いきなり俺の前に姿を見せた。

最初は俺を堕落させようとでもしているのかと勘ぐったが、奴に

物語の読み過ぎだとバカにされた。
何でも、魔族は考古学者なのだそうだ。

『ニュルンベルク公爵。貴殿の領地には貴重な古代遺産が大量にあるので、調査させて欲しいであるな』

正直なところ、俺にはこの男の本性が読めない。
裏に魔族の国がいてこの大陸の混乱を狙っているのか、単純に知的好奇心から地下遺跡がある土地の権限を持つ俺に近づいたのか。

それでも結果的に、俺は大量の古代文明の遺産を手に入れた。

爆発する魔物型のゴーレム、量産型のドラゴンゴーレム、そして『移動』と『通信』を阻害する巨大な装置。
他にも大量に手に入り、それらは反乱を起こすのに大いに役に立った。

『数はともかく、思ったよりも珍しい品物は出て来なかったのであるな』

本人は、その成果に少し不満だったようだが。

魔族は……こいつのもう一つ怪しい点は本名を名乗らない点だ。
だから俺は魔族と呼んでいるのだが、こいつはそれに文句も言わない。

気に入らない奴ではあるが、こいつは出土した品の修理、メンテナンスに協力してくれた。
何でも専門家ではないから製造などは出来ないが、簡単な修理とメンテナンスくらいなら出来るのだそうだ。

奴はニュルンベルク公爵領中の地下遺跡を探索させてやったお礼に、大ゴーレム軍団の稼働を助けてくれた。

『貴様は、やはり魔族の国の？』

『我が輩は密出国しているので、それは無いのであるな』

怪しい事この上ないが、奴は魔族で膨大な魔力を持っている。

『魔族は数が少ないのであるな。その代わりに、全員が魔法使いなのであるな』

魔族の魔力量は驚異的であった。

奴は、『移動』と『通信』を阻害する装置に定期的に魔力を補充しながら、出土品の修理とメンテナンスを行いつつ、一人黙々と研究を続けているのだから。

『魔族が本当に攻めて来ない事を祈るがな』

『魔族にも色々といるのであるな。中には、この大陸への進出を提案する者達もあるのであるな』

『進出だと？』

『魔族は、種族の限界に来ているのであるな』

ここ数千年で、魔族は子供が産まれ難くなっているらしい。

『少子化であるな。西部にある魔族の国は島とはいえ、亜大陸並に広いのであるな。戦争もないし、政治も安定している。なのに結婚

しない者は増え、生まれてくる子供は少なくなったのであるな。出生率が今にも1．1を切りそうなのであるな。ちなみに、ニュルンベルク公爵領は4を超えているのであるな』

出生率とか妙な言葉が出てきたが、それよりも魔族の『進出』の方が気になる。

言葉は便利だ。

例えそれが侵略だとしても、最初はそれで誤魔化す事も可能なのだから。

つまり、帝国の南進論者、王国の北進論者のように、魔族の国にも大陸侵略論者がいるというわけだ。

今は数が少ないのかもしれないが、魔族の国の少子化が進めばその意見が増していくかもしれない。

普通は逆だと？

バカな、戦争とは人間の本能に響くものだ。

戦争は嫌だ、駄目だと抜かす愚かな民衆も、自分や家族が戦死、負傷しなければ所属する国や領主の勝利に喜ぶ。

勝った方は、程度の差はあれ敗者を蹂躙、搾取する。

自分達の数の不足を、下等な異種族、人間を奴隷にして補うという考え方が出ても不思議ではない。

魔族は種の本能を取り戻すために、人間の住むこの大陸に攻めてくる可能性があるのだ。

俺はこの大陸を統べ、それを防ぐ必要があるというわけだ。

例え、この魔族を利用しても。

「話を戻すが、バウマイスター伯爵は先祖返りだと？」

「彼の魔力量は、魔族基準で言えば上級の下くらいなのであるな。まだ増えているのであるが、そうなると魔族基準でも上級の中以上になる可能性が高いのであるな。今の人間には無理であるから、古代魔法文明時代の人間の先祖返りと考えるのが妥当であるな」

「詳しいのだな」

「当時を実際に見たわけではないのであるが、古代魔法文明には魔法使いを人工的に増やす技術があったのであるな」

「何だと！　そんな技術があったのか！」

「一万年も前に滅んだ技術ではあるな」

さすがは本業が考古学者というだけはあって、魔族は古代魔法文明時代について詳しかった。

魔法使いの製造方法などという、とんでもない技術も知っていた。

「魔族の国は滅んでいないので、比較的資料が残っているのであるな。古代魔法文明は魔法技術が極端に進んでいたのであるな」

当時の古代魔法文明時代は、緩やかに結合した連合国家を成立させていた。

大陸中央にある本国は強大ではあったが、あまり政治的な不安も無かったので地方の小国家にある程度自由な統治を認めていたそうだ。

「特に、大陸最南端のアキツシマ共和国であるか。そこは、国民が統治者を選挙で選ぶのであるな」

「帝国も一応そうだが」

「帝国は議員しか投票できないのであるな。アキツシマ共和国は、十八歳以上の男女なら誰でも投票可能であるな。今の魔族の国と同じであるな」

「ふん。衆愚政治だな」

碌に政治も知らない民衆に政治家を選ばせる？
今の帝国議会でも愚かな議員が増えているのに、政治を混乱させるだけであろう。

「かもしれないのであるが、政治とは手段であり、実際に行う者の力量があれば政治体制はどうでもいいのであるな」

「考古学者、お前は政治学者も兼任か？」

「同じ大学の元同僚の受け売りであるな。話を戻すのであるが、魔法技術の発展によって、必要な魔法使いの数が増えたのであるな」

だが、そんな急に大量の魔法使いなど生まれるはずもない。
そこで、人工的に魔法使いを増やす研究が始まった。

「最初は苦戦の連続であったが、遂に見つけたのであるな。生物設計図の中に、魔力と魔法に関連するものを発見したのであるな」

「生物設計図？」

「この情報を元に全ての生物は成立しているのであるな。生まれた子供が両親に似るのは、これが原因であるな」

「待て。遺伝では魔法使いはそんなに出ない。むしろ全く関係ない」

遺伝で魔法使いが出るのであれば、とっくにこの世は魔法使いだらけであろう。

「難しい専門的な話になるので簡単に説明するのであるが、その生物設計図は極端な劣性遺伝要素なのであるな」

「劣性遺伝？」

「金髪と黒髪の両親から子供が産まれると、どちらが多いか？　それは、黒髪の子供であるな。つまり、金髪は劣性遺伝なのであるな」

なるほど、黒髪は優性遺伝か。

ならば、俺のミズホ人の抑え込みは正しいというわけだ。

あの連中を増長させると、帝国は内から食い滅ぼされるのだから。

「魔法使いの生物設計図は、極端な劣性遺伝子であるな。両親とも持っていないと遺伝しないのであるな」

「おい、魔法使い同士の子供でも魔法使いは生まれないぞ」

だから、もしそうなら世の中は魔法使いだらけであろうに。

「もう一つ、遺伝要素があるのであるな。これは『魔力具現化と増殖』に関連すると資料には書かれているのであるな」

「つまり、それが無いと魔法使いにはなれないと？」

「両方が無いと魔法使いになれないのであるな。片方だけだと、この大陸の人間ならば誰でも持っている量の魔力のみであるな。魔法使いの設計図は、意外と今の人間でも多数が持っているのであるな。試しに領民の髪を採取して調べたら二割はいたのであるな。統計学的に考えて、ほぼ平均であると思うのであるな」

統計学的にか……。

どうやら魔族の国とは、色々と技術や学問が進んでいるようだな。

「つまり、古代魔法文明が開発した人工魔法使いを作る技術とは、『魔力具現化と増殖』の生物設計を定着させる技術なのだな？」

「その通りなのであるな。魔族には必要の無い技術なので、もはや失われた技術であるな」

知っておれば、魔法使いを増産できたのに残念だな。

「それで、なぜバウマイスター伯爵が先祖返りだとわかる？」

「昔の資料に書かれていたのであるな。古代魔法文明時代に出現した人工魔法使いは、彼くらいの魔力を全員が持っていたと。あとは、貴殿からの情報を見たのであるな。彼の配偶者は全員魔法使いであるな」

「それがどうかしたのか？」

「全員がというのは、統計学的におかしいのであるな。結婚前にはそんな話は無かったと資料には書かれていたのであるな」

確かに、それはおかしな点だ。

だが、元々素質があって、結婚後に器合わせで魔法使いの才能が具現化したとは考えられないであろうか？

『聖女』と『暴風』と『破壊魔』以外の二人は中級レベルである。十分に貴重とはいえ、中級だから暫く気が付かなかったという可能性もあった？

いや、子供の頃の魔力検査は王国でも義務化しているはず。

確かに、奇妙な点ではあるな。

「もう一つ、昔の資料からわかっている事があるのであるな。両方の生物設計図を持っていても、それを刺激しないままだと死ぬまで魔法使いの才能に気が付かないのであるな」

「どういう事だ？」

「今の人間でも、両方の生物設計図を持っている比率はニュルンベルク公爵領の領民で八パーセント。これも平均値であるな」

「それにしては、魔法使いが少ない」

第一、それに気がつかぬようでは、何のために僻地の農村にまで判別用の水晶を支給しているのか、意味が無くなってしまうではないか。

つまり、一パーセントもないというわけか。

「判別用の水晶や器合わせで具現化する魔法使いの率は、古代魔法文明時代と変わらぬであるな」

「生物設計図を持っているのに、魔法が具現しない。最初は厳しい

修行などで呼び起させたようであるが、これは効率は悪かったようであるな」

厳しい訓練で魔法使いになれるのであれば、我がニュルンベルク公爵家諸侯軍の兵士で魔法が使える者が出ても不思議はないはずだ。

「色々と研究を重ねた結果、もう一つの生物設計図を発見し、三つを備えた人工魔法使いが生まれたのであるな。この人工魔法使いには大きな特徴があるのであるな」

それは、二つの生物設計図を持つ異性と子供を作ると、その子がほぼ百パーセント魔法使いになる。

次に、魔法が具現化しない二つの生物設計図を持つ者を刺激して魔法使いの才能を引き出せるのだと魔族は説明した。

「その結果、今までは魔法が使えないと思われていた者が魔法を発動させ、魔法を使える者でも潜在的な能力を引き出して魔力が増えたのであるな。これによって、古代魔法文明時代の人間は魔法使いを増やしたのであるな」

なるほど、それがあの大繁栄に繋がったというわけか。

「しかし、それとバウマイスター伯爵の先祖返りと……。魔族、潜在能力を引き出す因子とは何だ？」

「人間が魔族に勝るもの。その繁殖力を支える性欲であるな。快楽を伴うために、人間はそれで大量に増えて魔族よりも圧倒的に数が多いのであるな」

「戯言を抜かすな。魔族も同じだろうが」

人間と容姿に差が無いのだから、まさか卵を生んで増えるはずもあるまい。

そんな話は聞いた事が無い。

「近年の若い魔族は草食系などと言われて、恋愛や結婚に興味が無く、趣味や仕事に没頭する者も多いのであるな。政府の少子化対策は、常に空振りなのであるな」

高度な文明を持って生活に苦労しない分、生物としての活気が薄れているのかもしれないな。

ふん、どの国や種族にも悩みの種は尽きまじか。

それよりも……。

「元々因子を持っていたバウマイスター伯爵の嫁達が、彼との結婚生活で魔力を具現化、強化させたわけか。しかし、古代魔法文明時代の研究者達も悪趣味な……」

「そうであるか？　魔法使いを増やすのに一番手っ取り早い方法であるな。昔も魔法使いは厚遇されたがために、魔法使いになりたい女性や魔法使いを生みたい女性が人工魔法使いに近づく。人工魔法使いの方は、好みの女性を選び放題。男の夢というものであろう？」

「そうだな」

俺も男なので、その気持ちはわからなくもない。

「しかし、なぜバウマイスター伯爵にその因子が出た？」

「そこが謎であり、それを調べるのが学者や研究者の仕事であるな。

ただ、貴殿が見せてくれたバウマイスター伯爵に関する報告書は奇妙であるな」

「奇妙だと？　なぜだ？」

バウマイスター伯爵については、俺はかなりの時間と金をかけて調べさせていた。

あれほどの男が敵になるのか、味方になるのか？

どちらにしても、相手を知る必要があったからだ。

「俺の調査を否定するのか？」

「おかしいのは一カ所だけであるな。バウマイスター伯爵の魔力が具現化した時期。五～六歳頃と推定されると書かれているのであるな。これはおかしいのであるな」

「なぜだ？」

「人工魔法使いの因子が具現化すると、生まれた時点ですぐにわかるほどの魔力が備わっているのであるな」

「それは、彼の実家が田舎で調べる術が無かったからであろう」

「『人工魔法使いの虹色』と呼ばれていて、生まれた直後に虹色に光るのが普通であるな。まさか捨て子でもあるまいし、取り上げた産婆や家族が気がつかないはずがないのであるな」

「つまり、五～六歳頃のバウマイスター伯爵に何かあった？　その時期にたまたま才能に目覚めたのでは？」

全員が、生まれた直後に必ず才能に目覚めるという保証も無いではないか。

「貴殿、我が輩の話をちゃんと聞いていたのであるか？　生物設計図とは先天的なもので、後天的にいきなり出るはずがないのであるな」

なるほど、生物設計図だから生まれた時にはもうそれが決まっていると。

だから、人工魔法使いがあとで急に魔力に目覚めるという事はあり得ないというわけだな。

となると、どういう事だ？

「バウマイスター伯爵は、父親が四十を超えてから生まれたと聞く。大年増の正妻が産んだとされているが、その辺の端女に産ませたのを誤魔化した可能性もあるな」

貴族ではよくある話だ。

妻以外の女に産ませた子供を、正妻の子だと偽るのは。

なるほど、それなら納得がいくな。

母親が貧しい農民の娘なら、気がつかなかった可能性もあるというわけだ。

「念のために聞くが、急に生物設計図が変わる事はあるのか？」

「無くはないのであるな。ただ、今のこの大陸では不可能であるな」

「今は不可能？　どういう事だ？」

「それは、一万年前のあの時なら可能であったはずであるな」

一万年前、連合国家ながらも大陸を統一し、圧倒的な繁栄を誇っていた古代魔法文明の中心国家がいきなり原因不明の崩壊を起こした件であろう。
今よりも優れた魔法技術を有していたにも関わらず、この国はある日いきなり滅んだらしい。
帝国・王国双方の歴史・考古学者が、いまだにその原因を発見できていない謎の一つである。

「我が輩達魔族も万能ではないが故に、正確には古代魔法文明が滅んだ理由はわからないのであるが、大体はわかっているのであるな。昔に調査団も派遣して、資料も残っているのであるな」

「初耳だな。それは」

今まで考古学に興味など無いから聞かなかったのだが、それ以上にこいつにはこういう部分がある。
何かを聞いてもはぐらかし、ある時いきなり話してくれたりする。
学者だから気まぐれなのか、それとも後ろに魔族の国があるからなのか。

たまに頭にくる事があった。
下手に怒ってこの魔族の機嫌を損ね、それで話してくれなくなるのは困るので、今は下手に出ているのだが。

「簡単に言うと、傲慢から出た失敗であるな」

「失敗だと？」

「人工魔法使いによる魔法使いの増加で大量の魔力を扱えるように

なり、何か巨大な魔導装置の実験をしたようであるな」

「失敗して爆発したのか……」

「あとで現地に入った魔族の調査団によると、物凄い爆発であったようであるな」

ギガントの断裂はその時に出来たそうだ。

他にも首都とその周辺数百キロは消滅、大陸の全てを統治していた国家の中枢が一気に消えたのだ。

その後の混乱と破滅は容易に想像できる。

「常識では考えられない魔力が一カ所に集中し、それが爆発して大陸中に散ったのであるな。魔力の塊がへばり付いた場所は、大陸の痣、魔物の領域となったのであるな」

つまり、古代魔法文明時代以前には魔物の領域は無かったというわけか。

「魔物はどうなのだ？」

「通常ではあり得ない濃厚な魔力を体に通すと、生き物の生物設計図が変化する事があるのであるな。死んだり、奇形になって育たないものも多いのであるが、中には生き残って種として繁栄するものもいるのであるな」

それが、魔物の正体というわけか。

「領域のボスは？」

「その領域の最大魔力を内包してる存在であるから、それを倒すとその土地への魔力の過剰なヘバリ付きが無くなるのであるな。そうなると、中・小型の魔物はその土地で生き難いのであるな」

おいおい、両国のどの研究者でもわからない事をポンポンと答えやがって。

これだから魔族は油断ならないのだ。

「博識だな」

「専門家だからであるな。最近の魔族の若者は勉強しない者も多いのであるな」

「そういう愚痴を若い者に言うと嫌われるぞ」

「我が輩も、若い頃は年寄りに同じ事を言われていたのであるな」

この時点で歴史の真実がわかってしまったが、戦局の好転には繋がらぬか。

人間では俺しか知らない事実ばかりなので、多少の優越性はあるのだが。

「そうだ、バウマイスター伯爵の事を忘れていた。あの男はなぜ急に先祖返りした?」

「先祖返りは、あまり適切な言葉ではないかもしれないのであるな。第三の生物設計図は、極稀に定着技術なしで現化するのであるな。たまたまバウマイスター伯爵に出たというのが正解であるな」

「おい待て。それはおかしくないか?　古代魔法文明時代に固定化

と次世代への継承が可能になったのであろう。それならなぜ子孫が第三の生物設計図を継いでいない？」

「失われた固定化の技術でも、数百年ほどの固定が限界であるからであるな。固定化を用いないと、徐々に第三の遺伝子が子孫に継がれなくなるのであるな」

他にも、古代魔法文明崩壊後の混乱もあるのであろう。

多分、大陸の大半の土地が魔物の領域と化したはずだ。

可住領域を広げるために、第三の生物設計図を持つ魔法使いが多く動員されて魔物との戦いで死んだ。

こんなところであろうか？

「ふんっ、バウマイスター伯爵とその子孫は今後数百年は安泰か」

魔法に遺伝要素を持つ一族としてヘルムート王国で重用され、王国の更なる発展に寄与するというわけだ。

「そして、俺は最悪のタイミングで反乱を起こして帝国の国力を落としたか」

「歴史上ではよくある話であるな。気にしない方がいいのであるな」

「お前がそれを言うか？」

この人を小バカにしたような言動、本当に学者で政治になど興味が無いのか、それとも魔族の国の指示で俺を引っかけて反乱を起こさせたのか。

とにかく、この魔族の考えが読めなくて困ってしまう。

「それで、バウマイスター伯爵を討つのであるか？」
「出来たらな」
まさかな、魔法使いを増やす貴重な駒だぞ。
俺に付かせるか、捕える方法でも考えた方が建設的だ。
それに、お前ら魔族の事もある。
少子化で衰退中？
それが本当だという証拠がどこにある？
魔族に対抗するには、魔法使いが多い方がいいのだから。
「それで、潔く滅びるのであるか？」
「俺はそこまで善人じゃない。足掻くに決まっているだろうが」
とにかく今は、亀のように閉じ籠ってペーターからの攻撃を防ぐしかない。
もしかすると、奴が帝国の統治をしくじる可能性もあるのだから。
「ならば、アレを使うのであるか？」
「ああ。アレを使う。稼働の方は大丈夫か？」
「まあ、動かすくらいなら大丈夫であるな」
「ならば準備を進めてくれ。俺も準備を始めよう」
生き残るための準備か。

最初の大陸を統一する夢からは随分と遠ざかったな。
だが、今は勢力を残して明日に備える方が重要だ。
何しろ俺は、諦めが悪い男なのだから。

第百八話　巨大砲は男の浪漫？

「前方反乱軍の降伏を確認」

軍勢を進めていると、先行する偵察隊から進路上にいる敵軍の存在を報告される。

ただ、向こうはこちらに気がつくと戦闘もしないで降伏した。

「またかよ……」

「まただが、無視するわけにもいくまい」

もうこれで何度目かのフィリップの正論だが、これが最後なわけもないので困ってしまう。

『敵が降伏した』と、歴史書なら一行で済むが、これを処理する面倒臭さを本に書いておいてほしいものだ。

「わかっているけど、面倒だな……」

「あなたが、お顔を出さないといけませんしね」

そう、エリーゼの言うとおりで、お飾りで名目上の司令官でも別に仕事がないわけではないのだ。

「終わったらお茶の時間にしましょう。昨日、クッキーを焼いておきましたので」

「本当？　エリーゼが焼いたクッキー、甘さ控えめで美味しいんだ

よな」

エリーゼは、俺の好みに合わせてお菓子を作ってくれるのでありがたい。

早く降伏する貴族の言い訳を聞いて、楽しいオヤツの時間にしよう。

「それで、降伏した軍を指揮する貴族の名は？」

帝国の新しい支配者としてライバルであるテレーゼを強制引退させたペーターは、素早く体勢を整えてからニュルンベルク公爵に対して反撃を開始した。

『来年の春までには片づける』

そう宣言した彼は、支配下にある全ての領域から軍勢を集め、ジワジワとニュルンベルク公爵率いる反乱軍の領域を削り取り始める。

所属が曖昧な、西・東部の南部寄りの位置に領地を持つ貴族に『今の内に降れば、爵位と領地は保全しよう』と声をかけ、その大半を降らせる事に成功する。

ペーターは彼らの領地の位置を考えて、反乱軍側に付いた事を不問としたのだ。

その代わりに、彼らも兵を出してニュルンベルク公爵討伐軍に加わる事を条件とした。

幸いにして、ニュルンベルク公爵が彼らへの援軍などのフォローを行わなかったために、ほとんど戦闘は発生していない。
一部苛烈に抵抗した貴族もいたが、彼らは帝国軍によって討伐されるか、中には家族や軍勢を引き連れてニュルンベルク公爵に合流している者もいて、西部と東部は短期間で帝国軍の勢力下となっている。

続けて、先の討伐軍によって荒らされた南部領域北部の占領にも成功していた。
ここを領地とする貴族や領民達からすれば、帝国軍は自分達の故郷を荒らした敵でしかない。
当然抵抗も激しく、それでもペーターは復興を支援するなどの条件を提示し、硬軟織り交ぜてどうにか占領と補給体制の確立に成功する。

段々とニュルンベルク公爵が支配する南部領域が帝国軍の占領下に入り、既にニュルンベルク公爵領の一部地域も占領されていた。

南部を領地とする貴族は、降爵や領地の減少・没収を条件に降伏する者。
やはり家族や一部軍勢を連れてニュルンベルク公爵に合流してしまった者と、それぞれに対応が違う。

それでも、今までに発生した大規模な会戦や死闘に比べれば、そこまで大変というわけでもない。

南部領域を進む、王国軍軍人や一部傭兵で編成されたバウマイスター伯爵家軍は、隣で一緒に進むミズホ伯国軍と共に、前方に立ち塞がる小勢が降伏したのを受けてその処理に当たっていた。

「ええと……、誰の軍勢？」

「カシラー子爵の紋章じゃの」

相変わらずというか、元々外国人である俺が指揮するバウマイスター伯爵家軍には様々なワケ有りの人達が集まって軍を成している。

「よくわかるな」

「妾も、そこまで南部貴族に詳しくはないのじゃがな。カシラー子爵家の紋章はたまたま覚えておった」

「たまたまか。俺なんて、王国貴族ですら碌に名前を覚えていないのに」

「紋章官任せか？　別にそれでも構わないがの。第一、帝国も王国も貴族の数が多すぎるのじゃ」

バウマイスター伯爵家軍には、『暇過ぎるのも困り物じゃの』となぜかテレーゼが押しかけ参謀として付いて来ていた。

あの引退劇からさほど時間が経っていないので大丈夫かと思ったのだが、彼女はペーターに直接言って、こちらとの合流を決めたらしい。

『ヴェンデリンの軍に、帝国貴族に詳しい者を混ぜた方がいいか』

表向きはそう言って、あっさりとテレーゼの合流を認めている。

どうせ俺達がニュルンベルク公爵に合流するなどあり得ないし、こちらもミズホ伯国軍も現地での交渉という点では人材面に不安が

残る。

道案内は現地の人間を雇うとしても、反乱軍方の貴族や軍勢が降伏などを望んだ時の交渉をする人間がいない。

そこで、引退して一時は隠棲生活をしていたテレーゼに白羽の矢が立ったわけだ。

『使える者は何でも利用しないとね』

ペーターからすれば、テレーゼが帝国軍の下で働いているという事実が重要なのかもしれない。

周囲からすれば、彼女がペーターの軍門に完全に下ったと見られるからだ。

俺達やミズホ伯国軍と行動を共にしているのは、さすがに帝国軍本軍で働くとギクシャクしてしまうからで、一部にテレーゼが俺達と組んでペーターに反抗すると心配する者達もいるようだが、さすがにそれは心配し過ぎであろう。

ここでまた戦況を混乱させて戦争が長引いてしまったら、俺は今まで何のために苦労したのかわからなくなってしまう。

ペーターもそんな事は気にしていない。

いや、あえて気にしないフリをして自分の豪胆さをアピールしているというわけだ。

『本音で言わせてもらうと、人手が足りないんだよね。テレーゼ殿は軍勢を率いなくても、出来る仕事は多いし』

これが、ペーターの語った本音だ。

テレーゼは、自ら敵兵を斬った事もあるので自分の身くらいは守

れるし、指揮、軍政、交渉と何でも器用にこなせる一流の人材である。

軍勢は任せていないが、今もこうして役に立っているというわけだ。

「フィリップ公爵殿？」

降伏した小勢を率いている貴族は、テレーゼを見て目を丸くさせた。

まさか、彼女がこんなところにいるとは思わなかったのであろう。

「色々とあって引退した身じゃ。して、カシラー子爵殿は何を望む？」

「これまでは地理的な条件のためにニュルンベルク公爵殿に従うしかありませんでしたが、今の彼は極端な防衛戦術に出て内部に引っ込んでしまいました。そこで、帝国の実権を握られた摂政ペーター殿に縋るしかないと……」

そんなに簡単に所属を変えていいのかと思ってしまうが、これも小領主の悲哀であった。

下手に片方に義理立てなどをしても、それは滅亡の原因でしかないのだから。

「降伏するのがいいと妾も思うがの。無料というわけにはいかぬぞ」

東西部の貴族とは違って、南部貴族には降ればそのまま許す事を認めるわけにはいかなかった。

「やはり、何かを差し出さないと駄目ですか？」

「領地の一部か金銭が普通かの。あとは、軍勢を整えて帝国軍に合流する」

軍勢が消費する食料などは自腹なので、小領主にはかなりの負担になる。

それでも、帝国軍によって滅ぼされるよりはマシであろう。

可哀想だとは思うが、これも小領主の宿命であった。

「領地の縮小は勘弁して欲しいので、何とか金銭で交渉を纏めるしかないですな。分割払いは可能なのでしょうか？」

「そこは、要相談じゃの。支払いが滞るような事がなければ大丈夫であろう」

貴族にとっての領地の広さとは、世間にわかりやすい力のバロメーターであった。

それを削られるというのは、例え収益が落ちないにしても簡単に容認できる話ではない。

それでも、今回の戦乱で減封・改易された貴族は多数存在していたが。

「時に、ペーター殿は独身でしたよね？」

「カシラー子爵殿、気持ちはわからないでもないが、それは止めておいた方がいいと忠告しておくぞ」

俺と同じ年のペーターは独身であった。

なぜか浮いた話題は一切存在せず、彼は普段から傍に置いている魔法使いエメラを寵愛している。

ペーターがエメラを口説き、それを彼女が冷たく否定する場面ばかり見てるが、それでもエメラはペーターの傍を離れないので、まあそういう関係なのであろう。

そういう事を細かく詮索するのは野暮というものである。

「摂政殿は、新政権下での自分の立場を高めるために娘や妹を差し出そうとする貴族を快く思っていないからの」

「それは、怒りを買うとそのまま改易とか？」

「いや、そこまではないと思うが、よくは思われないのは確かじゃの」

ペーター自身は、父親である前皇帝が正妻の一族に配慮して帝国の政治をおかしくしたのを直接見ている。

俺は、娘を差し出すと言っても碌な結果にはならないとカシラー子爵に忠告しておく。

「わかりました。何とか罰金と従軍で済ませて貰えるように交渉してみます」

「妾が手紙を認めておこう。役に立つのかは不明じゃが、一切の抵抗や戦闘がなかった事は書いておく」

「ありがとうございます」

カシラー子爵は俺とテレーゼに深々と頭を下げてから、ペーターが指揮する本陣へと向かった。

「テレーゼが交渉役で助かったわね」

「そうだな。俺にはこういうのはわからない」

護衛として俺の横に控えていたイーナが、カシラー子爵の後姿を見ながら安堵の溜息を漏らす。

既にフィリップ公爵でもなく、単身で俄か参謀扱いのテレーゼはイーナ達に『もう殿や様を付けるな。敬語もいらぬ』と言って、それを実行させていた。

「さすがは元公爵様ですね。テレーゼさんは」

「苦労して嫌な貴族と沢山顔を合わせて経験を積んだだけじゃ。大したものではない」

エリーゼだけは『さん』を付けるが、これは彼女の癖のようなものなのでテレーゼも気にしていない。

「でもさ、戦闘なんて無くてこんな交渉ばかりだよね」

「戦闘が無いに越した事はない」

「ううっ……、ヴィルマは言う事が真面目だね」

「『神速の狙撃手』として、多くの狙撃を行ってきたヴィルマだからこそ言える至言じゃの。好き好んで人など殺せるものではない」

「それもそうだね」

ヴィルマだけではない。

ルイーゼも投石で多くの兵士を倒しているし、量産型のドラゴンゴーレムの破壊にも貢献している。
戦争だから仕方なしにしている事で、これから早く狩りの生活に戻りたいと思っているのであろう。

「妾はここで功績を挙げて、バウマイスター伯爵領への移住を勝ち取らねばな」

「テレーゼさんは、本当にバウマイスター領に移住なさるので？」

同じく癖でテレーゼを『さん』付けで呼んでしまうカタリーナが、確認するかのようにテレーゼに問い質す。

「名誉伯爵の年金は送ってもらえばいいし、帝国と王国の交流が復活すれば里帰りついでに取りに行ってもいいの。何にせよ、ペーター殿が実権を握った帝国に妾など不用じゃ。彼は妾を殺したくないから引退させたのであろうが、帝都に残留してそこに妙な連中が接近した場合、不本意ながらも妾を始末するという手を取らざるを得なくなる」

「それは考え過ぎでは？」

「カタリーナよ。権力者というのはそういうものじゃ。大のために小を犠牲にする事もある。逆を行う権力者というのも問題じゃからの。妾はペーター殿の人間性は信頼しておるが、同時に権力者としての能力も信頼しておるのでな」

テレーゼの皮肉の籠った言葉に、カタリーナは思わず返答に詰まってしまう。

「次期ヴァイゲル家当主の母親である、カタリーナが気にする事でもないか。というわけで、妾はバウマイスター伯爵殿から移住の許可を貰うために、こうやって働いておるわけじゃ」

「本当に移住するのか？　大分気候とかも違うぞ」

身一つで、数千キロも離れた土地に移住する。

俺としては、本当にそれでいいのかと心配になってしまうのだ。

「暖かいから、衣装代がかからぬかもしれぬの。今帝都の屋敷にいるメイドや警備兵は全員短期間の雇用だと伝えてあるのでな。バウマイスター伯爵領内で雇う予定なので、妾は身一つで向かう」

「ペーターとうちの陛下次第かな？」

「それならば安心せい。必ず許可は出るからの」

どういう根拠かは知らないが、テレーゼは自分のバウマイスター伯爵領移住が認められると確信しているようだ。

「妾の事は後でもどうにでもなる。それよりも、早く進撃しないでいいのか？」

「そうだった。ミズホ伯国軍が待っているんだった」

再び両軍の進撃が始まるが、今度は何も現れないで暇だった。

防衛戦闘でも仕掛けてくるのかと思ったが、本当にニュルンベルク公爵は戦力を一カ所に纏めているらしい。

「バウマイスター伯爵が前にニュルンベルク公爵家の従士長を討っ

ただろう？　あの影響もあるな」

ニュルンベルク公爵が己の右腕と公言していた従士長のザウケン、彼がいなくなりニュルンベルク公爵は一万人以上の軍勢を預けられる人材を失ってしまった。

これはフィリツプの考えであったが、あながち間違っているとは言えないであろう。

「地の利がありますからね。別働隊での奇襲や輸送路の襲撃など、それを率いるはずだったザウケンの死は痛いはずです」

「それで抵抗が少ないのか」

一部あるが、それは放置された貴族や領民達で、しかも前の帝国軍の悪行の被害者が大半だ。

彼らは再び土地を荒らされ全てを奪われると思い、帝国軍に対して絶望的な抵抗を行っている。

ペーターの説得で降だる者も多いが、人間とは戦争で受けた被害をそう簡単には忘れられない。

『ニュルンベルク公爵も帝国も信用ならない！』と言って、過酷なゲリラ戦を行う者も存在していた。

「それは少数ですし、ニュルンベルク公爵は選びに選んだ精鋭に大量の資金や食料などと共に防衛を行うでしょう。それを破るのは、ペーター殿でも至難の業かと」

追い詰めるまではさほど苦戦しないが、追い詰めてからが困難というわけだ。

クリストフの推論にペーターが気がついていないはずはないので、

今は懸命に対抗策を練っているのかもしれない。

「何にしても、もう少しで帝国の内乱も終わるはず。終われば、俺達は王国に戻れるというわけだ」

「兄さん、生徒の教育はどうなのです？」

「初歩くらいは教えたかな」

現在ハルカと共に先陣に立っているエルを教育して来たフィリップは、この仕事もあと少しだと感慨深げな表情を浮かべている。

確かに、この短期間でエルが千人ほどの軍勢を率いる姿が様になりつつあった。

指揮官としても教育者としても、フィリップが優れている証拠だ。

「初歩だとまだまだなのかな？」

「バウマイスター伯爵、あとはそっちで何とでもなる。というか、ここまで教えたら、あとは時間が経たないと指揮官としては熟成されないぞ」

「ワインみたいな事を言うんだな」

「ワインみたいなものだ。若い天才指揮官とかは別として、普通の指揮官には老練さとかも必要だからな」

指揮官として上にいるのだから、普通は若造よりは中年や初老の人の方が経験を積んでいて安心というわけだ。

会社で上司が自分よりも圧倒的に若いと、モヤモヤして心配して

しまうのと同じ感覚なのかもしれない。

「ある程度の軍司令官などは、五十歳前後で働き盛りという感じかな？　エドガー軍務卿がそんな感じだろう？　アームストロング伯爵でもう何年か先、彼の場合はそれを補う筋肉があるけどな」

エドガー軍務卿は見たままで、アームストロング伯爵の体の大きさと引き締まった筋肉は、軍指揮官として決して無駄な要素ではないものらしい。

確かに、中年太りのオジサンが指揮官よりは兵士達の安心感を得られそうだ。

「そういう加齢と共に現れる才能もあるから、ワインと似ているわけだな。最初から駄目なのを熟成しても腐るだけという点も似ている」

フィリップは、最初にその指揮下に入ったレーガー侯爵の事を言ったのであろう。

「ニュルンベルク公爵は若いけど」

「だから、若くてしてそういう才能を持つ者もいるさ。俺は実際に顔を見た事が無いが、鷲のように眼光が鋭くて、それに見つめられるとその命令に逆らえないという風に感じてしまうそうだな。それも指揮官として稀有な才能だ。実際に能力もあって、あの男は例外というわけだ」

「ペーターもなのか？」

「あの摂政殿は……あの人は軍人ではない。ギルベルト殿に一任し

て涼しい顔をしているだろう？　それが出来るトップなどそうはいないさ。あれを、将の将と呼ぶのさ」

「帝国の若い才能ねぇ……」

残念ながらニュルンベルク公爵はお陀仏の予定であったが、残ったペーターが家柄などに囚われずに人材を登用していけば、内乱で衰えた国力の回復も意外と早いのかもしれない。

「ただ、一番性質が悪いのはバウマイスター伯爵かもしれないな」

「俺が？　なぜ？」

「もし大負けをしても、自分さえ生き残ればいくらでも再起可能だからだ。敵に回すのに、こんなに面倒で嫌な敵はいない」

「そう思うのなら、俺に敵対しない事だ」

褒められてるのか、それともゴキブリ並だと思われているのか。
正直、少し複雑な心境なので強気に答えておく。

「それは十分に承知している。なあクリストフ」

「敵対する力も財力も無いので、そんな事はしませんね」

そのまま、両軍による進軍は続く。
たまに降伏する軍勢の処置と後方移送を行い、占領した町や村を軍政専門の部隊に任せて前に進む。
目の前には晩秋の風景が広がり、両軍はまだ一度も戦闘をしていないので、みんなノンビリと歩いていた。

「今までの苦戦って何だったのかしら？」

イーナが不思議に思うのも無理はない。

既に、ニュルンベルク公爵領にも大分入り込んでいた。

それでも抵抗は皆無で、占領した村や町の住民は素直に帝国の支配下に入っている。

働き手の男性が大分徴兵されていたが、それでも家族を助けて欲しいとか、侵略者に反撃などという行動を取る者は皆無だ。

それが余計に怖く感じるが、彼らはこう思っているのかもしれない。

『前回と同じく、どうせ侵略者達はニュルンベルク公爵によって討たれる』と。

「バウマイスター伯爵、ニュルンベルク公爵の館と中心街が無血で占領されたそうだぞ」

最新の報告を持って姿を見せたミズホ上級伯爵は、誰にでもわかるほど渋い顔をしていた。

「どこが防衛拠点なんです？」

「館から南方に五キロほど。岩山ばかりのクライム山脈だそうだ」

「山岳砦ですか？」

あのニュルンベルク公爵が、無条件で館を捨てるはずがない。

どこかに籠って防衛戦を行うのだと思って、その場所をミズホ上級伯爵に聞いてみる。

案の上、館近くにある山岳地帯に籠って防戦を行うようだ。

「防衛施設のメインは地下にあるらしい。元々広大な地下遺跡があって、その施設を利用しているようだ」

「他を全て放棄して、そこでの防衛に全てを賭けているわけですね」

既に、大半の帝国領土はペーターの手に落ちている。

国力比で勝ち目の無いニュルンベルク公爵は、防衛戦闘で帝国軍に出血と補給不足を生じさせて撤退をさせようとしているのであろう。

「非情の決意とも言えるな」

「となると、そこを攻略する戦闘になるわけですね」

どの程度の戦力で籠ったのかは知らないが、攻撃側は最低でも戦力が三倍以上は無いと勝てないと聞いている。

これを落とすのは、間違いなく至難の技となるはずだ。

「それで、ペーターはどう考えているのですかね？」

「まずは定番の、蟻の出る隙間も無いほどに囲む……。は、不可能か……」

山脈の地下にある遺跡を利用した防衛施設なので、よほどの大軍で囲んでもどこかに穴があるはずだ。

ニュルンベルク公爵領の領民達がえらく従順なのは、密かに食料などの補給や情報伝達を行う地下組織が既に結成されているからとも言えた。

「勝ち目はあるんですか？」

「さあな？　俺達は急いで合流しないでもいいそうだ」

間違いなく、もう俺達に功績を挙げさせないためであろう。

既に戦いは終盤であり、あとは生粋の帝国貴族達だけでニュルンベルク公爵を討伐するというわけだ。

「向こうが働かなくてもいいと言うのだから、今日はこの辺で適当に野営でもしようではないか」

「そうですね」

場所はニュルンベルク公爵家の屋敷とクライム山脈の中間点にあり、適当に開けた平地もあるので両軍で野営を行う事にする。

「野営の準備だ！」

王国軍組千人ほどを率いるエルによる指示の出し方も、大分様になって来たようだ。

「あとは、帝国軍が面倒で犠牲も多い地下要塞攻略戦を行ってくれるんだろう？　もうこれ以上は犠牲を出さずに王国に戻れた方がいいさ」

全軍の野営準備を統率しながら、フィリップも無理にこれ以上は戦おうとは思わないようだ。

最初は八千人いた王国軍先遣隊も、紆余曲折の後に四千人と少ししか残っていない。

半分近くが帝国で屍となり、故郷である王国に生きて戻れなかったのだ。
戦争とは、いかに悲惨であるかの証明であろう。

「あっそうだ。今日は宴会でもしましょうか？」

ただ、いつまでも悲しんでいるのも建設的では無い。
この世界の人達のメンタルは、地球の人達よりも強いようだ。
クリストフが、主だった面々による宴会を計画していた。

「一応戦地なので飲酒はなしで、食事をよくしようかと思います」

「いいのかなぁ？」

「少しいい食事を出すくらいですよ。降伏する反乱軍の処理で前に出てみんな疲れていますし」

ニュルンベルク公爵の館までは先鋒だったのに、クライム山脈の地下要塞の存在が知れたら帝国軍によって後方に下げられたという結果になったので、みんな拍子抜けしてしまったのかもしれない。

「兄さんが、奇襲や破壊工作などの防衛体制をちゃんと整えていますから」

「ならいいか」

ペーター達帝国軍の方が、急いで来なくてもいいと言っているのだ。
もしかすると後で出番があるかもしれないし、今の内に寛いでおく事にする。

「食事会みたいなものか？　酒がないのは残念だがな」

「某は、料理がよければ十分なのである」

ブランタークさんと導師の賛成も得て、設営した野戦陣地の本部で食事会が行われる。

酒は出せないが、ミズホ上級伯爵が食材を提供したので食事は俺にも馴染みのミズホ料理が多かった。

基本和食なので、これは悪くない食事会だ。

「季節は晩秋、ミズホ伯国では『実りの秋』と言って食べ物が美味しい季節となる。特別に旬の材料を取り寄せたから堪能してくれ」

「こうなると、急いでクライム山脈まで急がなくてよかったな」

元々帝国の内乱だ。

最後くらいは自分達だけで締めくくると言うのだから、任せてしまえばいい。

俺達は、目の前にある大量の料理に目を輝かせていた。

「サツマイモ、クリ、カボチャ、米も新米、サンマ、カキ、サケ、イクラ、そしてマツタケもあるぞ」

ミズホ上級伯爵は、相当気合を入れて食材を集めたようだ。

日本とほとんど同じ秋の食材がプロの調理人達によって調理され、みんなの前に並んでいた。

「ミズホ上級伯爵殿。このキノコは美味しいのであるか？」

導師はマツタケを焼いた物を指差し、その味をミズホ上級伯爵に聞いた。

「我がミズホ伯国では、大変に高価とされるキノコだな。外国人にはその価値がわからない者も多いが」

「特徴的な香りであるな。味も悪く無い」

導師なら何でも美味しく食べてしまいそうだが、マツタケを気に入ったらしい。

一人で何十本も食べていた。

「導師、高いキノコらしいから遠慮しろよ」

「ブランターク殿、こういうものは豪快に食べると美味しいのである。それに高いとは言っても、一本百万セントもするわけでもなかろうて」

「そうだな。そちらの貨幣で言うと、一本五十セントから百セントくらいだな」

日本のスーパーで見た外国産の物よりも遥かに高い。

これはやはり、全部ミズホ伯国産の弊害なのであろうか？

などと、元は庶民の俺は考えてしまう。

「そのくらいであれば、食べたくなったら飛竜を一匹倒してくれれば沢山食べられるのである」

「そんな事が出来る奴は、導師と極少数だけだよ……」

その気になれば幾らでも稼げる導師に相応しい発言かもしれない。
ブランタークさんは、少し呆れているようであったが。

「このキノコ、そんなに高いのか……。実家で秋に取ったキノコとは全然違うんだな」

エルは、マツタケを恐れ慄きながら口に入れていた。

「あれ？　普通に美味しいけど、そこまで凄い物か？」

「マツタケが高価なのは、その香りゆえですから。味はマイタケ、シメジとかよく言いますね」

ハルカは、エルに解説をしながら自分は他の旬のキノコを使ったキノコ鍋を食べていた。
タケオミさんも同じで、この兄妹はさほど裕福な家の生まれではないのでマツタケなど食べた事が無いのかもしれない。

「ハルカさんの言う通りに、キノコ鍋美味しいですね」

「これを食べると秋が来たという感じじゃの」

「テレーゼさんは、毎年食べているのですか？」

「フィリップ公爵領は隣じゃからの。キノコ鍋は取り寄せやすいのじゃ。美容にいいと女性に評判だし、マツタケ以外はそれほど高くはない」

テレーゼは、フィリップ公爵領内の女性にキノコ料理が人気であるとエリーゼに説明していた。

「ただ、キノコは判別が難しいのでな。たまに買うのをケチって自前で採ってきたのはいいものの、毒キノコを食べて死ぬ者がいて、それも風物詩かの？」

「おい……」

そんな風物詩は嫌だと俺は思ってしまう。

「そういう人は、やっぱりいるのね……。うちの道場の門下生で笑い茸に当たって、一週間くらい笑い続けていた人がいたわね。稽古の間中もずっと笑っていて不気味だったわ」

「ボクの知り合いは、幻覚を見てそれと懸命に戦ってたね」

キノコは大陸中で採れるので、平民やイーナとルイーゼの実家レベルやそれに近い家だと自分で採りに行く事が多い。

無料で食べられるのはいいが、種類の判別に失敗して最悪死に至るのはこの世界でも同じなようだ。

「魔法で『キノコ鑑定』とか出来ないかな？」

試しにマツタケに魔力を送ってみるが、何も起こらなかった。

「ヴェンデリンさん。まずはキノコの関する知識を得ないと、魔法での判別は難しいのでは？」

「確かにそうかもしれないな」

俺は、カタリーナの意見に思わず納得してしまう。

「ミズホ伯国は、シイタケ、シメジ、ナメコ、マイタケなどは栽培技術が確立されているのでな。他のキノコと間違えて中毒になどならぬよ」

キノコの人工栽培技術まで持っているとは、ミズホ伯国侮りがたしである。

やはり俺は元が庶民なので、実はマツタケよりもシメジやマイタケの方が美味しいと思うからだ。

シイタケは、これは干せば出汁として使える。

購入はしてあるが、これも俺の食生活には必要であった。

「お魚。美味しい」

「サンマを焼いた物が美味しいなぁ」

秋といえばサンマであろう。

さすがはミズホ伯国とでも言うべきか。

オロシ大根と、カボスらしき青いかんきつ類も一緒に付いていた。

「ヴェル様、これは付け合わせみたいな物？」

「付け合わせとは違うかな？　オロシ大根はショウユをかけてから身と一緒に食べると脂っこさが抜けて美味しいし、この果物は絞って汁をかけるんだ。そうすると、これもサンマがサッパリとした風味で食べられる」

「さすがはヴェル様、よく勉強している」

勉強しているというか、前から知っているだけであったが。

「なるほどそうやって食べるのであるか。妙に酸っぱいとは思ったのであるが……」

「導師、カボスをそのまま食べたのですか？」

「種も多いし、妙だとは思ったのだ」

導師はカボスをそのまま食べてしまい、その酸っぱさで顔を萎めていた。

「だが、食えない事もないのである」

「ですが、無理にカボスを食べなくても……」

「あははっ、バウマイスター伯爵はミズホ文化の吸収が早いではないか。もしかしたら、前世はミズホ人かもしれないな」

ミズホ上級伯爵は、宴会に出した料理を気に入って貰えて嬉しそうだ。

こうして秋の夜更けに、俺達は一時内乱を忘れて楽しい時間を過ごしたのであった。

「様子見で攻め込んだら負けちゃった」

「いや、負けちゃったじゃないと思うが……」

翌朝、両軍はゆっくりとクライム山脈に向かって包囲陣に加わろうとしたのだが、急用だとペーターから伝令が来て、急ぎ現地へ向かう羽目になっていた。

ペーターがいる帝国軍本陣横に着陣してから挨拶に向かうと、新しい帝国軍首脳部は大慌てで全軍に指示を出していた。

ギルベルトさん達も忙しいようで、俺達に軽く挨拶をしてから作業に没頭したままだ。

「あれ？　男爵様は？」

「負傷者が多いので、治癒魔法で救援に向かった」

スラムの主であった男爵様は、ペーターから本当に男爵に任じられていた。

今は法衣扱いで、スラムの住民有志を諸侯軍として率いている状態であったが、内乱が終われば、俺達が主を討伐した魔物の領域を領地として与えられる事になっている。

結局彼は、自分がどこの貴族家の出かを話さなかった。

相当に嫌な思い出があるのと、どうやらその実家はニュルンベルク公爵への過度の服従でペーターから改易されてしまったらしい。

改易された途端に男爵様に家族がタカろうとしたらしく、彼は家族を元家族に認定して記憶から消去する事にしたようだ。

本人が嫌がって話さないので、その辺の事情を知るのは本人とペーター達だけなのであろう。

「あなた、私も治療に向かいます」

「そうだな。頼む……。俺も行くか」

「私も軽傷者くらいならば」

「某も行くのである」

四人で急ぎ負傷者の治療に当たる。

負傷者の人数は多かったが、既に半分以上の治療を終えていたので俺達が助けに入ると一時間もしないで全負傷兵の治療は終わっていた。

治療を終えて戻ると、ペーターが昨夜の軍事行動について説明してくれる。

「謎の地下遺跡を利用した地下要塞だからね。様子見で攻撃させたんだけど……」

その地下要塞には、強固な牙が大量に設置されていた。

例のドラゴンゴーレムが装備していた無属性のブレス魔法を吐く装置の小型版が各所に設置されていて、ギリギリまで引き寄せられた帝国軍はモロに反撃を食らってしまったらしい。

「死者は三千二百七十四名。負傷者は四千百十一名。泣けてくる損害さ」

「俺からは何とも」

この地下要塞を落とせば内乱終結なので、これ以上は俺達に功績を挙げさせず帝国軍だけで対応するのは政治的には間違っていない。

それに、俺達が攻め寄せたからといって勝てる保証も無いのだから。

「のうペーター殿、様子見にしては犠牲が多くないかの？」

「テレーゼ殿、そこは功名心に逸った貴族がいたというわけさ」

後発で帝国軍に加わった貴族、元は反乱軍に組していた貴族達と、これが最後の戦いなのでペーターにいいところを見せて功績を稼ごうと無理をしてしまったようだ。

前進を声高に叫んで、自分も戦死してしまった者も数名いたらしい。

「この地下遺跡は思ったよりも厄介なようだね」

「地元住民からの情報によると、元は古代魔法文明時代の巨大地下遺跡だったそうで」

ペーターの傍に控えているエメラが、俺達に聞かせるように地下要塞の情報を開示していた。

「また古代魔法文明の遺産かよ」

ブランタークさんが愚痴る。

今までに、ニュルンベルク公爵が発掘した魔道具によって散々な目に遭って来たからであろう。

「魔法使い複数による火力集中で穴を空けて突入。この方法では駄目なのであるか？」

導師の作戦は、一見大雑把に聞こえるが実は最も効率がいい。
全軍で囲んで徐々に包囲を狭める作戦など、下手をすると余計に損害が増える可能性があるからだ。

「それがね。試したんだけど……」

ペーターはエメラに視線を送る。
現在の帝国では、彼女が一番多くの魔力を保有している魔法使いのはずだ。
その彼女と残っている帝国有数の魔法使い達が共同して、大規模魔法を地下遺跡に向けて発射したのだそうだ。

「それで、どうなったんです？」

「防がれちゃった」

「そんなバカな……」

いくら内乱で魔法使いの数が減っているとはいえ、複数で攻撃して全くダメージを与えられないはずがない。
ブランタークさんは、地下遺跡を守る『魔法障壁』のおかしさについて疑問を感じていた。

「試してみてよ。特にヴェンデリンに頼みたい」

「伯爵様、試そう。俺と導師とカタリーナの嬢ちゃんも協力する」

「わかりました」

早速四人で地下遺跡のあるクライム山脈に向かう。

どうやら相当な大軍で攻め寄せたようで、まだ回収されていない死体が散乱している。
負傷者の収容を優先したのであろう。

「向こうは撃ってきませんわね」

「こちらも防げるから撃つだけ無駄だと思っているのかも」

四人だけで麓に立っているのに、地下要塞側からは何の反応もなかった。
こちらがしようとしている事を掴んで、『やれるものならやってみろ』とほくそ笑んでいるのかもしれない。

「四人でやっていきなり破れたらどうするんだろう？」

「それはペーター殿が考える仕事だな」

「左様、ただ四人で魔法を集中させればいいのである」

「私、火系統の魔法は少し苦手なのですが……」

それでも四人共上級以上の魔力を持つ魔法使いだ。
高密度に収束させた『火弾』を作り、それを四連続で同じ場所に命中させる。
ヴィルマがレインボーアサルトの頭部を撃ち抜いたのと同じ戦法だ。

「いくら展開されている『魔法障壁』が強固でも、同じ場所に四連続で『高収束火弾』を食らえば……」

と思ったのだが、『高収束火弾』は山脈の岩肌に命中する直前で突如発生した『魔法障壁』によって弾かれてしまう。

「ヴェンデリンさん、物凄く強固な『魔法障壁』ですわね」

「撤収だな」

「そうですわね」

これ以上無理をして魔法を放っても魔力の無駄遣いであろう。

俺達は、とっととペーターがいる本陣へと引き揚げた。

「あれ？　諦め早くない？」

「全然、あの『魔法障壁』を普通の魔法で破るのは無理」

「ヴェンデリンでも駄目かぁ……」

俺はきっぱりと断言する。

あそこまで強固な『魔法障壁』を張るには、何か特別な方法を使うしかない。

ならばそれを破るには、何か特別な方法を用いるしかないのだ。

「大量の魔法使いを動員しただけじゃないの？」

「いや、それだと効率が悪い」

いつ攻撃されてもいいように、二十四時間常に監視を行う必要があるからだ。

「ああ、そうか。監視だけじゃなくて常に魔法発動の準備をしないとね。物凄く非効率だ」

「だから、何かしらの手を使っているはずなんだ」

『移動』のキャンセルと『通信』の遮断する装置に、師匠の木偶を発生させる装置もあった。

これは地下遺跡から発掘された古代魔法文明時代の遺産だと聞いたので、これと同じような発掘品の数々を利用して地下要塞を守っているのであろう。

「古代魔法文明時代の遺産か。俺達はよく関わるよなぁ」

俺達の冒険者デビューに付き合ってドラゴンゴーレム二体と戦闘を行い、ヘルタニア渓谷でもゴーレム軍団と戦って、この内乱でも自爆型ゴーレムを戦っている。

魔道具職人でもないブランタークさんからすれば、昔の魔道具には関わりたくないのであろう。

「ヴェンデリンは、何か方法を思いついたのかな？」

「思いついたというか、結局は強固な『魔法障壁』を打ち破るしかないわけで」

「それはそうなんだけど、その方法が問題なんだよ」

魔力量がトップ3に入る俺、導師、カタリーナで魔法をぶっ放したのに、『魔法障壁』はビクともしなかったのだ。

何か特別な手を使わないとこれを討ち破るのは難しいであろう。

「多少準備に時間はかかるけど、手がない事もない」

「教えて。教えて」

俺は、そっとペーターに耳打ちをするのであった。

「勇猛果敢なニュルンベルク公爵もーーー。遂には防戦一方なのであるなーーー」

「お前は常に発言が失礼だな」

「全て事実なのであるな」

ここは地下遺跡を利用して作られた地下要塞の最深部で、俺ニュルンベルク公爵の他は誰も入れない決まりになっているこの地下要塞の中心部だ。

とはいえ、この部屋には特に重要なものはない。

ただ、大量の本や資料、これまでに使用した発掘品のレポートを読みながら魔族が椅子に座って寛いでいるだけだ。

「吸着魔法陣の改良型は大成功であるな」

地下要塞に装備されたブレス発射装置、強固な『魔法障壁』、『移動』と『通信』を阻害するキャンセラーの維持は、全てこの魔族の魔力を用いて行われている。

この部屋の天井と壁に魔力を吸収する魔法陣が書かれていて、こ

の魔族から吸収した魔力が地下要塞の維持に使われる仕組みだ。

この魔族のおかげで、帝国軍の連中は手も足も出ずに一方的に叩かれたというわけだ。

俺も見ていたがその力は圧倒的で、気に食わないがこいつがいれば我々は十年は立て籠もれるはず。

十年ひと昔ともいう。

占領した我がニュルンベルク公爵領の領民達もそう簡単には懐かないはずだし、内政・外交で失敗して俺に出番が訪れる可能性もある。

今は盤石のヘルムート王国でも、何か混乱が起こるかもしれない。

この世に、何の影響も及ぼさない出来事などないのだ。

あのバウマイスター伯爵は、今回の帝国内乱で他者を圧倒する戦果を挙げた。

彼が王国に戻るだけで、あの国には混乱が発生する可能性がある。

あの澄ました名君面をしたヘルムート三十七世や、その目立たない王太子がバウマイスター伯爵に嫉妬して排除を目論む可能性があった。

それに、あのバウマイスター伯爵の事だ。

素直に粛清などされまい。

本人が混乱の拡大を望まなくても、周囲が彼を守ろうと王国に盾突く可能性がある。

そこまで事態が進めば、さすがにバウマイスター伯爵でも反旗を翻す覚悟をするであろう。

あの男とて、若くして死にたくないはず。
そう、守っていれば俺にも再びチャンスが巡ってくるのだ。

「色々と小賢しく、政治的な思案に耽っているのであるな」

「まあな。俺は小者だから、色々と考えないと生き残れないのだ。お前はなぜ俺を助ける？」

「我が輩が発掘後に修理した様々な古代魔法文明の遺産を、貴殿は実戦に使ってレポートなども貰ったからであるな。分析や、他の発掘品のメンテに研究、この地下遺跡にはまだ調べていない場所も沢山あるのであるな。それをしていれば、十年の月日などあっという間なのであるな」

俺のためではなく、あくまでも考古学者である自分の知識欲を満たすためか。
いや、こいつは上手く誤魔化しているが、実は魔族の国に情報を流して大陸進出派と手を繋いでいるのかもしれない。

今のところは外部との連絡は取っていないようだが、この魔族相手に油断などあり得ない。

「このまま何も無ければ何年でも籠城可能ではあるが、敵もさる者、何か考えているのでは？と、我が輩は愚考するのであるな」

「考えているだろうな」

ただ、今は強固な『魔法障壁』で時間を稼げている。
この間に、共に籠る家臣と兵達に、その家族が長期間の籠城で士気を落とさない体制作りが最優先だ。

それには、この地下遺跡をもっと改築してこの中に日常を作るのが一番であろう。

「結局のところは、我が精鋭が細かな変化にも上手く気がつき対応すれば大半の難事は防げる。今は、地下町の建設が最優先だ」

「長期間籠るのに、日常を創設するのであるな。しかしながら、よくこんな無謀な籠城について来たのであるな」

大きなお世話だ、この魔族が。

俺がこの兵団を作るのにどれだけ苦労したと思うのだ。

まあ、この魔族はムカつくが使える。

利用し尽して、今は籠城に備えるとしよう。

「なるほど、強力な魔砲を用いてその『魔法障壁』を破るのだな」

「ええ。そのためには、ミズホ上級伯爵とカネサダさんの力が必要です」

「私は、刀鍛冶で得た技術を新型魔砲に用いれば良いわけか」

「はい。今回の魔砲はとてつもない大きさで、大量の魔力を篭めて発射した特殊砲弾の打ち出しで砲身が割れるのを防ぎたいので」

「うーーーん。確かに難事だな」

俺がペーターに示した案は単純明快だ。
『魔法障壁』が強固ならば、それよりも強い威力の砲で打ち破ればいいじゃないという作戦であった。

ヒントは、ヴィルマがレインボーアサルトを狙撃した時に利用した巨大な狙撃銃である。
今回はそこまで照準精度に拘らなくてもよく、要は膨大な魔力で砲弾を発射した時に割れない砲身を作るのが一番の難事という事になっている。

この手の金属加工技術は、他のファンタジーな世界ならドワーフさんがいるのかもしれないが、この世界にはいないので技術力のあるミズホ人に任せるのが一番というわけだ。

「ミズホ上級伯爵殿、ヴェンデリンの要求に応えられそうな魔砲はあるのかな？」

「一応設計図だけは……これです」

ミズホ上級伯爵は、ペーターに一枚の設計図を見せる。
その設計図には、かなり巨大な魔砲が詳細に描かれていた。

「これを本当に作るの？」

「このくらい大きくないと、計算上では例の『魔法障壁』を破れません」

「こんなに大きな大砲で弾を撃ち出すと、最悪砲身が爆発しない？」

「します。この試作品の試験で、過去には死者も出ていますので。

発射時の衝撃に耐えられずに砲身が破裂して職人に犠牲が……」

「大丈夫なの？」

「バウマイスター伯爵には解決案があるそうですよ」

「ヴェンデリンは、金属加工の魔法も使えるのかな？」

これ以上悩んでいても仕方が無い。

今は、『魔法障壁』を破るためにこの魔砲を作るのが先決だ。

「あの『魔法障壁』を破れないと攻め入れないから任せるよ」

ペーターの許可も得たので、俺はミズホ上級伯爵と協力して巨大な魔砲の製造に取り掛かるのであった。

「不可能だと言われた巨大な魔砲、不足する砲身の強度を得るための金属素材、正確に真っ直ぐ砲口を切削する方法、巨大な特殊砲弾の製造、砲弾を飛ばす魔力を蓄える魔晶石の連結と、周辺装置の開発。多くの困難が男達を襲うが、彼らはそれを乗り越えていく」

「ヴェル。正しいとは思うけど、どうして言い方がわざとらしいんだ？」

早速『大魔砲』の製造に入るので、前世で子供の頃に見た某〇ロジェクトX風のナレーションにしてみたのだが、そんなものは知らないエルには不評であった。

これは、放送するに値する難事だと思うのだが。

「ただ、この大魔砲製造の困難さがよくわかるのは確かだな」

ミズホ上級伯爵は、俺のナレーション風の発言に納得するように首を縦に振っていた。

「まず最初の困難は、砲身の素材である金属の加工だな」

カネサダさんは、早速第一の問題を口にする。

「丈夫な金属を作るですよね？」

「エルヴィン殿、ただ丈夫な金属ならば全部オリハルコン製にすればいいわけだが」

「いや、そんなにオリハルコンを集められないでしょう」

設計図によると、砲身だけで直径が一メートル近くある。

砲身の長さは二十メートルほどで、これを全てオリハルコンで作る事は不可能であった。

大陸中のオリハルコンを全て集めても、量が不足しているのだから当然であろう。

「それで、どうするんですか？」

「合金を作る」

「合金？」

「高品質の鋼を造り、それに微量のミスリルとオリハルコンを混ぜるわけだ」

ミズホ上級伯爵は、エルに強度の高い合金の作り方を説明する。

「そこで、カネサダさんの経験と知識が生きるのですね」

「いや、エルヴィン殿に評価して貰えるのは光栄だが、私には無理だな」

肝心のカネサダさんは、その合金作りではあまり役に立たないと断言する。

「幾つか問題があってな。まず、合金の強度を均一化するために鋼も均一した強度が必要だし、ミスリルとオリハルコンを混ぜる時にも材料に偏りが出てはいけない」

刀一本分ならともかく、巨大な魔砲の砲身である。

これの材料を均一に鋳溶かしてスを作ってはならず、刀一本分の素材ならともかく通常の作り方ではそこまで巨大な鋳物を作る技術はないそうだ。

「えっ？　じゃあどうするんですか？」

「バウマイスター伯爵なら作れるであろうな」

「確かにそれはあるかも」

エルが俺に視線を送る。

集めた金属で純度の高いインゴットを魔法で作れるし、磁器作り

でも粘土の成分調整を魔法で行った。
合金の成分調整も、やったことはないが出来なくもないと思う。

「初めての試みだから、まずは練習しないと……」

俺は杖を取り出してから、大量の鉄素材を鋼に変えるところから始める。
確か、丈夫で粘りのある鋼には少量の各種金属類が混じっていて、それはタングステンだったり、クロムとかニッケルであったと思う。

鉄材と一緒に鉱石の類も置いてあって、それを『探知』で探ると微量ではあるが採取できた。
合金の素材なので、それほど量はいらないはずだ。
あとは炭素、これも混じっていたはずだが、日本の鉄鋼メーカーは特殊鋼の配分比率を公表していない。
企業秘密なので当然だが、おかげでどの程度混ぜればいいのかわからない。

更に、それに加えてオリハルコンとミスリルまで混ぜるのだ。
地球にこの二つの金属は存在しないので、正直どうやって配合比率を知ろうか迷ってしまう。

「一応、大昔の文献があるのだが……」

ミズホ上級伯爵が見せてくれた文献の一部には、古代魔法文明時代にミズホ人の先祖が製造した鋼よりも頑丈な特殊合金の配合比率が書かれていた。

「失伝している技術だな。その配合率通りに作っても、なぜか成功しないのでな」

それはそうであろう。
特殊な炉でも使えば可能であろうが、魔力燃料の反射炉に毛が生えたような炉では鉄に不純物が混じって成功するはずがない。
材料を均等に混ぜるという条件も、成功を阻害している。
もし完成しても、少しでもスが入れば強度不足で使えなくなるであろう。

「バウマイスター伯爵、大丈夫かな？」

「試行錯誤します」

とにかく魔法で極力鉄から不純物を抜き、その重さを計って他の金属の配合率を決める。

「というか、成功の基準がよくわからないんだけど」

帝国の所有する貴重なオリハルコンとミスリルを持参したペーターが、もっともな質問をミズホ上級伯爵にしていた。

「文献には、鋼、オリハルコン、ミスリルが決められた分配比で加減よく均等に混じると、一瞬だけ青白い光が発生する。この状態で製造された合金を『極限鋼』と呼び、多目的な物の材料として最高の性能を発揮すると書かれておりますな」

「成功の目安があるのなら安心だ。失敗の度に、貴重なオリハルコンとミスリルを供出させられるのかと思った」

「いや、材料はもうこれ以上は使わないさ」

炉で作るとなれば失敗もあるが、魔法で製錬する以上は失敗してもまたやり直せばいい。

それに、オリハルコンとミスリルは鋼の重量に比例した量だけでいい。

それよりも問題なのは、古代魔法文明時代でもタングステン、炭素、クロム、ニッケルなどの認知度が低く、材料の鋼にどれだけ含めればいいのか文献に書かれていないのだ。

「（その辺は全部試行錯誤だよなぁ）」

繰り返し、配合比率を細かく変えて何千・何万通りも試行錯誤する必要があるであろう。

「こんな複雑な合金の配合試験を一日中ですか。私には不可能ですわ」

様子を見に来たカタリーナが、話を聞いただけで諦めてしまった。

彼女も鉄くらいは収集して現金にしていたそうだが、あまり品質がよくなく高く買ってもらえなかったそうだ。

魔法使いによる鉄などの収集は、個人によって品質に差が出る。

不純物の方が多くて鉄鉱石よりもマシ程度の値段でしか買い取って貰えない人や、師匠のように出身孤児院の財政を支えられるレベルの人もいる。

いかに、自分に合ったイメージで不純物を取り除くかがポイントなのだ。

俺の場合は、なるべく鉄の原子が理路整然と並び他の原子を外部に排出するイメージでやっている。

他の金属も同じで、だから俺の作る金属インゴットは品質がよか

った。
こうなると、学生時代の授業も役に立ったというわけだ。
「ヴェンデリンさんは、地味にこういう魔法が得意ですわね」
「あーーーはっは！　伊達に未開地で一人修行はしていないさ」
「修行にはなったのでしょうが、なぜかあまり凄いとは思えませんわね……」
カタリーナがそう思う理由は簡単だ。
俺と同じで、ボッチよりも子弟ネットワークが凄いブランタークさんの方が凄いと感じてしまうからだ。
「ブランタークさんは、今日も先生役を？」
「ええ」
彼ほど指導が上手な魔法使いはそういない。
そのせいか、ペーターの頼みで大量の新人魔法使いの面倒を見ていた。
ある程度熟練した帝国の魔法使いが内乱で消耗したので、その補充のために下は七～八歳から上でも十二～三歳の魔法使いの卵達が集められ、帝国軍内で下働きをしながらブランタークさんが指導を続けていた。
『この中に、第二のバウマイスター伯爵がいるといいのである！』
『導師、あまりに無茶な修行は駄目だからな！』

『なぜであるか？　この年齢の頃にはバウマイスター伯爵は……』

『伯爵様は、滅多にいない例だからだな』

彼らの指導に最近は暇そうな導師も加わり、俺と同じように鍛えようとしてブランタークさんから釘を刺されているそうだが。

「配合比率を百分の一パーセント単位でズラしていって、大量の配合パターンを虱潰しにしていく」

「それが可能なのは、魔力が多いヴェンデリンさんだけですわね」

既に大まかな配合と成形は終わっている。

ミズホ上級伯爵が準備した石製の特殊な台の上に、直径一メートル、長さ二十メートルの砲身が乗っかっていた。

「それにスを作らないように、金属を均等に配分するイメージを忘れないようにしながら配合比を少しづつ変えていく……」

同じ作業の繰り返しというか、見た目には両手に杖を持ちながら砲身の素材に魔法を連続してかけているだけである。

一日中なので、夕方には大半の魔力を使い果たして寝るだけであった。

「根気よく続けるわね」

「ボクには一番向かないタイプのお仕事だね」

翌日のお昼、エリーゼからのお使いで昼食を持参したイーナとルイーゼは、砲身の前に座る俺に話しかけてくる。

「配合パターンはその気になれば無限大にあるからな。多少の許容範囲はあるはずだ。でなければ、いくら古代魔法文明時代でも製造できるはずがない」

許容範囲内に入れば、砲身は一瞬だけ青白く光る。

俺はそれを目指して根気よく魔法で成分調整を続けていくだけだ。

「もしかして、前に戦ったアルフレッドさんの影響もあるの？」

「あるな」

一見地味だが、この魔法を繰り返すと前に師匠に言われた『コントロールの雑さ』を直す練習になる。

師匠よりも遥かに大量の魔力を持ちながら苦戦した俺に対する試練とも言える。

「でも、ブランタークさんが言っていたわよ。いくら天才のアルフレッドさんでも、今のヴェルくらいの年齢の時は全然大した事はなかったって」

「自分も、アルフレッドさんに同じ注意をしたんだって」

魔力の多さで注目はされていたが、やはり若い魔法使いは魔法のコントロールが甘くなる。

当時はブランタークさんも若手だったので、年嵩の魔法使いから同じような注意を受けたのかもしれなかった。

「どちらにしても、これは完成させないと地下要塞に侵入できないから。俺はただ挑むのみさ」

今は、とにかく砲身の素材を完成させるだけだ。
ただそれだけで、毎日を過ごしていく。

「ヴェル様、お弁当」

「ありがとう、ヴィルマが発射・照準担当だって聞いたけど」

「レインボーアサルト討伐の実績を買われて」

「そうか、頑張れよ」

「うん、頑張る」

大砲と同じ扱いの魔砲なので細かな照準は必要ないのだが、大型の試作型狙撃魔銃での経験と、それを使った時に同じ場所に二度も銃弾を当てた実績を買われたそうだ。

「砲架や発射装置周りの製造も始まっている」

この大魔砲の運用には、多くの周辺装置が必要だ。
砲を支える強固な砲架に、照準機、発射装置、膨大な魔力を溜めておく魔晶石、これは一つでは間に合わないので複数を連結するそうだ。
ヘルムート王国では、巨大魔導飛行船に用いようとして失敗した技術なのでこれも困難が予想された。

他にも、高性能の冷却装置が必要となる。

「ヴェル様が作った、弾の研磨も始まっている」

これも、タングステンなどで製造していたが、俺の成形だとまだ凸凹や大きさに差があるようで、複数の職人が丁寧に研磨をかけている状態だ。

このように、大魔砲造りには多くの人達が関わっている。

なので、失敗は許されなかった。

「ルイーゼも動員されるんだっけ？」

「補助魔力供給係としてね。ボクにも頑張れと言わないと駄目だよ」

「ルイーゼも頑張れよ」

ルイーゼは、ヘルタニア渓谷でのロックギガントゴーレム戦で自分の魔力量の数倍もの魔力を拳に込めて技を放った。

その特技を生かし、魔晶石経由での魔力供給を補佐する役目を負っていた。

「訓練で変な線をもって立っているけど、実はあまり苦労もしてないね」

他の魔法使いが魔力を溜めた魔晶石を用いて拳に限界まで魔力を溜め、それを謎のコードで大魔砲に送り込む。

連結魔晶石からの魔力と合わせて、大量の魔力を一気に爆発させて大口径の特殊砲弾を撃ち出すというわけだ。

当然、普通の魔砲の砲身素材では破裂してしまう。

俺が作る『極限鋼』の出来にかかっているというわけだ。

「ヴェル様も頑張って」

「頑張ってね」

「おう頑張るぜ」

それから一週間、細かい配合比率の調整は進んでいたが、なかなか砲身は青白く光らない。

近くでは、段々と砲架や周辺装置が形になっていた。

「あなた、大丈夫ですか？」

「古代に失われたオーパーツの再現とは、ヴェンデリンも大変じゃの」

今日は、エリーゼとテレーゼが弁当を持って姿を現していた。

「エリーゼは、救護所は大丈夫なのか？」

「はい。最近は戦闘も無いのでそこまで忙しくないですから」

地下要塞が強固な『魔法障壁』で覆われているので、ただ周囲を包囲しているだけで戦闘などない。

たまにニュルンベルク公爵の支援者や密偵が侵入を試みて、小規模な戦闘が発生するだけだそうだ。

「その程度なら、帝国の魔法使いでも何とかなるからの。それに……」

「それに何です？」

「若い兵士達が、エリーゼの治療目当てにわざと擦り傷やら切り傷を作ってきおっての」

聖女様に治療されたいと、わざと傷を作って救護所に並ぶ事態になったそうだ。

「気持ちはわかるけど……」

「気持ちはわかるか。ペーター殿も同じ事を言っておったの」

俺と同じ年の男なので、綺麗なエリーゼに治療されたいという気持ちはわかるらしい。

だが、貴重な魔力の無駄遣いになるので、『その程度の怪我で救護所に並ぶな！』という通達を出したそうだ。

救護所には、ニュルンベルク公爵領への宣撫活動もかねて、地元住民には無料で治療を行うと宣伝している。

彼らへの治療が、わざと怪我をした兵士達によって邪魔をされては堪らないというわけだ。

「あとは、導師も激怒しての」

『我が姪に邪な感情を抱くとは！　そんなに怪我をするのであれば、某が治してやるのである！』

わざと傷作って来た連中は、全員導師に抱き付かれて地獄を見たそうだ。

「そんなわけで、意外と平穏じゃの。ヴェンデリンが大魔砲の素材

を完成させないと、戦況が動かぬ」

「平穏ですけど、大規模動員をしている帝国軍の方が痛手ですね」

「エリーゼの言う通りじゃな。軍は動員しているだけで金と食料を消費するからの」

ニュルンベルク公爵は、帝都から奪った財宝と食料を抱えて強固な『魔法障壁』に守られて籠城戦をしている。

間違いなく、時間を稼いで帝国側の消耗を待っているのであろう。

「懲罰で兵を出しているような貴族に不満が溜まると危険ですか」

「ニュルンベルク公爵と示し合わせて、夜襲でもかけられたら大変じゃ」

そんなわけで、俺は急いでこの大魔砲の素材を完成させないといけないのだ。

「もう四万五千七百八十二回目ですけどね」

ある金属含有率の百分の一パーセントの増減、こんなパターンを根気よく丁寧に続けている。

果たして答えはいつ見つかるのか？

正直少し飽きてきたところであったが、ある組み合わせで砲身の素材を再構成すると一瞬だけ砲身が青白く光った。

「やった！　成功した！」

「あなた、やりましたね」

「やったーーー！」

古代魔法文明時代に失われた合金の完成に、俺はつい嬉しくて二人に同時に抱きついていた。

「これは予想外……じゃが悪くないの」

俺に抱きつかれたテレーゼは、満更でもない顔をしていた。

だが、彼女はやはり生まれ持った大貴族である。

すぐに真面目な顔になり、俺に小声で耳打ちする。

「今の炉では製錬できない失われた合金か。ヴェンデリンクラスの魔法の精密さが必要じゃが、詳しい含有比率がわかれば、全く出来ないわけでもないか」

「テレーゼさん？」

「これから世話になるからの。そなたの夫に忠告じゃよ」

テレーゼは、そっと俺に小声で話しかける。

「その合金の含有比率は、ペーター殿やミズホ上級伯爵に漏らすなよ。その合金の製造で、そなたの子孫代々が飯を食えるかもしれぬ」

「ミズホ上級伯爵には、古い資料を見せて貰った恩がありますけど」

「鋼の条件付けが曖昧な資料じゃ。でなければ、ヴェンデリンが何日も試行錯誤するはずがない。鋼に交じっている他の金属の含有率を秘密にして、『資料通りでした。ありがとうございます』だけ言

っておけ。お礼は丁寧にの。何しろ、ヴェンデリンは大貴族じゃからの」

テレーゼの忠告は、まさに大貴族に相応しいものであった。

「どうせ、お礼を言うどころではないがの」

確かに、『極限鋼』の配合比率は複雑であった。

オリハルコンとミスリルは資料通りに混ぜておけば問題ない。

だが鋼には、クロム、ニッケル、ケイ素、タングステン、炭素などが混じっている。

この配合比率が書いておらず、俺は何日も試行錯誤する羽目になったのだ。

「ヴェンデリン、成功したって？」

「遂に、古代魔法文明時代の万能金属『極限鋼』が！」

ペーターとミズホ上級伯爵が転がるように飛び込んでくるが、すぐにテレーゼの予想どおりの発言をする。

「それで、『極限鋼』の詳細な配合比率は？　やっぱり、我々が認知していない金属とかがあるのかな？」

「バウマイスター伯爵、その配合比を五千万リョウで売ってくれないか」

純オリハルコンと純ミスリルよりは強度が低いが、兵器にも使用可能な『極限鋼』の製造方法を手に入れようと俺に押し寄せてきたのだ。

「ヴェンデリン、売ってくれないかな？」

「オリハルコンとミスリルの配合比の資料を出したのはうちだから、教えてくれると嬉しいのだがな」

テレーゼの予想どおりであった。

『極限鋼』の強度があれば、高性能な魔銃や魔砲のみならず、従来の武器や防具も簡単に強化可能であったからだ。

「いや、こういう技術は秘密なので」

「ええーーーっ！　売って欲しいな」

「通商の便宜ならいくらでも検討するぞ」

「はあ……」

あまりの迫力に、俺は先にテレーゼから釘を刺されていてよかったと思っていた。

でなければ、強い押しに負けて『はい』と言ってしまうところであったからだ。

「大魔砲の完成と運用が成功したら改めて交渉しよう」

「バウマイスター伯爵、また大量に高級食材を持ってくるからな」

何とか『極限鋼』の配合比を手に入れようとする二人を見送っていると、テレーゼが意味ありげな笑顔を浮かべながら俺に言う。

「皇族だの、大物貴族だのは本当に大変よな。引退できてよかったと思うわ」

俺は、思わずテレーゼの発言に納得したかのように首を縦にふってしまうのであった。

「砲身素材が完成したならば、そこに砲口を彫る私の仕事だな」

完成した砲身素材の前で、カネサダさんが気合を入れた格好で現れる。

新しい作務衣に着替え、後ろに立つ二名の弟子が三方の上に塩とお供えを載せて彼に従っていた。

「この砲身の素材は一本のみ。失敗しても作り直せばいいのであろうが、初めからそれを考えていたのでは成功も難しい。素材は一本しかないつもりで進める」

カネサダさんは、完成した砲身の前で一礼してから弟子達に三方の上に載った品を砲身の前に供えさせる。

そしてすぐに、砲身の中心点を探す作業を始めていた。

これをしくじると、砲身を切削する作業に失敗してしまう。

工作機械などないので、彫るのは全て手作業だから、失敗するとますます完成に遠ざかる。

失敗すれば切腹くらいの気持ちで、砲身の中心部を探っているようだ。

彼の緊張感がこちらにまでビシビシと伝わっていた。

「ここだな」

カネサダさんが中心点に印を付けると、今度は後ろに立つ弟子から大型のノミとハンマーを受けとりその体からは想像もつかないパワーとスピードで削り始める。

「ええっ！　手で削るの？」

工作機械とは言わないが、何か魔道具を使って削るのかと思ったのに、まさか手でノミを振るって削るとは……。

しかも、カネサダさんの本職は刀鍛冶のはずなのに。

俺は、超一流のミズホ職人の凄さを肌で感じていた。

「しかも、あの砲身は『極限鋼』なのに」

オールオリハルコン製よりは劣るが、鋼よりも圧倒的に硬度が上の素材なのだ。

それを削るとは……と思ってノミを見ると、それはオリハルコン製であった。

「魔砲の砲口を削る工作魔道具はあるのですが、『極限鋼』ですと強度不足でして……」

補助をしている弟子の一人がそっと俺に事情を説明してくれる。

「手で削るとなると、師匠にしか出来ません」

カネサダさんは、刀鍛冶だけではなく金属成形の名人でもあるそうだ。
ノミ一本で、この大砲身を削るというのだから凄い。

「どのくらいかかるのですか？」

「そうですね。師匠は二週間を予定しています」

エリーゼの問いに、若い弟子は答える。
同時に照準機、魔晶石連結装置、冷却装置などの製造と設置もあるし、最終的には完成した砲身との組立作業もある。
大魔砲自体の完成は三週間後を予定していると、その若い弟子は説明していた。

「カネサダさん、大変そうだな」

一度も削り間違えが許されない条件下で、カネサダさんは一心不乱にノミとハンマーを下ろし続ける。
大まかに終わった場所を、もう一人の弟子が『極限鋼』で作ったノミで削って加工面を綺麗にしていく。

もうすぐ冬なのに二人は滝のような汗をかき、時おり塩を舐めながら水を飲んでいた。

「大変であるな」

様子を見に来た導師が、カネサダさんを見ながら呟く。

「完全な手作業だからな」

ブランタークさんも姿を見せるが、彼は周辺装置を製造している職人達の様子を見て来たらしい。
俺に、進捗状況を教えてくれる。

「照準機はそれほどの精度は必要ないし、大型だから順調だそうだ。冷却装置も、ヴィルマの嬢ちゃんが使った大型狙撃魔銃のものを改良しているから問題はない。一番梃子摺っているのは魔晶石の連結だな」

帝国の所有していた大型魔晶石の大半は、今はニュルンベルク公爵が地下要塞内に持ち去っている。
強固な『魔法障壁』を含む地下要塞の保持に使われている可能性も高く、これを討ち破るためにペーターは準備できる限りの魔晶石を集めていた。
これに魔力を満タンに入れ、全て繋いで一気に砲弾を撃ち出すというわけだ。

「やはり、王国が失敗したのと同じ連結部の加熱に悩んでいるようだが、これは期限までに何とかするそうだ」

「補助のルイーゼは？」

「こっちは、ルイーゼの嬢ちゃんが順調だから問題ない」

ルイーゼの自身の数倍の魔力を拳に溜めて撃ち出す技を応用し、拳に溜めた魔力を導線で送り出して補助動力にする。
技術的には、魔力を伝達する導線を作るのに少し苦労しただけで、ルイーゼ自身はもう本番まで仕事はないそうだ。

「原理は簡単なのに大変であるな」

砲身は『極限鋼』製ではあるが、弾は前装式でライフリングなども削っていない。
新式の魔砲と魔銃には彫られているのだが、無くても計算上は威力に問題ないと今回は見送られていた。

後装式にしたが、強度不足で砲身が爆発した。
ライフリングの切削に失敗して、砲身を駄目にしたというリスクを避けたのだと思われる。

「ヴェル、お昼御飯よ」

「わかった」

カネサダさんがおにぎりを食べ始めたところで、俺達にもイーナが食事だと呼びにきていた。

「そんなにする事はないですけど、魔力の補充で疲れますわね」

みんなで昼食を食べていると、大魔砲で使用する大量の魔晶石に魔力を補充しているカタリーナが少し退屈そうだ。
魔力を補充すると、他の魔法関連の仕事がほとんど出来なくなってしまうからだ。

「それは、俺達も同じだし」

大魔砲製造における砲身素材製造を終えた俺も、あとは残りの魔力を魔晶石に込める作業のみを行っていた。

あとは、イーナやエリーゼと共に王国軍組に関わる書類の整理だ。

「最近、やっと書類仕事に慣れたな」

「そうかな？　ハルカが半分以上やってない？」

「それでも、前よりは出来るようになったぞ」

ルイーゼからの指摘に、エルは億面もなく答える。

確かに、以前に比べれば相当な進歩であった。

「大魔砲を打ち込んで『魔法障壁』を破壊するんだよな？」

「そうだけど」

「一度壊しても、すぐに『魔法障壁』が復活しないのか？」

事情に詳しくない人でこういう疑問を感じている人は多いのだが、ちゃんとそれについてはペーターも考えている。

「あの強度の『魔法障壁』が破られ、それをまた張るとなると膨大な魔力が必要となるからな」

それに、大魔砲は連射ができるように準備している。

発射して『魔法障壁』を破り、新たにニュルンベルク公爵が張らせた『魔法障壁』をまた破壊する。

この繰り返しで大量の魔力を消耗させて、遂には『魔法障壁』を張れない状態にしてしまうわけだ。

「あの質量と強度の弾が命中するんだ。地下要塞にも被害が出る」

『魔法障壁』が張れなくなる頃には、山腹とその下の地下要塞施設はズタズタのはずだ。
防衛側も混乱するはずで、その隙に全軍で突入という作戦になっている。

「その際には、俺達も突入するからな」

「俺が指揮する部隊と共にだろう？　フィリップさんから聞いたよ」

エルとハルカが指揮する王国軍組千名ほどと、ブランタークさん、導師、エリーゼ達も同行する。
標的はニュルンベルク公爵ではない。
あんな反乱者のクビなど、ペーターに任せておけばいいのだ。
それよりも、あの装置の破壊をしなければならない。
それも、二度と再生不可能なぐらいにバラバラにだ。

「俺も装置の破壊には賛成だな」

「どうしてそう思うんだ？」

「内乱を起こしたニュルンベルク公爵は役に立っていると思っているけど、互いに足ばかり引っ張られて、かえって損をしていないか？　あの装置」

「実際、エルの言う通りなんだよな」

クーデターを起こした当初に、標的を混乱させたくらいであろう。
あとは、どの勢力も損ばかりしてるように俺も思うのだ。

「ニュルンベルク公爵の軍勢の大半は侵入する帝国軍の相手で忙しいだろうし、俺達と千人もいれば十分だろう」

「そうだな。必ずしも大軍が有利という場所でもないし。ハルカさんも手助けしてくれるから大丈夫だろう」

エルが微妙にノロけているような気がするが、何より先にあの装置を破壊したい。

下手に残っていると、ペーターが変な欲をかく可能性があるからだ。

「ミズホ上級伯爵もだな。装置の回収を狙うかも」

「それはありますね。使えるかはともかく……」

「研究用の素材としては欲しいでしょうからね」

ハルカとタケオミさんは、その口調からミズホ伯国には装置が渡らない方がいいと思っているようだ。

「『ミズホ伯国のために装置の確保を！』とかはないの？」

「いえ。あんな装置を持っていたら、帝国ばかりか王国にも目を付けられてしまうので」

ハルカは、あの装置を厄介のタネだと思っているようだ。

「私は、他の重臣の方々から完全破壊を確認するように言われています。魔法技術研究のための資料なら、他にも一杯地下要塞から出てくるでしょうし」

そんなわけで、ミズホ伯国の妨害はないようだ。

「ヴェンデリン、今戻ったぞ」

そして、いつの間にかどこかに行っていたテレーゼも戻ってくる。

「テレーゼさんは、どこに行っていたのですか？」

「少し、ペーター殿と相談じゃ。例の装置についてな」

テレーゼの返答に、エリーゼ以下全員の視線が集まる。

「妙に見られておるの」

「あの装置をペーターが欲しがっている？」

「うん？　ヴィルマもそう考えたか。念のためにペーター殿に相談に行ったのだがな。彼もいらぬと言っておったぞ」

理由は幾つかあるようだ。

まずは、帝国は内乱で疲弊した。

王国との争いは暫く避けたいところだが、あの装置を確保している事が知られると王国に出兵論が出て来る可能性がある。

「その装置を量産されて、戦争に使われるかもしれない。王国北部を混乱させた装置を堂々と保持している帝国は危険だ」

「そんなところじゃの。それを出兵の理由にされてはかなわぬ」

次は、やはりあの装置の性能自体が原因となっている。

「敵だけ『移動』・『通信』魔法を無効化できるなら有用じゃが、そんな事は古代魔法文明時代でも不可能じゃった。膨大な魔力を使うようだし、ペーター殿に言わせると何のためにあるのかわからないそうじゃ。下手に将来の有効活用のためとか言い始める輩が増える前に、王国貴族であるヴェンデリン自ら破壊した方が、のちの交渉でもよい材料になるであろうな」

「そう言われるとそうかもしれない」

とはいえ、今はあの装置に一番乗りして木っ端みじんに破壊するのみだ。

戦争にまでなった両国の講和は、これはうちの陛下とペーターに任せればいいであろう。

「それにしても、テレーゼはそういう事を考えつくのが早いな」

「元フィリップ公爵じゃからの。妾は戦後にはバウマイスター伯爵領で悠々自適の日々だし、その前にお世話になる人のためにひと仕事というわけじゃの」

テレーゼは軽く言うが、この手の交渉になるとエリーゼでも不可能であった。

もしペーターがいなければ、やはり彼女が女帝だったのであろう。

「ペーター殿は、能力もやる気もある。妾は、能力はともかくやる気は薄かった。それだけの事じゃ。気にするな、ヴェンデリン」

大魔砲製造開始から一か月後、遂にその巨大な魔砲は完成していた。

砲身の先は地下要塞に向かい、周りは多くの職人と技術者で賑わっている。

これを可能な限り発射してから、いよいよ全軍による突入作戦が始まるのだ。

「さて、完成した大魔砲はどんな音を奏でるかの」

ミズホ上級伯爵による発射準備の命令が下り、いよいよ帝国内乱はクライマックスを迎える事となる。

第百九話　野望の終焉。

「遂に、大魔砲が完成したんだね！　早速作戦開始といこうか」

俺を含めて多くの人達が参加した巨大決戦兵器『大魔砲』は、製作期間一か月ほどで完成した。

その間、ペーターはニュルンベルク公爵領を含めた南部領域の統治と、ニュルンベルク公爵が籠る地下要塞の包囲、密かに情報や物資の搬入を図る敵地下勢力との戦闘に忙しかったようだ。

それを除くと、ニュルンベルク公爵領の領民達は素直に帝国の統治を受け入れている。

だが、それもこの地下要塞を落とさないと続かない。

軍費の負担に耐えかねてペーターが軍を退けば、たちまちニュルンベルク公爵が地下要塞を出てきて再び南部を制圧するからだ。

だが、地下要塞は強固な『魔法障壁』で覆われている。

それを破るための『大魔砲』がようやく完成したのだ。

砲身は直径一メートル、長さ二十メートルで、それを支える砲架、照準機、冷却装置、魔力を蓄える魔晶石連結装置、サブ動力伝達係のルイーゼという作りになっている。

「ボクの拳に集積した魔力がサブ動力って、かなり行きあたりばったりな作りだよね？」

砲身の材料である『極限鋼』は、俺が苦心して魔法で合成した。

複雑な多くの金属と希土類の配合に秘密があったので、これは地球の知識が辛うじてあった俺だから出来たのかもしれない。
おかげで、その配合比率を教えて欲しいとペーターとミズホ上級伯爵に迫られる羽目になったが。

ただ、それを知っても今の炉では精製できないはずだ。
製錬技術の問題で、それらの材料を均一に混ぜるのが一番難しいのだから。

「ヴェルは、今後は『極限鋼』作りに忙しそうだね」

「かもしれない」

混ぜるオリハルコンとミスリルはさほど多くないのに、これらの金属と耐久性、硬度、魔力伝達性にあまり差がない。
武器の素材にするには、最高の金属なのだ。

「でも、加工には同じ『極限鋼』か、オリハルコン製の工具が必要だけど」

あとは、ダイヤモンドとかでも可能だとは思う。
この世界では宝飾品や魔道具の材料としてのみ使用されているので、研磨や切削用として宝飾品にならないクズダイヤの需要が上がるかもしれない。

とにかく、将来有望な新金属である。
いや、古代魔法文明時代にはあったそうなので、古の技術の復活であろうか。
王国に戻ると、陛下から作成依頼があるかもしれなかった。

「それはあとで考えるとして、ルイーゼが補助動力ってのも変な話だな」

「装置扱いされたけど、これを握って立っているだけだよ」

ルイーゼは、砲架に繋がったコードを一本手に持って横に立っているだけだ。

「前に使った秘奥義をコードに流し込むのか？」

「その前の、大量の魔力を拳に溜めた状態。ボクは自分の魔力量の数倍の量を集められるから選ばれたみたい」

ルイーゼの傍には、袋に入った大量の魔晶石が集まっている。ここから魔力を吸い出して拳に集め、それをコードで大魔砲に流すのだとルイーゼは説明する。

「最新技術と、ボクが混じった変な魔砲だねぇ」

ルイーゼと一緒に照準機の方に視線を送ると、そこではヴィルマが照準機の最終調整を行っていた。

俺は彼女にも声をかける。

「ヴィルマ、大丈夫か？」

「何度も試験したから大丈夫。狙撃魔銃の照準機が大きくなっただけだから」

「狙撃魔銃ほどの精度も必要ないんだっけ？」

「大体、ここに当てればいい」

ルイーゼは設置された大魔砲の照準機から見える、クライム山脈山腹の詳細図を俺に見せてくれる。

「赤い印の所は、例のブレス発射装置が設置されている」

ペーターも、この一か月遊んでいなかったようだ。

『魔法障壁』を破りつつ、同時に地下要塞の設備に大ダメージを与えられる箇所の調査も行っていた。

「このくらいの照準なら、ヴィルマなら余裕か」

「油断しなければ。最初の試射で照準機の誤差調整を行うから大丈夫」

「そうか、頑張ってくれよ」

俺がヴィルマの頭を撫でると、彼女は嬉しそうな表情を浮かべた。

「ヴェル、ボクには？」

「えっ？　前に『ボクは大人の女だから、撫でられても嬉しくない』って言ってなかった？」

「そんな事を言ったかな？　ほら、不公平はよくないよ」

それならばとルイーゼの頭を撫でると、彼女はぽつりと漏らす。

「早くバウマイスター伯爵領に戻りたいよね」

「そうだな。この大魔砲による攻撃が成功すれば、すぐに帰れるさ」

「失敗したら？」

「しないと思いたいな。駄目で爆発しても、俺もここに残るからヴィルマとルイーゼは大丈夫だよ」

自分と二人だけなら『魔法障壁』で守る自信があるからだ。

他の連中に関しては、そこまで責任を持てない。

砲身を切削したカネサダさんは、『魔法による保護など不用。失敗したのなら、不出来な自分が死ぬだけなのだから』と弟子と共に語っている。

何というか、こういう覚悟の仕方は昔の日本の職人気質に似ているかもしれない。

それだけ、自信もあるのであろう。

「ヴェルがいれば安心だね」

三人で話をしている間に、着々と作戦開始の時刻が迫る。

今頃ペーターはエメラを傍に置き、本陣で地下要塞を睨んでいるのであろう。

「発射開始の合図がきた」

「ヴィルマ、派手にぶちかましてやれ！」

「了解、派手に行く」

とは言っても、照準を合わせて発射レバーを引くだけなので、ヴィルマは静かなままであった。

「魔晶石連結装置から、魔力の供給を開始。現在、充填率五十七パーセント」

一番作成に苦労した魔晶石連結装置は、無事に動いてるようだ。
ただやはり加熱はするので、こちらにも熱気が伝わってきていた。
あまり長時間の使用は難しいのかもしれない。

「充填率百五パーセント」

「ボクの方も、魔力の供給を開始します」

続けて、ルイーゼも拳にためた魔力をコードに流して大魔砲へと送り込んでいく。
サブ動力源役ではあるが、性能第一で歪な造りの大魔砲の威力を確保するには彼女の力も必要であった。

「魔力の装填を確認。照準、上に二、右に三修正。照準よし。発射」

ヴィルマは淡々とした声で全ての作業の確認を終えてから、素早く発射レバーを引いた。
途端に、大魔砲の周囲が大地震でも来たかのような揺れに襲われた。
大魔砲は、音に関しては実は魔銃に毛が生えた程度で大したものではない。
爆発する火薬ではないので、鼓膜が破れそうというほどではないのだ。

原始的な砲なので、発射のエネルギーも全て前方に放出される。
だから俺達に衝撃は来なかったが、代わりに異常加熱を抑える冷却装置の関係でまた大量の水蒸気に襲われていた。
俺は自分も含めて、二人を『魔法障壁』で水蒸気から守る。

「凄い水蒸気だね」

「前と同じ」

試作用の大型狙撃魔銃の時と同じなので、ヴィルマはミスリルコーティングのコートを着ていた。
だが、今回はそれよりも水蒸気の量が多かった。

「命中したのかな？」

「したみたい」

俺が慌てて双眼鏡を見ると、山脈の一部にかなり大きな穴が開いているのが確認できる。
例の『魔法障壁』を容赦なくぶち破り、そのまま山腹を撃ち抜いて地下要塞内で暴れて設備を破壊したようだ。
信管もなく炸裂弾でもない、ただのタングステン合金の椎の実型砲弾であったが、あの質量が大量の魔力で加速されているので、相当な威力になったのであろう。

「凄い威力だな。ヴィルマ、撃てるだけ撃つぞ」

「わかった」

ヴィルマは、地図を見ながら次の照準をつけ始める。

山腹の地図に、狙う箇所とその順番が書かれているのだ。
これは、ペーターが命じてこの一か月調査させたものである。

「次弾装填！　である！」

「えっ？　導師が装填役？」

俺が大まかな形を作り、それを職人達が磨いて仕上げたタングステン合金の砲弾はとてつもなく重い。
なので、身体能力を強化できる魔法使い複数名による装填を計画していたのだが、なぜか本番になると導師が一人で砲弾を装填していた。

「いくら身体能力を魔法で強化したとはいえ、よくその砲弾が持てますね」

「某にかかれば、このくらい軽いのである」

導師による弾丸装填作業も速やかに終わり、ヴィルマは次々と大魔砲を発射していく。
狙いは外れるはずがない。
多少位置がズレても、山腹に突き刺されば地下基地に確実にダメージを与えるのだから。

「やはり照準機に誤差があった。下に一、左に一修正をかける。発射」

俺が作成した砲弾は合計で二十五発、これ以上は材料がなくてどうにもならなかった。
他の材料でもいいのだが、どうせ魔晶石に溜めていた魔力が尽き

るので同じだ。
それに、あの巨弾を二十五発も撃ち込まれれば、その度に『魔法障壁』の復活で大魔力を消費してしまう。
山腹にも、見てわかるほどの大穴が複数箇所空いていた。
砲弾が飛び込んで暴れた穴の奥にある地下要塞内部は、既にボロボロのはずだ。

「全弾命中した。ブレス発生装置も相当潰せたと思う」

「凄いな。ヴィルマは」

ひと仕事を終えたヴィルマを褒めていると、ペーターの方に動きがあった。
先鋒部隊と思われる帝国軍の精鋭を、穴だらけの山腹に向けて進撃させたのだ。
大魔砲による砲撃で、反乱軍側が『魔法障壁』を維持できなくなったからであろう。

それは、俺達も確認している。

「こうなると、もう功名争いが優先なのかも」

「でも、油断は禁物だろう」

イーナの発言にエルが反論する。
実際に、先遣部隊が山腹に近づくと生き残っていたブレス発生装置から攻撃が開始されていた。
だが……。

「エメラさんがいるから効かないはずよ」

ペーターも、二度も同じミスはしないというわけだ。
ブレスは先頭に立つエメラによって全て防がれ、他の魔法使い達が発射地点に魔法を撃ち込んで次々と沈黙させていく。

「まだ帝国の魔法使いも多いか。無理に徴用しているんだろうけど……」

数も質も十分に見えるが、冒険者、内政担当、魔法技術者などが割を食っているはず。
早く元の現場に戻すために、ペーターは急ぎこの地下要塞を攻略したいというわけだ。

「伯爵様、俺達も行こうぜ」

「そうですね。行きますか」

「アルニム隊！　一緒に突入するぞ！」

「遅れないでください！」

帝国軍の先遣隊が地下要塞に侵入し始めたのと同時に、俺達も軍勢を地下要塞へと向けていく。
兵数はエルとハルカが指揮する千名ほどしかないが、侵入先は地下要塞なのであまり兵数が多くても指揮が難しいはずだ。

「エルヴィン、あまり気張らずに肩の力を抜けよ」

「私と兄さんは、ミズホ伯国軍と共に行動しますので」

七千人全員で移動すると逆にスピードが落ちるので、残り六千人を率いるフィリップとクリストフは、ミズホ伯国軍と共に行動する予定であった。

「突入開始だ！」

俺達は、もう弾がない大魔砲をミズホ職人達に任せて地下要塞を目指す。

「もしかすると、ヴェルはニュルンベルク公爵の首を狙っているとか？」

ルイーゼが妙な事を聞いてくる。

「首なんていらない。欲しい奴にくれてやれ」

戦いも終盤となり、反乱の首謀者であるニュルンベルク公爵の首に価値がある事は知っているが、外国貴族である俺が彼の首を獲っても面倒事が増えるだけであろう。

現代人のメンタルからすると、首を獲るという行為自体に慣れてしないし。

それよりも、今はあの装置の破壊が優先だ。

「どうせ、競争率が高くて手が出ないぜ」

「確か、一兵卒でも貴族にだったわよね？」

「はい。法衣ですが、子爵に任じると」

「そうそう。俺達のような外国人なら多額の報奨金とかだろうね。

もし運よく首が獲れても、後ろから味方に刺されそう」

「戦場ではよく聞くお話ですね。エルさん、私達は堅実にいきましょう」

「ヴェルを守るので忙しいから無理はしないよ。ハルカさん」

エルとハルカとイーナは、先ほどペーターが帝国軍の将兵達にそう言って発破をかけていたのを思い出したようだ。

大勢の貴族が没落しているので、ニュルンベルク公爵の首を獲った一人に爵位をあげるくらい痛くも痒くもないのであろう。

「かなり大規模な地下基地だな」

山腹にできた穴を覗き込むと、奥には露出した地下要塞の通路などが見える。

やはり地下遺跡を利用した施設のようで、その形状などは地下遺跡の通路そのものであった。

「意外と通路が広いね」

魔闘流の使い手なので先頭に立って敵の気配を探っているルイーゼは、地下遺跡の広さに感動しているようだ。

「元々、古代魔法文明時代の時も、軍か何かの地下基地だったんだろうな」

ブランタークさんの推論どおりであろう。

今までにニュルンベルク公爵が使った様々な魔道具の入手先がここだとすると、全て納得がいく。

普通は、一つの地下遺跡にあれほどの発掘品があるわけがないのだから。
ここは奇跡的に保存状態が良かった、未発掘の巨大地下遺跡というわけだ。

「例の装置はどこにあるんでしょうかね？」

「普通に考えれば、一番地下の奥であろうな」

そこにはラスボスもいそうな気がしたが、他の人が欲を出して確保しようとする前に装置を破壊するべきであろう。
俺達はエルが指揮する部隊に後背を任せながら、かなりのスピードで奥へと移動していく。

途中、ペーターが送り出した部隊とニュルンベルク公爵の軍勢が激突している場面に、剣戟の音が定期的に聞こえてくる。

「敵軍だ！」

「すまんな、時間が惜しい」

俺が『エリアスタン』を発動させると、こちらに向かって突進していた敵部隊が全て麻痺で動けなくなった。
魔力節約のために威力の微調整を行っていない。
もし感電死していても、戦争なので勘弁してほしいと思った。

「相変わらず、えげつないの」

テレーゼは、麻痺して動けなくなっている敵兵士達を見ながら感想を述べていた。

「まったく、付いて来なければいいのに。危ないのだから」

「ヴェンデリンの傍にいるのが一番安全そうなのでな。それに、例の装置をヴェンデリンが確実に破壊したか見届けるという仕事もペーター殿から受けておってな。妾も剣くらいは使える。自分の身くらいは自分で守るから安心せい」

敵軍に大量の麻痺者を出しながら、俺達は地下要塞を潜っていく。ここまで奥にくると、既に味方の姿や戦っている音は聞こえなかった。

「静かですわね」

「余計に怪しいね」

ルイーゼの予感は当たり、階層が下になればなるほど通路には多数の自爆型ゴーレムや、ブレス発生装置がセットされていた。

「もう対処方法は確立されているけど」

普通の兵士ならば排除に苦労するのだが、魔法使いならばさほど困難な相手では無い。

自爆型ゴーレムは、ある一定以上の衝撃を受けると爆発する。

「バウマイスター伯爵。材料である！」

導師が地下遺跡の壁を殴って大量の岩塊を作り、俺がそれを『石つぶて』としてこちらに向かって来る自爆型ゴーレムにぶつける。

すると自爆型ゴーレムが爆発を起こし、飛んでくる破片も『魔法

障壁』で防いで終わりだ。

「イーナ、ヴィルマ」

「任せて」

「撃つ！」

ブレス発生装置も同じだ。

拠点防衛用にブレスを吐く機能だけを量産しているので動けない。

遠方からイーナが槍を投擲、ヴィルマが狙撃を行い、それを『ブースト』で強化すると簡単に破壊できた。

ブレスを吐く機能しか付いていないので、ドラゴンゴーレムほど頑丈ではないからだ。

「しかし、なかなか奥に辿りつかぬのである」

俺達は例の装置のみを目指して突入していたのだが、なかなかその奥に辿りつけない。

ペーター達は地下要塞を虱潰しにする必要があるので、俺達よりも大分上の階層で苦戦しているようだ。

途中、明らかに兵士やその家族達が住んでいる居住区が建設中であった。

こういう場所を下手に押さえようとすると色々と面倒なので、俺達は無視して下の階層に降りている。

それが出来ないペーターは、攻略と占拠に時間を食ってなかなか下に降りられないようだ。

「カラクリばかり！　ニュルンベルク公爵は人を信じていないよう

であるな！」

ある階層からは、自爆型ゴーレムとブレス発生装置しか設置されていなかった。

それらを破壊しながら進むと、いかにもといった巨大な扉があり、その前には大量のブレス発生装置が置かれている。

遠方から魔法で破壊しようとすると、その前に導師が自身に『魔法障壁』を展開しながら接近し、全てパンチと蹴りで破壊してしまう。

導師に大量に注がれた各属性のブレスは、彼によって全て弾かれていた。

「一撃全壊！　チマチマとやっていては面倒なのである！」

巨大な扉の前には、ブレス発生装置群の残骸だけが残される。

「さて、ここが一番奥の部屋であるか？」

導師が一人で巨大な扉を開ける。

すると、そこにはニュルンベルク公爵と白いタキシード姿の変なおっさんが待ち構えていた。

「ニュルンベルク公爵の重臣？　には見えないな……」

「伯爵様、あいつの耳を見ろ」

ブランタークさんに言われて、そのおっさんの耳を見ると尖っていた。

エルフには見えない、というかこの世界でもエルフやドワーフは

想像上の種族であった。
実在などしていないのだ。

「魔族……」

ブランタークさんが、簡潔に正解を教えてくれた。
見た目は人間と大差なく、特徴としては耳が尖っている。
古代魔法文明崩壊直後から目撃例は存在しないが、必ず実在すると言われている魔族。

その現物が、何とニュルンベルク公爵に手を貸していたのだ。

「合点がいったのである！　謎の阻害装置といい、多くの古代魔法文明時代の遺産といい。魔族の手を借りていたのであるな！」

導師は、珍しくニュルンベルク公爵に激怒していた。
なぜなら、事はただニュルンベルク公爵の反乱で済まなくなったからだ。
大陸の覇権などと言っていたニュルンベルク公爵が、実は魔族の国の紐付きでしかなかったという事なのだから。
もっと最悪なのは、これが魔族の人間分断策で、ニュルンベルク公爵がわざと帝国にダメージを与えているという疑惑が浮上している事であった。

「それが何か悪い事なのかな？」

「貴様！」

「何を利用しようと最後に私が勝てばいい。勝てばその所業は全て正当化される。それが全てではないのかな？」

「なっ！」

ニュルンベルク公爵の反論に、珍しく導師は絶句してしまう。

「しかし、やってくれたな。バウマイスター伯爵」

「ふんっ……」

何をやったのかは言うまでもない。

強固な『魔法障壁』を破るために古に失われた『極限鋼』の技術を復活させ、それを材料に大魔砲を製造した。

そのおかげで鉄壁なはずの『魔法障壁』が破られ、突然の奇襲に精鋭であるはずのニュルンベルク公爵家軍は混乱している。

俺達による、地下要塞最深部への侵入を許してしまったのだ。

「俺も、古代魔法文明時代の遺品を復活させただけですよ。そこの魔族が復活させた物に比べれば微々たる物でしょう？」

「その微々たる物のせいで、我が篭城策は完全に潰えたがな」

現在、地下要塞内では二十万を超える両軍が死闘を演じている。

いくらニュルンベルク公爵家軍が精鋭でも、大魔砲による砲撃で混乱し、そこを突かれて大量に侵入した帝国軍の排除は難しいはずだ。

「結局、俺にとってバウマイスター伯爵は鬼門というわけか。惜しいが殺すしかあるまい」

「随分と目の上目線だな。今のあんたが、俺に勝てるのか？」

テレーゼから剣の達人だとは聞いているが、ならば魔法で倒してしまえばいいだけの事。
俺は彼を焼き払おうと、『火炎』魔法の準備を始める。
ところが、魔法の完成直後に炎が完全に消えてしまった。

「キャンセルがかかった？」

「正解なのであるな。魔族たる我が輩の得意魔法系統は『闇』。『闇』の強みは、他の系統魔法にはない特殊性にあるのであるな」

導師に口調が似ている魔族は、俺の魔法を瞬時に闇魔法でキャンセルしたらしい。

「こういう魔法も使えるのであるな」

「ううっ！」

「エル！」

続けて、突然エルの体を黒いモヤが包み、それが晴れるのと同時に白目の部分が黒くなったエルが我を忘れたかのようにテレーゼに斬りかかろうとする。
慌ててイーナが間に入り、エルの剣を槍の柄で防いだ。

「エル！」

「エルさん！　しっかりしてください！」

「うがぁーーー！」

ハルカも魔刀を抜いて応援に入りつつ声をかけるが、エルは二人の呼びかけにも答えず、意味不明な叫び声を発しながら狂ったように刀を振り下ろし続ける。
今までに習った剣術など忘れたかのようで、まるでバーサーカーのようだ。

「相手の心を操るのか？」

「どうなのであるかな？　ただその少年には、バウマイスター伯爵達が敵に見えるのであるな」

「厄介な魔法だな……」

この魔法で複数を操られてしまえば、最悪同士討ちで全滅であろう。
全員に緊張が走るが、その危険性を排除してくれたのはエリーゼであった。
俺達がいる場所全体に青白い光が走り、それが晴れた時にはエルは元に戻っていた。

「あれ？　俺は何を？」

「エルさんは、あの魔族に操られていたのですよ」

「おおっ！　『闇』と対を成す『聖』魔法の使い手であるな！　我が輩、その実力に感動したのであるな！」

どうやら、闇魔法は聖魔法で打ち消せる性質があるようだ。
ただ一定以上の力量が必要らしく、魔族はエリーゼの実力に驚い

ていた。

「魔族、お前の切り札である闇は効かないようだな。ニュルンベルク公爵と共に諦めて首を差し出せ」

「いきなり打ち首とは、人間とは野蛮な種族であるな」

「お前なぁ……、この帝国の惨状を見て命乞いが可能だと思うか？」

ニュルンベルク公爵と同じく、帝国人の感情的にも、法的に考えても死刑以外の罰があるわけがない。

もしここで生かして捕えても、生きているのが苦痛なくらいの拷問にかけられて最後に惨たらしく殺されるのがオチだ。

ならば、せめてここですぐに殺してやるのが情けであろう。

「お優しいバウマイスター伯爵であるな」

「違うな。お前ほどの魔力の持ち主を生かして捕えるなんて、犠牲が多くなるだけだからだ。色々と情報を聞き出せれば王国貴族としてはいいのであろうが、そこまで求めるのは贅沢だろう。お前は大量虐殺の共犯としてニュルンベルク公爵と一緒に死ね」

「我が輩、考古学者として遺跡の品に興味があっただけなのであるな」

「そんな言い訳が通用するか」

「そう言われる事は予想していたのであるな。ならば、ここは世話になったニュルンベルク公爵と共に戦うべきであるな。もしかしたら勝てるかもしれないのであるな」

そう言ってから、魔族はタキシードの内ポケットから何か四角い箱を取り出していた。
よく見ると、何かのリモコンのようにも見える。

「この地下遺跡は、古代魔法文明時代に国軍の兵器製造工廠と試作品の組み立て場であったのであるな。その中でも、とっておきの秘密兵器。出でよ！　『大人型カラクリ魔人君』！」

魔族がリモコンのボタンを押すと、ニュルンベルク公爵と魔族が立っている後方の壁が崩れ、そこから全高二十メートルほどの巨大人型ゴーレムが姿を現した。

「何だよ。またゴーレムかよ」

「このゴーレムは、ゴーレムの欠点である応用の利かなさを解決する事が可能なのであるな」

魔族が喋っている間にも、俺、カタリーナ、導師、ブランタークさんが容赦なく魔法を二人に放つが、それらは全て闇魔法を諦めて『魔法障壁』の展開に注力した魔族によって弾かれてしまう。

「伯爵様！　あの魔族！」

「はい。俺よりも魔力量が多い」

今まで、俺よりも魔力量が多い魔法使いなどいなかったのだが、さすがは魔族、驚異的な魔力量を誇っていた。

「この大人型カラクリ魔人君は、ニュルンベルク公爵が操作を、我

が輩が魔力を供給することで絶大な力を発揮するのであるな」

「お前達を殺してから、他の帝国軍を排除する事にしよう」

ニュルンベルク公爵は魔族に抱えられながら、『飛翔』でゴーレムの開いた胸部に乗り込んでいた。

そこがコックピットというわけだ。

「あの魔族、師匠が持っていた『移動キャンセラー』を付けているのか……」

俺達は相変わらず飛べないのに、魔族は『飛翔』が使えた。

つまり、あの魔道具を持っているという事だ。

「さあ、大人型カラクリ魔人君の強さに絶望するがいい」

巨大ゴーレムに乗り込んだニュルンベルク公爵の声が、ステレオ放送のように聞こえる。

コックピット内の声が外部に拡大されて放送される仕組みのようだ。

ここは魔法のある西洋風ファンタジーな世界のはずなのに、なぜかあそこだけロボットアニメになっている。

そんなことを思うのは、多分俺だけであろうが。

「武器から試してみるか」

新しいおもちゃを得て、ニュルンベルク公爵はご機嫌のようだ。

俺達の前方五十メートルほどにいる巨大ゴーレムは、その両手を前に出す。

すると、両腕の肘から下がロケットのように俺達に飛んでくる。
まるで、子供の頃に見たロボアニメのロケットパンチのようであった。

「腕が飛んだ！」

「『飛翔』の魔道具ですか？」

エルとハルカが驚くが、どうやら逃げる時間はないようだ。
俺と導師が強固な『魔法障壁』を張って、片方ずつロケットパンチを防いだ。

「凄い威力……」

「まだ止まらないのである！」

『魔法障壁』で止めても、ロケットパンチはまだ動きを止めずに俺達を薙ぎ払おうと突進を続ける。
ズルズルと押されて後退していくが、更に『魔法障壁』を強化して防ぎ、やっと膠着状態に持ち込んだ。
それから十数秒後、ようやくロケットパンチは元の場所に戻った。

「ヤバイ武器だな」

「ええ」

ブランタークさんは、ロケットパンチの威力に警戒感を露わにする。
威力も凄いし、俺と導師は『魔法障壁』への貫通を防いだだけで

ロケットパンチ自体は無傷でまだ何度でも放てる。
何とか対処しないと、いつか『魔法障壁』を貫通されて俺達に直撃するであろう。

「古代魔法文明時代の超兵器の威力はどうかな？　バウマイスター伯爵」

巨大ゴーレムから聞こえてくるニュルンベルク公爵の声は自信満々だ。
このままでいけば、俺達を倒せると確信したらしい。

「あの野郎、本来の素の部分が出たのかな？」

今までは、顔を合せた時くらいは紳士を装っていたのに、よほど追い詰められてから逆転可能だと感じたようで、その声に傲慢なものが滲み出ていた。

「ようやく子供の頃のマックスに戻ったかの？　敵にも寛容なフリをするのも大変じゃの」

俺の後ろで、テレーゼが一人納得していた。

「テレーゼは下がれ、他の王国軍組もだ」

あんな巨大なゴーレムが出た以上は、戦闘要員以外はこの部屋から出てもらうしかない。
通常の兵士達など簡単に蹂躙されてしまうし、その前にこちらの戦闘の足を引っ張って邪魔だったからだ。

「エル」

「悪いが、俺は退かないぞ。ハルカさん、兵士達をこの部屋から出してくれ」

「エルさん！　私も残ります！」

「いや、これに参加できるのはヴェルの悪運の犠牲者のみでね。今回は、まだハルカさんは出席できないんだ」

「ですが……」

「この面子を見なよ。負けるはずがないじゃないか」

「……。わかりました」

ミズホ女性であるハルカは、エルの言う事を聞き兵を下げる決断をする。

「エルヴィン、俺はバウマイスター伯爵の護衛だ。残るぞ」

「いえ。この戦いに限ってはヴェルの護衛は俺ですよ。ハルカさんの手伝いをして貰えませんか？」

「わかった、エルヴィンに任せよう」

タケオミさんも、ハルカと共に兵達をこの部屋から撤退させる事を了承した。

「エルヴィン、死ぬなよ」

シスコンではあるが、タケオミさんはエルを認めているようだ。
珍しく、彼に優しい声をかける。

「テレーゼ様、あなたも」

「いや、妾は残るぞ」

「しかしながら、テレーゼ様の剣の腕では……」

魔法使いでもない、剣の腕もそこまで凄いわけでもない。
なのに残るのは無謀だと、タケオミさんはテレーゼに意見する。

「ヴェンデリンが負けるとは思わぬし、もし妾が死んでも帝国に何の影響もないのでな。それに、妾も役に立つぞ」

テレーゼは、胸元から何かを取り出した。
よく見ると魔法の袋で、その中からどこかで見たような物体を取り出し、付属しているピンを引き抜いてから巨大ゴーレムの方に投げる。

「目を瞑れ！」

テレーゼの指示で全員が目を瞑るのと同時に、その物体は巨大ゴーレムの元で閃光を放った。
やはり、その物体は閃光手榴弾のような物であったようだ。

「閃光炸裂魔弾は効果があるの」

「おおーーーっ！　眩しいのであるなぁーーー！」

「テレーゼ！　目つぶしか！」

再びロケットパンチを飛ばそうとしていたニュルンベルク公爵達は、閃光手榴弾のせいで一時的にその視力を奪われて混乱した。

「とんだ隠し玉だな」

「ヴェンデリン、古代魔法文明時代の遺産はニュルンベルク公爵領だけで出るわけではない。量は少ないが、こうしてフィリップ公爵家にも伝わっておるわ」

テレーゼが持つ魔法の袋には、過去にフィリップ公爵領で発掘された魔道具の中で特に貴重で危険な物が仕舞われているようだ。

「なぜそれを、当主を引退したテレーゼが持っているんだ？」

「代々の当主は、この魔法の袋に入った物を秘匿する義務があるからの。本来はアルフォンスに渡さなければいけないのであろうが、今までにない当主交代劇のせいで渡す機会を失していての。よい機会じゃ。ここで使ってしまうとするか」

テレーゼは、続けて何かを魔法の袋から取り出す。

大きさが一メートルほどの筒で、よく見るとそれはバズーカ砲に似た物であった。

「『魔導噴推砲』という名だと聞いておるがの」

「使えるのか？」

「暇な時間に、一緒に見つかった説明書は読んでおるわ」

テレーゼは、魔導噴推砲を構えてその引き金を引く。
発射された噴推弾は巨大ゴーレムの右肘に命中し、右側のロケットアームをもぎ取っていた。

「威力絶大じゃの」

「今だ！」

まだニュルンベルク公爵達の視力が回復していない今がチャンスだ。
俺、ブランタークさん、導師、カタリーナの魔法が唸り、エルとイーナが槍を投擲し、ヴィルマが狙撃を行って巨大ゴーレムの目の部分を破壊する。
肢体のほぼ全てを破壊された巨大ゴーレムは、轟音を立てながら地面に倒れてしまう。

「やったぞ！」

「いや、待て」

動けなくなった巨大ゴーレムを見てエルが喜んでいたが、魔法使い組にはわかる。
まだ魔族の強大な魔力は健在で、何か次の鼓動に入ろうと蠢いているのを。

「この程度でぇーーー！　大人型カラクリ魔人君は倒せないのであるなぁーーー！　カムヒア！」

魔族の叫び声が響くのと同時に、巨大ゴーレムは損傷した頭部と

手足を切り離して宙に浮かび上がる。
続けて後方の巨大ゴーレムが出現した壊れた壁の奥から、追加の手足が飛んできて合体した。

巨大ゴーレムは、すぐに元の姿に戻っていた。

「甘い甘い、甘すぎるのであるなぁーーー。この数年、我が輩は懸命に発掘品の修理を行っていたのであるな」

つまり、巨大ゴーレムの部品は大量にあり、胴体に内臓している魔晶石と魔族の魔力が続く限り、いくらでも新しい部品を引き寄せて復活可能という事のようだ。

「ある意味！　この大人型カラクリ魔人君は無敵なのであるな！」

「見たかバウマイスター伯爵！　この大人型カラクリ魔人君の威力を！」

いつの間にか目つぶし攻撃から復活していたニュルンベルク公爵が、俺達に向けて高笑いをする。
その様子は、まさに意地の悪いラスボスそのものだ。

「戯言を。伯爵様、何回か潰せば部品も尽きるだろうぜ」

「そうですよね」

ブランタークさんの説に賛同した俺達は、再び全員で攻撃を行って巨大ゴーレムをボロボロに吹き飛ばした。
ところが……。

「カムヒアなのであるなぁーーー！」

再び手足と頭部の備品が飛んできて、巨大ゴーレムを元通りにしてしまう。

「ヴェンデリンさん、続けますわよ」

「そうだな、三度目の正直だ」

もう一度、魔法の集中砲火で巨大ゴーレムを攻撃する。

再びボロボロになるが、すぐに新しい手足が飛んできて元通りになってしまう。

「キリがないな」

「残念だったな、バウマイスター伯爵よ！　魔族よ！　止めを刺せ！」

「それでは、再び攻撃開始なのである！」

ニュルンベルク公爵は、巨大ゴーレムのしぶとさに余計に自信をもったようだ。

巨大ゴーレムの両腕からロケットパンチが飛び、今度はいつの間にか背中に装備していた背負い式の魔砲からも弾が発射される。

ロケットパンチの他に砲撃も加わり、俺達は防戦一方になった。

『魔法障壁』の展開で、魔法使い達は徐々に魔力を減らされていく。

「これって、まずくないか？」

「あと何回壊せば、あの巨大ゴーレムは復活しないのであろうな？」

二本のロケットアームに加えて魔砲による砲撃も防ぎながら、俺は導師とこれからどうしたものかという相談をしていた。

「テレーゼ、何か秘密兵器とかはあるか？」

「攻撃力でいえば、そう魔砲と変わりないからの。その前に一つ聞いてもいいか？」

「何か疑問でもあるのか？」

「うむ。ゴーレム本体を攻撃するよりも、その後方に攻撃して備品を補充する仕組みを破壊した方がよくないか？」

「……それだ！」

そんな当たり前の事を、俺はテレーゼに指摘されるまで忘れていた。

ゴーレム自体を破壊してもすぐに新しい部品が飛んでくるのなら、その部品を飛ばす仕組みを破壊した方がいいというわけだ。

「目標！　巨大ゴーレム後方にある手足が飛んでくる部屋！」

「伯爵様と導師が撃てないから、俺達で頑張るしかないか……」

ロケットパンチと砲撃を防ぐのに忙しい俺と導師は、この攻撃に参加できない。

ブランタークさんとカタリーナが大量の『ファイヤーボール』を

放ち、ルイーゼとイーナが魔力を篭めた槍を、テレーゼはまだ弾が残っている魔導噴推砲を連射する。
発射された魔法や弾は巨大ゴーレムをすり抜け、その後方にある壊れた壁に開いた穴に入り込み、暫くすると大爆発を起こした。

「何とぉーーー！　合体システムがぁーーー！」

テレーゼの策は正しかったようだ。
壊れていない手足などの備品が、誘爆に巻き込まれて破壊されてしまったらしい。

「魔族！　それよりもあの装置だ！」

「あの爆発では故障した可能性が高いのであるな。我が輩のせいではないとだけ言っておくのであるな」

「あの装置？」

もしやと思って『飛翔』を唱えると、俺の体は宙に浮く。
ほぼ一年ぶりに、俺は久しぶりに飛ぶ事が可能になっていた。

「意外と呆気ない最後だったな。例の装置は」

「伯爵様、今のうちに全員で畳みかけるぞ」

「隙を与えて復活でもされると困難ですね。全員攻撃開始！」

巨大ゴーレムは、壊れた部品の供給システムを破壊されて復活が不可能になった。
ならば、今の内に完璧に破壊しておくべきだ。

「一気に行くのである！　ふぬぁーーー！」

導師は魔法で身体機能を強化してから『魔法障壁』を解き、そのまま両腕でロケットパンチを掴み、万力のように締め上げはじめる。

導師による魔力を惜しまない攻撃で、そのロケットパンチは徐々にひしゃげて罅が入っていく。

「イーナ！」

「エル！」

次は、二人で投擲用の槍を投げる。

槍は巨大ゴーレムのロケットパンチとの接合部分に当たり、その部分がひしゃげた。

これで、二度とロケットアームを合体させられないはずだ。

「次はボクね」

『飛翔』を取り戻したルイーゼは、俺が『魔法障壁』で動きを止めているロケットアームの上に軽業師のように立ち、強大な魔力を篭めた一撃を上から振り下ろす。

ロケットアームはバラバラになって地面へと落下する。

「伯爵様！　行くぞ！」

「はい！」

ロケットパンチの完全破壊を見届けてから、俺とブランタークさんは巨大ゴーレムへと駆け寄る。

相変わらず魔砲による攻撃は続いていたが、カタリーナが極限まで圧縮して威力を増した『ウィンドカッター』を操作してゴーレムの後方に回し、魔砲を背中から切り落とした。

「お師匠様から言われていた、魔法のコントロールが上達していてよかったですわ」

切り離されて魔力の供給を絶たれた魔砲は、そのまま沈黙してしまった。

「魔族！　何とかしろ！」

「これが俗にいう、大ぁーーーい、ぴぃーーーンチ！」

「殺すぞ！」

「うるさい、見苦しい、チームワークがなっていない。撃つ」

ニュルンベルク公爵の慌て怒鳴る声が聞こえてくるが、追加でヴィルマが狙撃で巨大ゴーレムの両眼を撃ち抜き、彼らの視界を完全に奪ってしまう。

「ここは、我が輩の魔法で……。うぐっ！」

「魔族！　何事だ！」

「体が上手く動かないのであるな。体中水ぶくれで、頭もフラフラするのであるな」

「なぜそんな事が？　バウマイスター伯爵の魔法か？」

「残念ながら、俺じゃないよ」

「私です」

魔族の闇魔法を抑える役割を静かにこなしていたエリーゼは、同時に魔族の方に奇襲で逆撃を仕掛けていた。

魔族も生物なので人間と同じく治癒魔法で回復するという性質を生かし、少しずつ強く、繰り返しで治癒魔法をかけたのだ。

どんな治癒魔法でも、かけすぎれば逆に害になる。

エリーゼは、遠方から魔族だけを狙い撃ちして、高濃度の治癒魔法をその体に浸透させるという難事に成功したのだ。

「過治癒状態になると、肌の水ぶくれ、動機、息切れ、眩暈、精神への悪影響が起こります。更にそれを放置しますと……」

最悪、死に至る事もあるとエリーゼは俺たちに語る。

「あれ？　前に俺の治癒魔法が強過ぎるって……」

「必要量の数倍～数十倍くらいなら何も起こりません。必要量の数百倍以上をかけませんと」

「これは予想外なのであるな」

巨大ゴーレムの壊れた部分を交換するシステムが破壊され、自分も過治癒の副作用で調子が悪い。

魔族は相当に弱っているようだ。

止めを刺す最大のチャンスは、今をおいて他にないはずだ。

「ブランタークさん！」

「おう！」

ここで、魔力を温存していたブランタークさんと共に巨大ゴーレムに向かって走り出す。

「接近を許すな！」

「魔族使いが荒いのであるな」

過治癒に悩みながらも、さすがは魔族。

その強大な魔力を使って、『ウィンドカッター』をまるで嵐のように展開する。

「だから俺がいるんだよ！」

だが、それらは全てブランタークさんの展開する『魔法障壁』によって防がれていた。

「伯爵様、あの巨大ゴーレムの胴体部分がかなり頑丈なようだがどうする？」

ブランタークさんが展開した『魔法障壁』を使って前進しながら、俺はどんな魔法であの巨大ゴーレムを戦闘不能にしようかと考える。

確かに、どんなにダメージを与えても肢体はともかく操縦席がある胴体にはダメージを与えられなかったからだ。

「放出する魔法では……」

威力が低いので、巨大ゴーレムの胴体部分にダメージを与えられない。
ではどうするのか？
答えは、前に師匠と戦った時に見出していた。

「膨大な魔力を放出せず、一点に纏めて……。いや、この場合は『一刀』にか……」

師匠の形見である魔力剣の柄を取り出し、今までにないほどの膨大な魔力を篭める。
だが、具現化させる刀身はなるべく細くだ。
長さも最低限にするが巨大ゴーレムを切り裂く物なので、短くなり過ぎないようにする。

俺のイメージの問題なのか？
柄からは日本刀に似た赤い刃が現れた。
赤色なので火系統なのだが、炎のような物は見えない。
極限まで刃を細くしたせいだ。

「これで焼き切る」

『飛翔』で巨大ゴーレムの前まで接近してから、一気に炎の刀身を振り下ろす。

「いくらバウマイスター伯爵とはいえ、この巨大ゴーレムの胴体も『極限鋼』とミスリル合金の複合装甲なのだぞ。斬る事など不可能……何ぃ！」

ニュルンベルク公爵から驚きの声があがる。

なぜなら、巨大ゴーレムの胴体が切り裂かれ、その亀裂からニュルンベルク公爵の姿が見えたからだ。

ただ、完全に両断は出来なかった。

あれだけの魔力を篭めたのに、巨大ゴーレムの前部装甲を切り裂いただけだ。

「もう一度……」

と思ったのだが、予想上に魔力を使ってしまったらしい。

俺は眩暈を感じてその場に座り込んでしまう。

「伯爵様」

「ブランタークさん、続きを……」

「俺の魔力量じゃ、ひっかき傷も怪しいところだよ。導師！」

「無理であるな。ここに侵入するまでと、巨大ゴーレムの手と戦っていたら魔力の消費が予想以上に激しいのである」

「カタリーナの嬢ちゃんは？」

「私の残り魔力を結集しても、ヴェンデリンさんのような刀身は出せませんわ」

「なぁーーー！」

地下遺跡の一番奥にあるこの部屋に向かう途中での戦いと、巨大ゴーレムとの戦闘で全員の残り魔力量は心許無い。

通常の戦闘ならば十分に余裕があるが、巨大ゴーレムの胴体部分を壊す事など不可能であった。

「困った……」

まだ、巨大ゴーレムは活動を完全に停止していない。

早く止めを刺さないと敵に援軍がくる可能性もあり、俺はどうにか巨大ゴーレムを破壊する方法を考え始めた。

だが、その心配は予想外の人物によって解決される。

「ヴェル！　俺が行く！」

「エル？」

「待て！　お前は魔法なんて使えないだろうが！」

相手が相手なので、今まであまり攻撃を行っていなかったエルの突進を、慌ててブランタークさんが止めに入った。

「これがありますよ！　ルイーゼ！」

「了解！　エルが駄目なら、ボクとイーナちゃんの投擲で止めを刺すから」

「これを、ハルカさんから借りていてよかった！」

エルは、ハルカから借りていたらしい魔刀を抜き、それに限界まで火魔法を刀を纏わせる。

まだ肢体を壊されたゴーレムは宙に浮いていたので、そこまでの

移動はルイーゼによる強制打ち出しだ。

「投石機の石になった気分だな」

「いくよ！　エル！」

魔力を纏ったルイーゼによって撃ち出されたエルは、先ほど俺が作った亀裂を広げるようにゴーレムの胴体に正確な一撃を加える。

着地したエルはすぐに魔刀を仕舞うが、見た目では巨大ゴーレムが斬られたような印象は受けない。

「エル、何も変化がないけど？」

「安心しろ。既にあの巨大ゴーレムはもう真っ二つだ」

エルが自信満々に答えた直後、本当に巨大ゴーレムは縦に真っ二つに割れて崩れ落ちた。

さすがに、ここまで壊れると宙には浮けないようだ。

ガシャンと音を立てて地面に落ち、ただの残骸と化して活動を停止する。

「だから言っただろう。もう切れているって」

「ええっ！　凄いな！」

最後の最後で、一番の難敵に止めを刺した。

エルは、かなり美味しい所を持っていったのだ。

「エル！　凄い一撃だったな！」

「タネを説明すると、あの巨大ゴーレムはヴェルの一撃で大ダメージを受けていたのさ」

見た目には胴体部分の正面装甲の一部が切れただけに見えたが、実際には他の部分も見えない傷でボロボロになっていたらしい。

そこにエルが、魔刀で一撃を加えてその崩壊を促したのだと言う。

「それで真っ二つであるか……」

みんな大量の魔力を使ってしまったが、あのしぶとかった巨大ゴーレムは倒れた。

一番頑丈だった胴体部分も真っ二つとなり、崩壊して崩れ落ちている。

「ヴェンデリンよ、あの二人の確認をしないと」

「そうだった」

テレーゼの指摘で急ぎゴーレムの残骸の山へと向かい、ゴーレムに乗っていたニュルンベルク公爵と魔族を探す。

まず最初に、右腕、右足が切り落とされ大出血したニュルンベルク公爵の姿を発見した。

俺とエルの両断に巻き込まれて、その身を切り裂かれたようだ。

辛うじて意識はあるようであったが、その怪我の具合と出血量を見ると助かりそうにない。

「あなた、『奇跡の光』がありますが……」

そうだ、エリーゼの『奇跡の光』だけは例外であった。

俺に使用するかどうか聞いてくるが、それに答える前にニュルン

ベルク公爵の方が声を上げる。

「ここで中途半端に情けをかけるな。魔法で全治しても、あのバカ皇帝の三男の裁きを受けてどうせ死刑になる。なら、ここで無様に死んだ方がマシだ」

「いや……、しかし……」

さすがに死にそうな人間を放置する事への罪悪感と、生かしてペーターの元に差し出すという案もあるのだという考えで揺れていると、そこにテレーゼが意見を述べる。

「そうじゃの。このまま死なせてやれ。反乱の首魁は帝都で曝し首になるはずじゃ。死体から切り落とすも、生かして首を刎ねて処刑するも同じであろう」

「テレーゼらしい言い方だな。だが今は感謝する」

俺はテレーゼの言に従い、ニュルンベルク公爵をこのまま死なせてやる事にする。

「やはり負けたな。最初にテレーゼを帝都で殺し損ねた時に……そしてそれを助けたのがバウマイスター伯爵であると聞いた時にそういう予感はした」

ニュルンベルク公爵の口調は普段と変わらなかったが、手足の切断と大量出血で苦しそうな表情を浮かべていた。

「せめて、苦しみの無い死を」

それを見たエリーゼが、緊急で切断傷を塞いでこれ以上の出血を防ぐ。
失った血を補填していないのでじきに死ぬが、傷の痛みなどは消えたはずだ。

「感謝する。敵に情けをかけるとは聖女の二つ名に相応しいのか……。羨ましいな、バウマイスター伯爵」

「はい」

こういう時にどう答えていいものかわからない。
なので、一言で簡潔に答えておく。

「いい奥さんであるという一般的な羨ましいはともかく、俺はバウマイスター伯爵が羨ましいよ」

「そうですか？」

魔法は使えるが、中身が小市民なのと優柔不断なせいで、色々と利用されてしまっているように思うのだ。

「貴族で次男以下に生まれてその身分を失う。俺にはその悲哀があまり理解できなくてな。話に聞いた事を抽象的には理解できても、俺は長男で跡取りだ。次男以下でもないのに理解できるという方がおかしい」

「そうですね」

ニュルンベルク公爵が言いたい事は、俺にも理解できた。
自分がその立場でもないのに、その気持ちがわかるという奴は、

ただの偽善者であったからだ。

「だから、子供の頃には冒険者などになって自由に生きていける彼らを羨ましいと思っていた。彼らからすれば、公爵家の跡取りである俺がそんな事を言えば激怒するのであろうが……」

人は、自分にない物を欲しがる。

『隣の芝生は青い』というのが正しいのであろうか？

「幼少の頃に、何度か妾と冒険者ゴッコをして遊んだの」

「あの時は楽しかったな……、テレーゼも女剣士役をして……」

ニュルンベルク公爵の脳裏には、子供の頃にテレーゼと一緒に冒険者ゴッコをした光景が浮かんでいるのであろう。

「だが、俺はニュルベルク公爵で、テレーゼは結局フィリップ公爵になったな。俺らから言わせれば、これは血の呪いであろう」

「そうじゃの。『嫌だ、継ぎたくありません』とは口が避けても言えぬ。誰かに言うわけにもいかぬ」

「千二百年の歴史があるニュルンベルク公爵家とはいえ、俺が自分で創設したわけでもない。惜別の念など沸かぬよ。ただ義務感でニュルンベルク公爵をやっていたのだから……」

能力があったニュルンベルク公爵は、公爵就任後によき為政者となり、帝国中枢でも軍事の天才として将来帝国軍を率いる立場になる事を期待された。

若き才人として期待されたわけだが、それを本人が望んでいたわ

けではない。

だから次第に、心に闇のような物が生まれていったのであろう。

「よき領主様、将来を期待された軍指揮官。こんな俺を周囲の人達は称賛し羨むが、俺は全然嬉しくなくてな……。だから、こう思ったんだ。ならば、この能力と地位を使って何か大胆な事をしようと……」

どうせなら、帝国を掌握して王国も攻め滅ぼして大陸を統一する。

そのくらい無謀な夢に挑もうという結論に至ったのであろう。

「そう思って動くと虚しさを少し忘れられてな。それで出る犠牲者の事なんて考えなかった。勝てば虐殺者であるはずの俺が称賛される。負けても無謀な賭けに出て敗れ去った愚か者としての評価が残る。楽しいじゃないか」

「……」

みんな、誰もニュルンベルク公爵を非難しなかった。

なぜなら、そんな事をしてもこの男には何ら効果がない事に気がついたからだ。

「俺が無様に敗死して、歴史あるニュルンベルク公爵家は断絶する。テレーゼは俺に勝ったのにフィリップ公爵位と次期皇帝の座を失った。皮肉なものだな……」

ニュルンベルク公爵は、俺に意味ありげな笑みを浮かべながらテレーゼと話を続ける。

「そうよな。今の妾は強制引退させられ名誉伯爵となった。帝国におれば飼い殺しは確実で、為政者としてのペーター殿の心変りがあれば消されるかの。まあ、その心配は帝国を出るので無用ではあるが」

「帝国を出る？　自分一人で自由に生きていくのか？」

「平民のように全く自由というわけではないが、フィリップ公爵時代よりは遥かに自由じゃの」

「そうか……」

「ペーター殿とヴェンデリンによって引き摺り降ろされた時には驚いたがの。今にしてみれば、これ幸いというわけじゃ」

テレーゼが笑いながらニュルンベルク公爵に言うと、彼は一瞬だけ羨ましそうな表情を浮かべた。

「テレーゼがこれからどう自由に生きるのか見物だな……。数十年後……あの世で会おう……」

「そうじゃな、さらばだマックス」

そこまで話したところで、ニュルンベルク公爵は静かに目を瞑った。

最後の気力を振り絞って気丈に話を続けていたが、これが限界だったようだ。

「亡くなられています」

エリーゼが呼吸と脈を確認して、ニュルンベルク公爵の死が正式に確認される。

「自由にか……、バカ者めが……」

テレーゼは、顔を上を向けながら呟いていた。

そうしないと、涙を流しているのが俺達にバレてしまうと思っているのであろう。

大貴族が人の前で泣くなど、みっともない行為とされている。

今は構わないのだが、昔の癖でそうしているようだ。

「そんなにニュルンベルク公爵の地位が嫌なら、自分で辞退して出て行けば……。いや、それは妾にも出来なかった。だから、マックスの事は言えぬか……。しかし、他に選択肢は無かったのか？　お前は本当にバカ者じゃ」

「ねえ。ヴェル」

「いや……」

イーナは『テレーゼとマックスが、お互いに異性として好意を抱いていたのでは？』と思ったようだが、俺はそうは思わない。

どちらかと言うと友情寄りで、二人は若い身で継ぎたくもない選帝侯という地位とそれに伴う重責に耐えていた同志のようなものだと予想した。

「反逆者として永遠に批判されるかもしれぬのに、他にもっと違う選択肢はなかったのか？」

テレーゼは涙を溢さないように上を向いたままだ。

「真面目過ぎたんだろうな」

今まで静かに耳を澄ませていたブランタークさんがボソと自分の考えを漏らす。

「伯爵様みたいに出来ないと割り切って、他に任せて自分の好きにするみたいな事が出来なかった……」

「ブランターク。前にマックスがヴェンデリンは天才だと言っておったのを覚えておるか？　妾はそれに一部賛同する。ヴェンデリンの魔法の才は他の貴族としての才能など簡単にカバーするから、領地の運営が人任せでも問題ないのじゃ。妾がそれをしたら、あの兄達の傀儡であったの。ニュルンベルク公爵家は武断の家柄、軍系の家臣達の力が強いから、それをすると軍事一色に染まる危険があった。バウマイスター伯爵領のようにはいかぬよ」

「そうですか……」

「世の中とは、なかなか思うようにいかぬの」

「そうですね。ニュルンベルク公爵の遺体を回収して、他にも仕事がありますよ」

例の装置は壊れたようだが、まだ破壊が完全ではないであろう。
他にも、この奥に大量の発掘品が眠っている可能性もある。
これも、なるべく回収なり破壊する必要があった。

「そうよな。これらの兵器群を手に入れたペーター殿が狂わない保

証もない。人とは、本当にわからぬのだから……」

戦いも終わったので、エルは部屋の外で待機していた兵士達を呼び寄せ、ニュルンベルク公爵の遺体を担架に乗せて運ぶように命令を出す。

「ねえ。敵の親玉の最後のシーンで忘れていたんだけど」

「忘れていた？」

「魔族って死んだの？」

「しまった！　忘れてた！」

ルイーゼからの指摘に、俺は慌てて巨大ゴーレムの残骸から探すように兵士達に命令する。

すぐに見つかり、ガレキの下から魔族が姿を現した。

ただし水ぶくれが酷く、体も機能がマヒして上手く動けないようだ。

「ですが、致命傷ではありませんね」

「魔族、頑丈だなぁ……」

エリーゼからの報告に、俺は魔族の生命力の強さに呆れていた。

「出来れば治して欲しいのであるな」

「そんな事をして、お前にまた暴れられても対抗できないからな。

出来れば、そのまま死んでくれ」

この魔族には、まだ強大な魔力が残っている。

下手に治療してまた暴れられると、再び戦闘不能にするのは困難であった。

いや、俺達でも殺されてしまう可能性があったのだ。

「ここでトドメを刺した方が無難かも」

イーナの意見に、魔族以外の全員が首を縦に振る。

「ううっ……、バウマイスター伯爵は意外と残忍であるな……」

「内乱を誘発して、大量虐殺の片棒を担いだ魔族にそんな事を言われたくないな」

この負傷でも魔族は喋れるのが驚きであった。

しかも、俺に皮肉を言うくらい余裕がある。

「ヴェル様」

この魔族をどうしようかと考えていると、ヴィルマが俺のローブを引っ張って呼ぶ。

「何か？」

「この魔族を殺すと、魔族の国と問題にならないの？」

「おおっ！　それがあったの」

妙に勘がいいヴィルマに、この中で一番そういう話に強いはずのテレーゼも納得する。

「自国民を殺されたからと、兵を送る可能性もなきにしもあらずじゃの」

国家同士に真の友人などおらず、それを口実に攻められると厳しいかもしれない。

「テレーゼさん、この魔族は内乱の片棒を担いでいますが……」

「それは事実じゃが、魔族の国との戦争では考慮せざるを得まいて……」

俺もカタリーナの意見に賛同なのだが、テレーゼは冷静に魔族の国と揉める危険性について考慮する。

「内乱がようやく終わるのに、帝国は再び魔族の国との戦争になる。いや、この場合は王国も狙われる可能性があるの。両国の関係が修繕される前に攻められると危険じゃ」

「この方の、ヴェンデリンさんを超える魔力は凄いと思いまずけど、魔族とはそこまで脅威なのでしょうか？」

この中で魔族に関する知識がありそうなのは、元フィリップ公爵であるテレーゼであろう。

俺と同じく俄か貴族であるカタリーナには、その知識は無かった。

「魔族とは、みんなかなりの魔力を持っておるそうじゃぞ」

敵軍の全てが、強力な魔法使い。
味方の数少ない魔法使いを投入してある程度倒しても、魔力が切れた俺達も殺されてしまうので、あとは魔法が使えない兵士達が蹂躙されるだけ。
確かに、おいそれとは殺す選択は出来なかった。

「導師、どうしましょうか？」

「おい魔族！　治してもいいが、抵抗はお勧めできないのである！」

導師は、この自分と口調が似ている魔族がどうも気に入らないらしい。
だが、自分の感情と政治的な選択は別と感じたのであろう。
彼を助けるという選択肢を選んでいた。

「ヘルムート王国の魔法使い達は、慎重派なのであるな。ここで貴殿らと戦って逃げられたとしても、上の階にいる帝国軍兵士達や魔法使い達に捕捉されて死ぬのであるな。我が輩、無駄な事はしない性質なのであるな」

「減らず口を……。エリーゼ、治してやるのである」

「はい。伯父様」

エリーゼが軽く治癒魔法をかけると、過治癒魔法のせいでダメージを受けていた魔族は回復して立ち上がった。
過治癒によってダメージを受けた体は、いつまでも治癒魔法が残留するわけでもないので適性な治癒魔法で回復してしまう。
過治癒という状態がなかなか利用されない原因の一つであった。

それなら、普通の魔法で攻撃した方が効率がいいからだ。

「治療に感謝なのであるな。我が輩は、アーネスト・ブリッツ、魔族の国の考古学者なのであるな」

「考古学者？」

謎多き白タキシード姿の中年男性は、自分を考古学者だと自己紹介する。

「その通りなのであるな。我が輩の人生の目標は、未知の地下遺跡の探索と調査なのであるな」

魔族から事情を聞くが、彼は魔族の国がある西の島から一人密入国でこの大陸に潜り込んだと誇らしげに話す。

密入国後に、ニュルンベルク公爵領内に多数ある未発掘遺跡の噂を聞き、そこの探索が可能なように発掘品の修理などを請け負った。

あくまでも、ギブアンドテイクの関係だと彼は言う。

「ギブアンドテイクね……」

「これだけ犠牲を出して、随分と虫のいい話ですわね」

元ボッチゆえに、この中でも自分を貫く事が多いカタリーナも、導師に続きこの魔族には呆れているようだ。

「とはいえ、我が輩は考古学者なので地下遺跡の探索と調査を行いたいのであるな。そのためには領主であるニュルンベルク公爵の許可が必要なのであるな」

魔族には、魔道具職人や研究者としての才能もあった。
だから、ニュルンベルク公爵家軍が装備していた発掘品を修理して使えるようにした。

「ナイフを使えるようにして、渡した持ち主が殺人を犯しても我が輩にはどうしようも出来ないのであるな」

「お前！　ふざけた事を言うな！」

「エルさん、落ち着いてください！」

魔族のあまりの言い様に、エルはブチ切れてしまった。
ハルカが慌てて止めに入る。

「そこで怒られても、我が輩はそういう契約でニュルンベルク公爵領内にある遺跡を自由に調査できたのであるな」

俺は納得がいった。
彼は、心の奥底から学者であった。
ただ自分の知識欲を満たすために行動し、それで発生する周囲への迷惑など考慮しない。
マッドサイエンティストまではいかないが、典型的な学者なのかもしれない。

そしてこういう人は、欠けている部分があるからこそ成果を挙げたりするのだ。
ニュルンベルク公爵との契約に従って地下遺跡発掘で得た品を修理し、それが戦場で猛威を振るった。
内乱に加担はしているが、それをしたのはあくまでもニュルンベ

ルク公爵である。
巨大ゴーレムでの戦闘も自衛のためという考え方もあり……いや、彼の出自を考えるとやっぱり安易には処刑できない。

「もういい。もし逃げたりこちらに害を成そうとしても、みんなで袋叩きにすればいい話だ。この最深層にある部屋の探索が先だ。案内して貰うぞ」

「任せてくれなのであるな。まずは、この壁に刻まれた装飾の文様であるが、これは古代魔法文明時代後期では一般的に……」

「そっちの考古学の解説じゃない」

魔族は、いきなり地下遺跡の壁の文様について解説を始めようとする。
今は意味がないので、慌てて発掘品のありかの方に話を誘導した。

「発掘品の方であるか？　もう調査も終えて学術的な価値を見い出せないのであるな」

「考古学者であるあんたはそうでも、現実の世に生きているとその価値を必要以上に見出そうとするのがいるから処分が必要なんだ」

「わかったのであるな」

魔族は、まずは巨大ゴーレムが壁を破って現れた部屋の奥へと案内する。
そこには、全高十五メートルほどの巨大なアンテナとタイプライターが融合したような装置が置かれていた。

「これが、『移動』と『通信』を阻害する装置？」

テレーゼの忠告で、魔法を撃ち込んだのがよかったようだ。
アンテナの一部が壊れて、妨害波を発射できなくなっていた。

「直せばいいのであるかな？」

「いるか。こんな魔道具」

俺の唯一の長所である魔法を阻害する装置など、わざわざ残す価値も無かった。

「壊すのは構わないのであるが、先に使える部品などを取っておく事を勧めるのであるな」

高度な魔道具は様々な部品の集合体であり、他の魔道具に流用可能な物も多い。
いきなり壊さず、そういう部品を取ってから壊すべきだと魔族は忠告をする。

「特に、この装置に使われている魔晶石は巨大なのであるな」

「あんたが装置で使う魔力を供給していたんだよな？」

「我が輩には、本職の調査や分析、それに発掘品の修理やメンテナンスの仕事もあったのであるな。だから、常にこの装置の傍にいるわけにもいかず。巨大な魔晶石に大量に魔力を込めて装置を発動させていたのであるな」

魔族が装置の裏側に付いたハッチを開けると、そこには巨大な魔

晶石が設置されていた。

「早く壊すか……」

俺の命令で、エルが率いていた兵士達が最下層にある魔道具などの回収を始める。

破壊されたブレス発生装置と巨大ゴーレムの残骸、他にもそれらの部品やよくわからない試作品らしいゴーレム、武器のように見える品など多くが集められてくる。

「技術解説や修理ならば可能であるな」

「ならばよし」

俺は、集めた物を全て魔法の袋に仕舞う。

元々戦利品の扱いは、ここが帝国領とはいえ俺にあった。

内乱終了後、ニュルンベルク公爵領から接収した魔道具によってペーターが帝国軍を強くし過ぎると、今度は王国との戦争になる可能性もあるので全てこちらで鹵獲だ。

あとは……。

「アーネスト・ブリッツ。何とか変装できないのか？」

「我が輩の名前を憶えているのは感心であるな。変装は可能であるな」

「では、人間に化けろ」

この魔族をペーターに渡すわけにはいかない。

こいつは未盗掘の地下遺跡が発掘できれば満足なので、そのためにどんな悪党とだって手を結んでしまう。
だから、王国なりバウマイスター伯爵領に匿って魔族に関する情報を聞く必要があった。

ここ一万年近く、この大陸に魔族は姿を見せていない。
それなのに俺が魔族など連れていたら、すぐにその裏事情がバレてしまう。

「古代魔法文明時代には、変装用の魔道具も存在していたのであるな」

アーネストはポケットから一個の指輪を取り出して、それを指に填める。
すると、どこにでもいそうな中年男性兵士に変装していた。

「これで安全であるな。ただ、唯一の懸念があるのであるな」

「懸念？」

「そう、懸念なのであるな」

アーネストは、テレーゼに視線を向ける。
名誉付きとはいえ、帝国貴族であるテレーゼがペーターに漏らせばすぐにバレてしまうとその顔が語っていた。

「そのような心配は無用じゃの。妾は帝国を出るし、そもそも次期皇帝の座をペーター殿に奪われた身じゃ。義理など一セントとてありはせぬ」

「なるほど、それは納得なのであるな」

最下層での始末を終えた俺達は、ニュルンベルク公爵の死を宣伝しながらいまだ激闘続く地下要塞内を駆け巡る。

両軍の戦闘は、主に最下層よりも上にある軍駐屯所や建設中であった居住区がメインであった。

特に、ニュルンベルク公爵家館が置かれている場所では、熱狂的な彼の家臣や兵達が残存する自爆型ゴーレムやブレス発射装置を据えて奮戦し、攻める帝国軍に多大な犠牲を与えていた。

「降伏しろ！　お前達の親玉は死んだぞ！」

「くだらぬ嘘を言うな！　お館様は最下層に新兵器を取りに行かれたのだ！」

俺の降伏勧告に、屋敷周辺の防衛を担当している重臣が怒りを露わにしながら答える。

ニュルンベルク公爵が死んだなど、意地でも認められないのであろう。

「これを見ろ！」

俺の指示で、ニュルンベルク公爵の遺体が曝される。

首を斬り落として見せてはという意見もあったのだが、それをすると彼らが感情的になる可能性がある。

だから、そのまま遺体を曝した。

「お館様！」

「嘘だ！　よく似せた偽物だ！」

「そんな時間はない！　本物のニュルンベルク公爵だ！　彼の野望はこれで終わった。旗頭がいなければもはや野望の成就は叶わないのだからな。残された君達には潔い態度を望む」

「……どうする？」

「最後の一兵まで戦うさ！」

「でも、そんな事をして何の意味がある？」

俺の説得に、残された反乱軍の指揮官や兵士達は意見が割れて言い争いを始める。

そして、遂に最上級者が決断した。

「もやはこれまで。降伏する……」

この後も戦闘が続く各地に移動して説得を行い、地下要塞攻略作戦開始から十八時間後、全ての反乱軍が降伏して戦闘が終了する。

帝国軍の戦死者七千八百五十七名、反乱軍の死者五千六百七十八名。

共に大きな犠牲を出した戦いではあったが、これでようやく帝国の内乱は終了するのであった。

クリスマス記念ＳＳ（前書き）

これは、ヴェンデリンが成人する前のお話です。

クリスマス記念ＳＳ

「もうすぐクリスマスか……」

なぜか地球とほぼ同じ暦を持つこの世界に転生して十年近く、十四歳になったが、今になって俺はなぜか日本のクリスマスを思い出していた。

前世で俺一宮信吾が子供の頃、家でケーキとチキンを食べ、父親が正体のサンタさんからプレゼントをもらった。

中学や高校の頃には、友人同士や部活でもクリスマスパーティーはあったな。

あまり女っ気はなく、男の友人同士で、早々と彼女とクリスマスを祝う同級生や友人に呪詛の言葉を送りながら大騒ぎをした。

大学生になると俺にも彼女ができて、クリスマスプレゼントを買うためにバイトに勤しんだ。

卒業前にフラれてしまったが、それもいい思い出だと思う事にしよう。

就職してからは、勤めていた商社が食品を主に扱う会社だったので裏方に回った。

裏方というか、食品関係の仕事はかき入れ時の年末に向け、早いと一年前、遅くても数か月前から動く。

ケーキを作っている食品メーカーや洋菓子店が、『ケーキの材料が足りないからもう作れません』では食べていけないからだ。

事前に必要な物を、ある程度計算して早めに発注をかけるわけだ。

俺達は、それを卸す準備で忙しい。

クリスマスギリギリになっても、計算が狂って『アレが足りない、コレが足りない』というトラブルが起こる。

『うちにもありません』で済ませてもいいのだが、うちのような二流商社はそういう肌理細やかな注文に応えてこそ、大手に対抗可能だという現実もある。

翌年以降の商売にも差し障りがあるので、クリスマスから年末まで駆け回るような忙しさだ。

それでも、正月くらいは休みがあるからマシであろう。

本当、一年中商売をしている方々は凄いと思う。

などと、なぜ急にこんな事を思い出したのかと言えば……。

「バウマイスター男爵！　今年も『謝肉祭』の季節である！」

導師から、この時期に行われる面倒な行事への参加を強制されたからであった。

「ああ、面倒くさいなぁ……」

「本当だよなぁ……」

エルも俺と同じように愚痴るが、それもこの『謝肉祭』という行事のせいだ。

実はこの風習というか行事は、王都周辺でしか行われていない。

そういえば、子供の頃から獲物を卸しにブライヒブルクまで行っていたが、謝肉祭など聞いた事がなかった。

俺の実家については言うまでもない。

バウマイスター騎士爵領では、結婚式と葬式と収穫祭以外の行事はほぼ存在しないのだ。

「教会の行事なのよね？」

「ボクも聞いた事がないな」

ブライヒブルク育ちであるイーナとルイーゼも、謝肉祭という行事は知らなかった。

教会の行事なら、ブライヒブルクの教会でも行われているような気がするのだが、そういうわけでもないらしい。

「この行事はですね。今から五百年前、教会により聖人認定されたヴァレンティーン枢機卿が、孤児やスラムの方々にお肉を贈るために始めた行事です」

「炊き出しみたいなもの？」

教会は、孤児院やスラムで定期的に炊き出しを行っていた。

それと類似する行事なのかと、イーナはエリーゼに尋ねる。

「ほぼ同じなのですが、狩猟枢機卿と呼ばれたヴァレンティーン枢機卿の誕生日に行われ、振る舞われるのが獲物のお肉という点が特徴的ですね」

狩猟が上手な枢機卿というのはどうかと思うのだが、この世界では俺以外誰も気にしない。

彼の生まれた日が地球でいうクリスマスに近く、神官である彼は貧しい人達に施しを与えるのに寄付を募るとかではなくて、自ら弓矢を持って狩猟に赴いたというわけだ。

なかなかに逞しいというか、アグレッシブな人物であったようだ。

「ヴァレンティーン枢機卿は、狩猟の名人であったそうです」

「（金を出さずに、体を動かしたんだな……痛っ！）」

エリーゼに聞こえないようにエルが核心を突くツッコミを入れたので、俺は静かに肘打ちを加えておく。

人間、それが事実でも口にしてはいけない事もあるのだ。

「謝肉祭という命名はどうなんだろう？」

ヨーロッパでは、仮装パレードとお菓子の振る舞いが行われる祭りだと記憶しているが、この世界では、ボランティアが狩った獲物を調理して孤児と貧民に振る舞う行事である。

ボランティアは、神官、貴族有志、冒険者、富裕な平民有志、時間のある狩りが出来る人達だけだ。

これを始めたヴァレンティーン枢機卿の名前からして、バレンタインという事もなく、時期はクリスマスだけど俺達が何か食べられ

るわけでもない。

王都周辺でしか行われないのは、参加可能な人数が集めやすいのがここしかないからかもしれない。

「エリーゼ、去年はこんな行事あったのかしら？」

「勿論毎年あるのですが、去年のヴェンデリン様はお忙しかったので……」

王都に来たばかりで様々な大人達に振り回され、誕生日も多くの貴族達に囲まれて疲れていた。

なので、ホーエンハイム枢機卿が誘ってこなかったのだとエリーゼは説明する。

「みんな忙しいので毎年は出なくてもいいのですが、王都在住の教会の信徒である程度裕福な方は、数年に一度は出た方が宜しいかと」

義務ではないが、俺は教会の名誉司祭なので定期的に顔を出せという事のようだ。

「ヴェルならさ。寄付して終わりでいいんじゃないの？」

「いえ、これは謝肉祭ですから……」

どんなに偉い貴族様でも、この謝肉祭だけは自ら狩猟を行って獲物を調理し、貧民達に振る舞う事が重要なのだという。

「ええと……パフォーマンス？」

「ルイーゼ、ストレートに言い過ぎ……」

寄付でも金額が多ければありがたいような気もするのだが、謝肉祭への参加は一種の政治的パフォーマンスのようだ。

持つ者が、持たざる者に自ら奉仕活動を行う。

だから、自ら参加しないと意味がない。

そういう事なら理解できる。

日本でも、周囲の目を気にしてそういう事を行う金持ちや政治家、芸能人が多かった。

「事情はわかったけど、導師だけ妙に嬉しそうだな」

エルは、俺達を誘いつつ狩猟の準備に余念がない導師を見て不思議そうな顔をする。

何が楽しくて、こんな行事に参加するのであろうかと。

「伯父様は、ここ暫く毎年の参加ですね」

王宮筆頭魔導師なので、参加すれば目立つから都合がいいというわけだ。

どうせ、王城での面倒な書類仕事などは下に任せきりなのだ。

謝肉祭の時にサボっても今更で、むしろ宣伝にはちょうどいいと思われているのであろう。

「某は狩猟は好きなのである！　動物だろうと魔物だろうと、沢山狩れれば嬉しいのは人間の本能なのである！」

「そうですか……」

謝肉祭への参加準備に余念がない導師を見ながら、俺達は全員こう思ったはずだ。

「「「「「「（ヴァレンティーン枢機卿と導師って、似た種類の人間だったんだろうな……）」」」」」」

それだけは確信する俺達であった。

「ヴェル、沢山獲れたわね」

「沢山獲れても、俺達は肉の欠片一つ食べられないけど」

「屋敷に戻ってからの食事を楽しみにしましょう」

「そうだな……」

謝肉祭は早朝から行われる。

この日のために、普段は入猟料が獲られる狩猟場が無料開放されたり、普段は立ち入り禁止の猟場が解放される事もあって、獲物は大量に獲れた。

夕方まで狩猟に勤しんだ俺、エル、イーナ、ルイーゼ、導師はある種の達成感を得ていたが、実は謝肉祭はここからが本番だ。

獲った獲物を調理して、孤児や貧民達に分け与えないといけないのだ。

そのために、エリーゼは狩猟ではあまり役に立てないと、俺達と別行動で教会本部にて調理作業に参加している。

「ヴェンデリン様、大猟のようですね」

「まあまあかな」

俺達も、獲物の下処理を手伝った。

血を抜き、毛皮をはぎ取る。

切り分けた肉は煮たり焼かれたりして、集まって来た人達に無料で配られた。

「聖人ヴァレンティーン枢機卿により始められた、全ての人々に血肉を分け与えるこの儀式を……」

人々に肉料理を配っている横で、老いた枢機卿が挨拶なのか説話なのかよくわからない話をしているが、ほとんど誰も聞いていない。

参加者達からすれば、無料で肉料理が貰える事の方が重要なのだから当たり前だ。

「そういえば、ブランタークさんは来なかったな」

「去年、ブライヒレーダー辺境伯様から命じられて強制参加だったらしいよ」

「今年はもういいって事かな？」

「だろうな」

ブライヒレーダー辺境伯家は王都に屋敷があるので、毎年家臣の誰かが謝肉祭に参加する事になっているそうだ。

去年は、ブランタークさんの当番だったらしい。

「それはお気の毒に……ふぐっ！」

またエルが余計な事を口走るので、俺は肘打ちで黙らせてから肉料理を配る作業を続ける。

「料理も大量にあるけど、並んでいる人も多いわね」

「疲れたなぁ……」

イーナとルイーゼは、早朝から狩猟に調理に配膳にと大忙しで疲れたようだ。

当然、俺とエルもである。

クリスマスに似ているというか、時期が重なっている行事があると聞いて少しワクワクしていたのに、タダ働きさせられて碌に飯も食えない。

俺は、『こんなクリスマスモドキ、もう二度と参加したくないと！』と思うばかりであった。

「これにて、料理の配膳を終了します」

ようやく準備していた料理がなくなったのは、夜になってからであった。

「これで終わりか」

「ヴェンデリン様、まだ後夜祭が残っていますよ」

片付けが終わると、俺にそう教えてくれるエリーゼ。

『後夜祭』と言うからには、高校の学園祭のあとで行われる打ち上げパーティーのようなものだと推察できる。

「（なるほど、夜まで大変だったから慰労でご馳走が出るのか）」

いくら何でも、朝から夜まで飯一つ出さないのは異常であった。

ここでご苦労様と、教会が食事を出してくれるのはありがたい。

「飯なら何でもいい。食えるものならそれで十分」

「デザートとか出るのかしら？」

「お酒は未成年だから飲めないけど、デザートは嬉しいよね」

俺と同じような結論に至った、エル、イーナ、ルイーゼも嬉しそうであったが、それに止めを与えたのはエリーゼであった。

「いいえ、これから日付が変わるまで、教会本部において大説話会が……」

「えっ？」

どうやらパーティーではなく、夜中まで教会の坊主達が順番にありがたいお説教をするらしい。

「飯は？」

「はい、勿論ささやかな物が出ます」

この場合、エリーゼの言うささやかとは嘘偽りのない質素な食事

なのは明白だ。
朝から夜中まで、ただ教会の指示に従って働き続けてから坊主の説教を聞く。
地球でも、厳格なクリスチャンはクリスマスにパーティーなどしないでミサに参加するそうだが、謝肉祭も同じなのであろう。
「ええと……」
俺は参加したくないのだが、まさか『嫌です』とも言えない。
エリーゼは参加する気満々なので、逃げ出すわけにもいかなかった。
「ヴェンデリン様、たまにはこういう行事に参加するのもいいですよ」
エリーゼの満面の笑み。
彼女は、心の底からそう思って俺に言っているのだ。
それに、普段のエリーゼは俺に教会の行事に参加するようにとは言わない。
数年に一度の、更に俺がブライヒブルクを生活の拠点にしてしまえば永遠に参加しないで済むかもしれない行事なので、ここは周囲の目も考えて参加すべきだと。
俺に気を使う彼女の優しさはよくわかるのだが、やはり参加したくなかった。
何しろ、俺は俗な一般人なのだから。
「行こうか……」

「はい」

エリーゼと一緒に後夜祭の会場である大聖堂に向かうが、ここに至って逃げ出そうと考えている者達がいた。

「俺、急用が……」

「私、食事の準備をしないと」

「ボクも、イーナちゃんを手伝う」

エル達が逃げ出そうとするが、当然俺は逃さなかった。
魔法で『縄』を作り、それで三人を拘束する。

「お前ら、本当に逃げられるとでも？　さあ、一緒にありがたいお説教を聞こうぜ」

「ヴェルが代表でいいじゃないか」

「ヴェルと婚約者のエリーゼの二人でバランスがいいし」

「そうそう、イーナちゃんの言うとおり」

俺だって、本当は逃げ出したいのだ。
したがって、エル達を逃す理由などどこにもない。
ただし、一人だけ上手く逃げおおせている人がいた。

「導師がいないね？」

「はい……伯父様は、今までに一度も後夜祭に参加した事がありま

せんので……」

なるほど、大好きな狩猟と、パフォーマンスである炊き出しにまでは付き合うが、関係のない後夜祭には断固として参加しないのか。

俺は導師の強かさに、心から感心してしまうのであった。

「聖書の第七節三項のお話、神の使徒ハイウェルは道に倒れていた旅人を助けましたが、その時に……」

強制参加させられた後夜祭は、死ぬほどつまらない。

一応食事は出たが、硬い黒パン一個とブドウジュースだけであった。

教会の教えでいうと、黒パンは肉の、ブドウジュースは血の元となるものだそうだ。

一つ教会に関する知識を得たが、為になったとは思えない。

それだけの食事では全然足りないのでお腹が鳴り続けているが、この偉そうな坊主達の説話が終わらないと、俺達は屋敷に戻って飯を食えない。

先ほどから、神やその使徒達の本当にあったのかも怪しい話や、過去の聖人達の言動などが神官達によって語られる。

参加者は、それを静かに聞いているのだ。

ハッキリ言って、何が面白いのかがわからない。

よく見ると、半数以上の参加者が死んだ魚のような目をしている。
早朝から参加しているのと、別に好きで参加しているわけでもないので疲れていて当然だと思う。

中には一部、目を輝かせながら聞いている人がいた。
信仰心が篤いのであろうが、こういう人が邪教に嵌るんだなと、俺は意地悪な考えを抱いてしまう。

「（腹減ったなぁ……うげっ！）」

「（静かにしてろ）」

俺は三度エルに肘打ちを食らわせ、つまらない説話に集中させる。
結局、後夜祭が終わったのは日付が変わってからであった。

「日本のクリスマス！　お前ら大半がキリスト教徒じゃないし、浮ついたパーティーばかりとか言ってごめんなさい！」

大学卒業前の彼女にフラれ、就職後は碌にクリスマスを祝っていなかったので、捻くれて日本式のクリスマスにケチをつけてごめんなさい。

ケーキに、チキンに、シャンパンに、プレゼントにと。
浮わついたクリスマスが、俺は何よりも大好きです。

後日、俺は日本式のクリスマスパーティーを後夜祭として世間に普及させるため、アルテリオさんに指示を出す事になるのであった。

第百十話　帝国内乱の終結。

地下要塞での戦いが終わってから一週間後、帝国の内乱は完全に終了し、ペーターは帝国摂政として戦後処理に奔走していた。

俺も、また『瞬間移動』が使えるようになったので、急ぎシュルツェ伯爵を連れて陛下へ報告に戻っている。

「分厚い報告書よな」

「ええ。何しろ、ほぼ一年分ですから……」

俺はシュルツェ伯爵と協力して、これまでの経緯を全て報告書に記載して陛下に提出した。

勿論メインで執筆したのはその手の作業が得意なシュルツェ伯爵であったが、俺も大学生時代にはレポートを、商社員時代にも報告書くらいは書いている。

それなりに貢献はしていて、シュルツェ伯爵からも『思った以上にやりますね。文官としてもいけるのでは？』と褒められたくらいだ。

なお、やはり親善訪問団でも偉い方なはずの導師はまるで協力してくれなかった。

あの人に、報告書の記載などを頼む方が無謀なのかもしれないが。

エリーゼは協力してくれたのに……。

血縁と能力は類似しないのかもしれない。

「帝国との講和条約か。結ばねばなるまい……」

今回の内乱では王国も損害を受けていたが、だからといって懲罰的な戦争をするわけにもいかない。

一部軍部や貴族に跳ねっ返りもいたが、総合的に判断すると損害賠償と謝罪を引き出して講和というのが一番利益が大きいであろう。

「古代魔法文明時代に使われた古の兵器か……。厄介よな」

「はい、それも内乱中に大量に出現したのが驚異的です」

現在、開発ラッシュで国力が増大中の王国と、内乱で疲弊した帝国。

戦争になれば、国力比で王国の方が有利だと思う人が多いはず。

だが、もし王国が帝国に攻め込めば、多数の発掘兵器で武装した帝国軍が防衛戦闘を行うはずだ。

魔法使いの数や空軍戦力で有利でも、そう簡単に勝利はできないであろう。

「疲弊した帝国の国力が上向くには時間がかかるが、以前よりも帝国は中央政府の力が強まった。内乱で戦闘経験を積んだ帝国兵と指揮官が多い。戦争は無謀とまでは言わぬが、適切ではない」

今までどおりに国力の増強を押し進め、帝国が経済を立て直す前に、彼らが得た古代魔法文明時代の発掘兵器類の戦力化とコピーを目指す。

「長い目で見れば、帝国の中央政府が力を増した事はかの国のプラ

スとなろう。だが、暫くは混乱は避けられぬ」

改易が決まっているニュルンベルク公爵家の残党に、改易や減封されて不満がある貴族達が組んで小さな反乱が勃発する可能性が高く、暫くは王国との戦争は目論まないであろうというのが陛下の考えだ。

「数十年後に帝国が体制を立て直した頃には、王国との国力差は更に増大しておる。その時に選択肢が多い方が、王国にとっては好ましい状況だの」

別に王国が、武力行使を極端に恐れているわけではない。

究極の平和主義というわけでもなく、国の歴史が長いので帝国を下すにしても長い目で戦略を考える傾向にあるだけだ。

もし国力差がもっと広がれば、帝国を従属させる事も可能なのだから。

「その間にも対策は色々と打てるかの。ところでバウマイスター伯爵、帝国の新兵器とやらじゃが……」

「こちらです」

巻き込まれた形とはいえ、俺も帝国で色々とやってしまっている。帝国に利する結果にもなっているので、ここはバランスを取らないといけない。

〇〇課長ばかりと仲良くしないで、ちゃんと〇〇係長ともコミュニケーションを取っておく。

しがないサラリーマンであった俺の、ハブられないための心得でもあった。

「残念ながら王国の息のかかった軍勢は少なく、鹵獲品は帝国軍よりも少ないです」

傭兵も合わせて七千人しかいなかったが、王国軍は無理にニュルンベルク公爵軍と戦闘を行う必要がなかった。

そこでフィリップとクリストフは、地下遺跡内で鹵獲品を得る作業に没頭していた。

それでも人数が違うので、帝国軍ほどは確保できていないが。

「それについては仕方があるまい。勇んで兵を出し、壊滅させたアホもおるからの。それに比べれば、負けなしのバウマイスター伯爵達にケチをつける理由が見つからぬよ」

陛下は、謁見の間の端に集まってヒソヒソ話をしていた貴族達を睨みつける。

どうやら彼らは、レガー侯爵の息がかかった連中のようだ。

あとは、対帝国出兵論者、俺の責任を問いたくて仕方がない連中、こんな感じであろうか？

人に聞こえない場所で陰口を叩くくらいなら俺に直接言えばいいのに、陛下もいるのでそれは出来ないのであろう。

「ドラゴンゴーレムのブレス発射装置は、前にバウマイスター伯爵がドラゴンゴーレムごと鹵獲しておるからの。魔道具ギルドの研究で量産は可能になっておる。拠点防衛用には使えるであろう。あとは、魔砲か……」

古代魔法文明時代にも魔砲が存在し、それはミズホ伯国のものよりも性能は明らかに上であった。

最後にニュルンベルク公爵が操った巨大ゴーレムの背中に装着され、カタリーナが魔法で撃ち落とした物がほぼ無傷で、他にも予備の魔砲を数十門も鹵獲していたのだ。

どういうわけか魔銃はなかったが、これはミズホ伯国独自の物なのであろうか？

昔は魔法使いの数が多かったと聞いているので、火力はそれで補っていたのかもしれない。

「魔刀、魔銃、魔砲、自爆型ゴーレム、他にも数多の新兵器が実際に使われ、戦争のやり方が変わった。これに対応できるようになるまで、帝国と戦争をしても意味がない。下手に相手に逆襲され、国力が上なのに大惨敗した無能な王と言われては堪らぬからの」

「ですが、帝国も運用が可能なだけです」

修理も、軽微な故障が限界であろう。

製造は当然無理で、構造を理解して難しい修理も可能な魔族はこちらで確保している。

ミズホ伯国ならば将来的には同程度の物が製造可能かもしれないが、彼らは本質では帝国貴族ではない。

「古より続く高度な技術と、独特の文化を持つ民族と領地か……」

「はい。彼らは安全保障政策上、帝国の自治領となったという面が大きいと思います。帝国宰相は、上手く呑み込もうと選帝侯の一人にする予定です。ですが、それでも彼らは帝国と微妙な距離を置くでしょう」

「なるほど。ならば、我が王国とミズホ伯国が友好関係を結べば色

々と得じゃの」

「はい、彼らは領地的な野心が少ないという点も、友好関係を結ぶのに有利な点です」

帝国が獲得した発掘兵器を使ってよからぬ事を考えた時、もしくは将来的に王国の国力が増して帝国を攻める余裕ができた時に。

ミズホ伯国は、王国にとって極めて有益な同盟相手になる可能性があった。

「交易の促進、文化交流、出来れば婚姻を進めて友好関係を強化する価値があるというわけじゃな？　バウマイスター伯爵」

「はい」

「その辺は、帝国と上手く交渉して我らで進めよう」

続けて、極限鋼の件と魔族の件も話をする。

だが、その前に陛下と一部閣僚達に、口の堅いワーレンさん以下近衛騎士団の数名を除いて謁見の間から出している。

部屋を出される貴族達からは不満の声があがるが、陛下は俺から報告を受けると、彼らを外に出した事に納得した表情を浮かべる。

「とんでもない爆弾じゃな。まあ、極限鋼という金属に関しては、バウマイスター伯爵しか作れないのであれば、流通量のコントロールは可能であるか。バウマイスター伯爵領内で使用する量の報告と、残りは全て王国政府に直接卸してもらおう。直接他国や他の貴族への販売は王国政府から禁止という通達を出す。加工技術が未熟で、暫くは研究と試作用以外では注文は増えぬはず。じゃが……」

「武器に使用可能ですからね」

王国の魔道具ギルドが開発の入り口にすら立っていない、魔銃と魔砲の素材をもし極限鋼にした場合、耐久性が素晴らしいので実用化が早まる可能性があった。

「そして魔族か……」

俺達が捕えて保護している魔族アーネストの存在、純粋な帝国内乱のはずが裏で魔族の国が関与している可能性があった。

一万年近くも誰も目撃していなかった魔族が姿を見せ、伝承のとおりに莫大な魔力と圧倒的な技術力を持っていたのだ。

新たなる仮想敵国の存在に、エドガー軍務卿とアームストロング伯爵の顔が歪む。

今まで対帝国と、念のために国内の大物貴族の反乱のみに的を絞って立てていた防衛・侵攻計画を一から練り直さないといけなかったからだ。

これに、新しい兵器類の開発と、それらを用いた新しい戦術の研究、部隊の再編、訓練・補給計画の見直しなどがある。

軍務卿や軍の重鎮である以上は、そこから逃げるわけにはいかないからだ。

「なるほど、魔族の国に関する情報を集める必要があるわけじゃな」

「はい、ある程度は情報は得ていますけど……」

魔族の国の位置や、人口、社会システム、文化などのあらましは

アーネストから聞いて報告書にも記載している。

「自国の重要な情報なのに、変な魔族じゃの」

陛下からすると、そんなに簡単に情報を漏らしてしまうアーネストが信じられないようだ。

もしかすると、偽情報なのではと疑っているのかもしれない。

「それが、彼は民間人なので」

「民間人とな？」

「考古学者だそうで、国家や軍に仕える者ではないのです」

リンガイア大陸の地下遺跡に興味を持ち、魔族の国は国外に出るのを法で禁じていたので密出国してニュルンベルク公爵領に到着、そこで自由に発掘作業を行うために、発掘兵器の修理や稼働に協力したという話を陛下にする。

「研究バカなのか？」

「はい。彼は自分の好きな研究にしか興味がないのです。だから、それを行うためにニュルンベルク公爵に発掘兵器を大量に渡した。そして、それをどう使うかはニュルンベルク公爵次第だと平気で言える男ですから」

アーネストが魔族の国から、大陸を混乱するために送り込まれたスパイ、工作員という予想は誰でもするはずだ。

だが実際には、この大陸に来てから同朋にまったく連絡を取っていない。

本人も、研究が楽しいし家族もいないので、この数年間発掘と研究ばかりしていたようだ。

「かえって危険な男よな。そういう輩は、突拍子もない事をするからの」

「陛下、王国で拘束しますか？」

それならそれでいいと俺は思っている。

扱いが面倒な奴なので、王国が負担してくれるのであればそれでいいのだし。

「うーーーむ、バウマイスター伯爵はその魔族を抑えられるのか？」

「単独だと難しいです」

何しろ、向こうの方が魔力が大きいのだから。

俺、導師、カタリーナ、ブランタークさん、最低でも上級魔力保持者が四名常時傍にいないと逃げられてしまう可能性がある。

「非効率な話じゃな。ワーレン、魔法使い用の牢獄は使えるのか？」

「いえ、多額の建設予算をかけ、使用する際には維持費がかかる『魔力牢』ですが、中級までしか対応しておりませんので……」

魔法使いの魔法を防ぐ強固な『魔法障壁』を常時展開可能な牢屋があるそうだが、これを動かすと一日に百万セント以上の経費がかかる。

なので、そう簡単に『悪い魔法使い』を閉じ込めるわけにはいかないらしい。

「軽微な犯罪を犯した場合は、上位の魔法使い達を送り込んで叩きのめして罰金を取る。重罪の場合は、暗殺した方がコストがかからぬからの。上級、中級の魔法使いで滅多に重犯罪者は出ぬが、実はブランタークと、クリムト、バウマイスター伯爵の師匠であるアルフレッドは、極秘依頼で数名そういう魔法使いを始末しておる」

なるほど、だからブランタークさんと導師は内乱でも人を殺めるのに動揺しなかったわけだ。

「王国で拘束して軟禁するとなると、大量の魔法使いを用いた常時監視が必要となるわけか……。それで、その魔族は何を望んでおる？」

「バウマイスター伯爵領は元々未開地だったので、未発掘の地下遺跡だらけだそうです。これを探索、調査したいと」

「のん気な魔族よの。無理に閉じ込めても逃げられる可能性がある以上は、監視して逃げた時に捕殺した方が手間はかからぬか……。その魔族のせいで王国も被害を受けておる。賠償代わりに地下遺跡の発掘を行わせるか」

「それしか手が思い浮かびません」

危険ではあるが、生かして利用するわけだ。
もっとも、俺はアーネストをあまり危険視していない。
彼に、国のためとか、望郷の念などという感情は薄く、自分の好きな研究だけしていれば満足なのだから。

「未知の地下遺跡という餌で、バウマイスター伯爵領に縛りつける。

王国もそこから利益を得るしかないの。監視の人員は密かにこちらでも出すとしよう」

陛下は、アーネストを引き取るリスクを避けた。

下手に拘束しようとして逃げられるくらいなら、俺達に預けてしまった方がいいと判断したのであろう。

思いっきり、俺達に荷物を押し付けたとも言えるが。

「帝国もバカではないので、じきに魔族の存在に気がつこう。バウマイスター伯爵の元にいた方がいいかもしれぬ……」

ニュルンベルク公爵に次ぐ戦犯だと思われるであろうが、この魔族を捕えたのは俺達だ。

捕虜をどう扱うのかは、俺の裁量だという言い訳もできると陛下は説明する。

「バウマイスター伯爵は今回の内乱で大活躍したようだが、同時に難儀を背負い込むの。ブランタークの言う、悪運が強いというのは事実かもしれぬ」

陛下にまでそう言われてしまい、俺は少し落ち込んでしまう。

確かに、思い当たる節はあり過ぎだ。

「帝国は暫く外に兵を出す余裕もなく、その間に国力の増大と新兵器の配備を行う時間もできた。一回負けたが、帝国の犠牲に比べればマシだの。バウマイスター伯爵の意見を是とする。バウマイスター伯爵達からの報告書の分析と、これからの方針決定に時間がかかる。別口で帝国に外交交渉団を送るので、バウマイスター伯爵とシュルツェ伯爵は引き続き帝国で情報の収集を行ってくれ」

「畏まりました」

政治的な案件なので、俺達が戻ってきて報告したからといってそう簡単に講和交渉にはならないようだ。

帝国への残留を命じられたが、俺には他にしなければいけない事もあった。

「久しぶりに、自分の領地に戻りたいのですが……」

「移動魔法が復活したのであれば、それは自由にして構わぬよ。バウマイスター伯爵領は、この一年で大分様変わりしておるらしいが」

報告と一部極秘命令を受けてから陛下に許可を貰い、俺はエリーゼ達を連れてバウマイスター伯爵領へと魔法で飛ぶ。

すると、領主館を中心とした街並みが一年前よりも数倍に広がり、多くの人達で賑わっていた。

更に……。

「お館様ぁーーー！」

屋敷に向かうと、正面門から一年前とまるで変わっていないローデリヒが恐ろしい速さで駆け寄ってくる。

あまりの早さに、門に配置されていた二名の警備兵が反応できずに目を丸くさせていた。

「この一年と少し、お館様のご尊顔を拝む事もかなわず、拙者は大変に心配しましたぞぉーーー！」

「またかぁーーー！　折れるぅーーー！」

俺は再び、感極まったローデリヒにサバ折りをくらってしまう。
彼のサバ折りは、相変わらずの容赦のなさだ。

「ローデリヒさんの得意技が出た」

「エルさん、あの方は家宰の方ですよね？」

「うん。たまに感情が暴走するとああなるんだ」

「凄い方ですね……」

感極まったとはいえ、主君をサバ折りする家臣。
確かに、凄いかもしれない。

「物凄く有能な人なんだけど……」

「すいません、私にはまだそうは見えません……」

「だよねぇ……」

エルとハルカが冷静にローデリヒについて話をしていると、そこにもう一人、俺がよく顔を見知った人物が姿を見せる。

「エーリッヒ兄さん！」

「久しぶりだね、ヴェル。帝国の内乱では活躍したと聞いたけど」

一年ぶりに会うエーリッヒ兄さんは、やはりイケメンのままであった。

「気苦労も多かったですけどね。それよりも、エーリッヒ兄さんはなぜバウマイスタ伯爵領に？」

「お手伝いさ」

王国が支援をする南方バウマイスター伯爵領の開発において、領主が帝国内乱に巻き込まれて一時行方不明になるという事態が発生した。

その隙を狙ってかは知らないが、妙な貴族が複数蠢動しようとしたので、陛下がエーリッヒ兄さんに手伝いを命じたそうだ。

この一年ほど、バウマイスター伯爵領に出張してローデリヒの補佐をしてくれたらしい。

「最初はそれなりに仕事をしていたんだけどね。ヴェルが健在で内乱で活躍中という報告が入ったら、妙な連中は大人しくなった。ヴェルが戻って来た時に、手を出している事がバレると報復されると思ったようだよ」

ここ暫く紛争くらいしかない王国において、本気の戦争で大量に敵兵を討った俺達は畏怖の対象になっているそうだ。

隙を突いて人の財布に手を突っ込もうと考えるような輩からすれば、俺はエドガー軍務卿やアームストロング伯爵以上に怖い存在に見えるらしい。

「それでも、拙者は大いに心配しましたぞ！」

「すまんな、ローデリヒに全部任せてしまって」

「いえ、これでようやくお館様が戻ってきてくれると思えば……」

ただ、まだ帝国での仕事が残っているのでもう少しだけ任せると伝えてから、俺達は帝都へと戻った。

『通信』も復活したので、いつでもローデリヒとは自由に話せる。領地に関する報告も受けられるし、エーリッヒ兄さんもいるので安心というわけだ。

「すいませんが、もう少しお任せしていいですか？」

「私は問題ないよ。陛下から、正式に命令されておこなっている仕事だから」

「お館様には、帝国関連の仕事が残っているのですな。奥様達との帰還を心待ちにしております」

二人にバウマイスター伯爵領の事を任せると、俺は再び帝国へと移動するのであった。

「やれやれ、ヴェンデリンも困った事をしてくれたね」

「そうか？」

「言ってみただけだけどね。意外と多いんだよ、ヴェンデリンへの非難が」

王国での用事を終えて帝国に戻ってくると、忙しそうに働くペーターが俺を呼び出した。
用件を聞くと、俺が反乱軍の兵士達を降伏させる時にニュルンベルク公爵の首を切り落として曝さなかった事が問題になっているようだ。

「もっと他に問題もあると思うけど……」

極限鋼の事もあるし、それよりもニュルンベルク公爵の首はいらないと思っていたのに、結局彼を討ったのは俺達であったという件もだ。
勲功第一位が外国人である俺達になってしまったので、嫉妬と引き降ろしを兼ねての非難という側面もあるのであろう。

アーネストの件については、まだ隠し通せていると思う。
どうせ、すぐにバレるだろうけど。

「ヴェンデリンがニュルンベルク公爵の遺体を丁重に扱ったからこそ、大半の反乱軍は素直に降伏してくれた。もし首を曝していたら彼らは暴発していたかもしれない。でも、その処置を温いという貴族も多くてね。本当に、皇帝の座は面倒の塊だね」

彼らからすればニュルンベルク公爵はいい主君であったから、その遺体を丁重に扱った帝国軍にすぐに降伏してくれた。
俺達を非難している連中も、それはわかっているはず。

ところが、彼らからすればニュルンベルク公爵の家臣達は暴発してくれた方がよかったのだ。
討てば勲功になるし、降伏した彼らが帝国軍に吸収されれば自分達の席が減るという現実もある。

今の帝国軍は、かなり無理をして編成されている。
その再建に、優秀な人材が多い旧ニュルンベルク公爵家諸侯軍の軍人達は必要というわけだ。

「皇帝の座は、自分で望んだんだろう？」

「まあね。それで、用事は報酬に関してなんだけどね」

帝国の財政は、思ったよりは悪くないのだそうだ。

「ニュルンベルク公爵や反乱軍に積極的に与した貴族の領地と財産を没収したからね。帝都から持ち去った財貨や物資も大半が確保できたし」

ペーターがテレーゼを強制引退させた時に、前皇后達につこうとした無能な貴族達の財産や領地も没収している。
以上のような理由で、俺へ払う報酬は確保できるそうだ。

「ただし、二十年分割でね」

戦後復興と、新しい経済政策も実行するので予算の確保は必須のようだ。

「だと思ったよ」

「その気になれば一括でも払えるけど、そうすると帝国政府が何もできなくなってしまう。すまないけど」

「払ってくれるならいいけど」

「払うよ。払わないと、ヴェンデリンが王国軍を率いて押しかけてきそうだし」

「俺はそんなに野蛮じゃない」

「ヴェンデリンがそう思っても、家臣達が許せなくてそういう事になるケースって多いから。王国が侵攻の理由にもしかねないしね。ちゃんと王国との講和の席でも約束するから」

「律儀なのな」

「国や貴族同士の交渉では、表面上は誠実さは必須だよ。勿論裏ではドロドロだったりするけど。早くヘルムート王国と講和を結んで、交易の規模の拡大に、戦後復興もしないといけないしね。予算は何とか確保できそうだし、帝国は直轄地が増えて中央の力が増した形になった。期せずして、ニュルンベルク公爵の政策が彼の敗北でかなえられたわけだ」

俺もペーターも、何という運命の皮肉だと思ってしまう。

「ニュルンベルク公爵が最後に語った話はテレーゼ殿から聞いた。あの貴族のお手本のようなニュルンベルク公爵が貴族になりたくなかったなんて。ああいう有能すぎる人も考えものだね。装うのが上手すぎる」

「その無茶が、彼を勝ち目のない内乱に導いたとも言える」

「無意識下の破滅願望か……。人間とは本当に複雑だね。ところで……」

これ以上ニュルンベルク公爵の話を続けても仕方があるまいと、ペーターは別の話題を振ってくる。

「テレーゼ殿を預かってくれるそうで？」

「預かるというか、本人の移住希望を受け入れるだけだ。しかしいいのか？」

「僕としては、ありがたい事だと思っているよ」

そうであろう。

今のペーターにとって、テレーゼは一番の政治的なライバルなのだから。

彼に蹴落とされるまでは、テレーゼは解放軍のトップとして特に大過なくニュルンベルク公爵と戦っていた。

帝都解放も、テレーゼの手柄なのだ。

「彼女本人は皇帝の座にまったく未練がない。けど、彼女を神輿にしようとする連中が出るかもしれない。悪い事に彼女は未婚だしね」

大物貴族が、自分の息子なりをテレーゼの婿として派閥を形成する。

もしこれが行われれば、為政者であるペーターは非情の決断をせざるを得ない可能性も出てくるのだ。

「個人的には、テレーゼ殿はうら若き女性でもある。そういう決断はしたくないね」

「奥さんにすれば解決じゃないか？」

実は、それが一番てっとり早い解決方法である。
双方に愛情があるかとかそういう話は、貴族や皇族なのでまったく必要ないのだから。

「それで、夫婦で政治的に張り合う日々を送れと？　僕には、僕のエメラが傍にいれば十分だから」

「ペーター様、私はペーター様の物ではありません」

「またまた。エメラの恥ずかしがり屋さん」

「事実を述べただけです」

相変わらずエメラは無愛想だが、必ずペーターの傍にいて彼を嫌っているわけでもない。
やはり、彼女はツンデレさんなのだ。
俺達の前では、絶対にデレは見せてくれないのであろうが。

「あっ、そうだ。他にもいくつかあったんだ」

ペーターの話は続き、まずは俺の帝国領内の移動についてであった。

「ヴェンデリンは帝国の名誉伯爵でもあるからね。制限をかける理由がないんだよ。自分と家族と護衛くらいなら問題ない。軍勢を連れて移動されると問題だけど」

「『瞬間移動』では、軍勢の移動は無理だよ」

「ならいいさ。交易についてだけど、一部禁輸品を除けば直轄地では帝国の法に、貴族領ならその貴族家が制定した法に従っての購入だね。関税とか、かけている貴族領もあるから」

両国共に、貴族領とは一種の自治領なので、関税を掛けるか掛けないかは領主が決めている。

とにかく収入が欲しいので普通に掛ける貴族、それよりも流通量が増える事を重視しているので掛けていなかったり、極端に関税が低い領主と。

貴族ごとに、それぞれというわけだ。

「それは王国と同じだな」

「あとは、王国との講和案の草案をヘルムート三十七世陛下に届けて欲しいかな。今専門家に作らせているけどね。それを元に条件のすり合わせもあるだろうし」

「わかった」

「戦後処理の多さに眩暈がするね。なるべく早く皇帝選挙も行わないと駄目だし」

「選挙をするのか？」

「他に立候補者がいないから、ただの信任投票だけどね」

今回の内乱後、選帝侯家で生き残ったのはわずか二つ、それにミズホ伯国も加わるが、彼らは皇帝選挙には永遠に出馬しないと宣言している。

結局ペーターしか立候補しないので、選挙はただの信任投票になってしまうそうだ。

「選挙をする意義は、形式だけなんだろうけど」

「世の中には、形式を重んじる人が多いけどな」

「そういうわけさ。ヴェンデリンは今日はこれからどうするんだい？」

「テレーゼの屋敷に行く予定だ。移住の件の打ち合わせとかな」

「そうだね。そういうのは早い方がいい」

ペーターの元を辞した俺は、その足でテレーゼの屋敷へと向かった。

「再び妾は平穏で暇な時間を満喫中じゃ。移住に関しても、もう荷造りは済んでおるからの」

テレーゼの屋敷に行くと、彼女は庭に出した椅子に座ってノンビリとお茶を飲んでいた。

「もう荷造りを？　早いな」

「夜逃げでもあるまいし、そんなに荷物などいらぬ。フィリップ公爵家の紋章が入っているような物は、全てアルフォンスに返したからの。必要な物があれば、向こうで買えばよいのじゃ。その方が、ヴェンデリンの領地に役に立つであろうからの」

自分は、もうフィリップ公爵家の人間ではない。
と周囲に表明するため、テレーゼは自分が持っていた紋章入りの品を全て処分してしまったそうだ。

「あのフィリップ公爵家秘伝の魔道具は？」

当主しか持てない魔法の袋に入っていた品だが、まだ他にも色々と入っているとテレーゼからは聞いた。
さすがに、アルフォンスに返さないと駄目だと俺は思うのだ。

「勿論返した。『フィリップ公爵家秘伝の魔道具が、ニュルンベルク公爵を討ち取るのに大いに役に立った』とペーター殿にも伝えてもの」

テレーゼが勝手に使ってしまったが、魔道具はフィリップ公爵家の物であったから、それらを提供したフィリップ公爵家の功績も大きい。
という事にして、上手くニュルンベルク公爵討伐の功績をフィリップ公爵家に譲ってしまったそうだ。

今のテレーゼには功績など邪魔で、それを新当主となったアルフォンスに譲ったというわけだ。

「おかげで、荷物は少ないぞ」

大きなトランクとバッグが一つだけ、そして随伴は若いメイドが一人だけだとテレーゼは語る。

「本当は一人で行く予定だったのじゃが、今妾の屋敷にいるメイドは孤児出身で家族もおらぬから、外国でも構わぬらしい。次の職が

あるかわからぬみたいだし、この娘は妾で面倒を見る。向こうで婿を探してやらねばの」

テレーゼは、傍に控えるメイドに視線を送りながらそう答える。

「そういう考え方は、やっぱり貴族だな」

「そう簡単に今までの癖は抜けぬよ。ところで、少し買い物に付き合ってくれぬか？　まったく準備なしというわけにもいかぬ」

「付き合いましょう」

俺とテレーゼは、買い物へと出かける。

「どうだ。似合うであろう？」

「よく似合うな」

テレーゼは平民の若い女性がよく着る服装に着替え、俺もそれに合わせて衣装を替えた。

見た目は、平民の若い恋人同士がデートをしているようにも見える。

「もう賑わっておるの」

内乱が終結した事実は、既に帝都中に公表されている。

いまだに戦後処理は続いているが、既に戦地ではない帝都では多くの人達が楽しそうに買い物などを楽しんでいた。

「こういう光景を見ると、妾も少しは苦労した甲斐があるのかの」

「前半戦の功労者だからな」

「後半は、ペーター殿に出し抜かれたがの」

「それについては、すまんとしか言えないな」

「別に妾は気にしておらぬ。権力者に正義もクソもない。負けた奴が悪くて、妾が負けたにすぎない。負けたのに生き残れ、今の生活は楽しいからの」

テレーゼが、俺に腕を絡ませながら自分の考えを述べる。

「マックスは自分の本当の考えを最後まで上手く心の奥底に仕舞えた。妾は駄目じゃった。最高権力者になるのを避けたいという感情を、完全に隠せなかった」

そういう部分が隙になって自分は敗れたのだと、テレーゼは語る。

そして、自分は今の状況を悪く思っていない。

むしろ、楽で楽しいと思っているのだと。

「仕方なしに引き受けたアルフォンスは、今頃苦労しておろう。あの男は今までは能力はあってもやる気が薄かった。じゃが、今はそれを表に出せない」

だからかもしれない。

最近はあまりアルフォンスと顔を合わせていない。

それだけ、権力者になるというのは大変なのだと。

「その点、ヴェンデリンは魔法があるから便利よの」

やる気があろうと無かろうと、トップにいて家臣に任せれば勝手に統治してくれる。
それで実権を奪われる可能性もない。
大変に羨ましい境遇だとテレーゼは羨ましがっていた。

「軽い神輿だからな」

「じゃが、本当に軽いわけでもない。羨ましい限りじゃ」

そういう話はそこで止めて、俺達は商業街で買い物をする。

「どうじゃ、似合うか？」

「もう少し明るめの色がよくないか？」

「そう言われるとそうかの？」

テレーゼが服の試着を行い、俺が素直に感想を述べる。

「この色にするかの」

「そうだな。このくらい明るい色の方が似合う」

他にも、アクセサリーなども購入していた。
服もそうだが、フィリップ公爵に相応しい高級な物ではなく、庶民以上下級貴族くらいのグレードの物を多目に購入する。

「もう妾が目立つ必要などないからの。このくらいの方が気軽に着られるし、種類も多く買えてお得というわけじゃ」

とは言いつつも、やはりテレーゼは元大貴族である。
そういうオーラがあるし、美人でスタイルも抜群にいい。
何を着ても似合うのは羨ましかった。

「エリーゼ達も休みの日には色々と着ているからの。少し張り合ってみた」

「同じくらい似合っているさ」

「ほほう。随分と優しい評価ではないか。前は嫁達が一番で、妾には冷たかったのに」

「ああ。それは……」

今のテレーゼは特に力も持たない名ばかり貴族だし、別に無茶を言ってくるわけでもない。
年上のお姉さんと話をしているようで、安心して付き合えるというものだ。

「妾が面倒ではないのか？」

「フィリップ公爵は面倒でも、テレーゼは面倒じゃないな。俺は綺麗な女性には優しいんだ」

「ふっ。年下なのに生意気じゃの。なるほど、面倒ではないか。褒めてくれたお礼にケーキでも奢ってやろう」

「年下は、素直にお姉さんに奢って貰うか」

「遠慮なく食べるがよいぞ」

買い物を終えた俺達は、同じく商業街にある一軒の喫茶店へと向かう。

「聞くところによると、ここの新作ケーキが美味しいらしい」

「それは楽しみだ」

俺はコーヒーでテレーゼはマテ茶、一緒に新作ケーキも二つ頼む。

出て来たケーキを食べると、とても美味しかった。

「このレアチーズケーキの上に乗っているリンゴのソースが絶妙だな」

「北方の特産品だからの。リンゴは」

この世界でも、リンゴは寒い地方の特産品であった。

これも、是非とも輸入したいものだ。

「本当に未練はなかったのか？」

「うん？　皇帝の座のか？」

「それも含めてだな」

俺は彼女の可能性を摘んでしまったわけで、そのせいで実は恨まれているのではないかと思っていた。

「アーカート神聖帝国に初の女帝が！　うむ、歴史学者や、この世

の政治に絶望している連中には甘露じゃの」

どの政治体制でも、若い指導者とか、初の女性皇帝などは、世間の関心と期待を多く背負うものらしい。

「大いに期待されたのに、成果を挙げられなかった時の民衆の絶望こそ酷いと思うがの。最初に過剰に期待していた分、余計にであろう。妾は、別に皇帝になりたいなどと思った事は一度もないの」

「次期皇帝候補に近かったから仕方なしに？」

「有体に言うとそんな感じじゃの。妾を出し抜いたペーター殿は、ヴェンデリンと年齢に差がない。若き帝国の改革者とか持ちあげられるのは最初のうちだけじゃ。すぐに足を引っ張ろうとする輩も増えてくる。あの者の道は茨の道でもある」

「よく自分から皇帝になりたいとか思うよな……」

俺なら死んでもゴメンである。

「ペーター殿には、あの少し無愛想な女魔法使い殿がおるではないか」

「ああ、エメラね」

あの人は綺麗だが、基本的に職務に忠実で普段は笑わない。

無愛想だと言う貴族も多かった。

ペーターとランズベルク伯爵は、自分の妻にしたいと常に公言していたが。

「普段も、ペーターにはそっ気ないからなぁ……」

「表面上はそうでも、あの女魔法使い殿はペーター殿の安全確保に必死じゃ。筆頭魔導師にはなっておるが、かなりの仕事を部下に任せてペーター殿のボディーガードに徹しておる。それに不満を漏らす事もなく、あの二人はそういう関係なのであろう」

さすがは、同じ女性というわけか。

テレーゼは、エメラの気持ちをよく理解しているようだ。

「今思ったが、ペーター殿とヴェンデリンは似ておるの」

「何がですか？」

「年上の女にウケがいい」

「ははは……」

何とも返事がしずらい。

そういえば、アマーリエ義姉さんは元気であろうか？

早く会いたいものだ。

「ヴェンデリンが帝国を離れるのと同時に妾も自由の身となる。楽しみじゃの」

「バウマイスター伯爵領で何かする予定は？」

「何も決めておらぬ。暫くは自由を満喫するのみじゃ」

喫茶店を出てから更に数店舗を回って買い物を行い、時間はそろ

そろ夕暮れとなった。

「ヴェンデリンは、屋敷に戻って夕食か？」

「エリーゼが何かを作っているから」

「料理も練習したいの。貴族の令嬢には必要ないものじゃが、今の妾なら覚えたら面白いからの」

「やっぱり作れなかったのか……」

前に、料理が作れると言っていたのは嘘だったらしい。

「いや、作れるぞ。ただ、レパートリーが極端に少ないのじゃ。解放軍で出したフィリップ公爵家伝統のメニューがあったであろう？」

「あったね、毎日同じメニューで辟易したけど」

エルも、エリーゼ達もみんな飽きたというので、独自に食事を作る原因にもなっていた。

「そのくらいは作れた方がいいというのが、フィリップ公爵家の女に課された義務での。だから作れたのじゃ」

「なるほどね」

作れる料理の数は少ないが、包丁使いなどの基本ができていれば、そう料理の習得に苦労しないか？

「エリーゼくらい色々と作れたら人生が豊かになるかもしれぬ。時

間もあるし、教えてもらうとするかの」

「それがいいかもね。そうだ、今夜も食べて作り方を教えて貰えばいい」

「ほほう。ヴェンデリンも、さり気ないレディーの誘い方を覚えて、お姉さんは安心というものじゃ」

「さり気ない誘い方ねぇ……」

俺とテレーゼは屋敷へと歩いていく。

これから二人の関係がどうなるのかは、正直なところまだわからない。

だが、帝国貴族としての大半を捨てたテレーゼが魅力的に感じられたのは、決して俺の勘違いではなかった。

「これより、アーカート神聖帝国とヘルムート王国との講和の儀を執り行います」

テレーゼとのデートから一週間後、ようやく帝都にある皇宮において両国による講和の儀が行われていた。

帝国側はペーター自らが、王国側は外務卿だけではなく格を合わせるために王太子殿下が出席をしている。

外務卿がハブられているような気もするが、彼も別に暇ではない。

王太子殿下の傍についているし、事前に両国の外務担当者同士による協議が行われて条件のすり合わせは終わっていた。

「ようやく終わりですね」

「そうですね」

内乱に巻き込まれた実務能力のある上位貴族、という枠に入っていたせいで忙しかった俺とシュルツェ伯爵はようやく安堵の溜息をついていた。

こういう時に本当は仕事をしないといけない導師は、能力はともかくやる気はゼロなので何もしていない。

だから余計に、俺達の負担が増していたのだ。

「予想では、細かな条件で紛糾すると思ったのですがね」

両国は一度戦端を開いてしまっているので、その賠償額や、帝国の方が内乱で弱ったイメージがあるので王国側が強気で交渉してくるかと思っていた。

ところが実際に蓋を開けると、どちらかというと王国の方が早く講和を結びたいように見える。

「王国軍が弱かったからでしょう」

いくら無能なレーガー侯爵が指揮していたとはいえ、八千人の先遣隊が一方的に撃破されたのだ。

フィリップとクリストフの活躍によって何とか恥はかかないで済んだが、もしこのまま戦争になっても王国は実戦を経験した精鋭たる帝国軍に敗れるかも、という不安が王国軍内に広がっていた。

勿論、表立ってはそんな弱気は認めない。

だが、心の中ではその可能性を考慮する貴族が増えていたのは事

実だ。

「あとは、ニュルンベルク公爵の遺産ですか」

地下遺跡から発掘された魔道具類に、ミズホ伯国軍が実戦で使用した魔銃と魔砲もある。

特に魔道具の方は最後の戦いでかなりの数が鹵獲されており、これを実戦で使われると王国軍が不利になる可能性が高い。

よって、その対策が出来るまでは、大人しく穏便に和平と通商の拡大などをした方が得策という結論に至ったようだ。

「（バウマイスター伯爵もかなり回収したのでしょうけど、帝国軍の方が数が多いから数は確保しているはずです）」

俺の傍にいるシュルツェ伯爵が小さな声でささやく。

使い方も、降伏したニュルンベルク公爵家の兵士達から教えて貰えばいい。

訓練にもさほど時間がかからないはずだ。

「王国軍は慎重にならざるを得ない。藪を突いて蛇が出かねないのだから」

「実戦も経験して精強ですしね」

旧ニュルンベルク公爵家軍以下、改易されたり没落した貴族の軍勢に王国軍領地の切り取りを許可されると逆に王国の方が領地を失いかねない。

ならば、相手から謝罪と賠償を受け取って素直に講和した方がマシなのだ。

「一部、何もわかっていない貴族が帝国再侵攻を口にしていますけどね」

「そんな事は不可能だと思いますけど……」

「それがわかっていないから、陛下から鼻つまみ者扱いなのですよ」

事前に交渉を繰り返して条件が決まっていたので、両国の間で講和が締結されていた。

結局、王国北部にも及んだ『移動』と『通信』の阻害は、反逆者ニュルンベルク公爵による独断とされて、彼の罪を今の帝国政府が謝罪と賠償する旨で合意している。

やはり、戦争で負けると完璧な悪役にされてしまうようだ。

『勝てば官軍』とは、よく言ったものだ。

他にも、交易に関する交渉も纏まっている。

双方の経済拡大のためと、帝国としてはこれを復興の財源としたいのだ。

「両国共に、許可を得た人間が直轄領には自由に出入り可能。貴族領内には別途許可を得る事ですか」

「反乱の幇助を行われると困るからです」

ニュルンベルク公爵にも、おかしな魔族がついていた。

あの男は、俺の勘では国家の命令で動いていたわけではない。

自分の知識欲を満たすために、反逆者に手を貸しても何ら罪悪感も湧かない奴なのだ。

魔族の国でも、彼の扱いには困っていたはず。
何しろ、彼の魔力は魔族の中でもトップレベルにあるようだし。
ただ、エリーゼの『過治癒』で苦戦したように、彼の本業は考古学者で戦闘に優れているわけでもないのだ。

頭がいいので、発掘品の修理や整備でニュルンベルク公爵には相当貢献していたようだが。

「交易が拡大しますと、経済は回りますが密輸や密入国などは増えます。帝国も軍が精強になったとはいえ、暫くは小規模の内乱や騒乱に悩まされるでしょう」

内乱中にペーターが強引に推し進めた滅封、転封、改易などの処置に反発する者が出るのはこれからであろう。
彼は、帝国の再建と開発を行いながら、そういう物を上手く鎮圧していかないといけない。

「あの若さで大変だと思いますね。バウマイスター伯爵と同じ年ですか」

「ええ」

「それは大変だ。その苦労が忍ばれます」

俺とシュルツェ伯爵の前で、王太子殿下とペーターによる調印が行われる。
これでようやく、一年以上にも及ぶ内乱とそれに関連する両国間の紛争が終了するのであった。

正月記念ＳＳ

「新年を祝って乾杯！」

「「「「「乾杯！」」」」」

その存在意義に疑問を感じた『謝肉祭』から一週間後。
暦では、新しい年へと移行していた。

日本でいうなら正月だ。
お節料理に、お餅に、近年ではカニ、マグロ、高級和牛などのご馳走も食べる。
アメ横や築地を始めとする場所が多くの人達で賑わい、食品関係の商社マンであった俺も正月に関連する食材の仕入れで忙しかった。

さて、この世界ではというと、教会の堅苦しい説教やミサなどもなく、子供は寝てしまうが大人は年越しパーティーを行う事が多い。

除霊の後に手に入れたバウマイスター男爵邸の庭では、多くの料理やお菓子、酒、飲み物が大量に準備され、この日はローデリヒ以下屋敷の使用人達も自由に飲み食いしながら楽しんでいる。

「さすがは、バウマイスター男爵家の新年パーティーというべきかな？」

「本当、凄いご馳走だな」

「それなのに、あまり堅苦しくないのがいい。大物貴族家の新年パ

ーティーには面倒も多いらしいからな」

「ヘルムート、お前は出席した事があるのか？」

「いいや、話に聞いただけだけど。パウル兄貴もだけど、俺がそんな席に呼ばれると思うか？」

「ないと思うが、念のために聞いてみたんだよ」

招待したエーリッヒ兄さん、パウル兄さん、ヘルムート兄さんは奥さん達と共に料理と酒を楽しんでいた。

「バウマイスター騎士爵領での十二年間を思うに、これからはご馳走を食べてもいいのではないかと」

「あはは、うちの新年の料理は微妙だからね」

エーリッヒ兄さんが、思い出したように軽く笑う。

地方の貴族領でも、パーティーはなくても新年にはご馳走くらいは出る。

バウマイスター家でもそうなのだが、せいぜい狩りで得た肉料理が多めに出るくらいで、王都で普段食べているレベルくらいの料理であった。

「でも、昔は楽しみだったよな。鹿肉のローストがちゃんと一人前出たし」

「そうそう、分家から購入したハチミツでイチジクを煮たデザートが出てな。王都に来るまで、あれ以上のご馳走はないと俺は思って

いたな。王都で甘い物を購入したら、使われているハチミツの量がうちらしくて笑えたけど」

パウル兄さんと、ヘルムート兄さんも昔を思い出しているようだ。そういえば一年に一度は、未開地から家に戻ると少しだけ豪勢な食事が出ていたのを俺は思い出す。

「しかし、金がかかってそうだな」

「勿論それなりにかかっていますけど、ちゃんと節約していますよ」

「ああ……、アルテリオ殿がいるのか」

パウル兄さんの視線が、ローデリヒと談笑しているアルテリオさんへと向かう。

「それもありますけど、これのおかげですよ」

「魔法の袋？」

「はい、安い内に必要な食材を纏めて購入するんです。肉類は狩猟で得ましたし」

日本でもそうなのだが、王国では庶民でも年末から新年にかけてご馳走を食べる傾向にあり、需要が増すのでその時期になるとほぼ全ての食材の相場が上がる。

商売人からすると、年末こそが稼ぎ時というわけだ。

だから、商社マン時代に取引先の社長に言われたことがある。

『正月で使う食材で保存が利くものは、遅くても十二月初旬までには買っておけよ』と。

それを思い出し、俺は数か月前から新年のパーティーで使う食材の確保に余念がなかった。

魔法の袋があれば賞味期限も関係ないので、最高の状態で食材が集められたのは幸運であろう。

「魔法の袋か……。汎用は、貴族家でも相当の上位じゃないと持っていないからな」

魔法使いでなくても使える汎用のものは、作製に手間がかかるので値段が高い。

まず、男爵以下の貴族はほとんど持っていないそうだ。

お抱え魔法使いが持つ魔法使い用のものを使わせてもらうケースもあるそうだが、それだと魔法使いの所有なので貴族が持っている事にならない。

自分の収納物で一杯という魔法使いも多いそうで、預かりを断わられるケースも多いそうだ。

「でも、そこまで希少性が上がるものなのですか？」

「ああ、それはうちのような商人が買い占めるからだな」

パウル兄さんの代わりに、ローデリヒとの会話を終えたアルテリオさんが俺の疑問に答える。

「貴族家の魔法の袋は、せいぜいで一個か二個。容量もそれほど必要なわけでもない。だが、商人からすれば必須アイテムだぜ」

食品の保存以前に、容量が大きいものを買えば数十トンの荷物でも袋一つで移動可能なのだ。
大物になろうと考えている商人なら、借金をしてでも必ず買う物だそうだ。

「俺は、現役時代最後の老火竜退治の報奨金と素材代金の分け前があったからな。いきなり大容量の魔法の袋が購入できた。商人で、こんなに有利なスタートができる者は滅多にいないな」

それでも商人には商才が必要だし、魔法の袋の代金はアルテリオさんが命がけで得たものだ。
ただの商人志望者には、そんな事は不可能であろう。

「それで、その元相方のブランタークさんは来ないですね」

「あいつは、ブライヒレーダー辺境伯家のパーティーが優先だろう」

庶民は各家庭だけで、あとは近い親戚も一緒にパーティーを行う事が多い。
商人も大物になれば取引先を呼んで主催するし、同じような規模の同業者同士で数年おきに交代で行うケースも多い。
貴族はある程度大身の家だけが主催して、そこに寄子が料理、酒、お祝い金などを持参するケースが多いそうだ。

「王都ブライヒレーダー辺境伯家屋敷でも、それなりの規模で毎年やっているからな。まあ、領地にある屋敷の方が本命だけど」

どうやら屋敷の中でやっているようで、お隣のブライヒレーダー辺境伯家屋敷からは明かりが見えていた。

「辺境伯家ともなると二か所同時開催ですか、大変ですね。ところで、アルテリオさんは？」

「うちも政商の端っこに引っかかっているから、当然主催しているよ。カミさんと息子が仕切っていて、俺ももう少ししたら戻る」

「うちのような、ささやかなパーティーに長時間顔を出して大丈夫なんですか？」

バウマイスター男爵家は竜退治などで話題をさらったが、貴族の格からすると法衣男爵でしかない。

家族と、家臣や使用人とその家族、寄子とその家族くらいしか呼ばないのが普通だ。

だから、バウマイスター男爵家のパーティーは参加者が三十名を超えていなかった。

元小市民な俺からすると、それでも大人数だと思うのだが。

「そこに、ジレンマがあるのさ」

「どういう事です？」

「今王都で話題のバウマイスター男爵家のパーティーには出たいが、その規模は慣習に従った規模でしかないだろう？」

成り上がりの法衣男爵如きが、他の大貴族よりも豪勢なパーティーを行ったら、それだけで非難の対象となってしまう。

だから、招待客は兄さん達とその奥さん達だけ、商人で唯一招待されたのは付き合いのあるアルテリオさんだけだ。

なお、料理以外のパーティーの手配をしたのは、自らも商家の出であるローデリヒであった。
どの程度の規模でパーティーを行うか？
そのさじ加減を上手く調整してくれたと思う。

「家のパーティーに戻ったら、『どうにかバウマイスター男爵様に自分を紹介してくれないだろうか？』とか言う商人は多いだろうな。ああ、面倒くせえ」

アルテリオさんは、ワインを一気に飲み干しながら愚痴を溢す。

「生き馬の目を抜く商人の世界ですか？」

「そんなところだな。俺だけ呼ばれてラッキーなんだが、その分面倒も回ってくるのさ」

そんな話をしている間に、日付が変わって新年を迎える。

「新年あけましておめでとう」

「あけましておめでとうございます、お館様」

改めて乾杯をしながら挨拶を交わし、パーティーは夜中の二時くらいに解散となった。

「ヴェンデリン様、少し寝ておきましょう」

「明日は挨拶があるんだよね？」

「明日は拙者もお供します」

幸いして、教会への初詣などはこの世界には存在しない。
だが、その代わりに新年の挨拶回りがある。
なぜか日本のようであったが、どこに挨拶に行くかとか、どの順番で挨拶に行くかは慣習で決まってるそうなので、ローデリヒが付いて来てくれるそうだ。

「お館様、奥様方、エルヴィンはお休みくださいませ」

ローデリヒに促されて就寝し、次の日の午前九時くらいに目を覚ます。
少し遅い起床であったが、思ったよりも疲れていたのであろう。
いつもの時間に目を覚まさなかった。

「では、出かけましょうか。お館様」

朝食はなく、マテ茶のみを飲んでから新年の挨拶に出かける。
俺、エル、エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、ローデリヒの合計六名で、俺以外は全員大きめの籠を持っている。
籠の中には、紙に包まれた飴やクッキーが入っていた。

これを何に使うのかというと……。

「あけましておめでとうございます」

「くーーーださいな。くださいな」

屋敷を出ると、他の貴族の使用人や家臣の子供達に、商業街や富裕な平民の子供達が屋敷で待ち構えていた。

彼らはこうやって貴族の屋敷の前で待ち、新年の挨拶に出かける貴族や大商人からお金やお菓子を貰うのだ。

お年玉のような風習だと思う。

準備するお金とお菓子の量は、その貴族家の家格や資産状況によって大体決まってるのだと、その慣習を教えてくれたローデリヒが言っていた。

お金は、お菓子を紙で包む時に銅貨を一枚入れる事になっているそうだ。

勿論、教えてくれたのはローデリヒである。

「ひい、ふう、みい、よ……。ほれ、受け取れ」

「うちみたいな新興貴族家でも、結構集まってくるものなのね」

「ヴェルは、有名人だからねぇ」

エル、イーナ、ルイーゼが、集まっていた百名近い子供達にお菓子を配っていく。

「「「「「ありがとう、お貴族様、お兄さん、お姉さん達」」」」」

お菓子を貰った子供達は、お礼を言ってから駆け足で他の貴族を探しに向かう。

「なるほど、なるべく沢山の貴族や商人に会ってお菓子を貰うのか」

「はい、同じ人から何度も重複してお菓子を貰うのはマナー違反なのです。家に帰ってから、親御さんに見つかると怒られるのですよ」

「だから、包み紙に家名を書いたんだな」

年末に、お菓子の包みを作る作業を手伝ったエルが納得する。

同じ家名が書かれた包み紙が二枚以上あれば、重複してお菓子を貰ってきたという事になるからだ。

「年末も、貴族は物入りだな」

「そうですね。役職なしの法衣騎士ですと、それほどお菓子を準備しなくてもいいのですが、見栄で大量に準備する方もいます」

包み紙に家名が書いてあるので一種の宣伝であると、エリーゼは説明する。

「この貴族家は、こんなに沢山お菓子とお金をばら撒いたと思われるようにです」

子供が家で包み紙を開けるのを家族が見れば、自然とその貴族の名が宣伝になるというわけだ。

「子供達は一つでも多くお菓子の包みを得ようと、必死に貴族街を駆け回るわけか」

「子供は元気な方がいいという、理由もあるそうですよ」

お菓子が沢山欲しければ、自分の足で多くの貴族と会って稼ぐ。

新年の挨拶に出かける時間を推測して、効率よく屋敷の前で待ち構えるなどのコツが必要のようだ。

各貴族ごとに持っているお菓子の量も決まっているので、なるべ

く早くに出会ってお菓子を貰う必要がある。

「エリーゼも、子供の頃に貰ったの？」

「いえ、貴族の子供はお菓子を貰いに行きませんので。あくまでも、使用人や家臣の子供だけなのです」

家臣でも、当主の一族に入っている子供は参加できなかったりと、あくまでも貴族でない子供向けの風習のようだ。

その辺の身分差は、この世界では大きいようだ。

「その代わりに、新年のお小遣いは渡したものね。ヴェルは」

「年末から新年にかけて、色々と物入りになるって理由がよくわかったよ」

その代わりかは知らないが、家臣と使用人に一時金を出し、その子供達にも数十セント程度のお小遣いを渡す習慣もあった。

これこそが、本物のお年玉かもしれない。

「お館様、最初はブライヒレーダー辺境伯家のお屋敷に向かいましょう」

ローデリヒが最初の挨拶先を教えてくれるが、屋敷がお隣同士だし、寄親なので当然かもしれない。

警備をしている門番に来訪目的を告げると、すぐにブランタークさんが顔を出した。

「ブランラークさん、新年あけましておめでとうございます」

「よう、あけましておめでとう。お館様は領地の方で忙しいからな。俺が名代で来客への対応をしているんだ」

お抱え魔法使いであるブランタークさんは、俺への魔法指導もあって王都に滞在している時間が長い。

なので、ブライヒレーダー辺境伯家王都屋敷において責任者のような立場にされる事が多かった。

「もう何日かしたら、お館様が別途で新年パーティーを開くから、それに出てほしいそうだ」

「わかりました」

「お館様に、坊主達が来たって伝えておくよ」

領内の屋敷と、王都屋敷で共にパーティーを開く。

大物貴族の正月とは忙しいものらしい。

この世界では、『正月』ではなくて『新年』なんだけど。

「次は、ホーエンハイム家か？」

「はい」

俺の正妻になるエリーゼの実家なのだ。

早い順番で訪問して当然であろう。

「大変だよな。訪問の順番を間違えると、ヘソを曲げる貴族もいるからな。まあ、ローデリヒがいるから問題ないんだろうけど」

「いえ、ブランターク様。訪問の順番を何度も確認して胃が痛くな

りました」

「それは大変だったな」

事実上、バウマイスター男爵家の家宰扱いであるローデリヒは、この手の仕事を間違いなくこなさないといけない。

もし間違えると、自分に咎がいくばかりでなく、バウマイスター男爵家が他の貴族に攻撃される原因を作ってしまうからだ。

「まあ、今のバウマイスター男爵家は、そう多くの貴族家を訪問する必要もありませんので……」

ブライヒレーダー辺境伯家、ホーエンハイム子爵家、他はエーリッヒ兄さんのブラント家、パウル兄さんの家、ヘルムート兄さんの王都バウマイスター家くらいだ。

ルックナー財務卿とかの屋敷に行くのは、彼が寄親ではないから駄目らしい。

あとで、ブライヒレーダー辺境伯が王都屋敷で主催するパーティーで顔を合わせて挨拶をする。

それが正式な慣習なのだそうだ。

「聞いているだけで面倒な……」

「それが貴族という生き物だからな。俺は訪問客にあとで新年パーティーを開くという話をしないといけないから、今日は坊主には付いていけないぜ」

「わかりました。では、ブライヒレーダー辺境伯に宜しくお伝えく

ださい」

「任せてくれ」

新年の贈り物を渡してからブランタークさんに言付けをし、今度はエリーゼの実家であるホーエンハイム家の屋敷へと向かう。

「くーーーださいな」

「くっださいな」

途中、多くの子供達からお菓子を求められ、まだ残っているのでエル達が一つずつ配っていく。

「俺の実家も、ヴェルの実家と同じでこんな風習なかったけどな」

「まあ、あれだ。エルの実家も、俺とそこまで差が無いというわけだ」

バウマイスター家と同じで、貧しくて子供に菓子を配る余裕などないのであろう。

「新年の食事くらいは、ある程度マシなものが出たけど」

「うちも……あんまり覚えてないなぁ……」

肉料理とか、薄い甘さのデザートが出たような気がするけど、あまり美味しく無かったので俺の記憶にはあまり残っていなかった。

「ヴェンデリン様、到着しました」

門番に来訪を告げると、屋敷の中からホーエンハイム枢機卿が顔を出す。

「新年あけましておめでとうございます」

「婿殿か、よく来てくれたな。新年あけましておめでとう」

すぐに屋敷の中に案内され、軽くつまめる軽食に、お菓子とデザートを勧められる。

「（さすがは、教会の有力者。もてなしが洗練されているわ）」

イーナが、一人感心していた。

新年の挨拶に出かける人達は、他にも複数の貴族家を訪問しないといけない。

それなのに、豪勢な食事などを出すとお腹が一杯で食べられないし、何も食べないと失礼にあたるので無理をして食べる事になる。

それを避けるために、ホーエンハイム家では軽く食べられる物ばかりを準備してくれたようだ。

確かに、うちの実家ではそういう配慮は難しいかもしれない。

ただ、ご馳走を出したつもりでも、客には軽食にしか見えないという事があるかもしれないけど。

「（ああ……、その前に客が来ないよな……）」

山越えで、往復三か月もかかるのに来訪する価値はないのだから。

「どうかしたのか？　婿殿」

「いえ、ところで、義父上と義兄上はいらっしゃらないのですか？」

「新年の奉仕活動に行っておるよ」

俺達も出会った子供達にお菓子を配っているように、教会もスラムや貧しい家の子供達にお菓子を配るのだそうだ。

「日持ちするクッキーや、寄付で購入した飴を、教会のマークを印刷した紙に包んで配るのじゃよ」

純粋な奉仕活動でもあるが、裏事情も存在するらしい。

「王都のどこのエリアでも、子供がお菓子をねだるからの。スラムの子供達が、商業街、富裕な平民の住居、貴族街にお菓子をねだりに来ないようにするためでもある」

治安悪化を恐れての、政治的な意図が働いての奉仕活動のようだ。その辺のシビアさは、やはり日本とは違うのであろう。

「まあ、どんな子供でもお菓子を貰えれば笑顔になる。それはいいものだとワシは思うがの」

ホーエンハイム枢機卿に挨拶と新年の贈り物をしてから、エーリッヒ兄さんのブラント家、ヘルムート兄さんの王都バウマイスター家、パウル兄さんの家の順番に挨拶をする。

「赤ちゃん、可愛いですね」

「本当、抱っこすると温かい」

「うわぁ、本当だね」

エリーゼ達は、ミリアム義姉さんが産んだばかりの赤ん坊を順番に抱いて楽しそうに話をしている。

父親であるエーリッヒ兄さん、母親のミリアム義姉さん、産まれたばかりの可愛い赤ん坊と、一目でわかるリア充一家である。

「ヴェルも、もう何年かすれば子供が産まれるさ」

続いて、ヘルムート兄さんの王都バウマイスター家、パウル兄さんの家に行くと、共に奥さん達は妊娠中であった。

年越しのパーティーにいたからとっくに知っているが、エリーゼ達は羨ましそうな顔を崩さない。

「赤ちゃん、本当に可愛いですね」

「私も欲しくなったかも」

「ヴェル、その時になったら頑張ってね」

エリーゼ達の発言に、俺は少し驚いてしまう。

特に、ルイーゼの発言にはぎょっとしてしまった。

「さてと、これで終わりか？」

今は少ない訪問先を大体回り、お菓子をねだる子供達に用意していた物は全て配った。

あとは家に戻るだけと思ったのだが、ローデリヒが待ったをかけ

る。

「あとは、導師様のお屋敷が残っていますが」

「導師の屋敷か」

「ローデリヒさん、ボク達が訪問して大丈夫なの？」

これまた面倒な事に、導師は軍部の重鎮アームストロング伯爵家から独立してその寄子になっている家だ。

俺の寄親ではないので、訪問していいのか判断に困ってしまう。

「そのために、エーリッヒ様達よりも訪問の順番を下げております。魔法の修練を受けておられるのですから、訪問しても問題はないかと」

ホーエンハイム家の直後に訪問をすると、これは親族を蔑ろにしていると問題になるかもしれない。

だから、兄さん達のあとなら問題はないと。

「面倒な話」

エルが、心の底から面倒そうな顔をする。

「ご兄弟の訪問順位にしても、単純な年齢差ではありませんから」

兄弟で、エーリッヒ兄さんのブラント家が一番だったのは、彼の寄親であるルックナー財務卿の家には訪問できないから配慮したという理由らしい。

次がヘルムート兄さんなのは、王都バウマイスター家の寄親であ

るエドガー軍務卿に配慮したからで、最後が一番年上のパウル兄さんなのは、彼がまだ法衣騎士爵位を得たばかりだからであった。

「理由と言い訳が混じって決まっているみたい……」

自分がしなければいけない事ながら、ただ面倒臭さを感じてしまう。

ローデリヒに丸投げでよかった。

イーナも、同じように考えているようだ。

「イーナ様、貴族の慣例とはそういうものですから」

「じゃあ、そういうのが嫌いな導師様の屋敷なら寛げるかも」

ルイーゼがそう言うので、急ぎ彼の屋敷を訪ねてみる。

「おう！　新年あけましておめでとうなのである！」

これまた訪問を門番に告げると、導師がまるで突進する猪のように駆け寄ってくる。

「中に入るのである！」

屋敷の中に案内されると、そこにはテーブルに乗った大量の料理と、酒の瓶が置かれていた。

「想像ついたけど……」

「エルヴィン少年！　乾杯なのである！」

料理は肉料理が、それもガッツリ系のメニューが多い。
中央のテーブルには、ワイバーンの丸焼きが置かれていた。

飲み物も、頼めばお茶やジュースも出てくるが、基本的には酒ばかりである。

「どうせ、某の所が最後であろう。夕食も兼ねて、腹が一杯になるまで飲み食いするのである！」

断れるような雰囲気でもないし、夕食だと思えば豪勢な食事である。

俺達は、導師の沢山いる子供達や、既に三人もいる孫達にお年玉を渡してからパーティーに参加する。

「ワイバーンの丸焼きですか？」

「うむ、専門の大型オーブンを持っていて焼いてくれるお店があるのである！　材料は某が獲ってきたものである！」

他の貴族なら材料費でとんでもない事になるが、導師なら調理費だけで高価なワイバーンの丸焼きが食べられるというわけだ。

他の客達も、滅多に食べられないからと集中して切り分けて貰っていた。

「お酒もキツイのが多いな」

メインが蒸留酒という、とんでもない事になっている。

ワインもあるが、導師の屋敷では食前酒やジュースの代わり程度の扱いのようだ。

「ブランタークさんが喜びそうなパーティーだな」

あとで話すと、俺も参加したかったと言うかもしれない。

「でも、私達って未成年よね？」

「イーナ嬢、新年くらいは気にする事は無いのである！」

確かに未成年の飲酒は駄目なのだが、特に法的な罰則があるわけでもない。

それに、子供の年齢が二桁になると、内輪の宴会やパーティーでは『今のうちに慣れておけ！』と親が飲ませてしまうケースも多かったりする。

昔は、日本でもそんな感じだったと父が言っていた。

「エリーゼが怒るかも」

「色々と思うところはあるのですが、新年のお祝いの席ですから」

イーナが気にしたのは、未成年の飲酒に一番厳しい教会関係者エリーゼの存在であった。

彼女は真面目なので怒られると思ったようだが、一年に一度くらいなのでと己の心の中にいる神と折り合いをつけたようだ。

「私は、ジュースにしますけど」

ただし、自分はあくまでも酒を飲まないようだ。

「じゃあ、乾杯をするか」

俺、エル、イーナ、ルイーゼはワインを、ローデリヒは焼酎に似た蒸留酒の水割りを、そしてエリーゼは柑橘系のジュースの入ったコップを手に取る。

「じゃあ、新年を祝って乾杯！」

「「「「「乾杯！」」」」」

俺の音頭で乾杯をすると、みんなそれぞれのペースでグラスの中身を飲み始める。

「少し喉が渇きましたね」

どの訪問先でもあまり飲み食いをしなかったエリーゼは、ジュースを一気に飲み干した。

とそこに、他の客の相手をしていた導師が戻ってくる。

「エリーゼ、そこにあったグラスを飲み干したのであるか？」

「はい、伯父様。美味しいジュースでしたが……あれ？」

急にエリーゼの顔が赤くなってくる。

「導師、これはお酒だったのですか？」

「うむ。酒精が九十五パーセントの特上蒸留酒に、ほんの少しジュースを混ぜたものである」

「えっ？」

ジュースだと思っていたものが、実は物凄く強烈なカクテルであった。
そして、それを知らずに一気に飲み干してしまったエリーゼ。
どうやら新年の挨拶は、最後の最後でとんだトラブルに巻き込まれるようであった。

「あはははっ！　ヴェンデリン様、このジュースは美味しいれすね！」

「それ、ジュースじゃなくてね……」

「エルさん！　お代わり！」

酔っぱらったエリーゼは、笑い上戸であった。
理由はわからないがとても楽しいようで、エルにジュースのお代わりを頼んでいる。

「はい、お代わり」

「エルさん……、さっきと味が違いますね。同じものを要求します！」

先ほどの酒入りのカクテルがいいと、エリーゼがエルに強めに要求した。
いつもとは違う彼女の言動に、エルは戸惑っている。

「（どうするよ？　ヴェル）」

「（酒をなるべく薄くするんだ）」

俺はエルに、なるべくアルコール度数が低くなるようにカクテルを作れと命令する。

だが、それに気がついたエリーゼはエルにケチをつけた。

「エルさん！　ここは男らしく、わらしの言うとおりにお酒を多目にいれるのれす！」

「それって、男らしくと関係あるのか？」

「お酒の量をケチるとは、男としてみみっちいではないれすか！」

「はいはい、わかりましたよ……」

お酒を薄くしようとしたエルは、それをエリーゼに見抜かれてしまい、仕方なしにという感じでお酒の量を増やす。

酔っぱらったエリーゼはかなり強気で、エルはそれに逆らえなかったのだ。

俺ですか？

酔っ払いの怖さは、学生時代にも商社マン時代にも散々体験している。

勿論逆らうはずなどない。

「ううむ……。昔の悪夢再びである」

「何です？　それ？」

酔っぱらったエリーゼを見ながら呟く導師に、俺は詳しい説明を求める。

「あれは、エリーゼが十歳くらいの頃、某が試しに少しお酒を飲ませてみたのだが……」

『未成年者のお酒はいけません！』と、今よりも真面目だったのでついジュースに混ぜて飲ませてしまったそうだ。

「それで、どうなったのですか？」

「エリーゼは、酒に酔うと笑い上戸に……」

「あははは！　楽しいパーティーれすね、ヴェンデリン様」

何がそこまで面白いのかわからないけど、俺の背中をバンバン叩きながら話しかけてくる。

酔っていて力の加減ができないようで、背中が痛かった。

痛さの質が、導師に背中をバンバンされた時に似ていた。

やはり、この二人は血が繋がってるのだと俺は納得する。

「泣き上戸にも……」

「私だって、懸命に治療をしたのですよ。でも、あの子を私は救えなくて……。ヴェンデリン様、聞いていますか？」

「当然じゃないか。人間は神様じゃないんだから、怪我人や病人を全員救うなんて不可能さ」

「そうれすよね？　なのに、聖女の治癒も質が落ちたと言う人がいるのれす」

「自分では何もしない癖に無責任だよな」

「ヴェンデリン様なら、わかってくれると思っていました」

今度は、突然過去の治療失敗例を思い出して泣き始め、それを俺が慰める羽目になった。

しかし、酔っ払いとは恐ろしい。

突然、話題がまったく別の方向に飛んでしまうのだから。

「あとは、説教であるか……」

「エルさん、この前ブランターク様に、綺麗なお姉さんがいるお店に連れて行ってほしいと頼んでいましたね！」

泣き止んだと思ったら、今度はエルの秘密が暴露されてしまう。

「なっ！　なぜそれを？」

「エル、あなたは未成年なんだから……」

「そういうのは、成人してから自分の稼ぎで行きなよ……」

事実だったようでエルは動揺してしまい、イーナとルイーゼにまで冷たい視線で見られてしまう。

「エルさんは、将来バウマイスター家において重要な地位に就くの

れすから、そういう不謹慎な発言には気をつけていただきませんと」

「はい……」

エルは説教魔と化したエリーゼに捕まり、こんこんと説かれて肩を落としている。

完全なとばっちりで、自分の不運を嘆いているのであろう。

「エリーゼ、もうその辺で……」

「伯父様にも、いい機会なので言っておきます。伯父様は陛下の幼馴染ではありますが、王宮筆頭魔導師としての自覚に欠ける言動が多いと思うのれす！」

「……すまぬのである……」

エルに助け舟を出そうとした導師であったが、今度は自分がエリーゼに説教を受ける羽目になる。

その内容にある程度自覚はあったようで、導師は静かにエリーゼの説教を聞いて謝っていた。

「（ヴェルが、エリーゼにお酒なんて飲ませるから！）」

「（わざと飲ませたわけじゃないし、エリーゼの酒癖の悪さなんて知らなかったんだよ！）」

今度は俺がイーナに怒られてしまうが、出会ってから今まで一度もエリーゼが酒を飲んでいるところを見た事がなかったのだ。

こうなると知っていれば、俺だってもう少し気をつけている。

「ヴェル、治癒魔法で何とかならないの？」

「ええと……無理」

人の体から溜まっているアルコールを抜く魔法は、今のところはエリーゼにしか使えない。

『毒消し』とは似ているが系統が違うようで、俺も習得には苦労している状態だったからだ。

「そして、絡み酒もあるのである」

「イーナさん、いいなぁ」

導師への説教を終えたエリーゼは、今度はイーナに絡んできた。

「えっ？　私？」

「わらし、背がもう少し欲しいんれす。イーナさん、いいなぁ」

エリーゼは、イーナに抱き付いてしきりに彼女の頭を撫でている。

「エリーゼも、平均くらいはあるじゃないの」

この世界の女性の平均身長は百六十センチくらいである。

エリーゼは、十分に平均の範疇にはいるはずだ。

「れも、背が高い女性って恰好いいじゃないれすか」

「身長と恰好いいって関係あるの？」

「あるんれす！」

絶対の確信があるようで、エリーゼはイーナの頭に手を置きながら彼女の背の高さを羨ましがっていた。

イーナは、酒臭いエリーゼに纏わりつかれて迷惑そうだ。

「ルイーゼさん」

「えっ？　ボク？　ボクは背も低いし、胸も小さいよ」

「足が速くていいなぁ」

今度は、ルイーゼの足に縋りつく。

そういえば、前にみんなで基礎訓練をした時、遊びでかけっこをしたのだが、圧倒的一位がルイーゼ、二位がイーナ、三位エル、四位、俺、ドベがエリーゼであった事を思い出した。

エリーゼの運動神経は人並みで、体力や持久力は平均よりも少し上で、駆け足は少し遅い。

見た目少しおっとりしているので、見たままという感じであった。

完璧超人と言われているエリーゼの唯一の欠点かもしれず、彼女はそれを気にしていたというわけだ。

「わらし、足が遅いんれす。いいなぁ……」

「エリーゼ、ボクの足をスリスリしないで！」

更に酒が回ったエリーゼは、ルイーゼの素足を曝して頬をスリスリさせていた。

「少し危ない世界に行ってしまうから！」

ルイーゼは、エリーゼのスリスリ攻撃に身を悶えさせていた。

「うーーーむ、普段は聖女と呼ばれ、それに相応しい言動をしている時の反動であるか……」

「導師、冷静に分析するのはいいんですけど、パーティーの席に酒しか置かないのは問題だと思わないのですか？」

「それを言うのであれば、飲む前に確認をしなかったバウマイスター男爵にも責任があるのである」

「うっ！」

朝から相当酒を飲んでいるはずなのに、導師は普段のままであった。

俺からの言いがかりに近い苦情を、軽くスルーするのだから。

「ええと、次は……」

ルイーゼの素足を堪能したエリーゼは、今度はエルに視線を向ける。

「まずいぞ！」

エルが危機感を募らせる。

イーナとルイーゼはまだ女同士だからよかったが、酔っぱらっているとはいえエリーゼがエルに抱きついたりすると、エルの方が色々とまずい立場に追い込まれてしまうからだ。

「はあ……新しい大人の世界だね」

「ルイーゼも、わけのわからない事を言ってないでエリーゼを止めなさい！」

素足をスリスリされて煌々とした表情を浮かべていたルイーゼに、イーナが一緒にエリーゼを押さえるようにと命令する。

だが、その心配は無用であったようだ。

「エリーゼ！　背も高く、鍛えられた肉体を持ち、剣の腕もなかなかなものになったこの俺に……」

「いえ、エルさんは特に羨ましいとは……」

エリーゼは、エルに一言だけそう言うとそのまま寝てしまった。

周囲に微妙な空気が広がる。

何しろ、エルは自分で自分のいいところを先に口をにして予防線を張ったのに、肝心のエリーゼには全て無視されてしまったからだ。

「スキャンダルを防げてよかったな、エル」

「エリーゼは、エルが男性だからそういう比べ方はしなかったのよ」

「でも、ちょっと恥ずかしい。自分で鍛えられた肉体とか……」

「この終わり方は、俺的には最悪の結末だ！」

間違いなく、酔っぱらったエリーゼの被害を一番受けたエルの叫び声が、新年のアームストロング子爵家中に木魂するのであった。

「エリーゼ様？」

「すまん、ドミニク。手違いというか、間違いで酒を飲ませてしまってな」

エリーゼが眠ってしまったので、俺達は早めに導師の屋敷を辞して自宅に戻った。

出迎えた彼女の幼馴染にしてメイドのドミニクに、エリーゼが寝ている理由を説明する。

「そうですか……エリーゼ様がお酒を……」

過去に何かあったのであろう。

ドミニクの表情がかなり曇っている。

詳しく聞くと悪い気がしたので、みんな自重して彼女への質問は止めた。

「普段は決して口にされないのですが、一旦口に入れてしまうと、お代わりを要求するようになってしまうのです」

確かに、シラフの時には決してお酒には手を出さなかった。

間違って口にしてからは、お酒の薄さをエルに説教するほどであったが。

「となると、エリーゼ様には今後一切一滴もお酒を飲ませない方が……」

「そういう事になりますね」

ローデリヒとドミニクのみならず、俺達も絶対にエリーゼにはお酒を飲ませまいと強く心に誓うのであった。

そして……。

「あれ？　私、伯父様の屋敷で乾杯してからの記憶が……」

「「「「「……」」」」」

エリーゼは酔っぱらっていた時の記憶が一切残っておらず、彼女に絶対にお酒は飲ませまいと一層心に誓うのであった。

第百十一話　接待旅行。

マハゼは、スズキ目ハゼ科に分類されるハゼの一種で、東アジアの内湾や汽水域に生息する魚だ。
日本では北海道以南に、他にも中国、オーストラリア、アメリカにも生息し、ハゼ、カジカ、クズ、デキハゼ、ヒネハゼ、ケタハゼ、カマゴツ、ゴズ、クソハゼとその地方や大きさなどによって様々な呼び方をされる。

手軽な釣りの対象魚として、ハゼ釣りは江戸時代から庶民の娯楽として存在していた。
食用としてもポピュラーであり、天ぷら、唐揚げ、刺身、吸い物の椀種、煮付け、甘露煮など色々な料理で食べられる。

江戸前の天ぷらネタとしては最上のものとして知られ、下町の某高級天ぷら店では八千円以上のコースを頼まないとハゼの天ぷらは出てこない。

仙台など一部の地方では、ハゼの焼き干しは伝統的な雑煮の出汁として、なくてはならないものだ。

と、なぜ俺がここまで詳しく説明するのかと言えば……。

「バウマイスター伯爵、ここはサイズも数も出るポイントでな。マズメの時間には入れ食いになる事も多い。ミズホ伯国もとい、ミズホ公爵家専用の釣り場なのだよ」

内戦終了後、俺達はミズホ上級伯爵もとい、ミズホ公爵から接待

を受けていた。

そこは、ミズホ伯国がフィリップ公爵家から漁の許可を得た海に繋がる川の河口であった。

アユ、ウナギ、ナマズ、アカメ、ハゼ、アナゴ、シロギスなどの魚影が濃く、ミズホ家の人達と、当主に認められた家臣やその家族のみが、投網、釣り、その他の漁を許され、それを調理して楽しむ。

あとは、ミズホ家にとって重要な客を接待する場にも利用されるそうだ。

「夏はデキハゼ、今の時期は海に落ちる前の大きなハゼが釣れるのだ」

ミズホ人にとって、ハゼ釣りは領主から庶民までもがおこなう人気の趣味であった。

「極限鋼の流通をヘルムート王国に握られてしまった以上は、何とか購入可能なようにバウマイスター伯爵のご機嫌を取らないとな」

「随分と正直に言いますね」

「それに気がつかない者も少なかろうて。内乱中は大変であったから、単純に息抜きでもあるしな」

そんな理由で、俺達はミズホ公爵から接待を受けていた。

河口の岸にある、簡素な仕掛けを投入するとハゼがよく釣れる場所の傍に純ミズホ風の家屋が建ち、しかも屋内の窓から冬の寒さを

気にしないでハゼが釣れるのだ。
釣れたハゼは、すぐにミズホ家お抱えの料理人によって、刺身、から揚げ、天ぷら、煮付け、吸い物に調理されてお酒と共に出される。

お酒も、ハゼを焼き干しにした物をお燗したハゼ酒であり、美味しさのみならず風流も楽しめる仕組みになっていた。
元日本人である俺にとっては、大変に嬉しい接待の内容だ。

向こうは、そんな事は知らないけど……。

「釣れた、釣れた。おおっ！　これは新記録か？」

この世界にも、リール竿が存在している。
王国にも存在するのだが、ミズホ伯国製のものは現代日本のリール竿に似ていて使いやすい。
魚好き民族なのでよく釣れる仕掛けの研究も盛んで、天秤仕掛けや針なども日本のものによく似ている。

「糸も、細くて頑丈ですね」

二十センチを超えるハゼが釣れたのだが、ラインは極細なのにまったく切れる心配はないようだ。

「マダラ大クモという、魔物の領域に住んでいるクモの糸を特殊加工しておってな。プロの漁師にも重宝されておるよ」

「王国でも需要がありそうですね」

「早速、王国貴族からの引き合いもあってな。講和条約様様だな」

ミズホ公爵家は帝国の貴族に組み込まれたが、やはり生粋の帝国貴族ではない。

ペーターは何とか一体感を演出しようとしているが、王国政府と王国貴族で独自にミズホ公爵家と縁を結ぼうとする動きがあるそうだ。

王国政府のは、俺がそうするように陛下に進言したからだけど。

「交易が盛んになって我がミズホ家が儲かるのは万々歳だが、バウマイスター伯爵も意外と策士だな」

「そうですか？」

「ああ、ヘルムート王国は帝国の内乱に乗じて兵は出さなかったが、経済的には侵略を開始したともいえるからの」

現在の帝国は、内乱のせいで生産力と流通にダメージを受けている。

それに乗じるというか、王国の産品が徐々に輸入されるようになっているそうだ。

しかし、さすがは商人。

儲け話には敏感で、そのためなら国境を越えるくらいは厭わないようだ。

「まあ、うちは貿易黒字なので上手くやっているがね。中央政府は大変だと思うよ」

統治体制を固めようと必死のようだが、早速小規模の反乱が発生したそうだ。

「マールバッハ子爵が、改易された貴族やその家臣達と共に反乱を起こしたようだな。彼は領地を削られて不満があったそうだし。まあ、わずか一週間で鎮圧されて首を曝されたそうだが」

帝国軍の最高司令官になったギルベルトさんが、速攻で戦力を送り出して鎮圧してしまったそうだ。

あの人は有能な軍人なので当然とも言える。

「帝国が落ち着くまでには時間がかかるというわけだ」

「ペーターは大変だな」

「バウマイスター伯爵達が来るから一緒に招待したのだが、多忙なようで断られてしまった。『残念、無念』と言っておったぞ」

あとは、アルフレッドも忙し過ぎてミズホ家の接待に来ていなかった。

「テレーゼ殿も来ないか」

「遠慮しているのですよ」

自分はもうフィリップ公爵家の人間ではないし、帝国で政治的な仕事をするつもりもない。

それを世間に知らしめるために帝国を出たのに、いくら遊びでもすぐに帝国領内に戻るのはよくないと俺に言っていた。

「何でも、自分が出席すると沢山の帝国貴族がこの席に出たいとミズホ公爵の元に押しかけるであろうと。迷惑はかけられないそうで

す」

「それはあるの。テレーゼ殿はバウマイスター伯爵領で息災のようだし、それでいいのかもな」

あまり政治的な話ばかりしていてもしょうがないので、というか深く関わり過ぎるのも問題なので、俺は釣りに没頭する。

「エル、釣れたか？」

「そこそこの大きさだな。このハゼのから揚げ美味いな」

エルは、自分で釣ったハゼをから揚げにしてもらい、とても満足そうだ。

「あの……エルさん」

「ああ、餌ね。こいつ、ヌルヌルしてるな」

ハルカは、餌の活きイソメが苦手のようだ。

エルに申し訳なさそうに頼み、餌を針に付けてもらっていた。

「ハルカさんにも苦手なものがあったんだね」

「私、子供の頃からこのヌルヌルが苦手でして……」

「確かに、苦手な人はいるかもな」

エルが、活き餌が苦手なハルカのために餌をつけてあげ、二人で仲良く釣りをしている。

その光景は、まさにリア充のカップルそのものであった。

いまだにボッチ属性が抜け切らない俺の、心の中に住む嫉妬の鬼が、俺の心をざわつかせるのだ。

「エルさん、釣れました」

「これは大きいな。早速天ぷらに揚げてもらおうぜ」

エルが釣ったハゼを世話係の女性に渡すと、それを初老でいかにもプロの調理人が隙のない動作でハゼを捌き、衣をつけて、天ぷらを揚げていく。

暫く鍋を見つめ、迷いのない動作で揚がった天ぷらを引き揚げてから、素早く油を切る。

その熟練の技から、俺は目を離せないでいた。

そして、揚がったハゼの天ぷらが皿に乗って二人の前に差し出される。

「エルさん、天つゆで食べますか？　それともお塩で？」

「最初だから、塩がいいな」

「わかりました。はい、あーーーんしてください」

「あーーーん、美味しいな。ハルカさんが食べさせてくれると余計に美味しい」

「そんな事はないですよ」

エルに褒められて、顔を赤く染めるハルカ。
正直、見ているだけで『あーーー！』と叫びたくなる光景だ。

というか、お前らはあの熟練の技を持つ天ぷら職人に対して敬意とか尊敬の念とかを抱かないのか？
俺はそれがおかしいと思うのだ。
決して、羨ましいとか思っているわけではない。

「若いな。ワシも若い頃は妻にやって貰った事がある」

「そうなんですか？」

正直に告白すると、前世や結婚する前の俺にはそんな経験はない。
というか、いくら若い頃でもミズホ公爵には似合わないと思う。
言うと失礼になるから口には出さないけど。

「こういう時のための、タケオミさんなのに……」

あの妹ラブのシスコンサムライがいれば、二人の不謹慎な行為など阻止、断罪してくれるというのに、なぜか今日はいなかった。

「タケオミなら、フジバヤシ家の連中に吊し上げを食らって、今日は欠席だな」

「あの人、何をしたんです？」

「バウマイスター伯爵家と、ミズホ公爵家との融和を邪魔しているな」

フジバヤシ家は、ハルカとタケオミさんによる内乱の戦功と、俺

達の護衛任務成功で家禄がかなり上がった。
末端とはいえ、上士の仲間入りをしたそうだ。

「その功績の中にハルカとエルヴィンの婚姻もあるのに、次期当主が自らそれを邪魔すれば怒られて当然であろう」

現当主である父、隠居した前当主の祖父、他ほぼ全ての家族から叱られたらしい。

「『せっかく仲もいいのに、お前が邪魔をしてどうするんだ！』と叱責されたそうだが、誰でもそう言うと思うぞ」

そんなわけで、彼は上士の仲間入りをしたので参加できるはずの今回の釣行を欠席させられたそうだ。

「（ちっ！　使えない兄だな。それにしても、エルの分際で……）」

俺の心の中に住む嫉妬の魔獣が、徐々に大きくなっていく。
昔を思い出し、『リア充なんて爆発して死ねばいいのに』と思ってしまうのだ。

あとは、天ぷら職人への冒涜もある。
そう、これこそが一番大切なのだ。

もう一度言う、決して嫉妬などではない。

「あなた、私も天ぷらの作り方を習って実際に作ってみました」

俺の心にある闇の広がりを察してか？
エリーゼが、自作した天ぷらを皿に載せて持ってくる。

さすがは、俺の奥さん。
俺が、ニュルンベルク公爵並の心の闇に包まれ、功臣粛清の遠因となるものを防いでくれた。

「へえ、上手に揚がっているな」

「天ぷらって、難しいですね」

確かに、天ぷらを極めようとすると難しい。
ネタの細工から、衣の作り方、揚げ方などで細心の注意を払わないといけないからだ。

「揚げている最中に、油の音の変化を聞き分けるのは難しいです」

「物凄くレベルが高いなぁ……」

初めて天ぷらを自分で揚げているのに、プロの職人のような事を言うエリーゼ。
彼女の完璧超人伝説に、もう一つエピソードが加わった。

「油の切り方とか、まともに修行すると時間がかかるみたいだね。では、早速いただきます」

エリーゼが作った天ぷらを食べる。
サックリ揚がっていて、中の身はほっこりとしている。
某グルメ漫画のような感想になってしまったが、とても美味しい。
やはり天ぷらは、最初、塩で食べるべきだなと確信する。

「美味しい、さすがはエリーゼだな」

「よかった、これでバウマイスター伯爵領でもいつでも作れます」

そう言ってニッコリとほほ笑むエリーゼを見て、俺は勝利を確信した。

「ヴェル、天ぷらを食べて何を勝ち誇ったような顔をしているんだ？」

エルが不思議そうな顔をしていたが、エリーゼに感謝するといい。お前は、そのリア充ぶりのせいで将来俺に粛清されるかもしれないところを、そのフラグがへし折れたのだから。

「何かよくわからんな。ところで、イーナ達は？」

「はい、私と一緒に天ぷらを揚げています」

エリーゼの視線の先では、なぜかイーナとルイーゼが大量の天ぷらを揚げていた。

「これだけ揚げると、エリーゼレベルとまではいかないけど上達したわね」

「ボクも、職人さんに及第点を貰えたよ」

「なあ、なぜ二人はそこまで懸命に天ぷらを揚げるんだ？」

店でも開くのかというほど天ぷらを揚げるのに没頭しているイーナとルイーゼに、俺は近づいて聞いてみる。

「全然足りないのよ」

「揚げても、揚げても、キリがないんだ」

二人が懸命に天ぷらを揚げている原因、それは導師とヴィルマのせいであった。

窓の端のエリアにはブラックホールが存在し、そこではどんな食べ物や飲み物もすぐに無くなってしまうのだ。

「某が思うに、このハゼという魚はとても美味しいのであるが、せめて一メートルくらいのものが釣れてくれれば、もっと素晴らしいのである」

「本当、食べれば食べるほどお腹が空く」

「いや……、そんなに大きなハゼはいませんから……」

少なくとも、マハゼではあり得ない。

二十センチを超えていれば大物なのだから。

「ならば、数を釣るしかあるまいて」

「もっと食べたいから釣る」

大きなハゼがいない事を導師とヴィルマは残念がっていたが、二人は根がポジティブなので、すぐに沢山釣ればいいと考えを切り替えた。

二人は釣ったハゼをイーナとルイーゼに渡し、天ぷらとして揚がってきたそれを奪い合うように食べる。

時おり、導師がハゼ酒を、ヴィルマはお茶と煮付け、甘露煮など

も食べながら釣りに没頭していた。

「釣れた」

「ヴィルマは上手いな」

さすがは、狩猟と漁を生業と趣味にしている少女。
名人レベルの速度でハゼを釣っていく。
そして、釣れたハゼはすぐに調理され、その胃袋に収まっていた。

「この近辺のハゼ、全滅するんじゃないか？」

「他に釣っている人もいないし、大丈夫だろう」

エルが心配するほどのスピードで、ハゼは導師とヴィルマによって食べられていく。
だが、この川はミズホ家専用の河川だ。
そう簡単に、絶滅などはしないであろう。

「釣れたけど、見た事ない魚……」

「ああ、シロギスですね。これも天ぷらにすると美味しいですよ」

ヴィルマに、給仕役の若い女性が魚の種類を教える。
ポイントが河口であったために、外道でシロギスが釣れたというわけだ。
これも、江戸前では天ぷらネタとして有名だ。

王国沿岸には生息しておらず、帝国北方でしか獲れないようだ。
俺は、王国では見た事がない。

「ヴェル様、味見」

「これも美味しいな」

ヴィルマは無口なので『あーーーん』してとは言わないが、彼女から揚げたてのシロギス天ぷらを食べさせてもらう。

これも、白身で美味しい天ぷらネタなので予想どおりに美味しかった。

「某も、食べたいのである」

それを見た導師が、自分もシロギスを食べたいと子供のように我儘を言う。

「外道だし、そうは釣れない」

「うぬぬぬぅーーー！　釣りで一番大切なのは、釣りたいと願う気持ちである！」

導師がいかにもそれっぽい事を言うが、要は食い意地が張っていて自分もシロギスを食べたいだけにしか聞こえない。

しかし、導師は釣りはあまり上手くないようだ。

小さな針にチマチマと餌をつけるのが苦手なようで、どうしても手返しでヴィルマに負けてしまう。

「ポイントの取り方、アタリが出た時の合わせ方も……。導師、下手ですね……」

「見えない獲物は苦手なのである……」

そのせいで、導師はヴィルマの五分の一も釣れていなかった。

「と、ここでヒキが！　なのである！　これは大きいのである！」

導師の持つ竿が大きくしなり、素早くリールを巻くと獲物があがってきた。

だが、獲物はハゼではなかった。

「フグ？」

「河口だからかな？」

導師の仕掛けには、フグがぷくっと膨れてかかっていた。

「ええと、これは『川フグ』と言いまして、外道です……」

世話係の女性が、導師に申し訳なさそうに言う。

「食べられるのであろう？　前にフグは食べたのである」

「種類が違いまして……。河口でもよく釣れるのですが、毒だらけで食べる部位がありません」

「無念……」

フグが食べられないと知って、導師がえらく落ち込んでしまう。

「釣れた」

「早いのである」

導師がそんな事をやっている内に、ヴィルマはどんどんと釣果を重ねていく。

「でも、なかなか余らない。焼き干しにして持って帰りたいのに……」

いくら釣れてもヴィルマが全て食べてしまうので、ハゼを持ち帰れる可能性は低いようだ。

「ええと、帰りに買って帰ればいいと思うよ」

「さすがは、ヴェル様。いい解決策」

「……」

それって、褒められるほど凄い意見なのだろうか？

誰にでも思いつきそうな気がするが……。

「あとは、カタリーナは……」

最後にカタリーナの姿を探すと、彼女はフィリーネと共に真剣な表情で釣りに及んでいた。

今回フィリーネを連れて来たのは、内乱中に彼女の面倒を直接見てあげられなかったからである。

それと、父親であるブライヒレーダー辺境伯との面会はまだ行っていない。

大物貴族はみんな忙しいので、こういう離れていた親子の感動の面会ですら、事前にスケジュールを調整しないといけないのだ。

結果的にフィリーネは隠し子という身分になっているので、話を持っていく時にもなるべく周囲にバレないように慎重にしないといけない。
というわけで、現在ローデリヒが密かに交渉を行っている最中であった。

大物貴族ともなると、定期的に隠し子関連のトラブルが発生する。
何とか利益を得ようと詐欺紛いの連中も多く、俺達からの報告でもブライヒレーダー辺境伯家で慎重に協議を重ねているという理由もあると思う。

「繊細なアタリをわかりやすく感じるため、糸の周囲に外の風が当たらないように『魔法障壁』を張りましたわ」

「うわぁ、さすがはカタリーナ様ですね」

「これで、私が一番釣れる事は確実ですわ」

遊びでハゼ釣りをしているのに、なぜか一人だけ引くほど真剣にやっているカタリーナ。
一緒にいるフィリーネは、カタリーナの魔法に感心していた。
地味な魔法のために肉眼での確認は非常に難しいのだが、それでも魔法が使えないフィリーネからすると物珍しいようだ。

「なぜそこまで勝負に拘るのかわからん」

「ヴェンデリンさん、遊びは真剣にやってこそ面白いのですわ」

堂々と俺に向かってらしい正論を吐くカタリーナであったが、そ

れでも勝負の世界は甘くなかった。
実は彼女、あまり釣りの経験はないようだ。

「ええと……、言うほど釣れてないけど……」

俺の釣果と、あまり大差はないように見える。
これなら、ヴィルマの方が圧倒的に釣っているはずだ。

「……。大物でしたら、私の圧倒的な勝利ですわ」

と言いながら、釣ったハゼの中から一番大きなものを俺に見せる。

「バウマイスター伯爵様、カタリーナ様の釣ったハゼは大きいんですよ」

フィリーネの言うとおりで、確かに一番大きいのは二十七センチほどある。
そう滅多には釣れない大物であった。

「デカっ！」

「大物では私の勝ちですわね」

勝利を確信して胸を張るカタリーナであったが、その天下はわずかな時間で終了した。

「ヴィルマ嬢よ、それは大きいのであるな！」

「天ぷらにすると食べ応えあると思う」

ヴィルマが三十センチ近いオバケハゼを釣りあげ、その周囲に多くの人が集まっていた。
カタリーナの三分天下は、明智光秀も真っ青なほどの短さだ。

「ヴィルマは、物心ついた頃から釣りもしていたようだし……」

自分の食い扶持を稼ぐために、小さい頃は狩猟に出られないので川で魚を釣って食い扶持を確保していたそうだ。
仕掛けを結ぶのも速いし、その腕前も名人クラスだと、同伴しているミズホ家の世話係の人達が認めているほどなのだから。

「凄いですな、ヴィルマ様」

「ワシは、三十年前にそれよりももう少し小さいのを釣りましたが、それでも当時はお館様に羨ましがられましたぞ」

お客の世話をしたり、釣りを教える仕事をしている世話係の老人達が、ヴィルマの腕前と釣ったハゼの大きさを称賛していた。
彼らもハゼ釣りが趣味なようで、純粋にヴィルマが羨ましいようだ。

物差しなどで、釣れたハゼの長さを計って盛り上がっている。

「このサイズでも、年に数匹あがるかどうかみたいだぞ」

ここでカタリーナがヘソを曲げると困るので、俺はフォローを入れておく。
別に、カタリーナがヴィルマに隔意があるわけではないが、彼女は勝負になると周りが見えなくなる事があるし。

「……」

「カタリーナ？」

「ならば、私は明日の朝、マズメの時間にこれよりも大きなハゼを釣りましょう！　そう、この川のハゼのボスを釣り上げるくらいの覚悟で！」

「この川に、ハゼのボスなんているのか？」

そんな話は聞いた事がない。

「ヴェンデリンさん、魔物の領域には必ずいるではないですか。きっと、この川にも人知れずいると、私は思うのです！」

「（いるわけないだろうに……）」

某釣り漫画でもあるまいし、ここは普通の川で魔物の領域でもないし。

俺は、カタリーナの言い分にただ呆れるばかりであった。

「暗い、寒い、まだ日が昇る気配もない」

そして次の日の早朝、マズメの時間と言われる時刻。

季節は冬なので、まだ日が昇る気配もない。

そんな中、俺、導師、カタリーナ、ヴィルマ、フィリーネの五名は、宿泊したゲストハウスから少し離れた川の河口にいた。

「バウマイスター伯爵様、このポイントですだ」

「ここか……」

昨晩は、『ハゼのボスなんているか！』と思った俺であったが、実は存在すると、普段川を管理している老人に言われ、俺も急遽参加する事にしたのだ。

なぜって？

釣り漫画のような展開で面白かったからだ。

「ハゼは一年から二年で死んでしまうんですが、そのボスハゼは何十年、何百年も生きているって噂でさぁ。ワシの爺さんも見た事があるって言うておりました」

彼の家は、ミズホ公爵家専用の釣り場であるこの川を普段から管理している一族である。

毎日密漁者対策で川を見回りしているそうだが、何回か川底に見える全長二メートルほどの巨大ハゼを見た事があるという。

「二メートルは凄いな」

ハゼは産卵をすると死んでしまうので、それを放棄して成長、生き続ける個体か。

何か、段々と話が盛り上がってきたような気がする。

「でも、二メートルのハゼだと昨日の仕掛けでは通用しないか」

「そう思って、準備しておいた」

さすがは、釣りでは妥協しない女、別名『釣りガールヴィルマ』。
昨日の内に、世話役の老人に頼んで仕掛けを準備していたようだ。

「しかし、なぜヴィルマが準備を？　ボスを釣るって言っていたのはカタリーナだったような……」

「私、今まで魚は魔法でしか獲った事がないのです。そこで、ライバルであるヴィルマさんに頼みましたわ」

「おい……」

物は言いようである。
釣りの勝負なのに、超初心者が超ベテランをライバルだと言い張れるのだから。

「つまり、カタリーナ嬢はビギナーズラックを狙っているのであるか。ならば、某にもチャンスがあるのである」

「導師様、私も大物釣りたいです」

導師とフィリーネも竿を取り、ボス釣りに参加を表明する。
今回、エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、ハルカは不参加であった。

『何か釣れたら、朝食用に調理しますね』

エリーゼ達は、もう少し遅く起きてから朝食の準備をするそうだ。
メニューは、俺達の釣果にかかっている。

「ゴツイ仕掛けですね、ヴィルマ様」

「このくらいじゃないと、ボスがかかると対処できないから」

磯竿のようにゴツイ竿、デカいリール、昨日使ったマダラ大クモの糸を六本もより合わせてから特殊な加工をしたライン、重いオモリ、大きな針と。

これなら、ちっとやそっとの大物でもバラす心配はないであろう。

「餌は？」

「これ」

ヴィルマが差し出したバケツの中には、小さな蛇に見える大ミミズが入っていた。

「このくらい大きくないと、大物が食わない」

「ハルカは連れてこなくて正解だな」

普通のイソメでも駄目なのに、こんな化け物ミミズを見たら卒倒するかもしれない。

そして、エルがそれを介抱する……そんなリア充の光景など、ボス釣りのロマンには不要なのだ。

「針を隠すようにつけてから、仕掛けを狙ったポイントに投入する」

大きな針に大ミミズをつけたヴィルマは、ゴツイ竿を軽く振って狙いのポイントに仕掛けを下ろす。

狙い通りのポイントに投げられたようで、やはり彼女はイカス（死語）釣りガールであった。

「餌が底に沈むのを待ってから、糸フケを取ってアタリを待つ」

「誘いは必要ないのか？」

「水の中でミミズが暴れるから必要ない」

なるほど、これほどのお化けミミズだ。

さぞや暴れて、魚の興味を引くのであろう。

「そして、待ちながら甘酒を飲む」

「ヴィルマ様、甘酒が美味しいですね」

「これも寒い時期の釣りの楽しみ」

最後のはいらないような気もするが、今は冬の早朝なので寒い。

世話役の老人が甘酒を温めていて、みんなに配ってくれる。

空腹に、温かくて甘い甘酒は最高であった。

「じゃあ、俺達も始めるか」

ヴィルマの見本に従って、俺達も餌をつけてから仕掛けを投入する。

「（『きゃあーーー、ミミズ怖い』とか言う女子はいないね……）」

「ヴェンデリンさん、何かおっしゃいましたか？」

「ううん、何も」

いたらいたでムカっとするのかもしれないが、一人もいないというか、唯一いたのがエルの嫁という時点で少しモヤっとした。
カタリーナも、平気な顔をして針にミミズを付けている。

「狙った場所に仕掛けを投げ入れるのは難しいな」

大きな竿に慣れず、なかなか思った所に仕掛けを投入できないが、多少ズレていても何とかなるであろう。

「最後に、某が絶妙なポイントに投入するのである。ふんぬ！」

などと言っていた癖に、導師は川の向こう岸まで仕掛けを飛ばしてしまう。
釣りなのだから、最低限水の中に仕掛けを入れないと意味がないのに。

「導師……」

「仕掛けが切れていないか心配」

「私よりも下手ですわね……」

つい冷たい視線で見てしまう俺達であったが、唯一の例外がいた。

「導師様、凄い力ですね」

「であろう？　やはりフィリーネはわかっているのである」

なぜか、フィリーネだけが目を輝かせて喜んでいた。

導師も褒められて満更でもないようで、この二人、血は繋がっていないがまるで親子のように息が合う。

「次は、もう少し力を抑えて投げるのである」

幸い、木の枝などには引っかかっていなかったようで、導師はリールを巻いて仕掛けを回収していた。

すると、突然物凄いヒキが導師を襲う。

「何か釣れたのである！」

「凄いです、導師様」

導師のファーストヒットにフィリーネも喜んでいるが、何かがおかしい。

地面で引いている仕掛けに、魚がかかるわけがないからだ。

「明らかに魚ではありませんわよね？」

「水の中じゃないから当然」

「何が釣れたかは、仕掛けを巻いてみればいいのである」

物凄いヒキのようだが、導師のパワーにかかれば特に問題もないようだ。

ゴリゴリと音を立てながら止まる事なく仕掛けが巻かれていき、俺達の視界にようやく獲物の姿が見える。

「猪？」

掛かっていたのは、少し小さめの猪であった。

「何で、猪が？」

「この辺の猪は、この大ミミズが好物なんでさぁ」

世話役の老人が説明を始める。

「大ミミズが生息するこの近辺は猪の猟場でもありまして、猪はよく地面を掘って大ミミズを探しているんでさぁ」

猪狩りに来た猟師は大ミミズがいそうなポイントを探るし、成果が芳しくない時には大ミミズを掘って釣り具屋に売りに行くそうだ。

「猪が獲れない時でも、お小遣い程度にはなりますので」

「へえ、そうなんだ」

そんな話をしている内に、憐れな猪は導師によって向こう岸から川の中に引き摺り込まれ、段々とこちらに引き寄せられていく。

よく見ると、その口に針が刺さっていた。

外れるのかと思ったが、思ったよりも深く突き刺さって抜けないらしい。

導師の傍まで引き寄せられた猪は、彼に一撃で殴り殺されてその命を終える。

憐れな猪は、すぐに近くの木にロープで吊るされて血を抜かれていた。

「某が、一番最初に釣ったのである」

「導師様、凄いです」

「明らかに釣りの成果じゃないですし、本来の目的は巨大ハゼなんですけど……」

釣りに来て猪を釣るなんて奇跡を起こせるのは、間違いなく導師だけであろう。

カタリーナとヴィルマも俺と同じ意見のようだが、なぜかフィリーネだけは一人導師を褒めている。

「アタリが来ましたわ！」

釣りを再開した直後、本当の意味での最初の釣果はカタリーナが獲得した。

「巨大ハゼではないと思いますが……」

カタリーナも暫くリールを巻いて奮闘していたが、あがった獲物はスズキによく似た魚……いやどう見てもスズキであった。

「いいサイズの『シロ』ですな」

世話役の老人が、タモで八十センチほどのスズキを掬う。

この世界では、スズキではなくシロが正式名称のようだ。

「洗い、煮魚、焼き魚、揚げものなど。何にでも料理できる白身の魚なのでシロという名前だとか」

「一つ勉強になったな」

世話役の老人から豆知識を得てから、俺達は更に釣りを続行する。
その間に、彼は猪の解体を行い、カタリーナが釣ったシロを締めてから血を抜き、内臓とエラを取る作業を熟練の技で行っていた。

「おっ！　釣れたぞ！」

「バウマイスター伯爵様、私も釣れました」

「某も釣れたのである」

マズメの時間なので、アタリは多い。
全て大型のシロであったが、大物ばかり釣れるので意外と面白い。
これだけ釣れれば、エリーゼ達へのお土産も十分であろう。

「これは大物」

ヴィルマは一メートルを超えるシロを連続して釣って、その腕前のよさを証明した。
これだけ大きい魚なのでヒキも凄いが、怪力のヴィルマはラインの強さも利用してゴボウ抜きにしてしまう。

「大漁で、ご案内した甲斐がありますなぁ」

釣れた魚を締めながら、世話役の老人が安堵した表情を浮かべる。
事前にミズホ公爵から、俺達が大切な客だと言われていたのであろう。

「お化けハゼは釣れていないけど、まあしょうがないか」

警戒心が強いからこそ、今まで釣れていなかったのだ。
昨日今日で、そう簡単に釣れるものでもないのであろう。

「お化けハゼは、この川にいてこそのボスなのだと思いますわ」

最初に自分が釣りたいと言った癖に、カタリーナは大物のシロを釣ると満足してしまったようだ。
負け惜しみなのか、悟ってしまったのかよくわからないが、釣り漫画でヌシがいるポイント近くに住む住民のような事を言っている。

「結構釣れたし、朝飯でこれを塩焼きにしようぜ」

「美味しそうですね、導師様」

「うむ、楽しみなのである」

こちらも、大物が釣れて満足したのであろう。
導師は、素直に仕掛けを巻いて帰る準備を始める。
フィリーネも、導師と一緒に釣竿の片付けを始めた。

「じゃあ、そろそろ終わりにする」

ヴィルマも仕掛けを巻いて回収し始めた時、唯一釣りを続けていたカタリーナの竿にアタリがくる。
だが、それほどの大物というわけでもないようだ。

「三十センチくらいのシロですわ」

抵抗もあまりないようで、カタリーナはリールを巻いて簡単に魚

を水面まで手繰り寄せた。

「そのくらいですと、我らは『シロコ』って呼ぶんでさぁ」

スズキと同じく、成長の度合いに応じて呼び方が変わるようだ。

ただ、スズキのようにいくつも呼び方が分かれてはいない。

三十センチ以下のものをシロコと呼ぶだけだそうだ。

「このくらいのサイズですと、リリースですわね」

魚の鼻を水面の上に出しながら、カタリーナが余裕でリールを巻いていた。

あとは、一旦取り込んでから針を外して放流するだけだとみんなが思ったその時、突然水底から巨大な影が現れ、カタリーナが釣った小さなシロを呑み込む。

「バウマイスター伯爵様、物凄く大きな魚が釣れましたよ」

「凄い、ツキがイマイチのカタリーナが奇跡を起こした」

フィリーネは大喜びで、ヴィルマは何気に酷い事を言っている。

大きな魚は瞬時に小さなシロコを呑み込み、そのまま水底へと泳いでいく。

運よく小さなシロコに掛かっていたハリがそのまま大きな魚にも掛かり、カタリーナは川に引き込まれるかのようなヒキに襲われた。

「ヴェンデリンさん！　やりましたわよ！」

「偶然とはいえ、凄いな」

釣って取り込み中の小さな魚を食べようとして、本命の大魚がかかった。
今日ばかりは、カタリーナの運が勝ったというわけだ。

「頑張って取り込むんだ」

「えっ？　手伝ってくれないのですか？」

「あれ？　自分一人で釣らないと意味がないのでは？」

私が釣ったと自慢するためには、自分一人で最後まで取り込まないと意味がない。
それに、カタリーナには魔法があるのだ。
何とかどころか、十分に一人で釣れるはずだ。

「『身体強化』があるじゃないか」

「私、風の系統が得意なので、機動力を上げる魔法しか習得しておりませんので」

「系統は関係ないだろうが……」

火はパワーで、風はスピードとか、『身体強化』に系統なんて関係ない。
ただ、カタリーナが習得できなかっただけだ。
まあ、彼女は後方で魔法を放つ戦法を行使するので、無理に導師のような『身体強化』を使う必要はないのだが。

「ヴェンデリンさん、急いでくれないと私が川に引き込まれるので

すが……」

「凄いパワーだな」

たかがハゼとはいえ、さすがに全長ニメートルを超えているとパワーも凄いようだ。

カタリーナが川の方に引き摺り込まれそうになり、リールからもラインが出っ放しである。

俺は急ぎ、自分に『身体強化』をかけてカタリーナから竿を受け取る。

「本当にいるとなれば、この川のボス。釣らせて貰うぜ！」

ただし、俺の釣りの腕前も素人も毛が生えた程度であった。

魔法で強化したパワーを使って、リールを強引にゴリゴリと巻いていくだけだ。

それでも、針が掛かった場所が良かったのか、バレる事なく獲物を引き揚げる事に成功した。

「デカっ！」

日本どころか地球上でもあり得ない、全長二メートルを超えるハゼは実在した。

したのだが……。

「若干グロイな……」

「そうですわね……」

せっかくの大物が釣れたのだが、なぜかあまり感動しない。
一日目で釣れてしまったからなのか？
よく見ると、物凄く怖い顔をしているからなのか？

いや、普通のマハゼだって、よく見ると口がギザギザだったりして意外と怖いのだ。
それが二メートルもあれば、怖くて当たり前か……。

「噛まれたら怪我をしそう」

相手は、三十センチ近い魚を丸のみするような奴だ。
口のギザギザも鋭いし、ヴィルマの言うとおりに噛まれると大怪我をするかもしれない。

「導師様、このハゼ、可愛いですね」

ただし、フィリーネだけは少し美的感覚がズレていて、楽しそうに河原にあがったハゼを眺めているが。
さすがは、導師がお気に入りだけの事はあった。
色々な意味でゲテモノ好きなのだと思う。

「これ、どうする？」

「うん？　食べないのであるか？」

導師の問いに、誰も答えなかった。

「いや、実際に釣ってみて思ったんですけど……食べたくない？」

「調理も大変ではないですか？」

シロなら切り身にすればいいわけで……ああ、この巨大ハゼも切り身に？

してもいいと思うのだが、なぜかあまり食べる気にならない。

やはり、見た目の問題なのであろうか？

「から揚げや天ぷらにすると、美味いと思うのであるが」

「火が通り難そうですなぁ」

「「「それだ！」」」

世話役の老人の意見に、俺、カタリーナ、ヴィルマが同意する。

「切り身にすればいいのである」

「それだと風情がない」

そう、ハゼは頭を取り、背開きにして、中骨を取り、それを天ぷらにするのが美味しいのだ。

切り身にしてしまうと、何の魚を天ぷらにしたのかわからなくなってしまう。

ヴィルマは大食いだが、実はそういう部分も大切にする女であった。

だからこそ、俺の嫁が務まるのだ。

「頭と骨が固そうだから、から揚げは不可能に近い」

「これを丸揚げは難しいよな……」

そんな特別製の鍋など、そう簡単には手に入らないであろう。
ミズホ公爵に頼んだとしても、絶対に注文生産になるはず。
どうにか調理しても、食べると骨がアタリそうで嫌である。

「白身なら、切り身でシロが沢山ある」

五人で二十匹以上も釣りあげ、平均サイズは八十センチほどだ。
暫くは、塩焼きに、煮魚に、フライにと材料に困らないはず。

だから、無理にこの巨大ハゼを食べる必要はなかった。

「ヴェンデリンさん、最初は不気味だと思ったのですが、よく顔を見ると意外と愛嬌のある顔をしていますわよ」

「そう言われるとそうだな」

目も真丸だし、釣りあげて河原に鎮座させているのに、動かないでこちらを見ている姿は可愛いかもしれない。
段々と、フィリーネに毒されている可能性もあったが。

「バウマイスター伯爵様、このお魚さんは長年この川に住んでいたんですよね？」

「ある意味、この川のボスとしてこの川を見守っていたのである」

「導師様、逃がしてあげましょう」

「バウマイスター伯爵、某もフィリーネの意見に賛成である」

普段は皆殺しが基本なのに、珍しく導師が巨大ハゼを逃がそうと言う。

このデストロイヤーに仏心を出させるなんて、実はフィリーネは凄い少女なのかもしれない。

「その存在は確認できたし、朝ごはんのおかずはシロで十分」

「ヴェンデリンさん、たまには逃がすのも悪くありませんわ」

「そうだな、逃がしてやるか」

ヴィルマとカタリーナにも促され、運よく巨大ハゼは放流される事となった。

こちらの会話がわかっているのか？

針を外す時にもまったく抵抗せず、巨大ハゼは川へと戻される。

「導師様、あれ」

「おおっ！」

導師が巨大ハゼを抱えて川に戻すと、放流されたハゼを迎えるように、それよりももう一回り大きな巨大ハゼが姿を見せる。

「二匹いたのか！」

「私もこの川の管理を始めて六十年以上経ちますが、二匹いたとは知りませんでしたなぁ」

世話役の老人も、巨大ハゼが二匹いた事に驚いていた。

「ヴェンデリンさん、夫婦なのでしょうか？」

「かもしれないな」

偶然かもしれないが、俺には大きい方のハゼが奥さんを心配して見に来たようにしか思えなかった。

地球のハゼにはそんな習性はないが、どう考えてもそうだとしか思えなかったのだ。

「ハゼさん達、これからも仲良くね」

「この川の行く末を見守ってくださいね」

フィリーネとカタリーナが、日の出の美しい光景の中、川の深い流心部分への向かう二匹の巨大ハゼに声をかける。

俺達も二匹で寄り添うように泳ぐハゼを見送りながら、早朝の釣りを終えるのであった。

この川でいつまでも、あの巨大ハゼが生きていける事を願って。

「えっ？　巨大ハゼが釣れたけど逃がした？　何かなぁ……」

せっかくの感動話なのに、俺達がゲストハウスに戻ってエルにその話をすると、彼は明らかに嘘くさいといった表情を浮かべる。

「いや、本当に釣ったんだって！　噂どおりに二メートル以上あったし！」

「うーーーん」

「何が引っかかるんだよ？」

「いやね、導師、ヴィルマ、ヴェルの三人がいて、せっかく釣れた獲物を逃がすなんて、教会の聖人のような真似をするのかなと……」

食べられる物を獲っておきながら、それを可哀想だと逃がしてしまう。

エルからすると、俺達がそんな事をするわけがないと思っているようだ。

「俺が導師と一括りにされている点はあとで問うとして、フィリーネもいたんだ。情操教育に必要だったとは思わないのか？」

「ヴェルなら『食べ物を得るためには、生き物を殺さないといけないのです』とか言って、容赦なく殺すと思うけど……」

「うっ！」

なまじエルの言い分に納得できる部分があったために、俺の反論は鈍ってしまう。

「とにかく、カタリーナだって、フィリーネだって実際現場に居合わせているんだ。巨大ハゼは釣れたんだ」

「いや、世話役の爺さんもそう言っているから疑ってはいないぜ。

ただ、釈然としないだけ」

「釈然としないのは俺の方だよ！」

某釣り漫画のように、その川を守ってきたボスを釣り上げたあとに放流する感動のシーンなのに、この世界の人間はほとんどわかってくれないとか。

俺、父親に勧められて読んだ『釣りキチ〇〇』大好きだったのに……。

「それでも、楽しい釣り接待だったな」

ハゼとシロは釣れたし、お土産も沢山貰ったり買ったり出来た。

フィリーネも喜んでいたし、いい接待旅行であった。

などと思いながら、今日はバウマイスター伯爵領内で魔法による土木工事を行っていると、突然、携帯魔導通信機に着信が入る。

「もしもし？」

「こらぁーーー！　バウマイスター伯爵！」

突然、携帯魔導通信機越しに怒鳴り声が聞こえる。

声の主は、エドガー軍務卿であった。

「俺は、バウマイスター伯爵の義理とはいえ父親だぞ！　楽しそう

な接待旅行に俺を誘わないとかあり得ないだろうが！」

なぜ自分を接待旅行に連れて行かないのかと、エドガー軍務卿から大声で怒鳴られてしまう。

この怖さたるや、ヤクザも真っ青なほどだ。

「えっ？　そんな時間があるんですか？」

「誘われれば、予定を空けたに決まっているだろうが！　ヴィルマが土産を渡してくれなかったら、もっと怒っているところだ！」

「ええっ！　でも……」

内乱後の軍備、軍政改革が忙しいから誘っても来ないと思っていたのが不覚だったかもしれない。

「アームストロング伯爵も怒っているぞ！　弟はハゼの天ぷら食べ放題なのに、こっちは土産だけかって！」

「ええと……次は必ず誘いますので」

「なるべく早くにな！」

暴風雨のようなエドガー軍務卿からの通話が切れて安堵していると、今度はルックナー財務卿、ホーエンハイム枢機卿からも続けて通信が入る。

「もう大分付き合いも長いのに、ワシを誘わないとは……」

「エリーゼを大切にしてくれているのはわかるが、たまには義祖父

孝行も必要だと思うぞ、婿殿」

体育会系肌で直接苦情を言うエドガー軍務卿と違って、文系肌の二人は言い方は遠回しだったが、接待釣行に誘わなかった件を恨んでいるのは同じのようだ。

年寄りというのは、釣りが好きなのであろうか？

酒と、旅行先の美味しい食事も目当てかもしれないが。

「必ず、次はお誘いしますので」

「必ずだぞ！」

「なるべく早めに頼むぞ、婿殿」

連続した着信が切れて安堵していると、今度は初めての番号から通信が入ってくる。

「もしもし？」

「私だ」

いや、私だと言われても誰だかわからなかった。

「ええと、どちら様で？」

「バウマイスター伯爵、そなたも他の貴族達と同じ事を言うのだな。確かに、私は父である陛下に比べて目立たないと言われている。なぜか友達も少ないしな。だが、この前の帝国との講和交渉では、そなたの権利確保のために努力もしたのだ。ここは、接待釣行に誘う

くらいの配慮があっても……」

「王太子殿下ですか？」

まさかそんな偉い人から通信がくるとは思わなかった。

それと、あの程度の軽い接待旅行に王太子殿下が付いて来るとは俺も思っておらず、やはり声をかけていなかったのだ。

決して、その存在すら忘れていたわけではない。

「他に誰がいる？」

「申し訳ありません！」

つい、前世の商社マン時代の癖で頭を下げてしまう。

魔導携帯通信機越しなので、相手にはまったく見えないから意味ないのだが、それでも昔の習性とは恐ろしいものだ。

「必ず次はお誘いしますので」

「本当か？　期待して待っているからな！」

王太子殿下は、なぜか必死であった。

『誘うくらいはしろよな、俺は忙しいから行けないけど』というスタンスではなく、本当に誘ったら付いて来る気のようだ。

王太子殿下という身分にあるのだから、この程度の誘いはいくらでもあるような気がするのだが……。

「待っているからな！　絶対に私も誘うのだぞ！」

「勿論です、殿下」

「その言葉が聞きたかった」

満足したような声を最後に、殿下から通信が切れる。

どうやら、誘ってもらえると聞いてとても嬉しかったようだ。

「王族なのにボッチなのか……」

そういえば、今まで何度か顔を合わせた事があるのに一度も会話をした記憶がなかった。

どんな人かよくわからなかったのだが、俺と同じようなボッチ気質である事を知ったらなぜか親近感を覚えてしまう。

「何かあったら、絶対に誘うか……」

その後、どんな誘いでも王太子殿下は必ず出席し、後に俺は彼と親友になるのであった。

第百十二話　日常への帰還と、親子再会を手助けする。

「久しぶりに、冒険者兼業貴族生活に戻れるな」

「ヴェル、そこは貴族兼冒険者生活としておけ」

両国による講和条約調印から二週間、王城への報告や多くの貴族達に囲まれた戦勝パーティーなどを終えて、俺達はバウマイスター領に帰還した。

ミズホ公爵から招待された接待旅行などもあって、ようやくバウマイスター伯爵領に戻ってこれたというわけだ。

「しかし、なぜ王城で戦勝パーティーなんだ？　むしろ王国軍は……」

「エル、それを言ってはいけない」

王国軍の先遣隊が無様に負けた事実は、もう口にしてはいけないのだ。

そこには、国家としてのプライドもあるのだから。

俺達が内乱で大活躍し、後に合流したフィリップとクリストフも活躍して王国と王国軍の威厳が保たれた。

その事実こそが重要なのだから。

「みんな、待っているな」

屋敷の前まで行くとローデリヒ以下の家臣達が出迎えてくれて、

今日からは『魔の森』の探索、領内の土木工事、少しの貴族としての仕事などを順番にこなしていく事となる。

しかし、この一年と少しでえらくバウマイスター伯爵領も発展したものだ。

バウルブルクの町も広がっているし、魔の森周辺には冒険者達が集う町とギルド支部が複数完成していて、そこを拠点に多くの冒険者達が集まって狩りや採集で多くの素材を集めている。

そして、それが外部に販売されてバウマイスター伯爵領が潤うのだ。

利益はまた開発に投資される。

大規模な農地と、農民達が住む農村に、道の整備なども急ピッチで進んでいる。

これら全ての流れを、バウマイスター伯爵家の家宰であるローデリヒが仕切っていた。

おかしな貴族避けにエーリッヒ兄さんも手助けしていたが、ローデリヒ一人でも実務は何とかなったはずだ。

つまり……。

「ふと思ったんだけど、別にローデリヒが領主でも構わなくね？」

「ヴェル……、お前がそれは言うなよ……」

まさか、エルに窘められるとは思わなかった俺であった。

「ヴェル、それはないから」

ふと、先ほどの話をエーリッヒ兄さんにしてみたのだが、彼の答えはノーであった。

隣にいるローデリヒも頷いている。

「どうしてですか？　エーリッヒ兄さん」

「バウマイスター伯爵領の開発は早いけど、それはヴェルが事前に基礎工事をしていたからだよ」

それが終わっていたから、ローデリヒが通常の開発を効率よく行えていた。

俺の留守中にも、計画どおりに開発工事が進められたというわけだ。

「エーリッヒ様の仰る通りです。新規に開発を始めるとなりますと、またお館様には土木工事冒険者して活躍していただかないと。それに、今の拙者はあくまでもお館様から全権を任された家宰として信頼されているわけです。ここで『拙者が新領主なので言う事を聞け！』と言っても無視されるでしょうな」

「そうなんだ」

また、荒地を均したり、治水工事をしたり、道を作ったり、臨時の野生動物除けを作る工事が始まるのだ。

「前とは違って、素直に了承してくださいますな」

「内乱中に散々やったからだな」

陣地構築の手伝いに、慰撫工作のために町の開発と、あれだけやればもう慣れたというものだ。

「なるほど、お館様は工兵としても優秀なのですな」

「敵に回すと怖いかもね」

ローデリヒとエーリッヒ兄さんは、納得したような表情を浮かべる。

「それにだ。ヴェル達の戦果は大まかにはもう伝わっているんだよ。多分、今王国では一番威厳のあるというか恐れられている貴族だと思う」

隣国の内乱とはいえ、普段のなるべく死者を出さない紛争とは違って本気で殺し合う戦争に参加して大活躍した。

その事実は、王国の貴族達から畏敬の念で見られる最大の原因となっている。

「貴族は、戦争に勝てると尊敬され恐れられるからね」

「逆に負けると、色々と大変ですけどね」

負けて評判が落ちたのは、昔に魔の森で諸侯軍を壊滅させた先代ブライヒレーダー辺境伯か。

でも、当代がブロワ辺境伯との大規模紛争でそれを回復させている。

元ブロワ兄弟は、その大規模紛争で没落した。
だが、今回の内乱でフィリップは優秀な指揮官として名をあげている。
クリストフの軍政能力も評価された。

「無様に惨敗したレーガー侯爵家は、役職を世襲できなくなる可能性があるらしい」

強硬に出兵論を主張して、王国軍にも多大な犠牲を出している。
挙句に当主も戦死して家内は混乱の極致にあるそうで、このままだと軍務卿の役職が回ってこなくなる可能性もあるそうだ。

「逆に、敗残兵を纏めて内乱で活躍した元ブロワ兄弟は王宮でも評判がいいね」

レーガー侯爵が犯した失態を上手く補ってくれ、帝国軍上層部からも名将だと評価されている。

法衣貴族ながらも、昇爵と世襲職が与えられる事がほぼ決まっているそうだ。
えらく王宮からの情報に詳しいと思ったが、そういえばエーリッヒ兄さんはルックナー財務卿の派閥だ。
そこからの情報なのであろう。

「一戦の結果で、評価が乱高下ですか……」

「貴族は戦争に強くてなんぼという考え方だからさ。そんなわけで、今のバウマイスター伯爵領に表立ってちょっかいを出す貴族はまずいないね。私もとても楽だったよ」

「エーリッヒ様には、色々とお手伝いいただき感謝したしております」

「ローデリヒは優秀な家宰だよね。我が家にも欲しいくらいだけど、うちの家の規模だとそんなに仕事がないからなぁ」

エーリッヒ兄さんは法衣貴族なので、在地貴族よりは仕事が少ない。

というか、職務はその貴族本人が主にそれを行い、家臣達はその補佐という役割分担なので任せるという部分が少ないのだ。

「私ももう少しで王都帰還かな。でも、いくつか厄介なのを背負い込んだよね？」

「エーリッヒ兄さんには隠し事は出来ないなぁ……」

この内乱で俺が背負ったもの、まずはテレーゼの身柄であろうか？ただ、彼女に関してはペーターなどは俺が預かってくれて安心だと思っているし、王国側も何も言わない。

彼女がメイドを一人しか連れて来ず、フィリップ公爵家とも連絡を取っていないので『もう終わった人』という認識のようだ。

加えて、やはり彼女が女性なのが大きい。

『選帝候として手腕を振るった才人だが、所詮は女性』という考えが王宮にはあるそうで、俺が戦利品として貰ってきたくらいの感覚なのだそうだ。

フェミニストな人が聞いたら、大激怒しそうな意見ではある。

この世界に、そんな人はほとんどいないけど。

「元公爵閣下の女傑か。確かにそんなオーラは感じるね。なかなかの美人だし」

エーリッヒ兄さんはこう見えて女性評が厳しい方なので、テレーゼは美人で間違いないと思う。

俺の評価が甘いという事はないようだ。

「領主館傍の屋敷を購入され、そこで静かにお住まいです。念のために監視兼護衛は付けてありますが、メインは護衛ですね」

彼女に何かがあるとバウマイスター伯爵家の責任になるので、ローデリヒが気を利かせたようだ。

やはり、彼が家宰でよかったと思う。

「テレーゼ様はさほど厄介でもありません。むしろ、フィリーネ様です」

「ううっ……」

彼女も今は屋敷で生活している。

すぐに、父親であるブライヒレーダー辺境伯に会わせるというわけにはいかないからだ。

大物貴族の私生児騒ぎなどよくあり、その中には詐欺も多い。

うちの家臣が証拠の品と共に説明を行い、それを彼が承認したとしてもそう簡単には再会といかない。

相手は大物貴族なので、日時と場所を決めてフィリーネ側にも準備がある。

娘なので、それに相応しい服装の準備などもあるのだ。

「お館様、フィリーネ様の貴族としてのマナーなどはどうなのですか？」

「エリーゼに任せたままだけど大丈夫だと思う」

内乱で忙しい時には、お金を出して帝国貴族の奥さんに教育を頼んだりもした。

紹介はあのランズベルク伯爵なので、おかしな事にはなっていないはずだ。

「親娘の再会は宜しいのですが、明らかに押し付けられますね」

「それはあるね。ブライヒレーダー辺境伯殿は大喜びだと思うよ」

今までいなかった、年頃の娘である。

現時点で十歳なので、五年もすれば俺と結婚も可能であろう。

「母親の身分が低いから、序列が低くても何の問題もないからね」

それが一番大きい。

だから、ブライヒレーダー辺境伯に話を持ちかけられたら断わる理由を探すのは難しい。

「五年後まで、現実逃避しておきます」

「それがいいね」

「いいんですか？」

俺は、エーリッヒ兄さんに思わず聞きかえしてしまう。

「大物貴族になると問題が山積みだからね。『はい』、『いいえ』で済む問題は直前まで放置しても構わないさ。五年後には状況が変わっているかもしれないし」

俺よりも、嫁がせたい人が出るかもしれない。

貴族の婚約など、実は簡単に取り消されたりするのだから。

「再会の儀式は明日だっけ？」

「儀式ですか……」

「大物貴族ってのは、何でも大仰だからね。儀式と呼んでも差し支えないかも」

ルックナー財務卿をよく見ている、エーリッヒ兄さんらしい言い方だと思う。

感動の娘との再会も儀式扱い、大物貴族とは大変だと思った。

「そして、一番の問題は……」

あの魔族の事である。

今は、ローデリヒに頼んで屋敷のある部屋に軟禁している。

いや、その気になればあれだけ強大な魔力の持ち主だ。

簡単に逃走してしまうであろう。

何の事はない。

彼はニュルンベルク公爵領内で発掘した遺跡や発掘品に対するレポートを書いたり、今度はバウマイスター伯爵領で自由に発掘でき

ると喜び、昔の資料を引っ張り出して遺跡などの特定作業を行っていたのだ。

「あの者、国家に属しているとは思えませぬな」

「私もそれは感じた」

「彼を突き動かすのは知識欲なのでしょうね」

出会ってから一か月以上も経つが、彼が魔族の国と連絡を取っている様子はない。

それが可能な魔道具も持っていないし、そういう魔法を使っている気配すらなかった。

ただ机に向かってレポートの記載や資料の解析に勤しんでいるのだ。

唯一、三食出す食事には五月蝿かったが、ニュルンベルク公爵が好きだったミズホ料理を出すと文句を言わなくなった。

今、彼の食事を作っているのはハルカである。

「そんな理由で、内乱に手を貸すのはどうかと思うけど……」

「本人は反省していませんよ」

俺は、先ほど魔族の様子を見に行った時の事をエーリッヒ兄さんに説明する。

『アーネスト・ブリッツ、調子はどうだ？』

『ニュルンベルク公爵領内における、古代魔法文明時代の遺跡の分類。我が輩のレポートは順調に進んでいるのであるな。同時に、バウマイスター伯爵領内にある地下遺跡の特定作業も順調なのであるな』

厳重に監視された領主館の一室で、魔族は分厚いレポートを執筆していた。

『そうか』

『おや、我が輩を殺人者だと糾弾しないのであるな』

『それを言うと、俺も相当な殺人者だからな』

俺だけではない。

導師も、ブランタークさんも、エル達も、あの内乱に参加したみんながそうであろう。

『我が輩は魔力は多いのであるが、その手の訓練は受けていないのであるな。あと、これは言い訳になるかもしれないのであるが、我が輩が発掘した地下遺跡は確かに軍の施設などが多かったのであるが、何も武器ばかり発掘したわけではないのであるな』

そういえば、トラックや土木機械に似た魔道具なども多かった。

俺もある程度鹵獲したが、大半は帝国軍の手に入っている。

今は、戦後復興に使っているはずだ。

『得たナイフで料理をするか、人を刺すか。我が輩が、もう大人の

ニュルンベルク公爵に説く内容でもないのであるな』

『そういう考え方もあるのか』

ニュルンベルク公爵は反乱を起こさずに、それらを使って国力を嵩上げすれば良かった。

三十年もすれば、次の皇帝選挙で圧倒的な勝利を得られたであろう。

それを出来なかった事が、彼の精神が均衡を欠いていた証明かもしれない。

『もう終わった事だな』

『であるな』

いつまでも仮定の話をしても仕方がない。

二人の考えは一致する。

『それで、バウマイスター伯爵領はそんなに遺跡が多いのか？』

『今、そちらからの資料と合わせて解析しているのであるが、比率は他の王国領域と変わらぬのであるな』

他の王国領域は、既に発掘されてしまった遺跡が多い。

逆にバウマイスター伯爵領は、元は未開地なので未発見の遺跡が多いというわけだ。

『特に南部には、古代魔法文明時代に高技術を誇ったアキツシマ共和国があったのであるな』

『アキツシマ共和国？』

『今のミズホ伯国……、今はミズホ公爵領であるか。彼らの先祖であるな』

魔族の話によると、ミズホ人の先祖は魔の森付近で従属国ではあるが自治性の高い国家を運営していた。

だが、古代魔法文明の崩壊と共に未開地には暫く人が住めなくなり、今の場所まで移住する羽目になったそうだ。

『その遺跡が、未開地には沢山あるのであるな。調査と発掘が楽しみであるな』

『そうか、まだ外に出るなよ』

反乱が終わった直後である。

もう暫くは、この部屋で大人しくしていて欲しいものだ。

『幸いにして、する事も多いので心配無用であるな。考古学者は何も発掘だけしていればいいわけでないのであるな』

フィールドワークとデスクワーク、共に重要で、数か月くらいなら普通に待てるそうだ。

『ここは食事がいいので快適であるな』

この魔族も、ニュルンベルク公爵と同じで食事は薄味で脂っこくないものが好みのようだ。

ハルカが作るミズホ料理を気に入っている。

互いに利用し合う関係だけであった両者であるが、皮肉な事に食

事の好みは合っていた。
もう少し腹を割って話し合えばよかったのにと、俺は思わないでもない。

『俺達も、内乱が終わってようやく地元に戻れた。冒険者として魔の森を探索もする。地下遺跡の発掘くらいなら手伝ってやる』

『それは嬉しいのであるな。我が輩、魔力は多いのであるが荒事は苦手なのであるな』

魔力の多さで普通の敵を相手にしている分には無双できるのであろうが、エリーゼの『過治癒』を食らったように、この魔族には戦闘経験が圧倒的に足りなかった。
遺跡発掘に、俺達の力を借りるのを恥とは思っていない。
むしろ嬉しそうで、つまり彼は軍人ではないという事だ。

『この部屋に籠っている間に、我が輩が持参した昔の資料と、バウマイスター伯爵が持ってきてくれた今の資料を擦り合わせて、地下遺跡の位置を特定しておくのであるな』

最後にそう言うと、魔族はレポートの執筆に没頭してしまう。

「とまあ、こんな感じです」

「学者だねぇ……。王都のアカデミーにも、そんな学者さんは多いよ」

エーリッヒ兄さんは予算執行の仕事でたまにアカデミーに赴いていて、そこにいる学者先生とは話をした事があるらしい。
アーネストも、それと同類だと思っているようだ。

「頭は物凄くいいのですが、どこか浮世離れしていますよね」

「ローデリヒの表現が一番適切かな？」

「ところで、一つ気になるのですが」

ローデリヒが真面目な表情になって、俺に質問をしてくる。

「魔族を匿っている件を、帝国と王国の上層部は知っているのでしょうか？」

「知っているよ。陛下には話してあるし、帝国ももう気がついたと思う」

王国には報告済みだし、あのペーターに長期間偽装が通じるはずはない。

「よく取り上げられませんな」

「取り上げられないんだろう？　ヴェル」

「はい」

戦闘は苦手とは言っているが、もし強引に拘束して発掘品の情報などを引き出そうとすれば、彼は全力で抵抗するはず。
エリーゼの『過治癒』は、最初だから通用した手だ。

あの頭のいい魔族には二度と通用しない。

「物理的に、俺、導師、ブランタークさん、カタリーナ、エリーゼ、ルイーゼか、これに匹敵する戦力をあの魔族を監禁するために割けるのかという問題がある」

「確かに、それは難しいですな」

そんな戦力を常に貼り付けられるはずがない。

ならば、彼が逃げないような環境を作り出すべきである。

「なので、バウマイスター伯爵領の地下遺跡というわけだ」

「ほぼ未発掘なので、全て調べるには時間がかかりますか」

「そういう事」

「難儀な方ですな。バウマイスター伯爵家の利益にはなるので、お館様の方針には賛成ですけど」

いや、俺の方針というか、結果的に腫物扱いで押し付けられたのかもしれない。

あの魔族が住んでいた国は魔道具技術が発展していて、専門家でもない彼でもかなりの事ができた。

この情報と合わせて、地下遺跡発掘の成果も王国に疑われないようにどうせ定期的に提供しないと駄目なのだから。

「帝国の方はどうなのです？」

「扱いが難しいだろうね」

公表すれば、帝国住民の大半はニュルンベルク公爵と同罪だから処刑しろと言うはず。
もしくは、監禁して賠償代わりに帝国の地下遺跡を発掘させろと。
だが、そんな事を無理矢理すれば、アーネストが全力で抵抗する可能性が高い。

「今の帝国だと、抵抗するアーネストを討てても損害が大きすぎます」

「そうでなくても、今の帝国は魔法使いが不足しているからね」

内乱で、俺達がどれだけ帝国の魔法使いを殺したか。
初級や中級だって、しかるべき場所で活躍すれば普通の人の数百倍から数千倍の活躍をするのだ。
それがゴッソリといなくなり、今の帝国は魔法使いの数が大幅に不足している。

最後の地下遺跡攻略の時など、十歳以下の子供まで動員してブランタークさんが魔法を教えながら戦力化していたのだから。
しかも彼らは、帝国復興のために各地で忙しく働く羽目になる。

アーネストを監視する人手など、そう簡単に集められるはずがない。

「だから、ペーターはあえて知らんぷりをしている可能性があります。むしろ、アーネストの件を問題提起されるのを嫌がるでしょう」

知られて騒がれれば、対応しないといけないのだから。

「いつもの日々に戻るには時間がかかりそうですな。まずは、一個ずつ解決するとしますか」

「そうだね。私も、まだこの地に残留しろとルックナー財務卿から言われたしね」

「色々とですか。まずは、感動の親娘再会か……」

最近、全く顔を合せていなかったが、フィリーネをブライヒレーダー辺境伯に会わせないといけない。

まるでテレビでやっている親子感動再会番組のようだと、俺は思ってしまったのであったが。

「バウマイスター伯爵様、お父様はどんな方なのでしょうか？」

「ええと、文系の人かな？」

「あなた、そういう言い方ですとフィリーネさんにはわかり辛いですよ。お優しい方ですから」

「（優しい人が、こんなに娘を放置するかな？）」

「（エル、俺もそう思ったが、それを大きな声で言うてはならぬ）」

本日、ようやくフィリーネとブライヒレーダー辺境伯との面会が

行われる。
普通に会えばいいような気もするが、大物貴族ともなると忙しいのでアポを取るだけで色々と面倒だ。

ブライヒレーダー辺境伯は大物貴族であり、彼らは例外なく忙しいのでスケジュールの調整もあるし、フィリーネ側の準備もある。
ブライヒブルクにある屋敷まで『瞬間移動』で飛ぶ前に、エリーゼ達が姦しく話をしながらフィリーネを着飾っていた。

『お父様への印象をよくするために、ドレスはあまり派手な色はいけません。かと言って、暗い色でも駄目なので水色とか？』

『エリーゼ、アクセサリーは？』

イーナはリーダーであるエリーゼに、沢山あるアクセサリーからどれを選べばいいのか聞いていた。
貴族としての常識に則った、それでいて相手に好印象を与えるコーディネート。
こういう時に頼りになるのは、やはり経験のあるエリーゼであった。

『素材は銀が主体の物がいいでしょう。派手なのは駄目ですけど、安物はよくありません』

『リボンとかカチューシャは？』

『お父様と同じ銀色の髪を強調するために、あまり髪を隠すのはよ

くありません』

『でしたら、私が綺麗に梳いておきます』

『お願いしますね、カタリーナさん』

『私、髪が毎朝爆発していますので慣れていますのよ』

カタリーナは、自分の櫛でフィリーネの髪を梳き始める。

手つきが慣れているのは、カタリーナの髪が寝ぐせで爆発していて、毎朝それを自分で直しているからだ。

『エリーゼ様、靴は？』

『ヴィルマさん、靴は綺麗に磨いてください』

『わかった。足元の手を抜くと、相手に侮られるから？』

『よくご存知ですね』

ヴィルマが念入りに靴を布で磨き始める。

エリーゼは、ヴィルマが意外と博識なので感心していた。

エドガー軍務卿の義娘なので知らないはずはないのだが、彼女にはそういうイメージが薄かったのだ。

『あとはマナーだけど、これはもう遅いか……。ヴァーゼル子爵夫人の手腕に期待だね』

内乱の後半、結局戦場には連れて行けないという理由で、フィリーネは帝都在住の貴族家に居候をしていた。

ペーターが引き込んだ宮廷貴族ランズベルク伯爵の紹介で、教育込みで面倒を見てくれる貴族に預けたのだ。

ヴァーゼル子爵家は帝国においては平凡な貴族ではあったが、家の歴史が古くて貴族としてのマナーや教養に詳しかった。

ヴァーゼル子爵夫人は七十歳を超えた温和な老婆で、上手くフィリーネを教育してくれたはず。

『フィリーネ、また成長した？』

『はい、ルイーゼ様。少し背が伸びました』

『羨ましいな。あと、ボクの事は様付きで呼んでは駄目だよ。キミは貴族の娘になるんだから』

ルイーゼも俺の奥さんなので、互いに身分的な優劣はほとんどない。

だから、さん付けで呼ぶようにと忠告する。

『はい、わかりました』

そんな感じで、フィリーネは女性陣に着飾られてブライヒレーダー辺境伯家館の客間で父親を待っていた。

「でも、ちょっと不安だよな」

「何がだ？」

「いやさ、フィリーネって母親の身分が低いでしょう？」

着飾ったフィリーネと共にブライヒレーダー辺境伯の登場を待っていると、不意にエルが自分が感じた懸念を語り始める。

「ブライヒレーダー辺境伯はともかく、奥さん達は大丈夫なのかな？」

「うーーーん、どうかな？」

エルの懸念は、『お館様が外で作った娘ですって。本当なのかしら？』、『まあ、母親が下賤な平民だと娘も下賤に見えるのね』と嫌味を言って苛めるとか。

『あなたをブライヒレーダー辺境伯家に迎えるのは、お館様が言うから仕方なくです！』とか言い、『いいですか？　あなたはお情けで養われているのですよ！』と、奥さんとその子達にも苛められる。

こんな未来を予想してしまったようだ。

「（メイドと一緒に屋敷の手伝いとかさせられて、食事も最後に冷たい残り物とか出されてとか……）」

昔の日本のドラマなら、寒い中手を霜焼けにさせながら拭き掃除を行い、食事は一人で大根葉入りの雑穀飯を食べるとかであろう。

「（うわぁ。ありそうで怖いな）」

フィリーネがいるので、聞こえないように小声でエルと話を続ける。

もし彼女がそんな境遇になるのであれば、会わせなければよかったと後悔してしまいそうだ。

「（大貴族だからそんな事はないと思いたいけど、逆に言うと苛めても誰も非難できないだろう？）」

「（それはあるかもなぁ……）」

俺とエルの頭の中で、次第にブライヒレーダー辺境伯の夫人や子供達に苛められる光景がハッキリと映像化されてしまう。

「（ううっ……、実は会わせない方がフィリーネにとって幸せとか？）」

俺の心の中に、後悔の念が浮かんでくる。

もしそうなったらどうしようか？

ブライヒレーダー辺境伯には恩があるけど、そういうのを見逃すのはどうもな。

フィリーネとは内乱中に出会って、俺もエリーゼ達も面倒を見ていたのだし。

うちで面倒を見て、成人したら自由に人生を選ばせるという手もあったのだ。

そんな事を考えていると、エリーゼが俺の服の袖を引っ張ってくる。

「あの……あなた……」

「どうしたんだ？　エリーゼ」

「あの……後ろ……」

「後ろ？」

エリーゼに言われて後ろを振り返ると、そこには見覚えのある三十くらいに見える綺麗に着飾った女性が立っていた。

少し年は取っているが、物凄い美人である。

「あら。バウマイスター伯爵様は、うちの旦那様よりもよほど文学的な才能に優れているのですね」

「あははは……、お久しぶりですね」

エリーゼが、俺とエルの会話を止めようとするはずだ。

後ろに、俺達がフィリーネを苛めそうだと言った張本人が立っているのだから。

滅多に顔を合せないし、昔は身分が上の人だったので、つい口調が昔のままになってしまう。

「そんな物語を、昔に読んだ記憶がありますわね」

「ええ、前にそんな話を本で読みましてね。なあ、エル？」

「はい、俺も珍しく本で読んで」

俺とエルは、懸命に先ほどの失言を誤魔化そうとする。

フィリーネを苛める意地悪ババア扱いしたので、何とか取り繕わ

なくてはいけない。
わざとらしく笑いながら、先の発言を誤魔化そうと努力する。
「そうですか、昔の物語ですか、この娘がフィリーネね」
「初めまして、フィリーネと申します」
フィリーネは、ブライヒレーダー辺境伯夫人に礼儀に則った挨拶をした。
やはり、ちゃんとしたプロに任せて正解だったようだ。
「バウマイスター伯爵様、色々とお手数をおかけしまして」
「いえ、内乱中のためになかなかフィリーネに構ってあげられずに」
まさか戦場に連れて行くわけにもいかなかったので、他人任せにしてしまった件を謝っておく。
「事情が事情なので仕方がないと思いますよ。しっかりとした方に預けていただいたようで。それにしても……」
ブライヒレーダー辺境伯夫人は、フィリーネの顔をまじまじと見つめる。
「旦那様に目が似ています。髪の色も間違いないですわね」
続けて、フィリーネの髪を手に取って確認する。
「旦那様には私を含めて六人の妻がいますけど、子供は男の子ばかり。やっぱり、女の子は可愛いわね」

ブライヒレーダー辺境伯夫人は、フィリーネを気に入ったようだ。
あくまでも、表面上はだが。

「バウマイスター伯爵様、ご安心くださいな。この娘は、あなたの奥さんになるのですから、成人するまで雑事で扱き使ったり、ボロを着せたり、残飯を与えたりはしませんので」

「ヴェルぅ、やっぱり聞かれてたよ……」

「（エルは黙ってろ！）あはは、俺は夫人がそんな事をするなんて微塵も思っていませんから」

ここで狼狽えてどうすると、俺はエルに肘打ちをする。
一度誤魔化すと決めた以上は、最後まで誤魔化し切らないと駄目なのだから。

「そうですわよね。それで、フィリーネが成人したら娶っていただけるので？」

「はい、それは勿論」

こうなれば、笑って誤魔化すしかない。
そして、将来フィリーネがうちに嫁に来る件に異議を唱えてはいけないのだ。

「「「「「……」」」」」

エリーゼ達は墓穴を掘った俺を呆れた表情で見ているが、どうせこうなる事は予想していたんだと開き直る事にする。

「あの……、奥様」

「フィリーネ、私の事はお義母さんと呼んでね」

「はい、お義母様。それでお父様は？」

「今、ちょっと他のお義母様達とお話しているから、もう少し待っていてね」

「はい」

お話とは言うが、大方の予想はつく。

「（バウマイスター伯爵様が思っていらっしゃる通りに、他の畑に無責任に種を撒いて面倒も見ていない旦那様に少しお灸を据えているだけですから）」

ブライヒレーダー辺境伯夫人は、持っていた扇子を俺の耳元で広げて他に聞こえないように小声で話す。

「（外で子供を作るのは構いません。特に待望の女の子ですからね。問題なのは、一切の面倒を見ないで放置していた事実です。まったく、シュルツェ伯爵様達にも漏れたと聞くではないですか。我が家のとんだ恥ですわ。日記や才能のない自作詩集なんて、一セントにもなりませんのに……）」

シュルツェ伯爵達に漏れた件は、俺達が言うわけないが、あの人は案山子ではなく優秀な文官貴族であり、フィリーネを見ればある程度察してしまうというわけだ。

ブライヒレーダー辺境伯がボロカス言われているが、確かに彼ほどの貴族が外で子供を作ってその子が十歳になるまで放置していたのだ。
世間の評判を考えると、家を内を預かる夫人としては溜息ものなのであろう。

「（証拠の詩集を拝見しましたけど、確かにあの酷い詩を書けるのはうちの旦那様だけですわね）」

それは、俺達でもそう思う。
間違いなく、俺が書いた方がまだマシなはずだ。
ブライヒレーダー辺境伯は、書籍評論のサロンではかなりの高評価を受けている。
他人の作品は客観的に評論できるのに、自作の詩はその辺の五歳児にも劣る。
というのが、夫人や家臣達からの評価らしい。
可哀想なので、本人には直接言わないそうだが。

「（ただ、さすがに今回は酷いので、『今度やったら詩集を出版しますよ！』と釘を刺しておきました）」

あの詩集を出版する。
もし俺が作者なら、自殺を一度は考えるはずだ。

「フィリーネ、お父様の詩をどう思うかしら？」

「とても素直に書かれていると思います」

フィリーネの評価はある意味正しい。

バカ正直に書かれているのは事実だからだ。
どこまでもバカ正直に書いているので、詩としての評価は駄目なのであるが。

もしかすると、数千年後に評価がひっくり返って天才詩人の称号を……などとは思えない。
自分で言っていて、まずあり得ないと思ってしまう。

「あなたは優しい娘なのね。お母様の教育がよかったのかしら？」

ブライヒレーダー辺境伯夫人は、フィリーネに隔意を持っていないようだ。
喜んで受け入れるという態度を崩さない。

「（バウマイスター伯爵様、ご心配なのはわかりますが、フィリーネは女の子ですから……）」

そうであった。
彼女の存在は、次のブライヒレーダー辺境伯になるであろう夫人が産んだ長男の地位を侵さない。
ライバルですらなく、むしろ政略結婚に使えるので大切にする価値がある。
何とも現実的な理由ではあるが、逆に信用できてしまうのは皮肉かもしれない。

俺も、貴族の世界にどっぷりと浸かってしまったようだ。

「旦那様をこれ以上待たせると可哀想ですか」

ブライヒレーダー辺境伯は、フィリーネと顔を合わせるのにお預

けを食らっているらしい。
多分、それも罰の一つなのであろうが。
夫人の合図で、室内にブライヒレーダー辺境伯が入ってくる。

「私の娘ぇーーー！」

普段の冷静さはなく、ブライヒレーダー辺境伯は駆け足でフィリーネの元に駆け寄る。
どうやら、よっぽど早く顔を見たかったようだ。

「旦那様、バウマイスター伯爵様が内乱中にも拘らず連れ帰ってきてくれてよかったですね」

「バウマイスター伯爵、本当にありがとう」

ブライヒレーダー辺境伯は、涙を流しながら俺にお礼を言う。
しかしながら、普段からは想像もつかないほど必死に見える。

「フィリーネ、私はあなたの父親です」

「お父様、初めまして。フィリーネと申します」

「素晴らしい挨拶です！」

彼女の挨拶に、ブライヒレーダー辺境伯は勝手に一人で盛り上がっていた。
親バカを誘発したのであろう。

ただ普通に挨拶しただけなのに、俺も子供ができるとこうなるのであろうか？

「フィリーネ、今まで一度も会ってあげられず申し訳ありませんでした。お母さんは……亡くなったのですね……」

「はい。でも、私にはお父様がいますから」

「ええ。安心してください。もう二度とフィリーネに不自由させませんから」

よほど娘が可愛いようだ。

ブライヒレーダー辺境伯がとにかく必死過ぎる。

あまりに必死すぎて、エリーゼですら少し引いているように見えた。

「旦那様、この娘は成人してもお隣のバウマイスター伯爵様のところに嫁ぐのですから」

夫人は安心であると言いたかったみたいだが、なぜかブライヒレーダー辺境伯はこの世の終わりのような表情を浮かべる。

「えっ？」

「『えっ？』と言われましても……」

「フィリーネはまだ十歳なのですから、そんな話はまだいいではないですか」

「まだ十歳って……。うちのジーグルトもその年齢の時には、既に婚約者が決まっていたではないですか」

ジーグルトとは、ブライヒレーダー辺境伯の嫡男である。
まだ十二歳だと聞いているが、ブライヒレーダー辺境伯家ほどの大物貴族の嫡男なら、幼い頃に婚約者が決まっている事も珍しくない。

「ジーグルトは男ではないですか……。フィリーネは娘ですから……」

「一緒ではないですか！　顔を合わせた途端に過剰な庇護欲を出して！　そうなるくらいなら、最初からちゃんと責任を取ってですね！」

「すいません！」

ブライヒレーダー辺境伯の態度に夫人がキレ、あまりに怖かったので俺達は早々に撤退した。
フィリーネも、他の夫人達に連れられて部屋を出ている。
教育上、よくないと思われたのであろう。

「おっかねえなぁ……。大物貴族の夫人ともなると……。俺、戻ったら優しいハルカさんで癒されるんだ……」

ブライヒレーダー辺境伯に怒鳴る夫人を見て、エルは一人現実逃避をしていた。
俺もエリーゼ達で癒されよう。

「イーナさん。ルイーゼさん。ブライヒレーダー辺境伯夫人はあんなに怖い人だったのですか？」

「普段は温和な人だよ」

「あれは、ブライヒレーダー辺境伯様が悪いのよ」

確かに、『自分の夫に隠し子がいて、もう十歳になりました』と聞いて冷静でいられる人は少ないと思う。

「それは言えてますわね」

イーナとルイーゼの意見に、カタリーナは納得する。

「怒ると怖い部分は、エリーゼさんに似ていますか？」

「えっ？　私って、そんなに怖いですか？」

どうなのだろう？

俺は、あまり怒らせた事がないし。

「それよりも、フィリーネの嫁ぎ先がヴェル様に決まってしまった」

「あっ！」

ヴィルマに指摘されて、今思い出した。

夫人の俺の元に嫁がせるという提案を、一切否定しないまま部屋を出てしまったのをだ。

「五年後には、状況が変わっているかもしれないし……」

「ヴェル様、それはほぼない」

「ですよねぇ」

それでも、今は現実逃避する事にする。

貴族である俺には、他にも問題が沢山あったからだ。

今は、親子の感動の再会を助けられた。

それでいいじゃないかと思いながら、屋敷へと戻るのであった。

第百十三話　トンネル騒動。

「アーネスト・ブリッツ、レポートの作成と資料の分析は順調か？」

「バウマイスター伯爵であるかな？　順調であるな」

フィリーネを父親であるブライヒレーダー辺境伯と会わせてから一週間、既に俺達は普段の生活に戻っていた。

魔の森での狩猟と採取と、領内の土木工事を交替で引き受けていたのだ。

俺の基礎工事待ちの場所も多く、おかげでまたローデリヒに扱き使われる日々が続いている。

そんな日々の中で、領主館の一室に軟禁している魔族アーネストの様子を見に行く。

軟禁とはいってもその気になればすぐに逃走可能なわけだが、彼は今の生活環境に満足しているようで、逃げずに自分のやりたい事をやっている。

天才にありがちな、恐ろしくマイペースな性格をしているのであろう。

「バウマイスター伯爵からの情報提供により、発掘地点の特定も順調なのであるな」

アーネストが机の上に広げているバウマイスター伯爵領の地図には、多くの×印が付いていた。

そこが、地下遺跡の位置なのであろう。

「バウマイスター伯爵領内のものは、大半が未発掘であるな。当たり前ではあるが」

もう一枚、他の王国領域と帝国の地図にも大量の×印が付いているが、こちらは発掘済みのものが多い。

未発掘遺跡の大半は魔物の領域内にあり、中には山頂や海底にあるものまであった。

「バウマイスター伯爵領以外の未発掘遺跡の位置は、両国に伝えてあるが構わないな？」

「我が輩をバウマイスター伯爵領に置く条件の一つであるな」

「そういう事だ」

やはり、このアーネスト・ブリッツという魔族は頭がいい。

役立つ情報は持っているが危険物である彼を俺が預かる件に対して、王国と帝国が極秘裏に出した条件について理解しているようだ。

両国の、未発掘遺跡の位置を情報提供する。

そこを両国の中央政府が主導で発掘を行って発掘品を独占できれば、中央政府の力の強化に役に立つというわけだ。

「バウマイスター伯爵領以外の未発掘遺跡に興味はないのか？」

「その気になれば、いつでも調査可能であるな。ニュルンベルク公爵領内の遺跡と傾向が似ているし、バウマイスター伯爵領内の方が別系統の遺跡や出土品が得られて楽しみなのであるな」

アーネストは、発掘品の調査が目的であってあまり発掘品の所有欲を持っていない。
調査と報告書が書ければ満足で、こういう人を学者バカというのかもしれない。

「バウマイスター伯爵領内には変わった遺跡が多いのであるな。例えば、カプチラス山脈を貫く、古代魔法文明時代の土木技術の粋を集めた大縦貫トンネルであるな」

「トンネル？　そんなものがあるのか？」

その前に、カプチラス山脈という山脈名に聞き覚えがない。

「カプチラス山脈は古代魔法文明時代の呼び方であるな。今は、リーグ大山脈であるな。発掘作業第一号は、この大縦貫トンネルであるな」

マイペースな魔族の提案により、最初の発掘作業はリーグ大山脈にあるという縦貫トンネルの発掘に決まるのであった。

「えっ？　うちの領地の近くにそんな物があるのか？」

「らしいですよ」

「らしいってねぇ……」

早速、俺達は耳を隠す変装をしたアーネストを連れて、古代魔法文明時代に掘られたという大縦貫トンネルの発掘に赴く。

場所は、パウル兄さんの領地からそれほど遠くない場所にある山脈の麓であった。

パウル兄さんのバウマイスター準男爵領に顔を出すと、領地の開発は相当に進み、人口も増えているようだ。

出迎えたパウル兄さんの傍には、家臣となった警備隊の元同僚達が一緒にいた。

「そんなトンネルの痕跡があったかな？」

「残念な事にうちの領内ではないからな。そこまで詳しく観察していないので断定できないだろう」

パウル兄さんを守るように、バウマイスター準男爵家の従士長になったオットマーさんと、警護隊長兼剣術指南役のジークハルトさんもいた。

「とはいえ、近くではあります。もしトンネルが使えるものだとすれば、我がバウマイスター準男爵領飛躍のチャンスです」

商家の出であるルーディさんは、執事兼財政なども見ているそうだ。

やはり田舎なので、セバスチャンのように執事服は着ていなかったが。

「チャンス？」

「お館様、もしそのトンネルが使えれば、魔導飛行船よりは少し時間がかかりますが、安い経費で物資と人の移動が可能になります。出口付近にあるうちとしましては……」

「休憩・宿泊施設の運営で利益が出そうだな」

場所が近いので、ドライブインのような施設を運営すれば儲かるかもしれない。

ルーディさんからの提案に、パウル兄さんはかなり期待しているようだ。

「本当に見つかるかとか、見つかっても使用可能なのかという課題もありますけど。あれ？　ゴットハルトさんは？」

「あいつは、今開墾作業の指揮を執っている」

「意外な人選ですね」

前に会った印象では、武芸の方が得意で、口調もぶっきら棒なので領民を指揮するのに向いていないような気がしたからだ。

「あいつ、ああ見えて俺達の中で一番のインテリだからな」

孫でも、子爵家の出なので高度な教育を受けている。

閣達に喋る方ではないが、なぜか領民達は怖がらずに効率よく仕事をこなすらしい。

「意外と人を使うのが上手いんだよな。見た感じだと、ボソっと最低限の指示を出しているだけのように見えるけど」

「あれこれ喋る人よりも、やる事がわかりやすいとか？」

「かもしれないな。ヴェル、そのトンネル発掘の前に父上と母上に会って行け」

「はい」

「あと……。アマーリエ義姉さんとか、カール達も……」

パウル兄さんは、一瞬だけエリーゼ達に視線を送ってからついでのように言う。

まあ、アマーリエ義姉さんに関しては、色々と忙しかったのもあってまだ会いに行っていないのだけど。

「帝国で買ったお土産もありますし」

「内乱に巻き込まれて大変だったのに、すまないな」

その後は、パウル兄さんの案内で前に完成した屋敷へと向かう。

将来の事を考えて、かなり大き目に作ってある屋敷の前庭では、父が甥のカールとオスカーに剣の稽古をつけていた。

一年と少しぶりであったが、子供の成長は早い。

二人の甥達は、前に会った時よりも大分背が伸びていた。

「父上、カール、オスカー」

「ヴェンデリンか、よく来たな」

「ヴェンデリン叔父さん！　帝国でのお話を聞かせてください」

「戦争で大活躍したって本当ですか？　僕もお話を聞きたいです」

二人の甥達にとっては、どう取り繕っても俺は父親の仇でしかない。

それでも、こうして慕われている分、まだ気分が大分楽であった。

アマーリエ義姉さんに感謝しないといけないのであろう。

「カール、オスカー、それは後でな。バウマイスター伯爵殿は忙しいのだから」

父が気を使ってくれたようだ。

貴族は戦争になれば剣を振るって戦わなければいけない。

だが、二人はまだ子供だ。

子供は遠い場所で起こった戦争の話を聞くのが大好きだ。

それをよくないと言う人は日本に多かったが、子供はテレビで戦車や戦闘機が映れば恰好いいと思うし、自衛隊の基地祭は親子連れで賑わっていたりする。

自分が被害を受けていない勝った戦争のお話など、大人でも大好きな人が多いのだから。

あの死体の山を見なければ、大半の人はそんなものだ。

「カールもオスカーもすまないな。帝国のお土産を買ってきたから、お話はまた次にな」

「「ありがとうございます」」

二人にお土産を渡すと、父が彼らを部屋の外に出す。
それとほぼ同時に、ティーセットを持ったアマーリエ義姉さんが入ってくる。

「お久しぶりです、バウマイスター伯爵様」

「お久しぶりです、アマーリエ義姉さん」

白々しい挨拶だが、本当に久しぶりなのも事実だ。
一年ぶりだが、彼女はあまり変わっていないように見える。

「エリーゼ様達も、帝国では大変だったとか？」

アマーリエ義姉さんは、エリーゼの前に茶を出しながらさり気なく声をかけていた。

「大変でしたけど、夫と苦難を共にするのも妻の務めですので」

「旦那様との絆も深まったと思います」

「それはあるかも」

「どこでも、私はヴェル様について行くから問題ない」

「おかげで、こうして戻って来ても仲良く一緒に行動していますわ」

エリーゼの発言を皮切りに、イーナ達もにこやかにアマーリエ義姉さんに返答する。

「仲がよくて、羨ましい限りです」

同じく笑顔で答えるアマーリエ義姉さんに、俺の胃が痛くなってくる。

エリーゼ達からすると、アマーリエ義姉さんはいまだに俺と関係を続ける目障りな女でしかないのだから。

だが、そういう感情をおくびにも出さず、この場合は出した方が負けだと思っているのであろう。

アマーリエ義姉さんの方も上手く受け流していて、本当に女性とは逞しいと思ってしまう。

唯一、俺だけがハラハラしていた。

「あっ、このお茶菓子美味しい」

「発掘の前に、適度な糖分の補給は大切なのであるな」

そんな事情を知っているエルは、巻き込まれたくないので出されたお菓子に夢中である。

これから発掘するトンネルにしか興味がないアーネストも、俺を無視してお茶菓子を食べながらマテ茶を飲んでいた。

「おほんっ！　そういえば、今日は仕事だとか？」

俺とアマーリエ義姉さんをくっつけた共犯である父は、自分も気まずいのであろう、パウル兄さんに視線を送りながら話題を変える。

「昔のトンネルの発掘だってさ」

パウル兄さんは、父達に今日俺達がここに来た最大の理由を説明した。

「大昔のトンネルか。私は素人なのでよくわからないのだが、そんな大昔のトンネルが崩れずに残っているものなのか？」

実は、その疑問は俺も感じていた。

何しろ、約一万年前のトンネルなのだから。

「もし残っていたとしても、いつ崩れるかわからないトンネルなど誰も使わないのでは？」

父の意見に、みんなが納得したような表情を浮かべる。

「どうなんだ？　アーネスト」

「ヴェンデリン、彼は？」

「帝国で知り合った考古学者です。これからバウマイスター伯爵領内での発掘作業を行うので、その責任者です」

「なるほどな。地下遺跡は当たりを引くと金になると聞くからな」

領内にそんな素晴らしいものがあるのであれば、領主はそれを発掘して当たり前。

父はそのように感じたようだ。

アーネストの変装も完璧で、彼を魔族だとは思っていないようだ。

「普通のトンネルでは絶対に崩壊しているのであるが、これから探すトンネルに関しては特別なのであるな」

アーネストは、一枚の古いチラシのような物を俺達に見せる。

「古い紙だな。チラシ？」

「正確には、古代魔法文明時代の政府広報であるな」

一万年以上も昔の紙が残っているというのが凄い。

魔族の国に残っていたのであろうか？

「これによると、『カプチラス山脈を貫き、安価に大量に人と物資を送る事が可能になる、大縦貫トンネル』とあるのである。古代魔法文明時代で一番有名な魔道具のみならず、その他の分野でも高名であるイシュルバーグ伯爵と、古代魔法文明時代の中心国家に劣らない技術力を持つ、現バウマイスター伯爵領に存在したアキツシマ共和国。双方が人と金と技術を用いて掘られたトンネルであるので、一万年くらいでは崩れないのであるな。入り口が埋まっているので、それを探す方が困難であるな」

「イシュルバーグ伯爵って、冒険者デビュー戦で散々な目に遭ったあの地下遺跡の持ち主だよな？」

「ああ」

さすがにエルは覚えていたようだ。

あの地下遺跡は最低でも数千年前の物なのに、その施設は全く劣化していなかった。

使われていた『状態保存』魔法が優れていたからだ。

もしその魔法をトンネルに使っていたとすると、見つけて土砂をどければすぐに使用可能になる可能性もあった。

「当然、情報提供をした我が輩の調査が先であるな」

「それはわかってるさ」

こういう時にも釘を刺すのを忘れないアーネストは、さすがはニュルンベルク公爵と組めるだけはあると思っていいのであろうか？

ただ一つ言えるのは、『いい度胸をしている』であったが。

「一日で見つかるかどうかわからないので、泊めてください」

「それはいいが、そんなに大きなトンネルが一日で見つからないのか？」

「ご尊父、大体の位置は古代魔法文明時代の地図に記載されているのであるが、何しろ一万年も経っているのであるな。地形の変動などで、想定よりも大分ズレた位置にある可能性もあるのであるな」

「面倒なのだな」

父から暫く夜に泊めて貰う許可を得てから、俺達は現場に向けて出発する。

「これがアクセルで、ブレーキ、ギア……。サイドブレーキって何に使うんだ？」

多少距離があるし、まだ『瞬間移動』では行けないので、現地には前に発掘した魔導四輪で行く事にする。

燃料ではなくて魔力で動く車であったが、操作マニュアルを見ながらエルが試し運転をしていた。

この世界では免許もクソもないし、どうせここは誰もいない草原

だ。
いきなり動かして運転を覚えても構わないであろう。
幸いというか、エルは運動神経がいいのですぐに運転が上手くなった。
俺も前世では免許持ちであったし、少し空白期間があってペーパードライバー状態であったが、少し練習したら普通に運転できるようになった。
意外と体が覚えているものだ。
もう少し練習しないと、日本の道路を走れるとは思えないが。
「ボクも覚えたい」
「順番に練習していこう」
「昔の人って、便利な物を作っていたんだね」
便利といえば便利かもしれないが、車の類なので実はちゃんと道を整備していないと案外使い勝手が悪かったりする。
悪路で使用するのが前提だったようで、魔の森の地下で発掘された車両類はジープや大型トラックに似た物が大半だ。
もしそうでなければ、悪路に次ぐ悪路で使えなかったかもしれない。
「ヴェル、便利だけど酔うねぇ……」
アーネストが指定するポイントは大リーグ山脈の麓で、ほぼ手付かずの無人地帯なので魔導四輪を走らせると恐ろしく揺れる。
ルイーゼですら乗り物酔いで気持ち悪そうなので、他の人達は言

うまでもなかった。

「一万年の時の流れは残酷であるな。大陸で一、二を争う発展を遂げていた場所が手付かずの大自然であるな」

アーネストは車酔いとは無縁で、一人レポートの作成に勤しんでいた。

「アーネストさん、よく酔いませんわね……」

一番酷い車酔いに襲われているカタリーナは、全く車酔いしないアーネストに驚いていた。

「子供の頃は乗り物酔いが酷かったのであるな。今は大丈夫なのであるな」

このアーネスト、あまり自分の故郷の話をしないのだが、たまに断片的な情報が手に入る。

魔族の国では、魔導四輪が当たり前のように普及しているようだ。

「他の酔っている人はどうするのですか？」

「酔い止めを飲むのであるな。必要であるかな？」

「先に渡して欲しかったですわ……」

アーネストがみんなに酔い止めを渡し、それを飲むと全員が乗り物酔いから解放された。

もう一台、エルが運転している魔導四輪に乗り込んでいるメンバーにも渡す。

「ヴェンデリンさんは酔っていないようですわね」

「運転しているから？」

前世では、子供の頃は乗り物酔いが酷かった記憶がある。

それなのに、車の運転免許を取って自分で運転すると酔わなくなるから不思議だ。

「到着したのであるな」

予定ポイントには二十分ほどで到着するが、現場はただの山の斜面であった。

木々も大量に生えていて、とてもこの下に古代魔法文明時代のトンネルがあるとは思えない。

一万年も経っているので、完全に山の下に埋まっているのであろう。

「大体この位置というのはわかるのであるが、正確にどこと言われると困るのであるな」

「この辺りを全て掘ってみるしかないのか……」

ある程度位置を特定できるだけ、他の冒険者や考古学者よりもマシである。

そう思いながら作業を開始する。

ただ、無暗に魔法で土砂を吹き飛ばせばいいというわけではない。

まずは、斜面に大量に生えている木々を『ウィンドカッター』で切り倒して魔法の袋に回収していく。

「木材や薪の材料にはなるか……」

続けて、岩や土砂なども削り取って回収していく。

「ヴェンデリンさん、もっと一度に大量に行いませんか？」

「いや、それをすると下のトンネルが傷つくかもしれないし」

大学時代の友人に考古学を専攻していた奴がいたが、発掘で重機を使う時には慎重に行わないと駄目だそうだ。

面倒臭がって一度に大量に掘ると、せっかくの遺構遺跡や出土品が壊れて『貴重な資料が！』という事になりかねない。

まだ木のヘラで慎重に土を剥ぐ作業をしないだけマシかもしれない。

「地味だな」

「エル達は地味じゃなくていいよな」

トンネル探しは、俺、カタリーナ、アーネストが魔法で行い、エル達はたまにこちらにやってくる飛竜とワイバーンの相手をしていた。

リーグ大山脈は準魔物の領域ともいうべき場所で、麓で人間が騒いでいれば餌が来たと思ってやってくる竜もいたからだ。

他の領域に比べると分布に粗があるが、やはりここは領域でもある。

危険な山道や、安全でも運賃が高い魔導飛行船以外の移動方法も

整備しておくべきであろう。

「トンネルが出来て、それをバウマイスター伯爵家が保持すれば儲かるから」

ヴィルマの言うとおりである。

人は、利益がないとなかなか動かない生き物であった。

「そして我が輩は認められ、ますます発掘に集中できるのであるな」

俺は、便利なトンネルとそこから上がる利益のために、アーネストは更なる発掘作業を俺から認めてもらうために、こうして懸命に発掘を行っているのだ。

「あなた、残土も回収ですか？」

「ローデリヒなら、何かしら使い道を見付けるだろう」

前に、埋め立てをしたい場所があると言っていたし。

そこに持って行って埋め立ててしまえば、無駄な土砂も残らない。

下手な場所に積んでおいて、それが雨でぬかるんで土砂崩れにでもなったらたまらない。

「うーーーん、ここも外れであるな」

夕暮れまでにかなりの範囲を掘ってみたが、肝心のトンネルが見つからなかった。

あとは明日にしようと、『瞬間移動』でバウマイスター準男爵領へと飛ぶ。

魔導四輪を使わなかったのは、皆、間違いなく悪路による乗り物

酔いが嫌だからであろう。

一度魔法で来ているので、明日からも一瞬で飛んでこれるから問題ない。

せっかく便利な乗り物なのに、インフラ整備が行われていないために嫌われる事もあるのだと俺は知る。

他の問題としては、盗難対策問題というものもある。

現場に置いておくと、魔法の袋で盗まれるなんて普通にあるのだから。

「なかなか見つからないものなのだな」

「大体の位置の範囲が広いですからね……」

俺達はバウマイスター準男爵領に戻り、父達と共に夕食を取る。

さすがにメニューは大分改善されて、他家と遜色ないメニューになっていた。

俺は、父と今日の発掘作業について話を続ける。

「一万年も経てば、トンネルも埋まって、その上に山や森も出来るというわけか」

「そのくらい埋まっていないと、誰かしら過去の人達が見つけていたでしょうし……」

「見つかって使える事が判明すれば、この領にも客が沢山来るのか。

私が若い頃には想像もつかなかった出来事だ」

想像もつかない。

狭いバウマイスター騎士爵領の維持に、父は窮々としていた。
ただそれで必死だったのだという事であろう。

「今の私は、別の領主として独立したパウルに養われている隠居ジジイに過ぎないからな。手伝いが精々であろう。そういえば、クラウスはどうした？」

「大人しくしていますね……」

反乱を起こした後に臨時で雇用したクラウスであったが、俺達が帝国に行っている間はローデリヒに細々とした仕事を貰って、ただそれをこなす存在であったらしい。
ブロワ家との騒乱で高額の褒美を貰ったので、それで十分というわけだ。

「ローデリヒは多少警戒しているようですけど……」

ローデリヒほどの人物からすると、過去に散々やらかしているクラウスは要警戒人物なのであろう。
細々とした仕事を与えているのも、監視も兼ねてなのだから。

「あまり心配する事はないと思うがな」

「どうしてですか？」

「私とクラウスは反りが合わなかったが、奴の事は最近理解が出来るようになった」

父によると、彼の野望はもう成就しているのだそうだ。

「バウマイスター騎士爵領も含めて、未開地の開発が進んで外部との交流が始まる。これが奴の野望だ。この野望のために、私やクルトなど排除しても構わないと冷徹に考えられるのがクラウスだ」

「もう目的は達成していると？」

「あの男は、その不安定要素であった自分の孫達すら蹴落とした。もっとも、自分の孫達は可愛いのであろう。殺されないように上手く動いたがな」

父の顔に一瞬苦み走ったものが出る。

そこがクラウスの気に入らない部分なのであろう。

自分は息子を失う羽目になったが、クラウスの孫達は半分島流しでも普通に生活は出来ている。

もしかすると、父はクラウスとの能力の差に嫉妬しているのかもしれない。

クラウスは孫達を助けられて、自分は息子を助けられなかったと。

「どちらにせよ、もう終わった事だ。私もクラウスも老いて死んでいく。しかし、トンネルか。地図によるとブライヒレーダー辺境伯領に繋がっている可能性が高いが、上手くこの領の繁栄に役立ってほしいものだ。個人的には、私の小遣いも増えるであろうからな」

そんな話をしながら夕食を終え、俺は屋敷の裏庭で夕涼みをする。

外では、エルがカールとオスカーに剣の稽古をつけていた。

「エル、どうだ？」

俺はエルに、二人の甥達の剣の才能について聞いてみる。

「ヴェルとエーリッヒさんよりも才能はあるな」

「うーーーん。それだと、比較対象が駄目すぎてわからないぞ」

俺の剣の才能については言うまでもない。

そして、そんな俺よりも酷いのがエーリッヒ兄さんなのだから。

「このまま頑張れば、武芸大会で三~四回戦までは行くと思う」

「ならば安心だな。お母さんの血の方が強いのか？」

「それはないでしょう。私の父も若い頃に武芸大会に出て二回戦敗退ですから」

いつの間にか、隣にアマーリエ義姉さんがいた。

本当はもっと話をしたかったのだが、エリーゼ達もいるし人の目もある。

目の前ではエルが甥達に稽古をつけているが、周りには誰もいない。

これで二人きりで話を出来るというわけか。

エリーゼ達は気を使ってくれたのかもしれない。

「お義父様が、時間があれば稽古をつけてくれたのです」

父にも剣の才能はないが、子供に基礎を教えるくらいは問題ないというわけだ。

「文字や計算も、私やお義母様が教えています。お義父様もほとん

ど不自由なく計算なども出来るようになりました」

隠居状態で暇とはいえ、まだ拡張中で忙しいバウマイスター準男爵領の手伝いをしながら孫達に剣と弓の稽古までしている。

見かけ以上に忙しいのに自分も勉強をしているという事は、やはりクルトの件で自分の至らなさのようなものを感じているのかもしれなかった。

「そうですか」

ただ、その推論を口にはしない。

父に対して失礼になるからだ。

「ですが、その時間ももう少しで終わります」

「終わる？」

「はい、カールとオスカーは私の実家に預けられるのです」

カールの成人後に、バウマイスター伯爵領から領地が分与される。

オスカーも新設される騎士爵の従士長となって兄を支える予定で、それまでの期間はアマーリエ義姉さんの実家であるマインバッハ家に預けられる事になったそうだ。

「まだ早くありませんか？」

まだ十歳にもなっていない子供を他家に預けるなんて、俺には早いと感じてしまうのだ。

「あら、ヴェル君はもっと子供の頃から一人で未開地に出かけてい

たじゃない」

「でも、家には戻っていましたよ」

「たまに戻って来なかったわよね？」

「野宿した日もありましたけどね」

ようやくアマーリエ義姉さんの口調が二人きりの時のものに変わった。

エル達が稽古に夢中で、こちらの話を聞いていない事に気がついてくれたようだ。

「少し早いけど、実家の父が絶対だと言うから」

新しい騎士爵領は、アマーリエ義姉さんの実家マインバッハの家名を継ぐ。

同じ騎士爵家でも実質分家のようなものが出来て、その家はバウマイスター伯爵家の縁戚でもある。

彼らからすれば、失敗など万が一にもあってはならないと危機感を抱いているそうだ。

「身内では甘やかすからと……父親の悪行もあるのでしょうけど……」

家臣や領民の過半数は、マインバッハ騎士爵領から出す。

彼らは次男以下なので本来不遇な立場のはずが、降って湧いたチャンスのおかげで新しい居場所を得ようとしている。

「大変だなぁ」

まだ幼いのにと思ってしまうが、これが領主になるという事なのであろう。

子供の頃は父やクルトのやり方に疑問を感じていたが、当事者からすればそれは必死に行ってきた結果なのだと。

「アマーリエ義姉さんはついて行くのですか？」

「いえ。母親の私が一番甘やかす可能性が高いからと……」

「でもなぁ……」

あんまり厳しいのはどうかと思う。

たまに、それで壊れてしまう貴族も存在するからだ。

前に王都で、変な貴族に遭遇したからよくわかる。

「それは父も考慮していて、月に一度くらいなら会いに来ても構わないと。ですが……」

大リーグ山脈の向こうにある、マインバッハ騎士爵領に月に一度行くというのは難しい話だ。

魔導飛行船はバウマイスター騎士爵領の近くから週に一度小型の物がブライヒブルクまで出ているが、そこから更に馬車でマインバッハ騎士爵領までとなると、時間もそうだがお金の問題も出てくる。

いくら多少余裕が出来たとはいえ、子供に会いに行く交通費で年に二十万セント近くもアマーリエ義姉さんが使うのは難しい。

何しろ、今の彼女はパウル兄さんの家に居候をしている状態なのだから。

「父の思惑通りで忸怩たる思いですけど、私はヴェル君に縋るしか……」

つまり、アマーリエ義姉さんがここではなく俺の傍にいるように画策した。

俺ならば、彼女が子供達に会う時に魔法で送り迎えが簡単にできると言って。

アマーリエ義姉さんの父であるマインバッハ卿は、俺と自分の娘との関係に気が付いていて、それを利用しようと考えている。

無理に実家に戻して再嫁先を探すよりも、非公式の立場でも俺の傍に置いていた方が利益になると。

見事なまでの貴族的な思考だが、彼の肩にはマインバッハ騎士爵領の家臣と領民達の存在が重く圧し掛かっている。

娘を利用してでも、家のために、領民達のために動くというわけだ。

「俺の父よりも、貴族らしいか……」

「最近は特に悩んでいて……」

マインバッハ騎士爵領は小さな領地なので、もうあまり開発などが出来ない。

養える人口に限りがあって、余った人は外に出ていかなければならなかった。

「『王都で一旗あげてやる！』とか言って意気込んで出て行きますけど、半分以上は連絡不能になります。スラムででも生活できていればいいのですが……」

もしかすると、死んでいる人が多いかもしれないと。
嫁ぐ前のアマーリエ義姉さんは、何とかできないかと悩む自分の父親を何度か見た事があると話す。

「ですから、絶対に失敗は出来ないと」

カールとオスカーへの更なる教育に、家臣と名主候補、それに生え抜きとなる領民達と早くから接させて、効率よく新領地の運営と開発が行われるようにする。
マインバッハ騎士爵領で余った領民を送り出せる、新マインバッハ騎士爵領の開発失敗などあってはならない。

ついでに言うと、俺の心変りで話がなくなるなどもっとあってはいけないのだと。
そのためには、アマーリエ義姉さんを差し出すくらい平気で出来るのであろう。

「いいですよ。うちに来ても」

「ヴェル君の方が力があるのだから、強引に断ってもいいのよ？」

「それも考えなくもないのですが……」

帝国の内乱では、反乱軍と解放軍に翻弄されながら自分の領地の保持に必死になる貴族を沢山見てきた。
勿論、領地と爵位を失うのが怖いのであろうが、同時に領民達の生活にも責任があるからこそ必死なのだと。

そういうのを見ているので、どうにも断り難い気持ちがあったの

だ。

「どこも大変なのね」

「それが柵（しがらみ）となって、俺に絡みつくわけですよ。それで、どうせなら領主らしく自分の好きに決めようかなと」

「好きに？」

「アマーリエ義姉さんが傍にいた方が俺には都合がいいわけで」

「本当に変わっているわね。こんなオバさんを傍に置くなんて……」

「いいじゃないですか。俺がいいと決めたのだから」

「バウマイスター伯爵様のご命令通りに。でも、大丈夫？」

「ははは、俺はバウマイスター伯爵様ですよ」

などと、アマーリエ義姉さんの前では強気でいたが、それから一時間としない内に割り当てられた宿泊用の室内でエリーゼ達に綺麗な土下座を行っていた。

「という事情でして……」

アマーリエ義姉さんが傍にいると嬉しいと言う個人的な感情を絶対に口にせず、色々と貴族的な事情があって受け入れないと駄目になりました。

可愛い甥達のためでもあるのですよと、懇切丁寧に説明をする。

エリーゼ達は、静かに俺の話を聞いていた。
何も言わないので、俺は少し恐怖を感じている。

「私からは特に反対する理由もありません」

「私も」

「ボクもないかな」

「ヴェル様の好きにすればいい」

「そうですわね。私達が口を挟む理由もありませんし」

「おおっ！」

まさかの一発了承に、俺は喜びの声をあげてしまう。

「今さらという気もありますし」

「そうよね。でも、非公式から私達の目に留まるようになったのはいいわね」

「『バウマイスター伯爵様』が夜中に抜け出して非公式の愛人と逢瀬とか、ローデリヒさんがそろそろ困っていたし」

「警備上の問題もある。ヴェル様に何かあると困る。ここだと周囲が無人に近いから、暗殺者の配置も簡単」

「というわけですので、私達からすれば状況が改善されたと考えます」

「そう言っていただけると……」

結構厳しい指摘であったが、了承はしてくれたのでよしとしよう。

頑張って土下座をした甲斐があったというものである。

「それに、アマーリエさんに関しては『仕方がないかな』と思えますので」

「仕方がない？」

「はい。感情の問題ですけど、これは重要です。何しろ、これから一緒に屋敷で住むのですから」

嫌だと思っている人とは一緒に住めない。

貴族の妻達にはそういう関係の人達も多く、そうなると屋敷の中がギクシャクして雰囲気が悪くなってしまうそうだ。

エリーゼならではの割り切り方かもしれない。

「ヴェルはお義母さんとの関係が希薄な部分があるから、アマーリエさんでそういう部分を解消しているのかなと」

「イーナちゃん、こういうのは『年上属性』って言うんだよ」

色々と俺について解析されてしまっているが、『年上属性』ってルイーゼはどこで覚えたのかと思ってしまう。

「でも、それならテレーゼがそう？」

「ない。今はともかく、帝国にいた頃のテレーゼは駄目」

「鬱陶しい上に、ヴェンデリンさんへの露骨なアプローチでイラッときましたわよね」

ヴィルマとカタリーナによる、過去のテレーゼ評はボロカスであった。

間違いなく、エリーゼ達も同じ思いのはずであったが。

「でも、帝国にいた頃はか。今は？」

「今は大人しい。無毒」

「そういえば、前ほど嫌な感情は覚えませんわね」

今のテレーゼは近所に小さな屋敷を購入して静かに暮らしている。

念のために警備は入れているが、外部からの客もなく、たまに俺がお土産を持って話しに行くくらいであろうか。

「テレーゼさんには立場もあったのでしょうから。アマーリエさんの件は、そこまで事情が複雑でもありませんし」

俺には複雑なような気がするが、エリーゼに言わせるとさほど複雑な事情でもないというわけか。

やはり、貴族の世界とは色々と面倒だ。

「奥向きの事を行うメイド長扱いで構わないと思います。こうやって愛人を囲う貴族も多いですから」

形式上はメイドを束ねる身分にあるが、実は貴族の愛人である、という女性は多い。

連れ子や、もし子供が産まれた場合の身分は当主である貴族の権限なので、あまり他の者は口を出せないそうだ。

「アマーリエさんにはあなたからお話いただくとして、明日からも発掘作業ですので、早く寝ましょうか？」

さすがに今日は例の逢瀬小屋には行かず、明日に備えて早めに寝てしまう事にする。

「今日も張り切って発掘するのであるな！」

翌朝、今日は『瞬間移動』で現地に飛んで発掘を再開する。

相変わらずアーネストは元気はつらつであったが、エルの方は眠そうな目を擦っていた。

「カール達の稽古で疲れたか？」

「違う、俺の同室は誰だか覚えているか？　ヴェル」

「ああ……」

一応監視も兼ねてアーネストであった。

「夜中まで、ずっと何かを調べたり書いたりしていてな。気になって眠れなかった……」

「エルヴィン殿はおかしな事を言うのであるな。今日に備えて、推

定埋没地点の計算をしていただけであるな」

アーネストの手には、それが記載されたこの辺の地図が握られていた。

「では、張り切って発掘の再開であるな」

一人だけ妙にテンションが高いアーネストが、推定した地点を魔法で掘り続ける。

途中、疎らにワイバーンと飛竜も姿を見せるが、それらは全てイーナによる槍の投擲、ヴィルマの狙撃、ルイーゼとエルの攻撃によってただの素材と化していた。

「導師もいればよかったのにね」

「あとは、ブランタークさんか」

「あの二人は、今は忙しいから」

帝国内乱について、あちこちに赴き説明する仕事をしていた。

説明というか、講演のような仕事というのが正しいかもしれない。

俺は在地領主で忙しいからと、そうでない二人が割を食った形だ。

特にブランタークさんは、ブライヒレーダー辺境伯から頼まれてあちこちに出向いている。

ブランタークさんの勇名が上がれば、彼を雇用しているブライヒレーダー辺境伯は安泰というわけだ。

一時はブランタークさんの貴族への就任案も出ていたが、それは彼が断わっている。

『何が悲しくて、伯爵様のような苦労をしないといけないのかね』

現在五十歳を超えている彼が貴族になっても、自分が死ぬまでに領地が安定しない可能性が高い。

子供の代で潰れる可能性もあるので、無理をしないというのが本音であろうか？

「いい加減、飽きましたわね」

風魔法をドリルのような形にして山の斜面を削っていく。

元々考古学者であるアーネストの得意魔法であったが、そんなに難しい魔法でもないので三人で作業をしてひたすら掘っていく。

この手の作業が苦にならないアーネストはともかく、カタリーナは飽きがきたようだ。

「カタリーナ殿、発掘とは地味な作業の連続。しかしながら、何かが出土した時の感動は忘れられないものなのであるな」

「地味な昔の食器とか、錆びた剣とかでもですか？」

「その道具を古代の人がどう使っていたのか？　それを考えるだけでも楽しいのであるな」

「私には合わない趣味ですわね……」

前世で同じ大学に、学芸員の資格を取って夏休みに実習で遺跡の発掘をしている同級生がいた。

彼は好きなので楽しそうであったが、俺も話を聞く限りにおいては楽しそうには感じなかった。

「それは残念なのであるな。おっ！　遂に出たのである！」

削れた部分に、一部分だけトンネルの枠に似た物が出て光っている。

遂に、一万年も埋もれていた巨大トンネルが姿を現したのだ。

「しかし、こんな山の真ん中ではわからないだろう」

「この一万年で、崩れてきた土砂が集まって山となり、そこに木々が生えてしまったようであるな。まさに、自然の脅威！」

『愚公、山を動かす』ではないが、小さいとはいえ一つ山を崩すつもりで作業しないと出て来ないのでは、今まで見つけられなくても当然か。

「入り口前の土砂を、全てどかそう」

「わかりましたわ」

「カタリーナが急にやる気を出したな」

「さすがに、物が出てくれれば中身は気になりますもの」

確かにそれはあるかもしれない。

俺も気合が入り、三人による作業でトンネルを埋めていた土砂と木々などは全て魔法の袋に仕舞われてた。

「デタラメな量が入りますわね……」

帝国の内乱で魔法を多用したせいであろう。

またすぐにわかるほど魔力の量が増えていた。

「魔族でも、なかなかいない魔力の持ち主であるな」

「とはいえ、アーネストには勝てないがな」

「我が輩、魔法の修練はサボっているのであるが、魔族の国では五本の指に入る魔力の持ち主だったのであるな」

「よく国を出られたな」

それだけの魔力の持ち主なら、国が手放さないと思ったからだ。

「だから、密出国なのであるな」

遺跡発掘のために、国も命令すら無視する。

アーネストは、ある意味本物の学者なのであろう。

「早速に入るのであるな」

入口の土砂は、完全に除去された。

あとは入るのみである。

「魔物とかはいないよな？」

「いるわけないのであるな」

エルの心配は、アーネストによって完全に否定される。

念のために全員で警戒しながら内部に入ると、内部は暗くてよく見えない。

すぐに『ライト』の魔法で明かりを確保する。

エルとヴィルマが、念のために予備のランプに火を灯した。

「一万年前にしては綺麗だな」

「だから言ったのであるな。これは、国家の大プロジェクトであったと。見るのであるな」

アーネストがトンネルの壁を触るように言うが、見た目も感触も見覚えがあった。

コンクリート製なのだ。

「昔の漆喰？」

コンクリートと言うと、勘のいいアーネストが何か勘づくかもしれない。

わざと漆喰と言い直す。

「似たようなものであるな。これは、コンクリートというものであるな。更に言うと、これはこういった壊れてほしくない施設などに使う『特殊コンクリート』の一種であるな」

「特殊という事は、コンクリートとやらに何か混ぜているとか？」

「バウマイスター伯爵は優秀な生徒であるな。ああ、貴殿は極限鋼の合成に成功していたのであるな。それと同じであるな」

通常のコンクリートに、極小量のオリハルコンとミスリルの他に、十数種類の希土類を混ぜて作る。

そうする事で、このように一万年経っても壊れないトンネルが完成したのだそうだ。

「もっとも、これの建造にはイシュルバーグ伯爵が関わっているのであるな。彼の『超状態保存』魔法が生きているという理由もあるのであるな。他にも、極限鋼製の鉄筋も入っているはずなのであるな」

なるほど、このトンネルは極限鋼製の鉄筋を入れた特殊コンクリート製なので恐ろしく頑丈であるという事らしい。

「となると、すぐに使えるのかな？」

「大丈夫なはずであるな。出来れば一か月ほど調査したいのであるな」

「それは構わないさ」

いくらすぐに使えるとはいえ、いきなりトンネルをオープンさせるわけにもいかない。

王国への根回しに、トンネルが暗いので明かりの確保、トンネル全ての安全チェック、警備体制と利用者への入領と出領をチェックする部署の立ち上げに人員の確保。

そしてそれは、出口側の貴族にも準備して貰わないと駄目だ。

いきなり『トンネルが開きましたので自由にどうぞ』では、密輸や犯罪者が横行する事になってしまう。

前世で度々批判されていた役人と行政の仕事であったが、かくも多くの手間と時間がかかるものなのである。

「まずは、進めるところまで進むか……」

「しかし広いトンネルだな」

「政府広報には、片側五車線と書かれているのであるな」

『ライト』を地面に照らすと、日本で見慣れた白線が書かれていた。

大型トラックでも余裕で通れる車幅が合計で十車線、他にも故障・事故車両用の避難車線まで確保されている。

「（日本の高速道路みたい……）」

ミズホ人の先祖なので、日本人と考え方が似ているのであろうか？

「ついでに言うと、明かりもあるようなのであるな」

天井には、魔導灯が等間隔に埋め込まれていた。

「多分、奥に魔力を供給する魔晶石があるのであるな」

他にも、空気の入れ替えを行う通気口も一定間隔で設置されていた。

これらを動かす魔晶石が、どこかに設置されているはずだとアーネストは予想する。

「なるほど……」

俺は、すぐに魔導携帯電話を取り出してローデリヒに報告を行う。

「すぐに警備の兵を送ります」
「任せた、その間に出来る限り調査はしておく」
「しておくって、歩くのか？」
「いいや、こういう時こそ魔導四輪だろうに」
二台の魔導四輪に分乗して、トンネルを奥へと進んでいく。
今度は完全に舗装された道路なので、誰も乗り物酔いはしなかった。
「快適だぜぇーーー！」
エルが運転しながら窓から顔を出し、一人はしゃいでいた。
「思ったよりも、操作が簡単だね」
二台目は俺の代わりにルイーゼがハンドルを握り、元々運動神経もいいのですぐに上手に運転できるようになった。
エルの後ろを、同じスピードでついていく。
「あれ？　何かあるな？」
暫くトンネルを進むと、端の避難用の車線に十数台の車やトラックが放置されているのを確認する。
正確には、魔力で動く魔導四輪か。
俺達も降りて様子を探ると、ドアは開けたままで運転席にはキーが刺さったままであった。

「アーネスト、これは？」

「うーーーん」

アーネストは、自分用の魔法の袋を探って数百枚の紙を束ねた資料を取り出す。

素早く捲って読みながら、ある項目を見付けてその説明を始める。

「緊急災害時の避難マニュアルに従ったのであるな」

「緊急避難時の避難マニュアル？」

「地震などの災害の時に魔導四輪で避難をすると、余震でトンネルの壁に激突という可能性もあるのであるな。そこで、自分の魔導四輪を避難用の車線に置き、作業する救援隊などが動かしやすいように鍵は刺したままにする。これが決まりなのだと書かれているのであるな」

「変なルール、高価な魔導四輪が盗まれたらどうするんだろう？」

この時代では、エルの考え方の方が一般的である。

アーネストを除くと、全員が同じ意見のようだ。

「今の魔族の国よりも、古代魔法文明時代はもっと文明が進んでいたのであるな。災害時という緊急事態だからこそ、国民達に節度ある行動を求めて大半がこれに答えられる。実は盗難保険があるので、みんな特に気にしないでお上の命令に従うのであるな」

「保険って何？」

「普段から月に幾らとお金を払っておくと、何かあった時に損害を補填してくれる制度であるな」

「よくわからないや。それって、普通に次の購入資金を貯めておいた方がよくない？」

「月に支払う金額は、微々たるものであるな」

「それだと、車が古くなったら盗まれましたと言って、新品の資金を出させる人がいると思うけど……」

「ないとは言わないのであるが、そこは上手く運営して利益を出す仕組みがあったのであるな」

ルイーゼは、保険制度の仕組みに疑問を抱いたようだ。

確かに、今のこの大陸では保険業運営は難しいかもしれない。

「保険という制度はともかく、何かあったから魔導四輪を避難車線に停めてトンネルの外に退避した。出た後に、何かしらの理由でトンネルが埋まってしまったと？」

「何かしらというか、古代魔法文明を崩壊させた大爆発であろうな」

アーネストは、古代魔法文明の中心国家が行った大規模魔導装置実験の失敗による爆発、中心国家とその首都周辺の消滅、その後の混乱と文明の崩壊などを説明する。

「そんな大爆発があって、よくこのトンネルは無事だったな」

「比較的早期に、両側の入り口が埋まってしまったと想像するので

あるな。元々頑丈に出来ていたし、『超状態保存』の魔法もあったのであるな」

古代魔法文明崩壊時に埋まってしまい、何かの事情があってその復旧が出来なかった。

次第に入り口を埋める土砂の量が増え、段々とトンネルの存在を覚えている人がいなくなり、遂には遺跡となってしまったというわけか。

「魔導四輪も、よく残っていたな」

「『超状態保存』の効果がトンネルの空間にも及んでいたのと、入り口が塞がったのがよかったのであるな」

さすがに一万年も吹きさらしでは、魔導四輪も無事ではなかったであろう。

その前に、盗掘者達によって持ち去られていたであろうが。

避難車線に置かれている魔導四輪はほとんどが普通に動きそうだ。

状態は、当時のままであった。

新品に近い物もあれば、使い古して年季の入ったトラックもある。

「車両の回収は、ローデリヒが派遣した守備隊に任せるとするか。奥に進もう」

と思って自分達の魔導四輪に戻ろうとすると、なぜかエルだけは少し離れた車両のドアを開けて何かを見ていた。

「エル、何を見ているんだ？」

「ヴェル。古代魔法文明時代の書籍って凄いな！」

エルが見ていたのは、カラー印刷された写真週刊誌のようなものであった。

日本でいうと○ライデーや○ォーカスのような雑誌で、歌手や俳優が恋人と夜中に密会していたとか、政治家や貴族の汚職に、あとはお約束の水着とヌードグラビアのページもある。

「素晴らしいな。これを持ち出さないとは勿体ない」

エルは、勿論ヌードグラビアページに夢中であった。

車内に置いてあったが、避難する際に持ち出すまでの価値はないと思われたのであろう。

日本でも、読んですぐに捨てるようなものであったし。

「安物の雑誌であるな。魔族の国もあるのであるな」

アーネストが、熱心にヌードグラビアを見ているエルの後ろから雑誌を確認しながら言う。

「魔族の国にもあるのか」

「ただ、ヌード写真は禁止であるな」

「なぜ？」

「女性団体が五月蝿いのであるな。女性の人権に対する蹂躙であると」

何か、どこかで聞いたような話である。

「有権者の半分は女性なので、政治家もそれなりに配慮する必要があるのであるな。他にも、風俗業の禁止とかも数十年ほど前から始まっているのであるな。一部男性識者からは、これこそが少子化の原因だと言う者もいるのであるが、検証が困難な上に、お上が規制をすると地下でアングラ出版をしたり、違法風俗店の営業を行う者が出るのであるな」

本当に、どこかで聞いたような話である。

「エル、それは持ち帰って家で見ろよ」

「家には持ち帰れないから、ここで見ておく」

今回の発掘に戦力になるはずのハルカが参加していないのは、結婚式に備えて準備をしているからだ。

エルを働かせないわけにいかないので、その手の準備を彼女に一任してしまっていた。

だからこの場にいないのだ。

「そのくらいのもの、持ち帰って普通に見ればいいだろうが」

「いや！　ハルカさんに怒られるから！」

「どれだけ尻に敷かれているんだよ……」

「ヴェル、俺は尻に敷かれてなどいない！」

エロ写真を見ているくらいで嫁に怒られるのだから、そう思われても仕方がないだろう。

何しろ俺などは……ああ、別にエロ写真なんていらないか。

エルに早く魔導四輪を運転するように言い、その場をあとにしようとする。

「エリーゼ達が怖いんだろう？」

「まさか、エルが急に何を言うのかと思えば……」

伯爵にして、五人の妻と一人の愛人を持つこの俺が女性が怖い？

それはない。

エロ写真なんて本当に必要ないと思っているのだから。

「ヴェル、それは本心かな？」

「当たり前じゃないか」

「この雑誌、今週号はコスプレ特集と書いてあるけど……コスプレって言葉の意味は分からないけど、何か楽しそうだな」

「出土品は、領主たる俺に権利があるな。エル、必要ならば俺に借りるんだ」

あくまでも少し興味が湧いたので、念のためにとっておく事にする。

もしかすると、文学的な価値があるかもしれないし。

「了解」

俺は急ぎ週刊誌を魔法の袋に仕舞い、トンネルの奥に向けて出発

する。
勿論、エリーゼ達には内緒である。

「長いね」

魔導四輪のライトのみを頼りに、二台の魔導四輪はトンネルの奥へと向かう。
次第に避難車線のみならず他の車線にも放棄車両があるので、俺は運転しているルイーゼにスピードを落とすように指示した。
時速四十キロ平均で既に半日、約四百八十キロを進んだ事になる。

何という長いトンネルだと思うが、大リーグ山脈は山道を歩けば片道一か月半もかかるのだ。
当然といえば当然か。

「見えたのであるな」

ようやく、『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたドアがトンネルの端に見付かった。

「開けますわよ」

『開錠』魔法でカタリーナが扉を開けると、内部には大きな魔晶石と、いくつかの周辺機器が見付かる。

「故障はないのであるな。魔力を補充すれば、この通りに……」

魔力が空の魔晶石にアーネストが魔力を注ぐと、すぐに赤い輝きを取り戻す。
部屋を出ると、トンネル内の魔導灯と空調装置が復活していた。

「なるほど、これでトンネルが明るくなったな」

さすがに半日走り詰めなので疲れた。

その日はそのまま野営となり、翌朝また魔導四輪を走らせ始める。

目標は、反対側の出口だ。

「運転が簡単、馬ほど難しくない」

魔銃の取り扱いと簡単な整備までこなせるようになったヴィルマからすると、魔導四輪の運転はそれほどの難事でもないようだ。

エルと運転を代わっていたが、上手に動かしている。

「ん？　エンストか？」

「おかしいですわね……」

「ギアをチェンジしたら、もっとゆっくりとクラッチを戻すんだ」

一方、ルイーゼと運転を交替したカタリーナは最初にエンストを頻発させた。

この魔導四輪、オートマ車は存在しないようだ。

俺も前世ではオートマ車ばかり乗っていたので、やはり最初は何回かエンストをしてしまったが。

「こうですか？」

「そうそう。別にエンストしても大した事でもないから焦らないで。ある程度運転すれば、すぐに慣れるし」

「はい」

最初は戸惑っていたようだが、カタリーナもすぐに普通に走らせられるようになっていた。

「でも、本当に長いトンネルね」

カタリーナも運転に慣れたので、今度はイーナに変わった。

彼女はルイーゼと同じく運動神経がいいので、すぐに普通に運転できるようになっている。

「ブライヒレーダー辺境伯領に出るのよね？」

「アーネストが資料を参考に作った地図によるとそうだな」

助手席に座っている俺は、一枚の手書き地図を確認する。

少し西部の小領主連合側寄りではあるが、計算によるとブライヒレーダー辺境伯領内の山麓に出るはずだ。

彼ならば、トンネルの反対側でも諸々の交渉や手続きが面倒でなくていい。

「到着したわよ」

「では、ここで暫く待機だな」

いきなり反対側の土砂をどけてしまうと、色々と面倒な問題が起こるかもしれない。

そこで、ローデリヒが派遣した警備部隊が調査、魔導車両の回収を終えるまではここで待機となる。

あとは、アーネストとカタリーナと共に行う作業もあった。

「念のために安全確認は必要であるな」

というわけで、三人だけで今度はトンネルを戻っていく。

途中、『探知』『感知』『探査』などの魔法をかけて、トンネルに破損部分や内部の罅などがないか確認を始めたのだ。

「さすがはイシュルバーグ伯爵、素晴らしい工事であるな」

アーネストは、独自に音波探知のような魔法を使ってトンネルの状態を探っていた。

この魔法は風系統だそうだ。

彼は人の精神を操る闇魔法以外では、風系統が得意らしい。

何でも、遺跡発掘に一番使える魔法なのだそうだ。

「土と水も一部使える魔法があるのであるな。火は我が輩には役に立たないのである。野営した時に火付けをするくらいであるな」

魔族の特性魔法である闇以外は、遺跡発掘に必要な魔法しか覚えない。

ある意味、清々しいまでの考え方だ。

「お館様！」

チェックをしながらほぼ真ん中まで戻ると、そこには数百名の警備兵を連れたトーマスとニコラウスが姿を見せる。

「なるほど、これは凄い古代の遺跡ですね」

トーマスが守備隊長で、ニコラウスが副隊長扱いのようだ。
兵士達を動かして、早速車両の回収作業を行っていた。

「また人員が増えたのか？」

「はい。バウマイスター伯爵領は急速に発展していますからね」

常に家臣の新規雇用が行われ、彼らは人格と能力に沿って役割を与えられていく。
特に守る場所が多いので、警備隊や諸侯軍の編成は急務であった。

「今や、私達でも古参扱いですからね」

「既に後輩の方が圧倒的に多いですから」

「うちは、一番古参のローデリヒでも五年以下だからな」

トーマス達は、勤続期間でいえばトリスタン達とそう違いはないのだから。

「それにしても、これだけのトンネルですか。守備が大変そうだなぁ」

「まだ出口側の土砂排除を行っていないし、それをしたらしたでトンネル所有の割合とか、警備・管理責任分担とかあるけど、今は出来る限りの事してくれ」

「ああ、所有の分担があるのですよね。ですが、ブライヒレーダー辺境伯様なら交渉が楽な方では？」

トンネルは、リーグ大山脈を貫いている。
では、その大リーグ山脈の所有者はというと、これは一応決まっていた。
山頂より未開地側がバウマイスター伯爵領で、あとはブライヒレーダー辺境伯領や、小領主連合の誰かの領地だったりする。
ただ、リーグ大山脈自体が登頂困難な山道であり、加えて飛竜とワイバーンの住処となっていて、他にも凶暴な野生動物も多い。
実効支配しているのかと言われれば、答えはノーであった。
「ブライヒレーダー辺境伯様と半分ずつですか？」
「俺達が発見者だ。最低でも、動力室部分まではいただく」
トンネル内にある魔導灯と空調のエネルギー源となっている魔晶石が置かれた部屋、ここは重要なので絶対に所有権を取らなければならない。
「ならば、急ぎ実効支配してしまいましょう」
ブロワ家との紛争を経験したせいか、トーマスはえらく理解が早かった。
避難車線に止まった車両の回収とトンネルのチェックを手伝いつつ、警備兵達を配置してトンネルを実効支配していく。
同時に、警備兵達に魔導四輪の訓練を行っていた。
「これをある程度配備してほしいですね」

「それは確実に行う」

トンネルが長過ぎるので、車両ででも移動しないと緊急の事態に対応できないのだ。

まさか、馬で道路を走るわけにもいかない。

「いよいよ、出口側を掘削するか」

トーマス達が来てから三日後、トンネルは全て安全だと判断された。

入り口と各所に警備兵が配置され、彼らは運転を覚えた魔導四輪で定期巡回を行う。

魔晶石が置かれた動力室にも警備の手が入り、俺達はいよいよ出口側の土砂の掘削を始めた。

「掘っても、掘っても土砂が流れ込んでくるな……」

一万年で、出口側も土砂が大量に降り積もって山になっているのかもしれない。

大量に出る土砂を魔法の袋に入れ、溜まると入り口分も含めてローデリヒに渡しに行く。

「土砂は埋め立てに使いましょう」

やはりローデリヒは、埋め立て工事の計画も進めていた。

現場まで『瞬間移動』で飛んでから土砂を流し込み、木々は木材として商人が買っていく。

膨大な建築需要のせいで木材はいくらあっても足りない状態であり、喜んで購入してくれた。

「我々が生き埋めにならないように注意しつつ、掘り続けるしかない」

出口側の土砂を取ると、また土砂が落ちてきて元の状態に戻ってしまう。

これを暫く繰り返していたが、ようやく出口から日の光が見え始めていた。

「光だ！」

トンネルが開通し、全員が漏れる光に感動する。

「道を確保するんだ」

更に大量の土砂を避けると、やはり出口側も溜まった土砂が山になっていたようだ。

それらを全てどかすと、ようやくトンネルは再開通した。

「開通したけど……」

「のどかだねぇ……」

一番乗り狙いでトンネルを出たルイーゼは、目の前に広がる光景に驚きを隠せない。

山奥の田舎の農村地帯で、数名の農夫が畑を耕していたからだ。

「あんれまぁ、遂に山が消えて洞窟があるだ」

「お館様にお知らせしねぇと」

「あの人達は、地底人だべか？」

彼らは突然開通したトンネルに驚き、一人の農夫が領主を呼びに猛スピードで走っていく。

「あれ？　ここはブライヒレーダー辺境伯領じゃないのかな？」

「お館様、代官地なのでは？」

俺とトーマス達は、出口側の田舎ぶりに驚きを隠せない。

何となく嫌な予感がしてくるが、予想どおりにまた貴族の厄介ごとに巻き込まれて行く事になる。

第百十四話　そうすんなりと開通のわけがない。

「突然山がなくなって洞窟が出来たと、領民達が駈け込んできたので驚きました」

大リーグ山脈を貫く縦貫トンネルの出口の土砂を回収して外に出たところ、予想に反してそこはブライヒレーダー辺境伯領ではなかった。

農夫達が畑を耕す牧歌的な光景が広がっていて、俺達の登場に驚いた農民の一人が領主を呼びにいく。

姿を見せた領主は、四十歳くらいであろう。

辛うじて貴族とわかる服装で、もしかするとうちの実家よりも貧しいのかもしれない。

しかし、驚きだ。

昔のバウマイスター騎士爵領よりも、貧しそうに見える貴族領があるなんて。

彼の両脇には、二十歳ほどに見える人の好さそうな青年、多分後継ぎ息子であろう。

父親と同じような恰好をしている。

あとは、知らせに行った農夫と、七十歳ほどに見える老人。

老人の方は、執事か家臣だと思われる。

なぜわかるのかというと、俺の実家と同じような感じだからだ。

「すいません。実は……」

俺が事情を説明すると、彼らはとても驚いていた。

「まさか、そんなトンネルが存在するなんて」

「知己の考古学者の成果ですね」

「なるほど」

中年領主は、アーネストを見て感心したような表情を浮かべる。
隣の後継ぎ息子と執事も同じであった。

「それで、出口がうちの領地に繋がっていたと？」

「はい、それでここってどこですか？」

「そういうお話は、屋敷でいたしましょうか。粗茶ですが、お出ししますので」

俺達はトーマス達にトンネル入り口の警備を任せ、遠慮なくこの中年領主の申し入れを受ける事にする。

彼の案内で畑を抜け、斜面にある畑を降り、また畑を抜け……。
ほぼ畑ばかりなのであとは省略するが、次第に民家が見えてくる。

「（前のバウマイスター騎士爵邸よりもボロいな）」

「（しっ！）」

俺は、失礼な事を呟いたエルの口を塞ぐ。

エルの言うとおりではあるのだが、もし聞かれでもしたら大問題になるからだ。

「我がオイレンベルク領は、このようにのどかな農村でして……」

屋敷へと向かう道すがら、お互いに挨拶をする。

この中年貴族はジギ・フランク・フォン・オイレンベルクといい、人口三百名ほどの農村地帯を治める騎士であった。

若者はやはり後継ぎで、ファイト・フランク・フォン・オイレンベルクだと自己紹介する。

老人は、執事のゲオルクと名乗っていた。

みんな農夫にしか見えないけど……。

「俺は、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスター伯爵です」

今度はこちらが自己紹介をすると、なぜか突然三人はその場で土下座を始めてしまう。

突然の事に、俺ばかりかエリーゼまでもが驚きを隠せない。

「あの……オイレンベルク卿、俺達は同じ王国貴族ですから」

俺は、彼らを立ち上がらせる。

いくらオイレンベルク領が零細でも、王国から領地と爵位を下賜された貴族なのだ。

同じ貴族である俺に土下座はいけない。

「ど田舎にあるオイレンベルク領にはなかなか世間の情報も入ってきませんが、私達でもバウマイスター伯爵様の事は存じております。このような辺鄙な領地によくぞ……」

「あのですね……」

同じ貴族のはずなのに、オイレンベルク卿は恐ろしく腰が低くて卑屈であった。

息子と執事も同じで、あまりに卑屈過ぎて逆にこちらの居心地が悪くなる。

「大英雄たるバウマイスター伯爵様がいらしてくれたのに、大したおもてなしも出来ませんが……」

「……」

オイレンベルク騎士爵領の屋敷は、バウマイスター騎士爵領よりも小さくボロかった。

世の中、下には下がいると失礼な事を考えてしまう。

「このようなボロ屋で申し訳ありません」

「あはは……」

もう何を言っても、この人は卑屈なままだ。

俺達は諦めて、屋敷というか大きな農家にしか見えない家に入る。

内部も、昔のバウマイスター騎士爵邸といい勝負だ。

ヘルマン兄さんが継いでからは、ある程度直してマシにしたから差は広がっているか。

居間に通されて席に座ると、オイレンベルク卿と同年齢くらいの中年女性がお茶を出してくれる。

「家内のローゼです」

「我が家にはメイドがいませんので、私が……」

バウマイスター騎士爵領にも、どちらかというと『冥途』に近いがメイドくらいはいたのに。

オイレンベルク領には存在せず、領主夫人が自らお茶を淹れてくれた。

エリーゼもお茶を淹れたり料理はするが、それは内向きや戦場での話だ。

今は来客があれば、屋敷のメイドが客にお茶を淹れる。

「喉が渇いていたから美味しいや」

ルイーゼがお茶のお替りを頼んだ。

昔のバウマイスター騎士爵領とは違って、白湯に近いマテ茶で誤魔化すような事はしないようだ。

ちゃんと客をもてなす分、昔の実家よりも誠実で善良である。

「お茶受けは、『マロイモ』を蒸かしたものかしら？」

俺は見た事はないが、イーナはこの野菜の正体を知っているようだ。

見た目はサツマイモとジャガイモの相の子のように見える。

皮の色は鮮やかな黄色で、サツマイモのように蒸してあった。

貴族に出すお茶受けとしてはどうかと思うが、食べてみると甘くて美味しい。

この芋の存在を知らなくて、今まで損をしていた気分だ。

「この芋、美味しいな」

「奥方殿、お替りが欲しいのであるな」

女性陣のみならず、エルとアーネストにも好評であった。

というか、この状況で平然とお替りを要求できるアーネストが少し羨ましい。

まあ、お替りがくれば俺も食べるけど。

「エリーゼは、この芋を知っている？」

「イーナさんが言う、マロイモというお芋の名前は聞いた事があるのですが、現物は見た事がありません」

「エリーゼでも現物を見た事がないのか」

「だって、ブライヒレーダー辺境伯領内でもたまにしか出回らない芋だもの」

所謂、『地方野菜』という扱いなのかもしれない。

生産量が少ないので、なかなか世間に出回らないのだと思う。

「あれ？　という事は、ここはブライヒレーダー辺境伯領に近い？」

「近いと言いましょうか、ここはブライヒレーダー辺境伯領に囲まれた少領なのです」

ようやく卑屈度が低くなったオイレンベルク卿が、一枚の地図をテーブルに広げる。

「王国南部領域は、大リーグ山脈より南がバウマイスター伯爵領、北西部がブライヒレーダー辺境伯領で、北東部が少領主連合と比較的単純な配置になっています」

「そうですね」

俺も、持参した地図で確認をする。

「地図によっては記載されているのですが、ブライヒレーダー辺境伯領と地図で書かれている部分にも、いくつかの小さな貴族領があるのです」

全て、規模はオイレンベルク領と大差ないそうだ。

そんな騎士爵領がいくつか存在しているが、知名度に関してはお察しであった。

「人口二百人から五百人くらいですね。本当にささやかな騎士爵領ばかりです。位置はここですね」

オイレンベルク領の位置は、アーネストが予想したトンネル出口地点と大差なかった。

唯一違ったのは、ここがブライヒレーダー辺境伯領ではなくてオイレンベルク騎士爵領であるという事か。

「そうだったのか。なら話は早い」

「話が早いですか？」

「ええ。大リーグ山脈を貫くトンネルが発見されたので、これを稼

働させたいのです。こちら側の入り口が領内にあるオイレンベルク卿にも協力していただきたく」

「えっ？　私がですか？」

「いやだって、入り口はオイレンベルク領内にありますし」

加えて、トンネルの半分ほどの権利はオイレンベルク卿にある。なぜなら、トンネルの上にある大リーグ山脈部分も、書類上ではオイレンベルク卿にあったからだ。

「というわけで、オイレンベルク卿にも警備兵を配置していただきたいのです。代わりに、通行料を取れるから大儲けですよ」

魔導飛行船による便は増えていたが、新たに発掘されないと増えないし、運賃が高いという欠点もある。

トンネルを通ると時間はかかるが、昔のように山道を進むよりも遥かに時間を短縮可能であった。

小規模の商人なども参入しやすく、バウマイスター伯爵領に大きな利益をもたらすであろう。

「勿論オイレンベルク領もですよ。よかったですね」

ブライヒレーダー辺境伯領ではなかったのは、ブライヒレーダー辺境伯にとっては不幸かもしれないが、俺からすれば誰でも反対側の入り口を管理してくれればいいのだから。

「私が管理するのですか？」

「ええ、何か不都合でも？」

「無理です！　私には無理です！」

「私もです！」

オイレンベルク卿のみならず跡取り息子にも必死に否定され、俺達は困惑の表情を浮かべるのであった。

「「ブライヒレーダー辺境伯様！　ははっーーーー」」

「あの……、私達は同じ王国貴族で……」

トンネルの警備と管理をオイレンベルク卿に拒否されてしまって困惑した俺は、急ぎ『瞬間移動』でブライヒレーダー辺境伯とブランタークさんを連れて戻った。

そして、ブライヒレーダー辺境伯を見たオイレンベルク親子は再び土下座を始め、それをブライヒレーダー辺境伯が窘めるというどこかで見た光景が展開される。

「あなた方親子はなぜこうも卑屈なのです？　私達は同じ貴族なのですから……」

勿論建前ではあったが、いつもこれではブライヒレーダー辺境伯も困ってしまうであろう。

他の貴族に知られて、ブライヒレーダー辺境伯への攻撃材料にも

されかねないのだから。

「それにしても……」

ようやくオイレンベルク親子は落ち着いていたが、ブライヒレーダー辺境伯はドンヨリとした表情を浮かべて肩を落としていた。

なぜなら、運命の気まぐれにより大縦貫トンネルの位置が自分の領地ではなかったからだ。

「伯爵様、事前に確認しておけよ」

「ですがこの地図、王国政府が出した正式版ですよ。第一、確認してあったとしても問題は避けられなかったのでは？」

「事前にわかっていれば、先に手が打てたじゃないか」

「それはそうですけど、地図に書いてませんでしたし。この地図ではブライヒレーダー辺境伯領なんです」

地図は軍事情報なので、その作成には軍が関わっている。

各貴族家はなかなか領地の情報を出したがらないが、王国軍は密かに人を出して詳細な地図を作製していた。

はずなのに、なぜかその地図にはオイレンベルク領以下いくつかの小領主領の記載がされていないのだ。

「しかもこの地図、最近出た今年度版ですよ」

「本当ですね。去年までは普通に記載されていたのに、なぜ急に消されたのでしょうか？　全く！　手抜きも甚だしい！」

他の地図だと省略されているケースが多いそうだが、王国政府が出している正式版で記載されていないのはまずいはず。
怒ったブライヒレーダー辺境伯は魔導携帯電話を取り出すと、ある人物の元に電話をかける。

「通信用の魔道具！」

「父上、うちでは、とても買える物ではありません。さすがは、ブライヒレーダー辺境伯様」

「お館様、私は初めて現物を目にしました」

「私も、子供の頃に出先の町で一度目にしただけだ」

「父上、大貴族様は凄いのですね」

貴族なのに小市民的な親子は、執事と共にブライヒレーダー辺境伯の魔導携帯通信機を羨ましそうに見ていた。

「……何か調子が狂いますね……。エドガー軍務卿ですか？」

ブライヒレーダー辺境伯の通話先は、地図作製の最高責任者であるエドガー軍務卿であった。
地図は軍事情報でもあるので、その管轄は軍に存在しているというわけだ。

「今年度の王国地図なんですけど……」

『何だとぉーーー！』

ブライヒレーダー辺境伯が事情を話すと、こちらにも聞こえる怒鳴り声が響いてくる。
当然声の主はエドガー軍務卿で、自分も与り知らぬ事であったようだ。

『バウマイスター伯爵はいるか！』

「はい、傍に」

『迎えに来い！』

というわけで、俺は王城へと『瞬間移動』で飛び、その足でエドガー軍務卿を連れてくる。
同行者に、小動物のように震える一人の法衣貴族を連れて……。
俺は見ていた。
エドガー軍務卿が、王国国土院という役所に怒鳴り込むのを。
そして、地図作製担当の責任者である法衣貴族の首根っこを掴んだのもだ。
あの光景は、導師の戦闘シーンに匹敵する恐ろしさがあった。

「マイザー子爵！　どういう事か説明して貰おうか！」

俺とエドガー軍務卿によってブライヒレーダー辺境伯の元に連れて来られたマイザー子爵という初老の貴族は、オイレンベルク邸の床で土下座をする羽目になっていた。

なぜかその隣で、オイレンベルク親子と執事も土下座をしていたが……。

「なあ、バウマイスター伯爵。あの三人は何か悪い事でもしたのか

？」

「ええとですね……」

「お義父さん、あの三人は雲の上の存在だと思っていた閣僚級の大貴族を見て緊張しているだけ」

俺の代わりに、エドガー軍務卿の義娘であるヴィルマが事情を説明してくれた。

「そうなのか。でも、同じ王国貴族だからそういうのは困るよな……」

オイレンベルク親子のあまりの卑屈さに、エドガー軍務卿の怒りのテンションも下がってしまったようだ。

「まあ、それであなたの責任が減るわけでもないんですけどね。マイザー子爵」

エドガー軍務卿の怒りが消えて安堵の溜息をつくマイザー子爵に、すかさずブライヒレーダー辺境伯が釘を刺した。

「はい……それは理解しております……」

「ならいいですけど」

マイザー子爵が地図の作成で手抜きをしてしまい、そのせいで俺達はトンネルの出口がブライヒレーダー辺境伯領だと思ってそのまま繋げてしまった。

罪状になるのかもわからない案件ではあったが、そのせいで事態

が混乱しているのも事実だ。

何しろ、人口三百人の貴族領に大トンネルの管理など荷が重いのだから。

「先に聞いておくか。なぜこういう事になったのだ？」

先ほどまでの大激怒はなかったが、マイザー子爵を追及するエドガー軍務卿の目には殺意が籠っていた。

怯えたマイザー子爵は、特に抵抗もしないで事情を説明し始める。

「経費削減のために、地図を作製する工房の変更を……」

地図は本と違って印刷が難しいし、毎年細かな地形の変化、貴族領の増減、その領地を統治する貴族家の変更、未到達であった土地への測量成功などで細かく変化する。

作るのに大変な手間と経費がかかるので、マイザー子爵はどうにか経費だけは減らせないかと努力したらしい。

「経費の削減を決めるのは、その職責を持つマイザー子爵の管轄だがよ。手抜きは困るじゃないか」

「ですが……。本当に細かいミスでして……」

確かに、本来ならば気にもされないミスだ。

何しろ、エドガー軍務卿とブライヒレーダー辺境伯ですら指摘されるまで気がついていなかったのだから。

王国政府が人間の集合体である以上、このくらいのミスは探せばいくらでも見つかるはずだ。

「だがな、マイザー子爵は間が悪かったな」

「そんなぁ……」

そう、マイザー子爵は間が悪かった。

普通は、この程度のミスで処分などされない。

気がつかれるかも怪しいどころだ。

ブライヒレーダー辺境伯領内に囲まれてるいくつかの小領地など、知らなくて困る人などほとんどいないのだから。

「マイザー子爵のせいで、トンネルの開通は遅れる事が必至だ。これは当然陛下の耳に入るな」

「陛下のお耳に？」

「当然だろう。南部バウマイスター伯爵領の開発は陛下の肝煎りなんだぞ。それを促進可能なトンネルが完璧な状態で残っていたのに、こんな理由で開通が遅れる。誤魔化せると思うか？」

「いえ……思いません……」

「チェックが足りなかった俺の責任もあるから、公式には罰しないがな」

「私もちゃんとチェックしていなかった責任がありますしね」

というわけで、憐れなマイザー子爵は今の役職と当主の座を退く事となった。

公式な理由は、大病による療養目的という事にして。

こうやって、一般庶民が誰も知らないところで貴族が責任を取らされたりするのだと、俺は自分も気をつけようと思いながら見ていた。

「それで、どうするよ？」

「私達だけでは決められませんよ」

「そうだな。バウマイスター伯爵、また頼むぞ」

「はい」

俺は燃え尽きているマイザー子爵とエドガー軍務卿を連れて、また王都へと『瞬間移動』で飛ぶ。

そしてその足で、エドガー軍務卿が指名する人達を拾ってオイレンベルク邸に戻った。

「大リーグ山脈を貫く大規模トンネルか。いい物を見つけたな。バウマイスター伯爵」

「エリーゼも婿殿も、元気そうで何よりだ」

「バウマイスター伯爵、あとでトンネルを見学させてくれ」

「イシュルバーグ伯爵の作品か。参考になりそうだな」

ルックナー財務卿、ホーエンハイム枢機卿、レーリヒ商務卿、魔導ギルドの研究部長ベッケンバウアーさんなど、トンネルに関係があったり興味がある偉い人達が連れてオイレンベルク邸の居間に戻

る。

「エルも元気そうでよかった。あとで、内乱時の話を聞かせてくれ」

「ワーレン師匠（せんせい）？　という事は……」

連れて来た人の中には、ワーレンさんもいた。

彼は近衛騎士団の中隊長なので、ここに呼ぶほどの重要人物ではない。

だが、急遽ここに顔を出す事になった方の護衛としては必須であった。

姿を見せたワーレンさんは、弟子であるエルに声をかける。

彼は快楽殺人者というわけではないが、やはり実戦を経験して功績を挙げた弟子が羨ましかったようだ。

あとで話を聞かせて欲しいと頼んでいた。

「複雑な話になると聞いたら、陛下が自分も出た方が話が早いと」

「これも、手間を減らすためのコツよ。王というのは忙しいものでな。ワーレンも連れてきたし、ここには帝国内乱を勝利に導いた精鋭が多い。余の安全は確実であろうな」

「陛下もですか……」

さすがに、ブライヒレーダー辺境伯も陛下自らの出座には驚きを隠せないようだ。

「こういう話は早い方がいいからの」

「ありがたくはあります」

ブライヒレーダー辺境伯くらいの大物貴族ともなれば、陛下との会話にも慣れている。

ところが、この他にも閣僚級の大物貴族や中央で権威のあるギルドの大物幹部に教会の枢機卿と、えらい人ばかりが続々と自分の家に現れて精神状態が限界に達している人がいた。

「あなた、オイレンベルク卿が……」

「ヴェル、さっきから土下座をして動かないわよ」

エリーゼとイーナに指摘されたので視線を向けると、そこには土下座をしたまま微動だにしないオイレンベルク親子と執事の姿があった。

「可哀想に……今日一日で偉い人達ばかり姿を見せたから……」

「今まで、こんな事はなかったのだと思う」

ルイーゼとヴィルマは、いまだに土下座したまま微動だにしないオイレンベルク親子に同情の視線を向けていた。

「ところで、バウマイスター伯爵よ」

「はい」

「この者達は、なぜこんなに卑屈なのだ？」

「ええと……」

「領地の場所が場所なので、襲爵の儀以外で陛下にお会い出来るなど考慮の外だったのでは？」

俺の代わりに、カタリーナが事情を説明する。

「なるほどの……オイレンベルク卿とその息子よ、もう頭を上げて普通にするがいいぞ」

「すいません！　こんな場所に領地を持っていてすいません！」

「跡継ぎですいません！」

オイレンベルク親子は、なぜか陛下に必死に謝っていた。
陛下もわけがわからず困惑気味だ。

「駄目だこりゃ……」

この人達に、トンネルの警備と管理など不可能だ。
俺は、この案件の収拾には意外と時間がかかりそうだと覚悟を決めるのであった。

「マロイモというのか、これはいいお茶受けだの」

「陛下にお出しするような品ではないのではと、恐縮する次第でして……」

「物に身分などない。美味しければ、それを出された方も嬉しいのでな」

「我が領の特選品ですから」

「なるほどの。蒸かしただけでこの上品な甘さ。下手なお菓子などよりも、余はこちらの方が好みであるな」

関係者が集まったので、話を続ける事にする。

オイレンベルク邸の居間を会議室として、その壁際にはワーレンさん、エル、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、ブランタークさん、カタリーナが配置され、もしここに暗殺者が襲撃しても一瞬であの世に送られるはずだ。

エリーゼは、オイレンベルク卿の奥さんと共にお茶やお茶請けである蒸かしマロイモの給仕を行っていた。

大物貴族ばかり見て卑屈になっているオイレンベルク親子に比べると、奥さんの方は愛想よく陛下と接している。

いざとなると、女性の方が度胸があるのはどの世界でも同じだ。

「しかし、あまり市場では見ないの」

「イーナは知っていたよな？」

「ええ。滅多に市場には出ないけど、一回だけ見て名前だけは聞いていたの」

作られている場所が少なく、この辺ではオイレンベルク領だけなのでたまにブライヒブルクの市場に並ぶだけなのだそうだ。

王都周辺だと、更に市場に出る頻度が下がるそうだ。

「美味しいのにね」

「少し栽培条件が特殊らしいわよ。ですよね？　オイレンベルク卿」

「はい。斜面の畑で、夜と朝に気温が下がる土地でないと栽培できないのです。他にも、土質や栽培方法などを間違えると甘くなりません」

オイレンベルク領は、大リーグ山脈に接している。

その斜面に作った畑で栽培しているのだが、本来の山の斜面だと飛竜やワイバーンが飛来して農作業にならない。

ところが、オイレンベルク領にある斜面は古代魔法文明崩壊以後に出来た山の斜面なので飛竜とワイバーンが飛来しない。

だから栽培可能なのだと、オイレンベルク卿は説明した。

ようやく少し慣れて、イーナが相手ならそこまで卑屈にならなくなったようだ。

「地方限定か。貴重な品なのだな。確かに上品な甘さが美味しい」

ルックナー財務卿達も、マロイモの美味しさを気に入ったようだ。

「さて、話をトンネルの話に戻すが、ブライヒレーダー辺境伯、この問題の本質は何なのだ？」

「簡単に言いますと、トンネルのもう一つの入り口がうちなら、ここまで採めませんでした」

「すいません！」

「だからですね。別にオイレンベルク卿の責任ではなくてですね……」

オイレンベルク卿からすれば、みんな偉い人なので経験の無さもあって卑屈になってしまうのだが、ブライヒレーダー辺境伯達からするとそこまで卑屈にされると逆に困ってしまう。

同じ王国貴族なのだから当然だ。

外に漏れると、自分達が傲慢だと世間で噂されて困ってしまうのだし。

「トンネルは巨大な物らしいの」

「はい」

片側が五車線ずつあり、故障車両専用の避難車線まで付いている。

照明や空調設備まで揃っていて、それらを動かす動力室には巨大な魔晶石まで設置されている。

道路やトンネルの壁面には当時最新の素材と工法が使われ、ちゃんとメンテナンスをすれば数千年は使えるはずであった。

「魔導飛行船による輸送にも限界があるからの」

「道路の整備が必要ですが、陸路でも輸送網があった方がいいですな。もし戦時になれば、魔導飛行船は空軍に徴発されてしまいますし」

帝国内乱では、例の装置のせいで魔導飛行船の空軍による徴発案は流れた。

だが、これから先も徴発されないという保証もない。

もしそうなると、バウマイスター伯爵領への輸送が滞るので、陸路があれば安心だとエドガー軍務卿が説明をする。

「多少時間はかかりますが、山道を歩いて輸送するよりも時間も輸送量も圧倒的に上です。魔導飛行船よりもコストが低いのもいい」

ルックナー財務卿も、トンネルの早期開通を主張する。

「魔導ギルドとしましては、調査は開通してからでも出来ますからな。王国経済のために、一日でも早く開通させるべきでは？」

ベッケンバウアーさんもというか、この件で反対の人間などいないはずだ。

「開通にあたり、問題はいくつか。まずは、物が物なので警備は必須です」

入口を破壊して塞ぐなど、テロ行為が行われる危険性がある。

いくら講和を結んで停戦中でも、帝国は仮想敵国なのだから。

他にも、バウマイスター伯爵家に敵対する貴族の妨害行動がないとは絶対に言えなかった。

「おかしな犯罪者や流民が、無秩序に出入りしても困るな」

「というわけで、双方が一定数の警備兵を雇って常に警備する必要があります。定期的な点検と補修も必要ですね」

「金の問題……。いや、それは通行料で補える。逆に大きな利益が出るな」

ルックナー財務卿は、一番の問題が金の問題ではない事を理解する。

「上り線と下り線の通行料が違うと混乱しますから、それはバウマイスター伯爵と協議して決めればいいのです。片道百セントくらいで十分でしょう」

「そうだな。そのくらいの通行料なら、多くの利用者を望める。新規に商売に参入する者も多いか」

高額な魔導飛行船の運賃や、険しい山道に躊躇していた者達が参加して商売の幅と量が増える。

それは、王国全体に利益をもたらすはずだ。

「そこで問題となるのは、オイレンベルク領が小さな領地だという事です」

「すいません！　小さな領地ですいません！」

またも、オイレンベルク卿がペコペコと謝っている。

注意しても治りそうもないので、みんな無視するようになっていた。

「人口三百人の領地で、トンネルの警備と管理をして、通行料を取るのか……」

事実上不可能と言ってもいい。

新規に人を雇えばいいと言う人もいると思うが、そんな急に何百人も人を雇って彼らを上手く動かすなど不可能に近いであろう。

何しろ、オイレンベルク卿は……。
領民達と一緒に畑を耕しながらささやかに仲良く暮らしてきた、およそ世間の貴族像とは程遠い貴族なのだから。

可愛そうに、彼は自分の身の丈に合わない事を強制されようとしているのだ。
跡取り息子も同じで、彼にもそういう事は似合わないというか、出来ないであろう。

「エドガー軍務卿、物が物なので王軍からも警備隊を出して何とかしません？」

「バウマイスター伯爵、それはいいがな。トンネルの権利はバウマイスター伯爵家とオイレンベルク家にあるんだ。うちは三分の一しか出せないからな」

それ以上兵を出すと、貴族の利権に王国が嘴を突っ込んだと思われて統治的に好ましくないらしい。

「三分の一で、千人くらいですよね？」

「そうだな」

管理・補修・通行料の徴収と不審者や密輸、違法な品の取り締まりなども合わせると、そのくらいは必要となる。
年中無休で、二十四時間交替で仕事をしないといけないのだから。

「そんなぁ……千人も新規で雇うなんて不可能ですよ……」

人口三百人の領主が、その人数をいきなり指揮するのも難しい。

そんなに人を雇う財力もなく、彼らとその家族を生活させる場所の確保などもある。
そんな事は不可能だと、オイレンベルク卿は半分涙目であった。

「こうなったら、ブライヒレーダー辺境伯が業務を受注するとか？」

「そういうのはよくないですね」

小なりとはいえ、オイレンベルク家はれっきとした貴族家である。
そこの統治に口を出すばかりか、実際に領中に入って仕事をしてしまえば、それはブライヒレーダー辺境伯家が他の貴族家を支配下に置いて食い物にしているという悪評に繋がってしまうのだそうだ。

「相手がどんなに小さな領地の領主でも、それはいけません。そのために、紛争システムなんていう面倒なものがあるのですから」

気に入らなくても、相手を滅ぼすのはタブー。
だから、利権調整のために面倒な紛争をしているというわけだ。

「領地を交換しませんか？　ここよりも遥かに豊かな領地と、オイレンベルク領を交換で」

「それは王国の領分で、私は口を出せませんから。もし可能でも、私への悪評が鰻登りですよ」

ブライヒレーダー辺境伯は、トンネル利権を貪るために立場の弱いオイレンベルク家に無理を強いた。
こんな悪評が蔓延したら堪らないと彼は言う。

「うちは、バウマイスター伯爵が寄子で大分得をしていますからね。

今でもやっかみが凄いですから」

「じゃあ、王国が転封をしましょう」

「それも駄目だの」

ここを王国直轄にしてしまうという案も、陛下自身が否定していた。

「魅力的な案ではあるが、場所がよくないの」

「場所がですか？」

「うむ。ブライヒレーダー辺境伯領に囲まれておるからの。こういう事を露骨にすると、王国とブライヒレーダー辺境伯家との関係を揶揄する輩が現れる」

「そうですね。ありもしない緊迫状態を演出して、己の利益を狙うのがいますね」

ここ二百年の平穏な情勢というのは、何も運がいいだけでそういう風になっているわけではない。

為政者達の神経質なのではないかと思うほどの配慮から成り立っているのだと、俺は理解する。

「となると……どうしましょうか？」

「暫くは、トンネルのチェックに、魔導ギルドもそうだが、魔道具ギルドも調査に入るであろう。その間は時間が稼げる。各々持ち帰っての宿題というわけじゃな」

問題の先伸ばしとも言えるが、他に手がない。
会議の参加者は、今日はこれで御開きという事にする。

「では、バウマイスター伯爵に送って貰う前に、このマロイモを買っておくとするか。ワーレン」

「はっ！」

陛下の命令で、ワーレンさんはサイフを出してローゼさんにお金を払っていた。
すぐに、執事が大量のマロイモを麻袋に入れて持参する。

他にも、購入している人が多かった。
勿論俺も買って帰るつもりだが、『マロイモ人気すぎだろう！』と思ってしまう。
あまり人気になると、俺が買えなくなってしまうじゃないかと。

「早速石焼きイモにして食べるんだ」

「婿殿は、相変わらず新しい料理の研究に熱心じゃな」

「趣味ですから。ところで、今日は晩餐でも一緒にいかがですか？」

「それもいいかもな。ワシの出番はトンネル開通が進まければないからの。両方の出入り口に巡礼所を設置するくらいか」

トンネルなので、安全祈願も込めてそういう施設と常駐の神官が必要となるわけだ。
たかがトンネルと思う人もいるであろうが、日本でも利権などを

含めて政治家や官僚達がや悲喜交々の争いをしているので同じであろう。

「では、マロイモを買って……。オイレンベルク卿？」

「うーーーむ。彼には陛下の突然の来襲と、トンネルの話は重たかったようだな……」

今日一日で様々な事があったオイレンベルク卿は、跡取り息子共々その場で土下座をしたまま気絶していた。

少し可哀想な事をしてしまった気分になる俺達であった。

ヴァレンタイン記念SS　ヴェンデリン、敗北す！

帝国の内乱が終わり、俺達は普段の生活に戻る。
冒険者として狩り、アーネストの付き合いで地下遺跡探索、バウマイスター伯爵領内の土木工事、たまに貴族としてのお仕事と次々にこなしていく。

ローデリヒが上手くスケジュールを組んでくれるので、特に混乱などは発生していない。
季節は冬、ここは大陸南部なので暖かいが、謝肉祭と新年が過ぎ、月が変わったところでとある客の来訪を受けていた。

バウマイスター伯爵邸の客間に案内すると、その人物が軽い口調で聞いてくる。

「何か、いい商売のネタはないかなと思うんだ」

その人物とは、バウマイスター伯爵家の筆頭御用商人であるアルテリオさんであった。
貴族家における御用商人は、一人だけという家と複数いる家に別れる。

うちは複数派だが、筆頭で取引量も多いアルテリオさんの名前は王都では有名になった。
他にも御用商人がいるのは、ある種のやっかみを防ぐためでもある。

導師の次男であるヘンリックも、順位は低いがバウマイスター伯

爵家の御用商人に任命された。
彼は、内乱中に増やした小型魔導飛行船三隻を使って、バウマイスター伯爵領内中に人と物を縦横無尽に運んで稼いでいるそうだ。

「何か不安定要素でも？」

「不安定じゃないけど、チョコレート事業は少し方針変換だな」

魔の森で採れるカカオを材料にしたチョコレートが王都で売れているが、バウマイスター伯爵領の開発が進んで冒険者が持ち寄るカカオの量が増えた結果、チョコレートの値下がりが起こっているらしい。

「そんなに採れるものなんですか？」

「木から実を取っても、三日と経たずに元に戻るらしいぜ」

「恐ろしい繁殖力ですね」

「雑草よりも凄いよな」

カカオなんて、地球では需要の増大で大幅な値上がりが確実視されているというのに。
それが自然で採り放題なんて凄いと思う。
採りに行って魔物に殺される人も一定数いるので、それだけが入手困難な理由なのだけど。

「値下げは問題ないんだ。うちからすれば」

一番最初にチョコレートの製造技術を確立し、高級品は王族、大

貴族御用達となっている。
あとは、富裕な平民層などのターゲットに、量産品を生産して売る時期が来たのだとアルテリオさんが語る。

「値段も大分下がって、下級品なら平民でも月に一度くらいは食べられるようになったわけだ。ただ、それが王都の住民全てに周知されているわけでもない。やはり、高嶺の花だと思っている人も多いわけでな」

「つまり、普及のためには何か宣伝が必要だと？」

「さすがは、バウマイスター伯爵様だな。商売に詳しい」

俺は貴族なので商売の才能を褒められてもどうかと思うのだが、これでも昔はそういう仕事をしていた自負もある。
嬉しくないはずはなかった。
あの社畜としての日々は、決して無駄ではなかったのだ。

「チラシでも撒いて宣伝しますか？」

「それもするけどよ。実は、何かチョコレートを購入する理由、イベントをデッチあげようかと」

「えっ？」

俺は、アルテリオさんの発言に嫌な予感がした。
確か、今は新年になってから月が変わったばかりのはず。

「（という事は、バレンタインか？）」

しかし、なぜこの世界の人間であるアルテリオさんがバレンタインなどと。

実は、俺に隠しているけど彼も地球からの転生者なのか？

いや、それなら俺の意見など聞く前にもっと自分で色々とやっているはずだ。

「どうかしたのか？　バウマイスター伯爵様」

「少しだけ考え事を……」

俺は、考え込みすぎていたらしい。

アルテリオさんに心配されてしまった。

「他のチョコレートを製造する商会とも組んで、『聖ヴァレンティーン祭り』を盛り上げようかと」

「えっ？　その人って？」

確か、俺に日本式クリスマスの普及を決意させた、暗黒の宗教祭り『謝肉祭』の元となった人物のはずだ。

「有名な聖人だな。彼の奥さんも、なかなかに優れた逸話を残した人でな」

「へえ、そうなんですか」

「バウマイスター伯爵様って、教会の名誉司祭だろう？　知らんのか？」

「いいえ、サッパリ」

寄付して本洗礼を受けたら勝手に命名されただけで、教会の事なんてまったく興味がないのだから。

教会の長い歴史に比例して、聖人だの、優れた功績を残した偉人だと、評価されている過去の人達は多い。

人数が多いので、よほど興味がなければ全員覚えるのは大変なはずだ。

試験にでも出て、ある程度点数を取らなければ留年するのなら、頑張って一時的には覚えるけど。

俺は、限りある記憶力で覚える必要などないと思っている。

人にとって一番大切なのは、今と未来である。

過去を振り返る必要などない。

と、高校の頃の日本史の教師が言っていた。

「普通、少しは勉強するんだが……。ええと、奥様？」

俺の無知ぶりに呆れたアルテリオさんが、エリーゼに話しを振る。

「そのために私がいるのだと思います。ヴァレンティーン枢機卿の奥様は、ご自身も貧しい子供達に手作りのお菓子などを配るなど、夫であるヴァレンティーン枢機卿の活動を手助けしていました」

二人は、その気になればいくらでも豊かな生活が送れるのに、常に清貧な生活を送り、奉仕活動のためにお互いに贈り物すらしなかったそうだ。

「お二人は、お互いにわかっていたのです。そのような贈り物をしなくても、互いに愛し合っていたのを」

ところが、例外的に奥さんが一度だけ贈り物をした事があるそうだ。

「先に病気で亡くなったヴァレンティーン枢機卿の棺に、奥様は手作りのクッキーをそっと添えました。夫婦となって、初めての贈り物だったのです」

過去の聖人の逸話を、うっとりとした表情で話すエリーゼ。

確かに俺も、『いい話だなぁ』と思う。

特に、女性なら堪らない種類のお話であろう。

ここで『子供のために作って余ったクッキーくらい、旦那にやればいいじゃん』とか思ってはいけないのだ。

周囲に視線を送ると、ハルカ、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、カタリーナもその逸話に感動しているようだ。

「素晴らしい、愛の物語ですね」

「手作りのクッキーというところがいいわ」

「二人の間には、本物の愛があったんだね」

「感動した」

「私、このお話を知っていますけど、いつ聞いても素晴らしいですわ」

もし俺が死ぬと、棺の中が手作りクッキーで一杯になるかもしれ

ない。
そのくらい、みんな感動していた。

「それで、その逸話とチョコレートに何の関係が？」

ただ一人冷静なエルが、アルテリオさんに質問をする。
やはり、女性と男性では思考経路に差があるのかもしれない。
エルは、その逸話に感動したという表情を見せていなかった。

「だからさ、ヴァレンティーン枢機卿の亡くなった日に、チョコレートをだな……」

「チョコレートは関係ないんじゃ？」

「それを言うと、何も始まらないじゃないか」

商売のためには、時には強引さも必要なのは俺にでもわかる。
アルテリオさんの提案は、平民は一家でチョコレート菓子やケーキなどを購入してみんなで食べる。
富裕層や貴族などは、女性が男性にチョコレートを贈れるようにしたらどうかと。

「夫、婚約者、父親、兄弟、世話になっている屋敷の使用人とかにでもいいな。貴族なら、単価を落としてチョコレートを大量に買ってくれるかもしれないし」

やはり、そのまんまバレンタインであった。
何となくチョコを贈る相手が義理に傾いているような気もするが、昨今の日本でもバレンタインのチョコを色々な人に贈りましょうという宣伝があったりした。

世話になった人に贈る『世話チョコ』とか、家族に贈る『ファミチョコ』、友達に贈る『友チョコ』とか。

明らかに売り上げを増やそうとする製菓メーカーの陰謀なのだが、元々バレンタイン自体が製菓メーカーの陰謀なのだ。

そして、何が怖いのかと言えば……。

「（チョコの贈り先が、いつ恋人にチェンジするかだ。いや、夫や婚約者も有りとアルテリオさんが言っている以上は、そうなるのに時間はかかるまい……）」

もしそうなれば、かなりの男性が暗黒のバレンタインを迎える事となる。

そう、俺の前世において、バレンタインというものが『義理、母ちゃん九十九パーセント』であったかのようにだ。

「（思えば、義理チョコばかりだったな……）」

明らかに三倍返し……今は五倍や十倍返しもあり得る、ホワイトデー目当ての義理チョコの群れに、唯一気を許せたのが母からの義理チョコくらいであろうか。

本命は、大学生時代に彼女から貰えた一度だけ。

就職したら、また社内の女性社員達からの義理チョコが。

社内で貰えない奴は、よほど嫌われているか、いつ消えてもおかしくないと思われている奴のみという。

貰えなければ社内に居場所はないが、しかし貰えば三倍以上返しが基本の義理チョコだ。

一か月後のホワイトデーに俺の財布を薄くするのみで、バレンタインなど俺から言わせれば敵でしかなかった。

仕事も、チョコの輸入業務で忙しくなるし。
みんな輸入物のチョコに幻想を抱きすぎだ。
中にはとんでもなく低品質の物があり、クレーム多発で俺達は商品の回収と販売先に頭を下げるのに奔走する事となる。

欧米は商業ルールがしっかりしている？
苦情を言うと、なぜか逆ギレする欧米人の担当者は意外といる。
もう終業の時刻だからと、途中で電話を切って帰ってしまう奴もいるし。

うちのせいじゃなくて輸送方法が悪いからとか平気で責任転嫁する中国人よりは少ないけど、無責任な性格に人種は関係ないのかもしれない。

とにかく、バレンタインには碌な思い出がなかった。

「（しかし、なぜ急にアルテリオさんがバレンタインに似た企画を？）」

もしかすると、俺が転生した影響でバタフライ効果のようなものが？
いや、穿ちすぎか？
チョコレートを贈るイベントなんて、少し目端の利く商売人ならいつか思いつきそうだし。

「バウマイスター伯爵様、どうかな？」

「ええと……、試してみたらどうですか？」

「うん？　何かピンと来ないのか？　でも、いつもバウマイスター伯爵様の意見ばかりに頼っていてもな。駄目元でやってみるよ」

こうしてアルテリオさんは、王都でバレンタインモドキの行事を取り行う事を決めた。

俺は反対しなかったが、心の中では違う。

「（チョコなど好きな時に食べればいいんだ！　俺は、このバレンタインを絶対に潰すぞ！）」

他の何を置いても、これだけは絶対におこなうと心に誓う俺であった。

「新しい行事？　それが貴族の仕事なのか？　ヴェル」

「いや、違うけどね……」

早速俺は、バレンタインを潰すための行動に入る。

とはいえ、エリーゼ達が感動するほどの謂れがある行事を正面切って潰すのもどうかと思う。

大人気ないと思われそうだし、アルテリオさんもうちの御用商人なのだ。

そこで、ここは別の行事を流行させて、『聖ヴァレンティーン祭りは定着しませんでした作戦』を実行しようと思う。

手伝いにはエルを呼ぶが、彼には『聖ヴァレンティーン祭りは定着するか不安なので、他の行事を提案する』と嘘を言って協力させていた。

「うちの特産品なんだから、チョコレートの普及でいいんじゃないの？」

「チョコは美味しいから勝手に広まっていくさ。それよりも……」

さて、バレンタインを潰すとなると、それを上回る魅力を持つ行事が必要である。

日本におけてバレンタインが行われる二月と同じ月に行われる行事、それは勿論あの行事であるが、それを何とか普及させてバレンタインを潰そうと決意する。

少々派手さに欠けるが、そこは上手く盛ってバレンタインに対抗しようと思う。

どうせ、元の行事なんて知っている奴はいないのだし。

「そのヒントは、ミズホ公爵領に！」

というわけで、エルと共にミズホ公爵領へと『瞬間移動』で飛ぶ。

今回は二人だけでの移動だが、それは聖ヴァレンティーン祭りに傾きそうなハルカを同行させるわけにはいかなかったからだ。

ミズホ公爵領は真冬で寒かったが、予想どおりにお店ではあの食べ物が発売されていた。

「煎った豆？」

「これなら、誰にでも買えるぞ」

「安いからな……」

王都では、豆腐や湯葉を普及させるまでは家畜の餌での用途が一番多かった食材だ。

この煎り豆を使う『節分』こそが、バレンタインに対抗可能な行事となるはずである。

いや、俺がこの行事を育てるのだ。

「バウマイスター伯爵様は、『移節祭』に興味をお持ちなのですか？」

ミズホ公爵領に到着後、ローデリヒ経由でミズホ公爵から俺の護衛任務を受けたタケオミさんが聞いてくる。

今日の彼は、ハルカがいない事もあってテンションが低かった。

ここまでわかりやすいシスコンは、ある意味貴重かもしれない。

「この移節祭を、王国に普及させるのだ」

「王国にですか？　でも地味ですよ。移節祭って」

由来は節分に似ている移節祭は、旧暦の季節の変わり目に炒った豆を撒いて邪を払い、撒いた煎り豆を年齢の数だけ食べると、その年は病気にならないと言われている。

節分に凄く似ている行事であった。

「御社……もとい、教会でその年の恵方に豆を撒くので、みんな拾いに行きますけどね……」

家族の誰かが全員分の豆を拾い、それを夜に分けて食べる。
あとは、柊と魚の頭で作った飾りを家の入り口に飾るだけだとタケオミさんは説明する。

「ねっ？　地味でしょう？」

「確かに地味だ……」

「なあ、ヴェル。煎り豆でチョコレートに勝てるのか？」

エルから耳に痛い指摘をされてしまう。
確かに、美味しいチョコレートと、味も素気もない煎り豆では勝負にならない。

やはり、元は節分でしかないので地味でバレンタインに押し潰されそうだ。
日本でも、その傾向が強い。
だが、それでも俺は奮戦しなければいけないのだ。

この世界の未来の男達を幸福に導くために。
俺のこの戦いは、決して誰にも理解されないはず。
それでも、俺は戦う。

この孤独な戦いを！
バレンタインに似た行事を潰すために！

「不味くはないけど、美味くはないよな」

エルは、店頭で購入した煎り豆を食べながらその感想を述べる。
とりあえず買って味見はするようだ。

「キナコにした方が美味しいと思いますが」

タケオミさんも、煎り豆がチョコレートに勝てるとは思っていないようだ。

「ミズホ公爵領では、バウマイスター伯爵様との縁で交易が盛んですからね。チョコレートなら、ほらあそこに……」

本来、和菓子に似たミズホ菓子を売っている店舗に特設コーナーが出来て、そこにはチョコレートが置かれていた。
値段は高いが珍しいという事で、多くの客で賑わっている。

「私はあまり甘い物は好きではないのですが、新製品の『抹茶チョコレート』は美味しいですね」

「（何だと！）」

衝撃の事実である。
日本人に似ているとはいえ、ミズホ人はもう輸入したチョコレートの改造に入ったのだから。

「本当だ……」

店先の特設コーナーにはチョコレート菓子が置かれ、中には抹茶チョコレートが存在してる。
試しに購入して食べてみるが、日本で食べた抹茶チョコレートそ

のものだ。
物凄く美味しい……。
「他にも……キナコチョコか！」
侮りがたしミズホ人！
何と既にキナコチョコもあり、他にもチョコ饅頭、チョコ大福なども販売されていた。
「見事な改良能力だな」
「ミズホ人は、外から導入した料理や食品の改良が大好きですからね」
その辺も、日本人と大差ないようであった。
「これがもし輸出されるとなると……」
物珍しいイコール、貴族なら大枚を叩いても買うという事だ。
もしアルテリオさんが気がついて、聖ヴァレンティーン祭りで販売をしたりすれば……。
「このままでは勝ち目がなくなるぞ！」
俺は、危機感を募らせていく。
「いやだから、チョコレートの原料であるカカオはうちの特産だから、売れた方がいいじゃないか」
エルが正論を言うが、俺はチョコレートの普及に反対しているわ

けではない。
　この世界の希望のために、バレンタインモドキの普及を阻止するのが目的なのだ。

「こうなってしまった以上は、煎り豆だけではなくて他の食べ物も導入しよう！」

「俺には、ヴェルの考えがサッパリ理解できん」

「出来なくても、宮仕えとはそういうものだ」

　タケオミさんは、エルに諭すように言う。

「だから、こうして俺は動いていますけどね……」

「それでいいのだ、エルヴィンよ」

　なぜか、エルとタケオミさんの意見が一致しているようであったが、ならば好都合と俺達は三人で新しい行事の準備を行う事にするのであった。

「ふっ、俺は竜退治のバウマイスター伯爵だ。俺が勧める行事が、聖ヴァレンティーン祭如きに負けるとは思わない」

「ヴェルのその自信がどこから湧いてくるのか、俺は不思議でならない」

それから数日、俺はバレンタインをこの世界に普及させないように準備を進めた。
ローデリヒから言われた土木工事をこなしつつ、煎り豆と共に普及させる食品の準備を進めたのだ。

「そして、出来上がったのがこの『恵方巻』！」

「それって、太巻きですよね？」

ちょっとミズホ公爵に貸してもらったタケオミさんが、大量に準備された恵方巻を見て質問してくる。
ミズホ公爵領においても、移節祭で食べる恵方巻の風習は存在しなかった。
日本でも、元々狭い地域でしか行われていなかった風習だ。
海苔屋が仕掛けた行事とも言われ、この世界になくても不思議ではない。

「太巻きだが、当然中身は改良してある」

王国の人達の味覚に合わせるべく、卵焼き、デンブ、キュウリなどの他に茹でエビ、スモークサーモン、ツナマヨ、から揚げなどを入れ、なるべく多くの人達の好みに合うように改良した。

「これで、チョコレートに勝てる！」

「そうか？　ところで、この恵方巻とやらを食べればいいのか？」

「エルよ、ただ食べるのでは駄目だ。こうして、幸運が訪れる方向を向いてだな……」

そのままかぶりついて、一人一本を食べる。
こうする事によって……あれ？　どうなるんだっけ？
そういえば、恵方巻は知っていたんだが、食べるとどうなるのか知らなかった。

「……健康になる」

「何か、急に取ってつけたような返答だな」

エルが、俺を疑わしい目で見始めた。

「とにかくだ！　この風習を広げ、恵方巻を売るんだ！　ついでに煎り豆も！」

ヴァレンティーン枢機卿の命日に、王都では二つのイベントが推奨された。
一つは、アルテリオさんとチョコレートを販売する商会、店舗などで行われる聖ヴァレンティーン祭。
もう一つは、俺達が広めるべく努力している移節祭。
こちらは、豆を撒き、恵方巻を食べる風習だ。

「きっと俺達の勝利となるはずだ！　エル！　タケオミさん！」

「はいはい。まさか、俺達が直接売り子をするとは……」

「宮仕えの宿命だな……」

こうして、双方の宣伝合戦が始まったのだが……。

「普通に売れているな」

「売れているからいいじゃないか」

「というかさ、単純に恵方巻が珍しくて美味しいから売れてないか？　移節祭とか関係なくね？」

エルの鋭い指摘が、俺のピュアな心に突き刺さる。

「客層も偏ってますよね……」

念のためにアルテリオさん達の偵察を頼んでいたタケオミさんが戻って来て、気がついた事を指摘し始める。

「偏っている？」

「はい、聖ヴァレンティーン祭はほぼ女性客ばかり。こちらは、年配の方々と男性が多いですね」

「そう言われると……」

こっちは女性客が少ない。

珍しい食べ物だから家族に買って行こうという老人達に、男性は肉体労働系の人が多いような気がする。

「これ、片手で持ちながら食べられるし、ボリュームあっていいな」

「バウマイスター伯爵様、移節祭は関係ないですね。売れてますけ

ど……」

「働くお父さん達の飯になっているな」

確かに、売れてはいるが俺が意図した方向ではない。

恵方巻は、仕事で忙しい男性が片手で食べられてお腹も一杯になると大人気になっていた。

「幸運の方向を向いて、これを一本食べるのはいいんだけど、女性や子供や老人には辛くないか？」

「そう言われると……」

お得感を出すために恵方巻を大きくしてしまったのが、女性や子供の支持を得られない原因なのかもしれない。

切って食べればいいと言われてしまえばそれまでなのだが。

「孫にお土産で買って帰るかの」

「老人の支持はある」

「数人で食べるなら、切ればいいからな」

売れているのに、なぜか釈然としない。

それは、俺がただ新しい食べ物を売っているだけで、聖ヴァレンティーン祭打倒に繋がっていないからか？

「でもさ、売れているんだからよくないか？　うちの特産品である米と南方マスの販売促進にもなるし」

この恵方巻、米は増産中のバウマイスター伯爵領産を、スモークサーモンは同じく養殖事業を始めたバウマイスター伯爵領に生息するナンポウマスのサーモンを使っている。

「ミズホ公爵領としては、海苔とお酢の販売促進になったのでお館様も喜んでいましたが」

「じゃあ、結果的には大成功ですね」

「エルヴィンの言うとおりだな。よかったですね、バウマイスター伯爵様」

いや、商売的には成功なんだけど、やはり釈然としない。

ちょっと様子を見に、アルテリオ商会が運営するお菓子屋に自分で偵察に行くと、チョコレートとそれを使ったお菓子が物凄く売れていた。

しかも、女性比率が多い。

というか、ほとんど女性だ。

「この一番小さなチョコレートを三十個くださいな」

「ありがとうございます」

「女性から男性にチョコレートを贈る行事ですか。こういうのも面白いですわね」

貴族のご婦人が、一番安いチョコレートを大量に購入していく。

多分、家臣や使用人にでも配るのであろう。

「旦那様には、この大きいのを買って帰りましょう」

まずい、いきなりしょっぱなから、日本のバレンタインに近づきつつある。

このままだと、あと数年でバレンタインが多くの男性にとっての悲しみの日となってしまう。

「（だが、阻止する手が……）」

チョコレートが売れれば、自然とバウマイスター伯爵領が潤い、それは開発の促進にも繋がる。

俺は領主として、この行事を潰すわけにはいかないのだ。

「（何というジレンマ……）」

その後は戻って、煎り豆と恵方巻の販売に、節分モドキの移節祭のアピールに努めたが、地味で馴染みがないという欠点を払拭できなかったようだ。

恵方巻は売れたが、煎り豆はあまり売れなかった。

「酒のツマミになるかな？」

少数の酒飲みが、安いからと購入していっただけであった。

酒のツマミになる、ピスタチオやカシューナッツの低価格版だと思われたらしい。

「この煎り豆を撒くのですか？　バウマイスター伯爵様、食べ物を粗末にするのは感心しませんぞ」

なぜか煎り豆を購入した老人に説教されてしまった。
正論なので言い訳できない。

「何だ？　浮かない顔だな、バウマイスター伯爵様」

恵方巻は完売したので店じまいをしていると、そこにアルテリオさんが顔を出す。

「聖ヴァレンティーン祭は定着しそうだな。チョコレートの増産に勤しまないと。バウマイスター伯爵様も、新しい食べ物が売れてよかったじゃないか。しかし、自ら自領産の食材を売るのに、新しい料理まで紹介するとは……。こういう売り方もあるんだなって、感心したぜ」

チョコレートの売れ行きがよくてご機嫌だったからかもしれないが、アルテリオさんは何か色々と勘違いしているらしい。
俺が、バウマイスター伯爵領産の米とスモークサーモンを売るために、あえて恵方巻の紹介と販売を行ったのだと。

確かに、調理方法を紹介しながら食材を販売する方法は日本ではポピュラーだけど、俺は聖ヴァレンティーン祭を打倒するために、恵方巻の販売を行ったのだ。

それがわかってもらえないもどかしさを、俺は感じる。

「これとさ、バウマイスター伯爵様がよく食べているオニギリに、ミズホの和菓子、いなり寿司を組み合わせたお店をやろうかなと、今思いついたぜ。さーーーて、職人を貸して貰えないかミズホ公爵様に相談しに行こうっと」

結局チョコレートも恵方巻も売れ、俺は損どころか大儲けなのに、なぜか敗北感しか感じられない。

このままだと、聖ヴァレンティーン祭が本当のバレンタインへとなる可能性が高まったからだ。

なのに、それを止められない領主としてのジレンマ。

俺は敗北を認めざるを得なかった。

「片づけて帰るか……」

「商売に成功したのに、変な奴だな」

「そうですぞ、バウマイスター伯爵様。我がミズホ公爵領でも、商売などに出資して大損害を蒙る者が多く、『サムライ商売』などと揶揄されるのですから。成功するだけ素晴らしいかと」

「ただいま」

屋敷に戻った俺は、まだ落ち込んでいた。

聖ヴァレンティーン祭を潰せず、未来永劫モテない男性から聖ヴァレンティーン祭を考案して広めた戦犯として非難される事が決定したからだ。

俺は頑張った……いや結果が全てなのだ。

言い訳は止めよう。

「バウマイスター伯爵様、ハルカは元気なのでしょうか？」

ここ数日手伝ってもらったので、俺はタケオミさんを屋敷に招待していた。

彼も久々に妹の顔が見れると嬉しそうだ。

「元気ですよ」

エルとの結婚式の日取りも決まり、今はその準備とエリーゼ達と一緒にいて料理などをする事が多かった。

公式には、バウマイスター伯爵夫人方の侍女兼護衛という立場でもある。

「兄様ですか？　お久しぶりです」

「ハルカ、元気にしていたか？　エルヴィンが浮気していないか？　苛められていないか？」

「いいえ、まったく」

エリーゼ達の傍にいるのに異邦人だからとハルカを苛めなどしたら、そいつはバウマイスター伯爵領にいられなくなってしまう。

エルですか？

ものの見事に尻に敷かれて、財布と胃袋も握られていますが、本人は何の不満も感じていません。

「そうか、元気ならいいんだ」

「兄様は、お館様とご一緒に太巻きを販売していたとか？　王国で売れるものなのですか？」

「王国の人達の舌に合うように改良はしてあったし、珍しいから完売したよ」

「そうですか、それはよかったですね。ああ、そうだ」

ハルカは思い出したかのように、手に持っていたリボン付きの箱をタケオミさんに、続いてエルにも差し出す。

「アルテルオさんが、聖ヴァレンティーン祭なるものを始めたので、私も試しに購入してみたんです」

「「やったぁーーー！　聖ヴァレンティーン祭最高！」」

ハルカからチョコレートを渡され、二人はなぜそこまでというほど大声を出して喜んでいた。

「聖ヴァレンティーン祭は必要な祭りですな」

「恵方巻は、普通に売ればいいじゃん」

二人は、チョコレート一つで速攻で俺を裏切った。

いや、その言い方は間違いか。

聖ヴァレンティーン祭を潰すという野心は、俺しか知らないものなのだから。

「（これで俺は一人か……だが！　バレンタインを潰すという野望は決して！）」

そう、これは未来の男達に捧ぐ俺の戦いなのだ！

例え一人でも……という風に思っていると……。

「あなた、おかえりなさいませ」

エリーゼ達が揃って俺を出迎える。

「アルテリオさんが始めた聖ヴァレンティーン祭に合わせて、今日はチョコレートを準備してありますよ」

「ホットチョコ、チョコアイス、チョコレートケーキ、チョコチップクッキー、他にも色々作ったわよ、ヴェル」

「食後にみんなで食べようよ、ヴェル」

「エリーゼ様の音頭で、みんなで作った」

「なかなかの自信作ですわよ」

何と、エリーゼ達は俺のためにチョコレートを準備してくれたらしい。

「あなた、チョコレートはお嫌いでしたっけ？」

「いいや、大好きだよ。前から食べていたじゃないか」

「そうでしたわね。夕食の後に一緒に食べましょう」

「そうだね」

俺は、即座に考えを変えた。

聖ヴァレンティーン祭でチョコが貰えない？

それは、甘えです。

それに、一年、二年のスパンでチョコレートが貰えないからって騒ぎ過ぎ。

人間、生きていればいつかいい事もあるって！

「（聖ヴァレンティーン祭大好き！）」

その後、聖ヴァレンティーン祭は俺が死ぬまでに、日本のバレンタインとほぼ同じような形に落ち着き、恵方巻は他の海苔巻やいなり寿司と共に王国に定着。

アルテリオさんが展開したお店も大繁盛する事となる。

そして誰であろう、一番得をしたかもしれない人物は……。

「父上、バウマイスター伯爵様が宣伝をした恵方巻は売れました。オニギリや他の巻物なども王国で売れるでしょう」

「そうか。我がフジバヤシ家は、末端ながら上士となったのはいいが、お金がなくて困っていたところ。副業を何にしようか迷っていたが、分家を名目上のトップにして海苔の卸しと販売にするか」

「甘くないミズホ茶や、製菓材料としての抹茶にも需要が見込めます。乾物も扱ってはいかがでしょうか？」

「そうするか」

ミズホ公爵領においても、下っ端上士程度だと色々と物入りなので生活もなかなかに大変だ。

フジバヤシ家は、タケオミの進言で始めた、海苔、お茶、乾物の卸しと販売で後に大きな財を築く事となる。

第百十五話　オイレンベルク騎士爵領。

「ワシくらいの年寄りになると、ミズホ料理の方がサッパリしていて美味しいかな」

結局、開通させたトンネルの管理を巡っての問題は解決しなかった。

北側の出入り口に領地を持つオイレンベルク卿が、その能力を持たなかったからだ。

ブライヒレーダー辺境伯家と王家は、これを強引に奪うと発生するであろう風聞の悪さを恐れ、自分が管理する事を了承しなかった。

トンネルの検査と工事に時間がかかるからと今日は結論を出さず、みんなそれぞれに王都や領地に戻っている。

トンネル自体の管理は、ローデリヒが兵を増員したのでトーマスとニコラウスに任せた。

俺達も屋敷に戻ったのだが、今日はホーエンハイム枢機卿が夕食をご馳走になりにきていた。

メニューは、最近エリーゼや屋敷の料理人達が覚えたミズホ食が主体で、これが年寄りであるホーエンハイム枢機卿に好評だ。

彼はミズホ酒を飲みながら、ナスの揚げ浸し、揚げだし豆腐、鮎の塩焼きなどを美味しそうに食べている。

鮎は、帝国でも北方の川でないと獲れない魚で、ミズホ伯国もといミズホ公爵領の特産品でもあった。

ホーエンハイム枢機卿は、腸のウルカも美味しそうに口に入れて

いる。

「ミズホ伯国か。産品は珍しいし、王国の貴族や金持ちがこぞって食材を購入するかもしれない。脂っこくなくて、女性や年寄りにも人気が出そうだ」

地球でも、ヘルシーブームで欧米人が和食を食べていた。

この世界の人間も、ミズホ食をそういう位置づけで捕えているのであろう。

「直接貿易の権利を得て正解でした。最大の成果です」

俺はミズホ公爵から親友認定されているので、貴重な品も安く融通してもらえる。

所謂、友情価格というやつであった。

「帝国政府からの褒美の方が莫大であろうに」

「それは、契約に従って俺達で稼いだだけですから」

ブランタークさんも導師も、そういう感覚でしかない。

下手に帝国の領地や利権に下心を出すと、碌な目に遭わないと思っているからだ。

「婿殿らしいか。ところで、エリーゼ」

「はい」

ホーエンハイム枢機卿は、俺の隣の席に座るエリーゼに声をかける。

「子供はまだか？」

「すいません。まだです……」

「それはですね……」

「事情はわかっておる。念のために聞いておいただけだ」

まだ子供が出来ない理由は、今までは魔法薬で避妊をしていたからだ。

最初は、新婚なので一年位は子供がいなくてもという考え方で、内乱中は妊娠してしまうと戦力が減少してしまうからという、わかりやすい理由になっていた。

「エリーゼに子供が生まれないと、関係もないのに余計な心配をするバカが増えるのでな」

「今は避妊していませんし、時間の問題でしょう」

「それは頼もしいな」

「しかし、聖職者であるホーエンハイム枢機卿がそんな事を口にしても宜しいので？」

一応聖職者なので、問題になるのではないかと心配してしまう。

「勿論、公の席では口にせぬよ。教会には、子供が出来ないで相談にくる信徒も多い。ワシのような物言いをすると問題になるのでな」

教会では建前の方が優先であるが、ホーエンハイム枢機卿は子爵でもある。

貴族ならば、後継ぎの心配をしても当然というわけだ。

「婿殿はまだ十七歳。実は心配はしておらぬがの。それに……」

ホーエンハイム枢機卿は、端の席に座っているアマーリエ義姉さんに視線を向ける。

彼女は公式にはメイド長扱いなのだが、実際にはメイド服など着ていない。

屋敷の中で細々と俺の身の回りの世話をする係として、バウマイスター伯爵家内では実質的な妾扱いされている。

着ている服も、エリーゼ達の物と質的な違いはなかった。

「私は……」

「別に構わぬよ。マインバッハ卿は、常識的で貴族の道理を弁えておるようだからの」

「父をご存じなのですか？」

「教会の枢機卿ともなるとな。それなりに情報は入ってくる」

ホーエンハイム枢機卿が妖怪ジジイ扱いされる理由はここにある。

法衣子爵にして枢機卿ではあるが、彼はずば抜けた財力や大規模な家臣団を抱えているわけではない。

ホーエンハイム家は法衣貴族で、領地などないのだから。

だが彼は、王国全土から帝国にまで広がった教会を介した情報ネットワークを握っている。

これがあるために、過去には陛下すら煮え湯を飲まされた経験があるそうだ。

「六人か。今の婿殿には少ないくらいだな。ワシも貴族なので、序列を乱さなければ何も言わぬよ。自由に子も産むがいい。何しろ、バウマイスター伯爵家には一族が少ないからの」

側室の子供を分家の当主にして、各地に代官などとして派遣して支配力を強めなければいけないらしい。

「バウマイスター伯爵領は巨大すぎる。婿殿は頑張って子供を作らぬとな」

「何と言いますか……種馬みたいですね」

「言い得て妙じゃな。貴族や王族などみんなそうじゃぞ。血統をコントロールして子供を産ませるのだから。おっと、話が逸れたな。お客人は肝が据わっておるの。さすがは、元公爵閣下にして元次期皇帝候補と言うべきか」

ホーエンハイム枢機卿の視線は、アマーリエ義姉さんから客人として夕餉に招待したテレーゼへと向かう。

さすがというか、彼女はこういう席に慣れていないアマーリエ義姉さんとは違って、元公爵に相応しい、ふてぶてしさを含んだ笑顔を浮かべていた。

「妾はフィリップ公爵位を失い、捨扶持を与えられて一人バウマイスター伯爵殿にお世話になっている身。次期総司教と目されているホーエンハイム枢機卿殿が、自ら気にするような者ではないと思うのじゃが……」

「いやいや、ただのジジイが孫娘の心配をしておるだけじゃよ」

ホーエンハイム枢機卿は、テレーゼが俺に妻になって子を産み、その子を次期バウマイスター伯爵にしようと画策する危険性を感じているようだ。

「身分が上になればなるほど、疑り深くなる人が多いの。妾はもうそういう世界からは逃れられたと思っておるのじゃが」

「本人がそう思っても、周囲が同じように思うのかという懸念もありますからの」

「ホーエンハイム枢機卿殿ともなると、世に心配のタネが多くて大変じゃの」

「何の、常識の範囲内であるよ、テレーゼ殿」

テレーゼは、ホーエンハイム枢機卿と目線を合わせる。

見ているこちらは、その間で火花が散っているように感じてしまう。

「お爺様」

「人間、年を取ると疑り深くなって困りますな」

エリーゼに声をかけられて、ホーエンハイム枢機卿は表情を崩した。

「ホーエンハイム枢機卿殿の孫娘への思いがよくわかるというもの。

妾の祖父は既に他界しておるので、羨ましい限りじゃ」

二人は対立を止めたが、ホーエンハイム枢機卿の懸念は終わっていない。

バウマイスター伯爵領内の教会経由で情報を集め、何かあったらすぐに動くとテレーゼに圧力をかけたのだ。

もっとも、テレーゼ自身は既にその手の権力闘争は真っ平ゴメンだと思っている節がある。

監視するなら、どうぞご自由にという態度だ。

露骨なアピールも止まり、エリーゼ達とも友達付き合いをするようになったテレーゼであったが、俺はなぜか逆に迫られない事で少し寂しさのようなものを感じている。

これも、実は彼女の策なのであろうか？

しかしながら、女性とは本当によくわからないものである。

「ここは、孫思いのところを見せるために情報を開示しては如何かの？」

「それもそうですな」

テレーゼのいう情報とは、今日出会ったオイレンベルク卿やその領地についての事であろう。

かの領地にも教会はあるので、ホーエンハイム枢機卿は情報を持っているはずだ。

「何とも、可哀想になる話じゃがの……」

ホーエンハイム枢機卿に言わせると、オイレンベルク卿は大変に気の弱い善人なのだそうだ。

「気が弱いというか、彼らからすれば陛下は襲爵の儀で一生に一度だけ会う雲の上の人。ブライヒレーダー辺境伯や閣僚級の貴族など、一生顔を合せない人達だと思っておるわけじゃ」

「うちの実家と同じく田舎ですからね」

オイレンベルク領はほぼ自給自足で、特産品のマロイモを近隣の町や村に売りに行って現金収入を得ている。

「近所の村や町とはブライヒレーダー辺境伯領じゃが、そこにブライヒレーダー辺境伯はおらぬからの」

三百人の領民達と共に畑を耕し、収穫の量に一喜一憂する。

他の貴族との交流には興味がないし、大半の貴族はオイレンベルク卿など知らない。

貴族ではあるが豪農に毛が生えた程度で、昔のバウマイスター騎士爵領よりも貴族的な部分が少ない。

裕福でもないが、貧しくもない。

領主は過酷な税など取らないし、善良で優しいから領民達に不満はない。

「そういえば、温厚な方々が多かったですね」

エリーゼは帰りにマロイモや他の野菜などを購入していたが、外部からの客人にぼるような真似もせず、直売所のように安い値段で売ってくれた。

「でもさ。ああいう統治形態だと、次男以下が困らないかな？」

「いや、困らぬな」

ルイーゼの疑問に、ホーエンハイム枢機卿は答える。

「あの領からブライヒブルクに出るのは、さほどの難事でもない」

オイレンベルク領でのんびりやりたければ残ればいいし、一旗揚げたければブライヒブルクで働き口を探せばいい。

外に出ても帰省で故郷に戻って過ごす者も多く、それだけオイレンベルク領が物質的に豊かである証拠であった。

さほどお金がなくとも生活ができ、食料にも困らないのだから。

そのせいか、領民達には人がよさそうな者が多かったように思える。

「買い物も、近くの村や町でできるからな」

そう聞くと、昔のバウマイスター騎士爵領より生活に余裕があるのかもしれない。

「マロイモで現金収入か」

「あのイモ、甘くて美味しいしね」

オイレンベルク領の周辺の町などでは、とても人気があるイモらしい。

栽培条件のせいで、オイレンベルク領でしか収穫できないようで

あるし。

「オイレンベルク卿は、無理に貴族として見栄を張るような人物でもないしな。あの息子も、特技はイモの品種改良と栽培方法の研究らしい」

似た者親子で気は弱いようだが、マロイモに関しての知識には素晴らしいものがあるそうだ。

しかし、こんな情報を得られるとはさすがは教会というべきか。

「事情を聞くと、余計に可哀想になってきた」

あの親子は、領民達とマロイモなどを栽培していれば大満足なのだ。

そんな彼らに、千人からの兵士を雇って家臣団を形成し、トンネルの管理を行うように強制する。

あの場にいたのは大物貴族ばかりである。

過去には悪辣な事もしているはずだが、だからこそオイレンベルク卿のような人物を見ると居た堪れなくなってしまうのであろう。

「ブライヒレーダー辺境伯が泥を被れば解決するのに、あの男、躊躇しおって」

「なぜなんでしょうかね？」

「婿殿のせいで、あの男は王国貴族達に一人勝ちしていると思われておるからの。これ以上の利益はかえって毒だと思ったのかもしれぬな」

どうせなら、このまま突っ走ってしまえばよかったのにと俺は思ってしまう。

「何にせよ、暫く様子見じゃの。あの男がトンネルの学術調査をするのであろう？」

あの男とは、今この場にいないアーネストの事である。

彼はトンネルの学術調査を行う準備で、自室に籠っている状態であった。

「アレも厄介な存在よな」

ホーエンハイム枢機卿は、とっくにアーネストの正体に気がついていた。

「バウマイスター伯爵領内中の遺跡を調査している間は大人しいかと」

「そうよな、婿殿よりも魔力が多い者など、拘束しようと考えるだけ無駄だからの」

好きな事をしていれば大人しく、その好きな事も王国にとって利益になるものなので、現状では俺に預けるしか方策がないというわけだ。

「婿殿は、暫くはオイレンベルク領通いか？」

「はい」

トンネルの学術調査をするアーネストの送り迎えと監視、あとは

オイレンベルク領の情報収集も進めるべきであろう。
領内の工事もたまにして、冒険者としての狩りは大リーグ山脈のワイバーンと飛竜を相手にする予定であった。

すぐ近くにやつらは生息しているからだ。

「あの領も、暫くは大変であろうからの」

「その話に聞く、朴訥で気が弱い親子がまた卒倒しかねないの。難儀な事じゃ」

「ふふっ、テレーゼ殿はさすがにおわかりか」

「比較的、簡単に想像がつくの」

「確かに」

ホーエンハイム枢機卿は、エリーゼのライバルとしてのテレーゼは警戒しているが、優秀な貴族であったという点は好んでいるらしい。
彼女と楽しそうに会話を続ける。

「余計な虫が入らないように、暫くは頼むぞ。婿殿」

ホーエンハイム枢機卿の予想は現実のものとなり、たかがトンネルの開通だけで俺達はまた貴族達の奔走に巻き込まれる事となる。

「本当、うちの実家よりも田舎だなぁ……」

暫くのオイレンベルク領滞在が決まり、俺達は『瞬間移動』で現地に飛んだ。

トンネルの警備はトーマス達に任せ、アーネストは彼らの監視の下で学術調査を行っている。

「素晴らしい造りであるな！」

ただの大きなトンネルなのに、学術調査には一週間ほどかかるらしい。

付き合っても俺達にはつまらなそうなので、トーマス達に任せる事にした。

「雄大な田舎だなぁ……俺の実家よりも……」

トンネルの外に広がる斜面の畑を見ながら、エルはオイレンベルク領の田舎ぶりにあらためて感心する。

「斜面は一面マロイモ畑ね」

イーナも、斜面にあるマロイモ畑を見下ろしていた。

なぜか山の斜面で、朝夕に気温が下がらないとマロイモは栽培できない。

しかも昼時には温暖な気候の方が育ちがいいようで、この大陸南部大リーグ山脈沿いはその条件を満たしているというわけだ。

「ミズホ公爵領では、栽培が難しいわね」

「いえ、ミズホ人は食べ物に関しては不可能を可能にします」

「（絶対にないと言い切れないな……）」

もうすぐエルとの結婚式であるが、今日は特に用事がないハルカもエルについてきた。

彼女は、マロイモで何か料理を作れないか考えているようだ。

こういう部分は、さすがはミズホ人というべきか。

「ヴェル、あの人は後継ぎさんの」

目がいいルイーゼが、一人重要人物を見つけた。

「ファイトさんだよな」

斜面の畑に、昨日父親と一緒に土下座していた跡取り息子のファイトさんを見付ける。

この人、名前は勇ましいのだが、見た目からして争い事などとは一切無縁の、人のいい青年にしか見えなかった。

農民達に指導をしているようだが、貴族なのに帯剣すらしていない。

他の貴族に見られるかもという感覚すら皆無なのであろう。

「これはこれは。バウマイスター伯爵様ではありませんか」

ファイトさんは、俺達を見つけると怒涛の勢いでこちらに駆け寄って来て、低姿勢で挨拶をする。

この斜面を苦もな走れるので、武芸とは縁がなさそうだが見かけ

よりも運動神経と体力はあるのかもしれない。

「ファイトさんはオイレンベルク領の跡取りなのですから、あまり低姿勢にならなくても……」

昨日の土下座よりはマシだが、どうもこの親子あまり他の貴族との交流がなく、加えて他の貴族はすべて自分達よりも凄い人だと思っているようだ。

立場的には同じなので、そういう態度は止めてほしいのだが……。

「すいません、つい癖で……」

「おいおい慣れていただければ……」

時間がかかりそうだなと思いつつ、話題を変えて他の話をふる。

「マロイモの畑ですか」

「はい、曽祖父の代から数十年、苦心してここまで広げました」

ワイバーンや飛竜が来ない斜面を開拓して、見事なマロイモ畑が広がっていた。

「栽培は難しいのでしょう?」

「甘くするには、気候条件や畑の場所以外にも色々と注意が必要ですね」

ファイトさんは、マロイモの話になると饒舌になる。

剣を振るうよりも、イモを作る方が好きなのであろう。

「（貴族よりも、研究者になれば幸せなのに……）」

イーナがボソっと漏らすが、確かに貴族よりは研究者向きであろう。

日本なら、大学の農学部に進んで博士にでもなっているような人だ。

テレビのバラエティー番組で、マロイモ博士とか紹介されるタイプだと思う。

「マロイモは、タネ芋を直接植えてもほとんど収穫できません」

ファイトさんが案内したのは、サツマイモを発芽させる室（ムロ）に似た物であった。

「このように、室で発芽させてツルの部分を畑に植えるのです」

「その辺は、サツマイモと同じなのか」

「そうですね。マロイモは、サツマイモの突然変異種なので」

だから、サツマイモと栽培方法が似ているわけだ。

「ツルを植えて三か月で収穫です」

大陸南部は、朝晩が寒い山などを除くと一年中温暖な気候だ。

つまり、マロイモは年に三回くらい収穫できる事になる。

いや、上手くやれば四回獲れるか？

「室での発芽、斜面の畑、朝晩の温度差。他には？」

「土の質ですね。これを見て小まめに追肥を行います」

「若様ぁーーー！」

とそこに、農作業中の農民が姿を見せる。

「オラの畑の土の様子を見て欲しいんだべ」

「土が駄目なのかい？」

「ちいと、追肥が足らねえかもしれねえだ」

「見てみる」

ファイトさんはその農夫の畑に行き、土を手に取ると口に入れて味を見始めた。

「それでわかるんですか？」

「ええ。もう少し追肥が必要だな。川魚のは駄目だよ。落ち葉と草で作った肥料の方を追肥しないと」

「さすがは若様だべ。すぐに追肥するだ」

「そうだね。早く対処すれば甘くなるから」

土の質を見るのに味見をする。

そんな人が、昔にいたような気がする。

「大変なんですね」

「ただ栽培するだけなら問題ないのですが、甘くするのが難しいのです」

その代わりに、苦労して育てた甘いマロイモはすぐに売れてしまうそうだ。

その人気のせいで、ブライヒブルクにも滅多に入荷しないのだからよほど人気なのであろう。

「おかげで、一日中畑にいますね」

と、こんな感じで彼から説明を受けたのであるが……。

「物凄く罪悪感を感じますね……」

「ヴェル、あの人にトンネルの警備と管理なんて無理」

「完全なミスマッチだよ」

「他の人に任せるべき」

「絶対に引き受けないと思いますわ」

トンネルの前で、オヤツにマロイモの石焼きを造りながら輪になって話をするのだが、エリーゼ達から出てくる言葉は、『ファイトさんに任せるのは無理だし可哀想』であった。

「確かにな。俺も散々苦労したのに、いきなり経験もないあの人に千人も指揮するなんて無理」

内乱で軍の指揮を習ったエルからすれば、いきなりファイトさんが千人もの警備隊を指揮してトンネルの警備と管理が出来たら奇跡という事なのであろう。

「その前に、本人が望まないよな」

「胃に穴が開くんじゃないのか？　あの人」

エルは精神的にもタフなので何とかなったが、ファイトさんは大物貴族を見ると土下座をしてしまうような気の弱さがある。

父親も同じなので任せられず、こうなるとブライヒレーダー辺境伯か王国が強引に所有をするしかないであろう。

「みんな急にいい人ぶってな。マロイモが沢山栽培できそうな広い領地に転封してあげた方が、あの親子は幸せじゃないのか？」

「だよなぁ……」

残された課題を宿題だと持ち帰った、陛下やルックナー財務卿からも連絡は来ない。

これ以上は、お手あげという状態だ。

「お館様、マロイモが焼けました」

「おおっ！　焼けたか！　いい匂いだな」

火の番をしていたハルカが、イモが焼き上がったと報告する。

自家製した石焼機の蓋を開けると、香ばしく甘いが辺り一面に広がった。

この石焼機は、俺の微妙な絵画能力で描いた設計図を参考に、バウマイスター伯爵領に招聘した魔道具職人による逸品である。
高性能の魔晶石により、一度魔力を補填すると長時間芋が焼ける。
石焼に使う石も、俺が丁寧に魔法で同じ大きさにカッティングしたものだ。

おかげでコストが五十万セントくらいかかっているが、美味しい石焼きイモのためには許容できる範囲のはず。
少なくとも、俺は高いとは思わない。

「凄いな。このマロイモ、蜜が垂れている」

マロイモは前世であった安納芋よりも甘みが強く、石焼きにすると蜜が垂れるほどだ。

「蒸かしたものよりも、こちらの方が美味しいな」

「「「「「「「「「甘ぁーーーい」」」」」」」」」

どの世界でも、女性は焼き芋が大好きなようだ。
みんな幸せそうな顔をして食べている。

勿論俺も幸せだ。

「あなた、またお土産に買って帰りましょう」

「そうだな。このイモでプリンやケーキを作ると美味しいかも」

「帰ったら試しに作ってみますね」

その後は、マロイモの美味しさに現実逃避を行い、少し思い直して近場の山で飛竜狩りをして一日を終えたが、肝心の問題は何も解決していない。

それから六日間、アーネストの学術調査が終わるまで、みんなとオイレンベルク領でイモを焼いて食べ、狩りを行い、たまに俺だけは土木工事のために抜けた。

「なあ、ヴェル。これからどうなるの？」

「さあな？」

それを決めてくれそうな大人達は、みんな考えが纏まらないようで連絡すら寄越さない。

「試しに作ったプリンも美味しかったですが……」

「エリーゼの作ったケーキも美味しかったけど……」

「ハルカの作ったキントンとイモヨウカンも美味しかったね」

「でも、それを上回るのが……」

「石焼きイモですわね」

「最高の食材の場合、調理に手間暇をかけるよりも単純な調理方法の方が美味しい事があります」

「私、真理を聞きましたわ」

オイレンベルク領の問題が一向に進まないので、時間が空いた女性陣はマロイモの調理研究に没頭していた。
結論から言うと、焼きイモが至高の調理方法のようだ。

それには俺も賛同する。
プリンもケーキもキントンもヨウカンも、十分に美味しいと思うけど。

「というか、マロイモの調理方法しか進歩してないじゃないか」

「それだけでも進歩したら上等だと思うぞ」

「いや、それは貴族としてどうよ？」

「人間、食べないと生きていけないじゃないか！　トンネルの所有権なんて数十年、数百年で移ろうものだけど、至高の料理方法は、何千年、何万年も人々の記憶に残る文化となるのだ！」

自分でもとてもいい事を言ったと、俺は自分で自分を自画自賛した。
もしかすると、バウマイスター伯爵語録として後世に伝わっていくかもしれない。

「いかにもそれっぽい事を言っているけど、ヴェルだって現実逃避しているじゃないか……」

エルが呆れていたが、何も解決しないままに一週間だ。
やはり、問題が発生する。

「いやあ、内乱のお話を聞かせてほしいって講演で疲れたなぁ」

突然ブランタークさんから連絡があったので『瞬間移動』でブライヒブルクに迎えに行くと、彼は大量の見合い写真を抱えていた。

「ブランタークさん、奥さんを増やすんですか？」

「俺にじゃねえよ、ファイト・フランク・フォン・オイレンベルク殿にだ」

「もうかよ……」

「もうだよ」

さすがに俺でも察しはつく。

つまり、何らかの理由で情報が漏れて、ファイトさんと自分の娘や妹と政略結婚をさせようと企む貴族が現れたのだ。

「誰が漏らしたんです？」

「こういう情報は、なぜか漏れてしまうんだよな。全員が犯人かもしれないし、じゃないかもしれないし」

「そんな事はどうでもいいか……」

見合い写真は、あくまでもオイレンベルク家に来たものだ。

俺達が判断をするわけにはいかない。

ブランタークさんは、ブライヒレーダー辺境伯からの使いだと言ってオイレンベルク卿に挨拶をしてから見合い写真の束を渡す。

少なく見積もっても、三十枚以上はあるであろう。

「あの……バウマイスター伯爵殿？」

「はい」

「どうしましょうか？」

「どうしましょうかって……」

俺が決められるはずがない。

オイレンベルク家に来た見合い話なので、オイレンベルク卿が決めなければいけないからだ。

彼の気弱そうな顔を見たブランタークさんは、顔を反らして溜息をついた。

「（伯爵様、このおっさん大丈夫か？）」

「（大丈夫とは保証できません）」

「今までのオイレンベルク家当主の婚姻などを参考に、受ける受けないを決めれば宜しいかと」

エリーゼが至極当たり前の返答をするが、オイレンベルク卿の不安そうな表情に変化はなかった。

「オイレンベルク家って、ブライヒレーダー辺境伯家の寄子ですよね？」

「はい」

「（その割には、ブライヒレーダー辺境伯がよく知らなかったよう

な……）」

同じ僻地にあっても、バウマイスター騎士爵家はもっとブライヒレーダー辺境伯の記憶に残っていたと思うのだ。

「そりゃあ、先代のせいで商隊を出したり、借金を肩代わりしているんだ。記憶に残るだろう」

過去に迷惑をかけ、その後に沢山迷惑をかけられたバウマイスター騎士爵家は、ブライヒレーダー辺境伯の記憶に残っているというわけだ。

これを、悪目立ちしているとも言う。

「（オイレンベルク領は、今回の件がなければお館様の視界に入らなかっただろうな）」

大リーグ山脈と接した人口三百人ほどの小さな貴族領で、彼らは人に迷惑をかけているわけでもない。

本当に穏やかに、日々平々凡々と暮らしてきたので、忙しいブライヒレーダー辺境伯からすると、逆に手がかからなすぎて記憶に残っていなかったのだと思う。

「でも、貴族家ですから婚姻の斡旋とかあったでしょう？」

「それが……うちは今まで、他の貴族家と婚姻をした事がないのです」

「えーーーっ！　そんな事ってあるの？」

あのバウマイスター騎士爵家でも嫁を迎え入れる時期になれば一

人前に悩むのに、オイレンベルク家はそれをした事がないと言うのだ。

「どこから嫁入りさせているのですか？」

「我がオイレンベルク家を知っている貴族家は少ないですし、こちらも畑仕事が忙しいので他に頼みに行く余裕もなく、近隣の町の商人の娘とか、領内の名主の娘とかですね」

「それで済むのね……」

「咎める人もいないんだね……」

イーナもルイーゼも、貴族としての常識から外れたオイレンベルク家に驚きを隠せないようだ。

普通、跡取りの正妻に貴族家の娘を迎え入れない貴族など問題になるのだが、オイレンベルク領を知っている貴族がいないので問題にする人がいないというわけだ。

「（まさに、ステルス貴族だな……）」

どこかの王太子殿下も、そんな感じではあるのだけど……。

「ヴェル様、ファイト様の婚約者の有無とか聞いておくべき」

「そうだな」

「というわけでいますか？」

ヴィルマに言われて、俺は当事者であるファイトさんの婚約者の

有無を聞いてみる。

「います」

「いるのか……」

ファイトさんは、既に二十歳にはなっているはずだ。
婚約者くらいいても、不思議はないであろう。

「はいっ！　名主の娘で幼馴染の……」

「ファイト様！」

そこにタイミング良く、その婚約者らしき娘が飛び込んできた。
年齢は十六歳くらいであろう。
服装は平民のそれに準じているが、なかなかに可愛らしい娘である。

「マリタじゃないか。どうしたんだ？」

「あの……。おっとうからファイト様が貴族の娘様とお見合いをするって聞いて」

「いや、まだすると決めたわけでは……」

「だども、そんなに簡単には断れねえって。わたすは潔く身を引くだ」

マリタという娘は、自分は潔く身を引くと宣言する。
身を引く必要は正妻になる貴族の娘次第だと思うが、常識的に考

えて正妻にはなれるはずがない。
　生まれてくる子供の継承順位などで揉めないようにするために、正妻に子供が生まれてから妾として入るくらいが常識であろう。

「マリタ、私達は子供の頃に約束したじゃないか。二人で結婚してささやかにこのオイレンベルク領を治めていこうって」

「だども……」

「マリタは、あの時の事を忘れたのか？」

「いんや。ファイト様がまだ四歳のわたすに、『お嫁さんになって欲しい』ってプロポーズしてくれたのは覚えているだ」

「なら！」

「んだども……」

「オイレンベルク領に、他の貴族の娘なんていらないよ！　私はマリタとだけ結婚したいんだ！」

「ファイト様！」

　二人は、まるでメロドラマのようなシーンを展開してからその場で抱き合った。

　ブランタークさんは『そんなの通用するかね？』という表情を浮かべ、エルも同意見のようだ。

　ただ、なぜかエリーゼ達は『いい物を見た』と感動しているよう

だ。

「ファイトさん、今までのオイレンベルク領の慣例に従っても問題ありません」

こういう時に一番貴族の常識を言いそうなエリーゼすら、二人の味方を表明してしまう。

どうやら、幼馴染同士の純愛を間近で見て感情の方を優先してしまったようだ。

「そうよ。このまま他のお見合いは断ってしまえば」

「こんなトンネルの話が出てから急に見合い話を持ってくる貴族なんて無視だよ！」

「ブライヒレーダー辺境伯様経由で話を持ってくるのが卑怯。ここは戦うべき」

「そうですわ！　決めるのはファイトさんなのですから。あなたの男としての度量が問われているのです！」

「ミズホでも、当事者のやる気が政略結婚を捻じ曲げる例もあります！　頑張ってください！」

「みなさーーーん、冷静に考えてくださーーーい」

エルが盛り上がるエリーゼ達を抑えようとするが、あまり効果はなかった。

まさか、真面目なエリーゼやイーナ、ハルカまでもが賛同に回ってしまうとは思わなかったからで、女性陣を説得する言葉が思いつ

かないようだ。

俺も、女性陣全員がファイトさんとマリタの結婚に全面的に賛成するとは思わず、口をあんぐりとさせてしまった。

「ヴェル、お前が止めに入れよ」

「そうだな」

「おっ！　珍しく嫁達に逆らうか！」

「エル君、私はバウマイスター伯爵なのだよ」

まったく、エリーゼまでが感情に流されてしまって。

俺はバウマイスター伯爵であり、この貴族としての慣習を守らないオイレンベルク家を導く必要があるのだから。

「ヴェルの鬼！」

「ルイーゼ、何とでも言うがいい」

「いいかね？　ファイト殿」

「バウマイスター伯爵殿」

覚悟を決めたファイトさんは、マリタを後ろに隠して俺と対峙する。

その守るべきものができた目は、例え相手が俺でも一歩も引かぬという意思を表明していた。

明らかに向こうの方が格好良かったが俺は大貴族であり、時には

悪役や憎まれ役もしなければいけないのだ。

「いいかね？　ファイト殿」

「伺いましょう」

「貴族が自由な恋愛なんて、これ以上の贅沢はないのだ」

「しかし、必ずではない」

「そう。だけど、今のオイレンベルク領の状況を考えればそれは不可能に近い」

トンネルの管理が独自に出来ない以上は、欲深貴族の娘でも受け入れて実家の助けを借りるしかないのだから。

「いいえ。私はその道を選びません！」

「では、どうするのかね？」

「私はマリタと夫婦になって、マロイモの栽培ができればいいのです！　代替の領地を準備していただければ、そこで私達は暮らします」

「ファイト様。せっかく、斜面の畑の土が出来上がってきたんだ。それをわだすのために捨ててては駄目だ」

いや、その畑は多分工事でなくなると思うけど。

何か言いそびれてしまった。

「マリタ、土は十年もあればまた出来るよ。転封先に付いてこない領民もいるかもしれない。貧しい生活になると思うけど、付いてきてくれるよね？」

「喜んで」

ファイトさんとマリタは抱き合い、エリーゼ達は惜しみない拍手を続ける。

ふと見ると、ブランタークさんもいつの間にかエリーゼ達側に寝返っていた。

情勢を見て裏切るなんて、酷いオヤジである。

「ファイトさんの覚悟に感動しました。俺も出来る限りお館様を説得します」

「エルぅーーー！」

そして、ハルカの尻に敷かれているエルも素早く裏切って俺を逆に説得するという。

最初の態度は何だったんだ！

まるで、俺が悪役みたいじゃないか！

ああ、悪役か……。

「あなた、たまには貴族の慣習を外れても構わないと私は思います」

「そうよ。二人が可哀想じゃないの」

「ヴェルの薄情者！」

「ヴェル様、酷い！」

「こういう時にための、バウマイスター伯爵としての力と名声ではないですか！」

「そうですよ！　内乱平定の功績で力があるのですから、ここはお館様の力で押し切ってしまいしょう」

どうやら俺は、すべての女性陣を敵に回してしまったようだ。

「伯爵様、これは流れ的にだな」

「ブランタークさん、裏切るなんてずるいですよ……」

「俺は常に女性の味方だし」

ブランタークさんは、口笛を吹きながら俺から視線を外してしまう。

「お館様は、何が不満なんだ？」

突然エルの奴が鋭く真相を突いてくる。

そう、確かに貴族としての慣習を守るという建前はあったさ。

だが、それ以上に俺には気に入らない点があった。

「年下の幼馴染……」

「えっ？　何だ？　ヴェル？」

「小さい頃に結婚の約束とか、そんな羨ましい奴には制裁だ！」

俺は自分の思いを露わにする。
異性の幼馴染がいて、しかも小さい頃に結婚の約束とか、そんな物語や映画のようなシチュエーション。
一体、どこのリア充なのだと俺は怒りを露わにしてしまう。

「俺なんて！」

ヴェンデリンとしての五歳から十二歳には、完全にボッチで友達すら一人もいなかったというのに。
そして前世であるが、どう記憶を穿り返して女の子の幼馴染など出てこない。
出てくるのは、男ばかりだ。

「かーーーっ！　マロイモの研究のついでに、幼馴染の研究も完璧ですかって！　畜生！　俺なんて！　俺なんて！」

何であろう？
この心の奥底から沸き上がってくる、やり場のない怒りは？
俺は、何が何でもこのカップルの結婚を阻止しないといけないと思ってしまう。

『リア充に試練を！』だ。

「すいません。うちのお館様、たまに変な発作が出るんです」

「気にしないでくれよな。普段はまともなんだが、たまにおかしくなるんだ」

俺の魂の叫びは、エルとブランタークさんにボロソクに言われて

しまう。

だが、俺の実力行使はエルとブランタークさんによって阻止され、俺もなし崩し的に二人の結婚を支援する羽目になってしまうのであった。

第百十六話　結局、こういう解決方法になる。

「結局、そういう結論に至りましたか……」

発見されたトンネルの管理は、オイレンベルク家側の希望により他家に譲渡される事となった。

この場合は地理的な要因により、ブライヒレーダー辺境伯家が管理する事となる。

王国直轄地にすると王家とブライヒレーダー辺境伯家の対立が噂されてしまうので、妥協点として警備と管理の人材は、王国、バウマイスター伯爵家、ブライヒレーダー辺境伯家が均等に出す。

王国警備隊の経費は、バウマイスター伯爵家とブライヒレーダー辺境伯家で分担するなどの条件が出されるはずだ。

生臭い政治的なお話であり、なるほど、オイレンベルク家の人達は嫌がるはずだ。

他の貴族とは滅多に顔を合わせない彼らに、王家やブライヒレーダー辺境伯家との政治交渉など不可能なのだから。

ただその代わりに、ブライヒレーダー辺境伯家はオイレンベルク家がマロイモを栽培できる代替地を準備しなければならない。

今よりも条件がよくて大規模な場所を準備する必要があるし、フアイトさんとの婚姻を希望する貴族達に事情を説明して回る必要もあるであろう。

どう補佐しても、オイレンベルク家の人達にそんな芸当は無理だ。

海千山千の貴族達に翻弄され、おかしな約束でもされると困って

しまう。
結局、ブライヒレーダー辺境伯が何とかするしかなかったのだ。
「こういう予感はしていましたけどね……」
「ここを乗り切れば、大きな利益になりますよ」
「バウマイスター伯爵はいいですよね。ローデリヒさんに任せればいいのですから……」
うちは新興だし、まだ十七歳でしかない俺の領主としての実力など未知数である。
だから、ローデリヒが積極的に動いて勝手にやってくれるので楽であった。
「将来、傀儡にされますかね？」
「バウマイスター伯爵を傀儡に？　無理でしょう」
「俺は、貴族としての仕事をあまりしない駄目領主ですからね」
「いいえ、それは違いますね」
ブライヒレーダー辺境伯は、俺の発言をきっぱりと否定する。
「聞けば、バウマイスター伯爵は内乱時に参謀として事務処理などもしていたとか？　あなたは、その辺の貴族よりもよっぽど頭がいいではないですか。ただ、仕事のリソースが、冒険者や魔法使いの方に割かれているだけです。敗戦知らずで巨大な武勲も持っていますし、よほどのバカでなければバウマイスター伯爵を傀儡にしよう

としません。ローデリヒさんは、極めて有能な方ですしね。人格面でも信用に足る人物です」

俺もローデリヒも、ブライヒレーダー辺境伯からえらく評価されているようだ。

別に俺の頭がいいわけではなく、現代日本の教育制度と商社での仕事が役に立っただけであろう。

そう思うと、現代日本って教育レベルが高かったわけだ。

「そうなんですよね。だから俺は楽ができる」

「楽というのはどうですかね？　私なら、巨大地下遺跡で死にかけたり、一万人の軍勢に魔法をかけたり、ヘルタニア渓谷を解放したり、内乱で主戦力になったりとか嫌ですけど」

改めて他人から言われると、俺達は色々とやっているよなと思う。

「要は、役割の分担というわけです。バウマイスター伯爵が色々と派手に動いて結果的にバウマイスター伯爵家が多くの利益と利権を得る。それを、ローデリヒさんが上手く運用して領地が発展する。ただ……」

「ただ、何ですか？」

「こういうやり方は、初代だからこそ通用するやり方なんですよね」

俺の子供が魔法使いになるかどうかはわからないし、ローデリヒのような全権を持った家宰という存在は、後には災いとなる可能性がある。

次世代からは、色々とやり方を変える必要があるというわけだ。

「ローデリヒさんの事ですから、エリーゼさんが産む予定の後継ぎには厳しい教育を施すでしょうね。あとは、自分の仕事を若い家臣達に分割して後継者を指名、それぞれに教育を施すとか。これで、次世代以降はバウマイスター伯爵の後継ぎが家臣団を使って領地を運営していくわけです」

「恒久的な統治システムの構築ですか」

「領主の権限は強いですけど、領主一人では何もできませんからね。おっと、話が逸れましたね。トンネル利権の譲渡ですけど、私も考えましたがそれはあくまでもオイレンベルク家からの要望があったというアリバイが必要なのですよ」

オイレンベルク家側が、『うちでは無理だ！　だからブライヒレーダー辺境伯家に任せます！』と公式に白旗をあげる必要があった。それがないと、ブライヒレーダー辺境伯は他の貴族達から非難を雨霰と受ける事になる。

「面倒な話ですね」

「貴族は本当に面倒です。王国を混ぜるのだって、警備隊隊長などのポストが増えるのと、彼らの経費は我々が負担するでしょう？そうする事で、王国に利益供与しているのですよ。王国貴族は有事の際には諸侯軍の派遣が義務になっているので、王国に上納金を納める必要がないという決まりを破らないためです」

それは聞いた事がある。

昔は、軍役と領地の規模に比例した上納金の制度があったのだと。

ただ、当時は帝国との長年に渡る戦争が続いていて、その負担の

重さから一部貴族が王国からの離脱を計画した事があったらしい。
その動きは上納金制度を止める事で治まったそうだが、上納金制度をブライヒレーダー辺境伯家が復活させたと言われてしまっては堪らない。

だから、駐留警備隊の経費負担というわけだ。

「こういう時には、教会の方が相手が楽です。ここに巡礼所や教会を建てましょうで済みますから」

あとは、寄付金を出しておけば済むからだ。
良くも悪くも、教会の運営システムは洗練されている。
『俗っぽい』と同義語でもあったが。

「では、オイレンベルク領に行きますか」

思わず長話になってしまったが、俺はブライヒレーダー辺境伯を迎えにきていたのだった。
彼を連れてオイレンベルク領へと戻ると、過大な仕事を押しつけられずに済んだオイレンベルク卿とファイトさんの表情は明るかった。

「ブライヒレーダー辺境伯殿」

「飛竜やワイバーンが飛んで来ず、マロイモの栽培に適した斜面があり、他の作物も沢山作れる代替地ですね。我がブライヒレーダー辺境伯領も、大リーグ山脈に接している場所は多いですからね。探せば必ずありますよ」

「よかった」

ファイトさんは、顔を綻ばせていた。
彼からすれば、トンネルの管理よりもマロイモの栽培なのであろう。

「すぐに新しい領地で土造りを始めませんと。ようやく土造りのノウハウを獲得しましたが、マロイモが今の甘さになるには十年はかかりますし」

「それでしたら、バウマイスター伯爵に土を運んでもらったらどうですか？　その方法で、領地一つ分の畑の土を運んだ事もありますし」

「凄い事ができるのですね。バウマイスター伯爵殿は」

農業で一番面倒なのは、土造りである。
なら、移転時にそれを運んでしまえというのが俺の考え方だ。

そして、それが可能な俺をファイトさんは尊敬の眼差しで見ていた。
今までは怖がられてばかりだったので、初めて尊敬されたような気がする。

「どのみち、オイレンベルク領は大規模に工事をしないといけませんし……」

農地と斜面を削って、トンネルに続く広い道路を作らないといけない。
それを怠れば、トンネルに入る前に大渋滞を引き起こす可能性があった。

山崩れなどの災害対策もある。

他にも、大規模商家に向けての倉庫群、馬車の待機場、休憩所、宿泊施設、飲食店街、歓楽街など。

トンネルの両出入り口近くに、これらの施設を大規模に作る必要があった。

バウマイスター伯爵領側も、既に建築家でもあるレンブラント男爵に依頼を出して設計図を書いてもらっているところだ。

それが出来上がれば、俺は基礎工事で暫く働かないといけない。

建物なども、職人が多い王都で建造させてからレンブラント男爵の『移築』で運ぶという短縮工法がローデリヒの考案で始まっていた。

「トンネルの管理のみならず、そういった開発も合わせると、ますますうちには無理ですね」

「そういう物を作ると、マロイモの栽培は難しいですね」

オイレンベルク卿は自分達の能力の限界を超えていると嘆き、フアイトさんは建設工事をするとマロイモの畑が消えてしまう事を憂慮していた。

「今マロイモの畑がある斜面は、土砂崩れを防ぐために補強工事をしないといけません。土は持って行ってください」

「ありがとうございます」

ブライヒレーダー辺境伯からの好意に、ファイトさんがお礼を述べる。

最初は色々とあったが、これでようやく難題が解決した。
よかったよかったとみんなで喜んでいた時に、再びの難題が突然訪れる。

バタンとオイレンベルク邸の玄関ドアが勢いよく開き、一人の人物が飛び込んできたのだ。

「親父！　兄貴！　正気か！　オイレンベルク家大躍進のチャンスなのに、何嬉しそうに人様に金の卵を譲ってんだよ！」

「「カチヤ？」」

飛び込んできたのは、俺達とそう年が違わないように見える少女であった。
男勝りの口調なのでどんな逞しい女性なのかと思えば、身長は百五十五センチほどしかなく、黒に近い茶髪をツインテールにして膝下まで伸ばしている。

顔も、まるで人形のように整った美少女であった。

「カチヤ、随分と早い里帰りだね。予定では来月だと」

「カチヤ、前に渡した干しマロイモが足りなくなったのかい？」

「それはまだもう少し余裕が……って！　違うよ！　実家がこんな状態だって噂だから、急いで帰って来たんだよ！」

カチヤという少女は、口調とは違って家族仲もよく定期的に実家にも帰省しているようだ。
ファイトさんから干しマロイモの事を聞かれて素直に答えている

ので、意外といい娘なのかもしれない。

しかし、干しマロイモか……。

これは盲点だったな、帰りに買って帰らないと。

「オイレンベルク卿、私の勉強不足で申しないのですが、こちらのお嬢さんは？」

「娘のカチヤです。ファイトの妹になります」

「娘さんですか……」

ブライヒレーダー辺境伯は、自分の寄子なのにオイレンベルク家に娘がいる事を知らなかったようだ。

ただ一つ弁解させてもらうと、それを知っている他の貴族家が一つもなかったのでみんな同罪だとは思うのだが。

「カチヤさんは、外で働いていらっしゃるのですか？」

「おうよ、冒険者としてな」

冒険者だからか、本人の気質なのか？

カチヤは、相手がブライヒレーダー辺境伯でも口調を変えない。

「カチヤ、そちらの方は……」

「ブライヒレーダー辺境伯様だろう？　生憎と、今のあたいは冒険者だからな」

「別に構いませんよ」

ブライヒレーダー辺境伯は、彼女の口調を気にもしていなかった。

確かに、カチヤは一目で冒険者だとわかる格好をしている。

彼女はスピード重視の剣士のようだ。

白いタンクトップとデニム地に似た短パン、防御力を補強したブーツと、その上から薄手の防御用の手甲、胸部用のプロテクター、あとはなぜか鉢金（はちがね）もしていた。

ミズホ公爵領からでも輸入でもしたのであろうか？

武器は細身の長い剣を背中に二本挿しているようだ。

鞘についたベルトが、前側で十字にクロスしていた。

「あれはサーベルだな」

「サーベルかぁ……」

剣の収集を趣味にしているエルが、カチヤが装備する二本の剣がサーベルである事を教えてくれる。

「サーベルって珍しいのか？」

「一応剣の一種だから貴族が使っても問題ないけど、なぜか人気がなくて一段下に見られるな」

通常の剣のように、重厚さがないからだと言われているそうだ。

重厚感のあるサーベルもあると思うのだが、とにかく剣よりも一段低く見られるので貴族で使っている人が極端に少ないらしい。

「似たような扱いの剣に、エストックもあるな。細くて突きが主体だから卑怯に思われるんだよな」

そのせいで、貴族で使っている者はほとんどいないそうだ。
確かに、王都で挿している貴族をあまり見た事がないし、武芸大会でも使っている人は少なかった。

「確かに、あの双剣は軽量化重視だな」

日本刀は違う形の、斬るを重視する剣の形というわけだ。
カチヤは女性で、戦闘方法は軽量化された防具を見るにスピード重視であった。

「あとは、腰の部分を見てみろ」

「短剣？　ナイフ？」

腰のベルトに、小さな投擲用の小剣が十本ほど挿してあった。

「スピード重視の戦闘をするから、遠方から投擲して接近するんだ」

小さなナイフでも、無視すれば自分に刺さってしまう。
特に顔を狙われる事が多いので、対戦相手はみんな顔を狙って飛んでくるナイフを剣で弾くという動作を強要される。
それで出来た隙を突いて、接近を図るのだそうだ。

「なるほどな」

エルの解説に、俺は納得した。
さすがは、剣の才能をワーレンさんに認められているだけの事は

ある。

「ヴェンデリンさん」

カタリーナが俺のローブを引っ張った。

彼女の言わんとしている事はわかる。

それは、彼女が魔力持ちだという事実だ。

わずかに中級には届いていないが、その魔力を剣の腕前に上乗せすれば相当に強いはずだ。

「ちっ、冒険者ギルドで情報を集めないとな」

ブランタークさんが、カチヤを見て舌打ちする。

もしかすると、高名な冒険者かもしれないからだ。

冒険者の情報は防犯上の理由でなるべく秘密にされているが、ブランタークさんなら知己の幹部などから入手可能である。

『蛇の道は蛇』というわけだ。

「バウマイスター伯爵様の子分達か？　実戦経験有るって感じだな」

「大体合っているけど、子分じゃなくて家臣と呼んでほしいな」

「子分って……私は妻ですけど」

「俺は、一応師匠の一人でもあるな」

「すまないね。あたいは冒険者なんだ。多少の口の悪さは勘弁してくれないか」

別に、エル達も気にしているわけでもない。

ただ言っただけであろう。

エルとブランタークさんは、カチヤに女性としては興味ないといった感じだ。

カチヤは見た目は美少女であったが、それはハルカも同じだし、内面もミズホナデシコの鑑だとあのシスコン兄貴が褒めているくらいなのだから。

ブランタークさんも、奥さんの方が好みであろう。

この人は、意外にもおしとやかな女性が好きだし。

「それで、カチヤさんは何が不満なので？」

「何がって……トンネルの利権は誰がどう見てもオイレンベルク家の物じゃないか！　それを寄親だか王国だか知らないが、力技で強引に奪い取るなんて！」

「ですからねぇ……」

どおりで、ブライヒレーダー辺境伯が最初は断ったわけだ。

この世界にはニュースやネットなど存在しないから、トンネルの利権が零細貴族であるオイレンベルク家の物だという噂が流れると、ブライヒレーダー辺境伯家が取り上げるのではないかという憶測が勝手に広がる。

カチヤがそれを心配して戻ってみれば、自分の父親と兄が噂通りにトンネル利権をブライヒレーダー辺境伯家に譲る相談をしていた。

慌てて怒鳴り込んだというのが真相であろう。

「ただ無責任に、通行料だけ取ってウハウハじゃないんですよ」

「そんな事はわかってるさ！」

「本当にですか？」

「おおっ！」

トンネルが人との物の流れを加速させる以上は、負の案件も増える。

違法な薬物や犯罪者などの移動も増えるのだ。

他にも、トンネルはブライヒレーダー辺境伯領とバウマイスター伯爵領を結ぶ重要なインフラとなる。

帝国とは講和を結んだとはいえ、また戦争になればここを塞ぐ破壊工作が行われる可能性がある。

敗死したニュルンベルク公爵一派の残党が、王国と帝国を争わせて再起を目論むためにトンネルをテロの標的にする可能性もあった。

「だから、王国警備隊も混じっているのです。彼らがいるにしても、バウマイスター伯爵家側に権利がある魔導灯管理室などを除くトンネルの半分を、責任を持って警備・管理しないといけない。相応の手間もかかるのですよ」

「それは、オイレンベルク家で準備すれば……」

「それが出来ないから、こういう結論に至ったのですけどね。他にもあります」

出入り口付近の道や、利用者のための周辺設備の整備もある。

利用者の身分や、持ち込む荷などをチェックする税関的な施設の運用も必要になる。

「多額のお金と、人材、ノウハウが必要です。出入り口が、バウマイスター伯爵領側が順調なのに、オイレンベルク騎士爵領側がいつも渋滞では困ります。もしそうなると、王国から職務怠慢で領地を奪われますよ」

「ううっ！」

ブライヒレーダー辺境伯からの鋭い指摘に、カチヤはタジタジとなってしまう。

「それでも兄貴が……オイレンベルク家が管理する方法だって……」

「ない事もないですね」

「あるじゃないか」

方法があると知って、カチヤの顔に笑みが戻る。

「それは、ファイト殿がこのお見合い話を受け入れる事です」

ブライヒレーダー辺境伯は、机に積まれた大量の見合い写真を指さす。

「資金、人材、ノウハウを持っている子爵家以上が多いですね。ファイト殿の奥方と一緒に、その実家から資金と人材が送り込まれて彼らがトンネルを維持します。看板はオイレンベルク家ですけど、実態は奥さんの実家に乗っ取られたというわけです」

実家が乗っ取られる。

その可能性に、カチヤは苦い表情を浮かべていた。

「ブライヒレーダー辺境伯家としては嫌な状況ですが、我慢はできます。王国軍も駐留するから変な事にはならないでしょうし、奥方の実家側も妙な事はしませんでしょう。何しろ、オイレンベルク領はブライヒレーダー辺境伯領に囲まれていますし」

彼らはトンネルの利権が欲しいのであって、ブライヒレーダー辺境伯家の利権に嘴を突っ込みたいわけではない。

無用な衝突や対立は避けたいと願うわけだ。

「ちなみに、ファイト殿に奥方を送り込むという案では我らブライヒレーダー辺境伯家が有利です。何しろ、オイレンベルク家はブライヒレーダー辺境伯家の寄子ですし」

寄親が寄子の跡取りに奥さんを紹介すると言えば、他の貴族は黙るしかない。

その結果、ブライヒレーダー辺境伯家の縁戚か仲がいい寄子から資金と人材が入ってきて、実質オイレンベルク家は乗っ取られるわけだ。

「世間への評判が悪いから避けたい方法なんですけど、もしファイト殿が他の貴族家から奥さんを迎え入れると決意するならば、その策を強行する事も考えました。結果は、オイレンベルク卿とファイト殿が堅実で、最良の選択をしてくれたのでよかったですけど」

こういう事情を聞くと、ますますトンネルの管理をオイレンベルク家が単独で行うのは困難だと感じた。

「一言で言えば、身の丈にあった選択をですな」

「それもありますし、トンネル周辺の工事をすると大半の農地を潰さないと駄目ですから……」

「兄貴！　そんな儲からない農業よりもトンネル管理だろうが！」

「農業は人の基本だよ。食べないと人は生きていけないのだから。それに、カチヤもマロイモが好きでしょう？　帰郷の際には、必ず大量の干し芋を持って帰るし」

「マロイモなら、トンネル管理で儲かったら他に農地を買えばいいだろうが！」

農業とマロイモ栽培で細く長くが基本の兄に、トンネルで管理でオイレンベルク家の躍進をと考える妹。

実家に残っている兄は保守的で、実家を出た妹は新しい事に挑戦していきたいみたいな感じであろうか？

「カチヤさん、残念ながらそれは出来ません」

「周囲は全部、ブライヒレーダー辺境伯領だからか？」

「それもありますけど、貴族同士での土地の取引きは王国から禁止されていますので」

「そうなのか？」

「えっ？　知らなかったのですか？」

「ううっ……」

それはそうだ。

勝手に売買されて領地が増えたり減ったりすれば、貴族を管理する王国側としても堪らないであろう。

騎士爵領が土地の買収でいつの間にか伯爵領規模なったりすれば、王国の貴族管理政策において重大な支障が出るであろうし。

「勝手に土地なんて売ったら、王国から罰せられてしまいますから」

「土地の交換はいいのかよ！」

「それは王国が許可しますので」

貴族法の大本である王国が許可をすれば、法に触れる行為も例外として黙認されるわけだ。

「畜生！　ずるいぞ！」

「ずるいって……これは、オイレンベルク卿とファイト殿が現実を見て判断した決断でして、最善に近いと思うのですが……」

「親父！　兄貴！　ここは踏ん張れよ！　上手くやれば、男爵どころか子爵にもなれるぞ！　ここで諦めてどうするんだよ！」

ブライヒレーダー辺境伯に論破されてしまったカチヤは、今度は矛先を父親と兄に変えて二人に気合を入れようとした。

理論的に論破されたので、感情に訴える作戦に出たようだ。

「エリーゼ、これは、故郷を失う悲しさから意固地になっているのかな？」

俺は、カチヤが感情的なのは故郷を失うからだと思っていて、その正否をエリーゼに尋ねてみる。

「トンネルの管理が出来れば、オイレンベルク家は躍進する。自分は家を出ている人間だけど、実家が躍進してくれれば嬉しい。こんなところだと思います」

「また面倒な……」

カチヤが出てこなければ、話は解決していたのに。

俺は運命の神を呪ってしまう。

「兄貴が嫁を迎えると駄目なんだろう？　だったら、あたいが婿を取ってそいつを責任者にしてトンネル関連の仕事を任せようぜ」

「（なぜそうなる……）」

俺は小声で、カチヤの意味不明な判断を愚痴った。

そんな変則技を使っても、オイレンベルク家が傀儡化する事実に変化はないのに。

ブライヒレーダー辺境伯も、露骨に顔を顰めさせていた。

「貴族家の娘としての立ち位置に戻る。おかしくはないのよね……」

イーナの言うとおりではある。

どこかの貴族家に嫁ぐべきであったカチヤは、オイレンベルク家の特殊性によって家を出て冒険者になるという自由な行動が出来た。

それが、本来の立ち位置に戻るだけなのだから。

「というわけで、あたいに有能でオイレンベルク家のために頑張る婿を紹介してくれ。寄親のブライヒレーダー辺境伯様」

「なっ！」

いきなりわけのわからないお願いをされて、ブライヒレーダー辺境伯は混乱した。

カチヤの見当違いな策のために、トンネルを巡る情勢は余計に混乱していく事となる。

「ただいま」

「お館様、あの娘っ子の情報をもらってきました」

「ご苦労様です」

結局、カチヤの乱入で振り出しに戻ってしまった。

このままオイレンベルク卿が当主権限でカチヤを黙らせればいいと思うのだが、それをするとあの暴走小娘の事なので独自に婿探しを始める可能性がある。

こういう混乱に付け入って利益を得ようと考える貴族は多いから、小娘一人でも注意が必要だとブライヒレーダー辺境伯が言う。

最悪、カチヤと彼女と組んだ貴族による当主押し込めが発生しかねない。

ファイトさんも、気が強い妹には弱い部分があるようだ。

押し切られてしまう可能性もあった。

『カチヤを納得させないと』

と言って、ファイトさんはオイレンベルク卿と共に説得を続けている。

その間に、ブライヒレーダー辺境伯はブランタークさんにカチヤの情報を収集するように命じた。

俺がブランタークさんを、『瞬間移動』で王都にある冒険者ギルド本部へと送ったのだ。

『ちょいとグレーゾーンだから、伯爵様は目を瞑ってくれるとありがたいな』

トラブルを避けるために、冒険者ギルドは冒険者の個人情報の流出を避ける傾向にある。

特に稼ぐ冒険者ほどそれが顕著で、それはおかしなタカリや犯罪の被害に遭って稼げなくなると、ギルドが大損失を受けるからだ。

『よう、オイラリー殿はいるか？』

ブランタークさんは冒険者ギルド本部の裏口から入り、対応した若い女性事務員にある人物の名を告げ、出てきた初老の男性と内緒話をする。

『あまり詳しい情報は出せないぞ。ブランターク』

『それがな……』

『そんな事になっているのか。あの娘にそういう頭を使う仕事は無理だぞ。しょうがない……冒険者に戻るように動いてくれるのなら……あと……』

『安心しな、オイラリー殿。情報源は秘匿するから』

『懲罰会議はゴメンだからな。あとで一杯奢れよ』

『それは任せてくれ』

オヤジ同士の話し合いの後に、ブランタークさんは一枚の書類をもらった。

それを持って、俺達はオイレンベルク領に戻ったわけだ。

「それで、彼女はどうなのです？」

「まずいです」

ブランタークさんが貰って来た資料をブライヒレーダー辺境伯に見せると、途端に顔を渋くさせる。

「かなり稼いでいますね……」

「資金有りか……」

カチヤが強気の理由がわかった。

彼女は冒険者として稼いでいて、結構な自己資金があるのだ。

「王都の冒険者予備校を卒業して、十五歳から四年間で一千万長者を超えていますか……」

なぜ、これほどの逸材がブライヒレーダー辺境伯の目に留まらなかったのかと言えば……。

「登録名がカチヤのみですか……」

実家の情報を一切周囲に言わず、南部の田舎村の出だとしか言っていない点にあった。

更に、彼女は女性なので家臣にはできず、貴族も詳しくカチヤの事を調べようとは思わない。

嫁に迎え入れるにしても、あの男勝りの口調と強さでは相手の方が嫌厭してしまう。

貴族の娘だと公表していなかったから、『妾にしてやる』ではカチヤの方が砂を蹴って断るであろう。

「どうして貴族だって言わなかったの？」

「『冒険者に出自なんて関係ねぇ！　稼げれば偉いんだ！』が口癖なんだと」

「正論だけど、面倒そうな人」

ヴィルマの感想に対し俺達は全員で首を縦に振ったあと、続けて一斉にカタリーナに視線を向ける。

「なぜ私を見るのです？」

俺たちに見られて、カタリーナは居心地が悪そうな表情を浮かべる。

どうやら彼女は、最初に俺達と出会った時のトラブルを忘れてし

まったようだ。

「初見が面倒な部分が一緒」

「さすがはヴィルマさん……容赦がありませんわね……」

今日も、ヴィルマの毒舌が冴えわたっていた。

カタリーナが顔を引き攣らせる。

「そういう性格だから、自分が優秀な婿を受け入れてトンネルの経営を行うつもりなのでしょうか？」

「一千万セント以上の資金があるのでしょう？　なら、強気になりますよ」

いつの世でも、どこの世でも、何よりも偉いのはスポンサー様である。

ブライヒレーダー辺境伯も、それは誰よりも理解していた。

「自己資金から必要経費を捻り出すか」

「冒険者を続けて稼げば、追加の資金も出せるでしょうからね……ただ、それで上手くいったとしても……」

紐付きでないか、紐が細い優秀な婿を入れたとしても、ここで兄と妹との対立が発生する可能性があった。

カチヤが資金稼ぎのためにオイレンベルク領を留守にする時間が長ければ長いほど、その婿と集めてきた人材が、ファイトさんや前からの領民達と対立する可能性がある。

「オイレンベルク領の方々は農業が好きだから残っているのに、みなさん開発で農地を奪われますし」

やりたくもない仕事をやらされた挙句に、余所者達と次期領主の妹とその婿が上から命令をくだす。

暴発は必至だと、エリーゼは顔を強張らせる。

オイレンベルク領は、昔のバウマイスター騎士爵領とは違うのだ。

その気になればすぐに領地を出て他の仕事を選べるという点で、そんな彼らから農業を奪うのは大変に危険であった。

「カチヤって、そんなに稼いでいるのですか。凄いですね」

「情報によると、バウマイスター伯爵様達は例外としても、若手のホープという扱いか。『神速のカチヤ』と呼ばれているらしいな」

スピード重視で、魔物をサーベルで切り裂く。

魔法は不得意だが、魔力でスピードを上げるのが得意で、魔物の首筋などを狙って一気に切り裂くらしい。

「そんなわけで、素材の状態がいいでの評判だと書いてあるな。得意な魔物はワイバーン。待ち伏せして、一気に首筋を切り裂く」

その方法は飛竜だと通用しないが、ワイバーンだとスピードを魔力で増したサーベル攻撃ならいけるかもしれない。

それだけの自己資金を持つカチヤなので、サーベルもいい物を使っているであろうからだ。

「それにしても、カチヤさんはどうやって婿を探すのでしょうか？」

カタリーナは、カチヤの直情的で場当たり的な行動に疑問だらけのようだ。

「冒険者としてのツテで？」

「冒険者として求められるものと、領地開発とインフラ維持に求められるものは違いましてよ」

確かに同じならば、とっくに婿を連れてきているはずだ。

となると、カチヤは貴族側の人材を見繕わなければいけない。

「ローデリヒさんのような人を探す？」

「ルイーゼさん、ローデリヒさんのような人材はそう簡単に見つかりませんわよ」

「だよねぇ」

最初は何となく雇い入れたが、あれほどの逸材はそう簡単に見つからないのも事実だ。

「何かツテがあるのでしょうか？」

ブライヒレーダー辺境伯も首を傾げていたが、やはりカチヤは独断専行型で行動力が過多のようだ。

俺達の度肝を抜く方法で、婿探しを宣言するのであった。

「貴族の諸君！　オイレンベルク領の情勢は知っているな！　では、単刀直入に言う！　私の婿になりたい者は、私と戦って勝てる者のみである！」

王都の中心地で、カチヤは多くの観衆を前に婿探しの条件を高らかに叫ぶ。

平民達からは大きな歓声が上がっていた。

何か面白い事が始まると思ったからだ。

「極秘裏に進めていたトンネルの件が……」

逆に、ブライヒレーダー辺境伯は顔面蒼白だ。

ややこしい政治と利権の話だから極秘裏に進めていたのに、カチヤが全て喋ってしまったからだ。

これで、搦め手は全て封じられたのだから当然であろう。

「あのカチヤさん。一見バカそうに見えて、実は色々と計算して動いていますか？」

カチヤがトンネルの件を世間に公表してしまったがために、トンネルを誰が管理するか平民達に注目される事となる。

貴族がよく使う、搦め手や裏技を全て封じてしまったのだ。

計算してやっているのなら、実に大した手腕だと思うのだが……。

「ただ勢いで動いているだけだと思う。動物と同じ」

「ですよねぇ……」

ヴィルマの容赦ない毒舌に、ブライヒレーダー辺境伯は納得の表情を浮かべた。

「トンネルの管理なのに、カチヤさんに勝てないと駄目なの？　おかしくない？」

「それが、おかしくないんですよ。イーナさん」

候補者を減らす目的があるのだそうだ。

家柄自慢だけで、実家と共にオイレンベルク家の乗っ取りを謀るようなバカを排除する狙いもあるらしい。

「用件に沿う人材を広範囲で探せば、それなりの数はいるものです」

「それもあるけど、あたいはこの通りに気が強いからな。あたいを抑えつけるくらいの旦那が欲しいじゃないか」

発表を終えて戻ってきたカチヤが、婿を戦闘力で選ぶ理由を俺達に向けて話す。

文武両道で、コネも持っている。

そんなリア充、本当に存在するのであろうか？

魔法しかない俺には、そんな天才の存在自体が理解できなかった。

「トンネルの管理を行える能力と、自分を超える強さねぇ……。ちと贅沢ではありませんか？」

「この国は広いんだ。一人くらい、そういうのがいそうじゃないか」

気が強い自分を抑えられるという部分に、何となくカチヤの好みの男性のタイプも混じっているような気がする。

「（何というか……強さが基準なんだな……）」

女だてらに実家を出て冒険者になるくらいなのだから、相当に気は強いのであろう。

あとは、基本的に他人と自分とを比べる時に、戦闘力で計る人なのかもしれない。

「（実は、戦闘ジャンキー？）」

「その条件だと、力自慢の『脳筋』しかこないと思うけどね」

ルイーゼが、脅すわけではないが、カチヤに忠告めいたことを言う。

「ですから、『貴族に告ぐ！』なんですよ」

トンネル管理の人員を揃えられるコネも持つという条件で、さり気なく同業者の冒険者は阻害している。

いくらカチヤより強くても、トンネルの管理が出来なければ意味がないからだ。

「商人の子弟は？」

「ルイーゼさん、カチヤさんは貴族の娘なのです。降嫁ならともかく、入婿が商人では駄目なのです」

ブライヒレーダー辺境伯は、ルイーゼに商人が駄目な理由を説明した。

「厳しい条件だなぁ……」

カチヤとしては、厳しい選考条件を貴族達に強気で発表して主導権を握りたいようだ。

「それだけのものだからな。あたい達が主導権を握り続けるには、このくらいはしないと」

見栄でも、強気の態度を崩さない。

小身の貴族としては、これが唯一できる大物貴族達への対抗手段なのかもしれない。

「策があって結構だけど、カチヤ殿が勝負を行うコロシアムの予約は俺がしないと駄目なんだけどね……」

誰が管理するにしても、それが決まらないとせっかく開通したトンネルが使用できない。

結果、俺が王城に行って例のコロシアムの予約をする羽目になる。

陛下達にも、詳しい事情を説明しないと駄目であろう。

「バウマイスター伯爵様、暫く世話になるぜ」

気軽に頼んでくれるが、もう一つ婿決め武芸大会が開かれるまで、カチヤを王都バウマイスター伯爵邸で預かる事になった。

婿決め武芸大会は王都で行われるし、カチヤの独断は父と兄との意見の対立を生んでいて、実家には泊まらないと宣言したからだ。

ブライヒレーダー辺境伯としても、今の時点で彼女を預かる義理など存在しない。

「それはゴメンだな。何か企まれると困るからな！」

女冒険者が、一流になってここまで稼いでいるのだ。
誰よりも疑り深くなって当然かもしれない。
ただ、うちが何かを企む可能性も……ローデリヒもみんなも忙しいのを思い出した。
俺は意外と知恵が回るカチヤに対し、あとで必ず文句を言ってやると決意するのであった。

「俺は王城に向かいます」

「大変だな、伯爵様」

「本当に、何でこうなるのかな？」

俺は首を傾げながら、護衛役のエル、ブライヒレーダー辺境伯、ブランタークさんと共に王城へと向かう。
陛下との面会を希望すると、すぐに謁見の間へと通された。

カチヤの大胆な口上は、王城の方でも話題になっていたらしい。
陛下の横には、導師、ホーエンハイム枢機卿、ルックナー財務卿、エドガー軍務卿などのお歴々が全員揃っていた。

「バウマイスター伯爵よ、困ったじゃじゃ馬が現れたの」

陛下の言う『じゃじゃ馬』とは、勿論カチヤの事だ。

父と兄の意見に逆らい、出来るかどうかもわからないトンネル管理に手を挙げ、そのパートナーとなる自分の婿を民衆の前で堂々と募集する。

その行動は素早く大胆で、一見無鉄砲にも見えるのだが、今まで碌に名前も知られていなかった零細貴族家の戦い方としては間違っていない。

カチヤは、『世間からの目』というものを味方にしたのだ。

「おかげで、全ての搦め手を封じられたの」

「陛下も、王族の方々を婿として送り込む案をお考えになられたので？」

「その手を考えなくもなかったが、警備隊が費用負担ゼロで置ける方が重要じゃの。ブライヒレーダー辺境伯家との仲を勘繰られるのは、王国としては嫌なのでな」

「痛くなくても、腹を探られるのは嫌ですね」

ブライヒレーダー辺境伯も、陛下の意見に賛同する。

それが本心かは知らないが、共にそういう認識があるのは確認できた。

「というわけで、うちが管理しようかと思った矢先に、あのじゃじゃ馬が現れまして」

「しかもあのじゃじゃ馬、厳しい条件を出すものよの」

あの完璧超人募集要項には、俺も絶句した。

「王族に、そんな者はおらぬわ」

「代々武芸が駄目なブライヒレーダー辺境伯の一族に、あのじゃじゃ馬に勝てそうな者はいませんよ」

「有象無象を減らすのが狙いであろうが、困った条件を並べ立ててくれる」

腕の立つ代理人を出すのも禁止とカチヤは宣言して、それを聞いていた民衆は面白がって歓声をあげていた。

『あのアホ公爵と同じ事をされても興ざめだからな』

『あの時は、バウマイスター伯爵様の魔法が凄かったけどな』

民衆からすれば、偉い貴族様なのだから代理人なんてセコい事を言わずに自分で戦えよとカチヤに賛同したわけだ。

前に俺と戦って無様を曝したヘルター公爵の件で、代理人を出し難い空気が作られてもいた。

陛下からすると、それも頭が痛いようだ。

カチヤに勝てそうな貴族の子弟で、コントロールが効きそうな者に覚えがないのであろう。

「実家のコントロールを受け付けないで、あのじゃじゃ馬に勝てる。そういうのは扱いが面倒かもしれぬからの」

元々、跡取りがカチヤに勝負など挑むはずがない。

予備の次男や、いらない三男以下ばかりが出るので、カチヤに勝てても彼女と組んで実家を利用するだけして反逆する可能性もあった。

「そうなると、その実家とトラブルになり、トンネル周辺が騒がしくなる可能性もある。不安定要素は多くは必要ないのだがの」

「ワシらからすれば、ブライヒレーダー辺境伯家か、他の貴族の紐付きの方が扱いが楽だからの」

ルックナー財務卿クラスになると、そんな小さな貴族家の興亡などどうでもいい。

ただトンネルが安定して使用されて、王国経済にプラスになればいいのだから。

彼らからすれば、カチヤは土壇場で現れた反逆者と同じなのだ。

「本人がやりたいと言うのであれば、任せればいいのである」

「それで失敗したらどうするのだ？」

「ルックナー財務卿殿。その前に、貴族のもやし共にそのじゃじゃ馬に勝てる者がいるのであるか？　某はそれだけが心配である」

導師の意見は、ある意味一番辛辣だ。

カチヤに勝てる貴族の子弟はいない可能性が高いと言っているのだから。

「一人くらいはいるであろう。そこまで言うのであれば、導師が出ては如何かな？」

「元より資格もないが、某はああいうじゃじゃ馬は苦手なのでな」

導師ならカチヤに余裕で勝てるであろうが、彼が陛下の傍を離れて在地貴族になるはずがない。

ルックナー財務卿とてそれはわかっていると思うが、半分嫌味で言ったのであろう。

「某は、普段はおしとやかな女性が好きなのである」

意外にも、導師の奥さん達はそういう女性ばかりだ。

エリーゼもお気に入りの姪で、実は導師はそういう女性にモテるらしい。

人は、自分と正反対の資質を持つ異性を求めるのかもしれない。

「何とも不安な話ではあるな。一応王族を何人か参加させてみるかの。勝てれば問題ないのだから」

「陛下、勝てるのでしょうか？」

「一応軍人で、剣の腕はなかなかというのが数名おる。これは賭けじゃの」

その王族達も軍人をしないと居場所がない立場で、それでもカチヤに勝てれば王国からの支援が期待できるというわけか。

「貴族達は、何も言わないでも勝手に参加者が集まるであろう。ところでバウマイスター伯爵よ、そちらのトンネル開通の準備はできておるのかな？」

「はい、予定通りに」

問題があるわけがない。

ローデリヒが計画を立て、俺が基礎工事で明日から扱き使われるのだから。

むしろ心配なのは、揉めている反対側の方だ。

トンネルは、両出入り口が開通しないと使えないのだから。

「公にされた以上は、民達もある程度は納得する結論を出さぬとな。一週間後に、コロシアムで試合形式の婿選び戦を行う。余が準備をしておこう」

こうなっては、カチヤを倒せる強い貴族に期待するしかない。

陛下達もトンネル開通に関するゴタゴタに巻き込まれ、その準備に奔走する事となる。

「エル、どうだ？」

「うーーーん。駄目っぽいな」

カチヤの婿を選ぶ武芸大会の開催が決まり、王国中の貴族が続々と参加者を連れて王都入りしている。

みんな、トンネル利権を得ようと気もそぞろのようだ。

ここは是非に自分の子弟を婿入りさせ、美味しいトンネル利権を得たいのであろう。

他の一族の食い扶持にも関わるので、みんな必死にコロシアム内で実戦に備えた練習をしていた。
陛下が許可を出してコロシアムを練習用に開放したのだ。

代理人が不可なので本人達が剣を振るっているが、それを見たエルの表情は冴えない。

「勝てそうな、騎士団の人達とかは出ないのか？」

「そういう人だと、勝ててもトンネル管理の人員を出せないだろうが。ワーレン師匠（せんせい）なら勝てると思うけど、あの人は出ないだろうな」

勝てそうな人だとトンネル管理の人員を出せず、出せそうな貴族の子弟でカチヤに勝てそうな人はいない。
そんな状況を知り、エルは溜息をついている。

「あのじゃじゃ馬は、強いものな」

「ああ、あんな強い冒険者がいたんだな」

俺の屋敷に居候している関係で、カチヤは剣に優れたエルに勝負を挑んだ。
とりあえず戦ってみて、それで相手を判断する。
こういう人は、物語では一定数いるのかもしれない。
現実にいたら鬱陶しいので、エルも内心では面倒臭がっているように見える。

『思った以上に強い！　硬い！』

『防ぐのに精一杯で、なかなか攻撃できないな！』

王都バウマイスター伯爵邸の庭で行われたエルとカチヤの模擬戦闘は、スピードで翻弄しながら攻め続けるカチヤと、その攻撃を防ぎながらたまに的確な反撃を行うエルによって千日手となった。

基礎能力では魔力持ちであるカチヤの方が上だが、エルが内乱等で得た経験を利用して上手く凌ぎ、隙を見て反撃しているという構図である。

『エルヴィン殿は強いな！』

『カチヤは対人戦闘の経験がほとんどないようだな。その隙を何とか突けたぜ……』

結局、二人の勝負は引き分けに終わった。

『バウマイスター伯爵家には、強そうなのが多くていいな』

なぜか嬉しそうなカチヤであった。

エルのみならず、俺の妻達とも戦いそうな顔をしている。

『ただなぁ……俺よりも、うちは女性陣の方が強いから……』

エルのボヤキは、カチヤには聞こえなかったようだ。

続けて、バウマイスター伯爵家の女性陣に勝負を挑むカチヤであったが、ここで彼女は立て続けに負ける事になる。

『……そんな……あたいの方がスピードはあるのに……』

『スピードがあるという事は、その分動きを単純化する必要があります。ある程度目で追えれば、あとは先読みと気配で何とでもなります』

まずは、魔力はエルと大差ないが刀術の達人であるハルカと戦い、十分ほどで死角から首筋に刀身を添えられて敗北した。

『年下なのに、凄い技術だな』

『私は、三歳の頃から刀術を習っていますから』

『そうなのか……あたいなんて、剣の師匠すら碌にいなかったからなぁ……』

オイレンベルク卿が剣を振るっている場面など想像もできないし、ファイトさんも同様であろう。

聞けば、共に武芸大会にも出た事がないとか。

そんな環境の中で、カチヤが本格的に剣を持ったのは成人後であったらしい。

幼少の頃から行っていた農業の手伝いが、彼女の驚異的な身体能力の元となっていたわけだ。

『バウマイスター伯爵様』

カチヤとの勝負を終えたハルカが、俺に話しかけてくる。

『カチヤさんですが、武芸大会までこのお屋敷にいるのですよね？』

『あと五日くらいだけど』

『それでも、まずいです』

『えっ？　何で？』

俺には、ハルカが抱く懸念がわからなかった。

『成人するまで剣など碌に持った事もなく、高速化魔法を使って斬りつけるのみであの強さですよ。さっきエルさんと戦ったせいで、私が戦った時にはわかるくらい強くなっていました』

なまじまともな剣術の経験がないだけに、エルやハルカのような熟練者と戦っただけで、すぐに経験を吸収して強くなってしまう。

このままこの屋敷で模擬戦闘を続けると、カチヤはもっと強くなってしまうとハルカは危機感を覚えているようだ。

『今の時点でも、彼女に勝てる者が出るか不安視されているのに……』

『相手が強ければ強いほど、向こうは得る経験が多いからな。というか、完全な独学でよくあそこまで強くなれるよな……』

エルも、カチヤの底の知れない才能に気がついたようだ。

『とはいえ、イーナ達に断れとも言えないだろう』

ただの練習や模擬戦闘なのだから。

そして、ハルカの嫌な予感は現実のものとなる。

『負けたぜ！　強いなイーナは。やっぱり、子供の頃から槍術をや

っているのか？』

『はい、物心ついた頃にはもう槍を持っていました』

『凄いんだな。それと、あたいに敬語なんて不用だぜ』

自分よりも強い者と戦って経験を積んで強くなる。

それが楽しいらしく、カチヤはイーナの槍術にあしらわれても、ルイーゼの妙技に翻弄されても、ヴィルマの剛力に押されても、とても楽しそうであった。

『ルイーゼも子供の頃からか。羨ましいよな』

『でも、カチヤが強いのは生まれついての身体能力と、農作業で得た頑強さのせいだと思うよ』

『それもそうか。子供の頃は、親父と兄貴に斜面の畑ばかり耕させられてな。当時は、『こんな領地絶対に出て行ってやる！』って思ってたけど』

オイレンベルク家では貴族でも農作業を行うのが家風のようで、カチヤも子供の頃は農作業ばかりしていたと話す。

『ヴィルマも強いしな。あの大規模な帝国内乱で活躍したんだから当然か。義父のエドガー軍務卿に鍛えられたとか？』

『私は、先生が付いての鍛錬は十歳を過ぎてだから遅い方。狩猟は、五歳からしていたけど……』

『それも凄い話だな。強いのが納得いくぜ』

貴族的には腹が立つ事をしてくれたカチヤであったが、こうやって実際に接してみると性格がサッパリとしていて付き合いやすい。
模擬戦闘で負けても恨み言などは言わず、相手を褒めて自分も頑張ろうとする。

彼女がトンネルの件で意固地なのは、実家が弱い存在だから自分なりにどうにか守ろうと懸命だからなのであろう。

『私も戦えたらいいのですが、生憎と戦闘は苦手ですので』

『エリーゼの治癒魔法は凄いけどな。あたいなんて魔力量も少ないし、使える魔法は簡単な『身体強化』と『加速』だけだぜ。簡単な怪我とかを治せたら、もっと強くなれるのに』

カチヤは、エリーゼ達ともすぐに仲良くなった。
朝は庭で模擬戦闘がメインの訓練を行い、それが終わるとエリーゼがお茶や食事を出してみんなで食べる。
昼は、俺はトンネル関連の工事でいない事も多かったが、独自に鍛錬をしたり、エリーゼ達とお茶を飲んだり、女性だけで王都で買い物を楽しんだりしているようだ。

『エル、トンネルの当事者である俺は早期開通に向けて工事で忙しいのに、なぜもう一方の当事者であるカチヤは遊んでいるのかな？』

『ヴェル、俺もそう思わんでもないが、女性同士が楽しそうにしているところに口は出さない方がいいぞ』

カチヤは武芸大会まで鍛錬に遊びにと楽しそうなのに、俺はバウマイスター伯爵領側のトンネル工事で忙しかった。

ローデリヒ立案による、鬼の開発計画が進んでいたからだ。
護衛で工事についてきたエルに、思わず愚痴を溢してしまう。

『トンネルの件が決定したら、ヴェルが急ぎ反対側の工事に参加できるように、先にバウマイスター伯爵領側の工事を済ませるだっけか？』

トンネル出口と近くにある街道を繋げる道路工事に、トンネル通行者向けの倉庫や宿泊施設、商品の取り引き場などの建設をスムーズにするため、近くの土地を均したりと俺は忙しかった。

そしてそんな日々が何日か続いた後、遂に武芸大会が目前に迫った。

『エリーゼは料理も上手だな。あたいは実家の田舎料理と、冒険者だから雑な野外料理しか作れないけど』

『今度、習ったら如何ですか？』

『そうしようかな。結婚するとなると、もう少し色々と作れた方がいいかもな。このお屋敷で出る料理は本当に美味しいし』

カチヤは、バウマイスター家で出る料理を気に入ったようだ。

今回の騒動は、当事者以外からすれば楽しみなイベントでしかない。

コロシアムで行われる武芸大会に向けて王都には多くの貴族とその関係者に、観戦を希望する平民達も集まって、お店などは売り上げ増で嬉しい悲鳴をあげていた。

その観光客の中には、テレーゼも混じっている。
彼女は自分で泊まる場所を探すと言ったのだが、彼女の立場を考えるとうちで保護するのがの当然という事で、王都バウマイスター伯爵邸に滞在していた。

『そうか。であれば、妾が懸命に作った甲斐があったの』

『テレーゼさん、大分上手になったわね』

『先生がいいからの。しかも、二人もおる』

テレーゼと共に、アマーリエ義姉さんも王都屋敷に滞在していた。
面倒事ではあるが、結局俺も反対側のトンネル利権の話なので他人事な部分もある。
そこで、俺の世話役という名目でアマーリエ義姉さんも連れて来ていたのだ。
彼女は、エリーゼと共にテレーゼに料理を教えていた。

『このお屋敷は、バウマイスター伯爵様の奥さんが多いよな』

『そうかえ？　伯爵でこの人数なら普通であろう』

元公爵であり、帝国貴族にも知己が多いテレーゼからすれば、俺の奥さんの数など平均値でしかないと思っている。
父親であるオイレンベルク卿に一人しか奥さんがいないカチヤからすれば、複数の奥さんを持つ貴族は驚きなのかもしれない。

『うちの親父は特殊だったのか……』

『そうよな。普通は、正妻に子供が生まれなかったらとか考えるか

らの。貴族家同士の繋がりもあるから騎士爵でも最低は二人、その内一人は名主や商人の娘にして序列をつけるのが普通かの』

『それで、余った子供を外に放り出しか。あたいは自ら望んで冒険者になったけど、仕方なしに冒険者をしている貧乏貴族の子供は沢山いたぜ』

『子供の数をちょうどよくするのは難しいからの』

足りないよりは、余っていた方がいい。

病気などで死ぬ子供がいる以上は、余分に子供を作っておくのが貴族家の安全保障政策であった。

『元公爵様は言う事が違うよな。だから、バウマイスター伯爵様の愛人なのか』

『えっ？』

『ほう、そんな噂が流れておるのか』

驚く俺とは違って、テレーゼは楽しそうな表情になる。

『流れてるぜ。帝国内乱で大活躍したバウマイスター伯爵様は、新皇帝陛下のライバルであった元フィリップ公爵様を戦利品としてもらって囲っていると』

『いや、色々と政治的な事情で預かっているだけなのですが……』

カチヤが語る世間の噂に、俺は冷や汗をかいてしまう。

『表向きはそうでも、実際は……ってなるのが噂だし、噂も時に真実を突く事があるからな』

そう言ったカチヤの視線は、アマーリエ義姉さんにも向いていた。

『私ね……色々と言われているようだけど、別に気にしていないわよ』

アマーリエ義姉さんも、世間では『弟を暗殺しようとした、夫であった兄の代わりに償いで身を差し出している』とか言われているそうだし。

『今が楽しいからそれでいいわ。新しいお友達も出来たし』

『そうよな』

俺達は、夜になるまで屋敷を留守にする事が多い。

残留するアマーリエ義姉さんから料理などを習うためにテレーゼが屋敷に出入りするようになり、二人は仲良くなっていた。

『今の妾はただの居候じゃからの。将来はどうなるかいざ知らず』

『あたいから言わせると、バウマイスター伯爵様は稼いでいるんだから、別に構わないだろう。冒険者にだって、何人も奥さんを持っている人がいるし。女冒険者で、若くて格好いい男を何人も囲っている奴もいるからな』

男性ほどいないだけで、別に多夫一婦状態でも何か法に触れているわけではない。

やり手の女冒険者や商人に、そう言う人は一定数いるそうだ。

『うちの兄貴もな……バウマイスター伯爵様と同じにとは言わないけど、何人か奥さんを持って貴族らしくすればいいのに』

幼馴染とはいえ、名主の娘一人を奥さんにしてそれで終わりでは、オイレンベルク家が他の貴族達に舐められてしまうとカチヤは思っているのであろう。

『カチヤさんは、マリタさんがお嫌いなので？』

魔法使いなのでカチヤとは模擬戦闘を行ってはいないが、よく話すようにはなったカタリーナが彼女に質問する。

『嫌いじゃないさ。あたいとも幼馴染で、昔は毎日一緒に農作業をしていた仲だし。すげぇいい奴だけど、名主の娘だからなぁ。本妻は他の貴族の娘で、自分は妾として名主家の跡継ぎを産むという風に考えてほしかった』

『そういう事ですか。ですが、ファイトさんはそこまで好色に見えないといいますか……奥さんが一人でも満足してしまうタイプのような……』

『カタリーナにもそういう風に見えるのか。まったく、貴族家の跡取りなのに兄貴はなぁ……』

兄が頼りなく思えるからカチヤは動いた。

決して嫌いなのではなく、心配で堪らないのであろう。

『それで、婿決めの武芸大会か。しかし、カチヤに勝てる貴族の若様がいるかの？』

『一人くらいいるさ』

王国貴族は三千家を超える。

一人くらいは、カチヤの条件に合う者もいるはずだ。

『妾には、心当たりがあるの』

『イーナ達では駄目だぜ。女だからな』

エルでは引き分けられても勝てないし、そもそも俺が手離す気がない。

ハルカ、イーナ、ルイーゼ、ヴィルマが女性なので、カチヤの婿になれるはずがなかった。

『そうではない。ヴェンデリンがカチヤと戦えば勝てるであろうに』

『俺は貴族家の当主で、参加資格はありませんから』

『かもしれぬが、一番上手く治まる手だと妾は思うのじゃがな』

『上手く治まるねぇ……』

『もし妾がまだヴェンデリンやブライヒレーダー辺境伯の立場にいれば、利権配分がどうの、政治勢力均衡的にどうのと一緒になって悩んでいたであろうが、幸いにして妾はもうお気楽な身分。ならば、トンネルを発掘したのはヴェンデリンなのじゃから、全部権利を取ってオイレンベルク家には大リーグ山脈南側に代替地を準備すればよかったと、気楽に言えてしまうのじゃ』

その手が一番簡単だとは思うが、ブライヒレーダー辺境伯や他の貴族達の手前もある。
あまり取り過ぎるのもどうかと思うのだ。

『出る杭は打たれると思うたか？　それは今さらだと思うがの。ヴェンデリンの杭は、もうハンマーも振り下ろせないほど遥か頭上にあるわ』

テレーゼの言い方に、俺は思わず上手いと感じてしまう。

『暫くは、表立ってはヴェンデリンと敵対する貴族などおらぬよ。もしそうなれば、ヴェンデリン達に殲滅されるからの』

圧倒的な戦功のせいで、俺達と表だって揉めようとする貴族など当分出ないとテレーゼは言う。

『件のヘルタニア渓谷であったか？　あれと同じじゃ。王家と警備を案分して経費を負担すれば、王家がいい盾になってくれたのにの』

『ブライヒレーダー辺境伯の手前もありますし……』

『仲がいいのであろう？　事前に相談せい。まったく、ブランタークがいてこれを思いつかぬとは……。トンネル出入口の開発を少なめにして、隣接するブライヒレーダー辺境伯領に割り振れば、彼も納得したのにの』

『ううっ……その手があったか……』

さすがは、ペーターには負けたが元次期皇帝候補者。
俺達が煮詰まっている間に、素晴らしいアイデアを思いつく。

『もっともこれは、妾が無責任な場所から様子を見ているから思いついたとも言える』

なるほど、だから昔の王様は道化を置いていたのかもしれない。

自分の客観的な位置を正確に掴み、最善の判断をするというのは難しいのだと。

『武芸大会で、誰もカチヤに勝てない悪夢がないといいの』

『どうなんだろう?』

カチヤの宣言から一週間後、王都にあるコロシアムで武芸大会が始まる。

王族・貴族の子弟が沢山集まり、カチヤを破って夫となりトンネル利権を手に入れようと集まったのだ。

「人数が多いな」

「多いけど……」

エルは、本番に備えて最後の練習などを行う参加者達を見て溜息をつく。

どう贔屓目に見ても、カチヤに勝てそうな者が見つけられないようだ。

「エルさん、気にしても仕方がありませんよ」

「それもそうか」

「お弁当を作って来ましたから」

「ありがとう、嬉しいな」

婚約者手作りのお弁当を食べながらコロシアムで行われる試合観戦とか、もはや完全にエルはリア充と化している。

挙句に……。

「エルヴィン、やんごとなき参加者達はどんな感じかな？」

「ワーレン師匠（せんせい）、今日はお休みですか？」

「ああ。最近、子供達とどこにも出かけていなかったからね。遊びがてら観戦に来たんだ」

ワーレンさんは、奥さんと子供達を連れてコロシアム観戦に来ていた。

綺麗な奥さんと、子供は男の子と女の子が一人ずつ、眩しいほどのリア充家族である。

「エルヴィン様の婚約者で、ハルカ・フジバヤシと申します」

「なるほど……出来る人みたいだね」

ワーレンさんは、ハルカの姿勢だけを見て彼女の力量を見切ったようだ。

しかし、婚約者を紹介する弟子と、家族連れでレジャーに来る師匠とか、これをリア充集団と言わずに何と言えばいいのであろうか？

「相変わらず、妙な事で鬱屈しているな」

隣に座るブランタークさんが、俺を奇妙な視線で見つめる。

「バウマイスター伯爵殿、今日はボックスシートに入れていただき感謝いたします」

今回も、バウマイスター伯爵家の名で広めのボックスシートを予約した。

ブライヒレーダー辺境伯はフィリーネを連れて来ていたし、ブランタークさんはその護衛だ。

他にも、エーリッヒ兄さん、ヘルムート兄さんも家族連れで来ていて、導師も早速エリーゼが作った軽食のサンドウィッチを貪るように食べている。

「ますますただのレジャーね……」

イーナは少し呆れているようだが、こちらにはもうやる事がないのだから、せめて武芸大会を楽しむしかない。

「ワーレンさんは参加しないのですね」

「私ですか？　まあ、勝てなくもないですよ」

謙遜口調だが、実際にワーレンさんとカチヤが戦えばいくら彼女でも勝てないはずだ。

「参加なさらないので？」

「私は、剣の腕だけで近衛騎士団の中隊長になりましたからね。トンネル維持の人員の確保とか、管理・運営なんで出来ませんよ」

これが、今回の武芸大会の難しさだ。
カチヤよりも強い騎士や冒険者はいないでもない。
だが、それだけでは応募しても弾かれてしまうのだ。
逆に、そういうコネや能力がある奴はカチヤに単独では勝てない。
果たして、勝者が出るのか不安になってくる。

「この一週間ほどで大分強くなっているようですしね」

「えっ！　わかりますか？」

「私は、カチヤ殿と面識がありますから」

近衛騎士団の任務の一つに、凄腕の冒険者の実力を知るというものがあるそうだ。

「そういう強者が暴れたりすると、通常の警備隊では鎮圧するのに犠牲が多いので騎士団の騎士が派遣されますしね」

一種の治安任務として、ワーレンさんも高名な冒険者の実力はほぼ把握しているらしい。

「彼女、上手くなったのか？」

コロシアムの別の場所でカチヤも準備運動を兼ねたウォーミングアップをしているが、それを見たワーレンさんが首を傾げていた。

「ええと、エル達が模擬戦闘訓練を一週間ほど」

「それでですか」

「まずいですか？」

『勝てる奴がいないと話にならないのに、強くしてしまってどうするんだよ！』と怒られるかと思ったのだ。

「いいえ。何しろ、強くなる前でも誰も勝てそうにないですから」

剣では一切妥協しないワーレンさんは、参加者達の腕前をボロクソに非難する。

確かに、一週間前のカチヤでもあの連中に不覚を取るとは思えない。

「何か奇跡でも起きるといいですね」

「奇跡って、そう簡単には起きませんけど……」

「それもそうですね」

というわけで試合が始まったのだが、さすがに総当たりではカチヤが疲れてしまう。

そこで、まずは挑戦者を絞るための予選が行われた。

カチヤと戦えるのは八名まで、クジ引きの後にトーナメント戦が行われるのだが……。

「ワーレン師匠（せんせい）、酷いですね」

「本来、剣の腕なんて必要ない人達ばかりだからね」

まるで、下手なダンスのような試合が展開される。

今まで碌に剣など練習していないのに、一週間で達人になれるはずもない。
緊迫感の欠片もない試合が続いている。
いや、本人達は真面目にやっているのだが、とてもそうには見えないのだ。

「あの人は、まあまあですね」

「ハルカさん、彼が『神速』に勝てるとでも？」

「無理ですね……」

「カチヤ殿に勝てるというラインに達しないと、意味がないからね」

盛り上がらない予選が続く。
エル、ハルカ、ワーレンさんは真面目に試合を見ているが、それすら放棄している者達がいた。

「ぷはぁーーー！　王都は帝国に比べると暖かいからな。ミズホ酒は、まだお癇をしない方がいいな」

「内乱で苦労した甲斐があるのである！　いい酒のツテができたのは幸いであったな！」

バウマイスター伯爵家専用のボックスシート内で、ブランタークさんは導師と共に昼から酒盛りをしている。
ツマミも、枝豆、冷奴、冷製トマト、イカの塩辛、アジの開きなどと、今日は全てミズホ公爵領からの輸入品だ。

帝国からの褒美は二十年ローンとなったが、その分で自由にミズ

ホ公爵領から物が買えるようになった。
注文、見積もり、承諾を得ると、その請求が帝国政府に行くようになったのだ。

ブランタークさんと導師は、これ幸いと好き勝手にミズホ公爵領から多くの産品を個人輸入している。
俺達は顔パスで、よほど貴重な物でもなければ自由に買える。
貴重な品でも、頼めばミズホ公爵が融通してくれた。

「フィリーネ、ああいう駄目な大人になっては駄目ですよ」

「お父様、お酒は大人になってからと、夜に適量ですね」

「そういう事です。今日は、新しいお店でケーキを買ったので一緒に食べましょう」

「はい」

ブライヒレーダー辺境伯は、初めて出来た娘フィリーネを跡取り息子よりも傍に置いて溺愛していた。
今日も、彼女と一緒にケーキを食べながら試合を見ている。

「導師様、変わった食べ物ですね」

「うむ。遥か北方の産物でな。フィリーネも食べるか？」

「はい」

それでもフィリーネは、やはり導師がお気に入りであった。
彼に話しかけ、茹でた枝豆などを貰っている。

「ミズホ公爵領産の食材は美味しい物が多いですけど、流通量が少ないから値段が高すぎていけません」

「その辺は、領地も広がったし増産を計画しているそうですよ」

「私も、その内に挨拶に行かないと駄目ですね」

どういうわけか、俺達のお気に入りという理由で、王都周辺や一部大貴族の領地ではミズホ食ブームが始まろうとしていた。

健康にいいと、女性にも評判だ。

ただ、流通量が極端に少ないので、末端では恐ろしい金額になっていたのだが。

直で仕入れられる俺達は、圧倒的に割安でミズホ食を楽しめるのだ。

「内乱で苦労してよかったのである」

バウマイスター伯爵家専用のシートでは、もうひとグループが全く試合など見ないで遊びながら食事やお茶を楽しんでいた。

「カール、そこはビシっと！　慎重に取るんだ！」

「兄さん、指が震えている。それを抑えないと」

「取らないで欲しいな。次はボクの順番じゃないか。これ以上は無理！　崩れる！」

俺達は、試合など見ないでゲームに集中していた。

アマーリエ義姉さんに会わせるために連れて来たカール、オスカーに、エーリッヒ兄さん、ヘルムート兄さんの家族と共にジェンガを囲んで遊んでいた。

エリーゼ、アマーリエ義姉さんは、お茶や食事の世話をしながらジェンガゲームの様子を見ている。

この世界に存在していなかったゲームだが、俺が領地の木工職人に指示して作らせていたのだ。

「ふう……上手く抜けた」

「やったね、カール兄さん」

「次はボクか……」

「ルイーゼ、降参してもいいよ」

「降参なんてしないよ。ボクの計算では、三割の成功確率があるからね。次はヴェルだから、ここは集中して……」

尋常でないほど高さを増して傾いているジェンガの山を前にルイーゼは精神集中を始め、それから目にも止まらぬ速さでジェンガを抜き去った。

「成功だ！」

ジェンガの山はわずかに傾いたが、崩壊には至らずルイーゼは賭けに勝った。

そして最悪な事に、次は俺の番である。

「俺の計算では……一パーセントの成功もねえよ！」

「ヴェル、ジェンガを魔法で凍らせるとかは反則だよ」

「そんな事をしたら、場が盛り下がるからしないよ！」

慎重に指をプルプルさせながらジェンガを引き抜こうとするが、その前に限界を迎えたジェンガの山は崩れてしまう。

「やっぱり駄目かぁーーー！」

「ヴェルはこれで五連敗だね」

「エーリッヒ兄さん、俺が弱いのではなく、運が悪いのです」

「どちらでも、あまり嬉しくないような……」

絶対に不利にならない男エーリッヒ兄さんも、嫡男のイェルンを膝に乗せてジェンガに参加しているが、これまで一回も負けていない。

やはり、俺の運勢には何か特別なものがあるのかもしれない。

「俺の場合は、単純にヴェルの後だから負けないんだな」

まだ生まれてさほど経っていない嫡男アレクシスを膝に載せているヘルムート兄さんも、順番が俺の後なので一回もジェンガを崩していなかった。

単純なゲームだが、多人数でやると盛り上がるので作成を依頼した木工職人の工房では量産を開始するそうだ。

真似される前に大量に売り捌くと、意気込んでいたのを思い出す。

「こういう休日もいいものだな。うちは、義父さんがまだ現役だから休みは取りやすいけど」

「私も法衣貴族でお役所勤めなので、お休みは取りやすいかな？パウル兄さん達も来ればよかったのだけど……」

パウル兄さんは、領地がトンネル出入り口に近いので宿場町建設計画のために忙しい。

ヘルマン兄さんも、領地で生産しているハチミツ酒を特産品として本格的に売り出し始め、今は生産設備拡張のために忙しかったので今日は欠席であった。

「その内に、みんなで集まる事もあるでしょう」

「それもそうだね」

「あの……お館様？」

公式には屋敷の侍従長扱いのアマーリエ義姉さんが、俺に話しかけてくる。

屋敷内では『ヴェル君』と呼んでいるが、ここには外の目があるので俺をお館様と呼んでいた。

「何ですか？　アマーリエ義姉さん」

「試合を観戦しなくてもいいのですか？」

アマーリエ義姉さんは、懸命に戦う生まれのいい方々の試合をち

ゃんと観戦しないでいいのかと思っているようだ。

「見る価値ないですし」

「アマーリエ義姉さん、一生懸命に観戦したからといって、カチヤさんに勝てる人が急に出るわけでもないですし」

「本音で言うと、あまり面白くない」

俺、エーリッヒ兄さん、ヘルムート兄さんの三人は、それなら子供や甥達とゲームでもしていた方がマシだと考えていた。

「カールとオスカーには、剣術の参考になるのでは？」

母親としては、そういう理由も合わせて試合をちゃんと観戦した方がいいと思っているのであろう。

「カールとオスカーの剣術なら……」

俺がワーレンさんに視線を向けると、彼はこちらに気がついて話しかけてくる。

「短時間ですけど、私が少し見ますから」

「ワーレン様がですか？」

ワーレンさんの剣術指南を受けられる人間など、スケジュール的に考えてもそう多くはない。

それを知っているアマーリエ義姉さんは驚いていた。

「多少は融通を利かせますよ。バウマイスター伯爵殿のお願いですから」

ワーレンさんは、教えるのも上手い。

一時間ほど練習を見てから、その人が上達するのに最適な課題と訓練メニューを組む。

休みの日などは、家庭教師業で相当な額を稼いでいた。

お得意さんが大貴族家ばかりなので、これがお金になるのだそうだ。

「ヘボの試合を何時間も見るよりも、ワーレンさんとの一時間の訓練の方が圧倒的にためになりますから」

魔法でも同じだ。

師匠、ブランタークさん、導師からの指導はためになるが、他の魔法使いの魔法は見ていてもあまり参考になる事がない。

それなら、昔の魔法使いの本でも読んでいた方がよっぽど勉強になるであろう。

「カールとオスカーのためにありがとうございます」

「お気になさらずに」

こういう部分はやはり母親である。

アマーリエ義姉さんは、ワーレンさんに深々と頭を下げる。

「ワーレンさん、参加者達はどうなのです？」

「そうですね。暫くトンネルの開通は無理じゃないですか？　陛下も参加者名簿を見て溜息をついていましたし。ああ、インチキもいましたね」

勝てそうな代理人を変装させ、替え玉で出場させようとして数名が失格になったらしい。

「それなりの大貴族なのにバレないと本気で思ったのか、係員達も首を傾げておりました」

「魔道具を使ったのでは？」

「変装用の魔道具を使えば、王宮にいる魔導師達に一発で見破られますから」

魔道具でいくら完璧に変装できても、魔法が使えない人間の周囲に常時魔力が流れている状態になる。

流れている魔力は微量でも、ある程度技量がある魔法使いなら簡単に見破ってしまうのだ。

「そういえばそうでした」

「戦えても、腕前の問題で意味がないかもしれませんが」

それから一時間ほどで、八名の予選突破者が確定する。

この八名が、順番にカチヤに挑むのだ。

だが、ワーレンさんはその中でカチヤに勝てそうな者がいないと断言する。

「勝てないとどうなるのですか？」

「さて、陛下はどのようにお考えか……」

ここまで話が拗れると、あとは陛下の決断が重要となる。

国王には一定の力があるので、みんな『まあ、陛下がそう仰るのであれば……』となるケースが多いからだ。

「八人の中に余の甥もいるのでな。できれば勝ってほしいところではあるか……」

「陛下！」

俺達がいるシート席に、フードを深々と被った三人組みが入ってきたのでお忍びの貴族が挨拶に来たのかと思ったら、それは陛下と護衛の騎士二名であった。

今日はコロシアムに来ていないと思っていたら、変装して俺達のブースに紛れ込んできたのだ。

「陛下」

「ワーレンは、今日は休暇なのだから休んでおれ。上の者が休むまぬと、下の者も休めぬからの」

護衛の二名の騎士はワーレンさんの部下で、そっと彼に目礼をしてから陛下の両脇を固めた。

「陛下、お忍びですか？」

「先ほども言ったが、我が甥が出ておっての。勝ってくれればよいのだが、余が表立って応援にに行くと、妙な勘繰りや、必要もない

行動を取る者がおるのでな」

陛下が自分の甥をカチヤの婿に望んでいると強く思い、オイレンベルク家やカチヤに『わざと負けるように』と圧力をかける貴族が出かねないとか、そんなところであろう。

「それを予期して、あのじゃじゃ馬は公衆の面前で武芸大会の宣言をしたのであろうからな」

こんな平和な世の中だ。

王様が下級貴族に自分の願いをゴリ押ししたなどと噂が流れると、予想以上に悪評が広がる可能性がある。

平時の王様も、これでなかなかに大変なようだ。

「さてと、試合を見るとするかの」

陛下は俺の隣の席に座ると、エリーゼが準備したミズホ公爵領産の食事を摘み始める。

「エリーゼの調理技術もいいのであろうが、これは美味しいものじゃな。王宮で貴族達が噂をしておったわ」

「陛下、ここはミズホ酒を飲みませぬと」

「クリムトか。では辛口の酒を頼むぞ」

「ほう……陛下は既にミズホ酒を？」

「酒は、余くらいの身分になると手に入りやすいというわけじゃ」

陛下は導師から注がれたミズホ酒を飲み、導師も反対側の席に座って始まった試合の観戦を始める。

「一人目は、ディンドルフ子爵家の者じゃったかの？」

「確かそうですな」

導師は、勝ち残った八名のプロフィールが記載された紙を見ながら陛下の問いに答える。

「どうなのだ？」

「そこそこは強いはずですが……」

導師がその言葉を言い終わる前に、魔法で加速したカチヤに一撃で剣を弾かれて敗北してしまう。

「……一人目ですからと言った方がいいのでしょうか？」

「そういう事にしておこうか、バウマイスター伯爵」

続けて、トイフェル伯爵家の三男、リースフェルト伯爵家の三男、グリーベル侯爵家の四男と、大物貴族のボンボンにしてはまあまあ評判がいい若者達であったが、みんな五分と保たないでカチヤに敗れてしまう。

「弱いぞ！」

「貴族！　普段は威張っているんだから、こういう時くらい頑張れよ！」

本来の武芸大会よりも圧倒的に盛り上がらない試合に、観客達からは罵声とブーイングが鳴り響く。

不敬罪で捕まりそうな気もするが、そんな理由で平民を捕えて処罰したなどという噂が流れたら評判がガタ落ちしてしまうので、まずそれはないそうだ。

いちいち捕まえていたら、キリがないという理由もあるらしいけど。

「まるで反論できぬの」

「陛下、もっと強い候補者がいたのでは？」

「いない事もないのじゃがの……」

そういう人に限って、既に結婚している人が多いので試合に出られないそうだ。

「あのじゃじゃ馬の実家が持つ利権を考えるに、アレを正妻として受け入れるのが当たり前。そうなると、あのじゃじゃ馬に勝てそうな者の正妻を離縁なり側室に下ろす必要があるのじゃが……」

そんな事をすれば、当然正妻の実家から苦情が出てしまう。

正妻の実家だって、それなりの貴族家であるケースが大半だからだ。

「八方塞がりですか……」

「だから、ヴェンデリンがカチヤを倒せば一番すんなりと事が進む

と言ったであろうに」

「ご隠居殿か……なるほど、確かにそれは正しい意見じゃの」

陛下は、テレーゼが漏らした独り言に感心しているようだ。

「さすがは、元フィリップ公爵殿というべきかの？」

「陛下、妾は政争に破れて隠居した気楽な身分に過ぎませぬから」

陛下がテレーゼを『ご隠居殿』と呼ぶのは、彼女が既に現役を退いていると周囲に知らしめるためであった。

その割には、陛下に独り言のフリをして意見具申はしていたが。

「当事者同士だとどうしても複雑に考えてしまう。一歩退くと単純明快でよい案が出てくる事もあるか。ご隠居殿だからこそ出る案かもしれぬの」

「陛下、今さらそれはないでしょう」

それなら、最初にそうしてしまった方が問題が少なくて済むのだから。

「とはいえ、誰も勝者が出ぬのではの。そうだ、最後にグイードが残っておったの。我が甥の勝敗を見てから決めるとしよう」

最後の一人は、陛下の甥でグイードという青年であった。

「余の弟の息子での」

「なるほど、軍の重鎮にして剣の腕前も優れていると？」

「いや、時間があるものだから剣の練習に時間を割いておるが、ワーレンほど才能があるわけでもなし、余もあれの将来をどうしようかと悩んでおる」

「えっ？　そうなんですか？」

「バウマイスター伯爵も、辺境にある騎士爵家の八男で大変だったであろうが、王族も楽ではないからの」

王族は次々と増える。

公爵家の数は決まっているし、一度創設してしまうとその公爵家の中でしか継承権が動かない。

例外は、ヘルター公爵家のように後継者がいなかったケースのみだ。

「余の不詳の叔父は、たまたま運よくヘルター公爵家へ養子に入れたわけじゃな。もっとも、その後はあの様で家を潰したわけじゃが……」

増え続ける王族に対して、いちいち公爵家を増やしていたのでは王国の予算がいくらあっても足りない。

「娘は降嫁という手段があるので、かえって楽だの」

大物貴族家からすれば、王家から嫁を貰えるのだから名誉である。

嫁ぎ先などいくらでもあるのだ……なぜか余っている人もいるけど……。

「ただ、息子はのぉ……」

下手に婿入りさせると、王家からの干渉が強くなるので嫌厭する貴族家が多いらしい。

エーリッヒ兄さんとヘルムート兄さんの場合は、互いが小身の貴族家だからこそ、そう揉めずに話がついたというわけだ。

あくまでも、王族よりはと付け足しておくけど。

「一応、軍で当たり障りのない役職を与えておるがの。まあ、する事もないわけじゃ」

上司も部下も接するだけで気苦労だと思うので、特にする事もなく剣の練習だけしていたらしい。

「陛下……それって……」

「冷や飯食いだの、穀潰しだの、裏では色々と言われておるの」

陛下の返答も相当にぶっちゃけていた。

「可愛そうだと思うが、ここで情けをかけて公爵家を増やせば後に財政規律が崩れるからの。心を鬼にして、余っている王族を平民に落とす事もある。ただ、グイードは真面目で素直な青年じゃからの。伯父としては何とかしてやりたい」

「あんた！　王族にしては結構やるな！」

「ここで負けられないのでね！」

ワーレンさんは匙を投げていたが、グイードさんの剣の腕前はな

かなかのものだ。
一番長くカチヤと戦えていた。

「やるとは思うが、あたいにも未来図があるのでね！」

そう言うのと同時に、カチヤは自身のスピードを更に上げる。
『加速』の強さを上げたのだ。
グイードさんはこれに上手く対応できなかった。
すれ違いざまに剣を弾かれてしまい、これで八人の挑戦者は全員が敗北した事になる。

「一人も勝てないじゃねえか！」

「弱過ぎるぞ！」

観客達は、貴族達のあまりの不甲斐なさに大ブーイングをあげる。
カチヤに勝てる者がいなかったので、トンネルの件は再び暗礁に乗り上げた。
さて、どうしようかと思った時に、突然陛下は護衛の騎士二名と共に試合会場へと入り、そこでフードを脱いだ。

「確かに、余でも不甲斐ないと思うぞ！　この余、ヘルムート三十七世でもな！」

突然の陛下の登場に、今までブーイングをあげていた観客が一斉に歓声をあげる。

「ここまで揉めに揉めた案件ではあるが、ならばここで余が解決策を提示しよう！」

「おおっ！」

「陛下！」

観客に向かって、自分の決断を告げると宣言する陛下。
ある種の劇場型政治に、観客達は興奮して歓声を強くする。

「こうなれば、もうあの男に任せようではないか！　これまでに多くの功績をあげ、竜であろうが、帝国軍であろうが負け知らずのあの男に！　バウマイスター伯爵！」

陛下の呼び出しに、俺は思わず試合会場へと移動してしまう。
偉い人に命令されると体が勝手に動くのは、商社員時代からの癖が抜けきっていないのであろう。

「トンネルは、バウマイスター伯爵が見つけた物だ。ならば、発見者が管理をするのが筋！　そして、カチヤよ」

「はい」

突然の陛下の登場に驚いてはいたが、カチヤはどうにか返事をする。

「オイレンベルク家発展のためか。気持ちはわかるが、世の中はそんなに甘くない。貴族家とはの。バウマイスター伯爵のような例外を除けば、何代もかけてコツコツと大きくするものだ。そなたは強いようじゃが、異才に倒されて己の今の力を知るがよい」

「バウマイスター伯爵様が？」

「皆の者！　バウマイスター伯爵の魔法が楽しめるぞ！」

陛下はカチヤにそこまで言うと、最後にそう宣言して元の席に戻った。

「「「陛下！　陛下！　陛下！」」」

「バウマイスター伯爵様！　勝ってくれよ！」

あとに残された俺に、陛下の分と合わせて多くの歓声が投げかけられる。

「勝負しないと駄目か」

「ここにきて竜殺しが相手か。悪くねえ」

バトルジャンキー疑惑があるカチヤは、俺と戦えて嬉しいようだ。恰好の獲物をみつけたという表情を浮かべながら、俺と対峙を始める。

「八連戦して、疲れてないのか？」

「最後のグイード様以外は、全然疲労感すらねえから大丈夫さ」

「カチヤがそう言うのなら……」

「バウマイスター伯爵様、勝ちを確信して油断しないようにな」

「それは心配ないから」

一旦、お互いに距離を置いてから戦いが始まる。

「先手必勝！」

カチヤは、いきなり最高速の『加速』をかけてから俺に向かって突進を始める。

前の俺ならばビビってすぐに分厚い『魔法障壁』を張るのであろうが、内乱時の師匠との戦を経て、大分落ち着いて対応できるようになった。

同じく『加速』をかけてから、カチヤがサーベルをかざしてすれ違う面に最小の『魔法障壁』だけをかけ、最低限の魔力だけで攻撃をかわす。

「へえ、見切っているのかい」

「カチヤは早いけど、まだそれだけが強いね」

俺もまだそうだが、カチヤはもっとスピードだけに頼っている。

だからこそ、この一週間の鍛錬で劇的に実力を上げたのであろう。

「だが、攻撃魔法は当たらないぜ」

スピードがあるから、かわせると思っているのであろう。

以前の俺なら広範囲魔法で逃げ道を塞ぐのだが、それでは魔力の無駄遣いを窘める師匠の教えに反する。

ここは、新しい魔法を披露する事にする。

「カチヤ、高そうなサーベルなのに悪いな」

「えっ？」

俺は、指先に二本の小さな『青火蛇』を作ってから、それを高速でカチヤに向けて飛ばす。
スピードに自信があるカチヤは避けるが、『青火蛇』はその動きに合わせて移動し、最後に彼女のサーベルに巻き付いた。
小さいが超高温の『青火蛇』は、カチヤのサーベルをドロドロに溶かしてしまう。

「あちっ！　あたいのサーベルが！」

「だから、最初に謝っただろう」

「あくまでも、魔法であたいを倒そうっていうのかい！」

「当然だろう。俺が剣を持って何になる？」

「冒険者であるあたいが、予備のサーベルを準備していないとでも？」

カチヤは、腰に下げていた袋から素早く予備のサーベルを取り出した。
やはり、魔法の袋を持っていたようだ。

「バウマイスター伯爵様の物ほど量は入らないけどな。一応、汎用だぜ。高かったからな」

再び『青火蛇』でサーベルを溶かそうとするが、今度は連続加速で上手くかわされてしまう。

「二度も同じ手は食わないさ！」

続けて、上空にソフトボール大の『ファイヤーボール』を浮かべてから、それをカチヤの目前まで飛ばす。

「そんな『ファイヤーボール』くらい……」

カチヤが油断した直後に、『ファイヤーボール』は散弾のように弾けた。

散弾が一発くらいは命中するかと思ったが、カチヤは『加速』とサーベルの乱舞ですべてを弾き、回避してしまう。

「速いな」

スピードだけなら、ルイーゼにも匹敵するであろう。

だが、彼女の魔力量を考えれば『加速』が使える時間は容易に想像がつく。

次々と、『岩槍』、『氷弾』『ウィンドカッター』で連続攻撃を続けてカチヤの接近を許さない。

「ちっ！　やっぱり一流の魔法使いだな。隙がねえ！」

何とか隙を作ろうと、カチヤは腰に刺していたナイフを何本か連続して投擲した。

俺の顔、腹部、手足を狙ったようだが、咄嗟に高温の『火壁』を形成、ナイフは全て地面に溶け落ちてしまう。

「特注品のナイフが……」

「しかし、当たらないなぁ……」

反撃とばかりにいくつか魔法を繰り出すが、カチヤは上手く回避してしまう。
多彩な魔法とそれを華麗にかわすカチヤのせいで、客席からは盛大な歓声があがった。

「うぃーーーっ、今日の俺達ってこのためにいるのかね？」

「お師匠様、酔っていらっしゃいますね」

元々剣術の武芸大会なので、観客保護のために『魔法障壁』を張る魔法使いがいなかった。
代わりに、既に酒で出来上がっているブランタークさんとカタリーナが客席に『魔法障壁』を展開する。

「ですが、観客席に飛んできませんわね」

「その辺は、伯爵様も考えているんだろうな」

観客に当たれば大変なのだし、幸いにしてカチヤはほとんど三次元の動きができない。
上手く魔法をコントロールすれば、客席に飛び込む事などない。

「あたいは、手を抜かれているのか？」

「そうだな」

「何ぃ！」

カチヤも高名な冒険者なので、それは理解しているはず。
だが、実際に俺から言われると頭にくるのであろう。

顔を真っ赤にして激高する。

「剣術だけなら、俺がカチヤに勝てるはずなどない。だが、総合戦闘力でカチヤが俺に勝てるはずがないだろうが」

「ううっ……」

「ここで、カチヤは強いって言ってもらって嬉しいか？」

「思わない……逆に腹は立つが……結局どちらでもムカつく！」

カチヤは俺が飛ばし続けている魔法をかわしつつ、徐々に体勢を立て直してから再び二本のサーベルを構えて、俺に突進してきた。

「懐に入れれば！」

唯一の勝機だと感じ、全ての魔力を振り絞って今までにない『加速』を絞り出す。

「これが、切り札だ！」

魔力切れが間近のようで、今度は何発か魔法が掠って負傷する。一瞬だけ負傷で顔を顰めるが、カチヤは速度を落とさずに俺の目前にまで迫った。

「いける！」

カチヤは、自分は賭けに勝ったと思ったのであろう。

勝利を確信した笑みを浮かべるが、俺には対策が山ほどある。

とっくに体に合わせた『魔法障壁』を張っているので、カチヤによる俺の胴を凪いだ一撃は完全に防がれてしまった。
渾身の一撃を弾かれたカチヤは、そのまま後ずさってしまう。

「硬い！」

「もしまともに食らっていたら痛かったのに。無茶してくれるな」

「そのローブは、下手な鎧よりも頑丈じゃないか」

「何だ。知っていたのか」

カチヤの動きが止まった隙に、今度は滅多に使わない魔力剣の柄を取り出す。
篭める魔法は、当然火系統の物だ。
温度の高い青い炎の刀身を、フェイントなどもかけずに上段から一気に振り下ろす。

この一撃を、カチヤは二本のサーベルをクロスして防ごうとしてしまう。
だが、そのサーベルは少々のミスリルを混ぜた鋼製にしか過ぎない。

再び超高温の火炎によって溶かされてしまった。

「またサーベルをごめんな」

「まだまだ！」

諦めの悪いカチヤは、再び魔法の袋からサーベルを取り出そうと

するが、さすがにそれを許すほど俺は甘くはない。
小さな『ウィンドカッター』を飛ばして、腰に着けていた魔法の袋を切り落とした。

しゃがんで取ろうとすれば魔法の餌食になるのがわかっているカチヤは動けず、これで完全に武器を失った。

「降参して欲しいな、魔力ももうないでしょう？」

カチヤの魔力がほぼ尽きたのは簡単にわかった。
『加速』が使えない以上は、もうどうする事も出来ない。
彼女の頭上にはいくつかの『ファイヤーボール』が滞空したままであり、少しでも動けばカチヤを攻撃する手はずとなっている。

「くそっ……剣術だけなら……」

「実戦だと、剣術だけ指定なんて出来ないよね？　残念だけど、そういう事だから」

「降参だ……」

カチヤが両手を挙げるのと同時に俺の勝ちが決まり、観客席からは多くの歓声があがる。

「魔法で剣を溶かしたぞ」

「色々な魔法が出たな」

「サーベルで切られても、傷一つ負わなかったぞ」

面白い物が見れたと、観客席にいるみんなは満足のようだ。
今の王都の住民達からすれば、この手の武芸大会などただの暇潰しで娯楽なのであろう。
貴族や王族が必死に求めた賞品だって、彼らには縁がないものなのだし。

「負けた事がないわけじゃないけど、圧倒的な差を感じるぜ。今までの戦績は伊達じゃないんだな」

「大半が、巻き込まれてとか、頼まれての結果だけど。そうだ」

俺はカチヤに近づくと、魔法が掠った場所を探してから治癒魔法をかける。

「放置しておくと跡が残るぞ。せっかく綺麗に生まれたんだから」

「あたいが、綺麗？」

「お世辞じゃなくて客観的に見てな。カチヤがブスなら、世間の女性の大半がブスだろうし」

「あたいが……綺麗……」

なぜかカチヤが俯いてしまったので、俺は試合を観戦していた陛下に近づいて話しかける。

「陛下、順当に勝ちました」

「久しぶりに面白いものを見たの。あのじゃじゃ馬はバウマイスター伯爵が倒したのだから、そなたが責任を持って娶るがいい」

「やっぱり、そうなりますよね……」

この状況にまで至って、もはや断るわけにもいかない。

トンネル利権も、結局は他の貴族に渡して事態が複雑化するよりも、俺が一括して管理した方が安全という事か。

今になってみると、テレーゼの意見が正しかったとも言える。

「トンネル警備隊の創設に、上納金代わりの経費負担。当事者が王国とバウマイスター伯爵家だけになったから兵員は半々。王国としては得というわけじゃ」

それに関わる他の貴族達からの嫉妬も、王国が盾となってくれる事を期待するしかない。

「バウマイスター伯爵、なるべく早くにトンネルを開通させないとな」

「はい」

トンネルという資産は増えたのだが、それに合わせて嫁が増えるという結果に陥ったのは、予想外というか、これも避けられない運命だったのだと俺は思う事にするのであった。

「大リーグ山脈大縦貫トンネルの開通です！」

俺がカチヤを討ち破ってから一週間後、大突貫作業で準備を進めてトンネルは無事に開通した。
トンネル自体に問題はなかったのだが、他の準備で大忙しだったのだ。

まずは、両出入り口周辺の基礎工事や、渋滞を防ぐための道の整備、馬車などの待機場、宿泊施設などの整備が必要であった。
宿泊施設などの整備は当分続くが、それは仕方がない事だ。

バウマイスター伯爵領出入り口に近いパウル兄さんの領地や、ブライヒレーダー辺境伯領側出入り口に近いブライヒレーダー辺境伯領でも、宿泊施設の整備が進んでいる。

魔導飛行船は速いが、運んでいる商人と荷物に高額の運賃がかかる。
空港に到着しても、バウマイスター伯爵領は広いので、そこから馬車を出して各地に荷を運ぶとどうしてもコストがかかってしまう。

山越えだと、どうしても二か月近くもかかってしまうし、あまり大量の馬車が動くと野生動物や飛竜に狙われる可能性が増えるので、トンネルは小規模の商人が新しく商売をするには最適であった。

通行料は片道百セントと定められたが、開通日には多くの商人が馬車で大量の荷を積んで押しかけてきた。

この世界でも、開通イベントが存在している。

俺、ブライヒレーダー辺境伯、オイレンベルク卿などが飾りの付いたナイフで、トンネル入り口に張られたリボンを切るのだ。
こういう光景はニュースでしか見た事がないので、自分も参加で

きてワクワクしている。

「混んでるなぁ」

リボンが切られるのと同時に、多くの馬車がバウマイスター伯爵領に向けて走り始める。

「それはそうでしょう。魔導飛行船よりは時間がかかりますがコストはかからない。山歩きよりは圧倒的に時間もコストもかからない。大商人以外でもバウマイスター伯爵領で商売が可能になりました。取引量が圧倒的に増えますから」

バウマイスター伯爵領の経済は活性化し、通行料でトンネルの維持費と用心棒代わりの『王国軍大リーグ山脈大縦貫トンネル警備隊』の経費も賄えるというわけだ。

「ただ、本来引き受けるはずだったブライヒレーダー辺境伯には悪いかも」

「いえいえ。旧オイレンベルク領の大半を譲っていただきましたから」

本来トンネル利権に加われるはずであったブライヒレーダー辺境伯家にも、一定の配慮をする必要があった。

本人同士は納得済みでも、家臣達への手前もあったからだ。

特に俺などは、『山脈越えの水呑み騎士の八男』なのだから。

そこで、新しいオイレンベルク領はバウマイスター伯爵家で準備、場所は大リーグ山脈寄りのマロイモの大量生産に適した山地であっ

た。
　これは、ほとんど手つかずの場所だったのですぐに見つかっている。
　オイレンベルク卿とファイトさんと領民達は、新しい広大な領地で早速マロイモの生産を始めていた。
「ブライヒレーダー辺境伯殿、マロイモ畑の土をいただいてすいません」
　どうせ使わないからと、マロイモ畑の何十年もかけて作った土は、すべて俺が新しいオイレンベルク領へと運んだ。
『土は、農業にとって命なのでありがたいです！』
　ファイトさんは、これならすぐにある程度の収穫が望めると喜んでいた。
「我々はマロイモを栽培しませんからね。どうせ工事で削ってしまう土なので、有効活用してください」
　旧オイレンベルク領も、トンネルの出入り口の極狭い範囲のみバウマイスター伯爵領として、そこには警備隊の駐屯地と通行者の検問所くらいしか置いていない。
　他の領地はブライヒレーダー辺境伯家への譲渡となり、そことブライヒレーダー辺境伯領に大規模な馬車の待機場と宿泊施設の建設が進んでいた。
　馬車でトンネルを通行すると、トンネル内で何日も野宿をする羽目になる。

その前に宿に泊まっておこうという需要を満たす宿場町の運営を、ブライヒレーダー辺境伯家に委託したのだ。

「その辺の利権の調整って難しいですよね。私もたまに面倒になるんですけど、家臣や領民達の生活もありますから」

トンネル近くの宿場町が栄えれば、ブライヒレーダー辺境伯家の利益になる。

利益があれば、うるさ型の家臣でも案外黙ってしまうものらしい。

「人は霞を食べては生きていけませんからね。バウマイスター伯爵は、その辺の理解が早いからとても助かるのです。若い貴族だと、どうも突っ走ってしまう傾向にありまして……」

「ううっ……すまねぇ……」

ブライヒレーダー辺境伯の発言に反応して、項垂れながら謝る人物がいる。

結果的にトンネル利権問題を複雑化させてしまったカチヤであった。

今日の彼女は、オイレンベルク卿の御供なのでドレス姿であった。

元が綺麗なので、彼女は多くのトンネル開通式参加者達の注目を集めている。

ただし……。

「彼女が勇ましい行動を取ったオイレンベルク卿のご息女か」

「並み居る貴族や王族のご子息達を全員撃破したそうだが」

「私は試合を見ていましたとも。ただ、最後のお相手が悪かったですな」

「バウマイスター伯爵殿であろう。さすがの女丈夫も、竜殺しには勝てませんか」

「元フィリップ公爵殿に続き、バウマイスター伯爵様の戦利品となったわけですか」

随分と女性に失礼な言い方に聞こえるが、この世界の貴族の認識などこんなものである。

カチヤも、俺に負けて俺の物になった。

王国中で、みんなが同じような事を言っているはずだ。

「お気持ちはわかるのですが……」

「私もファイトもトンネルの管理はねぇ……農作業の方が好きだし」

人間、慣れない、合わない事を家業にすると苦労するものだ。

だから、最初にトンネル利権を譲る事を承諾したのであろう。

「カチヤが、オイレンベルク家の事を真剣に考えてくれていたのはわかってたんだ。ファイトも、カチヤを嫌っているわけじゃない。これは生き方の問題でな」

「親父……」

「それに、我がオイレンベルク家は農業で確実にゆっくりと繁栄する。人は食わねば生きていけない。幸いにして、バウマイスター伯

爵殿の手助けもあるからな」

「バウマイスター伯爵様が農業の？」

「勿論、専門的な事じゃないよ」

つまり、今の時点でが知名度は低いが美味しいマロイモの栽培技術を独占しているのだから、それを生かした開発を進めればいいのだと。

「サツマイモよりも、マロイモの方が高く売れる。つまり稼げるというわけだ」

比較的温暖な王国では、サツマイモの栽培とそれを使った産品が名物になっている領地が多い。

そこに参入するのは困難であったが、栽培条件と方法が特殊なマロイモならば競争相手がいないので十分に商売になる。

「ファイト殿には質を維持したまま栽培量を増やして貰うとして、それで作った加工品の販売も手がけて収入を増やす」

干しイモ、カリントウ、チップス、イモアメ、酒などを作ってもいいであろう。

これらの食品はサツマイモで作っている地域が複数あるが、その味ではマロイモに到底敵わない。

何しろ、甘さが圧倒的に違うのだから。

「王都のお菓子屋に材料として卸してもいい。王都で流行すれば、引く手数多になって仕入れ値が上がるから」

「なるほど、そういう商売方法があるのですか」

「トンネル利権の代金の中には、新領地の開発や産業育成のアドバイスなどもあります。商人も紹介するので、ご安心を」

その条件でもバウマイスター伯爵家が圧倒的に利益を得るので、そのくらいは援助しないと駄目であろう。

「ファイトが気合を入れていましたよ。品質の維持は大変ですけど、領地が広がったのでオイレンベルク領の発展に期待が持てると」

「兄貴にも、ちゃんと貴族としてのプライドがあったんだな」

「他の貴族とは少し違うがな。だから、安心してカチヤは嫁に行くといい」

「そういえばそうだった」

「初めて貴族的な事を言わせてもらうが、カチヤがバウマイスター伯爵に嫁がないとうちは色々と大変になるからな」

援助の中身が減ってしまうので、ちゃんと嫁に行け。

これは、先に貴族としての誇りが云々と言ったカチヤへの意趣返しかもしれない。

「わかったよ、あたいは納得して嫁に行くし」

「これは意外ですね」

「ブライヒレーダー辺境伯様、あたいを圧倒的な強さで倒す男なん

て、そういるもんじゃないんだぜ」

「なるほど」

やはり、カチヤは戦闘力で他人を計る事が多いようだ。

俺に負けたから、俺に奥さんになっても構わないというのだから。

「冒険者の男って、一定数を除いてしょうもない奴らばかりだからな。その点、冒険者兼業でもバウマイスター伯爵様は紳士だからな」

「俺が紳士ねぇ……」

どうにも紳士の基準がわからないが、カチヤがそう思っているのだから問題はないのか。

「あたいの事を綺麗なんて言う男性は初めてだから。野蛮とかガサツとはよく言われるけど……」

これだけ綺麗な娘を綺麗だとは思わないのか。

冒険者ってのは、意外と余裕がないんだなと俺は思ってしまう。

カチヤはなぜか再び俯いてしまったが、その様子も結構可愛いと思ってしまう。

「これで無事に解決という事で。そういえば、王国警備隊のトップはグイードさんですけどね」

陛下は、不遇な甥グイード様を心から心配していた。

「グイード様は王弟殿下のご子息なのですが、母親の身分が低くて四男でしたから」

行先がなくて軍で捨扶持を与えられている状態であったが、本人は決して腐らずに剣の稽古に励んでいたというわけだ。

「あたいが言うと生意気に聞こえるけど、真面目に修練した積み重ねた剣技だよな」

「決して才能があるわけでもないのに、懸命に苦労して覚えたのでしょうね」

その褒美なのであろう。

陛下は、彼を法衣子爵にしてトンネル警備隊の隊長に任命した。

「武芸大会は一人も勝てないで大ブーイングでしたけど、最後のグイードさんが唯一まともにカチヤさんと戦えていましたからね。それで面目を保てた部分もあるのですよ」

そんな理由もあって、陛下が珍しく強権を発動して決定したそうだ。

他の貴族達も反対はしなかった。

もし反対すると、他の不甲斐ない参加者達の話が必ず出てしまうからだ。

彼らの大半は、自分達の子弟である。

「なるようになったという事か」

「そのグイードさんですけどね」

「グイードさんが何か？」

「いえ、子爵家を立ち上げたので、お見合いの話が増えましてね」

トンネル利権は手に入らなかったが、警備隊隊長職はほぼ世襲が決まっている。

そこに潜り込もうと、まだ独身であったグイードさんとのお見合いを企んだらしい。

「結局、全て断ったようですが」

「婚約者でもいたのですか？」

「うーーーん……みたいなものですかね？」

「みたいなもの？」

「ええ」

陛下の甥なのに、母親の身分のせいで昔から扱いが悪かったグイードさん。

それでも彼は、目をかけてくれる陛下のために決して腐らず、真面目に日々の生活を送っていた。

「そんな彼には幼馴染がいたそうで……」

その娘は、ポイス子爵家の次女であった。

他の貴族からはほとんど無視されている彼の、唯一の理解者だったそうだ。

「グイードさんは、もし自分が独り立ちできたら結婚しようと彼女

に言っていたそうで。泣けるお話ではありませんか」

出たよ、また再び出てしまった。

幼馴染が結婚を約束して、それが実現してしまう。

先のファイトさんに続き、再び俺のトラウマを刺激する敵の登場である。

「へえ、純愛だね。あたいでも羨ましくなるぜ。でもそうなると、あたいが勝って結果的にはよかったのか？」

「かもしれませんね。陛下もお認めになられたそうで。前から二人の関係を知っていたから、許可を出したそうです」

どうやら陛下も、自分の甥には甘いらしい。

いや、ああいう立場の甥だからこそ、好きな人同士で結婚するのを認めてあげようと思ったのか？

しかし、なぜか無性に腹が立ってきた。

エリーゼ達はいい奥さんだと思うが、それとは関係なしに感じてしまう理不尽なまでの怒りとでもいうべきか。

「くあぁーーー！　貴族として失格！」

俺は突如大声をあげてしまう。

そんな結婚は、今度こそは阻止しないといけない。

「貴族が恋愛結婚などありえない！」

「そうかもしれませんが、グイードさんと家格が釣り合っていない

わけでもないですし、反対する理由もないですけど」

「ブライヒレーダー辺境伯、そこに純愛物語を贔屓する補正がないと断言できますか？」

「ないとは言いませんけど、別におかしな話ではないでしょう？第一、陛下がお認めになっていますから」

「そういえばそうだった……」

ブライヒレーダー辺境伯の正論に、俺は急にトーンダウンしてしまう。

どうしても商社員時代の癖で、偉い人の許可という言葉に弱いのだ。

「さっぱり理解できませんね。バウマイスター伯爵は何を怒っているのですか？」

「それはですね……」

いつの間にか、エルが姿を見せてブライヒレーダー辺境伯に何かを吹き込んでいる。

主君の悪評を広げるなど、とんでもない家臣である。

「幼馴染が羨ましい？　何です？　それ」

「十二歳でブライヒブルクに来るまでにトラウマがあったのかな？と思う次第でして。たまに変になるんすよ」

「今は、こんなに綺麗な奥さん達に囲まれているからいいではない

ですか。バウマイスター伯爵、私も兄が急死して家督を継ぐまでは、女性とはほとんど縁がありませんでしたよ。兄は自分の寿命を悟っているような人でしたから梃子でも結婚しませんでしたし、次男の私だって、兄よりも先に結婚して子供を作るなんて許されませんでした。私には文学があったので寂しくはなかったですけどね」

「ブライヒレーダー辺境伯っ！　俺達は仲間ですね！」

俺も十二歳になるまでは、魔法だけが友達だった。
だから、文学だけが友達だったブライヒレーダー辺境伯は仲間。
そう思うと、つい嬉しくなってしまう。

「ええと……喜んでいただけて何よりです……」

「あたい、この人と結婚して大丈夫かな？」

「奥さんには優しいから大丈夫だと思うよと言っておく」

「そうなんだ。エルヴィンは一緒にいるからわかるよな」

「たまにわからん事もあるけどな……」

こうして無事にトンネルは開通し、結果的に俺の嫁がもう一人増えたのであった。

第百十七話　ブリザードのリサ

「ううっ……何か歩きづらいな……」

「そういう経験は、前にボクにもあったな。懐かしいね」

「それほど前じゃないだろう？　ルイーゼは、まだ十七歳なんだから」

「そういえばそうだった。内乱がえらく長く感じたんだよね」

「大変だったって噂では聞いてたけど……」

「どっちが大変なのかな？　内乱？　それとも？」

「お前なぁ……そういうことを聞くなよ。冒険者のスケベオヤジでもあるまいし……」

トンネル開通から一か月、いまだ出入り口周辺の工事は進んでいるが、通行量は徐々に上がり続けている。

開発途上のバウマイスター伯爵領で商売を始める。

こういう商人が多数、コストが安いトンネル経由で荷を運ぶようになったからだ。

それに釣られて、出入り口付近の開発も進んでいる。
休憩所、待機所、荷を預かる倉庫、トンネル利用者向けの宿泊・飲食・娯楽施設など。
バウマイスター伯爵領側は、パウル兄さんの領地も近いので宿屋などの建設が始まっている。
ブライヒレーダー辺境伯領側は、協定によりブライヒレーダー辺境伯家がそれらを受け持って建設中だ。

トンネルの警備には王国軍も加わり、その職を陛下の甥が新規に法衣子爵家を立ち上げて世襲する事となった。
こうして、談合というか、密約というか、純情な若者なら激高しそうな大人同士の馴れ合いが発生するわけだ。

カチヤと戦うために武芸大会に出た連中が、その警備隊に優先的に雇用されたなんて事実は公表されなくてもいいし、それで何とか彼らの実家が納得したなんて事は庶民は知らなくていいわけだ。

そして、俺には奥さんが増えた。
元々トンネルの出入り口に領地を持っていたオイレンベルク家の長女である。
彼女は御家のためと暴走し、それを結果的に叩きのめした俺が彼女を娶る事になった。

そんな理由でと思うが、この世界ではそんな理由でまったく問題はない。
この世界で感動的な恋愛話というのは珍しく、珍しいからお話になって本が売れるのだ。

そして、俺と結婚する事になったカチヤがどう思っているのかだ

が……。

『あたいは、バウマイスター伯爵様に負けたし、あたいを綺麗なんて言ってくれた人はバウマイスター伯爵様だけだし……』

顔を赤くさせながら、妙にしおらしい態度で答えるカチヤ。

こういう人を、チョロイと言うのが正解なのであろうか？

俺にイケメンやリア充のスキルなど存在しないので、なぜ彼女に惚れられているのかよく理解できない。

『ヴェル様が強かったからだと思う』

『狼の群れみたいだな……』

『狼も人間も動物だから』

ヴィルマの返答になぜか俺は納得してしまう。

カチヤからすれば、強ければ正義なのであろう。

その正義である俺に嫁ぐのに、何の疑問も抱いていないと。

そんなわけで、カチヤは新しく移転したオイレンベルク領から嫁いできた。

さすがに今回は、オイレンベルク家も貴族の礼儀に則って婚礼の準備をしている。

勝手がわからないので、移封後に近所になったヘルマン兄さんがアドバイスをしていたが、うちの実家が貴族としての常識を他の貴族に教えるなんて、隔世の感というか何と言えばいいのであろうか？

他にもこの二つの騎士爵領は、ハチミツ酒、マロイモ焼酎の製造で一致協力していく事になったそうだ。

ハチミツとマロイモで、日持ちするお菓子を作って売り出す計画もあるらしい。

こういうコラボは、日本の地方名産品でもあったような気がする。

『親父、こんなに奮発して大丈夫か？』

『このくらいなら、それほど負担でもないな』

カチヤ達は、昔のバウマイスター騎士爵家なら躊躇するほど豪華な婚礼準備を整えた。

お金は大丈夫なのかと思ったら、実はオイレンベルク家は意外と貯蓄が多かった。

『現金収入源は、マロイモと少しの商品作物の販売益だけですけどね』

そのお金を使うのはたまに外に買い物に行くくらいで、更に大きかったのはオイレンベルク家が成立して以来、碌に他の貴族と付き合いをしてこなかった点にある。

何しろオイレンベルク家は、寄親であるブライヒレーダー辺境伯家とだって碌に付き合いがなかったのだから。

『オイレンベルク卿、この金貨は、帝国との停戦直後に発行された新金貨の前の金貨ですよね？』

『昔から、金庫に入っていましたね』

歴史は長いが、中央の世情にほとんど関わらないオイレンベルク家は、旧貨幣を新貨幣に交換すらしていなかった。

年寄りがタンス預金で、聖徳太子の一万円札を持っているのに似

ているかもしれない。

『レートは幾つだったかな？　それとも、多少希少価値がありますから、このまま持参金にしますか？』

『そうしましょうか』

『オイレンベルク卿、私にも数枚売ってください。色をつけますから』

王国も帝国も、停戦後に交易で面倒がないように双方が貨幣を新造して金の含有量などを合わせている。

古い王国金貨の金含有量を知らないブライヒレーダー辺境伯は、古い資料を引っ張り出して両替をしようとしていた。

オイレンベルク騎士爵領はブライヒレーダー辺境伯家の寄子のままで、バウマイスター伯爵家の準一門扱いにもなっている。

カタリーナのヴァイゲル家と同じ扱いだ。

式はバウマイスター伯爵家内だけで行われたが、そこには一部の貴族が招待されている。

仲人役のブライヒレーダー辺境伯は、気合を入れてその役割をこなしていた。

そして翌日に、エルとハルカの結婚式も行われた。

『ふっ、ようやく俺も結婚か』

『すまんな。時間をかけてしまって』

時間がかかったのは、初めてのミズホ人との結婚式なので向こう

の風習にもある程度考慮したからだ。
トンネル開通以降、エルは色々とミズホの風習に振り回されて精神的にグロッキーになっていた。

まずは、正式な婚約のための結納の式。
結納金、スルメ、カツオブシ、コンブ、酒などを購入してフジバヤシ家に挨拶に向かった。

『正座に慣れてないから、足が……』

事前に練習したので結納は滞りなく終了したが、エルは長時間の正座で足が痺れて俺が肩を貸す羽目になった。

『そんなに痺れたの？』

『こらっ！　ルイーゼ！　俺の足を触るな！』

ルイーゼが、エルの痺れた足を触って遊んでいた。

次に、教会での式と披露宴の前に、ミズホ公爵領で式を行った。
ハルカは白ムクに似た着物を、エルは紋付袴に似た服を借りて神社と寺が融合したような場所で神に結婚の報告を行う。
神主と坊さんが融合したような神官が神に結婚を報告し、エルとハルカが三々九度の盃を交わす。
思いっきり教会の風習とは違っていて、前世で先輩の結婚式に出た時に式が神前だったのを思い出してしまう。

『ヴェンデリンさん、珍しくて参加する方は面白いと思いますが、大分教会とは違いますわね』

『カタリーナ、そこは大人の事情で気にしては駄目だ』

帝国にはお互いの宗教にケチを付けるのは止めましょうという秘密紳士協定があったが、王国にはなかった。

そこで、この人物が事前に活躍する事となる。

『久しぶりに、えらく苦労したの』

ホーエンハイム枢機卿は、この秘密紳士協定を王国でも通用させるために、宗教家として帝国にまで赴いて奔走する羽目になる。

苦労した分、帝国の宗教関係者とも知己が増えて、余計に次期総司教の椅子が近づいたと言われるようになっていた。

ミズホ側の式が終わると、バウマイスター伯爵領内の教会で行われる式と、バウマイスター家領主館で行われた披露宴だ。

ミズホ公爵家側からも多くの参加者が招待され、料理や酒も王国の物と半々に出されて王国側の招待客にも好評であった。

『結婚を祝う気持ちは本物だが、一石二鳥でミズホ産品の紹介もできてよかったよかった』

ミズホ公爵は上機嫌で酒を飲み、王国の食べ物を口にする。

式は無事に終わり、エルとハルカは新婚旅行へと旅立った。

とはいえ、俺が王都に送り出しただけだが。

俺達がいると夫婦水入らずとならないので、王都に送り出してしまったのだ。

王都には、夫婦で行けるような観光スポットも多い。

二人は宿に泊まりながら一週間ほど休む事になった。

そして、俺もカチヤと初夜を迎える事になった。

「あたい、年上なのに経験がなくてな……」

実は、カチヤは現在十九歳。

同じ年くらいだと思っていたのに、何とカタリーナの一個上であった。

「この場合は、あった方が問題じゃないか？」

「そうだけど、あたいにだって年上としてのプライドがあるんだよ」

「それを言うと、テレーゼとか……」

「それを言ってはいけない。ええと、バウマイスター伯爵様って呼ぶのは変だよな？」

「呼び方はご自由に」

「じゃあ、旦那」

その日からカチヤとは夫婦になった。

他の奥さん達は前からカチヤと接しているし、彼女のさっぱりとした性格を好んでいる。

すぐに、バウマイスター伯爵家に馴染んでくれた。

「むしろ、カタリーナよりも早く馴染んでいる」

「ヴィルマさん、私が何か？」

「別に何も」

ヴィルマの毒舌は、幸いにしてカタリーナには聞こえなかったようだ。

カタリーナとカチヤ、共に最初は俺達とトラブルがあったが、なぜかカチヤの方がすんなりと輪に入ってきたような気がする。

「でもなぁ。あたいに貴族の奥さんが務まるのかな？　冒険者としてはそれなりに活躍していた自信ってのがあるんだけど……」

貴族の奥さんともなれば、礼儀作法や夫の手助けなどで腕っ節以外の能力を要求される。

カチヤは、それが自分に務まるのかと心配になったようだ。

「えっ？　大丈夫でしょう？　エリーゼが教えてくれるから」

「カチヤさん、こういう事は順番に焦らずにゆっくりとやれば自然に覚えますから」

「そうなんだ。うちの実家って、そういう事よりも農作業が優先でさ。困っていたところなんだ」

エリーゼが指導をすると聞くと、カチヤは安心したようだ。

しかし、さすがは正妻として抜群の安定感を誇るエリーゼだ。

的確にフォローを入れてくる。

「ただ、冒険者として活動できないのが残念だな」

「えっ？　何を言っているの？」

どこか情報に齟齬があるのか、本当に知らなかったのか？
カチヤは、普段の俺達の行動をよく知らないようだ。

「カチヤ、君は即戦力だよ」

ルイーゼは、その両手を肩の上に置く。

「ルイーゼ、それって？」

「この三日間ほどは、カチヤもヴェルのお相手で大変だったと思うから言わなかったけど、今日は魔の森で狩りと狩猟をする予定だから」

「旦那も？」

「最近ヴェルは工事依頼で忙しいから、置いていくと逆に怒るのよね。エリーゼ、支度は出来た？」

イーナは当然という顔をしつつ、エリーゼにお弁当などの準備が終わったかを聞いていた。

「今日は、いきなり中心部には行かないわよね？」

「カチヤさんがいますし、カカオの在庫が心許ないとアルテリオさんが言っていましたわよ」

「チョコ、チョコ」

「という訳ですので、本人が嫌がらなければ狩りには普通に行けますけど」

「貴族らしくないあたいが言うのも何だけど、バウマイスター伯爵家って変わってんのな」

その日は、カチヤも連れて久しぶりにみんなで狩りと採集を行った。

現在の魔の森は、付近に数十か所も村や町が完成し、冒険者達が目当ての獲物や採集物を求めて生活している。

長期滞在用の宿や借家が追加で多数完成し、冒険者達はそこで寝泊まりをしながら魔の森に入っていくのだ。

「噂には聞いていたけど、魔の森って魔物が多いな」

「危険だけど、実入りはいいよ」

「実入りをルイーゼが気にする必要あるのか？」

「ボク、バウマイスター伯爵領内の魔闘流道場の総締めだから」

領内中に道場を建設し、そこに兄や弟などの親族を道場主として配置し、ルイーゼが産んだ子供がバウマイスター伯爵家魔闘流指南役となる。

現時点でもルイーゼの活躍のおかげで門下生は増えていて、その纏めと管理をおこなうのが彼女の仕事となっている。

「とはいえ、兄と弟に丸投げで何もしてないけどね。資金は出しているんだよ」

「私もルイーゼと同じね。槍術指南役と、槍術はバウマイスター伯爵家中で習っている人が多いから。道場の建設にもお金を出してい

るし」

イーナも、バウマイスター伯爵領内に槍術道場を増やすため、自分でお金を出していた。

警備兵の必須技能なので習っている人が多く、道場の建設は急務であったのだ。

ローデリヒは槍術の達人であったが、正式に免許皆伝や目録を受けていなかった。

なので彼も入門していて、それが余計に門下生の増員に拍車をかけているようだ。

会社と同じで、上司と同じ趣味や習い事をして仲良くなろうとする部下というのは存在する。

「カタリーナは？」

「私は、ヴァイゲル家飛躍のために仕送りをしておりましてよ」

ヴァイゲル領内の開発を促進するために、カタリーナも定期的に仕送りをしていた。

「ヴィルマは？」

「美味しい物を買う。狩って、採集して食べる」

「ふーーーん」

ヴィルマは特に難しく考えない。

自分の子供はバウマイスター伯爵家の分家を創設するのであろうし、普段は美味しい物を沢山食べるだけだ。

「ヴェル様と一緒にいられるし、美味しい物が採れてお金にもなる。不満はない」

「なるほど、あたいも頑張らないとな」

その日は夕方まで狩りに採集にと頑張ったわけだが、屋敷に帰る準備をしているとなぜかカチヤが首を傾げていた。

「どうしたんだ？　カチヤ」

「なあ、旦那。気のせいか、あたいの魔力が増えたような気がするんだ」

「ああ、それね……」

こんな場所で話すのも何だと思い、俺達は急ぎ屋敷へと戻る。

更に、ブライヒブルクからブランタークさんを『瞬間移動』で連れてきた。

「カチヤは元から魔力があったものな。そんな予感はしたけどよ」

「ブランターク様、どういう事なんだ？」

「それがな……」

ブランタークさんはカチヤに、その認識は間違っていないと説明する。

間違いなく、魔力が増えているのだと。

「この三日ほどで、魔法の威力と保ちが全然違うからな。あたいなんて、今までは『加速』を多く使うと午前中で魔力切れだったから。しかし、何でだ？」

「それは至極簡単は話だ。伯爵様とそういう事をしたからだ」

「そういう事？」

「夫婦になるとするアレだな」

「アレって……」

妻達の中では年齢が上の方なのに、その手の免疫がないカチヤは顔を真っ赤に染めていた。

「そんな話は、聞いた事がないぞ！」

「聞いた事がなくても、伯爵様にはそういう謎の能力があるんだ。ああ、他に漏らすなよ。大混乱になるから」

「いくらあたいがバカでも、それはわかる」

間違いなく、魔力を増やしたい女性が殺到する。

カチヤは、すぐにそれを理解した。

一応魔法使いだからこそ、すぐにその能力を理解したのだ。

「伯爵様よぉ……」

「いやだって、ブライヒレーダー辺境伯がちゃんと泥を被ってトンネル利権を取っていれば、こういう事にはならなかったのでは？」

俺に文句を言われても困ってしまう。
俺は、あのトンネル騒動を解決させた功労者だというのに。

「ううっ……至極まっとうな反論で言い返せねぇ……」

ブランタークさんは、自分の主人の不手際を俺に指摘され何も言い返せない。
それに、カチヤと形式上だけの夫婦になるのは失礼であろう。
別に、彼女は嫌な女ではないのだから。

「もう堂々巡りだな。伯爵様の奥さんが増え、その人の魔力が上がり、それをどう秘密にするかという話になりと……」

「凄いけど、大騒ぎになる能力だから仕方がないですよ」

自分も魔力が上がって魔法が使えるようになったイーナからすれば、これが世間に漏れた時に起こる騒ぎが容易に想像できるというわけだ。

「今まで魔法が使えないと思われていた人の中から、魔法使いが現れるという事が凄いですからね」

「でも、エリーゼ。アマーリエさんは？」

カチヤは、アマーリエ義姉さんが魔法使いでない事が不思議なようだ。

「隠れている魔法使いの素質を引き出すだけで、魔法使いの数は増えるけど全員じゃないんだと思う」

「ヴィルマとイーナちゃんは素質があったんだね」

ヴィルマの推論に、ルイーゼは納得した表情を浮かべる。

「『加速』と『身体強化』の他にも魔法が使えるようになるといいな。そうしたら、カタリーナに魔法を教えてもらおう」

カチヤは、自分の魔力が増えて嬉しいようだ。

新しい魔法が使えるかもと期待している。

「私も教えますけど、お師匠様にも基礎を教わった方がいいのでは？」

「それもそうだな。ブランターク様、魔法を教えてくれ」

「それはいいけどよ。なあ、伯爵様？」

突然、ブランタークさんが険しい表情になる。

その視線の先を見ると、端のテーブルの上でアマーリエ義姉さんとテレーゼが楽しそうに話をしていた。

「この水晶玉、私の実家にもあったわ」

「帝国でも、貴族の家には必ずあったの。魔法使い発掘のためにの」

楽しそうに話をする二人のテーブルの上には、俺が子供の頃に魔法使いの素質を探るために使用した水晶玉があり、テレーゼがそれに手をかざしている。

水晶玉は綺麗な虹色をしていた。

「手をかざすと虹色になるのよね。私も子供の頃にそうなったのを覚えているわ」

「そして、魔法の才能があるとこれが消えるわけじゃ」

テレーゼが手をかざしている水晶玉から虹色が消え、これは彼女に魔法使いの才能がある事を示す。

「体が熱くなってきたの」

「凄いわね」

「妾も、子供の頃には魔法使いになりたくて堪らなかったからの。水晶玉をかざし、本を読んで遊んだものよ。魔法の鍛錬方法など、そこいらの魔法使いよりもよっぽど本を読んで勉強したわ」

テレーゼも子供の頃に魔法使いを夢見て、それが叶わなかった口らしい。

とても嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「その時は駄目だったのよね？」

「二十歳をすぎて、魔法使いの才能が出るか。これは嬉しい誤算じゃの」

「凄い、こういう風になるのね。私も魔法を使えればよかったのに」

「隠れた魔法の才能？　今のところは、ヴェンデリンでないと引き

出せないものなのかもしれぬの」

年上二人組は、わいわいと楽しそうに話をしている。

今になって、テレーゼに魔法使いとしての才能が現れた。

それが何を意味するのか、ブランタークさんは気がついたようだ。

「伯爵様……」

「あはは、俺もブランタークさんと同じ男って事で」

「そこで俺は関係ないだろうがよぉ……」

何の事はない。

ただ単純に、俺とテレーゼがそういう関係になってしまっただけだ。

「奥方は怒らないのか？」

ブランタークさんは、最後の防波堤だと思っていたエリーゼ達を問い詰める。

「今のテレーゼさんなら、特には何も」

エリーゼからすれば、俺が帝国に居辛くなったテレーゼの身柄を引き受けた時点で覚悟はしていたというわけだ。

それと、もうフィリップ公爵ではないテレーゼに特に含む点もないそうだ。

「テレーゼさんの助言には助かっていますし」

エリーゼは法衣貴族の娘なので、バウマイスター伯爵領の統治の補佐で甘い部分が出てしまう。
実は、それを密かに補っているのがテレーゼであった。
伊達に、あの大きな領地で独裁権を持っていたわけではないらしい。

自分が表に出ると面倒になるのであくまでも密かに助言を行い、公式にはバウマイスター伯爵領にお世話になっている隠居様という姿勢を決して崩さなかった。

その姿勢はローデリヒにも好かれていたし、エリーゼたちも一緒に料理などをする仲になっている。

「結局、トンネルの件はテレーゼの意見が一番正しかったわけだし」

「イーナよ。それは妾が部外者だから言えた事だぞ。為政者とは、考え過ぎて時に妙な回り道ばかり考える事があるからの」

「でもさ。結局、ヴェルがトンネル利権を取って一番穏便に解決したよね？」

「そうさの、ブライヒレーダー辺境伯が取ると『寄親だからといって、お前ばかりずるいぞ！』と非難されかねん。それが嫌だったのであろう」

テレーゼは、時にそういう嫉妬が貴族家を没落させる要因になるのだとルイーゼに説明した。

「旧オイレンベルク領の大半は譲渡して、トンネル周辺に作る施設

の建設と運営は任せた。十分に元は取っている」

「ヴィルマの言うとおりじゃ。上手くいって何よりじゃの。それにの、ブランターク」

「はあ……何でしょうか？　テレーゼ様」

エリーゼ達の支持を得られず、ブランタークさんはゲンナリとした表情を浮かべる。

まさか、俺とテレーゼの仲が公認だとは思わなかったのであろう。

いや、俺も勝手にテレーゼとそういう関係にはならない。

なぜなら、エリーゼ達が怒ると怖いからだ。

「妾は、公式にはヴェンデリンの妻ではない。しかしながら、隠居後にバウマイスター伯爵領で世話になっている時点で貴族達は妾をヴェンデリンの愛人扱いする者も多かろう。扱いとしてはアマーリエと同じじゃの」

周囲の人は『そういう関係なんだろうな』と思いつつ、それを表立っては大きく言わないというわけだ。

「そういう批評を封じ込められる力があるのじゃから、ヴェンデリンの好きにするがいいわ。妾は生活には困っておらぬし、子供が産まれたら、将来の保証さえしてもらえれば何も言う事はない。幸いにして、今のバウマイスター伯爵家には分家だの家臣家の枠が多く余っておる」

自分の子供を、バウマイスター伯爵家の後継者にするつもりもない。

テレーゼ自身がその件で散々に兄達と揉めたので、自分の子をそういう立場にしたくないのであろう。

「妾はこれまで通りじゃの。同じ境遇のアマーリエと仲良くやるから気にするでない」

「ううっ……」

テレーゼは、自分で俺の奥さんになるつもりがないと宣言する。あくまでも、非公式の愛人の立場を貫くわけだ。

そして、これにブライヒレーダー辺境伯は文句を言えない。他の貴族たちも同じで、なぜならこういう立場の女性を抱えている貴族は多く、下手に非難するとブーメランとして自分に戻ってきてしまうからだ。

「というわけで、妾も魔法の鍛錬を頼むぞ」

「俺がやるに決まっています。他に漏れると面倒だし」

「どうせじきに漏れるのじゃ。とはいえ、今は『遅咲きの魔法使いテレーゼ、衝撃のデビュー』のために密かに特訓を受けるとするかの」

などとのん気な事を言いながら、テレーゼは水晶玉と体に魔力を流す鍛錬を続けている。

話しながらそれができるという事は、彼女が優れた魔法使いの才能を持つ証明であった。

「お師匠様、私も手伝いますわ。カチヤさんの指導もあるでしょう

し」

「そうだな、秘密保持のためなら導師でもいいんだが……」

「導師様は、あまり初心者の指導には向いていないかと……」

十分に天才のカテゴリーに入るカタリーナをして、導師の指導方法にはついていけないという認識のようだ。

「うん、向いてない。初心者じゃなくても人を選ぶもの！」

過去に導師の修行を二年半も受けたルイーゼが、カタリーナの意見に賛同する。

俺もその意見に賛成だ。

第一、俺とルイーゼ以降、彼の弟子になれた者など一人も存在しないのだから。

『最近の若い魔法使いは、軟弱なのが多くて困るのである！』

この前、うちに飯を食いに来た時に、導師は少し厳しく教えると逃げ出してしまうと怒っていた。

「その前に、導師は忙しいからな」

「忙しいの？　何で？」

「それはな……」

『本日は、帝国内乱で大活躍されたアームストロング導師様のお話です！』

『……某は……』

基本的に通常業務が少ない導師は、現在陛下の頼みで王国各地に講演の仕事で出かけていた。

「導師が？　あの人、ちゃんと喋れるのかな？」

「大丈夫だろう。よくは知らんけど。にしても、テレーゼ様に魔法を教えるのか……」

ブランタークさんは、翌日からブライヒレーダー辺境伯の許可を得てカチヤとテレーゼの魔法指導を開始する。

また彼の弟子が増えたわけだ。

「何でか、俺に指導を頼む人が多いんだよな」

それは、導師よりも理論的かつ効率的でまともな指導ができるからだ。

師匠もブランタークさんの薫陶により、俺を上手に指導してくれた。

「まあ、ボチボチとやっていくさ」

カチヤは、徐々に上がっていく魔力の適切な使用方法と新しい魔法の習得を目指す。

テレーゼは、基礎訓練と自分の魔法の方向性を探るという課題に取り組んでいた。

カタリーナが補佐に入り、屋敷の裏庭は真面目な空気に包まれる。

「前のあたいは、魔力が少ないから高名なブランターク様に魔法を教えてもらうまでもなくてな。あくまでも冒険者の枠で、『ブリザードのリサ』に魔法を教わったんだ」

ブリザードのリサの名は、前に聞いた事がある。

前にブランタークさんが、高名な冒険者兼魔法使いだと言っていた記憶があった。

超一流で、高額な依頼料を取る人だと。

「へえ、あいつが人に教える事なんてあるんだな」

「知っているのか？　ブランターク様」

「あいつが新人冒険者の頃に、少しだけ教えた事がある」

さすがはブランタークさん。

顔の広さは、冒険者の中でも屈指であった。

そんな高名な人に魔法を教えた経験があるとは。

「姉御が、そんな事を言っていた記憶がないな」

「姉御？」

「それがさ旦那、『師匠』って呼ぶとババ臭いイメージになるから嫌なんだと」

カチヤには意地でも姉御と呼ばせ、他の呼び方だと怒るのだそうだ。

姉御もババ臭いような気がするが、本人が気に入っているらしいので構わないのであろう。

俺は師匠の事は師匠と呼んでいるけど、あの人は年齢よりも若く見えたし、それなのに威厳のようなものも兼ね備えていたような気がする。

語り死人だったから、年は取らないんだけど。

「カチヤ、ブリザードのリサって何歳くらいなんだ？」

「ええと……いくら旦那の願いでも、姉御の年齢は言えないかな」

微妙なお年頃で、それを指摘するとカチヤでも怯えさせる事が可能なのであろう。

カチヤは、意地でもブリザードのリサの年齢を言わなかった。

「カチヤ、その人って独身？」

「残念ながら？」

「納得できた。でも、何で疑問形？」

女の身で、超一流の魔法使いで冒険者でもある。

更に、カチヤが姉御とまで呼ぶ人なのだから、ルイーゼの予想どおりに独身なのであろう。

実は、こういう人は冒険者では珍しくない。

変な男と結婚するくらいなら、一人で稼いで面白おかしく暮らす

というやつだ。

「姉御の場合、結婚願望は凄いんだよ。相手がいないだけで……」

「それはわかるわ。あいつ、若い頃からすげえ気が強かったからな……」

元の性格もあるし、冒険者という仕事の特性上、男になんて舐められて堪るかという人が多いのも特徴だ。

過去に邂逅があったブランタークさんも、心当たりがあるらしい。

「美人ではあるんだがな……」

「へえ、そうなんですか」

「伯爵様がもらってみるか？」

「いえ、いいです……」

同じ冒険者兼魔法使いとして活動していたカタリーナに比べると、どこか地雷臭のようなものを感じてしまう。

カタリーナの場合は、あれで色々と可愛い部分があるのだから。

「でもその人、弟子の結婚式に来なかったんだね」

そういえば、ルイーゼの言うとおりだ。

彼女クラスの魔法使いならいくらでも出席可能なのに、式に姿を見せていなかった。

「招待状は送ったんだよ。でも姉御、どうしても外せない仕事があ

るからって……」

「それは事実なのかしら？」

「「「「「うーーーん」」」」」

イーナの疑問に、全員が首を傾げてまう。

移動時間も合わせて式の招待状は大分前に送るから、そう仕事のスケジュール調整が難しい事もないはずだ。

「姉御は強いから、指名依頼も多いし……」

カチヤの口調も、大分歯切れが悪い。

もしかすると、『年下の弟子の結婚式に出たくないという個人的な感情があったのでは？』と思っているのであろう。

「まあ、何だ。今は魔法の練習をしようぜ」

話の流れが悪くなったので、ブランタークさんが二人の魔法練習を再開しようとする。

するとそこに、メイドのレーアが何かを持ってやってきた。

実は現在ドミニクが産休中で、彼女の仕事の大半をレーアが担当しているのだ。

少し心配になってしまうが、内乱中に厳しくドミニクから教育を受けたようで目立った粗は見つからない。

「お館様、カチヤ様にお手紙です」

「あたいにか？」

「差出人は、リサ・クレメンテ・ウルリーケ・エクスラー様と書かれていますね」

「姉御だ……」

意外な差出人に驚きつつも、カチヤは手紙の封を切って手紙を読み始める。

「『近日中に、新妻になったカチヤの顔を拝みに行くから。バウマイスター伯爵様って、どのくらい強いのかしらね？　物凄く興味があるわ……』」

「あかん……これは面倒な人だ……」

自分の弟子がどんな新婚生活を送っているのか。

加えて、俺がどのくらい強いのかとか、バトルジャンキー的な話になっている。

少年誌のバトル漫画でもあるまいし、そういう人は基本的に勘弁してほしい。

「カチヤの師匠らしい」

「ヴィルマ、あたいは姉御ほど戦闘的じゃねえよ」

カチヤは、自分がブリザードのリサと同等の戦闘狂だと思われるのが嫌なようだ。

必死に否定した。

「そして、自分が未婚なのに弟子の心配。まさに小姑」

「ヴィルマ、お前は本当に容赦ないよな……」

カチヤが、ヴィルマの毒舌ぶりに呆れていた。

「カチヤさんとテレーゼさんの魔力が増えた件をどう隠しましょうか？」

「いや、あいつは超一流の魔法使いであって隠すのは無理だから」

カタリーナの意見を、ブランタークさんが否定する。

何にせよ、俺達は面倒な客人を迎え入れる未来が確定してしまった。

「でもさ。近々来るって書いてあるけど、正確にいつって書いていないから困るよね」

手紙がきてから一週間後、今日はみんなで魔の森に狩りに行った。

大量の成果と共にバウルブルクに入り、今日は屋敷に帰る前に町の中心部にオープンした喫茶店に寄る事にする。

そのお店はオープンカフェ形式で、王都にある同じようなお店にも負けていないと評判になっていた。

メニューに限っていうと、魔の森産の果物やカカオを使ったメニューが出るし、輸送費の関係で王都のお店よりも安く提供されている。

店は、多くの客で賑わっていた。

「バウマイスター伯爵様っ！　生憎と今の時点で貸し切りは……」

「そういう気遣いは無用だから。適当に普通の席に案内してよ」

「畏まりました」

店主直々に案内されて席に座り、みんなそれぞれに飲み物やデザート類を注文する。

暫くするとウェイトレスが持ってきたので、全員で食べ始めた。

「美味しいですね、あなた」

「王都のお店のに負けていないよな」

「そこで働いていた方がオーナー兼パティシエなのだそうです」

「へえ、そうなんだ」

暖簾分けか、独立をしたようだ。

バウマイスター伯爵領ならば商売になると思われたという事は、この領地は順調に発展しているのであろう。

「魔の森も凄いけど、旦那達も凄いな。というか、よくあれだけ狩れるよな」

魔の森には、他の魔物の領域に比べると貴重な魔物と産物が豊富に存在している。

それを獲る過程で、今も時折行方不明者や死傷者を出してるが、一攫千金を夢見て挑戦する冒険者は多かった。

その中でも、俺達は安定して大量の魔物を狩れるのでカチヤは驚

いているようだ。

「あたいは、待ち伏せ・奇襲専門だったからなぁ」

「でも、ソロで稼いでいたんだろう？　凄いと思うけど」

今のカチヤは援護があるので、高速で魔物の急所を一撃で切り裂く戦法に移行している。

魔力が増えて更に強くなったので、既に足手まといではなくなっていた。

「あたいに合わせられる旦那達が凄いと思うけど。元からの戦闘力じゃ比べ物にならないよ。姉御よりも上じゃないのかな？」

「へえ、それは凄いんだね」

「えっ？」

突然別の席から声がしたので振り返ると、いつの間にか隣の席に一人の女性が座っていた。

年齢は、三十歳前だと思う。

ボンテージ風の黒いショートドレスと黒いロングブーツ姿で、フトモモが露出している。

マント風の真っ赤なローブを纏い、ローブの装飾にはラメが大量に使われていた。

髪色は濃い緑で、髪型は俗にいうワンレングス、前世で母が『バブル崩壊前には、こういう恰好や髪型が流行していたのよ』と言っていた格好そのままのであった。

死語ではあるが、『ゴージャス系美女』という種類だと思う。

昔の映像で、〇ュリアナとかで踊っていそうな人だ。

「気がつかなかった……」

狩猟が終わって油断していたのかもしれない。

ブランタークさんはテレーゼへの指導でいなかったので、もっと気をつけないとなと思ってしまう。

「それを補うためにボクがいるわけだけど、特に害意もないから言いそびれちゃった。ゴメンね」

ルイーゼは、かなり前から彼女の存在に気がついていたようだ。

俺に謝ってくる。

「ルイーゼ、何でもっと早く言わなかったの？」

「あのね、イーナちゃん。あの人、声をかける前にお化粧に余念がなかったから……」

同じ女性として、ルイーゼなりに気をつかったというわけだ。

あの年齢だと、お化粧にも時間がかかるのであろう。

「余計な事を言うんじゃないよ。このチビ」

なのに、俺の奥さんであるルイーゼへの暴言。

俺も含めて、全員が絶句してしまう。

ただ一人を除いて。

「姉御、いらしていたんですか？」

予想通りではあったが、どうやらこの人がブリザードのリサであるようだ。
カチヤが緊張の面持ちと口調で挨拶をした。
「ちょっと仕事が早めに終わってね。魔導飛行船で飛んで来たのさ。ところで、カチヤは何で魔力が増えているんだい？」
「特訓でです」
「特訓ねぇ……」
リサは、カチヤを獲物を狙う猛禽類のような目でみつめる。
どうやら俺達は、とんでもない女に目をつけられてしまったようだ。
「お前、前に顔を合せた時よりも化粧が濃いな」
「人の事は言えないだろうが！　白髪が増えたな、ブランターク」
このままオープンカフェテラスで話を続けるのはどうかと思った俺達は、すぐに彼女を連れて屋敷へと戻った。
すると、まだ庭ではブランタークさんがテレーゼに魔法を教えていて、会うなり礼儀もへったくれもない言葉の応酬が始まる。
「年の事はお互い様だろうが、俺も五十を超えたんだから。お前もそういえばそろそろ……」

「凍らせるよ！」

ブランタークさんがブリザードのリサの年齢を言おうとした瞬間、周囲の温度が一気に下がって周囲の植木や芝生に霜が降りた。

ブリザードの名は伊達ではないようだ。

瞬時に、これだけの広範囲に冷気を拡散可能なのだから。

「お前なぁ……俺は一応年上で、昔は魔法の指導もしてやったんだぞ。ちっとは年上に敬意を払えや」

少なくとも、二十以上年上のブランタークさんを呼び捨てタメ口、実力本位の世界とはいえ、ある意味凄い女性である。

「冒険者に礼儀なんていらないのさ。それよりも新しい弟子かい？ブランターク」

ブリザードのリサの興味は、ブランタークさんから魔法を習っているテレーゼへと向かう。

「まあ、そんなところだ」

「随分と年のいった弟子だね。珍しい」

魔法使いの素質がある者は、大半が子供の頃に見出される仕組みになっている。

テレーゼのように二十歳以上になってからというのは、実はかなり珍しいケースであった。

勿論、一人もいないわけではないのだが。

「家庭の事情での」

「お前……『バウマイスター伯爵の戦利品』か。元フィリップ公爵が、今まで魔法を習えなかった環境？　おかしくはないか？」

しかし、このブリザードのリサは口が悪い。

テレーゼに関する世間の噂を、本人の前で平気で口にしてしまうのだから。

それでも彼女の情報もちゃんと入手している辺り、やはり超一流の冒険者は油断ならないという事か。

「おかしいと言われても、妾はフィリップ公爵として英才教育を受けた身、そういう事もあるのだと理解してもらうしかないの」

さすがはテレーゼ、上手く秘密をはぐらかそうとする。

「冒険者に事情があるように、貴族にも事情があるというわけじゃの」

「カチヤはどうなんだ？　前に会った時よりも、大分魔力が上がっているんだが」

「うっ！」

いきなり標的が自分になり、カチヤは顔を青くさせる。

「さあての。それはカチヤ本人にでも聞いてくれ。案外、師匠の教育が悪かったのではないか？　ブランタークが指導したら、こういう結果になったのじゃし」

テレーゼは、上手くはぐらかしながらもブリザードのリサへの口撃も忘れない。
いくら相手が高名な魔法使いとはいえ、口の利き方に腹を立てたのであろう。
さすがは、フィリップ公爵をしていた人物だ。

「おい、テレーゼ……」

「何じゃ？　カチヤ。妾は、客観的に事実を述べているに過ぎぬぞ」

それでも、お前の指導は下手だと断言しているのだ。
ブランタークさんが言うのならともかく、魔法を習いたてのテレーゼに言われればブリザードのリサが激怒して当然だ。

「言ってくれるな……小娘……」

「妾はもう二十一で、世間では年増の入り口なのじゃがな。お主は、一体いくつなのじゃ？」

「貴様ぁーーー！」

テレーゼは、わざとブリザードのリサを激怒させた。
彼女が激高すると、周囲に冷気が広がる。
どういう仕組みなのか？
人には寒気しか感じられないが、次第に庭にある草木やテーブル、椅子などが凍り始める。

「ブリザードのリサの二つ名は、伊達ではないの」

「小娘、謝るなら今のうちだぞ」

「なぜ謝る必要などある？　妾は事実を言っただけじゃぞ」

ブリザードのリサの迫力に、テレーゼはまったく動じていない。

逆に、向こうの激高ぶりを楽しんでいるかのように見える。

「弟子の様子を見にきて、妾に喧嘩を売ってどうするのじゃ？　それに、庭の草木もテーブルも椅子もバウマイスター伯爵家の資産じゃ。感情に任せて凍らせるのはどうかと思うしの。少し頭を冷やせ……もうこれ以上は冷えぬか」

「……」

ブリザードのリサは、使う魔法とは違って激高しやすい人物のようだ。

貴族に対してこれだけ傲慢な態度を取れるのは、それだけ彼女が冒険者として高名な証拠かもしれない。

「もう少し落ち着かぬと、いつまで経っても結婚できぬぞ」

「おいっ！　テレーゼ！」

カチヤが止めに入るが遅かった。

誰もが容易に想像がついたが、間違いなくブリザードのリサに一番言ってはいけない禁句がそれであるはず。

彼女は、今までの激高した表情から一気に無表情になっていく。

「うわぁ……姉御がこの表情になったら……」

今までにも経験があるのであろう。

カチヤはブリザードのリサの顔を見て、この世の終わりだという表情を浮かべる。

「魔法が使えるようになったばかりで、随分と粋がっているようだね。魔法の世界に貴族も平民もない。わかっているのかい？　小娘」

「少しばかり鍛錬の期間が長いからといって、無駄に威張りくさっておるのか。これだから、『大年増』は困るの」

「よくぞ言った、私が叩き潰してやる」

「ベテランは、いつか新人に敗れ去る定めじゃ。安心して破れるがいい」

なぜかブリザードのリサの弟子訪問が、テレーゼとの決闘へと変化してしまう。

なぜそうなるのかと、俺も含めてみんな何も言えずにただ二人の口論を注視するのみであった。

「あのぅ……お話のケリがついたのなら、少しばかり助けていただきたいのですが……」

そして不幸にも、ブリザードのリサの冷気で足元が凍りついてしまったエルが、俺達に助けを求めるという情けない出来事も発生するのであった。

「テレーゼさん、さすがに無謀では？」

「残された時間で、何とか殺されないレベルになれば問題あるまい」

果たして、水と油だからなのか？

売り言葉に買い言葉で喧嘩になったブリザードのリサとテレーゼは……もう面倒なのでリサで省略するが、魔法による決闘をする事が決まってしまった。

さすがにまだテレーゼは素人なので、決闘は一か月後。

リサはそれまでは魔の森で稼ぐと、本来の目的であるカチヤへの挨拶も碌にしないで魔導飛行船乗り場に向かってしまった。

いくら何でも、高名な魔法使いにまだ才能は未知数のテレーゼでは勝てまいとエリーゼは心配するのだが、当の本人は涼しい表情のままだ。

「妾の魔力はまだ成長途上にある。ヴェンデリンよ、妾を効率よく成長させせい」

魔力を成長させるイコール、そういう事を頻繁にしろという意味である。

「そういう意図？　ずるいなぁ」

「ルイーゼよ、それもないとは言わぬが、妾はとりあえずはあの年増女の疑念を逸らす事に成功したのじゃぞ。少しは感謝せい」

「疑念？」

「忘れたのか？　あの年増女、優秀な魔法使いゆえに、カチヤの魔

力が増えた点を気にしておったであろうに」

「そういえばそうだったね」

なぜ結婚したカチヤの魔力が増えたのか？

少し考えれば、自然と俺の方に疑問の矛先が向く。

テレーゼは、わざとリサに喧嘩を売って一時的ではあるがそれを防いでくれたわけだ。

「でも、一時的じゃないか」

「どうせ、これからは隠し切れまいて。今は、あの年増をどうするのか考える方が先じゃ。ヴェンデリン、あの年増女も嫁にするか？」

「ごめんなさい。無理すぎます」

あの格好もどうかと思うが、なぜああも喧嘩腰なのかが理解できない。

それに、あの人はいくつなのであろうか？

「ブランタークさん」

「俺もいらねえからな、あんなキツイ女。向こうもゴメンだろう？」

「そっちじゃなくて、年齢ですよ」

さすがにそれは、俺でも理解している。

ただ彼女の年齢を聞きたかっただけだ。

「確か、三十歳になるかならないかだな。そうだよな？　カチヤ」

「ええと、姉御は誕生日が春だから、今はギリギリ二十代だったと思う」

テレーゼにまで大年増扱いされたリサは、もう数か月で三十歳になってしまう。

加えて、あの強気というか喧嘩腰な言動、彼女が三十歳までに結婚できる可能性はかなり低い。

「あたいが姉御に教わっていたのは十五歳の頃、姉御も二十五歳くらいだったな」

その頃から、この世界では色々と言われ始める年齢になったので、カチヤはその事に触れないようにしていたそうだ。

「普段はサバサバしていい人なんだけど……」

食事中に、同業の男性冒険者が独身なのをからかったら、座っていた椅子とテーブルごと氷漬けにされてしまったのを見てしまったそうだ。

「ブリザードに相応しいというか……」

「姉御もバカじゃないから、表面だけ凍らせるんだけど」

「それにしても迷惑だ！」

不運にも鎧の足の部分を凍らされてしまったエルが文句を言う。

もし足の中まで凍らされていたら、それこそ障害事件になってしまう。

文句を言って当然であろう。

「でもさ、あの人と結婚する男性っているの？」

ルイーゼの疑問に、全員が黙ってしまった。

少々派手だが、美人ではある。

だが、恐ろしく気が強い。

怒ると、対象を氷漬けにする。

「ないわ。俺はないわ」

「俺もあるわけがない。そんな事は十五年も前にわかっていた」

エルからすればハルカの対極にいるような人物だし、ブランタークさんにその気があれば、とっくに彼女は既婚のはずだ。

「一か月後に来襲があるのじゃから、それまでに妾は特訓をせねば」

というわけで、テレーゼの特訓が始まった。

朝早くからブランタークさんの特訓が始まり、夕方までにかなりの量の魔力を使い果たす。

そして夜には……。

「妾の相手を毎日する事により、妾の魔力が上がっていく。これはよしとして、独占するとエリーゼ達に悪いからの。ヴェンデリン、気張れよ」

「そんな事だろうとは思った」

なぜか俺がとても疲れる羽目になっていたが、テレーゼはそのせいもあって次第に魔力が増大していく。
魔法の習得も、恐ろしく早い。
正直、羨ましい限りの才能である。

「覚えるのが早いし、才能あるんだな」

教えているブランタークさんも、テレーゼの成長に驚きを隠せなかった。

「とはいえ、まだリサさんには勝てませんわよ」

現時点でのテレーゼの魔力量は、中級の上であった。
杖は俺の予備をプレゼントしたので、それを使っている。

『これは、婚約指輪の代わりかの？　まあ公にできぬ関係ゆえに、こういうプレゼントの方がありがたいというわけじゃ』

俺から杖をもらったテレーゼは嬉しそうだ。
取得する魔法はブリザードのリサに対抗してか？
火系統の魔法をメインに練習していた。

「火魔法にしたのは対抗心からじゃの。時間もないから、他の魔法を練習している暇がないわ」

ただ魔法を使うのではなく、リサに対抗可能なレベルの精度と威力を持つ魔法を覚えるのに一か月はとても短い。
色々と覚えるよりも、リサの氷結系魔法に対抗するための火魔法に集中した方がいいという結論のようだ。

「それにじゃ。どうせ負けなのじゃから」

「確かに、勝つには難しいですわね」

いくら才能があっても、練習期間一か月で二十年以上も魔法の練習をしているリサに勝てるはずがない。

リサだって、十分に天才に分類される魔法使いなのだから。

テレーゼは、それを誰よりも理解していた。

「というわけで、適当なところで止めてくれよ」

どうやらテレーゼは、本当に俺の能力を隠すためにだけ喧嘩を売ったようだ。

「時間は稼げたが、さてどうやってあの女を丸め込もうかの。そちらの方が難題じゃて。そして、ヴェンデリンは頑張ったの。冒険者パーティドラゴンバスターズの戦力半減じゃ」

テレーゼがそう言いながら笑っているが、テレーゼにばかりかまけているとエリーゼ達に悪いわけで、そちらへの配慮も必要というわけであって……。

「悪阻がこんなに辛いとは……」

「私も駄目。ギブアップ」

「これじゃあ、ボク達は暫くお休みだね」

「私も、テレーゼさんに魔法を教えていると吐き気が……」

エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、カタリーナの四名が妊娠した。
慶事なのに、妊娠だとやはりまだピンとこない部分もある。

俺が男だからであろうか？
見た目ではまだわからないので、もっとお腹が大きくならないと実感がわかないのかもしれない。

「私は、年齢的な理由でもう少し遅くてもいいと思う」

「あたいは、これでも新婚だから。特訓もあるし」

妊娠していないヴィルマとカチヤに、エルを合わせてようやく四名。
これでは、ローデリヒも魔の森探索を認めてくれないであろう。

「私は戦力にはならないわよ。エリーゼさん達のお世話もあるし。ほら、私は二人子供を産んでいる経験者だから」

いや、さすがに俺もアマーリエ義姉さんを冒険者にしようとは思っていない。
子供を産んだ経験者なので、エリーゼ達の傍にいて世話などをしてほしいからだ。

「さすがにアマーリエは戦力にはしないであろうよ。それよりも、そなたは妊娠せぬな」

「私は色々とまずいもの」

「貴重な畑じゃ。頑張って産めばよいではないか。エリーゼ達の次に」

「高齢出産にならない？」

「アマーリエ、そういう事をあの年増女の前で言うと殺されるぞ」

そういえば、アマーリエ義姉さんはリサよりも年下であった。

「あの年増はもうすぐ三十、妾も前は年増の入り口などと揶揄されておったが、アレがおると気が楽になるの」

「小娘！　私はもうここにいるんだよ！」

実は、今日は決闘当日であった。

そこで、リサは早めに屋敷に顔を出していたのだが、テレーゼは彼女がいるのをわかって挑発していたのだ。

「畜生！　十代で結婚して妊娠だと！　すげえムカつく！」

「姉御、少し落ち着けよ」

「カチヤ！　あんたに言われたくないよ！」

「あたいにどうしろってのさ！　姉御は！」

リサはエリーゼ達の妊娠に、やり場のない怒りを覚えているようだ。

カチヤが止めに入るが、ここで新婚の彼女が止めに入っても意味がないどころか、余計に火に油を注ぐ結果になる。

別に俺だって、リサを怒らせるためにエリーゼ達を妊娠させたわけじゃないし。

「予告どおりに、ぶちのめしてやる！」

結婚できない鬱憤を胸に、リサはテレーゼとの決闘を始める。

本当は魔法使い同士なので避けるべきなのであろうが、そこは俺、カタリーナ、ブランタークさん、導師の四名が間に入る事になった。

「テレーゼ様、頑張ったんだがな……」

「普通、こんな短期間でここまで強くならないのである」

毎日魔法の鍛錬を欠かさず、俺との夜の生活も欠かさずに魔力量を増やし、今では上級の下くらいまで魔力量が増えていた。

魔法に関しても、ただ使えるだけの魔法も入れると恐ろしい進歩を遂げたと思う。

「ただなぁ……」

それでも、今のカタリーナよりも少し少ない程度の魔力を持つリサに勝てるはずがない。

その前に、経験の差で圧倒されるであろう。

「また短期間で魔力が増えているな……小娘をぶちのめしてその秘密を探ってやる！」

「ちっ、思い出しやがった」

「ヴェンデリン、そう都合のいい話はないぞ。妾が勝って大人しくさせるのは……」

テレーゼが口籠ってしまう。
まあ、ほぼ百パーセント不可能であろう。

「先に撃たせてやる」

リサも、自分がテレーゼに負けるとは思っていないようだ。
お手並み拝見とばかりに、先に魔法を撃てとテレーゼを挑発する。

一見油断しているようにも見えるが、リサほどの達人だと先に撃った対戦相手から瞬時に多くの情報を収集してしまう。
かえって、先制した方が不利になる場合もあるのだ。

「それは好都合、唯一覚えた大技を見せてやろう」

テレーゼが杖を構えると上空に巨大な火の玉ができ、それは徐々に大きくなっていく。
直径二メートルほどになると今度は炎が青白く変化して、今度は温度も上がっていった。

「小娘、思ったよりもやるけど、なんでそこまで魔力を込めるんだよ？」

この一撃に全てを賭けるとばかりに、テレーゼはほぼ大半の魔力を上空の火の玉に込めている。
火の玉の大きさも、再び直系十メートルほどにまで成長した。

「小さな魔法をチマチマと撃っても勝てぬからの。食らうがいい！」

テレーゼは、上空に完成させた巨大な火の玉をリサに向かって振り下ろす。

「ったく！　これだから素人は！」

この火の玉を無効化するには相当な魔力量が必要なはずだが、リサは瞬時にブリザードの魔法を展開してそれを火の玉にぶつけていく。

両方がぶつかる度に、大量の水蒸気が辺りに広がる。

決闘の場は住宅街の建設予定地なので草しか生えていなかったが、それらは全て水蒸気に当たって萎れてしまった。

俺達もそれぞれに『魔法障壁』を張って、水蒸気を防ぐ。

「旦那、すまねえ」

「いやあ、凄かったね」

火魔法を懸命に覚えたテレーゼと、氷魔法の達人リサのぶつかり合い。

威力はとんでもなかったが、既に勝負の決着はついていた。

「魔力切れで降参じゃ」

火の玉魔法にほぼ全ての魔力を注ぎ込んだテレーゼが、リサに両手をあげて降参したのだ。

魔力切れで他に切り札もない以上、テレーゼの判断は正しいと言える。

「降参？」

「勝てぬ勝負を続けるつもりはないのでな。では、これにて失礼す

るぞ。相殺のつもりが、少し寒いの。アマーリエにお茶でも淹れてもらうかの」

呆気ないほど簡単に降参したテレーゼは、そのまま屋敷に戻ろうとする。

「おい！　待てよ！」

「何か用事か？」

「私が勝ったんだから、素直に魔力が増えた秘密を喋れよ！」

「妙な事を言うの、お主は」

テレーゼは、『なぜそんな事をお前に教えねばならないのだ』という表情をする。

「私が勝ったじゃないか！」

「お主は勝負は挑んできたが、勝敗の条件など何も言っておらぬだろうが。お互いに、魔法の研鑽に励んだ。有意義であったの」

「ぷぷっ！」

「確かに……くくっ！　リサは何も言っていなかったな」

テレーゼからの指摘に、導師とブランタークさんは懸命に噴き出すのを堪えているようだ。

「私の一か月は何だったんだよ！」

「そんな事は知らぬわ。別に遊んでいたわけでもあるまいて。魔の森で狩りでもしていたのであろう？」

情報はギルド支部から入っている。

彼女はブリザードのリサに相応しく、大量の魔物を氷漬けにして倒したそうだ。

「確かに稼げたが、魔力の秘密を教えろ！」

リサがテレーゼにつっかかろうとすると、導師とブランタークさんが止めに入る。

「リサ、テレーゼ様は帝国から預かった大切な客なんだ。何かあったら、外交問題になるぞ」

「ううっ……」

リサはバカではないようで、ブランタークさんからの忠告で身を引いてしまう。

「それならば、カチヤ！」

「えっ？　あたい？」

「お前も、魔力が増えているじゃないか！」

妊娠したエリーゼ達も合わせ、テレーゼだけ贔屓するわけにもいかず全員を平等に相手にした結果である。

カチヤも、中級の上まで魔力量を上げていた。

「教えろ！」

「姉御にも言えないから」

「はあ？　言えないだと！」

「しまった！」

リサがカチヤに詰め寄ろうとしたので、俺は咄嗟に二人の間に割って入ってしまう。

「カチヤは、この俺バウマイスター伯爵の妻だぞ。さすがに、これ以上は無礼だろう」

「旦那……」

「大丈夫か？」

「うん」

上手く割って入れたようで、カチヤには被害はなかったようだ。

「くっ！　そうきたか！　しかし、私は納得しないからね！」

「ならば、俺が代わりに決闘をする。俺が勝てば大人しく弟子の結婚を祝って帰れ。俺が負けたら、秘密を教えてやろう」

「その条件受けた！　私もそれなりに経験を積んだ魔法使いだ。そう簡単に勝てると思わない事だね」

結局、俺はリサと決闘をする羽目になるのであった。

「伯爵様、勝てないとは思わないが、どうやって戦うんだ？」

「そこは臨機応変にですよ」

俺とリサとの決闘は、彼女の魔力が回復した翌日に行われた。
場所は、テレーゼと決闘をした住宅街開発予定地の草原だ。

決闘で大量に発生した水蒸気で草がすべて枯れていたが、どうせ開発をおこなうので気にする事はない。
戦いを始める前に、立会人役のブランタークさんがどうやってリサに対抗するのかと聞いてくる。

「相手がブリザードだから、大火力でもぶつけますか？」

「それは止めた方がいいぞ」

「どうしてです？」

「見ている方が、水蒸気で視界が遮られてな」

「そんな理由で？」

「その前に、『魔法障壁』で防がないと水蒸気で火傷するってのもあるし」

「ブランターク殿の言うとおりであるな。某は、視界不良で勝負が見えない方が嫌なのである！」

導師にも釘を刺されてしまい、他の手でリサに対抗する事になる。

こうなるのは、俺の魔法教育のためというやつなのであろうか？

「年下に負けるとは思わないけどね」

「具体的に一回り下、年齢が約半分のガキには負けないとか言わないので？」

「バウマイスター伯爵、凍らせるよ！」

やはり年齢の件は鬼門のようだが、嘘は言っていない。

今の俺が十七歳で、リサは二十九歳なのだから。

「では、勝負開始だな」

ブランタークさんが宣言し、導師が合図の火の玉を上空に上げてから決闘開始だ。

合図をしてから、二人は見学にきているエリーゼ達の近くまで下がった。

俺達の勝負の巻き添えを食らうと思ったのであろう。

「殺すと問題になるからね。凍らせて身動きを取れなくしてやるよ！」

先制攻撃はリサの方であった。

すぐに俺の周囲の温度が下がっていく。
足元を見ると、枯れ始めた草や地面に霜が降りていた。

そして、俺のローブにも薄氷が付着し始める。
このままでは、数秒と経たずに氷で動けなくなってしまうはずだ。

「さすがだな。二つ名持ちは」

俺はすぐに、火系統の魔法を利用して自分とその周囲の温度を上げてローブについた氷を溶かす。
肌寒さもすぐに消えた。

「（反撃だ）」

今度は逆に、リサに対して似たような氷魔法で反撃をする。
前に師匠が言っていた、相手と同じ魔法で攻撃して動揺を誘う戦法だ。

徐々にリサとその周囲の温度が下がり彼女の服や装飾品に霜や薄氷が付き始める。

「ブリザードの二つ名を持つ私に氷で攻撃とは、舐めた真似をしてくれるね！」

「勝負は勝てば問題ないだろうが。そういう事に舐めたもクソもないし」

「クソっ！　思ったよりも威力が……」

テレーゼとの決闘とは違い、俺との決闘はビジュアル的には地味

であった。
見た目には、二人で対峙したまま動かず、お互いに温度を下げて凍らせようとしているだけだからだ。
相手を氷で動けなくしようとしながら、自分に付いた氷を溶かして落としている。
魔法が使えない人から見れば、とても地味に見えてしまう。
「魔法が使える人から見れば、とても高度な勝負をしているのですが……」
「エリーゼ、魔法を習いたての妾からすると大変地味に見えるの」
「テレーゼさん、一見お互いにあまり変化はないですけど、この時点で双方はかなり大量の魔力を使っていますから」
相手を凍らせようと魔力を使い、自分が凍らないように魔力を使う。
二つの相反する系統の魔法を行使しながらなので、高度な魔法戦なのだとカタリーナはギャラリーに説明をする。
「こういうのを千日手という」
「そこまでは時間は伸びないでしょう。魔力量に限界あるし」
「このままだと、ヴェル様の勝ち」
「ボクもそう思う」
ヴィルマとルイーゼの予想は正しい。

このままお互いに地味な魔法の応酬を続ければ、魔力量が少ないリサの方が先にガス欠になる。
決着も地味だが、双方が大威力の魔法を放ち合うと事故が発生するかもしれないし、周囲への迷惑もある。
俺は配慮のために、こういう決闘をする必要があるのだ。

「くそっ！」

そしてこの状況に、リサの方が焦ってきた。
ここで無理に大きな魔法を放ったところで無駄どころか魔力切れを早めるだけ、このままだと魔力切れで負けるのがわかったからであろう。

「少しばかり大魔法を放てるガキかと思えば……」

確かに魔法使いとしての経験はリサよりも少ないが、内乱に巻き込まれたり、師匠と戦って死にかけたりと苦労はしているのだ。
その辺の部分も加味して勝負を受けて欲しかった。

「お得意のブリザード魔法でもどうぞ」

「……」

あとは、このままの状態を維持するだけだ。
焦って攻撃魔法など放たなくても、待っているだけで俺の勝ちである。
どう頑張っても、先に魔力が尽きるのはリサの方なのだから。

「この野郎……ガキの癖に焦って攻撃してこない……」

「内乱の経験が生きているからさ」

それもあるが、実は中身が既に三十代後半だからでもあった。

俺はリサよりも老練……だよな？

「でも、それだけでは芸がないか……」

相手は実力も名声もある魔法使いだ。

こういう勝ち方だと納得しないかもしれない。

いや、人の秘密を探らないように圧倒的な実力差を……向こうの敵愾心を折る必要があるかもしれない。

そうなると、彼女の得意技はその名の通りに氷の魔法。

実はこれ、水系統と風系統の合成魔法なのだが、彼女が自然現象などを参考によく研究して己の武器にしている。

こちらを真似すると俺に勝ち目はないのだが、一つだけ彼女に勝てる要素が存在する。

「（それは、絶対零度の概念……）」

温度を決める原子の振動が最低になり、その動きが止まった温度の事を差す。

自分で言っていてわけがわからないが、高校生の頃に科学の先生が授業で説明していたような……あれ？　物理の先生だったかな？

とにかくだ。

リサの周囲だけに限定して、絶対零度にして囲む。

間違えて彼女を凍らせないように慎重にだ。

ブリザードのリサクラスの魔法使いを殺してしまうと、あとで王国から何を言われるかわからないからだ。
損失分を補填するため、無料働きしろとか言われたら堪らない。

「まだ魔力には余裕がある」

「化け物か。このガキは」

「いいえ、色々とある柵（しがらみ）や苦労の分だけ、俺は魔力を増やしていく」

毎日の鍛錬と、様々な面倒事が俺の魔力を増やしていくのだ。

「あまり羨ましくないな……魔力が多いという点だけは羨ましいが」

俺は、決闘相手であるリサにまで同情されてしまう。
その間にも、俺の『絶対零度』魔法は徐々にリサの『暖房』魔法を押しやり、彼女の周囲十メートルほどが絶対零度の環境に変化する。

「くっ！」

「少しでも動くと死ぬぞ」

「何いっ！」

試しに落ちていた木の枝を絶対零度エリアに放り投げると、それは液体窒素に漬けたバナナのようになってしまう。
俺が魔法で小石を飛ばしてぶつけると、凍った木の枝は瞬時に粉々に砕けた。

「氷魔法、相性がいいな」

前世で、学校の成績が３（五段階で）だった理科の知識でも役に立つのだから。

ついでに、もう一つ魔法を思いついた。

「（名付けて『液体窒素』魔法）」

空気中にある空気を圧縮して、それを液体窒素にする。

いや分離が出来ないから『液体空気』か。

俺が空中で作った『液体空気』が地面に落ち、それを被った岩が凍りつく。

それにも魔法で小石をぶつけると、枝と同じく粉々に砕けた。

「降参していただけるとありがたいのですが？」

「クソっ！　私はブリザードのリサなのに……」

リサが両手を挙げたので彼女の周囲に張り巡らせていた絶対零度ゾーンを解除し、俺は決闘での勝ちを決めた。

だが、ここでとんだミスをしてしまう。

お互いに頑張ったのでここは握手でもと柄にもない考えでリサの元に向かったのだが、彼女は大きなダメージを受けていた。

いくら効果を除外されていたとはいえ、周囲を絶対零度の冷気に囲まれていたリサは自分の体を守るために体を魔法で温め続ける必要があった。

その時には、服や装備品などは後回しとなり、俺が絶対零度を解いてから急に装備品が温めたわけで……。

急激な寒暖の差に曝された服や装備品は、脆くも崩れ去る事となる。

ここで、大人気ない態度を見せてもと俺と握手をしようとしたリサは、身につけていた物がすべてボロボロとなって崩れ落ち、その裸体を俺達に曝す事となった。

「キャーーー！」

慌ててその場にしゃがみ込むリサ、そして想像もつかないほど女らしい悲鳴をあげるリサ。

更に俺は、彼女の秘密を知ってしまう。

「下……生えていないんだね……」

「わぁーーーん！」

俺に秘密を見られてしまったリサは、大声で泣き出す。

せっかくの決闘も、何やら締まらない結末を迎えてしまうのであった。

「今日は、色々と凄いものが見られたのである」

「導師、色々か？」

「左様。まずは、バウマイスター伯爵のブリザードを圧倒する冷気」

それは、俺の微妙な科学知識のおかげだ。
絶対零度に、液体空気の製造と。
いくら極寒の地でもマイナス五十度くらいが限界なので、それを参考にしているリサが俺に勝てないのは当たり前だ。

「次に、まるで女のように悲鳴をあげるブリザードのリサか」

運よく、リサの裸はギャラリーから距離が相当離れていたのと……。

「ブランタークさん、見ては駄目ですよ」

「伯父様、ご勘弁を」

「エル、見たいだろうけど駄目」

すぐに、イーナとエリーゼとヴィルマによって目を塞がれたので見えなかったようだ。

「（という事は、あの件は言わない方がいいな……）」

あの件とは、リサに下の毛がない事だ。

「それにしても、あれから妙にしおらしいな……」

状況が状況なので、すぐにリサは女性陣によって屋敷に連れて行かれ、お風呂に入らせてから、こちらが用意した服を着て、熱いマテ茶を飲んでいた。
今までのゴージャスな服が崩れ去ってしまい、特徴的であったイケイケ顔を表現していたメイクも、お風呂上りなのでスッピン状態

になっている。

年齢的に見て大丈夫なのかと思うと、実は彼女、化粧を取るとかなりの童顔だ。

テレーゼよりも少し上くらいにしか見えない。

そして、なぜか妙に大人しくしている。

アマーリエ義姉さんが準備したお茶をチビチビと啜りながら、オドオドとした態度でこちらをたまにチラチラと見ていた。

「俺、そんなに怖がらせ過ぎた？」

「いや、その程度で怖がる奴じゃないと思うけど……」

俺よりはリサに詳しいブランタークさんも、今の彼女の態度には首を傾げる。

「カチヤはどう思う？」

「いや、あたいもこんな姉御は初めてだな。皆目見当がつかない」

「さあ、クッキーが焼けましたよ」

大人しいままのリサに、アマーリエ義姉さんが焼いたクッキーを持って来る。

「今日は、チョコチップとドライフルーツ入りよ」

共に、魔の森産の食材を用いて作ったクッキーで、最近王都のお菓子屋で流行している品であった。

「美味しいです」

リサは、まるで小リスのようにクッキーを食べている。

「妙に可愛くなったね」

「そうね、化粧で女は化けるというけど……」

ルイーゼとイーナは、変わりに変わったリサを不思議そうな目で見ていた。

メイクがバッチリの頃はドギツイ系の美人だったのに、今は可愛い美人という感じであったからだ。

なぜかまだビクビクしているが、年上なのになぜがみんなの保護欲を誘ってしまう。

「どういう事なのでしょうか？」

さっぱりわけがわからなかったが、それは上手くアマーリエ義姉さんが聞き出してくれた。

色々と甲斐甲斐しく世話をしてくれた彼女にだけは、リサが心を開いたのか？

小さな声で耳打ちして事情を話している。

「なるほど……そうなのですか……わかりました」

リサから事情を聞いたアマーリエ義姉さんは、俺達にそれを説明し始める。

「リサさんは、ああいう格好をしないと人見知りするそうなのです」

アマーリエ義姉さんの説明は続く。
その昔、とある村に女の子が一人生まれたが、その子は極度の人見知りであった。
特に男性相手では、実の父親と後に生まれた弟以外とは碌に話せなかったらしい。

「せっかく魔法の才能があるとわかっても、人見知りは治らなかったようで」

リサは、このままだと冒険者になって社会に出ても碌に仕事にならないと悩んだ。
更に、結婚も不可能なのではないかと。

「そこで、派手なメイクと服装で強気な女性を演じていたそうです」

「随分と堂に入った芝居だな」

ブランタークさんが、今の今まで気がつかなかったのだ。
確かに、凄い演技力というか、自己催眠能力だと思う。

「衣装がなくなり、メイクも落としたので通常に戻ったと？」

「そういう事のようね。そうよね？　リサさん」

アマーリエ義姉さんが聞くと、リサは『うんうん』と首を縦に振る。
その仕草は、かなり可愛かった。

「可愛いね」

「そうよな」

ルイーゼの感想に、テレーゼも賛同する。

「もうすぐ三十歳とは思えないほど見た目が若いしの。そんなメイクはせぬ方がいいと思うぞ」

「……なるほど。テレーゼ、メイクを取ると男の人と話せないそうよ」

「それで、メイクをすればあの性格か。難儀なものよの……」

共に偏り過ぎて、どちらもいい結果を生んでいない。

確かに、難儀といえば難儀である。

「……わかったわ。ヴェル君」

「はい、もしかしてやり過ぎたのかな？」

続けてリサが、アマーリエ義姉さんに何かを耳打ちする。

俺は、リサに決闘の件で文句を言われるのかと思った。

「そうじゃなくて、決闘の件は決闘だから仕方がないって。そうよね？」

アマーリエ義姉さんの問いに、リサは再び首を可愛く降る。

しかしこの人、なぜ派手な服装と化粧がないと碌に男性と話すら出来ないのであろうか？

物凄く不思議でならない。

「それよりも、決闘の後で私の裸を見たから責任を取れって」

続けてリサのささやきを聞いたアマーリエ義姉さんは、とんでもない爆弾を投下する。

「ああ。前にそんな事を言っていた人がいたなぁ……」

「そんな事もありましたわね……」

俺に風呂場で裸を覗かれた経験があるカタリーナが、思い出したように呟く。

ブリザードのリサとの決闘に勝ったのはよかったが、俺は新たな難儀を背負い込む事になるのであった。

オマケ五話　ブラックリスト。

「お館様、こちらのリストをどうぞ」

「ああ」

普段は狩りと採集と土木工事しかしていないように見えるが、俺だってたまには貴族としての仕事をやっている。

ローデリヒから書類を渡され、その確認をしないといけないのだ。

要点は纏めてあるが、ちゃんと読んで内容を確認しないといけない。

ローデリヒを信用はしているが、これも当主としてのケジメというわけだ。

「採用不可人材リストねぇ……」

「いくら人手不足でも、こういう連中を入れるとかえって面倒ですから」

バウマイスター伯爵家は基本的に人手不足なので、よほどの事がなければほぼ採用される。

出世したければ、相応の能力が必要だけど。

ところが、色々と問題があってうちでもお断りな人というのもいる。

大抵が、前に仕えていた貴族家で大問題を起こして危険人物リストに載っているような奴らだ。
公金をチョロまかしたり、酔っぱらって同僚に暴力を振るったり、人の奥さんに手を出したり。

そういえば、商社マンの時に偉い人に言われたことがあるな。
人間ってのは、金、酒、女（男）のどれかでしくじる可能性を秘めていると。
他にも圧倒的に能力が足りないとかもあるけど、うちでは単純な仕事とかもあるから真面目にやってくれる人なら採るケースもあるか。

そういう問題児を知らずに雇って損害を蒙らないように、貴族同士でブラックリストが回っているそうだ。
ローデリヒは、ブライヒレーダー辺境伯、エドガー軍務卿、ルックナー財務卿などからそういうリストを預かっていた。

『みんな、うちに恩を売りたいのですよ』と、ローデリヒが教えてくれた。
でも、こういうリストは複数の大物貴族から手に入れた方がいいらしい。
常に情報の更新はあるし、派閥間で把握していたり、していなかったりするいる人もいるそうだから。

「バウマイスター伯爵、凶状持ちのリストなら王国政府の方が充実しているぞ」

なぜか執務室で一人お茶を飲んでいる若い男性、彼はヘルムート王国の王太子殿下であった。

「念のために持ってきた。参考にしてほしい」

「ありがとうございます」

「バウマイスター伯爵領開発は、王国南部発展のカギとなるからな。気にしないでくれ」

と、優雅に気さくに話しかけてくる王太子殿下。

若くて、イケメンで、有能で、実際に接すると悪い印象を抱く人など皆無だ。

なのになぜか、この人は目立たない。

常に陛下の陰に隠れている印象だ。

俺は、彼が何かの呪いにでもかかっているんじゃないかと思ってしまうのだ。

「殿下は、色々とお忙しいのでは？」

「それなりにな。しかし、今日のために仕事を前倒しで片付けてきたのだ」

そこまでして、バウマイスター伯爵領に来たかったらしい。

というか、この人はどうして目立たないのであろうか？

本当に不思議だ。

「今日は、狩猟に連れて行ってくれるそうだな」

「はい」

しかも、この人一人だけで来たし。

俺が王宮に迎えに行ったのだけど、殿下が一人で出かけるのを咎める人が誰もいないってどうなのだろうか？

『我らの護衛能力を、陛下もお認めになっているのでは？』

ローデリヒのように考えるのが一番妥当であろうか。

何かあると困るので、ローデリヒは警備隊の中でも古参で評価が高い精鋭ばかりを狩猟場に派遣している最中だ。

バウルブルクはまだそう遠く離れていない場所でも獲物が豊富なので、配置に時間がかからないのが救いであろう。

殿下がお茶を飲んでいるのは、その準備が終わるまで待っていただいているからだ。

「夫人達も参加なさるのかな？」

「勿論です、殿下」

エリーゼは殿下にお茶を淹れる時に挨拶に来て、狩猟にも治療担当として同行する予定であった。

イーナ達も狩猟に参加する。

王太子殿下のご来訪なので、奥さんが来ないなんて不敬はあり得ない。

一族総出で歓待するのが普通だ。

「バウマイスター伯爵の奥方達は優れた腕前を持つとか。楽しみだね。他の貴族の奥さんが狩猟に参加するケースは少ないから楽しみだ」

まあ、普通はそうだよな。

下級貴族はそうでもないけど、そういう人の所に王族は行かないし。

準備が整うまでもう少し時間がかかるので、俺はその前に採用不可人材リストの確認をおこなった。

要注意人物達の名前だけが記載された紙で、俺はどんな人かよく知らないのだけど。

「人を雇うというのは難しいからな」

「そうですね」

ローデリヒのようにバウマイスター伯爵を支えるような人材もいれば、滅ぼしてしまうような人もいる。

どんな組織でも、一番大切なのは人というわけだ。

「うんうん、こいつらはやっぱり切ったか……」

殿下はこちらの不採用者リストに載った名前の中から、何名かを見つけ出して納得したように頷いた。

「殿下はご存じなのですか？」

「彼らは基本的には有能なんだよ。でも、どこの貴族家でも採らない」

「なぜです？」

「協調性が皆無で、周囲とトラブルばかり起こすからだ」

この世界でも、ただ優秀ならいいというわけではないようだ。

「短期で使うのなら我慢するとかですか？」

「そうだね。仕官させてしまうと他の家臣達に悪影響だし、ローデリヒの判断は正しいと思うよ」

ローデリヒと殿下の意見は一致していた。

やはり、どんなに有能でも協調性がないと駄目なようだ。

「あとは、誰もが納得するブラックリストばかりです。今のうちで採ってもらえないなんて、相当な連中ですよ」

「そうだよな」

書類にサインをしてからローデリヒに渡すと、狩猟場の準備が整ったようだ。

屋敷の敷地内にある馬小屋へと向かい、みんなで馬に乗って狩猟場へと向かう。

「バウマイスター伯爵、馬の扱いになれたようだね」

「これがなかなか……普段は魔法で飛んでしまいますからね」

内戦のおかげで、馬には普通に乗れるようにはなったと思う。

あくまでも普通の域からは出なかったけど。

殿下は馬の扱いも上手かった。

帝王学というのを受けているのであろう。

エリーゼも達は、みんな運動神経がいいので上手に馬に乗ってい

る。
　カタリーナはそんなに運動神経はよくないけど、貴族の嗜みだからと普段から練習を続けていて上手であった。
「バウマイスター伯爵殿、妾があとで教えてしんぜようか？」
「帝王学を受けた人間がここにもいたな」
　今回は、テレーゼも同行していた。
　最初は彼女が遠慮したのだが、殿下が是非にと言ったのだ。
　人数が多い方がいいらしい。
「狩猟は俺の方が上手だけど」
「であろうな」
　現場に到着すると、先にローデリヒが配置していた警備隊員達が周囲を見張り、勢子役の人間がこちらに獲物を追い込んでいく。
　貴族と王族の狩猟なので、自分で歩いて獲物を探したりはしないのだ。
「殿下、鹿です。初手の矢を」
「久しぶりだからな、当たるといいな」
　とか言いつつ、殿下の弓の腕前は大したものであった。
　鹿の首に矢が突き刺さり、一撃で倒す事に成功する。
「さすがですね、殿下」

「当たってよかった。狩猟なんて、滅多に誘われないからな」

「そうですか……」

忙しくて滅多に狩猟に行けないのか、それとも誰も誘ってくれないのか。

俺達は絶対にそれを聞くまいと、アイコンタクトで伝え合う。

「エル！　行ったぞ！」

「任せてください！」

次はエルの出番であったが、獲物が猪であったので一撃では倒れなかった。

すかさず俺が二本目を放ち、猪は地面に倒れる。

「バウマイスター伯爵もやるじゃないか」

「子供の頃からやってますからね。昔は獲れないと肉が食べられませんでしたし」

それからも狩猟は続き、他のみんなも次々と獲物を狙っていく。

「弓なんて滅多に使わないから、なかなか当たらないわね」

「ボクも」

普段、弓の鍛錬をしていないイーナとルイーゼの成果は芳しくなかった。

「カタリーナ、思ったよりも上手」

「ヴィルマさん、趣味の狩猟は貴族の嗜みでしてよ」

カタリーナは、密かに弓の練習していたようだ。

何度か外しながらも、ウサギを一匹仕留める事に成功した。

「ヴィルマさんには勝てませんけど」

「狩猟は私の人生そのもの」

「哲学のようなお言葉ですわね……」

間違いなく、この中で一番狩猟が上手いのはヴィルマだ。

弓に矢を同時に二本番え、一緒に撃ってウサギを二匹同時に仕留めた。

さすがの殿下でも、そういう芸当はできないようだ。

ヴィルマを手放しで褒めていた。

「さすがは、エドガー軍務卿が養女にするだけはあるな」

「物凄い腕前じゃの」

ヴィルマを褒めつつ、テレーゼ自身もさり気なくウサギを仕留めてその腕前を披露した。

何でも卒なくこなせるのは、やはり帝王学のおかげなのであろう。

「この狩猟場は、獲物が濃いの」

「専門の狩猟場じゃないけどね」

未開地ではこういう獲物が沢山いる場所がいくらでもあって、実はバウマイスター伯爵家専門の狩猟場などは存在しない。

適当に郊外に出れば狩猟ができるからだ。

ただし油断すると、狼の群れと熊に襲われて餌にされてしまう。

警備隊の同行は必須であった。

「大猟でしたし、そろそろ戻りましょうか？」

「そうだな、戻るとしよう」

数時間ほどの狩猟が終わり、俺達は殿下と共にバウルブルクに戻る。

「夕食が楽しみだ」

「我が領の産物を使った料理をお出ししますよ」

馬に乗りながら屋敷の前へと向かうと、そこに一人の中年女性がいるのに気がつく。

「バウマイスター伯爵様でいらっしゃいますか？」

「はい、そうですけど」

その中年女性は、ある意味俺の印象に残った。

太めの体形に、厚化粧、着ている服は成金趣味丸出し、全力で老化に逆らおうと努力しているようだが、とてもそうは見えない。

その顔には、宝石が散りばめられた金鎖つきの眼鏡をかけ、一言で言うなら『ざーますおばさん』の典型例のような人だ。

俺は、こんな人が創作物ではなく現実の世界にもいる事を初めて知った。

「私、ヘルルーガ・フォン・シュティールと申すざます。シュティール子爵の妻ざます」

「（何だと！）」

もう一つ、俺は初めて聞いた。

まさか、語尾に『ざます』をつける女性が実在したなんて……。

「（シュティール子爵？）」

また知らない貴族の名だ。

というか、沢山いすぎてまだ覚えられない。

「（エリーゼ、シュティール子爵って知ってる？）」

「（はい、ベルツ伯爵の寄子で、大金持ちで有名な財務系貴族です）」

さすがはエリーゼ先生、このざーますおばさんの正体を知っているようだ。

「お久しぶりざます、エリーゼさん。エリーゼさんは、私の若い頃にそっくりざますわね。ますます私と同じように美しくなられたざます」

「「「「「（それは、ねえよ！）」」」」」

間違いなく、このざーますおばさん以外の全員の考えが一致したと思う。

例えいくら若返らせても、その厚化粧を取っても、痩せたとしても、彼女はエリーゼにはならない。

エリーゼも、どう答えていいものなのか回答に困っているようだ。

「おっと、今日は世間話でここに来たわけじゃないざます。実は、レオポルドちゃんの件で来たざます」

「レオポルドさんですか？」

「私の可愛い息子ざます」

レオポルドさんとは、このざーますおばさんの息子らしい。

しかし、息子の件とは何なのであろうか？

「レオポルド殿なら不採用ですが……」

ここでローデリヒが声をあげ、皆、その一言ですべてがわかってしまった。

ざーますおばさんの息子が仕官しようとしたが、例のリスト入りの問題児なので不採用にされ、それに文句をつけにきたというわけだ。

どうやらこの世界にも、モンスターペアレンツな人が存在するようだ。

「外野は黙るざます。私は、バウマイスター伯爵様と話をしているざます」

「あの、ローデリヒは家宰で採用の責任者なのですが……」

うちの家宰に外野はないだろうと、俺は思ってしまう。

「まあ、それはよくないざます。ローデリヒさんとやらは優れた方なのかもしれないざますが、バウマイスター伯爵様がもっと人を直接見る必要があるざます」

「はあ……」

このざーますおばさん、言っている事は間違っていない。

本当なら、バウマイスター伯爵家当主の俺が雇い入れる家臣を吟味する。

確かに、当主の重要な仕事だ。

だから、彼女の話を聞こうとしたのが俺の大きな間違いであった。

「レオポルドちゃんは、何かの間違いで不採用になったのざます。それを正すために、私は来たざます。いいざますか？　うちのレオポルドちゃんは……」

それから二時間以上、俺達は狩猟の後でお腹が減っているのに、屋敷の前でざーますおばさんの息子自慢を聞き続ける羽目になるのであった。

「申し訳ございません」

「いや、直接の危険はなかったからさ」

長い時間ざーますおばさんの息子ちゃん自慢を聞いて、みんな精神的に疲れてしまった。

ローデリヒは、彼女の息子自慢披露タイムを防げなかった件で俺達に謝り続ける。

「ヴェルに危険があるのにあのおばさんを防げなかったのなら問題だけど、危険というわけでもないし」

「しかし、イーナ様」

「精神的には疲れたわね。同じ女だけど、どうしてあんなに長時間話ができるのかしら？」

イーナに言わせると、よくあんなに長時間一方的に話せるのか不思議でたまらないようだ。

「凄かったよね、二時間以上全部、レオポルドちゃん自慢」

俺達の中で比較的元気なルイーゼが、ざーますおばさんの凄さについて語る。

あの、完成された感動の物語。

ざーますおばさんの息子レオポルドちゃんの誕生から現在に至るまでの、壮大な大感動巨編。

テレビの二時間ドラマ枠でいけるのではないかと、俺は思ってしまう。

勿論事実ならであるが、まあ物語には若干の脚色があって当然か。どの程度脚色されているのかは……調べる気にもならないけど……。

「おかげで、レオポルドちゃんに相当詳しくなった。私達、レオポルドちゃん博士」

「「「「「ぷっ！」」」」」

ちょうどいいタイミングで入ったヴィルマの一言で、全員が噴き出しそうになってしまう。

確かに、レオポルドちゃん検定とかあったら、今なら初級くらい余裕で、中級も狙えるかもしれない。

頑張って上級を狙えば、俺達も立派なレオポルドちゃんニストだ。

「そんな無駄な知識、記憶するだけ無駄ですわよ。なぜか頭から離れませんけど……」

「カタリーナ、それはあのざーますおばさんのせいだ」

聞きたくないのに、あのざーますおばさんの先制能力は大したものだ。

そして一度話を聞き始めると、容易にこちらの離脱を許さない。

あれは一種の才能だと思う。

記憶に残る喋り方も凄い、俺は彼女は学校の先生でもやればいいのにと思ってしまう。

「レオポルドちゃんが三歳の頃に、従姉を野良犬から救ったお話は感動的であったの」

「テレーゼさんもいるのに、ある意味凄い方でしたわね」

帝国の元公爵様もいたのに、長時間大演説会をかましてくれたのだ。

ある意味、物凄い度胸とも言える。

空気をまるで読んでいないのが真実であろうが。

「私もいたんだが……」

「そうでしたわね……殿下に対してあのお方は……」

そして、ざーますおばさんの演説会は殿下も聞いていた。

果たして、彼女は殿下の存在に気がついていたのであろうか？

だがカタリーナも殿下の存在を一瞬忘れていたようで、とってつけたように言い方を誤魔化していた。

「あのおばさんのインパクトが強すぎてなぁ……」

ざーますおばさんの存在感が凄すぎて、殿下は存在感を塗りつぶされてしまったのであろう。

実は、俺も少し殿下の事を忘れていたのは秘密だ。

「何か大変な事があったみたいですね。食事の準備ができていますからどうぞ」

アマーリエ義姉さんが、帰って来た俺達に夕食を勧めてくれる。
本当は狩猟で得た成果を調理する予定だったのだが、みんな疲れていたので昨日家臣達が獲っておいてくれた獲物を調理して出してもらった。

「殿下は、あのご婦人をご存じのようだの？」

「テレーゼ殿にはわかるか……まあ裏では有名な方だよ。あのシュティール子爵夫人は……」

ざーますおばさんことシュティール子爵夫人は、なかなかの女傑なのだそうだ。

「昔のシュティール子爵家は財政が傾いていてね。それを何とかするために、現当主の妻に彼女を迎え入れたわけだ」

目的は妻の実家からの多額の持参金と援助であったが、シュティール子爵夫人は自身も優れた才覚を持つ人物であった。

「夫人は金貸しのプロなんだよ」

「その噂は、私も聞いた事があります」

「まあ、ホーエンハイム枢機卿なら知っていて当然か……」

貴族には、どうしてもある程度纏まった大金が緊急で必要になる事がある。
夫人はそういう貴族を見つけ、密かにそっとお金を貸して利息を得る才能があった。
この密かにというのがポイントで、ホーエンハイム枢機卿からの

情報があるエリーゼは知っているが、知らない貴族もいる。
噂は流れてくるが、急にお金が入用になるかもしれないのは誰でも同じだ。

だから、彼女の批判や、大っぴらに情報を流すのは躊躇われるという事になる。

「そのおかげで、シュティール子爵家は傾いた財政を立て直せた。けど……」

シュティール子爵家の人間は、当主も含めて夫人に頭が上がらなくなってしまった。
この世界では滅多にない、極端なまでの夫人を頂点とする貴族家なのだそうだ。

「シュティール子爵は、凡庸で目立たない人だからね……」

夫人に頭が上がらず、気を使って側室すら一人もいないらしい。
殿下と似たようなタイプなのかもしれない。

「目立たないというよりも、あのおばさんが目立ちすぎなだけのような……」

一度あの姿を見れば、誰もが二度と忘れないと思う。
そのくらい強烈なインパクトを俺達に残したのだ。

「そうとも言うかもね」

「殿下、どうしてあのおばさんは息子の仕官に熱心なの？　お金はあるのに」

そう言われてみるとそうだ。
金貸しで培ったコネで、何とかなりそうな気がする。

「それはだね、ヴィルマ殿。レオポルド殿が六男だからさ」

あのざーますおばさん、何と六人の男子の母親らしい。

「跡取り長男、分家に婿に入った次男、親戚の貴族家に婿に入った三男。四男と五男も仕官先は決まった」

「六男だけ駄目なのですか？」

「末っ子だから、異常に可愛がっているみたいだね」

金貸しとしては素晴らしい才覚を持っていても、自分が可愛がっている息子に対しては盲目に近い状態になってしまう。
だから、何とか安定した将来を確保してあげようとして、暴走の結果ブラックリストに載せられてしまったらしい。

息子のみならず、母親込みでのブラックリスト入りらしい。

「母親が悪いのかよ……」

「それがよくわからないのです」

「あれ？　ローデリヒは面会くらいはしたんだろう？」

「すいません、リスト入りの人物なので応募の時点で弾いてしまいました」

他に人がいないわけでもないし、そんなブラックリスト入りの人材に気を使うほどローデリヒも暇じゃないというわけか……。

「実際に会えばわかるでしょう」

「えっ？　会うの？」

「お館様が夫人に懇願され、自ら首を縦に振ったではないですか」

「あれ？　そうだっけ？」

ざーますおばさんの話が長すぎて最後は聞き流していたので、無意識にもう一度採用試験をしてほしいという彼女の懇願を認めてしまったらしい。

もし狙ってあの長話をしているのだとしたら、油断ならないおばさんである。

「まあいいけどね……」

鷹揚な振りをして再面接を了承したように誤魔化したが、実はあのざーますおばさんの話に疲れてしまい、無意識に首を縦に振ってしまった事は内緒にしておこうと決意するのであった。

数日後、俺はあのざーますおばさんの息子との面接をおこなった。

もしかしたら、あのざーますばばあの極端な干渉で苦労している

人かもしれないしと、少し同情したからだ。

その気持ちは、ほんの数分後には消滅してしまったけど。

「レオポルド・フォン・シュティールと申します。僕の隠れた才能を見抜くとは、バウマイスター伯爵殿も案外やりますな」

十八歳ほどに見えるざーますおばさんの末っ子は、最初の挨拶から上から目線であった。

自分が雇われる方なのに、なぜか物凄く偉そうだ。

「ローデリヒ殿は比較的上手くやっている方だとは思いますが、僕に言わせると甘い部分も多いです。僕に任せていただければ、開発計画は二割ほど早まるでしょう」

俺は、前世で知り合った自称経営コンサルタントを思い出した。

自分に任せれば、アイデア満載、労力もコストも大幅削減、売り上げと利益率アップ間違いなしと断言するのだが、具体的にどうするとかそういう話が出てこない。

たまに騙されてコンサルタント代金を無駄にするどころか、店を潰す人間まで出て、業界では要注意人物扱いされていたのを思い出す。

「僕はこれでも、子供の頃から勉学に励み、様々な知識の習得に腐心いたしました。バウマイスター伯爵殿は？」

本は書斎のは読んでいたけど、あとは未開地でずーーーっと魔法の修行三昧だったような。

「いけませんな。バウマイスター伯爵殿は、これから王国でも指折りの貴族となられる方、教養なども身につけ、多くの貴族達と交流をしませんと」

このレオポルドという若者、言っている事は間違っていないんだけど、とにかくウザい。

俺がこの世界に飛ばされる前に、こういう人の事を『意識高い系』とか言っていたような。

でも、意識高い系って、多分褒め言葉じゃないよな。

意識が高い人なら褒め言葉かもしれないけど。

面接中、レオポルドは一方的に自分語りを続けた。

隣のローデリヒも、表情が能面のようになっている。

「これからのバウマイスター伯爵領は、帝国との関係も重視しないといけません。僕のような若い才能が、帝国の同じような立場の人々と新しい何かを作るんですよ」

その『何か』って何なのだろうか？

誰か、俺に教えてほしい。

「バウマイスター伯爵家は、西部とのお付き合いが希薄ですね。僕には知己が多いので話を通してあげますよ」

お前、本当にそんなにコネがあるのかよ……。

その後も、中身のないレオポルドによるお話は続く。

俺たちは、その話を聞き流して時間を潰した。

「本日はご苦労様でした。採用の結果は後日お知らせします」

「バウマイスター伯爵殿、僕を採用し、重用する事で、このバウマイスター伯爵領は変わりますよ。劇的にね」

レオポルドは『キラッ』とした笑顔を最後に、俺達の元を辞した。

「何か、すげえぶん殴りてぇ……」

「あの親にして、この子ありですな」

話がウザい点では、確かにあの親子は似ているかもしれない。

「念のためにお聞きしますが……」

「あの親子と会話するのはもう無理」

商社マンだったら我慢するかもしれないけど、今の俺はバウマイスター伯爵だ。

あの親子と顔を合わせないで済む権力くらい行使させてほしい。

「では、不採用という事で」

再面接の約束はしてしまったが、採用するとは一言も言っていない。

俺達は、レオポルドの不採用を通達した。

そして再面接から数日後、この日は魔の森に狩りに出かけ、帰りにバウルブルクで買い物をしてから屋敷へのわずかな道を歩いていた。

「それにしても、あのおばさんは凄かったわね」

「イーナちゃん、そういう噂をしているとまた屋敷の前に……」

「いた」

本当にあのざーますおばさんが、屋敷の前に立っていた。

あの時と同じ格好で、派手な装飾でキラキラと輝いている。

まるで、タイで派手に飾られている仏像のようだ。

「ルイーゼさんが噂をするから！」

「えっ？　ボクのせいなの？　それはカタリーナの言いがかりだよ！」

誰もざーますおばさんのお話など聞きたくないので、何とかそれから逃れようとした結果、俺を含めた全員の目がエルに向かう。

「俺か？」

「エルは聞き上手だし」

「イーナ！　今まで俺にそんな評価をした事ないだろうが！」

エルの正しい指摘に、イーナは顔を逸らした。

「放置しておけよ！」

「でもさぁ、誰かがお話を聞いてあげないと、ずっとあそこにいるかもよ」

確かにそれは嫌かもしれない。
つまり、誰か生贄が必要というわけだ。

「じゃあ、ルイーゼが話を聞いてやれよ」

「ボクだと幼すぎて、あのおばさんが納得しないと思うんだ」

「お前、こういう時だけ見た目が幼いアピールか？」

ルイーゼも正論を言われて、そっとエルから視線を逸らした。

「エルヴィンさんは、ヴェンデリンさんの家臣なのですから」

「ああいう一方的に話をする人は、聞いてあげれば満足する。第一、当主の仕事じゃない」

「うっ！　説得力があるな……」

カタリーナとヴィルマには逆に正論を言われ、エルは形勢不利に陥った。

「エルさん、私がお話を聞きましょうか？」

「いや、エリーゼにそれは任せられないから……」

エリーゼは、聖職者的な寛容の精神であのざーますおばさんの話を聞いてあげようとしたのであろう。
だが、下手にエリーゼから言質を取られると、またレオポルドが来て堂々巡りである。

エルはそれがわかったから、静かにざーますおばさんの話を聞きに行った。
足取りが、ものすごく重そうである。
「俺達は、『瞬間移動』で屋敷の中庭に飛ぶか」
そして三時間後、エルが魂が抜けきったような表情で戻ってくる。
「ううっ……レオポルドちゃんの激動の人生が、大幅加増バージョンで聞けたぞ。チンピラに絡まれた幼馴染を救う話はよくできてた……」
「あのレオポルドに、そんな腕っ節があるのかな？」
「知るか！」
その後、レオポルドが仕官できたのかどうか、誰も知る事はできなかった。
正直なところ、知りたくもなかったけど。

オマケ六話　道場破り。

俺の名前は、ヨハン・ヨランデ・アウレリア・オーフェルヴェーク。

バウマイスター伯爵領の本拠地バウルブルクにおいて、ゼノス兄貴と共に魔闘流本道場の運営に携わっている。

まだ十五歳で、成人したばかりの若造には過分な職責と待遇だと思うけど、これも姉ちゃんがバウマイスター伯爵様の奥さんになれたからだ。

まあ、誰がどう見ても思いっ切りコネだね。

周囲には『上手くやりやがって！』と言う人達がいるけど、別に俺が上手くやったわけじゃないから気にしても仕方がない。

姉ちゃんのルイーゼ……妹にしか見えないけど……の指名でゼノス兄貴と共に、バウマイスター伯爵家魔闘流指南役家の創設と、道場の運営に携わっているわけだ。

姉ちゃんは跡継ぎを産まないと駄目だから、いつもバウマイスター伯爵様の傍にいる。

だから、俺とゼノス兄貴が実務に携わっているというわけ。

同腹の兄弟だから、俺とゼノス兄貴に白羽の矢が立ったわけだ。

本妻の兄弟で俺達を羨ましそうに見ているのもいるけど、そこは住み分けというか、大人の都合で分けられたから仕方がないよね。

でも、結構大変なんだぜ。

姉ちゃんは金は出してくれるけど、細々とした運営とか雑務とか

絶対にしないし。
頭は悪くないんだけど、やりたがらないんだ。

幼馴染のイーナさんに言わせると『そういう性格だから仕方がない』ってさ。
あの人は、昔から姉ちゃんの最大の理解者だよな。

内乱中に完成したバウルブルクの本道場と、バウマイスター伯爵領は広いから警備隊を置いている各地に支部練習場みたいなものも整備した。
まあ、支部の方は小屋が大きくなった程度の建物だけどね。

そこに配置する師範は、俺達と仲がよかった外様の門下生が大半だね。
本妻の兄弟達と親しい連中だと、コントロールが難しいから。

どんな武芸でも、師範ってのはただ強ければいいってもんじゃないんだ。
人に上手く教えるという能力と、小さくても道場を任されたら運営もある。
それなりに学もないと駄目なのさ。

ちなみに、姉ちゃんは人に教えるのは駄目だ。
物凄く天才だけど、人に教えるとかえって害になってしまう。

だから、総師範だけど実務は俺達の担当なんだよね。
たまに顔を見せるくらいで、あとは早く子供が生まれてくれないと俺達が路頭に迷っちゃうから。

でも、時には姉ちゃんに出座してもらわないと駄目なケースもあ

る。

「姉ちゃん！　じゃなかった……大変です！　総師範！」

「ヨハン、どうかしたの？　何か用事？」

「総師範！　道場破りが出た！……じゃなくて、出ました！」

そう、たまに武芸の道場ではいるんだよね。

道場破りという存在が。

今のバウマイスター伯爵領なら、上手く潜り込めると思っているんだろうね。

道場破りといっても、勝利して本当に看板を持ち去ってしまう人はほとんどいない。

『俺を雇ってほしい！』というアピールが大半だから。

『俺はお前達よりも強い！　だから雇え！』と、勝利しているから強気に出るんだよね。

ただ、雇うかどうかはその道場次第かな？

師範に空きがあれば、雇ってもらえるかもしれない。

せっかく雇われても、教えるのが下手だったり、運営能力がないと判断されるとクビを切られたりする。

勘違いしている人も多いけど、ただ強いだけじゃ意味がないんだよ。

圧倒的に強くて知名度が高い人なら、その流派や道場の宣伝のために優遇されるけど。

教えるのとか道場の運営は、そういうのが得意な部下をつければいいし。

考えてもみてよ、素人や普通の人が武芸を習おうとした時、道場破りで獲得した看板を沢山掲げている人の所に習いに行くと思う？
頂点を目指しているような人や、夢見る無謀な若者ならともかく、最初はちゃんとした道場に行くでしょう？
俺達だって、幼い頃からちゃんと順序立てて訓練しているから。

「ふーーーん」

姉ちゃん、『ふーーーん』じゃないよ。
というか、食べているケーキのクリームが口についてるよ。
こっちは物凄く一大事だし、姉ちゃんは道場で一番偉い人なんだよ。
真面目に対処しようよ。

「ヨハンとゼノスでも駄目なの？」

「厄介なのが来ているのです」

俺とゼノス兄貴は、バウマイスター伯爵領内で魔闘流では二番目と三番目に強い。
勿論一番は、ぶっちぎりで姉ちゃんだけど。

そんな俺達だけど、王国全体ではというともっと強い人達が沢山いる。
今日の道場破りは、そういう強い人だった。

ゼノス兄貴と俺だと勝てそうにないから、姉ちゃんに来てほしいんだよ。

「看板、勿体ないもんね」

「そうだよ、看板高いから」

別に奪われたからといって道場が運営できなくなるわけじゃないけど、やっぱり負けて看板を取られたとなると恥ずかしいし、正式な看板は値段が高い。

看板代金は、流派本部の貴重な収入源だからね。

やっぱり、本物の看板を掲げていないと世間体も悪いし。

「この前、大金を出して作ってもらったばかりなのに、もう再発行だと絶対に足元見られて看板料が上がるよね」

「バウマイスター伯爵領はお金があると思われているから、本部のジジイ達、絶対に看板料を大幅に上げてくるよ！」

「それは上手くない話だね。よし、ボクがぶちのめしてあげよう」

姉ちゃんは、道場破りを撃退する事を了承してくれた。

「ルイーゼ、口の周りのクリーム」

「おっと、レディーなボクがはしたない」

すぐに席を立ったけど、しょうもない理由でイーナさんから注意された。

あと、姉ちゃんがレディーなのかは相当に怪しいと思う。

「急がないと」

「そうだな」

もう一つ、姉ちゃんは席を立つのと同時になぜかバウマイスター伯爵様がついて来ようとする。

道場破りへの対処なんて、領主様がわざわざ確認する事じゃないと思うけど……。

「あの……お館様にわざわざお越しいただくような案件でもありませんが……」

「えっ？　だって、道場破りだよ！」

「いえ、総師範に対処していただければ……」

バウマイスター伯爵様が、直接来るような大事ではないと思うんだ。

「いやね、俺は初めて道場破りに遭遇する機会を得たんだ。見に行かないと損じゃないか」

「……」

バウマイスター伯爵様が野次馬レベルの発言をしているけど、俺はこの人は姉ちゃんと気が合うんだろうなと心から思うのであった。

「うははははっ！　この俺様！　バンバ・バババーーン様が、道場の看板をいただいてやるぜ！」

姉ちゃんやバウマイスター伯爵様達と道場に戻ると、身長二メートル近くで鋼の筋肉に包まれた道場破りが、既に数名の門下生を破って気勢をあげていた。

名乗りをあげているけど、もう少し何とかならないのかな？
その名前。
敗れたこっちのテンションが余計に落ちてしまうよ。

「大丈夫ですか？」

「すいません、エリーゼ様」

敗れた門下生達は怪我をして、エリーゼ様から治療を受けている。
どうやら、バウマイスター伯爵様達が来てくれて結果的によかったみたいだ。

そして道場破りは、己の力を見せつけんばかりに道場の床や壁をぶち破って吠えていた。

「コラ！　せっかく新しい道場なのに、誰が修繕費を出すと思っているんだよ！」

そうだ、姉ちゃん言ってやれ！
いくら強くても、そういう常識がないから道場破りにまで落ちる羽目になるんだよ。

「君が、破った床や壁の修繕費を払ってよね！」

道場の経営って大変なんだぞ。
入るお金は少なく、出て行くお金が多いんだから……って、こちらは真剣なのに、なぜかついて来たバウマイスター伯爵様は、道場破りに興味深々のようだ。

「なあ、今までにいくつの道場を破ったんだ？」

「聞いて驚け！　既に五つの道場を破っておるわ！」

あーーーあ、その五つの道場は看板の再発行で大赤字だな。
本部のジジイ共は大喜びで、懇意にしている看板職人達と盛大にボッタクっているはず。

「すげえ！　本物の道場破りすげえ！」

「どうだ！　凄かろう！」

バウマイスター伯爵様、どうしてそんなに嬉しそうなんですか？
破られようとしているのは、自分の家臣が経営している道場なのに……。

「ヴェル、あの道場破りは敵なんだぞ」

「そうよ、看板が奪われたら今のバウマイスター伯爵領への注目度からいって恥をかいてしまうのよ」

「ヴェル様、はしゃぎすぎ」

「ヴェンデリンさん、ルイーゼさんを応援してさしあげないと」

バウマイスター伯爵様は、エルヴィンさん、イーナさん、ヴィルマさん、カタリーナさんから子供のように叱られていた。
その姿は、とても竜殺しには見えない。

「大体、なんでそんな芸名なのさ？」

バウマイスター伯爵様が、道場破りにばかり注目しているからか？
姉ちゃんが、道場破りの名前について突っ込み始めた。

「芸名じゃねえよ！」

いや、その名前は芸名にしか聞こえないから。
本名だなんてあり得ないし。

「俺の魂の名前だ！」

「何だよ！　その魂の名前って？」

「俺は、物心ついた頃から魔闘流を極めるべく、過去の名を捨て、これまでの交友関係を絶ち、魔闘流を友にして生きてきたのだ！」

「寂しい人生……」

「サラっとそういう批評をするな！　逆に堪えるんだよ！」

いや、姉ちゃんだけじゃなくて俺もそういう風にしか思えないけど……。
きっと他のみんなだって……。

「わかる、わかるぞ。道場破り」

あの……バウマイスター伯爵様？
どうして、道場破りに同情しているのですか？

「俺も、昔は魔法だけが友達だったし……」

「ほら見ろ！　バウマイスター伯爵様のようになるには、そういう努力も必要なのだ！」

なぜかバウマイスター伯爵様が、道場破りの落ち込んだ精神を回復させてしまう。
さすがに、姉ちゃんも怒ると思うんだけど……。

「わかるけど、道場破りによる門下生への傷害と、道場の設備を壊した器物損壊です。ルイーゼ、ぶちのめしてあげな」

「はーーーい」

バウマイスター伯爵様から命令されて、姉ちゃんはのんきそうな声で了承する。
姉ちゃん、そんなんで大丈夫か？

「おい、バウマイスター伯爵様よ。俺が女如きに負けると？」

「逆に聞くけど、君如きでどうしてルイーゼに勝てると思っているのかな？」

バウマイスター伯爵様、随分と姉ちゃんの事を評価しているんだな。

まあ、姉ちゃんが強いのは確かだけど。

「なっ！　可愛い奥さんが大怪我しても後悔するなよ！」

「君も、再起不能にならないといいね」

「抜かせ！」

バウマイスター伯爵様に挑発された道場破りは、まるで猪のように姉ちゃんへと駆け出していく。

そしてすかさず、拳による大振りの一撃を入れた。

「砕けろ！」

だが、道場破りによる渾身の一撃は空を切った。

既にその場所に、姉ちゃんはいなかったのだ。

「どこに消えた？」

「ここだよ」

姉ちゃんは恐ろしいスピードで、あっという間に道場破りの後ろに回り込んだ。

すかさず手刀による一撃を道場破りの首筋に軽く入れると、それだけで道場破りは意識を失って倒れてしまう。

大男が倒れ、道場の床が大きな音を立てて鳴り響いた。

「まあまあ強い道場破りだったね」

確かに結構強い道場破りだったけど、どちらかというと姉ちゃんの化け物じみた強さの方が際立っていた。
バウマイスター伯爵様はそれがわかっていたから、最初は道場破りを褒めたりしていたのか。

「物語みたいに、最初の方で威勢がいい敵ってほぼ負けるな」

「噛ませ犬ってやつ？」

姉ちゃん、さすがにそれは可哀想だろう。

「あなた、回復させますね」

「頼むよ、エリーゼ」

エリーゼ様が、気絶していた道場破りを治癒魔法で回復させる。
しかし、物凄い治癒魔法だよな。

「俺は負けたのか……」

再び暴れるかと思ったら、目を醒ました道場破りは観念したようでとても大人しくなった。

「なんでバンバ・バババーンなんて変な名前を名乗ったの？」

「それは……」

道場破りは、姉ちゃんたちに事情を説明し始める。

「俺の本名は、テルマってんだ……」

「それって……」

「そうだ、女の名前だ」

テルマの両親は、立て続けに五人も産まれたばかりの男の子を亡くしてしまった。

そこに六人目のテルマが産まれた。

「女の名前なら死なないかもしれないという理由だけで、女の名前にされたんだよ」

「たまにそういう人がいるよね」

女の子の方が丈夫だから、丈夫に育つようにと男の子に女性の名前をつける人がいるんだよね。

成人前だけ女性名で、成人したら男性名を与える地方とかもあるらしいけど。

「俺はこんな成りなんだ。女の名前では……」

子供の頃からバカにされ、苛められてしまったので、テルマは見返してやろうと魔闘流を極めて強くなった。

ところが、生まれが農民だったので所属していた道場で師範になれなかった。

「実家が金持ちだったり、貴族の子弟だってだけで師範になれている奴がいるってのに、俺は後輩にもどんどん先を越されて……」

半分ヤケになり、道場破りをするようになったとテルマは説明し

た。

「うーーーん、でも師範って指導力とか経営能力も問われるよ」

「俺はそれも勉強したんだよ！」

事情を聞いていると、可哀想になってくるな。

少し前の俺達と同じ境遇か。

「もう焼くなり煮るなり好きにしやがれってんだ！」

「じゃあ、うちで働いてもらおうかな」

「本当か？」

「うち、基本的に人手不足だし。君、結構強かったしね」

姉ちゃんが化け物みたいに強いだけで、テルマは俺やゼノス兄貴よりも強いからなぁ……。

「ありがたい、ありがたい」

姉ちゃんから雇うと言われて、テルマは嬉しそうに涙を流して感動した。

道場破りに対し、過剰な温情処置だと思ったのだと思う。

「心を入れ替えて頑張ってね。ああ、あと……」

「あと、何ですか？」

他に何だろう思っているテルマに対し、姉ちゃんは一枚の紙を差し出した。

「これは？」

「請求書だよ。君が壊した道場の床と壁の修理代ね。月賦にしておくから、頑張って働いて返してね」

「はい……頑張ろうと思います」

姉ちゃん、しっかりしているな。

まあ、よく言う事を聞きそうな部下が手に入ったと思えばいいか。

そんな事件があって道場破りを雇う事になったんだけど、テルマはすぐに魔の森近くの支部練習場の師範として赴任して行ったんだ。

「けっ！　俺達のような荒くれを相手にする師範様が不幸だな！」

「そうよ！　練習台にして半殺しにしてやるぜ！」

「それが嫌なら、講習代の返還と挨拶料くらい出さないとな！」

「テルマって、女が師範かよ！」

まだ支部練習場が設置されたばかりの魔の森付近の村で、二人の荒くれ冒険者達がよからぬ事を計画していた。

魔の森で思った以上に稼げないので、新しくできた魔闘流支部練習場で師範を脅して金銭でも奪おうと計画したのだ。

魔の森の魔物よりは、こんな僻地に派遣された魔闘流師範の方が弱いと思ったわけだ。

しかも、名前からして師範は女である。

これなら簡単に金を脅し取れると、二人は大喜びだ。

「へへっ、頼もう！」

「師範はいるか！　コラぁ！」

二人が勢いよく練習場のドアを開けると、そこには門下生達に激しい稽古をつける身長百九十八センチ、体重百二十五キロの筋肉達磨がいた。

「こらぁ！　俺様に勝てないで、ルイーゼ様に勝とうなんて千年早いわ！」

気迫を篭めて門下生達に稽古をつけるテルマに、二人の冒険者達は一瞬で硬直した。

見ただけで勝ち目がないと理解したからだ。

「うん？　短期講習か？」

「「いえ……」」

二人はこのまま逃げようと思ったが、恐怖で体が動かない。

しかも、テルマはそこまで甘い人物ではなかった。

「はあ？　魔の森の魔物を舐めてんのか？　俺様の訓練を受けておけ！　まさか、嫌だとか言わないよな？」

テルマのギョロリとした目が、二人を睨みつける。

「「いいえ！　滅相もない！」」

「お前達は運がいいな！　俺様がスペシャルコースで鍛えてやる！」

「ははははっ……嬉しいな」

「得しちゃったな……」

「そうだろう？」

二人は、短期間で徹底的に性根を治された。

厳しいが、面倒見がいい師範としてテルマは評価されるようになっていく。

第百十八話　リサという女。

自分の弟子であったカチヤと、今まで魔法使いだとは思われていなかったテレーゼの魔力が増強された原因を探ろうとした、気が強い女魔法使いリサ。
彼女はその名に恥じぬ実力の持ち主であったが、俺との決闘でそのゴージャスな衣装とメイクが取れたら急に大人しくなってしまった。

メイクが取れた後は、魔力増強の件は聞かれなくなった。
大人しくなったリサは極度の人見知りで、派手な衣装とメイクがないと碌に男性とも話せないからだ。

大人しくなったリサは、今は屋敷に居候しつつ、それでも朝には真面目に魔法の特訓を行っている。
その魔法の精度は、カタリーナが称賛するほどであった。
最初の印象とは違って、魔法に関しては真面目に練習をおこなうようだ。

ただ、一つ問題があった。

「俺は、十五年も前からの顔見知りじゃねえか！」

急にオドオド系美女になってしまったリサは、ちょい悪オヤジであるブランタークさんが苦手なようだ。
彼を見ると、誰かの陰に隠れてしまうようになった。

「お前、俺が魔法を教えていた時にはもっと偉そうだったじゃない

か！」

ブランタークさんが怒ると、リサは怯えてカタリーナの後ろの隠れてしまう。

日々こんな調子なのだが、逆にそのせいで女性陣からの非難は一切消えた。

元の高慢ちきなキャラよりも、よっぽどマシだからであろう。

「元の服装とメイクに戻せよ」

「……なるほど……リサさんは、この恰好でも普通に人と話せるようにしたいそうです」

ブランタークさんからの提案に、リサはカタリーナに小声で伝えて代弁してもらう事で答える。

どうやら、男性であるブランタークさんに直接は言えないようだ。

「それは可能なのか？」

「ブランタークさん、こういう事は時間が必要なのでは？」

「まあ、伯爵様が逗留を認めている以上は、俺が口を出す案件じゃないけどな……」

「……ヴェンデリンさんに感謝しているそうです」

「それはどうも……」

皮肉な事に、屋敷にいる男性の中でリサに一番好かれているのが俺であった。

まだ直接は話せずに女性陣の通訳が必要だが、顔を合せても怖がられたり目を逸らされたりはしていない。
エルと導師は、最初から怖がられてしまって駄目であった。

「うーーーん、難儀な人だな……」

自分も避けられてしまっているので、エルはどうにも手が打てないといった態度だ。

「このままだと問題なような……」

「徐々に慣らすしかないんじゃないか？」

エルの意見はありきたりなものであったが、一番手堅くもあった。

「慣らすために、少し出かけたらどうだ？」

エルからの勧めにより、俺達は王都に出かける事にした。
普通に考えればデートなのだが、今のリサに俺と二人きりの状況など耐えられるはずもない。
他にも色々と事情があって、王都行きは俺、リサ、カチヤ、テレーゼ、アマーリエ義姉さんというメンバーになった。

「これはもうデートじゃないな」

「私は通訳？　王都に行けるのは嬉しいけど」

リサは、アマーリエ義姉さんの傍から離れなかった。
この人と二人きりでデートするという事が、俺が死ぬまでに実現するのであろうか？

非常に興味深いどころだ。

「まあ、貴族の子息や令嬢が二人きりでデートなどというのは滅多にないからの。下級貴族ならばいざ知らず」

テレーゼに言われて俺は思い出した。

そういえばエリーゼと初めてデートした時も、セバスチャンのみならず、他にも何名か護衛がいたのを。

護衛の方は俺達に気がつかれないようにしていたが、間違いなくホーエンハイム枢機卿の差し金であろう。

「エリーゼ達は妊娠して『瞬間移動』は危険、ヴィルマはエリーゼ達の世話で残った。比較的、新しくヴェンデリンの妻になったか、そういう関係になった女ばかりじゃの」

リサと……アマーリエ義姉さんも違うが、彼女はいちいちそんな細かい事を指摘して時間を無駄にするような人ではない。

テレーゼとカチヤは、まだ一緒に出掛けた事が少ないので誘ったというわけだ。

「どんな事情があるにせよ、今日はお休みなのじゃ。ヴェンデリン、エスコートせい」

その時点で既に、お休みなのにお休みではないような気もしたが、俺は気にしない事にして王都での時間を楽しむ事にする。

とは言っても、女性が四人もいるのだ。

メインは、買い物というのが定番となっていた。

「バウルブルクのお店も大分品数が増えたが、やはり一国の主都に

は負けるというものよ」

商業街にある洋品店で、テレーゼは色々な服を……今回同行したカチヤに当ててみながら話を続ける。

「テレーゼ、あたいはいいよ」

「いいわけがあるか。私服の基準が、動きやすいのみなのはどうかと思うぞ」

テレーゼの指摘どおりに、カチヤはあまり服を持っていない。冒険者としての装備と、嫁ぐ時に実家が用意した貴族の妻として相応しい他所向きの服。

これを除くと、地味な動きやすい服しか持っていなかった。

実家であるオイレンベルク領時代からの生活を、そのまま引き摺っているのだと思う。

「誰も困らないじゃないか」

「バカ者、お主はヴェンデリンの妻なのだから、プライベートでもそれなりの服を着て当然じゃ」

テレーゼは、カチヤに説教を始める。

本人はよくても、カチヤの服装のせいで俺が非難されたり侮られる事もあるのだからと。

「貴族の妻になった以上は、諦めてある程度は着飾ってもらうぞ」

「わかったよ……」

カチヤは渋々と言った感じで了承するが、口調とは違って綺麗な顔をしているのでどんな服装もよく似合った。

「それとな、妾達がある程度浪費しないと下々に金が届かぬであろう？　浪費で家を傾けるのは論外じゃが、ある程度の消費は下々のためなのじゃ」

やはり、こういう貴族的な常識ではテレーゼが圧倒的に理解が深い。

生まれながらの貴族だからなのであろう。

「わかったけど、それでもあたいは姉御よりはマシだぞ。何しろ姉御は、あの派手な服以外持っていないんだからさ」

あの派手な服装でないと言動が保てなかったので、リサはプライベートでもずっとあの格好だったそうだ。

実は今着ている服は、背格好が近いカタリーナから借りている物であった。

「だから、アマーリエと選んでおるではないか」

確かに、二人で沢山の服を試着しながら選んでいた。

「ヴェル君、リサさんはどう？」

「よく似合っていますね」

アマーリエ義姉さんのセンスもよかったようで、リサは以前のハデハデしい服装ではなく、落ち着いた綺麗なお姉さんに見える服装

になっている。
アマーリエ義姉さんは、コーディネートが上手なようだ。

「リサさん、似合っているって」

アマーリエ義姉さんにそう言われると、リサは顔を俯かせて少し恥ずかしそうだ。
どうやら、まだアマーリエ義姉さんの通訳がないと俺と話ができないらしい。

通常の生活では主にアマーリエ義姉さん、魔法の修練などではカタリーナが通訳をしてくれるようになった。

「他にも、色々と見繕いましょう」

アマーリエ義姉さんの意見に女性三人が従い、ここぞとばかりに服を見定め買い始める。
こうなると、一番暇になるのは男である俺だ。
俺も服には無頓着な方だし、それでも伯爵ともなれば勝手に着る服は準備されるようになった。
ここは女性専門の洋品店で、俺はただ三人を見守り、試着した服が似合うか似合わないか言うのみである。

「似合うと思うよ」

「ヴェンデリン、もう少し女性を褒める語彙を磨けよ」

似合うか似合わないかしか言わなかったら、テレーゼから注意されてしまった。
だが、俺にそんな高度なものを求められても困ってしまう。

「ああ、君は薔薇のように可憐だね」

「寒気がするの……」

せっかく勇気を振り絞って言ったのに、テレーゼの評価は酷いものだ。

「テレーゼが語彙が少ないって言うから！」

「言えばいいというものではないぞ」

「ううっ……今度、エーリッヒ兄さんでも聞いてみようかな？」

「なかなかに洗練された兄君らしいの」

俺の努力は無駄に終わったが、服の買い物は無事に終わったようだ。

みんな自分で出すと言ったが、俺は有名人で周囲の目もある。

俺が金貨を出して全額を支払った。

応対している洋品店の店主が、誰でもわかるほど嬉しそうな顔をしている。

俺達は、よほど気前のいい客だったようだ。

「ありがとうございました」

店を出ると、もう時間はお昼の少し前であった。

さすがにお腹が減ってきた。

「じゃあ、そろそろ飯でも……」

「ヴェンデリン、まだ終わっておらぬぞ」

「何ですとぉーーー！」

最初の洋品店だけで二時間以上の時間を費やしたというのに、まだ買い物は終わっていないとテレーゼが言いだす。

「ヴェル君、あとは下着とか、アクセサリーとか、靴とかも必要でしょう？」

アマーリエ義姉さんは、テレーゼと同じ意見であった。

まだ買い物は終わっていないと言う。

「旦那、あたいも飯が食いたいんだけど……」

「カチヤ、お主の分もあるのじゃから欠席は許さぬぞ」

「そんなぁーーー！」

俺とカチヤの願いは空しく、その後も俺達は店を梯子して四時間以上も時間を費やすのであった。

「もうこんな時間か……昼飯とオヤツを要求する！」

「あたいも！」

テレーゼとアマーリエ義姉さんが長時間買い物に付き合わせるので、もう時間はお昼を大分回ってしまった。
もうオヤツの時間で、俺とカチヤは何か食わせろと声をあげた。

「お主ら、気が合ってよかったの」

貴族らしくない貴族家の生まれという共通項もあり、俺とカチヤは行動パターンや好みに共通項が多かった。
冒険者としての装備には手を抜かないが、私服はどうでもいいし、美味しい食事が好きなどの共通点があったのだ。

「リサさんも、何か食べたいそうよ」

静かに、リサも俺とカチヤの意見に賛同してくれた。
これで過半数だ。
何か食べに行くという意見が優勢になった。

「別に、食べに行かぬとは言っておらぬではないか」

テレーゼも、お腹が減っていたようだ。
食事に行くという俺の意見を否定しなかった。

「さて、何を食べに行こうか？」

「肉！」

「カチヤ、お主は年頃の女子とは思えぬの……」

テレーゼは、誰に憚る事なく天下の往来で肉が食べたいというカ

チヤに呆れていた。
俺は別におかしいとは思わないのだが……ああ、導師がいつもこんな感じだからか。
でも、カチヤは導師ほど食べるわけでもないし、好きな物を食べた方がいいと思う。

「アマーリエ義姉さんとリサは何が食べたい？」

俺は男性なので、女性に譲って何か食べたい物がないか聞いてみる。

「そうね……私は夕食までそんなに時間もないから軽い物を。リサさんは、甘い物が食べたいそうよ」

甘い物か……。
普通の女性らしい反応だな。

「それじゃあ……」

無難に、少し高級なレストランに行く事にした。
そこならある程度メニューが充実していて、デザートの種類も多いからだ。

俺は一応有名人であり、レストランはお昼時をすぎて客も少なく、奥の特別室に入れてもらった。
ウェイターに注文すると、三十分ほどで次々と頼んだ料理が出てくる。

「美味そうなステーキだな」

「カチヤ、そんなに食べて大丈夫か？」

「テレーゼこそ、お腹が空かないか？　最近、食べる量が増えたんだよな。その割には、少し痩せたし」

「それは、魔力が上がったからだな」

魔法使いは、大量の魔力を消費する人ほどカロリーも消費するので大食になる。

カチヤは魔力が上がった分、魔法を使うと消費するカロリーが増えたというわけだ。

「いや、それは妾も知っておる。確かに、以前よりも食べる量は増えたの」

テレーゼは、魚料理とサラダ、パンを頼んでいた。

一般的な食事量であったが、魔法使いになる前のテレーゼは小食だったから、食べる量は確実に増えている。

「最近、服を着ると少し緩かったのじゃが、やっぱり妾は痩せたのじゃな」

「いいわねぇ……魔法使いって、そういうメリットもあるのね」

アマーリエ義姉さんが、カチヤとテレーゼを羨ましそうに見る。

女性にとって、ダイエットとは永遠の課題のようだ。

ただし、昔の実家では考える必要がない問題でもあった。

「という事は、リサさんはこれを全部食べても大丈夫なのね……」

リサは、パフェ、ケーキセット、クレープを頼み、紅茶を飲みながら美味しそうに食べている。
さすがの俺でも、少し胸ヤケがしそうな量だ。

「姉御、甘い物なんて食べるんだな」

「えっ？　大好きだって聞いたわよ」

アマーリエ義姉さんはリサの通訳をしているので、男性がいない場所では彼女と色々と話をしているようだ。

「あれ？　でも、昔にあたいを食事に連れて行ってくれた時には……」

カチヤは、リサが蒸留酒と味の濃いツマミばかり飲み食いしていたと話す。

「それは、あの格好と言動を維持するために必要な演技ですって」

アマーリエ義姉さんは、リサに信頼されているようだ。
カチヤの疑問に、本人の代わりに答えられるくらいなのだから。

「演技で、大ジョッキを二十杯以上も空けられるのかよ……」

「お酒はあまり好きじゃないけど、飲んでもあまり酔わないそうよ」

酒があまり好きじゃない大酒飲みというのも凄いと思う。
確かに、甘い物はとても美味しそうに食べている。

「何か、あたいの中の姉御像と全然違って、初めて出会った人みたいだな」

ブランタークさんと同じく、リサと面識があったカチヤも彼女の変化に戸惑いを感じているようだ。

「まあ、どっちでも姉御には変わりないか。ステーキお替り！」

カチヤは、あまり細かい事を気にしないらしい。

すぐに気分を切り替えて、ステーキのお替りを頼んだ。

「よう食べるの」

「肉は美味しいじゃないか」

「美味しいのには賛同するが、妾ではこんなに食えぬわ」

食事の後は、留守番をしているエリーゼ達へのお土産を選んでから屋敷に戻った。

リサとはまだ直接話せないが、アマーリエ義姉さん、カチヤ、テレーゼとも出かけられたし、有意義な休日であったと俺は思うのであった。

「はあ？　大酒飲みなのも演技だったのかよ！」

集団デートから数日後、所用で屋敷を訪ねてきたブランタークさんが、リサの話を聞いて目を丸くさせた。

まさか、彼女が酒に酔わない体質なだけで、本当は酒があまり好きではないなどとは微塵も思っていなかったのであろう。

「大酒飲みの方が、冒険者として舐められないと思ったそうです」

また律儀に、アマーリエ義姉さんが通訳をする。

「それは間違っていないけどな。だが男からすると、大酒飲みの女なんてご遠慮願いたいぜ」

確かに、男性に対してあまりいい印象を与えないはずだ。

だからリサはこの年まで未婚……これだけが原因ではないと思うが、原因の一つではあるはず。

「昔に一度だけ食事に行ったけど、物凄く飲んでたもんな」

リサと同じくブランタークさんから指導を受けた魔法使い達と、一度だけ懇親会を兼ねた食事会をした事があるそうだ。

その時にも、一人で蒸留酒を大ジョッキで二十杯以上空け、ブランタークさんを呆れさせたらしい。

「それで、今は一滴も飲まずか……」

今のリサは、酒を飲まずに間食や食後のデザートで出てくる菓子を楽しみにしている。

普段飲んでいる飲み物も、紅茶に変わった。

「まあ、いい事じゃねえか。好きでもないのに酒を飲むなんぞ、酒への冒涜だし」

酒好きであるブランタークさんから言わせると、酒が好きではない奴は酒を飲むなという事らしい。

「俺が飲む分が減るからな」

だが、その理由は完全に自己中心的なものであった。

「ブランタークさんの事だから、『俺の方が沢山飲める、勝負だ！』とか言うのかと思った」

「おいおい、伯爵様。俺は導師じゃないんだぜ」

と、ブランタークさんが俺に言った直後に、彼は大切な事を思い出した。

それは、今日は導師もバウマイスター伯爵領に来ていたという事実をだ。

「面白い、ブリザードのリサが某よりも酒飲みだというのであるか！」

「ブランタークさん……」

「口が滑った……」

導師は、しょうもない理由でムキになる事が多い。

食事の量で常にヴィルマに勝負を仕掛け、勝手に負けて悔しがったりしている。

今回も、リサが酒が飲めるという事実が、彼の心の稜線に引っかかったのであろう。

「ブリザードのリサよ！　勝負なのである！」

突然導師から勝負するようにと言われたリサは、相変わらず導師が苦手なのでアマーリエ義姉さんの陰に隠れてしまった。

「伯父様、お酒の勝負は危険です。お止めください」

エリーゼが、慌てて止めに入る。

この世界でも、過度な飲酒で急性アルコール中毒になって命を落とす人がいる。

酒飲み勝負など論外というわけだ。

「いや、これは某の矜持に関わる問題なのである！」

飲酒の量がどんな矜持に関わるのか俺にはわからないが、導師にとっては大切な事のようだ。

彼は、エリーゼからの諫言を一切聞き入れなかった。

「これは、実際に勝負しないと導師は引かないのでは？」

「ブランタークさんが妙な事を言うから……」

「いやあ、すまんな」

結局、仕方なしに導師とリサによる飲酒対決がスタートするのであった。

「リサ、本当にすまないけど」

導師と酒飲み勝負をする羽目になったリサに、なぜか俺が謝る羽目になった。

酒が好きではない人に飲酒勝負をさせるのだから、ここは素直に謝るしかない。

ブランタークさんだと謝ってもリサが隠れてしまうし、導師も同じで……勝負が終わるまで謝るはずもないか……エルは今頃ハルカと楽しい新婚生活のはずだ。

邪魔をするのは……何か微妙に腹が立ってきたな。

「構わないそうよ」

「えっ？　どうしてですか？」

リサは特に怒るでもなく、導師の勝負を受け入れた。

俺がなぜかと聞くと、通訳のアマーリエ義姉さんが説明をしてくれる。

「将来の旦那様のためだからだって」

「（うがっ！）」

夫になる俺のお願いだから受けてくれるそうだ。

導師のせいで、ますます俺の逃げ道がなくなったような気がする。

もしかすると、導師はわざと勝負を挑んだのでは……まあそれはないか。

「無理しないでいいから」

「大丈夫、勝てるって」

リサはえらく自信満々のようだ。

アマーリエ義姉さんを通じてだが、導師には負けないと宣言した。

「ふっ！　その自信も今日までである！」

自分から勝負を言いだすだけあって、導師は物凄く酒に強い。

ブランタークさんでも勝てず、大食いではヴィルマに負けてしまう導師の自慢のタネでもあった。

「ヴェル様、お酒臭い……」

勝負のために度数が高い蒸留酒の瓶が大量に準備されたのだが、栓が空いた酒瓶からアルコールの匂いが周囲に漂う。

プロの狩人で匂いに敏感なヴィルマは、急ぎ鼻を手で塞いだ。

「ヴィルマは、お酒が苦手だものな」

「美味しくないから嫌い」

ヴィルマは、お酒が苦手であった。

乾杯時の食前酒でも、絶対に一口しか口をつけない。

「物凄い数の酒瓶ね……テレーゼが準備したのよね？」

「我が故郷、フィリップ公爵領特産のアクアビットじゃ。イーナも飲むか？」

「妊娠したから、お酒はパスね」

「そうじゃったな、すまんすまん」

アクアビットはジャガイモを材料にした蒸留酒で、フィリップ公爵領の特産品でもある。

アルコール度数は、四十パーセントを超えている代物だ。

「これを沢山飲んだ方が勝ちなんだよね？　ボクも苦手な匂いだなぁ……」

ルイーゼも、ヴィルマと同じくほとんど酒は飲めない。

イーナは普通に飲めたはずだが、普段は飲まない。

俺があまり飲まないので、他の妻達もあまり飲まなかったのだ。

「くれぐれも無理はしないでください。体調が悪くなったら、私に言ってくだされば『解毒』をかけますので」

導師に押し切られてしまったエリーゼは、救護役に就任した。

エリーゼも前に悪酔いして大騒ぎになったので、普段は絶対に酒を口にしない。

彼女にとってのお酒とは、料理やお菓子の材料という認識だ。

「匂いが凄いですわね……」

「カタリーナは、酒は大丈夫か？」

「まあ、普通に飲めますわ。普段はあまり飲みませんけど。カチヤさんは？」

「あたいもそんな感じ。食事会とか、お祝い事とかじゃないと飲まないかな？」

ギャラリーはいつものメンバーなので緊張感も欠片もないが、勝負の準備は整った。

「薄めるのは自由だけど、あくまでも原酒の量で勝負だからな」

「ブランターク殿が何を言うかと思えば、男ならそのまま飲むのである！」

「いや……酒を割るのに男も女も関係ないような……」

こんなに濃い酒をそのまま飲む人は少なそうだが、導師の中では普通の事らしい。

グラスすら準備せず、ラッパ飲みで勝負するようだ。

もう一方のリサは、自分の魔法で氷を作ってグラスに入れた。

ロック割りで勝負するらしい。

「テレーゼ様、余ったらこの酒くださいよ」

「ブランタークには魔法の修練で世話になっておるからの。余らなくても、あとで取り寄せて贈呈しよう」

「ははははっ！　原酒の大瓶で五十本ですよ。人間二人で飲める量じゃありませんって」

急遽審判役になったブランタークさんが、笑いながら勝負開始の

合図をする。

「うむ、スッキリと飲みやすい、いい酒である！」

勝負開始の合図と共に、導師は豪快にラッパ飲みでアクアビットの大瓶を飲み始める。

これだけアルコール度数が多いと味もへったくれもないような気もするが、導師は美味しそうに物凄い勢いで一本目を飲み干した。

リサは、グラスに自分で作った氷を入れてからアクアビットを注いで静かに飲んでいる。

飲む速度はそれほど早くはない。

だが、常に一定のスピードで飲み干していく。

「いけるのである！」

「いけるのはいいけど、せっかくの酒が勿体ねえなぁ……」

ブランタークさんが、導師の飲み方にケチをつける。

彼は、ゆっくりと楽しみながら酒を飲む人だからだ。

勝負開始から十分ほど、導師は既に五本の大瓶を空けた。

二分に一本というハイペースで、もしこれがテレビ放送されていたら『一般の方は、真似しないでください』とテロップが出ているであろう。

導師の顔は少し赤かったが、そんなに酔っているようには見えない。

飲むペースもまだ落ちていなかった。

「リサの方は……」

リサは、一定のペースで飲み続けていた。
グラスに大瓶から酒を注ぎ、ゆっくりと飲んでいく。
氷が少なくなると、自分で作ってグラスに追加した。
ブリザードの二つ名に相応しく、氷は常に自前のようだ。

何より凄いのは、リサは顔色一つ変えていない。
これまでに飲んだ量は導師には負けるが、丸々二本を空けている。
これも驚異的なペースだ。

「共に底無しじゃの」

「常人には真似できないわね」

テレーゼとアマーリエ義姉さんは、二人の飲む量に呆れ顔だ。
そして、勝負開始から一時間後……。

「まだいけるのである」

威勢はいいが、やはりというかさすがに導師は飲む勢いが止まった。
二分で一本を空けたのは最初の十分だけで、今の時点で二十本。
顔にも赤みが増してきている。

「当たり前だよなぁ……」

原酒の大瓶を一人で二十本も空けたのだから、今の時点でも十分に化け物であろう。
だが、導師は飲むのを止めようとしなかった。
なぜなら……。

「リサさん、大丈夫？」

アマーリエ義姉さんの問いに、リサは軽く頷いて答えた。
彼女は五分で一本というペースを乱さずに、これまでで十二本。
だが、まったく顔色に変化がなく酔っているようにも見えない。

まだ導師が勝っているが、リサが変わらぬペースで飲み続けるので彼は危機感を抱いたようだ。
だが、いくら導師でももうこれ以上飲めるなずがない。

エリーゼが止めるまでもなく、手が動かない状態であった。
そして二時間後……。

「ああ……酒がなくなってしまう！」

「ブランターク、あとで贈呈するから泣くな。お前は子供か」

「だって、全部なくなるなんて想定外じゃないですか！」

「妾だって想定外じゃ、五十本も準備したのじゃぞ」

リサは、わずかに飲むペースを上げたようだ。
今の時点で二十四本と半分、導師は奮戦したが一時間で二本しか飲めなかった。

五十本もあった酒瓶がすべて空になりつつあり、ブランタークさんは酒がもらえないと嘆いてテレーゼから呆れられた。

「ぬぉーーー！　このままでは！」

リサが二十六本を飲んだ時点で、導師の敗北が決定する。
そこで、急ぎ二十三本目を気合で飲み干し始めた導師であったが、酒がもっと大量にあってもリサはこのまま同じペースで飲み干してしまいそうだ。

元々、導師に勝ち目はなかったのだと全員が思った。

「まるで格が違うよね。ちょっと、お酒が飲めるとかいうレベルを超えているもの」

ルイーゼの発言が耳に入ったのか？
導師が何とか気合を入れて二十三本目を飲み干したが、彼はここで限界を迎えたようだ。
二十四本目に手が伸びず、顔もゆでダコのようだ。

朝市とかで売っていたら、美味しそうだとつい手が伸びてしまいそうである。

それを口にすると導師にぶん殴られそうなので、俺は絶対に言うまいと思ったが。
そして、その間にリサが二十六本目を飲み干していた。

「勝負あったな。リサ、もういいよ」

俺が声をかけると、彼女は二十七本目に手を出さずに少し迷ってからブランタークさんにそっとアクアビットの酒瓶を差し出した。

「ありがとう、リサぁーーー！」

ブランタークさんが、泣いてリサにお礼を言う。

「ブランタークさん……」

「残ってよかったぁ」

この勝負でわかった事は、俺達の想像以上にリサが酒に強く、俺達の想像以上にブランタークさんが酒に関しては意地汚いという事実であった。

「負けた以上は仕方がないのである！」

勝負終了から三十分ほど後、導師は水を飲みながら酔いを醒ましていた。

顔色は、既に少し赤い程度にまで回復している。

間違いなく、肝臓が大型竜並に頑丈なのであろう。

リサに関しては、理解不能なまでの酒への強さであった。

「勝負が終わったら、お腹が減ったな」

夕食は食べたが、少し時間が経っていた。

勝負観戦でエネルギーも使ったようで、軽く夜食でも食べたい気分だ。

「あなたがそう仰ると思って、準備しておきました」

エリーゼが、夜食用に焼いたバナナパイを持ってきてくれる。

魔の森特産のバナナを使用した、子供からお年寄りにまで人気の、バウマイスター伯爵領内で大流行しているお菓子である。

「美味しそうだな、導師はどのくらい食べますか？」

「いや、さすがにもう少しいいのである……」

さすがの導師も、あれだけの酒を飲んだ後では甘い物には手が出ないようだ。

「あれだけ飲めば当然ですか。リサはバナナパイを食べるか？　取っておいてあとで食べるという手もあるけど……」

念のためにリサに聞いてみると、意外な返答がきて俺達を驚かせた。

「甘い物は好きだから、大きめに切ってほしいって」

アマーリエ義姉さんの通訳であったが、どうやら彼女は甘い物は別腹らしい。

「負けたのである……」

それを聞いた導師が、珍しくがっくりと肩を落とすのであった。

オマケ七話　変わったお仕事。　（前書き）

これは、ヴェル達が成人する直前の話です。

オマケ七話　変わったお仕事。

今日は、王都の一番大きな書店において期待の新作小説が販売される。
私、イーナ・ズザネ・ヒレンブラントは、お休みの日を調整し、朝早くに起きて書店の前に並んだ。

『イーナちゃんは、本当に本が好きだよね……』

ルイーゼは私を奇特な人扱いするけど、読書が趣味の人なんて珍しくないのに大げさだと思う。
自分は活字を三分以上読むと眠くなるとか常に言っているけど、本当にそんな物語の登場人物のような人がいるのかしら？

いくら何でも三分は短いと思う。

「間に合ってよかった」

予想どおりに、まだ開店前なのに書店の入り口には多くの人達が並んでいた。
さすがは人気作ね。
入荷する点数は多いと思うけど、もし売り切れてしまったら次の入荷日まで読めなくなってしまう。
時間をかけても、ちゃんと並んだ方が後悔しない確率は高いわ。

「開店の時間です。新作の購入希望者は順番にお願いします」

一時間ほど待つと開店の時間となった。

書店員さんの誘導で、私達は並んだ順番に本を買っていく。

「あれ？　思ったよりも入荷数が少ない？」

もしかすると、私は購入できないかも。

不安がよぎるのだが……。

「はい、今日の入荷分はお嬢さんまでですね」

よかった。

ちょうど私で最後の一冊のようだ。

無事にお金を払って新作を購入する事が出来た。

「そんなぁ。よりにもよって、買えなかったとは……」

「入荷が少なすぎよ」

「他の書店は……駄目元で回ってみるか……」

私の後ろに並んでいた人達は残念がっている。

他の書店に駆け足で向かう人達もいるけど、よほどの幸運がないと今からでは入手は不可能よね。

でも、他の人に譲るなんて出来ないわ。

だって、無理に槍術の稽古のお休みを変えて貰って、今日は朝一時間早く起きて槍の自主稽古をしてから、書店の前に並んだのだから。

「早速帰って読みましょう」

「すいません」

購入した本を抱えて屋敷に戻ろうとすると、突然後ろから声をかけられる。

「はい？」

後ろを振り返ると、そこにはイケメンの好青年が立っていた。

背は百八十五センチほど、貴公子然とした風貌に、さわやかな笑顔が眩しい。

ライトブラウンの髪はサラサラで手入れも完璧、よく見ると貴族だ。

着ている服は一見地味だけど、服の素材や縫製が素晴らしい。

変にキラキラした装飾を付けて着飾る下品な貴族ではない。

こういうセンスのいい人は、ブライヒレーダー辺境伯様などに言わせると『本当の意味での貴族』なのだそうだ。

でも、そんな人が私に何の用事なのかしら？

もしかして、私をナンパ？

「お美しいお嬢さん。私は今あなたの御顔を拝見して、居ても立っても居られなくなりました」

ええっ！

本当にナンパなの？

でも、私にはヴェルがいるし……。

この人は物凄く恰好いい人だけど、まだどんな人かもよくわからないわけで……。

じゃないわよ！
ここで迷ってどうするのよ！

私は脳内で色々と想像してから、一人勝手に混乱していた。
もしこの人に求婚されたらとか、きっとこういう考え方がルイーゼに言わせると『物語思考』なのね。
実際に面と向かって言われるとムカつくけど。

私が一人だけ盛り上がってもね。
もしかしたら、道を聞きたいだけかもしれないし。

「あの……私にどのような用件でしょうか？」

「実はですね、あなたにお願いがあるのです」

「お願いですか？」

この人は貴族だから、もしかすると変な事を言ってくる可能性があるのよね。
でも、ヴェルの名前を出せば変な事はして来ないはず。
見た感じは、とても常識がありそうな好青年に見えるし。

そうだ、書店の前だからブライヒレーダー辺境伯様と同じで、この人も本が趣味なのかもしれない。
私が買った本を譲って欲しいとか？

「叶えられるかはわかりませんが」

本は譲らないわよ。

絶対に。
だって、苦労して並んで買った新刊だもの。

「そうですよね。ですが、出来たら受け入れていただきたい」

「どのような事でしょうか？」

私は、前に立つ好青年貴族の発言を待つ。
どんなお願いなのか、待っているだけでドキドキしてきたわ。

「実はですね、私を罵っていただきたいのです」

「はあ？」

私は一瞬、この好青年貴族が何を言っているのか理解できなかった。

「ですから、罵って欲しいのです。『いい年をしてナンパ？　そんな一人前の成りをして恋人や奥さんくらい普通にいないの！　このキモい豚貴族が！』という感じにです」

「……」

「あなたのような方に、私は思いっきり罵られたいのです。是非にお願いします」

「ええっーーー！」

見た目とは反してとんでもない事を言う好青年貴族に対し、私は思わず町の往来で大声をあげてしまうのであった。

「という事があったのよ……」

そのおかしな貴族を振り切って屋敷に戻ると、すぐヴェルに彼の事を報告する。

私に罵って欲しいと懇願する、イケメンの好青年貴族に出会ったと。

「変わったナンパだな……」

ヴェルも他に言いようがないのだと思う。

どう対処していいものなのか、彼も困っているのであろう。

「変な話だね。その人、物凄い美男子だったんでしょう」

ルイーゼが興味深そうにその貴族の容姿を聞いてくる。

確かに、何も言わなければあれほどの美男子はなかなか存在しないわね。

あの発言では、どんな女性でも百年の恋も醒めると思うけど。

「いきなり罵ってくださいじゃあ、他が全て完璧でもナンパの成功は覚束ないわよ」

「変な奴、素直にナンパすればいいのに」

エルなら、そう言うと思ったわ。

私は知っているのよ。

剣の訓練が終わると、あなたがたまに王城に勤めているメイドさんに声をかけているのを。
そして、思ったよりも成果が芳しくない事を……。

「あの……お館様？」

「何でしょうか、物凄くその方に心当たりが……」

今日は、王城で所用を済ませてきたブライヒレーダー辺境伯様がブランタークさんを連れて屋敷を訪ねていた。
私の話を聞くと、どうもその貴族に心当たりがあるみたい。

「イーナさん、その人なんですけど……」

ブライヒレーダー辺境伯様が語る身体的な特徴と、私が出会った貴族とはほぼ一致した。
つまり、彼の心当たりは正解であったという事だ。

「その人はですね……ガーランド男爵というお方です」

年齢は二十三歳で、去年に父親の急死で男爵領を相続した在地貴族だそうだ。
領地は、男爵領にしては豊かであるらしい。

「私と同じで腕っ節は駄目ですけど、統治手腕はなかなかの方ですね」

「よくご存じですね」

「私も文官系貴族で、彼もそうですからね。趣味も合いますので友

人でもあるのです」

貴族の交友関係には、寄親、寄子、縁戚、在地貴族なら近隣の貴族にも仲がいい人がいるパターンが多い。

隣接しているために、利権、領地争いで犬猿の仲の人もいるけど。

そして、もう一つ。

文官系、武官系という分け方もあるみたい。

ブライヒレーダー辺境伯様は中央の職を世襲している法衣貴族じゃないけど、武芸は全然駄目で内政家として知られている。

ブライヒレーダー辺境伯家自体が、代々あまり武芸の得意な当主が出ていないと父から聞いた事がある。

だから、私やルイーゼの実家はそれなりに重要視されているのだけど。

ブライヒレーダー辺境伯様は武芸が駄目で、その系統の趣味には興味がない。

自然と読書や作詩などを趣味として、同じ趣味を持つ貴族と仲良くなっていく。

いわゆる、趣味友というやつね。

こういう趣味友は、血縁、寄親、寄子、職務派閥などを超えての付き合いとなるので、時に侮れないコネとなる事がある。

貴族の趣味は、すべてが遊びというわけではないわけね。

「そのガーランド男爵様が文学を愛する貴族だというのはわかりましけど、それと『罵ってください！』に何の関係が？」

「『罵ってください！』と、彼の文学的趣味との接点はありませんね。どちらかというと、彼の被虐嗜好の問題ですから」

「聞かなければよかったような……」

あの一見好青年貴族が、女性に罵られて喜ぶ人だったなんて。

世の中には、知らない方が幸せな事ってあるものね。

「イーナさん。まあ聞いてください。彼は若い頃から苦労しているのです」

「苦労ですか？」

「ええ、彼の亡くなられたお父君は昔から病弱でして……」

ガーランド男爵領の統治実権は、成人前から若き跡取り息子に移っていたそうだ。

「彼には才能がありましたけど、十才になったかならないかの頃から、領内の統治を実質一人で切り盛りしていたのです」

私が十歳の頃は……それと比べると物凄いプレッシャーね。

「私は文学作品の書評サロンにおいて、成人前から彼の相談に乗っていました。私も二十歳前に爵位と領地を継いで苦労しましたからね。似たような境遇の彼を放置できなかったのです」

そんな事情があって、年は少し離れているけど、ブライヒレーダー辺境伯様とガーランド男爵様は親友同士なわけね。

「十代の若者の肩に、二万人を超える領民と家臣の生活が圧し掛かるのです。これは、プレッシャーですよ」

「二万人ですか……」

確かに、そう言われると私なら逃げ出すかもしれない。貴族でない人は貴族を羨ましいと思うけど、そういう苦労もあるのね。

「彼の場合、自分で領地の開発に成功して人口を増やしましたからね。領民達から絶大な支持があるのですが、そういう支持に応えるべく奮闘し、日々ストレスが溜まります。たまに貴族で人を人とも思わない傲慢な方がいるでしょう？」

領民なんて家畜以下、そんな統治をして領民の逃散や反乱を招き、たまに改易される貴族がいるとは聞いた事がある。

「親の教育とか、本人の資質もあるのでしょうが、自分がいきなり数千数万人のトップだと言われてみたと想像してみてください。中には、自分の立ち位置を見失っておかしくなる人もいますよ」

ブライヒレーダー辺境伯様の愚痴にも聞こえるけど、つまりガーランド男爵様にも同じストレスがあるというわけね。

「ヴェルも、もう何年かすると……」

多くの領民達の統治に翻弄され、ストレスで疲弊する日々が来るのかもしれない。

「バウマイスター男爵の場合は、魔法のせいで馬車馬のように働かされる未来の方が切実でしょうけどね」

そういえば、今も教会やインチキ不動産屋さんの依頼で除霊をよくしているわね。
本人は、エリーゼと一緒で楽しそうだけど。

「えっ？　そうなの？」

「そうですよ、諦めてください」

ヴェルがブライヒレーダー辺境伯様からピシャリと言われて、顔を引き攣らせた。
馬車馬扱いは、私も嫌ね……。

「バウマイスター男爵の事は置いておいて、今はガーランド男爵です。彼は自分が懸命に統治を行う過程で、多くの領民達が自分に何の疑問も抱かずに従うのを恐れたのです」

確かに身分は違うけど、領民達とて同じ人間のはず。
なぜ、自分の命令に何の疑いもなく従うのか？
考えれば考えるほど恐ろしくなった。
けど、それを領民達に話して不安がらせるわけにはいかない。

ガーランド男爵領のトップである彼が自分の立ち位置を再確認し、おかしな方に向かわないためにたまに女性に罵られる。
これが、彼なりのストレス発散方法なのだそうだ。

「もっと他に何かないのですか？」

気持ちはわかるけど、方法に問題があるわよね。
せっかくいい男に生まれているのに……。

「と、思わなくもないのですが、これが一番効果があるそうで」

「なぜ女性なのでしょうか？」

「簡単に言うと自分が男性だからでしょう。私も男に怒鳴られても腹が立つだけですから。女性でもどちらかといえば若くて美しい方がねぇ？」

『ねぇ？』と言われても、正直困ってしまう。

人を罵るのが仕事なんて、生まれて初めての経験だからだ。

「私はヴェルの婚約者ですし、これはヴェルが許可を出さない事には」

私は未婚の女性なので、そのガーランド男爵様と二人きりにはなれない。

例え、ただ罵るためだけでもだ。

「だそうですが、どうです？　バウマイスター男爵」

「世の中には色々な人がいるからなぁ。もしかすると、俺もイーナから罵られてストレス発散をするようになるかもしれないし、試しにやってみたら？」

「えっ？　ヴェルもそういう趣味があるの？」

「ないけど、言ってみただけ」

今まで静かに話を聞いていたヴェルは、呆気ないほど簡単にブライヒレーダー辺境伯様からの要請を受け入れ、揚句に私が罵る言葉

の草案を考え始めた。

「このスカした、好青年ぶっているけど罵られるのが大好きな変態男爵！　お前のような変態性癖を持つ貴族は……。エル、何か思いついたか？」

「いや、俺が考えると不敬になるからさ」

ヴェルからアイデアを尋ねられたエルは、心の底から嫌そうな顔をしている。

もし自分が考えたのがバレて、ガーランド男爵様に恨まれるのが嫌なのだと思う。

「俺の発案という事にするから、何か考えてくれよ」

「王都ってのは、変わった貴族様が多いよなぁ」

結局私は、ヴェル達が記載した草案に基づいて、ガーランド男爵様を罵る事になるのであった。

「こんにちは、イーナさん」

翌日、ブライヒレーダー辺境伯様の呼び出してガーランド男爵様が屋敷に顔を出したのだけど、会うなり『罵ってくれる事になって本当に嬉しいです。ありがとう』では言葉の返しようもない。

「バウマイスター男爵殿、ありがとうございます」

「将来の事を考えると、他人事とも思えませんし」

「そう言っていただけるなら」

こういう時のヴェルは、物凄く無難な対応をする。

もしかすると、こういう事に慣れているのであろうか？

「一つ聞きたいのですが、なぜ私なのでしょうか？」

これが一番の疑問よね。

だって、王都には沢山の女性がいて、私よりも綺麗な人なんて一杯いるのだし。

「なぜって、私は町中であなたを見かけた時にビビっときましたよ。ああ、この人に冷たい視線を送られながら罵られたいと」

「はあ……」

ええ、どうせ私は見た目が少し怖いですよ。

最近、女性にしては背も伸びてきたし、百七十センチの女性って男性に敬遠されやすいのよね。

ヴェルはまったく気にしていないようだけど。

「例えばですよ……」

今日は、エリーゼとルイーゼも付き合ってくれている。

こんな下らない用件に申し訳がないけど、これはガーランド男爵様の秘密に該当する事柄、こういう秘密を暴露するという事はヴェルと仲良くしたいと心から願っているので、エリーゼ達も顔を出しているみたい。

「聖女殿も怒るとなかなかだと思うのですが、普段は温和な方なので罵られた時のゾクゾク感が足りません。ルイーゼさんに至っては、可愛い妹に怒られているようで、それではほのぼの感が出てしまうではありませんか」

ガーランド男爵様は、自分が罵られるにおいて最高のシチュエーションを説明し始める。

その表情は真剣で彼のイケメンぶりを強調していたが、話している内容が内容なので残念感が著しい。

その情熱を、もっと他の事に使えばいいのに……。

でも、いい領主様なのよね……。

「では、お願いしますね」

早速、罵りタイムが始めるようね。

仕切っているのはヴェルだから、私は言われた通りにするだけだけど。

「イーナ、ちゃんと覚えた？」

「ええ……」

昨晩、ヴェルが懸命に考えた罵りの言葉を私は完璧に暗記した。

カンペを見ながらだと興醒めするからだそうだ。

昨日、ガーランド男爵様はそんな事を言っていなかったけど、ヴェルがそう言ったのよ。

先ほどそれを知ったガーランド男爵様は、ヴェルに『バウマイスター男爵殿はよくわかっていらっしゃる』と褒めていた。

「では……」

「えっ！　どうして土下座を？」

「私は罵られるのですよ、偉そうにふんぞり返っていてはおかしいではないですか」

真面目な表情で力説するガーランド男爵様、この人は物凄くイケメンだけど、もう何があってもこの人にはときめかないと思う。

「始めます」

私は、土下座をしたガーランド男爵様に向けて、昨晩覚えた罵り言葉をぶつける。

「この！　いつもは領民に慕われる男爵様の風を装っている癖に、陰でコソコソと罵られたいなんて下種でカスな願望を口にする〇ニャチ〇犬野郎！　お前のようなカス男は、みじめに土下座しながら、私のような小娘に罵られて喜んでいるのがお似合いなんだよ！」

少し短い気もするけど、ヴェルに言わせると長ければいいというものでもないらしい。

あと、罵り言葉だけではなくて冷たい視線や立ち方なども演技指導を受けている。

他にも、罵り言葉にも禁句があって、それはブライヒレーダー辺境伯様が監修をしたそうだ。

激しくどうでもいい事実だけど、本当に監修したのかしら？

「どうですか？　ガーランド男爵様」

ふと気になって彼に視線を送ると、彼は顔を下に向けながら小刻みに震えていた。

「もしかして、駄目でしたか？」

ひょっとすると、言ってはいけないワードを口にしてしまったとか？

私が心配していると、立ち上がって私の両手を握った。

「久々に、体の芯からゾクゾクしました。イーナさん、ありがとうございます！」

ガーランド男爵から物凄く嬉しそうにお礼を言われているけど、なぜか私は喜べなかった。

「いやあ、いい仕事してますね。イーナさん」

仕事？

これは仕事なの？

ああ、仕事よね。

だって、ヴェルとブライヒレーダー辺境伯様に頼まれたのだし。

「本当にありがとうございました」

私の罵られてストレスが解消したのか、ガーランド男爵様はいつもの貴公子然とした姿に戻って屋敷を颯爽と後にしていく。

私にお礼として、幾ばくかのお金と、人気シリーズの著者サイン入り本セットを渡して。

「イーナちゃん、この作家さんのファンだよね」

「さすがは男爵様……」

罵られたいなんて変な事を言っていても、力があるのよね。

コネで人気作家にサインしてもらえるのだから。

こうして私の奇妙なお仕事は終わったのだけど、後日私はまた同じトラブルに巻き込まれる事となる。

「実は、ガーランド男爵殿に聞きまして」

「心の芯からゾクっとする罵りがここで受けられると」

「私の事を『食い意地の張った豚野郎！』と罵ってください」

「私は『ウラ生りのモヤシ野郎で』」

「いやぁーーー！」

数日後、屋敷を訪れた数名の貴族達から、ガーランド男爵様と同じように罵って欲しいと頼まれてしまう。

何なのよ、この人達は！

本当に貴族なの？

類は友を呼ぶというやつなのかしら？

「ヴェルぅーーー！　助けて！」

「臨時で引き受けた仕事ですから、これを通常の業務にする予定はないのですけど……」

ヴェルも困惑していたけど、すぐに私に代わる新たな人材をあの人が見つけてくれて、私は人を罵る仕事をしないで済むようになった。

「ああ、そういう嗜好のやんごとなき方々を、極秘裏に罵るうら若き女性ですね。ツテはあります」

「あるんだ……」

「拙者、用心棒役も含む、水商売系のアルバイトも経験しておりまして……」

ローデリヒさんがなぜヴェルに雇われたのか、よくわかる人脈の広さであった。

とある日の、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスター秘密の日記。

昨日今日と、イーナが大変だった。

ああいうタイプの女性に罵られたいと願う男性は、日本のみならずこの世界にも一定数存在するようだ。

貴族が多いような気もするが、接点が無いだけで平民にもいるのかもしれない。

そういえば、前世に勤めていた商社でも聞いたな。

凄腕で自信満々な、将来の社長と目されている剛腕部長が、女王様に罵られるのが大好きだというのを。

ああいう場所の客には、政治家とか、医者とか、弁護士とか、社長とかの比率が高いと聞くし。

きっと普段は偉そうにしている分、逆に罵られる事でバランスを取っているのであろう。

俺も、ああならないように気をつけよう。

イーナがガーランド男爵を罵っている姿を見て、少しゾクっとしたのは秘密である。

第百十九話　爆炎のキンブリー。

「ところで、ふと思ったのですが……」

「何をだ？　伯爵様」

リサが導師を酒量で圧倒した翌日、俺は朝食の席で、ブランタークさんに疑問に思っている事を質問した。

「ううっ……二日酔いである」

その横で導師が二日酔いで苦しんでいるが、気にしない事にする。

「伯父様、これを教訓にお酒の量を抑えましょうね」

「いや、勝負でなければあんなに飲まないのである……」

酒量のみならず、その後の体調でも導師は敗北感を味わされていた。

二日酔いで朝食がほとんど食べられず、エリーゼから酒の飲みすぎを注意されている。

どうやら、罰も含めて『解毒』の魔法はかけてもらえないらしい。

こう見えて、エリーゼは生活習慣の乱れや不摂生に厳しい人なのだ。

言い方は優しいが、強い意志をもって相手に反省を促す。

だから、あの導師でも何も言えずに水をチビチビと飲んでいた。

もう一方の当事者であるリサは、普段と変わらない様子で朝食を静かに食べている。
前日の夜に、あれだけのお酒を飲んだ人には見えなかった。

「導師の事か？」

「いえ、じゃなくてですね……」

俺が以前にアホ公爵と決闘をした時、ブランタークさんが高名な魔法使いの話をしてくれた。

一人は、今静かに朝食を食べているリサだ。
やっとこの環境に慣れたようで、間に女性が入ればブランタークさんと目を合わせられるようになった。
俺とは、二人だけで土木工事に出かけられるようになっている。

男性との会話はまだ無理だが、確実に進歩しているといってもいいだろう。
そして、もう一人の魔法使い『爆炎のキンブリー』という人がどんな人物なのか何となく気になったのだ。

俺は、まだ彼と顔を会わせた事がなかった。

「ああ、あいつか」

「知っているんですね」

「悪い奴じゃないよ。むしろいい奴だな、普通に接する分には」

どこかブランタークさんの言い方に引っかかるものを感じるが、

変わり者が多い凄腕魔法使いの中でも、圧倒的に常識人の部類に入るらしい。

「高名な魔法使いの中では、俺と双璧で常識人だな」

「「「「「「「「「「「「えっ？」」」」」」」」」」」」

ブランタークさんからの予想外の発言に、俺達の視線が一斉にブランタークさんへと向かった。

でも、まさかエリーゼまでそれを疑っているとは思わなかった。

意外な事実を聞いたという顔をしている。

「常識人ですか？　ブランタークさんが？」

何だろう？

間違ってはいないと思うのだが、それは隣に非常識の塊である導師がいるので比較論でそう思われているだけかもしれないし……とにかく微妙に引っかかってしまうのだ。

「俺は至極常識的だろうが！　俺よりも、伯爵様の方がよっぽど変わってるぞ！」

「ううっ……」

逆にブランタークさんから変人だと指摘され、俺は言葉に詰まった。

人に言えない事情などを加味すると、確かに少し変人扱いされても不思議ではないような……。

でも、俺だってこの柵の多い世界で頑張っているのだから。

「伯爵様、この話はよそう」

「はい……」

世間から見れば、魔法などという異能を使いこなす時点で変人扱いなのだ。

無理に、同類同士で叩き合う必要などない。

「リサがブリザードで、キンブリーが爆炎だろう？　魔法使いの世界では、二人一組でライバル同士みたいな扱い？」

二人はペアを組んでいるわけではないが、確かにそんなイメージを感じてしまう。

「氷と炎ですからね」

「キンブリーは男だからな。まあ、そういう噂が立った事があるな」

ライバル同士だが、男女の仲もあったのではないかという噂が立った事もあったようだ。

だが、それはただの無責任な噂だと俺達ならわかる。

リサは、あのメイクと衣装の時には男性など寄って来ないし、今の綺麗なお姉さんモードだと男性と話ができないからだ。

「無責任な噂だそうですわ」

カタリーナの通訳で、リサはその噂を否定した。

フルフルと首を横に振っている様子が可愛らしい。

「年齢が近かったからな。もっとも、キンブリーは既婚者だけど。

愛妻家だって有名だし」

「爆炎で愛妻家なんですか？」

俺はなぜか、導師のような暑苦しい人物を想像してしまった。

導師もああ見えて、愛妻家の部類に入るからだ。

「いや、至って普通の奴だからな。基本的には」

「基本的には？」

「一度、実物を見た方がいいかもな」

とはいえ、俺も爆炎のキンブリーも忙しい身だ。

そう会う機会もないだろうと思っていたら、ちょうどいいタイミングで顔を会わせる事になった。

「バウマイスター伯爵はん、助けてくれませんか？」

俺がお世話になっているレンブラント男爵から冒険者としての依頼を受けたのだが、それに彼も参加する事になったのだ。

「嫁の実家の依頼なんですわ」

レンブラント男爵の正妻の実家、ロットナー男爵家からの依頼だそうだ。

「ロットナー男爵領内にある、小規模な魔物の領域の解放なんやけど……」

ロットナー男爵領は王国北部にあり、この度結ばれた帝国との講和条約と交易の促進を利用して領地を発展させたいらしい。
だが、それには一つの条件があった。

「領地のちょうど真ん中に、ちっこい魔物の領域があるんですわ」

小規模だが、これのせいでロットナー男爵領の可住領域はドーナツ状になってしまっているそうだ。

「この魔物の領域は小規模やし、冒険者にもいまいち人気がないんであまり収益にはならんのですわ。それなら、ここを解放して帝国国境と王都方面を結ぶ街道を作った方がええという話になりまして」

領内の交通の便もよくなり、可住領域の拡大と、大規模な農地開発も可能となる。
上手く開発できれば、下手な子爵家よりも実入りがよくなるポテンシャルを秘めているというわけだ。
確かに領地の中心部が魔物の領域だと、開発効率やアクセスなどで不便かもしれない。

「もしかすると、中心部にある魔物の領域のせいで男爵領にされたとか？」

「バウマイスター伯爵はん、よくわかりまんな」

なので、そこを開放してから開発すれば、子爵領並の領地規模になれるのだとレンブラント男爵は言う。

「魔物の領域なら北部にもあって、そっちは冒険者も多いんですわ。だからそっちだけ残ればいいわけでして。依頼料は相場をワイが確

実に支払うさかい、お願いしますわ」

レンブラント男爵が報酬を約束するのであれば、取りっぱぐれはないはずだ。

彼は金持ちなので、妻の実家に魔の森解放と開発に必要な資金を貸すのであろう。

「解放してくれへんと、うちも困るさかい」

多分、開発が上手くいけばロットナー男爵家は家臣を増やし、そこにレンブラント男爵の息子達が入る予定なのであろう。

なるほど、子供達のためにも失敗はできないというわけだ。

「レンブラント男爵にはお世話になっているのですから、勿論引き受けますよ」

これからも、バウマイスター伯爵領の開発は続く。

それに重要な役割を果たす、レンブラント男爵のお願いを聞くのは当然と言えた。

「助かりますわ。バウマイスター伯爵はん、おおきに」

そんな事情があり、俺達はレンブラント男爵の『瞬間移動』でロットナー男爵家領へと飛んだ。

メンバーは、俺、エル、ヴィルマ、カチヤ、リサである。

『実戦の機会だったのに残念じゃの』

『修練を怠らないように』

『先輩であるヴェンデリンの忠告に従うかの。お土産を頼むぞ』

テレーゼは、まだ未熟だと言うブランタークさんの意見と、彼女が魔法使いになった件はなるべく伏せておきたいという大人の事情でお留守番となっていた。

大分魔法が使えるようになったので、早く実戦で使ってみたいのかもしれない。

「エリーゼ達がいなくても、十分にバランスは取れているのか？」

「エル、普通に考えたらこんなに贅沢なパーティはねえって」

カチヤが、エルの疑問に答えるように反論する。

確かに、純粋な魔法使いが二名もいるのだから贅沢なパーティであろう。

「これに加えて、爆炎も混じるんだろう？　よほど油断しなきゃ大丈夫だと思うぜ」

「でも、小さくても魔物の領域。魔物の数はかなり多いはず」

「そうか、手つかずだもんな。あいつら、すぐ増えやがるし」

ヴィルマの言い分に、カチヤは納得した表情を浮かべた。

人気がなくて冒険者があまり利用しないと聞いているので、思った以上に魔物でひしめいている可能性があった。

今まで解放されていない点からしても、意外に骨の折れる依頼かもしれない。

だから俺達に依頼が入ったのかもしれないけど。

「あれ？　意外と人が多くないか？」

レンブラント男爵の案内でロットナー男爵領の中心部にある魔物の領域へと向かうが、そこでは多くの冒険者達が集まって狩りをしていた。

それにエルが気がついて、俺に報告してくる。

「まさか、こんなに冒険者を雇ったのか？」

「カチヤさん、ちゃいまんがな。ロットナー男爵家への上納金が、この魔物の領域限定でゼロなんや」

普段は、ロットナー男爵家への税金と、冒険者キルドへの上納金で三割を徴収されるのに、今はこの魔物の領域で獲れる獲物と採集物に限り、ギルドへの上納金だけ納めればいいそうだ。

同じ成果でも実入りが二割も増えるとあれば、沢山の冒険者が集まって当然であった。

利益で釣って、魔物を狩らせて数を減らす作戦のようだ。

「さすがに、冒険者ギルドへの上納金はゼロにならない」

「そりゃそうでっしゃろ、ヴィルマはん。ロットナー男爵領の開発が進んでも、冒険者ギルドが直接儲かるわけやありまへんし」

冒険者ギルドとしても、ロットナー男爵家だけを優遇するわけにはいかないというわけだ。

「俺達も、討伐に入るのですか？」

「いやいや、税金サービスキャンペーンはもう一か月もやってまして、おかげで魔物も大分減ったんですわ」

残り少ない魔物は肩慣らし程度で討伐しても構わないけど、本命は爆炎と組んでのボスの討伐が俺達の仕事だと、レンブラント男爵がエルに説明した。

「ここのボスって竜ですか？」

「こんな小さな魔物の領域やさかい、竜なんておりまへん。『バーサークバード』がこの領域のボスなんですわ」

バーサークバードとは、簡単に言うと大きな鳥型の魔物である。
魔物の領域にいるボスの中では、最弱に等しい存在だと思う。
ただし、討伐は時に厄介だと冒険者予備校の講義で習った。

なぜなら、普通ボスは一匹か多くて二匹なのだが、バーサークバードに限って短い期間で大繁殖するからだ。
運が悪いと、バーサークバードの集団に襲われてなぶり殺しに遭う可能性が高い。

「成鳥が最大全長五メートルの鳥、数十羽か……」

しかも、このバーサークバードは意外と頭がいいそうだ。
集まっている所を一網打尽という単純な手は通用しない。
全滅を防ぐために普段は集中しておらず、必要に応じて集まり多数で敵を嬲り殺しにする知性を持っている。
俺達は、その性質を本で読んで知っているだけだけど。

「ただ、属性が無属性やから、攻撃魔法は何でも効くんですわ」

「えっ？　ああ、そうなんだ。姉御が言うには、確かにどんな魔法でも効くけど、一撃で殺せる程度の強力な魔法でないと駄目だってさ」

今日は、カチヤがリサの通訳をするようだ。

彼女はベテラン冒険者らしく、バーサークバードについて説明してくれる。

過去に討伐の経験があるのかもしれない。

「あと、手負いにしてからの放置は駄目なんだってさ」

リサの説明……喋っているのはカチヤだけど……によると、手負いにして五秒も放置すると、その名の通りにバーサークしてしまうらしい。

そうなれば、己の死も恐れず狂ったように全力で周囲の生き物に攻撃を仕掛ける。

実力のない魔法使いが中途半端に攻撃してバーサーク化させ、そのまま殺されてしまうケースがたまにあるそうだ。

「そんな理由でして、爆炎はんも依頼を確実にこなすためには実力がある魔法使いが複数名必要だと言うんですわ。生憎と、ワイは攻撃魔法は苦手でして……」

レンブラント男爵は『移築』と『瞬間移動』に特化した特殊な魔法使いなので、魔物の討伐は苦手であった。

攻撃魔法がほとんど使えないからだ。

「理に叶った意見ではあるか。いいでしょう、共同作戦」

「ほな、爆炎はんを紹介しますわ」

魔物の領域を解放しようとしているので、ロットナー男爵家は臨時に諸侯軍を徴集して多数集まった冒険者の管理をしていた。

本陣に行くと、三十前後に見える若い男性魔法使いがいる。

顔は普通だと思うが、いかにもマイホームパパという感じで、とても爆炎の二つ名を持つ凄腕魔法使いには見えない。

「爆炎はん、バウマイスター伯爵はんを連れてきたで」

「レンブラント男爵殿、希望を叶えていただき感謝いたします」

レンブラント男爵に丁寧にお礼を言う爆炎のキンブリー。

しかし、その様子からは爆炎というイメージは感じられなかった。

「バウマイスター伯爵殿ですね、お噂はかねがね」

キンブリーは、俺にも丁寧に挨拶する。

貴族に対して様ではなく殿つけで呼ぶのは、高位の魔法使いが貴族に匹敵する社会的地位を有しているからだ。

別段、失礼に当たるわけでもない。

「お仲間の方々も、なかなかにお強いようで……」

エル、ヴィルマ、カチヤとお互いに自己紹介をしながら、キンブリーはその実力を読んで感心したような表情を浮かべる。

まあ、こういう実力の計り合いは冒険者ではよくある事だ。

「それで、こちらのお嬢さんなのですが。以前にどこかでお会いし

たような……」

キンブリーは、自分とよく比較されるリサがあまりにも変わりすぎて、誰だかわからないようだ。

「でも、この魔力は……」

「キンブリーさん、この人はブリザードのリサです」

「へえ、魔力の質に覚えがあると思ったら……って！　えーーーっ！」

キンブリーは、派手な装飾品とメイクを止め、普通の女魔法使いの格好をしたリサに驚きの声をあげるのであった。

「さすがに驚きましたね……」

キンブリーさんは、再びまじまじとリサを見ながら驚いている。

リサは、今まで比較的面識のあったキンブリーさんとは目を合わせられるようだ。

お話は……男性はまだ俺でも無理だけど。

「リサとキンブリーさんは、過去に付き合っていた？」

「ヴィルマさん、それは噂の類ですよ」

ヴィルマは、みんなが聞きたいとは思っているが、なかなか聞け

ない質問を、ストレートにキンブリーさんにぶつけた。
彼女も、実はとてもいい根性をしていると思う。

「年齢もほぼ同じで、魔力量もほぼ同じ、得意魔法は火と氷で、男と女。噂する素養はありますよね？」

確かに、付き合っていると言われたら信じてしまうかもしれない。

「私には、妻がいますしね」

男で三十を超えて独身というのも難しい世界だ。
ましてや、キンブリーさんは高名な魔法使いとして稼いでいる。
お見合いを断るのも難しいのであろう。

「へえ、どんな奥さんなんですか？」

「よくぞ聞いてくれました！」

「へっ？」

ちょっとした世間話でエルが話題を振ると、ギンブリーさんは勢いよく食いついてきた。

「メリーは、私の幼馴染でして。二歳年下なんですけどね」

なぜか突然始まってしまう、キンブリーさんの愛妻との馴れ初めや、自慢話。
そういえば愛妻家だと聞いていたので、どうやらそういう人だったようだ。

商社員時代にも飲み会などで、長々と奥さんと子供の自慢話を始める人がいたのを思い出す。
まさか止めてくれとも言えず、周囲に微妙な空気が広がるというわけだ。
社交辞令的にも、露骨に興味がないという表情を浮かべるわけにもいかないし……。

俺がレンブラント男爵の方を見ると、彼は『失敗した！』という表情を浮かべていた。
先に俺達に、その話題を振らないように注意すべきであったと後悔しているのであろう。

「（バウマイスター伯爵はん、爆炎はんは奥さんと娘達の自慢話を始めると長くなるんや……）」

それから二時間ほど、俺達はキンブリーさんと娘二人の自慢話を延々と聞き続ける羽目になるのであった。

「様子見と、バーサークバードと対峙する前に、できる限り魔物を削りましょうか？」

キンブリーさんの奥さんと娘自慢を聞き終わってから、俺達とキンブリーさんはようやく魔物の領域に入った。
レンブラント男爵は留守番だ。
なぜなら、彼はほとんど攻撃魔法が使えなくて戦力にならないからだ。

「大分、冒険者達が討伐したみたいだな」

先発して斥候役を務めるエルが、ほとんど魔物がいない魔物の領域を歩いていく。

ヴィルマとカチヤも、気配を探りながらエルの後ろについた。

「ロットナー男爵家への納税がないので、この近辺の冒険者の大半が集まっていますからね……少しは残りがいますけど……」

俺の『探知』でも、前方１００メートルほどに中型の魔物の気配をキャッチした。

「こいつは、私が倒しましょう」

「爆炎の二つ名どおりにですか？」

「いえ、それでは素材が焦げてしまいますからね」

キンブリーさんは前に出ると、指先に小さな炎を魔法で作った。

それを彼が『ふっ』っと軽く吹くと、指から離れた小さな炎はまだ遥か前方にいる魔物へと飛んでいく。

よく見ると、魔物は小さめの熊の形態をしているようだ。

その口の中に小さな炎が飛び込み、直後に魔物は口から煙を吐いてその場にのたうち回る。

数十秒後、魔物は痙攣を起こしてから動かなくなった。

「えっ？　どういう魔法だ？」

カチヤは、キンブリーさんの魔法に驚く。

俺もそうで、彼は極少量の魔力で作った炎だけで、魔物をあっという間に倒してしまったのだから。

「姉御はわかるのか？　なるほど。あの炎で魔物の肺を焼いたらしいぜ」

キンブリーさんは、火魔法の使い手である。

火魔法は、魔物への損傷が大きいので冒険者には不利な系統と言われている。

逆に、戦争では一番頼りにされる系統であったが。

「肺が素材になる魔物は少ないので、焼いて呼吸できなくするのです」

魔物の肺だけを、効率よく火で焼いてしまうわけだ。

焼けて呼吸ができなくなり、肺の中の酸素も魔法の燃焼でなくなってしまう。

魔物は窒息死を避けられれない。

そうやって倒せば素材の大半は無傷であり、キンブリーさんほどの魔力があれば多くの魔物を始末できる。

つまり、稼げるというわけだ。

「爆炎じゃない」

「ヴィルマさん、私は爆炎の魔法が一番得意ですが、使う場所くらい弁えますよ」

キンブリーさんの二つ名『爆炎』がつけられた理由は、とある紛争に呼び出され、そこで両軍が見守るなか、一つの岩山を爆発魔法

で吹き飛ばしたからだそうだ。
そのあまりの威力に、自然と両軍の兵士がキンブリーさんを『爆炎だ！』と言い始めた。
それ以降、彼の二つ名は爆炎のキンブリーとなったわけだ。

「バーサークバードの相手は明日にしますか」

キンブリーさんの意見により、その日はなるべく多くの魔物を狩る作業に没頭した。
夕方になったので本陣に戻ると、レンブラント男爵が出迎えてくれる。

「バウマイスター伯爵はん、みなさん、ご無事ですか？」

「はい、何かありましたか？」

「いえね、バーサークバードに中途半端に手を出した冒険者がおったようで……」

この一日だけで、冒険者の死傷者が二十名を超えるというアクシデントに見舞われたそうだ。

「若い冒険者パーティが、一匹だけバーサークバードに手傷を負わせたようですわ」

バーサークバードを中途半端に傷つけるのは、最悪の行為である。
傷ついた個体がバーサーク化して傷つけた者達を死ぬまで攻撃するし、彼らは数が多い。
刺激された無事な個体も攻撃に加わって、無謀な行動をしたパーティの他にも多くの死傷者が出てしまったらしい。

「そんなわけでして、バウマイスター伯爵はんとキンブリーはんにお願いするしかありませんわ」

「レンブラント男爵様、バーサークバードの推定数はわかりますか？」

「多分、五十匹は超えていると言われてまんな」

エルの問いに、レンブラント男爵が答える。

「多いなぁ……」

全部成体ではないが、幼体でもバーサーク化すると厄介な存在になる。

なぜなら、バーサークバードは他の野生動物や魔物と違って自分の身を心配しなくなるからだ。

体がいくら壊れてもリミッターが外れたように攻撃を繰り返すので、その脅威度は高い。

「この魔物の領域は森が大半。いくら魔物でも、そこまで体が大きい鳥が狂ったように攻撃を仕掛けるはずがない」

「木にぶつかるからな」

「ヴィルマはん、エルヴィンはん。バーサークバードは最弱やけど、領域のボスなんや。飛びながらでも、巨木くらいなぎ倒すで」

これも、バーサークバードの討伐が厄介な理由の一つになっている。

自分の方に巨木が倒れて嬉しい冒険者はいないから当然だ。

「明日の作戦に備えて寝るか……」

「そうでんな、早めに休んで明日に備えましょ」

その日はロットナー男爵家が用意した野外テントに泊まり、翌日、いよいよキンブリーさんと共にバーサークバード討伐作戦が始まった。

「……」

「おはようございます、キンブリーさん。あの、何か？」

俺は、一人神妙な面持ちで魔物の領域を見ているキンブリーさんに声をかける。

「バウマイスター伯爵殿ですか、おはようございます。いえね、笑っていただいて構わないのですが……」

これから討伐作戦が始まるが、何か嫌な予感がしてそれが脳裏を離れないのだとキンブリーさんが言う。

「勘ですか……それは重要ですね」

超一流の冒険者が超一流である理由の一つに、運や勘がいいというものもあるからだ。

これを理論的に説明すると難しいのだが、俺のデビュー戦もそうだ。

当事者からすれば運が悪かったような気もするが、周囲からすれ

ば俺達は運がいい扱いになる。

ちょっと嫌な予感がしたので何となく討伐を止めたら、他の参加した冒険者達が思わぬ強敵に襲われて全滅した。

その何となくで不幸を避けられた冒険者は、超一流になれるケースが多いと、前にブランタークさんが話してくれた。

勘だの運だのも、時には冒険者に必要なのだと。

『これぱっかりは、俺も他の人に教えようがないんだよな。予備校なら尚更だ。あそこは教育機関だからな。それによ、そんな気がして休んだら、馬車に轢かれて死んだ奴もいるから絶対でもない』

勘だの運だのと、不確定な事を教えるわけにはいかないのであろう。

短い予備校時代でも、そんなものは教わった経験がなかった。

「慎重に行動しましょう。何か不測の事態があったらすぐに撤退可能なように」

「そうですね」

この日は俺達とキンブリーさんが、二方向からバーサークバードがいると思われる魔物の領域の中心部へと先発して向かう。

「魔物、少ない」

「今まで散々に討伐したからな」

作戦予定地に到着するまでに少数の魔物に襲われたが、これらは

ヴィルマとカチヤが余裕で片づけてしまった。

「なあ、ヴェル。キンブリーさんは一人でよかったのか？」

「本人がそう言うからなぁ……」

他に参加している冒険者から護衛を貸すという提案をレンブラント男爵がしたのだが、彼は一人の方がいいと断ってしまったのだ。

「あれだけの実力者なら大丈夫か？」

キンブリーさんの正確無比で効率的な魔法を見ているので俺がそう思っていると、誰かにローブを引っ張られた。

リサが何か俺に言いたいようだ。

「姉御が言うには、キンブリーさんが本気を出す時は、むしろ周囲に人がいると邪魔なんだと」

「爆炎の本領発揮か」

周囲にも被害が出そうな魔法を使うイメージがあるので、一人の方がやりやすいのであろう。

昨日使った、魔物の肺を焼く魔法はバーサークバードには効かないであろうし。

「ヴェル、いたぞ」

魔物の領域の中心部近くまで移動すると、エルが一匹のバーサークバードを見つけた。

魔物なので大分大きかったが、茶色い羽を持つどこにでもいそう

な鳥である。

「地味な鳥だな」

「ヴェル、もっと他に何か言う事はないのかよ？」

「ヴェル様、地味な鳥の方が美味しい」

「ああ、それもあるか。焼き鳥だな」

「ヴェル様、私は塩で」

「俺はタレだな」

バーサークバードは、領域のボスなのに討伐して素材を取ってもあまり金にならない。

魔石と、肉や内臓が美味で高級品扱いであったが、危険な割には実入りが少ない。

羽も、今のところはほとんど使い道がないそうだ。

だから、討伐を引き受ける人が少ないのもわかるような気がする。

俺達は、焼き鳥の材料だと思う事にしている。

バーサークバードの内臓、皮、軟骨などは美味しいのであろうか？

是非に試してみないといけないであろう。

「この場合、あの一匹は倒してもいいのかな？」

またローブを引っ張られた。

リサがアドバイスをしてくれるようだ。

勿論まだ俺と話せないので、カチヤが通訳をしてだが。

「あの一匹は斥候役のようなもので、倒すと仲間が次々と押し寄せてくる。でも、倒さないと何も始まらないって。あと……」

「あと何だ？　カチヤ」

「姉御は、焼き鳥はタレの方がいいって」

「そっちかよ……」

それだけ、リサも俺達に馴染んだのだと思う事にする。

「倒すしかないよな」

どうせ無視して進もうとしても攻撃してきて、傷つければバーサク化する。

仲間も順次押し寄せるので、それなら一撃で倒した方がマシという事らしい。

要するに、どう倒しても面倒な魔物というわけだ。

「姉御が倒すって」

「お願いしようかな」

俺がお願いすると、リサは一瞬で『アイスランス』を作り、数十メートル先のバーサークバードの頭部を串刺しにして一撃で仕留めた。

魔法の生成速度といい、『アイスランス』のコントロールといい、貫通力といい、リサは超一流に値する魔法使いなのだと実感する。

「これで、奥から次々と仲間が出てくるってさ、旦那」

「そうか、ならば応戦準備だ」

エルとカチヤでは、高速で向かってくるバーサークバードを一撃で仕留めるのは難しい。

そこで俺とリサの護衛を担当、ヴィルマは大斧でバーサークバードの首を刎ねるか、頭をかち割って一撃で仕留める作戦だ。

「魔銃は使えないか」

「そこまでの威力はない」

野生動物や人間相手なら魔銃も十分に効果があるのだが、まだ魔物に使うには威力が足りなかった。

威力がある試作型もミズホにはあったが、あれはまだ取り回しや費用対効率、メンテナンスで重大な欠点がある。

第一、ミズホ公爵軍にもまだ正式に配備されていない物を冒険者が使えるわけもなかった。

「ヴェル様」

「来たな」

俺は『探知』で、高速で接近する五十を超えるバーサークバードらしき反応を確認する。

ローブが引っ張られたので、リサも探知しているようだ。

続けて、領域の中心部を挟んで反対側の地点から、何かが爆発したような音が連続して聞こえた。

「リサ、キンブリーさんだよな？」
「戦闘状態に入ったってさ」
この状況でも、カチヤは律儀にリサの通訳を務めていた。
「こっちに約五十で、キンブリーさんも戦闘状態。バーサークバードの推定数は間違っているな」
エルが舌打ちしながら言うが、この程度のミスはよくある事だ。
それに、俺だけでなくリサもいる。
何とかなるはずだ。
「『ウィンドカッター』でいく！」
俺は威力を上げた『ウィンドカッター』をブーメランのように飛ばしてバーサークバードの首を刎ねる戦法で、リサは頭上に複数の『アイスランス』を浮かせ、接近する順にバーサークバードの頭部に突き刺す戦法で対応した。
「あれ？　首を刎ねきれなかったか？」
さほど強くはないが、バーサークバードは高速で移動して数が多い。
領域のボスとしては弱い方だが、魔物なので大木すら倒しながら接近してくる。
俺の『ウィンドカッター』の狙いがズレて手負いにしてしまい、バーサーク化して倍以上の速度で突進してくる個体が何体か出てしまった。

首が半分もげてるのに血を噴き出しながら突進してくるので、俺はかなりの恐怖を感じてしまった。

バーサークバードの名は、伊達ではないようだ。

「まだまだ修行不足だなぁ……」

こんな失態、ブランタークさんが見ていたら大目玉だ。

今日はいなくてよかった。

リサの方は、一度も狙いを外さずにアイスランスをバーサークバードの頭に突き刺して一撃で倒していく。

その命中率と狙いのよさは、さすがと思わせるものがあった。

魔力の消費効率でも、今は逆立ちしてもリサには勝てないだろう。

俺が生まれる前から魔法の修行をしているのだから、当然ともいえる。

「何匹倒した？」

「ヴェル様、五十四匹」

この中で一番目がいいヴィルマが、バーサークバードの討伐数を教えてくれた。

ヴィルマ本人も、大斧で何匹かのバーサークバードの首を刎ねているはずだ。

「これで終わりか？　いや……」

俺は『探知』で、こちらに迫るバーサークバードの集団を捉えた。

今度は、約百匹の団体がわずかな時間差で二つだ。

「なあ、おかしくないか？　数が多すぎるだろう！」

「魔物だから、こんな事もあるとしか言えない」

俺は、キンブリーさんが朝に言っていた嫌な予感がするという発言を思い出した。

彼の予言どおりに、ロットナー男爵家とレンブラント男爵が教えてくれたバーサークバードの生息数が間違っていたというわけだ。

「俺達はまだいいが、キンブリーさんは大丈夫か？」

合計二百匹のバーサークバードへの対応に追われるなか、エルがキンブリーさんの心配をしていた。

彼は一人なので、もし俺達に襲いかかっているのと同数のバーサークバードを相手にすれば苦戦は間逃れないからだ。

「応援に行かないと駄目かな？」

「旦那、そんな余裕はないよ」

さすがに二百匹を超えるバーサークバードの相手は骨だ。

他の個体の事など考えずに俺達に向かってきて、その時にバーサークバード同士が接触、怪我をしてもバーサーク化してしまうからだ。

既に俺とリサも、『魔法障壁』の展開なしでは対応できなくなった。

「これ、並の魔法使いが一人や二人いてもどうにもならないな」

とにかく数の多さが厄介で、討伐しても危険に見合う報酬が出ない。

この魔物の領域が放置されていた理由がわかるような気がする。

などと考えていると、またローブの袖を引っ張られた。

「リサ、どうかしたのか？」

「えっ！　マジで？」

通訳をしているカチヤが、突然大声をあげた。

「カチヤ、リサが何だって？」

「危険だって」

「危険なのはわかっている」

まだ百匹を超えるバーサークバードの猛攻を受けているのだ。

戦況はまだ予断を許さない。

「そっちもそうだけど、キンブリーさんが危ない」

「しかし、まだ応援には行けないぞ」

できれば助けに行きたいが、こちらにも余裕がない。

それに、彼は自分一人で行くと言ってしまったのだ。

この発言は冒険者としては自己責任であり、もし彼に何かがあっ

ても俺達が責任を負うものではない。

「違うって！　キンブリーさんが危ないってのは、そういう意味じゃなくて！」

カチヤはそれ以上、リサの言葉を伝えられなかった。

なぜなら、俺もリサも、魔法を覚え始めたヴィルマとカチヤも、キンブリーさんがいると思われる地点で強大な魔力が消費されようとする気配を感じたからだ。

「リサ！」

「……」

俺とリサは『魔法障壁』を二重にして固く守りに入った。

その直後、鼓膜が破れるかと思うほどの爆発音と共に、目が焼けるかと思うほどの火炎と、とてつもない威力の爆風に晒される。

『魔法障壁』がある俺達は無事だが、その外で俺達を攻撃していたバーサークバードの集団は一瞬で黒こげになり、爆風でバラバラにされ、吹き飛ばされてしまった。

当然、森など残るはずがない。

爆発の時間は十数秒ほどしかなかったが、俺達にはわかった。

魔物の領域の中心部とかなりの周辺領域が、まるで大型爆弾でも落ちたかのように吹き飛ばされてしまったのを。

「これが、キンブリーさんの魔法？」

「爆炎のキンブリーがここぞという時に出す。最終魔法『ビックバンエクスプロージョン』だってさ、旦那」

「……」

教えてくれるのはいいのだが、俺はもう少しだけ早く教えてくれたならと思わずにいられなかった。

「いやーーー、すいません。バーサークバードの数が予想以上に多くて、『ああ、これで妻と娘達に会えなくなるかも』って思ったら、本能で発動してしまいました」

結局、バーサークバードの群れは、キンブリーさんの『ビックバンエクスプロージョン』によって、魔物の領域の八割ごと消失した。魔物の領域の外縁部にも森林火災が広がり、俺とリサで懸命に消火して何とか延焼を食い止めたのだ。

「ロットナー男爵はん、森を切り開く手間が大分省けたと思えば……」

「そうですね……」

ほぼ燃え尽きた魔物の領域を前に、レンブラント男爵と陰が薄いロットナー男爵は顔を引き攣らせていたが、キンブリーさんを責めるわけにはいかない。

バーサークバードのせいで討伐を受けてくれる高名な魔法使いが今まで存在していなかったし、レンブラント男爵とロットナー男爵側がバーサークバードの生息数を大幅に間違っていたからだ。

すぐに単純な集計ミスだと判明したが、意図的に数を少なく報告したと疑われても文句は言えないので、余計にキンブリーさんに何も言えなかった。

火災で八割が焼失した魔物の領域は、開発は容易くなったと思う。農業は、焼き畑農法もあるからな。

火災により木材に加工可能な大量の木が焼け、バーサークバードと他の魔物も素材は魔石以外全滅であった。

こちらの収支に関しては、トントンであろうか？

「せめて一匹だけでもバーサークバードを確保しておけばよかった……」

「焼き鳥……」

「夫婦して、なぜ焼き鳥ごときでそこまで悲しむ？」

エルよ、それは焼き鳥が今の俺達にとって最重要課題であったからだ。

おっと、他の鳥でいいじゃないかとか言うなよ。

俺とヴィルマは、バーサークバードの焼き鳥及び、他の鳥料理の味が気になっていたのだから。

「っ！　ヴェル様、卵」

「それもあったな……」

バーサークバードを討伐後に巣を探すと、必ず羽化前の卵がある

と聞いている。
卵料理と親子丼を作ろうと思ったのに、これもすべて駄目になってしまった。

「あの爆発では……」

倒したバーサークバードの回収を後回しにしたため、大焼き鳥パーティーはおじゃんとなった。
消し炭しか残っていないので、食べても苦いだけで美味しくないであろう。
まだ生きていると思う、新潟のおばあちゃんも焦げた物を食べるとガンになるって言っていたし。

「形ある物はいつか滅ぶと言いますし、仕事も終わったので奥さんと娘達にお土産を買って帰りますね。それじゃあ」

俺達は、実はキンブリーさんが物凄く『いい性格』をしているのに気がついてしまった。
これだけの騒ぎを起こして、反省一つしていないからだ。
仕事が終われば、キンブリーさんはマイホームパパに戻ってしまう。
俺達の挨拶をしてから、奥さんと子供達へのお土産を買うために立ち去ってしまった。

『まあ、魔法使いってのは変わり者が多いからな……』

俺の脳裏に、昔ブランタークさんが言っていた言葉が浮かぶ。
その真意をよく吟味して対策しなかったばかりに、俺とヴィルマは貴重な鳥料理を逃してしまったのだ。

「しかし、凄い人だったな……」

俺の楽しみを奪っておいて、何一つ反省どころか悪気すらないようだし。

「ある意味、リサと双璧を成すに相応しい」

「あのよ、ヴィルマ。以前の姉御は言葉遣いと格好はどうかと思うけど、仕事は精密で真面目なんだぜ」

カチヤがすかさずリサのフォローに入るが、それには俺も納得した。

バーサークバードへの対処に、火災が発生した時の対処も素早く正しかった。

リサはあの格好と言動でないと男性と話せないからそうしているが、仕事自体はキッチリとこなすから、スケジュールが詰まっているというわけだ。

多分、キンブリーさんが貴族になれないのは、過去に何度かやらかしているせいだからなのであろう。

そうでないと説明がつかなかった。

「リサ、もしかしてキンブリーさんが爆炎って呼ばれるようになった紛争って……」

「旦那の予想どおりだってさ」

紛争が長引いてしまい、早く奥さんと娘の顔が見たかったから裁定を促すために岩山を吹き飛ばしたというわけだ。

「キンブリーさんはともかく、俺もまだ学ぶ点が多いと思う。リサは練達の魔法使いだから、色々と教えてもらおうかな？」

俺がリサを褒めると、彼女は恥かしそうに顔を伏せてしまった。

その仕草はとても可愛いと思う。

「つまりあれか？　外見は凄いけど仕事は真面目なリサさんと、外見は温和で人がいいのに、仕事だとああなってしまうキンブリーさん？」

「キンブリーさんはいつもああなるわけじゃないってさ。愛妻家で愛娘家だから、少しでも危機感を感じると、もう家族に会えなくなるって、あの『ビックバンエクスプロージョン』が飛び出すみたい」

それは迷惑な話だな。

あの魔法も、開発では使えるのかな？

周囲への被害を考えると、使い方には注意が必要だと思うけど。

「それにしても、人は見かけによらないな」

キンブリーさんの意外な一面を知ったエルは、リサを見ながらまじまじと語る。

爆炎のキンブリーと、ブリザードのリサ。

二人がなぜ相対する存在として世間に知られているのか。

俺達は、身をもってそれを体験したのであった。

第百二十話　ヴェンデリン先生。

「うーーーん、耳を当てても赤ん坊の心臓の音とかが聞こえない……」

「あなた、もっとお腹が大きくならないと聞こえませんよ」

「そうなのか……」

今日もリサを連れてバウマイスター伯爵領内で土木工事をしてから屋敷に戻り、試しにエリーゼのお腹に耳を当ててみた。

ドラマだと赤ん坊がお腹を蹴る音が聞こえるとか聞くが、残念ながら何も聞こえない。

「性別も、もっとお腹が大きくなってからですね」

「それは生まれてからでいいよ。お楽しみというやつで」

ローデリヒ以下家臣達も、ホーエンハイム枢機卿以下エリーゼの実家も、陛下以下多くの大物貴族連中も、エリーゼに『男産め』的なプレッシャーをかけてくる。

直接口で言ってくるわけではないが、無言のプレッシャーとでもいうべきか。

エリーゼが女の子を産んで、イーナとルイーゼが男の子を産むと面倒な事になると思っているのであろう。

カタリーナの場合は、男の子ならヴァイゲル準男爵家を継ぐから問題ないというわけだ。

「性別がわかるんだな」

「聖魔法の一種ですけど、使える人に頼めば教えてもらえますよ」

赤ん坊の性別判定の魔法は、かなり特殊な部類に入る魔法で、聖治癒よりも使える人が少ないのだとエリーゼが言う。

「高度な聖魔法使いが、必ず使えるようになるというわけでもないのです。レンブラント男爵様の『移築』と同じですね。私も使えませんし」

エリーゼでも使えないという事は、かなり特殊な聖魔法なのであろう。

数少ない使い手は、赤ん坊の性別判定のお仕事で忙しいそうだ。

「特に、貴族と大商人向けの依頼で忙しいと聞きます」

この世界は、昔の日本と同じく家が重要視される。

当主に嫡男が生まれる事こそが重要で、それが生まれる前にわかるとなれば当然依頼が発生するというわけだ。

「へえ、そうなんだ」

「あなたは、気にならないのですか？」

「それほど気にならないな。生まれればわかる事だし、でも健康で生まれてきてほしいな」」

日本でも地方だとそんな感じだと前に母が言っていたが、俺から

すれば無事に生まれてくれれば万々歳なのだ。

「男女で半々の確率だから、二人生まれればどちらかは男だろうし」

実際には男ばかり生む人と女ばかり生む人なんてのがいるらしいけど、そんな事をいちいち考えていたのではキリがない。

それよりも、今はいかにして赤ん坊の心臓の音を聞くかだ。

「そこで、この『聴音』の魔法で！」

これは風系統の魔法で、聴診器のような役割をする魔法であった。

子供ができたと知ったので、急ぎ師匠からの本を読んで習得したのだ。

しかし、師匠はこの魔法を覚えてどうするつもりだったのであろう？

「この魔法があれば！」

『聴音』をかけてから、再びエリーゼのお腹に耳を当てた。

すると、定期的に心臓の鼓動が聞こえてくる。

「よし！」

「ヴェル、残念だけどそれはエリーゼの心臓の音よ」

「なっ！」

「まだそこまで赤ちゃんが大きくなっていないのよ」

確かに、イーナの言うとおりだ。

四人はまだ妊娠初期で、パッと見た感じでは妊婦にはまるで見えなかった。

「残念……」

念のために、イーナ、ルイーゼの順にお腹に耳を当てて『聴音』を使ってみたが、彼女達の心臓の音しか聞こえなかった。
いや、一人だけ『グーーー』とお腹の鳴る音が聞こえた。
ルイーゼである。

「妊娠したらお腹が空くなぁ……今、一日五食なのに」

「そんなに食べて大丈夫なのか？」

俺は改めてルイーゼを見るが、太ったようには見えない。
彼女が妊娠していると言っても、信じてくれない人の方が多そうな気がした。

「きっとボクの子供は、男の子なら逞しく、女の子ならナイスバディーになるね」

ルイーゼが夢見ているが、俺は彼女に似た小さくて可愛い娘が生まれるような気がしてならなかった。

「ヴェルなら、赤ん坊の性別を見分ける魔法を習得しようとするかと思ったけど」

「一応、習得は試みたんだけどね……」

特殊な魔法というのは本当のようで、『移築』と同じく俺には習

得できなかった。
もし覚えても、エリーゼ達には使わない予定であったが。

「どうして使わないの？」

「生まれてからのお楽しみだからだよ。まあ、結局使えないから使わないだけだけど。赤ん坊の性別判定を頼む予定はないし」

「そうなんだ」

イーナが、不思議そうな顔をしている。
俺も伯爵になったので、跡継ぎを期待していると思ったからであろう。

「何人か産めば、一人くらい男が混じるって。そのくらいの気持ちで気楽にいこう」

エリーゼ達が男産めプレッシャーでストレスが溜まらないように、俺はわざと軽く言った。

「ヴェンデリンさん」

「何だ？　カタリーナ」

「私もまだ赤ん坊の動く感じなどはいたしませんが、念のために確認してもよろしいですわよ」

「はあ……」

エリーゼ、イーナ、ルイーゼのお腹には耳を当ててみたが、まだ

カタリーナにはそれをしていない。
そこに不公平感を感じたのかもしれない。
こう見えて、カタリーナにはこういう可愛らしい部分もあるのだ。

「当然、耳を当ててみるさ。もしかしたら、聞こえるかもしれないし」

最後にカタリーナのお腹に耳を当ててみるが、やはり何も聞こえなかった。
『聴音』を使っても、彼女の心臓の音しか聞こえない。

「その魔法、使い方が難しいですわね……」

「私は覚えたいです」

カタリーナはともかく、治癒魔法の使い手にして基礎的な医学知識があるエリーゼには役に立つ魔法かもしれない。
魔法の習得なら動かなくても大丈夫なので、覚える時間を取っても構わないであろう。

「ヴェンデリンさん、聞こえましたか？」

「やっぱりまだ駄目だな」

「私達は、ほぼ同じ時期に妊娠していますからね」

赤ん坊の音は聞こえなかったが、俺は一つだけカタリーナの微妙な変化に気がついた。
そう、ほんのわずかな変化であったが、彼女のお腹に耳を当てた時にふと気がついてしまったのだ。

そして知ってしまった以上、俺はそれを口にせずにはいられなかった。

なぜかって？

誰しも、目の前にボタンがあってその横に『押すな！』という張り紙がしてあったら、押したくなってしまうのが心情ではないか。

全然関係ないけど……。

「カタリーナ、少し太った？」

「ヴェンデリンさぁーーーん！」

「えっ？　それを指摘してもらいたくて、お腹に耳を当てさせたのでは？」

「そんなわけがないでしょうが！」

俺から太ったと言われたカタリーナが怒髪天を衝くばかりに激怒してしまい、俺は彼女の機嫌を直すのに多大な苦労をする羽目になるのであった。

「旦那、女性に太ったかと聞くのは禁句だぜ、姉御もそう言っているし」

カチヤが俺に注意している横で、リサが『うんうん』と頷く。

「そうじゃの、これは生まれや身分に関係なく、全女性に共通した決まり事と言っても過言ではないの」

テレーゼも、俺の味方はしてくれなかった。

カタリーナの機嫌を直してから、俺達は土木工事に出かけた。

メンバーはリサ、テレーゼ、カチヤの合計四人、テレーゼはそろそろ実践をという理由で、カチヤはヴィルマの代わりに護衛役としてついてきている。

ヴィルマはエリーゼ達の世話で、エルは警備隊の野生動物狩りに参加していた。

未開地は野生動物が多くて狩りには最適なのだが、人が住むにはそこから彼らを駆逐しないと駄目だからだ。

警備隊の訓練にもなるので、定期的に駆除がおこなわれている。

「いやね、ちょっと気がついたからつい口に出てしまって」

「駄目だなぁ、旦那は。カタリーナは妊娠しているんだし、それは言わないでおかないと」

そうは見えないがカチヤも年上なので、俺は彼女から注意されてしまった。

実家の騒動の時には無茶な行動をしたが、普段は意外と常識的な人なのだ。

何気にローデリヒの奥さんと同じ名前だが、タイプは全然違う。

もし顔を合わせたら、『同じ名前だ！』とか言いながら挨拶する

のであろうか？
この世界、実は同じ名前の人が多いけど。
貴族だと、ミドルネームとかで被る人が多いし。

「それよりも、早く橋の基礎を埋めるのであるな」

「今日は、アーネストもいたんだっけな」

「家族水入らずのところを済まないのであるな」

「いや、周りにも工事関係者が沢山いるじゃないか……」

実は、アーネストも今日の工事に参加していた。
なぜかというと、今日は新しい橋の建設をおこなっているからだ。
建造物は『移築』を利用した荒業でも何とかなるが、橋は建設が非常に困難である。

『他の川に掛かっている橋を持ってきても役に立たんのですわ』

レンブラント男爵も、今までに橋の移築はした事がないと断言した。
川幅とかが違うので、移築しても役に立たないのだそうだ。
移築した途端に流されでもしたら笑えない。

そんな理由もあって、橋の建設には多額のコストと時間がかかる。
ある貴族の領地で、『〇〇家当主三代の悲願であった橋の完成！』というような話が普通にあった。

バウマイスター伯爵領でも、実はバウルブルクから、カタリーナ

と初めて出会った冒険者ギルド魔の森支部支部まで向かう途中にある橋しか完成していない。

バウマイスター伯爵領には大きな河が三本も流れているので、橋の建設は必要であった。

だが、時間だけ急いで適当な橋を作ってもすぐに流されてしまう。

そこで、先に発掘したトンネルで使われていた特殊コンクリートと、俺が生成に成功している極限鋼の出番になる。

これらを使用した橋脚を作り、多少の増水では流されない頑丈な橋を作るというわけだ。

橋脚などの基礎さえ終えてしまえば、上の部分は通常の工事でも十分に対応可能なはずだ。

「それで、いくつの橋を建設予定なのであるか？」

「ローデリヒの計画だと、三十以上だな」

「おおっ！　バウマイスター伯爵は働き者であるな！」

「それは褒めているのか？　アーネスト」

小さな川の橋も合わせると百を超える。

しかも、ローデリヒの計画次第ではその数が増える可能性があった。

「そのせいであろう、橋が実用的すぎて考古学的にはつまらない物になってしまったのであるな」

「お前はこのあと一万年も生きて、遺跡になった橋でも発掘するつもりか？」

「いやいや、我が輩、未来の後輩達が可哀想だなと思っただけであるな」

極限鋼の鉄筋と特殊コンクリート製の橋脚は、デザインはシンプルで橋をかける川の幅に合わせて大きさを変えているだけであった。作っているのが俺だけなので、凝ったデザインとか言われても困るのだ。

俺は、建築デザイナーではないし。

「その代わりに、魔力さえあれば量産は可能だ」

大量の橋脚を始めとする橋の部品を製造し、それを現地で組み立てるわけだ。

細かい装飾とかがほしければ、別途ローデリヒが依頼するであろう。

「だから、魔法使いが三人必要なのか」

「テレーゼ、頑張ってくれよ」

「些か訓練ばかりで飽きたからの。こういう実践は大歓迎じゃな」

作業分担はこうだ。

まずは、俺が橋脚を立てる川底を露出させる。

一部の川の流れを長時間上流から堰き止めるので、一番魔力量が多い俺の出番となった。

「次は妾か」

テレーゼが、露出した川底に橋脚の基礎部分を埋める穴を掘る。
最初は慣れない作業で時間がかかったが、次第に穴を掘るのにかかる時間が短くなっていく。

「……」

最後は、リサが『念力』で橋脚を動かし、川底に掘った穴に埋める。
埋め終わったら、橋脚の周りの川底を固める作業も忘れないで行う。
傾きがないように精密な作業が要求されるが、リサはそれを難なくこなした。

「以上、これを繰り返して橋の橋脚を設置、その上に橋を渡していくと」

上の橋も、すべて極限鋼と特殊コンクリートできている。
一度に多くの馬車が通れるよう幅が広いので、大重量に対応した作りにしたからだ。

「あとは細かい部分は任せる。さあてと、次の場所に向かうか」

「はい……橋が一日でほぼ完成したよ……」

建設現場にいた家臣は、あっという間に基礎が完成した橋を見て唖然としている。
確か新しく仕官した人物で、まだ魔法に慣れていないのであろう。

「新素材のおかげだな」

やはり、特殊コンクリートと極限鋼は役に立つ。

大きくて頑丈な橋が簡単に作れてしまう。

「すさまじいの、これほどの橋が簡単に作れてしまうとはの……」

前は不可能だったのだが、やはり極限鋼の製造方法を得られたのは大きい。

特殊コンクリートも、アーネストが製造方法を知っていて助かった。

希少金属の配合量を資料で持っていたのだ。

「どうせローデリヒが追加で橋の建設を頼んでくるだろうから、急ぎ建設を早めよう」

こうしてわずか一か月ほどで、大小合わせて百近い橋がバウマイスター伯爵領にかけられる事となる。

初期の三十から大幅に増えたのは、やはりローデリヒが追加発注をかけたからだ。

『橋、道、港などのインフラ整備が完璧ならば、その領地は発展するのです』

この世界の人が新領地の開発に失敗するのは、そこに辿り着く、移動するのに必要なインフラの整備ができないからだ。

道はまだこれからも作らなければいけないが、空海両方の港と橋、整地などはひと段落ついたような気がする。

などと思っていたら……。

「お館様、バウマイスター伯爵領が移動に便利だと知り、移住希望者が増えております。ここは急ぎ町と村落建設予定地の基礎工事をお願いします」

「ローデリヒは、主の使い方が上手いの」

「旦那も、文句を言いながらもよくやっているよな」

「……」

妊娠中のため『瞬間移動』が使えないエリーゼ達に代わり、テレーゼとカチヤとリサが土木工事についてくるようになった。

だが、まだリサは俺と話をするまでには至っていない。

「姉御、ご機嫌だな」

それでも、俺に笑顔を向けられるくらいには成長したので、あとは時間の問題だと思う事にするのであった。

「ヴェル、俺達の『ドラゴンバスターズ』は活動が困難な状態にあるぞ」

「大分前からそうだけどな」

今さらだが、エルの言うとおりだ。
『ドラゴンバスターズ』が機能していない原因、それはエリーゼ達の妊娠にあった。
新婚中、内乱中と避妊していたのが、それをしなくなった。
バウマイスター伯爵家には跡継ぎを含めて多くの子供が求められるので、これ以上は妊娠できませんとなると、他の貴族が妾を送り込もうとしたりするからだ。

だから、エリーゼ達が妊娠したのはとてもおめでたい事であった。
家臣達もとても喜んでいる。
俺も父親になるのだ。
悪い気分ではない。
前世では結婚すら出来なかったので、これは大きな進歩といえよう。

「産休が四名も出ているから戦力ダウンだ。俺も常には参加できないし」

先日の内乱で指揮を習ったエルは、今も領内警備などで経験を積んでいる。
そのため、たまにしか冒険者としての仕事に付き合ってくれなくなった。

まあ、これは仕方がないのだが。

「ハルカを貸してくれと言うと怒るか？」

「いや、怒らないけど、それがさ……」

ついでとばかりに、ハルカも妊娠してしまったとエルが報告する。

「おめでたい話なんだけど、何だろう？　早くないか？」

「俺には、早打ちの才能がある」

「それは褒め言葉じゃねえよ。大人の会話的に」

ブランタークさんが妙な合いの手を入れてくるが、それよりもパーティメンバーの問題だ。

「さっきも言ったが、俺も常につき合えないし、伯爵様、ヴィルマ、カチヤ、と……テレーゼ様はもう少し修練しないとな」

工事はともかく、戦闘に関しては慎重にというのがブランタークさんの方針だ。

テレーゼの場合、もし彼女の身に何かあると、バウマイスター伯爵家の責任問題になってしまうという理由もある。

「あれ？　十分な戦力じゃないか？」

「伯爵様、残念ながらもう前のように四～五人で魔の森に行くのは禁止になったんだ」

「えっ？　誰が禁止に？」

「うちのお館様とか、陛下とかもな。俺がいない時に、キンブリーがやらかしたからな。幸い伯爵様に怪我はなかったが、もっと戦力がいないと伯爵様を魔物の領域に出すのは禁止という、慎重論になったわけだ」

そんな事を言われてしまうと、完全にお手上げ状態であった。
そのせいか、最近は毎日土木工事ばかりである。

『お館様は父親になられるのです。ここはお子達のために、バウマイスター伯爵領の更なる発展を！』

自分も子供が生まれたばかりのローデリヒが、俺を上手く乗せて領内中の土木工事を急ピッチで進めていた。

『帝国からの恩賞も含めて、開発計画くらいならすぐに立てられる。そこで必ず問題になるのは、先立つ物、つまり資金なので、それがあるうちは無茶が可能だ。
一番手間と金がかかる基礎工事を俺が魔法で済ませてしまうので、開発計画も立て放題だ。
そして、金が回っているバウマイスター伯爵領には人が集まるので、ローデリヒは彼らも利用して開発を促進していた。

整地に、開墾に、街道工事、河川の改修、港の建設。
ローデリヒ曰く、第一次工事分は予定よりも大分早く終了したので、今は第二次工事分をおこなっている最中だそうだ。
まあどうせ、すぐに第三次工事計画のお話が出てくるのだろうけど。

バウルブルクを中心に東西南北に伸びる主街道と、蜘蛛の巣状に張り巡らされた支道の工事は完全に終わり、今はそれに繋がる細かな街道の建設、バウルブルクの近くを流れる河川の改修にも目途が

ついたので、東と西を流れる河川の改修工事も始まっている。
橋の建設は、ほぼ終わらせた。
あとは、小さな橋を必要に応じて建設するのみだ。
地元住民からの陳情が出たらローデリヒが必要度を判断し、俺達が実際に建設する。
将来、陳情が沢山出て橋だらけという可能性もあるが、その辺のさじ加減はローデリヒがしてくれると思う。
「冒険者としての仕事は、子供が産まれてからでいいじゃないか」
エルは、産休終了後に再び冒険者をすればいいと言う。
「あっ、でも……」
ふと、リサの方に視線を送ると、彼女は嬉しそうに首を縦に振った。
俺の新しいパーティメンバーとして助けてくれるようだ。
「……ですが、ヴェンデリンさん。ちゃんと責任を取って欲しいそうです」
通訳のカタリーナが、リサの希望を俺達に伝える。
裸を見たくらいで……あとは、下の毛が生えていなかったのを知ってしまったからか？
この世界の女性は、そういう点が面倒くさい。
「そういう事は、もう少しお互いをよく知ってからで……」
どうも、この前のカチヤの件はなし崩し的な部分もあったので、

今回は少し慎重になっている。
というか、慎重にしないと俺は奥さんばかり増えていく構図だ。
問題なのは、それを周囲が逆に喜ぶという点であろう。

「……最初はそれでいいそうです」

しかし、カタリーナも律儀に通訳をするものだ。
リサからの言葉を正確に伝えていた。

「これで何とかなるか？」

「導師が来てくれればいいのに」

エルは、導師が助っ人として来てくれる事を期待しているようだ。

「エルヴィン、導師は駄目だぞ」

「えっ？　何でです？　ブランタークさん」

「導師は講演で忙しいから」

帝国内乱の話を聞きたい人が多いのだが、俺は領地貴族なので開発に忙しく、ブランタークさんはブライヒレーダー辺境伯家の家臣である。
結果的に、法衣貴族であり、王宮筆頭魔導師としての仕事が少ない彼に出番が回ってきたそうだ。

「導師、陛下の頼みは断らないからな」

幼馴染にして、忠実な臣下だからだ。

他の部分では思いっ切り唯我独尊だと、俺も含めて関係者全員が認めているが。

「あの導師の講演ねぇ……」

エルは、導師が何を喋っているのか気になるようだ。

「暫くは、魔物の領域に行くのはなしだな。それに、もう伯爵様が狩りをしなくても魔物の素材や採集物は集まっているそうだし」

現在、魔の森周辺には数十の村や町が出来ていて、そこから多くの冒険者達が狩りを行っている。

俺達が無理に頑張る必要は、もうなくなっていた。

「ヴェル、あの人は？　ほら、アーネスト」

「いや、彼は……」

現在のアーネストは、俺達の前にも碌に姿を見せずに室内でレポートの作成に没頭していた。

『考古学の常識から考えて、遺跡発掘よりも調べた物を参考に論文を書く方が時間がかかるのであるな』

トンネルを予定を超えて二週間ほど綿密に調査したアーネストは、それから部屋に籠って分厚い紙束に論文を書いている。

探索してから、分析して、論文を纏める。

彼は、生粋の考古学者というわけだ。

かなり集中しているようで、毎日風呂に入るのと三食の食事以外

では部屋から出てこなかった。

『ここは快適であるな。ニュルンベルク公爵は、発掘を急げと面倒だったのであるな』

その分の論文記述も残っているそうで、それに加えて領内の遺跡位置の特定もある。

今のアーネストは、机の前から梃子でも離れなかった。

勿論監視は続けているが、担当の家臣は暇そうでテンションを保てないとローデリヒが報告してきた。

「あの人、本物の学者だな」

あれだけの魔力をも持つ魔族なので、野放しも危険である。

地下遺跡という餌を与えて、バウマイスター伯爵領内で生活させた方が楽というわけだ。

「じきに、新しい遺跡の話も出るだろう」

まったく手付かずのバウマイスター伯爵領内には、多くの地下遺跡が存在する。

特に魔の森がある場所には多いそうで、そこを探るには戦力も必要だ。

エリーゼ達が産休である以上は、無理をする必要はなかった。

「結局は、テレーゼの仕上げ待ちかな？」

「そんなところだと思うが、実は伯爵様に仕事の依頼だ」

「仕事ですか？　どこの竜でしょうか？　もしくは、謎の地下大遺

跡？」

「いやいや、そんな大げさな物じゃないから」

ブランタークさんが否定するが、実際に見ないと信用できない。

今まで、そういう無茶振りばかりされていたのだから。

「王都にある冒険者予備校の臨時講師だよ」

「臨時講師ですか……その前に、俺達ってまったく王都の冒険者予備校に通っていないですよね？」

「そう言われるとそうだな……」

所属はしていて、卒業はした事になっているが、碌に顔を出した事がない。

必要な訓練などは、すべて他で行っていたからだ。

「王都の冒険者予備校ともなると、魔法使いがそれなりにいるからな」

地元の予備校に入学せず、魔法の最先端だからとわざわざ王都まで学びに来る魔法使いは一定数存在するそうだ。

地方だとブライブルクのように大都市でも、ちゃんとした魔法使いの講師がいないケースが多いという理由もある。

「講師がいいからな。臨時で高名な魔法使いが短期講習とかをするから。俺も何度かやった事があるし」

ブランタークさんは、その時リサに魔法の指導を施したらしい。

「これも魔法使いの義務だ。伯爵様は有名になってしまったからな。日当は出るけどこれは雀の涙で、奉仕活動だと思ってくれ」

「わかりました」

俺は、その依頼を引き受ける事にするのであった。

翌日、ブランタークさんと共に『瞬間移動』で王都に向かう事にする。

講師など初体験だが、もし失敗しても仕方がない。

適性がなかったという事なのだから。

屋敷の庭まで、エリーゼ達が見送りに来てくれた。

連れて行くという選択肢もあったのだが、それはブランタークさんから止められていた。

『妊婦に『瞬間移動』は駄目だからな』

昔からそういう事になっているそうだ。

理由は、流産と赤ん坊の奇形が増えるからららしい。

『瞬間移動』とは、地味に怖い魔法である。

というわけで、エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、カタリーナ、カチヤ、テレーゼ、アマーリエ義姉さん、リサは見送りだ。

「あなた、行ってらっしゃいませ」

「お土産でも買ってくるよ」

「頑張ってくださいね、先生」

「エリーゼに先生って言われると照れるな」

エリーゼは、俺が冒険者として狩りにいくわけでもないので心配していないようだ。

笑顔で俺と話をする。

「ヴェル、先生役とか大丈夫？」

「イーナ、そこはこう考えるんだ。『一人くらい、臨時講師に反面教師がいても構わないじゃないかと』」

「ヴェルの言う事も間違っていないのよね。そう簡単にヴェルの魔法は真似できないと思うし……」

義務の履行というやつなので、顔さえ出せば最低限の仕事は終わるのだから。

「練習すれば大丈夫かもしれない」

「努力は必要だけど、本人の才能とかもあるから」

もしかしたら物凄い逸材と出会えるかもしれないが、そこは運の要素が強いであろうと思っていた。

「その割には、夜に懸命に何かを読んでいたような」

「俺はダメダメでも、師匠の理論は役に立つのよ。というわけで、念のために読んで覚え直した」

「でもさ、案外ヴェルの理論も参考になるかもよ」

「急に褒められたような。ルイーゼ、まさかお土産の増量を」

「コラっ、ヴェルって意外と考えて魔法を使うタイプじゃない。ボクは直感的だけど」

ルイーゼは、自分は教えるのに向いていないと言う。

それもあるが、彼女は使える魔法が少ないので、こういう席に呼ばれないのだとブランタークさんが説明していた。

「ヴェンデリンさん、私にも後に臨時講師のお仕事が来ると思いますので、戻ったら臨時講師の様子を教えてくださいね」

「そうか。カタリーナにもそのうちに、臨時講師の仕事が回ってくるよな」

「今は妊娠しているので、お話は来ないでしょうけど」

カタリーナも、今では大変有名な魔法使いになっている。

その内に、臨時講師の仕事が来てもおかしくはなかった。

「その前に、カチヤさんとテレーゼさんの指導がありますけど」

「妾は大人しくしているからの」

「あたいも使える魔法の種類が少ないから、そういう義務とは無縁だな。旦那も大変だな」

「ヴェル君、行ってらっしゃい。エリーゼさん達は安定期になるまで動かせないから」

テレーゼとカチヤも見送りに来ている。

アマーリエ義姉さんは、なし崩し的にエリーゼ達の面倒を見る仕事に就いていた。

『私、これでも二人子供を産んでいるから、少しは役に立つわよ』

経験者の強みで、エリーゼ達もアマーリエ義姉さんを頼りにしているようだ。

「っ？　リサ」

急に服の袖を引っ張られたので視線を移すと、カタリーナの後ろにリサがいた。

相変わらずの人見知りで、なぜ彼女があのメイクと服装を長年続けていたのかがわかる。

それをしないと、ギルドの受付にすら行けないであろうから。

しかし、先日戦った時とはまるで別人である。

「……リサさんも、カチヤさんとテレーゼさんの特訓を手伝うそうです」

「ありがとう、リサ」

俺がお礼を言うと、リサは嬉しそうにほほ笑む。

「本当、別人みたいだな」

派手なメイクと衣装の頃のリサしか知らないブランタークさんは、今の彼女に困惑気味だ。

どう接していいのか、わからないようだ。

「そして、私はヴェル様の護衛」

今日も、エルは警備隊関連の仕事でバウマイスター伯爵領を離れられない。

というわけで、俺は案内役のブランタークさんと護衛役のヴィルマと共に王都へと飛んだ。

数回しか行った事がなかったが、場所は覚えていたので冒険者予備校の裏庭へと『瞬間移動』で飛ぶ。

時刻は朝なので、外から見える教室の中では多くの冒険者見習いの少年少女たちが講義を受ける準備をしていた。

「みんな、初々しいな」

実は、俺達よりも年上の人は意外と多いけど。

三十歳を過ぎても、新しく始める商売の資金稼ぎなどで冒険者を目指す人もいるからだ。

それでも、半数以上は未成年であった。

「伯爵様と、そんなに年齢も変わらないじゃないか」

「いや、十代の数歳差は大きいのです」

王都の冒険者予備校も、他の地域の予備校と大差はない。
入学希望者が多く、王国から直接資金援助を受けているので、ブライヒブルクの予備校よりも敷地と建物が広大で講師や職員が多いくらいだ。

入学は十二歳からで、成績優秀者には学費の免除がある、十五歳にならないと魔物の領域には入れないので近場の森などで狩りを行う。
ブライヒブルクとまるで同じであった。

「校長に挨拶に行こうぜ」

ブランタークさんの案内で、俺達は校長室へと向かう。
ヴィルマと手を繋ぎながら校内を歩いていると、すれ違う生徒達が騒ぎ始めた。

「ブランタークさん、有名人ですね」

「俺も有名ではあるよ。だが、それ以上に伯爵様だろうが」

「みんな、ヴェル様を見て驚いてる」

「そうなんだ。俺の顔なんて知っているんだな」

校長室に入ると、数年前と同じ校長が出迎えてくれた。
六十歳くらいでロマンスグレーが格好いい、片腕が義手の男性だ。

「ヘリック殿、連れてきたぞ」

「すまんな、ブランターク」

彼の名はヘリック・クレーメンス・ハインケスで、元は高名な冒険者である。

片腕が義手なのは、若い頃、魔物に腕を食い千切られたからだそうだ。

彼が凄いのは、そこで引退しないで義手で冒険者を続け、腕を食い千切られる前よりも活躍した点にあろう。

『義手のヘリック』は、冒険者列伝にも載っている有名人であった。

引退後に、その知名度を買われて冒険者予備校の校長に就任している。

ブランタークさんは駆け出しの頃に彼に世話になっていて、だから臨時講師の依頼を俺に持ってきたのであろう。

「実は、ヨハネスの爺さんが引退してしまってな」

ヨハネスの爺さんとは、この予備校で魔法の講義を担当していた正規講師であるが、年齢は九十歳を超えている。

いかに王都の予備校でも、魔法を教えられる人材を確保するのは難しいので、教えられる限りは引退しない魔法使いは多かった。

本人が辞めたくても、予備校側が引き留めるケースが多いのだ。

「遂にボケて、魔法を忘れ始めてな。講義に支障が出るからと、孫が来て退職届を置いていった」

「そこまでいくと、さすがに引き留められないか」

そんな老人でも、正規講師が消えてしまったので予備校側は困った事態に陥ったようだ。

「講義が可能な老魔法使いの大半は、他の儲かる仕事を受けるからな。ヨハネスの爺さんは貴重だったんだよ」

次の正規講師を探し続けてはいるが、時間がかかる。

そこで、王宮から臨時講師扱いで魔法使いを派遣して貰ったりして凌いでいるようだ。

「だから一か月でも……一週間でも助かるから」

「奥さん達が妊娠して冒険者稼業もお休みですから、開発の合間になら」

「ありがとう。バウマイスター伯爵殿」

というわけで、週に三回ほどエリーゼ達が出産するまで臨時講師を引き受ける事になった。

まあ、こういう経験も何か人生の役に立つはずだ。

それに『ヴェンデリン先生』、悪くない響きである。

「ところで、王宮には暇そうな人がいるではないですか」

誰とは言わないが、最近講演で忙しい人である。

「導師殿か？　彼は駄目だろう」

「なぜです？」

「将来がある魔法使い達を壊すわけにはいかないからな。私も訓練は厳しい方がいいとは思うが、何事にも限度があると思う」

「あの……ここに、直接導師から二年半も訓練を受けた人間がいますが……」

「それは、バウマイスター伯爵殿が強いから何とかなったんだ」

元凄腕の冒険者にまで、導師と同人種だと認定されてしまった俺。

表面上は笑って誤魔化したが、内心では物悲しさを感じてしまうのであった。

「ヴェル様、緊張している？」

「思えば、こういう経験ってないからな」

校長への挨拶を終えると、早速魔法使いが集められている教室へと向かう。

ブランタークさんは顔合わせを終えると、王都に用事があるとかで俺達と別れた。

ヴィルマは、彼女も魔力があるので副臨時講師のような扱いで傍にいてくれる。

教室に入ろうとしたのだが、俺に教師の経験など無いわけで、急に胃を締め付けられるような緊張感に襲われた。

一方のヴィルマは、特に緊張もしていないようだ。
正直、とても羨ましかった。

「（偉いさんの前でもプレゼンでも、ここまで緊張しなかった……）」

商社マン時代に、新企画のプレゼンを役員連中の前でした事があった。
その時でも、ここまで緊張しなかったはずだ。

「ええいっ！　別に取って食われるわけじゃないんだ！」

覚悟を決めて教室に入る。
中には、十二歳から十五歳くらいの少年少女が四十名ほどいた。
さすがは王都、魔法使いの数が多い。
未成年ばかりなのは、魔法使いは成人直後、即戦力としてに使えるように早目に訓練に送り出されるからだ。
テレーゼのようなパターンは、滅多にない。
彼女の場合は、俺のせいで魔力が具現化したからなのだが。

「みなさん、初めまして。臨時講師のヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターです」

少し声が上ずったような気がするが、何とか挨拶はできた。

「ヴィルマ・エトル・フォン・バウマイスター」

ヴィルマは、いつも通りに淡々と自己紹介をする。
そこに緊張感など欠片もない。

だからこその、あの狙撃能力なのかもしれないが。

「ええと……」

俺が口を開くと、生徒達の視線が一斉に俺に集中する。

しかし、一つ問題があった。

「（ヴィルマ、こういう時って何をすればいいんだ？）」

緊張で頭が真っ白になっているのもあるが、いきなり臨時講師だと言われても何をしていいのかわからないのだ。

「（ヴェル様、昨晩の予習は？）」

「（あれさ、ここの生徒達がどの程度の修練度かわからないと使えないの……）」

ヘリック校長に聞いてこなかった俺の、完全なミスであった。

「（さっぱりわからんな。まあ、初日だからいいか）いきなり講義をするのを何なので、質問を受け付けます」

結局その日は、俺が次々と手を挙げる生徒達に質問に答えて終了した。

質問の中身も今までの骨竜退治や、地下迷宮攻略、内乱時などの質問ばかりであり、まったく魔法の修練にはならなかった。

「みんな、目がキラキラしていたな。俺にもあんな時期があった」

「いや、ヴェルは最初に出会った頃から目はキラキラしてない。世間に対して達観していた」

その日の講義が終わってから、俺とヴィルマは屋敷に戻る。
お土産を広げながら今日の話をするのだが、俺の話を聞いたエルが失礼な事を言う。

「もっと若い頃は目がキラキラしていたんだよ。まるで天使のように」

「どちらかというと、堕天使の類だな」

「失礼な事を。早く奥さんの元に戻ってしまえ」

「了解」

エルにお土産を渡すと、彼は自分の家へと戻っていく。
奥さんが妊娠してるのだ。
早く戻ってあげた方がいい。

「あなた、次からは講義をどうするのですか？」

「そこは師匠からの教えを参考に、臨機応変に行くよ。ヴィルマも助けてくれるし」

「副臨時講師として頑張る」

講師としての仕事は週に三回の約束なので、それから三日後。

俺とヴィルマは、再び教室へと向かった。

さすがに俺の話ばかりしていられないので、自分なりに講義を行う事にする。

だがその前に、以前に講師をしていたヨハネスさんの講義内容を聞いてみた。

「ヨハネス先生って、どんな講義をしていたんだ？」

生徒達に質問をすると、みんなで見合ってから黙り込んでしまった。

「えっ？　秘伝の魔法とか理論を教えてくれたのか？」

だから、他人には教えられないとか？

「いえ、違います。先生」

「先生？　ああ、俺か。ええと……君は？」

「はい、アグネス・フュルストと言います」

ざわめく生徒達の中から、一人の少女が手をあげた。

身長百五十五センチほどで、ライトブラウンの髪を内巻きにしている眼鏡をかけた美少女である。

ぱっと見た感じ、学級委員長キャラに見える娘だ。

「（眼鏡っ娘だ！）」

眼鏡をかけても美少女なので、外すともっと美少女かもしれない

などと、俺はくだらない事を考えてしまう。

「ヨハネス先生なんですけど……」

一年ほど前から、彼のボケは始まっていたらしい。

「何度も同じ事を言ったり、魔法を教えていたのに、途中で話が昔の冒険譚になったりで、みんなほぼ独学で魔法を……」

元から魔法は独学でやるものだが、せっかく高名な講師がいるのだから新魔法や鍛錬のコツくらいは聞いて参考にしたい。

その希望を打ち砕くボケ講師なのに、講義をサボるわけにはいかない。

ここで単位を取らなければ卒業できないのだから。

「全講義数の、三分の二は出ないと駄目なので……」

本当は、生徒数は六十人近いらしい。

ただ、みんな出席日数はギリギリで構わないと思っているので、常に三分の二くらいの生徒しか出席していないそうだ。

「なるほど」

ならば、昨晩考えた通りに最初は基礎からで構わないか。

そう考えた俺は、早速自分なりの講義を始める事にする。

「まずは、基礎中の基礎、毎日の瞑想について」

これは、世間に大量配布されている本に書かれている内容だ。

毎日、魔力の流れをイメージしながら、魔力路と魔力袋を広げる。

これによって、魔力量と魔法の威力が上がるから毎日行う必要があった。

「確実に毎日してる人は？」

「半分……」

手を挙げた生徒の少なさに、ヴィルマがガッカリしたような表情をしている。

彼女も俺やブランタークさんに教わって、毎日確実に瞑想を行っているからだ。

あの導師だって、それを欠かした事など一日もない。

そのくらい、基本中の基本なのだ。

「毎日しないと駄目だよ」

「ですが先生、俺は魔力の上昇がもう止まっているのです」

一人の男子生徒が反論してくる。

魔力は初級レベル、このクラスでは低い方であった。

ちなみに、このクラスで一番魔力量が多いのは委員長キャラのアグネスであった。

あくまでも、今のところはという条件がつくが。

「それでも、魔力路は広げられるから」

「魔力路をですか？　俺の魔力では魔法の威力もたかがしれていますし」

「魔力路が狭いと、使用魔力量と魔法威力のコントロールが甘くなるよ」

「えっ？　そうなんですか？」

その男子生徒は、その話を初めて聞いて驚いたようだ。

「大量の魔力を使って魔法を使う時でも、少量の魔力を使って魔法を使う時でも、魔力を流す魔力路は広い方が有利です。特に前者は魔法の発動時間に影響します」

魔力路が狭いと、必要な魔力が流れ終わるまでの時間が長くなるからだ。

「それは、わずかな差なのでは？」

別の男子生徒が、俺に質問をする。

「わずかだけど、実戦だと致命的だよ。相手に先に魔法を撃たれたら終わりだし、発動する前に魔物に突進されたら死ぬだろうね」

「……」

俺の返答に、その生徒のみならず全員が黙り込んでしまう。

そう、コンマ一秒も差はないであろうが、それが致命傷になるケースが多いのだから。

「先生っ！」

「何ですか？」

「その瞑想なんですけど……」

もう一人、下限年齢ギリギリであろう、黒髪をオカッパ頭にした美少女が質問をしてくる。

「魔力を流して魔力路を広げるイメージって本には書いてあるのですが、そのイメージの具体例がよくわからなくて……」

イメージだけしか書いていないので、具体的にどうイメージするのかわからない。

だから適当に座って瞑想しているだけで終わってしまうと、その少女は言う。

他にも、同じような悩みを持っている生徒は複数いた。

「（それも仕方ないか……）」

俺が魔力路を広げるイメージに利用したのは、日本で見たテレビ番組などである。

学校で見させられる教育テレビなどでは血管に血が流れる映像とかがあって、それと似たイメージを脳裏に浮かべればよかった。

ところが、この世界では人体の仕組みなど医者や教会経由でないと学べない。

それも本が主流で、資料映像など存在しないのだ。

「それを予想して、こんな物を準備しました」

別段大した物でもなく、王都の店でも売っている猪の腸を横に吊るす。

これは、詰め物に使うので安く購入できるものだ。

横に吊るした腸には傾斜がついていて、俺は高い位置に吊るした右側の入り口から魔法で水を出して腸の中に流していく。
水量を増やすと腸は膨らんでいき、流れ終わった水は低い位置にある左側の出口から下に落ちる。
落ちた水は、助手のヴィルマがタライを準備していて、そこに落ちて溜まった。

「水を魔力で、この猪の腸が魔力路という考え方です。大量の魔力で腸を常に膨らますイメージを浮かべる」

俺は水量を強くして、水が流れる腸を膨らませる。
破れてしまうと駄目なので、そこは慎重に水量を微調整していく。

「自分の魔力路がこのように広がるイメージを、一日一回は瞑想しながら行うといいでしょう。次に……」

魔力袋であるが、これはもっと簡単だ。
猪の膀胱も、腸詰の材料として安く売られている。
これに、水を限界まで入れて膨らませた。

「先生、魔力路と魔力袋とはこういう形なのですか？」

「あくまでも想像の範囲ですけど、先生はこれで毎日訓練しています。魔力を大量に流して膨らむというイメージですと、これが先生には最適なのです。勿論イメージなので、自分なりのイメージを考えて実行しても構いません。それで効果があれば、その人には最適な方法なのです」

「なるほど……」

生徒達は、俺の解説を聞き懸命にメモを取っていた。

「（眩しいくらいに真っ直ぐな若者達だな）」

「（ヴェル様、ちょっとジジ臭い）」

彼らの純真さに感動した俺に、ヴィルマの毒舌が突き刺さる。

「先生ほどの魔力を持っていても、まだ基礎訓練をしているのですか？」

「先生の場合は、まだ魔力が増えていますから」

まだ二十歳前なので不思議ではない。

だが、俺の魔力量は既に大陸随一、勝てるのは魔族のアーネストくらいなのでみんな目を丸くして俺を見つめていた。

「魔力量が上がらなくなっても、魔力路を広げるイメージ訓練はした方がいいです。広げておけば、魔法の手早さや、威力の調整などで有利になりますから」

魔法を使うために魔力を使う時に、魔力路が広ければ素早く魔力が流れるというわけだ。

「精度などにも影響が出るので、これは毎日する事をお勧めします」

他にも、師匠から教わったり、俺が独自に考えて行っている基礎訓練などを生徒達に伝えていく。

一回目は自己紹介で、二回目は基礎の基礎。

妥当な講義内容であろう。

「バウマイスター伯爵殿、私も講義を見ていましたが感心したぞ」

講義を終えて校長室に向かうと、俺とヴィルマはヘリック校長からお褒めの言葉を頂いていた。

「基礎の基礎ですよ？」

「そうなんだが、意外と教えてくれる人がいないんだ」

ヨハネスの爺さんは、今のクラスを編成した時からボケが始まっていた。

本当ならば教えているはずなのだが、それが不明確であったそうだ。

「名のある魔法使いに臨時講師を頼むと、これも当たり外れが多くてな」

講義を受けている魔法使いの大半は、初級から中級レベルの魔力しか有していない。

それでも貴重なのだが、臨時講師で来るような魔法使いは確実に中級の上以上の魔力を持っている。

彼らは有能ではあるが、天才で唯我独尊な部分もある。

自分の派手な魔法を披露して、『これを参考にしな！』で終わる人も珍しくないそうだ。

「参考にならない」

「そうなんだ、奥方様。派手な火炎魔法とか、竜巻の魔法とか、ク

ラスの半分以上は使えないから」

というわけで、魔法使いはますます自己研鑽か、師弟制度に偏る事になる。

どころが、師弟匠制度には臨時講師と同じような罠も存在していた。

弟子が、必ず師匠の真似を出来るわけでもないのだ。

「俺は魔法使いじゃないけど、たまにここの魔法使いは本当に全ての実力を発揮できているのかと不安になってしまう」

ちゃんと形式立った訓練を受ければ、もっと使える魔法使いになるのではないかと思ってしまうそうだ。

「ええと、お引き受けした時期までは努力して教えますので」

「ありがたい！」

というわけで、俺はヘリック校長に気に入られたようであった。

「体系的な魔法の指導ですか……確かに、師匠次第、自分の実力次第な部分が大きいですね」

家に戻り、夕食を取りながらエリーゼにその話を振ると、彼女はそれを否定しなかった。

「エリーゼはどうだったの？　私、ルイーゼ、ヴィルマは完全な後

発型だからヴェルとブランタークさんが師匠みたいなものだし」

「カチヤもそうだよね。カチヤの場合は、最初からある程度魔力はあったけど」

「でも、あたいも使える魔法の習得で苦労しているからな……姉御の指導でようやくってところ」

イーナ、ルイーゼ、カチヤは、自分の状況を語った。

「私の場合は、教会で指導がありましたから」

エリーゼは幼い頃に魔力が確認されたので、すぐにホーエンハイム枢機卿のツテで教会で指導を受けたそうだ。

「すぐに治癒魔法の特性を見い出されたので、他の治癒魔法使いの方々から指導を受けました」

教会としても、治癒魔法が使える人材の確保は急務である。
それに、祖父がホーエンハイム枢機卿なのだ。
指導の手を抜く事はあり得なかった。

「でもよ、魔法使いは貴重なんだろう？　あたいの場合は、あまり使える魔法がないからさほど大事にもされなかったけど。冒険者ギルドの扱いは悪くなかったけどな」

以前のカチヤ程度の魔力の持ち主でも、それが戦闘能力を嵩上げできるタイプなら冒険者ギルドや軍でも重宝される。
ただ、それは厳密にいうと魔法使いだからではない。
強いからだという現実もあった。

「治癒魔法の才能があれば、教会の手厚い指導が受けられます。他の魔法使いの場合は……」

魔法使いは数が少ないので忙しい。

指導に時間をかけるくらいなら、自分で働いた方が儲かる。

魔法くらい、自分で何とかなるだろうと。

それでも一応有名になった事だし、社会貢献の意味も込めて二～三人は弟子を取るか。

こんな感覚なようだ。

「それも面倒な方は、予備校の臨時講師などでお茶を濁しますね。それすらしない変わり者の方も多いですし」

それでも、お上や各種ギルドは何も言わない。

相手は実力も実利もある魔法使いなので、下手に怒らせてヘソを曲げられると困るからだ。

「なぜ予備校の魔法使い講師陣が貧弱なのかよくわかる話ではあるか……それで、カチヤとテレーゼはどんな感じ？」

俺は、二人の仕上がり具合を聞いてみる。

「はい。カチヤさんは、『加速』に特化した身体能力強化魔法と風系統の魔法に特性があります。ですが放出は苦手なので、サーベルに纏わせて攻撃力を上げたり、『風魔法障壁』などの習得に留まっています。イーナさんと同じ系統ですね。テレーゼさんは、実は一番得意な系統は土でした。土木魔法などの適性が高いです。火系統も高度なものが使えるのは、以前に私と決闘をした時に判明してい

ますから」

「へっ？」

俺は、驚きを隠せなかった。
カチヤとテレーゼの魔法の事ではない。
あの究極の人見知りであるリサが、俺に淀みない声で説明をしたからだ。

「カチヤさんって……姉御……」

カチヤは、以前のリサしか知らない。
急に『さん』付けで呼ばれて、かなり戸惑っているようだ。

「リサが喋った！」

昔にそんなアニメがあったな。
あれは、〇ラが立ったか……。

「いや……こいつは元から喋れるから。なあ、リサ」

「……」

リサは、俺とは普通に喋れるようになったが、ブランタークさんからの問い掛けには黙ったままだ。
まだ人見知りは治っていないらしい。

「俺は無視かよ！」

「お師匠様、リサさんはまだ男性はヴェンデリンさんとしか話せな

いようで」

リサから話してもらえず不機嫌になったブランタークさんに、カタリーナが懸命にフォローをする。

彼女はいつの間にか、リサの世話役のようなポジションについていた。

カタリーナは、何だかんだ言われながらもやはり面倒見はいい方である。

「あのメイクと服装がないと、こんなものかよ……」

「カタリーナ、随分と面倒見がいいんだな」

「この方、非常にシンパシーを感じるといいますか……」

人見知りではないが……似たようなものか……同じくボッチであったカタリーナからすると、リサは放っておけないタイプに見えるのであろう。

実は俺もそうで、だから好きに居候をさせているのだが。

「バウマイスター伯爵様、私を土木工事に連れて行ってください。カタリーナさんはもう……」

「そういえばそうだな」

妊娠したカタリーナを、工事現場まで『瞬間移動』で連れていくわけにもいかない。

リサは居候をしているので、自分が代わりに手伝うと手をあげた。

「橋の建設では大活躍だったものな。土系統の魔法は得意なのか？」

「火系統の魔法よりは得意ですよ」

リサの魔法の精度と威力は、既に経験ずみだ。

ならば、せっかくなので手伝ってもらう事にする。

俺も貴族として、バウマイスター伯爵領発展のために遠慮などするべきではない。

「テレーゼさんの面倒も見ます」

「そうよな。妾も多少の経験は積んだが、まだ一人だと不安があるの」

まだ魔法使い歴が短いテレーゼからすると、ベテランであるリサの付き添いはありがたいようだ。

「テレーゼさんが、うちの開発を手伝って問題ないのでしょうか？」

「エリーゼも真面目じゃの。妾は引退した身じゃから、アルバイトですと言っておけばいいのじゃ」

「フィリップ公爵領から帰還命令とか出ませんか？」

エリーゼが心配しているのは、テレーゼが魔法を使えるようになったのでフィリップ公爵家から帰還命令が出ないかという点にあった。

「それはないの。アルフォンスほどの男が、そんなバカな命令を出すはずがない」

下手に呼び戻すと、再びフィリップ公爵継承問題に火がついてしまう。

いくら魔法があっても、それを理由に呼び戻せるはずがないのだ。

「ペーター殿とて、それは望まないであろうよ」

同じく、次の皇帝にテレーゼをという話になりかねない。

いまだ帝国には混乱があり、議会の再編と皇帝選挙の実施には時間がかかるからだ。

ここでテレーゼが戻ると、彼女の出馬を画策する連中が現れかねなかった。

「公式では、妾はバウマイスター伯爵の客人じゃが、実は戦利品で愛人だと思われている。この立場が妾には面倒がなくてちょうどいい。アマーリエという友人も出来たので、お気楽極楽にやっていくというわけじゃ」

翌日から、リサとテレーゼは土木工事の手伝いに回り、俺も手伝うか、現場に魔法で送り届けてから予備校で講義という日が多くなっていく。

「旦那、あたいも退屈だから連れて行ってくれ」

カチヤも俺の護衛に加わり三人で予備校に顔を出すと、ヘリック校長が早速カチヤに声をかける。

「そういえば、バウマイスター伯爵にボロ負けして嫁いだんだよな？」

「校長先生は、相変わらずストレートにものを言うよな」

カチヤはここの教え子で、二人の間には面識があるようだ。

「あたいも、旦那の補佐をするからさ」

「補佐……人生ってのは何があるかわからないな。『神速』が旦那の補佐か。というのは冗談で、バウマイスター伯爵がいないとどうにもならなくてな。助かるよ」

「ヨハネスのジジイ、遂に死んだんだっけか？」

「お前なぁ……勝手に殺すなよ。ボケて引退しただけだ」

今日は三人で授業を始めるが、カチヤも予備校では有名人である。ワイバーン専門の待ち伏せ殺し屋で、かなり稼いでいる事が知られていたからだ。

あとは、例の婿取り宣言と、並み居る貴族や王族の子弟を倒した件、最後に俺に負けた件も含まれるか。

話題には事欠かない人物ではある。

「講義の前には瞑想を行います。魔力路を広げていくイメージで」

今日も講義が始まる。

とは言っても、もう五回目くらいなのであとは師匠が俺に教えてくれた基礎や理論に、自分なりにアレンジしたものを加えただけだ。

「同じ量の魔力を使用した『ファイヤーボール』でも、このように効果範囲がまるで違います」

一つは、標的の板に直径一メートルほどに軽く焦げ跡がつくだけ、ところが大きさをパチンコ玉程度にすると、板に穴を開ける事に成功した。

「最初の効果範囲が広いが威力がいまいちな『ファイヤーボール』、これにも使用が推奨されるケースはありますが、魔物狩りではほぼ使いません。その理由は？」

「はいっ！」

俺の質問に、委員長キャラのアグネスが手をあげる。

眼鏡っ娘で真面目な彼女はこのクラスでは一番魔力が多く、学業成績も優秀で、生徒達の纏め役になっている。

予備校のクラスに学級委員長制度は存在しなかったが、周囲からも実質委員長のような扱いをされていた。

「威力が圧倒的に足りないからです。目晦ましくらいにしか使えないと思います」

「ほぼ正解ですね。当たっても倒せない魔法など、放つ意味もありませんから。パーティを組んで討伐する際に目晦ましに使うという事はたまにありますが、これも止めた方がいいかな？」

その理由は、二つ存在している。

一つは、その程度の『ファイヤーボール』では野生動物ならともかく、魔物にはさして目晦ましにはならない事。

魔物は動物とは違って、あまり火を怖がらないからだ。

二つ目は、実は一番重要である。

「毛皮が焦げると商品価値が落ちるからね」

ジョークだと思ったのか？
教室中に笑いが広がる。

「実は冗談ではなくて、獲物の状態は冒険者にとっては大切なので」

一日に倒せる魔物の数など決まっているので、あとはいかに綺麗に殺すかにかかっている。

「全身黒焦げ、切り傷だらけ。こういう素材は毛皮や皮が使えないので買い叩かれます」

ただ倒せばいいというものではない。
倒した状態が悪ければ、いくら沢山倒してもなかなかお金にならないのだ。

「つまり、火系統の魔法は魔物討伐に不利だと？」

「全身をこんがりは止めた方がいいね」

再び質問したアグネスに回答する。

「でも、火系統しか使えない魔法使いだっていると思いますが……」

「俺がそうです」

「私もです」

数名の生徒が手をあげる。

これぱかりは相性なので、練習してもどうにもならないケースがあった。

「そこで、魔法の圧縮が役に立ちます」

大きな『ファイヤーボール』など撃たないで、パチンコ大ほどの大きさに圧縮した『ファイヤーボール』を獲物の急所に向けて撃つ。少ない使用魔力でも、圧縮させれば威力は増えるという理論だ。

「魔物の急所に一撃する」

見本として、米粒大までに圧縮した『ファイヤーボール』を次々と板に当てていく。

板には、十か所以上も焦げが付いた穴が開いた。

平均一秒で一発、このくらいは出来ないとブランタークさんに怒られてしまうようになった。

「この程度の穴と焦げなら、そう買い取り価格も下がらないでしょう。素早い魔法の発動と、急所へ当てるコントロールは要訓練です。魔力路を広げる瞑想は、魔法の素早い発動に役に立ちます。練習しておくように」

俺の言葉が途切れると、生徒達は懸命にノートを取り始める。

「ちなみに、この圧縮は……」

続けて、小さく圧縮した『ウィンドカッター』を多数発生させる。

これも、木の板に三日月形の穴を十か所以上も開けた。

「凄い……」

「先生、水と土の系統は出来ないのですか？」

生徒達が驚きの声をあげるなか、アグネスが再び質問をする。

「出来なくもないんだけど……」

ヴィルマがそっと差し出した石を手の平で発生させた『ウィンドカッター』で砕いてから、それを銃弾のように板にぶつける。

更に、水の玉を発生させ、これを『ブースト』で補強して板にぶつけた。

共に、木の板に小さな穴が複数開く。

「このように、貫通力アップのために風系統の『ブースト』を掛ける必要があるので、魔力の使用量が増えます。水の場合は、『氷弾』にした方が貫通力は圧倒的につけやすいですけど、そうすると水と風の系統を組み合わせるので魔力は倍消費しますね。火の場合は貫通力ではなくて、あれは板を焼き切って穴を開けているのです」

貫通力でいえば、実はそれよりも弓矢や金属製の銃弾に『ブースト』をかけた方が大きくなる。

「魔物はなるべく損傷なく殺すのが一番ですが、そればかり狙って逆に魔物に殺されるのも問題です。魔法を使える才能を得た以上は、自分がいかに効率よく獲物を倒すのかを研究するといいでしょう。冒険者になってあまりソロでやる人はいないかと思います。他のメンバーの得意武器や戦法も加味して、なるべく安全で効率のいい狩りを模索する。魔物を撃退だけして高価な採集物のみで稼ぐという手もありますし、そこは頭を使ってください」

同じ戦闘能力でも、頭を使ってない人よりも使っている人の方が収入が圧倒的に多いのだから。

「冒険者稼業は長い年月は出来ません。君達は魔法使いなのですから、引退後も仕事に困るケースは少ないかと思いますが、将来の事をよく見据えて冒険者稼業を行ってください」

三回目の講義も、どうにか無事に終わらせる事に成功するのであった。

この日も講義が終わったので、俺達はヘリック校長に挨拶をしてから昼ご飯を食べに外に出た。

手間の関係で予備校には食堂はなく、生徒達は外食か弁当を持ってくる。

周辺には予備校の生徒目当てに飲食店が多数立ち並んでいるので、その中からある一軒のお店を目指していた。

「このお店か……」

見た感じは普通の食堂にしか見えないが、実はこのお店、導師推薦のお店である。

「おおっ！　待っていたのである！」

中に入ると、奥のテーブル席から導師が俺達に声をかける。

最近講演活動に忙しいのであまり顔を合わせていなかったのだが、今日は午後から一緒に狩りをしようと誘われていたのだ。

その前に、このお店で待ち合わせて昼食を取ろうという寸法だ。

「この食堂は、モツ煮込みシチューが名物なのである」

導師お勧めのメニューを注文してから話を続ける。

「先生役はどうなのであるか？」

「それなりに何とかこなしていますよ」

「そうかな？　旦那は結構上手くやっているとあたいは思うよ」

「それは私も思った。ヴェル様は、先生に向いていると思う」

「そうかな？」

カチヤとヴィルマに褒められたが、自分ではあまり実感が湧かない。

前世でも、通っていた大学で教職過程など選択していないので、上手くやれているか自信がなかったからだ。

「ヨハネスの爺さんは丁寧に指導はしてくれたけど、わからなければ練習を続けろというタイプの人だったぜ」

「努力は実を結ぶという感じ？」

「今ヴィルマが言った、『努力は実を結ぶ』が口癖だったな」

ただし、魔法の理論的な説明などはあまりなかった。
自分の魔法を見せて、それをイメージしながらひたすら練習だったそうだ。

「あたいは、なかなか魔法を覚えられなくてな」

結局、ヨハネス爺さんの講義では魔力が増えただけ、『加速』を覚えたのは成人後にリサから教わってようやくだったそうだ。

「リサが？」

「ああ見えて、姉御は魔法に関しては理論的なんだよ」

氷系統の魔法を極めるために、リサはわざわざ真冬に王国北部にある山脈へと出かけたらしい。
そこの厳しい自然環境を実体験して、魔法のイメージ力を上げたのだとカチヤに解説したそうだ。

「最近、すっかりしおらしいけど」

「前よりはいいでしょうに……」

いくら人見知りが酷いとはいえ、あのメイクと服装で高慢ちきなのもどうかと思うのだ。

「今も、素直にバウマイスター伯爵領の開発を手伝っているからな」

テレーゼの修行も兼ねて、臨時講師の仕事がある俺の代わりに工事現場へと『瞬間移動』で二人を送っていた。

俺が講義でいない間も、バウマイスター伯爵領の開発を止めないためである。

『お館様、ここは景気よくリサ殿も娶ってしまいましょう』

『無責任に言ってくれるな』

『いいえ。無責任ではありません。バウマイスター伯爵家家宰として、利益になるから言っているのです。多少年上ですが、綺麗な方ではないですか』

彼女の土木工事の上手さに感心したローデリヒは、シビアな理由で俺にリサを娶れと迫っていた。

リサは、テレーゼを指導しながら巧みに工事を行っている。

二つ名通りに氷魔法だけかと思えば、他の魔法も実に器用に使いこなすのだ。

あとは、カチヤの言う通りに人に教えるのも上手い。

今までは、あのメイクと衣装のせいで損をしていたと思われる。

あの恰好でないと人と碌に話も出来ないのだから、仕方がなかったのだが。

「姉御、絶対にこう思っていると思う。これも、内助の功だって」

「うっ！」

報酬は後で支払う予定であったが、もし本人がそう思っているのなら受けとらないかもしれない。

しかしそれを許すと、既成事実の追認のような事になってしまう

かも。

「そういう難しい話はあとにして」

注文した料理が届いたので、早速食べる事にする。
魔物の内臓を煮込んだビーフシチューはとても美味しい。
長時間煮込んでいるのであろう。
食べると内臓肉なのにとても柔らかく、口の中でとろけるのだ。

「臭みもないし、美味しいですね」

「バウマイスター伯爵よ。こうしてパンをシチューに浸し、その上にモツを載せて食べると美味しいのである」

導師お勧めの食べ方をすると、口の中に至福の味が広がる。

「お客さんで一杯」

ヴィルマはお替りを頼みながら、店内の客の多さに驚いていた。

「セットで七セントはお得だな」

「故に、予備校の学生達も多いのである」

予備校には食堂がないために、その周辺の飲食店は学生を目当てに安くてお腹一杯になって美味しい料理を研究している。
だから美味しいのだと、導師は説明した。

「某も昔は予備校の学生だったのである。このお店は、某がまだ十二歳くらいの頃にオープンしたのである」

「美味しかったな」

食後は、みんなで狩りに行く事にする。

場所は、導師がよくアルバイトで狩りをする、王都近くの魔物の領域であった。

そこはあまり広くもないし、険しい丘陵地帯なので開発せずにそのままになっている場所だ。

「魔力も増えて、戦闘力も上がったからな」

「久々に、私の大斧がうなる」

「頼もしいではないか、バウマイスター伯爵」

この四人で苦戦するほど強い魔物など出ないので、夕方まで狩りに勤しんだ。

導師とヴィルマは相変わらず強かったが、カチヤも魔力が増えたおかげで多くの魔物を狩れるようになった。

高速で、すれ違いざまに魔物の急所をサーベルで切り裂いて失血死させる。

さすがは、二つ名を持つ冒険者である。

「久々の狩りであるな。最近は講演ばかりで疲れたのである」

「どういう事を喋るのですか？」

「真面目な話などしてもみんな退屈がるのでな。戦の話もするが、バウマイスター伯爵がテレーゼ様に迫られて大変だったと」

追うテレーゼに、かわす俺。
みんな笑いながら聞いていたそうだ。

「なぜ、俺の話なんです？」

というか、人のプライベートを。
いくら人の不幸は蜜の味とはいえ、それは酷いと思ってしまう。

「まあ、この程度の話で笑えるのであれば王国も平和ではないか」

その日の狩りは無事に終わり、今日も無事に平穏なままで一日が終わるのであった。
俺のプライベートが世間に暴露され、平穏ではなかったような気もするが……。

第百二十一話　サングラス。

「ふと思ったんだが……」

「何をですか？　あなた」

いつもの朝食の時間、俺はふいにある事を思いついた。
そして、それが何なのかをエリーゼが訪ねてくる。

「俺は、臨時とはいえ先生になったよな？」

「そうだけど、それがどうしたの？」

俺が何を言いたいのかがわからならしく、イーナも話に加わってきた。

「残念ながら、俺はまだ先生としては若い」

「そうかな？　魔法が使えればいいんじゃないの？」

「ルイーゼ、確かに魔法が使えないと先生にはなれない。だが、魔法が使えるだけでも先生にはなれない」

「何？　難しいお話？　なら、僕には無理だよ」

と言って、ルイーゼは食事に戻ってしまった。
段々と食欲が増してきたようで、妊娠前よりも沢山食べるようになっていたのだ。

その割には、いくら食べてもあまり体形に変化はなかったが。

「それはつまり、先生としての威厳が必要という事ですか？」

「そう、それ！」

カタリーナは、俺の考えに気がついてくれた。

先生とは、先に生きると書く。

年配の人物が教えるのが普通であり、それは知識や経験も然る事ながら、年月を経て醸し出される威厳のようなものが教師には必要だと俺は思うのだ。

「ヴェンデリンさんが、導師様やお師匠様のようになるには時間がかかりますし、今の臨時講師の期間には間に合いませんわよ」

「ヴェル様が実際に年を取らないと、そういうのは身に付かない」

カタリーナとヴィルマの言うとおりで、俺に威厳が出るには年月が必要というわけだ。

「それは確かにそうなんだけど、それをある程度解決する方法がある」

「そんな便利な物があったかの？　威厳というのは統治者にも必要でな。じゃから、若い後継者は色々と大変な思いをするわけじゃ。親や祖父に後見してもらう方法もあるが、それをすると傀儡とも言われてしまうからの」

最近は、ほぼ毎日毎食食事を取りにくるテレーゼが、『そんなに都合のいいものが本当にあるのか？』というニュアンスで俺に聞い

てきた。

「あるさ」

「ほう、何なのだ？　それは」

「眼鏡です！」

そう、眼鏡だ。

眼鏡とは不思議なアイテムである。

かけているだけで、その人の知性が何割かアップしたように見えてしまうし、真面目な印象を与える。

学校の先生が眼鏡をかけていると、何か先生という感じがしてしまうではないか。

俺が若い先生なのは隠しようもない事実だ。

だが、ここで眼鏡をかけて講義を行えば、俺の威厳や真面目度も上がるというわけだ。

前世も今世も、俺は目がいいのだけが自慢で眼鏡には縁がなかった。

本来必要がないアイテムであったが、伊達眼鏡を購入して講義の時に着ければ効果抜群だと俺は思うのだ。

「というわけで、今日は眼鏡を探しに行くぞ」

「行ってらっしゃいませ」

「……」

何だろう？

エリーゼの対応がいつもよりも若干冷たいような気がする。

「イーナもそう思うだろう？」

「そうね、ヴェルの自由にすればいいと思うわ」

「……」

あれ？

イーナの対応も、なぜか冷たいな。

「ええと、ルイーゼさん？」

「眼鏡をかけると真面目っていう評価がよくわからないよ」

「真面目に見えないか？」

「全然、『ああ、お金持ちなんだ』と思う」

「……」

そうであった。

前世とこの世界では、眼鏡に対する評価がまるで違うのだ。

目が悪くても、お金がない人は眼鏡をかけられない。

だから、眼鏡とは金持ちが購入するもので、そこに真面目とか知性的だとかいう印象はないというわけだ。

これは、とんだ誤算であった。

「とにかくだ、眼鏡を買うぞ」

「ヴェルって、目が悪かったの？」

「いいや」

前世も今も、俺の視力はとてもよかった。

目が悪くないから眼鏡をかけてはいけないという法もないと、俺は思う。

「まあ、欲しければ別にいいけど……」

イーナに微妙な顔をされてしまうが、俺が先生に相応しい眼鏡をかければ、きっと生徒達は俺を威厳のある素晴らしい先生だと思ってくれるはずだ。

そんなわけで、講義が終わった午後に眼鏡屋へと出かけるのであった。

「眼鏡屋があった」

「いかにも高級なイメージだな、旦那」

「それは、金持ちしか買えないからだな。でもさ、目が悪いわけでもないのに金が勿体なくないか？」

今日はエルが付いてきていて、あとはカチヤとヴィルマの合計四名で王都にある眼鏡屋の前に立っていた。

高価でお金持ちしか購入できないものなので、お店の構えも同じ

く高級なイメージを感じさせる。

だが、眼鏡を購入する人が少ないようで店はこじんまりとしていた。

あまり大店にする必要がないのであろう。

「目が悪い人で、眼鏡が買える金持ちが少ないのか？」

現代社会のように人間の視力が全体的に衰えているという事もなく、ちょっと目が悪い程度だと眼鏡は必要なく、目が悪くてもお金がなければ眼鏡を購入しない。

ここは、そういう世界というわけだ。

『目が悪くても眼鏡が買えないと、困ってしまうのでは？』と思わなくもないが。

「じゃあ、入るか」

「いらっしゃいませ」

店に入ると、店主と思われる中年男性が俺達を出迎えた。

「眼鏡をご要望でしょうか？」

「ああ、そうだ」

偉そうな口調で答えるが、伯爵になると逆にこういう口調にしないと相手の方が困ってしまうケースが多いので仕方がない。

前世では、上司や得意先にペコペコしてたので慣れるのが大変なのだ。

たった三年ほどのサラリーマン生活だったのに、ある意味恐ろしい慣習である。

「あの……バウマイスター伯爵様ですよね？」

「ああ」

「やはりそうでしたか！　アグネスがお世話になっております。おいっ！　アグネス！」

何とこの眼鏡屋は、今俺が魔法を教えている委員長キャラアグネスの実家であった。

もしやと思ったのだが、俺は王都にはもっと沢山眼鏡屋があると思っていたので、違う可能性の方が高いと思っていたのだ。

「お父さん、どうしたの？　あっ！　先生だ！　こんにちは」

予備校にいる時のローブ姿ではなく、今日のアグネスは私服姿であった。

さすがは都会の女性……こう言うと俺が田舎者のように思われてしまいそうだが、バウマイスター騎士爵領の女性とかと比べると、やはり王都の人間はファッションでは圧倒的に垢ぬけていた。

「先生も、目がお悪いのですか？」

アグネスも眼鏡をかけているので、彼女は俺が目が悪いと思ったようだ。

「いや、あくまでも威厳の確保のためだ」

「ええと……どういう意味でしょうか？」

アグネスは、俺の言い分に首を傾げていた。

「ヴェル、素人のお嬢さんをお前の妙な常識に巻き込むなよ……つまりね……」

エルが、俺が教師として必要な威厳を手に入れるために眼鏡を欲しているのだと説明する。

「俺も意味がわからないんだけど、眼鏡をかけると知的に見えたり、威厳が出たりするのか？」

「そうですね……アカデミーの教授や、書類と睨めっこをしている法衣貴族の方々で眼鏡をかけている人は多いですよ」

本や書類ばかり見ているから目が悪くなり、この世界は親の職を子が引き継ぐ事が多いので、代々眼鏡になるテクノクラート階級や貴族家が多くなる。

だから、自然と眼鏡をかけている人は知的に見えるのかもとアグネスは答えていた。

どうやらアグネスは眼鏡屋だからこそ、俺と同じような価値観を有しているらしい。

エルの場合は……まあ地方には眼鏡をかけている人が少ないからであろう。

「ほら見ろ、だから俺は眼鏡をかけて先生らしくするのさ」

「そんな俄かで大丈夫か？」

「ヴィルマ、あたいにはさっぱりわからないんだけど」

「私にもよくわからない」

エルは、眼鏡をかけたくらいでそんな急に威厳が出るのか疑問に感じているようだ。

カチヤとヴィルマもどう答えていいのかわからないようで、二人で首を傾げていた。

「先生！」

「どうした？　アグネス」

「先生は、もっと自信を持っていいと思います。先生は私達とそんなに年が変わらないのに、今までに来たどんな先生よりもわかりやすく魔法を教えてくれるのですから」

「アグネス」

「先生に飾りの眼鏡なんて必要ありません！　先生は、眼鏡なんてかけなくても素晴らしい先生です」

「ありがとう！」

俺は嬉しかった。

講義の前日に、二時間ほど睡眠時間を削って師匠の本を読み込み、それを参考に自分の理論と合わせて授業ノートを作ったりとかしてよかった。

俺の努力は、ちゃんと認められていたんだ。

可愛い女子生徒がそれを認めてくれた。
別に男子生徒でも嬉しいけど、女子生徒でしかも可愛いとその嬉しさも倍増するというものだ。
我ながら、現金な性格をしていると思うけど。

「そうだな！　先生には眼鏡は不要だな！」

「だから、前からそう言っているじゃないか……」

エルが何か言っているけど、俺には聞こえない。
野郎の意見など、この際は無視である。

「はい！　先生は眼鏡をかけていなくても立派な先生です！」

「ありがとう！」

俺とアグネスは、手を取り合ってその喜びを共感し続けるのであった。

「旦那……」

が、すぐにローブを引っ張られて現実に引き戻されてしまう。
その犯人は、カチヤであった。

「その娘の親父さん、ちょっと可哀想じゃないか？」

「いえ、アグネスがお世話になっているのです。眼鏡が売れなくても、私は全然気にしませんよ」

とは言いつつも、見てわかるほどガッカリしているので、俺はアグネスの親父さんに悪い気がしてしまうのであった。

「ならば、狩猟と釣りに使う色付きの眼鏡を購入しよう」

「色付きの眼鏡ですか？　初めて聞く商品ですね」

さすがに店内で勝手に感動して何も買わないというのは、バウマイスター伯爵としての沽券に係わる。

というわけで、俺は狩猟や釣りに使えるサングラスを購入しようとした。

昼間の直射日光の下で狩りをするのはなかなかに大変である。

時おり、直射日光が目つぶしとなり、野生動物や魔物に不覚を取ってしまう冒険者も毎年発生しているそうだ。

そこで、直射日光を防ぐ遮光レンズを……技術的には難しいのでサングラスでも十分に使えるはずである……を頼もうとしたのだが、アグネスの親父さんは初めて聞く商品だという。

「色付きのレンズはないのか……」

「はい、見え難くなってしまうので」

「いや、色がついている方が逆によく見えるケースもあるんだ」

俺はアグネスの親父さんに、懸命にサングラスと遮光レンズの理

論を説明した。
余分な日光を防いで眩しさを軽減するので、逆にものが見えやすくなるのだと。

「そのために、レンズに色を付けるのですか？　技術的には可能だと思いますが……工房に聞いてみますね」

親父さんは、眼鏡屋の近所にある眼鏡工房に俺達を案内した。
たかが眼鏡と侮ってはいけない。
様々な技術の塊なので、眼鏡屋は専門の工房を抱えている。
しかも、工房の主はアグネスの親父さんの親戚であった。

「我ら一族は、貴族籍から没落して眼鏡屋と工房になったのですよ。技術は秘伝で、まあ眼鏡屋は幾つかありますけどね」

店舗と工房を一族で経営し、従業員や職人も代々同じ家の人を使って技術の漏えいを防いでいるらしい。
魔道具では不可能な芸当だが、通常の工芸品ではよくある事だ。
そのおかげでアグネスの一族は食べて行けるが、逆に言うといきなり新入りが眼鏡工房に就職する事はできない。

就職しないで一から眼鏡作りを志すのは困難であり、数少ない眼鏡屋と工房が独占状態にあるわけだ。
眼鏡は高価でそれほど数が売れないので、独占していないと生活できなくなるという事情もあるのだけど。

「レンズに色をつけるのですか？」

「ええと……こんな感じです」

俺は、既にできあがっているレンズに魔法で色をつける。
レンズはガラス製であり、レンズ工房はガラス工房でもあった。
ガラスに着色する染料を借りて、魔法でサングラスっぽい色のレンズに仕上げたのだ。

「俺は目が悪いわけじゃないから、レンズに度は必要ないから薄く……」

できあがったレンズを魔法で削って、適当な眼鏡のフレームと合わせて取りあえず完成した。
試しにかけてみると、サングラスっぽい見え方がした……当たり前だか。

「なるほど、目が悪くない方にも需要があるというわけですね。畏まりました。このままでは商品として販売できませんので、こちらで調整をしておきます」

数日後、改良と調整を施されたサングラスはとてもかけやすく、伊達眼鏡とはいえ見え方なども大幅に改良されていた。
さすがは、技術を抱え込んでいる眼鏡工房とでもいうべきか。
俺の即席製造魔法では、やはり限界があるのであろう。

「早速、狩りに行ってみよう」

俺達はアグネスの親父さんにサングラスの代金を支払い、その足で王都近郊の草原に狩猟に出かけた。

「おおっ！　眩しくないぞ！」

真昼間の草原でも目が眩しくなく、俺は順調に狩猟の成果をあげ

る事に成功した。
半ば思いつきの提案であったが、アグネスの実家である眼鏡工房の技術力のおかげでサングラスの実用性が高かった。
「なるほど、そういう利点があるんだな。俺も注文しようかな？」
過剰な直射日光を防いでくれるサングラスに、エルは感心していた。
「私も欲しいかも」
「眩しさを軽減してくれるのはいいな。ここぞという時に眩しくて動きが遅れると困るし。でも、使いどころは限定されるか？」
ヴィルマとカチヤも興味があったようで、試しにもういくつかサングラスを購入して屋敷に戻り、早速自分達でかけてみる。
「似合わないね……」
「ルイーゼ、それは実用性と関係ないじゃないか」
ルイーゼの感想に、カチヤがケチをつける。
でも確かに、サングラスってのは大人の女性じゃないと似合わないわけで、カチヤはこう見えてもう少しで二十歳だけど、可愛らしい容姿のせいでサングラスが全然似合っていなかった。
「似合うようなフレームを注文すべきじゃな」
さすがというべきか、テレーゼのサングラス姿はとても似合っていた。

大人の女という感じがする。

「テレーゼさん、似合いますね」

「エリーゼも、もう少し年を取れば似合うであろう」

とテレーゼは言うのだが、エリーゼは年を取ってもサングラスは似合わないような気がするのは俺だけであろうか？

「イーナさんは似合いますわね」

「カタリーナもね」

イーナとカタリーナはサングラスが似合いそうな感じがしたが、実際に似合っている。

「リサさんは、元のメイクと衣装に戻さないと似合わないかも。私も駄目ね」

アマーリエ義姉さんには、サングラスは似合わないようだ。リサも、元のメイクと衣装に戻してまでサングラスをつけようとは思わないようだ。

「ハルカさん……怖いっすね……」

「私にも駄目なようです」

たまたま屋敷にいたハルカはエルからサングラス姿を怖がられてしまい、外しながら溜息をついていた。

こんな感じで、みんなでサングラスをネタに遊んでいたのだが……。

「ヴェル様、みんな、これって狩猟や釣りの時に直射日光を防ぐものでは？」

「そういえば、そうだった」

ヴィルマによって冷静にサングラス本来の使用法を指摘されてしまうが、出来上がった新商品が制作者の意図とは違う使用方法をされる事は多いので仕方がない。

まあ楽しければいいというわけだ。

「先生、この前お売りした色付き眼鏡の具合はいかがですか？」

数日後のお昼、講義が終わるとアグネスからサングラスの調子を聞かれた。

親父さんから聞いてくるように頼まれたのであろう。

「釣りに使ったけど、水面からの反射が眩しくなくていいね」

「そうですか、よかったです」

俺は、サングラスを釣りや狩猟の時に、必要に応じて使うようになった。

日本の量販店で買えるような気軽な値段ではないけど、ほぼオー

ダーメイド品に近いのでかけごこちなどは悪くない。

「調整は無料ですから、気軽にお店にいらしてください」

眼鏡の調整は無料なのか。

まるで、眼鏡〇ーパーみたいだと俺は思った。

「かけ心地も悪くないし」

「フレームの製造技術も、うちの実家は評判がいいんですよ」

実家で製造、販売した商品なので、それを褒められたアグネスは嬉しいようだ。

「それでですね、実はお父さんがお願いがあるそうで」

「お願い？」

「はい」

お願いとは、俺用に作ったサングラスであったが、これを冒険者用に量産して販売したいというものであった。

「通常の眼鏡とは違って度は入れませんので、レンズの加工にそれほど手間がかからないから安価で販売できると」

他にも、猟師、漁師、釣りや狩猟を趣味とする貴族を中心とした富裕層、この辺にサングラスを売り込みたいようだ。

「別に構わないけど」

「本当にいいんですか？」

俺はレンズに色をつけろと言っただけで、実際の加工はアグネスの実家に任せてしまった。

この程度で特許料の徴収というのもどうかと思うのだ。

「ありがとうございます！」

俺が許可を出すと、あとは話が早かった。

アグネスの工房はサングラスを正式に発売し、その珍しさと用途に多くの客が購入していく。

冒険者、漁師、猟師、狩猟で使うためだと貴族も購入していき、今までは普通の度付き眼鏡をかけていた貴族も度付きのサングラスを注文する人が増えた。

「思わぬ需要も引き出せました。ありがとうございます」

アグネスの親父さんは、俺にいくつかのサングラスを持参してお礼を述べる。

「度付きのサングラスも作れるんですね」

「はい、秘伝のレンズ研磨技術で可能ですよ。ですが、研磨には気が遠くなるほどの時間が必要なので。なるほど、色付きの眼鏡は太陽の光を防ぐからサングラスですか。いいネーミングですね」

それが、眼鏡が異常に高価な原因でもあるそうだ。

ついでに、サングラスは俺が命名した事になってしまった。

前世の癖でサングラスって言っていただけなのに。

「度の調整が必要でなければ、圧倒的に安く販売できます」

「なら、ファッション用でも売れるのでは？」

「新しいフレームのデザインでも、うちの加工技術も活かせますね。試しに作ってみます」

その後、アグネスの実家である眼鏡工房は、サングラスとファッション用眼鏡の販売で売り上げを大幅に伸ばす事に成功する。

同じような技術を持つ他の眼鏡工房にもすぐに真似をされてしまったが、眼鏡の需要自体が増えたので売り上げは落ちなかった。

だが……。

「先生、最近怖い人達がよくサングラスを買いにくるんです」

「怖い人？」

アグネスが言うには、体が大きくて筋骨隆々の大男ばかりが大量のサングラスを購入していくという。

「（まさか、マフィアが？）」

ちょっと興味があったので放課後に眼鏡屋の前で見ていると、確かに筋骨隆々の大男が姿を見せた。

彼らはマフィアではなかった……俺の知り合いで、ある意味マフ

ィアよりも性質が悪い人達だ。

「よう、バウマイスター伯爵。今度狩猟に行くんだが、ここのサングラスが日光の眩しさを防ぐって評判でな。ああ、バウマイスター伯爵が考案したんだっけか？」

エドガー軍務卿が、取り巻きの軍系法衣貴族ばかり連れて買い物にきていたのだ。

つまり、趣味で狩猟をよくする軍系法衣貴族達が、サングラスの購入に続けて来ているのであろう。

確かに、誰が見ても怖い人達だ。

「冒険者予備校で魔法を教えているんだってな。王都にいる機会が多いんなら、今度一緒に狩猟に行こうぜ」

サングラスを購入し、言いたい事だけを言うとエドガー軍務卿は俺達の前から去ってしまった。

「アグネス、侵略や内乱という暴力から国を守る人達だから怖くて当たり前なんだ」

「なるほど。とても勉強になりました、先生」

そう、だから彼らがマフィアみたいに見えても気にしてはいけない。

実際に接してみると、そう悪い人達でもないし。

「しかし、意外と売れたな。サングラス」

「そうですね」

俺は眼鏡屋の売り上げが増えてよかったねくらいの感覚であったが、その効果は俺のあずかり知らないところで意外な広がりを見せていた。

「なあ、アグネス」

「なあに？　お父さん」

「お前は将来、バウマイスター伯爵様と結婚するのか？」

「えっ！　何でそうなるの？　バウマイスター伯爵様は、私達の先生なんだよ」

父親からの想定外の質問に、アグネスは顔を赤く染めながら反論する。

「だが、うちの商売を助けてくれたし、お前は可愛いからそういう話もあるのかなと」

「ないない！　先生の奥さんってみんな綺麗だから！」

とは言いつつも、アグネス自身は内心それもありかもと思い始めるのであった。

更に……。

「なあ婿殿」

「はい、何でしょうか？」

講義の終わりにたまには一緒に昼食でもとホーエンハイム枢機卿に会いに行ったのだが、彼から予想外の苦情を言われてしまう。

「エドガー軍務卿やアームストログ伯爵などの軍務系法衣貴族連中が、城内で新しい眼鏡を試着しながら自慢しておるのだが、陛下から『不気味で怖い』という苦情を言われてな。聞けば、婿殿が考案した眼鏡だという話だが」

「えっ？　それって俺のせいですか？」

「そう言われると、婿殿に苦情を言うのも変か……」

「城内で着用禁止にしてくださいよ」

以後、王城内ではサングラスの着用が禁止された。

第百二十二話　ヴェンデリン、花を贈る。

「先生、サングラスの具合はいかがですか？」

「いい具合で、釣りと狩猟に役立っているよ。いい品をありがとうな、アグネス」

「先生に喜んでもらえてよかったです」

今日も講義が終わった後、俺はアグネスと世間話をしていた。

サングラスで縁ができたし、彼女は魔法使いのクラスで一番優秀な生徒であった。

魔力も現時点で一番多く、講義も熱心に聞き、筆記試験などでも優秀な成績を修めている。

委員長キャラであるが可愛い娘でもあり、俺のお気に入りの生徒になっていた。

生徒を差別するのはどうかと思ったが、先生も人間だから仕方がないし、別に他の生徒達の指導に手を抜いているわけでもない。

と、自分で思う事にした。

前世の学校の先生も、こういう悩みを抱えていたのであろうか？

「先生はこれからどうされますか？」

「少し早く屋敷に戻ろうと思うんだ。奥さん達がいるから」

「それがいいですよ」

俺がアグネスを気に入っている理由の一つに、この娘が物凄くいい子だというのがある。
放課後に遊びに連れて行けとか、この年代の娘なら言いそうな事を言わずに、俺が妊娠したエリーゼ達の元に早く帰ってあげた方がいいと気を使えるのが凄いと思う。
まず前世で同じ年齢だった時の俺は、こんな気遣いなどできなかった。
最新のゲームと、人気の連載漫画の続きと、可愛い女の子の事しか考えていなかったのを思い出す。

「何かお菓子でも買って帰ろうかな？」

「先生って、お土産がほとんど食べ物ですね」

「ははっ、好きだからな」

それもあるが、服やアクセサリーだと似合う似合わないとかサイズの問題もあって、エリーゼ達と一緒に店に行かないと俺には判断できないからだ。
まあ、ファッションセンスがないのは前世からずっとそうなので仕方がない。

「女性への贈り物なら、たまにはお花なんていかがですか？」

「花か……」

さすがは女性という事もあり、アグネスは俺に花を買って帰ればエリーゼ達も喜ぶであろうと助言してくれた。
なるほど、女性らしい視点からの意見であった。

「そうだな、たまには花もいいか」

「そうですよ、女性はお花をもらうと嬉しいものですよ」

大量にバラを買って花束に……鉢植えの高価なランとかでもいいのか？

他にも花は一杯あるであろうし、いざ花を選ぼうとすると悩んでしまうな。

「先生、実はシンディちゃんの実家はお花屋さんなんですよ。有名な専門店で、綺麗なお花が一杯置いてあるんです」

シンディとは、このクラスで最年少の少女であった。

年齢は十二歳で、そういえば俺もその年で予備校に入学したんだよな。

アグネスとも仲がよく、実はクラスで三番目の魔力の持ち主であった。

しかも、三番目とはいっても、アグネスとそう魔力量に差があるわけでもない。

前途有望な新人というわけだ。

黒い髪をオカッパにしているので余計幼く見えるが、実はルイーゼよりも少し背が高かった。

やはり、ルイーゼほど幼く見える娘ってそうはいないのだな、と俺は感じていた。

「シンディ」

「なあに？　アグネス」

年齢は二つ違うが、二人はお互いに気安く口を利いていた。
同じクラスでもあるし、本当に仲がいいのであろう。

「先生が、シンディのお家でお花を買いたいって」

「本当ですか？　ありがとうございます」

シンディは、お客になるであろう俺に嬉しそうにお礼を述べた。

「それで、どのようなお花をご希望ですか？」

「……」

シンディに質問され、こで一瞬、俺の時間が止まってしまった。
よくよく考えたら、俺は大して花の種類など知らないのだ。

バラ、チューリップ、ラン、菊……駄目だ、菊は女性に贈るのに向かない。
俺のイメージだと、葬式とかに飾られていそうだ。
あとは花人形……全然関係ないな。
そういえば、この世界に菊ってあるのかな？
ミズホ公爵領には花人形と共にありそうだが、全然興味がないので知らなかった。
食用菊……はあるかどうか、あとでミズホ公爵に聞いてみよう。
あれ、茹でてからカラシ醤油で食べると美味しいからな。

それにしても、他の花の名前がいまいち出てこない。
マーガレットって、花の名前……人の名前か？
ポインセチア……あれ？　犬の名前か？

そんな具体的に聞かれても困ってしまうので、俺は思わず後ろで静かにしていたエルに救いを求めた。
エルもナンパとかしているくらいだから、きっと俺の知らないところで女性に花を贈った経験くらいはあるはずだ。
「エル、お前ならどんな花を贈る？」
「……チューリップ？」
「さては、お前。俺と同じレベルだな」
エルも碌に花の名前など知らず、俺と大差なかったというわけだ。
「お前、そんなんだからカルラにフラれるんだよ！」
「それは花と関係ないじゃないか！　バラ！」
「バラを知らない人はいないだろう」
やっぱり、エルも俺と大差がなかった。
大半の男がこんなものなのであろうが……。
「ここは同じ女性であるカチヤに聞くか……カチヤ」
「えっ？　あたい？」
なぜかカチヤに話を振ったら、彼女もエルと同じように考え込んでしまった。

「例えば、家族や冒険者の男性から花を贈られたとか？」

「……ええと、ないかな」

カチヤは、人から花を贈られた経験がないという。
明らかに表情が暗くなったので、俺もエルもこれ以上は聞いてはいけないような気がした。
多分、屋敷に帰っても、カタリーナとリサにも聞いてはいけないと思う。

「親父や兄貴が花なんてくれないし。一番もらうのはマロイモ？」

「そうか……」

マロイモは美味しいし女性には大人気だけど、やっぱりたまには花くらいほしいとカチヤでも思うよな。
マロイモだと、いまいちロマンチックじゃないし……。

「こうして、花の名前がわからなくて三人で行き詰っているわけだ」

先生失格かもしれないが、俺の専門は植物学じゃないからな。
気にしないようにしようと思った。

「先生、そういう方は別に珍しくないですよ。そのための、私達のようなお花のプロなのです」

「そうだよな？　なら、シンディに選んでもらおうかな」

「はい、喜んで。ご案内しますね」

こうして俺達は、シンディの案内で彼女の実家である花屋へと向かうのであった。

「先生、ここですよ」

「これは専門的な……」

シンディの実家は、商業街の一角、下級貴族街にも近い大きな花屋であった。

花のみならず、植木やガーデニング関連の商品も扱い、かなり大規模に経営している。

「ただいま」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

店内に入ったシンディを、店員らしき若い男性が出迎える。

お嬢様と呼ばれているところを見ると、かなり大規模に花を扱っている大商家のようだ。

「トーマス、今日はお客さんを連れてきたから私が案内するわね」

「へえ、お嬢様がじきじきお連れしたお客様ですか……って！　バウマイスター伯爵様ですか？」

若い店員は、俺の顔を知っていたようだ。

こちらも驚くほどの大声をあげた。

「今、私達の先生なのよ。先生は奥様達に贈るお花を選ぶから、私が案内するわね」

「わかりました、ここはお嬢様にお任せした方がいいですね」

シンディの案内で、まずは切り花が置いてあるコーナーに向かう。

綺麗な花が沢山置いてある。

バラとか……チューリップもあった。

タンポポはないか……野生の植物だからな。

でも、あれは根っこでコーヒーが作れるんだよな……今度作らせてみようかな。

あとは、よくわからない。

「綺麗だな、エル」

「ああ、綺麗だ」

「綺麗だな、旦那」

そして悲しい事に、やはりエルとカチヤも俺と同じレベルであった。

人に花を贈る生活なんてした事がないから、三人もいて花を見ても綺麗としか言えない。

花の名前なんて、ほとんど知っているはずがないのだ。

「先生は、どのようなお花が好きですか？　お花の名前を知らなくても、自分が綺麗だと思うお花を贈るのも悪くないですよ」

さすがは、商売屋の娘。
シンディは、俺に恥をかかせないように上手く誘導してくれる。
というか、十二歳とは思えないほどシッカリしていた。

俺から魔法を教わる時とかは、もう少し幼い印象を受けていたのだが。

「そうだな……これは？」

俺は、ある花を指差した。
何か見た事があるようなないような……花は小さいけど、これは意外といいのではないかと思ったのだ。

「えっ！　このお花ですか？」

「おかしいかな？　綺麗だと思うけど……」

「先生、このお花はシレネって言いまして、花言葉は『偽りの愛』なんです」

「……」

どうやら、この世界にも花言葉があるようだ。
しかも俺は、花言葉という単語しか知らず、いきなり妻達に贈るのには不向きな花を選んでしまうのであった。

「ヴェル、こんなに沢山ある中から最悪なのを選ぶなよ」

「うるさいな、じゃあエルが選んでみろよ」

「俺も、ハルカさんが喜ぶような花束でも買って帰るかな」

エルも、ハルカに花でも買って帰ろうと思ったらしい。
沢山ある中から、女性に贈るのに相応しいと思う花を選び始める。

「似合わないなぁ……」

「ヴェルには言われたくないわ！」

俺に対して怒りながらも、エルは沢山ある花の中から自分の好みに合う花を選び出した。

「これなんて、変わっていて面白いかも。バラと合わせて花束にするとか？」

「シンディ、これはどうだ？」

俺は、エルが選んだ花の花言葉を聞いてみる。

「このお花はシクラメンですね。花言葉は、嫉妬と猜疑心です」

「お前も駄目じゃないか」

嫉妬と猜疑心とは、女性に贈るのには不向きな花言葉にしか聞こえない。

シクラメンは今名前を言われて、俺も聞き覚えがある花の名前であった。
正直、どんな花かは知らなかったけど。

「なあ、シンディ。そういうのを気にしていたら、花なんて贈れないんじゃないのか？」

カチヤは、じゃあなぜそんな花言葉の花を商品として置いておくのだと疑問に感じたようだ。
シンディに対し、疑問を投げかける。

「女性に贈るのに一番無難で、一番喜ばれるのはやっぱりバラなんですけど、ずっとバラばかり贈られても飽きるじゃないですか。そういう慣れた方は花言葉はほとんど気にしませんけど、初めて贈るお花で冒険をして相手に嫌われるというケースもあるので、そこは、お勧めする店員の力量なんです」

シンディは、カチヤの疑問に淀みなく答えた。

「なるほど、あたいは花言葉よりも綺麗な花がもらえた方が嬉しいかな」

シンディの実家である花屋は繁盛していた。
数名いる若い店員が、客一人一人について色々とアドバイスをしている。
花を買うのはお金に余裕がある人なので富裕層であり、花の値段も現代日本よりも高いから、きめ細やかなサービスというものが必要なのであろう。

定期的に花を購入してくれる金持ちの客が、次も気分よく花を買

いに来てくれるよう、店員達は日々お花の勉強を怠っていないようだ。
鉢植えなどもあるし、花の種も売っているので、育て方についても詳しくないと駄目なはず。
俺は、お花屋さんも色々と大変だなと思った。

「お得意様の好みのお花を覚えるのも、店員のお仕事なんです」

「なるほどねぇ……色々と大変なんだな。シンディも詳しいみたいだけど」

「はい、私には兄と弟がいるのでこのお花屋は継ぎませんけど、子供の頃から手伝いをしていたので」

門前の小僧習わぬ経を読むという事のようだ。
シンディも、店員に負けないくらいお花には詳しかった。

「サービスのよさか……確かに、客が多いからなぁ」

店内には男性の客も多い。
貴族がお付き合いのある女性に贈ったり、大商人らしき人は飲み屋の女性にでも贈るのであろうか？
そう考えると、実はエルよりもブランタークさんを連れてきた方がよかったとか？

「赤いバラとカスミソウを大きな花束に！　四つ作ってほしいのである！」

とここで、俺達は意外な光景を目の当たりにする事となる。

何と、あの導師が花を買いに来ていたのだ。

導師が熱心に教会に通うのと合わせて、あり得ない事象の双璧だと思っていたのに、俺達は目の前の現実に目を見張った。

「導師？」

「おおっ！　バウマイスター伯爵であるか！」

導師は俺達を見つけると、嬉しそうに声をかけてきた。

「花を買いに来たのですか？」

「普段は屋敷を空ける事も多く、妻達には寂しい思いをさせているので、たまには花くらいはというやつである！　まあ、花などよく知らないので、いつも赤いバラとカスミソウであるが」

「導師様、これでよろしいですか？」

「うーーーむ、もう少し赤いバラ花を増して花束を大きくするのである！　こういうのは豪勢な方がいいのである！」

「畏まりました」

意外というと失礼かもしれないが、導師はこのお店の常連のようだ。

店員とのやり取りで、そういう印象を感じてしまった。

しかし、花束も豪勢な方がいいとか、導師の性格がよく出ていると思う。

「大分増量いたしましたが」

「おおっ！　これぞ花束であるな！　では、某はこれで！　エリーゼ達に花を贈るとは、バウマイスター伯爵もやるではないか！」

俺は導師に褒められたが、何となく釈然としない気持ちを抱いてしまった。

そして導師は、購入した花束を魔法の袋に仕舞うと、颯爽と屋敷へと戻っていく。

その手慣れた様子に、俺も、エルも、カチヤも、物凄い敗北感を感じてしまう。

ブランタークさんやブライヒレーダー辺境伯なら、そんな感情は抱かなかったかもしれない。

あの、花とは一番縁遠そうな導師だからこそ、余計にそう感じてしまったのだ。

「ヴェル、なぜか物凄い敗北感を感じたような……」

「あたい達って、導師様以下……」

「それを言うな！　カチヤ！」

「だって事実じゃないか！　エルヴィンだってそうだろう！」

導師には大変失礼だが、この件に対する俺達への心のダメージは深刻であった。

そして、もう一つの試練が俺達を襲う。

「お嬢様、導師様が赤いバラをすべて購入されていかれたので品切

れです」

一番無難な赤いバラの品切れという事態に、花に詳しくない俺達は更に追い込まれる事となった。

「真っ赤なバラがないというのは困ったな……」

導師よって赤いバラを買い占められてしまうという事態に、俺達は困ってしまった。

陳腐だとか、マンネリだとか言われても、真っ赤なバラを贈られて嬉しくない女性はいないからだ。

「こうなれば……」

「こうなればどうするんだ？　旦那」

「専門家に一任する」

そう、俺は伯爵様なのだ。

何かを成す時に、人の力を借りる事は悪ではない。

むしろ、これが正しい貴族の姿であった。

決して、赤いバラが売り切れてネタに詰まったとかではない。

「はい、任せてください。でも、次からは先生も贈りたいお花とかを考えておいてくださいね」

さすがは手馴れているというべきか、シンディは上手く花を組み

合わせてエリーゼ達に贈る花束を作ってくれた。

「……先生の奥さんって、多いんですね……」

それは、アマーリエ義姉さん、テレーゼ、リサの分も混じっているからであろう。

でも、伯爵様ならそう珍しくもないのだが。

奥さんに花を贈るだけでも物凄い出費になっていて、貴族って存在するだけでコストが発生するんだなと、俺は妙に感心してしまった。

「また買いに来るよ」

「はい、定期的に奥様達に贈ってさしあげると喜びますよ。女性は、お花が大好きですから」

それは、俺でも何となくわかった。

女性は花が好きな生き物で、なぜ花がいいかというと枯れてなくなってしまうからだと言っていた人がいたような。

アクセサリーほど重くはなく、また贈ってもらえるかもという期待感もあるのかもしれない。

「シンディにはお世話になったから、ここは先生がお花を贈ろうかな」

俺達だけだったら花を選ぶ事すらできなかったであろうし、お礼とチップも兼ねてシンディにもお花を贈る事にした。

女性に贈る花を選ぶ訓練にもなり、一石二鳥でもある。

「そうだな……これなんてどうかな？」

俺が選んだのは……ユリに似た花。
そうそう、俺でもユリはわかったよ。
急に知っている花の種類を全種類とか言われても、そう都合よく全種類を思い出せるわけでもないからな。
今、ようやく思い出したけど。

「今日はありがとうな、シンディ」

「はい、奥様達によろしくお伝えください」

俺はエリーゼ達に贈る花束を購入し、急ぎ屋敷へと戻るのであった。

「というわけで、エリーゼ達に花を買ってきました」

「そのまま渡せばいいのに、事情を話してしまうのがヴェルらしいね」

「いやあ、俺に気の利いた言葉とか難しくてさ」

奥さん達に花束を渡すと、ルイーゼからもっと格好良く渡せばいいのにと言われてしまうが、花を贈られたこと自体は嬉しかったようだ。
花を見ながら、エリーゼ達とわいわい話をしている。

「赤いバラがありませんけど、他のお花を上手く組み合わせてあって綺麗ですね」

エリーゼも、とても嬉しそうだ。

やはり、女性は花をもらうと嬉しいというのは、本当のようであった。

「赤いバラって、やっぱり定番なのかな？」

「はい、一番人気があって、一番わかりやすいので」

この世界でも、やはり赤いバラは最強なようだ。

「それがさ……」

俺が、導師が赤いバラを全部買い占めてしまった話をすると、実際にそれを見ていたカチヤと、エリーゼを除き、みんなが驚愕の表情を浮かべた。

「えっ？　導師が？」

「またまた、導師に似た他の誰か……あんな人、見間違えるはずがないか」

「似合わない」

「似合わないとしか言えませんわね……」

イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、カタリーナの反応は俺の予想の範囲内だ。

導師を知る人からすれば、きっと誰だってそう思うはずなのだから。

「でもよ、実際にあたいも見たし、話もしたんだから」

「いや、それほどおかしい事か？」

「おかしいというか、似合わないって方が大きい」

「それはそうかもしれぬが、ああ見えて導師は女子供には優しいのじゃぞ」

テレーゼは、子供の頃に親善訪問団で訪れた導師に我儘を言って各地に遊びに連れて行ってもらった時の事を話す。

「下手をすれば厳罰物の行為なのに、導師は妾の我儘を聞いてくれたからの。巻き込まれたブランタークは、最初顔を引き攣らせておったがの」

可哀想にと、俺はブランタークさんに思わず同情してしまう。

「そうよね、私もたまにお話をするけど、お優しい方だと思うわ」

アマーリエ義姉さんもテレーゼと同意見で、ある程度年齢がいっている女性は導師は女性に優しい人だと思っているようだ。

経験を重ねて、男を見る目が鍛えられているというやつであろうか？

「エリーゼは驚かないな」

「はい、昔から伯父様はそういう方ですから」

導師は新婚当時から、定期的に奥さん達に花を買って帰るのが習慣になっているのだと、エリーゼがみんなに教えてくれた。

「まあ、結局あれだな。俺達も導師くらい女性に気を使えるようにならないと駄目だと」

「そうかもな」

エルの的確すぎる指摘に、俺は思わず納得してしまうのであった。そしてその頃、シンディの実家である花屋では……。

「シンディが、バウマイスター伯爵様からチグリジアを贈られたそうだ」

花言葉など何も知らないバウマイスター伯爵であったが、そんな事は知らない花屋の店主兼オーナーであるシンディの父親は、その事実を知って大喜びしていた。

「凄いですね、オーナー。シンディお嬢様がバウマイスター伯爵様の奥さんですか」

「何しろ、シンディにチグリジアを贈るくらいだからな。シンディがバウマイスター伯爵様の妻になれば、うちもバウルブルクに支店を出せるな」

「それはいいですね」

シンディの父親は、長年花屋に勤めているベテラン店員達と大喜びしていた。

チグリジアの花言葉は、『私を愛して』である。

二人は、自分の娘がバウマイスター伯爵から求愛されたと思っているのだ。

勿論、これは盛大な勘違いである。

「うちは庶民だからな。バウマイスター伯爵様とシンディの子供がバウルブルクの花屋のオーナーになり、バウマイスター伯爵領に作られる他の町の花屋も経営する。そうだな、こっちの本店はカーチスの息子に任せて、お前はシンディの下で実質的な経営と支店網の構築を担当するのだ」

「夢が広がりますね」

そうすれば、今までは王都に一店舗しかなかったこの花屋の商売も大きく広がっていく。

「バウマイスター伯爵領には、珍しいお花も多いそうで。これも商えれば、商売も広がりますね」

「カーチス、いい事に気がついたな。そうだ、これは大きなチャンスなんだ！」

シンディの父親とベテラン店員は将来への希望に夢を膨らませていたが、当のシンディはバウマイスター伯爵がそこまで考えてチグ

リジアを贈っていないのを知っていたので、予想外の展開に動揺するばかりであった。

「（お父さん！　カーチスさん！　違うの！　先生はそこまで考えて私にチグリジアは贈っていないから！）」

シンディは父達のあまりの喜びように、それが違うと言えなかった。

物凄くガッカリするのがわかっていたからだ。

「（何とか私の卒業までにお父さんに違うって言わないと……でも、先生のお嫁さんもいいかも……）」

同時に、バウマイスター伯爵の奥さんになれれば嬉しいとも感じていたので、止めに入れなかったという理由があったのも、他の人には秘密であった。

第百二十三話　ヴェンデリン、再び飲食店にテコ入れをする。

「さあて、飯だ飯」

「エル、今日は何を食べに行く？」

「実際に行ってみてから、その時の気分で？」

「それもそうだな」

俺は週に三日ほど、王都にある冒険者予備校で魔法使いクラスの臨時講師を続けていた。

講義は午前中で終わり、生徒達は午後から自由行動となる。

昼飯を食べてから、自分で魔法の練習をするも、アルバイトで狩りに出かけるも、それぞれの自由になっていた。

俺達は、王都で昼食を食べてから午後の予定をこなす。

エリーゼ達が妊娠してしまったので領内の開発が多いけど、その前にわざわざ外で昼食を食べるのは、外食を楽しんでいるからだ。

バウマイスター伯爵領の屋敷に戻ればすぐに調理人が昼飯を出すし、それは材料にも調理にも拘っていて美味しい。

でも、たまに外出した時には、外食したくなるのが心情だ。

今まで、あまり美味しくない店にも多数当たってきたけど、それも穴場的なお店を見つけた時に喜びを倍増させるスパイスと言った感じだな。

「旦那、ちょっと予備校から離れた店にしようぜ」

「カチヤは、その辺に詳しいのか？」

「全然、何も知らないところの方が面白いじゃん」

「おっ、意外とギャンブラーだね」

「冒険者なんて、案外趣味が少ないからこんなものだって」

俺、エル、カチヤの三人で、冒険者予備校から少し離れたエリアを探索し、何か食事が取れそうな店を探す。

「当たりのお店はなさそうだな」

「それはわからないぞ、エル」

予備校の傍にある生徒向けの飲食店は、評判のいい老舗と、度々店が入れ替わる微妙な味のお店に分類される。

導師お勧めのモツシチューのお店は、常に混んでいる老舗というわけだ。

新しいお店も頑張っていたり、逆に全然駄目だったりもした。

後者は、人が多い予備校近辺で出店すれば儲かるだろうくらいにしか考えていないのであろう。

でも、そういう店は最初は試しに利用する客が多いけど、すぐに閑古鳥が鳴いてしまう。

どの世界でも、飲食店の経営というのは大変なようだ。

今回少し遠出したのは、ある程度予備校周辺の飲食店は回ったの

で、新しい穴場的なお店を発見するためであった。

「旦那、あのお店は？」

カチヤがその地域のメインストリートから一本裏道に入った場所に、こじんまりとしたレストランを見つけた。
店はよく掃除されているようで汚いという印象はないが、とにかく目立たない店という印象だ。

「こういうお店が、隠れ家的で意外と美味しいかも」

「それにしては、その隠れ家を目指す客がいないな」

エルは、そのレストランに一人も客がいない事を訝しがった。
確かに、隠れ家的なお店はちゃんと客がいるからな。
でなければ、隠れ家的なお店だと認識される前に潰れてしまうし。

「試しに食べてみればいいじゃん」

「カチヤの言うとおりだ。虎穴に入らずんば虎児を得ずだ」

「旦那、そこまで大げさじゃないと思うけど。駄目ならもう一軒いけばいいんだし」

「そうだな、もう一軒いけばいいんだよな」

穴場的なお店は、自らの足で探さないといけない。
導師などは今でもたまにそれを実行しているようで、彼は王都中の美味しいお店に敏感だ。

『導師は貴族様なのに、庶民的なお店にばかりに詳しくてな。これがまた、どの店も美味しいんだわ。ある意味、感心するよ』

以前にブランタークさんが、俺達に導師の庶民向けグルメへの傾倒度合いを話してくれた事がある。

導師は、俗にいうところのB級グルメ探索が趣味のようだ。

あの導師がお忍びで飲食店を探す……あんなに目立つ人がお忍びは無理か。

見かけても、あえて誰も突っ込まないんだろうな。

多少治安の悪い裏路地とかに入っても、導師に恐喝や強盗をおこなう犯罪者なんていないだろう。

さすがに彼らも、死にたくはないだろうし。

「腹が減ったから、入ってみようぜ」

「いらっしゃいませ」

エルに促されて三人でレストランに入ると、すぐに若い店主らしき人物が出迎えてくれた。

黄色に近い金髪が特徴の、二十代前半くらいに見える若い男性だ。

「ご注文は、いかがなさいましょうか？」

「そうだな、このお店のお勧めを三人前」

「かしこまりました。お勧めを三人前ですね」

初めてのお店に入った時、俺達こういう風に注文する。

いい店なら一番人気のメニューを出してくれるし、悪い店だとわ

ざと一番値段が高い料理を出したりする。
お店の判別にとても役に立つ方法なのだ。

「お待たせしました」

十分ほどで料理が出てくるが、メニューは大きな猪肉の塊入りのシチュー、パン、サラダという特に捻りもないものであった。

「さあて、食べるか」

早速料理を食べ始めるが、普通に美味しかった。
シチューは味もよく、肉の下処理も完璧で、よく煮込んであって柔らかい。
パンもサラダも普通に美味しかった。

「美味しいじゃないか」

「あたいも、普通に美味しいと思うな」

「……」

「どうしたんだ？　旦那」

確かに、食べると普通に美味しい。
美味しいんだが……俺はこの店に違和感を感じ始めていた。

「お客様、お味の方はいかがでしょうか？」

「美味しいですよ」

「美味しいと思うぜ」

俺が考え込んでいると店主が料理の味を聞きにきて、エルとカチヤは正直に料理を美味しいと答えた。
本当に美味しいのだから、間違ってはいないのだと思う。

「それはよかった……あのお客様？」

若い店主はエルとカチヤから美味しいと言われて喜んでいたが、すぐに俺の態度が気になったようだ。
俺に声をかけてきた。

「ヴェル、何か引っかかる点でもあるのか？」

俺が感じた違和感は、なぜこのお店は美味しいのに客がいないのかという点に移っていた。
今は時間外ではない。
どこもお昼時で、本来であれば混んでいないとおかしい時間帯なのだから。

「うーーーん、今、何かに気がつきつつある」

「それは何なのでしょうか？　お客様」

店主は、俺が言いたい事に物凄く興味があるようだ。
身をせり出してきた。

「（前に、こういう店に……そうだ！　あのお店だ！）」

俺が前世でしがない商社マンをしていた頃、顧客にあるお店があ

った。
その店主は有名な高級ホテルで料理長までしていた人物で、彼は自分の城を持とうと独立を果たしたのだ。
本当にその業界では有名人であったので、俺も他の取引先に頼まれて高価で質のいい食品を降ろすようになった。

試食もさせてもらったが、料理は本当に美味しかった。
誰もがそのお店は成功すると思ったのだが、実際には一年ほどで潰れてしまった。
それはなぜなのかと言うと……。

「調理技術も味もいいと思う。でも、リピーターが来るかな?」

料理は美味しいがありきたりなメニューであるし、ただ美味しいだけで何か特徴があるわけでもない。

「導師が教えてくれたモツシチューのお店は、モツを長時間煮込んだシチューが売りだった」

使ってる肉は、モツだからこのお店の物よりも質は低いであろう。
それでも、モツ肉を丁寧に下処理し、長時間煮込んで味に特徴を出している。
材料費を節約して手間をかけ、美味しい物を安く提供していた。
だから予備校の生徒達にも大人気で、夜には予備校の関係者や、卒業生が友人や家族を連れて食べに来るそうだ。

「予備校を卒業しても、たまに食べたくなる味。だから、リピーターで店は常に混んでいる。だが、この店は……」

料理を食べて、『美味しかったね』で終わってしまうわけだ。

「この店を出て一日も経てば、このお店の事を忘れてしまうんじゃないかな？」

「お客様、それはつまり……」

「調理技術はいいと思うけど、料理がオーソドックスすぎて特徴がない。だからリピーターが生まれないで客が増えない。このお店は立地もよくないから、わざわざこのお店に来たくなる理由がないと辛いよね」

「くっ……」

俺の指摘を聞いた若い店主は、その場でうなだれてしまった。
自分でも身に覚えがあったのであろう。

「旦那、言いすぎじゃないか？」

「それはそうなんだけど……」

ここで、『とても美味しいのに、お客さんが来ないのはおかしいですね』とお茶を濁すのは楽なのだ。
多分、この店主は多くのお客さんに同じ質問しているはず。
それでも店の客が増えていないのは、そういう無難な解答しか客から聞いていないからであろう。

家族や友人ならともかく、たまたま入った店の店主に耳が痛い忠言をするのは勇気がいるのだから。

「いや、旦那。それはあたいにもわかるんだけど……」

「何だよ？　カチヤらしくもない」

いつもサバサバと言いたい事を言うカチヤらしくない態度を、俺は疑問に思ってしまう。

「お兄さん、今日も材料を持ってきたよ……って！　先生!?」

「あれ？　ベッティか？」

なんと、この若い店主は俺の生徒であるベッティの兄であるようだ。

それにしても、偶然とは恐ろしい。

客がいないのにいい肉を使っているなと思ったが、肉類は優秀な魔法使いである彼女から入手していたらしい。

彼女ほどの実力があれば、そう難しい話でもないからだ。

「カチヤは、それを見越していた？」

「そこまで読んでないけど、耳に痛い忠告をするって事は、親身になって協力しなければいけない可能性が高くなるわけで……生徒の親族なら余計にそうなるよなぁ……と」

「確かにそうだ……」

俺は、この客が入らないで困っているレストランの、なんちゃってコンサルタント業に再び手を染める事になるのであった。

「先生、見捨ててあげてください」

「ベッティ！」

ところが、レストランの店主の妹であるベッティはこちらの予想を裏切る発言をした。

自分の兄が経営するレストランを潰してもいいと言ったのだ。

「さすがにそれは、お兄さんに酷くないか？」

レストランに客を呼ぼうと懸命に努力しているお兄さんに対し、『それはないのでは？』と、俺はベッティを窘めてしまった。

「そうだぞ！　バウマイスター伯爵様の言うとおりだ！」

店主も、妹のベッティに怒っている。

「だって、実際にお客さんが入らないから。お兄さんは雇われで調理人をした方が生活が安定するもの。今は私が狩猟で得た肉を分けているけど、私が予備校を卒業したら他所から仕入れないと駄目なんだよ。お兄さんには料理人としての独創性が皆無なんだから、今の内に諦めた方がいいって」

「ぐうの音も出ない正論だな」

前言を覆し、俺はベッティの味方に回った。

彼女はお兄さんのために、嫌われるのを覚悟してそこまで言っているのだという事に気がついたからだ。

「妹さんが正しいよな」

「いい娘だな。あたいでも、ここまで兄貴に言えるかどうか……」

「言ってたじゃん。トンネルの件で」

「エルヴィン、そこは話を蒸し返さないでくれよ。あの件は、あたいなりに反省はしているんだから……」

エルとカチヤもベッティの味方に回り、これでレストランは閉店した方がいいという意見に纏まった。

ヴェンデリンのコンサルタント業第二回目は、これで終了だ。

借金生活にならない内に、自営業から雇われに移行して生活を安定化させる。

面白くない結末だが、それも仕方あるまい。

「というわけで就職しなさい。腕はいいからアルテリオ商会に紹介してあげるから。上手くやれば、出世して幹部クラスになれるかもよ」

「お兄さん、その方がいいって。アルテリオ商会っていえば、色々な食べ物屋さんを沢山経営していて、物凄く儲かっているって聞くし」

そうそう、将来有望な幹部候補生を紹介すればアルテリオさんにありがたがられ、回りまわって俺の利益にもなる。

俺の可愛い生徒の兄が借金で首が回らなくなって、妹に迷惑をかける未来も防げる。

一石二鳥のアイデアというわけだ。

決して、俺の利益のためだけではない。

「じゃあ、そういう事で」

「待ってください！　私はこのお店を辞めませんよ！　ベッティ！　このお店は亡くなった親父の大切な形見じゃないか！　それを閉めるなんてできない！」

「ヴェル、どう思う？」

「亡くなった親の形見か……」

そこは少し考慮して、考えをニュートラルな方に戻すかな。

最近、そういうハートフルなお話に飢えていたところだし。

「ベッティが産まれたばかりの頃に亡くなった母さんの思い出も、このお店には残っているんだぞ！　そう簡単には閉店なんてできない！」

「ベッティ、本当なのか？」

「はい……」

ベッティに詳しい事情を聞いてみると……昔ある所に、自分の店を開こうと考えていた若い夫婦がいました。

夫も妻も懸命に働いて店を手に入れ、店は立地が悪いにも関わらず普通に生活できる程度には利益も上がっていました。

ところが、ここで人生の転機が訪れます。

妻が二人目の子供を産んでからすぐ、病気で亡くなってしまった

のです。
残された夫は、二人の子供を育てながら懸命に店を切り盛りしました。

「いい話だな」

ドラマとかでありそうなお話である。

「問題はここからですよ」

夫一人になっても、店の経営は順調でした。
じきに上の息子が大きくなり、自分が店を継ぐと宣言しました。
小さい頃から父親の手伝いをしていたので、彼には自信があったのです。

「お父さんは、ちゃんと他のお店で修行してから戻って来いって言ったんです。親である自分が教えると甘えが出るからって」

「物凄く正しいお父さんだな」

「そうですよね？　先生」

流行っていた飲食店が突然駄目になる理由の一つに、駄目な後継者の存在がある。
先代の評判にあぐらをかいて努力せずに味が落ち、次第に客足が遠のいて潰れるというパターンだ。
商社マン時代から、その手の話はいくらでも聞いていた。

「一から新しい店を繁昌させるよりも圧倒的に楽なのに、潰すのがいるんだよな」

貴族にも家を没落させるバカボンボンが定期的に出るので、あまり人の事は言えないのだが……。

「お父さんもそれを怖れて、お兄さんを他のお店に修行に出したんです」

ところが、ここでまたトラブルが発生します。
店主である夫も、病に倒れてしまったのです。

「急遽、新店主として戻ったという事かな？」

「病床でお父さんはお兄さんに言ったんですよ。まだ戻って来るなって」

中途半端な状態で修行を終わらせるな。
店は賃貸でなくて所有物件なんだから、ちゃんと修行を終えてから戻ってこい。
亡くなる寸前に父親がそう言ったにも関わらず、息子は勝手に修行先を辞めてレストランの経営を始めました。
当然次第に客足が遠のき、今では食材の仕入れ代金にも事欠き、妹が狩猟で得た肉が頼りになっている有様というわなわけでした。

「うわぁ……十歳近くも年下の妹に頼りきりって……ないわぁ……」

「兄貴としてのプライドはねぇのかよ」

過去にエルは、嫌な兄達のせいで酷い目に遭ったりもしている。
カチヤの兄は、妹に金銭的な負担など与えた事がない。
なので、妹に頼りきりの癖に、思い出の店などと抜かしているべ

ッティの兄に露骨な嫌悪感を向けた。

そういう事を言っていいのは、自分だけで何とかできている人だと思っているからであろう。

「だって、ここは親父の店で！」

「だから、親父さんは修行を終えてから店を開けって言ったんだろう？　この店は賃貸じゃないから家賃はかからない。売り上げもないから税金も物凄く安い。いつでも店を再開できるように維持しながら、修行を続ければよかったじゃないか」

「それは……」

エルの正論に対し、ベッティの兄は何も言えずに黙り込んでしまった。

年下に勇み足を指摘されてショックなのであろう。

「今さら、元の店に戻れないものな」

「はい、今さら戻れませんよ……」

散々に自分の駄目な部分を指摘されたベッティの兄は、心をへし折られたようで萎れた菜っ葉のようであった。

今さらながら、自分の駄目さ加減に気がついたようだ。

「先生、見捨ててくれて構いませんよ。お兄さん、甘やかすと駄目になるので」

とは言いつつも、ベッティはお兄さんが心配で堪らないようだ。

その表情は、何とかしてほしいという風にしか見えなかった。

「これも乗りかかった船だ」

ベッティの兄が、この場所で飲食店を経営して生活できるようにする。

駄目元だと考えた俺は、お店の改善に乗り出す事になった。

「バウマイスター伯爵様、新しい商売を考えたって？」

「新しいかな？　既存の商売を組み合わせたみたいな？」

翌日、ベッティの兄のお店は改装工事中であった。

俺がそれを頼んだアルテリオさんは、果たしてどんなお店が出来るのか興味津々のようだ。

「しかし、ちょっと立地が悪くないか？」

「立地の悪さは、他の要素で補いますよ。酒を出しますし」

「居酒屋か？　居酒屋って、経営が難しいだろう」

そう、居酒屋の経営は難しい。

出す料理の数が多く、それが結構な手間になるからだ。

客がこなければ食材のロスが増え、それが更に経営を圧迫する。

個人経営よりも企業が経営した方が儲かるのには、こういうカラクリが存在した。

『無理というのはですね、嘘吐きの言葉なんです。途中で止めてしまうから無理になるんですよ』……おっと、他の理由を追及してはいけないか……個人で居酒屋を経営するには力量が必要というわけだ。

「カウンター席を増やしているのはそのせいか？　椅子もなしかよ」

「立ち飲み形式にしますからね」

俺が考えているのは、いわゆる立ち飲み屋形式の飲食店であった。利益率が高いお酒とそれに合うツマミを出し、仕事帰りに一杯やってから家に帰る人目当ての経営である。

「ツマミを一～二品に、酒も多くて三杯くらいまで。立ち飲みにしているのは、回転率を向上させるためですよ。本格的に座って飲むのは居酒屋に任せてしまいましょう」

本格的に飲みたい人達は、本業の居酒屋に任せてしまう。

ここは、日本だと新橋にあるような立ち飲み屋にしてしまう予定だ。

「ちょっと飲んで帰る形態だから、立地はそこまで気にしなくてもいいのか」

「立地が悪いところの方が逆にいいんですよ」

仕事を終えて家に戻る前に短時間で一杯飲む、休みの日に昼間からちょっと一杯。

こんなケースを想定してなので、逆に人通りが多い場所にない方がいいのだ。

「常連が増えれば、立地の悪さなんてハンデにもなりませんよ。常連が知り合いと飲みに来れば、これで客が増えますから」

「なるほどな」

改装工事は、調理スペースを狭めてカウンター席を設置する。テーブルも置くが椅子はなしで、仲間同士が数名で談笑しながら飲めるようにした。

椅子がないのは、やはり客の回転率を上げるためだ。

「長居して粘る客は、居酒屋に任せてしまいます」

「なるほど、客層を絞り込むんだな。で、俺の出番は？」

「メニューですよ」

酒が進む一品料理を、これをなるべく種類を増やしたかったのだ。アルテリオさんが経営している飲食店や、販売している調味料を活用する。

「豆腐の冷奴、枝豆、野菜の漬物、各種サラダ、から揚げは色々と作れるな。天ぷらもいけるか？」

他にも、串揚げ、鳥の照り焼き、焼き鳥は……竹串が実はミズホ経由でないと手に入らないので高価だから……今は串なしで皿に盛

って誤魔化すしかない。
タレと塩味で、色々な部位を出せばメニューが増えるであろう。

「魚もほしいかも」

「伯爵様、魚は意外と高くつくぜ」

「ツテはあるんですよね。相談してみます」

俺が相談をしたのは、以前にウナギの蒲焼きの調理方法を伝授した『リバー』の店主であった。

「バウマイスター伯爵様、お久しぶりです」

「ウナギ王だ！　ウナギ王がいる！」

「バウマイスター伯爵様の言うとおりに、そんなあだ名になってしまいましたね」

リバーの店主は今ではいくつかの支店も出していて、王都ではウナギ王と呼ばれるまでになっていた。

「ウナギは難しいですけど、川魚料理なら材料を提供可能です。私は川魚漁師達とツテがあるので、仕入れも少し安くなりますよ。そうですね……メニューは……」

定番の小魚と川エビのから揚げ、フライや天ぷらにしてもいいであろう。
甘露煮や南蛮漬けにしても、酒にはとても合うはずだ。
鯉は鯉こく、甘煮に、ナマズは蒲焼きにしてもいいかもしれない。

全部作ると手間がかかるので、ある程度完成したものを仕入れれば大丈夫だ。

「メニューが大分増えたな、バウマイスター伯爵様」

「これで、店主を調理に慣れさせてから再オープンですね」

「そして、上手く行ったら王都の別の場所に同じ形態でオープンさせるんだな」

「そういう事です。バウルブルクにもオープンさせますよ」

「また儲かってしまうな」

「でしょう？」

俺とアルテリオさんは、肩を叩き合いながら笑い合った。

「なぜか私の意見とか、心情とかそういうものが無視されているような……」

「ベッティのお兄さんよ。亡き父の思い出だか何だか知らんが、採算が取れてない飲食店なんて意味がないから。妹に肉を融通してもらっているなんて聞いたら、草葉の陰で亡くなった親父さんが泣いてると思うけどね。自分なりの飲食店をやりたかったら、まずは金を稼ぐ事だ。それとも、ベッティは優秀な魔法使いになるから、死ぬまで妹に集って、中途半端な飲食店経営で一生を終えるか？」

ベッティの兄がまだグチグチと言っていたので、俺は正論で撃破

してやった。
　このままだと前途有望な妹の足を引っ張りかねないから、俺はベッティの兄に協力しているのだと。

「それも楽といえば楽だけどね」

「ううっ……私にも兄としての意地とプライドがあります。腕だって悪くはないんだ！　このお店を成功させてから、またレストランを！」

「料理を出す方法もあるけど」

「本当ですか？」

「これまた本当に」

　昼間から店を開けるのだから、限定でランチメニューを出せばいいのだ。
　立ち飲み屋のメニューの調理も忙しいであろうから、メニューは日替わりにして一品か二品に絞る。
　こうすれば、忙しいであろうが無理ではない。

「例えば、こんな感じに」

　限定昼飯の試作も行わせていたが、これは既存の物の再利用でしかない。
　先日、ベッティの兄が出したシチューを改良したものであった。

「ソースはほぼ完成している。ここに、ベッティの狩猟の成果に頼らず、安価なスジ肉や切り落とし肉などを大量に煮込んでシチュー

を完成させる。大皿にご飯と共に盛って、脇にピクルスにした野菜などを添えるわけだ」

丁寧に皿を分けず、一つの皿に全部盛ってしまう。

パンだと駄目だが、ご飯にしておけばビーフストロガノフライスやハヤシライス風になるから問題ない。

野菜は栄養バランスのためと、ピクルスにしておけば日持ちがして食材にロスが出にくい。

ピクルスを単品で、酒のツマミに出してもいいだろう。

「これで値段は七セントにする。水を無料で出して、果汁水がほしい人は一セントプラスだな」

果汁は酒を割るのにも使うので、これも食材のロスを減らせるわけだ。

大量仕入れで卸値を下げる効果もある。

「皿が一つだから洗うのも楽だしな。こういうメニューを考えながら、料理人としての独自性を磨いてくれ」

「はいっ！　頑張ってみます！」

「先生、ありがとうございました」

ここまでしておけば、大分勝率も高いはずだ。

俺達は、あとの事はアルテリオさんに任せて普段の生活に戻った。

そして暫くして……。

「先生のおかげで、お兄さんのお店が繁昌しているんです。本当にありがとうございました」

色々と厳しい事を言っていても、ベッティはお兄さんのお店が気になっていたのであろう。
お客さんが入るようになったと、笑顔で俺達に報告してきた。

「それはよかったな」

「はいっ！」

アルテリオさん経由でも話は聞いていたのだが、ベッティのお兄さんの店は初日から大盛況らしい。
昼間に限定で日変わりランチメニューを出し、あとは夜中まで立飲み屋として経営する。
アルテリオさんはいいアイデアだと、王都の他のエリアで実験店舗を出す予定らしい。

「お兄さんの借金も早く返せそうです」

店の改装費、新メニューの開発費、再オープンに必要な費用はですべて借金になっていたが、返す目途が立ったとベッティが俺に報告する。
立ち入ってしまった関係で、ベッティの兄に金を貸したのは俺だからだ。

『お兄さんが返せないと、私が返済をしないと駄目だから頑張って』

大した金額でもないのだが、ベッティは自分が借金の保証人になると言って実の兄を脅していた。
しっかりしているとも言うが、実は結構怖い娘なのかもしれない。
少し抜けている兄のせいで、しっかりせざるを得なかったのかも

しれないが。

「エルヴィン、旦那、昼飯を食いに行かないか？」

「そうだな、行ってみようか」

俺は、エル、カチヤ、ベッティを連れて路地裏の店に向かうと、店は多くの客で賑わっていた。

時間は昼なので、客の大半がランチメニューを食べていた。

中には一部、昼からツマミと酒を楽しんでいる老人などもいたが。

「いらっしゃいませ」

「混んでいるからな。新しい人を雇ったのか」

店には、若い女性従業員がいた。

店長であるベッティのお兄さんが調理を担当し、注文を取ったり、料理や酒を運んだり、会計をするのがその女性の役割のようだ。

「あら、ベッティちゃん。こんにちは」

「こんちは、ローザさん。今日はバウマイスター伯爵様と様子を見に来ました」

どうやら、この若い女性従業員はベッティと知り合いらしい。

二人は、仲よさそうに話をしている。

「お兄さんが迷惑をかけてすいません」

「本当にどうしようもない男ね。妹さんにこんなに迷惑をかけて」

ローザという名の若い女性従業員は、調理で忙しいベッティの兄を見ながら溜息をついた。

「ベッティ、知り合いか？」

「ローザさんはお兄さんと幼馴染なんです」

「その縁でここで働く事になったのか」

「はい、バウマイスター伯爵様にはお世話になりっ放しで、何とお礼を申し上げたらいいか」

ローザという女性は綺麗で、接客や他の仕事も完璧にこなした。
俺への挨拶を見ても、とても有能な人のようだ。

「ローザさん、あんなしょうもないお兄さんなので、もし今度しくじったら見捨てて構いませんから」

「大丈夫よ。今度はちゃんと首根っこ掴んでおくから。バウマイスター伯爵様、借金も必ず返済いたしますので」

ローザさんの方が雇われているはずなのに、力関係は完全にローザさんの方が上のようだ。
まあ、世間ではよくある話なので気にしない事にする。
店が繁昌して、借金が返済されればいいのだから。

「はあ……あの、ローザさんはベッティのお兄さんとはどういう関係で？」

「幼馴染ですね。いまいち頼りないですけど、悪い人ではないので」

「お兄さん、ローザさんと結婚の約束までしていてあの様だったんですよ」

「何だと……」

また出てしまった。

料理はそこそこ上手いが、切羽詰まって妹に食材の供給を頼むような駄目な男に結婚を約束した幼馴染がいた。

世間とは、本当に不公平である。

そんな奴に幼馴染兼婚約者がいるなんて……果たして神は本当に存在するのか？

だが、ここで以前のように無意味に叫んでも、俺の主張が認められるわけではない。

他の手で、あの不届き者に罰を与えておくべきでろう。

「もし失敗したら、お前は鉱山送りだ！」

彼は調理中のベッティの兄に、大声で発破をかけた。

「ひぇーーーっ！　頑張ります！　必ずお金はお返しします！」

俺はベッティの兄を厳しく激励するように見せかけて、リア充への反撃をおこなった。

そう、これは嫌がらせじゃない。

抑圧されたリア充でない人達の心の声を、俺が代表してリア充に叩きつけただけなのだから。

これは正義なのだ！

「わかったら、日替わり四人前だ」

俺はベッティの兄に素早く注文をすると、空いているテーブル席へと移動した。

椅子はないので、四人でテーブルにもたれながら話を続ける。

「お兄さん、定期的にダレて駄目になるんですけど、ローザさんがいれば大丈夫ですよ」

「彼女の尻に敷かれているくらいで安泰なのか？」

「はい」

しかし、本当に不思議だ。

世の中、ああいう駄目な男に限って、いい女がつくパターンが多いような……。

「お待たせしました、猪のすじ肉シチューライスです」

暫くすると、ローザさんが人数分の食事をもってきてくれた。

早速食べてみるが、味に改良を重ねたようで前よりも美味しくなっていた。

ベッティから駄目な兄だと言われているようだが、料理に関してはそれなりに真面目なようだ。

でなければ、俺も金など貸さなかったけど。

「しかし、わけわかんねえな。冒険者にもいたんだよな。ああいう駄目なのと引っ付くいい女ってのがいてさ」

「それは、男女の事だからないとは言えないだろう」

カチヤは俺と同じ意見のようだ。

エルは、恋愛なんてそんな杓子定規な世界ではないという意見で、ベッティの兄に婚約者がいた事を不思議に思わないらしい。

「カチヤは、ああいう男は駄目か？」

「無理！　あたいは、旦那のようなタイプの方がいいな」

「俺も、言うほどしっかりはしてないけど」

魔法以外だと、結構ズボラな部分も多いからな。

「でもさ、妹や婚約者を困らせたりしないだろう？　男女の関係でお金の事を出すと嫌がる人もいるけど、家族や奥さんを困窮させないって重要だぜ」

確かに、ベッティの兄のやり方はとても褒められたものじゃないからな。

「まったくもって反論できないな」

「だろう？」

カチヤは、俺達が思っていたよりもシビアな物の考え方をする人のようだ。

女だてらに、一流の冒険者をしていたからなのかもしれない。

「あたいと旦那って、実家が微妙な貴族家だったから一緒にいて疲れないし。こういうお店で、普通に食事を楽しめるのはいいよな」

確かに、そういうのも重要かもしれないと俺は思った。

だが、エリーゼは順応が早いし、テレーゼはそういう店を逆に楽しむ傾向がある。

俺には、ただの深窓の令嬢は似合わないというわけか。

「でも、そこまでわかっていてトンネルの件は？」

「旦那も蒸し返さないでくれよぉ……」

ベッティの兄の店は無事に経営が軌道に乗り、俺への借金の返済もすぐに終了した。

彼はアルテリオ商店の傘下に入り、お店がある地区に数店舗の飲食店を経営。

成功者として、それなりに名が知られるようになるのであった。

勿論、その陰に怖い奥さんの存在があったのは言うまでもない。

むしろ、後には彼女の方が業界で有名人になるのは、みんなの想像の範囲内であった。

「ベッティ、すまん。必ず店を成功させて借金は返すから。でないと、ベッティが借金の保証人だから」

その日の夜中、店の片付けをしながら兄は妹に謝り続けていた。

「返済が滞ると、ベッティちゃんに迷惑がかかるんだから、わかっているわね？」

「明日からも頑張るさ」

ベッティは、婚約者に叱られながらも仲がいい兄達を見て羨ましいと思ってしまう。

自分は将来、どんな人と結婚するのであろうかと。

何となく想像してみたら、そこにバウマイスター伯爵の顔が現れ、彼女は慌ててそれを打ち消そうとした。

「（先生は、綺麗な奥さんが一杯いるから無理だよ）」

「本当に、妹を借金の保証人にするとか……」

「反省しています。絶対に返しますから」

「当たり前でしょうが」

喧嘩していても仲がいい二人の姿を見ながら、ベッティはある考えに至っていた。

それは、もし自分の兄が借金の返済に失敗した時の事だ。

「（私が返すのは、成人後ならそれほど困難じゃないよね）」

魔法使いは稼ぎが大きい。

ましてや、自分はかなりの魔力を持っていて、予備校でも期待されている魔法使いだ。

「（先生も、そう言ってくれたし……）」

『ベッティは魔力が多く、まだ成長途上にある。頑張って精進すれば、いい魔法使いになれるぞ』

ベッティは、ヴェンデリンから褒められた時の事を思い出して顔を赤く染めた。

お店の改修費用くらいなら、よほど油断しなければ短期間で返済可能なはず。

「（あっ、でも。もし私も返済が滞れば……）」

バウマイスター伯爵は、貸しつけた金の回収を行わないといけない。

ところが、今のベッティに碌な資産などなかった。

という事は、自分が担保になればいいのだと。

「（借金が返せないから、私が先生の物になる。いけるかも）」

ベッティは、妙な想像をしながらニヤニヤと笑い始める。

更に、自分の兄にこう言い放った。

「お兄さんが借金の返済に失敗しても、私は何とも思わないからね」

「大丈夫だよ！　絶対に返すから！　というか、私はどこまで信用されていないんだよ！」

「信用される要素がなかったでしょうが！」

婚約者に怒られている自分の兄を見ながら、ベッティは、むしろ

自分の兄が借金の返済に失敗すればいいのにと思ってしまうのであった。

第百二十四話　過去の思い出と現実。

「お館様、いかがなさいますか？」

「そうだな。エリーゼブルク、イーナバーグ、ルイーゼフルト、ヴィルマドルフ、カタリーナベルク……」

「お館様は、愛妻家でいらっしゃいますな」

「（いや、他に思いつかないんですけどね……しかも、ドイツ風の命名限定だし……）」

「お館様、何か？」

「いいや、何でもない」

バウマイスター伯爵領の開発は順調に進んでいる。

バウルブルクを中心に、道、橋、町、村、農地、港などの建設に俺達が魔法を駆使し、ローデリヒが金を回しているので人も大量に集まっていたからだ。

魔法だけでも人手だけでも開発が遅れるので、両方があるバウマイスター伯爵領の開発速度は驚異的であった。

俺も父親になる以上は、子供達を飢えさせないように頑張らないといけない。

前世の商社マン程度の給料だと生活に四苦八苦したであろうが、今の俺は貴族で魔法使いでもある。

頑張って稼いで、子供達にある程度発展したバウマイスター伯爵領を残してあげないといけない。

家臣や領民も増えているので、一代で終わりという無責任な事もできないのだ。

前世だと貴族や王族って傲慢に思われているのかもしれないけど、普通の貴族は色々と責任があって大変だよな。

俺は魔法があるからいいけど、なければサラリーマンの方が確実に気楽だと思う。

「それでお館様、他には？」

「そうだな……カチヤバーグとか？　テレーゼフルト、リサドルフ、フィリーネベルク、アマーリエ……ベルク？」

「お館様、あとは？」

「ええいっ！　そんなに急に思いつくか！」

俺は、一つの困難に直面していた。

それは、バウマイスター伯爵領各地に建設中の町や村の命名についてだ。

元々バウマイスター伯爵領は未開地で何もなかったが、今ではそこに数十の村や町が建設中で、まだまだいくらでも増える予定だ。

既にある程度移住が終わっていて、人が住んでいる村や町も多い。

他にも、河川、街道、港、森、湖、池、草原などいくらでも命名しないといけないものが多い。

人が住んでいる村や町が名無しというのもおかしいわけで、そしてそれを命名するのは領主である俺の役割というわけだ。

「領民の投票とかで決めない？」

「いえ、それはいけません」

沢山考えるのが面倒なのでそこに住む住民による投票で決めようと俺が言うと、ローデリヒはキッパリと否定した。

「お館様は、このバウマイスター伯爵領の絶対権力者なのです。領民に決めさせるなど絶対にいけません」

この辺が、民主主義と封建制度の絶対的な差というわけだ。

「どんなにお館様のネーミングセンスが最悪でも、お館様自身がお決めにならないと意味がありません」

「ううっ……そうなのか……」

ローデリヒが何気に俺をディスっているような気がするが、いくらダサイ命名でも俺自身が地名などを決めないと駄目なのは事実であった。

「こうなると、ローデリヒブルク……」

「お館様、いきなり私の名前を使うのはよくありません。奥方様などは構わないのですが……」

貴族が、自分の愛する妻の名前を町や村の名前につける。

これはよくある事のようだ。

ただし、昔はという条件がつくそうだが。

今はそう簡単に町など増えないので、新しい命名がされる機会は少ないというわけで、つまり、バウマイスター伯爵領は久しぶりの大量命名例というわけだ。

「宿題にしておいてくれ。そんなに急に沢山思いつかないよ」

今まで何もなかった土地なので、碌にヒントすらない。

命名基準だって、ドイツ風が基本なため範囲が思いっきり狭いので困ってしまう。

「畏まりました、なるべく早めにお願いします」

そんな急に、沢山の地名などが思いつくはずもない。

今日は久々にお休みなので、俺はローデリヒを残して執務室をあとにするのであった。

「というわけで、俺はエリーゼ達の名を後世に残そうと思うんだ。受け取ってくれるかな？」

自分で言ってて歯が浮きそうなセリフであったが、彼女達に了承してもらわないと最初の十個ですら不採用になって俺は詰んでしまう。

そう、俺は愛する妻達のために永遠に残る地名や町村名をプレゼントする、洗練された男にして大貴族様でもある、バウマイスター伯爵様になりきっていた。

「はい、喜んで」

エリーゼは基本いい娘なので、俺からのプレゼントを嬉しそうに受け取ってくれた。

新興貴族が、開発した領地の地名などに愛する妻の名前を採用する。

貴族の世界では、宝石にも勝るプレゼントなのだとローデリヒが言っていた。

俺には、いまいちピンとこないのだが。

「少し恥ずかしいような気もするけど……」

「でも、後世にボクの名前が残るって面白いかも」

イーナもルイーゼも、気恥ずかしそうながらも満更でもないという感じだ。

「ヴェル様、ありがとう」

「私の名前が残る。貴族になったと実感できますわね」

ヴィルマとカタリーナも嬉しそうでよかった。

特にカタリーナは、自分が貴族である事に拘っている人だ。

口調はいつもどおりだが、とても嬉しそうな笑顔を浮かべている。

「ありがとう、旦那。うちの実家じゃあり得ない事だよなぁ……畑の名前とかに採用されそうだけど……」

「ありがとうございます」

カチヤとリサも嬉しそうであったが、問題はここからであった。

「エリーゼ達はわかるが、妾達の立場を考えると、受け入れていいものか判断に悩むの」

「そうね、私とテレーゼはどうかと思うのよ」

正式な奥さんではない、もしくは奥さんになる予定がないテレーゼとアマーリエ義姉さんからは、微妙な顔をされてしまった。

確かに、愛人の名前を残すというのもどうかは思う。

でも、二人の名前も入れないと……候補が減るんだよなぁ……。

そんな一度に数十もの町の名前なんて、普通は考えられないのだから。

「（エリーゼ、別に構わないんだろう？）」

「（はい、例がないわけでもありません）」

こっそりとエリーゼに聞くと、たまに大貴族が新しい町を開いた時、領民達があまり聞き覚えのない女性の名前がついていると、大半がこのパターンらしい。

「（そういう事をするのは大物貴族が多いですから、あまり正面きって批判する方はいません）」

いつまでも名無しの町だと困ってしまうので、とりあえず名前がつけば町に住む住民はどうでもいいと思うそうだ。

そりゃあ町の住民からすれば、貴族様の愛人の名前なんてどうでもいいわけだし。

「（その辺の悪評をねじ伏せるのも大貴族ですから。それに、同じ名前の別の女性から命名したと言われてしまえばそれまでです）」

なるほど、つまり俺の自由にやっていいわけだ。

「大丈夫だよ、小さな町の名前とかにしておけばいいし」

「何もない広大な土地に大貴族領が生まれると、こんな苦労があるのか。普通は数年から数十年に一度くらいが関の山じゃからの。新しい村や町の命名など」

テレーゼは、フィリップ公爵領でもそう簡単には新しい村や町などできず、新しい町の名前を考えるのに苦労するなんて思わなかったと言う。

「元大貴族である妾にも予想外の出来事じゃの。まあ、あまり大きな町の名前とかは止めておいてくれよ」

「私も、小さな村の名前とかでいいかな」

残るフィリーネは、あのブライヒレーダー辺境伯の娘なので問題ない。

多少大きな町の名前に採用しても、それは寄親であるブライヒレーダー辺境伯家への配慮という風に受け取られるからだ。

娘バカなブライヒレーダー辺境伯からすれば、大歓喜な出来事であろう。

「それで、あとの数十個はどうするんだ？」

「エルヴィンブルグ？」

「そこで何で俺なんだよ？」

「もうネタが尽きたから」

なぜって、嫁さんの名前を流用したら、あとは子供とか功臣の名前を流用するしかないからだ。

子供はまだ産まれていないので、これはあとで新しく流用するとして、あとは功臣の名前を使うしかない。

ローデリヒが文句を言っていたが、彼は間違いなくバウマイスター伯爵家一の大物家臣である。

ゆえに、彼の名前を採用しないなどあり得なかった。

それにだ、どうせ名前を取る家臣が足りなくなってある程度の家臣なら名前を流用される事になる。

その親族や子孫を、そこの代官職にしてもいいのだし。

「というか、一度に多すぎなんだよ……」

俺達が魔法で整地し、街道に近い村や町が異常な速さで増えている。

家の建築には手間がかかるとはいえ、もうバウマイスター伯爵領ができてから一年以上の時間が流れた。

レンブラント男爵が中古住宅を大量に移築し、バウマイスター伯爵領は景気がいいと大工が集まって家を急ピッチで建設している。

王国には大工が不況で困っているという地域もあり、彼らが出稼ぎに来たり、移住する者も多かった。

バウマイスター伯爵領ならば、いくらでも仕事があるからだ。

出稼ぎが嫌な者は現地の空地に家を建て、それをレンブラント男爵が移築するという手法もあり、住宅不足は……それでも足りないんだよなぁ……。

ちょっと凝った建物とかだと、まだ全然不足しているし。

「まあいい、まだ締め切りには時間がある」

「命名ねぇ……奥さんの名前がネタ切れなら、あの娘達の名前でも使ったらどうだ？」

「あの娘達って誰だよ？　エル」

「ヴェルが特に可愛がっているじゃないか。女子生徒三人組をさ」

エルが言うあの娘達とは、俺が今魔法を教えているアグネス達の事であった。

「アグネス達の事か？　あの娘達は俺の弟子にして生徒だ。名前を流用なんてできないさ」

その辺は、ちゃんと区切りをつけないとな。

俺が初めて魔法を教え、その中でも特に目をかけている三人であったが、彼女達はバウマイスター伯爵家の人間ではない。

きちんとケジメはつけないと、ローデリヒにも怒られてしまうのだから。

「えっ？　あの娘達って、将来ヴェルが奥さんにするんじゃないの？」

「エル、お前なぁ……」

俺は、そんなわけがあるかと思ってしまった。

確かにあの三人は可愛がっているが、あくまでも魔法の弟子としてだ。

「俺には責任があるんだ。あの三人は、師匠の孫弟子にもあたる。ちゃんと一人前の魔法使いにして、師匠の名を汚すわけにいかないんだ」

「えっ？　色事は一切抜き？」

「当たり前だ！」

そう、師匠の唯一の弟子たる俺がしっかりと弟子を育てあげ、師匠の偉大さと功績を後世に確実に伝えなくてはいけないのだから。

「遊びでやっているんじゃない。というわけでだ。下種な勘繰りは止めたまえ。エルヴィン君よ」

「はあ……ヴェルがそう言うのならそうなんだろうな……」

エルがいまいち納得していないような表情を浮かべるが、どこの世に十二歳から十四歳の女子生徒に手を出す教師がいるというのだ……前世ではたまにいて、ニュースや新聞で報道されていたか……。

「とにかくだ。今日はお休みだ」

アグネス達の話は、これで終わりだ。

とはいえ、エリーゼ達が妊娠しているので遠出ができない。
そこで、バウマイスター伯爵邸の中庭でピクニックのような事をしていた。
当初は何もない中庭であったが、伯爵家に相応しい見栄えにするために庭師を雇い入れて相応の内容にしている。
観賞用の草花や木々が植えられ、それらは適切に管理されていた。
庭師を専属で雇う、いかにも大貴族である。
実家の場合だと、母やアマーリエ義姉さんや使用人達が花壇に自分で花とか植えていただけだし。

中庭の中心にはテーブルと椅子が置かれ、そこで軽食やお茶を楽しみながらノンビリとした時間をすごすのだ。

「ちょっと、あたいには合わないかもだけど……」

俺よりも貧乏性の気があるカチヤは、こういうノンビリとした時間は苦手なようだ。
もうそわそわしていた。

「カチヤさんも妊娠するとわかりますよ。あまり動けなくなってしまいますから」

とは言いつつも、エリーゼはいつも通りにテキパキとマテ茶を空いたカップに注いでいた。
ただ、やはり外出する機会などは減っている。

「ドミニクにも言われてしまいました。お腹の子はバウマイスター伯爵家のご世継ぎなのだから、慎重に行動してくださいと」

もしエリーゼの身に何かがあったら大変だという事らしい。

確かに、エリーゼについている護衛やメイドの数が増えていた。
もし今の彼女に何かがあったら大変だと、護衛達は緊張した表情を崩さない。

「私やルイーゼも似たようなものだけど、これは出産後に冒険者に復帰するのが大変かもね」

「鈍った体を元に戻そうとしたら、また妊娠したりして」

「ローデリヒさんは、それを望んでいるようね」

俺がバウマイスター伯爵家の初代なので、分家や有力家臣家の創設でいくらでも子供の数はいてもいいというわけだ。
イーナとルイーゼも、あまり派手に動けなくなったと愚痴っていた。
二人もどちらかというと、カチヤのようにじっとしているのが苦手なタイプであったからだ。

「そうですね、私もすぐに復帰できるでしょうか？」

今日は、エルと一緒にハルカも中庭の茶会に参加していた。
彼女もエリーゼ達とほぼ同時期に妊娠したので、同じく剣術の稽古などは休んでいる状態だ。

「五人の赤ん坊が次々と産まれるのか。賑やかでいいではないか。ところで、エルヴィンよ」

「何です？　テレーゼ様」

テレーゼは、エルに聞きたい事があるようだ。

「そなた、側室は取らぬのか？　お主は、バウマイスター伯爵家でもかなりの地位にいるし、甲斐性もある。妻がハルカ一人では周囲も納得すまい」

「ううっ……」

テレーゼの問いに、エルは言葉に詰まってしまう。

確かに、今のエルが奥さん一人だと色々と周囲がうるさいであろう。

俺もローデリヒから、その手のアプローチがうるさいという話は聞いている。

「ローデリヒさんは、奥さんが一人だし」

「今のところはであろう？　あとで、成長したルックナー財務卿の孫娘をもらうではないか。誰が見ても見事なまでの政略結婚じゃが、貴族とはそういう生き物じゃ。諦めい」

「テレーゼ様がそれを言いますか？」

「妾はそういう世界から抜け出した身、しかしながら、世話になっているバウマイスター伯爵家のために忠告くらいはするというわけじゃ。して、どうなのだ？」

「はいはいっ！　テレーゼ様！　私がいますから！」

テレーゼの問いに、俺達の傍で給仕をしていたメイドのレーアが手をあげた。

彼女はドミニクの従妹で、密かに……ではなく堂々とエルの側室

の座を狙っていた。
その堂々たる態度には、俺も他のメイド達もある意味感心している。
レーアがエルの側室になれば、この屋敷でドミニクの補佐として働き続けられるという利点もあった。

「（エル、レーアはどうなんだ？）」

「（面白い奴ではあるんだよな……）」

エルの返答は微妙であったが、俺は知っている。
最近では、ハルカに促されて定期的にデートなどをしているのを。
ハルカは、下級ではあるが貴族の出みたいなものだ。
サムライイコール貴族だからであり、家の当主に側室がいても当たり前だと思っている。
なので、自分の妊娠中にエルとレーアとの仲を纏めようとしているのだ。

「（エルの嫁さんって、完璧超人だよな……）」

「（俺もそう思う……）」

俺は、ハルカはエリーゼにも負けない高スペックな奥さんだと思っている。

「そうなのか、余計な心配じゃったの」

「あのう……まだそうと決まったわけでは……」

「ええっーーー！　私、エルヴィン様のお嫁さん失格ですか？」

気恥ずかしかったのか？
レーアを嫁に貰うと即答しなかったエルに対し、彼女が目に涙を浮かべながらその真意を聞いてくる。

「いや！　そんな事は……」

まさか泣かれるとは思わなかったようで、エルは思わず口籠ってしまった。
確かに、女の涙は俺でも経験値不足で対処が難しい。

「エル、デートまでしていてそれはないんじゃないの？」

「そうだよ、レーアが可哀想じゃないか」

続けてエルは、つき合いの長いイーナとルイーゼにまで攻め立てられてしまう。

「考えていないわけじゃなくて、結婚するとなると色々と準備が大変だなって思っただけだよ」

エルは、そう簡単にほいほいと結婚しますとは言えないから躊躇しただけだと反論した。

「そう、ならいいのよ」

「よかったね、レーア」

「はいっ！」

そして、最初からグルであると思われるイーナ、ルイーゼ、レーアに言質を取られてエルは二人目の嫁を貰う事になった。
どこかで見たような光景……デジャヴだと思ったら、俺にも似たような事があったからだと思う。

「お父さんとお母さんに手紙を書かないと駄目ですね」

「式までの準備も色々と必要よ」

「ええと……最短の日程は……」

「あのぉ……そんなに急がなくても……」

しかし、エルも学習しない男だな。
俺を見て、結婚を了承した後に猶予期間があると思っているとは。
余程の事情がない限りは、他に抜け駆けされないように話は勝手に進んでいくのさ。
本人は了承したらそれで終わり、あとは勝手に周りが準備してしまう。
その本人の了承だって、１００パーセント自分の意志なのか怪しいものだからな。

「エル、お前もそういう身分になったのだ」

「それは喜ばしい事なのか？」

それは、俺にもわからないな。
貧乏貴族の八男のままでいた方がよかったのか、バウマイスター伯爵の方がいいかなんて。
二つを同時に経験なんてできないわけだから。

「それじゃあ、エルとレーアの婚約が決まったから乾杯！」

「「「「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」」」」

マテ茶ではあるが、みんなで乾杯してから再び軽食とお茶菓子を楽しむ事にする。

エルが何とも言えない表情をしているが、人間誰しも程度に差はあるがマリッジブルーになるものだ。

終わってしまえば、すぐに元通りになるさ。

俺もそうだったし。

「旦那様、おめでとうございます」

「うん……」

そして、そんなエルにお祝いを言ってのけるハルカという女性。

俺は、彼女のミズホ撫子ぶりに感心してしまう。

ただ、俺の奥さんでなくてよかったかもしれない。

何というか説明はできないのだが、実はエルの手足を見ると操る糸がついていて、ハルカが上手く操作しているような感覚を覚えてしまうからだ。

本人が幸せそうなので、俺は何も言わないけど。

「お館様」

「どうかしたのか？」

そんな風に考えていたら、突然屋敷の警備責任者が俺に声をかけ

てきた。

「実は、お館様に用事があるというお方が」

「アポなしはパスだな」

最近、やたらと俺に会いたいという人達が増えている。

理由は想像の範囲内が大半なので今さら説明しないが、全員に会っていたら俺には一日が四十八時間ほど必要になってしまう。

大半をローデリヒに任せ、俺が自分で会う人など滅多にいない状態にしていた。

俺にアポなしで会える人は、ブランタークさんと導師くらいであろう。

『お館様がアホの話を一時間聞いている間に、魔法で土木工事をしていただいた方が……』

ローデリヒの話によると大半が碌でもない用件のようなので、俺は滅多な事がなければそういう連中とは会わないようにしていた。

「屋敷の前でうるさいのですが、実はレガート男爵様と名乗っておりまして……」

「貴族本人でも、アポなしは駄目なんだがな……」

とはいえ、屋敷の前に直接貴族本人がアポなしで訪ねてくるケースは珍しい。

だからこそ、警備責任者は俺に判断を仰ぎにきたのでろう。

「それで何の用事だと？」

「はあ……どうしても直接仰りたい事があるようで……」

「しょうがない」

俺は一人で、屋敷の正面門まで行く。

すると、本当に貴族らしい格好をした若い男性が立っていた。

年齢は二十前後だと思われる。

「バウマイスター伯爵殿でしょうか？」

「そうですが、こういう方法は反則なのでは？」

レガート男爵のやり方は、貴族としてはルール違反である。

俺はその点だけは釘を刺しておく。

「とは思いましたが、私の提案が受け入れられれば、バウマイスター伯爵家の更なる発展が期待できますから」

「お聞きしましょうか？　その提案とやらを」

「はい、義父上」

「はあ？　義父上？」

嫌な予感がしたが、レガート男爵はそのままバウマイスター伯爵家発展のための提案とやらを語り始めた。

「奥方殿達が懐妊されたそうで、おめでとうございます。娘が生ま

れたら……いやあの人数ならば必ず生まれるはず。お一人をこのレガート男爵の妻にしていただければ。さすれば、バウマイスター伯爵家とレガート男爵家との関係が強化され……」

まさかとは思ったが、まだお腹にいる子供を嫁にほしいとは……。しかも娘が生まれたとして、成人になった頃にはこのレガート男爵は四十近いおっさんになっている。

個人的にも、自分よりも年上の娘婿は勘弁してほしいと思う。

少なくとも、このバカで軽薄そうなレガート男爵は御免蒙りたかった。

「お義父さん、お義母さん。娘さんは、必ず私が幸せにしますから」

「一昨日、来やがれぇーーー！」

瞬発的にブチ切れた俺は、レガート男爵を風魔法でバウルブルクの大通りにまで吹き飛ばしてしまう。

彼は、大通りの真ん中で気絶して倒れ込んでしまった。

「あのアホは、二度と相手にもするな！　ローデリヒに、絶縁状の作成依頼を出しておけ！」

「ははっ！」

普通は、誰かを使者にそういう頼みをするのが当たり前なのに、レガート男爵は直接自分が交渉に行って優位に立とうとした。

勿論浅はかな考えで、俺の怒りを買っただけだ。

こういうルール違反をする貴族に対しては、絶縁状という手が使える。

『こういう理由で、お前の家とは二度とつき合わない』という手紙を出す制度で、滅多に行われないが、その分効果は絶大であった。

「まったく……どこの世にお腹にいる娘を嫁にほしいなんて言う奴がいるんだ……」

俺が気絶したレガート男爵を見ながら文句を言っていると、その横で別の人が門番とやり取りをしている。

よく見ると、俺達よりも少し年下の美少女であった。

「エルヴィン様は、このお屋敷にいらっしゃると……」

「本日はいらっしゃるが、エルヴィン様もそう簡単にアポなしで会わせるわけにはいかないんだ。我慢してくれ」

「ですが、私にはもう時間がなくて」

エルヴィンと言っているので、この美少女はエルに会いたいと思っているのは確実だ。

どんな用事かは知らないが、この美少女は相当に切迫しているらしい。

俺がすぐ隣で貴族を魔法で吹き飛ばしても、それを気にもしていないのだから。

「とにかくだ！　アポを取ってくれ。エルヴィン様もお忙しい身なのだから」

普段はそうかもしれないが、残念ながら今日のエルは思いっきり暇である。

ついでに言うと、俺はこの美少女とエルとの関係が物凄く気になり始めていた。

「なあ、ちょっといいか？」

「お館様？」

「エルヴィン様が御仕えしている、バウマイスター伯爵様でいらっしゃいますか？」

「そうだけど、君とエルとの関係は？」

「はい、幼馴染です」

「（エル、許すまじ……）」

俺は、当主権限でその美少女を屋敷の中に入れてあげる事にした。

なぜって？

幼馴染同士を会わせてあげないといけないという親切心から……

嘘です、このような美少女といつ知り合ったのか厳しく追及するためであった。

「エル、君には失望した」

「いきなり何だよ……って！　アンナか？」

「はい！　お久しぶりです、エルヴィン様」

俺がその美少女を中庭まで連れていくと、本当にエルの幼馴染だったようだ。

早速親しそうに話をしており、この時点でエルは、俺の中では有罪確定である。

その罪はかなり重い。

「急にこんな遠くまで、どうやって来たんだ？」

「持っていたお金で、長距離馬車を乗り継いで来ました」

「それは大変だっただろう」

エルの実家は西部にあり、このバウマイスター伯爵領に来るにはブライヒブルクを経由しないといけない。

魔導飛行船を乗り継げれば一週間とかからないが、お金がかからない長距離馬車経由だと一か月以上もかかってしまう。

このアンナという美少女は、エルに会うためにそこまでの苦労をしたというのだから凄い。

俺の中では、エルは終身刑相当の罪人となった。

「エル、許すまじ」

「ヴェル、俺はアンナから事情を聞くのが忙しいから、その発作はもう少しあとで頼む」

エルに軽くかわされてしまい、俺の中でエルは終身強制労働刑レ

ベルの罪人扱いとなった。

「うきぃーーー！　エルの癖に生意気な！　幼馴染とか聞いてねえよ！」

「ヴェルにその話をするのが可哀想だったから？」

「お前、俺と大して差がない貧乏貴族の五男なのに、何で美少女の幼馴染とかが存在するんだよ！　俺にはいなかったぞ！」

俺には、同性の幼馴染すらいなかったというのに。

俺は、ただ運命の神を呪うのみであった。

「まあ、事情を聞いておこうか……」

そうだ、この悲しみと怒りはあとに取っておこう。

俺はバウマイスター伯爵、冷静に事情を聞くくらいの度量は見せないといけない。

「そんなに複雑な話じゃないけどな」

五男であったために、実家で兄達に苛められ、搾取され、苦労の連続であったエル。

そんな彼と普通に接してくれたのは、平民の子供達だけであった。

「その時点で、俺を凌駕しているな」

「ヴェンデリン、黙って話を聞け」

「はい……」

なぜかテレーゼに怒られてしまい、俺はエルの話を聞くのに集中する。

エルがその中でも一番仲がよかったのは、領内に唯一存在する商店の三女であったアンナであったそうだ。

「よくありそうな話ね。でも、今まで聞いた事がなかったわ」

「俺は過去を捨てた男なんだ」

別にエルが格好つけているわけではなく、三女でも地元の商店の娘となればそこで結婚して生活をしなければいけない。

父親から『○○の家に嫁げ！』と言われれば、彼女は断れない立場にあるのだ。

「俺は領地を出ていく身だったし、まさかアンナを連れて出るわけにもいかない。うちの親父もアンナの父親も激怒するだけだろうし、当時十二歳の俺に何ができるよ？　一人で精一杯だったというだけの事だ。それよりも、アンナ。お前は、名主の次男ベッカーと結婚するんじゃなかったのか？」

エルも、既にバウマイスター伯爵家の家臣という身分になっている。

勝手に故郷から逃げてきたアンナという少女に対して、厳しい口調で詰問した。

「そのお話は、なしになってしまいました……」

平民でも、親同士で婚約を決めても色々な事情で取り消しになってしまうケースが多い。

結婚とはあくまでも家と家同士のものであり、家長の意向が大きく影響するからであった。
この世界の現状を平成日本人が知れば、古典的で堅苦しいと笑うかもしれない。
だが、この世界はこれで回っているのだ。

平成日本みたいに、結婚しない自由、子供を産まない自由など、そう簡単に認められるはずがないのだから。
家が存続しないと以上の恐怖など、この世界には存在しなかった。

「なしになった？」

「はい、リーラお姉様が代わりに嫁ぐそうです」

「何でそんな事になっているんだ？」

「それが、名主様の跡継ぎであったゲッツ様が病でお亡くなりになりまして……」

「ゲッツの奴、死んだのか……」

知り合いが死んだと聞いて、エルは表情を少し曇らせた。
だが、そこまで悲しいという表情でもない。
名主の跡取りともなれば、エルの兄貴達に擦り寄っていたのであろう。
もしかすると、エルにとっては嫌な奴であったのかもしれない。

「悲しくはないな。それで、ベッカーが急遽跡取りか……」

「はい、そうなると三女の私だと家格の釣り合いがというお話にな

りまして」

上のお姉さんの方を、名主家の跡取りの嫁にする。
田舎の領地だとよくある話であった。

「それで、アンナはどうなったんだ？」

「それが……名主様の後添えという事になりまして……」

「はあ？　何でそうなる？」

「ゲッツ様と同じ病が奥様にも伝染ってしまい、ほぼ同時期にお亡くなりになってしまわれたのです」

名主が妻を病気で亡くしたので、急ぎその後添えをという話になった。
後添えとはいえ、普通の農民の娘を嫁がせるわけにもいかず、急遽婚約話が消えたアンナに白羽の矢が立ったというわけだ。

「クソ親父、もう少し考慮しろよ……」

「名主様が独り身というわけにはいかないそうで……」

「そういう場合は、普通年増の未亡人などを当てるのが普通なのじゃがな……」

「そうなのか？　テレーゼ」

「ああ、下手に若い嫁をもらって子供が生まれると、先妻の子と揉めるからの。夫を亡くしたもう子供は産めなさそうな女性を、形だ

け後妻に押し込むというわけじゃな。妾も、昔にそんな裁定というか斡旋というか、した事があるぞ。そいつは年老いた重臣であったがの。当時は、未婚の妾がなぜこんな事まで配慮せねばならぬのかと悶々とした記憶がある」

自分の婚約者も決まっていないのに、六十を超えた老臣の後添えを探すのに奔走したテレーゼ。

確かに、俺でもそんな仕事には違和感を感じてしまうかもしれない。

「普通は、こんな若い後添えは選ばぬのだがの。その名主はいくつなのじゃ？」

「はい……六十近いです」

「思ったよりも年寄りだな」

「名主はうちの親父の庶兄で、名主家に婿養子に入ってから結婚したから晩婚なんだよ」

つまり、エルの祖父である前領主が他所に子供を作って飼い殺しにしていたけど、たまたま名主家の婿の座が空いたからそこに押し込んだ。

息子が二人生まれたが、嫡男が病死して次男が跡を継ぐ事になった。

妻も同じ病気で亡くなり、独り身になってしまった名主は若い後添えを欲したという事情のようだ。

名主家はエルの実家と親戚関係にあるので、アンナの実家も断れない。

それでもアンナは結婚が嫌で、幼馴染を頼って逃げてきたというわけだ。

「複雑な家庭環境だな」

「そうか？　田舎の貴族領なんて、みんなこんなものだぞ」

前世だと、時代錯誤だとか散々に批判されそうな話である。

「それで、どうするの？」

事情もわかったところで、さてこれからどうするかだ。

ルイーゼが、エルにストレートに尋ねた。

「どうするも、領地に戻って結婚しろとしか俺には言えないよ」

「そんな……エルヴィン様……」

「俺もアンナももう子供じゃないんだ。それはわかるな？」

領主と親戚である名主家の後妻候補が、勝手に昔の幼馴染を頼って逃げ出してしまったのだ。

エルが気ままな冒険者のままなら、このまま彼女を連れて逃げてしまうという選択肢も可能である。

どうせ、エルの実家に駆け落ちしたカップルを探す余裕などないのだから。

だが、今のエルはバウマイスター伯爵家の家臣である。

エルがアンナを匿うと、バウマイスター伯爵家とアルニム騎士爵家との争いになってしまう可能性があった。

この二家だけの争いとなればいいが、寄親である西部の雄ホールミア辺境伯家が顔を出してくるのが容易に想像できるというのが困ってしまう。

「アンナ、俺とお前は昔は仲がよかったよな」

「はい、私もエルヴィン様も半端者の扱いでしたからね」

「アンナは、嫁入り要員に思われていただけマシ……でもないか……」

貧乏貴族で将来出ていく事が確実な五男と、三女で冒険者としての資質もなく、出て行こうにも田舎なので出て行けず、婚姻の道具としてしか見なされなかった少女。

二人は、自然と仲良くなっていった。

エルがアルニム領を出てから二人の交流は途絶えたが、アンナは今もエルを忘れていなかった。

でなければ、彼を頼って一人でバウマイスター伯爵領まで来たりはしなかったであろう。

「昔に冗談で、『将来結婚しようか？』とか俺が言った事があったな」

「私は、本気にしていましたよ。エルヴィン様」

「だがな、アンナ。もう今の俺の立場ではお前を守ってやれないんだ。バウマイスター伯爵家に迷惑をかけてしまうからな」

エルは、自分なりに懸命に考えて今の結論に至っていた。

自分がアンナを匿ってしまえれば、どんなによかったかと。
だがそれは、バウマイスター伯爵家のために選択できない。
もしこの件で、アルニム騎士爵家とホールミア辺境伯家とトラブルが発生してしまえば、それはバウマイスター伯爵領開発の足かせとなる可能性があるのだからと。

「アンナ、運賃は出す。アルニム領に戻れ」

「エルヴィン様……」

「これは、どうしようもない事なんだ」

エルは、昔の未練を苦渋の選択で振り切った。
その仕打ちに冷たいと思う人も多いと思う。
それでも、自分はもうバウマイスター伯爵家の家臣なのだからお前を匿えないと、昔の幼馴染に故郷に戻れと心を鬼にして言ったわけだ。

「（俺は理解できたんだけど……）」

いや、結婚を約束した幼馴染とか、ここで俺の嫉妬砲が炸裂してもおかしくはないのだが、その前にエルが冷徹にアンナを振り切ってしまったからな。
彼女は涙を流しながら俯いていたが、その様子を見てうちの女性陣がどう思うのか？

確実に暴発確実だとわかったから、俺は静かにしていた。
人間、ちゃんと学習しないとまた大変な事になってしまうからな。

「ちょっと、エル。それはあまりにアンナさんが可哀想じゃないの

よ」

「イーナ、俺も苦渋の選択……」

「どこが苦渋の選択よ。ここで幼馴染の一人くらい匿う度量を見せなさいよ」

「そうだよ！　第一、エルがバウマイスター伯爵様じゃないんだから、立場とか偉ぶっているのが変！」

「ちょっ！　ルイーゼ！」

イーナとルイーゼは、エルの選択がおかしいと噛みついてきた。

「いやだから、俺は自分の今の立場を考えてだな……俺は正しいよな？　エリーゼ」

「いえ、特に気にする必要もないかと……」

「あれ？　そうなの？」

エリーゼの予想外の回答に、エルは己の態度の根拠を失って狼狽えた。

これまでのクールな姿勢が台無しになった瞬間である。

「こう言うと失礼になるかと思いますが、王国でも有数の大貴族家であるバウマイスター伯爵家の重臣と、ささやかな騎士爵家では、前者の方が力がありますから」

まあ、至極当たり前の話である。

今のバウマイスター伯爵家の重臣相当であるエルと、アルニム家の、しかも名主風情とどちらが偉いのかと。

実は俺も、後ろにいるアルニム家とかホールミア辺境伯家が出てきて面倒になると思っていたけど……。

「つまり、エルヴィンさんの決断次第というわけですわね。考えすぎなのではありませんか？」

「ここはビシっと、俺が妻にもらうくらい言うべき」

カタリーナとヴィルマにも散々に言われてしまい、まずますエルの立場がなくなってしまう。

「そんなぁ！　俺は色々と考えたのにぃ！」

「エルヴィンはあたいと同じでバカなんだから、あまり深く考えるとドツボに嵌るぞ」

「アンナさんは貴族の娘ではないので、わざわざ時間と運賃をかけてバウマイスター伯爵領まで取り戻しに来ないと思いますけど……」

最後に、カチヤとリサに止めを刺されて、クールな決断をするエルの構図は一瞬にして崩れ去った。

やはり、人は慣れない事をしてはいけないのだ。

「ほら、エル」

「言いなさいよ」

「アンナ、お前さえよければ、俺の傍にいてもいいんだぞ」

「はい、喜んで。エルヴィン様」

ルイーゼとイーナに促され、エルはアンナも嫁として娶る事になった。

可愛そうに、今回の件でエルはうちの奥さん達に首根っこを掴まれた形だ。

俺にはあまり格好よく見えなかった。

「でも、なぜか気に入らないような……」

俺が気に入らない理由は簡単だ。

何と、俺と似たような境遇であったはずのエルに、過去にプロポーズまでした事がある幼馴染がいたというのだから。

「エル、今日はデートでもしてきたら？」

「そうね、レーアも連れて」

「私もですか？　アンナさん、エルヴィン様の二番目か三番目の妻になるレーアです」

エルはルイーゼとイーナの勧めどおり、アンナとレーアを連れてバウルブルクの町にデートに出かけてしまった。

今回の件でエルは、完全にイーナ達に頭が上がらなくなってしまったようだ。

「大きな町ですね、エルヴィン様」

「アルニム領と比べるまでもないさ」

「アルニム領には、うちの実家しかお店がありませんからね」

「バウマイスター伯爵様のご実家には、昔はお店がなかったそうですよ」

妊娠中のハルカが遠慮したので、エルはレーアとアンナと両手に花で楽しそうに屋敷を出て行ってしまった。

式を挙げるまでに、互いの相互理解をというやつであろう。

まあ、デートなんだけど……。

「うぐぐ……」

エルがプロポーズをした事がある幼馴染の存在、俺は再び嫉妬の感情に支配されつつあった。

何度思い返しても、俺にはそんな人はなかったというのに……。

しかもあのアンナという少女、最初はエルに結構冷たくされたのに、今は物凄く嬉しそうだし。

「解せぬ……」

「ヴェル君、バウマイスター騎士爵領時代のヴェル君には私がいたじゃないの」

「アマーリエ義姉さん……」

そうだな、俺にはアマーリエ義姉さんがいた。

実家にいた頃の俺が出かけたり戻って来たりすると、ちゃんと『行ってらっしゃい』や『おかえりなさい』と言って話しかけてくれ

たし。
母はその点がかなり適当だったけど、アマーリエ義姉さんは違ったんだ。

浮ついた会話とかはなかったけど、あの時はアマーリエ義姉さんが俺の唯一の心の癒しだった。

「ここは、親友兼家臣であるエルヴィンさんの幸せを喜ぶのが、ヴェル君らしくて私はいいと思うな」

「そうですよね、俺にはアマーリエ義姉さん達もいますし」

「そうよ」

休日にこのような出来事があり、エルはバウマイスター伯爵家の重臣に相応しく三人の妻を娶る事になるのであった。
そこに本人の意志がどの程度入っていたのか、問うてはいけないのだが。

「それでだ、俺は手紙を書かないと駄目なんだよ」

別にこのままでもいいような気がしなくもないが、アンナはアルニム領の名主に後妻として入る予定の女性であった。
それがエルの奥さんになる以上は、一応連絡だけはしないといけないわけだ。

俺も大貴族である以上は、相手に付け込まれないように上手く手紙を出す必要があり、そのマナーをローデリヒに聞いてみる事にする。

「拙者が教えてもいいのですが、実務で経験があるテレーゼ様に聞くのも手ですな」

「ああ、そうか。テレーゼは、そういうのは慣れているよな」

ローデリヒの勧めに従い、俺はテレーゼに手紙の書き方を教わる事にする。

「二通であったな」

「えっ？　二通？」

「アンナという少女の前に、まだエリーゼ達のお腹に入っている子供を嫁にほしいと騒いでいたアホ男爵がおったではないか」

「いたな、そんな奴」

「お主が忘れてどうするのじゃ」

魔法で吹き飛ばしたらスッキリしたし、アンナの件があってすっかり忘れていたのだ。

ムカつく以外で、特に印象に残る奴でもなかったし。

「これは普通に絶縁状を叩きつけ、知り合いの貴族にアホ男爵の所業を手紙で知らせておけ」

先制してレガート男爵の悪行を伝え、相手の反撃を許さないためである。

相手も追い詰められている以上、嘘八百を並べてバウマイスター伯爵家を攻撃してくるかもしれない。

彼が不審者扱いで新設された牢屋に入っている間に、絶縁状などは出しておくべきであろう。

「生まれたばかりの赤ん坊同士で婚約という話は聞いた事があるが、お腹に入っている子供の婚約は初耳じゃの。久々に聞く、空前絶後のアホ貴族じゃな」

「それで、絶縁状ってどう書くんだ？」

「これは、それほど難しい文面でもないの。ありのままに事実を書き、そういう理由なのでレガート男爵家の者とは金輪際つき合わないと最後に書けばいい。あとは家臣達への徹底じゃの。レガート男爵家の者がいたら、バウマイスター伯爵領から叩き出すように命令しておけ」

「なるほど、慣れているんだな」

「大物貴族などしておるとな。極論すれば、半分が味方で半分が敵じゃからの。半分すべてを敵視はしない。仲が悪くても、距離感のあるつき合いというのもあるであろう？　中には一部どうしようもない貴族家があって、そのために絶縁も必要というわけじゃ」

テレーゼも、フィリップ公爵時代に絶縁状を出した経験があるのだと語る。

「帝国にも王国にも、貴族家などいくらでもある。一つや二つ絶縁

しても大した影響などないわ」

テレーゼはそう言って笑っているが、確かに今でもなかなか貴族の名前を覚えきれない俺が、男爵家一つくらいと絶縁しても大した変化もないんだよな。

「絶縁状はこれでいいとして、アルニム家への書状はどういう風に書くんだ？」

「これも、思いっきり上から目線で書け！　相手に言質を取られるな！　以上じゃ」

「そんなんで大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃ。伺いなど立てるな。相手はそこから攻めてくるからの。エルヴィンの実家は騎士爵家であろう？　それも、たかが名主の後妻候補を奪っただけの事。相手が文句を言ってきたら西部との取引をちょっと締めてやればいい。相手もそれを考えるであろうから、何も言ってこないと思うがの」

「寄親は出てこないのかな？」

「出てくるはずがないであろうが。ヴェンデリン、お主は西部との取引を制限しておるか？」

「いいや」

特別扱いをしておらず、正常な取引のままであった。

勿論、優遇もしていないけど。

「寄親とは言うがな。エルヴィンの実家の直接の寄親は、子爵家なのであろう？」

「そんな話だったな」

俺は以前にエルから、そんな話を聞いたのを思い出す。

「その子爵家の寄親がホールミア辺境伯家なのじゃから、寄子の寄子の名主の話に口など出さぬわ。ホールミア辺境伯家とやらも暇ではないし、沽券に関わるからの。その名主が領主の庶兄だとしても、既に青い血でもない。気にするな」

「なるほどな」

以上のような参考意見をテレーゼから聞き、俺はアルニム家に書状を認めた。

貴族への手紙は色々と面倒なルールがあるので、その点は要約してここに記す事にする。

『西部は今、陽気な春だと聞いたけど、お前ら元気？　実はさ、うちの家臣があんたの領地の娘を嫁に貰う事にしたんだわ。別に、お前ら如きに教えてやる義理もないんだけど、一応礼儀だから知らせておくわ。まさか文句はないと思うけど、あったらうちだけに直接知らせてくれないかな？　別に青い血の娘でもないんだから、寄親とかにチクるとこちらも騒ぎを大きくしちゃうぞ。あっ、祝儀とか式の参加は不要だからね。それじゃあ』

勿論このままの文面ではなく、決まりに従って文章を飾り立ててあるが、要約するとこんな内容である。

「思いっきり、失礼な内容だな」

「アルニム家とやらの以前の対応を聞くに、こちらが下手に出るとつけ上がる可能性が高いからの。騎士爵家ひとつに嫌われるくらい、伯爵家ではよくある事じゃ。気にするな」

「さすがはテレーゼ様、素晴らしい手紙ですな」

「それなりに経験があっただけじゃ」

ローデリヒが手紙の中身を確認するが、素晴らしい出来であったようだ。

彼は、テレーゼを絶賛している。

俺は全然内容を考えておらず、手紙を言われたままに書いただけだからな。

それにしても、あまり手紙なんて書く風習がないから疲れてしまった。

「ヴェンデリンは、魔法と自分が興味のある事以外にはやる気が薄いからの」

「時間は有限だからな」

俺は器用じゃないので、熱中する事を取捨選択しているだけなのだから。

「子供のような男じゃの。まあ、しょうがない。妾やアマーリエ、リサなどでフォローくらいはしてやる。年上女達もたまにはありがたかろう？」

「テレーゼ、あたいも一応年上なんだけど」

「そうは見えぬが……というわけじゃ」

「テレーゼが酷ぇ……」

「カチヤは、もう少し大人の女にならぬとな」

テレーゼ監修の手紙がアルニム家に届けられたが、返事はこなかった。

つまり、黙認というわけだ。

こうしてエルは、無事にレーアとアンナを奥さんにするのであった。

第百二十五話　教師生活でも、色々と面倒が増える。

「お館様、これからのバウマイスター伯爵家の繁栄は、いかに多くの子を成して一門衆を形成するかにかかっているのです。歴史ある貴族家では、多すぎる子は争いの元になりますが、バウマイスター伯爵家はお館様が立ち上げた家です。よって、その心配もありません」

「そうなんだ」

「お館様、そんな他人事のように……お若いのですから、これからも頑張っていただきませんと」

「はあ……」

俺が臨時講師を引き受けてから三か月、季節は初夏となっていた。

バウマイスター伯爵領は常に気温が高いが、これからはとても暑い真夏の時期を迎える。

そんな状態の中で、俺は家宰にして政務を丸投げしているローデリヒから説教でもないが、励ましのようなものを受けていた。

正直、その必要があるかはわからない。

「エリーゼ様達は既に妊娠四か月ほど、待望の後継ぎの可能性が高く、我ら家臣一同安堵の溜息をついております」

エリーゼ、イーナ、ルイーゼ、カタリーナと。

ほぼ四人同時に妊娠したので、もし今俺に何かがあってもバウマ

イスター伯爵家が無継断絶になる心配はない。

それがないと、爵位と領地継承でいらぬトラブルになる事がある。

ようやく職を得た家臣達からすれば、それが原因でリストラされる可能性もあるのだ。

安堵して当然であろうか。

「続きましては、ヴィルマ様とカチヤ様ですが……」

実は、この二人も妊娠していた。

ヴィルマは十五歳になったからで、カチヤももうこれ以上は魔力が上がらないのと、もうすぐ二十歳なので実家の方から催促が来るようになってしまったらしい。

そこでというわけでもないが、俺が奮闘したわけだ。

「よかった。これでバウマイスター伯爵家も安泰です……ううっ……」

どうやら俺に説教したいわけでもないらしく、ローデリヒが勝手に感涙に咽んでいる。

こういう時、俺はどう対応していいものやら迷ってしまうのだ。

男の涙に優しくしてあげる必要はないと思うんだよなぁ。

「おかげで、魔物の領域に狩りに行けなくなったけどな」

「当たり前です。安全が確保できるパーティを組んでいないのですから」

これにて、ドラゴンバスターズの女性陣はほぼ全員産休に入った。

よって今は、たまにエルと近隣の森へ狩りに行くくらいである。
それも、エルが数名の護衛を連れてだ。

「護衛とか、堅苦しいよね」

「何をおっしゃいます！　もしお館様の身に何かあれば！」

偉くなるのも考えものかもしれない。
ただ、ローデリヒはエリーゼ達が付いていれば行動の自由を認めてくれる。
今は仕方がないというわけだ。

「テレーゼもなぁ……」

結局、上級の中レベルの魔力量まで上がった彼女は、自主的に避妊を止めて妊娠してしまった。
本人曰く、『魔法の練習は妊娠中でも出来るであろう。妾ももう二十一じゃ。一人くらい子供を産んでおきたいからの』だそうだ。

「テレーゼ様に関しては、別に問題はありません。お察しがいい方なので大変に楽でした」

その子はバウマイスター伯爵家の継承権はないが、男子ならば新たに立ち上げる重臣家の当主にする。
それでテレーゼとは話がついていると、ローデリヒが語る。
いつの間にと思ったが、面倒がなくて俺からすれば好都合だ。

「リサ様ですが、結局手を出しましたな」

「こら、ローデリヒ。今さら階段を外すか？」

彼女に関しては、あのメイクと衣装のままだと誰ももらってくれないし、スッピンにすると俺以外の男性とは話せない。

うちの女性陣とは普通に話せるようになったので、訓練の効果がなかったわけでもないのだが……。

甲斐甲斐しく領地の開発を手伝ってくれるし、アマーリエ義姉さんなどに言わせると『年上なのに可愛いからつい面倒を見てしまう』人で、俺もそう感じていたので本人の希望を受け入れる事にした。

そして彼女も妊娠し、その前に魔力も上がっている。

カタリーナとほぼ同じ量まで増えていたが、やはり元から超一流の魔法使いだと伸びしろが少ないようだ。

「リサ様は、嬉しそうではないですか」

確かに、今の彼女はエリーゼ達と共に赤ん坊用の産着などを縫って日々を過ごしている。

もうすぐ三十歳になる彼女からすれば、年増の自分に奇跡が起きたと思っているのであろう。

日本なら特に珍しくもない年齢なのだが、この世界だと間違いなく高齢出産であった。

「この前は、大変な目に遭ったけどな……」

「リサ様が、臨時講師をなされた件ですか？」

「そう、それ」

俺は、先月にあった出来事を思い出す。

『えっ？　工事？　俺は今日は駄目だぞ』

リサの妊娠が発覚する前、その日は予備校の講義だったのだが、ローデリヒから是非に急ぎ魔法で工事して欲しいと頼まれた案件があった。

急ぎだというので俺は講義を翌日にズラそうとしたのだが、そこに名乗りをあげたのがリサであった。

しかも、臨時講師の方をだ。

工事の方は大規模で、俺が担当しなければ魔力が足りなくなってしまうので逆は不可能であるとローデリヒが言う。

『リサ様が臨時講師の方を受けてくださるそうです』

『ならいいか』

以前にカチヤが、リサは魔法を教える時は理論的だと言っていたし、生徒達も色々な魔法使いに教わった方が視野が広がっていいと思う。

俺だって、師匠、ブランタークさん、導師と魔法を教わり、魔法使いとは色々なんだなととても参考になった。

『じゃあ、お願いしようかな』

『はい』

こうして、その日はリサが臨時講師を務める事になった。

『リサ？　あんたが、あのブリザードのリサ？』

その日の朝、彼女を予備校まで送っていきヘリック校長に事情を説明すると、彼は目を丸くさせながらリサを見ていた。

俺もその気持ちはよくわかる。

以前とは、まったくの別人のようになってしまったのだから。

『よろしくお願いします』

『バウマイスター伯爵殿、俺はあんたを尊敬するぜ……』

ヘリック校長は、俺がリサを矯正したと思っているらしい。

正確には化けの皮を剥いだか、本性を暴いたといった感覚なのだが。

『バウマイスター伯爵殿が急用ならば、是非にお願いしようかな』

ところが、今のリサには欠点が一つある。

いまだに、俺以外の男性と碌に話すら出来ない点だ。

いくら未成年ばかりとはいえ、魔法使いクラスの半分は男性であった……。

『あの……』

『先生、何を言っているのかよく聞こえません』

当然、自己紹介すら出来ないでオドオドする羽目になってしまう。

生徒達も、碌に口すら利けない臨時講師に不満を漏らす。

正直、なぜ引き受けたのかと思ったのだが、すぐにその理由は判明した。
もっともこれらの話は、俺はもう工事現場に向かっていていなかったので、ヘリック校長が様子を見に行ってわかった事実である。

『少し、失礼します……』

生徒達が今日の臨時講師に不満を抱くなか、リサは小さく断ってから教室を出て行き、十分ほどで戻ってきた。
以前のメイクと派手な衣装に身を包んで。

『ブリザードのリサだ！　クソガキ共！　今日は鍛えてやるから感謝するんだな！』

教室内は、一気に阿鼻叫喚の渦に包まれたそうだ。
それはそうであろう。
冒険者を目指す魔法使いで、リサの名と普段の言動を知らない人はいないのだから。

教室内は、一気に危険ゾーンに突入した。

『さっきのと同一人物？　詐欺だ！』

『うっさいね！　凍らせるよ！』

ある男子生徒の発言にキレたリサが、周囲に冷気を漂わせる。
教卓の上に置かれた花瓶と花がまるで彫刻のように凍りついたのに生徒達が恐怖し、彼らは大人しくリサからの講義を受けた。
講義内容の方は、納得のできる理論的なものであったそうだ……。

『前回の臨時講師はどうだったかな？　先生、前回は急用があって出られなかったんだ』

『とても参考にはなりました……怖かったですけど……』

『教卓のお花は天に召されましたので、新しいお花を持ってきました。ためにはなったけど、怖かったです』

『水と風系統の魔法理論は素晴らしかったです。怖かったですけど……』

アグネス、シンディ、ベッティ他、すべての生徒達があのメイクと衣装のリサを見て肝を冷やしたようだ。

それにしてもあの衣装、替えがあったのかと、俺は妙な感心をしてしまった。

『リサのあの衣装、もう一度見てみたいかも』

『すいません、旦那様になる人には見せられません』

そんな経緯もあり……何がそんな経緯なのかわかないが、俺はリサも奥さんとして娶った。

勝負して破ったから嫁にするとか、こんな事を続けていると俺は死ぬまでに何人の女性を嫁にするのであろうかと思ってしまったが。

「それにしても、アマーリエ様がいてよかったですな」

確かに、ローデリヒの言うとおりだ。

ここまで奥さんが増えてみんな妊娠してしまった。

なので、彼女が妊娠したエリーゼ達の面倒を見てくれるとありがたい。

公式には侍女長扱いのアマーリエ義姉さんであったが、ローデリヒは俺の奥さんとして扱っている。

彼に言わせると、『子供を産んだ経験があり、まだ若いので頑張ってください』なのだそうだ。

「さすがに、これ以上は奥さんを増やせませんか……」

「おい……」

ローデリヒがとんでもない事を考えていやがった。

だが、寄親であるブライヒレーダー辺境伯との兼ね合いもあるので、これ以上は不可能であろう。

彼は俺に奥さんの数を合せる事をしてきたのだが、さすがにもう勘弁してくれと、この前魔導携帯通信機で連絡してきた。

彼は文系肌の人物であり、別に好色でもなかったからだ。

成人してからだが、フィリーネも合わせて合計八人、非公式の愛人二人。

字面だけで言うと、貴族とは淫靡な生き物である。

いや、ライオンの群れか？

官能小説などのネタになるわけだ。

もっとも、実際にそうなると面倒な点もあったりする。

特に俺は、女性を上手くあしらうスキルに欠けているのだから。

「最低でも、三十人はほしいですな」

しかし、ローデリヒに言わせるとその制限がもどかしいらしい。

一体、俺の将来はどこに進もうとしているのだ。

「何をだ？　ローデリヒ」

「勿論、お子の数です」

「おい……あえてもう一度言う。おい……」

そんなに沢山、俺は戦国武将や江戸幕府の将軍かと思ってしまう。

「分家の創設に、半分は女子と考えて婚姻の引き合いも多いですからな。男子とて、婿養子に欲しがる家などもあります」

子供が娘しかいない家からすれば、うちから婿養子を受け入れ関係を結び、利益を得るくらいの事は考えるそうだ。

普通の貴族家なら子供の行き先で頭を悩ませる事態になるが、俺が初代のバウマイスター伯爵家ならまったく問題ない。

「生臭い話だな」

「それが貴族ですので」

「わかったから」

「というわけですので、頑張ってください」

俺はローデリヒにガッチリと両肩を掴まれた。
これ以上、俺に何を頑張れというのであろうか？

「わかったから！」

俺は話を打ち切ると、急ぎそのまま『瞬間移動』で王都へと飛んだ。
生臭い貴族の世界のお話は忘れ、早く純真な生徒達と接したいと思ったからであった。

「今日の講義はここまで。質問があったらいつでも聞いてくれ」

今日の講義も無事に終わった。
教室にいる六十一名の生徒達は、まだメモを取り続けている。

最初はボケた老講師のために出席日数ギリギリで構わないと顔を出していなかった生徒達も、俺が講師だと聞いてほぼ全員が出席している。
たまに体調不良などで一人、二人休むくらいだ。
俺のネームバリューもあるのであろうが、こうして俺が教えている事を懸命に聞いてくれる生徒達を見ると心が和むというものだ。

このまま教師を続けるのも悪くないかもと、俺は思い始めていた。
本当、貴族の柵とはクソ食らえである。

「先生！」

「質問か？　アグネス」

「はい」

最近では、生徒達の名前と顔も覚えた。

その中でも一番よく質問してくるのは、やはり委員長キャラであるアグネスだ。

彼女の実家は眼鏡屋さんであり、目が悪い彼女はそのおかげで高価なオーダーメイド眼鏡を複数所持している。

たまにかける眼鏡を変えてくるのだが、彼女にその理由を聞くと実家の宣伝だと言っていた。

真面目な彼女は、父親に言われてそうしているらしい。

眼鏡とはそう滅多に売れるものでもないので、少しでも宣伝になればという事のようだ。

高価なので富裕層向けであり、庶民で買えるのはあの胡散臭い不動産屋のように商売で成功した人間だけであった。

確かに、リネンハイム氏は眼鏡も胡散臭いものをかけている。

アグネスに聞くと、彼もあのお店の常連だと言っていた。

わざわざあの胡散臭い眼鏡をオーダーメイドするとは、さすがはリネンハイム氏だと言わざるを得ない。

アグネスの実家は、俺が提案したサングラスの販売でそこそこ潤っている。

リネンハイム氏も、プライベート用にサングラスを注文したそうだ。

仕事用でなくてよかった。

どう見ても地上げ屋になってしまうからだ。

「『魔法障壁』の角度についてお聞きしたいのですが……」

「ああ。それね……」

『魔法障壁』は、魔力が少ない者からすると悩ましい魔法である。全身を包むと消費魔力量が増えるし、展開を維持すればやはり魔力を消費していく。

魔力をケチって『魔法障壁』を薄くし過ぎると、呆気なく貫通してしまい展開する意味がなくなってしまうというわけだ。

そこで俺は、ある方法に辿り着いていた。

戦車の傾斜装甲のように、『魔法障壁』に傾斜をつけるようにしたのだ。

これならば、多少『魔法障壁』が薄くてもある程度までの衝撃は防げる。

魔力が少ない魔法使いからすれば、大きな助けとなるであろう。

ただし、同じ『魔法障壁』の厚さと角度でも防御力には個人差が出る。

その見極めを確実に行ってから実戦で使用するようにと、俺は講義で説明した。

アグネスは、早速自分なりに『魔法障壁』の改良を行いたいのであろう。

「私も、お願います」

もう一人、この娘はシンディという名前で、黒髪をオカッパ頭にした少女であった。

年齢は十二歳と最年少であったが、現時点での魔力量は最優秀のアグネスとそう違いはない。
実家は大きな花屋であり、彼女はそこそこのお嬢さんであった。
俺は、たまに奥さん達に贈る花を購入している。

「先生、私にも教えて欲しいです」

三人目は、実家が飲食店であるベッティであった。
彼女もアグネスと魔力量に差がなく、俺は特にこの三人に目をかけている。
駄目な兄が店を潰しかけたが、今は俺のインチキコンサルティングのおかげで人気店になっていた。
立飲み屋なのでたまに導師と待ち合わせて一緒に飲んでいるが、居酒屋とは違って長っ尻にならないので、俺も導師も使い勝手のいい店だと喜んでいる。
現在、アルテリオさんが同形態のお店を王都に何店舗かオープンさせていた。

「先生、俺にも教えてください！」

他にも多くの生徒達が手をあげたので、ここからは課外講義として外に出る事にした。
裏庭にて、早速『魔法障壁』の実演を行う。

「見やすいように、色を付けたから」

『魔法障壁』に色を付けるのはそう難しくない。
対人戦闘だとその厚さが一目瞭然になってしまい戦闘で不利になるので、みんな透明に近い『魔法障壁』しか張らないだけだ。
魔物に『魔法障壁』の厚さがわかるのか？　という疑問もあるが、

魔物の知性についてはいまだ研究途上だし、冒険者をしていると人間とトラブルになる可能性もある。
魔法使いで色付きの『魔法障壁』を張っている人は少なかった。

「傾斜をつけすぎると大分前で展開しないといけない弱点も出てくるから、四十五度くらいが限界かな？　もしくは……」

『魔法障壁』に丸みを帯びさせる。
形状のコントロールが難しいので練習が必要になるが、これも防御力を上げる効果があった。

「なるほど。これなら同じ魔力使用量でも防御力が増える」

「難しい……『魔法障壁』に丸みを帯びさせるのが……」

「それは、ライナルトが魔法の練習をサボっているからだろうが」

「俺はちゃんと毎日練習しているぞ！」

一人の男子生徒が同級生にどやされ、彼はそれに反論した。

一部要訓練の者もいるが、何とか全員に理論を理解してもらえたようだ。
時間外指導を終えて校長室に向かうと、そこでヘリック校長からとある行事に参加して欲しいと要請された。

「『大野外遠足』ですか？」

「魔法使いクラスを引率してほしいのだよ」

「引率ですか……先生らしい仕事ですね」

「そうだろう？　もし時間が空いていたらでいいんだが」

遠足の引率とは、俺も教師業も本格的になったというわけだ。

「勿論応援はくるさ、一人で六十人も引率はしないから」

「ですよね」

プロの教師でもない俺が、一人で六十名もの行動を監視など出来るはずがない。

さすがに、その辺は考慮してくれたようだ。

「予定は空いていますからいいですよ」

「すまないな」

「いえ、俺は先生ですから」

俺は引率の件を了承した。

屋敷に戻ってエリーゼにその話をすると、彼女は大野外遠足について知っているようだ。

俺にその内容を教えてくれる。

「教会から何名か神官を派遣しますので、概要は知っています」

大野外遠足とは、王都近郊の狩猟場に全員で出かけて狩りをする行事だとエリーゼは説明する。

どうやら、俺が考える遠足よりもアクティブに動く行事のようだ。

なら、『大狩猟祭』でもいいのにと俺は思ってしまったけど。

「未成年の学生さんか、卒業前の生徒さんばかりなので、当然魔物の領域では行いません。通常の狩猟場で、みんなで狩りを成果を競い合うのです」

神官は、負傷した時のためのボランティアだそうだ。

エリーゼも一度参加した事があると言う。

「たまに軽傷者は出ますが、ほぼ顔を出すだけで終わりでした。そこまで危険でもありませんし」

王都郊外の狩り場だから、当たり前といえば当たり前だ。

冒険者でなくても、野草などを取りにくる人もいるくらいなのだから。

「ヴェルは何をするんだ？」

「監視だな。危険がないように」

俺は、エルに当日の仕事を説明した。

「結構、過保護なんだな。王都の予備校は」

ブライヒブルクにある冒険者予備校には存在しない行事だ。

俺達は滅多に王都の冒険者予備校に行かなかったので、実はこの行事が存在する事すら知らなかった。

「俺は予定が空いているから付いていくよ」

エルが、俺の護衛と手伝いのために付いてくる事になった。

「狩猟か……監視役でもいいわね」

「ボク達はもう行けないからね」

妊婦に『瞬間移動』は禁止で、イーナとルイーゼは参加できないのを悔しがっていた。

あまり動けないので、少しストレスが溜まってるのかもしれない。

「気持ちはわかるけど、大人しくしていなさい。母子共に危険なんだから」

「わかりました」

「お母さんになるには大変だなぁ」

動きたくてたまらない二人に、アマーリエ義姉さんが釘を差した。

流産でもしたら大変だと思っているのだと思う。

「それに、言うほど動けないわけじゃないじゃない。冒険者の運動量に比べれば、動いていないのに等しいのでしょうけど……」

二人も含めて奥さん達は屋敷とその周辺は自由に動き回れるし、訓練も魔法主体のものは今も行っている。

だから、そこまで行動に制限があるわけでもなかった。

「ヴェル様、魔法使いばかり六十人も監視するの？」

「いや、それは正確ではないか」

当然、魔法使い達は他の冒険者見習い達と編成しているパーティで参加する。
放課後既に活動しているパーティに、この行事のために臨時で編成したパーティ、あとは現地で人数が少ないパーティとソロの人間を集め、講師が勝手にパーティを組んでしまうケースもあると聞いた。
俺の仕事は彼らの監視であった。

「まさしく……」

「ヴェンデリンさん、なぜ私とリサさんに視線を？」

カタリーナとリサの二人は、それにも逆らってボッチで大野外遠足に参加していそうだからだ。
担任の先生から『〇名でグループを作ってください』と言われた時に、余り者同士でグループを作ってしまうのはボッチ見習いでしかない。
それにも逆らって一人で行動するからこそ、真のボッチと呼ばれるに相応しいのだから。

「私は西部の予備校でしたので、大野外遠足という行事はありませんでしたわ。狩猟ランキング制度はありましたけど」

在学中一年間の狩猟の成果をカウントして、成績優秀者を表彰する制度だそうだ。

「私、十二歳の頃から三年連続で一位でしたわ」

「カタリーナ、凄い！　どういうパーティで狩猟をしたの？」

「……私ほどの魔法使いになると、一人で十分に対処可能ですから……」

ヴィルマの質問が堪えたようで、カタリーナは顔を引き攣らせていた。

きっと彼女は、ずっと誰ともパーティを組まないで一人で狩猟を行ったのであろう。

「リサは？」

「私は王都の冒険者予備校の出なので、『大野外遠足』には出ました……」

ヴィルマは続けてリサにも聞くが、口籠って後半の言葉が出ない。

出会った頃のリサを考えると、間違いなく彼女一人で参加したのであろう。

「一人でも、優秀な魔法使いは何とかなるからの。妾もそれは理解できたわ」

魔法を使えない冒険者見習いが一人ではどうにもならないが、魔法使いなら一人でも好成績を上げてしまう。

カタリーナとリサは、典型的なボッチ魔法使いというわけだ。

いや、こういう場合は孤高の魔法使いであろうか？

俺も他人の事は言えなかったが……。

「しかしわからぬの。その時だけでも適当にパーティを組めばよかろうに。のう、カチヤ」

「あたいはソロだったけど、臨時パーティならよく組んだぜ」

それは、テレーゼとカチヤがそっち側の人間だからだ。

テレーゼならば、自分がリーダーになってパーティが組める。

カチヤもこう見えて、誰とでもすぐに仲良くなれるスキルを持っている。

普段はソロ冒険者であったが、定期的に臨時パーティを組んで狩猟を行っていたそうだ。

冒険者予備校時代からの知己も多く、実は彼女はコミュニケーション能力に優れていた。

「カチヤ、凄いんだな」

「えっ？　そうか？　旦那」

俺も基本的にはカタリーナとリサ寄りだから、カチヤを羨ましく思ってしまうのだ。

「大野外遠足ならあたいも出たけど、あの草原や森は危険は少ないからピクニック気分でいいと思う」

ウサギ、鹿、アナグマ、ハクビシン、鴨、ホロホロ鳥。

獲れる獲物はこのくらいで、まず死者など出ない。

だから、大野外遠足なのだそうだ。

「お気楽な行事なのか？」

「俺は半分お休みのようなものだな」

エルはのん気そうだが、翌日俺達は予想外の喧騒に巻き込まれる事になる。

「これはこれは、バウマイスター先生ではありませんか。私は講師のヨーゼフと申します」

「普段はなかなか挨拶が出来ないので。ラードルフです」

遠足は家に帰るまでが遠足だと、日本で学校の先生が言っていた。
大野外遠足も同じであったが、冒険者予備校は学校ではない。
現地集合現地解散なので、早速遅れてくる生徒達が続出した。

王都からそんなに距離は遠くないのにこの体たらく。
だが、冒険者では珍しくない。

少しくらい遅刻しても、冒険者とは稼げれば問題ないからだ。
勿論、貴族家に仕えようとすればそんな奴は駄目だが。

そんな理由で生徒達を待っていると、俺に正規・臨時を含めて多くの講師達が挨拶に訪れる。
ちゃんと対応はしているが、数が多くて相手をするのが面倒だ。

「みんな、必死だな」

隣にいるエルが、ボソっと呟く。

「何で、臨時講師の俺に挨拶を？」

「お前なぁ……ローデリヒさんの計画書をちゃんと見ているか？」

「見ているけど、それが？」

「バウルブルクの冒険者予備校建設計画だよ」

それは俺も見たが、それは一年後に開校予定のはずだ。

いくら魔法で工事できるとはいえ、そうポンポンと何でも出来るわけがないのだから。

「正規講師は予備校の幹部と校長の椅子が欲しいだろうし、臨時講師は正規講師の椅子がほしいだろうな」

俺のような短期間のみの臨時講師とは違って、正規講師員職の空きを待ちながら臨時講師を続けている者も多い。

彼らからすれば、バウルブルクの冒険者予備校で正規講師枠が増えると期待しているというわけだ。

「採用なんて、校長にした人に丸投げする予定だけど」

「それでも、領主様の鶴の一声は貴重だろう？」

「かもしれないけどな」

他にも、多数の生徒を引率するので多くの冒険者も参加している。

アルバイトなのであろうが、彼らも俺を食い入るように見つめて

いた。

「彼らは？」

「貴族の子弟とかじゃないの？」

生活のために冒険者になったが、出来れば仕官したい。

そういう連中がこのアルバイトに潜り込んだようで、必死にアピールを続けていた。

「何か、やりづらいな……」

彼らは、俺の方にばかり視線を向けるので困ってしまう。

「無視しとけ。仕官なら、正式な窓口から申し込めばいいんだから」

他人に見られ続けて居心地の悪さを感じていたが、ようやく生徒が全員集合した。

大野外遠足は校内行事なので、最初に開会式がある。

パーティ毎に整列し、ヘリック校長が挨拶をしてから注意点などを話していた。

俺とエルは、校長の横に講師達と共に並んでいる。

「至極当たり前の事ばかりだけど、念のために言うんだな」

「そこは、予備校だからだろう」

やはり、いつ聞いても校長先生の話など退屈なものだ。

幸いだったのは、元は優秀な冒険者であるヘリック校長なので無駄話はしなかった点であろうか。

あと、学校の朝礼では恒例の倒れる生徒はいなかった。
その程度で倒れてしまう奴に冒険者は不可能だから当然であったが。

「では、開始の合図を！」

「はい」

ヘリック校長に促され、俺は上空に向けて『ファイヤーボール』を放つ。
花火代わりというわけだ。
これが開始の合図となり、生徒達は事前に地図を見て検討したポイントに向けて走り出す。

「各講師の方々も、臨時雇いの冒険者の方々も。所定のポイントでの監視を続けてください」

そう言うと、ヘリック校長は本部に指定したテントに引っ込んでしまう。
他にも、治癒担当の神官数名と幹部クラスの講師達も一緒だ。

「若い連中が汗を流せってか？」

エルが早々に引っ込んでしまったヘリック校長達を皮肉っていたが、待機も仕事であろう。
気合を入れて現場に来られても逆に困るのだから。

「エル、行くぞ」

「了解」

俺とエルも、事前に話し合って決めたポイントへと向かう。

「草原に一部森か……悪くないな」

「そうだな」

俺とエルが担当するエリアは草原と森が隣接するエリアで、悪くない狩り場だと思う。

エルも同意見であった。

俺はすぐに、はぐれた大猪や熊などがいないかを確認。

いれば駆除をして、生徒達に危険がないようにする。

これも、講師役の仕事であった。

「何だ、大物がいるじゃないか」

「本当か？　一匹だけでも狩りができてラッキーじゃないか。行こうぜ、ヴェル」

俺は『探知』でそれらしい反応を見つけ、早速二人で現場へと向かう。

熊はいなかったが、巨大な猪がいたのですぐにエルが矢を放ち、俺が『ブースト』をかけた。

額のど真ん中に矢が刺さった猪は、すぐにその場に倒れて絶命する。

「やっぱり、王都の予備校は甘いよな」

「校内行事だからだろう。放課後の狩りではこんな事はしないし」

行事で冒険者に死なれると面倒だから、こんな事をしているのであろう。
気にしても仕方がないと、俺は猪をその場で血抜きしてから魔法の袋に仕舞う。
他の反応も探すが、あとは小型の反応ばかりでここは安全な狩猟場のようだ。
これにて駆除が終わり、あとはウロウロと監視するだけしか仕事がなくなってしまう。

「あーーー、狩りがしたい」

「ヴェル、生徒達の獲物を奪うなよ」

「ならば、他の物を採ろう」

というわけで、エルには監視を続けさせ、俺も『探知』で監視を続けながら野草の採集を始める。

「この草は天ぷらにすると美味しい。この木の新芽はお浸しにすると最高だ。この草の根っこはあとで味噌汁に入れよう」

「妙に詳しくなったな」

「先生がいいからさ」

「エリーゼ先生かよ」

エリーゼは、教会の炊き出しに使う素材の採集を経験しているので、野草にも詳しかった。
俺も教えてもらって、ある程度はわかるようになっている。

「毒とか大丈夫か？」

「ありきたりで、確実に大丈夫なものしか取っていないから大丈夫」

魔法で解毒もできるが、たまに魔法が効かない未知の毒もあるのでその辺は警戒していた。

『バウマイスター伯爵、野草の毒で死す』では格好がつかない。

「これくらいで十分だな。早速調理を……」

ある程度採集を終えたら、今度は野外調理の開始だ。

ただ監視もあるので、携帯魔導コンロでご飯を炊き、味噌汁を作り、野草の天ぷらとお浸しを作るくらいである。

「いや、十分に作りすぎだから！」

「メインは、持参しただけだぞ」

さっき獲った猪ではないが、これは事前に大きな鍋で角煮を作っていた。

豚肉ではないが、エリーゼの作なので味は美味しい。

これも温める事にする。

「いい感じに昼食が出来たな」

遠方では、生徒達が懸命に狩りをしている。

成績上位者には表彰と賞金も出るそうで、他にも高名な冒険者というのはみんな大野外遠足においても好成績を上げていたそうだ。

当然、生徒達は優秀な成績を目指す事になる。
みんな懸命になって当然なのだ。

「ご飯、野草の根の味噌汁、野草の天ぷら、野草のお浸し、猪の角煮。食事はバランスよくな」

「こんな場所でそんな事を気にするのは、間違いなくヴェルくらいだろうな……」

生徒達に特にトラブルもないようので、俺達はのんびりと食事を始める。
ヘリック校長達も食事を取っているであろうし、他の講師達も弁当くらい持参しているはず。
生徒達も、各々自由に昼食を取るはずだ。

時間の指定などない。
そのくらい、自分で考えて取れという事なのだ。

「先生、美味しそうですね」

「いいなぁ……」

「豪勢ですね」

食事をしていると、顔見知りが声をかけてくる。
魔法使いクラスでトップ3で俺が目をかけているアグネス、シンディ、ベッティの三人であった。
彼女達は仲がいい三人でパーティを組んだようだ。

「すまないな。規則上、分けてあげられないんだ」

飯の確保とその時間配分も大野外遠足の課題に含まれているので、あげると失格になってしまうからだ。

「ルールですから。当たり前です」

やはり、委員長キャラであるアグネスの性格は真面目そのものであった。

「魔法使い三人のパーティか。ヴェル、みんな可愛い娘だな」

「お前なぁ……ハルカに言いつけるぞ」

「なぜ、女性を褒めただけで浮気扱いなのか？」

「まったく、他人の教え子にちょっかいを出して」

「思いっきり濡れ衣なんだが……」

嘆くエルは放置して、俺は三人に狩猟の成果を聞く。

「かなり上位を狙えるはずです」

「それはよかったな」

三人とも優れた魔法使いなので、別におかしい事でもない。

上級がいないので今年は不作だと騒ぐアホな講師もいたが、彼女達はまだ魔力が伸びている状態だ。

今の時点で決めつけるのはどうかと思う。

それに、俺の周りには魔力量の多い魔法使いが多いが、本来であれば中級でも十分に優れていて、そうそう一緒にパーティなど組めないのが普通なのだから。

「弓を使える奴を入れなかったのか？」

「三人の方が連携が楽ですし、弓なら持っていますから」

三人は弓も持っており、これを射て矢を魔法で強化する戦法も使って数を稼いでいるようだ。

魔法使い用の袋に、獲物が大量に入っていると思われる。

俺とエルもよく使った数稼ぎ用の戦法で、懐かしさを感じてしまう。

「先生のおかげで、前よりも大分狩猟の効率が上がりました。ありがとうございます」

シンディが俺にお礼を言うが、こういう光景を見ていると心洗われるようだ。

以前は素直にお礼を言う少女ではなく、普段は何か裏のあるお礼も言わないオッサンやジジイを相手にしていると余計にそう感じてしまう。

「怪我のないように頑張ってくれよ」

「先生」

「何かな？　シンディ」

「もし優勝したら、何かご褒美をください」

最年少であるシンディは、俺に褒美が欲しいとストレートに言う。図々しいお願いではあるが、彼女の愛らしい容姿と声によってまったくそうは感じられなかった。

「優勝したらな。王室御用達のフルーツパーラーで食べ放題だ。他のクラスメイト達にも伝えておいてくれ」

「やったーーーっ！　ありがとうございます」

俺から優勝したら奢るという条件を引き出した三人は、素早く準備したお弁当を食べると狩猟に戻っていく。

その対象が彼女達だけでなく、他の魔法使い達も入っていたのは、先生として依怙贔屓はよくないと思ったからだ。

「俺達にも、あんな風に可愛い頃があったな」

「ヴェル、お前はジジイか。俺達はまだ二十歳前だぞ」

「とはいえ、これまでの苦労を考えると……」

とても、十七歳の少年少女がしていい苦労ではない。

俺は、中身がおじさんだからこそ耐えられたのだと思っていた。

「それは考えるのを止めようぜ。確かに幼く感じるよな」

「だろう？」

俺に巻き込まれて苦労しているエルも、アグネス達を見て昔を思い出しているようだ。

「でもみんな、ルイーゼよりは胸があったがな」

「エル、それを本人の前で言うなよ……」

確実にぶん殴られるはずだ。

俺ならそんな恐ろしいタブー、口に出すのも躊躇われる。

「当たり前だろうが。ルイーゼの場合、手加減されても滅茶苦茶痛いからな」

健康に留意した昼食を取ってから午後も監視を行うが、そろそろ駄目なパーティが目立ってくる。

準備した矢の数が少なくて狩猟ができなくなる者、午前中に張り切り過ぎて動きが極端に落ちてしまった者。

みんな経験不足だから起こるミスであり、今の内ならばまあいい経験であろう。

「三人組は頑張っているな」

三人は、いまだにペースを落とさずに狩猟を続けている。

これなら優勝するかもしれない。

夕方になりヘリック校長の元に戻ると、彼から再び上空に『ファイヤーボール』を撃つようにとお願いされる。

これで、大野外遠足の終了というわけだ。

集まった生徒達は、パーティごとに獲った獲物を集計してもらう。

一時間ほど後に、ヘリック校長から成績発表があった。

「優勝は、『マジカルトライアングル』！」

俺の予想どおりに、優勝はアグネス達のパーティであった。
二位以下のグループを大きく引き離しての圧倒的な勝利だ。
マジカルトライアングルとは、彼女達のパーティ名である。
魔法使いが三人なので特に捻りもないパーティ名であるが、俺はとても似合っていると思った。

他にも、魔法使いを入れたパーティは例年よりも優れた成績をあげているところが多い。
俺の指導も、少しは役に立ったのかもしれない。

表彰台の上で賞状と賞金を貰う三人を見ながら、俺は一人感動に浸っていた。

「ヴェル、特に波乱もなく優勝したな」

「約束どおりに奢ってあげないと。先生は約束を守るものだ」

「そういうものなのか？」

「そういうものなのだ」

「まあ、好きにしたら？」

そして三日後、俺は約束どおりに三人を王室御用達のフルーツパーラーへと案内した。
このお店は老舗の果物屋で、王宮にも果物を卸しているせいで王室御用達の看板を掲げている。
ケーキ屋も経営していて、そこでは仕入れたフルーツを使ったス

ィーツが人気となっていた。

バウマイスター伯爵家も冒険者ギルド経由で魔の森産フルーツを卸しているので、お得意さんでもある。

「先生、本当にこんな高いお店でいいのですか？」

真面目なアグネスは、お店の門構えと建物の豪華さを見て申し訳なく思ってしまったようだ。

一番安いスィーツでも一個十セントなので、庶民にはなかなか手が出ないお店である。

分不相応だと思っているのかもしれない。

「優勝のお祝いなんだし、今日くらいは構わないだろう。約束した以上は、先生はそれを守るさ」

「ありがとうございます」

それでもやっぱり女の子なので、彼女も甘い物には目がないようだ。

アグネスはとても嬉しそうな顔をする。

「一杯食べるぞ。おーーーっ！」

「一杯食べてくれよ」

優勝したら奢ってほしいと言い出したシンディは、無邪気に喜んでいる。

「限定のケーキ。これ食べたかったんです」

ベッティも大喜びなので、このお店にしてよかったと思う。
早速四人でお店に入ると、そこには品の好さそうな初老の男性が待ち構えていた。

「バウマイスター伯爵様、お待ちしておりました。フルーツパーラー『ブリュンヒルト』のオーナー、ツェーザルと申します。本日はようこそお越しくださいました」

「これは、オーナー自らどうも」

人気のお店なので一応予約を入れておいたのだが、それがオーナ自らの出迎えに繋がったようだ。
やはり、俺はＶＩＰ扱いのようだ。

「最近では、魔の森産フルーツとそれを使ったスィーツが好評でして、私共の商いも広がっております。それでお礼を申し上げたいと思いまして」

この店のオーナーは、アルテリオさんと知り合いなのだそうだ。
彼と組んで、今では王都とその周辺に支店網を広げているらしい。

高価ではあるが、ここぞという時には『ブリュンヒルト』でというイメージで、帝国内乱時には北部地域の流通がダメージを受けたが、全体的には南部・パンゲニア平原開発、王都再開発、スラムの大幅な減少などもあり、王都周辺は好景気に沸いていた。

なので、たまには庶民が奮発して購入というケースも増えていたのだ。

「特別室をご用意いたしました。どうぞ」

「わざわざすまないな」

「バウマイスター伯爵様は有名ですので、その……」

ブリュンヒルトのカフェスペースには多くの客がいて、特に貴族達は俺に注目している。

同じスペースで喫食をすれば話しかけられて面倒なはずなので、オーナーが俺達に気を使ってくれたのであろう。

「ご案内いたします」

オーナー自らの案内で、俺達はＶＩＰ専用の個室に案内される。

「こちらがメニューでございます」

「好きな物を頼んでくれ。食べきれなくても、持ち帰ればいいんだし」

「魔法の袋ですね」

この前の講義で、師匠に教わった魔法使い用の魔法の袋の作成実習を行った。

魔力量が低いとカバン一つ分くらいしか収納できないのだが、この三人はかなりの量を魔法の袋に収納できる。

お土産のケーキくらいなら、いくらでも入るはずだ。

「魔法の袋に入れておけば鮮度が下がらない。つまり……」

「わーーい、暫くブリュンヒルトの味が堪能できる」

シンディとベッティは、大喜びで自分の魔法の袋の確認をした。

「お待たせいたしました」

「凄い……」

「美味しそう」

「夢のようです」

テーブルの上には、ケーキ、プリン、ババロア、パフェなど大量のスィーツが並んだ。

注文していない品もあり、他にもメニューにない新製品などもあるようだ。

「来週からお出しする予定の新製品もあります。ご感想などをいただければ幸いです」

オーナーが気を使って、新製品を俺達に無料で提供してくれた。

エリーゼ達にも持ち帰ってあげようと思う。

「じゃあ、遠慮なくいただこうか」

「「「はいっ！」」」

俺達は順番にスィーツを食べ始める。

このために昼食を抜いているので、かなりの量が入るはずだ。

「甘さ控えめで、いくらでも入りそうです」

「美味しい」

「幸せです」

三人とも、スィーツを食べながら幸せそうな顔をしていた。
その様子を見ると、連れて来た甲斐もあったというものだ。

「でも、他のみんなに悪いような……」

「条件が優勝だから問題ないさ」

真面目なアグネスらしい意見だが、冒険者や魔法使いの世界は実力本位なのだ。
俺が優勝したらという条件を飲み、それをアグネス達が達成したので連れて来た。

他のクラスメイト達も条件が同じであった以上は、これに文句をつけても仕方がない。
もし奢って欲しければ勝てばよかった。
この世界では、みんなそんな風に考えるのが普通だ。

「お腹一杯です。先生、ありがとうございました」

「先生、ご馳走様でした」

「とても美味しかったです。ご馳走様でした」

沢山のスィーツを食べ、お土産も大量にある。

三人はとても満足そうで、その顔を見ていると俺もなぜか嬉しくなってしまうのであった。

「つまり、新しい嫁候補だと？」

「エル、お前はどこをどう聞くとそういう話になるんだ？　先生として優勝した教え子三人に、約束どおりスィーツを奢った。それだけの事じゃないか」

「本当にそうなのかなぁ？」

その日の夜、俺は屋敷に戻ってエリーゼ達にもお土産のスィーツ類を振る舞っていた。

エルも姿を見せてケーキを食べていたが、突然とんでもない事を口にする。

「俺は先生として、頑張った可愛い生徒達にご褒美を出しただけだぞ」

「いや、そんなブリュンヒルトほどの高級店。貴族や金持ちが、若い姉ちゃんの気を引こうと連れて行くようなシチュエーションにしか見えない」

「嫌だねぇ……心が穢れている人は」

「だから、ヴェルがどう思うかじゃなくて、世間の人がどう思うか

なの。わかるか？」

「そんな事は、いちいち気にしていられないよ」

帝国内乱での功績に、トンネルでの騒動もあった。

いちいち世間での風聞を気にしていたら、俺にはカウンセラーが必要になるかもしれない。

「大丈夫よ、エル。世間の人はこう思うわ。ヴェルは弟子を取ったのだと」

イーナが言うには、俺が冒険者予備校の魔法使いクラスの中で最優秀の三名を弟子として囲おうとしている。

そういう印象を受けるようだ。

「弟子かぁ……魔法使いの師弟制度って、俺にはよくわからないけど……」

「私にもわからないけど……その辺ってどうなの？　リサさん」

「正式な登録が必要というわけでもないですし、お互いに承知するだけです」

最近やっと普通に喋れるようになったリサは、魔法使いの師弟制度について説明する。

「こういう時に、前はブランタークさんだったけど」

「お師匠様は、お忙しいのです……子守りに……」

ここのところ、ブランタークさんは姿をほとんど見せない。
その理由は、内乱中に子供が生まれたので、家族との時間にウェイトを置いているからだ。

なので、本当に用事がある時でないと俺も迎えに行っていない。
ルイーゼやカタリーナからすると、今までは究極の独身主義者だったのに、今では子供に掛かりきりのブランタークさんが面白くて仕方がないのだ。

「私もカチヤに教えましたけど、やはり男性は男性同士で、女性は女性同士の方がいいかもしれませんね」

「器合わせの問題か……」

親子や恋人、配偶者以外の器合わせが世間から色眼鏡で見られる以上は、男性は男性同士、女性は女性同士が好ましいとされていた。
ただ、器合わせさえしなければ、性別の違う師弟は珍しくない。

「でもよ、カタリーナの師匠はブランタークさんだろう？」

「器合わせは、ヴェル様とした」

「なら問題ないのか」

ヴィルマの返答にカチヤは納得した。

カタリーナは、俺達と出会うまですべて独力で魔法を学んでいる。

その後で俺と器合わせをし、他の指導は全てブランタークさんが行っているので、彼女の師匠はブランタークさんという事になる。

「あたいは姉御が師匠で、魔力の伸び担当は旦那だもんな……」

自分で言いながらカチヤは顔を赤く染めていた。

恥ずかしかったのであろう。

「カタリーナは凄いよな。あたいよりも年下なのに、姉御が感心するくらい独学で魔法を習得していたし」

「私も、基礎はブランタークさんなので」

リサですら、成人前にはブランタークさんから指導を受けている。

それすらないのに独学で一流の魔法使いになったカタリーナに、彼女は感心していた。

「それは、カタリーナが……」

「ヴェンデリンさん、何なのです？」

「何でもないよ」

「怪しいですわね……」

カチヤのようにコミュニケーション能力がないので、独学で何とかしないといけなかった。

必要に駆られてというやつだ。

これは、口に出して言えなかったが。

「エリーゼは、教会だよね？」

「はい、治癒魔法使いの方に基礎を習いました」

そして、俺と器合わせをする前に魔力の伸びがほぼ限界に達してしまった。

その後、俺が他人様の前では言えない方法で伸ばしていたが。

「ブランタークさんからも、細々としたコツなどを教えてもらって感謝しています。私もそうですが、ルイーゼさん、イーナさん、ヴィルマさんもそうですよね？」

ルイーゼの師匠は導師という事になっているが、ブランタークさんからもたまに指導は受けていた。

俺と結婚後に魔法使いになったイーナとヴィルマは、一からブランタークさんの指導を受けている。

「あたいもそうだし、旦那もそうだから、ブランタークさんの教え子が多いよな」

内乱中には、帝国の魔法使い達にも指導していたので、弟子の多さでは大陸随一かもしれない。

「そのせいで、引き抜きのお話もあったそうですが」

「エリーゼ、それはホーエンハイム枢機卿経由の情報かな？」

「はい」

王国がブランタークさんを法衣貴族にしてしまい、冒険者予備校の校長職を任せる計画があったそうだ。

エリーゼは、ホーエンハイム枢機卿から聞いたと話す。

「ですが、ブライヒレーダー辺境伯様はいい顔をしませんし、ブランタークさんも嫌がっていました」

自分が貴族になると面倒だと考えている人だし、ブライヒレーダー辺境伯家での待遇は悪くない。

冒険者予備校の校長の件も、貴族にしたブランタークさんを押し込んで予備校校長職を貴族固定にしてしまおうとする貴族達の陰謀があったようだ。

「ブランタークさんは、お世話になったヘリック校長を押し退けたくはありませんし、有能でちゃんとお勤めを果たしている方を、そんな理由で退職させるのかという話になりまして」

ブランタークさんは突っぱねてしまったために、その話はお蔵入りになってしまったそうだ。

「面倒臭い話だな」

「ですが、その三人の魔法使いの方々はどうするのですか？」

「えっ？　どうって……」

どうもこうも、このまま一年間のカリキュラム終了まで教えて、修了式で他の生徒達と共に『よく頑張ったな』と褒めて、ドラマの教師のように感動に浸るだけである。

それが終われば臨時講師期間も終了なわけで、卒業後にも師匠として個々に面倒は見るが、これはケースバイケースだな。

「間違いなく、他の貴族達はピリピリしていると思います」

才能ある若い魔法使い達なので、どうにか自分の家に引き込もうとしているのに、俺が殊更可愛がれば、バウマイスター伯爵家で確保するつもりなのではないのか？

そういう風に考えているのであろうとエリーゼが予想した。

「そうでなくても、うちは伯爵家にしては魔法使いの数が多すぎますから」

当主である俺の他は、全員妻なので文句も言えない。

だが、ここで他の魔法使い確保に走ればただでは済まないぞ、と思っている貴族も出てくると、エリーゼは警告する。

「決められた期間は教えるけど、あとの進路は自分で決めてほしいな。勿論、指導や相談は常に受けるけど」

師匠なので助けはするが、最終的には自分で進路などを決めてほしい。

俺はそう思っているのだが、周りが色々とうるさいのは優れた魔法使いの宿命であるか。

それでも、アグネス達には自由にやってほしいものである。

今の俺が完全な自由とはほど遠いところにいるので、余計にそう感じてしまうのだ。

「彼女達の進路は自分で決めるべきだ。先生は、そのための努力は惜しまない」

「本当、このわずかな期間で先生にかぶれたな」

「かぶれた言うな！」

思わずエルに言い返してしまったが、それから数日後早速に予備校で変化があった。

「アグネスさん、俺達のパーティに入らないか？」

大野外遠足の結果もあり、アグネス達三人はよく他の生徒達からパーティに誘われるようになっていた。

「すいません、私達は三人で動いていますから」

ただ、三人とも今のパーティで十分だと思っているようで、誘いはすべて断りを入れている。

魔法使い三人のパーティというのは珍しいが、それで成果が出て本人達が納得しているのなら文句を言う筋合いのものではない。

だが、中にはおかしな連中もいる。

「魔法使いという希少な才能を持つ者が三人も固まっているのは、はなはだ効率が悪い。僕が分割してパーティーを組み直してやろう」

なぜかこういう上から目線のアホが定期的に出てくるが、命をかけて仕事をしないといけないのに、なぜ出会ったばかりでよく知らないお前にパーティーの編成を任せないといけないのだ。

それをアグネスが指摘すると、そいつは逆ギレした。

「魔法使い三人のパーティ一つよりも、魔法使いが一人のパーティ三つの方が効率がいいだろうが！　僕はこういう知識に長けているんだ！」

「はいはい。そこまで」

俺は、アグネスに怒鳴りつけるアホを制止する。

年齢は俺よりも数歳上に見えるが、なぜかそれだけでとても偉そうである。

「何だね？　君は」

「冒険者パーティとは自分で決めるものであって、他人に強制されるものではない。お前は、そんな事もわからないのか？」

「僕が一番効率がいい方法を言っているのだ。何しろ僕は、ベイヤー男爵家の者だからね」

段々と話が見えてきた。

どうやらアグネス達を手に入れるために、このバカ達が予備校に送り込まれてきたのであろう。

来たばかりなので、俺の顔を知らなかったようだ。

「（ローブ姿なんだけどな……）効率って言うけど、分割して戦力が落ちたパーティが犠牲を出せば、その時点で全体的な効率が落ちるけど」

何度でも言うが、命がかかっているのに戦力の公平な分布もクソもない。

パーティメンバーは、自分の意志で決めるものなのだから。

「君は魔法使いかね？　魔法使いは魔法は凄いが、冒険者としてパーティを組む時などは、幼少の頃より高度な教育を受けた貴族たる

僕に任せたまえ」

戦闘力はあまりないけど、指揮、調整能力は優れていると言いたいらしい。

軍隊ならともかく、人数が少ない冒険者パーティで戦闘力が低いのは致命傷だと俺は思うのだが……。

「君はまだ若いではないか」

言うほどこの貴族のボンボンと年齢差はないと思うが、二十歳は超えているのでアグネス達の確保のために実家から送り込まれて来たようだ。

ただし、跡取りや有能な者は公的な仕事で忙しい。

ここに送られてきた時点で、間違いなくこいつは家ではオマケ扱いのはずだ。

「言い分は聞きました。ですが、やはり冒険者パーティは本人が決めるものです。それに、この娘達はまだ未成年なので」

「それについては安心したまえ。我がベイヤー男爵家からの出陣命令で、いくらでも魔物の領域に入れるから」

「あんたはバカか……」

俺は十二歳の頃に、王国政府からの従軍命令でグレードグランドの討伐に赴いた。

貴族家でも家族や領民に同じような命令を課す事は出来るが、まともな貴族はそれをしない。

領内の魔物の領域解放を目指すなら成人した凄腕冒険者達に任せるのが常識で、内乱の鎮圧、紛争、山賊の退治などでも領主や家臣が跡取りや子供を出陣させる時くらいにしか使わないからだ。

貴族家が、自分達の利益のためだけに魔法使いを囲って魔物の素材などで利益を上げる。

こういう搾取行為は、世間から白い目で見られてしまうからだ。

「まず前提条件がおかしい。この娘達はベイヤー男爵家の領民ではない。もし従軍命令を出すにしても、それは王国政府の領分だろうが」

「それも、我がベイヤー男爵家の領民に転籍すれば問題ないさ」

「おい……」

この目の前のバカは、自分の領地によほど自信があるのか？

いや、それはないだろう。

うちの実家を見ればわかる。

王国直轄地で普通に暮らす住民達からすれば、何が悲しくて名も知らない男爵領になど移住せねばならないのかと思うからだ。

貴族領には当たり外れがあり、子爵領以上だとそう外れもなく、ブライヒレーダー辺境伯領などは生活レベルが王国直轄地と大差ない。

だが、男爵領以下は賭けになる。

当主や統治システムが優秀で暮らしやすい場所と、駄目な場所がある。

ベイヤー男爵領は、このバカを見れば一目瞭然だ。
間違いなく外れであろう。
アグネス達に金を稼がせようとしている意図が透けて見える。

「大体、君は何だね？　生徒のようだけど、これ以上うるさいと父上に言って罰を与えるぞ」

「罰ですか……」

どんな罰なのか、気にはなるところである。

「そうだ！　いくら魔法使いでも、平民風情は黙って……」

「あのさぁ。見てわからないのか？　俺は講師なんだが。臨時ではあるけど」

世の中には、予想を超えるバカが存在するらしい。
俺の格好を見ても、魔法使い志望の貧乏な平民にしか見えないというのだから。

「講師？　その若さでか？　嘘を言え！」

「いや、嘘じゃないけど。ちなみに、俺の名前はヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターです。二度と会わないと思うけど、一応自己紹介はしておく」

「なっ……竜殺しの英雄……」

俺の名前を聞き、ベイヤー男爵家の若い男とその取り巻き連中は足早にその場から立ち去ったのであった。

「それは、凄いバカと遭遇したな」

バカ達を追い払った後にヘリック校長に事の顛末を報告すると、彼は呆れた表情を隠そうともしなかった。

「まともな貴族は、もっとスマートに勧誘するがな。ちゃんと条件も提示するし」

お金がなかったり欲深な貴族だと、ああいう勧誘をするらしい。仲間に入れてから、貴族の子弟が強引に妾にしてしまい、稼がせて実家に貢がせる。

稀に、こういう寄生行為の被害に遭う女性魔法使いがいるそうだ。

「ベイヤー男爵家か……ギルドに報告しておく」

「報告するとどうなるのです？」

「当然、ブラックリスト入りさ」

ブラックリストに入ると、指名依頼がほぼ出せなくなる。

冒険者が寄り付かなくなるので、領内に魔物の領域を抱えていると自力で狩りをしなくてはいけなくなるのだそうだ。

「何でそんなバカな事を……」

「領内に、魔物の領域がないんだろうな」

ただの貧乏男爵領なので、余り者の息子に女魔法使いを誑かせて実家に仕送りをさせる。
それにより、領地の財政状態を改善するというわけだ。
それにしては、あの男はイケメンでもなかったな。
ヒモを目指すのであれば、せめてイケメンでないと難しいであろう。

「そういう貴族ってのはプライドばかりが高くてな。例えば正妻や身分の確定している側室にでもするならわかるけど、高貴な我が家に平民の血は入れられないからとか抜かすんだ」

非公式の妾にして、金だけ搾取する。
女性魔法使いからすれば、関わり合いにならない方がいい連中とも言えた。

「あーーー、これは注意喚起しないとなぁ。勧誘が増えた原因の一つには、実はバウマイスター伯爵達もあるんだけど」

「俺がですか？」

「間接的にだな。帝国の内乱で大活躍したじゃないか」

俺、導師、ブランタークさん、カタリーナ、エリーゼなどが帝国内乱で大きな戦功をあげている。
魔法使いが戦争で活躍する事は誰にでも予想がつくが、実際にその成果を聞けば自分の家にも魔法使いが欲しくなってしまう。
そこで、予備校で学んでいる生徒達への勧誘が激しさを増しつつあるのだ。

「魔法使いの数から考えても、魔法使いを雇っていない貴族家の方が圧倒的に多い。バウマイスター伯爵は魔法使いに恵まれ過ぎている。戦争のみならず、領地の急速な発展も現実となれば、欲しくてたまらないだろうな」

例え初級でも、いるのといないのでは大きな違いがあるというわけだ。

その得意魔法によって、実はあまりニーズに合わない魔法使いもいるのだが。

その最たる例は、カチヤであろうか。

彼女の魔法では、領地開発や農作業の役に立たない。

本人は身体機能を強化していくらでも農作業が可能なのだが、一人だけ元気に畑を耕してもあまり成果は増えないであろう。

「これは、計画を前倒ししないとな」

「前倒しって、もしかして……」

「そう、冒険者予備校バウルブルク支部の開設をだな」

ヘリック校長との話を終えてから屋敷に戻ると、俺はすぐにローデリヒを呼び出す。

そして、予備校側からの要請を伝えた。

「予備校開設の前倒しですか。それは十分に可能ですな」

「予定では一年後になっているけど大丈夫か？」

「はい、実は敷地も校舎もほぼ完成しているのです。寮は建設中で

すけど、それは他の宿泊先を臨時に宛がえばいいのです。どうせ、最初はそれほど生徒を抱え込めませんので」

「相変わらず、手際がいいな」

さすがはローデリヒ、もう領主は彼でいいのではないかと思ってしまう。

「予備校の開設で一番時間を食うのは、手続きが面倒な上に審査でも時間が物凄くかかるからです。向こうから急げと言っている以上は、それが早まると考えるべきですな。ところでお館様、今何か不穏な事を考えていませんでしたか？」

「気のせいじゃないかな」

さすがはローデリヒ、妙に鋭い部分を見せる。

俺が領主の座を押しつけたいと、心の中で願っているのに気がつくなんて。

「準備を進めておきましょう」

そんな話をしてから一週間後、冒険者予備校バウルブルク支部はあっという間に開設された。

「手続きとか、審査って何なのでしょうか？」

「実は審査の大半は、王国政府が行っているからね。でも、最近は新規に冒険者予備校が立ちあがる話も少なく、その気になれば大分審査期間は短縮可能なのさ」

「それは知りませんでした」

「あんまり公にも出来ない話だからね、仕方がないよ」

開校した冒険者予備校の中庭で、エーリッヒ兄さんが俺に事情を説明してくれた。

仕事が少ない担当者は、その少ない仕事を引き伸ばしたがる。

どこの世界でも、役人とは同じ事を考えるようだ。

だが、今回は冒険者ギルドにせっ突かれて、急ぎ審査を終えたというわけだ。

学生寮が完成していないので人数の受け入れ制限があり、他にも入学シーズンではないので編入生ばかりだが、バウルブルク支部は活動を始めた。

校長は元冒険者でヘリック校長の知り合い、講師陣は王都の予備校に在籍している非常勤講師を昇格させて対応、生徒も王都の予備校からの転校生が大半であった。

とりあえずはこの状態で始動しつつ、来年の春までに新入生を受け入れる体制を整えるのだそうだ。

「さすがに一週間は無茶だから手続きと審査は今も継続中だけど、特に問題もなく正式な許可は出る。どんなに伸びても、新入生入学時までには終わらせるそうだよ」

「助かりました、エーリッヒ兄さん」

「私は何もしていないよ、今日はただのメッセンジャーだから」

冒険者予備校を開設すると、王国政府から補助金が出る。
その関係でバウルブルクまで来たエーリッヒ兄さんは、俺に裏の事情を説明した。

「妙な貴族から魔法使いの卵達を守る。それはわかりますけど、うちが囲い込みをしていると思われるのもどうかと……」

王都の予備校生達にバウルブルク支部への転校を打診すると、希望者が殺到した。
特に、魔法使いは全員が転校希望を出している。
うちに集まった人数が多いような気がしないでもない。

「ヴェルの奥さん達は産休中だけど、バウルブルクの予備校なら講師が出来るじゃない。講師陣の充実ぶりでは王都の予備校でも勝てないかもね。卒業後に無理矢理囲い込まなければ大丈夫だよ」

実際に、冒険者ギルド側から要請が入っている。
そこで無理をしないように、エリーゼ、カタリーナ、リサなどが対応する予定であった。

「バウルブルクなら安定して指導を受けられるし、バウルブルクはアルバイトにも有利だしね」

エーリッヒ兄さんの言うとおりだ。
まだ発展途上で手付かずの自然が多いバウルブルク近郊には、多くの獲物が存在する。
予備校生達がアルバイトで稼ぎやすいという事情もあった。

「だからって、魔法使い全員か……」

冒険者予備校バウルブルク支部の生徒数は二百名ほどであったが、その三分の一近くが魔法使いであった。
他の予備校では考えられない魔法使いの人数である。

「勧誘に関しては、卒業後に一人前になったらいつでも出来るからね。狩猟の場所に関しては、今は魔の森が一番のスポットになっている。他の支部の卒業生も結局、魔の森に集まっているのさ」

魔の森産の素材と採集物は不足しているので、その買い取り額が高い。
同じ命をかけるのなら、稼げる場所を選ぶのは当然ではあった。

「未成年の間は面倒を見るけど、成人後にどの貴族の勧誘についていこうと自由ですか……」

ベイヤー男爵家のバカが問題になったのは、まだ予備校生であるアグネス達を勧誘しようとしたからだ。
法的には問題ないが、それは暗黙の掟で禁止されている。
冒険者ギルドからすれば、駄目な貧乏男爵家くらいならそれを罰するのに躊躇わないというわけだ。

「ヴェルは、春までは大変だね」

「そうですね」

冒険者予備校バウルブルク支部に転校した魔法使い達への指導に、王都の予備校でもまだ指導の仕事が残っている。
王都の予備校に所属する魔法使いの人数がゼロになってしまったので、十歳から十一歳くらいまでの、入学可能年齢に達していない魔法使いへの指導も発生してしまった。

入学前に基礎力を付けるとかで、ヘリック校長がどこかから魔法使い見習いを集めてきたのだ。
どうやら、エリーゼ達が出産するまで俺を手放さないつもりらしい。

「これも、エリーゼ達が出産するまでですよ」

「本当にそれで終われるのかな？　ヴェルの指導って、予備校側の評判がいいんだよね。それに……慕われているね」

新設された冒険者予備校バウルブルク支部の前でエーリッヒ兄さんと話をしていると、アグネス達三人が駆け寄って来る。

「先生、もうすぐ講義の時間ですよ」

「新しい校舎って、木のいい匂いがしますね」

「先生、質問があるんですけど。先生のお兄さんって、うちのお兄さんと違ってしっかりしているんですね。格好いいし、羨ましいなぁ……」

「エーリッヒ兄さん、また夜に」

「そうだね。夕食をご馳走になりに行くから」

エーリッヒ兄さんと別れた俺は、三人に手を引かれながら真新しい校舎へと向かう。
そして結局、これからも冒険者予備校バウルブルク支部の臨時講師を続けていく事になるのであった。

第百二十六話　ヴェンデリン先生、実戦指導をする。

「バウマイスター伯爵、新しい遺跡が呼んでるのであるな」

「呼んでいるって……そう思っているのはお前だけだと思うぞ」

「勿論そうであるが、バウマイスター伯爵にも利益があるのであるな」

「そこは否定しないんだな……しかし急にやる気を出したな」

エリーゼ達が安定期に入った頃、俺達が屋敷で一緒に朝食を摂っていると、そこに魔族の考古学者アーネストが姿を見せる。

一緒に食事とは珍しい事もあるものだなと彼の分も準備させると、突然新しい遺跡の探索について話を始めた。

これまでは、ニュルンベルク公爵領にいた頃に探索した分も合わせて論文の執筆に大忙しだったのだが、それもようやく終わって新しい地下遺跡の探索を始めたいようだ。

俺に対して、熱心にその位置などを解説し始める。

「エリーゼ達が産休中なので延期だな」

せっかくのお誘いだが、完全に戦力不足である。

今の俺が手薄なパーティで冒険者としての仕事をしようとしても、まずローデリヒが許可を出さないので無理だ。

「おおっ！　何たるアクシデントなのであるな。だが、この地下遺跡は安全なので、それほど戦力はいらないはずなのであるな」

アーネストが探索を希望する地下遺跡の位置は、確かに魔の森の中ではなかった。

まだ開発の手は入っていない、バウマイスター伯爵領にはよくある広大な平原の地下にあると、彼が地図を指差しながら言う。

「エリーゼ達の産休が終わるまで待ちな」

エルが、地下遺跡の探索は暫く中止だとアーネストに語った。

「まったく、ようやく奥方達に子供ができたと思ったらほぼ一斉にとか。多少は家族計画を立てるべきであるな」

「こっちにも事情があるんだよ」

バウルブルクより北方では、俺に沢山子供が生まれてほしいと願うオジサンとジイサン達が一杯いるからだ。

それに、いつもアーネストの希望に従うわけにもいかないからな。

「しかしながら、さすがは先祖返りであるな。」

「先祖返り？」

俺が首を傾げると、アーネストは古代魔法文明時代に存在した人工魔法使いについて語り始める。

性行為によって異性の魔力量を増やし、産ませた子供やその子孫もかなり先の子孫まで魔法使いになる。

この技術のおかげで、古代魔法文明時代には多くの魔法使いが存在したのだと。
そして、俺がその人工魔法使いの先祖返りだとアーネストが言うのだ。

というか、もし本当だとしたら、こいつはなぜ今の今までそんなに重要な情報を俺に教えなかったのか？
その理由と判断に迷ってしまう。

「そんな話は初耳だがな。第一、子供ができたのと、人工魔法使いに接点はあるのか？」

「当然であるな。そういう性質を持つ人工魔法使いには女性が多く集まり、多くの子供が生まれて魔法使いの数が増える。それを狙っての人工魔法使いなのであるな。人間という生物の性を利用した、効率のいいシステムであるな」

「人間の性ねぇ……」

「そうであるな、エルヴィン殿。優秀な魔法使いは稼げるから、沢山の女性が集まって子供を産もうとする。人間も動物の一種なので当たり前であるな」

「実も蓋もないな話だな……」

知ってはいたけど、聞きたくもなかったとばかりにエルが渋い顔をした。

アーネストの説明によると、周りに女性が増えるのは人工魔法使いの宿命なのだそうだ。

人間のというか、全生物の性かもな。
女性も安全に子供を産んで育てようとすれば、生活が安定する裕福なパートナーを探すわけだし。
『貧しくても愛し合っていれば』とか、前世ではよく聞いたけど、やっぱり金持ちには女性が多く集まるのが現実だ。

この世界にいると、そんな現実をまざまざと見せつけられてしまうケースは多かった。
一部の例外のせいで、たまに俺の心は大きく揺るがされるけど。

「その人工魔法使いという存在は理解できたが、そういう重要な情報はもっと早く教えてくれよ」

「聞かれなかったから仕方がないのであるな」

「元々知りもしない情報を聞けるか！」

「そこは、想像の翼を羽ばたかせてほしかったのであるな」

一欠けらも悪気がなさそうに語るアーネストに、『そういえば、こいつはこういう奴だったよな』と心の中で納得した。
きっとニュルンベルク公爵も、俺と同じような苦労をしたのであろう。
その点についてだけは、彼に同情できる。

「つまり、生まれてくる子供はみんな魔法使いになるのか？」

「個人差はあるのであるが、どんなに少なくても中級以上の魔力は持って生まれるのであるな」

俺と子供を作ると、生まれてくる子供は全員魔法使い。
そんな予感はしていたが、それが実際にわかると逃げ出したくなる。

「ちなみに、その話を誰かにしたのか？」

「ニュルンベルク公爵だけにはしたのであるな。彼が外に漏らしたかまでは我が輩の関知するところではないのであるな」

「そうかよ……」

本当に、こいつはいい根性しているなと俺は思ってしまう。

「その話は、他の人にするなよ」

「我が輩は生物学者や医学者ではないので、意図的に外に漏らす必要もないのであるな」

その前に、自分の専門分野外なので興味がない。
あくまでも、前に人から聞いた話だという態度をアーネストは崩さなかった。
人というか、魔族の国で他の魔族から聞いたのであろうが。

「口止め料代わりに、地下遺跡の探索を手伝おう」

「毎度ありなのであるな」

なぜ毎度ありなのかは知らないが、地下遺跡の研究で静かになるのだから安いものである。
それにしても、アーネストの研究のためなら手段を選ばない態度

は恐ろしい。
何とか長期間バウマイスター伯爵領で生活をしてもらわないと…
…地下遺跡発掘を必ず手伝うしかないか……。
何かしらの利益になるからいいけどね。
「でもよ、戦力がないぜ」
この日はエルとハルカも一緒に朝食を食べていたが、そういえば
エル以外で戦力になる人間がいない。
ハルカも妊娠中なので、連れて行くわけにはいかなかったからだ。
「ブランタークさんを呼ぶにしても……」
俺、エル、ブランタークさん、そしてアーネスト。
戦力的には十分だと思うのだが……。
「何か、野郎ばかりでむさ苦しくないか？」
「そうだな……」
ここで講演活動に忙しい導師を誘ったとしても、やはり余計にむ
さ苦しくなる。
安全度は確実に増すが、導師とアーネストは相性が悪いという理
由もあった。
共に『いい性格』をしているため、近親憎悪のような感情を抱く
のであろう。
「地下遺跡の調査はバウマイスター伯爵家で行うんだから、冒険者
予備校の生徒から優秀なのを連れていけば？　いい経験になるだろ

うし」

「それは俺も考えたけどな……」

絶対に安全な地下遺跡など存在するはずもなく、そこに未成年者を連れて行くのはどうかと思うのだ。

もし何かあれば責任問題になってしまうし、貴族のゴリ押しは世間の外聞も悪くなってしまう。

「ちゃんと報酬を出せば、その手の批判はかわせるだろう。優秀なのを厳選すればいいじゃないか。冒険者なんだし、そのくらいの危険は織り込み済みのはずだ。あんまり過保護なのもどうかと思うぞ」

「我が輩もその意見に賛成であるな。どうせ、連れて行くのはあの三人の娘っ子達であろう？」

アーネストの奴、普段はまったく外に出ない癖に、予備校の生徒達をよく知っているようだ。

アグネス、シンディ、ベッティは、既に現役の冒険者に引けを取らないくらいの実力を保持している。

「我が輩でも魔力を探れるのであるな。その三人は、人間にしてはなかなかの魔力を持っているのであるな」

年齢も若く、まだ魔力も成長途上にある。

連れて行っても、そうおかしいとは思われないはずだとアーネストが太鼓判を押した。

「本人に直接聞いてみるか……」

「それが一番なのであるな」

次の日の放課後、俺は早速三人に対し、地下遺跡探索のアシストをする気があるかと訪ねてみた。

「是非、参加したいです」

「未成年なのに、これはチャンス」

「先生もいるし、安全ですね」

アグネス達は躊躇うことなく要請を受け入れ、早速アーネスト、エル、ブランタークさんと共に現地へと飛ぶのであった。

「先生、地下遺跡がありません」

「埋まっているからなぁ……」

俺達は現地に到着し、ベッティーが地下遺跡があるとされる草原を見渡していた。

何も見つからないが、もし何か目印があれば俺が子供の頃に見つけていたはずだ。

地下遺跡はアーネストの情報どおり、完全に地下に埋まっているのであろう。

「この辺を掘るのが正義なのであるな」

地下遺跡なので、まず発掘をしないといけない。
俺は、アグネス達と共に土魔法で地面を掘って地下遺跡の痕跡を探し始める。

「頑張るのであるな」

「アーネスト、お前も手伝えよ」

「調査への気力を残しているのであるな。あとは、娘っ子達に任せるのであるな」

トンネル並に苦労するかと思ったが、地下遺跡入り口の発掘作業は一時間ほどで終わった。
運良く、すぐに入り口があるポイントを引けたからだ。

「先生、入り口を掘り当てました」

「よくやったな、シンディ」

「えへへ、先生に褒められました」

シンディは運がいいようだ。
大体の場所しかわからない地下遺跡の入り口を、わずかな時間で掘り当てるのだから。
冒険者には運も必要なので、彼女は冒険者に向いているのかもしれない。

「何か、ボロいのな……」

俺達は、掘り当てた入り口から『探知』で探りながら地下遺跡の中に入る。
先頭のエルは、カビ臭い地下遺跡の空気に顔を顰めさせていた。

「残念なのであるな。中は全滅なのであるな」

この地下遺跡は、ハッキリ言って外れであった。
トンネルのように高度な『状態保存』がかかっておらず、中はボロボロで朽ち果てている。
元が何であったのかもわからないほどの荒廃ぶりだ。

「それでも、何かあるかもしれないのであるな。すべてを探索するのであるな」

全員で半日かけて地下遺跡内を探索するが、一万年の歳月とは残酷である。
中にあった物は、腐るを通り越して埃やカビとなっていた。

地下遺跡とは、本来こういうものがほとんどなのだそうだ。
今まで俺達は運がよかった……悪かったとも言えるか……。

「たまには、こういう事もあるさ」

「この建設様式と、壁面の文様については……」

こんなにボロい遺跡でも、考古学者であるアーネストには価値があるようだ。
ルーペで壁面の半ば崩れ去った装飾を確認しながら、一人熱心にメモを取っていた。

「何もないじゃないか」

「俺は早く帰れるから別にいいけど」

今朝からテンションが異常に低いブランタークさんは、地下遺跡は外れでも残念そうな顔をしていない。

それよりも、明らかに早く帰りたそうな表情をしていた。

「子供が生まれると違うよな。ブランタークさんが家に帰りたいなんて。以前なら、歓楽街に直行していたのに」

「エルヴィンも子供が産まれるってのに、下品な物言いは嫌だね。歓楽街って……」

「ブランタークさん、急にそういう風に言われると、逆に怖いけど……」

究極の独身主義者から、生まれた子供が可愛くて仕方がないマイホームパパになってしまったブランタークさん。

そのあまりの変わりように、エルは本気で引いていた。

「フランツィスカへのお土産がないのは残念だな」

ブランタークさんの子供は娘であった。

奥さんは『跡取り息子でなくてすいません』と言ったそうだが、ブランタークさんは気にもせずに可愛がっているそうだ。

婿を取るという選択肢もあるので、本当に気にしていないのであろう。

「じゃあ、俺の子供と結婚させます？」

「はあ？　エルヴィンは何を言っているんだ？」

ブランタークさんは、エルの冗談に本気で顔を顰めさせる。

どうやら婿を取るとか以前に、まだ娘を嫁にやるという考え自体に至っていないようだ。

「家の存続のために止むなしだが、俺が認めた男しかフランツィスカの婿として認めないぞ。エルヴィンの子供は、親の性質を受け継いでいそうだからヤダ。女遊びとかしそうだし」

「ブランタークさん、よく人の事が言えますね……」

自分に女遊びを教えたのはブランタークさんなのに、娘が出来たら途端に手の平を返した。

エルからすれば、わけがわからない裏切りに見えるのだと思う。

でもなエル、世の中の人はそうやって心に棚を作るものなのだ。

ダブルスタンダードともいうか。

「俺は真面目な男なんだ」

「俺も真面目ですよ」

二人でトンチンカンな会話が続いている間も、アーネストは崩れた壁の装飾の分析に忙しい。

そして、連れてきたアグネス達は……。

「あれ？　いないな」

どうやら、他の場所に行ってしまったようだ。

ここは退屈だったらしい。

「ブランタークさん、ちょっと探して来ます」

「娘っ子達には退屈だったのかな？　ここは罠も魔物もいないから、別に構わないけど」

ブランタークさん達がいる部屋を出て広い廊下を歩き、既に探索を終えている一番奥の部屋へと向かう。

その部屋は広かったが、いくら調べても何も見つからなかった。

昔は何かあったのかもしれないけど……。

「アグネス、シンディ、ベッティ。何かを見つけたのか？」

「いいえ、何かあったらいいなと思いまして……」

アグネスが代表して答えるが、ようは退屈して何となく地下遺跡を散歩していただけのようだ。

「冒険者を襲う高度な罠、迫り来る古代魔法文明時代の遺産ゴーレム、大量のお宝。全部ありませんでした」

「そういう事もあるのさ。勉強になっただろう？　ベッティ」

「同じ勉強になるにしても、もっと何かあった方が……」

大陸中で古代魔法文明時代の遺跡は見つかっているが、すべてにお宝があるわけではない。

このように、完全なハズレの遺跡も一定数存在しているのが普通であった。

「今回は運がなかったな。アーネストが調査を終えたら帰るとしようか」

「そうですね」

「成人したら、物凄い地下遺跡を見付けるぞーーーって、シンディは何をしているの？」

珍しく俺と話をせず、俺達に背中を向けて壁をいじくっているシンディにベッティが声をかける。

「この壁の装飾が崩れていて、その中に綺麗な玉が。もしかして、お宝！」

「どれどれ」

シンディが見つけた玉を俺達に見せようと、それを掘り出そうとして触れるのと同時に、突然地下遺跡が揺れてシンディの前にある壁が上にせり上がっていく。

どうやら、シンディが見つけた玉は隠し部屋を開けるスイッチだったようだ。

「先生、何か動きましたよ！」

「どれどれ。ああ、これは……」

装飾の小さな像に隠されていた玉は、特殊なスイッチであった。

魔法使いが魔力を送ると、それに反応して隠し部屋への扉が開く仕組みになっていたのだ。

魔法使いが魔力を送らないと発動しないし、なかなか『探知』にも引っかからない種類の魔道具であった。

「シンディの運は、神がかっているな……」

スイッチの玉は壁の装飾品である小さな像の中にあり、これは像が経年劣化して崩れていなければ誰も玉の存在に気がつかなかったはずだ。

しかも、魔法使いが触らないと反応しない。

この地下遺跡の入口を見つけた件といい、シンディは本当に運がいいと思う。

「さてと、奥の部屋は……ゲッ！」

隠し部屋はかなり広く、その奥には金色の輝きが見える。

お宝部屋であり、大量に金貨や宝石、高価なアクセサリー、装飾された剣、美術品などが見えた。

部屋の状態も悪くない。

どうやらこの地下遺跡の持ち主は、一番大切なこのお宝部屋のみを厳重に保管していたようだ。

「凄い！」

「お宝だぁーーー！」

「やりましたね！」

三人は大喜びであったが、その前には全長三メートルほどのドラゴンの像が置かれていた。

これに見覚えがあった俺は、瞬時に意識を戦闘モードに切り替える。

「三人とも、『魔法障壁』を準備」

俺はすぐ、アグネス達に戦闘態勢に入るようにと命令する。

「えっ？　どうしてですか？」

「だって、あのドラゴンの像は……」

「お宝の一つですよね？」

「いいや、あれはお宝の守護神さ」

俺がそう言った直後にドラゴンゴーレムが咆哮をあげ、俺達はそのままなし崩し的に戦闘に突入するのであった。

「性能的には、帝国でニュルンベルク公爵が使用した量産タイプか……」

ドラゴンゴーレムとの戦闘が始まったが、俺はまだ攻撃を開始していない。

アグネス達も含めて『魔法障壁』を展開し、相手の出方を待った。

ついでに、ドラゴンゴーレムの戦闘能力解析も行っている。

「体が小さい分、装甲に混ぜてあるミスリルの比率は少し高め。ブ

レスの威力は低めだが、小回りが利くな」

小型のドラゴンゴーレムは、今までに対峙したドラゴンゴーレムに比べると機動力が高い。

低空を飛行しながら爪で俺達を引き裂こうとしたり、滞空したままでブレスを吐いたりした。

「エネルギー源は、あの台座か……」

派手に攻撃を加えると、一定の間隔で台座の上に座る。

使用した魔力を、あの台座に設置された魔晶石で回復させているのであろう。

まるで携帯電話の充電器のようである。

「ヴェル！」

「伯爵様……って！　何でこんなのがいるんだよ！」

ドラゴンゴーレムの騒音と魔力に気がついたブランタークさんとエルが慌てて飛び込んできた。

「アーネストは？」

「あの程度の玩具、バウマイスター伯爵なら余裕だから、調査を続けるって」

「あの野郎……」

確かに、この程度のドラゴンゴーレムに負けるはずはないが、ス

ポンサーを助けもしないで調査とか、本当にいい度胸をしている魔族である。

「新人達は駄目か？」

「まあ、無理もない」

二人は、突然のドラゴンゴーレムに怯えているアグネス達を見て納得したような表情を浮かべた。

普通の冒険者は、一生の内にドラゴンゴーレムに遭遇する機会などまずない。

それが、成人前に遭遇して襲われているのだ。

いくら魔法使いでも、動揺して当然であった。

「俺達で倒すか？」

「いいえ。アグネス！」

「はいっ！」

俺が大声でアグネスを呼ぶと、ようやく彼女は恐慌状態から脱したようだ。

シンディとベッティと共に、俺に顔を向ける。

「三人でやれば勝てる相手だ。俺達が倒してもいいが、やるか？」

今の三人で協力して戦えば、あのドラゴンゴーレムは勝てない相手ではない。

だが、初めての実戦で怯えがあるのも事実だ。

それにまだ未成年なので、あえて無理をさせる必要はない。
戦うも戦わないも、本人達次第というわけだ。

「やります！」

「先生だって、私と同じ年齢の時に骨竜を倒したんです！　いけます！」

「あんなガラクタ！　魔法でぶっ飛ばしてやります！」

「その心意気やよし！　最低限の支援はするが、なるべく助けはないものと思って戦ってほしい」

「「「はい！　先生！」」」

「講義の内容を思い出すように」

三人は、一番年齢が上のアグネスがリーダーとなって小型ドラゴンゴーレムとの戦を始めた。

「ベッティ！　『魔法障壁』を！」

「任せて！」

まずアグネスは、竜種との戦闘で一番大切な防御を『魔法障壁』が一番得意なベッティに命令する。
俺の『魔法障壁』から外れた三人は、ベッティの『魔法障壁』によってドラゴンゴーレムからの攻撃を防ぐ。

「『魔法障壁』の強度は合格だな……」

「伯爵様、えらくスパルタじゃないか」

「本当に、十二歳から十四歳にあのドラゴンゴーレムをやらせるとは」

三人の戦闘を監視していると、ブランタークさんとエルが傍まで来る。

共に軽口は叩いているが、いつでも救援が可能な態勢になっていた。

「俺の師匠の師匠は、十二歳の子供を一人でアンデッドドラゴンと戦わせましたけど」

「それは当時坊主、今は伯爵様が、娘っ子達三人を合せたよりも強かったからだ」

「初めての実戦で、あれはないと当時は思いましたけどね」

「何とかなって、今も元気に生徒に指導まで出来ているんだ。気にするな」

ブランタークさんと話をしている間に、アグネス達は攻撃に転じていた。

ベッティに『魔法障壁』での防御とコントロールを任せ、アグネスは追跡型の『ファイヤーボール』を、シンディは『土槍』を飛ばして小型ドラゴンゴーレムを狙っていく。

「威力は十分か」

魔力量の節約のために極限まで収束した魔法を飛ばしているので、当たればダメージがあるはず。
ただ、小型ドラゴンゴーレムは素早い。
巧みに、二人の攻撃魔法をかわしてしまう。

「小型な分、機動力に長けるか……」

「ブランタークさん、小型っていうけど全長三メートルはあるぜ」

「エルヴィン、あの程度だと小型の部類に入れるのが常識なのさ」

今までに見たどのドラゴンゴーレムよりも小さいが、他の魔物に比べれば十分に大型であろう。
そして、見た目に反して恐ろしくスピードが速く、決して広いとはいえない隠し部屋に激突する事なく動き回っている。
超低空飛行まで行っているので、よほど優れた人工人格を持っているのであろう。

「埃っぽいな」

エルが、ドラゴンゴーレムの高速機動で舞い上がった大量の埃を手で払いながら文句をいう。

「当たらない！」

「アグネス、二人の魔法で部屋の隅に追い込もうよ！」

「うん、タイミングを合わせよう！」

早速自分達なりに工夫を始めたようだが、小型ドラゴンゴーレム

は部屋に隅に追いやられても二人の魔法を難なくかわし、そのついでとばかり攻撃を加えていく。

「アグネス！　シンディ！　急いで！」

常時展開してる『魔法障壁』により徐々に魔力量が減っていくのがわかるベッティは、焦りからか二人への口調を荒げた。

「そんな事を言われても、魔法が当たらないのよ！」

「クソっ！　また外れた！」

まだ魔力量でいえば十分に戦闘可能であったが、初めての実戦で三人には余裕がなくなっていた。

このままだと、徐々に魔力を削られて負けてしまう展開である。

「先生、助言しなくてもいいのか？」

「そうですね」

この年齢でこれだけ戦えれば十分であろうが、できればあの小型ドラゴンゴーレムの弱点に気がついてほしかったものだ。

確かに高性能なのだが、こんな朽ちた地下遺跡の隠し部屋に置かれていた物だ。

やはり、他の超一流のお宝を守るゴーレムには性能的に劣る。

お宝の量から考えると、ゴーレムの費用を多少ケチったのかもしれない。

ゴーレムにお金をかけすぎて置く宝がないというのもどうかと思うので、この地下遺跡の持ち主の判断が間違っているわけでもない

のだが。

「アグネス、あの小型ドラゴンゴーレムには弱点があるぞ。わかるか？」

「えっ？　弱点ですか？」

「少し考えれば子供にでもわかる。初の実戦で動揺しているから思いつかないだけだ。冷静に考えてみろ」

「はい……」

アグネスは暫く考え続けていたが、ようやくその弱点に気がついたようだ。

「先生！　弱点を見つけました！　いきます！」

アグネスは『ウィンドカッター』を展開すると、それを小型ドラゴンゴーレムが鎮座していた台座へと放つ。

そう、この小型ドラゴンゴーレムの弱点は、燃費の悪さと魔力を補充するための台座にあった。

いくらゴーレム本体が高機動性能を発揮しても、その台座まで素早く動けるわけではないのだ。

「ただ、それは小型ドラゴンゴーレム側とて理解はしているからな」

ブランタークさんの予言通りに、小型ドラゴンゴーレムはその身で『ウィンドカッター』を受けて台座を守る。

小型ドラゴンゴーレムは損傷したが、まだその戦闘力に衰えはな

い。

「それでも、攻守は逆転しました！」

シンディも台座に向けて『ウィンドカッター』を放つと、小型ドラゴンゴーレムはその身で攻撃を防ぎ、損傷を蓄積させてしまう。

何とかアグネス達の魔法攻撃を防ごうとブレスを連発するが、それはベッティの『魔法障壁』によって完全に防がれた。

「このまま押し込みます！」

ここが勝負時だと思ったのであろう。

アグネスとシンディは魔法を台座に向けて連発し、防ぎきれなくなった一発が台座の上部に命中して破片が飛び散った。

これで魔力を補充する装置が破壊されて、二度と魔力が補充できなくなった。

それを認知した小型ドラゴンゴーレムは、恐ろしい勢いで三人に襲い掛かる。

魔力切れで停止する前の、最後のひとあがきというわけだ。

「凄い力……」

「私も手伝う！」

アグネスとシンディが協力して、小型ドラゴンゴーレムの隙を突きながら『ウィンドカッター』を放つ。

次第にドラゴンゴーレムの胴体や首の部分に亀裂が増えていき、遂にその高機動力を生み出している羽を切り離す事に成功した。

これで、低空飛行による高機動は出来なくなったはずだ。

「先生、やりました！」

「止めを刺します！」

墜落して身をバタつかせる小型ドラゴンゴーレムに対し、アグネスとシンディは更に魔法攻撃を続ける。

『ファイヤーボール』、『岩槍』、『氷弾』、『ウィンドカッター』とありとあらゆる魔法攻撃を交互にぶつけていき、次第に小型ドラゴンゴーレムはボロボロになっていく。

「もう少し！」

「これで最後よ！」

これで止めとばかりに、二人は威力を増した『ウィンドカッター』をぶつけ、これにより小型ドラゴンゴーレムは完全に動きを停止した。

「アグネス、シンディ、やったの？」

「活動の停止を確認」

「ベッティ、やったよ」

ようやく強敵を倒せたので、三人は抱き合って大喜びしていた。

だが、まだそれは早い。

やはりまだ新人なので、経験が浅く油断があるのであろう。

「まだだ！　三人とも、『魔法障壁』を全開！」

「えっ？　あのゴーレムはもう……」

「急げ！　命令だ！」

「「「はいっ！」」」

俺からの強い命令で　三人は急ぎ強固な『魔法障壁』を張る。

そしてそれと同時に、大破した小型ドラゴンゴーレムは自爆してその破片を隠し部屋中にばら撒いた。

爆発で勢いがついた破片が、次々と『魔法障壁』に当たって激しい音を立てる。

もし生身であれを受けていたら、間違いなく重傷か最悪死亡していたであろう。

「まさか、自爆するなんて……」

アグネスは、それを見抜けなかったのが悔しいようだ。

小型ドラゴンゴーレム討伐の喜びも忘れて、唇の端を噛みしめている。

「先生は、なぜわかったのですか？」

「微量だが、残骸にはまだ魔力が蠢いていた」

残存していた魔力が残っていただけかもしれなかったが、俺にはその残存魔力が動いているように感じた。

小型ドラゴンゴーレムは大破しているので、つまりは最後に何か

一つ企んでいるであろうという勘というか予想であった。

素早く三人に『魔法障壁』を展開させて正解だったというわけだ。

「さすがは先生です。私は油断してしまって……」

「反省します」

「地下遺跡のゴーレムって怖いんですね……」

王国にある地下遺跡からの出土品で、自爆機能がついているゴーレムは初めてであった。

なぜ気がついたのかと言うと、帝国内乱で大量に使用されていたからであろう。

俺はそれだけ疑り深くなったというわけだ。

「おおっ！　せっかくの出土品が！　自爆では、あまり資料が集まらないのであるな！」

そして今頃になってから、アーネストが乱入して小型ドラゴンゴーレムの残骸に近寄っていく。

貴重な資料が壊れてしまった件だけを悲しんでいるのであろう。

まったく戦闘に参加しないで文句だけを言うとは、とんでもない魔族である。

「お前が手伝えば、ほぼ無傷で鹵獲できたかもしれないのにな」

「結局は自爆したであろうから同じであるな。それに、我が輩は戦闘は苦手なのであるな」

「言ってろ」

小型ドラゴンゴーレムは胴体の部分がほぼ吹き飛んでいたが、運良くとでも言えばいいのか頭の部分はほぼ無傷で残っていた。

という事は、あの動きを司る人工人格が無事の可能性がある。

だが、以前のゴーレム軍団から鹵獲した人工人格の解析すら出来ていない魔道具ギルドには『猫に小判』、『豚に真珠』かもしれない。

それでも、絶対にほしいと言うのだろうけど。

「それは後で考えるとして、三人とも大丈夫か？」

俺は、アグネス達に声をかける。

俺からの強い指示で、小型ドラゴンゴーレムの自爆前に『魔法障壁』を張れたが、予想以上の爆発の威力に呆然としていたのだ。

「先生……」

「私達……」

「三人だけでは……」

「最初は仕方がないさ。それに、三人はまだ未成年じゃないか」

爆発が怖かったようで、三人は目に少し涙を浮かべていた。

いくら魔法の才能があっても、そこは年相応の少女達というわけか。

慰めるために頭を撫でてあげると、ようやく落ち着きを見せ始め

る。

「失敗は、次の成功の糧となる。最後の『魔法障壁』の張り忘れ以外は大体上手くやっていたと思うぞ」

「「「先生っ！」」」

アグネス達の顔にようやく笑みが浮かび、俺は何とか先生として慰める事に成功したと安堵する。

一番幼いシンディとは五歳差、来年成人するアグネスでも三歳差だが、こんなに幼いものかなと思ったが、俺は中身がもう四十歳近いのでそう感じるのかもしれない。

「先生か……モテモテだな、ヴェルは」

「エル君、お仕事があるでしょうが」

「もうやらせているよ」

何を勘ぐっているのか知らないが、エルが俺をからかってくる。

しかし、俺からすればアグネス達は生徒なのだ。

この辺のケジメはちゃんと付けないといけない。

それにまだ幼い……ルイーゼとそんなに見た目は変わらないか？

いや、そんな事は関係ない。

この三人は、俺の初めての生徒達である。

無事に育て上げ、卒業させないといけないのだ。

「伯爵様よ。この隠し部屋にあったお宝だけどよ」

「吹き飛んでいるな……」

人様に渡すくらいなら、小型ドラゴンゴーレムの自爆に巻き込んで吹き飛ばしてしまえという発想だったのであろうか？

それとも、そこまで予想できなかったとか？

金貨などはそれほど傷も付いていなかったが、宝石、装飾品、美術品などは壊れたり傷だらけで価値が落ちてしまう物が多いそうだ。

「このお宝の持ち主って、財産をあの世にも持っていけると思っていたのかね？」

「さあ？　もしかすると警備用の小型ドラゴンゴーレムで不良品を掴まされたとか？」

「それはねえよ。ダメージが蓄積するか、魔力の供給が不可能になると自爆する仕組みだったんだろう」

「あの魔力の補充システムは欠陥だと思うんですけど……」

台座のジョイント部分を破壊すると魔力を補充できないなんて、俺には不良品にしか思えなかった。

「そうでもないさ。あの機動力と戦闘力だからな。よほどの魔法使いが対応しないと、台座への攻撃すら不可能だし」

ブランタークさんに言わせると、不良品ではなくそれなりに高性能な防衛装置というわけか。

「しかし、それはそれとして、こんな地下遺跡に資料的な価値なんてあるのかね？」

ブランタークさんは、隠し部屋の床をルーペで調べているアーネストに不可解な生き物でも見るかのような視線を送る。

経年劣化してボロボロの床だったので、調べる価値があるのかと思っているのであろう。

「考古学者ってのは、こういう生き物では？」

「そういえばそうだったな。俺も現役冒険者時代に地下遺跡まで警護したけどよ。壁や床の文様とか何時間も見ていて、本当に理解不能な人種だったわ」

地下遺跡の探索は一日で終了したが、俺達にはどんな歴史的な価値があるのかわからない。

それでもお宝は出たし、三人も初めての実戦経験が積めたのでよしとしよう。

「この隠し部屋の形式は、古代魔法文明時代後期に特注で作られたケースが多かったタイプの……」

俺達が撤収の準備を始めても、アーネストはルーペで地下遺跡の壁や床を観察し続けるのであった。

第百二十七話　髪は長い友達

「バウマイスター伯爵、『髪神（カミカミ）』が貴殿の領地で出現したようですぞ」

「えっ？　カミカミですか？」

「そうです。髪神（カミカミ）です」

今日は予備校講師の仕事が休みなので、俺はローデリヒからもらった報告書を屋敷で読んでいた。

広大なバウマイスター伯爵領の政務すべてを見れるはずはないが、領主として徐々に全体を把握していかなければならない。

エリーゼ達も産休中なので、こういう仕事を覚えるのにちょうどいいというわけだ。

商社マン時代の経験も、無駄というわけでもなかったらしい。

書類を読むと大凡の把握はできたし、領内の開発は予定よりも順調に進んでいた。

俺がそれを確認したところで、不意の来客が姿を見せる。

その客はエーレンフリート伯爵だと名乗り、それに相応しい服装と立ち振る舞いを見せていた。

年齢は四十前後であろう、法衣貴族にして農務閥の大貴族だそう

だ。

俺は相変わらず貴族の名前が覚えられないけど、エリーゼとローデリヒが教えてくれた。

それで何の用事かと思ったら……農務閥だから農業関係しかないと思っていたのだが……急に俺の知らない単語を口にした。

「すいません、俺は若造でいまいちよく知らないのですが、髪神（カミカミ）って何ですか？」

「伝説上の生き物と言われておりますからな。バウマイスター伯爵が知らないのも無理はないですか……」

エーレンフリート伯爵の説明によると、髪神（カミカミ）とは動物なのか、魔物なのかもわかっていない生き物なのだと言う。

「わからないのですか？」

「とても動きが素早いそうです。目にも留まらぬ速さで動くとか……」

目にも留まらないので正確な姿は誰にもわからず、生息地も目撃例が魔物の領域だったり、普通の森や草原だったりもするそうだ。

「一つ疑問なのですが、正体もわからない生き物が、なぜ目撃されたとわかるのですか？」

「それはですね……」

髪神（カミカミ）には、ある大きな特徴があるのだという。

それは、逃げる際に妙な液体をばら撒くのだそうだ。

「液体ですか？　それを浴びると体が溶けるとか？」

「いいえ、違います。その液体を浴びると、髪が生えてくるのです」

「髪ですか……」

そういえば、俺の前にいるエーレンフリート伯爵には髪がなかった。

その年齢で毛根が一本もないと、男性としては色々と辛いものがあるのかもしれない。

「つまり、逃げる時に液体をばら撒き、それを浴びた人の髪が復活したと？」

「はい、たまたま髪が薄い冒険者だったそうです。その後は死ぬまで髪がフサフサだったそうですが」

「それは凄い効果ですね……」

前世でも、髪の薄さに悩む人は多かった。

俺も上司のカツラに気がついてしまい、その人と話をする時には目線を髪の生え際に持っていかないように苦労したものだ。

薄毛に効果があると、高い育毛剤に手を出す人も多い。

科学万能な地球でも、これは絶対に効くという毛生え薬は存在しなかった。

少なくとも、俺がこの世界に飛ばされるまではだが。

この世界にも、怪しげな毛生え薬は存在している。

効果があるような、ないような……。

多少怪しい魔法薬でも、お金のある商人や貴族で大金を出して購入する人は多いのだ。

騙されて、また新しい魔法薬に手を出し、また騙される。

そんな人が多い。

何度騙されても、いつか効果のある薬に出会えるかもしれないと希望に縋るわけだ。

世界が変わっても、髪は男性にとって永遠のテーマであった。

「幸いにして、目撃ポイントは魔の森ではありません。そこで、バウマイスター伯爵殿にお願いが」

エーレンフリート伯爵は、書状の束を俺に差し出した。

そこに書かれている内容は、すべて俺への依頼であった。

「まさか、断りはしませんよね？」

これは、俺への圧力であった。

魔法を用いて何とか髪神（カミカミ）を捕えるか、逃げる時に出す液体を確保してほしいと。

そして、優先的に自分に売ってほしいとも書かれている。

依頼書の主は、間違いなく全員が髪が薄いのだと思われる。

そしてこの依頼を断ると、俺は髪のない人達から恨まれるという寸法だ。

恐るべきは、髪への執着心というやつである。

「成功するかはわかりませんよ……」

「それはわかっております。ですが、わずかな可能性に縋ってでも、我らは髪を取り戻したいのです！」

エーレンフリート伯爵のあまりの迫力に、俺は断るという選択肢を選べなかった。

「髪神（カミカミ）ですか。伝説の生き物ですね。その効果ゆえに、多くの権力者がその体液を求めたそうです」

依頼を受けてしまったのは仕方がないので、先に情報を集めようとエリーゼに髪神（カミカミ）について聞いてみた。

すると、さすがはエリーゼ先生、よく知っているようだ。

「髪神（カミカミ）の情報は、あまり平民には流すべからずという不文律がありまして……」

下手に平民に知れると、平民も失った髪を取り戻そうとして競争率が上がるからしい。

失った髪が元に戻る。

夢のような効能が確実にあるとわかれば、それを入手するために競争が激しくなりそうだものな。

成功した商人とか、いくらでも金を出しそうではある。

「髪神（カミカミ）を捕えたという記録は存在しません。体液を浴びたり、入手した人のみが、失った髪を取り戻せたそうです」

つまり、量の限られた逃走時に出す体液を入手するのに、苛烈な競争があるというわけだ。

「正体も目視できないほど素早いので、そんなに沢山の量の液体は手に入らないそうです。それも、数百年に一度入手できれば御の字だそうで……」

滅多に手に入らないし、手に入っても量が少ないのでその恩恵を受けられる人は少ないのか。

「ようするに、駄目元？」

「はい、当然大昔の魔法使い達も、髪神（カミカミ）の捕縛に挑戦していますが、成功者は一人もいませんので。体液を入手した方は、普通の人よりも多いそうですが……」

つまり、失敗しても怒られないという事だよな？

失った髪を取り戻せるかもしれないと大物貴族様達が騒いでいるけど、入手できる可能性は少ない。

それでも、その可能性に賭けて確率が上がる魔法使いの俺に頼んだというわけか。

「努力はするよ。結果については責任を持てないよなぁ……」

「そうですね、それでいいと思います」

エリーゼ先生がそう言うくらいなのだから、そうなのであろう。

「それで、その髪神（カミカミ）とやらはどこで目撃されたの？」

「それがさぁ……」

イーナに髪神（カミカミ）の目撃地点について聞かれたが、そこは意外な場所であった。

「そんな生き物が、うちの領地にいるかもしれないのか」

「素早すぎて、目撃は困難らしいですけど……」

髪神（カミカミ）が目撃されたとされるポイントは、パウル兄さんの領地と接する森の中であった。

この森はちょうど真ん中に小さな川が流れており、その川がバウマイスター伯爵領との境目となっている。

目撃されたのはバウマイスター伯爵領側の森であったが、もしかするとパウル兄さんの領地側にも出没するかもしれない。

そこで、俺はパウル兄さんに森の中での移動許可をもらいに行ったのだ。

俺とパウル兄さんの関係を考えると別に無許可でも構わないのだが、そこは親しき中にも礼儀ありというわけだ。

「何というか……雲を掴むような話だな……」

「駄目元でも、俺が受けないと圧力が凄くて……」

この国は、偉い王様、王族、貴族が支配している。
国を治める偉い立場にある方は年配の人が多く、そういう人で薄毛、ハゲ……じゃなくて髪が亡くなられて困っている人は多い。
だから俺は、駄目元でも髪神（カミカミ）の探索に全力を傾けないといけないのだ。

ここで拒否してしまうと、領地開発で邪魔をしてくるかもしれないからだ。
ローデリヒが笑顔で俺を送り出したので、まあそういう事なのであろう。

「ふと疑問に思ったんだが、なぜ目視できないほど素早い生き物が目撃されたと報告が入るんだ？」

「ええと……風圧とか残像とかですかね？」

その辺の詳しい事情は俺にもわからない。
カマイタチみたいに、素早く動くと物凄い風圧があるのかもしれない。

「パウル兄さん、分け前は必要ですか？」

「うちの領内で獲れたら考えるよ」

例え寄親と寄子の関係でも、その辺はキッチリとしないといけない。
でも、パウル兄さんは髪神（カミカミ）の体液が取れる可能性を大分低く見積もっているのであろう。
具体的な条件はあとでと言った。

「お館様、私も捜索に参加したいのですが」

とそこに、元はパウル兄さんの警備隊の同僚で、今は従士長をしているオットマーさんが髪神（カミカミ）の探索に参加したいと話しかけてきた。

「オットマーは、今日は休みだから別にいいけど……」

「ありがとうございます、やったーーー！　気合を入れていくぞーーー！」

オットマーさんは、喜び勇んで森へと向かっていく。

「あの……パウル兄さん？」

「オットマーの奴、最近薄毛で悩んでいるんだよ……」

どの時代でも、どの世界でも、髪が薄くなると悩むのはみんな同じようであった。

「つうか、本当にそんな生き物がいるのか？」

俺が集めたメンバーと、パウル兄さんの領地からもオットマーさん以下数名が参加して髪神（カミカミ）探しが始まるが、エルは本当にそんな生き物が存在するのかと疑問を投げかけた。

「いても、いなくても、ちゃんと探したという事実が必要だからな」

「つまり、アリバイか？」

「そんな感じだな」

探さないで彼らの怒りを買うと、色々と面倒になってしまう。

だから見つからなくても、俺はベストを尽くす必要があるのだ。

「金かけているよなぁ……」

「それほどでもないさ」

いるのかいないのかもわからない生き物の捜索なので、俺は冒険者予備校の生徒達をアルバイトとして雇っていた。

日当を払い、森に分散して置いて監視をさせているのだ。

「必要経費ってやつですな」

「俺が驚いたのは、なぜアルテリオさんがいるかって事だけど」

今回の探索には、バウマイスター伯爵家御用商人筆頭のアルテリオさんも参加していた。

まさかの大物の登場に、エルは驚いているようだ。

「私も色々と調べたのですが、万が一にも髪神（カミカミ）の体液を入手してしまった時の対策ですよ。エルヴィン、貴族や王族が自分が手に入れようと血で血を洗う争いを始めるのだぞ。過去には殺傷沙汰もあったと記録に残っている」

「髪ごときでですか？」

「エルヴィン、それはお前の髪がフサフサだからだ。それがない人からすれば、ライバルを物理的に消去してでも入手したいと思うだろうからな」

そんな話を聞かされると、とんでもない依頼を受けてしまったなと思ってしまう。

こちらに圧力をかけられる人達からの依頼なので、断れなかったのだけど……。

「エルヴィンは、アレを見ても同じ事が言えるか？」

「みんな！　気合を入れて探すんだ！」

「「「「はいっ！」」」」

アルテリオさんが顎で指し示した場所では、鬼気迫る勢いで髪神（カミカミ）を探すオットマーさん一行の姿があった。

心なしか、彼の下で捜索に参加している人も髪の量が少ないような……。

自分が体液を確保できれば、最優先で自分の髪を取り戻せると思っているのであろう。

確かに、前に会った時と比べるとオットマーさんの髪は薄くなったような気がしてならない。

それだけ必死なのであろう。

「見ていて怖いですね……」

「男性の髪と、女性の美容関係の魔法薬には色々とな……そんなわけで、俺はここにいるのさ。現物の値段はあってないようなものなので、商人も必要でしょうというわけだ」

大きな金が動く事は間違いないので、それに備えてアルテリオさんはここにいるのであろう。

「アルテリオさんも、髪神（カミカミ）の体液がほしいですか？」

「いえ、私はハゲていませんので。生まれた娘にええ格好したいブランタークなら必要かもしれませんね」

確かに、アルテリオさんの髪はフサフサだ。

年齢のせいで多少白髪は混じっているけど、白髪でも最悪髪を染めればいいからな。

「俺も、髪には問題ねえよ」

アルテリオさんと共に、ブランタークさんも今回の探索に参加していた。

その理由は……。

「ブライヒレーダー辺境伯が必要とか？」

「それはないよ、伯爵様。ブライヒレーダー辺境伯家もほとんどハゲがいない家系だから。万が一伯爵様が髪神（カミカミ）体液を入手すると問題が起こりそうだから、そのために俺が派遣されたわけ」

髪神（カミカミ）体液を手に入れるために、ブライヒレーダー辺境伯家経由で

色々と工作される可能性もあり、できれば入手してほしくないのがブライヒレーダー辺境伯の本音だそうだ。

「あくまでも万が一だよ。髪神（カミカミ）は数十年に一度目撃例があるが、入手できるのは十回に一度くらい。本当に幻の体液なんだよ。俺も一度だけ探索に参加した事があってな。当時はペーペーの魔法使いだったし、俺はその影すら拝めなかったけど」

ブランタークさんも、若い頃に髪神（カミカミ）探索に参加した事があるそうだ。

ただし、本当に参加しただけなので、どんな生き物かはわからないと言う。

「過去にも魔法使い大動員で捕まらなかったケースも多いそうだし、ぶっちゃけ運だよなぁ……気張らずにやろうぜ」

ブランタークさんに、やる気は皆無であった。

それよりも、早く家に帰りたいのかもしれない。

「まあ、導師は必要なのかもしれないけど……」

今回の探索には、実は導師も参加していた。

「ブランターク殿、某のこの髪型は毎日剃っているのである。アームストロング家に髪が薄い者は少ないのである」

「それは知っているけどよ。関係のある貴族から頼まれたんじゃねえの？」

「頼まれなかったといえば嘘になるのであるが、確実に入手できる

保証もないので、某からは何とも言えないのである」

同じ派閥の軍系貴族で髪が薄い人から頼まれたとか……導師は正確には軍系貴族ではないから、引き受ける義理もないのだけど。

「某が参加しても駄目だった、という風に納得する者もいるのである」

「わざわざすいません」

「構わないのである。男の魅力は髪だけではないのに、いい大人が大騒ぎしてみっともないのである！」

俺もそう思わんでもないけど、それが平気で言えてしまう導師は凄いよな。

これ以上話ばかりしていても無駄なので、俺達も髪神（カミカミ）の探索に加わる。

「先生、退屈です」

「それはわかるが、所定の位置から動かないように。日当が出ているんだから、真面目に仕事をしないといい冒険者になれないぞ」

それで、髪神（カミカミ）をどうやって探すのかだが、特に効果のある素晴らしい方法が開発されているわけではない。

アルバイトにきた生徒達を髪神（カミカミ）が目撃された森の各地に配置し、どこに現れても急ぎ対応可能なようにするだけだ。

と言っても、かれこれ数時間、何も見つからないでみんな飽きていた。

とにかく所定の場所で監視を続けないといけないので、他の狩猟や採集も禁止となっており、正直なところ俺も退屈で仕方がない。

「エル、それっぽい反応はあるか？」

「いいや、髪神（カミカミ）とやらの反応がどんなものなのか知らないけど、それっぽい気配とか反応はない」

更に数時間が経過、そろそろ夕暮れなので今日の探索は一旦中止となった。

今回の探索は、それを注視している大物貴族様方の意向を酌んで三日間行われる。

今日はバウルブルクには戻らず、パウル兄さんの領地で全員が宿泊する事となった。

「ヴェル、毎度あり」

「……」

数十名が宿泊し、飲み食いをする。

いまだ開発中のバウマイスター準男爵領からすれば、無視できない儲けであった。

そういえば、過去の地球であったゴールドラッシュの時、一番儲かったのは、彼ら鉱山夫を相手に商売をした人達だとか。

それでも、必要経費だから仕方がない。

「食事と泊まる場所は用意してあるぞ」

俺、エル、ブランタークさん、導師は、パウル兄さんの屋敷に泊

まる事になった。
アルテリオさんは、髪神（カミカミ）の体液が見つかる可能性が低いと感じたようだ。
部下を残してバウルブルクに戻ってしまった。
仕事が忙しいので、こんな場所で三日間も時間を潰せないのであろう。

バウマイスター準男爵邸は新しく建てられたばかりであり、以前のバウマイスター騎士爵家のものとは大違いだ。
バウマイスター伯爵邸ほどではないが、比較対象がアレなので恐ろしく豪華に感じてしまう。

「こんな豪華な屋敷、大丈夫ですか？　パウル兄さん」

「いや……前のうちの実家と比べるなよ……外からの来客もあるし、長年維持する予定だから、ボロかったり狭かったりすると、後で建て直しになってもっと金がかかるから」

屋敷の中に通されると、若いメイド服を着た数名のメイドがテキパキと動いていた。

「パウル兄さん！　メイドですね！」

メイドがいるだなんて……。
俺は、驚きを隠せない。

「メイドは領民の中から通いの人を数名雇っているだけだから。メイド服も貸与で使いまわしだよ」

「それにしても凄い！」

「まあ、気持ちはわかるけどな……」

昔の実家では、メイドという名のお迎えが近い冥途さんが働いており、服装も普段着のままだった。

家政婦というか、そこにも至っていないような状況だったのだから大きな進歩とも言える。

「食事にしようか」

そして肝心の食事であるが、かなり豪華なメニューとなっていた。

フルコースでメイドが配膳をしてくれるし、デザートも美味しいケーキがつく。

俺は再び心配になってしまう。

「パウル兄さん、本当に大丈夫でしょうか？」

「ヴェルは寄親だから歓待しなきゃ駄目だし、費用の方も他の連中の宿泊費や食事代をもらっているから大丈夫だよ。それと、あまり心配しない方がいいぞ。親父が落ち込むから」

「えっ？」

俺が父の方を向くと、テーブルの端で父がガックリと項垂れていた。

「ヴェルが心配して当然だよな……子供の頃にはまともな食事を出していなかったし……ヴェルが獲ってきた食材がないとおかずすら付かなかった事もあったし……いいんだ、俺は元駄目領主で……」

「父上！　すいません！」

俺は、ガックリと項垂れる父を宥めるのに、かなりの時間を費やしてしまうのであった。

「失った髪を取り戻す秘薬の材料か……大物貴族というのは大変なのだな」

ようやく父の機嫌が直ったので食事を再開しながら、今回の仕事の内容を説明する。

情報の漏えいは、父達も貴族なのでそれは察してくれた。

とはいえ、もう俺が人を使って大々的に捜索しているし、冒険者の線から漏れるのはどうしても防げない。

髪神（カミカミ）という生き物がどれほど目撃された地点に居座るかは知らないが、暫くはパウル兄さんの領地で宿を取る冒険者が多いかもしれなかった。

必ず効く毛生え薬ともなれば、大物貴族や大商人ならいくらでも金を出すのだから。

一生遊んで暮らせるお金が手に入るかもしれないとなれば、ゴールドラッシュの如く人が集まってくる可能性があった。

「うちは稼ぐ機会だな」

ただし、探しに来た冒険者達が必ず髪神（カミカミ）を見つけられるとは限らない。

だが、彼らを相手にするパウル兄さん達には、地味なゴールドラユシュが発生したのかもしれない。

「大物貴族ともなれば、人前に出る機会も多かろうからな。髪があった方が見栄えがよくていいのかもしれないな」

父はそう言うのだが、実際問題、今まで髪が薄かったのに急にフサフサになったら周りの人はどう思うのであろうか？

前世だと、植毛とカツラを疑われるケースである。

会社の上司とか目上の人だと、いかに上手くスルーするかを問われる案件であろう。

でも自前の髪だから、そんな事は気にする必要はないのか？

そんな事を思いながら、ふと父の頭に視線が行ってしまう。

とはいえ、父は別に髪に不自由していない。

少し白髪が増えていたが、それは染めれば済む問題だからな。

「ヴェンデリン、別にその秘薬は提供してくれなくてもいいぞ……」

俺からの視線に気がついたのか。

父は、俺に釘を刺した。

「我がバウマイスター家の家系で髪に困る者は少ない。特に取り得もない一族だが、それだけは自慢できるな」

バウマイスター一族で、髪が薄くなったりハゲる人は少ないようだ。

エーリッヒ兄さんとかも、髪はサラサラだものな。

でも、それはありがたいかもしれない。

この世界の貴族は髪が薄くなったからといって、坊主にして誤魔

化すという手段が使えないからだ。
貴族が坊主頭にすると、あきらかに場違いというか似合わないというか常識がないと思われるからだ。

中にはカツラをつけている人がいるのだけど、技術力の問題で誰が見てもカツラだとわかってしまう。
それを表立って口にしてバカにする貴族は少ないけど、その人がいない場所では笑い話にされてしまう事が多い。
悪口をたまたま本人に聞かれてしまい、決闘になってしまった事が昔にはあったそうだ。

そんなわけで、金のある貴族は長い友達である髪を求めて色々と努力するわけだ。
変な薬に引っかかって詐欺に遭う人もいるそうだが。

『背が伸びる薬、痩せる薬、精力剤、胸が大きくなる薬、この辺は疑ってかかった方がいいですね』

エリーゼは、俺にそう教えてくれた。
明らかに胡散臭いのに、夢のような効能を話されると、つい大金を出してしまう人が多いのだそうだ。

「その前に、その髪神（カミカミ）というのは本当に捕まるのか？」

「ええと……どうなのでしょうか？」

俺は、父からの質問の返答に窮してしまう。
その後は母も混じって、エリーゼ達の状況などについてなど話をしたので、誰も髪神（カミカミ）についての話をしなくなった。
結局人は、実際に見たものしか信用しないのだなと、俺は密かに

悟ってしまうのであった。

「先生、見つかりませんね」

「シンディの幸運でも駄目か……」

二日目の捜索も始まるが、髪神（カミカミ）とやらは影すら見つけられなかった。

幸運を呼ぶ少女シンディの実力をもってしても、そのヒントすら掴めない。

「伯爵様、見つけられないな」

ブランタークさんもやる気なさげだ。

目撃されてから捜索しても見つける可能性も少ないし、ブランタークさんは早く娘の元に戻りたいと思っているのかもしれない。

「最低でも三日くらいは探さないと、アリバイにならないのですよ」

「無駄な出費……でもないか……貴族社会では……」

俺も大物貴族なので、彼らにそれなりに配慮する必要がある。

例え見つけられなくても、ちゃんと手間暇をかけて探したという誠意が必要だというわけだ。

勿論、俺の不甲斐なさを非難する貴族もゼロではないけど。

「ヴェル、生徒達がダレてきているぞ」

アルバイトに出した予備校の生徒達を統率しているエルが、俺に報告をした。

決められた場所を監視し、他の狩猟採集行為が禁止されているので、集中力が途切れてきているのであろう。

「何とか明日まで保たせてくれ」

「完全な骨折りだな、早く終わらせて……」

エルがそう口にした瞬間、突然風が舞って俺の顔の横を何かが高速ですり抜けたような感覚を覚える。

「伯爵様？」

「ブランタークさんも感じましたか？」

「ああ」

今はまったく風が吹いていない状態だった。

それなのに、局地的に俺達は風と何かの気配を感じた。

つまり……。

「髪神（カミカミ）か？」

「そうだろうな」

あくまでも推定でしかないけど。

そしてその髪神（カミカミ）らしき気配だが、もう感じない。
高速で俺とブランタークさんの間をすり抜けたようだ。

「伯爵様、『探知』にも引っかからないぞ」

「俺も駄目です」

なぜ魔法使いが髪神（カミカミ）の捕獲になかなか成功しないのかを、俺はようやく理解した。
魔法の『探知』に引っかからず、あまりに素早いので魔法の発動前に範囲外に移動してしまうのだ。

「こんなのどうやって捕えるんだ？」

「予想して罠を張るとか？」

「今の時点で、どこにいるのかわからないのにか？」

ブランタークさんから、魔法で罠を張るという策を否定されてしまった。
確かに、仕掛けた場所に必ず髪神（カミカミ）が来る可能性もないし、魔法で罠を張ると罠の維持で魔力を使ってしまう。
沢山の場所に仕掛けるにしても、対象が多すぎて物理的に不可能だった。

「第一、どこにいるのかもうわからないじゃないか」

「そうだよな……」

エルの指摘がもっともだと思っていると、森の奥から配置した生

徒達の声が聞こえてくる。
どうやら、髪神はそこまで移動したらしい。

「行くぞ！」

「伯爵様、もう行っても遅いんじゃないのか？」

ブランタークさんから指摘されて、俺は気がついた。
確かに、今から生徒達が騒いでいるポイントに向かっても、間違いなく間に合わないはずだと。

「こんなのどうやって捕えればいいんだ？」

まず不可能だなと思っていると、そこに同じく髪神探索に参加している導師が姿を見せた。

「バウマイスター伯爵、たまたまだが髪神らしき気配を感じたのである」

「導師もですか。俺達も気配くらいは……って！」

俺達が導師に視線を向けると、そのあまりに異形ぶりに声が出なくなってしまった。

「勘で拳を入れてみたが当たらず、だが髪神の怒りを買ったようである！　ご覧の有様である！」

髪神は、噂の体液攻撃を導師に向けておこなったらしい。
導師は普段剃っている頭全体から無駄にサラサラな髪が腰まで伸び、同時にヒゲにも効果があるようだ。

まるで仙人のように豊かなヒゲを蓄えていた。

「導師、不気味だな……」

「まったく、これが本来髪やヒゲが生えない場所に生えでもしたらとんだ迷惑だったのである！」

髪神（カミカミ）の体液を浴びた導師の髪とヒゲは豊かになったが、それは貴重な体液を無駄遣いしてしまう結果となった。

「なるほど……」

「まったく、酷い目に遭ったのである」

二日目の探索を終えて宿に戻ると、俺、エル、ブランタークさんはロンゲ、仙人ヒゲとなってしまった導師を観察しながら、髪神（カミカミ）の体液が本当に効くのだという事実を確認する。

「綺麗な髪ですね……」

エルの意見にみんな賛成だけど、導師が女性のように綺麗な金髪を伸ばしていても、ただ不気味である。

事実、この屋敷に戻るまでに、導師を見た子供達が悲鳴と泣き声をあげ、大人達は驚いて家の中に逃げ込み、失神した老人までいた。

俺は、普段の導師の髪型が十分に迫力があると思っていたのだが、実は一番穏便な髪型でもある事に今になって気がついた。
金髪ロンゲの導師、ハッキリ言ってちょっと怖かった。
ヒゲも仙人のように生えていて、そのアンバランスさで余計に怖いのだ。

「導師、髪を切らないのですか？」

「探索を終えるまで待つのである、また体液をかけられる可能性があるのである！」

そんな奇跡のような確率……導師ならあり得そうなので、俺達も無理に髪を切れとは言わなかった。

「少し揃えておきますね」

それでも、パウル兄さんの奥さんがハサミで髪を整えてくれた。
おかげで、少しはマシになったかもしれない。
最初にパウル兄さんの奥さんが導師を見た時、あきらかにビクっと驚いていたから。
ああ、でも見慣れたのかもしれないな。
髪を切ってくれたという事は。

でも、俺の甥達は導師を見て泣いていた。
このままトラウマにならない事を祈るのみだ。

「おれの髪神（カミカミ）め！　いたいけな子供を泣かせおって！」

導師が一人、髪神（カミカミ）に敵意を燃やしているが、何だろう？

間違ってはいないと思うのだが、どこか言いがかりなような気もしてしまう俺がいた。

「それでも、少しだけ体液を集めたのである！」

「凄いですね」

ロンゲ、仙人ヒゲの導師は、自分の身に降りかかった髪神（カミカミ）の体液を集めていた。

導師の髪とヒゲを伸ばすのに使われてしまい回収できた量は少ないが、とんでもない貴重品である。

一人分の髪を回復できる量はあるので、あとで厳しい獲得競争がおこなわれるであろう。

「効果てきめんだものなぁ……」

エルは、ロンゲ、仙人ヒゲの導師を見て、髪神（カミカミ）の体液の効果が本物である事を知った。

俺も最初は眉唾ものだと思っていたけど。

「明日以降も、導師が活躍すれば髪神（カミカミ）の体液が手に入るわけだ」

「いや、某が髪神（カミカミ）の体液を手に入れたのは、本当に偶然である」

導師はエルに、明日も同じように髪神（カミカミ）の体液を手に入れてくださいと言われても困ると答えた。

「魔法で捕縛しようにも、そう思った時にはいないのである」

そう、いくら魔法の準備をしても、唱える前に範囲外に逃げてい

るから性質が悪い。
明日も、捜索はしたというアリバイだけ稼いで終わりだ。

「バウマイスター伯爵、陛下がこの薬を欲っしなくて助かったのである」

「それは、俺も考えましたけどね……」

その日は明日に備えて早めに寝てしまったが、翌朝、再びロンゲ、仙人ヒゲの導師を見て朝から心臓に悪かった。
睡眠でつい導師の髪とヒゲの事を忘れてしまっていたのだ。

俺の甥達など、再び導師を見て泣いてしまう有様だ。

「しかも、一晩でかなり伸びている……」

髪もヒゲも、昨晩より十センチ以上は伸びているはずだ。

「恐るべき効能ですね……」

「某には元々髪があるので、うっとうしいだけである！」

朝食後、導師はパウル兄さんの奥さんにまた髪を切ってもらっていた。
しかし、このままで導師は大丈夫なのだろうか？
髪やヒゲはタンパク質だと聞いた事がある。
つまり、導師の髪とヒゲの伸びが驚異的に早い分、自慢の筋肉が減って最終的にはガリガリになるとか？
もしくは、薬の効能が切れると髪の伸びに限界がきてハゲになる？

その可能性を考えると、俺が髪神（カミカミ）の体液を浴びなくてよかったと思う。

「（でも、導師の筋肉が痩せ衰えたようには見えないか……）」

その髪はどこから来たのかと思ったが、ある種の魔法薬だから物理法則を無視するのかもしれないな。

導師は肉を沢山食べるから、そこからきているのかもしれないけど。

「今日で終わらせようと思ったんだけどなぁ……」

なまじ、導師が偶然でも髪神（カミカミ）の体液を手に入れてしまったのがよくなかった。

パウル兄さんの領地で宿を求める冒険者の数が徐々に増えていき……。

「（お館様、もう何日かは捜索をされた方がよろしいかと……）」

ローデリヒから、魔導携帯通信機で連絡がきた。

大物貴族から『もっと探してほしい』という圧力がきたらしい。

しかし、こんな事でバウマイスター伯爵家が今までにないレベルの圧力を受けるとは……。

髪とは本当に恐ろしいものだ。

「俺は、髪が薄くなったら頭を剃ろうかな？」

「それは駄目なんじゃないのか？　バウマイスター伯爵的に言うと」

そう言われると、坊主頭の貴族っていないよなぁ……。
でも、常に帽子を被ったり、誰にでもわかるカツラをつけるのもどうかと思うし……。
貴族達もそう思うから、俺への圧力が凄いんだろうけど……。
「それで、どうするんだ？」
「根気よく見張る！」
「しかないよなぁ……」
パウル兄さんの領地側の森では、最近髪が厳しいオットマーさんが領民を動員して森中に網や罠を仕掛けていた。
そもそも、髪神（カミカミ）はそんなに罠に引っかからないからこそなかなか捕まらないんだけど……。
「もっと網と罠を増やすんだ！　見張りも厳重に、どんな些細な変化も見逃すな！」
パウル兄さんの従士長であるオットマーさんは、その経験と地位を生かして必死に髪神（カミカミ）を捕えようとしていた。
「あの……パウル兄さん？」
俺は、オットマーさんを見ながら溜息をついているパウル兄さんに声をかける。
「あいつ、本当に必死なんだよ。領民達に髪神（カミカミ）の体液が手に入れば巨万の富を得られると煽ってさ。俺にも、開発資金が手に入ります

って……」

表向きにはもっともな理由であったが、実は自分の薄くなりつつある髪を取り戻すためなのは誰にでもわかった。

わかっているけど、可哀想だから誰もその事実を指摘しないというわけなのであろう。

「俺も、この件だけはオットマーに何も言えないよ。何か怖そうだし……」

パウル兄さんは、髪神祭（カミカミ）りが終わるまでは仕方がないと諦め顔だ。

「たかが、毛生え薬のような気がしないでもないけど……」

エルはそう言うが、それは俺達は髪の量に困っていないからであって、ない人からすれば切実な問題なのだから。

それと、エルは発言に気をつけた方がいいと思う。

「エルヴィン！　たかが毛生え薬ではないのだ！　必ず髪を取り戻す奇跡の魔法薬、これが手に入れば、バウマイスター準男爵領は必ずや大きく発展する！　高値で売れるからな、まあ……念のためにちょっとは使ってみるつもりだけど……実際に効果を試さないと売れないからな……とにかくだ！　将来はバウマイスター伯爵家の重臣になるであろうエルヴィンが、そんな考えなのはよくないぞ！」

エルはオットマーさんに捕まってしまい、長々と説教を受けてしまうのであった。

「それで、もう一週間だけど……」

どうやら、導師は本当に運がよかったらしい。
あれから髪神（カミカミ）の目撃報告すらなく、みんなやる気をなくしていた。
それはそうだ。
みんなで、ただ担当しているポイントを見張っているだけなのだから。

冒険者の中には既に見切りをつけた者も多く、次第に髪神（カミカミ）探索に参加する人数は減っていった。

「先生、見つかりませんね」

「退屈です」

「見張る以外に何もできないので辛いです」

アグネス、シンディ、ベッティ他、アルバイトで探索に参加している生徒達も退屈そうだ。
若いのによく我慢したとも言えるが、さすがにもう限界であろう。

「新しい目撃報告もない。今日で一旦終わりにしよう」

「賛成！」

俺が髪神（カミカミ）探索打ち切りを宣言すると、真っ先にブランタークさんが賛成した。

「ブライヒレーダー辺境伯は何も言わないのですか？」

「言うわけがない。目撃されても、十回に一回くらいしか体液が手に入らないんだぜ。うちのシビアなお館様がそんな夢は見ていないよ。俺の派遣はアリバイ作り。本当、王都のハゲどもも諦めればいいのに」

随分と酷い言いようだが、こちらも多額の資金を投入しているからな。

そういつまでも続けるわけにもいかない。

アグネス達のアルバイト代に、宿泊費など。

宿泊費はパウル兄さんが少し勉強してくれたけど、今までの経費を計算すると小身の貴族だと頭を抱えるだろう金額にはなっていた。

「第一、魔法で捕まえられないからな」

ブランタークさんですら、導師もそうだけど、髪神（カミカミ）を魔法で捕えられないのが大きい。

髪神（カミカミ）の存在を認識した瞬間には大分距離は離れてしまっている。

魔法を発動させる暇もないというわけだ。

「一応、こんな魔法も作ってみたんですけどね」

俺は、ブランタークさんに網の目が細かい魔法ネットを見せた。

「なかなかに緻密な出来だが、この手を考えない魔法使いはいないさ」

「ですよね」

髪神（カミカミ）を魔法のネットで捕える。
とても陳腐な手段だと言えよう。

「その網を展開する前に、逃げられてしまうからな」

「となると、網を仕掛けるしかないのか……と言っても、そこに髪神（カミ）がくる確率は低いですよね」

その前に、そんなあちこちに魔法のネットを仕掛けて維持していたらいくら魔力があっても足りない。
利点としては、普通のネットに比べると網の目を細かくでき、俺の場合は色を極力透明にして見えにくくもしている点であろうか。

「もっと網の目を細かくします」

「ここまで細かいと、さすがの髪神（カミカミ）も抜けられないか？」

「えっ？　そこで疑問形ですか？」

「髪神（カミカミ）の正体なんて誰も見た事がないからな。噂ではどんな形にもなれて、網の目をすり抜けるとか？　あくまでも噂、伝承の域だけどな」

形を自在に変えて、網の目を潜り抜ける？
もしそれが本当ならば、魔法の出る幕すらないと俺は思ってしまう。

「この網もボツですかね？　こうやって頭上に仕掛け、髪神（カミカミ）が捕まって体液を出した時に備えて、下で壺を持って待ち構えるのです」

俺は、魔法の袋から取り出した大きめの壺を両手で持ちながらブランタークさんに見せた。

「随分と大きな壺だな。今までも、一回に採れた体液なんて十人分がいいところだぜ」

導師が運よく回収できたのが二十ｃｃくらいで、これが一人前くらいだそうだ。

俺が持っている壺が昔に塩を入れていた物で、満タンにすれば二十リットルくらいは入りそうであった。

「欲をかきすぎだぜ、伯爵様」

「このくらい壺が大きければ、体液を拾うのも楽かなと……」

「髪神（カミカミ）が出たぞ！」

そんな話をしていたら、少し離れた場所から髪神（カミカミ）が出現したと報告が入った。

慌てて対応しようとした俺の頭上を一陣の風が舞う。

「また間に合わなかったか！」

また逃げられてしまったかと頭上を見上げると、何と上から大量の液体が降ってきた。

「伯爵様！」

俺は慌てて対応しようとするも、その液体はすべて抱えていたツボの中に入ってしまった。

急にズッシリと重みがくるが、俺は慌てて魔法で体を強化し、壺を地面に落としてしまうのを防ぐ。

「急に雨ですか？」

「違うよ、それが髪神（カミカミ）の体液なんだろう。この辺に雨なんて降っていないから」

俺は、思わぬ幸運によって大量の髪神（カミカミ）の体液を入手してしまうのであった。

「しかし、なぜこんなに？」

「偶然としか言いようがないな」

目的の物が大量に手に入ったので、これで探索は終了となった。

一旦パウル兄さんの屋敷に戻り、そこで壺に入った液体の確認をおこなう。

「壺に入った時に、重たくて溢すかと思いました」

「ほぼ満タンだからな」

多分、髪神（カミカミ）の体液は二十リットル近くあるはずだ。

二十リットルは二万ｃｃなので、一人前が二十ｃｃだとすると千

人分という計算になる。

「とんでもない量であるな！」

導師も、壺になみなみと入っている髪神（カミカミ）の体液に驚くばかりだ。

「しかし、なぜこんなに入手できたのであるか？」

「偶然だな。間違いなく」

ブランタークさんの推測によると、俺がたまたま頭上に魔法のネットを掲げていた所を髪神（カミカミ）が通り抜けた。

髪神（カミカミ）は形を自在に変えるが、俺が試作した網の目が細かすぎて体の水分……つまり体液だけど……を捨てないと通り抜けられなかったから、大量に捨てたのではないかというわけだ。

「なるほど。それで、本物なのであるか？」

「本物ですね……」

「やっほぉーーー！」

俺達の傍で、オットマーさんが人目も気にせずに大喜びしていた。

実験……じゃなくて試しにオットマーさんの頭に体液を塗ってみたところ、髪が全体的に太くなり、頭頂部の髪が薄い部分も完全に回復している。

毛根が死滅した部分にも髪が生えるので、髪神（カミカミ）の体液の効果は本物のようだ。

導師の場合、髪や髭の成長促進しか確認できなかったので、その点だけが心配だったのだ。

「となると、惜しかったな。うちは」

俺が髪神（カミカミ）の体液を採取した場所は、パウル兄さんの領地側ではなかった。

もしそうなら三割くらいは権利があったのだから、確かに惜しいかもしれない。

「まあいいか。うちも儲かったし」

ゴールドラッシュではなく、髪神（カミカミ）ラッシュにより、集まった冒険者達の宿泊先や食事の手配などで、パウル兄さんもかなり儲けていたからだ。

「それに、そんなものをうちのような零細貴族が持っていると面倒そうだし」

こうして一週間の探索を終え、俺達は無事にバウルブルクへと戻ってきた。

「あなた、お帰りなさいませ」

エリーゼ達が出迎えてくれて、ようやく屋敷に戻ってきた事を実感する。

みんなの顔を見ようとリビングに移動すると、イーナ達は何やら相談しているようであった。

「イーナ、何かあったのか？」

「そんな大した事じゃないけど、髪を切ろうかなという相談してい

たの」

「えっ？　何で？」

「知らないの？　妊娠すると、栄養が赤ちゃんに持っていかれて髪が駄目になるのよ。赤ちゃんが生まれてから、また伸ばそうかなって話になってね」

「そうなのか」

正直、初耳だ。

母親になるというのはなかなかに大変なんだな。

でも、せっかく伸ばしているのに髪を切るのは勿体ないような……。

「ボクは元々短いから切らないけど、他のみんなはしょうがないよ」

髪が短いルイーゼを除き、みんな髪を短くする相談をしているようだ。

「最近では、私の髪型も勢いをなくし、色艶も悪くなってきたので仕方がありません」

貴族として髪型には拘るカタリーナですら、段々と状態が悪くなってくる自分の髪には困っているようであった。

切るのも止む無しという考えに至っている。

確かに、少し髪の色艶が悪いような……、クルクルロールの勢いもない。

女性は妊娠すると色々と大変なんだな。

子供を産んだ事がない俺にはわからない苦労だ。

「ヴェンデリン、髪は出産後にまた伸ばせばいいのだから気にするな」

「そうなんだけど……」

テレーゼも、髪を短くする事を決めたようだ。

俺は長い髪型も短い髪型も似合えば好きだけど、みんな一斉に短くしてしまうと寂しいような気がする。

「長い付き合いの髪型ですけど、これぱかりは仕方がありません」

ようやく母親になれるリサからすれば、髪型に拘っている場合ではないというわけだ。

「でもなぁ……」

俺は、今までの髪型がいいんだけどな。

でも、荒れた髪のケアが必要になるか。

ちょっといいシャンプーやヘアケア製品で保つのは難しいか……

いや、待てよ。

いいものがあるじゃないか。

「じゃじゃーーーん！　今回の成果、髪神（カミカミ）の体液ぃーーー！」

俺は壺の中から少量の髪神（カミカミ）の体液を手に付けると、それをエリーゼの髪に薄く塗った。

すると、目に見えて髪の質がよくなっていく。

妊娠前の美しいエリーゼの金髪が復活した。

「おおっ！　いけるじゃないか！　じゃあ、次はと……」

「「待てい！」」

続けてイーナの髪に髪神（カミカミ）の体液を塗ろうとすると、エルとブランタークさんが止めに入る。

「えっ？　どうかしましたか？」

「いや、伯爵様。そんな無駄使いは駄目だろう」

「無駄じゃないですよ。エリーゼの髪がこんなに綺麗になったじゃないですか」

夫としては、妻は綺麗な方がいいからな。
それに、髪神（カミカミ）の体液は俺が採取したものだ。
どう使おうと俺の勝手であった。

「エリーゼの嬢ちゃん達の髪は、出産後に復活するじゃないか。その魔法薬は、王国中の髪がもう二度と戻って来ない連中の希望だから、無駄遣いは止めた方がいいって！」

「無駄じゃないですよ、エリーゼ達の髪が綺麗になります」

「だぁーーー！」

どうにも、俺とブランタークさんの意見がかみ合わないようだ。

「だって、偶然とはいえ俺が採取したものですよ。少しくらいいい

じゃないですか」

「伯爵様が、髪神（カミカミ）の体液をそんな事に使ったなんて知られたら大変だぞ」

「大丈夫ですよ。使ったなんて言わないですから」

俺が髪神（カミカミ）の体液を採取した事実は外部に知られてしまったが、どのくらい採ったかなんて知られていないのだから。

「第一、顔も知らない人のハゲが治るよりも、エリーゼ達が綺麗な方が俺は嬉しいですし」

「ヴェル、お前は何気に酷い事を言うな……」

エルが、なぜか俺に呆れている。

でも、おっさんや爺さんに褒められるよりも、毎日顔を合わせるエリーゼ達が綺麗な方が精神衛生上よろしいのは事実だ。

「俺もそう思うけど、そういう行動は髪がないやんごとなき方々を敵に回すから！」

もしエリーゼ達の髪につけた分の髪神（カミカミ）の体液が減った事実を知られてしまったら？

そのせいで割を食った貴族に恨まれると、ブランタークさんは説明する。

「ブランタークさん」

「何だ？」

「内緒でお願いします」

「ちくしょう、碌でもない秘密を抱えてしまった」

俺は中断していた作業を再開する。

イーナに髪神（カミカミ）の体液を塗ると赤い燃えるような髪が復活し、ルイーゼ、ヴィルマ、カタリーナ、テレーゼ、カチヤ、リサと次々と綺麗な髪が復活していく。

さすがは伝説の魔法薬である。

というか、もしこれを地球に持って行ったら金持ちがいくらでも出しそうだな。

「アマーリエ義姉さんもつけますか？」

「私は妊娠していないから大丈夫よ」

「必要になったら言ってくださいね」

「嬉しいけど、ブランタークさんの顔が真っ青よ」

「ちょっとくらいいいと思うんだけどなぁ……」

エリーゼ達の髪を元に戻した俺は、そっと髪神（カミカミ）の体液が入った壺を魔法の袋に戻すのであった。

「旦那、正面門の方が眩しいな」

「カチヤも、大概口が悪いな」

「女冒険者なんてこんなものだぜ。姉御だって、前は凄かったじゃん」

「否定できませんね……カチヤも少しずつ直しなさい」

「姉御、それは難しい話だなぁ」

数日後、バウマイスター伯爵邸の前に多くの眩しい方々が集まった。

その眩しさに目も眩むばかり……俺もカチヤの事は言えないか。

リサはあのメイクと衣装にならないと喋り方は普通なので、カチヤに普段の喋り方を直すようにと忠告した。

本人には妙な拘りがあるようで、やんわりと断られてしまっていたが。

「この数日でよく集まったなぁ……」

「髪神（カミカミ）の体液は安いものではありません。購入できるのは財力に自信がある者ばかり、自然と大物貴族と大商人に限定されますので、その情報収集能力を侮ってはいけません」

「必ず効く魔法薬を入手し損なわないようにか」

「はい」

髪神（カミカミ）の体液だから正確には魔法薬じゃないけど、効果は絶大なので魔法薬扱いであった。

本当の魔法薬は、専門家が調合している。

知識があれば魔法使いじゃなくても調合可能だけど、最後に魔力を篭める種類の薬もあるので、やはり魔法使いの方が有利だ。

こうやって、魔道具、魔法薬と魔法使いのリソースが割かれるから、余計に魔法使いが不足するんだよな。

もっとも、個人で魔法薬の調合師をしている人は少なく、大半は知識のある魔法使いじゃない調合師を雇って調合工房を開いているけど。

勿論、調合師のギルドも存在する。

ただ、魔法薬の類は門外不出のレシピなどもあって完全に秘密主義である。

魔道具工房よりも目立たなかった。

ついでに言うと、金になるから毛生え薬はかなりの種類発売されている。

値段は魔法薬なのでかなりお高いが、効果の方はあるような、ないような？

毛根が残っていると効く薬もあるので全部がインチキじゃないけど、髪に悩む人々は、色々と購入しては駄目だったという日々の繰り返しらしい。

「私もあとで資料を調べましたが、前に髪神（カミカミ）の体液が入手されたのが、三百二十四年前に二十四名分のみです」

リサは、地味に過去の古文書の解読なども得意であった。

昔も同じ言語なんだけど、あまりに古い書籍や資料だと字が達筆すぎたり、崩しすぎたりで、俺たち一般人には読めないケースが多

いのだ。
おかげで、師匠が残した文献の解析は他の仕事が忙しいので後回しにしていたのだけど、妊娠中で動けないリサが解読、翻訳してくれるのでありがたかった。

「停戦よりも百年以上も前なのか！」

それは、必死になって集まるはずである。
俺が髪神（カミカミ）の体液を入手したので、それを欲する人々が集まったというわけだ。
そんな彼らの頭が、日の光でキラキラと輝いているわけだね。

「だから、そんな貴重な薬を嫁さんの髪に使うなっての！」

「このくらいの我儘は許してくださいよ。もしかして、ブライヒレーダー辺境伯も密かに髪の悩みが……」

「それはねえよ。伯爵様の不正流用が知られると、うちのお館様も怒られるからだよ」

「不正流用って……俺が採取したものなのに……」

それにだ、みんな髪の傷みが回復して妊娠中でも綺麗な髪型を維持していられるようになったんだ。
これは素晴らしい事だと俺は思うけどね。

「確かに、髪神（カミカミ）の体液の権利は伯爵様にあるけど、あの外の連中の血走った目を見ろよ。下手をすると紛争だからな」

失った長い友を取り戻す。

そのために、他のライバルを蹴散らすのも躊躇わないというわけか。

「それを聞くと恐ろしいような……」

「古代より、金、権力、女、髪で人々は血で血を洗う戦いを続けてきたのである！」

「導師、最後の一つおかしくないですか？　あと、髪型は直さないんですね……」

今日は導師も来ていたが、彼は肩まで伸ばしたキンパツロンゲと、仙人のような髭をそのままにしていた。

いつものパイナップルカットとカイゼル髭ではないので、エリーゼですら最初は絶句したほどだ。

というか、俺もブランタークさんもまだ慣れていない。

朝に挨拶とかされると、思わずぎょっとしてしまうのだ。

「もう一日二日、髪神（カミカミ）の体液の効果が薄れるまでは面倒なのでこのままである。これでも、朝に大分切り落としているのである」

髪神（カミカミ）の体液をつけると、一週間から十日ほどは髪が過剰に伸びてしまう。

その期間が終わると状況は落ち着くので、導師はそれまではいつもの髪型は止めていた。

剃らないと駄目なので、今は面倒だと思っているのであろう。

「質問！」

「はい、エル君どうぞ」

「髪神（カミカミ）の体液って、相場はいくらくらいなんだ？」

「「「「「……」」」」」

エルのもっともな質問に、全員が黙り込んでしまった。

絶対に効果がある毛生え薬、一体いくらなのか見当もつかなかったからだ。

「ええと……古い資料には載っていないのかな？　リサ」

「約一千万セントと書かれていました」

「高っ！」

塗れば、必ず髪が蘇える。

凄い薬だとは思うが、所詮は毛生え薬でしかない。

それに日本円で約十億円とは、俺には狂気の沙汰としか思えなかった。

購入したのは、間違いなく大物貴族であろう。

その金を領地の産業振興とかに……でも領主はその領地の顔だものな。

できればフサフサの方がいいと思ったのか？

「もし俺なら、その金額を払うだろうか？」

これぱっかりは、自分の髪が薄くなってみないとわからないよなぁ……。

今の俺の『髪くらいで……』なんて心情は、持つ者の傲慢さからきているのかもしれないし。

「ヴェル、外の眩しい人達はどうするんだ？」

かなりの大物貴族達もアポなしで集まっているので、屋敷の前のメインストリートが渋滞しているからなぁ……。

建設工事の邪魔になってしまうか……。

「今回は一杯獲れたから、一人前百万セントで売ればいいか」

それにしても、日本円で一億円だ。

普通の人にはまず出せない金額だよな。

「諦めて帰る人もいるだろう」

この人達の陳情を全部聞いていたらいくら時間があっても足りないので、俺達は髪神（カミカミ）の体液を一人前ずつに分けて販売を開始した。

依頼書を寄越した貴族が最優先だけど、依頼書には値段が書いていなかったからな。

まあ、同じ金額でいいだろう。

何かもう、価格交渉をするのも面倒くさい。

あと眩しい。

「バウマイスター伯爵、よくぞやってくれた！」

「百万セントだと！　安い！」

「俺は髪を取り戻すのだ！」

恐ろしい事に、屋敷の前に集まっていた人達で髪神（カミカミ）の体液を高いという人は一人もいなかった。
みんな即金で支払って、すぐに頭に髪神（カミカミ）の体液を塗る。
すると、どんなツルッパゲでもすぐに髪が復活した。
何度見ても、恐ろしい効力である。

「よかった！　死ぬ前に髪が戻って本当によかった！」

八十を越えているようにしか見えない老人までいたが、明日死ぬにしても髪があった方がいいものらしい。
白髪ながらも見事な髪が復活し、年甲斐もなく喜んでいる。

「ヴェル様、眩しくなくなった」

「ヴィルマ、しぃーーー」

「しぃーーーする」

集まっていた人達全員に髪神（カミカミ）の体液を売ると、これで在庫はすべてなくなった。
偶然で手に入ったものだが、エリーゼ達の髪は綺麗になったし、世の中の髪で悩む人々がかなり救えたのでよかった。
善行を積んだ気分だな。
俺も儲かったし。

「ところで導師は、髪神（カミカミ）の体液はどうするのですか？」

「我が家の伝統から考えて、いつもの髪型ができなくなるのは困るのである！　よって、万が一に備えてとっておくのである」

導師本人は、アームストロング家の伝統に従ってパイナップルカットを維持している。

髪が薄くなってその髪型ができなくなった時のために、髪神（カミカミ）の体液はとっておくつもりのようだ。

「バウマイスター伯爵は、少しくらいはとっておかないのであるか？」

「髪が薄くなったら、その時はその時ですよ」

などと導師には言ったが、実は髪神（カミカミ）の体液を少しとっておいてあるのは秘密である。

それにしても、たかが髪、されど髪と思わせてくれる事件であった。

第百二十八話　兄と弟、弟と兄。

「お館様、本日はとある貴族の跡継ぎと会ってほしいのですが……」

奥さん達のお腹も大分大きくなってきた。

早く産まれないかなと毎日ワクワクしながら……同時に無事に産まれてほしいと心配しながら日々をすごしている。

とそこに、ローデリヒが姿を見せ、俺にある貴族と会ってほしいとお願いをした。

「跡継ぎなのか？」

「当主が病床にあるため、跡継ぎ息子が代理というわけです。実質、当主のようなものですな」

実質、当主となると、俺が直接顔を合せないと失礼に当たるというわけか。

格と面子の問題なのだけど、本当に貴族とは面倒なものだ。

「どこの家の人だ？」

「マッテゾン子爵家の跡取り息子です」

「そうか……」

まあ、聞いても誰だかわからないんだけど……。

俺は頭の中がまだ日本人に大きく偏っているからな。

むしろ貴族の名が、近衛とか、武者小路とか、今出川とかの方が

覚えやすいかもしれない。
そういえば、ミズホにはサムライはいたけど、『〇〇でおじゃる』と話す、白塗りお歯黒公家さんはいなかったな。
いたら、笑ってしまって失礼になりそうだからいなくてよかったよ。

「三十分ほど、軽く世間話でもしていただけたら」

「そのくらいならいいけど、なぜそんな事を？」

「マッテゾン子爵領は、石細工で有名な産地なので……」

石細工の何が重要なのかというと、橋の欄干の先とか、街道の間隔を示す標識とか、そこに細かく細工した石製の彫像を載せるわけだ。
現代人の感覚だと『別にそんなのいらないじゃん。逆にない方が、費用の節約にならないか？』などと思ってしまうのだけど、この世界の常識ではないと格好がつかないらしい。
マッテゾン子爵領は岩山ばかりで農業生産は振るわないが、沢山ある石の細工で金を稼いでいる。
良質の石材と、それを細工する凄腕の職人達が有名らしい。
バウマイスター伯爵領でも、建材や石畳にする石材は豊富に採れる。
だけど、石材を細工する職人は不足しているからな。

加工する職人を引き抜くにも、限度があるというわけだ。
結局、引退したような年寄りの石工職人に若い未経験者をつけて気長に育てるしかない。
新入りが一人前になるまでは、マッテゾン子爵領からすべての石

細工を購入しないといけないわけだ。

「マッテゾン子爵側にも、事情があるのですよ」

「事情？」

「はい、あそこは後継者争いで揉めていますから」

一応、今回顔を出す嫡男がマッテゾン子爵家の後継者に指名されているらしい。

ところが、彼には妾腹で一つ年上の異母兄がいるそうだ。

「妾腹なら、あくまでも後継者候補なだけだろう？」

この世界もそうだが、貴族の後継者は血筋が大切にされる。

よほど何かなければ、正妻が産んだ嫡男が跡継ぎになるのが当たり前なのだから。

ブロワ辺境伯家を見ればわかるけど、揉める時には揉めるけどね。

「というわけで、後継者争いの禍根を絶つために、跡継ぎがバウマイスター伯爵であるお館様と会って楽しくお話をする」

「箔付けなわけね……」

『実質、当主同士の会見でしょう？』というわけだ。

俺は、その跡継ぎさんに正当性を与える飾りという事になる。

「状況は理解した。それで、うちには石細工の割引きとか利益があるんだろうな？」

「ええ、それは勿論」

さすがは、ローデリヒ。

バウマイスター伯爵家のために、ちゃんと交渉して利益を取ってきたようだ。

無料で会ってあげるほど、俺も暇じゃないしね。

第一、俺よりもそういう事に厳しいローデリヒが許すはずもないし。

「正直なところ、例の跡継ぎは出来が悪いと評判なのです」

ちょっと出来が悪いくらいなら、それなりの家だと親族や家臣で当主をお飾りにして上手く運営してしまうと聞いている。

今回もそのケースなのであろう。

「病床の当主としては、そのバカな跡継ぎに実績をつけたいわけですな」

そんな親子の情を利用して、ローデリヒは上手く利益をふんだくったわけだ。

いやーーー、ローデリヒに任せておくと楽でいいわ。

お飾りのバカ殿最高だな。

「会見予定は二時間後です」

「わかった」

俺は早速会見に備えて準備を進めるのだが、ここで一つ問題が発生してしまうのであった。

「あなた、私と、イーナさん、ルイーゼさん、カタリーナさんの同席は無理ですよ」

「えっ？　どうして？」

「お腹が大きいからです」

向こうの箔付けのための会見ではあったが、こういう時には奥さんも一緒に同席して双方の親密ぶりをアピールするケースが多い。

本当は、マッテゾン子爵の跡取りなんてどんな奴かも知らないけど。

だけど、会見への同席をエリーゼに断られてしまった。

イーナ、ルイーゼ、カタリーナも同様だ。

「ヴェル、お腹が大きくなった妻を夫は表に出さないものなのよ」

ここで、貴族の常識というよりも、この世界の常識が出てしまった。

妊婦さんを人前に出すのはよくないという、俺にはよくわからない慣習だ。

イーナが教えてくれたのだが、その理由は詳しくはわからないそうだ。

妊婦が不浄だという大昔からの言い伝えによるとか、妊婦さんを無理させると流産してしまう可能性が高いからだとか。

どんな理由にせよ、早くに妊娠してお腹が目立ち始めたエリーゼ達は同席できなかった。

「ヴィルマは？」

ヴィルマは、まださほどお腹の大きさが目立たない。

彼女なら同席できるはずだ。

「うーーーん、難しい」

「なぜだ？」

「実は、マッテゾン子爵の跡取りを知っている。会うと確実に揉める」

「揉めるのか？」

過去に何かあったのであろうか？

「私がまだ子供の頃、たまたま王都の屋敷にいたマッテゾン子爵の跡取りと揉めたから」

ヴィルマが子供の頃に、『無口で無愛想な気持ち悪い奴』だとからかわれたそうだ。

所詮はバカな男のガキだから、女の子をからかうのは誰にでもあるとも言えるし、単純に性格が悪い奴なのかもしれない。

うーーーん、判断が難しい。

「子供の頃のお話だから恨み事は言わないけど、顔を合わせるとトラブルになるかもしれない」

「そうだな……」

というか、そんな失礼な奴と俺は会見するのか？

ちょっと問題なんじゃないかと思いつつ、俺はヴィルマの頭を撫でてあげた。

「一抹の不安が……そいつが大人になっていたらいいな……」

「なっていないから、バカだと評判になっている」

「ですよねぇ……」

ヴィルマの言い方はかなり辛辣だけど、間違ってはいない。

俺は少し不安になってしまう。

「となると、あとは……」

「妾はそんな不愉快そうな奴と顔を合わせないで済んでよかったの」

テレーゼは、当然無理として……。

「旦那、もしそいつが失礼な奴だとして、あたいだとすぐに言い返しそうだから無理に決まっているじゃん」

カチヤ、いくら顔を出したくないからって、すぐにキレてしまうからという理由はずるいと思うぞ。

「となると、私ですか？」

「一番無難な人選かな？」

リサは一番年上で場数を踏んでいるし、あのメイクと衣装がなければ暴走の危険もない。

貴族の妻として、上手く対応してくれるであろう。

「というか、どうしてそんな心配をしなければいけないのかね？」

「ううっ……いくら必要な事とはいえ、申し訳ありません」

ローデリヒとしても、もし向こうに斜め上の対応をされ、石細工の仕入れがストップしたらという考えから俺との面会を組んだのであろうが、段々と不安になってきたらしい。

「リサさんが出席するのなら、私がメイド役で傍にいれば少しは薄まるかしら？」

アマーリエ義姉さん、その薄まるという言い方はよく理解できるわ。

女性が多い方が、安全かもしれない。

「そうですね、お願いします」

「でも……何か嫌な予感がするわね」

俺もそれは感じたが、それはやはり現実のものとなってしまうのであった。

「初めまして、次期マッテゾン子爵に指名されたアルバンと申します」

「（指名された？　ああ、病床の父親からか……）バウマイスター伯爵です」

会見の時間となり、俺はマッテゾン子爵の跡取りである長男と顔を合わせた。

年齢は二十前後だと思う。

見た目は如何にも貴族のボンボンという感じだが、今のところは別におかしな点もなかった。

社交辞令に則り、俺と普通に挨拶をしただけだ。

「どうぞ、お座りください」

「ありがとうございます」

互いに挨拶をしてから、俺達は椅子に座る。

俺は同席者のリサを紹介し、彼女も俺の隣の席に座った。

もう一方のアルバンは奥さんを連れてこなかった。

何でも父親の病気が思わしくなく、一か月後に正式に家督を継ぐそうで、その時に婚約者と式をあげるらしい。

当主就任と婚姻を同時に行って、領民や家臣にアピールするというわけだ。

「粗茶ですが、どうぞ」

アマーリエ義姉さんが謙遜で言っているが、実はヘルムート兄さ

んから仕入れている森林マテ茶なので高級品だ。
王都のバウマイスター家は人手が増えた分、森林マテ茶の木の警備を厚く行えるようになり、自然と木が増えて茶葉の収穫量が上がったと聞いている。
その一部をうちで仕入れ、重要な客に出しているというわけだ。

「いいマテ茶ですね。森林マテ茶ですか」

リサの補佐も兼ねて傍にいるメイド服姿のアマーリエ義姉さんが全員分のマテ茶を注ぐと、アルバンは茶の香りだけで森林マテ茶だと見抜いた。
いい家の子供なので、高級食材を見抜く能力があるのかもしれない。

「ところで、そちらの方は？」

「ああ、御付きの者です。気にされらずに」

アルバンは、一人の若者を付き人として連れてきた。
最初はただの執事や従者かと思ったが、この若い男性、顔がアルバンに少し似ている。
もしかしなくても、噂になっている妾腹の異母兄なのであろう。

「（性格、悪っ！）」

他に従者の当てなどいくらでもあるだろうに、わざと異母兄を指名したのは、俺と自分の会見をまざまざと見せつけ、家督を諦めろよと言うためであろう。
でも待てよ。

そうだとすると、この異母兄は実は野心溢れる若者だとか？

詳しい事情はよくわからないが、何にせよ予定されていた会見が始まった。

「いつも、我がバウマイスター伯爵家に石細工を融通してもらい、感謝しています」

「バウマイスター伯爵領への出荷で、我が領も好景気なのです。こちらこそ、感謝しております」

それもそうか。

道や橋がどんどん出来ているのだから、その分石細工は必要だものな。

「奥方達にも、お子が次々と産まれるようで」

「はい、無事に産まれるのか、多少の不安はありますね」

「私もじきに婚約者と結婚します。子供ができると、バウマイスター伯爵殿と同じ気持ちになるかもしれませんね」

「（あれ？）」

思わず、声に出してしまいそうになった。

バカだと評判のはずのアルバンだけど、話をしてみると別に普通だよな。

なぜ、バカだなんて噂が立つんだ？

「バウマイスター伯爵家はバウマイスター伯爵殿が自力で打ち立て

た新興の貴族家、お子は多い方がいいですな」

「まあ、それなりには」

「とは申せ、奥方を増やすとなると寄親であるブライヒレーダー辺境伯殿とのバランスもあるというわけですか」

「はあ……」

バカだと聞いていたけど、このアルバンという若者、ちゃんとうちの事を調べているようだな。

自分で調べさせた保証もないわけだけど、ちゃんと相手の情報を掴んでいるのは事実だ。

「となると、この場合は非公式の愛人ですな。正式な妻や妾としてカウントせず、子供だけ産ませればいいのです」

「はあ……」

まあ、最近よく聞く話だよな。

ローデリヒが全部話を止めているけど、こんな話はいくらでも持ち込まれているそうだ。

しかし、自分はまだ未婚の癖に随分と積極的ではないか。

それに、ローデリヒに言わせると今の俺に愛人は悪手だという。

『愛人とはいっても貴族家の血筋に繋がる娘ですから、子供が生まれればその子の縁戚だからと利益供与を堂々と求めてきますしね。それなら、最初から認知した方がマシです。非公式でいいなんて、一種の詐欺ですよ』

甘い話には罠があるというわけだ。
というか、俺には全然甘くない話だ。
子供が魔法使いになるかもしれず、いやアーネストが堂々と事実を教えてくれたんだ。
その押しつけられた愛人の子供が魔法使いだとバレたら、ますます面倒な事になってしまう。

「いえ、今の妻の数で十分だと思うのです」

みんな若いのだし、一人三人くらい産めば十分だろう。
『平成大家族のドキュメント番組』でもあるまいし、そんな子供がいたら顔と名前を覚えるのも困難になってしまう。

「そう仰らずに、実はお勧めの娘が二人いるのですよ」

ああ、何でこいつがバカなのか理解できた。
こいつはすぐに見てわかるバカじゃなく、無能な働き者に属する人物なんだ。
俺と会見し、少し仲良く話せばミッション達成なのに、無駄に欲をかいて余計な事をしてしまう。
こういう人物は、一見バカではないので扱いに困ってしまう。

「いえ、そのようなお話は……」

「そんな事は仰らずに。後腐れもなく、若く体も丈夫な娘ですよ。ちょっと血筋は悪いので、普段はメイドとしてでもお使いください」

自分の策が上手く決まったと悦に入りながら話をするアルバンであったが、それよりも俺は、後ろに控えるアルバンの異母兄の顔が

大きく変化したのを見逃さなかった。
アルバンのアホは気がついていないが、異母兄は彼を視線で射殺せそうな表情で見つめている。

「……」

すぐ俺の視線に気がついて表情を元に戻したけど、つまりその娘二人とはアルバンの異母妹、アルバンの異母兄の実妹達なんだろうな。
なるほど、母親違いで邪魔な妹達を俺に押しつけつつ、俺が愛人にしたり子供が産まれたら縁戚面して利益を取る作戦か。

でも、俺でも気がつくレベルのつたない策だからなぁ……。
それを会心の策だと思っているから、こいつはヴィルマがいうところのバカ息子なんだろう。

「もしかすると、それはアルバン殿の妹殿達なのでは？　そのような方々を愛人では失礼に当たりますよ」

アルバンがなぜ知っているとビックリしているけど、お前の顔を見ると全部わかってしまうんだよ。
お前、愛人の話をした時に、後ろに控える異母兄の方に『ざまあみろ！』という感じの視線を向けたじゃないか。

というか、俺をマッテゾン子爵家の後継者争いに巻き込まないでくれ。

「確かに妹達ですが、母親の身分が低いのですよ。それでも若いですから、まだ沢山子供が産めるでしょう。そこにいる二人の代わりに使ってやってください」

「代わりに？」

「年増では、バウマイスター伯爵殿のお子も産めないでしょうから」

こいつ、一度しくじって動揺すると建て直しに苦戦するようだな。

最初のシナリオで無難に終わらせればよかったのに、能力もないのに独自の作戦に走るから失敗するんだよ。

もうすぐ三十になるリサと、俺がほぼ妻扱いしているアマーリエ義姉さんは年増だから若いのに変えればいい。

何でそんな事を本人の前で言うのかね？

リサは序列は低いけど、妻としてこの席にいる。

アマーリエ義姉さんも公式な立場では奥さんじゃないけど、俺が実質そうだと認めているのに、本人を前に悪口を言うとは、この男はバカなのか？

後ろの異母兄が『信じられない！』と言った表情をしているぞ。

どうやら、彼の方はうちの事情を詳しく掴んでいるようだ。

ああ、アルバンの方も知ってはいるのか。

「アルバン殿、あなたは何をしに来たのですか？」

「それは勿論、私とバウマイスター伯爵殿の仲を深めるためです」

こいつ、本気で言っているのか？

本気で言っているんだろうな……。

どうやらまともに見えたのは最初だけで、すぐにボロが出てしまったようだ。

「とてもそうは思えないのですが……なぜだか理由はわかりますか？」

「バウマイスター伯爵殿、我らは似た者同士じゃないですか」

おい、それは俺の質問の答えになっていないぞ。

というか、俺は別に有能じゃないけど、お前よりはマシな人間だと思うがな。

「似た者同士？」

「そうです、貴殿は邪魔な兄を排除してバウマイスター伯爵になった。私も、後ろにいる異母兄デニスの代わりにマッテゾン子爵となるのです。弟の身ではありますが、これも高貴な血を継いだ者の義務。領内にはデニスを推す者もいますが、私はそのような圧力には屈しません！」

何か、選挙演説みたいになってきたな。

それよりも、俺は兄を殺してバウマイスター伯爵になったというわけか。

結果的には間違っていないし、兄殺しの汚名も仕方がない。

でもな、俺はお前と同類だと思われるのが勘弁ならないんだ。

段々と頭に血が昇ってくるが、不意に両肩をポンと軽く叩かれた。

俺に落ち着くようにと、リサとアマーリエ義姉さんが止めてくれたのだ。

このまま魔法で吹き飛ばしてやろうかと思ったが、さすがにそれは不味いというわけか。

「ひゃっ！」

下手な演説というか宣言を終えたアルバンは、喉が渇いたので少し醒めた冷めたマテ茶を飲もうとした。

ところが、突然奇妙な声をあげてカップを落としてしまう。

「（リサ、やったな）」

ブリザードのリサに相応しく、彼女は密かにアルバンのカップに入ったマテ茶を凍る直前、限界ギリギリまで冷やしたのであろう。

彼は、自分が思っていた温さのマテ茶でなかったから驚いてしまったというわけだ。

このような微妙な魔法コントロールは、ベテランであるリサの独壇場であった。

魔法の効果範囲をカップの中に入ったマテ茶のみとし、俺に魔法を使った気配を感じさせないのだから。

「お客様、大丈夫ですか？　すぐに新しいマテ茶を淹れますね」

アマーリエ義姉さんが、急ぎ倒れたカップと溢したマテ茶を片付け、新しいカップにマテ茶を注ぎ直す。

「メイド！　このマテ茶は暖かいのか？」

「はい、淹れ立てですので」

「そうか！」

限りなく零度に近いマテ茶にビックリさせられたアルバンは、口

を温めようと急ぎカップを口につける。

「熱っ！」

ところが、今度は冷えた口に淹れたてのマテ茶を入れてしまった。いつもより熱く感じてしまい、慌てたアルバンは再びカップを落としてしまう。

「熱いぞ！」

「淹れ立てですから」

アルバンからの抗議に冷静に答えるアマーリエ義姉さんであったが、実は時間が経過して、ポットの中のマテ茶は飲みやすい温度にまで下がっていた。

再び淹れたての温度まで上げたのは、勿論リサである。

アマーリエ義姉さんはリサの細かいイタズラに気がつき、だからすぐに新しいマテ茶を注いだわけだ。

「もうすぐマッテゾン子爵になる私に失礼ではないか！」

「淹れたてで熱いので、少し冷ましてからの方がいいと言おうとしたのですが、申し訳ありません」

アマーリエ義姉さんは、急ぎアルバンに謝った。

だが、いくら貴族でも茶が熱いくらいでメイドを叱るのは器が小さい。

第一、グラグラと煮立っているマテ茶を出したわけではないのだ。

そのくらい、自分で確認しろよというレベルの話だ。

「お前の事は知っているぞ！　アホな夫がバウマイスター伯爵殿の殺害を目論んで自滅し、お詫びのために愛人をしているらしいな！　ふんっ！　兄なんてそんなものだ！　とにかくだ！　年増はバウマイスター伯爵殿の傍にいるな！」

段々と支離滅裂になってきたな。

なかなか自分の計画どおりに行かず、貴族のボンボンが我慢ができずにキレてしまったのであろう。

「バウマイスター伯爵殿、この二人の代わりに新しい愛人を囲いましょう！」

直前まで激怒していたにも関わらず、俺にはにこやかな表情で、さっきの愛人話を続ける。

後ろの異母兄は、呆れ果てて天井を見上げていた。

処置なしと思ったのかもしれない。

確かに、こんな弟がいたらどう扱っていいものか悩んでしまう。

デニスが止めないのかと思ったが、多分それをすると火に油を注いでしまうのであろう。

アルバンは堪忍が足りなそうだしな。

「うーーーん、ハッキリ言わないとわからないかな？」

「ハッキリとですか？　つまり、妹達を受け入れるわけですね？」

何をどう考えると、そんな結論になるのであろうか？

俺は、こいつの根拠のない自信の源泉が気になってしまう。

「そんなわけがあるか！　人の奥さんにケチつけやがって！　お前は縁切りだ！　二度とうちに来るな！」

「なっ！　そんな事を言っていいのか？　工事に使う石細工を売ってやらないぞ！」

「うるせえ！　そんな飾りがなくても橋は落ちねえよ！　街道も普通に歩けるわ！　一昨日来やがれ！　このアホ息子が！」

「この野郎！　後悔させてやるからな！」

ちょっと貴族の跡取りと会見するだけのはずが、その相手と完全な喧嘩別れに終わってしまう。

俺もすぐにキレてしまったのは悪いかもしれないけど、長い人生を生きていると、こんな事もあるよね。

それに、向こうが悪いのだから。

「なっ……完全に手切れですか……」

「ローデリヒ、ある意味面白い奴を紹介してくれてありがとう」

「……」

俺が事の顛末をみんなに伝えると、まずはローデリヒが絶句した。

俺への苦情というよりも、想定を上回るアルバンのバカさ加減に言葉も出ないようだ。

「そんなわけで、石細工はもう売ってくれないって」

「それは困りましたな」

「そうか？」

俺は思うのだけど、別に橋の欄干や街道の標識の先に石細工が付いていなくても、誰も困らないはず。

それがないと橋が落ちてしまう、魔法的な効果とかがあれば話は別だけど。

勿論、この世界でそんな石細工は存在しない。

大昔ならあったかもしれないけど。

「拙者もそうは思うのですが……」

ローデリヒをして、この世界の常識から脱するのは困難なようだ。

うちほどの大物貴族ともなると、建設した橋や街道の標識に綺麗な石細工がついていないとおかしいという常識に縛られている。

「とにかくだ、リサやアマーリエ義姉さんの代わりに、あいつの妹二人を愛人にしろなんて平気で言う奴だ。二度と付き合いはゴメンだね」

人が貴族の柵で苦労しているのに、新たなキング・オブ・バカの相手は御免蒙るというわけだ。

「そもそも、そんなお話を受け入れられるはずもないのですが……」

もし俺がその条件を呑んだら、次々と同じ提案をしてくる貴族が出てくるだろう。

ローデリヒは、改めてアルバンのバカさ加減に呆れるばかりだ。

「石細工をどうしましょうか？」

「他から買えないのか？」

確かに綺麗な石細工だけど、マッテゾン子爵領にしか生産地がないわけでもあるまい。

向こうから売らないと言われた以上は、他から買うしかないのだから。

「あるにはあるのですが、そんなに大量に売ってもらえませんよ」

理由は、王国領では常にどこかで工事が続けられているからだ。

既存の街道標識や橋の修理もある。

数十年、数百年も経てば、石細工も壊れたり風化してしまうものだからだ。

「今の王国はバウマイスター伯爵領開発の影響で経済が上向いております。この機会にと、領内で新しい街道や橋の建設を計画している貴族も多いのです」

他の石細工を作る貴族領も、そう簡単に生産量は増やせない。

いきなりの増産は難しいというわけだ。

「少量仕入れて、あとはその内に石細工をつけます、で誤魔化そう」

うん、日本人的ないいアイデアである。
そんな意味もない石細工は廃止と言うと、俺は石細工職人から仕事を奪う悪人になってしまうからだ。
石細工以外が完成したら未完成でも開通させて、あとは石細工が来てから設置という案で行こう。

「予め言っておくけど、俺は絶対に向こうと妥協しないからな」

俺が妻に迎えたリサとアマーリエ義姉さんを年増扱いで、人の過去の傷までえぐり出しやがって。
それで、自分も俺と同じだと言えるアルバンの性根が凄いと思う。

「ここで一時的に妥協しても、これから何十年もあの男と付き合うと考えると嫌になる。典型的な貴族のバカ息子だな」

俺も貴族だからそんな事は言いたくないのだけど、あいつは色々と酷すぎると感じてしまったのだ。
二度と顔を合わせるつもりもない。

「そうですね……ここで下手に妥協すると、あの手のタイプはますつけ上がりますし……」

自分の方が上だなんて勘違いでもされたら、これから何十年も上から目線で対応してくるだろうしな。
長い目で見たら、マッテゾン子爵家とは断絶した方がうちの利益になるだろう。

「お館様の仰るとおりですな。何とか他領からの仕入れに切り替えて対応します」

ローデリヒは、マッテゾン子爵家との関係修復を俺に強要しなかった。
噂でバカだとは知っていたが、アルバンがここまでバカだと見抜けなかった自分に責任があると思っているのであろう。

「しょうがないさ、なあ？　エリーゼ」

「はい」

あそこまで酷いのは、滅多に存在しないからな。
『貴族の』バカ息子だから目立つのであって、子供がバカな割合に身分は関係ない。
確率で言えば、貴族の息子は教育でマシになるのがいて、むしろ平民よりも少なくなるのだから。
ただし貴族なので、少数のバカが悪目立ちするだけである。

「ですが、一応説明に行った方がいいですね」

「説明？」

「はい」

というわけで翌日、俺は王都へと『瞬間移動』で飛んだ。
今日のお供はアマーリエ義姉さんであった。
リサは妊娠しているから『瞬間移動』は駄目なんだよな。

「王都は久しぶりね」

俺と今日はメイド服姿じゃないアマーリエ義姉さんは、王城に出向いてゲーペル商務卿と面会した。

彼は、最近商務卿を前任者と交代したばかりだ。
四十前後の小太りな男性で、商店街の会長のような雰囲気を持つ男性であった。

「というわけです」

「またか……あの若造は……」

ゲーペル商務卿に事情を説明すると、彼は舌打ちをしながらアルバンへの愚痴を溢す。

「またですか？」

「まただ。あの若造、どれほど自分が偉いと思っているのかは知らんが、バウマイスター伯爵殿以前にも、何回か同じ問題を起こしているのさ」

相手を怒らせるような事を言い、揉めると『お前の領地には石細工は売らない』と言って激怒し、席を立ってしまう。
ゲーペル商務卿の下には、何件かそんな情報が入ってきているそうだ。

「マッテゾン子爵領の石細工は、技術力が圧倒的に優れているからな。農地が少ないから、沢山ある石でを工して食うしかなかったわけだが……」

マッテゾン子爵領は、昔は飢饉になると必ず飢え死にする者が出るほど貧しい領地だった。
それが富裕な領地になったのは、代々のマッテゾン子爵が懸命に石細工職人を育て、保護してきたからだ。

決してアルバンの手柄でも何でもないと、ゲーペル商務卿は説明する。

「だから、デニスに継がせればよかったんだ！　あのアホではどうにもならん！」

デニスって、あの時にアルバンの後ろにいた異母兄だよな。

あの兄貴の方が評価は高いのか。

「お詳しいのですね」

「私は商務閥の重鎮だからな。それよりも、問題はマッテゾン子爵領の事だ」

いくら技術があるとはいえ、肝心の新マッテゾン子爵がこの調子では石細工を買う客がいなくなってしまう。

石細工業が死ねば、マッテゾン子爵領は以前の貧乏領地に戻ってしまうのだ。

「飢饉になって、周辺の領地に流民が押し寄せでもしたら目も当てられん。大体、石細工は食料とは違って生活必需品じゃないんだぞ！」

なぜ、橋の欄干や街道の標識に石細工を載せるのか？

それは、王国や大物貴族が考えた経済のためのものだからだ。

いらないと言って付けなければ、そこに需要と金の流れが発生しない。

王国や大物貴族が費用を増してでも石細工を橋や街道に使い、それで石細工職人が生活できるようにする。

無駄だからといって削ってしまっていいものではないが、向こう

が殿様商売で嫌われれば、客がいなくなっても仕方がないという話になってしまうというわけだ。

「バウマイスター伯爵領の開発は王国の肝入りだ。石細工は橋や街道の完成時に付いていればいいが、いつ完成したかなんてバウマイスター伯爵殿次第。気長に待って、他の領地から輸入したものを取りつければいい。こんな事を続けていると、マッテゾン子爵領の石細工職人は仕事を失うぞ！」

そう、無理にマッテゾン子爵領から石細工を買わなくても、他の領地から入ってくるのを気長に待てばいいのだ。

完成してはいないが一応使える橋や街道が沢山あっても、それは大規模開発中であるバウマイスター伯爵領内だから問題にならない。

石細工がなくても、他が完成していれば何も問題はないからな。

「バウマイスター伯爵殿が必ず石細工を付けると約束した以上は、私からは何も言えん。それよりも、マッテゾン子爵領の事だな」

「寄子なのですか？」

「だったらどんなに楽か……圧力をかけてデニスを次期当主にできるからな。他の手を考えるしかあるまい……」

会見は短時間で終わり、ゲーペル商務卿は考え事をしながら俺達の下を去った。

アルバンに対し、何らかの処置を取らなければいけないと思っているのであろう。

「アマーリエ義姉さん、行きますか？」

「ええ」

次は、エーリッヒ兄さんと彼の屋敷で会う約束なのだが、仕事を終えた彼が帰宅するまでにはまだ時間があった。

そこで、久しぶりに二人だけで喫茶店に入ってみる。

服装を庶民向けのものに着替え、俺がバウマイスター伯爵だとバレないようにしてだ。

「マテ茶とケーキのセットで」

「私も同じものでいいわ」

俺とアマーリエ義姉さんは、すぐにウェイトレスを呼んで注文する。

「私達って、周囲から見るとどういう風に見えるのかしら？」

どうなのだろう？

別に日本だと、このくらいの年齢差のカップルや夫婦もいなくはないよな。

この世界だと……弟と姉が妥当な線だな、やっぱり。

「弟と姉、もしくは、私が大貴族の正妻だとしたら、若いツバメとか？」

子供を産んで役割を終えた大貴族の夫人などで、若い男性を囲う人も一定数いると聞く。

たまに、年配の貴族女性が若いイケメンの男性を連れているのがそれだ。

ホストに嵌るようなものなのだろうな。

夫である貴族も若い他の奥さんや愛人しか相手にしないケースが多いから、子供さえ産まなければ夫公認なんて人も多いらしい。

俺の周りにはいないけどね。

特にエリーゼの実家は教会関連だから、そんな事をしていたら非難されてしまう。

「アマーリエ義姉さん、そこまでの年齢差はないですよ」

「それもそうか、なら普通に弟と姉よね」

そんな感じだよな。

思えば、実の兄であるクルトよりもアマーリエ義姉さんとの会話の方が多かったのだから。

「ヴェル君、気にしては駄目よ」

「いや、俺は別に……」

アマーリエ義姉さんが、優しく諭すように俺に言う。

「ならいいけど、所詮は他人の無責任な意見だものね」

「ええ……」

アマーリエ義姉さんは、俺がアルバンの暴言を気にしているのではないかと心配してくれたようだ。

俺は気にしているのだろうか？

アルバンの奴は、俺と自分が同じだと言って仲良くなろうとしたけど、色々と違いすぎて同調できなかった。

俺は結果的に兄を排除した。
アルバンも、異母兄を排除しようとしてるのか？
でも、全然前提条件が違うんだけどな。

落ち込むほど気にしているわけではないが、言われてしまったせいで心の片隅に引っかかっている。
そんな感じだと思うのだ。

「つい色々と考えてしまうけど、きっと考えても何も解決しないのよ。全部過去の事だから」

「そうですね」

アマーリエ義姉さんの言うとおりだ。
アルバンの暴言のせいで過去の事まで色々と考えてしまうけど、考えても何かが変わるわけじゃないんだよな。
既に終わった事なので、もう結末を書き直したりはできないのだから。

「だから、気にしては駄目よ」

「はい」

アマーリエ義姉さんにそう言われて、楽になったような気がする。
すると、段々とあのアルバンとかいうバカに仕返してやりたくなった。
あいつ、アマーリエ義姉さんの事を年増扱いしたからな。

「ああ、でも……」

「何？」

「俺は、アマーリエ義姉さんとカール、オスカーにしか悪いと思っていないかも……」

何となくそんな感じはしたのだけど、実際に口にすると俺は酷い事を言っているのかもしれない。

「私達に？」

「結果的に、一つの家族を壊してしまいましたから」

今、アマーリエ義姉さんが母子で別れて暮らしているのは、俺が原因なのだから。

「そんな風に思っていたんだ……でも、気にしなくていいわよ」

「どうしてですか？」

「実の子でも、カールとオスカーが心の底でどう思っているのかはわからない。表面上はあなたを慕っていてもね。でも、私は酷い女で、この生活を気に入っているのよ」

「気に入っているのですか……」

「周囲は酷い女だと思うかもしれないけど、私は今の生活が気に入っているの。だから、気にしないで」

「はい」

アマーリエ義姉さんにそう言われて、俺はまた少し救われたような気がした。

「アマーリエ義姉さん、そろそろ行きましょうか？」

「そうね」

俺達は喫茶店を出てから、今度は王都のあるお店へと向かう。

実は、エリーゼ達にあるものを取ってきてくれと頼まれたのだ。

「妊婦用の下着ですか……アマーリエ義姉さんがいなかったら、恥ずかしくて取りに行けない……」

俺しか取りに行けないとはいえ、下着屋にはあまり入りたくないな……。

アマーリエ義姉さんがいるから、格好がつくのだけは救いだ。

「そう恥ずかしがる事はないぞ。バウマイスター伯爵殿」

「えっ！」

王都でも有名な高級下着店に入ると、そこにはあの魔導ギルドの研究部門のトップ、ルーカス・ゲッツ・ベッケンバウアー氏の姿があった。

彼は魔法陣でイーナとルイーゼの下着を召喚した変態である……ああ、魔法で召喚したのは俺か……。

「そういえば、前に実家は下着屋だと言っていましたね」

妙に下着にも詳しかったからな。

「そうだ、ここはワシの兄貴が継いでいたのだ」

「それで、今日はなぜここに？」

「手伝いだよ」

この下着屋は、ベッケンバウアー氏の兄が継いでいた。
過去形なのは、つい先日そのお兄さんが急死してしまったらしい。
さらに彼には子供がおらず、跡取りはベッケンバウアー氏の次男が養子として入っていた。

「急遽新しいオーナーが跡を継いだのはいいが、まだ若造で色々と問題が発生しておってな。ワシや妻も、お休みの日に手伝っておるのだ」

「そうなんですか……」

この人、下着への知識には素晴らしいものがあるのだけど、少し変態だからなぁ……。

「奥方達がご注文した妊婦用の下着であろう？　出来上がっておるぞ」

というかこの人、よく俺の奥さん達が注文した品まで把握しているよな。

「注文した数が多いからな。たまたま覚えていただけだよ」

そう言ってから、ベッケンバウアー氏は俺に完成した下着を確認するようにと一枚一枚広げて見せてくれた。
さすがはというべきであろうか？
下着の扱いは上手なのだが、やはり変態ジジイにしか見えない。
人間、第一印象が重要というわけだ。

「以上だな。あとは、そちらの奥方の分も買って行くのであろう？」

「はい」

変態だけど、ベッケンバウアー氏は商売が上手だ。
他の奥さんの分の下着を購入して、アマーリエ義姉さんの分だけなしというのは不公平だものな。

「えっ……私はいいわよ」

「いいじゃないですか。今日のお礼ですよ」

あとで、その下着姿を見る俺にも得があるので誰も損はしない。
俺はベッケンバウアー氏にお勧めの下着を訪ねた尋ねた。

「試着等があるので、ワシよりもワシの妻に任せよう。おーーーい！」

「はあーーーい。バウマイスター伯爵様でいらっしゃいますね。いつもありがとうございます」

俺も試着姿を見るわけにはいかないので、あとはベッケンバウアー氏の奥さんが対応してくれた。
試着室があるので、そこで俺達に見えないようにアマーリエ義姉

さんに色々な下着を着せてくれたのだ。

「少し大胆じゃありませんか？」

「このくらい派手な方が、旦那様も喜びますわよ」

「布地が少ないのですが……」

「奥様、これが今の王都の流行なんです。色も今年は黒が流行しています」

「黒ですか？　私は白が好きなんですけど……」

「同じ色ばかりだと、旦那様も飽きてしまいますよ」

話を聞くだけでも楽しみ……じゃなかった。

随分と大胆な下着を勧められているようだ。

「バウマイスター伯爵様、大体こんな感じになりましたが」

「いいですね、勘定をお願いします」

「はい、毎度ありがとうございます」

どんな下着かはあとのお楽しみという事にして、俺はベッケンバウアー氏の奥さんに下着の代金を支払った。

「バウマイスター伯爵様、もっと沢山奥さんを貰って下着を買いに来てくださいね」

そして、ベッケンバウアー氏の奥さんの発言に目を丸くさせる。
さすがにそれはないと思いたかった。

「バウマイスター伯爵殿、お買い上げ感謝する」

「それはいいのですけど、例の魔法陣ってどうなりました？」

俺の魔力で色々なものを転送させたあの魔法陣の研究が進んだのかを、俺はベッケンバウアー氏に尋ねた。
というか、あんたの本業はそっちじゃないか。

「ああいう魔法陣の改良は、天文学的な試行回数を繰り返さないと駄目だからな。全然進んでおらんわ」

研究が進んでいないのに、ベッケンバウアー氏はそれを気にする様子もない。
その状態で下着屋の手伝いとは、この人はかなりいい性格をしていると思う。

「それよりもだ、奥方殿、今日の下着は加齢による胸やお尻のタレを補正してくれる機能があるのです。是非ご活用を……」

「まだそこまで垂れていません！」

「あんたは、なんで一言多いのよ！」

またもベッケンバウアー氏が余計なひと言を言ってしまい、アマーリエ義姉さんと奥さんからダブルビンタを食らっていた。
やはり、この人が下着屋を継がないで正解のようであった。

「ヴェル、待っていたよ。アマーリエ義姉さんもお久しぶりですね」

下着屋を出ると、ちょうどエーリッヒ兄さんの終業の時刻となった。

彼の屋敷に向かうと、玄関先で俺達を出迎えてくれる。

「エーリッヒ様も立派になられましたね」

「そうですかね？　本人は実感がないのですけど」

アマーリエ義姉さんはバウマイスター家の籍を抜けていないので、エーリッヒ兄さんから見てもいまだに義姉であった。

女性受けではチートな才能を持つエーリッヒ兄さんなので、久しぶりでもアマーリエ義姉さんと楽しそうに話をしている。

そう、エーリッヒ兄さんは本物のリア充なのだ

二人は仲良く会話を続けていた。

「アマーリエ義姉さん、またバカが出たと聞きましたが……」

「はい」

エーリッヒ兄さんの言うバカとは、勿論アルバンの事だ。

「エーリッヒ兄さん、なぜ俺の下にはバカな貴族が集まるのでしょ

うか？」

「ヴェル、それに対する正式な返答がほしいのかい？」

「いいえ、ただの愚痴です」

バカの相手をさせられた後には必ず思うだけだ。

なぜ俺を目指してやってくるのかと。

「愚痴かぁ……念のために言っておくけど、私とヴェルの下を訪ねる貴族でバカな奴の確率に変わりはないよ」

「確率ですか？」

「そう、今のヴェルには私の百倍以上の客が押し寄せているからね。例えば十人一人の割合でバカがいた場合、私のところには一人バカが来て、ヴェルのところには百人が来るというわけさ」

大半はローデリヒ達が弾いていると思うけど、それでもたまに混じるからな。

「マッテゾン子爵家の次男はバカで有名だからね。長男の方はよくできた人だと評判だね」

アルバンの後ろにいたデニスという青年、やはり優秀な人らしい。

「でも、血筋が悪いのでは？　アルバン本人が下賤な血だと言っていましたよ」

「別にそこまで悪くないよ」

あとは、エーリッヒ兄さんが夕食を準備してくれたので、それを食べながらの話になった。

「今のマッテゾン子爵は、ホーラッド男爵家から正妻を迎え入れたのさ」

ところが、その正妻が三十近くになっても子供ができなかった。

この時代だと、当たり前のように側室が迎え入れられる。

「王都の貧乏騎士の八女、それがデニス殿と二人の妹達の母親さ」

「八女という部分にシンパシーを感じますね……」

俺は八男だからな。

こういう場合、その側室が産んだ嫡男を正妻の養子に入れるなどする。

ところが側室がデニスを産んでからすぐ、今まで子供ができなかった正妻に子供できてしまったらしい。

「うわっ、面倒な話」

当然正妻としては、自分が腹を痛めて産んだ子供に跡を継いでほしいわけだ。

その瞬間から、マッテゾン子爵家は御家騒動に巻き込まれる事となる。

家臣や領民達も、アルバン派とデニス派に分かれてしまった。

「八女でも騎士の娘なら、青い血なので下賤扱いされるのはおかしいのでは？」

「そうだね、でも血筋くらいしかアルバンには有利な点がないんだ」

こうして一歳違いの兄弟が誕生したわけだが、兄のデニスは何をしても優秀なのに、弟のアルバンはご察しのとおりだ。

次第に、デニスの方が跡取りに相応しいという意見が増えてくる。

これにアルバンの母親である正妻と一部家臣が反発し、当主の病気と重なって大きな問題になっているというわけだ。

「どこにでもありそうな御家騒動ですか……」

「アルバンは、自分が優位に立つためにデニスを下賤の血だと批判するようになったわけだね。それしか手がないとも言えるけど」

能力は、完全にデニスの方が上だからだ。

自分が正妻の子だという部分しか、有利な点がないのが辛い。

「なるほど、大変ですね」

「ヴェルはやっぱり放置するかい？」

「向こうから石細工を売ってやらないと言われましたからね」

「そうだね、ヴェルの方から歩み寄ると舐められる可能性があるね。やめた方がいい」

マッテゾン子爵家の話についてはそれで終わり、あとは楽しく世間話をしながら夕食を取ってバウルブルクの屋敷へと戻った。

こういう時には、『瞬間移動』はとても便利である。

自分の屋敷に戻るとエリーゼ達に頼まれた妊婦用の下着を渡し、その日はアマーリエ義姉さんが購入した下着をちゃんと確認してから……その先もあるけど……就寝するのであった。

「ヴェル君、お客様よ」

そして翌日、再びメイド服姿のアマーリエ義姉さんが俺に来客を教えてくれた。

「アマーリエ義姉さん、別に今日はメイド服姿でなくてもいいのでは？」

「何か、気に入ってしまったのよ」

アマーリエ義姉さんが着ているメイド服は、帝国内戦中に試作した現代風のものだ。

バウマイスター伯爵家で採用する時にはスカートの丈を長めにしたけど、従来のものよりも可愛いデザインになっている。

「それよりも、客って誰です？」

「例のマッテゾン子爵家の長男さんよ」

あれからアルバンは激怒して領地に戻ってしまったそうだが、長

男の方は残っていたらしい。
しかし、俺に何の用事なのだろうか？
「時間はあるし、少しくらいは話を聞くか」
石細工の仕入れの件もある。
一応、話くらいは聞いておくべきであろう。
「デニスと申します」
「バウマイスター伯爵だ、時間がない。手短に話をしてくれ」
話くらいは聞くつもりだが、他の予定もあるのでそう長々と話は聞いていられない。
それに、こちらが強気に出ないと駄目なので、俺は早く話せと彼を急かした。
「バウマイスター伯爵様、再び我がマッテゾン子爵領の石細工を購入していただきたく」
「お前はバカか？」
俺は、このデニスという男が今回の問題の本質を掴んでいるのか不安になってしまった。
別にうちは購入してもいいのに、向こうが売らないと言ってきたのだから。
「俺よりも、先にアルバンの方を説得してこいよ」
「それは……」

できないんだろうな。
アルバンからすれば、このデニスは血筋の悪い一応年上の兄弟くらいの認識しかない。
下手に諫言などすると、余計に状況が悪くなってしまうというわけだ。

「何とか、バウマイスター伯爵様に御助力をいただきたく……」

「どうして俺が？」

そちらが会見を望み、勝手にわけのわからん提案をして俺を怒らせ、挙句に石細工は売らないと言われたのだ。
こちらが何を協力するというのだ。

「こちらの妻の序列に口を出し、挙句に妹達を愛人として押し込もうとしたよな？」

「それは……」

「その時点で既に手切れなんだよ。石細工は他の領地から買うし、多少石細工の設置が遅れても王宮は何も言わないってさ。じゃあ、そういう事で」

これ以上話を聞いても無駄だ。
向こうに妥協する理由がないので、俺は急ぎ席を立った。

「待ってください！　このままだと、我がマッテゾン子爵領の石細工業は……」

「俺のせいじゃないだろう」

それに、バウマイスター伯爵家との取引がなくなっても、他にいくらでも顧客がいるじゃないか。

アルバンのせいで、それも徐々に減っているようだけど……。

「そこを何とか……」

「デニス殿、あんたは基本的に間違っている。間違っている人に手は貸せないな。貸しても無駄だから」

「バウマイスター伯爵様、それはどういう？」

「デニス殿は優秀らしいが、自分の身が汚れるのは嫌らしいな」

そう、デニスが今しなければいけない事は、家臣や領民有志と協力してアルバンを廃嫡し、自分が新しい当主になって俺と関係改善をする事だ。

ところが、デニスはそれをしたくないらしい。

「デニス殿は、駄目な弟領主を支える優秀な兄という世間の評価を捨てたくないんだろう？」

「……」

もしここで弟を廃嫡すると、いくら駄目な弟でも本来の嫡男を追い落とした怖い兄だと非難する者が必ず出てくる。

デニスは、そういう評価を受けるのが嫌なのであろう。

「デニス殿に残された道は二つ。弟を追い落として次期当主になる

か、領地を出る事だね」

「領地を出るですか？」

「これからも弟の補佐ができると思っているのなら、甘いんじゃないか？　いくら上手く補佐しても、アルバンはデニス殿に憎悪を燃やすだけだ」

アルバンは、デニスが自分を追い落とそうとしていると危険視している。

このままだと、デニスの暗殺を目論むかもしれなかった。

「アルバンとデニス殿、どちらが家臣の支持が多い？」

「……」

「沈黙ということは、デニス殿の方だと俺は思うからな」

「……」

デニスは反論しなかったので、家臣の支持も彼の方が厚いのであろう。

「なら、心を鬼にしてアルバンを廃嫡するしかないな。もしこのまま彼が次期領主として活動すると、デニス殿の妹達はもっと苦境に追いやられるぞ」

マッテゾン子爵家が困窮すればするほど、妹達は条件の悪い家に送り出されるであろう。

何しろ、アルバンは異母妹達も好きではない。

道具として使うのに、何の躊躇いもないのだから。

「覚悟を決めるしかないな。少なくとも、俺はアルバンと交渉する気にはならない」

「アルバン様とは交渉しないですか……」

「悪いけど、顔を見るのも嫌」

「……わかりました。妹達のためにも泥を被りましょう」

覚悟を決めたデニスは、俺の下を辞して領地へと戻っていく。

そして一週間後、魔導携帯通信機にブライヒレーダー辺境伯から通信が入った。

『アルバンが廃嫡ですか』

『元から駄目な跡取りだと評判でしたからね。家臣や領民有志が兄の方を次期当主にしろと、病床の現当主に迫ったそうですよ』

『現当主は、受け入れたのですか？』

『アルバンが色々と問題を起こしていましたからね。あっさりと受け入れたようです』

『そうですか』

さらに一週間後、無事に病床の父親から当主の座を受け継いだデニスが挨拶に訪れた。

「アルバンとその母親は、教会行きにしました」

情けをかけて領地に残すと、また何かしでかすかもしれない。

デニスは、二人を教会に送り込んでいた。

「これでよろしいですか？」

「ええ」

普通に会見をするだけだったはずなのに、えらく時間がかかったものだ。

「つきましては、暫くは石細工の値引きを。こちらも生活もあるので、大幅には値引きできませんが……」

「それはありがたい」

会見は無事に進むが、最後にデニスは一通の手紙を俺に渡した。

今も病床にある前マッテゾン子爵からのものだ。

「なになに……『デニスの背中を押していただき感謝いたします』か……」

「父にアルバンの廃嫡を迫った時、『ようやく決心したか』と言われました」

何の事はない。

デニスの父親も、アルバンは次期当主に相応しくないと思っていたようだ。

正妻の子供だしいい補佐があれば……そう思っていたのに、予想

以上に彼が酷いのでデニスに継いでほしいと願うようになったというわけだ。

「父は、安心して死ねると」

こうして、会見は無事に終了した。

私室に戻ると、そこにマテ茶を持ったアマーリエ義姉さんが姿を見せた。

「ヴェル君は優しいわね」

「そうですか？　結構厳しい事を言いましたけど」

実の弟を追い落とせだものな。

とても優しいとは思えないはず。

「結果的には上手くいったじゃない。私が勝手にそう思っているだけだから、ヴェル君がそう思っていなくてもいいのよ」

「俺は優しいですかね？」

「ええ、優しいわよ」

アマーリエ義姉さんからそんな風に言われてしまうと、段々とそんな感じがしてくるような気がするな。

これも、俺がもうすぐ父親になるからかな？

「エリーゼさん達、もうすぐね」

「楽しみですね」

「そうね」

俺は、アマーリエ義姉さんとマテ茶を飲みながら話を続ける。

エリーゼの出産予定日まで、既に二か月を切っていた。

第百二十九話　卒業とその後の進路。

「先生、質問があります」

「先生、また一緒にケーキ屋に行きましょう」

「先生、今度狩りに連れて行ってくださいね」

アグネス、シンディ、ベッティの三人は今日も元気なようだ。

「今日は時間があるからいいか……シンディ、ケーキ屋は最後だからな」

「はーーーい、わかってます」

「本当にわかっているの？」

「ベッティこそ、さっきケーキが食べたいと言っていた癖に」

「喧嘩するなよ。まずはアグネスの質問からだな……」

「「はーーーい」」

俺の講師業は、とても順調であった。

予定を早めて開校させた冒険者予備校バウルブルク支部において、俺の新米臨時講師生活は続く。
アグネス達魔法使いクラスの生徒達に、魔法を理論、実技両面から指導していく。
前世の大学時代、教職過程は取っていなかったので不安があったが、案ずるより産むがやすしである。

思ったよりも、ちゃんとこなせているような気がする。
生徒達に聞くと、熱心で、親切にわかりやすく教えてくれる先生なのだそうだ。

年配の元冒険者講師の方が経験と知識はあるのかもしれないが、彼らも人に教えるための専門教育を受けているわけではない。
現役時代は優秀な冒険者でも、必ずしも人に教えるのが上手というわけではないのだ。

こんな話は、野球でもよく聞いたな。
名選手イコール名監督ではないというわけか。

となると、バウルブルクの予備校では将来的に講師を育てる教育や講習を組み込んだ方がいいのかな？
でも、それをすると年配の講師が反発する可能性もあるのか。

「自分に自信がありすぎて独自の教育方法に拘ったり、プライドが高くて拒否する者もいると思うが、ありがたいと思う講師も多いはずだぜ」

王都にいるヘリック校長に相談したら、それはいいアイデアだと

褒めてくれた。

「あれ？　反対されるかと思いました」

大半の講師は、自分が最善と信じる教育方法を実践したいものだと思っていた。

「講師連中は、元は優れた冒険者が多いからな。優れた冒険者ってのは、臨機応変に動く。上手な教え方を無料で教育してくれるってのなら、喜んで受けるのが普通さ。才能があっても偏屈なのはすぐに居辛くなるし、そういうので元々講師になる奴は少ないのさ」

仕事だから、研修を拒否する人も少ないか。

それに講師業は、孤高の天才や、偏屈な人には勤まりにくいだろうし。

「となると、やっぱり教え方をマニュアル化しないと駄目ですね」

「それは、うちでマニュアルの編纂作業を進めるよ。うちは歴史が長い分、そういう作業の音頭を取るのに向いている。他の予備校にも協力させて、最終的にはマニュアルの共有ができればいいな」

ヘリック校長も、元は優れた冒険者である。

優れた冒険者の資質の一つに、決定と行動の素早さがあった。

今にも魔物に襲われようとしているのに、長々と考え込んでいては生き残れないからだ。

『下手の考え、休むに似たり』というわけだ。

予備校は冒険者ギルドの下部組織だからもっとお役所的かと思ったら、トップが優秀だと新しい事を決めるのも早いようだ。

「バウマイスター伯爵殿、魔法使い用のマニュアルも、ゆっくりとでいいから整備してくれないかな」

「それは構いませんが……」

一部自分なりに改良を加えているけど、マニュアルはほとんど師匠が書き残した内容だからな。

ブランタークさんや……ほんの一部導師の教えもあったりするけど。

「アルフレッド殿が著作者で、バウマイスター伯爵殿、ブランターク殿、アームストロング導師殿が監修という形にしようと思う」

「わかりました、引き受けましょう」

予備校で、魔法使いに教育を施す時に使われるマニュアルの著者が師匠になる。

誰よりも優れた才能を持ちながら、短い生涯を終えてしまった師匠の名が後世に伝わり、もっと多くの人達に評価されるようになってくれれば、弟子の俺も鼻が高いというわけだ。

「バウマイスター伯爵殿も忙しいだろうからな。俺達の方にも準備があるし、ゆっくりとでいいさ」

ヘリック校長からそう言われ、俺は空いている時間に師匠が残してくれた著述の整理も徐々に行うようになった。

そんな出来事もあったが、俺は何とか講師をやれている。
師匠からの教えに、教えるのも名人級のブランタークさんからもたまに指導を受けて、この職をまっとうしようとしたのだ。

「伯爵様は真面目だねぇ。アルの記述まで纏めているのか」

「やると決めた以上は。それに、弟子の俺が師匠の功績を後世に残さないで、誰がやるというのです」

「俺にも、そんな真面目な直弟子が欲しいよな」

俺はブランタークさんの孫弟子だから、厳密に言うと彼の直弟子じゃないんだよな。
でも、彼には沢山弟子がいると思うけど。

「カタリーナはどうなのです？」

彼女はブランタークさんからの指導で力量を増しているから、いい弟子だと思うんだよな。

「カタリーナの嬢ちゃんは一種の天才だからな。ああいう天才は、恐ろしいほど人に教えるのに向いていないんだ」

魔闘流では天才的な技量を持つルイーゼがまったく指導者として向かず、お飾りでうちの臨時指南役になって、弟達に指導を丸投げしているのと同じというわけか。

「そのうちに、ブランタークさんの望むような弟子が現れますよ」

「そうだな、俺はまだ何十年も現役だから」

魔法使いは、普通の人よりも寿命が延びる傾向にある。
ブランタークさんも、あと三〜四十年は現役である可能性が高かった。

「でも、安心したよ。伯爵様は、導師の百倍くらい教えるのに向いているから」

「それって、褒められているのでしょうか？」

俺が講師に向いていると褒めてくれるのは嬉しいのだけど、比較対象があの導師という点でモヤモヤする。
何しろ、あの人ほど教え子を選ぶ人もいないのだから。

「それにしても、慕われているそうじゃないか」

確かに、俺は生徒達から慕われていると思う。
講義のみならず、時間が空けばバウルブルクの外に出て狩りの方法などを実技込みで指導しているのだから。

「魔物には、野生動物に似た形態の物が多い。大きくて、素早くて、強いが、基本的な動作や生態は似ている。成人前に野生動物をなるべく多く狩って、慣れておく事も必要だ」

「沢山狩れば、アルバイト代も増えますしね」

「それもあるな」

これは冗談ではなく、生活が安定しないと教育を受ける暇がなく

なるからだ。
　中級以下の魔法使いは高性能な杖があった方がいいし、金属鎧よりも優れた防御力を発揮するローブも生存率に大きな差が出るので必要だ。
　これらは魔物の領域に入る前に入手しておいた方がいいから、アルバイトで稼いで早めに購入しておけと、俺はクドイほど言っていた。

「伯爵様がずっと講師をするわけにはいかないけど、今年はいい魔法使いが複数出そうだな」

　ブランタークさんのような年配の魔法使いからすると、なるべく才能のある若い魔法使いが沢山出てきてほしいというわけだ。
　魔法使いの希少性が薄れて利益が減るなどと言っていられないほど、この世界では魔法使いが不足しているからであろう。

「頑張れよ、伯爵様」

　ブランタークさんに励まされつつ、俺は生徒達に狩りも教えていく。

「帰りは何か食べて帰るか。先生が奢ろう」

「ラッキー」

　狩りの帰りに生徒達にスィーツや食事を奢ったり、こういう事をしていると先生をしているなという実感が湧いてくる。
　そして、生徒達の中でも特に可愛がっているのはアグネス、シンディ、ベッティの三人であろう。

まだ魔力が伸び続けているので、俺は時間を惜しまずに教えている。

一緒にいる時間も増えて、追加で色々と教えたり、休日にはどこかに遊びに連れて行ったりもした。

勿論、魔法を教えている時にはケジメをつけているが、これは前世では弟しかいなかったので、妹が出来たようで嬉しかったのかもしれない。

何しろバウマイスター家でも、俺は末っ子の八男だったからな。

碌に面識もない異母姉達はいても、妹はいなかったし。

「アグネス、まだ魔力を篭める時に少し多めに流し過ぎだな。もう少し肩の力を抜くように」

「はい。ですが、毎日瞑想で魔力路を広げているので……」

「魔力路を広げるのは、極大から極小までの魔法に素早く対応するためだ。それと、無駄に魔力を使うのとは別の話だぞ」

「なるほど……わかりました」

「シンディ、そんなにケーキばかり食べていると太る……らないか。魔法使いだしな」

「そうですよ。魔法の練習を一杯していますから。先生、レディーに太るは禁句です。奥さんに怒られたりしませんか？」

「あるな……」

俺は、ダイエット魔のカタリーナの事を思い出してしまう。

魔法は魔力の他にもカロリーを消費するらしく、魔法使いで太っている人はほぼ皆無である。
だからカタリーナは太っていないのに、彼女は定期的にダイエットを目論むから、俺はついからかってしまうのだ。

「狩りか。何が狩りたいんだ？　ベッティ」

「ホロホロ鳥が多目に欲しいとギルドから頼まれたんですけど、私は風の魔法が苦手なので」

「練習込みで手伝ってやるさ。厳しく指導するけど」

「わーーい、ありがとうございます」

などと、今日も楽しく講義を終えてから屋敷に戻ったのだが、戻るやいなや俺は屋敷のリビングでなぜか土下座をする羽目になっていた。
外部の人間にはとても見せられない、バウマイスター伯爵土下座の図である。

「ヴェル君、駄目よ」

「えっ？　何がですか？」

ずらりとお腹が大きくなってきた奥さん達に囲まれ、代表して妊娠していないアマーリエ義姉さんに責められてしまう。
まるで、浮気がバレた夫のような感じだ。

しかし、変である。
俺は浮気なんてしていないのに……。

「アマーリエ義姉さん、俺はよき夫、よき父親となるべく頑張っているじゃないですか」

俺は、その一例について話し始める。

『エリーゼが一番早いのかな？』

『はい』

予備校に講義に出かける前、俺はエリーゼのお腹に耳を当てながら話をするという、まるでドラマに出てくる父親のような事をしていた。

もうすぐ俺も父親になるわけだが、嬉しくもあり、不安でもあり、たまに実感が薄れる時もある。

果たして、俺に父親なんて務まるのか不安になってしまうのだ。

『魔法で男の子か女の子かを確認していないから、かなり気になってきた』

『それは、生まれた時のお楽しみですよ』

『わかってはいるんだけど、産まれるまでの時間がもどかしい』

『できれば跡取り息子がいいとは、父もお爺様も言いますけど……』

それは第二子以降でもいいし、俺はまだメンタルが平成日本人なので女の子でも構わないと思ってしまうのだ。

この世界の貴族ならば何が何でも男なのであろうが、強く言われてもピンと来なかった。

そういえば、まだ元気なはずのお婆ちゃんが、曽お婆ちゃんや同年代の親戚から言われた事があると言っていたな。

昔の田舎の農家とかだと、家を継ぐ跡取りという考えがあるんだろうな。

『まずは、元気に生まれてくればいいのさ』

『ヴェル、私ももう元気にお腹の中で動いているわ』

『ボクもだ』

『うーーーん、もう少しだと思うと緊張してきた』

『ヴェルが緊張してどうするのよ』

実際に赤ん坊を産むのは自分達だと、イーナに呆れられてしまった。

『ヴェンデリンさんはご安心を。無事にヴァイゲル家の跡取りを産んで見せますわ。私、この子は男の子だと思うのです』

カタリーナが、大きくなったお腹を摩りながら言う。

彼女も子供の性別は調べていなかった。

ハインツから『焦らずに何人でもお産みになってください。お子

が無事に産まれる事の方が大切なのです』と言われていかたらだ。

『ハインツに言わせると、ヴァイゲル家の第一子は女児の確率が非常に高いそうですが、間違いなく男子ですわ』

カタリーナは長女だから、そういう傾向があるのかもしれないな。

『でもさ、カタリーナがそう言うと当たらなそうだね』

確かに、カタリーナの予感はあまり当てにならないような気がした。

『ルイーゼさんはどうなのです？』

『元気に産まれてくればどちらでもいいよ。うちは、女の子しかいなければ婿養子でもいいから。武芸を教える家臣家だと、女の子の方が喜ばれたりするね』

貴族家の家臣で決められた生業がある家と、歴史が長い商家などでは、女児が産まれた方が喜ばれる傾向があった。

その理由は簡単で、能力が微妙な跡継ぎ息子よりも、娘に優秀な婿を取って継がせた方が家が栄えるからだ。

貴族は男子血統を重視するので、男子がいればその人物に継がせる。

ところが、イーナやルイーゼのような指南役家で駄目な跡継ぎが出ると、最悪主家から役目を取り上げられてしまう。

商家は商売に失敗して破産する危険があるので、駄目な息子は致命傷になってしまうのだ。

だから、女児の方が婿を取れるので喜ばれる事になる。

商社マン時代に色々な取引先の経営者と出会ったけど、関西の商売人にはその傾向が強いような気がした。
婿の方が優秀な人物を選べるからいいのだそうだ。

『それぞれに色々と事情があるものよな。妾は気楽な身分じゃからの。それよりも初産で少々の不安があるので、ヴェンデリンに言われた体操をしておるぞ』

テレーゼは、柄にもなく初めての出産を前に緊張しているらしい。
出産予定日がエリーゼ達より数か月後なので、今から緊張していたら身が保たないと俺は思うのだが……。
ちなみに、なぜ俺が安産体操を知っているのかというと、前世で祖父母がいる田舎に帰省した時、出産間近の従姉が毎日やっていたからだ。

当時の俺はその従姉に頭が上がらず、なぜか俺も付き合いで安産体操をやらされていたのは黒歴史だったりする。
覚えていたからこそ、妻達に教える事ができたので悪い事ばかりでもなかったけど。

『妾も男女の拘りは薄いの。何しろ、妾の子は他所に出せないからの』

テレーゼは表向き父親不明の子供を産むが、その子の将来はバウマイスター伯爵家が保証しているという奇妙な状態だからだ。
帝国に嫁がせたり婿養子に出すわけにもいかない。
バウマイスター伯爵家の家臣として、領内で結婚して人生を終わらせるという約束になっていた。

『ヴィルマはどうじゃ？』

『女の子の方がいいってお義父様は言う』

エドガー軍務卿の親族に、ヴィルマの実家であるアスガハン家もヴィルマが産んだ娘の嫁ぎ先候補というわけだ。

『まだ産まれてもいないのに……』

『ヴェル様、中央の貴族は気が早い』

『そうじゃな、あいつらは領地を持たぬから機敏に動かないと、領地持ち貴族に対抗できぬからの』

中央の法衣貴族の強かさは、テレーゼも十分に経験済みのようだ。

『カチヤ、そなたも実家から言われておろう？』

『そうなんだよ。ほら、兄貴とマルタが約束どおりに結婚してしまったから』

オイレンベルク騎士爵家の跡取りであるファイトさんは、初志貫徹して幼馴染である名主の娘マルタと結婚してしまった。

普通はあり得ないのだが、オイレンベルク騎士爵家はあの事件のあとでバウマイスター伯爵家の寄子になっている。

本当ならばうるさい外野が寄親であるうちに遠慮して黙ってしまい、二人は無事に夫婦となった。

ファイトさんは側室を迎える予定もないそうだ。

ところが次世代以降もそういうわけにはいかないので、オイレン

ベルク卿はファイトさんの嫡男とカチヤが産んだ娘とで婚姻を目論んでいた。
逆でもいいし、最悪ファイトさんに子供ができなくても、カチヤの子供がオイレンベルク騎士爵領を継げればいいと考えているそうだ。

『だから、無事に子供を産め。何人でもいいから沢山産めって言われた』

『貴族は跡継ぎがいないと死活問題じゃからの』

平成の日本では〇女速報にでも書かれてバカにされるかもしれないが、この世界の貴族からしたら何よりも重要な事であった。
貴族家が潰れれば、自分達の一族だけでなく、家臣や領民の生活まで壊してしまう可能性があるからだ。

『リサはどう思う？』

『必ず嫁にやります。年頃になったら、必ず嫁がせます。拒否は許しません』

『おおっ……そうじゃの……』

自分が嫁き遅れかけた関係で、リサは娘が産まれたら必ず適齢期に嫁にやると意気込んでいた。
そのあまりの迫力に、テレーゼですら引いてしまう。

『とにかくだ、外野なんてどうでもいい。今は無事に産まれてくればいいのさ』

イーナ、ルイーゼ、カタリーナとお腹に耳を当ててみると、こちらも赤ん坊が動いている。
ヴィルマ、テレーゼ、カチヤ、リサにも同じくお腹に耳を当ててみる。
『聴音』の魔法で探ると、二つの心臓の音が聞こえた。
心臓の音が聞こえるという事は、無事に育っているという事だ。
『ローデリヒにも準備を頼んでいるから、安心だ』
ローデリヒは産婆と神官の手配で大忙しだそうだが、子供達のためにも俺は頑張らねばならない。
エリーゼ達と話しながら、俺は立派な父親となるべく決意を固めるのであった。

「というわけで、予備校の臨時講師として頑張りつつ、領内の開発にも精を出し、エリーゼ達とも時間を作り、今の俺ほど頑張っている人は王国中を探しても少ないですよ」
そう、俺はとても頑張っているのだ。
それなのに、なぜアマーリエ義姉さんから叱られているのであろうか？
「ヴェル君、生徒達は可愛い？」
「ええ、先生として慕ってくれていますから」

慕われて嫌な気持ちになるわけがない。
みんな魔力の量や才能に差はあるけど、懸命に学んで成長している。
それを手助けしていると、アホな貴族との付き合いや帝国内乱で荒んだ心が癒されるのだ。

「やはり、戦争による破壊よりは教育による育みですね。駄目な大人になってしまったバカな貴族の相手よりも素晴らしい」

戦争はもう終わったが、再教育も難しそうなバカ貴族の相手はこれからも永遠に続く。
それを考えると、予備校で生徒達に教えていた方が心が安らぐというわけだ。

「うん、俺はいい事をいった」

「ヴェル君、自分でそう言ってしまうの？」

アマーリエ義姉さんは呆れているようだが、これはあの内乱を通じて俺が悟った真実である。
勿論、敵が来れば容赦なく粉砕する予定ではあった。
俺は誰よりも、自分の居場所の確保に拘る人間だからだ。

「ヴェル君は、特に可愛がっている三人がいるわよね？」

ああ、なるほど。
だから俺は土下座をしているのか。
奥さん達がお腹が大きいから、俺が浮気をしているのではないかと。

「あのですね、アマーリエ義姉さん。あの三人は純粋に才能があるから、特に可愛がって教育しているだけです」

妹のように可愛がっている自覚はあるけど、そこに邪な感情はない。

俺は、アマーリエ義姉さんに力説した。

「休日に、遊びに連れて行っているわよね？」

「それは、時には休暇も必要だからですよ。『よく学び、よく遊べ』です」

奥さん達はお腹が大きいので、もうあまり屋敷の外には連れ出せなかった。

俺もたまには遊びに行きたいし、勿論出かけた際にお土産を忘れない。

いくら夫婦でも、こういう気配りは忘れてはいけないと思う。

「第一、あの三人は俺の可愛い生徒なのです。なぜそこで手を出すという可能性が出てくるのか……実に嘆かわしい事ですよ」

ちゃんとここで反論しておこうと思う。

アマーリエ義姉さんは、実は怒らせるとエリーゼと同じくらい怖いけど、ここは男の意地である。

ところで、この土下座はいつ解いていいのだろうか？

「あのね。私は、ヴェル君の浮気を咎めているわけじゃないの。ただ、貴族として脇が甘いと言っているの」

「と、申しますと？」

「あの娘達、王都ではもうあなたの愛人扱いなの」

「何で？」

アマーリエ義姉さんに発言に、俺は思わず首を傾げてしまう。

あの三人が俺の愛人？

何だそれは。

お前らは、胡散臭い女性向け週刊誌やワイドショーか！

「ヴェル君って、たまに大バカよね。あんなに可愛がって、あちこち遊びに連れまわして、貴族でなくてもそう思わよ。向こうの親御さんもそう思っているわよ」

「それは、向こうの親御さんに悪い事を……」

嫁入り前の娘さんにそんな噂が流れたら、親御さんとしても心配なはずだよな。

「ううん。向こうの親御さんは大喜びよ。ヴェル君が娘を貰ってくれると思っているから」

「何だってぇーーー！」

「そうですね。あの三人は平民の出なので、愛妾でも親御さんは大喜びでしょう」

エリーゼが、いつもよりも冷たい表情で俺に説明をする。

俺はちょっと背筋が寒くなった。

「エリーゼが、ホーエンハイム枢機卿から噂を聞いたそうよ」

イーナが続けて説明するが、要するにベイヤー男爵家の連中の勧誘から三人を守り、揚句に予定よりも早くバウルブルクに予備校を作って三人を転校させたので、俺が囲い込みをしていると思われているらしい。

「特に派手に噂を流しているのは、ベイヤー男爵家だってさ」

「ルイーゼ、それは予想できたぜ」

どう頑張っても三人はベイヤー男爵家になど行かないのに、とんだ嫌がらせをしてくれたものである。

「ヴェンデリンさんは、生徒を可愛がり過ぎです」

「そうかな？」

「カタリーナは、ほぼ独学で魔法を学んでいるから嫉妬している？」

「ヴィルマさん、ここで妙な茶々を入れないでくださいまし……」

ヴィルマの鋭いツッコミが、俺の心に悲しみを植え付ける。

そういえば、カタリーナは寂しい学生時代を送っていたのだった。

「そうか、俺はカタリーナの気持ちを察してやれなかったな。今度はカタリーナも一緒に魔法を習おう」

「そういう事ではないのですが……それと、私はそこまでボッチではありませんでした！」

ボッチはボッチだと指摘されると怒るので、ここは一旦引いておく事にしよう。

なぜわかるのかって？

俺もボッチだったからさ。

「出産後は、一緒に魔法の鍛錬をしたいですが……」

ただし、一緒に魔法の練習をする事は否定しなかった。

カタリーナのこういう可愛らしい部分が、俺は好きだったりする。

「何やら面倒な話じゃの」

「ここは貴族として、テレーゼが上手い解決案を出してください」

俺は、こういう時に一番いい解決策を出してくれそうなテレーゼにお願いしてみる。

「解決策？　そんなものはないわ」

「随分と大胆な意見ね」

「イーナよ。貴族などというのは、そういう噂をされてナンボという生き物なのじゃ。いちいち噂など気にするのは小者、ヴェンデリンならば、本当に三人とも妻にしてしまっても問題あるまいて」

「いや、それはどうよ」

寄親であるブライヒレーダー辺境伯の奥さんの数との兼ね合いもあるし、王国政府が何か言ってこないのかという件もあった。

「ヴェンデリンよりも奥さんの数が多い伯爵など沢山おるわ。気にするだけ無駄じゃ」

「じゃあ、ならなぜ俺は呼ばれた？」

「あの三人の事も考えておけという、妾からの忠告じゃの」

それはつまり、上手く囲ってバウマイスター伯爵領発展に貢献させろという事なのであろう。

「あたいは旦那に負けて囲われた身だから、今回も旦那の好きにしてくれとしか」

「そうですね。もし必要であれば、魔法を継続して教えますけど」

カチヤとリサに言わせると、別にどちらでも構わないらしい。
この世界、こういう部分が寛容だよな。
日本なら、俺の社会的な評判が詰んでいる可能性もあったはず。

「とにかくだ。俺はあの三人を鍛えて、無事に予備校を卒業させたいのだ」

そこに下心などない。
ただ単純に、自分が師匠から教わったように才能有る若手に魔法を教えて後進を育てる。

多分それは、師匠があまり出来なかった事なのだから。

「俺が師匠の代わりに、少し多めに弟子を育てないと。俺もまだ未熟者だけど」

「あなた」

エリーゼ達は、俺を尊敬の眼差しで見つけている。

俺はまだ土下座をしたままなので、とてもそう思われるような人物には見えなかったけど。

「というか、なぜ俺は土下座を？」

「ああ、それはね。私は別に妊娠していないし、みんなもうとっくに安定期に入ったのよ。あの娘達とばかり出かけないで、お休みにはみんなを遊びに連れて行きなさい。ちょっとバウルブルクの町に出かけるだけでいいんだから」

「えっ！　大丈夫なんですか？」

無理にエリーゼ達を連れまわして何かあったとしたら。

そんな理由もあって、俺はアグネス達と遊んでいたのだから。

「少し歩いたくらいで、妊婦がどうこうならないわよ」

さすがは出産経験者、アマーリエ義姉さんは妊婦について俺よりも圧倒的に詳しかった。

俺がまるで知らないとも言うが。

「それは、配慮が足りませんでした……」

アマーリエ姉さんからの指摘に、俺は思わず頭を下げてしまうのであった。

そして季節は流れて、翌年の春となった。

俺も先生稼業に慣れてきたなと思ったら、もう生徒達は卒業だ。

ずっと先生ばかりしているわけにもいかないので、俺の臨時講師業はここで一旦終了する事となる。

バウルブルクの予備校に限り、エリーゼ、カタリーナ、リサができる限り臨時講師をする予定にはなっていた。

「先生は……とても感動しているぞ！」

「何で、ヴェルが一人だけ泣いているんだよ……」

卒業と世間では言われているが、冒険者予備校では修業とも言われる。

一年で無理なく必要な単位は取れるのだが、未成年者は魔物の領域には行けないので、必要単位以外の講義を後から履修する事も可能であった。

この場合は、他の生徒達と講義時間が被らないように午後や夕方からの講義になる。

プロの冒険者でも、単発で必要な講義を受ける事が可能だ。

この場合少々のお金はかかるが、予備校の置かれた領地から補助金が出るので、かなり安く受けられる。

俺達は数か月しか通っていないので詳しくは知らなかったが、実

は意外と冒険者予備校とは融通が利く。
時間と金さえあれば必要な講義を受けられるので、社会人向け講習のような感じといえばいいのかな？
なので、これからいくらでも会う機会などあるのに、俺は初めて卒業生を出すので一人感動して泣き、それをエルに呆れられていたのだ。

「エルにはわかるまい。俺が初めて教えた生徒達が卒業するんだぞ。きっと、みんなだって……」

「そうか？　嬉しそうに見えるぞ」

エルが視線を向けた先では、生徒達が修業証を受け取ってから嬉しそうに話をしていた。

「俺は成人したから、同期の仲間とパーティを組んで魔の森に挑むぞ」

「俺は来年成人だから、それまではバウマイスター伯爵領内で狩りをする。パーティメンバーはいるから、連携を確認しつつ、必修外の講義でも受けてみようかな」

「野営関連の実技付き講習とかいいな」

「それは必要だな、俺も受けよう。基礎講習は必修だったけど、応用講習も受けておきたい」

「俺も受けようかな？」

「そうした方がいいぞ」

みんな、卒業後の生活に夢を膨らませながら話をしていて、泣いている者など一人もいない。
一人だけ泣いている俺は、エルの言うとおりに浮いていた。

「あれ？　おかしいな？」

卒業なのだから、一人くらい涙を浮かべても……。
そういえば、俺も卒業式で涙なんて流した記憶がないな……。

「何でそのくらいで泣くと思うんだよ？　ヴェルは」

「いやあ……」

エルからの指摘に、まさかドラマの影響ですとも言えず、俺は一人頭をかいた。
それでも、生徒達は俺に感謝をしているようで、次々と挨拶をしてくる。

「先生のおかげで、魔法が上達しました」

「先生の教え方は、とてもわかりやすかったです」

「また魔法を教わりに来てもいいですか？」

「当たり前じゃないか！　俺はみんなの先生なんだから！」

そうだ、この六十一名の生徒達はすべて俺の教え子なのだ。
いつでも困った時には、俺を頼って欲しいと宣言する。

「先生！　ありがとうございます！」

「そうだ！　先生を胴上げしよう！」

「賛成！」

というわけで、魔法使いの卵達の卒業式は感動の中で終わったのであったが……。

「弟子だからという理由で、彼らが冒険者を引退した後にバウマイスター伯爵家で全員雇うのですか？　他の貴族達からの反発が必至ですけど……」

卒業式の感動をそのままローデリヒに伝えたら、彼から嫌な顔をされてしまう。

「えっ？　そこまでは言っていないけど……」

「お話を聞く限り、そういう風にも受け取れます」

「あっ！」

そういえば、困った時にはいつでも俺を頼れと先生らしく言ってしまったのを思い出す。

「冒険者を引退して貴族家などに仕える際に、うちにフリーパスで来れると思っていますよ」

「でもさ、魔法使いは引く手数多だから……」

魔法使いは数が少ないので、当然取り合いになる。
条件さえよければ、他の家に仕えても構わないのだから。

「現時点で、うちよりも高待遇を提案可能な貴族家って少ないのですが……」

まだ開発途上で予算もタップリあるバウマイスター伯爵領なので、魔法使いはいくらでも欲しい。
もし来てくれるのであれば、かなりの好待遇を保証可能であった。

「いくら元生徒とはいえ、全員を最悪バウマイスター伯爵家で雇うと言ってしまった以上は、彼らも交渉で強気に出るでしょう。同じ高待遇で雇うにしても、お館様のせいで相場が跳ね上がったと言われかねません」

「うっ！」

ローデリヒからの追及に、俺はタジタジとなってしまう。

「大丈夫、その頃にはみんな景気がよくなっているから……」

最南端開発とそれに伴う大量の資金の流入で、これからの王国経済は右肩上がりとなる。
これが王国中の貴族に波及すれば、きっと多少魔法使いを雇う賃金が増えたとて、俺に文句など言うはずがない……ないよね？

「バウマイスター伯爵領から始まる経済発展、その名を『バウマイスターノミクス』！」

「妙なネーミングですな……」

前世日本で、そんな事をテレビや新聞で言っていた政治家や経済評論家が沢山いた。
本当にそうなのか、俺のささやかな賃金からは想像できなかったが、景気は気分に影響を受けやすい。
少なくともこれ以上は悪くならないのだから、ここは強引に押し切ってしまおう。

要は、ローデリヒからの追及をかわせればいいのだ。

「既に終わってしまった事ですので、これ以上言っても仕方がありません。彼らが仕官するにしても、数十年後ですしね」

「そうだよ、これは麗しい師弟愛だから」

「まあ、この件はよろしいでしょう。ところで、お館様が特に可愛がっている三名ですが……」

ローデリヒは、特に目をかけていたアグネス達について新たな追及を始める。

「ローデリヒ、知っていたのか？」

「いや、あれだけ可愛がってバウルブルクの町中にも頻繁に連れ出して、この領の領民達でも知らない人は少ないと思いますけど……」

しかしながら、たかが俺如きの私生活によく注目が集まるものだ。
俺は芸能人でも、イケメンでもないのに。

「それ、本気で仰っていますか？　今のお館様は、王国でも有数の

有名人なのですが……」

「あーーーわかったから」

ローデリヒは、一年以上も巻き込まれた帝国内乱での功績を言いたいのであろう。

それにしても、面倒な話ではある。

「あの三人は、これからどうするのですか？」

「もう卒業したんだ。自分の進路くらいは自分で決めたさ」

アグネスは、どこか見習いで入れるパーティを探している。

シンディとベッティはまだ未成年なので、まだ受けていない講義を取りながらバウルブルク周辺で狩猟を行うそうだ。

そして、三人とも成人してから改めて三人で活動を行うと言っていた。

「堅実に進路を選んでいるじゃないか」

俺が一番目をかけて教育したのだ。

きっと優秀な魔法使いになってくれるさと、俺は期待していた。

「えっ？　あの三人は囲いましょうよ」

「お前なぁ……」

他の男子を含む魔法使い達と、アグネス達との違いは何よ？

才能の差か？

「まあ、今は大丈夫ですか……」

俺が追及すると、なぜかローデリヒは何も言わなくなってしまった。

こうして魔法使いの卵達は無事に卒業し、それぞれの進路へと進んでいく。

俺も、臨時講師の仕事を終えた。

これからもたまに臨時講師の仕事は引き受けるが、バウルブルクの冒険者予備校は人員も整い、俺が常に出張る必要もなくなったからだ。

エリーゼ達の出産も近い。

最初に彼女が出産をすると、あとは他の妻達も次々と出産だ。

「ローデリヒ、俺は父親として頑張るぞ。領内の開発を進めるのだ」

というわけで、俺は再び領内の基礎工事へと赴く。

開発計画は次々とローデリヒが立てているので、その基礎工事に全力を振り向けた。

奥さん達が全員産休なので俺しかいなかったが、ここでちょうどよく助っ人が現れる。

「先生、私は土木工事も覚えたいのです」

「私もです」

「こういう仕事なら、冒険者を引退しても出来ますよね」

「そうかそうか、三人とも熱心だな。工事魔法は、一部繊細な部分もあるからな。特に、他の人夫などがいる場合、彼らを巻き込んでは駄目だ。先生が一から教えよう」

「「「ありがとうございます！」」」

アグネスは見習い魔法使いとして他のパーティに加入したので回数は少なかったが、シンディとベッティは狩猟と合わせて、バウマイスター伯爵領の工事を請け負う事が多くなった。

最初は指導が必要だが、それはカタリーナも通った道だ。

すぐにコツを覚えて、こちらの依頼をテキパキとこなしてくれるであろう。

「お館様、だから大丈夫だと言ったでしょう？」

「いや、あの三人はあくまでも俺の弟子だって」

「今はそうでしょうね」

ローデリヒが思わせぶりなことを言うが、実際に三人への土木魔法の指導は上手く行っており、それに比例してバウマイスター伯爵領の工事も順調に進んでいる。

カタリーナとリサの産休分を上手く埋めてくれていた。

勿論正式な謝礼は支払っているし、アグネス達の成長も早まっている。

これは、師匠としても喜ばしい限りだ。

「お館様、将来が楽しみですね」

「その楽しみには、他の思惑も入っていないか？」

「それは、お館様の気のせいでしょう」

ローデリヒの中ではアグネス達は俺の嫁確定らしいけど、あの三人はまだ幼いからそんな話はなしだ。

俺はアグネス達の魔法使いとしての成長を見届けつつ、エリーゼ達の出産を待つのであった。

第百三十話　ヴェンデリン、父親になる。

「うーーーん……まだ産まれないのか……」

アグネス達の卒業からすぐ、遂にエリーゼが産気づいた。

父親である俺は彼女の傍にいてやりたかったが、この世界では妻が出産を行う部屋に男性は入れない。

ホーエンハイム枢機卿が寄越してくれた助産婦と神官達も、全員が女性であった。

出産に関われる男性は医者のみで、それも事前の診察しかできない。

更に、出産の時には入室できないというのだから驚きだ。

「まだか、まだか……」

分娩が行われている部屋の外で、俺はただひたすらに待ち続けた。

あまりにもどかしく、手持ち無沙汰になったので、俺は近くの窓を開けて空気を入れ替えようとした。

すると、一本の巨大な木が視界に入る。

風に吹かれて数枚の木の葉が落ちそうになったので、俺は地面に落ちる前に極小の『ファイヤーボール』をつぶけて焼く事を繰り返す。

なぜそんな事をしているのかというと、とにかく焦りばかりで何かをしていないと心配で堪らなかったからだ。

魔法の特訓にもなってイライラが静まり、一石二鳥というやつである。

他に意味はない。

「名付けて『ファイヤーガン』、もう葉は落ちないのか……」

すぐに落ちる葉がなくなり、俺はまた椅子に座ってから貧乏ゆすりを始めた。

今まで生きてきてそんな事をする癖はなかったのだが、これをすると落ち着くような気がする。

「うーーーん」

ところがまたすぐに気分が落ち着かなくなり、今度は魔法の袋から師匠の書き残した本を取り出して読み始める。

師匠が書き残したものはすべて目を通しているが、見落とした部分に出産で役に立つ知識や魔法が書いてあるかもしれないと思ったからだ。

「ない……出産に役立つ魔法が……ああ、師匠は男だからな……独身だったし……」

だが、新しい発見はなかった。

もう十年以上も前にもらった本なので、一字一句すべて読み尽くしていたからだ。

「次は……」

再びイライラしてきたので、今度は空の魔晶石を取り出して魔力を補充しようとすると……。

「魔晶石がキラキラと輝いていく。綺麗だなぁ……って！　当たり

前じゃないか！」

魔力を補充すれば、魔晶石は光り輝くのが常識であった。

「ヴェル、いい加減に落ち着けよ」

「いや、しかしだな……」

「お前が焦っても、何も状況は変わらないからな」

一緒にエリーゼの出産を待っているエルが、俺の落ち着きのなさを注意した。

「ちょっと遅くないか？」

「まだ産気づいて二時間しか経っていないぞ。エリーゼは初産だから、少し時間がかかるのと違うか？」

エルは出産について知識があるようだ。

俺は、今まで生きてきて出産に縁がなかったからなぁ……。

前世では一歳下の弟がいたけど、彼が産まれた時の事なんて覚えているはずがない。

この世界でも俺は一番下の弟だったし、アマーリエ義姉さんが子供を産んだ時には、田舎領地ほど男は邪魔だと追い出されるからなぁ。

正直、よくわからないのだ。

「エルは、詳しいんだな」

「実家の領地で定期的に出産があったからな。手伝っているわけじ

ゃないけど、産婆が駆けつけて半日とか一日かかる場合が多い。凄く早い人もいるけどな」

なるほど、実家の領民の出産を見ているからなのか。

俺は魔法の修行に忙しくて、気にした事もなかったな。

「ヴェル君、これを飲んで落ち着いてね」

エルと話していると、メイド服姿のアマーリエ義姉さんがきてマテ茶の入ったカップを渡してくれる。

「こういう時には、父親がドンと構えていないと駄目よ」

「ドンとですか？」

「そう、ただ静かに座っていればいいのよ」

「わかりました」

アマーリエ義姉さんからの忠告で、俺はようやく心が落ち着いてきた。

「やれやれ、アマーリエさんがいてくれてよかったよ……」

更に時は進み、もう何時間経ったであろうか？

俺とエルは、ただひたすら待ち続ける。

こういう時に、煙草でも吸えればもっと気が紛れるのであろうか？

前世で大学生の時に一度試しに吸ってみたのだけど、、物凄く噎せてしまって合わなかったんだよな。

この世界にはタバコなんてないから、自分で作らないといけない

わけだが。
いや、探せばあるんだろうけど、俺はタバコ葉を知らないからな。食べ物じゃないから興味がなかった……○Tにでも就職していれば詳しかったかもしれないのに。
まあ、あんな超一流企業、俺には縁がなかったけど。
おっと、話がそれてしまった。

「ブランタークさんでもないから、酒を飲むわけにも……」

「いくらブランタークさんでも、こういう時に酒は飲まないだろう……」

「わからないぞ」

何と言っても、あの何よりも酒を愛するブランタークさんなのだから。
この場で酒盛りを始めても、俺は不思議に思わない。

「待てよ、酒で気を紛らわすという手も……」

「それは不謹慎だから止めとけ！」

自分の子供が産まれる時に酒盛りをする奴はいないとエルから注意されてすぐ、エリーゼが出産している部屋から、大きな赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。
遂に、俺の子供が産まれたのだ。

「おぎゃーーー！　おぎゃーーー！」

「ヴェル！」

「エル！」

「生まれたぞ！」

「ああ！」

俺は慌てて部屋のドアを開けようとするが、まだ鍵がかかったままであった。

「おーーーい、もういいよな？」

「あっ、はい。すぐに開けますね」

俺がドアを開けるようにと命令すると、分娩室の中から助産婦の声が聞こえた。

さすがは超ベテラン、助産婦はまったく動じていない。

出産で慌てている助産婦ではみんな不安になるだろうから、正しい態度である。

彼女は、ノンビリとした声でドアの鍵を開けてくれた。

すぐにドアが開き、俺がドアを引いてわずかな隙間が出来た瞬間、中から眩いばかりの光が漏れる。

「魔法の光？」

「何だ？　この眩しさは？」

慌ててエルと共に中に入ると、俺達の視界には光り輝く赤ん坊の姿が見えた。

やはり眩く光っているのは、エリーゼが産んだばかりの赤ん坊だったのだ。

「さすがは、俺の子供。もう輝いているぜ。いや、俺に似ずに素晴らしいカリスマだ」

「もう親バカかよ。というか、普通の赤ん坊がこんなに輝くか？絶対に、何か魔法的なものだぞ」

赤ん坊の輝きは一分ほどで消えてしまうが、すぐに魔力を探ってみると、俺の子は生まれたばかりなのに既に下手な初級魔法使い並の魔力があった。

はからずも、俺の子供は高確率で魔法使いになるというアーネストの指摘が現実のものとなった瞬間であった。

「エリーゼ、光り輝く元気な男の子だぞ。よくやったな」

「はい。元気そうな男の子でよかったです」

赤ん坊は元気だったので、まずは初めての出産で疲れているエリーゼに治癒魔法をかけながら声をかける。

実は使えるけど、エリーゼよりも下手なので普段あまり使う機会のない治癒魔法が、久しぶりに役に立った。

「男の子で安心しました」

間違いなくエリーゼは、実家からは男の子を期待されていたのであろう。
それが果たせたのもあって、彼女は安堵の表情を浮かべていた。
俺は、どっちでも無事に産まれてくれればよかったけど。

「バウマイスター伯爵様、エリーゼ様は初産にしては安産で安心いたしました。出産時の痛みを和らげるための治癒魔法も、ほとんど使わずに済みました」

ホーエンハイム枢機卿が寄越した超ベテランの助産婦が、予定よりも大分早く産まれたと教えてくれた。
念のために治癒魔法が使える神官も複数待機していたが、あまり出番はなかったらしい。
難産で出産が長引くと神官による治癒魔法が頻繁に使われるのが、この世界の出産の常識であった。
ただし、治癒魔法を使える人を呼べる身分の人だけという条件はつく。
普通の人は、昔の日本と同じようにリスクを背負いながら子供を産むというわけだ。

「そうか、それはよかった」

完璧超人なエリーゼは、出産でもその完璧ぶりを示したというわけだ。

「可愛いな、髪は俺と同じ色か……」

あとは猿みたいなのでこれからだが、赤ん坊はバウマイスター家の特徴である濃い茶色の髪を受け継いでいた。

きっと、この子はイケメン、リア充になるはずだ。
男の子は母親に似るというし、俺のようにボッチにはならないであろう。

「あなた、この子のお名前をお願いします」

「そうだな……ちょっと候補が多いけど、ちゃんと決めておくよ」

かなり前から命名の準備はしていたのだが、どの名を選ぶのかで迷っている最中だったのだ。
どれかに決めようとすると、もっといい名前があるような気がして考え込んでしまう。
この一週間ほど、俺はずっとそんな調子であった。

「お願いします」

「ホーエンハイム枢機卿が、名付けたいとか言っていなかった？」

可愛がっている孫娘の出産とあって、彼は王都でも一二を争う優秀な産婆と、治癒魔法を使える神官を派遣してくれた。
彼女達は、王族の出産でも指名されるほどの凄腕なのだそうだ。

そこまでしてくれたとなると、実は自分で命名したいのかもしれない。

「お爺様は、必ずあなたが命名すべきだと。この子は、バウマイスター伯爵家の跡取りですから」

いくらひ孫でも、この子は他の伯爵家の次期当主だ。
ホーエンハイム枢機卿が命名するのは、道理が通らないというわ

けか。

「ヴェル、まだ決めていないのか？」

「なかなか一つに絞れないんだよ」

「名前は数日後でもいいけど、凄く光っていたよな？　その子」

生まれた子供が次のバウマイスター伯爵になるという件は、既に決まっている件なのでいい。

それよりも、本来遺伝しないはずの魔法使いとしての特性をこの子が継いでいるという点だ。

出産時に眩しく光る、謎の発光現象もあった。

ヴェンデリンも、産まれた時に発光したのであろうか？

父に聞くと、何か藪蛇になりそうで怖いんだよな……。

「エリーゼ、こういう話をどこかで聞いた事があるか？」

「いいえ、初めて聞きます」

エリーゼは、早速生まれた赤ん坊にお乳をあげ始めた。

なかなかに飲み応えがありそうに見える。

エルはその前に部屋を出てしまった。

主君の妻の胸を見るわけにいかず、エリーゼの友人としても気を使ったのであろう。

「ヴェル、いいか？」

「ああ」

エリーゼが初乳を飲ませ終わった直後、エルがある人物を連れて戻ってくる。

それは、我が家の危ない客人にして魔族の考古学者アーネストであった。

彼は、一か月ほど前新たに探索した地下遺跡の論文を書くとかで、このところまた缶詰になっていたのだ。

「バウマイスター伯爵、奥方殿、出産おめでとうなのであるな」

意外というと失礼かもしれないが、アーネストにも俺達にお祝いを言うくらいの常識はあったようだ。

その前に、サラっと俺の特殊性を指摘して色々と混乱させてくれた過去があるにしてもだ。

アーネストの推論が間違っていれば、たまに学者が述べるトンデモ学説で済んでしまったのだが、実際に赤ん坊には魔力があった。

次代バウマイスター伯爵としてこの子も大変かもしれないが、俺も色々と大変になりそうな予感である。

「アーネストの言うとおりとは……学者特有のトンデモ理論ならよかったのに……」

「バウマイスター伯爵、いくら天才の我が輩でも時に間違った論文を発表してしまう可能性はなくもないのであるな。だが、人工魔法使いに関する理論は大昔から専門の学者が研究しており、結論も確定しているものなのであるな。間違いはないので、諦めるのであるな」

「そうかよ……」

アーネストに言わせると、魔族の国では古代魔法文明の人工魔法使いに関する研究はとっくに終わっているそうだ。

「古代魔法文明時代の者達は、我ら魔族のように魔法の才能を人工的に遺伝させようとしたのであるな。ところが、魔族と人間とでは差がありすぎて、恒久的な遺伝要素にするのには失敗したのであるな。これは、人間が魔法に関する生物設計図の継承能力に弱いという研究結果が出ているのであるな」

しかし、生物設計図とはね……遺伝子が認知されていたとは、古代魔法文明時代の科学力は侮れない。

魔族では魔法に影響する遺伝子が優勢遺伝で、人間では劣勢遺伝となってしまうというわけか。

「なら、ハーフはどうなんだ？」

「昔はいたと、記録に残っているのであるな」

人間と魔族は子供を作れるそうだ。

両者は見た目は魔族が少し耳が長いくらいで、他はあまり差がないからな。

「ただ、ハーフ同士では子供が作れないのであるな」

魔法に関する遺伝子を固定化するには、ハーフ同士で子供を作るのが一番効率がいい。

ところが、ハーフ同士では子供ができないそうだ。

「ハーフが人間と子供を作ると人間に、ハーフと魔族が子供を作ると魔族になってしまうのであるな」

だから、この大陸にはハーフが存在しないわけか。

魔族が遥か西方に住んでいて、一万年近くも交流がなかったのだから。

「詳しい方法は伝わっていないのであるが、古代魔法文明時代の人間は何らかの特殊な方法で、大分先の子孫まで魔法使いにしてしまう方法を編み出したというわけなのであるな」

人工魔法使いも古代魔法文明が滅んでからは存在しなくなったが、たまたま俺が先祖返りとして復活したというわけか。

「不思議な話ではあるな。だが、なぜ俺がそうだと言い切れる？もし本当にそうなのならば、産まれた直後に家族に気がつかれないか？」

産まれたばかりの赤ん坊が、あんなに眩く光るのだ。

両親が気がつかないはずはない。

もっとも、産まれたばかりのヴェンデリンが魔力を持っていたのかは不明である。

「生物設計図が生後に変化するはずもないのであるが、バウマイスター伯爵が魔法使いの才能に気がついたのは五～六歳の頃だと聞いているのであるな。その時に何かあったのでは？」

「いいや、特に何も」

「うーーーん、謎なのであるな」

五〜六歳というのは、俺がちょうどヴェンデリンに乗り移った頃だ。

魂が入れ替わった時に、ヴェンデリンの遺伝子に何か変化があったのか？

そう考えると、納得のいく部分があった。

どちらにしても推論だし、真相を知ったところでどうにかなるわけでもない。

その前に、俺にはしなければいけない事があった。

「名前……候補が多すぎるぜ……」

「そっちの方が悩みなのかよ」

「名前は重要だぞ。その子に一生ついてまわるからな」

というわけで、キラキラネームを採用するわけにはいかないのだ。

俺は、魔法の袋からヘルムート王国人名事典を取り出してページを捲り始める。

とにかく、この生まれた子供の名前をつけないといけない。

「いくつか候補があるって言っていなかったか？」

「まだいい名前があるかもしれないし……」

俺は、また子供の名前で深く悩んでしまう。

「エリーゼ、生まれたのね」

「男の子かぁ、よかったぁ」

同じく出産直前のイーナとルイーゼが最初に部屋に入ってくるが、エリーゼの子供が男の子で安心していた。

もし女の子で、その後にイーナとルイーゼの子供が男の子だと、継承権に首を突っ込む輩が増えるからだ。

「家格的に無理があるんだけど、その無理を通そうと騒ぐ人達がいるのよね……」

「ブライヒレーダー辺境伯家の一部家臣とか……」

エリーゼの子供よりも、イーナとルイーゼの子供の方がコントロールが容易いと思って動くかもしれないそうだ。

まったくお話にならないが、さすがのブライヒレーダー辺境伯家でもすべての家臣がまともではないし、完璧に統制など出来るはずもない。

必ず暴走する輩が現れる。

だから、エリーゼが嫡男を産んでひと安心というわけだ。

「貴族って、本当に面倒くさいよな……」

「それよりも、まだ命名で悩んでいるのか？」

「エルはどうなのよ？」

ハルカももうすぐ出産なので、エルも子供の名前を考えないといけないはずだ。

「男ならレオン、女ならエマ」

何と、エルは既に子供の名前を決めていた。
迷わずに候補をあげている。
その決断の早さは、正直羨ましい限りだ。

「どういう基準なんだ？」

「いやあ、ヴェルが持っている本を適当に捲ってね」

目に留まった名前を迷いなくチョイスしたそうだ。
かなりの適当さを感じてしまうが、悪くない名前である。

「こういう事は悩み始めるとキリがないからな。バウマイスター家には伝統の名前とかないんだろう？」

「ないな……」

エルは、バウマイスター家に何を期待しているのであろうか？
伝統の名前とか、両親や兄達からも聞いた事がない。

「うちの実家にはあるけどな。嫡男は数代前の当主の名前をつけるのさ」

これはエルの実家だけの話ではなく、かなりの数の貴族家が実践しているそうだ。
当主にしかつけない名前をつけるという事は、その子が跡取りだと周囲にアピールできるからだ。

「でもさ、もし嫡男に何かあって次男に出番が回ってきたら？」

「次男も数代前の当主の名前をつけるんだよ。だから、予備扱いなの」

「名前は当主名でも、扱いは部屋住みで予備か……」

この世界における次男の扱いの軽さに、俺は同情を禁じ得なかった。

優遇されているのは名前だけとは……。

「でも、俺は八男だから知らされていないだけで、実はバウマイスター家には厳密な命名基準があるのかもしれない……」

そう思った俺は魔導携帯通信機でパウル兄さんに連絡を取り、エリーゼが男の子を産んだ報告をしてから話し相手を父に代わってもらった。

『男の子が産まれたか。よかったな』

『はい、安心しました』

『初めての子供だと、親は色々と心配はするものだ』

父は、俺に跡取り息子が産まれた事を喜んでくれた。

すぐに母に変わり代わり、彼女も男の子が産まれた事を喜んでくれる。

『女の子だと駄目という事もないが、貴族は跡取り息子に拘るものだからな。なかなか子供が産まれなくて悩む貴族も多い。家の存続に関わるからな』

婿養子、親族からの養子で家を保つわけだが、やっぱり血を分けた息子に家を継がせたいのが親の心情だ。

『我がバウマイスター家は、子供が産まれないで困った事は一度もないらしいが……』

規模と懐具合は微妙だが、跡取りが産まれなくて苦労した事はないらしい。

そういえば、兄さん達もみんな、結婚してすぐに子供が産まれた。

父も十人の子持ちだから、どちらかというと余っている子供の行き先で悩む方が多い家なのであろう。

『ところで、父上。バウマイスター家に決められた命名基準などはあるのですか？』

『なくもないな。数代前の当主の名前とかだな。厳密に決まっているわけではないが……』

意外にも、バウマイスター家にもそういう伝統があったようだ。

クルトとヘルマンは、昔の当主の名前なのか。

ああ……でも、クルトは今後命名されない可能性があるよな。

『ヴェンデリン。その命名基準が使えるのはヘルマンのところだけだぞ。パウルも初代だから、自分で決めていた。ヘルムートとエーリッヒは、婿入り先の決まりがあるからそれを尊重するだろう』

そうか、俺は自分が初代だから自分で子供の名前を決めないといけないのか。

『パウルも悩んでいたが、そういう時には王国人名辞典が大変に役に立つ。パウルも使っていたぞ。最終手段として、こうページをパラパラと適当に捲ってだな……』

『はあ……』

子供の名前に悩んだら、王国人名辞典に頼る。

これはうちだけではなく、ヘルムート王国に住む多くの父親が頼る定番商品のようだ。

どうやら、俺のヴェンデリンという名は父が適当に辞典を捲って目に留まった名前っぽいな。

十人目だと、父親も手抜きをするようだ。

『もう少し大きくなってから孫の顔を見に行くよ』

『はい、お待ちしております』

父との話を終えると、俺は魔導携帯通信機を切った。

「名前を考えないとな……」

子供の名前なので、もっとこう色々と親の願いとかが籠ったいい名前をつけるべきであろう。

あれ？

親の願いが籠った名前？

俺は、とてつもない違和感を感じ始める。

中身が日本人である俺からすれば、名前に漢字が使えないと願いもクソもなかったからだ。

この世界、言語は日本語なのに、なぜ名前はドイツ風が多いので

あろうか？

「（ドイツ風の名前の意味なんてわからないな……）」

ドイツ語は大学で第二言語として選択したけど、もうほとんど覚えていない。

『グーテンモルゲン』『バウムクーヘン』……子供の名前には使えないな……。

第一、俺のヴェンデリンだってどういう意味なのかわからないのだ。

となると、ここは方針変換をしないと駄目であろう。

「王国人名辞典は役に立つぞ」

「すべての候補は記載されているからな、見てみるか……」

俺は、持っていたヘルムート王国人名辞典を適当に捲ってその手を止める。

開かれたページの中で、一つの名前が俺の目に留まった。

「フリードリヒにしよう」

「早っ！」

「これ、いい名前じゃないか？」

「確かにいい名前だな」

前世の世界史の授業で、そんな名前の王様だか皇帝の名前を聞いた事がある。

それに、恰好いい名前だと俺は思う。
そこはかとなく、大物になってくれそうな名前なのもいい。

「決めた！　この子の名前はフリードリヒだ！」

「フリードリヒ・フォン・ベンノ・バウマイスターですか。いい名前ですね」

エリーゼも賛成してくれたので、赤ん坊の名前はフリードリヒに決まる。
この子が、次のバウマイスター伯爵としてこの領地を更に発展させていくのだ。

「フリードリヒ、早く大きくなって俺を引退させてくれよ」

この子が真面目に領主をやってくれるのなら、俺は安心して自由に冒険者稼業と隠棲生活を送れるというものだ。

「色々と台無しだよ！　跡取りが産まれた感動とかすべて！」

「ヴェルはまだ十代じゃないの。今から年寄りみたいな事を言わないでよ」

「いくらこのところ色々とあったからといって、それはないと思うな」

なぜかエル、イーナ、ルイーゼから立て続けに批判されてしまったが、とにかく無事に生まれてよかった。
まずはひと安心といったところであったが、それから半月もすると今度はイーナ達も立て続けに産気づいた。

これより、バウマイスター伯爵家では出産ラッシュが続く。

「これは、想像以上に痛いわね……」

「イーナさん、治癒魔法をどうぞ」

「ありがとう、エリーゼ……痛たたたっ！」

「もう少し強くかけます」

「ありがとう、物凄く楽になったわ」

日本よりも、この世界では出産が楽な部分もある。

勿論、自前で治癒魔法使いを確保できたらという条件はあったが。

イーナは、エリーゼの治癒魔法のおかげで無事に女の子を出産した。

俺はフリードリヒの時と同じく、ただ待っていただけ……とはならなかった。

『お館様、確実に気が紛れる方法がありますぞ』

『そんな凄いものがあるのか。それで、それは何だ？』

『お館様、お仕事です』

『子供が産まれるのにか？』

『お館様、お生れになったら魔導携帯通信機にてお知らせいたしま

すので、すぐに『瞬間移動』でお戻りください』

『ローデリヒ！　お前は鬼だ！』

『これも、産まれてくるお子達のためです』

ただ、イーナ以降は俺が出産を待っていると落ち着かない点を突かれ、ローデリヒによって出産直後まで仕事のスケジュールを組まれてしまった。

産まれたらすぐに戻ればいいのだけど、やはりローデリヒは鬼である。

『生まれてくるお子達のために、お館様は頑張りませんと。領地の発展は、お子達の生活の安定に繋がりますし、子は父親の背中を見て育つのです』

『産まれたばかりの赤ん坊は、俺の背中を見れないけど』

『……お仕事です』

『ローデリヒ、誤魔化しただろう？』

ローデリヒの言う事は正論だが、子供が産まれるまで仕事で主君を扱き使う家臣というのも酷いと思う。

俺は新しい町が建設される場所で整地を行いながら、早く子供が産まれないかと待ち続けた。

そして数時間後、ようやくイーナにも子供が産まれたと通信が入る。

「髪の色はイーナ譲りか。女の子も可愛いな」

本当は、どちらも産まれたばかりだと猿みたいだけど……。

でも、すぐに可愛くなるさ。

「エリーゼの時と同じで、この子も眩しいわね」

「予想はしていたけど、この子もか……」

アーネストの説明どおりに、イーナが産んだ俺の娘も眩く光った。

続けて……。

「ボクも女の子だね。そして光るわけだ」

バウマイスター伯爵家に出産ラッシュが続く。

ルイーゼの後も、数か月の間にカタリーナが男の子を、テレーゼが女の子を、ヴィルマが女の子、カチヤも女の子、リサも女の子と。

わずか数か月、俺が十八歳になる頃には男の子二人、女の子六人の父親になった。

しかし、八人か……。

父をすぐに抜いてしまいそうだな……。

「ちょっと女の子が多いけど、フリードリヒ、カイエン。数少ない男として頑張るんだぞ」

「ヴェンデリンさん、赤ん坊が何を頑張るというのです？」

「男というのは男同士でつるみたいから、多くの女性にずっと囲まれると疲れる時もあるのさ」

「そうなのですか？」

カタリーナが意味がわからないという風な表情をしているが、男には切実な問題であった。

子供は女の子の方が成長が早く、口も達者だ。

フリードリヒとカイエンは、姉や妹達に囲まれて大変かもしれない。

日本でいうところの、『女の中に男が一人』状態というわけだ。

二人いるから、孤立しないだけマシか。

「エルヴィンさんのところの、レオンもいるではないですか」

出産が終わると、産まれた赤ん坊達は専用の子供部屋に移される。

収容人数の多さから大きな部屋が宛がわれ、まずは人数分のベビーベッドが置かれて、そこが彼らの生活の場となった。

貴族家では子供が産まれると世話を乳母を頼む事が多いので、部屋にはハルカと他の家臣の奥さん達が集まっている。

ただ、母乳が足りなくならなければ、基本的に母親本人が乳をあげる事になっていた。

「エリーゼは、それでいいの？」

「貴族家によって対応はバラバラですから、私は自分でお乳をあげたいですし」

完全に授乳を乳母に任せてしまう家、足りない分だけ補う家、出来る限り母親が何とかする家。

どれを選ぶかはその家の伝統であったり、たまに自分の意見を押し通す当主や妻がいたりするそうだ。

つまり、適当というわけだ。

ただすべてのケースで、子供の面倒を母親と交替で見るためにベビーシッター扱いで乳母を雇う事はするらしい。

雇うとはいっても外部の人間を入れるはずもなく、子供を産んだ時期が近い家臣の妻というケースが大半で、我が家もエルの奥さんであるハルカを乳母として雇った。

ハルカの場合、赤ん坊達の護衛としても期待できる。

現状で、俺の子供達を狙うような輩はいないと思うけど、念のためというやつであった。

勿論、ハルカが産んだレオンも一緒にベビーベッドで寝ている。

彼は、フリードリヒ達の乳兄弟になるというわけだ。

「乳母の子供も一カ所に纏めて、子育ての効率を上げるのです」

「効率か……」

「みなさん、忙しいですから」

家臣の妻達も、別に暇ではない。

カタリーナの言うとおりに、一緒に纏めて育てた方が効率がいいのは確かだ。

あとは当主と家臣の子供を一緒に育て、連帯感を養い、忠誠心溢れる家臣にするという目的もある。

うちは新興だからこそ、当主と家臣の連携を強めないといけないのだから。

レオンばかりでなく、年の近い家臣の子供達も集められる予定であった。

「いい風習だと思うけど、実家ではそんな事はなかったなぁ……」

ヴェンデリンの記憶によると、乳母や乳母兄弟のような存在はいなかった。

俺はどこまでもボッチであったらしい。

我ながら、泣けてくるような生い立ちである。

「地方領主では、そこまで手が回らない方も……」

それでも、家臣の妻が乳を分けたり、同世代の子供同士を幼馴染の関係にして忠誠心を強固な物にする事は行われているそうだ。

「ただし、跡取り長男のみだな」

俺と同じく、五男なので放置されていたエルは乳母兄弟などいなかったと明言する。

「おおっ！　仲間だ！」

「嫌な仲間だな。ハルカさんは、跡取りのレオンを無事に産んでくれてホっとしたよ」

エルヴィン家も、これで安心だというわけだ。

俺とエルが見ている傍で、ハルカは産まれた赤ん坊達のオシメを順番に換えている。

「ハルカ、上手じゃないか？」

今回が初めての出産だったはずなのに、ハルカは随分と赤ん坊の世話に慣れていた。
理由を聞くと、子供の頃から親戚の子供の面倒を見ていたそうだ。
「下級のサムライは貧乏ですからね」
男女共に働かないといけないので、親族同士で子供を集めて年長の子供に面倒を見させる風習があるらしい。
ハルカは年下の子供達の面倒を見ながら、空いている時間に刀を稽古して抜刀隊に選抜されたのだと話した。
「さすがは、刀術の天才だな……」
もし俺がそんな環境だったら、間違いなく赤ん坊の世話しかできなかったであろう。
「でも、経験者がいるのはありがたいな」
他の乳母達にも赤ん坊の世話をした経験がある者がいて、自分の子供と合わせてフリードリヒ達の面倒を上手く見てくれた。
あの大お見合い会で婚姻した家臣達にも次々と子供が産まれ、バウマイスター伯爵領は空前のベビーラッシュであった。
「それよりも、大きな問題が……エリーゼさんのフリードリヒも、私の息子のカイエンも、他の全員の子供も……」
「母親の才能を継ぐのはいい事では？」
「それ以上の危険を感じますけど……」

さすがのカタリーナでも、産まれた赤ん坊全員が魔法使いの素養が有りだと逆に不安になってしまうようだ。
とにかく産まれる度に光るので、ホーエンハイム枢機卿からから派遣されてくる助産婦と神官達はもう慣れてしまったらしい。
何も言わないのは、彼女達を派遣したホーエンハイム枢機卿から固く口止めされているからだと思う。
その代わりに、教会には情報がだだ漏れだ。

これから向こうがどう出るかと考えると、不安ではある。
、
「次期ヴァイゲル家当主になる、カイエンが魔法使いなのは嬉しいのですが……」

こうも魔法使いばかり産まれると、色々とまた大変なのではとカタリーナは心配していた。
この場合の大変とは、俺への嫁の押しつけである。

「そこは、断固として拒否すればいいさ」

俺は、三冠を制したサラブレッドじゃないんだ。
種馬にされてたまるか！

「そうですわね。あの三人は仕方がないにしても」

「うっ！」

カタリーナにアグネス達の事を指摘され、俺は心に何かが突き刺さる。
しかしながら、今の彼女達はいまだ俺の指導を受ける弟子である。

年齢的にも妹のような存在で、それを奥さんにするのはどうかと思ってしまう。

「どちらにせよ、今は目の前に差し迫った問題がありますぞ」

「差し迫った問題？」

「はい、貴族の家で子供が産まれると、色々と大変なのです」

自分の子供も預けているので様子を見に来たローデリヒに、実はこれからが大変なのだと脅されてしまう。

「お祝いを貰って御礼状を送るくらいだろう？」

「まあ、基本はそうなのですが……」

とりあえず、八人で一区切りとなったベビーラッシュが終わったが、それから暫く、バウマイスター伯爵家は様々な騒動に巻き込まれる事となる。

第百三十一話　ヴェンデリン、挫折する。

「フリードリヒも、アンナも、エルザも、カイエンも、フローラも、イレーネも、ヒルデも、ラウラも良く寝ているな」

壮観な光景であった。

バウマイスター伯爵家の屋敷の一室に二十以上のベビーベッドが置かれ、そこで寝ている赤ん坊を、エリーゼ達やハルカ、乳母として雇われた家臣の妻達が世話をしているからだ。

まるで乳児園のようになってしまったが、この後も保育園から小学校へとジョブチェンジしていく予定だ。

この世界には小学校などないから、初等教育という位置づけだな。

家臣の子供達と共に生活を送らせて、バウマイスター伯爵家に忠実な家臣にする。

過去の地球でも、この世界でも普通に行われていた事である。

なるほど、いきなり新参者が仕官など出来ないわけだ。

能力はあるかもしれないが胡散臭い余所者よりも、子供の頃から一緒に育っている幼馴染、教育を受ければよほど駄目な奴以外は普通に仕事をこなせるとなれば、気心の知れた知己を家臣にするのは当然であった。

一斉に泣き始めた赤ん坊にエリーゼ達が母乳を与え、お腹が一杯になった彼らはそのままスヤスヤと寝てしまう。

俺は、その寝顔を見て心が安らぐ気分だ。

「赤ん坊はいいね。心洗われるようだ」

「お館様、残念ながら大人の時間にございます」

「わかっているよ……」

貴族に子供が産まれると、縁のある貴族は出産祝いを贈る。
祝いを貰えば当然お礼状を送り、あとでお祝いを貰った貴族に子供が産まれたらお返しをしないといけない。

というわけで、誰から何を貰ったのかを把握し、その内容に沿った御礼状も書かないといけないわけだ。
これには決められた文体があるらしく、他にも冒頭の季節の挨拶とか色々とルールがあって、俺の頭の中はパンク寸前である。

実は、会社員時代に年嵩の上司に命令されてビジネス文章検定を取ったけど、あまり役には立たないな。
一級じゃなくて二級だからか？
単純にもう忘れたからだろうな。

奥さん達は子育てに忙しいので、俺はこの仕事を、土木工事をこなしながら行わないといけないのだ。

「しかし、何でこんなにあるのかね？」

「それは、バウマイスター伯爵家との繋がりを周囲にアピールするためと、これから繋がりを強化したいからではないでしょうか」

ローデリヒが、わかりきった事ですといった表情で答える。

「それしかないよなぁ……」

赤ん坊がいる隣の部屋には、大量のお祝いが山積みとなっていた。
あまりに量が多いので、今にも崩れてきそうである。

「すげえな。こんなに貰えてよかったじゃないか」

「御礼状を大量に書き、贈ってきた貴族に子供が産まれたらお返しをしないと駄目なんだが……」

エルが思うほどいい話ばかりでもない。
貴族は収入も多いが、出ていくお金も多い。
その中でも、交際費の多さは出費の中でも上位にランクインするはずだ。

前世でも、祝儀や香典を貰うとお返ししないといけないから結局同じなんて話があったけど、貴族は贈り物の金額が違うからなぁ……。

相手の贈り物の金額を正確に把握し、同じ金額の物を送らないと失礼になってしまうから、これもまた調べるのが面倒だったりする。
お祝いを贈ってきた貴族の領地の名産品だったりすると、流通範囲が狭くて調べるのが面倒だったりするのだ。

『ちょっと量が多いですな。お任せを』

値段を調べる仕事は、先ほどお祝いを持ってきたアルテリオさんに任せてしまった。
俺達だけでは、とても調べられない。
アルテリオさん曰く、こういうのも御用商人の仕事なのだそうだ。
ついでに、お祝いを贈る時にはうちをよろしくと、ちゃっかり宣伝されたけど。

『思いきって、お互いにお祝いをなしにするという決まりにできないですかね』

『それは無理だな。生活できない奴が出てくるから』

続けてアルテリオさん曰く、これを廃止すると贈り物を作ったり販売している人達の生活が成り立たなくなる。

だから、お祝いや贈り物の習慣をなくすわけにはいかないのだと俺に説明した。

「聞いた事がない貴族家からも来ているなぁ……ローデリヒ、知っているか？」

「名前くらいは知っている貴族家に、名前すら初耳の貴族家もありますね。紋章官に確認を取らせます」

それをしないと、お礼状すら書けないのだから困ってしまう。

そして悲しい事に、その御礼状を書くのは俺であった。

「ブライヒレーダー辺境伯とか、ホーエンハイム枢機卿とか、ルックナー財務卿とか、その辺はいいんだ」

誰かわかるので、お礼状もそう苦労なく書けるはず。

「そんなわけないけど……」

手紙は色々と細かい決まりに従って書かないといけないし、前世のようにパソコンで打って印刷して済ませるわけにもいかない。

全部、俺が手で書かないと駄目なのだ。

「泣ける……俺の筆跡で文章を勝手に書いてくれるペンとかないかな？　あれば、一億セントでも出すんだけど……」

それで、手紙を書くわずらわしさから解放されれば安いものだ。

「そんな物はありません。その手の作法や決まりに詳しい家臣も新規に雇いましたので、文面は作成させています。お館様は、それを写していただければ」

「それだけでも面倒臭いなぁ……その家臣に俺の筆跡で代筆させるのは駄目か？」

「駄目です。もしバレると、自分は軽く扱われたと怒りを買いますので」

貴族の手紙は、他人に代筆を頼んではいけないようだ。

結局、午前は御礼状の作成、午後は土木工事というローテーションで一週間ほど過ごす事になる。

「貴族の仕事で一番面倒なのは、手紙を書く事じゃからの。妾も昔は難儀したわ」

「テレーゼ、俺の筆跡を真似して書くとか、そういう特技はない？」

「残念じゃの。妾はフローラの世話で忙しいのじゃ。文面は考えてあげられるが、それは担当の家臣がいるのであろう？」

非公式の愛人のような立場になったテレーゼであったが、別に誰に憚る事なくエリーゼ達と一緒に赤ん坊の世話をしている。

彼女が俺の屋敷に入り浸りでも、もはや世間の誰もが不思議に思わないからだ。

「魔法で何とかならぬのか？　リサ、そういう魔法はないのかえ？」

「まったく同じ筆跡、文面なら、『摸写』の魔法がありますけど……」

ペンを魔法で動かして、同じ筆跡と文面を複製する魔法を使った魔法使いの記録があるらしい。

俺は初耳であったが、さすがはベテラン魔法使いのリサ、その手の勉強はちゃんとしていたようだ。

「ですが、まったく同じ筆跡と文体なので御礼状には使えません」

面倒な事に、貴族にお礼状を送る時にはその貴族に合わせて微妙に文面を変える必要がある。

大貴族などは文面を考えるのが面倒なので、それを担当する家臣が存在するほどだ。

普段は領内の統治などで使う書類の作成に関わるのだが、これも各貴族家ごとに決められた文体があったりする。

王国に報告書や書類を出す時にも、王国政府で使われる文体や形式、決まりなどがあって、これも把握して書けるので専門家というわけだ。

違う文体で送ると王国政府に相手にしてもらえないので、彼らは高度なテクノクラートと言えた。

当然給金は高く、貧乏な貴族は自分で勉強して何とかする羽目になる。

付け焼き刃だと上手く行かず、結果小貴族は中央への陳情が通らずに余計に困窮するというわけだ。

「そうよな。まったく同じ文面で、宛名だけ変えて出したのがバレたら大恥じゃからの。その辺は帝国も同じじゃ」

「何てこったい！」

「あたいの実家では考えられない事だな。まあ、うちの親父や兄貴が他の貴族に手紙なんて出した事ないけど。旦那、お祝いで実家からマロイモが来ているから蒸かして食べようぜ」

「甘い物はいいなぁ」

「だろう？　今から蒸かすからさ」

何とか御礼状は書き終わったが、結局数多あるお祝いの中で一番評判がよかったのは、カチヤの実家から贈られてきたマロイモと、ミズホ公爵領から贈られて来た『旬の素材詰め合わせ』であった。

「うむ、壮観じゃの。一度に八人か」

お祝いと御礼状攻勢が終わると、今度は赤ん坊の顔が見たいと言ってくる人達がいた。

「陛下、何も自ら玉体を運ばなくても……」

何より困ったのは、陛下が王太子殿下と導師、ルックナー財務卿、エドガー軍務卿、ブライヒレーダー辺境伯を連れてバウルブルクを訪れた事だ。

今から行くからと、突然携帯魔導通信機に連絡が入り、エドガー軍務卿が準備した『瞬間移動』持ちの魔法使いが連れて来た。

お偉いさんばかりがゾロゾロと赤ん坊のいる部屋へと入り、俺の赤ん坊を見て安堵の笑みを浮かべている。

だが、俺にはわかる。

この大人達は、何か企んでいると。

どんな大物貴族でも、自分の跡取りを陛下に披露する際には王宮を訪ねるのが常識だからだ。

「エリーゼ、元気そうな跡取り息子でよかったの」

「はい」

「バウマイスター伯爵に似ているではないか」

陛下は、まずはエリーゼに労いの言葉をかけた。

「陛下、この後の予定が詰まっておりますれば……」

「おお、そうであったの。実は、バウマイスター伯爵にお願いがあっての」

「それは、どのような？」

「実はの……」

俺は、陛下からの願いに絶句する事となる。

「まあ、予想はできたのですが……」

お願いを断れる立場にない俺は、この世の理不尽を嘆いた。

忙しい陛下はお願いを言うと、魔法使いの『瞬間移動』で他の閣僚達と一緒に王城に戻り、唯一残ったブライヒレーダー辺境伯が俺を慰める。

「産まれたばかりの子供に、なぜもう婚約者が？」

「平均よりは早いですけど、いない事もないんですよ。貴族や王族の婚姻ですから、勝手に当主が決めますし」

「ブライヒレーダー辺境伯も、そうは言いつつ俺の娘を……」

「お互い様でしょう？　私の可愛いフィリーネが成人したら、バウマイスター伯爵の元に嫁ぐのですし」

「ううっ！　言い返せない！」

「バウマイスター伯爵は特殊ですからね。子供や子孫が魔法使いになるとわかれば、婚姻関係を結びたくて当然です」

まず、エリーゼが産んだ長男フリードリヒの正妻は、王族から迎える事になった。
王太子殿下に、産まれたばかりの娘がいるのだそうだ。

あの人、陛下と来ると余計に目立たないな……おっと、そんな話じゃないんだ！
普通は王太子殿下に子供が産まれたのだから騒ぎになるはずなのに、なぜか噂すら流れてこなかったな。
娘だからかな？
それとも……詮索はやめておくか……。

フリードリヒは、金の草鞋を履いて探すこともなく姉さん女房をゲットした。
０歳児と一歳児だから、そこまでの年齢差でもないか。

「フリードリヒの奥さんは王族のお姫様か……どうなんだろう？」

「あの陛下だから、ちゃんと教育するでしょう。高慢ちきで夫に嫌われて子供が出来ないと悲劇ですし」

普通の貴族や王族同士の結婚なら、家の繋がりには役に立ったと放置される。
ところが、フリードリヒの場合は子供を作らないと魔法使いが生まれないので、夫に嫌われる娘などは寄越さないとブライヒレーダー辺境伯は言うのだ。

「イーナ、可哀想なくらい動揺していたな……」

「まあ、母親の身分から考えると、普通はあり得ませんからね……」

イーナが産んだ長女アンナは、王太子の長男、つまり次の次の王様の正妻に決まった。
相手はまだ三歳だそうだが、いきなりそんな事になったイーナはどうしようという表情を浮かべていたのだ。

「王太子殿下に跡取り息子っていたんだな」

「お館様、なぜか大半の貴族はそう言いますが、いらっしゃるのです」

職務上、ローデリヒは王太子殿下の跡取りの存在を知っていた。
これで王国は安泰というわけだ。
でも、親子して目立たないのってどうなんだろう？
大きくなると、子供の方は目立つようになるのかな？

「母親の身分から考えてあり得ないけど」

「父親がバウマイスター伯爵だと、なくはない話なんですよ……」

正妻が産んだ娘がいないので、妾や側室が産んだ娘を代わりに政略結婚の駒にするというわけだ。
その前に、形式上だけは正妻の養子にするらしいけど。

「将来の王の正妻は異常です。ですが……」

王族に魔法使いが産まれるメリットを考えると、そのくらいは無視しても構わないという事であろうか？

「うちも、そうですしね」

ルイーゼが産んだ次女エルザも、ブライヒレーダー辺境伯の跡取り息子の正妻に決まったからだ。
他に婚約者がいたらしいが、それはなかった事にするらしい。
よくある事らしいが、俺達が婚約を破棄された貴族から恨まれそうで嫌である。

「ちょっと年齢差がありますけど、大切にするので安心してくださいね」

ブライヒレーダー辺境伯は悪い人ではないし、俺の娘が産む子供が魔法使いというメリットを考えると、嫁いびりはないと信じたい。

「というか、競り市やオークション会場じゃないんですから……」

カタリーナが産んだ次男カイエンは次期ヴァイゲル準男爵なので、ルックナー財務卿の一族から正妻を迎え入れる。

ヴィルマが産んだ四女イレーネはエドガー軍務卿の嫡孫の正妻に、カチヤが産んだ五女ヒルデはアームストロング伯爵家の嫡孫に。
そして、リサが産んだ六女ラウラは導師の嫡孫の正妻に決まった。

ここに俺が介在する余地はなく、陛下達が勝手に話し合って決めてしまったのだ。
かかった時間も十分ほど、憐れ俺の子供達はサラブレッドの子馬を競るように嫁ぎ先が決まってしまった。

「ごめんよ、娘達。嫁ぎ先が嫌なら、いつでも戻ってきていいんだよ」

俺は、涙目でベビーベッドに寝ている娘達に話しかける。

「あなた、まだこの子達にはわかりませんよ。今はそんな事は考えず、すこやかに育てばいいのです」

そんな俺に、エリーゼが慰めるように声をかける。

「ううっ……カタリーナ、リサ。子供達は、なるべく早くに魔法の鍛錬を始めよう。嫌な旦那なら、魔法で吹き飛ばせるように」

俺は優秀な魔法使い二人に、子供達の鍛錬を早めようと言った。

娘達が嫁ぎ先で苛められたら、魔法で吹き飛ばせるように。

「ヴェンデリンさん、それは貴族としてどうなのでしょうか？」

「お気持ちはわかるのですが……」

カタリーナとリサは、俺を呆れた表情で見つめた。

「やっぱりそういう事になったの……妾も同じようなものじゃ」

俺の非公式な妾なのに、他の奥さん達と普通に生活しているテレーゼ。

さすがに彼女の娘と婚姻を結ぶ王国貴族はいなかったが、彼女は大量の手紙を抱えている。

差し出し人は、すべて帝国貴族からであった。

「テレーゼがフローラを産んだ情報なんてよくわかったな」

「両国は、講和後に交易規模を拡大したからの。間違いなく商人経由であろうて」

「おいおい、アルフォンス……」

フィリップ公爵家を先頭に、ミズホ公爵家、バーデン公爵家の他にも、多くの貴族家がテレーゼが産んだ三女フローラを嫁に欲しいと手紙を送ってきた。

その数に、俺は眩暈を感じてしまう。

「テレーゼの娘って、帝国の政治状況的に拙くないか？」

「妾本人なら問題かもしれぬが、フローラは娘じゃからの」

「フローラが魔法使いなのが漏れているのか？」

「いや、単純に王国貴族と縁を結ぶためであろう。ヴェンデリンは内乱で勇名を挙げたが、領地は遠く南方にある。過度な干渉もないであろうから、縁を結ぶのには適当な相手とも言えるの。交易でも利が大きい」

魔法使いの素質が遺伝する件は、帝国側には漏れていないはずだとテレーゼは予想する。

「何か変だとは思っているかもしれぬが……」

「何ですと！」

「一生隠し切れるものでもあるまいて。産まれた子供が全員魔法使いなのがわかればの。バレるのが嫌なら、生涯独身で禁欲生活を送るしかないのだから」

「それは嫌です」

俺は出家した修行僧ではないのだ。

人並みに欲は存在している。

「正直なのは素晴らしいぞ。ヴェンデリンよ」

「あと、陛下にも念を押されましたよね」

「ですね……」

ブライヒレーダー辺境伯も聞いていたのだが、『みんな、二人とか三人と言わずに五人でも十人でもバウマイスター伯爵の子を産むがいい』と言い残して去ったのだ。

出生率の低下に悩む日本では、考えられないレベルの子沢山要求であった。

「ですが、これも陛下の温情ですよ。もし他の人が王なら、とんでもない事になります」

王族で適齢期の女性は、すべて俺の元に送り込まれるかもとブライヒレーダー辺境伯は言う。

「継承で揉めるので籍には入れず、手習い扱いでも、召使扱いでも構わない。子供を産ませろとか言って押し付けますよ」

「それは酷い……」

「王家というのはそういうところです。娘の婚姻くらいなら温情というレベルでしょうね」

ヘルムート王国の安定が民衆の平和をもたらしている以上は、そのために俺を種馬にするくらいは平気で行うというわけだ。

「わかりました。でも、俺の娘達が……」

まだ一歳にもなっていないのに、もう嫁ぎ先がほぼ全員決まっている。

悲しくなるような現実である。

「私にもフィリーネがいるからわかりますけど、どうせ娘が好きな男性と結婚したいと言っても腹が立ちますよ」

「それはあるかも……」

お父さん、私この人と結婚したいの。

うん、確実にぶん殴りたいな。

でも、娘が嫁に行くのは嫌だけど、かと言っていつまでも嫁がないで家に残っているのもどうかと思う。

ブライヒレーダー辺境伯も、複雑な心境でフィリーネを数年後に嫁に出すというわけだ。

「うちの叔母みたいになられると、これはこれで困りますし……」

「ああ、あの方ですね……」

「最近景気がよくなってきたから、あれが欲しいこれが欲しいと子供みたいにうるさいんですよ。自分で稼ぎもしない癖に……」

「そうなのですか」

「あの人を引き取って……すぐに返品されるとまだ面倒ですね……」

なぜか後半からは、ブライヒレーダー辺境伯の愚痴になってしまった。

産まれた子供達の婚約者がすぐに決まってしまったがために、逆に平穏な日々が訪れたのは皮肉であった。

なぜって？

彼らがみんなブロックしてしまうからだ。

他の貴族に漏らすはずがないし、もし漏れてもバウマイスター伯爵家への接近を阻止しようとする。

つまり、俺たちの平穏は彼らによって保たれるわけだ。

正直、複雑な心境であった。

「気持ちを切り替えて、俺は父親として頑張るぞ！」

決まってしまった事でいつまでも悩んでも仕方がない。

俺は、領地開発、アグネス達への個人指導、バウマイスター伯爵家当主としての仕事をこなしていく。

エリーゼ達は、赤ん坊の世話と、時間があれば鍛錬をしていた。

冒険者としての現役復帰を目指しているのだ。

もっとも、またすぐに妊娠してしまうかもしれないので、あくま

でも復帰できたらという事になっている。

そして俺は、赤ん坊の世話に参加しようとしていた。
前世でいうところの『イクメン』というやつである。

俺も忙しいから、あくまでも参加できる範囲内でというわけだ。

「フリードリヒはいい子だな」

俺は、バウルブルクの町でこの世界にはなかったおんぶ紐を注文、これは昔からある背負うタイプではなく、前で赤ん坊をおんぶするタイプである。
職人に説明すると、すぐに作ってくれた。

それを使ってフリードリヒをおんぶし、同じく職人に作ってもらったでんでん太鼓を鳴らしながらあやしていく。

「ご機嫌だな、フリードリヒ」

「うわうーーー」

屋敷の庭で、俺はフリードリヒをおんぶしながらあやした。
後半に生まれた子供達はまだ首が座っていないからおんぶできないので、今はフリードリヒだけだ。

「ヴェル、何をしているんだ？」

「見てわからないか？　フリードリヒをあやしているんだ」

「男なのにか？」

この世界では、赤ん坊の世話は女の仕事だという慣習が強かった。
田舎では特に顕著であり、エルはフリードリヒをあやす俺を不思議な生き物のように見ている。

「エルよ。俺は新しい貴族なのだ」

「新興だからな」

「新しい貴族である俺は、男でも赤ん坊の面倒を見てもいいじゃないかという、新しい常識を世間に示すのだ」

どこの世界でも世間の常識とは、誰かが始めたものをみんなが長期間真似したから常識になったにすぎない。
つまり、俺が赤ん坊の面倒を見て、それを他の貴族が真似したらミッションコンプリートである。

イクメンが世間に誕生した瞬間なのだから。

「そういう考え方もあるのか」

「エルも、レオンの面倒を見るとハルカに見直されるかもよ」

女性は、家事や育児を手伝う男性が好きだからな。
その点を散々アピールしたにも関わらず、俺は前世でモテなかったけどね。

「じゃあ、俺も……」

エルがレオンの面倒を見ようと育児室へと向かおうとすると、そ

れを止める者がいた。

「お館様……」

誰であろう。

それは、ローデリヒであった。

「おおっ、ローデリヒか。俺は新しい貴族を目指すぞ」

「いえ、目指さなくて結構です。いいですか、お館様は世間に注目されている存在なのです。そのお館様が赤ん坊の面倒などと……」

それから暫く、俺はローデリヒから説教されてしまった。

貴族家の当主が、赤ん坊の面倒を見るとは何事かという内容だ。

「深刻な問題だな……新しい時代の流れが、古い慣習によって防がれてしまうとは」

「どうとでも仰ってください。お館様が、フリードリヒ様の世話をするなどあってはならないのです」

貴族には、それに相応しい振る舞いがあるのだそうだ。

「ローデリヒは、俺と大して年が違わないのに考えが古いぞ。よし、ここは」

きっとエリーゼ達ならばわかってくれる。

という期待を胸に、俺は育児が行われている部屋に戻った。

すると、いきなりエリーゼに怒られてしまった。

「あなた、フリードリヒの面倒は私達で見ますから」

せっかくおんぶしていたフリードリヒを、エリーゼに取り上げられてしまう。

「ここは、新しく赤ん坊の面倒を見るバウマイスター伯爵というイメージでいこうと思うんだけど」

「それは、よくないと思います」

いきなり、エリーゼから全否定されてしまった。

この世界には、男が育児を手伝ってくれるとありがたいという女性はいないのか？

「駄目なのか？」

「はい、育児は女性の仕事です」

おかしいな？

男性も育児に参加すべきとかいう意見はないのか？

「イーナ」

「駄目よ。育児は私達の仕事だから」

いやそんな、みんなの仕事を奪うつもりとかはなくて、少しだけ手伝えたらとかそんな話なんだけど……。

「ヴェル、もう少し大きくなったらどこかに一緒に出かけようよ」

「ルイーゼの言うとおり。ヴェル様には世間の目があるから」

ルイーゼとヴィルマにも否定されてしまった。

「ヴェンデリンさん、真の貴族とは赤ん坊の面倒など見ませんわよ」

「旦那、こういうのは昔から分担が決まっているからさ」

貴族に拘るカタリーナは勿論、カチヤにまで否定されてしまう。

彼女の実家も田舎だからな。

考えが保守的なのであろう。

「帝国の貴族でも、赤ん坊の面倒を見る者などおらぬぞ」

「女性の魔法使いは、余裕があるのでベビーシッターを雇いますね。魔導ギルドが使用人ギルドを紹介してくれますから」

テレーゼも、リサも、俺の育児参加に反対のようだ。

「そういうわけだから、ヴェル君は大人しく見ていてね」

「はい……」

最後に、アマーリエ義姉さんから子供のように諭されてしまった。

まさか女性側からの反対が根強いとは……世界が変われば常識は変わるのだと、俺は改めて思い知らされるのであった。

「お館様、このおんぶ紐は優れておりますな。すぐに量産を指示しましょう」

ただ、俺がオーダーメイドしたおんぶ紐はローデリヒに気に入られ、王国中に普及していく事となる。

第百三十二話　ヴェンデリン、浮かれる？

「だぁーーー」

「そうだな。みんな、まだ産まれたばかりなのにもう婚約者がいて大変だよな。お父さんは、できる限り頑張ってお前達を守るからな」

「あうーーー」

「うんうん。お父さんに任せておいてくれ」

「おい、ヴェル。お前はまだ喋れない赤ん坊と、何を勝手に会話した気になっているんだ？」

朝、土木工事に出かける前に子供達と話をしていると、なぜかエルが邪魔をしてきた。

自分も父親になった癖に、無粋な事を聞いてくる奴である。

「エルよ。一見、『だぁーーー』とか、『あうーーー』とかしか言えないけど、実はその中には多くの意味が詰まっているんだよ。この子達の父親である俺にはわかる」

「それは、ヴェルの勝手な思い込みじゃないか……」

「失礼な」

「いやさ、赤ん坊なんだからもう少し待てよ。その内にちゃんと喋れるようになるから……」

エルの奴、父親になったらえらく常識的な事を言うようになった。
なるほど、子供が産まれると親も成長するらしい。
まさか、目の前にその実例がいるとは驚きだ。

「それよりも、そろそろ時間だぞ」

「名残惜しいが、お父さんは頑張るからな」

子供達だけでなくエリーゼ達にも挨拶をしてから、早速エルを護衛に工事現場に『瞬間移動』で飛ぼうとすると、屋敷の入り口が騒がしくなってくる。

「エル、何事だ？」

「さあ？　様子を見に行くか？」

「ああ」

小さな城塞のような造りになっているバウマイスター伯爵邸の正門に向かうと、そこでは衛兵達と貴族らしい青年とが小競り合いをしていた。
以前に、こんな光景を見たような……。
こういうのを、デジャブっていうんだよな。

「事前のお約束なしでは通せません！」

「そこを何とかしたまえ！　僕はベネケン男爵家の嫡男フロート様なのだから！」

「自分で自分を『様』付けするか？」

エルが、自称ベネケン男爵の嫡男フロートという青年の発言を聞いて失笑した。

俺も、自分で様とか言ってしまう貴族の御曹司は初めてだ。

「いかなる身分の方でも、いきなりの面会は無理です！　まずはアポイントメントを！」

フロートと名乗る貴族の青年が強引に屋敷に入ろうとし、入れまいと衛兵達が抵抗する。

ローデリヒから面会の予定は聞いていないので、この男が勝手に押し入ろうとしているのであろう。

いわゆる、アポなしでの面会希望者だ。

テレビ番組の企画でもあるまいし、基本的には迷惑な奴でしかない。

「高貴な生まれである僕を止める事などできないよ。どきたまえ」

「若様！　お助けします！」

「押し込め！」

フロートが、三名の従者に応援させて無理矢理屋敷の中に入ろうとする。

衛兵達はそれを阻止しようと、笛を吹いて応援を呼び、彼らを押し返した。

暫くそんな状態が続いたので、俺は乗りかかった船だとフロートに姿を見せる。

「バウマイスター伯爵だが、何か用事か？」

「おおっ！　バウマイスター伯爵殿ではないですか。私の名は、フロート・ロゲール・フォン・ベネケン。ベネケン男爵の嫡男です」

フローロは、礼儀に則った挨拶を俺に行う。

そのくらいの知恵はあるようだ。

常識は……誰が見てもないな。

「それで、アポイントメントも取らずに何の用事で？」

口調が厳しくなるが、俺に会いたいという貴族、商人、平民などは多い。

ローデリヒが厳選して会う人物を選定している状態なので、このような横紙破りを許すと、余計にそういう手合いが増えてしまう可能性があった。

今回は、たまたま偶然というやつだ。

「なら、前に出たのは失敗だな」

「エル、そこで正論を言うなよ……これは例外中の例外です。さあ、ご用件は？」

「これは光栄の極み。では、率直に！　あなたのお嬢さんを私の妻にください！」

「へっ？」

俺は最初、この男が何を言っているのか理解できなかった。

「娘？」

「この前、生まれたではありませんか。当然、成人するまで待ちますよ。お義父さん」

「はあ？」

明らかに俺よりも年上の男が、俺をお義父さんと呼ぶ。

最初の衝撃が消えて次第にその意味がわかってくると、俺は湧きあがってくる怒りで頭が沸騰しそうになってしまう。

「お義父さん、安心して私に娘さんを」

「死にさらせ！　このロリコン！」

真顔で生まれたばかりの娘を嫁に寄越せというフロートに、俺は遂にキレて爆発した。

非殺傷ながら威力のある爆発魔法で、その従者ごと門の外に吹き飛ばすのであった。

「お館様」

「暫く牢屋にでも入れておけ」

「かしこまりました」

彼らは、父親であるベネケン男爵が迎えに来るまで別荘生活を楽しんだ。

別荘は豪華な石造りで、鉄格子もついて防犯体制も完璧なお部屋

であった。
食事も普段は贅沢ばかりしている御曹司のためを思い、バウマイスター騎士爵家で出てきたものとほぼ同じ、高血圧予防のために薄味で、素材の味を十二分に生かしたものだ。

貴人に出す食事ではないとフロートが叫んでいたそうだが、俺はそれを実際に聞いていないから知らない。
フロートを迎えにきたベネケン男爵の顔が真っ青で、後に彼は廃嫡されたそうだが、その件に関しても俺はまったく関与していない。

どうやらフロートは、王国でもかなり偉い方々を敵に回してしまったようだ。
俺には、よく事情がわからなかったけど。

「まったく、どいつもこいつも……」

朝から嫌な奴に会ってしまったが、気分を取り直して土木工事を始める。
最近は次々と入植者が増えているので、宅地に農地に道路にと、基礎工事で忙しい状態なのだ。
ちなみに最近では、仕上げはすべて入植者にやらせている。
このくらいは自分でやる人達でないと、いつまで経っても領地が発展しないからだ。
何とか部屋住みやスラム生活を抜け出そうとしている人達を救う必要はあるが、駄目な連中を領地に入れるつもりはない。
死ぬほど頑張れ、無理という言葉が無理とは言わないが、普通に

働いて生活できる人でないと困る。

「あのバカ貴族、何を狙っていたんだ？」

「真相は漏れていないはずだよな？」

娘達は王家や大物貴族家に取られてしまったが、婚約した情報は秘密になっていた。

俺の子供が魔法使いになる情報は、彼らが完全にシャットアウトしている。

なぜなら、それが漏れれば競争相手が増えてしまうからだ。

そう考えると、彼らは信頼できるというわけだ。

問題は、俺の娘が嫁ぎ先で苛められないかだけであろう。

地球で母親がそういうドラマを見ていたので、俺は心配になってしまうのだ。

「単純に、財力があるバウマイスター伯爵家と縁戚になって援助をたかろうという寸法か」

「だろうな」

でなければ、二十過ぎの青年が赤ん坊に求婚とかまずあり得ない。

いくらこの世界でもだ。

「これは、暫くは冒険者パーティは組めないか？」

「だよなぁ……」

出産後、エリーゼ達は冒険者復帰を目指して訓練しているのだが、

すぐに子供を産めと言われているに等しいので、またすぐに産休になってしまう可能性が高かった。
この世界には、『女性は子供を産む機械ではないのですよ！』と抗議する政治家はいないからだ。

「たまに、導師、ブランタークさん、俺、エル、助っ人でいくか？」

「男だけパーティか、いいな」

エルが物凄く嬉しそうだ。
奥さんのいない場所で、思いっ切りハメを外せると思っているのかもしれない。
みんな忙しいのでたまにしか組めないだろうが、それはお互い様なので問題なかった。

「先生、私が助っ人に入りますから」

「私も頑張ります」

「私も」

今日も、魔法の修練をかねてアグネス達が土木工事を手伝っていた。
俺達の話を聞いて、自分達がパーティに加わると言う。

「ありがとう。でもシンディとベッティは、成人してからな」

「すぐに産休に入って、またメンバーが足りなくなりそう……」

「ふんっ！」

「痛っ！」

可愛い生徒達を邪な目で見やがって、俺はエルに肘打ちを食らわせた。

俺は、三人をそういう目で見ていないというのに……。

「先生、エルヴィンさんは何か？」

「何でもない。ちょっといつものおバカ発言が出ただけ」

「そうなんですか」

俺がエルに肘打ちした理由をアグネスが聞いてくるが、適当に誤魔化した。

その日も無事に予定の工事が終了し、さて帰ろうかと準備をしているとシンディが俺にお願いをしてくる。

「先生、赤ちゃんを見に行ってもいいですか？」

「いいよ」

「私も行きたいです」

「私も」

アグネスとベッティも付いて来る事になった。

そして、それを聞いたエルがまた余計な事を言う。

「自分で出産する時にために勉強か……」

「ふんっ！」

「痛っ！」

俺は、再びエルに肘打ちを加えるのであった。

「お弟子さんですか。可愛らしいお嬢さん方達ですね」

アグネス達が赤ん坊を見たいというので屋敷に連れて行くと、エリーゼ達が満面の笑みで三人を出迎える。

先ほどエルが妙な事を口走っていたが、それがエリーゼに漏れたという事は無いようだ。

というか、あの三人は俺が初めて指導を行い、もう少しで一人前の魔法使いになれる初めての弟子達なのだ。

そういう下種な想像は止めて欲しいものである。

「初めまして、エリーゼ様」

「先生の奥様は、評判どおりに綺麗ですね」

「スタイルもよくて羨ましいです」

「ありがとうございます」

アグネス達に褒められて、エリーゼも悪い気はしないようだ。

確かに、出産して大して時間が経たない内に体形がほぼ元通りなのだから。
治癒魔法に、そういう魔法があるのかと思ってしまうほどだ。

「ヴェルのお弟子さんかぁ」

「私達もこういう時期があったわよね」

まずはアグネス達が挨拶と自己紹介を行い、他の奥さん達や、テレーゼ、アマーリエ義姉さんなども自己紹介をおこなう。
ルイーゼとイーナは、三人に自分達の過去を重ねているようだ。
少し遠い目をしていた。

「でも、見事に女の子ばかりね」

「特に深い意味はないぞ」

念のため、イーナに釘を刺しておく。
可愛い女の子だから特に目をかけているわけではなく、あのクラスの中で三人がずば抜けて優秀だからである。
勿論男子生徒もちゃんと面倒を見ていたが、俺が担当したクラスはどういうわけか女子の方が優秀であった。
魔法使いのクラスは一つしかないんだけど……。

「確かに、私やヴィルマの魔力量では勝てないわね」

既に上級も見えつつあるアグネス達の魔力に、イーナは納得をしたようだ。

「君達、いくつ？」

「私が十五歳で、シンディが十三歳、ベッティが十四歳です」
「年下なのに、子供を産んだボクよりも胸があっていいね……」
ルイーゼは、自分とアグネス達の胸を見比べて溜息をついた。
そういえば、赤ん坊が産まれた割にルイーゼの胸は……これ以上は危険だ。
「えっ？　気にするところはそこ？」
「ヴェル、ボクが他に何を悩むと言うのさ。アマーリエさんが子供を産むと胸が大きくなるって言うんだけど、あまり実感がないんだよね……」
確かに、ルイーゼの胸はあまり大きくなっていない。
これはもう、遺伝子のせいだとしか言いようがないな。
「人生、色々あるさ」
「ヴェル、もっと気の利いた慰め方はないの？」
「魔法で何とかなるから何とかするけどね……」
俺は可愛いと思うのだが、本人の希望もある。
魔法で何とかできるのなら、何とかしてあげたいところだ。
この世界の魔法は、魔法使いの才能次第で万能になる可能性を秘めていたけど、それでもできない事は多い。
前に背を高くできないかという相談を貴族から受けたけど、人間の体に変化を与える魔法はとても難しかった。

もしそれができれば、俺ももう少し背を高くしていただろうし、筋肉をもう少し増やしたりしているであろう。

「魔法で盛った胸ってのもどうかと思うから、やっぱりいいや」

基本的に深く悩まないルイーゼは、すぐに自分の胸がない事が気にならなくなったようだ。

「噂には聞いていたのですが、先生の奥さんは全員魔法使い……」

「アグネス、先生の赤ちゃん達も……」

「全員、魔力を持っている……」

魔法使いは魔法使いを知る。

アグネス達は、エリーゼ達、赤ん坊達と見て、全員に魔力がある事に絶句した。

確かに、普通に考えればあり得ない事だ。

「えっ？　えっ？　どうしてですか？」

「全員はさすがに……」

「これはもしかして……」

三人の中でベッティが、最初に感付いたようだ。

明らかに動揺した表情になる。

「ベッティ、しぃーーー」

「へっ？　しぃーーーですか？」

「世の中、知らないフリをしていた方が幸せな事がある」

普段は寡黙だが、たまに喋るとインパクトがあるヴィルマがベッティに忠告を始める。

「『魔法の先生の子供を見に来て、和やかな時間を過ごして帰っただけ』か、『少し秘密に入り込む』のとどちらがいい？　ただし、後者には条件がある」

「秘密……」

「魔法使いとして大成したいのなら、どちらを選択してもしてはいけない事がある。それを破ると、後の人生が色々と大変」

「先生の奥さん怖い……」

ヴィルマからの問いに、アグネス達は神妙な表情で考え込んでしまう。

明らかに脅しも含まれているが、入り込んでしまえば魔法使いとして大成可能かもしれない。

その誘惑に迷っているようだ。

「なあ、ヴィルマ」

「ヴェル様、これは脅しじゃない。あくまでも取引」

アグネス達が赤ん坊を見たいというから連れて来たのに、なぜか

とても物騒な話になっている。
困惑する俺に、ヴィルマがこれは脅迫ではないと述べる。

「ヴェンデリンさんは、まだどこか甘い部分がありますわね。陛下や大貴族の方々が封じている機密に触れるのですから、気軽にフリードリヒ達を見せてあげるなんて言わない方がいいですわ」

「いやね。俺は、可愛い生徒達の願いを聞き入れようかと思ってね……」

カタリーナは俺に呆れているようだが、地球なら親戚や友人に子供が産まれたら見に行くくらい普通に行っているはずだ。
俺も、何回かお祝いを持って見に行った事があるし。

「今朝の、バカ貴族の息子の件があるじゃないか。旦那にしては迂闊だぜ」

「そう言われると……カチヤでも気がつくレベルの話を俺は……」

「うわっ！　旦那が酷い！」

確かに、俺の子供達は全員が魔法使いの素質を持っているので、成人するまで慎重に育てないといけない。
いくら可愛い生徒達でも、アグネス達に見せるのは迂闊だったかもしれない。

「旦那、出会った頃のあたいはおかしな行動で迷惑をかけたけど、それはないじゃないか」

「すまんすまん、カチヤ」

「意味のない決闘を挑んで負けた私よりは、マシな過去ではないでしょうか？」

「最近の姉御は、あたいが初めて出会った頃とは別人だぜ……」

カチヤが出会ったばかりの頃のリサは、派手な装飾とメイクにエキセントリックな言動で世間を騒がせる凄腕の魔法使いであった。

今はようやく人見知りがマシになり、エリーゼ達とも普通に話せるようになった。

年齢は三十になったが、メイクがないと若く見える綺麗なお姉さんにしか見えない。

子供を産んで少し落ち着きを見せ、年齢が近いアマーリエ義姉さんやテレーゼと特に仲良くなった。

魔法使いとしては努力家で経験も長いので、ブランタークさんの次くらいに人に教えるのが上手い。

特に魔法が使えるようになって時間が短い、イーナ、ヴィルマ、テレーゼ、カチヤに妊娠中でも出来る魔法の訓練を施していた。

「先生はやっぱり凄いです！」

「えっ？　いきなり何で？」

俺は、急にアグネスに褒められて困惑してしまう。

「あの『ブリザードのリサ』を、決闘で破るなんて！」

「しかも、あのド派手な装飾とメイクを止めさせ」

「奥さんにして子供まで……凄い……」

なぜか、シンディとベッティにまで尊敬されてしまう。

というか、その情報は今さらだと思うけどな。

この三人からすると、以前に臨時講義を受けた時に以前のメイクで現れて生徒達の度肝を抜いた過去が強烈に残っているのであろう。

「私、前はそんなに恐ろしかったのでしょうか？」

「そうね。ちょっと同一人物とは思えないわ」

「妾とも決闘をしたしの。結果は妾が負け逃げしたわけじゃが、あの時は物凄い暴言じゃったの」

「そんな……」

アマーリエ義姉さんとテレーゼにも肯定され、リサは落ち込んでしまう。

「まあ、以前のリサと今のリサ。夫としては、二人と付き合っているようでこれはこれで面白いと思うけど」

「ヴェル……それはフォローになっていないわよ」

「イーナ、しぃーーー！」

人の懸命のフォローをイーナが否定するので、俺は慌てて彼女の口を塞ごうとした。

「イーナさん、安心して。なぜか効果あったみたいだから」

「私って、夫に愛されているのですね」

アマーリエ姉さんが視線を向けた先では、今度は一人顔を赤く染めながら喜んでいるリサがいた。

なぜ、あのフォローでそこまで喜べるのか、俺にもわからなくなった。

「本人が喜んでいるからよしとしようではないか。話を戻すが、今のバウマイスター伯爵家は色々と複雑な事情があっての。三人とも、わかるかの？」

「新興の大貴族様なので、色々と大変だというくらいは……」

「アグネスじゃったの。そなたの実家は？」

「王都で眼鏡工房と店を営んでいます」

「なら、わかるか」

眼鏡は完全オーダーメイドで高級品でもあるため、顧客に貴族が多い。

両親などが貴族を接客しているところを見ているアグネスは、他の平民よりも貴族という生き物がわかっていた。

「ご覧の通りに、ヴェンデリンは有能ではあるが少し抜けている部分があっての。それを補うのが、エリーゼ達というわけじゃ」

「あの……それはテレーゼ様もですか？」

「おうよ。世間では、妾は『バウマイスター伯爵への帝国からの戦利品』と思われておって、実際にそうじゃがの。アマーリエと同じく、日陰の身で楽しくやらせてもらっておるがの」

テレーゼは、自分が俺の愛人だと素直に認めた。

それはもう子供まで産んでいるので今さらであったが、堂々と口にするのはどうかと思う。

俺の、生徒達への評価とかそういうものにも繋がるから、あまり大きな声で言わないでほしいな。

「先生は、奥さんが多いのですね」

「これだけの大貴族なのじゃ。珍しくもないの」

「凄い」

嫌悪感でも抱かれるのかと思ったが、シンディは目を輝かせながら俺を見つめる。

ここでは、地球の常識が通用しないようだ。

「こういう新興の家は、特に子供が沢山必要じゃからの。妾達はこれからも産休で抜けるケースが多い。よって、アグネス達には期待しておるぞ」

テレーゼの言う期待とは、自分達が産休を取っている間、三人がパーティメンバーとして活躍する事であろう。

あとは、冒険者引退後にバウマイスター伯爵家のお抱えになる事であろうか？

「テレーゼ様、私頑張ります」

「私も」

「先生と一緒。最高です」

「あのさ、アグネスは別のパーティに入っていなかったか？」

彼女だけ成人していたので、普段は別の冒険者パーティに入っていたはずだ。

そことの契約は大丈夫なのであろうか？

「はい、あくまでも臨時で組んだパーティなので問題ないですよ。抜けようと思えば、すぐに抜けられますから」

正式にパーティを組むと抜けるのが難しいので、あくまでも臨時でパーティを組んだようだ。

この娘、同年代の俺よりもしっかりしているよな。

「先生と同じパーティ、楽しみですね」

俺の子供を見に来たはずのアグネス達は、なぜかテレーゼの説得でバウマイスター伯爵家にスカウトされてしまう。

「こういう囲い込みってどうなの？」

「文句を言う輩も多いであろうが、魔法使いとて生活がかかっておるのじゃ。条件がいい方に雇われて当たり前であろう。それよりもヴェンデリン、ローデリヒが呼んでおったぞ」

「えっ？　今？　アグネス達もいるし、あとでよくないか？」

「緊急の用事だそうじゃ。早く行け」

「アグネス、シンディ、ベッティ。招待しておいて色々と悪いな。ちょっと席を外すから」

俺は、急ぎローデリヒがいる執務室へと向かう。

「やれやれ、内乱では妾を蹴落とす選択までできた男が、妙に甘いの」

あの時は、妾と同じくヴェンデリンも追い込まれていたからかの。今は領地開発で大変じゃが、別に敵もおらぬか。

「さて、アグネス達よ。そなたらは将来どうするのじゃ？」

「どうするって、私達は先生の弟子で……」

「早く成人して、先生と狩りに行きたいです」

「魔法ももっと教えて欲しいですし」

ふっ、妾も舐められたものじゃな。

フィリップ公爵位を失って、ヴェンデリンの愛人と揶揄されておるからかの？

まあ、いい。

この三人、ヴェンデリンは可愛い妹兼弟子のような扱いで特別に可愛がっておるようじゃの。

しかし、三人は女じゃ。

魔法使いが少ないとはいえ、異性の魔法使い同士が深くつき合うのはよくない。

師弟以上の関係があると、周囲から噂されるからの。

ブランタークには弟子が多いが、女性魔法使いに教える時にはちゃんと距離を取っている。

あの男は、女の扱いにも、女の怖さにも慣れているからの。

カタリーナはお師匠様と呼んでおるが、それはあくまでも当時婚約者であったヴェンデリンが許可しての事。

妾にも指導してくれるようになったが、今の妾はヴェンデリンの愛人だと世間に知られておる。

教えるのに、何ら不都合はない。

「妾にも可愛い子供の頃があっての。その頃は、魔法使いになりたくて懸命に書籍を読み漁ったものよ。そこで知り得たのじゃが、未婚の女性魔法使いがヴェンデリンに接近しすぎると世間的にどう思われるかの？」

「それは……」

「私は気にしません」

「運命に身を任せるのみです」

三者の返答の仕方が、それぞれに個性が出ておるの。
真面目なので答えに詰まるアグネス。
最年少で天真爛漫なのもあろう、ヴェンデリンの傍にいられれば何の問題もないと感じるシンディ。
結果的にそう思われても構わないとは言っているが、実はそれを望んでいる節がある強かなベッティか。

「そなたら、顔に書いてあるぞ。可愛い生徒や弟子から、妻か愛人にランクアップしたいと」

舐めるなよ、小娘ども。
負け犬である妾じゃが、その程度のこと気が付かぬと思うたのか？

「事実であろう？」

「「……」」

「はーーい！　先生のお嫁さんになりたいです！」

アグネスとベッティは黙ってしまったが、シンディは正直じゃの。
最年少で、その分そういう事を言える立場なのかもしれぬが。

「別に咎めてはおらぬよ。ただ、今は止めておけ」

「どうしてですか？　テレーゼ様」

シンディが躊躇うことなく妾に訪ねてくる。
それを特に不快に思わないのは、この娘の得な性格かもしれぬ。

「ヴェンデリンは、お主らを一人前の魔法使いに育てる事に妙に拘っておってな」

普段から、妙な連中と生臭い話ばかりであるからの。

妾も、同じ問題で帝国では苦労した口じゃが。

そなたらを妹のように思い、早死にした師匠が出来なかった弟子の育成に拘ったというのが真相であろうか。

「そこで、強引に押しかけ女房をするとヴェンデリンは引くからの」

「テレーゼも前はそうだったよね」

ルイーゼめ、人の過去を抉ってくれたの。

「あの男はちゃんと計算もできる男じゃが、そこにもう一つ理由を付けて自分を納得させようとする部分がある。お主らは、今は可愛い弟子のみでいるように。それが最終的にヴェンデリンから好かれるコツじゃぞ」

このままヴェンデリンが三人を冒険者パーティに入れて連れまわせば、近寄る男などいなくなるからの。

何年かしてから『責任を取れ』と言われれば受け入れるであろう。

それに、受け入れればこの三人が産んだ子供は全て魔法使い。

優秀な魔法使いを三人バウマイスター伯爵家が独占しても、三人以上の子供を産んでそれが魔法使いなら貴族は納得するというもの。

「妾もまだ魔法の修練を始めて時間が短いのでな。たまには、魔法を教えてくれよ」

「「「はいっ！」」」

ここで話は終わり、ヴェンデリンが用事を終えて戻ってくると、三人は交互に赤ん坊を抱いたりあやしていた。

「三人とも、慣れているんだな」

「私には弟と妹がいて面倒を見ていましたから」

「私も妹がいるので」

「私は親戚の子供で慣れています」

三人とも、さり気なく子供を産んでも大丈夫アピールをしておる。ヴェンデリン、確かにその三人は可愛いのも事実じゃが、やはり女であるという事を忘れておるの。

いや、あえて忘れたフリをしておるのか。

「テレーゼって凄いわね」

アグネス達が帰り、ヴェンデリンはまたローデリヒに呼ばれて雑用をこなしていると、アマーリエが妾に労いの言葉をかけてくる。

アマーリエは零細とはいえ騎士の娘なので、エリーゼの次にこういう事では察しがいいのが助かる。

「妾も非公式ながら、バウマイスター伯爵家の一員じゃからの。御

家のために、将来有望な魔法使いを周囲からの軋轢を少なく囲い込む道しるべを示したのみ」

「あの娘達、少し怖がっていなかった？」

「じゃろうが、同時に妾が落とし所を提示したら喜んでいたではないか」

こういう話は、正妻であるエリーゼが言うと角が立つのでな。
愛人の妾が非公式に出した方がいい。
それを理解したエリーゼは何も言わなかったのじゃから。

「女魔法使いとは、大変じゃからの」

リサを見れば一目瞭然じゃ。
なまじ力があって稼げるために、寄生虫のようなおかしな男が近寄ってくる。
それを排除すれば、売れ残る羽目になるケースが多い。
それを防ぐのに、ヴェンデリンのような相手は最適というわけじゃ。

「こちらは庇（ひさし）を準備してやり、向こうは魔法使いとしての力と子供を提供してもらう。こう言うと、物凄く現実的じゃが……」

ヴェンデリンには、甘い部分が多い。
そのおかげで妾も救われたが、その甘さが致命傷になるやもしれぬ。
それを防ぐ手助けを、妾がするのもこれは運命かの。

「しかし、ヴェンデリンは女というものがまだよくわかっておらぬ

ようじゃの」

「ああ見えて、夢見がちな部分もあるからね」

でなければ、あの三人を純粋な弟子として扱う事にここまで拘らぬか。

もっとも、肝心の弟子達の方はしっかりとヴェンデリンの妻なり愛人になる事を望んでおる。

「多分、親御さん達も期待してしまっているのよ」

冒険者予備校の魔法使いクラスの中で、三名だけがヴェンデリンに特別扱いされている。

変な男に騙されて結婚するよりは、ヴェンデリンの傍の方が安心というわけだ。

上手くすれば、自分の孫が貴族になれるかもしれぬしの。

「私がヴェル君に囲われたら、両親も兄も大喜びよ」

「であろうな」

飛ぶ鳥落とす勢いのバウマイスター伯爵家の縁戚になれたのだから。

更にアマーリエが子供でも産めば、余計に嬉しいであろう。

「かくも貴族とは、打算の果てに婚姻が決まるというわけじゃ」

「恋愛結婚なんて、物語になるほど珍しいものね」

「とはいえ、妾は物語的な部分があるぞ。帝国皇帝になるのも仕方

なしと思われていた時に、ヴェンデリンが妾の心を読んで見事に粉砕してくれたわ。兄達には悪かったが、妾に隠れて最悪な選択を取ろうとしたからの。あまり同情もできぬ」

傍から見ればまるでそう思われないかもしれぬが、妾はヴェンデリンに感謝しておる。

だから非公式の愛人としては、バウマイスター伯爵家のためにたまにはひと肌脱ぐ手間を惜しまぬというわけじゃな。

世間からは、容易い女だと思われるかもしれぬがの。

「やれやれ、また工事の計画が早まったのかよ……」

「先生、また土木工事ですか？」

「ローデリヒの奴、俺を容赦なく扱き使うからな」

「先生、私達も手伝いますから」

「アグネスちゃんも、シンディちゃんも、私も、みんな先生のおかげで土木魔法が上手になったから大丈夫ですよ」

「それはそうなんだけど……」

「先生は、俺に任せとけと言って魔法を使っていた方が似合いますよ」

「そうかな？」

「そうですよ。先生、頑張りましょう」

「それもそうだな」

いくら可愛いとはいえ、ヴェンデリンの奴、簡単におだてに乗ってしまいおって。

能力はあるのだから、このくらい抜けていた方が実は大貴族の当主としてはよかったりするからの。

もし何かがあれば、エリーゼや妾が口を出せば済む問題なのじゃから。

第百三十三話　総司教選挙と血塗れキャンディーさん。

「元気そうな男の子でよかった。長生きはするものじゃな」

産まれた子供達の首が据わってくると、一目見ようと来客が増えてくる。

今日はホーエンハイム枢機卿が姿を見せ、フリードリヒを抱きながら笑みを浮かべている。

その笑顔からは、陛下からも妖怪扱いされているような人物には見えない。

教会のお偉いさんである公の顔と、ひ孫を可愛がる曽祖父としての顔は別というわけだ。

「エリーゼ、体調は大丈夫か？」

「はい、お爺様」

「それはよかった」

この世界には産婦人科がないから、産後に体調を崩す人が多い。

いわゆる、産後の肥立ちが悪いというやつである。

エリーゼの場合、ホーエンハイム枢機卿が治癒魔法を使える神官を派遣しており、エリーゼ自身も優れた治癒魔法の使い手なので心配ないはず。

それでも、ホーエンハイム枢機卿は自分の孫娘が心配だったようだ。

「元気そうな跡取りでよかった。フリードリヒはいい次代のバウマイスター伯爵になってくれそうだな」

もし産まれたのが女の子だったら、エリーゼに対し『次の子を早く！』という圧力が凄かったはず。

ホーエンハイム枢機卿も、可愛い孫娘へのそういう圧力がなくなってほっとしているようだ。

「他の子達も元気そうでよかった。みんな首が据わってきたようだし、そろそろ本洗礼でもするかの」

そういえばそんな行事があったなと、俺は思い出した。

この大陸では、子供が産まれると親が赤ん坊を教会に連れて行って洗礼を行うのだ。

うちの実家でも、マイスター殿が洗礼の儀式を担当している。

いきなり本洗礼なのは、俺がバウマイスター伯爵だからであろう。

「本洗礼の担当司祭はフリッツに、その補佐は、ザームエルに任せる予定だ」

フリッツとは、エリーゼのお父さんの名だ。

まだ枢機卿には任命されていないが、教会でもかなり偉い方の人である。

枢機卿は五十を超えないとまず任命されないので、エリーゼのお父さんの出世が遅れているわけではない。

教会とは、年寄りが多くて上が詰まっている組織なのだ。

軍人とは違って、歩けて説教ができれば通用する職業なのだから、引退する年齢がどうしても遅くなってしまう。

そして、ザームエルとはエリーゼのお兄さんの名であった。

次の次のホーエンハイム子爵家当主であり、教会の若手では偉い方の人である。

「お父様とお兄様がですか？」

「まあ、しょうがあるまいて」

下手な者に任せると、子供達の魔力の事が漏れやすいというわけか。

ホーエンハイム枢機卿の関係者で囲んでしまえば、その心配はないというわけだな。

「ですがお爺様。そのような事をすると、批判も多いのでは？」

ホーエンハイム枢機卿は、次の総司教を狙っている身だ。

ここで露骨な身内贔屓をすると、ライバルから非難されるのではないかとエリーゼが心配したようだ。

「別に構わぬよ。ひ孫達の安全には代えられぬ。それに、もうワシは総司教を目指さない事にした」

「お爺様、よろしいのですか？」

ホーエンハイム枢機卿の総司教就任は、ホーエンハイム子爵家の悲願だったはず。

それを彼自身が目指さないと宣言したので、エリーゼは驚きを隠せなかったようだ。

俺もちょっと意外だと思ってしまう。

「ワシも年だからな。それに現実的な問題として、ワシが総司教に

なると問題がある。婿殿の義祖父だからな」

俺の跡取り息子フリードリヒは、王家から嫁を迎える。
娘のアンナも、次の次の国王陛下の妻に決まった。
これで、ホーエンハイム枢機卿が総司教になれば……警戒されるというわけか……。

「我々のために申し訳ないです」

「気にするな。教会に入ると、みなが総司教の座を目指すのは当然。だが、実際に総司教を傍で見ておると、あまりなりたいとは思わないぞ」

まあ、確かに大変そうではあるよな。
常に人に見られているから、嫌な事があっても酒を飲んでくだを巻くわけにいかないのだから。

「それに婿殿、上に上がれば上がるほど理解するのだ。あそこに真の信仰などないとな」

それでも、人々に宗教は必要だから教会をなくすわけにもいかないか。
ホーエンハイム枢機卿は真の意味で宗教家かも。
色々と悟ってしまっているのだから。

「本洗礼の日時はあとで伝えよう。本洗礼は本部で行わないといけないからな」

ホーエンハイム枢機卿は、出産祝いを置いてその日は王都に戻った。

一週間ほどで本洗礼の日時が決まり、俺は奥さんと子供達を連れて『瞬間移動』で王都へと向かう。
赤ん坊はもう首が据わっているから、母親が抱いていれば問題なかった。

「バウマイスター伯爵様、エリーゼ様。お世継ぎ誕生、おめでとうございます」

ホーエンハイム子爵邸に『瞬間移動』で飛ぶと、すぐにセバスチャンが姿を見せた。
彼は、俺とエリーゼに子供が産まれた事へのお祝いを述べる。

「バウマイスター伯爵様とエリーゼ様が親となる。私も年を取るわけです」

「セバスチャンは、変わっていないように見えるけどな」

「これが寄る年波には勝てないようでして……私も年を取ったと思うのですよ」

そんなに変わったようには見えないけどな。
セバスチャンは、相変わらず執事の鑑のように見える。

「ささ、そっと教会に参りましょうか」

本洗礼は、あまりなるべく他の教会関係者に知られないように行う予定だ。
ホーエンハイム子爵邸から、セバスチャンが裏道などを使って案内してくれた。

「本洗礼なのに、関係者以外完全にシャットアウトなのか」

「色々と面倒がありますので」

他の教会関係者達がうちと縁を結ぼうと、しつこく迫ってくる可能性がある。

もし連中が優れた魔法使いを連れていると、子供達が全員魔力持ちである事がバレてしまうのだ。

本洗礼の見届け人は教会の有力者であるホーエンハイム枢機卿なので、非公開でもそれにケチをつける者はいない。

以上の理由で、本洗礼は完全非公開で行う事となった。

「総司教から苦情は来ないのかな？」

「それが、総司教様は今健康が優れないとか……」

「お年ですからね」

「就任した時から爺さんだものな」

エリーゼは高齢である総司教の健康を心配し、エルは年寄りだからいつ健康を害してもおかしくないという認識だ。

俺も、自分の結婚式の時から、総司教が大分ヨロヨロとしていたのを思い出した。

「あれ？　実は結構不穏な状態？」

「バウマイスター伯爵様、ご安心を。総司教様は、王都郊外の施薬院にてご静養中です。それに釣られて、多くの教会幹部の方々も郊

外に集まっております」

セバスチャン、安心って……次期総司教を決めなければいけない可能性がある状態だから安心とはほど遠いような……。

「旦那様は次期総司教にはならないので、芽が出てきた方々が施薬院において大層嬉しそうに動き回っております。本洗礼を邪魔されないで好都合だと旦那様は仰っておりました」

『次期総司教には自分をよろしく』と、他に集まっている教会幹部達や投票権を持つ神官達に対して運動してまわっているんだろうなとは予想できる。

その隙を突いて、フリードリヒ達の本洗礼を済ませてしまおうという腹か。

「婿殿、こちらだ」

セバスチャンの案内で裏口から本部に入ると、いつもよりも人が少なかった。

本当に、静養中の総司教の下に集まっているようだ。

ホーエンハイム枢機卿の案内で聖堂に入るが、その中にもエリーゼのお父さんとお兄さんしか人がいない。

まさか、ここまで関係者以外をシャットアウトするとは思わなかった。

「ワシが見届け人で、セバスチャンが手伝いをすればいい」

本洗礼を行う時には、若い見習い司祭を儀式の補佐役として使う事が多い。

今日はその仕事をセバスチャンが行うようだ。

それにしても、さすがはセバスチャン。
儀式の補佐役までできるとは。

さすが、出来る執事はひと味違う。

「やはり孫は可愛いな」

「エリーゼ、可愛い甥じゃないか」

「フリッツ、ザームエル。急げよ」

「わかっていますとも、父上」

エリーゼのお父さんとお兄さんがフリードリヒを見ていると、ホーエンハイム枢機卿から急ぐようにと釘を刺されてしまった。
他の神官や幹部達に本洗礼を邪魔されたくないのであろう。

「では……」

本洗礼の儀式自体は、そこまで時間がかかるものでもない。
八人同時に行っても、三十分とかからなかった。

儀式が終われば、そのままホーエンハイム子爵邸に退避するだけだ。

「婿殿、少しつき合ってくれ」

俺はホーエンハイム枢機卿に誘われ、エリーゼ達を見送ってから今まで来た事がない本部内の建物に向かう。
中に入ると、そこには神官服を着た一人の老婦人がいた。

「今日は済まなかったな、エミリー」

「まさか、あなたが私に頼み事をするとはね」

「ひ孫達の本洗礼を成功させるためだ」

「密かに本洗礼を行うためでしょう？」

「婿殿、世間ではワシを妖怪だと言う輩が多いが、ワシの目の前にいる女の方が本物の妖怪だからな」

「あなたは、相変わらず女性に対してデリカシーの欠片もないのね」

姿格好からして、この老婦人は教会幹部だと思う。

ホーエンハイム枢機卿の態度からしても、相当に偉い人のはずだ。

「婿殿は、このようにとんと教会には疎くてな。協力はしてくれるのだが、信心は皆無なのじゃ」

「いいじゃない。バウマイスター伯爵殿の篤志によって、実際に多くの人が救われているのだから。口では立派な事を言っても、浄財をケチる貴族なんて珍しくないわよ」

うーーーん、この腹の探り合いのような会話。

俺は、とんでもない場所に案内されてしまったようだ。

「紹介が遅れてしまったが、この女性はエミリー・ケンプフェルト。ワシと同じく枢機卿をしておる」

「バウマイスター伯爵殿の噂はよく聞いておりますよ」

エミリーという女性は、ホーエンハイム枢機卿と同じくらいの年齢に見える。

それにしても、女性で枢機卿ってのは凄いな。

教会は女性神官も多いけど、幹部は男性ばかりだからな。

あくまでも、俺が今までに知り合った教会幹部についてだけど。

「女性の枢機卿は、たまに出るがそう数は多くない。実力と運がなければなれないからな。エミリーは両方を兼ね備えておる」

そんな人に、本洗礼で借りを作って大丈夫なのかな？

俺は少し心配になってしまう。

「それでだ。なぜ婿殿をここに連れて来たのかというと、フリードリヒ達の安全のためじゃ。協力してくれよ」

えっ？

何でフリードリヒ達の安全と関係があるんだ？

「簡単に事情を説明するとだな……」

ホーエンハイム枢機卿は、自分が総司教になると周囲から力を持ちすぎだと思われ、最悪排斥される可能性があるからと、総司教になる道を諦めた。

ところがそれを発表した途端、総司教が体調を崩してしまった。

すぐにも総司教を決める投票が行われるであろうが、最有力候補だったホーエンハイム枢機卿は既に立候補しないと宣言している。

今までは諦めていたような連中がこぞって立候補を表明し、総司教が静養している施薬院に集まってお見舞いに来た神官達に投票を依頼して大騒ぎになっているそうだ。

「まだ亡くなっていないのに……」

もし回復したら、選挙活動をしていた連中の立場が悪くなるような気がするんだけど……。

「それがだな、婿殿。総司教殿はもう意識もないらしい。いつ心臓を止めるのかという病状なのだ」

「その情報なら私も掴んでいるわ。高価な魔法薬で無理矢理心臓を動かしているけど、いつ投与を止めるかという状態のようね」

この二人、共に妖怪だと俺は思ってしまった。

施薬院になんていなくても、最新の情報を入手しているのだから。

「それと、フリードリヒ達の安全と何の関係があるのでしょうか？」

「彼らは、みんな泡沫候補なのよ。投票で誰かに決めても、総司教としての力には欠けるの。だから、その力を得ようとしてあなたの取り込みを図るでしょうね」

「俺は神官じゃないですけど……」

神官の手助けをしている暇はないけどな。

「あなた自身はね。その義祖父は総司教に一番近かった男で、妻は聖女と呼ばれる治癒魔法の使い手、エリーゼさんの地位は司祭でし

かないけど、その名声はなかなかのものね」

ケンプフェルト枢機卿の説明で段々とわかってきた。

力のない総司教は、それを強めようと俺、エリーゼ、ホーエンハイム枢機卿に接近してくる。

縁を結ぼうと、婚姻攻勢を仕掛けてくる可能性があった。

それは王家と大物貴族達による囲い込みで難しいのだけど、色々と探られてフリードリヒ達の秘密が漏れると混乱が大きくなってしまうわけか。

「エクムント、あなたが立候補すればいいのよ」

ホーエンハイム枢機卿の名前って、エクムントだったのか。

今まで、お爺様、ホーエンハイム枢機卿としか呼ばれないから知らなかった。

それにしてもこの二人、お互いに名前で呼び合って、実は昔恋人同士だったとか？

「無茶を言うな、エミリー」

「これ以上は身の破滅か……仕方がないわね。それで、どうするの？　ポーツァルに支持を集めるのかしら？」

「いや、エミリーが立候補してくれ」

「私？　私は無理よ」

ホーエンハイム枢機卿は、ケンプフェルト枢機卿に総司教選挙に出るようにと要請を行った。

「女性だと、総司教就任は難しいのですか？」

「そうね、枢機卿になるもの大変なのだから」

ケンプフェルト枢機卿によると、今までに女性で総司教になった人はいないようだ。

選挙に立候補する人は定期的にいるらしいが、最有力候補になった事すら一度もない。

あと、ポーツァルとはホーエンハイム枢機卿の派閥でナンバー2の地位にある人物であった。

「ポーツァルはまだ五十二歳で、枢機卿に任じられたばかりだ。それに、あいつは調整型の人間で、こういう状況だと力を発揮できないからな」

「私も同じようなタイプなのに」

「嘘をつくな、エミリー。お前は、歴代の女性枢機卿の中で一番力があるだろうが。ケンプフェルト商会の一族なのだから」

「ケンプフェルト……ああ、王国一の材木商の」

ケンプフェルト枢機卿は、王国で一番規模が大きい材木商の一族であった。

なるほど、ならば女性でも影響力は大きいか。

「回りくどい話はやめるぞ。ワシはエミリーを支持する。次の総司教をポーツァルに回せ」

「私もひ孫と遊ぶ時間がほしいから、五年だけやってあげるわ」

「……まあよかろう」

俺はなぜか、ホーエンハイム枢機卿とケンプフェルト枢機卿による権力談合を最初から最後まで聞かされる羽目になってしまうのであった。

「フリードリヒ、お爺ちゃんだぞぉ」

密談が終わってからホーエンハイム子爵邸に戻ると、エリーゼのお父さんがフリードリヒを嬉しそうに抱いていた。

やはり、孫は可愛いのであろう。

「ザームエル、エミリーが私用でこの屋敷に来るからな」

「私用って……そんなわけがないですよね？」

「何を言うか。ワシとエミリーは、仲のいい幼馴染ではないか。空いた時間に遊びに来るくらい普通であろうが」

先ほど別れたばかりなのに、あのばあさん、もう遊びに来るらしい。

勿論遊びのはずはなく、総司教選挙対策で生臭い話をしにだろうけど。

「ホーエンハイム枢機卿とケンプフェルト枢機卿が幼馴染？」

「はい、そうですよ。私も幼い頃にはエミリー様によく遊んでいただきましたから」

エリーゼの説明によると、二人は同じ年の幼馴染で子供の頃は毎日のように一緒に遊んでいた仲であった。

子爵家の跡取りと豪商一族の娘、一時は側室ながらもケンプフェルト枢機卿がホーエンハイム枢機卿に嫁ぐという話もあったそうだ。

「エミリー様は次女でしたので、それで構わないというお話だったのですが……」

彼女の姉が急死して、急遽婿を取らなければいけなかった。

そんな理由で二人は結婚しなかったというわけだ。

ケンプフェルト家には娘しかいなかったので、あのばあさんが継ぐしかなかったというわけだ。

「育児と商会の仕事に勤しむ傍ら、エミリー様は空いている時間に教会への奉仕活動を始めました」

最初はボランティアであったが、若くに婿入りした旦那が亡くなり、商会を継いだ息子達が一人立ちすると、本格的に神官として活動を始めたそうだ。

「四十をすぎてから教会に入り、二十五年で枢機卿になった女傑だからな。婿殿も要注意だ」

エリーゼのお父さんの言うとおりだ。

ホーエンハイム枢機卿が幼馴染なのに警戒するわけだ。

私的な友情と、教会幹部としての対応を分けているというわけか。

「父上とケンプフェルト枢機卿が男女の仲だと噂する者も多いな」

二人の気安い会話を聞いてしまうと、確かにそんな関係かもと思ってしまう。

その真相は、当事者同士にしかわからないであろうが。

「ふんっ、枯れたジジイとババアの間にくだらぬ噂を立てておってからに」

「あら、老いらくの恋ってのも物語としては成立するのよ」

「そういう事を言うと、また変な噂が広がるぞ」

「言わせておけばいいじゃないの」

そこに、セバスチャンの案内で噂のケンプフェルト枢機卿が姿を見せた。

今の彼女の服装は、大商家の奥さんに相応しい上品ないでたちだ。

神官服ではないのは、あくまでも私的にホーエンハイム枢機卿を訪ねた形式にしたいからであろう。

「エリーゼ、出産おめでとう」

「ありがとうございます、エミリー様」

「あの小さなエリーゼがお母さんとは、私も年を取ったわけね。それもそうよね、エクムントがもうお爺さんなんだから」

「お互い様だ。年の話はお互いに言わない方が幸せだぞ」

「それもそうね。早速、次代のバウマイスター伯爵であるフリードリヒ様を見せてもらおうかしら」

フリードリヒが寝ている部屋にケンプフェルト枢機卿を案内すると、彼女はすぐにフリードリヒを抱いた。

その様子はとても様になっている。

「子供、孫、ひ孫と慣れているから当たり前よ」

そういえばこの人、ちゃんと結婚して子供も産んでいるんだよな。

どんな旦那さんだったんだろう？

典型的なマス夫さんだったとか？

もしかして早死にしたのって……これ以上は考えるのを止めよう。

「この子は、いい跡継ぎ様になれるわね」

「そうであろう」

「いいわ、協力してあげる」

なるほど、協力には見返りが必要なのですね。

俺にでも容易に想像がついた。

「私のひ孫で、先月に生まれた娘がいるのよ。名前はシュテファーニエというのだけど」

「エミリー、わかっているとは思うが……」

「うちは商家で平民だから、その辺は弁えているわよ」

「というわけだ。婿殿」

産まれたばかりの娘が俺の妻になるわけがないから、フリードリヒの奥さんになるというわけだ。

というか、この子は俺よりも凄いな。

物心つく頃には、奥さんが何人になっているんだ？

それでも受けるしかないのか。

彼女以外の総司教が当選すると、うちにちょっかいをかけてくる可能性が高いから。

「お互いに利はあるのよ。うちは材木商だから」

バウマイスター伯爵領は未開地ばかりなので、木が沢山生えている。

そのおかげで、木材ってものをまったく輸入していなかった。

自分達で切り出してくればよかったからだ。

「開発が落ち着いたら、今度は材木を他領に輸出する計画くらいローデリヒさんは立てていて当然よね？」

「ええまあ……」

それは聞いている。

普通の木材もそうだが、特殊な種類の木などもだ。

他の領地だと樹齢が長い大きな木が不足している場所もある。

そこに高く売れるというわけだ。

「そろそろ、盗伐に注意しないと駄目よ。バウマイスター伯爵領へのアクセスがよくなってきたから、利益が出やすくなっているし」

盗伐についてはローデリヒも警戒していたが、それを防ぐノウハウがほぼ皆無なのが辛かった。

ただ木がある場所に警備兵を置いていたら、いくら金があっても足りないからだ。

「その辺のノウハウも提供するわ」

俺が無条件にフリードリヒの側室の件を受け入れるはずがないと、ケンプフェルト枢機卿ほどの女傑が気がつかないはずもないか。

「貴族が家の事を第一に思うように、平民の商人も家が大事なのよ。うちが破産すると、路頭に迷う人も多いのだから」

確かに、ケンプフェルト商会規模になると、そう大物貴族と変わらない人を雇っているだろうからな。

「贔屓目かもしれないけど、シュテファーニエは可愛くなると思うのよ。フリードリヒ様も気に入ると思うけど」

「はあ……」

ただ、それをまだ首が据わったばかりの乳飲み子であるフリードリヒに確認する術がなかった。

ちょっと席を外してローデリヒと相談したけど、彼はいい条件だから受け入れるしかないという。

これで、フリードリヒの婚約者は二人となった。

「フリードリヒ、お前は俺以上にモテモテだな」

「あーーー」

フリードリヒが、『まあな』と言ったような感じがした。
もしかすると、俺とは違ってモテ道を驀進してしまうのか？
そんな事を考えていたら、屋敷に数名の神官が飛び込んでくる。

「ホーエンハイム枢機卿、ケンプフェルト枢機卿。総司教様が天へと旅立たれました」

「そうか」

「始まるわね」

何が始まるのか？
察しのいい人ならすぐにわかると思うが、次期総司教を巡る選挙が始まるというわけだ。
そして、間違いなく俺も巻き込まれるのだと思うと、なるべく早く終わってほしいと願うのみであった。

「カタリーナ、総司教の葬儀に一緒に行こうぜ」

「私、ちょっとお時間の都合が……」

「カタリーナは貴族じゃないか。ここは是非に参加しないと」

「私は零細貴族ですし、この場合はヴェンデリンさんだけが参加なされた方がよろしいですわよ」

本洗礼が終わってから一週間後、亡くなった総司教の葬儀が王都で行われる事となった。

葬儀にカタリーナも誘ったのだが、なぜか断られてしまう。

「貴族なら、ここは出ておこうよ」

「私のような零細貴族が、本部で礼拝などおこがましいですわ」

カタリーナめ。

貴族関連の行事なら喜んで出るのに、教会関連の行事だから面倒だと思ったな。

実は、カタリーナのような貴族は多い。

王都在住の貴族だと小身の者でも出席するけど、地方の貴族は総司教なんて雲の上の存在だから嫌がるのだ。

地方で活動している神官達も、よほど地位が上でないと出席はしない。

バウマイスター騎士爵領にいるマイスター殿も、教会で独自に祈りを捧げるそうだ。

交通費と距離的な関係で、来られない人が多いというわけだ。

「エリーゼの他で、誰かついてくる人いないかな？」

見事に誰も手を挙げなかった。

あきらかに、堅苦しいから行きたくないというオーラが漂っている。

「私、身分が低いから」

「ボクも」

「エリーゼ様、フリードリヒの面倒は任せて」

イーナ、ルイーゼ、ヴィルマは速攻で辞退した。

カタリーナも同様だ。

「ヴェンデリン、妾が行くと色々と面倒じゃぞ」

「それはそうだけど……それで本音は？」

「教会の連中が面倒なのは帝国でも同じじゃ。それとつき合わなくてもいい身分になったのに、何を好き好んで総司教の葬儀などと面倒なものに出ないといけないのか」

「ですよねぇ……」

テレーゼ、俺も出たくないんだけど。

「あたいは粗相をするかもしれないから遠慮しておくよ」

「私も教会は苦手でして……」

カチヤとリサにも断られてしまったか。

冒険者って一部の信心深い人を除くと、教会は治癒のお礼を支払

う場所くらいの感覚しかない人が多いのだ。
たまにミサに出る人でも、総司教の葬儀に出るのは嫌な人が多いと思う。

「天国へと旅立つ総司教様を見送るだけの儀式なのですが……」

エリーゼは基本的に善人だから、純粋に亡くなった総司教に祈りを捧げたくて葬儀に出たいのであろう。
俺達の結婚式で神父役をしてくれたから、不義理はできないという理由もある。

「エリーゼ。そうは言うけど、参列者が凄いから気後れする人は多いのよ」

王族も来るからなぁ……。
俺も心情的にはそっちの人間だから、できれば参加したくない。
まあ、途中でブライヒレーダー辺境伯を拾っていかないと駄目だから不可能なんだけど。

「護衛役の俺は参加せざるを得ない。緊張するなぁ……」

愚痴ってばかりいても仕方がないので、フリードリヒの世話をイーナ達に任せて出かける事にする。
メンバーは、俺、エル、エリーゼの三名のみ。
途中で、ブライヒレーダー辺境伯とブランタークさんを拾っていく予定だ。

「よう、伯爵様」

ブライヒレーダー辺境伯とブランタークさんは、今日は正式な礼

服姿だ。
魔法使いはローブ姿で葬儀に出てもいいのだが、教会の総司教ともなると話は別だ。
だから当然、俺とエルも礼服を着用している。
そうする事によって、他の人に対してよりも弔意を表すわけだ。

エリーゼも、普段は着ない黒い神官服を着ていた。
いつもと違ってシックな感じでよく似合っているが、それを口にすると不謹慎だと言われそうなのでエリーゼには言っていない。

「面倒だよな」

「ブランターク、それを本部内で言わないでくださいね」

「当然ですよ」

「私も面倒だとは思っているのですから」

亡くなった総司教を悼む気持ちがないわけでもないけど、この人の葬儀で王国中が振り回されている。
王様の葬儀なら理解できるが、総司教の葬儀はなぁ……でも、影響力を考えると無視もできないし。

この辺が、大半の大貴族の心情なのだと思う。

「バウマイスター伯爵がいて幸いでした。早めに王都に向かわないで済んで」

魔導飛行船を使っても、移動で数日無駄にしてしまう。
領地の統治や寄子達への対応で忙しいブライヒレーダー辺境伯か

らすると、無駄な時間に感じられてしまうのであろう。

「若い方が亡くなると葬儀も悲しくなりますが、総司教は……いくつでしたっけ？　ブランターク」

「確か八十半ばくらいかと」

「最近の総司教は、本当に死ぬまで辞めませんね」

「辞められるのですか？」

「ええ、本人にその気があればですけど」

ああ、そうか。

ケンプフェルト枢機卿が、五年だけ総司教をやるって言ってたものな。

総司教が生きたまま引退すると、上皇という名誉職が与えられて年金も出るそうだ。

ところが、年金の額よりも総司教の給金の方が高いからなかなか辞めない傾向にあった。

本人が辞めたがっても、家族が押し留めるケースも多い。

そのせいで、近年では総司教に就任する年齢が上昇するばかりなのだそうだ。

「昔は、数年で潔く辞めてしまう人が多かったそうですよ。結構大変なお仕事ですからね。年を取っても地位に汲々とする。嫌なお話です」

その辺も、教会関係者が微妙な評価を受ける原因になっていた。

敬うし寄付も出すけど、あまり深入りしたくない。

という信者を増やす原因になっていたのだ。

「次の総司教は……ホーエンハイム枢機卿が出馬しないと聞いたので本命はなしですね。バウマイスター伯爵は何か聞いていますか？」

「はい」

ホーエンハイム枢機卿が、ケンプフェルト枢機卿の支持に回る。

この件は話してもいいと言われていたので、俺はブライヒレーダー辺境伯に事情を説明した。

「なるほど。やはりホーエンハイム枢機卿は侮りがたいですね」

「初の女性総司教誕生の生みの親ですか」

「それを話題にする方は多いでしょうけど、肝心なのはそこではないですよ」

自分が総司教になると、力を持ちすぎだと周囲から非難される可能性がある。

そこで、一旦ケンプフェルト枢機卿の支持に回る。

ケンプフェルト枢機卿はホーエンハイム枢機卿ほど支持基盤が強くないから、円滑に総司教をしたかったらホーエンハイム枢機卿に頼らないといけない。

本人は繋ぎでしか引き受けないからそれに不満もなく、彼女の次はまだ五十代と若い腹心のポーツァルが総司教になる。

総司教にはならないけど、二代に渡って総司教に強い影響力を持つわけか。

教会の裏の権力者と思われるのだろうな。
本人の最大の目的は、教会がバウマイスター伯爵家に必要以上に介入しないようにするためだけど。

「別にそれで纏まれば私としては文句ありませんけどね。どうせ、投票権もないですし」

名誉司祭には、総司教を決める選挙への投票権がなかった。
これは、それを認めると教会に対して貴族と王家の影響力が強まってしまうからという理由による。
平民でも出世できるという教会の不文律を侵す事になるというわけだ。
とはいっても、やはり貴族出身の幹部は多いのだけど。

「エリーゼさんには投票権がありますよね？」

「はい」

エリーゼは司祭なので、総司教選挙に投票権があった。
いつの間にか、助司祭から出世していたようだ。
ちなみに、彼女では総司教選挙に立候補はできない。
教会に二十名しかいない枢機卿しか立候補できないからだ。

「選挙の方も大変そうですね……と、そろそろ時間ですか」

そろそろ葬儀の時間なので、俺達は『瞬間移動』で王都へと飛んだ。
本部前には一般市民、小身の貴族用に弔問スペースがあり、そこで手伝いの神官が花や香典を受けつけている。

「（ヴェル、凄い大金だな）」

「（エル、しぃーーー！）」

俺は慌ててエルの口を塞いだ。

名誉司祭でもあるバウマイスター伯爵が、香典で銀貨を持ってくるわけにはいかない。

本部での葬儀に参加できる者も、それなりの額を包まないといけないので、金がかかると愚痴を溢す貴族は多いのだ。

「（葬儀で黒字だったりして）」

「（黒字ですよ）」

「（えっ！　本当ですか？）」

エルは、ブライヒレーダー辺境伯から真実を聞いて驚きを隠せなかった。

「葬儀では黒字でも、亡くなられた総司教の銅像とか、説話集の作成と販売……これは無料みたいな値段なので赤字です。モミュメントの作製と設置、ステンドグラスの製造をして、新しい教会に設置したりするので、まあトントンですかね」

総司教の死は、教会にとっては一大イベントというわけか。

あとは、職人や工房に仕事を回す経済政策でもあるわけだ。

「バウマイスター伯爵、そろそろ中に入りましょうか？」

「そうですね」

葬儀会場である本部聖堂内に入れる者は少ない。
教会の幹部、王族とその家族、大貴族とその家族。
これだけで、ほぼ聖堂は埋まってしまうからだ。

俺はバウマイスター伯爵だから、ブライヒレーダー辺境伯も同じ理由、ブランタークさんは高名な魔法使いで、エリーゼは有名人だしホーエンハイム枢機卿の孫娘なので聖堂に入れる。
だが、入れるからといって幸せというわけでもない。

「（香典が高い……）」

聖堂に入れる者が出す香典の相場、伯爵で十万セントである。
日本円にして一千万円の香典。
ローデリヒが言うには、その額が相場だそうだ。
ブライヒレーダー辺境伯など、二十万セントを包んでいる。
陛下や王太子殿下はもっと多く、なるほど葬儀で大幅な黒字になるわけだ。
聖堂に入れない信者の香典も合算すれば相当な額になる。
大商人などは多めに出すのが普通で、口の悪い者は総司教の葬儀を行うと儲かるから総司教を死ぬまでやらせるのだと批判する者もいた。

俺はホーエンハイム枢機卿の手前、あまり批判できないけど。

時間になると葬儀が始まるが、この辺はまあ想定の範囲内だ。
ただ、ホーエンハイム枢機卿以下、全枢機卿が説話を始めるので非常に退屈で眠くなってくる。
ここで寝ると大顰蹙なので、寝ないようにするのが大変だ。

「……っ！」

「（エル、寝るな！）」

早速エルが居眠りを始めたので、俺は慌ててひじ打ちを入れて起こす。

「（護衛役の俺は聖堂の前までででいいじゃないか！）」

「（エルも巻き添えだ）」

「（ひでえ！）」

長かった説話が終わると、総司教の棺に順番に花などを入れていく。

他にも生前に使っていた品や、好きな食べ物なども入っていた。

何と言うか、日本の葬式を思い出す。

「（いい年をした爺さんの好物がクッキーって……）」

エルはそう言うが、神官はあまり人様の前で肉を貪り食ったり酒を飲んだりできない。

できなくもないが顰蹙を買うので、出世できるような神官はちゃんと弁えている。

そのせいで、制限がない甘い物が好きな神官は多かった。

実は、棺に好物の肉や酒を入れると問題になるので、遺族が甘い物しか入れないという人もいるそうだが。

「（俺の棺の中には、酒だけ入れてほしいな）」

「（ブランタークさんなら、そう言うと思いましたよ……）」

「（死んでまで人様に気を使って、坊主ってのは大変だよな）」

葬儀が終わると棺が聖堂の外に運び出され、そのまま火葬場へと運ばれた。

近年王都では、墓場不足と、遺体がアンデッド化しないようにという理由で火葬が推奨されていた。

田舎だと土葬の地域も多かったが、王都とその周辺は次第に火葬が増えているそうだ。

「（総司教だから土葬かと思った）」

「（大昔に死んだ総司教の遺体がゾンビになった事があってな。風聞が悪いから、火葬してしまう事になったんだよ）」

「（よくご存じですね）」

「（その総司教のゾンビを焼き払ったのは俺だから）」

極秘の任務っぽいけど、ブランタークさんも過去に色々とやっているな。

「（焼いても、スケルトンになったりして）」

「（そうならないように、高温の魔法で焼くのさ）」

「（へえ誰がって……導師？）」

総司教の棺を火葬する役は、何とあの導師であった。

火葬場には木で組まれた祭壇があり、その上に棺が乗っている。
祭壇ごと棺を魔法で焼き払うわけだ。

「（大丈夫ですかね？）」

というか、総司教の葬儀なのに意外と適当というか……。

「では！　必殺のバースト・ライジング！」

「……」

「なぜ必殺なのか？」

ブランタークさんのみならず、誰もがそう思ったはずだ。
別にそんな掛け声をかけなくても、普通に火葬できそうなものなのだが……。

「火力が大きすぎるような気も……」

もう一つ、火力が大きすぎだと思う。
火葬なのだから、少しは骨を残さないといけないのに……。
俺の心配は当たり、火葬は速やかに終了したが、焼け跡には碌に骨が残っておらず、若い神官達が懸命にわずかな骨を探す羽目になっていた。

あんまりな結果だが参列者は笑うわけにもいかず、総司教の葬儀はおかしな終わり方をしてしまうのであった。

「導師、やりすぎ」

「必殺のって、総司教はもう亡くなっていますけど」

「バウマイスター伯爵、その指摘はいかがなものかと……」

葬儀終了後、俺達は導師と合流して近くの喫茶店でお茶を飲んでいた。

よく見ると、同じく葬儀に参加していた者達もちらほらと見える。

みんな、堅苦しい葬儀が終わって気を和らげているようだ。

「そんな席で、必殺のと言えてしまう導師が凄いですね」

「遺体を火葬するだけなのだから、他の魔法使いを呼べばよかったのである！　それを王宮筆頭魔導師だからという理由で某を呼ぶからである！」

あれは、意趣返しだったのか。

というか、よく教会に喧嘩を売れるよな。

導師だからこそできる行為だと俺は思ってしまった。

「葬儀が終わったので、次の総司教を決める選挙ですね」

「選挙で選ぶのですね」

「昔は密室で決めていたらしいですけどね」

その方法だと王族や貴族の総司教ばかり出るので、信徒達の不満

が溜まってしまったそうだ。
ちょうどその頃に腐敗したカソリックに対抗すべくプロテスタントができた時期であったりしたため、多数いる平民階層の神官や信徒達の不満を逸らすべく、投票によって総司教を決めるようになった。

「選挙になって、ようやく貴族と平民で半々くらいの比率になったそうですよ」

ただ、平民出身の総司教も実家が金持ちだったりとかするのであまり変わらないという意見も多いそうだ。
それでも、以前よりはマシだと信徒達からは思われているらしい。

「投票権がある司祭以上の階級にある人間の七割が平民出身者です。彼らの支持をいかに取り込むかが総司教に選ばれるポイントだそうですよ。私は投票権がないですけどね」

大金を叩いて名誉司祭になっている貴族や大商人には投票権がなかった。
つまり、俺にもないわけだ。

「導師もないですよね？　投票権」

「いや、あるのである！」

そういえばそうだった。
導師は聖魔法が使えるから、司祭に命じられていたのだ。
それにしても、こんな信仰心の欠片もない人を……せめて名誉司祭にできなかったのだろうか？

「誰に入れますか？」

「候補者がさっぱりわからないのである」

「導師、それを自慢げに言うなよ……」

一応、王宮筆頭魔導師なんだからさと、ブランタークさんが導師に釘を刺した。

「世の中には、もっと気にしなければいけない事が沢山あるのである！　エリーゼにでも聞いて、適当に投票するのである」

導師、さすがに適当はまずいと思いますよ。

「投票の日、エリーゼと二人だけでは寂しいのである！　バウマイスター伯爵、つき合うのである！」

「（なんでだよぉーーー！）」

断るのも勇気がいるため、俺も仕方なしに投票について行く事になるのであった。

「今日が投票日？　それにしては準備が……」

「あなた、今日は違いますよ。立候補締め切りと、立候補したと名

乗りをあげるための日です」

総司教の葬儀から三日後、俺とエリーゼは再び教会本部に向かう。
今日は、総司教選挙に立候補する人物が、本部中庭で名乗りを挙げるのだそうだ。
なぜ中庭なのかというと、その中庭が昔の聖堂の跡地だからで、そこの地下に教会を建設した始祖が眠っているのだという。
本当に眠っているのかは、俺にはわからなかったけど。

「始祖様に、自分が総司教に立候補すると宣言するのです」

中庭での宣言は、投票権がある全員が聞けるわけではない。
詳細はすぐに纏められ、王国中の司祭以上の者に伝えられる。
王都まで投票に来れない人は、投票用紙に記載して運んでもらうそうだ。

そんな事が可能っていう時点で、教会は大きな力を持っているんだよな。
いわば、宗教世界の王様を選ぶ選挙というわけだ。

「導師は来ないよなぁ……」

「はい……」

今朝、エリーゼに候補者を聞いておいてくれと、導師から魔導携帯通信機で連絡があった。
投票も、エリーゼがよさそうだと思う候補でいいそうだ。
というか教会、なぜ導師に投票権なんて与えたんだ？

「実質、エリーゼが二票持っているようなものだな」

「二票でも大した影響力はありませんけど……」

投票権がある者だけで三千名以上もいるので、確かに微々たるものか。

「ホーエンハイム枢機卿から、ケンプフェルト枢機卿が出馬するのは聞いているから、問題は他の候補者だな」

「お爺様が出馬せずにエミリー様を推薦しているので、ほぼエミリー様で決まりだと思います」

ホーエンハイム枢機卿の派閥に属する人達は、ほぼ全員ケンプフェルト枢機卿に投票するだろうからな。

「私も、エミリー様に投票しようと思います。エミリー様は、奉仕活動に熱心ですから」

大商家の実質的なオーナーであるケンプフェルト枢機卿は、今の教会で一番奉仕活動に熱心な人物なのだそうだ。

同業者達から寄付を集めるのも上手で、その中からいくらかを自分のポケットに……などという事にも無縁、これはケンプフェルト枢機卿が大金持ちだからだろうけど。

わざわざ小銭を着服して、自分の評判を落とすような真似はしないであろう。

孤児を教育して、自分の商会に職を用意したりもしている。

ケンプフェルト商会の幹部には、孤児出身者も多いそうだ。

すべて商売で儲けるためにやっているのだが、それで実際に救わ

れている人も多いわけで、ケンプフェルト枢機卿は庶民には人気がある枢機卿であった。
ちなみにホーエンハイム枢機卿は、陛下からも妖怪扱いされているせいであまり人気はない。
俺に言わせると、ケンプフェルト枢機卿の方がよほど曲者のような気もするが……。

「予想よりも出馬した人が少なく、お爺様は対策で大忙しのようです」

支持基盤が薄い立候補者が複数出て得票が分散し、ホーエンハイム枢機卿とその派閥の支持するケンプフェルト枢機卿の当選を阻むというわけか。
あれ？
でも、ホーエンハイム枢機卿の派閥は最大派閥だったはず。
当選できないという事はないような……。

「当選できなくても、立候補をする人は多いのです」

「自分の力を誇示するためか」

「はい」

得票率二割で当選できなかったとしても、その立候補者は二割の力を持っている事になる。
総司教が交替すると、色々な役職も交替になる。
当選した新しい総司教は、自分のライバルの派閥にも一定の配慮しなければいけないわけだ。

それを聞くと、やはり宗教というものは好きになれない。

「新しい総司教の得票数が少ないと、指導力が弱いと見られます」

帝国の皇帝を決める選挙と違って、そうそう全国から投票用紙を集められない。

過半数に達しないとやり直しというルールがなく、過去には得票率が三割くらいでも当選してしまう総司教がいた。

当然そういう人は力がないので、ホーエンハイム枢機卿はケンプフェルト枢機卿のために得票数を少しでも増やそうと活動しているようだ。

なるほど、そこに信仰はないと、ホーエンハイム枢機卿の言ったとおりだな。

「候補者は四名か……」

ケンプフェルト枢機卿は勿論、他はラングヤール枢機卿、ブュヒャー枢機卿、ゾルガー枢機卿という顔ぶれだ。

ラングヤール枢機卿は七十五歳、傍流ながら王族の出だそうだ。

教会建築の仕事に長年携わってきたので、建設を行う商会、教会内の装飾品、ステンドグラスを作る工房に顔が利く。

日本の政治家でいうと建設族か……。

ブュヒャー枢機卿は七十三歳、彼も貴族の出だ。

聖書を含む書籍を印刷、販売する仕事に長年関わってきた。

書籍の校正、印刷、製本を行う工房、書店にも顔が利くから文教族か。

ゾルガー枢機卿は聖堂騎士団のトップなので、あまり神官には見

えなかった。
筋肉で神官服がピチピチなのだ。
彼は平民の出で六十八歳、候補者の中で一番の若手だ。
六十八を若手と呼べてしまうのが教会という場所であった。
彼は聖堂騎士団に装備を卸す工房に顔が利く、防衛族というわけだ。

「（何か、〇民党の総裁選みたい……）」

選挙という民主的な手段で総司教を決めるはずなのに、どこか生臭いんだよなぁ……。

立候補宣言を聞いた足で、俺とエリーゼはホーエンハイム子爵邸へと寄った。
今日は、ありがたい事にパーティーに招待してくれるそうだ。
ご馳走が一杯食べられて嬉しいなぁ……って、そんなわけあるか！

主催はケンプフェルト枢機卿で、ホーエンハイム枢機卿が共催という怪しさ満点のパーティーだ。
一応会費制らしいが、その金額はわずか十セント。
神官が主催するパーティーなので酒は出ないが、ケンプフェルト商会がバックアップするのでいい料理が出てくるであろう。
会費は、孤児院の建設費用として全額寄付される予定になっている。

そういえば、まだ生きていると思う田舎のお爺さんが言ってたな。
昔は地元の政治家が安い会費で歌舞伎鑑賞とか、温泉旅行に連れて行ってくれたって。
あきらかにそれと同じだよなぁ……。

「すまないが、この席だけは顔を貸してくれ」

「はあ……」

俺に投票権はないが、ホーエンハイム枢機卿の義孫だからパーティーに顔を出す事に意義があるのであろう。

ホーエンハイム枢機卿は、全力でケンプフェルト枢機卿を支援すると周囲に表明するわけだ。

「初めまして、バウマイスター伯爵です」

「妻のエリーゼです」

俺とエリーゼは、ホーエンハイム枢機卿についてパーティー参加者に挨拶をしていく。

とてつもなく面倒だが、これもフリードリヒ達の未来のためだ。

子供達よ。

お父さんは、お母さんと共に頑張っているぞ。

「ホーエンハイム枢機卿、バウマイスター伯爵、聖女様の支持か……ケンプフェルト枢機卿の勝ちは固いかな？」

「あとは、残り三名の立候補者がどのくらい票を取れるかですな」

パーティーの参加者は、ちょくちょく出入りを繰り返している。

実は、他の候補者も似たようなパーティーを主催しており、掛け持ちをしている神官も多かった。

パーティーを開けない神官は立候補すらできないというわけだ。

「盛況だな、エミリー」

「支援者が素晴らしいからよ」

ホーエンハイム枢機卿と共にケンプフェルト枢機卿に挨拶に行くと、彼女の周囲には多くの女性神官達がいた。

投票権を持つ年嵩の司祭以上だけ……かと思ったら、俺達とさほど年齢が違わない少女達も沢山いる。

「可愛い娘達ばかりでしょう？　バウマイスター伯爵」

「おい、エミリー」

即座にホーエンハイム枢機卿が、ケンプフェルト枢機卿に釘を刺した。

俺に若い女性を押しつけようとしている風に見えるからだ。

「そんなつもりはないわよ。あなたがバウマイスター伯爵に対するガードを固くしちゃうから、顔を見たいって娘が多いのよ。この娘達の親御さんも支持者だから」

「お前なぁ……」

そう言われてしまうと、ホーエンハイム枢機卿も反論できない。

実際に顔を合わせた結果、俺が彼女達を見初める事があってもそれは仕方がないよねという意図が見え隠れする。

ケンプフェルト枢機卿……相当に食えないばあさんだな。

「初めまして、リーファ・ケンプフェルトです」

しかも、何気にケンプフェルト枢機卿の孫娘が数名混じっていたりする。

ケンプフェルト商会ほどの大規模な商会になると、子弟を教会で手伝わせるのが普通だ。

大半が嫁入り修行も兼ねたお手伝い程度のものだが、子育てが終わると教会の活動に戻る女性も多い。

彼女達も、そんな人生設計を立てているのであろう。

「デムミン通りに新しいお菓子のお店ができたんですよ」

「へえ、どのようなお菓子なのでしょうか？」

「シュトロイゼルクーヘンの専門店なのですが、中に入っているフルーツがバウマイスター伯爵領産のフルーツなんです。他のシュトロイゼルクーヘンとは違う美味しさだって評判ですよ」

「それは知りませんでした」

同年代の女の子達と話す。

いまだにその手の経験値が貯まっていない俺であったが、話題が王都に新しくできたお菓子屋やレストランのお話なので助かった。

最近、バウマイスター伯爵領産のフルーツや魔物の肉を用いたお店の新規オープンが増えているそうだ。

女性は食べ歩きなどが好きである。

教会に手伝いに行っている時以外は普通の女の子という事もあり、この手の話題が豊富であった。

まあ、俺の好みがよく研究されているわけでもあるが……。

やっぱり、ケンプフェルト枢機卿は食えない婆さんだ。

「今度、一緒にいかがですか？」

「最近は忙しいので、機会がありましたら」

あくまでも社交辞令の範囲で了承の返事を出しておく。

まあどうせ、俺のスケジュールを管理するローデリヒが弾いて終わりだ。

楽しく話はしているけど、これはあくまでもケンプフェルト枢機卿の選挙支援の一環だ。

「ご苦労じゃったな、婿殿。おかげで、ケンプフェルト枢機卿の大勝利は確定した。まあ、相変わらずの食えない幼馴染じゃが……」

個人的には仲のいい幼馴染だが、教会内ではライバルでもあるというわけか。

隙あらば俺に女性を送り込もうとするあたりは、この二人、夫婦になったらお似合いだったかも。

「あなた、そろそろ戻りましょうか？」

「そうだな」

エリーゼはパーティー中は、俺の正妻として上手く振る舞っていた。

ケンプフェルト枢機卿が多くの女性神官を連れて来た時も、表面上は無難に対応している。

でも、さすがにいい気分がしないのは確かで、そのくらいは女性に疎い俺でもわかる。

そこで、戻る前に王都でデートをしていく事にした。
エリーゼも出産や子育てで大変なので、こういう時間を作った方がいい。
彼女は真面目なので、上手く息抜きをさせないと育児ノイローゼになるかもしれないからだ。
他の奥さん達も、たまに連れて来た方がいいかもしれない。

「このお店、ブランタークさんの知己が開店させたんだってさ」

「ブランタークさんのお知り合いといいますと、冒険者の方ですか？」

「みたいなんだよ」

女性を連れてのデートなので、向かったのは女性向けの洋品店であった。
最近オープンしたばかりだが、なかなかに好評だというブランタークさんからの話だ。
洋品店でブランタークさんの知己がオーナーだというから女性かと思ったら、男性らしい。
男性で冒険者で、洋服に興味があるというのも妙であったが、店内に入ってオーナーと顔を合わせたら納得できた。

「あら、いらっしゃい。ブランタークちゃんのお弟子さんで、竜殺しの英雄バウマイスター伯爵様ね。うーーーん、若くていい男」

「どうも……」

「……」

彼は、いわゆるオカマさんであった。
多分、ブランタークさんとそう年齢も違わないはずだ。
男性なのに、化粧をしてスカートとフリルのついたシルクのYシャツを着ているが、まったく女性には見えない。
導師ほどではないが筋肉質で、シャツの上からでも筋肉が凄いのはわかってしまう。
冒険者としても、相当に実力があったはずだ。

「バウマイスター伯爵様、私の事はキャンディーって呼んでね」

「はい……キャンディーさん……」

「……」

何とか気力を振り絞ってそう呼んでみたが、五十超えでマッチョなオカマキャラの迫力に俺は圧倒された。
俺は、前世でこういう人は見た事があるからまだいい。
会社の接待で、何度かオカマバーに行った事があるからだ。

お嬢様育ちであるエリーゼは見慣れないオカマに衝撃を受けたようで、言葉を発する事ができないようだ。

「私、こんな成りだけど、中身は乙女ちゃんなの」

乙女ちゃんて……久々に導師に匹敵するとんでもない人物が出現したようだ。
『乙女とか抜かすな！　オカマ野郎！』とか言ったら、殴り殺されそうなイメージしか浮かばない。

「ブランタークさんとは、古い知り合いなのですか？」

「そうなの。ブランタークちゃんて、若い頃は可愛かったのよ。私も狙っていたんだけど、彼はノンケだからお友達にしかなってくれなかったの。あの人、女の子の扱いが上手だから私を翻弄してくれたのよ」

「……」

俺の隣にいるエリーゼは、半ば機能を停止していた。

同性愛は教会ではタブーであるし、キャンディーさん自体がこんなに濃いキャラをしている。

どう対応していいものか、頭が処理し切れていないのであろう。

「ブランタークさんとは、冒険者仲間だったのですか？」

「たまに、臨時でパーティを組んだりしてね」

さすがのブランタークさんとアルテリオさんも、この人と常時パーティを組む精神力はなかったみたいだな。

「キャンディーというのは、冒険者時代のニックネームみたいなものですか？」

「私の本名ってバルストなんだけど、似合わないから魂のネームがキャンディーなの」

魂って……見た目だけで言えば、凄く似合っている名前だけどな。

バルストって、格好いい名前だし。

「冒険者時代もキャンディーで通していて、現役時代の二つ名は『血塗れキャンディー』って言われてたわ」

血塗れって……このおっさんが怪我をするとは思えないから、魔物の返り血をよく浴びていたとか、そんな理由なんだろうな。

というか、この人魔力はないけど隙がないというか、尋常でない実力の持ち主だ。

「冒険者なのに、洋品店って珍しいですね」

「私、小さい頃からお洋服を縫うのが得意だったの。でも、小さい頃から実家が貧乏で、仕方なしに冒険者になったのよ」

冒険者として家族の生活を支え、ようやく引退して洋品店を開いたというわけか。

それにしても、そんなにゴツイ指でよく女性用の洋服が縫えるものだと感心してしまった。

「奥さんのお洋服ね。いいわ、似合うのを見繕ってあげる」

「お願いしようかな。エリーゼ、見てもらいなよ」

「はい……」

見た目が見た目なので、最初エリーゼはキャンディーさんをえらく警戒していた。

神官としても、オカマさんと仲良くするのはどうかという考えなのだと思う。

でも実際に服を見てもらっていると、すぐに仲良くなったようだ。

キャンディーさんは見た目はアレだけど、確かに乙女っぽくて物凄く女性受けがよかったのだ。

「もう少しで、この色が流行になってくるはずなの。エリーゼちゃんは髪の色が金髪だから、色が被る黄色系統の服はやめた方がいいけど、エンジ色やえんたん色系くらいまでならよく似合うわよ。青系統や緑系統だけに拘ると、レパートリーが減っちゃうものね」

「確かにそうです。あまり暗い色ばかりはよくないですよね」

「そうそう、若い娘は明るい色のお洋服を着た方がいいわ」

エリーゼが、一瞬俺を見ながらキャンディーさんとの話を続ける。幼い頃から知り合いであったケンプフェルト枢機卿が俺に孫娘達を紹介した件で、不安を感じているのかもしれない。

いや、エリーゼさん。

これ以上嫁が増えるのは、本当に勘弁してほしいんです。

あのクソババアの思惑どおりにはなりませんので。

「エリーゼちゃんは綺麗だしスタイルもいいから、基本的には何を着ても似合うけど。お母さんになったから、教会のお仕事以外の時間はもう少しアダルティーにいきましょうよ。旦那さん、あなたに惚れ直すわよ」

「本当ですか？」

「エリーゼちゃんは、もっと自信を持たないと」

「そうですね」

「そうよ、そうよ」

前世でもそうだったけど、こういう業界にはオカマさんが多かったよな。

そしてこういう人は、中身が本物の女性よりも女性らしいから、女性のハートを掴むのが上手なのだ。

「あとは、こういう組み合わせもいいわね」

ぱっと店内を見た感じ、キャンディーさんのお店で売っている商品は貴族の令嬢にでも通用する品が多かった。

展示されている服の数が少ないのは、キャンディーさんが自ら縫製したか、気に入った品しか仕入れていないからだそうだ。

彼女は……このおっさんは、お客にコーディネイトのアドバイスをしながら、その客に似合う服を薦めるという商売を行っていた。

出てきたお茶とお菓子も美味しいし、商売はとても上手いと思う。

引退前は有名な冒険者だったから資金力が豊富なせいか、お客に無理矢理商品を勧めたりしない。

そのおかげで、いい常連客を掴んでいるようであった。

ガツガツ稼ぐ必要がないから、上品に商売ができるわけだ。

まあ……店主が筋肉質のオカマな点だけはどうにもならなかったが……。

「お勧めは、これとこれね」

「じゃあ、それをいただこうかな」

「あなた、ありがとうございます」

バウマイスター伯爵が奥さんと一緒に買い物に来て、買った物の代金を奥さんに支払わせるわけにはいかないし、お屋敷内で着る服だからそこまで高いわけでもない。

俺はキャンディーさんに服の代金を支払った。

「バウマイスター伯爵様って、太っ腹。他の奥さんもコーディネートしてあげるからまたいらしてね」

見た目はちょっとアレだけど、キャンディーさんは確かに中身は乙女なんだよなぁ……などと思っていたら、突然店の外から男性の怒鳴り声が聞こえてきた。

「このクソアマ！　俺様の肩が外れたじゃねえか。治療費と慰謝料を払いやがれ！」

「そんな……先にぶつかってきたのは……」

「そんなのはどうでもいいんだよ！　俺の肩が外れちゃったの。わかるか？」

チンピラがざわと若い女性にぶつかり、因縁を吹っかけているようだ。

この通りは下級貴族街寄りだから、この手の輩が出るのは珍しかった。

もしかすると、兄貴分や親分に納める上納金が不足してこちらに出稼ぎに来たのかも。

「あなた」

「やれやれだな。町の美観を損ねやがって」

俺が顔を出せば、暴力的な手段を用いずともチンピラは逃げるはずだ。

そう思って店の外に出ようとすると、キャンディーさんの方が先に動いていた。

「バウマイスター伯爵様、私に任せて」

笑顔を浮かべながら俺にウィンクするキャンディーさんは、正直不気味だった。

彼は店の外に出ると、すぐにチンピラに絡まれていた女性の前に立つ。

「駄目よぉ、女性を怖がらせるような事をしちゃ」

キャンディーさんは、笑顔と優しい声でチンピラに手を引くようにとお願いした。

俺と同じく、暴力的な手段で排除するつもりはないようだ。

ところが、チンピラの方がまったく引く気配がない。

「何だぁ？　オカマの癖に余計な口を出すんじゃねえよ！　お前も俺に治療費と慰謝料を払うか？」

「治療費？」

「そうだよ！　俺様の肩が外れちまってよぉ！　早く医者に行かねえといけねえんだよ！」

チンピラは最初、ガタイのいいキャンディーさんに驚いたようだが、オカマ姿なのを見てすぐに舐めてかかるようになった。

「肩が外れているように見えないけど……」

「ほら、見てみろよ！　俺様の肩は外れているだろうが！」

チンピラは、外れていると自称している右肩をキャンディーさんの前に差し出した。

「そうかしら？」

目の前に肩を差し出されたキャンディーさんは、素早く触って確認する。

「外れてないわよ」

「外れてんだよ！」

「私、元冒険者でそういう怪我をした人を散々見ているからわかるけど、肩なんて外れていないわね。そういう事だから、あなたはお家にお帰りなさい」

「ありがとうございます」

キャンディーさんは、後ろに匿った女性を上手く逃がした。

チンピラに絡まれていた女性は、彼女？　おっさんにお礼を述べてからその場を立ち去ってしまう。

「てめえ！　勝手に逃がしてんじゃねえよ！」

「だってぇ、肩なんて外れてないし」

体をウネウネしながら反論するキャンディーさんは、やはりちょっとキモかった。

とてもいい事をしているから、俺もエリーゼもキモいなんて思ってごめんなさいという気持ちになってしまう。

「外れてるって言ってんだろうが！」

「しつこいわね。肩が外れるってこういう状態を言うのよ」

しつこいチンピラに、遂にキャンディーさんはキレてしまったようだ。

あっという間に、チンピラの両肩を外してしまう。

やはり、キャンディーさんは冒険者としても凄腕のようだ。

いきなり両肩の関節を外されたチンピラは、両肩をダラっと下げてしまった。

「腕が動かねえ！」

チンピラは両腕を動かせなくなってしまい、その場で悲鳴をあげた。

「肩が完全に外れていたら、腕なんて動かせないもの」

「てめぇ！　元に戻せよ」

「いいわよ、はい」

チンピラから外した肩を元に戻せと言われたキャンディーさんは、やはり一瞬で外れた肩を継いでしまった。
キャンディーさんのガタイのよさで勘違いしてしまったが、この人はとてつもなく技巧派の冒険者でもあったはずだ。

「なに人の肩を勝手に外してんだ？　おらぁ！　てめぇの店をぶち壊すぞ！」

自分の思い通りにならないチンピラが、遂に口にしてはいけない事を言ってしまった。
冒険者をしながらお金を貯め、ようやく持つ事ができたお店を壊す。

などと言われたら、キャンディーさんがキレて当然であろう。
彼は一切の予備動作なしに、チンピラをネックハンギングで宙に浮かせた。

「おらぁーーー！　俺の店に手を出したら、お前の組織をその構成員ごとバラバラに引きちぎるぞ！」

「しゅいません……」

窒息死する前にチンピラはネックハンギングを外してもらえたが、突然豹変したキャンディーさんにトラウマを植え付けられたようで、目から涙が流れていた。
俺もエリーゼも、キャンディーさんの豹変ぶりに背筋が凍る思いだ。

「今度、この近辺で見かけたらバラすぞ！」

「すっ、すいませんでしたぁーーー！」

チンピラは脱兎の如く逃げ去ってしまう。

そしてキャンディーさんは、チンピラがいなくなったのを確認すると、俺とエリーゼにいつもの笑顔を向けた。

「やだ、私ったら。ちょっとお転婆しちゃった」

「「……」」

俺とエリーゼはお互い無言であったが、言いたい事は同じであった。

決して、キャンディーさんを怒らせてはいけないのだと。

「相変わらずだな、キャンディーの奴は」

エリーゼの服を購入してから『瞬間移動』で屋敷に戻ると、ブライヒレーダー辺境伯のお使いでブランタークさんが来ていた。

本日のキャンディーさんの様子を教えると、納得の表情を浮かべている。

「あいつは、女性に優しいからな」

「そうですね」

彼女から洋服について親身になって相談してもらったエリーゼは、

ブランタークさんの発言に頷く。

「冒険者時代からそうだったんだよ。女性冒険者ともなると、色々と大変な事も多い。キャンディーはよく面倒を見ていたんだ。裁縫はプロになるほど上手だし、接客も丁寧。料理も上手でな。あいつが女だったら、俺も結婚していたかもしれないな」

ブランタークさんの考えに、俺も納得した。

確かに見た目は凄いのだけど、中身は本当に乙女でいい人なんだよな。

怒らせると大変な事になるという事実も判明したけどね。

「その辺のチンピラなんて、キャンディーなら一秒とかからず殺せるからな。魔法使い以外なら最強かもしれん」

冒険者としても超一流で大成功を収め、第二の人生である洋品店も上手く経営している。

唯一侭ならないのが、自分が男性だという事か。

『性転換』の魔法はないからなぁ……。

「エリーゼ、その服、いつもとイメージが違っていいね」

「キャンディーさんに選んでもらったんですよ」

「へえ、キャンディーさんって人、センスいいんだね」

ルイーゼは、珍しく赤系統の服を着ているエリーゼが新鮮だと褒めていた。

改めて見ると、確かに大人の女性のイメージがしていいと思う。

「ヴェル、ボクもその内に連れて行ってね」

「その内？」

「ボクよりも、先に服を見てもらった方がいい人物がいるもの。ねえ、イーナちゃん、ヴィルマ」

三人の視線の先には、俺とエリーゼが買ってきたお土産のクッキーを食べるカチヤの姿があった。

「あたい？」

「カチヤは、自分で服を選ばなすぎ！」

「服なんて、着れて見苦しくなければいいじゃん」

程度の差はあるが、一流の女性冒険者にはこういう人が多い。ついでにいうと、俺の前世もこんな感じだった。

ファッションとか言われても、何を着ていいのか迷ってしまうのだ。

結局、〇ニクロとか〇印良品とかの無難な服になってしまう。

仕事が忙しくてスーツ姿でいる時間も多かったからな。

「ある程度、自分で着る服を選べないとヴェル様が恥をかく」

「ヴィルマはどうなんだよ？」

「私は大丈夫」

ヴィルマは俺の奥さんになってから、エリーゼやテレーゼに教わって屋敷にいる時はちゃんとした服装をしている。
服の選択やコーディネートも悪くない。
ヴィルマは、俺達の中で一番環境適応能力に優れていた。
多分、平成日本に飛ばされてもすぐに順応してしまいそうだ。

「ヴィルマはちゃんとしているわよ。私も機能性だけで服を選んでいたりした時もあったけど、カチヤほど酷くないわ」

「ううっ……味方がいねぇ……」

イーナにも事実を指摘され、カチヤは一歩後ろに下がってしまう。

「姉御は……テレーゼとアマーリエが教えていたものなぁ……」

リサも、派手な衣装とメイクがないと男性と話せなかったので私服など皆無な状態であったが、テレーゼとアマーリエ義姉さんに教わって普通の服装をするようになった。
魔法使いとして仕事をする時も、あの派手な衣装とメイクは止めている。

「カチヤ、エリーゼが投票に行く時に服を見てもらえ」

「それがいいわね」

「拒否は許しません」

「わかったよ……」

テレーゼ、アマーリエ義姉さん、リサからも説得され、カチヤが

最初にキャンディーさんのお店に行く事になるのであった。

「旦那、ここは教会の本部じゃん」

「先にエリーゼが投票を済ませてからだ」

今日は、総司教を決める投票の日だ。
あらかじめ地方からの票は集めてあるので、あとは王都やその近辺にいる司祭以上が清いかどうかはわからない一票を投じる。
どうせ自分が所属する派閥の決定に従って投票する者が多いから、民主的とは……それを言うと日本の選挙も選択肢が豊富ってわけでもなかったか。

俺は、自慢じゃないけど一度も選挙の投票に行った事がないけど。
貴重な休日を潰されて堪るかと思ったわけだ。

「バウマイスター伯爵、エリーゼ。今日は狩猟日和であるな」

教会本部の入り口で待ち合わせた導師は、投票に対しまるでやる気を見せていなかった。
仕方なく来てやったという顔をしている。

「エリーゼは誰に入れるのであるか？」

「ええとですね……」

「わかったのである！　とっとと投票して、今日は狩りに行くので

ある！」

導師はエリーゼが投票する候補者の名前を聞くと、駆け足で投票所へと駆け込んだ。

「では、これにてなのである！」

素早く投票すると、『高速飛翔』で王都郊外へと飛んで行った。

出会ってからまだ五分と経っていない。

どうやら、心の底から選挙が面倒だったようだ。

「エリーゼ」

「はい、早く投票を済ませましょう」

嵐のように去って行った導師に唖然とし、その場で停止してしまった俺達であったが、気を取り直して投票のために教会本部へと入った。

「やあ、バウマイスター伯爵」

「あれ？　ルックナー財務卿って投票権がありましたっけ？」

なぜか神官でもないルックナー財務卿が、投票所の前で声をかけてくる。

「いや、ワシに投票権はないんだが、ラングヤール枢機卿の父親に昔世話になってな……」

そんなわけで、最後のお願いに協力しているらしい。

というか、財務卿なのに応援に参加させられて大変だと俺は思ってしまった。

「バウマイスター伯爵には、投票を頼めないよなぁ……」

「その前に、俺には投票権はないですし」

俺はあくまでも、エリーゼの付き添いで来ているのだから。

「エリーゼは自分で最善だと思った人物に投票するでしょうし、俺は本当に付き添いだけですよ」

「そうだったな。まあ、どうせバウマイスター伯爵へ投票の依頼なんてできないがな」

ルックナー財務卿は、新しい投票者を見つけてラングヤール枢機卿への投票を依頼していた。

選挙の最後のお願いみたいである。

「よう！　バウマイスター伯爵じゃねえか」

ルックナー財務卿と別れた直後、続けてエドガー軍務卿の姿も見つけた。

彼も特定の候補者の応援をしているようだ。

というか、現役の閣僚がそんな事をしていいのであろうか？

「せっかくの休みなのに、投票の応援で潰れてしまったぜ」

「ゾルガー枢機卿の応援ですか？」

「王国軍にいた頃に世話になった人でな……あとは、聖堂騎士団と王国軍との絡みもあるな」

軍と聖堂騎士団は別の組織だが、聖堂騎士団の中には一定数軍を退役した者が所属している。

軍事関連の情報……新しい武器や装備品、戦術、軍政関連の知識を得るため、聖堂騎士団が王国軍に幹部候補生を送り出すケースもある。

軍を退役した年寄りが、天下りで聖堂騎士団に臨時で雇用されるケースもあった。

人材交流があるので、エドガー軍務卿も気を使うというわけだ。

軍務卿として投票の応援をするのは問題のようで、わざわざお休みの日だと強調していた。

ルックナー財務卿も同じである。

「頼まれても、俺に投票権はありませんよ」

それに、エリーゼもゾルガー枢機卿には投票しないと思う。

「逆にゾルガー枢機卿に入れたら問題があるものな」

「何か、拍子抜けな応援ですね」

俺はエドガー軍務卿が、もっと強く投票を依頼するかと思った。

「投票権があるのはバウマイスター伯爵の奥方だし、ホーエンハイム枢機卿の孫なんだから、ゾルガー枢機卿に入れるわけにいかないのはわかっているんだよ」

ここで強引に、ゾルガー枢機卿に投票してくれと頼むと問題になるわけか。
ルックナー財務卿も同じような理由なんだろうな。

「どうせゾルガー枢機卿は選ばれないし。あとはどのくらい票を取れるかだが、ゾルガー枢機卿は頭もいいからな。大体の得票数は掴んでいるよ」

大体予想通りの票数を確保できそうなので、これなら聖堂騎士団の重鎮としてある程度の影響力を維持できそうだ。
ラングヤール枢機卿も、ブュヒャー枢機卿も最初から当選は狙っていない。
ホーエンハイム枢機卿がケンプフェルト枢機卿を支持した時点でそれはわかっているというわけだ。

「俺達もよぉ。貴族として、敬虔な信徒としてこうやって縁のある枢機卿の応援で顔を出さなきゃいけないわけだ。参加しないと、あとで面倒だからな」

渡世の義理というべきか、こうやって選挙応援に参加しましたからねとアピールしないといけないわけか。
結果はある程度わかっているが、応援に参加する事に意義があるわけだな。

会社の組合の選挙応援に似ているな。
顔も知らないおっさんに投票してくれ、立候補後の決起集会に出てくれと、本業でクソ忙しいのに参加したからな。
あれ、参加を拒否すると、社内で孤立するリスクが高いし。
俺も一応は出世したいとか思っていたから、組合関係の雑務を断るという選択肢はなかった。

ルックナー財務卿も、エドガー軍務卿も、貴重な休日をご苦労さんというわけだ。
俺は二人にちょっと同情してしまう。

「そろそろ行きますね」

「そうだな、俺はもう少しここにいないとな」

投票箱が置かれている本聖堂の中に入ると、ケンプフェルト枢機卿が自分の投票を行っていた。
彼女は様々な年代の女性神官を大量に引き連れ、彼女達の熱い声援を受けている。
ケンプフェルト枢機卿の選挙戦略は、史上初の女性総司教という触れ込みであった。
前世でもあったが、女性の支持が大きいというわけなのであろう。
支持者の前で投票するのは、これもテレビで見た事がある。
典型的な政治的パフォーマンスというわけだ。

「あら、エリーゼも投票なの」

「はい」

「清き一票をお願いね」

ケンプフェルト枢機卿は、やはり食えないばあさんだ。
エリーゼが自分に入れるのをわかっていて、清き一票をだなんて言えるのだから。

「投票が終わったら、お茶でもいかがかしら？」

「お忙しいのでは？」

「もうやる事はないわ。私も投票を済ませたから」

「では、少しだけ」

本当はこの後、カチヤを連れてキャンディーさんの店に行こうと思ったのだが、少し予定が変わってしまった。

断るのも失礼だし……などと思った俺が甘かったのかもしれない。

ケンプフェルト枢機卿は、本聖堂内にある会議室のような広い部屋に俺達を案内した。

そこは選挙事務所のような使い方をしている部屋のようだが、既にほとんどの仕事は終わったと、テーブルの上に大量のお菓子とティーセットが置かれていた。

そして……。

「すげえなぁ。若い女の子ばかり。これは素晴らしい」

「エル、嫁さんに言いつけるぞ」

「ヴェルこそって……嫁さん二人いるんだよな」

エルは、部屋にいた多くの若い娘さん達に鼻の下を伸ばしていた。

気持ちはわからなくもない。

綺麗どころばかり揃っているからだ。

ケンプフェルト枢機卿の選挙応援をしていた若い神官に、神官服は着ているがあまり神官ぽくない娘も多い。

多分、普段は教会にボランティアで来ている娘達だ。
ほとんど投票権を持っていないはずで、その目的は……。

「バウマイスター伯爵様に会ってみたいという娘が多くてね。ちょっとお時間を頂けるかしら」

「はあ……」

やはり、ケンプフェルト枢機卿は食えないばあさんだ。
俺を出汁に、この娘達の親に投票の依頼や選挙資金の援助などを頼んだのであろう。
ホーエンハイム枢機卿の手前、この娘達を強引に嫁に貰えとは言わないが、顔を合わせた結果、俺が彼女達を見初めても仕方がないよねという形にしているのだと思う。

「さあ、どうぞ」

この茶会は、投票権もない俺が主役のようだ。
真ん中の席に座らされ、周囲を神官服を着た若い女の子達に囲まれる。
気分はさながら、女の子を大量に指名したキャバクラのようであった。

「バウマイスター伯爵様、私はマルガレータ・テンツラーと申します。食料を扱うテンツラー商会が実家です」

「フリーダ・フォン・ロッシュです。ロッシュ騎士爵家の娘です」

次々と自己紹介されるが、数が多くてなかなか覚えきれない。
ケンプフェルト枢機卿が傍に置いて実家に支援を頼む娘達なので、

下級貴族や商会の娘が多かった。
特に綺麗な娘の中には、一般庶民の娘も多い。
彼女達は、俺が気に入るかもしれないからというチョイスであろう。

「エルヴィンさんは、バウマイスター伯爵家でもいちにを争う重臣だとか？」

「いやあ、そんな事はないんですけどねぇ……」

どうやら、エルもターゲットのようだ。
彼も若い子達に囲まれて鼻の下を伸ばしている。
あとでハルカに知れたら、刀で斬り殺されるかも。

「お茶のお代わりをどうぞ」

「バウマイスター伯爵様、このクッキーは私の実家で大人気の品ですよ」

エルはとっくに、俺も若い女の子達に囲まれ、お茶を注いでもらったりしている内に段々と気分がよくなってきた。
あきらかにケンプフェルト枢機卿の罠なのだが、実際問題、この誘惑に抗うのは難しい。
女の子達とお茶を飲みながらお話しているだけ。
浮気じゃないと思ってしまうからだ。

「バウマイスター伯爵様、このタルトは美味しいですよ。食べさせてあげますね」

「さすがにそれは……」

「遠慮なさらずにどうぞ」

「じゃあ……」

周囲の空気に呑まれて少しくらいいいかと思ったその時、突然俺は殺気の籠った視線を二つ感じた。

慌ててその方向を見ると、そこには笑顔でお茶の入ったカップを持っているエリーゼとカチヤの姿がある。

二人は笑顔を崩していないが、俺にはその笑顔がとても怖く感じてしまった。

「ええと……子供じゃないから……このタルトは美味しいなぁ……野イチゴの酸味がちょうどいいアクセントで」

「エルヴィン様、今度時間があったら実家に遊びに来てくださいね」

「俺も護衛で忙しいから機会があればだけど」

「ありがとうございます」

俺はエリーゼとカチヤのおかげでこれ以上は崩れなかったが、エルは沢山の綺麗な女の子に囲まれて理性を失ったようだ。

何人かの女の子と連絡先を交換していた。

ケンプフェルト枢機卿の思惑どおりに動いてしまうとは……。

だが、家に帰ればハルカ達に何を言われるやら、それまでの楽しみだと、俺はお茶とお菓子を楽しむ事に集中するのであった。

「あのばあさん、かなり露骨だよな。旦那も鼻の下を伸ばしてさ」

「失敬な。俺は常に冷静だぞ」

「そうかな？　最初の頃はさも仕方がないみたいな顔をしながら、物凄く楽しそうだったぜ」

前世の接待で行ったキャバクラのようで楽しかったのは否定しないけど、エルのように鼻の下は伸ばしていないと思う。

「支援者対策であなたに会わせますという名目なので断れません。お爺様は、ケンプフェルト枢機卿様の支援を約束しているのですから」

ケンプフェルト枢機卿の罠で、楽しいお茶会は二時間ほどで終了した。

俺は誘惑になんて負けていない。

だって、エルみたいに何人かの女の子と連絡先の交換なんてしていないから。

「俺はヴェルの盾となるべく、わざと鼻の下を伸ばして連絡先の交換などをしつつ、向こうの期待を俺に引き寄せたのだ。これは、俺の策なんだ」

「嘘臭っ！」

エルの言い分を、カチヤはすぐさま否定した。

俺も、本能のままに楽しい時間を過ごしていた風にしか見えない。

「では、エルヴィンさんは連絡先を交換した紙を活用なさらないのですね？」

「これは……ローデリヒさんと相談してからだな。ほら、商会の娘さんが多いから、バウマイスター伯爵家との取引で有利になるかもしれないし……」

エリーゼに冷たく問われても、エルは連絡先を交換した紙は使い道があると言い張った。

色々と経験を積んだおかげで、上手い言い訳を考えられるようになったみたいだ。

「わかりました、ハルカさんにはそのように報告しておきます」

「なっ！」

ただし、やはりエリーゼの方が一枚上手であった。

「連絡先の件は、ちゃんとローデリヒさんに伝えてくださいね」

「ううっ……」

エルがエリーゼに言い含められて肩を落としたところで、俺達はキャンディーさんのお店に到着した。

「旦那、あたいは他のお店でも……」

「えっ？　何で？」

「カチヤさん、キャンディーさんのお店にはいい品が多いですよ」

なぜかカチヤが嫌がって俺とエリーゼが不思議に思ったのだが、その理由はすぐに判明した。

「あらぁ、カチヤちゃんじゃないの」

「やっぱり、覚えられていたぁーーー！」

「当たり前じゃないの。カチヤちゃん、素材はいいんだから」

「知り合いなんですか？」

「そうよ」

キャンディーさんによると、カチヤとの最初の出会いは彼女が駆け出しの冒険者だった頃だそうだ。

「カチヤちゃんは可愛いのに、お洋服に全然興味を持たないんだもの。私、注意したのよ」

「冒険者としての注意なら受けるけど、服はいいじゃないか。別に変な格好とかしてないし」

ああ、カチヤは俺によく似ているな。

前世の俺は、本当に服に興味がなかったからな。

サラリーマンになったのも、スーツを着ていれば様になるからだ。

カチヤも、冒険者としての装備をちゃんと整えれば、プライベートなんて見苦しくなければいい程度の認識なんだ。

それを、せっかく可愛いのだからとキャンディーさんが注意した。
高名な冒険者が新人の自分に声をかけたと思ったら、もう少し可愛い服を着ろでは、カチヤも混乱したかもしれない。

「こういう娘が多いから、私はお洋服屋さんになったのよ」

「あんた、まだ全然冒険者として衰えていないじゃないか！　冒険者を続けろよ！　業界の大損失だぞ！」

カチヤは、キャンディーさんの引退は冒険者業界にとっての損失だと言い切った。
やっぱり凄い人だったみたいだ。

「えーーーっ、私、こっちのお仕事の方が性に合ってるしぃ。冒険者って、私お転婆になりすぎちゃうから嫌なの」

先日のチンピラへの態度を見れば一目瞭然だ。
二つ名持ちの凄腕で、その二つ名が『血塗れキャンディー』だものな。
見た目どおり、パワータイプの前衛で戦士、スピードも悪くないから、魔物にとっては災難だったと思う。
血塗れという二つ名があるにしては体に傷がないから、血塗れなのは魔物の血で塗れていたって事だ。

「……」

「どうした？　エル。急に静かになって」

「何なの？　このおっさん」

気持ちはわかる。
初見だと、どう接していいかわからないものな。

「あらぁ、この子、逞しくて私の好みよ。年を取ると、ブランタークちゃんみたいになりそう」

「俺？」

エル、お前は本当に色物によく好かれるな。
瑕疵物件にいたバアさんの幽霊とか。

「私、男性用のお洋服も作れるのよ。ちょっと試着してみましょう」

「いえ……俺は、今日はお館様の護衛で……」

「あらぁ、奥ゆかしいのも私の好み」

「ですから、俺は……」

「試着させてあげる」

「俺は仕事でぇーーー！」

エルは、キャンディーさんによって強引に店の奥に連れ込まれて行った。
当然エルは抵抗したが、パワーでも、冒険者としての力量でも敵うはずがない。
抵抗も空しく、キャンディーさんによって引きずられていく。

「エルの抵抗を子供のようにあしらうとか……」

世の中には、凄い人が一杯いるなと俺は思った。

「脱がせてあげる」

「自分でできますから！」

「奥ゆかしくて可愛いわね。あらぁ、ちゃんと鍛えてあってとても素敵」

「「「……」」」

店の奥でエルが大変な事になっているが、俺もエリーゼもカチヤも止める気が起きなかった。

キャンディーさんによって、必ず阻止されてしまうような気がしたからだ。

「ヴェル、恨むぞ……」

「似合っているじゃないか」

ちょっと前までキャバクラ状態で天国だったのに、キャンディーさんに気に入られて地獄に突入か……。

世の中ってのは、、ちゃんとバランスよくできているようだ。

「でも、本当に似合っていますね」

「エルヴィン、少し大人っぽく見えるな」

見た目はアレだけど、キャンディーさんのセンスは凄いと思う。
一見シンプルに見えるけど、上質の素材を用いた服のおかげでエルが大人になったような雰囲気を感じたからだ。

「エルヴィンちゃんはバウマイスター伯爵様の家臣なんだから、このくらいのセンスがないと、王都で他の貴族の家臣にバカにされるわよ」

「言い返せない……」

バウマイスター伯爵家は、これからも大きくなっていく。
重臣であるエルがダサイ格好していると、俺の評判も落ちるという事か。
キャンディーさん、見た目で損しているけど優しい人だよな。

「こういう服装だと、鍛えたエルヴィンちゃんの体の線も出ていて素敵ぃーーー！」

そこに実利もあったみたいだ。

「でもぉ……」

「あれ？」

突然キャンディーさんが、エルの左胸を指で軽く突いた。
すると、それだけでエルは体のバランスを崩してしまう。

「私、男の子の筋肉は大好きだけど、エルヴィンちゃんは左右のバランスが悪すぎ」

「そんなバカな……」

やはり、キャンディーさんは強い。

あのブランタークさんが一目置くのだから当然か。

今のエルだと、戦っても子供のようにあしらわれるはずだ。

「剣を持つ右側が強すぎなのよねぇ……でもぉ、せっかく鍛えた右側を衰えさせるのは駄目だから、もう少し左側を鍛える頻度を上げないとね。剣士はどうしても剣を持つ方が強くなってしまうけど、左右の差が小さい方がいいものね」

冒険者の先輩として、キャンディーさんはエルに鍛錬方法のアドバイスをした。

その鋭い指摘に、エルは静かに聞き入っていた。

「そうやって鍛えられたエルヴィンちゃんはもっと素敵かも」

「あの……俺、妻帯者なので……」

「あらぁ、残念。真実の愛ってどこにあるのかしら？」

キャンディーさんの哲学的な問いに、俺達は答えを出す事はできなかった。

「カチヤちゃんにもいい服があるのよ」

「エルヴィンで忘れられていたと思ったのにぃ！」

「そんなわけないじゃない。今日はカチヤちゃんが主役だもの」

「その割に、エルヴィンに時間をかけてたじゃないか！」

「だってぇ、エルヴィンちゃん、私の好みのタイプだしぃ」

エルで寄り道をしたが、キャンディーさんはカチヤの服を選ぶという本来の目的を忘れていなかった。

「カチヤちゃんに似合いそうな服を用意したわよ」

「あたいに似合いそうな服？」

「そう、とてもよく似合うと思うわ。試着室に準備してあるから」

「では、私がお手伝いします」

カチヤは、エリーゼの手を借りて着替え始める。

「エリーゼ、本当にこれを着るのか？」

「あら、とてもよく似合っていますよ」

「何か、動きずらいし……」

暫く着替えに時間がかかったようだが、着替え終わるとカチヤは恥ずかしそうに顔を出した。

「キャンディーさん、この服は？」

「私が考えたのぉ。素敵でしょう？」

キャンディーさんがカチヤに準備した服は、ゴシックロリータ、いわゆるゴスロリ服であった。

黒を基調としているのでカチヤの髪の色と被るかと思ったが、光沢のある黒に映えてよく似合っている。

前世で何度か見た事があるが、それよりも素材は上質で細かな刺繍と装飾にも手を抜いていない。

「旦那、これはどうなの？」

「とてもよく似合っているじゃないか。黒ってどうかと思ったけど、黒の方が似合うな」

「私もとてもよく似合っていると思います。私も黒は葬儀以外で着た事がないですけど、これはいいですね」

エリーゼも、カチヤのゴスロリ服を絶賛した。

それにしても、ゴスロリ服を自分で思いつくとは……。

実は、キャンディーさんは俺と同じく他の世界から？

それはないか。

「エルヴィン、何か言えよ」

「おおっ！　この服いいな！　ハルカさんに買って帰ろうかなぁ」

エル、それを奥さんに着せてどうするつもりだ？

というか、服よりもカチヤを褒めろよ。

「ごめんね、エルヴィンちゃん。まだこれ一着しかないの」

縫うのに手間がかかりそうだからな。

そういえば、このお店の服はほとんどキャンディーさんの手作りだったのを思い出した。

「この服の評判がよかったら、知り合いの服飾工房に注文を出そうかなって計画なの。貴族のご令嬢や若い奥さんがターゲットよ。色も色々と変える予定なの」

「価格帯でいうと、上の下くらいを狙って利益を確保するためですか？」

「あら、バウマイスター伯爵様、商売にも詳しいのね。やっぱり、お貴族様向けの商品があった方が利益を確保しやすいからよ。もうちょっと品質を落として、ちょっとお金持ちのお嬢さんを狙う計画もあるけど」

このおっさん、商売にも長けているようだ。

「なあ、もうこれで終わりだろう？」

「そんなわけがないじゃない。カチヤちゃんはどうせ滅多にお洋服屋になんて来ないんだから、沢山試着してもらうわよ」

「カチヤ、一日だけ我慢するんだ」

「旦那、実はあたいと同じ人種だろう？」

「着る服を他人が準備してくれるなんて最高！」

「同じ人種だぁーーー！」

俺も、前世ではなかなか服屋に行かなかった人間だからわかる。
切羽詰まらないと服を買いに行かないのだ。
デートでも、服屋に行くと心身ともに疲れてしまう。

そんなんだから彼女にフラれたのかもしれないが、この世界では子供の頃は持っている服が少なかった。
今は、エリーゼ達かメイドが着る服を準備してくれるので大変に楽である。

「ここで頑張っておけば、あとは二～三年くらい服を買いに行かなくてもいいかもしれないぞ」

「それは最高だな、旦那」

「あなた達、もう少しお洋服に興味を持ってよ……」

この日、カチヤはゴスロリ服を含めて結構な数の服を購入した。
それを見たイーナ達もキャンディーさんの洋品店の常連となっていき、彼の店は順調に客を増やしていくのであった。

「キャンディーさん、ゴスロリ服を注文します」

「エルヴィンちゃんの奥さんってどんな人なのかしら。楽しみね」

有言実行で、エルはハルカの分のゴスロリ服をキャンディーさんに注文した。

ゴスロリ服も、女性の間で大きく流行していく事となる。

「ヴェル様、選挙は？」

「あんな出来レース、結果など問うまでもない」

「投票に意味があるのかわからない」

「ヴィルマ、俺もわからないんだ」

総司教選挙は、下馬評どおりにケンプフェルト枢機卿が当選して教会は静かになった。

ホーエンハイム枢機卿は総司教ではないのに教会を影から支配する人物だと言われるようになり、それでもそのおかげでバウマイスター伯爵家は余計な干渉を受けないで済むとは皮肉としか言いようがなかったが。

第百三十四話　フジバヤシ家の副業と、謎じゃないけど美少女店長。

ハルカの兄で、次のフジバヤシ家当主であるタケオミさんが、バウマイスター伯爵領にやって来た。
甥であるレオンの顔を見るためと、フジバヤシ家からハルカの出産祝いを持ってきたのだ。

あともう一つ、フジバヤシ家は副業でヘルムート王国にミズホ産食品を売る仕事を始めている。
これが思いの他好調で、バウルブルクにも支店を作るために店舗候補地の下見をしに来たというわけだ。
フジバヤシ家は、ミズホ茶……まあほぼ日本茶だ……海苔、昆布、塩蔵ワカメ、保存の利く海産物の商売で成功を収めた。

ミズホ茶はマテ茶のほのかな甘みが嫌いな富裕層に人気となり、抹茶も製菓材料としての注文が増えた。
ミズホの影響でマテ茶の粉末をお菓子に使う菓子職人が増えたが、ほのかな甘みが邪魔になって味がハッキリとしないという意見が多く、それがない抹茶は大人気となっている。

昆布は出汁としての需要が、あとはワカメと同じく髪にいいという効能から庶民で髪が薄い人がよく購入するようになった。
というか、ミズホ公爵領でもワカメは髪にいいという迷信があるようだ。
俺は迷信だと思うのだが、健康にはいいものだからな。
無理に否定しようとは思わない。

庶民でも買える値段の品なので、購入した方も効果がないから詐

欺だとまでは言わないであろう。
どちらかというと、健康にいいからと購入している人の方が多いようだ。

「我が甥レオンは可愛いな。ハルカが母親ならば、刀も上手く使えるようになるだろう。私もたまに刀を教えに来よう」

「兄様、無理をなさらないでくださいね」

「何の、我が可愛い甥のためさ」

内乱時の戦功で上士の末席にはなったが、出費が増えて財政は厳しいフジバヤシ家が副業で始めたはずの商売は順調のようだ。
タケオミさんの服装は変わっていない……いや、着ている服は似ていても、服に使っている素材が高級になっている。

どうやら、随分と儲かっているようだ。
そういえば、レオンへのお祝いも豪華だったな。
彼が将来使う刀を、カネサダさんに打ってもらったと言っていた。

オリハルコン刀ほどではないが、名人カネサダの刀となればかなりの高級品だ。
現在の王国では、その刀身の美しさからミズホ刀をコレクションしている貴族も一定数存在している。
数あるミズホ刀の中でも、歴代カネサダの作品は美術品としても大人気であった。
そう簡単に打ってもらえる刀ではないのだ。

「ハルカ、体の具合は大丈夫か？」

「はい、エリーゼ様が出産後に治癒魔法をかけてくれましたので」

「エリーゼ様、我が妹のためにありがとうございます」

「ハルカさんは、バウマイスター伯爵家になくてはならない方ですから」

「そう言っていただけると感激です」

ハルカは、フリードリヒ達の護衛も兼ねた乳母という立場にある。

レオンと一緒に俺の子供達の面倒を見て、足りなければ乳を与える役割も期待されていた。

我が家の奥に自由に入れる重臣の妻というわけで、それだけ信用されている証拠でもあった。

「ハルカさんにはいつもお世話になっています」

エリーゼ達も、そう毎日子供の面倒ばかり見ていたら育児ノイローゼになってしまう。

上手くローテーションを組んで休みを取るためにも、ハルカの助けは必要であった。

「ハルカがバウマイスター伯爵家で受け入れられているようで、兄として安心しました。ですが……」

タケオミさんは、ハルカの服装に目を丸くさせていた。

なぜなら、エルが例のキャンディーさんに注文した黒のゴスロリ服姿であったからだ。

エルは随分と金を使ったようで、高価な素材のゴスロリ服は貴族やその家臣の妻が屋敷の中で着ても変に思われないクォリティーが

あった。

だが、初めてゴスロリ服を見るタケオミさんは、自分の可愛い妹がなぜそんな格好をしているのか、不思議で堪らなかったのだ。

「お義兄さん、これは現在王都で流行している服なんですよ」

「元凶はお前かぁーーー！」

タケオミさんは、いまだに可愛い妹を奪い去ったエルに隔意を持っている。

産まれた甥が可愛いのでその隔意が薄れるかと期待したら、ゴスロリ服がお気に召さなかったようだ。

以前と同じく、エルに怒りの矛先を向ける。

ここまでくると、これは様式美であろう。

「お義兄さん、これはですね……」

「誰がお義兄さんか！」

「いや、お義兄さんじゃないですか……」

エル、それはそうなんだが、今のタケオミさんにそれを言っても無駄だと思う。

彼からすれば、エルは可愛い妹を奪った敵にしか見えないのだから。

「レオンはこんなに可愛いのに……お前はまるで可愛くない！」

「はあ……」

エルも、いい年をした年上の青年から可愛いと言われても困るだろうから、それは構わないとして、そろそろタケオミさんにも慣れてほしいものだ。

シスコンという存在が、ここまで業の深い存在だとは思わなかった。

「第一、お前はハルカの他に！」

タケオミさんは、レーアとアンナの件でも怒っているようだ。

可愛い妹に不満でもあるのかと……というか、本来タケオミさんも最低二人は奥さんを貰わないといけないのに、いまだに独身なんだよなぁ……。

タケオミさんの父親は、お見合いをさせないのであろうか？

「それは、バウマイスター伯爵家重臣として必要な事だと理解していただかないと……」

「わかってはいるのですが……」

貴族の常識としては理解できるが、感情ではというわけか。

やはり、シスコンというのは業が深いと思う。

「兄様……」

「おっと、今日は他に大切な用事があったのです」

自分の兄の態度を見かねたハルカが注意しようとすると、タケオ

ミさんはすぐに話題を変えた。
彼はシスコンゆえに、愛する妹に注意をされるのが嫌なのだ。

「バウマイスター伯爵領への出店許可、ありがとうございます」

こちらとても大歓迎だ。
ミズホ産の食材を手に入れやすくなり、税収も期待できるのだから。
バウマイスター伯爵領は人口が増加中で、開発特需で金を持っている人が多い。
珍しいミズホ産の食材の需要もあるはずだ。

「時おり私も顔を出しますが、バウルブルク支店を任せる人物を紹介しておこうと思いまして。アキラ、入って来い」

「はい」

タケオミさんに呼ばれると、俺達の前に愛らしい黒髪の少女が姿を見せた。
髪は短く切り揃えておりまるで少年のようであったが、華奢で小柄で、守ってあげたくなるような感じだ。
この娘ならいい看板娘になる……いや、待てよ。
支店の責任者だって言っていたよな。

「タケオミさん、この子が支店の責任者なんですよね？」

「はい。フジバヤシ家の縁戚なのですよ。二代前にアキラの祖父が商人になりましてね」

当時下士であったフジバヤシ家が一族全員をサムライにするわけ

にもいかず、下の子供を平民に落としたというわけか。
そして、その人物は商売を始めた。
アキラはその人物の子で、タケオミさんとは従兄弟同士の関係だという。

両家は今でも繋がりが残っていて、フジバヤシ家の商売を手伝っているというわけだ。

「スキルはあるのですね」

「若いですが、商売なら私達よりも遥かに優秀ですよ」

適材適所だとタケオミさんは言うけど、少し不安はあるんだよな。
バウルブルクの町は人の出入りが多くて活気があるが、その分柄のよくない人も多い。
防犯上の観点から、支店長が女の子なのはどうかと思う。
うちの警備隊も頑張って取り締まりはしているけど、如何せん人手不足で駆けつけるのが遅れるケースもあった。

そう滅多な事はないが、安全面を考えると男性が支店長の方がいいような……。

「大丈夫ですか？　バウルブルクには気性の荒い方も多いですわよ」

俺の代わりにカタリーナが釘を刺した。
実は彼女、以前にバウルブルクの町で柄の悪い連中に絡まれ、竜巻の魔法で吹き飛ばした事があった。
あの事件は酷かったな。
事後処理をしたトリスタンが涙目だったから。

『無礼を働いたあの連中が悪いのですわ』

カタリーナの言っている事は間違っていなかったが、俺はもう少し周囲に被害が出ない魔法で対処したらと、苦言を呈する羽目になったほどだ。

「カタリーナ様、アキラはこう見えても強いので大丈夫ですよ。刀の腕前も、古戦術も、免許皆伝の腕前ですから」

「まあ、それは凄いのですね。さすがは、ハルカさんの親戚の方ですわ」

フジバヤシの一族なので、刀の鍛錬は怠っていないわけだ。
古戦術とは、戦場で武器を失った時に素手で戦う武術だ。
魔闘流に似ているが、相手の武器を奪い、それを使いこなすという技が重要視されるのが特徴的だと、前にハルカから聞いていた。

「ミズホ商人には、サムライに負けないほど強い人は多いですよ」

各地に商売に出かけるので、自分の身を守る手段に長けているわけか。

「ですが、やはり見た目でいらぬトラブルを招く可能性があるのでは？　もう一人、男性の店員を増やすとか？」

「それは商売が軌道に乗ってからですかね。それに、アキラは本当に強いから大丈夫ですよ」

いくら強いとはいっても、女性だからなぁ……。
もし何かがあると、ミズホ公爵家との問題になってしまうかもし

れない。

「もう一人、男性がいた方がいいだろう。女性一人で店を切り盛りするのは危ないと思う」

強制ではないが、ここは言っておいた方がいい。

何か事件があって、警備隊が間に合わない可能性もあるからな。

「あの……バウマイスター伯爵」

「何です？　タケオミさん」

「アキラは男ですけど……」

「「「「「「「「「「嘘っ！」」」」」」」」」」

俺がそれを言う前に、みんながそう叫んでしまった。

何と、こんなに可愛らしいアキラが男性だというのだから。

「えっ？　男性？　嘘だろう？」

「エルさん、アキラは男性ですよ」

エルも、アキラを女性だと思っていたようだ。

ハルカは彼の親戚で、昔から男性だと知っているから驚かないのであろう。

エルに間違いなく男性だと教えた。

「バウマイスター伯爵様、服装が男性物ではないですか」

「ミズホ服は、男性用と女性用の差が少ないから困る」

「よく見てください。男性用のミズホ服ですよ」

女性でも地味な色のミズホ服を着ている人が多かったから、男性用だとは思わなかった。

確かにアキラは落ち着いた色のミズホ服姿だけど、もし女性と言われてもまるで違和感がないのが凄いと思う。

ミズホ服姿のアキラをよく見ていると、段々とドキドキしてきた。

うん、これはまずいぞ。

俺はすぐに視線を逸らす。

「僕は男です。タケオミさんのように屈強なミズホ男子になるべく、日々奮闘しているのです」

「えっ？　それはどうかと思うけど……」

「エルヴィン、何か文句でも？」

「いえ、何でもないですよ。お義兄さん」

「誰がお義兄さんだ！」

「またこれだよ……」

タケオミさんのようになる？

もう一人、シスコンが増えるのは勘弁してほしいな。

エルは、特にそう思っているであろう。

思ったまま発言してそれをタケオミさんに咎められていたが、俺もエルの考えに全面的に賛成だ。

それと、アキラ一人称が僕なので、余計に可愛く見えてしまう。

「ヴェル？」

「何だよ？　エル」

エルも、俺と同じくアキラを見てちょっとドキドキしてしまったようだ。

多分、神様が間違って男性にしてしまったのだな。

神をまったく信じていない俺でもそう思えてしまう。

「確かに男性だね。魔力の流れが」

「わかっていただけましたか。ルイーゼ様」

「でも、結構判別が難しいパターンだね。つい老人のように目を凝らしてしまうよ」

ルイーゼには、微妙な魔力の流れでその人物が男性か女性かをほぼ見分ける能力がある。

ただ判別が難しいらしく、老眼になった人のように目を細めてアキラを見つめていた。

「喉仏がない……」

「ヴィルマ様、これでも僕はちゃんと声変わりしていますって」

「そう……」

アキラは声も高いので、余計に女性に見えてしまう。
彼はそれを覆そうと努力を重ねているようだが、いくら刀術などを習って中身を男性っぽくしても、見た目が……やはりどう見ても女性にしか見えない。

「肌が綺麗でいいわねぇ……」

イーナは、アキラの肌の綺麗さが羨ましくて仕方がないらしい。
冒険者として活動する女性の最大の悩み、それは常に外で活動しているから髪や肌が荒れてしまう事だ。
出産もしたので、うちの女性陣は髪や肌の手入れに余念がなかったが、まずそんな事はしていないはずなのに、誰よりも肌が綺麗なアキラが羨ましいようだ。

「そうよね、女性よりも肌が綺麗なんて羨ましいわ」

アマーリエ義姉さんもお肌の曲がり角な年齢を超えているので、若々しい肌をしたアキラを羨望の眼差しで見ていた。

「やれやれ、人は手に入れたいものが手に入らずじゃの」

「髪もサラサラで綺麗ですね……」

「本当にな。本人は別に狙ってそうというわけでもないようじゃが……」

テレーゼとリサも、アキラの肌と髪を羨ましそうに見ている。

「僕は、いくら炎天下で刀の訓練をしても肌が焼けないんです。筋肉も全然つかいないし……日に焼けて筋肉をつけて男らしくないた

いんですよ」

いくら女性陣に羨ましがられても、アキラ本人はそれを望んでいない。

本当はもっと声を大にして言いたいのであろうが、俺がいるので声を押さえているようだ。

それにしても、声を押さえながら懸命に自分の考えを言うアキラに萌えるな。

「まあ、いくら女性っぽいとは言っても、所詮は男性。私の可憐さには勝てませんわ」

随分と自信満々のようだが、カタリーナとアキラは全然タイプが違った。

ゴージャス系美人のカタリーナと、守ってあげたくなるような可憐さを持つアキラ……これで男性っていうのだから凄いと思う。

「ぶっぶーーーっ、可憐さではカタリーナの負け」

「ヴィルマさんたら、私は幼い頃から亡くなった両親や、領内の者達から可憐だと言われて育ってきたのですから」

「それは、親の目は欲目なだけ。カタリーナとアキラ、アキラの方が可憐だと思う人」

いきなりヴィルマが多数決を取り始める。

すると、カタリーナを除く全員が一斉に手を挙げた。

俺も自分に嘘はつけないので、アキラの方に手を挙げている。

「ヴェンデリンさん！　なぜ妻である私に手を挙げないのですか！」

「えーーーっ！　なぜ俺だけに？」

他全員も、同罪じゃないか。

カタリーナから責められた俺は、理不尽さを感じてしまう。

「ヴェンデリンさんは、私が可憐ではないと？」

「ええとだ……カタリーナは結婚して母親にもなったんだ。いつまでも可憐ではなく、大人の女性としての美しさを出していかないと。アキラは未婚だよね？」

「はい」

「既婚者として、新たな魅力を出していかないと」

「それもそうですわね」

またも上手く誤魔化せた。

それにしてもアキラは、本当に可憐で助けたくなってしまう。

男性だと聞いていても、少し見ているとそれを忘れてしまうような……。

俺はアホか！

アキラは男性じゃないか！

「ヴェル、アキラは十分に強いみたいだし大丈夫だと思うよ。それとも心配かな？」

ルイーゼは、格闘家としての直感でアキラに実力ありと判断した。

一人でお店を任せても大丈夫だという考えだ。

だがな、ルイーゼ。

いくら俺でも、男性に恋愛感情はないぞ。

俺は自他共に認めるノーマルだからな。

ちょっと自信がなくなって……んなわけあるか！

「最初は小規模で様子を見ないといけませんし、アキラは強いから大丈夫ですよ」

「よろしくお願いします」

以上のような経緯で、バウルブルクにフジバヤシ家が経営するお茶、乾物屋がオープンしたのであった。

「ヴェル、フジバヤシ乾物店は盛況みたいだよ」

「それはよかったな」

数日後、所用でバウルブルクの町中から戻ってきたルイーゼが、先日オープンしたばかりのお茶と乾物のお店の様子を俺に報告する。

沢山のお客さんがいて、お茶や海苔が売れていたそうだ。

「オープンしたばかりの頃に客がいないと大変だからな。まずは最初のハードルをクリアーしたな」

新しいお店がオープンすると、物珍しさから最初はお客さんが入る。
たまにオープン当初から駄目なお店もあるが、そういうお店は短期間で潰れてしまう事が多かった。
オープン当初は沢山お客さんがいても、暫くしてから寂れてしまうパターンが一番多いと思う。
いかに固定客を掴むか。
商売とは難しいものなのだ。

「ヴェルってば、厳しい意見だね」

「商売は油断すると、すぐに閉店だからな」

前世では、数年で潰れるお店など珍しくなかった。
この世界でも、商売のパイが少ないので新規店はよく潰れる。
いくら最近人気のミズホ産食材のお店とはいえ、油断は禁物であった。

「でもさぁ。ボクは大丈夫だと思うな」

「随分と自信があるんだな。ルイーゼは」

「だってさ。あのお店、看板娘がいるじゃない」

看板娘ねぇ……。
確かにアキラは女性と見紛うばかりの外見だけど、歴とした男性だからな。
その言い方は失礼だと思うんだ。

「帰りに見て来たけど、客は男性ばかりだよ」

「それはおかしいな」

アキラが店長をしているお店は乾物屋だからな。

お茶は男性でも買うと思うけど、海苔や乾物は調理をする女性が主な客層なのだから。

「プロの調理人が仕入れているとか？」

珍しいミズホ産食品を用いて、客を増やそうとしているのかもしれない。

でも、そう男性の飲食店店主ばかりが客として来ないだろう。

「そうだとしても、女性客がほとんどいないのはおかしい」

「ですよねぇ……」

ちょっと気になったので、俺はルイーゼと傍にいたヴィルマを連れてお店の様子を見に行く事にする。

「いらっしゃいませ。今は新茶がお買い得ですよ」

フジバヤシ商店の前で店主のアキラが、お客さんにミズホ茶の試飲を勧めている。

前世のお茶屋さんのような光景だが、ミズホ服に前掛けをしたアキラが可憐な女性にしか見えないので、男性客は花の蜜に群がる蜂のように集まってきた。

「マテ茶を淹れるポットでも大丈夫ですよ。甘くないので、飲むと口の中がスッキリとするんです。食事にも合いますし、暑い時には

冷やして飲むと最高ですよ」

アキラは、商売上手でもあるようだ。

次々と客にお茶を勧め、勧められた客の半数以上がミズホ茶を購入していた。

「男は単純」

「ヴィルマ、可哀想だからそれは言わないであげて……」

アキラは男だけど、あんな可憐な子にお茶を進められて断れる男性は少なく、少量入ったお試しパックくらいならそこまで高くもない。

大勢が購入して行ってしまうのだ。

「ヴェル、見知った顔が多いよ」

「げっ！」

うちの家臣が複数いるな。

トリスタン、モーリッツ、トーマス……他にも何人か……。

というか、バウルブルクの警備は大丈夫なのだろうか？

トーマスに至っては、トンネル担当だったはずだ。

「なあ、お前ら……」

「お館様も、ミズホ茶の購入に？」

「買って帰るけど、お前ら仕事は？」

「ヴェル、買っては帰るんだ」

ルイーゼに鋭く突っ込まれたが、別にアキラの色気に惑わされたわけじゃ……というか、男のアキラに色気などない！

「新茶の季節だからな」

「そう、新茶の季節は大事」

「お茶なんていつ飲んでも同じだと思うけどなぁ……」

フジバヤシ家が経営しているだけあって、ミズホ公爵領内の主要な産地の新茶がタイムリーで揃っている。

オヤツで甘い物を食べる時には、俺はマテ茶よりもミズホ茶派になっていたから購入して当然であった。

「ヴェル様、ウージの新茶が売っている」

「おおっ！　ウージのお茶は美味しいからな」

ミズホ公爵領で一番有名なお茶の産地だ。

微妙に宇治と被っているような気もするけど、ウージのお茶はそれだけで飲んでもとても美味しい。

エリーゼ達にも買って帰るとしよう。

「で？　仕事は？」

「ご安心を。ちゃんと所定の休憩時間なので」

「私も同じです」

「報告でバウルブルクまで来たのですが、帰りにニコラウス達へのお土産を購入しようかと……」

三人とも、仕事をサボっているわけでもないらしい。

休憩時間に新しいお店を見つけたので、つい試飲に参加してしまったというわけだ。

そんな男性が多いようだな……。

みんな、幸せそうな顔でミズホ茶を試飲している。

アキラが男性だって知っているのか？　……ちょっと怖いので聞くのはやめておこうと思う。

「休憩時間に何をしていようと自由だけどな……ああ、海苔も買って帰ろう」

「海苔でしたらこちらです」

アキラは、いくつかの種類の海苔を見せてくれた。

海苔もお茶と同じく値段がピンキリであった。

「海苔は色が濃くて光沢があるものがいいですよ。あとは……」

一番高級そうな海苔を、アキラが軽く火で炙ってくれた。

すると、濃い緑色になった。

いい海苔の証拠である。

前世で、海苔問屋の社長に教えてもらったのだ。

「オニギリに使うからいい海苔の方がいいな」

「そうですね。そのまま口に入れますからね。これはお値段に負け

ない品質のよさですよ」

オニギリといえば海苔だが、実はミズホ公爵領から輸入するまでは海苔なしのオニギリで我慢していた。

昔、高菜オニギリを参考にブライヒブルクで購入した菜っ葉で包んでみたが、悲惨な結末に終ったのを思い出す。

海苔なしオニギリも美味しいのだが、やはり海苔がないオニギリは何か物足りない。

今はミズホ公爵領との交易が可能で、バウルブルクにお店もできた。

つまり、俺はいつでも自由に海苔オニギリが作れるのだ。

あと、海苔巻き、太巻き、餅を焼いてから砂糖醤油につけて海苔で巻く事も可能だ。

そして、海苔があるという事は……。

「フリカケが欲しいな」

「カツオ、オカカ、梅、ワサビ、シソワカメ、ジャコなどがあります。乾燥していない高級フリカケもありますよ。試食をどうぞ」

何と、アキラはご飯も準備してくれていた。

そこに乾いたフリカケを順番に載せて試食していく。

前世を思い出すとても素晴らしい味だ。

湿ったままの具が豪華なフリカケも素晴らしい。

ウニや肉のソボロを使ったフリカケもあった。

どれも、俺の日本人としての精神を揺り起こしてくれる素晴らしい美味しさだ。

「全種類買おう」

「ありがとうございます」

俺は金持ちバウマイスター伯爵だ。

高級海苔とフリカケの大人買いくらい余裕だ。

「餅はあるのか？」

「はい、あります。キナコもいい商品がありますよ。小豆もミズホで一番とされる産地のものが」

餅とキナコと餡子。

この至高の組み合わせを楽しまないわけにはいかない。

王国でも手に入るのだが、やはり一度いい物を知ってしまうとな。

購入した小豆は、急ぎ水に漬けてからじっくりと煮ないと駄目だな。

「他にも色々とあるみたいだな。だが、今日は時間が……また来るとしよう」

予想外に大量に購入してしまったが、品質のいい品が大量に手に入った。

これからもちょくちょくと見に来ようと俺は決意するのであった。

「ヴェル……アキラが可愛いからって……」

「トリスタン達と一緒にすんな！」

俺は男に興味はないんだ。
いくら女性に見えても、俺は同性愛者ではない。

「でもさ、試食品を貰う時に物凄く嬉しそうだったよ。トリスタン達と同じく」

それも違う。
俺は、新しいお店でいい商品が多くて嬉しかっただけなのだ。
試食可能という点も、俺の購買心を大きく誘った。

「ヴィルマはわかってくれるよな？　あの店はいい品が多いよな」

「いい食材が一杯置いてあった」

「ほらな、ヴィルマの言うとおりじゃないか」

「でも、アキラに釣られて来る客が多すぎる」

「だから、あいつらと一緒にすんな！」

俺は、あくまでもお店の商品に魅かれただけだ。
決して看板娘であるアキラ……看板娘じゃない！　彼に釣られて商品を購入したわけではないと声を大にして言い続けるのであった。

「まあ、気持ちはわからなくもないよな。アキラが男性だって言われても、信じない奴がいそうだし」

「うるさい、エル。オニギリをやらんぞ」

「俺は別に、ヴェルがアキラの色香に迷って大量に商品を購入したとは言っていないぞ」

「おおっ！　信じてくれるのか？　エル」

「お前、昔からそういう奴じゃん」

夕食に大量の海苔オニギリが出され、それを食べながら俺達は話をする。

ルイーゼの言うとおり、フジバヤシ乾物店はアキラのおかげで大盛況であった。

彼に釣られて店に近づくと試飲用のお茶が入った茶碗を渡される。

アキラは美少女に見えるので断る者はおらず、お茶を飲んだ一定数の人間がお茶を購入してしまうのだ。

タケオミさんは随分と上手な商売方法を……あの人が狙ってやったとは思えないな。

自分はあくまでも出資者で、商売は上手くないって言っていたし。

「みんな、アキラが男性だって知っているみたいよ」

「えっ？　そうなの？」

何と、イーナが衝撃の事実を暴露した。

「アキラは男性だけど、お茶を飲んでお話するだけなら至福の時間を過ごせるから気にしないんだって」

確かに、アキラが淹れてくれたお茶を飲みながら話をしていると、彼が男性である事実を忘れてしまいそうになるのは事実だ。

「トリスタン達、アキラが男性だってわかって行ってたのか……」

「そうみたい」

みんな、もしかすると家庭で何か問題でもあるのだろうか？
癒しを求めるために、男性の元に通うなんて……。
バレたら、奥さんに怒られないのかな？

「でも、それはヴェルも同じじゃないの？」

「おいっ！」

俺は、すかさずイーナにツッコミを入れた。
俺にはその手の趣味はなく、ただ単にあのお店が楽しくて行っているのだから。
たかが乾物屋だと思っていたら、新興のフジバヤシ家と親戚の小規模商家の運営だから商売の方法が面白い。
行くとワクワクするお店なんて久しぶりだ。
デパートの北海道物産展に行った時と同じ気分だな。

「他のお店と比べると、通う頻度が多くないかしら？」

「イベントがあるからな」

そう、ある日は出汁の取り方教室をやっていた。
カツオブシと昆布で出汁を取り、それを試飲させてくれるのだ。

つい買ってしまったが、それで作った味噌汁は美味しかった。

やはり、プロが作る品は違うな。

俺も自力で味噌製造まで辿りついたが、フジバヤシ乾物店で売っている味噌には及ばない部分も多い。

醤油もだ。

値段は高いが、俺はついそちらを使用してしまうのだ。

このくらいの贅沢は、バウマイスター伯爵なのだからいいであろう。

「今日も、アキラが佃煮を炊くというから試食に行くのだ」

「そして、買ってくるわけね……」

「だって、俺が自分で作るよりも美味しいし」

佃煮は難しい料理だ。

誰にでも作れるけど、美味しく作るのは難しい。

微妙な味加減で、あそこまで評価が変わる料理も珍しい。

前世で老舗佃煮屋の佃煮を貰って食べた事があるけど、あれは美味しかった。

俺も昔は自分で作って、オニギリの具にしたりご飯のおかずにしていたけど、フジバヤシ乾物店で売っている品の方が美味しいからな。

種類も豊富だし。

乾物店なんだが、店長であるアキラが独自裁量でミズホから仕入れたり、自分で作ったりするのだ。

大陸南方は米を食べるから、ご飯に合う佃煮は需要があった。

オニギリの具やご飯のおかずとして一般庶民も食べたが、保存食

として冒険者も買いに来るようになったのだ。
魔法の袋を持つ魔法使いが入っていないパーティは、あまり豪勢な食事を用意できない。
オニギリを持参したり、現地で米を炊いてスープを作りおかずは佃煮というケースが増えていた。
材料がミズホ産の佃煮は高級品で高かったが、アキラがバウルブルクやその周辺で入手した材料を炊いた佃煮は安かったので、これがよく売れている。

「乾物屋なのに、佃煮屋もしているのね」

「その辺は、臨機応変なんだと思う」

「保存が効いて塩気も多いから、冒険者には最適なのは確かかね」

「というわけで、俺はフジバヤシ乾物店に行くのだ。イーナも来るか？」

「面白そうだから行ってみようかしら」

「あっ、あたいも行く！」

イーナとカチヤを連れてフジバヤシ乾物店まで行くと、店先から佃煮を煮るいい匂いが漂ってくる。
商売繁盛で急遽従業員を増やしたが、佃煮を炊いているのはアキラ本人であった。
男らしさを目指すとか言っているが、料理が上手で佃煮を炊く事まで得意とは、ますます女性と間違われそうである。

「バウマイスター伯爵様、いらっしゃいませ」

「何を佃煮にしているんだ？」

「バライソウの新芽です。安く仕入れられたので」

バライソウとは、薬草と野草の中間地点にある植物であった。

食べると胃腸にいいと言われており、これを乾燥させて胃腸薬として用いる事がある。

ただ、大陸南方では比較的大量に生えてるので、これを野菜代わりに食べる人が多かった。

特に新芽が美味しく、草から新芽を採っても一か月もすればまた新芽が出るので、冒険者は採取して料理に入れたりする事が多かったのだ。

「バライソウの新芽を佃煮にするのか」

「佃煮は、元々余った食材の保存のための料理ですから。試食をどうぞ」

「ありがとう」

「あたいも貰い！」

アキラが試食用の佃煮を配ると、店先は多くの客で賑わい始めた。

「ちょっと苦味も残っていて大人の味だな」

「成功のようですね。お酒のツマミとしてもいいかもしれません」

今日は佃煮の特売と称して、多くの佃煮が並んでいた。

アナゴ、シラウオ、イカナゴ、ウナギ、カツオ、マグロ、アサリ、ハマグリ、シジミ、カキ、昆布、海苔、シイタケ、土筆などは材料も調理もミズホで行った品なので高価だった。
特に、マグロとウナギは高い。
前世でも、１００グラム数千円は普通にしたからな。

まあ、俺は買うけど。

「ヴェル……あれは大丈夫なの？」

「あれ？」

「旦那、虫じゃないのか？　あれ？」

この大陸には、虫を食べる習慣はなかった。
勿論、ミズホ公爵領を除いてだ。
イナゴ、蜂の子、ザザムシ、生糸を取った後のカイコの佃煮もあった。
これは珍味の類なので、それほど量は置いていない。
貴重なので購入する事にする。

「ヴェルぅーーー」

「えっ？　美味しいけど？」

見た目はちょっと女性受けしないが、イナゴの佃煮とか美味しいんだけどなぁ……。

「買ったから、あとで試食してみればいいさ。結構美味しいよ」

「私は遠慮しておくわ……」

「あたいも……」

冒険者として、万が一食料が手に入り難い状況になった時、虫食もできれば生き残れる可能性は高いんだけどなぁ……。

イーナもカチヤも、虫を怖がる普通の女性だったというわけだ。

「ミズホ人でも、虫の佃煮を嫌がる人は多いですからね。逆に、物凄く好む人もいますね」

ここで、すかさずアキラが女性二人をフォローした。

優しい男性はモテる……と思いたいが、アキラはあまり女性にモテないそうだ。

そりゃあ、自分よりも可愛い男性って、女性からしたらアイデンティティー喪失のピンチだものな。

デートとかで一緒に町を歩いていると比較されてしまいそうだ。

女性二人で遊んでいるように見えて、デートだと思われない可能性が高い。

「ここで採れるキノコを佃煮にしてみました。どうぞ」

アキラは、虫ではなくてバウマイスター伯爵領で採れるキノコの佃煮も試食として出してくれた。

「美味い」

「ハミタケの食感もちゃんと残っていて美味しいわ」

「本当だ。ご飯が食べたくなるな」

佃煮は、食材によって調味料の配合や煮方を変えないといけない。
俺達に出す前に、色々と試作を重ねたようだ。
とてもよく炊けており、イーナとカチヤも美味しそうに食べている。

「魚は、小鮒と泥鰌も試作しましたよ。どうぞ」

「これもいいな」

共にここで仕入れた食材をアキラが自分で炊いた品で、安めなのでよく売れていた。
試食をした客が、次々と佃煮を購入していく。
パンに佃煮は合わないが、バウマイスター伯爵領は俺が田んぼを広げた影響で米食が多いから、おかずに購入していく人が多いのだ。
やはり、アキラの商売の才能は凄いと思う。

「奮発してウナギの佃煮を買おうっと」

「俺はアサリの佃煮！」

またも休憩時間にトリスタン達が姿を見せ、佃煮を試食してから購入して行った。
アキラが男性なのは気にならないというのは本当のようだ。
彼から嬉しそうに試食品を受け取り、律儀に品物を購入していく。
今日は給金の支給日だから家族へのお土産という名目で、アキラに癒しを与えてもらっているようにしか見えない。

「トリスタン達……家庭生活に何か問題でも？」

まだ新婚なのに、家庭不和とか勘弁してほしい。
相談とかされても、俺には対処できる経験値がないのだから。

「旦那、結婚して家庭を持って子供が産まれると色々とあるんだと。
そっとしておいた方が優しさってもんだぜ」

「かもしれないな……」

カチヤは、両親のそういうのを見ているから詳しいのであろうか？
彼女のアドバイスがあまりに的確なので、俺は素直に従った。

「時雨煮もありますよ」

時雨煮とは佃煮の一種で、生姜を加えたものの事を言う。
ミズホ公爵領にも存在し、ハマグリや魔物の肉を煮た商品が置かれている。
試食してみると、牛肉の時雨煮とよく似た味だった。
牛の肉質に似た魔物の肉を使っているものと思われる。

勿論牛肉の時雨煮もあるが、家畜の肉はとても高い。
一番の高値がついていた。

「とはいえ、これは買わないと損だな」

「結局、全種類買っちゃって……」

「いいじゃないか。長持ちするんだし」

それよりも、好きな時に好きな佃煮を食べられる方が大切だ。

「魔法の袋に入れておけば、鮮度なんて関係ないじゃない……」

「かといって、冒険者として外出している先で佃煮を煮るわけにもいかない。佃煮のストックは必要なんだ。あっそうだ！　アキラ」

「はい」

「こういう商品は作れないか？」

「大丈夫だと思いますよ」

アキラに新製品の作製を頼み、それができあがってから数日後、俺は久々に冒険者として魔の森に出かけていた。

エリーゼ達女性陣は全員お休みで、今日はエル、導師、ブランタークさんで臨時パーティを組んでいる。

建て直されて豪華になった冒険者ギルド魔の森支部では、同じく受付をしていた冒険者達に大いに注目されてしまったが、導師は気にもしないし、あの見た目と雰囲気なので話しかけてくる者もいない。

「冒険者の数は増えましたし、その質も上がりました。ですが、まだ需要を満たしていない肉や素材が多いですね。フルーツや薬草なども少し不足気味です」

「今日は狩猟がメインなのでな。採集の方は期待しないでほしいのである」

受付を終えると、四人で魔の森の奥深くまで移動した。

「この森は、相変わらず魔物が沢山いるのである！　スレていない

のも最高であるな！」

「スレてないって……釣りかよ……」

魔物の数は多かったが、ほとんど導師が一撃で殴り殺してしまうので、俺達はさほど忙しくなかった。

「これはとんだ盲点だったな」

ブランタークさんもほとんど狩りに参加できず、魔法の袋から取り出した水筒の中身を飲んでいた。

「ブランタークさん、酒ですか？」

「いいや、俺は狩りの最中に酒は飲まん。嫁さんがお茶を淹れてくれたんだ」

たまに破天荒な冒険者で、飲酒しながら狩りをする人もいる。

だが、超一流の腕前を持つブランタークさんレベルになると、いかなる隙も作らないというわけだ。

イメージ的には、飲酒しながら狩りをしても不自然じゃないのだけど。

「ただ、このマテ茶は少し甘いのが欠点だな」

「でしたら、こちらはどうです？」

俺は、魔法の袋から冷たくしたミズホ茶を入れた水筒をブランタークさんに差し出す。

「これはほどよい苦味で美味しいな。ミズホ茶か。冷たくできるとは思わなかった」

ブランタークさんは、美味しそうに冷たいミズホ茶を飲み干した。

「ヴェル、こっちに魔物が来ないな」

「まあ、当然だよな」

デストロイヤーな導師が魔物を殴り殺すとその周囲に死骸と血溜まりができ、血に誘われた魔物がさらに集まって来るからだ。

おかげで、こちらにはほとんど魔物が来ない。

「ギルドの連中が薬草と果物が不足しているって言っていたな」

「そっちを集めておくか」

俺、エル、ブランタークさんの三名は、フルーツと薬草、キノコなどの採集を行ってお昼までの時間を潰した。

「腹が減ったのである！」

そして、昼食の時間になった。

大暴れをした導師はお腹が空いたと言いい……あれだけ暴れればお腹も空くであろう。

加えて、俺達がいるので食事を準備していないようだ。

導師の目が、明らかに飯を出せと言っていた。

「導師、何があるかわからないんだから飯くらい準備しておけよ」

「当然非常食などの類は準備しているのである！　だが、普段は非常食に手を出さないのが常識である！　バウマイスター伯爵、某はオニギリが食べたいのである！」

オニギリが欲しいのか……。

随分と逞しい某画伯のようだ。

「それが目当てですか」

現在、バウマイスター伯爵領で活躍する冒険者の間で、オニギリが爆発的にヒットしていた。

美味しく、食べやすく、具材に融通が利き、お腹が一杯になりにくいからだ。

何でも食べすぎればお腹一杯になると思うが、オニギリは食べる量の調整が行いやすい利点もある。

ノンビリ食事が摂れない時に、片手で食べられるのもよかった。

「一杯作ってあるからいいですよ」

俺達は『魔法障壁』の中で昼食を摂り始める。

大型の魔物が張られた『魔法障壁』をガリガリと引っかくが、今日はあまり魔力を使っていないので余裕であった。

「オニギリは美味しいのであるが、某にはちょっと小さいのである」

俺は普通サイズのオニギリを握らせたはずなのに、導師には物足りないらしい。

数を食べてお腹を満たそうと必死だ。

「この甘しょっぱい具が美味しいのである！」

導師は、昆布の佃煮が入ったオニギリをえらく気に入ったようだ。

「ミズホの食材ですよ」

「おおっ！　王都でも噂になっていたのである！　バウマイスター伯爵が、バウルブルクの乾物屋の女主人に執着でよく通っていると」

「ちょっと待ってください！」

俺が、アキラに懸想しているから乾物屋に通っている？

アキラが男なのはバウマイスター伯爵領では有名な話なのに、王都ではアキラは女という事になっているようだ。

「そんな噂になっているのですか？」

「そうである！　バウマイスター伯爵も普通の男であったと、みんな噂しているのである！」

普通って……俺は今までどう思われていたのだ？

「導師、乾物屋の店主は男ですよ」

唖然とする俺に代わってエルが導師に事実を伝えるが、まさかそんな噂になっているとは思わなかった。

「何と！」

エルの説明に驚いた導師は、持っていたオニギリを一口で頬張ると、突然俺の両肩を掴んだ。

「バウマイスター伯爵、男色はよくないのである！　ホーエンハイム枢機卿に知られると事である！」

「俺はノーマルですし、乾物屋には商品目当てで通っているんですよ！」

俺が導師の誤解を解き終わる頃には、大量のオニギリはすべて導師の胃の中に納まっていた。

そういえば、俺はまだ一つしかオニギリを食べていない事に気がついてしまう。

実は、俺をわざと動揺させて、その隙に導師がオニギリをすべて食べてしまう作戦だったのか？

「俺の分のオニギリィーーー！」

「ヴェル、パンならあるけど！」

「パンと味噌汁が合うかぁーーー！」

「そんな事を言われてもなぁ……」

今回は、アキラに試作を頼んだインスタント味噌汁も持参していた。

フリーズドライは難しいので、味噌にイリコと昆布の粉末を入れて出汁代わりに、具材にはワカメ、水抜きした豆腐、ネギ、アサリなどが入っている。

カップにスプーンで必要量を入れてからお湯を注ぐと味噌汁の完成というわけだ。

フリーズドライではないので保存が面倒だが、俺の場合は魔法の袋がある。
生味噌タイプのインスタント味噌汁でも、特に問題なく保存できた。

調理の手間を省き、お湯を注ぐだけで温かい飲み物が作れるというわけだ。
ただ、この世界にはビニールもレトルトパックも存在しない。
魔法の袋なしでの保存と持ち運びには問題があった。

「クソぉ！　このパンを使って味噌汁を豪華にするんだ！」

味噌汁にクルトンは意外と合う。
オニギリという主役をみんな導師に食べられてしまった俺は、パンを一センチ角ほどの大きさに『ウィンドカッター』で切り、油にまぶしてから火魔法をバーナーの形にしてこんがりと焼いていく。

パンは美味しそうなクルトンになった。
それを味噌汁に入れれば、美味しい具材となるわけだ。

「カリカリのクルトンに、味噌汁を吸って柔らかくなったクルトンも美味しい」

「伯爵様、俺は料理作りのために魔法のコントロールを教えたわけじゃないんだがな……」

「ブランタークさん、これも練習の内ですよ。飲むでしょう？　味噌汁」

「ああ、導師の奴、みんなの分までオニギリを食べてしまいやがっ

て！」

俺も、エルも、ブランタークさんも、オニギリ一つだけじゃ足りないので、クルトン入りの味噌汁でお腹を満たした。

「バウマイスター伯爵、某がいる時はもっとオニギリを準備するべきなのである！」

導師はまるで悪びれた様子もなく、自分の分のクルトン入り味噌汁を豪快に飲み干すのであった。

「このお店か。お土産を買って帰るかな」

「奥さんにお土産とか……ブランタークさんも変われば変わるものだ」

「エルの坊主、どうせお前も買って帰るんだろう？」

「まあ、今日は久々に儲かりましたからね」

男四人による、『ドキッ！　男まみれの魔物殺りく大会』は終了し……主に殺りくは導師の担当で、俺達はほぼ採集に集中していたが……金にはなったので、アキラの店でお土産でも買って帰ろうという話になった。

俺は、今日飲んだインスタント味噌汁の感想を頼まれていたので、それもアキラのお店に寄る理由であった。

「導師、王都にはこういうお店はないのですか？」

「ミズホ資本の乾物屋はあるのである！　だが、ここまで色々とやっていないのである！」

大手資本による問屋のような乾物屋で、普段料理をしない人が寄っても何も楽しくないそうだ。

フジバヤシ家は小資本なので、お茶の試飲や、乾物を使った料理の製造と試食と販売、調理方法の実演などで客を呼んで販売するという小回りの利いた営業を行っているというわけだ。

ただ、タケオミさんにそれを思いつけるスキルはないので、アキラが独自にやっているというわけだ。

若いのに、恐ろしいまでの営業手腕である。

バウルブルクはこれからも拡大が期待できる場所ながらも王都に比べれば客数で不利にも関わらず、大成功を収めていた。

「バウマイスター伯爵様、味噌汁はどうでした？」

「味はよかったよ。難点は予想したとおりだ。魔法の袋を持たない冒険者が気軽に持ち運べない点にある」

「やはり問題はそこですか。味噌なので日持ちはすると思いますから、小さめの容器に入れて必要量を匙でカップに入れるしかないですね」

袋分け包装とかないので、そうするしかないというわけだ。

現地で出汁を取ってから味噌汁を作るわけにはいかないので、この方法でも十分なはず。

「具材ももう少し研究したいと思います」

「ところで、今日は何をしているんだ？」

「新製品ですよ。バウルブルクには魚屋さんがあるでしょう？」

「お久しぶりです」

「あっ！　召還魔法でパンツ獲られたお姉さんだ」

「覚えていただいて光栄ですが、それはないと思いますよ……」

バウルブルクに王都にある有名な魚屋の支店ができたが、その店主は魔導ギルドに勤めていたお姉さんであった。

彼女は魚屋一家の娘で、魔導ギルドを辞めてこの地に魚屋を開いていた。

以前、魔導ギルドのベッケンバウアー氏に、召還魔法で履いているパンツを魔法で奪われてしまったのを思い出す。

「やはり、ベッケンバウアー氏のセクハラが原因で？」

「それもないとは言いませんが……店の主として辣腕を振るう。素晴らしいじゃないですか！」

「それもなくはないのか……」

ベッケンバウアー氏は、たまに言動に問題があるからな。
誤解……頭はいいはずなのに空気が読めないというか、暴走するというか……友人の駄目さ加減を聞いて、ブランタークさんは残念そうな表情を浮かべる。

「うちの店は、代々貯めた資金によって得た魔法の袋で新鮮な魚貝類を入手できる点に強みがあります。バウマイスター伯爵領南端には、ナンポウマス、シイラ、カジキマグロ、マンボウ、カツオなどがよく獲れて美味しいですね。あとは、大型のエビと貝類です。これは、王都の本店に運ぶと高く取引されるんですよ」

魔導ギルドの職員は安定しているけど、それよりも自分の店を持って商売をした方が稼げるし、面白いというわけか。

「なるほど、婿を受け入れて新しいお店を開いたわけであるな」

「いえ、まだ独身ですけど……」

導師が余計な事を言うので、途端に雰囲気が悪くなってしまった。
この元受け付け嬢は、二十代前半に見える。
この世界だと、もうそろそろ結婚しないと周囲から色々言われてしまう年齢というわけだ。

「魚屋の店主と一緒という事は、何か魚の加工品でも出すのかな？」

「はい、色々と試作していますよ」

俺が淀んでしまった雰囲気を直そうとアキラに話題を振ると、空気を読んだ彼が素早く対応してくれた。
商売が上手で、料理も得意、気遣いもできる。

もし本当に女性だったら、きっといいお嫁さんになれると思う。

「魚を味噌漬けにしたのです。漬ける味噌もミズホは種類が多いですからね。色々と種類や配合を変えて試作しました」

「評判がよければ、魚をもっと仕入れてくれると思うので、味見に来たんですよ」

「バウマイスター伯爵様達もいかがですか？」

「楽しみだなぁ」

魚の味噌漬けは、肉の味噌漬けと共に俺もよく作っている。
俺も素人なりに研究と試作を進めたが、やはりプロには勝てない部分もあるからな。

「あっそうか！　漬味噌を売ってもらえばいいんだ！　あとは白味噌系の漬味噌もいいな。赤味噌もある」

俺が自作する味噌は、通常タイプの味噌のみだからな。
白味噌、赤味噌の類には手が出ない。
ミズホには西京味噌に似た味噌もあるので、これに脂の乗った魚の切り身を漬けると美味しそうだ。

「乾物屋なのに味噌漬けなのか？　変じゃない？」

「エル、細かい事を気にしてはいけない。一夜干しとかあるかもしれないし」

「そっちも試作しています。あとは、イカの塩辛とか練りウニとか

もありますよ」

それは、是非お土産に買って帰らないと駄目だな。

そんな話をしながら、アキラは手際よく味噌漬けにした魚の切り身と、干した魚も七輪で焼き始めた。

段々と味噌や魚の身が焼けるいい匂いが伝わってくる。

「これは、酒も必要だな」

ブランタークさんは、勝手に魔法の袋から酒の入った瓶を取り出した。

仕事中は飲まないが、常に持ち歩いてはいるというわけだ。

「これ、ミズホの焼酎だからな。きっと合うぜ」

「おおっ！　ブランターク殿、某にも！」

酒の準備をしている間に味噌漬けと一夜干しが焼き上がり、二人はそれを貪るように食べてから用意していた焼酎を飲み干した。

「最高だな。この一杯のために生きているな」

「味噌漬けと焼酎は最高の組み合わせであるな！」

人様の店先で勝手に酒盛りを始める中年オヤジ二人。

周囲の視線など気にもしていない。

このくらい図太くないと、超一流の魔法使いにはなれないのかもしれない。

「（ヴェル、完全におっさんだな）」

エル、元から誰が見てもおっさんなので、今さらその指摘をするのはおかしいと思うぞ。

「俺も少しもらう」

「俺も」

俺とエルは、あくまでも試食なので少しだけ食べさせてもらう。

やはり、魚の身の質に合わせて味噌や他の調味料の配合を変えないと駄目なのだな。

俺がつくる味噌漬けよりも圧倒的に美味しかった。

「いい味ですね。これが売れたら、アキラさんもうちの魚を大量に仕入れてくれますよね？」

「はい。いいお魚が手に入りますからね」

「アキラさんは、お魚を捌くのも上手ですね」

「ミズホ人は魚が好きですからね。デリアさんもいい腕前をしていると思いますよ」

「稼業ですから」

ちょっと年齢差があるように見えるが、この二人随分と仲がいいようだ。

もしかすると、将来結婚したりして。

「朝食に食べたいから、一夜干しと一緒に買って帰るよ」

「いつもありがとうございます」

「あの二人は……すまんな……」

購入した商品をアキラから受け取りながら、俺は店の前で新商品の味噌漬けと一夜干しだけでなく、スルメを焼いたものや、魚の骨煎餅、焼き干しの炙りをツマミに焼酎を飲むオヤジ二人について謝った。

二人を連れてきてしまったのは俺だから、責任の一端がないわけでもないからだ。

「いえ、いいヒントを得られましたから」

「ヒント？」

「はい」

その時は意味がわからなかったのだが、数日後にアキラが言っていた事の意味が判明する。

「旦那様、フジバヤシ乾物店が規模を拡大したそうです」

「規模を拡大？」

「はい、立ち飲み屋を始めたそうです」

たまたまバウルブルクに所用で出かけたリサが、乾物店の隣に、ツマミと酒を出す一杯飲み屋がオープンしたのを教えてくれた。

「短期間でどんどんと増殖しておるの。大丈夫なのか？」

テレーゼが店の規模を広げすぎではないかと心配しているようだが、立ち飲み屋は王都でも盛況だからな。

王都のは、俺が提案して営業させているのだけど。

「フジバヤシ乾物店経営の立ち飲み屋だから、メニューが違うんだろうな」

そこで差別化を図っているとなれば、そう失敗する事もないと俺は予想していた。

「ちょっと様子を見に行くか」

「私も行くわ」

お酒絡みという事で、今度はテレーゼ、リサ、アマーリエ義姉さんを連れてフジバヤシ乾物店へと向かった。

確かに、隣の空き家では立ち飲み屋がオープンしている。

「バウマイスター伯爵様、いらっしゃいませ」

乾物屋はミズホから来た若い男性店員に任せ、アキラは立ち飲み屋で酒とツマミを出していた。

建築ラッシュが続くバウルブルクには労働者が多く、店は多くの客で賑わっている。

ツマミと酒はミズホ仕様なので少し高かったが、これが酒の飲み過ぎを防ぎ、売り上げ単価を上げ、程度の悪い酔客を減らす効果を出していた。

「凄く商売が上手だな」

「そんな事はないですよ」

アキラは謙遜するが、商売の才能で彼に敵う者は少ないと思う。
俺が商売で成功したのは、前世の知識を利用しただけの事なのだから。
しかも、俺はアイデアを出しただけで店を維持していないからな。

「お勧めを貰おうかな」

「今日は、水菜のお浸しとヒジキの煮物がお勧めです」

ほぼ和食の一品料理をツマミに酒を飲む。
大人になったような気分で……俺も前世と合わせると随分な年齢だからな。
こういう雰囲気のお店が性に合ってきた。

「ヴェンデリン、お主も色々とあってこんな雰囲気のお店がよく合うようじゃな」

「テレーゼもじゃないか？」

実はまだ二十をすぎたばかりのテレーゼであったが、元フィリップ公爵であったのは伊達じゃない。
威厳と貫録で年齢以上に見えてしまう。
それを本人に言うと怒られそうだが。

テレーゼ、リサ、アマーリエ義姉さんで年長組という風に思われ

ているからな。

「いいミズホ酒が置いてあるな」

「こういう野菜や海藻を材料にした料理は健康によさそうね」

テレーゼはミズホ酒を美味しそうに飲み、アマーリエ義姉さんは水菜のお浸しにカツオブシと醤油をかけて食べていた。

女性は美容やダイエットに興味があるから、野菜や海藻を多く使うミズホ料理に興味があるのであろう。

「美味しい……」

リサは、原酒の焼酎をストレートで飲んでいる。

前に導師と飲酒対決をした時と同じく、まったく酔っているようには見えなかった。

「でも、これって乾物屋と関係あるのかしら？」

「ありますよ。乾燥ヒジキとカツオブシは乾物屋の商品ですから」

魚屋が魚料理の店を開いたり、肉屋がステーキハウスや焼き肉屋を開いたり。

前の世界ではよくあった事だ。

乾物屋が乾物を使ったツマミを出して立ち飲み屋をやってもおかしくはない……アキラも実は他の世界からの転生者？

そんなわけはないか。

自分で思いついただけであろう。

「ヒジキの煮物などは、お持ち帰りもできますよ」

立ち飲み屋で出しているメニューの大半が持ち帰り可能で、たまに酒を飲まずにツマミだけ購入して帰る客がいた。

「切り干し大根とニンジンと油揚げの煮物、山芋とウナギの酢の物、大根とウサギ肉の梅煮、根菜のキンピラ、生湯葉とキュウリの白味噌和え、浅漬け、キノコとスルメのピリ辛煮、こんにゃくとレンコンの炒め物、ナスの味噌炒め、らっきょうの酢漬け、菜の花のお浸し、昆布豆、うどの和え物、ナンポウマスのマリネ、ちくわ、お手製揚げ物とはんぺん、ブリの照り焼き、イワシの酢煮、数の子、新鮮な魚のつくねとアラ汁、塩サバの焼き物、ハゼとタコの天ぷら、アサリの酒蒸し、イカと里芋の煮物……随分と頑張っているな」

「はい、新鮮なお魚はデリアさんから仕入れています」

ミズホ料理というか、京都のおばんざいに近い料理が多い。

値段を抑えるため、デリアの魚屋他地元の食材も仕入れてアキラが上手く調理している。

凄い腕前だな。

うちの専属料理人に欲しいくらいだ。

「持ち帰りたい料理が多すぎる……」

四人でちょっとツマミと料理を食べ、リサ以外は一杯だけお酒も飲んだ。

屋敷ではエリーゼ達が夕食を用意しているので、これ以上は食べない方がいいな。

ならば料理を持ち帰ろうと思ったのだが、どれにしようかと迷ってしまう。

バウマイスター伯爵な俺は全種類大人買いでもいいのだが、食べ

きれないからな。
食べ物を無駄にするのは極力避けないといけない。
魔法の袋に入れれば悪くならないが、こういう料理は作りたてを食べたいというのが心情だから少しずつ購入した方がいいわけだ。

「毎日一品ずつ違う料理を買って帰ればいいじゃない。あまり欲張っては駄目よ」

「そうですね」

それが一番いいだろう。
ここで売っているおかずは副菜扱いできるものが多いから、テーブルの端にそっと置けるし、朝食で食べてもいいのだから。

「ヴェンデリン、お主は真にアマーリエの義弟じゃな。義姉の言う事をよく聞いておるではないか」

「テレーゼ、バウマイスター伯爵たる俺を子供扱いしてはいけないな。俺だって、一度に大量に料理を買って帰っても意味がないってわかっていたさ」

「お主は、自分が好きな事が絡むと途端に子供のようになからの。全部欲しいと言うのではないかと思ったわ」

「さすがにそれはないって。そうですよね？　アマーリエ義姉さん」

「ごめんなさい……実はそう思ったら忠告したの」

「……」

テレーゼとアマーリエ義姉さんは、俺を子供扱いする事が多くなったな。
これでも、父親となって威厳も出てきたと思うのに。

「リサ、お主はお主でマイペースじゃの」

「このお酒、美味しいですね」

「こんな強い酒、ストレートでひと瓶飲み干すのはリサくらいじゃぞ」

「確かに、フィリップ公爵領産のアクアビット並の酒精量じゃからの……」

それもあるが、確か前に酒は飲めるけど苦手だと言っていたような……。

「このお酒は美味しいですね」

「ミズホでも有名な米焼酎ですが、すっきりとした飲み口で評価が高いんですよ」

アキラの説明に、リサは納得したように首を振った。
酒飲みなのに酒が好きではない彼女が、初めて見つけたお気に入りの酒というわけだ。

「持ち帰りで一本ください」

「お買い上げ、ありがとうございます」

「酒も売っているのか？」

「ええ、ミズホの酒だけですけど。結構人気ですよ」

乾物屋、佃煮屋、立ち飲み屋、酒屋、総菜屋。

わずかな期間で順調に店の規模を拡大させていくアキラに、俺は畏敬の念を覚えてしまうのであった。

「今度、ミズホ茶とミズホ菓子を出すお店もやるんだってさ」

「また店を広げたのか……人員とか大丈夫なのか？」

「ハルカがお義兄さんから聞いた話によると、売り上げがいいから応援を送ったって。売り娘は、ここで採用しているって。競争率が高いらしいぞ」

「そうなの？」

「普通の喫茶店やお店の売り娘と待遇に差はないけど、制服が独特で人気があるんだよ」

アキラが店主をしているお店がまた規模を拡大するらしい。

看板はいまだに『フジバヤシ乾物店』のままだが、乾物屋は既に一部門でしかなくなっていた。

ミズホ食品の小さな総合施設みたいになっている。

この手のお店はブライヒブルクにもなく、わざわざ魔導飛行船で買い物に来る金持ちまで現れるようになった。

「タケオミさん、いらなくねえ？」

「元々口は出していないんだと。あの人が口を出すと潰れそうだからいいんじゃねえ？」

そういえば、最初の挨拶以外でこっちに来ていないような……。

アキラは親戚だから、任せた方がいいと判断しているのかもしれない。

「ミズホ服の制服が人気なのか」

「大半の店員は嫁入り前の女の子だからな。変わった制服でアピールしたいんだろう」

嫁入り前の女子がお店で店員をする理由。

それは、お客さんと知り合うためだったりする。

それなりの収入がないと常連にはなれないので、ちょっと裕福な夫を探したいという女性に人気なわけだ。

競争率が激しい人気店もあり、そういうお店の店員はほぼ全員可愛かった。

「フジバヤシ商店は商品が少し高いだろう？」

「輸入品が多いからな」

「制服も変わっていて、そういう女子には大人気というわけさ」

他のお店の制服であるメイド服や洋服よりも目立つという点が人気の理由らしい。

確かにおかずを買いにかいに寄ると、段々と綺麗な女性店員が増えていっているような……。

「綺麗な子が多いけど、なぜか一番人気はアキラだけどな」

「それはどうかと思うけど……」

アキラが男性なのはバウルブルクでは周知の事実となっていた。
それなのに、アキラ目当てで店に通う男性が多いのだ。
彼らは商品を購入してからアキラと少しお話をし、満足して家路につく。

癒し系の男の娘であるアキラか……。

「ヴェルも楽しそうに買い物をしているじゃないか」

「俺は純粋に商品目当て」

一日に食べられる量が限られているため、何を買うか迷ってしまうのだ。
だから、アキラに一番のお勧めを聞くのは日課となっていた。

「俺はアキラに執心とか噂が流れたらどうするんだよ」

「教会がうるさそうだな」

そんな話をしていたら、突然携帯通信機から呼び出し音が鳴る。
急いで出ると、連絡してきたのはホーエンハイム枢機卿であった。

「ホーエンハイム枢機卿、何か緊急の用事でも？」

選挙も無事に終わったし、暫くは公の用事はないはず。
またフリードリヒに会いたいとか？
そんな予想をしていたら、思わぬ用件を言われてしまう。

『婿殿、噂によると婿殿は男性に執心しておるとか？』

「はい？」

『女性ならばいいが、男性はいかんぞ。婿殿は名誉司祭なのだからな』

俺が男性に執着？
アキラのお店に通っているだけなのに？
ちょっと前まではアキラを女性と間違えて、俺が愛人にでもしようと執着しているという噂が流れ、今度は男色疑惑かよ……。

本当に他人の噂とは恐ろしい。
前世と違って進歩した情報伝達手段が少ないから……前世でも普通に胡散臭い噂やゴシップは流れていたか……。

「あのですね……」

俺は長時間、ホーエンハイム枢機卿に事実を説明して男色疑惑を解く羽目になってしまう。

『婿殿は何かと注目される身。そのお店に行く頻度を落としては？』

「それは無理です」

だって、定期的に通わないと突発のイベントを逃す事になるし。

『しかしだな、婿殿』

俺とホーエンハイム枢機卿は、フジバヤシ商店にどのくらいの頻度で通うべきかを長時間論議してしまった。

まさしく、魔導携帯通信機の魔力と時間の無駄使いである。

「エリーゼは微塵も疑っていないのですから」

『エリーゼが何も言わないとなればワシがあれこれ言う必要もないか……しかし、なぜその店にそこまで通うのだ？』

「美味しい物が多いからです」

『婿殿らいいというか……』

まさか、前世を思い出すからとは言えず、ただアキラのお店が好きだからとホーエンハイム枢機卿には説明するのであった。

「金目の煮付けですね。今日の金目はフィリップ公爵領近海で獲れたもので高価ですけど、脂が乗って最高ですよ」

日々謎の拡大を続けるフジバヤシ乾物店。

既に乾物店の割合は大分下がっていたが、アキラは店名を変えなかった。

オーナーであるタケオミさんがそんな細かな事を気にするはずもないから、ほぼこのままだと思う。

アキラは、乾物を使った料理と惣菜のお店のメニューを増やした。
デリアの魚屋から仕入れた魚を使い、焼き物、煮付け、から揚げ、天ぷらなどを販売している。
練り物も多くの種類が販売され、これも多くの人が購入していた。
アキラ一人とだと限界があるので、いつの間にかミズホ人の調理人が増えている。
俺とエリーゼは、仲良く二人で鍋を持って『金目鯛の煮付け』を買いに来ていた。
美味しい総菜屋ができて買いに来る頻度が増えたが、前世のようにビニールやプラスチックの容器がないのだけは不便だな。
みんな空の鍋や皿を持参して購入している。
もっとも、これを日本の人間が見たらエコだと絶賛するかもしれないけど。

「バウマイスター伯爵様、僕、結婚する事にしまして」

「えっ！　マジで！」

このところの急速な規模拡大でアキラも忙しいはずなのに、いつの間に女性と知り合ったのであろうか？
もしかすると、ミズホに婚約者がいたとか？

「随分と急なお話ですね」

「僕もそう思うのですけど、こういう事はタイミングですからね」

「そうかもしれませんね。お二人の未来に神の祝福があらん事を」

「ありがとうございます、エリーゼ様」

「それで、相手は誰なんだ？」

アキラと結婚する女性……物凄く美人か、逆に男らしい人かもしれないな。

アキラが女性ぽいから、それで案外バランスが取れるかもしれない。

となると、キャンディーさんみたいな人？　って、キャンディーさんは中身はともかく外見は男性だからな。

などと、思わず色々と考え込んでしまう。

「僕の奥さんになる人はデリアさんですよ」

「意外……じゃないな」

最近、魚の取引で毎日会っているからな。

店舗も住んでいる場所も近いから、ある意味必然とも言えるか。

「お店の女の子の誰かかと思った」

「縁のある子はいませんでしたね」

フジバヤシ乾物店に勤めている女の子達からすれば、アキラは稼ぐからいい条件の男性だが、見た目が誰よりも可愛らしく料理もプロレベルとなると、敬遠してしまのかもしれない。

その点デリアは、毎日顔は合わせても距離感があるからな。

それが逆によかったのかも。

「そうか、おめでとう。あとでお祝いを贈るよ」

「お気遣いいただきありがとうございます」

式に出席してもいいのだが、俺は領主だからな。

あまりフットワークが軽いと軽く見られてよくないとローデリヒが言うはず。

いい飯も出そうだから出席したいな……アキラはタケオミさんの親戚だから俺が出席してもいいような気もする。

屋敷に戻ったら聞いてみるか。

「二人とも店主だから大変そうだな」

「その点はデリアさんのお父さんが配慮してくれて、応援の人手を王都から送ってくれるそうです。その代わりに最低でも子供は二人と釘を刺されてしまいましたが」

アキラはタケオミさんの親戚ながらも雇われ店長なので、実はデリアの魚屋に婿入りしてもおかしくはない。

包丁捌きも達人級なので、魚屋でも十分に通じるであろう。

ただ、もしそうなるとタケオミさんがドル箱であるフジバヤシ乾物店の名物店長を失ってしまうわけだ。

アキラは御覧の通りの凄腕なのでいつでも独立できると思うが、彼は子供の頃からタケオミさんに刀を習っており仲もよかった。

結婚したからすぐ独立という事はしないで、フジバヤシ乾物店をフランチャイズ化する事にしたらしい。

フジバヤシ乾物店が繁昌すると、ミズホ産食材を卸しているタケオミさんが自然と儲かる仕組みなので、特に揉めもせずにアキラは独立できた。

独立した以上は店を継ぐ跡取りが必要だが、デリアの魚屋にも跡継ぎが必要なので子供は最低でも二人というわけだ。

ここで夫婦して働き詰めで子供が産まれないと困るので、デリアの父親はベテランの店員を送り込んで魚屋を任せ、新婚生活をサポートするわけだな。

「両方ともお店が残ってよかったじゃないか。それにしても、姉さん女房かぁ」

「えっ？　僕の方が年上ですよ」

「「ええっ！」」

デリアの見た目は多分二十二〜三のはずで、アキラはどう年上に見ても俺達と年齢差がないはず、もしかしたら年下かもと思っていたのに、デリアよりも年上だというのだから驚きだ。

エリーゼも俺と同じように思っていたのであろう。

思わず一緒に叫んでしまった。

「ちなみに、アキラっていくつ？」

「もうすぐ二十三です。デリアさんは二十一ですね」

俺とエリーゼは、アキラの結婚よりも彼が実は二十三歳だという事実に驚きを隠せなかった。

「アキラの年齢ですか？　はい、確かに間違いないです。アキラは子供の頃、兄様とよく遊んでいましたから」

夕食の席でハルカにアキラの年齢を訪ねると、確かにもうすぐ二十三である事が判明した。

本人が嘘をつくとは思えないが、アキラは威厳のある男性になりたがっている。

逆サバを読む可能性は十分にあったから確認してみたのだ。

「アキラが威厳のある男性になれる日は遠そうだな」

エルの言うとおりで、まず見た目が誰が見ても美少女なのがよくない。

挙句に、童顔である事実まで判明してしまった。

アキラが威厳のある男性になる日は、一度すべての頭髪を失った人がそれを取り戻すのと同じくらい難しいと思う。

本人以外で、それを望んでいる人がいないのもあった。

男性が癒しを求めて買い物にくる男、それがアキラなのだから。

「俺とハルカは、結婚式と披露宴に招待されているな」

「畜生、俺も行きたい……」

「それは難しいだろうな」

いくら俺お気に入りのお店の店主同士の結婚式とはいえ、バウマイスター伯爵である俺が出席してしまうと、色々と問題があるわけか。

まさか貴族としての地位が、俺の行動を縛るとは……。

「ふと思いついたんだが、バウマイスター伯爵領に住む謎の冒険者ヴェルが、懇意にしているお店の店主から披露宴に招待されたというシナリオはどうだ？」

前世で、まだ元気なはずのお爺さんがテレビで見ていた時代劇と同じだ。

遊び人の〇さんが奉行だったり、貧乏旗本の三男坊が実は将軍様だったりと。

俺もこの手で行けば、披露宴に出るくらい余裕だと思うんだ。

「いや、ヴェルだって一発でバレるから」

「そうですね、バウマイスター伯爵様のお顔を知らない領民は非常に少ないと思いますよ」

俺が考えた『世を忍ぶ仮の姿作戦』は、実行前にエルとハルカによって拒否されてしまった。

「第一、なぜそんなに式に出たいんだ？」

「勿論、二人の結婚を心から祝うためだ」

新鮮で美味しい魚を売ってくれるデリアと、乾物屋から色々と派生して美味しい物を作って販売しているアキラ。

この二人が夫婦になれば、俺は更に美味しい物が食べられるようになるであろう。
祝って当然だと俺は思うのだ。

「お前、もう一つ何か考えていないか？」

エルの奴、俺のもう一つの目的に気がついたか……。
あの二人の披露宴だから、さぞやいい飯が出るであろうという俺の考えを見抜きやがった。

「披露宴で出る飯が目当てか？」

「ミズホ料理と、いい魚があるから魚料理も期待できるのに……」

普通、披露宴の飯は微妙な事が多いけど、食べ物を扱う二人の披露宴となれば宣伝も兼ねてこだわりの食事が出るはずだ。
それが食べられないなんて！
人生の大きな損失じゃないか！

「祝儀なら十人前でも出すぞ」

俺はバウマイスター伯爵、その身分に恥じない祝儀は出させていただくぞ。

「いや、そういう問題じゃないから……エリーゼ、あんぽんたんな旦那に説明してやれ」

「お二人の式にあなたが出席してしまうと、主役がどちらかわからなくなりますし、みなさん緊張してしまいますから。花嫁と花婿さんも同じですよ」

「俺は、謎の冒険者ヴェル！」

俺はバウマイスター伯爵じゃないよ。

ちょっと魔法が使える冒険者なのさ。

「ですから、それは無理です」

エリーゼにも駄目だと言われてしまった。

クソッ！

もっといい手はないのか？

「エリーゼも、謎の冒険者ヴェルの妻として出席するんだ」

夫婦になってしまえば、さぞやいいカモフラージュになるはず。

「夫婦だと余計に目立ちますが……私はあなたの妻ですから」

俺は奥さんの数が多いけど、エリーゼはその中でも一番の有名人。

謎の冒険者ヴェルの妻という設定は難しいか……。

「あのぉ……私がアキラに頼んで、料理を取っておいてもらいましょうか？　宣伝も兼ねて大勢の招待客を呼ぶと思うので、料理は大量に作るはずです」

いい案が思い浮かばずに悩んでいると、俺達の分の料理も取り置きしておきましょうかとハルカから提案があった。

なるほど、その方法はとんだ盲点だったな。

「ナイスアイデアだ！　エルもそのくらいは思いつかないとなぁ…

…」

ハルカの内助の功は素晴らしいけど、肝心のエルが駄目駄目であった。

そのくらい、エルが思いつかないといけないのに……。

「何かムカつくな。ヴェルも思いつかなかっただろうが。披露宴の飯が気になって」

「いいじゃないか。いい飯が出る披露宴はみんなの記憶に残るいい披露宴になるんだから」

美味しい料理を食べながら二人の門出を祝う。

ここで飯が不味いと、飯が不味かった記憶の方が優先されてしまうからな。

「すげえ屁理屈……まあいいや。ヴェルの分の祝儀も預かって、食事は屋敷に運んでもらうから」

「それならば」

披露宴には出席できないが、同じ食事を楽しめるのならばこれ以上子供のように文句を言ってはな。

ここは、大人の対応に終始しようと思う。

「ところで、ウェディングケーキは切り分けてもらえるのかな？」

ヘルムート王国でも、披露宴でウェディングケーキを出す事が多かった。

ケーキ入刀はなかったけど、参加者全員に配れる数は準備するの

が常識だったのだ。
　という事は、俺達にもケーキがないと不自然というものだ。
「お前は子供か！　ハルカがちゃんと伝えてあるから大丈夫だよ」
　結婚式とそれに続く披露宴に参加するため、エルとハルカは正装して教会へと出かけて行った。
　結婚式はバウルブルクにある教会で行われる。
　アキラは信者ではないのだが、そこは日本人に似た気質を誇るミズホ人。
　上手く合せるくらいは普通にできるようだ。
「飯が楽しみだな」
「ヴェル、ここはアキラとデリアの結婚を祝うのが先じゃない」
「そうだよ」
　イーナとルイーゼは、デリアと同じくは召還魔法で下着を奪われた仲間だものな。
　連帯感があるというわけだ。
「勿論二人の門出はちゃんと祝うさ」
　祝うけど、いい飯があればもっと祝えるじゃないか。
　そう思っていると、フジバヤシ乾物屋から大量の料理とデザートのケーキが届いた。
「予想どおりだ！」

様々な種類の刺身に、大きな鯛の塩焼き、天ぷら、カニ、鯛飯など、豪華なミズホ料理に加えてヘルムート王国の料理も材料が高品質になっていてとても美味しかった。
披露宴に出席した人達へのいい宣伝になったであろう。
ケーキはチョコや魔の森産フルーツをふんだんに使った品で、これも全員に好評だ。

「ヴェンデリン、披露宴に出ていたら客への対応で碌に食べられなかったかもしれないぞ」

「という事は、これでよかったというわけだな」

俺達は、赤ん坊達の世話の合間に、心ゆくまで豪華な料理とデザートを堪能したのであった。

「いらっしゃいませ」

「あれ？　もう仕事か？」

「はい、もう少し落ち着いてから新婚旅行にでも行こうかという話になりまして」

無事に結婚式を終えたアキラとデリアは、三日ほど休んでから仕事に復帰した。
デリアは魚屋を王都の本店から来たベテラン店員に任せ、自分は惣菜屋の手伝いに入っている。

デリアは魚を捌けるので、即戦力となっているようだ。
アキラと二人で楽しそうに調理作業をしている。
二人とも女性に見えて、ちょっと夫婦には見えないけど。

「デリアは魚を捌くのが上手ですよね」

「それは俺も思った」

魔導ギルドで、北方から召喚した海の幸を見事な腕前で捌いていたからな。
なるほど、支店を任されるだけの腕前はあるというわけだ。

「また忙しくなる予定なので、デリアの助けがあってよかったです」

「そうですね、また新しい店を呼びますし」

「あのさ、短期間で店を広げすぎじゃないか？」

アキラの能力は凄いと思うが、少し急ぎすぎじゃなかと思うのだ。
もう少しゆっくりでも問題ないと思う。

「規模を広げるのはこれで終わりですよ。それに、新しい店にはほとんど手間がかかりませんし」

「どういう事だ？」

「ああ、それはですね……」

アキラが計画している事。
それは、肉屋、魚屋、八百屋、乾物屋、総菜屋、食堂、居酒屋、

その他食品店から生活雑貨を売る店まで。
色々なお店を一カ所に集めて利便性を追及した……あれ？　この経営形態って……。

「（総合スーパーの走りか！）」

「王都では難しいですけどね」

確かに、デリアの言うとおりだ。
王都でスーパーに似たお店の経営は難しいと思う。
なぜなら、それぞれのお店にギルドがあって彼らの権利が強く守られているからだ。
その点、新興の貴族領で各種ギルドが完全に根を張っていないバウルブルクならば可能というわけか。

「なるほど、だから急いだのか」

「先に作ってしまえばいいのですから」

そんな理由で、アキラによりバウマイスター伯爵領にスーパーマーケットのような店舗が誕生した。
一カ所で必要な物がすべて揃い、わざわざ他のお店に買い物に行く必要がないので大盛況となり、沢山の客が集まるので店子として入っている肉屋や八百屋などにも好評であった。
フジバヤシ乾物店はオーナー店舗として家賃でも稼ぎ、後世大陸中に店舗を持つ総合食料品店フジバヤシ屋の礎となるのであった。

「ああ、何か儲かっているな」

ただ、フジバヤシ乾物屋の躍進にオーナーであるタケオミさんはまったく関わっていなかった。

完全に人任せで、ある意味大物だと思うとエルが語っていた。

第百三十五話　人類は麺類。

「はい、どうぞ。まだいけますか？」

「大丈夫だ」

「じゃあ、お代わりをいきますよ」

新蕎麦の季節だという理由で、フジバヤシ乾物店はミズホから職人を呼んで臨時に蕎麦屋を開店させた。

アキラのお店にはイベント用のスペースがあり、今後は寿司屋を呼んだり、餅つきをする計画だそうだ。

これは是非行かねばなるまい。

今日はお店の定休日であったが、アキラが蕎麦打ち職人達を連れてバウマイスター伯爵邸で蕎麦を振る舞ってくれた。

俺は領主であり、常連中の常連なので、たまにはこのような無理も聞いてくれるというわけだ。

こういう部分だけは貴族になってよかったと思う。

お店の規模を広げた時に、俺が領主として手続きなどで協力したからそのお礼も兼ねているわけだ。

アキラが連れてきた職人達は次々と蕎麦を打ち、茹でてから水で締めて仕上げていく。

掛けと盛りを自由に選べ、蕎麦だけじゃなくて天ぷらも揚げてくれた。

普段お店で出している惣菜なども並び、蕎麦を食べながら自由につまむ事ができる。

前の世界ではそうでもないけど、この世界ではちょっとした贅沢であった。

「相変わらず、導師は食うなぁ」

「本当、食った物はどこに行っているんだ？」

この日はブランタークさんと導師も招待されていたが、導師は既に三十杯以上も蕎麦をお代わりしている。

彼は盛り蕎麦が好みのようで、一枚を一～二分で食べてしまう。

そのせいで職人達が大忙しなのだ。

エルとブランタークさんも、導師の食欲に呆れていた。

「まあ、ヴィルマには負けるけど……」

そう、うちにはヴィルマがいる。

子供を産む前は少し……それでも凄かったが……食欲が落ちていたが、今ではすっかり元通りであった。

彼女もお代わりを連発し、職人達を更に忙しくさせている。

「ヴィルマ、美味しいかい？」

「美味しい」

「やはり、蕎麦は美味しいな」

「ヴェル様は、そこまで蕎麦好きだった？」

「この食べ方が好きなのさ」

「私もそう」

蕎麦は大陸中で栽培されているが、日本風の食べ方をしているのはミズホ公爵領だけだ。

あとはお粥に入れたり、パスタやクレープにしたり、蕎麦は痩せた土地でも作れるので米や小麦の代わりというわけだ。

日本の蕎麦の産地も、稲作が難しい土地が多かったからな。

前世で、『有名な蕎麦の産地って事は、昔は貧乏だったって証拠だ。地元の人に言うと怒られるけどな』と、蕎麦好きな取引先の社長が言っていたのを思い出す。

「導師は、ヴィルマに張り合わなくなったな」

「いや、さすがに勝ち目がないのである」

導師も物凄く食べるけど、あくまでも常識の範囲……でもないか。

ヴィルマの場合は、英雄症候群という生来の事情がある。

いくら導師が努力をしても、食べる量でヴィルマに勝てるはずがないのだ。

「職人を呼べるのは今だけですけど、お店に乾麺と出汁入りのツユを置くのでよろしくお願いします」

みんながお腹一杯になったところで、さり気なくアキラが宣伝をした。

乾麺とツユは前にミズホで購入したが、そろそろ在庫が危うくなってきたからな。
現地に買いに行こうかと思っていたところなのでちょうどよかった。
打ち立てには負けるけど、乾麺の方が簡単に作れて便利だから、常備するなら乾麺だな。

普通の蕎麦だけじゃなく、茶蕎麦や布海苔が入ったへぎ蕎麦もあって、色々と楽しめるのがよかった。
ミズホ公爵領は、本当に日本によく似ている部分が多い。

「蕎麦はどこでも作れるから、その内にミズホ式の蕎麦を出すお店ができるかもしれませんね」

「それはあるかもな」

蕎麦打ちは集中して練習すれば、意外と短期間である程度の腕前になる。
前世でも、定年退職したお父さん向けに蕎麦打ち講座があった。
田舎に行くと、蕎麦やうどんを打つのが上手なおばあちゃんとかも結構いたし。

田舎風うどんとかも美味しそうだな。
今度は、うどんを打ってもらおう。

「この前のお休みの時、デリアとレストランに行きまして。その時に、生パスタを手打ちする腕のいい職人さんがいたんですよ」

夫婦でお休みの日にデートか。
夫婦というよりも女性二人組に見えるけど、夫婦仲がよくてよか

った。

「ローレックの店だろう？　あそこの生パスタは美味しい」

ヘルムート王国において一番食べられている麺はパスタであった。
土地が貧しい地方には雑穀や蕎麦を使ったパスタもあり、美味しいパスタを打つ技術があれば、少し練習すれば蕎麦もいけるであろう。

「彼と仲良くなりまして、今度蕎麦打ちを教える事にしたんですよ」

「いいのか？」

蕎麦打ちの技術を、そんなに簡単に教えていいであろうか？
この世界でも技術の独占は富の源泉である。
簡単に人に教えるのはどうかと思ってしまうのだ。

「蕎麦はヘルムート王国でも採れますが、ツユの材料である昆布とカツオブシはミズホが独占していますからね」

ミズホ式の蕎麦を普及させ、ツユの材料である醤油、カツオブシ、昆布でフジバヤシ乾物店が儲けるというわけか。
恩を売りつつ、自分も稼ぐか。
やはりアキラは商売が上手だ。

「新しい味のパスタも提案したら、彼も乗り気でしたよ」

という事は、これからはローレックの店でも和風パスタがメニューとして出るというわけだ。
昆布、干し椎茸、醤油、明太子、納豆、青紫蘇などが具として使

われる可能性が高い。
ウニ、イクラ、アワビ、鮭などが使われた海鮮系パスタもいいな。

これは楽しみだ。
人気が出たら、具材を卸すアキラが儲かるという仕組みなのであろう。
何というＷＩＮＷＩＮな関係であろうか。
やはりアキラは、俺よりも商売の才能があるな。

「乾麺なら、立ち食いや屋台でも出せますしね。天ぷらやオニギリも売ればいい商売になりますよ」

そこまで考えているとは、さすがはアキラとでもいうべきか。

「乾麺の需要が増えれば、ミズホから輸入しないでここで製造すれば原価を落とせますしね。高級品はミズホ産という住み分けも可能です。ところで、バウマイスター伯爵様にお願いがあるのですが……」

「聞ける願いなら聞くよ」

アキラは、俺に美味しい物を沢山提供してくれるからな。
多少の願いくらいは……決してアキラが可愛いからじゃないぞ。

「現在の王都は、短期間で食の進化が始まっているとか？」

「そうらしいな」

一緒に商売をしているアルテリオさんから聞いたのだが、俺がパクって普及させた醤油、味噌その他大量の調味料と新しい料理に、

ミズホ文化と食品の普及も始まって、王都の飲食店は熾烈な競争に入ったらしい。

アルテリオさんが手がけている店は順調だが、人生何があるかわからない。

『調子のいい時は、没落の入り口でもある』と、前世で我が社の社長が俺達に訓示を述べつつ、なかなか給料が上がらない原因にもなっていたからなぁ……。

「僕も、王都の飲食店を調べたいのです」

「それは、俺も必要かな？　アルテリオさんがコケると困るし」

飲食店を長く続けるのは大変だ。

前世では、開店してから五年以内に七割以上の店が潰れるのが当たり前だったからな。

テレビで『お客さんが殺到！』と紹介された店がすぐに潰れてしまったりと、飲食店もなかなかに大変なわけだ。

「バウマイスター伯爵様の魔法で連れて行ってほしいのです」

「いいよ。俺も出かけるから」

「ありがとうございます」

俺がオーケーを出すと、アキラは満面の笑みを浮かべて俺にお礼を述べた。

相変わらずの可憐さに、俺はちょっと心臓がドキドキしてくる。

やっぱり、どう見ても美少女にしか見えないな。

「ヴェルは、アキラがお気に入りみたいだね」
「その言い方は誤解を招くと思うけど……」
「本当に誤解かな？」
「誤解に決まっているじゃないか」
俺の心情を見透かすかのようにルイーゼが意味あり気な表情を向け、それを俺が懸命に否定する。
だが、本当にそうではないのかいまいち自信が……あるに決まっているじゃないか！
こうして俺達は、アキラと共に王都に出かける事になるのであった。

「それじゃあ、出発するか」
「はい」

数日後、俺達は王都にある飲食店の視察に出かける事になった。
公式な目的は、『バウマイスター伯爵領における飲食店産業発展のための視察』という名目だ。
俺も伯爵になったので、ただ色々な飲食店を巡りますではローデリヒが首を縦に振ってくれなかったのだ。
お役所の人も、視察と称して税金で海外旅行とかに行くじゃないか。

物事に正当な理由をつければ、そこに少し遊びを入れても大丈夫というわけだ。

あとは、スケジュールの問題もある。

俺は開発で忙しいので、この視察のためにハードスケジュールをこなしてきた。

同行するアキラは、まだ新婚旅行に行けないので結婚したばかりのデリアを連れて来た。

視察は三日間を予定していたので、王都にあるデリアの実家に挨拶に行くスケジュールも入れていたのだ。

当然、遊びの要素の方が強いけど。

「あなた、久々に楽しみですね」

「そうだな」

視察とはいっても、大半が遊びみたいなものだ。

連れて行くメンバーの人選で少し悩んでしまったが、エリーゼはバウマイスター伯爵家の正妻として他の奥さん達よりも苦労している。

俺は、一番にエリーゼを連れて行く事を決めた。

「俺もハルカと一緒に行きたかったなぁ……無理だけど」

二人目は、俺の護衛役であるエル。

「試食は任せて」

三人目は平等にクジで決めたのだが、こういう時のヴィルマのク

ジ運は最高だ。

「服を選ぶのは面倒だけど、食べるのなら大歓迎だぜ」

四人目も、カチヤは何気にクジ運がいいので上手く同行する権利を引き当てた。

「私もか。あまり料理のレパートリーは多くないから、役に立たないかもしれないわよ」

「予備校でパーティを組んでいた時には、ボクが一番運がよかったんだけどなぁ……滑り込みセーフってやつだね」

最後にアマーリエ義姉さんとルイーゼが滑り込み、これで同行するメンバーが決まった。

「旦那様がいない間の開発は、私が進めておきます」

「リサはえらく気合が入っておるの。まあ仕方があるまい。妾もリサの指示に従って働こうかの。今度、妾とリサもどこかに連れて行ってくれよ」

「この埋め合わせは、必ずするよ」

留守番役のリサとテレーゼは、俺の留守中に魔法で土木工事を行ってくれる事になった。

なぜなら、同じく魔法の修練も兼ねて土木魔法を駆使しているアグネス達も王都行きについてくる事になったからだ。

「先生、ありがとうございます」

「お兄ちゃんの様子も見たいんです」

「先生とお出かけ、楽しみだなぁ」

三人とも普段からよく頑張っているので、たまにはお休みをあげないといけないからな。

何しろ、バウマイスター領の開発が順調なのはアグネス達のおかげでもあるのだから。

「ベッティは、お兄さんが心配か？」

「お兄ちゃん、ちょっと目を離すと駄目人間になりますから。たまに引き締めないと」

何だかんだ言いながらも、ベッティは兄想いの優しい少女であった。

お兄さんが没落しないように気を使っているわけだ。

「奥さんがしっかりしているし、借金の返済も順調だ。多分、問題はないと思うよ」

「だといいんですけど……」

「それを確認するためにも行くか……」

「お願いします、先生」

俺達一行は、『瞬間移動』で王都へと向かうのであった。

「時間通りである！」

「ビックリした！　時間どおりならいいではないですか」

王都に『瞬間移動』で飛んだ俺達は、視察の前に導師と待ち合わせをする事になった。

なぜなら、彼は貴族の癖に庶民的な食べ物が好きで、定期的に食べ歩きを行っているからだ。

王都の飲食店事情（低価格の店のみ）に詳しいので、同行をお願いしたというわけだ。

「早く何か食べたいのである！　某、朝はパンを一斤しか食べていないのである！」

「それだけ食えば十分な気がするけど……」

エルがそっとボヤき、俺も含めて導師以外は一斉に首を縦に振った。

「確かに、それだけだとあとでフラフラする」

「であろう？」

勿論、ヴィルマは例外であった。

彼女は、毎朝パンなら三斤は食べるからだ。

「これから食べ歩きだと聞いたから、今朝は食べるパンを五斤に増やして胃を広げてきた。逆に朝食を食べないと、胃の動きが悪いから最終的に食べる量が減ってしまう。そうすると、お腹が減ってフラフラする」

「なるほど！　そうやって食べる量を増やすのであるか！」

ヴィルマと導師の会話が色々とおかしい。

というか、ヴィルマは前世の大食い名人みたいだな。

少なくとも、常人にはまったく参考にならない。

「伯父様がお店を紹介してくださるのですか？」

「半分お遊びとはいえ、実はバウマイスター伯爵のおかげで王都やその周辺で庶民の食生活に変化が出た事例を教えようと思ったのである！　ついて来るのである！」

導師は、向こうの世界だとB級グルメマニアに属する人種だ。

若い頃に冒険者をしていたから、場末の酒場や食堂で出るような食事が大好きなのだ。

子爵家の当主にして王家筆頭魔導師だから、普段は貴族らしい食生活を……あまりそうは見えないけど、本人なりに気は使っていた。

あくまでも、自分なりにであったが。

そしてお休みになるとお忍びで、そういうお店を回るというわけだ。

導師はどう変装しても導師だから、全然お忍びになっていないけど。

当然他の王族や貴族達は、導師の趣味を知っている。

陰口くらいは叩いているかもしれないが、堂々と導師本人に下品

だと言う貴族はいない。
誰も決闘を挑まれたくないから当然だ。

「これはまた、随分と物騒な地区ですね」

導師が俺達を案内したのは、貧しい人達が住むスラム地区であった。
そこに導師以下、貴族様御一行という場違いな集団がいるから、人々が遠巻きに俺達を見ている。
エルは、油断なく周囲を警戒していた。

ただし念のためだ。

「そりゃあそうだな。導師様から金をせびったり、誘拐しようと考える奴はいないものな」

「あくまでも念のためだね」

凄腕の冒険者であるルイーゼとカチヤは、さり気なくエリーゼとアマーリエ義姉さん、デリアの護衛に入った。
あくまでも念のためというスタンスだ。
デリアの場合、アキラがいるから心配ないであろう。
彼はあのタケオミさんが認めるほどの凄腕だから、間違いなくちょっかいをかけた奴の方が不幸になると思う。

「あの姉ちゃん、凄え可愛いな」

「同行者がいなければ声をかけるのに……」

「本当、うちのへちゃむくれの嫁とは大違いだぜ」

離れた場所からこちらを見ているスラムの住民達が、うちの綺麗な女性陣を評価しながら世間話をしていた。
特に人気なのは、やはりアキラであった。
彼はミズホ人なので、どうしても王国では目立ってしまうのだ。
勿論、物凄く可愛いのもある。

「（何か複雑だね）」

「（私、アキラの妻なんですけど……）」

「（綺麗で可愛い夫を持つ妻かぁ……）」

「（ルイーゼ様、そういう評価は嬉しくないです……）」

「（でもさ、何気にアキラとか呼んじゃって仲良しなんだね）」

「（まあ、それは夫婦ですから）」

ルイーゼとデリアが、男達から一番注目を浴びるアキラについて小声で話をししていた。

「先生、大丈夫でしょうか？　両親からスラムには入ってはいけないって言われていまして……」

「私もお兄さんから」

「誘拐されるからって」

「普通はそうだよな。今日は、心配いらないけど。俺から離れるな

よ」

「「「はーーーい！　先生から離れません！」」」

「急に元気になったな」

初めてスラムに入る三人娘が心配そうな表情を浮かべるが、今日は心配ないと説明する。

柄の悪い連中は、たまにこの地区に紛れ込むお上りさんから金銭を奪ったりする。

だが、導師から恐喝するなど死刑執行書にサインするようなものだ。

万が一上手く行っても、王宮筆頭魔導師に被害を与えたわけだから最悪死刑になるかもしれない。

ハイリスクノーリターンなので、誰も俺達の前を塞がなかった。

「ここである」

「モツ料理のお店ですね」

「そうである。デリアは食べた経験があるのであるか？」

「何度かは。従業員の人達がオヤツに串焼きを買って来る事もありましたし。魚も捌くとアラが出ますから、アラの料理は魚屋の賄いではよく出しますよ。それを知り合いの肉屋と交換したりするんですよ。だから、馴染みはありますね」

なるほど、魚屋でのアラ料理は関係者のみの特権なのか。

その話を聞いたら、アラ汁が食べたくなったな。

味噌と酒粕で作ると美味しいから、あとでアキラに頼んで作って

もらおうかな。

「旦那、いらっしゃい。今日は、えらく大人数ですね」

店の店主である初老の男性は俺達を見て少し驚いたようだが、導師とは普通に会話をしていた。

常連なのでもう慣れてしまったのであろう。

「適当に料理を出すのである！　某は酒も！」

客がまばらな時間帯のようで、俺達は店の奥のテーブル席に座って料理が出てくるのを待った。

「モツ料理ですか」

「苦手であるか？」

「いいえ」

バウマイスター伯爵領が成立したばかりの頃、モツ料理屋をやっているアルノーの屋台でよく食事をしたものだ。

串焼きと煮込みが特に美味しく、彼は醤油や味噌もすぐに取り入れたので、工事関係者に大好評であった。

特に色々なモツを味噌でトロトロになるまで煮込んだモツ煮が美味しいのだ。

酒のツマミにも、パンに挟んでも、ご飯の上に載せても美味しい。

屋台からスタートした彼であったが、今ではバウルブルクで何店舗かの居酒屋を経営するまでになった。

バウマイスター伯爵領開発特需の分け前を狙って多くの人達が押しかけたが、アルノーは別のアプローチで大成功を収めたわけだ。

「伯父様、このお店はいい店ですね」

「であろう？」

「生臭くないです」

エリーゼも、このお店がいいお店だと気がついたようだ。

所得の低い庶民が肉を食べるとなると、やはり本来なら捨てられてしまう動物や魔物の内臓に頼る事となる。

モツは安く手に入るのだが、処理を上手くやらないと臭くなってしまう。

スラムには、モツの嫌な臭いが出たままのお店が多い。

臭くても安いから、庶民はそんなモツ料理でも美味しいと言って食べるわけだ。

このお店は、モツの嫌な臭いがしない。

上手に処理をしてから調理している証拠であった。

「お待ちどうさま」

話をしている間に、店主とその奥さんがモツを煮込んだ料理を持ってきた。

導師には、酒精分の強そうな蒸留酒が入った大ジョッキもだ。

「導師、酒は関係ないのでは？」

「景気づけである！　気にしてはいけないのである！」

エルからの指摘を、導師はいつものようにスルーした。

「これ、美味しいですね。優しいお味で」

「そうね、全然生臭くないし。うちの実家も田舎で、狩猟で得たモツはこんな感じで煮込むけど、どうしても少し匂いが出てしまうから」

エリーゼも、バウマイスター伯爵邸にいるので料理をする機会が増えたアマーリエ義姉さんも、モツの煮込みが気に入ったようだ。

「色々な種類のモツが大量に入っているな」

「美味しいから、余計お腹が空いてきた」

カチヤもモツ煮込みが気に入ったようだ。

ヴィルマは、早速お代わりを頼んでいる。

「塩と少量の香草だけでこの味は凄いですね」

「手間をかけて味をよくしているのであるな」

導師が、蒸留酒の大ジョッキを煽りながら俺に説明する。

別に酒を飲む必要はないわけだが、みんな言っても無駄なのでスルーしていた。

「このお店は、この周辺のモツ料理屋の中では少し高い方である。味は抜群にいいので繁昌しているのであるが」

段々とお昼時が近づき、店には多くの客が入ってきた。
みんな、俺達を見て驚いているけど、すぐに注文して食事に没頭する。
芸能人じゃなくて貴族だから、声をかけたり、サインを強請ったり、写真を撮ってほしいなんて頼めないから当然かもしれないが。

「このお店は、巨大な鍋でモツを煮込んでいるのである！」

導師が調理場の方に視線を向けると、そこでは巨大な鍋が三つ湯気を立てていた。

「三つなのは、三つないと間に合わないからですか？」

「いや、急遽鍋を三つに増やしたのである」

「なぜです？」

「それはであるな……オヤジ！」

「へーーーい」

導師に呼ばれた店主は、追加でモツ煮込みの器を持ってきた。
よく見ると、モツ煮込みの汁の色が違う。

「ミソ味とショウユ味です」

「このお店は、モツ煮込みの種類を増やした結果、余計に客が増えたのである！　ミソ味とショウユ味のモツ煮込みは少し高いのであるが、それでもよく売れているのである！」

なるほど、バウマイスター伯爵領のみならず、王都のしかもスラム地域にある飲食店でも味噌と醤油が使われるようになったわけか。
どのお店も、自分なりに工夫をして競争をしているわけだ。

「オヤジ！　あれを持ってくるのである！」

「へーーーい」

導師は物凄い常連のようだ。
あれだけで、何を注文するのか店主がわかってしまうのだから。
親父は、七輪に似た炭で焼く携帯調理器具をテーブルの上に置いた。
そして、調味液に漬け込んだモツを皿に入れて持ってくる。

「これも少し高い料理であるが、大人気の一品なのである」

導師は慣れた手つきでモツを金網の上に載せて焼いていく。

「俺も手伝います」

「エルヴィン少年、モツは塩、ミソ、ショウユと調味液が分かれているのである！　混ぜて焼くのは禁止である！」

「拘るなぁ……」

モツ焼き奉行と化した導師は、エルに厳しく指示を出してモツを焼いていく。

「この腸の部分を焼くと、余分な脂が下に落ち、タレが炭で焼けて香ばしい香りが広がるのである」

前世でたまに行った焼き肉屋を思い出すな。
バウマイスター伯爵家でもたまにバーベキューはするけど、こういうちょっと下品なモツ焼きも美味しそうだ。

「焼けたら、それを口に入れる。美味い！　味を確認しつつ、残ったシオ、ミソ、ショウユの味を流すように酒を煽る！　最高であるな！」

完全にただの酒飲みオヤジのセリフであるが、俺も内心賛同していた。
貴族にはふさわしくない料理だが、美味しいのは確かだからだ。

「お昼に野外でお肉を焼いた事を思い出しますね」

エリーゼも、美味しそうにモツ焼きを食べている。
その所作は、さすがは貴族の令嬢として教育を受けていたのでこの店では浮いているくらいだが、エリーゼは俺達と一緒に冒険者としても活動している。
なので、まったくこういう料理が駄目というわけではない。

エリーゼの場合、そういう料理を上品に改良するのも得意だから、下品だからその料理は食べないという事もなかった。
上品なだけで大して美味しくもない料理に出会うと、完全に社交辞令的な態度に徹してしまうほどだ。

「これは予想以上に、味噌と醤油が普及していますね。バウマイスター伯爵様が開発したとか？」

「まあね、昔にブライヒブルクでミズホ関連の事が書かれた本を見

つけてね。そこに味噌と醤油の情報が書いてあったんだ」

勿論大嘘であった。

いくらアキラが可憐でも、俺も正体を話すわけにはいかない。

ボッチな俺が、古い書籍を参考に試作した事にした方が都合がよかった。

「魔法だけで製造を試みて大分苦労したけどな」

「全体的に纏まっていて、いい味噌だと思いますよ」

「普通だよな」

「その分使い道が限定されないから、逆に素晴らしいと思います」

俺はミズホ産の味噌には大分負けると思っているけど、アキラに褒められると悪い気がしないな。

やっぱり、美少女に褒められると……って！　違うわ！

「それなりの質の味噌と醤油が量産されたのはよしとしよう」

「長年製造していけば、質も向上しますからね。ただ、ミズホの味噌と醤油の歴史は長いです。追いつくのは容易じゃありませんよ」

距離の関係で中級品を輸出しても利益は少ないだろうから、ミズホは高級品を王国の富裕層に売っていく計画なのは明白だ。

実際に、帝国でもそんな感じのようであったし。

「とまあ、こんな感じである！　では、次に行くとするか」

ひととおりのメニューを食べて満足した導師は、店主に会計を頼んだ。

このお店の分は出してくれるようだ。

みんな味見くらいしかしていないが、人数が多いので結構な金額になっているはず……でもないか。

どうも前世の癖で、会計が日本円で一万円を超えると高いと感じてしまう俺は、まだ貧乏性が抜けきっていないのかも。

「美味しくて参考になりましたね。アキラさんは、モツ煮込みをどのように改良しますか？」

店を出てスラムから市民街へと移動する途中、料理が好きなエリーゼは同じく料理が得意なアキラと話をしていた。

子持ちとはいえ、まだ十分に美少女なエリーゼと、ミズホ風美少女のアキラは絵になる……いや、アキラは男性だった。

「味噌仕立てで、サトイモ、大根、人参、コンニャク、豆腐、キノコ、生姜なども入れてジックリ煮込むといいかもしれません」

「それは美味しそうですね」

エリーゼとアキラは、料理の話で大いに盛り上がっていた。

それにしても、そのモツ煮込みを早く食べたいものだ。

「アキラ、そのモツ煮込み。七味とネギは忘れるなよ」

「さすがはバウマイスター伯爵様ですね」

アキラに褒められると、悪い気がしない俺であった。

だが、さきほどから少し不機嫌な三人がいる。

それは、兄のお店を見に行くためについてきたベッティ達であった。

「どうしたの？」

「「「……」」」

アキラの奥さんであるデリアが聞いても、三人は不機嫌なまま。

みんなその理由がわからなかったが、最初にデリアが気がついたようだ。

「あのね、あの人は男性なんだけど。それで、私の夫なの」

「「「えっ！」」」

アグネス達は、やはりアキラを女性だと思っていたようだ。

それで不機嫌って事は、俺とアキラの仲を邪推してヤキモチを焼いたって事か？

「本当に男性なんですか？」

「そうなのよ。もう慣れたけど、二人で歩くと必ず旦那の方が先に男性に声をかけられるし……」

デリアもかなり綺麗な方なのだが、アキラの可憐さには負けてしまう。

休日に町中を歩いていると、事情を知らない男性がアキラをナンパする事があるみたいだ。

「旦那が自分は男性だって言っても、たまに信じない人がいてね。

あっ、この前は『男性でも構わない！　むしろ男性の方が！』って……」

「その話、危ないからストップ！」

俺は、慌ててデリアの話を止めた。

「おおっーーー！」

「ルイーゼ、何を期待しているんだ？」

「この前、イーナちゃんが秘蔵している本がね……」

「それは聞かなかった事にする」

まあ、夫婦にも秘密が存在して当たり前だからな。

それに、またホーエンハイム枢機卿が駆け込んできたら面倒だ。

「物凄く綺麗でそうは見えないけど……そうだったんですか」

「アキラさんと先生は、趣味友達なんですね」

「安心しました。先生、次はお兄さんのお店に視察ですよ」

ご機嫌になった三人は、大喜びで俺の手を引いて次の場所へと移動した。

そこはかとなく嫌な予感はしたけど、俺ってアグネス達に惚れられている？

これって、先生と教え子の禁断の関係ってやつか？

「旦那、気にするな。あの三人はもう予備校を卒業しているし」

「ヴェル様、よくある事」

カチヤとヴィルマが妙な慰め方をしてくれたが、俺はどこか釈然としない感情を抱いてしまうのであった。

「先生、お兄さんが調子に乗っていないで、無事に商売繁盛していますよ」

「それは少し言いすぎじゃないか？」

「でも、お兄さんて、すぐ調子に乗るから……」

「信用がない兄貴だな」

俺が前になんちゃってコンサルティングを行ったベッティの兄のお店は、無事に繁昌していた。

むしろ、前よりも客が多いような気がする。

お昼時という事を考えても、確実に前よりも客が増えていた。

「忙しそうだから、お昼時が終わってから声をかけるか」

「そうですね」

そして昼食時から一時間後、他の場所で時間を潰してきた俺達は、ベッティの兄に声をかけた。

「へへい、借金は予定どおりに返済可能ですので」

「随分と繁昌しているようだな」

「研究もちゃんとして、新メニューを出していますから」

ベッティの兄は、ちゃんと店を繁昌させていた。

人手不足なので新しい従業員も雇っており、売り上げも順調なようだ。

「でも、お兄さんすぐに調子に乗るから」

「ベッティ、俺はちゃんとやっているから」

「なるほど、一度失った信用を取り戻すのは難しいのである！」

「そんなぁ……」

導師からのあんまりな一言に、ベッティの兄は肩を落としてしまう。

「調子に乗って商売が傾かなければいいんだよ」

「そのために、ローザもいますから……」

散々に言われているが、ベッティの兄はかなり料理の才能があると思う。

たまに無計画で事を進めようとするので、それを抑える存在……彼の奥さんであるローザさんの事だ……がいれば安心なような。

尻に敷かれていた方が、商売が上手く行く。

それが、ベッティの兄であった。

「新メニューですか？」

「はい、奥様。ランチは薄利多売、夜のお客さんに味を知っていただくための一皿料理がメインですからね。筋肉やモツを煮込んだシチューも人気メニューですが、パスタも始めたんですよ。試しにお出ししますね」

ベッティの兄はエリーゼに説明しながら、素早く調理したパスタを出してくれた。

麺は普通のパスタで、具材はトマトソースで煮込んだ肉とモツのソースが乗っている。

ミートソーススパゲッティのモツ肉バージョンのような料理であった。

試食してみると想像どおりの安定した美味しさだ。

「あとは、ミソとショウユも使っていますね」

続けて出てきたのは、パスタの上に挽肉を味噌とその他の材料で煮込んだ料理だ。

パスタと、汁なしジャージャー麺の相の子のような料理であった。

醤油ベースの方はタマネギやキノコも入っており、これもよく研究してあった。

独自にこれを考え付いたという事は、彼の料理の腕は確実に上がっているのであろう。

「脇にサラダも載せて、これで7セントですね。麺の大盛は一セント増しで、夜に出しているから揚げやフライも載せられて、これも一個一セントです」

随分と商売が上手くなったものだな。

俺は、ベッティの兄に感心してしまう。

「ローザがそうした方がいいって言うんです」

「あっそう……」

残念、才能があったのは奥さんの方であった。

それにしても、尻に敷かれていた方が上手く行くとは……。

「それで、その奥さんは？」

「新店の方にいますよ」

「そうなんだ……」

この短期間でもう一軒をオープンさせるとは、ローザさんは商売の才能があるみたいだな。

「先生、ローザさんがいるから安心ですね」

そう言いながら俺に満面の笑みを向けるベッティ。

実の兄よりも義姉の方を信頼しているとは……。

「ベッティ！　俺も頑張っているんだよ！」

案の上、ベッティの兄は妹の態度に涙目であった。

「ふむ、過去の罪が祟るとは、因果は巡るであるな」

「そんなぁ……」

導師の容赦ない一言に、ベッティの兄は再び肩を落としてしまうのであった。

「バウマイスター伯爵様、義妹のベッティも含めて色々とお世話になっております」

ベッティの兄から教わった新店に向かうと、そこの店長をしているローザさんが俺達に丁寧に挨拶をする。

その如才なさに、改めて彼女のおかげで旦那の商売が安定しているのだという事実を理解した。

「ローザさん、いつもお兄さんがすいません」

「最近は研究も熱心にしているからそうでもないわよ」

「またバカな事をしようとしたら、ちょっとくらい締めてもいいですから」

「勿論、締めるに決まっているわ」

元々顔見知りだったという事もあり、ベッティとローザの仲はよかった。
微妙な兄貴のおかげで嫁と小姑の仲がいいというのも、何と言うか運命の皮肉であろう。

「新店と聞きましたが」

「このお店は、旦那が考えた麺料理だけ出すお店ですね。サイドメニューはそれなりにありますけど」

この世界にラーメンは存在しないが、麺類は多数存在する。
汁があるとスープを取る手間がかかるが、汁なしのパスタならそこまで手間もかからず回転率も期待できる。
実際ローザさんのお店も、お昼時から少し外れていたが繁昌していた。

「ちょっとお腹が空いた時用に、半分の大きさのメニューもありますよ」

「あれ？　それって、フォンに似ているような……」

「フォンの改良みたいなものですね」

「アマーリエ義姉さん、フォンを知っていたんだ」

フォンとは、この大陸の庶民が気軽に食べる麺料理の事であった。
大昔から存在し、パスタよりも少し太い麺に塩味のクズ肉や野菜を炒めたものが載っている。
麺の量がパスタの半分くらいで、値段も一杯二～三セントが主流、

お腹が空いた時に間食として食べる人が多かった。

「私の領地もほとんどお店はなかったけど、フォンを出してくれるお店があったの。お兄さんが狩猟で臨時収入があった時、たまにご馳走してくれたわね」

「へえ、そんな事があったのですか」

「でも、フォンって今は苦戦中じゃないかしら？」

「はい、奥様の仰るとおりですね。現在の王都では様々な麺料理の開発が流行しています。既存のフォンを出すお店が新メニューを出したり、新規店に客を奪われて潰れるケースもありますから」

フォンは、その原型が数千年前からある麺料理だ。

伝統に胡坐をかいた結果、最近の新料理ブームから外れて潰れてしまったお店も多いらしい。

そしてその傾向は、今後も続くとローザさんは予想していた。

「定期的に新しい味を出さないと、うちのような新参者は厳しいのよね。だから、旦那をせっついているの。調理技術と新メニューを考える能力は高いのよ。経営の才能は微妙だけど」

そこは、ローザさんが補って成功したわけか。

「ですので、ちゃんと借りたお金は計画どおりに返済しますから」

「新店も立ちあげて、借金も予定どおりに返済するって凄いな」

エルも、ローザさんの商才に感心している。

「フォンは廃れるのか。でも、確かに最近食べた記憶がないな」

「ボクもあまり好きじゃないから、無理してまで食べようとは思わないな」

実は、俺もルイーゼと同じ意見であった。

嫌いじゃないけど、じゃあ好きかと言われると困ってしまう食べ物の一つだからだ。

「私も最近食べた記憶がない」

ヴィルマも、近頃はまったく食べていないと答えた。

バウルブルクにお店があったかな？

あるもかもしれないけど、俺達の目には留まらないし、特に食べたいとも思わない。

王都で導師に修行をつけてもらった帰りに、何回かお店によった過去を思い出した。

「バウマイスター伯爵、あの店はこの近くなのである」

「そういえばそうでしたね」

「この辺の街並みは見覚えがあるね」

導師に指摘されて、今思い出した。

この近くに、ルイーゼも含めて三人で行った事がある老舗のフォンのお店があったのを。

そのお店は大食いチャレンジをやっていて、導師が何度か挑戦したけどそのお店のチャンピオンには及ばなかった……って？

「チャンピオン？」

「私、チャンピオン」

みんなの視線が、一斉にヴィルマへと向かう。

導師に大食いで勝てる人間は希少だから、ヴィルマに聞けばかなりの確率で正解というわけだ。

「ヴィルマも、最近行っていないよな？」

「行く時間がなかった。ヴェル様と一緒に行く料理屋の方が美味しいし」

前の川魚のお店と同じだ。

舌が肥えて食べに行かなくなったというパターンかもしれない。

俺もルイーゼも、フォンはすぐに飽きるからそこまで好きじゃなかった。

導師の付き合いでしか行った事がなかったし。

「導師はどうです？」

「うむ、最近は他に食べたい店が多いのでご無沙汰である！」

やはり、導師もここのところフォンは食べていなかった。

他にいくらでも美味しい物があるからであろう。

「ローザさん、他の店の事を聞くのは何ですけど、どうなんですか？」

「ええと、生き馬の目を抜く商売の世界なので、ここなら勝てると思って新店を開いた経緯もあるのですよ」

多少高いが、フォンに比べてそこまで高いというわけでもない。フォンよりも美味しいし、麺料理の種類もあるから、この新店が老舗フォン料理屋の顧客を上手く奪ったというわけか。

「ヴェル様、様子を見に行ってみよう」

「そうですね、参考になると思いますよ」

ヴィルマとアキラに促され、俺達は近所の老舗フォン料理屋へと向かう。

するとそのお店は、以前は多くの客で賑わっていたのに、今は閑古鳥が鳴いている状態であった。

「何か寂れたね。ローザさんの言うとおりに潰れるのは……」

「ルイーゼ、しっ！」

俺は、思わず本音を漏らしてしまったルイーゼの口を慌てて塞いだ。

もしお店の人間に聞かれたら、失礼になってしまうからだ。

「あっ！　チャンピオンじゃないですか！」

「お久しぶり」

「本当、お久しぶりですね」

店の店主は、大食いチャンピオンのヴィルマを見つけると彼女に駆け寄ってきた。
ヴィルマは、店主からチャンピオンと呼ばれているらしい。

「うぬぬっ……」

「導師、子供じゃないんですから……」

この店の大食いチャンレジで一度もトップになれなかった導師は、ヴィルマに対し悔しそうな顔を向けた。
その様子を見るに、まるで子供のようである。

「チャンピオンが、バウマイスター伯爵様の奥様になられるとは」

「人生色々」

「確かに仰るとおりです。フォンを召しあがられますか？」

「お願い」

「畏まりました」

全員で店内に入るが、客が一人もいなかった。
フォンは半人前くらいで二セントととても安い。
間食にも利用される薄利多売の典型的な麺料理なのだが、こうも客がいないと商売が成り立っているのか心配になってしまう。

「お待たせしました」

フォンは、注文してからすぐに出てくるのも売りの一つであった。

出てきたフォンの試食をするが、そういえばこんな味だったのを思い出す。
導師から無理矢理修行に付き合わされた時代に食べた味だ。

基本は塩味で、まあまあ美味しい。
でも、沢山食べると飽きる。
味が落ちているわけじゃないが、醤油や味噌を使ったパスタや汁なし麺に比べると美味しくはない。
これでは、客に飽きられて当然であろう。

「お味はいかがですか？」

「前と変わっていない」

ヴィルマは、こう見えて味にうるさい。
フォンの味は落ちていないと断言した。

「ありがとうございます」

「でも、他が美味しくなっているから相対的に美味しくないと感じてしまう」

「確かにそうかもしれません……」

店主も、フォンの弱点については気がついているようだ。

「新しい麺料理を出さないのか？」

「それが、私はフォンしか作れませんので……」

麺は自家製で手打ちだし、調理の手際は悪くない。
だが、この店主はフォンしか作った事がないのだ。
これが伝統を頑なに守っていると言えばいいか、伝統に胡坐をかいていると言えばいいのか？
判断に迷ってしまう。

「ショウユとミソ味のフォンを出せばいいんじゃないの？」

エルが軽く適当にアドバイスするが、間違った方法ではないな。
フォンという料理を残しつつ、新しい味も出す。
これなら、伝統云々という話にはならないであろう。

「その方法も考えたのですが、実は他のお店がとっくに真似しておりまして……」

王都やその周辺、地方の田舎貴族領でもフォンを出す料理屋は多い。
彼らは徐々に王都から流れてくる醤油と味噌を使って麺料理を作っており、今さら真似ても二番煎じと見なされて客は入らないと店主は言う。

「早く決断すればよかったのにね」

「左様、商売は時に思い切りも必要である」

ルイーゼと、商売などした事がないのに商売について語る導師は、フォンを食べる手を止めて店主の行動の遅さを責めた。

「どうせ改良するなら、とびきりの素晴らしいフォンを出そうと思ったのです」

「時に、未完成でも拙速の方がいいパターンもあるのである」

導師は商売などした事がないが、真理を言っていると思う。

単純に醤油味と味噌味のフォンを出して客の注目を集め、それで時間を稼いでいる間に改良を進めればよかったのだ。

こうも客が離れた後だと、確かに二番煎じの改良では客は戻らないであろう。

他のお店の真似だと思われてしまうからだ。

「時に冒険も必要である！」

お店なんて経営した事はないと思うが、導師の言い分は正論であった。

店主の心にも響いたようで、彼はガックリと肩を落としてしまう。

「私は、フォンしか作れないのですよ。このままだとお店が駄目になるのはわかっているのですが、なかなか一歩を踏み出せないのです。私だって、お店を潰したくありません」

店主があまりにも落ち込んでしまったので、俺は何も言っていないのに少し罪悪感を感じてしまった。

「店主、お替り！」

「導師は反省してくださいよ」

店主を落ち込ませた張本人なのに、気にもしないでフォンのお替りを要求する導師。

さすがに、エルが酷いと釘を差した。
俺も同意見だ。

「しかし、誰かが言ってやらねば、結局このお店は潰れるのである」

「いやまあ……そうなんですけど……」

それでも、もう少し言い方ってものがあると思う。
導師のせいで、店主は余計に落ち込んでしまった。

「お代わりですね。どうぞ、次はもうこのお店はないかもしれませんが……」

「導師……」

「伯父様……」

さすがに酷いと思ったのか、ルイーゼとエリーゼにまで導師は責められてしまう。

「お店、潰れる？」

「今はこれまでの蓄えでどうにかしていますけど、このままですと……」

潰れるのは時間の問題だと、店主がヴィルマに説明する。
すると、途端にヴィルマの顔色が暗くなった。

「チャンピオンは、今まで通り一杯分の料金で十杯出しますから安心してください。ああ、でも古いままのフォンだと飽きてしまいま

すか……」

店主がヴィルマに話を終えた途端、彼女は目に涙を浮かべて俺に縋りついてきた。

「昔、食べられなかった時にお世話になった。ヴェル様、助けてあげて」

「俺？」

「前みたいに、ヴェル様なら何とかできるはず。お願い」

この光景は前にあったような……いや、デジャブじゃなくて本当にあったんだって。

こうもヴィルマに縋られてしまうと、俺は断れなくなってしまう。

だが、ウナギ屋の時は適当な知識だけで何とかなったけど、麺料理は難しいからなぁ……。

下手に引き受けて、お店が潰れてしまったら大変だ。

「どうせ駄目元なのであるから、引き受けたらどうであるか？」

「そんな無責任な……」

他人事だからって、導師は本当に軽いよな。

「バウマイスター伯爵なら、何とかできるのである」

「お願いします。どんな些細な事でもヒントを与えていただけたら……」

導師にも勧められてしまい、俺はまたもなんちゃってコンサルタント業務を行う事になるのであった。

「お館様は変わっておられますなぁ……」

「ヴィルマに涙目で頼まれると弱くてな」

「事情を聞くと、ヴィルマ様が義理堅いという風にも感じられますか……」

「昔、世話になったお店らしいからな」

三日間の王都飲食店巡りは中止となり、代わりに老舗フォン料理屋を再建する事となった。

暫くは王都と屋敷を行き来する生活になるからとローデリヒに報告すると、彼は特に反対しなかった。

「まあ、情けは人のためならずとも言いますから」

この世界にも、日本のことわざと同じものが存在している。

ローデリヒも、バウマイスター伯爵家に仕えるまでは色々と苦労した。

その時に大いに助けてもらった人達には、自分の職権で許される範囲内で仕事を頼んだり、仕官の口利きをしているそうだから、ヴィルマに駄目とは言えないのであろう。

「ただ、怒る方がいるのでは？」

「ローデリヒは鋭いな」

潰れそうな老舗フォン料理屋を助けると怒る人物。

それは、お兄さんが近くに新店舗を出したベッティであった。

『先生！　せっかくお兄さんが普通に戻りつつあるのに！　酷いですよ！』

彼女、普段は結構お兄さんに辛辣なのだが、決して彼が嫌いというわけではない。

キツイ言い方になるのは、お兄さんにもう少ししっかりしてほしいと思う、妹なりの愛情からきているものであった。

『先生、ここであのお店が復活したら、ベッティのお兄さんの借金が増えてしまいますよ』

『先生、ベッティちゃんが可哀想です』

アグネスとシンディも、ベッティの援護に入った。

三人が言っている事は間違っていないし、俺はベッティのお兄さんのお店に梃子入れをした人間だ。

ここで、ベッティのお兄さんの足を引っ張っては意味がない。

『そっちも梃入れするし、お店が近くて競合していても大丈夫な方法もあるから』

ヴィルマのお願いだけを聞いてしまうと、今度はベッティのお兄

さんの店がピンチになってしまう。
結局、両方の店にアドバイスを出す羽目になってしまう。
こうなれば乗りかかった船である。

『先生、ありがとうございます。先生、大好き！』

ベッティにもお兄さんのお店を再び梃入れすると言ったら、彼女に抱きつかれてしまった。
嫁入り前の娘が男に抱きつくのはどうかと思ったが、すかさずヴィルマがそのパワーでベッティを俺から引き剥がした。

『ヴェル様に抱きついていいのは妻だけ』

『まだ駄目だぜ。アグネスとシンディも』

『これで、もう抱きつけませんね』

アグネスとシンディもベッティの動きに呼応しようとしたが、素早さでは負けないカチヤと、意外と抜け目がないエリーゼも加わって、俺は三方向から妻達に抱きつかれてしまう。

『まだです！　先生の頭上が残っています！　魔法の特訓の成果を！』

諦めきれないアグネスが、素早く『飛翔』を唱えて俺の肩に乗ろうとした。

『残念、魔法なんて使わなくてもボクは全然余裕』

最後にルイーゼが軽業師のように『飛翔』で浮かび上がったアグ

ネスを踏み台にして、俺の肩に飛び乗る。
俺は彼女を肩車している格好となり、もう俺と接触できる体の箇所はなくなってしまった。

『素早い……』

『へへーーんだ。ボクやヴィルマやカチヤが、まだ新人冒険者見習いであるキミ達に隙は見せないよ』

『ううっーーー、隙が見い出せないです』

俺に抱きつくという計画が阻止されて、アグネス達は悔しそうであった。
それはいいんだが、俺が動けないぞ。
ルイーゼが俺の肩に飛び乗って来た時にほとんど重さを感じなかったのは、さすがだと思う。
だけど、エリーゼ、ヴィルマ、カチヤに包囲されたまま抱きつかれて、俺は身動きが取れずにいた。

『おーーーい、エリーゼまで』

『あなたはバウマイスター伯爵様ですから、妻以外の女性にはお気をつけて』

『はい……』

俺はエリーゼの正論に何ら言い返せず、目論みを阻止されたアグネス達は残念そうな表情を浮かべていた。

「はっはっは！　英雄色を好むですか？」

「どこに英雄がいるんだよ？　英雄ってのは、もっと真面目な存在だぞ」

少なくとも、飲食店の立て直しに知恵は絞らないよな。

「それで、対策はお有りなので？」

「大丈夫、アルテリオにも手伝ってもらうから」

「お金になるとわかれば、彼も協力しますか……」

ローデリヒの許可を取ってから、俺は助っ人を連れて王都へと飛んだ。

例の老舗フォン屋へと向かうと、そこには店主やその家族と、ベッティの義姉であるローザさんもいた。

「ローザさん、新店の方は？」

「信用できる店長候補がいるから、彼に任せているわ」

「バウマイスター伯爵様、ベッティさんのお兄さんは呼ばないのですか？」

「彼は向いていないから」

麺料理の開発なので、ミズホ料理の知識と調理の腕前も生かそうと、アキラも俺に同行していた。

バウルブルクにあるお店は、奥さんであるデリアに任せての参加だ。

「向いていないですか？」

「ベッティの兄は調理の腕はいい。ちゃんとやれば、新メニューを考えられるくらいの頭もある。何人かの人を使うくらいはできるのさ」

だけど、その上の仕事が苦手だ。

いい材料を価格交渉して必要量仕入れるとか、店に経営形態を整えるとか、経理業務とか、飲食店の数が増えると途端に役立たずになってしまう。

飲食店全体を人間の体に例えると、彼はどう足掻いても腕が限界の人なのだ。

奥さんのローザさんの方が、頭の仕事が得意。

むしろ天職だと俺は思う。

「なるほど、確かにそうですね」

そしてアキラは、どちらも得意な希有な人間というわけである。

見た目は美少女だけど。

「バウマイスター伯爵様、うちの新店のお客が減ったら借金の返済も遅れますけど……」

やはり、ローザさんは俺が老舗フォン屋の経営再建に手を貸す事に不満があるようだ。

これは仕方がない。

明日からの自分の生活がかかっているのだから。

「新メニューの開発も進めるけど、他の手段で全体的な客数を増やすから大丈夫」

「客を増やすですか？　どうやってです？」

「そのお話は、全員揃ってからだな」

「全員ですか？」

「伯爵様、お待たせしました」

「いやーーー、バウマイスター男爵様……じゃなかった！　伯爵様！　このリネンハイム、あなた様が短期間でここまでの大貴族様になられるとは想像できませんでしたとも」

バウマイスター伯爵家筆頭御用商人にして王都でも稼いでいるアルテリオと、瑕疵物件の取引で荒稼ぎしているインチキ不動産屋のリネンハイム。

俺は、この二人を呼び寄せていた。

そう、この二人が客数を増やす計画で重要な役割を果たすのだ。

「伯爵様、何か楽しい事を計画なされたようで？」

「楽しくなるかはやってみないとわからないな」

「私は、成功する目は高いと思っていますよ。じゃあ、始めますか」

まずは、ミーティングからである。

リニューアルのため一時閉店した老舗フォン料理屋の中に入り、

みんなでテーブル席に座って相談を始める。

「リネンハイム。この地区の地図を」

「はい、準備しておりますとも」

リネンハイムは不動産屋だ。

この地区の地図くらい独自に作製している。

彼は、テーブルの上に一枚の大きな地図を広げた。

「思ったよりも多いな……」

「伯爵様、何が多いのですか？」

「この地区で潰れた飲食店の数」

「ああ、ここは住宅地と工房や商店が多い地区の間にありますからね。中途半端なんですよ」

アルテリオが、この地区の事情を説明してくれた。

働いている人達に昼食を出すお店は、工房側に寄っている。

逆に家族と一緒に外食するようなお店は、住宅地側に寄っている。

中途半端なので、通りがかりに軽く食べられる老舗フォン屋や、ローザさんの……実質彼女の店だよな……新店くらいしか経営しているお店はなかった。

あっても、かなり経営が厳しいお店が多い。

「そうだとすると、お客さんを増やすのは厳しいのでは？」

「客は呼び寄せればいい」

「呼び寄せるのですか？」

「だから、リネンハイムを呼んだわけだ」

「はい、バウマイスター伯爵様から呼ばれました。このリネンハイム、バウマイスター伯爵様のためなら、例え火の中水の中でございます」

「そこまでしなくてもいいから、この地区ですぐに飲食店に改装可能な物件はすべて押さえろ」

「はい、速攻で押さえます」

「あと、あの物件もな」

あの物件……リネンハイムが一番得意な、主に霊的な理由で誰も近寄らない瑕疵物件の事である。

「俺が祓えば、コストは抑えられるな」

「はい、実質無料みたいなものです」

王都で平民が住む家や利用する商店、飲食店に悪霊が憑くと厄介だ。

もっと価値のある物件なら、教会なり、聖魔法が使える冒険者に頼んで祓ってもらえる。

だが、平民がそう簡単に日本円で千万円単位のお金など出せない。

悪霊を祓った後の掃除や改装の費用も考えると、他の物件を借り

た方がマシ、代わりはいくらでもあるわけだから、瑕疵物件として放置される事が多かった。

これが貧しい人達が住んでいる地区なら、教会が定期的に慈善活動で悪霊を祓う。

だが、ここは中途半端な中産階級の人達が住んでいる地区だ。

慈善活動の対象にもならず、大金を払って悪霊を祓える余裕がある人も少なく、一定の割合で瑕疵物件が存在した。

「祓うのは、リネンハイムが瑕疵物件を押さえてからだな」

「バウマイスター伯爵様のご意見に賛成でございます。あとは、このお話は誰にもなされませんように」

「どうしてですか？」

どう見ても、不動産業には詳しそうに見せない老舗フォン料理屋の店主が、リネンハイムに質問をする。

「バウマイスター伯爵様が瑕疵物件を祓うという事実が持ち主に知れますと、売却価格の釣り上げが行われますから。商売で儲ける秘訣は、スピードと独占とネタの秘匿でございますので」

俺もリネンハイムの考えに納得するが、やはり彼が言うと途端に胡散臭くなるな。

「なるほど。バウマイスター伯爵様が祓うと持ち主が知れば、価値がまったくない物件でも価格がつきますね」

「そういう事でございます」

「丁寧に説明していただいて申し訳ないのですが、私は三件の瑕疵物件を所有しておりまして……」

「これはこれは。三番目のネタの秘匿に失敗してしまいましたね」

さすがは、老舗店の店主とでも言えばいいのか。

予想外の強かさに、さすがのリネンハイムも頭をかいていた。

「これは奥様、お久しぶりでございます」

「豪華な出産祝いをありがとうございます」

「ゴッチもお世話になっておりますので、あの程度で心苦しい限りでございます」

数日後、早速この地区の瑕疵物件を祓う事になった。

老舗フォン屋の店主の持ち分を除き、この地区にあるすべての瑕疵物件はリネンハイムが無事に買い叩いてきた。

悪霊のせいで資産価値ゼロどころか、税金でマイナスだったから、ほぼ無料に近い値段で買い叩いてきたみたいだ。

それで御祓いとなれば、やはりエリーゼ先生の出番であろう。

『悪霊がいるために経営できないお店を再生し、多くの人達で賑わうようにするのですね。さすがは、あなた』

エリーゼの中で俺が物凄くいい人になっていたが、結果的には間違っていないのでよしとしよう。

彼女は知己であるリネンハイムと挨拶をしていたが、確かに彼からの出産祝いは豪華であった。

ゴッチという彼の息子がバウルブルクで不動産屋を開業していたので、そのお礼も兼ねてであろう。

ちなみに、リネンハイムの息子はまっとうに不動産屋をやっている。

リネンハイムが初代だと聞いているので、彼ほどのアクの強さは出ないのであろう。

バウルブルクにはまだ瑕疵物件がないので、父親の方の出番がないという事情もあり、息子の出番となったわけだ。

「（ヴェル、本当にこの人にまた仕事を頼むのか？）」

「（頼んだ仕事はちゃんとやっているから）」

「（ヴェルがそう言うのならいいけどよ……）」

他にも、護衛役のエル……彼はどうもリネンハイムが苦手なようで距離を置いていたが……と、地元の人間なので老舗フォン屋の店主も案内役として来ていた。

店主の家族と、ローザさんと彼女が雇っている調理人達は、閉店中の老舗フォン屋で新メニューの開発を行っている。

俺が麺料理のアイデアを出し、それを参考に色々と試作しているわけだ。

俺も、日本や地球で親しまれていた麺料理の作り方やレシピは知っている。
前世での仕事の関係で、素人よりは詳しかった。
だが、この世界には向こうで手に入る食材がなかったり、同じ物があっても材料に適さない事もある。
それは代替品で補わないといけないし、そうなると細かな配合を試行錯誤しなければ売り物にならないわけだ。

せっかくレシピが決まっても、常に同じ配合では味を保てない。
同じ材料でも、産地、季節、成長条件でみんな味が違う。
それを見極めて配合を調整しないと、せっかく決まった味がブレてしまい、不味い方にブレれば顧客が離れてしまう。

ヒントは与えるが、そこから先は調理人の腕前がものを言うわけだ。

『いい匂いね』

『出汁をちゃんと取ると、香りも味も最高ですからね』

『これで何を作るのかしら?』

『はい、うどんに使おうとか思いまして』

バウルブルクでも、アキラはイーナ達と一緒に仲良くうどんと蕎麦の試作を行っていた。
彼は、俺の計画に乗って麺料理のお店を出店する事にしたのだ。

自分のお店の調理場でうどんの汁を作り、それを試飲したイーナがその出来栄えを褒めた。

『お鍋が二つあるね』

『はい、ミズホは西部と東部でうどんつゆの色が違いますから。塩分量は、そんなに違わないんですけどね』

『うどんって内乱の時にミズホ領内のお店で食べたけど、これはこれでとても美味しいよね』

『ルイーゼ様、ツユが完成しました。ここに手打ちして茹でたうどんを入れます』

『うどんの手打ちは面白かった。蕎麦打ちもだけど』

『彼らは、老舗店舗で修行した本物の麺打ち職人達ですから』

アキラは王都での出店を成功させるため、ミズホにある老舗蕎麦屋とうどん屋から職人を引き抜いていた。

『なあ、そんな貴重な職人を引き抜いて大丈夫なのか？』

ここまで見事なうどんと蕎麦を打てる職人を引き抜くと、引き抜かれた方のお店から文句が出るのでは？　と、心配になったカチヤがアキラにそれを問い質す。

『これは、向こうのお店も認めた引き抜きなんです』

『そうなのか？』

『はい、ミズホはうどん屋と蕎麦屋が飽和状態ですからねぇ……』

市場が飽和しているので、せっかく店で修行しても独立できるかどうかわからない。

ミズホ家は新しい領地を得たが、隣接した土地なのでとっくにうどん屋と蕎麦屋が存在した。

そこに新規出店しても成功の目は少なく、ならば国外で一旗揚げようという若者が志願したというわけだ。

『一店舗に修行を終えた職人が何人もいますと、新しい人を雇うのも難しくなるじゃないですか。老舗店舗は、従業員の年齢分布を偏らせたくないですからね』

人件費に余裕がないからと新しい人を雇わないでいると、気がつけば従業員が年寄りばかりなんて例も多いそうで、お店を継続するのにこれほど不利なお話もない。

『老舗店舗を経営する一家の子供の行き先もできます』

貴族の領地と同じで、一つの店舗は一人しか継げなかった。

次男以降を暖簾分けするにしても、今の状況だと失敗する可能性が高い。

従業員にすると、それなりの給金を払ってやらないと生活ができない。

自然と、外部から新しい人を雇わなくなってしまうのだ。

『そんな理由で、職人が余っているといえば余っている状態です。うどんやそばが打てても、他の仕事をしている人もいますし』

『せっかく手打ちを覚えても、仕事にできないのですか？』

リサが驚くが、確かに魔法使いならあり得ない事態であろう。

魔法が使える時点で、何かしら職が保証されるのが魔法使いだからだ。

『地方だと、お店をやっていなくても蕎麦やうどんを打てる人は多いですよ。名人クラスの腕前の人も多いです。というわけで、引き抜きは容易でした』

老舗は、抜けた職人の代わりに新人を雇える。

彼らは見習いだから、一人前になるまで給金も安くできるからお店の収益もよくなる。

なので、互いに利益があったわけだ。

『理屈はわかったが、みんな熱心にツユの作り方を習っておるの』

テレーゼからすると、イーナ達が真剣にうどんと蕎麦のツユの作り方を習っているのが驚きのようだ。

『お店ができたら食べに行けばいいではないか』

『駄目ね、テレーゼは』

『なぜじゃ？　アマーリエ』

『私達に麺の手打ちは難しいと思うけど、乾麺を茹でればいいわけだし、ここでうどんや蕎麦が作れれば、ヴェル君が喜ぶでしょう。あの子、女性が変に着飾るよりも、料理が上手な方が好感を得られ

るじゃない』

『確かに、エリーゼは料理が上手じゃな』

『テレーゼが一番下手なんだから』

『普通に作れるぞ』

アマーリエから料理が一番下手だと言われてしまい、テレーゼは女性の尊厳のために反論した。

『レパートリーが少ないのよ。私もここに来てから頑張って増やしたもの。それでもまだ少ないから、増やそうと努力しているし』

『アマーリエは料理が上手で羨ましい限りじゃな』

『料理歴は長いものね』

実家にいた頃は、貧乏騎士爵家の次女が家事をできないと色々と不都合があった。

いつ料理が必要な家に嫁ぐかもしれないし、収穫後に領民達に料理を振る舞う事くらいはしないといけない。

手際が悪いと母親に叱られたし、バウマイスター騎士爵家では料理をする頻度も増えた。

これで料理を覚えられないはずがないというわけだ。

『しかし、妾が一番下手というのはおかしくないか？　例えば……』

テレーゼの目は、カチヤへと向かう。

『カチヤは、野外料理しか作れないではないか』

『あたい、それでもテレーゼよりはレパートリーあるぞ。ちゃんとアマーリエから習っているし』

カチヤは、冒険者の野外料理だけでは厳しいと自覚して、定期的にアマーリエから料理を習っていた。

『カチヤは覚えが早いわよ。テレーゼも気合を入れないと』

『そう言われると……』

『女はいつまでも若くいられないわ。そうなると、必要になるのが料理などね。美味しい料理があると、男性が必ず帰ってくるわよ』

『逆に、同じ料理しか出て来ないと思えば、旦那もテレーゼの所に行かないかもな』

料理下手だと言われて頭にきたようで、カチヤもアマーリエの発言に乗ってテレーゼに反撃をした。

彼女の発言内容がテレーゼの脳裏に広がり、最悪の予想をしてしまう。

年を取ったテレーゼの下にヴェンデリンが姿を見せず、エリーゼ達のところでばかり一家だんらんをすごし、自分が寂しい老後を過ごすという最悪の未来だ。

『それはまずい！　妾とて帝王学を習得した者じゃ。料理のレパートリーを増やすくらい余裕のはず！』

テレーゼが気合を入れ直し、うどんと蕎麦の調理は順調に進んでいく。

「料理はプロに任せるに限る」

「物件の確保は、この私の出番ですからね。一軒目ですが、これは……」

「私の持ち物です」

一番最初に到着した瑕疵物件は、老舗フォン料理屋の店主が持ち主であった。

彼は、他にも二軒の瑕疵物件を所有している。

元は飲食店……フォン料理屋だと思うが、放置されてから相当年月が経っているようで物凄くボロかった。

「あのう、どうしてこんな状態に？」

「はい、これも我が一族の宿命でしょうか？」

エルからの質問に答えるかのように、店主が事情を語り始める。

「私の曽祖父の時代が、お店の絶頂期だったそうです。当時、私はまだ産まれたばかりでしたが……」

その曽祖父も、年齢の問題で引退する事になった。

彼には四人の子供がおり、その四人に対して彼はこう宣言する。

「俺の店を継げるのは、腕がいい奴だけだ！　お前らは競え！」

店が繁昌してお金があった曽祖父は、四人の子供全員に一店舗ずつ持たせて競争をさせたのだという。

「過激な曽お爺さんですね」

「ですよねぇ……」

貴族であるエリーゼからすれば、そのお店は長男が継げばいいだろうという感覚しか持てない。

兄弟で真の後継者を争うなんて、その一族にとって没落の原因にもなりかねない悪手だからだ。

確かに、グルメ漫画じゃないのだからと言いたくなる。

「実は、曽祖父自体が暖簾分けでこの地区に来たのです」

店主のお店は、歴史あるフォン料理屋から正式に暖簾分けされた正当な分店なのだそうだ。

という事は、曽お爺さんは子供達を他の地域に暖簾分けできないはず。

その地区にも多分暖簾分けされた弟子や一族のお店があるわけで、彼らの縄張りを侵す事になるからだ。

フォン料理屋にギルドは存在しないが、ギルドと同じような不文律が存在するというわけだ。

ただし、他の料理屋にその理屈は通用せず、このところの新しい麺料理攻勢で潰れたり、メニューを上手く改良して生き残ったりと、

色々と大変なようだ。

「四人で熾烈な競争を行いました。結果、生き残ったのが末っ子である私の祖父だったのは皮肉な結末ですけど……」

本当に苛烈な争いだったようで、他の三店舗は潰れるだけじゃなく、未練も大いに残した。

借金を抱えながら、他の仕事で厳しい残りの人生を送った三名の元店主が悪霊と化して店を占拠してしまったというわけだ。

「元店主達……私の大伯父にあたる方々ですけど、その悪霊が新しくお店を出すのを妨害するわけです」

「なるほど、生前の自分達はいつか借金を返して、再びこのお店でフォン料理屋を経営したかった。その未練が残ったのですか」

「はい、奥様の仰るとおりです」

エリーゼの推論に、店主は首を縦に振る。

「たかがフォン、されどフォンなんだな」

エルも、料理屋も大変だなと納得したように首を縦に振っている。

「老舗の料理屋が少ない理由は、こういったものなのです。私も頑張らないと潰れたお店の仲間入りですけど……」

「今はとにかく、物件を確保しないとね」

悪霊がいたままだと改装工事にも入れないから、さっさと祓って

しまおうと思う。

「ですが、バウマイスター伯爵様。大伯父達の悪霊は厄介ですよ」

店主の話によると、彼らは普段は隠れていて、新しい借主が改装工事を始めないと妨害を始めないらしい。

なので、店主も格安で何度か物件を貸してみた事があるそうだ。

賃料が安いからと安心して営業準備を始めようとすると妨害に入る。

妨害のタイミングの厭らしさは、生前飲食店を経営していたので知恵がついているのだと思う。

「あなた、どうなされますか？」

「ああ、簡単に除霊できると思うよ。それほど強い悪霊ではないんだろう？」

「はい」

「じゃあ、簡単簡単。エリーゼ、念のために『聖壁』を張っておいてくれないかな？」

「はい、わかりました」

エリーゼが俺達を守るように『聖壁』を張り終えると、俺は店に向かって大声で怒鳴り始めた。

「うわっ！　クソ不味いフォンだな！　そんなんだから潰れるんだよ！　時代遅れも甚だしいな！　新しいお店の方が美味しいから、そっちに行こうぜ！」

彼らは競争に負けてお店を潰している。
だから、こういう悪口で挑発してやればいい。
どうやら俺の悪口は聞こえたようで、店内から大した強さではない悪霊が姿を見せた。
年配の男性の悪霊だ。

「ナンダトォーーー！　オレノフォンハァーーー！」

「ぷっ、クソ不味っ！」

「コロスゥーーー！」

俺の挑発に乗った悪霊は、そのままエリーゼの張った『聖壁』に激突。
元々弱い悪霊なので、それだけで弱ってしまった。

「あの世で、新作料理でも開発するんだな」

トドメで俺が軽く『聖光』を放つと、悪霊は呆気なく消えてしまった。
貴族屋敷の悪霊に比べれば、大した強さでもない。

「来世では、かの者に幸があらん事を」

真面目で優しいエリーゼは、消えた悪霊に対し祈りを捧げていた。

「それで、この物件はどう？」

「古い建物ですけど、石造りなので十分にいけます。店内の設備は

どうなされますか？」

「中古品でもいいぞ。なるべく金はかけないでいこう」

「畏まりました。知り合いで潰れた飲食店の中古設備を取り扱っているお店がありましてね。内装専門の職人にも知己がいますよ」

さすがは不動産屋、リネンハイムには関連する仕事を行う知り合いが複数存在した。

「他の物件も素早く祓って、早く作業に入るか」

「時間は貴重でございますからね」

「おい、ヴェル」

「どうした？　エル」

リネンハイムと打ち合わせをしていると、エルが俺に話しかけてくる。

「悪霊でも店主さんの親戚なんだからさ……こうもっと気遣うとかよ……」

エルの奴、えらく常識的な事を。

だが、俺にとって悪霊は邪魔な存在でしかなかったからな。

悪霊になるほど店に未練があるのなら、もっと頑張ればよかったのだから。

「ここで変に慰めるよりも、彼らは浄化されて天国に行ったんだ。

それを祝ってあげた方が店主も嬉しいと思うはずだ」

「はい、あたなの仰るとおりですね」

エリーゼは、俺の発言を額面どおりに受け止めたようだ。

本当は、適当に言い訳しただけだけど……。

「店主さんはどう思っているのです？」

「いや……あまり会った事もないですし、今まで数十年も不良債権化していましたからね。ちょっと可哀想とは思いましたが、別にそこまでの思い入れは……」

「なっ！」

「エルヴィン様はお優しいですね。商売とは生き馬の目を抜く世界です。いくら親族でも……無事に成仏したわけですし、過去の事は忘れて新しい商売に励みましょう」

「……なあ、ヴェル」

「何だ？　エル」

「お前とリネンハイムさん、実は似た者同士か？」

「……」

そんなわけがあるか！

俺は彼ほど胡散臭くない。

本人を目の前にして言えないので、俺は心の中でそう叫ぶのであ

った。

「バウマイスター伯爵様、工事は順調ですが、これはどういう意図なのですか？」

更に一週間後、新メニューの開発は続き、数軒の瑕疵物件の除霊と空き物件の買収も終わり、リネンハイムが手配した業者が改装工事を行い、調理器具などを搬入している。

まずは、十店舗ほどをいつでもオープン可能な状態にもっていく事が目的だ。

工事が進む中、アルテリオは俺の意図が理解できないようで、どういうつもりなのかを聞いてきた。

「この地区は、実はそれほど場所は悪くないのさ」

徒歩圏内に工房が多い地区と、住宅地もあるからだ。

「客が寄らなければ、寄せてしまえばいい。この地区に、麺料理の店を集合させるわけだ」

考え方は、ラーメン博物館みたいなものだ。

様々な種類の麺料理を出すために新メニューを研究しているのは、麺料理の店だけを大量にオープンさせるからだ。

「麺料理の店だけを？」

「この地区に色々な麺料理の店があれば、それを目当てに客が来るじゃないか。工房で働いている人達が昼食に、休日に家族も連れて来るかもしれない。ここは、ちょうどいい位置にあるからな。工房や住宅地の至近というわけではないから少し条件が悪いけど、それを補うための店舗集中なのさ」

他にも、軽食やデザート、お菓子などを売ってもいい。
家族の行楽、デートにも使える。
麺料理も、半分のサイズを出せば何店舗か回れるはずだ。

「店舗が集中している事を逆に強みにするのだ」

「おおっ！　何て凄い考え方なのです！　さすがは伯爵様！」

何か、えらくアルテリオに褒められているけど、アイデアはただのパクリである。
それを教えてあげるわけにもいかないから黙っているけどね。

「店舗が集中しているから、競争も起こるだろうな。駄目な店は、早く撤退してもらうさ」

「それで、ほとんどを賃貸物件にしたんですね」

老舗フォン料理屋の店主は、除霊した三件の物件も含めて四店舗、あとはローザさんが一店舗を持っているのみだ。
あとは、買収したリネンハイムが持っている。
俺とエリーゼは、彼から除霊の代金を貰っていた。

あいつ、商売の匂いにも敏感なようで、俺にすんなりと除霊代金

を支払って物件を確保しやがった。
老舗フォン屋の店主も、大分オマケしてあげたが除霊の代金を支払った。
店が苦境に立ったのはこの一年ほどで、これまでは老舗有名店で稼いでいたからな。
蓄えがかなりあったようだ。

「アルテリオは……傘下の商人に任せるにしても、この地区に入るお店に食材を卸したり、新規店舗のオープンや入れ替え、食材の仕入れなどで儲ける。チョコレートや魔の森の果物を使ったデザートを出してもいいな。オープンカフェも作るとか。期間限定で、新商品を格安で紹介する店舗があってもいいな」

「リネンハイムは、賃貸物件の管理ですか」

「駄目な店は追い出さないといけないからな。客が多くて賑わっているから、貸店舗の賃貸料が上昇するんだ。物件を持っているリネンハイムは、賃貸料が高い方が儲かるから、それを維持するために駄目な店に引導を渡す役割を担当する。嫌な仕事だから、ちょっとは利益で優遇しないと」

地区の賃貸物件を一つの施設に見たてると、リネンハイムに物件の管理を任せるというわけだ。
賃貸契約を半年単位くらいにし、駄目な店は契約を更新しないなどして競争を促し、新陳代謝を促す。
契約停止を告げる嫌な役割をリネンハイムに任せる事になるが、その分高価格になるであろう賃貸料で儲けさせるというわけだ。

「もし、ここが大いに賑わえば、店を持っている店舗が他に支店を出す時に宣伝にもなる。店側が理解できれば、人気を維持するため

に努力すると思うんだ」

「なるほど、納得できました」

「それで、ここが上手く行ったら王都は広いだろう？　何カ所か同じような形態で営業できるよな？　ここでノウハウも得られるわけだし」

「ただ飲食店を経営するのではなく、こういう方法もあるのですか」

こういう飲食系のイベントや施設の運営に、商社が関わる事もあるからな。

それを知っている俺ならではのアイデアだ。

具体的なマニュアルは、俺が知っている事に加えて実際に経営して得て行くしかないか。

「急ぎ準備を進めます」

「頼んだぞ」

アルテリオと別れた俺は、アキラが借りる予定の店舗に向かった。

彼は隣同士の空き店舗を二つ借り、現在オープンに向けて準備を進めていた。

「あっ、バウマイスター伯爵様。試作は順調ですよ」

「それにしても、二店舗なのか？」

「価格帯を分けようと思いまして」

「価格帯を分ける？」

「ええ」

一店舗目は、内装をミズホ風にして凝った作りにする予定のようだ。

ミズホ人の従業員が内装工事を行っている。

「これは、蕎麦とうどんを最後に出す割烹料理店ですね」

ミズホ料理をコースで出して、最後に蕎麦かうどんを出す。

値段は張るが、これはある程度富裕な人達を客層としている。

「もう一点は、普通の蕎麦とうどんのお店です。立ち食いスペースも作りますよ」

もう一店舗は、中に普通のテーブル席、入り口付近に立ち食い用のカウンターと、店の前のスペースにもテーブルと椅子が置かれていた。

食べ終わった器を返す棚も作られており、前世でたまに食べた立ち食い蕎麦屋そのものであった。

というか、ミズホにも立ち食い蕎麦屋ってあるんだな。

「職人の工房が多い地区には結構あるのですが、外地からのお客さんはあまり寄らないと思います。ここの近くにある工房で働いているお客さん目当てですね」

忙しい彼らは急いで食事を取りたい。

過去にフォンが流行した背景には、簡単に立ち食いで食べられる

という利点があったからだ。
立ち食いでも蕎麦やうどんは少し高いけど、王都は景気がよくなっている。
ある程度の客数は見込めると、アキラは計算しているようだ。

「順調なようだな」

「はい、最初に店をオープンさせた僕達が成功すれば、もっと新しいお店がオープンします。競争になりますが、お客さんも増えるからチャンスですね」

アキラは忙しそうなので、話をすぐに切り替えて、今度はローザさんの新店へと向かった。

「バウマイスター伯爵様。うちの旦那、メニューの試作が順調なようですよ」

「難しい課題だったんだけどなぁ……」

俺がベッティの兄に大体のレシピを伝えた麺料理、それはラーメンであった。
ラーメンはスープを作るのが難しい。
俺も昔に試作した事があるけど、なかなか思ったような味のスープにならなかった。
豚骨なんて手に入らないので、猪の骨で代用したけど、下処理が下手で臭い、香味野菜を入れて煮ても臭い、ようやくスープが臭くなくなったら味が薄っぺらい。
何度も失敗して、遂に諦めてしまったのだ。

それを何とか形にしたというのだから、やはり本物の料理人は違

うな。
ベッティの兄は、経営に携わらないといい料理人なのかもしれない。

「味見してください」

ローザの案内で店の調理場へと向かうと、ベッティ達三人娘が見守る中、ベッティの兄が大きな寸胴でスープを作っていた。

「どうだ？」

「バウマイスター伯爵様、ようやく味が安定しましたよ」

寸胴でスープを煮込んでいるベッティの兄は、俺にスープを入れた小皿を差し出した。
試しに飲んでいると、とてもいい味がする。
俺が作った時は、変な臭いがして、味も薄っぺらで駄目だったんだけどな。

「下処理をきちんとしないと駄目で、他の魔物や豚の骨も手に入れ、臭み消しのハーブや野菜類と一緒に煮込みました」

「豚の骨なんて手に入るのか？」

家畜なんて、よほどの金持ちしか食べられないからな。
そう簡単に豚骨が手に入ると思えないんだが……。

「豚骨は少量なら手に入りますよ。解体所で直接仕入れないと駄目ですけど。ただ入荷量が不安定なので、手に入りやすい猪と魔物の骨も配合して味を安定化させたわけです。他にも、季節とか、獲物

が獲れた地域とか、どうやって育ったかで骨から出る出汁の味に差が出ますからね」

ラーメンの難しいところは、例え素晴らしいレシピができあがっても、使用する素材の状態が変化するから、上手く調整しないと同じ味のスープができない点にある。

味にブレが出て、美味しい方にブレればいいが、不味くブレれば顧客が離れてしまう。

それにしても、ベッティの兄は思った以上にやるじゃないか。

最初の印象はよくなかったが、料理に関しては『やればできる子』だったらしい。

評価を改めないといけないな。

「あんた、奥さんの尻に敷かれていると優秀だな！」

「バウマイスター伯爵様、それはないですよ……」

「お兄さんは、お義姉さんの下にいてようやく真人間になれるんですよ」

「ベッティまで酷い……」

実の妹にまで散々に言われ、ベッティの兄はガックリと肩を落としていた。

「猪、豚、魔物の骨の配合スープです」

それでも気を取り直して、彼はスープの説明を続ける。

匂いや見た目は、トンコツスープにとてもよく似ていた。

俺にとっては、何よりも歓迎すべき出来事である。

「これに醤油ベースのタレを入れると……」

懐かしい醤油トンコツラーメンのスープになる。

醤油トンコツ味のラーメンは陳腐だけど、陳腐ゆえに人気が高いとも言える。

この世界では初めて嗅ぐ匂いなので、早く麺を入れて食べたくなった。

「具の肉は？」

「これもバウマイスター伯爵様のヒントを元に作っています」

猪の肉で角煮を作るのはよくしていたので、チャーシューはスープよりも簡単だった。

ベッティの兄が、美味しく仕上げてくれた。

「煮卵ですか？　ちょっと高いので、これは試作だけですね。あとは適当に野菜を煮て入れれば完成ですか」

卵に関しては、ホロホロ鳥は高いし、養鶏で得られる鶏の卵も負けずに高い。

そこで、鴨など他の鳥の卵で試作してもらったが、原価が高すぎて客には出せないであろう。

日本のように卵が安いって、実は凄い事だったのだ。

メンマは、材料の竹の子がミズホでしか採れないから、これも今回はなしだ。

ミズホ人は竹の子が大好きなので、どう考えても輸出量が足りなかった。

「言われたとおりに全部揃えましたが、問題は麺ですよ。パスタにはちょっと合わないと思いますし、私も麺打ちは経験がないですね」

ローザさんの新店で出している麺も、すべて知り合いの麺打ち職人から仕入れているそうだ。

自分では、ラーメンの麺は打てないとベッティの兄が言う。

「ここで、あの老舗フォン料理屋が役に立つのさ。麺を取りに行こう」

駄目なら他の料理人に任せようと思っていたが、ベッティの兄は見事に試練を果たした。

あとは、これに茹でた麺を入れれば完成である。

「先生、お兄さんはしっかり仕事をこなしましたね」

「ちょっと過小評価していたかも。いい腕をしているな」

というか、若いので新しい料理を試作する方が得意なのであろう。スープの味を維持できれば、ラーメン店で成功するかもしれない。ローザさんもいるし。

「先生、ありがとうございます。亡くなった父と母も安心していると思います」

普段は散々言っているが、ベッティはお兄さんが嫌いではない。助け舟を出した俺の両手を取って、彼女はお礼を述べた。

「あーーーっ！　ベッティがずるい。私も」

なぜかシンディがベッティを非難しながら俺の肩腕を取り、右手はベッティに、左手はシンディに腕を組まれてしまう。

「先生の腕は二本しかない……二人ともずるいですよ！」

普段は真面目なはずのアグネスが、先に俺と腕を組んでしまった親友二人に激怒した。

「えーーーと、じゃあ、私はここに」

「おいっ！」

ならばと、シンディが見事にコントロールされた『飛翔』の魔法で、俺の肩に上手く乗った。

俺は慌てて彼女の足を取り、肩車をする形になってしまう。

代わりにアグネスが俺の左腕を取り、俺は弟子三人に囲まれながら道を歩く事になってしまう。

「ほほう。嫁がいない間に、これは大胆だな」

「こら！　エル！　誤解を招くような事は言うな！」

俺はにやけた笑みを浮かべるエルに苦情を述べた。

間違った情報をエリーゼ達に報告されては困るからだ。

「ううっ……あの小さかったベッティが嫁に行ってしまう……」

「ベッティちゃんも、いつかはお嫁に行くのだから、めそめそ泣かないの。バウマイスター伯爵様だから大丈夫よ」

ほら見ろエル。

麺を見るため俺達についてきたベッティの兄とローザさんが、勝手に誤解してしまったじゃないか。

「もうここまで来たら、この娘達は他に嫁に行かないと思うけどな。それについては、バウマイスター伯爵様はどうお考えで？」

「ううっ！」

段々と外堀が埋められていくような気がしてきたが、今はなんちゃってコンサルティング業務の方が大切だと、俺は現実逃避に入るのであった。

「バウマイスター伯爵様……綺麗どころに囲まれて羨ましい限りで……おっと、違った！　試作は順調ですよ」

実は、ラーメンの麺は老舗フォン料理屋の店主に任せていた。

彼らはフォンに使う麺を毎日手打ちしており、店主には五名の息子がいて、みんな麺打ちが上手であった。

そこで、経営を安定化させるために、この地区で経営する麺料理屋に麺を卸す製麺所の経営も兼業するようにアドバイスしたのだ。

「スープや具に合う麺を作ってもらえば、その分他の事に傾注できるじゃないか。細かい注文も出せるし」

仕事の効率化というわけだ。

自分で麺を打てばコストはかからないかもしれないけど、麺を打つ時間を取られるし、客が多くなると捌けなくなる可能性があった。
同じ地区に製麺所があれば、もし麺が足りなくなってもすぐに追加注文が出せる。

「いいアイデアだと思いますが、麺のできは大丈夫なのでしょうか？」

彼らは、アキラが紹介した蕎麦とうどんを打つ職人からも学んでいた。
もし蕎麦とうどんが人気になれば、俺とアルテリオさんは屋台を出す計画も立てていた。
その屋台で使う麺も、将来的にはこの製麺所から仕入れる計画になっている。

「我々は、フォンの麺を毎日打ってきました。基礎はできていますし、研究でパスタなども打ちますからね。私も息子達も特訓して腕を上げつつありますよ」

「勿論、フォンも改良して出す予定です」

他にも、いくつかの麺料理を出す計画であった。
製麺業と兼業して利益を増やし、経営状態を黒字化する予定なのだ。

俺が悪霊を祓った三店舗も製麺所兼フォン料理屋として経営し、息子達を分散して配置する計画だと店主は語った。

「頼んでいた麺を取りに来たんだ」

「はい、こちらになります」

ラーメンの麺なので『かん水』が必要なのだが、どこを探しても存在しなかった。

アキラに聞いても、ミズホでも『かん水』は使っていないそうだ。

その代わりではないが、新しくミズホ領になった地方に木灰水を使って麺を打つ地方が存在した。

その地方で木灰水に使っている木は王国にも普通にあったので、これで木灰水を作り店主が麺を打ってくれた。

麺は中太麺で、色はかん水を使った時ほど黄色くない。

沖縄そばの麺によく似ていると思う。

その内、かん水の製造を始めたいものだ。

こういうものだとアルテリオに教えて丸投げしてしまったが、彼なら何とかすると思う。

「この麺を茹で、先ほどのスープと醤油で作ったタレの中に入れる。上に具を載せて完成だな」

急いでベッティの兄の店に戻り、ようやく『醤油トンコツラーメンモドキ』が完成した。

スープの素材に猪と魔物の骨が入っていたり、地球にはないハーブや野菜を使ったり、チャーシューが猪の肉だけど、久しぶりに食べるラーメンだ。

やはり、情けは人のためならずだな。

早速一番最初に試食するが、前世でよく食べた醤油トンコツラーメンに味はよく似ていた。

とても美味しい。

多分俺が自分で作ったら、スープが獣臭いとか、チャーシューが

臭くて硬いとか、麺の太さが一定ではなくてボソボソとか、そんな結果になったと思う。

「ほう、スープに泳がせた麺ですか。パスタとは違うのですな。勉強になります」

麺を打ってくれた店主も、美味しそうにラーメンを試食していた。

「麺に卵を練り込んだり、卵を具にしても美味しいのだけど」

「バウマイスター伯爵様、それでは高くついてしまいますよ」

養鶏と養鴨で得た卵はとても高く、しかも金持ちが消費してしまうので手に入り難い。

冒険者が狩りの途中で見つけ、買い取り所に販売して臨時収入を得たり、自分で食べてしまう者も多いが、これは冒険者の数少ない特権であった。

ラーメンに卵を使うとコストが倍以上に上がるので、お店で出すのはなしだ。

俺が個人で煮卵を作って楽しむとしよう。

バウマイスター伯爵である俺は、自由に卵を食べる事ができるのだ。

子供の頃から、卵取りでは名人だと父からも言われていたし。

「先生、この麺料理は美味しいですね。名前はどうしましょうか？」

「ラーメンで」

「らーめんですか？　単純だけど、似合っているような……お兄さ

ん、これなら成功するね」

「ううっ……妹にようやく褒められた……まだ時間があるので、改良を進めます」

ベッティの兄は、ようやく妹に褒められて涙を流した。

ここ最近は頑張っていると思うのだが、油断すると堕落すると思われていたから、妹に褒められた事がなかったんだよな。

「私もフォンの改良を進めていますし、他の麺料理も考案中です」

「オープンは三日後だ。油断なく準備を進めてくれ」

そして三日後。

一つの地区に麺料理屋を集中させた施設……正確には施設じゃないんだけど……がオープンを果たした。

今はちょうどお昼前、ちゃんと宣伝をしておいたおかげで、この地区には昼食を食べようとしている労働者や、休暇を楽しむ家族連れなどが押し寄せていた。

「伯爵様の言うとおりに、ちゃんとビラを撒いておきました」

俺はアルテリオに命じて、地区の地図と店舗の位置、どのような麺料理がいくらで食べられるのかがわかるチラシを作らせ近隣で配布させた。

最初にお客さんが来てくれないと困るからだ。

地区のあちこちにも、チラシと同じ内容の立札を立てている。

これに釣られて、多くのお客さんが店に入って行った。

「ミズホのそばとうどんか。珍しいからこれにするか」

「こっちも、ラーメンとかいう汁のある麺料理があるぞ」

アキラがオープンさせた蕎麦とうどん屋、ベッティの兄がレシピを完成させたローザさんのラーメン屋、パスタのお店も部下に任せて経営している。

他にも、お茶とチョコレートと魔の森産のお菓子を出す喫茶店、焼き鳥、から揚げ、サンドウィッチ、ハンバーガー、ポテトなどを出すフードコートもオープンしていた。

アルテリオが、目敏く傘下の商人に店をオープンさせていたのだ。メインは麺料理屋だが、サブでこういうものを出すお店もあった方が飽きないのでこれでいいと思う。

「そして、肝心のフォン屋だが」

「ヴェル様、大丈夫？」

「製麺所と二足草鞋だし、製麺だけでも忙しそうだな……」

客が多いので、店主は追加注文に備えて麺を打っていた。

珍しいラーメン屋の客が多く、麺が足りなくなったみたいだ。

改装工事で店の前面にガラス張りの製麺スペースを作り、表から店主が麺を打っているところを見えるようにしたのだ。

これに釣られて、奥のフォン料理屋に入ってくる客も多い。

「麺打ち名人の実技に釣られて客が入るのさ。料理は味覚だけじゃない」

「本当、料理については真面目だよな」

「おうよ、人は食べ物を食べないと死ぬからな。アホな貴族とつき合うよりも大切だぞ」

「そこは、ローデリヒさんの負担を軽くしてやれよ……」

実演販売をすると客が増える。

前世では当たり前のようにあった手法だ。

悪霊を祓った他の店舗でも、店主の息子達が父親から習った麺打ちを客に披露していた。

「というわけで、潰れないから大丈夫だよ、ヴィルマ」

「ヴェル様、ありがとう」

ようやくヴィルマが満開の笑みを浮かべてくれた。

彼女は普段あまり頼み事をしないが、過去に世話になった人達には義理堅い部分を見せるのだ。

「フォンはどういう風に改良されたの？」

「そこはプロである店主に任せてしまったからなぁ……行ってみるか」

「試食する」

今日は客が多い事を懸念して、同行者はエルとヴィルマだけだ。

三人でフォン料理屋の方に入ると、すぐに従業員が注文を取りにきた。

「ご注文は？」

「ええと……」

メニューを見ると、大分値上がりしている。

『新フォン』というベタな命名であるが、大きな変化は味が三つになった事だ。

従来の塩に加え、醤油と味噌も加わっている。

「俺は醤油」

「じゃあ、俺はミソ」

「私は塩」

「ヴィルマ、チョイスが渋いな」

「フォンの基本は塩味。これがちゃんと改善されていないと安心できない」

「なるほど」

「確かにそうだな」

エルと二人でヴィルマの言い分に納得していると、そこに注文したフォンが運ばれてきた。

「美味しそうになっているな」

なっているけど、これは見覚えがあるな。
『油そば』とよく似た感じにアレンジされていた。
麺は木灰水を使った太麺で、量も一人前に増えている。
混ぜて食べてみると、ラーメンのスープを煮詰め、それに醤油ダレを加えたもので茹でた麺が絡めてあった。
具も、香味野菜を刻んだもの、茹でた野菜、猪肉の角煮が載っている。

「美味しいな」

「そうだな」

俺は油そばも好きだから、これはいい改良だと思う。
いくら悩んでいても、そこはプロ。
ラーメンを参考に、自分で油そばに到達してしまうのだから。

「ヴィルマ、塩味はどうだ？」

「美味しい。ちゃんと改良されてた。ヴェル様、あーーーん」

いきなり食べさせられてしまったが、俺達は夫婦なので問題ない。

「一応人前なんだけどな」

「私達は夫婦だから。エルも、毎日家に帰るとハルカが……「ストップ！　それは部外秘だ！」」

エル、お前はハルカと毎日そんな事をしていたのか……。
夫婦仲がいいのは素晴らしいと思うが、あんまり聞きたくなったような……。

「美味しいな」

フォンと同じく汁なしで、塩味、具の材料もほぼ同じ。
店主としては、何が何でも塩味を残したかったのであろう。
苦労して改良した成果が見受けられる。

「バウマイスター伯爵様、どうでしょうか？」

「とても美味しくなっているな」

これならたまに食べに来たいな。
油そばって、たまに無性に食べたくなるから。
今までは忘れていたけど、現物がある以上は食べに来たい。
幸いにして、俺には『瞬間移動』があるからな。
王都との距離は、一切関係ないのだ。

「まだ悩みがあるのか？」

俺は、店主が少しだけ浮かない顔をしているのに気がついた。

「塩味の新フォンもそこそこ売れているのですが、やはりショウユとミソのフォンには負けますね。私は古い人間なので、フォンは塩味って考えてしまうのですよ」

商売だから売り上げのために醤油と味噌のフォンを出すが、やはり塩味をメインにしたいというわけか。

「アイデアがないわけでもないけど」

「本当ですか？」

「試しに作ってみようか」

店の厨房に移動すると、俺は魔法の袋からある物を取り出した。

それは、大昔に俺が自作した燻製を作る小型のスモーカーと、それに使うチップである。

パーティを組んでからはほとんどやっていなかったが、ボッチ時代には時間があったので、獲物の肉や魚でたまに燻製を作っていたのだ。

「燻製にするのですか？」

「そう、塩に香りをつけて、それで塩タレを作るのさ」

燻製塩はある程度作り置きができる。

チップもそれほど高くないし、これなら値段を上げる必要はないであろう。

「香りも味覚なのさ。今日はクルミの木のチップしかないけど、ミズホから桜の木のチップを輸入してもいいな。でも、これは高くなるか……もう一つある」

新フォンのタレには、煮詰めたスープが少量と調味料、そして油が材料となっている。

「塩味を残すとなると、油を改良すべきだな」

ネギ、エビ、ショウガ、ニンニク、トウガラシ、焼き干、貝、小魚など。

様々な素材を使って香味油を作る。
これを使えば、新フォンの味が多彩になるはずである。

俺は塩を燻製し、持っていた小さな川エビと、ミズホから輸入したトウガラシでラー油モドキを作った。
そして、これを使って塩味の新フォンを作る。

「塩味で、エビ風味、お好みで辛さも調整可能になる」

「おおっ！　凄え美味え！」

「バウマイスター伯爵様、よく思いつきますね！　凄い才能だ！」

エルと店主が俺のアイデアを絶賛するが、自分で思いついたのではなく、ただのパクリなので少し心が痛んだ。
だが、これも俺が麺ライフを取り戻すために必要だから仕方がない。

「ヴェル様、美味しい」

「改良したのが素人の俺だから、プロの店主が自分でやればもっと美味しくなるさ」

「今回の件で色々と考えさせられました。研究は常にしないと駄目なのですね……」

人間は慣れる生き物だから、同じ物ばかり出すと飽きてしまう。
じゃあ『老舗はどうなんだ？』って言う人がいると思うが、それは食べている客が同じ味だと思っているだけで、実は少しずつ改良して美味しくしているのが常識だからな。

何百年もまったく同じフォンを出し続けた店主の店がつい最近まで繁昌していたという事実の方が俺には脅威だった。
麺打ちの技術を見ると、店主も決して手は抜いていない。
それでも、凄い事だと俺は思う。

「同じメニューでも、細かな改良を加えて味をよくしていく作業は必要だな」

「そうですね、勉強になりましたよ。フォンだから安く手軽に。その考え方はいいのですが、美味しくないと駄目ですね。安いメニューの提供までしていただいて申し訳ありません」

店主は、息子達に任せている四店舗で製麺所、フォン屋、そして店頭で焼きそばも売り始めた。
麺は自家製でコストが安いから、焼きそばなら量を少なくすれば二セントで何とか出せる。
庶民の気軽な間食になるというわけだ。
従業員が鉄板の上で焼きそばを焼いており、ソースが焼ける匂いに釣られて多くの客が集まってくる。

『僕も負けていられませんね』

アキラも、店頭で焼きうどんの販売を始めた。
見た目は美少女だが、彼は商売の申し子といっても過言ではない。
行動力については、誰よりも男性らしいのだ。

『王都も含めて、王国は暖かい時期が多い。冷やした蕎麦とうどんも出して、売り上げを伸ばすのです』

アキラは、王国中に蕎麦屋の支店を出そうと計画しているようだ。
そのためにも第一号店は失敗できないと気合を入れていた。

「アキラさんでしたか。あの人、男性なんですよね？」

「ちゃんと奥さんいるし、俺よりも年上なのが信じられないけど」

「うちの息子も信じられなかったようで……」

店主によると、支店を任された彼の息子の一人が共に開店準備をしているアキラに一目ぼれし、結婚を申し込みに行って撃沈したそうだ。

「その息子さんは？」

「大きなショックを受けたようですが、それをバネにえらく頑張っていますね」

麺打ちに、新フォンの調理に大忙しだと店主は教えてくれた。

「でもさ、それって失恋なのか？」

「失恋なんじゃないの？」

「いや、入り口にも辿り着いていないような……」

「失恋じゃなくて、勘違い？」

「エルもヴィルマも、そこは失恋だった事にしておこうよ」

リニューアルした麺屋には初日から多くの客が詰め掛け、徐々にリピーターも増えて地区は賑わっていくようになる。
客が増えると、それを目当てに新しい麺料理や軽食を出すお店も増え、それがますます客を呼びと。
俺の読みどおりに、この少し寂れた地区は『麺料理ストリート』として後世まで多くの客で賑わう事となる。

そして、似た形態の施設というか地区が、王国のみならず帝国の都市にも広がっていくのであった。

「ぶぅーーーっ！　ボクも行きたかった」

「悪い悪い。人が多いから少人数での行動が一番だったんだよ。ヴィルマは、フォンの店が心配だっただろうから」

試食を終えて屋敷に戻ると、連れて行ってもらえなかったルイーゼが不満そうな顔を浮かべていた。

「ルイーゼよ。子供のように膨れるでない。何かお土産くらいは、ヴェンデリンも準備しているはずだろうからな」

「新しい麺料理ならいくつか。アマーリエ義姉さん、あれは完成していますか？」

「言われたとおりに作ってあるわよ。具材多目で。でも、シチュー

が麺料理になるの？」

「ちょっと変形させますけど」

夕食も兼ねて、俺はエリーゼ達に新しい麺料理をご馳走する事にした。

これも徐々に王都の店で出していけば、またお客さんが増えるはずだ。

「どうかしら？」

「普通に美味しいですね」

アマーリエ義姉さんは、バウマイスター騎士爵領にいた頃からちゃんと料理をしていたからな。

そうしないと生活できないほど貧しかったというのは禁句だぜ。

「ちょうどいいですね」

「味を少し濃い目って言われたからこんな感じにしたわ。でも、こんなに具材が多いシチューって、昔なら考えられないわね」

「野菜が多い時はありましたけどね。肉は沢山あると、焼いたり他の料理に使った方が効率的だって」

「お義母様がよく言っていたわね。『うちの家族は、シチューにお肉が沢山入っているより、焼いたお肉が大きい方が喜ぶ』って」

「限りあるお肉を、できる限り目立たせる手段だったからですよ」

「人数も多かったから」

ついアマーリエ義姉さんと昔の話に興じてしまうが、バウマイスター騎士爵領時代だと、濃い味ですら贅沢だったからな。

昔の実家の特殊さは、この屋敷では俺とアマーリエ義姉さんしかわからないだろうな。

二人は、ある意味戦友でもあったのだ。

「でも、どんな麺料理になるの？」

「作りながら解説しましょう。エリーゼ、これを固めに茹でてくれないかな？」

「変わったパスタですね」

よく料理をするエリーゼでも、ラザーニェタイプのパスタは初めてのようだ。

日本ではラザニア、同名の料理に使うパスタである。

フォン屋の店主に形状を伝えたら、すぐに打ってくれた。

地球だと乾麺が主流なのだけど、この世界だと生麺が主流だから、パスタはこの世界の方が圧倒的に美味しいと思う。

蕎麦を使ったパスタもあって、これもとても美味しいのだ。

ただ、そんな洒落た料理は昔の実家にはなかったけど。

「あなた、茹で終わりました」

「ありがとう、エリーゼ」

耐熱容器にシチューを注ぎ、そこに固めに茹でたラザーニェを入れる。

チーズを振りかけ、これをオーブンで焼いたら完成だ。
最後に刻んだパセリを添えれば完璧だな。

「これも麺料理なの？」

「麺が、粉を水で溶いて練ったものだと定義すれば麺ですね」

ラザニア風の新料理は焼き上がり、加熱されたチーズがブクブクと泡を立てて煮立っていた。
とても美味しそうである。
チーズも贅沢品だが、焼いてとろけているチーズは万人に好かれる味だと俺は思う。

「美味しそうよな。冷めぬ内にいただくとしようか」

テレーゼの提案で、みんなで夕食にラザニア風の麺料理をいただく。
味はビーフシチューで、グラタン風というかラザニア風になっているので不味いはずがない。
焼けてとろけたチーズも美味しく、これから新メニューとして出してもいいはずだ。

「この料理は、北方のフィリップ公爵領で食べるともっと美味しいかもな」

「温かい料理だからな」

「それにしても、よく思いつくものよ」

「はっはっはっ、他にも麺料理を準備したぞ」

続けて、油で揚げて塩を振った揚げパスタ、蕎麦も同様に揚げてみた。
これは、前世に蕎麦屋で食事をした時、サイドメニューとしてあったものだ。
共に、軽食として店頭で販売ができる。

「次は、冷たい麺料理だ」

冷製パスタ、冷やしタヌキ蕎麦にうどんなど、王国は比較的暖かいので、冷蔵庫や製氷機さえ確保できれば、こちらの方が需要はあるかもしれない。

「本当、感心するくらい思いつくね」

「任せてくれ、ルイーゼよ」

「でもさ、バウマイスター伯爵様の本業を忘れると、ローデリヒさんに怒られるよ」

「そこは、ちゃんとお休みを貰っているから大丈夫」

ここのところ、領地開発が加速して土木工事ばかりだから、たまにはこうやって別の仕事をするのもいいな。
仕事というよりも趣味か。
ヴィルマに頼まれて始めたけど、これはいいストレス発散になったと思う。

「そして、デザートです」

様々な麺料料理を試食してから、最後にデザートで蕎麦がきを出す。
この料理も、前世に蕎麦屋で食べて美味しかったから再現した。
蕎麦粉をお湯で練るだけで完成するのがいいな。
黒蜜ときな粉をかけて食べたり、善哉や汁粉に入れても美味しい。

「美味しいですね。同じ甘い物でも、王国のお菓子と違ってさっぱりとした甘さです」

一番年上のリサも、蕎麦がきを気に入ったようだ。
美味しそうに食べている。

「これらの新メニューも徐々に出していけば、あの地区は繁昌するはず」

そして、そこに素材を卸すアルテリオ、俺のバックアップを受けて店を出しているアキラと、ベッティの兄夫婦が儲かり、その利益がバウマイスター伯爵家にも還元される。
金額的には大した事もないが、うちの評判はよくなるはずだ。

「実にスマートな宣伝」

「ほほう……それは宜しかったですな」

突然聞きなれた声がしたので振り返ると、そこには恨めしそうな顔をしたローデリヒが立っていた。

「ローデリヒ？」

「お館様、確かに新しいお店のメニュー開発に集中するのは許可い

たしました。ですが、それは本来の休暇であった三日間だけです。それなのに、二週間近くも王都に入り浸りでは開発が計画どおりに進みません。そもそも、どうして一店舗への梃子入れが、大規模な商業施設のオープンにまで話が大きくなっているのです？」

楽しかったので、つい二週間ほど新しい麺料理に関連した仕事に集中してしまった。

そこまで期間が伸びるとは聞いていないと、ローデリヒが俺に苦情を述べた。

「いや……みんなが代わりに活躍してくれたじゃないか」

カタリーナ、テレーゼ、リサ、アグネス達三人娘も、俺の特訓で魔法の腕をあげていたので、俺の代わりは十分に務まったはず。

「確かに、奥様達のお力で工事は進んでおります。ですが、お館様にしかできない大規模な工事などが止まっているのです」

「そうなんだ……明日から頑張るよ」

「明日からですね？　わかりました。この十日間ほどの遅れも考慮し、暫くはお館様のお休みはありませぬな」

「何と！」

せっかく残業ばかりのサラリーマン生活から離れられたのに、暫くお休みなしとは……。

これじゃあ、何のために貴族になったのかわからないじゃないか。

貴族って、もっと優雅な時間があるんじゃないのか？

「第一、そんなに計画は遅れているか？　今までどれだけ前倒ししたと思っているんだ」

「お館様、こうは考えられませんか？　前倒ししても余裕がある。という事は、もっと前倒ししても大丈夫で、それこそが本来の計画どおりではないのかと。お館様の魔力はまだ成長しております。ですので、まだ大丈夫です」

ローデリヒが、自信満々の笑顔を俺に向けてきた。

というか、何でお前が自信満々なんだ。

実際に工事をするのは俺なんだぞ。

「でも、たまには王都で麺でも食べに行きたいかな。エリーゼ達も誘ってデートとかしたいし……」

「奥様達とは、お屋敷やバウルブルクの町で仲良くしていただきたく。『瞬間移動』の魔力もバカにならないですから」

「クソぉ！　ベッティの兄のケツを蹴飛ばして、バウルブルクにもラーメン屋をオープンさせてやる！」

王都で二週間もなんちゃってコンサルティング業務を行ったツケで、俺は暫く領地の開発に専従する事になってしまった。

それでも、たまに食事で麺料理が出るようになったのはいい事だと思う。

工事に参加している作業者達にもたまに簡単な麺料理が出るようになり、彼らの中から故郷や居住地で麺料理の店を始める者も出てきて、次第に王国中で麺料理が更に普及していくのはまた別のお話であった。

オマケ八話　世界が違っても、同じような料理を考える人がいる。

「待たせたな。バウマイスター伯爵。そして、やはりいたのか……ヴィルマ嬢よ」

「今日は大盛を超え、特盛りだと聞いている。これに参加しない私は私じゃない」

「なるほど……納得なのである」

「せっかくのヴェンデリンさんとの外出ですが、激しく場違いな気がしてきましたわ……」

麺料理のプロデュース業に専念しすぎた結果、俺は暫く、ローデリヒから土木工事のみに従事させられてしまった。

そして俺が工事計画を早めれば早めるほど、ローデリヒは計画を前倒ししてしまう。

ひょっとすると、奴にはブラック経営者の気質が……いや、彼は一般作業者への労務管理は完璧なんだよな。

つまり、ブラック待遇で扱き使われているのは俺だけ。

あとは自分のみか。

俺が忙しいのは貴族としての義務ノブレス・オブリージュで、ローデリヒは自分が大きな権限を持っているからか。

ローデリヒは俺よりも忙しいから、文句も言えないで困ってしまうな。
せっかく二人目の子供が産まれるのだから、もう少し休んでもいいと思うけど……。

ようやくお休みが貰えたので、俺は先日なんちゃってコンサルティング業を行った王都の麺料理地区へと向かった。
この地区に多くの麺料理屋をオープンさせ、ラーメン博物館のようにしてしまう計画を立てたのだ。

俺の計画なので多少粗はあったが、まったく新しい商売を初めて行う利点というのは凄いと思う。
地区にはオープン当初から多くの客が集まった。

近隣で働く労働者が昼食を食べにきたり、お休みには家族連れが食事に来るようになったのだ。
麺料理のみならず、喫茶スペース、テイクアウト可能な軽食、デザート、乾麺や瓶入りのパスタソース、麺つゆなども販売され、これはお土産や簡単な贈り物としても人気が出た。

予想以上の盛況ぶりに、アルテリオとリネンハイムは同様の地区を他の場所にも作ろうと物件を探しているそうだ。
これは、リネンハイムの息子であるゴッチからの情報である。

まあ、そちらは二人に任せるとして、今日は新しい麺料理の店に試食に行くのが目的だ。
オープン前に、関係者などに試食を行うので顔を出してほしいとローザさんに頼まれ……ベッティの兄にも頼まれたけど彼はオマケみたいなものだな。
ただとても量が多い麺料理だそうで、メンバーは大食いに自信が

あるヴィルマと、導師とも待ち合わせた。

この二人なら、多少の大盛でも必ず完食するはずだ。

『ヴェンデリンさんは、最近私を蔑ろにしていませんか？』

『今日の料理は、ダイエットに励むカタリーナには不向きかと……』

『ご安心を。あくまでも試食なので、量は抑えますから』

そして今日は、カタリーナも同行する事になった。

メニューの内容から考えると参加しない方がいいかもしれないけど、本人の希望だし、最近夫婦としてのスキンシップが足りないと言われてしまうと、夫としては断れない。

カナタリーナも、ダイエットより夫婦で仲良く出かける方を優先したわけだ。

もしダイエットをしたければ、魔力を使う土木工事に従事してもらうか。

「バウマイスター伯爵、そのお店はどこなのであるか？」

「ええと……地図によればこの辺ですね」

場所は、例の老舗フォン屋からさほど離れていない。

以前は小さなレストランだったそうだが、店主が急逝しており、お店は閉店していた。

そこに、元冒険者である息子が入って跡を継いだ。

オープンが遅れたのは、メニュー開発に時間をかけたからだそうだ。

何となく親の店を継ぐだけでは不安なので、ちゃんとメニュー開

発を行った点は評価できる。

「元冒険者なのか。よくあるパターンではあるな」

「そうなのですか？　導師様」

「うむ。『冒険者の商法』とかよく言われるのである！」

『武士の商法』に似ている言葉だな。

この世界では冒険者に当てはまるらしい。

冒険者は危険だが実入りは多いから、その資金で第二の人生として商売を始める者が多い。

ところが冒険者とは勝手が違うから、失敗する人が多い。

アルテリオみたいな人はなかなかいないわけだ。

「実は冒険者の商法という言葉、裏の意味があるのである！」

「裏の意味ですか？」

「ふむ、世の中には暇人がおり、冒険者と冒険者以外が始めた商売の成功率を調べたのである！」

「実は、そんなに違わなかったとか？」

「然り、ヴィルマ嬢の正解であるな！」

冒険者の方が、畑違いだから商売が失敗しやすいイメージなんだろうな。

冒険者以外の人が商売に失敗しても印象に残らないが、冒険者が商売に失敗すると『ほれ見た事か！』となるわけだ。

「導師様、つまり裏の意味とは？」

「簡単な事である！　何をやっても上手く行く者はいくし、駄目な者は何をしても駄目という意味である！」

「ぶっちゃけましたね」

「身も蓋もありませんわね」

俺もカタリーナも、正直酷いと思った。

「バウマイスター伯爵様ぁーーー！」

そんな話をしながら歩いていると、俺達は突然声をかけられた。

「こっちよぉーーー」

声の方向に視線を向けると、非常に印象的で見慣れたというよりも一度見ると忘れられない人が乙女のように手を振っていた。

何とその人物は、見た目はマッチョ、中身は乙女のキャンディーさんであった。

今日もフリフリがついたシャツに、なぜかエプロンもつけていた。

エプロンの色はピンクで、中心部分にウサギの刺繍が入っている。

どうやら、キャンディーさん手作りのようだ。

「あれ？　キャンディーさんも招待されたのですか？」

「ええ、このお店の店主って、私が最後に冒険者として色々と教えたのよ。今日はちょっとお手伝いもね。あら、ロンちゃんじゃない

の」

「「「ロンちゃん？」」」

俺やヴィルマやカタリーナがロンちゃんのわけないので、となるとあとは導師だけか。

導師も昔は凄腕の冒険者だったから、キャンディーさんと知り合いでもおかしくはないんだよな。

年齢的にいえば、キャンディーさんの方が十年以上ベテランのはず。

「アームストロングだからロンちゃんよ。私がつけたあだ名なの。ロンちゃんは若いのに実力がある魔法使いだったけど、お坊ちゃん育ちで社会常識に疎い部分もあってね。私が少しだけ指導したの」

「……お久しぶりなのである……」

「やだぁ！　ロンちゃんったら珍しく真面目ね。それにしても、ロンちゃんも大人しくなったものね」

「某は、昔から大人しいのである……」

今の導師でも昔に比べれば大人しくなったのだという事実を聞き、俺達は目を丸くさせた。

一体若い頃はどれほど元気だったのであろうか？

そして、キャンディーさんに出会ってから、導師は借りてきた猫の子のように大人しくなった。

若い頃の凶状を知られているので、キャンディーさんに苦手意識を感じているようだ。

でも、それだけで導師が大人しくなるかな？

「（導師にも苦手な人なんていたんだな）」

「（ちょっと意外）」

「（意外でしたわ）」

「（でも）」

「（好都合だ）」

「（いい情報を得られましたわね。ヴェンデリンさん）」

導師の苦手な人が判明しただけで、今日はこのお店に来てよかったと思う。

ヴィルマとカタリーナも同じ考えのようで、三人は目を合せると思わずにんまりと笑ってしまった。

「キャンディーさん、導師が若い頃の話を聞きたいな」

「そうね……初めて冒険者キルドに姿を見せた時には、体は大きいけど、可愛らしい坊やでね。あの頃は寝る時に熊のヌイグルミがないと……「店主殿は、まだ若いのであるか？」」

「熊のヌイグルミですか？」

「空耳である！」

どうやら、俺達には知られたくない過去があるようだ。

導師は強引に、キャンディーさんの話に割って入った。

「そうね。本当はもう少し冒険者を続ける予定だったの。でも、お父様が急に亡くなられてね。元々料理は上手だったし、この地区はお客さんも増えたでしょう？　そこで新メニューを開発して殴り込みをかけたってわけ」

殴り込みという言い方だけで、店の性格がよくわかるよな。

キャンディーさんが教えた冒険者というだけでも、イメージ的に強そうな感じがする。

「うっす！　バウマイスター伯爵様」

お店からその元冒険者の店主が顔を出すが、彼は俺のイメージどおりの人であった。

身長は二メートル近いと思う。

小太りだが、力士体形で筋肉の量も多く、完全なパワーファイターだったようだ。

「うっす！　自分はダットマンって言うっす！」

そして、喋り方が典型的な体育会系だ。

後輩が先輩に話しかけているみたいだな。

「それで、どんな麺料理を？」

「それは実際に試食してもらった方がいいわね」

キャンディーさんに促され、俺達はお店へと入って行く。

すると……。

「へいらっしゃい！」

「らっしゃい！」

「ヴェンデリンさん？」

ダットマンと似たような体型をした二名の店員が、老人なら心臓が止まりそうな声で挨拶をした。

ビックリしたカナリーナが、俺にしがみついてくる。

「威勢がいいな」

「自分と同じく、元冒険者っす！　ここで修行して、将来はのれん分けをさせてあげたいっす！」

ダットマンは見た目どおりの体育会系であると共に、後輩の面倒見もいいようだ。

体が大きい冒険者ってのは、引退後に意外と潰しが効かない。

力仕事がメインになってしまい、下手をするとマフィアの構成員とかになってしまうケースも多かった。

ダットマンは彼らに新しい麺料理の修行をさせ、のれん分けして第二の人生を歩ませたいようだ。

キャンディーさんが力を貸しているのは、彼の考えに賛同したからであろう。

「みんなが私みたいにお裁縫で生きていけないものね。飲食店ならいいかもしれないと思ったのよ」

「悪くない考えですね」

「問題は、その麺料理の味」

「あら、ヴィルマちゃんは厳しいわね」

ヴィルマの言うとおりだ。

いくら考えが素晴らしくても、料理の味が悪いと客が来ないからな。

「私は大丈夫だと思うのよ。だから、ロンちゃん達も試食してバシバシ意見を言ってね」

「わかったのである……」

「ロンちゃん、今日は本当に大人しいわね。昔は酒飲みの冒険者仲間数名と一緒に一軒分の酒屋の在庫を飲み干したり、喧嘩で百名以上の冒険者を一人で叩きのめしたりしてたじゃないの。私が一緒に謝りに行ってあげて……」

「いや……それは昔の事で……」

予想の範囲内というか、導師は若い頃は無茶苦茶やっていたんだな。

そしてその頃の導師をよく知り、後始末もしてくれた生き証人キャンディーさんか。

自分の過去の悪行をよく知っている彼に対し、苦手意識を持っても当然か。

「それで、新しい麺料理なのであるが……」

これ以上、俺達の前で過去の悪行を曝される事を嫌がった導師は、

再び自分で話題を切り替えた。
新しい麺料理について聞いてくる。

「ほら、バウマイスター伯爵様が考案したらーめんってあるじゃない。それの改良ね」

「汁がある麺料理って事ですか？」

「そうよ。私も料理は得意な方だから、ちょっとだけアドバイスしたの」

確かに店の奥の調理場を見ると、巨大な寸胴が火にかかっている。
スープの匂いは豚骨系で臭みもなく、よく仕上がっているようだ。

「ダットマンちゃん、いい腕しているでしょう？　私が教えていた頃は、よく食事当番をしてくれたのよ」

「なるほど、さすがは料理屋の息子」

「昔、『俺は料理人になんてならない！』ってお父様に反抗して冒険者になったそうよ。でも、お父様が急死されたら、やっぱり自分は料理人になるって」

「キャンディーさんにはよくしてもらったし、冒険者の仕事も好きだったんすが、やっぱり自分は料理人が一番好きなんだって気がついたっす！　親父はもういないけど、このお店が成功すれば、天国で喜ぶはずっす！」

「いいお話ですわね」

亡くなった父親の跡を継いで、料理屋を経営する。
カタリーナは自分と同じく親の意志を継いだボルクの話を聞き、一人しんみりと感動していた。

「でも、問題は味」

「ヴィルマさん、そこで急に冷静にならないでくださいまし。きっと、素晴らしい麺料理ですわ。これは必ず完食いたしませんと」

感動秘話を聞いてしまったカタリーナは、試食で新しい麺料理を完食すると宣言した。
俺は量が多いと聞いていたので、ちょっと嫌な予感がしてくる。

「ダイエットは？」

「夕食を抜けばいいのですわ」

「まあ、そこまでカタリーナが言うのなら……」

「お待たせっす！」

そしてダットマンと店員二人が、俺達の前に完成した麺料理を目の前に置いてくれた。

「カタリーナ、大丈夫か？」

「勿論ですわ……」

とは言っているが、カタリーナの顔は引きつっている。
なぜなら、俺達の目の前に洗面器のような器が置かれたからだ。

「美味しそう」

「確かに」

ヴィルマと導師は、量の多さだけで気に入ったようだ。

そのラーメンはうどんのような麺で、これは伸びないように加水率をあげてある。

これが三人前くらい入っており、スープも醤油トンコツベースのものがなみなみと注がれている。

そして、山のように盛られた茹でた野菜と、分厚いチャーシューも入っていた。

俺は、このラーメンに見覚えがあった。

前世で一部マニアに人気があった、あの爆食系ラーメンに非常に酷似していたのだ。

「お好みで、卓上の刻みニンニクを入れてくださいっす！　沢山入れても、全然問題ないっす！」

地球のお店では麺の量と野菜の量を自由に調整できたが、まだ試作段階だからなのか？　ちょっとシステムに違いがあるみたいだ。

「駄目っすか？」

「いや、そんな事はないさ」

ダットマンが不安そうな顔をするので、俺達は早速試食を開始する。

すると、味は悪くないどころかとても美味しいと思う。
問題はこの量なので、美味しいという感覚がいつまで続くかだな。

「ヴェル様、茹でた野菜にスープをつけられない」

「ああ、これは……」

俺は素早く天地返しを行って、スープに浸った麺と、浸っていない野菜の位置を交換した。

「ヴェル様、凄い」

「こうすると、麺が伸びなくなり、野菜がスープに浸って美味しくなるんだ」

なぜ俺が詳しいかって？
実はある期間、この爆食系ラーメンを定期的に食べていたからだ。
この世界の飛ばされる一年ほど前、俺はある新入社員の指導を行う事になった。
彼はある中堅大学のラグビー部出身で、大した先輩でもない俺を立ててくれるいい奴だった。
お得意先回りに付き合わせ、さてお昼に何を食べるかという話になった時。

『自分、お勧めのお店があるっす』

という事情で、俺も爆食ラーメンにハマってしまったわけだ。
その報いは、体重が二か月で七キロ増という悪夢を生み出し、それからは食べる頻度を減らしたが。

「あの……ヴェンデリンさん……」

「やってあげるよ」

「ありがとうございます！」

「えっ？　そこまで感謝される事か？」

俺がカタリーナの分のラーメンに天地返しを行うと、物凄い勢いで感謝された。

別に宣言どおりに完食しなくてもいいと思うのだが、どうせカタリーナの事だ。

貴族が一度決めた事を成し遂げないのは、よくないと思っているのかもしれない。

「店主、この量だと、利益率は低くないか？」

「そこは薄利多売で頑張るっす！　自分も新人冒険者の頃は食べるのにも苦労したっす！　だから、お客さんには沢山食べてほしいっす！」

見た目とは違い、随分といい人みたいだ。

そして俺は、このお店は必ず成功するであろうと思った。

「ふう……何とか食べ切ったが、お腹一杯だな」

体は違うが、前世で大ラーメンを完食した事もあるし、魔法使いは大食いになりやすいからな。

俺は無事に出されたラーメンを完食した。

「まだ全然物足りない。お代わり」

「某も！」

ヴィルマと導師なら、このくらいの量は何でもない。
ダットマンに空いた器を見せてお代わりを要求した。
いや、あの……あくまでも試食なんですけど……。

「いやーーー、噂には聞いてたけど凄いっすね。試食は大量に用意してあるのでどうぞ」

「やったのである！　沢山食べるのである！」

「ロンちゃん、宣伝のためにあとで試食に来る人が沢山いるから、ちょっと遠慮してね」

「はいなのである……」

だが、導師の暴走はキャンディーさんによって未然に防がれた。
再び導師は、借りてきた猫のように大人しくなってしまう。

「カタリーナ、無理するなよ」

「バウマイスター伯爵様の言うとおりっすよ」

何とか三分の二ほどを食べる事に成功したカタリーナであったが、そこで箸が止まってしまった。
女性でここまで食べられた時点で俺は凄いと思う。
ダットマンも、無理をするなとカタリーナに配慮してくれた。

「俺が改善点をあげるとすれば、女性や子供用に量が半分くらいのメニューを用意するくらいかな？」

「なるほど、みんながこれを完食できるはずがないから必要っすね」

「逆に追加料金を取って量を増やすっていう手もあるけど」

「バウマイスター伯爵様をお呼びしてよかったわ。ちゃんとした改善点が出るから。ロンちゃんは、ちょっと駄目ね」

「すまないのである……」

導師は本当にキャンディーさんが苦手なようだ。

俺達は、こんなに大人しい彼を見た事がない。

「私は貴族ですわ……貴族が一度宣言した事を実行しないわけには……」

そしてカタリーナは、気合を入れ直してどうにか出されたラーメンを完食する。

「やりましたわ！　ヴェンデリンさん」

「おっおう……」

人間とは、どんな事でも困難を達成すると嬉しい生き物のようだ。

カタリーナが、ただラーメンを完食したというだけで異常に喜んでいる。

だがな、カタリーナ。

俺も経験があるのだが、この種のラーメンは食べた後にある種の

後悔が襲い掛かってくる可能性があるのだ。

「バウマイスター伯爵様、カタリーナちゃん、ヴィルマちゃん、ロンちゃんもまた来てね」

こうして、無事に試食会は終了したのであるが……。

「カタリーナ、何か臭くない？」

「あと、お腹が少し出ているような……」

「いやぁーーー！」

「そんな予感はした」

屋敷に戻ったカタリーナは、イーナからニンニク臭いと言われ、ルイーゼからはお腹が出ていると言われて一人絶叫する羽目になる。

「ヴィルマは大丈夫だな」

「臭いはミントで消せる。あと、私はいくら食べてもお腹が出ない」

「それは凄いな」

一方、そのラーメンをお代わりまでしたヴィルマには何の変化もなかった。

「理不尽ですわ！」

「カタリーナ、お腹ポンポン」

「それを言わないでくださいまし！」

ヴィルマから出っ張ったお腹を指摘され、カタリーナが大きな声をあげた。

「ヴェル様、また行きたい」

「たまにはいいよな。ああいうお店も。今度はもう少し少ない量にするけど」

「あの……ヴェンデリンさん」

「どうした？　カタリーナ」

「たまにでしたら、私も一緒に行ってもいいかと……」

「たまにならいいかもね」

そして、食べ終わった時にはもう二度と食べたくないのに、暫くするとまた食べたくなる。

カタリーナもその呪縛から逃れられなくなったようだ。

「事前に魔力を大量に消費すればいいのです」

これ以降、俺はたまにカタリーナをあのお店に連れて行くように

なった。
当然ダイエットにはよくないので、お店に行く前に彼女は魔力を大量に使うのが日課となったのであった。

「伯爵様、あの店はえらく繁昌しているのですが、客層がかなり偏っているような……」

「繁昌しているから問題ないと思うよ。リピーターも多いみたいだし」

「みたいですな……」

ダットマンの爆食系ラーメン屋は無事にオープンを迎え、開店初日から多くの客で賑わった。
だが、アルテリオの言うとおり、その客層はえらく偏っている。
ガタイのいい若い男性と冒険者が沢山押しかけるお店になったのだ。

「（まあ、どの世界でもこういうお店の客層は偏るよね……）」

ダットマンのお店は大人気となり、のれん分けによって元冒険者が店主を務める支店が次々とオープン、彼は引退した冒険者の第二の人生を安定化させた功労者として尊敬を集める事になるが、それはまだもう少し先の事である。

「ロンちゃんが新人冒険者の頃、寝る時に使っていた熊のヌイグルミって、ちゃんと名前がついていたのよ」

「伯父様が、意外でした」

「初恋の女性の名前からつけたんですって。意外とロマンチックなのよ。ロンちゃん」

「もう勘弁してほしいのである……」

導師唯一の弱点であるキャンディーさんは、エリーゼが服を買いに来た時にせがまれると導師の昔話を始め、それを知った導師は萎れた菜っ葉にように大人しくなってしまうのであった。

第百三十六話　西方動乱。

「定時報告も異常なし。艦長、何もない海ばかりですな」

「そうだな、副長。だが古い記録によれば、西方には魔族の住まう国があるとか……」

「その情報、本当なのでしょうか？」

「わからない。だが、何もないという事はないのではないか？」

穏やかな大海原を、一隻の巨大魔導飛行船が航行している。

艦名は『リンガイア』、我らが住む大陸の名前を冠した全長四百メートルにもなる巨大飛行船だ。

現在この船は、王都から出発して西方海域の調査を行っている。

リンガイアは大分昔に古代魔法文明時代の地下遺跡から発掘されたが、つい最近まで運用ができなかった。

それは、動力源となる巨大魔晶石が確保できなかったからだ。

他にも、この巨大な船体を支える装甲材なども不足していた。

どうやら修理、整備途中だったようで、発掘時にはかなりの外部装甲が外されていたのだ。

このままでは就役は不可能、そう思われていた時に奇跡が起こる。

王都へと向かう魔導飛行船の航路上に半ば伝説扱いになっているアンデッド古代竜が出現、それを若干十二歳の少年が討伐し、回収された魔石からこの船の動力源となる巨大魔晶石が作られた。
不足していた装甲材の材料も、アンデッド古代竜の骨から十分な量が取れた。

何とも都合のいい話に聞こえるが、私達はその少年がアンデッド古代竜を討つ現場に居合わせている。
私と隣にいる副長は、ただ魔導飛行船で逃げ回っていただけだがね。

「あの時の少年が、今ではバウマイスター伯爵様ですか」

「あのアンデッド古代竜退治が終わりじゃなくて、始まりだったようだな」

あの事件からバウマイスター伯爵様の大躍進が始まったわけだが、なぜか我々もその恩恵を受けているような。

なぜなら、私コムゾ・フルガがリンガイアの艦長に、長年の相棒であるレオポルド・ベギムが副長に任命されていたからだ。

魔導飛行船の船員は、元々空軍の軍人も兼ねている。
あの事件で船を守った功績により、我々がリンガイアの船長と副長兼西方調査団の団長と副団長に任じられたのだ。

「逃げ回っていただけで、この巨大魔導飛行船の船長と副長ですからね。我々は」

破壊されれば、現時点で建造が不可能な魔導飛行船を守った。

功績といえば功績だが、それもバウマイスター伯爵様やブランターク様がいての事だからな。

運の要素が大きいが、一応功績ではある。

我々がリンガイアの船長と副長に任じられた時、他の艦長連中は羨ましがっていた。

『運がいいだけじゃないか！』と言う奴もいたが、実際にその通りで反論のしようもない。

他の艦長でも、ブランターク様の『魔法障壁』があったから無傷で逃げ回れただろう。

本当にただ運がよかっただけさ、我々は。

「プラッテ伯爵家の御曹司が五月蠅かったですね」

「我々に言われてもな。人事担当に言えよって思うよな」

空軍にも、代々空軍軍人を生業とする貴族家が多い。

ただ、空軍ってのは実力本位な世界だ。

ヘボが貴重な魔導飛行船を運用して墜落でもさせると問題なので、平民でも実力があれば出世できる。

我々がその最たる例だ。

「あの御曹司、我々がバウマイスター伯爵様の推薦でこの役職に就けたと思っているようですよ」

「被害妄想の類だな、それは」

アンデッド古代竜を倒したバウマイスター伯爵様達が港に降りてから、我々は一度も顔を合せていないというのに。

それにいくら空軍でも、現場は平民でも出世できるが、地上の管理職はお貴族様のほぼ独占となっている。
船を任せられないお貴族様達は、そこで席を温めるというわけだ。
書類を書き損じても、魔導飛行船は落ちないからだ。
つまり、我々をこの船の艦長と副長に任じたのは、バカな同朋が信用できない他のお貴族様というわけだ。

見当違いも甚だしい。

お貴族様という言い方は、空軍で我ら平民出身者達がよく使う暗語だ。
空軍に所属している、鼻についたり、役に立たないお客様な貴族の事を差す。

「第一、バウマイスター伯爵様は空軍閥でもないのだから口を出せないだろう」

「領地開発利権の絡みで、口を出せると思っているようですよ」

確かに、それはあるかもしれない。
バウマイスター伯爵様の領地は、現在急速な勢いで発展している。
いくら物資や人を運んでも間に合わない状態だ。

「アンデッド古代竜退治の後も、パルケニア草原地下遺跡での戦果もあるじゃないですか」

「それもあったな」

運用可能な魔導飛行船がほぼ倍に増えたし、地下遺跡は現在では空軍の本拠地になっているからな。

空軍のポストは倍以上に増えて、魔導飛行船の運行ルートを増やして訓練も順調、輸送網の強化によって王国経済は上向いてる。

「空軍のお偉いさん達、バウマイスター伯爵様に頭が上がらないのと違うか？」

「でしょうね。それに、あの方はあまり空軍の事に口も出さないようで」

「そうなのか？」

副長、よく調べてきたな。

そんな情報。

「『バウマイスター伯爵領への定期便をできる限り増やして』としか言わないそうです。人事に口なんて出しませんし。『俺は空軍の事なんて知らないから、プロであるそちらに任せる』だそうで」

「空軍の司令官、涙流して喜んだだろうな」

世の中には、碌に勉強もしていない癖に知ったかぶりして口を出す身分の高い人がいるからな。

あれは、本当に対応に困るのだ。

しかし、バウマイスター伯爵様はお若いのに弁えているというか。

アホな陳情を垂れ流す貴族連中は、あの人の爪の垢でも煎じて飲めばいい。

「何よりも大切なのは、重要な天下り先になるそうで……」

「天下り先？」

「ええ、バウマイスター伯爵領って未開地だったじゃないですか。未発見の遺跡が沢山あって、たまに出るらしいですよ」

たまに、中・小型の魔導飛行船が出土しているそうだ。

「一定数は王国政府というか空軍が買い取りですけど、認められた隻数は領内で運用可能でしょう？」

大物貴族なら領内で運用している家も多いし、数名の小貴族が共同出資で運用しているケースも多い。

この場合、船を動かす人材は元空軍の軍人を用いるケースが多い。

各貴族家でも独自に教育もしているが、船乗りを育てるには時間とお金がかかるからな。

経験者を雇ってしまった方が安くつく事が多いというわけだ。

後進の教育もしてくれる。

「バウマイスター伯爵領でも、王国政府から認められた隻数の小型魔導飛行船の運用を始める計画だとか」

となると、ゼロからの運用スタートか。

最初は天下りの人材で人を揃えるしかないな。

独自に船を動かす家臣家の創設もあって……余っている子供を送り出したい貴族は多いだろうな。

「空軍のお偉いさん達、ますますバウマイスター伯爵様に頭があがらないな」

「でしょうね」

「あれ？　なら、どうしてプラッテ伯爵家の御曹司はご機嫌斜めなんだ？」

「それは、今の空軍司令がヴァイツ侯爵だからではないかと」

空軍のトップである司令官職は、幾つかの侯爵家と伯爵家の持ち回りとなっている。

数年で交替するのだが、たまたまヴァイツ侯爵が司令の時に美味しい話ばかりが舞い込んだ。

プラッテ伯爵家からすれば、面白くないわけか。

「貴族ってのは本当に面倒だな。私は平民でよかったよ」

「ですよねぇ。心からそう思います」

空軍で艦長と副長になれる人間は、下手な下級貴族よりも実入りがいいからな。

勿論総収入では負けるが、貴族じゃないから面倒な付き合いもないし、天下り先にも事欠かない。

大型魔導飛行船の艦長は、五十になれば肩を叩かれる仕事だ。

それだけ心身ともに激務だから仕方がないのだが、天下り先で小型魔導飛行船の艦長ならもう十年から十五年はやれる。

船を降りても後進の指導ができるから、天下り先で若い連中に教えながら第二の人生をすごすのも悪くないというわけだ。

特殊技術職だから、給料もいい。

「私も退役したら、バウマイスター伯爵家に厄介になろうかな？」

「それはいいですね」

副長と随分長く話し込んでしまったが、今は何もないから問題はない。

艦長という職は、基本的には二十四時間常に対応可能なようにしていないと駄目だからな。

ずっと気張っていたら、神経がおかしくなってしまう。

「艦長、前方に大きな島が見えます」

「遂に、来たな！」

私と副長は話を止めて、首に下げた双眼鏡で前方を確認する。

見張り員の報告通りに、次第に海岸線が見えてきた。

「大きな島……、亜大陸くらいあるかもしれないな」

昔の文献も案外あてになるものだな。

記述どおりに、島が見えてきたのだから。

「艦長！　前方から飛行物体が接近！」

「やはり人はいたのか……」

「魔族の国だと文献にはありました」

「少なくとも、我々と同じレベルの技術力が……いや残念ながら負けだな……」

こちらに向かってくる魔導飛行船だと思われる飛行物体は、全長五十メートルほどしかない。
それでも二隻あり、我々の魔導飛行船とは形状が違う。
表面はほぼ流線型で構成されていて、まるで卵のようだ。
速度も、確実にリンガイアの倍以上は出ているだろう。
それと、見た事もないような金属で表面が覆われている。

「帝国内戦で使われた『魔砲』で攻撃しないと駄目そうだな」

実際に撃ってしまえば戦争になるので、勿論そんな事はしない。
あくまでも、念のために乗組員達に警戒命令を出すだけだ。

魔法使いもいて、もしもの時には彼に魔法を撃たせる予定になっているのだが、あの硬そうな表面装甲には効きそうになかった。

「バウマイスター伯爵様がいれば、貫通するかな？」

「かもしれませんが、まだ戦闘になると決まったわけでは……」

「当たり前だ」

私が話をしているのは、あくまでも仮定の話だ。
まずは、向こうと連絡を取って交渉をするのが先であろう。

「その前に、あのバカが暴走しないようにしませんと」

「そうだな……」

あのバカとは、プラッテ伯爵家の御曹司の事である。
能力はそれほど低くないのだが、如何せん能力以上に自分を高く

見せようとする部分があって扱いにくい。
それでも貴族家の御曹司なので、二十代半ばで副長の地位にあった。

これだけの巨大船なので、運用上副長は二名存在している。
二人が同じ階位だと、万が一私が指揮不能になると混乱するので、長年の相棒であるベキムの方をナンバー2格にして艦橋に詰めさせている。
それも、プラッテ伯爵家の御曹司からすれば気に入らないのであろう。

不機嫌さを隠しもしないで船内で任務をこなし、他の乗組員達を困らせていた。

「先制攻撃でもされると困るからな」

「いくらなんでも、艦長の命令に背いて勝手に攻撃するとは……一応気をつけておきます」

副長が人を走らせると、さすがに命令違反を起こそうとは思わなかったようだ。
ただ、俺は貴族なのだから俺に交渉させろと喚いていると報告が入ってきた。

「船長、頭が痛いですね」

「ああ……」

だから、こういう時に備えて貴族を乗せておくべきだったんだ。
伯爵でも乗せておけば、その人に交渉を任せられたのに。

みんな、誰も知らない大地の探索なので尻込みしたのであろう。
ならば、平民でも職責から見て私にその権利があるのだが、貴族であるプラッテ伯爵家の御曹司からすればそれが気に入らないというわけだ。

あいつをトップに？
冗談じゃない。
あいつは外務閥の貴族ではなく空軍軍人だ。
交渉権限を与えると、あいつを船長にしなければならず、それではリンガイアが遭難、墜落する確率が上がってしまう。
これは、大きな運用上の欠点だな。
もし無事に戻れたら、上に報告をあげておこう。

「船長、御曹司がうるさいのですが……」

「今は忙しい！　放置しておけ！」

新しく見つかった魔族の国と、彼らとのファーストコンタクト。
私にはわかる。
プラッテ伯爵家の御曹司は貴族である自分がトップとなって対応し、その功績で名をあげて出世を果たしたいわけだ。
上長に平民である私と副長がいるが、これは船の統率ではなく外交交渉なのだから、貴族である自分が前に出ると思っているのか。

一応、私がその権限を与えられているのだがな。
なぜ無視しようとするのだろうか？

直接私に言いに来ないのは、それでも階級と職責は私の方が上だとわかっているからであろうか。

「私に文句を言われてもな。貴族の船長もいるのだから、そいつに任せればこういう問題にはならなかったのに」

「世の中は、侭なりませんね」

「そうだな」

このまま愚痴っていても、何も始まらない。

まずは、対話のチャンネルを開くべきだ。

と思ったら、リンガイアと対峙する魔族の魔導飛行船から声が聞こえる。

「こちらは、ゾヌターク共和国軍保安庁一等警備艦『アモル』艦長ロルイヌ・ケイオス二等佐です。貴殿の船は、共和国の領空を犯しています。これ以上の侵入は拿捕と撃墜の対象となりますので、速やかなる退去を願います」

「えらく丁寧な警告ですね」

「文明国なのだろうな」

しまったな、少し奥に入りすぎたか。

だが、領空の設定がかなり広いようだな。

あの魔導飛行船のスピードから見て、領空を広めに設定しないとあっという間に侵入されると思っているのかもしれない。

実際、我らの魔導飛行船はそこまで速くないが。

「こちらは、ヘルムート王国空軍リンガイア艦長兼西方調査団団長

のコムゾ・フルガです。我々は東のリンガイア大陸から来ました。情報の交換と、来たるべき外交交渉に備え、予備交渉を望んでいます」

こちらも、魔道具である拡声器で返答をする。

王国政府の方針は、もし魔族の国が見つかったら交易などの促進と、相互不可侵同盟の締結にあった。

どういうルートか知らないが、王国政府はどういうわけか魔族の国の情報を持っているように感じる。

だからこその、条約交渉なのであろう。

相変わらず、一部の貴族達は魔族の国への侵攻を提案する者もいたが、魔族は全員が魔法使いで、ご覧の通りに魔法技術でも上回っているようだ。

戦っても勝てないのは、誰の目から見ても明らかだ。

第一、帝国内乱の時でも統治効率が落ちると帝国に侵攻しなかったのに、こんな遠方の亜大陸をどうやって維持するというのだ。

戦費の問題もあるし、距離が遠すぎて大軍を送るのにとてつもない手間がかかる。

現在、王国領内で運用している大型魔導飛行船をすべて徴用しても間に合わない。

もし苦労して大軍を送り出しても、補給が難しいのは子供にでもわかった。

向こうの食料事情もわからずに、現地調達でもさせる気か。

戦況が悪くてなっても、撤退すらできない。

貴族ってのは、名前を売りたい目立ちたがり屋ばかりいて困ってしまうな。

先の事など碌に考えもしないで無茶を言うのだから。

「幸いにして、話し合いはできそうだな」

「お貴族様よりも理性的みたいですね」

などと安堵した瞬間、突然ゾヌターク共和国軍の魔導飛行船から火の手があがった。

私は、攻撃命令など出していないぞ！

「どういう事だ？」

「船長、あのバカ御曹司が！」

火の手は、魔法使いが『ファイヤーボール』を放ったせいらしい。

一瞬だけゾヌターク共和国軍の魔導飛行船の心配をするが、向こうの装甲が固いのと、こちらの『ファイヤーボール』の威力が低すぎて、まったくダメージを与えていなかった。

「よかったですね」

「よくない！　ラーセンは何をやっているんだ！」

ラーセンとは、リンガイアに詰めている魔法使い達を束ねている人物の名だ。

自身も中級の魔法使いである。

長年空軍に所属している癖に、あのバカ御曹司の命令など受け入れおって。

「いえ、ラーセンではないでしょう」

「臨時雇いの魔法使いか！」

未知の領域への探索なので、空軍は自前の魔法使いを出し渋った。
高額の報酬で冒険者である魔法使いを増やしたのだが、こいつがバカ御曹司の命令に従って『ファイヤーボール』を放ったらしい。

「冒険者なのが仇になったか！」

空軍の者ならば、いくらバカ御曹司が攻撃命令を下してもまずは私に伺いを立てる。
ところが、普段組織にいない冒険者ほど貴族に対して卑屈だったりする。
命令系統に疑問を持たないで、攻撃してしまったのであろう。

「とにかく、あのバカを抑えろ！　向こうにも事情を説明して……」

最後まで命令を言い終わる前に、船体が大きく揺れた。

「攻撃……じゃないな……」

「接舷されました！」

「防戦準備！」

結局、なし崩し的に戦闘になってしまった。
願わくば、このまま両国が戦争にならない事を祈るのみである。
これでも、私は愛国者なのだから。

「一週間ほど前、突然定時連絡が途絶え、西方探索をしていたリンガイアは消息不明である」

「遭難ですか？」

「あの船の安定性は、従来の大型魔導飛行船などよりも上なのである。それに、艦長と副長も腕がいいのである」

「今思い出しました。俺が、アンデッド古代竜を退治した時に乗っていた魔導飛行船の船長と副長ですよ」

今日も土木工事を終えて屋敷に戻ると、やたらと赤ん坊達の泣き声が激しい。

何事かと思って部屋に入ると、そこには赤ん坊をあやしているつもりでも、泣かせているようにしか見えない導師の姿があった。

暫くは講演行脚で忙しかった導師も、ようやく赤ん坊を見に来れるくらいは暇になったようだ。

「導師は、赤ん坊受けしないよな」

「まあ、それは今さらとして。だが、フリードリヒは例外である！」

導師の姪であるエリーゼの血を引くフリードリヒは、導師を見ても泣かなかった。

まだ生まれて間もないのに、素晴らしい胆力である。

「えらいぞ、フリードリヒ」
「ただ鈍いだけと違うか？」
「違う、フリードリヒは胆力があるんだ。この子は大物になるぞ」
失礼な事を言うエルに、俺は主君として釘を刺しておく。
フリードリヒは、優れたバウマイスター伯爵になれるはず。
そして、俺を引退させてくれるのだ。
「親バカも極まれりであるな」
「導師まで酷いですよ」
「某を化け物扱いしておいて、それはないのである」
導師に内心で思っていた事を悟られ、俺は締まらない笑顔で誤魔化した。
「ええと、西方探索をしていたリンガイアが行方不明でしたね」
話がヤバイ方向に行こうとしたので、俺は慌てて話を元に戻す。
「あの巨大魔導飛行船、そんな事をしていたんだな」
エルと同じく、俺もリンガイアの活動なんて知らなかった。
稼働に必要な魔石や素材は売ったが、別に就航式に招かれたわけでもないからだ。
「最後の定時連絡で、魔族の国を見つけたとあるのである」

「となると、そこで何かトラブルがあったと？」

「かもしれぬ」

「うーーーん。何をしたんだ？　おい、アーネスト」

俺は、部屋に籠って論文の執筆に勤しむアーネストを呼び出し、魔族の国についての情報を聞いてみる事にする。

何かヒントがあるかもしれない。

「巨大魔導飛行船が行方不明であるか？　大方、アホな貴族が先制攻撃などをかまして、拘留でもされているのではないかと推論するのであるな」

「そんなバカな」

探索団は、空軍の軍人ばかりで指揮系統も整っている。

そんなバカな真似などするはずがない。

「それで、一つ問題になっている事があるのである」

「問題に？」

「左様、リンガイアにはプラッテ伯爵家の御曹司が乗っていたのである」

「軍人なら、別に問題ないのでは？」

リンガイアは軍船で、未知の遥か西方を探索するのだ。

遭難もあり得るし、もしそうなっても次男が跡を継げばいいのだから。

「ただの遭難ならそうであろうが、魔族の国との偶発的な戦闘で戦死という事になれば、報復を叫ぶのが貴族という生き物である」

報復ねえ……。

気持ちはわかるけど、地図もなく距離も離れている魔族の国にどうやって攻め込むというのだ。

もしそんな事をするのなら、まだ帝国に侵略でもした方がマシである。

第一、勝ち目がないだろう。

「プラッテ伯爵家は、帝国内乱の時も出兵派であったのである」

「今度は、魔族の国に出兵派ですか？」

「ブラフという可能性もあるのである」

それも視野に入れて、もしくは逆に向こうが攻めて来る可能性もあるので、それに準じた戦備を整えましょう。

特に空軍をねと。

予算とポスト増を勝ち取って、プラッテ伯爵家の空軍内での影響力を強くするというわけだ。

「政治ですね……」

「リンガイアの方は、もう暫く待つしかあるまい。追加で捜索隊を送り込もうにもである」

ここは、地球ではないのだ。
衛星画像の解析をするわけにもいかず、そう簡単に探索機など送れるはずもない。

「通常の大型魔導飛行船を、追加の探索に回す余裕もないのである」

そうでなくても、王国北部地域は内乱中魔導飛行船が使えなかったのだ。
その穴埋めに、バウマイスター伯爵領開発に続いて計画された王国各地の開発計画もあって、今では予備の船すら動かしている状態であった。

追加で、西方探索に出せる大型魔導飛行船など存在しないのだ。
元々リンガイアが選ばれた理由も、航続距離や性能もあるのだろうけど、就役したばかりで員数外だったという理由が大きいのだから。
性能試験もしなければいけないから、一石二鳥だったのだ。

「別の船を出しても、また戻って来ない可能性もあるのである」

「ですよねぇ……」

リンガイアだけでも大損害なのに、他の大型魔導飛行船まで行方不明になれば王国は大きな損害を受けてしまう。
拙速で追加の探索を出す前に、偉い人達で長い協議が必要となるはずである。

「ただ、一人だけ声が大きいのがいるのである」

「誰です？　それは」

「プラッテ伯爵である」

大切な跡取りが、リンガイアに副長として着任して戻らない。

大体、こういう事になったのは平民風情を艦長にするからだ。

その人事を行ったヴァイツ侯爵の責任は重い。

速やかに辞任をして責任を取るべきである。

大凡、非主流派と野党が言いそうな発言ではある。

日本で国会の時期にテレビをつければ、いつでも聞けてしまう内容だ。

そのくらいしか、自分の存在感をアピールする方法がないとも言えたが。

「遭難か、拿捕かはわかりませんけど、こうなってしまうと、まずは艦長に責任ありですか」

「ではあるが、『平民風情』はまずいのである」

王国政府が優れた船乗りを集めるために平民への門戸を開いているのに、我が子可愛さで、空軍閥の重鎮がその制度を批判しているのだ。

当然、対策会議は揉めに揉めているらしい。

「不毛で、生産性のない会議ですね……」

そんな会議があるのも組織の宿命なんだけどね。

「現状では、どうにもならないのも事実なのである。暫くは様子を

見るしかないのである」

そんな話を導師から聞いたのだが、それ以降も俺の生活に変化はなかった。

魔法による土木工事は続き、たまにほぼ男だけのパーティで魔の森に狩りに出かけている。

唯一の例外は、俺の一番弟子扱いになっているアグネスであった。

彼女は成人しているので、いつも所属しているパーティの他に、俺達が臨時で組んだパーティにも参加するようになった。

やはり、魔法使いが多いと狩りの効率が増すな。

「先生、今日も大収穫でしたね」

「アグネスも、大分魔法が安定してきたな。落ち着いて狩りができるようになったし」

真面目なアグネスは、最初は慣れない魔の森での狩りに緊張しっ放しであったが、今では大分魔物狩りに慣れたようだ。

この調子ならば、すぐに冒険者として独り立ちが可能であろう。

「先生のおかげです」

「来年になればベッティが、再来年にはシンディが成人するから、強力なパーティが組めるぞ」

「そうですね。私が頑張って、二人を引っ張っていかないと」

三人の中で年長者であるアグネスは、リーダーとして責任感に燃えていた。

「でも、たまには先生とご一緒しても構わないですよね？」

「当たり前じゃないか。俺は、アグネス達の先生なんだから」

「ありがとうございます、先生」

弟子もであるし、妹のような存在でもある。

頼られて、悪い気がしない俺であった。

特にこの三人は、俺が一番目をかけて指導をした生徒達なのだから。

「ブランタークさん、導師、もう戻りますか？」

「そうだな。俺は、娘の面倒を見ないといけないし」

「はあ……」

どういう心境の変化があったのか？

ブランタークさんは少しでも時間が空くと、自分の娘の面倒を見るようになっていた。

さながら、この世界の『イクメン』か。

昔は結婚すら嫌がっていたのに、驚くような変化である。

「バウマイスター伯爵には子供が多いのだから、早く帰ってやるのである。エルヴィンもである」

「導師、たまに物凄く真面目な事を言いますね……」

こう見えて導師にも子供が多いので、たまに父親の先輩としてこういう真面目な事も口にするのだ。
人間慣れない事はしない方がいいみたいで、エルは物凄く失礼な返答をしていたが。

「某とて、休日には子供を遊びに連れて行ったりなどしているのである」

「そうなんですか……」

家族サービスをする導師、想像すらできない光景である。
竜狩りにでも連れて行くのであろうか？
彼の子供達にはわからないが、導師にとっては娯楽みたいなものだからな。

「とにかく戻るか……」

冒険者ギルドで素材と採集物の清算を済ませてから『瞬間移動』で屋敷に戻ると、そこには意外な来客があった。

「うむ。プラッテ伯爵であるか」

「導師殿か。今日は同じ『伯爵』として、バウマイスター伯爵に用がある」

「同じ伯爵であるか」

「そうだ」

導師は、その来客を知っていた。

プラッテ伯爵、先日のリンガイア行方不明事件で跡取り息子の消息がわからない貴族である。

「バウマイスター伯爵、陛下に追加で船を送るよう、共に上奏しようではないか」

「はあ……」

挨拶もそこそこに俺の説得を始めるプラッテ伯爵。

だが、彼の目的や意見を聞いているうちに、俺の心にどんよりとしたものが溜まってくる。

プラッテ伯爵は物凄くバカだったり無能という事はなかったが、自分の考えがいかに正しく、俺がそれに協力するのが当たり前だという物言いをするのでとても腹が立つ。

ある意味、貴族らしいといえばそれまでだ。

この時点で俺は、既に彼の後継ぎ息子への同情は消え去っていた。

「そもそも、リンガイアの処女航海を兼ねた西方探索は、西方にあるとされる魔族の国の情報収集や予備交渉も兼任する可能性が高かった。それなのに、ヴァイツ侯爵は艦長と探索隊の団長職を平民になど渡しおって。もし本当に魔族の国があったとしたら、交渉はどうするつもりなのだ？　我が息子に任せればよかったものを……若造で経験不足な上に、でいくら貴族でも空軍の指揮序列を乱す事は許されないと抜かしおった！　これは次の空軍司令官となる私に対する嫌がらせなのだ！　それにだ！　実力本位で選んだ平民船長が貴重な国家財産であるリンガイアを行方不明にさせておるではないか！　ヴァイツ侯爵の任命責任も追及しなければいけない！」

プラッテ伯爵の言っている事に間違いはなかった。

ただ、それを何の関係もない俺に言われても困る。

俺は空軍閥じゃないのだから。
というか、おっさん、何しに来たんだ？

「交渉ですから、外務閥の貴族を乗せるのが優先でしょうね」

「あのクソ共！　みんな怖気づいて断りおった！　あいつらは、帝国とたまに交渉するくらいしか仕事がない怠け者で、怠惰な連中だから無理なのだ！　ならば私の息子に任せればよかったものを！　ヴァイツ侯爵の奴め！」

正論だが、吠えるプラッテ伯爵はウザかった。
交渉を行わないといけない可能性がある以上は、本来その権限がある貴族を乗せておかないと駄目なのはわかる。

だが実際には、外務閥の貴族達はみんなリンガイアに乗るのを拒否してしまったらしい。
未知の領域へ向けての探索であり、遭難の可能性もあったので全員断ってしまったそうだ。
元々外務卿以下の外務閥貴族達は、普段からあまり仕事がないのでやる気がある者が少ない。
挙句に、今回の内乱初期から終盤にかけての役立たずぶりだ。
内乱後彼らへ批難が集中し、それを糧に頑張ってくれたらよかったのだが、逆に委縮してしまって余計に仕事をしなくなったと、ブライヒレーダー辺境伯からは聞いていた。

そういえば、帝国との講和交渉でも王太子以上に目立たなかったよな。

「プラッテ伯爵、大型魔導飛行船に余裕はないのでは？」

隻数は増えたが、ここ一年ほど帝国内乱に巻き込まれて二隻が抑留された。

ニュルンベルク公爵に動力源である魔晶石を鹵獲され、これはペーターが返還したが、おかげで輸送量を確保するために稼働率を上げざるを得なかった。

これ以上、大型魔導飛行船を西方探査に使うのは難しいはずだ。

「二重遭難の可能性もあります。陛下が許可を出さないのでは？」

「バウマイスター伯爵が上奏をすれば大丈夫だ。貴殿は、陛下のお気に入りではないか」

プラッテ伯爵は、自分の跡取り息子が心配なのであろう。

加えて、頭に血が昇っている。

平民の艦長と副長のせいで歴史あるプラッテ伯爵家の跡取りが行方不明になり、更にその人事を発布したのはライバルであるヴァイツ侯爵であった。

自分の子供を謀殺しようとしているとか思っているのかもしれない。

被害妄想の類だと思うが、それは息子が心配な父親には通用しないのであろう。

「私には空軍の事はわかりませんが、船の量が足りませんし、大型魔導飛行船でも遥か西方まで行くとなると難しいでしょう」

だからこそ、就役したばかりで輸送量にカウントされていないリンガイアが探索に赴いたのだから。

それに、航続距離の関係もある。

リンガイアなら、一度魔晶石に魔力を満タンに積めれば大分遠方まで行ける。
ところが、通常の大型魔導飛行船では魔力補充の回数が増えると聞いた。

しかも、ただ魔力だけ補充すればいいというものでもないらしい。
当然整備なども必要で、だから通常の大型魔導飛行船は探索に用いられなかったのだ。

飛ばしながら定期的に整備を行い、更に魔力補充のために大量の魔法使いを確保しないといけない。
リンガイアだとその回数が減らせるから選ばれたのに、それを空軍閥であるプラッテ伯爵が気がつかないはずはなかった。

「リンガイアは、バウマイスター伯爵が就役に貢献した船。多少の愛着もあるであろう？」

「はあ……」

「我が息子は、そのリンガイアを立派に維持、運用していたのです！　ここは、バウマイスター伯爵自らが助けるくらいの度量を見せるべきです！」

「……」

手を変え、品を変え、俺に再探索の上奏をさせようと迫るプラッテ伯爵。
俺はまたも五月蠅い貴族を相手にし、余計に精神を摩耗させてしまうのであった。

「己の子が可愛いのは、人間も魔族も同じなのであるな」

食い下がるプラッテ伯爵に対し、暫く考えさせて欲しいとお引き取りを願った後、俺は中型・小型魔導飛行船が二十隻以上も並んでいる簡易ドッグ内で船を見分しているアーネストに声をかける。

この簡易ドッグは、来たるバウマイスター伯爵家空軍創設に備えて、俺が材料を準備したものだ。

中・小型船向けとはいえ、魔導飛行船を雨風から守るものなので、作りは簡素ながらも頑丈に作られている。

ちなみに材料は、石材と木材に、俺が製造に成功した極限鋼の鋼材であった。

「我が輩には子供がいないので、よくわからないのであるな」

「なら、言うなよ。ところで、何をスケッチしているんだ？」

「バウマイスター伯爵領各地から発掘された魔導飛行船であるが、これは年代ごとに作りや装飾が微妙に違うのであるな。これを系統立てて論文を書くためであるな」

「同じにしか見えないけど……」

エルには、魔導飛行船ごとの差がよくわからないようだ。

俺もまったく同じとは思わないが、大した違いもないように見える。

「素人はこれだから困るのであるな。イシュルバーグ伯爵初期の作品に対して、あまりにも不見識なのであるな」

「イシュルバーグ伯爵ねぇ……」

俺の中のイシュルバーグ伯爵像は、天才だけどロクデナシという印象しかない。

それはエルも同じで、何しろ俺達は彼のせいで死にかけたのだから。

「大陸中央部、王都近くの遺跡で見つかり、王国が運用している大型魔導飛行船。これは、イシュルバーグ伯爵が晩年に設計したものであるな。あの大きさとあの造りが、性能、量産性、コスト、整備効率に一番優れているのであるな」

「古代魔法文明時代の中心国家が用いていたから、中央で出土しやすかったと？」

「正解なのであるな、バウマイスター伯爵。そして、あの大型魔導飛行船が普及すると……」

「地方に、中・小型の古いタイプが回されるわけだ」

「そんなところであるな」

都心で使われた古い電車やバスが、地方に回されるようなものか。

「何だ。古いタイプなのか……」

「そうガッカリするものでもないのであるな、エルヴィン。これでも、普通に使う分には何の問題もないのであるな」

多少性能が落ちるからといって、それで問題があるわけでもないとアーネストが説明する。

「これだけの隻数、普通の貴族家では運用不可能だからな」

二十隻にも及ぶ魔導飛行船の使用許可が王家から出たのは、バウマイスター伯爵領の広さと、いまだ多くの領地が開発途中であったからだ。

実は、この三倍以上も出土していたのだが、残りはすべて王家が強制的に買い取った。

額は相場通りであったが、相場から一セントも超えないのは、さすがはルックナー財務卿とでもいうべきであろうか。

王家は、買い取った小・中型の魔導飛行船を売却する貴族家を選定している。

これで儲ける気はないが、船を売ってもらえる貴族家というのは王家に貢献していると思われている貴族であり、こういう事情を聞くと王国は帝国よりも中央の力が強いというわけだ。

「バウマイスター伯爵家に、他の貴族家も王国から中・小型魔導飛行船を購入して運用を開始であるな。それはすなわち、人員の不足を招くのであるな」

「だよなぁ……」

育成に時間がかかる船乗りが、不足するというわけだ。

戻って来れるかわからない西方探索になど出す余裕もなく、魔法

使いだって不足するはずだ。

「リンガイアは高価かもしれないけど、現実的に捜索に船と人を出せないよな」

陛下や閣僚、空軍の上層部は『リンガイアの行方不明事件については残念であるが、現実的に探索に向かわせる船と人員が……』という事で、現在話し合い中らしい。

こういう状態を、日本では『決められない政治』とか言うのであろうが、ここで無理に大型魔導飛行船にベテラン船員達、魔法使い達を向かわせて戻って来ないと損失を広げてしまう。

探索に消極的になるわけだが、プラッテ伯爵からすればそれが許せないというわけだ。

「アーネスト、リンガイアを魔族の国は撃沈したのかな？　領空・海侵犯とかで」

「バウマイスター伯爵、魔族の国はそこまで野蛮ではないのでな。大方、何かの行き違いで拿捕でもされたのが正解ではないのであるな？」

「それを確認しに行く術もないからな。俺は空軍の人間でもないし」

領地の開発に、奥さん達と子供達を置いても行けない。

プラッテ伯爵はウザ可哀想だが、俺に打つ手はなかった。

「そういえば、アーネストさんはどうやって魔族の国からこの大陸に来たんだ？」

「当然、船で来たのであるな」

「船？」

「そう、船なのであるな」

魔族の国から密出国したために、小さな木造の海に浮く船に乗って出て来たそうだ。

「よく遭難しなかったな……」

「これがあるからであるな」

アーネストは、自分の魔法の袋から船外機に似た魔道具を取り出す。

「動力はこれであるな」

どう計算しても、モーターボートくらいの船しか動かせない船外機だ。

これで前人未到の大海原を一人で横断とは、学者バカも極まれりであろう。

俺には死んでも真似できない行動だ。

「研究が、我が輩を呼んでいたのであるな！」

ただし、この学者バカぶりのせいで帝国内乱が酷くなったという現実もある。

アインシュタインは天才だったが、原爆の製造に関わった。

研究成果のために他人などいくら死んでも構わないとまでは思わ

ないが、想像ができない点において、アーネストも同罪なのかもしれない。
天才というのは、元々唯我独尊な人が多いからな。

俺は、今のところは役に立つので置いているが……。

「その魔道具を小型魔導飛行船に付けても同じだろうな。というか、元から魔族の国になんて行くつもりもないけど」

俺は色々と忙しいのだ。
生まれてきた子供達のために頑張らないといけないのだし。

「父親になると、途端に保守的になるのであるな。我が輩は、だから独身を貫いているのであるな」

「それは、本当なのか？」

その前に、変わり者過ぎて女性が近づかないのではと俺は思ってしまった。

「どうせ、暫くは何もできないのであるな」

アーネストの予言は正しかった。
王国政府は、リンガイア行方不明事件に対して何ら対策を打てないでいた。
定期的に話し合いをしているが、一向に結論が出ないのだ。

追加で探索隊を送るべきだという、プラッテ伯爵以下の一部空軍軍人達に、他の貴族達も賛同している者達がいる。
ところが半数以上の貴族は、リンガイア探索隊の派遣に反対して

いる。

バウマイスター伯爵領から出土した魔導飛行船を早く運用したいので、そんな再び遭難の可能性がある探索に船と人を使いたくなかったからだ。

結局のところ、リンガイアは運行と輸送のローテーションに入っていなかったから王国経済への影響がなかった。

ベテラン船乗り達は惜しかったが、致命的なダメージではない。

暫くは船乗りの不足が続くであろうが、それは教育する人数を増やせば数年で解決するのだから。

「大型飛行船一隻を戻って来れるかわからない探索に出す。空軍のトップは嫌でしょうね」

ローデリヒが、俺達に空軍トップの考えを説明する。

「リンガイアの損失は惜しいですが、追加で探索に大型魔導飛行船など送る余裕はありませんよ」

「それが戻って来ないと、いよいよ空軍上層部の責任問題になるか……」

リンガイアのみの損失なら、まだ陛下も目を瞑るはず。

だが、もう一隻送り込んで戻って来ないとなると、陛下もヴァイツ侯爵を処分しなければいけなくなる。

案外、プラッテ伯爵もそれを狙っているとか？

彼の息子は一人だけじゃないからな。

いや、それは疑いすぎなのだろうか？

「リンガイアは、まだ不可抗力の遭難で済ませられる案件ですし」

「惜しいのは事実であるが、正式に戦力にするなり運航を開始していなかったのである」

講演業務が終わってから、ほぼずっとバウマイスター伯爵領にいる導師が裏の事情を教えてくれた。

「沈んだっていう証拠もないですしね」

「あの魔族であるな。信用はできぬが、そう言っている事が間違ってるわけでもないのである」

導師は、アーネストが苦手であった。

お互い性格が似ているような気もするが、そうなると近親憎悪のような感情が湧き上がるのかもしれない。

あとは、口調も似ているか。

何の関係もないけど。

「拿捕されたのであれば、魔族の国から何か言ってくる可能性もあるのである」

そうなってから交渉の方がいいという意見も多かった。

実は、その根拠となる情報を陛下に送っているのは俺で、とはいっても、ただアーネストの発言を記して送っているだけであったが。

「念のために情報は収集していますが、今のところは何もできません。そこで……」

「そこで何だ？　ローデリヒ」

「魔導飛行船を独自に運用するとなると、バウマイスター伯爵領各地に魔導飛行船用の港を作りませんと」

「それ、前に作らなかったか？」

入植当初、結構作った記憶があるんだけどなぁ……。

「数がまったく足りないのです。開発を始めたい無人の土地もありますから、まずはそこに港を作れば、人と物の輸送も楽々です」

「俺が作るのか？」

「はい。それが一番早いので」

「そうか、早いのか……」

「これも生まれてきたお子達のためですぞ」

「わかったよ」

というわけで、俺はローデリヒの指示どおりに魔導飛行船専用の港の基礎工事を行う羽目になる。

着陸用の船台を切り出した岩で作り、それをローデリヒが手配した職人や労働者達が仕上げていく。

「陸と空の交通と流通を制する者は、その土地を制するですな」

「ああ、ローデリヒの言う事は正しいよ」

「ご理解のあるお館様を持てて、このローデリヒ、嬉しい限りでございます」

人と物の流れを促進する道や港は、土地を流れる血管のようである。

それを強化して経済発展を促すのは、古代より誰もが行っている公共事業であった。

そのくらいなら、俺にも理解できる。

「我がバウマイスター伯爵領は未開地が多いですが、お館様の魔法が圧倒的ですので不利にはなりません。跡を継ぐお子達にも魔法使いの素質が現れて万々歳です」

他よりも圧倒的に開発が早く進むので、ローデリヒはご機嫌のようだ。

「それはいいが、リンガイア関連の事件はどうなるんだろう？」

「拙者からは何も……王国でも対応に苦慮しているのでは？」

俺も、別に王国政府の要職にあるわけでもないので何もできない。

今はとにかく領内の工事を続け、試験的に小型魔導飛行船の運用を始めるので新しい家臣を雇った。

それはヴァイツ侯爵の弟で、若い頃から優秀な船乗りであったそうだ。

家を継がないで済む気楽さから、あえて現場を好み船に乗っていたらしい。

他にも、他の空軍閥貴族の子弟や、現役を退いた元船乗りを雇っている。

彼らに、領内で募集した若者を教育させる計画だ。

「お館様、プラッテ伯爵家ゆかりの者がおりませぬな」

バウマイスター伯爵家諸侯軍魔導飛行船部隊を担当する事になるヴァイツ侯爵の弟ヨーハンが、集まった人材の中にプラッテ伯爵家の息がかかった者がいない事に気がつく。

「本当は駄目なんだろうが、五月蝿いからいらない」

「何となくわかります……」

あれからプラッテ伯爵は、暇さえあれば俺に会いに来た。

自分の跡取り息子を救うため、俺が陛下に再探索を上奏して欲しいというわけだ。

俺に上奏させるのは、自分だと駄目だから、陛下のお気に入りである俺の名義を借りたいわけだ。

交通費が大変だなと思ったら、あのアホ。

空軍閥のお偉いさんなのをいい事に、大型魔導飛行船に無料で乗ってバウマイスター伯爵領にやって来やがる。

資金切れでギブアップしないから面倒なおっさんだ。

『ですから、私にも都合があるのです！』

『息子の命がかかっているのだぞ！　そこを何とかするのが貴族であろう！』

プラッテ伯爵は、人道的な観点から俺に再探索に参加しろと五月

蝿かった。
その割には、自分の息子ばかり心配して他の人達への配慮はゼロである。

『通常の大型魔導飛行船では、あの遠距離は不可能とは言いませんが難しいと聞きましたが』

『貴殿の魔力量ならば、魔晶石への補充も常に行える。奥方達もみんな魔法使いだと聞く。魔族の国にも容易に辿り着くはずだ』

そんなわけはない。
そんなに簡単に到着可能ならば、わざわざ探索隊など組まなかったであろうからだ。

『お礼なら出す』

『お礼ですか？』

『私の跡取り息子と貴殿の娘の婚姻を認めよう』

『はあ？』

俺は最初、プラッテ伯爵が言っている事の意味がわからなかった。

『息子には既に妻がいるが、私が責任を持って側室に降格させるから』

『……はあ？』

俺は、目が点になってしまう。

苦労して魔族の国に到着し、上手く交渉してプラッテ伯爵の息子を救出すると、俺はその間抜けな息子に娘を妻として差し出す権利があるのだそうだ。
更に、もしそれを実現すると、俺は元の正妻を出した貴族家からも恨まれるという寸法だ。
何が褒美なのか、正直意味がわからない。

『貴殿は陛下に再探索を上奏し、奥方達も連れて再探索に出ればいいのだ』

呆れてものが言えない。
同じ伯爵同士なのに、なぜプラッテ伯爵は俺に対してこうも偉そうなのだろう？
同じ伯爵なのだが、俺が新興だから後輩扱いなのか？

『とにかくお帰りください』

その日も、何とかブチ切れずにプラッテ伯爵を帰す事に成功した。
だが、次はわからない。

「というやり取りがあったから、プラッテ伯爵に関わる連中はすべて採用しなかったんだが、ヴァイツ侯爵と他の空軍閥の方々に不満があると思うか？　ヨーハン」

「いえ……プラッテ伯爵は何を考えているのでしょうか？」

とりあえず魔導飛行船の運用を任せるヨーハンにプラッテ伯爵の

事を聞いてみると、彼も困惑した表情を浮かべる。

「俺はよく知らないのだが、元々プラッテ伯爵とはそういう人なのか？」

「いえ……そこまでおかしな方では……我が子可愛さからでしょうか？」

とにかくお話にならないので、報復処置としてうちでプラッテ伯爵家ゆかりの者は雇わなかっただけだ。

元々船乗り自体は不足しているので、他の家に行けばいいわけだからそれで彼らが困る事もないであろう。

「リンガイアの件は、一体どうなる事やら」

「これればかりは、陛下のお考え次第かと……」

バウマイスター伯爵領の開発は、予定よりも大分前倒しで進んでいる。

エリーゼ達がまだ産休というか育休を取っているので、土木工事にかける時間が増えていたからだ。

リンガイアの消息不明が確認されてから二か月ほど、今日もアグネス達に指導をしながら土木工事をしていると、そこに突然王国政府からの使者が現れる。

使者とは言っても、あの人物なので特に驚きはなかったのだが……。

「バウマイスター伯爵、大変なのである！」

「大変って、何があったのです？」

「西部に、謎の魔導飛行船艦隊が出現したのである！」

「えっ？　報復か？」

俺が咄嗟に思いついたのがそれだ。

アーネストの予想では、リンガイアが消息不明になったのは魔族の国で揉めたからではないかという。

王国や、息子を送り出しているプラッテ伯爵は認めたくないのであろうが、今まで一万年以上も姿を見せなかった魔族の国の船が西部に現れたという事は、何か用事があって交渉にでも来たか、先の事件の報復に来たのではないか？

そういう風にしか考えられなかった。

ただし、その交渉には当然硬軟合わせた対応があるはずだ。

「その艦隊は、西方海域に浮かぶ『テラハレス諸島群』に拠点を築きつつあるのである！」

「名前くらいは聞いた事がある島ですね……」

リンガイア大陸西部から少し離れた海上にあるが、周囲には海竜が生息し、島自体にもあまり平地はない。

入植には厳しい環境にあり、一応西部を統括するホールミア辺境伯家が領有権を持っていた。

昔、領有を主張するために簡単な港を整備したらしい。

「何か嫌な予感が……」

「バウマイスター伯爵の予想どおりである！　何の価値もない無人島ではあるが、れっきとしたホールミア辺境伯家の領地。当然、退去を求めたり、奪還すべきであると諸侯軍の動員が始まっているのである！」

貴族にとって、領地問題とは死活問題以外の何物でもない。

いくら無価値の無人島でも、それを奪われても放置では貴族の沽券に係わるからだ。

それに、そのテラハレス諸島群の領有を魔族達に認めてしまうと、ホールミア辺境伯領の防衛ラインが下がる。

テラハレス諸島群と大陸の間には有人の島もあるそうで、そこが危険に曝されると神経質になっているらしい。

「それで、その艦隊から何か？」

「まだ何も言って来ないのである。艦隊の停泊地や、船員や兵士達が滞在する陣地を建設しているようであるな」

「また面倒な……」

領地問題の面倒さは、地球でいくらでもあった。

それよりも、魔族の国の艦隊が何を考えているのかが不明で不気味だ。

「王国貴族同士の紛争ならば王国政府も放置なのであるが、相手は外国なのである。結果、空軍も動員の準備を……」

「そんなぁ……」

導師からの報告に、俺はガックリと肩を落とす。
バウマイスター伯爵領開発のために魔導飛行船が必要なのに、それらが動員されてしまえば交通と流通が死んでしまう。
リーグ大山脈にあるトンネルでは、到底すべてを捌けるはずがなかった。

「あと、王宮内の一部にバウマイスター伯爵責任論が出ているのである」

「俺にですか？」

貴族の誹謗中傷などいちいち気にしていると精神が病むので無視していたが、王城でそういう話が出るとまずいのは確かであった。

「急先鋒は、プラッテ伯爵なのである」

「あの野郎……」

つまり、俺がリンガイアに乗っていた跡取り息子を助けなかったせいであろう。
彼は通常の大型魔導飛行船でも、俺達が魔力を補充しながら航行すれば魔族の国に安全に到着できると考えていて、それをしない俺に不満があるというわけだ。

「それで、その責任論は大多数ですか？」

「おおよそ、二割ほどであるかな」

「意外と多いですね……」

過半数には届かないが、かなりの数ではある。
全体から考えると少数のグループではあるが、こういう連中は声が大きい。
熱狂的に俺の批判を始めると、次第に賛同者が増えてしまう可能性もあった。

「バウマイスター伯爵領の領地開発利権にあぶれているような連中も参加しているので、結束は緩いのであるが……」

そういう連中の意図は『もし利益供与があれば、いつもでプラッテ伯爵を裏切るよ』なので、崩すのは簡単であった。

「そういう連中に優遇なんてしたくないですね……」

爵位や領地は得たが、その分苦労はしているのだ。
せめて、嫌な奴を無視するくらいの選択肢は欲しいところだ。

「陛下が鼻で笑っているので、吠えているだけで終わるである。それよりも、従軍命令が出たのである」

通常であれば西部諸侯と王国軍からの応援だけで済ませるのであろうが、相手は未知の魔族艦隊である。
万全を期して、俺にも召集命令が出ていた。

「それって、バウマイスター伯爵家諸侯軍を出せと？」

数はまだ足りないし、訓練などもまるで足りていない。
出来ればまだ出したくはなかった。

「いや、バウマイスター伯爵達のみである」

「その心は？」

「島を巡る争いなので、兵員はホールミア辺境伯が準備する分だけで大丈夫なのである。本人がそう言っている以上は、あまり兵員も送れないのである」

自分の領地に余所者の兵士達が大量に入り込む、食料供給や治安維持を考えても好ましくないと判断したのであろう。

いくら費用が援軍を送る側の自己負担だとしてもだ。

「王国軍も、ほぼ空軍のみの派遣である。バウマイスター伯爵は、できる限り魔法使いを揃えてほしいのである」

俺の周りには魔法使いが多いので、それを派遣してほしいという事のようだ。

人数的に言えば大した事もなく、ホールミア辺境伯も安心なのであろう。

「陛下からの命令じゃ仕方がないですね」

というわけで、俺達も西部に向かう事になる。

魔族の艦隊はテラハレス諸島群に拠点を築き、その上空に艦隊を遊弋させている。

ホールミア辺境伯領には小規模ながら水軍もあって、その船が彼らを監視しているそうだ。

「また戦争になるのでしょうか？」

西部出立をみんなに報告すると、エリーゼはフリードリヒをあやしながら心配そうな表情を浮かべる。

「どうかな？　リンガイアの件で何らかのトラブルがあって、交渉を有利に進めるために一時的にテラハレス諸島群を占拠したのかもしれないし……」

魔族の国の事情はアーネストから聞いている。
聞いた限りでは、非常に内向きで、大陸に覇を唱えようとしているようには思えない。
人口も少ないので、大陸全土の制圧など不可能であろう。

全員が魔法使いとはいえ、人口比が大き過ぎる。

「王国からの命令では仕方がないわ」

「そうだね。ボクはヴェルについていくよ」

「私も、大分体の調子も戻った」

「ヴァイゲル家当主としては、出陣も止むなしですわ」

イーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、カタリーナと、自分達も俺に付いていくと宣言する。
どうやら、産休と赤ん坊の世話で退屈もしていたらしい。

「旦那、あたいも行くからな」

「妾も行くぞ。最近、退屈での」

「私も行きます。もしかすると、久々の全力ブリザードが必要かもしれません」

「リサは、突然怖い事を言うの……」

というか、俺の奥さん達は全員ついていくつもりのようだ。

「ついて来るのはいいけど、フリードリヒ達はどうするんだ？」

一番の問題は、そこにある。

まだ赤ん坊なので、母親が傍にして面倒を見て欲しいからだ。

だから俺は、男性組だけで行くつもりであった。

「あなた、男の方だけでは行かせませんから」

「えっ？　何で？」

「確かに戦争になるかもしれませんが、西部で色々と戯れが過ぎる可能性がありますので」

俺の問いに、エリーゼは冷静な表情と口調で答える。

最初に俺を見てから、次にエルにも視線を送る。

「エルがいるから疑われているな……」

「いや、ヴェルも同じくらい疑われているだろうが！」

「この場合は、ヴェル自体の過失というよりも、西部諸侯で戦時のドサクサに妙な事を企む人が出る可能性があるからよ」

「面倒だなぁ……」

俺は、イーナの言い分に納得してしまう。

急に戦時体制にはなったが、まだ戦闘状態になったわけでもない。

アーネストからの情報によれば、このまま戦わないで終わってしまう可能性の方が高い。

となると、男達だけで行くと西部諸侯で嫁や愛人の押し付けがあるはずなので、それを防ぐためにエリーゼ達も一緒に来ると言うのだ。

「ヴェルは、西部諸侯と距離を置いているように思われているからな」

「何でだよ……」

別に距離など置いていない。

それは南部や中央よりは優遇はしていないし、そういえば東部とも最近付き合いが増えたか。

今のブロワ辺境伯とは知己だし、フィリップやクリストフにも頼まれて取引などを増やしてる。

あの二人から、意味のない後継者争いと紛争で迷惑をかけたからと頼まれてしまったのだ。

帝国内乱で世話になったし戦友でもあるので、俺はその頼みを受けていていた。

「ほら、扱いが低いと思われても仕方がないよな」

「それはエルもだろうが……」

エルも実家とは完全に絶縁状態なので、人の事は言えないと思うのだが。

「俺の影響力なんて微々たるものじゃないか。それで、本当にエリーゼ達は付いて来るのか？　一応戦場になる危険性があるんだけど……」

バウマイスター伯爵家の家臣として、エルはエリーゼ達の同行に難色を示す。

「いいアイデアがあります」

「アイデアって何だ？　エリーゼ」

「はい。どうせ私達だけなのですから……」

翌日、俺達は就役したばかりの小型魔導飛行船で、西部へと向かっていた。

搭乗しているのは、俺、エル、ハルカ、エリーゼ達に、その赤ん坊全員、その世話をするメイド達となっている。

あとは、船員達と少数の兵士達のみであった。

「子連れで戦場にって、聞いた事がないわ。託児所を兼ねた船ってわけね」

赤ん坊の世話を助けるために、今回はアマーリエ義姉さんも同行

している。
フリードリヒ達のおしめを替えたり、ミルクをあげながら、俺に呆れた表情を向ける。
「何かあったら、船ごと逃走可能でしょう？」
西部で激しい戦争が始まったとしても、エリーゼ達と赤ん坊達を船ごと逃せばいい。
この辺が、俺とエリーゼ達との妥協点であったわけだ。
「ヴェル君も大変ね。また戦争かもしれないし」
「どうなんでしょうかね？」
それよりも、他の事で苦労しそうな気がするのは気のせいであろうか？
何にせよ、託児所と化した魔導飛行船は西部ホールミア辺境伯領へと向かうのであった。

第百三十七話　偵察及び、臨時食料調達任務。

バウマイスター伯爵領を出発した一隻の小型魔導飛行船が西へと向かう。
アーネストの案内で地下遺跡から発掘され、この度王家から運用の許可を貰った諸侯軍に属する船である。

西方海域にあるテラハレス諸島群に突如魔族の国のものと思われる空中艦隊が出現し、そこを領有するホールミア辺境伯家が臨戦態勢を敷いた。

その救援のため、俺達は現地に向かっている。

ただ、彼らはテラハレス諸島群に臨時の拠点を築くのに夢中で、しかもほとんど陸兵は連れて来ていないそうだ。
直接西部ホールミア辺境伯領への侵攻は今のところは可能性が少ないとの王国軍上層部の判断であり、俺達も王国も陸兵の派遣は行っていない。

魔法使いと空軍の派遣が主なものとなっていた。

兵力を派遣すると、受け入れる側としても色々と準備が必要となる。
経費は援軍側が負担するのが義務だが、大量の兵員が西部で食料調達を始めると値上がりするし、確保にも苦労するであろう。

そうでなくても、現在は西部諸侯に動員命令がかかっている。
彼らへの補給が最優先というわけだ。

王国西部は穀倉地帯だが、王国各地への輸出や自分達向けの備蓄もあるので、そう余裕があるわけではない。
そのため、歩兵の派遣は極力控えていた。

「うーーーむ、魔導飛行船を託児所代わりとは凄いのである」

「動員したバウマイスター伯爵家の女性魔法使い達が、みんなおっ母さんなわけだからな」

船は途中ブライヒブルクに寄り、そこで導師とブランタークさんも拾っている。
二人は、託児所と化した船内を見て目を丸くさせた。

戦場になるかもしれないのに子連れなのは前代未聞……という事は実はなかったりする。
過去の戦乱期には、子連れで陣地に詰めていた女性魔法使いも存在していたそうだ。

「補給物資にオムツとベビー用品が必要だな」

「ちゃんと持って来ましたよ」

それどころか、世話を手伝うメイド達に、彼女達が必要な物資まで準備したのだから。

「ホールミア辺境伯領の中心都市ホールミアランドで購入しないのか？」

「そこには寄りませんし……」

テラハレス諸島群に一番近く、ホールミア辺境伯家の水軍基地もある西部の港町サイリウスに直接向かうようにとエドガー軍務卿から連絡が来たからだ。

「いやさ、こういう場合は、伯爵様としては消費しないと文句を言われるんじゃないかと心配したわけだ」

大貴族の大半が、普段はみんなが思っている以上にケチだったりするのだが、例えば他の貴族領に出かけた時には派手にお金を使う。見栄が一番大きな理由だが、あとは訪問した貴族の領内に金を回すためでもある。

ブランタークさんは、それをしなかった俺を心配しているのであろう。

「どうせサイリウスでお金を使う事になるのである。それに、今は準戦時状態なのである」

導師の言うとおりで、今の王国は『準戦時』体勢にある。

準がついたままなのは魔族艦隊の目的がいまいち掴めないし、テラハレス諸島群が占拠されているとはいえ、あの島は元々無人である。

領民達が直接被害を受けたわけではないのだ。

ただいつ魔族が攻め寄せて来るかも知れず、迎撃準備は必要であった。

場合によっては、テラハレス諸島群奪還が命じられる可能性もある。

だが、王国全土から歩兵を集めると莫大な経費がかかってしまう。
そこで、数の割に戦力になりそうな魔導飛行船や魔法使いの援軍をホールミア辺境伯領に出したわけだ。

「サイリウスでの道案内は、ブランタークさんと導師に任せますね」

二人とも、若い頃に冒険者として西部に滞在経験がある。
当然サイリウスにも行った事があり、なので俺は道案内を頼んだ。

「任せるのである」

「それはいいけどよ。エルヴィンがいるじゃないか」

ブランタークさんは、西部出身であるエルにも道案内を頼むようにと勧める。

「ブランタークさん、ブライヒブルクに来るまでの俺は故郷とその周辺から出た事がないので無理ですよ。サイリウスにも、ホールミアランドにも行った事がないですし」

「そうなのか？」

「俺は魔法なんて使えないから、行動範囲が狭いんですよ」

エルも貧乏騎士の五男なので、子供の頃に旅行などした経験がないのであろう。
故郷であるアルニム騎士爵領とその周辺地域くらいが精々のはずだ。

「エル、アルニム騎士爵領ってどこにあるの？」

「西部領域だと、西寄りの位置にあるな。周りは山ばかりで物凄い田舎だぜ」

イーナに聞かれて、エルは自分の故郷について話し始める。

アルニム騎士爵領は山に囲まれた典型的な田舎領地で、それでも山道を一日歩けばある程度大きな町に出られるから、バウマイスター騎士爵領よりはマシであった。

「エルのお父様達は、サイリウスにいるのかしら？」

「さあ？　ホールミア辺境伯の寄子の寄子で動員はしていると思うけど、どこに配置されているかわからないし」

領地のある西部に魔族が攻め寄せるかもという瀬戸際にあるので、エルの実家も兵を出しているはずだ。

ところが、そんな小規模で練度も怪しい連中をそのまま防衛本軍に混ぜると、かえって不利になる可能性がある。

練度不足の軍が、精鋭の足を引っ張るのだ。

ホールミア辺境伯家諸侯軍の実力は不明だが、これでも三家しかない辺境伯家の軍勢である。

アルニム騎士爵家諸侯軍よりも下のわけがない。

「下手に混ぜて混乱されると、全軍が崩壊するからな。どこかで警備でもしてんじゃないの？」

帝国内乱で、それは多数目撃した。

そのため、そういう連中は補給路警備、荷駄部隊の護衛などに回されるケースも多かった。

文句を言おうにも、相手は辺境伯様である。

言えるはずもなく、エルの言うとおり渋々と働いている可能性があった。

「世知辛いんだね」

「うちなんて、ヴェルの実家よりも少しマシ程度、家の裕福さでいったら、イーナやルイーゼの実家といい勝負だろうからな」

貧乏な騎士など、大物貴族の陪臣にも経済力が劣る。

建前では貴族同士に主従関係など存在しないが、現実ではエルの父親はホールミア辺境伯に逆らえるはずがなかった。

「小貴族としては、それが逆にありがたいかもしれませんわよ」

「かもしれないけど、小なりとはいえ貴族で、表向きは前線に出たいんじゃないのか？」

戦争の際には、常に前に出て剣を振るいたい。

これが歴史書や物語に記される格好いい貴族の姿であったが、実際にはもしそんな事をして貴族が死ねば相続で手間がかかるし、率いている軍勢の大半が領民で普段は他の仕事をしている。

一人でも死ねばその分生産力は落ちるわけで、できれば後方に引っ込んでいたいと願うのが彼らの本音かもしれない。

「何にしても、親父や兄貴達と会いたくないな。ヴェルに迷惑がかかるし」

前に、エルのコネでバウマイスター伯爵家の重臣になれると信じ

ていたような人達である。
エルからすれば、ここで顔を合せたらまた余計な事を言わないかと配なのであろう。

「到着のようであるな」

船の外から、大きな港町サイリウスが見える。
町は普段通り平和そうに見えるが、港には物々しいホールミア辺境伯家諸侯軍と、水軍の艦艇が臨戦態勢にあった。

「水軍か……」

この世界の海運は、魔導飛行船のせいであまり活発ではない。
バウマイスター伯爵領の南端以外もそうだが、海流の難所が多くて港に出来ない海岸も多く、加えてサーペントの存在もある。
大型船なら遠洋航海も大丈夫だが、中型以下だとサーペントに襲われる可能性が急上昇するので、沿岸の近海航海がメインであった。

他の大陸には行かないし、そもそも存在するのかも不明だ。
リンガイア大陸内の移動は魔導飛行船があるので、自然と海上船が小型化していったのだ。
港を持つ領主には水軍を持つ者も多かったが、密輸の取り締まりと、海賊とはいっても規模も小さかったのでそれに見合う戦力しかない。

ホールミア辺境伯家の水軍は王国有数であったが、その船の大きさと隻数は案外しょぼかった。
王国軍でも、水軍は一部の直轄地に配置されているのみで、規模はいい勝負である。
空軍の整備が優先され、水軍は軍でも目立たない存在であった。

「相手も空中艦隊らしいから、水軍はどうせ役に立たないだろうな」

大砲などという便利な装備はないので、空を飛ぶ敵に成す術がない。

一方的に上空から攻撃されて沈められてしまう危険性があった。

ミズホ公爵領が開発した魔砲の存在は知られているが、あんなものを急に量産して配備できるはずがない。

あのミズホ公爵が技術を帝国に提供するはずもなく、帝国ですらやっと試作に入ったくらいなのだから。

「まずは、ホールミア辺境伯に挨拶に行くか……」

船を指定の場所に着陸させると、赤ん坊とメイド達への警備を残して臨時の本陣へと向かう。

「バウマイスター伯爵殿か。応援感謝する」

ホールミア辺境伯は、今年で三十八歳。

数年前に、先代の死でその爵位と領地を受け継いだ……とエリーゼから情報を聞いた。

領主としての能力は、平均的だそうだ。

取り立てて名君でもなければ、暗君でもないと。

「大変な事になりましたね」

「帝国の内乱が終わって、まださほど時間は経っていないのにな。ただ……」

最新の情報を聞くと、謎のというかほぼ魔族の艦隊で決まりだが、

テラハレス諸島群でノンビリと基地の建設を続けていて、動く気配はないそうだ。

「水軍の偵察結果ですね？」

「小型船ばかりだが偵察くらいはな。なぜか向こうは偵察を妨害してこないという理由もあって、そう難事でもなかったそうだが」

「向こうの目的が見えませんね」

「それで困っているんだが、今は警戒しながら待機するしか仕事はない。私は、それなりに忙しいが」

ホールミア辺境伯家諸侯軍に、他の貴族達の諸侯軍、王国軍も続々と集まっている。

何もしないでも物資は消耗するので、ホールミア辺境伯はそれを手配しないといけないのだ。

「一部家臣達の中には、全軍で攻めてテラハレス諸島群を取り戻しましょうとか言う者もおるし、まだ何もしていないのに疲れた」

「はあ……」

「取り戻せても何もない無人島だ。魔族相手では犠牲も多かろうから、経費を考えるとこんな損な命令、王国政府からでも出ない限りは実行できん」

「かといって、このままなのも困りませんか？」

自領を奪われたままでは、貴族としての沽券に関わる。

ホールミア辺境伯としては、このまま魔族に撤退してもらいたいのが一目瞭然であった。
奪還作戦をしても勝てそうにないという本音は、ホールミア辺境伯は口が裂けても言えないわけだが、王国政府もその件で彼を責めるほど愚かではない。
『では、テラハレス諸島群を王国に譲渡するので、王国軍で奪還してください』とホールミア辺境伯から言われたら困るからだ。

「今は様子を見るしかないわけだが、様子を見ているだけでも経費は飛んでいく。どうしてこんな事になったのやら……」

愚痴を溢すホールミア辺境伯に、俺は相槌を打つ事しか出来なかった。
顔を出して挨拶をするという用事を終えたので、本陣を辞して船へと戻る。
赤ん坊もいるし、船内には生活可能な設備や装備を準備してある。
どこか宿屋などに泊まらなくても、ここで待っていれば十分であろう。

「事実上のバウマイスター伯爵家諸侯軍の本陣ね」

「質はともかく、数はしょぼいけど」

奥さんでもある魔法使いのみ従軍で、一部いる兵力はあくまでも護衛であったからだ。
ブランタークさんと導師もいるが、ブライヒレーダー辺境伯家からの援軍と王家からの援軍扱いである。

「何かする事はあるのかしら？」

「うーーーん、ないんじゃないの？　ボク達は、何かがないとお仕事もないでしょう」

イーナの問いに、ルイーゼが代わりに答える。

俺達が無理に頑張って、他の将兵達の仕事を奪うのはよくないというわけだ。

決して、俺達が変に頑張って彼らの目に留まった結果、テラハレス諸島群攻めの先鋒を命じられでもしたら嫌だと思っているわけではない。

王国政府が、犠牲の少ない解決策を選んでくれる事に期待しているだけだ。

「でしたら、買い物にでも行きましょう」

「そうだな、カタリーナ。みんなで行こうか？」

赤ん坊の世話をメイド達に任せて、俺達はサイリウスの町に向かう。

今は準戦時ではあったが、別に戦闘が起こったわけではない。

多くの外部から来た軍人達がいるので、彼らが消費する物資や食料の商いで町は賑わっているようだ。

いちいち現物を輸送していたらキリがないし、そうすると補給部隊も連れて来なければいけなくなる。

金だけ持って、サイリウスの町で買った方が早いというわけだ。

「皮肉な事に、戦争だから儲かっているのである」

「それはどうかな？　ちょっとくらい税収が増えても、ホールミア辺境伯は大赤字だろうに……」

売っているイカに似た生き物……イカだと思うけど……の串焼きを頬張りながら、導師とブランタークさんは町の様子を見学する。
外部からの人達が増え、商売人などは売り上げが増えて万々歳のようだ。

王国軍、他の西部貴族と諸侯軍、俺達と同じように応援に来ている魔法使いの姿もある。
戦闘をしなくても飲み食いはするし、少人数なので宿屋に泊まる人達もいた。
サイリウスの町は、一種の戦争景気に沸いているわけだ。

「うん？　バウマイスター伯爵殿じゃないか」

「フィリップ殿か？　クリストフ殿も。どうして？」

「応援だよ」

町の往来で、帝国内乱を共に戦ったフィリップとクリストフと再会する。
後ろに数十名の王国軍将校を引き連れていて、俺達と同じくホールミア辺境伯に挨拶に行った帰りだそうだ。

「お久しぶりです。ですが、王国軍は空軍しか出していないと聞きましたが」

「エリーゼ殿、それは大雑把な言い方というやつだな」

情報が欲しいところなので、二人をお茶に誘って話をする事にする。

フィリップとクリストフは護衛の数名以外は自分達の陣地に帰らせ、町にあるレストランの部屋を貸し切りにして、そこでデザートなどを食べながら話を始めた。

「援軍のメインは空軍だが、船にある程度の陸兵は乗せてあるさ」

「もしテラハレス諸島群の奪還上陸作戦とかあると、歩兵が必要ですから」

ただ、あまり多数の兵をホールミア辺境伯領に送ると補給で苦労する事になる。

そこで、少数ながらも精鋭でアクシデントに対応可能な軍、帝国内乱を潜り抜けた王国軍生き残りと、その指揮官をしていたフィリップ、クリストフ両名に白羽の矢が立ったそうだ。

「厄介事を押し付けられたような気もするが、爵位も上がって将軍にも任命されたからなぁ……」

「私も軍政官に任命されましたし、お仕事ですから死なない程度に頑張りましょうというわけです」

ブロワ辺境伯家の継承争いでは評判を落としたが、後に軍を率いて帝国内乱で活躍した。

領地貴族としては失格だが、軍系の法衣貴族としては戦功を挙げた数少ない実戦経験者という事で優遇されているそうだ。

「エドガー軍務卿の先見の明ですね」

「エルヴィン、実際にそうだし世話にもなっているが、エドガー軍務卿も俺達を拾った判断で評価を受けているさ」

「その評価のために、とりあえず動員もされますしね」

まあ、その辺は『貴族はお互い様』な部分かもしれない。

フィリップは法衣子爵として、クリストフも法衣男爵になって分割独立し、共にエドガー軍務卿の寄り子になったと聞いている。

「あの人、見た目に反して貴族していますよね？」

「あの見た目のせいで、脳筋扱いして騙される貴族も多いですからね」

クリストフから言わせると、エドガー軍務卿は間違いなく大貴族だそうだ。

ヴィルマの件とかを考えるに、俺は大分前から知っていたけど。

「それで、王国の方針はいかがなのです？」

エリーゼが本題を聞こうと、話題をそちらに誘導する。

「それが割れています」

テラハレス諸島群を占領して基地を作っているので、これはもう戦争だという貴族。

元々テラハレス諸島群は無人だし、大陸本土に侵攻したわけではない。

防衛の準備を行っている最中でもあるので、ここは一回話し合いをもった方が建設的であろうという貴族と。

両論に分かれて、現在も会議は続いているとクリストフが説明す

る。

「陛下は、ご決断をされていないのですか？」

「判断材料が少ないという理由もありますね」

いまいち、魔族側の意図が掴めないというわけだ。

「最初に外交使節くらい送るのが常識なのに、いきなりテラハレス諸島群の占領でしたし。ですが、偵察した情報によれば魔族側の兵数は少ないんですよね……」

艦隊の人員は不明だが、テラハレス諸島群で基地の建設作業をしているのは千人にも満たない人数らしい。

「元々魔族という種族の人数が少ないとはいえ、文明レベルはこちらよりも上のはずなのにチンタラと作業をしているらしいですし、彼らは何をしたいのでしょうか？」

「うーーーん」

「こっちも迎撃準備にも時間がかかりますし、暫くは待機になりそうですね」

互いに交渉団や外交使者を出すわけでもなく、片方はテラハレス諸島群にチンタラと基地を建設し、ホールミア辺境伯は迎撃準備の途中。

これでは、俺達が手を出すわけにもいかない。

なぜなら、俺にそんな権限は一切ないからだ。

「帰りにお土産でも買って帰るか……」

「お土産は止めた方がいいわよ。まだ時間がかかりそうだし」

イーナからまるでお母さんのような事を言われてしまい、俺達は食材になりそうな魚を買ってから帰る事にする。

元日本人の俺としては、港町に来て魚を買わない選択肢はないからな。

ところが……。

「貴族の旦那、サイリウスは港町で魚が特産なんだけど、漁船で大型の物は例のテラハレス諸島群偵察に動員されているし、小型漁船だけ得た成果も、このところ軍人さんが多いだろう？　軍隊がみんな買い占めてしまってな。俺らはみんな売れるからいいけどな」

「何だとぉーーー！」

「伯爵様、そんなに怒る事か？」

「ブランタークさん、他の土地に旅行に来て、そこの名産が食べられなかったら嫌じゃないですか」

漁港に行って直接魚を仕入れようとしたら、碌な商品が残っていなかった。

魚屋の親爺からその理由を聞いた俺は、地魚が買えないという現

実に激怒する。

「エルヴィン、伯爵様に何か言ってやれよ」

『なぜその程度の事で？』と思っているブランタークさんは、エルにストッパー役を期待したらしい。

ところが、今の彼は俺達側であった。

「ハルカさんが一夜干しを作ってくれる事になっていたのに……。一夜干しは、新鮮な魚の方が美味しいのに……」

「旦那様、ここにある古い魚では、美味しい一夜干しは不可能です」

ミズホ人であるハルカを妻にしたエルは、既にその胃袋を彼女に掴まれていた。

「そうだよなぁ。干物とか一夜干しは、新鮮な魚を使わないと美味しくないのに……」

「さすがはお館様、よくわかっていらっしゃる」

ハルカが俺を褒めるが、伊達に中身が元日本人ではない。

海に来て新鮮な魚が手に入らないなど、こんな理不尽な事があっていいのだろうか？

「ううっ……導師も何か言ってやれよ」

「旅の醍醐味は、その土地ならではの食材と料理なのである！　サイリウスに来て魚が食えぬとは酷いのである！」

導師も、旅先の食事は楽しみな人だ。
新鮮な魚がないという現実に、俺と同じく激怒した。

「金なら出す！　新鮮な魚を売ってくれ！」

「それが、数少ない新鮮な魚はホールミア辺境伯諸侯軍に卸す契約でして……」

古い魚に当たると困るので、事前に定期購入を頼んできたそうだ。

「領主様のお願いですし、買い叩かれているわけでもないですし、貴族の旦那の分はないんです」

「何てこったい……」

「あなた、他のお店を当たっては？」

「奥方様、サイリウスの魚屋はみんなうちと同じ状態ですぜ」

ホールミア辺境伯家のみならず、他の諸侯軍を動員している貴族達も食材の定期購入を頼み、出遅れた俺達は新鮮な魚が買えない。
その現実に、俺はガックリと肩を落としてしまう。

「ヴェル、大丈夫？」

「ねえ、少しくらいはないの？」

俺の食に対する拘りを知っているイーナがそっと慰め、ルイーゼは念を押して新鮮な魚の在庫を聞いた。

「我々も、今は魚を食べていないくらいですから」

軍隊の胃袋恐るべしである。

いくら漁獲量が減っているとはいえ、サイリウスの魚を買い占めてしまうなんて。

「魚が食えないなんて……。実は見た事もない魔族の連中よりも、ホールミア辺境伯家諸侯軍の方が俺の敵なのではないかと」

「ヴェンデリンさん、その考えは王国貴族としてはどうかと思いますが……」

咄嗟にカタリーナが、俺の危険思想を窘めた。

「旦那の気持ちはわかるけどな。あたいは、冒険者として色々な場所に行ったけど、その土地の食材や料理は楽しみの一つだったし」

「カチヤもそう思うだろう？」

「たまに、とんでもない地元の料理が出たりするけど、サイリウスの魚は普通に美味しいって聞いたし」

「そうよな。北方の輸入品には少し負けるが、なかなかのものだと聞いたぞ」

元フィリップ公爵であるテレーゼからすれば、故郷で採れた魚こそが一番なのであろう。

それでも、王国では一番魚が美味しい土地であるという知識は持っているようだ。

「ねえ、ヴェル様」

「どうした？　ヴィルマ」

「どうして自分で獲らないの？」

「えーーーと、漁業権とかあるからかな？」

ヴィルマから言わせると、『魚が買えないのなら、自分で獲ればいいじゃない』という事らしい。

そういえば、彼女と特に仲良くなったのは南端の海岸で漁をしてからであった。

ただ、海の漁師は漁業権などについてうるさい。

勝手に獲ったら怒られるどころか、地域によっては密漁者は魚の餌だ。

船は小型の物しか残っていないし、沖合に出てサーペントに襲われる可能性もある。

そう簡単に魚を獲れないのではないかと思っていたのだ。

「漁業権に関しては、会員の漁師を一定数以上雇えば大丈夫ですけど」

彼らに日当を払って漁に付いてきてもらえばいいと、魚屋の親父が言う。

思った以上に規則が緩かった。

「漁師って、余っているのか？」

「ええ、テラハレス諸島群の偵察に駆り出された連中は漁ができないので普段よりも漁師を乗せていません。小型漁船だけでは余る漁

師が出ますからね」

生活ができないので、今は少ない小型漁船を誰の物であるとかを無視して順番に乗って漁をしているそうだ。

ただ収入ダウンは避けられず、アルバイトがあれば喜んで参加するであろうと。

「ですが、漁師は余っていても船が余っていないのでは？」

冒険者として長年活躍してきたリサは、年齢が上という事もあって社会経験が豊富なのであろう。

すぐに、魚屋の親爺が言っている事の矛盾を指摘した。

「若奥さんには敵わねえな。でも、船があれば沖合に一キロも出れば魚は獲れるんですぜ。貴族の旦那の一家が食べるくらいなら、釣り糸を垂らせば十分に釣れますし、サーペントも沖合に十キロ以上行かなければまず出ませんから」

「なるほど、船が必要なのか」

ならば話は早い。

俺は早速、その船を準備する事にするのであった。

「ヴェル君、その船はどこから？」

「魔法の袋からですが」

「それは今見たけど……お高そうな船ね」

「拾い物ですけどね」

魚が買えなければ、自分で獲ればいい。

ヴィルマの意見に賛同した俺は、自分の魔導飛行船を置いている近くの船着き場に一隻の船を浮かべた。

大きさは三十メートルほど、形は地球のクルーザーに似ている。

魔の森にある地下遺跡から見つけた物で、説明書によるとお金持ちが購入するレジャー用の魔導遊行船と書かれていた。

この船の特徴は、魔晶石に蓄えた魔力でスクリューを動かす点にあると思う。

この動力は王国軍と諸侯軍水軍の一部艦艇にしか装備されていない物で、この船は発掘品なのでもっと性能がいい。

何隻か研究用だと言われて魔道具ギルドに売却したが、新しい魔動力は今回間に合わなかったようだ。

だが、どうせ中・小型船舶の大半が帆と船員の手漕ぎで動いている。

船団を組む時に大型船ばかり早くても意味がないので、小型の魔導動力を普及させないと戦力アップにはならないであろう。

「自分用の船舶ねぇ……。私の父なんて、川で魚を獲る小さな舟しか持っていないわよ」

マインバッハ領には海がなく、小さな川が流れているだけだそうだ。

船も、その辺の丸太を削って作った小舟で、それでも領主様しか持っていない自慢の一隻だったそうだ。

「アマーリエ義姉さん、昔のバウマイスター家は船すら持っていなかったですよ」

「そういえばそうだったわね。でも、いきなり新しい船で大丈夫？」

「ええ、試し運転は当然していますよ」

同じ船という事で、船に乗れないで暇そうにしていた漁師達に先ほどまで練習させていた。

動力が自動なくらいで、船を動かすという点に違いはない。

『帆の操作と、風がない時の漕ぎが必要なくて楽だな』

『売って欲しいくらいだぜ』

漁師達は一時間ほどの練習で、魔導クルーザーを乗りこなす事に成功した。

さすがはプロというべきであろう。

俺は、船関係の免許は持っていなかったからなぁ。

船はよくわからないのだ。

「それでお魚を獲りに行くの？」

「ええ」

漁船ではないので収納スペースは少ないし、網の運用は出来ないが釣りをしてその成果を収めるくらいは出来る。

自分達の分だけだと割り切って、早速釣りに行く事にした。

「アマーリエ義姉さんは来ないのですか？」

「私、船酔いが酷いのよ。赤ん坊達を預かっているから。あと、お魚をお願いね」

「わかりました」

早速、釣り道具と必要な物資を積み、いつもの面子で少し沖合に釣りに出かける。

「こんな事をしていいのかなと思わんでもないな」

とは言いつつ、漁師お勧めのポイントに到着すると、ブランタークさんは自分の釣り竿に仕掛けと餌をつけて投げ釣りを開始する。

「ブランタークさん、慣れてませんか？」

「冒険者ってのは、時に食料を川や海から恵んでもらう事もあるからな。たまに釣りはしていたよ。しかし、いい竿と仕掛けだな」

これも、魔の森にある地下遺跡からの発掘品である。

この世界にもリールは存在したが、造りが原始的なので糸が絡みやすい。

その点、発掘品の釣り道具は日本にあった物と大差ない造りになっている。

初心者や女性でも扱いやすい品となっていた。

「エルも、気合を入れて釣れよ」

「釣るけど、ブランタークさんと同じでこんな事をしていていいのかなと思う」

「いや、それは大きな間違いだぞ。俺達はちゃんと軍事行動をしているのだ」

せっかく応援に来たのに、ホールミア辺境伯家とその他諸侯軍、王国軍は俺達に構っている暇がないらしい。

『何か状況に変化があるまで、その場にて待機していてほしい』という命令以外は、完全に放置状態だ。

応援に来たのに、町で悪さをする貴族の私兵達がいて余計に手間がかかったりしているそうで、雑多な混成軍を纏めるというのは大変なのだ。

これは、テレーゼやペーターが散々苦労しているのを見ているので今さらであろう。

そんな中、迷惑をかけていない俺達は管理に手間がかからないので基本放置である。

ただ、何もしないのはどうかと思うので、独自に偵察と食料確保のための行動に出たわけだ。

「食料確保と偵察ねぇ……」

「方便とも言うのである！」

「うわっ！　導師がぶっちゃけた！」

偵察も何も、ここは港から一キロほどの沖合である。

サーペントすら来ないのに、魔族の艦隊など来るはずがない。
テラハレス諸島群などは、遥か西に百キロ以上も先だからだ。

食料確保も、別に食料が不足しているわけではない。
西部は王国一の穀倉地帯である。
最近は畜産にも力を入れているので、穀物と肉類に不足はない。
ただ俺が、魚が食えなくて嫌なだけだ。

「暫く何もできませんから、子供達の面倒を見ながら適度に息抜きをして万が一に備えた方がいいですね」

「ほら見ろ、エリーゼの言うとおりじゃないか」

さすがは俺の妻、実にいい事を言う。

「新鮮なお魚で、しかも釣った物は別格に美味しいと聞きますし、頑張りましょう」

「そうだよ、奥方様。魚は、網獲りよりも釣った方が美味いのさ」

エリーゼの発言に、船を操作している漁師がフォローを入れる。

「網で獲った魚は、網の中で暴れて傷つくからなぁ。実際に、手釣りの魚の方が値が高いのさ。さあ、仕掛けを降ろしてくだせえ」

というわけで、みんなで釣り針に餌をつけて仕掛けを海に投入する。
みんなリール竿に、餌は魚やイカの切り身で、これは漁師が準備してくれた。

「何かかかったわ！」

一番最初にヒットしたのはイーナであった。

漁師の助言どおりにリールを巻いていき、最後は漁師がタモで掬って取り入れる。

「アカダイだな。刺身や塩焼きにすると美味しいぜ」

見た目はマダイその物なので、食べれば普通に美味しいと思う。

「早速絞めてくれ」

「貴族の旦那は魚に詳しいんだな。任せてくれ」

漁師は釣ったアカダイのエラと尻尾を切り、冷たい海水で血抜きをする。

「ヴェル、生かしておいた方が美味しいんじゃないの？」

「それは誤解だな」

実は、今は開店休業状態だが、観光客や富裕層向けに生簀に泳がせた魚を調理して出すレストランが存在している。

新鮮な魚が食べられるとあって、ボッタクリに近い値でも人気だそうだが、一応食品を扱う商社に居た俺に言わせるとそれは幻想である。

「餌もやらずに狭い生簀で無理矢理生かしているんだ。川の魚の泥抜きとは違う。味は当然落ちる。見た目生きているから錯覚しているだけ」

すぐに殺して血を抜き、それが終わったら内臓とエラを素早く除去する。
あとは冷やしてから、魔法の袋に入れるだけであった。

「貴族の旦那は締め方にも詳しいんだな。俺らは商売だから、無理に生かして生簀に運ぶけどよ。貝やエビ、カニは生かさないと駄目だから同等に思われているのかもな」

「ふっ、任せてくれ」

「ヴェルって、食べ物の事には詳しいのね」

「何か引っかかる言い方だな」

「だって、貴族の名前がなかなか覚えられなくて、ほとんどエリーゼ頼りじゃないの」

イーナに事実を指摘され、俺は思わず顔を引き攣らせてしまう。
元日本人である俺から言わせると、貴族の名前は面倒で覚え難いのだ。
あと、昔から人の名前を覚えるのは苦手であった。

「それよりも、沢山釣ろう！」

本当に必要な貴族なら、自然に覚えるはずなのだ。
それができないという事は、その貴族は俺には必要ない。
と思う事にして釣りを再開する。

「あなた、釣れました」

「ソコゾコだな」

エリーゼは、大きなヒラメを釣った。
ちなみに、ソコゾコとはヒラメの地方名のようだ。
フィリップ公爵領や王都とは呼び名が違っていた。

「ボクのは結構大きいよ」

「大きいブーリだな。これも塩焼きにすると最高だ」

ルイーゼは、巨大なブリに似た魚をゴリゴリとリールを巻いて釣り上げた。
相変わらず、見た目では想像もつかない怪力である。

「釣れた」

「ヴィルマのも大きいね」

「ゴーチか。高級魚だぜ」

ヴィルマも、一メートル近いマゴチに似た魚を釣ってご機嫌だ。
それにしても、凄い大物ばかり釣れるな。

「ヴェンデリンさんは、釣れていませんわね」

「そういうカタリーナはどうなんだ？」

「数は釣れていますわよ」

反対側で釣っているカタリーナは、四十センチほどあるサバに似た魚を次々と釣り上げている。

「爆釣だぜ！」

「面白いように釣れるの」

カチヤとテレーゼもよく釣れていた。

「サバですね。味噌煮と絞めサバにしましょう」

「奥さん、サイリウスではサッパって言うのさ」

補佐をしてくれる漁師は、なぜか地方名に拘っているようだ。

「釣れると面白いものだな」

夫婦で釣っているエルとハルカも、大きなサバが大漁であった。ハルカが味噌煮にすると言っているから、俺もあとで分けてもらおう。

「新鮮だと、刺身でもいけますぜ」

と言いながら、漁師はサバを頭から折って血を抜き、内臓とエラを素早く取り除く。

「胃を食い破る寄生虫がいるのもあるんですが、内臓をすぐに取れば大丈夫でさ。エラも素早く取らないと鮮度が急に落ちやすからね」

サバは庶民向けの安い魚なので、網で獲っている時にわざわざ処

理はできない。
町で売っている物は、加熱調理が基本なのだそうだ。
これも冷海水を使って素早く処理する。

なお、この冷海水の提供者は『ブリザードのリサ』の二つ名を持つリサであった。
彼女の手にかかれば、冷海水など余技で大量に作れる。

「こんなに冷たい海水を大量に作れるなんて、魔法使いは羨ましいですな」

「いつもは、普通の海水で処理して時間が勝負なのに」

漁師も、そう簡単に魔法の袋など用意できない。
獲った魚の鮮度が落ちないように、彼らは常に時間との勝負なのだそうだ。

「生かして持って帰るにしても、船の生簀の問題で数を入れられないし、半分以上死んでしまいますしね」

「鮮度の差ですか？」

「ええ、若奥様。王都の王侯貴族様など向けに、港でこちらの帰りを待ちわびている商人もいますし」

今は同じく開店休業状態だが、漁を終えた馴染みの漁船に駆け寄り、処理をした魚を素早く魔法の袋に仕舞って王都へと向かう。
そんな彼らが卸す魚よりも、今の俺達は状態がいい魚を得ているわけだ。

「いくら魔法の袋が魚の腐敗を防ぐとはいえ、常温の外に出してから調理に時間をかけて駄目にする料理人もいます。魔法の袋に入れるとはいえ、貴族の旦那のように先に絞めて処理をした方がいいんでさ」

どのみち、生きた魚は魔法の袋に入れられないので絞めなければいけないのだ。

「ふーーーん、そうなのか。にしては、伯爵様は釣れてないよな？」

ここで、ブランタークさんが一番痛いところを突いてくる。

みんなは続々と魚を釣り、それを漁師達が次々と処理をして魔法の袋に入れていくが、なぜか俺だけ一向にアタリがなかったのだ。

「そういうブランタークさんはどうなんです？」

「俺か？　普通に釣れているけどな」

「魔法使いの旦那は、アージが大漁ですな。刺身、塩焼き、開いて干物にしても最高ですぜ」

「酒の肴にもいいな。一杯釣るか」

最初は『釣りなんてしていていいのか？』とか言っていたブランタークさんであったが、次々とアジに似た魚を釣り上げて、それを漁師達が素早く処理していた。

地方名も似ているから、アジなのであろう。

地球にいるアジとは部妙にヒレの形や模様が違うので、１００パーセント必ずそうだと断言できないのがもどかしかった。

「まずいな……」

どうも釣果を見るに、ここは魚影が濃いポイントのようだ。
なのに、俺だけがアタリすらなくボウズであった。

「これは、バウマイスター伯爵としての沽券に係わるのでは？」

「ヴェル、もっと貴族らしい事で沽券とか気にしろよ」

エルが失礼な事を言うが、俺からすればほぼ全員釣りの素人なのに、俺だけがボウズでは沽券に係わるというものだ。
そこに、この世界の貴族の常識など関係ないと断言しよう。

「また釣れました」

「みんな、大漁ね」

「一人だけ、一匹も釣れていない人がいるけどね」

事実なだけに、ルイーゼの容赦ない一言が俺の胸に刺さる。

「しかし待てよ。そうだ！　導師がいたじゃないか！」

同じ釣れていない仲間がいた事で、俺は安堵する。
限りなくレベルが低い考え方だが、それでも今の俺には吉報だ。

「きたのである！」

「何ぃ！」

ただし、俺の安堵はわずか数秒で消え去ってしまう。

「バラせ！」

「ヴェル、お前……」

「ビリは嫌なんだよ！」

いくらエルにバカにされようとも、一人だけボウズは嫌なのだ。

「釣れたのである！」

導師はかなり巨大な魚を釣り上げたが、魚体を見た漁師は首を横に振る。

「デカイ貴族の旦那、それは肉も内臓も毒で食えませんぜ」

漁師はタモで掬った魚を、すぐに海に捨てる。

「万が一にも食えるという可能性はないのであるか？」

「いえ、本当に毒魚なので……少量でも食べると死にますから……」

導師の迫力に、逞しい漁師達がタジタジになって答えた。

「導師、プロの意見は受け入れろや。また釣ればいいじゃないか」

「仕方ないのである」

ブランタークさんに注意され、導師は再び仕掛けを海に投げ入れ

た。
　すると、あっという間に次の魚が釣れてしまう。
「普段の行いのよさであるな！」
「（なぜ導師は、自分の普段の行動にそこまで自信があるんだ？）」
　エルの酷いツッコミが俺に耳に入るが、確かに導師の自信の根拠はわからなかった。
　あえて言うのなら、『導師だから』なのかもしれない。
「これも大きいのであるな！」
「デカイ貴族の旦那、これも駄目でさぁ」
「毒魚なのか？」
「いえ、毒はないんですけど、物凄く不味いんです。猫にやっても絶対に食べないくらいに……」
　通称『ネコ逃げ』とも呼ばれる、道端に落ちていても誰も見向きもしない魚なのだそうだ。
「いや、もしかしたら食べられるかもしれないのである！」
　導師は針から外したネコ逃げに直接かぶりついた。
　生だが、新鮮なので導師ならお腹は壊さないであろう。
　というか、こういう事をしても既にエリーゼですら心配していなかった。
　するだけ無駄だし。

「導師、美味しいですか？」

「不味いのである！」

何でも美味しそうに食べてしまいそうな導師でも、ネコ逃げだけは無理らしい。

齧った跡の付いたネコ逃げを、フルパワーで遠方に放り投げる。

「伯父様、あまり無駄な殺生は……」

いくら不味い魚でも、食べない物を無理に殺すのはよくない。

エリーゼが宗教的な理由で、導師に苦言を呈した。

「奥方様、ネコ逃げはあの程度では死にませんよ。釣りあげて水のないところに数時間放置しても死にませんし」

驚異の生命力を持つが、残念な事にどう調理しても不味いそうだ。

「まあ、釣れたのでよしとするのである」

導師のその発言は、間違いなくアタリすら来ない俺に向けられたのであろう。

「何じゃ。ヴェンデリンは一匹も釣れておらぬのか？」

「今日は調子が悪いのかな？」

「調子は関係ないのではないか？　ここは魚影が濃いポイントのようじゃし」

俺も釣りは素人だが、子供の頃はまだ元気なお祖父さんに釣りに連れて行ったし、中学生の頃にはバス釣りにも行ったし、商社員時代には何度か接待で釣りに行った。

そのすべてでボウズなど一度もなかったのに、なぜ今日はアタリすらないのであろうか？

「でも大丈夫さ。俺はこの海域の主を釣るから！」

昔、日本にいる方の父が読んでいた釣り漫画にもあった。

主人公が最終的に、その釣り場の主を努力して釣り上げるのだ。

「主？　ここは魔物の領域なのか？」

「違うけど、こういうポイントで釣りをしていると、ボス的な巨大魚がいるんだよ」

俺は、某釣り漫画のストーリーを懸命に説明する。

「それは単純に大きい魚が釣れただけであろう？　なぜその魚が主だとわかるのじゃ？」

「一番大きいから」

「もっと大きな魚がいるかもしれぬではないか」

やはり、女の身では〇平君の素晴らしさはわからないようだ。

とても残念である。

「とか話をしている内に！」

ようやくアタリが来た。
だが、ここで無邪気に喜んだり、大騒ぎをしてはいけない。
これは当たり前の結果だからだ。

「大きいな！」

物凄いヒキで、魚も大きそうだ。
ならば、余計に焦ってバラす危険を冒してはならない。
俺は慎重にリールを回していく。

「本当に大きいみたいだな」

竿のしなり方に、ブランタークさんもかかった魚の大きさを認めたようだ。

「最後の最後に一番の大物を釣り上げる。素晴らしきかな！」

などと思っていると、突然更に竿が重くなった。
その後は、どうリールを巻いてもビクともしない。

「ヴェル、根がかりか？」

「いや、タナは底じゃないぞ」

いくらリールを巻いても、まるで地面を釣っているかのようにビクともしない。
不思議に思っていると、ようやくその理由が判明した。

ラインが緩んだと思ったら、水面から徐々に巨大な物体が上がっ

てきたのだ。
そして、その正体に漁師達が驚愕する。
「何で、こんな港から近い海域に！」
「サーペント！」
水面からサーペントが巨大な顔を出し、こちらを恨めしそうに見ている。
その口の端からは、俺の釣竿のラインが垂れていた。
「つまり、ヴェルが釣った大物を、あのサーペントが丸のみしたんだね」
「そして、口内に刺さった針に不快感を感じ、その原因である旦那様に怒り心頭と」
ルイーゼとリサの推論どおりであろう。
サーペントは、新たな標的を俺達にしたようだ。
「貴族の旦那ぁ！」
「逃げないと！」
漁師は儲かるが危険な商売である。
遭難しても、遭難しなくても、たまに遭遇するサーペントに運悪く食われる者がいるからだ。
「俺の大物……」

ところが俺は、サーペントの驚異など感じてしない。
それよりも、せっかくの大物を横取りされた事実に怒りを感じていた。

「お前のせいでボウズじゃないか！」

サーペントは大きな口を開けて俺達に襲いかかろうとしたが、すかさず海水で作った巨大な槍を口内に突き刺し一撃で屠った。

「貴族の旦那、すげえ……」

漁師たちは驚いているが、サーペントは竜よりも弱いし、これで二匹目だ。
大した事じゃない。

「魚じゃないけど……いや待てよ！」

もしかすると、サーペントの胃の中に魚が残っているかもしれない。
俺は殺したサーペントを氷漬けにしてから魔法の袋に仕舞い、急ぎ港へと戻るのであった。

「ううっ……。あの腐れサーペントめ……」

港に戻ると、早速漁師を集めてサーペントの解体を行った。
ウロコ、肉、内臓、骨などはすぐに噂を聞きつけた商人が買っていく。

それはいいのだが、肝心の胃袋を開けてみると、そこには全長二メートルほどの巨大な魚が未消化で入っていたのだ。

「貴族の旦那、惜しい獲物をサーペントに横取りされましたな」

魚は、九州などで高級魚扱いされるクエに似ていた。

「クエルでこの大きさは滅多に出ませんぜ。刺身に、塩焼きに、鍋にも最高でさ。これは食えませんが……」

「ある程度原型が残っているぞ」

「サーペントの胃液に浸かった魚は駄目ですぜ。お腹を壊しますから」

「何だとぉーーー！」

せっかく、一番の大物な上に珍しい高級魚を釣ったのに、それがサーペントに食われて駄目になるなんて……。

こんな不幸があってもいいのであろうか？

「あなた、サーペントが釣れたではありませんか」

「でも魚じゃないし……」

俺は魚が釣りたかったのだし、サーペントは結局魔法で退治された。

これを釣ったと言うのは、真実ではないと思うのだ。

「ヴェルが言う主が釣れたじゃないか」
「お館様の執念が実ったのでは？」
「違うんだ！　俺の言う主は魚じゃないと駄目なんだ！」
サーペントは魚じゃない。
俺は、エルとハルカに強く反論した。
サーペントは動物のカテゴリーなので、いくら大物でも外道である。
釣り人は、外道を嫌うものなのだから。
「でもよ。この町の商人達は大喜びだぜ」
船舶不足で漁獲量が落ち、その大半を駐留している軍人に買い占められている現在、普段でも年に数頭しか上がらないサーペントが最高の状態で水揚げされたと知って、みんな喜んでウロコや肉を買っている。
漁師達が解体した部位を、オークションで次々と競り落としている。
それは彼らに臨時報酬を出して任せるとして、問題は魚が一匹も釣れなかった件だ。
「ちくしょう！　明日こそは、沢山釣ってやるんだからな！」
「明日も行くのか？　伯爵様」
「食料調達のための軍事行動だから！」

俺は、ホールミア辺境伯が何も言ってこないのをいい事に、明日からも食料確保という名の釣りに出かける事を決意するのであった。

第百三十八話　戦闘はないが、話はなかなか進まない。

「アーリートン三級将、基地の建設は予定どおりかな？」

「はい」

「ならばいい」

ここは、人間達がテラハレス諸島群と呼ぶ無人島群の上空、ここから東に百キロほど、リンガイア大陸西部に領地を持つ貴族が領有を主張していると情報にあった。

先日、防衛隊の船に魔法を放って拿捕された大型魔導飛行船の船員からの情報だが、確かに粗末な灯台や掘立小屋は見える。

ただし、ここでは穀物類が自給できない。

水も相当深く井戸を掘らないと確保できず、おかげで無人島のままのようだ。

「ゲーリー政務官、いつになったらヘルムート王国と交渉を開始するのでしょうか？」

「それは、高度に政治的な判断を要するからもう少し待ってほしい」

テラハレス諸島群に浮かぶ我が国の空中艦隊の旗艦において、私司令官のアーリートン三級将は魔導絵通信で政府高官への定時報告を行っていた。

「高度に政治的判断ですか……」

目の前の政務官はそう言っているが、実はただどうしていいのかわからなくて混乱しているだけである。

このゲーリー政務官は、見た目は二枚目で女性にも人気がある。

前回の選挙では野党民権党から出馬し、多くの女性票を集めて当選した。

一年生議員にも拘らず防衛政務官の地位にあるのは、ひとえに得票数の多さからである。

そういえば、前回の選挙は投票率が二十パーセント以上も上がって野党民権党が大躍進して政権を取った。

これまで六百三十年間にも及ぶ長期政権を運営していた国権党は、特に失政もないが長期的に魔族の衰退を阻止できなかったという理由で選挙に大敗、大幅に議席を失ったのだ。

国民も、何らかの変化が欲しかったのであろう。

だが、彼らには実務能力がある者が少ない。

人前に出ればいい事は言えるが、ではそれを実現可能かと言われると厳しい。

事件が、新内閣を成立させて僅か一週間後であったという時間的なタイミングも悪かった。

一万年も前に高度な文明を消失し、原始的な文明しかない人間達が野蛮にも争っている土地。

と、言われていた東部大陸から一隻の巨大魔導飛行船が現れた。

すぐに決まりに従って領海・空からの退去を命じたのだが、なぜか魔法が飛んできてこの船を拿捕するしかなかった。

幸い、死者は出なかったが、若干の負傷者は出ている。
治療は終わっていたが、彼らへの尋問は苦労した。

何しろ我々には、他種族人間と接した記録が一万年以上も皆無だったからだ。
先に相手が魔法を撃ったので、彼らは戦闘による捕虜という扱いである。
だが、我が国に捕虜をどう扱うかという法はない。

昔はあったのだが、必要がないのですべて廃法になっていたのだ。
交渉相手もいないので、同時に外務省も解散している。

そんな理由もあり、彼らをどう扱うのか？
どこの役所で管理して事情を聞くのかで世論が揉めた。

そう扱いは悪くないはずなのに、勝手にマスコミが捕虜への人権侵害とかで騒ぎ始めた。
まあ、彼らは騒いで世論の関心を得て商売にしている。
話半分で聞いている市民も多かったが、一部に騒ぐ者達もいた。

普段、河川の工事でそこに住むメダカが希少だから配慮しろとかいう連中の同類だ。

彼らに言わせると、人間は魔力を持つ者も少なく寿命も短い可哀想な種族らしい。
それも一理あるのであろうが、多少文明レベルが劣る程度で我らとそう変わりはないであろう。
私も訊問に参加して、それがよくわかった。

船長と副長を名乗る人物は冷静に事情を説明した。

こちらに伝える情報と、伝えるべきでない情報を理性的に判断して話をするので、私は彼らに好感すら持った。
同じく真面目に職務にまい進する軍人として、尊敬の念すら覚えている。

少なくとも、この定期的に無意味な通信を寄越す顔だけ政務官よりは好感度は上だ。
そして、同時に救いようのないアホがいる。

もう一人、あの巨大魔導飛行船には副長がいる。
能力は低くないと思うのだが、まだ若いせいか勘忍が足りない。
と思ったら、自分は貴族の跡取りでこの待遇は我慢できないと騒ぐ。

向こうの大陸には貴族がいるそうで、中にはこのような特権意識に溢れた若造もいるようだ。
我が国でも、政治家や大物官僚、大企業のオーナーの親族というだけで無意味に威張っているのがいるのでお互い様かもしれないが。

ただ、一部国民とマスコミに言わせると、ヘルムート王国はいまだに貴族の専制が蔓延る野蛮な後進国家なのだそうだ。
同じ考えを持つ記者が、新聞にそう書いていた。

それで、今こそ大陸に進軍して民主主義の大義を広めるべきとか言っている連中がいる。
お題目は素晴らしいのだが、我々は大陸にヘルムート王国とアーカート神聖帝国という国家がある事しか知らない。
人口とか、技術レベルとか、国力とか、軍事力とか、そういう情報を何も知らないのに軍を押し進めろとか騒いでいるのだ。

自分が行かないからといって、随分と無責任な連中である。

そもそも我が国の防衛隊は、正式には軍隊ではない。

一万年以上も友好国も仮想敵国もないので、ようするに内乱勢力に備えた治安維持組織でしかないのだ。

魔族という種族にはたまに莫大な魔力を持って生まれ、とてつもない戦闘力を有する者が現れる。

そういう連中が国家転覆やテロを目論むと困るので、そういう事態に備えての防犯が主な任務というわけだ。

あとは、通常の犯罪者向けに治安維持隊、消防とレスキューを合わせた救護隊などがあるが、それらを合わせても三万人もいない。

魔族の人口が百万人ほどで、最近では大規模凶悪犯罪もテロも滅多にない。

装備の更新に金がかかると文句を言われて、現在では人員も縮小傾向にあった。

この人数で、大陸一個をどうやって占領・統治すればいいのだ。

あまりにもバカすぎる意見であったが、困った事にこの目の前のバカを含む民権党の連中には大陸侵攻論……侵攻という言葉はよくないそうで、解放論らしいがどちらでも同じだ……を唱える勢力が一定数いる。

加えて、野党に転落した国権党の議員にも、人口減で部数を増やしたいマスコミ関係者にも、財界人にもシンパはいた。

マスコミは民主主義を大陸の人達に教えるために、公器である新聞が必要だと言うのだ。

ただ販売部数を増やしたいだけのような気もするが、彼らはその本音を覆い隠して建前を真実だと思い込む事ができるのであろう。

羨ましい限りである。

まだ財界の、商売のパイが広がるかもという正直な意見の方が理解できる。

もっとも、国民の大半は冷静で冷めている。

だからこそ、こんな中途半端な出兵になっているわけだが。

相手の領地ではあるが、実効支配が及んでいないこの群島に臨時で基地を作って圧力をかけ、相手に先制攻撃を謝罪させて通商条約を結ぶ。

さすがに、すぐに戦争を言うほど政府はバカではなかった。

戦力がないので、防衛隊の制服組に反対されたのであろうが。

もっとも、相手への謝罪と通商条約の締結には外交官が必要なのだが、生憎と我が国は外務省を二千年も前に閉鎖している。

当時、必要がないのに存在し続けていて、予算が無駄だと言われて廃止したらしい。

組織を潰される外務省の連中は反対したそうだが、彼らには仕事がなくて他の省庁の応援に回っていたくらいであったそうだから、廃止されても仕方がなかったのであろう。

そんなわけで、一応外交のノウハウを記載した古文書は残っているわけだが、では誰が行くかで揉めている。

経験がないので及び腰なのと、各省庁で自分達がと主導権争いを始めて、しっちゃかめっちゃかで混乱しているらしい。

今日もゲーリー政務官が無駄に爽やかな笑顔で誤魔化しているが、防衛大臣が顔を出さないのでまだ何も決まっていないのであろう。

「それで、極秘裏に来ているヘルムート王国の外交使者なのですが……」

ヘルムート王国には、仮想敵国であるアーカート神聖帝国が存在する。

当然外交担当者はいて、十名ほどの使節団がこちらを訪ねていた。

当然極秘で、今は我々が歓待して預かっている。

時期が来れば本国に送ると言っているが、それがいつになるのかは不明だ。

しかし、奇妙な話だ。

政治家やマスコミの連中の大半は、彼らを文明が劣る野蛮人だと思っているが、その野蛮人はすぐに外交使節を送ったのに、我が国はいまだそれを出せずに混乱している。

これでは、どちらが野蛮人なのかわかったものではない。

「どうせ、基地の建設にも時間がかかるのだし……」

「そうですね……」

もう一つ困った事がある。

この群島に建設中の基地の件だ。

最初は、すぐに撤去可能な仮設基地にする予定であった。

ところが、政府がコロコロと方針を変えるのだ。

せっかくだから、ここを大陸進出の橋頭保としようと騒ぎ出したのだ。

こちらに対抗してヘルムート王国が大軍で迎撃準備を始めている

のに、恒久的に支配しようとしたら戦争になってしまう。

元から、防衛隊はこの群島の占領作戦に反対だった。
受けざるを得なかったのは、防衛隊はシビリアンコントロールの下にあるからだ。
つまりは、政府の命令に従わなければいけない点にあった。

それは別に構わないと思う。
古代の歴史にある、軍閥による独裁政治など悪夢であろうから。
ただ、コントロールする以上は、せめてその知識は最低限得てきてほしいと思う。

ちなみに、今魔導絵通信に映っているバカは、海上艦艇と空中艦艇の区別すら今もついていない。
有事になると、このバカが防衛隊のナンバー3だと思うと頭が痛くなってくる。

「青年軍属達は元気かね？」

「はあ……」

そして、基地建設の作業を大幅に遅らせている存在、それはこの青年軍属達にある。
ここ数百年、我が国は未婚率の増加に伴う少子高齢化、経済の縮小に悩んでいる。
まあ、若者の半分が無職という現実を考えるに、これは仕方がないのかもしれない。

ただ、当事者である若者達はそこまで悩んでいなかった。
少人数で高度な農業を行えるため、余りに余っている食料は無料

で支給され、これに小遣い程度の生活保護もある。
加えて、彼らはたまにアルバイトに出かけたり、趣味などに没頭して意外と無職生活を楽しんでいるからだ。

これが年寄りに言わせると言語道断なのであるが、職がどう考えても足りないので騒ぐだけ無駄である。
そしてこの矛盾を誤魔化すために、政府は青年軍属を募集した。

つまり、防衛隊の戦力が足りないので、無職で興味ありそうな連中を募集して基地建設の作業を行わせる事にしたのだ。
結果、素人である彼らのせいで作業は遅れに遅れている。

理由は言うまでもない。
彼らが就業経験の少ない素人だからだ。

技術がある少数の防衛隊員は彼らの警備にまわり、素人が試行錯誤で基地の建設を行っている。
あまりの遅さに激怒する将兵もいたが、彼らに労災が発生すると政府が五月蝿い。
よって、自然の流れに任せる事になった。

どうせ暫くは完成しないと思って、完成予定時期を遅めに申請してよかった。
我々が青年軍属のせいで基地の完成が遅れていますなどと言い訳しても、政府は激高して我々を処分するだけだからだ。
本当、上から言うだけの政府連中は気楽でいい。

「彼らは未経験者なのだ。長い目で見てあげてくれ」

「はあ……」

別にそれは構わないのだが、中には経験以前の奴がいる。
碌に作業もしないで、島の地質がどうの、生態系がどうのと調査をしているのだ。
彼らは大学院の卒業生で、その分野の研究を行っているらしい。

大学の自治組織は、民権党の牙城で支持母体でもある。
青年軍属にかこつけて、無料で研究をしようという腹なのであろう。

「（まあ、彼らは逞しくてある意味感心するがね）」

それに、あまり立派な基地ができると政府のバカ達が余計な事を考える可能性もある。
ある意味、好都合かもしれない。
第一、青年軍属達が素人でも理解は出来るが、防衛隊のナンバー3が軍事に素人なのはどうなのであろうか？

政治家に素人などいらないと思う私はおかしいのであろうか？

「（あんたは、どう長い目で見ても無能だろうがな……）」

「何か言ったかな？　アーリートン三級将」

「いいえ、特に何も」

危うく、つぶやきを聞かれるところであったか。
聞かれてもいいような気もしてきたが、ここで懲罰の対象にでもされたら退職金と年金が消えてしまう。
ここは我慢の一時だ。

「基地が完成する頃には交渉も始まるはずだ。ヘルムート王国側が先に手を出したのだから謝罪するであろうし、通商交渉が纏まれば景気もよくなるさ」

「そうですね」

そんなに上手く行けばいいのだが……。

私は、こののん気な政務官が次第に羨ましくなるのであった。

「貴族の旦那、今日も大漁でしたな」

「ああ、食べる分は確保して、あとは売却だ。今日も臨時ボーナスが出せそうだな」

「みんな、喜びますぜ」

暇潰しに漁を始めてから一週間、いまだに事態は動かない。

ホールミア辺境伯も何も言ってこないので、俺達は自由に行動している。

赤ん坊の世話、各々の鍛錬や勉学、遊びと買い物、そして初日の雪辱を果たすために漁を続けている。

サイリウス周辺に敵がいないかの偵察と、食料確保を兼ねた漁に一日一回出ていたのだ。

ただ、俺達には赤ん坊の世話を含めて他にもする事がある。

数時間ほどちょっと沖合で釣りを行い、他にも魔導動力推進のボ

ートがあるので、それらを漁師に貸している。
彼らはすぐに操作を覚え、定置網漁や、はえ縄漁などに出かけた。
船の権利は俺にあるのでオーナーとして漁師達に日当を払い、獲った獲物はオークションで流し、売り上げに比例して決められたボーナスを出す。
この方法でも、彼らは収入が増えて嬉しいようだ。
「貴族の旦那がこの船を売ってくれればもっと嬉しいんですがね」
「残念だけど、それはできないな」
彼らはバウマイスター伯爵領の領民ではないので、それはできない。
その辺の線引きは絶対に必要であった。
「残念です。それにしても、貴族の旦那は漁師姿も板についてきましたな」
網を使わずに釣竿で釣るスタイルに変化はなかったが、初日とは違って魚が沢山釣れるようになった。
最近では、少し日焼けして逞しく見えるようになったほどだ。
「すいません、あなた。私は日焼けは……」
「私も駄目」
「僕も」
「お肌に悪い」

「日焼け止めは必須ですわね」

「妾はあまり気にせぬが……」

「あたいもだな。昔から気にした事はないし」

「私は気にしていました」

一部例外もあるが、俺の妻達は念入りに日焼け止めを塗って船に乗り込んでいる。

それでも、魚が大量に釣れて面白いので特に用事がなければ毎日ついてきた。

「今日はブーリ大根を作りましょう」

「いいなぁ。俺は大好き」

エルとハルカは、子供が産まれても新婚夫婦のように仲良く釣りに付いてくる。

護衛も兼ねているので当たり前ではあるのだが。

「新鮮な魚料理は美味しいのである！」

導師も相変わらずだが、彼も王宮筆頭魔導師の癖にホールミア辺境伯や王国軍に呼ばれもしない。

やはり、平時には役に立たないと思われているのであろうか？

今は平時とは言いにくいが、つまり事務的な事では役に立たないと思われているのであろう。

そして、ブランタークさんであるが……。

「伯爵様、毎日漁師みたいな生活で本当にいいのか？」

俺と一緒に毎日釣りをして、釣った魚をエリーゼ達に調理してもらう。

そして、それを肴に一杯。

彼は、こんな自堕落な生活でいいのかと悩んでいるようだ。

「とはいえ、向こうは何も言ってきませんし……」

フィリップとクリストフも、暇なので訓練ばかりしているらしい。

敵がいるのに何もできないと、こちらに魚を買いに来た時に愚痴を溢していた。

「それに、釣りをしていないと大変ですよ。ブランタークさんが俺の代わりに相手してくれますか？」

「いいや、御免蒙るね」

暇なのが余計によくないらしい。

多くの西部貴族が、俺を茶会だの、食事だのに誘うのだ。

目的は、領地開発利権にもっと絡ませて欲しいであろう。

あとは、そこにノコノコと行くとまた側室や愛人を押し付けられる可能性があった。

「よって、この魚の補給は絶対に毎日しないと駄目です」

不足する魚を、漁師達に船舶まで貸して確保している。

補給不足の解決に貢献しているので、これが十分に軍事行動に当たるはず。

そう、俺は軍の補給に貢献しているわけだ。

だから忙しいので、他の貴族に会っている暇はないんだよな。

「それはわかるけどよ。伯爵様は、絶対に好きでやっているだろう？」

「はい」

「そこは、表向きは否定しろよ……」

俺の身も蓋もない返答に、ブランタークさん溜息をつくのであった。

ただ、毎日美味しい肴を得るために、彼も釣りは止めないのであったが。

「補給作業が忙しいな」

「バウマイスター伯爵は漁師みたいになっているし、今回の紛争はどうなっているんだ？」

今日も漁を終え、赤ん坊達にミルクをあげて寝かせた後、今日は夕食会を開いた。

あまりに何も状況が動かないので、フィリップとクリストフを呼

んで情報交換を試みたのだ。
相変わらず着陸させた船内での生活なので、客はあまり呼んでいない。
二人と、彼らの部下、あとは彼らに新しく出来た寄子達だそうだ。

「もう寄子を？」

「帝国内乱で褒賞を受けた貴族は俺だけじゃないのさ」

一緒に戦った中で、貴族の次男三男で食うために軍人をしていた指揮官クラスが数名、一緒に騎士爵を貰って法衣貴族として独立、そのままフィリップの寄子になったそうだ。

「あっという間にできあがる柵……」

「バウマイスター伯爵、そう思っても口に出すな。俺だって戸惑ったんだ」

「えっ？　元は大貴族の息子なのに？」

「俺が細やかに寄子達を把握していたと思うか？　そういうのはクリストフの担当だったんだよ」

軍人肌の長男、内政官肌の次男だったからなぁ……。

「それは駄目なんじゃ？」

「フィリップ兄さん、一応形だけでもそういう事はしていたという風にしていてください」

フィリップは、クリストフに釘を刺された。
確かに、何もしていなかったとカミングアウトするのはよくないか。
「人に言うほど、バウマイスター伯爵も寄子達に細やかな配慮とかしてないだろうに」
「まあ、してないけど……」
していないな。
みんな、ローデリヒに丸投げだ。
「今はやっているぞ。みんな、俺が頼りだからな。法衣騎士なんて吹けば飛ぶくらいの存在だからな」
昔とは違って、今は自分が面倒をみてあげないと駄目らしい。
フィリップは、共に帝国内戦で苦労した部下達の面倒をよく見て慕われているようだ。
「俺とクリストフもエドガー軍務卿の寄子で世話になっているからな。その点はありがたいし楽だな。その代わりに、こうしてバウマイスター伯爵と情報交換に務めたりするわけだが……。代わりにこちらも情報をバウマイスター伯爵に渡そう」
二人の寄親であるエドガー軍務卿からの情報で、実は既に極秘裏に外交使節団を例の魔族艦隊に送り込んでいるらしい。
だが、一向に交渉が始まらず、艦隊内に留め置かれているそうだ。
「監禁されている？」

「わからん。定時通信は普通にできるそうだし、用事があるのなら戻っても構わないと向こうの指揮官に言われたそうだ」

「いい条件で交渉しようとジラしているのかな？」

こちらが外交使節団を送ったのだ。

普通なら、すぐに責任者が対応するはず。

「王宮でも判断がつきかねてな。中には『我がヘルムート国を舐めている！　すぐに攻撃開始だ！』とか騒ぐ貴族もいて……まあプラッテ伯爵達なんだが……」

「あいつかよ……」

自分の跡取り息子がリンガイアの副長だから、彼を取り戻すために戦争も辞さないと吠えているバカである。

親バカも極まれりだが、俺もフリードリヒが同じ目に遭ったらああなるのであろうか？

「A情報は、バウマイスター伯爵のところのローデリヒから来ているから、何もわからなくて右往左往でないだけありがたいが」

『A情報』とは、『アーネストからの情報』の略で、うちに居候している魔族からの情報という意味だ。

彼は、ここに連れて来ると向こうと勝手に連絡を取ったり、内応の可能性があると疑われるので連れて来なかった。

本人は、いつも通り論文の作成に忙しくて部屋に閉じ籠っているようだが。

そして、その状態を王国から黙認してもらっている代わりに、彼

から魔族に関する情報を提供していた。

アーネストは、このリンガイア大陸にある遺跡を調査したくて密出国までした男だ。

よって国家に対する忠誠は薄く、知りうる限りの情報を王国に伝えてくれる。

おかげで魔族の国に関する情報は集まったのだが、彼は元は大学教授であった。

政府や軍隊などに関する情報は、どうしても概要的なものになってしまう。

だが、それでも王国政府を交渉へと向けさせるのに十分であったが。

「魔族は全員魔法使い、最低でも中級以上の魔力を持つ。魔導飛行船や、その他の武器の性能も比べ物にならない。いくら数が少なくてもな……」

数が少ないから全面戦争にはならないかもしれないが、条件闘争のための限定的な軍事衝突となれば、一方的に蹴散らされてしまう。

その結果、不平等な条約や領地割譲を受け入れてしまったら。

アーカート神聖帝国にも舐められてしまう事態になるであろう。

「そんなわけで、王国政府としては数を頼りに圧力をかけて何とか平等な条約を結びたいわけです」

「可能なのかな？」

「そう思っていないとやってられませんから。問題は、プラッテ伯

爵達のように足を引っ張る連中ですね」

魔族の国と戦争をして、それで勝てると思っているのが驚きだ。
アーネスト経由で、情報はちゃんと入っているのに。

「彼らに言わせると、そんな情報は当てにならないそうです」

「じゃあ、自分で当てになる情報を探ってこいってんだ」

「そんな面倒な事はしませんよ。連中は」

彼からすると、戦争とは出世をかけた賭けなのだそうだ。

「政府閣僚も、軍人も、上にいる連中は戦争なんて嫌ですからね。戦争を煽る貴族ってのは、それで上手く行けば自分も出世できる。駄目なら上の連中の責任にして逃げようと考えていますから。それで、上が処罰されて空いたら何食わぬ顔で戻ってきます」

駄目元で景気のいい主戦論を煽り、失敗したら上の責任だと言って逃げる。
酷い話だが、こんな中間層や非主流派は多い。
上が可愛そうな気もするが、それに引きずられてしまえば責任のある地位にいるのだから、罰を受けても仕方がないのであろう。

「という事は、まだ俺達は釣りができる？　よーーーし、これを生かして海釣りを極めるぞぉーーー」

まだ、主クラスの大物が釣れていない。
そのうちに、名人級の腕前を持つベテラン漁師が『この海域には、全長十メートル以上もある謎の大魚がいて、ワシもそれを何十年も

追いかけているのだ』などと話しかけてくれるかもしれないし。

「バウマイスター伯爵、それは何の物語なんだ？」

「ありそうというか、あったら面白そうですね」

体育会系のフィリップは呆れ、文系のクリストフは半分だけ俺の話に賛同してくれた。

「その名漁師の鼻を明かしてやるんだ」

「初日にサーペントに食べられてしまった大物もいましたし、またあのくらいの獲物が釣れますよ、あなた」

「だよなぁ。エリーゼはわかっている」

そう、この海は豊富な魚を我々に恵んでくれる素晴らしい漁場なのだ。

頑張れば、またあんな巨大魚がかかるかもしれない。

「ヴェル、あくまでも漁に出ているのは駐留する各軍への食料供給任務なんだが……」

「エル、そのくらいの事が俺にわからないとでも？」

わかっているからこそ、そう言って毎日釣りに出ているのだ。

それに、実際彼らに大量の魚を販売してもいる。

相場は少し安く設定しているし、漁師達の収入も保障していた。

だから、ホールミア辺境伯も何も言ってこないのだから。

「俺は、ヴェルがこのまま釣りだけに没頭して、本来の目的を忘れているのではないかと心配したんだ」

「あははっ、そんなまさか」

そんなはずがないと、俺は笑い始める。

「そうかしら？　エルの心配はもっともよ」

「ええーーー、何でイーナが裏切るの？」

「裏切るとかじゃなくて、ヴェルは毎日楽しそうに釣りをするか、フリードリヒ達の傍にばかりいるし」

「時代の先端を行く、赤ん坊の世話を見る貴族、それがこのバウマイスター伯爵様だ」

この世界に、家事の分担とか、イクメンという言葉は存在しない。

子供の世話は、主に女性が見るものという考え方が主流だからだ。

大貴族だと、母親が面倒を見ず乳母やメイドに任せてしまう人も多かった。

俺のように自分でミルクをあげたり、おしめを替える男は滅多にいないそうだ。

「普段はできないけど、こういう時くらいはね」

領地にいると色々と忙しいしローデリヒも五月蠅い。

だから、今がチャンスというわけだ。

戦争になるかもしれないのに、なぜか物凄く時間が空いているし。

「悪くはないと思うけど、バウマイスター伯爵としては問題かも」

「そうだね、軽く見られちゃうよ」

現代日本とは違って、男が、それも俺のように大貴族が赤ん坊の面倒など見ていると、世間の風評が悪いそうだ。

ルイーゼもイーナの考えに賛成で、もしこんな事を日本の女性が知ればどう思うのであろうか？

ある意味、興味深くはある。

「それほど気にする事もあるまい」

「テレーゼは俺の味方だった」

「大貴族が少々変わった事をしたとて、それが何程の事かというわけじゃ。世間の流行など、変わり者の大貴族や王様が始めた事も多いからの」

自分が大貴族でもあったテレーゼからすると、流行とは自分達のように目立つ人間が作り出すものだと思っているらしい。

「つまり、ヴェンデリンさんが男性なのに赤ん坊の世話をしていると、それを真似る人が出て流行するかもと？」

「そんな感じじゃの」

「信じられませんわね」

カタリーナは貴族に拘る女である。
だからこそ余計に貴族の基本に忠実で、俺が赤ん坊の面倒を見るのはおかしいと思っているようだ。

「好きにすればいいと思う」

「だよなぁ、ヴィルマ。あたいの兄貴なんて、子供の頃はあたいを背負って面倒みていたらしいぜ」

あの家は、当主夫人も農作業をするような家だ。
どうせ他の貴族は誰も見ていないし、気にもせずにそういう事をしていたのであろう。

「でも、私達もいるからたまにでいいわよ」

「旦那様には、やはり世間の目がありますし」

「うーーーむ、こっそりとやるとするか」

アマーリエ義姉さんからすると自分の仕事ばかりか、連れてきたメイド達の仕事がなくなるのが困るというわけだ。
確かに、それは一理あるかもしれない。

ここは、リサの言うように他の貴族に目を付けられないようにするべきか。

「となると、ここは釣りを強化か？」

「旦那様、なぜ釣りなのですか？」

「なぜって、海が俺を呼んでいるから！」

そして、まだ見ぬあの海域の主が、俺との対決を待っているのだ。

「いえ、『瞬間移動』が使えるのですから、ここは領内の開発工事もしないと駄目なのでは？　ローデリヒさんに怒られますよ」

「リサさんの言う事は正論すぎますね。あなた、二日に一度は領地に戻ってください。何かあれば携帯魔導通信機で連絡します」

エリーゼにも念を押され、俺の釣りライフは二日に一度となってしまう。

もう一日は、『瞬間移動』で領地に戻ってまた土木冒険者として仕事をする羽目になるのであった。

「失礼、バウマイスター伯爵殿はいらっしゃるかな？」

相変わらずの待機状態が続くなか、こちらを五名の男達が訪ねてきた。

身形からして下級貴族とその子供達という感じであろう。

本来なら門前払いをするところなのだが、彼らがエルの父親と兄達であったから話だけは聞く事になってしまった。

「恐れていた事が……」

今まで、彼らは補給部隊の通り道などを警備していて、このサイリウスに来ていなかったようだ。
任務が終わり、休暇がてら諸侯軍を連れてサイリウスに入ると、そこには自分の息子がいた。

顔を出して親子の再会を……というのが普通なのであろうが、実は彼らは大きなチョンボをしている。

俺が領地を得たばかりの頃、エルのツテで他の貴族よりも優遇しろと無茶を言って、西部貴族達への対応が悪くなる原因を作ってしまったのだ。
悪くなるというと誤解を与えるが、別に拒否しているわけではない。

南部を一番優遇しているのは地元だからだし、次が中央なのは開発で中央貴族と王家の援助と庇護を受けているからだ。
東部とは揉めたが、それも解決して新ブロワ辺境伯とは知らぬ仲でもないし、紛争で損害を受けて大変そうなので少し手を貸している。
そうする事で新領主の統治体勢を安定させ、また紛争で足を引っ張られないようにする目的もある。

ああ、そう考えると西部は一番不遇かもしれない。

エルも、それ以来家族とは連絡を取っていない。
彼が恩を返すべき人は亡くなった母親のみなので、独立して家を出た以上は関係がないという考え方なのだ。

「エルも大変だねぇ」

「まったく、イーナやルイーゼの家族が羨ましいぜ……」

エルは、厄介のタネが来たと顔を渋くさせた。

「言うほど、ボクの家族も素晴らしいとは思えないけど」

「そうよね。極めて普通？」

「だから、その普通が羨ましいんだよ」

二人の子供がバウマイスター伯爵家の槍術指南役と魔闘流指南役となって家臣家を創設するので、それを手伝うために親族や弟子を優先的に採用している。

このくらいならどの貴族家でも行っているし、どうせうちは人手不足である。

特に問題にもなっていない。

「バカな俺が言うのもどうかと思うが、俺の家族なんてみんな凡人だぞ」

剣に優れたエルに嫉妬して、獲物の横取りをするような家族なのでお察しというわけだ。

「しかし、何でレクス兄さんとサレム兄さんがいるんだ？」

「何でって、家族だからじゃないのか？」

「あの二人は、俺よりも先に家を出てホールミア辺境伯家に仕えたと聞いていたからな」

零細貴族の子弟の就職先としては、地元大物貴族家に仕えるという選択肢もある。
だが、ここでも大物と小物は差がつく。
大物は家臣家に婿入りなどができるが、エルの兄達だと末端の警備兵で死ねば貴族の身分も失ってしまう。

「ホールミア辺境伯家に仕えているのなら、今は忙しいのでは？」

魔族艦隊への対応があるので、俺達ならいざ知らずここに来る余裕もないと思うのだ。

「これは、バウマイスター伯爵殿。私は、エルヴィンの父でアルニム家の当主です」

最初の挨拶は普通だった。
エルの父親が、自分と四人の息子を紹介しただけだ。

「バウマイスター伯爵殿のご活躍は噂に聞いておりますとも。ところで、うちの他の息子達はいつバウマイスター伯爵家に仕官できるのですか？」

「はい？」

俺は、エルの父親が何を言いたいのか理解できなかった。
仕官したければ、好きに募集に応じればいい。
能力があれば出世も可能だからだ。

「それは、募集に応じていただければ。ただ、その前に仕えているところを退職して、トラブル等がないようにしていただきたい」

うちの方が条件がいいから焦ってか知らないが、仕えていた家なり職場を辞めもしないでうちに応募してくる者がいて困っていたのだ。

向こうからすれば、バウマイスター伯爵家が勝手に引き抜いたように思えてしまう。

当然うちに抗議してくるので、そのトラブルの処理で余計な仕事が増えてしまい、ローデリヒ達が頭を抱えた事もあった。

なので、ちゃんと前の職場は辞めてきてくれと念を押しておく。

「えっ？　なぜそのような事をせねばならないのです？　それは、バウマイスター伯爵殿がホールミア辺境伯殿と相談してくださいし」

「はい？」

この親父、いきなり何を言うんだ？

「エルヴィン、俺はホールミア辺境伯家で末端の兵士稼業なんてまっぴら御免だからな。いい席を準備しておけよ」

「そうそう、兄貴は敬うものだぜ」

先ほどエルがホールミア辺境伯家に仕えていると言っていたレクスとサレムの二人が、エルに上から目線で命令する。

いや、あんたらはエルの兄貴達かもしれないけど、今では全然身分と立場が違うんだがな。

昔の関係が今も通じると思っている……通じると思いたいんだな。

「エルヴィン、俺の子供も将来は面倒を見ろよ。いいか、相続可能

な家臣家を継がせてやれ」

次男らしき人物も、なぜかとても偉そうだ。

自分の子供をバウマイスター伯爵家に仕官させろと偉そうに言っている。

というか、俺の実家はまだマシだったのかな？

前に優遇はしないと宣言したんだが、この連中はまだ諦めていなかったらしい。

「父上、兄上達。俺には、そのような権限はないのですよ」

ぶち切れるかと思ったら、エルは案外冷静だった。

怒りが一回転以上して、逆に冷静になったのかもしれない。

そのようなコネは存在しないと、彼らの提案を却下する。

「待ってください！　バウマイスター伯爵殿！　ここは普通ねぇ……」

嫌らしい顔だな。

そんな媚びた表情を向けられても、俺もエルの家族を優遇する予定はない。

第一、俺はお前達と縁も所縁もないのだから。

「そうですとも。エル如きがバウマイスター伯爵殿の重臣なのです。我らならもっと上の地位を与えられて当然ではないですか」

「エルヴィン、お前からもバウマイスター伯爵様に言うんだ」

「（なあ、エル）」

「（家を出た時よりも悪化してるなぁ……お前の兄貴達は、一人を除けばマシだっただろう？）」

確かに、こんな父親と兄達ならエルも帰省しようとか、つき合いを絶とうとは思わないよな。

「（多分、俺経由でヴェルと縁を結べなかったから、ホールミア辺境伯様から嫌われたんじゃないのか？）」

あてが外れたというわけか。

俺とホールミア辺境伯との仲は、この前知り合いになった程度だからな。

長い目で見たら、むしろブロワ辺境伯家の方がよほど仲がいいわけだし。

東部と南部の関係が改善したら、西部との一番縁が薄くなってしまう可能性がある。

その原因となったエルの実家は、間違いなく村八分状態なのであろう。

「いや、あなた達を護衛に置きたくないですけど」

何で、お前達のような知りもしない連中を傍に置かないといけないんだよ。

ローデリヒが全力で反対するわ。

確かに、エルと俺が知り合ったのは偶然だ。

家臣になったのも偶然。

でも、エルはちゃんと努力して今の地位にいる。

お前らが、何か努力でもしたのか？

してたら、コネで重臣にしろなんて言わないよなぁ……。

「バウマイスター伯爵様、未熟なエルヴィンよりも、私の方があなたの護衛に相応しいのです」

「そうですとも」

「ふーーーん、そうなのか」

なら、試験してみようか。

「エルの兄さん達は、エルよりも俺の護衛に相応しいらしい。なら、それを証明してもらわないと。剣で相手をしてあげなよ」

「わかりました。兄上達、俺を剣で負かせられれば、俺の地位を得られますよ」

どういうと、エルは自分の刀を抜いた。

「バウマイスター伯爵殿、このような席で剣の試合などとは！」

「そうですとも！」

「我らの能力は剣だけではなく、もっと総合的なものなのです」

総合的って、何だよそれ。

せめてエルと剣の試合をするくらいの気概があればいいのだが、そういえば領地にいた子供のエルにも剣と弓で勝てなかった連中なんだよな。

真面目にコツコツと勤めるようなタイプにも見えないし、悪いけ

どエルの親族はいらないわ。

「いえ、エルは俺の護衛に、時間があれば警備部隊も率いますし、帝国内乱の時には部隊を率いて敵軍に切り込みました。エルよりも高い地位を望まれるという事は、エルよりも剣の腕前が勝っていないと厳しいですね。ですので、エルとの模擬戦に勝って証明してください」

今、改めて整理すると、エルって凄い戦績なんだな。

あれ？

結構、ハードルが高くないか？

ヴェンデリンになる前の俺なら、無理だと思うぞ。

「それは……」

「俺は、頭脳の方で貢献を……」

「そうだ、俺もサムルと同じく頭脳の方で！」

「では、王都で下級官吏の試験に合格してきてください」

エーリッヒ兄さんも受かった試験だ。

かなり難しいが、努力すれば受からないという事もない。

この試験に受かった下級官吏出身者は、文官としても即戦力である。

合格者を積極的に仕官させているし、ローデリヒに抜擢される者も多かった。

文官として活躍したいのであれば、最低でも下級官吏試験には受かっていてほしい。

「「……」」

「どうかしましたか？　うちは確かに人手不足ですけど、出世したければそれなりの能力が必要です。逆にいうと、それがあれば家柄やコネがなくても出世は可能ですよ。さあ、それを証明してみせてください」

「「「「「……」」」」」

「どうなのでしょうか？　能力があれば、我が家の家宰であるローデリヒがすぐに抜擢してくれますよ。是非ご応募を」

「バウマイスター伯爵殿、私は急用ができたので……」

「俺も、失礼します！」

「俺も！」

俺はただ正論を吐いただけなのだが、エルの親父と兄達はその場から逃げ出してしまった。

エルよりも上の地位に就きたいというから、その条件を出しただけなんだがな。

「やれやれ、我ながら情けない家族だな」

俺は何も言わなかった。

本当は、エルも大分堪えているはずだ。

ここは何も言わない方が親切であろう。

「エルさん、今日は大変でしたね」

「まあね」

事情を聞いたハルカもエルに詳しく事情を聞かず、食事を出して彼を労うだけであった。

さすがはミズホ撫子、旦那への気配りに長けている。

「今日は、早くお休みになられますか？」

「そうだな。何か、疲れたわ……」

その日は夫婦で早くに寝てしまったようだが、翌朝にはエルも元気になっていたので俺達は安堵するのであった。

第百三十九話　セカンドコンタクト。

「貴族の旦那ぁ、今日も大漁でさぁ」

「そうか、事故がないように頑張ってくれよ」

「任せてくだせぇ」

どういうわけか、いまだに王国と魔族との間で交渉が始まっていない。

魔族の空中艦隊はテラハレス諸島群に上陸して基地の建設を行っているが、その速度は魔族による策略なのではないかと思うほど遅い。

魔族はみんな魔法使いのはずなのに、この遅さは異常だ。

王国政府は、交渉を迅速に進めるために本気で基地を作るつもりはないとのメッセージだという貴族と、わざとこちらを挑発しているのだという貴族もいる。

何にしても交渉が始まらないと意味がないのだが、それはいつになるのかわからない。

それでも、大軍が集まっている以上は大量の物資を消耗する。

特に食料と水は必要で、俺達はそれを確保すべく働いていた。

魔導動力付きの船を、テラハレス諸島群の監視のために漁船が不足している漁師達に貸して漁を行わせたのだ。

おかげで、サイリウスの町では魚の価格は安定した。

軍への補給でも、民心の安定でも、俺達は大きく貢献している事になっている。
相変わらずホールミア辺境伯には呼ばれないが、俺達どころではないのかもしれない。

「ただし、ただ釣りをしているだけとも言えるがな」

「そういうブランタークさんも、その魚を調理して、それを肴に酒を飲んでいるだけじゃないですか……」

ブランタークさんも釣った魚をエリーゼ達に調理してもらい、それを肴に晩酌の毎日であった。
とても人の事など言えない状態なのだ。

「しょうがねえだろう。状況が動いていないのだから」

とはいえ、まだ二週間ほどである。
この程度の長対陣には慣れていたし、『瞬間移動』が使えるので二日に一回はバウマイスター伯爵領に戻って土木工事を続けている。

俺と使える魔法が似ているカタリーナ、リサ、テレーゼも連れて一緒にやっているので、戦時にも関わらずバウマイスター伯爵領の開発は計画どおりであった。

あとは、アマーリエ義姉さんとエリーゼは赤ん坊の世話に集中しているし、ルイーゼ、イーナ、ヴィルマ、カチヤなどは漁の方に重点を置いている。
空いている時間に、網の張り方なども漁師達から教わっているようだ。

「このまま、永遠に毎日漁をするのかと思うと心配になるな」

心配にはなるが、漁や釣りは嫌っていないようだ。

年を取ったブランタークさんからすると、サッパリしたメニューを作れる魚は素晴らしい食材なのだから。

「うーーーむ」

「どうかしたか？　導師」

「釣れないのである！」

「いや、釣れているじゃないか」

初日の不味い魚、食えない魚地獄の後は、導師も順調に釣果を伸ばしている。

今日もかなりの数の魚を釣っていた。

「いや、クロマグロとか、海猪とかである！」

「導師、こんな港の近くの海域じゃ釣れませんよ……」

我儘を言う導師にエルが呆れていたが、確かに港から一キロほどのこの海域で難しい。

もう少し遠くに行かないと駄目なはず。

「クロマグロと海猪ですか？　最低でも、もう十キロは沖合に出ませんと」

釣った魚を締めている漁師に聞くと、やはりかなり沖合に出ないと無理だそうだ。

「海猪なら、たまに沖合にも姿を見せますがね。大きいのでそう簡単には獲れませんけど」

海猪とは、イルカやクジラの事を指す。

この世界でも、卵ではなく子を産むイルカやクジラは動物扱いで、だから海の猪と昔から呼ばれているそうだ。

この世界には、クジラやイルカは頭がいいから殺すのは可哀想と騒ぐ環境保護団体がいないので、たまに獲られて市場に出回っていた。

たまになのは、巨体なので獲るのが難しいからだ。

「バウマイスター伯爵よ、たまには大きいのを狙わぬか？」

「デカイ貴族の旦那、海猪はそう簡単に獲れないですぜ」

漁師達に愛称も込めてデカイ貴族の旦那と呼ばれている導師に、漁師が説明をした。

捕鯨用の銃がないし、もし捕獲しても大きな船でないと積めないので、とてもハードルが高い漁だと漁師が言う。

「我らは魔法使いである！　海猪獲りなら任せるのである！」

「任せろって……」

実際に獲った事もないのに、導師も無責任な……。

「たまにはいいではないか。明日に出発するのである！」

なぜか導師が強引に決めてしまい、俺達はクジラ獲りに付き合わされる羽目になるのであった。

「青年軍属達が何だと？」

「一部の連中が、退屈なので休みに釣りにでも行きたいと」

「あの連中、頭にウジでも湧いているのか？」

まだ基地建設は終わっていないというのに、司令官である私アーリートン三級将を新たなる試練が襲った。

能力はともかく、やる気など微塵もない青年軍属達の一部が、休暇で外の海に出たいと言い始めたのだ。

「あの連中は、今の我々の状況を理解しているのか？」

「していないでしょうね……。もしくは、知っていて配慮しないとか？」

「どちらでも同じ事だな」

「ですよね」

副官のバーメル三級佐が呆れ顔で答える。

彼らは職に就かないというか就けない若者達への支援という名目

で、民権党が募集をしてこちらに送り込んできたのだが、そのせいかやる気はゼロに等しい。

契約では決められた期間、軍属として仕事をしていれば決められた賃金が出るからだ。

そこに、能力や仕事達成度という項目はない。

よってやる気などなく、極論すれば別に基地など完成しなくてもいいのだ。

いれば金になるのだから当然だ。

それに、彼らは正規雇用でもないので期間が終われば解雇される。

そんな彼らに真剣に作業をしろと言っても無駄であった。

民権党の連中は、若者を雇用したという事実だけが欲しいのであって、それを考えると彼らも犠牲者なのかもしれない。

だが私は思うのだ。

実は、一番の被害者は私達防衛隊なのではないかと。

「もうグダグダだな。それで、政府はいつヘルムート王国と交渉を始めるのかね？」

「それは神のみぞ知るですかね？」

「これはあれだ。政府の連中も、青年軍属達と大差ないな」

「ですね」

そんな彼らの中から、休暇も島にいるのは退屈だと言い始めたらしい。

民権党の政治家共の命令で、彼らには決められた十分な休日が与

えられている。
あのアホ共が言うには、自分達は労働者の味方なので労働法規の順守は当たり前なのだそうだ。

いや、防衛隊でも過度な疲労が思わぬ事故やトラブルを起こす事くらいは理解しており、作業の効率も落ちるので、ちゃんと労働管理は行っている。
あの連中が問題なのは、仕事の方は全然なのに文句ばかり言ってこちらを困らせる事だ。

「この群島の周囲は、大小多くの船で監視されているのだがな……」

「戦って負ける事はないと思いますが、周りは全部敵ですからね……」

「バーメル三級佐、彼らはまだ正式に敵ではない。発言に注意したまえ」

「失礼しました」

公式に敵と認めてしまうと、それは際限のない戦争を巻き起こす可能性がある。
発言には注意すべきであろう。
それに、我ら防衛隊はシビリアンコントロール下にある。
政府の命令なしに、防衛隊が勝手に人間を敵だと判断してはいけないのだ。

その前に、勝手に向こうの領地に基地を作っておいて、人間達を敵だと言ってしまうと、魔族としての尊厳とか羞恥心に関わる事案であった。

あくまでもこれは私見であり、政府の連中の心の内までは理解できないがね。

「はあ……。ですが、そうでも言わないとあの連中は本気で外に遊びに行くと思いますが……」

「悪夢だな……」

そんな海域にあの連中を送れば、いくら休暇でも向こうがそんな事情を加味してくれるはずがない。

間違いなく戦闘になるであろう。

「島ですごさせろ！」

「今、警備を強化しております」

青年軍属の連中が厄介なのは、魔族の特性である『魔族は全員魔法使い』という点にある。

どんなに魔力が少ない奴でも、人間の魔法使いでいうと中級に匹敵する魔力を持っている。

古代の文献からそれを知っている連中も多く、調子に乗って魔法をぶっ放す可能性も否定できなかった。

「だから、青年軍属なんていらなかったんだ……」

魔族は全員が魔法使いで強い。

その事実を背景に、魔族の一部には『大陸侵攻』を口にする者が一部存在する。

だが、大陸に侵攻できるほど防衛隊の人員は多くない。

防衛隊の名のとおり、大昔に侵攻能力を持つ軍隊としての機能を

失ったのだ。

加えて、魔族自体の少なさがある。
勝っても戦死者が出れば、それだけで世論は沸騰するだろう。
我らの国から戦争や戦死者という言葉が消えて久しい。
下手をすると、数名の戦死者でも内閣が総辞職に追い込まれる可能性がある。

それに、大半の民衆は侵略や戦争に否定的だ。
人口減で放棄する土地が増えているのに、他国に侵攻してどうにかなるものでもないからだ。
今回の作戦も、法的根拠に問題があると騒いでいる民衆や識者もいるのだから。

「バーメル三級佐、たまに思うのだが、どうして私が指揮官なのだろうな？」

「……」

答え辛いようで、バーメル三級佐は無言のままだ。
俺も回答を期待していないから問題はない。

正直、こんな作戦には参加したくなかった。
大過なくすごせば、退職金と年金で……最近は少子高齢化が進んで支給年齢の引き上げ議論は出ているけど……。
まあ、生活するくらいはできるはずだ。

「青年軍属の連中、妙に魔法が上手い連中がいますからね」

「暇だからな……」

大昔、数万年前の魔族は、相手を従わせるのに力（魔法）でわからせる野蛮な社会を形成していた。
今は魔導技術が進み、社会の統治システムが洗練され、魔法バカは社会で疎まれる傾向にある。

それよりも、ちゃんと勉強をして、いい学校を出て、資格を取り、周囲の人達や友人とのコミュニケーション能力を磨いた方が就職には有利だ。
社会システムとインフラを維持する魔力は必要だが、これは魔導技術の進歩によって毎年必要な魔力量が減っている。

魔族は人間と違って、物心つけばある程度の魔力が身に付くので、そのくらいの魔力量で十分なのだ。
それよりも、ある程度の学力やスキルを身に付けないと就職できない。
身に付けても、若者の半分は就職できなくて社会問題化しているが。

そんな無職の若者達の一部には、暇潰しに魔法の修練に熱中する者がいた。
たまに社会への不満を解消のため町中で暴れる『キレた若者』もいるが、そういう連中はすぐに逮捕される。
防衛隊を含む治安維持組織には、まともで真面目でちゃんと就職できた魔法使いを一定数雇用して戦闘訓練を行っているからだ。

若者達も食えないわけでもないので、暴れる連中は滅多にいない。
マスコミがその少数を『社会の犠牲者』だと言って政府批判に利用するから、問題が大きく見えるだけだ。

「実は、私の弟も無職でして……。木から落ちる葉の数を数えるのは飽きたからと、魔法の練習をしていましたな。そんな事をしても、就職はできないのですが……。『両親に何とかならないのか？』と聞かれるのですが、私にコネなんてないですからね……」

バーメル三級佐の家も色々と大変なようだ。

「将官になればコネがあるのでしょうか？」

「いや、少なくとも私にはないな。うちの息子は民間に就職した」

幸いにして、うちの息子は何とかサラリーマンをしているが、酷い待遇で毎日疲れた顔をしている。

働かないというか、働けない若者。

数少ない求人には、『暗黒企業』と呼ばれる酷い待遇の会社も多い。

そこで追い詰められ、自殺したり鬱になる若者も多いので、無理に就職してもという若者も多く、それに年寄りが『昔の自分はもっと酷い待遇でも働いていた！　今の若者は！』と文句を言い、当の若者達には『ジジイの昔自慢』とバカにされている。

まあ、実は昔の方が待遇のいい企業が多かったのだが……。

ガムシャラに働かせる会社も多かったが、その分給料も高かったと亡くなった祖父が言っていたな。

そんなわけで、我が国ではここ数百年ほど不毛な言い争いが続いていた。

ジェネレーションギャップというやつであろう。

「だからといって、それら矛盾を誤魔化しで大陸に侵攻してもドツボだろうな」

「かえって、魔族の衰退を招くでしょうね……」

占領地を上手く統治できなければ、数少ない魔族は人間に寝首をかかれて大陸に屍を曝す可能性もある。

それがわかっているから、上の制服組はアホな政治家の言い分に四苦八苦しているのであろう。

「俺は制服組でなくてよかった……「大変です！　三名の脱走者が！」」

などと考えていると、そこに警備担当の二級佐が飛び込んでくる。

何と、監視の目を潜って三名の青年軍属が島の外に出てしまったらしい。

「しかし、どうやって？」

「海中です……」

『飛翔』で空を飛んで島を出れば、すぐに見付かって戻されてしまう。

そこで、『高速移動』と『水中呼吸』とを合わせた魔法で三名が島の外に出たというのだ。

「追跡をかけますか？」

「しかし、それを行うのは難しい……」

下手に船を動かせば、この島の周囲を警戒している人間達の船を刺激してしまう。

かといって、貴重な人員を魔法だけで追跡させるのは危険だ。

「三名が遭難でもすると、それも非難の対象になりますけど」

「あのバカ共め！」

私は眩暈を感じ、多分自分ほど不幸な指揮官はいないのであろうなと感じるのであった。

「ははははっ！　見つけたのである！　某達に獲られて食われるがいいわ！」

翌日、導師のせいで俺達は沖合に海猪ことクジラ・イルカ漁に出かける事となった。

他の漁船には通常通り漁をするように命令してから、一隻だけでもっと沖に出る。

「ヴェル、例のテラハレス諸島群に近づいたな」

「心配するな、なのである！　まだ全然遠いのである！」

エルの懸念を、導師が大声で否定する。

普通こういう場合は、若者の方が無茶をしようとしてそれを年配者が止めるものだが、うちではまるっきり逆であった。

「海猪ねぇ……」

俺にとってはクジラか。

商社員時代にクジラ料理専門店に連れ行ってもらった事もあるし、そういう商品も扱った事がある。
俺も美味しいとは思うのだが、如何せんタブーだと考えている人が多くて扱いに難儀する品物であった。
思ったほど儲からないし、他の肉があるのでそう売れる物でもないのだ。
これが悲しい事に、年配者でも『懐かしい』という人と、『今は美味しい物がこんなにあるのだから、無理して食べる必要はない』という人もいた。

クジラ食は文化かもしれないし、捕鯨禁止には欧米の思惑も存在している。
だが、食の多様化が進んで昔ほど重要視されなくなったのも事実であった。

この世界では、安定して獲れるようになれば商売になるかもしれない。

「ヴェル様、海猪は使える部分が多くてお得」

「そうなんだ」

ヴィルマによると、この世界でもクジラの油でランプを灯すらしい。
他の部位も色々な品の原料になるので、水揚げさえされればすぐに売れてしまうそうだ。

「テレーゼのところでは海猪は獲らないのか？」

「ミズホ人が銛を投げて獲っておるの。危険じゃし、そう量も獲れ

ないのでフィリップ公爵領の人間はあまり食べぬ。ミズホ人で好きな者が多いとかで、ミズホ領内だけで消費されてしまうと聞いたの」

ミズホ人は日本人に似ている。

だから、クジラやイルカをよく食べるのかもしれない。

「さてと、導師が満足するように頑張ろうかな」

「貴族の旦那、早速探索を開始するだ」

とはいっても、実際にクジラが見つからなければ意味がない。

操船を任された漁師は、船を動かしてクジラの群れを探す。

「貴族の旦那、あそこに！」

見つからない可能性もあったが、この世界のクジラはあまり人間に獲られていないためかかなりの数存在するようだ。

十数頭の群れが悠々と泳いでいるのが俺達にも見えた。

「それで、銛を撃つのよね？」

「そうなんだけど……」

当然、艦首に銛銃などついていないし、導師に任せると大魔法をぶっ放して消し炭にしてしまいそうなので、イーナにロープが付いた槍の投擲を任せる。

「結構距離があるわね……」

とは言いつつも、イーナは上手く魔力を篭めて槍を投擲し、無事

に命中させる事に成功した。
体に槍が刺さったクジラが暴れるが、そのロープを導師とヴィルマが自慢の怪力で引っ張る。

「ご馳走、逃がさない」

「おおっ！　いい引きである！」

普通の人間なら海に引きずり込まれると思うのだが、導師とヴィルマには余計な心配であった。

「ヴィルマ、ボクも手伝うよ」

「あたいも足しになるかわからないけど」

これに、魔力を篭めてパワーを増したルイーゼとカチヤも加わる。
槍が深く刺さったクジラは暴れるが、次第に船の近くに引き寄せられ、百メートルほどまで引き寄せられた時点で、俺が『雷撃』の魔法を放って気絶させた。

これは、あの『エリアスタン』の改良魔法である。
気絶したクジラに止めを刺すと、それは魔法の袋に仕舞われた。
さすがに船の上では解体できないので、それはあとで行う事にしたのだ。

「次は、某がやるのである！」

以上のような方法で、クジラ獲りを始めた。
導師は、槍が刺さったクジラを引くのも、魔法で止めを刺すのにも参加してとても楽しそうだ。

「大漁なのである！」

「持ち帰ってから漁師達に解体させて販売か」

「これだけの海猪が一度に揚がるのは珍しいですぜ」

それから半日ほど、クジラは順調に獲れた。

メンバー的に魔法という火力が過多なので、下手なベテラン漁師の団体でも相手にならないほど獲れるのだ。

「ただ、やっぱり魔法の袋がないと難しいかも……」

「仕舞う場所がありませんものね」

特にする事もないエリーゼは、試しにクジラの肉や油を使って船内で調理を始めた。

「汎用の魔法の袋は高いからなぁ……」

「ええ」

獲ったクジラを積むには大きな船がいる。

だが、普通の漁師がそんなに大きな船を準備するのは難しい。

小さい船だと獲ったクジラをロープで引っ張って港に戻らないと駄目だが、監視を怠るとサメに食われて商品価値が落ちてしまう。

サメなら船で引いているクジラが食べられるだけで済むが、海竜を呼び寄せてしまうと漁師まで危険に曝されてしまう。

体が大きいので金にはなるが、海竜や同じ大きさの魔物には負ける。

そんなに強くはないが、やはり地球のクジラよりは凶暴なので、生命の危険を感じると船に体当たりをする個体もいて、需要があるのに水揚げ量が少ないのには、そんな理由があったのだ。

「安定した捕鯨で食肉を確保すれば、殖産にも役に立つな。バウマイスター伯爵家でも研究させようかな」

「伯爵様、俺達は一応戦争に来ているんだぜ」

「とはいっても、ホールミア辺境伯は何も言ってこないじゃないですか」

なぜか魔族と交渉すら始まっていないので、特にやる事がない俺達は食料確保の名目で漁や釣りをしているのだから。

「もう十分だろう」

「貴族の旦那、遭難者です」

帰ろうとすると、監視をしていた漁師が遠方にイカダのようなものを見つけた。

俺も魔法の袋から取り出した双眼鏡で確認すると、海上に小さなイカダの上で休んでいる三人の男性を発見する。

「何でこんな場所に？」

「遭難した船の情報なんて聞いてないですぜ」

漁師はみんなギルドに所属しており、出航前に遭難した船の情報があればギルドから必ず知らされる。

注意喚起をしておけば、漁の最中に遭難した船や船員が見つかる事もあるからだ。

「テラハレス諸島群の監視を行っている小型漁船が遭難したのかの？　どのみち助けなければなるまい」

遭難者を救助するのは、海で船に乗っている者の義務である。

テレーゼにそう言われ、漁師は船をイカダに近づける。

だが、間近まで迫ったところで、彼らに長い耳がある事にみんな気がついてしまう。

「魔族か！　しかし、なぜ魔力で気がつかなかった？」

「ブランターク殿、連中は魔力切れのようである！」

さすがのブランタークさんも、魔族の魔力が切れていたせいでその存在に気がつけなかったようだ。

導師も不覚を取ったというような表情をしている。

「魔族ですか？　貴族の旦那ぁ……」

我々はアーネストがいるので多少の慣れがあったが、漁師達はそうもいかない。

風聞くらいしか聞いた事がない魔族を初めて見て、可哀想なくらいに怯え始める。

「まあ、落ち着け」

ここで変に怖がってしまうと、相手に警戒感を抱かせてしまう。

それに魔力が切れているのなら、今はそう警戒しなくても大丈夫だ。
俺は普通に彼らに話しかける。
「遭難か？」
「うん？　人間か。初めて見るな」
「本当だ、耳が短い」
「というか、本当にそれしか差がないんだな」
三人の若い男性魔族達は、ツナギに似た作業着のような服を着ていた。
俺達を見ても警戒すらせず、初めて見る人間に興味津々のようで、軍人などの類ではないようだ。
「魔力切れか？」
「ああ、休暇中に暇だから島の外に出てみたんだ。空を飛ぶと、人間達の船もあるから海中を進んで来たんだが、予想以上に魔力の消費が激しい。というわけで、休憩中」
「なら、休んで行かないか？　海猪漁を終えて試作の料理も作っているし」
「そうだな、せっかくだからご馳走になろうかな」
こちらの誘いを、魔族達は呆気ないほど簡単に受け入れた。
船内に案内して、エリーゼにマテ茶を出してもらう。

「この船、女の子比率高し！」

「羨ましいなぁ。俺達青年軍属なんて男と女が強制隔離されていてさ。これなら、家で本でも読んでいた方がマシだって。修学旅行かっての！」

「君、もしかしてモテモテ？」

三人の魔族は、背が高い痩せ型の青年がモール・クリント。背が低いガッチリとした体形の青年がラムル・アートン。丸坊主が特徴の青年が、サイラス・ヘクトル。

見た感じは、本当に普通の青年だ。

「俺は、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスターだ」

「ええと、お貴族様？」

「領地持ちの伯爵だ。今回の騒動で援軍として来ている」

「えっ？　漁をしているのに？」

モールは、援軍として来ているのにクジラ漁をしていた俺達を不思議そうな目で見る。

「しょうがないだろう。双方が交渉も始めないんだから。軍隊はいるだけ食料を消費するから、こうして食料確保の任務に勤しんでいるわけだ」

「軍隊って金食い虫らしいからね。うちの防衛隊も経費や補給で四苦八苦しているみたいだし」

「基地の建設資材の費用だけでもバカにならないだろう？」

「みたいだね。予算がないって四苦八苦しているみたいだから」

「防衛隊なんて、前から廃止しろって市民団体とかがうるさいしね」

何だろう？

モール達の話を聞いていると、日本を思い出すな。

「予算が厳しいのは、人間も魔族も同じさ」

「どちらも、同じような苦労があるわけだ」

やはり、彼らはド素人だ。

俺程度の誘導尋問にスラスラと答えてくれる。

「飯でも奢るよ。海猪の料理だけど」

「いいねえ」

「クジラを獲ると、環境保護団体がうるさいからなぁ」

「たまに漁師と無意味な激突をしているよね。新聞で見た」

魔族はクジラって言うんだな。

それにしても、この三人の発言を聞いていると、まるで地球に戻ってきたかのような感覚に陥る。

魔族の国とは、大分現代の日本に近い社会システムで運営されているようだ。
となると、やはり戦争になるのは危険だ。
まともに戦ったら、まず勝てないであろう。
それがわかっただけでも収穫か。

「（なあ、伯爵様）」

「（上手く世間話をして情報を集めましょう）」

「（特に毒になるような連中にも見えないのである。バウマイスター伯爵の方針に賛成である）」

一向に交渉が始まらない以上は、何とかそれを進めるために情報を集めるべきであろう。
俺がそう説明すると、ブランタークさんと導師も納得したようだ。

「（一応警戒するけど、彼らって素人よね……）」

結果的に内乱を潜り抜けて素人ではなくなってしまったイーナからすると、モール達が何か特殊な工作や攻撃をするとは思えないらしい。
それでも、一応一人では魔族と接しないようにとエリーゼ達に提案して受け入れられた。

「全員奥さん！」

「みんな子持ち！」

「未婚の男性と二人きりにならない！　そんな慎ましい女性、うちの国では滅んでいるぞ！」

彼らが気分を悪くしないように、エリーゼ達は夫がある身なので他の男性とは二人きりにならないと言うと、モール達は驚きの声をあげた。

「いいなぁ……バウマイスター伯爵。究極の勝ち組じゃないか」

「それなりに苦労はあるのよ」

「それは、人間も魔族も一緒でしょう」

そこに、料理を持ってエリーゼ達が姿を見せる。

実験的に作った、クジラの刺身、鍋、龍田揚げ、串カツ、煮物、焼き肉などが出され、彼らはそれを美味しそうに食べた。

「女の子の手料理最高！」

「うちの国だと料理もできない女が多いからな」

「料理は腕前っていうけど、やっぱり女の子が作ると違うな」

モール達は大喜びで料理を食べ続ける。

「ねえ、島の外に出るのに食料は？」

「万が一に供えて準備はしてあるよ」

荷物持ちをしているラムルは、背負っていたリュックからレトル

トパウチと缶詰を取り出してルイーゼに見せた。
やはり魔族の国は、日本にとてもよく似ていると思う。

「これを食べるの？　銀色だけど」

ルイーゼは、缶詰とレトルトパックをどうやって食べるのかわからないようだ。
手に持って首を傾げている。

「中身を開けるんだよ、ルイーゼちゃん」

「凄いねぇ……金属の容器に料理が入っているなんて」

ラムルは、試しにいくつかの缶詰を持っていた缶切りで開ける。
ビーフシチュー、グラタン、ピクルスに、何とパンの缶詰もあった。

「パンが魔法の袋もなしに保存できるんだ。でも、なんで魔法の袋を使わないの？」

「大人の事情だってさ」

ラムルの説明によると、魔族の国は食料が余っているらしい。

「その状況で、魔法の袋で食料を保存したら余計に食料が余るじゃない。農家、畜産家、漁師、食品メーカー、飲食店では使用禁止だね。防衛隊は、普段は調理担当の人員がいるけど、これは万が一のための非常食だから」

「魔法の袋の使用禁止なんて徹底できるの？」

「魔道具の探知機器があるから、農林水産省の役人が定期的に調査している。たまに経営が厳しい飲食店が使って捕まるくらいかな？」

「食料が余っているなんて夢のようだね」

「そうかな？　食品関連の仕事なんてワープアと失業の板挟みだからなぁ。よほどの大手でもないと」

食料価格の下落を補助金で補てんし、それは税金から出ている。沢山作れればいいというものでもないとラムルは語る。

「クジラは初めて食べたけど、美味しいものだね」

「調理がいいんだよ」

「ありがとうございます」

ラムルに料理の腕を褒められて、エリーゼはお礼を言った。

「バウマイスター伯爵の奥さん、美少女ばかりで羨ましい！」

食後、デザートやお茶を楽しみながら話を続ける。

とにかく、どんな世間話でも重要な情報になるからだ。

彼らから話を聞くと、魔族の国は長年争いも無く平和だが、少子高齢化で徐々に人口が減っている状態だそうだ。

政治は国権党と民権党の二大政党に、他の小規模政党も加えて選挙で政治家を選ぶ民主主義。

魔導技術は王国と帝国を圧倒しているが、平和な時間が長かった

せいか思ったよりも軍事技術が進んでいない。

ただし、普通に魔銃や魔砲は配備されている。

魔導飛行船などは、魔族のものが防御力と機動力、火力で人間のものを圧倒しており、リンガイアでも歯が立たない。

魔族はみんな魔法使いなので、その気になれば大陸征服も可能かもしれない事実などがわかった。

つまり、長年戦争がないせいで平和ボケだが、怒らせれば人間の国は滅亡してしまう可能性があるという事だ。

「聞かなきゃよかった」

「ですわね」

ヴィルマとカタリーナの本音に、みんが心の中で首を縦に振る。

同じような話はアーネストから聞いていたのだが、これで情報の信頼度が増した結果となった。

「でも、魔族の大半は戦争なんて嫌だと思うよ」

「そうなの？」

「いくら若者に仕事が増えるかもと、大企業や政治家がマスコミを使って煽っても、青年軍属達を見るに非正規で使い捨てでしょう？別に生活できないわけでもないし」

「国権党だろうが、民権党だろうが、失業率の改善なんてそう簡単にできないし。みんな、結構冷めた目で見ているね」

「何というか、覇気のない連中じゃの」

「とはいってもね。戦争大好きで、占領地の人間は搾取の対象、逆らえば皆殺しの魔族とか嬉しい？」

「そういうのは、何万年も前に終わっているから」

「そうそう、昔の文献に出てくる魔族とか頭がおかしいし！」

よくも悪くも覇気のない三人に、元フィリップ公爵であるテレーゼは色々と思うところがあるようだ。

俺だけは、この三人に好感が持てた。

魔族だからと世界征服でも目指されてしまうと、俺の安定した生活……まあ安定している事にしよう……がなくなってしまう。

あと、こいつらって現代日本人にメンタルが似ていて付き合いやすい。

「魔族の国の事はわかったけどよ。何で交渉を始めないんだ？」

「うちの国は、政権交代したばかりだからね」

「はあ？　政権が交替しただけで、どうして外交交渉が始められないんだよ？」

ブランタークさんは、サイラスが言っている事が理解できないようだ。

「元々、我らの国には外交を担当する部署なんてないし、久しぶり

に政権交代で民権党が政権を獲ったけど、あの連中は実行力がないから」

「何でそんな連中が選挙に勝てるんだよ……」

民主主義を知らないブランタークさんからすると、完全選挙というシステムが理解できないのであろう。

そしてその弊害も……。

「でも、選挙は四年に一度はあるからバカはすぐにメッキが剥げて選挙に負けるから。こういうと失礼かもしれないけど、一旦跡を継いだ貴族家の当主や王様が無能だと、何十年も祟るでしょう？」

「あんまり酷いと、家臣達が押し込めるパターンもあるけどな」

政治制度のよし悪しは、まあ言い合ってもキリがないのが常識だ。どちらも、トップが優秀でなければ機能しない点は同じなのだから。

「伯爵様はどう思うんだ？」

「えっ？　どっちも運用する人次第だと思います。一長一短があると思いますけど」

どんな政治制度でも構わないと思うが、問題は他の国の政治制度にケチをつけて介入する事かもしれない。

その余計なお世話のせいで、戦争になって多くの犠牲が出たら意味がないからだ。

「伯爵様って、案外政治家向きか？」

「そんなわけがないでしょうが」

前世の影響で多少はそういう知識あるだけだ。

そんな聞きかじり程度の知識で政治に関わっても碌な事にならない。

それこそ、三人がその能力を疑っている民権党の連中と同じになってしまう。

「なかなかに面白い話を聞けてよかったよ。おかげで助かった」

あえて積極的に交渉に乗り出そうとは思わないが、情報があるのは何かと有利だ。

まあ、王家やホールミア辺境伯を差し置いて、俺が出しゃばるのもどうかとも思うから、あくまでも参考にするだけだ。

「では、気をつけて帰ってくれ」

「えっ？　俺は帰らないよ」

「俺も」

「どうせ向こうに戻ってもつまらないし」

「はあ？」

三人は抜け出して来たテラハレス諸島群に戻らないと言い、俺達を困惑の渦に陥れる。

「いやいや、戻らないでどうするよ？」

「バウマイスター伯爵って何かＶＩＰぽいし、観光も兼ねてお世話になろうと思うんだ」

モール達は、このまま基地に戻ってもつまらない建設作業で退屈なので、俺達についてくと宣言した。

「戻らないと、金が出ないんじゃないのか？」

「別にそこまで金に困ってもいないしね。日当と常識的な遊興費を出してくれれば、大陸側でも全然構わないし」

「親に言われて青年軍属に参加したけど、あそこは碌なものじゃないからね」

「情報ならもっと提供するから、暫く置いてよ。適当なところで戻るから」

「……」

所属する国家や同朋への忠誠心の欠片もない三人に、導師ですら絶句していた。

俺は、この三人の考え方が理解できてしまうのだけど。

「そうそう、バウマイスター伯爵は知っている？　青年軍属の日当って、六千四百エーンなんだよ。そこから税金とか健康保険とか年金とか引かれるし」

「ワープア以外の何ものでもないから」

あくまでも若年者失業率を一時的に下げるためだけのものなので、その待遇はよくはないそうだ。
ただ、エーンという単位が円と同じだとして、衣食住は無料なのでそこまで悪くないのか？

でも、非正規だろうからな。
元社畜のカテゴリーに入る俺だが、それでも正社員だったからなぁ……。
青年軍属よりはマシだったのだ。

「今回の出兵が終われば、俺達はまた無職だから。完全に使い捨て」

「そうなんだ……」

俺は、前世の日本に戻ったかのような懐かしさと虚しさを同時に感じてしまう。
そういえば、この世界に飛ばされる前に中学時代の同窓会に出たけど、フリーターとか派遣で生活している同級生は多かった。
どの世界でも、若者が生きていくのは大変というわけだ。

「六千四百エーンがどのくらいの価値かは知らないけど、金貨か銀貨なら換金可能か？」

「大丈夫、金なら町のリサイクルショップで換金してくれるから」

魔族の国なのに、なぜか現代日本に似ているという現実に、俺は内心で暫く考え込んでしまうのであった。

「あっ、先生がいる」

「先生って生きていたんですね。新聞の報道だと、僻地に遺跡探索に行って遭難死した可能性が高いって」

「先生、やっぱり職がないです」

結局、海で拾ったモール達は付いてきてしまった。

あまり公にもできないので耳を隠させ、小型魔導飛行船内で生活させる事にしたのだが、一応仲間もいるとアーネストを『瞬間移動』で連れて来た。

すると、意外な事にモール達とアーネストは知り合いであったのだ。

「知り合いなのか？」

「そうなのであるな。我が輩は、この大陸に渡る前はある大学の教授をしていたのであるな。その時にゼミに参加していたのがこの三人なのであるな」

「そんな高等教育を受けているのに無職なのですか？」

「奥方、教育が進みすぎるのも弊害があるのであるな。高学歴の人間を配置できるポストに限りがあり、それを目指して来た連中に通常の職を斡旋しても断ってしまう。我が国では、雇用のミスマッチと言っているのであるな」

「魔族の国も大変なのですね」

王国や帝国で、大学といえばアカデミーが数校ずつしかなかった。厳しい選抜試験があり、そこを卒業できればまず職に困る事などない。

エリーゼからすれば、大学を出て無職という三人の存在が信じられないのだ。

「しかし、我がゼミの生徒はみんな無職なのであるか？」

「いいえ。デミトルは役人の試験に受かりましたし、ホルストは考古学とは何も関係ない会社に入社しました。ミアンは田舎で自給自足の生活をしています」

「考古学、関係ないじゃん……」

アーネストの専門は考古学である。

それなのに、その教え子が一人も考古学関連の仕事をしていない。王国ではまずあり得ないので、エルも驚きを隠せないでいた。

「嘆かわしいのであるな。古代の英知を知る考古学こそ至高の学問なのであるが……」

「考古学じゃ、飯は食えませんって」

「第一、先生って企業とかに全然コネないし」

「大学で講師になるのですら狭き門ですからね。俺達に用事なんてありませんって」

アーネストは優れた考古学者だ。

それでも勝手に講師や助教授を増やせないし、考古学は就職には

不利で、研究ですら国の予算待ちなのだが、最近は予算削減の波で碌な発掘もできなかったらしい。

「だからこそ、我が輩は新たな遺跡とスポンサーを求めてこの大陸へと来たのであるな」

それでニュルンベルク公爵に協力してしまうのだから、彼は根っからの学者なのであろう。

正義感や倫理観よりも、まずは研究というわけだ。

「先生、よく密出国できましたね」

「骨折りではあったが、我が輩は魔力が多いのであるな」

海中を進む事で沿岸や領海を警備する防衛隊の目を掻い潜り、あとは『飛翔』で大陸目指して飛んだそうだ。

勿論、一日では無理なので海上で何泊かしていると語る。

魔導飛行船にも乗らず、単身地球でいうところの大西洋横断を行ったに等しく、さすがは魔力量が莫大な魔族とも言えた。

「我が輩がいない数年で、故郷に何か変化があったのであるな？」

「大した事はないですけど、国権党が選挙に負けたくらい？」

「それのみとは、退屈の極みであるな」

「そのせいで、青年軍属に応募できて先生に再会できたとも言えますけどね」

「民権党であるか？　大学の自治組織で騒いでた連中であろう？

あのアンポンタンどもは大学でまったく勉強しないから困るのであるな」

元々政治に興味などないアーネストは、元教え子達の故郷報告にもあまり興味がないようだ。

それと、新政権に所属する連中に好意的な感情を持っていなかった。

「とはいえ、両国が戦争にでもなると遺跡発掘に影響が出るかもしれないのであるな。バウマイスター伯爵、善処を期待するのであるな」

「何で俺よ？」

「伯爵様なのだから、ノブレス・オブリージュを率先して行うのであるな」

「この野郎……」

「バウマイスター伯爵が何もしないでも、我が輩の報告なら、国王陛下の目に留まるのであるな」

「……」

やっぱり、こんな奴を連れて来なければよかった。

アーネストのせいで、俺達は再び戦争に巻き込まれる確率が上がってしまうのであった。

『お館様、戦争が嫌なのなら、ここで踏ん張りませんと』

「俺、結構頑張ってるよ。主に釣りにだけど」

『どのみち従軍しているのです。魔族との戦争に巻き込まれるよりはマシでしょうから、王宮に情報を流すくらいしてみたらいかがです？』

「ああ、面倒だなぁ……」

俺は、携帯魔導通信機越しのローデリヒに溜息をつく。

居候魔族が四人に増え、おかげである程度状況は見えてきたが問題は山積みだ。

まず、魔族の国は誰が外交交渉をするかで揉めているらしい。

国内には、リンガイア大陸に進出、侵略して魔族の国の停滞感を何とかしようという動きもある。

加えて、リンガイアは先に領空を出るようにと忠告した防衛隊の艦船に魔法を放ったそうだ。

『船長の責任は逃れられないとして、誰が魔法を撃たせたのですか？』

「情報によると、副長の貴族のボンボンだってさ」

『あのとても残念なお方のご子息ですか……』

「ローデリヒはよく知っているんだな」

『そこは、蛇の道は蛇と申しましょうか……』

いつの間にかローデリヒは、王宮から情報を得るルートを開拓していたようだ。

あのプラッテ伯爵家の息子が残念な人物なのを知っていた。

ルックナー財務卿からのルートであろうか？

「何か、向こうの新聞に大きく載ったらしいよ」

ところが魔法は大した威力でもなく、魔族の国の魔導飛行船は装甲が固い。

まったく効果がなかったが、それでも攻撃は攻撃だ。

反撃されて拿捕されてしまったそうだ。

これらすべて、モール達からの情報であったが。

記事によるとその副長プラッテ伯爵家の御曹司は、取り調べの場で『自分は次期プラッテ伯爵なのだから、それに相応しい待遇を！』と我儘を言い、取り調べをした担当者を困らせているそうだ。

「『血筋だけで貴族になった我儘息子の火遊び』と、魔族の国の新聞では非難しているそうだ」

『順当な評価ですな』

同じ王国貴族なのだが、まったく擁護できない。

俺は息子の方を知らないが、親であるプラッテ伯爵が大嫌いなので助ける気持ちが微塵も湧かなかった。

まあ、日本で同じ事があってもそう新聞に書かれると思う。
特権を持つ我侭で傲慢な貴族なんて、マスコミからすれば格好の攻撃材料だからだ。

「ただ、これをそのまま陛下に伝えても意味ないよね？」

『ですね……』

それが事実だという決定的な証拠がない。
魔族が、ヘルムート王国を陥れるために仕掛けた罠だと言われればそれまでだ。

「実際にそう言いそうだからな」

特に、主戦論を煽っているプラッテ伯爵などは。
まさか、今さら『うちの息子が悪いんです』とは口が割けても言えない。
王国貴族の中には、何とか魔族の住む大陸に侵攻できないかと考えている者も少なくはない。
下手をすると、俺が魔族の手先だと疑われて攻撃される可能性もあるのだ。

『こうなると、魔族の国の実務者が決まっていなくて助かりましたな』

「それで、バウマイスター伯爵はどういう風にしたいのであるかな？」

「現状維持でしょうね」

魔族がテラハレス諸島群から空中艦隊を撤退させ、王国はプラッテ伯爵家のボンボンがリンガイア拿捕事件の責任者なら公式に謝って公平な通商条約を結ぶ。
ただし、言うは易し行うは難しである。

「バウマイスター伯爵、どうするのである？」

「やっぱり面倒だから、全部事情を陛下に話しましょう！」

そう導師に宣言すると、俺達は急ぎ王宮へ『瞬間移動』で向かう。
アーネストとモール達も耳を隠して同行したが、事前に導師が陛下に連絡を取ったので兵達は何も詮索しなかった。

「バウマイスター伯爵は、相変わらず豪運なのか悪運なのかというところじゃの」

今回は、閣僚すらいない状態で謁見を行っていた。
導師が陛下の護衛に入るので認められる、滅多にない事だ。

「我らとて、別に遊んでいたわけではないのだ」

外務卿を団長とする外交団を送り出したのはいいが、何も進んでいない。
外交団の一行は魔族艦隊旗艦に留められ、王宮への通信は可能であったが、毎日『もう少し待ってくれ』としか言われていないそうだ。

「魔族の国は一体どうなっておるのだ？」

アーネストからの情報は定期的に受けていたが、いくら政体が違

うとはいえ交渉すら始まらないのは困ってしまうと陛下が言う。

「それはですね……」

モール達からの情報に、陛下は溜息をつく。

彼は、耳を隠した魔族四人にあまり興味を持たなかった。

それどころではないのと、四人は所詮政治家ではないのだ。

気にしていたのは、今まで魔族の情報を教えてくれたアーネストくらいであろう。

あまり騒ぐと他の貴族達に知られるので、わざと興味がないフリをしているかもしれなかったが。

「政権が交替した直後で混乱？　まあ、王国でも過去にないわけでもないの」

王と閣僚の交代が重なって政治が混乱し、当時帝国と戦争をしていたのになかなか停戦交渉が始まらなかった。

過去にはそんな事もあったようだ。

「しかし、困ったの」

西部は限界まで動員を行い、王国軍も一部兵力と空軍を、うちのように魔法使いや荷駄などを送っている貴族もいて、何もしていないのに資金と物資を食い潰していく。

せっかく帝国が内乱で疲弊して、これから王国の開発に増々力を入れようとした矢先であった。

陛下からすれば、今度は王国を襲った悪夢なのであろう。

「とはいえ、ここでバウマイスター伯爵を交渉に送り出しても意味

がないの」

最初の交渉団と同じく待機させられるであろうし、外務卿達はいい顔をしないであろう。

俺は外務閥ではないので、あきらかに彼らの職権を侵しているのだから。

「新たな情報はありがたかったが、困ったのぉ……」

などと話をしていた翌日、ようやく話が動いたそうだ。

魔族の国から新しい魔導飛行船がテラハレス諸島群に到着し、そこにようやく政府からの交渉団が乗っていたらしい。

王国の交渉団から、速やかに交渉を始めると連絡が入った。

「何か、嫌な予感がするけど……」

「ヴェルがそう思うと、結構当たるのよね。交渉で揉めるとか？」

イーナも心配そうな表情をするが、今の俺達には何もできない。

朝起きて各種修練を行い、赤ん坊の世話を見つつ、今日は俺達だけ漁を休んでサイリウスの町の観光をしていた。

「異国情緒溢れるねぇ……」

「せっかくだから、何か特産品でも食べよう」

「両親へのお土産、何にしようかな？」

モール達のためであるが、彼らは初の外国旅行を心から楽しんでいる。

「我が元教え子達よ。昼は何を食べるのか考えたのであるかな？」

「港町といえば魚介でしょう！」

「他にも何かあるかもしれない」

「そして、それは先生の奢りで」

「まあ、別に構わないのであるが」

孤高の天才に見えるアーネストであったが、元教え子達との再会を満更でもないと思っているようだ。

食事やお土産代などを出してあげていた。

「先生、金持ちですね」

「まっとうな成果をあげているので、バウマイスター伯爵から支給されるのである」

既に多くの地下遺跡を発掘し、多くの発掘品を得ているので、それに見合った報酬は渡している。

アーネストは研究バカだが、スポンサーにちゃんと利益を供与する事も忘れない。

あのニュルンベルク公爵とつき合えていたのだから、そういう配慮はできる人物なのだ。

普段は書斎に籠っているためお金はほとんど使わないが、こういう時には大盤振る舞いをする柔軟さもあるようだ。

「これで、女の子がいたらなぁ……」

「いるじゃないか。みんな可愛いし」

「可愛くても、みんな人妻という点がねぇ……」

ハルカはエルの奥さんで、あとはみんな俺の奥さんである。

魔族も人間と大差ないので、色々と思うところがあるのかもしれない。

「別に一人でも問題ないのであるな」

「そりゃあ、先生は研究が恋人みたいなものでしょうから……」

「俺達も、恋人くらい欲しいですよ」

「結婚は……金がないですからね」

魔族の国は一夫一婦制で、若者の婚姻率が徐々に下がっているらしい。

結婚できない若者が徐々に増えており、モール達も彼女くらいは欲しいと思っているのであろう。

町中を歩く若い女性に度々視線が向かっていた。

「よくよく考えたら、無職に彼女は難しいか」

「物凄いイケメンとかならあるかもしれないけどな。ヒモにでもなるか？」

「俺達のどこにイケメンの要素があるよ？　あと、ヒモは意外と大変だと聞くぞ」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

モール達のあんまりな会話に、エリーゼ達は何も言えなかった。

「みなさん、独身なのですか？」

「俺らの年代だと、九十パーセント以上は独身だよ」

「みなさんは、おいくつなのですか？」

「俺は五十四歳、ラムルとサイラスは五十三歳だね」

ハルカの質問にモールが答えた。

魔族は人間の三倍近く生きるので、人間に換算すると十八～二十歳くらいか。

俺達とさほど年齢に差がないように見えるわけだ。

「五十歳をすぎるまで学生さんなのですか？」

「そうだよ。魔族って長生きでしょう？　あとは、職もないから」

義務教育が二十七年、その上の高等教育が九年、大学十二年、大学院は六年から十二年もあるらしい。

「そんなに習う事があるのですか？」

「いいや、学生なら無職を糊塗できるからだね」

いくら魔族でも、そんなに長期間学校に行く必然性がない。

ただ、必要な教育期間だけで世間に出すと無職が増えるので、長々学生をやらせているだけのようだ。

「長いモラトリアムだな」

「バウマイスター伯爵は難しい言葉を知っているな」

「そうなんだよ。学校なんて週に二～三日しかないし」

「たまに行くのを忘れたりな」

「それでも進級は楽だし、アルバイトで時間を潰せるのもいいね」

モール達は笑っているが、長く生きる魔族にもそれなりに悩みはあるようだ。

「魔法使いなのに……」

「ヴィルマさん、人間では魔法使いは珍しいけど、魔族は全員だからね」

「余るのが多いわけ」

もし魔族でなければ、彼らなどあっという間に仕官可能なのにと思ってしまう。

「そんな厳しい現実を忘れ、今は観光を楽しみましょう！」

その日は楽しく観光をしたのだが、家代わりの魔導飛行船に戻ると、そこには王宮からの使者とホールミア辺境伯家の家臣がいた。

何か急用があるようだ。
何だか、嫌な予感がする。

「何事です？」

「陛下からの勅命です。本日初の交渉を行うも、双方相違点どころか交渉の継続すら怪しい。バウマイスター伯爵殿は至急テラハレス諸島群へと向かうべし」

魔法しか能がない俺に、外交の仕事が与えられた。
無事に任務をまっとうできるのか、俺は不安に苛まれそうになるのであった。

八男×銭同時発売記念コラボSS「ヴェンデリン、奮闘す！」もし彼らが別の世界に飛ばされていたら。

「ヴェンデリン！　お前はまさか、俺の命令を拒否などしないよな？」

「はい」

「素直なのはいい事だ。我がバウマイスター騎士爵家諸侯軍に加わり、俺の指揮で戦うのだ！」

語り死人であった師匠から魔法の特訓を受け、これからも魔法の修行に励まなければいけないなと思った直後、俺は……いや、俺達はか……思わぬアクシデントに襲われた。

バウマイスター騎士爵領があるリンガイア大陸南端部、ここにはバウマイスター騎士爵家の人間以外いないと聞いていたのだが、突然別の貴族領があったと兄から言われたのだ。

無人の未開地から、突然貴族の領地が湧くわけがない。

ヘルムート王国から移民してくるはずはなく、多分南端海岸から上陸して入植してきたのであろう。

先代ブライヒレーダー辺境伯による魔の森侵攻作戦以来、誰も未開地の様子なんて見に行っていない。

だから、彼らの上陸に気がつかなかったのだ。

そして、我がバウマイスター騎士爵家と、謎の勢力とのファーストコンタクトが行われようとしている。

ただ、クルトは友好的に話し合いでなどとは考えていない。

彼からすれば、北上してくる連中は侵略者でしかないのだから。

「クルト兄さん、その未開地に入植している連中の詳細は？」

「知らん！　だが、未開地は我らバウマイスター騎士爵家の物だ！　侵略者に鉄槌を下さねばなるまい！」

「それで戦力は？　我らだけで勝てるのですか？」

侵略者との戦いということで、クルトは妙に張り切っている。

貴族としては間違いなく最下層にいると断言できる我が家が、今初めて貴族らしい事をする。

その高揚感で、長男クルトは周りが何も見えていなかった。

あとひと月もせず王都に向かう予定だったエーリッヒ兄さん達も急遽諸侯軍に参加し、頭のいい彼はクルトの参謀役に落ち着いた。

名主であるクラウスにも同じような役割を割り振られたが、クルトは二人とも大嫌いなようで、その忠告をことごとく否定した。

相手の戦力を探るために偵察をしようと言っても、少ない戦力が分散されるので駄目。

どうせ単純に防衛を行えばいいのだから無駄だと抜かした。

「お前ら！　我らに降伏などあり得ないのだ！　ここは一旦敵の攻撃を防衛で防ぎ、戦況に応じて逆襲。奴らの入植地を奪えば、我らバウマイスター騎士爵家の躍進に繋がるのだぞ！」

いや、そう上手くいえばいいけど。

というか、広大な未開地の北端バウマイスター騎士爵領付近まで北上してきた敵が、うちの兵力以下なんてまずあり得ない。

そんな事は、子供にでも理解できるはずだ。

「多少の兵力差など、ヴェンデリンの魔法で何とでもなる！　父上

もブライヒレーダー辺境伯に援軍を要請しに向かった！　我らは必ず勝てるのだ！」

そう、なぜクルトが偉そうに命令しているのかといえば、父がブライヒレーダー辺境伯に援軍を要請しに行っているからだ。

『なぜ本来陣頭に立たなければならない父が？』と思ってしまうが、ここにバウマイスター騎士爵家の悲しい現実があった。

ブライヒレーダー辺境伯家の人間が知っているバウマイスター騎士爵家の人間が、父とクラウスくらいなのだ。

クルトが援軍の要請に行っても、最悪誰かわからないなんて事もあり得た。

下手をすると、偽物扱いで相手にされないかもしれない。

そんな理由でクルトが軍勢の指揮を執っていたが、父の選択は間違っていると思う。

多分、クルト以外の全員が思っているであろう。

「あのう……この場合、ヴェンデリン様が援軍の要請に向かった方が早いのでは？」

特にクラウスなど、絶対に心の中でクルトをバカにしているはずだ。

俺が『飛翔』の魔法で援軍を呼びに行った方が確実に早い。

そんな子供にもでもわかる事を、父もクルトも行えなかったのだから。

まあ、父の場合はこの領地で最大戦力である俺がいなくなると、領民達がパニックを起こすと予想したから、という理由もあったのかもしれない。

それにしても、まだ六歳の俺が最大戦力って……。

「ヴェンデリンが援軍を呼びに行く？　ふんっ！　臆病風を吹かせて逃げたらどうするのだ？」

残念な事に、クルトは俺を疑っているわけだ。

今までほとんど接触がなかったが、とことん非常時の当主としては向かない男のようだ。

どこの世界に、一番の責任者が部下を信用していないとみんなの前で公言するというのか。

戦う前から、バウマイスター騎士爵家諸侯軍は機能していなかった。

「現実問題として、お館様がブライヒレーダー辺境伯領まで到着するには時間がかかります。その間、敵の侵攻を防げるのですか？」

「もし戦況が不利になれば、森に逃げ込んで抵抗すればいい。いいか、我がヘルムート王国の領地が敵国の侵略を受けたのだ。必ずや、王国が援軍を寄越すであろう」

エーリッヒ兄さんの問いに、クルトは能天気に回答した。

時間はかかるが、王国が援軍を寄越す可能性は高い。

それまでに、バウマイスター騎士爵領が完全占領されていない保証はないが。

それにしても、クルトは本当に非常時には役に立たない男のようだな。

お前は大本営の頭でっかちの参謀か？

いや、彼らほど勉強もできないか……。

森に逃げ込むって、我が家の占有森でも熊や猪は領民達にとって脅威なんだぞ。

第一、非常時に備えて何か森の中に準備がしてあるのか？
女、子供、年寄りを森の中で野宿させる。
それも、王国軍が来るまでの長期間だ。
確実に病気になったり死ぬ者も出てくるであろう。
そして、八百人もの領民達に食を与え、敵軍からの探索を誤魔化せる森など存在しなかった。

「それならば、領民達は一度降伏した方がいいのでは？　少数の諸侯軍のみで森に潜伏し、王国からの援軍と共に決起してバウマイスター騎士爵領を奪還すれば……」

「そんな卑怯者の戦法が取れるか！　子供がしたり顔で下らぬ策を抜かすな！」

突然、俺はクルトに張り倒されて地面に倒れてしまった。
まだ体が子供なので、彼の咄嗟の暴力に対抗できなかったのだ。

口の中を切ったようで、血の味がする。
それにしても、いきなり殴るのはないよな。
俺とあんたは、そこまで縁があったわけでもないのに。

「ヴェル！　クルト兄さん！　ヴェルは幼いながらも、領民達の安全を願ってこの策を提案したのですよ！」

「クルト様、ヴェンデリン様の策でしたら、敵軍の補給に負担を与える事も可能です。彼らは、我らの反抗を怖れて搾取などは行わない可能性もあります」

倒れた俺を、すぐにエーリッヒ兄さんが起こしてくれた。
というか、この状況ならとっとと降伏した方がマシだと思う。

向こうに犠牲が出ない内に降伏すれば、敵による略奪なども防げるかもしれないのだから。

こんな中世ヨーロッパ風の世界だから保証はできないが、下手に抵抗して犠牲が出たら最悪皆殺しだ。

本当は俺だけで逃げ出してもいいが、残される領民達やエーリッヒ兄さん達を思うと罪悪感も出てしまう。

「我らバウマイスター騎士爵家は、今ヘルムート王国の先駆けとして、この謎の敵に当たろうとしているのだ！　例え多くの犠牲が出ようと、最後まで徹底抗戦しなければいけない！」

まあ、お前はその犠牲の中に入らないんだろうがな。

「ならよ。まずは敵戦力の把握だ。偵察は必要に決まっているだろうが」

「ヘルマン！　俺に意見か？」

「意見とかそういう問題以前の、軍事の常識なんだがな」

「仕方がない！　ヴェンデリン、偵察して来い！」

人間、切羽詰まった時に本性が現れるという。

普段は父の言う事をよく聞く凡人クルトは、口では勇ましい事を言っても自分で何かをするわけではなかった。

父の名代として怒鳴っているだけだ。

本当は怖いのを隠すため、余計に怒鳴っているようにも見える。

まあ、実際に接する側としては迷惑でしかなかったけど。

急遽編成した諸侯軍も、全体的な指揮は兄弟の中で一番体が大きくて威厳もあり、普段から少数ながら警らや害獣の駆除を指揮しているヘルマン兄さんに、その下でパウル兄さんとヘルムート兄さんが補佐を行い、エーリッヒ兄さんは参謀兼軍政官のような役割をしていた。

ここに名主のクラウスと、俺達の異母兄弟も諸侯軍に参加して補佐を行っている。

クルトは父の名代なので一番偉いはずなのだが、俺をぶん殴った時点でただのお飾りになった。

誰もが、こいつに従って死ぬのは嫌だと思ったからだ。

クルトの勇ましい抵抗宣言も、彼に軍人として、バウマイスター騎士爵家の跡取りとしての実績がないので、従う者は少ないであろう。

どうもこいつ、人を犠牲にして自分は生き残り、あとで援軍に来た王国に対し自分の功績を誇ろうとしている節があったからだ。

彼がそういう裏の本音を見抜かれない器量を持った人物ならよかったのだが、最悪な事に父は選択を誤ったと、クルト以外の全員が思っているはずだ。

「どうした？　早く行け！」

まだ魔法を習いたてとはいえ、俺はバウマイスター騎士爵家の最大戦力だ。

『飛翔』を使えば、敵軍の偵察も容易いと思われているのであろう。

「行ってきます」

これ以上こいつの顔を見ていると不快なので、俺は習いたての『飛翔』で南方に飛んだ。

バウマイスター騎士爵領から南に二十キロほどの平原、ここに謎の敵の軍勢が陣地を築いていた。

「敵軍の数……それがわかるようになるのも、ちゃんと教育を受けてからだよなぁ……」

敵に見つからないように軍勢の数を数えてみるが、生憎と俺は軍人をした経験がなかった。

数千人……もしくは一万人を超えるか？

どちらにしても、バウマイスター騎士爵家諸侯軍なら一撃で粉砕されるであろう。

これは、降伏も視野に入れないといけないな……などと思っていたら、どうやら敵に見つかってしまったようだ。

俺の魔力の隠蔽が、まだ未熟なせいであろう。

敵陣地から一人のローブ姿の中年男性が、『飛翔』でこちらに飛んでくる。

あの規模の軍勢だ。

魔法使いは貴重だが、いないわけがない。

「子供？」

俺の姿を確認した魔法使いは、俺が子供なので警戒を解いてしまった。

それにしてもこの魔法使い、体は大きめだがあきらかに日本人だよな？

おっと、今はそれどころじゃない。
逃げられるか怪しいところであったが、向こうは俺が子供なので油断しているのは幸運であった。
いくらベテランそうに見えても、油断すれば意味がない。

『ヴェル、油断はどんな強者でも一瞬で弱者に変える』

師匠の言葉を思い出し、俺は拳に『魔法障壁』を集中させて敵魔法使いの懐に飛び込んだ。
彼も『魔法障壁』を展開していたが、どうやら魔力量では俺に勝算があるようだ。
拳に集中させた一撃で、敵魔法使いの『魔法障壁』を叩き壊した。

「バカな！　その年で俺よりも！」

「隙あり！」

続けて『魔法障壁』が壊された敵魔法使いの懐に飛び込み、鳩尾の部分で風魔法を展開する。
さすがに元平成日本人に人殺しは躊躇われ、軽くダメージを与えながら吹き飛ばすに留めた。

鳩尾に一撃加えたので、吹き飛ばされた敵魔法使いは膝をつき、その場で動けなくなってしまう。

「今だ！」

敵魔法使いが動けるようになる前に、俺は急ぎ『飛翔』でバウマイスター騎士爵領へと逃げ出すのであった。

「陛下、奥方様、宰相様、思わぬ不覚を取りました。申し訳ございません」

「まあ、無事だったからよかったよ」

「まさか、あのような子供に一方的にあしらわれるとは……この責任を取り、この松永久秀、足利王国筆頭魔法使いの地位を返上しようかと……」

「それは駄目だ。他に適任者がいない」

リンガイア大陸南端への侵攻と入植は順調だったが、思わぬ障害が発生した。

唯一この未開地に領地を持つ貴族領を占領しようと軍勢を北上させたら、うちの軍勢を探っている魔法使いがおり、その捕縛を筆頭魔法使いである松永久秀に任せたら、反撃されて逃げられてしまったのだ。

しかも久秀の報告によると、その魔法使いは五、六歳の子供だという。

「天才児現れるだね、兄さん。久秀としては、どのくらいの実力だと思う？」

俺の弟にして宰相をしている清輝は、興味深そうに子供魔法使いについて久秀に尋ねた。

「あの年齢で、既に私の魔力量は余裕で超えていたでしょう。油断して不覚を取った私が言うのも何ですが、魔力の使い方や戦い方は未熟そのもの。彼の魔力はこれからが成長期です。間違いなく、末恐ろしい魔法使いになります」

「へえ、それは凄いね。こっちに引き抜けないかな？」

「私も、娘の婿にほしいくらいです」

アキツシマ王国統一で多大な貢献をし、筆頭魔法使いに任じられた久秀がそこまで評価するとはね。

これは、本物なのかもしれない。

「問題は、そんな子供にまで物凄い魔法使いがいるヘルムート王国の方かな？」

俺の正妻にして、王国軍最高司令官でも今日子は、ヘルムート王国の魔法使いの層の厚さを警戒し始めた。

「義姉さん、それは心配ないよ」

「そうなの？　キヨちゃん」

「事前に偵察はしているからね。リンガイア大陸も同じさ。魔法使いが貴重なのは。ただ、魔力量でいうとうちの方が不利かもね。リンガイア大陸では、今も定期的に上級レベルの魔法使いが現れるようだし」

「上級ですか……。我がアキツシマ島では、既に伝説ですな。中級レベルの私が天才扱いなのですから」

リンガイア大陸最南端から南に三百五十キロほどの海上、ここにアキツシマと呼ばれる島があった。

人口は三十万人ほど、俺達が来るまで統一された国は存在せず、数十名の貴族が分割統治を行っていた。

血で血を洗う戦乱の世とまではいかなかったが、頻繁に領主同士による小競り合いは発生していたし、分割統治の影響で効率のいい発展が妨げられていた点もある。

彼らは、大昔に北方のリンガイア大陸に国を築いていたアキツシマ共和国という保護国の国民の子孫だそうだ。

一万年以上も昔、繁栄を誇っていた古代魔法文明は一夜にして滅んだ。

暫く、リンガイア大陸は人が住みにくい土地となり、彼らは船でアキツシマ島と名付けた島に逃げ込んで入植したわけだ。

本当は、リンガイア大陸が落ち着いたらすぐに帰還する予定だったらしい。

北方に逃げた同朋もいるそうで、どうなったのか気になっているのもあった。

ところが、アキツシマ島は政治的な混乱から王族と貴族の統治に戻り、ここ数百年はそれも崩れて割拠状態が続いてしまった。

そこを、俺達が統一したわけだ。

巨大な宇宙船カナガワと、科学の力を用いて。

俺足利光輝と、その妻今日子、弟の清輝は宇宙で運送業を営んでいた。

それが仕事中に異次元宙流に巻き込まれ、気がついたら魔法がある西洋ファンタジー風な世界に。
ただ、なぜか最初にコンタクトした連中は日本人のようであった。

彼らも、自分達と似ている俺達が宇宙船で降り立ったのを目撃して衝撃を受けたようだ。
紆余曲折色々とあったが、俺達は神の船で島に降り立った神のお使い様扱いとなり、カナガワの科学力と生産力を駆使してアキツシマ島の統治を行ったら、王様になってくれと言われて今に至る。

極少数逆らった連中もいたが、彼らは既にこの世にいない。
大半の住民達は、生活を豊かにしてくれる俺達を支持した。

ところが、統一した王国が成立して統治と開発が効率化し、食料事情と医療技術が進歩した結果、人口が爆発的に増えつつあった。
このままでは、アキツシマ島が過密状態になってしまう。

そこでリンガイア大陸南端部と、それに付随する島々に入植……彼らに言わせれば里帰りを計画したわけだ。
実はリンガイア大陸南端に至るまでの海域には海竜の巣が大量にあり、それも彼らが大陸に戻らない原因であった。
島への移住により技術と魔法が衰退した彼らには、海竜の巣を突破する力がなかったのだ。
海竜は俺達によって効率よく退治され、リンガイア大陸への道は開いた。
軍勢を整えて上陸した旧アキツシマ共和国領は、深いジャングルに包まれ、同時に魔物の楽園と化していた。

『兄貴、ファンタジーの世界だよ。モンスターや竜がいるよ』

残念ながら、今の俺達の力では彼らの完全な駆逐は不可能であった。

魔物は海竜ほど弱くないからだ。

俺達はようやく兵士達に鉄砲と大砲を装備させつつある状態であり、同時に竜に対抗可能な優秀な魔法使いが不足している。

長年アキツシマ島で籠っていたせいか、我ら足利王国の国民に魔法使いは極端に少ないのだ。

その不足分は、カナガワと科学の力で補っている状態であった。

無理はさせられない。

とはいえ、これから恐ろしい量の魔力を持つ天才魔法少年と戦わないといけないわけだが。

「その魔法使いが、闇雲に本陣を目指したら危険ね」

「そうだなぁ……他に魔法使いはいるのかな？」

「いないはずだ。リンガイア大陸でも、ちゃんと攻撃魔法が使える魔法使いなんて数千人に一人だから」

事前に偵察衛星や無人機で情報収集をしている清輝は、自信満々に答えた。

情報を握る。

これほど有利な事もない。

久秀以下、アキツシマ島の住民達が俺達に従っているのは、科学を駆使した圧倒的な力を持っているからだ。

そりゃあ魔法使いは便利だけど、出現率の問題がある。

科学の力を有した俺が王様に祭り上げられているのも、妻の今日子が王妃なのも、弟の清輝が宰相なのも、すべて科学のおかげであった。

「でも、残念だな」

「何が残念なんだ？　清輝」

「その魔法使い、男なのか。アキツシマ島でも魔法使いはおっさんや爺さんばかりだし、ここで美少女魔法使いとか出てほしいよね」

加えて近年、アキツシマ島においてはほとんど女性の魔法使いが出ていなかった。

そのせいもあり、島の住民にはどうも男尊女卑の傾向が強いように思える。

「「別に思わないけど」」

「つまらない夫婦だな」

清輝がこよなく愛している魔法少女アニメでもあるまいし……。

それにもし敵の魔法使いが美少女でも、俺達を殺しに来るんだぞ。

「そこは、敵対しながらも徐々に恋に落ちる、敵の魔法使いと、宰相の青年」

「「お前が恋の相手なのかよ！」」

「夫婦で息がピッタリだな！」

俺と今日子は、清輝に対し同時にツッコミを入れてしまった。

「キヨちゃん、現実見ようよ……」

清輝が妄想を口にし、それに今日子がツッコミを入れる。
普段の光景のため、既に久秀達はそれをスルーする能力を身につけていた。

「久秀、魔法使い全員で防げば大丈夫だろう？」

「はい。他の守りが薄くなりますけど……」

「それは鉄砲隊と砲兵部隊で防げるよ。リーグ大山脈より南で領地を持つ貴族はバウマイスター騎士爵家のみ。人口は八百人ほど。魔法使いは、例の子供だけ。的確に対処すれば、まず負けないね。あとは、久秀達がいかにその子供を抑えるかだ」

事前に清輝は、敵の情報を掴んでいた。
さっきまで、鳥に偽装した無人偵察機を飛ばしていたからな。

「みっちゃん、その子ほしいね」

「犠牲を出さないで捕えるのは難しそうだなぁ……」

「それは意外と難しくないかも」

「どうしてだ？　今日子」

足利王国の魔法使い達を纏める久秀が、不覚を取った相手だからなぁ……。
俺は、生け捕りは難しいと思っていた。

「その子、魔法使いとして才能はあるけど、経験不足なのはあきら

かよ。それに、久秀を殺さなかった」

「はい。自分の『魔法障壁』が破られ、懐に入られた時、私は死を覚悟しました。ところが……」

「中途半端なダメージだけ与えて逃げてしまった。その子は偵察をしていたのだと思う。情報を持ち帰るのが最優先だけど、久秀にとどめを刺すのは難しくない状況だった。でも、それをしないという事は、子供で戦争どころか対人戦闘も未経験で人を殺した事なんてない。まあ、子供だからね。うちの愛や太郎と大して年齢も変わらないんじゃないの？」

「むしろ、年下でしょうな」

魔法使いの少年は五～六歳で、うちの長女愛は八歳だから二つばかり年上か。

「魔法使いの才能があったから従軍させられたのか。可哀想にね。久秀、魔法使い部隊は、その子だけを相手にしなさい。上手く捕えてね」

「義姉さんの言うとおりだ。他のバウマイスター騎士爵家諸侯軍は、なるべく犠牲を出さないで降伏させたいな」

自分達だけこんな僻地に住まわされて、間違いなくヘルムート王国に対する忠誠心なんてゼロだろうしな。

うまくこちらに組み込んでしまえばいい。

「兄貴、未開地全土を押さえたら、カナガワはこっちに移動させようよ。新しい王都はこちらに建設した方がいい」

「アキツマシ島は狭いからなぁ……開発の余地がないのが困ってしまう」

危機的状況とまでは言わないが、それも時間の問題であろう。
速やかにこの未開地を、足利王国の本拠地としなければならない。

「我ら民族の里帰りです。これも、神の船と、足利王国のおかげ」

「足利王国万歳！」

「「「「「万歳！」」」」」

この連中、カナガワが突然島のすぐ傍に出現し、そこから俺達が出てきたから本当に神の遣いだと思っているんだよなぁ……。
たまに忠誠心が強すぎてドン引きするけど。

「その子だけ上手く捕えて、あとは力を見せつけて降伏させる方針で」

せっかくここまで、魔物と野生動物以外とは戦闘をしないで進軍できたのだ。
俺は戦争好きじゃないし、犠牲ゼロでの未開地平定を願うのみであった。

「クルト兄さん、抗戦は不可能ですよ」

「そうだな。敵は数千から一万を超えている可能性がある。兵士の質も、うちは大半が農民と狩人だぞ。絶対に勝てない」

「相手が理性的な連中である事を祈るしかない。交渉できないかね？」

「駄目そうなら、ブライヒレーダー辺境伯領に逃がすか？　いや、女子供にリーグ大山脈は辛い」

「クルト様、ヴェンデリン様の報告によりますと、敵は多くの魔法使いを抱えている可能性があります。それに対して、こちらはヴェンデリン様お一人。これでは、切り札になりません」

敵の魔法使いを振り切ってバウマイスター騎士爵領に逃げ込んだ俺は、できる限り知り得た情報を報告した。

それと聞いたエーリッヒ兄さん、ヘルマン兄さん、パウル兄さん、ヘルムート兄さん、クラウスと、諸侯軍幹部の全員が抗戦に反対の意見を述べた。

どう戦っても勝ち目なく、こちらに無駄な犠牲が出るだけだからだ。

子供にでもわかる理屈だが、唯一徹底抗戦を主張した人物がいた。

父の代理であるクルトであった。

「貴族として、一戦もせずに降伏や逃亡などあり得ない！　お前らは臆病風に吹かれたのか？」

臆病風というよりも、立場の違いであろう。

クルトは跡継ぎとして、より貴族的に振る舞わないといけない。
とはいっても、この戦力差だ。
もし父なら降伏したであろう。
本当は若いクルトを援軍の使者にした方がよかったのだが、ブライヒレーダー辺境伯家は辛うじて父の顔は覚えている者がいたが、クルトの顔を知る者はいないはず。

偽物扱いされる可能性もあり、だから父が使者になったわけだ。
しかしながら、今のクルトの言動を見るにこの人選は大きな失敗であった。

「そのような無謀な抗戦で領民に被害を出せません。領民達は降伏させ、我々だけで潜伏して援軍を待つ方が賢明でしょう」

クラウスの献策の方が、まだ堅実だと思う。
数名なら、リーグ大山脈と隣接する森に逃げ込めば、数か月は時間を稼げるはずだから。

「そのような逃げ腰の策が認められるか！　確かに領民達は兵士としての経験が少ない！　だが、故郷を守るためだ！　必ずや実力以上の力を発揮するであろう！」

人間、時に追い込まれると、わざわざ罠に向かって行く事があると聞く。
今のクルトがそんな状態だ。
なまじ父が代理に任命したために責任感を感じてしまい、それが余計に彼を意固地にしている。
父が戻るまで抗戦できなければ、あとで廃嫡されるかもと思っているのであろう。

どちらにしても、下の人間には迷惑な話だ。

「兄貴、ちょっとやる気があるとか、そういうレベルの問題じゃないんだよ。戦いは数で、その数が致命的に足りないって言っているんだ。ここは一旦降伏するなり、俺達だけで潜伏するなりしないと」

「ヘルマン！　貴様ぁーーー！　そうやってから、あとで俺の責任を追及して自分が跡継ぎになるつもりだな！」

「何でそうなるんだよ？」

なるほど、これはどうにもならないようだ。

クルトが当主代理であるうちは、彼は意地でも降伏しないのだと。

「敵の数が多いから勝てない？　バカめ！　俺には必勝の策があるんだ！　おう！　ヴェンデリン！」

名前を呼ばれた時点で、俺には必勝の策の内容がわかってしまった。

間違いなく、俺が大変な目に遭うやつだ。

「ヴェンデリンが敵の総大将を討てばいいのだ！　さすれば、残された連中など烏合の衆にしかすぎない！　残りを討つか降伏させれば、我がバウマイスター騎士爵家躍進の始まりになる！」

「そんな夢物語を……」

あの軍勢に、梟首戦術が通用するとは思えないのだが……。

「ヴェンデリン！　行け！」

この時点で俺だけ逃亡してもよかったのだが、中身がお人好しの元日本人という時点で割り切れなくて困ってしまう。
それに、いくら状況が状況とはいえ、領民と家族を見捨てて逃げ出した貴族の子が普通に暮らせるかどうか怪しい。

冒険者になったとしても、お上に目をつけられ、周囲から悪口を言われて居心地が悪いかもしれないのだから。

「（仕方がない……せっかく魔法が使えると思ったら、一年と経たずに死にそうだな……ただ……」

そのまま死んでしまうのは癪であった。
人殺しには慣れていないが、俺は一人だけ許せないと感じている奴がいる。
こいつの目が黒いうちに死んで堪るか。
俺は直接手を出さないが、必ず惨めな思いをさせてやる。

「わかりました。敵の大将を狙いましょう」

「ふふん、それでこそ魔法使い。上手くやれば、お前をバウマイスター家筆頭お抱え魔法使いにしてやるぞ」

そんなのは死んでも御免だと思ったが、ここは素直に頭を下げてクルトを油断させるのであった。

「ヴェル、すまない……」

さて、俺は敵の大軍に突っ込まなければいけないのだが、まだ子供で体が小さく、師匠が残してくれたローブなどが使えなかった。これがあれば防御力が大分違うのだが……。

裁縫をする時間もないので、このまま行くしかないであろう。鎧なども、バウマイスター家に子供用の鎧なんてあるはずがない。あるのは、王家や大貴族家くらいなのだから。

できる限りの準備をしていると、そこにエーリッヒ兄さんが姿を見せ、いきなり俺に謝ってきた。

「エーリッヒ兄さんは悪くないですよ」

「いや、結局まだ子供のヴェルを危険な場所に追いやろうとしている。反対はしたけど、それが覆らなかった以上、僕も同罪なんだ」

エーリッヒ兄さん、まさか発言までイケメンだとは……。

もし俺が女なら惚れてしまいそうだ。

「ご安心を。俺も死ぬ気はないです。あとは、不埒な事を企んでいます。エーリッヒ兄さんにお膳立てをお願いしたい」

「クルトの排除だね」

一瞬でエーリッヒ兄さんの顔に殺気が走った。

クルトを呼び捨てで呼んだという事は、彼に愛想を尽かしたのであろう。

「彼は、自分のためだけに他人を無意味に殺そうとしている。当主

の器にあらず」

「そうだな。ちと面倒な状況になった。できる限り捕縛を試みるが、駄目なら俺が斬る」

エーリッヒ兄さんに続いて、ヘルマン兄さんも顔を出した。

「お前とはそんなに話をした事がなかったが、ヴェンデリンが当主をした方がよっぽど上手く行きそうだな」

「ヘルマン兄貴、駄目だ。クルトは斬らざるを得ない」

さらに続けてパウル兄さんも顔を出したが、その表情は優れなかった。

「駄目かぁ……」

「あの妄想を、士気を鼓舞するためという名目で領民達に話しやがった。一部の領民が欲に釣られて、クルトを囲むように守っている」

こう言うと失礼になるが、クルトの扇動に釣られたバカ者がいたというわけだ。

バカというか、こんな閉鎖された領地なので、世間知らずも存在するという事だけだ。

勿論少数派だが、人間の欲とは恐ろしい。

ちょっと冷静に計算すればわかる事ですら選択を誤るのだから。

「ヴェンデリンの魔法なら何とかなるってわけだ。そりゃあ、ヴェンデリンの魔法は凄いのかもしれないが、向こうにも魔法使いは複数いるだろう」

「それがわかっている大半の人達は、クルトの扇動に乗っていません」

「少数なら、最悪そいつらごと斬る！　このまま抗戦するよりも犠牲が少ない。ところで、ヘルムートは？」

「クルトとその取り巻きの監視を頼んだ。まったく、クルトの結婚式が終われば王都に行けたのに……」

「パウル兄さん、僕もですよ」

パウル兄さん、ヘルムート兄さん、エーリッヒ兄さんは、クルトの結婚式が終われば王都に向かう予定だった。

その直前に戦争に巻き込まれたのだから、不運としか言いようがない。

「従士長として残る予定だった俺は、お前らにご愁傷さまとしか言えないよ。降伏して向こうに仕えるという手もあるな」

「ヘルマン兄貴、それは王国貴族としてどうなんだ？」

パウル兄さんが、敵に仕官したいと言ったヘルマン兄さんに苦言を呈した。

「パウルは凄いな。王国貴族としての気概に満ち溢れている。俺には無理だ」

「僕も生まれてこの方、王国貴族としての自覚に薄いですね。王都でそれを培う予定でした」

ヘルマン兄さんとエーリッヒ兄さんと同じく、俺もそうだ。
自分が王国貴族だと言われても、バウマイスター騎士爵領にいるとまったく実感できないので困ってしまう。

「俺は、時間稼ぎに傾注します」

俺も死にたくないので、時間をなるべく稼ぎ、その間にクルトを排除して降伏してもらうしかない。
後の事は、後で考えるしかないな。
もしバウマイスター騎士爵家が滅んでも、俺は一人で生きていけばいいのだから。

「行ってきます」

「ヴェル、すまない」

「クルトは必ず斬る。なるべく早く終わらす」

「クラウスもこちら側だ。クルトはもう終わりだな」

俺は、兄達の見送りを受けて謎の敵軍へと進撃を開始するのであった。

「行くぞ！」

クルトの命令で敵軍の総大将を討つ。
あいつはそれですべてが解決すると思っているようだが、当主を討たれた後継者や家臣達に報復される未来は予想できなかったのであろうか？
それと、やはり魔力を消して至近距離からの奇襲という策は取れなさそうだ。
まず俺がまだ未熟だ。
向こうの魔法使い達のレベルがわからないが、中級でもベテランが十人いれば俺の動きは簡単に止められてしまう。
「ならば！」
俺は敵軍の前に飛び出し、そこで堂々と名乗りをあげた。
「我こそは、ヴェンデリン・フォン・ベンノ・バウマイスター！侵略者達よ！　これ以上の前進をやめよ！」
やはり、敵は数千人から一万人ほどはいる。
元々未開地に人などいないので、戦闘は魔物か野生動物としかしていないはずだ。
つまり、ほとんど損害を受けていない。
ギリギリで実働戦力二百名ほどのバウマイスター家では勝てるはずがない。
それにしても、未開地の南方に人が住んでいたとはな。
いないと決めつけられる材料もなかったので、これは俺のみならずヘルムート王国の人間すべての油断だと思う。
ブライヒレーダー辺境伯領に応援要請に行った父が、ちゃんと援

軍を連れて来れるか？
王国が、未開地を不採算領域だと決定して放棄すればうちは終わりだな。

敵がどんな連中かはわからないが、とにかく交渉の余地を残すため、徹底抗戦を主張しているクルトを、他の兄さん達が排除するまで時間を稼ぐしかない。

「出たな！　小僧！」

どうやら、名乗りをあげ終わる前に夕立のように矢が飛んでくる結末は防げたようだ。
先ほど、逃げるために魔法で一撃かました中年魔法使いが姿を見せる。

やはり、彼がこの軍勢で一番偉い魔法使いというわけだ。
ベテランの風格は感じられるが、俺に比べると魔力は少ない。
師匠基準で中級レベルのはずだ。

俺は器合わせで師匠と同じ魔力となり、それからも毎日少しずつ魔力が成長している。
何も考えないで全力で戦えば勝てるであろうが、この軍勢に魔法使いが彼一人のはずがない。
残念な事に魔法使いの魔力を数十ほど探知し、中年魔法使いの後ろに続々と集まってきた。

「（これは駄目だ……時間稼ぎに徹するしかない）子供一人に数十名か。この軍勢の大将は、よほどの臆病者なのであろうな！」

「何だと！」

「子供の分際で！」

幸運な事に、俺の挑発で数名の魔法使い達が激高してくれた。
このまま順番に勝負するとかに持っていけば時間を稼げる。

ただ、もしそれが上手くいっても俺が生き残れる保証はないけどな。

この世界に飛ばされて数か月、せっかく魔法を覚えたのにここで死ぬかもしれないとは……。

中身が平成日本人なのも考えものだ。

領民を見捨ててバイバイできれば、楽しい人生が待っていたかもしれないのに。

そういう事をしても罪悪感を感じない鋼の心が欲しかった。

「小僧、そのような挑発は通じない。時間稼ぎか？　まあいい。お前がいなくなれば、残りの領民達も素直に降るであろう」

「それで、略奪と殺戮と強姦か？　野蛮人めが！」

「小僧、まだお子ちゃまにしては難しい言葉を知っているようだが、我ら足利王国を侮るなよ！」

「勝てば官軍、あとでいくらでも取り繕えるものさ」

「おっと、自己紹介を忘れた。我が名は、足利王国筆頭魔法使い松永久秀である」

「えっ？」

「何だ？　小僧。まさか私の名前を知っているなんて事はないよな？　我らは、今初めてヘルムート王国の人間と接するというのに」

俺もそれほど歴史に詳しいわけじゃないけど、子供の頃に某戦国シミュレーションゲームをプレイした事はある。

有能ながらもすぐに裏切る、非常に評判の悪い松永秀久の名前は覚えていた。

最後は茶釜と一緒に爆死したんだっけ？

当然同姓同名の別人だが、どこか身構えてしまう。

どんな卑怯な手が出てくるか、警戒してしまったのだ。

そして、その懸念は事実となった。

突然、『バーーーン』という軽い爆発音と共に正面の『魔法障壁』に何かが食い込んだ。

「っ！　銃弾か！」

まさか、足利王国を名乗る軍勢に鉄砲が配備されているとは。

万が一の事に備えて『魔法障壁』を厚くしておいてよかった。

と同時に、俺はかなり不利な立場に追い込まれている事を理解する。

『魔法障壁』が銃弾にも有効なのはわかったが、常に狙撃されるかもしれないとなると、常に強力なものを張らないといけない。

いくら俺の魔力が多くても、相手は数が多いのだ。

じきに魔力切れとなるであろう。

「ならば！」

敵軍からの狙撃を防ぐため、俺は松永久秀の後ろに控えていた魔

法使いの集団に飛び込んだ。
乱戦にしてしまえば、狙撃は防げる。

「なっ！　早い！」

「遅い！」

体は子供でも、機動力は魔法で上げればいい。
まずは数を減らすべく、初級の魔法使い達が集まっている場所で『爆砕』の魔法を炸裂させた。
これは爆発で地面を吹き飛ばし、爆風だけでなく土や石を破片として敵にぶつける魔法である。
俺を中心とした半径二メートルほどの地面を爆発で吹き飛ばした。

「バカ者が！　誰が狙撃をしろと！」

さすがは、筆頭魔法使い。
他にも中級レベルと思われる魔法使い達は冷静に『魔法障壁』を展開したが、初級魔法使い十名ほどが爆風で吹き飛ばされ、土や石の破片を食らって戦闘不能になってしまう。
殺してはないが、暫くは戦闘に参加できないはずだ。

「（先に数を減らす！）」

まずは、さほど強くない初級魔法使い達を標的にする。
素早く移動して懐に入り、両手をお腹に当ててから魔力を放出した。
これも死にはしないが、見た目以上にダメージを受けるので、彼らはその場で動けなくしまってしまう。
他にも、両手で『竜巻』を作って空高く吹き飛ばしたりと、三十

分ほどの戦闘で二十名以上の魔法使いを戦闘不能にした。

殺していないのは、残念ながら人を殺した経験がないので躊躇してしまうのと、もしエーリッヒ兄さん達が上手くやって降伏するにしても、俺が魔法使い達を殺してしまうと報復される危険があったからだ。

「やるな、小僧。やはり魔力の量が圧倒的だ。もう十年後だったら、私達は全滅さ」

「……」

「もっとも、私達が全滅しても足利王国軍は強いがな」

鉄砲を装備しているのだ。

リンガイア大陸で一番の精鋭かもしれない。

鉄砲があるという事は大砲もあるかもしれず、このまま戦ってもジリ貧であろう。

それでも、バウマイスター騎士家諸侯軍が次のアクションを起こすまで、時間を稼ぐしかない。

「確かに私達の魔力量は少ない。だが、こういう戦い方がある！いくぞ！」

「「「「「おう！」」」」」

中級の魔法使い十名ほどが俺を囲み、次々と『火球』、『氷弾』、『土礫』、『ウィンドカッター』をぶつけてきた。

一つ一つの威力は少ないが、とにかく数が多い。

加えて彼らの連携は素晴らしく、同士討ちがまったく発生しない。

すべて俺の『魔法障壁』に当たり、魔力を徐々に奪っていく。
俺は、自分の『魔法障壁』を保つ以外に何もできなくなってしまった。

やはり俺はまだ未熟で、その隙をベテランである松永久秀に突かれてしまったのだ。

「っ！」

「恐ろしいまでの魔力だな。清興」

「そうだな、この年でこれほどの実力とは」

「油断する事なく、魔力を消費させるのだ」

魔法の袋から魔晶石を取ろうにも、手を下げると瞬時に『魔法障壁』が消えてしまうので何もできなかった。
自分でも、徐々に魔力が尽きていくのが確認できる。
そして、戦闘開始から一時間後。
既に魔力は尽きかけ、意識が朦朧としてくる。

「粘ったな。小僧。褒めてやる」

「どうも……」

駄目だ。
もう力を抜くと意識を失ってしまう。
何と気絶しないように、俺は意識を集中させる。

「なぜ抵抗した？　逃げればいいものを」

「見捨てるのは性に合わない。それができる性格ならよかったのに……領民達の中で一番戦う力があったから前に出た。それだけだ……」

「小僧ながら天晴な奴だな」

「……」

もう完全に魔力を失ってしまった。
この状態で意識を保つのは難しい。
俺はエーリッヒ兄さん達や領民の無事を祈りながら、その場に倒れてしまうのであった。

「ううっ……」

「ヴェル、大丈夫かい？」

「エーリッヒ兄さん？」

やはり、まだ魔法使いとして未熟な俺は松永久秀の作戦の前に破れてしまった。
時間は大分稼げたはずだが、バウマイスター騎士爵領はどうなってしまったのであろうか？
エーリッヒ兄さん達は、無事にクルトから指揮権を奪えたのであろうか？

目が醒めると次々に心配事が頭に浮かんできたが、それはエーリッヒ兄さんの顔を見たらすぐに消えてしまった。

「大丈夫かい？　久秀さんは魔力を完全に消耗して気を失っただけだと言っているけど」

「すいません。敵軍の大将には届きませんでした」

「活躍したそうだね。久秀さんが大苦戦したと言っていた。やはり、ヴェルは凄いね」

エーリッヒ兄さん、足利王国筆頭魔法使いをさんづけで呼んだりしているけど、肝心のバウマイスター騎士領はどうなったのであろうか？

再び心配になってしまった。

「エーリッヒ兄さん、バウマイスター騎士領は？」

「降伏した。酷い事にはなっていないよ。安心して」

「そうですか……」

「いくら魔法使いでも、まだ六つのヴェルが大軍の矢面に立って、領地と領民達の事を心配している。我が身の不甲斐なさを感じるね」

いくらエーリッヒ兄さんが優秀でも、あの場面でできた事は少ないはずだ。

それに、無謀な徹底抗戦を叫んだクルトの排除を試みようとした。

十分に努力しているはず。

「それで、クルトは？」

「死んだよ」

「やはり……」

「ああ、俺が討った」

ちょうどいいタイミングでヘルマン兄さん、パウル兄さん、ヘルムート兄さん、クラウスも姿を見せた。

俺のお見舞いに来たのであろうか？

「素直に降伏するか、指揮権を俺達に譲るか。問い質したら拒否したので、俺が斬り殺した。まあ、止めを刺しきれなかったがな」

クルトは、俺達には徹底抗戦を命じておきながら、自分は逃げようとした。

先にブライヒレーダー辺境伯領へと向かっている父と合流し、ブライヒレーダー辺境伯に頼んで王国軍を出してもらおうと。

自分は次期当主なので、父の傍でバウマイスター騎士領奪還軍の傍にいなければいけないと思ったらしい。

ただ、自分だけが助かろうとしているようにしか思えなかったが。

「取り巻き連中にリーグ大山脈越えに使う食料や装備、現金などの準備をさせていてな。俺が斬った。取り巻き連中はパウルとヘルムートと協力して斬ったが、クルトは逃げてしまってな」

深い切り傷は追わせたが、森の中に逃げてしまったらしい。

「あの……手負いで森に逃げたのですか？」

血の匂いを漂わせながら森を彷徨えば、狼や熊などを呼び寄せてしまう。

「そういう事だ。死者は四名。穏便に済んだ方だと思う」

クーデターは無事に成功し、ヘルマン兄さんが指揮を執ったバウマイスター騎士爵家諸侯軍は降伏。

領地は、現在占領下にあるそうだ。

領民達は不安そうだが、実害は今のところないようだ。

「足利王国軍は、規律はいいみたいで安心した」

「それで、バウマイスター家はどうなるのです？」

「領地は没収さ。あの国の貴族は全員給金で暮らしているそうだ。向こうに犠牲が出ないうちに降伏したから、バウマイスター家は最下級の騎士爵家ながら存続を認められた。今は臨時でこの領地の代官職に任じられている」

足利王国は、全員が給金を貰う法衣貴族しかいないそうだ。

極めて中央集権的な封建国家というわけだ。

今さらヘルムート王国領に逃げ込むわけにもいかないバウマイスター家の面々は、足利王国に仕官する事になった。

ヘルマン兄さんがバウマイスター騎士爵家の跡継ぎとなり、この元バウマイスター騎士爵領で代官を行う。

実情は何も変わっていないように見えるが、早速大規模な開発計画が始まるらしい。

他の兄さん達も全員仕官し、功績があれば貴族になれる。

なれなくても、元々足利王国は常に人手不足だそうだ。
子供が職に困る事もないそうで、家を出ていく予定だった兄さん達も安心している。

「エーリッヒは凄いよな。王様と王妃様に直接声をかけられて」

「さすがですね」

「僕は、降伏の際に交渉に赴いただけだよ」

エーリッヒ兄さんはイケメンで、所作も非常に爽やかである。
加えて、交渉の時にも怯まず堂々とした態度で臨んだらしい。
それを気に入った王様と王妃様が、直接彼をスカウトしたそうだ。

「文官として仕える事になったんだ」

「それはよかったですね」

領民達の無事も確認され、兄さん達も将来が決まった。
思わぬトラブルであったが、これで俺も自由に一人で生きていけるのだ。
ヘルムート王国には行けないが、この足利王国の領地になった未開地で冒険者として……と思ったら、思わぬ罠が待ち構えていた。

「あのね、ヴェル」

「どうかしましたか？　エーリッヒ兄さん」

「陛下と王妃様が、ヴェルに用事があるって」

まずいな。
魔法使い達を負傷させてしまった罰か？
「じゃなくて、足利王国は魔法使いの質が低いわけで、わずか六歳で奮闘したヴェルを手放すわけがないんだよね。そういう事だから……」
わずか六歳で宮仕えの身とは、せっかく前世の社畜人生を脱したと思ったのに……。
再びどっと疲れが襲ってくる俺であった。
「遠くから見ていたが、この幼さで大したものだ。なあ、今日子」
「そうね。あの久秀が大苦戦していたものね」
目が醒めた俺は足利王国の王様と王妃様に呼ばれたのだが、しょっぱなから色々と違和感を覚えてしまった。
この西洋風の世界で、漢字で足利王国、王様も他の人達の名前も漢字表記でイースト式、これは苗字の方を先に表示するという意味だ。
加えて、戦陣にある王様と王妃様、そして王様の弟は作業用のジャケットを羽織っていた。
兵士達もTシャツとズボンの上にプロテクター式の鎧を装着し、合金製の刀に鉄砲を装備している。
しかも、火縄銃ではなくて後込め式の歩兵銃を持っていた。
銃剣も取り付けられるようだ。

重機関砲らしきものや、大八車に載せて使う小型の青銅砲に、馬で引く大砲も配備され、バウマイスター騎士家諸侯軍は戦わなくて正解だったと思う。

あの時に俺を狙った銃声は一発のみであったが、あれは一人の兵士が逸って射撃禁止命令を破ったためらしい。

「久秀は、ヘルムート王国の基準でいうと中級レベルでしかない。魔法使いは便利だが貴重な存在だ。それを補うための銃さ」

俺はこの人達に違和感を感じていた。

こんな銃や大砲が、いきなり量産できるはずがない。

もしかしなくても、この人達は俺の同類なのではないかと。

別の世界から飛ばされてきて、ここで科学の力を用いて勢力拡大を図っている。

「ところで、ヴェンデリン君に質問があるんだ」

王妃様である今日子さんが、俺に聞きたい事があるという。

「ここには私達しかいないから単刀直入に聞くけど、あなたは同類かしら？」

「ええと…仰っている事の意味が……」

今日子さんは、俺も別の世界からの住民なのではないかと疑っているようだ。

だが、そうおいそれと話すわけにはいかない。

ここは一旦誤魔化しておこう。

「私はそうだと思うんだけどな。あの銃撃の時、君は『銃弾か！』って言ったよね？」

なぜそれを？

いや、きっとこちらを引っ掛けようと適当に言っているだけだ。

「そうでしたかね？　俺はあの時必死だったので覚えていません。第一、王妃様は俺と大分離れた位置にいたはず。俺の声が聞こえますか？」

「聞こえないけど、双眼鏡で見ていたから。口の動きでわかっちゃうんだよね」

「……」

読唇術か？

なぜ王妃様が読唇術を？

「ヴェンデリン君、義姉さんの追及から逃れるのは不可能だよ。元軍人だし、対テロ対策とかも専門だったから拷問もお手のものだし、早くゲロって楽になった方がいいよ」

王様の弟で宰相をしている清輝さんに説得され、俺はこの世界に来る前の人生と、これまでの経緯を説明する羽目になるのであった。

なお、この後清輝さんは『私はどれだけ凶悪なのよ！』と激怒した今日子さんに回し蹴りを食らっていた。

俺は本能で、今日子さんには逆らうまいと決意するのであった。

「えっ？　年上？」

「今は子供なんで子供扱いでいいです」

「どうりで年齢の割に大人びていると思ったら……」

「僕、そういう話をネット小説で読んだよ」

今日子さんに追及され、俺はすべてを話した。

信じてもらえない可能性もあったが、三人は感心したように話を聞いている。

「信じるのですか？」

「だって、私達も他の世界の、それも宇宙から飛ばされてきたし」

今日子さんが、自分達の事情も説明してくれた。

人類が宇宙に出た未来の世界で零細運送業を営んでいたが、宇宙船ごとこの世界に飛ばされてきたそうだ。

「それで、ここから南のアキツシマ島近海に不時着してね。その時は領主が乱立していたけど、うちが統一したわけ」

「そんな……ちょっと買い物に行くような感じでですか？」

島でも乱世を統一するって、大変だと思うけど……。

「だって、僕達は科学力と生産力と金を持っていたからね」

商売をしながらアキツシマ島に統一した貨幣を流通させ、反抗的な領主や勢力を常備兵主体の軍勢で討ち破った。

次第に有力領主も素直に従うようになり、五年ほどでアキツシマ島は統一された。

「それから五年ほど内政しながら引っ込んでいたんだけど、このままだと人口が飽和するから先に手を打ったわけ」

殖民のために、未開地に上陸したわけか。

「それにしても、西暦の人なのか。しかも、アキツシマ連邦の祖先である日本人とは」

今は、見た目が西洋人になってしまったけど。

「宇宙ですか……。俺の時代では、日本人が宇宙飛行士に選ばれると大ニュースでしたね」

「アンドロイドは？」

「研究段階だけど、実用化にはほど遠い状態でしたね。産業用のロボットとか、ＡＩが囲碁の名人を破ったとかそのレベルです」

「そうなんだ。ここにいるマロちゃんはアンドロイドだよ」

「えっ！　そうなんですか？」

今日子さんの後ろで控えていたキヨマロという男性だが、全然アンドロイドには見えない。
ちょっと物静かな人間にしか見えなかった。
あと、非常にイケメンである。

「どうやら、本当に我々と似た世界からの来訪者のようですね。ですが、精神だけこの世界の人間に移り変わるとは珍しい。とても興味深いです」

「俺から言わせると、キヨマロさんの方が驚きだけど……」

「この世界にも、ゴーレムがあるではないですか。おかげで、作業ロボットを投入しても誰も不思議に思いません。進んだゴーレム扱いですから」

この世界の住民で、ロボットの原理を理解できる人はほとんどいないだろうな。

「いやあ、久々に同朋と話ができてよかったな」

「そうだね、みっちゃん」

正直に話をしてよかった。
王様と王妃様の機嫌もいいので、俺が自由に生きる許可を貰う事も可能なはず……と思ったら、大きな勘違いであった。

「うちは便利な魔法も科学と両輪で重視しているから。他に逃げられても困るし、ヴェンデリン君は、うちの愛姫の婚約者ね。愛の方が二つばかり年上だけど、私もみっちゃんより年上だから問題なしね。久秀が引退したら筆頭魔法使いにするし、まだ魔力が成長途上

なんだよね？　久秀にビシビシ鍛えてもらうから、頑張ってね」

「はい……」

「甘いな、君も。執念深い義姉さんから逃れられるはずがない……うべらっ！」

「あの……清輝さんは大丈夫ですか？」

「いつもの事ですから」

すぐ傍で、清輝さんが今日子さんから回し蹴りを食らっているのに気にもしないキヨマロさんに驚きつつ、俺は自分の運命を受け入れる決意をするのであった。

「婿殿は羨ましいな」

「義父上、どの点が羨ましいのですか？」

「色々と」

「でも、色々と大変ですよ」

「それは運命だと思って受け入れるしかないな。我が松永家は、陛下と王妃様に戦で徹底的に破れてな。滅ぶところを、拾っていただ

いたのだ。魔法の才能があるがゆえに、足利王国など余裕で倒せると侮ってすべてを失ったわけだ。まあ、結局は筆頭魔法使いになれたのだし、人生とはこんなものだと思うに至ったわけだ」

あの日から六年、俺は足利王国の筆頭魔法使い松永久秀から今日も魔法の手ほどきを受けていた。

今も魔力が増え続ける俺であったが、経験は非常に乏しい。

師匠からの教え以外に、足利王国の魔法使い達からの指導が役に立った。

彼らは魔力が少ない。

少ないがゆえに、魔力の節約や応用に非常に長けていた。

日本人によく似ているので凝り性な部分もある。

俺もそれを参考にし、魔力を増やしながら毎日魔法の訓練に励んだ。

今の俺の立場は足利王家一門衆筆頭で、光輝さんと今日子さんの長女である愛姫の婚約者にして、久秀の娘婿でもあった。

彼には娘しかいないそうで、彼の娘唯姫とも婚約をしており、愛姫が産んだ子が足利分家を創設、唯姫が産んだ子が松永家を継ぐという決まりになっている。

多少忙しいが、足利王家にいると日本の味が気軽に食べられるのでよかった。

冒険者としても活動している。

十歳から魔法使い達と魔の森に入り、飛竜、ワイバーン、他にも色々な魔物を魔法で倒し、大量の巨大フルーツも採取している。

その成果は、ヘルムート王国とアーカート神聖帝国にも輸出されていた。

最初、ヘルムート王国は自らの領地である未開地を奪った足利王家に怒りを露わにした。

ところが王国は、わざわざ未開地に軍勢を出して奪還するつもりがなかった。

いつか開発しようとは思っていたが、それはまだ大分先の話だ。

大金を使って奪還しても現時点で意味がなく、かといってヘルムート王国にも国家としてのプライドがある。

下手に妥協すると北にいる仮想敵国アーカート神聖帝国に舐められるので、足利王国の外務大臣本多正信と極秘裏に交渉した。

帝国にはミズホ伯国という保護国扱いの国があり、王国もこれを真似たのだ。

ただ王国では、ミズホ伯国ほど足利王国を押さえられない。

こうして、王国の公文書では『アシカガ公国』という名の名ばかり属国が成立した。

援軍を求めるためブライヒレーダー辺境伯領へと逃げ込んだ父は、王国政府の裏切りに激怒して騒いだが、すぐに静かになった。

王国としては、未開地にバウマイスター騎士爵領があった事自体が不都合な事実なのだ。

父は王都で法衣準男爵となり、姓も改名させられ、新しい妻を娶った。

母はヘルマン兄さんの庇護下にあり、二人は離婚したのと同じ……いや、王国としては父に妻や子などいなかった事にしたかったのだ。

未開地にバウマイスター騎士爵領など存在せず、足利という貴族が領地を持ち、彼らは王国の属国となった。

この嘘を事実とするため、王国政府は父に家族を捨てる事と改姓

を迫った。
断れば消される可能性もあり、父はそれを受け入れたわけだ。
爵位が準男爵なのは、その詫び料も兼ねてであろう。
新しい妻もだ。

こうして王国側から見れば属国になった足利家であったが、別に損はしていない。
一応王国の貴族なので交易は可能であり、足利家の科学の力を用いた品が大量に輸出された。
特に人気があるのは、缶詰だ。
みんなそうそう魔法の袋となども持てないので、大人気となった。
魔の森のフルーツ、魔物の肉、南の海の豊富な魚貝類、これらを材料にした缶詰がよく売れている。
あと、魔の森で大量に採れるカカオを材料にしたチョコレートも人気だった。

形だけ属国の足利王国は、帝国にもこれらの品を販売して大儲けした。
王国政府からの要望で帝都の商人にしか販売していないが、持ち込んだ分は高値で完売するので利益率も高かった。

稼いだお金で未開地の開発を行い、まだ六年ほどしか経っていないのに、未開地の中心部に『新京』という大都市が完成した。
大規模な治水工事、農地の開発、港や町の整備も行われ、未開地はわずかな期間で恐ろしいほどの発展を遂げている。
俺も散々手伝わされたし、重機やロボットがあるのが有利であった。

やはり、超科学の力は凄い。
魔法も凄いのだが、光輝陛下や今日子王妃、清輝宰相からすれば

『便利だから優遇する』という扱いだ。

「あと三年だ。愛姫様もうちも唯も年上だから、婿殿が成人すればすぐに子供ができるな。我が松永家も安泰だ」

松永久秀は、俺を婿殿と呼ぶようになっていた。

娘の唯姫の婿だからだが、同時に魔法の師匠でもある。

魔力では俺の方が圧倒的に上だが、テクニカルな部分で彼は尊敬に値する魔法使いであった。

他にも、島清興、堀秀政、武藤喜兵衛、黒田官兵衛、竹中半兵衛、片倉小十郎、太原雪斎などにも指導を受け、それぞれに魔法の得意分野が違ってとてもためになった。

彼らの名前が戦国時代の人物と同じなのは、あまり深く考えない事にしている。

一つ困っているのは、みんなから自分の娘と結婚してくれと言われている事であった。

『断れないだろうね。みんな君を婿に欲しいんだよ』と今日子さんに言われてしまったので、将来的にはそうなるのであろう。

そもそも、今の俺の名乗りは足利ヴェンデリンである。

うさん臭いハーフタレントのようであったが、そこは気にしてはいけないのだと思う。

「我が足利王国は、科学を用いた兵器とよく訓練された常備兵でリンガイア大陸の両大国と対抗可能だが、上級の魔力を持つ魔法使いは何をするかわからない怖さがある。婿殿も、我らが数十年苦労を重ねて会得した魔法の大半を数年で会得してしまったからな」

それに加えて、両国には魔力量が多い上級魔法使いがそれぞれ数

十名ずついると思われる。
これに少しでも追いつくべく、魔法使いの強化も必須であった。
ただ、今は俺を鍛えつつ新人に期待するしかないらしい。

「いつまで平和が続くかわかりませんからね」

国家の真の友人などありえず、軍備を整えたヘルムート王国が未開地に攻めてくる可能性もある。
このところの開発の進み具合と独自の交易品で財を成した足利王国に、いつヘルムート王国が牙を剥くかもしれないのだから。

「一対一なら、両国のトップレベルの魔法使いに劣るとは思えないがな」

「多数相手なら厳しいのは、義父上が一番ご存じでは？」

「それはそうだ。六年前はそれで婿殿に勝ったのだから」

足利王国の魔法使い達は、平均的に魔力量が少ない。
それを技術と連携で補っており、その分野では両大国の魔法使いよりも勝っているかもしれない。
統一前は個人プレイに偏っていたそうだが、今日子さんが魔法使いの戦闘方法や連携に関する教本を纏めたそうだ。

さすがは元高級軍人。
さらに医者なのだから凄いと思う。

「両国は戦争を避けようとしている節が見られますが、問題はいつまで続くかですね」

「ゆえに、備えは必要……「大変です！　尊師様！　ヴェンデリン様！」」

突然、俺達のところに一人の兵士が飛び込んできた。
何か緊急事態が発生したらしい。

「何事だ？」

「それが、ヘルムート王国の王都が壊滅しました！」

「「はあ？」」

俺と義父上は、最初それが事実だとは信じられなかった。
核兵器もないこの世界で、人口百万人の大都市がどうやったら壊滅するというのだ。

「竜です！　伝説の古代竜の仕業だと！」

「そうか……婿殿、行くぞ」

「はい」

俺達は稽古を切り上げて、新京の中心部にある王城へと向かう。
足利王国の王城は、見た目で臣民達に力を示し、戦時には要塞にもなる作りになっていた。
まともに建設すれば何年もかかると思うが、そこは機械力を駆使して一年ほどで開発している。
同時に新京も大規模に造成され、上下水道完備で、将来は電気を普及させるため、地下電線用のスペースも予め作られているほどだ。

アキツシマ島から首都機能の移転も終わり、人口二十万人ほどながらも新京は両大国の主都よりも発展しているように見える。

王城を守る兵士達にチェックを受けてから城内にある作戦室に入ると、巨大なスクリーンに瓦礫と化したヘルムート王国主都スタッドブルクが映し出されている。

「これは酷いですな……」

無人偵察機による偵察で、ガレキの山と化した王都の映像が鮮明に映っていた。

よく見ると死体も散乱していたので、それは極力見ないようにする。

「伝説の古代竜。物語の話だけだと思ったけど。久秀は何か知っているか？」

「数万年の時を生きる、属性竜など相手にもならない強大な竜としか。実物を見た者は、過去にはいたのかもしれません」

光輝陛下の問いに、義父上は簡潔に答えた。

「数万年に一度の大災害か。不思議なのは、ヘルムート王国には優れた魔法使いが多かったと思うが……」

無人偵察機だけでは限界があるので、足利王国は詳細な情報を求めて密偵達の報告を待つ事にした。

なお、足利王国の諜報部門を纏めているのは、百地三太夫という人物だそうだ。

どこかで聞いた事があるな。

数日後、詳細な報告が入った。
足利王国は非常に諜報能力が高いようだ。
軍人である今日子さんの薫陶なのであろう。

まあ、無人偵察機とか、科学の力なのだろうけど。
機械力のみに頼らず、諜報組織をしっかりと強化している部分に隙はないと思う。
俺、足利王国の一族になってよかった。

「ヘルムート王国は、最終兵器と呼ばれていたアームストロング導師以下、大量の魔法使いを投入するも、古代竜はアンデッドであったため、犠牲のみ出して初戦は敗北。後がないヘルムート王国は、教会に『聖光』が使える神官達の派遣を要請。教会はこれを受け入れ、王都住民の避難と共に迎撃作戦を行うも、またしても敗北。ヘルムート三十七世以下の王族などは脱出に成功したが、アームストロング導師は討ち死に、魔法使いにも損害多数。神官にも多大な犠牲。王都は壊滅し、死傷者は五十万人に近い。これは駄目だな」

「そうね。一国の主都が壊滅だものね……」

王都がガレキと化した。
ただの大都市の崩壊ではない。
ヘルムート王国は中央の力が強い国家であり、その力の源が崩壊したのだ。
中央集権的な施政を支える政治家や官僚にも被害が大きく、王国軍については言うまでもない。
住民の半数が死傷した時点で、ヘルムート王国は崩壊したに等しい。

「陛下、王妃様。いかがなされますか？」

「そのアンデッドの古代竜の動き次第だな。それにしても、かの王国の最終兵器が討ち死にとは……」

「そうだよね。化け物染みた実力の持ち主と聞いたけど……」

「聖属性の魔法は使えるものの、その威力に乏しかったとか……教会の神官達は、戦闘に向きません。アームストロング導師以下の魔法使い達で古代竜の動きを止め、その間に神官達が『聖光』でとどめを刺す。その作戦が失敗したのでしょう」

義父上の推測は、後に当たっていた事が判明した。

自分の魔力の少なさを誰よりも理解している義父上は、両大国の魔法使いに関する情報収集を怠っておらず、ほぼ正確に彼らの戦闘力を分析する事に成功していた。

「それで、古代竜の動きは？」

「大暴れしています」

古代竜は、王都周辺である程度人が住んでいる場所を無差別に攻撃しているそうだ。

既に、足利王国が送り出した密偵達にも犠牲が出ているらしい。

「西部、東部、南部。実力のある辺境伯が三名。中央と北部は、古代竜の憂さ晴らしの場所と化しました。彼らが野心を抑えられるか不明ですな」

足利王国において外務大臣を務める本多正信は、両国の貴族に詳

しかった。
彼は、三人の辺境伯が勢力拡大に乗り出すのではないかと予想する。

「中央に近寄れないのでは？」

「古代竜がいますからな」

「王国の貴族よりも、北方に仮想敵国がいますけど、そちらはどうなのですか？」

思わず聞いてしまった。
両国は停戦しているが、それはギガントの断裂があり、国力が拮抗しているからだ。
ヘルムート王国が弱った以上、野心を剥き出しにするかもしれない。
戦乱の時代が始まるかもしれないのだ。

「帝国南方に領地を持つ選帝侯ニュルンベルク公爵は、やる気満々のようですね。諸侯軍に動員をかけています。帝国軍はまだ動いていません」

「それはつまり、ニュルンベルク公爵が野心を剥き出しにしたと？」

「可能性はありますね」

俺の質問に、本多外務大臣が答える。

「ニュルンベルク公爵としては、先に混乱した王国領土をかすめ取って力を蓄え、あとで帝国にも侵攻するつもりかもしれませんな」

古代竜一匹で、大陸は戦乱に突入したわけか。

「いかがしましょうか？」

「ない袖は振れないものね。今は未開地の整備の方が先だよ。リーグ大山脈の北にいるブライヒレーダー辺境伯がこっちに野心を出さなければ、こちらは国力を蓄えるべきだと思う」

「賛成ですな」

「同じく」

義父上も、本多外務大臣も、軍も、ヘルムート王国への侵攻を否定した。

いくら領地が確保できても、その後で古代竜に襲われたら意味がないからだ。

「古代竜とやらの迎撃準備だけはやっておかないと。人が集まっている場所を狙うのでしょう？」

「はい、王妃様。古代竜はアンデッドと化しております。死せる存在なので、生物への憎しみがあるのかもしれません」

「『自分は死んでいるのに、お前らは生きていやがって！』みたいな感じ？」

「ええ、アンデッドならみんな持っている感情だそうで。だから生者を襲うのですな」

「これは、リーグ大山脈にビーム砲でも設置しようか？　カナガワの奴を修理してさ」

ビーム砲って……。

この人達、本当に超未来の人間なんだよな。

火薬火器が古代竜に通じるとは思わないけど、ビーム砲なら勝ち目はあるのか？

「それも、リーグ大山脈の飛竜とワイバーンを駆逐してからだね。じゃないと、軍勢を派遣できないよ。というわけで、よろしくね。私の可愛い義息子君」

「はい……」

義父上達や、軍の将校達のシゴキよりはマシか。

そう思った俺達は、リーグ大山脈に古代竜を防ぐ基地を建設すべく、飛竜とワイバーンの駆逐作戦を開始した。

「我々だと一日に討伐できる竜の数に制限があるからな。婿殿がいて助かったよ」

その日から、俺は来る日も来る日もリーグ大山脈に籠って竜を退治し続けた。

全滅させるまで、俺の仕事は終わらないのだ。

リーグ大山脈も魔物の領域と認識されているが、ここには不思議な事にボスがいない。

よって、全滅させなければ解放とはみなされないのだ。

その間にも、ヘルムート王国の中央部と北部は古代竜によって徹底的に破壊された。

そして、その状況を利用して王国領へと侵攻しようとしていたニュルンベルク公爵にも報いが訪れた。
古代竜は次の標的をニュルンベルク公爵領に定め、諸侯軍は壊滅、ニュルンベルク公爵自身も行方不明となった。
まず生きているはずがなく、そういう事である。
古代竜は、一か月ほどで帝国を壊滅に追い込んだ。
多くの貴族領とその軍勢が崩壊し、魔法使いも多数が死傷、各地のインフラと治安は徹底的に破壊された。

帝国を破壊して満足するかと思ったら、今度は再び南下して生き残った王国領を狙っているとの報告が入ってくる。
ヘルムート王国領が壊滅したら、次は間違いなく足利王国領であろう。

「怪獣映画がリアルなのか……」

「動く大災害とは困ったものですね」

今日も竜の討伐を終えてリーグ山脈の山頂に建設中の砲撃基地に戻ると、そこでビーム砲の修理と調整をしていた清輝宰相と話をする。
彼は俺の秘密を知っているので、話のネタもそれに準じていた。

「宰相閣下、このビーム砲で古代竜に勝てるのでしょうか？」

「下手な上級魔法使いの魔法よりも、足止めは可能な威力がある。色々と調べたけど、やはりアンデッドは『聖』属性の魔法でしか倒せないみたい。ビームの火力で倒せたら、上級魔法使いの火力でもダメージが与えられるはずだからね。いやあ、科学の力が通用しないなんてファンタジーだね」

「えっ？　それでどうするのです？」

「かなりの長時間、行動不能にはできる計算なんだ。そこで、我が義甥殿の『聖光』でとどめだね。君の魔力は尋常じゃないから、ほぼこれでミッションクリアーさ」

やはり、師匠から習った『聖』魔法で何とかするしかないのか……。

「問題は、この砲台に古代竜が接近するかですか……」

「大丈夫。古代竜は、人工的な建造物にも反応しているから。両国の魔導飛行船で無事なのはほとんどいないじゃない」

過去の遺産とされる魔力で動く魔導飛行船、これらはほとんどが古代竜の標的になった。

中型以上で無事なものはほとんどなく、徹底的に破壊されたために再建も不可能だそうだ。

動力源である巨大魔晶石を砕かれてしまい、今の技術では作れなかったからだ。

足利王国にも似たような船が多数建造され運用されているが、これは反重力装置と電池で動いている。

生産は足利王国が……というかこの清輝宰相が独占している。

どうせ外部の人間が仕組みを知っても、まず真似はできないだろうけど。

「こっちのビーム砲は予定どおりだけど、難民が増えたよね」

特に、帝国からの難民がだ。

王国の難民は、リーグ大山脈があるのでほとんど来なかった。
帝国はほぼ壊滅したので、船で続々と押し寄せている。
特に、帝国北部に領地を持っていたミズホ伯国の住民が多かった。

彼らは元々同じ民族という事もあり、難民にしてはすんなりと受け入れられている。
他の難民には騒動を起こす者も多く、足利王国は彼らの受け入れで精一杯であった。
ただ科学力のおかげで、他の生き残ったヘルムート王国領よりは圧倒的にトラブルが少ないそうだ。

ブロワ辺境伯領、ホールミア辺境伯領、ブライヒレーダー辺境伯領などでは、武装難民と諸侯軍による衝突まで発生している。
減少した食料生産量に比して生き残った難民が多いので、食料の奪い合いすら発生していた。

「リーグ大山脈より北は地獄ってね。情け心を出すとこちらも自滅だ。可哀想だが、手助けはしない。足利王国領まで来れれば、犯罪者じゃなきゃ保護するけど。犯罪者だった場合？　即刻硝石丘の材料ですけどね」

怖い事を言っているが、清輝宰相の言っている事は間違っていなかった。
現時点で、リーグ大山脈よりも北に行くのは危険であったのだ。

「ブロワ辺境伯領、ホールミア辺境伯領、ブライヒレーダー辺境伯領。すべての領主館所在地が壊滅。粗方破壊した奴は、やはりこち

らを目指しているな」

遂に古代竜は、両国を壊滅させた。

都市、インフラ、大規模農地などが徹底的に破壊され、生き残った人達も食料や住める場所を巡って争っている。

リンガイア大陸は、まさに世紀末と化したのだ。

古代竜はそれでも飽きたらず、いよいよリーグ大山脈を超えて足利王国領の破壊を目論んだ。

「本当にここに来たぁーーー！」

「えっ？　来ないと思っていたのですか？」

「ヴェンデリン殿、常務はいつもこんな感じなのでお気になさらないように」

山頂の砲台基地には、清輝宰相とキヨマロさんの他にほとんど人がいなかった。

古代竜の標的にされる可能性が高く、ビーム砲自体は清輝宰相とキヨマロさんだけで十分に動かせるからだ。

それにしても、いつ見てもキヨマロさんは人間にしか見えない。

あと、清輝宰相って常務だったんだよな。

平社員だった俺とは違って凄いと思う。

「私の顔に何かついていますか？」

「いや、俺のいた時代のロボットはレベルが低かったのだなと」

「昔なので仕方がありませんね。さて、発射準備が終わりました。自動追跡装置も正常」

「早っ！」

俺は、『エネルギー充填率〇〇パーセント！』とか読み上げるやり取りがあるものだと勝手に思っていた。

「そんな時間は無駄ですから」

「我が義甥殿もそう思うだろう？　キヨマロって夢がないんだよ」

「アンドロイドですから。ヴェンデリン殿も準備を」

「了解」

作戦は単純だ。

レーダーと無人偵察機によると、古代竜はこちらに接近しているそうだ。

これをビームで撃って動きを止め、その間に俺が『聖光』で仕留める。

失敗すると大変なので、段々とプレッシャーを感じてきた。

「社長と副社長でしたら、第二、第三の矢も準備しております。肩の力を抜いてください」

なるほど。

某宇宙戦艦物に出てくる技術長のように、『こんな事もあろうかと！』という感じで他にも備えがあるのだ。

それなら安心だと、俺は安堵の溜息をつく。

「では、発射！」

清輝宰相がボタンを押すと、山頂に設置されたビーム砲台からピンク色のビームが発射された。

まるで○ンダムみたいだ。

「凄い威力……」

「商船の自己防衛用なので、軍艦の物に比べれば小便みたいなものです」

キヨマロさんはそういうが、発射されたビーム砲を食らった古代竜は動きを止め、体中から煙を噴き上げ始める。

これだけの威力なのに、アンデッド古代竜が倒せないのは凄いと思う。

ビームの照射が終わっても、古代竜はその場に浮かんだまま煙を吐き続けていた。

ダメージがないというよりも、聖属性以外の攻撃で受けたダメージは回復してしまうようだ。

回復するまでは動けず、つまり俺の出番というわけだ。

慎重に、『飛翔』で煙を吐き続ける古代竜に接近する。

勿論念のために強固な『魔法障壁』を張りながらだ。

俺が接近しても、古代竜はダメージ回復のためにその場から動けなかった。

「なるほど、据え膳だ」

それでも油断しないよう、強力な『聖光』を展開する。
古代竜はやはり動けないようだが、その代わりに身を焼かれる熱さで大きな悲鳴のような彷徨をあげた。
一分ほど『聖光』で古代竜を焼き続けたであろうか？
遂に、骨だけの古代竜はバラバラになって落下していく。
俺は急ぎ古代竜の骨と巨大な魔晶石を回収した。

「やったぁーーー！　ラノベの主人公だ！」

「何です？　それ？」

清輝宰相から妙な称賛をされてしまったが、俺達はようやくリンガイア大陸の災厄アンデッド古代竜の討伐に成功するのであった。

「古代竜は倒せたものの、足利王国領以外のリンガイア大陸は混乱している。両国の王族と皇族もほぼ全滅した。難民が多すぎて、このままでは土地が足りなくなる。リーグ大山脈を貫くトンネルが見つかったし、電磁飛行船の量産も進んでいる。船員も、逃げてきた旧ヘルムート王国空軍軍人の雇用と新人の教育で何とかできそうだ」

「そこで、ヴェル君は先駆け部隊を率いてね」

「酷い。まだ十五の俺を……」

「だって、君はもう三十超えじゃない。本来なら。あっ、愛姫も一緒に連れて行ってね。あと、君の奥さん達もね」

「はい……」

古代竜を倒してから二年半、俺は光輝陛下と今日子王妃の長女愛姫を正妻とし、他にも松永久秀の一人娘唯姫他、ようするに王国の魔法使いの娘を何人も奥さんにする事になった。

清輝宰相が『ハーレムじゃないか！　何てラノベ展開！』とか言っていたが、みんなにいつもの発作だと無視されていた。

そして、結婚して性行為をしたら奥さん達の魔力が上昇した。

魔法使い連中は狂喜し、俺の奥さんが増えてまるで軍団のようだ。

そんな俺達は、遂にリーグ大山脈を越えて出陣する。

精々で生き残った貴族達による小競り合い程度だそうで、あとは難民同士の争いとかもあるかもしれないが、足利王国は少なくとも旧ヘルムート王国領を併合して開発しないと難民のせいで自滅する可能性が出てきており、嫌々併合を行う事になった。

既に足利一族となっている俺も、なぜか超未来人同士の娘なのに魔法が使えるようになった愛姫と共に出陣する事になった。

勿論、他二十二名の側室達と共にだ。

というか、俺にこんなに奥さんがいるなんておかしいと思う。

でも断れない。

俺の特殊性が判明した以上、魔法使いを増やす事は足利王国にとって急務だからだ。

愛姫の子は足利分家の次期当主となり、他の奥さんの子供は実家の家督を継ぐ。

魔法使いはみんな貴族なので、跡取りを足利分家当主の血を継いだ者にしたいらしい。

実は、俺には一人男の子がいる。

結婚前に『お前は女を覚えるべきだ！』と義父上に押しつけられたのだ。

子供ができてしまったのだが、その子はいきなり魔力が多かった。

魔法使い体質は遺伝しないというのが常識だったので、義父上（松永久秀）は涙を流して喜び、早く唯姫との間に子供を作れと催促する。

そんなわけで、俺の奥さん達はみんな俺の傍から離れない。

自身も魔法使いになったので俺に付き添い、妊娠しないと後方に戻らないそうだ。

「泣ける……」

「たまげたなぁ……アルフレッドの弟子はハーレム王だったのか」

最初に進撃した旧ブライヒレーダー辺境伯領で、俺は師匠の師匠だという人物と出会った。

ブランタークさんという人で、彼はブライヒレーダー辺境伯領の生き残った家族や難民を率いてこちらに投降してきた。

ブライヒレーダー辺境伯本人は、ブライヒブルクから一人でも多くの住民を逃がすため、古代竜の餌となったらしい。

立派な人物だったようだ。

「俺の役割はこれで終わった。あとは……足利王国で余生を送るよ」

ブランタークさんは光輝陛下と今日子王妃の誘いを断り、たまに魔の森で狩りをして稼ぐ気楽な生活に入った。
これまでの苦労で、再び宮仕えをする気力が残っていなかったようだ。

古代竜なきあとのリンガイア大陸を、俺達は北上、次々と色々な人達に出会っていく。
そして……。

「私の不甲斐なさが、家族や伯父上、多くの人達を死なせてしまいました。何とか壊滅した王都から逃げ出しましたが、これだけの人達を救う事しかできなかったのです」

王都から逃げてきた教会の有力者の孫娘であった凄い巨乳の神官さん。

「ヴェル君、どこを見ているのかな？」

「愛、これは男の本能です」

彼女は、連れてきた難民達が足利王国軍に無事に保護されると、俺達に同行した。
治癒魔法の使い手なので、必要戦力だと思ったのだ。

「みなさんが、ヴェンデリン様の奥様なのですか。……わかりました」

何がわかったのかは知らないが、俺はなぜか次々と女の子達と出会っていく。

「ボクとイーナちゃんを雇ってほしいな。これでも、腕っ節に自信があるし」

「雇っていただけないと、今日の食事にも事欠く有様なのです」

「私はヴィルマ、姓は捨てた。力には自信がある」

「ヴァイゲル領の領民達を安全な場所に住まわせてくれるのなら、私がヴェンデリンさんのお力になりましょう。私、これでも『暴風』の二つ名を持つ魔法使いですわ。古代竜には歯が立ちませんでしたけど……」

こうして、次々と俺に奥さんじゃなくて仲間が増えていき、それは足利王国によるリンガイア大陸統一まで続くのであった。

第百四十話　魔族の言動に既視感を覚えてしまう。

「ああ、嫌だなぁ……」

「しょうがねえだろう。陛下からの命令なんだから」

「絶対に邪魔者扱いされる……」

「それは覚悟するしかない」

俺は陛下の命令で、昨日始まった魔族と王国との外交交渉に参加させられる事になった。

場所は、テラハレス群島上空に浮かぶ魔族艦隊の旗艦内である。

敵地に乗り込むわけだが、交渉団は今のところ何事もなくそこにおり、危険だから嫌というわけではない。

魔族よりも、交渉している味方の貴族達に嫌がられ、嫌味でも言われるかと思ったからだ。

「昨日から交渉が始まったそうだが、ユーバシャール外務卿が役に立たないんだと」

「ユーバシャール外務卿ですか？」

陛下から名前くらいは聞いているが、どんな人かは知らなかった。

俺は王国でも有数の大貴族なのに、他の貴族をあまり知らないのだ。

「いつの間にか交替していたんですよね」

「ああ、閣僚職は数家で持ち回りだからな」

ただ、一度に全部の閣僚を交代させると王国の政治に混乱が発生する可能性がある。

そこで、時期をズラして閣僚は交替する。

今回はたまたま、一か月前に外務卿の交代があったばかりだそうだ。

「知りませんでした」

「閣僚の交代はある程度話題にはなるが、恒例行事だから気にしない人も多いし、何しろ外務卿だからなぁ……」

外務卿はアーカート神聖帝国との折衝しか仕事がないので、閣僚職の中では一番の冷や飯食いである。

それでも、前任者は陛下と共に帝国との講和交渉を上手く纏めた。

手伝った王太子殿下と共に、世間ではほとんど目立たなかったけど……。

「ユーバシャール外務卿って、能力的にどうなんです？」

「悪くはないって話だがな」

ブランタークさんは、事前にブライヒレーダー辺境伯から情報を集めていたようだ。

俺からの質問に答えてくれた。

「悪い評判は聞かなかったんだが、少し気が弱いという噂がある」

「それって、駄目じゃないですか？」

外交交渉をするのに気が弱いのでは、色々と不都合があるような気がする。

あまり強硬なのもどうかと思うが、押しに弱いのでは、一方的に相手の要求を呑まされるだけであろう。

「他の能力は特に問題ないそうだし……」

「昨日は駄目だったんですよね？　だから、俺が陛下に呼ばれて……。何で呼ばれたんだ？」

俺は、外交交渉なんてした事がないのに。

せいぜい、前世で顧客と交渉したくらいだ。

「帝国内乱で活躍したし、魔法使いだから魔族への脅しにはなると思われたのでは？」

だが、魔族は全員が魔法使いである。

向こうに戦いを挑まれたら、多勢に無勢で倒されてしまうと思う。

モール達の話を聞くに、魔族が俺の戦歴を把握しているのかという疑問もあった。

「まさか、向こうもいきなり戦闘開始とは言わないだろう。伯爵様、行くぜ」

「はい」

「あなた、行ってらっしゃいませ」

「俺、フリードリヒ達の世話と釣りの日々、結構気に入っていたんだけどなぁ……」

「陛下からのご指名ですから」

思わず、エリーゼに愚痴を溢してしまう。

さすがに最前線に赤ん坊を連れていくわけにもいかず、俺、ブランタークさん、エルの三名は、王国軍の魔導飛行船でテラハレス群島へと向かった。

エリーゼ達は、それぞれに赤ん坊を抱きながら俺を送ってくれた。

「沢山の若くて綺麗な奥さんか……」

「俺の嫉妬の炎が、バウマイスター伯爵を照らす」

「燃やさないのかよ！　俺はこの怒りを観光に向ける！」

なぜか耳を隠したモール達も見送りに来た。

空軍に雇われている魔法使いが、初めて見る中級魔法使い三名に首を傾げていた。

「あの三人は、臨時に雇ったんだ」

「ああ、冒険者ですか。バウマイスター伯爵様はお金持ちですね」

在野の魔法使いだと説明すると、彼らは納得した表情を浮かべた。

お上に雇われている魔法使いは案外在野の魔法使いを知らなかったりするので、俺の嘘に気がつかなかったようだ。

「安心して、バウマイスター伯爵。代わりに釣りに行くから」
「観光ばかりだと暇だし」
「あとは、先生の論文執筆の手伝いとか、資料の整理とか、無職時代よりは充実しているな、俺」
今まで無職だったからといって、特に無気力でもないようだ。
観光に出かけ、釣りにも参加するといい、アーネストの仕事の手伝いもしている。
そういえばこの三人は大卒で、魔族の国ではトップレベルの大学を卒業しているそうだ。
王国なら滅多にいないインテリなのに、それで職がないというのだから、魔族の国は案外詰んでいるのかもしれない。
「釣果によっては歩合も出るし、頑張るぞ！」
「目指せ！　釣り名人！」
「海域に主はいないのかな？」
「サイラスさんが、ヴェルと同じ事を言っている」
「えっ？　釣りといえば主との遭遇でしょう？」
イーナが、俺と同じ事を言うサイラスを不思議そうに見る。
見られたサイラスは『こんなの常識でしょう』という顔をしていた。
どうやら魔族の国にも、そういう創作物が存在するようだ。

「ヴェルって、何でこんなに魔族と仲良くなるのが早いのかな？」

「バウマイスター伯爵は、俺達と考え方やメンタルが似ているからな」

ルイーゼの疑問に、サイラスが答えた。

確かに、魔族の社会は現代日本に似ているので、向こうの気持ちがよくわかるという点は大きいと思う。

「バウマイスター伯爵、そろそろ時間である！」

今回、導師は留守番である。

念のためアーネスト達の監視に残すのと、導師まで行くとユーバシャール外務卿達が態度を硬化させるかもしれないという、政治的な配慮のためでもあった。

いくら仕事ができない閣僚でも、相手は大貴族である。

下手に怒らせて、事態を混乱させるわけにはいかない。

「では、行ってきます」

魔導飛行船は予定通りに出発し、特にトラブルもなく数時間でテラハレス群島上空に到着した。

「魔導飛行船の形状が違うか」

「材質も違うみたいですね」

大陸側の魔導飛行船は、軍用船の装甲以外はほぼ木製で帆船型であったが、魔族側の魔導飛行船は卵のような形をしている。

外装はすべて金属製で、普段は仕舞われているが魔砲も十数門装備されているようだ。
俗にいう空中戦艦というやつであった。

「戦ったら、王国空軍では勝てませんね」

「だから、何とか交渉を纏めたいんだろうな。陛下は」

事前に行く事は連絡していたので、こちらの魔導飛行船は問題なく魔族艦隊旗艦の隣へと誘導された。
急ぎ旗艦へと移動して船内を歩くが、床も壁も金属製でそう簡単に破壊はできないであろう。
こちらを案内してくれている魔族の兵士は、とてもよく訓練されているようだ。
無駄口一つ叩かずに、俺達を誘導する。

「作りが凄いな、ヴェル」

「技術力に差がありすぎるな」

俺とエルは、近代的な作りの船に感心するばかりだ。
ブランタークさんが、継ぎ目のない金属製の床、壁、天井に感心していた。

「おおっ！　バウマイスター伯爵、よくぞ来てくれた！」

案内された室内に入ると、飛びつくようにユーバシャール外務卿が近づいてくる。
三十代半ばで育ちのいい貴公子そのものであったが、気が弱いという噂は本当のようだ。

他の随員達が見ているのに、俺達を見て情けない声をあげるのだから。

「あの、何があったのですか？」

「あいつら、帝国の人間とは違うぞ！」

「それは、魔族ですからね」

ユーバシャール外務卿も、帝国との小規模会合や交渉は無難にこなしている。

だが、魔族となると別の種族だし、彼らが全員魔法使いという事で怯えてしまっているようだ。

これでは、対等な交渉など期待できない。

「あいつらは、とにかくおかしい！」

「おかしい？」

「わけのわからない事を言うのだ！」

「まあ、お話を聞きましょうか」

このままだと埒があかないので、まずはユーバシャール外務卿の言い分を聞いてみる事にする。

『ゾヌターク共和国軍外交団団長、レミー・シャハルです』

「バウマイスター伯爵、魔族は女ごときを交渉団の団長にしたのだぞ！」

「（あちゃぁ……）」

つい直前までオドオドしていた癖に、俺が姿を見せるとユーバシャール外務卿は魔族側の責任者が女である事を問題にし始める。

王国でも帝国でも、女が政治に参加するなどほぼあり得ない。

テレーゼなどは滅多にないケースで、それすら王国は認めておらず、女如きを交渉に寄越してとユーバシャール外務卿はキレたようだ。

自分がバカにされていると感じているのであろう。

「（まずいよなぁ……）」

いきなりそんな事で不快感を示したら、魔族側も気分がよくないであろう。

魔族側には魔族側のやり方があるからそれにケチをつけてしまうと交渉自体ができないし、魔族側からすれば、王国側こそ女性を抑圧していると感じてしまうからだ。

「あのクソ女！　王国の政治にもっと女性や平民を活用すべきだと文句をつけおって！」

「（どっちもどっちだな……）」

ところが、魔族側にも問題があるようだ。

団長のレミーとかいう女性は、民権党の政治家で、党幹事長、母体は女性社会進出平等機構の総裁でもあるそうだ。
こっちも政治の素人で、進んでいる我ら魔族が、遅れている人間に民主主義や男女平等を教えてやろうという態度を隠しもしなかったらしい。

おかげで、ユーバシャール外務卿は怒りで交渉を忘れるほどだった。
ただ、魔族が怖くて彼女達にはそういう態度は見せなかったようで、代わりに今、俺の前で怒っていた。

「交渉に来ているのに、王国の政治体制にケチをつけおって！　それに、そもそもの原因が貴族の暴走によるだと！」

リンガイア拿捕事件の責任は、最初に貴族の副長が魔法使いに発砲を命じた事にある。
魔族側は詳細な報告書を提出した。
調査を担当したのは防衛隊の調査なので、一応虚偽を疑いつつひととおり読んでみたが、アラや矛盾点は見つからなかった。

「本当にこちらが先に領海・空侵犯をして魔法まで放ったのなら、それは謝って次に平等な交渉を模索すべきでは？」

「それでは、魔族に舐められるではないか！」

俺の前だと、ユーバシャール外務卿は強気のままだ。
下手に謝ると王国が風下に立たなければならないと思っているのか、それともプラッテ伯爵家と繋がりがあるのであろうか？

どちらにしても、その強気を魔族にぶつければいいのにと思って

しまう。

「あの連中は何様なのだ！」

魔族側は団長もそうだが、他の団員もどこかおかしいらしい。

男女比はほぼ半々で、それは団長に意向のようだが、あきらかに物見遊山の素人が混じっていて、なかなか交渉が進まないそうだ。

魔族側には商売をしている者達もおり、できれば交易がしたいと言ってきた。

参考までにと、交易量、禁輸品について、関税の額などの話をしていたら、素人だと思っていた連中が余計な口を出してきたそうだ。

しかも、あまり交易には関係ない話題であった。

『王国や帝国では、児童に対する強制的な労働や虐待などは深刻化していませんか？　もしそうなら、それはただちに止めさせるべきです！』

『書物などに差別用語などが使われていませんか？　私は差別用語撲滅運動の……』

『狩猟や、毛皮は残酷です！　それらを使った品の販売を禁止する事を要求します！　私は動物愛護協会の理事をしておりまして……』

本来の交渉そっちのけで、意味のわからない要求ばかりされて交渉団は困惑、どうしていいのかわからず、内心では激怒しつつ、子犬のように怯えていたのが真相のようだ。

帝国との交渉とはまるで違うので、初日は要求だけ聞いて終わってしまったようだ。

「（駄目だな……）」

ブランタークさんがボソっと呟くが、確かにこれを陛下が知れば俺を応援に回した気持ちも理解できる。

つまり、既存の貴族では手に負えないので、貴族としては異質な部分もある俺で様子を見るという事か。

「意味がわからん！　狩猟もしないでどうやって生活するのだ！」

「もしかすると、魔族の国は農業、畜産、漁業などが進歩していて、動物を直接殺すイメージがある狩猟に否定的なのでは？」

憤慨する外交団の一人に、俺は自分なりの見解で意見を述べる。

俺だって、狩猟と畜産の差なんて実はよくわからない。

「畜産だって、最後に家畜を締めると思うが……」

「ええと……。彼らはそういう風に考えているかもという予想です」

ユーバシャール外務卿のツッコミに、俺は反論する術を持たなかった。

前世でも動物愛護団体が存在していて、毛皮、狩猟、一部漁や、動物の扱いなどで抗議活動を繰り広げていた。

なかにはチンピラの因縁レベルのものもあり、俺も『なぜこんなことで抗議を？』と思いながらテレビを見ていた事もある。

あれは、魚の活き造りであったか？

確か、動物愛護団体が噛みついたんだよな。
白魚の踊り食いもだったか？

そして、今魔族にもそういう連中がいる事を俺は知ってしまった。

「（魔法が全然役に立たない。このまま帰ってしまおうか？）」

なまじ魔族が言っている事がある程度理解できるため、俺は事態の深刻さも理解してしまった。
世の中、何も知らない方が幸せという事もあるのだ。

「海猪は頭がいいから殺すなとも言われたのだが、家畜は頭が悪いのか？　私にはそう差があるように思えないのだが……」

ユーバシャール外務卿の素朴な疑問はもっともなのだが、そう思うだけでは外務卿の仕事などできない。
上手く情報を集め、相手の考え方ややり方を理解し、対策を立てないと交渉すら難しいであろう。

「とにかく、明日の交渉でもっと詳しい話を聞きましょう」

その後、ユーバシャール外務卿達とできる限り打ち合わせをしてから、翌日の交渉に臨む。

「随分とお若い方ですね」

「若い分、思考が柔軟だと陛下が思われたのかもしれません」

翌日、魔族側の交渉団団長のレミーとかいう魔族のおばさんは、まだ二十歳前の俺を見て驚いていた。

さすがに魔族側に未成年者はいない。
まあ、選挙権がないからな。

「王国でも、その時に合わせた柔軟な人事も可能ですから」

とにかく、戦争にならないように上手く押していかないと駄目だ。
魔族が民主主義的な思考を有する以上は、まずは若い俺がこの要職に抜擢された点をアピールすべきであろう。

外交団の後方にいる防衛隊の隊員達は、俺を見てヒソヒソと話をしている。
もしかすると、すでに帝国内乱の情報を得ているのかもしれない。

「（公僕は優秀なんだな……。政治家は微妙なようだけど……）」

他にも、新聞記者らしき数名もいて丁寧にメモを取っているようだ。
交渉の様子を魔族の読者に伝えるためであろう。

「しかしながら、交渉団に女性がいませんね。これはよくありません」

レミー団長は、王国側の交渉団に女性がいない点にケチをつけた。
このおばさんはそういう団体のトップであり、選挙では女性票を集めて当選したのであろう。
空気が読めないと思われても、俺達にそう問い質さずにはいられないわけだ。
次の選挙も関係しているのだから。
政治の素人で、ただ喚いているだけかもしれないが。

「その件に対してお聞きしますけど、ゾヌターク共和国において女性の社会進出が進んだのはいつからですか？」

「およそ千年前です」

古代魔法文明が崩壊後から数千年前まで王政、そこから限定的な民主主義が続き、千年前くらいから女性も政治に参加するようになった。

こんな感じだと、レミー団長から説明を受ける。

「王国でも、女性は働いていますよ」

冒険者もそうだし、ギルドの職員、店員、神官なども女性比率が高い方だ。

「概ね三割以上は女性かと」

「政治家はどうなのです？」

「いなくもないかな？」

帝国ではテレーゼがいたし、男性が当主でも、本人が能力的に駄目で奥さんが実務をやっているような貴族家もなくはない。

それほど多くはないけど。

「ゾヌターク共和国の政治家の女性比率はいかほどです？」

「二十一パーセントです……」

「防衛隊の女性隊員比率は？」

「……五パーセントほどです……」

やはりだ。

レミー団長は女性社会進出平等機構の総裁なので五割ではないことを言い難そうだが、現実はこんなものである。

男性と女性では職種に向き不向きもあるし、アーネストやモール達からの情報によると、仕事に熱中する女性の婚姻率と出生率の低下も問題になっているらしい。

世の中、そう都合のいい社会など存在しないのだ。

「ですが、そちらよりは女性は抑圧されていません！」

「抑圧ですか……」

その辺の感情が、俺は女ではないのでさっぱりわからないのだ。

俺でもそうなのだから、ユーバシャール外務卿達からすれば理解の範疇外なのであろう。

ただ、これだけは言えた。

「我らが住む大陸は、一万年前の古代魔法文明の崩壊でほぼゼロからのスタートでした。政治体制・社会生活の進化・変化には時間がかかり、これを無理に行うと余計な混乱が起こります。今、王国は発展を続けている最中です。これに手を出そうというのであれば内政干渉に当たりますが」

「しかし……」

「無理強いをするのであれば、これは双方にとって不幸な未来しか生みません。第一、この席は不幸な衝突事件の解決と、両国の通商・友好関係の橋渡しのはずでは？」

モール達の考え方は間違っていなかった。

今、魔族の国の政権を握っている民権党は、実は外交など何も知らない。

自分が政治家になれた母体政治活動にばかり目が行って、肝心の交渉が進まない。

これでは、何のための政権交代であったかという事になる。

「こういう事は、時間が解決すると思いますが……」

王国のすべての女性も働き、全ての職種で男女比が半々になり、男性も育児と家事に参加しつつ、統治者は選挙で選ぶか。

いきなりそんな事になれば、王国は一気に崩壊するはずだ。

なぜなら、そのための下地がまるで出来ていないのだから。

まあ、どうせユーバシャール外務卿達が反発して条件など纏まるはずもないが。

他にも、外交交渉なのに奇妙な事を言う魔族が多い。

「児童への虐待禁止ですが」

「子供は大切に育てられるべきですね」

とんだ詭弁であったが、現状では王国が豊かになれば徐々にマシになるとしか言いようがない。

それに、どうせこの偉そうな魔族が王国の王になっても解決など不可能なはずだ。

「（言うだけ番長だな……）」

「差別用語の禁止ですが」

「王国では、極度な王政批判以外は比較的自由に本を出せています」

あくまでも王国はという条件はつく。

貴族の領地で領民が領主を批判する本を書いた時、その対応は個々に別れる。

教会も、独自によからぬ図書の摘発を行う事もあった。

正直、そう簡単に口約束などできない。

「狩猟はどうなのです？」

「それは、現実的に不可能です」

魔物の領域のせいで農作物の生産量がなかなか上がらず、畜産を大規模に行う余裕がない。

肉を食べるためには、狩猟は必須であった。

毛皮も、王国北部や帝国への重要な輸出品だ。

綿花、絹の生産量の関係で、毛皮に頼らないと凍え死ぬ人間が増えるであろうと。

「それならば、我が国から食料と衣類を輸入すればいい！」

「交易に関しては、貨幣の交換レート、関税、交易量などで別個交渉が必要ですね」

その日は、何とか交渉は続けるという結論にまで持っていけた。
だが、慣れない事をして俺はヘトヘトになってしまう。
やはり、俺は政治家になど向いていないのだ。

「伯爵様、内弁慶のユーバシャール外務卿より遥かに適性があるな」

「それは褒められたのでしょうか？」

交渉が終わると、ブランタークさんが感心した口調で話しかけてきた。

「ユーバシャール外務卿も、帝国との交渉ではしくじっていないからな。それよりも有能だって言っているんだ」

まあ、既視感のせいで魔族がどういう連中か理解できている分だけマシなのであろう。
言っておくが、俺に外交の才能なんてない。

「それよりも、あの狩猟するなってうるさい連中、すぐに黙ったな」

「ああ、それはな」

俺は、エルに説明を始める。

「彼らは、魔族の国で狩猟などを禁止する活動をしているだろう？
誰がその活動資金を出しているかわかるか？」

「それを不思議に思ったんだ。抗議活動で金になるのかって」

「なるのさ」

末端のボランティアでやっている人達は、純粋に動物が可哀想という意図かもしれない。
ところが、上でやっている連中はそれで金を得ているという現実がある。

「賛同者からの寄付金で組織を運営するのだけど、金を出している中に食料を作っている大商会もあるはずだ」

まあ、正確には食料を販売している大企業と商社か。

「何でそんな連中が金を出すんだ？」

「簡単さ。農作物や畜産物を王国に売るためだ」

モール達からの情報によれば、今、魔族の国では食料が余っている。
だから、無職の人に無料で配給されていた。
同じく衣料なども余っていると推論すれば、俺が交渉次第によっては輸入もあり得るといったら一旦矛を収めた事も不思議ではない。

顧客になるかもしれない人達に、野蛮だと何だのと言うのを避けたのであろう。

「俺達が毛皮で作った服を着ると、その分服が売れないと考えて当然だろう？」

「善意の活動じゃないのかよ……」

百パーセント利益のためとは言わないが、少なくとも今回の交渉

に来ている連中の脳裏には彼らの意向が詰まっているはず。

「いや、彼らは動物が可哀想だから善意で狩猟の禁止を訴えているさ」

女性社会進出平等機構も同じだ。

ただ、そこに国やら利権が絡むと奇妙な事になる。

そういう組織の中に、金儲け目的の連中もいるのであろう。

「海猪も同じさ」

あれだけの巨体なので、食肉にすれば結構な量になる。

食料が余っている魔族の国の食品企業からすれば、自分達の利益を奪う捕鯨を悪い行動にした方が都合がいいというわけだ。

「俺も、海猪が頭がいいというのが理解できない」

「そうだよな。牛や馬だって、飼えば普通に慣れるよな」

ブランタークさんも、エルも、魔族の言い分が理解できないようだ。

帝国内乱でペーターから借りた馬を恩賞で貰ったので、今は屋敷で飼育してたまに乗っている。

賢い馬で、大して乗馬が得意でもない俺に上手く合わせてくれるのだ。

なお、海猪は獲っているだけなので頭がいいとかわからない。

「なんというか、小難しい連中だな」

「ある程度は話せたから、あとはユーバシャール外務卿に任せて大丈夫でしょう」

俺が参加した交渉の議事録に、魔族の考え方などの推察を急ぎ纏め、それを陛下とユーバシャール外務卿達に渡す。

『異なる価値観を持つ別種族か……。帝国と手打ちになったと思ったら……』

陛下は深刻そうな顔をしていたが、今の技術格差などを考えると戦争は悪手だ。

最悪、帝国にも裏切られて挟み撃ちにされる可能性があった。

『帝国がか？　考えすぎじゃないか？』

『いいえ。そんな事はありません』

面倒なので、二台の携帯魔導通信機でエドガー軍務卿とも話をする。

もし王国と魔族が戦争になれば、帝国が裏切る可能性はゼロではなかった。

『魔族は帝国内乱でミズホ公爵領が使用した魔銃、魔砲よりも高性能な装備を大量に保持しています。更に、魔族は全員が中級以上の魔法使いです』

『だが、兵数は少ないんだろう？』

『そうですね。今は少ないですね』

今の王国軍でも全軍で決死の防戦を行えば、最初はどうにか数で魔族を撃退可能かもしれない。

だが、それで魔族が本気になってしまえば終わりであろう。

『多分、俺も導師も、ブランタークさんも他の魔法使い達も、みんなこの世にいないでしょうね』

まだ知らない魔族の高位の魔法使いが本気になれば、俺達は刺し違えないと撃退できないかもしれないのだ。

『魔導飛行船も、多くの精鋭も失うでしょう。本気になった魔族は、軍備を増強して再度攻めて来る可能性があります。幸いにして、魔族の若者は無職が多い』

褒美で釣って、王国の支配を目指すかもしれない。

『兵士達の犠牲を忘れるな！』と魔族達を政府が煽る可能性もあるのだ。

『帝国としては、魔族の調略に乗っかる可能性がありますよね？』

魔族だけで支配せず、帝国を挟んで王国を支配する。

ペーターとしても、帝国が魔族と戦えば同じ結果になる以上、王国との講和を破棄して共同で攻め込んでくる可能性もあった。

魔族は数が少ないので、内乱で疲弊した帝国は利用価値があると思うかもしれない。

『ううっ……。帝国の国力が落ちて少し楽になったと思ったら……。通商と波風立てない交流で時間を稼ぐしかないな』

戦争で勝てない以上は、上手く対等な条件で友好条約を結ぶしかない。
エドガー軍務卿からすれば、無謀な戦争で国を失うわけにはいかないというわけだ。

『ただ、救いはあります』

『救いとは？』

まず、王国と魔族の国とに対立が少ない。
リンガイアの件があるが、魔族側にはまったく負傷者が出ていない。
今までに交戦した事もないし、むしろ帝国よりも因縁が少ない相手であった。

『確かに、帝国よりは恨みつらみはないよな』

『あとは、魔族の考え方ですね』

一部過激な者もいるかもしれないが数が少ない。
大半は、人間よりも生活水準が圧倒的に上で、無理に侵略などする必要はないと思っている。

『そういう考え方ができるとは羨ましい限りだの』

王国でも過激な好戦派は少ないが、帝国内乱の時には陛下が出兵を抑えるのに苦労した。
領地が増えるという誘惑に、貴族が耐えられなかったからだ。

『魔族はそうじゃないのか？』

『それがですね……』

魔族の住む島はゾレント島と命名されているが、広さはリンガイア大陸の四分の一ほどもあって亜大陸に近い広さがあった。

『昔はほぼ全域に魔族が住んでいたようですが……』

少子高齢化で人口が減り、多くの領域が放棄されてしまった。

今は、島の四分の三が無人の土地であった。

『他にも開発可能な土地はありますし、魔族がその気になれば魔物なんて簡単に駆除できますよ』

切り開いても住む魔族がいないので、そのまま多くの自然や魔物の領域が放置されている。

一部、魔族の学者が研究をしたり、自然保護区に認定されているくらいだそうだ。

『勿体ない話だの』

『かもしれませんが、亜大陸への移住は絶対に提案しないでくださいね』

『なぜだ？』

『好戦派を刺激しますから』

人間が時間をかけて我ら魔族の土地を奪い、滅ぼそうとしている。

そう言って魔族を煽り、リンガイア大陸侵攻を口にする者が出るかもしれないからだ。

『開発は、まだ数百年は王国領内を優先するしかあるまい。魔族の国は遠いので、移民を送ってもコントロールが難しいからの』

陛下は、このリンガイア大陸の開発がまだ全然終わっていないのに、さすがに魔族の国への移民は考えていないようだ。

『状況はほぼわかった。しかし、予想以上にやるの。バウマイスター伯爵』

『まぐれですよ』

そう、俺に外交官としての能力などない。

たまたま現代日本と、魔族の国の政治状況がよく似ていただけだ。

相手をある程度知っているのだから、よほどのバカでなければある程度対応は可能である。

『ですが、俺の仕事はこれで終わりですよ』

『ユーバシャール外務卿か……』

最初は魔族が理解できずに混乱していたユーバシャール外務卿であったが、今はある程度魔族について理解できたので助けは必要ないと言ってきた。

『外交閥でもないバウマイスター伯爵にお株を奪われっ放しでは、ユーバシャール外務卿も気分を害するか』

『はい』

『余も、ユーバシャール外務卿と連絡を絶やさぬようにする。バウマイスター伯爵も、念のために待機してくれるか？』

『わかりました』

テラハレス諸島群にいなければいけないが、もう交渉には出なくていいらしい。

無理に出しゃばってもユーバシャール外務卿達に嫌がられるから、これは渡りに船であろう。

「ただ、エルとブランタークさんとだけで？」

「随分な言い方だな。俺だって、ハルカさんが傍にいた方がいいに決まっている！」

「俺は、美味しい酒と肴があれば。どうせ奥さんと娘は連れて来れないし」

ただし、俺は連れて来ても問題ない。

というわけで、早速エリーゼ達を呼び寄せた。

「魔族の軍隊、魔族の外交使節団、ホールミア辺境伯家水軍の偵察艦艇、王国軍外交使節団が集まってピリピリしている現場に赤ん坊連れであるか。バウマイスター伯爵は大胆である！」

テラハレス諸島群には五十近い島があるが、現在魔族が基地を建設してるのは一番大きな島のみで、他にはいくつかの島に警備兵を

置いているだけである。
俺達は一番外縁部にある小さな島に、帝国内乱の時と同じく石材で家を建て、簡単な港と作って船を置いた。

「ヴェル君も、大物貴族らしくなったのかしら？」

「一応、援護射撃ですよ」

「私にはよくわかないけど、魔族の魔導飛行船って変わっているのね」

今まで赤ん坊の世話を担当していたアマーリエ義姉さんも、何も言わずについて来た。
一部護衛の兵士達と家臣はサイリウスに残し、漁を頼んでいる漁民達の管理を任せる事にする。

数名の漁師達も付いてきて、今は島の海岸に魔法の袋から出した船の整備と出航準備を行っていた。

「ヴェル、これはバカンスなのか？」

「そんなところ」

どのみち、陛下からの命令でテラハレス諸島群にはいないといけないし、ただいるだけでは退屈である。
そこで、エリーゼ達と共に無人島でバカンスを楽しむ事にしたのだ。

「魔族の軍隊がいるんだけどな……」

「大丈夫さ」

いきなり、こちらの拉致や殺害を目論んだりはしないであろう。もしそんな事をする連中なら、とっくにユーバシャール外務卿達はこの世にいない。

「彼らは、自分達が進歩的で文明的である事に誇りを持っている。いきなり俺達に何かする可能性は低いさ」

「でも、ゼロじゃないぜ」

「この交渉が決裂すれば、最悪戦争になる。魔族の軍隊が相手だと、どこにいても結果は同じだからな。ならば、少しでも援護射撃をしないと」

「援護ですか？　ですが、ユーバシャール外務卿が嫌がりませんか？」

フリードリヒを抱いたエリーゼが、俺が考えている事を聞いてくる。

「ユーバシャール外務卿とは別に行う」

「援護がバカンスなの？」

「結果的に、そうなる可能性が高いというわけだ」

「わからないわ」

俺の発言に、イーナは首を傾げた。

確かに、俺の考えている援護は大陸に住まう人達には理解できないと思う。

「とにかく、バカンスを始めよう」

というわけで、数時間で住む場所もできたのでフリードリヒを抱いて海岸を散歩する。

「フリードリヒ、綺麗な海だろう？」

「あーーー」

「開発が入っていないからな。自然のままなんだぞ」

「あぅーーー」

「そうだな」

「あのよ、ヴェル。やっぱり会話になっているようでなっていないから」

「大丈夫、フリードリヒはもうわかっているから」

「親バカかよ！」

「悪いか！」

この子は、俺の跡を継いで面倒な貴族や王国政府と渡り合ってくれるはず。

母親はエリーゼだし、魔力も伸びるだろうし、優れた二代目にな

ってくれるはずだ。

「そして、俺は安心して引退するわけだ。あとは自由に気ままに生きるぞ」

「お前、生まれたばかりの赤ん坊にそういうプレッシャーを与えるなよ……」

賢いフリードリヒが早めに家督を継ぎ、俺は安心して早めの隠居生活を送るプランにエルが文句を言う。

「とにかくだ。今は、元気に育ってくれればいいのさ！」

「お前、誤魔化しただろう？」

エルのツッコミは無視して順番にアンナ、エルザ、エトヴィン、フローラ、イレーネ、ヒルデ、ラウラと生まれた順に抱いていく。

何度見ても赤ん坊は純真で可愛いものだ。

既に薄汚れてしまった俺とは比べ物にならない。

夕方になり、エリーゼ達は子供達に母乳を与えてから野外でバーベキューを行う。

貯蔵していた肉、野菜などに、連れてきた漁師達が獲っていた魚貝類も焼かれ、久々に休日をエンジョイしていた。

「ここ最近は、文句を言いつつ楽しんでいたようにも見えるのであるな」

「そういうアーネストはどうなんだ？」

「我が輩は、趣味と仕事が一致しているのであるな」

家は三つ作り、一つは俺達、もう一つは漁師達、あとの一つはアーネストとモール達、導師とブランタークさんが使用していた。

モール達はもう十分に観光もしたしと言い、アーネストは論文の執筆はどこでもできるからと付いて来たのだ。

「しかし、なかなか纏まらない交渉であるな」

「先生、民権党の新人議員ですから」

「政治家としては微妙？」

「いきなり交渉決裂で、『戦争だ！』とか言わないだけマシですって」

どういうわけか、モール達にもレミー団長達の評価は低かった。

日本にも、こんな政治家はいた記憶があるが。

「それでさ。この遊びが交渉の援護になるの？　ボクとしては、ヴェルがエルザ達の相手をしてくれて嬉しいけど」

「ふっ、戦争はよくないです。赤ん坊は国を救うのです」

「子供がいないと、あとで王国が大変なのはわかるけど……」

ルイーゼは俺の考えが理解できないで悩んでいたが、突然戦闘態勢になってある方角に殺気を向ける。

「いやーーー。人間の魔法使いもやるっすね。さすがに、実戦経験者は違うっす」

「誰かな？　子供達がいる以上は、ボク容赦しないよ？」

「いえいえ。自分に戦闘の意志はないっすよ。これでも、奥深い魔物の領域にも取材に行く事もあるっすから、ある程度は鍛えているっす」

「取材？」

「はいっ！　肝心の交渉の方がグダグダで、編集長から何か面白い記事を送れってうるさいから、ここは変わった事を始めたバウマイスター伯爵さんの取材をしようかなと思ったっす」

ようやく、俺が期待していた人というか魔族が姿を見せた。

その魔族は二十代前半ほど、ダークブラウンの髪を三つ編みにして後ろで束ね、目には丸眼鏡、ツナギに似た服を着て、首には魔道具のカメラを下げていた。

「どうも、エブリディジャーナルの新人記者ルミ・カーチスっす。取材の許可をいただきたいっすが……」

俺の予想どおりに魔族のマスコミが姿を見せ、俺の魔法を使わない援護作戦が始まるのであった。

素人の俺でも、知っていたマスコミ対策くらいはできるであろうから。

第百四十一話　魔族の新聞記者ルミ・カーチス。

「魔族には新聞という情報伝達手段があり、その情報を元に世論が形成される事も多い。選挙で政治家が選ばれる以上、政治家を選ぶ判断基準となる新聞の報道に政治家は敏感だ。もし新聞社を敵に回して批判でもされたら、民衆の支持を失って選挙に落選する事もあるのだから」

「いやーーー、バウマイスター伯爵さんは博識っすね」

「自らが新しい権力であると言っている者もいるな」

「バウマイスター伯爵さん、本当に詳しいっすね」

結構適当に言ってみたんだが、ルミは俺の発言に感心していた。

もしやと思ったが、魔族のマスコミにも腐敗した連中がいるようだ。

「権力は時が経てば腐敗するので、新聞も腐敗しているかもしれないけど」

「厳しい一言っすね。本当に、バウマイスター伯爵さんは魔族の国にお詳しいようで……」

突如俺達の前に姿を見せた、エブリディジャーナルの新人記者ルミ・カーチスという魔族の女性。

彼女は、魔族の国で一番の発行部数を誇る新聞社の新人記者であった。

「新人さんなのに、外交交渉に同伴可能だったんだ」

「団長のレミーさんは、女性の社会進出を推進しているっすからね。自分は女性なので選ばれたっすよ。まあ、特にする事もないんすけど」

「交渉を取材だっけか？　しないの？」

「ルイーゼさんっすよね？　そこは建前で、自分みたいなペーペーで若い女性記者が出しゃばると、年配の男性記者達がうるさいんすよ」

「レミーさんは文句を言わないの？」

「あの人も、結構いい性格しているっすからね。自分達と同行する記者団に女性が混じっていれば、それだけで宣伝になるから何も言わないんすよ。これを形式だけ整えたというか、男女同権に一歩前進はしたのか。判断に悩むところっすね」

他にベテランの男性記者が数名いるので、交渉関係の報道では仕事がない状態だそうだ。

アリバイのために連れて来られたが、重要な交渉関連の取材を新人のそれも女に任せる事はあり得ないのであろう。

「あんなグダグダの交渉、新聞とやらで書いて誰か読むんだ？」

「『グダグダしているから、民権党の政治家は駄目だ！』とか、『さすがは民権党、ジックリと交渉している』とか、記事はいくらでも書きようがあるっすね。どう受け取るかは読者次第でして」

「身も蓋もない言い方だな……」

ブランタークさんは、ルミの発言に呆れ顔だ。

「エブリディジャーナルの元記者で、今は民権党の政治家も多いっすから。国権党にもいるっすけどね。今の政治部長が民権党の政治家になった元記者の部下だったとかで、民権党批判が激しいと、記事の表現を和らげるようにうるさいっす」

「いい加減だな」

これを談合というか、なれ合いというか、大人の対応というか、立場に応じて色々と言い方が変わってくると思う。

「真のジャーナリズムへの道は遠いっすね」

王国や帝国にも号外形式で配ったり、週に一度、月に一度と発売される瓦版のような物がある。

これで庶民は情報を得るわけだが、貴族の領地だと領主批判は難しいし、ブライヒレーダー辺境伯は、俺の王都滞在時の情報を面白おかしく書かせてバウマイスター騎士爵領の領民達に配った。

それも原因となってクルトは暴走したのだから、報道で政治をコントロールする手法に貴族でも政治家でも違いはないというわけだ。

「それで、私達を取材して何か記事になるのですか？」

「エリーゼさんでしたっけ？　十分になるっすよ！　ああ、一応独占取材させて貰える立場として、配信する記事は事前にお見せする

っす。プライバシーの問題とか、うるさい連中もいるっすから」

というわけで、いまだ交渉が続くなか、テラハレス諸島群の端の島でバカンスを他の楽しみながらルミの取材も受ける事となった。

「バウマイスター伯爵さんは、お仕事があるっすよね？」

「まあね」

交渉があの様なので、俺は『瞬間移動』を使って三日に一度はバウマイスター伯爵領で土木工事をしている。

特別に何かなければ午前中に終わるよう、ローデリヒにスケジュールを調整してもらってだ。

あとは、一週間に一度はサイリウスの港に飛び、漁師達に貸している船の魔導動力に魔力を補充している。

残留している兵士や家臣が彼らを管理し、漁の成果を駐留している軍や市場に販売する仕事をしていた。

「残りは、この島でバカンスっすか？」

「一応、待機という事で」

「了解っす！」

とはいえ、ユーバシャール外務卿達はもうなるべく俺に頼りたくないようで、基本は無視されている。
専門分野に素人が口を出せば嫌な顔をされるのは当然だ。
そこで、残りの時間は自由に過ごしていた。
元々好きで来たわけではないし、俺も他人の仕事を奪ってまでしたいとは思わないからだ。

「オムツ替えが、ほぼ全員一斉にくるとは！」

朝、アマーリエ義姉さんが、フリードリヒ達のオムツ替えに一人奔走していた。
他のメイド達は場所が場所なので、今はサイリウスに残留している。
おかげで、アマーリエ義姉さんは忙しいようだ。

「あっ、俺も手伝います」

「ヴェル君、ここはいいけど、バウマイスター伯爵領でやっては駄目よ」

「わかっていますよ」

赤ん坊のオムツを替えるのは、最初は苦戦したが、ある程度数をこなせば俺にもできるようになった。
どんな事もでも基本は慣れだな。

「へえ、伯爵様がオシメ替えですか？」

「普段はしないけど、こういう時にはやるよ」

普段は一応伯爵なので外の目もあるし、当主がメイドやベビーシッターの仕事を奪うのは問題であったからだ。
こういうほぼ家族だけの状態なら、俺がオシメを替えても問題ない。

「貴族も色々と大変なんすね」

「私も手伝いますわ」

「カタリーナは、魔法の訓練終わったのか？」

「ええ。もうヴェンデリンさんのように魔力は上がりませんけど、魔法の精度にはまだ課題が多いですわね」

カタリーナに続き、外で特訓をしていたエリーゼ達も戻りみんなでオシメを替えたり母乳をあげていた。

「子供が産まれると、胸が大きくなるって聞いたんだけどなぁ……。カチヤですら、多少は大きくなっているのに」

「こらルイーゼ！　気を悪くするぞ！　あたいは元々、そこそこはあるんだ！」

お乳をあげながら、ルイーゼが自分の胸のなさをボヤく。
母乳が足りないわけでもないので、俺は問題ないと思うのだが。

「ねえ、記者さん。魔族の女性は子供を産むと胸が大きくなるの？」

「そうっすね。個人差っすかね？　自分、子供を産んだ事がないのでわからないっすけど」

「ルミさんは、お仕事に生きているのですか？」

三十歳になってようやく出産し、以前は冒険者稼業オンリーであったリサがルミに質問をする。

「できれば結婚したいとは思うんすけど、この仕事って時間不規則だし、相手もいないから暫くは一人っすね。しかし、赤ん坊が九人もいると凄い光景っすね」

ハルカが自分の子供の世話もしているので、部屋には赤ん坊が九人もいる。

魔族の国でこんなに赤ん坊が集まるのは、大きな病院だけだとルミはいう。

「そういえば、魔族は少子高齢化なんだって？」

「同朋からの情報っすね」

ルミは、既にアーネストとモール達の存在にとっくに気がついていた。

『先生、何をしているっすか？』

最初ルミは、アーネストの顔を見て驚いていた。

まさかこんなところで会えるとは、という感じの表情だ。

『うん？　我が元教え子であるな。我が輩なら、真の研究であるな』

『先生は、相変わらずの奇人ぶりっすね』

『我が輩の教え子で、考古学に進んだ者がいないとは……。嘆かわしい限りであるな』

『先生、考古学では飯は食えないっすよ』

ルミは、モール達と同じ事を言った。

『文化部の記者なら、我が輩も教え子を褒めたのであるな』

『新聞社で、文化部は扱いが悪いっすからね。新聞社の花形はやっぱり政治部っすから』

最初に新聞は政治欄だけじゃやないと言っていたルミであったが、実はちゃっかりと政治部所属だったようだ。

『無念であるな』

ルミはモール達と同じ大学の出で、二年ほど先輩なのだそうだ。
そして何と、アーネストの教え子でもあった。
ただしアーネストからすると、ルミは不肖の教え子であった。

『先生が生きていたとは驚きっす。取材で得た情報によると、先生は『アテモンゴ大森林』で未知の遺跡を探索中、魔物に食われて死んだって結論づけられていたっすよ』

俺に言わせると、アーネストほどの魔力の持ち主がそう簡単に魔

物の餌食になるとは思えないのだが……。

『こいつは、殺しても死なないのである！』

導師も同じ風に思ったようだが、彼も殺しても死なないタイプなので人の事は言えないと思う。

『我が輩、文化系で戦いは苦手なのであるな』

『抜かせなのである！』

やはり、アーネストと導師の相性はあまりよくなかった。

『それにしても、ジャーナリズムもいい加減であるな。我が輩は、新しい未知の遺跡を求めてリンガイア大陸に向かったというのに。マスコミは、第四の権力を自称して権力の腐敗に呑まれたのであるか？』

『先生、相変わらず毒舌っすね。あと……駄目な後輩達もいるっすね』

レミの視線は、顔見知りであるモール達へも向く。

それにしても、世間とは意外と狭いらしい。

『先輩、自分は就職できたからって酷い言い方ですね』

『そうですよ』

『俺達は、こうして元気だからいいけど』

『青年軍属を抜け出して、行方不明だったアーネスト先生と共にバウマイスター伯爵さんといるとは、事実は小説よりも奇っすね』

ルミは、脱走兵と認識されても文句が言えない行動を起こした後輩達に呆れていた。

『俺ら、脱走で死刑？』

『ならば、政治亡命を希望します』

『戻って死刑は嫌だから、それもいいな』

『死刑？　そんな結果になるわけがないっすよ。後輩達が常識外れなのは間違いないっすけど』

青年軍属達が問題ばかり起こして使い物になっていない事を、既に防衛隊の連中は諦め受け入れている。

問題とはいっても、大半が働きが悪くて、待遇の改善ばかり言うからだ。

そんな中で、魚を獲りに行くという理由で島を出てしまった三人は、防衛隊上層部の心胆を凍らせるのに十分であった。

『大昔の法だと防衛隊イコール軍なので、脱走は死刑っす』

だが、実際にモール達を死刑にするわけにはいかないらしい。

『青年軍属とはいっても、基本は短期労働者っすから』

正式な軍人ではないので、逃げたからといって死刑にするわけに

もいかない。
法を拡大解釈して処罰するにしても、今度は別の問題が浮上する。
『防衛隊は、既に軍ではないという考えの人もいるっす』
魔族にも不戦・平和団体がいて、彼らからすると今の戦争がない状態は好ましい。
防衛隊は治安維持と災害救助の手伝いだけしていろという意見であり、彼らは今回の防衛隊派遣を苦々しく思っているそうだ。
『そういう連中からすると、脱走した軍属の処罰なんて軍を復活させるようでおぞましいと、反対運動が起こる可能性が高いっす』
そこに、防衛隊の縮小論を唱える人々、人権団体などが加わって大騒ぎとなるのは確実で、今の政府はそれに抗えない。
なぜなら、彼らは与党民権党の支持母体であるからだ。
『政治の問題かよ……』
『まあ、あれっすね。魔族も魔族なりに悩みがあるんすよ』
政権成立直後にこの事件なので同情論も多いそうだが、政治家は結果を出さないと意味がない。
それが今の政府の悩みだとルミが語る。
『そんな状態なので、自分はバウマイスター伯爵さんを取材して別視点でいくっす。先生達は、今は見なかった事にするっす』
ルミは、取材を続けるがアーネスト達の事は記事にはしないと言った。

『下手に記事にすると『魔族から裏切り者が出た！』、『売国奴だ！』とかうるさいのがいるっすから』

以上のような経緯で、またもアーネストは元教え子と再会する事になる。

「ヴェル君、みんな眠ってくれたわよ」

「じゃあ、休憩にしますか」

「そうね。お茶を淹れるわ」

フリードリヒ達は母乳をお腹一杯飲み、オシメも綺麗になったのでスヤスヤと寝ていた。

赤ん坊は寝るのが仕事なのでこれでいい。

アマーリエ義姉さんが全員分のお茶を淹れてくれたので、そのまま休憩がてらルミと話を続けた。

「魔族ってのは、子供が生まれにくいっすからね。人間が羨ましいっすよ」

「羨ましいの？」

「イーナさん、自分も普通に結婚して子供くらい産んでみたいっすから」

魔族は人間の三倍近い寿命があるので、大体二百五十年から三百年の人生だそうだ。
寿命が長い分子供が生まれにくく、魔族は少子高齢化で悩んでいるらしい。
ルミもまだ独身だと教えてくれた。

「魔族は若い期間が長いっすけど、まず五十歳を超えないと結婚しないっすね」

二十歳くらいまでは、人間と成長速度に差がないらしい。
だが、二十歳で成人されても今は職がないので恐ろしく長い学生期間が存在した。

「それで、二百歳くらいまでは人間で言う二十代前半くらいまでしか年を取らないっす」

残りの五十年から百年で、徐々に年を取るそうだ。
という事は、あのレミーとかいうおばさん、実は二百歳を超えているのか……。

「五十歳で結婚すれば、子供は二～三人は産めるっすけど」

晩婚化が進んで百五十歳を超えて結婚する魔族も多く、そうなると子供は一人が限界。
出生率が二を割れば、現代日本と同じく少子高齢化というわけだ。

「政府は対策を立てているっすけど、若者の半分に職がないので、無職で結婚は辛いっすね」

ルミの視線は、後輩である無職三人組に向く。

「先輩こそ先生にも負けない毒舌だから、在学中に彼氏がいた試しがないんですよ」

「俺でも、在学中は彼女くらいいたのに……」

「先輩、顔もスタイルも悪くないんですけどね。何か足りないんですよ。優しさだったんだな！　エリーゼさん達を見て俺は確信した」

「ううっ……むかつく後輩達っすね……」

彼氏いない歴年齢がモール達によって暴露されたルミは、恨めしそうに彼らを見つめる。

「でも自分、基本的に寛容っすから、主夫をするなら婿にしてやるっすよ」

「先輩をですか？」

「ごめんなさい」

「友人としてはいい人だと思うんですけど……」

「無職で毒男の後輩達にまでフラれたっす！」

ルミは見事にモール達にもフラれ、一人肩を落とした。

モール達も、女性なら何でもいいわけではないようだ。

「もういいっす！　自分、仕事に生きるっす！」

だが、根がポジティブシンキングのようで、すぐに立ち直って取材を再開する。
赤ん坊の世話が終わると、今度は朝食の時間になる。

「ご飯をよそい、その上にしょうゆ、みりん、砂糖で漬けた魚の刺身を乗せ、ゴマ、三つ葉をアクセントに、最後に熱い出汁汁を注ぐと……」

今は両国の軍艦が睨み合っているが、テラハレス諸島群はあまり漁民も来ないので魚の宝庫であった。
俺達で漁に行けない時には、連れてきた漁師達に任せてその成果を調理して食べる。

せっかくなので、新鮮な魚料理を多く出すようにしていた。
和食が多いのは、ミズホ公爵領経由で他の材料を仕入れているからだ。

「あーーー、朝酒最高」

「ブランタークさん、飲み過ぎは駄目ですよ」

「一杯だけさ」

ブランタークさんは魚の干物を肴に、朝から一杯やっていた。
エルがそれを窘めながらご飯を食べ、他にも焼き魚、煮物なども出ている。

「新鮮な魚は美味いな」

「であろう？　沢山食べるのである」

「いや、導師様みたいに丼は不可能だから……」

カチヤは、刺身茶漬けを丼で食べる導師に驚いていた。

「お替り」

「ヴィルマは相変わらずだな！」

その丼をお替りするヴィルマの方がもっと凄かったが。

「バウマイスター伯爵家生家伝来の食事とか、そういうのは食べないんすか？」

「えっ？　食べたい？」

ルミは、貴族家には代々伝わる伝統メニューなどがあって、それを常に食べるものだと思っていたようだ。

あの塩スープを食べたいとは、どう考えても中流家庭の出であるルミの方がいいものを食べているであろうに。

多分、俺が物凄く上流階級の出だと誤解しているんだな。

あとは、貴族にも色々とある事に気がついていないようだ。

「興味あるっすね」

「変わってるな。今は材料がないから作れないけど」

スープに入れる野菜やクズ肉も、硬い黒パンも、今は逆にその材料を持っていない。

残念な事に口が肥えてしまったようで、うちの両親ですら食べなくなっていたからだ。

『不味いな。俺は、よく何十年もこんなメシを食えていたな』

『あなた、何も今無理をしてそんなものを食べなくても……』

前に、父が遊びで昔の食事を母に作らせて食べてみたのだが、塩のみでしかも味付けが薄いので不味くて食べられなかったと、パウル兄さんから聞いていた。

「資料が間違っていたんすかね？　大昔の魔族の貴族はそうだって書いてあったんすよ」

王国貴族は、ここぞという時に客に出す定番メニューのようなものはあったが、普段は特に決まったメニューを食べるような事はしない。

ただし、昔のうちの実家のように使える食材が限定されているので、同じような食事ばかり出る家は多かったが。

「昔のバウマイスター家のメニューなら毎日同じだったけど……」

その理由とメニューを教えてあげると、ルミは『食べたくない』という表情を浮かべた。

「極貧からの出世っすか？　記事になるっすね」

ルミは大喜びでメモを取り続ける。

「そういう話って、魔族の一般人に受けるの？」

「受けるっすよ」

魔族の国でも、貧困の幼少時代を経て若くして会社の経営に成功した人や、名を成して政治家になった人の書籍などは、ベストセラーになるケースが多いのだそうだ。

俺が、その凄い人達と肩を並べるというのもおかしいと思うのだが。

「そういうのに憧れるって、魔族も人間も同じっすよ」

「それもそうか」

人間と同じく、成功者への憧れと好奇心が強いのであろう。

「いやあ、いい記事が書けそうっすね。ところで、人間は魚が好きっすね」

「魔族は魚を食べないのか？」

「食べる量は少ないっすね」

魔族が食べる魚の大半は養殖魚で、あとは極一部の地方の漁師と、釣りを趣味にしている人が釣った魚を食べるくらいらしい。

そして、その少なくなった漁師に動物愛護団体が噛みついて衝突、時おりニュースになるそうだ。

「漁は自然を壊すのと、自然の魚を殺すのは可哀想という事っすね」

「養殖でも、魚を殺すような気がするけど……」

「エルヴィンさん、そこは心に棚を作って誤魔化すというパターンすよ」

「俺には理解できない……」

自然界にいる魚を獲り過ぎると生態系がおかしくなるので、養殖魚なら大丈夫という考え方なのかもしれない。

ただ、その考え方のせいで魔族は海沿いに住んでいる人しか大量に魚を食べないようだ。

「内陸部の魔族は、肉と穀物が主食っすね」

大規模農場と畜産場で安く作った素材を、大規模食品加工メーカーが加工販売する。

薄利多売を維持するために商品数は少なく、変わった物を食べたければ高級なお店に行くか、自分で材料を入手して調理するしかなかった。

「魔族は、毎日同じようなものを食べている人が多いっすね」

同じような物だから安価に量産できて、食料が配るほどあるわけだ。

そういう社会だと飢えが原因の革命は起こらないのであろうが、面白みには欠けるかもしれない。

「食べ物は、人間の方が美味しいのであるな」

「先生、昔は味音痴だったじゃないですか。毎日研究室から出ないで、食パンだけ齧って」

ルミによると、アーネストは研究に熱中すると発掘以外では外に出かけなくなるそうだ。
よくよく考えてみると、今とまったく同じ状態であった。

「昔は食事に興味がなかったのであるな。今は、多彩な食事が出るので我が輩も満足であるな」

アーネストは、毎日出される食事は残さず食べていた。
最初は食事に興味がないのだと思っていたが、実際には食事を楽しみにしていたようだ。

「しかし、こんな普段の生活が記事になるのか？」

「大丈夫っすよ、バウマイスター伯爵さんは理解しているようですけど」

エルが考える新聞の取材とは、俺が固い政治の話をしてルミがそれを記事に纏めるとかそんなイメージなのであろう。
最初の説明と、ルミから見せてもらった新聞の現物でそう感じていたようだし。

「新聞は、政治面だけじゃないっすよ！」

そして、その日の夕方。
ルミが書いた記事原稿が俺達に渡された。

「『なかなか終わらない両国の交渉！　その途中で突如交渉に顔を出した王国の若き貴族バウマイスター伯爵、彼は我々の貴族像を根底から覆す人物であった』がタイトルね」

あとは、俺が領主として開発に精を出しつつも、空いている時間に赤ん坊の面倒を見たり、奥さん達と海に出て釣りを楽しんだり、獲った獲物を捌いたり、調理したりもしていると書かれていた。

「まんま普段のヴェルだけど、これが役に立つのか？」

「エルヴィンさん、今回の交渉で一番問題なのは、双方がお互いをよく知らず、一部偏見があるという点っす」

魔族は、人間を古めかしい封建社会で生きる野蛮な連中だと思い、それに人間側が反発している。

この構図をどうにかしないと、一向に交渉は進まとルミは考えたようだ。

残念ながら、レミーとかいう意識高い系の女性政治家はそう思っていないようだが。

「ですから、ここはバウマイスター伯爵さんの記事で、王国の人間も魔族とそう違わないと伝える事が肝心なんす」

「それで、こういう記事なのか」

ルミは、あえてこういう記事を配信する事で、人間と魔族との融和を狙っているらしい。

新人記者の癖に、考えている事が強かであった。

「戦争になったら堪らないっすからね」

「危険はあるのか？」

「あるっすよ」

まず、今の時点で交渉解決の糸口すら見えていない。
あまりに進展しないので、戦争でケリをつければいいという意見も出始めているらしい。

「数は少ないっすけど、そういう連中は声が大きいっす」

「その後ろに、そいつらを扇動している奴らがいるんだろう？」

「バウマイスター伯爵さん、正解っす」

これは戦争ではなく、古い封建制度によって民衆を抑圧する貴族や王族を倒し、自分達が大陸の人間達に民主主義を教えてあげる。
という論調を始めた連中が出始めたらしい。

「いや……、民主主義って……」

今の大陸では、間違いなく不可能であった。
辛うじて字を読むくらいは大半の人が可能であったが、それで民主主義など、まだ早いというのが俺の意見だ。

「無用な混乱を招くと思うが……」

「そこで、まずは自分達がその地位について人間を導いてあげようというわけっす」

何の事はない。
民主主義を建前に、少数の魔族で人間を支配したいわけだ。

「最近の政治家は世襲が多いし、コネで親族を公務員や大企業に就職させたりするっすからね。貴族とあまり変わらないと言う人も多いっすね」

それが原因かは知らないが、魔族の国の人口は減少傾向にあって経済力や市場も徐々に少なくなっている。
それを解決するために、大陸へと進出したい。
企業は市場を、政治家は新しい支配地を。

これを過去の地球では、植民地支配と呼んだ。

「やれやれだな」

「ただ、肝心の大衆にはウケが悪いと言いますか」

確かに職がない若者が多いが、別に生活に困っているわけでもない。
一部だけが大騒ぎして、大半の民衆が醒めた目で見ているだけだそうだ。

「第一、みんなにそんな活力があったら、国内にあんなに未開地を抱えていないっすから」

更にこの数百年で、維持が不可能な土地を大分放棄したそうだ。
過疎化が進み過ぎて人口がゼロになった土地を、管理すると税金の無駄だからと放棄したらしい。

「魔族、大丈夫か？」

「大丈夫だと思うっすけど」

大丈夫というか、騒いでも仕方がない。

自然の摂理に任せるしかないのでは？　という意見も多いらしい。

騒いでいるのは、市場が縮む商売人と実入りが減る政治家だけなのかもしれない。

「古代魔法文明が崩壊した時には、魔族は十万人くらいしかいなかったっす。もしかすると、今の魔族は多すぎるから適性数に戻ろうとしているだけかもしれないっす」

「そうなのか」

魔族は、最盛期から衰退の入り口に向かっているのかもしれないな。

それでも、古代魔法文明時代の十倍近い人口か。

やはり魔族は侮れない。

「それで、この記事を載せても問題ないっすよね？」

「ないけど。もう載せているじゃないか」

「それもそうっすね。領民を一日中扱き使って、重税を課し、毎日贅沢三昧、領地に綺麗な女性がいたら召し出すとかだと、自分も記事にしにくかったので」

「そんな事、した事ないけどな」

リンガイア大陸も広いので、一人もいないとは言わないけど。

むしろ、これ以上の女性は勘弁してほしいくらいだ。

特に問題もないので、俺に関する記事はエブリディジャーナルにそのまま掲載された。

「反応は悪くないっすね」

議会では、『こちらの方が技術力が上だし、もし攻められても防衛可能なんだから、高付加商品を大陸で販売するだけでいいじゃないか。儲かるし』と言う政治家が増え始めたらしい。

新聞の記事を読んで『向こうの支配者も文明人なんだから、条約結べばいいだろう』という考えに至ったようだ。

加えて、『今の我々では、大陸を支配しても維持できんよ。軍、官僚、技術者などを出せても最大で五万人、この人数で推定人口五千万人で今も増え続けている人間を支配など不可能』とのレポートが、防衛隊からも出されていた。

『もっと出せないのか？』

『無理ですね。本国の治安維持任務もありますし、そもそもこの数値は、防衛隊が確実に増員された場合です。ヘルムート王国と、今は交渉のテーブルにないアーカート神聖帝国を打倒するのに犠牲者が出るでしょうし』

『どの程度出ると防衛隊は予想しているのか？』

『最低でも、二千人から一万人ほどと推定しています』

『少なくて二千人とは……』

今の魔族の国ならば、内閣が総辞職した挙句、次の選挙で確実に野党に転落するほどの損害だ。

長らく戦争がなかった魔族は、同朋の死に慣れていなかった。

『これは純粋な戦闘で生じる犠牲者の予想です。この上、大陸を占領して維持するとなると……』

魔族という悪辣な支配者に対し、人間が抵抗活動を始める可能性がある。

正面から戦って勝てないとなればテロ行為が行われ、その組織や拠点を潰すのにまた犠牲が出てしまう。

『十年で、三万人以上が殉職する可能性があります』

『我らは優れた技術と、人間よりも多くの魔力があるではないか！』

『それは確かですが、常に一分の隙もなく人間からのテロに備えるなど不可能です。何しろ、我らは圧倒的に数が少ないですから』

食べ物に毒を入れられるかもしれないし、睡眠中に寝首をかかれる可能性もある。

人間と魔族に身体的な特徴の差がないため、美女に誘われて人気のない場所に誘われ、そこで殺されるというような案件も増えるはずだと。

『防衛隊を大幅増員だ！』

『例の青年軍属をですか？』

『そうだ！』

『あの連中では、すぐに隙を作って殺されるでしょうね』

防衛隊が精強なのは厳しい訓練を一定期間受けていたからであり、いきなり青年軍属を正規兵にしても人死が増えるだけだと防衛隊の幹部が説明する。

『我々は政府の命令があれば行きますけど、それで出た犠牲に対する責任も政府にありますとしか言えませんな』

『ううっ……』

以上のようなやり取りが議会で行われ、政府が出兵論を言う可能性はなくなったらしい。

まだ一部、騒いでいる連中はいるそうだが。

「魔・人共栄圏とか、魔・人共同体とか言っている連中がいるっす」

政治思想が、右も左も大騒ぎという事のようだ。

「こういうとバウマイスター伯爵さんは怒るかもしれないっすけど、まだ大陸征服論者の方がマシっすね」

「征服するという事は、一応自分が悪事を働いているという自覚があるからな」

「そうっすね」

むしろ危険なのは、民権党の方に多い『人間に民主主義を教えるため、旧弊の徒である王族と貴族を打倒する』とか言っている連中

の方だ。
ソ連の共産革命のような考え方なのであろう。

「彼らは、自分達がとてもいい事をしていると本気で思っているっすからね」

ただ、今の俺は現状では何もできない。
交渉には参加しておらず、ただ現地に待機して普段通りに生活しているだけだ。

定期的に陛下への連絡は忘れていなかったが。

「焦って交渉を結んでも、碌な結果にはならぬしの」

テレーゼの言うとおりであろう。
俺から見ても、本当に仕事をしているのか怪しい両国の交渉団であったが、陛下は今のところは任せておくつもりのようだ。

「ところが、一つだけ懸案事項があるんすよ」

「拿捕されたリンガイアと、拘留されている船員達か？」

「そうっす。政府はとっとと返したいのが本音っすね」

「そんなに金がかかるのか？」

「抑留している人間を虐待したなんて風評が出ると面倒っすからね。拘留にも経費もかかるし、あのリンガイアとかいう大きな船。あれも、魔族基準で言えば旧式船で使えないっすから」

抑留されたリンガイアの船員達が、人質や交渉のカードになると思ったのは我々だけらしい。
実際には、乗組員達を拘留するのにも費用がかかる。
リンガイアみたいな旧式船、魔族の国では使い道がない。
防衛隊が所持しているドッグを長期間占有しているため、とっとと返してはどうかと議会から突き上げられたようで、リンガイアと船長以下の乗組員は解放されるかもしれないという。

「経費の問題なのか……」

『最近、うちの国も社会保障費の増大で財政が厳しいっすからね。我が社もよく政府の無駄遣いを記事で指摘するっすから」

何か、本当にどこかで聞いたような話だな。
などと思っていると、突然携帯魔導通信機の呼び出し音が鳴った。
すぐに出ると、相手は何と陛下であった。

『バウマイスター伯爵、実は頼みがある』

挨拶も抜きに、陛下は俺にある命令をくだした。
頼みとは言っているが、断れるはずがないので命令に等しい。

「はい、何でしょうか？」

『実は、拘束されているリンガイアの乗組員達の様子を見に行ってほしいのだ』

「俺がですか？」

『向こうは言葉の端々に、自分達は進んだ文明人だというニュアン

スを含ませるからの。バウマイスター伯爵がいきなり拘束されたりはしないはずだ。そこで、直接魔族の国に出向いて欲しいのだ』

「はあ……」

魔族の国に興味があるのでそれはいいのだが、もし魔族が暴走して攻撃してきたらと思わないでもない。

「バウマイスター伯爵さん、魔族は高度な文明国を自称しているっす！　昔の魔族でもないですし、正式な特使としての訪問なら安全っすよ！」

ルミにも魔族としてのプライドがあるようで、俺の懸念を全力で否定した。

確かに、王国でも帝国の使者を殺した事などよっぽどの大昔、戦乱の時くらいしかない。

今まで一万年以上も戦争をしていない魔族なら、もっとあり得ないか。

『前に報告してきた新聞社の記者という者か？』

「ええ」

『ユーバシャール外務卿達に何の進展もないのが困り物でな。かといって、交渉を焦ればこちらが不利な条件を呑まされる可能性が高い。そこで、バウマイスター伯爵に行ってほしいのだ』

「それはいいのですが、他に希望者はいないのですか？」

数は少ないが、外務閥の貴族は他にもいると思うのだ。

『どいつもこいつも、魔族の国と聞いて怖気づいておるわ。挙句に、帝国内乱で戦功を挙げたバウマイスター伯爵なら適任だと抜かしおった』

「はあ……」

本当に外務閥の貴族って、盲腸のあだ名に相応しい連中が多いな。

『すべてバウマイスター伯爵に任せる。リンガイアの乗組員達の様子を最優先で頼む。随伴する人員も好きにして構わない』

「わかりました。急ぎ、魔族の国へと向かいます」

当然陛下からの命令を断れるはずもなく、俺は魔族の国へと向かう事になる。

第百四十二話　ゾヌターク共和国。

「まったく、面倒な仕事を……」

「陛下からの命令だから仕方がないわよ」

「そうなんだけどさぁ……」

イーナ、そうは言うけどさ。

面倒なものは面倒なのだ。

「男は、一度決めた事にグチグチと文句を言っては駄目よ」

「はい、わかりました」

まあ、アマーリエ義姉さんがそう言うのであれば……。

「ヴェルは、アマーリエさんの言う事はよく聞くわね……。子供？」

「俺は大人だっての！」

小型魔導飛行船で西へ一週間。

俺達は、ようやく魔族の国に到着した。

次からは『瞬間移動』で来れるが、今のところ再訪したいとは思

っていない。
モール達からの話を聞くと、どうも無味乾燥な国のような気がしたからだ。

ゾヌターク共和国と呼ばれるその国は、リンガイア大陸の四分の一ほどの広さがある島というか亜大陸にある。
魔族の人口は百万人ほど、島の四分の一ほどを生活圏としていて、残りの領域は自然と魔物の領域で占められている。

昔は亜大陸の大半に人が住んでいたそうだが、段々と魔族の人口が減って放棄され、そこが自然に呑まれていった。
故に、無人地帯には遺跡なども多く、アーネストはその発掘作業をたまにしていたらしい。

ただ、ここ数十年ほどは国が予算不足を理由に資金を出さなかったので、大規模なものは滅多にできなかったそうだが。
その不満が、アーネストのリンガイア大陸への密出国に繋がったというわけだ。

「アーネスト、懐かしの故郷だぞ」

「効率のいい社会ではあるが、つまらないのであるな」

小型魔導飛行船の窓から見える港の風景に、アーネストは特に感動もなく答える。

確かに、海上船と魔導飛行船の港を兼ねているそこは、無機質なコンクリートとコンテナ、クレーン、プレハブ風の建物のみで構成されていて見ていてすぐに飽きてしまう。
凄いとは思うのだが……。

古めかしいが情緒はあるサイリウスとは違って、効率第一で観光地にはなり得そうにない。
ここを見たいと思う、人間の観光客は少ないだろう。
王国と帝国の政府関係者達は、視察したくなるであろうが。
効率を極端まで極めているのは港だけではなく、そこから見える街並みも同じであった。

同じような箱型の住宅が綺麗に並び、道路も真っ直ぐ整備されてまるで碁盤に並ぶ石のようだ。

「お主、よくついてくる事を許可したのである。祖国では裏切り者扱いされぬのか？」

俺達に同行している導師が、アーネストに訪ねる。
実は、アーネストのみならず、モール達も俺達に同行していた。

彼らは、俺達の世話役兼アドバイザーのような扱いになっている。
さすがに魔族側もバカではないので彼らの存在に気かつき、かといってアーネストの密出国とモール達の脱走を処罰するのも躊躇われたという事情のようだ。

アーネストの密出国は、魔族が大陸と交流をしなくなってからは重罪ではなくなった。
その程度で彼を処罰するのかという程度の認識らしい。
魔族で国外に出ようと考える者が今までほとんどおらず、アーネストが久々の密出国者だと俺は聞いていた。

大陸への密入国は、アーカート神聖帝国とヘルムート王国が対応すべき事で、これにゾヌターク共和国が口を出せば内政干渉になっ

てしまう。
元々、双方共にアーネストを処罰する気がないし、これからも処罰はされないと思う。
既にバウマイスター伯爵家の庇護下に入っているので、手が出せないという事情も存在したが。

『彼らは、両国友好のために居残っていたのです！』

さらに外交団にいた民権党関係者が彼ら庇い、防衛隊としても何も言えなくなってしまったらしい。
民権党には軍隊という存在に忌避感を持つ者も多く、彼らが脱走者だからといってモール達を処罰しようとする防衛隊を牽制したというわけだ。
防衛隊も、政権の人気取りのため若者を短期雇用しただけの軍属に何も期待していなかった。

期待していない連中が脱走したところで、わざわざ処罰する手間が惜しいという事になったようだ。
このところ警備隊は忙しいので、モール達だけに構っていられないのであろう。
休憩中の遭難、それを俺達が救助した事にしてしまった。

軍属の仕事に関しては、俺達に雇われたから雇用関係は終了というのが表向きの処置となった。
正直、民権党とやらの外交団については思うところもあるのだが、今回は彼らに救われた格好になったわけだ。

『ううっ……。君達にバウマイスター伯爵御一行への同行を命令する』

防衛隊の司令官は、苦虫を噛み潰しながらモール達の脱走を不問にする羽目になった。
シビリアンコントロールの賜物というか、ただ単純に彼らを処分すると世論が政府を非難すると思ったのであろう。
何しろ、青年軍属は非正規雇用で使い捨てという非難が新聞に掲載されたようだし。

「モールさん、同じような建物ばかりね」

イーナは、王国とは違って整然とし過ぎている町の様子に少し違和感を覚えているらしい。

「独自のデザインで住宅を建てるなんて、よほどの金持ちだからね」

住宅市場は大手数社のほぼ独占状態であり、どの会社もほぼ同じ形の住宅を建設するようになったとモールが説明する。
現代日本の住宅のように工場である程度材料を加工してから、現地で組み立てるようだ。

何事も効率優先で、沢山販売して薄利多売で生き残りを図る住宅メーカーという事らしい。
そのせいで、中小の住宅メーカーや大工はこの数百年で相当数を減らしたそうだ。

「同じ形の住宅を建てた方が安く効率がいいからね。早くて安いし」

見た目は安普請のような気がしたが、中は広く丈夫で、住みやすいらしい。

「それでも、みんなローンを組んで購入するんだけどね」

まるで、日本のサラリーマンが家を買うのと同じようだ。

俺は前世を思い出して、少し物悲しさを感じた。

当時の俺は、結婚もしてなければ家も購入していないが、会社の飲み会で既婚の先輩や上司がローンの話でよく愚痴っているのを聞いていたから。

「金がある人は豪邸や注文住宅だね。無職でも、政府借り上げの格安集合住宅があるし」

「そういう人達は、あの同じ家が並ぶ町中には住んでいないよ。金持ち向けの住宅地もあるから」

「俺達には縁がないけどね」

逆に貧乏人は、職とお金がなくて家を買えなくても、人口減少で住む人がいなくなった集合住宅を無料で貸してもらえる。

基本的な衣食とおこずかい程度の生活保護の支給もあるので、無職でもそこまで深刻というわけでもないらしい。

その代わり、結婚する人は少ないそうだが。

飢えとは無縁だが、職と収入がないから結婚できない。

こういうのを、生かさず殺さずとでもいうのであろうか？

「素晴らしい世界だと思うのですが」

「そうよね」

「張り合いはないかもしれないけど、王国の貧民よりはマシだって」

エリーゼ、イーナ、ルイーゼの三人は、働かなくても食える魔族の国は素晴らしい社会なのではないかと言う。
確かに、王国の都市部に必ず存在するスラムの状態は酷い。
不衛生で栄養状態も悪いので子供がよく死ぬ。
直接的な飢え死には少ないが、病気になりやすいからだ。
それに比べれば、魔族の国は確かに素晴らしいのかもしれない。

「でも、生活保護者はなかなか結婚できないしね。子供はお金がかかる」

「成人までの教育費とかね」

「家と魔導四輪よりも贅沢かもね」

魔族は学生の期間が長いので、長期間お金を出せないと子供を育てられない。
だから、貧しい人には男女とも独身者が多いのだそうだ。

「一人でちょっと趣味をしながら生活するなら何とかなるからね」

「魔族の未婚率は、もう四割を超えているし」

「離婚も多いよねぇ」

モール達の話を聞いていると、俺はまるで現代日本に戻ったかのような感覚を覚えていた。

「軍の港に着陸か……」

「ブランタークさん、魔族の国に軍はありませんよ。防衛隊です」
「言葉遊びのような気がするけどな。あれだけの装備を持っていてか？」
軍艦が王国と帝国では作れない頑丈な金属でできていて、速度も魔導飛行船より速い。
魔砲も沢山装備されており、戦争になれば両国の空軍は瞬時に壊滅するであろう。
ブランタークさんからすると、そんな船を装備している魔族の国に軍隊が存在しないという言い分が詭弁に聞こえるわけだ。
「他国という概念がなかったので、治安維持と反動勢力を抑える組織に改変したと思ってください」
「伯爵様は、意外と順応が早いのな」
順応が早いというか、俺が防衛隊に感じるイメージが自衛隊に近いからあまり違和感を覚えなかっただけだ。
事前の協議どおりに、俺達を乗せた小型魔導飛行船は防衛隊の基地へと着陸した。
「遠路はるばるご苦労様です、バウマイスター伯爵。私の名はラーゲ二級佐官であります」
出迎えた警備隊の若い将校は俺達を笑顔で迎えたが、脱走したモール達と、密出国したアーネストには渋い表情を浮かべた。
色々と言いたいが立場上言うわけにはいかず、かと言ってそれを

完全に心の奥に仕舞えるほど割り切れていないのであろう。

「案内役、ご苦労様です……」

「色々と思うところがあるかもしれないのであるが、我が輩を罰する事など不可能であるな。調べてみたら、穴だらけの法で笑うしかないのであるな」

アーネストは魔族の国をと密出国した癖に、罪悪感の欠片も持ち合わせていなかった。

実は、時間がある時に法律を調べてみたそうだが、密出国にはまったく罰則がなかったからだ。

それはわかるが、少しは反省するフリでも見せればこの若い将校も納得するのにと思ってしまう。

まあ、アーネストにそういう配慮を求める事が無理なのであろうが。

「密出国は違法ではあるが、罰則はないのであるな。防衛隊のラーゲ二級佐官だったかな？　法の重層構造の構築に手を抜いてはいけないのであるな」

アーネスト学者らしく密出国の罰則がない点を突き、魔族の将校は余計に顔をひきつらせた。

でも彼が作った法でもないわけで、責めるのはお門違いであろう。

「防衛隊は軍じゃないから、脱走しても罰則はないという解釈らしいね。政府見解では」

「正確にいうと、正規の防衛隊員でも罰則は禁固一年以下罰金百万

エーン以下だね」

「でも、その範囲の中に青年軍属は該当しないしね」

師匠も師匠なら教え子も教え子であった。

無駄に頭はいいので、法の不備を突いたツッコミが容赦ない。

ラーゲ二級佐官はさらに顔をピクピクとさせていた。

「貴殿らは、政治家達の都合で無罪とバウマイスター伯爵一行の案内役という役割を得られたにすぎない。調子に乗らない方がいいと忠告しておくが。第一、貴殿らのその態度は、バウマイスター伯爵のイメージすら悪化させる危険がある」

政治家はアレだが、防衛隊のエリート将校ともなると有能な人間も多いようだ。

毅然とした態度でアーネスト達の嫌味に応酬したのだから。

「これは失礼したのであるな。この国では遺跡が発掘できなかった。しがない考古学者の愚痴であるな。忘れてくれると嬉しいのであるな」

「仕事はまっとうしますよ。ただ、一言くらいは愚痴を言いたかったのですよ」

「エリートのあなた達とは違って、俺達は無職だったからね」

「青年軍属の仕事には夢も希望もなかったからね。公の場では弁えますよ」

「わかりました。貴殿らがバウマイスター伯爵一行の滞在中、サポ

ートの任をまっとうできるように祈っています」

ラーゲ二級佐官とアーネストたちが無事に和解できでよかった。
揉めると厄介だと思ったのだが、アーネスト達は思った以上に大人だったようだ。

というか、このレベルの人材が無職なのはえらい損失のような気がするんだが……。
だが、ローデリヒの例もあるので王国も同じか？

「先生、ヒヤヒヤものだったっす」

俺達にそのままついてきたルミは、恩師と後輩達の言動にヒヤヒヤさせられたようだ。
ラーゲ二級佐官を挑発したアーネストに文句を言った。

「オフレコで頼むのであるな」

「記事に書けませんよ！　まあ、自分はバウマイスター伯爵さん専属って事で本社から許可ももらっていますし、他に書く記事はいくらでもあるから問題ないっす」

ルミは、これからも俺達について記事を書く予定だ。
新人記者にしては異例の扱いだが、目先が利いたルミが最初に俺達に取材を申し込んだのは事実だし、やはり政治面の主流はテラハレス諸島で行われている交渉の行方であった。
新人記者のルミが担当しても、他の記者から嫉妬される事もないというわけだ。

「手柄争いにうつつを抜かす記者ねぇ……」

「記事を出世の道具にするなんて、新聞記者も腐敗したね」
「新聞社も会社だからね。儲からないと意味がないわけだし」
「自分の後輩達はひねているっすねぇ……」
マスコミ批判をするモール達に文句を言いつつ、ルミは静かに取材の準備を始めた。
「それで、俺達って何をするんだ？」
「親善外交だ」
「親善外交ねぇ……」
俺はエルに、今回の仕事の内容を伝える。
俺達には何の交渉権限もないが、ゾヌターク共和国政府は拿捕しているリンガイアと、拘束している乗組員達を開放したい。
ただ、いきなり無条件で開放してはゾヌターク共和国政府が弱腰だと有権者から批判されてしまう。
そこで、俺達がゾヌターク共和国でフレンドリーに振る舞い、世論が王国に対し好印象を持つように仕向けようというわけだ。
これは陛下の発案である。
自分達が政治的に進んでいると思っている魔族からすれば陛下がそんな考え方をするのは驚きなのであろうが、人気商売なのは王様や皇帝も同じだ。

「バウマイスター伯爵さんの記事が物凄く好評なんすよ。」

エブリディジャーナルの新人記者ルミ・カーチスが書いた、俺達に関する記事であった。

「バウマイスター伯爵さんは、我々魔族が抱く貴族観とは違って庶民的ですし、奥さん達にも優しく、お子さん達の面倒も時間があれば見ていますからね」

魔族の国の人達は、俺を極めて親しみを持てる若い貴族だと思っているらしい。

新世代の貴族がこうならば、魔族と人間との融和も近いと。

物凄く勘違いのような気もするが、陛下は俺達を魔族の国に送れば少しは交渉の役に立つかもと感じたようだ。

そして融和ムードを作るために、奥さん達と子供達も同伴となった。

「魔族の国だと、政治家の地方行幸は奥さん必須っす。あと、お子さんも連れてだと印象もよくなるっす」

なぜかこちらに協力的なルミの意見により、エリーゼ達と赤ん坊達も付いてくる事となった。

「俺とエルの子供は一歳にならない内に、もう海外旅行を経験しているんだな」

「でも、危険じゃないのかな？」

エルは、子供連れでまだ敵地認定のゾヌターク共和国入りなので

少し心配のようだ。

「ヴェルの場合は、御家断絶の危機もあるぞ」

もし魔族が俺達を害しようとしたら、配偶者全員と子供達全員を巻き込んでしまうからだ。

「そのために、某達がいるのである」

「そうそう、時間稼ぎのな」

俺が『瞬間移動』を使ってエリーゼ達を順番に逃がしていき、その間、導師とブランタークさんが護衛をするというわけだ。

「帝国内乱で魔力が上がったせいか、それとも師匠に言われて精度の訓練を強化したせいか、『瞬間移動』は一度に十五名まで大丈夫になりましたから、二往復で大丈夫ですよ」

そのために、メイドや家臣達を置いてきたのだから。

「ですから、魔族の国は外交特使を殺害するような野蛮な国ではないっすから」

ルミは自分の国に対して色々と不満があるようだが、嫌いなわけではない。

魔族はそんなルール破りはしないと断言した。

「まあ、それならいいけど」

「エルヴィンさん、信用してくださいっすよ」

「最悪、ヴェルが逃げられればいいんだ。ヴェルはまだ若いからな」

俺がいれば、また子供が生まれるからバウマイスター伯爵家は断絶しない。

いつもはおちゃらけた部分もあるエルだが、その考え方は意外とドライだったりする。

「足手纏いのメイドはいないからいいか」

「私はいるわよ。まあ、なるようになるんじゃないのかしら。外国旅行って始めて」

「女性は逞しいなぁ……」

ただし、アマーリエ義姉さんはいる。

魔族の国に不安を感じない彼女に、エルは感心するばかりだ。

「魔族の国って殺風景なのね。でもヴェル君といると、色々なところに行けて面白いわ」

「極めて効率的な社会というわけじゃの。帝国もこれから交渉しなければいけないから、ペーター殿も仕事が増えて大変じゃ」

テレーゼの言うとおり、帝国はこれから魔族の国と接触しないといけない。

いまだ国内の立て直しに奔走しているペーターの仕事が増えるわけだ。

「テレーゼなら、どうやって対応した？」

「魔族と接触するなど誰も予想できまいて。様子を見ながら少しずつ交渉していくしかあるまい。そんな起死回生の策などそうはないわ」

「政治って大変なのね」

アマーリエ義姉さんは、一番仲がいいテレーゼと共に防衛隊の基地を見下ろしながら話を続けた。

「ようこそ、おいでくださいました」

基地の指令だというお偉いさんに迎えられたが、外交特使扱いの俺達を迎え入れるのに殺風景な基地というのはどういう事なのであろうか？

実は、ゾヌターク共和国には民間用の空港があると聞いているのに。

「実は、空港の方には……」

基地の指令が申し訳なさそうな顔をする。

なぜなら……。

『旧弊なる王政を掲げる王国を打倒し、我ら魔族が優れた民主主義をリンガイア大陸に伝えるのだ！』

『そのためには国軍の復活を！　軍を今の十倍の規模にして、大陸に兵を進めるのだ！』

『ようこそ、バウマイスター伯爵さん。我らが、民主主義の素晴らしさを教えましょう。そして、まずはバウマイスター伯爵領を大陸における民主主義発祥の地へとしましょう』

「と、こんな感じでして、バウマイスター伯爵殿の安全を我らが確保しないと、これはゾヌターク共和国の恥となりますので……」

大変に申し訳なさそうに説明する基地の指令であった。

自分達が信奉する民主主義は王政よりも素晴らしいから、それを後進的な人間達に教えてやらないといけない。

いや、それでは時間がかかる。

魔族が全大陸を支配し、民主主義を教えてやらなければいけない。

そんな考えを持つ市民団体や政治団体が、空港に押しかけているそうだ。

「防衛隊が一番理性的って……」

民主主義の建前として、空港に来た俺達に向けて彼らが政治的な主張をするのは自由である。

だが、だからと言って『お前の国は駄目だから、俺達が解放してやる』とか『民主主義を教えてやる』では融和もクソもない。

他の貴族なら、もしかするとキレてしまうかもしれない。

「我らとしましては、今回の外交特使、バウマイスター伯爵殿で安心しました。何でも、大変にゾヌターク共和国の事情に理解があるとかで」

「その空港にいる変な連中、排除しないのですか？」

「それがミセスバウマイスター、あの連中には民権党のシンパも多く……」

民権党の政治家には、いわゆる運動家上がりも多いようだ。

彼らに文句など言えば、すぐに落選の危機なので言わないどころか、下手をすると積極的に手を貸している危険すらあった。

「バウマイスター伯爵殿の滞在中は、防衛隊が確実にお守りいたしますので安心を」

「あの……大変そうですけど、お体をご自愛ください」

今の時点で、ゾヌターク共和国で一番信用できるのは防衛隊だという現実に、俺はこの外交特使の仕事が予想以上に大変であると気がつくのであった。

「バウマイスター伯爵さん、あなたをケルトニア市の観光大使に任命します」

「あなた、これはどういう？」

ようやく魔族の国に到着し、定宿に案内されて荷物を解いた直後、俺達はある年配の魔族からそう告げられていた。

いかにも小役人風なその魔族は、ゾヌターク共和国辺境にある過

疎に悩む地域の市長らしい。
主な産業は、農業と観光。
日本の地方都市と同じく若年人口の流出に悩み、何とか人口減少を止めようと努力しているそうだ。

「もし我が国とヘルムート王国とに交易交渉が纏まれば、旅行の自由化もあり得ると。そこで、是非にケルトニア市に観光に来ていただきたく……」

「いやーーー、バウマイスター伯爵さんは有名人っすね」

いや、それはお前が新聞の記事に書いたからだろうが。
傍にいる魔族の記者ルミが、知ってか知らずか他人事のように言う。

「ケルトニア市は素晴らしいのですよ。奥さん方」

そう言って市長は俺達に観光案内パンフレットを渡す。
魔族の印刷技術は、王国や帝国よりも上であった。

「自然が豊かなのですね……」

あまりストレートに批判をしないエリーゼらしい逃げ口上であったが、ケルトニア市は自然が豊かな田舎というか、自然しかない田舎だ。
観光というが、王国人も帝国人も高い旅費を払ってこのケルトニア市に来るとは思えなかった。

「（自然が豊かって、観光資源になるのか？）」

エルが小声で俺に聞いてくる。
自然豊かな田舎に住んでいたエルからすると、そんなものをわざわざ金と時間をかけて見に行く奴の気が知れないというところであろう。

「（うーーーん、どうかな？）」

もし魔族の人間の交流が始まった場合、外国だからと観光に行く人間がいないとは言えなかったからだ。
まあ、一度見れば十分という結論に至って、結局観光客は来なくなるかもしれないが。

「バウマイスター伯爵さんには、是非一度ケルトニア市に観光に来ていただきたいですな」

「はあ……。時間があればいいのですが……」

実は、親善大使扱いで宿にも到着したのに、俺達の予定はまだ知らされていなかった。来てもらったが、肝心の政府が俺達をどうするのかで迷っているようにも見える。

「そうですか、残念ですな。滞在中に是非観光をご検討ください」

そう言うと、市長は俺達にお土産を渡してから部屋を出て行った。
お土産は、ケルトニア市産の農作物だった。
種類は一般的な物ばかりであったが、やはり品種改良や栽培技術は魔族の方が上だ。

「いいお野菜ですね」

エリーゼがそういうのだから間違いない。
俺もそう感じていた。

「あの方は、何をしにいらしたのでしょうか？」

「宣伝のために観光大使に任命はしたが、報酬は払いたくないので無理も言えない。名貸しの一種であろう」

俺の代わりに、テレーゼがカタリーナに説明してくれた。

「それって、意味があるのですか？」

「さあての。あの市長とやらが本当に有能であれば、ケルトニア市の過疎問題とやらも今頃は解決しているかもしれぬの」

テレーゼの発言は辛辣であったが、確かに俺を観光大使にしたくらいでケルトニア市の過疎が解決するとも思えない。
日本だって、そう簡単に過疎の問題が解決などしていないのだから。

「とりあえず、数少ない仕事をこなす方が先じゃないか？　旦那」

「仕事？」

「リンガイアの船員達の無事を確認する」

「そうだったな」

カチヤとヴィルマから指摘されたので、俺達は防衛隊の収監施設へと向かう。

そこには、拿捕されたリンガイアの船員達が拘束されていた。
警備上の理由で面会に行く人数を制限されたので、俺、エリーゼ、導師、ブランタークさん、リサで収監施設へと向かう。

「どうしてブリザードがいるのかと思えば、いきなり魔法をぶっ放した魔法使いと知己だったよな？」

「はい。昔に少し教えた事があります」

「何か調子狂うよな」

ブランタークさんの知るリサ像は、派手な衣装とメイクで言葉も荒い姉御タイプであった。
それが今は、普通に綺麗なお姉さんになってしまっているので、かなり違和感を覚えているらしい。

「それとも、またメイクをしましょうか？」

「いいや、今のままがいい」

ブランタークさんは、リサの提案に首を振って否定する。
いくら違和感を覚えても、以前のリサはもっと付き合い難いと感じていたからだ。

「バウマイスター伯爵殿ですね。こちらです」

防衛隊の隊員に案内されて収監施設に向かうと、無機質なコンクリート製の建物ながら中は綺麗で、リンガイアの船員達が酷い目に遭っている事はないようだ。

「収監者への暴力や虐待は禁じられていますから」

その辺は、魔族の国は文明国なので信用できた。
いくつかの檻付きの入り口や通路を抜けると面会室らしき場所へと到着し、そこには四人の男性が待っていた。

リンガイアの船長と副長、この二人は俺が屍竜を倒した時に顔見知りになっている。
あとはもう一人の副長、彼は謎の攻撃命令を出した奴だという情報だ。
あのうるさかった、プラッテ伯爵家の御曹司である。
残り一人は、いきなり魔法をぶっ放した魔法使いであろう。
魔力を感じられる。

だが、魔力量は初級と中級の間くらいで、どの魔族よりも少ない。
魔法をぶっ放しても、脱走は不可能であろう

「おおっ！　バウマイスター伯爵殿ではないか！　見てくれ！　プラッテ伯爵家の御曹司である俺に対する魔族の理不尽な対応！　すぐに陛下に報告して魔族に抗議するのだ！」

収監者以外、他に誰も人間がいない外国で久しぶりに同朋に会えて嬉しいのであろうが、いきなりその発言はないと思う。
室内に警備で立っている隊員達の表情が曇ったのを、彼以外は見逃さなかった。

「それとだ。急ぎ私を解放させるのだ。そうしてくれたら、父からお礼が出るからな」

「（何で、こいつはこんなに偉そうなんだ？）」

そう言われても、俺も返答に困ってしまう。

「（バカだからじゃないですか？）」

俺は、小声でこうブランタークさんに答えるので精一杯であった。

まったく捻りもない解答である。

「残念ですが、私はあなた方の無事を確認しに来ただけで、解放を交渉する権限がないのです。別途、現在行われている交渉の結果をお待ちください」

「何とかならんのか！　私だけでも！」

「どうしようもない男であるな」

自分だけ解放しろというプラッテ伯爵家の御曹司の発言に、導師は声を小さくする事もなく彼を公に批判した。

「貴様！　たかが従者の癖に……導師殿？」

「某の顔を忘れるとは、国防に携わる資格がないのであるな！　それとも、長い収監生活でボケたのであるか？」

導師からの容赦ない一言に、プラッテ伯爵家の御曹司は塩を振ったナメクジのように縮んでしまう。

こいつはバカだが、導師を怒らせると怖い事くらいは理解しているようだ。

「まあまあ、導師。交渉が終われば解放はされるはずだ。ところで、

アナキンとかいう若造、お前に聞きたい事がある」

アナキンとは、プラッテ伯爵家の御曹司の命令で魔法をぶっ放した魔法使いの名前であった。

「はい……」

何を聞かれるのかなど、子供にでもわかる事だ。

自分が罰せられると思った彼の表情は暗い。

「もう一つ悪いが、聞くのは実は俺じゃないんだ」

ブランタークさんは、そう言ってリサを彼に紹介する。

「あれ？　どこかでお会いしましたか？」

アナキンは、昔の派手な衣装とメイクのリサしか知らないので、今の彼女を見て誰かわからないようだ。

「わかりませんか？」

「ええと、私の知り合いにこんなに綺麗な方が？」

「おほん。少しの間口調を戻します。アナキンのクソったれ！　せっかく人が魔法を教えて一人前にしてやったのに、何調子こいて勝手に魔法ぶっ放しているんだよ！　凍らせるぞ！」

「ああーーーっ！　姉御！」

口調を昔に戻したおかげで、アナキンはようやくリサに気がつく

のであった。

「すいません！　すいません！」

「さあ、正直にお話なさい」

頭が上がらない魔法の先生リサの前で、アナキンはコメツキバッタのようにペコペコしながら、事件に様子を証言し始める。

実は、これも陛下から頼まれていた事だ。

『プラッテ伯爵家のバカ息子は、無事なのを確認だけしてくれればいい。あとは、念のために事件について聞いておいてくれ』

こう言われたので、まずは時間の核心部分である無許可の魔法発射の犯人から話を聞く事にしたのだ。

「プラッテ副長の命令です。撃たねば、お前を命令違反で処罰すると」

「貴様！　独断専行の責任を俺に押し付けるのか！」

アナキンの証言に、隣に座っていたプラッテ伯爵家の御曹司が文句を言う。

どうやらこいつは、何とか責任をアナキンだけに押し付け、自分は逃げきるつもりなのであろう。

それなら、最初からそんな事をしなければいいのにと思ってしまう。

「あなたは、黙っていてくれませんか？」

「何だと！　俺を誰だと！」

「プラッテ伯爵家公子殿ですよね？　俺は『バウマイスター伯爵』ですけど何か？」

「……」

嫌なやり方だが、こういうバカな貴族を黙らせるには地位の高さで押しきるしかない。

彼はまだ跡取りで伯爵本人ではない。

つまり、俺よりも身分は低いというわけだ。

「それに、防衛隊からの調書はとっくに王国に伝わっています」

このバカ息子の父親であるプラッテ伯爵とその一味は、このバカ息子が暴走したなど魔族側の言いがかりだと騒いでいるが、大半の貴族はほぼ調書どおりであろうと思い始めている。

このバカ息子、どうやら普段はそれなりに優秀なのだが、何か突発的な事が起こると妙な行動を取ってしまう事があるようだ。

挙句に、こういう状態になると隠していた傲慢な部分が極端に出てしまう。

ある意味、リンガイアに乗ったのが不幸だったのかもしれない。

「バウマイスター伯爵様、ところで交渉っていつ終わるんですか？」

「もうすぐかな？」

勿論、大嘘である。

だが、正直に交渉が一向に纏まらないと話しても、彼らを不安にさせるだけであろう。

というか、魔族の国に来てみて気がついたんだが、いまだリンガイア解放の交渉権限はテラハレス諸島の連中にしかないようだ。

じゃあ俺が何をしに来たのかというと、俺もわからなくなってきた。

人間の顔見せだと思うしかない。

「差し入れなどは可能ですか？」

「すいません、万が一にも脱走などに使用されますと……」

防衛隊の隊員から、とても申し訳なさそうに言われてしまう。

本などは火種にされる可能性が、酒なども瓶は凶器になりかねないと、もっともな理由で差し入れは認められなかった。

「俺は王国産のワインが飲みたいのだが」

「「「「「……」」」」」

ただ一人空気が読めず、プラッテ伯爵家の御曹司だけが我儘を言って導師すら絶句してしまったほどだ。

「ええと、フルガ船長とベギム副長。何か困った事があれば連絡をください」

「ありがとうございます。このように収監はされていますが、特に不便な事もないので早く交渉が終わって解放されるのを祈っています」

「そうですね。食事なども悪くはないのですが、やはり自由には勝てませんか」

他の船員達もそうだが、さすがは超大型魔導飛行船のクルーに選ばれた逸材。

弱音などは吐かず、気丈に対応してくれた。

「一日も早く私を解放するのだ。でないと、プラッテ伯爵家を敵に回す事になるぞ」

ただ一人、やはり空気が読めていない奴がいたが……。

「五月蠅い蠅の羽音がするのである！」

「うっ！」

あまりに言動が酷いので、プラッテ伯爵家の御曹司は導師の思いっきり手加減したチョップで、意識を刈り取られてしまった。

導師のあまりの早業に、防衛隊の隊員達はまったく対応できなかったようだ。

その場に硬直していた。

「こいつは、勝手に転んで気絶したようであるな。ベッドに放り込んできてほしいのである」

「わかりました……」

防衛隊の隊員達もプラッテ伯爵家の御曹の態度に辟易させられていたようで、特に導師を咎め立てもせず、彼を数名で抱えて独房へと移動した。

「まったく、どうしようもない愚か者であるな」

「導師、プラッテ伯爵家を敵に回さないか？」

「ブランターク殿、某は決闘ならいつでも受けるのである」

導師が気に入らない貴族に対して、ストレートに気持ちをぶつけても平気な理由。

それは、文句があるならいつでも決闘を受けると公言していたからであった。

誰しもこの人と本気で決闘なんて嫌であろうから、導師の表立っての物言いに抗議する者は少ないというわけだ。

こんな手を使えるのは、導師くらいしかいないと思うが……。

「アホが迷惑をかけてすいません。ああいうのはそれほど多くはないのですよ」

王国貴族の名誉のために、何となく貴族になったしまった俺が釈明をする。

随分と遠くに来てしまった気がする。

前世の事を考えると、俺は魔族の国の方に親和性が高いというのに……。

「どうしてもアホが一定数出てしまうのは、魔族の国も同じだと思

うのです」

「そうですな。政治家、大物官僚、大企業の経営者一族。その家のバカ息子が騒ぎや事件を起こす事もありますから」

その辺の事情に、王政国家も民主主義も差はないからな。

金や権力の力で、バカな子供の不祥事を隠すわけだ。

「アレは飢え死にさせなければいいので。交渉終了まで生かしておいてください」

「はい、義務的に対処しておきます」

今王国と交渉している魔族の政治家は微妙らしいけど、現場で仕事をしている魔族にはまともな人が多い。

バカ御曹司の数百倍好感が持てるな。

などと考えていたら、もう一人空気が読めずに制裁を受けていたバカがいた。

「しかし姉御、噂には聞きましたよ。結婚したって。姉御、結婚できたんですね」

「……っ……」

「あっ……バカ……」

アナキンの口を塞ぐのに間に合わなかったため、無言で静かにキレたリサはその二つ名に相応しい魔法を発動。

凍結ではなく、超硬質の氷の檻を作ってアナキンを閉じ込めてし

まう。

「姉御、ここ寒いです」

「丸一日くらい寒くても人間は死にませんよ」

「姉御、ごめんなさぁーーーい！　言い換えます！　バウマイスター伯爵様って、姉御を奥さんにするなんて男気がありすぎる！」

「本当にバカなんだな。こいつ……」

また余計な事を言ってしまったアナキンは寒い氷の檻を二重にされ、二日間も暖房もなしでそこで過ごす羽目になるのであった。

「さて、お仕事終わり」

「深刻だな、旦那」

「ああ、何をやっていいのかわからない」

収監されているリンガイアの乗組員達との面会を終えて宿泊先のホテルに戻るが、いまだに明日以降の予定が伝わってこない。

エルは、ホテルの部屋に置いてあったお菓子を食べながら包み紙を見ていて、ハルカもバウマイスター伯爵領に戻ってからそのお菓子を再現できないかと考えているようだ。

エリーゼ、アマーリエ義姉さん、イーナ、ヴィルマは子供達の面

倒を見ている。

親善大使として赴いたもののまったく先が見えてこず、俺はソファーに深く座り込んで考えているが、カチヤと同じくどうしていいものやらといった感じだ。

「第一、交渉の権限は我らにはないのである！」

グダグダで何も決まらないどころか、価値観の違いから交渉が決裂するのではと思われている有様で、交渉団でもない俺達がする事なんてない。

と思っていたら、翌朝から俺達は色々な場所に連れまわされた。

「バウマイスター伯爵さん一行は特別老人ホームを訪れ、入居している老人達と楽しい時間を過ごしたっす」

宿泊しているホテルで朝食を終えると、魔族の国では普及しているバスタイプの魔導四輪で老人ホームに連れて行かれた。

これはあれだ。

日本でも、海外の政治家とかが来日すると予定を組まれるアレだ。

老人達と親しげに接している画像を撮って放映し、国民達に親近感を抱かせるというやつであろう。

俺達付きの記者になっているルミ・カーチスが、独り言を言いながら記事にするためにメモを取っていた。

「（本当にそう思うか？　ルミ）」

「（いやあ、魔族の国の政治家って、こういう絵を好むんですよ。

一般大衆にウケがいいじゃないっすか）」

と、ルミは言っているのだが、アーネスト達はどこか醒めた表情をしている。

第一、一般大衆へのウケとか言っている時点で、ルミもどこか醒めていると思う。

「（まだある程度は引っかかる奴もいるのであるが、半数は政治的なパフォーマンスだと見抜いているのであるな）」

アーネスト達魔族組は、俺の護衛のフリをして老人達との交流を避けていた。

「（モール、手伝えよ）」

「（えーーー、嫌だよ）」

「（しかしだな、見てみるんだ）」

意味はわからないようだが、みんな老人の話を聞いてあげたり、一緒にボール遊びをしたりして仕事をこなしている。

特に、老人と一緒にボール遊びをしている導師の絵はシュールであった。

モール達も俺達と政府に雇われている以上は、老人達の相手をしないと駄目なので、俺は強引に仕事をさせた。

「（わかったよ……）」

「（お前ら、心の底から嫌そうだな……）」

「（だってさ……）」

人間と同じく、魔族にも年寄りを大切にしましょうという考えが昔からあった。

だから、年老いた魔族を世話する老人ホームが拡充され続けているのだが、今では老人の増加が激しく、そのせいで若い魔族が割を食っているらしい。

「（消費税は三十パーセントにまで上がったし、老人福祉予算の削減なんて叫んだ時点で選挙に勝てないから絶対に口にしないし。若い奴に金を回さないと少子化は解決しないだろう）」

選挙で政治家が決まる以上は、得票数を多く持っている老人を優遇する政策になるというわけだ。

そんな理由もあり、最近では若い世代の投票率がどんどん落ちているそうだ。

「（みんな、白けているんだよね……）」

それでも仕事は仕事という事もあって、モール達も新聞記事が書けるくらいの事は老人ホームでおこなった。

「これが政治的な活動なのであるか？　意味不明である」

老人ホームを出た導師は、なぜ自分達がこんな事をと首を傾げていた。

「貴族や大商人でも、孤児院に寄付をしたり、教会の慈善活動に参加するじゃないですか。それと同じだと思いますよ。まあ、そこには老人達の票も付属していますけど……」

「選挙で選ばれる議員も、貴族も、似たような印象を受けるのである」

「利権で釣って票を稼いで、その基盤を子供が受け継ぐケースも多いんだろう？　似た感じだな……」

「導師さん、ブランタークさん、そこで私達、報道が彼らを監視しているっすよ」

などと言っているが、実はルミもどこか魔族の国の現状に疑問を抱いているのかもしれない。

何しろ、あのアーネストの弟子だったのだから。

「記者の姉ちゃん、王国だって駄目な貴族は押し込められたりするんだぜ」

「でも、落選して無職になったりはしないじゃないっすか。と……ここで我々が争っても仕方がないっすね。何しろ、次の訪問予定地は保育園っすから。働くお母さんを支援して出生率を上げるために試験的に整備された優良施設って売りっすね」

俺達は、自分の赤ん坊の世話を他人に任せている状態で、他の子供達の世話をしたり遊んだりする様子を記者達に見せる仕事をこなした。

どちらかというと平成日本に近い社会のはずなのだが、俺はどうもこの魔族の国が好きになれない。

「第一、俺らの存在意義は何よ？」

交渉は別口で難航しており、俺達は客寄せパンダと同じ扱いなのだから。

「フリードリヒ達の元に戻るか……」

「そうですね……」

エリーゼ達も、この魔族の国の奇妙さに疲れてしまったようだ。

フリードリヒ達を世話しているアマーリエ義姉さんの元に戻る事にする。

「おかえりなさい、みんな元気よ」

それから一週間ほど、俺達は各地に出かけた。

色々な場所を訪問し、魔族の国の政治家に会い、他にも晩さん会に出たり、そしてその様子がルミのエブリディジャーナルも含めて多くの新聞に記事となった。

「ヴェル、ボクが映ってるよ」

ルイーゼは、新聞記事の写真に自分が映っていて嬉しそうだ。

だが、来訪から十日もすぎると、新聞から俺達に関する記事が消えた。

「まあ、賞味期限が切れたんだね」

「バウマイスター伯爵さん、結構ドライっすね！」

一万年以上も交流がなかった人間の国から来た貴族様、多くの妻達を従えて各地を訪問して人々に話題を提供したが、もう飽きてし

まったという事なのであろう。
すべての新聞の一面が、『国立動物園で、黒白クマの双子の赤ちゃん産まれる！』になっていた。

「酷いわね。魔族の国の人達ってどうなのかしら？」

「イーナ、俺達はまだマシな方だぞ」

テハラレス諸島で交渉を続けている交渉団など、政治面の隅に記事が追いやられたままなのだから。
十日間も一面に記事が掲載された俺達の方がマシというわけだ。

「しかも、政治面でもトップ記事じゃないって……」

老人ホームの不足と、その整備をどうするか？
食品の産地偽装が増えてきたので法律を改正すべきか？
生活保護費の削減問題。

こんな記事ばかりが大きく、魔族の大半は見た事もない外国よりも身近な問題を優先するというわけだ。
今までに外国を意識した事もないので、危機感なども薄いのであろう。

「魔族の国は、妾達の国よりも恵まれてはおるな。じゃが……」

無職は多いが、別に飢え死にするわけではない。
最低限の衣食住が保証されているからだ。
それなのに、なぜかこの国には閉塞感が存在する事にテレーゼも気がついた。

俺も、ここは前世の平成日本に近い世界なのにどうも落ち着かない。

「ヴェンデリンよ、親善大使の仕事などもうほとんど終わりであろう？　早めに手を引いた方がいいぞ」

「それができたらいいけど」

俺もテレーゼの言う通りだとは思っている。

一向に交渉が進まない中で魔族の国に来てみたが、俺達が何かの役に立っているのか不明だ。

実務的な会談など一切なく、魔族側の都合で各地に連れまわされて見世物にされただけなのだから。

だが、俺は陛下の命令でここに来ているのだ。

両国の交渉が進まない以上、ある程度の目途が立つまでこの地を離れるわけにはいかなかった。

「もう帰りたいな」

「エル、そういうわけにもいかないんだよ」

平成日本に似た国だからもう少し色々と見て回ろうと思ったのだが、俺もこの世界に大分馴染んだようだ。

魔族の国に一切未練を感じなかったが、勝手に帰国するわけにはいかないのが現実だ。

しょうがないので、赤ん坊の世話を優先してホテルで毎日を過ごす羽目になる。

「なあ、普通は政府が色々と予定を組むんじゃないのか？」

ブランタークさんが、今の俺達と一緒に行動しているルミに質問をするが、彼女の返答は予想外のものであった。

「最初の一週間で、バウマイスター伯爵さん達に利用価値がなくなったと思っているっす」

「何だよ、それ」

「政権交代の弊害っすね」

今まで散々に批判されながらもどうにか政権を運営していた国権党から、魔族は変化を求めて民権党に投票を行った。

彼らの大半は政治の素人で、しかも民権党には保守も革新勢力が存在してそれぞれに好き勝手言っている。

声が大きい奴が目立ち、彼らは支離滅裂気味にマスコミで自分の意見を述べ、政府がそれに釣られて政策方針を決められず、それを誤魔化すために俺達を利用したという事情もあったようだ。

「外交特使を受け入れるという仕事はしたっていうアリバイっすね。交渉がまったく進展していないのを誤魔化すためっす」

「酷い話だな」

「報道関係者には民権党支持者が多いから、彼らを批判しにくいって事情もあるっすね」

「報道なんて仕事をしている人間は、どこか反権力・反国家の性質

を持つからな。市民寄りの民権党政権だから支援したいんだろうな」

「おおっ！　バウマイスター伯爵さんはよく事情を知っているっすね」

ルミが俺を褒めたが、これも前世からの知識を持っていたからだ。

「その民権党に為政者としての能力があるのかはわからないけど」

これまでのグダグダな対応を見るに、あるとは思えない。

新聞を読むと、民権党はまだ初心者だから暫く見守ってあげないといけないという記者の意見が書かれていた。

平時ならともかく、これだけ人間の国と魔族の国が揉めている現在、素人だから対応が稚拙でも仕方がない。

もう少し長い目で見てあげようでは困ってしまうはずだ。

「人の国の政治を批判してもな。俺はヘルムート王国貴族だから内政干渉になるし」

「魔族は内政干渉する気が満々なようだけど」

ここのところ毎日、俺達が泊まっていたホテルの前に一部市民団体や政治団体が来ていたが、彼らは警備隊の人達に排除された。

警備隊の人達に言わせると『相手にするだけ時間の無駄』らしい。

俺には彼らの要求を受け入れる権限もないので、会わなくてよかったのであろう。

その前に、ヘルムート王国とアーカート神聖帝国は遅れた封建主義国家なので、選挙で政治家を選ぶ民主制に移行すべきだと言われても困ってしまう。

イーナからすれば、連中の方が内政干渉が激しいとわけだ。

「あの連中は政治家ではないので、相手にするまでもないのである」

「えっ？　じゃあ何者なのですか？」

「無職で暇人なのである」

アーネストの説明によると、魔族の国には無職が多い。

彼らは生活はできるので、持て余した時間を政治活動に使う者が多いのだそうだ。

「暇潰しですか？」

「そういう者も多いのであるな。人間、お上を批判していると偉くなったような気がして、それだけでストレスが発散するものであるな。時間も十分にあるわけで、上手くやれば民権党の政治家のように選挙に出て議員になれる者もいる。これも仕事であるな」

「仕事なんですか？」

「勿論、純粋に少しでも国民の生活をよくしようと活動している者もいるのである。数は少なく、そういう真面目な人は目立たないのが現実であるな」

アーネストによる事実かどうかわからない過激な説明に、イーナは度肝を抜かれたようだ。

「とにかく、魔族の国と関わると碌な目に遭いそうにない。交渉は

今まで暇だった外務卿達に任せればいいんだ」

俺達は、陛下の命令で魔族の国に訪問した。

それだけで十分じゃないか。

「アーネスト、ホテルの飯にも飽きたな」

「そうであるな。バウマイスター伯爵は庶民の食事に興味があるであるな」

「ホテルや訪問先では食えないからな」

段々と扱いが適当になっていくし仕事もないので、俺達は町に出る事にした。

護衛を行う防衛隊には悪かったが、これ以上は退屈で死んでしまう。

「先生、こんな時にチェーン店のレストランに伯爵様を案内するんですか？」

「高級なホテルの飯は飽きたのであるな。我が輩、ここのハンバーグセットが好きなのであるな」

アーネストは、子連れで大所帯の俺達をファミレスに似たレストランへと案内した。

他国の伯爵様を魔族の国でも庶民的な場所に案内する……と周囲に思わせて、実はアーネストがここのメニューを食べたかったらしい。

「随分と綺麗なお店だね」

「メニューが一杯ある」

魔族の国のファミレスは、前世日本のファミレスによく似ていた。
多くのメニューがあり、値段も千エーンを超えるものはほとんどない。
出される料理も、すべて水準以上だ。

ただし出来合いなので、もの凄く美味しいというわけでもない。
まあまあでレトルト感あふれる飯が出てくる。
俺は味見だけして、エルの方にドリアの皿を回した。

「まあまあかな。狩りの途中で出れば、もう少し美味しく感じるかも。ハルカのご飯の方がいいや」

エルは結婚して、随分と舌のレベルが上がったみたいだ。
隣のハルカも、自分の作る食事の方が美味しいと言われて嬉しそうだ。
「旦那様、デザートの方は結構美味しいですよ」

「本当だ。無理に飯を頼む必要なかったな」

エルは、ハルカからクレープを食べさせてもらっていた。

「死ね！　エルヴィン、死ね！」

「今、嫉妬の炎が俺を焼き尽くす」

「今この瞬間、君は俺の友人じゃなくなった」

そして、その光景を見たモール達が三人で激怒していた。
前世の俺もそうだったから気持ちはわかる。
同情すると『お前に同情されたくないわ！』と言われかねないので黙っていたが。

「器が小さい後輩達っすね……」

「結婚しようと、独り身だろうと、それに何の意味があるのである？」

「「「先輩と先生にはわからないですから！」」」

モール達は、涙目でルミとアーネストに反論していた。

「話を戻すのであるが、魔族の国はこういうお店か、特徴的な個人のお店しか残っていないのであるな。我が輩は気軽に食事が摂れるので結構好きなのであるが」

人口減で競争が激しいから、薄利多売のチェーン店と、お得意さんに支持された個性的な個人経営の店しか残れないのであろう。

「酒があるのもいいな」

「ブランタークさん、飲み過ぎないでくださいよ」

「ちょっとだけだよ。なあ、導師？」

「お姉さん、ワインをボトルで」

ちょっとだけのはずが、導師はいきなりワインをボトルで注文し

た。

他にも、フライドポテトとか、ほうれん草の炒め物などをツマミとして注文している。

「酒しか楽しみがないのであるな。貧困な人生であるな」

「うるさいのである、魔族。いい年をして酒も飲まないとは貧困な人生である」

アーネストと導師はちょっと相性が悪い。

昼間から酒を飲む導師をアーネストが皮肉り、導師もすかさず言い返した。

「まあまあ、喧嘩はしないで。周りに迷惑ですよ」

なぜか俺が仲裁に入る事になってしまったが、昼間のファミレス似たレストランで、伯爵様一家御一行（赤ん坊九人を含む）、導師とブランタークさんのおっさん二人に、魔族五人で奥の席を独占している状態だ。

他の客や店員達に注目されて当然であった。

「先生、こういう場合は個室のあるお店にしません？」

「うん？　我が輩、この店のハンバーグセットが食べたかったのであるな」

「そんな特に食べたいと思うほど美味しくないじゃないですか」

「この安っぽい味がいいのであるな」

モールがアーネストの選択を批判するが、彼が他人の事情なんて斟酌するはずがない。
自分がこの店の料理を食べたいから、俺達を案内したというわけだ。
それはいいが、店員の前で美味しくないとか安っぽいとか言うな！

「まあ、不味くはないからいいけど」

「でも、俺はたまにここのドリアを食べたくなる」

ラムルとサイラスも、もっといいところに行きたかったと少し不満気であったが、行き慣れているお店のようだ。
すぐに食べ終えて、今度はドリンクバーで飲み物を注いでいた。
魔族の国のファミレスにも、ドリンクバーが存在するようだ。

「何杯飲んでも同じ値段なのは凄いな。どういう仕組なんだろう？」

「いくら飲み放題でも、そんな何十杯も飲める人はいないからな。自分で注ぐから、人件費も節約できるわけだし」

「バウマイスター伯爵さん、飲食店の事情にも詳しいっすね」

ルミが感心しているが、前世でファミレスに食材を卸したりもしていたからだ。

「酒の飲み放題ならよかったのである！」

「それは居酒屋じゃないと無理ですよ」

「バウマイスター伯爵さん、居酒屋に飲み放題の店があるのを知っているんすか？」

「あはは……。新聞に書いてあったんだよ」

「そうなんすか」

なんだ、居酒屋にも飲み放題があるのか。

ルミを上手く誤魔化せてよかった。

「飲み放題はないのか。残念」

「この辺にしておくのである！」

残念とはいうが、ブランタークさんと導師は既に一本ずつワインのボトルを空けていた。

飲み放題がなくて幸いである。

「バウマイスター伯爵様、お金は大丈夫なの？」

「換金したからな」

俺は魔族の国の金など持っていないので、ホテルの人間に金塊を渡して換金を頼んだ。

ホテルの従業員は、町の換金ショップで金塊をエーン通貨に交換してくれた。

これだけあれば、ファミレスの支払いには困らないはずだ。

「一グラム八千七百エーンって高いのか？」

俺が日本にいた頃には、金の値段はグラム四千円くらいだった。
エーンと円の価値が似たようなものすると高いような気もするけど、俺は魔族の国の金保有量なんて知らないからな。

「俺達が軍属になる前よりも、大分値上がりしているな」

「そうだな。前は七千五百エーンくらいだった」

「我が輩がこの国にいた頃には、六千八百エーンくらいであるな」

「先生、金は投機の対象なんですよ」

サイラスの説明によると、人口が減り、国民の所得が減って経済の成長が期待できないので、株、債権、先物取引などがますます活発になり、金も品薄感から相場の上昇が続いているらしい。

「人間との接触も原因であるな」

「交易が始まるかもしれませんからね」

そうなると、金や銀で交易の決済を行うかもしれない。
だから早めに確保しておこうと、企業などが金を買い漁っているのも相場が上昇した原因であろうとアーネストは予想した。

「気が早い事で」

「今の魔族の国は、あの連中が支配しているのであるな」

「政治家は、あの連中に養われているだけにすぎないか」

「だからどちらが政権を取っても、世の中がそう変わらないのであるな」

どの世界でも、世の中、金を持っている奴が一番偉いというわけだな。

魔族の国は王族や貴族が没落し、商人、企業、銀行などのオーナーが新しい支配者となったわけだ。

政治家は彼らの飼い犬にしかすぎない。

この辺は、前世に通じる部分があるな。

「あなた、そろそろ……」

「そうだな」

このファミレスモドキの飯は普通だった。

点数にすると六十五点から七十点くらい。

味は悪くないし、値段も安いから、店内は平日の昼間にも関わらずそれなりに客が埋まっている。

女性魔族のグループが食事をしたり、ドリンクとデザートを注文してから世間話に興じているようだ。

俺達の事は新聞に出ていたし、赤ん坊を九人も連れているから目立つんだよな。

遠巻きに見ながらヒソヒソと話をしているが、話しかけてこないのは護衛達のせいか。

彼らの負担にもなるし、早くホテルに戻るとしよう。

「何か、暇だな」

「それは俺も思っていたところだ。アーネストは忙しそうでいいな」

あまり気晴らしにはならなかったが、ホテルに戻るとする事がなくなってしまった。
ミルクを飲み、オシメを変えたフリードリヒ達は赤ん坊の最大の仕事である眠る事に集中している。

エリーゼ達はお茶を飲みながら話をしており、アーネストは魔族組とルミを手伝わせて遺跡資料の整理を始めた。

「みんな、考古学というロマンを忘れてしまったのであるな」

「無職が長いですから」

「俺もそうですね」

「だから先生、考古学は金にならないんですよ」

「生活保護で暮らせるのだから、金にならなくてもどこかを発掘するくらいのやる気が欲しいのであるな。我が輩の生徒なのだから」

「先生、俺達はたまたま考古学科に入れたから入学しただけですよ。就職までのモラトリアムってやつです」

「その期間は長いけどな」

「このまま死ぬまで無職かもね」

さすがのアーネストも、モール達のマイペースぶりには呆れてしまったようだ。
珍しく愚痴を溢している。

「本当、しょうがない先輩達っすね」

「ルミも、なぜ考古学を志さないのであるな？」

「先生、これでも新聞社に入社した時に文化部を希望したんすよ。上が詰まっていて政治部に回されたんすけど」

「何という悲劇であるな。確かに魔族は飢えて死ぬ事もない。だが、活力がないのであるな。このままでは、種族の衰退が決定的となるのであるな。バウマイスター伯爵はどう思うのであるな？」

「俺に聞かれても……」

というか、そこで俺に振るか？

気持ちはわからないでもないが、アーネストが活力があると褒めている大陸の人間達も相応に大変なんだが。

貧困でスラムの住民になる者も多いし、子供は沢山産まれるけど、下の子供ほど雑に扱われる。

結婚できない人が多いとはいえ、無職でも最低限の生活が保障されるっていいと思うけど。

人間、そう何でも手に入るわけじゃない。

人口が増えていく活力のある社会はその陰で不幸になる人が多いかもしれないし、今の魔族のように飢え死にの心配がなくなれば種族の活力が失われる。

これは、生物の性かもしれないな。

「というわけで、魔族にあれやこれや言ってもな。内政干渉だと受

け取られかねないし」

俺は、バウマイスター伯爵だ。

発言には気をつけないと。

「我が輩とて、ゾヌターク共和国をどうこうするつもりはないのであるな。別の国なりコミュニティーがあれば、我が輩はそこで存分に生活ができるのであるな」

「お前、無茶を言うな……」

魔族は長年ゾヌターク共和国という国家でひとつに纏まっているのに、そこに別の国家を起こすとは。

あきらかに反逆だと思われて討伐の対象になりかねない。

「その後ろにヘルムート王国なりアーカート神聖帝国がいると思われたら、人間と魔族の全面戦争になりかねん。バウマイスター伯爵領で大人しく遺跡の調査をしていろ」

アーネストの奴、ニュルンベルク公爵に協力していた時もそうだが、たまに危険な思想が表に出るな。

政治家でもないのだから、妙な事は考えないでほしい。

「土地ならば、いくらでもあるのであるな。ゾヌターク共和国では完全に自然と化した放棄地域の再開発もおこなわず、地下遺跡の発掘予算も出さない。だから我が輩は、密出国したのであるな」

「わからんでもないが、それはアーネストの欲望が入っていないか？」

「人も魔族も、欲望があるからこそ進化するのである」

アーネストは、今の魔族にはそれがないという。

確かに、ゾヌターク共和国の連中は淡白な奴が多い。

俺のイメージにある欲望に塗れた魔族って、まだ一人も出会っていないな。

「現実問題として、こちらに戦争でも仕掛けられたら困るからな。俺は、あれでいいよ」

せっかく俺が、懸命にバウマイスター伯爵領の開発を進めているのだ。

それを荒らされたり、奪われでもしたら困ってしまう。

奥さんと子供達のためにも、俺は保守的に動かないといけないのだ。

「陛下からの命令だから行ってみたが、無駄な時間だったな」

何ら実りもなく、ただ開発が遅れただけであった。

バウマイスター伯爵領に戻ると、きっとローデリヒが手ぐすね引いて俺のスケジュールを組んでいるであろう。

それも、かなりの密度のものをだ。

「まあいい、早速領地に戻って開発を……」

もうこの国で俺にできる事はない。

みんなつまらなそうだし、早くバウマイスター伯爵領に戻る算段をしないとな、と考えていると、あくまでも俺達が魔族の国に滞在するまでという条件で雇っていたモール達が必死の表情で懇願してきた。

「アーネスト先生の助手扱いでいいから雇ってくれ！」

「無職も長いと暇なんだよ」

「無職でも平気と言われれば平気だけど、たまに親の視線が痛いんだ」

「そうなのか……」

せっかく大学まで出て無職だからな。

若者の失業が多いとはいえ、ルミのようにちゃんと就職している者もいるから、肩身が狭いというわけか。

「人間の国だと仕事はあるんだろう？」

「あるけど……」

この三人は魔法使いなので、能力だけでいえば引く手数多であろう。

ただし、人間が魔族を雇うのかという疑問は残るが。

「バウマイスター伯爵はアーネスト先生も雇っている。という事は俺達も大丈夫なはずだ」

「何も知らない貴族の領地で働くのは不安だが、バウマイスター伯爵領なら大丈夫そう」

「というわけで、雇って！」

いきなり無茶を言ってくれる。
というか、警備隊の目と耳がある場所で軽々しく雇ってくれとか言うな。
アーネストの存在だけでも王宮に気を使っているのに、三人も魔族を雇ったら最悪謀反でも企んでいるのではないかと思われかねない。
人間の国に長期滞在という扱いなのであろうか？

「能力は十分だと思うけど、魔族が人間の国で働くには前提条件があるな」

「それは？」

「ゾヌターク共和国とヘルムート王国の交渉が纏まる事。出入国に関わる協定も結ばれるだろうし、労働条件などの規定、他国で働くわけだから税金に関する決まりも必要だな」

「先生はどうなんだ？」

「アーネストは例外だからな。例外を増やすと面倒だ」

「「「そんなぁ……」」」

そう簡単に無職から脱せられない事を知り、モール達はガックリと肩を落とした。
俺から見ても、両国の交渉は上手く行っているようには見えないからな。
原因は魔族側の方が多いと思う。
王政を排して民主主義制に移行しろとか、無茶な要求を出すから反発して当然だ。

それに、ヘルムート王国でいきなり民主主義制を実行しても社会が混乱するだけだ。
その辺が、民権党のお花畑には理解できない……わざと混乱させて支配下におこうと考えているかもしれないけど。

「民主主義は俺達を救わないな！」

「職も与えてくれない！」

「結婚したい！」

叫ぶ、無職の魔族男性三人。
こいつら、別に怠け者でもバカでもない。
ちょっと運が悪いだけでこの有様だからな。
政府に色々と言いたい事もあるのであろう。

「若者の半分が無職って凄いわね。でも、ゾヌターク共和国がある この島って、無人の領域の方が多いのよね？」

「放棄した地域が多いからね」

モールは、元々考古学を学んでいたので歴史にもある程度詳しい。
豊かになった魔族には少子高齢化が進行し、人口が減って徐々に可住領域を減らして行った歴史をイーナに説明する。

「勿体ないから、そっちに移住したら？」

「でも、それだと社会保障とかがなぁ……」

ゾヌターク共和国が管理していない誰もいない土地で暮らすと、

自由ではあるが、最低限の生活が保障されなくなる。
魔族は魔力持ちだから大丈夫だと思うけど、文明的な生活が送れる保障もないから嫌というわけか。

「今のゾヌターク共和国での生活が嫌だから離れたいのに、そのゾヌターク共和国の社会保障とやらに縋るのは変じゃない？」

「それは……」

イーナの正論に、モールは口を閉ざしてしまった。
確かに、ゾヌターク共和国の影響下から脱して自由に暮らしたい人が、そのゾヌターク共和国の社会保障に縋るのは変だよな。
自由には、飢え死にする自由と病死する自由もあるのだから。

「私は、この国は恵まれていると思うわ」

ヘルムート王国に生活保護なんて存在しないからな。
年金や健康保険もそうだ。
最後のセーフティーネットが教会な時点で、ヘルムート王国の社会保障レベルはお察しなのだから。

「どちらかを選ぶしかないと思うけど」

「無職でも生活保護で暮らしには困らないか、自由に働けるが社会保障は一切ない暮らしか……」

俺がモール達の立場でも迷うな。
俺の場合は、スタート地点がバウマイスター騎士爵領だったから懸命に足掻いただけだ。
もし魔族としてこの国に転生していたら、まだ学生で気楽に暮ら

していたかもしれない。

「バウマイスター伯爵殿」

ちょっと考え込んでいたら、俺達の部屋の前で警備をしていた若い男性の魔族が声をかけてくる。

「何かありましたか？」

「実は、客人が見えられております」

「客ですか？　どんな方でしょうか？」

王族貴族批判命の変な運動家とかだと嫌だからな。

その手の連中は警備隊の人達が排除しているらしいが、完全という保障もないのだから。

「それが、旧ゾヌターク王国の魔王陛下と、その宰相を名乗っております。同じノブレス・オブリージュを信念とする者同士、交流を深めたいと……」

「あのぉ……魔族の王って、まだいたんですか？」

俺はてっきり、革命で首チョンパにされてしまったものだと思っていた。

主なイメージは、フランスの革命である。

ゾヌターク共和国の連中を見ていると、王様の存在なんて許せないという風に見えてしまうのだ。

「一応いるというのは知っています……。お会いした事はありませ

ん」

警備隊の若い魔族は、王様が存在する事実は知っているらしい。だが、実際に会った事がないので本物かどうか確信を持てないという表情をしていた。

「そんな者達を通して危険はないのか？」

本物の王様かどうか怪しい連中を警備担当者が通そうとした事実に、ブランタークさん過剰に反応した。

もし俺や子供達に何かあると大変だからだ。

「危険はないのです」

「そうなのか？」

「はい。王様と言いましても、今は何の権限もありませんし……」

若い魔族の説明によると、ゾヌターク共和国の前身であるゾヌターク王国は無血革命で国家としての生を終えた。

王族や貴族は殺されなかったが、大半の資産を共和国政府に没収されて庶民に転落。

勝手に王様や貴族を名乗るのは民主主義の精神のおかげで自由であったが、庶民並の力しかない者が王族や貴族を名乗っても滑稽でしかない。

徐々に王族や貴族を名乗る者は減っていき、遂にはほとんどいなくなってしまったという事情を魔族の若者は説明してくれた。

「力をなくしたとはいえ、王族と貴族の接近は危険じゃない？　痛

くもない腹を探られるのは嫌だぞ」

俺が王族をけしかけ、ゾヌターク共和国を混乱に陥れようとしていると思われるのも嫌だ。

なので、無理に会う必要もないと思うのだ。

「本当に何の力もありませんので、それに……」

「もうよい。ここからは余が話をしよう」

魔族の若者を押しのけ、その魔族の王……魔王か……でも、RPGのように敵というわけでもなく、ただ単に魔族の王様の略称でしかない……が姿を見せた。

見せたはずだが、誰もいないな……。

「バウマイスター伯爵殿、下だ」

「下？」

少し視線を落とすと、そこには王様の格好をした魔族の少女がいた。

女性だから女王なのか。

背が百二十センチほどしかなく、とても小さい。

年齢は七～八歳か？

魔族の成長速度を知らないので、実はもっと年齢は上かもしれないけど、下手をすると幼女に見えるな。

将来は美人になるかもしれないけど、今は一言でいうと可愛い女王様といった感じだ。

「ちっさ……」

「こらっ！　小さい言うな！」

どうやら、小さいと言われるのが嫌いらしい。

すぐさま俺に抗議してくる。

「陛下、ここは穏便に……。魔王たる陛下が、この程度の事で激怒してはいけません。王の器は体の大きさとは比例しません。内に持つ度量の大きさと比例するのです」

「なるほど、危うく激怒するところであった。このバウマイスター伯爵殿が、余の器を見定めようと、わざと徴発している可能性もあるのだな？」

「ご賢察です。陛下」

可愛い女王様の同行者は、身長百六十五センチほど。

黒いショートカットに、隙なくきめたスーツ姿の、キャリアウーマンといった感じのとても綺麗な女性だ。

彼女が宰相……こちらも実権はないから、宰相の血筋というわけだな。

女王陛下は子供なので、現実的な話はこちらの宰相に話を聞かないといけないわけだ。

「伯爵様」

「バウマイスター伯爵」

「凄い魔力ですね……」

さすがは、魔王と宰相、アーネストも相当だが、それ以上の魔力量だ。

特に女王陛下は、とてつもない魔力を秘めている。

彼女の先祖が、魔王として戦争で活躍したという事実は納得できるな。

「魔力など、いくらあってもゾヌターク共和国ではさして役に立たぬぞ」

「そうなのか？」

「魔族はみんな、一定以上の魔力を持ってもっておりますので」

魔王の代わりに宰相さんが説明してくれた。

「ゾヌターク共和国では、魔道具が発達しております。改良が進んで段々と使用する魔力が減っている関係で、多くの魔力を持っていても無意味だと思われているのです」

消費魔力の減少……、技術が進んで省エネ家電みたいになっているのか……。

魔族はみんな魔力を持っているから、魔道具を開発する頭脳と技術、あとはこの高度な社会を運営するスキルがないと上にあがれないわけか。

昔の魔力がある魔王や貴族が戦場で活躍し、多くの魔族を従えるというパターンが通用しなくなったわけだな。

「それで、本日はどのようなご用件で？」

「先ほど言ったとおりだ。ノブレス・オブリージュを信念とする者同士、共に交流を深めようぞ」

「つまり、この国には王族や貴族を名乗っている者はほとんどおりません。同類と交流したいわけです」

「ぶっちゃけたなぁ……」

特に害もなさそうなので、俺は魔王と宰相さんを部屋に招き入れた。

「改めて紹介しよう。余の名は、エリザベート・ホワイル・ゾヌターク九百九十九世である。この者は余によく尽してくれる宰相だ」

「ライラ・ミール・ライラと申します」

魔王が胸を張りながら自己紹介をするが、悲しいかな。
胸がないので胸を張っている意味があまりなかった。
もう少し成長しないと、胸を張る意味はないであろう。

「むむっ……バウマイスター伯爵の妻達はみんな胸があっていいな……」

魔王はエリーゼを最初に……ルイーゼは無視して妻達の胸を見て羨ましそうな表情を浮かべた。

「ああ、やっぱり……」

出産しても胸が大きくならないルイーゼは、魔王に無視されて一人落ち込んでいた。

「陛下はまだ十歳です。あと十年もすれば成長いたします」

「そうだな、そうすれば余もスタイル抜群の国民に愛される魔王になれるな」

随分と俗ズレした王様というか……。

王の器量と胸の大きさって関係あるのであろうか？

「魔族は女性でも王になれるのか？」

「そなたは？」

「陛下、彼女の佇まいからしてただ者ではありません」

宰相さんは、テレーゼの雰囲気だけで彼女の正体をほぼ見抜いた。

「妾は元公爵にして、運命が変わっておれば女性皇帝になっていたかもしれぬ身じゃ。だが、今はただの女にすぎぬ」

テレーゼは、元の自分と同じ立場にある魔王に興味を持ったようだ。

彼女に声をかけた。

「なるほど、理解できました。ゾヌターク王国時代は男性しか魔王になれませんでしたが、これも時代の流れです」

「余は、国民に愛される魔王様を目指しておる。それに、今の世は女性政治家というだけで票を得て政治家になっている者もおるからな。女性の魔王ならば、国民に人気が出るかもしれぬ」

何と言っていいのか……。
やっぱり俗っぽい理由だな。

「人気取りのために戦略というわけじゃな」

「今の余達が置かれた状況はあまりよくないからな。手段は選んでおれぬ。もう一つ、直系の王家の生き残りは余だけになってしまったのだ」

没落した王家は、普通の勤め人をしながら日々の生活を送っていた。
ところが、エリザベートの母親が彼女を産んだ直後に病死し、父親も三年ほど前に事故で亡くなってしまったそうだ。
そこで、同じく宰相家の一人娘であるライラが、保護者としてエリザベートを引き取ったらしい。

「世知辛い」

「他に思いつかないわね……」

ヴィルマとアマーリエ義姉さんと同じく、俺もそれし思い浮かばなかった。

「余は子供一人なので、今は生活保護も出ており、生活は何とかなっておる」

「私も、常にお世話させていただいております」

この国は社会保障が充実しているから、魔王様が一人でも生活に

は困らないというわけか。
宰相も、時間があれば彼女の面倒を見ているようだ。

だが、仕事をしながらだと大変だよな。

「時間の都合をつけるため、普段はいくつかのアルバイトを掛け持ちしております」

生活保護の魔王と、フリーターの宰相か。
ある意味、斬新的な組み合わせである。

「無職なのか」

「俺達と同じだね」

モール達がエリザベートに親近感を持ったようだが、彼女の方は彼らにつれなかった。

「余は両親を亡くし子供だから生活保護、普段は学校に通っている身だ。そなたらは両親も健在でいい大学も出ておる。それなのに無職とは嘆かわしい」

「あがっ！　世間からの悪意と同じ物言いだ！」

「小さいくせに、凄い毒舌だぁ！」

「まな板の癖に……」

「ちっさい言うな！　余はすぐに背が伸びる予定だ！　胸もすぐにエリーゼのようにバインナインになる予定だぞ！」

無職の若者達が自分の方がマシだと罵り合う国。
確かに、あまり将来には期待が持てないかも。
でも、エリザベートがエリーゼのように成長するものなのかね？

「陛下、落ち着いてください」

「ライラの言うとおりであった。今日はとても大切な話があったのだ」

「その前に、お茶とお菓子をどうぞ」

客を招き入れて、お茶ひとつ出さないというのも失礼な話だと、エリーゼとリサがお茶を準備していた。
今日のお茶請けは、この国のお菓子屋で購入したシュークリームだ。
一個五百エーンもするが、クリームが上品な甘さでシューにたっぷり詰まっている。
客層もお金持ちばかりで、俗にいうセレブ御用達のお店のようだ。

「おおっ！　『デモワール・シュー』の高級シュークリームではないか！　久しぶりだな」

エリザベートは、大喜びでシュークリームを食べ始める。

「陛下、お口の端にクリームか」

「うむ、大義である」

エリザベートは、ライラから口の端についたクリームを拭いても

らいながらシュークリームを心から堪能していた。
お菓子に大喜びするところを見ていると、この魔王様も年相応の子供なんだよな。
ライラさんも、宰相というよりも魔王様のお母さん……は失礼か、お姉さんみたいだなと思う。

「生活保護の身ではこれは購入できぬからな。世間では生活保護者が高価な品を買ったり博打に興じたりすると、新聞で批判されてしまうのだ。重箱の隅を突くような話しであろう？」

何だろう？
この国って、本当に日本によく似ているよな……。

「いやあ、耳が痛い話っすね」

魔王様に批判されたレミは、困ったような表情を浮かべながら頭をかいた。

「おっと、大切な話があったのだ。うむ。やはり、デモワール・シューの高級シュークリームは美味であるな」

「お土産でいかがですか？」

「おおっ、催促したようですまぬな」

極論すれば、一個五百円の高級シュークリームで篭絡される魔王様か。
この国の王族や貴族は大変なんだな。

シュークリームを食べ、お茶を飲み干したエリザベートは、緊迫

した面持ちとなって話を続ける。

「このままいけば、魔族におけるノブレス・オブリージュ滅んでしまう。よって余は決意した。余は実力を伴った魔王になるぞ！」

どうやら、再び俺達に厄介の種が舞い込んだようであった。

第百四十三話　ゾヌターク王国復興？

「このままでは、魔族は衰退する！　余は魔族の王国を復活させるのだ！」

いきなり俺達に会いに来て、魔族の王国を復活させると宣言した魔王様（年齢十歳の少女）。

正直なところ、好きにやってくれという感じだ。

俺達が関わると内政干渉となりゾヌターク共和国政府を刺激するから、当然手は貸せない、貸す理由もないけど。

「建国ともなれば、将来的にはヘルムート王国やアーカート神聖帝国とも対等な同盟を結びたいところ。よって、今日は無心にきたわけではないぞ」

「下手に援助を受けると借りになってしまいますし、ゾヌターク共和国側が警戒するでしょうから……」

宰相であるライラさんには、まともな判断力があるようであった。

「でも、どうして今なの？」

ルイーゼは、今のこの時期に王国建国の宣言をした理由を訪ねる。

「魔族はこれまで、一万年以上も一国で安定した統治を行っていた。あまりの安定ぶりに魔族の本能が衰えてしまうほどだ。だが、ここで人間の国家が二つも確認された。これからの魔族には大きな変化が訪れる。いい点も悪い点も多かろうが、ゾヌターク共和国が正常

な判断をする保証もない。よって、余達は立つ事にしたのだ！」

「国が二つあった方が、どちらかが生き残れるという現実的な理由もあります」

この魔王様、十歳にしてはまともな事を言うな。

女の子だから、ませているのかもしれない。

宰相のライラさんも冷静である、今の魔族は女性の方が優秀なのであろうか？

「魔族が人間に滅ぼされる？　そんな事があるのか？」

魔族は全員が魔法使いで、魔導技術も人間側を圧倒している。

どう考えても、人間に滅ぼされるとは思わない。

むしろ逆を心配した方がいいであろう。

「魔族はご覧のとおり少子化で人口が減っております。一方、人間は数が増えるばかり。リンガイア大陸の開発が終われば、他の島や大陸にも勢力伸ばすでしょう。確かに魔族は魔導技術に優れておりますが、それも時間が経てば追い付かれるかもしれません。長期的な視野に立ち、今女王陛下は立ち上がったのです」

「立ち上がったのだ」

胸を張りながら、堂々と宣言する魔王様。

だが、残念ながらまだ背と胸が足りなかった。

志は立派だと思うんだけどなぁ……。

「でも、そんな急に独立できるの？　共和国の警備隊に鎮圧されて終わりじゃないの？」

まあ、普通に考えればイーナの言うような結末になるよな。
ゾヌターク王国には問題も多いけど、分裂するほど混乱していないのだから。

「独立などまだ先の話だ。余が生きている間には不可能であろう。だが、その根拠地を整備する事は可能！　まあ、余達の活躍を見ているがいい」

「陛下、そろそろ家に戻る時間です」

「うむ、学校の先生が暗くなる前にお家に帰りなさいと言っていたからな」

「「「

この国では既に力はないと思われていた魔王が、俺達と会見した直後に共和国からの独立を図る。
俺と、その後ろにあるヘルムート王国が魔族を分断させようと目論んでいる。
そういう風に捉えられかねないからだ。

ところが、そんな心配を一笑に付す存在がいた。
新聞記者であるルミであった。

「心配いらないと思うっすけどね」

「おい、新聞記者。ここは、そういう陰謀があるって読者を煽るのが普通だろう？」

「うち、民権党の政治家の言いなり上司が多くて問題視されてるっすけど、これでも一応売り上げトップの新聞社っすから。イエロージャーナリズムじゃあるまいしって感じっすね」

「クォリティーペーパーだって言いたいのか？」

「それっすよ！　それ！　自分、後輩達と違って、真面目に就職活動したんすから」

「「「俺達もしたんだよ！」」」

ルミの言い分に、モール達がムキになって反論した。
真剣に就職活動をして全滅か……。
俺なら心が折れるな。
前世では仕事が大変だったけど、ちゃんと就職できてよかった。

「第一、警備隊がまったく警戒していないっす！　たまに不祥事で批判されるし、反軍思想の矢面に立ってある層に嫌われているっすけど、基本警備隊は優秀な人が多いっすよ」

就職するにしても、競争率が高そうだからな。
公務員で収入も待遇も安定しているだろうから、優秀な人が集まりやすいのであろう。

「心配ないと言っておくっす」

「ならいいけど……」

そして翌朝、魔王と宰相による独立宣言の詳細が明らかになった。
ルミがエブリデイジャーナルの朝刊を持参したのだ。

「出てたっす。この記事っす」

「どれどれ」

その記事は生活面にあった。
王政国家が独立する話なのに、なぜか記事が生活面。
この違和感は何なのだ？

「ええと……『歴史あるゾヌターク王国の女王陛下、新生ゾヌターク王国の国王に就任』。肝心な記事の内容は……」

記事を読んでいくと、こういう風に記されている。
彼ら魔族の住まう島は、現在四分の一ほどの領域しか人が住んでいない。
昔は四分の三ほどまで人が住んでいたが、徐々に人口が減って放

棄された。
無人となった土地は荒れ果て、自然に戻り、古い放棄地には魔物の領域に戻ってしまった場所もある。
これら放棄地を、職がなかったり、待遇が悪い暗黒企業を抜け出した若者達が再生する活動が始まっている。
彼らは基本的に自給自足の生活を送り、生活に必要なインフラ設備も、放棄されたものを修理、維持している。
彼らの主な収入源は生産した農作物の販売益などであり、その平均収入は総じて低いが、自給自足生活のおかげで困窮はしていない。
むしろ、精神的に豊かな生活を送っていると言えよう。

この挑戦が上手く行くのか？
注目していきたいところである。

「……」

この記事を読むと、俺には既視感しか感じられなかった。
これって、地球の国々でもあった活動だよな。
若者が、廃村や耕作放棄地を利用して生活を始めるってやつ。

確か、農村再生運動とか、ロハスとか言ったかな？

「ルミ、お前知らなかったのか？」

「そりゃあ記者っすから、こういう活動があるのは知っているっすよ。でも、担当が生活部だから担当外っす」

「お前、役人みたいな事を言うな」

「バウマイスター伯爵さん、魔族の社会を理解しすぎっす！」

いや、魔族の事に詳しいんじゃなくて、ただ単に日本によく似ているから知っていただけなんだけど。

「これ、独立なのか？　俺にはただの農村復興運動に見えるけど……」

「さあ？　俺にはさっぱりわからん」

俺の問いにエルは首を傾げた。

新聞の記事を前にみんなで悩んでいると、そこに再び魔王様と宰相が姿を見せた。

「今日は略装で失礼するぞ」

「陛下は、今日は学校でして」

今日の魔王様は、普通のワンピース姿であった。

そして、ランドセル……。

魔族の国の子供は、学校にランドセルを背負って行くようだ。

「これが独立運動ですか？」

イーナが、二人に新聞の記事を見せた。

「然り！　共和国の連中が放棄した土地に、職がなかったり、今の生活に不満がある連中を集めて集団を形成する。千里の道も一歩から！　こうやって臣民を増やし、最終的には王国の独立を目指すのだ！」

臣民というよりも、組合員や団員と呼ぶ方が適切かもしれない。
王国を名乗っているが、これもどちらかというと団体名や社名に近かった。

「陛下は、この活動を行う非営利団体の会長に就任しております。私は、副会長兼会計役に専念する事になったのです。陛下は休日以外は学校がある身、普段は私がこの団体を取り纏める予定です」

放棄地の各所にある農村を取り纏める非営利団体ねぇ……。
共和国政府が無価値だと思っている土地で、魔王様と宰相が無職の若者を集めて自立の道を模索している。
生活保護でなくなる者が増え、わずかではあるが税金も納めていれば、それをわざわざ妨害するのは不利益しかないわけだ。

第一、魔王様達が武装しているとも思えない。
それは警備隊が何も言わないわけだ。
そもそも、魔王様達と共和国政府は対立すらしていないのだから。

「だが、それが甘い。余の生存中は難しいであろうが、子や孫の世代には我らの組織は大きく拡大していよう。武力闘争に頼る事なく分離独立が可能なのだ」

「さすがは陛下。非常にクレバーな作戦です」

「何の、ライラの献策のおかげではないか」

それは独立したというよりも、ただ単に組織が拡大しただけのような……。
非営利団体側も、そのための神輿として魔王様を選んだのであろうし……。

幼女魔王様なら軽い神輿でお上に警戒感も与えない。
それに庶民って、実は王様とか王女様が好きだからな。
独裁でもされて迷惑を蒙らなければ、この幼い魔王様を微笑ましく見ているだけであろう。

「陛下、そろそろ学校のお時間です」

「もうそんな時間か。余も皆に愛される魔王となるべく、よく勉強して努力せねばなるまい」

魔王様は、宰相の送迎で学校へと向かった。
学校は休まないでちゃんと勉強しているようだ。

「ちゃんと勉強しても、職に就けない俺達みたいなのもいるけどね」

「本当、現実は残酷」

「「「ヴィルマちゃん！　酷いよ！」」」

「この方達、実は何か問題があるのでは？」

「「「カタリーナさんも酷い！」」」

モール、そんな夢も希望もない話は聞きたくないぞ。

「あなた、問題にならなくてよかったですね」

「そうだな」

そして放課後の時間になると、再び魔王様は姿を見せた。

エリーゼが淹れるお茶を飲み、今日は別の高級洋菓子店で購入したケーキを食べながら宿題をしている。

というかこの魔王様、なぜか俺達の部屋に通うようになってしまったな。

フリードリヒ達がいるから、勉強には向かないと思うんだけど。

「バウマイスター伯爵の赤ん坊は可愛いな。子は国の宝だからな。次は、分数の割り算か……」

魔王様は、宿題である計算ドリルを解きながら眠っている赤ん坊達を時おり見ていた。

「余も、大人になったらよき後継者を産まねばな。問題なのはお見合い相手がいるかだが……」

「恋愛結婚すればいいじゃないですか。政略結婚なんて今どき流行りませんよ」

「何を言うかと思えば……我ら高貴な身分の者達はお家やお国のために結婚するのだ。恋愛結婚も結構だが、教授を含む四名は結婚すらしておらぬではないか」

「陛下、言う事がキッツいわぁーーー」

モール達は魔王様から独り者である事を指摘され、揃って凹んでいた。

「我が輩は、研究が恋人であり妻なのであるな」

勿論、アーネストは気にもしていなかったが。

「確かに、貴族や王族の結婚にはそれが一番求められると思います。ですが、素晴らしい旦那様と出会える可能性もありますから」

「エリーゼは、よき旦那と出会えたわけか？」

「はい」

面と向かって言われると恥ずかしいけど、エリーゼにそう思われると嬉しいな。

「余にも、白馬の王子様が現れる可能性があるわけだな。少しは期待しておくか。ところで、バウマイスター伯爵。この計算がわからん」

魔王様は、学校の宿題である計算ドリルを俺に見せた。

どうやら、魔王だから宿題をサボるという選択肢は存在しないようだ。

「分数の割り算か……」

魔王様が授業中にやったと思われる問題には、すべて×がついていた。

なぜなら、割り算なのに分数の分子と分母をひっくり返さないで計算していたからだ。

これでは、分数の掛け算と変わりがない。

「二分の一÷三分の二は、四分の三だ」

学業から離れて大分経つが、小学校でやる分数の割り算くらいならそう忘れる事もなかった。

「バウマイスター伯爵、なぜ分数の割り算は分子と分母をひっくり返してからかけるのだ？」

「それは、そっちにインテリが沢山いるからそっちに聞いてください」

アーネストは有名大学の元教授で、学歴はこの国の最高学府の院まで出ている。

モール達も、実はこの国で五本の指に入る大学を院まで出ており、宰相のライラもいい大学を出ていた。

俺に聞くよりも確実というわけだ。

「ヴェル、凄いね！」

小学生の算数の問題が解けただけなのに、なぜか俺はルイーゼからえらく尊敬されてしまった。

リンガイア大陸で生活するには、文字の読み書き、簡単な四則計算ができれば十分だからか。

分数の割り算とかは、アカデミーに行かないと必要ないと思う。

あそこは、エリーゼですら引くくらいの学者バカが集まっているそうだし。

ちなみに、俺はアカデミーには行った事はなかった。

だって、話が合わなそうだから。

「まあ、簡単な問題くらいはね……」

ここで下手に調子に乗ると、もっと難しい問題を聞かれて自爆する可能性がある。
みんなほどよくお勉強している魔族に押しつけるのが一番だ。

「我が輩、専門は考古学なのであるな」

「俺も文系だから」

「俺も！」

「算数は意外と難しいんだよ。数学ならなぁ……」

ところが、アーネストとモール達は俺の期待に応えられなかった。
分数の割り算くらいはできると思うが、なぜ計算する時に分子と分母をひっくり返すかの説明ができないのであろう。

「お前ら、ここで役に立たないでどうするんだよ！」

「バウマイスター伯爵、心外であるな。我が輩、遺跡発掘では役に立っているのであるな」

そう言われると、アーネストは大きく貢献はしているか。

「じゃあ、モール達は？」

「俺達の仕事は、この国に滞在するバウマイスター伯爵達の補佐であって、分数の割り算の理論を説明する事じゃないし……」

「そうそう」

「俺、文系」

モール達も駄目なので、ここは宰相家の血を引く才女ライラさんに説明をお願いする事にした。

「分数の割り算ですか……」

「はい。なぜ分子と分母をひっくり返すかです」

「それは、学校の先生にお聞きになってください。かの者は、そのために存在しているのですから。陛下は、仕える家臣の特性を理解し、得意な分野で用いる事が肝要ですので。ところで陛下、明日からのご視察ですが……」

誤魔化したぁーーー！

ライラさん、自分もわからないものだから、話題を切り替えて魔王様からの質問に答えなかった。

それにしても、上手いかわし方である。

「視察か。楽しみだな」

「はい、どの村の住民達も、陛下の来訪を心待ちにしております」

「うむ。余の臣民候補達じゃな」

ただの農村再生運動の神輿にされているような気もしなくもないが、下手に革命だとか言わないだけマシか。

そんな事をしても、まず防衛隊相手に勝ち目がないからな。

ライラさんは、現実主義者というわけだ。

「バウマイスター伯爵、一緒に来ぬか？」

「そうだなぁ……」

今の今まで、肝心の交渉はまったく進んでおらず、このゾヌターク共和国では俺達の事が話題になる回数が大幅に減った。

何でも、有名な歌手が結婚するとかで、そちらの方が話題になっていたのだ。

俺達は歌手よりも下かと思ったら、テラハレス諸島で交渉を続けている両国の交渉団の事などほとんど記事になっていない。

ルミからのリークによると、洒落にならないくらい交渉が進んでいないので、民権党の支持率下落に繋がると、政府から新聞社にあまり報道するなと圧力がかかっているそうだ。

「おい、民主主義！」

「バウマイスター伯爵さんにそう言われると耳が痛いっす！　民権党には新聞記者上がりが多いんすよ。元上役から書くなと言われると厳しいんす。ほんのちょっと政治欄に記事が出ているのは、若手の可能な限りの反乱なんす！」

酷い話だが、そういう事情もあって俺達は暇であった。

農村に遊びに行くのもいいであろう。

「問題は、防衛隊が認めてくれるかだな」

これが唯一の懸念であったが、防衛隊はあっさりと認めてくれた。

「ああ、例の農村再生運動ですね。いいですよ。変な運動家がいない分、護衛も楽ですから」

「えっ？　いないの？」

「ほら、この運動は魔王様がお飾りとはいえトップでしょう？　変な左側の運動家は近寄りませんよ」

そういう運動家は、王様なんて大嫌いな人種が多いからな。

魔王様がトップの時点で近寄らないか。

許可も出たので、翌日から俺達はゾヌターク共和国内を色々と巡る事にするのであった。

翌日の五の日。

五の日とは、日本で言うと曜日みたいなものだ。

一の日から七の日まであり、五の日から七の日までは学校がお休みのようだ。

「随分とお休みが多いのね」

イーナだけじゃなく、俺達人間はみんなそう思っていた。

ローデリヒなんて、よほど特別な事でもないと週に一度しか休みをくれないのだから。

「そんなに急いでカリキュラムを達成しても、上が詰まっているからさ」

モールの説明によると、これも教育期間を伸ばす苦肉の策らしい。早く教育を終えても、就職先が少ないから無職が増えてしまう。無職が多いと政府への批判が強まるので、休みを増やして教育期間を伸ばしたというわけか。

「先延ばしとも言うのであるな」

「アーネスト、それはぶっちゃけすぎ」

自分には職があるからって、その言い方は酷いと思った。

「バウマイスター伯爵殿、到着しました」

その村には古い港があると聞いていたので、俺達は自家用の小型魔導飛行船で過疎地に移動していた。

もう一隻、小型の警備隊の船も同行している。

すぐに注目されなくなったが、一応国賓である俺達の護衛のためであった。

「陛下、ようこそお越しくださいました」

魔王様と一緒に村に到着すると、百名ほどの若者達が出迎えてくれた。

見た目はみんな二十前後に見えるが、魔族はなかなか年を取らないので本当の年齢はわからない。

だが、みんな百歳にはなっていないはずだ。

「皆の者、今日はわざわざの出迎え感謝する。村も活気が出てきて余は嬉しく思うぞ」

「みんな、やる気を出していますからね」

「陛下、農業って楽しいですね」

「なかなか作物が育たなくて落ち込む時もありますが、収穫した物を手に持った時の重みでそれも吹き飛びます」

「陛下、自分は鶏を飼い始めたのです。ようやく卵を産んでくれるようになりました。前の年寄りに高価な羽毛布団を売りつける仕事よりも充実していますよ」

若者がなかなか就職できない社会ってのは深刻なんだと思った。

それでも、農村で暮らす事に生きがいを感じ始めたのだから、お飾りでも魔王様はみんなのお役に立てているのだな。

「今日はお客さんも多いのですね」

「うむ、遥か東リンガイア大陸にあるヘルムート王国より、バウマイスター伯爵とその家族が来てくれた。余の客人である」

「それでは歓迎しないといけませんね。今日は、芋の収穫を利用して芋掘りをしようと思うのです」

「芋掘りか！　楽しみだな！」

いくら魔王様でも、やはり年相応の子供だ。

村の代表から芋掘りができると聞くとはしゃいでいた。

「芋掘り？　楽しそうだな」

勿論、俺も楽しみにしている。
というか、あの何もないホテルで待機する生活に飽きていたのだ。
政府の対応が適当すぎて、俺達は何のためにここにいるのだという気持ちになってきてしまうから。

「芋ならフリードリヒ達に離乳食を作れるかな？」

「いいわね、それ」

「ボク達も芋料理が食べられるね」

イーナとルイーゼも乗り気となり、フリードリヒ達を船内のメイド達に預けて、みんなで芋掘りに参加した。
俺も魔法など使わず、自力で芋を掘っていく。

「あれ？　小さい？」

「旦那の掘る芋は小さいのばかりだな」

気合を入れて芋のツルを引っこ抜いたから、ついている芋はすべて小さかった。
それを見たカチヤが、俺を笑っていた。

「言うほど、カチヤの芋も大きくないじゃないか」

「あれ？　芋はうちの実家の得意技なんだけどなぁ……」

確かにサツマイモに似ているけど、マロ芋とは違うんじゃないのか？

「合成肥料を用いておらぬから、大きさもまばらなのだ」

合成肥料？

化学肥料みたいなものか。

魔王様の言いたい事はわかる。

要するにこの村で行われている農業は、日本でいうところの有機無農薬栽培なのであろう。

「農作物規格には合わぬから、通常の流通路には載せられぬ。だが、この運動の支援者達が購入してくれて評判もいいぞ」

ますます、日本で見た事があるような運動だな。

農業を古い方法に戻し、それを支援者に販売して経費をねん出するわけか。

有機無農薬野菜ファームとか、そんな名前をつけたくなる。

「旦那、合成肥料って何だ？」

「魔導技術を用いた肥料だよな？」

「作物の成長に必要な成分だけを抽出した、工場で生産される肥料と学校で習ったぞ」

魔王様が俺の問いに答えてくれた。

芋掘りに夢中で鼻の頭に土がついているが、これもご愛敬。

しっかりはしているが、年相応の子供なんだよな。

「陛下、お鼻に土が」

「うむ、大儀である」

それに気がついたライラさんが、ハンカチで土を拭った。

こうしているのを見ると、君臣の関係というよりは母娘に見えてしまう。

「へえ、それがあったら兄貴ももっと楽になるのかな？」

「わからない。第一、交易に関する交渉が纏まらないと輸入も困難だろう」

「あいつら、あんな誰もいない島で毎日よく無駄な話し合いができるよな。旦那もそう思うだろう？」

無駄かどうかはわからないが、話し合いがまったく進んでいないのは事実だからな。

カチヤの言い分もわからなくもない。

「兄貴も、肥料作りが大変そうだからな」

そういえば、ファイトさんは自然肥料だけでマロ芋を育てているのだった。

もし合成肥料を輸入したら、もっと楽に大量のマロ芋が作れるのか？

「合成肥料も一長一短がありますからね。画一的に大量の作物を作るには有利ですよ」

ようは使い様、時に自然肥料と使い分ける事が重要だと村の代表を務める青年が教えてくれた。
この青年はとある大農場の子供で、実家の大農場では働かず、この運動に賛同して参加者達に技術指導をしている。
魔王様は、未来の農業大臣候補だと勝手に言っていた。

「うちの場合、合成肥料の購入費もバカにならないから自然肥料使っているのですがね」

金をかけずに生活するための運動だから、肥料代で苦労したら意味がないか。
農薬の類も同じで、肥料と農薬の会社ばかり儲かって農家が困窮しては意味がないのであろう。

「自然肥料でもちゃんとやれば美味しい作物は取れますしね。害虫に使う忌避剤も自作ですし。除草剤は使わずに草取りで。収穫した作物は大きさや形がいいものを支援者に送り、残りを自分で食べる。これで十分です」

「ヴェル、これは大きいわよ」

「へへん、ボクの方が大きいよ」

「たまにはこうして童心に返るのも悪くないのである！」

「娘を連れてくれば喜んだかな？」

「たまには土に塗れるのも悪くないのであるな」

若者から、約三名いるおっさんまで、みんな芋掘りを楽しんだ。
通常の収穫作業も兼ねていたので、村の芋畑にあるすべての芋は村民達により無事収穫される。

「これで子供達に離乳食を作るか」

「ヴィルマ、フリードリヒ達はまだ歯がないから、なるべく薄く伸ばしてな。ペースト状にするんだ」

「ヴェル様、詳しい」

前世で、離乳食を扱った事もあったからな。
なぜか少子化の時代に大手商社を真似して販売に関わり、見事に失敗した。
俺は『離乳食ってこういう風に作るんだ』って感じで勉強になったが、責任者の課長、中国の支社に飛ばされて可哀想だったな。
奥さんから、『中国は大気汚染が酷くて子供の健康によくないから単身赴任して』と言われて送迎会で涙目だったけど。

「赤ん坊にあまり濃い味はよくないから、素材の甘さを生かす方向で。おっと、ハチミツは使うなよ」

某グルメ漫画で赤ん坊に食わせて批判されていたからな。
乳児ボツリヌス菌が混入している可能性があるから、一歳以下の赤ん坊は避けるべきだ。

「ヴェル、相変わらず妙な事に詳しいんだね……」

「勉強したんだ」

前世でという条件がつくけど。
大した知識でもないけど、この世界だと凄いと思われるものは意外と多い。

「バウマイスター伯爵は、この国の人間のようだな」
日本と魔族の国って、似ている部分が多いからな。

「エリーゼ、裏ごしした方がいいと思うが」

「そうですね、味付けはこのままでいいと思います」

「十分に甘いですからね」

エリーゼ、テレーゼ、リサ達が離乳食を仕上げ、それをフリードリヒ達に少しずつあげていた。

「だぁーーー」

「そうか、美味いか」

エルとハルカも、夫婦でレオンに離乳食を与えていた。

「子供が多いのは羨ましいな。我らには子供がいない」

魔王様自身が子供だと思うのだが、彼女を除くと確かにこの村に子供はいなかった。

「国にとって子は宝だと思うのだが、我らの運動に賛同して参加した者達の大半は元無職。全員が未婚で、当然子供がいるはずもない。

建国計画は苦難の連続だな」

「それでも、ここで出会って結婚した者達もいます。お腹に子供がいる者も数名いるので、そう悲観したものでもありません」

魔王様はともかく、ライラさんはそう状況を悲観していないようだ。

「でも、学校はどうするの？」

ここは、人が住んでいる町から大分離れている。

元々廃村になったところを再利用しているため、近くに子供を通わせる学校がなかった。

魔王様自身が、お休みにならないと視察に来れないくらいなのだから。

「教育は必要だろう」

「教師を引退した者や、この中にも教員資格を持っている者が複数いる。何とか、義務教育を行う学校を作りたいのだ。幸いと言っていいと思うが、元々学校だった建物もあるからな」

「許可が出るの？」

俺が一番心配したのはその点だ。

ここが日本に類似した国だとすれば、新しい学校を作るのにどれだけの書類を出さなければいけないか。

ライラさんが主となって役所と交渉するのであろうが、その道は遠く険しいはず。

「確かに、必要な書類や条件が多すぎて困難です」

せっかく子供が産まれても、その子を学校に通わせるためにこの村を離れなければいけないのでは本末転倒になってしまう。

今お腹にいる子供達が通える学校が建設できなければ、村の規模拡大は難しいであろう。

「もう一つ、医療をどうする？」

「治癒魔法があるではないですか」

「それがさ、この国は医者の資格がないと治癒魔法禁止なんだって」

「本当ですか？」

「それが驚いた事に事実なんだ」

エリーゼのみならず俺もビックリしたが、今の魔族の国では無資格者が治癒魔法をかけると、最悪投獄される危険がある。

「そんなバカな事があるのか？」

テレーゼからすれば、使うと便利な治癒魔法の使用に制限をかけてしまう魔族の国というのが信じられないようだ。

「理由を聞くとバカらしいけど……」

魔族の国は、豊かになるために魔導技術を高めに高めた。

その結果、今のこの国の繁栄は非常に燃費のいい魔道具の普及によって支えられている。

生まれつき魔力量が多い魔族は、無理に鍛錬をして魔力量を上げる必要が少ない。
むしろ便利な魔法など使われたら、量産された魔道具が売れない。
売れないと、国が不況に陥ってしまう。

そこで、かなり厳しい魔道具と魔法の使用禁止規定が存在していた。
例えば、食料を長期間そのままで保存できる魔法の袋の使用禁止だ。
他にも、医師としての資格がない者の治癒魔法の禁止、これは『医療について素人なのに、治癒魔法で治療を施して何かがあったらお前は責任を取れるのか？』。
こう言われてしまうと、確かに困ってしまうな。
攻撃魔法の類も、練習する者はあまりいないそうだ。

警備隊の面々も、肉体的な訓練と支給されている武器の使い方……これは魔力を送り込めば使えるから本人が魔法を使う必要がない……あとは地球にある先進国の警察や軍隊に類する訓練を行っているらしい。

例えばテロリストが現れた時……仕事を寄越せというデモくらいらしいが……警備隊が攻撃魔法で彼らを鎮圧して死傷者が出ると、マスコミや人権団体に非難されてしまう。
人死にが出ない程度の電撃系の魔法というのは加減が難しく、普段魔法を訓練していない魔族には使える者がほとんどいないのだ。
だが、魔力を流せば適量の電撃が出る麻酔銃のような装備はある。
これを使えば楽なのだから、魔族で無理に魔法を使う者は少ないというわけだ。

「せっかく素質があるのに勿体ないの」

「町中で魔法なんて使うと、職務質問されますからね」

モールがテレーゼに説明する。

魔道具の使用なら問題ないが、魔法を使うと非難されるのだ。

『いきなり攻撃魔法を放たれ、怪我人が出たらどうするのだ』という警戒感から、魔族は人が多い場所では絶対に魔法を使わない。

魔道具の場合は、魔力を送り込んだ時の効果が見ればわかるようになっている。

だから、みんな魔道具を使うのに必要な魔力があればいいと思っているわけだ。

「この村では、一部魔法を使っています。何分長年放置されていたインフラが多く、修理できないものは魔法で補うしかありません」

魔法に関する資料は大量に残っているので、それを参考にして重い物を運んだり、畑を耕したり、道を整備したりしているそうだ。

「昔に戻ったというわけじゃな」

「お金がありませんので、自分で何とかできる事は自分でするというのが、この村の決まりです。幸いにして、薬剤師の資格を持つ者がおり、この近辺には薬草の類も生えております」

魔法薬を生産し、それで怪我や病気に備えるというわけか。

「医師の資格を持つ治癒魔法使いの方がこの村に興味を持っているので、治癒魔法の件はじきに解決すると思います」

魔王様を村長とした村は、着々とできあがっているわけか。

「難しい話はそれくらいにして、余はお腹が減ったぞ」

「俺もお腹が減ったな」

収穫した芋を使ったベビーフードも完成し、フリードリヒ達はそれを美味しそうに食べていた。

これからは、徐々に離乳食の割合を増やしていけばいいであろう。

「他の料理も完成しました」

エリーゼ達も手伝い、天ぷら、大学イモ、キントンなども完成し、村人達と一緒に食べ始める。

自分で収穫した作物を調理して食べると美味しいものだ。

気のせいかもしれないけど、味覚は舌だけで感じるものじゃないからな。

「見よ、バウマイスター伯爵。我が臣民候補達は楽しそうではないか」

若い村人達が、収穫した作物を一緒に調理して美味しそうに食べている。

それぞれに持ち寄った料理、酒、お菓子などもあり、まるで収穫祭のようであった。

「職がない、結婚できない、そんな者達でこの村に興味があれば、余は何人でも受け入れるぞ。そして時がくれば、ゾヌターク王国復活も十分にあり得る」

「陛下、その準備も着々と進行中です。この村の作物を卸す店舗も

決まりました。生産者の名前と顔をお客様に知らせ、少し高くても安心して購入していただく仕組みです」

「おおっ！　素晴らしい手ではないか！」

何だろう。

その手法って、日本だと当たり前のようにあるんだけど……。

「他にもいくつかの廃村を再生させ、その中から首都に一番近い村に産品を集め、定期的に市を開きます。作物を材料に使った特産品も開発しましょう。これを販売する市を『道の駅』と命名しました」

「いいアイデアだな！　ライラ！」

「……」

あの……ライラさん。

それって、日本の農村だと当たり前のように存在しています。

だから何って言われると困るけど……。

「このまま順調に規模を拡大させれば、必ずやゾヌターク王国の復興が成るでしょう」

「おおっ！　まさに王国再興千年の計というやつじゃな！」

「ねえ、ヴェル」

「本当に王国が復興できるかもしれないし、本人達が喜んでるんだ。気にしない方がいいよ」

イーナが何か言いたそうに見えたが、俺はそれをやんわりと止めたのであった。

「バウマイスター伯爵、新聞を持ってきたっすよ」

農村の見学が終わり、翌週の一の日。

新聞記者であるルミが、今日の分のエブリデイジャーナルを持参した。

魔王様と宰相による王国復興運動……と思っているのは本人達だけなので、ルミが取材を行った農村復興運動が記事になったので、俺達に持ってきてくれたのだ。

記事には、ゾヌターク共和国政府に放置されている俺達もその農村を表敬訪問したという記述も書かれていた。

「これは、外交に当たるのかの？」

「そんな事を考えるアホはほとんどいないっすよ。第一、あの農村の人達って、別に共和国の統治から外れたわけでもないですし」

ルミが笑いながら、テレーゼの問いに答えた。

独立を目指すと言っているのはあの二名だけであり、村民……現状は廃村という扱いなので正式な村民ではないのだが、多少の現金収入もあり、わずかだが納税もしている。

国を離脱しようとする人間がちゃんと納税をするとは思えないから、外部の人間が見ればただの農村再生運動にしか見えないのだ。

「それもそうかの。第一、防衛隊に勝てるはずもない」

武装すらしていないので当然だ。

俺達について来た防衛隊の人達は、彼らに何ら脅威を感じていなかった。

ただの農業従事者だと思ったのだから当然だ。

逆に、農村の連中が食事を差し入れしようとしたら、『すいません、こういうものは決まりで受け取れないのです』と恐縮する有様であった。

ルミがいたから、賄賂だと思われたら困ると思ったのかもしれない。

『このくらいはいいような気もするんすが、先輩記者で喜々として防衛隊批判を始める人がいるから、警戒する気持ちは理解できるっす』

全員を見たわけじゃないけど、防衛隊の面々は真面目な人が多いように思えた。

「ところで、今日、バウマイスター伯爵領に戻るって聞いたっす」

「このままここにいても、何も状況は変わらないからな」

妻と子供達まで連れて親善外交モドキを行ってみたが、外交交渉の方は相変わらずだし、俺達も最初は注目されたけど、あとは他の話題の方に夢中で相手にされなかった。

ゾヌターク共和国の国民は、基本的に外国に対してほとんど興味がない。

アーネストのような魔族は本当に特殊な存在だったわけだ。

「また陛下の命令で来るかもしれないけど、今度は『瞬間移動』ですぐに来れるから」

「羨ましいっすね。移動に時間がかからないって」

魔族で『瞬間移動』が使える人間はいない。

その代わりに魔導技術を用いた乗り物が進化しているのだから、俺は魔族の方が進んでいると思うのだが。

「バウマイスター伯爵、俺達はお役御免？」

「連れて行くわけにいかないからさ」

モール達は魔族で外国の者達だ。

アーネストは陛下が黙認しているからいいけど、モール達も連れて帰ると色々と問題になりそうだからな。

「約束の日当に、一時金で色をつけるからさ」

「初めて働いて金を貰ったのに、非正規で短期！」

「うぉーーー！　新卒キップを逃した俺達に正社員への道はないのか？」

「この世の、何と残酷な事か！」

三人の話を聞いてると、俺の心が次第に寒くなってきた。

まさか、魔族の国で就職残酷物語を聞くとは……。

「あのぅ……魔王様の農村で働けばいいのでは？　あそこなら、発掘などもできるかもしれませんよ」

見かねたリサが、先週出かけた農村で働けばいいと意見を述べた。

「その手があったか！」

「希望者は受け入れるって言っていたよな」

「あそこなら、結婚できるかも！」

モール達は、未来への展望が開いたと三人でテンションをあげた。

「「「ライラさぁーーーん！」」」

ライラさんか……。

綺麗な人だけど、果たしてモール達に可能性はあるのだろうか？

「そうだ！　彼女を上手く補佐できれば！」

「いける！」

「お前らには負けん！　ライラさぁーーーん！

三人は俺から報酬を貰うと、ライラさんの下へと駆け出した。

「ようやく、教え子達が就職したのである」

ホテルをチェックアウトした俺達は自分の魔導飛行船に登場し、

暫し滞在したゾヌターク王国を後にする。
だが、両国の交渉は未だにその糸口すら掴めていなかった。

第百四十四話　やはり魔法はあまり関係なかった。

「ブラントー閣下！　この新聞記事をご覧になりましたか？」

「まだ見ていないが。それが何か？」

突如大型魔導飛行船をこちらに送り出し、挙句に領空侵犯を警告した警備艦に魔法を放ったヘルムート王国との交渉が上手くいっていない。

事件の一週間前に政権交代をしたばかりで政府が混乱しており、この事件が混乱に拍車をかけた形となった。

それでも官僚達の力を借りて民権党の連中もどうにか交渉を始めたようだが、話は何も進んでいなかった。

歯痒いが、今の我々は野党で何ら権限もない。

世論とマスコミの受けを狙って編成された交渉団が、こちらの予想どおり別の方向に張り切ってヘルムート王国を怒らせ、これに今の魔族社会の停滞を解消するため、リンガイア大陸への侵攻を唱えるおかしな連中も呼応し、これでは纏まる交渉も纏まるはずがない。

民権党はリベラルを売りにする政党のはずなのだが、所詮は寄合所帯。

今私の目の前にいるようなおかしな連中もいる。

野党に転落したとはいえ、我々国権党も暇じゃないのだがな。

民権党が思った以上に素人の集まりで危機感を抱いた官僚連中と話し合いをしたり、無駄とはわかっていても民権党に政策を提案したりしているのだから。

まあ、民権党の連中は無駄にプライドだけは高いから、こちらの政策提案はほぼ無視されているが。

一部まともな議員達は危機感を抱いているが、彼らは少数派で目立たない。

我ら国権党にもアホな議員は存在し、今、そのアホから会ってほしいと言われた人物と話をしている。

彼の名はオットー・ハインツといい、病的なまでに痩せ型でロマンスグレーの髪を七三に分けている。

とても神経質そうに見え、目がギョロっとしており、常にあちこちを見渡していた。

人と目を合わせるのが苦手なようで、これで政治団体のトップだというのだから凄い。

差し出したヨレヨレの名刺には『世界征服同盟』と書かれており、この時点で私の心の中に警報が鳴り響いた。

聞いた事もない政治団体なので泡沫組織であろうが、こんな命名をしてしまう時点でちょっと近寄りがたい連中なのは確実だ。

彼は先に『世界征服同盟』とやらの政治理論を説明したが、この男、話し始めると急に饒舌になる。

だからといって演説が上手というわけでもなく、ただ単に自分が語る内容に酔ってしまうタイプのようだ。

世界征服同盟なので、彼はリンガイア大陸への進出を目論んでいる。

人間を征服して搾取すれば、無職の若者も待遇のいい仕事が得られるという至極簡単な理屈だ。

確かに、良心の呵責に苛まれなければいい政策だ。

その前に、それが可能な軍備を整えなければいけないがな。
無職の若者は、みんな軍人にしないといけない。
魔族も人口減少で人手不足だからな。
それで、どの程度の大陸領土が確保できるのかは未知数だが。

組織名に相応しい主張だが、所詮は泡沫組織の戯言だ。
大体、わざわざ野党である国権党所属議員の私の下に来たのは、民権党が多数連合を組んでいるリベラル系の労働団体、市民団体、政治団体、人権団体にハブられたからであろう。

あの連中は、いまだに未開な封建主義で国を治めるヘルムート王国とアーカート神聖帝国を打倒しろと言っているから、考えが合わないのは明白だ。
えっ？　同じじゃないかって？
我ら魔族による侵略は悪でも、解放のための手助けなら正義だと言葉遊びができるのが、民権党と組んでいる連中なのだ。
国権党にも、彼らと協力している者がいるがね。

実は民権党にも、この世界征服同盟と同じ事を主張している団体も複数存在する。
こいつらがどういう理由で除外されたのかは不明だが、あの手の組織は内部対立が華みたいな部分もある。
大方、極右団体同士の抗争で敗れたのであろう。

それとこの世界征服同盟なのだが、富裕層による富の独占についても批判しており、完全な極右組織というわけでもないようだ。
むしろ大資本家を批判しているから、極左勢力か？
どちらにしても、あまりお付き合いしたくない類の連中だ。
それでも、大きな組織なら嫌々付き合わねばならない事もあるのが政治家だ。

だが、こんな泡沫組織に気を使う必要はない。
なぜなら、こいつらでは選挙で票を稼げないからな。

「遂に、魔王が古の独裁政治復活に向けて動き出しましたぞ！」

「どこにそんな記事が書いてあるのだ？」

「ここに書いてあるじゃないですか！　閣下！」

オットーは、エブリディジャーナルの一記事を指差した。
一応、政治面に記事が書かれている。
記述記者の名が署名してあるが私は知らない名だ。
ベテラン政治家ともなると大物記者の名前は把握しているし、記事に手心を加えてもらうためにつき合いもあるからな。新人なのであろう。
記事の内容は、失業したり、今の効率第一の生活に嫌気を差した若者達が、いくつかの廃村で農村の再生運動を行っているというものだ。
廃村のインフラを自分達で修理しながら、自給自足の生活を送っている。
余った作物はこの活動に賛同している人達が購入し、生活費に当てているようだ。
ここで結婚し子供が産まれる夫婦もいて、今の課題は子供達をどうやって学校に通わせるべきか……か。
悪い話ではないな。

いいじゃないか。
無職の若者達が、新しい生き方を模索する。
生活が軌道に乗れば生活保護を出さないで済むし、若い集団なので結婚して子供が産まれる者達もいる。

学校は、国権党が与党なら相談に乗ってもよかったのだがな。

「何か問題なのかな？」

「閣下！　この団体の代表はかつての魔王ですぞ！」

「魔王ねぇ……」

魔王とその一族が政権と国家財産を返納してから、一体何年経っていると思うのだ。

今の魔王に力などないではないか。

この団体の代表になったのも、お飾りとしてなら有効だと団体の幹部達が判断したからであろう。

今の魔王は幼い少女のようだな。

写真を見ると、将来美人になるであろうと予想できる。

いつの世も、組織のトップが美人だといい広告塔になるようだ。

もし彼らの活動が上手く行ったら、国権党から選挙に出馬してもらうのもいい。

少なくとも、目の前のこいつよりはマシな政治家になるはずだ。

「彼らは危険です！」

「別に、武装しているわけでもあるまい？」

危険って……。

間違いなく、お前よりはマシであろう。

「農機具は、武器になります！」

そりゃあなるが、そんな装備で警備隊に勝てるはずがない。
こいつは何を言っているのだ？

「反乱を起こす可能性もあります！　魔王とバウマイスター伯爵が接触しました！」

そうらしいな。
記事にそう書かれている。

「『今日の収穫を、ヘルムート王国からの客人であるバウマイスター伯爵と奥さん達が手伝い、収穫後に調理された芋料理をみんなで楽しんだ』収穫祭に遊びに行っただけでは？」

バウマイスター伯爵達は、ヘルムート王国に男女平等、民主主義の受け入れ、狩猟と捕鯨の禁止など。
お花畑のような無茶な要求を出してくる我が国の政府に対抗すべく、送り出されたものと思われる。
バウマイスター伯爵自身も、この国の政治状況などをよく理解しているようだ。
奥さんや子供達も引き連れ、どうにか融和ムードを作ろうと懸命に努力していた。

いい手だったとは思うが、バウマイスター伯爵は我が国の国民達の大半が外の世界にまったく興味を持っていない点を読み違えたようだな。
すぐに飽きられ、話題にも昇らなくなった。
おかしな興味を持っているのは、目の前のこいつと一部賛同者くらいであろう。

「彼らの意図は見えております！　魔王と結託して、この国で王政

復古のクーデターを起こそうとしているのです！」

「はあ？」

いや、バウマイスター伯爵には警備隊の護衛兼監視役がいるんだぞ。

そんな事を企んでも、一瞬で見破られてしまう。

警備隊の連中が何も言ってこないという事は、バウマイスター伯爵と魔王一行がただ純粋に交流をしているだけとしか見ていないのだ。

警備隊にもミスがないとは言えないが、ただ騒いでいるお前達よりは優秀だ。

少なくとも、胡散臭いお前らよりは信じられる。

「貴殿は、想像力が豊かなようだな」

「想像ではありません！　この国に危機が訪れているのです！」

泡沫組織の特徴だな。

荒唐無稽な事を言い始め、目立つ事で国民から支持を得ようとする。

というか、この連中に活動資金を与えているのは誰だ？

リンガイア大陸での商売を目論む資本家連中か？

駄犬に無駄な餌を与えるのはやめてほしいな。

「その可能性もゼロとは言わないが、まずは貿易や交流が始まってからの話だし、大分未来の事だと思うが……」

我が国の魔道具が大陸で販売されるようになれば、人間もそれを真似し始め、徐々に技術力が上がるかもしれず、人間が増えすぎて

無人の土地に移民が送られるようになると、領土の蚕食が問題になるかもしれない。

非常に難しい問題だが、双方が接触してしまった以上は落としどころを探らないといけない。

クソッ！

こんな時に民権党が政権を取ってしまうとは！

現実的な対応ができないではないか！

「閣下の状況認識は少し甘いですな」

失礼な奴だな。

私はお前とは違って、少なくとも政治家という仕事はしてきたぞ。

お前のような自称政治団体トップの無職と一緒にするな！

「念のために警告しておくが、もし貴殿らが実力行使に出ようとしても無駄だからな」

警備隊に阻止されて捕まるだけであろう。

今の政府はアレだが、基本的に警備隊の連中はまともだからな。

魔王やバウマイスター伯爵一行に実力行使を行おうとしても、防がれて逮捕されてしまうはずだ。

この目の前のバカは、外国から来ている公的な使者とその家族を排除しようとして、お咎めなしで済むと本気で思っているのであろうか？

「閣下……あなたには失望した。ここまで先を見通す目がないとは……」

先を見通す目？
それが、いまだにまともな仕事すらした事がないお前にあるというのか？

「彼らは危険なのです。私はその政治生命をかけて、彼らを排除しなければいけないのです！」

目の前のバカは、一人で自分の決意に酔っていた。
これは無駄な時間を使ってしまったようだ。
こいつを紹介したアホな同僚議員は切る事にしよう。

「あなたは、この選択を必ず後悔する事になる！」

アホは勝手に怒って出て行ってしまった。
無駄な時間を使ってしまった。
野党に転落しても、政治家は忙しいのに。

「そうだ。警備隊に連絡しておくか。バウマイスター伯爵へと攻撃を目論むアホがいると」

今まで魔族のみで生活していた社会に人間という異種族が現れ、我らの生活が大きく変化しようとしている。
その混乱の中では、あのような輩が出現してもおかしくないのか。

「世界征服同盟……構成員は十数名？　少ないなぁ……」

ちゃんと警備隊に通報はしたので、私はすぐに彼らの事を忘れてしまった。
人間への対応で色々と忙しかったからだ。
あのような泡沫組織など、いちいち覚えておく必要がなかったと

もいえる。

「交渉がまったく進まない状況はまずい。交易と双方の移動に関する条件だけでも先に条約を締結すればいいのに……クソッ！　民権党め！」

それよりも、今は両国の交渉についての話だ。

私は無駄になる事が確実でも、民権党に提案する政策の取り纏めに再び没頭するのであった。

「同志オットーよ。陳情の結果はどうであった？」

「同志ライムントよ。また駄目だった」

「クソッ！　この危機を理解できない無能め！　あれで国権党の重鎮とは……」

「同志ライムントよ。あのような男が政府中枢にいたから、国権党は政権与党の座から転落したのだ」

またも陳情に失敗した。

民権党の複数の政治家に続き、国権党の政治家相手でもこの様だ。

我ら世界征服同盟に所蔵する副党首ライムントに経緯を報告すると、彼も悔しそうな表情を浮かべた。

「魔族は、大資本の搾取と行きすぎた老人優遇政策のせいと少子高齢化で国が滅びつつある！　人間を未開だと侮っている連中も多いが、彼らは人口が多い。将来その数に押されて魔族が存亡の危機を迎えるとなぜ気がつかぬのだ！」

我らの考えに賛同し、先週は四十六名もの支持者が集まってくれたのに。

主催者発表は五百名にしておいたが、これは嘘ではない。

彼らは十名分以上のやる気をもって、この集会に参加してくれたのだから。

「我らは、資本家からによる不当な搾取で貧困に喘ぎ、職もなく、わずかな生活保護で生かされている！　魔族の若者は結婚せず、子供も産まず。このままでは魔族は滅ぶのに、政府は何も手を打たない。民権党の連中は、国権党の政治に失望している不満者達の票を集めて政権を取ったが、あのような連中が物の役に立つとも思えん」

力を貸そうと政策を提案したのに無視しおって！

この世界征服同盟の党首オットーを何だと思っているのだ！

「同志ライムントよ。他の党員達は何をしているのだ？」

「いつものように魔法の練習だ」

「それは素晴らしい」

進んだ魔道具の普及によって完全に廃れてしまった魔法だが、我々は魔法の復権も目指している。

魔族が人間よりも有利な点、それは誰もが魔法を使える事のはず

だ。

それが、魔道具に魔力を供給できればいいなどと。

魔族がその強みを捨ててどうする。

攻撃魔法が他人に当たったらどうする？

子供が町中で魔法をぶっ放したら危険だ？

わけのわからない理屈で、多くの場所での魔法の練習を禁止しやがって！

だが、我らは違う。

この私、オットー・ハインツの下に集まった九名の仲間達は、その時間の大半を魔法の練習に費やしている。

魔法は、魔族にとって必要不可欠なのだ。

古の時代に活躍した多くの偉大な魔法使い達。

彼らは戦乱の世に、その魔法で多くの戦果を得た。

魔族は本来の姿に立ち戻り、魔法を駆使して脅威である人間を征服する。

魔族一人あたり百名の人間を支配すれば、魔族は大きく発展できるはずだ。

働かなくても豊かな生活が送れ……いや、魔族がみな貴族となる。

身分差も収入差も少なくなり、結婚する者も子供を産む者も増えるであろう。

危険な人間を抑える効果もある。

誰もが幸せになれる素晴らしい政策なのに、民権党も国権党も我らを無視しやがる。

この天才である私を何だと思っているのだ！

「同志ライムントよ。あとでみんなに話がある」

「わかった」

数時間後、私は魔法の練習を終えた同志達を集めた。
話したい事があったからだ。

「同志オットー、大分魔法の威力が上がったぞ」

「それはよかったな。同志レオンよ」

我ら世界征服同盟は、十名の精鋭と数名の支援要員によって運営されている。
みんな金に汚い資本家連中や、その犬となっている政治家達のせいで不遇な生活を送っているが、魔法の練習を始めたら表情が明るくなった。
やはり、魔族は魔法を使ってこそ光り輝く。

この魔法を駆使し、必ずや人間の国を征服するのだ。
それこそが我ら魔族に相応しい生き方なのだから。

「同志オットーよ。陳情は与野党双方に無視されたと聞くが……」

「嘆かわしい事だよ。目の前にすべてを解決する妙案があるのに、人権だの、戦力だの、予算だのと、人間と魔族の融和などと戯言を言って我々の政策を批判する。魔族の衰退を止められなかった政府、自分達さえよければいいと思っている資本家の豚ども、その御用聞きをしているマスコミども！　あいつらの自分の事しか考えない姿勢にはヘドが出る！」

綺麗事を言いながら、魔族の若者を搾取し、その心を殺しているのはお前らではないか！

人間の人権？

そんなものは、我々が支配をすれば解決する。

我ら魔族がこの世界の支配者となり、人間を支配すれば終わる話なのだ。

「同志オットーよ。これからどうするのだ？」

「勿論事を起こすが、それには時間がかかる」

「やはりそうか……」

何しろ、民権党政権が成立したばかりだからな。

下手に焦ると、我々を警戒している警備隊などに捕まりかねん。

「だが、民権党の連中は無能だ！　必ず警備隊の足を引っ張るようになる！」

その時に、一気に事を起こすのだ。

「事を起こす？」

「我らは少数である。組織も決して大きくはない。だから、とにかく目立って多くの賛同を得るのだ！」

「何をするのだ？」

「決まっておろう。魔王とバウマイスター伯爵を暗殺する」

政府や国権党へのテロはまずい。
あいつらは自分が可愛いから、自分達を殺そうとした者達に容赦はしない。
ところが、魔王とバウマイスター伯爵は違う。

魔王は今は何の実権もないが、幼いながらも美しい少女だと聞く。
彼女が将来政界に進出したら？
自分の椅子が奪われるのではないかと、戦々恐々する政治家共も多いはずだ。
バウマイスター伯爵に至っては、他所の国の人間である。

この二人を殺せば、大きな知名度が得られる。
刑務所に四十年ほど入らねばならないが、この国では死刑制度が廃止されたからな。
必ず出所はできるのだ。

「バウマイスター伯爵を殺せば、その後ろにいるヘルムート王国が怒るはずだ。あとはちょっと刺激すれば戦争になる。戦争になれば、なし崩し的にリンガイア大陸に出兵が可能となろう。戦って勝利し、人間どもを支配すればいい」

「おおっ！　さすがは同志オットー」

「さすがだ！」

「我らが魔族の礎となるのですね」

我々の考えがなかなか認められないのは、お行儀よく自分達だけが可愛い政府や資本家、マスコミ連中のルールで動いているからだ。
そう、我々がそのルールを、枠組みをぶち壊し、新たな世界と秩

序の切っ掛けとなるのだ！

「今は耐える時である！　必ず民権党のアホどもは警備隊の牙を抜こうとする！　その時こそ、魔王とバウマイスター伯爵の最後なのだ」

別に恨みがあるわけでもないがな。

私達のために、二人には死んでいただかねばならない。

「というわけで、私も魔法の練習に励むかな」

「おおっ！　同志オットーが！」

「バウマイスター伯爵は人間の間では高名な魔法使いだと聞くが、同志オットーには勝てまい」

私の魔力は、魔法のエリート一族であった魔王にも勝る。

必ずや二人を血祭りにあげ、私は新たな高みへと昇るのだ。

そう決意した私は、同志達と共に魔法の鍛錬に勤しむのであった。

「……バウマイスター伯爵、魔族とゾヌターク共和国に関する報告書は読んだ。それにしても……」

自分なりに色々と努力してみたのだが、端的に言って俺達の魔族の国訪問はあまり意味があったとは思えない。

最初は奥さんや子供達を連れての登場だったので好意的な世論も多かったのだが、進まない両国の交渉に、魔族の他国に対する興味の薄さも手伝って、注目されなくなるまでさほど時間はかからなかった。

人の噂も七十五日というが、俺達の話題は一か月保たなかったな。

魔族という種族はあまりに長い期間自分達だけで生きてきたので、人間に興味がある者が少ないのだと思う。

後半は特に何もする事がなく、辛うじて血脈を保っている魔王様ご一行と遊んでいただけだ。

彼女達が農村復興運動を進めていたので、そこで農作業を手伝ったり、収穫物を一緒に調理して食べたり、魔王様がフリードリヒ達の面倒を見たり、俺が魔王様に算数を教えてみたり。

政府に相手にされなくなったので、彼女達とばかり一緒にいたというわけだ。

交渉が進まない以上、あまり長くゾヌターク共和国にいても意味はなく、俺達はヘルムート王国に戻ってきた。

西部へ出陣命令も既に終了となっている。

両国が交渉を続けており、ホールミア辺境伯もテラハレス諸島の基地規模や、敵の少なさから判断して金がかかる動員を解除し、即応可能な少数精鋭部隊のみをサイリウスに配備するのみとなっていた。

交渉が長期化するのが確実な以上、あまり大軍を動員していたらホールミア辺境伯も、他の貴族も破産してしまうからだ。

ただ、西部の準戦時体制は解かれていない。
ホールミア辺境伯としても、早く平和になる事を望んでいるはずだ。

俺もそれは望んでいるのだが、交渉のチグハグさは王宮でも問題になりつつあるようだ。
だが、魔族側の主張を受け入れると、ヘルムート王国は国が成り立たなくなる。
魔族側には妥協するという考えがなかった。
普通の政府なら進まない交渉に批判が集まるものだが、魔族は基本的に外国に興味がない。
大新聞社が政府に気を使って交渉に関する報道を控えるようになると、すぐに領空侵犯事件から始まる人間との接触に興味を失ってしまった。
たまに大本営記事で、ゾヌターク共和国側は強気で交渉しているという記事が書かれ、それならいいと国民は満足してしまうそうだ。

『強気の交渉といえば聞こえはいいっすけど、ただ言いたい事を言っているだけともいえるっすね』

ゾヌターク共和国を出る時、見送りにきたルミが事情を説明してくれた。
交渉団には、人権団体のトップや、動物保護団体のトップがいる。
彼らはヘルムート王国における男女平等と民主主義の導入、狩猟と捕鯨の禁止などを条件に入れて引かない。
こういう連中が原理主義者なのは、どこの世界でも同じだ。

「彼らはなぜこうなのだ?」

「生活が豊かだからです」

「それにしては、人口が減少傾向なのか……わからぬ」

俺もよくわからないけど、人間って貧しい方が子沢山だったりするからな。

まともに育つか不安なので沢山産むと聞いた事がある。

アフリカの国とかがそうだよな。

「このまま粘り強く交渉を進めると、ユーバシャール外務卿は言っておった」

粘り強くねぇ……。

あの人は、内弁慶という欠点があるからなぁ……。

向こうに押されて、不平等条約でも結ばなければいいけど。

「外交に関わる者達をすべて手伝わせておる。そういう事はないはずだ」

内乱があった帝国との交渉に続き、久々の大仕事というわけで、他の外務卿に就ける貴族達も積極的に手伝いに行っているそうで、つまりユーバシャール外務卿がポカをしても、他の者達が止めるシステムが出来上がったようだ。

その代わりに『船頭多くして船山を行く』の諺どおり、何も決まらない可能性もあるけど。

「交渉には時間がかかると覚悟しておる」

焦って不平等条約を結ぶよりは、なかなか決まらないで停滞していた方がマシという考えなのだろうな。

魔族側は国民に批判されるかもしれないけど、それをヘルムート

王国側が気遣ってやる必要などないわけだ。

向こうの焦りは、こちらの得にもなる。

どうせ、狩猟、捕鯨の禁止、女性の社会進出、民主主義の導入など王国が受け入れるはずがない。

地球でも纏まらない外交交渉など珍しくもないので、纏まらない以上は放置しておくのも手ではあるのだ。

「もう一つ、リンガイアとその乗組員達の返還交渉についてだ」

「それは、ユーバシャール外務卿が交渉しているのでは？」

「これが上手くいっておらぬのだ」

「どうしてですか？」

この件は、俺もほぼすべてのリンガイア乗組員達から事情を聞いているが、副長の一人であるプラッテ伯爵の跡取りが、魔族の船に魔法をぶっ放させたから事件が発生したという結論で一致している。

ゾヌターク共和国警備隊による事情聴取でも同じ結論に至っており、その副長による暴走であるが、上官である艦長や空軍にも管理責任があるので謝罪する。

プラッテ伯爵の跡取りは命令違反なので、空軍で厳重に処罰する。

リンガイアと乗組員達の拘留にかかった費用を王国が負担する。

このくらいの条件で手打ちにした方がいいと俺は思い、陛下もそのくらいでケリをつけた方がいいと思っていた。

ところが、ここでその条件は断固として呑めないと言い始めた人物がいる。

勿論、プラッテ伯爵だ。

『魔族という存在が王国の取り巻く状況を大きく一変させるかどうかの瀬戸際に、王国側が謝って魔族の風下に立つ必要があるのか？それは危険だ！』

一見いい事を言っているように見える……とは俺は思わない。

ようするに、プラッテ伯爵は跡取り息子が厳罰を受けてキャリアに傷がつくのを怖れているのだ。

プラッテ伯爵家は空軍司令官を世襲できる家柄であるが、さすがに厳罰を受けた人物を順当に出世させたり、司令官の職を回すわけにいかない。

彼を次のプラッテ伯爵家当主から外さなければいけない空気になるわけだが、どういうわけか彼はあのバカ息子を溺愛している。

だから国家のプライドなどという事を言い出して、すぐに実現可能なリンガイア解放を邪魔していた。

俺からするとバカバカしい言い分なのだが、この意見、軍部と外務閥では一定の支持があるので解放交渉はまったく進んでいなかった。

「つまりプラッテ伯爵は、ヘルムート王国が謝るのはよくないと？」

「そう言っておるな」

プラッテ伯爵の言い分は、国家間の関係などを考慮すると必ずしも間違っているとは言えないんだよな。

だから王宮内にも支持者がいて、それがより問題を複雑化させている。

「どこか落としどころはないのですか？　乗組員達の拘留が長期化してしまいますよ」

相手が人権を考慮する魔族の国なので、拘留された乗組員達が虐待を受けているような事はない。

それでも、長期の拘留となればストレスも溜まるはずだ。

「ご子息の拘留について、プラッテ伯爵は何と言っているのです？」

「向こうの状況を知るために、先に奴だけ解放させようと抜かしておる」

何だよ。

結局自分の息子が可愛いだけじゃないか。

やっぱり、俺とプラッテ伯爵は致命的に合わないのだな。

その話を聞いたら、余計あいつが大嫌いになった。

「こういう場合って、彼が最後に解放されるのがいいと思いますけど」

建前としては、高貴な貴族が平民達の解放を優先し、自分は最後まで残る。

高貴な者としての責務ノブレス・オブリージュ　というやつだ。

実際に貴族が実践するかは別として、あのバカ息子は俺にも早く自分だけ解放しろと迫ってきたから、確実に実践しない方の人間なのであろう。

「そうじゃな。プラッテ伯爵の息子は最後に解放された方がいいであろう。例え、本人が嫌がろうとな」

陛下も、プラッテ伯爵のバカ息子が嫌いなようだ。
好きな奴は、息子ラブの父親くらいであろうが。

「ユーバシャール外務卿はどうお考えなのです？」

「あの男、外部からの圧力に弱い部分があるからの。プラッテ伯爵とその賛同者に突かれてオロオロしておる。ただ、プラッテ伯爵の子息だけを先に解放するという交渉は、逆に魔族側に舐められてしまう危険性があると、他の外務閥の貴族達に言われて受け入れていないそうだ」

「それもありますが、貴族の息子だけ先に解放すると、ヘルムート王国は傲慢な貴族が政治を壟断する国だと、魔族から思われてしまう可能性があります」

「民主主義とやらか？　今、概要を学者達に精査させておるが、よくわからない統治システムじゃの」

これまで数千年も王政に馴染んできた人達に、民主主義を説明するのは難しい。
俺も理解できる範囲で陛下からの問いに答えていたが、上手く説明できたかどうか怪しいところだ。
俺の前世について言うわけにいかないので、これはあくまでも私見という事で話はしていたが。

「交易などの交渉が長引こうと問題はないが、やはりリンガイアの乗組員達だな。余は決めた。バウマイスター伯爵を正式に特命大使に任命する。リンガイアの乗組員達を解放してきてくれ」

「私がですか？　ですが……」

あきらかにユーバシャール外務卿がいい顔をしないと思う。
自分の職権を犯されるからだ。

「バウマイスター伯爵に任せるのはリンガイアとその乗組員達の解放だけ。そもそも、ユーバシャール外務卿にはその交渉を第一にと任じておる。念のために二ルートで交渉を行わせるだけだ」

「わかりました。お引き受けします」

ここで断るわけにもいかず、俺はリンガイアの乗組員達の解放交渉に従事する事になるのであった。

「それで私が同行するのですか？」

幸いにして『瞬間移動』でテラハレス諸島と魔族の国には移動可能になったので、秘密交渉の側面もある以上、それほど同行者を増やせない。

そこで、俺は同行者にリサを指名した。

凄腕の魔法使いなので護衛役も十分に務まるし、何よりリンガイアに乗船していた彼女の弟子が魔族の船を魔法で撃った実行犯なのだ。

その弟子と、プラッテ伯爵のバカ息子をどうするかが交渉の肝なので、実行犯と顔見知りのリサが一番の適任であった。

「頼むよ」

「それは喜んで参加しますが、アナキンですか……彼の拘留を解くのは難しいのでは？」

リサは自分の弟子なので、彼の事を気にかけていた。

確かに魔法を放った実行犯なのだが、彼はプラッテ伯爵のバカ息子の命令を聞いただけなので犠牲者でもあるのだ。

警備隊の連中に言わせると、アナキンの魔法で船に損傷があったわけでもなく、特に彼に対して悪感情は抱いていないようであった。

ならば、リンガイアとその乗組員達の解放交渉は勝算があるかもしれない。

「ヴェル、また魔族の国に行くの？」

「陛下の命令で交渉しないといけないんだ」

「艦長と副長さんには骨竜の時にお世話になったから、無事に解放されるといいわね」

「部下の暴走の被害者だものな」

管理責任がないとは言わないが、プラッテ伯爵のバカ息子はこちらの予想を上回るバカだからな。

不可抗力でもあったと、イーナも俺も思っていた。

「ささっと交渉してくるよ」

「そんなに簡単に交渉できるものなの？」

「そう言わないと長引きそうな気がするから」

早速俺とリサは、『瞬間移動』でテラハレス諸島へと飛んだ。

「おや、どうかなされましたか？」

「陛下より、正式に特命大使を任じられまして」

勝手に動くとユーバシャール外務卿が臍を曲げそうなので、先に挨拶をしておく。

陛下からも連絡が行っていると思うが、これも円滑なコミュニケーションのためだ。

「話は聞いているが、大丈夫なのか？」

「正直なところ、わかりません」

別に嘘を言っているわけでもなく、本当にわからないのだ。

これぱっかりは、実際に交渉してみないとわからない。

「我々は通商関係の交渉だけで苦戦している状態だ。ご自由にやられるがいい」

ユーバシャール外務卿は、俺でも解放交渉を成功させるのは難しいと思っているようだ。

というか、世間一般の人達の大半はそう思っているであろう。

「旦那様？」

「じゃあ、行こうか」

とはいっても、目的は魔族の国ではない。
いきなり現地に飛んでも、知己がいないので交渉のテーブルにすらつけないからだ。

「誰と交渉するのですか？」

「あの連中じゃない事は確かだ」

ユーバシャール外務卿達がいる交渉のテーブルには、反対側に魔族の代表達も座っている。
だが、俺の目から見ても彼らの大半は優秀じゃない。
運動家あがりの政治家が多いから、声は大きいが実務に不向きなのだ。

それよりも、彼らに資料を渡したり、後ろからささやいてフォローしている官僚達。
狙いはむしろ彼らの方だ。

「失礼」

政治家から離れた隙を狙って、俺は若い官僚らしき魔族に声をかける。

「貴殿は外交に従事する官僚という認識でよろしいのでしょうか？」

「はい。急遽外務省が復活したので、他の省庁からの出向組ですけど」

他国の不在により、魔族の国では数千年も外交を担当するお役所

が閉鎖されていた。
この度急遽復活し、彼らは新しく組織を作りながら、政治家の補佐も行っているのだ。

「次官クラスの方はいらっしゃられますか？」

「いますが、それが？」

「あっ、そうそう」

俺は声を小さくしてから、その若い官僚に耳打ちする。

「私、急遽リンガイアの解放交渉に関する特命大使に任じられまして。急ぎ内密に取り次いでいただきたいのですが」

俺が陛下から貰った委任状を見せると、彼は顔色を変えた。

「解放交渉ですか？」

「いや、なに、わざわざ政治家の方々のお手を煩わせる必要はありません。建前としてはよくないのでしょうが、ここは本音でいきましょう。意味はご理解していただけますよね？」

「……ガトー事務次官は、今休憩中ですが、ご案内いたします」

俺達は、若い官僚の案内で別の部屋に案内される。
そこは、警備隊が建設したプレハブのような建物の一室で、白髪交じりの魔族が書類を見て溜息をついていた。

「どうした？　オウテン」

「バウマイスター伯爵殿をお連れしました」

「バウマイスター伯爵殿？　ああ、我らの国に親善大使として来られた方だな。本国から情報は受け取っている」

「バウマイスター伯爵です。今日はリンガイア解放についての特命大使として来ました」

「解放交渉ですか……」

「ちなみに、政治家連中には何も言っておりません。意味はわかりますよね？」

「オウテン、暫く誰も入れるな！」

「はい」

オウテンという魔族の若い官僚は部屋の入り口で監視にあたり、ガトー事務次官と俺との秘密交渉が始まった。

やはり、魔族の国は政治家よりも官僚の方が実務に長けているようだ。

その辺は日本と同じで、俺は政権交代もあって不安定な政治家よりも、今は官僚と交渉した方が楽だと想像し、それが見事にハマったわけだ。

「リンガイアの解放交渉ですか……」

「はい、拘留費用もバカにならないでしょう？　正直なところ」

「警備隊の制服連中は不満そうですね」

拘留で臨時の出費が増え、そうでなくても政治家が防衛予算は削減するのにリンガイア大陸への侵攻を口にしたりしている。

これで不満が出ない方がおかしい。

ならもっと予算を出せという話になるのだが、民権党の政治家は増え続ける国家の借金を削減するといって当選した。

世論に敏感な彼らは、口が裂けても防衛隊予算増額を口にできないのだ。

「ですから、当事者以外は急ぎ船ごと解放してしまいましょう。実行犯の魔法使いと、指示を出した副長だけは例外ですけど。彼らの処遇はあとで細かく相談するとしてですね……」

犯罪者二人だけの拘留なら、今よりも圧倒的に費用はかからないのだから。

「二人ですか？　いかにその副長の独断とはいえ、艦長ともう一人の副長の責任もあるのでは？　業務上過失傷害の罪状があります。警備隊にも微傷を負った者がいると聞いております」

警備隊が反撃して船を制圧する時に、かすり傷程度だが負った隊員が存在した。

その罪状があると、ガトー事務次官は鋭く指摘する。

さすがは、細かい事にもよく気がつく官僚という生き物だ。

こちらの粗を突き、自分の得点を稼ぐ事も忘れない。

「ですが、世論はプラッテ伯爵のバカ息子が主犯の方が嬉しいのでは？」

民衆を抑圧する貴族のバカ息子が平民階層出身の艦長に逆らい、同じ平民出身で逆らえない立場にいた魔法使いに無茶な攻撃を命じた。

彼が主犯の方が、魔族達は納得するのだ。

「確かに否定はできませんね」

「王国空軍では、プラッテ伯爵のバカ息子を命令違反で厳罰に処す予定だそうです。彼が主犯で問題ないと思いますが。どうせ彼は最後に帰国しないといけません。ヘルムート王国でも駄目な貴族は民衆の間で噂になりますから」

「なるほど、むしろ帰国が遅れた方がいいと」

「はい」

プラッテ伯爵の言うとおりに、バカ息子だけが先に帰還したら非難轟々のはず。

だから、彼が長期間拘束されても問題ないわけだ。

自分だけが最後に残り、平民達を先に帰した。

その評判が彼を救うのですよ。

本人は自分を一番早く収容所から出せと抜かしたクズだが、奴の意志など関係ない。

せいぜい、魔族達へのスケープゴートにしてやる。

「この方が、拘束する人員が一名で済みますけど」

「実行犯の魔法使いは？」

「彼は即決裁判でよくないですか？　罪状は器物破損程度でしょう？　しかも主犯じゃない」

さらに、魔法を放った警備隊の艦艇には何のダメージも与えていない。

上手く交渉して微罪にし、国外追放扱いでリンガイアと共に帰国させてしまえばいい。

「バウマイスター伯爵殿は、我が国の法律をよくご存じですね」

「そこまで詳しくないですよ。この前の滞在時に少し本を読んだだけです」

本当は、魔族の国の法律が日本の法律とよく似ているからだけど。

いくら時間があるからといって、魔族の国の法律書なんて読まないさ。

「即決裁判で、被告人側は争わない。執行猶予付きの禁固刑くらいでしょう？　平均的な相場は」

「和解してお金を払って終わるケースの方が多いですね」

「では、こうしましょうか？　和解して、魔法使いが相場よりも多目の金額を支払う。警備隊艦艇に損害がないとはいえ、リンガイアの整備や検査で人手を使ったでしょうし、人件費もバカにならないでしょうから」

リンガイアの乗組員達の拘留費用には及ばないが、ある程度は魔法使いが和解金名目で支払う。

和解なので向こうが罪を認めて謝り、収監されないように金を出

すという構図だ。

「彼はお金を持っているのですか？」

「ええっと……リサ？」

アナキンはリサの弟子なので、彼女に彼の懐具合を聞いてみる。

「初級なので、そこまでお金は持っていないかと」

初級魔法使いが放つ『ファイヤーボール』では、軍艦の装甲を貫くなんて不可能だ。

この場合、彼が初級で逆に助かっているのだが。

「足りない分は俺が出す。勿論向こうが出した事にするけど。アナキンは俺に借金するわけだ」

「バウマイスター伯爵殿が保証するのでしたら、こちらも警備隊に連絡を取って和解交渉を始めましょう。弁護士も紹介します……ちゃんとプロの弁護士をね……」

官僚であるガトー事務次官は、弁護士あがりも多い民権党の政治家をあまり信用していないようだ。

まあ、弁護士業で忙しかったら、政治家になろうとは思わないよな。

「バウマイスター伯爵殿、少々お待ちいただけますか？」

ガトー事務次官は、一時間ほど各所に携帯魔導通信機で連絡を入れて色々と交渉していた。

その仕事ぶりは優秀そうに見え、なるほど魔族の国は官僚が動かしているのだなと納得してしまう。

「バウマイスター伯爵殿、オウテンと共にゾヌターク共和国に向かっていただきたい」

「わかりました。『瞬間移動』で急ぎます」

「バウマイスター伯爵殿は、失われた『瞬間移動』が使えるのですか？」

「はい」

アーネストも言っていたが、魔族には俺よりも魔力が多い人が複数存在するのに、なぜか『瞬間移動』が使える人がいなかった。

昔は多く存在したが、今では使える者がいないそうだ。

色々と研究をしたが、なぜ魔族が『瞬間移動』を失ってしまったのかはわからないそうだ。

「それでしたら、早くリンガイアの解放がなりそうですね」

ガトー事務次官は、とても嬉しそうであった。

「正直なお話、あの巨大船がドッグを塞ぐと、他の艦艇の整備に支障が出るそうです」

魔族基準では古臭いリンガイアなど誰も使わないし、とっととドッグから出してほしいのであろう。

野ざらしにして何かあると責任問題になるらしく、警備隊は律儀にリンガイアをドッグに入れて保管していたのだ。

「では、急ぎます。リサ」

「はい」

オウテンという若い官僚と共に警備隊の基地へと飛ぶと、そこには既に警備隊の制服組の幹部と弁護士と思われる若い男性魔族が待ち構えていた。

「お話は聞いております。急ぎ対応しますが、その前にアナキン殿と面会ですね」

「ええ、頼みます」

急ぎ警備隊が管理する収容所へと向かい、俺達はアナキンと接見する。

「姉御、差し入れっすか？」

「っ！　んなわけあるか！」

大人しくなったリサであったが、弟子の能天気さには本気でキレてしまったらしい。

昔のような口調でアナキンを怒鳴りつけた。

「お前、これから旦那様の言う事をよく聞いて、言われたとおりに動きな！　失敗したら、永遠に牢屋だからね！」

「わっかりましたぁーーー！」

昔、リサから魔法の指導を受けた時の事を思い出したのか？
アナキンは、リサの発言に対ブンブンと首を縦に振った。

「お前の罪は和解でケリをつけるから、素直に罪を認めて謝るんだよ。あとは、和解金の支払いだね」

「姉御、俺そんなに金が……」

「うちの旦那様が貸してくれるから」

「すいません」

「まあ、ちゃんとうちで働いて返せよ」

「えっ？　俺はバウマイスター伯爵家に仕官ですか？」

「そう。それしかないのはわかるか？」

アナキンはわからないといった感じの表情を浮かべたので、俺は彼に自分が置かれた状況を説明してやった。

「プラッテ伯爵のバカ息子は、お前に罪を押しつけてでも、自分だけ早く釈放されたいと願う下種だ。それなのに、お前が先に釈放されてみろ。バカ息子どころか、父親のプラッテ伯爵から恨まれる立場になるぞ」

下手をすると、激怒したプラッテ伯爵に殺されかねない。
初級の魔法使いくらいだと、法衣貴族とはいえ単独で伯爵家に対抗するのは難しいであろう。

「冒険者として仕事をするにしても、色々とやり難いかもな」

「俺、副長の命令で魔法を放っただけなのに……」

「向こうは勝手に、お前が一番悪いストーリを脳内で作りあげているから、言い訳しても無駄」

「そんなぁ……俺、結婚したいし、魔法で金稼いで家とか欲しかったのに……」

アナキンの奴、見かけによらず意外と堅実な夢を持っているんだな。

「姉御みたいに独身期間が長いと大変じゃないですか」

同時に空気が読めない部分もあり、余計な事を口走ってリサの怒りを買っていた。

彼女のコメカミがひくついている。

「リサ、どうどう。俺はリサと結婚してよかったと思っているから」

「ありがとうございます」

俺はどうにかリサを宥める事に成功した。

「お前、永遠に牢屋に入っているか？」

「すいません！」

リサを怒らせたアナキンを脅すと、彼はすぐに謝った。

「色々と大人の事情で和解金は多めになる。足りない分は俺が貸すから、バウマイスター伯爵家で働いて返せ」

「わかりました」

「では、打ち合わせを……」

そこからは話が早かった。

オウテンと弁護士が警備隊幹部と相談をし、他にも必要な各省庁や裁判所などに連絡を取り、わずか一日でアナキンの裁判がスタートする。

ところがすぐに警備隊側が和解を提案、アナキンと弁護士はそれを受け入れ、和解金一億エーンを支払う事で同意した。

和解金が高いが、これは魔族側の世論の反発を抑えるためだから仕方がない。

どうせ判決が出ても執行猶予がついて当たり前の判例だ。

ならば、国庫に金が入った方がマシだと思わせるための和解金だったのだ。

「一億エーン。どのくらいなんですか？」

「百万セントくらい」

一エーンを一円と見た相場だ。

「俺、そんな大金を返せないですよ！　バウマイスター伯爵様みたいに上級魔法使いじゃないんですから」

「利子はつけず、契約金代わりに十分の一にしてやる。これからは、真面目にうちで働けよ」

「それなら大丈夫です」

アナキンは、安堵の表情を浮かべた。

初級ながら魔法使いを一人確保できたし、どうせ必要経費は陛下に請求できる事になっている。

アナキンに恩を売りつつ儲けまで出して、俺もいい貴族様になったものだ。

「バウマイスター伯爵殿、和解案が成立しました。ところで、エーン貨幣を持っているのですか？」

和解してしまったので、これでもう裁判はなくなった。

アナキンの弁護を担当した弁護士は、自分への報酬も含めて、金が払えるのかと聞いてくる。

「この前のが少し。あとは金を売って収めるよ」

「金をお持ちですか」

弁護士の表情があっという間に緩んだ。

俺は再び町のリサイクルショップで金を売り、無事に和解金を支払う事ができた。

和解金を収めるのに、町のリサイクルショップで金を売る貴族。

どんな創作物にも存在しないだろうな。

「相場が上がっているのか……」

現在の金相場は、一グラムで八千二百エーン前後。
人間と接触してから、倍以上に上がったそうだ。
金に需要があると思っている魔族が多いのか？
魔族は人間に興味がないと聞いたが、水面下では将来を見越して動いている聡い人達もいるのだな。

「バウマイスター伯爵殿、また何かありましたら」

少し多目に依頼金を渡したら、弁護士はえらくご機嫌だった。
彼が言うには、最近魔族の国では弁護士が余っており、だから政治家に転身する者も多いのだそうだ。

「警備隊もリンガイアの乗組員達の釈放を決定し、約一名を除き乗組員全員は警備隊監視の元でリンガイアの再稼働作業を行っております」

俺の予想以上にスピード解決してしまった。
約一名がいまだ拘束されているし、彼は警備隊の艦艇に攻撃をした首謀者として裁判にもかけられる。
弁護士も貴族のボンボンの弁護ではやる気が出ないだろうし、アナキンが和解交渉の過程で罪をすべて認めてしまった。
これが証拠として採用されるので、プラッテ伯爵のバカ息子は確実に実刑を食らう。

寿命が長い魔族なので何年刑務所暮らしか知らないが、俺は陛下にこう報告する予定だ。

『プラッテ伯爵のご子息は、他の乗組員全員を釈放させるため、あえて捕らわれの身となったのです』

勿論大嘘だが、これでプラッテ伯爵はリンガイアの乗組員達に手が出せなくなる。

せっかく自分の息子がその身と引き換えに助けた彼らに対しその父親が手を出せば、プラッテ伯爵家の評判が地に落ちてしまうからだ。

「旦那様、そんな方法で大丈夫なのでしょうか？」

「うん。それも大丈夫」

この策を行う前に、俺はちゃんとローデリヒに相談している。

俺はやめるように言われるかもと予想していたが、意外にも彼はその策を了承している。

『人間も貴族も同じです。みんなが仲良くできるはずがありません。お館様とプラッテ伯爵は相性が悪いのでしょう。それは構いません。変に関係が曖昧な貴族よりも、敵だと明確にわかっている貴族の方がいい』

『敵だとわかっていれば、対処がわかりやすいからな』

『ええ、向こうもどうせ敵同士だからと距離を置きますしね。腹の中で何を考えているのかわからない貴族の方が不気味です』

以上のような会話があり、俺は無事にプラッテ伯爵のバカ息子のみを犠牲にして目的を達成したわけだ。

「もう一度、艦長と副長に挨拶しておきたかったな」

「旦那様のお知り合いですからね」

「実は、骨竜を退治した時と、この前の面会でまだ二回しか会った事がないけど」

それにしても、骨竜の時とまったく同じコンビで今回の事件に巻き込まれるとは、彼らも船乗りとしてはアクシデントというかイベントに巻き込まれやすい体質のようだ。

あれ？

もしかすると、俺と知り合ってしまったからとか？

「バウマイスター伯爵殿は秘密特使なので、報道の目がありそうなリンガイアの傍は遠慮していただきたいのです。船の出航時には時間を作りますので」

「わかっていますよ。オウテン殿」

最終チェックが終われればリンガイアはヘルムート王国に戻るので、あとで挨拶をしておけばいいか。

「あと、プラッテ伯爵のご子息殿に会われないのですか？」

「何か言われそうだからパス。あっそうだ。帰りに」

どうせ、俺はなぜ出られないのだと文句を言われそうだし、あいつを生贄に交渉に成功したのだから嫌われて当然。

ローデリヒの言うとおりに距離を置くのがベターであった。

「出発までもう二～三日ある。俺達はそれを見届けないといけないからなぁ。どこかでその間、時間を潰せる場所はないかな？」

どうせ報道されると思うが、俺達があまり表に出ると騒ぎになってしまう。
何しろ俺は、秘密特使扱いなのだから。

「ここに留まっていただければ無駄な費用はかかりませんけど、どこかに内密でお出かけになられますと、ご自分での御負担となってしまいます」

警備隊の官舎に留まっていれば、滞在に必要な経費は警備隊や外務省で負担する。
他に出かけるのなら、それは俺達が自分で負担してほしい。
少しケチな気もするが、お上ってのは予算が有限なのでそんなものだ。

「勿論自分で出すさ。高くても、機密を保てる場所がいいな」

マスコミに押しかけられ、交渉の事を根掘り葉掘り聞かれるのは疲れてしまうし、余計な横槍でせっかく決まった交渉が駄目になるのも嫌だからだ。

「それでしたら、私が手配しておきます。そういう方々が利用される口の堅い宿がありますので。その分、お高いですけど」

日本にも芸能人や政治家がお忍びで利用する温泉宿とかがあり、魔族の国にあってもおかしくないというわけか。

「旦那様、私は元冒険者なのでこの官舎でも十分ですけど」

リサは、無理にそんなところでお金を使わなくてもと俺に気を使った。

あの派手なメイクと衣装がないと、彼女はえらく常識人なのだ。

「俺が退屈だし、たまには夫婦二人で水入らずってのもいいじゃない」

「二人きり……はい、たまにはいいですね」

リサもとても嬉しそうだし、俺もあと最低二日官舎に籠りっきりってのも嫌だ。

オウテンがすぐに手配してくれたので、俺達は彼が運転する魔導四輪でとある温泉地へと向かった。

「旦那様、魔族の技術は凄いですね」

「これは、例の発掘品よりも上だな」

魔族の国では、当たり前のように車が普及している。

魔力で動いているのは魔の森の発掘品と同じだが、それと同等かそれ以上に技術が進んでいるように見える。

ここまで技術格差があると、交易交渉一つとっても大変なはずだ。

ユーバシャール外務卿達は内外からの圧力に曝され、交渉がなかなか進まない側面もあるのであろう。

「魔道具ギルドの反発も大きいと思います」

「だよねぇ……」

優秀な魔法使いであるリサは、ユーバシャール外務卿達に圧力をかけている存在として魔道具ギルドの存在をあげた。

彼らは俺達のお得意さんである。

古代魔法文明時代の遺物を研究用に高く買い取ってくれるからだ。

汎用魔道具の製造を独占しているので資金はあり、技術発展のためにそれら遺物の収集と解析に力を入れていた。

だがここ数百年、ほとんど成果は上がっていない。

それでも、魔道具の製造を独占しているから、魔道具に好きな値段をつけられる。

魔道具の値段が一向に下がらない原因の一つであった。

もしここで交易交渉が纏まり、ゾヌターク共和国から最新の魔道具が輸入されるようになった場合。

断言しよう。

魔道具ギルドの没落が始まると。

「オウテン殿、ゾヌターク共和国では車はどのくらいで買えるのですか？」

「ピンキリですが、安い中古車なら五十万エーンしませんね。車検と税金と魔力補充代で経費はかかりますけど」

ちなみに、リンガイア大陸では車の製造に成功していない。

帝国やミズホ公爵領でも研究段階であった。

発掘品は大量にあり、研究は盛んだが、なかなか独自製造に成功しないのだ。

おかげで、バウマイスター伯爵領でもほとんど車を走らせていない。

特にローデリヒが大反対で、その理由は盗難を防げないからであった。

「魔法の袋で簡単に盗めますからね。あちこちに置いて使ったら、我が領にどれほどの窃盗団が入り込むか……」

そんな理由があり、厳重な警備が保証できる場所に少数を配置するしかなかった。

あとは、例の大トンネルだ。

さすがに馬車だけでは輸送量に限界があり、トラックなどをトンネルの中だけ往復させている。

これら車両の管理のため、トーマスにはさらに部下が増えて忙しい状態になった。

それにしても、治安が悪いから車が使えないとは。

だが、ゾヌターク王国から安い中古車が大量に輸入されるようになったら、リンガイア大陸の状況は一変するかもしれない。

移動と輸送手段が革命的な進歩を遂げるのだから。

そして、魔道具ギルドの力は地に落ちるであろう。

今の時点で車が作れないのだから。

「（魔道具の交易が認められたとしても、多額の関税をかけて……リンガイア大陸に車なんてないから、いくら関税をかけるんだ？）」

「（魔道具ギルドは、輸入阻止で動いています）」

「（あれ？　リサは魔道具ギルドに知己がいるのか？）」

「（ええ、数少ない友人ですけど……）」

確かに、昔のリサだと友人はできにくそうだ。

「（魔道具ギルドは、圧倒的な技術力を持つ魔族に警戒しています）」

今までの地位と権益をすべて失うかもしれないのだ。

警戒して当然であろう。

「（それを考えるのは俺達じゃないから、今は休暇を楽しもう）」

「（はい、楽しみですね）」

「バウマイスター伯爵殿、リサさん、到着しました」

オウテンが運転する車は、山間をぬうようにして建つ一件のホテルに到着した。

外見だけで豪華だとわかるホテルと、そこから湧き出す温泉で疲れを癒せるそうだ。

他にも、色々な娯楽が楽しめるようになっている。

「高級リゾートという感じだな」

「はい。私の給料では手が届きませんね。値段が高い代わりに秘密が守られるというわけです」

芸能人が世間に交際を秘密にしている恋人を連れたり、政治家や企業の社長が愛人を連れたりするのに使われるケースが多いそうだ。

「秘密を守るために、従業員の待遇がいいのですよ。その代わり、一泊お一人様二十万エーンからですけど」

「ふーーーん。そうなのか」

前世の感覚でいうと、一泊二十万円の宿なんて絶対に泊まらない。
だが、今の俺はバウマイスター伯爵だ。
オウテンの前で驚くわけにもいかず、務めて冷静な風を装った。

「到着しました」

「いらっしゃしませ」

車を降りてホテルの受付に行くと、従業員らしき中年男性の魔族が応対する。
耳が短い俺とリサを見てその正体がわからないわけがないが、彼は無駄な口を叩かずに丁寧な接客を続けた。
このホテルの教育が優れている証拠だ。
どんな客が来ても騒がず、その事実を誰にも公表しない。
だからこそ、金持ちＶＩＰ御用達のホテルなのであろう。

「ガトー事務次官様と、外務省、警備隊から予約が入っております。バウマイスター伯爵様ご夫妻ですね。十九階のスイートルームがお部屋になります。すぐに係りの者がご案内いたしますので」

「（この野郎……）」

どうやら、俺はガトー事務次官ら官僚達に試されているようだ。
わざと高額の宿に案内され、そこで俺がどのように振る舞うのか。
お金がなくなってガトー事務次官に貸してくれと言わせたら、それで彼らは勝ちだと思っているのだ。

「スイートか。そこは一泊いくらなんだ？」

「三百万エーンですね」

とんでもなく高いが、ホテルの従業員は顔色一つ変えないで答えた。

慣れてしまって特に何も感じていないのであろう。

「バウマイスター伯爵殿、お高いでしょうか？」

オウテンが、もう少し安い値段の部屋にしましょうかと聞いてきた。

彼はガトー事務次官の命令で動いているから、部屋のランクを下げたら報告がいくようになっているはずだ。

貴族に限らず、ＶＩＰがこういう時に大金を出せないのでは大した奴でもない。

俺だけなら別にそう思われてもいいのだが、バウマイスター伯爵家がそう思われるのは困ってしまう。

必要経費だと思って割り切るしかないな。

これから人間と魔族がどうなるのなんて誰にもわからない。

ここで舐められるのは得策じゃないからだ。

「いや、それで一番高い部屋は？」

「最上階に二部屋だけあるロイヤルスイートですね。こちらは、一泊一千万エーンとなっております」

「じゃあ、それで」

「それでは、ロイヤルスイートに変更させていただきます」

俺は高い部屋への変更を要求し、それは無事に受け入れられる。
それにしても、教育や慣れとは凄い。
従業員はまったく動揺せず、冷静に部屋の変更手続きをおこなうのだから。

「ロイヤルスイートには、警備の方や御付きの人が泊まれるお部屋も付属しております」

「よかったな。オウテン殿」

「そうですね……」

どうせ監視役で傍にいるはずだから、一緒に高級ホテルを楽しめばいい。
そして、バウマイスター伯爵の無駄遣いをちゃんと報告するがいいさ。

「こちらがロイヤルスイートでございます」

係員の若い女性魔族に部屋に案内され、早速彼女はお茶とお菓子の準備を始めた。
飲み物は自由に選べ、俺は久しぶりにコーヒーを、リサは紅茶を選んでいる。
お菓子は、温泉宿のようにお土産屋に売っている銘菓ではない。
ホテルで専門のパティシエが作る、綺麗な細工が施されたミニケーキなどであった。
他にも、頼めば好きなお菓子を作ってくれるそうだ。

「（旦那様、こういう場合にはチップが必要なのでは？）」

「（そういえばあったね。そんな制度）」

「（制度じゃなくて慣習ですけど）」

お茶を入れてくれた係員は、そのままこの部屋の担当になるそうだ。

部屋に数ヵ所呼び鈴があり、それを鳴らすと部屋の外にある待機室からかけつけて用事をこなしてくれる。

こういう超ＶＩＰなホテルに泊まった経験がないので、彼女にどのくらいのチップを渡せばいいのかわからなかったのだ。

「あなたは、この部屋の担当ですよね？」

「はい。二日間よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく」

そういえばこの国の現金も少ないので、オウテンに頼んで換金してもらわないといけなかった。

そこで、適当な大きさの金の塊を係員にチップとして渡しておく。

「エーン紙幣じゃなくてすまない。リサイクルショップで換金できるから、その分の手間賃も含めてだ」

「ありがとうございます」

金の塊をチップとして貰った係員の女性の声は上ずっていた。

「というわけで、オウテン殿。エーンがないから、これを換金しに行ってくれないか？」

俺は、紅茶を飲んでいるオウテンに死蔵していた宝石の入った袋を渡す。

「こんなにですか？　物凄い金額になりますけど……」

「このくらい必要だろう？　二日間も滞在するんだから」

「……わかりました……すぐに換金に行って参ります」

急ぎ紅茶を飲み干したオウテンは、宝石の入った袋を持って部屋を出て行った。

その表情は必死そのものだ。

もし宝石を買い叩かれてしまったら、それが自分のミスになると思っているからだ。

官僚はミスを嫌う。

もしガトー事務次官に『こいつは駄目な奴』と思われたら、それでオウテンの出世ルートは絶たれるわけだから。

「このケーキは美味しいな」

「そうですね。紅茶も美味しい」

「コーヒーも香りがいいな」

「ホテルと特別契約した農園で栽培、加工された茶葉とコーヒー豆ですので」

チップを渡した係の女性が、飲んでいる紅茶とコーヒーの説明をしてくれた。
このホテル用に栽培している茶葉とコーヒー豆なのか。

「それは凄いな」

「美味しいわけですね」

必ずしもそうとは言い切れないが、やっぱり高い物は美味しい。
リサと一緒に食べているミニケーキに正式な値段はないが、スイートルームに泊まらないと注文できない。
宿泊費込みであるが、とても高いケーキとなっていた。

「旦那様、普段とは違って随分と無駄遣いをしていますね」

「バウマイスター伯爵様だからしょうがない」

ここでどこかの安宿に泊まってしまうと、ゾヌターク共和国の官僚どもに舐められてしまう。
民権党の政治家やマスコミ辺りは庶民的だと褒めてくれるであろうし、庶民達にも支持者はいるであろう。
だが、現実問題として安ホテルに泊まる外交特使が有能に見えるはずがない。
王国貴族に安ホテルに泊まった事が知られた時の問題もある。

俺達は、バウマイスター伯爵夫妻に相応しい贅沢をする必要があるというわけだ。
まあ、普段は意外と質素なのは他の大貴族でも同じだ。
だが、今この場は秘密の滞在でも贅沢をする必要があった。

「というわけだ」

「なるほど。わかりました」

リサは冒険者歴も長く、その関係で多くの貴族を知っている。
前はあんな感じだったが、凄腕の魔法使いなので依頼はひっきりなしだったからだ。
そんな彼女からすれば、今の俺が置かれた立場が理解できるというわけだ。

「それは幸運でした。私が同行していて。ルイーゼさん辺りは羨ましがるでしょうね」

今度連れて行ってくれとか言われそうだ。
機会があればそうしてもいいけど。

「このホテル何でもあるみたいだし、リンガイアの出航準備が終わるまで派手に遊ぶか」

「はい」

俺とリサがケーキを食べ終わるのと同時にオウテンが宝石類を換金して戻って来たので、大量のエーン紙幣を持ってホテル内の探索を始める。

「旦那様には整体やマッサージ、奥様には肌をより綺麗にするエステがお勧めです」

この高級ホテル、料金は素泊まりのみだそうだ。
あとは、何をするにもオプション料金がかかる。

最初は、何やら色々高級なアロマオイルやら泥やら薬草湯などを使うエステに誘われた。
男性用のコースもあるみたいだが、俺は遠慮して整体やマッサージのコースにしておく。
考えが古いかもしれないが、男性がエステってと思ってしまうのだ。

「リサはエステでいいんじゃないの？」

「ロイヤルコースは、十五万エーンとなっております」

「じゃあ、それで」

エステのコースが十五万……さすがは、セレブ御用達の超高級ホテルだ。
そのくらいの金額を気にしないで支払えないと、ここには来られないのであろう。

「リサ、チップを忘れないようにだって」

「決まりではないのですが、ほぼ全員支払うようですね。相場も決まっています」

俺達の監視兼世話役をしているオウテンが、このホテルの仕組みを調べてくれた。
このホテルに常駐する様々なサービスを行っている人達の、その技能の素晴らしさにも関わらず、基本給は思ったよりも低いそうだ。
彼らはサービスを行うとその客からチップを貰い、その技量に相応しい所得を得ている。

評判がいい人は沢山チップが貰えるし、駄目な人はすぐに淘汰されてしまうというわけだ。

「平均で二万エーンほどです。サービスが気に入ったら、天井知らずですね。百万くらいぽんとチップを出す方もいらっしゃるとか」

「凄いな。そいつ、何の仕事してんだ？」

「一等地に大量の不動産を所持している人ですね」

リネンハイムのもっと凄いバージョンなのか。

「じゃあ、普通で五十万、サービスがよければ百万、凄く気に入ったら二百万くらいだな」

その不動産王に負けるわけにはいかないからな。

精々、金持ち観光客として振る舞ってやるか。

「オウテンはマッサージしないの？」

「経費の問題でして。宿泊費はバウマイスター伯爵殿の従者用の部屋に泊まるとして、他の経費も渋々ガトー事務次官が認めた状態なんです。お役所も無駄遣いをすると、マスコミや政治家に批判されますしね」

何か、本当に日本の官僚を見ているみたいだ。

「とはいえ、ここで自前になったら私は破産ですよ。大学の同期から勝ち組で羨ましいとか言われますけどね。民間の大企業の方が圧倒的に勝ち組だと思いますよ。官僚なんて言うほど給料が高くない

ですから」

その辺は、以前にエーリッヒ兄さんも下級官吏の給料はビックリするほど安いと言っていたのと同じだ。

年金でそこそこの金額になるも、貴族は出費も多い。

世間で言われるほど楽じゃないと、エーリッヒ兄さんも言っていた。

「うちの兄も官僚なのですが、苦労は同じようです」

「バウマイスター伯爵殿のお兄様は官僚なのですか。優秀な方のようですね」

「はい」

エーリッヒ兄さんは、魔法なんてなくても知力で貴族家の主になったからな。

俺よりも圧倒的に優秀なのだ。

「私は他の仕事もありますので、時間は潰せるのですよ」

オウテン氏は書類の整理をするといって部屋に戻り、俺達はエステとマッサージを堪能した。

「お客様は、体をよく動かされていますね」

「体が資本の仕事だからね」

毎日魔法の鍛錬はしているし、従軍もし、冒険者としても活動、領内の開発でも色々と動いている。

体は使っている方だと思う。

「お若いのに凝っていますね。ちょっと強くしますね」

俺を担当した中年魔族男性のマッサージ師は、ちょうどいい加減で俺の体の凝りをほぐしてくれた。

さすがはこのホテルに常駐しているマッサージ師だ。

いい腕をしている。

あまりに気持ちいいので、少し眠くなってきた。

それにしても、俺もこの若さでマッサージが気持ちいいとは。

色々と疲れているのであろう。

「終了です」

「体が楽になったよ。じゃあ、これはチップね」

「ありがとうございます……えっ！　こんなにですか！」

「気にしないで取っておいてくれ。それじゃあ」

マッサージは気に入ったので、チップは二百万エーンにしておいた。

札束を貰って、マッサージ師は驚いている。

「あなた、どうですか？」

「効果あるんだねぇ……」

男にはよくわからないエステの数々を受けたリサは、見てわかる

ほど肌が綺麗になり、顔も小さくなり、体も少し細くなったような気がする。

「エステに魔法薬が使われていますね。かなりの高級品だそうです」

なるほど。

魔法薬を使用しているから、日本のエステよりも絶大な効果が出るわけか。

「カタリーナが知ったら、ここに来たいと言うだろうなぁ……」

「彼女、ダイエットの権化ですからね」

「さて、次はどこに行きましょうか？」

時間潰しで書類整理を行っていたオウテンも姿を見せ、次の遊び場所へと移動する。

そこは劇場であり、様々な歌手、芸人などがショーを見せ、観客からチップを受け取っていた。

「旦那様、本当の手品師ですね」

「本当だ」

俺とリサは、トランプを使った魔術を行っている手品師が魔法を使わずに手品をしているのを確認して驚いた。

「凄い。王国よりもレベルが高いな」

なまじ魔法があるために、リンガイア大陸における手品のレベル

は低かった。
初級魔法使いが魔法を使った手品を見せ、彼らがメインという有様なのだ。

「魔族も昔はそうでしたが、魔法を使ったら手品ではないという流れになったのです」

俺達の傍にいる従業員がそっと教えてくれた。
魔族の手品は地球の手品のように駆使するもので、俺とリサはレベルの高い手品を楽しんだ。
他にも、いい歌を歌う歌手、大笑いできる芸人のコントなど。
さすがにこのホテルに呼ばれるだけあって、一流の技量を持つ人ばかりだ。

「みなさん、売れっ子ですからね。ここはギャラがよくてチップも出ますから、定期的に来て稼いでいますよ」

魔族の人口は百万人ほど。
市場が狭いので、歌手も芸人も金持ちのチップをあてにして収入を確保しているわけだ。
俺も、面白かったのでチップは弾んだ。

「旦那様、面白かったですね」

「王国の手品師は、あれは魔法だからな」

エステとショーを楽しむと時刻は夜になっており、夕食の時間となる。
部屋に料理を運んでくれるコースもあるそうだが、今夜は正装してホテル内のレストランに向かった。

フランス料理に似た料理のコースが出る高級レストランにし、一人前が二十万エーン。

「私、人生最初で最後だと思います」

オウテンは、料理と俺が奢ってあげた一本二百万エーンのワインを堪能していた。

「このワイン、美味しいですね」

「高いからねぇ……」

俺は酒に詳しくないのだが、王国・帝国産の高級ワインよりも飲みやすくて美味しいと思う。

これはあくまでも俺が感じた感想だが。

「ワインに関しては、我が国は研究が進んでいますからね」

前世の経験から、高級ワインってのは決してすべてが美味しい、飲みやすいという保証もないのだが、魔族の国のワインは高いほど美味しいもののようだ。

「ブランタークさんと導師にも買って帰るか」

「喜ぶと思いますよ」

二人とも、酒が大好きだからな。

あと、給仕してくれた人とソムリエとシェフにはチップを弾んでおいた。

料理人に関しては、調理を担当したリーダーシェフにチップを渡

すと、その人が下で使っている料理人達にチップを分配するそうだ。

食事が終わると、今度はお風呂だ。
今日は部屋に備え付けられた風呂に入る。
お風呂は広く、湯船には花や魔法薬由来の入浴材が入っていた。
効果は、疲労回復とリラックスがメインだそうだ。

「こういう贅沢を味わうと、癖になって破産しそう」

「冒険者をしていると普通に野宿とかありますしね」

「あるねえ。風呂は『洗浄』で誤魔化して」

リサと一緒にお風呂に入りながら、冒険者あるあるを話す。
彼女は冒険者としての経験が豊富なので、聞いているととても面白い。

「こうして夫婦二人だけというのもいいですね」

「そうだな」

メイクをしていないリサが男性とちゃんと話せるようになったのは最近であり、今日はいい機会だったと思う。
段々となし崩し的に奥さんが増えていたが、結婚した以上は夫婦間のコミュニケーションは重要だからな。

「こういう所にたまに来ると面白いな」

「他人にお世話されるのに慣れないのは、私も平民の出なので」

「俺も普通の貴族とは程遠い家だったからなぁ……」

相互理解も深まり、その日は二人で仲良く同じベッドで眠るのであった。

「おはようございます。バウマイスター伯爵殿、奥方殿」

翌日もオウテン監視のもと、俺達はバウマイスター伯爵夫妻として無駄遣いに勤しんだ。

大量のエーン紙幣があるが、王国に戻れば使えないわけで、ここで使いきってしまおうという腹だ。

朝食後、調理人にチップを渡し、プールで泳いだり、休みながらトロピカルジュースを飲んでのんびりと時間をすごした。

世話役のボーイ達にもチップは忘れない。

「チップ文化かぁ……」

「一部金持ち向けの場所だけですね」

隣のチェアーで寝転ぶオウテンが、いい機会だと色々と魔族の国について教えてくれた。

「それは王国も同じだな」

王国にも厳密なチップ制度はないが、一定以上の貴族はサービスが気に入ったらチップは出す。

面白いのが、商人は基本的にケチなので出さない点であろう。

俺に言わせると、チップをケチるくらいだから成功するんだろうなという感覚だ。

勿論大物商人になると、そうも言っていられなくなるそうだが。

「人間も魔族も、金持ちと貧乏人がいますからねぇ」

官僚で頭がいいオウテンからすれば、王政でも民主主義でもそれは変わらないと達観しているようだ。

「そろそろ、リンガイアの出航準備が終了するかもしれません」

「じゃあ、その前に……」

リンガイアの乗組員達も大変だったであろうから、気持ち程度に何かお土産でも渡すか。

そう考えた俺は、プール遊びを中断してホテル内のお店へと向かう。

このホテルには様々な高級品が売られており、リンガイアの乗組員は多いが、お菓子くらいなら全員分を余裕で購入できるはず。

「大人買いだぁーーー！」

というわけで、お土産に大量のお菓子を購入し終えたところで連絡が入り、俺達はホテルをチェックアウトして港へと向かった。

「バウマイスター伯爵様、お久しぶりです」

「あの時は、大変お世話になりました」

港で出航直前のリンガイアに到着すると、船長のコムゾ・フルガ氏と副長のレオポルド・ベギム氏が出迎えてくれた。

二人とも、最初に面会して以来だ。

「色々と思うところはあると思いますが、このまま出航して王都に戻っていただくという事で」

「それは問題ありません。約二名ほど乗組員が欠けておりますが……」

「一人は貴族としての責務を果たしただけです。もう一人は、こちらで預かりますので」

「わかりました」

コムゾ氏は、これ以上何も追及しなかった。

俺がプラッテ伯爵のバカ息子を犠牲に、リンガイアを解放させた事実を理解しているからであろう。

どのみち奴が今回の事件の主犯で、ゾヌターク共和国としては有罪にしないと世論が納得しない。

極めて民主主義的な彼らからすれば、貴族のバカ息子が有罪になって収監された方が納得するであろう。

実行犯のアナキンは、既に即決裁判で有罪となっている。

罰金も収めたし、執行猶予判決は事実上の国外追放処分だ。

リンガイアで王都に戻るとプラッテ伯爵あたりが何かしてきそうなので、アナキンはこのまま俺達でバウマイスター伯爵領に連れ帰る。

あとは、借金返済までうちで仕官確定だ。

領地から出なければ、プラッテ伯爵に何かされる心配もないであろう。

「あの……」

「あのバカ息子が悪いのは事実ですし、貴族である彼が他の仲間や国家の貴重な財産であるリンガイアのため収監される道を選んだのです。彼は貴族の鑑ですよ」

プラッテ伯爵は大切な跡取り息子が収監されて涙目であろうが、文句を言おうにもこういう世論が形成されるので表向きは何も言えない。

裏で何か画策する可能性は否定できないが。

「船長、急ぎ出航しましょうか？」

副長であるレオポルド氏が状況を察し、すぐに出航しようと船長に進言した。

このまま素直に戻る方が賢いと理解したのであろう。

「そうだな……急ぎ出航しましよう」

「長期間苦労なされたそうで、大したものではありませんが、お土産などを持参しました。みなさんで分けてください」

「ありがとうございます」

「みんな喜ぶと思います」

大人の二人は深く詮索せず、約二名を置いて速やかにリンガイアを出航させた。

こうして、俺の外交交渉は無事に成功するのであった。

第百四十五話　南方探索命令。

「といった事情でして、ご子息はヘルムート王国の貴重な資産であるリンガイアと、多くの乗組員達のため、自ら収監される道を選んだのです。プラッテ伯爵！　彼は貴族の鑑ですね」

「そうですか……」

「いやあ、このバウマイスター伯爵。ご子息の決断に心から感動いたしました。貴殿のご子息は貴族の鑑ですな」

「我が息子も、バウマイスター伯爵殿からそこまで評価されたと知れば大喜びでしょう」

「（ぷぷっ、怒ってる。怒ってる）」

王城内で出会ったプラッテ伯爵に嘘の報告をしたら、彼は顔をひくつかせながら俺の話を聞いていた。
勿論、そんな事実は真っ赤な大嘘であったが。

リンガイアの解放が成って無事に出航したので、俺は一足先に『瞬間移動』で王城へと飛んで陛下に事情を説明した。
どう繕っても、プラッテ伯爵のバカ息子が先に攻撃を仕かけた事実は覆せない。

ここで国家のプライド云々を言って抵抗すると、ゾヌターク共和国政府が混乱している事もあり、リンガイアと乗組員達は長期間戻って来ないかもしれない。

そこで、実行犯であるアナキンは即決裁判で執行猶予と罰金、罰金は俺が肩代わりして彼はそれを返すためにバウマイスター伯爵家に仕官する事に。

主犯のプラッテ伯爵のバカ息子のみ魔族の国の刑務所にぶち込み、リンガイアと他の乗組員達は既に出航済みである事を報告した。

「これが私の限界です」

「リンガイアと貴重な乗組員達は戻ってきた。ベストとは言わぬが、ベターな結果と言えるの」

勝手にリンガイアと乗組員達を拘束した魔族の国は謝罪し、双方を即刻解放すべし。

賠償もせよ。

こんな主張をしている貴族……プラッテ伯爵の事なのだが、そんな条件を魔族が呑むはずがない。

しかも自分は矢面に立たないで裏から色々と言うので、あまり外交交渉が進んでいないユーバシャール外務卿が『じゃあ、お前が直接交渉しろ！』と激怒してしまったそうだ。

俺も魔族側にそんな条件を呑ませるのは不可能なので、一番簡単なプラッテ伯爵のバカ息子にすべてを押しつける方法を選択したというわけだ。

俺は思った。

創作物みたいに、国家間の交渉で大の虫も小の虫も生かすのは難

しい。
俺は交渉が得意ってわけでもないし。
『アレは小の虫にも値しない』
『貴族の風上にも置けませんわ』
『あんなのを助けても、どうせ奴はヴェンデリンに感謝などせぬぞ。むしろ、救出が遅いと文句を言うような輩じゃ。見捨ててしまえ』
当然といえばそれまでだが、ヴィルマ、カタリーナ、テレーゼの奴への評価は最低であった。
エリーゼ達に対しても言うまでもない。
『感じの悪い人よね』
『アマーリエのその一言が、端的に奴を表現できているな』
確かに、あいつは取り繕う事もできない本物のバカであった。
多少知恵が回れば、牢屋に入っているのだから少しでも印象をよくしようと心がけるはず。
大貴族の跡取りなので、我慢するとか自分を律するのが苦手なのであろう。
どうせ奴は主犯だ。
冤罪なら可哀想と思えるが、自業自得なので助けてやろうという気持ちすら起きない。
それでもただ魔族の国に生贄として差し出すと問題になりそうなので、奴が貴族であるという事実を利用させてもらった。

リンガイアと他の乗組員達のため、彼だけが収監される道を選んだのだと。

勿論奴はそんな殊勝な性格はしていないが、少なくとも貴族としての体面だけは保ってやった。

プラッテ伯爵は俺を怒鳴りたい気持ちで一杯だろうが、まさかそれをするわけにはいかない。

先ほどバカ息子の今後の予定を教えてあげたら、『我が息子は貴族の誉れだ！』と言いながら泣いて喜んでいた。

世間にはそう言わざるを得ないのだが。

「バウマイスター伯爵も、悪辣な事をするの」

「私は、彼の名誉を守ってあげたのです」

すぐに自分だけ逃げ戻ってきたら厳罰物だが、刑務所務めを終えてから王国に戻れば、空軍としても彼を評価せざるを得ないであろう。

名誉と実入りはいいが、あまり責任のない役職につけてくれるはずだ。

実務はあり得ない攻撃命令を出したので任せないと思うが、老人になるまでいい骨休めになるはず。

本人がどう思うかはともかく、俺はとてもいい事をしている。

「ところで、その罪状だといかほど収監されるのだ？」

「二十五年から三十年ですね」

国が運用している警備隊の船に攻撃を命令したのだ。

終身刑や死刑ならないだけマシであろう。

お上に危害を加えるという事は、平成日本人などが思う以上に重罪なのだ。
もし王国で類似の罪を犯した場合、最悪死刑もあり得た。

えっ？　アナキン？
あいつはあくまでも命令されてやっただけだし、司法取引は終わっているので例外です。

「実害がなかったのと、あとは刑務所内でどうすごすかですね。模範囚だと二十年くらいに縮まるそうです」

「なるほど。リンガイアと乗組員達が戻るのであれば問題ない。あの船が戻ったら、今度は東方にでも探索に出そうと思う」

陛下も、バカな事をしたプラッテ伯爵の息子には内心激怒しているのであろう。
彼の話はすぐにしなくなった。

それよりも、リンガイアを利用した探索を続行したいようだ。
このリンガイア大陸で繁栄した古代魔法文明の崩壊以来、周辺地域の探索はほとんど行われていない。
王国としても、人口が飽和した際に移民可能な土地がほしいのであろう。
今はリンガイア大陸の開発すら終わっていない状態だが、一国を支配する為政者としては長期的な視野でものを考えなければいけないのかもしれない。

そういえば、バウマイスター伯爵領南方諸島群以南の探索もいつかしないといけないな。

「今は、魔族への対応で精一杯だがな」

大半は、理性的な連中である。

『人間の国に侵攻だぁーーー！　人間は皆殺しじゃぁーーー！』

という種族でないのは救いだが、潜在的な力が大きすぎる。

交渉は自然と慎重にならざるを得なかった。

「実は、帝国も交渉団を送り込んできての」

「ペーター……じゃなかった。向こうの陛下は交渉団を送るのが遅かったですね」

「様子見であろう。様子を見ていた帝国の方が案外有利かもしれぬぞ」

魔族も王国も帝国も、それぞれに思惑がある。

利害関係の調整から始めると、一体いつ交渉が終わるのかわからなくなってしまった。

「魔族の国には、外交を行う部署がなかったそうだの。急遽、作ったとか？」

「一万年以上も外国と交流していませんからね」

「政府が送ったという交渉団と交渉はしておるのだが、全員外交に疎いようで、なかなか話が進まないらしい」

魔族の国は、政権交代もしているからな。

実力のある実務者が送れなかったのであろう。

その辺の情報は、既に王国も掴んでいるようだ。

俺が利用した官僚達はリンガイア解放交渉では働いてくれたが、外交交渉の矢面に立てば政治家から出しゃばりだと文句を言われてしまう。
彼らは補佐役に徹するしかないので、交渉は進まない可能性が高い。

「他にも問題がある。交易をするにしても、貨幣の交換比率とかがある」

「下手な交換レートにすると、一方的に富が流出しますからね」

幕末の日本のように金と銀の交換レートに差があったなんて事があれば、王国の力は急速に衰えてしまう。
焦った帝国がミスをしても同じだ。
何しろ、王国と帝国ではほぼ同じ貨幣を使用しているのだから。

「魔族の国は、優れた魔道具を輸出したいようじゃ」

「陛下、それって……」

「もう嗅ぎつけたらしい。魔道具ギルドが大騒ぎしておる」

どう贔屓目に見ても、王国と帝国の魔道具が魔族の国の魔道具に技術力で勝てるはずがない。
俺の見立てでは、軽く数百年分は格差があるはずだ。
魔族の国の魔道具は量産技術に優れており、価格もそこまで高くないはずだ。
もし魔族の国から大量に魔道具が流れ込めば、魔道具ギルドは開店休業状態になるであろう。

「魔道具ギルドが騒いでいるのは、帝国も同じだ。ミズホ公爵領。あそこもな」

ミズホ公爵領の魔道具は、王国と帝国のものより優れている。その優位が崩れるのだから、騒いで当然であろう。

「関税をかけるか、輸入量を制限するかですね」

「そんなところであろう」

だが、関税をかけるにしても、輸入量に制限をかけるにしても、具体的な数字を探らないといけない。

第一、向こうが自由貿易を主張して受け入れない可能性があるのだ。

「帝国の皇帝も困っておるようだな」

「でしょうね」

内乱を機に、王国と帝国は直接会話が可能な魔導通信機を設置した。

いわゆるホットラインというやつだ。

二人とも、魔族の国への対応に悩んでいるのであろう。

異文化コミュニケーションと軽く言うが、そんなに簡単に仲良くなれたら戦争なんて起きない。

双方がある程度納得する条件で交流を始めるまでに、とてつもない時間と労力が必要なのだ。

「暫くは、ユーバシャール外務卿に任せる」

「そうですね」

今回の交渉は、あくまでも臨時の仕事であった。

ここで俺が、ユーバシャール外務卿の職分に口を出すのはよくない。

面倒なので出したくもないけど。

とか言いながら、俺も短期間で二度も特使をしたな。

「それでは、私は領地に戻ります」

「バウマイスター伯爵、ご苦労であった。経費と褒美を受け取って戻るがいい」

陛下の下を辞した俺は、『瞬間移動』でバウマイスター伯爵領へと飛んだ。

屋敷に入ると、早速ローデリヒが出迎えてくれる。

「お館様、大変でしたな」

「まあ、仕方がないさ。それよりも、俺はプラッテ伯爵を完全に敵に回したぞ」

プラッテ伯爵としても俺を罵倒するわけにはいかないが、息子を外国の官憲に売り渡した俺への憎しみで一杯であろう。

「仕方がありませんな。プラッテ伯爵と彼に親しい連中には気をつけます」

「やはり、少しくらいは注意されると思ったんだが」

いくら、敵対している事がハッキリわかった方がいいと言われても、社交辞令でも仲良くしていた方がいいような気もしないでもないからだ。

「そういう八方美人的な対応をする貴族もいますが、お館様ほど大貴族になってしまいますと、仲が悪い貴族がいても仕方がありません。やはり、敵だとわかっている方がこちらも対応が楽なのです」

敵だとわかれば、偽りの好意や善意に騙される心配もないか。

その貴族と仲がいい貴族にも注意を向けられる。

「ニコニコしながら利き手同士で握手をしたと思ったら、実はそっちが利き腕でなく、本当の利き腕でナイフを握っている。比喩表現ですが、貴族とはそんなものなので」

「なるほど」

上手い例えだな。

貴族は油断できないってのがよくわかる。

「それにしても、今回の動乱。ホールミア辺境伯は大損でしたな」

交渉は続いているが、テラハレス諸島は魔族の軍勢に占拠されたままだ。

軍事基地の建設も少しずつ進んでいる。

交渉の場は帝国も混ぜ、その軍事基地の一角に場を移していたが、肝心の交渉はあまり進んでいない。

二か国間でも交渉が纏まらないのに、三か国に増えれば余計に交渉が纏まらなくなって当然だ。

しかも、今の帝国はミズホ公爵家にもそれなりに配慮が必要な状態なのだ。

「諸侯軍の動員解除は難しいか」

「完全には無理です」

ホールミア辺境伯としては、今の状況ですべての諸侯軍の動員を解くわけにはいかないのだ。

数は大分減らしたそうだが、それでも大きな負担である。

軍隊は、何もしなくても費用を消費してしまうからだ。

「まあ、うちは唯一動員していたお館様達が戻られたので、これで安心して領内の開発に傾注できますよ」

魔族関連の件はまったく解決していないように見えたが、俺は国王陛下でも外務卿でもないからな。

自分の領地だけ心配しておけばいい。

というわけで、俺達は元の生活に戻る。

「この小山は崩して平地にした方がいいかな？」

「そうですわね。ここが平地になれば宅地も作りやすいでしょう」

バウマイスター伯爵領には未開地が多い。

というか、ほぼ未開地なので土木工事を進めていかないと人口が増えた時に困ってしまう。
王国中から移住条件がいいと、土地を持てない農家の次男三男や、弟子入りして独立したものの客がいないで困っていた職人、居場所がない貴族や陪臣の子弟が集まっていたので、彼らは住めるよう宅地や農地の造成は急務であった。

一緒に魔法で整地を行うカタリーナも、今では慣れたものだ。

「先生は、もう魔族の国と交渉しに行かないのですか？」

俺に魔法を習いながら土木工事も手伝ってくれているアグネス達は、西部行きに同行しなかった。
日本とは違って事件の詳細が知られるのに相当な時間がかかるため、気になって俺に魔族の国の事を聞いてきたのだ。

「あれ、纏まるのかね？」

「ええっーーー！　いいんですか？」

「いいも悪いもねえ？」

「そうですわね」

国同士が外交交渉を重ねたところで、必ず交渉が妥結する保証なんてない。
日本だって、北方領土とかもう何十年も戻ってきていないのだから。

「魔族の大半は、大陸に侵略したいとは思っていない」

自分達が住む島ですら人口減で放棄した場所が多いのに、大陸を占領しても維持が難しいからだ。
ただ、大企業としては自分達の五十倍以上という市場に進出したい意図はあった。

ところが、彼らが生産する産品が大陸に流れると我が王国の魔道具ギルドは確実に衰退する。
食料生産はどうであろうか？
魔族の国の食料生産量と技術は凄いが、多分値段が高すぎて一部富裕層しか購入できないであろう。
むしろ、王国から安い食料が大量に魔族の国に流入しかねない。
王国は食料が不足気味なのだが、商人からすれば儲かる方に食料を売って当然である。

魔族の国は、自国の農業というか食料自給率を守るために関税をかけるなり、食料の輸入禁止をしようとするであろうから、そうなると王国側も輸入する魔道具に高額の関税をかけるか、輸入禁止という事もあり得るわけだ。

「先生、難しいお話ですね」

三人の中で一番年少のシンディが、額に皺を寄せながら言う。

「そうだな。説明している俺が一番意味がわからない」

「正式に交流を結ぶにしても、お互いに事情があるのですね」

「そういう事だろうね」

ベッティは柔らかく言っているが、要は既得権益を侵すので反抗勢力が強いのだ。

王国側は魔道具ギルドの反発が強い。

圧倒的に技術力に優れた魔族の国の魔道具が輸入されるようになれば、彼らの力は大きく落ちてしまうからだ。

『最新技術を仮想敵国に独占されるのは危険』だと、少し本末転倒というか誤魔化しの言い訳で魔道具の輸入阻止を行っているらしい。

魔道具ギルドは金もあるし、ギルド運営のために貴族の子弟を多く雇っている。

もし魔道具ギルドの売り上げが落ちれば彼らから首を切られるわけで、多くの貴族がユーバシャール外務卿に圧力を加えていた。

魔族の国側も農業、畜産、漁業関連の会社や関連団体からの圧力を受けていないはずがなく、これで交渉が上手く行くはずがないのだ。

「問題なのは、いまだに魔族の国側がテラハレス諸島を占領している事だな」

『こちらの領地を勝手に占領した魔族は信用ならない！』と言う貴族も多く、そんな彼らが交渉を締結しても順守されないかもしれないと騒げば、一定の支持を受けてしまう事にも問題があった。

魔族の国側としては、テラハレス諸島は無謀な攻撃を仕掛けてきたヘルムート王国から賠償で貰うべき島、という認識が一部ではあるがあるのもまずかった。

あの諸島はホールミア辺境伯領であるから、王国が勝手に外交交渉で譲渡するわけにもいかない。

その事件で王国は謝罪しているし、実行犯達は処罰された。
これで終わっているはずなのに、勝手に領地を奪われては堪らない。
誰も使っていない諸島であるが、貴族と国家のプライドもあって、そうホイホイと他国に譲れるわけがなかった。

「つまり……」

「交渉は物凄く長引くから、ヴェルは自分の領地の事だけ考えればいいのさ」

「手の出しようがないですけど……」

今日の工事現場には、エーリッヒ兄さんも同行していた。
彼は陛下から直々に、バウマイスター伯爵領の開発が順調に進むよう、その補佐と連絡役に任じられている。
今日は視察のためにここに来ていたのだ。

「ヴェルは臨時特使として魔族の国に行ったし、交渉でも成果を出した。これ以上は無用だね。それよりも、領地の開発の方が重要さ」

外交交渉の間、王国は統治と内政を行わないわけにもいかない。
むしろ魔族の国に対し、我が国は常に発展し続けているのだとアピールしなければいけなかった。

「ヴェルが、アーネスト殿からの情報と合わせてゾヌターク共和国の報告を挙げたでしょう？　向こうは人口が減り続ける社会だそうだから、うちは発展し続けている事をアピールしてプレッシャーを与えるわけだね」

技術力や魔法使いの数では相手にならないので、勝てる要素で魔族の国にプレッシャーを与えるわけだ。

これも一種の戦争であろう。

「帝国もいるからね。あの国は内乱で大きなダメージを受けたけど、中央の力が強くなった。長期的に見れば大きく成長するだろう」

今まで顔色を窺わなければいけなかった選帝侯家の多くが没落し、新皇帝であるペーターは若くて有能だ。

内乱で荒廃した帝国の復興という名目で大規模開発も次々と進んでおり、油断していると王国は帝国に国力で抜かされる危険もあった。

「暫くは帝国との関係も悪くないと思うから、その間に王国も力を蓄えないといけない。魔族の国との交渉は帝国も加わって余計に複雑化したんだ。時間は稼げるだろうね」

交渉の停滞、時間がかかるのは、むしろ王国にとって有利というわけか。

「帝国の交渉団も、魔族の国の言い分に首を傾げているらしいけど」

『野生動物が可哀想だから狩猟はやめろ』と言われては、帝国も混乱して当たり前か。

「そんなわけで、うちはうち、他所は他所という結論に至るわけだね。私は財務閥の法衣貴族だから、ヴェルの領地が栄えて間接的に王国の税収が上がれば評価される。王国政府とバウマイスター伯爵家の関係が良好ならもっと評価されるわけさ」

エーリッヒ兄さんは財務閥の貴族だから、端的に言うとお金が最優先だからな。
金がないと首がないのと一緒なのは、どの世界でも同じだ。
お互い、金のない実家で苦労もしている。

「それで、開発を促進するのですか？」

「それもあるけど、実は王国から依頼を受けていてね」

「依頼ですか？」

「そう、バウマイスター伯爵家が領有している南方諸島群があるよね？」

「ええ……」

南の海岸からそう離れておらず、俺が見つけた島なので、王国からバウマイスター伯爵領と認知されていた。
野生のサトウキビが大量に生えている島が多く、現在数百人がサトウキビの栽培と製糖業を営んでいる。
漁業も盛んで港も整備されており、徐々に人口が増えていた。

「その南に何があるのかというお話さ」

「ですが、探索には大型の船が必要なのでは？」

西方探索では、リンガイアを出航させたくらいだ。
うちで運用している魔導飛行船では、そう遠くまで探索もできない。

「そこまでの大探索なら、王国が大型の船を出すよ。今回の探査は、精々数百キロ。バウマイスター伯爵家で所持している魔導飛行船の行動範囲内の探索だね。バウマイスター伯爵領全体の把握を行う必要があるわけだ」

大型船で探らなければいけない新領地は、王国が船を出して領有権は別というわけか。

「新領地探索ですか……」

「西方探索で魔族が見つかってしまったからね。北方は帝国が探索隊を出す予定だと聞いている。東方も同じでね。王国は計画を立てているよ」

先に帝国に見つけられてしまうと領有権を確保できないから、とにかく早く探索隊を出すというわけか。

南方は、バウマイスター伯爵領の確定作業というわけだ。

「わかりました。ローデリヒに言って船を準備させましょう」

「私も同行するよ」

魔族との交渉はまったく進んでいなかったが、バウマイスター伯爵領の開発は進めないといけない。

そのための領地確定作業を行うため、俺は南方探索隊の編成をローデリヒに命じるのであった。

第百四十六話　南国少女と光源氏計画？

「伯爵様、男ばかりでムサいな」

「仕事ですからしょうがないですよ」

「まあ、気楽で開放的だと思えばいいのである！」

なかなか纏まらない魔族との交渉はお偉いさんに任せるとして、バウマイスター伯爵領に帰還した俺は古い中型の魔導飛行船を用いた南方探索隊を出航させた。

この船で行ける範囲内で島などを見つけたら、これをバウマイスター伯爵領に編入するわけだ。

船はバウマイスター伯爵家で運用しており、船員は雇い入れた元空軍軍人が多いので練度も士気も高い。

他にも、地図を作製する文官達に、エーリッヒ兄さんは王国からの監査役として、ブランタークさんはブライヒレーダー辺境伯の代理扱いで、あとは俺とエル、導師も参加していたが、彼は楽しそうだからと言って勝手に参加していた。

彼に具体的な仕事があるわけではないのだ。

むしろ、王都でもっと重要な仕事があるんじゃないかと俺は心配してしまった。

「導師、王城にいなくていいのですか？」

「魔族がすぐに戦争を吹っかける心配もなくなった以上、某がいても無意味なのである！　王城にいると書類を寄越す連中もいるので、いない方がいいのである！」

「ぶっちゃけるなぁ……」

「あんなもの、誰がサインしても同じである！」

「いや、中身は確認しておけよ。いい大人なんだから……」

堂々と書類仕事は嫌だと断言する導師に、エルが呆れていた。

ブランタークさんも、書類はサインする前に内容は読んでおけと釘を刺したが、さすがの導師も書類の内容を読まずにサインするなんて……ないよね？

「空と海が青いなぁ」

南の港から出発し、漁業と製糖事業関連の開発が進む南方諸島を眺めつつ、船は南方を進んでいく。

途中島が見つかると、何やら文官達が色々と測定をしながら地図に書き込んでいた。

彼らは王国から派遣されており、この船で行ける範囲内にある島はバウマイスター伯爵領であると、その証拠となる地図の作製を行っていたのだ。

あとで揉めないよう、役人である彼らは真面目に地図の作製作業に没頭していた。

「彼らの十分の一でいいから、導師が真面目ならな」

「あははっ……」

まさかそうですねとも言えず、俺達はブランタークさんの呟きをスルーした。

「これまで大きな島はありませんでしたね」

いくつか小さな島が見つかったが、どれも人が住めてもわずかであろう。

地図には記載したが、殖民するかどうかは不明であった。

「南方に何があるのか、今まで確認した者はいなかったのである！探索は、まだこれからである！」

今回は、船員も含めて男性ばかりで探索を行っている。

どうせ数日で終わるし、たまには男だけで気を抜きたいという理由からだ。

西部に奥さんと赤ん坊を連れて行ったのは、あの時は紛争地域がテラハレス諸島なのでそこまで危険じゃないと判断したのと、エリーゼ達が自分の赤ん坊は自分で面倒を見たいと願ったからだ。

今回の探索は短期間であるし、未知の領域というわけでエリーゼ達は留守番になった。

結果、こうして男ばかりの探索隊となったわけだ。

「なあ、ヴェル」

「何だ？　エル」

「無人の島ならいいけどよ。もし住民がいる島があったらどうするんだ？」

「陛下にご報告し、ご判断していただく」

魔族の件からわかるとおり、異民族が住む島が見つかったら王国政府に丸投げ……じゃなくて任せるのが一番であろう。

バウマイスター伯爵領にしても、まったく利益にならないところか、下手をすると統治の面倒さで大損をする可能性の方が高かったからだ。

「ミズホのような扱いにするか、貴族に序してもらうか。そうなれば、交易だけすればいいからな」

お互い干渉しない方が幸せってものだ。

民族や文化が違うのに無理矢理一緒にしても、騒動が起こるだけだからな。

「王国に任せた方が無難か」

「陛下は魔族の国との交渉に忙しく、こちらに丸投げされる可能性もあるのである！」

「それはあるかもしれませんね、導師殿」

「それは酷い……」

もし島に住む住民が少数の場合、そういう事も起こる可能性があ

るわけだ。
　ユーバシャール外務卿に交渉を頼んでも、今は魔族の相手が忙しいから何もしてもらえないかもしれない。
　導師とエーリッヒ兄さんからそう言われてしまうと、現実味がありすぎて怖かった。

「無人島しかなければいいな」

「ブランタークさん、俺はその可能性は低いと見ているのです」

　一万年前に古代魔法文明が崩壊した時、ミズホ人は未開地からリンガイア大陸中を放浪してアキツ大盆地を新たな故郷とした。
　ミズホ公爵が言うには、先祖がミズホ人全員を率いたとは思えず、他にもミズホ人が住んでいる場所があるかもしれないと。

　ミズホ人だけじゃない。
　古代魔法文明崩壊後の混乱から逃れるため、探索が始まったばかりの南方や東方に逃げ込んだ人達がいても不思議ではなかった。

「ははははっ、そこの領主に娘がいて、ヴェルが娶る羽目になったりして」

「エル……」

　そういう不吉な事を言うなよ。
　もし現実になったらどうするつもりだ。

「お館様！　大きな島が見えます！」

「こらっ！　エル！」

お前がそんな事を言うから、大きな島が見つかってしまったじゃないか！

「有人とは限らないじゃないか。まずは探索だな」

「船長、上陸の準備を」

「畏まりました」

まずは、その島の情報を集めないといけない。
段々とその全容が見えてくるがその島はかなりの大きさで、海岸と一部隣接する土地以外は鬱蒼としたジャングルに覆われていた。
そして、島の中心部に標高の高い山が見える。
山は形が富士山に似ており、八合目付近くらいからは根雪も確認され、ここは南の海上なのに一種独特な光景を作り出していた。

「標高が高いから、山頂付近に雪があるのか？」

形は似ていても、その山は富士山ほど標高が高くない。
ここは熱帯なのに、あの程度の標高で山の頂上付近に根雪が残るものなのだろうか？
他に原因があるかもしれないが、それは調査してみないとわからない。

「ヴェル、集落が見えるけど」

「エルぅ～～～！」

お前が余計なことを言うから住民がいたじゃないか！

「すげえ言いがかりだな！　俺のせいじゃないてーの！　人口も少なそうだし、上手く領民になってもらおうぜ」

「エルの坊主、それは難しくないか？」

エルの楽観論に、ブランタークさんが異論を挟んだ。

彼らは、一万年も他者と交流がなく独自にやってきた連中だ。

いきなりバウマイスター伯爵領の領民になれといっても反発するかもしれない。

「その前に、言葉が通じるかな？」

「それはわからん」

エルの疑問にブランタークさんも答えられなかった。

魔導飛行船が島に近づくにつれ、集落から数百名ほどの住民が集まり、こちらを指差して驚いていた。

どうやら、彼らは魔導飛行船を運用していないようだ。

初めて見る魔導飛行船に、興味と不安が入り混じった状態なのであろう。

「さて、降りるぞ」

「もうか？」

「時間が惜しいし……」

『探知』の結果、彼らの中には魔法使いが一人しかいなかった。

しかもその反応は、集落の奥にある大きな家の中から感じる。
この人物が集落の主で、こちらの様子を伺っているのかもしれない。
どのみち、この人物以外で俺達にとって脅威となる人間はいないはず。

「向こうの様子を探りたいじゃないか。もし敵対行動をされても大丈夫」

俺、ブランタークさん、導師がいるので、奥に引っ込んでいる魔法使いにもどうにもできないであろう。
この人物は、魔力量でいえば中級が精々であったからだ。

「というわけで、船長は警戒態勢を維持するように」

「了解しました。お館様、お気をつけて」

魔導飛行船は上空に待機させ、俺達は『飛翔』で島へと上陸する。
エルは、導師がおんぶして一緒に降りた。

「この集落の代表者はいるか？」

「村長は屋敷におりますが、お話なら私が聞きましょう」

俺達を見つける数百名の住民の中から、一人の老人が前に出てこちらの問いに答えた。

「村長は？」

「ええと……村長には、少し難しいお話と言いましょうか……私は

副村長のネイと申します。事務的なお話ならば、私にしていただけますと……」

魔法使いと思われる村長は、何か病気なのであろうか？
それとも、交渉術の一貫としてわざと顔を出さないとか？

「まあいい。実はだな……」

俺の代わりにエルが、自分達はリンガイア大陸南端の未開地を新たに領地としたバウマイスター伯爵家の者である事。
南下して領地の確定作業を行っており、その途中でこの島を見つけた事。
できれば、バウマイスター伯爵領の領民になってほしい事。
嫌なら、ヘルムート王国と相談する事などを説明した。

「この集落の村長を領主にして、ヘルムート王国の貴族になるという手もあります。うちが寄親になると思いますけど」

さて、問題は彼らがこの条件を受け入れるかだ。
一万年も独自にやってきたので独立独歩の姿勢が強く、どこかに属するのを嫌がるかもしれないのだから。

「構いませんよ。むしろ喜んで」

「えっ！　いいの？」

随分あっさりとこちらの要求を受け入れるから、俺は逆に怪しいと感じてしまった。
今まで前世も含めて生きてきて、美味い話には裏があったケースも多かったからなぁ……。

「我々が呆気なく受け入れたので疑問に感じていらっしゃると思いますが、これにはちゃんと理由があるのです」

副村長のネイ氏は、なぜバウマイスター伯爵領の領民になるのを受け入れたのか。

その理由について説明し始める。

「それは、この集落が成立した理由から来ています」

一万年以上も昔、この集落の住民の先祖はリンガイア大陸に住んでいた。

「大崩壊により、我らの祖先は危険なリンガイア大陸から南の海に逃れたのです。ですが、その海も安全ではありませんでした」

船で海上に出た彼らは、大量に出現した海竜の群れに襲われその多くが犠牲となった。

「あれ？　魔物は古代魔法文明崩壊後に生まれたのでは？」

「伯爵様、海竜は動物だ。急に海上に多くの人が逃れたから集まったんだろうな。餌が一杯あるって」

「そのとおりです。我々の祖先も大半が海竜（サーペント）に食べられてしまい、わずかな生き残りのみがこの島に逃れたわけです」

生き残りはわずか三十名ほど、船も壊れ、多くの物資や道具も失い、この島でほぼ一から文明を築き直す事になった。

「そんなわけでして、いい移住先があれば喜んで向かいます」

「この島に住まないのか？」

「少なくても、我々には拘りがありませんから。この島は、九割の領域が魔物の住む場所なのです」

「あれ？　魔物の領域も古代魔法文明崩壊後なのでは？」

膨大な魔力が爆発して各地に飛び散り、強い魔力の塊によって魔物と魔物の領域が生まれた。

ならば、崩壊直後に上陸したこの島が魔物の領域になるのはおかしくないか？

「昔は普通の森だったそうです。それが、あの南山を中心として徐々に魔物の領域が広がっていきました」

副村長は、頂上に根雪が残っている山を指差した。

魔物の領域が完成する途上に巻き込まれ、彼らは海岸沿いのわずかな土地に住めるだけになった。

「魔物に殺された者は数えきれません。島のわずかな土地で養える人数は限られていますし、必要な物資も集まり難いですし、何より食料が不足しやすく……」

人が使える土地が狭い以上、農業にも限界がある。

狩猟も、動物に関してはほとんどあてにならないはず。

魔物を狩るといっても、普通に人間にはかなり困難な作業だ。

この人口だと、魔法使いも滅多に出ない。

結果、一万年で大して人口も増えなかったわけだ。

「脱出は考えなかったのか？」

エルが、ならば他の島に移住すればいいのにと言う。

「実はこの島、周囲を海竜（サーペント）の住処や縄張りに囲まれておりまして……」

小さな船で出航したら、たちまち海竜（サーペント）の餌になってしまうのか。

「そんなわけでして、どこかいい移住先があれば喜んで従います」

「ない事もないけど……」

南方諸島でいくつか無人島があるので、そこで漁やサトウキビ栽培をすればそう生活に困らないはずだ。

現在、帝国でも消費量の増大で砂糖が不足しており、ペーターから生産量を増やしてほしいと頼まれていた。

新フィリップ公爵であるアルフォンスをせっついてビートの栽培も増やさせているそうだが、この世界のビートは品種改良が進んでいないので糖分が低い。

大量に作らないといけないので、なかなか需要に追いつかない状態だそうだ。

「サトウキビの栽培なら、普段からやっているので大丈夫です」

確かに、集落の周辺にある小さな畑にはサトウキビが植わっていた。

その代わりに、他の作物はわずかな芋と野菜くらいしか植わって

いない。
農地にできる土地が少ないようで、土地のやり繰りに苦労しているようだ。

「空を飛ぶ船があるのなら、我らは脱出できますとも」

「よかったなぁ」

「やっとこの島から出られるね」

この島は、住民達に異常に人気がなかった。
故郷への思いとか、郷土愛とか微塵も存在しないようだ。
副村長以下、すべての住民が移住できると喜んでいる。

「少しは故郷に未練とかないのか？」

「未練ですか……まったくないとは言いませんが、差し迫った状況がありまして……」

副村長は、エルの疑問に焦ったような口調と態度で答えた。
どうやら一刻も早くこの島から出たいようだ。

「なぜ急ぐんだ？」

「若い騎士様。この島は海竜（サーペント）の住処に囲まれているのです。海竜（サーペント）は本来陸地にはあまり近寄らないのですが、この島は例外です。今年も漁に出た者が三名も食われまして、魚が獲れないので食料が不足しているのです。村長に撃退をお願いしているのですが、最近は海竜（サーペント）の襲撃が増えておりまして。どうやら、人間の肉の味を覚えてしまったようです」

人間は毛が少ないから、肉食の野生動物や魔物が好んで食べると聞いた事がある。
そして一度人肉の味を覚えると、繰り返し襲撃するようになると。
ああ、それは熊か。

「というわけでして……「副村長！　出たぞぉーーー！」」

「またか！」

突然村人らしき男性の叫び声が聞こえ、俺達が海上を見ると数匹の海竜（サーペント）の姿が見えた。
海竜（サーペント）達はこちらを見つけると、首をかまげてこちらに向かってくる。

「女、子供は逃げろぉーーー！」

「魔物の領域には入るなよ！」

突然の海竜（サーペント）による襲撃で、住民達は急ぎ内陸部へと逃げていく。
あまり森の奥深くまで逃げると魔物に襲われるので、ギリギリ奥まで逃げるようだ。

「（毎日のように怪獣に襲撃されているのか……）そりゃあ、移住を希望するよな」

船で逃げようにも、海竜（サーペント）に見つかって捕まってしまう。
人口から考えると魔法使いは滅多に出現せず、彼らは海竜（サーペント）の襲撃に怯えながら生活するしかなかったわけだ。

「村長様に撃退してもらうしかねぇだ」

「だが、村長はお疲れじゃねえか？」

「んだども！」

このところ海竜（サーペント）の襲撃が頻繁なようで、村長とやらは疲れているらしい。

だから、俺達が現れても顔すら出さないのか。

それにしても、どんな村長なんだろう？

「村長を呼びに行ってくるだ」

「つい半日前にも襲撃があって、海竜（サーペント）を追い払うのに魔力を消費してしまったべ！　みんなで森の奥に避難するべ！」

「それはええが、村はどうする？　村長様が追い払ってくれないと、家や畑が壊されてしまうだ！」

海竜（サーペント）は水生生物だが、陸上で活動できなくもない。

海岸から百メートルくらいなら普通に陸上でも活動できた。

餌となる人間を捕えるために、村の家を破壊するくらいの事はできるのだ。

もし村の家や畑が破壊されてしまうと、海竜（サーペント）からは逃れられても住む場所は破壊され、作物も駄目になって将来食料が不足してしまう。

村長はそれを防ぐために、オーバーワークを強いられているようだ。

「村長にこれ以上無茶をさせるのは……」

「それはわかってるだ！　んだども、他に方法が！」

「大丈夫、私が海竜（サーペント）を追い払うから！」

村人達が言い争っていると、遂に噂の村長が姿を見せた。

「ええーい！　海竜（サーペント）覚悟しろ！　私が追い払ってやるんだからぁ！」

「「「「「……」」」」」

海竜（サーペント）による襲撃の多発で村長の魔力の消費は激しいようだが、やる気は十分なようだ。

だが、村長の姿を見た俺達は絶句した。

なぜなら……。

「あの……お嬢さん？」

「あっ、凄く格好いいお兄さんだ。お兄さんも避難しないと駄目だよ」

「そのつもりだけど、お嬢さんが村長さんなのかな？」

「うん、私が村長さんだよ」

村長は女性であった。

イケメンであるエーリッヒ兄さんに話しかけられると、とても嬉しそうに答える。

いついかなる時も、イケメンは得だという証拠だ。

いや、問題は村長が女性だからではない。

あまりに幼すぎるのだ。

「私は村長のルルだよ。よろしくね」

「こちらこそ、私の名前はエーリッヒです」

「エーリッヒ様ですね」

このルルという村長、どう見ても五歳くらいにしか見えない。

年齢の割にしっかりしているように見え、イケメンであるエーリッヒ兄さんと楽しそうに話しているが、こんな子供に村長をやらせて海竜（サーペント）撃退までさせているとは……。

「おい、ジジイ」

「仕方がないんですよぉ！　魔法を使えるのが村長しかいないから！　我々だって苦渋の決断なのです！」

幼女に海竜（サーペント）を撃退させている村人代表である副村長をエルがジト目で見つめ、それに副村長が全力で言い返した。

自分にそれができるのなら、とっくにやっていると。

「成人男子で警備隊くらい作れよ！」

「彼らは住民の避難で精一杯なのです！　それにもし海竜（サーペント）撃退で負傷や死亡したら、誰が畑を耕すのです？　我々だって精一杯で、村長もそれをわかってくれているから……」

どうやらこの村、俺達が思っている以上に切羽詰まっているようだ。
エルもそれ以上は何も言えなくなってしまった。

「大丈夫です。私が撃退しますから」

「あのよ。それは結構な事だが、お嬢ちゃんの杖は？」

「杖？　杖って何に使うの？」

「「「「「……」」」」」

続けて、俺達は絶句してしまった。
何と、このルルという幼女は杖を持っていなかった。
この年齢で中級相当の魔力を持つのだから天才レベルの魔法使いだと思うが、それでもまだ中級なので杖がないと魔法の威力が落ちてしまう。
この年で、一人で、杖なしで海竜（サーペント）の群れに立ち向かっている。
実は中級なら海竜（サーペント）は倒せない事もないのだが、なぜ撃退しかできないのかようやく理解できた。

「副村長さんよ」

「杖なんてどうやって作ったらいいかわからないし、上陸時に持ち込めた荷の中にもなかったんですよぉ！」

エルに続きブランタークさんが副村長に苦言を呈し、彼は再び強く反論する。
もし持ち込めても、杖が一万年保つという保証もないか。

「大丈夫です、私が海竜（サーペント）を撃退しますから！」

幼いのに使命感に燃えているようで、ルルは自分が海竜（サーペント）を退治すると宣言した。

だが、俺達がいてこの子に海竜（サーペント）退治を任せるわけがない。

彼女の代わりに、海竜（サーペント）の前に出た。

「あっ、俺が退治するから」

「お兄さんがですか？　大丈夫ですか？」

どうやらこの子、魔法は独学以前にほぼ勘のみで使っていたようだ。

俺、導師、ブランタークさんを見ても魔法使いだと気がついていなかった。

他の魔法使いの実力を計る概念が存在しないのであろう。

「大丈夫。俺も、この小父さん達も魔法使いだから」

「そうなのですか」

ルルは、俺達を興味深そうに見つめた。

「これは、一から基礎を教えてやらないと駄目だな。まあ、それは後だ」

ブランタークさんがルルを自分の後ろに庇い、俺と導師が最前線に立つ。

「エーリッヒ様？」

「彼は私の弟なのだけど、優秀な魔法使いだから大丈夫」

「エーリッヒ様がそう言うのなら」

エーリッヒ兄さんの説明で、ルルは納得したようだ。

やはりイケメンの説得力は絶大だな。

「数は多いみたいだけど、所詮は海竜（サーペント）だからな」

海竜（サーペント）なんて、見た目が竜なだけだ。

退治など、さほどの難事でもない。

ヴィルマなんて、肉が美味しくて効率のいい獲物だって言っているくらいなのだから。

「バウマイスター伯爵、某もやるのである！」

「導師、遺骸の回収が面倒なので引き寄せてくださいよ」

「今日は、海竜（サーペント）の肉でバーベキューである！」

俺と導師が迫りくる海竜（サーペント）をギリギリまで引き寄せ、ブランタークさんは万が一に備えて魔法の準備をしていた。

エルも念のために戦闘態勢に入っている。

「ヴェル、数が多いみたいだけど……」

「海竜（サーペント）は弱いので安心してください。数の多さは不利になりません」

「やはり魔法使いは凄いんだね。漁師達は恐がっていると聞くけど」

文官肌のエーリッヒ兄さんからすれば、全長二十メートルを超える海竜（サーペント）が複数自分に迫ってくれば怯えて当然であった。

俺達は、色々と物凄いのを相手にしすぎて感覚が麻痺しているだけだ。

「導師、数が増えていませんか？」

最初に比べると、こちらに押し寄せる海竜（サーペント）の数が増えたような……。

ああ、俺達がいるから餌が増えたと思ったのか。

しかも、逃げないで堂々と砂浜に立っているし。

「ちょうど十匹なので、半分ずつ倒すのである！」

「わかりました」

俺は海水から氷で巨大なランスを作ると、それをぶん投げて海竜（サーペント）の口の中に突き刺した。

突き刺さった氷のランスは一撃で海竜（サーペント）の後頭部まで貫通し、即死した海竜（サーペント）はその場に崩れ落ちてしまう。

急所である延髄を貫けば、どんな生物でも即死して当たり前だ。

「次は某である！」

導師はその身に『魔法障壁』を纏うと、『飛翔』して海竜（サーペント）に接近し、魔力を篭めた拳で海竜の頭部を殴った。

それだけで海竜の頭部が大きく凹み、そのまま倒れてしまう。

続けて、魔力を篭めた足で海竜（サーペント）の首にすれ違いざま蹴りを入れる

と、それだけで首がちぎれて死んでしまった。

引き寄せてからの攻撃だったので、俺と導師の前に広がる海岸は海竜（サーペント）の血で真っ赤に染まった。

なお、大半が導師の仕業である。

「あーーーあ」

「えっ？　駄目ですか？」

海岸の惨状を見て、ブランタークさんは溜息をついた。

「首がちぎれてしまったのは、海竜（サーペント）がモロすぎるせいである！」

「ハグレの個体ならいいけどよ。巣の近くだから、追加で血に釣られてくるぞ」

「そうだったのである……」

導師が言い訳をしたが、ブランタークさんはそんなものは関係なく他の海竜（サーペント）が血で引き寄せられてくると彼に文句を言った。

「乗りかかった船である！　全滅させてしまうのである！」

「導師、その言い方は正しいのですか？」

「どうせ海竜（サーペント）は団体で来るのである！　精々歓迎してやるのである！」

それから一時間ほど、俺と導師の奮戦によりおびただしい数の海竜（サーペント）

竜が討伐されたのであった。

「夕食分にしては多すぎですね」

「数が多かったなぁ。これだと暫く南に海上船を回さない方がいいかなぁ……」

結局、俺と導師により二十八匹もの海竜（サーペント）が退治された。
現在夕食用に船に乗っていた調理人達が肉を切り分けているが、追加で来ないという事はこの近辺の海竜（サーペント）は全滅したのであろうか？

「海竜（サーペント）の生態はわかっていないから、ヴェルと導師殿が強くて隠れただけかもしれないよ。他に巣がない保証もないからね」

冷静で慎重なエーリッヒ兄さんは、この周辺の海竜（サーペント）が全滅した確証がなく、油断は禁物だと俺に釘を差した。

「暫くは、魔導飛行船を運用するしかありませんね」

海上船を運行させて海竜（サーペント）の群れに襲われたら目も当てられない。
暫くは魔導飛行船を用いないと、南方諸島以南の島々に移動できないはず。

「陛下には事情を説明しておくよ。大型船に余裕はないけど、もっと中型、小型の魔導飛行船を回してもらう。幸い、就役する船は増えているからね」

今回は『何か見つかったら、調査に参加するのであるな』と、バウマイスター伯爵領内の地下遺跡発掘に出かけてしまったアーネストだが、彼のおかげで発掘され、稼働する魔導飛行船が増えていたのは確かであった。

船を動かす人員の確保が大変であったが、それも王国空軍が訓練を請け負う事になった。

空軍軍人の採用も増えており、貴族の子弟は職が増えたと喜んでいる。

貴族の中にも、独自に魔導飛行船の運用を開始したり、運用する船を増やす者が多かった。

元軍人に領内の若者や家臣の子弟を預けて訓練させている。

「王国は中、小型船を国内で大量に運用し、大型船は南方や東方との連絡に使いたいみたいだね。新大陸や無人の島々の開発も視野に入れているのさ」

南方開拓を進め、ヘルムート王国全体の国力を増す。

ちょうど魔族という新しい仮想敵国も誕生したので、開発の促進は必須というわけだ。

帝国も独自に動くかもしれない。

俺とペーターは友人同士だが、個人的な友好関係と国家同士の関係は別だからな。

王国を出し抜くような策を弄するかもしれないから、今のうちにやれることはやっておかないと。

「この島の魔物の領域は、あとで探索と試しに狩猟をさせてみます」

魔の森みたいに貴重な魔物や採集物があれば、無理に解放する必

要はない。
ここに冒険者専用の町を作り、冒険者の島にしてしまえばいいのだから。

「開放してから開拓しても限度があるか。大きな山もあるし」

「その前に、まずは住民達の脱出ですね」

今日はもう海竜（サーペント）は来ないはずだから、一泊してから彼らを移住させなければいけない。
南方諸島で開発中の場所があるので、そこに移住させて暫く生活を支援すれば大丈夫であろう。
サトウキビの栽培経験があるそうなので、すぐに仕事も始められるはずだ。

「脅威だった海竜（サーペント）の肉がこんなに美味しいとは」

海竜（サーペント）は大量に獲れたので、船員や村人達にも提供された。
この島の住民は、久しぶりにお腹一杯食べられるようでとても嬉しそうだ。
またいつ海竜（サーペント）が現れるかもしれないので、探索を一時中断して彼らを輸送する事にもなった。
この島を出られる嬉しさもあり、村人達は楽しそうに談笑しながら焼いた海竜（サーペント）の肉を食べている。

「南方諸島のどこかに移住してもらうかな」

「それがいいだろうね」

似たような気候と環境なので、すぐに慣れるはずだ。

俺もエーリッヒ兄さんとそんな話をしながら食事を取っていたのだが、一つ気になる事があった。

「ヴェンデリン様、お肉のお代わりをどうぞ」

「うん、ありがとう」

「ヴェンデリン様は偉大な魔法使いなのですね」

「そうかな？」

「そうですよ。私なんて一匹も倒せなかったのに」

ルルの代わりに海竜（サーペント）を退治してしまったせいか、俺は妙に彼女に懐かれてしまったのだ。

海竜（サーペント）退治は導師もやっていたのだが、彼は元々子供受けがあまりよくない。

ブランタークさんは万が一に備えて準備はしていたが、実際に魔法を放っていない。

結果、俺は五歳の幼女に物凄く付き纏われていた。

「ははははっ、ヴェルはモテモテだね」

ルルは魔法使いの素質がありながらも、現時点では中級レベルで、杖も持っていなかった。

海竜（サーペント）の襲撃頻度が上がって魔力の回復も万全とはいえず、もしあの時ルルだけが海竜（サーペント）を迎撃していたら負けていたかもしれない。

「そこにヴェルが救世主として現れたからね。魔法の威力も桁違いだし、好かれて当然だよ」

これは、エーリッヒ兄さんの発言である。
なお、彼も導師の事は軽くスルーした。
わざわざ導師が子供受けしない事実を口にして、彼に睨まれる必要はないというわけだ。

「ヴェル、お前は色々なタイプの女性にモテるな」

エルの奴、自分の事じゃないからって……。
あとで覚えていやがれ。

「ヴェンデリン様には奥様がいるのですか？」

「うん、それも複数」

エルは他人事なのをいい事に、軽くルルからの質問に答えていた。

「ヴェンデリン様ほどの偉大な魔法使いなら当然ですね。私も立派な魔法使いになって、ヴェンデリン様のいい奥さんになりますね」

「……」

そう言いながらニッコリと笑うルル。
現時点では娘のような年齢の幼女であったが、大きくなれば美人になると思う。
ただし、今は幼女でしかない。
愛でるよりも、保護する対象でしかないのだ。

「聞けばこの娘、家族がいないそうだぞ」

先ほど副村長から詳しい話を聞いたのだが、元々ルルは村の漁師の一人娘であった。
父親は彼女が生まれてからすぐ海竜（サーペント）に食われてしまい、その直後に母親も病で亡くなってしまった。
孤児となってしまったルルだが、生まれながらに魔力があったため、村の決まりとして村長に就任。
魔法使いが生まれなければ、副村長の家が代々村長を出す仕組みらしい。

戦闘力がある魔法使いに村長という地位を与え、実務は副村長が行うであろうから、半分名誉職みたいなものなのであろう。

「移住先で、魔法使いを村長にする必要もないからな」

そこなら海竜（サーペント）の襲撃もないわけだし、代々本来の村長で経験もある副村長に任せた方が安泰であろう。
ところが、ここでもう一つ問題が発生した。
村長としての役割を終えた彼女の養育を誰が担当するかであった。

『バウマイスター伯爵様、我々ではルルに魔法を教えられません。よろしくお願いします』

ルルは既に両親を亡くしている。
親戚もなく、魔法で海竜（サーペント）を追い払う仕事もなくなった。
そこで、彼女が立派な魔法使いになれるように養育してほしいと、副村長が俺に頼んできたのだ。

「ええと……」

「はい、喜んでお引き受けします」

俺が返事をする前に、エーリッヒ兄さんが了承してしまった。

「エーリッヒ兄さん？」

「断る理由もないじゃない。ルルちゃんは優秀な魔法使いになるわけだから、バウマイスター伯爵家で囲わない理由があるかな？」

エーリッヒ兄さんは優しくてイケメンだけど、貴族としても優秀であった。

ルルを俺が囲い込んで当然だと言う。

「身寄りのない魔法使いの子供、存在が知れたら貴族同士で奪い合いになるよ？　その方が、ルルちゃんにとって大変になるかもしれない」

変な貴族に囲われると、一生大変な目に遭ってしまうかもしれないのは事実だ。

ましてや、ルルは女の子なのだから。

「幸いにして、ヴェルはルルちゃんに尊敬されているからね」

そして好かれてしまった。

俺の妻になると公言して、村人達や船員達もそれはよかったという顔をしている。

というか、誰か一人くらい異議を唱えてほしい……無理か……俺が村人でも伯爵様には何も言えないよな。

「暫くは、娘の面倒でも見ているのだと思えばいいんじゃないかな？」

エーリッヒ兄さんは随分と軽く言ってくれたが、翌日以降も幼女は俺の傍を離れなかった。
仕方がないので、魔法の訓練をさせながら島の住民達の移住作業を指揮する。
魔導飛行船に村人と荷物を載せ、携帯魔導通信機でローデリヒと連絡を取り、指定された開拓村へと運んでいく。

何往復かする必要があるので、俺達は島に残った。
海竜（サーペント）の襲撃に備えるためと、再びここから探索を始めるためだ。

「ルル、三番を一つ上げ」

「はい」

「四番も一つ上げ」

「はい」

「七番は一つ下げ」

「はい……ああっ！」

ルルに俺が考案した魔法の鍛錬方法をやらせてみたが、まだ子供なのですぐに失敗してしまった。
この鍛錬方法は目の前に十個の小石を並べ、まずは全部を目線の高さまで宙に浮かせる。
物を動かす魔法は基礎中の基礎なので、それを利用した鍛錬方法だ。

小石に番号をつけ、一つ上げと言ったら指定された小石を目線の高さから五十センチほど上げる。
下げと言ったら、同じく指定された小石を五十センチほど下げる。
簡単なゲームのような鍛錬方法であるが、これが意外と難しいのだ。
小石は十個あるので、すべて指示された高度を維持するのが難しい。
ルルのように不慣れだと、指示に従おうとして一つの小石を動かそうとした瞬間、他の小石のコントロールが疎かになって落下させてしまうわけだ。

「なかなか上手く行かないです」

「最初は誰も上手く行かないものさ」

「ヴェンデリン様もですか？」

「これは俺が考案したんだけど、考案者でも駄目だった」

アグネス達にも教えてやらせたのだが、やっぱり最初は全然駄目だった。
一時間続けてできるようになったら、大したものというレベルの鍛錬方法なのだ。
ブランタークさんは、何の苦もなく三時間ほどやってみんなを驚かせていた。
導師は十分も保たないで、逆の意味でみんなを驚かせていたが。

「さて、休憩だな」

「ルルは大丈夫ですよ」

「ルル、魔法の道は一日にして成らず。鍛錬も大切だが、ちゃんと休憩もしないと駄目だよ」

「わかりました」

実際に接してみると、ルルは素直で可愛い子であった。

話をしたり、魔法を教えていると、まるで娘でもできたかのような気持ちになってくる。

これからフリードリヒ達も大きくなって話をしたり、一緒に遊んだりできるようになるであろうから、その予行練習のような気持ちになってくるのだ。

「今日のオヤツは、魔の森のフルーツを使ったケーキだよ」

「うわぁ、凄いです」

魔法の袋から取り出した生クリームとフルーツたっぷりのケーキに、ルルは目を輝かせた。

この島にも甘味は存在していたが、それはサトウキビから採れる砂糖のみ。

しかも、これは生きるためのカロリーベースとして計算されている。

オヤツでお菓子を食べる余裕など、この島には存在しなかったのだ。

「いただきます」

ルルは、美味しそうにケーキを食べている。

鼻の先にちょっとクリームがついているのも、余計にその可愛ら

しさを増していた。

「なるほど、この前イーナが読んでいた本にあった。とある男性が小さな女の子を引き取って、理想の女性に育て上げるんだ……うべら！」

「ヴェンデリン様、エルさんはどうして倒れているのですか？」

「石にでも躓いたんじゃないかな？」

「そうなのですか？」

「ルル、王都のお店で買ってきたクッキーもあるよ」

「わーーーい、ありがとうございます」

俺は妙な事を抜かしたエルに、ルルから気がつかれないよう『エアハンマー』で地面に押しつけた。

エルは、まるで車に轢かれたカエルのように地面にへばりついている。

人を光源氏扱いしやがって。

というか、この世界にも似たようなお話があるんだな。

なぜイーナがそんな話を読んでいたのか、ちょっと疑問が残ってしまったが。

「あとは夕方まで訓練して、夕食後には簡単な漢字を教えてあげよう」

「ありがとうございます」

この島の住民はひらがな、カタカナの読み書きはできた。
ルルもまだ五歳なのに、頭がいいようでほぼ読み書きはできる。
でなければ、この幼さで納得して海竜の迎撃はしないよな。

だが、漢字が読める人がいなかったので、俺がルルに教育する事にしたのだ。
魔法使いが記した本の大半は、漢字が使用されている。
漢字を覚えないと本が読めないので、急ぎ覚える必要があったのだ。

「ヴェンデリン様のお話が聞きたいです」

「昔のお話でいいかな？　俺はルルよりも魔法に目覚めたのがちょっと遅かったな。暫く一人で修行をして、たまたま師匠に出会って……」

「凄いです」

純真なルルは、俺の話を目を輝かせながら聞いている。
一緒に夕食を食べ終わると、少しの時間、簡単な漢字から教えていく。
ルルはまだ幼いので就寝の時間は早いからだ。

俺も特にする事がないので、漢字の勉強が終わると彼女が早く寝つけるようにお話をしてあげた。
まるで父親のような事をしているが、副村長は涙を流して喜んでいる。

「この子は父親の顔を知らないのです。きっと今のルルは、バウマ

イスター伯爵様を父親のように思っているのでしょう」

いや、副村長。

感動しているところを悪いんだが、あんたの認識は一歩遅いと思う。

「ヴェンデリン様、ルルは早く大きくなっていいお嫁さんになりますね」

「……それは楽しみだなぁ」

拒絶するとルルに泣かれるような気がして、どうせ大きくなるまでの間に、別のいい男性が現れるさ……。

無理やりそう思う事にして、彼女におとぎ話代わりに自分の昔話を続けるのであった。

第百四十七話　山積する問題、俺にばかり面倒が降りかかる。

海竜に襲われて逃げ込んだ人達が一万年以上も隠れ住んでいた島。
俺が参加したというか、一応団長である探索隊によって発見され、今は外に出られなかった住民達の移住作業が進んでいる。
その間、俺達は海竜の襲撃に備えて島に待機しつつ、俺はわずか五歳にして島の防衛を一手に担っていた南国少女ルルの面倒を見ていた。

ルルはオレンジの髪をショートボブにしているが、癖っ毛で外側に跳ねている。
頭に大きな貝殻の髪飾りをつけており、これは母親の形見なのだそうだ。
服装は、簡単な加工をしたスカート丈が短いワンピース風の服を着ている。

そんな、いかにも南国風の幼女がルルであった。

「ルルは杖を持っていないから、これをプレゼントしよう」

「杖ですか？」

「外の世界の魔法使いは、みんな杖を持っているんだよ」

まあ、上級になってしまえばただの飾りだけど。
今のルルには必要なものだ。

「知りませんでした」

ルル達の先祖は、島に杖を持ち込めなかったと聞いた。
魔道具職人もいなかったそうで、杖を自作できるはずもないから、ルルが持っているはずがない。
彼女が最初から上級レベルの魔力を持っていれば必要なかったのだが、現時点だと魔法を使うのに不利であった。

というか、杖もないのに一人で海竜を撃退し続けていたとは凄い。
撃退しかできなかったようだが、それでも大した偉業だと思う。

導師など、まだ幼いルルに敬意を払うくらいなのだから。

『いかに魔法使いが一人とはいえ、あの年で自ら村人達のために海竜に立ち向かう。並の人間にはできぬ事である！』

ただし残念なのは、彼は見た目のせいでルルにあまり好かれていなかった。
フィリーネのような存在はそうおらず、残念ながら導師の完全な片思いである。

代わりに俺は物凄く好かれてしまったわけだが、彼女の事情を考えると無下にはできない。
それに、ここ数日は娘を世話しているようで楽しい。
俺も現金な性格をしているから、可愛い幼女に慕われて嬉しくない事もない。
探索隊には母親代わりになる女性もおらず……男性しかいないから……、彼女の面倒は俺が見ていた。

「ルルにこの杖をプレゼントしよう」

俺は、魔法の袋の中から一本の杖を取り出す。
これは師匠の遺品の一つで、飛竜の魔石に近い部分の骨を削り出して芯にし、その表面を樹齢数千年の樫の木で覆ったものだ。
少し地味な杖だがなかなかの逸品で、魔法の練習にこれほど適した杖はなかった。

杖に魔力が素直に乗るので、初心者が練習するには最適なのだ。
師匠も若い頃に練習で使っていたと言っていた。

「これで練習して、ルルが成人した時に新しい杖を贈ろう」

「ありがとうございます。杖を貰えるなんて、これは婚約指輪みたいなものですね」

「……」

ただこの子、幼くして村の安全に責任があったせいか、妙に大人びている部分があるというか……。
俺が杖を贈るイコール結婚を申し込む事だと思っていた。
一万年も孤立していた村なのに、婚約指輪なんて概念があったのかという気持ちと共に頭を抱えてしまう事態だ。

「ははははっ、ヴェルはモテていいな。エリーゼ達にどう説明するのか知らないけど」

「……」

「ふべらっ！」

再びエルが通りすがりにからかってきたので、俺は素早く奴の進

路上の砂浜に落とし穴を掘る。
前をよく見ていなかったエルは、そのまま落とし穴に落下した。

「エルヴィンさんはどうしたのですか？」

「みんな移住の準備で忙しく動いているから、砂浜に穴が空いていたのかな？　あいつもよく前を見ないから」

「そうなのですか」

俺はルルに、村人達が数百人も引っ越しの準備をしたせいで砂浜に穴が開き、偶々そこにエルが落下したのであろうと嘘をついて誤魔化した。

「お前なぁ……一旦戻ったらどうだ？　この島は覚えたんだろう？」

エルが落とし穴から這い出ながら、俺に忠告した。
ルルの事をエリーゼ達に知らせておいた方がいいと言うのだ。

「女の子だからな。世話をする同姓がいた方がいいか？」

「それもあるな」

エルの忠告に従い、俺は『瞬間移動』でバウルブルクの屋敷へと飛ぶのであった。

「ヴェル……あなた……」

「イーナ、お前は物凄く誤解していると思うぞ」

ルルと屋敷に戻ると、最初に彼女を見つけたイーナが深刻そうな表情をした。

あきらかに、俺の人間としての尊厳を疑い、あらぬ疑惑を抱いているような目だ。

「この子は……」

「可愛いから連れてきちゃったのかしら？」

「ちゃうわ！」

人を誘拐犯扱いするな！

「ヴェンデリン様、ルルはいらない子ですか？」

「そんな事はないさ。ルルはいい子で可愛いなぁ」

俺の怒鳴り声を聞いたルルが涙目になってしまったので、俺は彼女が泣きださないように宥める羽目になってしまう。

「えっ？　やっぱりそうなの？」

「ここで『違う！』と叫ぶと堂々巡りだな……実はこの子は……」

屋敷のリビングに移動してみんなを集めてからルルの話をすると、

みんな一応納得してくれた。
貴重な魔法使いの子供で身寄りがない。
貴族達による醜い争奪戦が始まるのは必至であり、俺が保護しても仕方がなかったからだ。

「とはいえ、猫の子ではないのじゃ。面倒を見る以上は、最後までじゃぞ」

テレーゼ、その言い方だとまるで犬や猫の子みたいだけど。

「その最後までって？」

「普通、こういう場合はの。一族の年配の女性、それも未亡人などに預けるのが常識じゃ」

同じ女性が育て、その子が成人したら選択肢は複数存在する。
恩返しでその貴族家に仕えてもいいし、預かった貴族に嫁がなくても、その子や家臣に嫁ぐという選択肢もある。
だが、俺の場合は島で数日間直接面倒を見てしまった。
目撃した村人や船員は多く、彼らが俺とルルの関係をどう見るのか？

「相変わらず魔法以外では迂闊じゃの。ちゃんと最後まで面倒を見るのじゃぞ」

「ルルは、ヴェンデリン様のいい奥さんになります」

「そうか、頑張って精進せいよ」

「はい」

「いい返事じゃの」

おい、テレーゼ。

小さいルルを煽らないでくれ。

「聞かずとも、この年でなかなかの魔力。成長すればいい魔法使いになろう。嫌がられているのならともかく、ここで囲わずにどうする？」

貴族の中の貴族であったテレーゼに指摘され、俺はまったく反論できなかった。

「ルルちゃんはあなたを慕っているのですから、ここはバウマイスター伯爵として面倒を見てあげませんと」

エリーゼは元々神官なので、身寄りのない子供を預かる事に何の抵抗感もなかった。

ルルが俺の嫁さんになるという発言も、罪のない子供の発言という認識のようだ。

「それよりもさぁ」

「そうですわね」

「えっ、何？」

ルイーゼとカタリーナが可哀想にという表情を俺に向けたが、俺にはその理由が理解できなかった。

「ヴェル様、あの三人」

「三人？」

俺が意味もわからず首を傾げていると、そこにアグネス達が飛び込んできた。

「先生！　五歳の女の子を奥さんにしたって本当ですか？」

「先生、順番が逆ですよぉ！」

「探索に私達を連れて行かなかった理由はこれだったのですか？　先生は幼い子が好きで、そういう子を探すために私達を連れて行かず……」

教え子三人娘に縋られ、俺はタジタジになってしまう。

「五歳の子がいいのなら、私はもう十五です！　全然構わないじゃないですか！」

「アグネス、お前は何を誤解してるんだ？」

「先生は、もっと若くて才能がある子がいたから私に飽きて！」

「なぜそうなる？」

アグネス、お前はまだ修行中の身じゃないか。

飽きたとか、そんなわけがない。

「先生！」

「シンディもか？」

「私、この子ほど若くないけど、三人の中では一番若いですから！」

別に俺は、女性は若ければ若いほどいいなんて思っていない。

俺がロリコンなんじゃないかと思うのはやめてくれ。

「先生、ごめんなさい。私達が無理を言ってでもついて行けばよかったんです。奥様達もいなくて、つい若い女の子の目が行ってしまって……でも、先生は男性ですから」

ベッティ、その間違った認識を頼むから声を大にして言わないでくれるか？

エリーゼ達が肩を震わせて笑っているんだけど……。

「ベッティの言うとおりですね。探索には私達もついていきます」

「このまま男の人だけで探索を続けると、先生がどんどん女の子を拾ってしまうから！」

シンディ、俺に女の子を拾う趣味なんてないから。

「先生は優しすぎるんです。安心してください！　私達が壁になりますから！」

三人の勘違いにより、俺はエリーゼ達に死ぬほど笑われてしまった。

「久々に大傑作だな！　ヴェル、モテる男は大変じゃないか！」

特にエルには大爆笑されてしまうが、ここは屋敷内だ。
エルに魔法で天罰を与えるわけにもいかず、俺はただこの世の不条理さに溜息をつくのみであった。

エリーゼ達に事情を説明にしに行って大爆笑されてしまったが、探索は再開される事となった。
あの島の住民は、すべてバウマイスター伯爵家が管理する南方諸島にあるサトウキビ農園へと移動した。
ここには製糖工場も建設する予定で、彼らはサトウキビ農家か工場の従業員として働く。
砂糖は高価なのでそれなりの給料も出せ、海では漁もでき、自分と家族で食べる小さな畑も作れる。
前の島よりは生活が豊かになるので、みんな喜んでいた。

島の九割以上を占める魔物の領域については、あとで有志冒険者を募って魔物の種類や採集できる品を確認する予定だ。
何か珍しい素材や採集物が入手可能ならば、村の跡地に冒険者ギルドと宿場町を作って冒険者の島にしてしまえばいい。
冒険者の数が増えれば、魔導飛行船を定期的に飛ばす予定だ。

それはあとでやるとして、今は未確定領域の探索だ。
島を出発した魔導飛行船は、順調に南下を続けている。

アグネス達の熱意というか、勘違いゆえの暴走の効果により、男性ばかりだとトラブルが起こると彼女達がついて来てしまった。
エリーゼ達が断ってくれればいいのだが、面白がって許可してしまうから、三人は俺の傍にいる。

それと、ルルも相変わらず俺にひっついたままだ。
飛行中は何もする事はないので、アグネス達はできる限りルルに魔法を教えている。
これは師匠が言っていたのだが、人に魔法を教えるのは決して弟子のためだけではないそうだ。

『人に教える事によって、自分の魔法を理論的に系統立てて考えられるようになったり、今まで手が届かなった魔法のヒントに繋がる事もある。自分のためでもあるんだよ』

アグネス達も、ルルという未完の大器に教える事で何かを得られるであろう。
そう説明したら、熱心にルルに魔法を教え始めた。

そして、やはりルルは小さな女の子なので、面倒を見るためにアマーリエ義姉さんもついてきた。
彼女は二人の育児経験があるので、安心してルルを任せられる。

「私の場合、実は男の子の育児経験しかないけど」

「それでも、俺が全部面倒を見るよりはいいですよ」

それを言うなら、俺なんて育児経験すらほとんどないからな。
しかも相手は女の子だ。

実は、どうすればいいのかいまだにわからなかった。

「それにしても、好かれたものね」

確かに、ルルの俺への傾倒ぶりには凄いものがあると思う。

特に彼女に好かれるような事はしていないのだが。

「わからない？」

「はい」

「ルルちゃんは年齢よりもしっかりしているけど、それはそうならざるを得なかったのよ」

唯一の魔法使いとして、わずか五歳にして村人数百名の命を背負っていたのだ。

大人になるしかなかったのであろう。

「でも、それは大きな負担だったと思うわよ」

わずか五歳なのだから当然だ。

前世の俺が五歳の頃なんて……バカだったから何も覚えていないな。

そうだ！

『仮面〇イダー』になりたいって幼稚園で言ってた。

男はバカだな。

「海竜の集団が迫り、今回はもう駄目だと思ったその時、ヴェル君が颯爽と姿を現した。しかも、自分では追い払うのが精一杯だった海竜を倒してしまった。慕われて当然だと思うわ」

死も覚悟した時に、俺が海竜を倒したからか。

「ですが、導師も討伐には参加しています」

「導師様は、女性や子供には優しいけど、少し受けが悪いから……フィリーネさん以外……」

アマーリエ義姉さんは、言葉を濁しつつ導師がルルに好かれなかった理由を説明する。

ようするに悪役みたいで怖いからだ。

そしてルルは、自分の危機を救ってくれた俺を慕っているわけか。

吊り橋効果のようなものかもしれないが、彼女はまだ幼く身内もいない。

彼女が無事に成人するまで、俺が面倒を見てあげないと。

「ルルは女の子なので、男の俺にはわからない点が多いのですよ」

特にわからないのが服装などだ。

今のルルは、頭につけた貝殻の髪飾りは母親の形見なのでそのままであったが、服装はアマーリエ義姉さんがキャンディーさんから購入した小さな女の子用のワンピース姿であった。

王都でちょっと裕福な家の子が着るようなワンピースで、南の島の地味な服よりも鮮やかでフリルなどの装飾も沢山ついており、移住した元島民の子供達に羨ましがられていた。

『ルル、いいなぁ』

『色が綺麗な服ね』

『私もほしいなぁ』

『私も』

『ルルは将来バウマイスター伯爵様の奥方となり、ルルの子が我らの村長となる。だからじゃ。我慢せい』

ルルの服装を見て羨ましがった島民の女の子達に対し、副村長がルルは身分が違うのだから諦めろとかなり現実的な発言をした。

『じゃあ、私もバウマイスター伯爵様の奥さんになる！』

『私も！』

『私もなる！』

『おい……』

『申し訳ないです。つい……でも、村長なり町長なり必要ですから』

ところが、ならば私も俺の奥さんになると幼女ばかりが騒ぎ始め、俺は堪らず副村長に文句を言った。

副村長は謝りつつも、村を纏めるために村長は必要ですと反論を忘れない。

『村が落ち着けば、服は買えるから。キャンディーさんの服にはそれほど高くないものもあるし』

そんな事があったのだが、彼女じゃなくて彼はコーディネート能

力も超一流で、ルルはもっと可愛く見えるようになった。
幼女達はそれが羨ましいのであろう。

女性を綺麗に着飾るのは得意なのに、本人の見た目は化け物……じゃなかった、ちょっと変わっているというか……。
まるで、本当は心優しいのに、そうは見えないフランケンシュタインのようだ。

『まあ、この子は可愛いわね。将来は美人になるわよ。よかったわね、バウマイスター伯爵様。この色男！』

『あがっ！』

キャンディーさんは、他にも靴とか予備の服装や下着などもすべて的確に選んでくれたが、相変わらずのバカ力で俺の背中を叩くから息が止まるかと思った。
力の強さは導師といい勝負だ。

『女の子だから、男であるヴェル君には難しいところはちゃんとフォローするわよ。私も、娘が一人くらい欲しかったし』

アマーリエ義姉さんとそんな話をしつつ、魔導飛行船は南の海を飛行していく。
バウマイスター伯爵領南端は、海竜もほとんど出ず開発が進んでいる南方諸島の他に、大きな島などは今のところほとんど見つかっていなかった。

今までで一番大きな島は、ルルがいた海竜と魔物の楽園であったあの島だ。
あそこに一般人が住むのは難しいので、多分冒険者の島として開

発する事になるであろう。
他の島は、小さな無人島が多かった。
住んでいる人はおらず、人が生活していた痕跡もない。
これらの島の周囲にも海竜が出没するので、よほど強さに自信がなければ住めないのだから当然だ。

「バウマイスター伯爵、そろそろ探索を打ち切った方がいいのである！」

導師が俺に意見を述べた。
これはバウマイスター伯爵領確定のための探索であり、あまり遠方の島を押さえても意味がない。
統治コストがかかるし、王国もリンガイアによる南方への探索を計画しているはずだ。
あまりバウマイスター伯爵領を広げると王国が警戒するかもしれず、この辺で『ここまでがうちの領土だ！』と言って終わりにした方がいい。

導師は陛下の意向を理解しているので、俺にこんな事を言ったわけだ。

「魔導飛行船で三日ほど。そろそろ引き返しますか」

「そうだな。俺も嫁さんと娘に会いたいしな」

ブランタークさんも賛成し、そろそろ魔導飛行船をUターンさせようとしたその時、見張りの若い船員が大きな声をあげた。

「前方に巨大な島が見えます！」

「なっ！」

まさかここで、大きな島を発見してしまうとは。
もうちょっと早く引き返す決断をすればよかったか？

「とにかく、島の情報を探るぞ」

俺も徐々見えてくる島を観察してみるが、意外と大きな島だ。
しかも、無人島ではない。
港には、小さいながらも小型の木造船が複数置かれていた。

どうやら、海竜はそう頻繁に出現しないみたいだ。
この島の住民がバウマイスター伯爵家と今まで接触しなかったのは、北上すると海竜の巣や縄張りがあったからであろう。

「この島一つで生活が完結しているのか、もっと南に別の国などがあるのか？」

それは、島の住民に聞いてみないとわからないであろう。
とにかくこれが最後と、俺達は偵察と調査を始める。

「ちゃんとそれが聞けるのかは不明なのである！」

導師の言うとおり、いきなり余所者は排除するという危険な原住民族かもしれない。
接触には慎重を期するべきであろう。

「船長、上陸などはあとにする。上空から島全体の様子を探る方が重要だ。魔法と弓矢などの遠距離兵器の攻撃に注意してくれ」

「かしこまりました！」

「伯爵様、図分と変わった島だな」

上空から双眼鏡で島の様子を探るが、今までの島とは大分毛色が違う。

島の周囲はほぼ断崖絶壁で、砂浜や港にできそうな場所は少ない。

「岩ばかりなのか？　違うな、島内には自然も見えるな」

上空から島を観察すると、島の内部には自然や広大な田畑、町や支配者階級が住んでいそうな豪華なお屋敷も見える。

「伯爵様、これって火山の火口なんじゃないのか？」

「そう言われると」

島というよりは、火山の先端部分が海から突き出していて、その火口の中に居住地や自然が広がっている感じだ。

島の様子を見ると、既に数千年も火山は噴火していないものと思われる。

「バウマイスター伯爵、まるでミズホのようである！」

「そうですね」

島にある屋敷、家屋、田畑。

見れば見るほど、ミズホ公爵領のように見える。

ミズホより技術が発展していないようにも見えるが、農家らしき家屋が茅葺きだったりするので、そうとしか思えなかった。

「前にミズホ公爵が言っていた、別れた同朋ですかね？」

「かもしれないな」

実は、前にミズホ公爵から聞いた事があるのだ。

ミズホ人の祖先は未開地に保護国というか、自治領のような国を持っていた。

それが古代魔法文明崩壊の余波でそこに住めなくなり、彼らは次の移住先を求めて今のミズホ公爵領まで移動している。

まさに民族大移動だが、その時に袂を別ち別行動を取った集団が複数いたそうだ。

『はてさて、その連中は無事に新天地に移住できたのやら。今のところ、リンガイア大陸内において我らの同朋の存在は確認できない』

となると、彼らはリンガイア大陸の外に出た事になる。

西は魔族の国があるからないと思うが、北、東、南は可能性があり、今こうして南に住むミズホ人の存在を確認できたわけだ。

「それがわかっただけでも収穫だが、どうする？　伯爵様」

そう、ミズホ公爵領の住民とは別系統のミズホ人が住む島が見つかったのはいいが、さてここをどうするかだ。

「バウマイスター伯爵領内である！」

「いや、ここは王国が面倒を見ましょうよ」

無人島ならうちの領地でもいいが、この島、かなり大きい。

人口も、発展途上であるバウマイスター伯爵領よりも多いかもしれず、こんな連中をうちで抱え込んだらバウマイスター伯爵領の統治に大きな影響が出てしまう。

「ミズホ方式で行きませんか？」

ミズホ公爵領がミズホ伯国だった時のように、王国に従わせて交易の利益のみを取る。

それが一番余計な手間がかからず、もっとも利益を得られた。

「その可能性も陛下は考慮していると思うのであるが、まずはこの島の統治体制を探るのである！　必ずしも、絶対的な統治者がいる保証もないのである！」

もし島が複数の権力者に分割統治され、常に小競り合いなどが行われていた場合。

服属させようにも、誰を王国に服属させていいのかわからない。

導師は、まずはそれを探るべきだと断言する。

こういう時の導師って、いかにも優秀な陛下の代理人だよな。

普段も、これの五パーセントくらいは配慮してほしいものだが。

「幸いにして人が沢山集まっているのである！」

「人が？　って！」

導師が見つけた集団というのは、それぞれ二～三百名ほどの武装した集団が睨み合っており、つまり小規模な軍勢による戦が始まろうとしていたのだ。

その時点で、俺はこの島が平和でない事を察してしまう。

「導師、あきらかに戦ですけど……」

「そのようであるが、二つの集団があってちょうどいいのである！　情報源が二つあるのである！」

「いや、そんな素直に話してくれるのか？」

導師のあんまりな言い分に、ブランタークさんは頭を抱えた。

いかに小勢とはいえ、これから戦う集団の間に割って入ろうというのだから。

「大した魔法使いはいないのである！　中級がどちらにも一人のみである！」

俺も探ってみたが、導師と同じ結論が出た。

どちらも一人ずつ魔法使いがいるようだ。

そして彼らが敵対するのであれば、導師は力技で従わせるつもりなのであろう。

「某達なら問題ないのである！」

「勝てるでしょうけど、先にちゃんと話し合いをしません？　禍根が残るとあとで面倒ですよ」

それは殺される心配は少ないと思うが、もっと穏便に適当な集落や権力者らしき屋敷を訪問して話を聞けないのかと思ってしまった。

だが導師は強引であり、俺とブランタークさんを引き連れて二つの軍勢の間に割って入ろうとする。

争いを止めようとする意図もあるようだが、導師だとどちらも蹴散らしてしまいそうな気がする。

「先生！　私も行きます！」

「「私も！」」

続けて、アグネス達も俺達に同行すると宣言する。

「危険だからやめておけ」

相手は魔法を使えない集団だが、不意を突かれてアグネス達に何かあっても困る。

俺は三人の同行を却下した。

「先生、私達だって、これまでちゃんと訓練を積んできました」

「いつかこういう事態に対処する事も考えてです」

「それが今だと思うんです」

アグネス達は、もう自分達は子供ではない。

魔法使いとして戦力になるのだから、俺について行くと宣言した。

俺としては、まだ早いような気がするのだが……。

「伯爵様、自分の弟子には甘いようだな。嬢ちゃん達は実力でいえばもう一人前なんだぜ。連れて行ってあげな。俺もフォローするから」

「わかりました」

ブランタークさんに説得され、アグネス達も同行する事になった。

「油断するなよ」

「「「はい」」」

「じゃあ、行くか……」

魔導飛行船を着陸させるのは危険なので、俺達は『飛翔』で二つの集団の間に入ろうとする。

「空飛ぶ船だ！」

「船が飛んでいるぞ！」

上空に魔導飛行船を確認した彼らは、それを指差しながら驚いていた。

どうやら同じミズホ人でも、魔導飛行船を見た事すらないらしい。

この一万年ほどで、彼らは技術力を落としてしまったようだ。

「そこで睨み合う二つの軍勢！　今は争いをやめて話を聞け！　俺はバウマイスター伯爵だ」

こちらを無視して戦いを始められても困るので、全員で二つの軍勢の間に着地し、俺は大声で名乗りをあげた。

「魔法使いか？」

「瑞穂の民じゃねえな」

「空飛ぶ船って事は、島の外から来たのか？」

兵士達は、俺達と上空に浮かぶ魔導飛行船を交互に見ながらヒソヒソと話を続ける。

彼らはよく見ると、専業の兵士ではなかった。

指揮官クラスは豪華な戦国時代の武将が着けているような鎧兜姿であったが、残りの大半は粗末な装備しかつけていなかった。

ちゃんと隊列ができずバラバラであるし、領主をしている武将が農民を集めて編成したのであろう。

「貴殿は何者ですか？」

「「「「「「えっ？」」」」」」

片方の軍勢から指揮官とその副将らしく人物が姿を見せるが、俺達は驚いてしまう。

「女性なのか……」

領主なのか大将なのかよくわからないが、一人は足元まで伸ばした長い黒髪が栄える巫女服を着た少女であった。

ただ綺麗なだけでなく、見ただけで高貴な生まれなのがわかるくらいのオーラ纏っている。

彼女は薙刀をその手に持っていた。

もう一人副将と思しき人物も女性で、彼女は男性武将と同じく鎧兜姿であった。

「私は、秋津洲高臣（アキツシマタカオミ）と申します」

「このアキツシマ島を支配されているお方だ！」

この薙刀巫女美少女が、この島の支配者だと副将らしき武者美少女さんが言う。

副将さんもちょっとキツそうに見えるが、なかなかの美少女であった。

黒のショートカットがとてもよく似合い、活動的にも見える。

「この島の支配者なのであるか？」

「そうだ！」

「なら、なぜ同程度の軍勢と争っているのである？」

導師は何も考えずに割り込んだのかと思ったが、すぐに副将さんの説明の矛盾点をついた。

それしても、巫女さんは女性なのに男性の名前なのか。

この島の名がアキツシマ島（アキツシマトウ）なのはわかったが、島と島が重なる命名ってどうなのだろうか？

「秋津洲さんはなぜ男性名なのでしょうか？」

「バウマイスター伯爵殿とやら、貴殿は外から来たのに我ら民族を知っているのですか？」

「ああ」

俺は、副将さんに対し簡単にミズホ公爵領の事を教える。

「何と、古に別れた同朋がそこまで発展していたとは……」

俺からミズホ公爵領の話を聞いた副将さんは、リンガイア大陸北方に国を作った同朋の存在に驚きを隠せないようだ。

俺から見ても、この島よりもミズホ公爵領の方が人口も、国力も、技術力も圧倒的に高いように見える。

この島の住民達は一万年以上もこの島の中でのみ生活をした結果、技術力などでミズホ公爵領に対し大きく溝をあけられてしまったようだ。

あと、もう一つ懸念があった。

「何がこの島の支配者だ！　俺と同程度の軍勢しか揃えられない癖に！」

もう一つの軍勢から、同じく鎧兜姿の若い男性が前に出た。

彼は導師とほぼ同じ大きさ、体格をしており、誰が見ても猛将に見える。

秋津洲さんと敵対する軍勢の大将のようだ。

「先生、アキツシマさんの方が不利なのでは？」

アグネスの言うとおりであろう。

この規模の軍勢同士の戦なら、総大将の強さが大きな鍵を握るからだ。

しかも、大男は魔法使いであった。

秋津洲さんも魔法使いなのがわかったが、どう見ても戦いには向いていないような雰囲気を漂わせている。

実際に戦うと、秋津洲さんの方が負けるかもしれない。

「もう一人のお兄さん？」

「くっ、お前らみんな魔法使いか……しかも……」

アグネス達も既に上級の仲間入りを果たしており、俺達の中でこの青年に破れる者はいないはず。

彼は中級なので、どう逆立ちをしても俺達に勝てないのだから。

それがわかる彼は、俺達を刺激しないようにしていた。

見た目とは違って、ちゃんと冷静に物事を考えられるようだ。

「名乗るがよい！」

「俺の名は、七条兼仲だ！」

どこかで聞いた事があると思ったら、確か戦国武将だったような……。

世界が違うのに同じ名前とは、これは偶然の一致なのか？

「ところで、なぜ戦っているのである？」

「水がないからだ……」

七条兼仲によると、最近この島では雨が降らず、川も少ないので農作物が育たないで困っているのだと言う。

「秋津洲御殿には大量の地下水が湧きだす泉があり、これがあれば農作物が枯れる心配もない」

「勝手な事を言うな！　我々もギリギリなのだぞ！」

「何がこの島の支配者だ！　それは千年も前の話じゃないか！」

詳しくは聞かないとわからないが、秋津洲さんの祖先はミズホ公爵のような位置づけだったのであろう。

それが今では、わずかな領地のみを治める身となってしまった。

そして、元は家臣の子孫であろう七条兼仲に狙われているわけだ。

「仲良く分け合う事はできないのか？」

「無理だ！　雨乞いまでしたが、このままでは収穫までに作物が枯れてしまう！　そうなれば、領民達にも餓死者が出るであろう。俺が悪役となって秋津洲家から水源を奪ってでも、水を確保しないといけないのだ！」

七条兼仲も、好きで戦争を吹っかけたわけではないのか。

すべては水があると解決するというわけだ。

「気持ちはわかるが、そのためにアキツシマとやらの領民達の水がなくなれば、彼らも飢えて死んでしまうのである！」

「それでもだ！　言ったであろう？　俺が悪役になると！　今の水の量では、半分しか生き残れないのだ！」

七条兼仲は、さらに一歩前に出て導師を睨み付けた。

『余所者が綺麗事抜かすな！』という目をしている。

「他の手立てがあるやもしれぬ。戦になれば犠牲者がゼロというのも難しいのである！　今一度冷静になって考えるのである！」

「余所者は引っ込んでいろ！　秋津洲御殿を寄越せ！」

七条兼仲は、導師を無視して秋津洲さんに勝負を挑もうとした。
彼の実力ではどう足掻いても導師には勝てない。
それがわかっているから、導師を余所者だと強調して戦いに巻き込まないようにしているのだ。

「同じ魔法使い同士、勝負しようではないか！」

「貴様！　お涼様は治癒魔法の使い手なのだ！　荒事には向かないのだぞ！」

お涼様？
秋津洲さんの本名か何かか？

「ふんっ、それがどうした？　平和な時ならいざ知らず、今の状況で弱いのは罪だぞ！　細川藤孝！」

副将さんの本名は、細川藤孝だそうだ。
女性なのに男性名なのか。
でも、七条兼仲は男性だから、名のある武将がみんな女性というわけでもないのか。
当主は男性でも女性でも、武将っぽい名を名乗る仕組みなのだろうか？

「導師、色々と複雑な事情があるみたいですね」

というか、俺はこんなに面倒な島を支配しないといけないのか？
日本風の産物を手に入れたり文化に触れるのならミズホ公爵領が

あるし、そんな面倒そうな島はヘルムート王国に譲るに限るな。

うん、そうしよう。

「導師、この島は王国が管理するという事で」

「嫌なのである！」

「はあ？」

導師、嫌って何よ？

陛下の代理人として、こんな王都より遠く離れた戦乱の島は統治コストを考えると、俺に丸投げした方がいいって事か？

「事前の約束により、この島はバウマイスター伯爵家の領地と決まっているのである！　国家を運営するにおいて、信義は必ず守られなければいけないのである！」

「導師、そんな都合のいい時だけ……」

国家が信義を守る？

そんなの、あくまでも建前だけじゃないか。

あきらかに、面倒そうな島をうちに押しつけようとしているのがミエミエであった。

「バウマイスター伯爵殿とやら、貴殿らは何を話しているのだ？」

「えーーーとだな。細川殿とやら。実は……」

俺と王国の代弁者である導師がこの島の統治を押しつけ合ってい

る間に、ブランタークさんが細川さんにこちらの事情を説明した。

「何と！　この一万年でリンガイア大陸が二つの大国に支配され、我らの故郷がバウマイスター伯爵家の領地となり、さらにアキツシマ島まで支配の手が伸びていると？」

細川さんはかなり動揺しているようだ。

彼女らが一万年もこの島の中のみで暮らしていたら、いつの間にか外部から大国の影が迫っていたのだから。

「とはいえ、王国側も面倒臭がっているようだから、この島の支配者が王国の臣下になって爵位でも貰えばいいのではないかと……あとはうちと交易でもすれば……」

まだ領地の開発が残っているのに、こんな統治が面倒そうな島はいらない。

王国に臣下の礼を取らせて、統治者に伯爵の爵位でもあげればいいじゃないか。

交易は、うちから魔導飛行船を出すという事で。

この辺の海域も海竜が多いみたいだから、それがいいな。

決して、交易網を独占して大儲けとか考えていないぞ。

「おい、この島に支配者などいないぞ」

とここで、七条兼仲が話に割り込んでくる。

「そうなのか？」

「そんな奴がいたら、水でここまで揉めるかって。そこに、元支配

者一族がいるけどな」

「秋津洲さんが？」

「そうだ。大昔の秋津洲家は、瑞穂家に継ぐ歴史の長い名家でな」

なるほど、一万年前に瑞穂家と秋津洲家は分離したわけか。

瑞穂家は大陸北部アキツ大盆地に新天地を見つけ、帝国と関わるうちに姓名の表記がカタカナに変わったが、魔導技術のかなりの部分を維持して勢力を拡大した。

島の北に逃げ込んだ秋津洲家は……七条兼仲にも舐められているから没落したんだろうな。

辛うじてわずかに領地が残っている状態か。

「昔は秋津洲家といったら、この島を統治する家柄だったさ。今では、我ら領主達が独立して小競り合いを続けている状態だ。領地、利権、水利などで隣接する領主との争いが多い」

この島を明確に支配している人物がいない。

これでは、王国に臣下の礼を取らせる事もできない。

魔族の件もあるのに……これ以上の面倒はいらない。

「そうなのか……じゃあ、誰かが島を統一したら王国にご挨拶に行くという事で。うちも推薦しますから。じゃあ」

「それは無理である！」

誰か島の統一を成し遂げるであろう英雄さんの登場をお祈りしつ

つ、今は放置でいいかなと思ったら、導師に全力で否定されてしまった。

「この島より南方の探索も始まるであろうから、このままにしておけないのである！」

探索隊の後方拠点、ベースキャンプにしたいからか。

確かに、この島が騒乱状態では探索に影響が出てしまう。

「ですけど、面倒そうですよ」

一体いくつくらいの勢力に分裂しているのか知らないけど、この人達の名前からして戦国乱世のようになっているような予感がしてならない。

ここで手を出すと、あきらかに俺が面倒事に巻き込まれるのだが……。

「秋津洲さんがこの島を統一し、王国に爵位をいただくという事で……」

目標ができてよかったですね。

あとは自力で頑張っていただくという事で。

俺ですか？

心から秋津洲さんの天下統一をお祈りいたしております。

「残念ですが、今の秋津洲家はこの島で最弱の勢力でしょう……領民は五百人ほどしかおりません」

この島の人口が何人いるのかは知らないが、俺の実家とそう大差がない。

よく見ると、秋津洲家の遇勢にはあきらかに成人前の子供や老人も混じっていた。
七条兼仲に水を奪われないよう、可能な限り人を集めた形跡が見える。

「ははははっ！　没落した秋津洲家がこの島を統一する？　島には数十もの、我らを上回る大物領主が日々凌ぎを削っておるのだ！　第一、余所者が偉そうに！　ヘルムート王国とやらが本当に存在するかも怪しいわ！　お前らは邪魔だ！」

「邪魔とは何よ！　この筋肉達磨！」

「人の大切な水を奪う悪党！」

「大体、あんた暑苦しいのよ！」

今まで静かにしていたアグネス達であったが、他人の水を奪う事に躊躇しない七条兼仲に対し罵詈雑言を浴びせた。

「小娘の分際でぇ！」

七条兼仲ではアグネス達にも勝てないのだが、頭に血が昇った彼は三人に掴みかかろうとした。

「おい、人の弟子に手を出すな！」

「何だぁ？　こちらの事情も知らないで偉そうに！　バウマイスター伯爵だったな！　確かに凄い魔法使いではある！　だが、接近戦なら！」

七条兼仲は、素早く俺を倒すなり拘束すればすべてが解決すると判断したようだ。
突然その目標を俺に切り替えた。
「お前を捕えて人質にすれば、いくらでも条件を引き出せるな！」
「だったらいいな」
島の端っこで、数少ない貴重な中級魔法使いなのだ。
七条兼仲が調子に乗っても当然か。
頭である俺を拘束するのはいいアイデアだと思うが、それも成功したらだ。
導師もブランタークさんもまったく動いておらず、俺に任せて問題ないと判断したようだ。
「やれやれ、これは正当防衛だからな。先に手を出したお前が悪い」
「抜かせ！　この島では弱いのは罪なんだよ！」
七条兼仲が俺の両肩を魔力を篭めた両腕で掴んだが、すぐに強烈な電撃を感じて手を離してしまった。
『エリアスタン』を改良し、俺に触ろうとした者の手を痺れさせたわけだ。
「なっ！　両腕が！」
「暫くは両腕が痺れて使えないはずだ。中級であるお前が、上級の俺に単純な手で勝てるわけがないだろうが」
「そんなのは、やってみないとわからねえ！」

両腕が暫く使えない七条兼仲は、今度は足に魔力を込めて俺に蹴りを放った。

「痛ぇーーー！」

ところが、俺が強力な『魔法障壁』で防御したため、『べきっ』という嫌な音と共に兼仲の足の骨が折れてしまう。

あまりの激痛に、七条兼仲は地面に倒れて大きな悲鳴をあげた。

「さて、七条兼仲に従う兵達に告げる」

俺は巨大な『火球』を作って、近くにあった巨大な岩に放った。

『火球』は見事に命中し、その巨岩をドロドロに溶かしてしまう。

それを見た七条兼仲の兵達は、全員が一斉に顔を真っ青に染めた。

「俺は冷静に話し合いをしたいんだ。みんな、戦いはやめてくれるよね？」

「「「

「導師が治療しますか？」

「うむ、それでいいのである！」

「あーーーあ、可哀想に……」

「えっ？　どういう事だブランターク殿？　ぬぅおぁーーー！」

結局負傷した七条兼仲も降伏し、水を巡る無駄な争いは終わった。
犠牲がゼロでよかったと思う。
彼の負傷は導師が治療する事になり、彼に抱きつかれた七条兼仲が悲鳴をあげるが、みんな聞かなかった事にする。
俺達からすれば、もうわざわざ騒ぐような事でもないのだ。

「バウマイスター伯爵様、兼仲様を助けていただいてありがとうございます」

七条兼仲の軍勢はそのまま解散となったが、彼の家臣達が主君を殺さなかった俺達にお礼を述べた。
どうやら、この男。
俺達が思っている以上に領民達に慕われているようだ。
領民を飢えさせないため、自分の悪評を気にせず他領の水源を奪う決意ができる人物だからな。

「兼仲様は向う見ずでバカですけど、我々にはいい殿様なんです」

「兼仲様はちょっと猪ですけど、高い税は取らないで贅沢もせず、いい殿様なんです」

「兼仲様はあまり賢くないですけど、領民達の食料が足りなくならないように狩りを行って獲物を分けてくれたりするのです」

慕われているのは確かだが、ちょっとオツムに問題があると思われているようだ。

導師に治療されている兼仲が家臣達からおバカ扱いされて涙目だったが、みんな見て見ないフリをした。

それに、裏切られていないって事はいい殿様の証拠なのだから。

「ところで、これからどうするのです？」

二つの勢の争いは防げたが、細川さんの言うとおりこれからどうするのか方針が決まっていない。

「我々はこの島に住めるのであれば、ヘルムート王国とやらの支配下に入っても構いません」

「いいのか？　秋津洲さんに不満はないの？」

俺は、細川さんの隣にいる秋津洲さんにもその意志を訪ねた。

「本当ならば、私は領地すら持てない存在だったのです。それが、昔から我が家に仕えていたという理由だけで藤孝が支えてくれています。確かに昔の秋津洲家は、この島全体を治める家でした。ですが、それは昔の事。私に為政者としての才はありません。ただ領民達が平和に暮らせればいいのです」

残念ながら、彼女には領民達に慕われる魅力はあっても為政者としての能力に不足していた。

それを、同じ女性である細川さんが担当している。
うちで言うところのローデリヒのような存在なわけだ。

「秋津洲さんは魔法使いですよね？」

「はい、治癒魔法のみですが」

巫女服だからというわけでもないが、彼女は治癒魔法の名手なのか。
そして、ようやく治療が終わった兼仲は猛将としての才能があると。

「俺はバウマイスター伯爵に負けた。負けた以上は、あんたに従おう。だが、本当にうちは水が足りなくて困っているんだ。戦は避けたかったが、俺は領主だ。領民達が飢えて死ぬのを見ていられなかった。例え他所の領民が飢え死にしてもだ。俺が悪役になればいい。領主ってのはそういう決断ができないと駄目だと思った」

兼仲も、無意味に秋津洲領に攻め込んだわけではない。
すべて領民達の事を思っての行動だったというわけだ。

「でも、やっぱりバカですね」

「否定できない……」

アグネスから再びバカ扱いされ、兼仲は涙目になった。
頭が悪いのを、案外気にしているようだ。

「水かぁ……この島には川とか池はあるのか？」

「島の中央にはあるが、当然別の領主が支配しているぞ」

勝手に水を引くわけにはいかないのか。

どの世界、時代でも、水利権の争いは過酷だからな。

犠牲者が多数出てしまう事も多いし。

「今まではどうしていたのだ？」

「雨水を蓄えるため池があってな。今は雨が降らないので空だが……」

何とか水を確保しないと、今度は領民達が主体となって水を奪いに来かねないな。

「井戸は掘れないのか？」

「無理だ。この島の地下は、分厚い岩で覆われているのだ」

「魔法で叩き壊せないのか？」

「俺では無理だったんだ。威力が足りなくて岩が割れないんだ」

「毎日少しずつ割っていけば大丈夫なのでは？」

「それができたらやっているさ。論より証拠、案内しよう」

俺達は怪我が癒えた兼仲の案内で、彼の領内にある巨大なため池へと移動する。

そのため池は完全に干上がっており、池の底も謎の黒い岩で覆われていた。

「変な色の岩だな？」

「普通の岩なら、ちょっとずつ割ればいつか水脈に辿り着く。だが、この岩は俺の全力程度では凹みもしないんだ」

「これは、『黒硬石』ですね。ならば割れませんよ」

俺達に同行した細川さんの説明によると、この『黒硬石』は島の大半の地下水脈上を覆っており、そのせいで島は全体的に水不足なのだそうだ。

地下水はあるが、それを得る手段がないというわけだ。

「導師、どうです？」

「某がやってみよう」

並の威力では傷一つつかない黒い岩。

導師は興味を持ち、自分が全力で叩き割ってみせると宣言する。

「大丈夫かな？」

「安心するのである、ブランターク殿。某は今も魔力が上がっている状態なのである！　全力でやれば大丈夫なのである！」

『黒硬石』はとにかく固く、しかも厚さが十メートル以上あるそうだ。

というか、この島の表面の大半はこの『黒硬石』であり、その上に数万年をかけて土などができたようだ。

「この島は、水自体は豊富って事かな？」

「はい、その水を利用できるかどうかは別問題ですけど」

「魔法で割れないのか？」

「大昔の実力のある魔法使いならば。ですが……」

一つの島に籠っていた副作用なのか、ここ数百年で島に住む人間に魔法使いが出現しにくくなった。

しかも、上級レベルの魔法使いがまったく出現しなくなったそうだ。

その代わり、なぜか彼らの魔法使いとしての能力は遺伝しやすいらしい。

中級レベルとはいえ、領主である秋津洲さんも兼仲も先祖代々魔法使いだった。

「遺伝する代わりに、魔法使いとしての能力は徐々に劣化してきたのか？」

リンガイア大陸とは何かが違うというわけか。

なぜ違うのかは、あとで偉い学者さんにでも研究させてもいいか。

今はそれどころではない。

「それでは、早速なのである！」

導師は即座に行動に入った。

『飛翔』で上空へと飛び、体に強固な『魔法障壁』を纏って地面へと砲弾のように全力で落下した。

「つうか、もちっとスマートな方法はねえのかよ……」

導師のストレートな方法にブランタークさんが呆れていたが、俺はいい方法だと思う。

自分の巨体を砲弾に見立て、落下速度まで利用して黒硬石の岩盤を砕こうというのだから。

もし俺がやるとしたら、この方法は取らないわけだが。

だって、失敗したら痛そうだし。

「あの方は大丈夫なのでしょうか？」

『飛翔』による速度まで加えて上空数十メートルから落下した導師を秋津洲さんが心配した。

彼女はとても優しい人のようだ。

でも安心してほしい。

この程度の事で、導師がどうにかなるわけがないのだから。

地面への落下と共に何かが砕ける爆音のような音と、大量の破片が周囲に飛び散った。

俺とブランタークさんは、冷静に『魔法障壁』を展開して秋津洲さん達を守る。

「ありがとうございます。バウマイスター伯爵様」

巫女服の美少女にお礼を言われると、悪い気がしない。

やはり、巫女服は偉大だな。

「で？　どうなった？」

ブランタークさんが導師の落下した時点を見ると、ため池の底の中心地には巨大なクレーターができていた。
深さは三メートルほどであろうか。
それにしても、黒硬石とは物凄い硬さだな。
導師が全力で攻撃して、三メートルしか掘り進められないのだから。

「導師、もう一回可能ですか？」

「明日にしてほしいのである！」

残念、この一撃で導師は魔力の大半を使い果たしたようだ。
導師でこれだと、兼仲では一センチも掘り進められなくて当然か……。
彼は、導師が掘り進めたクレーターを見て絶句している。

「三日か四日で岩盤を抜けますかね？」

「バウマイスター伯爵、ルイーゼ嬢がいるのである！」

「ルイーゼも一撃加えれば早まりますか……」

導師の忠告に従い、俺は『瞬間移動』で屋敷に戻ってルイーゼを連れて戻ってきた。

「お涼様、伝説の移動魔法ですよ」

「初めて見ました」

この島の魔法使いも、魔族と同じく『瞬間移動』が使えないよう

だ。
秋津洲さんと細川さんは、俺を尊敬の眼差しで見つめていた。
「うわっ！　本当に島があるんだね！　あと、ミズホみたいな服装だ。ボクもこの服ほしいなぁ。ヴェルを誘惑できそう」
「あのぅ……この服は神に仕える者が着る神聖なものなのですが……」
俺に連れてこられたルイーゼはこの島と秋津洲さん達を見て驚き、彼女が着ている巫女服を欲しがったが、動機が不純なので秋津洲さんから注意されてしまう。
「ルイーゼにお願いがあって、この岩盤なんだけど……」
「導師が全力で攻撃してこれだけ？　この岩、何でできているのかな？」
ルイーゼは、黒硬石の硬さに驚いていた。
「前の必殺技で頼むよ」
「えーーーっ！　あれは何日か動けなくなるから駄目だよ。ボクも全力で導師と同じくらいの深さを掘るから、あとはヴェルがやって」
「うーーーむ、しょうがないか」
ヘルタニア渓谷で使った『ビックバンアタック』は、ルイーゼの体の負担が大きいと断られてしまった。
それでもクレーターの底に行き、拳に大半の魔力を篭めて必殺の

一撃を放つ。

「これも凄え威力だな」

再び大量の破片が飛んだので、俺とブランタークさんで『魔法障壁』を張ってみんなを守った。

「あとは俺か……」

さすがは魔闘流というべきか、ルイーゼは導師よりも深く穴を掘っていた。

クレーターは更に深く大きくなり、これで七メートルほど掘り進めた事になる。

「岩盤は十メートル以上、俺か翌日に誰かの一撃で水脈に届くな」

「あんたら凄いな。俺が全力で殴っても、傷一つつかなかったのに……」

例え少しずつでも掘り進められたら、兼仲かその祖先が岩盤を砕いてはずなのだから。

最低でも上級レベルの魔力がないと、黒硬石は傷一つつかないわけか。

この黒硬石、何かに使えるかも。

ちょっとサンプルを取っておくか……。

「ヴェル、少し魔力を残さないと駄目だよ」

「俺も溢れる水で溺れたくないから残すよ」

もしすべての魔力を使って岩盤を完全に打ち砕けても、俺は深いクレーターの底なので溢れる水で溺れてしまう。
ルイーゼの忠告どおり、『飛翔』で逃げる分の魔力を残しておかないと。

「それじゃあ、次は俺の番だ！」

俺もルイーゼのように、拳に大半の魔力を集めて岩盤を殴る事にした。
魔闘流ほど効率はよくないが、俺はルイーゼよりも魔力がある。
同じくらいの深さを掘れるはずで、もし今日岩盤を撃ち抜けなくても、明日には水が出てくるはずだ。

「よぉーーーし！　最後の一撃だ！」

俺は拳に全力を込めて、クレーターの奥で第三撃目を放った。
三度大量の岩片が飛び散り、俺の視界を防ぐ。

「どうだ？　あれ？　やっぱり明日かな？」

俺の見立てではもう十メートル以上掘り進めたはずだが、まだ岩盤が残っていた。
水が湧き出るのは明日もう一撃してからかなと思ったら、岩盤には罅が入り、次第に少しずつ広がってそこから水が湧き出してきた。
段々と湧きだす水の量が増え、遂には罅の入った岩盤を突き破り、まるで噴水のように水が湧き出し始める。
俺は水没しない内に、クレーターの底から『飛翔』で逃げ出した。

「予定よりも早く水が出たな」

「凄ぇーーー！　あんたは、俺のお館様だぁーーー！」

水が湧いてよほど嬉しかったようだ。

兼仲は涙を流しながら、俺に土下座をした。

家臣達もそれに続き、秋津洲さんの家臣も同じように俺に頭を下げる。

「みなさん、今日は喜ばしい日です。この分裂し混乱するアキツシマ島に、外部よりそれを正すお方が現れたのです。バウマイスター伯爵様は我らの新しい主様です」

「えっ？　俺？」

突然秋津洲さんが俺を新しい主君だと言い始め、それに俺達以外の全員が賛同して頭を一斉に下げた。

俺は、ただ争いを止めようと岩盤を砕いて水を確保しただけなのだが……。

「これで、水不足で収穫が足りなくなる事もなくなりました。七条領と秋津洲領でも、新しい土地で沢山の作物が作れます」

「俺はバウマイスター伯爵様の家臣になるぞ。みんなもいいよな？」

「はい」

「バウマイスター伯爵様は救世主です」

この中で一番家柄がいい秋津洲さんの臣従宣言により、一人も反対する事なく、逆に大喜びで俺の家臣に領民になると宣言し、頭を下げてしまった。

これでは、俺はもう逃げられないではないか。

「ルイーゼ、どうしよう？」

「どうせ、王国からバウマイスター伯爵領にされてしまった島だからね。ヴェルが平定しないと駄目なんじゃないの？」

「魔族もいるんだぞ……」

「だから、大急ぎで？」

「そんなお手軽に、戦乱の渦中にある島の統一なんてできるか」

「やってみないとわからないじゃない。みんな、協力するから」

「ルイーゼ嬢の言うとおりである！　某も協力するのである！」

「（じゃあ、あんた一人でみんなぶん殴って統一してくれ。統一したら法衣から在地領主になれますよ）」

さすがに空気は読んでそれを口にしなかったが、俺はなるべく短期間でこの島を統一しなければいけなくなるのであった。

第百四十八話　俺は、戦国時代ぽい島で統一を目指す。

『なるほど。では、お館様が一刻も早く島を統一せねばなりますまい』

「やっぱり？」

『手を出してしまった以上は』

「……」

子供の頃、俺は捨て犬を見つけた。

とても可愛い子犬だったが、両親に飼っていいか尋ねると『最後まで面倒を見られたらな』と言われてしまった。

『拾うのはいいが、ちゃんと最後まで面倒を見ないと保健所に連れて行く』とも言われ、決断できなかった俺は結局子犬を飼わなかった。

今にして思えば、俺はちょっと考え込んでしまう石橋を叩いて渡るタイプの人間だったのであろう。

そんな俺が珍しく、南方探索で見つけたアキツシマ島という島の内乱に手を出してしまった。

導師もノリノリで参加し……彼はあくまでも陛下の代理人だから気楽なものだ。

事情を聞いたら、島内は五十を超える領主によって分割され、小競り合いも多い場所との話であった。

陛下としては、遥か遠方にあるそんな面倒な島はいらないのであろう。
元々アキツシマ島は我がバウマイスター伯爵領と区分した海域にあり、見事に押しつけられてしまった。
この島の南を探索し、そこで他の無人島やあわよくば大陸でも見つけた方が得だと思ったのであろう。

こうして、戦乱の島が俺に押しつけられたわけだ。
ただ戦乱とはいっても、ルール無用で敵は皆殺しとまでは行っていないようだ。
秋津洲軍と七条軍は、戦う前に己の考えを主張していたくらいなのだから。

これがもし問答無用状態なら、ただ先に軍勢を集めて敵の領地に雪崩れ込んだであろう。
その辺にはまだ救いがあるというわけか。

『何か産物を交易できれば御の字であろう』

陛下から、携帯魔導通信機越しにそう言われてしまった。
現在、ヘルムート王国の国王として魔族の国への対応で忙しいから、そんな中途半端な島はいらないというわけだ。

続けて携帯魔導通信機でローデリヒに相談すると、俺が何とかするようにと言われてしまった。
俺が領主でローデリヒが家宰のはずなのに、なぜか俺が命令されているような……。
バウマイスター伯爵領は、ローデリヒがいないと回らないから仕方がないか。

それでも、ルル達が住んでいた島を探索する冒険者グループの手配、あの島を冒険者の拠点とすべく村の測量や建設を行う人員の手配は済んだそうなので、さすがはローデリヒというわけだ。

「とはいえ、先は長いよ」

かつて島を統治していた名族最後の生き残り秋津洲高臣、男みたいな名前だが、見た目は巫女美少女であった。

年齢は十七歳、結構スタイルもいい。

名族直系最後の一人にして、治癒魔法の名手、領地は小さいが善政を敷いているようで領民達には好かれていた。

まあ、悪政を働くおっさんよりは、善政を敷く美少女の方が人気があって当然だ。

俺も後者を支持するであろう。

もしおっさんが善政を敷いていたら……やはり美少女の方か……。

悪政を働く美少女と、善性を敷くおっさん。

これは悩むかもしれない。

現実なら、悩まず善政を敷くおっさんだけど。

話を戻すが、この島の名族は当主になると決められた『当主名』を名乗る。

だから、当主が女でも男みたいな名前になるわけだ。

ミズホとは、少しシステムが違うようだ。

実は秋津洲さん、幼名というか以前の名は涼子というらしい。

だから、細川さんはお涼様と呼んでいたわけだ。

秋津洲さんを補佐している細川藤孝さんも、本名は別にあるようだ。

俺達には教えてくれなかったけど。

細川家は、代々筆頭家老として秋津洲家を支えてきたらしい。

共に両親を失い、直系の子供が女子一人だけとなっても、二人は小さな領地を懸命に守ってきた。

二人が家督を継いだのは、他に男子がいないので仕方がない面もあったからだ。

『お館様、統治体制の確認をお願いします』

「確認？」

『左様です。このまま島の領主達を降したとして、どうアキツシマ島とやらを統治していくのか？　その確認が必要だと言っております』

さすがはローデリヒ、俺よりも貴族としての才能に溢れているな。

彼が領主で俺が筆頭お抱え魔法使いなら、それはそれでとても上手く行っていたような気がする。

「俺がトップだよね？」

『勿論それはそうなのですが、あまり前面に出てしまうと島の住民達から不満が出るかもしれません。何しろ、一万年以上も鎖国していたのと同じなのですから』

異民族の、それも若造に支配されるのが嫌で彼らが反抗的だと、いちいち騒動を鎮圧しないといけないから統治コストが跳ね上がっ

てしまう危険があった。
バウマイスター伯爵本領の開発も残っており、ローデリヒはその手間を嫌がったわけだ。
これは、王家に押しつけられるわけだ。
『バウマイスター伯爵領は常に伸長を続けており、王城には嫉妬に近い感情を抱く者も多いのです。陛下がこの島を押しつけたのは、お館様への温情とも取れますね』
そういう考え方もあるのか。
どちらにしても俺は王国の家臣なので、命令どおりこの島を安定化させなければ。
それで、島の統治体制の確認に戻るが……。
「誰か代官を立てろと？」
『それが一番無難ですね』
代官が矢面に立った方が、この島の住民も従いやすいか。
勿論島外の人間では駄目なので、この島の住民でないといけない。
現時点で、統一したアキツシマ島全体の代官職が務まりそうな人物。
俺の視線は、ある女性へと向かう。
「私は駄目ですよ」
俺が候補に選んだのは、秋津洲領の統治を担っている細川藤孝さんであった。

彼女なら、能力面から見ても十分に勤まると思う。

何しろ、今まで秋津洲領を実質統治してきたのだから。

「お涼様を差し置いて、そのような大役は受けられません」

細川家は、代々秋津洲家の家臣であった。

ここまで秋津洲家が縮小しても忠実に仕えているのだから、主君を差しおいて代官職を受けるはずがないか。

「でも、秋津洲さんは忙しいんでしょう？」

普段の秋津洲さんは、治癒魔法を用いた領民達への治療で忙しいそうだ。

領外からも患者が多数押しかけ、御所は多くの人達で賑わっているらしい。

領地は狭いし、実務は細川さんが代行しているが、この地域では一定以上の影響力はあった。

残念ながら、統治者にはまったく向いていないらしいが。

「雪、あなたの秋津洲家への忠誠は嬉しいのですが、血筋ばかりで力なき私が代官になっても島が混乱するだけです。遠慮しないで引き受けてください」

俺達には教えてくれなかったが、細川さんの本当の名は雪というようだ。

クール系美少女なので、雪という名はよく似合っていると思う。

「遠慮などしておりません！　私はお涼様の家臣で十分に満足して

いるのです」

細川さんは、秋津洲さんから随分と信頼されているようだ。

秋津洲さんも、島が平和になるのなら自分が支配しなくてもいいと言えてしまうところが、器の大きい部分とも言えた。

彼女は、今さら自分がしゃしゃり出ても碌な結果にならないと思っているのであろう。

『お館様、では、秋津洲殿を代官に、細川殿を副代官とし、細川殿に実務を任せたらいかがでしょう？』

「それがいいかも」

秋津洲さんは治癒魔法使いとして多くの支持者がいるし、この島で一番の名族だからな。

一番上にいるだけで、反抗的な人は大分減るか。

口の悪い人は神輿だって言うかもしれないけど……。

「細川さんは、どう思う？」

「お涼様はお優しすぎるので、統治の仕事には向かないのです。普段は治癒魔法使いとして、御所で治療にあたっていただきます。これは昔からそうですが」

優しいというのは、統治者としては必ずしも褒め言葉じゃないからな。

それでも秋津洲家が小領主として生き残れていたのは、代々続く治癒魔法使いとしての能力のおかげだそうだ。

「魔法使いとしての能力が遺伝しているのか。凄いな」

「ですが、代を経るごとに能力は落ちております」

前にアーネストが、古代魔法文明時代に存在した人工魔法使いについて話してくれた。

この島の名族連中は、間違いなく先祖がそうだったのであろう。

随分と長い間遺伝が続いていたようだが、これもこの島の閉鎖性が原因かもしれない。

他にも原因はあるかもしれないけど。

だが、その閉鎖性を持ってしても、代を経るごとに魔法使いとしての実力が落ちているわけだ。

「そうみたいだな。我々の基準で言えば、秋津洲殿の魔力量は中級のど真ん中ってところだ」

ブランタークさんは、彼女の魔法使いとしての実力を中級でしかないと分析した。

治癒魔法使いは貴重だが、エリーゼに比べるとかなり実力は落ちる。

もしかすると、俺の治癒魔法の方が威力だけはあるかもしれない。

「兼仲も、中級の真ん中がいいところである」

「外の世界には、もの凄い魔法使いが一杯いるのだな」

俺に破れて家臣になった七條兼仲も、中級レベルの魔法使いでしかない。

導師にそう指摘され、彼は外の世界にいる魔法使いの実力に驚いていた。

「とはいえ、まだ鍛えられる部分もあるのである」

導師が、まるで獲物を見つけた狼のように兼仲を見つめ始める。
どうやら暇潰し……じゃなかった、見どころがあると思い彼を鍛えようとしているのであろう。

「あの……お館様？」

呆気なく俺に破れてしまったが、兼仲は実力者である。
相手の力量を見抜く目はあり、超がつく実力者である導師に目をつけられて恐怖を感じたようだ。
主君である俺に縋ってくる。

「兼仲」

「はい、何でしょうか？」

「俺は数年間、導師から指導を受けたんだ」

「ボクもだよ」

俺の隣にいるルイーゼもそうだと聞き、兼仲の顔色はさらに悪くなった。
彼はルイーゼも実力者だと見抜いており、俺とそんな彼女に指導ができる導師という存在と、彼から弟子に指名された事に恐怖を感じたようだ。

「俺とルイーゼが逃げられなかったんだ」

「君にも、無理無理」

「というわけなので、俺は兼仲がもっと強くなってくれる事に期待しているから」

「大丈夫、多分死なないから」

俺とルイーゼに肩を叩かれた兼仲は、顔面が一気に蒼白となった。

「ここはバウマイスター伯爵の領地である！　某は開発等に手を出せぬし、兼仲はこの分野で役に立たないのである！　さあ、楽しい修行の時間である！」

「お館様ぁーーーー！」

兼仲は、導師に連れて行かれた。

彼に引きずられた兼仲の声が次第に小さくなっていくが、これも彼がもっと強くなるため。

俺とルイーゼは、心を鬼にして彼を見送った。

「先生、私達はいいのですか？」

「あのな、アグネス」

「はい」

「人には向き不向きがあるのさ。それは個性のようなものだから、決して向いていない事が悪いわけじゃない。魔力を用いた格闘戦闘は、彼らやルイーゼに任せよう」

俺は信じている。

兼仲が、これから始まる統一戦争において先陣として活躍してくれる事に。

「まあ、兼仲殿は昔からずっとああなので、統治にはまったく役に立たないのですよ」

「細川さん、じゃあ誰が七条領の統治を？」

「あそこは、分家の名主とかが優秀なのです。当主である兼仲殿は近隣では最強の魔法闘士です。小競り合いの時に顔を出せば、ほぼ有利な条件で講和が結べますから」

七條兼仲、とても領民に慕われ腕っ節も強かったが、残念ながら脳筋であった。

「ルル、こういう風にするんだよ」

「はい」

「アグネスは、広げた道に石畳を敷いてくれ」

「はい」

「ベッティは、荒れ地を急ぎ開墾だ」

「任せてください」

「シンディは、どうだ？」

「用水路の掘削は順調です」

探索で見つけたアキツシマ島を統一する事になったが、まずは余所者でしかない俺が領民達に認められるためには、税を集めるよりも与える事が重要となる。

というわけで、まずは領地の把握と、忠誠心をあげるための施しを行う事となった。

まるで戦国シミュレーションゲームだな。

施しといっても、金や食料をバラ撒くわけじゃない。

ちょうどため池の底を塞いでいた黒硬石を砕き、豊富な地下水が得られるようになったので、用水路を広げ、今まで水不足で耕せなかった土地を開墾し、街道の整備を行い。

古来より、公共工事は現地住民からの支持を得るのに有効な方法であった。

「秋津洲領は七条領を事実上併合し、領地はほぼ倍に、人口も合計で千二百五十七名となりました」

アキツシマ島を統一するにおいて、形式上は代官である秋津洲家が全島を統一して統治する事になった。

その上に、バウマイスター伯爵家がいるというわけだ。

「細川さん」

「お館様、私の事は雪と呼んでください」

初めは本当の名を教えてくれなかった細川さんであったが、領内の大規模開発が始まると随分と好意的になってくれた。

当主名でなく、本当の名前で呼んでくれというのだから。

「いいのか？」

「はい。是非そうしてください。私は、秋津洲領の統治をお涼様から託された身でしたが、結局私では、お涼様に安寧の日々を与えられませんでした……」

秋津洲さんと細川さんが家督を継いだ時点で、もう秋津洲領は衰退が激しかったそうだ。

それを、秋津洲さんの治癒魔法と細川さんの統治能力でどうにか七条家に対抗可能な状態にまで持っていった。

「あの争いで兼仲殿が先陣で力を発揮していたら、我々は不利な講和を結ぶしかありませんでした」

細川さんは武芸にも優れているそうだが、魔法使いである兼仲には勝てない。

同程度の魔力を持つ秋津洲さんも治癒魔法使いであり、確かに勝ち目はなかったかもしれない。

「その兼仲殿をお館様は圧倒されました。私は感謝しているのです」

クール系美少女に感謝される。
悪い気はしないな。

「痛ぇ！」

「お館様。どうかされましたか？」

「何でもない……」

鼻の下でも伸ばしたのかと思われたのか？
俺は、隣にいたルイーゼから尻をつままれてしまった。

「ヴェル、可愛い女の子に好かれてよかったね。探索すると女の子が増えるって、ヴェルは凄いなぁ」

それを俺に言われても……。
元々ルイーゼは、アグネス達は認めている。
だから探索に同行しても何も言わなかった。

だが、今も魔法を教えながら傍に置いているルルと、美少女巫女秋津洲さん、そして雪。
ルルは幼いから違うかもしれないが、二人には思うところがあるのかもしれない。
いや、俺はもう嫁を増やしたくないのだが……。

「ええと、ところで、秋津洲領ってどのくらいの広さなのかな？」

「これが地図です」

とにかく話題を切り替えないと……。

俺は、雪にこの島の勢力図について聞いてみた。

「狭いね……」

俺達は北からこの島を訪ねたわけだから、秋津洲領と旧七条領は島の最北端にある。

これからは南の敵勢力にだけ注意すればいいから、まだ少し楽になったわけだ。

「この島の人口は、約四十万人です」

四十万分の千二百五十七。

辛うじて、０．２５パーセント以上は押さえているわけか。

押さえていると自慢できる数字じゃないな……。

「兼仲だけじゃなく、旧七条領の領民達が素直に降ってくれてよかった」

おかげで犠牲者はゼロだった。

死人が出ると禍根となるので、それはよかったと思う。

「お館様が兼仲殿を圧倒したからでしょう。すぐに開発を始めたのもよかったです」

旧七条領は、秋津洲領に併合された形となった。

兼仲は家臣となったのだが、元々彼は領内の統治を名主達に丸投げしている。

さほど状況に変化があったわけでもなく、兼仲も武官に専念できると喜んだ。

彼に統治の仕事はまったく向いていないから、みんな幸せになっ

たわけだ。

「これで人口が増えても、食料のあてができました」

この島は、黒硬石の塊の上に人が住んでいるようなものであった。

そのため、島の中心部にある巨大な湖周辺以外は、基本的に水が不足している。

農業生産に限界があるというわけだ。

なぜか地下水は豊富なので、昔は優秀な魔法使いが岩盤を魔法で砕いて井戸を掘った。

ところが、現在の魔法使いにはそれはできない。

黒硬石という石で覆われた強固な岩石を砕かないと地下の水脈に届かず、それを砕くには強大な魔力が必要であったからだ。

井戸や池には長い年月の間に枯れる場所もあって、みんな水不足に脅威を感じていたのだ。

そのため、各家や領内中に雨水を溜めるため池やタンクが置かれていた。

「水田も増やせそうです」

「雪は、やっぱり米があった方がいいのか？」

「はい！　我らは昔からお米が好きなのです！」

とても元気な声で答える雪。

とはいえ、この島の現状を考えるとそれほど沢山米は作れない。

主食は雑穀、麦、サツマイモの原種に近いイモが大半で、米はな

かなか食べられない高級品だそうだ。

「大昔のご先祖様は毎食お米を食べたそうです。この島では難しい話なのですが……」

「島の中央には湖があるんだよな？」

「はい。琵琶湖というのですが、ここの水利と豊富な漁業資源、琵琶湖から流れるいくつかの河川を利用した水運をすべて握る三好家は、この島における一番の大領主です」

しかも、その三好家の当主は、代々三好長慶を名乗っているそうだ。

一族や家臣も多く、彼はこの島で事実上の『天下人』と呼ばれているらしい。

湖の名が琵琶湖なのも含めて、俺は心の中で乾いた笑みを浮かべた。

「米ならミズホの連中は毎日食べているな。俺も一日一食か二食は」

「凄い！　北に逃れた同朋は、楽園に住んでいるのですね！」

「それなりに苦労はあったみたいだよ」

ミズホは、帝国との戦争で多大な犠牲を出して独立を保ったからな。

帝国の方も散々だったみたいだけど。

「北方にあるから冬は寒いしね。ここは寒くないのがいい」

南方だから冬も暖かい、むしろ暑い日が多いくらいか。
標高が高い場所が多いので朝晩が寒い地域もあって、常夏からは少し離れているという感じであった。

「水があれば、上手くやれば稲作が年に二回できるか？　開墾と田んぼの拡張はアグネス達にお願いして、土の土壌改良を魔法で行えば初年度からもそこそこ米が採れるか」

押さえた土地を開発しながら統治し、徐々に秋津洲家の当主が代官を務めるバウマイスター伯爵領を増やしていく必要があるな。
ただし、あまり軍勢を助っ人には呼べない。
敵対勢力が『秋津洲家は他民族に島を売り渡した！』と宣伝しかねないからだ。

そこで、数少ない戦力になる助っ人を呼ぶ事にする。

「それで私達？」

「俺とハルカは、ヴェルの護衛だな」

「古に別れた同朋ですか……昔の歴史書には記載されていましたが、本当に実在していたとは……」

イーナ、エル、ハルカは個人でも十分に強いので、俺の護衛役に。
ハルカは、同朋である秋津洲さん、雪、兼仲の存在に驚いていた。

「瑞穂一族は発展を遂げたようですね。我が秋津洲家は、不甲斐な

くて忸怩たる思いです」

瑞穂家と秋津洲家、共に大昔は一二を争う名族だったそうだ。

それが、片方が独自の、他民族にも負けない力を持ったのに、自分達は完全に力を落としてしまった。

秋津洲さんは、先祖に申し訳がないと表情を暗くしてしまう。

「お涼様の責任ではありません！　秋津洲家は元は神官の出です。政治には不向きな血筋であすから仕方がありません！」

雪の説明によると、秋津洲家にあまり優秀な政治家はいないらしい。

代々と当主や一族が使える治癒魔法を駆使し、領民達を治療して慕われる。

政治の実務は、細川家他いくつかの名族で分担していたそうだ。

元から秋津洲家は、君臨すれど統治はせずという状態だったわけだ。

「なら、ちゃんと秋津洲家を上に据えればいいのに。三好家だっけ？」

「五代前の秋津洲の当主は、残忍な性格で有名でした。治癒魔法の練習と称して領民を斬り、死なせてしまうと『間違えて斬り殺してしまった。次はもっと浅く斬ろう』で済ませたそうです」

諫めた四代前の三好家の当主が無礼討ちにされ、それに激怒した三好家が徐々に秋津洲家当主の領地や利権を奪っていき、今に至るというわけだ。

「先祖の罪が祟ったのか。秋津洲さんに罪はないし、むしろ治癒魔法で領民達から好かれているのにね」

三好長慶は優秀な人物だそうだが、もうお爺さんであった。

ならば、美少女巫女である秋津洲さんの方が人気が出ても仕方がないか。

とはいえ、今の秋津洲家は北部でわずかな領地を持つのみ。

中央の三好家に対抗するのは難しい。

先祖の恨みもあって、簡単には言う事を聞かないであろう。

「事情は大凡こんな感じなので、今は押さえた領地を開発して力を蓄える必要があるのです」

元々、この島の領主で大量の常備兵を整えられる者は少ない。

今の内に開発を進めて収穫を増やし、次の戦いに備えて食料を備蓄した方がいい。

どうせ秋津洲領と接しているか、近い領主は零細ばかりで農民を徴兵しないと軍勢を整えられない。

向こうがとち狂って攻めてきても、俺、ブランタークさん、導師、ルイーゼ、イーナ、エル、ハルカ、エリーゼ達もいるから過剰戦力であろう。

「まだまだである！」

「負けぬぞぉーーー！」

「その心意気やよしである！」

いい領主様だけど、頭の中身は残念（領民達談）な兼仲は、導師から特訓を受けていた。

魔力の伸びはほぼ期待できないが、彼はこの北方で一・二を争う猛将という評価を受けていた。
彼が金で雇われるフリーの専従武官になったのだ。
さすがに攻めてくるアホな領主はいないと思う。

「それにしても、エリーゼ様は凄いですね。私よりも遥かに優れた治癒魔法使いではないですか」

秋津洲さんは、自分よりも圧倒的に実力があるエリーゼに素直に感心していた。

「救われる方が増えるのはいい事です」

秋津洲さんは、とてもいい子であった。
残念ながら領主としては向かないは明白であったが、エリーゼに嫉妬しないで怪我や病気を治せる人数が増えたと心から喜べるのだから。

「なぜ雪が、秋津洲さんを支えるのかわかったな」

「お涼様は素晴らしいお方です。ですが、こんな世の中ではその優しさが仇となる事もあります」

彼女を守るため、雪は自分が汚れ役になる覚悟があるというわけだ。

「俺は、雪も優しいと思うけどな。雪の能力なら、三好家辺りでも出世できたのでは？」

「三好家で働く私は予想できませんでしたから、発想力が低いので

しょう。それでは、三好家での出世は難しいですね。秋津洲家の筆頭家老で私は満足しております」

照れてそう言っていたが、雪は心から秋津洲さんが好きなのだと思う。

「昨日までは色々と大変でしたが、お館様のおかげで少し余裕ができました。ありがとうございます」

「へえ、ヴェルはホソカワさんをユキって名前で呼ぶのね？」

「せっ、戦友だから……一緒に兼仲と戦ったのさ」

俺が勝手に兼仲を倒してしまっただけだが、そう言って誤魔化しておく。

物語でも、戦場で生死を共にした仲間を名前で呼ぶようになったケースがよくあったじゃないか。

「あれは、俺がお館様に倒されただけ……「あーーーっ！　色々と大変だったな！　雪？」」

「そうですね、兼仲殿は北部でも名の知れた猛将だったので」

雪も、すぐに状況を察して俺のフォローに回ってくれた。

さすがは、この島の実質的な代官職を任せようと考えた才媛である。

「そうなんだ。私は、またヴェルに奥さんが増えるのかと思ったわ」

「それは……ねえ？　雪」

「私如きがあり得ない話です（まあ、機会があれば……むしろその機会が多いので、大いに期待できる？）」

「ホソカワさん？」

「いいえ、何でもありません！」

雪は、何をブツブツと独り言を言っていたのであろうか？

「先生、今日も予定よりも十パーセント増しの進捗率です」

アグネス達も魔法の特訓になるからと、街道整備や田畑や用水路の造成を続けていた。

ルルを連れて、魔法の訓練がてら頑張っている。

「シンディとベッティは？」

「シンディは、用水路を広げに行きました。ベッティは、ルイーゼさんと井戸掘りです」

用水路を掘るくらいなら、黒硬石の層の上にある普通の岩や土を掘るだけだ。

なので、魔法使いならさほどの難事でもない。

ところが井戸を掘るとなると、必ず十メートル以上もある黒硬石の層をぶち破らないといけないのだ。

これができる導師は兼仲の訓練に忙しく、俺も領主として色々と忙しい。

そこで、ルイーゼがアグネス達に岩盤を魔法で打ち砕く方法を伝授していた。

あの三人は上級なので、多少日数がかかるにしても黒硬石を打ち破れるからだ。

一度に大量の魔力を使うので、魔力を増やす鍛錬にもなる。

「えらい事に首を突っ込んでしまったが、魔族との交渉で何も動きがないからなぁ……」

ブランタークさんは、ヘルムート王国と魔族の国との交渉がまるで進んでいない事実に呆れ顔だ。

もし交渉に進展があったら、俺に出番があるかもしれないのでアキツシマ島ばかりに構っていられない。

ところが、向こうはまるで音沙汰なしである。

双方に自由貿易が始まると損をする人物や団体があり、そこが手を変え品を変え妨害しているらしい。

王国側は魔道具ギルドが露骨に圧力をかけているから、あのユーバシャール外務卿だと厳しいだろう。

暫くはこちらの問題に専念できると思う。

「ブランタークさんは、ブライヒレーダー辺境伯から何か言われていますか？」

「俺の場合は、元々伯爵様担当だからな。バウマイスター伯爵領が広がれば交易とかで商売も広がる。王国がさらに南方の探索を始めれば、新しい島や大陸が見つかるかもしれないから、これはもう新しいフロンティアだ。手を貸して貸しを作っておくのは悪くないじゃないか」

ブランタークさんの言うとおりに、南方には夢があるかもしれな

い。
東方にも同じように夢があり、西方は魔族との交渉次第か。
唯一北方のみは、アーカート神聖帝国があって探索ができない。
王国もブライヒレーダー辺境伯家も、これからを見据えて未発見の土地に唾をつけておこうという算段だな」
「南に移民し航路を拓くにあたって、バウマイスター伯爵領が安定していないと意味がないからな」
アキツシマ島は、南方探索開発の中継拠点として安定していなければならず、ブランタークさんも手を貸してくれたというわけだ。
「まあ、先は長いけどな……」
確かに、現在バウマイスター伯爵家で押さえているアキツシマ島の領地は全体の二パーセントちょっと。
残念ながら、一番家柄がいいはずの秋津洲家はこの島で一番小さな領地しか持っていなかった。
七条家も似たり寄ったりであり、早期に勢力を拡大する必要があるであろう。
「開発は進めます」
「基本、俺らは余所者だ。支持を得るためには、明確な飴が必要となるか」
いつの間にか俺の参謀ポジションについたブランタークさんが、この島の地図を見ながら呟く。

「五十くらいの勢力に別れているとの細川殿のお話だったが、実際にはもっと多いんだな」

「ええ。小領主は、時にある大きな領主につき、また別の大きな領主につきと、そんな感じですので……」

大きな領主に圧迫されて臣従したが、そこが力を落とすと別の大きな領主を頼る。

一種の戦乱なので戦はあるのだが、あまり敵を追い詰めないルールらしい。

「兼仲はルール破りをしようとして負けたのかよ」

「そこまでは考えていなかったそうです」

脅せば、御所の水を使えるくらいの感覚で軍を集めたそうだ。

実は上手く行く可能性があったのだが、俺達の乱入で失敗した。

彼は領主として、とことんツキがなかったのであろう。

「今は武官になれてかえって喜んでいるのか。導師と同種類の人間に見えるからな」

兼仲は、村を統治して税を集めるなんて作業がとことん苦手だからだ。

今は雪が担当している。

仕事量が倍に増えたわけだが、彼女は有能なのであまり苦にしていないようだ。

旧七条領の名主達も、『兼仲様はお優しいのですが、そういうお仕事がちょっと……』と口を揃えて言い、雪を歓迎した。

なお、名主達に脳筋扱いされた兼仲はちょっと切ない表情を浮かべていた。

「体制としては、ここはバウマイスター伯爵領であり、代官は秋津洲家、副代官である細川家が実務を担当ですね」

秋津洲さんは島一番の名族の出なので、君臨すれど統治はせず、領民達の治療をしながら島民達に慕われるのがお仕事というわけだ。

「それで、導師が鍛え直していう兼仲が武官なわけだな」

彼が先陣に立てば、大抵の人間は震えあがるからな。
俺達魔法使いは例外だが、本来上級なんて滅多にいない。
ましてや、この島には上級の魔法使いが一人もいなかった。
中級の兼仲がトップクラスの実力の持ち主なのだ。

彼に勝てる奴など、滅多に存在しないわけだ。

「早速、南に調略をかけます」

「言う事を聞くかな？」

ブランタークさんと雪、イーナ、アグネスと共にこの島の地図を見る。
各領主の勢力分布図まで書かれたかなり詳細なものであり、これを調べた雪の力量を示すものであった。

「この地に来た商人やお涼様から治療を受けた者達から聞きました。島の地図自体は、元々秋津洲家は島を統治していたので所持していたのです。小領主はコロコロと所属を変えるので、現時点では多少

の変化があると思ってください」

「とりあえず、島の北方を統一しないと駄目か……」

「しても、中央の三好家と争いになるけどな」

「どうせ争いになる以上、少しでも多くの領地を押さえないと」

それに、事実上の天下人と呼ばれている三好長慶ですら、完全に押さえているのは中央との周辺領域だけ。

北部、東部、西部、南部に複数の有力大領主がおり、その下で小領主がその時に応じて所属を変えたりしていた。

「（子供の頃にやった戦国シミュレーションゲームみたいだな……）雪、この北部で強いのはどこだ？」

「一番の大身は伊達家ですね。秋津洲家とも遠縁で名族、自領も広く、従えている小領主も多いです。次は最上家。我らと至近にある南部家も侮れません」

どの家も、某戦国シミュレーションゲームや歴史ドラマではお馴染みの名前であった。

勿論苗字と名前が同じだけで、本人は出てこないはずだ。

……この世界に転生してきたとかないよね？

ちょっと不安になってきた。

「当主は、雪や秋津洲さんのように女性なのか？」

「いえ、大半の当主は男性ですよ。我々はあくまでも例外なのです」

もし当主が全員女性だったら、日本の創作物を参考に神が何かしたのかと疑う事態だったな。

二人の場合、あくまでも直系に女性しかいなかったからのようだ。

「そんなわけでして、私は細川家の跡取りを産まないといけないのです」

「そうなんですか……」

雪、そうやって俺に期待の視線を向けるのはやめてくれないか？

「ヴェル、モテモテでいいわね」

イーナさん、その笑顔が物凄く怖いです。

「とにかくだ！　まずは田植え、種まきを終えたら出陣だ！」

俺達バウマイスター伯爵家は、まずは北部統一に向けて動き出す事になる。

「総数二百か……で大丈夫なのか？　ナンブって、結構大物領主なんだろう？」

「ブランターク殿、こちらは田植えと種まきが終わったとはいえ、農作業等で忙しいのでこれが限界、向こうも同じ状況なので戦力比

は変わりませんから」

秋津洲領と七条領を併合したバウマイスター伯爵家は、第一目標としてアキツシマ島北部平定に乗り出した。

王国と魔族による交渉の行方がわからないので、なるべく急いだ方がいい。

俺達はエリーゼ達も含めたフルメンバーで、フリードリヒ達が心配だが、ここは涙を呑んでアマーリエ義姉さんやメイド達に任せている。

何日かに一度、『瞬間移動』で戻って顔を見る予定だ。

ただ、この予定も計画どおりに作戦が進んだらという前提条件がある。

昔の地球の貴族や大名も、忙しくて子供になかなか会えなかったりしたから、為政者というのは色々と大変なのだ。

「あなた、まずは慌てずに平定作業を進めましょう」

「そうだな」

従軍神官の仕事がすっかり板についたエリーゼに焦らないようにと諭され、俺は少し落ちついた。

「まあ、バウマイスター伯爵様と奥様はいい御夫婦なのですね」

「はい、私達はもう出会ってから長いですから」

俺の隣に、名目上の代官にする予定の秋津洲さんがいる。

彼女はエリーゼに比べると治癒魔法使いとしての実力では劣るが、

島一番の名族の出で、普段は領外からも来る患者の治療で活躍しており、北部で彼女の名は不動のものとなっていた。
領民達にも好かれており、彼女は看板に相応しい人物というわけだ。

本人もとても優しい子で、エリーゼとも仲良さそうに話をしているのだが、どこか引っかかるんだよなぁ……。

「アキツシマさんにも、そのうちにいい旦那さんが現われますよ」

「そうでしょうか？　でも、意外と近くにいるかもしれませんね」

「遠くの方かもしれませんよ」

「それはそれで面白いかもしれません」

エリーゼと秋津洲さん、一見ほのぼのと会話をしているように見えるのだが、やはりどこか引っかかるものがある。

「エリーゼ様、私達は臣下となったのです。そのまま涼子と呼び捨てにしてください。ヴェンデリン様もです」

秋津洲さんは、エリーゼのみならず俺にも名前で呼んでくれと言った。

「ヴェンデリン様、家臣をさんつけはおかしいですから」

秋津洲さん……じゃなかった。
涼子の言い分は正しかった。
だが、どこかエリーゼの機嫌が悪いような……。

俺の呼び方も突然ヴェンデリン様になっており、でもあまり違和感は感じないな。

やはり、久々の巫女服は偉大である。

自分を名前で呼んでくれというのも、先にエリーゼに頼んで既成事実を作ってから、俺にも言った？

主君の奥さんが涼子って呼んでいるのに、俺が秋津洲さんって呼んだらおかしいので、間違ってはいないんだ。

でも、実は涼子って意外と強か？

「私はこの島の平和のため、ヴェンデリン様の下で一生懸命に働かせていただきます。残念ながら、お飾りの代官職と治癒魔法使いとしてですが……」

自分に統治者としての資質がないと自覚している涼子は残念そうであったが、それでも島一番の名族の出だ。

その血は、この島を纏めるのにとても役に立つ。

彼女がいる事で反抗する者が少なくなるのなら、これはもう万々歳であろう。

できれば、これからも秋津洲家が代々この島の代官職を世襲し、それが多くの人達に認められるよう、バウマイスター伯爵家と婚姻関係を結んで……あれ？

俺が涼子を見ると、彼女はとても可愛らしい笑顔を浮かべた。

エリーゼの方は、その笑顔が何か怖い……。

これ以上深く考えるのはやめよう。

今は北方平定の方が先だ。

「あなた、ちょっと失礼しますね」

行軍の合間に休憩に入ったのだが、いつもなら俺の傍を離れないエリーゼが席を外した。

彼女は十分ほどで戻ってきたが、何と普段の服装ではなく涼子と同じく巫女服姿であった。

「似合うね、エリーゼ」

「ありがとうございます」

俺に褒められたエリーゼは、とても嬉しそうだ。

金髪巫女服も、これはこれでとてもいいな。

「でも、どうして？」

「涼子さんと同じです。この島では、女性の治癒魔法使いはこういう格好をするのが常識のようなので、郷に入れば郷に従うを実践したのです」

この島に治癒魔法使いは少なく、女性はさらに少ない。

巫女服姿なのは涼子だけなので、エリーゼは女性治癒魔法使いはみんな巫女服を着るものだと思っているようだ。

「そうなのか？　涼子」

「私の場合、秋津洲家は元々神官の出なので……」

この島には神道に似た宗教があり、秋津洲家はその宗教の神官の出だそうだ。

徐々にその力は落ちているが、代々優秀な治癒魔法使いを排出しやすく、治療と神官としての仕事、昔から世俗的な権力よりも宗教的な権威を利用して君臨していたわけだ。

「そのため、分家やそのまた分家の神官連中に利用される危険性もあり、この北方に領土を確保しました」

唯一の本家の人間である涼子を取り込み、本家を乗っ取る算段だったのか。

それにしても、雪は本当に忠臣だよな。

「お涼様が普段おられる場所は『御所』と呼び、本家の健在を誇示しているわけです」

普段涼子がいる御所は、名前は立派だが大きな屋敷程度でしかない。

近くにふんだんに地下水が湧く場所があり、そこを領地が水不足だった兼仲が狙ったわけだ。

「第一段階の目的としては、伊達家が本拠を置く『米沢城』を確保し、そこを本拠地にして北部を掌握する事かと」

米沢って、確か伊達家の本拠地だったような……。

まさか、本拠地まで同じ地名とは思わなかった。

「それはいいけどよ。その前にまずはナンブじゃないのか？」

エルからすれば、まずは最初に戦いになる南部家の方が気になるようだ。

「雪さん、南部家とはどれくらいの力があるのですか？」

エルに同調したハルカも、雪に南部家の戦力を問い質した。

「そうですね……南部家で千人程度は動員可能かと思いますが、我々とは違って田植えや種まきが終わっていません。半分動員できれば大したものだと」

「ですが、主家の危機なのでは？」

「それはですね、ハルカさん」

南部家は大領主ではあるが、大半は領地は小領主の集合体であり、本家の領地はそこまで大きくない。

「農繁期に動員なんてかけたら、小領主達はそっぽを向くでしょうね。無理強いすれば、他の大領主に裏切るなんて日常茶飯事ですから」

「……大変なのですね……」

ミズホ公爵領ではミズホ家の力が強く、ハルカはこの島の現状が信じられないようだ。

大領主が兵を挙げると、それに近隣の小領主が従う。

それで勢力が増えたように見えるが、他の領主が兵を挙げると今度はそちらに従って勢力図が塗り替わる。

これを延々と繰り返すわけだから、この島の戦乱は一向に終わらないわけだ。

従わない小領主を殲滅するという手法を取りそうな気がするが、

それはタブーなのだそうだ。
たまに領地を奪われる領主もいるが、彼らは一族は追放処分で終わってしまう。
逃げ延びた領主一族は、追放した領主に対抗している領主の世話になったり、中央の三好家などに仕えたりするらしい。

戦乱とはいえそこまで血みどろというわけではないが、これだと永遠に島の統一は難しいだろうなとは思う。

「そこで、膨大な魔力を持つお館様の存在が役に立つのです」

俺、導師、ブランタークさん、エリーゼ、ルイーゼ、カタリーナ、テレーゼ、リサ、アグネス、シンディ、ベッティ。
上級魔法使いがこれだけおり、それだけで過剰戦力といっても過言ではない。

イーナ、ヴィルマ、カチヤは中級クラスの魔力を持ち、この島では頂点に近い実力を持つ。
エルとハルカはオリハルコン刀を持ち、残念ながらこの島の鍛冶技術で作られた刀では歯が立たない。
雪によると、この島ではオリハルコンが採れないそうだ。
外部からも持ち込めておらず、それどころかミスリルすら存在しない。
鋼で作られた刀や槍が最高品質の武器であり、エルやハルカとまともに斬り合えないのが現実であった。

「でも、戦力比が圧倒的な方がいいな」

犠牲を少なく平定するには、強大な力で脅すしかない。
統治を安定化させるには、これは時間をかけないと駄目であろう。

それにしても、陛下はよくわかっている。
俺にこの島を押しつけてしまうのだから。

「ヴェル、あの内乱よりは楽だと思うよ」

「そうね、この島には古代魔法文明の遺産もないだろうから」

ルイーゼとイーナに励まされ、俺は行軍を続ける。

「ぷっ、ヴェル様」

不意にヴィルマが俺の腕をトントンと叩くので振り返ると、彼女の横にエリーゼに続き、巫女服に着替えた三名がいた。
カタリーナ、リサ、ベッティである。

「なぜ？」

「軍勢の中で、治癒魔法が使える者を区別するためです」

この中で一番の治癒魔法の使い手であるエリーゼが巫女服に着替えたので、うちの女性陣で治癒魔法を使える者は全員着替えたそうだ。
カタリーナは、水系統の治癒魔法で軽傷者には対応できる。
リサも、ブリザードの二つ名から水系統の治癒魔法が使えた。
ただし、カタリーナと同じく軽傷者にしか対応できないそうだ。

俺の弟子である三人娘の中では、ベッティが唯一水系統の治癒魔法が使えた。
ただし、二人と同じく軽症者にしか対応できなかった。

「ヴェル様、カタリーナが変」

「うーーーん」

カタリーナの巫女服姿が似合わない理由は簡単であった。

洋風そのものの縦ロールの髪型と、和風そのものの巫女服の相性が最悪だからだ。

リサとベッティは、涼子ほどではないがよく似合っているのだから。

「私、元のドレス姿に戻りたいですわ」

「従軍中なので、そこは我慢していただく方針でお願いします」

「仕方がありませんわね」

カタリーナは意外と真面目なので、雪から軍規の関係でと言われると何も言い返せなかった。

兵士達からすれば、誰が治療してくれるかわかった方が安心であり、その数が多い我が軍の士気は高く保たれるわけだから。

「リサさんは、よく似合っていいですわね」

すっぴんのリサは落ち着いた感じなので、巫女服が似合っている。

ベッティはまだ未成年で幼いので、やはりとても可愛らしかった。

「負傷しても、これなら安心だな」

「そうだな」

「んだんだ」

従軍している兵士達は、自軍にいる治癒魔法使いの多さに安心していた。

みんなが巫女服に着替えたのは、決してコスプレ趣味というわけではないのだ。

「治癒魔法使いを準備できない領主の方が多いので、我々は物凄く贅沢だと思います」

秋津洲家は元々治癒魔法使いの家系だからこれは例外で、大半の領主は一族に多くても二～三名くらいしか魔法使いがいないそうだ。

その中から治癒魔法使いはというと、数代で一人出れば御の字らしい。

「まず一番最初に当たる南部家は？」

「それでも、服属領主の当主や一族には魔法使いがいるので、十名ほどはいるかと。ただし、みんな初級です。治癒魔法使いは、一人いればいいですね」

「そんなものなのか……」

最近、どこの名族でもなかなか魔法使いが出なくなって困っているらしい。

そのため、今では魔法使いの子供が産まれると問答無用で跡継ぎにされるケースが多いそうだ。

「血が濃い方が魔法使いが出やすいので親戚同士で婚姻を行うも、子供が産まれなかったり、産まれても体が弱くて長生きできなかっ

たりしますね」

一つの島で一万年以上も暮らしてきたので、そろそろ遺伝的に限界が来ているのであろう。

ただ、閉鎖的な島で生きてきたからこそ、逆に魔法使いの才能が何とか遺伝してきたという現実もある。

地球のハスプブルク家のように、大分遺伝状態の悪化が進んでいたようだが。

「ゆえに、外部から優秀な魔法使いの血が入る事に私は歓迎です」

「そうですね。昔は島一番の魔力の持ち主と謳われた、秋津洲家の当主である私がこの程度なのですから……」

涼子は、ここ数代で秋津洲家の当主が持つ魔力量が大幅に減ってしまったと俺に説明した。

「ですが、私とヴェンデリン様の子供が秋津洲家の当主となれば安泰ですね」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

涼子の発言で、その場の時間が一瞬止まってしまった。

「あれ？　おかしい事でしょうか？　秋津洲家の代官職がお飾りだとしても、秋津洲家の当主は代々優秀な治癒魔法使いの方が求心力があるではないですか」

涼子の言い分は正論だ。

正論だからこそ、俺は答えに窮した。

エリーゼ達がどんな顔をしているのか、見るのが怖い。

「細川家も、できればお館様の血が入っていた方がいいですね。何より、私もお涼様も一族唯一の生き残りとなってしまいましたので」

更に、雪も爆弾を投下した。

「ええと……そういう事はあとで決めるのが……「前方に敵軍あり！」」

ちょうどいいタイミングで俺達の前面に敵軍が姿を現した。

実は南部家にバレるよう行軍を続けていたのでこれは想定内であり、俺からしても更に嫁が増えるかもしれない話を先延ばしにできたので、心の中で南部君に拍手を送ったくらいだ。

「全軍、応戦準備！」

先陣と味方の軍勢を纏める兼仲が、素早く隊列を整えて敵軍と対峙した。

「どのくらいいるかな？」

「うーーーむ、総勢で六百というところである！」

ブランタークさんと導師は、まるで物見遊山のように南部軍を観察している。

「攻撃してこないな」

「先に大将の物言いがあるのが我々の決まりですので」

相手の隙を突き、奇襲をかけるような戦争は滅多に起こらないらしい。
互いに軍勢を出し、大将同士がそれぞれに要求などを言い、それから戦闘になるそうだ。
敵軍から三十ほどと思われる男性が馬に乗ったまま、数騎のお供を連れて姿を現した。

「我こそは、南部家の当主南部晴政である！　秋津洲の女当主よ！　何ゆえ兵を挙げたか？」

南部家の当主は晴政というらしい。
俺は歴史に詳しくないので、彼が戦国時代の人物と同名なのかわからなかった。
従っている連中は、服属している小領主のようだ。
みんな、魔法使いだとわかる。

「ブランタークさん、これぞという強者はいませんね」

「そうだな。あのナンブとかいうのがもう少しで中級かなってところだ」

南部家は名族らしいが、当主の魔力が減少していく宿命から逃れられていなかった。
他の小領主達はみんな初級クラスだ。
小領主で中級の兼仲が、北部で一番の猛将だと評価されるわけだ。

「細川藤孝！　説明を求めるぞ！」

秋津洲家の実務は、細川家が見ている。

この事実は周知のようで、晴政は雪にどういう事かと尋ねていた。

「見てのとおりです。外から膨大な魔力を持つバウマイスター伯爵様がこの島の平定を決意なされ、我が主秋津洲高臣様がこの島全体の代官に任じられました。素直に降って従うのならよし。嫌ならば、バウマイスター伯爵様とその配下の方々の魔法で消し炭にされるのみ。信じるも信じないも、貴殿のご自由ですが」

「呆けたか！　小娘！」

随分と傲慢な言上であったが、元からこう言って晴政を挑発するのが作戦の内であった。

「その若造がバウマイスター伯爵とやらか。それほど凄い魔法使いだというのか？」

「あーーーあ、だそうですよ。ブランタークさん」

「この島の魔法使いの劣化は酷いな」

何しろ、他の魔法使いの力量を見抜けないのだから。

兼仲は俺達の強さに気がつき、恐怖に慄きながらも戦った。

晴政達は、俺達の魔力の量にすら気がついていない。

確かに、この島の魔法使いの劣化は酷いと思う。

「試してみるか？」

「何を試すのだ？」

「俺達で決闘して、勝った方が総取りだ」

「総取りだと？」

「そうだ、お前が勝てば秋津洲領も七条領も南部家の領地になる。お前が負けたら、我々が南部領を併合する。わかりやすいだろう？」

「そのような条件、あとでお前らが負けてもやっぱり嫌だと言うかもしれないじゃないか」

「それはないな」

「ほう、なぜそう言い切れる」

「絶対に俺が勝つからだ。むしろ、お前が負けてやっぱりなしという危険の方が高いな」

「言わせておけば！　ここに居るすべての兵達が証人だ！　いくぞ、バウマイスター伯爵とやら！」

思ったよりも簡単に挑発に乗ってくれた。

あとは、俺が晴政を撃ち破るのみだ。

とは言っても、彼は所詮は初級。

師匠のような技巧派というわけでもなく、俺は軽く『魔法障壁』を張って彼の魔法を防いだ。

晴政は連続して『火球』を放って俺にぶつけようとするが、すべて簡単に弾かれてしまった。

「全然効かないな」

「舐めるな！」

晴政はもっと巨大な『火球』を作ってぶつけるが、やはり俺が張った『魔法障壁』には通用しない。

しかも、彼は初級でしかない。

すぐに魔力が尽きてしまった。

「降伏するか？」

「お前は俺の攻撃を防いでいただけではないか！」

「つまり、攻撃を食らいたいと？」

「守るのは得意なようだが、果たして攻撃はどうかな？」

「じゃあ、攻撃してやる」

俺は直径三メートルほどの『火球』を作り、晴政の上空に浮かせた。

それを見た晴政は、絶句したままその場で動けなくなってしまう。

「念のために聞いておくけど、これをお前の体に落としてもいいか？　多分、骨も残らないと思うけど」

「……」

次第に、晴政の顔色が真っ青になっていく。

「南部家の家臣の人達、及びに服属領主の方々。南部晴政殿につき

合って滅びの美学を追及されるのなら、俺は止める気はないけどね。
それで、返答は？」

「我ら津軽家は降るぞ！」

「九戸家も降る！」

「北家も降ります」

「八戸家もだ！」

晴政を除く全員が、彼よりも先に降ってしまう。
そして最後の残された晴政も遂に決断した。

「南部家も降ります……」

「それはよかった。じゃあ、この『火球』は邪魔だな」

俺が作った『火球』を不要とばかりに少し離れた場所にある岩山へとぶつけると、その岩山はドロドロに溶けてなくなってしまう。
それを見た晴政達は、全員その場で腰を抜かした。

「悪辣よのぉ、ヴェンデリン」

「殺すよりはいいさ。魔族の件もあるから、なるべく早くに島を統一し、あとの統治で徐々に支配力を増す方法で行く」

「まあ、それがよかろう。どうせこんな特殊な事情のある島じゃ。王国も無茶は言うまい。我々に押しつけた罪悪感も多少はあるであろうから、あとで支援なり援助を集るのを忘れるでないぞ。名目は

『将来王国が南方探索をするための後方拠点整備費』あたりかの。
もっともな理由をつければ、役人は納得する生き物じゃからな」

圧倒的な力で脅かして、相手の気力を折ってしまう。
この作戦を俺に提示したのは、兼仲には難しい軍政面で協力してくれているテレーゼであった。
伊達に元フィリップ公爵ではないわけだ。

「わかったよ、テレーゼは頼りになるな」

「この程度の忠告、大した事でもあるまいて」

我がバウマイスター伯爵家、秋津洲家合同軍は、犠牲ゼロで北部の有力領主南部家を降す事に成功するのであった。

第百四十九話　こっちの世界でも、安定の独眼竜。

「という統治方法に徐々に持っていくが、不満はあるかな？」

「いいえ、滅相もない！」

降った南部晴政達に俺がこの島の統治方法を伝えたが、彼らは反対しなかった。

俺達がいなくなってから反抗する可能性も否定できなかったが、俺は『瞬間移動』ですぐここに来れる事。

バウマイスター伯爵家に逆らわなければ、魔導飛行船を用いた交易も始まると伝えたらとても喜んでいた。

「この島に入植したご先祖様は、魔導飛行船を所持していませんでした。製造、維持ができる技術者もおりませんでしたので……」

同じ名族でも、この島に入植した秋津洲家は神官の出であった。

もう一方の瑞穂家は、一族や分家に職人や技術者が多かったそうだ。

ミズホ公爵領ですら今の領地に腰を据えるまでに失った技術が多かったのだから、アキツシマ島は余計にそうなのであろう。

外部との交流もなかったわけだから、おかげで魔導技術も大分衰退してしまったようだ。

「同じ民族であるミズホに支援を要請するか？」

「それは反発が大きいと思います」

すっかり従順になった南部晴政が、自分はともかく他の領主層の反発が強いはずだと断言する。

「一万年も前とはいえ、瑞穂家と秋津洲家は仲が悪かったそうです。昔は、互いに当主を暗殺しようと暗殺団を定期的に送り込んでいたとか……」

「昔の事なのに、随分と詳しいんだな」

「南部家は、元々秋津洲家に仕えていた警備隊幹部の子孫なので、大昔の書物などが残っているのです」

一万年も続く名族か……。

ヘルムート王国でもビックリなお話だな。

「ハルカ、そうなのか？」

「私も、父や兄から聞いた事があります。なぜ同じ民族で行動を別にしたのかといえば、仲が悪くて一緒にいると内輪揉めをどころか、殺し合いになる危険があったからだと」

「でも、一万年経っているけど」

「ミズホ側としても、無償での支援は難しいと思います。新しい領地の開発や入植で忙しいでしょうし……」

内乱鎮圧の功績で加増されたミズホ家は、加増された新しい領地の把握と統治で忙しかった。

こんな遠く離れた島の支援は難しいというわけだ。

一万年以上も離れていたのに、突然同族だから支援してというも

の難しいか。
アキツシマ島側にもプライドがあり、支援してもらったがために下に見られるのも嫌だろうし。

「こちらとしても、瑞穂側に支配される危険性を考えますと……瑞穂家に支配されるくらいなら、バウマイスター伯爵家に従った方がマシという領主も多いでしょう」

戦に負けた俺達に従うのは仕方がないが、負けてもいないミズホから下に見られるのは嫌という事だ。
それにしても面倒な……。
一万年以上にも及ぶ確執か……。
でもそのおかげで、彼らはバウマイスター伯爵家に素直に降伏したとも言えるのだから。

「まあいい。領地は没収だが問題ないな？」

「はい」

これも揉めるかと思ったが、意外と素直に受け入れられた。
領主を廃止するのは、彼らはバウマイスター伯爵家の家臣になるわけだから、寄子になって独立でもしなければ領地を与えられないからだ。
とはいえ、今統治している領主の代官には任じる予定だ。
彼らは代官として統治を行い、バウマイスター伯爵家の代わりに行政、徴税、治安維持などを行う。
ミスがなければ、跡継ぎを代々代官に任じる。

そんな彼らを纏めるのが細川家と秋津洲家というわけだ。
領地を没収とはいえ、今の時点ではあまり変化もないとはいえる。

南部家はその家柄と元々持っていた領地に比した屋敷と土地の所有を許され、代官職の他にも商売をおこなったり、大規模農地の経営もできるからだ。

ただ、領民達に対し、バウマイスター伯爵家で決められた以上の税や労役を課す事はできなくなった。

彼らの土地や家屋の所有も正式に確定され、そこから上がる収入から決められた比率の税をバウマイスター伯爵家に収める。

元領主達は代官として税の徴収をおこないバウマイスター伯爵家に納め、代官としての給金はバウマイスター伯爵家が金で支払うわけだ。

最初は上手く行かないかもしれないが、代官としてミスが多ければ解任もあり得るとは言ってある。

反抗すれば、すぐに鎮圧可能なので問題ないであろう。

それに、彼らを統括する予定の雪は優秀だからな。

彼女が同じ方式で何の苦もなく旧秋津洲領と七条領を統治していると聞き、ローデリヒが『部下に欲しいです』と言っていたくらいなのだから。

「こちらの統治を受け入れれば利益も供与する」

まずは、一万年も待ちに待った外部との交易だ。

彼らは水上船しか持たず、しかも少しこの島を出て海を北上すると海竜の巣があった。

今までに外部との交易を目論んで海に沈んだ者はほぼ全員だそうで、普段は島の周囲で漁をするくらいだったそうだ。

その漁ですら、この島はほぼ断崖絶壁に囲まれており、砂浜や港になる場所はほぼ限られていたので規模は大分小さいくらいなのだ

から。

「今、みんなで井戸を掘っている」

「ありがたいです」

この島には、河川や湖沼が異常に少ない。

中央部にある琵琶湖とそこから伸びた短い支流くらいだ。

大半の領主は、大昔に掘られた井戸や、雨水を溜めるため池に頼っている。

井戸は深く掘らねばならず、水脈の上に『黒硬石』という特殊な岩盤の層があり、これを破壊するのは上級以上の魔力を持つ者でないと難しい。

中級以下では削れもせず、ここ数百年優秀な魔法使いが出ていない彼らは新しい井戸を掘れなかった。

昔に掘った井戸が次第に枯れる事案も発生し、彼らは水の確保に懸命であったのだ。

「一度枯れた井戸も、もう一層岩盤を砕けば復活するみたいだな」

「おかげで、みんな助かっています」

名族南部家の当主晴政をもして、水の確保は容易ではなかった。

琵琶湖を持つ三好家の力が、いかに強大であるかの証拠もあったのだ。

「ただ、琵琶湖の水を持ってしても中央の民が豊かに暮らすのが限界なのです」

だから三好家は、地方に手を出さなかった。

晴政も年に一度贈り物を持って挨拶に行き、すると三好家から返答の贈り物が貰える。
その贈り物は、琵琶湖で獲れる魚を干したり、塩漬けにしたもので、これを転売すると大きな利益が出るそうだ。

アキツシマ島の住民は日本人に似ているので、彼らも魚が好きなのは同じようだ。

「あとは、行商に来てくれる頻度が上がります。三好家は、挨拶に来る領主には気前がいいですね」

「それで地方が大きく荒れないのなら、安い買い物なんだろうな」

下手に地方に介入すると経費ばかりかかって赤字なので、地方領主を贈り物と交易の利益で従わせるのが三好家の方法なのであろう。
彼らが、新しいこの島の支配者であるバウマイスター伯爵家に対しどう出るかはわからないな。

その前に、色々とやらねばいけない事が多い。

上級の魔力を持つ魔法使いは、降った南部家以下の領主達の領地を回っている。
新しい井戸を掘ったり、過去の枯れた井戸の再生を行っているのだ。
ただ、彼らの実力を持ってしても一日に一度全力で岩盤を砕いて五日から一週間かかる。
それでも、今まで黒硬石を砕ける魔法使いがいなかったので、我々は大いに歓迎された。
命の水を提供してくれる新しい支配者を素直に受け入れている。

使える水の量が増えるという事は、彼らの好きな米を作れる量が増える事にもなる。
歓迎されないわけがないのだ。
エリーゼと涼子は無料で領民達の治療を行い、これも好評だ。
強大な魔法で脅すという方法で従わせたので、飴の政策も必要というわけだ。

「貨幣についても感謝しております」

ミズホには独自の通貨があったが、この島にもないわけでもなかった。
だが、その質はお世辞でもいいとは言えない。

この島は金と銀が少ししか採れず、銅は島内数箇所に銅山があるので銅銭が主流であった。
形は時代劇に出てくる奴によく似ている。
ところがその銅貨が、まったく統一されていないのだ。

秋津洲家が島全体を押さえていた時に発行された古い銅銭『秋津通宝』。
ただしこれは、最後に作られたのが五百年ほど前だ。
鋳造技術がいいので価値は高いが、ほとんど市場に出回っていない。

次に、三好家が製造している銅銭『三好通宝』。
一番数が流通しており、そう作りも悪くない。

最後に、それぞれに地方領主や商人が勝手に鋳造している通称『雑貨』。
質はピンキリの上、地方貨なので現地でしか使えない。

少なくとも中央では、贋金扱いなので絶対に使えなかった。

地方領主の大半は、外部との決済用に三好通宝を、地元で使う雑貨の両方を備蓄していたわけだ。

銅銭がなくて、金片、銀塊、水晶などの宝石、岩塩、塩、いまだに物々交換が主流の地域もあるそうで、誰が考えても不便なのは確実であった。

そこで、金、銀、銅の量を計ってセント貨幣に交換する事を義務付ける事にした。

施行は北部を完全に把握してからになるが、その頃にはバウマイスター伯爵領から交易船も来るので、セント貨幣で色々な品が買えれば不満もないはずだ。

バウマイスター伯爵領となった以上は王国のセント貨幣しか使えないので、特に私鋳した雑貨などは撤廃させないといけない。

「今は北部の平定に全力を傾ける」

「本故地は、やはり米沢ですか？」

「あそこが一番便利だ」

北部一の名族伊達家の本拠地とあって、そこを押さえれば北部支配が容易となる。

そこに涼子と雪の屋敷を置き、常備兵を兼仲に任せる。

統治の補佐として、晴政達に文官を出さえてまずは北部の支配権を強固にする計画だ。

「（まるで、リアル〇長の野望だなぁ……）兵力を常備兵主体とし

て、北部の開発も推進。井戸ももっと掘らないとな」

魔法で海水を真水にしてもいいのだが、俺が常にこの島にいられるはずがない。

この島は島なのに地下水が豊富なので、岩盤を魔法で撃ち砕き続けるしかないのであろう。

人口が増えた場合は、バウマイスター伯爵領に移住だな。

土地は余っており、降伏した旧領主達の子弟には仕官先も提示できる。

既に、バウマイスター伯爵家に仕官してしまった者達もいた。

領主やその家臣の一族でも、行き先がない者が多かった。

基本的に水不足なので、じゃあ開墾しようというわけにいかなかったからだ。

若い彼らは外の世界に出られるとあって、みんな目を輝かせてうちに仕官した。

今は俺直属の常備兵部隊を編成し、訓練の合間に街道の整備などを行っている。

「次は最上家か伊達家か」

「最上家の攻略が先ですね」

「なぜ晴政は、そう思う？」

「両家は親戚同士ですが、元は仲が悪かったですから」

少しでも関係を改善しようと、現伊達家当主に、前最上家当主が妹を嫁がせた。

だが、一代の婚姻くらいで両者の関係はなかなか改善しないであろうというのが晴政の考えだ。

「伊達家は、最上家に援軍を送らないのか？」

「伊達家は、うち以上に重臣の力が強いですからね。いまだに最上家との婚姻に反対している者も多く、援軍を送れるか疑問なところです」

「詳しいんだな」

「ええ、南部家はアキツシマ島北部三大名族と言われておりますが、その力は最下位です。伊達家と最上家の動きには常に注意を払っていました」

生き残るためとはいえ、名族の当主というのもなかなかに大変なようだ。

「井戸掘りがひと段落したら、次は最上家だな」

やはり黒硬石の岩盤は強固であり、俺が加わっても領民達から支持される数の井戸を掘るのに二週間かかってしまった。

その間にエリーゼと涼子は領内での無料治療を行い、兵士達は兼仲が訓練を施したり、領内の街道整備、開墾なども行っている。

次は、北部三大名族の中で二番目に力を持つ最上家。

その当主である義光の決断が気になるところであったが……。

「降ります。一門の清水、大山、上野山、山野辺、楯岡、松根、家臣の鮭延、寒河江、日野、志村、延沢、氏家他全員、一人残らず降

ります」

「はい？」

動員兵力でいえば南部家よりも多いはずの最上家は、当主義光が自ら来て俺達に降ると宣言した。

念のため雪が事前に降伏条件を認めて送っていたが、まさかこちらが力を見せる前に降るとは思わず、雪ですら唖然としていた。

「魔法勝負を挑むとかしないのか？」

「最上家当主である私の魔力は、残念ですが南部晴政殿とそう差がありません。勝てない勝負を挑むほど我々はバカではないのです」

「領地は没収だぞ」

「代官職の世襲と、子弟の仕官、バウマイスター伯爵領への移民も認められるそうで？」

「ああ」

「では、問題ないですな」

この最上義光という人物、本心からそう言っているのだろうか？

みんな、代々数千年以上も領主としてその土地で暮らしていたというのに。

「領地に未練はないのか？」

「ないと言えば嘘になりますが、このままですと我らはジリ貧です

から」

段々と当主とその一族の魔力が減少していき、このままでは領地の開発も侭ならない。

ちょうど強者が外部から来たので、過酷な条件が出たわけではなく、むしろいい条件なので降って当然だと義光は述べた。

「領主が独立独歩でやっているといえば聞こえはいいですが、この数百年で我らは衰退する一方なのです。三好家も中央にしか興味がありませんので。バウマイスター伯爵様が強者で我らに利益を与えてくれるのなら降ります」

「そうなんだ……」

俺はもっと『先祖代々の土地がぁーーー！』と必死で抵抗するかと思った。

「そこにおられる秋津洲高臣様には申し訳ありませんが、せめて秋津洲家が島内に統一した強固な統治体制を維持していればと思います」

「それがあったら、俺はヘルムート王国に朝貢させていたから」

今のところは順調に平定作業が進んでいたが、収支でいえば完全な大赤字である。

アキツシマ島が安定的に統治できるようになっても、このままだと元を取るのに数十年規模でかかるであろう。

もっとも金がないわけでもないし、俺も妙に貯め込むよりも派手に使った方が王国も安心であろうから、俺は金を使う。

浪費癖も大層な趣味もないからな。

というわけで、俺は大金をかけてこの島を平定しなければいけないのだ。
いくらまで使うのかは、ローデリヒの胸先一つだけど。

「我らは降りましたが、伊達家はどうなるかわかりません」

「義光は、伊達家当主の義兄だと聞くが」

「そうですね。伊達家当主政宗の義理の兄になりますか」

伊達家の当主は政宗というのだな。
もしかして、片眼で眼帯をしているのであろうか？

「それともう一つ」

「何かあるのか？」

「それが、現伊達家当主政宗は急病で床に伏せているという噂が。我らも探ってみましたが、勿論そう簡単に探らせてもらえるはずもなく」

「これはまた厄介な……」

当主が降ってくれれば楽だったのに、もし病状が悪化して亡くなりでもしたら、今度は御家騒動か？
とにかく状況がわかるまで、最上領の慰撫に務めるしかない。

「つまり、ボク達やヴェルは井戸掘りなんだね？」

「他にできる人がいないからな」

本当、黒硬石って硬すぎだよ。

この島の基礎の大部分がこの石でできているのだから。

魔法にも強いので、井戸掘りで砕いた石を王都の魔道具ギルドに見せたらサンプルに大金を支払ってくれた。

魔族が作る高度な魔道具に危機感を抱いているが、金はあるし、何か新しい技術のヒントが欲しいと思ったのであろう。

だが、黒硬石は硬すぎて加工すら難しい。

オリハルコン製の工具でしか削れないらしく、これを使った製品の実用化には膨大な年月がかかると予想される。

要するに、今の時点ではただの固すぎる岩であった。

「井戸を掘りつつ、体制を整えて伊達家と戦わねばならないわけだ。ところで、現当主はどの程度の魔力を持つんだ？」

「実は、我々とそう違わないです」

伊達家も犠牲を出さずに降せるだろうか？

そんな事を考えながら俺達は併合した旧最上領や、服属領主達の旧領に井戸を掘り、開墾を行い、街道を整える。

あとは伊達家の対応を待つのみであったが、俺達は予想外の敵と戦う事になるのであった。

「父上、お加減はいかがですか？」

「すまないね……藤子。私が元気なら、すぐに北の敵と対応するのに……」

「父上は、心安んじあれ」

今、俺の父伊達政宗は病床にあった。

医者に見せたが病状はよくない。

そこで、最北に領地を持つ名族秋津洲家の当主にして高名な治癒魔法使いである高臣殿の招聘を計画していたところ、予想外の出来事が発生した。

その高臣殿が、外部から来たバウマイスター伯爵を名乗る集団に降り、この島の北部領域の平定を始めたのだ。

その動きは早く、彼らは難なく南部家と最上家、その他対数の小領主達を呑み込んだ。

当然次は、父上が当主を務めるこの伊達領が標的となる。

本来ならばその対応は父の仕事なのだが、今は重病で床から離れられない。

ならば、父の唯一の子である私、次期伊達政宗を継ぐ伊達藤子がバウマイスター伯爵に対抗しなければいけなかった。

これ以上、余所者に好きにはさせない。

名門伊達家の意地を見せてやるのだ。

「大体、伯父上も不甲斐ない！」

「しかしながら、義光殿は優れた人物。彼が降るほどの実力を持つバウマイスター伯爵家は危険だ。私が動けねばなぁ……」

「父上、ここは俺にお任せを。バウマイスター伯爵とやらは優れた魔法使いと聞きますが、俺とて父上を超える魔法使いと言われているのですから」

俺は父上よりも魔力が多い。

父上が病床にあって無理をできない以上、俺が一族と服属領主達を率いて戦わねばならないのだ。

「しかしだな。藤子はまだ……」

「父上、事ここに至っては年齢など関係ありません。みなの補佐を受けつつ、バウマイスター伯爵とやらを撃退してみせましょう。なあ、小十郎、成実」

「お館様、我ら必ずや藤子様をお守りいたします」

「他の一族もついておりますれば、お館様は病状の回復に専念していただきたく」

俺の付け家老の片倉小十郎と従姉の伊達成実も、俺の代理出陣に賛成してくれた。

父上は、病気が治ってからまた伊達家で辣腕を振るえばいいのだ。

「わかった。藤子の意志を尊重しよう。だが、くれぐれも無理をしないように」

「心得ました」

父上から許可はいただいた。

見ていろ、バウマイスター伯爵め。
南部家、伯父上と立て続けに降していい気になっておるようだが、俺の魔法で必ずや島から追い出してやる。
そう決意した俺は、全軍を率いて出陣するのであった。

「聞け！　バウマイスター伯爵！　お前如きの対応でわざわざ父上が出陣するまでもない！　この次期伊達家当主、政宗の名を継ぐ伊達藤子が相手をしよう！」

雪が伊達家にも降るように、外の世界の情報を含めて文を送ったのだが、伊達家は降らずに軍勢を発進させた。
こちらもそれに対抗し、今は両軍が睨み合っている状態だ。
そんな中で、俺達に対し伊達家の当主代理である伊達藤子を名乗る者が堂々とした態度で言上を述べているのだが……。

「まあ、可愛らしいですね」

「あの子が伊達家の次期当主なの？」

「ふっ、ボクの方が大人だ」

「ルイーゼ、当たり前」

「ヴィルマ、それはわかっているから言わないで！　ボクはいつになったら大人の女性になれるんだ！」

「ヴェンデリンさん、魔法で勝負なされるのですか？」

エリーゼ達は、伊達藤子を見ると戦意を失ってしまった。

「先生、あの子……」

「ナナちゃんとそれほど年齢が変わらないのでは？」

「先生、本当に戦うのですか？」

アグネス達が心配するのも無理はない。

何しろ、伊達藤子はとても賢い子のようだが、どう見てもナナと同じくらいの年齢にしか見えないのだ。

「藤子ちゃんは、いくつなのかな？」

「誰が藤子ちゃんだ！　バウマイスター伯爵とやら、俺をバカにするのか！」

バカにはしていないが、彼女はどう見ても五～六歳にしか見えない。

そんな彼女と本気で戦ってしまったら、俺が大人気ないじゃないか。

「藤子ちゃん、女の子が俺なんてよくないですよ」

エリーゼは、彼女と戦う気などまったくないようだ。

『女の子なのだから、自分を俺なんて呼んではいけませんよ』と優しく注意した。

「ムキィーーー！　ちょっとくらい胸が成長しているからって、俺を子供扱いか！　俺は次の伊達政宗になるのだぞ！」

俺にとっては物凄く有名な人の名前だ。
この世界の伊達家は、当主が代々政宗を名乗るらしい。
雪が細川藤孝を名乗るのと同じだな。

「旦那様、あの子は眼帯をしていますが、何か目の病気なのでしょうか？」

そして、この世界の次代伊達政宗は黒い眼帯をしていた。
前の世界で独眼竜と呼ばれた政宗と同じく、隻眼なのであろうか？
リサはまだ小さい女の子なのにと、彼女を心配した。

「おーーーい、ガキンチョ」

「誰がガキンチョだぁーーー！」

「あのよ、目はちゃんと治療した方がいいぞ。エリーゼもいるから」

というか、次期伊達政宗こと藤子ちゃんは、伊達幼女政宗であった。
カチヤもまったく藤子ちゃんに戦意を持てないでいた。
むしろ、彼女の眼帯を見て心配で堪らないようだ。

「この眼帯か？　聞くがいい！　なぜ俺が独眼竜と呼ばれているのかを！　この眼帯は、俺の片目に封じている竜を封印するためのものなのだ！」

「すげえ！　聞いたか？　ヴェル」

「聞いたけど……（そんなわけがないよな？）」

魔法についての知識が薄いエルは、藤子ちゃんの発言を信じてしまったようだ。

目に竜を封じるなんて格好いいと一人興奮していたが、そもそもこの世界の魔法技術で目に竜を封印なんてできない。

封印魔術は、とてつもない大掛かりな装置が必要であり、しかも古代魔法文明時代以後ロストした技術であった。

「あれ？　でも、もしかして？」

「あーーー、それはねえから」

「万が一、この島には秘術として残っていたとか？」

「ないない。第一、あの娘っ子の目にそんな反応がねえよ」

「じゃあ？」

「口から出まかせなのである！」

ブランタークさんも導師も、藤子ちゃんの目に竜が封印されているという彼女の言い分を即座に否定した。

「誰が出まかせか！　この筋肉達磨！　この目の奥に封印された暗黒竜は、常に俺の目に施された封印を破ろうとしており、俺はそれを懸命に押さえているのだ！　うっ目が疼く……まだだ！　まだ表に出てはいけない……」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

みんな呆れ返っていたが、俺には理解できた。
前世で中学の頃、クラスメイトに似たような事を言う同級生が存在していたからだ。
彼は右手に包帯をしており、『いつ魔王の封印が解かれるやもしれぬ！』と定期的に周囲にアピールしていた。
他の同級生に聞いたところ、彼は厨二病とやらを患っていたそうだ。
俺はその方面に詳しくなかったので、世の中には色々な人がいるものだと感心したものだ。

藤子ちゃんも幼くして、その厨二病に蝕まれていた。
彼女はちょっとマセているので、件の同級生氏よりも早く目覚めてしまったのであろう。

「藤子ちゃん、もういいから」

「こらぁ！　人を可哀想な子のように言うな！　もう怒ったぞ！　食らえ！　『暗黒紅蓮竜』！」

怒った藤子ちゃんが眼帯を外すと、本当に目から黒炎で構成された竜が飛び出してきた。

「ヴェル、本当に封印されてたぞ！」

「いや、そんなわけないから……」

「あなた、あれは魔法ですよ」

魔法使いではないハルカにも理解できてしまう事であった。
藤子ちゃんは片目に竜など封印しておらず、ただ黒炎の魔法を竜の形にして目の近くから放っただけだ。

「変な集中法だな」

そう、ブランタークさんの言うとおり、これは藤子ちゃんなりの精神集中法なのだ。
一見無駄に見えるが、こうする事で魔法の威力が上がるのであればそれは正解である。
魔法使いとはそういうものなのだ。

「じゃが、恥ずかしいの。妾ではよう真似できぬわ」

テレーゼだけじゃない。
ここにいる藤子ちゃん以外の魔法使いは、みんなそう思っているはずだ。

「ヴェンデリン、大丈夫か？」

「勿論」

「ふんっ！　我が紅蓮の黒竜に焼き尽されて死ぬがいいわ！」

随分と自信満々のようだが、藤子ちゃんも今の時点では中級魔法使いでしかない。
俺が彼女の『炎竜』に対抗し『水竜』を作って絡ませると、藤子ちゃんの黒炎でできた竜は大量の水蒸気を発して消滅してしまう。

「バカな！　俺の暗黒紅蓮竜が！」

「藤子ちゃん、残念ながらこの世の中には上には上がいるのさ。それを理解するがいい」

俺は藤子ちゃんの五倍以上の『炎竜』を作り、それに頭上でとぐろを巻かせた。

いつでもこの竜をけしかけられる状態だ。

「大きい！」

「藤子ちゃんは魔法の才能があるみたいだね。でも、まだ修行不足だ」

「ううっ……」

蛇に睨まれたカエルの如く、藤子ちゃんは俺の頭上にある炎竜に圧倒されてその場から動けなくなってしまう。

元から魔力量にも差があり、藤子ちゃんも段々とその事実に気がついてきたようだ。

「俺よりも圧倒的な魔力か……。まさかここまでとは……」

「さて、どうする？　ここで素直に降るか、この炎の竜に軍勢ごと焼かれるかだ」

なるべく犠牲は出したくないが、こちらも慈善事業をやっているわけではない。

逆らうのであれば、それなりの犠牲は払ってもらわなければいけない。

こちらが強く出ると、藤子ちゃんの顔に迷いの色が出てきた。

「悩むまでもないと思うが」

「俺一人の問題ではないのだ。俺は自ら父上に進言して代理役となった。ここで一戦もせずに降るのは伊達家としての矜持に関わる」

矜持って……。

まだ幼いのに、随分と難しい言葉を知っているのだな。

次期伊達家当主としての責任感が、ここまでさせるのであろうか？

「つまり、勝負を続けるという事か？」

「……」

俺からによるこの質問で、藤子ちゃんの後方にいる軍勢に動揺が走った。

残念ながら、伊達軍や服属領主の軍勢に中級以上の魔法使いの存在はない。

こちらが魔法使いを投入すれば、戦はほぼ間違いなくこちら勝ちであろう。

みんなそれに気がついているので、藤子ちゃんには降ってほしいと思っている。

でも口には出せない。

そんな風に、俺には見えた。

「時に家臣や兵の事を考え、降る決断をするのも上に立つ者の役割だぞ」

「わかっておる！　だが……「藤子、もう降ろう」」

藤子ちゃんが俺達に降るかどうかで葛藤していると、その後らから落ち着いた男性の声が聞こえた。

その声の持ち主は輿に乗っていたが、それでも顔色は真っ青であった。

彼が、噂の病床にある当代の伊達政宗なのであろう。

「父上！　お加減はよろしいのですか？」

「あまりよくはないが、やはり戦で当主不在はよくないからね」

声は優しかったが、その芯にはとても強いものを感じた。

病床にあって弱っていても、伊達家の当主というわけだ。

「本当ならば、私が決断せねばならない重要な選択だ。いくら病気とはいえ、藤子に任せてしまった私は……」

当代政宗は、娘の藤子に対し申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「父上、私にすべて任せてお休みください！」

「いや、これは伊達家当主である私が決める事だ。バウマイスター伯爵、我々は降ります」

政宗の決断に、伊達軍の将や兵士達の大半は安堵の表情を浮かべた。

ところが、一部この決定に反対の者達がいた。

初級魔法使い数名が、突然こちらに攻撃を仕掛けてきたのだ。

「バウマイスター伯爵さえ倒してしまえば！」

「北部を、伊達家が統一するのだ！」

伊達家は古くからある名族のため、忠誠心過多の者達が一部存在するようだ。

彼らは刀を抜いてこちらに襲い掛かってくる。

「エッホを思い出すな」

「妾がいなくなって、エッホも大分落ち着いたと聞くぞ」

「へえ、そうなんだ」

テレーゼと軽く会話をしたあとには、雷撃系の魔法を食らって地面で痙攣する四名の魔法使い達がいた。

残念ながら、彼らの魔力では上級魔法使いの魔法はレジストできない。

「魔法が駄目なら！」

「じゃあ、もっと勝ち目がないわよ」

「無謀」

続けて十数名の敵兵も突進してきたが、イーナとヴィルマが魔力を篭めた槍と大斧の大振りで吹き飛ばした。

魔力が中級レベルにまで上がっている二人ならば、このくらいの

芸当は十分に可能なのだ。

「次は首を刎ねるか？」

「大人しく降りなさい」

エルとハルカもオリハルコン刀で兵達の武器のみを切断して破壊し、これで伊達軍において抵抗する者はゼロとなった。

「家臣が申し訳ない」

「痛い目に遭わせたから、これで大人しくなるでしょう」

「私はともかく、家臣達には寛大な処置をお願いします」

顔色が真っ青な伊達政宗が俺に頭を下げ、一か月と立たない内にバウマイスター伯爵家はアキツシマ島の北部およそ五分の一の領域を支配する事に成功するのであった。

「ねえ、ヴェル」

「何だ？　ルイーゼ」

「あの子、『暗黒紅蓮竜』って言っていたけど、どの辺が紅蓮なの？」

「……さあ？」

それは俺にもわからないが、何となく詳しく聞いてはいけないような気がしたのは確かであった。

「とにかく、今は無理をなされない事です。この薬を必ず毎日二回、朝と晩に飲んでください。あと、毎日私が治癒魔法をかけます」

「敵対した私にまでこのような情けをかけていただき、大変にありがたい」

伊達家の降伏により、俺達は島内における本拠地を伊達家の本拠地米沢へと移した。

日本にも同じ地名があるなと思いつつ、俺は領地の整備と新しい統治を進めていく。

そんな中で病床にあった伊達政宗は、エリーゼから投薬と治癒魔法を受けて徐々に回復しつつあった。

彼の病気は、ヘルムート王国では治せる病気であった。

治療薬も高価だが存在したので王都から取り寄せ、さらにエリーゼが治癒魔法をかけるので、あと一か月ほどで完治する予定だ。

だが、疲れていると再発する可能性があるので、もう半年ほどは無理ができない状態である。

彼は元々文官肌の人間で、さほど体力に自信があるわけでもない人間だ。

それでも、将来島の北部を統括する代官に就任してもらう予定なので、今は雪や南部晴政に任せて静養した方がいい。

彼はエリーゼの治療に感激し、とても感謝している。

きっと、この島の安定した統治に貢献してくれる人物になるであろう。

「お館様、暫くは北部領域の統治ですね？」

「ああ」

「三好家についてはどうなされますか？」

「今は警戒しつつ無視する」

一時の安定を求めるのなら、うちが北部を平定しました。

『責任を持って安定化させるのでよろしく』と挨拶に行けばいい。

ただしそれをした時点で、この島の常識ではバウマイスター伯爵家は三好家の家臣になったと宣言したに等しくなる。

実利があれば一時欺いてもいいのだが、それを王国に知られるとまずい。

王宮にいる俺が気に入らない貴族達が騒ぐ可能性があるので、三好軍の侵攻に備えつつ、今は体勢を整えている状態だ。

また黒硬石の岩盤を砕いて井戸を堀り、街道を広げたり、魔導飛行船で北部慮領域の測量を行い、新しい道の整備、田畑の開墾、村や町の建設候補地の選定を行っている。

来たる中央、東部、西部との戦に備えて軍の再編と訓練も行われており、今は三千人ほどが訓練をしながら街道整備などを手伝っていた。

常備兵なので金がかかるが、仕方がない。

「実は三好長慶も病床にあるという噂です。そうと思われないため

に牽制で兵を出してくる可能性否定できませんが。まず攻めてこないかと」

「ただ、商人が来なくなった」

個人レベルの行商人は来るが、規模の大きな商人が中央から交易品を持ってこなくなった。

このままだと領民達から不満があがるのは確実であり、今アルテリオと連絡を取って定期的に交易船を出す計画を立てている。

勿論海は危険なので、中小の魔導飛行船を週に二～三隻出す予定であった。

これと合わせて、計画していた貨幣の交換を行う。

領内において銅銭の流通を禁止し、すべてヘルムート王国発行のセント硬貨に移行するわけだ。

交換比率は、雪の進言で銅銭に使用されている鉱物の量を基準にする事にした。

この島の貨幣は種類も多く品質もバラバラなので、結局これが一番効率がいいのだ。

この島の銅銭は厚ぼったいので、一番品質が低い私鋳銭でもセント銅貨一枚半～二枚分ほどの量が使われている。

交換しても損はないので、みんなこぞって銅銭をセント銅貨と交換していた。

金片と銀塊も、ヘルムート王国の相場に従って貨幣との交換に応じている。

セント硬貨を手に入れた領民や、兵士達は早速日々の生活で使用していた。

セント銅貨は一種類しかないので、みんな買い物が楽だと喜んで

いる。

他にも、エルとハルカに俺の魔法の袋に入っている商品の売買を任せていた。

これはアルテリオが品を持ってくるまでの緊急処置であり、そのため少し安く販売したので好評だった。

「三好領にいる商人達に不満はないのか？」

確かに俺達は得体の知れない新勢力だが、北部領域は安定に向かいつつある。

井戸やため池が増え、農地も広がり、道も整備され、貨幣も統一されつつあるのだ。

俺は中央から来た商人達の活動に掣肘は加えておらず、行商人達は普通に商いをしていた。

そこに加われないのでは、色々と不満が溜まるかもしれないと俺は思うのだ。

「セント硬貨の件もあります。元々この島には多くの種類の銅銭があるので、北部以外でも使われるでしょうが、三好家は気に食わないでしょうね」

気に食わないが、今は当主重病のため北部を攻めるわけにはいかない。

中規模以上の商人の出入りを禁止し、経済的にダメージを与える戦法なのであろう。

「ならば、この北部はバウマイスター伯爵領、王国、帝国との交易で発展させる」

ようは、北部の住民が不便さを感じなければいいのだ。
水と道は増やしているので、少なくとも領民レベルではバウマイスター伯爵家の支配は好評であった。
元の領主達も大半が旧領の代官となり、あまり仕事内容に変化がないので不満も少ないのかもしれない。

「さてと、弟子達の様子を見に行くかな」

政宗との話を終えた俺は、伊達屋敷を出て米沢城内にある庭へと向かう。
北方の雄伊達家の居城はなかなかに立派な作りで、庭も広い。
今はバウマイスター伯爵家の代官府となっている。

伊達家は私財を持って、城に隣接する大きな屋敷へと移っていたのだ。
今は、俺達と涼子、雪もここで生活をしている。

「ヴェンデリン様」

「ルル、ちゃんと訓練していたかい？」

「はい」

俺が面倒を見るようになった元村長である幼女ルルは、俺の弟子兼お嫁さんを自認し、毎日魔法の特訓に励んでいた。
彼女はなかなかに才能がある魔法使いで、俺やアグネス達の教育で日々成長していた。

「次は私も連れて行ってください」

「未成年は戦場に連れて行けないよ」

いくら優秀な魔法使いでも、ルルはまだ五歳だ。

戦場には連れて行けない。

「ふふふっ、ルルはまだお子様だからな。ここは、次の伊達政宗である俺がお館様をお助けするのだ」

先日の戦いで伊達政宗代理を務めた藤子は。降伏すると妙に俺に懐いてしまった。

押しかけで魔法の弟子になり、同じ年のルルと毎日切磋琢磨している。

藤子もなかなかの才能の持ち主で、もしかしたら久々にこの島出身者で上級魔法使いになれるかもしれない。

なるほど、わずか五歳の幼女が総大将代理でも軍勢が機能していたわけだ。

みんな、藤子ちゃんの将来に期待していたのだ。

「藤子ちゃん、私と同じ年じゃない。それに私も村長だったもの」

「うっ、俺は次期伊達家当主として、色々とやっていたのだ」

「色々って何を？」

「色々とだ！」

藤子ちゃんは五歳にしてはしっかりしているが、やはり子供なのでなかなか統治の実務には関わらせてもらえなかったはずだ。

降伏後、政宗は幼い娘に負担を強いていた事を大いに反省した。

そこで、あとは成人するまで自由に過ごしていいと宣言したのだ。
おかげで、俺の傍には幼女が二人になった。

アグネス達もおり、奥さん達もいるわけだから、俺の周りは女性ばかりなのだ。
男がいても、俺の尻を狙うような奴ならいらないけど。

「俺も、導師様みたいに海竜退治に行きたいな」

「もう少し大きくなってからだね」

導師とブランタークさんは、ちょっと近くの海まで海竜退治に出かけていた。
中型の島内連絡船で少し島の沖合いに出て、自分達を食おうとする海竜を魔法で倒すのだ。
これを領民達に日当を与えて解体させ、素材や肉を販売する。
この売却益も、北部を統治する費用に化けるというわけだ。

「私ももっと強くなって、海竜を倒してみたいです」

「ルルならちゃんと訓練すれば大丈夫さ」

「ヴェンデリン様、ルルはいいお嫁さんになれるように頑張りますね」

「そうだね……」

ここで否定すると泣かれそうだし、変に認めてしまうと回りが勝手に納得してしまう。

なかなかに悩ましいところである。

「ルル、俺もお館様の嫁になると父上が言っておった。ただ強いだけじゃなく、ルイーゼのように大人の女になるのだ」

「……」

藤子も藤子で、どうやら政宗に言われたようだ。

大きくなったら俺に嫁ぐとか言っている。

魔法使いの弟子になったのは、当然魔法の上達もあるが、俺と一緒にいる口実を作るためであろう。

あと、ルイーゼが大人かぁ……。

初見だと、ほぼ子持ちだと思われないんだがなぁ……。

「アグネス達が不満そうだが、お館様ならあの三人も嫁にするのだから、目くじら立てる必要はあるのか？」

「私もわからない」

まずい。

俺は刻一刻と、女性達に包囲されていっているような……。

そして、俺に沢山奥さんがいても何とも思わない幼女二人。

この世界の価値観には、今も完璧に対応できないな。

「相変わらず、バウマイスター伯爵の回りには女性が多いな」

「いやあ、ここはいい島だね」

「あとで海水浴とかしたいな」

「ただ、もっと開発が必要だろうね」

さらに、民主主義全盛の魔族の国において、今も魔王を自称する少女まで姿を現した。

実は、俺が人手不足だから呼んだのだけど。

彼女は、モール達を護衛として連れてきていた。

魔王様は夏休みに入り、魔族の学校の夏休みは三ヵ月もあるとかで、出稼ぎ兼社会勉強兼バカンスに来たわけだ。

随分と血生臭い社会見学もあったものだが、彼女に従う宰相ライラさんに『王として必要な事だから』とここに来ていた。

魔族の国では、魔王様を会長、ライラさんを社長とする農業法人が設立された。

農村で自給自足をしていた若者達を組織し、農作物や畜産物の販売が主な業務となっている。

最初はなかなか作物が売れなかったそうだが、今では会社の経営も安定してきたそうだ。

アーネストの教え子であった元ニート三人組も、無事に就職を果たしている。

経営は順調なようだが、それでも当座の金は欲しいと俺の誘いに応じてくれた。

魔族が人間の国で働いていいのか疑問であったが、考えてみたら両国はまだ交渉中であった。

帝国も交渉に加わったようで、余計に事態の収拾が難しくなっていく。

決まりがない以上、魔王様とモール達がここで働いても問題はな

い？

最悪、脱法行為で違法じゃない。

ここは俺達が平定作戦中の島であり、関係者以外誰も来ないもの大きいか。

勿論、魔族の国には王政、封建制に対しアレルギーがある連中が多いので、俺の『瞬間移動』でこっそりと来ている。

「余は夏休み中、田舎の村ですごす事になっているのだ。余は魔族の国を出ていない事になっておる」

あくまでも、ここに来ているのは秘密というわけだ。

この島はバウマイスター伯爵領という扱いだが、平定作戦中なので他の王国貴族が来るはずがない。

ブランタークさんと導師がわざわざ外部に漏らして大騒ぎするはずがないので、魔王様とモール達はこの地で農業指導と開発の手伝いをする事になっていた。

「魔王様が、出稼ぎをするのか？」

藤子は、自ら働いて金を稼ぐ王様という存在が信じられないようだ。

彼女は民主主義など理解の範疇外なので、今魔王様が置かれている状況を理解していないからなのだが。

「余は皆に愛される魔王様だからな。というのは冗談として、現実的に金が必要なのだ」

「農業法人の経営は順調なんだよね？」

「そちらは大丈夫だが、急に金が必要になってな」

「金がですか？」

「学校の建設資金だ」

廃村に魔族の若者達が集まり、そこで自給自足の生活をしながら生産した作物を売って現金収入を得る。

魔王様が会長になり、優秀なライラさんが社長として実務を取り仕切る。

モール達も、元々一流の大学を出て優秀な人材なのだ。

他にも、最初に就職して失敗したり、酷い待遇の会社で心を病んでリタイアしていた若者が無事に再生したので、農業法人の経営は順調であった。

「生活が安定した社員同士で結婚し、子供が産まれる者も増えてきた。となると、子供には学校が必要となる」

廃村に学校にできるような建物がないそうで、今すぐ必要ではないがその時に備えて資金が欲しいのだと魔王様は言う。

「学校ともなれば、それなりの規模の建物が必要となる。長期間使うからな。子供がある程度集まれば、役所としても学校については検討してくれるそうだ。教員についても、教員免許を持っている従業員がおってな。彼らを臨時で採用すれば、中央からの派遣は最小限で済む。ところが、校舎がないと駄目だと言われたのだ」

田舎に学校を建設する。

どの世界でも、先立つものが必要というわけか。

「そこで、我らが魔法や技術でバウマイスター伯爵を手助けする。相応にお礼が貰えれば、余達も嬉しい。お互いに得をするわけだな」

バウマイスター伯爵領内でアルバイトをすると、俺の事が大嫌いなプラッテ伯爵達がいらぬ讒言を陛下にするかもしれない。

この島なら関係者以外誰もいないので、是非能力を発揮してもらいたいものだ。

「モール達が護衛なのですか」

就職してから短期間で、随分と信用されたものだな。

「この者達は恩師と同じで普段の言動はアレだが、仕事はできるからな。魔力も並以上はあって魔法の修練もちゃんとしておる。護衛としても役に立つぞ」

「というわけだから、バウマイスター伯爵」

「それにさ、ここで働くと給料以外に手当てが出るんだよね」

「遠隔地手当てだね」

「そんなに物入りなのか？　お前ら」

あまり詳しくは聞けないが、農業法人って給料が安いのだろうか？

「俺達さ、結婚するんだ」

「となると最低限の式は挙げたいし、子供が産まれた時に備えてちょっと蓄えも欲しいじゃない」

「そこでこの話が出たのだから、飛びつかねば男じゃない」

この三人と知り合ってそう月日も経っていないのだが、次々と人生の転機が襲ってきているな。

「そういえば、先生は？」

「もう少ししたら来る予定」

アーネストは、もう少し島の状態が落ち着いたら調査に来る予定だ。

もっとも、この島には古代魔法文明時代の遺産が存在しない。

純粋な学術調査なので、ローデリヒがバウマイスター伯爵領の遺跡調査を優先させているのだ。

「何だ、いたらご祝儀でも貰おうと思ったのに」

「残念だな」

「そのうち来るんじゃないの？」

お前ら、あのアーネストがそんな気の利いたものを出すと思うのか？

「俺は祝儀は出さんが、報酬に色をつけるからあとは魔王様の器量に期待してね」

「そうだな。バウマイスター伯爵が余の臣下に褒美を渡すと問題だからな。よくわかっているではないか。お主が余の婿なら色々と楽

なのにな」

「それは、同じ魔族の婿さんで適格者を選んでください」

今でも、涼子、雪、藤子、ルル、アグネス、ベッティ、シンディに迫られていて大変なのだ。

魔王様を嫁にするのは勘弁してほしいと、俺は心の中で思うのであった。

第百五十話　早巻き、アキツシマ統一作戦遂行中。

「ただいま帰ったのである！」

「あなた、お帰りなさい。先にお風呂にしますか？　それともお食事にしますか？」

「夫君、遠征はいかがであった？　敵将の首はどれほど獲れたのだ？」

「フジコちゃん、そんな事を聞く奥さんはいないよ！」

「そうなのか？　ルル。しかし、我らは貴族の妻となるのだ。時に、そういうやり取りもあるはず」

「いや、今のヘルムート王国は戦乱とは無縁である。隣の帝国で発生した内乱も終結しており、まずお主らが生きている間にそんな会話は必要ないと思うのである」

「アキツシマ島とは違うのか……。それで、反抗した領民を何人磔にしたのだ？」

「フジコちゃん！　旦那様に対する質問が怖いよ！」

「しかしだな、ルル。上に立つ者としてその土地を統治するのに、時に非情な決断を迫られる必要があるのだ。夫君役の導師殿、貴殿もそうであろう？」

「某は、法衣貴族である……」

「悪さをした家臣を鞭打ちにしたり、悪さがすぎれば首を刎ねる事もあるのでは？」

「そんな事はした事ないのである……」

「見た目に反して優しいのだな。素手で首を引き千切りそうに見えるのだが……」

「……」

「なあ、ホソカワ殿。あれは何をしているんだ？」

「おままごとです」

「雪が教えたそうです」

「教えたのは確かですが、どうも私の考えているおままごととは違う方向にいっているような……」

「大分脱線していないか？　俺はちょっと怖いんだが……」

「私も怖いですよ」

米沢城の中庭において、ルルと藤子が暇そうな導師を夫役にして

おままごとをしていた。
ルルはともかく、藤子は物心つく頃から伊達家の次期当主として振る舞ってきたので、女の子としての常識に疎く、それを心配した雪が二人にアキツシマ島の伝統的な女の子の遊び『おままごと』を教えたのだ。

ところが実際にやらせてみると、どうも藤子の言動には問題があるような……。
同じく時間が空いたので、雪に淹れてもらった茶を飲んでいるブランタークさんは、藤子の言動に少し引いていた。

「この島って、領主が反抗する領民を磔にするのか？」

「私やお涼様はしていませんよ」

ブランタークさんの問いを、雪は全力で否定した。

「雪には必要ないものな」

「はい、お館様はわかってくださいますか」

そう言いながら、俺に対しにっこりと笑う雪。

雪は名門細川家最後の直系のため幼少の頃から英才教育を受けており、本人も才能があったので秋津洲領では善政を敷いていた。
雪も涼子も贅多な生活を望まなかったから税も高くなかったし、彼女は地質学の知識もあって豊富な地下水が湧き出る御所も発見している。
御所の地下水の存在は、次第に井戸や湧き水が枯渇するこの島において唯一の例外だったそうだ。

ここを見つけた彼女は、立場が危うい涼子を連れて島の最北部へと逃げ、零細領主としてようやく居場所を確保したわけだ。

「（ローデリヒに匹敵する才人だな……）他の領地では、反抗する領民が磔になったりするのか？」

「よほど残忍な領主でもなければ……。代を経るに従ってそういう領主が出ない保障もないので確実にないとは言えません。ですが、普通は追放で済ませますね。他の領地に住もうにも、どんな理由で前の領地を追い出されたのかは調べられますからまず受け入れてもらえませんし、誰も管理していない水源なんてまずありませんから、実質死罪と同じですけど」

追放の時点で生きていけないので、わざわざ殺す必要はないというわけか。

血みどろの戦乱とまではいえないが、水が確保できないと死んでしまう環境は厳しいな。

「ホソカワ殿、伊達家はどうなんだ？」

「あそこで領民の一揆なんて聞いた事がありませんね。伊達領も比較的裕福な領地なので」

「あのチビっ子は、随分と発言が物騒だな」

「あえてそう言う事で、『非情な発言をする俺、すげえ格好いい』と思っているのかも」

何しろ、五歳なのに厨二病だからな。

多分、人なんて殺した事もなさそうだし。

「そうよね、目に竜が封印されているとか言っていたし」

「そうそう。結局、黒い炎の竜だけで、紅蓮は関係なかったけど」

「単に語呂がよかっただけだと思う」

「そんなところだよなぁ……。もしかすると、あの黒い炎の竜が紅蓮の炎を吐く前に旦那に倒されてしまったかもしれないけど」

「魔法の炎でできた竜が炎は吐けないと思うわよ」

「それもそうか。ユキさん、あたいもお茶」

ひと仕事終えたイーナ、ルイーゼ、ヴィルマ、カチヤが休憩がてらお茶を飲みに来た。

エリーゼがバウマイスター伯爵家飴の政策である無料治療で忙しいため、みんな彼女と同じくらいお茶を淹れるのが上手な雪にお茶を貰いに来る事が多くなった。

雪は料理も上手で、その多才ぶりはエリーゼに匹敵するかもしれない。

「『おままごと』か。懐かしいの」

さらに、出稼ぎ兼夏休みを外国ですごすために来ている魔王様も、今日の分の宿題が終わったようで姿を見せた。

魔王様はお茶を飲みながら、ルルと藤子と導師がおこなっているおままごとを見ている。

「魔族の国にも、おままごとはあるのですか？」

「昔からあるな。ただ、ちょっと人間のとは違うぞ」

「違う？」

おままごとなんて、誰がやっても同じように思えるんだが……。

「少しやってみよう。導師殿」

「陛下が某の奥さん役であるか」

「然り、ただし……」

魔王様監修の元で魔族のおままごとが始まったのだが、確かに人間のそれとは大きな違いがあった。

「某が家で出迎えるのであるか？」

まず、妻が夫を出迎えるのではなく、夫が家に帰ってきた妻を出迎えた。

本当なら小道具である割烹着ぽい服装に着替えるのだが、導師が着ると破れるのでそのままの格好だ。

「そうだ。妻が家にいて男性を出迎えるという価値観自体が古いと女権論者から批判をされてな。あいつらはうるさいから、逆にした方が楽という結論に至ったわけじゃ」

「調子が狂うのである……おかえりなのである！　飯が食いたいのである！」

「ダウトだ！　導師！」

「どうしてであるか？」

家に帰ってきた妻役の魔王様に飯を要求した導師は、魔王様から駄目出しをされた。

「妻が食事の支度を一手に引き受けるなど、古い考え方だと女権論者がうるさいのでな」

「……食事はできているのである」

「似合わねえなぁ……」

導師が主夫役って……と、ブランタークさんも心底嫌そうな表情を浮かべていた。

俺も、毎日導師が作る飯を食わされたら発狂ものであろう。

「すまぬの。最近は残業が多くて……いや、労働基準法では残業ではないのか。政治家め、企業に媚びて何が裁量労働制度だ。サービス残業を隠しているだけではないか。かといって、文句を言えばクビだからな。はあ……生きていくのは辛いの」

「……某、魔族でなくてよかったのである」

どっちも経験している身としては、何とも言えなかった。

どっちの世界にも、一長一短があるからなぁ……。

「魔族も俺達と同じで大変だな」

「ぶぅーーー、つまんない」

藤子は魔族の生活に同情し、ルルはこの一見変わったおままごとに文句を言う。

ヘルムート王国、アキツシマ島、魔族。

異文化コミュニケーションの難しさを、俺達は目の当たりにするのであった。

「北部の開発は順調だな」

「あたり前じゃ。大して広くもない島の一部地域にこれだけの魔法使いが集まっているのじゃから」

アキツシマ島北部の中心都市米沢にある米沢城の執務室において、俺は報告書を読んでいた。

バウマイスター伯爵領本領の開発もあるが、多数の魔法使いがいるのでローテーションで回して計画は予定よりも大分早く進んでいる。

俺は、開発予定場所に必要な数の魔法使いを『瞬間移動』で送り迎えするのがメインの仕事になっていた。

この『瞬間移動』の魔法は、とにかく使える者が少ない。

なぜか魔法では圧倒的に優位なはずの魔族には、一人も使える者がいなかった。

昔の魔族には使えた者がいたので、今の魔族の間では幻の魔法扱いだそうだ。
もっとも、今の魔族の技術ならば移動手段には事欠かないのでそこまで困っていないようだが。

「さすがに、魔王様とモール達はこの島限定だけど」

「あいつらの持参した種子は優れておるの」

農業法人を経営している魔王様は、北部の農業開発に大きく貢献している。
新しい土地を開墾し、土壌も魔法で劇的に改良している。

数日おきにモール達以外の魔族も来ており、彼らは農民達に栽培方法のマニュアルを配り、現地で直接指導した。
彼らは、魔王様が会長になる前から自給自足で農業を行っており、農業のプロなのだそうだ。

穀物や野菜の種子、果物の苗木なども売ってくれた。
最初テレーゼは、それは国家機密なのではないかと心配していたが、彼らは何も心配していなかった。

「これは長年による品種改良によって改良が進んだ種子ですが、我々の国ではもうほとんど普及していませんから」

「味もよく収穫量も多いのであろう？」

「大手企業が提供する一代種には負けます。こんな古い品種の種子を持ち出しても、彼らは何も言いませんよ。家庭農園で楽しむ人が、

ホームセンターで安く買う種ですから」

一代種というのは、地球でいうところのＦ１種であろう。

味がよく、大量に収穫でき、病気や環境の変化にも強くて育てやすく、儲かりやすい品種の事だ。

だが、その効果は一代のみ。

収穫した種子で栽培しても、次世代以降はその効果が薄くなってしまう。

それにしても、魔族の国にも穀物メジャーのような連中が存在するのか。

日本の農業がいまいちな原因の一つに、欧米の穀物メジャーにＦ１種の市場を握られているという理由もあると聞いていたからな。

ただ、リンガイア大陸での普及は難しいはずだ。

普通の農民が、種子、化学肥料、農薬、除草剤などを常に購入できるとは思わない。

「この地で普及させるのは、比較的栽培が楽な古い品種の方がいいでしょう。うちも、企業が経営する合成肥料、合成忌避剤使用の農業に苦言を呈し、原種に近い品種を、有機肥料、天然由来の忌避剤を少量だけ使用する作物というコンセプトで販売していますので。大規模にはできませんが、一定のファンがいるのでよく売れていますよ」

本当、魔族の国は日本によく似ているな。

効率第一の大手経営の農場に対し、昔の栽培方法で対抗する小規模農業か。

「なるほど。無理にそちらの最新技術を導入しても失敗しそうだな」

購入するものが多くてコストがかかるので、それを提供する企業ばかり儲かる。
結果大規模に耕作する必要があるが、もし豊作すぎて価格が下がれば大赤字。
大規模にすれば必ず農業が儲かるなんて幻想だ。
むしろ、種、苗、肥料、薬草、農機具を製造販売している企業の方が儲かるかもしれない。

「第一、交渉が纏まってもいないのに、種子や合成肥料は購入できないからな」

国同士の交渉がすぐに纏まるなんて幻想なのだ。
帝国も交渉に加わった結果、それぞれ様々な勢力に足を引っ張られ、なかなか交渉が進まない。
そして彼らは気がついた。
別にすぐに交渉が纏まらなくても、それで普段の生活に変化がない事をだ。

下手に焦って不平等条約を結べば、叩かれて今の地位を失ってしまう。
結果、交渉は長期化していた。

「私にも影響はないですね」

農業指導に来ている若い魔族も、政府の交渉にあまり興味がなさそうだ。
所属している会社としては商売繁盛だし、自分も遠隔地手当てが貰えるから個人的には嬉しいはずだが。

「よくよく考えてみたら、交渉が纏まってからでもここに来れますからね」

魔族の国ではとっくに陳腐化した農業技術の普及なので、外国に持って行っても誰かに咎められるはずもないわけだ。

これが最新技術なら、持ち出しに大きな制限がかかるのであろうが。

「では、私はまだ指導がありますので」

若い魔族は、報告を終えると現場に戻っていく。

それにしても、優秀な魔族だな。

少し前まで無職だったのが信じられない。

「魔族とは淡々としておるの」

「世界征服を目論むよりはいいじゃない」

「それもそうよな」

「「お館様！」ヴェンデリン様！」

テレーゼと話をしていたら、いつもは勉学や魔法の修練をやらせている藤子とルルが入ってきた。

「バウマイスター伯爵、差し入れだぞ」

二人と一緒にケーキらしき箱を持った魔王様も一緒だ。

確かあの箱は、『瞬間移動』で連れてきた時にも持っていたな。

「差し入れ？」

「そうだ。我が会社も経営が軌道に乗り、余のお小遣いも増えたのだ」

魔王様は農業法人の会長であるが、普段は学業優先なのであまり仕事はない。

成人するまでお飾りなので、報酬はお小遣い制だとライラさんから聞いていた。

「王が小遣い制とな？」

「ヘルムート王国の陛下は小遣い制だぞ」

小遣い制というか、個人的に使える歳費が決まっているだけだが。

「帝国の皇帝も、使える歳費の額には制限があるぞ。無駄遣いをすると、議会で追及される事もある」

帝国の貴族議会、意外と仕事をしていたようだ。

内乱は防げなかったけど。

「テレーゼ殿、法人は余の臣下なれど、王たる余が無駄遣いをして傾けては意味がない。時に節制をするのも王である余の重要な仕事なのだ。とは申せ、余の小遣いは月に三万エーンにまで増えた。普段はなるべく貯蓄しておるが、たまにはみなに振る舞いも必要なのだ」

小学生が月にお小遣い日本円にして三万円は多いが、魔王様はちゃんと貯金しているそうだ。

それにしても、随分と微笑ましい魔王様である。

「その箱はケーキですね」

「バウマイスター伯爵は甘い物が好きだからな。これは、我が国でも有名なケーキ屋のケーキなのだ。みなも食べるがいい」

「わーーーい」

「ヴェンデリン、お主は心から嬉しそうじゃな」

ちょうどオヤツの時間なので、みんなでケーキを食べる事にした。

「やはりいい味じゃの。皇室御用達の店よりも美味しい」

テレーゼは前にも食べた魔族の国のケーキを食べ、再びその味のよさに驚いていた。

王都と帝都にある超一流店のケーキも美味しいが、やはり最高級品の料理とお菓子の味は魔族の方が上だ。

長年素材まで品種改良して研究を重ねているので、美味しくなって当然なのだ。

魔族の国では安価な量産品でも、王国と帝国では最上級品レベルの味なんて品は沢山ある。

生活レベルが高い魔族は口が肥えており、人口減で競争も激しそうだから余計に切磋琢磨しているのであろう。

「このような綺麗なお菓子が存在するとは……」

実質的な代官として執務室に詰めている雪は、初めて見るケーキ

という食べ物に感動していた。

「美味しい……至福の時ですね。あとで涼子様にもお届けしていいですか？」

「構わぬぞ」

雪はうっとりとした表情を浮かべながらケーキを口に入れているが、涼子の分を確保するのも忘れなかった。

能力だけじゃなく、こういう気遣いができるので雪は凄いと思う。

「この島のお菓子事情ってどうなの？」

「甘味は、北部では贅沢品ですね」

「どうしてかな？」

この島はどの地域でも同じ亜熱帯であり、その気になればどこでもサトウキビが栽培できるからだ。

島でも標高が高い部分があり、そこは朝晩に冷えたりするそうだが。

「水不足で、なくても生きていけるサトウキビは後回しなのです。中央と南部では盛んに栽培されています。どちらの地域も水に余裕があるので」

中央は琵琶湖が、南部では湧き水が出る場所が多い。

両地域は農業生産が盛んで、特に南部は砂糖の有名な産地だそうだ。

ただ少し高いので、生産された砂糖の多くは経済的に恵まれてい

る中央で消費されてしまう。
実は、北部地域は貧しい地域でもあったのだ。

「今は水に余裕ができので、サトウキビ栽培は計画しております」

やはり、雪も女性なので甘い物はほしいようだ。
それにしても、対応が早いな。

「甘い物はいい。心が落ち着くな」

「魔族の国とは豊かなのだな。俺も月に数度、饅頭や砂糖菓子が食べられるくらいだったぞ」

名門伊達家の姫君である藤子ですらそのような状態なので、やはりこの地域は貧しいようだ。
早く開発を進めて、生活を豊かにしないといけない。
そして、それが上手く行けばバウマイスター伯爵家と秋津洲家は領民達に支持されるというわけだ。

「ヴェンデリン様、美味しいですね」

雪や藤子と違い、魔法の才能はあっても年相応なルルは、鼻の頭に生クリームつけながら懸命にケーキを食べていた。
彼女がいた島ではサトウキビ栽培が盛んであったが、ケーキのような手間のかかったお菓子は存在しなかった。

彼女からすれば、オヤツの時間は最大の楽しみなのだ。
俺からしても、年相応で可愛らしいルルを見ていると心が癒される。

「ルル、鼻にクリームがついているぞ」
俺は、ルルの鼻についた生クリームを取ってあげる。
「ヴェンデリン様、ありがとうございます」
「うーーーん」
「魔王様、何か？」
「まるで本当の親子みたいだな」
「そこまで年は離れていませんけど」
「そうですよ、魔王様。ルルは、ヴェンデリン様のお嫁さんなんです」
「ちなみに、俺もそうだぞ」
なぜか俺の嫁になる事に積極的な幼女二人、俺はそういう問題は彼女達が成人してからだとスルーするのであった。
俺達が、アキツシマ島に上陸してから二か月ほど。
魔族の国と王国、帝国の交渉は笑えるほど停滞していたが、その

間に領地の整備は進めていた。
バウマイスター伯爵領本領と、南方諸島、海竜の巣がある海域にある島々、そしてバウマイスター伯爵領南端にあるアキツシマ島北部領域。

人が住めそうな島への調査と移住も始まり、それら島々との間に中、小型魔導飛行船の定期航路が開かれた。
港は俺達が魔法で何とかしたので、早くに運行が開始されたのだ。

船員に関しては、とにかく人手不足なので退役した元空軍軍人達を期間限定で雇用した。
彼らに若い未経験者をつけ、教育しながら船を動かす。
泥縄感があったが、何とかなっている状態だ。

彼ら退役した軍人達は、みんなヴァイツ侯爵や他の空軍閥貴族の紹介で働いている。
当然、息子の件で俺と揉めているプラッテ伯爵と繋がりがある連中は排除しているので、王宮で彼は盛大にブチ切れたそうだ。

俺の排除を目論んでいるらしく、ヴァイツ侯爵から注意するようにと連絡が入った。
ローデリヒにも通達が行っており、プラッテ伯爵と縁がある人間はバウマイスター伯爵家に仕官できなくなったり、商人でも商売から排除されたりした。

貴族をやっていると、こういう完全に敵対する人物が出てくるわけで、貴族なら誰にでもある事なので気にしないでいいと、ローデリヒには言われた。
いくら人手不足でも、敵対勢力と縁がある人間を雇って足を引っ張られたら意味がないそうだ。

そんなわけで、今日もプラッテ伯爵は機嫌が悪いみたいだ。
忙しい俺は王宮に行かないので、直接彼の顔を見たわけじゃないけど。

空軍も協力してくれたので、広大なバウマイスター伯爵領内の移動は魔導飛行船で行えるようになった。
最近、王国と帝国との間でも貿易量が劇的に増大しているので、空軍の軍人は忙しい。
プラッテ伯爵と縁が深い連中も、対帝国貿易ではハブられているわけではないので、プラッテ伯爵の悪巧みに手を貸す者は少ないそうだ。

それで余計イライラしているらしいが。

そんなわけで、バウマイスター伯爵領の開発は順調だ。
魔法使いが多いのも有利な原因であろう。
アキツシマ島北部については、中央で権勢を誇る三好家は何も言ってこない。
地味に商人の活動を阻害されているが、交易はバウマイスター伯爵領とできるので、北部の領民達に不満はなかった。

俺が公共工事や開発を積極的に行って彼らに金をばら撒き、それは王国発行のセント硬貨で、それを得た彼らは北から来た魔導飛行船で運ばれてきた産品を購入する。
特に人気なのは、バウマイスター伯爵領で生産量が増大している米、魔の森で採れる果物類、海産物、塩、砂糖などであった。

他にも、装飾品、衣服、工芸品、芸術品なども売れた。
『北部の領民達はそこまで裕福だったかな?』と疑問に思ったの

だが、実はこれらの品は転売するために購入しているようだ。

中央は商人が北部に行くのを禁止したが、個人レベルの行商までは制限していない。

よって北部からも、個人なら商品を持って中央に行けるのだ。

中央は富裕層が多い地域なので、彼らに舶来物を高く売って儲ける。

最近北部では、羽振りのいい領民がボチボチと現れ始めた。

一人で行商に行くので、途中荷を奪われるケースもあるそうだが、一回の失敗は一回の成功で補填可能なので、個人で中央に行商に行く者が多い。

それに加えて、関所がある場所で集団移動するようになって行商の成功率が上がったようだ。

彼らは代金として金や銀の塊を受け取り、それをセント硬貨に両替した。

徐々に東部、西部、南部の富裕層もバウマイスター伯爵領産の品を欲しがり、それに北部の領民達が対応して儲けと、次第に北部に富が流出していったが、それを気にしても仕方がないであろう。

向こうが対処する問題だからだ。

それに、アキツシマ島の焼き物、織物、工芸品、美術品なども王国領で売れるようになった。

中央に出かけた行商人が仕入れ、それをバウマイスター伯爵家で買い取り、さらにそれをバウマイスター伯爵家が領内や王国領で販売して利益を稼いだのだ。

ミズホ公爵領の特産品と共に、リンガイア大陸では珍しいデザインの品という事で好事家の金持ちが高く買ってくれた。

彼らに言わせると、ミズホ公爵領の品とはまた少し違って面白いのだそうだ。

そんなわけで、特にトラブルもなく静かな生活に戻ったが、米沢城で恒例となったオヤツの時間になると、エルが逃げ出そうとするようになった。

「何か、居心地悪いなぁ……。俺、ちょっと仕事が……」

「こんにゃろ、俺を置いて抜け出すな」

バウマイスター伯爵領内で工事をしている女性陣を除き、ほぼ全員が集まってお茶を淹れ、購入しておいたお菓子を楽しむ時間になったからだ。

そこには、ルル、雪、涼子、藤子も加わり、大半が女性で男は俺、導師、ブランタークさん、エルしかいない。

最初は導師に訓練を受けていた七条兼仲も参加していたが、『女性ばかりで疲れる』と逃げるようになった。

ブランタークさんは、あまり気にしていないようだ。

マテ茶に愛飲しているブランデーを垂らし、カタリーナに毎日窘められている。

「お師匠様、飲酒は夜になってからですわ」

「飲酒じゃねえぞ。お菓子の材料に香りづけで酒を入れる事は多いだろう？　これも、お茶の香りづけなんだよ」

「その割にはお酒の量が多いようですわね」

「お前さん、俺の妻みたいな事を言うな」

「ヴェンデリンさんは深酒をしませんから、注意する必要がありませんので。お師匠様の奥さんの代わりに注意しているのです。ご心配でしょうから」

「へいへい。わかりましたよ」

カタリーナの注意をブランタークさんは軽くかわしたつもりでいたが、いつの間にか彼が作ったマテ茶五割ブランデー五割の飲み物をリサが飲み干していた。

「こらぁ！　一気飲みすんな！　超高級ブランデーなんだぞ！」

「確かに、酒精は濃かったですね」

「かぁーーーっ、これから酒の味がわからん奴は」

リサは酒に強いし、味の利き分けにも長けている。

ただ、世間で高価だと言われているお酒を無条件にありたがる事はなかった。

ブランタークさんお気に入りの超高級ブランデーも、古くて酒精が濃い酒程度の認識なようだ。

「バウマイスター伯爵、今日のお菓子は？」

導師は美味しい物が食べられれば問題ないので、周囲に沢山女性がいても気にしなかった。

「ところで、お館様」

「どうかしたのか？　雪」

「実は、三好長慶が死んだという噂が流れてきました」

重病で伏せっているとは聞いたが、そういう噂が流れたという事は事実なのであろうか？

「それ、何かの策で実は生きていたとかないのかな？」

「エルヴィン殿、中央の三好家からすれば、長慶は生きていた方が都合いいわけでして、死んだなんて噂を流す必要はないわけです」

「うちが調子に乗って中央を攻めたら、健在な長慶がいて俺らは大混乱とか。そんな策じゃないの？」

エルの奴、『死せる孔明、生ける仲達を走らす』みたいな事を言うな。

「その可能性も否定できませんが、やはり三好家は長慶の死を隠そうとする可能性が高いです。何しろ、三好家は後継者争いがありますので」

後継者を決めずに当主が死んでは混乱してしまうか。

「三好家は、後継者を決めていないのか？」

「決めていないというか、決められなかったというか……」

日本の戦国時代に似ているようで当然世界は違うため、同姓同名

の武将でも色々と差異があった。

「長慶の子には、庶兄義興と次男義継がおります」

「よくある後継者争いである！」

「そうですね」

雪は簡潔に、現在の三好家が置かれた状況を説明してくれた。

ブロワ辺境伯家と同じか。

「一族や有力家臣がバラバラに義興と義継支持して、家が割れているわけだ」

「お館様の想像どおりです」

義興には、長慶の弟三好実休、安宅冬康、十河一存と、重臣松永久秀か。

義継には、一族の三好長逸、三好政康と、家臣の岩成友通、内藤長頼が。

完全に真っ二つに割れていると雪は説明する。

「それって、ミヨシナガヨシってのが死んだら大変だな。あっ、もう死んだんだっけ？」

ブランタークさんの予想どおり、中央で天下人を名乗った三好家は当主長慶の死で完全に真っ二つになった。

だが、その後の行動は斜め上であった。

「えっ？　意味がわからない」

「ですから、三好軍が攻めてきました。義継と彼に組した方の軍勢です」

雪が放っている密偵が、三好軍の大軍五千がこの米沢城を目指して進軍中であると王国した。

「だから、どうして揉めている義興の軍勢と戦うんじゃないのか？先にうちなんだよ？」

「わかりません。とにかく、対応をしませんと」

「バウマイスター伯爵、籠城であるか？」

「いいえ、迎え撃ちます！」

この島のバウマイスター伯爵家諸侯軍の動員を解かずに訓練と開発に使っていてよかった。

すぐに三千の軍勢で南下を開始、米沢城の南二十キロほどの時点で両軍が睨み合う。

「侵略者に告ぐ！　この三好家当主である義継に、秋津洲高臣を寄越すのだ！」

俺達は最初、どうして義継達がライバルを無視してまで攻めて来たのか不明であったが、彼が涼子を差し出せと言った時点で、攻めてきた理由が判明した。

義継はこの島で一番の名族の出である涼子を妻にして、義興に対し後継者争いで優位に立とうとしているのだ。

「嫌です！」

涼子は、すぐさま義継の要請を断った。

「私はバウマイスター伯爵様の妻になる身です！　あなたの元には参れません！」

「……」

断ってくれたまではいいのだが、その理由はどうなのであろうか？　何か、みんなの視線が痛いんですけど……。

「そもそも、そちらが中央に住めないようにしておいて、今さらその要求はおかしい！　第一、今の三好家の当主は誰なのです？　秋津洲家から嫁を迎え入れるのですから、最低でも三好家の当主でないと。もう一度聞きますが、あなたは三好家の正式な当主なのですか？」

「そうだ！　この三好義継こそが、三好家の当主なのだ！」

「では、義興殿はどうなのです？　三好家が泥沼の後継者争いをしている事など百も承知！　あなたは、義興殿を納得させて当主の地位についたのですね？」

「それは……」

この義継という若者、雪に理論整然と質問されたら途端にタジタジとなってしまった。

間違いなく、義興とは後継者争いを続けたままなのであろう。

「なあ、坊ちゃんよ。お留守にしておうちは大丈夫か？」

「無礼な！　三好家嫡男であらせられる義継様に向かって！」

ブランタークさんは、最初から強気であった。

どうせ余所者だ。

向こうは天下人を自称している連中で、下手に下出に出ると家臣扱いされかねない。

敵には武将や領主一族に数十名魔法使いがいるが全然大した事もないし、俺達は魔族という不安要素を抱えている。

よって、力でわからせて早くこの島を平定しないといけないのだ。

「魔法を使うんだろう？　かかってきな。でなければ、ションベンを漏らす前に帰りな」

「ジジイがぁ！」

ブランタークさんのわかりやすい挑発で、若い義継は激高した。

「我ら三好一族と家臣団を舐めるなよ！　余所者の魔法使いの実力、見せてもらおうではないか！」

総大将である義継の命令で、三好軍の軍勢の中から次々と魔法使いが前に出てきた。

彼らは三好家の一族、家臣、服属領主で、この島の魔法使いは偉い人が大半という法則はわかりやすくある。

「数は多いのである！　しかし、雑魚ばかりなのである！」

「そりゃあ、導師と比べたらみんな雑魚でしょうけどね……」

「三好長慶が天下人を名乗るほど栄達できた理由に、一族や家臣に魔法使いが多いというのがあります」

確かに、雪の説明どおり魔法使いは多いな。

ただしみんな初級ばかりだけど。

義継は……辛うじて中級の下くらいか？

どちらにしても、よほど油断しなければ負ける事はない。

「バウマイスター伯爵、やるのである！」

「えっ？　俺ですか？」

「導師様、俺にやらせてくれよ」

「藤子は駄目！」

急な出陣であったため、勝手について来てしまった藤子にはやらせないにしても、わざわざ俺が相手にする必要もないような……。

ルイーゼとかヴィルマが、とても戦いたそうにしているし。

「バウマイスター伯爵、連中は犬と同じである！」

一万年以上もこの島の中で過ごしてきたので彼らはとても排他的……かと思ったが、そこまで酷いわけでもない。

北部の領民達も、バウマイスター伯爵家の支配に従順だ。

まあ、悪政は行っていないし、井戸を沢山掘ったからなぁ……。

「この島では、魔力イコール権威、権力なのである！」

「ああっ！　逆だったのか！」

俺は勘違いしていた。

この島の領民達は、お殿様の血筋がいいから従っているのではなく、お殿様が魔法使いだから従っていたのだ。

水がある中央を除くと、この島では硬い黒硬石の岩盤を破って井戸が掘れる者が尊敬され、従うようになる。

近年、秋津洲家の力が衰え島内が群雄割拠状態なのは、新しい井戸を掘れる領主様が現れなかったから。

一応魔力があるので領主には従うが、そこまでの求心力はなかったという事のようだ。

「三好家は、経済力がある中央を政治力と一族家臣の魔法使いの多さで押さえました」

とはいえ、長慶自体が取り立てて優秀な魔法使いというわけでもない。

彼の組織力で纏め上げていた三好家は、彼の死で分裂したわけだ。

「それを再び纏めるため、バウマイスター伯爵は力を見せなければいけないのである！」

「師匠の仰るとおりです！　お館様の偉大な魔法を見せれば、義継のガキなど！」

ここに、七条兼仲というわかりやすい例えがいるからな。

彼は俺が魔法で倒したら、忠実な家臣になったのだから。

「では、俺が相手をしよう」

「ふんっ！　ガキがあとで吠え面かくなよ！」

「悲しいですね」

「つうか、この島の連中は相手の魔力量を計れる奴が少なすぎる！」

ブランタークさんは、この島の魔法使いのレベルの低さを嘆いた。

でも、逆に高いと苦労するから、俺はこれでいいと思うんだ。

「我ら鉄壁の組織力を誇る！　三好家魔法軍団！」

「へえ、大層な名前だな」

「ジジイ！　そこで茶々を入れるな！」

義継君は若いのであろう。

自慢気に自分が率いている魔法使い達の紹介を始め、それに呆れたブランタークさんが茶々を入れていた。

戦場を前に自己紹介もどうかと思うが、この島の戦争とはこんなものらしい。

兵力は脅しで、大半は総大将や武将が魔法で勝負をつけるようだ。

血みどろの戦闘をしないで済む分、悪い話ではないか。

それにしても、三好長逸、三好政康、岩成友通、内藤長頼か。

どこかで聞いたような……。

俺は歴史マニアじゃないから、そこまで詳しくないんだよなぁ……。

「火炎魔法を巧みに操る『火奏者』の三好長逸！」

「風魔法の名手『風武者』の三好政康！」

「土魔法の名人『岩弾』の岩成友通！」

「水魔法『水刃』の内藤長頼とは俺の事だ！」

見ていると痛々しいくらいに張り切って自己紹介をしているが、残念ながらみんな初級レベルの魔法使いだ。

宣伝目的と、魔法使いは珍しいから使える時点で天狗になる人がいるので、ヘルムート王国ではさほど珍しい光景でもなかった。

この島でも、戦となれば将である魔法使い同士が魔法勝負をする事が多い。

派手な自己紹介は、半ばお家芸なのであろう。

中央の三好家ともなれば、余計に目立つ必要があるのであろう。

「導師、恥ずかしいな」

「まあ、某には無理なのである」

ブランタークさんと導師は、彼らの派手な自己紹介を居た堪れない表情で見ていた。

確かに、地方プロレスのレスラー紹介みたいだ。

「じゃあ、そろそろ始める？」

「ふん！　貴様のその余裕もそこまでだ！」

「吠え面かくなよ！」

「我ら三好家の力を思い知るがいい！」

「地べたに這いつくばらせてやるわ！」

それから数秒後、彼らは全員痺れてその場で動けなくなり、率いていた軍勢は全員降伏した。

「畏まりました！　お館様の仰せのとおりにいたします！」

三好義継以下、三好家の半分が降伏した。

この島に来てから四連勝、敵味方共に犠牲者がいないのが救いか。

最初は粋がっていた義継も、今ではすぐに焼きそばパンとコーラを買ってきそうなくらい従順だ。

他の一族や重臣も同じで、今のところはあとで裏切ってやるという風な態度は取っていない。

「導師って、意外と物の本質をちゃんと見ているんだな」

「そうだな」

防衛に出たバウマイスター伯爵家諸侯軍と降伏した三好軍は、そ

のまま中央へと進軍を開始した。
雪の助言で、このどさくさで中央を押さえた方がいいと言われたからだ。
この島を統治するのであれば、やはり島の中心地である中央の掌握は必要だ。

琵琶湖という水利に、政治経済の中心地なので国力も高い。
他の領主に獲られるわけにはいかないというわけだ。

北部は病状がよくなってきた伊達政宗に任せ、俺達は軍を進めている。

「俺も中央は初めてだな。『大津』の都は賑やかだと聞くぞ」

政宗が留守居役なので、自然と人質代わりで藤子もついてきた。

『藤子は、お館様の傍にいた方がよろしいでしょう。降って間もない私に北部をお任せになられるのですから、ケジメとして人質は必要でしょうし』

『父上の言うとおりだな。俺は人質だぞ』

そう政宗は言っていたが、どう見ても俺と藤子を常に一緒にいさせて既成事実を積み重ねようとしているだけだ。
三好軍に面と向かって俺の妻になると宣言した秋津洲家の涼子、俺の補佐でよく一緒にいる細川家の雪にライバル心を抱いたらしい。
ルルも藤子に対抗してついてきており、アグネス達も俺の傍を離れない。

「お館様、実は私には同腹の妹が……」

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

「何でもありません……」

義継が自分と同腹の妹を俺に差し出そうとしたが、涼子、雪、藤子、ルル、アグネス、シンディ、ベッティと女性陣に睨まれ、すぐに発言を引っ込めてしまった。

「ヨシツグ殿、貴殿は秋津洲殿を妻に迎える方が先では？」

「滅相もない！　私には過分なお話ですよ！」

導師からの問いを、義継は全力で否定した。

彼は若く、粋がっていてもバカではない。

これからこの島の支配体制が、バウマイスター伯爵家支配になる事を理解している。

そして、俺の代官としてこの島一番の名族である秋津洲家が代々就任する事を。

つまり、秋津洲本家当主涼子は俺の妻になり、彼女が次の秋津洲家当主を産むと理解したのだ。

今のところ具体的な計画はないのだが、彼はそういうものだと思い、自分は涼子を諦め……元々そこまで未練があるようにも見えなかったが……自分の妹が俺の愛妾にでもなれればいいと思ったらしい。

残念ながら、雪達のひと睨みで退散してしまったが。

「俺も伊達本家唯一の子だからな。秋津洲家に適当な男子がいない以上、お館様の子を伊達家の跡取りにして北部領域を安定化させなければいけないのだ」

わずか五歳にして、政略結婚の必要性と意味を理解しているとは……。

伊達藤子、伊達に早い厨二病をわずらっていないようだ。

「政略結婚とはいえ、俺はいい妻になるように努力するぞ。エリーゼ殿みたいに女の嗜みもちゃんと覚えないとな」

「ルルも頑張ります」

「私は十分にできますよ」

「私もです」

「……」

涼子と雪、ここで五歳児に張り合ってどうする？

「もう先生ったらしょうがないですね。あまり増やさないでくださいね」

おい、アグネス。

俺は別に好きで増やしているわけじゃないというか、まだ誰も正式に嫁に貰うなんて言っていないんだが……。

「わかっています。先生は優しいですし、お立場もありますから」

「奥さんが沢山いても仕方がないですよね」

ベッティとシンディ。

お前ら、その妙に物わかりのいい奥様的な言動はどうなんだ？

「でも、安心してくださいね。これ以上は増えないように頑張りますから」

「何か、妹を先生に押しつけようとした人がいますけど……」

シンディに悪巧みを指摘された義継は、そっと視線をそらして口笛を吹き始めた。

こいつも結構偉い奴なんだが、魔法使いとしての力量ではシンディに逆立ちしても勝てないからな。

どうやらこの島の魔力至上主義は、導師が思っていた以上のもののようだ。

「少し疑問なのですが、いきなりこのまま中央に進軍して大丈夫なのですか？」

「ヨシツグ殿のお兄さんの軍勢が待ち構えているとかないの？」

カタリーナとイーナは、大した準備もせずに中央へと進撃する事が心配なようだ。

義継のライバルであると聞く、三好義興とその支援者達の妨害を予想したのであろう。

「それなら大丈夫です」

義継の代わりに、彼の重臣である内藤長頼が即答した。

「実は、義興派は西部に兵を出しております」

「そうなのか？」

「ええ、味方を増やそうというお話でして……」

長頼によると、長慶が亡くなる前から三好一族と家臣団によって激しい後継者争いが発生した。

両派が味方を増やしていくが、段々と中央の勢力分布は均衡してしまった。

双方がほぼ同数の勢力のため、もし本気で衝突すれば犠牲が大きい。

「元々、中央で戦はご法度です。そこで味方を増やして敵を脅かし、服属領主や家臣の離反を誘うわけです」

「数でビビらせて、敵勢力についた連中の離反を誘うわけか」

間違いなく島の経済が崩壊するので大規模な戦をするわけにもいかず、ならばもっと味方を増やして相手を圧倒すればいい。

これが、この島でよく行われる戦なのだそうだ。

そこで、義興派はあまり有力な諸侯もいない西部に兵を出し、義継派はバウマイスター伯爵家の侵攻で名族がことごとく降り、政治的に混乱している北部に兵を出した。

北部には、この島一番の名族の娘である涼子がいる。

自分の嫁にすれば、権威も得られると義継は兵を出したわけだ。

「己ら、ちゃんと偵察はしたのか？」

「テレーゼ殿にそう言われても反論できません……」

混乱していると思われた北部は、俺達の井戸掘りと、公共工事の連発、外国との交易で好景気に見舞われていた。

テレーゼに言わせると、そんな事にも気がつかない天下人の親族はどうかと思ったのであろう。

確かにニュルンベルク公爵はアレな部分もあったが、優秀な軍人で手強い敵だったかからな。

「そこは、我ら三好一族と家臣団、服属領主連合がバウマイスター伯爵家に素直に降るという事で御勘弁を」

「それはいいが、中央は抵抗するのではないのか？　義興派であろうか？　留守部隊くらいいるのであろう？」

「それはいますが、問題ありません」

「随分とキッパリ言い切るの」

「実は、私の兄が大津の守備をしておりまして……私は他家に養子に行ったので姓は違いますが、松永久秀といいます」

「えっ？　松永久秀？」

「はい、それが何か？」

思わず大声を出して驚いてしまったので、長頼に不振がられてしまった。

松永久秀、俺が子供の頃にやった戦国シミュレーションゲームでは有能ながらも、すぐに裏切るキャラとして有名だ。
将軍を殺し、大仏を焼き、仲が悪い主君の弟を毒殺し、何度も裏切って最後にはお気に入りの茶器と共に自爆した。
ゲームならいいが、ちょっとお近づきになりたくない人物だ。

一緒の席でお茶とか出されても飲む気がしない。
同姓同名なだけで必ずしもそういう人物とは限らないので、先入観を持つのはよくないのだが……。

「兄は、三好家でも一番の魔力の持ち主です。お館様には遠く及びませんが……」

それでも、兼仲、涼子、藤子と同じく中級レベルの魔力の持ち主だそうだ。

「連絡を取りましたところ、お館様の力量に感服し、ならば降ると」

「テレーゼはどう思う？」

これが罠かどうか、新米成り上がり貴族の俺にはさっぱりわからん。
こういう判断は、元公爵であるテレーゼに聞いた方がいい。

「ヴェンデリン、何を躊躇う。これを機に、この島の政治と経済の中心地である『オオツ』とやらを押さえればいいのだ。そのマツナガなる者が手引きしてくれるのであろう？」

「はい」

「ならば、あとは行くのみ。マツナガとやらが心からヴェンデリンに従うのであれば問題ない。もし何か企むのであれば……」

「企むのであれば？」

「この軍勢に上級魔法使いが何人いると思っている？　即座に撃破して、マツナガとやらが一人目の戦死者になるだけであろう？　ここまで犠牲ゼロというのが奇跡なのじゃ。奇跡とはなかなか続かぬもの。ヴェンデリンは気にするでない」

「……いいえ、兄は心からバウマイスター伯爵様のお力に心腹しておりますので！」

テレーゼの脅しを篭めた警告に、三好家中でも猛将と呼ばれた長頼の顔は真っ青であった。

「お初に御目にかかります。松永久秀と申します。……これは、お噂通りですな」

降伏した三好軍と合わせて八千の軍勢は、そのままの勢いで琵琶湖沿いにある島の中心都市『大津』へと到着した。

大津はこの島の中央部のさらに中心にあり、琵琶湖の岸沿いに広がっている。

琵琶湖の水運の中継地でもあり、水利を生かした大稲作地帯から大量に米が集まり、他の地域にも輸出されていた。

ここを握った三好家が天下を取れて当たり前の立地なのだ。
大津の町は人口が五万人ほど、中央の人口の半分はここに住んでいる。
中央地域だけで島の人口の三分の一が住んでいる事になり、中央の力が強い事の証明でもあった。

大津には琵琶湖と政庁に隣接した場所に大きな城があり、ここが三好家の居城であった。
今は、留守をしていた松永久秀が降伏してバウマイスター伯爵家のものになっている。

「義興派の抵抗とかはなかったのか？」

「それは、お館様の魔法を見たら静かになりました」

実は、この城に入る前に長頼から頼まれて、大津城の上空で巨大な『火球』魔法を打ちあげた。
見た目だけ派手でお飾りの魔法であったが、中級魔法使いには到底不可能な魔法。
大津の住民達はこの『火球』に度肝を抜かれ、久秀は城や政庁にいたすべての三好家家臣や一族に『長慶様をも上回る天下人の登場だ！』と触れ回ったらしい。

長年三好家の支配が及んでいたはずなのに、みんな随分とあっさり降ったものだ。

「この島の名族、領主階級は危機感を抱いておりました」

段々と魔力量の多い魔法使いの数が減り、今では中級でも天才扱いされてしまう。

三好家の子供ですら中級に届かず、長慶は死の床で将来を悲観していた。
そのため、どちらを跡取りにするか判断する前に意識を失ってしまい、後継者争いの混乱が広がってしまったようだ。

「バウマイスター伯爵様がこの島の主となり、我々が臣としてその統治を支える。それでいいではありませんか」

「お主もそうだが、この島の領主はみんな素直じゃな。『土地は黄金』と、我が祖父などはとても拘っておったが……」

「この島は、私の見立てではあと数十年で詰んでおりましたからな」

久秀は、自分なりにこの島の未来に危機感を抱いていたらしい。
土地はまだもう少し余裕があるが、水は既に限界であった。
中央は琵琶湖があるからいいが、地方は次第に枯れる井戸が増えて領主同士が水を争う事が多くなった。

海に出ようにも、海竜の巣が多すぎてどうにもならない。
魔導飛行船などは、先祖がこの島に持ち込まなかった。
大昔に失った技術開発もなかなか進まず、このままでは人減らしのために戦が行われるかもしれなかったのだと。

「幸いにして、この島の住民は強大な魔力を持つ者に敬意を払い、従う者が多いのです」

この島の魔法使いは、みんな名族や領主の一族のみだ。
いわばお上なので、自然と素直に従う習慣があるのであろう。

「とにかく、今が一番不安定な時だ。中央に混乱を起こさず統治しなければいけない」

そこからは忙しかった。

三好家の統治をバウマイスター伯爵家の統治にするため、俺値は奔走する事となる。

ある程度の防衛、治安維持用の兵力を残しつつ、多くの兵士を町や農村に戻した。

人口約十万の中央で、義興派と義継派がそれぞれ約五千ずつ徴兵してしまったのだ。

こんな兵数を維持し続けたら、この島の経済が破綻してしまう。

三好一族と家臣、服属領主は代官に任じて戻し、大津城や政庁に仕える文官の給料も保障した。

まあ、そちらは雪、義継、久秀などが主に行っていたが。

涼子とエリーゼは、新領主のイメージアップ作戦の一環で魔法による無料診断と治療を行い、俺達は今、琵琶湖の畔にいる。

「バウマイスター伯爵、これは水田なのか？　みんな、首まで泥に埋まっておるぞ」

農業指導を行う魔族を率いた魔王様は、琵琶湖沿岸の名物である『深泥田』を見て驚いていた。

俺達が思うような水田ではなく、農民が泥に首まで浸かって農作業をしていたからだ。

「これでは、作業が大変ではないのか？」

そのおかげで、本当は気候が温かいので三期作も可能なのに、条

件の悪い深泥田では年に一度しか米が採れないそうだ。
まずは、琵琶湖を徹底的に治水、沿岸の深泥田を通常の田んぼに改良、琵琶湖から流れる支流の掘削と、洪水対策用の治水、用水路の掘削、中央にも琵琶湖の恩恵がない地域があるので井戸も掘らないといけない。

みんな、魔法使いは分散して作業にあたる事になった。

「あたいも、出来る限りは手伝うよ。放出系とか、こういう工事の魔法は苦手だけど」

今日は、カチヤが俺の護衛として傍にいた。

「兄貴がさ。オーケーしてくれたんだ」

「それはよかった」

農業指導では、カチヤの兄ファイトさんも手伝ってくれる事になった。
この島には山もあり、その斜面は朝晩涼しくなる。
マロイモも栽培が可能であり、その技術指導をしてくれる事になったのだ。

「カチヤの兄君には、うちも指導してほしいな。勿論報酬は弾むぞ」

農業技術では魔族の方が進んでいたが、中には例外もある。
魔王様によると、魔族の国でもマロイモほど甘くて美味しい芋は存在しないようだ。
これを独自に栽培し、利益になる商品作物を確保したいようだ。

「村の傍にある山の斜面を利用して栽培したいのだ。ありきたりな作物を栽培しても売れぬのでな。栽培に手間がかかる？　好都合じゃ。高値で売れて利益を稼ぎやすい」

「あの兄貴が、魔族の国に行くかな？」

「そこを何とか説得してくれ。我らも、この島の農業指導で貢献しているのだから」

魔王様は、お飾りだという割には積極駅に仕事をしているように見えた。

「海外旅行だと思ってとか」

「兄貴、領外に出た事が少ないからなぁ……」

あのトンネル騒動で領地が移動したが、そこでもほとんど領外に出ない生活をしているそうだ。

毎日、マロイモの畑で作業をしているらしい。

しかも、マロイモの栽培が三度の飯よりも好きだから、それが全然苦じゃないんだよな。

「頼んでみるけど。それよりも、大丈夫なのかな？　旦那」

「何がだ？」

「いや、ほら。ミヨシの連中は二つに割れているんだろう？」

後継者争いで割れた三好義興派は、味方を増やすために西部に兵を出した。

まさか、北部に兵を出したライバル義継が呆気なく降伏し、俺達と一緒に電光石火で中央を押さえたのは予想外であろう。
挙句に、義興派の実力者であった松永久秀が俺に降伏してしまった。
彼は西部で孤立しているので、いつ中央の奪還を目指して兵を送るのか？

カチヤは、それが心配なのであろう。

「それが、軍勢が崩壊してしまったみたい」

久秀の報告である。
中央がバウマイスター伯爵という強大な魔力を持つ支配者のものとなり、義継も降伏してしまった。
大津に残っていた義興派も同様であり、その情報が次第に西部遠征軍に伝わると、まずは中央に領地がある服属領主が軍勢ごと離脱してしまった。

彼らは元々、すぐに強い方に靡く習性がある。
若い義興では、彼らを留め置く事ができなかったようだ。
帰還した彼らは、久秀の仲介ですぐに降ってしまった。

服属領主が抜けると、今度は俺に降伏した義継を頼って降る一族や家臣が増えていく。
こうして櫛の歯が欠けるように、義興の軍勢は減っていく。

今では、五百人も残っていないそうだ。

「それは可哀想だな」

「『最後の意地を見せてやる！』って突っ込んでこないかな？」

「それはないと思います」

「それは久秀と同じ意見か？」

「はい」

実は、俺の世話役という名目で久秀の娘唯姫が俺につけられた。
魔法は使えないそうだが、彼女はなかなかに優秀だ。
雪と連絡を取りながら、俺の傍で様々な仕事を行っているのだから。

年齢は俺の一個上だそうだ。
一見怜悧なイメージを感じさせる女性だが、話をしてみると話題も豊富で面白い。
俺とも話が合い、エルの下らない冗談でも笑ってくれて、笑顔もとても魅力的であった。
女性なので警戒していたが、俺を誘惑するような事もなかったので安心して傍における。

「これからどうなるかな？」

「父は、もうそろそろ困って降伏するのではないかと」

「そうなのか？」

弟と後継者争いをしていたら、いきなり余所者に領地を奪われてしまった。
理不尽さを感じて戦を仕掛けてきそうな気がする。

「それをしようとすると、残っている家臣にも愛想を尽かされますので」

「久秀がそう言うのであれば……」

ところが、珍しく久秀の予想が大きく外れた。

何と彼は、追い詰められたがゆえに火事場のバカ力を発揮、西部の諸侯を説得して五千ほどの軍勢で中央に攻め寄せてきた。

これには、さすがの久秀も驚きを隠せなかった。

「三好義興って優秀なんじゃ？」

「妾腹という事で侮る家臣もおりまして、反骨心も強いお方です」

「何にせよ、迎撃しないとな」

まだ開発は終わっていないのだが、敵軍を放置するわけにもいかない。

動員を解いていない五千ほどの軍勢で、西から攻めのぼってくる義興軍と対峙した。

「ふんっ、無駄な抵抗を」

「降った男が偉そうに！」

「バウマイスター伯爵様こそが、父長慶の跡を継ぎ天下人となるお方なのだ！」

「外国の貴族に呆気なく降りおって！　お前みたいな臆病者が、三好家の当主など務まるか！」

「務まっているわ！　お前こそ、時世も読めずに西部の軍勢を集めおって！　中央を荒らす気か！」

俺に降った義継は、兄である義興と口喧嘩していた。

「ストップ」

「お館様」

「俺が出ればいいのであろう？　三好義興殿。魔法で勝負しないか？　貴殿が勝てば北部も含めてすべて貴殿のもの。俺が勝てば逆だ」

「受けよう！」

俺からの魔法勝負の呼びかけに、義興はすぐに了承した。

「愚かなる弟め！　俺は妾腹のため、常にお前に与する家臣達に蔑ろにされておった！　魔力もお前より少ないとな。だが、それはこういう時のためにわざと魔力を隠していたのだ！　本当の俺は中級魔法使いなのだ！」

なるほど、その隠していた魔力を見せつけて西部諸侯を従えたわけだ。

本妻の弟よりも魔力が多いのを隠していたのは、後継者争いの余波で暗殺される危険性を考慮したのかもしれない。

「見よ！　この父長慶譲りの『竜巻』を！」

「「「「「「「「「「「「「「「おおっ！」」」」」」」」」」」」」」」

今まで有力者がいなかった西部の領主達は、元天下人三好長慶の息子義興が作り出す魔法の竜巻の大きさに大きな歓声をあげた。

「まあ、五十二点ですわね」

「そんなにあるか？」

「中級魔法使いながら、『竜巻』の密度や形状、出現させるまでの時間などに努力の形跡が見られます」

「それを入れると妥当なところかな？」

ブランタークさんとカタリーナは、二人で義興の『竜巻』魔法の評価を始める。

俺もよく見てみると、デカイ口を叩くだけはあるのだなとは思う。

今までのこの島の魔法使いの基準でいうと、十分に天才という評価は下せるのだから。

「若殿、敵はあまり驚いていませんが……」

「俺様の魔法に驚いて何も言えぬと見えるわ！」

「そうなのですか」

「さすがは、義興様ですな」

数少ない義興の家臣と西部諸侯達は、俺達が義興の魔法でビビっ

ているのだと思い、これはもう勝ちだと大笑いしていた。

「ヴェンデリンさん、勘違いも甚だしいですわね」

「『井の中の蛙、大海を知らず』ってね」

「その言葉は初めて聞きますわね」

「バウマイスター伯爵様は、この島のことわざを知っていたのでえらく感心していた。

久秀は、俺がこの島のことわざまでご存じなのですか」

本当は、日本のことわざと同じだったからだが。

「基本、風系統の魔法は普通にしか使えないんだが、何とかなるか」

「ヴェンデリンさんの魔力でしたら、問題ないと思いますわ」

まずは、義興の自信の源であるあの『竜巻』を消してしまう事にする。

この場合、普通は相反する系統をぶつけて消すのが正しいのだが、火系統の魔法は周囲に火災などの被害が出やすいので避けたいところだ。

そこで、竜巻の習性を利用する事にした。

義興の『竜巻』とは逆に回転する『竜巻』を作り、それをぶつけて消してしまおうとしたのだ。

「威力が小さくて逆に難しいな……まあいいや」

一旦義興の『竜巻』を打ち消し、それからもっと威力のある『竜巻』を作って脅そうとしたのだが、二度手間になるのでいきなり巨大な『竜巻』を作ってしまう。

「ふんっ、大きさだけは立派だな！」

義興は一瞬俺が作った『竜巻』にビビったようだが、すぐに大きさだけだと判断して再び余裕の笑顔を浮かべた。

というか、この島の魔法使いは相手の魔力量をちゃんと察知できるようになった方がいいと思う。

「若殿、きっと大きさだけでスカスカなのでしょうな」

「大方そんなところであろう」

彼らが笑っていられたのは、ほんのわずかな時間だけであった。

義興自慢の『竜巻』は、俺が作った『竜巻』と衝突すると呆気なく消滅してしまったからだ。

「なっ！」

「若殿？」

「何かの間違いだ！　もう一度！」

義興は急ぎもう一つ『竜巻』を作って俺の『竜巻』にぶつけたが、結果は同じであった。

彼の『竜巻』はすぐに消えてしまう。

「もっと大きくできるぞ」

俺は、自分で作った『竜巻』をさらに大きくした。

さらに義興の前に移動させ、彼に降伏を迫る。

「みんなで『竜巻』に巻かれて空まで行くか？　落ちる時は自由落下だが」

「……」

「義興様？」

「すいませんでしたぁーーー！」

ようやく俺に勝てないと悟った義興は、その場で土下座をして降伏した。

これに彼の家臣と西部諸侯も続き、俺はアキツシマ島西部もその勢力圏に収める事になるのであった。

第百五十一話　東方ＤＱＮ三人娘。

「バウマイスター伯爵、島の平定は順調ではないか。夏休みの自由研究で、その詳細を発表したいところだ」

「魔族の学校でですか？」

「冗談だ。魔族という種族は、民主主義を過剰に崇拝し、王政を憎んでいる偏った連中も一定数いるからな。戦乱の渦中にある島を平定する伯爵の話などできない。民主革命で開放するのが正しいと騒ぐはずだ。我らは、農業指導、土地の改良で報酬が貰えればいい」

アキツシマ島に上陸してから二か月半。

現在バウマイスター伯爵家は、島の北部、西部、中央を完全に制圧した。

三好家の本拠地大津はバウマイスター伯爵家の本拠地となり、降伏した三好義継以下三好家の面々は生活の場を大津にある屋敷へと移している。

とはいえ、この島の統治にバウマイスター伯爵家側から大量に人員を割けない。

三好家の力は必要であり、彼らは領主から代官になって統治に必要な人員を提供した。

現在、西部で兵を集めて俺達に対抗した三好義興も降伏したので、西部の統治体制の確立に大忙しであった。

その土地の領主を代官に任じて、バウマイスター伯爵領の法や税制を受け入れさせる代わりに、魔法使いは井戸を掘り、道を拓き、

農地を開墾し、新しい作物の種子や苗を提供し、その栽培方法を伝授する。

農業指導については、魔王様が連れてきた魔族が担当していた。

その成果に応じて、俺が魔王様に代価を支払う予定だ。

「まだ夏休みも残り半分ほど、あまりに長いと逆に疲れるな」

「羨ましいですけどね」

夏休みが三ヵ月って……あれだけ学生の期間が長いから当たり前なのか。

「モール達も頑張っているな」

魔王様の農業法人に入社してまだ短いので、彼らは農業技術を勉強中だそうだ。

元々いい大学を出ているから、覚えはとてもいいようだが。

モール達は、その農業法人で知り合った女性達と結婚するのに色々と物入りなので、手当てが出るこの仕事に志願した。

今日は、雪の手伝いをしているはずだ。

それにしても、俺達と出会いついて来た時からそうだが、あの三人は異常に決断が早いな。

色々と考えてしまう俺からすると、とても羨ましく感じてしまう。

今の俺達の課題は、バウマイスター伯爵家が命じた島全体の代官秋津洲家と、副代官細川家の力をいかに増やすかであった。

秋津洲家は飾りでも仕方がないが、細川家に実務能力がないと、再び降伏した領主達が反抗しかねない。

支配体制の強化には長い年月がかかるが、今は俺達魔法使いの実力をその目で見たので大人しく従っている。

飴として各所で井戸を掘り、開発も進めているので、領民達の支持が厚いのは幸運であった。

細川家当主である雪の負担は大きいが、臨時でモール達と、バウマイスター伯爵家からも文官を派遣し、今までに降した領主の一族や家臣からも人を出しているので、今のところは特に大きな問題もなかった。

「あっ、そうそう。バウマイスター伯爵に頼まれた魔道具だが、手に入れてきたぞ」

「早いですね」

「在庫が余りに余っていたからな。とても安かったぞ」

俺が魔王様に頼んだものとは、海水を真水にろ過する魔道具であった。

この島は、中央にある琵琶湖から離れれば離れるほど水不足に陥りやすい。

琵琶湖から流れるわずかな支流や水路を広げてはいるが、黒硬岩の地形に阻まれるとそこでお手上げになってしまうからだ。

そこで、魔族が持つ海水を真水にろ過する装置が役に立つというわけだ。

魔族が作る魔道具は性能もいいので、海岸沿いの岩山の上に置いてホースで水を引いても十分な水量が確保できる。

井戸と合わせれば、北部と西部の農業生産量は増大するであろう。

ろ過した塩分とミネラルも、上手く加工すれば塩になる。
この島は塩も不足気味なので、水と塩を握るバウマイスター伯爵家の支配力は増すはず。

「結構な魔道具というか、王国でも帝国でもまだ実用化していない装置ですね」

海水を真水に変える装置など、今の魔道具ギルドでは研究すらしていないかもしれない。
俺は魔道具ギルドに所属していないので、実はこっそりとやっている可能性もあったけど。
それでも、実用化していなければ意味がない。

「我々の国は、元々水資源は豊富だからな。昔はそれなりに需要があったのだが、今は人口減と水道屋の仕事がなくなるから、すべて倉庫の肥やしとなっておる。装置の一部は災害用に保管され、あとは中古市場で叩き売られたが、漁業関係者がたまに買うくらいかの。と、ライラが言っていた」

この装置もそうだが、魔族が作る魔道具は魔力効率もよく、頑丈で、性能もいい。
そりゃあ、交易交渉が上手く行かないわけだ。

ローデリヒからの情報によると、とにかく魔道具ギルドの妨害が凄いらしい。
彼らも失業の危機なので、必死なのはわかるのだが……。

「バウマイスター伯爵は、勝手に魔族の魔道具を購入して大丈夫なのか？」

「この島だけなら」

バウマイスター伯爵領本領で、魔族が作った魔道具を使用していたら問題になるであろう。

でもこの島だけなら、バウマイスター伯爵家の人間以外立ち寄らないので問題はない。

というか、異民族で人口三十万人の島を領有して統治しなければいけないのだ。

時間もないし、これくらいのズルをしてないとやっていけない。

「結局、バウマイスター伯爵領と確定した島で、入植可能な島は百を超えました。海竜のせいで海上船舶の使用が難しいので、開発には魔道具の力が必要ですね」

南の僻地なら、魔道具ギルドも口を出せないはずだ。

暫くは政情不安定という理由からバウマイスター伯爵家の人間以外立ち入り禁止なので、魔族から購入した魔道具を開発に使う予定だ。

いまだ王国と魔族の国との間に正式な交易協定は結ばれておらず、両国の法に他国から魔道具を輸入してはいけませんと書かれているわけではない。

王国の法には帝国と勝手に交易をしてはいけないと書かれているが、魔族の国については想定外なので書いていないのだ。

帝国との交易も、実は一部北部諸侯が帝国と密貿易をし、それを王国政府が黙認していたのは公然の秘密であり、法の運用は結構曖昧だったりする。

つまり、俺のやっている事は違法ではない。
脱法とでもいうべきか？
王宮にいるプラッテ伯爵などから攻撃されそうなので、今はこの島でしか購入、使用していないけど。

「まだ他にも色々と頼むかも」

「手間賃が貰えれば大歓迎だ」

魔王様達は、魔族の国の市場に流れている中古魔道具をこちらに持ってくるだけで利益が稼げるので、俺からの提案に大喜びであった。
メンテナンスについては、現在この島の魔道具職人を集めて教育中であった。

魔王様の農業法人にも魔道具のメンテナンスに詳しい人がいるので、最悪その人に頼めば修理はできるので問題ない。
魔道具を動かす魔力については、バウマイスター伯爵家側の人間の方が優秀な魔法使いが多い。
魔道具が便利で多用されるほど、バウマイスター伯爵家の支配力が増す仕組みだ。

「農地を耕す耕運機など、市場では余りに余っていて叩き売られておるぞ」

「魔族の国の農業では、それら魔道具をよく使うのでは？」

どう考えても、鍬で畑を耕すような農業はしていないと思うな。
アメリカのように、デカイ耕運機とかで広大な畑を耕していそうだ。

「段々と、企業経営で農地が大型化しておるからな。古い小型の農機具が余って、中古市場が飽和しておるのだ。趣味で農園をやる人間くらいしか客がいない。しかも、壊れにくいからな」

贅沢な話ではあるが、この島以外では使えないか。

いや、待てよ……。

前に魔の森の地下倉庫から大量に得た魔道具の数々、もし魔族の国と交易が始まれば、あの品々でもあっという間に性能が悪い古い品々という扱いになってしまう。

盗難を怖れてほとんど死蔵していたが、ここは積極的に用いてバウマイスター伯爵領本領の開発を進めるべきか。

『それがよろしいかと思います。特にトンネルの方からは苦情が多いので』

『ああ、馬糞の臭いが凄いんだっけ？』

『はい』

早速携帯魔導通信機でローデリヒに連絡を取ると、彼は魔道具の積極的な活用に賛成してくれた。

特に開通したトンネルで、そこを通る馬が出す馬糞の臭いが問題になっていたそうだ。

警備を担当するトーマスからも『馬糞拾いに任務のかなりの部分が割かれ、何かあった時に対処が遅れる。あと、物凄く臭いです』と苦情が入っていた。

『トンネルの両端に拠点を持つ商人なら、大型車両でトンネルを輸送してあげて手間賃を取ってもいいよな』

『トンネルは長いですかね。トンネルを通る人足に支払う割増賃金を考えますと、運賃を取っても苦情は出ないどころか喜ばれると思います』

発掘された魔道具にはトラックも多いので、これをトンネル内で往復させればいい。

個人商人だけなら、通るレーンを指定すればそれほど馬糞も出ないはずだ。

軽トラのような車両で、馬糞を拾う掃除夫を雇ってもいいな。

臭いから、少し給金をよくすれば希望者もいるはずだ。

集めた馬糞は、前から肥料に加工しているから問題ないはず。

『本領では、発掘魔道具の使用を。アキツシマ島では、魔族の国から購入した中古魔道具で開発を促進する』

『畏まりました。早速手配します』

俺が方針を伝えると、ローデリヒはすぐに対応すると返答した。

この手際のよさ、やはりローデリヒが領主でも問題ないよな。

「というわけなので、これから中古魔道具の仕入れを頼みます」

「ライラがいうには、違法ではないが騒ぐ輩も多いので、上手く誤魔化しながら購入を図ると言っておったぞ」

「それは理解しています」

魔族でも国粋主義的な連中が、『売国奴だ！』と魔王様達を批判するかもしれない。

ライラさんは優秀なので、そういう危険は犯さないのであろう。

向こうでは需要が少ない中古魔道具でも、こちらでは十分に使い道がある。

メンテナンスや簡単な修理くらいなら、こちらの魔道具に詳しい人間にでもできるのだから。

エネルギー源である魔力も、俺達の他に魔の森で採れる魔石で十分に補えるから問題ないであろう。

ルルがいた島の大半を占める魔物の領域、ここも探索と冒険者の活動が始まれば、採取できる魔石の量が増えるはず。

不便な場所にあるが、アキツシマ島の人達なら、魔導飛行船の航路を作ってあげれば冒険者として狩猟に励んでくれるかもしれない。

統一後には軍縮が進むであろうし、農地の拡大で余った人員を吸収しきれなかったり、農民には向かない連中の仕事として、冒険者稼業も悪くないであろう。

強い不満を溜めて反抗的になったり、犯罪に走るよりかは、冒険者稼業でひと山当てるという方に持って行った方がいい。

いわば、ガス抜きの一種だ。

「順調で何よりだ。余も力を蓄え、余の代では無理でも、子や孫がみなさまに愛される魔王様になれるよう、ここは金稼ぎをしておこう。おっと、もうこんな時間か」

「何か予定でも？」

「夏休みの宿題をしなければ。特に日記は毎日必ずつけなさいとライラが言うのだ」

この魔王様、年の割にはしっかりしているのだが、やはり小学生なんだよな。

夏休みの宿題が気になってしまうのだから。

「陛下、夏休みの日記でしたら、日記を書くのを忘れたとしても、必ず天気はメモしておいた方がいいですよ。それも、向こうの天気をです」

魔王様は、ここにはいない事になっているからな。

ここの天気を日記に書いてしまうと整合性が取れなくなってしまう。

「ライラの事だから、毎日の天気はメモを取ってくれていると思う。日記の内容は当たり障りのない記述にしているぞ」

「魔王様のクラスに何人クラスメイトがいるか知りませんが、天気が間違っていなければ、担任の教師もわざわざ日記の記述が本当か、確かめたりしませんよ」

これらの知識は、主に小学生の頃の記憶から出ている。

学校では当然夏休みの宿題が出て、一番面倒なのは絵日記であったが、俺は絵が下手なので難儀したものだ。

日記には天気を書く欄があり、一週間ほどサボると天気を忘れてしまう事もあったが、昔とは違ってインターネットで調べられるのは救いであった。

父に聞くと、昔は天気を忘れると大変だったらしい。

真面目に日記をつけている同級生から情報を得たりしていたそうだ。

「自由研究はどうです？」

「毎日農業に関わっておるからな。二十日大根とホウレンソウをプランターに植えて、世話をしながら観察しておる」

野菜を育てて観察日記をつける魔王様。

とてもシュールな光景である。

「収穫したら、バウマイスター伯爵にも振る舞ってやろう」

「ホウレンソウはお浸し、ラディッシュは浅漬けとか、炒め物も美味しいですね」

「うーーーむ、バウマイスター伯爵は料理にも詳しいな。楽しみにしているがよい」

魔王様は夏休みの宿題をしようと、大津城内に用意された自分の部屋へ向かおうとした。

ところが、急に何かを思い出したように振り向き、俺に頼みごとをしてくる。

「バウマイスター伯爵、時に台形の面積の求め方を知っておるか？」

「はい」

前世では、一応それなりの大学は出ている。

記憶が怪しい部分もあるが、小学生の算数くらいならほぼ何とかなる。

数学ですか？

残念、俺もモール達と同じく文系の学部だったのだ。

「モール達も忙しくて、この城にほとんどいないからな。教えてくれる者がいないのだ」

「まあ、わかる範囲で教えますよ」

「すまんな。それにしても、バウマイスター伯爵は若いのに博識だな」

たまたま覚えていただけだが、俺は魔王様の夏休み中、定期的に勉強を教えるようになるのであった。

「ヴェル、いつの間にそんな勉強ができるようになったの？」

「いつの間にっていうか……魔法を勉強するついでさ」

「ふーーーん、そうなんだ。魔法の本って、難しい内容のものも多いからね」

昼食の時間、魔王様は嬉しそうに俺が勉強を教えてくれたのだと話をし、それを聞いたルイーゼは『なぜ自分達と同じく最終学歴冒険者予備校卒業の俺が、なぜ高等な算数を？』と聞いてきた。

魔族の国は初等教育で習う図形の面積を求める公式も、王国と帝国ではアカデミーの入学試験合格を目指す予備校で習う高度な勉強

であったからだ。

地形の面積を求めるのに使えるが、下級でも役人になろうとしなければ習う必要はないからだ。

不動産屋は土地の面積がわからないと損をするので、これは家伝みたいな形で子弟にのみに教育したりすると、前に胡散臭いリネンハイムから聞いた事があった。

代々の役職がある法衣貴族には習わないといけない高度な勉学もあったりするが、領主でも文章の読み書き、それも漢字が混ざると読めない地方領主など珍しくもないので、魔族の国はそれだけ教育が進んでいる証拠であった。

「ボクも習おうかな？」

「ルイーゼ、これが算数のドリルだぞ」

「どれどれ……」

ルイーゼは、魔王様から夏休みの宿題である算数のドリルを見せてもらう。

「……ボクはいいや」

残念ながら、ルイーゼには合わなかったようだ。

元々勉強するのが似合わないからな。

「あっはっは！　我らに勉学など不要！　要は強ければいいのである！」

「導師、俺らは魔法使いだ。さらに言うと、導師は筆頭魔導師だろう？　多少の教養は必要じゃないか？」

「某の次の筆頭魔導師に期待するのである！」

「げほっ！」

突然導師から肩を叩かれ、食事をしていた俺はむせてしまう。

相変わらずのフリーダムぶりだが、俺がこの島の開発に魔族から購入した中古魔道具を使っているのを黙認してくれているからな。

導師が黙認しているんじゃなくて、陛下が黙認しているのだけど。

その代わり、ちゃんと一定数の魔道具は陛下に献上している。

ただ不思議なのは、陛下はその魔道具の存在を魔道具ギルドには一切知らせていないらしい。

交渉の邪魔をしてくるので、知らせる義理も渡す義理すらない？

魔族の進んだ魔道具が、さらに型落ちの中古品だと知ったら余計に妨害してくるかもしれないので、陛下も黙っているのであろう。

「俺ですか？」

「左様、バウマイスター伯爵はアルフレッドの知識と魔法を継ぐ知に長けた魔法使い。今は某が武に長けた魔法使いとして陛下に仕えているのである！　こういうのは個性であり、どちらが上とかそういうのはないのである！」

「導師、誤魔化しただろう？」

自分が武闘派なのは個性で、知識とか教養は自分の次の王宮筆頭魔導師である俺に任せる。

つまり、このまま死ぬまで勉強なんてしないと導師は断言したの

だ。
まあ、導師が真面目に勉強しても何かの役に立つのか相当疑問があるのだが。

「いうほど、俺も勉強していませんが……」

さすがに、前世で勉強した事は記憶が薄れつつある。
忘れないようにたまにメモしているが、書く前に忘れてしまった事もあるからな。

「魔族ってのは、幼い頃から難しい勉強をするんだな」

魔族の庶民の初等教育イコールリンガイア大陸では高等教育と同じなので、エルも魔族の教育水準に驚いていた。

「エルも勉強したら？　ローデリヒさんを継ぐ立場を目指して」

「俺は武官でいいよ」

ルイーゼから回ってきた算数のドリルを見て、エルはすぐにイーナに回した。
どの世界の人間でも、基本的に勉強好きな奴なんて少ないからな。

「大体わかるけど、これで初等教育って凄いわね」

「イーナ、わかるの？」

「正式に勉強しているわけじゃないけど、たまにそういう本を見るから多少は」

「すげえ！」

イーナは、分数の掛け算、割り算、平均値の求め方、平行四辺形、三角形、台形の面積の求め方など、小学生の算数レベルくらいは理解していた。

空いている時間に、その手の本も読んでいたようだ。

ヴィルマとカチヤが驚いていた。

「でも、このくらいならエリーゼも知っているわよ」

それは俺も驚かない。

彼女はホーエンハイム枢機卿の孫娘で教会に出入りしていたし、完璧超人であったからだ。

「教会は、やる気があれば色々と勉強を教えてくれますから」

とても頭がいいのに、家が貧しくて勉強できない子供がいたとする。

そういう子は、教会に面倒を見てもらいながらアカデミーや上級官吏の採用試験を目指す者が多かった。

教会としても頭のいい将来有望な子供に恩を売れ、信徒も増やせるわけだ。

教会のお世話になった人達は、老後に時間が空くと無料で子供達に勉強を教える。

エリーゼも、空いている時間にそういう老人から勉強を教わっていたそうだ。

「なるほど。教会は、社会のセーフティーネットでもあるのか」

「セーフティーネットって何？」

「貧しい困った人達を救う最後の『安全網』、救済システムの一つだ」

「へえ、難しい言葉を知っているんだね」

「まあ、これでも魔王だからな」

ルイーゼは、魔王様の知識に感心していた。

確かに為政者を目指しているだけあってそれなりに知識はあるのだが、唯一の懸念は少し算数が苦手な部分かもしれない。

「うーーーむ、こういう勉学は、学者や専門家が習う内容じゃな。妾も基本的な事しか知らぬ」

「私のような下級貴族出身者は、勿論学んでおりませんわ。知らなくても困った事はありませんもの」

テレーゼも帝王学を受けていたから、それなりに算数の知識もあった。

カタリーナはそれどころではなかったはず。

それに、分数の割り算や台形の面積の求め方を知らなくても、現状で困る事もないのだから。

「ヴェンデリン様、わかりません」

「うっ！　伊達家当主の俺がわからぬとは……」

わずか五歳のルルと藤子が、算数を学んでいるはずがない。

それよりも、まずは漢字の読み書きが先であろう。

「雪はわかるのか？」

「ええ、この島にも和算という学問がありますので。利息計算、運上金の計算、収穫量から税率の計算、不作の時の減免率の計算、開墾した土地の貢献度に比した分配、検地と。和算を使わないでは統治も侭なりませんので」

「雪はとても頭がいいのですよ」

彼女と幼馴染である涼子は、雪が文武に長けた才女と呼ばれていたのだとみんなに教える。

俺にもわかった。

この中で一番頭がいいのは、間違いなく雪であろうと。

当主名細川藤孝だものな。

ゲームだと、ステータスが優秀な人なのだし。

「私達には魔法があります！　お店のお手伝いをしているので簡単な計算くらいは……」

「私も商売人の家の子なので、会計の基本くらいはできますよ」

「私もです。お兄ちゃん、そういうの苦手だったから」

アグネス、シンディ、ベッティ。

別に、無理に雪や魔王様に張り合わないでも……。

三人は商売人の家の子なので、会計の基本はできるというわけか。

「せっかくみんなが集まったので、これからどうするかなんだけど」

「えっ？　あとは東部と南部の併合で終わりでしょう。魔族の事もあるから、早くしないと駄目なんじゃないの？」

ルイーゼは、この島の統一を急ぐべきだと意見を述べる。

「それしかないわね。ユキさん、東部と南部ってどんな感じなのかしら？」

「ともに、複数の有力諸侯が勢力拡大を狙っている状態です」

雪は、東部と南部の諜報活動にも力を抜いていなかった。

まずは東部。

ここは、農業と商業のバランスがいい地域だそうだ。

「今川家、北条家、武田家、上杉家、織田家などが有力諸侯ですが、飛び抜けた勢力はいません。この五家にしても、動員兵力は五百が精々ですから」

聞いた事がある領主が多いな。

織田家か……。

やっぱり、信長さんがいるのかな？

「南部は、毛利家、長宗我部家、竜造寺家、大友家、島津家などが有力諸侯です。東部と状態は同じです」

ドングリの背比べで、三好家のような大領主はいないわけだ。

それで、小競り合いを続けていると。

「まずは、東部から併合していこうか」

「それがいいと思います」

雪も賛同したので、バウマイスター伯爵家諸侯軍は五千の戦力で東部へと進撃しようとした。

ところがその直前、雪が東部の様子を探らせていた忍びから思わぬ報告が入ってくる。

「大変です！　今川家の当主が討ち死にしました！」

「今川って、義元？」

「そうですが……お館様は、よくご存じでしたね」

「井戸を掘っている時に、噂話で聞いたんだよ」

「そうでしたか」

まさか前世で同じ名前の大名がいたとは言えず、俺は噂で聞いたと嘘をついて誤魔化した。

今は、今川家の当主の名前よりも気になる事がある。

討ち死にしたって聞いたような……。

「討ち死にって言ったよな？」

今まで何度か戦はしたが、敵味方双方に犠牲者は一人も出ていない。

偶然かと思ったら、この島の戦はそんなもの。

いや、討ち死にを出すのを極端に嫌がる傾向のようだ。

「由々しき事態です。織田のウツケが、まさか戦の決まりすら守らぬ女とは……」

「噂には聞いていたが……」

「しかも、当主を討つか？　普通」

雪、三好義継、十河義興……彼には西部を任せるため、分家である十河の姓と家督を継いでもらった……は、戦で当主を討ってしまう織田家に批判的であった。

「でも、戦だろう？」

「お館様も今まで何度か参加して理解しているとは思いますが、戦で人殺しは所作見苦しいというのが常識です」

この島の戦、ヘルムート王国の紛争とそう違いはないのか？
でも、上に立って調停をする者がいない。
戦自体も、魔法使いである大将同士の魔法比べや、武将同士による腕比べが主流のようだ。

「兼仲は、涼子と雪に降伏を迫っていなかったか？」

「あの時はとにかく水がなかったので、秋津洲家を力で抑え込んでも御所付近の水の優先使用権が欲しかったんです。討ち取ったり、滅ぼすつもりはなかったですよ」

紛争と違うのは、時に利権や領地を奪われるケースがある事か。
最後まで抵抗せず、利権や領地を渡してしまう。
領主階級が魔法使いのため、兵や領民が自分の領主が魔法比べや

腕比べに負けてしまうと抵抗しないで降ってしまう。

こんな狭い島なので、本気で殺し合いの戦を始めると犠牲が大きくなりすぎてしまうと考えたのであろうか？

でも、徹底して殺し合う気性でなかったから、俺の平定作業も順調なわけだ。

ある意味、強大な魔力でゴリ押ししているとも言えたが。

「戦に負けても滅ぼされる領主なんてほとんどいません。降って所属を変えるか、領主とその一族が追い出されるのが普通です」

もしくは、西の大領主が兵を出せばすぐに降り、東の大領主が兵を出せば今度はそちらに降る。

犠牲は出ないが、島の統一も難しいというわけだ。

「織田家はルールを破ったのか」

「どういう方法か知りませんが、当主を討ち取るなど不作法もいいところです！」

「そうだな」

「織田のウツケに相応しい行動ではあるか……」

雪、義興、義継は、織田家のやり方に反感を覚えたようだ。

俺が思うに、こんな茶番をしているから島が一向に統一されないのだと、織田家の人がブチ切れてしまったのではないかと思ってしまうのだが。

「織田家の当主って、どんな人なんだ」

「当主は織田信秀、とても商売熱心な方だと聞いております。義元を討ったのは、その長子である織田信長」

「信長？」

ここに来て、織田信長の名前が出てしまった。

今川義元が討たれてしまったのだから、これはつまり桶狭間なのか？

「織田家の当主の通り名は信秀だよな？　現当主がそうなのだし」

「それが、織田のウツケは『代々同じ名前を継ぐなんて古臭い！私は、新たに信長の名を継ぐのだ！』と言ったそうです。本当の名は吉子というそうです」

この世界の信長は女なのか。

そして、本名は吉子（キチコ）……。

その今までの常識を打ち破る行動を見るに、似合っている名前ではあるのか。

「あんまり関わり合いになりたくない」

「そうだね。フジコの『眼帯の下の黒炎竜が！』なんてまだ可愛げがあるものね」

「ルイーゼ、この眼帯に下には本当に竜がいるのだぞ」

「はいはい、そうだね」

「こらぁ！　バカにすると黒炎竜がルイーゼを焼き尽くすぞ！」

ヴィルマ、残念だが東部を平定するのに織田信長との対決は避けて通れないんだ。

ルイーゼ、藤子のはあくまでも魔法の威力を上げるメンタル強化方法だからな。

彼女を挑発しないでくれ。

あの炎の竜を出されると暑いのだから。

「どうせ戦わねばならないんだ。東部を速やかに平定するぞ」

俺の命令で五千の軍勢は、一気に東部へと雪崩れ込んだ。

「降伏します」

中央に近い東部領域に領地を持つ領主達は、バウマイスター伯爵家の情報を知っていたのですぐに降った。

「もう手に負えません。北条家も降ります」

東部で大きな領地を持つ北条家の当主氏康は、一戦もせずにこちらに降った。

彼の目の下には酷い隈が目立つが、原因は俺達ではない。

この地で三つ巴の争いを繰り返す織田家、武田家、上杉家の存在のせいであった。

「織田のウツケ、武田の卑怯、上杉の戦闘狂。今は三者で睨み合っていますが、いつこちらに牙を剥くかわかりません。降伏の条件も厳しいものではありませんし、あの三家を押さえてくれるのなら…

…」

氏康は三家の対処で身も心も疲れたらしく、何の抵抗もしないで降った。

かなりの苦労性に見えてしまう。

「北条家は、今川家と武田家と同盟を結んでいたと聞きますが」

ここで、俺の傍に控えていた松永久秀の娘唯が氏康に質問をした。

「いかにも。ここ最近、織田の小娘が今川に妙なちょっかいをかける事が多く、義元殿は忠告のために兵を出したのです」

それが、いきなり奇襲を食らって今川軍は崩壊し、領地も大半が織田家によって併合されてしまったそうだ。

更に、同盟を結んでいたはずの武田家までもが、どさくさに紛れて今川家の領地をかすめ取ってしまった。

「戦で当主を討つなど、卑怯にもほどがあります！」

「細川殿、義元殿は生きていますぞ」

「あれ？　死んだと聞きましたが……」

「戦場が混乱しておりましたからな。義元殿は負傷が激しく、軍勢も崩壊したので家臣がこちらに避難させてきました」

おかげで死なずに済んだが、領地は織田家と武田家によって分割されてしまった。

義元の家族も、処刑はされていないが、軟禁状態にあるという。

「織田のウツケ殿は、武田家を激しく非難しました。今川家の領地は戦に勝利した自分達のものなのに卑怯だと」

「間違ってはいないけど、『お前が言うな！』って感じね」

「ウツケのやり方に、信秀殿も抗議したのですが、逆に当主の座を奪われて領地を追放されました。彼女の弟である信勝殿も一緒に追放されております。武田家も同じです。現当主である信虎殿が追放され、長子の晴美が信玄を通り名として武田家を乗っ取ったのです」

武田家の当主も女なのか……。

どちらも気が強そうな女ばかりだな。

「最後の上杉家は？」

「あの家は、元々小領主でもある家臣の力が強い家なのです。それを前当主為景の急死後、その娘である竜子が反抗的な小領主を追放し、上杉家の力を増しました。彼女は、当主の通り名を謙信と改め、周辺の小領主を降すか追放して力を増しています」

「厄介なのが三人もいるじゃないか」

この三名、当然魔法使いで中級レベルの実力者である。

煮え切らないルールのため、一向に統一が進まないこの島の現状に憂慮し、力技を用いても統一すると決起し、三人は所領が近いので、勢力拡大の途中で激突するようになったのだと、氏康が説明してくれる。

「今川義元主従、信長に追放された義元殿の家臣、織田信秀、信勝

親子、武田信虎殿、旧上杉家臣の本庄家、竹中家、新発田家など。他にもこの三家に領地を奪われた村上家、諏訪家、松平家、蘆名家、神保家……他にも多数です。みんな、なぜか北条家を頼ってきましてね……」

「一番の大身で、再び戦に負けて追放される危険性も少ないからな」

エルの推察どおりだと思うが、三人が暴れたせいで中立的な小領主が減り、逃げ込む候補が減ったのも理由であろう。

「これだけの方々を養い続ける財力が……」

北条家は東部のある有力五家で一番統治者として評判がいいのに、こんなに亡命者を抱え込んでしまうと増税でもしないとやっていけないはず。

氏康は、信長、信玄、謙信の戦バカ達に恨みつらみがあるのであろう。

彼らの身勝手な行動に頭を抱えていた。

「それで、彼女らは？」

「何でも、最終決着をつけるそうです。三人から、お前も加われと文が来ました。戦費なんてありませんけどね！」

一番まともそうなのに、近所に三人ほどＤＱＮがいるばかりに苦労するとは、この氏康というおっさんは不幸の星の下に生まれてきたのかもしれない。

「あなた、急ぎましょう」

「そうだな。義元殿は大丈夫なのか？」

「はい、応急処置がよかったので重傷の割には簡単に治りました」

エリーゼは負傷して寝込んでいる今川義元の治療を行い、無事に回復したようだ。

このおっさんも死亡説が流れたり、家族が信長に監禁されて不幸以外の何者でもないと思う。

「では、行くか……」

あまり関わり合いになりたくない雰囲気を醸し出す三人であるが、こいつらを好き勝手させておくと、本物の血で血を洗う戦乱に突入しかねない。

バウマイスター伯爵家諸侯軍は、三人の軍勢が睨み合う場所に到着した。

「おーーーい！　空気が読めないおバカ娘三人！」

「何だとぉーーー！　お前が噂の侵略者バウマイスター伯爵か！　私は織田信長だ！」

エルの単純な挑発に一番最初に乗ったこの世界の織田信長は、ヤンキー系美少女であった。

染めたと思われる茶髪に、フルプレートに似た鎧、この島は一万年以上も鎖国をしていた癖に、リンガイア大陸風の軍装をつけている。

どこから入手したのかは知らないが、舶来物好きなところだけは織田信長によく似ていると思った。

「俺は、バウマイスター伯爵の家臣！　エルヴィン・フォン・アルニムだ！」

「お前には用がない！　バウマイスター伯爵はいるか？」

「ぷっ、信長は雑魚だから相手にされないんじゃないの？」

「言ったな！　このおチビが！」

「体の大きさなんて関係ないわよ。戦はここで勝つのよ。ここで」

真っ赤な鎧をつけ軍配を持った小さな少女は、自分の頭を指差す。

彼女が第二のＤＱＮ武田信玄のようだ。

「軍勢の数だけは立派ですね」

「ビビったのか？　おチビ」

「何ですって！　この脳筋娘！」

信長と信玄は、俺達の存在を忘れたかのように醜い口喧嘩を始めた。

レベルがほぼ同じ、とても低く安定している二人だ。

「敵がいくらいようと、すべて叩き潰すのみ！」

三人目の少女は、僧兵風の格好に薙刀を持った黒髪の美少女であった。

だが、三人目のＤＱＮなので俺は勿論トキメキもしない。

彼女が上杉謙信のようだ。

「これだから戦闘狂は……」

「常に卑怯な策ばかり考えているおチビには言われたくない！」

「あんた達、人をいつもおチビ扱いして！」

「レベルの低い言い争いだな」

「ああ……」

俺とエルは、三人のくだらない言い争いを聞いてテンションを下げた。

というか、そろそろこちらの相手もしてほしいところだ。

「外からの侵略者が何だ？　私は、おチビと戦闘狂を倒してお前に戦を挑む！　この島を統一し、バウマイスター伯爵領とやらを併合し、ヘルムート王国、アーカート神聖帝国、魔族の国をも平らげて世界の王となるのだ！」

この世界の信長も、気宇壮大であった。

ただし、現実は見えていないようだが……。

「言い分は聞いてあげたから、本題に入るぞ。お前さんが頑張らなくてもバウマイスター伯爵家がこの島を統治するから、安心して降るように」

「バカにしているのか？　ちょっとくらい魔法が使えるからって！　勝家！」

「おう！」

信長に降るように言うと、彼女はキレてしまったようだ。
後ろに控えていた身長二メートルはありそうな大男が、馬に乗ってこちらに突撃してくる。

「ははははっ！　織田家一の猛将である勝家に勝てるかな？」

「戦いたい人は？」

「はーーーい」

勝家って言ったから、柴田勝家風な人なのであろう。
猛将という共通項はあるか。
魔力も持っており、それでも初級くらいだ。
小領主の小競り合いで、魔力をパワーに乗せて戦えばほぼ無敵だと思う。

俺が戦うまでもないので希望者を募ると、ヴィルマが手を挙げた。
許可を出すと、華麗に馬に飛び乗り、大斧を持って勝家へと突進していく。

「俺に勝てるか！　チビ！」

「噛ませは、物語でもこういうセリフをよく言う」

「抜かせぇーーー！」

「あと、馬が可哀想」

残念ながら、この世界の柴田勝家はヴィルマの挑発に簡単に乗ってしまう猪武者であった。
この島の馬についてだが、外の馬に比べると一回り小さく、勝家ほどの巨体が乗ると馬が大変そうに見えた。
ヴィルマはバウマイスター伯爵領から持ってきた馬に乗っているので、そんな事はない。

「馬上にてその大斧を振るうか！」

「別にどこでも使える」

「自信満々なのは今の内だけだぞ！　我が槍の前に破れるがいい！」

二人は武器を構えながら馬を走らせ、一瞬だけ交差した。
俺にはただすれ違っただけにしか見えなかったが、エルは違う意見のようだ。

「ヴィルマの勝ちだな」

「そうなのか？」

「一撃で決まったよ」

エルの言う事に間違いはなかった。
その直後、意識を失った勝家が馬から落ち、勝利したヴィルマが大斧を掲げたからだ。

「まあまあ強かった」

「勝家が……」

「駄目じゃないの。武田家が四天王を出してあげるわよ。信春、昌豊、昌景、昌信」

「「「「はは っ！」」」」

「弥太郎！」

「お任せを！」

信長と信玄と謙信、共闘しているわけではないが、先に共同して俺達を倒した方がいいと判断したのであろう。

この三人、実は気が合うのかもしれない。

信玄は負けた勝家を出した信長に文句を言いつつ、多分四天王扱いの馬場信春、内藤昌豊、山県昌景、高坂昌信を、謙信は鬼小島の異名を持つ小島弥太郎を出してきた。

なぜ彼らの名前がわかるのかと言えば、俺の傍にいる唯がそっと教えてくれるからだ。

「唯殿」

「以前から私の父は、長慶公の命で各地域の有力領主とその配下について調べておりました。その情報を、長慶公の後継者であるお館様にお伝えていただけです。雪殿は心安んじて軍政を担当していただきたく」

「くっ！」

雪は、情報収集能力で松永親娘に先を越されたと、とても悔しそうな顔をしていた。
唯姫は俺よりも年上だが、出しゃばらず頭もよく気が利く綺麗なお姉さんである。
松永久秀自慢の一人娘であり、将来は婿を取って松永家を継いでもらうそうだ。

俺は条件に合わないから、気楽につき合えていいな。

「ヴェル、行って来るわね」

「ボクも行く」

「あたいも」

「某も！」

「いや、導師は止めとけ！」

ゾロゾロとムサイ兄さんや小父さん武将が出てきて一騎打ちを所望し始めたが、イーナ、ルイーゼ、カチヤが勝負を受けて戦い始めた。
導師も暇なのか戦おうとするが、彼らはみんな初級魔法使いでしかない。
どう考えても敵の方が可哀想なので、ブランタークさんが止めた。

代わりに、導師が鍛え直していた兼仲が導師から与えられた六角棒を持って一騎打ちに臨んだ。

「信玄様以外の女子が、俺達に勝てるものか」

「女子は後ろでお菓子でも食べているがいい」
「勝負に負けて泣かないようにな」
「外の世界では、女子に戦わせなければいけないほど男が弱いらしいぞ」
自称武田四天王の面々は、女性が一騎打ちに出てきたのでバカにし始めた。
「いやね、ああいう言い方をする人って」
「イーナちゃん、ああいう発言をする人って大抵それほど強くないから」
「あんまり強そうには見えないけど、旦那のためだ」
「うーーーむ、なぜかあまり強そうに見えない。師匠のおかげか？」
イーナ、ルイーゼ、カチヤ、兼仲は武田四天王と一騎打ちに臨んだが、俺がどいつがどいつか見分けがつかないまま全員倒されてしまう。
死んではいないが、暫く意識を戻さないであろう。
「なっ！　私の四天王が！」
「四人いるという事は、私の鬼小島の四分の一の強さなのでしょう。私の鬼小島は……
「あまり強くないのである！　ガッカリである！」」

ブランタークさんの静止を振り切った導師は、謙信自慢の猛将小島弥太郎を一撃で殴り倒し、その意識を刈り取ってしまう。
殺してはいないが、脳震盪で完全に戦闘不能だ。
残念ながら彼は、自慢の大太刀を抜く暇すら与えてもらえなかったようだ。

「駄目じゃねえか」

ブランタークさんが、三人のＤＱＮ自慢の配下に駄目出しをした。

「実は織田軍で一番強いのは私だ！　バウマイスター伯爵、勝負しろ！」

「奇遇だな、信長。私もバウマイスター伯爵と勝負しようと思っていたんだ」

「鬼小島がやられた以上は、私が出なければいけまい」

自慢の猛将をうち破られたＤＱＮ三人組は、一斉に俺に勝負を挑んだ。

「三対一か？」

「何を言う。私は一騎打ちを望んだのだが、信玄と謙信が割り込んだのだ。私に譲るという選択肢はないので、あの二人がバウマイスター伯爵に同時に挑もうと私は関係ない」

信長はとてもいい性格をしていた。
彼女は、自分一人では俺に勝てないと瞬時に理解したのだ。

だから三人で俺を倒そうとするが、あくまでも自分は一騎打ちを望んだ。
信玄と謙信は、勝手に加わっただけで関係ないと言い放った。

今までにない、清々しいまでの卑怯っぷり。
勝つために手段は選ばない女なのであろう。

「信長が退かないが、時間はないので仕方がりません。私はあくまでも、一対一で戦いに挑んでいます」

信玄も信長と同じく、ここは三人で俺を倒してしまい、あとでまた三人による戦いを再開しようと目論んでいるようだ。

「まあ、仕方がないな」

戦闘狂と噂される謙信は、戦えれば卑怯も何も関係ない。
それ以上に、勝てれば嬉しいタイプのようだ。
結局同時に戦いを挑み、俺対信長、信玄、謙信の戦いになってしまう。

「いい性格をしていますわね」

「貴族や王としては間違っていないのじゃがな……」

いい性格をしている三人に、カタリーナとテレーゼも呆れていた。
元々大貴族であったテレーゼは三人の作戦を理解はできるのだが、今となっては卑怯としか言いようがないと思っているようだ。

「あなた、頑張ってくださいね」

「すぐに済ませるよ」

俺はエリーゼにすぐ戻ると言ってから、三人の前に立つ。

「聞いたか？　信玄」

「聞いていないが、聞いている。この状況で随分と余裕だな」

「まあよかろう。我々ではなく、私が勝つのだ」

この三人、先ほどまでそれぞれ軍勢を率いて睨み合っていたのに、俺という大敵の前ではとても仲がよかった。

「お前ら、実は仲いいだろう？」

いい性格をしているという部分と、いきなりこれまでのルールを破ってしまうというＫＹな部分では似た者同士、とても気が合っているように俺には見えるのだ。

「誰が仲がいいものか！」

「あくまでも、たまたま攻撃の機会が一緒になっただけだ！」

「バウマイスター伯爵、降伏すれば命だけ助けてやるぞ」

「その言葉をそっくり返すよ」

謙信の降伏勧告を、俺はそのまま三人に返した。

「いかに魔力に自信があるとはいえ、三人ならば！」

「まずはバウマイスター伯爵を降してから、東部、アキツシマ島全土と平定を進めるべきか」

「どのみち、信長と信玄とはケリをつけないといけない。先に倒されるがいい」

信長は『火炎』魔法を、信玄は『カマイタチ』の魔法を、謙信は『氷弾』で俺に攻撃を仕掛けたが、すべて『魔法障壁』で防いでしまう。

この三人、そこそこ有望な中級魔法使いという感じだ。

「三種類の属性魔法攻撃だ！　思い知ったか？」

信長が魔法を連発しながら高笑いを続けているが、特に工夫もない攻撃魔法なので欠伸が出そうなほど暇だった。

師匠のように、魔力が多い敵に対し色々と応用を利かせるというレベルに達する者は少ないようだ。

「もっと派手なのはないのか？」

三人の大した事もない魔法が続くので俺は退屈してしまい、つい余計な事を口にしてしまう。

それを挑発だと受け取った三人は激高した。

「言わせておけば！」

「ならば食らうがいい！」

「地獄で後悔するなよ！」

三人は俺の挑発に簡単に乗ってしまい、信長は『火柱』魔法を、信玄は『竜巻』魔法を、謙信は巨大な『氷弾』を作って更に激しく攻撃を続ける。

だが、こちらにはまったくダメージがなかった。

魔力も向こうばかりが大量に消費し、俺は必要最低限の『魔法障壁』だけで三人の魔法攻撃を防いでいる。

「（もうそろそろかな？）」

中級魔法使いが上級魔法使いが展開した『魔法障壁』をうち破らんとする時には、一撃で全魔力を用いるくらいしないと駄目だ。

それなのに、中途半端な威力の攻撃魔法をダラダラ連発している時点で、この三人の負けは確定した。

もうこれ以上は時間の無駄というやつだ。

「はあ……はあ……」

「なぜバウマイスター伯爵の『魔法障壁』が破れない」

「こんなはずは……」

三人は次第に口数も少なくなり、遂に大半の魔力を使い果たして動けなくなってしまう。

だが、彼女達はここで逃げるわけにはいかない。

三人は、魔法の強さで家臣や兵を率いてきたのだ。

ここで逃げたら、その軍勢は崩壊してしまうであろう。

そうでなくても、名だたる猛将達が俺の妻達に倒されているのだから。

「何か攻撃魔法を披露しないとな」

犠牲を少なく勝利するためには、圧倒的な力を見せて相手の心を折らなければならない。

そこで俺は、膨大な魔力を使って三人の前に巨大な『火柱』を派手に撃ちあげた。

「導師が『何とかライジング』とか言ってたな」

「バウマイスター伯爵、何とかでは格好がつかないのである！　『バースト・ライジング』である！」

「そう、それでした！」

とにかく相手をビビらせる事だけが目的の魔法なので、『火柱』は高さ五十メートルを超えるものとなった。

「これは、思ったよりも熱いな……」

「それだけ派手な火柱をあげれば当然ですわ」

ここは亜熱帯の島なのでとても暑くなってしまったが、脅しの効果は十分にあったようだ。

「ひぃ……」

「魔法の威力が違いすぎる……」

「勝てない……」

巨大な『火柱』を見たＤＱＮ三人組はその場で腰を抜かし、兵達も何も言わないのに次々と武器を捨てていく。

これにより、織田軍、武田軍、上杉軍は降伏し、三人のせいで混乱していた東部もバウマイスター伯爵家によって併合されたのであった。

第百五十二話　高速アキツシマ島統一。

「キリキリ働くのである！」

「無謀な戦で荒らした分は、開墾で倍にして返せよ。せっかく魔力があるんだ。生産力の増大に貢献するように」

「「「わかりました！」」」

この世界にいた織田信長、武田信玄、上杉謙信の通り名を持つ三人の少女達は、俺達膨大な魔力を持つ魔法使いの前に膝を屈した。

天下統一のためだからという理由で本気の犠牲が出る戦を行った罪により、三名は当主の地位を強制引退。

元々クーデターで当主の地位に就いた者もいたので、彼女達はいなかった事とされた。

織田家は、北条家で匿われていた信長の父織田信秀が一日だけ当主に復帰、信長の弟で信勝という少年がいたので、彼が本来の通り名信秀を継いで当主となった。

隠居した信秀も、暫くは信勝の補佐を行う。

織田家の新しい通り名信長は夢幻と消え、彼女は織田吉子に戻っている。

武田家も、北条家が匿っていた信虎が旧武田領の代官として一日だけ復帰。

すぐに信玄の弟信繁が、従来の武田家当主信虎の名を継ぎ、新しい通り名信玄も二度と使われない事が決まった。

彼女も、ただの武田晴美となる。

上杉家も同じで、先代為景の名を継いだ竜子の従兄が上杉家の家督を継いでいる。

謙信の通り名はタブーとなり、謙信は上杉竜子に戻った。

実家を追われた三人は、今罰として導師監視の下で魔法による開墾を行っている。

戦で荒れた東部地域の復興と開発を、責任を持って行う事になったのだ。

逃げようにも、監視役は導師である。

それに、魔導飛行船がないのに小さな船で逃げても、たかが中級レベルの魔法使いだと確実に海竜の餌であろう。

特にこの島の周辺海域には、海竜の巣が大量に確認できた。

彼女達だと、頑張っても一回に十匹倒せればいいくらいだ。

その程度だと、仲間を殺されて怒り狂った他の海竜達の餌食にされてしまう。

この島が一万年以上も外部と交流がなかったのには、ちゃんとした理由があったのだ。

彼女達が魔導飛行船を奪っても運行は不可能だし、他の場所に逃げても生活が成り立つ保証もない。

三人は、導師監視の下で大人しく土地を開墾していた。

攻撃魔法が得意なようで未熟な点も目立つが、それはブランター

クさんなどが指導する事になった。

「バウマイスター伯爵様、私達は戦の方が得意なのですが……」

「南部平定の時には是非ご指名を！」

「戦でこそ、私は輝くのです」

「却下。お前らは、多くの東部諸侯に恨まれている。戦で荒らした場所を元に戻すのが最優先だ」

この三人がＤＱＮと言われる所以は、今までのこの島のルールでは一向に統一できないと本気の戦を仕掛けてしまった事だ。

織田家は、今川家、水野家、松平家などの領地を奪う、武田家も村上家、諏訪家、木曽家の領地を奪っている。

上杉家も反抗的な家臣の領地を奪い、神保家、畠山家などの領地を奪った。

犠牲者も出ており、この三家は新当主になっても肩身が狭い状態であった。

おかげで、東部全体の代官は領地を奪われた領主とその家族を匿って養っていた北条氏康に、その補佐に負傷から復帰した今川義元がついている。

匿われていた領主達も、代官としては復帰できたので喜んでいる。

領主ではなくなったので不満がある者もいるかもしれないが、あの三人のＤＱＮを魔法で圧倒した俺に逆らうほど、現実が見えていないわけでもないであろう。

それに彼らからしたら、俺よりも三人の方が憎いという者の方が

多いのだから。
処刑しろと言う者もいたが、俺がこの三人を生かして開発作業に従事させているのは、バウマイスター伯爵家への不満や怒りが、彼女達に向かって統治が楽になるからである。
復興や開発で扱き使っているので利益もあり、こういう考えに至る俺は貴族らしくなったのであろうか。

「それに、こう言っては悪いが大した戦力にならない」

「そうですね。うちは上級魔法使いが多いですから」

リサから見ても、この三人の実力は普通の中級魔法使い。
この島の中では天才扱いだが、リンガイア大陸では上級魔法使いに圧倒され、魔族の国は普通の人。
領主階級で魔力が遺伝するというこの島独自の特徴があったが、長い年月で徐々に魔力が劣化していき、遺伝しても初級レベルが平均になっていた。
だからこそ、外部からの刺激が欲しいという気持ちもあったのかもしれない。

アキツシマ島の住民が異民族であるバウマイスター伯爵家の支配を素直に受け入れたのには、上級魔法使いの多さがあった。
黒硬石の岩盤をぶち抜いて井戸を掘れる魔法使いがここ数百年出現しておらず、彼らは水不足が深刻化するかもしれない危機に怯えていた。
そこに新たに井戸を掘れる俺達がきたので、特に悪政を働くわけでもなく、受け入れて当然という流れになったようだ。
外部との交易も行え、移民も可能かもしれないという点もあった。

「うぉーーー！　外の魔法使いがここまで凄いとはぁーーー！」

この三人の他にも、開墾を手伝っている者達がいた。
行動はＤＱＮだったが一定の支持者がいた彼女達について、主家を出た者達がいたからだ。

柴田勝家、武田四天王、小島弥太郎の他に、十数名の初級魔法使いが開墾を手伝っている。
前田利家、丹羽長秀、滝川一益、武藤喜兵衛、柿崎景家とか、どこかで聞いたような名前の者が多かった。

「それでも、監視は必要だから面倒だな」

「そうですね。監視を緩めて暴れられでもしたら押さえる手間が面倒です」

今はとにかく、開発で魔力を搾り取って余計な事を考えないようにしないといけない。
それにしても、導師のみならずリサも監視役として置いているから井戸を掘る速度が下がって困ってしまった。

「ほら見ろ、信玄。お前が陰湿な手段ばかり用いるから、お館様に信用されないのだ」

「人の事が言えるのですか？　今川義元を奇襲で大怪我させたあなたに」

「私のように正々堂々と戦えば、そのような評価は受けぬのです」

「戦バカの謙信に言われたくない」

「お前は、容赦なく戦うから怖いんだよ」

怒られるのでちゃんと作業をしながらであったが、この三人敵対していた割には会話が弾んで仲がよさそうに見えてしまう。

今は同じ立場だから、余計そういう風に見えるのであろうか？

「織田家の家督を弟の信勝に取られてしまった。あいつと親父は、今の領地なしで給金を貰って代官をするくらいならちょうどいいか」

「うちの信繁も同じです。彼は父に気に入られていましたからね」

「今の上杉家の家督なら、特に未練もありません。暫くは魔法の修練をしつつ、機会を狙います」

「機会だと？　謙信、また兵でも挙げるのか？」

「信玄、今さらそんな事をして何になるというのです。私は、勝ち目のない戦は嫌いなのです」

「それは奇遇だな。私も負けるのは嫌いだ」

またよからぬ事を考えていないだけマシか。

この三人は勝利するのが好きだから、無謀な、最後の意地を見せるための反乱などを起こさないというわけだ。

「信長、何か考えたのですか？」

「簡単な事だ」

「簡単な事？」

「この島で平定されていない場所は南部だけ。あの三好長慶でも成し遂げられなかったアキツシマ島の統一はお館様によって成し遂げられる」

「それはわかります。それが何か？」

信玄は、何を今さらそんな事をという表情を浮かべた。

「落ち着け、謙信。ならば、次に我らが目指すものは何か？　ずばり！　私が女だからこそできる天下取りの方法。お館様の寵愛を受け、産まれた子供がこの島全体の代官に任じられれば勝ちなのだ！」

「秋津洲高臣、細川藤孝、伊達藤子などがいますが……」

信玄は、この三人が俺の妻の座を狙っている情報を掴んでいた。
この世界の信玄も、情報収集に長けているようだ。
今はどうなっているのか知らないけど。

「これより抵抗がないわけでもないが、女として色々と磨く必要があるな。エリーゼ様達が産んだ子供達は、あくまでもバウマイスター伯爵領本領を継いだり、家臣になる身。私がお館様の子を産んで寵愛されるように女を磨くのだ」

「信長がそういうのであれば、この武田信玄も負けていられません」

「つまり、これは女の戦なのですね。受けて立ちましょう」

この三人、そういう相談は俺がいないところでやってくれないかな？
これ以上、厄介な女はいらないんだが……。

「リサ、俺、あいつらは嫌」

なかなかの美人なのだが、既に俺のイメージではＤＱＮ三人娘でしかない。
俺は元々、前世では普通で真面目な学生だった。
この三人はヤンキー系に見えてしまい、生理的に苦手な部類に入る女達に見えるのだ。
俺の子供を産んだ直後に騒動を起こさない保証もないし、このまま距離を置いておきたかった。

「何かうっ憤を晴らせる場所が必要でしょうか？」

「ルルがいた島にある魔物の領域にでも押し込もうかな」

冒険者にしてしまい、毎日魔物を狩らせて余計な事を考えさせないようにしようか？
パーティメンバーは、三人についてきた、一緒に追放された家臣達でいいであろう。

「となると、今が絶好の機会か？」

「そうなのか？　信長」

「わからぬのか？　謙信。今お館様の傍には、年増のリサ様しかおらぬではないか」

「なるほど！　他に女はいないな」

「ここでこの信玄がお館様の寵愛を受け、お前らはガサツな女だから無視されるのだな」

「リサ、どうどう」

「あの三人、面白いですね……」

この三人、そんな会話を俺達に聞こえるようにしているのが凄い。距離が離れているので、俺とリサが監視も兼ねて三人の会話を魔法で盗聴しているだけなのだが、彼女達に年増扱いされたリサの顔に冷たい笑顔が浮かぶ。

「信玄のような発育不足女に需要などない。ここは、この三人の中で一番胸も大きく、腰も細い私が寵愛されるに決まっておろう」

「信長、胸の大きさなら、私もそう変わらないぞ」

「戦バカの謙信など、お館様が相手にするか。今は女にも癒しが求められるのだ」

「信長のどこに癒しがあるのだ？　エリーゼ様ならわかるが……」

謙信の言うとおりだ。

俺も、この三人に癒しなどないと思っていた。

「ふん、私に負けているからといって。今は、ここにいる女子の中で一番ならいいのだ。私の魅力を持ってすれば、年増のリサ様など」

「年増のリサ様に勝ったはいいが、私の事を忘れていないか？」

「信長も謙信も笑えるな。年増のリサ様に勝っても、ここに戦の天才改め、女の天才上杉謙信がいるではないですか」

「……」

「リサ、ドウドウ」

あの三人、聞こえていないと勝手に勘違いして、とんでもない話をしていやがるな。

俺はもう知らないぞ。

「旦那様、少し失礼します」

「あんまりやりすぎないようにね」

リサは、少しの間その場から離れた。

きっと、あの昔のような衣装に着替え、化粧をしに行ったのであろう。

「うーーーむ、毒には毒を持って制すである！」

数分後、リサは俺達と初めて出会った時と同じ服装とメイクで現れた。

そのあまり衝撃に、信長達は口をあんぐりとさせながら動けなくなってしまう。

「よくも散々言ってくれたね！　お前らも、もう十年すれば年増なんだよ！　無駄口叩く前にこれは罰なんだ！　真面目に働きやがれ

！」

三人に怒鳴りながら、リサが無造作に『冷気』を近くの巨岩に放つと、カチンコチンに凍ってしまった。

彼女の『冷気』魔法は、俺が使用する『絶対零度』の概念を参考に、以前よりも大幅に強化されている。

続けて、リサが完全に凍結した巨岩に『氷弾』をぶつけると、巨岩は粉々に砕け、空中に舞った微細な岩片が日の光でキラキラと輝いていた。

「役立たずなうえに余計な事を考えたら、お前らも木っ端微塵に砕いて畑の肥料にするぞ！　わかったか？」

「「「了解しました！」」」

リサの変化に驚いた三人はその日一日中リサに厳しく監視され、ヘトヘトになるまで開墾作業に従事させられてしまう。

翌日以降は普段の姿に戻ったが、またいつあのメイクと衣装になるのか不安で仕方がない三人は、素直にリサの指示に従うようになるのであった。

「あの三人の考える事など、容易に想像がつきます」

「罰で働かされているのを理解しているのでしょうか？」

ＤＱＮ三人組の監視を導師とリサに任せ、俺は大津城へと『瞬間移動』した。

現在の大津城は完全にバウマイスター伯爵家の拠点となり、アキツシマ島副代官である雪がすべての統治実務を取り仕切っていた。

雪は魔法は使えないが、俺よりも年齢が一つ下で女性なのに物凄く有能な文官であった。

軍勢を任せても上手く指揮を行い、本人は刀術、槍術、弓術、斧術、薙刀術、馬術、操船の達人でもある。

これだけ有能ならいくらでも一人立ちできるはずなのに、幼馴染でもあった涼子を盛り立てていたのだから、かなり義理硬い性格もしていた。

『拙者の下に欲しいくらいの逸材です』

その有能さはローデリヒも認めるところであった。

その雪にあの三人がしていた下らない計画を教えると、彼女も呆れた表情をしていた。

「とはいえ、もう少しお館様がこの島に来るのが遅かったら、彼女達の誰かが島を統一したかもしれません」

「そうだろうな」

この島は、領主階級に遺伝はするが段々魔力量が落ちていく魔法使いが井戸を掘れなくなり、外部に出ようにも海竜に邪魔され、このままだと衰退する可能性が高かった。

あの三人は、今までの戦のルールでは一向に島が統一されずにバラバラだという危機感があったからこそ、あのような行動に出たのだと思う。

俺がいなければ、あの三人がこの島を血で血を洗う乱世へと誘った可能性が高いわけだ。
もっとも、その想定はバウマイスター伯爵家が来た事により無意味になっている。

「魔力が余っていると碌な事を考えないので、暫くは開墾作業に従事させましょう。まったく、今まで領主として男勝りの言動を繰り返していた癖に、急に女性を前面に押し立てても意味がない事くらい理解してほしいものです。お館様は、涼子様と私の夫になるのですから」

「おっ、おう……」

思わず、肯定とも否定とも取れない返事をしてしまった。
島の安定した統治のために、この島全体の代官と副代官である涼子と雪を妻に迎え、その子に継がせるのが重要なのはわかる。
だが、こうもストレートに言われてしまうと、どこか釈然としない部分もあった。

「今は、南部平定の方が優先ですよ。雪さん」

「勿論、その計画は進めています。唯殿もそれはご存じでは？」

「そうでしたね」

とここで、あの松永久秀の娘である唯さんも話に入ってくる。
雪は統治に必要な官僚、代官組織の編成を行った。
トップは秋津洲高臣の名を継ぐ涼子だが、彼女は基本神官なのでお飾りである。

実際の統治よりも、この島では廃れつつある神道に似た宗教と神社の復興を進め、彼女はそのトップとして統治の精神的な支えとなる。

ここで教会の教えを強引に持ち込むと新たな騒動の元なので、ミズホ公爵領と同じ方式にした。

こういう時に、ホーエンハイム枢機卿とツテがあると話が早くて助かる。

どうせ暫くはバウマイスター伯爵家の人間以外島には立ち入り禁止なので、押しかけ布教を試みる神官はいないであろう。

そんなわけで涼子は、普段は大津城の近くにある廃れた大社で秋津洲家が代々伝える神事や治癒魔法を用いた治療を行う事になった。

病気や怪我をした人が押しかけ、同時に大社も大規模改装工事中であった。

統治の実務は雪が当主を務める細川家が担当、唯さんは松永家の人間として副代官である雪を補佐する役割についている。

彼女も魔法は使えないが、松永家の一人娘なので高度な教育を受けており、非常に優秀であった。

他にも、雪の補佐についている中央領域の代官や官僚も多い。

彼らは、この島を統治する中央官僚という位置づけだ。

さらに、今までに平定した地域にも責任者がいる。

北部は伊達家、中央は三好家、西部は十河家、東部は北条家といった具合だ。

その下に各領地の領主からそこの代官にジョブチェンジした人達がいて、上手くピラミッド型の統治組織ができあがった。

俺はよくわからないので、みんな雪に任せたけど。

中には、七条兼仲のように領主には向いていないし、やりたくもないという理由で中央官僚や武官に転身した者も多かった。

兼仲は中央で再編した治安維持用の警備隊の責任者になり、訓練と警邏、たまに街道拡張工事などを手伝っている。

松永久秀も中央官僚のお偉いさんに華麗に転身し、雪の下で辣腕を振るっている。

唯さんも雪が女性なので、傍に同じ女性がいた方がいいという理由でついているのだが、この二人仲が悪いのかもしれない。

二人で仕事をしていると、とても効率よく片付くようではあるのだが……。

「南部が平定できれば、さらに効率のいい開発が進められます。松永久秀殿は優秀なのですから、南部の責任者などはいかがですか？唯殿も、南部の有力領主から婿を迎えればいい」

「松永家は中央を基盤としてまいりました。急に南部の責任者になっても、地元の人達が言う事を聞かなくなる懸念があります。それに、松永家の婿については父に考えがあるようです。雪さんが心配する必要はありませんわ」

やはりこの二人、仲が悪いようだ。

雪は松永家を南部に移そうと画策し、唯さんはそれを堂々と否定した。

『松永家の事に口を出すな、小娘！』と顔に書いてあるが、それを見ても涼しい顔をしたままの雪も大したものだ。

「松永家にも外の血を？」

「そうなるかもしれませんが、それは雪さんが心配する事ではありませんよ。何事も、お館様次第です」

そう言いながら、俺に妖艶な笑みを見せる唯さん。

彼女は男勝りの仕事をしながらも、あのＤＱＮ三人組とは違って身嗜みにも気を使っていた。

あまり派手ではないセンスのいい打掛を着ており、この島には香水はないが、ほんのりといい香りがする香を炊いていた。

誰から見ても綺麗なお姉さんであり、俺の一歳上とは思えないほど洗練されている。

雪も大津城に詰めるようになってから女性らしい格好をするようになったが、ずっと北部にいた影響であろう。

女性としての身嗜みは、唯さんの方に軍配が上がってしまう。

「お館様は、この島を統べる存在。誰を寵愛しようと自由なはず。血筋によって副代官職の正当性を求めるのは結構ですが、それはお館様への配慮がなっておりません。迫り方も無粋ですね。私には到底真似できませんわ」

「っ！」

唯さんの指摘が図星であったため雪が歯ぎしりをしてしまい、俺は早くこの場から抜け出したくて仕方がなくなるのであった。

「というわけです。女は怖い」

「聞いていた私も怖いわよ。あまり人の事は言えないけど」

執務室のギスギスした空気に耐えかねて外に出た俺は、城の中庭で槍の稽古をしていたイーナに先ほどの出来事を話してしまう。

「唯さんも、ヴェルの子供が産みたいわけね。あの久秀っていう人、いかにも企んでそうな感じだものね」

名前が松永久秀だからな。

天下人であった三好長慶の腹心で、元は領主階級でもなかったらしい。

己の実力のみで、三好家重臣の地位と、松永領の領主となった。

今は領地が持てないので、旧松永領の代官兼雪の補佐で重要な地位にいる。

彼は優秀なので、仕事を任せると楽なのは確かであった。

「久秀さんの狙いは、雪さんの副代官職だと思う」

「やはりそうか……」

一人娘の唯さんに俺の子供を産ませて松永家次期当主とし、バウマイスター伯爵家の血で細川家に対抗するつもりなのであろう。

秋津洲家は飾りなので抵抗しても意味はない。

細川家を標的にしているところで、久秀のおっさんが食えない人なのはわかった。

それでも、別に武力闘争というわけでもない。
無用な派閥争いで統治の足を引っ張っていないから、特に罰する理由もない。
三好長慶の下で権謀策術の世界に生きてきた彼だからこそ、むしろ今の体制の方が立身出世が可能だと思っているわけだ。

少なくとも、細川家と副代官職を奪い合うライバル関係にはなりたい意図が透けて見える。

「どうしようか？」

「それは私には決められないわ」

「そうだね。ヴェルが決めないと」

話にルイーゼも加わってきた。

「あたい達には決定権ないものな」

「そう、ヴェル様の妻が百人いても私達は何も言えない」

カチヤとヴィルマも話に加わってくるが、俺が誰を妻にするかしないかは自分で決めてくれと突き放されてしまう。

「そのくらいの事、ご自分で決めるのが貴族ですわ」

「あなたはバウマイスター伯爵家の初代当主なので、当主の力が特に強いのです。代を経れば家臣団や一族の意向も左右しますが、基本的にはローデリヒさんも、あなたの意向に逆らえません。実力のある当主とはそういうものなのです」

カタリーナとエリーゼにも止めを刺され、俺は思わず最後の望みテレーゼに縋った。
リサはまだあのＤＱＮ三人組を監視しているので、ここにいなかった。

「何じゃ？　妾のアドバイスが必要なのか？」

「助けて！　テレーゼ！」

心の中で、後ろに『えもん』とつけた。

「好きにせい……では、他のみなと同じじゃな。妾なりの見解を述べよう。妾なら、涼子、雪、唯を妻にした方がいいと思うがの」

「その心は？」

「ヴェンデリン、為政者とはな。常に最悪の想定、未来の事も考えねばならぬのじゃ」

「最悪の想定？」

「秋津洲家はいい。あそこはお飾り、宗教的な権威と合わせてあの島のトップとなる。それを支える存在はぶっちゃけ誰でもいい。理想は能力がある家なら、定期的に交替した方がいいの」

つまり、副代官職の細川家世襲は大きな危険を孕んでいるのか。

「雪はとてつもなく優秀じゃが、その子は？　孫は？　ひ孫は？悪愚な当主が出て、島の統治を不安定にするやもしれぬ」

「そこで松永家って事か？」

「そうじゃ。細川家が駄目なら、松永家に交代する。その権限をバウマイスター伯爵家が持てば、アキツシマ島の混乱は防げる。向こうの不満？　バウマイスター伯爵家の力は圧倒的じゃ。文句があるのなら、叩き潰すぞという姿勢が大切なのじゃ」

「うわぁ。怖いね」

「ルイーゼよ。統治者とは基本的に怖れられてナンボの存在なのじゃ。上が舐められて下が混乱すれば、一番迷惑を蒙るのは下々の領民達じゃぞ」

それは、帝国内乱で嫌というほど実感した。

今のところは順調だが、島の統治に手を抜いてはいけないわけだな。

ただ、誰を嫁に貰うのかとかはあとにしてほしい。

「その三人くらいでよかろう。伊達の小娘が何か言うておるが、あの小娘との婚姻など悪手じゃ」

「当主がヴェンデリンさんの血を継いでいるからと、北部で反抗的な態度を取る可能性がありますわね」

領主は全員代官にしてしまったが、担当地域は元領地なので影響力が残っている。

ここで藤子と俺の子が伊達家の当主になると、中央と張り合って島の統治に混乱が出る可能性もあった。

「男と女の事などまだ知らぬ子供の言う事じゃ。適当にはいはい言っておけ」

「それはルルもか？」

「あの子はいい。ヴェンデリンの妻になっても、余計な紐もついておらぬ。ついていても、移転した村くらいであろう？　子供をその地域の代官にすれば、連中も素直に従おうて」

それにしても、ここまでドライに考えられるとはさすがは元公爵様。

「むむむっ、その言葉聞き捨てならぬぞ！」

「おお、噂をすれば小娘じゃ」

「俺を小娘扱いするな！　ちょっとくらい背と胸が大きいからって威張るなよ。俺もテレーゼ殿くらいの年になれば、張り合えるくらいのナイスバディーになるわ！」

どうやらテレーゼは、藤子が話を聞いているのがわかって彼女に釘を差したようだ。

子供相手に大人気ないという意見もあると思うが、藤子は年齢以上に大人びている部分がある。

理解できるとわかって釘を差したようだ。

「ルルは、ヴェンデリン様のいい奥さんになりますね」

「おう、自由にせい。ルルは何の問題もないからな。ヴェンデリンの事は好きか？」

「はい、大好きです」

「そうか、それは相思相愛じゃな」

テレーゼからの問いに、満面の笑みで答えるルル。
五歳の幼女の大好きだから、娘がお父さんを大好きと言っているような感覚を覚えてしまう。

「俺とルル。随分と差があるじゃないか！　俺もヴェンデリンの事は大好きだぞ！」

「生まれた家が悪かったの。生まれは選べぬから本人に罪はないが、その影響は生涯ついて回る。諦めい！」

「ぐっ！　俺が伊達家の次期当主だから駄目ってのか？」

「そういう事じゃ。お主の身形や心根のせいではない。それだけは言っておこう」

テレーゼは、五歳児でも理解に及ぶのであれば容赦しなかった。
逆に言うと、藤子を対等の相手だと認めているわけだ。

「ならばこの伊達藤子、いや、伊達の名を捨てただの藤子となろう！」

「本気か？　お主」

「フィリップ公爵の爵位と家を捨てたテレーゼ殿と同じじゃ。実は、昨日父上から母上が身籠ったと連絡が来てな。ちょうどいいから、

その子に家督を譲る旨を伝えている。家臣達も次は男かもしれないとなれば、俺が家督を捨てても何も言うまい」

藤子は、本当に五歳児とは思えない口を利くよな。
元々藤子の家督継承の話は、伊達家直系の子供が藤子しかいない状態で当代政宗殿が病気になってしまったから出た話だ。
彼はもう健康であるし、次の子供も産まれる。
となれば、別に戦乱の世でもないし、無理に藤子に家督を継がせる必要はないというわけだ。

「なるほど。家を捨てても、ヴェンデリンの妻になるわけだな？」

「おうよ。伊達の家よりも、お館様の方が大切だからな」

「そこまでの覚悟なら、まったく問題ないな」

「テレーゼ殿は話がわかるな」

おい、テレーゼ。
俺の妻を勝手に増やすな。

「よかったの、ヴェンデリン。若い妻が増えて」

「がぁーーー！」

「お館様、ルルと二人、いい妻になるからな」

ここで拒否すると藤子でも泣きそうだったので、俺は何も言えなかった。

「だぁーーー！　私達はどうなるのですか？」

「そうです！　私達は今かあと一～二年の話ですよ！」

「先生は私達を捨てたりしませんよね？」

「捨てるわけがないだろう。アグネス達は俺の弟子で……」「「「婚約者ですよね？」」」

これで八人……。

俺は、ミズホ人と同じルーツを持つアキツシマ島、ここには俺の予想もつかない何かがあるのかもしれなかった。

と、勝手に思って現実逃避していただけであったが……。

「さて、南部の状況ですが……」

俺が新たに何人の妻を迎えるのかはあとの問題として……まあ、先送りともいうが……まるで日本の政治家……俺は元々日本人だからいいのか。

前世では、そういう政治家をテレビで見ながら批判していたが、その立場になってみると意外と大変だった事がわかる。

無責任に一方的に非難して悪かった。

統治体制の整備と兵力の再編……これは、なるべく専業の兵士を増やし、領民が生産作業に専念できるようにしている。

過度期なので地方の治安維持にパート兵士がいたりするが、これ

も南部の平定が終われば徐々に開墾した農地などに割り振って数を減らす方針だ。

その作業がひと段落したので、いよいよ南部平定を行う事になった。

作戦会議が大津城の会議室で行われ、雪が南部の状況を説明する。

「南部は、大きく分けて四つの大きな領主がいます。北部の毛利家、家臣に小早川家、吉川家、穂井田家などがいます。中西部の竜造寺家、家臣に鍋島や松浦家、中東部は大友家で、家臣に立花家、高橋家、一万田家、志賀家など。最南端に島津家、伊集院家、新納家、北郷家などが有力な家臣ですね」

「一番強いのは？」

「どこも似たり寄ったりです。ただ、島津家は当主貴久の子四兄弟全員が中級魔法使いだそうで、勢いはあります」

こちらが攻めると、激しく抵抗する可能性があるのか。

「南部は比較的食料生産に余裕がありますからね。独立独歩というか、領地が接しているところは小競り合いがありますが、基本あまり争わないんですよね」

日本の戦国時代だと九州は修羅の国であったが、アキツシマ島の南部勢力は現状の変更を嫌う大領主が多かった。

比較的水と食料に恵まれている事もあって、他の地域よりはむしろ戦は少ないのだそうだ。

「じゃあ、平定は簡単か」

「平定は簡単です。むしろ、あとが面倒ですね……」

この雪の発言は、現実のものとなった。

七条兼仲が指揮を執る南部平定部隊が南下を開始すると、毛利家、竜造寺家、大友家、島津家とみんな素直に降ったからだ。

雪は、もしかすると島津四兄弟が戦いを挑んでくる可能性を考慮したが、実際には素直に降っている。

「呆気ない全島統一だな」

物語やゲームとしてはいまいちなのであろうが、実際に統一している身としては最良の結果だ。

ところが、問題はその後に発生したのだ。

「南部の責任者は、一番歴史の長い大友家だな。我らは一万年以上も前、この島に上陸し、秋津洲家を支えた仲間の子孫なのだから」

通り名が宗麟の大友家当主は、自分こそが南部の代官に相応しいと宣言する。

「それはおかしいぞ！　我が毛利家も、歴史の長さは同じだ！」

「何を言う。毛利など、秋津洲家の屋敷の前でゴミ掃除をしていた小物の子孫ではないか」

「そんな事はない！　毛利家の祖先は、秋津洲家の仲間だと古文書に書いてある！」

「一万年も前の話だ。大方、適当に嘘でも書いたのであろう」

「人の事が言えるのか？　第一、お前の家は何度も断絶して養子を受け入れているだろうが！　血など繋がっていない癖に！」

「バカ者！　分家からの養子だぞ！　血は繋がっておるわ！」

毛利家の当主の通り名は元就であり、二人は自分こそが南部の代官に相応しいと口喧嘩を始めてしまう。

「家柄の古さしか取り得がないというのも困りものだな。ここは、我ら竜造寺こそが南部代官に相応しいのだ」

「一番相応しくないわ！」

「成り上がり者の癖に！」

「二千年の歴史があるうちが成り上がり？　お前らが骨董品なだけじゃないか！」

この島の家柄自慢は、王国と帝国の歴史ある貴族家がすべて新興、成り上がり貴族に見えてしまうほど凄い。

数千年の歴史が当たり前なのだから。

領主一族の本流はほぼ全員魔法使いなので、家が続きやすかったのであろうが。

「我ら島津家は八千年の歴史と、四人の息子は全員中級魔法使いだ。家柄と実力を兼ね揃えた島津家こそが南部代官に相応しい！」

随分と素直に降ったと思ったらこれだ。

彼らも、基本は勝てない戦などしない。
領地はなくなっても代官だから地元に影響力は残るわけだし、ならば素直に降ってあとは南部を統括する代官職を狙った方が利口だと考えたわけだ。

「雪の予言が当たった！」

この四家の実力は伯仲しており、戦がなかったので誰も力を落としてしない。
四人の中で誰を選んでも反抗は必至で、これでは素直に降った意味がないかもしれない。

「どうしようか？」

「この件は対応を間違えますと……」

再び争いは必至だ。
せめて四人の中の誰かに、指名するに足る根拠があればいいのだが……。

「涼子、彼らの言う家柄って本当なのか？」

「我が家に伝わる古文書にも記載されていますが、何しろ一万年もの年月です。途中で断絶して分家が本家を継いだり、乗っ取ったりする事例も多く、話半分かと……」

領主の血筋は、魔法使いならそこまで疑われもしない。
ただ、血筋の薄い分家の人間が当主になったりしたため、段々と魔力が少なくなったのであろう。
魔力が遺伝するという、この島の領主階級の特異性の理由は何な

のであろうか？
遺伝子……それは、王国と帝国貴族も条件にそれほど差はないはず……。
あとでアーネストにでも研究させるか。
畑違いだと言われて断られるかもしれないけど。

「それで、いかがなされますか？」

「うーーーん、代官職の取り合いで戦が再開したらバカみたいだしなぁ……王国の制度を参考にするか……」

王国で大臣職は、五つほどの家で持ち回りだ。
これを参考に、四つの家で五年ごとに交替でいいような気がする。

「そんな適当な提案を、あの連中が受け入れるか？」

「どれか一家を選ぶと、また戦ですよ」

「逆に、そういう玉虫色の裁定はよくないと思うんだよなぁ……」

ブランタークさんは俺の提案を心配していたが、この島の住民は日本人に似ている。
『絶対に我が家が南部の代官になるのだ！　そのためには、他の三家を滅ぼしてでも！』とまで考えた者はおらず、俺からの提案を呆気なく受け入れた。

「順番はクジで決める」

「伯爵様の家臣だから好きにすればいいが、クジって……」

「ここで家柄の順とか、家臣や服属領主の支持数の順にすると、また揉めますよ。どうせ二十年に一度は回ってきますし、クジならクジだから仕方がないで家臣や支持者に言い訳できますから」

「何か、この島って戦乱なのに、しけった菓子みたいな連中が多いな」

「殺し合うよりはいいのでは？」

結局クジ引きの結果、南部の初代代官は島津家となった。

あとは、大友家、毛利家、竜造寺家の順である。

素直に言う事を聞いてくれるのであれば、このくらいの例外は認めても構わないであろう。

「ようやく、アキツシマ島が統一されたな。大変だった」

「そうか？　普通は島でも、三か月とかからずに統一は難しいのでは？　余の夏休みは、まだ一か月近くも残っておるぞ」

この島に遊び仕事を兼ねて来ている魔王様は、バウマイスター伯爵家によるアキツシマ島統一の早さに驚いていた。

「いいじゃない。色々と転売して儲かるから」

「ほほほっ、魔族の国ではまだ使えるのに古かったり、デザインが悪いとかで売れない魔道具も多いからな。今、ライラが密かに買い集めておる。まだ使えるのに粗大ゴミで出してしまう者も多いから、無料で回収もしておるぞ」

そういった魔道具が、この島に次々と到着する予定であった。

「この島の開発に魔族の国から格安で購入した魔道具を使い、バウマイスター伯爵領本領では、遺跡で発掘した魔道具を使えばいい。問題は盗難対策だが……」

金のない初級魔法使いでも、魔法の袋を使えばかなりの量の品が盗める。

依頼者は、俺と敵対している貴族か、純粋に貴族領というのは一種の独立国だ。

盗品を抱え込んでも、俺に取り戻す手段はほとんどなかった。

「足の引っ張り合いか。どの国の貴族にもアホは一定数おるな。盗難対策なら、盗難防止のタグを買えばいいではないか」

「タグ？」

「魔族の国なら、どこの店でも使っておるぞ」

魔族は全員魔法使いなので、魔法の袋で大量に盗難が可能という事情があった。

そこで、魔法の袋に入れると大きな音が鳴る魔道具が販売されているそうだ。

「高額な商品を売る店なら、みんなつけておるぞ。特殊な鍵でしか外せず、それは店が持っている。無理に外すと割れて、割れても物凄い音が鳴るのだ」

「それも欲しいなぁ」

ローデリヒだから魔道具の管理体制はきっちりとやると思うが、

犯罪と防犯はイタチゴッコのような関係だ。
必ず盗難は発生するし、それを防ぐ手段は多い方がいい。

「ライラに連絡して入手させよう。それほど高いものではないし。通販でも買えるものだからな」

こうしてアキツシマ島は無事統一され、これからこの島の開発を行って領民達の支持を得るべく努力を開始するのであった。

第百五十三話　統一、陞爵、他いろいろ。

「宋家？　誰それ？　どこに領地があるの？」

これで統一と思ったら、まだ残っている領主がいるそうだ。

クジ引きで初代南部代官になった島津貴久が、俺にまだ服属していない領主がいると教えてくれた。

「宋家の領地はここです」

アキツシマ島南部には、比較的広めの砂浜がある。

たまに海竜が来るので危険はあるが、島津家はここで製塩業を営み、ここで製塩された塩は中央まで運ばれているそうだ。

「この南海湾はちょうど真円状の内海（うちうみ）でして、南側の狭い海峡のみで外海と繋がっているのです」

その特殊な地形ゆえに広大な砂浜を有し、製塩業が盛んであった。

たまに狭い海峡を通って海竜が襲来するが、島津領の男達は製塩設備を守るために命をかけて戦う。

そのため、彼らは精兵としても有名であった。

これからは、製塩や漁業にのみに従事できるように改革を進める予定だが。

「この内海の真ん中に島があるのです。人口は百人ほどですかね？」

「島津領ではなかったのか？」

「それが、独立した領主がいるのです。うちもそうですが、どの大領主にも服属しませんね。当代の当主が中級魔法使いで、余計に島津家には従えないと」

人口百人……ほぼ村の規模で独立精神が旺盛。

何か、面倒なので放置したくなってきた。

「お館様、そういうわけにはいきませんよ」

「最後の仕事かぁ……」

相手は人口が百名ほどだ。

降伏させるのなら、千人もいれば……いや、もう軍縮したいから五百名で十分だろう。

俺達は、宋家の領地がある島へと船で上陸した。

「ヤシの木ばかりだな」

「この島の特産はヤシの木ですので。身の中に入っているジュースを飲むくらいで、中央の金持ちが心もち高めに購入するくらいですね」

「それは勿体ないな」

ヤシの木を増やして大農園を作れば、新しい産業になるのに。

「来たな！　侵略者よ！」

上陸して島を見学していると、突然大きな声で侵略者扱いされてしまった。

声の方向を見ると、そこにはミズホ服に腰ミノという奇妙な格好をした色黒の青年がいる。
気配を探ると魔法使いなので、彼が宋家の当主なのであろう。

「……。ヴェル様、変」

「あの腰ミノに何か意味はあるのかしら？」

「変だよね」

「あの家の決まりなのかもしれませんわ」

「ええと……とても個性的ですね……」

和服風のミズホ服……この島だとアキツシマ服というらしい……に腰ミノ姿なので、宋家の当主である色黒の若者は全体的にどこかチグハグな印象を受ける。
ヴィルマ、イーナ、ルイーゼ、カタリーナ、エリーゼ。
一緒にいる女性陣は、みんな彼の格好が変だと言った。

エリーゼはあからさまに批判しないで個性的と言っているが、個性的は変の同義語であろう。

「これから躍るのですね」

危険も少なかろうという事で俺についてきたルルが、宋家の当主を見て言う。
確かに腰ミノは、ハワイとかバリ島に行くとダンサーがつけている物によく似ていた。

「ルルの島でも、年に一度お祭りで腰ミノをつけて躍るんです」

「収穫のお祭りとか、そんな感じかな？」

「はい。その時には料理も一杯出ますよ」

南の島の収穫祭なので、腰ミノをつけて躍るのであろう。

ルルはヘルムート王国人と人種的に違いはないが、宋家の当主は日焼けしているが日本人風である。

つまり、アキツシマ島の住民と人種的に差はなく、なぜ腰ミノなのかという疑問が残ってしまう。

そして、彼は言動も変だった。

「このぉーーー！　超絶天才魔法使い！　『宋家の旋風』と呼ばれる俺様に何か用か？」

「貴久、彼はそういう二つ名で呼ばれているのか？」

「いえ、今初めて聞きました」

「……そうか……」

今、この場で決めたっぽい。

何というか、とてもキャラが濃い人のようだ。

「念のために聞いておくけど、島津家と宋家との関係というか、立ち位置はどうなんだ？」

「距離は置いていますね。何と言いますか、宋家の当主はああいう

感じの者が多くて……」

宋家は内海の島に領地がある。

昔は島津家も、何度か服属を迫ったり、兵を出した事もあったそうだ。

「兵を集めて攻めると降伏はします。ですが……」

『やっぱり嘘だよぉーーーん！　バーーーカ！』という感じで……代々の宋家の当主は、そういうノリの者が多いそうだ……すぐにまた独立してしまう。

それでまた兵を送ると降伏するが、兵を退くと独立してしまい、兵を送るのも無料ではないし、交易品はヤシの実くらいなので、段々と無理に服属させなくてもという空気になってしまったそうだ。

「我ら島津家の後背を突けると、大友、竜造寺、毛利も服属させようとした事もありましたね。まあ、無駄だったのですが……」

『宋家は、何者にもつかず！』と言い放ち、宋家とはそういうものという空気が南部に広がって行った。

放置しておけばヤシの実の交易も普通にできるので、今では誰も宋家を降そうとは思わなくなった。

これが、宋家の現状というわけだ。

「お館様の手腕に期待しております」

……島津貴久、随分と素直に降ったと思ったら、バウマイスター伯爵家のお手並み拝見とはいい度胸だ。

彼を降す事ができたら、心からバウマイスター伯爵家を認めると

いうわけか。

「このぉ！　超絶天才魔法使いぃ！　宋家の旋風に勝てる奴はいるのかな？」

何だろう？

こいつ、喋り方がウザい。

他にも色々と理由はあるけど、島津家が関わり合いになりたくない理由がよくわかった。

「誰か戦いたい人は？」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

誰も手をあげなかった。

導師ですら嫌がっている。

きっと変な人だからであろう。

あと、喋り方が何かムカつく。

「俺が相手をする。負けたら降れよ」

「そうだなぁ、考えてやらないでもないなぁ」

本当、こいつウザいな。

「……」

「始めるか？」

「おうっ！」

時間が勿体ないので、早く降す事にしよう。
領主同士で魔法勝負を行い、降して降伏させる。
この島ではよくある戦であった。

「なぜぇーーー！　この俺が宋家の旋風と呼ばれているかぁーーー！」

「自称でしょう？」

イーナ、それは事実だけど、そこで妙なツッコミを入れないでくれ。

「自称ではなぁーーーい！　我が領民で可愛いハナちゃんがつけてくれたのだぁーーー！」

ほら、こいつ反論しないと気が済まないから。
時間がもったいないので、とっとと終わらせてしまうに限るのだ。

「ちょーーーぉとくらい、魔力が多いくらいで俺に勝てるかなぁ？　いかにぃ、魔法の威力が凄くてもぉ！　風と同じ速さで動く俺はぁーーー！」

宋家の当主は、風系統の魔法を得意とするようであった。
カタリーナとは違って『竜巻』は用いず、極限まで速度をあげて敵の魔法を回避、相手に素早く接近して攻撃するタイプのようだ。

「あーーーはっはっ！　この俺の姿がぁーーー見えるかなぁーーー！　いかにぃ、魔力が多くてもぉーーー！　当たらなければ意味がぁーーーあーーーっ！」

これ以上聞いていると頭が痛くなりそうだったので、俺は彼の移動位置を予測、そこに風の塊を作って罠として配置した。
宋家の当主はそれに真正面から激突し、そのまま海へと飛ばされてしまう。
彼のスピードも利用した攻撃だったので大分沖合いまで吹き飛ばされたが、あいつなら死なないという確信はあった。

「殿ぉーーー！」

「あいつ、自分の事を殿って呼ばせているのかよ……」

ブランタークさんが呆れるのも無理はない。
殿よりも、村長といった方が正しかったからだ。

「さて、これで天下統一だな」

宋家も無事に降り、これでようやくアキツシマ島は統一された。
これにより島から一切の戦が消え、島内の発展にも期待できる……と思っていたら……。

「お館様、宋家が独立しました」

「……」

ウザイ奴だが、決まりなので降伏した彼を旧領の代官にして大津に引き上げたが、わずか数日で再び宋家が反乱したと雪が報告を持ってきた。

「あの野郎……」

喋り方はウザイし、一見アホそうに見える宋家当主だが、実はかなり賢いようだ。
彼の領地は人口百人ほど、特産品はヤシの実のみ。
ここを、逆らう者達を殺してでも支配する意味はない。

この島の戦には特殊なルールがあり、宋家の当主はそれを最大限に利用して領地の独立を維持しているのだ。

「再び討伐しますか？」

「そうだな」

「兵力はいかほど？」

「兵力は出さないよ」

「ですが！」

「それも宋家の狙いなんだよ」

侵略者が何度も兵力を率いて宋家を攻めても、手間と費用ばかりかかって無駄になってしまう。
本腰を入れて支配する価値もない領地のため、島津家も他の領主達もすぐに諦めてしまったというわけだ。

「兵力を整えるだけ無駄だな。雪は常備兵力の再編と、訓練と称した開発の手伝いの方を頼む」

この島は統一された。

常備兵力を減らし、島の開発に人員を振り分けないといけない。
領民は戦に駆り出される事もなく、生産性も上がる。
生活が豊かになれば、バウマイスター伯爵家が異民族でも問題にする者は少なくなるであろう。

「承知いたしました」

「じゃあ、行ってくる」

まるで奥さんに対し仕事に行ってくると言うような感じで、俺は宋家の領地である島に『瞬間移動』で飛んだ。

「どうだ？」

「原種が多いね。土地の利用し方も不効率だし、もっと生産量を上げられるんだけどなぁ……」

「魔族の国にヤシの木があるんだ」

「気候の関係で路地だと栽培できないから、温室で限定生産だね。ヤシジュースを販売しているところがやっている。品種改良も進んでいるし、園芸用で苗も売っているよ」

「ヤシの木を園芸で育てるのか」

今日の宋家攻めには、モール達を連れてきた。
兵力など必要ないので、この島をいかに開発するか、彼らに判断してもらうためだ。
この三人、農業の素人だったのに短期間でよく勉強したものだ。

元々頭はよかったし、職も得られて、今度結婚するから頑張っているのであろう。

結婚費用になる遠隔地手当てのために。

「旧島津領でも、ヤシの木の栽培に適している土地は多いね。水は中央ほどじゃないけど豊富な場所が多いけど、ちょっと稲作に向かない土地が多いかな。イモでも作ればいいさ」

「野菜も種類によってはいけるかな？」

「この島は、黒硬石の上に堆積した砂や土が載っているから、土壌が少し貧弱なのが欠点だな。バウマイスター伯爵領は、逆にあんなに農業に適した土地はないよ」

モールの説明どおり、バウマイスター伯爵領は水も多くて稲作に向いている土地が多い。

他の作物も問題なく作れ、寒くならないし、日もよく当たる。

確かに、農業には非常に適した土地であった。

「この島も気候は悪くない。水も井戸を掘れば出てくるし、中古の海水ろ過装置も大量に導入する予定だからね。島だからちょっと土壌が貧弱だね。どこから土でも持ってこようかな？」

「それがいいかもしれないな。あとで正式に魔王様に依頼しようかな？」

「そうしてくれないか。俺達も会長の許可なしでは動けないからね」

俺も概要が理解できないわけではないので、宋領がある島を視察しながらモール達とこれからの開発計画を相談する。

魔族をお抱えにすると、技術と知識があるので効率がいい。
向こうの国で不良在庫やゴミ扱いの魔道具だって、この島やバウマイスター伯爵領ではとても役に立つものなのだ。

「おい！　お前ら！」

「えっ？　何？」

人の島で勝手にこれからの開発計画を相談していたので、やはり宋家の当主であるこの色黒の若者はキレてしまったようだ。
まあこいつがいくら怒ろうと、俺達は仕事を効率的にこなそうとするだけだ。

つい二日前に魔法勝負で勝利して海に叩き込んでやったのだが、懲りずに反抗してきてウザかったのだから。

「もう少しで相談が終わるから、少し待ってくれ。すぐにお前に相手をしてやるから。寂しいのはわかるけどさ」

「この野郎！　人を友達がいない可哀想な奴みたいに言うな！」

「誰もそんな事は言っていないじゃないか」

でも、宋領の人口は百名ほど。
領主である彼につき従う家臣もなく、実はこの男。
子供の頃の俺よりもボッチなのか？

「バウマイスター伯爵、彼が旧宋領の当主なの？」

「魔族！　人を勝手に元領主にするな！　宋領は再び独立を果たし

たのだ！」

サイラスに元領主扱いされた、宋家当主の青年が激高する。

自分はまだ領主のままだと、大声で主張する。

「一旦降っておいて、それはないよなぁ……。なら、降らないで領地に殉じたら？」

「サイラス、お前、怖い事を言うな」

「領主同士による魔法勝負や一騎打ちで勝利した方が講和で有利になったり、勝った方に服属。犠牲を出さないいいシステムだけど、こういうルール無視の例外は、処分しちゃっていいと思うよ」

「ルールが機能しなくなっちゃうからね。そのリスクを考えると、統一の過程で一人くらい死んでも許容範囲？」

サイラスに続けて、ラムルも宋家の領主に厳しい意見を言う。

「お前ら余所者が、この島の決まりにケチつけるな！」

「その決まりを破っているのは君じゃないか。そこのところはどう思っているの？」

学のあるモールは、理論的に宋家の当主の駄目な点を指摘した。

「うるさい！　俺はこの宋領を必ず守ると、両親に誓ったのだ！」

これはもしかすると、この若者は亡くなった両親のためにこの領地を守ると誓い、魔法の勝負を俺に挑みで負けてもすぐに反抗して

いたのか？
亡くなった両親のためか……。
その点は同情できるな。

「両親の遺言なのか」

「こら魔族！　人の両親を勝手に殺すな！」

こいつ、本当に腹立つな。
両親はまだ生きており、この息子に宋領を守るように命令しているというのが正しいようだ。

「とにかくだ！　俺様は諦めないぞ！　バウマイスター伯爵、尋常に勝負！」

「またかよ」

「またかよとか言うな！」

とは言いつつも、どうせ勝負しないといけないのは同じだ。
とにかくこいつが心から敗北を認めなければ、何度破れてもすぐに反抗してしまう。
昔の偉い人が言っていたが、心を屈服させないと駄目なのだ。

「今度負けたら降れよ？」

「さ～～～あなぁ～～～」

こいつ、本当に殴りたくなってきた。

「それとだな！　バウマイスター伯爵」
「まだ何かあるのか？」
「俺様の名は、宋義智様だ！　超絶天才魔法使いにして……「ああ、それはもういいから」」
名前は立派なのに、行動が残念すぎる。
これ以上前と同じ口上を聞かされても、退屈だし時間の無駄だ。
また速攻で倒してしまおう。
「俺をバカにするぅーーーと！　お前は、必ず後悔するぞぉーーー！」
前と同じく、彼は勝負で興奮するとこういう口調になった。
癖なのであろう。
今度は魔力をほぼ使った巨大な『竜巻』を作り、それで俺を攻撃しようとする。
というかこいつ、『竜巻』も使えたんだな。
その威力は絶大で、島に植わっているヤシの木から実が取れて上空へと飛ばされて行った。
「若！　ヤシの木はうちの島の命綱じゃないですか！　魔法勝負なら他所でしてくだせえ！」
「すまん……あと、俺は領主なんだが……」
義智は外の人間には威張っていたが、領内では意外と立場が弱いらしい。

魔法の『竜巻』でヤシの実を飛ばしてしまい、木の持ち主であるお爺さんに怒られていた。
それにしても、領主なのに領民から怒られる奴は珍しい。

「まだ領主様のお仕事の大半は、ご隠居様と奥様がなされているではありませんか。魔法ばかり撃っていないで仕事をしてくだせえ」

「なあっ！　俺はこの領地の独立を守るために戦っているのだ！」

「誰もそんな事は望んでねえじゃねえですか！」

「そうなのか？」

俺は、思わずヤシの木の持ち主である老人に問い質してしまった。

「島が一つになるってのなら、その方がヤシの実も売れますし、この島はイモしか取れねえんですよ。みんな米を買わなきゃいけねえ」

「おい、アホ」

独立云々よりも、その前に領主としてやる事がいくらでもあるじゃないか。

「誰がアホかぁーーー！　俺様は、この前の俺様とは大違いなのであーーーるぅ！　超絶天才魔法使いである俺様が……「あーーー、先の話をしてくれ」」

「俺の事をバカにしてんのかぁーーー！　この巨大な『竜巻』をーーー！」

義智は作った『竜巻』を俺にぶつけようとしたが、やはりカタリーナの『竜巻』に比べると数段落ちる。
俺は即座に反対側から回っている同程度の『竜巻』を作り、義智の『竜巻』にぶつけて相殺した。
義智はほとんどの魔力を使ってしまったので、もう魔法攻撃はできない。
「おのれーーー！　ならば、代々宋家に伝わる刀術にて……あがっ！」
もうこれ以上付き合っても無駄なので、俺は『電撃』の魔法で義智を気絶させた。
「バウマイスター伯爵様、わざわざすみませんですだ」
「彼の両親の下に案内してくれ」
「へい」
義智の『竜巻』のせいでヤシの木を失わずに済んだお爺さんは、俺達をこの島の領主館へと案内してくれた。
気絶した義智は誰もおんぶしたくなかったので、俺が魔法で浮かせて運んでいる。
「申し訳ありません！」
「このバカ息子が！」
案内された宋家の屋敷は、この島では一番大きくて立派だが、中

央に行けばこれよりも立派な家はいくらでもあった。
人口が百人しかいない村の領主だったので、村長くらいの存在でしかないのだ。

意外にも義智の両親は常識人で、俺にペコペコと頭を下げた。
気絶した義智は土間に放置され、少し可哀想な気がしないでもない。

「村の代官職は、暫く義智の父親宗義調に任せる。というか、他に手がないな」

義智が宋家の独立とうるさいので、常識的な父親に任せるしかないのだ。

「彼は、なぜはっちゃけているんだ？」

「ご覧のとおり、私は魔力が低いので……」

彼は宋家の当主としては例外的に魔力が低く、ウザイ性格をしていなかった。
そのため、義智が調子づいてしまう土壌が生まれてしまったようだ。
とはいえ魔力は多いので宋家の家督を早めに譲り、いつあるかもしれない島津家のちょっかいに備える生活。
段々と宋家の独立に拘り、意地でも自分が降らないという姿勢を崩さなくなったというのが真相のようだ。

「バウマイスター伯爵、アレどうするの？」

「放置する」

俺に突っかかってきたら、すぐに撃退すればいい。
それよりも、この島の開発をどうするかだ。
思ったよりも大きな島なので、モール達の仲介で新種のヤシの木の苗を購入し、それを育ててもっとヤシの木を増やした方がいい。

「そうですね。島の空いている土地を手入れし、もっとヤシの木を植えます」

義智はアレだが、父親は素直に降ってこの島の代官になった。
領民達も、別に義智に同調しているわけでもないようだ。

「彼に支持があったら、徒党くらい組むよね？」

「サイラスは、サラっと酷い事を言うなぁ……」

つまり、義智は誰に支持されるでなく、一人で俺に突っかかっただけ。
なまじ彼の身分が領主だったので雪が混乱したが、ボッチなので放置しても構わないという結論に至ったわけだ。

宋義智は、アキツシマ島のボッチ魔法使いであった。

「バウマイスター伯爵、苗木を購入してきたぞ」

「これが品種改良品かぁ」

「少し前は、この品種が農家で栽培されていたのだ。今も極少量生産されているそうだがな。まあ、我らの国でヤシの木の需要は少ないし、気候の問題もある。わずかに温室で生産されているのみだが」

魔王様がヤシの木の苗木を持ってきてくれたので、みんなで宋領がある島と島津領内に植えた。

魔法で土地を整備し、魔法で作った肥料を混ぜながら苗を植えていく。

島の住民と、島津領で新たにヤシの木の栽培を始める者達も手伝い、モール達は栽培方法を教えていた。

元ネタの大半は、魔族の国の園芸書や、書店で購入可能な農業指南書からである。

「バウマイスター伯爵、成木もあるそうだぞ。ライラが言っておった」

「それは欲しいけど、何で成木が？」

「持ち主が破産したそうだ」

「世知辛いお話ですわね……」

魔王様の口から出た『破産』という言葉に、カタリーナは顔をしかめた。

さらに詳しい事情を聞くと、人口減で悩んでいる地域で観光客を呼ぼうと温室と建て、ヤシの木や他の熱帯産フルーツの栽培を始めた者がいた。

そこで獲れるフルーツを、観光客に調理して出す。

地球でもありそうな商売だが、過疎地の村おこし、地方創生……日本でも大分前から色々とやっているが、商売なので少数の成功者と多数の失敗者という構図は同じだ。

資金繰りが悪化して倒産、なまじ地方自治体も金を出していたために税金で借金を補てんし、余計に苦境に陥るという話は珍しくない。

その温室農園と飲食店も、その地方の自治体が資本金を出して参加していた。

所謂第三セクターというやつだが、魔族の国でどういうのかは知らない。

結局補助金が戻ってくるどころか、膨らんだ借金を税金で補てんする羽目になり、地元住民は大激怒というわけだ。

「税金の無駄使いだと批判されたそうだ。放置されているヤシの木が多少なりとも金になれば損失が減る。今頃ライラが買い叩いているはずだ」

ライラさんは、本当に優秀な人だな。

魔王様をお世話するため複数のアルバイトで家計を維持していた生活とは一変、優秀な女性社長に華麗に転身を遂げたのだから。

「温室がほしいな」

「移築が難しかろう」

「それはあるか」

魔族は全員魔法使いなのだが、使える魔法の数が少なかったり、人間には極少数いる希少な魔法を使える者がいなかった。
俺の『瞬間移動』、レンブラント男爵の『移築』、『通信』系の魔法も駄目だ。
ただし、携帯魔導通信機の技術は最新鋭なので魔王様は頻繁にライラさんと連絡を取っていた。

魔王様の携帯魔導通信機はピンクが主体の女の子仕様で、藤子とルルがとても羨ましそうに見ていた。
携帯電話を使う魔王様……ちょっとシュールではあるか。

「農業は経営が難しい。価格の下ぶれに耐えられる大規模農家か大企業経営農業。あとは小回りが利く小規模農園のみだな。それでも潰れる農家は多い」

ライラさんは、倒産農家の放置された道具や肥料、種子、苗木なども買い取ってこちらに送ってくれるそうだ。
向こうでは債権者ですらゴミ扱いして放置された品なので、少しでも金になればいいとかなり集まっているらしい。

ライラさんは農業法人の社長なので、まさかアキツシマ島に輸出されているとは思っていないようだ。
苗木を植える作業をしている領民達は、支給された農機具の使いやすさに感動していた。

「旦那、ヤシの木ばかり植えているけど、これ役に立つのか？」

「ヤシの木は使い道が多いぞ」

ヤシは色々と種類があるが、この島に植わっていた種類はココヤ

シに似ていた。
未熟果からココナッツジュースが取れ、これは中央の金持ちがたまに飲んでいるそうだ。
成熟果の胚乳からココナッツオイルが搾れ、ココナッツとココナッツミルクも取れた。
外皮、殻、幹、葉も使い道がある。

魔族の国から購入した品種改良品は、実が多く成ったり、病気になり難くなったり、樹木が高く成長しないようになっているそうだ。
他にも、ナツメヤシ、アサイー、アブラヤシ、オウギヤシに似ている品種もあった。

果物、砂糖、油などが取れ、油は食用油としても、石鹸の材料にもなる。

せっかく暖かい気候なので、この地でヤシの木を大量に育て、将来は王国や帝国に輸出してもいい。

「種子からも苗を育て、大々的にヤシの木の大農園を作ればいいか」

「それはありがたい事です。銭も手に入りますからな」

旧島津領と旧宋領の領民達も、換金可能な商品作物に喜んでいた。
この島は長年分裂していた影響で、地方に銭が流れないで困っていた。
鉱物資源にも恵まれていない地域が多く、商品取引に物々交換や、地方貨扱いで石貨を用いていた地域もあったほどだ。
石貨は誰でも作ろうと思えば作れる。
そのせいで価値が不安定で受け取らない人も多く、物々交換だと手間がかかりすぎてしまう。

例え外国のものでも、安定した貨幣があり、それが交易で手に入るのなら彼らには利益となるのだ。

「ええいっ！　嘆かわしい！」

一人だけ、物凄く反発している人がいるが……。

「また君？　ボク達忙しいから、またあとで遊んであげるよ」

「このチビ！　俺様を寂しい人扱いするな！」

宋家の現当主（名ばかり）の義智が、またも文句を言ってきた。

ルイーゼがまたかと適当にあしらうと、それが我慢できない義智は反論し、二人はレベルの低い口喧嘩を始める。

「実際に寂しいじゃない。独立を目指すのはいいけど、支持者は？」

「いるに決まっている！　お前達に表立って反抗すると最悪処刑されるかもしれないからな！　心の中に仕舞って俺を密かに応援しているのだ！」

それとなく義智の父である代官に聞いてみた事があるのだが、宋領の領民の独立性は昔はヤシの木と実の交易以外では島に籠った生活だから出たものらしい。

島津家など大物領主の介入は、実入りを減らされる事への不安から。

今は、バウマイスター伯爵が開発と交易の促進を代官を通じて行っているので、誰も義智の反乱に参加していない。

というか、この義智の行動は反乱なのか？

ルイーゼに可哀想な子扱いされている時点で駄目だと思うんだが……。

「せっかく木を植えたんだから、魔法で吹き飛ばさないでよね。植えたばかりで、まだ根が張っていないんだから」

「するか！　この俺様は超絶天才魔法使いではあるが、スーパー天才格闘家でもあるのだ！　バウマイスター伯爵、勝負だ！」

こいつ、魔法では俺に勝てないからって、今度は格闘技で勝負かよ。

魔力を使わないとなると、俺には勝ち目がなさそうだな。

色々と残念な義智だが、こいつ典型的な器用貧乏で何でもそこそこなしてしまうのだと代官から聞いていたからだ。

「はいはい。じゃあ、ボクが相手をするから」

「ふっ、女には本気を出せないな」

「そんな事を言って。ボクに負けるのが怖いんでしょう？」

「そんな事があぁーーーるかぁーーー！」

ルイーゼの挑発に簡単に乗ってしまった義智が、勢いよくルイーゼに飛びかかった。

並の格闘家なら対抗できないスピードだが、ルイーゼなら余裕で対処可能なようだ。

「ほいっと」

ルイーゼは魔力を使わず、義智の勢いを利用し、受け流しつつ、素早く彼を掴んで海へとぶん投げた。

「のぁーーー！」

ルイーゼの投げ技にまったく対処できなかった義智は、大きな水柱と共に海へと沈んでいく。

「大丈夫か？　あいつ」

「あの程度で死にはしないよ」

確かに、義智は今まで何度か戦ったが、異常なまでにタフで頑丈だった。

怪我をしにくいようで、次の日にはピンピンとした状態でまた挑んでくるのだ。

「ぷはっ！　うぬぬ……」

義智は水面から顔を出し、悔しそうな表情を浮かべていた。

「また暇なら遊んであげるから」

「この俺様が、お子様に負けるなあんてぇーーー！」

「失礼な奴だな。ボクは、バウマイスター伯爵家夫人で子供もいるんだぞ」

「嘘つけ！」

「失礼な！　えいっ！」

「痛いじゃないか！」

義智にお子様扱いされたルイーゼは怒り、その辺にある石を彼に投げた。

それが彼の顔に命中し、一人勝手に怒っている。

義智は、宋家の独立を願う癖に敵の情報には疎かった。

一人で勝手に反抗しているので、こちらを調べる余裕がないのであろう。

それに、初めて会う人でルイーゼが既婚、子供ありだと思う人はいなかったから、義智の言い分もあながち間違いではないのだ。

「しつこい人ね」

こいつのしつこさは、ある意味伝説だ。

家に戻ると毎日代官である父親に叱られるそうだが……というか、バウマイスター伯爵家に反抗しているのに、その代官に任じられた実家に戻るのが凄い。

普通に食事などもするそうだ。

彼曰く『代官家に食事代を負担させ、バウマイスター伯爵家の財政にダメージを与えているらしい。

何とも、物は言いようである。

「物語だと、何度か負かしていると敵が観念してとか、そういうパターンよね」

諸葛孔明が破った孟獲を七度放ち、八度目に心服したお話みたいだな。

この世界にも、似たような話があるのか。

「でもよ、イーナ。アレに心服されて嬉しいか？」

「ないわね」

イーナとカチヤが酷い事を言うが、確かに義智に慕われてもなぁ……。

何かウザいし。

「畜生！　何で勝てないんだよぉーーー！」

海に浮かびながら一人叫ぶ義智だが、同情する者はいない。

素直に島の代官をやればいいのに、一人だけ無意味にバウマイスター伯爵家に逆らっているからだ。

両親と領民達ですら、意味がわからなくて首を傾げている状態なのだから。

「そんなに俺に勝ちたいのか？」

「当たり前だ！　俺様は超絶天才魔法使いだからな！」

アキツシマ島では中級魔法使いでも天才扱いだから、義智の言う事は間違っていない。

隣に島津四兄弟がいるのだが、彼らとは戦った事はないのであろうか？

俺はむしろ名前から、この四兄弟の方を警戒していたのだ。

実際に蓋を開けてみたら、彼らは父貴久に従って降り、代官や中央官僚、軍の武官として活躍している。

まさか、宋義智という戦国時代ではマイナーな人物が逆らうとは

思わなかった。

「いくら天才でも、修行はしないと勝てないんじゃないかな？」

「バウマイスター伯爵、お前は修行をしたのか？」

「したよ。厳しかったなぁ……」

成人するまで、ルイーゼと共に導師に鍛えられたものだ。

今も格闘術などはいまいちかもしれないが、それでも帝国内乱で師匠に殺されないで済んだりしたから、あの厳しい修行の日々も決して無駄ではなかったのだと思う。

「ふっ、敵に塩を送るとは、バウマイスター伯爵も甘ぁーーーいな！」

出た、興奮したり調子に乗ると出るいつもの口調が。

どうやら、上手く引っかかってくれたようだ。

「ならば俺もその人物に修行を受け、必ずやバウマイスター伯爵を倒ぉーーーすのだぁ！」

「でも、大丈夫かな？」

「どういう意味だ？　バウマイスター伯爵」

「いや、厳しい修行だからねぇ……。なあ？　ルイーゼ」

「そうだねぇ……。ボクも結構大変だったし」

「何を心配するかと思えば。この俺様なら、余裕で修行をこなせぇーーーるはずだ！」

「まあ、ご自由に」

「ふんっ！　あとで後悔するなよ！」

わざと修行は厳しいからやめた方がいいよと釘を差して正解だった。

義智は、俺にできた修行が自分にできないはずはないと、逆に余計に修行をやる気になったからだ。

ルイーゼに視線を送るとウインクしてきたので、俺の誘導策に気がついたようだ。

「では、その人物の下へ！」

「俺が送るよ」

「ふっ、甘いな貴様は」

これから大変だろうから、せめて最初くらいは送ってやるよ。

地獄への時間を短縮してやる意図もあったけど。

「なかなかイキのよさそうな若者である！」

「導師、彼が弟子になりたいそうです」

「大歓迎である！」

導師は、大津の郊外で魔法使い達を鍛えていた。

兼仲もおり、他の魔法使い達も魔法を放出するよりも、拳に魔力を纏わせて殴ったり、まあそういう系統の人が大半であった。
普通の魔法使いは、全員ブランタークさんの方に行っていた。

「おおっ！　いかにも強そうじゃないか！」

義智は、導師を見て大喜びであった。
相思相愛で俺も嬉しいさ。
なかなか修行は終わらないと思うけど、精々頑張ってくれ。

「では、強さを見るのである！」

「ふっ、この超絶天才魔法使い宋義智様なら、一か月もあれば余裕だな！　バウマイスター伯爵よりも早く修行のコツを掴んでスピードアップだ！」

「バウマイスター伯爵、これは思った以上にイキのいい若者である！」

「頑丈なので、好きに鍛えてやってください」

「任せるのである！」

導師が胸を叩いて了承すると、隣にいた兼仲の顔が真っ青になった。
彼も、人類の壁を超えていそうな導師に鍛えられ、三途の川の向こう側を何度か見ているからだ。

「（お館様……）」

「（導師に鍛えられている間は反抗しないからな。俺も忙しいから、あいつの相手をしていられないんだよ）」

「（はあ……）」

兼仲は今度大津に発足した警備隊の幹部なので、義智の事情をよく知っている。

そのため、導師の生贄に出す事を了承した。

自分が相手をするのも面倒だと思ったのであろう。

「（まあ、自分では義智よりも少し強いくらいなので、毎日突っかかられたら面倒ですね。わかりました）」

「じゃあ、義智は頑張れよ」

「ふんっ！　貴様は厳しい修行により更に限界を超えた俺様に破れるのだ！」

だといいがな。

その前に、導師に毎日ギタギタに鍛えられるがいい。

義智は中級魔法使いでこれ以上魔力は上がらないから、死ぬほど努力して工夫しないと俺に勝てない仕組みになっているわけだが。

「では、行くのである！」

「おうさ！」

導師と義智は、修行前にお互いの実力を確認するために戦い始めた。

「あれぇーーー！　ドカッ！　ベキッ！」

いきなり導師の魔力を篭めた拳に殴られ、地面にめり込んだ奴がいるが、彼の頑丈さは折り紙つきだ。

気にせずに俺は、中断した作業を手伝うために『瞬間移動』で旧宋領がある島へと戻るのであった。

「ただいま、ヴェル。どうだった？」

「導師は快く受け入れてくれたよ」

「バカ息子がすいません」

島に戻ってからルイーゼに詳細を報告していると、義智の父親が息子の不祥事を謝った。

本来なら、宋家はクビにされても文句を言えない不祥事だからだ。

だが、今の時点で義智はともかく父親の方は切れない。

彼は代官としてもよくやっているし、島の領民達にも慕われているからだ。

義智も、導師に鍛えられれば現実が見えてくるであろう。

不良息子を相撲部屋か寺へ修行に出したようなものだと、父親は納得していた。

「それよりも、あの島は『宋島』でいいな。正式な呼び名を考えないと、色々と面倒になる」

「その名前でよろしいのですか？」

「いいよ。実は我々の名前は、バウマイスター伯爵本領の地名づけの時にネタが尽きてな」

もう考えるのが面倒なので、そのままにしようと思う。

王国に地名などを報告しなければいけないので、急ぎ名もなかった旧宋領の島に命名しなければいけなかったからだ。

他の地名はそのままだ。

王国でも漢字は使うので、大津などをそのまま使っても問題ない。

というか、何とかブルクとかつけるのが面倒になった。

うるさい貴族達には『ヘルムート王国風の名前に変えると反発するかもしれない。せっかく大人しく支配を受け入れているので、このままでいいでしょう』と言い訳するつもりだ。

そんな命名よりも、早く開発を進めないと。

バウマイスター伯爵本領、南方諸島、今回発見した人が住めそうな島々、アキツシマ島を結ぶ魔導飛行船網を整備し、また移民を募らないといけない。

アキツシマ島は、もう少し開発の余地がある。

ナナがいた島への移住と冒険者としての滞在許可を与えて、今はバウマイスター伯爵本領に移住させない方がいいな。

ミズホへの移住を希望する者はいるのであろうか？

それを聞いておかなければいけない。

「いえ、嫌です」

「同じ民族でも、一万年も前に喧嘩別れしてしますからね。昔からミズホの連中は技術や財力を鼻にかける嫌な連中だったそうです」

そんな悪口を書いた本が残っているとはなぁ……。

今のところは人口で、経済力でも、技術力でも負けているので、移住すると下に見られるかもしれないと思っているのかもしれない。

『アキツシマの係累か？　ミズホへの移住はやめた方がいいな』

『向こうもそう言っていますね』

『大方、こちらを傲慢な一族とか言っているのであろう？　アキツシマの連中は、神官で宗教の権威を傘に威張っておっての。付き合うのはゴメン。別れて清々したという古文書が……』

同じ民族同士でも、色々とあるようだ。

お互いに移民はしないという事になり、アキツシマ島とその住民はすべてバウマイスター伯爵領に編入された。

「ヴェル、この魔道具はちょっと古びているけど、使い勝手は最高だね」

ライラさんが魔族の国で集めた中古魔道具が徐々に到着し、例の盗難防止のタグをつけて畑を耕していた。

イーナが試運転を行い、人間が耕すよりも遥かに早い速度で畑を耕していく。

やはり、魔族の国の耕運機の方が旧式中古でも性能はいいようだ。

この島でしか使えないので、バウマイスター伯爵本領の方は盗難対策の準備が整わないので死蔵されていた魔の森地下遺跡に眠って

いた魔道具が使用されるようになった。

耕運機、田植え機、刈り取り機、散水機などは、家臣が管理と簡単な整備を担当しつつ、農民に対し順番に貸し出す仕事を行う。

トラックや車は、バウマイスター伯爵家が運送会社を経営する事で盗難に備えた。

ライラさんが入手してくれた盗難防止タグは好評で、早速魔道具の盗難を試みた初級魔法使いが捕まった。

多分どこかの貴族に頼まれたのであろうとリーデリヒが言っていたが、この犯人が黒幕を喋っても、その程度では依頼した貴族を罰する事はできない。

その代わりに、その魔法使いはバウマイスター伯爵領で捕まったので、バウマイスター伯爵家の法で裁かれる。

その魔法使いがどこぞの貴族のお抱えでも、これはバウマイスター伯爵領内の事件なので不当逮捕とは言えないのだ。

彼はすべての持ち物を奪われ、毎日鉱山で鉱石を掘っている。

一定金額以上の鉱石を掘って納めないといけないが、初級魔法使いでも十年はかかるであろう。

この世界では、窃盗は意外と重い罪状であった。

「イーナ、上手いな」

「そう？　ヴィルマの方が器用じゃないかしら？」

「すすすーーい。これ一台で凄い仕事量」

ヴィルマは、魔族の国製の中古田植え機で稲を植えていた。

その操作は、今日が初めてとは思えない上手さだ。

「兄貴も欲しがるかな？」

「うーーーん、あそこは山ばかりだから魔道具が使えないかも」

カチヤの実家であるオイレンベルク家はトンネル騒動のあと、バウマイスター伯爵領側のリーグ大山脈沿いに移転した。

そこの広大な山の斜面で、マロイモの大量生産を始めたのだ。

カチヤは農作業に耕運機が使えないものかと思ったようだが、斜面で使うと倒れてしまうから危険であろう。

「マロイモ以外の畑で使うならいいと思う。地下遺跡の品の方を貸すようにローデリヒに言っておくよ」

「旦那は優しいな。だから大好きだぜ」

カチヤに面と向かってそう言われると、嬉しいのと同時に照れてしまうな。

「魔王様」

「何だ？」

「もっと欲しいな」

「あまり一度に大量に買い取ると、相場が急騰するからな。ライラには言っておく」

いまだに両国の間で交易交渉が結べていないが、実は勝手に交易

をしても法的には問題ない。
魔族の国では交易、貿易という概念が消えて久しく、実は勝手に交易をしてもそれを罰する法がなかった。
王国の方は、帝国との交易では色々と決まりがあった。
破ると貴族でも処罰されるが、実は魔族の国との交易に関する法はなかった。

それを決めるために交渉を開始し、まったくお互いが歩み寄らずに何も決まっていないのだが。
帝国も交渉に加わったが、残念ながらそれで交渉の速度は早まらなかった。
むしろ、余計に遅くなってしまったのだ。

即位したばかりのペーターからすれば、下手な交易条件を結び、それで議員や貴族達に攻撃されて耐えられるほどまだ政権基盤が盤石ではないからだ。
下手に国を開きすぎて魔族に侵略でもされたら、同じく帝国のダメージは大きい。
そのため、三者による実りのない話し合いが続いていた。
続いているだけで進んでいないけど……

「とはいえ、中小型の農業用魔道具は余りすぎて困っている状態だな」

小・中規模農業が減ったため、廃業した彼らのものが余っているらしい。
このアキツシマ島でも大規模な農業は難しく、ちょうどニーズに合っているというわけだ。

「とはいえ、バウマイスター伯爵領にはまだ導入できないけどね」

その理由は、王国のみならず、帝国の魔道具ギルドの焦りからだ。
間違いなく、魔族の国から魔道具が輸入されるようになれば、誰も魔道具ギルドから魔道具を買わなくなってしまうであろう。
その前に、車両、農業機械などはまだ研究状態にあるのだから。

「失業の危機か。気持ちはわかるなぁ……」

「決められた数量だけ輸入するとか、そういう条件になるのかな？」

「もしくは、自国の産業保護のために高い関税かぁ……」

モール達は無職期間が長かったため、魔道具ギルドに同情的であった。

「今は職があるからいいけど、やっぱり無職は辛い部分がないわけでもないからね」

魔族の無職は生活保護があるからいいけど、リンガイア大陸の無職は飢え死にの危険があるからなぁ……。
でも、俺に口を出す権限もないので仕方がない。

「入手できる限りは入手するぞ」

アキツシマ島が統一され、統治体制の構築と開発が順調に進んでいく。
俺は、ここで一旦陛下に報告をする事にした。
アキツシマ島の産品を持って王城に移動し、すぐに謁見の間に通される。

「おう、バウマイスター伯爵ではないか。色々と大変だったようだな」

「ええ」

謁見の間には、ルックナー財務卿もいた。

彼は、俺を見かけるとすぐに話しかけてくる。

「バウマイスター伯爵領の開発が進めば、もっと交易が増える。税収が増えて、財務卿であるワシとしては大歓迎だな」

「問題は異民族統治ですね」

「その辺は、バウマイスター伯爵に任せるよ」

だから、王国が直接支配しないでバウマイスター伯爵家に押しつけたのだろうからな。

王国は交易の利益だけ取り、あとは時が経てばアキツシマ島以南の探索でもするつもりもなのであろう。

「バウマイスター伯爵、島とはいえ征服成功とは大義である」

続けて、陛下からお褒めの言葉をいただいた。

王国政府や陛下からすれば、俺は辺境の異民族の領地を平定して王国の領地を増やした功労者という扱いになる。

アキツシマ島の産品を献上したが、これはオマケに等しい。

ミズホ風の……こういうとアキツシマ島の住民は怒るので、アキツシマ風と呼ぶ事になった……一部工芸品や茶器などが喜ばれた。

変わっていて、貴族がコレクションするのにいい品なのかもしれない。

多少ミズホ産よりも質は落ちるが、その分値段は安くなるし、一万年の歳月でミズホの品と多少の差異が出ている。
中級以下の貴族や、商人、富裕な平民層に需要があるかもしれない。
これら献上品のチョイスをしたのは、芸術にも造詣がある松永久秀あった。
陛下や貴族達からも好評を得たので、彼はこの分野でも才能があるというわけだ。

「我が国が将来南方に探索の手を広げられるよう、バウマイスター辺境伯が更に領地を発展させる事に期待しよう」

「えっ？　辺境伯ですか？」

俺は伯爵のはずだが……。

「今回の功績で昇爵させる事にした。今のお主は伯爵の力を超えておるからの」

人口はまだ及ばないが、領地の規模と発展性はブライヒレーダー辺境伯領を上回っている。
それなのに、伯爵のままではまずいというわけか……。

「階位も第四位に上げよう」

その場で昇爵の儀が行われ、俺は陛下からゴテゴテと装飾のついた宝剣と新しいマントも与えられた。
マントには金糸と銀糸で豪華な刺繍がされている。
儀礼用だと思うが、これを実際に着けて人前には出たくないな。
成金主義な人に見られそうだ。

「ブライヒレーダー辺境伯家、ブロワ辺境伯家、ホールミア辺境伯家もこれを所持しておる。見た目は豪華なので箔付けというわけだ」

報告と昇爵の儀が終わると、謁見は思いの他短時間で終了した。

やはり、今の王国で最大の懸案事項は魔族の国との交渉のようだ。

「安易に結んだ条約で王国が損をすれば、それは王国の支配力の低下に繋がります。慎重になって当然ですね」

謁見が終わると、俺は久しぶりに王都にあるブライヒレーダー辺境伯邸を訪ねた。

まずはブライヒレーダー辺境伯に昇爵した件を伝えたのだが、彼は既に知っていた。

それもそうだ。

南部で辺境伯が二人になるのだから、先に知らせておかないとブライヒレーダー辺境伯がヘソを曲げてしまうかもしれない。

「また絶妙というか、途中で帝国も交渉に参加しましたからね。私もツテがあって交渉の様子が耳に入ってきますが、全然交渉は進んでいませんね」

「魔族の政治家はどうなのです？」

「融通が利かない声が大きい者、あからさまに魔族の産品を大陸に売り込む事ばかり考えている者の代弁者。政治のプロが少なく、条件を擦り合わせる事すらできないで、魔族が一番性質が悪いかもしれませんね」

まあ、魔族の国は政権交代しないと無理か……。

「そっちは王国政府の領分です。私も手は出せないので放置です。バウマイスター伯爵……じゃなかった、辺境伯への昇爵は私への牽制です」

「政治力学ですねぇ……」

「理解が早くて助かります。まあ、そういう事です」

南部は今急速に発展している。

それに伴い、南部を統括するブライヒレーダー辺境伯の力も上がっている。

領地は増えていないが、バウマイスター伯爵領の開発利権とうなぎ登りに上昇している交易の利益、ブライヒレーダー辺境伯でも問題になっていたスラムの住民が殖民し、ブライヒブルクの拡大計画に伴う問題が消えた。

予算の余裕があるので、街道工事、魔導飛行船の発着港の整備、小規模な魔物の領域の開放と跡地の開発が進み、急速に力を増していた。

「王国からすれば、うちが大きくなりすぎると独立、反乱の可能性を考えます。帝国内乱も記憶に新しいですからね」

そこで俺を同等の爵位にしてしまい、ブライヒレーダー辺境伯家へのけん制に利用するというわけだ。

「バウマイスター辺境伯に南部貴族達の面倒を見ろなんて王国は言いませんよ。うちが担当した方が負担を与えられますしね」

「小領主混合領域ですか……」

「寄親なんて面倒なだけですよ。うちの持ち出しばかりです」

ブライヒレーダー辺境伯領と隣接している貴族領には、領地、水利、犯罪者の引き渡しなどで揉めている家も複数あるそうだ。

それでも寄子は寄子なので決定的に揉めるわけにはいかず、そこまで配慮しても『ブライヒレーダー辺境伯家は寄子に冷たい。寄親を変えようかな?』などと腹が立つ事を言う貴族もいると、ブライヒレーダー辺境伯が苦笑いしながら教えてくれた。

「結局、ブロワ辺境伯との紛争と同じく、寄子同士でいつも争っていますからね。寄親は私なので仲介に入りますけど、毎回同じ案件で揉めているケースが大半で、私が出した仲介案を『向こうばかり有利で贔屓だ!』と、怒る貴族もいます。それで、やはり言うんですよ。『他の貴族の寄親なろうかなって』」

「それって、可能なんですか?」

「可能ですけど、南部で孤立するだけでかえって不利ですね。本当にやる人はいませんよ」

寄親を変えると言って、ブライヒレーダー辺境伯から譲歩を引き出そうというわけか。

というか、ウザイ連中だな。

「向こうも生活がかかっているから必死なのはわかりますが、疲れますよ。辺境伯って。バウマイスター辺境伯の場合は寄子も少ないですし、あくまでもうちの牽制のためでしょうね」

南部に二人辺境伯がいて、うちはこれから王家の血が入っていく。

両者の帯同を代を経る毎に緩めるつもりなのか。

「このくらいはしても当然でしょうね。そうでなければ、平和が二百年以上も続きませんって」

その後は、南方諸島以南の島々やアキツシマ島についての話をした。

ブライヒレーダー辺境伯は、砂糖、ヤシの実、海産物、これから討伐を進める海竜の取引などに興味を持ったようだ。

「それにしても、遂にあの魔道具の数々を解禁しましたか。うちも欲しいですねぇ……」

それがあればブライヒレーダー辺境伯領でも開発が進むのにと、ブライヒレーダー辺境伯は残念そうな表情を浮かべる。

こちらとしても、地下遺跡で発掘した分だけではむしろ足りないくらいで他家に販売などできない状態だったのだ。

「かなりの量を魔道具ギルドが研究用で購入して行ったと聞きますが」

「事実ですね」

同じ物が作れるようになれば王国の利益になるからと、今まで色々と売ってきた。

金払いは悪くないので不満はないが、今までに何か成果が出た試しがないので困ってしまう。

「何も成果なしってのは凄いですね。彼らは何をしているのでしょうか？」

魔道具の研究は難しいので、一年や二年でそう簡単に成果が出るわけでもない。
開発研究というのは、莫大な予算と時間が必要だからだ。
俺はそれがわかるので、ブライヒレーダー辺境伯ほど魔道具ギルドに不信感は持っていなかった。
その点に限ってのみだけど。

「誰憚る事なく、交易交渉の妨害をしていると評判です」

「それは、失業の危機だからでしょう」

もし無条件で、魔族の国から魔道具は輸入されるようになれば……。
俺も、魔族の国の製品を購入するかな。
そんな未来を、自国の経済と産業の発展に止めを刺すからといって止めるのは、あながち間違いではなかった。
魔道具ギルドの魔法使いだけでなく、魔道具の重要部品以外を作る職人達や、他にも魔道具関連で食べている人は多い。
彼らの生活を奪うかもしれない自由貿易論を魔道具ギルドが防ごうとするのは、むしろ当たり前の行動なのだ。

「では、暫く状況は動きませんね」

大切な国家同士の交渉だ。
物語みたいに、すぐに交渉成立とはいかないのであろう。

「私も、明日には領地に戻りますしね。王都で疲れる付き合いや交渉に臨むよりも、領地で開発の指揮でも執っていた方がマシです。
景気がいいおかげで、少しは寄子達の争いも減っていますから」

「それはよかったですね」

などと話をしていたら、突然ブライヒレーダー辺境伯の家臣が報告したい事があると言って駆け込んできた。

「お館様、イスラーヴェル会長が急死したという報告が入りました」

「イスラーヴェル会長？」

俺はその名前に聞き覚えがなかった。

会長って事は、どこかの組織の長だよな？

「バウマイスター辺境伯、あなたがイスラーヴェル会長を知らないのはどうかと思いますけど……魔道具ギルドの会長ですよ」

「そういえば、そんな名前だったような……」

俺は魔道具ギルドと犬猿の仲である魔導ギルドに所属しているので、ちょっと小耳に挟んだくらいの名前を思い出せなかったのか。

「これは、また混乱しますね……」

魔族との交渉で色々と動いている魔道具ギルドの長が急死してしまった。

これが、これからの交渉にどういう影響を及ぼすのか？

「俺達は関係なくありませんか？」

「いや、辺境伯がそういうわけにはいきませんよ。魔道具ギルドは、

世間の人達が思っている以上に力があるのですから」

とはいえ、よく知らない人が亡くなったくらいだ。

どんな影響が出るのかは、俺にもよくわからなかった。

第百五十四話　ワタシノトモダチ　ヴェンデリン。

「イスラーヴェル会長が死んだ？」

「はい、どんな人ですか？」

「物凄い年寄りで、九十は超えていたはずだ。政治力はあったな。まあ、あの年ならいつ死んでもおかしくはないか……というか、どうして辺境伯様は知らねえんだよ」

「魔道具ギルドはこれまで色々と古代魔法文明時代の遺産を買い取りに来ましたけど、そんな偉い人が直接来るはずないじゃないですか」

「それもそうか。でもなぁ……一回くらい挨拶に来ればいいのに……」

「歴史ある組織だから、腰が重たいのでは？」

「あいつら、無駄にプライドが高いからなぁ……」

魔族との交易交渉において、魔道具の取り扱いを断固阻止していた魔道具ギルドの会長が急死した。

ブランタークさんにどんな人なのか聞いてみるが、九十を超えた爺さんだという。

「急死って……ただの老衰じゃないんですか？」

「そうとも言うな。でもよ、あそこの上は、魔導ギルドも真っ青な高齢者の集まりだぞ。世間では『共同墓地』って揶揄されている」

この世界には老人ホームなどないから、超高齢な老人の集まりイコールいつ埋葬してもおかしくない状態、つまり共同墓地という毒のある比喩表現となるわけだ。

「さすがに魔導ギルドは、魔法が使えないほど老いた奴は引退するからな」

ところが、魔道具ギルドは魔道具の生産において分業体制を取っている所が多い。

管理部門が爺さん婆さんだらけでも、下で実務を担当している連中は気にしない。

むしろ老後はそこに上がれると、不満を持つ者は少ないそうだ。

「そのせいかわからんが、ここ二百年以上魔道具は進歩してねえ」

「それ、本当なんですか？」

単純に技術開発が大変なのかもしれないし、俺にはよくわからないんだよなぁ……。

「少なくとも、技術が進歩していないのは事実だな。研究は真面目にやっているベッケンバウアーに言わせると、魔道具ギルドの連中

は老害だとさ」

常に需要が絶えない魔道具は、ある程度の生産量が維持できればそれだけで功績になってしまう。

すでに生産体制が完成しており、一から構築するよりも圧倒的に楽なので、さほどの難事でもないので上が問えるわけだ。

「会長に今さら魔道具を作れって言う人もいませんか」

「イスラーヴェル会長自身は、それでも魔道具の生産管理で功績のある人だからな」

彼のおかげで魔道具の生産量は従来の1．3倍になり、品質もまったく落とさなかった。

功績があり、政治力もあったので、長期政権を維持したわけだ。

その代わり、人員を生産力向上と品質維持に振り分けすぎて研究部門が手薄だという悪評もある。

ブランタークさんによると、この点をベッケンバウアー氏は批判しているのだそうだ。

「彼は、魔族が作る魔道具の流入を心配していたらしいからな」

それは確かに心配であろう。

下手をすると自分達が失業するだけでなく、この大陸で二度と魔道具が製造されず、魔族に独占されてしまう危険性があったのだから。

俺は汎用の魔道具なんて作れないから、魔族が作った高性能な品がもっと市場に出回ればいいと思ってしまう。

ヴェンデリン本人としてはそれでいいのであろうが、為政者バウマイスター辺境伯としては失格なんだろうな。

バウマイスター辺境伯領で魔道具の製造をしている人は……いたな……アキツシマ島に……彼らはリンガイア大陸よりも技術力が低く、魔道具を作れる者が少ない。

今は魔王様が持ち込んだ中古魔道具の維持、管理、簡単な修理に、壊れているガラクタも、部品取り用で購入した。

向こうでは粗大ごみ扱いで、処理するにも金がかかるからほぼ無料だ。

魔道具の仕組みを勉強するにはちょうどよかった。

魔道具職人が少ないから、それだけでも彼らは勉強しながら稼げてしまうんだよな。

勿論、あまり表沙汰にはできないけど。

「葬式に行かないと駄目だな」

「俺達がですか？」

「当たり前じゃねえか。伯爵様……じゃなかった。辺境伯様」

俺とブランタークさん、導師も魔導ギルドの所属なので、犬猿の仲である魔道具ギルド会長の葬儀に出ていいものか悩んでしまったが、俺はバウマイスター辺境伯、ブランタークさんはブライヒレーダー辺境伯のお供、導師は忘れてしまいそうになるが王宮筆頭魔導師である。

出席してもおかしくはないというか、出ないと問題になるわけだ。

「顔すら見た事がない人ですけどね。行きますよ」

そこは大人の対応が必要だよな。

「エリーゼ殿もだぞ」

エリーゼは俺の正妻だ。

こういう場合、夫婦で出ないとおかしな事になってしまう。

「わかりましたよ。ブランタークさんも奥さんと出席したらどうです？」

「残念だが、俺は陪臣だからな。お館様にお供する方だから、お供はいらないのさ。導師は葬式なんて嫌いだから、一人で来て終わりだろうけど」

奥さんも連れて来いと、彼に直接言えそうな人はいないか。

「わかりました。準備いたしますね」

王都で所用を終えて大津城に戻ると、エリーゼは葬儀への出席を了承してくれた。

『瞬間移動』があるからこその夫婦での出席であるが、たまには二人で行くのもいいであろう。

「帰りに、新しい店でケーキでも食べて帰ろうか？」

「はい。いいですね」

このくらいはいいであろう。

子供達の誕生に、魔族への対応、アキツシマ島の統一と統治で忙しかった。

短い時間だけどデートというわけだ。

エリーゼはあまり表に出ず、この島の領民達に無償で治療を続けてバウマイスター辺境伯家の支持を本物にした。

アキツシマ島の代官に任じられた涼子以上の治癒魔法使いという事で、バウマイスター辺境伯家の優位が確立されたのだから。

まったく戦わなかったが、エリーゼの功績はとても大きいのだ。

「あの、お館様」

「どうかしたか？　涼子」

「私もバウマイスター辺境伯家の代官として、葬儀に出席したいのですが……」

「でも、異教徒の葬式だぞ。大丈夫か？」

涼子は、ミズホと同じく神道に似た宗教のトップでもあった。

このところ大分衰退して影響力は落ちており、大津の神社に似た神殿ですら廃れている状態だったが、それでも神官長である。

教会の葬式に出ると、色々と問題があるかもしれないと俺は思ったのだ。

「その辺アキツシマの宗教は寛容ですから。お互いを尊重する事で問題ありません」

そこまで言われてしまうと、参加を認めないわけにはいかないか。

せっかくの二人きりのでデートがなくなってしまう事案なので、エリーゼには悪かったが。

「でしたら、普段のアキツシマ風の服装はやめた方がいいですね。葬儀には、教会の人が出ますから」

そこで異民族風の服装で目立つと、教会にも他宗派や他宗教に寛容ではない人もいるので、思わぬトラブルになってしまうかもしれない。

エリーゼは、リンガイア大陸風の喪服を着る事を条件とした。

「私、持っていないのですが……」

「それはお貸しします」

「ありがとうございます」

エリーゼは、本当に優しいよな。

やっぱり、あとでデートの時間を作ろうと思った。

子供が産まれても、こういう時間が必要だよな。

「それでしたら、私もお供します。涼子様のお世話が必要でしょうから」

「それでしたら、私が！」

「雪さんは副代官としてお忙しいでしょうから、私の方がいいですね」

涼子のお供として、松永久秀の娘である唯さんも立候補した。

二人きりでないのなら、ちゃんと形式を整えた方がいいか。

他の貴族達も多数葬儀に参列するはずだ。

アキツシマ島の代官と、最低限のお供は必要か。

「なら、俺も行くぞ」

「ルルも行きます」

五歳児コンビも立候補したが、こうなってくるとただ単に王都観光がしたいだけとも思わなくもなかった。

「服がないから無理だな」

「何とぉ！」

王都に連れて行ってもらえないとわかった藤子が、少しショックを受けていた。

「葬式だから、あまり大勢でゾロゾロと行ってもな。王都観光は、もう少し暇になったら計画するから。お土産も買ってくるよ」

「それは楽しみだな」

「わーーーい。ありがとうございます、ヴェンデリン様」

とはいえ、いくら賢くても子供は子供だ。

あとで埋め合わせはすると言ったらすぐに機嫌を直してくれた。

実は、これと合わせてアキツシマ島南の海岸で海水浴も計画しているから、それで納得してもらおう。

「では、葬儀は四人で行くか。他のみんなは、悪いけど仕事を頼む

ね」

「それはわかったけどよ」

「何か疑問でもあるのか？　エル」

「お前、辺境伯に陞爵したんだろう？　その話題が全然出てないじゃないか」

と、言われてもなぁ……。

領地持ち貴族の俺は年金が上がるわけでもないし、南部の統括はブライヒレーダー辺境伯のままで、俺は彼の寄子のまま。

何も変わっていないのが実情なのだ。

「実感はないと思いますが、伯爵から辺境伯への陞爵です。お祝いは盛大に開かないと……。そうですよね？　エリーゼ様」

「何もしないわけにはいきませんね」

「うーーーん」

よく知りもしない魔道具ギルド会長の葬儀はまだいいが、爵位と階位が上がっただけで大勢の客を呼んでお祝いパーティーか……。

面倒だなと思ったら、ローデリヒから魔導携帯通信機で連絡が入る。

『お館様、陞爵の件は聞きました。辺境伯ともなれば、お館様は押しも押される大貴族です。このローデリヒ、感動のあまり涙が止まりません！』

「おっ、おう……」

通信機越しだから確認したわけじゃないが、本当に泣いているみたいだな。

領地を与えられ伯爵になった時には、彼はここまで感動しなかったと思うのだが、あの時は責任が重くてそれどころではなかったのかもしれない。

『ご安心ください。拙者が、豪華なパーティーの準備をいたします。出席者の選定や招待も滞りなく行いますので、お館様はアキツシマ島の統治に傾注していただきたく願います』

パーティーの準備での負担はなかったが、出席自体が面倒そうだ。誰を呼んで、招待状を書いてとか、面倒な事をしないで済んだのはいいか。

そんな暇があったら、魔法で開発してろって事なのだろうけど。

「パーティーかぁ……」

「あの、お館様」

「何かな？」

涼子は、何か聞きたい事があるようだ。

「ローデリヒ様というお方は、ミズホの血を引いておられるのですか？」

「いや、そんな事はないと思うよ」

ローデリヒは、生粋の王国人だと思う。
西洋人風で、髪の色も緑だから。

「私、自分を拙者と仰る方、昔のご本以外で初めて聞きました」

「あいつ、ちょっと変わっているから……」

涼子によると、今のアキツシマ島でも自分を『拙者』という人はいなくなって久しいらしい。
俺は、彼は有能だけどちょっと変人だからと説明しておくのであった。

「似合うな。涼子は」

「ありがとうございます。エリーゼ様が貸してくださったおかげです」

魔道具ギルド会長の葬儀に出席するため、俺は普段のローブ姿のままであったが、エリーゼ、涼子、唯の三名は喪服に着替えていた。
涼子は、エリーゼの予備の喪服を少しサイズ直しをして……主に胸の部分である。
唯は、リサの喪服をほとんど手直しなしで着ていた。
彼女は思ったよりも着痩せする性質のようだ。

「綺麗なご婦人は、喪服がよく似合う」

「ブランタークさん、美人は何を着ても似合いますよ」

「そりゃあそうだ。イーナは出席しないのか？」

「やる事がありますし、ヴェルとブランタークさんって、あきらかに招かれざる客じゃないですか？」

「向こうもバカじゃないから、社交辞令に徹すると思うけどな」

魔導ギルドと魔道具ギルドは、本当に仲が悪い。
それでも、お互いに大人なのでトップの葬式くらいには出席する。
気を使って安くない香典まで包んでいるのだから、せめてちょっと嫌味や皮肉を言うくらいで済ませてほしいものだ。

「ボク、行かないでよかった」

「ヴェル様、あとで王都にみんなで遊びに行く」

ルイーゼは葬儀に参列しないで済んで安堵し、ヴィルマは別の機会に王都に連れて行ってほしいと強請った。

「そうですわね。私も魔道具関連はさっぱりですから、魔導ギルドの所属ですし。リサさんもですわよね？」

「魔道具作りは、魔法使いの中でも特殊な技能ですから。私もさっぱりわかりません」

「あたいも、魔導ギルドの所属だからなぁ……バウマイスター辺境伯家で、魔道具ギルドに所属している奴はないじゃないか」

確かにそう言われてみると、カタリーナ、リサ、カチヤも魔導ギルドの所属だ。
俺も含めて、魔道具ギルドに所属している者はいない。

「それは凄いの。妾など、どちらにも所属しておらぬぞ」

「所属しないでも、何も困らないから」

「まあ、妾のような面倒な立場の人間に勧誘などせぬよな」

元フィリップ公爵で、俺の非公式の愛人。
確かに、俺が魔導ギルドのトップでも勧誘しないと思う。

「ヴェンデリン、妾はゾーリンテのケーキが土産にほしいの」

「はいはい。買って来ますよ」

俺達は、奥さん達の見送りを受けてから王都へと『瞬間移動』で飛んだ。
葬儀会場は事前に教会本部と聞いていたので、場所がわからなくて迷う心配もない。
少し離れた場所に飛び、少し歩くと教会本部の建物が見えてくる。

「豪華ですね」

涼子は、教会本部の豪華さに驚きを隠せなかった。
分裂していたアキツシマ島では逆に宗教の力が弱まっていたので、修繕もされず放置されていた社を改修している最中なのだから。

「教会が豪勢な事はあまり威張れないのですが」

真面目なエリーゼからすれば、必要以上に豪華な教会に違和感を覚えているのかもしれない。
やはりホーエンハイム枢機卿の言うとおり、彼女が教会の中枢に入るのは難しいようだ。

「それでは行きましょうか」

受付で香典を渡してから会場に入ると、既にブランタークさんと導師がいた。
導師は葬儀の準備のために前日王都の屋敷に戻っており、ブランタークさんも昨日所用があるとかで王都のブライヒレーダー辺境伯邸へと魔法で送っていたのだ。

「まあ、享年九十六だ。死因は老衰。こういう葬式の方がいいな」

下手に若い人や、ましてや子供の葬儀だと、気分的に落ち込んでしまう。
ここまで老齢なら大往生なので、参列者達も悲しいという事もないであろう。

「むしろ、下の人間が喜んでいるのである」

「「「「「導師っ！　シィーーー！」」」」」

俺達は一斉に導師の口を塞いだ。
確かに、参列している魔道具ギルドの幹部達は亡くなった会長とそう年が違わないので、自分が死ぬ前に次の会長になれるチャンスがきてよかったと思っているはずだ。
あまりに老齢なので、ここで倒れて死ぬかもとか不謹慎な事を考

えないでもないが、導師はＴＰＯを弁えてほしいと思う。

きっと、この爺さん連中が魔族との交渉で王国に圧力をかけていたので、陛下の親友である導師からすれば好意を抱けないのは当然か。

「またあの爺さん達の中から会長を？」

「そうだな、幹部なんだから」

どう見ても、魔道具ギルドの幹部連中に八十以下の人はいないように見える。

当然彼らも魔法使いなのだが、既に現役の魔道具職人としては引退していた。

組織の管理ならば、老人でも問題ない。

むしろ、老練な経営で魔道具ギルドを維持しているというわけだ。

「どうせ、誰がなっても同じだろう」

ブランタークさんは、次の魔道具ギルド会長になる人にまったく興味がないらしい。

誰がなっても、このまま王国に魔族の魔道具輸入阻止運動を水面下で続けるものと思われる。

なまじ財力があるので、彼らの影響力は絶大であった。

葬儀に参列している他の貴族達も、そそくさと香典を置き、ちょっと棺の前でお祈りして、やはり辺境伯になった俺に声をかけてきた。

「短期間のうちに辺境伯への陞爵とは凄いですな。見つけた島を征服して新たな領地としたとか」

「これは、ブライヒレーダー辺境伯をも上回る南部一の実力者となる日も近いですな」

「いえ、若年の私はブライヒレーダー辺境伯殿に助けられる事が多く、とても頼りにしております」

人が出世したら、もう足を引っ張り始めたか。

俺とブライヒレーダー辺境伯との仲を割き、それを自分の利益にしようとしているのであろう。

この葬儀には多くの貴族が集まり、半ば公式の場のようなものだ。

ここで、俺はブライヒレーダー辺境伯を頼りにしていると堂々と公言した。

そう言っておかないと、また余計な事を言う貴族が出てきて面倒だからだ。

実際に、彼の助けがないと大変な事になるし。

「（エリーゼ、あいつ誰？）」

「（はあ……伯爵様じゃなかった、辺境伯様はいい加減、貴族の名前を覚えろよ）」

「（だから、多すぎですって）」

ブランタークさんはそう言うけど、ローデリヒは魔法で開発さえしていれば何も言わないからなぁ。

中央の主だった貴族はエリーゼが知っている事が多いし、紋章官もいるから問題あるまい。

「（ブーロ子爵ですね。プラッテ伯爵と縁戚関係にあります）」

「（納得したよ）」

俺がわざと、プラッテ伯爵のバカ息子だけを犠牲にリンガイア返還交渉を成立させた事に気がつかないほど、彼はバカではなかった。

公式の場で俺を怒れない彼は、密かに俺への嫌がらせを始めたのであろう。

「（このくらいなら、問題ないのか？）」

「（あなた、お気をつけください）」

油断大敵というわけか。

あとでローデリヒにも報告しておこう。

「ホーエンハイム枢機卿も葬儀で忙しそうだし、ちょっと挨拶してから帰るか……」

これで義理は果たしたので、もう帰る事にしよう。

葬儀会場にいたホーエンハイム枢機卿に挨拶をすると、彼は葬儀を主催する立場でとても忙しそうであった。

「おおっ、バウマイスター伯爵じゃなかった辺境伯だったな。昇爵おめでとう、婿殿」

「ありがとうございます」

「ゆっくりと話をしたいところだが、ご覧の有様でな。後日、フリードリヒの顔を見せてくれないか」

ホーエンハイム枢機卿は、教会側の葬儀責任者としてとても忙しそうであった。

「わかりました。それにしても豪勢な葬儀ですね」

「魔道具ギルドは金があるからな」

それも、魔族の国製の魔道具が輸入されるようになると、大幅に力を落とす可能性もあるんだよな。

反発して当然といえば当然か。

「色々と事情はあるようだが、教会としては魔導具ギルドに口を出す権限もないからな」

俺には、教会が下手に彼らを刺激して敵に回すのが嫌だと言っている風にしか受け取れなかった。

「辺境伯になった祝いのパーティーに来ていただければ、フリードリヒにも会えますよ」

「それを楽しみに、忙しい仕事をこなすか。エリーゼも元気そうでよかった」

「はい、毎日色々とありますけど」

「それは婿殿だから仕方がないな。体に気をつけてな」

ホーエンハイム枢機卿とエリーゼの話も終わり、俺達は葬儀会場をあとにした。

これ以上長居しても、俺にすり寄ろうとする貴族達に話しかけられるだけで面倒だ。

「涼子さん、教会の葬儀はいかがでしたか？」

「とても豪華でしたね。三好長慶公の葬儀でも、ここまで豪勢ではなかったそうです」

島の中央部を押さえた天下人と、リンガイア大陸の半分を支配する国のギルドのボス。

時に、後者の方が金もあったというわけか。

「どうせ葬儀が豪華でも質素でも、死ねばわからないのである！」

「伯父様、その発言はさすがに……」

エリーゼが、導師に苦言を呈した。

それはそうなんだが、できれば心の声にしてほしい。

まだ会場の外で、若い神官達が客の応対で傍にいるのだから。

「お館様、これからいかがなされますか？」

「そうだなぁ……予定よりも早く終わったから、王都をブラブラして、みんなにお土産を買って帰ろう」

「それがよろしいかと」

唯さんにそう言われると、心からそれでいいように思えてくるから不思議だな。

この人、梟雄と同姓同名の人の娘で、まだ要注意の人なんだけど。

「あなた。せっかくですので、これからも入り用になるかもしれませんので、涼子さんと唯さんの服を購入するのはどうでしょうか？」

「それがいいか」

涼子さんは、名目上だけとはいえアキツシマ島全体の代官である。バウマイスター辺境伯領本領と交流する機会も増えるので、リンガイア大陸風の洋服も必要であろう。

「唯の分もだな」

「お館様、涼子様を最優先で、私は雪さんの次でいいですよ」

唯さんは自分の分を遠慮し、副代官である雪を優先してほしいと言った。

こういう配慮ができるお姉さんってとてもいいと思ってしまう。

「雪の分も準備するけど、今日は唯が王都にいるし、涼子と付き添う機会が多いから必要だろう」

「私は、涼子様の侍女のような扱いですから」

「そういうわけにはいかないよ」

唯の父親松永久秀は、アキツシマ島でもトップレベルの魔法使いにして、故三好長慶に重用されていた武人にして、文官にして、教養人でもある。

彼の娘を侍女扱いでは、後の島の統治に悪影響が出るかもしれない。

「雪の仕事を手伝ってもいるんだ。遠慮しないでくれ」

「お館様のご厚意に甘えさせていただきます。お館様は、懐の大きな男性なのですね」

「そうかな？」

綺麗な女性に褒められて嬉しくない男はいない。

例えそれが、彼女の父親の思惑どおりでもだ。

「最初は、公の場で着る服を。次はキャンディーさんの店だな」

涼子と唯、キャンディーさんを見て驚くかもしれない。

アキツシマ島にはいそうにないタイプだからなぁ……。

「やあ、ヴェンデリンじゃないか」

涼子と唯の服を見に行こうとしたところで、突然声をかけられた。

振り向くと声の主は何とペーターであり、まさか王都にいるとは思わなかったので、俺もエリーゼも驚いてしまう。

「エリーゼ殿、お子さんが産まれたそうでおめでとう」

「ありがとうございます」

「ヴェンデリンも、辺境伯に昇爵か。おめでたいかな？」

さすがは、ペーター。

俺が別に昇爵を喜んでいない事に気がついている。

それにしても、まさか王都にいるとは思わなかった。
というか、両国の歴史上において初めてアーカート神聖帝国の皇帝が王国を来訪したのだ。
大騒ぎになるはずなのに、なぜか俺は何も聞いていなかった。

「魔族との交渉に出遅れたから、こっちも交渉団を送り込んだから余計に状況が混乱したでしょう？　公式には謝れないけど、極秘裏に個人的にってやつさ。僕の方が若いから、ヘルムート三十七世陛下に配慮したってわけ」

ペーターは極秘裏に一部口が堅い家臣のみを連れて王国を来訪、陛下と魔族に対する対応を協議したそうだ。
そして、魔族の国が信奉する民主主義の混乱に巻き込まれたわけだ。

「うちも王国と似たような状況でね……ここでは何だから、ちょっとお茶でも飲みながらどう？」

「おい、ペーター。なぜ涼子の手を取りながら言うんだ？」

こいつは為政者としての才能を十分に持つのに、普段は相変わらずアホみたいな事ばかりしている。
きっと、こういう時だけ素の自分に戻ってストレスを解消しているのであろう。
ならば俺は、こういう時だけはペーターを皇帝として扱わない方がいい。

「そこに綺麗な女性がいたからだね。情報通り、ミズホ人と祖先を同じくする人達なんだね。アキツシマ島の住民は」

「よく調べているな」

俺は、ペーターのというか帝国の諜報力に感心した。

「それにしても、ヴェンデリンも奥さんが増えて大変だね」

「まだ奥さんじゃない」

将来はと聞かれると、多分そうだ。

「当たり前だね。ヴェンデリンがその島をちゃんと統治するためには、そちらのお嬢さん方を娶り、産まれた子供を代官にしないと」

そうだな。

ペーターの言うとおりだ。

ここで嫌そうな顔を二人に見せれば失礼になるし、雪も合わせて三人とも綺麗で優しい女性だ。

ここは光栄と思わないとな。

やっぱり、日本人風の女性はいいな。

俺が元日本人だから。

「そういうペーターは、全然そういう噂を聞かないな」

「先に、どこかお店に入ろうか？」

俺達は久しぶりにペーターと再会し、彼と近況報告も兼ねて一緒にお茶を飲む事にするのであった。

「お久しぶりです。バウマイスター辺境伯様」

「陛下共々、辺境伯への陞爵を心からお祝いします」

ペーターは適当な喫茶店に入ったように見えたが、その店内は既に貸し切り状態であった。

昔のように少数の護衛で動くわけにいかず、店内には一般客に化けた多くの護衛達が席に座りお茶を飲みながら見張りをしており、店外にも多くの護衛がいるようだ。

彼の傍には、近衛隊長に就任した剣豪マルクと、正式に筆頭魔導師に就任したエメラの姿があった。

彼女は、心なしかふくよかになったような気がするな。

「エメラさん、おめでとうございます」

「わかりますか？」

「ええ」

「エリーゼ、何が？」

「エメラさんは妊娠しているのです」

それで、少しふくよかになっていたのか。

でも、まだお腹はそう目立ってしないような……。

魔法使いはローブを着るからわかりにくくするのは簡単なのだけど。

「ペーター、エメラさんと式を挙げたのか？」

「いや、籍すら入れていない。これからもその予定はない」

子供ができたのに、側室にもしないのか。

ちょっと冷たくないか？

「僕は、エメラ以外の女性とそういう事をするつもりはないんだ」

「気持ちはわかるが……」

一国の皇帝が、実質上の妻が一人だけで済ませられるものなのだろうか？

俺もそれができたら……俺はそうする必要がないか。

「大丈夫だよ。帝国の皇帝は世襲制じゃないから。次は、他の選帝侯家の子供の誰かが皇帝になるでしょう。皇家はうるさいのがほとんどいなくなってね。どこからか現れた僕の子供が皇家を継げばいいのさ」

エメラさんが産んだ子供は認知するわけだ。

そして皇家の跡継ぎにする。

エメラさんを正式に妻にしないのは、最悪彼女の暗殺を目論まれるからか？

娘をペーターの妻に押し込み、産まれた子供が皇家の跡取りになるのを期待している貴族連中からすれば、エメラさんは邪魔だよな。

「籍を入れなければ、エメラは優秀な筆頭魔導師だ。バカ共も手を出しにくい。それに……」

「それに？」

「皇家ってのは、代々の婚姻政策でうるさい外戚が増えた。クソ親父は能力にも問題があったけど、何代前に妻を出したからと口を出してくる外戚連中に配慮しすぎてね」

一度ニュルンベルク公爵のクーデターで軟禁されて、ペーターの父親は大幅に力を落とした。

再び皇帝の座に無理矢理ついた時、彼が頼りにしたのはそういう連中か。

「クソ親父は縁戚達で与党を組織しようとしたら、逆に力を落としたってわけさ。僕がいなくても、テレーゼ殿の一派に負けていただろうね」

ペーターは父親の死後、今度はテレーゼの兄達と組もうとしたこういう連中を追い落とし、処罰した。

おかげで皇家は、ペーターが独裁権を発揮できるわけだ。

元々皇家は、帝国の予算を捻り出す官僚組織としての面がある。

皇家で力があるペーターは、皇帝としても力があるというわけだ。

処罰で皇家が組織していた官僚層にもダメージがあったが、ペーターは昔から従えてた商人、平民、貴族の次男坊以下の有能な連中の抜擢、組織の下位者で有能な者を出世させて皇家を活性化させた。

彼はエメラとのみ添い遂げようという目標と、皇家の複雑怪奇な縁戚関係をリセットして強固な皇家を作り出したのだ。

私的な欲望と、公的な欲望を同時に達成してしまう。

俺にはとても真似できなかった。

「そりゃあ、テレーゼは負けるわ」

「彼女は、あのニュルンベルク公爵も認めていた女傑だけどね。フィリップ公爵家当主の枠組みの中でしか動けない欠点があった。内乱がなければそれで十分なんだけど」

「俺には真似できないよ」

そこまでして、ペーターはエメラさんだけを愛するわけか。

皇帝としてはすぎた我侭……その選択に伴うデメリットは、自分の力で何とかしたわけだ。

こいつは、本当に大した男だ。

「エメラには悪いのだけど……」

「私は気にしていません」

「そこは素直に『ペーターは優しいから好きっ！』とか言ってよ」

「嫌です。恥ずかしいので」

そう言って、少し顔を赤らめるエメラさん。

前とは違って、ペーターの言うとおりにデレたな。

「時間は短いけど、プライベートな時間は夫婦そのものだよ。エメラは料理とか作ってくれるから」

二人は実質夫婦になったわけか。

それはよかった。

「極秘来訪も、新婚旅行も兼ねてだからね。外国ならうるさい連中もいない。口実もあった」

「魔族か……」

「交渉が進まないのは仕方がないね。今までお互いを認知していなかったのだから、交易をしなくても何も困らないわけだし」

「それでも、人間には欲がある」

交易で儲けようとする連中は、貴族や政府に圧力をかけてくる。逆に、交易で損をしそうな連中もそうだ。

「帝国も、王国と一緒なのさ。魔道具ギルドの横やりが凄くてね。帝国の魔道具ギルドは、魔導ギルドの別部門みたいな存在だけど、逆に組織が一緒だから魔導ギルドも反発している。内乱で世話になったし、犠牲も多くて組織の再建に奔走しているからさ」

内乱で、帝国の魔法使いは大勢討ち死にした。

特にニュルンベルク公爵は、在野の魔法使いも硬軟織り交ぜて勧誘し従軍させていたため、俺達に殺されて多くの犠牲を出していたのだ。

「魔道具を作れる魔法使いは前線に出なかったからね。相対的に魔道具ギルドの力が上になっちゃったんだよ」

新たな魔法使いの探索と育成では、魔道具ギルドが稼ぐ資金を当てにしないといけない。

魔族と交易が始まって、もし魔道具ギルドが作った魔道具が売れなくなったら。

王国の魔道具ギルドと同じく、死活問題だろうな。

「帝国も王国と同じか」

「ミズホ公爵もだよ。あそこは、今までリンガイア大陸一の技術力を持っていたんだ」

それが、魔族のせいで一番じゃなくなった。

技術力があるから少し高くても売れたミズホ製の魔導具は、この瞬間にとても中途半端な品になったというわけだ。

「そんなわけで、この交渉は長引くよ。交易量の制限、関税の導入まで行くのに何年かかるかなぁ？」

それはそうだ。

物語でもあるまいし、突然一夜で双方が納得する条約なんて不可能だ。

日本やアメリカだって、ＴＰＰの交渉を何年もやっているのだから。

暫く待つしかないよな。

「じゃあ、これで難しい話は終わりだね。ヴェンデリン、どこか遊びに連れて行って。バウマイスター辺境伯領の南の海とかがいいな。帝国は寒いからねぇ。南国っていいよね」

「それはいいんだが……」

俺は、思わずエメラさんを見てしまう。

妊婦に『瞬間移動』はよくないからなぁ……。

となると魔導飛行船になるわけだが、今からだと南の海に到着す

るのに三日はかかってしまう。
日程は大丈夫なのかと心配してしまったのだ。

「これがあるから大丈夫だよ。エメラ、ヴェンデリンに見せてあげて」

「はい。これです」

そう言ってエメラが懐から取り出したのは、明らかに古代魔法文明時代の魔道具であった。
十字型のアクセサリーに、色とりどりの小さな魔晶石、よくわからない微細な魔法陣や文字がビッシリと書かれている。

「魔道具ですよね？　でも、あまり魔力を感じません」

十字についている魔晶石が小さいため、エリーゼは大した効果がある魔道具には見えないようだ。
何かを維持するような、ちょっと特殊な魔道具ではないかと俺は思った。

「これを持っていると、何かを防ぐ、状態を維持する魔道具か？」

「さすがは、ブランターク殿。帝国では『振動抑制装置』という名で呼ばれている。旧ニュルンベルク公爵領で最近発掘されたんだ。効果は『瞬間移動』の悪影響から妊婦を守るだね。昔は、人の移動がもっと活発だったようだね」

妊婦が移動系の魔法陣や『瞬間移動』を使うと、流産や奇形のリスクが増す。
この魔道具は、それを防ぐ役目があるようだ。

「便利といえば便利か」

需要はないわけではないが、極端に少ないと思う。

移動系の魔法陣は研究途上で、『瞬間移動』を使える魔法使いは少ない。

女性、それも妊婦を移動させる機会はほとんどないからだ。

「今回は役に立ったけどね。極秘来訪だから、船を仕立てるわけにいかなかったのさ」

「なるほど。では、陛下の許可を取ってご案内いたしましょう。明日にでも」

「楽しみだね、エメラ」

「はい」

その日はみんなで夕食を一緒に取り、その間に王都バウマイスター辺境伯邸に詰めている家臣が陛下に聞きに行ってくれた。

王都の屋敷とは、俺が王都在住時に購入したものである。

ところがバウマイスター男爵の頃に入手した屋敷なので、そろそろ大きな屋敷に買い替える必要がありそうだ。

実はキャパ的には何の問題もないのだが、辺境伯はあんな小さなお屋敷では外聞がよくないらしい。

これもすぐに買い直さないといけないが、リネンハイムに要相談だな。

「お館様、許可が出ました」

勝手にペーター一行を接待すると、帝国の皇帝とバウマイスター辺境伯の間で密談が……とか言い始める貴族が出ると思うので、その筆頭は確実にプラッテ伯爵であろう。

彼はある意味、今バウマイスター辺境伯家で注目の男であった。

俺は、彼の息子が他国のブタ箱に入れられている最大の要因だからだ。

「同行者がいるそうですが」

「そのくらいなら」

多少人が増えても、『瞬間移動』でどうとでもなる。

誰か王国中枢に近い人の監視があった方が、ペーターと俺達も痛くもない腹を探られないで済むというわけだ。

「それで誰が来るんだ？」

「それがわからないのです」

王城から戻ってきた家臣も、誰が同行するのか聞けなかったようだ。

申し訳なさそうな表情をしている。

「誰か王族か、暇そうな大臣あたりであろう」

「導師、今の王国に暇な大臣なんていませんよ……」

本来、一番暇なはずの外務卿ですら大忙しいのだから。
他の閣僚達も、もし魔族の国から様々な品が輸入されたら蒙るであろう様々な影響に対応しないといけない。
いくら戦争がなくても、閣僚というのは忙しい存在なのだ。

「明日になればわかるのである！」

そして翌朝。
ペーター達はバウマイスター辺境伯邸に泊まり、その庭から南の海へと『瞬間移動』で飛ぶ事になった。
場所は、ヴィルマと海産物を獲ったあの砂浜の近くだ。
可能な限りの人達も参加して、みんなで海で泳いだり、釣りや簡単な漁をしたり、バーベキューなどをする予定になっている。

王城から監視に来る予定の人達を待っていると、時間より少し前にその人物が姿を現した。

「えっ？　王太子殿下？」

「バウマイスター辺境伯、昇爵おめでとう。私も色々と忙しい身なのだが、今日はアーカート神聖帝国の皇帝陛下も参加する重要な席でもある。私が直接出席した方がいいという事になってね」

ペーターの格を考えて、陛下は無理だが、王太子殿下が出席したというわけだ。

「（バウマイスター辺境伯、殿下はとても楽しみにしていたようである）」

導師が小声で教えてくれたが、何しろ目立たない殿下の事だ。

多分、このバカンスに参加してもあまり問題はないはず。
むしろ、誰が見てもわかるほど嬉しそうな顔をしていた。

それほど喜んでもらえるのなら光栄だが、それを指摘してしまうと問題がありそうな……。
ペーターも知っているとは思うが、王太子殿下の存在感がないのを彼の前で堂々と公表してもいい事はないか……。

「殿下、お忙しいなか本日はありがとうございます」

「気にするな。私とバウマイスター辺境伯は、これから親戚同士になるのだから」

殿下の息子には俺の娘アンナが嫁ぐし、フルードリヒには殿下の娘が嫁ぐ。
二重の婚姻で、俺と殿下は深い繋がりとなったわけだ。

「ヴェンデリン、君も段々と苦労が増えていくね。でも、僕とヴェンデリンはそういう血縁の関係よりも深い同じ戦場で苦労した戦友であり、親友同士だものね。プライベートな時間では、身分なんて関係ないさ」

おい、ペーター。
いきなり殿下を挑発するなよ。
殿下の顔色が一瞬で変わったぞ。

「ペーター殿、私にとってもヴェンデリンは大切な友人であるのだよ」

いきなり殿下からそう言われたが、友人なのか？

そこまで一緒に遊んだり会った事も少ないし、知人よりは濃い関係か？
将来は親戚になるのだし。

「僕にとってもそうさ。ヴェンデリンが帝国貴族だったらと思うよ。気軽に遊べる機会も増えるし」

「それは残念でしたね。私はこれから子供達の事もあります。親が決めた許嫁同士でありますが、なるべく交友を深めてから結婚させたい。もう少し大きくなったら、定期的に一緒に遊ばせようと思います」

これは、『パパ友』という奴か？
ママ友って前世でよく聞いたけどな。
それにしても、殿下は子供達を定期的に会わせようと計画していたのか。
あとでローデリヒに相談しないと。
俺達が王城に出向く時はいいが、逆の時には警備の問題もある。

「ヴェンデリン、こういう席では私の事もヴァルドと呼んでくれて構わない。何しろ、我らは友人同士なのだからね」

ペーターとヴァルド殿下、二人とも笑顔であったが視線で火花を散らしていた。

「（バウマイスター辺境伯、人気であるな）」

「（そんな人事みたいに……）」

「（人事なのは事実である！）」

「（言い切った！）」

導師が俺を小声でからかってくる。

どっちが俺の真の親友かと、くだらない争いを水面下で始める二人。

自慢じゃないが、十二まで友達がゼロでボッチだった俺を取り合って楽しいのであろうか？

「私が王に即位した暁には、ヴェンデリンが王宮筆頭魔導師として私を支えてくれる予定だ。父もアームストロング導師と親友同士だからね。親子で似るものだね」

「僕とヴェンデリンは、所属する国とか、身分とか、仕事とか関係なく親友同士だからね。僕みたいな身分だと、そういう友人は貴重なのさ」

「私もそうだよ。ペーター殿」

「僕もそうさ。ヴァルド殿下」

二人はますます火花を散らせ、俺は今日これからどうなるのか、大きな不安を抱いてしまうのであった。

「ペーター殿、帝国内乱の際にはバウマイスター辺境伯と共に戦っ

て戦友だそうだが、彼は渡さない。彼は私の親戚となり、親友にもなるのだ」

ヘルムート王国王太子にして、次期国王であるこの私ヴァルドは、どういうわけか存在感が薄かった。

父は私が次の王に相応しい能力があると認めてくれている。

弟も同じで、彼は後継者争いを避け、既にメッテルニヒ公爵家に婿入りしていた。

メッテルニヒ公爵として、私を支えてくれるそうだ。

妻も美しく気立てのいい女性だし、可愛い息子と娘にも恵まれた。

幸せなはずなのに、私はある事実に気がついてしまった。

それは、私には友達がいないのだという事実に。

私は王太子なので、知人は沢山いる。

目立たないとはいえ、どこかに出かけるのにお供くらいはつく。

では、彼らは友達かと言われればそうではない。

父にはアームストロング導師がいるが、私にはそういう存在がいないのだ。

ならば、私は友達を探そうと決意した。

候補はバウマイスター伯爵であり、その理由は私と同じような匂いがするから。

だが、彼には家臣に親友がいてとても羨ましかった。

更に、帝国内乱で新皇帝となったペーター殿と友好を深めたらしいという情報が入ってくる。

彼は魔族との交易交渉絡みで極秘来訪していたが、私は聞いてしまった。

『せっかく王国に来たから、ヴェンデリンとどこか遊びにでも行こうかな？』

『陛下、バウマイスター辺境伯様はなかなかにお忙しいそうですが』

『大丈夫だよ。ヴェンデリンは友達だから、一日くらいなら融通してくれるって』

彼と御付きの家臣の話を聞いて、私は大きく動揺した。

駄目だ！

彼は私の親友になるのだ！

だってそうだろう？

これから私の娘は彼の息子に嫁ぐし、私の息子の嫁は彼の娘なのだから。

私達は深い結びつきがあるのだ。

他国の皇帝だか何だか知らないが、私こそがバウマイスター辺境伯の真の親友なのだから。

そもそも、なぜ彼を名前で気安く呼ぶのだ？

その資格があるのは私のはずなのに！

こうなれば、私も参加するしかあるまい。

これはペーター殿がバウマイスター辺境伯の親友だと認めたわけではなく、いくらプライベートでも帝国の皇帝と我が国の偉大な魔法使いにして辺境伯が仲良くしていたら、いらぬ言いがかりをつける貴族が出てくるかもしれない。

彼の親友たる私は、バウマイスター辺境伯が疑われるのを防がなければいけないのだ。

私が参加していれば、そういう噂も出ないからな。

というわけで、私は父に断って今日の行楽に参加している。
今日は楽しい一日になるであろう。
何しろ、私はバウマイスター辺境伯の親友同士だからな。

「何？　ヴェルを巡って男同士で取り合い？」

「ルイーゼ、そういう周囲に誤解を招く言い方はやめてくれないかな」

「ボク、間違った事は言っていないよ」

今日はペーター達とヴァルド殿下とその御付きの方々で、バウマイスター辺境伯領南端にあるプライベートビーチにおいて海水浴が行われる事になった。
俺が『瞬間移動』で参加者を運び、多くの人達が参加している。

屋敷からエリーゼ達も呼び寄せ、ドミニク以下メイド達は前と同じくバーベキューを含めた飲食物の用意をしている。

水着はバウマイスター辺境伯家の者達以外がいるので生地が多いものであったが、みんな南国の海を楽しんでいた。

ペーターとヴァルド殿下は変に張り合っており、ルイーゼが理由を聞いてきたので説明したら、そういう風に言われてしまったのだ。

「そう思われても仕方ないよね」

「あのなぁ……俺にそういう趣味はないからな」

そういう噂が立つだけでも双方致命傷なので、それはやめてほしかった。

「何てね。冗談冗談。でも、ヴァルド殿下は凄いね。ヴェルも友達少ない方だけど、それを上回るんじゃないかな？」

「それも危険な発言だな」

俺とルイーゼが話をしている最中にも、ペーターは昔ながらの生地が多い水着を着て海で泳いでいた。

泳法は導師が教えたバタフライで、その導師だが彼だけは人目も気にせず前に俺から貰った黒のブーメランパンツを履いている。

「導師、すげえ水着だな」

「泳ぎやすいのである！」

「水の抵抗はなさそうだな」

今まで導師のブーメランパンツ姿を見た事がなかったブランタークさんも驚いていたが、前はエリーゼ達も際どい水着姿だったからなぁ……。

今は他人の目があるので、彼女達も生地が多い水着を着ている。

「おーーーい、ヴェル。助けてくれぇ……」

「どうかしたか？」

海水浴に護衛として参加したエルは、ルルと藤子の遊び相手にされ砂に埋められていた。

砂山から顔だけ出している状態で、体に次々と大量の砂をかけられている。

「エルは子供と遊ぶのが上手だよな」

「そうか？」

「だよねぇ。ただ遊ばれているだけだよ」

「こらぁ！　失礼だぞ！　ルイーゼ！」

ルイーゼからルルと藤子と精神年齢が同じだと言われ、エルは一人怒っていた。

「護衛の仕事があるんだけどなぁ……」

「大丈夫だろう」

バウマイスター辺境伯家が出している護衛は他にいるし、ペーターはマルクとエメラなどの少数精鋭で、ヴァルド殿下にも護衛はいたので、エルは遊ばれていても問題ないであろう。

「というわけなので、埋められていても問題ないぞ」

「ヴェンデリン様、もっと一杯砂を盛りますね」

「俺も手伝うぞ」

ルルも藤子も、砂浜での砂遊びを楽しんでいた。
大人びてはいても、やはり普段は年相応の子供なのだ。

「私も泳ごうかな？」

「なりませぬ！　王太子殿下に万が一の事があったら、陛下に申し訳が立ちませんから！」

「何か、大変だね。僕は普通に泳ぐけど」

ペーターは、導師から教わったバタフライで南国の海を思う存分泳いでいたが、ヴァルド殿下は御付きの老臣に泳ぐのを止められていた。
もし殿下が溺れでもしたら、彼らの責任問題になってしまうからであろう。

「ペーター殿は泳いでいるぞ」

「殿下、他所は他所。うちはうちなのです」

ヴァルド殿下についている老臣は、うちの母親（前世）みたいな事を言うな。
子供の頃、同級生が夏休み海外旅行に行くので俺も行きたいと言ったら、同じような事を言われてしまったのだ。
彼らからすれば、もしペーターが溺れ死んでも自分達の責任じゃないと思っているのであろうが。

「融通が利かないなぁ……」

「殿下も大変ですね」

「ヴェンデリン、私の事はヴァルトと呼んでくれ」

「あの……。それも難しいかと……」

御付きの連中の目と耳があるので、下手にヴァルド殿下を呼び捨てにして不敬だと言われたら堪らないからだ。

「ペーター殿は名前で呼んでいるじゃないか」

「それは、帝国で一番偉い人がそれでいいと言っていますし、御付きの連中もみんな顔見知りなんですよね……」

内乱時に知り合った連中ばかりだから、彼らは俺がプライベートな時間にペーターを呼び捨てにしても問題視しないのだ。

ついでに言うと、彼らはみんなペーターが好き勝手活動していた頃からの仲間や家臣だったりする。

ペーターが海で泳いでも、誰も気にしないのだ。

溺れたら自分が助けに行けばいい。

その前に、泳ぎが上手な彼が溺れる可能性はほぼないと思っていた。

「ううっ……。せっかくヴェンデリンと海に来たのに……。砂を盛っておこう」

景色を見るだけで何もする事がないヴァルド殿下は、エルを埋めた砂山をさらに大きくする作業に没頭し始める。

何の意味があるのかと思うが、思えば俺も前世で一人の時とかは、

ただ黙々とプチプチを潰したりした。

それと同じなのであろう。

「殿下、楽しいですね」

「そうだな」

「おーーーい、フジコ。そろそろ俺を出してくれ」

「殿下のご要望だ。我慢しろ」

ルルと藤子もそれにつられ、砂山はさらに大きくなっていく。

エルは余計に抜け出せなくなった。

「殿下って、一人遊びがよく似合うね」

「ルイーゼ、しぃーーー！」

その姿に少し哀愁を感じてしまう。

俺は王太子殿下じゃなくてよかった。

「ヴァルド殿下、そろそろお食事の時間です」

暫くみんなで泳いだり砂遊びをしたのち、ドミニク達による食事の準備が完了した。

「野外で大胆に魚介を焼いて食べるのもいいね」

「昔、狩猟の成果をみんなで焼いて食べたのを思い出します」

ペーター達は俺達と一緒に、ドミニク達が用意したバーベキューに舌鼓を打ち、魔の森産の果物を用いたトロピカルジュースなども堪能する。

御付きの連中も、ペーターと狩りをして小銭を稼いでいたような者達だ。

網の上で焼ける魚介類に抵抗もなく、美味しそうに食べている。

「美味しそうな料理ではないか」

「殿下はいけません」

「はあ？　こういう場所に来て、こういう物を食べないでどうするのだ？」

「ご安心ください。バウマイスター辺境伯様から食材と調理人の提供を受けまして、殿下に相応しいコースを作らせました」

「アームストロング導師は、普通に食べているぞ」

「導師様は大丈夫です」

普通どころか誰よりも食べているが、導師は何を食べてもお腹は壊さないようなイメージがある。

御付きの老臣も、導師がお腹を壊しても責任があるわけじゃないからな。

どうせ注意しても無駄だろうし、止める権限もないから放置しているのであろう。

「殿下はなりません」

ヴァルド殿下についている老臣が、衛生面や、第三者により毒物が混入されない保障ないという理由でバーベキューは駄目だと言い、俺は調理人にコースメニューを作らせていた。
ヴァルド殿下だけは、数名の御付きと共にテーブルの上に準備されたコースメニューを食べる羽目になる。
材料もいいから美味しそうではあるのだが、ヴァルド殿下はとても不満そうだった。

確かに、外のレジャーにきて自分だけ高級レストラン風の料理を食べさせられてもな。
こういう時は、バーベキューの方が美味しいであろう。
でも、俺には何も言えないんだよなぁ……。

「ペーター殿は、普通に網で焼いた魚介を食べているが……」

「他所は他所。うちはうちでございます。殿下は常に健康でなければならず、どのような危険もあってはならないのです」

「……」

ヴァルド殿下は諦めてコース料理を食べ始めるが、俺はなぜ彼に友人がいないのか何となくわかってしまった。
似たような立場のペーターだが、こいつは元々三男で皇帝になれるような立場の人間じゃなかった。
傍にいる連中も似たような立場の者達ばかりだし、うるさそうな事を言いそうなのは内乱で消し飛んでいる。

自己責任でもあるが、ペーターは比較的自由に行動できた。

「この大きなエビや貝は美味しいね」

「生きている間に焼かないと駄目だけどな。もしくは締めてすぐに魔法の袋に入れたものをだ」

「いい物を食べさせてもらったよ。エメラも栄養が必要だからね」

「妊婦さんを『瞬間移動』で運べる魔道具か……」

「需要はそれほどでもないけどね」

昔は知らないが、今だと『瞬間移動』が使える人間が極端に少ない。

しかも、妊婦が流産しないようにするという、非常に限定された効果しかないのだ。

「発掘品の効果が、短時間でよくわかったな」

魔道具は定期的に出土するのだが、そう都合よく説明書と一緒に出土するわけでもない。

現代でもある魔道具の発展形や、過去に出土して使い道がわかっているものならいいが、たまに何に使うのか判明するまで長い時間がかかるものもあった。

振動抑制装置は、特にわかりにくいと思うのだ。

「帝国の魔道具ギルドもなかなか優秀ではあるんだよ。僕は魔法が使えないからよくわからないんだけど。装置が作動した時の魔力の流れを測定して、他にも色々と調査方法があるみたい」

無事に振動抑制装置の使い方がわかり、エメラは海水浴に来る事

ができたわけだ。

「まだ産まれるまで時間がかかるのかな？」

「そうですね。半年以上は先です」

「楽しみね。男の子かしら？　女の子かしら？」

「無事に産まれてくれればどちらでも」

女性陣は女性陣で、楽しそうに話をしながら食事をしている。

話題の中心は妊娠したエメラであった。

ルイーゼとイーナが、エメラのお腹を撫でている。

「ルルも、将来はヴェンデリン様の子供を産みたいです」

「俺も早く大きくなりたいものだな」

ルルと藤子もエメラのお腹を触りながら、自分達も早く俺の子供を産みたいと言った。

凄い事を言う幼女二人だが、ここには貴族や王族しかいない。

俺以外、誰もその発言をおかしいと思っていないのだ。

「ううっ……ルルちゃんとフジコちゃんの前に、先生の弟子である私達が先です！」

「アグネス、もう成人したからね」

「私も来年成人で、シンディちゃんは再来年成人。夢の新婚生活だね」

「……」

今の時点でも嫁の数が完全にオーバーフローなわけだが、それを理由に断れる状況ではないようだ。

「ヴェンデリンも大変だね。僕はエメラ一人で精一杯だよ」

「お前は皇帝なんだから、後宮を作れよ」

「皇帝の後宮？　それはあくまでもイメージだけだね。物語のお話だよ」

帝国の皇帝は投票で決まる。

その子供が次の皇帝になる可能性は限りなく少ないので、妻の数は普通の大物貴族と同じであった。

在位中は後宮と呼んでいるが、それはあくまでも外部に対する見栄でそう呼んでいるだけだそうだ。

子供が皇帝位を継がないのに、豪華な後宮があると退位後の後始末で苦労してしまう。

そのため帝国では、正式な後宮というものは存在しないらしい。

「内乱がなければうるさく言う連中もいただろうね。あっ、内乱がなかったら僕に出番はなかったか」

それでも正妻を含む複数の妻を娶れと言われるのが常識であったが、ペーターはあくまでも例外を貫くというわけだ。

「そういえば、ヴァルド殿下はどうなの？」

「どうって？」

「奥さんとか。さすがに一人って事はないでしょう？」

「……」

そういえば俺って、ヴァルド殿下の事をよく知らないんだよな。
名前と、奥さんと息子と娘がいる。
王太子殿下だから側室はいるはずだよな？
全然噂にもなった事がないけど。

「……。これから色々とわかるんだよ」

「これから親戚同士になるってのに、君達は何か微妙だよねぇ……」

「そんな事はないぞ！　私とヴェンデリンは深い友情と絆で結ばれているのだ！」

いや、殿下。
そんな大きな声で言われても……。
何かこう、殿下が物凄く積極的だと、元日本人である俺は逆に引いてしまうというか……。
今までの付き合いを考えると、そこまで絆は深くないかなと……。

「そうなんだ……」

ペーターは友人が多い方なので、どうもヴァルド殿下のあまりの必死ぶりに引いてしまったようだ。

「そういえばさ。アルフォンスなんだけど」

「あいつ、忙しいのか？」

「テレーゼ殿よりも力のない当主だからね。家を纏めるのに苦労しているみたい。今日も誘ったんだけどねぇ……」

アルフォンスは優秀な男だが、元は分家の当主だ。

テレーゼの兄達が消えたにしても、フィリップ公爵家の掌握で苦労しているようだ。

元々当主になんてなりたくなかった奴だけど、実は意外と責任感がある男なんだよな。

「じゃあ、今度フィリップ公爵領に一緒に行こうか？　こっちのお土産も一杯持って」

「いいねぇ。アルフォンスは僕を支持してくれる貴重な友人だからね。同じく友人であるヴェンデリンと会えたら嬉しいと思うよ」

奴と俺とは、同じ嗜好を持つ心の友だからな。

今もストレス発散のため、奥さん達を裸エプロンにして楽しんでいるのであろうか。

「私も行こう！」

「あの……ヴァルド殿下は難しいかと……」

そう簡単に、王太子殿下を外国に連れてはいけない。

俺は王族じゃないし、すぐに魔法で逃げられる身軽な存在だから、自由に他国にも行けるのだから。

「そうか……。残念だな。でも、次は子供達を遊ばせたいな！」

その日は、夕方までみんなで存分に南の海を楽しんだと思う。
ただ一つだけ、ヴァルド殿下はどうしてあんなに必死なのであろうか？

「いやぁ、ルイーゼの言うとおりだな。ヴァルド殿下は、ヴェルよりも酷いわ」

「俺、結構友人が増えたよ」

ここは大切なところだから強調しておこう！

「だから、ヴェルよりも酷いと言っている」

エルは、ヴァルド殿下から十二歳頃の俺と同じ雰囲気を感じたようだ。
俺と同じ雰囲気……ヴァルド殿下は立場の問題もあると思うが、俺と同じくボッチ体質なんだろうなと、俺は思ったのであった。

第百五十五話　俺は、カニにはうるさい。

「やあ、久しぶり」

「ペーターが言うほどやつれていないかな？」

「中央で陛下の補佐を行い、フィリップ公爵領でも統治があるからね。激務だからこそ、睡眠と食事はちゃんと摂っているよ。他は何もできないけど。今日はよく来てくれたね」

「ああ、北の魚介を仕入れに来たのさ」

「仕入れに、導師は必要かい？」

「必要なのである！　自分の食べる分は自分で見繕うのである！」

ペーターとプライベートで遊んでから一週間後、俺たちはたまたま時間があった現フィリップ公爵であるアルフォンスに会いに行った。

彼は元気そうであるが、休みがないのが大いに不満らしい。

「のう、大変であろう？」

「テレーゼ、君はもの凄く元気そうだね」

「当たり前であろう。面倒な仕事がなく、たまにヴェンデリンに助言するだけなのだから。それでもヴェンデリンは、妾を大切にしてくれるぞ」

「あーーーあ、凄いノロケを聞いたね」

「実際問題、俺は大貴族の経験がないからな。経験者であるテレーゼの助言は貴重だ」

今回のフィリップ公爵領行きでは、久しぶりにテレーゼもついて来た。

ただ、あまり顔を見せるのはよくないので、フードを被り、髪型をカチヤがツンテールにしたりして変装している。

「テレーゼ、何か変」

「言うと思ったわ。バレるやもしれぬが、しないよりはマシであろう」

バレるバレない以前に、テレーゼのツインテール姿は似合わなかった。

カチヤになぜツインテールなのかと尋ねると、『まさかテレーゼがこの髪型をするはずがない』と、意外性を狙ったわけだ。

深く被ったフードから出ているツインテールが奇妙だ。

「カチヤ、もう少し違う髪型はなかったのか？　意外性はあるが女である事に自信をなくすほど似合わぬぞ」

「帰れば元の髪型に戻すからいいじゃないか。あたいなんて、物心つく頃からこの髪型だぜ」

「そなたは似合うからいいのじゃ」

カチヤは、静かにしているとお人形さんのように綺麗だからな。ツインテールでもよく似合う。

この前、カチヤとつき合いのある古参冒険者と少し話をしたんだが、初見の若い冒険者でカチヤに惚れる者は多いそうだ。

ただ、すぐにあの口調が出るし、彼女に勝てる男性冒険者は少ない。

男性とはプライドが高い生き物だから、自分よりも力量が高い女性冒険者を恋愛対象とは見ない。

近寄るのは寄生、ヒモ目的の男性冒険者のみであり、そういう奴はカチヤが厳しく排除してしまう。

彼女に男性っ気がなかったのには、そんな理由からであった。

「三つ編みにしても似合いそう」

「旦那、この前エリーゼが面白がって編んでくれたけど、あんな面倒な髪型、維持したくねえよ！　毎日髪を洗う度に編み直さなきゃいけないじゃないか」

そういえば、カチヤも俺と同じくお洒落に手間をかけたくない人間だった。

綺麗好きではあるので風呂には毎日入りたがったが、毎朝髪を編むのは嫌なようだ。

「カタリーナとか、よく毎日あんなに髪のセットに時間をかけていられるよな。あたいには無理だ」

カタリーナに関しては、寝癖が酷くて毎朝髪が爆発しているのと、彼女はあの手間のかかる縦ロールこそが、真の貴族女性に相応しい髪型だと思っているからだ。

「真の貴族ねぇ……王都に行くとああいう髪型の貴族令嬢はそこそこいるよな。帝国だとあまり見なかったけど」

そういえば、帝国貴族で縦ロールにしている女性は少なかったな。

内乱中だったからかな？

「ああいう髪型には流行があっての。帝国では、三十年くらい前までは流行しておったぞ」

「貴族の髪型に流行なんてあるんだ」

決まっている中から適当に選ぶのだと思っていた。

貴族って、家の決まりとかにうるさそうだし。

「カタリーナを見ればわかるとおり、毎日整えるのが面倒なので、段々とする者がいなくなっての。貴族は目立つのが好きじゃから、面倒でもそういう髪型に拘る者もいるにはいるがの」

テレーゼによると、今は髪型に拘るよりも髪自体の綺麗さを誇るのが帝国貴族女性の流行らしい。

「貴族女性は見栄っ張りじゃからの。髪を洗う洗髪剤に、洗った髪のパサつきを抑える整髪料などに拘るわけじゃ。色々な高級素材を用いている高価な品を買い求める。毎日使う消耗品なので大金を使うわけじゃ」

そして、その高級素材は魔物の領域でしか採れない品もある。

強い魔物の血液や油脂、珍しいところでは内臓といった素材もあり、我々冒険者が採取して儲けるわけだ。

俺の場合、奥さんたちのためお店に直接素材を渡して作ってもらったりしているけど。

「ヴェンデリンのくれる洗髪剤と整髪料はいい品じゃの。妾の髪も光沢が出てきたわ」

「あたいもそうだな。昔は髪を洗って乾かすくらいだったから余計に」

「カチヤ、そなたはもう少し身形に気を使った方がいいぞ」

「今は気を使っているって」

そこは、バウマイスター辺境伯の妻だからな。
屋敷にはメイドいるから、本人は何もしなくても用途ごとに身形を整えてくれる。

「奥さんに魔の森で採れた高級素材を原料にした洗髪剤ねぇ……効き目ありそうだね」

「アルフォンス、妾が分けてやろうか？」

「くれるの？　なら欲しい」

「そうか……お前も苦労しているのじゃな」

テレーゼの奴、妙に優しいと思ったら……。
そうか、アルフォンスの奴、仕事が忙しいから遂に……。

「あのさ、テレーゼもヴェンデリンも。私の髪が怪しいとか思って

いないかな？　抜け毛じゃなくて、白髪がちょっと増えたから今のうちにケアしておこうと思っただけだからね！」

アルフォンスは、自分はまだ二十代だからまだハゲていないと断言した。

「そうじゃな。アルフォンスは疲れているからの。洗髪剤と整髪料は送るから」

「テレーゼ、言っておくけど私は抜け毛に悩んだりしていないからな！」

「……」

「ヴェンデリン！　私は付け毛とかはしていないからな！」

まだ若いしそれはないと思うのだが、アルフォンスが殊更強く言うものだから、ちょっと疑わしいと思ってしまったのだ。

バレにくい、魔道具のカテゴリーに入るカツラや付け毛もあると聞くから念のため『探知』で探ってみたけど、反応はなかったな。

もし普通のカツラや付け毛だと、俺にもわからなかったが。

「ちょっと白髪が出ただけだから。ところで、今日は北の港が目的地だとか？」

ここで髪以外の話題に切り替えるべく、アルフォンスは俺たちがここに来た目的を訪ねた。

「おうよ。ヴェンデリンが北の海の幸が欲しいそうじゃ」

「ヴェンデリン、私と再会と海の幸。どちらが重要なのかな？」

「難しい質問だな。アルフォンス」

「そこは嘘でもいいから、私だと言っておいてくれ」

今日はアルフォンスも久々に暇だそうで、北の港にある漁港まで同行してくれる事になった。

彼は護衛を連れ、俺と同じく海の幸が欲しい導師、密かに帰郷したテレーゼ、護衛のカチヤ、あとは……。

「北って寒いのね。でも、生まれて初めての外国だから楽しみ」

今日は予定が空いている人が少なく、その中でこのところフリードリヒ達の世話をするので忙しいアマーリエ義姉さんも連れてきた。

彼女は内乱に参加していないので、今日が初めての海外旅行である。

それと、比較的少人数での移動となっていた。

「でも、この毛皮温かいわね。ヴェル君、こんなに高い品をありがとう」

「そんなに高くないですよ」

魔の森で俺が狩った魔物の毛皮を、キャンディーさんが加工してくれたからだ。

実質加工賃しかかかっていない。

それも、二着分素材を渡して一着だけ返す形にしてくれればいいと彼女……みんなキャンディーさんを女性扱いするようになってい

た。導師は特にそうだ。……に言ったので、実は無料だったりする。

「でも、シルバーエイプスの毛皮は貴重だって聞くわよ」

「まあいいじゃないですか」

シルバーエイプスとは、銀色の毛皮を持つゴリラに似た大型の魔物であった。

これも黒いゴリラのアルビノ種であり、滅多に姿を見せないので貴重なものだ。

この魔物の毛皮はコートなどの加工に適していると、大昔の書籍『図解魔物・産物大全』には書かれていたので、試しにその加工をキャンディーさんに依頼、試作品をアマーリエ義姉さんにプレゼントしたわけだ。

「フリードリヒ達の面倒を任せていますし、俺からのプレゼントですよ」

特にアキツシマ島を統一する時は、エリーゼ達もあまり子供達の面倒を見れなかった。

だから、毛皮のコートはエリーゼ達からのプレゼントでもあったのだ。

「ありがとう」

「そのうち、妾にもプレゼントしてくれよ」

そんな話をしているうちに、漁港内にある市場に到着した。

早速見学をすると、中では今朝獲れた魚のセリが行われている。

独特な符号でセリを行っており、俺達にはいくらでセリ落とされ

たのかよくわからなかった。

「マグロがあるな」

「貴族の旦那ぁ。マグロはみんなミズホの卸しがセリ落としてしまいましたぜ」

漁港の石の床には数十匹のクロマグロが置かれていたが、すべてミズホ人がセリ落としてしまったそうだ。

ミズホ人も、日本人と同じくマグロが大好きというわけだ。

「ミズホ人は魚が好きだよね。私も好きだけどね」

アルフォンスは、セリ落とされたマグロを未練がましく見つめていた。

「他のものを購入して屋敷で調理すればいい」

「そうだね。他にも色々とあるからね」

北の海にいる魚介類は、不思議と日本のそれと大差がなかった。タイ、ブリ、ヒラメ、シマアジ、ホタテ、カキ……色々とあるので、次々に購入する。

「少し買いすぎじゃないかしら？」

「余っても、魔法の袋に入れておけば大丈夫ですから」

「そうやって無駄に魔法の袋に死蔵するのもどうかと思うわよ」

「気をつけます」

「ヴェンデリンも、アマーリエには弱いのぉ……」

実は俺にも異母姉がいたが、ほとんど接触がないのでアマーリエ義姉さんの方が本当の姉っぽかった。

たまに注意されると、心から反省してしまうのだ。

「ヴェンデリンは、年上の女性に弱いみたいだね」

「アルフォンスはどうなんだ？」

「私も乳母だった人に弱くてね。今も、お野菜をちゃんと食べなさいとか、二人きりの時に言われるね。お母さんみたいなものだな」

男性とは、いくつになっても女性に叱られる生き物というわけだ。

「でも、何か全体的に漁獲量が少ないな」

「そういえばそうじゃの」

テレーゼも俺の意見に同意した。

元々フィリップ公爵として漁業の産業化に取り組んでいたので、全体的に漁港に活気がないのに気がついたようだ。

「そうかな？」

「アルフォンス、本当は口を出したくないのじゃが、普段の半分以下程度の漁獲量しかないように見えるぞ。何か問題があるとすれば、すぐに対処せねば漁民達が飢えてしまう」

忙しいのはわかるがちゃんと領内の事を把握しておけと、テレーゼはアルフォンスに釘を差した。
フィリップ公爵領の漁業は成長を続け、昔は半分以上がミズホ人であったが、今ではラン族を始めとするフィリップ公爵領の領民達も多く就業するようになった。
このままでは、彼らは失業してしまうかもしれない。

食えない領民が増えれば、領地は不安定になってしまう。
それに気がつかないアルフォンスに、謎のフードを被った女性が忠告をする。
実はその正体が、前領主であるテレーゼなのは秘密というわけだ。

「アルフォンスも普段なら気がつくのであろうがの」

ペーターも忙しいが、アルフォンスも忙しい。
フィリップ公爵領の統治のみならず、ペーターも手助けもしないといけないからだ。
なかなか領地の視察も行えない状態なのであろう。

「これは忠告痛み入るだね」

「余計な口を出してすまぬの」

「何か言われているうちが華さ」

アルフォンスは、テレーゼの忠告を素直に受け入れた。
その度量の広さは、彼が領主に向いている証拠でもあった。
大半の領主は、前領主の諫言なんて聞いたくもないし、聞く耳を持たない者も多かったからだ。

「どうして漁獲量が減っているんだい？」

早速アルフォンスは、その辺にいた年配の漁師に漁獲量が減った理由を尋ねた。

「漁獲量確保のための、禁漁、制限期間ではないよね？」

「はい。実は、北方の海域に、奇妙な巨大生物が出たのです」

「巨大生物？」

「はい。物凄く大きなカニなのです！」

北の海に魔物の領域がないとは思わないが、普段漁をしているエリアに巨大な蟹が出現したという事は、海竜と同じく野生動物という扱いなのであろうか？

いや、でもカニってエイリアンみたいにも見えるから、魔物のカテゴリーに入るのか。

「そんなに大きな蟹なのか？」

常識で考えれば、いくら蟹が大きくてもたかが知れている。

アルフォンスは、そんな漁を躊躇うような大きさの蟹が本当に実在するのか疑問に思っているようだ。

「どのくらいの大きさなんだ？」

「へい、高さは二十メートルを超えているかと。動きは遅いですが、あんな巨大なハサミで船を攻撃されたらひとたまりもありません。

実際、漁船が一隻沈められました」

すぐに他の船の漁師が救助したので犠牲者は出ていないが、おかげで狭い範囲でしか漁ができなくなってしまった。

このままだと漁師を減らさないといけないと、年配の漁師が語る。

「蟹かぁ」

「美味そうである！」

「確かに……」

俺と導師は漁師達が可哀想だと思うよりも、巨大な蟹の方に興味津々であった。

基本的に蟹は高級品なので、何とか倒して試食できないかなと思ったのだ。

「どんな蟹だった？」

「へえ……。全身が短い棘状の突起で覆われておりまして……。足は八本しかありません。色は紫色に近いかな？」

年配の漁師から蟹の化け物の特徴を聞くが、俺はすぐある種類の蟹に似ていると思ってしまった。

「（タラバガニか？）」

「蟹って、足が十本なかったっけ？」

北方でも当然カニは生息しており、食用となっている種もある。

フィリップ公爵家にも献上される事が多く、アルフォンスは蟹の足が十本だという常識を知っていた。

だが、もしこの巨大な蟹がタラバガニの近種ならば、これはヤドカリの仲間なので正確にはカニではない。

そんな事はどうでもいいが、もしその巨大蟹がタラバガニならば、これは是非試食しなければいけない。

試食するには倒すしかなく、可哀想な……気持ちは微塵もないな。

早く倒して試食しよう。

「その蟹の小さい個体は見た事があるか？」

「いえ、この海域で一番有名な蟹はガザミでしょうか……」

比較的日本と獲れる魚貝類が被る北方海域であったが、海老、蟹類は実は南方の方が豊富であった。

特に大きな海老、蟹類は南方の方が沢山生息しており、北方で一番食されている蟹は通称『ガザミ』と呼ばれているワタリカニをもっと小さくしたようなものであった。

海老類も甘エビ程度の大きさしかなく、ロブスターに似た海老が獲れる南方の方が産地としては有名だ。

「（なぜか北方には大きな蟹がいなかったが、遥か北方に海竜と同じく巨大種で生息していたのか……）ガザミの大きいのはいないよな？」

「ガザミはいないのですが、実はその巨大な蟹の他にも目撃例が……」

「どんな蟹だ？」

「甲羅の高さは十五メートルほど。甲羅は三角形に近く、体色は暗い赤。足がすらっとしています」

それって、間違いなくズワイガニだよな。

「実は、まだいまして……」

巨大な蟹は三種類いるというのか。

「これは小型ですね。それでも、甲羅の高さは十メートルくらいありますか……全身がズングリとしておりまして、毛が一杯生えています」

これは、日本人なら誰でもわかる。

間違いなくケガニか、それに近い種類であろう。

「三種類もの巨大な蟹かぁ……。今までは、目撃例はなかったのか？」

「大昔から、漁師が北の果てで巨大な蟹を目撃したというお話はありました。特徴も似ています。ですが、普段の漁場では今まで見かけた事がないのです」

何らかの理由で、もっと北に住んでいた蟹達が南下したというのか。

異常繁殖、縄張り争いでの敗北、南に餌が沢山あると気がついた？

どちらにしても、蟹の南下が一時的なものなのか、それともこれからも定位的に続くかで対応が別れるな。

「現地に行ってみようと思う」

「某も同行するのである！」

一刻でも早く美味しい蟹を……じゃなかった。

巨大蟹は魔物ではない可能性が高いが、それでも一般人には脅威である。

ここで俺達魔法使いが、蟹を美味しく調理して……じゃなかった。

退治して漁場を安全にしないといけない。

そう、これは日々真面目に生活する漁師達のため、ノブレス・オブリージュの精神に則ってカニを退治するだけの話であった。

「ヴェンデリン、導師、行ってくれるのかい？」

「勿論だとも、アルフォンス！　俺達は友達だろう？」

なあに、討伐代金なんていらないさ。

倒した蟹の権利さえ貰えれば。

「腕が鳴るのである！」

「というわけで、誰か船を出してくれないかな？　あっ、テレーゼとカチヤとアマーリエ義姉さんは留守番で」

「あたいは、船の上じゃあまり戦力にならないから仕方がないか」

カチヤも魔力が増えていたが、海底にいる巨大カニに届く攻撃手段を持っていなかった。

危険なので留守番をしてもらうしかない。

「妾はいた方がいいのでは？」

「テレーゼが活躍するとまずいじゃない」

変装はしているが、既にテレーゼの正体に気がついた者がいるかもしれない。

そんな状態で彼女が魔法を使えば、再び領主に返り咲いてほしいと願う者達が出てしまうかもしれない。

魔法は隠し、あくまでも極秘理に里帰りをしたという体を装った方がいいであろう。

「アマーリエに料理でも習っておこうかの」

「購入したものを調理しておくから、これを戻ってから食べましょう」

「わーーーい」

「ヴェンデリン、お主は子供か……」

久々の北の海の幸尽くしだ。

蟹の討伐が上手くいき、俺の想像どおりに蟹が食べられる種類だったら……。

巨大な蟹をお腹一杯食べ放題。

海竜の肉なんて目じゃないな。

「みんなで蟹パーティーをしましょう」

「そんな得体の知れない蟹、食べられるのかしら？」

アマーリエ義姉さんが首を傾げ、テレーゼとカチヤとアルフォンスが見送るなか、俺と導師は地元漁師達が操る船で、荒波と寒風激しい北の海へと出発するのであった。

「貴族の旦那、ここが巨大な蟹の出た場所でさぁ」

半日ほど漁船で北の海を行くと、ようやく謎の巨大な蟹が出たポイントに到着した。

そこまでリンガイア大陸から離れておらず、周囲には島もない。

北方の海はさらに風と波が激しくなり、常に凍死と遭難の危険に曝される。

それでも、この漁場で採れる魚介類は高く売れるので、みんな危険を冒してこの海に挑むのだ。

「導師、反応はありますか？」

「むむっ！　もっと北である！」

二人で『探知』の魔法で探るが、やはり巨大蟹は魔物ではなく野生動物の一種のようだ。

同じ大きさの魔物ならもっと大きな反応が出るが、巨大蟹らしき反応は小さい。
もう少し距離が離れていたら、俺や導師でも探れなかったはずだ。

「もっと北である！」

「へい！」

導師の命令で、漁師達は船をさらに北に向ける。
危険な仕事のため荒くれが多い漁師達であるが、残念ながら導師はもっと荒くれだ。
その統率に、一片の曇りもなかった。

みんな、最初から導師がリーダーであるかのようにキビキビ働いている。
俺だととてもこうはいかないはずだ。

「ちょうど、この真下ですね」

「海底にいるのである！」

この海域は、水深が数百メートルはあるはず。
その海底に巨大蟹らしき反応が複数あった。
餌を摂るためなのか、漁師達に縄張りを侵すなと告げるためなのか、巨大蟹は水面まで浮上してきたそうだ。

その辺が、北海道やロシアで獲れる蟹とは違うのであろう。
何しろ漁船を攻撃する蟹など、地球上には存在しないのだから。

「浮上してこないかな？」

俺達がいるので浮上してくるかもと暫く待機したが、巨大蟹らしき反応は海底に鎮座したままだ。
船が一隻しかないので気がつかないか、浮上しても腹の足しにもならないと思っているのかもしれない。

「バウマイスター辺境伯、どうするのである？」

「こうなれば、餌で誘いましょう」

「餌であるか？」

「ええ、少し勿体ないですけど……」

以前に害獣として退治したものの、血抜きと解体が面倒なので魔法の袋に入れたままであった巨大な熊を取り出し、長ロープに結んで重し代わりの石とともに海に放り投げる。
その時に腹を割いておいたので、大量の血が海面に浮かんだ。

「蟹が食べるかは不明ですけど、こうやって血の臭いを出せば効果があるかなと」

「なるほど。バウマイスター辺境伯はよく考えているのである！」

誰にでも考えつきそうな策だし、導師が考えてくれたら俺は何もしないで済んだんですけど。

「来たのである！」

「効果あるんだな！」

餌である熊を沈めてから数分後、海底にある複数の反応が水面に向かって動き出した。
熊の血の匂いに反応して浮上してきたのであろう。
どうやら巨大蟹は、海竜と同じく肉食であるようだ。

「導師！」

「もうすぐ姿を見せるのである！」

餌の熊を引き揚げると同時に、水面が大きく盛り上がり、水上に巨大な蟹が姿を現した。

「（タラバガニだぁーーー！）」

その体色や特徴は地球のタラバガニそのもので、全高は二十五メートル近く、全幅に至っては五十メートル以上あるかもしれない。
この巨体でどうやって水上に浮いているのか疑問であったが、今はそれよりも奴を調理……じゃなかった、討伐しなければいけない。

「貴族の旦那ぁ！　前に遭遇した個体よりも大きいでさぁ！」

下手な竜よりもデカイ巨大な蟹、しかも漁師達が最初に遭遇した個体よりも大きい蟹らしい。
そのあまりの大きさに、荒くれが多い漁師達もみんな振るえ上がっていた。
彼らは冒険者ではないので、巨大な生物に慣れていないからだ。

「そういう事はよくある。きっと、前の蟹のお父さんなんだ」

それに、大きいのは好都合だ。
きっとその甲羅にも、足にも、ハサミにも、大量の身や味噌が詰まっているであろう。

「貴族の旦那、見かけによらず度胸がありやすね……」

「デカイだけだからな」

「ひぃーーーっ！　貴族の旦那ぁ！」

巨大な蟹がその大きな足で船を攻撃してくるが、事前に張っていた『魔法障壁』で防がれてしまう。
はやりただの巨大な蟹でしかないようで、ブレスなどを吐く気配もない。
竜ではなく蟹なので、ブレスは吐かないか。
海竜と同じく、美味しい食材となってもらおう。

「バウマイスター辺境伯？」

「俺がやります」

「その心は？」

「導師、調理方法や使える部位を研究するため、あの蟹はなるべく無傷で倒さないといけないのです」

俺は、タラバを含めた蟹の最適な調理方法を知っている。
浜茹でこそが最高の方法なわけだが、その前に蟹の体を傷つけては駄目なのだ。
足が折れたら勿体ない。

甲羅の部分を傷つける？

アホか！

一番美味しい味噌が零れでもしたら、これ以上の損失が人類にあると思うのか？

よって、奴にはその形を保ったまま死んでもらう。

そうすれば、巨大蟹以外はみんな幸せになれるというわけだ。

死んだらすぐに魔法の袋に入れてば劣化を防ぎ、茹でる時にはあとは蟹を投入するだけという状態にしなければいけない。

茹でるか、焼くか、蒸すか……。

調理方法に悩んでしまうな。

蟹が巨大なので、最初は実現可能な方法を優先するしかないか。

「貴族の旦那ぁ……」

「凄い音がしますが……」

俺が考えを纏めている間も、巨大蟹は『魔法障壁』に足で攻撃を続けていた。

その度に『魔法障壁』から激しい音が鳴り、経験がない漁師達は不安そうであった。

完全に攻撃力不足なので何の心配もないのだが、俺としてはあまり足に負担をかけないでほしいと思ってしまう。

巨大蟹が無理をして、足が折れてしまうと勿体ないからだ。

それにしても、地球の蟹に比べると随分とアクティブな動きをする蟹である。

「安心しろ。絶対に『魔法障壁』は破られないから」

「そうなのですか？」

「体は大きいが、さほどの攻撃力はない。所詮は大きな動物扱いだな」

「そんなの魔法使いだけですよぉ！」

それでも、振り回した足が人間に直撃すれば即死なので、『魔法障壁』が使えないと簡単に死んでしまうのには変わりない。

漁民だけでは、この巨大な蟹の討伐は難しいか。

「導師、この蟹達は北方から来たのでしょうが、これは彼らがこの海域まで生息圏を広げた証拠でしょうか？」

「反応は、この海域に数匹のみである！　たまたま南下しただけとも言えるのである！　もし巨大蟹の生息圏が広がったとしても、某達にはどうにもできないのである！」

今日は急遽アルフォンスの許可を得て狩りをしているが、本来ならフィリップ公爵である彼が、諸侯軍なり冒険者なり魔法使いを動員して何とかしなければいけない。

それに、俺達も今日は戦利品丸取りという条件で今回だけ討伐依頼を受けた。

これが常在化すると、討伐時の賞金に、得た巨大蟹の分け前等、細かくフィリップ公爵家がルールを作らないと誰も討伐依頼を引き受けないであろう。

命がけで蟹を倒したのに、ルールがなく、もしフィリップ公爵家

が立場を利用して利益を総取りにしてしまったら。

何の保障もないフリーランスの魔法使いや冒険者が、そんな危険を冒すわけがない。

ルールが決まるまで、巨大蟹が長期間我が物顔でこの海域を暴れまわる危険もあった。

「今日は、この数匹を倒して持ち帰ればいいですね」

「それでいいのである」

「貴族の旦那ぁ……。大丈夫ですか？」

「大丈夫だ」

大丈夫。

巨大蟹は強くないし、俺は急所を知っている。

蟹は生きたまま茹でると、暴れて足が取れてしまう。

そうすると胴体の美味しいところが湯に流れてしまうので、調理する直前に必ず締める必要があった。

蟹の急所は目の間、口の中、ここを鋭い刃物や錐で深く突けばいいのだ。

「動きが遅いので、それほど苦でもありませんよ」

俺は、全長十メートルほどの鋭い錐状の刃物を魔力で作り、それを一気に巨大な蟹の目の間に突き刺した。

この俺からの攻撃にあまり素早くない巨大蟹は反応できず、巨大蟹の目の間に魔力の錐が深く突き刺さった。

「どうだ？」

「動かなくなったのである」

いくら巨大とはいえ、同じ蟹なので急所は同じだったようだ。
魔力の錐が消えると、巨大蟹はまったく動かなくなってしまった。
生命反応もなくなり、俺は無事巨大蟹の討伐に成功する。

「海竜よりも弱いな」

「あいつらは、もっとよく動くのである！」

攻撃力は海竜よりもあるが、攻撃が遅いので対応は難しくない。
急所もわかりやすいので、研究が進めば魔法使いでなくても倒せるようになるであろう。

「おっと、次が来る前に……」

絞めてしまった蟹をそのままにしておくと、いくらここが寒い北の海でも品質が落ちてしまう。
俺は慌てて、巨大蟹を魔法の袋に仕舞った。

「バウマイスター辺境伯、次である！」

「貴族の旦那ぁ！　種類が違うだ！」

「（出たあ！　今度はズワイだぁーーー！）」

次の巨大蟹は、全高十五メートル、全幅五十メートルほどの巨大なズワイガニであった。

違うかもしれないが、とてもよく似ている。

「とても美味そうだな」

「貴族の旦那ぁ……。それどころじゃないですよ」

「それが何よりも大切じゃないか」

クソ不味そうな動物や魔物なら、素材以外は黒焦げでも、素材も大した事がなければ時間節約のため粉々にしても構わないが、相手は蟹様である。

足が取れてしまうなどもっての他、そのままの姿で慎重に締めなければいけないのだ。

「今度の蟹も凄い力ですけど……」

「大丈夫、前の蟹よりも弱いから」

タラバに比べると、足の攻撃力が劣る。

いや待てよ。

このまま攻撃を続けると、美味しい足が取れてしまうか。

「そうなったら勿体ない」

またも魔力で錐を作り、目の間に深く突き刺して巨大蟹を殺した。

「あとは、毛が生えている奴がいたら全種類制覇だな」

毛蟹は味噌が美味しいからな。

出現したら、タラバ、ズワイよりも慎重に締めないといけない。

早く持って帰って茹でる方法を考えないと。
何しろ、みんな大きいからな。
鍋の特注は難しいか？

「バウマイスター辺境伯、また違う種類である！」

「おおっ！」

今度の蟹は、全高十メートル、全幅二十メートルほどで小さかった。
全身に毛が生えており、まさしく毛蟹そのものである。

「これも同じ方法で倒す！」

今度は『魔法障壁』に攻撃される前に、先制して倒してしまった。

「これで北の三種を制覇ですね」

まだ百パーセント食べられる保証はなかったが、今は一秒でも早く茹でてみたい気分だ。
きっと美味しい匂いがするはずなのだから。

「バウマイスター辺境伯、反応はあと四つである！」

「あとは、反応がないですね」

「たまたま南下したのであろうか？」

その答えは誰にもわからなかったが、俺はその日の内にタラバガニに似た巨大蟹を二匹、ズワイ二ガニに似た巨大蟹を二匹、毛蟹に

似た巨大蟹を三匹も確保する事に成功したのであった。

「北方の海にそんな生き物がいたんだ。これから探索なんだけどなぁ……」

結局、巨大な蟹は七匹の群れを俺が退治したらいなくなってしまった。

これからまた南下してくる可能性も否定できなかったが、それに対応するのはアルフォンスの仕事である。

彼は魔法使いの確保に頭を悩ませていたが、暫くは時間があるはずだ。

北で獲った巨大蟹を調理すべく、俺はバウルブルクにある屋敷に戻っている。

当事者という事でアルフォンスも招待し、巨大蟹に興味を持ったペーター達もこちらに来て興味深そうに巨大蟹を見ていた。

「あなた、この蟹はどうやって調理いたしますか？」

「茹でる」

蟹は茹でるに限る。

他の無駄な調理など必要ない。

「ですが、こんなに大きな蟹が入る鍋がありません」

「鍋に入る大きさに切ったら？」

「ぬぉぁーーー！　そんな事をしたら、美味しい成分が湯に流れ出してしまうーーー！」

「そんなに強く否定すること？」

俺は、イーナの意見を全力で否定した。

蟹はそのまま茹でなきゃ意味がないのだ。

第一、南方の海で獲れる巨大なエビや貝って、いちいちバラして調理なんてしない。

やはり、美味しい部分が流れてしまうからだ。

「でも、鍋を注文していたら時間がかかるよ。この巨大な蟹が茹でられる特注の鍋なんて、完成に何か月かかるか」

ルイーゼは、鍋がないから諦めてイーナの言うとおりにすればいいと言った。

「だが、それは認められない！　魔法で茹でてやる！」

要は、蟹全体を満遍なく熱湯で決められた時間茹でられればいいのだ。

「先生、どんな方法で茹でるのですか？」

魔法で巨大な蟹を茹でる。

応用が必要であり、俺の弟子であるアグネスは興味津々のようだ。

「魔法で大量の『蒸気』を作る？」

「シンディ、その蒸気を閉じ込める方法がないと、魔力が大量に必要で、周囲にも迷惑がかかるよ」

シンディとベッティも、師匠である俺が出した問題を懸命に考えていた。

魔法の応用性を高めるためには、どんなにくだらない課題でも懸命に考えて思考力を磨く必要があった。

三人は懸命に自分ならどうするかと考えている。

「一気焼いてしまったらいいかがです？」

「あのなぁ、カタリーナ。あの巨体なのだから、表面だけ焼いて中が生のままじゃ意味ないだろうが」

焼きガニもいいと思うが、まずは茹でを解決してからだな。

「ヴェンデリンさんならどうするのですか？」

「あまり複雑な方法は取らないね」

巨大な蟹と大量の湯を入れる鍋は、『魔法障壁』の形状を鍋の形にすればいい。

『魔法障壁』は水を漏らさないようになっている。

漏れると冷気などが浸透して使用者にダメージがいくので当然だ。

まずはこれを巨大な鍋の形にし、そこに大量の水を入れて『火炎』魔法で沸騰させる。

その時に、塩を入れるのを忘れてはいけない。
蟹は海水と同じくらいの塩水で茹でないと、味がボヤけて不味くなってしまうからだ。

「これでいいですか？」

「さすがは、リサ」

大量の水を鍋型の『魔法障壁』に塩と共に移し、『火炎』魔法で上手に沸騰させた。

「ここで蟹を入れる」

巨大な蟹を『念力』で底の部分に入れる。
最初は、俺が前世で一番好きだったズワイガニにしておいた。

「甲羅は下なのですね」

そうしないと、味噌が固まる前に湯に流れ出してしまうからだ。
俺が理由を説明すると、リサは納得した。

「茹でている間に蟹が浮き上がらないように、重しをした方がいい」

「わかりましたわ」

とはいえ、そんな重しは急に準備できなかったので、カタリーナは蟹が湯から出ないよう『念力』で抑え込んだ。

「先生、これだけの動作を一人で可能ですか？」

「今日は人数がいるから分担しているけど、俺一人でもできるな」

むしろそれができないと、もしまた蟹を入手した時に茹でられない。

できなくても、必死に修行して会得するであろう。

「茹でると、鮮やかな赤になるんだね」

「美味しそうな気がする」

茹であがった蟹が鮮やかに赤く染まり、とてもいい匂いが漂ってくる。

この匂いは、間違いなく茹でたてのズワイガニの匂いだ。

「茹で終わった蟹はすぐに引き揚げ、湯気が止まるまで置いておく」

今回は蟹が大きかったので少し長めに茹でたが、細かい茹で時間などはこれからも研究が必要だな。

茹であがった蟹の足を一本切り落とし、毒などがないか魔法で探るが、特に問題はないようだ。

殻がえらく硬いが、茹でると強度が落ちるらしい。

『ウィンドカッター』で剥くと、中には美味しそうなカニの身がビッシリと詰まっていた。

前世以来、何年振りのズワイガニであろうか。

試食をすると、あの懐かしい……懐かしいというほど沢山食べた記憶もないが……身の甘い味が口一杯に広がる。

美味い。

蟹はとにかく美味い。

いちいち口で言い現わさなくても、蟹には食べている人を無言にする美味しさが存在するのだ。

「あなた、どうですか？」

「もの凄く美味い。拘って茹でた甲斐があったね。エリーゼも早く」

身を切り取ってエリーゼに食べさせると、彼女も無言になった。美味しい蟹には、やはり人を無言にする力があるのだ。

「じゃあ、自己責任でどうぞ」

「ここまで見せつけられて、食べないなんてないよ」

「ヴェンデリンが毒味しているからね。エメラ殿、蟹に毒はあったかな？」

「いいえ、ありません」

エメラが大丈夫だと太鼓判を押すと、みんなが蟹に群がって食べ始めた。

「塩水で茹でただけなのに、物凄く美味いな」

「下手な料理なんて目じゃないね。今度、冒険者ギルド本部に討伐依頼を出そうかな？」

「フィリップ公爵領の支部にも出してみよう」

ペーターも、アルフォンスも、一心不乱に蟹を食べ続けた。

彼らに釣られ、エメラやマルク達も蟹を美味しそうに食べている。

「美味しい」

「美味いのである！」

ヴェルマと導師は自然と競うように蟹を食べ始め、エリーゼ達も、今日はバウルブルクの屋敷にいたルルと藤子も、美味しそうに蟹を食べている。

「ぷはぁ！　これは酒とよく合うな」

ブランタークさんも酒と共に蟹を味わい、とにかく巨体で量が多いのでバウマイスター辺境伯家の家臣、兵士、メイド達も無言で蟹を食べ続ける。

みんな、茹でたてのズワイカニモドキに大満足であった。

「ヴェル君に言われたとおり調理したわよ」

「ありがとうございます。これも美味しいなぁ」

アマーリエ義姉さんが、パスタを茹でてカニパスタを作ってくれた。

これには味噌も入っており、カニ味噌の濃厚な味が食欲を回復させる。

他にも、まだ大量にある蟹の身でグラタン、チャーハン、カニ玉、味噌汁、カニハサミクリームコロッケ、サラダ、天ぷら、シュウマイ、あんかけ豆腐、鍋、ブイヤベース、雑炊、春巻き、スープなど、様々な料理が出てきた。

「これはいい身の質と味の蟹ですね。討伐は大変そうですが……」

これらの料理でミズホ風のものは、バウルブルクで様々な店を経営しているアキラとデリアが出張して作ってくれたので、とてもいい味だ。

特に、この味噌汁と、カニの身のあんかけはいいな。

揚げ豆腐とよく合っている。

カニの身と、擦り下ろしたヤマイモ、卵白、だし汁を混ぜて蒸した真薯（しんじょ）も素晴らしい。

やはり、こういう料理をさせるとアキラの圧勝だな。

「北方には、こんなに大きなカニが生息しているのですね。王都にいる父が聞いたら仕入れたがると思います」

「偶然南下したみたいだな。北方は未探索地域だから、いても不思議ではない。南にも海竜みたいな巨大生物がいるのだから」

「そうですね」

まだ蟹は沢山あるから、時おりアキラにミズホ風の料理をさせるのもいいな。

「ヴェンデリン、ご馳走様。魔法使いで探索隊を組んで蟹を討伐させたいね」

「残念ですが、魔法使いに余裕がありません」

「だよねぇ……」

ペーターによる巨大蟹探索隊の編成案は、アルフォンスよって否定されてしまった。

内乱で魔法使いの犠牲が大きく、未成年者への早期教育を行っても大幅な人員不足であったからだ。

復興と新開発計画もあるので、北方の探索に魔法使いを回す余裕はないのであろう。

計画自体はあるが、なかなか進んでいないのが実情だ。

「そのうちにまた蟹がきたら、フィリップ公爵家の魔法使いで何とかするよ。ヴェンデリンに効率的な討伐方法を教えてもらったから」

「それがいいな。いいか、急所を一撃しないと勿体ないからな」

「そこは拘るんだね」

足が取れたり、甲羅の中の味噌が漏れたら勿体ないじゃないか。

「俺も在庫が尽きたら、フィリップ公爵領から輸入しなければいけないから当然だ」

「新しい特産品になるかな？」

「定期的に獲れればな」

ところが、あの巨大蟹の群れは偶然南下したようで、フィリップ公爵家が巨大蟹の住処まで漁に出かけられるようになるまで、まだ数十年も先の話であった。

「いやあ、あの蟹は美味かったな」

「そうだな、エル」

「お館様、今日はアキラが自作したドラ焼きを持ってきました」

「いいね。お茶と一緒にみんなで食べようか」

蟹料理を振る舞う会が終わり、色々と忙しいペーターとアルフォンス達は帝国へと戻って行った。

家族だけで食後の団欒をすごしていると、突然魔導通信機の着信音が鳴る。

慌てて出ると、通信相手はヴァルド殿下であった。

『ヴェンデリン！　なぜ誘ってくれぬのだ？』

「はい？」

『今日、ペーター殿、アルフォンス殿と君が狩った獲物の料理を食べた事は聞いているぞ』

「はあ……」

さすがは、次の国王陛下。

だが、ヴァルド殿下にはうるさい家臣が多い。

得体の知れない巨大な蟹の料理なんて、彼らが認めるわけがないのだ。

ペーターとアルフォンスには自己責任だと言ってあるし、二人はそれを認めて食事会に参加している。
お互いに信用もあるし、うちは魔法使いが多いから万が一誰かが毒を入れてもすぐに気がつき、エリーゼがいるから解毒も可能であった。

巨大な蟹を食べる会で、出席者の中で最上位に近いヴァルド殿下が蟹を食べられなければ場がシラけるので、自然と招待はしない方向になったわけだ。

「殿下をご招待しても、お出しできるものがありません」

『それは……』

「というわけですので、今回は仕方がなかったものと」

『……次は、誘ってくれよ。何しろ私達は、友人同士でこれから親戚同士になるのだからな』

最後にそういうと、殿下は魔導携帯通信機を切った。

「何かさぁ、面倒な人じゃねえ？」

「そうだな」

エルの不敬な指摘に、俺も、エリーゼですら首を縦に振るのであった。

第百五十六話　バカとインコ。

併合したアキツシマ島と南方諸島以南の領域と、今もバウマイスター辺境伯領本領の開発も順調に進めており、それに隣接するブライヒレーダー辺境伯領も好景気に沸いていた。
西部における魔族との緊張関係と、一向に進まない交易交渉などの問題はあったが、交渉は続いているので軍事的な驚異は逆に低下している。

魔族の軍人には冷静な者が多く、暴発の危険も少なかった。
それよりも、魔族側は足手纏いの青年軍属の数を増やしてしまい、魔族の軍人達は彼らの管理で忙しいようだ。

誰が見ても青年軍属達は足手纏いなのだが、もう用事がないからと放逐もできない。
彼らを無職に戻してしまうと、失業率が悪化して政府批判が強まるからだそうだ。

それに交渉はなかなか進まず、人間との緊迫関係がなくなったわけではない。
だが軍人の増強は事実上不可能であり、なら青年軍属でもいいかと、軍事に詳しくない政治家が数は戦力という考えに至る。
魔族は全員魔法使いだからあながち間違った考えでもない。
彼らに職があれば雇用統計もよくなるし、給金を出しているのだから彼らがお金を使えば景気もよくなるであろう。
あんな無人島で、貰った金をどう使うのかという疑問もなくはないが。

そんな理由で、テラハレス諸島には多くの魔族の若者達がいた。
させる事というか、任せられる仕事が少ないので、効率は無視して色々な建物などを作り始めた。
魔族側は、テラハレス諸島を人間と魔族との交流拠点にしたいらしい。
新聞などで、進歩的と言われている政治評論家やコメンテーターがそうインタビューに答えているとモール達が教えてくれた。

『魔族と人間による友好の懸け橋とか言っているね。度が過ぎた性善説を元にしたお花畑発言は彼らのお仕事だから。魔族も現実を直視するだけでは生きていけないから、ああいう手合いも必要なのかもね』

『それが元で戦争になったら本末転倒だけど、そうなったらそうなったで、彼らは戦争反対を声高に言うお仕事が増えるから』

『拗らせた中途半端なエリートはどうしようもないね』
モール達は相変わらず醒めており、同朋に辛辣だったが、間違った事は言っていない。

元々テハラレス諸島は、ホールミア辺境伯が領有権を主張している諸島だ。
勝手に色々と建てられてしまって、気分がいいはずがない。
領地を魔族に奪われたままなので、寄子や他の貴族達への面子の問題もある。

ホールミア辺境伯は反発を強めているが、かといって単独での諸島奪還は不可能であった。
交渉が続いている以上は王国軍も事を荒立てないし、ならば他の貴族も援軍を出す事はないであろう。

それに、大軍を維持し続けると経費の問題が出てくる。
それでも軍勢で圧力をかけながら奪われた領地を返せと文句を言い続ける必要はあり、ホールミア辺境伯は資金繰りに四苦八苦していると噂になっていた。

そんな複雑な情勢ではあるのだが、人間とは慣れる生き物だ。
次第に西部以外の領域は普段と変わらない生活に戻っていった。
どうやら戦争にはならないようだとわかると、みんな遠い西部の事など気にしなくなってしまったのだ。

俺達も南部も開発で忙しいので、西部の事などあまり気にかけなくなっている。
そんな状態なので、今日の俺は久々にブライヒブルクに顔を出していた。

開発の手伝いをしてもらっているし、俺が辺境伯に陞爵したのでその説明などもある。
彼の娘フィリーネは婚約者なので、定期的にその顔を見に行って仲がいい事を周囲にアピールもしないといけない。
政略結婚であるが、彼女が成人するまで無視するわけにもいかない。
何とも貴族らしい行動で、自然にそういう風に振る舞う俺も貴族生活に慣れたものだ。

幸い、彼女は内乱の時に長期間一緒にいたのでエリーゼ達とも仲がよかった。
俺も好かれていたので、フィリーネは顔を合せると陞爵したお祝いを述べてくれた。

「ヴェンデリン様、辺境伯への陞爵おめでとうございます」

「ありがとう、フィリーネ」

フィリーネがお祝いを述べてくれたので、俺は笑顔でお礼を述べた。

「何か妙な事になりましたね」

「そうですね」

この人事の変な部分は、俺もブライヒレーダー辺境伯も爵位は同じなのに、俺が寄子なのは変わらないという部分だ。

俺達でも少し違和感があるのに、外野が変だと思わないはずがない。

「予想どおりでしたが、王国はこうやって地味に手を打ってきますね」

「やはり、離間の策ですか？」

「そこまで露骨じゃないですけどね。我々が死んでから、王国は国土の管理区分を変えるのかもしれません」

王国は確定したバウマイスター辺境伯領の南部を探索する予定なので、もし大陸や島があったら入植させるつもりであろう。

王国自身も力を増しつつ、ブライヒレーダー辺境伯家を中南部担当、バウマイスター辺境伯家を南部担当にして、管理区分を切り離して両者が必要以上に親密になるのを防ぐ。

俺とブライヒレーダー辺境伯が存命の頃は不可能だが、代を経る

と両者に溝ができる可能性が高かった。
王国は、随分と長い目で貴族の管理を行っているようだ。

「なるべく今のような親密な関係でいきたいですけどね。先の事は誰にもわからないのですが。今は、フィリーネもバウマイスター辺境伯に嫁ぎますからね」

ただ、彼女は母親の身分が低いので、奥さんとしての序列はさほど高くない。
それに、貴族の血縁関係は一代か二代でリセットされる。

百年後、ブライヒレーダー辺境伯家とバウマイスター辺境伯家が紛争をなんて未来もあるかもしれなかったが、今に時点でそれを心配しても意味がない。

「ヴェンデリン様、お茶をお淹れしました」

「ありがとう、フィリーネ」

フィリーネはブライヒレーダー辺境伯家の娘となり、今はそれなりの教育も受けているそうだ。
実質花嫁修業であったが、少し前まで平民の娘としても生活し家事なども手伝っており、お茶なども上手く淹れられる。
早速ひと口飲むが、その腕前はエリーゼと遜色なかった。

「フィリーネはお茶を淹れるのが上手だな」

「ありがとうございます、ヴェンデリン様」

そう言いながら、にこやかに笑うフィリーネのおかげで場が和んだ。

ただ一つ勘弁してほしいと思ったのは、フィリーネはマナーに従って最初俺にお茶を出したのに、ブライヒレーダー辺境伯があからさまに不満そうな顔をした事だ。

可愛い一人娘が、父親である自分以外の男に先にお茶を出した件が気に入らないのであろう。

すぐに彼の表情を見た奥さんがひじ打ちをして、元の表情に戻っている。

「お土産があるから一緒に食べようか？」

「はい」

屋敷で作らせた魔の森産のフルールを使ったケーキを持参していたので、フィリーネも加わってオヤツの時間となった。

「随分と領地が広がりましたね」

「海の方が多いですけどね」

一番大きな島はアキツシマ島で、二番目に大きいのが、ルルがいた魔物の領域だらけの島。

他にも百を超える無人島があったが、数百人も住めば一杯になってしまうような島ばかりだ。

もっと小さな無人島も入れれば数百は超えると思うが、開発の効率は悪いと思う。

何しろ、海には大量の海竜がいるのだから。

「退治できませんか？」

「数が多すぎるのですよ」

現在も手が空いているアキツシマ島の魔法使い達が討伐を行っているが、中級以下の彼らではさほど成果が出ない。
下手に頑張らせすぎると犠牲者が出てしまう。
魔法使いは貴重なので死なせるわけにいかず、海竜退治を慎重にすればするほど効率は落ちてしまうのだ。
開発が最優先のため、暫く海路は使わない方がいいであろう。

「幸い、魔導飛行船も確保できていますから」

バウマイスター辺境伯領本領各地と、島々を結ぶ定期航路はこれからも増強する予定だ。
船員の教育には時間がかかるが、これは時間が解決してくれるはず。

「それはよかったですね。うちも好景気で万々歳ですよ。隣の小領主達も最近は大人しいですね」

ブライヒレーダー辺境伯領の隣には、多くの小領主達の領地が集まったエリアがある。
当主が代わると自分の力を領民や家臣に見せつけるためであろう、係争事案がある隣の領主と紛争を起こすケースが多かった。
紛争に至らなくても、寄親であるブライヒレーダー辺境伯に裁定を頼む貴族も多い。
さらに凄いのが、ブライヒレーダー辺境伯家に紛争を仕掛ける貴族もいるらしい。
『〇〇家の新当主たる私は、寄親であるブライヒレーダー辺境伯家にも怖気づく事はないのだ！』と、領民達に強い領主をアピールするわけだ。
この辺の考え方は、地球のヤクザやマフィアとそう変わらない。

毎度巻き込まれるブライヒレーダー辺境伯家当主が不幸であった。
寄親の一番面倒な仕事らしいが、頻度は少し下がったそうだ。

「酷い理由で紛争が起こるのですね」

「我が家は、代々こんな連中の相手をしているのですよ。バウマイスター辺境伯家がブライヒレーダー辺境伯家の寄子を続けるという奇妙な状態をどうして王国すら認めているのかといえば、バウマイスター辺境伯家が独立すると、この連中が新たな活動を始めるわけです」

『バウマイスター辺境伯家の寄子になるので、ブライヒレーダー辺境伯家が自分達に下した不利な裁定を改善してください』とか言い出しかねない。
少しでも自分達に有利になるのなら、これまでブライヒレーダー辺境伯家から受けた恩すら仇で返すかもしれないというわけだ。

「地方の小領主なんて、みんなが思っているほど裕福ではありませんしね。収入が入っても、すぐに経費で飛んでいきますし。少しでも利益を得ようと必死なのですよ」

事情は理解できるが、まだ貴族として経験の浅いバウマイスター辺境伯家が彼らの利害調整なんてできないので、下手をすると南部が混乱してしまうかもしれない。
そうなれば王国も損をするので、うちがブライヒレーダー辺境伯家の寄子のままでいても何も言わないわけだ。
あと百年も経てば、話は別なのであろうが。

「今はこれでも落ち着いていますよ。バウマイスター辺境伯領への

出稼ぎに、開発に必要な物資の販売で潤っていますからね。猫の額のような土地を争う暇があったら、仕事でもした方が金になりますからね」

金持ち喧嘩せず。

金持ちとまではいかないが、好景気なので紛争する暇がないというわけだ。

「開発特需が終われば、元の木阿弥かもしれませんが」

かもしれないが、そう簡単に開発が終わるはずもない。

何しろ、俺は今物凄く忙しいのだから。

俺が忙しいという事は、それに大規模な開発が不随するわけだ。

ローデリヒに言わせると、俺が一年三百六十五日、二十四時間ずっと働いてもらっても構わない、できればそれが理想だと怖い事を言っていた。

勿論物理的に不可能なので、ローデリヒが微ブラック程度にスケジュールを組んでいた。

先に厳しい発言で俺を脅し、次にちょっと忙しい日程を俺に提案する。

すると不思議な事に、俺は結構楽なスケジュールなのではないかと錯覚してしまうわけだ。

俺は、ローデリヒによって完全にコントロールされていた。

「魔族についても心配したのですが。あの様子だと数年は動かないですね」

「双方の利害関係の調整はそう簡単に終わらないでしょう」

「魔道具ギルドも、後継者争いで揉めていますからね」

魔族から魔道具を輸入してしまうと、ヘルムート王国の魔道具職人が失業してしまう。
帝国の魔道具ギルドとも組み、彼らは魔道具輸入の断固阻止を目論んでいた。
なまじ金も力もある組織なので、見事に交渉の足を引っ張っているわけだ。

先日、強権を駆使していた会長が亡くなったのもよくなかった。
これに次期会長人事の争いも加わり、残念ながら交渉が進む事はないであろう。

テハラレス諸島に建設された建物の中で、魔族、王国、帝国の代表者達が、何も進まない交渉に辟易しているのが目に浮かぶ。

「どうせ誰を投入しても交渉が進むわけがなく、むしろ魔道具ギルドを敵に回す危険もありますからね。誰も交渉を進めません」

帝国もそれは同じで、みんな魔道具ギルドから恨まれたくないので、適当に時間を潰しているという状態であった。
俺もそこに加わろうとは思わない。
他にやる事がいくらでもあり、現状で何も困っていないからだ。

アキツシマ島には魔王様から中古魔道具を輸入して開発を進めていたが、あの島は暫く部外者が誰も入れない。
もし見つかっても、古い魔道具なので発掘品だと言って誤魔化す予定であった。

「バウマイスター辺境伯は、異民族対策で忙しいようですね。ですが、私の可愛い娘であるフィリーネに会いに来ていただかないと」

そうする事で、周囲にバウマイスター辺境伯家とブライヒレーダー辺境伯家との関係が良好な事を知らせる。
王国政府による分断策に対抗するわけだ。

「ところで小耳に挟んだのですが、バウマイスター辺境伯は併合したアキツシマ島の有力者の娘を嫁に迎えるそうで？」

「有力者本人です」

「本人なのですか？」

「ええ」

秋津洲家も細川家も、本家一族の生き残りが涼子と雪だけとなったため、例外的に家督を継いでいる。
二人は独身なので、バウマイスター辺境伯家がアキツシマ島の支配力を強めるためには、二人がバウマイスター辺境伯家の血を継ぐ子を産み、その子がアキツシマ島の代官、副代官になればいい。
つまり、俺が二人を娶るわけだ。

「ううううっ……。仕方がありません……」

生まれながらの大貴族であるブライヒレーダー辺境伯は、俺がそうせざるを得ない事を誰よりも理解していた。
ところが可愛い娘の父親としては、これ以上俺に嫁が増えるとフィリーネが蔑ろにされるのではないかと心配しているわけだ。

「聞けば、元名門有力領主の娘と、他の島の村長も娶るとか？」

「あの二人は……」

まだ五歳である二人なので、正式にそう決まっているわけではない。

今は子供なので、保護しているだけであった。

二人とも年齢以上に大人びており、俺の嫁になる気マンマンで、アグネス達が危機感を募らせていた。

「弟子の三人もそうですよね？　あの娘達は、年齢的にそう先の話でもないですよね？」

「はい……」

アグネスは既に成人しており、ベッティは来年、シンディは再来年成人してしまう。

三人に関しては、ローデリヒが開発で役に立つので絶対にと釘を差されていた。

以上のように、俺がブライヒレーダー辺境伯でも心配してしまう状態なのだ。

別に、俺が望んでこうなったわけではなく、人生何があるかわからないというわけだ。

「ヴェンデリン様は凄いですね」

「凄いのかな？」

「はい、お父様のお本に沢山奥さんがいる貴族様のお話がありました」

「ブライヒレーダー辺境伯……」

あんた、娘に何を見せているのだ？

「旦那様！」

「いいお話なんですよ」

ブライヒレーダー辺境伯は俺に続き、奥さんにも怒られていた。

あらすじだけ聞くと、女の子が読むお話じゃないよな。

「お父様。フィリーネは、例えヴェンデリン様に奥さんが何人いても、仲良くできると思います」

「そうですよね。フィリーネは私の娘なのですから！」

ここでまた、ブライヒレーダー辺境伯の親バカ発言が飛び出した。

とはいえ、俺もあまり心配ないと思っている。

何しろフィリーネは、あの導師と友達になれてしまうほど博愛精神に満ち、肝も据わっているのだから。

「ですので、私も早めにヴェンデリン様のお屋敷に住まわせていただこうかと」

婚約者として、事前に俺の屋敷に住んでしまう。

実はこの手法、エリーゼもホーエンハイム枢機卿の指示で行っている。

イーナとルイーゼもそうで、王都屋敷で二年半以上も一緒に住み、おかげで三人を俺の妻だとすべての貴族が理解した。

他の虫がつかないようにする、非常に効果的な作戦なのだ。

「いけません！」

「なぜです？　旦那様」

フィリーネが今から俺の屋敷に住むというと、ブライヒレーダー辺境伯が全力で反対した。

とてもいい策だと思っていた奥さんも首を傾げている。

「まだ教育が終わってしませんし……」

「それは、向こうのお屋敷でやらせればいいじゃないですか。家庭教師と教育係なら、うちから送り出せばいいのです」

フィリーネは未成年であり、十歳頃まで平民として暮らしていた。そのせいで色々と教育されているのだが、別にブライヒブルクでやらなくても、バウルブルクでやっても結果は同じであろう。

ブライヒレーダー辺境伯家が、そんな金すらないとはあり得ない。

フィリーネが俺に嫁ぐという事を世間に知らしめるには、とても効率のいい方法なのだ。

特に奥さんは賛成のようだ。

「いえ、いえ、いえ！　駄目です！　フィリーネは成人するまで私と暮らすのです！」

「旦那様……」

ブライヒレーダー辺境伯は、ようやく一緒に暮らすようになったフィリーネをまだ手放したくない。

彼女がいなくなると寂しくなるので、成人後嫁ぐ時にすればいいのだと断固反対し、それに気がついた奥さんが頭を抱えていた。

「フィリーネがバウルブルクのお屋敷で住むようになれば、他の貴族のちょっかいも防げます！」

一緒に住んでいしまっているため、ここで婚約破棄になる事は滅多にない。

二人の関係を世間に知らせるには最適な手なのだ。

「フィリーネ、バウマイスター辺境伯様のお屋敷で住むのは嫌ですか？」

「いいえ、お義母様。エリーゼ様達がいるので寂しくありません」

あの村から保護してきたフィリーネは、エリーゼ達とも仲良くやっていた。

一緒にいられるのは楽しいと答える。

「そうですか。あなた、フィリーネがそう言っていますよ」

「フィリーネ、お父さんと暮らすのが嫌ですか？」

「いいえ、お父様と暮らすのは楽しいです。お父様もお義母様も大好きですから」

「フィリーネぇーーー！」

フィリーネに好きだと言われたブライヒレーダー辺境伯は、何か用事を仰せつかった時のため部屋の隅で待機していたにいるメイド

達が引くほど喜び、感極まって泣いていた。

「フィリーネにそう言ってもらえると嬉しいですけど、私達は貴族なのです。時に、エリーゼさんと同じ事をする必要もあるのですよ」

フィリーネが俺に嫁ぐのは決定事項。

そういう風に世間に思わせたいわけだ。

「待ってください！　要は、フィリーネは絶対バウマイスター辺境伯家に嫁ぐと周囲が思えばいいのですよね？」

「そうですね」

「ならば簡単です！　今度のバウマイスター辺境伯の昇爵お祝いのパーティー。ここで、バウマイスター辺境伯がフィリーネをエスコートすればいいのです」

そういえば、そんな行事の準備をローデリヒがしていたような……。

いざ出席となると面倒そうだなと思ってしまった。

「まあ、その方法ならば……」

「フィリーネは、バウマイスター辺境伯の婚約者としてパーティーでエスコートされるのですよ」

「お父様、ブライヒレーダー辺境伯家の娘として恥ずかしくないよう、今からちゃんとお勉強をします」

「さすがは私の娘です！」

再び感極まって泣き始めるブライヒレーダー辺境伯。
俺が思うに、ブライヒレーダー辺境伯が親バカなのもあるが、きっとあの叔母上にフィリーネの爪の垢でも飲ませたいと思っているのかもしれない。
俺からは、絶対に口には出せない本音であったが。

開発が進むアキツシマ島であったが、夏休み中の魔王様は遊び、時々仕事の日々を送っていた。

「藤子、九九は覚えたか？」

「何とかな。ろくしち四十三」

「４２だぞ、藤子」

「しちは五十六」

「うーーーん、九九はルルの方が覚えも早いな」

魔王様は、藤子とルルと遊んだり、簡単な計算や漢字などを教えるようになっていた。
既に夏休みの宿題も終わり、遊んでばかりいるのも何なので、二人に勉強を教えていたのだ。

モール達は仕入れた魔道具の配置、使い方の指導、簡単な修理、農業指導で忙しく、島中を飛び回っていた。

元々魔力がある魔族には、飛べる資質がある者も多い。

今は近代的な生活の影響で、わざわざ『飛翔』を習う者は少ないそうだが、ちょっと訓練すれば簡単に飛べるようになる。

彼らは結婚する予定なので、今のうちに出張手当で稼いでおきたいと、今までの無職ぶりが嘘のように真面目に働いていた。

アキツシマ島のあちこちを魔法で飛び回っている。

「バウマイスター辺境伯か。陞爵めでたいではないか」

「大変なだけのような気もする」

「まあ、貴族が大変なのはいつの世も同じだ。余も昔の王であれば忙しかったであろう」

今の魔王様は小学生なので、夏休みの宿題が終わればそうでもなかった。

藤子とルルの他にも、領主階級の子供達と遊んだりしている。

この島の人間は一万年以上も鎖国をしていたようなものなのに、魔王様を始めとする魔族にあまり抵抗を感じていなかった。

そういえば俺達もそうであったが、雪と唯に聞くと、この島の住民はみんな実力がある魔法使いに敬意を払うものらしい。

『特に、お館様達は井戸を掘りました。敬意を受けて当然です』

黒硬石の岩盤に、魔法使いの魔力が中級以下となった時点で、この島の住民は自力で井戸を掘れなくなった。

そこに外部からとはいえ、井戸が掘れる俺達が現れた。
魔王様は俺以上の魔力を持っているし、モール達は中級レベルだが、多くの魔道具を持参し、積極的に指導を行って住民達の尊敬を受けていた。

あまり魔族だからとか、そういう事は思っていないらしい。
この辺の柔軟さは、リンガイア大陸の人間も見習った方がいいと思う。

魔族の国ではゴミ、ガラクタ扱いの魔道具でも、それ以外の場所では物凄く役に立つ。
向こうでは毎年のように新製品が出ており、古い魔道具など見向きもされないそうだ。
ゴミとして捨てるにも処理費用が必要で、中には人気のない山などに勝手に古い魔道具を捨ててしまう者もいるらしい。

優秀な宰相であるライラさんはこれらの品を安く手に入れ、魔法の袋に入れてこちらに流していた。
それを使っての開発は順調に進んでおり、島は農地が増え、道も広く整備され、新しい村や町の建設も進んでいる。

作物の種も、ライラさんが古い品種や園芸用のものを大量に準備してくれた。
魔族の国では作っても金にならないそうだが、アキツシマ島の従来種よりは圧倒的に収量も味もいい。

実は、バウマイスター辺境伯でも実験栽培している。
地下遺跡で見つかった種と合わせて実験農場で栽培をおこなって農家に配る種を生産、他にも品種改良なども進めていた。

交易の船も最低週に二度は来るようになり、戦がなくなって力があり余っている者達は、導師とブランタークさんに指導されて周辺海域に大量にいる海竜の討伐、ルルがいた島にある魔物の領域で冒険者稼業に精を出すようになった。

その成果により彼らは報酬を手に入れ、その金を元に商売をしたり農地を開墾したりしている名族が増えている。

彼らは領主ではなくなったが、バウマイスター辺境伯家の陪臣となり、親族に商売や開墾をさせて元領主家に相応しい収入を得られるようになった。

領地が細切れでなくなったので開発も効率よく進み、島は急速に発展している。

このまま人口が増えれば、将来は周辺にある中小の無人島に移民を行う予定となっていた。

時が経てば、バウマイスター辺境伯本領への移民もできるであろう。

「ようやくこの地は落ち着きを取り戻しつつあるようだ。バウマイスター辺境伯の功績だな」

「犠牲がほとんど出なかったからでしょう」

魔王様が俺を褒めてくれたが、上手くいったのは偶然の要素も強いと思う。

もし統一の過程で多くの犠牲が出ていたら、俺達はこの島の住民達から怖れられていたかもしれない。

「バウマイスター辺境伯よりも、むしろ身内の三人の方が凶悪だったからな」

魔王様は、織田信長、武田信玄、上杉謙信のＤＱＮ三人衆の事を言っているのだと思う。
彼女達は家督争い、ルール無視の本気の戦、領地の争奪戦で、島の住民達に非難される身となってしまった。

今はその贖罪として、海竜退治と魔物の領域討伐に専念している。
血の気が多いみたいなので、あの三人には常に敵がいた方がいいであろう。

「随分とバウマイスター辺境伯に執心なようだがな」

俺が三人よりも強い魔法使いなので、俺との子が産まれれば強力な魔法使いが誕生し、織田家は島でも有力な陪臣になれると野心を燃やしているそうだ。
顔やスタイルは悪くないが、如何せんあの性格なので俺は勘弁してほしいと思う。

それにだ。
あの三人を嫁にしたら、他の領主達が『じゃあ自分の娘も！』と言い出しかねない。
涼子、雪、藤子が産んだ子と、有力領主の子弟が縁戚関係となる。

こうした方がいいと言ったのは、ローデリヒであった。

『お館様の血は貴種。だから最初の婚姻は、少ない家だけの方がかえって好都合なのです』

バウマイスター辺境伯家と婚姻関係を結べた秋津洲家と細川家は、特別というわけだ。

藤子はどうなのであろうか？
あとは、唯さんもか。

これはあとで考えよう。

「あの三人は、義智あたりがちょうどいい」

最後まで俺に挑戦してきた宋義智も、今のままでは俺に勝てぬと導師に師事し、海竜の討伐など、実戦も兼ねた修行の日々を送っている。
お互い暑苦しい同士だし、義智とＤＱＮ三人娘が結婚すればいいのだ。

「そうなると、産まれてきた子供もバウマイスター辺境伯に挑んでくるかもしれぬな」

ＤＱＮのエリート家系ってわけか。
子供にとって家族の影響は大だから、血の気が多い子供が育ってしまうかもしれない。
だが、大丈夫であろう。

「フリードリヒ達が負けるはずないさ」

まだ赤ん坊のフリードリヒ達だが、きっと俺をも超える魔法使いになってくれるさ。
もう少し大きくなったら、基礎的な瞑想から教えてないといけない。
子供と魔法の修行か。
とても楽しみだな。

「子供か。余も、いつか婿を迎えて次代の王を産まねばならぬ。まだ大分先だがな」

あの現代日本風の魔族社会で、魔王の婿になる人っているのであろうか？

それだけは疑問に思ってしまう。

「ライラさんが男性だったらいいのにね」

「余もそう思うな」

あれだけ優秀な人なら、魔王様のいい婿になったと思うのに。

「だが、今その手の話はライラにはしないでくれ」

「どうしてですか？」

「モール達の奴がなぁ……結婚は悪くないんだがな……」

魔王様の農業法人に就職したモール達は、最初綺麗で仕事もできるライラさんに惚れてちょっかいをかけていたらしい。

「ライラは優秀なんだが、ちょっと男女の機微に疎くてな。余を支えるため今まで恋人などもいた事がなく、その手の経験も少ないというか……」

つまり、美しく、仕事ができる喪女なのですね。

決して口には出さないけど。

「周囲は、ライラがモール達を冷たくあしらっていると思った。だ

が、付き合いが長い余から見ると、実は喜んでいたのだ。うん、余にはわかる」

女性の魔王様は、お子様でも男女の機微に聡いという利点があったのか。

それが何の役に立つのかと言われると困ってしまうのだが。

「ライラとしては、もっと追ってほしかったのだと思う」

俺もそうだが、恋愛経験が少ない人がそういう駆け引きをすると、あまりいい結果を得られないケースが多いというか……。

「モール達は脈ナシとみたら、他の若い女性社員を口説き始めてな」

あいつら、エリーゼ達を素直に可愛いと言って話しかけたり、人間に臆しなかったりと、意外と図太く度胸もあった。

その辺は、恩師であるアーネストとそっくりであった。

アーネストも、何だかんだ言いつつもあの三人を気に入っているようだ。

モール達は休みの日に、この島で学術調査をしているアーネストを無償で手伝ったりするようになっていたのだから。

「というわけでだ。ライラにその手の話はしないでくれ」

「わかりました」

ライラさんは仕事に生きる女性だと思っていたのだが、恋愛にも興味があったのか。

あれだけの美人が、今まで一度も男性と付き合った事がないって

のは凄いけど。

「ライラは美人なので、男性の方が尻込みする」

「そういうのはあるかもしれないですね」

とはいえ、前世の会社で美人だった人って大半は彼氏とかいたけどね。

ライラさんの何が駄目なのか、俺にはわからん。

「そういえば、明々後日にはキャンプに連れて行ってくれるそうだな」

「夏休みの思い出ですよ」

「絵日記には多少の改ざんが必要だがな」

魔王様達の活動は違法でないが脱法に近いので、魔王様の夏休みの絵日記には農業法人のみんなでキャンプに出かけたと改ざんされる予定であった。

実際にはアキツシマ島の開発が順調なので、アキツシマ組と魔王様、モール達を誘ってのキャンプとなる。

「藤子とルルも来るか。楽しみにしておるぞ」

「俺も楽しみにしていますよ」

モール達は、前世の日本人にメンタルが似手いて付き合いやすいからな。

「その前に、ひと仕事ありますけどね」

「あの連中のお供か？」

「あーーー、面倒だなぁ……」

「あんなのでも、臣下は臣下だ。飼い慣らすのも大切な仕事だと思うぞ」

「ですよねぇ……」

同意見だけど、魔王様も何気に酷い事を言うよな。

俺は小学生なのにしっかりしている魔王様に諭され、ある場所へと魔法で移動するのであった。

「バウマイスター伯爵っ！」

「辺境伯になったぞ」

「ならば辺境伯！　このぉーーー！　師匠により更に強者となった俺様の力おーーー！」

約束の時間に約束の場所に到着すると、突然バカが勝負を挑んできた。

このところ導師に預けていたため大人しかった、宋義智のバカである。

「我が竜巻を攻撃力に転換！　必殺『トルネードパンチ！』」

バカは、腕に小さな竜巻を纏わせながら俺に殴りかかってきた。
いきなり巨大な竜巻を出して周囲に迷惑をかけない点だけは進歩したようだ。

それでも、いきなり主君に攻撃を仕掛けるのだから相変わらずとも言える。

「足元が留守だ」

「ふげぇ！」

時間が惜しいので、俺は魔法で手前に落とし穴を掘った。
何も考えずに突進してきた義智はそれに嵌り、これにて彼の敗北が決定する。

「お前はアホか！」

「どこの世界に、お館様にいきなり勝負を挑む家臣がいるのだ！」

「困った男だ」

そして、落とし穴に頭から突っ込んだ義智の非常識さを非難する。
織田信長、武田信玄、上杉謙信のＤＱＮ三人組。
こいつらは、義智よりはマシ……。

「もしお館様に何かがあったら、私と子作りができなくなるではないか！」

「そんなに勝負したかったら、その辺の海竜とでも盛っていなさい！　私は、お館様といい感じになりますので」

「ガサツなのと、チビの貧相な体で、お館様の食指が動くものか。この私こそが」

訂正する。
この三人は相変わらずだ。
導師め！
今日は忙しいからという理由で、俺にこんなのを押しつけて。
いっそ、お休みにしてしまえばよかったのに。

「うわぁ……。最悪」

「エル、何を他人事みたいに言ってくれているのかな？　今日はお前も同行するんだぞ」

「畜生！　クジ引きで負けなければ！」

「クジ引きなんてしたのか？」

なあ、エル。
なぜ俺はクジ引きに誘われないで強制参加なんだよ？

「ヴェルがいないと、こいつらうるさいから。逆にいうと、ヴェルがいれば問題なし」

俺は鎮静剤か何かか！

「あーーーあ。あたい、普段はそんなにクジ運悪くないんだけどなぁ……」

「たまにはそういう事もある。こういうのは、カタリーナが当たりやすい」

「確かに。あいつ、旦那と同じくらいクジ運ないよな」

エルと共に同行する予定のカチヤとヴィルマも、あからさまに貧乏クジを引いたという顔をしていた。

俺も同じ気持ちなのに、俺には同行を避ける選択肢すらなかったのだが。

「しゃあない。あたい達は初めての場所だ。何か新しいものでも見つかればいいな」

「美味しい物があると嬉しい」

今日は、普段導師が引率している一番の問題児宋義智と、ＤＱＮ三人組がちゃんと魔物を狩れるか確認をしつつ、ルルを保護してから他人任せだったこの島の魔物の領域の確認を行う予定だ。

メンバーは、俺、エル、カチヤ、ヴィルマ、宋義智、ＤＱＮ三人組。

半分が実力はともかく、人間性、協調性の面で役に立たないどころか最悪足を引っ張るものと思われる。

導師でなければ、この野獣の群れは統率できないと俺は思うのだ。

現に、ブランタークさんに同行をお願いしたら今日は腹痛になった。
誰が見ても仮病である。
そのくらい、この四人は酷いという事だ。

早速義智が俺に勝負を挑み、瞬殺されて砂浜に魔法で掘った落とし穴から某八墓村みたいに足を出しており、ＤＱＮ三人組は俺に迫る手段を考えていた。
これは酷いとしかいいようがない。

「ヴェル様、今日は適当にお茶を濁す」

「そうだな」

「無理をして奥に行くと死ぬかも」

魔物の領域なのに仲間割れくらい平気でしそうだからな。
入り口付近で適当に狩らせておくか。

「じゃあ、出発」

「なあ、旦那」

「何か忘れ物か？」

「あれ、助けないでいいのか？」

「……バウマイスター辺境伯！　この永遠のライバル宋義智を助けないと、人生の後半で色々と後悔するぞ！」

やっぱり、こいつ腹立つ。
魔物の領域で死んだ事にしても、俺は批判されないかもしれない。

「助けて、お館様」

と思ったら、急に口調が変わった。
仕方なしに引き上げてやったが、俺達は魔物の領域に入る前に精神的に疲れてしまうのであった。

「生息する魔物、採集物は本領南端の魔の森とそう差はないか」

「そうみたい」

「となると、距離の関係でアキツシマ島以外の冒険者が集まらないかもな」

早速魔物の領域に入って魔物や採集物の確認を行うが、気候が似ているせいか本領南端にある魔の森とそう変わらない。
魔物は手強いが、それは先行している義智とＤＱＮ三人組が次々と倒した。

さすがは血の気が多い四人である。

「さすがにこの状態で同士討ちはないか」

カチヤが心配するのもわかるが、よくよく考えてみるとこいつら

は野心と欲がある。
魔物の巣で無駄な争いをして自爆などしないのであろう。
ちゃんと四人で連携して獲物を獲っている。
導師の教育が役に立っているようだ。

「ヴェル様、果物一杯」

「ここもか」

果物もやはり非常に大きかった。
ヴィルマは喜んで採取し、カチヤは図鑑と見比べている。

「結構魔物が強いから、血の気を抜くのにちょうどいい」

「確かにそうだ」

アキツシマ島が統一され、治安維持用の警備隊を運用する以外の人員はすべてリストラとなった。
兵力の九割以上は徴兵された領民だったので、彼らは農作業や開発の手伝い、自ら農地を開拓して大農家を目指す者もいた。
領主一族やその家臣の親族などは、バウマイスター辺境伯家で陪臣になったり、実家や本家の事業を手伝ったりする者が大半であった。

残りはそういう仕事が性に合わないという連中で、彼らは冒険者となって魔物の領域で狩りと採集をしている。
ルルがいた島ではアキツシマ島出身者に優先権を与え、どうせ他のみんなは本領にある魔の森に集中したので問題にならなかった。

距離が遠いのに得られる物に差がないのだから、来なくて当然であろう。
それでも、ルル達が住んでいた村の跡地に木造ながらも宿場町ができ、多くの冒険者が利用している。
彼らは数か月島で稼ぎ、長期休みでアキツシマ島に戻るという生活を送る予定だ。

色々とやらかしている四人はどうせ島に戻っても歓迎されないので、この島を生活の拠点にしている。

「ははははっ！　やっぱり俺様最高！」

「ここで凄腕冒険者となって、お館様に夜に呼ばれ」

「あんたみたいなガサツな女、お館様は死んでも嫌でしょう」

「信玄みたいなチビでは、どうにもならん」

「やれやれ、駄目な女同士醜い言い争いが絶えないな」

「「戦狂いには言われたくない！」」

連携はちゃんとできていたが、四人が急に仲良くなるはずもない。
それぞれ好き勝手に言い争っている。

「ヴェル様、聞こえないフリ」

「ヴェル、それが一番安全だと思うぜ」

「あたいもそう思う」

俺達は四人で警戒しつつ、連中はあまり見ない事にし、果物などの採集を行った。

「お館様」

「どうかしたか？」

数時間後、大分成果があがったところで、織田信長が俺に声をかけてきた。

「実は、ある地点で数名の冒険者が行方不明になっております」

「焦って奥まで行きすぎたのでは？」

「それはありません。入り口付近でも十分成果は出ますから」

この魔物の領域も、魔の森並の密度と回復力を誇る。

それに、リストラされた兵士や武将は強かったが、全員が魔法使いではない。

無理に奥に向かう者はいなかった。

血の気は多いが、その辺はちゃんと弁えている者が多いのだ。

「その場所に、何かがあると？」

「そう思います」

「竜かな？」

そこそこ強い冒険者数名が殺されてしまった。

多勢に無勢だったとか、思わぬ奇襲を受けたとか、それ以外だとそこに強い魔物がいたとしか思えない。

「様子だけ見に行くか」

「大丈夫か？　ヴェル」

「大丈夫だよ」

俺達も初心者ではなくなっているし、『探知』しながら魔物の強さは測れる。
もし強そうなら逃げてしまえばいいのだ。

「俺が大丈夫かって言っているのは、あの連中なんだが……」

エルは、四人が無茶をしないかと心配していたのだ。

「ふふふっ、ここで最良の進言。お館様の気持ちは、この織田信長に向いたな」

「その程度の進言、誰でもできます」

「うるさいな、チビ」

「言いましたね。ガサツ女の癖に」

「相変わらず不毛な言い争いだ。ここでその新しい魔物とやらを討ち、お館様に献上すれば、私が夜に伽に呼ばれるであろう」

「「それはないな」」

「何だとぉ！」

ＤＱＮ三人組は、人目も憚らずに不毛な言い争いを続けていた。
というか、その俺に好かれるという妄想上のシナリオは何とかならないのであろうか？

「エル、貰ってやれば」

「いらないし、向こうが断るだろう。あいつらは、お前の血を引く子供を産んで、あの島での地位向上を狙っているんだから」

ＤＱＮ三人組は、そういう知恵は回って困ってしまう。
いっそ、当主命令で義智にでも押しつけてやろうか。

「毒は毒で制する？」

「ヴィルマ、お前、ぶっちゃけたな」

「最悪、あの四人が無茶をして死んだとしても、私達の責任じゃない」

「お前、本当にたまに凄い事を言うな」

ヴィルマの毒舌にカチヤは呆れていたが、それが間違っていると思う者は当事者四人意外には存在しなかった。

「うーーーん」

「旦那、どうだ？」

「魔物の反応はちょっと多いけど、そこまで強くないはずだ」

信長に言われた殉職者多発エリアに向かうが、『探知』で探っても特に強い魔物の反応はなかった。

他のエリアとそう魔物の強さに差はないはず。

強いていえば、少し魔物の数が多いくらいか。

「そろそろ、そのエリアに入るぞ」

「ヴェル様、綺麗」

「はい？」

ヴィルマが指差した魔物を見ると、それはとても大きなインコであった。

赤、ピンク、オレンジ、黄色、緑、青、紫など。

鮮やかな原色の羽を持ち、あちこちの木に停まっている。

「綺麗な鳥だな。でも、襲ってこないのな」

エルは、沢山いるインコがまったく襲ってこない事に違和感を覚えていた。

インコは間違いなく魔物だが、人間を見ても襲ってこない。

あちこちの木に停まって、たまにその辺の果物を食べている。

「餌が豊富だから、闘争本能が薄いのかもしれない」

「無理に他者を襲う必要がないのか」

エルは警戒を緩めていなかったが、こちらがいくら身構えてもインコは襲ってこなかった。

インコは前世、ペットショップで見た事がある。

種類によっては大きく、長生きもするそうだ。

このエリアにいるインコは、小さくても全高二～三メートル。

大きな個体は全高五メートルほどあるはずだ。

インコでも魔物なので、異常に大きいのであろう。

だが、俺達を見ても一匹も襲ってこない。

それよりも、果物を食べる方が重要なようだ。

「拍子抜けだな。旦那。この鳥、えらく羽が綺麗だけど美味いのかな？」

「さあ？　カチヤ、それよりも羽の価値を気にした方がいいかもな」

この世界では、インコという生物は今まで存在していなかったようだ。

少なくとも、俺は今まで見た事がない。

となると、こいつは新発見なのであろうか？

ただ、食えるかどうかはわからない。

魔の森の魔物で美味しく食べられないものはいないから、多分大丈夫だと思うけど。

「一つ懸念があるな」

「こっちが攻撃すると、向こうが襲ってくるかもしれない」

「だよなぁ」

もしそうなって、しかもこのエリアにいるインコすべてが襲い掛かってきたとしたら？

冒険者が死んだのは、こいつらに手を出したからだと考えると不自然じゃないんだよな。

「ここは手を出さず、大人数で狩った方が安全だよな？」

「それがいいな」

「集団で襲われたら堪らないものな。あたいも、引き揚げに賛成」

「無駄な危険は犯さない」

エル、カチヤ、ヴィルマが俺の意見に賛成し、では引き揚げようかというその時。

目を離していたのがいけなかったのだが、空気も読まずにバカ四人がやらかしてくれた。

「ははははっ！　今まで誰も狩った事がない魔物か。弱いではないか！」

「これをお館様に献上し、夜の伽を……」

「信長、抜け駆けは許さないわ。私も狩ったわよ」

「お前らの小汚い体など、お館様は望んでおらぬ。ここは私が」

四人は導師によってさらに鍛えられた力を駆使し、それぞれ大きなインコをほぼ無傷で仕留めていた。

いきなりインコを狩るのは危険だから今日は止そうと決めたのに、こいつらは勝手にインコを狩ってしまったのだ。

「グェーーー！」

「「「グッグェーーー！」」」

「「「「「「「「「グッグェーーー！」」」」」」」」」

俺にはインコ語はわからないが、仲間を殺されたインコ達は食事や休憩をやめてグエグエ鳴きながら会話らしきものをしている。

俺には、『仲間を殺したこいつらをどうする？』『殺すに決まっているだろう』と会話しているようにしか思えなかった。

「お前らなぁ！　勝手に狩っているんじゃねえよ！」

カチヤはこう見えても、俺達よりも冒険者としては先輩だ。

勝手な行動をした四人に激怒した。

「弱い魔物じゃないか。心配するな。お館様よりも弱い女」

バカな義智は、カチヤの名前すら憶えていなかった。

「カチヤ殿、何事も先手必勝！」

「なるほど、先に獲物を狩られてしまった嫉妬なのですね。私がお

館様に寵愛を受けるであろうから」

「指示がなかったのでな。自主的に動いただけだ。私は戦でもそうだった」

「駄目だこりゃ」

この四人は、やはり色々と酷い。

平和なアキツシマ島には、できれば必要ない種類の人間のようだ。

「ヴェル、ヤバイぞ」

「みたいだな」

段々と、インコ達の鳴き声による会話が大きくなってきた。

更に、インコ達は徐々に殺気を増していく。

どうやら、仲間を殺した俺達を許すつもりはないようだ。

「ヴェル様、凄い数」

今ヴィルマに指摘されて気がついたが、このエリアにはインコしかいないようだ。

南国特有の巨大な木の枝に大量のインコが停まっており、その数はあちこちから次第に増えていく。

『探知』ではもう数が多すぎて正確な数がわからない。

いくら一匹では弱くても、あれだけ集まれば圧倒的な脅威となる。

「おや？　これは予想外だぁーーー！」

「予想外じゃねえよ！」

どこか無責任な義智に、エルが本気でキレた。

「お館様、これは危険です」

「臣下たる私は、お館様の慈悲に縋るべく……」

「こういう事は、戦と同じく水物なので」

これはまずい事をしたと、それに気がついた三人はすぐに俺に助けを求めてきた。

本当に、こいつらはいい性格をしている。

「魔物の領域の中だ。あくまでも自己責任で！」

逃げに徹すれば死にはすまいと、俺は四人に罰を与えるべくその場に放置して逃げた。

俺はエル達を呼び寄せ、すぐに『瞬間移動』で魔物の領域の外にある宿場町の入り口に逃げている。

「あいつら、人に迷惑かけやがって」

「旦那、あいつら死んだかな？」

「そんなタマか！　殺しても死ぬわけがない！」

「ああいうのはしぶとい」

俺とヴィルマの予想通り、一時間ほどして四人はインコの羽塗れになって魔物の領域から出てきた。

留まって戦っていたら死んでいたであろうが、その辺の選択は本能でできるらしい。
まさに、殺しても死なないのがこの四人というわけだ。

「旦那、インコの死体は？」

「一応あるけどね……」

一応、インコの死体は持って帰ってきたが、この島の宿場町にも支部を出した冒険者ギルド職員の鑑定により、さほど価値がない事が判明した。
果物ばかり食べているので肉は癖がなくて美味であったが、羽は衣服や装飾品の材料にしかならない。
一匹でも攻撃するとそのエリアにいる群れが全力で攻撃してくる事を考えると、まったく割の合わない獲物として無視されるようになってしまうのであった。

「次こそは、バウマイスター辺境伯を打倒するぞ！」

「新しい魔物を探して、お館様に献上するのだ」

「それは私が先です」

「狩りも戦も同じ事。ならば、この戦の申し子である私が！」

やらかしてくれた四人は再び導師に預けたが、こいつらはいい性

格をしているので反省などしない。
義智は俺の打倒のため、信長達は何か功績を得て俺の寵愛を受けようと狩りに勤しむのであった。

それでも皮肉な事に、この四人は実力派冒険者パーティとして有名になっていく。

バレンタイン記念ＳＳ　一宮信吾は拗らせていた。

「一宮先輩、このところ、どのお店でもバレンタインフェアですね」

「かき入れ時だからな。そうでなくても、二八（二月と八月）は商売がパッとしない月だ。少しでも売り上げをあげようとどこも必死なのさ」

俺の名前は一宮信吾。

どこにでもいる、普通のサラリーマンだ。

主に食品を扱う商社勤めで、世間で商社マンというとエリートなイメージがあるが、俺の勤めている商社は大手じゃないからな。

普通の会社の営業と変わらない。

入社三年目の若手だが、先月から研修が終わった新人をつけられた。

彼を見ていると、入社直後の自分を思い出すな。

今日は予定していたお得意先回りは終わったので、帰社する前にちょっと取引先のデパートに寄っていた。

もうすぐバレンタインなので、特設売り場ではバレンタインフェアが行われている。

多くのお店やメーカーがいつもより高価なチョコを売ろうと、店員さんがチョコの試食を勧めたり、お客さんの呼び込みに大忙しであった。

「一宮先輩は、彼女さんとかからチョコを貰うんですか？」

「四谷お前、俺と知り合ってすぐ彼女の有無を聞いたよな？　この

二〜三週間で俺に彼女ができると思うか？」

俺にそんなプレイボーイスキルなんてないぞ。

「もしかしたらと思いまして。というか一宮先輩、社内の女性社員達と話していたじゃないですか。チョコあげるからって。その中に本命がいたりして」

「ふっ、甘いな。アメリカの歯が溶けそうなほど甘いチョコレートにさらに砂糖を大量に溶かし込んだよりも甘い！」

「それは確かに甘そうですね……」

アメリカって、どうしてあんなにお菓子を甘くするんだろうな？甘いだけで、色々な種類のお菓子がある意味がないじゃないか。

「お前は入社して初のバレンタインか。いいかよく聞け！　義理チョコは分のいい投資なんだ」

「投資ですか？」

四谷、お前に社会の残酷な現実を教えてやろう。

「お前、義理チョコは貰った事あるよな？　学校とかで」

「ええまあ……」

「ホワイトデーにお返しはしたか？」

「つき合っていた彼女以外はしていないです」

「まあ、学生時代はそんなものだよな」

「返していた奴もいました。自分でお菓子を作ってきた奴もいましたね」

「それは諸刃の剣だな」

男の手作りお菓子なんて、よほどちゃんと作る奴じゃなきゃ罰ゲームみたいなものだ。

あと、既製品でお返しというのも、貰ったチョコを母親に見られ、なぜか母親の方が『うちの子はモテる』と舞い上がり、自分の方が懸命にチョコを選んでいたりとか。

そんな裏事情がある奴もいた。

でも安心してください。

所詮義理チョコなんて、人間関係を潤滑にするためのものにしかすぎません。

あなたの息子さん、思ったほど女性にモテませんから。

「高校の同級生で、そいつパティシエ志望だったんです。今、専門学校出て有名な洋菓子店で働いています」

「それはいいかも」

そういう人の手作りなら、俺もちょっと食ってみたいと思った。

「それで、投資って話ですが……」

「学生の頃は、女子もそこまでお返しを期待しているわけじゃない。義理チョコも大した値段のものじゃなかっただろう？」

「ええ、チロルチョコとか渡す女子がいましたね」

「これが、社会人になるとそういうわけにはいかないのさ。ああいう場所で見繕って、同じ職場にいる男性社員全員に渡したりする」

渡されない人がいると、これはこれでそいつが課内で孤立しているか、嫌われているって証拠になるから、その結果を見ただけで貰った人達も地味に鬱になったりする。

そいつが嫌われている自覚もなく『なぜ俺だけ貰えないんだ?』って言い始めると、途端に周囲の空気が悪くなり、対応するので時間が勿体ないし。

「加藤先輩ですね。他の部の女性社員を妊娠させたのに、中絶させて捨てたから」

「四谷、それは社内で口に出してはいけない」

そんなクズでも、長内専務の甥っ子だからクビにできないからな。それでも社長の逆鱗に触れたから、長内専務が退任するまで社内で飼い殺し状態なんだ。

彼に関わって、社長から睨まれるのは嫌だろう?

本当、サラリーマンって大変だ。

加藤さんにチョコをあげなくていいのかって?

『こんな安物のチョコ、長内専務の甥っ子の君はいらないよね?』って、課長がわざわざ彼のご機嫌取りをしているから。

加藤さんはもう社内では死んだみたいな扱いだけど、社長は長内専務の実力は評価しているから、暫くは辞めさせないはず。

俺達は無視しているけど、課長までそれに加わると長内専務からねぇ……。

課長、あと五年くらいの辛抱ですよ。
倉内部長からのお話ですと、多分そのくらいだと思います。

「話を戻すが、こういうデパートの特設コーナーでは、有名なお店やメーカーが商品を販売していて、お値段も結構する」

「そうですね。五百円以下ってのは、なかなかないですね」

ここぞとばかりに、高級チョコメーカーや洋菓子店がバレンタイン用にチョコを販売するからな。

「一番安い五百円くらいのチョコでも、十人に渡せば五千円。少し頑張って千円くらいのチョコを十人に渡せば一万円。数名で分担するにしても、その金があれば結構いい飯が食えるからな」

「そう考えると、女性社員も大変ですね」

「大変なんだが、我々も大変だぞ。ホワイトデーのお返しで」

ホワイトデーのお返しは、最低でもチョコ代の三倍。
下手をすれば五倍。
お金では返ってこないが、品物ではチョコ代以上に戻ってくる。
そう考えると、まったく無駄な出費というわけではない。
リターンは必ずあるのだから。

確かに女性はチョコ代で大変だが、随分と高いチョコ代になってしまった男性の方もこれまた大変だ。

「内山さんは奥さんから『ホワイトデーの費用もバカにならないわ

ね。三月はその分お小遣いを減らします』と言われて、この前凄く凹んでいた」

既婚者が本命チョコを奥さん以外から貰ったら大変だと思うが、義理でもお返しで家計を圧迫してしまう。

内山さんはもう少しで子供も生まれるし、子供のために節約しておきたいところだからな。

「結婚するって大変なんですね……」

「俺も独身だから実感はないが、大変そうな気はするな」

「でも、そこまでやってもバレンタインは売り上げが落ちていると言っていましたね」

先ほど、知己であるデパートの店長と話をしていたのだが、バレンタインの売り上げは少しずつ下がっているそうだ。

「景気が悪いからな」

「それで、『友チョコ』とか、『ファミチョコ』とか、『世話チョコ』とか『俺チョコ』ですか……」

『友チョコ』は、ようするに友達に渡すチョコの事だ。

男性同士、女子同士だと誤解を招く可能性があるけど、『ホモチョコ』と『レズチョコ』ってのもあるらしい。

商売のためとはいえ、製菓業界は明日を生きているな。

『ファミチョコ』って、母親や姉妹からチョコを貰うイメージと重なるな。

俺には弟しかいないので、実家に住んでいた頃は母親からのみチョコは貰っていたけど。

『たまには、彼女から本命チョコでも貰ってきなさいよ』と言われながら……今思い出したら、地味に腹が立ってきたな。

『世話チョコ』は、職場で配られる義理チョコと重なるな。

「『俺チョコ』って、別にバレンタインじゃなくてもいいですよね？」

「そうだな」

ただ、甘い物が好きな奴が店で自分用に買うのと同じだからな。

自分用のご褒美なら、いつ買ってもいいような気が……。

「だからですかね？　たまに男性のお客さんが見えますよ。俺も帰りに自分用のチョコでも買って帰ろうかな？」

「それはよした方がいいぞ」

「どうしてですか？　一宮先輩」

「あのな、四谷。確かに俺達はチョコが沢山売れれば、その原材料や、外国産の高級チョコの輸入で売り上げは得られる。だが、あの売り場を見てみろ」

確かに男性客も二～三名はいたが、特設売り場はほぼ女性しかいなかった。

「『俺チョコ』なんてマスコミのステマをまともに信じてあそこに飛び込むなんて、そんな恥ずかしい事、少なくとも俺はできないぞ」

「そう言われるとそうですね……」

本来、バレンタインは女性だけのものだと俺は思う。

俺もたまに高級チョコを買って贅沢気分に浸るけど、一月の末からバレンタインが終わるまではチョコを売っている場所には近づかない。

なぜなら、男が一人そんな場所にいたら『あの人、誰からもチョコが貰えないから自分で買うのよ』とか言われかねないからだ。

下手にバレンタイン用に包装したチョコとか買ってみろ。

というか、その時期には包装されたチョコしかないお店も平気で存在する。

『ぷっ、誰からも貰えないから、女性から貰ったように装うのよ。あの人』とか、多くの女性客から裏でコソコソ言われてしまうんだぞ。

ああいうお店は、ほとんど若い女性が店員だ。

一見いつもどおり『ありがとうございました』と清算した商品を渡してくれるけど、内心ではきっと、この時期にわざわざチョコを買った男性を笑っているはずだ。

「注意した方がいい」

「あの……一宮先輩、俺達は特設売り場の傍にいますけど」

「それはいいんだ」

「どうしてですか？」

「スーツ姿で、さっきこのデパートの担当者と売り上げについてとか話していただろう？　だからお客さん達は、俺と四谷をチョコメ

ーカーの人だと思っている。チョコを買いに来たんじゃなく、仕事で売り上げの様子を見に来たんだなと」

「では、あの人は？　わずかですが、男性のお客さんもいますよ」

四谷は、数名いる男性客について聞いてきた。

この時期に、えらく度胸のある人だな。

「それは簡単だ。今の世は男女平等だからな」

きっと、奥さんがとても仕事ができる人なんだ。

でも忙しいから、奥さんは義理チョコを買っている暇がない。

そこで、時間に余裕がある旦那さんが代わりに義理チョコを買いに来た。

「昔ではあり得なかった光景だな。とにかくだ、もう少しの辛抱だ」

「はあ……」

バレンタインが終われば、今度は一か月後のホワイトデーまで、ちょっとくらい普段は食べられない高級チョコを大人買いしても、『あの人、バレンタインのお返しなのね』と思われ、不審がられない。

「さり気なく領収書を頼むのもいい。余計に義理チョコのお返し感が出ていいぞ」

「ためになりました」

今日はとてもいい事を後輩に教えたな。

きっとご利益があるはずだ。

「そうですね。この時期に男が一人でチョコを買うのは、確かに女性からの目が……彼女から貰うチョコに期待しますよ」

「えっ？　四谷、彼女いたのか？」

「ええ。先週、大学の後輩から告白されまして。初めてのバレンタイン、楽しみですね」

「よかったな……」

「はい！」

おおっ！　神よ！

俺は真面目に働いているじゃないですか。

それなのに、後輩には彼女ができて、俺には彼女ができない。

こんな不公平があっていいのでしょうか？

こんなに辛いのなら、俺をバレンタインのない世界に連れていってください。

第百五十七話　人間も魔族も、抜け道を探る。

「バウマイスター辺境伯殿ですか。陞爵、おめでとうございます」

「あら、フィリーネ様ととてもお似合いですわね」

「そうですわね。なにしろ、フィリーネ様は南部の雄ブライヒレーダー辺境伯家のご令嬢ですから」

「お二人のお子がバウマイスター辺境伯家を継げば、両家の仲ももっと深まるでしょうに」

「……」

特に何か利益があったわけでもないのだが、辺境伯になったのでバウルブルクの屋敷でお祝いのパーティーが行われた。

多くの貴族とその家族、家臣が参加し、めかしこんだ俺とフィリーネに次々とお祝いを述べていく。

俺は忙しいのと、元からやる気もなかったので準備はローデリヒに任せたんだが、金がかかっているのに一部の参加者が碌な事を言わないから、空気がピリピリしている。

ブライヒレーダー辺境伯とどういう関係なのか知らないが、エリーゼも傍にいるのに『フィリーネが正妻だったら、もっと両家の関係も深まるのにね』と煽ってきた。

エリーゼは気にしていない風でニコニコしていたが、ちょっと離れた場所にいるホーエンハイム枢機卿の代理で来た司祭が能面のような顔をしていた。

「（何で高い金を払って、貴族同士の当てこすりを見聞きしなきゃならんのだ……）」

そういうのを見る趣味はないんだが……。

「あと十年もすれば、バウマイスター辺境伯家こそが王国一の大貴族となるでしょうな」

「いえ、我が家は立ち上がったばかり。歴史ある辺境伯家のご歴々に比べれば、まだまだですよ」

今度は、別の貴族が煽ってきた。

俺が若造なので調子に乗せ、ブライヒレーダー辺境伯や他の大貴族達と仲違いさせようとしているのであろう。

そんな事をして何になるのかと思わなくもないが、思えば前世で勤めていた商社でも偉い人達が足の引っ張り合いをしていたな。

生産性は皆無だったが止める事はできず、人間とはそういう生き物なのだと思うしかない。

大体うちは、辺境伯家にしてはまだ人口などが全然足りないからな。

俺の辺境伯としての地位は、ブライヒレーダー辺境伯達地方の取りまとめをおこなう三大辺境伯よりも少し下という位置づけにされた。

そうしないと、俺がブライヒレーダー辺境伯の寄子なのはおかしいという話になってしまう。

バウマイスター家はどうせ新興貴族なので、辺境伯の中で一番格下にした方が丸く収まるというわけだ。

昔のミズホ公爵のように『上級伯爵』とかそういう爵位を作ればいいと思うのだが、ヘルムート王国にはそういう前例は存在しない

ようだ。
　中央の力が強いという事は官僚の力も強いので、いきなり新しい爵位は作れなかったのであろう。
役人という生き物は、前例がないと積極的に動かない人種なのだから。

　バウマイスター辺境伯家としても、ブライヒレーダー辺境伯の手助けがないと厳しいので、そういう事になったというわけだ。

「バウマイスター辺境伯殿、貴殿は当代の英雄ですな」

「左様、陛下も覚えもめでたいそうで。羨ましい限りです」

「実は、我が娘が今度十五になりまして」

「うちの妹は十四です」

　ローデリヒがすべて準備したパーティーは盛況だが、どいつもこいつも俺におべんちゃらを使って取り入ろうと必死であった。
　アキツシマ島という新領土も得たので、何か分け前がほしいのであろう。
　あと、あなた達の娘や妹はいりません。

「領地は得ましたけど、これからですね」

　まだ分けられる利益など出ておらず、完全にこちらの持ち出しのみ。
　もし蓄えがある俺でなければ、開発予算と経費でとっくに破産していたであろう。
　それがわかっているから、王国も俺に押しつけたのだ。

王国はアキツシマ島以南の南方と、いまだ誰も探索をしていない東方への進出に執着している。
魔族の国から帰還したリンガイアは、もうすぐ今度は東方への探索に赴く予定であった。

「フィリーネはよくやっていますね。よかった」

うるさい貴族をかわすためというわけではなく、俺とフィリーネはパーティー会場中を挨拶してまわる。
出席者が多いので、エリーゼ達も数名ずつでそれぞれ挨拶に出向いていた。
俺の同行者がエリーゼでないのは、彼女が俺の正妻なのは今さらなので、今日はフィリーネの宣伝というわけだ。
妾腹とはいえ、ブライヒレーダー辺境伯が娘を俺と結婚させる。
両者の関係は深いと、貴族達にアピールするのが狙いというわけだ。

着飾ったフィリーネは、ブライヒレーダー辺境伯による親の目は余り目なのを差し引いても卒なく貴族達への挨拶をこなしていた。
未成年なのに、随分としっかりしているものだ。
度胸もあり、あの導師がお気に入りなのも理解できる。

ブライヒレーダー辺境伯は、娘の成長ぶりに一人感動していた。
隣で奥さんは呆れていたが。

「旦那様、フィリーネなら大丈夫ですよ」

「大丈夫でしょうが、心配なのは親心なのですよ」

そして、誰よりも心配性であった。
ブライヒレーダー辺境伯からの、心配そうな視線が俺にも突き刺さる。
『ちゃんとフォローしろよ！』と言いたいのであろう。
俺から見たら、フィリーネにフォローの必要なんてないんだが。

「お父様、どうでしたか？」

「バウマイスター辺境伯はともかく、フィリーネは完璧でしたね」
挨拶回りを終えたフィリーネを、ブライヒレーダー辺境伯は褒めちぎった。
そこまで大げさに絶賛するほどかと思うのだが、この人は娘に異常に甘い。
そしてフィリーネの対応は褒め、俺はどうでもいいと思っているのであろう。
特に何も言われなかった。
別に、ブライヒレーダー辺境伯に褒められたいわけではないからどうでもいいけど。

「バウマイスター辺境伯様、せっかくの機会なのでフィリーネはそちらのお屋敷で成人まで……「駄目ですよ！　フィリーネには成人までブライヒブルクに居てもらわないと！」」

そして再び、ブライヒレーダー辺境伯の奥さんがフィリーネをバウルブルクの屋敷に住まわせてはどうかと提案しようとしたが、すぐに察知したブライヒレーダー辺境伯によって阻止されてしまった。

フィリーネが嫁ぐのは仕方がないが、一秒でも長く娘と一緒に暮らしたいのであろう。

「旦那様、フィリーネはバウマイスター家の生活に一日でも早く慣れた方が……」

「駄目です！　成人するまでは！　まだ手習いも残っています！」

相変わらず強く口調で、ブライヒレーダー辺境伯はフィリーネを手放さないと断言する。

「バウマイスター辺境伯は新領地の経営にも忙しく、余計な手間をかけさせてはいけません。フィリーネが定期的にバウルブルクに遊びに行けばいいのです」

それでも、ブライヒレーダー辺境伯は大貴族であった。

うちに他の貴族がちょっかいをかけないよう、フィリーネが定期的にバウルブルクを訪問する案を提示した。

「ブライヒブルク～バウルブルク間を航行する魔導飛行船の数も増えましたので、いつでも遊びに行けます。バウマイスター辺境伯が、『瞬間移動』で迎えに来てもいいですし」

婚約のみで、フィリーネはまだ未成人である。

ブライヒレーダー辺境伯の提案の方が、こちらとしても楽であった。

そうでなくてもルルと藤子がおり、涼子、雪、唯の件もある。

帝国内乱の時にも思ったが、異民族が住む土地を統治するのは大変なのだ。

下手に反乱になれば、王国から処罰を受けてしまう。
俺の嫁の数が増えるのは決定事項で、ローデリヒも婚姻でアキツシマ島が鎮まるのであればと安堵していた。

そのため、できればフィリーネのお相手はもう少しあとにしてほしかった。
他の貴族？
知らん！
俺にこれ以上娘を押しつけるな！

「実際問題、島の統治はどうなっているのですか？」

「今のところは順調ですかね」

実質ミズホ人なので……アキツシマ島の人間にミズホ人というと怒るのでアキツシマ人と呼ばないといけないが……戦闘民族的な理由で警戒したが、俺が魔法の力を見せたのがよかったらしい。
統一で犠牲もほとんど出ておらず、その犠牲は戦のルールを無視した同朋だったというのも大きい。

島の開発がバウマイスター辺境伯家主導で進み、人口が増えた時に外部への移民も可能になった。
血の気の多い連中は魔物の領域で稼がせており、あとは俺が死ぬまでに統治体制を安定化させるのみというわけだ。

「それはよかったです。何しろ、肝心の王国と魔族との交渉がイマイチなので」

帝国も加わり、三者には色々な考えを持つ有力者や勢力がある。
すぐに纏まらなくて当然とも言えた。

「最近、発掘品を開発に使用しているそうですね」

「盗難を防ぐ仕組みを作ったので」

「それは羨ましい限りです」

実はそれだけでは足りなくなり、魔王様の会社からそういう魔道具を格安で購入したからなのだが。

魔族の国では粗大ゴミ扱いの様々な魔道具が大量に流入し、アキツシマ島を筆頭にバウマイスター辺境伯領の開発に使われていた。

違法というか脱法行為なのだが、領地が広がりすぎて俺だけではもうどうにもならなくなってきた。

魔道具で機械化しないと開発が進まず、なら王国の魔道具ギルドが必要なものを販売してくれるのかというと、技術力の不足で車両、農業機械、海水ろ過装置に類する魔道具は存在しなかった。

他の物も生産量は不足しており、それもあって価格が異常に高い。

それでも入手できればいいが、実際には在庫不足で予約待ちの状態であった。

普通は輸入を検討するレベルだが、もし魔族の国から高性能で価格も手ごろな魔道具が輸入されると、魔道具ギルドの凋落は確実。

彼らは帝国の魔道具ギルドと組んで魔道具輸入の絶対阻止に動き、その途中で魔道具ギルドのトップが死んで余計に混乱している。

これで交渉が纏まったら、逆に騙されて不平等条約を結んだのかもしれないと疑うしかなくなってしまう。

「とはいえ、何か状況が変わったわけでもないのです。王国は全体的に開発が進んでしますし、帝国も内乱のおかげで中央の力が増し、

戦後復興も兼ねて大々的に開発が進んでいます」

だから、余計に交渉が進まないのかもしれない。

魔族が政権交代により、老練な政治家が交渉に出て来ないというのもあった。

「焦る必要はありませんね」

「俺もそう思います」

こうして無事にパーティーは終わり、俺は辺境伯となった。

ただ、変わったのは爵位と階位だけなのは言うまでもない。

「あれ？　魔王様、今日は学校では？」

「うむ、実は今日は学校の創立記念日でな」

俺は、魔族の学校にも創立記念日があるのかと思いつつ、あって当然かと納得もした。

「休みが多いですね」

「学校の期間が長いからな。カリキュラムは非常に緩い。ライラが『ゆとり教育の弊害』と言っておったぞ」

「そうなのですか……」

アキツシマ島では、多くの重機と、耕運機、車両が忙しく働いていた。

操作をしているのは、魔王様が会長を務める会社の若い社員達と、彼らから操作を学んだうちの家臣とアキツシマ人である。

やはり機械化の成果は大きく、地下遺跡の魔道具を全投入したバウマイスター辺境伯領本領よりも作業効率はよかった。

「それだけ長い期間教育して半分が無職だからな」

「うっ！」

「会長、今は働いていますよ！」

「俺達も結婚するのですから」

会長の言った『無職』という言葉に、重機の使い方をアキツシマ人の若者達に教えていたモール達が反応した。

気にしていないように見えて、実は長期間無職だったのを気にしていたようだ。

それにしてもこいつら、あっという間に重機の操作を覚えて人に教えるまでになっているのだから、優秀なのは確かなんだよな。

アーネストはああ見えてバカが嫌いなので、そうでなければゼミに入れなかったのであろう。

「うちの法人では、若い社員を大量に採っているぞ。ちょっと教育

して魔道具のオペレーター、整備員、教育係などで使っている」

使用する魔道具も、すべてライラさんが仕入れた。

旧式のため捨て値で売られていたか、粗大ゴミを修理した物も多い。

普通に使えて安いので、こちらでは大好評であったが。

「色々と疑問が……」

「余で答えられる事なら答えよう」

「どうしてこんなに魔道具が余っているのですか？」

「過剰生産をしているからだ」

今動いている魔道具は、すべて旧式とされている。

それでも十分に使えるし、地下遺跡の品よりも性能が低い物もかなりあったが、それでも普通に使う分には問題ない。

ツルハシとモッコで作業するよりも早いのは確実だ。

それに、今のリンガイア大陸では絶対に作れない品物であった。

「魔道具はちゃんと手入れをすれば数百年、物によっては数千年も保つ。これはいいな」

「ええ」

『状態保存』の魔法があるし、コア部品を除けば現代日本の電化製品や工業製品よりも作りが簡単なので、少し教育を受ければメンテナンスと修理ができるからだ。

コア部品が壊れれば駄目だが、それですら魔族の国は品質管理と生産性の向上で簡単に手に入った。

「なかなか壊れぬ魔道具。次々と作られる新製品。毎年何となく新製品が出ておるが、前年の新製品と何が違うのか？　性能が上がっていないとは言わぬが、些細な差じゃ。魔道具を新規で購入する者が減り、政府も企業が倒産すれば失業者が増える。よって、このような古い魔道具は法律で使用禁止となった」

表向きは、耐用年数が終わったために危険だからという理由で。実際には、魔道具の買い替えを法律で強制して企業の倒産や失業者の増加を防ごうとしているのだ。

「無理矢理魔道具を購入させても経済を保たせる。世知辛い話だな」

そのため毎年大量の魔道具が粗大ゴミとなり、これも環境保護の観点から処理に高額の費用がかるようになった。

「粗大ゴミの違法投棄は社会問題化しておる。余達が勝手に拾っても、ありがたがられる事はあっても嫌がられる事はない。我が社では、毎日ボランティアで粗大ゴミの片付けをしているぞ」

一見無料奉仕のゴミ拾いだが、それを修理してこちらに売って儲けているという寸法だ。

「あと、無料の廃品回収も始めたぞ」

これも、ライラさんのアイデアだそうだ。

一般家庭から、法律で耐用年数がすぎた魔道具を格安の処理費用で引き取る。

これも修理して、うちに流しているわけだ。

「ただ、ライラが言っておったが、最近ライバルが増えたそうだ」

「えっ！　そうなんですか？」

こういう事をしているのは俺達だけじゃない。

当たり前の話であったが、俺は驚いてしまった。

多少目端の利く人物で実行力があれば、魔族でこういう商売を始める者がいても不思議ではないのだから。

「特に帝国がの。噂では、帝国政府がダミーの商会を作り、そこと我が国の廃品業者が取引をしていると」

あのペーターならあり得る事だ。

表では魔道具ギルドと揉めてグダグダしているように見せつつ、裏では中古魔道具を購入して開発に使用する。

何なら他の貴族に貸してもいい。

そうする事で、帝国政府はさらに力を増すという寸法だ。

「魔道具ギルドはよく怒らないな」

「それは、バウマイスター辺境伯と同じであろう？」

始めは購入した魔道具をアキツシマ島内でしか使用していなかったが、もう不足気味なのでバウマイスター辺境伯領本領でも誤魔化して使っていた。

そのうち魔道具ギルドも気がつくであろうが、もし文句を言われてもうちは魔族からゴミを買っているだけだと言い逃れをする予定だ。

それと、王国の魔道具ギルドでは作れない品ばかり購入している。
『魔道具ギルドの縄張りは侵していませんよ。というか、じゃあんたらが売ってくれるの？　俺は金はあるんだよ。あれば買うよ』という論法で行く予定であり、ローデリヒも主導的な立場だ。

人手が足りず、バウマイスター辺境伯領本領の開発すら終わっていない状態でアキツシマ島を抱え込んだのだ。
ならば機械化は急務であり、魔道具ギルドが供給してくれない以上は輸入するしか道はなかった。

「王国政府も、一番遅かったが動いたらしい。代理で粗大ゴミ集めをしている業者がいるそうだ」

誰も『お前、勝手に魔族と取り引きしているよな？』とは聞かないが、みんな考える事は同じというわけだ。
魔道具ギルドの圧力で表の交渉が上手くいかない以上、裏で魔族の魔道具を手に入れるしかない。

「法の裏を突く行為だけどね」

ハッキリ言って、ヘルムート王国もアーカート神聖帝国も法が非常に緩い。
俺でも簡単に穴を見つけられてしまう。
今まで外国が一つしかなかったため、俺が勝手に帝国政府や貴族と貿易をしたら罰せられるが、想定していなかった魔族と取引をしても違法ではない。

魔道具の取引も、両国で力がある魔道具ギルドの圧力で交易交渉が進んでいないだけなのだ。
つまり、誰かが勝手に魔族から魔道具を購入しても違法ではない。

魔道具ギルドから文句を言われるかもしれないが、両国の法に触れているわけではないのだ。

ただ、俺は魔導具ギルドで購入可能な品はそこから購入していた。魔族の国でしか生産していない品のみ購入し、魔道具ギルドからの抗議に備えている。

まだバレていないようで、彼らは何も言ってこないけど。

「我々はバウマイスター辺境伯としか取引しておらぬが、景気はいいな」

「うちも助かっている」

「互いに得をしているのだ。商売の理想だな。ライラがＷＩＮＷＩＮな関係だと言っていた」

閉塞感がある魔族の国において、あまり表立っては言えないが廃品業者の景気がいい。

国内で集め、修理した古い魔道具を、自ら交渉ルートを開いた国や貴族に売る。

あまりコストがかからず儲かり、代金も通貨レート交渉は暗礁に乗り上げていたが、貴金属や宝石などで取引すれば済む話なのだから。

「表の交渉は知らんが、これからこの裏技で人間と取引する魔族は増えるだろうな」

俺達は販売する品を魔法の袋に入れた魔王様やモール達を俺が『瞬間移動』で迎えに行くという方法を取っている。

他の業者はその方法が使えないが、魔族は全員が優秀な魔法使い

だ。
魔法の袋に商品を入れ、リンガイア大陸まで飛んでもいい。
成り上がりたい魔族なら、そのくらいの事はすると魔王様は言う。
「余達はバウマイスター辺境伯と知り合えて得だったな。でなければ、モール達が魔法で飛行しなければならなかった」
「えっ？　俺達がですか？」
「せめて船を使わせてください！」
「遭難しそうだな」
さすがのモール達も、遭難覚悟で両国を船で移動するつもりはないようだ。
彼らとの最初の出会いも、手作りの筏で遭難しているところを救出したというものだったから懲りたのであろう。
結婚もするから、二度とそういう無茶はしたくないはず。
「古い魔導飛行船を購入している者もいると聞く。個人や零細企業が、リンガイア大陸との交易を目論んでいるのであろう」
政府間の交渉が暗礁に乗り上げたため、人間も魔族も勝手に動く者が増えた。
俺は先に動いていたし、帝国と王国、両国の目敏い貴族も動いている。
魔族にも人間との交易で一旗あげようという者が、懸命に粗大ゴミを集めているわけだ。
その粗大ゴミを、ちょっと修理して人間に売れば金になる。

閉塞した感もある魔族社会の若者からすれば、絶好の機会というわけだ。

「船も買えるのですか？」

「木製の船なら安いぞ」

現在魔族の国では、警備隊が使用しているような金属製の魔導飛行船が主流だそうだ。

古い木製の魔導飛行船は維持に手間とコストがかかり、例の魔道具の使用期限制限にも引っかかり、運行もできず野ざらしで放置されている船が多いと魔王様が言う。

「欲しいか？　バウマイスター辺境伯」

「あるだけ欲しいな」

「ライラの事だからもう集めていると思うが、念のために伝えておこう」

モール達と派遣した若い指導員達の様子を見た魔王様は、『瞬間移動』で農村に戻った。

そして一週間後、バウマイスター辺境伯領本領にある広大な平地に、数百隻にも及ぶ中小型の魔導飛行船が並んでいた。

「凄い数ですね……」

「これでもまだ一部です。我が社は、この十倍の数を確保しております」

「ライラは優秀だからな」
「そうなんですか……」
今日はトップセールスなので、ライラさんも顔を見せていた。
「ただ一つ残念なのは、かなりの数の大型船を他の業者に取られてしまった事ですね。それでも、ある程度は確保しましたが……」
「大型船は買わないよ。取引先の紹介はできるけど」
「大型船はいかんのか？」
魔王様が、俺に『なぜ？』という表情を浮かべた。
「ええ、大型船は王国政府しか持てないのです。多分、大型船を押さえたのは……」
「両国の政府が作ったダミー商会ですね……」
ローデリヒが、俺の代わりに答えてくれた。
彼が情報を集めた結果、帝国はペーターが、王国も目立たない特性を利用して王太子殿下が魔族から特殊な魔道具などを購入していた。
ダミー商会を作ったのは、いまだ正式な交易交渉が継続中だからなのと、魔道具ギルド対策であると思われる。
もっとも既に公然の秘密と化しており、魔道具ギルドが文句を言っているかもしれない。
会長の死で魔道具ギルドは揉めているから、それどころではないかもしれないけど。

「貴族の大型船所有禁止は、れっきとした王国の法だから破るわけにはいかない。中小型の船は買う。だけど、かなりヤバイ船が多いような……」

多分、粗大ゴミ扱いで野ざらしにされていた船が多いのであろう。
このまま飛ばすと分解しそうな船も半分くらいあった。

「その分格安ですから」

「まあいいや。安いから」

魔族の国の旧式船は、木造でリンガイア大陸の魔導船とデザインもよく似ている。
旧式扱いでゴミにされたのであろうが、船体の修理なら人間の職人でも十分に可能だ。
船の待機場と修理工房を領内にいくつか作り、修理と船員の教育を終えた船から順番に運用していこう。
アキツシマ島を含む南方航路は、海竜の完全駆逐が難しいと判断され、魔導飛行船の数を増やす必要があったからだ。

広大な領内の移動と輸送、ブライヒブルクを始めとする他の貴族領との交通と交易にも使える。
船はいくらあっても困らない。

「大型船を買ってくれる人に連絡してみます」

俺は携帯魔導通信機で、王太子殿下に連絡を取った。

『おおっ！　我が友ヴェンデリンか！』

「そこでなぜ友なのを強調するのだ？」

魔王様、それは言わないであげて。

『それで何か遊びの誘いか？　いつでも、私はスケジュールを変更して対応するぞ！』

「必死だな」

魔王様、それ以上は……。

可哀想すぎて俺も泣けてくるから。

例え、王太子殿下には聞こえなくても。

「実は、ちょっと商談が……」

俺は、大型魔導飛行船の在庫があるという話を王太子殿下に振る。

すると、彼は途端に真面目な口調に変化した。

『私が頼んでいる者達が、かなりの部分を押さえられてしまったと報告していたが、ペーター殿の他にヴェンデリンも動いていたとはね』

王国からすれば、俺が密かに魔族と取引している事などとっくに承知であった。

武器やヤバイ薬などを仕入れれば処罰されるが、自国にない魔道具ならばお互い様なのだ。

俺が一番早く動いたのは事実だが、もうとっくに両国政府と他の貴族も密かに魔族と取引はしていた。

そこを突っ込む意味はない。

「うちで頼んでいた業者が、貴族は大型船を持てないという法を知らなかったのです。そこで、王太子殿下にご紹介をと思いまして」

バウマイスター辺境伯は、禁止されている大型魔導飛行船を所持する意図はありません。

これは、王太子殿下にはっきりと言っておかなければいけない。

『全部買おう。状態は問わない。この件では、ペーター殿が先行していてね。私は父に怒られてしまったんだ』

普段は移動と輸送にも使えるとあって、両国は大型の魔導飛行船の所持に執着していた。

昔の地球で、各国が戦艦の数を競うみたいなものだ。

つい最近までは王国が圧倒的に有利だったのだが、帝国が魔族の国から古い船を購入してその差を埋めてしまった。

どうやらペーターの方が多くの大型船を購入しており、先を越された王太子殿下は陛下に怒られたうだ。

さすがは、あの内乱で勝ち残っただけの事はある。

決断の速さはさすがだ。

それにしても、交渉がグダグダで困っているように見えて、裏ではちゃんと動いているとは。

陛下も王太子殿下も油断ならない。

「仲介料等は必要ありませんので」

『それはありがたいね』

一番早く魔族と取引を始めた件で責められるのも嫌なので、ここ

で王太子殿下に恩を売っておこう。
などと考えるようになってしまった俺は、進歩したのか？
それとも、完全にミイラ取りがミイラになってしまったのか？

判断が難しいところだ。

『では、詳しい話はあとで』

「わかりました」

携帯魔導通信機を切ってから、俺はライラさんに大型船は王太子殿下と取引してほしいと伝える。

「ありがとうございます」

いえいえ、これで恩を感じてくれたらいいのです。
王太子殿下という新しい取引先を紹介してくれたと。

「政府間の正式な交易条約が存在しない以上、これは私貿易、密貿易の類になります。違法ではありませんが、トラブルに関してはお上が保証してくれません。これから参入する人間も増えるでしょうが、間違いなく騙される者も出てくるでしょう」

もう騙されている人がいるかもしれない。
人間が一方的に騙されるだけでなく、魔族でも騙される者が出てくるであろう。
武器や違法薬物、人身売買などを始めたら、さすがに両国政府も黙っていない。
自由だからこそ、己を律する必要があるのだ。

「その点、バウマイスター辺境伯殿はいいお得意様です。王太子殿下もそうであると信じたいですね」

と言いながら、クールな微笑みを向けるライラさん。

もし魔族の国で王政が続いていたら、彼女は宰相だったかもしれない人だ。

その優秀さは、会社の経営で如何なく発揮されている。

ただ、なかなかいい男性と知り合えないのが大きな悩みだそうだ。

最初はモール達がちょっかいをかけていたそうだが、脈がないと見るとすぐ同じ会社の若い女性魔族に標的を変えてしまった。

それですぐに婚約できるのだから、モール達も実はコミュ力があるのかもしれない。

「ライラ」

「はい、陛下。何か御懸念でも？」

「中古魔道具の取引だけでは、我々の会社も先細りでは？」

確かにそれはそうだ。

今ある粗大ゴミと古い魔道具がすべてなくなれば、今度は一年ごとに魔族の国で使えなくなる魔道具を集めて売るしかなくなる。

こうも参入業者が増えると、ライラさんでも買い負ける可能性があるのだ。

「そこで、こちらもバウマイスター辺境伯領から購入したい物があります」

「うちから購入して、魔族の国で金になる物なんてあるの？」

鉱物、食料くらいしか思いつかない。
これを取引するには、正式な交易条約締結を待った方がいいであろう。

「勿論、ありますよ」

それは、魔物の素材だそうだ。

「我が国の魔物の領域は、何しろ一つの島の中なので生息する魔物の種類が少ないのです。それを狩っても、作れる物が少ないわけです」

例えば魔族の衣服は、大半が大規模農場と牧場で生産される繊維や毛を加工した物であった。
一部狩猟で得た魔物の素材を原料とした服もあるが、これは高額で生産量も少なかった。

「我々の国は人間の国よりも人件費が高く、わざわざ狩猟をして得た材料で服を作ると高くつきます。高級品なうえに嗜好品なので、購入できる者は少ないのです」

「それは、こちらで獲れる魔物の素材でも同じでは？」

「いえ、魔族の国にいない魔物が非常に多く、これを用いて作られた衣服と装飾品は富裕層向けに一定の需要があるはずです」

「加工技術については？」

「魔族の国は、ある程度の品質の服を大量生産する技術には長けて

おりますが、プロの職人による裁縫、縫製技術ではそれほど差はないと思いますよ。人件費が割安なので、値段を少し下げ、中間層よりも少し上の人達に購入してもらう手もあります」

「となると……。あの人か……」

「バウマイスター辺境伯様は、知己が多いのですね」

俺はライラさんと始める新しい事業を任せられそうな人物を思いつき、すぐにその人物と連絡を取る。

「はぁーーーい、みなさん、お元気？」

「……」

「あれ？　ロンちゃんもいるの？　ロンちゃん、あまりお洋服に興味ないじゃない。新人冒険者の時あまりにファッションセンスが酷かったから、私が何着か買ってあげたわね。懐かしいわ」

「あの時は、とてもお世話になったのである……」

相変わらず、王国、帝国、魔族との交渉が纏まる気配がない。

そのため、水面下で箍が外れたかのように私貿易が始まっていた。

帝国はペーターが、王国も王太子殿下がダミー商会を使って交易をおこなっている。

正式な条約締結を待っていたら、双方相手に出し抜かるところだったので仕方がない。
それに、貴族は所属している国に先駆けて動く者もいた。
その先頭が俺であり、中古魔道具と中古魔導飛行船では大いに得をしたわけだ。

魔王様とライラさんの会社も相応の謝礼を受け取り、会社の人員と規模を拡大している。
魔族の国では、表向き有機無農薬作物の栽培と販売、廃品回収業となっていたが。

ライラさんと同じ事を始めた魔族も多く、彼らと交易を始めた貴族も増えていた。
出遅れた分、残っている中古魔道具と中古魔導飛行船が少ないため、商売の規模はさほどではない。

領内に中古魔道具と中古魔導飛行船が出回り、それを用いた開発が加速度的に進むバウマイスター辺境伯家では、魔物の皮や毛皮、リンガイア大陸にしかない植物などを用いた繊維、布、衣服を輸出する事になった。

半分は素材で輸出して、魔族の国のファッションデザイナーや職人に販売する。
もう半分は、俺の知り合いの職人……まあ、服に詳しくない俺にはキャンディーさんしかいないが……に頼む事になった。

今日はたまたま導師が来ており、彼は唯一苦手なキャンディーさんがいる事を知って冷や汗を流した。

「最初は少量生産で、好評なら人を増やしましょう。私、ツテがあ

るの」

キャンディーさんはこう見えて顔も広いので、それもあって衣服の生産を依頼したのだ。

「ねえ、魔族ってどういうデザインが好きなのかしら？」

「これが、我が国で一番売れているファッション雑誌です」

「そんなものがあるなんて、魔族の国って便利ね」

キャンディーさんは、興味深そうにファッション雑誌のページをめくる。

「でも、あまり人間と変わらないのね。機能的なお洋服が多いみたいだけど」

魔族の国のフッションは、現代日本とよく似ていると思う。

毎年流行色が決まり、季節ごとにも細かな流行がある。

ただ、ファッションに手間をかけない人も意外と多く、カジュアルな服装や、新聞記者であるルミのようにツナギモドキの服を着ている者もいる。

あれは仕事をする人の共通した作業着の扱いで、面倒な人は私服にまで流用していた。

勿論ホワイトカラー職の人はスーツ姿であったが、これもお休みの時にはノーネクタイにして使いまわす人も多かった。

「事務の仕事でも薄給の人は多いですからね。私も前は事務職でアルバイトをしていましたが、給料は低かったですよ」

ライラさんは、魔族の国のファッション事情を説明した。

「そのため、大半の人は格安の服を購入します。大手企業が量産している服です。富裕層と、一部ファッションが趣味でお金をかける人向けに高級ブランドがあるわけです」

「だから私達が品質を落とさず、魔族の国にはない素材で服を作り、高級ブランドよりも少し安く売る。こちらは品質が劣っているわけじゃないし、手縫いのよさもあるわね。今まで最高級品を一着で済ませていた人がそのお金で二〜三着買ってくれるかもしれないから」

「中古ですが、ミシンも安く提供できますよ」

「うーーーん。魔道具ギルドがうるさいから今は遠慮しておくわ」

実は、リンガイア大陸にもミシンはある。

性能は低いが、手で縫うよりは圧倒的に早い。

キャンディーさんも数台所持しており、もっと欲しいと魔道具ギルドに問い合わせたが、生産が間に合わないと断られてしまったそうだ。

「売ってくれないのに、魔族の国から輸入を阻止しようとしているのよ。本当、嫌な連中」

キャンディーさんは、魔道具ギルドの連中が嫌いなようだ。

「魔族の国から定期的に魔道具が入ってきたら、あいつら全員失業ですから」

「それもそうね」

値段、性能、故障率。
他にも、リンガイア大陸の魔道具で魔族の国の魔道具に勝てる部分は少ない。
今の時点だと、魔道具ギルドの政治力が侮れないだけだ。

「今、あそこはにっちもさっちも行っていないけどね。力のある会長が死んじゃったから」

「前に葬儀に出ましたけど、まだ後継者争いをしているのですか？」

「そうよ。バカみたい」

次の会長の座を巡って、魔道具ギルド内では激しい後継者争いが起こっていた。
これで交渉なんてできるはずがないが、彼らもバカじゃないから王国政府が魔族の国から魔道具を輸入しないように政治的な圧力はかけ続けている。
後継者争いの余波で生産力も落ちており、魔道具ギルドの閉鎖性が王都でも問題になりつつあった。

「うちは粗大ゴミを輸入しているけど」

「王都でも、『魔導四輪』っていう馬がなくても動く車両が軍で採用されたみたい。あれ、魔族の国からの輸入品なのね」

うちばかりか、他の貴族も、両国政府も、実は魔道具を輸入している。
だが、言い訳が利くように魔道具ギルドでは作れない品ばかりであった。

そのため、重機と車両はリンガイア大陸中に徐々に姿を見せ始めていた。
全部魔族の国では、廃車の修理品か、廃棄する予定の中古品ばかりだが。

「バウマイスター辺境伯様は、古代魔法文明時代の発掘品を相当数魔道具ギルドに販売したって聞いたわよ」

「耳がいいですね。キャンディーさんは」

「元冒険者だからね」

その中に当然、重機や車両も入っている。
自分達で作れるように研究素材として購入したわけだが、いまだに試作費成功したという話はない。
多分、まったく見通しが立っていないのであろう。

「だからさ。『魔導具ギルドで生産の目途が立っているのなら見せろ』と言われると困るから、彼らが作れない魔道具の輸入は黙認しているわけだ」

作れませんなんて、魔道具ギルドの今までの地位を考えると口が裂けても言えないのであろう。
成果がないのは、帝国の魔道具ギルドも同じ。
内乱でニュルンベルク公爵が発掘した品を大量に手に入れているはずだが、まだ何の成果もあがっていないはず。
共に、魔族の国から魔道具を輸入する件に断固反対しているわけだ。

「プライドでご飯は食べられないのにね」

「キャンディーさんの意見に賛同します」

ライラさん、オカマなキャンディーさんにあまり抵抗がないらしい。

魔族の国では、特に珍しくもないのか？

現代地球みたいに、そういう人の権利も認められているのかもしれない。

「嗜好品なら少量ずつ生産した方がいいわね。大量生産しても意味がないし」

「ご理解いただけてよかった」

ライラさんは、キャンディーさんをいい商売相手だと思ったようだ。

「王都のお店は私の知り合いの娘に任せて、バウルブルクに洋裁工房を作りましょう」

俺とキャンディーさんは半分ずつ資金を出資し、オーダーメイド服の工房を作った。

他にも、工芸品、芸術品、アクセサリーなど。

魔族の国で売れそうな品を作れそうな職人も集めて作業場を併設している。

規模や生産量は少ないが、元々大量生産品と張り合う種類のものじゃない。

この程度で十分であろう。

「魔族の国での販売は、我々の領分ですから。珍しい希少なものな

ら売れる可能性が高いので、これからも商品を模索していきます」

今、魔王様とライラ様の会社に小規模貿易という業務も加わった。

規模を大きくしないのは、お上に警戒心を抱かせないためだ。

「古い魔道具も集めています。放棄地域には、運ぶのが面倒だと捨てられた魔道具も多いので、これを修理、掃除して売れば……うふふ……」

「よっぽど儲かるのね」

不気味にほほ笑むライラさんを見ても、キャンディーさんは冷静なままであった。

「陛下を頂点とする会社の規模が大きくなっていき、お金も貯まってきました。将来への展望が持てるのはいい事です」

若干方法が胡乱だが、俺も利用しているし、極論すれば粗大ゴミを転売しているだけだからな。

それに、今ライラさんと同じような事を考えている魔族は多く、取引を望む人間も多い。

お上の交渉締結を待っていたら旨味がなくなるので、バウマイスター辺境伯としては素早く動く必要があるのだ。

ライラさんも、魔王様に人材と財力を揃えるいい機会だと思っているのであろう。

「商品ができあがったら、買い取りに参ります」

「作っておくわね。もっと知り合いに声をかけようかしら？」

こうしてキャンディーさんは、バウルブルクに魔族向けの服を作る洋裁工房と、その他の品を生産する工房もいくつか併設した設備の責任者となった。

これから、魔族との関係がどうなっていくのか？

まだわからない部分も多いが、上が停滞していても下は対策を立てて抜け道を通るものなのだ。

「ロンちゃん、たまには違う服を着なさいよ。ロンちゃんも、もう四十を超えたでしょう？　こういう落ち着いた服もいいと思うの。きっと奥さん達も惚れ直すわよ」

「ありがたいのである……」

「あらぁ、いい感じね」

商談終了後、キャンディーさんは同行した導師に大人の男性が着るような落ち着いた服を勧め、強引に試着させていた。

普段の導師なら絶対に試着になんて応じないのであろうが、彼にとってキャンディーさんは天敵に近い存在なのかもしれない。

借りてきた猫のように、大人しく試着させられていた。

「ロンちゃんが十八の時、こういう洒落た服装でデートに行けば、踊り子のサーシャさんにフラれないで済んだのにね」

「その話は、みなの前では……」

「あとぉ、南町のカフェの看板娘だった子。この前会ったら、もう四人の子供のお母さんだって。月日が経つのは早いわねぇ。ロンちゃん、遠い店なのに毎日通ってね」

「勘弁してほしいのである……」

導師は、キャンディーさんに色々とネタを知られているようであった。

今度、何か教えてもらおうと思う。

第百五十八話　やはり、俺の嫁は増える運命にあるらしい。

「今日は、ご招待に預かり感謝するぞ。それにしても、バウマイスター辺境伯は凄いな」

「何が凄いのですか？」

「プライベートビーチを持つ者など、魔族にはそういないからな」

バウマイスター辺境伯家と魔王様が会長を務める会社との取引が増えていき、今日は魔王様、ライラさん、モール達を招待していつものプライベートビーチに来ていた。

エリーゼ達もいて、みんなで海で泳いだり、バーベキューをしたり、ビーチバレーをして遊んだりしている。

魔王様はピンク色のワンピースタイプの水着を着ており、とても可愛らしく見えた。

少なくとも、魔王様というイメージはない。

それでも彼女は、俺が今までに出会ったどの魔法使いの中よりも大量の魔力を持つ人物であった。

ただ、彼女が魔法を使っているところは見た事がない。

もしかすると、魔法が使えないとか？

それはないと思うが、魔族の国では使う機会がないのかもしれない。

「どうかしたのか？　バウマイスター辺境伯」

「陛下は、魔法を使わないのですか？」

「使わなくもないが、普段は魔道具で事足りてしまうからな。王家に代々伝わる魔法というものもあり、これはたまにライラと練習しておるぞ」

「いかに権力をなくした陛下とはいえ、伝統の王族魔法の修練は必須ですので」

紫色のビキニを着たスタイル抜群のライラさんが、魔王様に続けて事情を説明した。

「その魔法って、本か何かで伝わっているのですか？」

魔法の事なので興味を持ったカタリーナが、ライラさんに質問した。

「はい、数少ない王家に残された家宝ですね」

「貴重なものなのですね」

「いえ、写本は本屋で売られております。本物を所持していますが、文化的な価値はともかく資産的な価値はさほどでも……ちょっとした古文書扱いですね」

せっかく王家に残った秘蔵の魔法書ですら、魔族の国ではさほどの価値もないのか。

何か切なくなってきた。

「とはいえ、王家の魔法は習得できる者が少ないので、本は残っていても積極的に覚えようとする者はいません。今の魔族の社会では役に立ちませんし。無職の暇人くらいでしょうか？」

「「「ギクッ！」」」

ライラさんの指摘に、モール達が反応した。

もしかして、無職時代に王家の魔法を覚えたのであろうか？

「バウマイスター辺境伯、俺達の魔力量じゃあ王家の魔法は無理だったよ！」

モール達の魔力は、中級レベルしかない。

特殊な王族魔法は使えなかったそうだ。

「どんな魔法なんだ？」

「魔王様が使う魔法だから、敵軍を大爆発で吹き飛ばすとかだね」

「王族魔法って名がついているけど、要するにただの広域殲滅魔法だから」

ラムルとサイラスの説明を聞くと、確かに今の魔族の国では需要がないかもしれない。

そんな魔法を、人がいる場所で使われたら迷惑なのは確実だ。

迷惑扱いくらいならいいが、最悪テロリスト扱いで捕まるかもしれない。

「王族魔法とは、ここぞという時に使うもの。普段より鍛錬は欠かさず、万が一必要な時には躊躇わず使うものだ」

「陛下、御立派な覚悟です」

魔王様は、そのあまりない胸を張りながら魔王としての決意を述べ、ライラさんが一人感動していた。

みね麗しい君臣の図というやつだが、魔族では時代錯誤な考えなんだろうなと思う。

「とはいえ、今の世では必要ないがな。余もその子供も覚えるだけで終わるであろう」

「町中でぶっ放せば、捕まりますからね」

もし町中で使ったら、器物破損と殺人で間違いなく刑務所入りであろう。

それは俺にもわかる。

「バウマイスター辺境伯は覚える必要ないと思うな」

「高威力の魔法なら、もう使えるからですか？」

「そうだ。ただ桁外れに威力があるだけで、基礎はバウマイスター辺境伯達上級魔法使いが使う大規模魔法と大差ないぞ」

「なるほど。して、陛下はもう魔力の成長が止まったのであるな？」

同じく海水浴に参加しているアーネストが、魔王様の魔力量について問い質す。

彼は、シマシマ図柄で膝と肘まで布地に覆われた水着を着ていた。

「いや、まだ余は幼いからな。ただ、余は歴代の魔王の中では魔力が多い方らしい。今の時点で、既に過去の魔王を抜いておるぞ」

「それは凄いのであるな」

「アーネストとやら、そなたもなかなかの魔力量だな」

「研究にはあまり役に立たなかったのであるな。この大陸に渡る時くらいであるな。魔力の多さをありがたいと思ったのは、であるな」

いや、お前。

ニュルンベルク公爵に協力していたじゃないか。

あの魔法を阻害する装置を動かして。

こう見えて、魔族の国でも三本の指に入る魔力量を持つ人物だが、本人は本気で魔法なんてあまり役に立たないと思っているから凄い。

「でも、ヴェルよりも魔力がある人って凄いね」

「凄いのである！」

ルイーゼと導師は、アーネストと魔王様の魔力量に驚いていた。

導師の魔力量は、俺よりも少し少ないくらいだ。

ただ、四十を超えた今も成長しているため、彼はかなり特殊な部類に入ると思う。

「ふと思ったのですが、バウマイスター辺境伯様は器合わせはいしないのですか？」

「アーネストは嫌」

なぜ嫌なのかと問われたら、これは精神的な理由からだろう。
俺なら、もう数年でアーネストの魔力は超えられるだろうし。

「某も嫌である！」

あの導師ですら、アーネストとの器合わせを嫌がっているからな。
これは理屈じゃなく、感情の問題であろう。

「なら、余とするか？」

「それもどうかと思いますよ」

「なぜじゃ？　古の魔族は、魔力こそが富と権力と源であった。自分よりも魔力が多い魔族がいれば、時に頭を下げても器合わせを頼んだと古文書に書いてあるぞ」

それ、もし敵対している魔族でも頼んだのであろうか？
人間よりは、気楽に器合わせをしていたような言い方だ。

「人間の世界には風習がありまして……」

俺は、男女の関係にあるか親族でもなければ、異性間で器合わせはしないのだと魔王様に説明した。

「お互い、文化や慣習は尊重すべきだな。なら、アーネストと器合わせは……」

「嫌です！」

「嫌なのである！」

俺と導師は、アーネストとの器合わせを断固拒否した。

「そなた、不人気だな」

「我が輩、真の研究の道を歩んできただけであるな」

勿論それだけのわけがなく、内乱の最後では色々と大変な目に遭ったという理由もある。

とにかく、アーネストと器合わせをするのが嫌だったのだ。

「嫌なら仕方があるまい。余はビーチバレーをして遊ぶぞ。フジコ、ルル、フィリーネ！」

「おう！」

「はーーーい」

「チーム分けをしましょう」

今回の海水浴には、藤子、ルル、フィリーネなども招待していた。

子供組である三人は、魔王様と一緒にビーチバレーで遊んでいる。

「ヴェンデリン様、新しい水着をありがとうございます」

「でも、ブライヒレーダー辺境伯には見せないでね」

「はい」

フィリーネにもライトグリーンのワンピースタイプの水着をプレ

ゼントしたが、これでもまだこの世界基準では布地が少ない過激な水着扱いであった。
ブライヒレーダー辺境伯に見せると怒られるかもしれないので、このプライベートビーチだけで着てくれとお願いした。

「よーーーし、いくぞ。必殺魔王サーブ！」

魔王様と藤子、ルルとフィリーネのチームに別れ、ビーチバレーは始まった。
魔王様が、最初のサーブを打つ。
技名は怖いが魔力が籠っていない普通のサーブで、ルルが簡単にレシーブし、フリィーネがアタックを放った。
そして、それを再びレシーブする藤子。

四人とも、見かけによらず運動神経はよかった。

「砂浜は動きにくいな。ルルはそうでもないか」

「ずっと砂浜の上で生活していたから。でも、バレーボールというスポーツは初めてです」

ルルが住んでいた村は砂浜の上にあったため、彼女は砂浜での移動を苦にしていなかった。
海竜が出現すると急ぎ迎撃に駆けつけなければいけなかったので、自然と足腰が鍛えられたのであろう。
さすがは南国娘である。
彼女の今日の水着はフリフリのついた水色のワンピース型で、これはキャンディーさんの作品であった。

「そうなのか。我らの国では、様々なスポーツがあるからな」

「戦はせぬのか？」

「フジコ、お前は修羅の国の住民か？」

「魔族と聞いたから、常に戦っているものだと思ったのだ」

藤子が実家で読んだ事がある書物では、魔族とは常に誰が王となるか、戦う事で決めていたという風に書かれていたそうだ。

「フジコ、そんな魔族は何万年の昔の魔族だけだぞ」

一体いつの時代の話だと魔王様が呆れたその隙に、彼女の死角にポトンとボールが落下した。

「隙あり！　フェイントトスです」

「ぬぁーーー！　ずるいぞ！　フィリーネ！　伊達家秘伝のサーブ！」

「えいっ！」

「やるな！　ルルも！」

子供組四人は、話をしながら楽しそうにビーチバレーに興じていた。

「先生、お肉が焼き上がりましたよ」

「お魚もですよ」

「エビや貝も美味しそうですね」

子供組以外は、それぞれライラさんは日頃の疲れを癒すべくチェアーに寝転がってトロピカルジュースを飲み、アーネストはこんな時でも探索した地下遺跡のレポート執筆を、モール達はバーベキューの火の番をしていた。

キャンディーさん制作の水着を着たアグネス、シンディ、ベッティの三人は、俺に対し積極的に焼き上がった肉などを勧めた。

このプライベートビーチに招待され、バウマイスター辺境伯家独自の水着をプレゼントされたという事はそういう事だ。

三人は領地の開発に貢献大という事でローデリヒにせっ突かれ、正式にバウマイスター辺境伯家に嫁ぐ事となった。

アグネス以外は成人してからだが、もう決定という事でバウルブルクにはメガネ屋と花屋、料理屋の支店ができている。

領内にもう数店舗、アキツシマ島にも支店ができる予定で、これら支店網の責任者が三人であった。

勿論直接お店の経営に関わっている時間がないので、ルイーゼやイーナ同じくお飾りの責任者というわけだ。

早速彼女達の親族や、長年働いているベテラン従業員が実務を取り仕切っていた。

「先生、魔の森で活動する冒険者にサングラスがよく売れているそうです。ここは日差しが強いですから。漁師で購入する人もいますし、アキツシマ島では眼鏡自体が珍しいそうで」

「そう言われると、アキツシマ島の人間で眼鏡をかけた人はいない

か」

戦国時代風の島だったので、眼鏡は珍しいのかもしれない。

「お花もよく売れているそうです。あの島の人達は、ミズホ人達と同じく『生け花』というものをするそうなので。

シンディがオーナーである花屋も好調だそうだ。

ミズホ人もそうだが、生け花に使える外の珍しい花を購入してくれるそうだ。

逆に、ミズホ公爵領とアキツシマ島の珍しい花も王国ではよく売れている。

外国向けに、種や苗を栽培する農家が増えたそうだ。

貴族の女性にはガーデニングが趣味の人が多いので、ミズホ、アキツシマ産の花の種や苗もよく売れていた。

「うちも支店を増やしていますよ。お兄さんが関わると失敗するから、全部ローザさんがやっています」

「それなら安心だな」

元々飲食店は、経費がかからない商売だ。

日本人に似ているミズホ人とアキツシマ人……同じ民族だけど、どうも関係があまりよくないようで、分けて呼ばないと機嫌が悪くなる……は、外国の料理に興味があるようで、ベッティの義姉ローザさんが、ミズホとアキツシマ島に飲食店を何店舗か開いていた。

なお、ベッティの兄は料理の開発と本店の現場のみを任されている。

彼が経営に加わると、碌な結果にならないと思われているからだ。
実は俺もそう思っているけど。

「先生ももうすぐ結婚式で大変ですね」

「向こうの流儀に従うからな」

魔法使い三人娘に加えて、バウマイスター辺境伯領になったアキツシマ島統治安定のため、俺は涼子、雪、唯の三名と結婚する事になった。
島一番の名族秋津洲家の令嬢にして当主である涼子との間に子供を作り、その子を次の秋津洲家当主にする。

統治の実務を取り仕切る細川家の当主雪と、有力な重臣となった松永家の一人娘唯ともだ。
今、ルルと共にうちで預かっている伊達家の藤子も成人すればと、ローデリヒが言っていた。
『もうちょっと減らせないか？』とローデリヒに言ったら、『むしろ減らしています』と言われてしまった。

『アキツシマ島の元領主家のほぼすべてが、お館様に妻を差し出すと言っていたのです。拙者がなんとかここまで減らしたのですよ。その代わり、フリードリヒ様以降は彼らの要求をある程度受け入れないといけませんが……』

アキツシマ島の統治が安定しなければ、将来バウマイスター辺境伯家が潰れてしまうかもしれない。
そのための婚姻なら致し方なしというわけだ。

もっとも、ローデリヒの事だ。

島の統治に貢献した家に優先的に婚姻を斡旋し、バウマイスター辺境伯家の優位を決定づけようとしているのであろうが。

ローデリヒも、最近は一国の宰相かと思うほど老練になってきたな。

『とにかく、今あげた三名は外せません。下手をすると反乱ですので』

次世代以降の島のトップには、上位統治者であるバウマイスター辺境伯の血が入った者を当てるというわけだ。

完全な政略結婚なわけだが、これは大貴族の義務だとローデリヒは言っていた。

「お主も大変よな」

「テレーゼは逆でよかったな」

「そうよな。だから言ったであろう？　ヴェンデリンよ。王族や大貴族という地位は義務でしかないのだと。例え能力があっても、その義務のせいでおかしくなる者がいる。マックスのようにな。ヴェンデリンは潰れてくれるなよ」

「安心しろ。そこまでやる気はないから」

ニュルンベルク公爵みたいに、なら自分の思う通りにやってやると反乱まで起こすのはどうかと思う。

俺は神輿だけのバカ領主でもいいと思っているのだから。

「幸いにして、ヴェンデリンにはローデリヒがおるからの。あの男

は、帝国でも宰相の器であろうな。お主は暴君になる資質もないから、鷹揚に構えておればいい」

「そうしないと、俺には手に負えないよ。もうバウマイスター辺境伯領は小国みたいなものだからな」

将来的には、ブライヒレーダー辺境伯領、ブロワ辺境伯領、ホールミア辺境伯領を抜く大貴族となるはず。

王国との関係も重要であるし、ここに帝国とミズホ公爵領なども加わってくる。

うん、外交とか俺にはよくわからん。

ローデリヒに丸投げしておくか。

「して、結婚式にはあまり人を呼ばぬと聞くが」

「だって、教会で式を挙げないもの」

近年没落気味だったとはいえ、秋津洲家自体が神官の家系なのだから。

神道に似た宗教のため、教会式の結婚式など挙げたら島内で大きな反発が起こるのは必至だ。

そこで、完全にアキツシマ形式で結婚式を挙げてしまう予定だ。

今、松永久秀が懸命に準備をしている。

結婚式も島内でおこない、招待客も限られた者だけになるであろう。

「そういう事情ですので、お爺様も出席しません」

「そうなのか。ホーエンハイム枢機卿が異教徒の結婚式に出るわけ

にいかぬか」

「それもありますが、出席してしまえば改宗を迫らねばいけない立場にありますので」

アキツシマ島の住民達からの反発は必至であろう。

それがわかるから、教会関係者の出席はゼロであった。

「あくまでも、バウマイスター辺境伯家内の事だという口実です」

「それが一番賢いかの」

テレーゼとエリーゼによる話は続く。

「王太子殿下はいらっしゃいますが」

「……あの殿下、本当にヴェンデリンが好きなのじゃな」

あれほど嫌われる要素が皆無なのに、友人がないという人も珍しいと思う。

俺もバウマイスター辺境伯として陛下と王太子殿下にアキツシマ島統治の安定化のためだと、今回の婚姻について事前に説明している。

王家としてはまったく異論なし。

なぜなら、アキツシマ島から南に三百キロほど。

王国空軍が送り出した先遣偵察隊が、無人の大陸を発見したからだ。

東で探索をしていたリンガイアも、多くの島や陸地を見つけている。

大陸には魔物の領域も多く、いまだその全容もわからないが、王

国の方針は決まった。

面倒くさい異民族はバウマイスター辺境伯家に任せ、王国は新しい未開地の占領と開発をした方がいいと判断したわけだ。

「本来であれば、王太子殿下が涼子達と婚姻をして島を統治しなければならない。それをヴェンデリンが代わってくれたような結果になったからの。感謝して当然であろう」

王国としては、バウマイスター辺境伯家が安定させたアキツシマ島から利益のみ受け取れるというわけだ。

王太子殿下が式に参加して当たり前か。

「あとは、ブライヒレーダー辺境伯様とブロワ辺境伯様ですね」

共に、これからも緊密な関係強化が必要な相手だ。

ホールミア辺境伯家は、今魔族関連の事で忙しく、特に親しいわけでもないので招待しなかった。

「変わった形式の結婚式らしいから、余も将来に備えて見学しておこう」

実は、魔王様達も出席する予定であり、ライラさんと王太子殿下、ブライヒレーダー辺境伯、ブロワ辺境伯の顔合わせをする席でもあった。

新しい大陸が見つかった以上、王国の膨張は暫く進む。

いまだ交易交渉は進んでいないが、既にリンガイア大陸の魔道具職人が作れない魔道具の私貿易は公然の秘密となっていた。

それでも、力のある魔道具ギルドに配慮して、輸入している魔道

具の種類は限定されている。
彼らの市場を奪わない配慮であったが、これもいつまで保つかわからない。
王国政府は現在水面下で魔道具ギルドを説得していたが、魔道具ギルドは影響力があった会長の死により余計に態度が頑なになってしまった。

これでは交渉が進むはずがなく、王国としても私貿易の管理をしなければいけなくなったのだ。
王国は、魔族にとっては旧式でも中古魔導飛行船が欲しいし、将来的には魔銃、魔砲なども手に入れて研究したかったからだ。
もっとも、これらの品はライラさんには入手できなかった。
魔族の国では、非常に管理が厳重なものだからだ。
ライラさんも、逮捕される危険を冒してまで武器は密輸しないであろう。
そんな事をしなくても、廃棄、中古車両と船、修理した粗大ゴミの売却で十分に儲かるのだから。

「三人の大物は、車両と船が目的ですか」

「作れないからね」

俺も、地下倉庫から出た車両を魔道具ギルド販売したりしたんだが、どうも研究がうまくいっていないらしい。
技術の進歩はそう簡単に進むはずがないから仕方がないであろう。
現物があるので、ちょっとは何か成果を出してほしいとは思うのだが。

「結婚式が楽しみですね」

ライラさんの目が喜びに満ち溢れている。
きっと、いい儲け話だと思っているのであろう。
そして、海水浴の接待から一か月後。
アキツシマ島において、俺と涼子、雪、唯の結婚式がおこなわれた。

大津で拡張、改修された社において神前の式がおこなわれる。
式は日本の神前式にとても類似しており、涼子、雪、唯は白無垢、角隠し姿であった。

「旦那様、末永くお願いします」

「こちらこそ。でも、いいのか？」

「はい。あの兼仲と軍勢を率いて争っていた時。私は不安で一杯でした。それを突然旦那様が空から降りて救ってくれたのです。私は旦那様の妻になれて幸せです」

涼子は、きっと形ばかりの当主でも不安で一杯だったのであろう。
それを救った俺の妻になる事に不満はないようだ。

「私も、あの時内心で安堵しました。何しろ、私は魔法が使えませんから」

代々秋津洲家の補佐をおこなう細川家は、知識と教養が売りの家で、魔法を使える者が滅多に現れない珍しい家系であった。
武力に優れた兼仲に対抗しつつも、果たして撃退できるのかと不安を感じている時に、俺が助けに入ったというわけか。

「元々役割が役割なので、私を女性扱いしてくれたのはお館様だけ

なのです」

お飾りなので寛容さが求められる涼子と、時には心を鬼にしないといけない雪。

今まで他の家臣や領民達からも、尊敬はされていたが同時に畏れられてもいた。

男女の話は出てこなかったわけだ。

「ですので、私は嬉しいです」

「そうか。俺もそうだよ」

俺からすると、雪は話しやすいからな。

よく俺を補佐してくれるし。

「私は、涼子様と雪さんのオマケですから」

そして、いつの間にか第三の女として浮上していた唯。

領主や魔法使いとしてだけでなく、元は中央で権謀策術の世界に生きていた松永久秀の娘なだけはあるのか。

「父は、これでアキツシマ島が安定、発展するのなら満足なのです。私の夫に関してですが、私が産む子が次の松永家当主となるので、今まで高望みが激しくて……」

ああ見えて、久秀は唯をとても可愛がっていた。

一人娘なので余計であったようだ。

そんな可愛い一人娘の婿に対するハードルは非常に高かったようだ。

「三好義継様の妻にと望まれた事もありましたが、父は断りましたからね」

元主君の子供との婚姻を断るとは、どれだけハードルが高いのであろうか。

「そんな中でお館様がいてくれて助かりました。そう頻繁にアキツシマ島へ来れらないかもしれない事情は理解しております。その時には、三人で精一杯歓待させていただきます」

雪もそうだが、アキツシマにはしっかりとした女性が多いのであろうか？

「バウマイスター伯爵じゃなくて辺境伯か。まあいい。いつかお前を打倒して俺がこの島の主となるのだ！」

「ふんっ！」

「師匠……痛いですよ」

「冠婚葬祭の席である！　大人しくするのである！」

「わかりました……」

その代わり、男にはバカが多いのか？

宋義智のアホが、無礼だと導師に拳骨を落とされながら顔を出した。

その後ろには、元織田信長、元武田信玄、元上杉謙信のＤＱＮ三人娘もいる。

「とはいえ、今の時点では最初の難関である師匠に勝てん！」

「当たり前だ！」

今のところ、人類でそんな奴はいない。

導師が健在なうちは、力こそすべてだと思っている義智もＤＱＮ三人娘もアホな事は考えないか。

「今は島を預けているから、お祝いは奮発しておいたぞ」

決して誇張ではなく、義智とＤＱＮ三人娘は大量のお祝いを持参した。

「お前、どうしてそんなに裕福なんだ？」

「インコ特需だ！」

平和になったアキツシマ島では、武力しか取り得がない領主階級の人間の居場所がなくなった。

文官としての才能は未知数だが、義智やＤＱＮ三人娘のようにやらかしてルルが住んでいた魔物の島に飛ばされた者も多い。

そのあり余る力を利用して、魔物を狩らせたのだ。

今ではルルがいた村の跡地に新しい村ができあがりつつあり、そこで義智達は修行と討伐の日々を送っている。

ここに住む無駄に大きく数が多いインコの羽毛が、寝具や高級衣料品の原料として人気となり、今ではライラさんも購入しているほどであった。

「そんなに儲かるのか？」

「いくら獲っても足りないし、あいつらいくら倒してもいなくならないんだ！」

あの魔物の領域は、インコの楽園だからな。
下手な冒険者だと返り討ちであり、大量に討伐可能な義智達は重宝されているのであろう。

「じゃあ、暫くはあの島か」

「昔の村の家屋だと辛くてな。金はあるから家を建てている」

いきなり家を建てるとか、本当に景気がいいんだな。

「まあ、住む人数が増えるからな」

「ふふふっ、我らはあの島で財を築き、いつか島を取り戻すのだ」

「沢山の子を成し、いつかアキツシマ島へ！」

「今のうちに安寧の時をすごすがいい！」

ＤＱＮ三人娘の発言ですべてわかった。
と同時に、嬉しさもこみあげてくる。

まさか、ＤＱＮ三人娘を引き取ってくれるなんて。
義智はバカだが、意外といい奴かもしれない。

「ヴェル、いいの？」

「いいんじゃないか？」

ルイーゼが心配するが、ああやって言いたい事を言っている間は大丈夫だ。
本当に謀反を起こすつもりなら、いちいち口にはしないのだから。

「殿下達はライラさんと商談かな？」

「みたいだね」

招待した三名の大物は、早速ライラさんと何か真剣に話し合っていた。
現在両国では、独自のルートで魔族と私貿易をするのが流行しつつあり、今の時点で手を出していない大物貴族はボンクラ扱いという評価だ。
いくら上が交渉で揉めていても、貴族領はそれぞれ独立した国のようなもの。
独自に魔族とパイプを繋げない者は無能扱いされても仕方がなかった。

ただ、貴族は王国、帝国に所属している。
いくら独自に私貿易をおこなっても、最低限守らなければいけないルールがある。
明確に文章化されているわけではないが、武器を輸入したら王国への反逆と取られても文句は言えないなどがあった。
実際にいくつかの貴族家で魔族に依頼をしたケースもあり、早速王国は調査に乗り出したそうだ。
もし購入でもしていたら、確実に改易されるであろう。
いまだ統治が安定してしない帝国では、先日魔族から武器を輸入しようとして改易された貴族家があったそうだ。
もっともその貴族は、魔族に騙されて金だけ奪われたそうだが。

最近、人間との私貿易は金になると、怪しげな連中も参加するようになったとライラさんが言っていた。
騙されずに利益を上げる事も、貴族や王族としての力量の内というわけだ。

「ヴェル、そろそろ時間よ」

「わかった」

いよいよ、アキツシマ式の結婚式がおこなわれる。
花嫁と花婿四人が姿を見せると、社の境内では数十名の巫女が神に奉納する舞を舞っていた。

「涼子は花嫁だから躍らないのか」

「あとで所望でしたら舞を披露しますね。彼女達はただ仕事というわけではないのです」

秋津洲家を神官長として、今までは分裂していた社が大津を本拠地に再編成された。
巫女が島の各地から集まって今日の奉納舞を舞っているのだが、彼女達の大半は領主一族や富裕な商人や庄屋、豪農の子女であった。

「今日は社の前でお祭りもおこなわれており、島が統一されたので多くの人達が集まっています。巫女達を男性が見染めるというわけです」

社は未婚の女性を巫女として受け入れ、花嫁修業も兼ねて色々な事を教える。
祭りで舞を舞わせ、それを見て気に入った男性がお見合いを社に

申し込み、女性が了承したらお見合い、互いにオーケーなら結婚という流れだそうだ。

「正妻は政略結婚で決めても、側室はこういう場で見染める事も多いのです」

大領主様の側室になれるチャンスというわけか。

巫女には綺麗な人が多く、みんな華麗に舞を舞っていた。

「旦那様、興味ある娘はいらっしゃいますか？」

「ははは。舞を見て綺麗だなって思っただけ」

本当、これ以上の嫁は勘弁してください。

奉納舞が終わると、神官らしき人物が御祈りを捧げてから俺達に三々九度をさせた。

この辺は、エルとハルカの式によく似ている。

同じ民族だから当然か。

「今、神の前で四人は夫婦となりました」

アキツシマ島においておこなわれた結婚式は、同時に開催された社の祭りと共に大成功を収めた。

島の住民は平和を喜び、新しい支配者も好意的に受け入れたと思う。

もう暫くは色々とあるかもしれないが、これでバウマイスター辺境伯領はすべて定まった。

俺は、なるべく早く穏便に隠居できるよう、もう暫くは頑張ろうと決意するのであった。

第百五十九話　三年後、バウマイスター辺境伯暗殺計画。

「父上、瞑想が終わりました」

「みんな、終わったのかな？」

「はい」

「じゃあ、今日は他の事をしてみようか」

魔族の襲来から三年、バウマイスター辺境伯領は今日も活気に満ち溢れていた。

いまだ政府間の交渉は纏まっていない。

ある意味凄いと思うが、現実はお上の取り決めを超えている。

リンガイア大陸中に、魔族の国でゴミ扱いされた古い魔道具が修理されて大量に流入し、それらを用いて開発が進んだ結果、ヘルムート王国、アーカート神聖帝国ともに開発ラッシュが続いていた。

格安とはいえ魔道具だ。

魔族の国からしたら、粗大ゴミや捨て値で売られていた古い魔道具がそこそこの金になるのだ。

目端の利く魔族達が、中古魔道具の販売益で多くの富を得た。

移動距離のせいもあって苦労している者は多いが、成功するため

に苦労を厭わない若者が多くの利益を得ている。

いまだ三か国との間で貨幣レートすら決まっていないが、金、白金、宝石、その他金になる魔物の素材、鉱物などとの交換で取引しているので問題なかった。

この中途半端な状況に文句を言う者も多いが、そういう連中に限って裏で交渉に圧力をかけている。

三か国の政府も、武器や奴隷の密輸入などがなければ黙認というスタンスなのだ。

そうやって入ってきた魔道具……自分の市場を奪われる事に過剰に敏感な魔道具ギルドに配慮し、魔道具ギルドでは作れない物しか輸入できない秘密の取り決めになっていた……は、今や両国中に普及していた。

いまだリンガイア大陸の魔道具ギルドが作れない車両、重機に似た魔道具が開墾や道路工事、建設で大いに活躍し、魔族の国ではもはやほとんど使われていなかった帆船型の魔導飛行船も沢山飛び回って流通、交通網が強化された。

バウマイスター辺境伯領でも、魔王様の会社から購入した魔道具のおかげで急速に開発が進んでいる。

併合した南方の島々やアキツシマ島の開発の順調であり、領内中をライラさんから購入した中小の魔導飛行船が飛び交っていた。

王国と帝国も、大型魔導飛行船の数を大幅に増やしている。

すべて魔族の国から私貿易で輸入したものだ。

武器はついていないし、旧式の魔導飛行船では魔族の国の警備隊が保有する新型魔導飛行船に歯が立たない。

輸送目的のみであるし、大半は死蔵されたり、粗大ゴミとして放置されていた船だ。
目敏い魔族だけが儲かり、一般の魔族は大量の粗大ゴミが消えてよかったという認識だと魔王様が言っていた。

そんな状況なので、俺達は魔王様とライラさんから定期的に魔道具を購入し、それを領内の開発に投入して成果を出していた。
俺達魔法使いも魔法で開発に協力し、たまに冒険者としても活動している。

そんな日々の中でまたもエリーゼ達が子供を産み、俺は最初に生まれたフリードリヒ達が三歳になったので魔法を教えるようになっていた。
フリードリヒ、アンナ、エルザ、カイエン、フローラ、イレーネ、ヒルデ、ラウラの八人だ。
ただまだ子供なので、本当に基礎的なものだけだ。
毎日の瞑想を教え、今日はちょっとした遊びを考えている。
みんなまだ子供なので、楽しく鍛錬してくれればいいのだ。

「みんな、好きなのを選んでくれ」

「うわぁ、魔導飛行船だぁ」

それは、俺がバウルブルクの玩具屋に依頼した魔導飛行船の玩具であった。
魔法の鍛錬に参加している八人分をみんなに見せ、好きなものを選ぶように言う。

「私、これ」

「僕はこれ」

「これかなぁ？」

みんなそれぞれに玩具を選んでから、俺はその使い方を教えた。

「これは軽めに作ってある模型なんだ。こうやって『念力』で動かす」

フリードリヒが選んだ玩具を借り、俺はまるでドローンにように魔法で動かした。

本物の魔導飛行船のように動かしたり、上空で宙返りさせたり、スピードも早めたり、緩めたり、進路上にある木の幹や枝をターンさせたり、要するにこの玩具を自在に動かすのが訓練というわけだ。

「「「「「「「「「「父上、凄い！」」」」」」」」」」

「毎日ちゃんと練習すれば、このくらい余裕さ。そのうち、コースを作ってレースをしようか？」

「よーーーし！　優勝するぞ」

「私が優勝する」

「私よ！」

「僕が優勝するんだ！」

フリードリヒ達は、早速玩具を魔法で飛ばし始めた。

「あれ？　落ちちゃった」

「おかしいなぁ？」

「カイエン、フローラ、意外と難しいだろう？」

カタリーナの息子カイエンと、カチヤの娘ヒルデはいきなり玩具を落下させてしまった。

実はこの玩具には特別な仕掛けがあり、揚力を均等に纏わせないとすぐに落下してしまうようにしたのだ。

「フリードリヒ達は魔力が多い。でも、それだけでは魔法はちゃんと使えないぞ。今からちゃんと魔力のコントロールをしっかりと身につけるように」

「そうすれば、父上のようになれる？」

「なれるぞ」

フリードリヒ達は、今の時点で俺が師匠に出会う前くらいの魔力があったから才能はあるはずだ。

毎日瞑想はさせる事にして、今は無理な魔力量の増加よりもコントロールの方を重視しようと思う。

未熟な子供だと、時に魔法が暴発してしまう危険があるからだ。

焦らず、ゆっくりと魔法を覚えていけばいい。

「がんばります」

「浮いた！」

フリードリヒ達は、楽しそうに玩具の魔導飛行船を浮かせて楽しんでいた。

「よしよし」

「あら？　随分と熱心なのね。お館様。ローデリヒさんが待っているわよ」

あとは世話役と護衛に任せて他の用事をこなそうとしたら、アマーリエ義姉さん迎えに来た。

「アマーリエ義姉さんから、お館様って呼ばれるのは慣れないなぁ……」

「それはしょうがないわね。私はもう奥さんと同じような扱いだから」

いまだアマーリエ義姉さんは侍女長のような扱いであったが、去年女の子を産んだので家臣達は俺の奥さん達と同じ扱いをするようになった。

表向きの身分なんて、バウマイスター辺境伯家の家臣はあまり気にしない。

彼女が俺の娘を産んだという事実が大切なのだ。

現在、ロジーナと名付けた娘は元気に成長している。

「それで、ローデリヒはなんと？」

「お話がありますって」

「また説教だぁ……」

俺は貴族としてちゃんとやっているはずだ。

確かに、たまにエル、ブランタークさん、導師と勝手に抜け出して魔の森に狩りに行ったり。

『貴族が面会？　俺はフリードリヒ達に魔法を教えるのが忙しいんだ！』と断ったり。

ローデリヒが厳選した書類へのサインをなかなかしなかったりするけど、それで何か悪影響があったわけではない。

「書類はちゃんと見ないと駄目だと思うわ」

「そこには、聞くも涙、語るも涙の事情があるのですよ」

「そうなの？」

「ええ……」

勿論、ただ面倒だからだけど。

「アマーリエ様、お館様の嘘に騙されないでください」

「嘘じゃないよ」

痺れを切らしたのか？

俺を呼んでいたローデリヒが姿を現した。

「俺は忙しいから、順番に仕事をこなしているだけなんだ。ローデリヒが明日までにサインが欲しいという書類があったとしますよね？」

「ええ」

「実は、一週間くらい大丈夫です」

「そうなの？」

お仕事が完璧なローデリヒは、俺が遅れて書類にサインしても問題ないようにしてあるのだ。

「さすがに一週間は駄目です！　せめて三～四日ですよ！」

と言っておいて、実はそこにまだ余裕が存在する。

小説家が締め切りを指定され間に合わなかったが、そこにはまだ第二・第三の締め切りがあるのと同じ事だ。

「というわけなので」

「書類を見てサインするくらい、期日内にしてください。お館様にも多くの子が生まれ、ますますバウマイスター辺境伯家の当主として精進していただかなければ……」

「一杯生まれたものね」

確かに、今のバウマイスター辺境伯家は究極のベビーブームに沸いていた。

この三年で、エリーゼはマルテという娘を、イーナはラルスという息子を、ルイーゼもオーラフという息子を、ヴィルマはフーベルトという息子を、カタリーナはイェルクという息子を、テレーゼはディルクという息子を、カチヤはエーゴンという息子を、リサもニ

クラスという息子を産んだ。

新たに嫁にしたアグネスはマリーアという娘と、シンディはヴァネサという娘を、ベッティはヘラという娘を。

アキツシマ組の涼子は涼介という息子を、雪は文子という娘を、唯は久通という息子を産んでいる。

今度は、エリーゼとアマーリエ義姉以外が息子を産んでくれたので、ローデリヒはバウマイスター辺境伯家の分家を創設できると喜んだ。

そして、娘しかいない貴族家から跡取り婿にくれと大勢から懇願され、俺は泣いた。

俺の子は、セリで落とされる子牛じゃないてのに……。

『もっと、御子を！』

しかも、ローデリヒは俺の気持ちを一切斟酌してくれないのだ。

エルもそうだが、自分も父親だというのに。

『エルヴィンや拙者の子達と、お館様の御子は立場が違いますので』

他にも、エルとハルカの間に娘サオリが、この名前はミズホ風にしたのだという。

レーアもグンターという息子を、アンナはモーニカという娘を産んでおり、エルも四人の子持ちとなっていた。

ローデリヒも既に二人の息子と一人の娘の父親であり、他の家臣にも次々と子供が生まれてる。

あまりに子供が多いため、女性陣はみんな大忙しであった。

効率よく面倒を見るためにバウマイスター辺境伯家の子供と主だ

った家臣の子供が集められ、妻達が分担して面倒を見ている。
家臣の親族で未婚の娘も、ほぼ強制で子供達の面倒を見させられた。
将来嫁入りして子供を産んだ時の練習という理由だ。

ただ、魔力があるのはうちの子供達だけなので、魔法の特訓は別メニューとなっていた。
基礎的な教育は、個々にやると面倒なのでみんな集めて学校のようにしている。
多少は競争した方が習得も早いであろう。

先生役は、教養のある年寄りを王都の貴族の紹介で呼び寄せている。
とにかく今のバウマイスター辺境伯家は、色々と大騒ぎであった。
「だから、ちゃんとやっているじゃないか。魔王様との私貿易を最初に始めたのは俺だよ」
魔族との私貿易でも、俺が最初に手を出した。
魔王様と縁を結べたし、これはいいコネになると思う。
何しろ、今の魔王様は大きな会社の会長様だからな。

うちに色々と売ったり教えたお金で順調に会社を拡大。
今は、ヘルムート王家、バウマイスター辺境伯家、ブライヒレーダー辺境伯家、ブロワ辺境伯家と取引をおこなう貿易会社として有名になっていた。
魔族の中には『庶民を弾圧した王家の末裔が、再び独裁を目論んでいる。そのために、我らの貴重な資産や技術を売り渡した！』と騒ぐ者もいたが、世論はさほど批判的ではない。
つまるところ、最初に売り渡した中古魔道具の大半は元粗大ゴミ、

残りも捨て値で売られていたのに誰も買わなかったような古い品だ。
魔導飛行船に至っては、処理費用を払うのが嫌だからと勝手に捨てられていて、地元の住民が迷惑していたようなものもある。

片づけるにも費用がかかるからだ。

それらが一斉に片付いたので、文句を言う人もいなかったのだ。
今も放置区画に捨てられた魔道具や魔導飛行船を拾い、法律で使用禁止になった魔道具を買い取り、それを修理して販売している。
輸入は、魔族の国では手に入らない魔物の素材、それらを用いた衣服、装飾品などがメインであった。
新品の魔道具、食料品などには手を出していない。
これはお上の交渉内容に被るからだ。
ライラさんは、今の時点で魔族の国の政府に逆らおうと考えるほどバカではない。
もし再び王族が国を支配するにしても、それは大分未来のはず。
今の魔王様の存命中は不可能だと思っていた。
なので、今は力を蓄えているだけだ。

それに、魔王様の会社は失業していた若い魔族を大量に雇用し、そこで知り合って結婚し、子供が産まれた者も多い。
この前、モール達も子供が生まれたと手紙が来た。
新聞記者でライラさんと同じくいまだ独身のルミが、魔王様の会社を記事に書いたそうだ。
『この少子高齢化社会で、珍しく出生率に期待が持てる会社』という内容で、積極的に若者を雇用し、社員同士で結婚して子供を産む者が多いと好意的な記事になっていた。
世論の反応もいいようで、一部を除けば評価は悪くなかった。

それに、古い魔道具と技術をリンガイア大陸の人間に売って儲け

る魔族など、今では珍しくなかった。
いくら政府間の交渉が纏まらなくても、勝手に動く者は人間に魔族にも多かったというわけだ。
みんな、お上の逆鱗に触れないよう、ギリギリの線を探って新しい商売を色々と考え、独自に儲けている。
それを権力で止めるのは、実は結構難しかったりする。
武器や違法な薬物を輸出入されたら困るが、わざわざそんなものを取り扱わなくても儲かるから、滅多にいない。
いても、魔族の治安組織は優秀なのですぐに捕まってしまうと、ルミが俺たちに教えてくれた。

「今日は、魔王様とライラ殿がいらっしゃっています」

「あれ？　俺は迎えに行っていないけどな」

人間と魔族の交流において一番の障害は、両国の距離にあった。
自前で魔導飛行船を準備するか、個人で魔法を用いて過酷な航海をするか。
魔族は訓練すればすぐに『飛翔』や『高速飛翔』を覚えられたが、『瞬間移動』は幻の魔法扱いらしい。
魔王様との貿易も、連絡を受けると俺がわざわざ魔法で迎えに行っていたのだから。

「何でも、新しい船を購入したそうで」

「景気いいんだな」

「ですね」

待たせるのもなんだと思って執務室へと向かうと、そこには魔王

様とライラさんがいた。
ライラさんはこの三年でまったく変わっていなかったが、魔王様は今年で十三歳。
前世で何度か会った事がある、親戚の女子中学生くらいまでには成長していた。

将来はかなりの美少女になるはずだ。
ただ、残念ながら胸は……年相応だな。
ルイーゼよりは大きいはず。

「バウマイスター辺境伯、春休みなので遊びに来たぞ」

「船に乗ってですか？」

「そうよ、新型の魔導飛行船を会社の経費で購入したのだ。交易量が増えると、そう毎回バウマイスター辺境伯の魔法に頼ってばかりいられないからな」

「魔族は自分で魔晶石に魔力を篭められますので古い魔導飛行船でもよかったのですが、法律で古い船を使うのには制限があるのです」

「古い船や魔道具の使用が禁止されているのに、私貿易は黙認って……」

「法律に記載がないのですよ。ですから、魔族は自由にこっちで商売していますね」

魔族の国の法律では、国内で古い魔導飛行船を使用するには特別な許可がいる。
だが、国外で使う分には違法ではない。

というか、想定していないので記載がないのだ。

さらに、国内でも放棄区画や未開発地域は使用禁止の範囲に入っていない。

古い魔導飛行船は危険で墜落でもしたら大変、だから使用期限がすぎた船は新しい船を購入しなさいという法律なのだが、国外や放置区画で古い船を使って墜落しても自己責任という理由らしい。

そこで、人間との商売を目論む魔族は放棄区画に簡易な港を作り、そこから船を飛ばした。

これなら、処罰のしようがないというわけだ。

「さらに言うと、うちのように新型船を購入すればまったく問題ない。うちは魔王が経営する会社として注目を浴びているからな。古い船を使うと、批判して足を引っ張る輩がいるかもしれない。そこで新造船を購入したわけだ」

「節税目的でもあります」

ライラさんは、そっと一言付け加えた。

魔族の国でも、税金の問題は色々と切実らしい。

「新型って、警備隊で装備しているような船ですか？」

「あれは軍艦だからな。民間人は買えぬぞ」

「あえて形状は変えておりません。素材も木製の部分が多いですね。警備艇の外殻素材は軍事機密ですから、民間人は船に使用できないのです。どうせ買えませんし。あとは、旧式船に比べると燃費とスピードが段違いですね」

「燃費がいいのはいいなぁ……」

実は古い船でも、古代魔法文明時代の発掘船より燃費はいいのだけど。

「ところで、そちらの国の大企業は、交易に手を出さないのかな？」

「今のところは出せないのです。交渉の途中なので」

これだけ私貿易が活発になると、魔族の国で大きな力を持つ大企業が手を出してきそうな気がするのだが、ライラさんによるといまだに参加していないそうだ。

「どうしてですか？」

「私貿易にも暗黙のルールがありますから」

大企業が量産している魔道具などは、国内では機密保持に問題がある。

国外では、魔道具ギルドの反発で王国、帝国共にいまだ交渉が纏まっていない。

よって、手が出せない状況だそうだ。

「大きな会社ゆえに、違法とは言えないまでもグレーゾーンには手を出しにくいわけです」

「陛下の会社は？　大分規模が大きくなったと聞いたけど」

「大きくはなりましたが、大手魔道具メーカー、魔導飛行船造船メ

ーカー、有名な大規模農業法人などに比べたらまだまだです。あとは、今の政権が彼らの動きを掣肘しているのです。早く人間との交易に参加したいと不満タラタラでしょうけど」

「政府が掣肘している？」

「我々の国で一番の魔道具メーカーのトップが失言したのです。『重要部品のみ国内で作って、あとは人間の国に大工場を作ればコストが削減できるな』と」

「労働組合を敵にまわしたのか？」

「よく労働組合をご存じですね」

知っているさ。

前世の会社にもあったよ。

給料から決して安くない組合費を引かれていたが、投票の要請ばかりされて何の役にも立ちませんでした。

出世したい奴が組合活動に参加して、うるさい連中を押さえて会社の言いなりになってしまったからね。

みんな、労働組合なんてあっても残業なんて減りませんよ！

「お館様、労働組合とは？」

「わかりやすく言うと、工房の職人が組織を作って、団体で親方に待遇改善を要求する運動だな」

「団体なのが肝なのですか。使用人もたまに要求をする事がありますからね」

封建社会だからといって、決して労働争議がないわけではない。
あまりに待遇が酷いと使用人全員で貴族に要求を出したり、元から雇用保険や年金などないのだ。
嫌なら逃げてしまうという選択肢もあった。

「こっちの方が人件費も安い。工場をこっちに移せば儲かるわけだ」

技術漏えい対策として、重要部品をブラックボックス化してこちらでは組立だけをやるという手がある。
重要部品以外で外注できる部品があれば、もっとコストが安くなるであろう。
その代わり、ゾヌターク共和国内で重要部品を作る従業員以外はリストラだろうな。
人間と取引を開始したら、経営者ばかり儲かって魔族の国では失業者が増えた。
なんて事になりかねない。

「当然、労組が大反発しています。『新しく商売を始めた者達は雇用を増やしているのに、大企業はこれだ！』という反発です」

こういう問題は、日本でもあったからな。
魔族の国も日本に似ているから、こういう問題が発生する可能性が高いわけだ。

「それは、交渉も纏まりませんね。どうせ、こっちも条件を飲めませんけど」

もしそんな大工場ができたら、両国の魔道具ギルドは没落決定であろう。

当然反発するので、また交渉が纏まらないわけだ。

「これで三年もか。よくやるよ」

王国は交渉が纏まらなくてもそう影響はないが、魔族の国は大変そうだ。

「民権党は役立たずという批判が大きくなりました」

民主主義国家で、貿易交渉が三年も纏まらないと色々と批判されそうのは容易に想像できた。

「来年の選挙では、与党からの転落は確実と言われています」

「そうなんだ」

国権党が政権を奪還したら、交渉は纏まるのであろうか？

今よりはマシになるのかな？

「そちらの情報は定期的に確認するのを忘れないようにするけど、今はどうにもできないな」

俺は既に交渉団の一員ではなくなっていた。

今は、自分の領地にだけ責任を負えばいいのだ。

「魔導ポンプ、魔導船、魔導飛行船、車両、重機。全部、放置区画に捨てられていたものですが、修理してちゃんと動くようになりました」

「全部買うよ。そちらは？」

「特に、インコの羽毛がほしいですね。今、インコの羽毛の布団やマクラが流行していまして……」

羽毛があれば、魔族の国のメーカーに製造を委託する事もできる。

だから、インコの羽毛を売ってほしいとライラさんが頼んできた。

「在庫が結構あるから、そちらの希望に添えると思います」

「沢山討伐しているのですね」

「俺じゃないけど」

いつか俺を倒すと言っている宋義智と、前は俺の子を産みたいと言っていたＤＱＮ三人娘は、他の元兵士や武将であった冒険者を率い、大量の魔物を狩っていた。

特にインコの羽毛がよく売れるので、彼らは島に豪邸を構えて住んでいた。

さらに、ＤＱＮ三人娘は今妊娠しているそうだ。

宋義智は、今何気に成功していた。

ここまで成功してしまうと、もうあの領民が少ない島には戻らないような気がする。

「羽毛はいくらでも購入させていただきます。布団とマクラは常時品切れ状態なので困っていたのですよ」

領地の開発も魔族との交易も順調であり、バウマイスター辺境伯領の開発を促進していた。

魔王様も、企業のオーナーとして魔族社会で認知されつつある。

お上同士の交渉がまったく進まなかった三年で大きく様変わりしたものだ。

「あっ、魔王様だ！」

「久しいな、魔王様」

「ルルとフジコか。冬休み以来だな」

商談も終わったので、魔王様は屋敷にいるルルと藤子に会いに行った。

種族差を乗り越え、子供組同士でとても仲良くなっていたのだ。

魔王様は長期休暇になると、商談とバウマイスター辺境伯領に滞在している魔族社員への激励と視察を兼ねて遊びに来るようになっていた。

『これも、余が真の魔王となるべく他国への視察と遠征も兼ねておる』

遠征してバウマイスター辺境伯領を占領するわけではないが、魔王様は領地の代わりに販路を増やそうと努力しているので遠征と変わらないという。

武力を用いない平和な遠征というわけだ。

「魔王様、お土産は？」

「買ってきたぞ、ルル。見るがいい。高級菓子店『エスポワール』のエクセレントシュークリームだ」

「美味しそう」

「そういうお菓子は魔族の圧勝だな。バウルブルクも王都に匹敵するレベルまで上がってきたが、それよりも上に感じる」

俺の嫁候補として屋敷に滞在しているルルと藤子は、この三年で相当舌が肥えてしまった。

魔王様の持参したシュークリームに目を輝かせている。

こういう高級品の品質では、魔族の方が圧倒的に上であった。

問題なのは、これを購入できる層が段々と減っている事らしいが。

魔族の社会では、格差が広がっているというわけだ。

リンガイア大陸も、格差という面では相当なものだけど。

「確かに、これは美味しそうだ」

「であろう？　バウマイスター辺境伯。高額なので普段は買わないがな。こういう時ならば、これはお得意様に対するお土産。交際費、接待費で落とせるからな」

「細かいですね」

「我々は予定よりも大分早く大きくなってしまったからだ。魔王様が経費流用なんて不祥事があれば足を引っ張られる」

「政治家でもないのにですか？」

政治家なら賄賂、公金流用とかがあれば問題になるが、魔王様は公人ではないからな。

そこまで気にする必要はないと思うのだが……。

「今は公人ではないが、将来は公人という立場になるかもしれない。油断せぬよう、今から気をつけておるのだ」

女子中学生の年齢なのに、魔王様は随分としっかりしていた。

魔王様が公人になる？

将来、政治家の道を志すのか？

それなら気をつける理由がわかるような気がするな。

「それも、長い学生期間が終わってからだがな。次の王を産むという大変な仕事もあるからな」

女子中学生くらいの子が恋愛にあこがれず、出産を仕事と割りきるのは凄いな。

これから好きな人ができたら、普通に恋愛くらいはするのであろうが。

「同級生に気になる男子はいないのですか？」

「みんな子供だからな」

魔王としての力を取り戻すため、学業の傍ら大人と一緒に会社経営をしている魔王様から見たら、同じ学校の同級生は子供にしか見えないようだ。

魔王様は年上好きになる可能性が高い。

「さあ、持参したお土産を一緒に食べようではないか。沢山買ってあるから、みんな遠慮するなよ」

魔王様はみんなにシュークリームを振る舞い、暫くバウマイスター辺境伯領に滞在する事になった。

ところがちょうどその頃、水面下ではとんでもない陰謀が謀られようとしていたのであった。

「だから言ったであろうが！　バウマイスター辺境伯こそが元凶なのだと！」

「あの男、しれっと魔族と取引などしおって！」

「ええい！　我々の魔道具の売り上げが一向に増えぬではないか！　これも、バウマイスター辺境伯が！」

みんな、それぞれに不満を口にしているが、その対象はバウマイスター辺境伯が大半であった。

私がそういう風に誘導しているのだから当然だ。

長期政権を担った会長の死により、いまだに混乱している魔道具ギルド。

彼らは、魔族から大量の魔道具を購入したバウマイスター辺境伯を恨んでいた。

人は都合のいい事実しか見ない。

確かにバウマイスター辺境伯は最初に魔道具の輸入を始めたが、今では多少目端の利く貴族や商人ならみんな取引している。

いまだ政府間の交易交渉が纏まっていないので、自然と私貿易が普及したのだ。
王国と帝国だって、政府がダミー商会を通じて取引をしている。

暗黙の了解として、魔道具ギルドが製造しているもの、武器や奴隷の類の取引は禁止している。
地方の貧しい貴族が不良魔族と手を組んでそういう事に手を出す案件もあったが、大半が見つかって改易されてしまった。
王国と帝国は程度の低い貴族を間引きでき、直轄地も増えて万々歳か？
そんな貧しい飛び地のような領地、王国も統治しているだけで負担なので、じきに褒美名目で誰か別の貴族に下賜するのであろうが。

おっと話が反れたな。
魔道具ギルドは会長の葬儀後、散々に揉めて今の会長が就任している。
元は理事に名を連ねていた人物で、組織管理能力には優れていた。
だが、自身の派閥はさほど大きくない。
多数派工作で、他派に色々と妥協した結果の会長就任なので力がないのだ。
本人は魔道具職人出身だが、腕はさほどでもないし、とっくに職人としては引退している。
そのため、今、王国中に流れ込んでいる魔族製魔道具への対応すらできていなかった。

勿論、魔族製魔道具の購入と分解、解析はおこなわせている。
そんな事は、帝国の魔道具ギルドも、北方の技術国ミズホの魔道具職人共同組合もおこなっているのだ。
唯一の違いは、王国の魔道具ギルドは何の成果も出ていない点であろうか？

昔から、バウマイスター辺境伯から発掘魔道具を景気よく買い込んで解析を続けているが、碌な成果を出せていない。
私としては、魔道具ギルドの技術部門には何か致命的な欠陥があるようにしか見えないのだが、それを連中に言っても仕方があるまい。
『貧すれば鈍する』とはよく言ったものだ。

技術進歩の停滞と市場を奪われる危機感から政府間の交易交渉を妨害し、王国を怒らせている。
王国政府が直接魔道具ギルドを罰しないのは、その資金力と影響力が大きすぎるのと、ただ潰しても後釜の組織がないからだ。
だから、王太子殿下がダミー商会を使って私貿易をしているのだ。
陛下でなく、殿下がおこなっているというところが肝というわけだ。

それに、王国としてもこのまま魔道具の市場を魔族に奪われるのをよしとしていない。
今は魔族との技術格差が大きく、生産力も大幅に劣っている。
それは認め、交易する魔道具の種類と量を制限しつつ、関税をかける事も視野に入れ、自国の魔道具産業を守りながら成長を促進させる。

これを達成すべく王国政府は懸命に努力しているのに、肝心の魔道具ギルドは魔族製魔道具の断固輸入阻止という考えを崩していない。

とっくに、私貿易で大量の魔道具が輸入されているがな。
その走りとなったバウマイスター辺境伯を、新会長とその取り巻きは憎んでいる。
今までは、彼が苦労して入手した発掘魔道具を購入していた癖に、

恩知らずもいいところだ。
そのバウマイスター辺境伯が購入する魔道具の種類に制限をかけ、この指針を王国、帝国、他の貴族達も真似ている。
だから、魔道具ギルドの売り上げは落ちていない。
第一、お前らには作れないものばかりじゃないか。

それなのに、バウマイスター辺境伯を憎むとは、やはり八十すぎの偏屈ジジイを新会長にしたツケだな。
会長が死んだ時、次は自分の出番だと思ったのであろうが、とんだ老害というわけだ。

もっとも、そんな愚か者だから利用できる。

他の連中も似たり寄ったりだ。

バウマイスター辺境伯の躍進の恩恵を受けられず、見当違いの恨みを抱いている貴族。

魔族と取引をして騙され、そこからバウマイスター辺境伯憎しとなった者。
なぜそうなるのか理解できないが、彼が魔族と取引して利益を出しているのが憎い、いや、自分が無能だと思われるのが嫌なのだろうな。
バウマイスター辺境伯は、魔族と取引をする売国奴だと思わずにいられないわけだ。

見渡すと痛々しい連中ばかりであるが、利用しやすい点はいい。
それに、どうせ私も同類だ。
私は、ただ息子を魔族の国の豚箱にぶち込んでおきながら王国に評価されるバウマイスター辺境伯が憎い。

確かに、私の息子はデキがあまりよくない。
だからといって、可愛い跡取り息子をああいう目に遭わされて何とも思わない親などいないはずだ。
他の乗組員達を救うため、あえてうちの息子が豚箱に入ったという噂まで広げやがって！
私の息子だぞ！
そんな殊勝な考えをするはずがない！
そんな事は、親である私が一番理解している！
バウマイスター辺境伯が、周囲からの批判をかわそうと考えた姑息な策でしかないのはお見通しだ。

今、この私がバウマイスター辺境伯暗殺を目論む。
リスクばかりで何の益もないであろう。
歴史あるプラッテ伯爵家が改易される危険性が大きい。
だが、私とて感情のある生き物なのだ。
家を潰す危険を冒してでも、感情がバウマイスター辺境伯に復讐せよと告げるのだ。

もっとも、ちゃんと処罰されないように策は講じているがな。
ここに集まっている愚か者達に罪を被せてしまえばいい。
暗殺の資金は魔道具ギルドと、バウマイスター辺境伯が憎い貴族達が出す。
今日の秘密の会合も、私はここにいない事になっている。

あとは暗殺をおこなう手駒だが、これもバレにくいところに頼む予定だ。
バウマイスター辺境伯は凄腕の魔法使いだ。
その辺の魔法使いなら返り討ちであろうし、依頼した事がすぐにバレてしまう。
帝国の魔法使いもなしだ。

バウマイスター辺境伯は、帝国の皇帝とも仲がいいからな。
となると、あとはおのずと選択肢が限られてくる。
「ところで、魔族にバウマイスター辺境伯の暗殺を依頼するとして、プラッテ伯爵にツテはあるのですか？」
「ある」
バウマイスター辺境伯と犬猿の仲と目されている私だが、それでも一応空軍閥の重鎮だ。
いまだ交渉が続くテラハレス諸島で魔族と会うくらいの権限はある。
実際に既に何度か行っているし、知己となった魔族の政治家もいた。
あの連中、民権党か。
口先だけで政権を獲ったらしいが、できが悪いのが多い。
成果がなくて焦っているのが多く、他にも碌な事を考えていない政治家も多かった。
政治家になる前は胡散臭い反政府活動に従事していた者もいるとか。
ならば、こいつに仲介してもらえばいいのだ。
魔族の暗殺者を。
もし事実が露呈しても、相手は魔族で他国の人間だ。
王国も強く追及などできまい。
「交渉は私がおこなう」
「任せたぞ、プラッテ伯爵」

魔道具ギルドの会長が、凄腕の暗殺者なら大金を提供すると言った。
そんな金があったら研究費を増やせばいいような気もするが、所詮は他人だ。
私が金を出さずに済むのは幸運だと思い、急ぎテラハレス諸島へと飛んだ。

「今日も交渉は纏まりませんね。まあ、どうでもいいのですが」

現地で、一人の議員と会合を開いた。
表向きは意見交換というやつだ。
三か国の政治家達は、今ではそれなりに個別会合などを開く事が多くなった。
だが同時に、民権党とやらの魔族政治家の資質について疑問を感じるようになっている。
口ではいい事をいうが、実務能力に欠けているというか……新聞という庶民に情報を伝達する紙を書く連中にいい顔をしようとしてばかりいて、あまり個別会合に意味がないような気がするのだ。

その懸念は当たっており、今では新聞の記事のために大物貴族と個別会合を開く政治家が増えた。
元々交渉団に入っていなかったのに、魔族の国で成果が出せない、次の選挙とやらで当選が危なさそうな奴が、ただ大物貴族と会合しようとやって来るようになった。
そこを懇意の新聞記者に取材させて新聞に書かせる。
自分はとても交渉を頑張っているのだと、魔族の庶民にアピール

するようになっていた。

勿論、優秀な政治家もいる。

だが駄目な政治家の方が多く、完全に埋没してしまっているようだ。

同行している官僚達も上が駄目なので、完全にお手上げ状態だ。

間違いなく、彼らが実務者協議をした方がマシなのはわかるが、それはできないらしい。

王国で交渉団のトップを務めるユーバシャール外務卿は、新聞の記事で目立つのと、有権者にアピールするための個別交渉の申し込みで、完全に疲れ切っていた。

帝国の担当責任者も同じようだ。

『彼らは、王国の交渉団のトップである私と交渉した事実だけがほしいのだ。来年の選挙とやらに向け、有権者にアピールするのが狙いだから』

三年も進まない交渉のせいで、彼の目の下には濃い隈が目立つようになった。

元々それほどタフな人物ではない。

肉体的にはともかく、精神的には限界に近いのであろう。

そんな中で、もう一種類の政治家を探すのは簡単だ。

交渉団にも入れてもらえず、長々と国を開けているのに問題にもなっていない政治家。

運よく一回議員になったが、次は当選できるとは考えていない。

アピールに必死な議員よりは現実が見えているのであろう。

議員をやっている間に、次の人生に向けた蓄財やコネ作り、名前

を売るのに必死な連中。
この中から候補を探せばいいのだ。

少し情報を集めれば、おのずとそういう政治家が見えてくる。

それにしても民主主義か。
連中は、それを実践している自分達をえらく優れた存在だと思っているようだが、三年も付き合っていると裏が見えてくる。

『政治システムに優劣はなく、ただそれを担う人物の資質で結果が左右されやすい』

この点に関してだけは、バウマイスター辺境伯の意見に賛成だ。
あたりをつけた議員と人気のない場所で会合を開くと、随分とやる気のない発言が聞けた。
どうせこいつが頑張っても、むしろ状況が悪化するだけ。
ならば、やる気がない方がいいわけか。

「実は、極秘裏にあなたのお知り合いにお願いしたい事がありまして」

「ほう、お願いですか」

私は、この議員は支持母体に暴力行為を厭わない市民団体が存在しているのだという情報を入手していた。
時には、マフィア紛いの犯罪行為にも手を染めていると。
普通の政治家は、そういう連中との付き合いは隠れておこなうのだが、堂々とそんな連中の支持で当選していますと言えてしまうのが、民主主義の凄さかもしれない。

今は、仕事の話に集中するか。

「聞けば、色々と行動的な方がいるとか？」

「いますが、彼らと誰を遊ばせるのですか？」

やる気のなかった議員の表情が変わった。

遊びとは、彼らが使う隠語だそうだ。

遊んだ相手が死んでしまう隠語らしいが。

最初は使命に燃えて反政府活動に身を染めるが、いくら懸命に活動しても未来が見えて来ない。

そんな中で、マフィア紛いの犯罪行為に手を染める者がいる。

彼らは政府の監視を逃れながら、己を鍛え続ける。

魔族は全員が優秀な魔法使いだから、素手でも大きな戦闘力を持つに至り、時に殺人に手を染める者もいた。

今は大人しい者が多い魔族とはいえ、この手の犯罪行為がゼロというわけでもないからだ。

「それで、誰と遊ばせるのですか？」

「バウマイスター辺境伯だ」

「……よろしいでしょう。遊戯代金は高めですが」

「本当にいいのか？」

少し躊躇したようにも見えるが、こちらの用件を受け入れたか。

バウマイスター辺境伯を殺せる魔族の当てがあるのであろう。

遊戯代金とは、連中の中で通用する暗殺に必要な費用の隠語とい

うわけだ。

「お支払いは、いかなる方法で？」

「金塊でも宝石でも、好きな方を選んでほしい」

いまだ、貨幣の交換ルートすら定まっていないからな。

私貿易でもそうだが、支払いは貴金属か宝石、物々交換で済ませていた。

こんな報酬を公にできないので、税金も払わず秘匿するのにも向いているか。

「よろしいでしょう。早速指示を出しておきます」

いい儲け話だと、議員は口の端を緩めた。

こんなクソが政治家とはな。

魔族は技術は進んでいても、人を見る目は進歩していないのであろう。

私も人の事は言えないが。

「不思議な事がありますな」

「何がですか？」

「よく遊戯を受け入れたと思いまして」

バウマイスター辺境伯は、私貿易というグレーゾーンながらも正式な交易交渉が纏まるまでの代理案を世間に示した人物だ。

魔族の国では若者の雇用が増えたと聞くが、その功労者であるバウマイスター辺境伯の暗殺をよく受け入れたものだ。

依頼した私が言う事ではないと思うが。

「我々も一枚岩ではありませんから」

「それは、今の政府がという事ですかな？」

「政府もそうですが、民権党が元々寄り合い所帯なのですよ」

民権党発足の理由は、国権党独裁政治の打破にあった。

そのため、極右から極左まで参加する寄り合い所帯なのだそうだ。

「比較的左寄りでリベラルと思っている人もいますね。ですが、そんな事はありません。ただ反国権党で纏まった政党なのです」

「それでよく政権を運営できますな」

「できていませんよ。来年には破綻する事が確定している組織です」

だから、この議員はその地位を生かした最後の荒稼ぎというわけか。

そんな民権党の議員は、こちらの予想以上に多いようだが。

「主流である左派の本音は、バウマイスター辺境伯が嫌いです」

「魔王か？」

「ええ、碌でもないものを復活させてくれたと」

復活？

公人になったわけではない。

ただ、私貿易で大きな商会を立ち上げて成功しただけのように思えるが。

「今、その魔王への民衆の人気が高まっております。民権党政権の支持率が下がり続けるのと比例してね」

魔王の会社は一から立ち上げたに等しいため、多くの若者を雇用した。

しかも好待遇で。

社員同士で結婚する者も多く、彼らの育児に会社も手を貸しているという。

「民衆は思うじゃないですか。民権党の雇用対策は、この用事が済めば壊される施設の建設と、期間限定で若者を雇用して失業率の数字を一時的に抑えるだけの税金の無駄遣い。もう一方の魔王は、若者をちゃんと雇用している。不人気な政府は魔王が気に入らない。このままだと、封建制度が復活すると騒いでいるバカがいる。しかも、政府中枢の奴らがです。民衆で本気にする奴はほとんどいませんがね。今さら、どうやって魔王が即位するっていうのです？」

今思ったのだが、この議員はバカなフリをして実はかなり頭は回る人物のようだ。

若い頃は革命に奔走し、ようやく夢かなって政権の一員になったが、何も変わらぬどころか悪化する現状に絶望した。

もう政治などゴメンで、今は金が優先というわけだ。

そう思うと、こいつも被害者なのか？

「そんなわけでして、その魔王を世に出したバウマイスター辺境伯は憎まれています」

元はゴミとはいえ、魔道具の流出を技術漏えいだと騒ぐ魔族がいると聞く。
そんな連中からすれば、魔王とその一味は売国奴で、バウマイスター辺境伯はその協力者というわけか。

「これはオフレコに願いますが、バウマイスター辺境伯の遊戯については、腕のいい者は用意しますが、我々の組織とは真逆の連中に頼む事になるでしょうね」

つまり、世間では国権党に近いとされている右寄りの組織に頼むわけか。
そうしておけば、バウマイスター辺境伯の暗殺を国権党の仕業だと民衆に思わせる事ができる。
政治家というのは、どの国にも碌な奴がいないな。
私もその一員だが。

「なるほど、了承した」

決められた代金を金塊と宝石で支払うと、その議員は暗殺者に渡りをつけるべく本国へと戻っていった。
これで賽は投げられた。
あとは、無事にバウマイスター辺境伯に死が与えられる事だけを神に祈ろう。

あとの事など言った事か！
私の息子を豚箱にぶち込んだ報いを受けさせてやる！

「バウマイスター辺境伯を暗殺？　いいだろう」

王国貴族から大金でバウマイスター辺境伯の暗殺依頼を受けた俺は、彼を殺せる実力ある魔法使いの選定に入った。

俺が無理に情報を集めなくても、政府上層部が色々と骨を折ってくれたが。

支持率が下がり続け藁にも縋る思いの連中からすれば、バウマイスター辺境伯の暗殺は蜘蛛の糸に見えたのであろう。

これを極右組織にやらせれば、それを口実に野党国権党を叩ける。

そうしなければ、次の選挙で再び国権党に政権を奪われるのは必至だからだ。

連中、権力中枢の座り心地は随分といいようだな。

そんなわけで、俺は暗殺者と顔を合せた。

「『世界征服同盟』のオットー・ハインツと申します」

俺も人の事は言えない極左組織の出だが、こいつも大概だな。

よく恥ずかしげもなく、そんな名前を組織につけられたものだ。

逆にいうと、そんなバカだから使い捨てにはちょうどいいわけだ。

こいつは、一部国権党議員達と繋がりが深い。

もしバウマイスター辺境伯暗殺後に身元がバレても……むしろバレた方が好都合だな……国権党を叩くいい材料になるはずだ。

「依頼はただ一つ。バウマイスター辺境伯の死のみ」

「家族や家臣は？」

「奴一人が死ねばいい。他人を巻き込もうと巻き込むまいと貴殿の自由だ。バウマイスター辺境伯が死ねばいいのだ」

大金をくれた依頼者だからな。
その願いはよく聞かないと。
魔族でも人間でも、お金ってものは大切だからな。

「私一人では無理ですな」

「方法は問わないそうだ。バウマイスター辺境伯が死ねばいい」

「では、仲間達と共に依頼をおこないましょう。我らの国から技術と富を盗み出していくバウマイスター辺境伯を討つ！」

また随分と凄いのを見つけてきたな。
このくらいの方が、民権党の関与を疑われなくていいか。

こいつら、『世界征服同盟』などという怪しげな政治団体を運営しているが、所属している人員は十名ほど。
デモをおこなっても数十名の動員が関の山だ。
そんな木っ端政治団体からすれば、もし憎っくきバウマイスター辺境伯の暗殺に成功すれば名が売れる。
報酬を活動資金にもできるから、この話は渡りに船だったのであろう。

「早速、私貿易をおこなう商会のフリをしてバウマイスター辺境伯に近づきます」

「方法は任せる。これが前金だ」

金塊をオットーの痩せすぎの手に渡すと、彼はその重さに驚いていた。

無職で貧乏な若者には縁がない重さの金塊だからな。

「では。任せる」

「お任せを」

あとは、オットーに任せればいい。

実をいうと俺は、依頼が成功しようとしまいとどちらでも構わないのだから。

これでひと稼ぎできたと、俺はほくほくの顔でその場をあとにするのであった。

「おおっ、壮観だな。魔族にもこれだけ子供が産まれれば嬉しいのだが」

オヤツの時間を楽しんだ魔王様は、赤ん坊達が寝ている部屋を訪れ、その数の多さに驚いていた。

現時点で、俺の子供は二十名を超えている。

ここにはエルとローデリヒの子供もいるし、他の家臣の子供達も隣のもっと大きな部屋で寝ていた。

完全な乳児院状態で、家臣の妻達で効率よく面倒を見ていたのだ。

「余も、次の魔王となる子を将来産まねばなるまい。王を支える王族も必要だ。三人は産みたいの」

この魔王様、年齢と見た目は女性中学生なのに、婚活女子のような事をいうな。

「陛下は、どんな男性が好みですか？」

「そうよな。次の王を愚王にせぬ優しい優れた男性がいい。王は見た目がいい方がいいから、なるべく顔がよければなおさらいう事なしだ」

「陛下、それを世間では高望みと言います。高望みは、婚期を逃す要因ともなりますので……」

美人で優秀なのになかなか結婚できないライラさんが、魔王様に釘を差した。

彼女は最初モール達に言い寄られて内心悪い気はしなかったが、邪険に扱ったらすぐに逃げられてしまったという過去を持つ。

最初邪険にしたのは、そうすると男性側が余計に執着を持つと考えたからであろうが、まさかモール達があっさりと他の女性に目標を変えるとは思わなかったようだ。

結果、今も彼女は独り身だ。

結婚の予定は……あるのであろうか？

社長なので、仕事が忙しそうだからな。

「ライラの忠告に従うとしよう。余は優しい男性がいいな」

優しい男性かぁ……。
でも、その条件はちょっと曖昧だよなぁ……。

「陛下、優しいだけの男性など、夫としては不向きですよ」

「そうなのか？」

「はい。いくら優しくても、甲斐性のない男性はよくないです。あまり男性の財力に拘るのもどうかと思いますが、結婚生活は長いもの。お金がないと、夫婦関係と生活がギクシャクする事も多いのです」

「なるほど。ライラは詳しいな」

「結婚していないのにね「しぃーーー！」」

俺は慌てて、ルイーゼの口を塞いだ。

「（ルイーゼ、結婚経験がなくても結婚相談はできるんだよ）」

「（そうか、世間一般の話を知っていれば、それを参考に色々と言えるものね）」

野球経験がなくても、試合を見て選手のプレイや監督にあれこれ言えてしまうだろう？
それと同じだ。

「こうなると、バウマイスター辺境伯が人間なのが惜しいな」

すいません、これ以上奥さんは必要ないです。

「余はまだ子供を産める年でもないからな。焦る必要はないか。それにしても、可愛いではないか」

「ライラさんはそろそろ焦った方が……「しぃーーー！」」

俺は再びルイーゼの口を塞いだ。

魔王様は、ルイーゼの息子オーラフを抱いてあやしていた。

将来に向けて、赤ん坊の世話を実地で学んでいるというわけだ。

「ところで、西方海岸に建設中の海水ろ過設備ですが……」

幸い、ライラさんはスルーしてくれた。

彼女の言う海水ろ過装置だが、これは既にアキツシマ島では小型のものが数基稼働している。

海水をろ過して真水とし、水が不足している場所に送水する。

魔族の国では、大昔から当たり前のように稼働している装置だ。

人口減で放棄された地域に放置されており、これを回収、修理してバウマイスター伯爵領でも稼働させたわけだ。

いまだリンガイア大陸の魔道具ギルドでは、試作品が一日に1リットルの海水をろ過できたと大喜びしているレベルなので、魔族から購入するしかないわけだ。

放置された古い装置でも、状態がよければ簡単に修理できてしまう。

性能も最新型に比べれば数分の一で、魔族の国では粗大ゴミ扱いだが、リンガイア大陸で水が不足している地域には救世主となる装置というわけだ。

唯一の問題は、定期的に魔力を補充しなければ使えないという点

にあった。

魔法使いが多いバウマイスター伯爵領では、まだ余裕をもって設置できるわけだ。

バウマイスター伯爵領の西方海岸沿いは、切り立った崖と、船を寄せ付けない海流のせいで開発が遅れ気味であった。

何より、河川が少ないという点がネックとなって、人口を増やしても水が不足する状態だったのだ。

そこで、魔導飛行船の港の整備と、海から海水を取水して真水を作り、これを送水するシステムの構築を魔王様の会社と協力しておこなっているわけだ。

「海水ろ過装置の現物は、いつ到着予定なのです？」

「一週間から十日ほどを予定しております」

「今回は少し遅いですね」

「段々と、遠方にある放棄地から魔道具を回収しなければいけなくなりましたからね。注文が増えたのに人手不足という理由もあります。人は雇っていますが、最初は教育をしないといけませんし。今回は、装置の運送を他の業者に委託したというのもあります」

「へえ、そうなのですか」

「若者の中に、人間との商売で一旗あげようとする者が増えまして。最初に我々のような先発組の仕事を受けて経験を積もうと考える者もいるのです」

取引先が増え、魔王様の会社も好調というわけだ。

「社員は十名ほどで、『オットー運送』という社名で登録していますね。今は荷を運搬しているだけで結構儲かりますし、古い船でも裏技で使用できます。若者でも、船の確保と開業資金を出せるのです」

人間が魔族の国を経済的に侵略する。

逆もまたあり得るかもしれない。

でも、そんな危険性を双方口にしながら、利益を求めて交易等で色々と模索している感じだ。

出会ってしまった以上、付き合いをしないわけにもいかず、試行錯誤しているというわけだ。

「その『オットー運輸』とやらの船が着いたら、荷を降ろして設置するわけだ」

「はい。バウマイスター辺境伯もご一緒に作業を見学しますか？」

「いいですね。ルイーゼもどう？」

「いいね。悪いけど、子供達の面倒は任せて外出しようかな」

「それがいいんじゃないの？」

いつもはちゃんと子供達の面倒を見ているし、他に人がいないわけでもない。

育児ノイローゼにでもなると困るから、エリーゼ達も誘おうか。

「みんなに声をかけておくね」

こうして、西部海岸付近に視察をする事が決まったのだが、俺達は思わぬ事件に巻き込まれる事となる。

「ふふふっ、先払いで貰った報酬でこの中古船を手に入れ、運よくバウマイスター辺境伯領に荷を運ぶ仕事を受ける事もできた。あとは、バウマイスター辺境伯を討つのみ！」

私の計画は完璧だ。

まさか、魔導具を運んできた運送業者が暗殺者だとは、バウマイスター辺境伯も思うまい。

それにしても、人間どもはやはり度し難い。

我ら魔族の英知、貴重な魔道具を札ビラで買い叩くような真似をして！

「そうかな？　これ、基本は粗大ゴミだろう？」

「ヨーゼフ、いくら粗大ゴミでも魔族の貴重な技術が詰まった英知なのだ。それが人間に流出してみろ。じきに真似をされ、数が多い人間の魔道具が魔族のそれを圧倒する未来がな……」

事を成すに際し、私は世界征服同盟の仲間達を全員召集した。

みな俺の理想に共鳴した、優れた者達だ。

たまたま運に見放されて職はないが、これからは違う！

バウマイスター辺境伯を討てば、我々の世界征服同盟の名は国中に広がる。

我らの快挙に賛同した仲間が多数集まり、政界進出も夢ではない。
バウマイスター辺境伯を暗殺した後は、リンガイア大陸を出てしまえば罪にも問われまい。
バウマイスター辺境伯暗殺の罪を裁けるのはヘルムート王国のみであり、その力は我らの国には及ばない。
交易交渉で三年も揉めている両国が、犯罪者引き渡しの交渉などできるはずがない。

こうなると、民権党が無能で助かった。
どうせ次の選挙では消える連中だ。
かといって、国権党が再び政権を取っても国はよくならない。
そこで、第三の勢力として我らが世に出るわけだ。

バウマイスター辺境伯には、その尊い犠牲となってもらおう。
そんな風に考えているのだが、同志の一人であるヨーゼフが少しうるさいな。

「廃棄処理するにもコストがかかるから、不法投棄で問題になっていたじゃないか。それが消えて環境にもいいって言っている連中は多いぞ」

「それでもだ。人間どもは、特にバウマイスター辺境伯は不当に安く買い入れている！　これこそ、我ら魔族の富を奪う行為なのだ！」

「古い在庫が一掃されて、企業の業績はいいみたいだな。古い魔道具を売って新しいのを購入する人が増えたから」

ええい！
ああ言えば、こう言う。

だが、俺は魔王のような専制君主じゃない。
同志の主張を聞くくらいの度量はあるぞ。

「企業？　我々若者から職を奪った連中が儲かったところで国はよくならない！　むしろ、連中を調子づかせ、まずます庶民を貧困に追いやるだけだ！　それにだ、我々はバウマイスター辺境伯を討つという仕事を受けたのだ。この船も、その金から購入した。この仕事を断る事はできない！」

「それはわかっているんだが……」

そうか、わかってくれたか。
話せばわかるというのはいい事だ。

「なあ、オットー」

「まだ何かあるのか？　リライ」

「バウマイスター辺境伯に勝てるか？」

「勝てる！　私の魔力はあの魔王にもそう劣るものではないからな」

先祖に大貴族だの王族がいたとは聞かないが、私の魔力は非常に量が多い。
今までの人生で、それが役に立ったという事は一回もなかったが。
私だけじゃない。
我ら十名は全員、魔力量が多い。

「私とバウマイスター辺境伯がサシで戦えるよう、同志諸君の健闘を期待するものである」

「バウマイスター辺境伯の周囲には、多くの魔法使いがいると聞くが」

「視察に全員は来ない！　同志諸君は、バウマイスター辺境伯の護衛を近寄らせなければいい！　戦闘に勝つ必要もない！　私がバウマイスター辺境伯を討つまで時間を稼げばいいのだ！」

そう、他の奴を殺す必要などない。

ただバウマイスター辺境伯のみを殺し、とっとと逃げ出せばいいのだ。

「作戦はわかったが、一つ懸念があるな」

「なんだ？　カイツェル」

我らの中で参謀的な役割を果たしているカイツェルが、私の作戦に対して懸念を述べた。

こういう問題点は、今のうちに出た方がいい。

「バウマイスター辺境伯は戦闘経験が豊富だと聞く。一方我々は戦闘経験がないぞ」

「そうだな。我々は魔法の訓練は豊富におこなっている。だが、戦闘というものを経験していない。せめて、魔物を狩りに行けばよかったかな？」

それを今さら言われてもな。

そういう意見も出ていたんだが、みんな血を見るのが嫌で反対したのだ。

食べもしない魔物を無意味に殺すのもどうかと思うからな。

「魔物を殺すとなると、せめて肉くらいは取って無駄をなくしたいが、この中に魔物を解体した経験がある者がいなかったからな。まあ、なんとかなるだろう」

いくら戦闘経験があるとはいえ、所詮は人間だ。

他のメンバーは違うが、私はバウマイスター辺境伯よりも魔力が多いのだから。

「とにかく、私とバウマイスター辺境伯だけで戦うようにすればいい。それも最悪の想定だ。こちらは無警戒のバウマイスター辺境伯に奇襲をかけるのだからな。実際に運んだ品を納品しながら、バウマイスター辺境伯の隙を襲えばいいのだ。まさか、いかに歴戦の士であるバウマイスター辺境伯も気がつくまい」

私の作戦は完璧だ。

今こそ、グダグダになっている魔族と人間との関係をハッキリさせてやる。

魔族が人間を圧倒し、我ら魔族が優先権を得るのだ。

私はクレバーなので、人間の領地などいらぬ。

今の時代は、技術、生産力、流通、富を握った者が勝つ。

リンガイア大陸を魔族の経済植民地とし、職がない、収入が低い若者に希望を与える存在に私はなるのだ！

「まずはその一歩、バウマイスター辺境伯を討つぞ！」

「「「「「「「「「「おおっ！」」」」」」」」」」

あとは、事を起こすのみだ。

「ええと……。これが運ぶ品だから。オットー運輸の社長さん」

「わかりました。急ぎ届けますね」

「安全優先で頼むって、社長と会長から言われているんですよ。少しくらい遅れても、両国の距離を考えると仕方がないそうで」

「そうなのですか。安全航行で行きますね」

私達は自費で購入した船に、悪逆非道な専制君主の子孫である自称魔王の会社から受け取った荷物を積み、一路バウマイスター辺境伯領へと船を発進させるのであった。

第百六十話　陥穽。

「オットー、航行は順調だな」

「そうだな、カイツェル」

購入した古い魔導飛行船は、順調にバウマイスター辺境伯領を目指していた。

操船に多少の不安があったが、これは事前に訓練しておいてよかった。

我々は政治結社の一員であるが、目下転職活動中……じゃなく、大儀のために動いている最中なので時間は空いている……じゃない！　我々は色々とやる事があって忙しいのだ！

古い魔導飛行船なら、そこまで操船は難しくない。

何しろ、無理に着陸させる必要はないからな。

むしろ、逃げるために船は浮かせたままの方が好都合だ。

「デキタン、お前は船に残れ」

「わかりました。素早く逃げるためですね」

「そうだ」

このデキタンという若者は、最近世界征服同盟に入隊した若者だ。

準隊員扱いだが、ここで上手くやってくれれば正規隊員にすると話はつけてある。

我らと違って魔力が普通だし、これまで魔法の訓練もしていなか

ったので、船の舵を任せていた。

「我々がバウマイスター辺境伯を討ち、この船に逃げ込んできたら、すぐに船を発進させるのだ」

「わかりました。ご武運を」

いい若者だ。

こういう若者の職がない事が当たり前の我が国こそ、今すぐ改革されるべきなのだ。

「予定どおりか」

「我々は魔力が多いからな」

多少燃費を無視しても、船の魔晶石に魔力が簡単に補充できる。

我々はあくまでも優秀な運送会社として、バウマイスター辺境伯を油断させないといけないのだ。

「もうすぐ、指示を受けていたバウマイスター辺境伯領西岸海岸付近に到着します」

「では、戦闘準備開始だ」

私の命令で、合計十名の魔族の戦士達が臨戦態勢に入る。

バウマイスター辺境伯がノコノコと顔を出したら……さあ、もうすぐ楽しい時間の始まりだ。

「ライラさん、次は私にも色々と魔道具を融通してほしいですね」

「急ぎ在庫の確認をおこないます。なければ、放棄地に回収にいかないとけないので時間がかかるかと」

「そうですか。それにしても、これほど便利な魔道具がゴミとは…魔族は進んでいますね」

バウマイスター辺境伯領西方海岸沿い、ここにある町を広げるため、不足している水を補給する海水ろ過装置の到着を、俺達は今や遅しと待っていた。

今日、子供達は置いて来ている。

妻達も、それぞれ予定があるのでついてきている者もいない者もいた。

ブライヒレーダー辺境伯は自分も海水ろ過装置が欲しいそうで、俺達の視察に同行しつつ、到着までライラさんと商談をしていた。

今ではブライヒレーダー辺境伯家も、魔王様の会社のお得意様であった。

ブライヒレーダー辺境伯領は農業が盛んなので、特に農業機械などを大量に購入していた。

魔族には古い魔道具でも、こちらで用いれば作業効率と生産量が圧倒的に上がるからだ。

「魔道具は壊れにくいにも関わらず、毎年新型が出ていますからね。古い魔道具は入手しやすいのです」

魔族の国の魔道具は、徐々に性能の向上、燃費の改善、小型化が進んでいる。

いつまでも古い魔道具を使われると魔道具を作る会社が倒産しかねないので、魔族の国では古い魔道具の使用が禁止されている。

見つかれば罰金だし、廃棄するには高額の処理費用がかかる。

そこで、人口減で放棄された場所に古い魔道具を捨てる者があとを絶たない。

魔王様とライラさんはそのゴミを修理して販売し、今の大成功を収めたわけだ。

「毎年新製品が出る度に、同じく使用禁止となる古い魔道具が出ます。これを早めに出張引き取りするのです。捨てると処理費用がかかりますけど、我々が引き取る時は無料です」

日本でも、業者が軽トラで古い家電の回収をしていたのを思い出す。

確か、回収した家電を外国に販売して儲けているんだよな。

魔王様達も、それと同じというわけだ。

「贅沢なお話ですね。我が国も帝国も、今まで魔道具は魔道具ギルドから買うしかなかったですし、品質と価格は向こうの言い値で、いらなきゃ買わなくても構わないって態度があからさまなので、ちょっと評判が悪いんですよ」

品質の問題が一番だが、独占企業である事に胡坐をかき、大貴族相手でも殿様商売をしてきたツケがきた。

魔族製の中古魔道具があっという間に普及したのには、そんな理由もあったのだ。

魔道具ギルドの連中に客商売への心得を説いても無駄というか、彼らは魔道具作りの適性があるため、平民出身者でも貴族に対し偉そうにできる。

今さら、客に丁寧な接客なんてできないというわけだ。

「俺はそこまで不快な扱いを受けた事はないかな？」

「バウマイスター辺境伯とは、発掘魔道具の売買があったから気を使ったのでしょう。彼らなりに」

その代わり、今の俺はもの凄く嫌われているみたいだが。

表立ってそういう態度を見せる魔道具ギルドの連中はいないけど。

「裏ではボロカス言われてそうだなぁ」

「バウマイスター辺境伯は思いっきり嫌われていますよ」

ブライヒレーダー辺境伯は、魔族から古い魔道具を購入し始めた俺が彼らに恨まれていると教えてくれた。

「別にいいですよ。俺は魔導ギルド所属ですから。第一、俺が輸入している魔道具って、魔道具ギルドで作れないものばかりですよ」

これでも、魔道具ギルドで製造可能な種類の魔道具は輸入していないし、今も俺は魔道具ギルドのいいお客さんなんだけどな。

他の貴族や商人にはこの慣習を守っていない者もいたので、その分も逆恨みされたのかもしれない。

「あれだけ色々と見本を購入して、なぜあまり技術力に進歩がないのでしょうかね？　魔道具ギルドは」

「会長の死で混乱しましたし、今のあそこは魔道具の輸入阻止にかなりの労力をかけています。ちゃんとした研究活動ができていないのでは？」

勿論、政治に無関心で研究を続けている魔道具職人もいるのであろうが、まともな支援がないのかもしれない。

それに、技術って一朝一夕では進歩しないからな。

「ミズホと帝国の魔道具職人は、ちゃんと危機感を抱いているそうですよ。帝国は、若い皇帝が自ら音頭を取って技術力を上げようとしています。ミズホも同じですね」

このままでは、内乱でガタ落ちしたはずの帝国の国力が早く回復してしまうかもしれないし、技術力に至っては抜かれる危険も出てきた。

専制君主制でも指導者がいいと、劇的に国がよくなっていくからな。

「元々、ニュルンベルク公爵が発掘した古代魔法文明時代の魔道具が多かったですからね。解析はしているのでしょう」

魔族の技術力に追いつくにはとてつもない時間がかかるはずだが、王国の方はすぐに抜き去ってしまうかもしれない。

王国の魔道具ギルドは、政治闘争なんてやっている場合じゃないんだがな。

彼らの力の源は技術力であり、資金力はあくまでもオマケでしかない。

ところが、今はその資金力が最大の戦力という、本末転倒な話になっていた。

「魔道具ギルドのみならず、王国貴族には帝国を侮る者も多いですからね。将来技術で抜かれるなんて思っていないのでしょう」

内乱で大きな犠牲が出たからな。

一方王国経済は順調なので、帝国に対し根拠のない優越感を持っている者が多いのだ。

「舐めてかかると、ペーターにしてやられるのに」

なるほど、好調な時こそ注意した方がいいというわけだ。

「陛下や殿下は油断していませんけどね。そういう連中に足を引っ張られているのは事実です」

「本当は陛下も、魔族の国の最新魔道具が欲しいんだろうな」

「研究用にほしいでしょうね。使っても便利そうですし」

国内の産業保護や技術開発の観点でそれはできないが、俺個人としては魔族の魔道具の方が便利そうなんだよな。

「どうせ輸出してくれませんよ。我が国の大規模な魔道具メーカーは、政府に従順ですから」

ライラさんによると、魔族の国の大企業はいまだ政府間の交渉が終わっていないからと、新型の魔道具を外国に流出させないようにしているそうだ。

そのため、人間への中古魔道具販売が商機と見た魔族の多くは、古い魔道具を集めて修理し、せっせと人間に販売しているという事情がある。

「大企業で一つくらいは掟破りをするかと思ったのに」

「お上に目をつけられると面倒ですから」

ライラさんによると、確かに魔族の国の大企業は市場の縮小に悩んでいる。

だが、その分新規で起業してライバルになりそうな会社が出てこないので、大手の寡占状態が続いているそうだ。

「特に魔道具がそうです。段々と需要が落ちているため、小規模の魔道具工房は大半が潰れるか吸収、合併されましたからね。潰れる心配はないので、政府を敵に回して密輸する大きな会社はありませんね」

既得権益があるから、無理をしないわけか。

この辺は、王国の大商人と同じだな。

とはいえ、これからはどうなるかわからないけど。

「交渉が終われば……」

「いつ終わりますかね？」

「残念ながら、民権党政権は既に死に体です」

最初の期待にまるで応えられず、既に支持率は危険水域にあるそ

うだ。
政権発足直後に人間とのコンタクトがあったので同情すべき点はあるが、三年もかけて交易交渉一つ纏められないのかという世論の方が大きいわけだ。
この点に関しては、王国も帝国も人の事は言えなかったが。

「ヴェル様、来た」

「……そうなんだ。ヴィルマはよくわかるなぁ」

「目がいいのが自慢」

「自慢していいと思うよ。俺には見えないもの」

三人で話をしている間に、西の空に魔導飛行船が姿を現した……らしい。
もっとも、今の時点ではヴィルマにしか見えていなかったが。

「ヴィルマは目がいいね。ボクも見えた」

続いて、ルイーゼも魔導飛行船の姿を確認する。
ほぼ間違いなく、その船が注文の海水ろ過装置を積んでいるのであろう。

「凄いですね」

ライラさんは、二人の目のよさに感心した。

「ライラさん、魔族は目がいいのでは？」

「元はそうなのですが、現代の魔族は生活習慣の変化でそうでもありません。私も、書類仕事が多くて目が悪くなりました」

魔族も現代日本人みたいだな。

文明の発展により、目のよさを失うなんて。

「余は見えるな」

魔王様はまだ子供なので目がいいようだ。

三番目に、こちらに向かってくる魔導飛行船に気がついた。

「船が到着したら、まずは荷を降ろして、海水ろ過装置の試験をしないと駄目だな」

「我が社のモットーとして、懇切丁寧に掃除と修理はしてあるが、確認はしてもらいたいものだ」

今まで不都合があった魔道具はほとんどなかったし、クレーム対応もよかったから、魔王様の会社は信用していた。

それなのに、なぜかルイーゼとヴィルマの表情が徐々に曇っていく。

何かあったのであろうか？

「ヴェル、応戦準備！」

「ヴェル様、油断しないで」

魔王様と話をしながら船の着陸を待っていたら、突然ルイーゼとヴィルマが戦闘態勢に入った。

周辺にはエルとハルカが指揮している護衛もいるし、周辺に襲撃者の気配もない。
というか、クルトの事件以外で俺が襲撃された事はないのだが。
面倒な貴族が無理やり来た事はあるけど。

「ヴェル様、あの船の中」

「……魔力が高い者が十名、あとは普通だな。魔族だから、こんなものだろう？」

ただ魔力が高い者達が集まっているだけで襲撃を疑うとなると、ライラさんと魔王様でもそういう対応をしなければいけなくなってしまう。
あまり疑りすぎてもな。

「ちっちっちっ、ヴェル、魔力の量は関係ないね」

「ルイーゼの言うとおり。魔力に殺気が混じっている」

「そうか？」

まだ距離があって、俺には気がつけない。
ルイーゼとヴィルマだけが気がついている？
ライラさんと魔王様は……当然気がついていないか。

「でも、あの船は魔王様の会社の船で、船員は社員なんじゃ？」

「そういえば……」

「そういえば？」

「最近人手不足でして、他の運送会社に輸送だけ委託しました」

「アウトソーシングというやつだな」

ああ、前世でもあったな。

経費節約にはなるんだが、魔族の国は日本に似ている。

あまりいい風に受け取れないのは、俺の勤めていた商社が購入した荷を運ぶ運送会社の人達が、あまり恵まれない待遇で働いているのを見てしまったからであろうか？

「どういうところに頼んだのです？」

「オットー運輸という、小さな立ちあげたばかりの運送会社です」

「ちょっといいですか？」

ここで、ブライヒレーダー辺境伯が手をあげた。

「私はこれでも辺境伯なので、交渉の詳細やあなたの国に関する情報に接する機会も多いのです。その中に、要注意人物、つまり王国に対し害を成す可能性がある人物や組織に関する情報もありました。その中に『世界征服同盟』という組織と、そのリーダーを務めるオットーという人物の名がありましたが」

ブライヒレーダー辺境伯の説明で、段々とライラさんの顔に冷や汗が浮かんでくる。

「……そうなのですか？」

「ライラ、確認しておらぬのか？」

魔王様が、確認するかのようにライラさんに尋ねた。
運搬を頼んだ業者の身体検査をちゃんとしたのかと。

「すいません、忘れていました。私のミスです」

ライラさんは、仕事が忙しくてそういうチェックを忘れていたようだ。
日本の大手企業でも、意外とよくあるというか、さすがにテロリストに仕事を頼んだ会社はほとんどないと思うが。

「この身に代えましても、私がバウマイスター辺境伯殿をお守ります！」

「余も手伝うぞ」

「いえ、二人はお下がりください！　エルとハルカは、エリーゼと魔法を使えない者達と避難だ」

「あなた！」

「ヴェル！」

「お館様！」

俺の命令に、三人は一斉に反対した。

「一番魔力が少ない奴でも上級の下。一人だけ俺よりも魔力が多い

奴がいる。一定量の魔力がない者がいると、逆に俺が苦戦する」

標的にされたり、人質にされたりと、残留されると逆に足を引っ張られてしまう危険があるからだ。

それなら、安全な場所に下がってくれた方がありがたい。

それよりも、あの連中の目的が何かだ。

ほぼ俺か魔王様が狙いであろうが。

「エリーゼは治療要員として後方に待機！　エル！　ハルカ！　魔法が使えない者は退避だ！」

「わかった……」

「ですが、勝てるのですか？」

「勿論」

本当は、やってみないとわからないがな。

ちょっと魔力量が多い奴が多すぎる。

「なぜ、余とライラも駄目なのだ？」

「それは、実戦経験がないからだね」

「そうね、それに魔王様は未成年だし」

ルイーゼとイーナが、魔王様の質問に答える。

「余は魔王であり、いつか初陣は巡ってくるものなのだがな」

「それでも駄目です」

魔法の練習をしていると言っていたが、それはあくまでも魔法単体の練習だ。

魔法を用いた実戦形式の訓練ではないであろう。

悪いが、手伝ってもらうわけにはいかない。

俺達も余裕がないので、二人の面倒を見ている暇がないからだ。

「ルイーセとヴィルマと……」

「ヴェル！」

「旦那ぁ！」

異変に気がついたイーナとカチヤが来たので、これで五名。

四人は中級レベルだが、二人で一人に当たれば大丈夫なはず。

「ヴェンデリンさん！　何事ですか？」

「なんじゃ？　品物でも奪われたか？　魔王殿よ」

「これは……随分と魔力が尖がっていますね」

カタリーナ、テレーゼ、リサも駆けつけたので、上級の彼女達は一対一で対応可能か……。

「アグネス達を連れてくればよかったな」

今日は他の仕事を頼んでいたので、西岸にはいなかったのだ。

エリーゼは戦闘力が皆無なので戦わせるわけにいかない。

あとは……。

「ふん！　久々の戦いの気配なのである！」

「おいおい、魔王様。ライラさんよ。これは失態だぞ」

勘がいいのか、今日はたまたま導師がここに遊びに来る事になっていて、彼は時間どおりに飛んできた。

ブランタークさんは、今日視察をしているブライヒレーダー辺境伯の護衛として来ている。

「伯爵様、ちいとばかり不利だから逃げないか？」

「逃げたとしても、何も事態は解決しませんよ」

上級魔法使いが十名だ。

領内で無差別に暴れられたら、大損害どころではない。

大災害級の犠牲が出るであろう。

「自分の領地ですからね。俺が先陣に立たないと」

俺が一般庶民ならすぐ逃げるのだが、こういう時に爵位というものは重いな。

現代日本人の常識が通用しないのだから。

「王都にいる剣も握れないアホ貴族がうるさいものな。自分は絶対に先陣になんて立たない癖によ」

「ブランターク殿、あんな連中戦場にいるとかえって邪魔である！」

「足を引っ張るか。エル！　ハルカ！　応援を呼びに行け！」

「わかった！」

「わかりました！」

俺の命令で、二人は応援を呼びに行った。

とはいっても、今からアグネス達が駆けつけるまで時間がかかるか。

「今は時間を稼ぐしかないですか」

「そうだな、辺境伯様。この場合、一秒でも長く稼いだ方が有利だ」

まだ決定ではないが、襲撃者達も長時間戦えば魔力が枯渇してくる。

襲撃に失敗と判断して、逃げる可能性もあるか。

「やはり私は残ります。実戦経験はありませんが、実戦に即した訓練はしていましたから。エリーゼ殿、陛下をお願いします」

「わかりました。あなた、みなさん。ご武運を」

襲撃者を迎え撃つ俺達の周囲に誰もいなくなると、東の上空に小型の魔導飛行船が見えた。

中古品を修理して使っているようだ。

こちらが様子を窺っていると、早速宣戦布告の一撃が飛んできた。

巨大な『火球』が、俺達に向かって放たれたのだ。

「導師、リサ。相手が素人で助かったな」

「そうであるな」

「ええ、実戦経験は皆無でしょうね……」

経験豊富なブランタークさんと導師とリサは、すぐに『魔法障壁』を張って『火球』を魔導飛行船に向けて跳ね返した。

勿論この程度で船を落とせるはずがない。

すぐに向こうも『魔法障壁』を張って『火球』を跳ね返すが、二回も跳ね返された『火球』は威力がなくなって海に落ちてしまった。

火球が落ちた海面から、『ジュワ』っという音と共に火山の噴火時のように水蒸気が立ち上がる。

「本来、奇襲と挑発は相反する戦術なので、今の『火球』と『魔法障壁』は魔力の無駄遣いでしかありません。相手は素人ですね」

「さすがは、ベテランのリサ。正確な分析だな」

「旦那様……ベテラン扱いは嫌です……」

既に三十三になったが、三年前とあまり容姿が変わっていないリサは、俺にベテラン扱いされるのを嫌がった。

「ヴェンデリン、リサも微妙な年ごろじゃ。配慮せい」

「テレーゼも結構酷い」

「そうか？　ヴィルマ」

「酷い」

確かに、庇っているように見えてリサを年増扱いしているような……。

テレーゼは、ヴィルマからも酷いと言われてしまう。

「今は、それどころではないのである！」

例の魔導飛行船が大分接近すると、上空の船から十名の魔族が『飛翔』でこちらに降りて来た。

「バウマイスター辺境伯だな？」

「だとしたら？」

「我ら、真に国を憂う十名の国士達である！　『世界征服同盟』は、バウマイスター辺境伯！　貴様を殺す！」

痩せて陰気そうな魔族に、俺は指を差された。

子供の頃、両親から『人を指差してはいけません！』って言われなかったのであろうか？

連中は失礼なうえに、俺を殺すのだそうだ。

「変なの」

「何だと！　この小娘！」

そして、その雰囲気を壊すかのように話に割って入るルイーゼ。

時間稼ぎが目的だが、彼女の言うとおり、こいつらはどこか変だ。

俺を殺したいのなら、いちいち名乗る必要なんてあるか？

とっとと魔法を放てばいいような気がしてしまう。

「貴様の死が暗殺以外の理由だと嘘をつかれても困る。悪逆非道な専制君主の手先であるバウマイスター辺境伯家ならやりそうだ！」

「悪逆って……。暗殺を目論むキミ達の方がよっぽど悪逆だと思うな」

「うっ！」

このリーダーと思しき男性魔族、あまり場慣れしていないようだ。ルイーゼにツッコミを入れられると、少し動揺した表情を見せた。

「さっきからうるさいぞ！　小娘！」

他の男性魔族が、ルイーゼの発言にケチをつけた。

理論的に言い返せないので、とりあえず怒鳴って相手を委縮させ、自分を有利にしようとしている風にしか見えない。

「ぶぅーーー！　小娘とは失礼な！　ボクはこれでも二児の母親なんだぞ！」

まだどう見ても十五歳未満にしか見えないし、二人子供を産んでも胸は大きくなっていない。

それでも、ルイーゼが二児の母親なのは事実であった。

「『世界征服同盟』？　もうちょっと何とかならなかったの？　その組織名」

「だよな。大げさだし、有史以来世界征服に成功した奴なんて聞い

た事がないぞ」

ルイーゼとブランタークさんは容赦なく追及を続け、魔族達はちょっと自信なさげな表情を浮かべた。

あの栄華を誇った古代魔法文明時代でも、魔族の国は占領していない。

つまり記録に残っている限りでは、この世界で世界征服をした者は一人もいなかったからだ。

何とも稀有壮大というか、ホラ吹きの類だと俺も思ってしまう。

いや、妄想か？

「これから、このオットー・ハインツと同志達が成し遂げるのだ！」

「たった十名で？」

「悪いか！」

悪いかというよりも、不可能だと思うな。

単純に人手不足だと思う。

「ライラさん、こいつらって大きな組織なの？」

「えーっと……ああ、辛うじてリストに載っていました。だから見逃したのですね。末端の極小組織です。支援者もほぼ皆無。正真正銘の弱小政治団体です」

ライラさんは、持っていた資料を確認してからルイーゼに『世界征服同盟』について説明した。

「構成員は？」

「恐らく船に残っている人達を合わせても、二十名には届かないでしょう。いくら古い船でも魔導飛行船を購入できる資金はないと思うので、他のスポンサーがいると予想されます」

札びらで頬を叩かれ、黒幕の手駒になったわけか。

弱小政治組織も色々と大変だな。

「もっと他にやる事があると思う。まず働くとか」

「うるさい！　これが俺達の仕事だ！」

ルイーゼと同じく、あまり見た目が変わっていないヴィルマにちゃんと働けと言われ、魔族達はムキになって言い返した。

大人気ない連中だ。

「今日はいないけど、モール達はちゃんと就職して結婚した。まず地に足をつけた方がいい」

「働きたくても職がないんだよ！」

「お前ら人間にわかって堪るか！」

「こんな腐った国を変えるべく、我々は立ったんだ！」

「なら、魔族の政治家でも暗殺したらどうじゃ？　まあ、そんなに変わらないと思うがの」

既に魔族の国の事情をよくわかっているテレーゼが、半ば嫌味で別の方策を魔族達に指南した。

「うるさい！　女！　女如きが政治を語るな！」

「お主らの国は、男女同権とやらではないのか？」

「男には男の、女に女の仕事があるのだ！」

「そうだ！　女が政治に口だしするから、国が腐っていくのだ！」

「そういうのは、同朋に言え」

「何だと！　お前が聞くから答えたんだろうが！」

こいつら、完全にこじらせているな。

暗殺対象であるはずの俺の話しかけに応対してしまい、ルイーゼとヴィルマの挑発に乗っている。

ニュルンベルク公爵ほどのプロではないか。

テレーゼ、半分からかっているな。

それにしても、元フィリップ公爵であるテレーゼに『政治を語るな！』か……。

「ライラさんの会社は人を募集している。応募して入ればいい。その船で運送業をしてもいい」

「その手があったな」

「そうだよなぁ……。さっき計算してみたんだが、自分達でも売れるような品も運搬すればなんとかいけなくないか？」

「無職よりはいいか……」

「こら！　そんなチビの口車に乗るんじゃない！」

暗殺団のリーダーであるオットーが、ヴィルマの発言を聞いて決意を鈍らせた仲間を怒鳴りつける。

「この仕事が成功すれば、もっと金が手に入る！　民権党没落に乗じて政界に討って出るも、商売をして将来の政界進出に備えるのも自由ではないか！」

こいつら、聞きもしないのに背景をペラペラと喋るな。

金目当ての犯行なのか。

「はっ！　時間を無駄にしてしまった！　バウマイスター辺境伯め！　姑息な時間稼ぎを！」

「いやいやいや！　俺は何もしていないから！」

ただ勝手に自分でペラペラ喋って、時間を潰しただけじゃないか。

「女どもをけしかけたじゃないか！」

完全な濡れ衣だし、また無駄な時間を潰しているな。

「こいつら、バカなのである！」

「同意するぜ。今までで見た一番アホな刺客だな」

「うるさい！　脳筋とジジイ！」

それにしても、オットーとやらは勇気があるな。
導師に面と向かって脳筋なんて言うのだから。
ただ彼を知らないだけかもしれないが……。

「どちらにしても、この近辺にバウマイスター辺境伯家の兵は少なく、応援を呼ぶにも時間がかかる！　我ら十名なら、お前を討つなど容易い！　計画どおりだ！」

確かに、上級魔法使い十名で構成された暗殺団だからな。
ちゃんとやれば、大きな成果を残せるはずだ。
あくまでも、ちゃんとやれたらだが。

それにしても、オットーのドヤ顔は宋義智以上にウザイ。
ひょっとすると、人から嫌われる才能があるのかも。

「同志諸君！　かねてよりの作戦に従い、その任をまっとうする事に期待する！　いくぞ！」

「ちっ！　バカだが魔力は多いから強いな！」

オットーは体内に大量の魔力を流し、まるで弾丸のように俺に突進してきた。
俺はすぐに『魔法障壁』を張るが、その威力を止めきれなかったようだ。
俺とオットーは、もつれ合うように誰もいない無人の荒野へと飛ばされていく。
そこはもうすぐ町を建設する予定地で、今のところは何もない場所なので障害物にぶつからないで済んだが、埃まみれになってしまった。

帰ったら早く風呂に入るとするか。

「「ヴェル！」」

「チビに小娘！　人の心配をしている場合か！」

距離が離れてしまった俺をイーナとルイーゼが心配し、急ぎ駆けつけようとするが、その前に一人の魔族が立ち塞がった。

「『世界征服同盟』のヨーゼフ・アクスだ。オットーの邪魔はさせん！」

この時点で、連中の戦術がわかった。

十名の中で一番多くの魔力を持つオットーが俺と対峙し、それまでの間他のメンバーが応援を防ぐというわけだ。

「オットーの魔力は強大だ！　いかにバウマイスター辺境伯とて所詮は人間！　オットーに勝てるはずがない！」

「ヴェルよりも魔力が多い人って、魔王様とライラさん以外では初めて見たわ」

「でもイーナちゃん。あまり心配しないでいいよ」

「そうね。あなたを倒してヴェルに加勢するまでの間、ヴェルが生き残れないはずがないもの」

「随分と信用があるようだな……」

「あたりまでしょう。私の愛する夫なのだから」

「おおっ、イーナちゃん。いい事を言う。ヴェルが負けるはずないものね」

「世迷言を。中級が二人で、俺に勝てると思っているのか？　思っているのだろうな。二人とも、覚悟しろ！」

イーナとルイーゼは、ヨーゼフという魔族と戦闘を開始する。

「あたいはヴィルマとか。あいつも上級レベルの魔力があるな」

「魔力は上級。戦闘力はわからない。エリーゼ様も上級だけど、戦闘力はほとんどないから一方的に不利というわけではないと思う」

「ヨーゼフと戦っている女達と同じか。中級二人で上級の私を倒す。計算しても、魔力の量が足りないぞ」

「いくら魔力が多くても、無駄遣いしては意味がない」

「そうだな。お前ら、素人っぽいし。魔物ですら倒した経験がなさそうだ」

「ふんっ！　そのくらいはハンデだ。『世界征服同盟』のリライ・マックローの実力を思い知るがいい！」

「ヴィルマ、こいつらどうして暗殺者なのに、バカ正直に名前を名乗るんだろうな？」

「今。カチヤが答えを言った。バカだから」
「小娘、発言には責任を持ってもらうぞ！」
「小娘と言われるほど若くない」
「あたいは、もっと年上だけどな」
カチヤとヴィルマは、リライという魔族と対峙した。
「オットーとバウマイスター辺境伯を一対一にできた。策どおりだな」
「そうか？　妾から見ると、随分と穴だらけの策に見えるのじゃが」
「また女か！　バウマイスター辺境伯の周囲には女ばかりだな！」
「何じゃ？　羨ましいのか？」
「……」
「沈黙は肯定と見なすぞ。同じ上級同士じゃ。お手柔らかにな」
「ふんっ、この『世界征服同盟』において参謀を務めるカイツェル・バートス。とっとと貴様を倒して、バウマイスター辺境伯を袋叩き

にしてやる！」

「また穴だらけの策じゃ。妾もこれまで遊んでいたが、その分時間もあったので、ちゃんと魔法の修練はしていたぞ」

「それはどっちなんだよ！」

「よく遊び、よく学べというわけじゃ。おかしな政治ゴッコにうつつを抜かすお主にはわからないと思うがの」

「ぶっ殺す！　我々の崇高な活動を！」

「自分で崇高とか言っている時点で怪しいわ」

テレーゼは、カイツェルという魔族を挑発した。
冷静さを失わせて魔法の精度を落とす。
陳腐な策だが、こちらは魔力を消費せず、敵は魔力を無駄遣いする可能性があるので魔法使い同士の戦いでは多用されていた。
紛争でもなければ、そう魔法使い同士の戦いは発生しないのだが。

「あら。派手なのが来たわね」

「あなたに言われたくありませんわ。それに私は派手なのではなく、無事復興となったヴァイゲル家の当主として相応しい格好しているのです。それであなたは……」

「何よ？　文句でもあるの？」

ここでも微妙な運の悪さが出るというか、カタリーナが相手をしている魔族はまるでキャンディーさんのように女装していた。

まったく似合っていないので、まさしく化け物といった感じで、カタリーナは直視する時間を短くしたいようだ。

化け物から目をそらし、テレーゼに視線を送った。

「カタリーナ、今さら交換するのもアレじゃし、我慢せい」

カタリーナは対戦相手を交換してほしかったようだが、さすがのテレーゼもオカマ魔族とは戦いたくないようだ。

「……どうして、私がオカマと……リサさん？」

「すいません。私も忙しいので……」

カタリーナの近くで別の魔族と対峙しているリサも、そのオカマ魔族の相手は嫌なようだ。

すまなそうに、カタリーナの交換要請を断った。

「失礼ね！　私は女装とお化粧が大好きなだけで、普通に女の子が好きなノーマルよ！」

「魔族には、変わった方がおりますのね……」

キャンディーさんの例を見るように、別にオカマだからといって教会が全員を処罰するわけではない。

よくは思われないが……。

エリーゼのように、個人の自由だと認める聖職者もいた。

魔族の国でも、最近は性別の変更を認めたり、同姓婚を認めてはどうかという意見も存在するようだから、ちょっと変わっているくらいなら、この手の政治組織に所属しても大丈夫なのであろう。

その前に、こいつはただの女装好きだし……。

「リーダーは何も言いませんの？」

「別に何も言わないわよ」

この手の国粋的な政治組織だと何か言われそうな気がするんだが、正規構成員として暗殺に参加しているから大丈夫なのであろう。

メンバーを選り好みしている余裕がないのかもしれないし、アレでも上級だからな。

それにしても、『世界征服同盟』という組織がよくわからない。

「私は、ミランダ・レッシーよ」

「女性名なのですか？」

「この格好をしている時だけ、この名前なの。本名を知りたいかしら？」

女装が趣味の男性が、女装している時だけ女性名を名乗るみたいなものか？

「いいえ。別に」

カタリーナは即答したが、俺も女装好き魔族の本名なんて知りた

くもないな。
知ったところで、だからどうなるというわけでもないし……。
「急に冷静になったわね！　失礼な小娘だわ！」
ミランダという名前の女装魔族は、カタリーナと戦闘状態に入った。

「オバサンが僕の相手か……ひっ！」
リサをオバサン扱いした魔族の周囲に数本氷の柱が立った。
「速やかに倒されなさい！　職なし坊や」
「職なしって言うな！　今はあるんだよ！」
リサは、見た目が相当チャライ魔族と対峙していた。
女装魔族よりはマシなのであろうか？
それにしても、どうしてあんなチャライのが政治組織に？
よほど暇だったのであろう。
それとも、女性にモテるかもって勘違いしたとか？
「ミハエル・レストールのイケてる魔法を食らえ！　オバサン！」
「そういう人に限って、魔法は微妙な人が多くて困ります」

「後悔するなよ！　オバサン！」

リサも、ミハエルとの戦闘を開始した。

「俺の相手はチビか！」

「うーーーむ。この年になり、生まれて初めてチビと言われたのである！」

急ぎ駆けつけた導師は、まるでゴーレムのような大きさの魔族と対峙していた。

「学生時代はボディービルで鳴らしたこのバースト・ハルクが、チビの相手をしてやろう」

導師をチビ呼ばわりするバーストという魔族は、導師よりも身長が二十センチ近くも高かった。

筋肉の量も多く、まさしく魔人と呼ぶに相応しい容姿をしている。

「魔法で増幅した怪力で潰してやるよ。チビ」

「口だけは一人前なのである！　かかってくるのである！」

「後悔するなよ、チビ」

導師とバーストという巨漢の魔族が戦いを始めた。

「さて、俺の相手はお前か？」

「そうだ、ジイさん」

「ジイさんは酷いな。俺は生涯現役を目標にしているから、いぶし銀とか、大ベテランっていってほしいぜ」

ブランタークさんは、若い魔族からジイさん扱いされた事を気にしていないようだ。

「上級の連中じゃあ、ジイさんが一番魔力も少なくて弱そうだ。余裕だな」

「若いねぇ……。確かに魔力の量は重要だが、俺とお前さんの魔力量はそこまで差があるわけじゃないぞ。経験値による補正を考えると、俺が有利かもよ」

「言うね、ジイさん。俺の名は、ウィッツ・ベン。冥途の土産に覚えておけ」

「お前こそ、俺の名前を覚えておけよ。あの世で、ブランターク・リングスタットに破れたと神様に報告するのを忘れるな」

ブランタークさんは、ウィッツという口の悪い魔族が相手のようだ。

「さて、あなた達が陛下に危害を及ぼすのであれば、私も戦わねばなりません」

「魔王？　今回は標的じゃないから、大人しくしていたら殺さないかもな。手が滑るかもしれないけどよ」

ライラさんは、少し残忍そうな顔をした魔族と対峙していた。

「そうですか……それも御遠慮願います。バウマイスター辺境伯殿は重要な顧客であり、他の取引先との関係を保ってくれている重要な人物なのです。我々が力を蓄えるにはお金がいる。それをもたらす方を討つと仰るのなら、私も戦わねばなりません」

「魔族の癖に、人間に媚を売りやがって！」

「勘違いしているようですね。私は、あくまでもバウマイスター辺境伯殿と対等に……私ではなく、会長が対等に取引をしております」

「はんっ！　よくもそんな詭弁を！」

「少しばかり商売で後れを取って儲からなかったからといって、他社に因縁をつけるとは……あのオットーとかいう方は、よほど無能なのでしょう」

「ぶっ殺す！」

「お名前を聞いておきましょうか？」

「エスト・エリックだ！」

「陛下の補佐役にして宰相のライラです。全力をもってお相手いたしましょう。戦闘には慣れておりませんので、あなたが死んでしまっても不可抗力です。悪しからず」

「それは俺のセリフだ！」

最後に、ライラさんもエストという魔族と戦いを始めた。

これで、俺の傍にいた魔力持ち全員が魔族の刺客達と戦闘を開始した事になる。

そして俺は、オットーとの戦いを始めた。

「『双竜炎舞』！」

「いちいち、技名を言うのかよ……」

俺とオットーは、上空で『飛翔』しながら戦闘を開始した。

残念ながら、魔力の量では俺はオットーの半分くらいであろうか？

それでも、彼の魔力が尽きるまで時間を稼げば生き残れるはずだ。

帝国内乱の時、師匠は魔力量が圧倒的に多い俺を上手く翻弄した。

あれを参考に、オットーの魔法をいなしていけばいいのだ。

早速オットーが二つの頭がついた炎の蛇を魔法で繰り出したが、

手にシールド型の『魔法障壁』を作り、それを地面に叩き落とした。
こうすれば、相反する水系統の魔法で相殺するよりも使用魔力量が少なくて済む。
このくらいの工夫ができなければ、俺はオットーに殺されてしまう。

「やるな！」

「まあね（ちっ、予想以上に手練れだな……）」

オットーには実戦経験がなかったが、魔法の訓練は真面目にこなしていたようだ。
いちいち技名を叫ぶ欠点があったが、魔法の展開とコントロール、魔力使用効率も思った以上に優秀であった。
という事は、俺の苦労が増すというわけだ。

「舞え！　『風のツバメ達』よ！」

続けて、『ウィンドカッター』を改良した風のツバメの群れが俺を襲う。
これは回避が難しい。
『魔法障壁』の魔力を増してすべてを防いだ。

「（と、見せかけて……）」

もしかしてと、急ぎ『風のツバメ』の複製を作り、オットーに向けて発射する。

「甘い！」

オットーも『風のツバメ』を『魔法障壁』で防いだ。
ところが、一個だけ威力を増した一撃がオットーの『魔法障壁』を貫く。

「小賢しいわ！」

見た目はガリ弁タイプに見えるオットーだが、思ったより運動神経も悪くないようだ。
俺の攻撃魔法を上手く回避してしまう。
これは、師匠と戦った時の俺よりも魔法使いとして優れているようだ。

「（これは困ったな……）」

あわよくば倒してやろうという下心もあったが、それはかえって危険だ。
生き残る事を優先しよう。
自分の領地じゃなければ逃げていたのに。
エルとハルカがアグネス達に連絡を取っているはずだが、果たして間に合うかな？
全力で飛んできても、かなり時間がかかるはずだ。

「どうした？　バウマイスター辺境伯」

「お前を倒す算段をしていたのさ」

「ミエミエの嘘だな。この私の、魔王にも迫る魔力。人間である貴様如きが勝てるはずがない！」

全員魔力を持って生まれ、高貴な血筋に魔力量が多い者が出やすい魔族。
今は微妙だが、古の魔族は己の魔力量の多さを誇りに思い、それを誇示する者が多かったそうだ。
魔法で人間などには負けないという自負が強いというわけだ。
古いマッチョな魔族にあこがれを持つオットーからすれば、ぱっと出の俺になど負けないと思っているのであろう。

「実は、高貴な血筋の出でしたとか言うのか？」

「落ちぶれた魔王や貴族の血筋だと思われるのは恥でしかない！
何しろ私は血筋ではなく、天により魔族を導く者として選ばれた身なのだからな！」

あーーーあ。
今まで色々とありすぎて、オットーは完全にこじらせてしまっているようだ。

「暗殺に手を染める、天に選ばれた者なんていねえよ。せっかく運送業でやれそうなんだから、ちゃんと仕事しろよ」

「我々は天に選ばれた存在なのだ。運送業などという下等な仕事はやらん！　魔族を統べるというもっと相応しい仕事があるからな。
その前にお前を殺すという試練も存在するわけだが、これのクリアーは余裕であろう」

余計な事を嬉しそうにペラペラと喋る奴だ。
まあ、時間が潰せるのはいいか。

「だといいがな」

「抜かせ！　本当は焦っている癖に！」

「職がないお前ほど焦っていないさ」

魔族の若者には仕事がなくて困っている者も多いが、オットー達にはまるで同情できない。

彼らが無職なのには、彼ら自身の性格にも問題があるように思えたからだ。

「ふんっ！　そんな挑発に乗るか！　これは、私のような選ばれた人間が成り上がる時に、仕方がなく受けた仕事にすぎない。確かに殺しはよくないが、魔族の将来を考えた結果、これは許容できる必要悪というわけだな」

こいつは、本当に自己愛の傾向が強いな。

自分は何をしても正しいと思っていやがる。

「お前もそうだが、他の仲間も酷いな。根性叩き直した方がいいぞ」

「ガキの分際で！」

「そのガキから見て、お前達がガキ以下だ」

「死ね！」

ちょっと煽ったら、オットーは魔法を連発し始めた。

コントロールと魔法の選択が甘くなったので、回避や『魔法障壁』の小盾を用いて魔力の消費を抑える。

今のところは上手く行っているが、オットーの魔力の多さは尋常

ではない。
それでも、まだ魔王様の方が魔力量も多いんだよな。
昔のように戦争で使われないでよかった。
「逃げるな！　『アサルトランナー』！」
無属性の光の矢が大量に俺を襲う。
なるべく回避して、間に合わないものだけを『魔法障壁』で弾いていく。
オットーの方が魔力を圧倒的に消費しているのだが、なかなかその差が縮まらない。
魔族でも、トップレベルの魔力量を持つ者はやはり尋常ではないな。
「（導師とか、ブランタークさんとか、カタリーナとか。上手く倒して、応援に来ないかな？）」
「妻達の応援に期待か？　バウマイスター辺境伯？」
「だったらいいな。だって、お前の仲間だから間抜けそうだし」
オットーの魔力が抜きに出ているが、他はすべて上級レベルだ。
何とか倒してこちらに応援に来てくれれば、オットーを魔力切れで撤退に追い込めるはずだ。
勿論、倒そうとなんて思ってはいない。
あきらかに勝ち目がないからだ。
「我が同志達を舐めるなよ！　我々は常に戦略的に動いている！
誰も貴様の応援にはこれないさ！」

意外と知恵がまわるのか？
あくまでも俺を殺すのはオットーの役割で、他のメンバーは足止めでしかない？

「ははははっ！　貴様は妻達の前で死ぬのだ！　いくぞ！　必殺の『サーチデストロイ』！」

「やっぱり技名を言わないと駄目なんだな」

と言いつつ俺は、オットーが繰り出した魔法を瞬時に分析し、『飛翔』を『高速飛翔』に切り替えて回避に専念する。
『サーチデストロイ』とは、ようは追尾機能がある無属性の魔法の事であった。
スピードが速いので『飛翔』だと追いつかれてしまうから、『高速飛翔』に切り替えたわけだ。

だが、このまま『高速飛翔』で逃げると、魔力消費量では俺が不利になってしまう。
サーチ機能がある魔法なので弾いても戻って来てしまう以上、ここは大量に魔力を消費しても打ち消すのが一番魔力を消費しないはずだ。

そんな事を考えながら、圧倒的に魔力が多いオットーと戦う。
帝国内乱で師匠が俺と戦った時、彼も同じような苦労をしていたはずだ。
魔力量が多い魔法使いと戦うと、一瞬でも気を抜けない。
精神的な疲労も多かった。

「（師匠は、こんな気持ちで俺と戦っていたのかな？）」

「随分と魔力を消費したな。私はまだ余裕があるぞ」

『サーチデストロイ』が無属性魔法のため、系統間の相性を用いて魔力を節約できなかった。

火系統の弱点は水系統のため、火魔法を水魔法で打ち消す時には消費魔力が少なくて済む。

みたいな真似ができなかったのだ。

『サーチデストロイ』が強固であったため、この一撃で半分以上の魔力が削られた。

「ふふふっ、万事休すだな。バウマイスター辺境伯よ」

「そうかな？」

「まだ妻達の応援に期待しているのか？　そんなものは……うわっ！」

すべて言い終わる前に、オットーはその場でのけぞった。

なぜなら、突然自分の体を槍が貫こうとしていたからだ。

「槍？　バカな！　ヨーゼフは何をしているのだ？」

「おねんねしているけど」

「あちゃあ、上手くかわされてしまったわね」

「バカな！　ヨーゼフが、二人とはいえ中級二人に……あれ？」

「ボク、中級なんて一言も言っていないよ。キミ達が勘違いしただけで」

既にヨーゼフという魔族は倒れており、イーナはオットーに奇襲で槍を投げた。

生憎とかわされてしまったが、仲間を倒されたオットーはあきらかに動揺している。

「魔族は、他人の魔力量を計るのが下手だね。ボクの魔力隠蔽に気がつかないんだからね」

「魔族は生まれつき大体『探知』できるので、鍛錬をしないから逆に魔力量の隠蔽に引っかかりやすいのです。そういう細工をされるという経験もないので」

自分も戦っているのだが、対戦相手が仲間の脱落で気が緩んだのか。

ライラさんが代わりに説明してくれた。

「上級寄りの中級みたいに思わせるのが可能なんだ」

「それは、ルイーゼが魔闘流の達人だからよ」

「騙したな！　ヨーゼフ！」

「生きているけどね。暫く動けないよ」

「ええい！　お前如きに！」

「ボク、結構頑張ったけどなぁ……」

仲間の脱落に、オットーはえらく腹を立てていた。

「小娘ども！　オットーの右腕であるこの私がお相手をしよう！」

「イーナちゃん」

「何？」

「リーダーの右腕でも左腕でもどうでもいいけど、こういう人に限って、実は全然右腕じゃなかったりするよね？」

ルイーゼ、あのヨーゼフという魔族、顔がプルプルしているわよ。相当怒ったみたいね。

でも、組織のリーダーって、多くの部下に同じような事を言うのよね。

『君が俺の右腕だ』とか、『君がナンバー2』だとか複数に。

「少し痛い目を見ないとわからないようだな！」

「当たらなければ痛くないよ」

「ならば、当たるようにしてやる！　『千手鞭撃（せんじゅべんげき）』！」

ヨーゼフという魔族は、随分と変わった魔法を使うわね。

背中に魔力の塊を集め、そこから鞭状の触手？　が多数私達を襲う……趣味悪いわね……。

ブライヒレーダー辺境伯様が、密かに楽しんでいる本に出てきそう。

「イーナちゃん、千本はないよね？」

「よくて数十本ね」

千手という技名はかなりの誇張ね。

それに、少しコントロールが甘いような……。

同時に襲い掛かってくる鞭は、一度に数本。

私は普段から愛用しているミスリル製の槍で鞭を斬り払い、ルイーゼも拳に魔力を篭めて鞭を千切り飛ばした。

「思ったよりもやるようだな！　だが、お前らの魔力では私に勝てない！」

「そうかしら？」

「槍女！　そういつまでも防げると思うなよ！」

「何よ槍女って！　女性に対してデリカシーの欠片もないわね！　だから女性にモテないのよ！」

本当にこの魔族が女性にモテないかは知らないけど。

こんな活動をしている時点で、女性には縁がなさそうだけどね。

「言ってくれたな！　バウマイスター辺境伯を暗殺して名をあげれば、女なんていくらでも寄ってくるわ！」

「どこかズレてるよね。だから、暗殺で無職状態を打破しようなんて無謀な事を考えるんだよ」

ルイーゼ、あんた容赦ないわね。

「もう堪忍袋の緒が切れた！　お前らもバウマイスター辺境伯と一緒に死ね！」

私達の挑発で我を忘れたヨーゼフという魔族は、一気に魔力を消費して鞭を倍増させた。

「これで避けられまい！」

「そうでもないね、イーナちゃん」

鞭の数を増やしても、元からコントロールに難があるのよね。
それに、もう彼は気がつけない。
ルイーゼが魔力を隠蔽しているのを。

私とルイーゼの二人で戦いを挑んだから、ヨーゼフという魔族はずっと勘違いしたまま。
他の仲間も気がついていない。
ここは素早くこいつを倒して、ヴェルの救援に向かわないと。

「（ルイーゼ）」

「（ボクが一気にあいつの懐に飛び込むよ。イーナちゃんは……）」

「（何とかするわ）ほら、かかってきなさい」

私はルイーゼを後ろに隠し、槍を振るってヨーゼフという魔族を挑発した。

「チビっ子は、もうヘバったか？」

「イーナちゃん、あいつムカつく」

二児の母親に対し、チビっ子はないわね。

確かに、ルイーゼは子持ちには見られないけど。

「お前を先に倒し、次は隠れているチビっ子だ！」

ヨーゼフという魔族は、倍に増やした鞭で次々と攻撃を仕掛けてくる。

少し対応が面倒になったけど、やはりコントロールが甘い。

順番に対処していけば、暫くは保つはず。

私の後ろで、ルイーゼは一瞬の機会を計っていた。

ヨーゼフという魔族が、わずかでも隙を見せるタイミングをだ。

「ひゃひゃひゃ！　私の連続攻撃に、人間の！　それも女如きが勝てるはずがないのだ！」

「段々と本性が出てきて下品ね。だから、女性にモテないのよ」

「絶対に殺す！」

やったわ。

遂に、ヨーゼフという魔族に我を忘れさせる事に成功した。

攻撃の回数は増えたけど、余計にコントロールが甘くなっている。
あとは……。

「ルイーゼ、どう？」

「今だよ、イーナちゃん！」

「わかったわ！　『火炎槍』！」

私は槍に『火炎』を纏わせると、大きく振り回して一度に大量の鞭を斬り落とした。
同時に、一気に大量の魔力を使って槍に纏った『火炎』でルイーゼの姿も見えなくしてしまう。

「へっ、この程度ならすぐに回復させ……バカな！」

ここでルイーゼも大量の魔力を用い、一気に身体能力を増大させた。
『火炎』で目が眩んだヨーゼフという魔族のわずかな隙を突き、あっという間にその懐に潜りこんでしまう。

「チビぃ！」

「こんなにいい女をチビって失礼だな」

「がはぁ！」

ヨーゼフという魔族は慌てて自分の体を強化したようだけど、ルイーゼの一撃は完全に防げなかった。
ボキボキという音と共に、そのまま地面に崩れ落ちてしまう。

でも、これで死なないなんてさすがは魔族ね。
咄嗟に、魔力で体を強化して致命傷を防いだみたい。
普通の人間なら確実に死んでいたと思う。

「イーナちゃん、やったよ」

「じゃあ、ヴェルの助っ人に行くわよ」

「他の人は無理かぁ……」

私とルイーゼが組んで戦う事を決めた時点で、みんなは私達が最初にヴェルの救援に向かうであろうという合意が無意識にできていた。
ルイーゼの魔力隠蔽が、一番上手くいきそうだったから。
こうして私達は、オットーという魔族の妨害に入れるようになった。

「本当に、ヴェルよりも魔力が多いわね。あの魔族」

「これは、ヴェルも苦戦して当然か」

「チビぃ！　卑怯だぞ！」

「魔力隠蔽の件？　卑怯なんて、暗殺を目論む人間が言うセリフじゃないよ」

「言わせておけば！　このチビ！　あがっ！」

とここで、ルイーゼに話しかけられてわざわざ応対していたオットーの背中に、イーナが魔力を篭めて投げた槍が命中した。

強固な『魔法障壁』のせいでダメージにはなっていないが、脅かす効果くらいはあったようだ。

「貴様ぁーーー！」

続けて数本槍が投擲されるも、オットーはすべて『魔法障壁』で防いだ。

だがその隙に、ルイーゼがオットーの死角に潜り込んで魔力を篭めた一撃を放った。

これもオットーの『魔法障壁』で防がれるが、徐々に彼の魔力を削っている。

彼の膨大な魔力量を考えるとわずかな量にしかすぎないが、それでも時間稼ぎには成功していた。

「ちょこまかと三対一でぇーーー！　あがっ！」

さらにイーナが投擲した槍が『魔法障壁』に命中、オットーにダメージはないが、揺さぶられて体のバランスを崩しそうになり、慌てて『飛翔』で体勢を立て直す。

ところがその直後、今度は俺が放った無属性魔法が命中。

これもダメージはないが、オットーは滞空していたポイントから数メートルほど落下してしまい、慌てて体勢を立て直した。

「ヴェル、上手くいったわね」

「ヴェル、ナイス判断」

「ルイーゼも。イーナもな。このまま畳みかけるぞ！」

「……わかったわ」

「……わかったよ」

ルイーゼとイーナとはもう長い付き合いだ。
俺がちょっと片目を瞑って合図すると、それだけで作戦を理解してくれた。
いくら三人になっても、俺達がオットーを倒せるはずがない。

そのくらい、魔力の量に差があるのだ。
かといって、まだ幼い魔王様をオットーにぶつけるわけにはいかない。

ライラさんでは、オットーに勝てない。
多少魔法の訓練をしていたようだが、社長業が忙しすぎるようだ。
自分よりも魔力量が低い他の魔族に翻弄され、一対一で睨み合いを続けたままだ。

「ライラ、駄目か？」

「申し訳ありません、陛下。この者の方が、戦い慣れているようです。さすがは無職。空いている時間が多く、無意味な戦闘訓練を続けていたようです」

「うるせえ！　俺が無職でお前らが困ったりしたか？」

「今、困っています」

「減らず口ぉーーー！」

ライラさんに実質無職なのを指摘されたエストは、激高しながら次々と魔法の矢を放った。

すべてライラさんの『魔法障壁』によって防がれるが、防戦一方となって俺達の救援にはこれなさそうだ。

こうなれば、時間だけが俺達を有利にする。

オットーには俺達が勝負を着けようとしているように見せつつ、相手の魔力を少しずつ削って時間を稼ぐしかない。

「こういう時のために、大量に槍を準備しておいてよかったわ。乱れ撃ち！」

イーナは、魔法の袋から取り出した大量の槍を次々とオットーに向けて投擲した。

「こんなものは避ければ……あがっ！」

「チグハグね……魔法や戦闘技術は学んでいるけど、実戦の勘が皆無に近いなんて……」

イーナはあまり魔力を使わなくても、オットーの移動する方向を読んで槍を投げて半数以上を命中させていた。

『魔法障壁』がなければ、いくら魔族でも槍が刺されば死んでしまうから消すわけにいかない。

槍が命中する度に、少しずつオットーの魔力が消耗していく。

「小娘ぇーーー！」

イーナからの嫌がらせに近い攻撃に激怒したオットーは、『火球』を彼女に向けて放った。

「残念でした」

ところが『飛翔』でイーナの前に立ったルイーゼが、小さな『魔法障壁』の盾を作り、オットーの『火球』を弾いてしまった。

動体視力がいいルイーゼは全身に『魔法障壁』を張らず、片手に出した小さな盾状の『魔法障壁』だけで、イーナに命中するはずだった『火球』を弾いてしまったのだ。

「節約、節約」

「クソぉーーー！　ならば避けられない『火球』を食らえ！」

ルイーゼの戦い方に激怒したオットーは、莫大な量の魔力を消費して巨大な『火球』でイーナを攻撃しようとした。

「おっと、バイバイ」

だがルイーゼは、オットーが巨大な『火球』を放った直後、イーナを抱えて巨大な『火球』の射程距離から離れてしまう。

オットーは、またも魔力を無駄にしてしまう。

「しかし……」

イーナとルイーゼは上手く戦っているが、やはりオットーの魔力

量は尋常ではない。
あれだけ高威力の魔法を連発して、まだ半分も消費していないのだから。

「汚く足掻きやがって。女に助けてもらって格好悪い奴だ。とても貴族とは思えん」

「ふんっ、何とでも言え。その前に、お前に貴族云々言われたくないな」

俺は、お前に殺されなければ勝ちなのだから。
それに、言うほど貴族も楽じゃないんだぞ。
オットーにはわからないだろうがな。

「責任のある立場。私もじきにそうなる。だがそれは生まれからではない！　私が偉大な才能と力を持つからだ！」

「そうかい」

こいつがペラペラ喋っている政治信条や政策は、今のところは口先だけ。
自分も、貴族や政治家と同じような立場になってみたい。
ただそれだけなのであろう。
でなければ、暗殺など普通は引き受けない。

「女が二人も乱入して面倒だな」

「いいじゃないか。ボクは夫を手助けしているだけだよ」

「決闘じゃないんだから、一対一じゃないと不公平とか言ったら、

あなたは本物のバカよ」

「ああ言えばこう言う！」

二人の発言に激高したオットーは再び巨大な『火球』を作ってぶつけようとしたが、またもイーナを抱えたルイーゼに察知され、『飛翔』で回避されてしまう。

ルイーゼは、オットーの手の動きを見て『火球』の飛ぶ方向を瞬時に見極め回避してしまう。

このままだと、オットーがルイーゼに魔法を当てるのは難しいであろう。

「ここで無駄な時間をかけていられない。最後の手段と思ったが、密かに準備しておいてよかった」

オットーは、懐から虹色の光を放つ宝石が嵌められたペンダントを取り出した。

「経費が嵩むのでできれば使いたくなかったが、仕方がない。バウマイスター辺境伯、お前はこれで終わりだ！」

「オットー、お前は何を？」

オットーがそのペンダントを掲げてすぐ、突然俺の周囲が真っ暗になってしまった。

一瞬意識を失ったのかもしれない。

気がつくと、俺は真っ白な空間を真っ逆さまに落下していた。

「ここはどこだ？」

そこはただ真っ白な空間で、見渡す限り足で立てる地面が存在していなかった。

ひたすら落下を続けていた俺は、慌てて『飛翔』でその場に浮かぶ。

「……っ！　魔力が吸われていく……」

ところが魔法を使うと、通常の何倍も早く魔力が減っていく感覚を覚えた。

「この空間で魔法を使うと、通常の何倍も魔力を消費するのか？」

「正解だ。バウマイスター辺境伯」

いつの間にか、俺の斜め上には得意げな表情を浮かべるオットーが宙に浮いていた。

「お前たちが古代魔法文明時代とやらの文明の利器を利用するように、我々にもゾヌターク王国時代にのみ存在した古代魔法技術の品が存在する。これもその一つさ。ブラックマーケットで手に入れた」

「それは、貧乏なお前たちには大変な出費だったな」

「この状況でまだ減らず口を叩くか！　これは、大昔の修行用の道具だ。魔法の袋と同じく別の空間に魔族と人を送り込める。ここでは常に『飛翔』を使わないと永遠に落下していく。魔力の消費量は通常の五倍以上、計算では俺よりも遥か早くバウマイスター辺境伯の魔力が尽きる。永遠に別空間で落下し続けるがいい！」

まずい。

魔法の袋と同じ空間なら、時間の概念が存在しない。
休んでも魔力が回復せず、その前に時間が経過しないのだ。
眠くならない。
お腹が空かない。
一旦魔力が尽きれば、ただひたすらこの白い空間を落下していく。
間違いなく気が狂うはずだ。
魔法の袋に魔晶石があるが、それを使って魔力を回復させたとして、果たしてオットーを倒して例のペンダントを奪えるか？
さすがに、オットー自身がそれを許さないであろう。

「（とにかく、今は時間を稼ぐ。ライラさんと魔王様に救出手段があるかもしれない）」

俺はただオットーと睨み合って対峙を続けた。

「時間稼ぎか。悲しいな。魔力が少ない雑魚は。どう努力しても、お前の方が先に魔力が尽きるのだ」

一か八かで、オットーと短期決戦を行うのは危険だ。
奴はそれを予想してちゃんと備えをしている。
今は、ただエリーゼたちやライラさん、魔王様の救援を待つしかない。
俺はできる限り魔力の節約を始めるのであった。

第百六十一話　魔王様、奮闘す！

「あれはまさか！」

「オットーの奥の手が成功したようだな。もうバウマイスター辺境伯は、こちらの世界に戻って来れまい」

私に対し、エストという魔族が勝ち誇ったような顔をしました。

自分のリーダーが、バウマイスター辺境伯殿の暗殺に成功したと確信したのでしょう。

確か、オットーが使用したペンダントの本来の使用目的は、特別な異空間で魔力の消費を早め、負荷をかけた魔法特訓を行うためのもの。

大昔、ただ強い魔族が絶対とされた時代の魔道具、修行用具であったはず。

ところが、この魔道具は使い方によっては人を殺す事も可能です。

魔道具の使用者が、空間の中で全魔力を消費した者を脱出させなかった場合、その人物は永遠に異空間の迷子となり、これはもう死んだも同然。

そういう使い方も可能なので、今は危険な魔道具として販売も使用も禁止されているのです。

ブラックマーケットに大昔の発掘品が出回り、時おりそれを犯罪組織が暗殺に使用したりしてニュースになっているようですが。

あの空間に閉じ込められたら、魔力切れと共に永遠に空間を落下し続け、どんな人でも気が狂ってしまうのです。

「あのような物をどこで手に入れたのです？」

「お前に話す義理などあるか！　喋るわけがないだろうが、バーカ！　精々時間稼ぎをしてやるぜ。一秒経つ毎に、バウマイスター辺境伯の死ぬ時が早まるわけだ。焦るよななぁ？　何しろ、大切な金づるだ」

喋り方に品がない人ですね。

魔族としても男性としても、まったく好意に値しない人物です。

こういう人であるのなら……。

「そうですか……ならば、強引にでも口を割らせるしかありませんか……。自分がとても賢いと思っているオットーの事です。もし自分が脱出できなかった時のために、あなた達に脱出手段を委ねているでしょうから」

「はんっ！　俺様が喋ると思うか？　戦い慣れておらず、俺を捕えられない宰相閣下さんよ。俺は時間を稼げば勝ちなんだぜ」

こうやって話を続けているのも、時間稼ぎの一つですか。

ですが、あなたはミスを犯しました。

あなたは、私と一対一の戦いが永遠に続くと思ったのですか？

先にヨーゼフという魔族を倒し、バウマイスター辺境伯の救援に向かったイーナさんとルイーゼさんがフリーなのを忘れているのでは？

「そうだったな。ヨーゼフを倒した小娘が二人ほど余っていたんだよな」

エストという魔族は、意外とやるようですね。
背後から奇襲をかけたルイーゼさんの一撃を軽くかわしてしまいました。

「通用するか！　チビ！」

「魔族の男性はどいつもこいつも、レディーに対して失礼だな。魔族は男女同権じゃないの？」

「あんなフェミババアの言う事なんて聞けるか！　俺は支持していないから関係ないね」

いきすぎた女権論者もどうかと思いますが、こうもあからさまに女性を下に見る男も嫌ですね。
それにしても、思ったより隙がない。

「そうなんだ。ボクは別にどっちでもいいけどね。ヴェルは優しいから」

「それは残念だったな。あいつは、もうお前らに優しくできないさ」

「そういう言い方をするから、君達は女性から嫌われるんだよ。モテない男が集まって、ヴェルに嫉妬でもしたの？　ぷっ、恥ずかしい人達だな」

ルイーゼさん、バウマイスター辺境伯の件もあってか、エストを煽りに煽っていますね。
怒りで我を忘れさせ、その隙を突く作戦ですか。
「そうやって怒らせて、俺の意識をこちらに集中させてから、宰相閣下が攻撃をするわけか。残念だな、通じなくて」

ルイーゼさんと話をしている隙を突き、私に背中を見せたエストに向けて魔法を放ちますが、再び察知されてかわされてしまいました。

「女の浅知恵だな。底が知れるぜ」

「そんな事はないと思うんだよなぁ」

「チビ、負け惜しみか？　ああ、もう一人いたな」

三度目の正直とばかり、また別の方向からイーナさんが魔力を篭めた槍を放ちますが、これもかわされてしまいました。

「バーーーカ！　俺様が人数計算を間違うわけないだろうが！」

イーナさんの攻撃も余裕でかわし、エストは余裕の表情を浮かべました。

彼は私達を倒す必要などなく、ただ時間を潰せばいいのだから。

「三人で俺様一人に攻撃を掠らせもないとはな。人間の小娘二人はともかく、魔力ばかり多くて戦えない魔族とは。しかも、それが宰相の血筋ときた。魔王復権が聞いて呆れるぜ」

これは、三人で攻撃の手数を増やさなければいけないかと思ったその時、ここで思ってもみなかった人物の声が耳に入ってきました。

「そうかな？　お前こそ戦いの最中に雄弁だな。その余裕がお前を敗北に導く」

「なっ！　魔王か！」

私ですら気がつきませんでした。

エリーゼさんと後方に退いたはずの陛下が、エストへの第四の矢として彼の背後に立っていたのですから。

「暫く寝ておれ！」

「がはっ！」

エストは陛下の魔力を篭めた一撃を受け、その場に倒れてしまいました。

陛下は手加減をしたようで彼は死んではおらず、気を失ったようです。

「殺されぬだけありがたいと思え。王の慈悲だ。ライラ、バウマイスター辺境伯を救出するぞ」

「救出ですか？」

「そうだ。バウマイスター辺境伯は我らの大切な客だぞ。この襲撃の責任が我らにある以上、彼を助けなければいけないのだ」

確かに、商品の輸送を頼んだ連中が暗殺者社集団だったなんて、とんだ失態、不祥事です。

忙しさにかまけて、私に隙がありすぎたのでしょう。

「あの、ヴェンデリン様を救出できるのでしょうか？」

陛下と一緒に後方に下がっていたエリーゼ殿もおり、彼女も突然

消えたバウマイスター辺境伯殿の事が心配なのでしょう。
あきらかに動揺した表情を浮かべています。

「ライラは、『次元空間発生魔晶石』を持っておるではないか」

「持ってはいますが……」

オットーがバウマイスター辺境伯殿に対して使用したのは、古の訓練用の魔道具です。
指定した相手と魔法の袋と同じ別の空間に移動し、そこで鍛錬を行う。
その空間は広さに限りがなく、常に浮遊していなければ永遠に落下し続けて迷子になる可能性があり、かといってその場に浮遊し続けると、通常の数倍の魔力を消費してしまいます。
早く救出しなければ、バウマイスター辺境伯殿の方がオットーよりも先に魔力が尽きてしまう以上、永遠に脱出不可能となるでしょう。
一度魔力が尽き落下し続ける彼を探すなど、まさに砂漠で一粒の色違いの砂粒を見つけるようなもの。
バウマイスター辺境伯殿の魔力が尽きる前に見つけなければいけないのです。

「ライラ、バウマイスター辺境伯が消えた位置で次元空間発生魔晶石を作動させ、バウマイスター辺境伯がいる空間の同位置に強引に接続するのだ」

「ぶっつけ本番ですね……」

通常、違う次元空間発生魔晶石を用いるとまったく繋がっていない別の場所に飛んでしまうのですが、いくつかの条件を満たすと別

の次元空間発生魔晶石が繋いだ座標に飛ぶ事ができるのです。

実は、私の先祖がこの手の魔法が得意であり、次元空間発生魔晶石を組み込んだネックレスも先祖代々の家宝として持っています。

「ライラさん、ヴェンデリン様を助けてください」

「お願いします、ライラさん」

「ボクからもお願い」

エリーゼさん、イーナさん、ルイーゼさんに頭を下げられてしまいました。

絶対にバウマイスター辺境伯様を助け出さなければいけませんね。

「ライラ、ここは恩を返しておくのが魔王としての度量を示す事になるぞ。それに、バウマイスター辺境伯は余の友人だからな」

陛下も、バウマイスター辺境伯殿の救出に異存はないようです。

むしろ積極的に見えますね。

「わかりました。急ぎ準備しましょう。ですが……」

「ですが、何か不都合でも？」

実は、次元空間発生魔晶石が繋げた空間に、別の次元空間発生魔晶石で移動するにはいくつかの条件が必要です。

まずは、バウマイスター辺境伯殿が消えた場所で次元空間発生魔晶石を使用する。

次に、オットーの次元空間発生魔晶石が作動した時の魔力の残滓

を辿る。

そして、その空間を開く時には膨大な魔力を必要とする。
その量たるや、私の魔力量よりも相当多いはず。

「ならば余が魔力を提供しよう」

「それはいけません」

「なぜだ？　ライラ？」

「誰か一人空間に突入してバウマイスター辺境伯殿を救出する者が必要なのですが、それを陛下にやっていただかないと。こじ開けた空間は、私が維持しないといけないので、私が突入できないのです」

「じゃあ、ボクが行くよ」

「ルイーゼさん、次元空間発生魔晶石で作った空間では魔力が恐ろしい勢いで消耗していきます。そのため、昔の魔族が鍛錬に使用していたのですが……」

「ボク、一応上級だよ」

「先ほどの戦いで魔力を消費しておりますし、辛うじて上級であるルイーゼさんですとバウマイスター辺境伯殿に合流する前に魔力が尽きて、空間を永遠に落下する羽目になるかもしれません」

「げっ！　そうなの？」

「はい、あの空間はそういう場所なのです」

魔力は膨大ですが、バウマイスター辺境伯殿よりも実戦経験がないオットーが容易く勝利できるからこそ、彼はバウマイスター辺境伯殿を空間に引きずり込んだのですから。

「ならば余が行くのがいいな。それにしても、反対せぬのだな。ライラよ」

反対したいのが本音ですが、この状況では陛下がバウマイスター辺境伯殿の救援に向かうのが一番効率いい。

それに、私は信じています。

陛下は必ずこの試練を突破なされると。

「もう一つ、強引に空間をこじ開けて繋げる魔力が不足しています。他の戦っている方々にも参加していただかないと」

問題はオットーの配下達はまだ倒れていない者の方が多く、しかも彼らは時間稼ぎに集中している点です。

時間が経てば経つほど、バウマイスター辺境伯殿の魔力切れが確実となるのですから。

「それなら、もうすぐ大丈夫なはず」

「そうね、私達が救援に行こうかと思ったけど、その必要もないみたい」

「そうなのですか？」

私がブランターク殿を始め、オットーの配下達と戦っているみんなの方を見ると、既に全員が対戦していた相手を倒していたのでし

た。

「よく倒せましたね。オットーは例外として、配下達も魔力量が多いのに」

「訓練と実戦は違うのである！」

「そうだな。それなりに上手く戦う連中だったが、如何せん狩猟もした事がない連中だからな。ちょっと時間はかかったが、何とか倒せたさ。でも、こういつらは目を覚ますと危なくないか？」

エリーゼさん達と陛下とともにバウマイスター辺境伯殿の救出案を練っている間に、導師殿やブランターク殿は他の魔族を倒してしまいました。

彼らは全員上級だったはずなのですが、あまりに呆気ないといいますか……。

「実戦経験の不足である！」

「これは憂慮すべき事なのでしょうか？」

もし人間と魔族が戦争になった場合、魔力の量だけで戦力を計算すると魔族が戦い慣れている人間に思わぬ不覚を取るのでは？

「ライラ殿の国にいる警備隊の連中。彼らならこうは簡単にいかないのである！　彼らはプロだからである！」

要するに、革命ゴッコのため適当に鍛錬していたオットーの仲間達と、それを仕事にしている者達との差なのでしょう。

「魔物と戦った事すらない連中に負けないのである！」

「そう、いくら魔力が多くてもいくらでも隙は見い出せる」

ヴィルマさんの言うとおり、彼女の足元には縛られたオットーの仲間達がいました。

「このままで大丈夫なのであるか？」

「まだ魔力が残っているからな。目を覚ますと危険かもしれないな」

導師殿とブランターク殿は『捕えた魔族達が目を覚ますと危険なので処刑すべきでは？』と提案しました。

人間でその意見を否定する者がいません。

彼らが戦い慣れているというのは、そういう部分からも判断できます。

昔と違って、我々今の魔族は犯罪者でも命を奪うのはよくないという考えが主流ですから。

「その心配はありません。手伝っていただけますか？」

さすがに殺すのはどうかと思うので、私は彼らを完全に無力化する事にします。

「いいぜ。これは魔道具か？」

「はい。魔力量が多い魔族を拘束するためのものです」

「この特殊な縄で縛り、縄は空の魔晶石繋がっている。そういう事か」

「この縄から縛った者の魔力が抜け、空いている魔晶石に貯まっていきます。魔力が多い魔族は素手でも脱獄が容易いので、罪人はみな常に魔力を抜かれるのです。抜いた魔力を有効活用もしますし」

「ずっと縛られているのか」

「犯を犯して逮捕されたような者は、拘束中ずっと腰を縄で縛られて魔力を抜かれるのです。気絶しない量の魔力だけ残され、あとは作業に狩り出されます」

「魔族の罪人って大変だな……」

魔力を抜かれ、他にも肉体労働や作業に従事させられますしね。人間が罪を犯した時に課せられる強制労働よりも大変かもしれません。

「抜いた魔力は適性価格で買い取られ、犯罪被害者への弁済に当てられますからね。ですが、その価格が安く『他の魔族の職を奪っているのでは？』という批判がないわけでもありません」

「魔族も大変だな」

ブランターク殿に同情されてしまいましたが、私は罪人になった

事がないですからね。
そんな話をしている間に、縛られた魔族達の魔力はほぼすべて吸い上げ終わりました。
巨大な魔晶石に、大量の魔力が貯まりました。
この巨大魔晶石も特殊なもので、魔力質の共通化もやってくれるので、簡単に魔道具の動力に転用可能なのです。

「これを使って私が、バウマイスター辺境伯殿が引きずり込まれた空間を強引にこじ開けます」

「俺達の魔力を返せ！」

それにしても、オットーの仲間達は思ったよりも頑丈ですね。
導師殿達から意識を失うほどの攻撃を受け大半の魔力を奪われたのに、もう目を覚ましてしまうなんて。

「どう喚こうとも、お主らは魔力がほとんどない状態なのである！グダグダ言うと、首が本来あり得ない方向に向く事になるのである！」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

お前らの首をへし折るという導師殿の脅しで、彼らは全員口を噤んでしまいました。
魔族の大半は人間を残酷な野蛮人だと思っていますし、導師殿からそう脅されると信じてしまう人は多いのでしょう。

「では、ライラ殿」

「はい、陛下もご準備を」

「任せてくれ。バウマイスター辺境伯は必ず助けるぞ。何しろ、余達の一番の顧客だからな」

私と陛下は『飛翔』でバウマイスター辺境伯殿が消えた地点に飛び、ブランターク殿と導師殿が、捕えた魔族達から吸い上げた魔力が貯まった魔晶石を持ってついて来ます。

「この辺ですね。わずかに魔力の残滓が残っています」

「そうだな。この辺だな」

ブランターク殿は魔力量が少なめですが、魔力の『探知』が得意なようですね。

私と同じくらい、魔力の残滓に敏感とは驚きです。

「これから、私の魔力とその巨大魔晶石の魔力で強引に空間をこじ開けます。陛下はすぐに飛び込んで、バウマイスター辺境伯殿と合流してください」

「わかった。して、どうすれば脱出できるのだ？」

「一番てっとり早いのは、こじ開けた場所に戻ってくる事です。ですが、異次元の空間は方向や位置の把握が難しい。それに、私がこじ開けた入り口を維持できるのは三分までです」

「うーーーん。それだと間に合わない可能性もあるな」

バウマイスター辺境伯殿を回収し、入り口まで戻ってくるのに三分。

私はバウマイスター辺境伯殿達がいる空間への入り口をこじ開ける事は可能ですが、彼らがいるすぐ傍に入り口をこじ開けられる保障がありません。
だから、空間内で一番長時間活動できる陛下に突入役をお願いしたのですから。

「迷子になる可能性もあるので、オットーが持つ次元空間発生魔晶石を破壊するか、オットーが死ねば空間から脱出可能な事も覚えておいてください」

私が強引に抉じ開けて入り込みますが、その空間はオットーと彼が持つ魔道具によって開かれたもの。
魔道具が壊れてしまうか、彼が死ねば空間を保てなくなり、バウマイスター辺境伯殿と異物である陛下は外に、この世界ですけど追い出されてしまうのです。

「三分か……間に合わぬ可能性の方が高いな。ならば、バウマイスター辺境伯と合流し、オットーを倒した方が確実かもしれぬ」

「倒せなくても、次元空間発生魔晶石が破壊できれば大丈夫です」

「とはいうが、ライラよ。オットーもそこまで間抜けではあるまい。倒すしかないのだ。なあに、戦闘は魔力を回復させたバウマイスター辺境伯に任せるから安心せい。彼と器合わせをすれば完璧だ。さすがに彼も、この状況で器合わせを否定すまい」

「ですね。では、早速入り口を」

空間への入り口をこじ開ける作業を始めると、倒した魔族達を見張っているバウマイスター辺境伯殿の奥さん達が何か喚いています。

「コラぁーーー！　男女間の器合わせは駄目に決まっているじゃないか！」

「そうよ、駄目よ！　人間には人間の慣習があるのよ！」

「ヴェンデリン様を救出するだけでいいんです！」

「何の躊躇いもなくヴェンデリンさんと器合わせなんて！　魔族の少女は大胆ですわね」

「カタリーナ、そこ、感心する部分じゃないから。異性同士の器合わせは駄目。よくない」

「なあ、状況的に仕方がないんじゃあ……」

「駄目なものは駄目。大量の魔晶石もあるのだから、それで魔力を補充すればいい」

人間は、そんなに異性間の器合わせが嫌なのですか？

それをしたからといって、陛下とバウマイスター辺境伯殿がどうこうなるわけでもないのに……。

彼女達、私が準備した魔力質を共通化させる魔晶石への魔力補充にえらく協力的だと思ったら……。

今のバウマイスター辺境伯の魔力量でも、回復させえすれば、異空間で魔力を消耗したオットーに勝てると思って魔力提供に協力したわけですか。

「でもさぁ……旦那が強い方が脱出する可能性が高いし。なあ、姉御」

「いけません。タブーです」

「姉御、年だから昔からの決まりに弱い？　うっ、すいません、生意気言いました」

下から外野が色々と言っていますが、今は緊急事態なので無視です。

導師殿とブランターク殿は反対していないのですから、人間とは案外女性の方が保守的なのでしょうか？

十数秒ほど、集中しながら特殊な魔力を練ってバウマイスター辺境伯殿が消えたポイントに流し込むと、無事に空間へと繋がる穴が完成しました。

久々だったのですが、ミスをしないでよかった。

「ライラ、では行くぞ！」

「陛下、ご武運を」

「王たる余の初陣だな。相手がショボいが、まあ仕方あるまい。エリーゼ殿はまだ反対か。魔族に器合わせをした男女が結婚せねばならぬ決まりなどないわ。では、参る！」

陛下は私がこじ開けた穴に飛び込み、あとはバウマイスター辺境伯殿を無事に救出してくれる事を祈るのみとなるのでした。

「どうだ？　バウマイスター辺境伯。もうそれほど魔力に余裕もあるまい」

「……」

この空間に飛ばされから、どれだけの時間が経過したであろうか？
時間の概念がないので、段々と時間を感じる感覚が鈍ってきたような気がしてよくわからない。
数分のような気もするが、数時間経ったようにも感じてしまうのだ。
ただ魔力の減りから考えると、数十分が正解か。

「時間の概念がないのに、なんで魔力が減るんだ？」

「そういう空間だからさ。知りたかったら、あの世でこの魔道具を作った先達に聞くがいい」

時間の概念はないのに、魔法を使うと魔力が普段の数倍も早く消費してしまう。
嫌な空間だな。

「辛かろう、自分よりも魔力が多い敵に粘られてなぁ。ほれ！」

俺の魔力が早く尽きるよう、オットーは時おり魔法を飛ばしてくるようになった。
これが通常の空間なら、魔力を節約して回避するという手が使え

た。
ところが、この空間では『飛翔』による回避行動だけでも大量の魔力を消費してしまう。
下手に動けず、『魔法障壁』で防ぐしかなかった。
小さな『魔法障壁』で魔法を防ぐという手も使えなかった。
オットーがわざと俺の体全体を覆うような魔法を放ってきたからだ。
オットーは俺以上に魔力を消費しているのだが、魔力量の差でまだ奴が圧倒的な優位にある。
予備の魔晶石で魔力を回復していたが、それは奴も魔晶石を持っていたので同じ事が可能だった。
オットーがどれほどの魔晶石を持っているかわからないが、やはりどう考えても俺の方が先に魔力が尽きてしまうであろう。
そのくらい、両者の魔力量の差は大きかった。
「一か八かでケリをつけるか？」
「……」
俺はオットーの問いを無視した。
今の、まだある程度魔力が残っているうちにオットーに最後の勝負を仕掛ける。
勝率はゼロではないが、ほぼゼロに近いであろう。
オットーが逃走するか防御に徹すれば、早く魔力が尽きて俺の死が早まるだけ。
師匠なら速攻でケリをつけても勝率は高いが、俺ではまだ無理だ。
「（とにかく、今は待つしかない）」

外にエリーゼ達がいる。
導師とブランタークさんもいて、ライラさんと魔王様もいるのだ。
何か対策を立てているはずで、ならば一秒でも長く魔力を保たせるのが一番生存率が高いはずであった。
ここで、オットーの挑発に乗るのは危険だ。

「若いのに無理はしないのか。年寄りみたいだな」

「……」

何を言われても無視だ。
今はとにかく時間を稼がないといけない。

それにしても、俺は今少し後悔している。
人間と魔族では考え方が違うのに、魔王様と器合わせをしなかったのは失敗だった。
もっと魔力があれば、ここまで追い込まれる事はなかったのに。

「まあいい。それほど遠い先でもないさ」

さらにどれだけ時間が経ったであろうか？
俺の魔力は枯渇寸前で、段々と内心に焦りが広がってくる。

「バウマイスター辺境伯、その魔法の袋に入った魔晶石で魔力を補充してはどうだ？」

オットーの野郎、既に俺の持つ魔晶石が空なのを知って挑発してきやがった。
本当に嫌な奴である。

それでも、今は一秒でも長く魔力が枯渇するのを防ぐしかない。

「ふふふっ、もう少しだな」

そして遂にその時が訪れた。

『飛翔』が保てなくなったのだ。

わずかに魔力が残っているので意識は失っていないが、もう落下は防げない。

俺は、上か下か右か左かもわからない真っ白な空間を落下し始める。

どうやらこれで俺も終わりのようだ。

最後まで助けを待つという、俺の賭けは失敗に終わった。

この世界に飛ばされてから色々とあったが、今度も短命で死んでしまうとは……。

いや、俺はこの空間では死ねないのだった。

ただひたすら落下を続け、最後には気が狂ってしまう未来か。

これは完全に狂う前に、自害でもした方がマシか？

いや、まだ何か脱出手段が？

そんな事を考えていたら、突然誰かに背中から体を支えられて落下が止まった。

「えっ？　どうして？」

「どうにか間に合ったようだな。バウマイスター辺境伯、だから言ったであろう？　余の忠告を聞かぬからそうなる」

「陛下？」

俺を救ったのは、何と魔王様であった。

俺は導師かライラさんが救いに来ると思ったのだが、魔王様とは意外だった。

「よくライラさんが許しましたね」

「内心渋々だな。この空間では、上級でも活動時間が短い。ライラは空間をこじ開ける仕事があるからの。もう一つ、残念な知らせがある」

「何でしょうか？」

「バウマイスター辺境伯を探すのに時間がかかった。もう余が潜ってきた入り口は消えておろう。オットーが持つ次元空間発生魔晶石を破壊するか、オットーを殺すしか脱出の手段がない。その前に……」

魔王様は声を小さくし、そっと俺の耳元で呟いた。

「（目を閉じよ。早く）」

「はい？

「（いいから、早く！）」

小声ながらも強く言われたので、俺は慌てて目を閉じた。

「未練たらしく生き残った王家の残骸が、これより世界の王となる

俺の邪魔をしただと？」

「オットーとやら、多少弁が立ち、魔力も余に次ぐほどだが、ついてくる者は少なく、小心で卑劣で、自分の事しか考えられぬ小物よ。人を統べる資格などないわ。『フラッシュ』」

「あーーーっ！　眼がぁーーー！」

俺が言われた通りに目を瞑った直後、魔王様はオットーを挑発しつつ魔法で眩しい光を放った。

突然『フラッシュ』という魔法に相応しい光が目に直撃したオットーは、まるで某天空の城のア二メに出てくる悪役のように、目を押さえながらのたうち回っている。

「よし！　少し離れるぞ！」

魔王様は、俺を抱えたまま『飛翔』でオットーから距離を置いた。

そして俺に、ある提案をする。

「わかっておろうな？　もう躊躇する暇はないぞ」

「わかりました。ですが、俺は人間ですよ」

魔王様は俺と器合わせをしてその魔力を増やし、勝率を上げたいようだ。

彼女はオットーよりも魔力は多いが、残念ながらオットーよりも戦闘力がない。

十三歳の少女に、ライラさんもそこまで厳しい訓練は課さないのだから当然だ。

それよりも、俺の魔力を増やしてしまっていいのかと、彼女に尋ねてしまった。

「バウマイスター辺境伯は人間にしては魔力量が多い。あとどの程度増えるかわからぬが、それも時間の問題でしかない。結局は何も変わらぬよ。それよりも、今は目の前の敵に対抗する力を手に入れる方が先だ。そなたも守らねばならぬものが多い、今回の暗殺事件、単純に魔族の仕業だと思うか？」

「いいえ」

王国、帝国どちらか知らないが、人間が金を積んで俺の暗殺を依頼したかもしれない。

むしろその可能性の方が高いであろう。

オットーを捕えて尋問すればわかるかもしれないが、今はそんな余裕がない。

彼の視力が回復する前に、器合わせを始めよう。

「それでよし。予備の魔晶石も大量に持ってきた。少し魔力を回復させてから始めるぞ」

「はい」

俺は魔王様が持参した魔晶石で少し魔力を回復させてから『飛翔』で再び浮かび上がり、魔王様と対面して両手を繋いだ。

自分よりも魔力がある人と器合わせをするのは、師匠以来初めての事である。

「さて、どのくらいまで魔力が伸びるか……」

すぐに魔力量の限界がきてオットーに対抗できないという事態は避けたいが、こればかりは神のみぞ知るというやつだ。
最悪、二人で攻撃すればいいので、オットーに負ける事はないと思いたいが……。

「余はそんなに心配しておらぬぞ。バウマイスター辺境伯は、ちょっと普通の人間の範疇を超えているからな」

「それって、褒められているのですか？」

「当たり前だ。もしかしたら、バウマイスター辺境伯は余よりも魔力量が上かもしれないと思っておるぞ」

魔族の王よりも、魔力の量が多い人間って……。
もしそうだとしたら、それはやはり俺が別の世界の人間なのと関係あるのだろうか？
さすがにそれはないか。
今の時点で魔王様の魔力量を超えても、彼女も魔力量は成長途上にある。
どうせすぐに抜かれるはずだ。

「これは予想以上だな。おおっ、バウマイスター辺境伯の魔力は心地よいの」

「そうですか？」

目の前で両手を繋いだ美少女からそういう事を言われると、少し恥ずかしい気持ちになってしまう。
それと、気のせいか少し魔王様の顔が赤いような……。

「陛下、大丈夫ですか？」

「うんっ、まあ気にするな。時にバウマイスター辺境伯は知っておるか？　魔族と人間にある数少ない差を」

「差ですか？　なんでしょうか？」

「極稀にある事だが、魔族が器合わせをして魔力を通わせると、魔力の相性がよくてお互いに好意を抱く事があるそうだ。まあ、滅多にない事だし、余は魔族でバウマイスター辺境伯は人間だからな。そういう事はないのだが」

「それは珍しい話を聞けました。陛下」

「なあ、ヴェンデリンよ」

「はい……」

あれ？

どうして急にバウマイスター辺境伯から、ヴェンデリンなんて名前で呼ばれるようになったんだ？

「余とヴェンデリンもつき合いが長いからな。代わりに余の事もエリーと呼ぶがいいぞ」

「さすがにそれは……」

そんな愛称で魔王様を呼んだら、あとでライラさんに何と言われるか。

あの人は、もの凄い忠臣だからなぁ……。

「そういう事は気にするでない！　我々は同じ敵に立ち向かっている戦友同士であるし、余は王である！　いくら宰相たるライラでも反論は許さぬ！　よって、気にせずに余をエリーと呼べ！」

「はい、エリー様……」

「様はいらぬ。第一、ヴェンデリンは余の家臣ではないではないか」

「ですが、他国とはいえ王なので」

「ヘルムート王国やアーカート神聖帝国ならいざ知らず、ゾヌターク共和国の王などさほど偉くもない。何しろ実権がないからな。わかったら、エリーと呼んでみよ」

「エリー」

「それでいい」

エリーは、俺に対し満面の笑みを浮かべた。
こういう妹がいたら可愛くていいかもしれない。
じゃない！
今は戦いに集中しなければ。

「と、これで器合わせは終わりだな」

結構時間がかかったが、今の俺の魔力量は……ほぼ魔力がない状態で器合わせをしたので、実際に魔力を補充してみないと増加量がいまいちわからないな。

「目くらましなど、舐めた真似をしくさって！」

暫く『眼がぁーーー！』と言いながらのたうち回っていたオットーが復活したようだ。

彼は、自分に目潰し魔法を使ったエリーに対し、強烈な殺意を向けた。

「王など！　民を虐げ、その富を吸い上げ、贅沢な暮らしをしていた俗物でしかない！　だから落ちぶれたのに、この私の邪魔をするのか？」

「金で暗殺を受け請った俗物と語り合う舌など持たぬわ。お前はいちいち偉そうだが、要はただ自分がその俗物な王や貴族に成り替わりたいだけであろう？　所詮は愚人でしかない」

「小娘がぁーーー！」

エリーがオットーを挑発している間、俺は彼女が持参した大量の魔晶石で魔力を回復させていた。

その中にエリーゼの指輪も混じっている。

やはり、みんなで協力してエリーをここに送り込んでくれたようだ。

「バウマイスター辺境伯……。貴様……」

「残念だったな、オットー。これで形勢逆転だ」

俺はエリーと同じ魔力量まで成長したようだ。

しかも、まだ限界が来ていないような気がする。

それはあとで検証するとして、今はオットーを倒してこの空間を

脱出しなければいけない。

「人間が、なぜ魔王に匹敵する魔力を……」

「さあな、そんな事を俺が知るか。あの世で神にでも教えてもらえ」

いくらオットーとはいえ、俺との根競べで魔力は四分の一以下にまで落ち込んでいる。

回復用の魔晶石も使い切ってしまっているようで、その状態でも魔力を回復させなかった。

それでも、器合わせをする俺の半分くらいの魔力量が残っているのか。

「どうする？　一か八かの勝負を……」

「死ねぇーーー！」

逆に追い詰められたオットーは、突然無属性の魔法を俺に向けて放った。

即応性、威力ともになかなかだが、残念ながら俺に不意打ちなど通用しない。

俺もカウンターで無属性魔法を放ち、二人の間で無属性魔法がぶつかり合い、眩い光を放つ。

「まだだ！」

「くぅ！」

俺は無属性魔法の威力をあげた。

双方の青白い光が激突し、眩い光を放つ位置が徐々にオットーへ

と近づいていく。
彼も慌てて無属性魔法の威力をあげるが俺には及ばず、ただオットーの魔力切れを早めさせるだけであった。

「あいつ、逃げるという選択肢はなかったのか？」

「ライラによると、これはあくまでも魔法訓練用の魔道具だそうだ」

殺人にも転用可能だが、それには条件がある。
一緒に空間に入った者を先に魔力切れにしなければならず、双方魔力が残っている状態で魔道具の効果を解くと、二人とも元の世界に戻ってしまうらしい。

「であれば、ここで魔道具の効果を解いたとしても、元の場所でヴェンデリンと戦う事に変わりはないし、外にはエリーゼ殿達もいるからな」

それならここで、一対二で戦った方がマシというわけか。
ただ単に戦闘経験のないオットーが、圧倒的優位から圧倒的不利に転落し、動揺のあまりヤケになって魔法を放ってきたという説も否定できないが。

「ヴェンデリン、もっと魔法の威力を上げろ。オットーが死ねば脱出可能らしいが、何があるかわからぬ。余は魔力の大半をヴェンデリンに送るから早くケリをつけよ」

そう言うと、エリーは『飛翔』を切って俺におぶさり、自分の魔力を俺に送り始めた。
まさか、効率のいい魔力転送をブランタークさん以外に使える人がいたなんて。

「王は臣下にも民にも施しをする存在だ。魔力を分ける事など容易い」

魔族では、魔力移転は王族や貴族の魔法というわけか。

「余がおぶさり、男性であるヴェンデリンも色々と複雑な心境であろうが気にするな」

いえ、今のエリーの胸の大きさなら背中に押しつけられてもさほど。

うちには大戦艦エリーゼ、戦艦カタリーナなどがいるので、水雷艇エリーでは……。

「ええと……残念ですが……」

「なっ、余も三年前に比べれば成長しておるのだぞ！」

「あと五年もすれば、エリーは絶世の美女になるだろうなぁ」

「そうか。そうか」

オットーに向けて高出力の無属性魔法を放っている間、俺はエリーの機嫌を取るのに懸命であった。

年頃の女の子をガキ扱いしてはいけないというわけだ。

「ふざけるな！　私を無視するな！」

オットーが吠えていたが、彼は一瞬でも気を抜けば俺の魔法で消滅させられてしまう。

もし無理やり魔法から逃れても、今の魔力量ではものの数分で魔力が尽きてしまうはずだ。
そうなれば、オットーを殺すなんて簡単な事だ。

「暗殺などという方法で俺の殺害を目論んだ報いだ」

「降伏する！　私はある人物に頼まれて暗殺を実行した。その後ろに人間もいるのだ。それを知りたくないか？」

このままだと殺されると判断したオットーは、突如降伏を口にした。

「だから、私を殺さないでくれ」

「ちなみに、俺を殺そうとした人間とは？」

「言えない。助けてくれないと言わないぞ！　もう一つ、私は法によって保護される権利がある。弁護士の派遣と、ゾヌターク共和国で裁判を受ける権利が……」

「ヴェンデリン」

「そうだな」

こいつは、とんでもないクズだ。
暗殺を目論見、成功したらゾヌターク共和国に逃げ込み、王国の法で自分を捌く権利などないと言い張る。
魔族に対しては、自分は悪逆な貴族を討ち取った英雄だと言い張って名を売り、無罪を勝ち取るつもりなのであろう。
もし王国が抗議しても、野蛮な法を用いる人間の国に魔族を引き

渡すなどあり得ない、そんな事をしたら政府が人権侵害をしようとしている、などと言って騒ぐつもりだったのであろう。
貿易交渉すら締結されていないのに、犯罪者の引き渡しなんてもっとできないよな。
そこまで考えての悪事か。

まったく同情の余地すら存在しない。
こいつは、ニュルンベルク公爵よりも圧倒的に駄目な奴だ。

「お前はここで死ね！」

「バカな！　私は人間側の首謀者を知っているのだぞ！」

「大凡想像がつくし、外にいる連中に聞けば済む話だ。ちょっと痛めつければ吐くだろう」

「容疑者を私刑するなど、野蛮な人間めが！」

「だから、暗殺を目論んだお前が言うな！　王国の法では貴族と王族への暗殺は未遂でも死刑。生かして捕える必要もなく、そのまま処刑しても文句は出ない。都合によってコロコロと言い分を変えるな！　それにだ」

「それに何だ？」

「ここはバウマイスター辺境伯領だ！　ここでは俺が法律なんだよ！　家族が巻き添えにならないだけありがたく思え！」

「やはり人間は野蛮な生き物だ！」

「お前が言うな！」

もう聞く耳持たないと、俺は無属性魔法の威力をあげた。
既に魔力がほとんどないオットーに青白い光の奔流が迫り、遂に彼の魔力が完全に尽きたその瞬間、俺が放った無属性魔法の奔流に包み込まれた。
高威力の無属性魔法がオットーの体を容赦なく溶かしていき、激痛のあまりオットーが断末魔の叫びをあげた。

「私こそが魔族を統べ、人間すら支配して世界の王にぃーーー！」

最後にそう言い残すと、オットーの体は魔道具と共に完全に消え去ってしまった。

「ふう……何とかなったか。エリー、助かったよ」

ギリギリで救いに来てくれたエリーに、俺は改めてお礼を述べた。

「ヴェンデリンよ。ありがたいと思うのなら、一つお願いがあるのだが」

「聞けるお願いなら聞くよ」

「ちょっと疲れたので、おんぶじゃなくて抱っこしてくれないか？」

ええと……。
それは、お姫様抱っこというやつでしょうか？

「余は魔力がなくなりそうだからな。眠くなってきたのでおぶさるのも辛いのだ」

「わかりました」

そう言われては仕方がないと、俺はエリーをお姫様抱っこした。

「楽になった。余は満足だ」

エリーがそう嬉しそうに言ったところで、真っ白な空間に罅が入り始めた。

オットーが死に、彼が持つ次元空間発生魔晶石が破壊されたので、この空間が維持できなくなったのだ。

次第に空間に入る罅が増えていき、遂には砕けて破片が地面へと落ちて行く。

白い空間がなくなった場所には、青い空が見えていた。

「どうやら無事に戻れたみたいだな」

「そうだな」

数十秒で完全に白い空間が砕け落ち、俺はエリーをお姫様抱っこしたまま空に浮いていた。

その場所は、オットーにより別空間に引きずり込まれた場所からそう離れていなかった。

「おおっ！　無事であったか。バウマイスター辺境伯！　よかったのである！」

「辺境伯様、無事でよかったな」

俺とエリーを見つけた導師とブランタークさんが、『飛翔』で俺

達の傍まで飛んできた。

「それにしても、バウマイスター辺境伯も隅に置けないのである！」

「それが誤解ですよ。エリーは魔力切れなので、俺が抱っこしているだけで」

「それにしては、どうしておぶらないでわざわざお姫様抱っこなんだよ？」

ブランタークさんが、怪しいぞという視線を向けてきた。

「エリーがそうしてほしいと言ったので。エリーは命の恩人ですからね」

もし彼女が間に合わなかったら、俺は永遠にあの空間で落下し続けていたであろう。

死ねずに永遠に落下し続けるなんて、死ぬよりも最悪だ。

それを思えば、疲れたから抱っこしてほしいという可愛いお願いくらい聞いても罰は当たらないと思うんだ。

「そんなわけです」

「他意があるわけではない。ブランターク殿よ、気にするな」

「本当ですか？　魔王様」

「余がそうだと言っているのだ。気にするな」

「そうですか……。俺はどっちでもいいんですけど、下の連中がど

う思うかな？」

「下？」

ブランタークさんに指摘されて下を見ると、なぜか俺が生還して大喜びのはずが、エリーゼ以下女性達はみんな怒っていた。

「あなた、ご無事の帰還をお祝いいたします」

エリーゼは口ではそう言っていたが、その表情は冷たく羅刹のようであった。

「あのぅ……。エリーゼさん？」

「妻でもない女性をそのように抱っこするのは、感心できません！陛下も未婚の淑女とて不用意ですよ」

「エリーゼ殿、これはほぼすべての魔力をヴェンデリンにくれてやったから、余が疲れてしまっただけの事だぞ」

「なら、もういいですよね？」

「余は体がダルいぞ。ヴェンデリン、もう少しこのままにしておいてくれ」

「はい」

「ヴェルぅーーー」

「イーナ、俺は悪いのか？」

イーナが非難めいた言い方をしたので、俺は思わず反論してしまう。

「ライラさんが怒るわよ」

「ライラ、気にするでない。ただ魔力切れで疲れただけだ」

「畏まりました」

「ライラさん、そこは怒らないと！」

「私は陛下の臣下ですので、このくらいの事でいちいち目くじらを立てる必要はないかと」

ライラさんは、俺がエリーをお姫様抱っこしても気にならないようだ。

魔族の世界は平成日本に近いので、キスをしていたわけでもないしという事なのであろう。

「まあまあ、イーナちゃん」

「ルイーゼは気にしていないの？」

「だって、陛下が特別な意味がないって言っているからね」

「そう。陛下が自分でそう言うからには、きっと本当に何もない。魔族の王たる者が嘘をつくはずがない」

「それもそうね。陛下はあくまでも疲れたから抱っこしてもらって

いるだけだものね」

「まあな」

エリーはイーナの言い分に口では納得していたが、なぜか目が泳いでいた。

「それよりもさ。陛下はどうして急に旦那を名前で呼んでいるんだ？」

「ヴェンデリンさんにも、自分を愛称で呼ばせていますわね。私はむしろそちらの方が気になりましたが……」

カチヤにカタリーナも、俺とエリーに色々と言いたい事があるようだ。

「お姫様抱っこ、羨ましいです」

「姉御は年を考えて……すいません。何でもありません」

お姫様抱っこが羨ましいと純粋に感想を述べたリサに対し、カチヤが年を考えろと文句を言うが、彼女の目が一瞬で座ったをの見てすぐに謝った。

「ほほう、そういう事か。ヴェンデリンも豪胆よな」

テレーゼ、フィリップ公爵時代のような目つきで思わせぶりに俺を見るのをやめてくれ。

「旦那、あたい達も頑張ったんだから公平にしてくれよな」

「なるほど、それはいいアイデアですね」

カチヤのトンチンカンな意見に、なぜかエリーゼが納得してしまった。

「あなた、また妻が増えるのは仕方がありませんが、私達に心配をかけたのですから、公平にお姫様抱っこをしてほしいです」

「いいアイデアね。エリーゼ」

「ボクもそれでいい」

「ヴェル様、陛下だけにズルイ」

「だよなぁ。姉御もそう思うだろう？」

「そうですね。こういう事で不公平な扱いをすると、あとで家庭不和の原因にもなりますから」

「リサの言うとおりじゃ。ヴェンデリンの腕が翌日大変かもしれぬが、死ぬわけでもない。頑張れよ」

「わかりました」

それでエリーゼ達が納得するのであれば……。

暗殺から逃れたのに、奥さん全員をお姫様抱っこするのか。

みんな、どれほどお姫様抱っこに憧れているのやら。

「おっ！　生きていたか、ヴェル。ハルカさんと近隣の警備隊を纏

めてきたんだが、必要なくなっちまったか。それにしても、お前、魔族の嫁を貰うのか？」

「それはない」

人間が魔王様を嫁にするには、色々とハードルが高いような気がするのだが……。

「私達も間に合いませんでしたが、通信をしたアグネスさん達も間に合いませんでしたね」

「それは仕方ないよ。アグネス達は遠方で他の仕事をしていたから」

ハルカと救援に間に合わなかったアグネス達の話をしていると、バウルブルク方向から三つの魔力反応が近づいてきた。

『高速飛翔』で俺の救援に向かおうとしたアグネス達で間違いない。

「先生、間に合わないで申し訳ありません」

「先生、無事でよかったです」

「先生……。私は先生に奥さんが増えても気にしませんから」

到着するなり、アグネス、シンディ、ベッティの三人は俺に声をかけてきた。

そして、お姫様抱っこされたままのエリーを見て羨ましそうにしている。

それにしても、この三人。

俺を『先生』って呼べる妻は自分達だけだと、俺を先生と呼ぶのをやめなかった。

「ところで先生。下手人は？」

「主犯は倒した。あとは、全員拘束されている」

「間に合っていれば、私もご褒美が貰えたのに……」

「残念です。でも、いいなぁ……」

「陛下、気持ちよさそうですね……」

アグネス達は、羨ましそうに俺にお姫様様抱っこされたエリーを見ていた。

「魔力が回復するまでは仕方ないではないか」

「立つくらいできますよね？」

アグネス眼鏡の奥が光り、エリーに対し厳しい指摘をする。

「他にも色々とあって疲れたのだ。余は魔力が異常に消費される空間にいたからな。体もダルイのぉ……」

「本当ですか？　陛下」

「嘘は言わぬ。あーーー、本当にダルイのぉ……」

「「「むむっ……」」」

アグネス達は、エリーに対し不審の視線を向けた。

「まあまあ、三人とも落ち着いて」

俺が慌てて宥めるものの、アグネス達はエリーに対し不審な視線をやめなかった。

「アグネスさん、シンディさん、ベッティさん。お三人も懸命に駆けつけたのですから、きっとヴェンデリン様がご褒美をくれますよ」

「それもそうですね。エリーゼ様」

「わーーーい、お姫様抱っこだぁ」

「一度本で読んで羨ましいと思ったんですよねぇ」

というか、この世界の女性はどうしてそこまでお姫様抱っこに拘るのだ？

まさか聞くわけにもいかず、俺は家庭の平和のために奮闘し、翌日両腕が筋肉痛になった。

暗殺未遂事件で怪我はなかったが、それだけが唯一の被害であった。

第百六十二話　それって、八つ当たりじゃあ……巨大ゴーレム登場！

「ヴィルマ、旦那がヤバイ。早くこいつを無力化するぞ」

「頑張る」

「させるか！」

暗殺を目論むオットーという魔族と戦っていた旦那が、突然消えた。

魔法的な要因のより、別の空間に飛ばされてしまったのだ。

早く助けに行かないといけないが、あたいとヴィルマで担当しているリライという魔族が邪魔をしてきた。

こいつの動きは十分予想の範疇であったが、実際にやられると腹が立つな。

だが、ここで慌てては相手の思う壺だ。

とにかく、今は一旦冷静になる必要がある。

「カチヤ、どうする？」

「あたいに聞くのか？」

「カチヤの方が先輩」

「お前なぁ……こういう時だけ先輩扱いかよ」

普段の落ち着きぶりを見ていると、ヴィルマの方がよっぽど先輩に見えるけどな。

「現実問題として、先輩だから。妻としての扱いは平等だけど」

「はいはい。この魔力だけバカを倒す算段をつければいいんだな？」

「そう」

「誰が、魔力だけバカだ！」

暫く戦ってみて気がついたんだが、こいつらはどこか歪なんだ。

魔法の展開や使い方はそれなりに訓練されている。

ところが、実戦には疎いというか……。

訓練で獲得した魔法を、上手く実戦的な動きに組み込むのが下手というのが正しいのか。

ヨーゼフとかいう魔族は、ルイーゼがおこなった初歩の初歩、魔力量の隠蔽に騙されて倒されてしまうし。

このリライという魔族も戦法は単純だ。

小規模の魔法を連発して放ち、命中力を高めようとしている。

ところが、スピードに長け二刀流のあたいには通用しない。

旦那のおかげで魔力も増えたからな。

武器屋に注文して作らせたミスリル製の双剣で、魔法を弾いたり、切り裂けば済む問題だ。

ヴィルマも、普段の大斧から特別注文で作らせたミスリル製の片手斧二本に武器を切り替えている。

あたいと同じく二刀流で器用に敵の攻撃魔法を切り裂き、回避していた。

「でも、キリがない。どうしようか？　カチヤ」

「そんなのは簡単だ。いいか、ヴィルマ……」

あたいは、ヴィルマに作戦を伝えた。
そんなに難しい作戦じゃない。
ちょっとでも実戦経験がある奴には引っかからないと思うけど、あいつなら大丈夫。

「わかった。私が先に行く」

ヴィルマは片手斧の二刀流をやめ、今度は魔法の袋から普段使っている大斧の倍以上もある特大の斧を取り出した。
それにしても、よくあんなに巨大な斧が持てるよな。

「これで真っ二つ」

「ばぁーーーか！　当たるものかよ！」

ヴィルマの特大斧を見たリライが、彼女をバカにし始める。
確かに、常人ならあんな特大斧を振るって標的に当てられるはずがないからな。

「そうでもない。結構当たる」

ここでヴィルマが、自分の体に大量の魔力を流した。
爆発的に身体能力をあげたヴィルマは、一気にリライとの距離を詰めた。
大量に向かってくる魔法は、無造作に特大斧の刃で弾いている。

「バカな！　しかし！」

リライも咄嗟に両腕に強固な『魔法障壁』を纏わせ、ヴィルマが上段から振り下ろした特大斧の刃を防いだ。

「残念だったな！　俺を切り裂けなくてよ！」

「そうでもない。目標は達した」

「はあ？　お前は何を？」

「動きが止まっている。隙だらけ」

「お前は何を？　がはっ！」

だから言っただろう。

そんなに難しい作戦じゃないって。

ヴィルマの全力攻撃を防いで動きを止めたリライの後方から、あたいが同じく大量の魔力を篭めた双剣でリライの背中を切り裂いただけだ。

スピードでは、ヴィルマよりもあたいの方が上だからな。

突進するヴィルマの後ろに隠れているように見せて、リライがヴィルマの一撃を防いだ時にはもう後ろに回り込んでいたのだ。

「他のみんなは大丈夫かな？」

「私達でも勝てたから大丈夫」

「それもそうだ」

「生きている？」

「何とか生きているみたいだな。ちょっとだけエリーゼに治してもらってから、拘束しておこうぜ」

「それがいい」

リライという魔族を倒す事に成功したあたい達は、エリーゼの元に向かっちゃのであった。

「そんなに名をあげて為政者になりたいのか？」

「貴様にはわかるまい。政治の無能が、我々庶民を痛めつけているのだ！」

「まあ、妾も魔族の政治状況をちょっとばかり調べてみたが……」

「ならば、わかるだろうが！」

「飢え死にしないだけマシだと思うがの」

最近減りつつあるとはいえ、王国にも帝国にも貧民は存在する。さすがに飢え死には滅多にないが、劣悪な環境で病気になっても

医者や治癒魔法使いにかかれず死ぬ者も多い。
元フィリップ公爵である余からすれば、魔族の国はそう悪くないと思うがの。

だが、それを奴に言っても議論は平行線であろう。
それよりも、早く別の空間に飛ばされてしまったヴェンデリンを救う算段を立てぬとな。
妾は正式な妻ではない事になっているが、領内では妻として扱われておる。
よき夫で、産まれた娘のよき父でもあるし、妾が見染めた男じゃ。
早く目の前の自称参謀男を倒して、ヴェンデリンを救う手立てを考えねばなるまい。

「妾は元大貴族であるから、庶民であるお前の気持ちなどわからぬのじゃ。どうせわかり合えるはずもない。とっととかかってくるがいい。徐々に仲間が倒れて減っておるからの。後ろから攻撃されるやもしれぬぞ」

「……」

妾と戦っているカイツェルという魔族は、自称オットーの参謀役。
頭で考える事が多いはず。
こちらで危機感を煽れば、勝手に考えすぎてくれるはずじゃ。

「長期戦というわけにはいかぬか……。急ぎお前を倒して、戦力差を縮めなければならぬか……」

そうそう、それでいいのじゃ。
それにしても、バカ正直に己の戦術を口に出してしまうとは。
やはりこいつらは、どこか甘い部分があるようじゃの。

「それができればいいの」

「やるのですよ。私が」

そう言うと、冷静な口調に戻ったカイツェルは魔力で作った火炎剣を身構えた。

放出系の魔法ばかりかと思ったら、魔法剣を作れる魔族もいるのか。

「ヨーゼフとリライは。自分が傷つかないよう、遠くから一方的に攻撃しようと思うから負けるのです。まあ、私は違いますけどね。剣術の経験もあります」

「経験があると言っても、一回だけ数分剣を振るっても経験ではあるぞ」

「ふんっ、私はこれでも学生の頃、模擬剣術の大会で準優勝をした経験がありましてね。さて、あなたはどうでしょうか？」

模擬剣術？

よくわからぬが、実戦に即したものではないであろう。

早くケリをつけるとするかの。

「どうでもいいからかかって来るがいい」

「お前は何様なのだ！」

「ただのバウマイスター辺境伯の女じゃ。別に覚えてくれなくてもいいぞ」

「死ね！」

やはり、魔力を全身に回して速攻で攻めてきたか。
しかしな。
妾は土系の魔法が得意でな。
自分の周りを何重にも土壁で囲って、カイツェルの侵入を防ごうとした。

「無駄だ！　この程度の『土壁』など！」

カイツェルは、魔法剣で次々と『土壁』を斬り割いていく。
ところが、妾の『土壁』には特徴があっての。
『土壁』を剥いても剥いても、次から次へと新しい『土壁』が出てくるのじゃ。

ヴェンデリンにアドバイスを受けたのじゃが、あいつは『タマネギ』と一緒だと言っておった。
あいつは、本当に食べ物関連の話が好きじゃな。

「どうじゃ？　妾に辿りつけそうか？」

「当たり前じゃないですか。あなたのような素人には負けませんよ」

自信があるようじゃな。
妾も魔法使いとしての経験が薄いので仕方がないか。
だが、妾も魔法はともかく、遊び剣術の自称達人であるカイツェルには負けぬ。
これでも、実際に敵兵を斬った事だってあるのだからな。

それに、この『多重土壁』にはもう一つ特徴があってな。

「おりゃ！　おりゃ！　おりゃ！　もうすぐ中心部だ！」

カイツェルの奴、随分と熱心に火炎剣を振るって『土壁』を崩しているではないか。

これだともうすぐ中心に辿りつけるはず。

だが、そこに妾の張った罠があるのじゃ。

「これで最後の土壁だ！　あれ？」

そう、実は多重土壁の中心部に妾はいなかったのじゃ。

必ずいなければいけない理由もないからの。

中心点を定めておけば、外部からでも『多重土壁』を張る事は可能であった。

そしてカイツェルが中心部に辿り着いた瞬間、外側の『土壁』が復活して内部が別の物質で充満する。

その中身は『砂』であった。

「窒息させるのが狙いか！」

カイツェルは火炎剣を振り回して『砂』を振り払おうとするが、『砂』が切れるはずがない。

もがけばもがくほど、カイツェルは肺の中の酸素が減って窒息するまでの時間が早まっていく。

「こら！　卑怯だぞ！」

「自称参謀役が言う事か？　卑怯？　元フィリップ公爵の妾からす

れば、最高の褒め言葉じゃの」

「このアバズレ女がぁーーー！」

「失礼な。妾は、ヴェンデリンとしか男女の関係にないぞ……もう聞こえぬか？」

数分で、カイツェルの声が聞こえなくなった。

どうやら窒息して気を失ったようだ。

もしくは死んだか？

『土壁』と『砂』を取り除くと、カイツェルは白目を向いて気絶していた。

どうやら死んではいないようなので、拘束してから蘇生させる。

「頑丈じゃの。魔族は。これであと五人か」

妾の仕事は終わった。

今はヴェンデリンを救う方法を考えるべく、エリーゼ達の下へと向かうのであった。

「……」

「どうかしたのかしら？」

「私の対戦相手が個性的すぎますわ」

「何よ。文句でもあるの？」

十名で襲撃してきて、私の担当がオカマ魔族ってどうなのでしょうか？

テレーゼさんもリサさんも、気味悪がって対戦相手を交替してくれませんでしたし。

「私はオカマじゃないわよ。女性が好きだし、ただ女装が好きな男の子なの」

「男の子という年ですか？」

ああ、もう。

私には、どうしてこんな個性的な方が。

「オットーちゃんに頼まれて参加したけど、私って荒事が苦手なのよね」

荒事は苦手ですか。

ならば、今回参加してもらわなくても結構でしたのに。

私も、普通の魔族と戦いたかったですわ！

「こうなったら、早く済ませてしまいましょう」

「っ！」

わずかに殺気を感じて身を引くと、私のドレスの端が切り裂かれていました。

どうやらこの人、『カマイタチ』系の魔法が得意みたいです。
ですが、風系統なら私も得意です。
ほぼ同じ魔法でオカマさんを攻撃します。

彼女……彼ですか、紛らわしいですわね。
特注と思われるドレスの端が、私の『カマイタチ』で切り裂かれました。

「もう、私の体の大きさだと自作かオーダーメイドしかないのに。
それを破くなんて酷いわ！」

「私も高いお金を出してオーダーメイドしているのです。お互い様ですわ！」

どうやら、この方。
見た目に反して、なかなかの実力をお持ちですわね。
切れてしまったドレスはあとで修繕できるでしょうか？
キャンディーさんに……この方も同類なのでしょうか？

「もう、私はただの女装好きの男の子なのに」

「そうですか……」

何か、この方は話していると疲れますわね。

「私はこういう人だからお友達が少なくて、だから参加したのだけど、ぶっちゃけ暗殺が成功してもしなくてもどちらでもいいのよね」

知人に頼まれて暗殺に参加？
一体どういう方なのでしょうか？

「まあいいわ。とっととケリをつけましょうか？」

「願ったり叶ったりですわね」

早く、別の空間に消えてしまったヴェンデリンさんを救出する算段をつけなければ。

ですが、オットーさんは知りませんが、実はこの方が一番魔法に精通しているのでは？

「あなた、結構やるみたいね。じゃあ、お互いに一番の大技を繰り出しましょうか」

「わかりましたわ」

ここで負けるわけにはいきません。

範囲を極限まで狭めた『竜巻』で、この方を吹き飛ばしてさしあげましょう。

「行くわよ」

「行きます」

お互いに『竜巻』の魔法を繰り出しますが、その威力も精度もほぼ互角。

やはりこの方、他の人達が戦っている魔族よりも一段上の実力があるみたいです。

「暇だからって魔法の練習ばかりなんて嫌になってしまうわ。あとは自分のお洋服を作るくらい」

「そういうお仕事をなされてはいかがですか？」

「魔族も案外保守的なのよ。私みたいな子って、就職できないの」

確かに、ちょっと嫌かもしれませんわね。

となると、キャンディーさんのように独立するしかないのでは？

「洋裁で独立するにも、まずは修行をしないと駄目だし、そのチャンスすらないのよ」

「だから、オットーの企みに参加したのですか？」

「そういう事ね。お金が手に入れば、何とかなるかもしれないし」

「そでですか」

私、戦っている相手の人生相談を聞いている場合ではないような……。

お互いの『竜巻』は、まるで駒のように二人の間でぶつかり合っています。

ここで魔力を加えてもうひと押し……。

相手側に押し込んでしまえば、二つの『竜巻』があの方を吹き飛ばしてしまうはず。

逆に、私が吹き飛ばされてしまう可能性もありますが。

「ここが正念場ですわ」

お師匠様もいるのに、ここで無様を曝すわけにはいきません。

「やるわね」

「あなたも」

実力が伯仲した者同士、私とミランダさん……本名ではないようですが……お互いに追加の魔力で『竜巻』を相手の方に押しやろうとします。

「しぶといわね！　もう少し！」

少しだけ、私の方に二つの『竜巻』が押しやられ、私の方が不利なようです。

力押しだと、私の方が少し弱いようですわね。

ならば、お師匠さんに教わった別の方法で戦うしかありません。

「（私が作り出した『竜巻』をエネルギーにして、ミランダさんが作り出した『竜巻』を再び押し返す。繊細な魔力のコントロールが必要になりますが、今までの修行の成果を生かして……）」

私よりも年下である、ヴェンデリンさんもできる事です。

私にできないはずは……。

一瞬で一度発生させた私の『竜巻』を魔力に還元しつつ、ミランダさんの『竜巻』の魔力の質を瞬時に察知してコントロールを奪う。

非常に難しい魔法ですが、私はヴァイゲル家の当主。

「やってやれない事はありませんわ！」

私の目論見は無事に成功し、今度は一つに合体して強化された『竜巻』がミランダさんへと向かっていきました。

これで、彼女に……ではなかった。

彼に再び押し返されなければ。

「しまったわ。まだ魔法の鍛錬が足りないわね」

一度は再び『竜巻』を押し返されると思っていたのですが、ミランダさんはそのまま『竜巻』に巻き込まれて上空へと飛ばされていきました。

その後、地面に叩きつけられた彼は、気を失ってしまいます。

「この方、実はわざと負けた？」

今はそれを考えている余裕がなく、私もエリーゼさんの元へと向かうのでした。

「おばさんと俺は、同じ氷系の魔法が得意なんだ」

「『ブリザード』の威力を確かめますか？」

「俺の勝ちだけどな」

私の相手は、無礼で軽薄そうなミハエルという魔族です。

そして彼の得意魔法は氷系、彼は連続し『氷弾』を放ってきますが、少しコントロールが甘いようです。

同じ『氷弾』をつぶけて落としていきます。

「コントロールいいな。おばさん」

「口のなっていない失礼な魔族ですね。魔族も色々ですね。基本的な礼儀もなっていない野蛮人がいるようです」

「おばさん、蛮族如きが生意気じゃないかな？」

どうしてそこまで自分が偉いと思えるのかわかりませんが、こんな私を妻にしてくれた旦那様への救援が先です。

こうも失礼な男なら、凍らせても構わないでしょう。

こう見えても冒険者としての生活が長く、導師やブランタークさんと同じく無法を働いた同朋を極秘裏に始末した経験もありますので、必要とあらば殺人も厭いません。

「おっ、冷えてきたね『ブリザード』で俺を凍らせるのかい？　でもな、俺も得意なんだよ。『ブリザード』が」

それぞれ放った『ブリザード』が、お互を凍らせようと体を侵食しようとしてきます。

なかなかの威力ですが……旦那様が私に放った『絶対零度』には及びません。

『ブリザード』を極めるために冬山に籠った私でしたが、これ以上寒くならない寒さが存在するなど知りませんでした。

最初は旦那様の話す『絶対零度』の概念がなかなか理解できず魔法に反映できませんでしたが、最近ようやく習得する事ができました。

これを持って、あなたを凍らせてさしあげましょう。

「おばさん、俺の魔法にビビった？」

「別に……。まあまあじゃないですか？　それに……」

「それに何だよ？　おばさん」

「誰におばさんなんて口を利いてんだよ！　お前はムカつくから凍らせてやる！」

「はあ？　そんな事は……足が！」

甘い甘い、その程度の習得度で偉そうにしているんじゃねえよ！
クソガキが！
人をおばさん扱いしやがって！
魔族のテメエらの方が年上だろうが！
このまま氷のオブジェにしてやるぜ！

やはり、魔法の訓練ゴッコしかしていないので長時間魔法の精度が保てないようだね。
最初は互角だったけど、徐々に私の冷気に浸透されて足元から凍っていく。

「ひいっ！」

「泣き言かい？　甘いね、坊ちゃん！」

「助けて」

「残念！　もう間に合わないね」

「綺麗なお姉さん！　助けて！」

「そんなお世辞が通用するか！　旦那様以外の男性に綺麗だって褒められても嬉しくねえんだよ！　助けてほしいか？」

「はい！　是非！」

「助けるか、バーーーカ！　凍れ！」

最後に大量の魔力を消費してひと押しすると、ミハエルという魔族は完全に凍りつき、完全に動きを止めました。

「運が良ければ、解凍しても生きているでしょう。もし倒れて体が割れでもしたら駄目ですけど」

つい、メイクもしていないのに昔の口調に戻ってしまいました。気をつけないと。

「リサ、お前、怖いわ」

「あら、ブランタークさん。担当の魔族はいかがなさいましたか？」

「ああ、あんなのは雑魚だからな」

「うるせえ！　ジジイ！　死ね！」

「今までに出会った上級魔法使いで、一番稚拙な奴だ」

「では、救援は必要ありませんか？」

「そういう気遣いは無用だ。早くエリーゼの嬢ちゃんのところに行ってやれ」

「エリーゼさんは、もう二十歳を超えていますよ。お嬢ちゃんはそろそろお止めになられたらどうです？」

「その内にな。じゃあ」

「では、ご武運を」

ミハエルという魔族を倒した私は、他の方々と同じく急ぎエリーゼさんの下に向かうのでした。

「ひゃひゃひゃっ！　この炎の竜の口に食われて骨まで焼かれやがれ！」

「あのよぉ……」

「ジジイ、死ね！」

俺が担当したウィッツとうかいう魔族、こいつは駄目だな。
今まで多くの上級魔法使いに出会ってきたが、こんなに使えない魔法使いは珍しい。
中級以下の魔法使いなら勝てないが、辛うじて上級の俺でもこいつには余裕で勝てる。

前の帝国内乱で、蘇ったアルが技量だけで辺境伯様を翻弄した事があったが、今は俺がその時のアルのような状態だ。
こいつ、見た目が派手な魔法は沢山使えるんだが、ただ見た目のいい魔法の鍛錬ばかりしていたようで、回避するのが簡単なんだよ。

「『デスドラゴンヘッド』を食らえ！」

「大仰な魔法名だな」

ただ炎で、口を開いた巨大な竜の頭を再現して飛ばしているだけだが、威力は相当なものだ。
当たれば、人間なんて骨も残るまい。
中級以下の魔法使いなら脅威かもな。
技が稚拙でも、魔力量の多さからくる威力は相当なものだからだ。

「焼かれろ！　黒焦げになれ！」

「ならねえよ」

俺は体の回りに『氷障壁』を纏わせると、こちらに向かってくる竜の頭に飛び込み、そのまま走り抜けて突破した。
竜の口の中は高温で『氷障壁』は一瞬で消滅したが、その前に俺は竜の頭を突き破っている。
一旦突破してしまえば、一度放出した魔法をバックさせるのは難しい。
そういう機動性を持たせるため、火魔法を小さな球状などにする魔法使いは多いが、こいつはわざわざ巨大な竜の頭にしているから、一度魔法を放ってしまえばバックさせるのが難しいわけだ。

こいつが、魔法の見た目にしか拘っていない証拠でもある。

「クソっ！」

今度は、もうちょっとマシな魔法が出たな。
小さな鳥の形をした『ウィンドカッター』を飛ばしてくる。
距離を縮められたのが嫌で、牽制のために出したのであろうが。

「予想どおりだ」

俺は小さな『火球』を出して、次々と『ウィンドカッター』を相殺していく。
風は火に弱い。
少ない魔力で相殺可能だ。
向こうはわざわざ『ウィンドカッター』を精巧な鳥の形にしており、俺が適当に作った『火球』よりも余計に多くの魔力を消費してしまった。
こういう無駄な魔法の使い方を見れば、こいつが素人なのは一目瞭然だ。

「それで？　次はどんな手品を見せてくれるんだ？　ちょっと興味が沸いてきたぜ」

どんなに下らない魔法でも、時に優れた新しい魔法のヒントになる事もあるからな。
そういう意味では、こいつのイリュージョン魔法にまったく意味がないわけでもない。

「ちょっとくらい経験があるからと言って威張りやがって！」

「俺は威張ってねえよ。お前が根拠のない自信に満ち溢れているだ

けだ」

「きぃーーー！」

逆上した奴が次の魔法を放ったが、何を目論むかは大方予想がついた。

俺は急ぎ『飛翔』で空中に退避する。

俺がいた場所には、地面から数本の『岩棘』が突き出していた。

「串刺しか。相手の隙を突くという点においては悪くないな」

「なぜわかった？」

「お前の目線が、俺の足元を向いていたからな」

魔法の種類がわからなくても、それだけでお前の意図がみえみえなんだよ。

まだまだ未熟だな。

「こういう風にやらないとな」

「痛ぇーーー！」

「致命傷は防いだか」

すぐに俺もお返しで、奴の足元から『岩棘』を数本出してやった。

ギリギリで反応して急所への命中は回避したが、一本だけ奴の太ももを貫通したものがあり、その痛みで奴は悲鳴をあげた。

今まで大怪我なんてした事がないんだろうな。

泣き叫ぶだけで、もう完全に戦闘力を失っている。

「おい、早くその『岩棘』を抜いて治療した方がいいぞ」

「痛ぇよぉーーー！」

「駄目だこりゃ」

辺境伯様が負傷した時には、もっと冷静に対処していたがな。
いくら多くの魔力を持つ魔法使いでも、負傷して泣いているのは論外だよな。

「俺も暇じゃないから、もう終わらせるぞ。それでいいな？」

子供でもあるまし、叫び声うるさいので、もう片方の太ももにも『岩棘』を貫通させると、奴は痛みで気絶してしまった。

「魔法使いとしての素養と、戦闘力が比例しない典型例だな」

俺は、気絶した奴を拘束してから周囲を見渡す。
オットーのために足止めをしている魔族達は、あと二人しか残っていないか。
一人、援軍が来た時に牽制する役割の魔族もいたはすだが、今は連中が圧倒的に不利だ。
こちらの数を減らそうと仲間の援軍に入っているが、まさか導師に襲いかかるとはな。

「バカなんじゃねえの……」

数を減らすのを目標とするのなら、なぜ導師を狙う？
一番強いから、最初に消すと有利になると思ったのか？

だが、残り二名となった時点でその戦術はあり得ねえよ。
やっぱり、素人臭さが目立つ連中だな。

魔力は多いのに、こいつらは本当にチグハグだ。

「導師！　手伝いはいるか？」

「無用である！」

「何が無用だ！」

「このまま我々二人に一方的に攻撃されて死ね！」

バーストとバトゥという名の魔族だったか？
二人は協力して魔法を連発し、一方的に導師を攻撃していた。

「何が王宮筆頭魔導師だ！　バウマイスター辺境伯の傍にいた時にはヒヤヒヤしたが、我々の攻撃に手も足も出ないではないか」

「そうだな、バースト。俺達にもできそうだな。王宮筆頭魔導師」

二人の魔族は、導師がまったく反撃せず一方的に魔法を食らっていたので油断していた。
だが、俺にはわかる。
お前らの魔法は、導師にはまったく通用していないのを。
一見派手に魔法が炸裂しているが、強固な『魔法障壁』に阻まれてまったく効果がないのがわからないのだから、こいつらもやっぱり荒事には無縁だったのであろう。

魔族ってのは、お上品な存在だったんだな。

「じゃあ、あとは任せるわ、導師」

「任されたのである！」

俺もエリーゼの嬢ちゃんの下に行くが、果たしてあいつら、あと何分保つかね？

「意外としぶといな！」

「俺達の魔法をこれだけ食らって無傷のはずがない！　もう少しだ！」

それにしても、魔族とはこうも惰弱なのであるか？

いや、軍に所属している者達は違った。

こいつらが、大量に持つ魔力を有効的に活用できないだけである！

もしアルフレッドが見たら失笑するであろう。

中級以下の魔法使い相手なら、その魔力量と魔法の威力だけで脅威なので、こいつらは自分の未熟さに気がつかなかったのであろう。

魔法も、見た目の派手さや使える種類を増やす事ばかりに傾倒しているようである。

動かない的に魔法を当てるような練習ばかりしていたのであろう。

使える魔法は高度でも、全体的な戦闘力はあまり高くない。

正直、少々ガッカリしたのである！

これなら、バウマイスター辺境伯やルイーゼ嬢の方が遥かに強いのである！
様子見は、もう十分であろう。

「もうそろそろくたばるか？」

「そんなわけがないのである！」

奇妙な魔道具を使ってバウマイスター辺境伯を陥れたオットーの件もあるのである！
雑魚は早く始末するに限るのである！

某は、『魔法障壁』を強化してから『飛翔』で一気に二人の魔族に詰め寄った。

「まだそんな元気が！」

「当たり前なのである！　ノーダメージなのであるからして」

「そんなバカな！」

「涼やかな風のような魔法なのである！」

「「ふざけるな！」」

二人は再び魔法を連打し始めるが、そのような小さな魔法を数打っても意味がないのである！
大方、命中率に不安があるから数を打っているのであろう。

次々と向かってくる霰のような魔法を腕で振り払い、二人の目前に立つ。

「ひぃーーー！」

「防御だ！　防御だ！」

慌てて『魔法障壁』を張ったが、その程度の『魔法障壁』ではな。思い切りが足りないのである！

「ふんっ！」

拳に魔力を篭めて二人を『魔法障壁』ごとぶん殴ると、二人は地面に叩きつけられた。

少し地面が凹んだようであるが、『魔法障壁』のおかげで死んではおらぬか。

「クソ……体が……」

「アバラが折れたか？」

「某、お主らの体の心配などしておらぬし、重傷でも魔法は放てるのである！　悪いが……」

「「ひぃーーー！」」

最低でも暫く寝ていてもらうのである！

再び拳に魔力を篭めて二人をぶん殴り、続けて足に魔力を篭めて蹴りを入れる。

常人なら即死であろうが、二人は『魔法障壁』を張れる。

まあ、死にはすまい。

「まだ戦うのであるか？」

「「……」」

どうやら運よく気絶したようであるな。

体中の骨が骨折しているので、痛覚を誤魔化すために体が意識を切ったのであろう。

「では、バウマイスター辺境伯の援護をするのである！」

ただ一つだけ残念だったのは、エリーゼの下に駆けつけた時には、魔王陛下とライラ殿があっくに救出案を練って、それが実行寸前だった事であろう。

うーーーむ。

別空間にいる魔族の親玉と戦いそびれてしまったのである！

「という映像があるけど、いる？」

「いるっす！　超特ダネっす！　我が社の独占スクープになるっす！」

オットー達による暗殺未遂事件から三日後、バウマイスター辺境伯邸の中でとある上映会が行われていた。

それは、オットー達が俺を暗殺しようと襲い掛かり、それに俺達が応戦している映像であり、撮影者はエリーである。
ライラさんからエリーゼと一緒に後方に下がるようにと言われ、後方からすぐさま私物の魔像撮影機で撮り始めたそうだ。

魔族のテロリストが、バウマイスター辺境伯である俺を暗殺しようとした。
そのバックを含めて、エブリディジャーナルの新人記者ルミから見たら褒章物の特ダネ記事というわけだ。

「ほしいっす！　絶対に記事にするっすから！」

興奮したルミは、俺に証拠をくれと迫って来た。
その迫力に、俺は思わず後ずさってしまう。

「でも、撮影者はエリーなんだよ。俺に権利はないんだよなぁ」

迫ってきたルミを、俺は正論でかわした。

「しかも、余の私物じゃぞ。この魔像撮影機は」

「ううっ……若いのにしっかりしているっすね……」

俺を救出にきただけでなく、密かにオットー達の犯行を撮影していたのだから。
本当、十三歳とは思えないほどしっかりしている。

「余としては、別の新聞社に映像を売ってもいいわけだからな。何しろ、エブリディジャーナルは……」

「民権党贔屓で有名ですからね」

ライラさんが、冷たい視線でルミを見つめた。

「それって、おかしくないっすか？　オットー達は極めて国粋的な政治結社をやっていた連中っすよ。バウマイスター辺境伯の暗殺を目論んだのは、交易拡大に反対する国権党の議員なのでは？」

ルミは、オットー達の黒幕が国権党の議員だと思っているようだ。だが、実はそうじゃないと俺達は捕えたオットーの仲間達から情報を得ていた。

オットーがこの世から消滅した事を知ると、目を覚ました奴らはとても大人しくなった。

今は魔力を抜かれながら、軟禁生活を送っている。

犯罪者にしてはいい環境にいると思うが、抜いた魔力が魔道具のエネルギー源として活用されているので、そのくらいはいいであろう。

常に魔力を抜かれているので脱走する気も起こらないらしく、今は大人しくしている。

オットーは党首としては秘密主義者だったようでわからない事も多かったが、彼らは常に『世界征服同盟』の本部にいたので、暗殺を依頼した人物については知っていた。

そしてそいつが、実は民権党の議員であった事もだ。

「オズワルド・ジャック。ルミは知っているか？」

「民権党の議員じゃないっすか！　でも、奴ならあり得るかもしれないっすね」

「どんな奴なんだ？」

「機に聡い悪人っす」

政治信条などなく、自分に利益があれば何でもいい。

議員になる前は詐欺に近い商売をしていたり、アンダーグラウンドな連中と懇意だったり、知恵は回るので上手く動き、いつの間にか民権党の候補者になって当選してしまった。

議員になってからは、政治活動よりも議員特権を生かした商売に熱心で、同僚からも胡散臭い目で見られているらしい。

「さすがに民権党議員の大半が、彼を胡散臭い目で見ているっすね。議員特権を使って悪事を働いているという噂もあるっすから」

「そいつが、オットー達に俺の暗殺を依頼したそうだ。その後ろにも誰かいるだろうけど」

さすがに、黒幕の存在はオットーしか知らなかった。

残りの連中は、オットーの指示で動いたにすぎないわけだ。

「そういうわけでして、これがもし報道されれば民権党政権にトドメとなるでしょう。エブリディジャーナルの元記者で民権党議員も多い。あなたでは、記事にする前に上層部に潰されるのでは？　他に新聞社がないわけでもありませんし」

「議員に圧力を受けて、新聞社の上層部が記事をストップするわけか」

日本でもあったからな。

同じ大学で新聞記者になった奴がいたけど、政治家、大物官僚、

大企業、金持ちの圧力で取材した記事がボツになる事がたまにあったそうだ。

「バウマイスター辺境伯、私の知り合いに『ゾヌターク日報』の記者がいますけど、そちらの方にリークした方がいいのでは？　第二位の新聞社です。あそこは、現政権に批判的ですから」

「それがいいかもな」

確実に報道された方が、魔族社会に衝撃を与えられる。

俺は、自分を暗殺しようとした連中を許すつもりはなかった。

とにかくオズワルドという議員を官憲に逮捕させ、裏の依頼者の正体を見つけなければ。

「そういうわけなので、今回は縁がなかったという事で」

俺は、ルミに対し丁重にお断りを入れた。

「自分を呼んでおいて、それはないっすよぉーーー！　必ず記事にするっすから！　自分、結構脱ぐと凄いっすよ」

と言って、いきなりツナギのような服装の肩の部分をめくり、扇情的なポーズをするルミ。

残念ながら、まったく色気は感じなかった。

結構綺麗な人なんだが、色々と残念臭が漂っている。

この人は、このまま一生結婚できないかもしれない。

というか、新聞記者が色気で特ダネを提供してもらっていいのか？

時に手段を選ばずとも思えなくもないが、やはりＴＰＯは弁えないとな。

あと、エリーの機嫌がわかりやすいほど急降下した。

ネタの提供者を怒らせてどうするよ？
新聞記者！

「エリー、どうするんだ？」

「どうしようかな？　余はまだ子供だが初めて知ったぞ。新聞記者の仕事に、取材先の男性を誘惑するというものもあるのか」

「ううっ！　それは……」

エリーから痛いところを突かれ、ルミは顔を引きつらせた。
子供にとんだ誤解を与えてしまったと思ったようだ。

「バウマイスター辺境伯、助けてくださいっす！」

ルミの誘惑にまったく興味を示さなかった俺に対し、彼女は懇願の表情を浮かべた。

「ルミ、ヴェンデリンには、若くて綺麗な奥さんが沢山いるのだ。今もどうにかして妻、愛人になろうと奮闘している女性も多い。そんな見え透いた誘惑が、ヴェンデリンに通用するわけないであろうが」

「ううっ……自分、そんなに駄目な女っすか？」

「そなたが、モール達にフラれたと聞いているぞ」

「ううっ……彼らは一生無職で、一人くらい自分のために主夫になってくれると思ってたんすが……」

ルミ、残念ながらその後輩達は、もうリリの会社で課長になって、奥さんと子供までいるんだ。
今は毎日仕事で忙しいが、充実した毎日だってさ。

「魔像撮影機の映像と、拘束中の暗殺未遂犯達の証言を録音したものは渡せる。コピーが取れるからな。それで、いつ新聞に記事を載せられる？」

「バウマイスター辺境伯さんが『瞬間移動』で送ってくれたら、明日の朝刊に間に合わせるっす！」

「ならばよかろう。もし明日の朝刊に載せられなかったら、ライラの知人であるゾヌターク日報の記者にデータを渡すから同じだな」

「絶対に明日の一面を飾るっすよ！」

データを得たルミは、俺に送ってもらうとすぐに会社に掛け合って俺の暗殺事件を記事にした。
魔像撮影機の映像を写真にして、魔族の跳ねっ返りがヘルムート王国の大貴族を、それも前に来訪した事があるバウマイスター辺境伯の暗殺を試み、主犯は死亡、残りのメンバーは拘束、彼らが使用した魔導飛行船も拿捕され、そこからも色々と証拠が出てきた。

暗殺未遂事件の主犯は、自称政治団体『世界征服同盟』の当主、オットー。
彼にバウマイスター辺境伯の暗殺を依頼したのは、民権党の現役議員オズワルド・ジャックで、彼も何者かから報酬を得てバウマイスター辺境伯の暗殺を請け負っている。
事件の詳細を知るためにも、オズワルド・ジャック議員の殺人事件容疑での逮捕が必要なのではという記事が掲載された。

「今年の社長賞はいただきっす。バウマイスター辺境伯さん、今度焼き鳥でも奢るっすよ」

「いいねえ、焼き鳥」

ルミも悪い人じゃないからな。

上手く上層部の圧力をかわして記事を掲載できたのを喜ぶとしよう。

それに、その日の内に新聞を持ってきてくれたのだから。

「ヴェルが載っているね」

ルイーゼが、興味深そうに新聞の写真を見ていた。

リンガイア大陸では、写真はあるが、それを印刷する技術はないからな。

「オットーと戦っているところね。いつも違って真面目でいい男じゃない」

「イーナ、真面目にやらないと死んでいたんだから当たり前じゃないか」

新聞を見たイーナが、珍しく褒めてくれたと思えばこれだ。

「インチキだとか、嘘だとか言っている人はいないのか？」

「極わずかっすね。オズワルドの胡散臭さは有名っすから。今までは上手く逃げて捕まっていなかったんすけど、交渉中の他国の貴族を暗殺しようとしたんすからね。仲介役でも、政府はカンカンっす

ね」

今まで人権がどうの、男女平等がどうの、動物愛護はどうのとリンガイア大陸の人間に偉そうに言っていた癖に、その仲間が暗殺を目論んでいたのだから立場がないというわけだ。

「そうでなくても、今の民権党政権は死に体っすからね。政府からの圧力が減った警備隊は、オズワルドの拘束を狙っているようっすね。何しろ、殺人未遂の仲介役っすから」

実際に新聞が出てか、テラハレス諸島で行われていた交渉は一時中断となっている。

俺が陛下に報告して、それが三か国の交渉団に知られたからなのだが。

王国、両国双方の貴族に真実かどうか問われ、交渉団のトップであるレミー団長は政府に問い合わせると言って逃走してしまったそうだ。

「バウマイスター辺境伯さん、もう情報をリークしたんすか？」

「俺は王国貴族だからな」

それに、今の政権では交渉などもう纏まらないであろう。

私貿易が順調なので、俺達としては政権交代後に正式な交渉が締結されても何も困らないのだから。

「オズワルドの逮捕もあるのか」

「ただ、外国での犯罪なので、罰せるかどうか法律の解釈が難しいようっすよ。本人も黙秘するかもしれないっすから」

ところが数日後、別件で逮捕されたオズワルドは『仲介はしたが、それは古い魔道具の輸出についてだ。オットー達は運搬役にしかすぎない。まさか暗殺を目論むとは……』と堂々と言い放ったらしい。

確かに、オズワルドもリンガイア大陸に中古魔道具を輸出する仕事に参加し、莫大な利益を得ていた。

当選以降、奴はほとんど議会にも来なかったそうだ。

議員になったのは、一期でも務めれば元議員の肩書がついて後に有利になると思っただけという事らしい。

ある意味、清々しいレベルの悪党である。

「いやぁーー、驚きの言い分っすね。でも、誰の仲介をしたかは話しているっすよ。ええと、プラッテ伯爵と魔道具ギルドの会長っす」

「はあ？　どうして魔道具ギルドの会長が？」

プラッテ伯爵は不思議に思わないが、魔族が作る魔道具の輸入阻止で動いていた魔道具ギルドが、俺の暗殺に金を出した？

なぜなんだ？

「私貿易はしているが、魔道具ギルドが作れない魔導具しか輸入していないのにな」

「そういう態度が逆に、魔道具ギルドのプライドを傷つけたんじゃないの？」

「ルイーゼ、俺はあのジジイ達にそこまで気を使わないといけない

のか？」

思えば、沢山の古代魔法文明の遺産を売ってあげたじゃないか。
それなのに、今の今まで新しい成果が出たという話を聞いた事がなかった。

「魔導ギルドの方は、多少成果はありましたよね？」

「そうだな。あのとんでも魔法陣の改良とかしているからな。今もベッケンバウアーが色々とやっているよ」

ブランタークさんが、俺も知り合いである魔導ギルドの技術部長であるベッケンバウアー氏の現状を教えてくれた。

魔力を使うと、遠方から色々な品を移転させられる魔法陣。
あれは、魔導ギルドが地下遺跡にある古代魔法文明時代の魔法陣を改良した品であった。
今も研究は順調だと、前にベッケンバウアー氏から聞いていたから、むしろ魔導ギルドの方が魔導技術の研究が進んでいるわけだ。

「あの魔法陣か。ボクのブラを『移転』させてエッチな魔法陣だよね」

「そうね。私のパンツもよ。あの魔法陣、研究している人のスケベさが滲み出ているわね」

パンツとブラを『移転』させられてしまったルイーゼとイーナは、その時の事を思い出して嫌そうな表情を浮かべる。

「ブラとパンツを魔法陣で召還？」

「そうなんだよ、テレーゼ。セクシーなボクに似合うお気に入りだった黒のブラを、ヴェルが実験で召還してしまうから……」

「ルイーゼ……」

「あっ！」

ペラペラと事情を話してしまったルイーゼに対し、イーナが呆れたような表情を浮かべる。

あの実験では、当時フィリップ公爵として領地で視察をしていたテレーゼのパンツも召還してしまい大騒ぎとなってしまったからだ。

彼女の下着が突然消えてしまった理由が、魔法陣の実験のせいだと喋ってしまったようなものなのだから。

「ほほう、やはりそういう事か。ブランタークも、ヴェンデリンも怪しいと思っておったわ」

「ルイーゼ……」

「ヴェル、ごめん」

ルイーゼが珍しく、しおらしい態度で俺に謝った。

「ヴェンデリン、ルイーゼを責めてやるな」

「怒っていないのか？」

「今さらじゃし、下着も買えぬほど困窮しているわけでもないからな。妾は器の大きな女のなのじゃ」

「ありがとう、テレーゼ」

テレーゼは優しいなぁ。

履いている下着を魔法で召還した事をまったく気にしていないのだから。

「照れるではないか、ヴェンデリン」

俺はテレーゼに抱きつきながら、魔法の袋から彼女の下着を取り出した。

「やはり持っておったか。しかし、これはフィリップ公爵家の家紋がついているから使えぬの」

今のテレーゼは、フィリップ公爵家の人間ではない。

だから、家紋の入った下着は使えないわけだ。

「あとで別の下着を買ってあげるから」

「そうか、見に行く時はつき合えよ。ヴェンデリン」

新しい下着を一緒に見に行くくらいで済むなら安いものだ。

「てっ！　ヴェル、話がそれているわよ」

「そうだった」

イーナから冷静に指摘されたので、また話を元に戻す。

「魔導ギルドの方が、魔導技術の研究が進んでいるのですか？」

「ああ、この三年でな。魔導ギルドは基礎研究と試作品の製造くらいしかいないが、技術力は相当上がっているようだ。試しに話を聞いてみるか？」

「そうですね」

早速みんなで、魔導ギルドへと向かう。

俺の『瞬間移動』も、リリとの器合わせのおかげで一度に移動できる人数が二十名にまで増えていた。

やはり、リリと倒したオットーの魔力は人間では考えられないほど多かったようだ。

そして、俺の魔力はリリをも超えてしまった。

俺って人間なのに、どうしてそんなに魔力があるのだろう？

やはり、転生者である事に意味があるのか？

「久しぶりですな。バウマイスター辺境伯」

相変わらず魔道具ギルドとは仲が悪い魔導ギルドであったが、技術部長ベッケンバウアー氏の顔色は明るかった。

徹夜でもしたのか目に隈が浮かんでいるが、本人はとても気分がいいようだ。

疲労しすぎてランナーズハイになったのかもしれない。

「バウマイスター辺境伯と実験した魔法陣ですがあれから相当研究が進みまして、目的に応じて魔法陣を書き換える事により、様々な効果が発揮できるようになったのです。刻む魔法陣のパターンは組み合わせがほぼ無限なので、これから法則を探るのと、もっと色々な効果が出るように魔法陣を改良しているのですよ」

「そうなんですか……」

目の下に隈を作りながら、とても嬉しそうに説明を続けるベッケンバウアー氏。

だったら、これからも研究しないといけないのだから、まずはちゃんと睡眠を取ってほしいと俺は思った。

「ベッケンバウアーさん、ちゃんと寝ないといけませんよ」

「『聖女』と呼ばれているエリーゼ殿からそう言われたら、寝ないといけませんな。今までは魔道具ギルドを出し抜くレベルまで研究を進めるのに無茶をしていたのですが、ようやくそれも達成しました。今日からは平常業務でいきますよ」

ブランタークさんの言うとおり、魔法陣の改良はかなり進んでいるようだ。

目に隈のあるベッケンバウアー氏が、自慢げに俺達と地下の研究室に案内した。

「ヴェル、久しぶりね」

「ボクとイーナちゃんは、下着を取られて文句を言いに来て以来だね」

「そうだな」

魔導ギルドの研究室では、数十名の魔法使いが様々な魔法陣に魔力を流し、それがどのような現象をもたらすかメモを取っていた。

魔法陣の刻む文字のパターンを、根気よく探っているのであろう。

「この魔法陣、魔道具にも応用できるのだ」

「どうやってですか？」

「この極微量のミスリルを塗布した板に魔法陣を刻むと、最低でも数十年は文字が薄れないで効果を発揮し続ける。今までの魔道具よりも軽量化が進むな。法則を見つければ魔力量の消費量も減らせる。何よりも、魔道具を製造する手間が大分減る。将来はもっと高性能にできるし、魔道具を構成する部品も減る」

ベッケンバウアー氏が見せてくれた十センチ四方の板に魔法陣が刻まれたものを見て、俺は半導体みたいだと感じた。

この魔法陣、もしかするともっと研究が進めば、魔族の魔道具を技術力で超える可能性があるわけだ。

地球でも、トランジスタやＩＣが発明されて歴史が変わったのだから、これもその類の発明品というわけだ。

「ちなみに、バウマイスター辺境伯が中古品を購入したり、地下遺跡から発掘した車両という魔道具。こちらも一台だけ試作に成功したぞ」

研究室の奥には、ジープに似た簡素な造りの車両が置いてあった。

「へえ、こういう魔道具の方が武人の蛮用に耐えるかも」

「そうですね。ちょっとした移動なら、むしろこの車両の方がいいかもしれませんね」

エルとハルカは、早速魔導ギルドが試作した車両を試しに少し動かしていた。

「ははははっ！　ざまあみろ！　魔道具ギルドめ！」

「正確悪いなぁ……」

「そうだな」

ヴィルマとカチヤのみならず、発言したベッケンバウアー氏以外の全員が首を縦に振る。

「量産はせぬのか？」

「残念ながらうちは魔導ギルドなので、量産に必要な職人が揃えられないのですよ」

ベッケンバウアー氏は、テレーゼに魔導ギルドはあくまでも魔導技術の基礎研究が目的なので、魔道具は試作品しか作れないのだと説明した。

魔道具を作るには多くの職人が、魔法使いだけじゃない。

大型で複雑な構造の魔道具ほど、魔法使いじゃない職人が多数必要になる。

「長年、職人達は魔道具ギルドとの繋がりが強いので、うちが頼んでも無駄なのです。魔道具ギルドに睨まれたくないから、うちの仕事を受けるわけがないですな」

ベッケンバウアー氏は、テレーゼに事情を説明した。

「一台しかないのでは、あまり役に立たぬの。それにしても、帝国ではもう少し融通が利くぞ」

組織なので多少の派閥争いはあるが、帝国の魔道具ギルドは魔導ギルドの下部組織なのでそこまで仲が悪くないらしい。

「でも、魔族が作った魔道具の輸入阻止をしているのは一緒よね」

「明日食えなくなる危機じゃから、それは仕方がないかの」

そこは徐々に魔導技術の開発を進めつつ、徐々に輸入枠を増やす方向で交渉するしかないわけだ。

もっとも、帝国の魔道具ギルドはこの三年で大分態度を軟化させつつある。

いまだに頑ななのは、王国の魔道具ギルドの方なのだ。

「そこで、魔導ギルドは陛下にも報告しているのです。こちらが魔法陣を刻んだ板の量産に集中するので、それを使った魔道具の量産を始めてはいかがかと」

「それでどうなったのじゃ？」

「魔道具ギルドが断りました。自分達で開発すると」

「実際に開発できておらぬのであろう？」

というか、そういうアイデアすら出ていないはずだ。

「テレーゼさん、そこは魔道具ギルドのプライドの高さと既得権益の大きさを侮ってはいけません」

リサも魔導ギルドの所属だが、過去に魔道具ギルドの傲慢さを直接経験した事があるようだ。

「その魔法陣を刻んだ板でしたか。それが重要部品で、それがないと新しい魔道具を作れないとなると、魔道具ギルドは魔導ギルドに頭が上がらなくなります。そんな事を今の上層部は容認しないでしょう」

「ジジイばかりだからな」

ジジイは酷いと思うが、カチヤの言うとおりであった。

前会長の死後、魔道具ギルドは後継会長を決めるのに散々揉め、挙句にまた九十近い元副会長を会長に添えた。

前会長の方針を継承するといえば聞こえがいいが、前と何も変わらないのに、魔道具ギルドの指導力は落ちてしまった。

若い会員の中には組織の改革を求める声も大きいが、彼らは年寄りなので変化を嫌う。

別に今のままでも儲かるのだから、無理して新しい事をする必要はないわけだ。

そんな彼らが一番恐れる事は、帝国と魔族の国から魔道具が輸入される事である。

今までのほぼ独占状態が崩れるのだから。

昔からミズホ製魔道具の存在は知られていたが、あそこは帝国への販売で手一杯。

王国には、極少数しかミズホ製の魔道具は存在しなかった。

シェアを考えると、そこまで脅威でもない。

だが、魔族が作った魔道具は別だ。

向こうは生産力も十分持っているのだから。

「一つ聞きたい事があるのですが」

「何かな？　リサ殿」

リサは高名な魔法使いである。

当然、ベッケンバウアー氏とも知己の関係にあった。

「板に極少量のミスリルを塗布と言いましたが、板の素材は決まっているのでしょうか？」

「色々と試しておるだが、基本は二種類。ミスリルの板でも大丈夫だが、これはコストの問題で駄目。高級品なら問題はないかなと。あとは、性能が低めの量産品には焼き物の板が一番いいように思う。ただ、使っている土や焼き方で性能にバラつきがあってな。割れやすいという欠点もあるし、試行錯誤しておるよ」

土という事は、高純度なケイ素（シリコン）で作るシルコンウェハーのような板の方が、魔法陣を刻みつけやすいのであろう。

なるほど、この世界の近代化にもシリコンの活用が重要なわけだ。

割れやすいのは、ケイ素以外の不純物が多いからであろう。

自然界にある土を焼いただけでは、当然そういう結果になって当然だ。

「バウマイスター辺境伯、何かいいヒントはないかな？」

「そうですね……自然界にある土では、板の形成に必要な物以外の不純物が多いのでは？」

試しに研究室にあった焼き物用の土から魔法でケイ素以外の物質を抜いて薄い板を形成し、単純な結晶の塊にしてみた。
これなら、性能もよくなるはず。

「急ぎ試験させてみますが時間がかかります。結果が楽しみですな」

知っているからとはいえ、俺がこの世界でシリコンウェハーを作ってしまうとは。
あくまでも類似品だが、これで魔法陣を刻めて、板を取りつけた魔道具の性能が上がれば大成功か。

「もう一つ、これは高級品向けですな。バウマイスター辺境伯が作れる『極限鋼』も安定した金属なので板の素材に向いています。欠点はコストと、加工にオリハルコン製の工具が必要な点ですな」

今の俺が定期的に作っている『極限鋼』。
これが、板の素材に向いているとベッケンバウアー氏は言う。

「つまり、新しい魔道具の重要部品は魔導ギルドとヴェルが握っているわけだ。じゃあ、ヴェルの暗殺を魔道具ギルドが目論んでも当たり前なのかな？」

「技術の進歩を否定するのか？　魔道具だって、もっと高性能なものが安く量産可能なのかもしれないのに？」

「ヴェンデリンは、重要な部分が抜けておるの。魔道具ギルドの上層部は年寄りじゃ。変化を嫌うし、世の中全体が便利になっても自分の収入が落ちたら嫌であろう。今のままの、魔道具生産を独占できる立場が続けばいいと思っておる」

「ヴェルが魔族の国から私貿易で中古魔道具の輸入始めた時点で、ヴェルが敵になったようね」

全体の利益よりも、自分達の組織の利益か。

別にそれでも構わないといえば構わないが、俺を狙った時点で腹が立つ。

喧嘩を売られた以上は、これはやり返さないと駄目であろう。

貴族が他人に舐められると、次の不埒な輩を産む事になるのだから。

「あとは、プラッテ伯爵か？」

「ベッケンバウアーさん、よくご存じですね」

「バウマイスター辺境伯、魔導ギルドも大きな影響力を持つ。王宮の噂も手に入るからな。プラッテ伯爵のバウマイスター辺境伯嫌いは有名さ」

息子を豚箱にぶち込んだ俺を許せないのは当然か。

あの時は、あの方法が一番穏便に解決する手段だったので仕方がない。

元凶たるあいつも、どうせ反省もしていないだろう。

プラッテ伯爵の息子が嫌な奴で、積極的に助けてやろうという気が起こらなかったのもある。

「バウマイスター辺境伯が試作した板の性能が好調なら、ワシが陛下に奏上しておこう」

「では、その時にプラッテ伯爵と魔道具ギルドの罪状も報告させま

す」

貴族同士の犯罪なので、まずは様子見でローデリヒに奏上させて陛下の反応を見た方がいい。

ただ、プラッテ伯爵は法衣貴族である。

領地貴族だと自分の領地に籠って逃げられるケースも多いが、法衣貴族の管轄は王国政府にある。

しかるべき証拠があれば、陛下もプラッテ伯爵を処罰しない事はないはずだ。

そして数日後……。

「バウマイスター辺境伯、貴殿が開発した板はいいな。前よりも微量のミスリルでこれまでの焼き物板以上の性能を発揮する。魔法陣も刻みやすいと評判だぞ」

ベッケンバウアー氏は、試作した四輪魔導車の重要部品を俺が作ったシルコン板に魔法陣を刻んだものに変えたところ、性能と稼働時間が大幅に上がったと報告してきた。

「使用する部品数も減ったし、魔道具の軽量化とコストダウンもできそうだ。何より、魔道具ギルドが作れない物を魔導ギルドが作れた。万々歳だ！」

「魔導ギルドと、魔道具ギルドか。仲が悪いのだな」

「色々と歴史的な背景もあってね」

「余から見ると、同じような組織に見えるがな」

今日は、魔王様とライラさんも俺達に同行していた。

バウマイスター辺境伯暗殺未遂事件の仲介役オズワルド議員は逮捕され、警備隊によって家宅捜索も行われた。

そこに、ゾヌターク王国では産出しない宝石や、出所が不明な金塊が見つかり、彼も王国のプラッテ伯爵と魔導ギルドからのものだと証言したそうだ。

「もっとも、奴は中古魔道具の取引代金だと言い張っておるがな」

「そいつ、起訴されるのかね？」

「殺人未遂では困難じゃな。我が国の法では、国外での犯罪を裁く法がないからの。金の流れが相当怪しいので、政治資金規正法と脱税くらいかの？」

オズワルドの逮捕と家宅捜索も、実は別容疑での別件逮捕にあたるそうだ。

バウマイスター辺境伯領内での事件で、彼を裁くには法律が整備されていないわけだ。

「となると、魔族はリンガイア大陸で犯罪のし放題か」

「その危険性はあるが、逆に言うとリンガイア大陸で捕まれば現地の法で処罰される。政府は口出しもできない。そこはお互い様だな」

その辺は、これから交渉していかなければいけないのであろう。

それは責任者に任せるとして、なぜエリー達を連れてきたかとい

うと、陛下が魔族の王と会ってみたいと言い出したからだ。
暗殺未遂事件の依頼者がプラッテ伯爵と魔道具ギルドであるという証拠を持参したついでという建前と共に、陛下は魔族にも王族がいて安心したというのが本音かもしれない。
上手く繋がりをもっておき、もし魔族が王政国家を作ろうと志したら手を貸して同盟でも結んでおきたいという本音もあるのであろう。

いわば魔族国家の分裂に期待しての事だが、国家同士の関係に綺麗事などない。
エリーもライラさんも、それは期待しての参上かもしれなかった。
あくまでも、非公式の会見ではあったが。

「魔族の国の魔道具には、このような板は？」

「いや、魔族の国の魔道具は、従来の人間が作る魔道具の仕組みと同じじゃぞ。機能を達成でできるように魔晶石と人工人格が取りつけてある。人間のものよりも大分性能は上だがな」

加えて、品質管理と規格化により生産力が高く、同じ魔道具などに性能バラつきがなく、魔力消費量が少ない。
人間にはいまだ生産できない種類の魔道具を作れる強みもあった。

「この魔法陣を刻む板は凄いな。魔族にもない技術だ」

「そうですね。こう言っては失礼ですが、まさか技術力が劣る人間の方が新しい魔道具の仕組みを開発してしまうとは」

シリコンウェハーと極限鋼にミスリルを吹き付け、そこに魔法陣

を刻んだものが魔道具の重要部品になるなんて、二人は聞いた事がないようだ。

「新しい板の素材をバウマイスター辺境伯が作るとはな。魔道具ギルドからすれば、余計にバウマイスター辺境伯には死んでほしいというわけだ」

どういうわけか、エリーは俺をヴェンデリンと名前で呼ばなかった。

そうか、ベッケンバウアー氏や王城の人間が不思議に思うからか。

この娘は若いのに、こういうところも頭が回るな。

だからライラさんも、彼女に忠誠を誓っているのか。

「この技術の開発が進めば、人間の魔道具も我ら魔族に対抗可能になるであろうな。魔族の技術でないのが残念であるが。あとはヘルムート王国の王にオズワルド議員がプラッテ伯爵と魔道具ギルドにどう対応するかだが、それは余の領分ではないからな」

プラッテ伯爵は知らないが、魔道具ギルドへは混乱を防ぐため、現在の会長やそのシンパを組織から排除し、新しい人事体制にして魔導ギルドから『魔法陣板』の供給を受けて新しい魔道具の開発と量産を進めるという点でケリであろうか。

要は、今の古い体質がなくなればいいのだから。

俺達は悪事の証拠を握っているので、まさか魔道具ギルドの会長も拒否はすまい。

「では、陛下の下に向かいます」

魔導ギルド本部を出た俺達は、そのまま城内へと入った。

事前に知らせは受けていたようで、門番はそのまま素直に入れてくれた。
俺が有名人なので、まさか入れないという選択肢は存在しないのかもしれないが。

「陛下、バウマイスター辺境伯です。お客人をお連れしました」

「よくぞ来てくれた。魔族の王よ」

「民主制を信奉するゾヌターク共和国では何の力もない王だがな。バウマイスター辺境伯暗殺未遂事件に関する情報をお持ちした」

エリーとライラさんは、新聞記事のみならず、独自に国権党議員などとも連絡を取っていたようだ。
三か国の交渉を進めるため、お飾りでも王が役に立つとその政治家が理解したのであろう。
少なくとも、国権党の方が民権党よりは話がわかるようだ。

「プラッテ伯爵め。こやつはまだいい。バウマイスター辺境伯暗殺の報酬は私財から出しているからな。だが、魔道具ギルドは許されない。我が王国が、一体いくら補助金を出していると思っておるのだ！」

陛下が怒って当然だ。
本来、魔道具研究に使うための補助金を、俺の暗殺に使用したのだから。
魔道具ギルドは貴族ではないが半ば公共的な組織なので、資金の不正な流用は許されるはずがなかった。

挙句に、このところ新しい魔道具の開発が進んでおらず、魔族と

の交渉では魔道具の輸入阻止を目論んで政府と交渉団に圧力をかけ、前会長の死後、新会長の選出に手間をかけて組織を一時機能停止にした。

ようやく就任した新会長は、前会長の方針を受け継いでいまだ魔道具の輸入阻止をたくらんでいる。

今、魔導ギルドが新しい技術を開発したが、職人に圧力をかけて魔導ギルドに協力できないようにしている。

陛下見ても、今の魔道具ギルドは害悪な存在でしかない。

「魔導ギルドは話にならない。まだいいとは言っても、プラッテ伯爵も無罪のはすがないがの。私財没収と改易を命じよう」

王国のために貢献している俺を殺そうとしただけでなく、公式な交渉ルートではなく私的に魔族と接触して不法行為の報酬を支払った。

私貿易ならまだ許せるが、敵対する貴族の暗殺を魔族に依頼するなど、今度模倣犯が出るかもしれないと考えると、陛下としては絶対に許さないはずだ。

「魔導ギルドも、今の上層部は首を挿げ替える。こちらの足を引っ張りおって！　ワーレン！」

「はっ！」

「アームストロング軍務卿に命じろ！　プラッテ伯爵の屋敷と魔導ギルド本部に兵を送り、連中の身柄を確保せよと」

「畏まりました」

陛下はワーレンさんに対し、エドガー軍務卿のあとを継いだアームストロング伯爵に今回の暗殺未遂事件の犯人を捕縛せよと、伝えてくるよう命じた。

「そういえば、プラッテ伯爵の奴はおらぬの」

「普段は、城内にいるのですが……」

法衣貴族で空軍閥の重鎮であるプラッテ伯爵は、いつも城内にたむろしている。

俺の悪口を言い、反バウマイスター辺境伯家派閥の組織化に忙しかったようだが、そんな貴族など珍しくない。

人というのは、所属する集団の中で必ずソリの合わない人物が出てくるのだから。

それにしても、プラッテ伯爵。

俺憎しで、家を潰すとはな。

そして、魔道具ギルド。

今までそう関係は悪くなかったと思ったのだが……。

早速ワーレンさんが伝令に走り、アームストロング軍務卿が王国軍を編成してプラッテ伯爵の屋敷と、魔道具ギルド本部の制圧に入った。

ところが、プラッテ伯爵の屋敷に本人の姿はなかった。

「残された家族が言うには、魔道具ギルドに出かけていると」

「察知されたか？」

ワーレンさんからの報告に、陛下は首を傾げた。

オットー達の襲撃を切り抜けた俺達が王城に姿を見せた時点で、プラッテ伯爵は自分の関与が知られたとすぐに察知してしまったのかもしれない。

自分だけで、慌てて魔道具ギルドに逃げ込んでしまったようだ。

「どちらにしても、魔道具ギルドを押さえれば済む話だ。すぐにアームストロング軍務卿に命じて……」

「何だ？　地震か？」

突然、地面がかなり激しく揺れ始めた。

王城が倒壊するほどではないが、かなり大きな揺れだ。

急ぎ謁見の間からバルコニーに出て震源を探すと、魔道具ギルドのある場所に鋼鉄の巨人が立っていた。

大きさは五十メートル近いと思う。

形は、ニュルンベルク公爵が最後に乗って戦った巨大ゴーレムによく似ていた。

「ヴェル！」

「ああ……」

魔道具ギルドの地下に、あんな巨大ゴーレムが鎮座できるようなスペースがあったとは。

父が、子供の頃に見たというロボットアニメの出撃シーンにそっくりだ。

残念ながら、あの巨大ゴーレムは正義の組織のロボットではなく、王国軍の捕縛に抵抗するプラッテ伯爵と、魔道具ギルドの会長……。

「エリーゼ、今の魔道具ギルドの会長って誰？」

元副会長が会長に横滑りという面白みも欠片もない人事だったはずだが、あの葬儀の席にいたどの爺さんが会長になったのか知らなかった。

「ヴェル、お前はいい加減、そういう重要な地位にいる人の名前と顔を覚えろよ！」

「別に覚えなくても不都合はないし」

「ある！　俺達が恥ずかしいじゃないか！」

「覚えなくても生きていけるし……」

エルの文句に、俺は反論した。

そういう偉い人の顔と名前を懸命に覚える生活なんて、前世で卒業したのだから。

「貴族が、紋章官の仕事を覚えるのはよくない」

それに、普段よく接している貴族の名前と顔はちゃんと覚えている。

つまりだ。

魔道具ギルド会長の名前と顔が覚えられないという事は、その必要が一切ないというわけだな。

「滅多に顔を合せない貴族の名前と顔を覚える手間があったら、新しい魔法でも覚えた方がマシだって」

「そんな屁理屈はどうでもいいけど、あの巨大ゴーレム。こちらに

向かってきていないか？」

「そう言われるとそうだな」

魔道具ギルドの建物は、巨大ゴーレムが地下から出る時にその余波で完全に破壊されてしまった。

続けて、向いにある恨み重なる魔導ギルドの建物も破壊されている。

どうやら、魔道具ギルドの会長はよほど魔導ギルドが嫌いであったようだ。

プラッテ伯爵と魔導ギルド会長以下執行部の捕縛を行おうとしていた王国軍は、突如出現した巨大ゴーレムに驚き、恐怖して統一して応戦するどころではなくなった。

「怯むな！」

陣頭指揮を執っていたアームストロング軍務卿が、冷静に王国軍の統制を取り戻してから魔法と弓矢で攻撃を始める。

王国軍にいる複数の魔法使いが魔法を放つが、残念ながら初級魔法使いの『ファイヤーボール』では、ゴーレムの装甲に傷一つつかなかった。

「これは駄目だ。バウマイスター辺境伯！」

アームストロング軍務卿は、王国軍による巨大ゴーレム撃破を諦めた。

巨大ゴーレムに人々が押し潰されないよう避難誘導を行い、先に崩れた建物から生き埋めになった人々の救援を行う。

巨大ゴーレムは、魔導ギルドの建物以外には攻撃を加えなかった。
だが王城へと進路を取り、その進路上にある建物を踏みつぶしていく。
運悪く、自分の店や家を潰される不幸な人が続出した。

「なぜこちらに？」

「帝国へ向かっておるな」

「陛下？」

いつの間にか、俺のすぐ後ろに陛下の姿があった。

「攻撃力は凄い巨大ゴーレムであるが、我々を殺して王国の支配者となるのは無理だ。そこで、北上して帝国に亡命を試みる。今の皇帝が連中を受け入れるのかという疑問はあるが、彼もいまだ帝国すべてを掌握していないであろう。分裂を怖れて渋々ながら受け入れる可能性がある」

「ないとは言い切れませんねぇ……」

仮想敵国の王城を破壊した、恐ろしい破壊力を持つ最新鋭の巨大ゴーレムと共に亡命する。
帝国には喉から手が出るほど欲しい勢力があるかもしれない。
その勢力が大きければ、ペーターも配慮しなければいけないのか。

となると……。

「破壊しないと駄目ですか」

「そうよな。余個人にとっても思い出が多く歴史の長い王城である。壊れてほしくないのが心情だ」

「わかりました。俺も死にたくないから出ますよ」

「バウマイスター辺境伯、それはどういう？」

陛下からの問いであったが答えている暇はなかった。

俺は急ぎバルコニーから『飛翔』で外に飛び出し、巨大な『魔法障壁』を張る。

なぜなら、巨大ゴーレムの胸の部分に砲塔のようなものを確認したからだ。

巨大ゴーレムは、魔砲の試作品を搭載しているようだ。

俺が張った『魔法障壁』に膨大な魔力で発射された直径一メートルほどの砲弾が命中した。

砲弾は魔力によって威力を強化されており、容赦なく『魔法障壁』を砕いていく。

次々と新しい『魔法障壁』を展開し、バルコニーの手前ギリギリで砲弾を防ぐ事に成功した。

威力を失った砲弾は王城の正面に落下し、正面門前に設置されている石像などを破壊する。

門番はすでに避難していたので、犠牲者がいなかったのが幸いだ。

「バウマイスター辺境伯、助けは必要であるか？」

「導師も、他のみんなも、避難者の誘導や救助を頼みます」

「わかったわ、ヴェル」

「エリーゼも、怪我人がいたら治療を頼む」

「はい、ご武運を」

まさかこの世界で、二度も超巨大超合金ロボットモドキと戦う羽目になるとはな。

こちらに歩いて来るだけで、足元の住宅や店舗が踏みつぶされていく。

ゴーレムの撃破を諦めた王国軍が住民の避難誘導をしているので、犠牲者はほとんど出ていないようだが、やる事が滅茶滅茶だ。

「プラッテ伯爵は頭がおかしいな」

『恨み重なるバウマイスター辺境伯め！　この魔道具ギルドが密かに開発した巨大ゴーレム大魔神には勝てまい！』

「ネーミングセンスが皆無だな」

「エル、そんな事を気にしている場合じゃないと思うけど……」

予想どおり、巨大ゴーレムにはプラッテ伯爵が乗り込んでいるようだ。

操縦席内で喋った声を拡声する機能もあり、彼の話し声はよく聞こえた。

それにしても、名前が『大魔神』とはネーミングセンスが欠片もない。

これは多分、帝国内乱でニュルンベルク公爵とアーネストが乗っていた巨大ゴーレムを参考に試作されたのであろう。

残骸を回収して、戦後魔道具ギルドに販売したからな。

「ダサイ名前だな」

『私がつけたのではないわ！　シャーシェウド会長の命名だ！』

「シャーシェウド会長？　誰？　それ」

初めて聞く名前だな。

『ふざけるな！　魔道具ギルドの会長であるこの私を知らないだと？』

もう一人、拡声器から老人らしき声が聞こえてきた。

彼が魔道具ギルドの会長のようだ。

前にエリーゼから教えてもらったような気がしたが、すぐに忘れてしまったのだ。

「そういえば、会長って言っていたな」

『バカにしおって！　この裏切り者が！』

「どうして俺が裏切り者なんだよ？」

むしろ、魔道具ギルドのために色々と貢献してきたじゃないか。

俺は本来、魔導ギルドの会員なのだ。

それなのに、様々な古代魔法文明時代の品を研究用として売却してきたのだから。

『魔族から魔道具を購入しおって！　我々がいなくなったら人間の魔導技術は衰退し、魔道具はすべて魔族によって牛耳られてしまうのだぞ！　そうなれば、王国のみならず人間が魔族によって支配さ

れる要因にもなりかねないのだ！　その遠因となった私貿易！　これを最初に行った貴様は罪深き存在だ！』

そうは言われても、俺はちゃんと配慮はしていたぞ。

いくら低性能で高額で無駄にデカくて重くても、人間が製造した魔道具があればそっちの方を購入して利用していた。

魔族との私貿易では、あくまでも人間が作り出せない魔道具しか取引していないのだから。

そうやって現物を手に入れ、それの修理や解析で人間の魔道具職人も技術を上げられる。

模倣から新しい魔道具を作れるかもしれない。

第一、魔導ギルドが魔法陣板を試作したのに、それを使用した魔道具の生産を拒否したのは魔道具ギルドじゃないか。

今のまま、一切進歩しない魔道具生産を独占して楽したいだけのジジイに言われたくない。

まあ、これは立場の違いか……。

「最初から全面輸入禁止では、魔族の進んだ魔道具に人々が触れるチャンスがなくなるじゃないか」

それに、交易で輸入超過にならないように王国政府も関税と輸入量制限などの条件も考えている。

一切の例外を認めず、とにかく魔道具の輸入阻止を目論む魔道具ギルドの方が頭がおかしいのだ。

「成果がないとか抜かして、それは何だよ？　革命でも考えていたのか？」

王城近くの魔道具ギルド本部地下で、お前らはどうして巨大ゴーレムなんて作っているんだよ。
そんな暇と資金があったら、もう少し高性能な魔道具を作れ。
ああそうか。
巨大ゴーレムは、あくまでもニュルンベルク公爵が使用したゴーレムの改良品でしかない。

『見たか！　我々の力を！』

思いっきり方向性が間違っているな。
それにしてもこの巨大ゴーレム、まさか手足を吹き飛ばすとどこかから予備の手足が飛んで来るとか……。
それはないか。
魔道具ギルドの建物と、巨大ゴーレムが置いてあった地下施設は完全に崩壊している。
このまま手土産代わりに王城をぶっ壊し、帝国に亡命するつもりなのであろう。
ペーターが受け入れるかどうかは知らんが。

『今まで魔道具ギルドはずっと上手く行っておったのだ！　それをお前が色々と発掘してしまうから！　同じ物を作れ？　そんなすぐにできるか！』

シャーシェウド会長は、一人ぶち切れていた。
実は俺達が、地下遺跡を発掘して様々な古代魔法文明時代の魔道具を手に入れている事が気に入らなかったようだ。
入手してしまった以上は、魔道具ギルドはそれを複製するために努力しないといけないからだ。
きっと今まで努力はしてみたが、上手く行かなかったのであろう。
何が悪いのかは、俺は研究者や職人じゃないのでよくわからない

けど。

『お前は、我がプラッテ伯爵家に恨みでもあるのか？』

もう一人。

プラッテ伯爵は、魔導飛行船の入手や、空軍軍人の天下り先、息子への対応で俺に激怒しているのはわかった。

俺も同じ立場なら激怒したであろうが、さすがに暗殺は目論まないと思うので、やはりプラッテ伯爵は堪忍が足りない部分があるのであろう。

少し悪いとは思ったが、俺も聖人君子ではない。

バウマイスター辺境伯家の方が大切であり、自分のためにプラッテ伯爵家を陥れる事があっても仕方がないと思っている。

「息子には配慮したんだがな……」

表向きは、リンガイアと乗組員達を救出するため、貴族の義務としてゾヌターク共和国に残ったという事にした。

王宮にいる貴族で実情に気がつかない人はいないが、貴族は建前を大切にする。

プラッテ伯爵の息子が、貴重なリンガイアと乗組員達のために豚箱にぶち込まれたという嘘を公式の事実にする事に疑問を投げかける貴族は少なかった。

その配慮も、プラッテ伯爵の暴発ですべて無駄になったが。

出所してもプラッテ伯爵の息子は貴族でなくなっており、爵位も屋敷も私財もないただの無職の庶民になってしまうのだ。

『あれのどこが配慮だ！　もういい！　お前を殺し、王城を破壊し

て、それを功績に帝国に亡命してやる！』

『大魔神の素晴らしさに、帝国の魔道具ギルドの連中も感激するであろうな』

「そうか？」

巨大ゴーレムは確かに強力な兵器ではあるが、稼働率や燃費、整備性に大きな問題があると思うのは気のせいであろうか。

それに陛下としても、今は巨大ゴーレムの生産よりも魔導技術の進歩であろう。

民生品でも技術力が上がれば、それだけ新兵器の生産も容易いのだから。

特に車両類の生産は必須だ。

軍で採用されれば、機動力と補給にどれだけ貢献できるか。

馬を使う戦いが大きく変わる可能性があるというのに、こいつらはそれに気がついてもいない。

プラッテ伯爵は空軍閥の重鎮で魔導飛行船にも詳しいはず。

それなのに、車両の利便性に気がつかないとは……。

シャーシェウド会長は論外だ。

こんなデカブツの試作よりも、魔導ギルドに先を越された車両の試作が優先であろうに。

『大魔神の価値がわからぬとは愚かな。バウマイスター辺境伯、王城と共に貴様も倒してやる！』

どうやらプラッテ伯爵もシャーシェウド会長も、俺を殺さないと気が済まないようだ。

ならば相手をしてやるとしよう。

不毛な会話であったが、その間に王国軍とイーナ達が上手く住民を避難させてくれたようだ。
エリーゼは、避難先で負傷者の治療にあたっている。
ここで戦うと町に損害が出てしまうが、王城を破壊させるわけにもいかない。
巨大ゴーレムを食い止めつつ、活動停止に追い込むしかないな。

「魔力は上がっているんだ。いけるか？」

「バウマイスター辺境伯、某も手伝うのである！」

突然導師の声が聞こえたと思ったら、遥か上空から猛スピードの塊が飛んできて、巨大ゴーレムの胴体を直撃した。
落下速度と『魔法障壁』の硬さを利用した、導師必殺の体当たり攻撃である。

俺は、絶対に真似しようとは思わないが。
痛くはないと思うが、衝撃で脳震盪でも起こさないかと心配になってしまうのだ。

「ううむ……胴体に傷一つつかないのである！」

もの凄い速度で巨大ゴーレムの胴体に体当たりした導師であったが、何事もなかったかのように『飛翔』で俺の隣まで上昇してきた。
巨大ゴーレムも無傷であったが導師も無傷であり、俺は彼の人間離れした頑丈さに恐怖した。

『当たり前だ！　大魔神には、極限鋼を大量に使用しているのだからな」

人が作った極限鋼をそんな使い方するとはな。
研究用だからって売ったのに、それは橋の橋脚や鉄筋代わりに使うのが本来の目的だ。
魔銃や魔砲の素材としての需要もあるとは聞いているが、まだそっちの方がマシな使い方だ。

「あの巨大ゴーレムの装甲をすべて極限鋼にしたのか……」

どれだけの経費を使ったのであろうか？
魔道具ギルドの金満ぶりに驚きつつも、そんな金があったらもっと使える魔道具研究に回せと俺は思った。

「導師、無茶すんなよ。ほら、魔法の効果が薄いじゃないか」

避難誘導を終えたブランタークさんも俺と導師に合流し、試しに『火球』を巨大ゴーレムに放ったが、『火球』は極限鋼製の装甲に弾かれてしまう。
自分で作っておいてなんだが、極限鋼が軍事機密に指定されているのは当たり前か。

「おおっ！　幻の反魔法金属ではないか！」

「バウマイスター辺境伯が再現に成功していたとは……多くの企業や研究所が試作を繰り返しているのですが、いまだに成功していない古代のロストテクノロジーです」

王城にいたエリーとライラさんも俺達に合流したが、二人は巨大ゴーレムの装甲に使われている極限鋼を見て驚いていた。
極限鋼は古の魔族も製造していたが、今は完全なロストテクノロ

ジー扱いらしい。
いつの間にか製造技術が失われ、魔族の間では幻の錬金金属なのだそうだ。

「さすがはヴェンデリンだな」

エリーは、嬉しそうに俺と腕を組んだ。
彼女の胸はまだ小さいが、俺の腕に押しつけられるとその感触が心地よい。

「ヴェルも鼻の下を伸ばさない」

「ルイーゼ、俺は鼻の下は伸ばしていないぞ」

目の前に王城に向けて魔砲を連発する巨大ゴーレムがおり、『魔法障壁』で防ぐのが忙しい。
それどころではないのだ。
エリーも『魔法障壁』の展開に協力してくれており、決してそういう意図で俺と腕を組んでいるわけではない……よね？

「そうだ、ルイーゼ殿。これは余とヴェンデリンが協力して『魔法障壁』を張るのに必要な行為なのだ」

避難誘導を終えて合流したルイーゼが、突然後ろから話しかけてきたので驚いてしまった。

「ライラさん、いいの？」

「害のある方との交友については諫言いたしますが、バウマイスター辺境伯様については特に何も」

ルイーゼはライラさんに、俺とエリーが腕を組んでいるがいいのかと尋ねたが、彼女は気にしていないようであった。

「古の魔族とは、魔力の多い者を尊敬、敬愛する存在なのです。バウマイスター辺境伯様は陛下の魔力すら超えてしまわれている。陛下が親密になろうとするのはわかります」

「魔族は本能に忠実だねぇ……」

「ルイーゼ殿、魔族が欲望に忠実だなんて、それは大昔の書物などの記載のみです。人間とそう変わりませんよ」

その誤解は解いておくといった感じで、ライラさんはルイーゼの発言を訂正した。

「こんなしょうもない理由で巨大ゴーレムを出撃させる人間の方が、よっぽど本能に忠実なのでは？」

「ううっ、それは否定できない……」

確かに、誰が見てもあの二人は大バカでしかないな。

「ヴェル、イーナちゃん達が怒らないといいね」

「なぜ俺が怒られないといけないんだ？」

別に浮気をしたわけでもないし……。

それよりも、住民の避難誘導はすべて終わったのであろうか？

「そっちは大丈夫、王国軍も協力してくれたから。エリーゼは怪我人の治療を始めているよ。でも、あのデカブツが少しでも進路を変えると、また逃げないと駄目だけどね」

こんな、よく東京を破壊する某怪獣のような巨大ゴーレムだ。

人が住む場所で動かしていいような代物ではない。

「まったく、貴族の風上にも置けない方々ですわ」

「近くで見ると、本当に大きいですね……」

「マックスが乗り込んだものの巨大版か。戦闘力は高そうに見えるが、オリジナルティーは薄い。今の魔道具ギルドの問題点を具現化したような代物よな」

カタリーナ、リサ、テレーゼも合流し、これで戦力は整った。

「旦那様、どうやって破壊するのでしょうか？」

「どうしようか？」

リサに巨大ゴーレムの倒し方を聞かれたのだが、俺もさっぱりわからなかった。

装甲が極限鋼製なので、かなり高威力の魔法でもあまり効果がなかったからだ。

導師による一撃でも無傷なのは痛い。

「えーーーっ、ヴェルは何か案があると思っていた」

「あったんだけど、できない事が判明した」

いくら極限鋼でも、俺が魔法で素材構成を変えてしまえば強度が脆くなってしまう。

そう考えて接近戦を望もうとしたら、巨大ゴーレムには特殊な『錬金阻害塗料』が塗布されており、素材構成を変えて極限鋼でなくしてしまう案が使うのが困難であった。

その前に、あの巨大ゴーレムに長時間取りつかせてくれるほど、プラッテ伯爵達も甘くはないであろう。

「どうしようか？」

「派手にぶち壊す」

「ルイーゼさん、ここでは無理ですわ」

下手に高威力の魔法で破壊すると、何しろあの巨体を動かす魔晶石が搭載されているのだ。

魔晶石は高威力の魔法に曝されると誘爆するケースがあり、もしそうなれば王城もその周辺区画もただでは済まない。

「ただ勝てばいいというわけにはいきません」

リサの言うとおりだ。

それでいいなら、とっくに導師が全力で戦っているはず。

破壊できても、王城とその周辺地域に被害があったら意味がない。

その点、既に家族まで見捨てて帝国に亡命するつもりのプラッテ伯爵達は自由に行動できた。

巨大ゴーレムが動く度に足物の建物が踏みつぶされていくが、気にする必要もないのだから。

「ヴェンデリンさん、導師様。どうなされますか？」

「どこか、人のいない場所に運ぶのである！」

「また無茶を言うな、導師」

ブランタークさんは呆れ顔だ。

全長五十メートル近い巨大なほぼ極限鋼製のゴーレムを、王都の中心部から人がいない郊外へと運ぶ。

どう考えても、物理的に不可能だからだ。

一体、あの巨大ゴーレムが何トンあると思っているのだ。

しかも持ちあげて数十キロ先の無人の土地まで運ぶ。

そんな魔力は、いくら導師でも持っていないはずだ。

「策ならあるのである！」

「どんな策だ？　導師」

ブランタークさんが、そんなものがあるのかと懐疑的な表情を浮かべた。

「某、いまだ魔族とは器合わせをしておらず、つまりまだ魔力が増える余地があるのである！」

導師は、四十をすぎていまだ魔力が増え続けている特殊な人だ。

これまでは魔族との器合わせを拒否していたが、遂にそれを実行する決断をしたわけだ。

「導師なら、今の辺境伯様の魔力に迫れるか？」

「あのデカブツを倒すのに、バウマイスター辺境伯は魔力を保持していてもらわないと困るのである！」

今の俺なら全力を出せば巨大ゴーレムは倒せるはずだが、ここで倒せば被害は甚大なものとなろう。

被害を抑えようと攻撃を手加減して失敗したら目も当てられない。

そこで、導師が全力で巨大ゴーレムを王都郊外にある無人の土地に運ぼうと言うのだ。

「いい策だな。じゃあ、早速器合わせを」

「というわけである。陛下」

「えっ？　余がか？」

「左様、バウマイスター辺境伯とライラ殿は忙しいゆえに」

実はこんな話をしながらも、俺達は忙しかった。

大魔神を操るプラッテ伯爵達が、容赦なく巨大ゴーレムの腹部に配置された魔砲を連発していたからだ。

そのままにすると王城が壊れるので、みんなで『魔法障壁』を張って防いでいるのだ。

『魔法障壁』によって弾かれた砲弾が落下して一部貴族の屋敷に被害が出ているが、みんな避難して無人なので犠牲者は出ていない。

あとで、屋敷を壊された貴族から文句を言われるかもしれないが、今はそんな事を気にしている場合でない。

「導師、早くぅ！」

「ちっ！　胴体だけじゃねえのかよ！」

王城に被害が出ない事に焦ったプラッテ伯爵達は、腰、太腿、肩にも装備されていた魔砲を連発し始めた。

ブランタークさんは、防ぐ砲弾が増えて途端に機嫌が悪くなる。

「急ぐのである」

「嫌じゃ」

「「「「「「「「「はあ？」」」」」」」」」

まさかの器合わせの拒否に、俺達全員一斉にエリーを見てしまった。

「余も『魔法障壁』の展開を手伝おうかな」

「いえ、それよりも器合わせです。陛下、何か嫌な理由でもあるのでしょうか？」

魔族には、異性同士の器合わせに関する風習など存在しない。

それなのに、導師の器合わせを拒否したリリに対し、ライラさんがその真意を問い質す。

「ヴェンデリンと器合わせをした時。こう体がポカポカと温かくなって、気分が落ち着いて、心地よい気分になったのだ。昔、ライラと器合わせをした時にはそんな感覚はなかったのに不思議なものよ。つまり……」

「つまり？」

「もうヴェンデリン以外とは器合わせをしたくない。同性はいいが、異性は断固拒否する！」

「なっ……」

エリーのあんまりな言い分に、ブランタークさんは顎が外れるかと思うほど口をあんぐりとさせていた。

「じゃあ、俺が代わりに……」

「辺境伯様は守備の要だ！　魔王様に代理はできない！」

まだ巨大ゴーレムが魔砲を隠し持っている可能性があった。これ以上魔砲を連発されると、エリーでは対処できないであろう。経験不足で、咄嗟にリサ、カタリーナ、ルイーゼ、ブランタークさんの補佐に入れない可能性があり、彼女に任せられないのが現状なのだ。

「それに、今の辺境伯様はそれどころじゃない」

「それどころじゃない？　ゴーレムからの攻撃に対する防戦で忙しいからですか？」

「違う。ある意味もっと厄介かな？」

ブランタークさんからそう言われた直後、俺は複数の殺気を一斉に感じた。

順番に見てみると、俺の妻達がいわくあり気な笑顔を浮かべてい

る。
よく見ると、目が笑っていない。
「ヴェル、また？」
ルイーゼの言っている事の意味がわからないな……。
「ヴェンデリンさん、今度は魔族の方ですか？」
「私は別に異論はありませんが……」
カタリーナ、リサ、本当に誤解だから。
「今にして思うと、別空間に飛ばされたヴェルの救出に行ったくらいだから、魔王様もねぇ……」
イーナ、だからそれは友情であって、恋愛感情は一切なくて……まったくないとは言えないか？
「今さら一人くらい増えても同じ」
「だよなぁ。何かもう慣れちゃったし」
ヴィルマ、カチヤ、だから誤解なんだって！
「ヴェンデリン、お主は見ていると退屈せぬの。エリーゼが何と言うか興味あるの」
テレーゼ、俺の人生はテレーゼの娯楽じゃないんだぞ！

散々な言われ方であるが、別に俺とエリーは男女の関係になどないし、種族の壁もある。
彼女と結婚なんてするわけがないじゃないか。

「あなた」

「エリーゼ？」

ここで、救助した怪我人の治療を終えたエリーゼがエルとハルカを護衛にイーナ達と合流した。
残念ながら、今までの一連のやり取りをすべて聞かれてしまったようだ。
イーナ達と同じく、底冷えのしそうな笑みを浮かべている。

「あなた、今はそれどころではありません。ご武運を御祈りいたしております」

以外にも、エリーゼはエリーについて何も聞いてこなかった。
確かに、今はそれどころではないのだが。

「終わったらお話がありますから」

やっぱり、そう来たか！
せっかく巨大ゴーレムを倒しても、そのあとで俺はエリーとの関係についてエリーゼから尋問されてしまう。
というか、俺がエリーを口説いたわけでも、浮気をしているわけでもない。
ただ、エリーが導師と野器合わせを拒否しただけなのに、こんなに理不尽な事はないと思う。

「ライラ殿はどうであろうか？」

エリーから器合わせを拒否されたショックを見せず、導師はライラさんに器合わせを頼んでみた。

「私もできれば遠慮したいです……」

「導師、人気ないな」

「某、何か悪い事でもしたのであろうか？」

それについては、他者から見ても思い当たる節が複数あるような気がする。

「じゃあ、作戦が実行できないじゃないか「待つのであるな！」」

導師の魔力を器合わせで増やすという策が駄目になるかと思われたその時、突然あの男が現れた。

最近、まったく存在感がなかったあの男。

監視はつけているが、遺跡発掘、レポート作製、食事、風呂、睡眠以外は何もしない、外出も発掘の時だけというある意味究極のヒココモリ、アーネストが突然姿を見せたのだ。

「どうやって王都に？」

「我が輩、王国の依頼で地下遺跡の場所を探る仕事をしていたのであるな」

えっ？

そんな仕事、お前、いつの間に受けていたんだ？

「エリーゼ？」

「ローデリヒさんが、陛下から依頼を受けまして。アーネストさんに逃亡の危険はないと判断したそうです」

こいつは、地下遺跡が沢山ある場所なら喜んで滞在するからな。バウマイスター辺境伯領の地下遺跡探索が大分進んだため、王国に猜疑心を抱かれないよう、直轄地の地下遺跡調査も請け負うようになったらしい。

今日はたまたま王都郊外にいたため、ここに駆けつけてきたわけだ。

「我が輩なら、アームストロング導師と器合わせができるのであるな。これも、あの巨大ゴーレムが万が一にも地下遺跡に害を成さないようにするためであるな」

アーネストの魔力は、エリー、オットーに次ぐ多さであった。実はライラさんよりも魔力量が多く、器合わせをする相手には向いていた。

「お主であるか？」

「今は個人的な嗜好を優先させる時ではないと、我が輩は思うのであるな」

「うぐっ……」

導師にとってアーネストは苦手な部類の人間に入るが、この状況

で個人的な感情を優先させるべきではない。
アーネストから言われ、導師は余計に顔を顰めさせた。

「すぐに器合わせをするのである！」

「戦闘は任せるのであるな。我が輩、基本的に頭脳労働者なのであるな」

「元々、期待していないのである！」

導師は言われんでもという顔をしながら、アーネストと手を繋いで器合わせを開始した。
その間、俺達は防戦に務めていが、無事に器合わせが成功した。
導師がパワーアップしたのがよくわかる。

「では、早速やるのである！」

魔力容量が増えた分は魔法の袋に入った魔晶石で魔力を補給し、導師は大量の魔力を使って身体能力を強化した。

「いけそうである！　続くのである！」

導師は、先頭となって巨大ゴーレムへと接近を開始する。

『させるか！』

プラッテ伯爵が巨大ゴーレムの操作を手伝い、装備された複数の魔砲を乱射し続けるが、それらはすべてルイーゼ達が『魔法障壁』で弾いていく。

「ふんぬぉぁーーー！」

無事に巨大ゴーレムに取りついた導師は、両腕でその胴体を抱え込み、唸り声をあげながら『飛翔』で上昇しようとする。

このまま巨大ゴーレムを持ちあげてから、王都郊外へと運ぼうとしているのだ。

「うぬぅおぁーーー！」

だが、巨大ゴーレムは一ミリも地面から浮かび上がっていなかった。

「駄目だな」

「そうですね……」

いくら導師の魔力がアーネストクラスになったといえ、そう簡単にあの巨大ゴーレムを持ちあげられるはずがないと思うのだが。

俺とブランタークさんは、この試みは失敗したと思った。

「バウマイスター辺境伯以外、手伝うのである！」

「えーーーっ！　ボク達も？」

「そうである！　もう少しなのである！」

一緒に巨大ゴーレムを持ちあげるのを手伝ってほしい。

そう導師から頼まれて、ルイーゼは微妙な表情を浮かべた。

間違いなく、ルイーゼ達が救援しても成功しないと思っているはずだ。

「もう少しなのである！」

「わかったよ。ほらみんなも」

「本当に大丈夫なのですか？」

「魔族でも、あれほど巨大なゴーレムを持ちあげる奴などおらぬぞ」

「そうですよね、陛下」

「他に手がないと、ここで壊して被害が甚大になる方を選ばなければならぬ。やるだけやってみようではないか」

「私、『身体強化』系の魔法は少し苦手なのですが……」

「気をつけて手伝うぞ」

ブランタークさんの指示でルイーゼ達も巨大ゴーレムに取りつき、『飛翔』で一緒に浮かび上がろうとする。

怪力の導師が駄目なのに、力は常人のブランタークさん達が手伝っても同じような……。

と思ったら、本当に巨大ゴーレムが宙に浮き始めた。

『このカトンボ共が！　大魔神を持ちあげるな！』

プラッテ伯爵が苦情を述べるが、みんなそれを無視して巨大ゴーレムを上空百メートルほどまでに浮かせた。

途中、巨大ゴーレムがその腕で取りついた導師達を振り払おうと

したが、その前にライラさんとリサが両腕に取りついて上空へと飛んでいく。
巨大ゴーレムは万歳をしたような格好となり、身動きが取れなくなってしまった。

『この野郎！　叩き落としてやる！』

「死ぬぞ。プラッテ伯爵」

「どういう事だ？　バウマイスター辺境伯」

それはそうだろう。
魔法で飛べない人間が、高度百メートルから落下して生きていられるはずがない。
巨大ゴーレムの操縦席には魔法でGや衝撃を緩和する機能があるかもしれないが、ないかもしれない。
巨大ゴーレムごと落下したら、プラッテ伯爵は水風船のように破裂すると思う。
人間はそんなに頑丈にできていないのだから。

「ちょっとした教養から得た知識で忠告しておく」

もし巨大ゴーレムに張り付いているルイーゼ達に手を出すと、人数が減って巨大ゴーレムを『飛翔』で浮かせておく事ができなくなるかもしれない。
そうなれば、そのまま落下してプラッテ伯爵達は死ぬであろう。

「それを思うと、持ちあげた時点で勝ちなのか」

何も考えていないように見えて、実は導師、ちゃんと計算してい

るとか？
……たまたまか。

『バウマイスター辺境伯、今までの無礼許してやらんでもない。私をこの巨大ゴーレムから救出したらだが』

「おい……」

死ぬぞと言われて恐ろしくなったのか。
プラッテ伯爵は、俺との和解を求めてきた。

「バカなんじゃないの」

「今さらですわね」

「陛下から生死を問わずで捕縛命令が出ているので、救出はあり得ません」

「こんな大騒ぎを起こしておいて、今さら降伏か？　お主にできる事を教えてやろう。このまま反逆者として死ね」

ルイーゼ、カタリーナ、リサ、テレーゼは、容赦なくプラッテ伯爵を批判、死刑宣告を出した。
確かに、これだけの騒ぎを起こしておいて、今さら助けてくれとは虫がよすぎる。

「ヴェンデリン、このまま上空から叩き落とせば壊れるかの？」

「どうだろう？　一応、最新鋭の魔道具だからな。そういう時のために安全装置がついているかもしれないけど……」

逆に言うと、これだけの巨体だ。
上空から地面に叩き落とされると想定していないかもしれない。
操縦者は呆気なく死んでしまえば、それはそれで楽か。

「ならば、すぐにこのまま巨大ゴーレムを郊外に運ぶのである！」

導師は躊躇なく、抱えた巨大ゴーレムを王都郊外まで運ぼうとした。
ルイーゼ達も協力し、上空に浮いたゴーレムは王都郊外へと向けて移動を開始した。

『おいっ！　シャーシェウド会長！　大丈夫なんだろうな？』

降伏が許されなかったプラッテ伯爵は、同乗しているシャーシェウド会長に巨大ゴーレムが地面に叩きつけられた時の安全性を訪ねていた。
その口調の必死さから見るに、二人はそれほど仲がいいというわけでもないわけだ。
俺への憎しみと、謀略がバレテしまったので、帝国に亡命するまで組んだだけにしか見えなかった。

慌てたプラッテ伯爵が拡声器のスイッチを切っていないようで、二人の会話まで外に聞こえていた。

『大丈夫だ。ニュルンベルク公爵が乗って敗北したゴーレムをさらに改良してある。操縦席に過剰な衝撃がかかった時、それを緩和する装置が働く』

『おおっ！　さすがは最新鋭の魔道具』

そんなものを開発する暇があったら、魔導四輪を実用化すればよかったのに……。

この巨大ゴーレムといい、魔道具ギルドの連中はどこかズレているような気がした。

『聞いたか？　バウマイスター辺境伯。我々を地面に叩きつけても、我々には何のダメージもないのだ』

『ついでに言うと、巨大ゴーレムも極限鋼のおかげでダメージは受けない。わざわざ郊外まで運んでくれてこちらとしては大歓迎だ。帝国との距離も縮まったからな』

王城を破壊して、それを手土産にする話はどうなったのであろうか？

周辺区画には損害を与えたので、それで十分だと思ったのか？

「ペーターがいい顔をするとは思えないんだろうけどなぁ……」

今のペーターに必要なのは、帝国を立て直すのに必要な平和な時間だ。

巨大ゴーレムは兵器として魅力的かもしれないが、王国に敵意を持たれては意味がないと思うのだが、帝国も一枚岩ではない。

何かの切り札に使えるかもと、プラッテ伯爵達の亡命を受け入れる可能性もなくはないのか。

「どのみち、某達の方針に変更はないのである！　このガラクタをぶち壊す時に周辺への被害を考えると、無人の場所で行った方がいいのである！」

『好きにすればいい。アームストログン導師、お前も他の魔法使い達も、大魔神の輸送で莫大な魔力を消費した。これで、我が大魔神を破壊できる可能性は減った』

「バウマイスター辺境伯がいるのである！」

そのために俺は魔力を温存しているのだが、果たして極限鋼で覆われた巨大ゴーレムに歯が立つのか。

不明な点は多い。

『どう転んでも、私と大魔神に何ら影響はない。帝国の魔道具ギルドと組んで、この大魔神をさらに強化すれば、帝国も私を蔑ろにはできないはずだ』

さすがは、ジジイ。

自分の安全は必ず確保するわけだ。

そういう部分は老練なのであろう。

「あれ？」

「どうかされましたか？　陛下」

大魔神を運んでいるライラさんは、リリが首を傾げたのでその理由を尋ねた。

「『私と大魔神』は？　プラッテ伯爵とやらは駄目なのか？」

『別に駄目じゃない。些か操縦席の改良に手間がかかってな。安全機構があるのは、私が座っている席だけなのだ』

「それって、つまり……」

「巨大ゴーレムが地面に叩きつけられた場合、シャーシェウド会長は無事でも、同乗者のプラッテ伯爵は無事にはすまないというわけです」

「なるほど、それはこの高度から地面に叩き落とされればな」

それにしても、プラッテ伯爵。

シャーシェウド会長から見捨てられるとは、やっぱり貴族としては微妙な人だったわけだな。

『私が座っている席が安全ではないと？　こら！　そちらに座らせろ！　ベルトが外れないぞ！』

『ふふふっ、お前なんぞ、便宜上組んだだけの事。そもそも私は貴族など嫌いなのだ！』

『貴様、プラッテ伯爵である私に対して、何たる無礼な口を！』

シャーシェウド会長は、加齢で衰えたとはいえ魔道具ギルドのトップになれるほどの人物であった。

だが平民の出なので、出世のため偉そうな貴族に本心を隠して気を使っていたのであろう。

今は、陛下から改易された『元貴族』であるプラッテ伯爵に使う気などないわけだ。

『仕方なしに組んでいたが、本当に使えない奴よ』

『貴様ぁ！　平民の癖にぃーーー！』

この状況で仲間割れできるのが凄いと思うが、彼らに残された時間は残り少なかった。
遂に、巨大ゴーレムを王都郊外にある無人の平原上空まで運ぶ事に成功したからだ。

「ごちゃごちゃうるさいので、とっとと地面に叩き付けるのである！」

「そうだな。運よくどこか壊れてくれるかもしれないからな」

『こらっ！　ちょっと待て！』

巨大ゴーレムが地面に叩きつけられたら確実に助からないプラッテ伯爵が苦情を述べたが、ブランタークさんと導師が聞く耳など持つはずがない。
哀れ、巨大ゴーレムは地面に叩きつけられた。
ただみんな手を離して落としただけだが、あれだけの重量物だ。
爆発したかのようなもの凄い音と共に、落下地点に盛大な土煙があがった。
それが晴れると、巨大ゴーレムは深く地面にのめり込んでいる。

「搭乗者が死んでいれば楽なのに」

『残念だな！　バウマイスター辺境伯！　私はピンピンしているぞ。見たか！　これが魔道具ギルドの力だ！』

あの高さから落下しても搭乗者にまったくダメージがない操縦席か。
未来になると、魔力で動くロボット人間が操縦して戦争をするな

んて未来もあるかもしれない。

「ちなみに、プラッテ伯爵は？」

『死んだに決まっておろうが。うるさいだけでクソの役にも立たない。貴族の家に跡継ぎとして生まれた以外、何も取り得もない奴だ。挙句に操縦席を汚しおって。死ぬ時まで迷惑しかかけないとはな』

よほどプラッテ伯爵の事が嫌いだったのであろう。

シャーシェウド会長は、嬉しそうに彼の死を報告した。

あの高さから落下したのだ。

プラッテ伯爵の死にざまは、誰にでも容易に想像できる。

俺は後片付けしたくないな。

『次は、お前がプラッテ伯爵のようになるのだがな！』

「それはどうかな？　お前は存在感がないから」

『人が気にしている事をーーー！』

巨大ゴーレムは、シャーシェウド会長が操縦している。

戦闘を優位に進めるために彼を挑発してみたのだが、彼が副会長からの横滑りで、しかもギルド内の支持も薄く、外部からも存在感が皆無だと思われている事を随分と気にしていたようだ。

『お前は、私の名前すら知らないで！』

それはしょうがない。

俺が生きていく上で、別に魔道具ギルドの会長の名前を知らなくても、何の不都合もないからだ。

「俺は魔導ギルドの所属だし」

『前会長の死後、私がいかに苦労して魔道具ギルドを纏めてきたか！　お前のように、魔法の才能だけでお気楽に切り抜けている貴様にはわかるまい！』

それは誤解だ。

確かに魔法は便利だが、絶対じゃない。

俺だって、ジジイにはわからないかもしれないが、色々と苦労しているのだから。

まあ、彼にそれを言っても無駄であろう。

戦闘を優位に進めるため、もっと挑発しておくか。

「お前も魔法使いだったな。でも、組織で成り上がらないとうだつが上がらないほどだ。俺のように魔法だけで何とかならないから、こういう姑息な手を使うんだろうな」

『お前は！　殺す！』

完全にブチ切れたシャーシェウド会長は、巨大ゴーレムに搭載された魔砲を発射した。

半分ほど落下のショックで暴発し、完全に壊れてしまったが。

「なるほど、完全に無傷ってわけでもないんだな」

「それにしても、極限鋼とは頑丈である！　内蔵している魔砲が暴発しても、本体には影響ないのである！」

「そこ、冷静に評論していないで下がって」

巨大ゴーレムを運ぶ時に大量に魔力を消費したので、導師以下俺以外は全員既に戦える魔力が残っていなかった。

ここは俺に任せて退いてほしいとところであった。

「足を引っ張るのも何なのである！　バウマイスター辺境伯、任せるのである！」

「無理そうなら退けよ。あとで壊すって手もあるんだから」

導師とブランタークさんは、急ぎ俺の近くから離れた。

「ヴェル、無理しないでね」

「こいつの歩みは遅いようですので、明日また挑戦する手もありますわ。ご無理をなさらないように」

「旦那様、ご武運を」

「無理するなよ、ヴェンデリン」

巨大ゴーレムの運搬で魔力が残り少ないルイーゼ、カタリーナ、リサ、テレーゼも、俺の邪魔な衣ならないように俺から距離を置いた。

「すいません、私も魔力を使いすぎました」

巨大ゴーレムの運搬では、魔力量が多いライラさんにも負担が大きかったようだ。

逆にいうと、ライラさんとリリがいなければ巨大ゴーレムは運べなかったはず。

「あのゴーレムは重たかったからな。ヴェンデリンに任せる。これは勝利のためのおまじないだ」

最後に、突然エリーが俺の頬にキスをしてきた。

「勘違いするなよ。これはあくまでも真面目な勝利のおまじないだからな」

とは言われたのだが、心なしかエリーの顔が赤いような気がする。俺の勘違いか？

「痛っ！」

そして、遥か遠くから小石が飛んできて俺の頭に当たった。遠方から微妙な威力で小石を当てられる人物は、間違いなくルイーゼであろう。

「ヴェンデリンの妻達はヤキモチ焼きが多いの。では」

ライラさんとエリーが離脱し、その間に巨大ゴーレムが起き上がって一対一の戦いが始まろうとしていた。

『お前一人なら、この大魔神の圧倒だ！』

プラッテ伯爵が死んで気が晴れたのか。

シャーシェウド会長は嬉しそうな声で、巨大ゴーレムに搭載している壊れていない魔砲での攻撃を再開した。

ところが、数発を撃った時点で砲撃は止んでしまう。

「壊れた？　違う！　砲弾切れだ！」

当たり前の事だが、いくら巨大ゴーレムでもそれほどの砲弾は積めない。

魔砲は弾がないと撃てないので、今までの砲撃で弾を使い果たした以上、これ以上の砲撃は不可能であった。

「駄目じゃん」

『次の手はある！　『魔貫通熱線』を食らえ！』

「っ！」

魔砲が撃てなくなった巨大ゴーレムは、手の平の部分を俺に向けた。

咄嗟に嫌な予感がして回避すると、目にも留まらない早さで俺の真横をビームのような光線が抜けていく。

少し俺の『魔法障壁』に掠ったのだが、簡単に貫通してしまうほどの威力であった。

俺は背中に冷や汗をかいた。

まさか、『魔法障壁』を容易に貫通してしまうビーム砲のような魔法があるなんて。

『ははは！　見たか！　この『魔貫通熱線』を手土産に帝国へと亡命だ』

もっと強固な『魔法障壁』なら貫通しないと思うが、そうすると

防御で尋常ではない魔力を消費してしまう。
中級以下だと完全にお手上げであろう。

まったく、こんなものばかり開発しやがって。
軍人でもないのに、頭がおかしいんじゃないのか？

『『魔貫通熱線』に貫かれて死ね！』

ただ威力は凄いが、『魔貫通熱線』には弱点があった。
発射口が手の平なので、射線の特定が容易であり、発射前に手の平からズレれば、簡単に回避できてしまう。
俺も最近、ブランタークさんの言う魔法の精密さを身に着けつつあるのかもしれない。

『なぜ当たらぬ？』

「さあな？　こっちは回避で精一杯だ」

油断すると貫かれてしまうので、こちらも必死であった。
もう一つ、ここで巨大ゴーレムの魔力を消費させておこうという作戦であった。

「どのくらい頑丈なんだ？」

俺は巨大ゴーレムが放つ『魔貫通熱線』を回避しつつ、適当な大きさの『火球』をぶつけてみた。
極限鋼は伊達ではないようで、呆気なく弾かれてしまう。
『火球』がぶつかった後にも、傷一つついていなかった。

「駄目だな。こりゃあ」

続けて『魔貫通熱線』を回避しながら、どうやってこのデカブツを倒すかを考える。
攻撃魔法で破壊するとなると、相当な威力のものを放たないといけないはず。
もしそれでも駄目だった場合、ブランタークさんのように歩行速度を考えると逃がす心配はないが、また居住地域に行かれると面倒だ。

ならば……。

「ちょっと面倒だが……」

極限鋼の原子構成に手を加え、まずはその強度を落とすか。
自分で『錬金』したものだからそのくらいは容易なのだが、問題は巨大ゴーレムの全身に塗布されている『錬金阻害塗料』であろう。

『ははは っ！　錬金阻害塗料を剥ごうなどという安易な策は通じないぞ！』

どういう仕組みなのか？
今、ちょっと巨大ゴーレムに取りつき、ミスリルナイフで塗料を剥ごうとしたら、まったく歯が立たなかった。
試しに『錬金』の魔法を装甲に浸透させてみるが、特殊な塗料のせいで極限鋼の層まで届かない。
だが、まったく届かないというわけでもないらしい。
それが確認できたので、俺は一旦巨大ゴーレムから離れた。

「さて……やはりあそこにしがみ付くしかないか……それも最低でも数分間は……」

覚悟を決めた俺は、先日リリがオットーに対して使用した『フラッシュ』の魔法を仕掛けた。

『眩しい！　目がぁーーー！』

巨大ゴーレムの操縦席に、外部からの閃光を防ぐ機能はなかったようだ。

直接『フラッシュ』を見てしまったシャーシェウド会長は、あまりの眩しさに暫く目が見えないはずだ。

その間に俺は背中に取りつき、巨大ゴーレムに使用されている極限鋼の再『錬金』を始めた。

綿密に規則正しく結びついた原子配列に魔力で介入し、その組成を変えてしまう。

レアアースやレアメタル成分を抽出してしまえば、極限鋼はただの鋼になってしまう。

そうすれば、高威力の魔法で簡単に壊せるはずだ。

ところが……。

「魔力の介入が阻害されてしまうな……」

どうやら『錬金阻害塗料』だけでなく、他にも『錬金』を阻害するものが巨大ゴーレムには搭載されているようだ。

強く魔力を篭めたおかげで、『錬金』が錬金阻害塗料の層を突破したのは感じられたが、また別の何かに『錬金』が阻害されてしまった。

「バカめ！　魔道具職人である私が、『再錬金』への対策を立てないと思ったのか？」

いくら頑丈な極限鋼でも、錬金で少しでも成分に変化があればただの鋼や鉄合金に戻ってしまう。
それを防ぐための装置が、巨大ゴーレムには設置されているようだ。
多分その元は、あのニュルンベルク公爵が発掘し、アーネストに稼動させた魔法を阻害する装置であろう。
壊しはしたが装置の回収はしていたので、戦後それを魔道具ギルドに販売していた。
修復して小型の装置を試作し、それを搭載しているのであろう。
極限鋼で覆われた巨大ゴーレムの欠点は、『錬金』されて装甲が極限鋼でなくなってしまう事なのだから。

『ははははっ！　我々魔道具ギルドの力を見たか！』

「そこまでできるのなら、魔族の国の魔道具も複製しろよ。それにお前が直接作ったわけではないだろうが」

シャーシェウド会長は、既に現役の魔道具職人ではない。
きっと、この巨大ゴーレムの製造で一秒たりとも作業には参加していないはずだ。

「ちゃんと会長職にまい進していればいいのに、余計な事をして。これだから、プライドと権力欲が肥大した年寄りは厄介なんだ」

そういうのを、日本では老害という。
魔道具ギルドは特にその傾向が強く、魔道具職人としては引退している年寄り連中が魔道具ギルドで余計な政治活動を始めるから、魔族の国との交渉がなかなか纏まらなかったり、既得権益を守るため俺の暗殺を試みたりする。

「とっとと引退すればいいのに。引き際って肝心だな」

俺も気をつけないとな。

『言わせておけば！　この大魔神に手も足も出ない癖に！」

「果たしてそうかな？」

確かに『錬金』は阻害されているが、この装置には欠点がある。

それは、魔法の阻害に打ち勝てる強大な魔法を使えばいいだけなのだ。

帝国内乱で使われた巨大魔法阻害装置では難しいが、巨大ゴーレムに搭載された小型装置なら強力な魔法を使えば阻害を無効にできるはず。

以前の俺なら魔力が保たないが、今の魔力が増えた俺なら大丈夫なはずだ。

「（精神集中……）」

『無駄な事を！』

まだ視力が回復していないシャーシェウド会長であったが、俺に巨大ゴーレムは破壊できないと思っているので、その口調は余裕そのものであった。

「できる。地味な『錬金』にここまで魔力を使うのは珍しいが……」

最初は魔力の浸透を阻害され、なかなか『錬金』が発動しなかっ

たが、半分以上の魔力を使用したところで巨大ゴーレムに使われている極限鋼にアクセスできた。
ここから、少しずつ混ぜられているオリハルコン、ミスリル、その他レアメタルやレアアースを抽出していく。
数分で巨大ゴーレムの装甲がただの鉄になる予定だが、魔力の消耗が予想以上に激しい。
『まだ諦めないのか！』
視力が回復したシャーシェウド会長は、巨大ゴーレムの背中に張りついた俺を振り落とそうとする。
巨大ゴーレムの手が背中に届かないので、大きく体を揺すり続けた。
俺は振り落とされそうになるが、何とか背中にしがみ付いて『錬金』を維持し続ける。
『ええい！　落ちろ！』
「嫌だね」
ここでやめたら何の意味もなくなってしまう。
『錬金』が成功して極限鋼がただの鉄になってしまうか、その前に魔力が尽きてしまう心配もあったが、器用に魔法の袋から予備の魔晶石を取り出し、魔力を回復しながら『錬金』を続けた。
そして数分後……。
「成功だ！」
俺には、巨大ゴーレムを覆っていた極限鋼がただの鉄になってし

まったのに気がついた。
これから、俺の魔法で簡単に破壊できるであろう。
すぐに巨大ゴーレムの背中から離れ、トドメの一撃とばかり魔法を放つ魔力を練ろうとして……。
「いかん……魔力が足りない」
予想以上に極限鋼の変性で魔力を使ってしまったようだ。
今は何とか飛べているが、もう数分で地面に落下してしまう。
その前に、一時撤退も視野に入れなければいけなくなった。
「私の大魔神がぁーーー！　バウマイスター辺境伯め！」
どうやらシャーシェウド会長は、ご自慢の大魔神の装甲がすべてただの鉄になってしまった事に気がついたようだ。
激怒しながら、連続して『魔貫通熱線』を連発し始めた。
回避はそう難しくもないが、今は飛んでいるので回避のたびに魔力を余計に消耗してしまう。
「できれば、ここで倒しておきたいんだが……」
魔力を回復する前に、他の町で暴れたりすれば犠牲が出てしまう。
今、この場でトドメを刺したかった。
「どうしたものか……」
遠方に退避したみんなも、もう魔力に余裕がない。
今の俺の魔力では、絶対に巨大ゴーレムは倒せない。

「あなた！」

残留か、撤退かで悩んでいると、突然後方からエリーゼの声が聞こえた。

「エリーゼか。どうやって？」

後ろを見て確認すると、ルイーゼとカタリーナがエリーゼを抱えて飛んできてくれたようだ。

「ルイーゼ、カタリーナ。危ないぞ」

「あの光線みたいな魔法だね」

「『魔法障壁』を相当強くかけないと貫通してしまう魔法ですか。確かに、私とルイーゼさんの残留魔力では回避以外できませんわね」

「じゃあ、エリーゼをヴェルに渡して撤退だ」

「ヴェンデリンさん、エリーゼさん。あとはお任せしますわ」

二人は、俺にエリーゼを渡すと再び巨大ゴーレムから離れていく。自然と俺はエリーゼをお姫様抱っこしていた。

『逃がすか！』

「残念、ボクは回避の方が上手なの」

ルイーゼはカタリーナを抱え、自分達を襲った『魔貫通熱線』をダメージを受けないギリギリで回避してから徹底して行った。

「あなた、あの指輪をお持ちしました」

攻撃魔法と『飛翔』を使えず、後方で今回の事件の怪我人を治療していたエリーゼには、俺がプレゼントした指輪の魔力がまだ残っている。

それを持ってきて、俺のピンチを救ってくれた。

さすがは、俺の正妻というわけだ。

「やっぱり、エリーゼは頼りになるな」

「はい。沢山奥さんが増えましたが、私はあなたのただ一人の正妻ですから。それは譲れません」

「俺はどこか抜けている部分があるから、エリーゼがいてくれて助かるよ」

「私も望んであなたの妻となり、一緒にいるが楽しいのですからお気になさらずに。あなたと一緒にいると、人生退屈しませんし」

「そう言ってもらえると嬉しいな」

「私もです」

二人で話をしている間に、指輪の魔力をすべて吸い上げ、巨大ゴーレムを倒す魔法に使う魔力を練り始める。

どうやって倒すかだが、ここは非効率な事はやめて、操縦席を貫く魔法の方がいいであろう。

生かして捕えるという選択肢もあるが、ここで変に手加減をした結果、負けてしまっては意味がない。

「あの『魔貫通熱線』という魔法、俺もあとで練習してみよう」

今はいきなり使えないので、無属性の太い槍を作って操縦席をぶち抜くだけだ。

その前に、あの巨大ゴーレムの操縦席だが……。

「あなた、あそこです」

エリーゼは、巨大ゴーレムのヘソの部分を指差した。

極限鋼で覆われていた時には気がつかなかったが、今の状態なら魔力の反応がしっかりとわかる。

それにしても、シャーシェウド会長。

自分のいる場所をカモフラージュすらしないとは、魔法使いとしては既に終わった存在のようだ。

「シャーシェウド会長、これで終わりだ！」

『貴様のような奴がいるから！　前の方が王国も圧倒的に幸せだったのだ！』

「老人の昔はよかった発言に興味なんてない！」

俺は、無属性の魔法の槍をエリーゼも指摘した巨大ゴーレムのヘソの部分に向けて投げた。

極限鋼の装甲なら傷もつかないが、ただの鉄なら余裕で貫通してしまう。

『がはっ……バウマイスター辺境伯ぅーーー！　貴様、必ず呪ってやるぞぉーーー！」

魔法の槍は、見事に操縦席に座っていたシャーシェウド会長を直撃した。

苦しそうなシャーシェウド会長の声が聞こえる。

「呪わせなどいたしません。そのために私がいるのですから。シャーシェウド会長、あなたのせいで数は少ないですが死者も出ています。あなたこそ、その罪を悔いるべきだと思います」

『銭ゲバの似非宗教家の孫娘がぁーーー！　私は魔道具ギルドにおいて、並ぶ者なき力を持つ会長なのだ！　私達こそが、魔道具でこの世を支えている。その仕組みを破壊しおってぇーーー！』

まだ絶命していないようで、シャーシェウド会長は自分の言いたい事を喋り続けた。

「うるさい！　犯罪者の戯言など真面目に聞いていられるか」

俺は追加で無属性の槍を先ほどと同じ場所に投げた。

『バウマイスター辺境伯めぇーーー！」

それがシャーシェウド会長の最後の言葉となり、操縦者を失った巨大ゴーレムは立ったままで活動を停止させる。

「エリーゼ、終わったな」

「はい」

「あれ？」

「あなた……」

巨大ゴーレムを倒し一安心したところで、再び俺とエリーゼに緊張が走る。

搭載されている膨大な魔力を蓄えた魔晶石、その反応はとっくに察知していたが、シャーシェウド会長が死ぬのと同時に魔力がうごめき始めたのだ。

こういう感じ方をした時、すぐに必ず大規模な魔法が発動する。

どんな魔法が発動するか、魔力のうごめきのみで判断するのは難しいが、今回は前後の状況で簡単に予想できてしまった。

シャーシェウド会長が死に際に、俺達を撒き込もうと巨大ゴーレムの自爆装置を作動させた。

これが一番可能性が高いであろう。

「あのジジイ！」

「あなた、これだけの魔力が一気に爆発魔法に転換されれば……」

かなりの広範囲に甚大な被害が出るはずだ。

ここは無人の土地であるが、もしかすると王都にも影響が出るかもしれない。

その前に、残り少ない魔力で少し距離を置いているルイーゼ達が爆発に巻き込まれかねなかった。

「止めるぞ！」

「はい！」

大量に消費されたが、これだけの巨大ゴーレムを動かす魔晶石だ。
残存魔力は非常に多く、俺とエリーゼだけなら『魔法障壁』で防御可能……という保証はできかねなかった。
ならば、危険を承知でこの巨大魔晶石から魔力を吸い上げるしかない。
間に合わないかもしれないが、今さら逃げるわけにはいかなかった。

エリーゼだけでも逃げて……というのも不可能だ。
彼女は『飛翔』を使えないのだから。

「私の指輪も使いましょう」

「逃げた方がよかったかな？」

「あなたの決断でしたら私は尊重いたします。もし失敗して死んでも、あの世で夫婦一緒にアルフレッドさんから魔法を習えばいいのです」

「そうか」

エリーゼがそういうのであれば、俺もこれ以上は何も言わない。
この魔力を大分消耗している俺の体に、巨大魔晶石から吸い出した魔力を蓄えるだけだ。
もし吸い出し終わる前に爆発すれば、俺もエリーゼもひとたまりもないであろう。

「それにしても、どれだけ魔力を集めているんだよ」

「魔道具ギルドなので、魔法使いは沢山いますから」

「その魔法使いを、もっと別の仕事に使えばいいのに……」

「そうですね、あなた」

こんな試作品のエネルギー源に使うくらいなら、もっと魔道具を生産しやがれと俺は思ってしまう。

予想以上に吸い上げられそうな魔力量が多いが、今はそんな事を気にしていられない。

エリーゼも指輪のみならず、予備の魔晶石にまで魔力を吸い上げていく。

魔力が少しでも残れば、爆発して至近にいる俺達はひとたまりもないであろう。

作業の性質上、『魔法障壁』を張るわけにはいかないのだ。

数秒の時間がえらく長く感じた。

さっきまでの戦闘のおかげで、また少し魔力量が上がっている。

俺の予想では、巨大魔晶石に残った魔力はゼロになるはずだ。

「あなた？」

「大丈夫」

集中して、巨大魔晶石から素早く魔力を吸い上げていく。

間に合わなければ爆死、あまり早く吸い上げすぎても爆死だ。

ギリギリのところで、なるべく多くの魔力を吸い上げるコントロールは、師匠からの教えに従い毎日鍛錬していた。

失敗はしないはず。

俺だけでなくエリーゼがいるので、失敗するわけにはいかなかっ

た。

「……あなた？」

「ふう……」

これで、巨大魔晶石からすべての魔力を吸い上げたはず。

作業は成功だと安心していたら……。

「あなた！」

「えっ？」

咄嗟にエリーゼが俺に飛びかかり、二人が巨大魔晶石から離れたところで、巨大魔晶石の周辺機器が爆発を起こし、破片を飛び散らせた。

どうやら、自爆を防ごうと魔晶石の前で作業をしている人を爆死させる罠だったようだ。

「エリーゼ！」

エリーゼが俺を庇ったので、負傷したのではないかと慌てて彼女を抱き起こした。

「エリーゼ、大丈夫か？」

「はい。咄嗟に『魔法障壁』を張ったので」

俺は、作業に成功して完全に油断していたようだ。

もしエリーゼがなければ、大怪我をするか死んでいたかもな。

「本当、エリーゼがいてくれてよかったよ」

「ちょっと嫌な予感がしたのです」

嫌な予感か……。

「さすがは、神官という事かな？

「それもあるでしょうが、私はあなたの正妻ですから。夫を最後に助けるのは、やはり正妻である私の仕事なので」

確かにそういわれると、そんな感じがしてきた。

「エリーゼのおかげで、最後にバカみたいな理由で死ななくて助かったよ。これで俺達の仕事は終わりだ。あーー、疲れた。明日は王都に遊びにでも行こうか？」

死んだプラッテ伯爵とシャーシェウド会長、完全に活動を停止した巨大ゴーレムの後片付けは王国に任せて問題ないであろう。

疲れたから、明日はエリーゼとデートにでも行こう。

「美味しい物が食べたいな」

「そうですね」

「エリーゼは、何か希望でも？」

「あなたのお好きな物でいいのですが、ご褒美に二人だけで出かけたいです。特に、エリーさんは駄目ですよ。そういえば、随分と彼

女から好かれているようですね」

「その話かぁ……彼女は魔族でも、年齢的に妹みたいなものだからなぁ……」

まだ、エリーゼ達が心配するような関係じゃないのだから。

「将来はわかりませんよ。あなたにはどういうわけか女性が寄ってきますから」

「そこは否定しないけど……」

「お気をつけてくださいね、あなた」

「できる限り気をつけます」

どうにも、エリーゼには叶わないな。

以上を持ってして、王都に被害を出した巨大ゴーレムは完全に停止し、俺の暗殺を目論んだプラッテ伯爵と魔導ギルドのシャーシェウド会長は俺達に返り討ちにされて死んだ。

きっと暫くは王国政府も大騒ぎであろうが、別に俺は中央で役職に就いているわけではない。

あとは知らないと思い、エリーゼと手を繋ぎながら、ほっと安堵のため息をつくのであった。

最終話　そして何気ない日常へ……繰り返す因果？

「バウマイスター辺境伯、いるであるか？」

「はい？　ああ、導師でしたか」

「また土木工事であるか？」

「ローデリヒから頼まれているのですよ。いつもの事ですけど……」

あの事件から一週間後、バウルブルク郊外で魔法による土木工事に勤しむ俺を導師が訪ねてきた。

王宮からのメッセンジャーのようだが、彼にもっとも適した任務であろう。

プラッテ伯爵家と魔道具ギルドの始末で中央の貴族と王族は忙しく、暇な導師に出番が回ってきたというわけだ。

「工事は終わったので、屋敷に戻りましょうか？」

「できれば何か食べさせてほしいのである！」

「エリーゼが準備しているはずです」

「それは好都合である！」

予定の工事を終えた俺が導師と共に『飛翔』で屋敷へと戻ると、中庭では、エリーゼ達が中庭にテーブルと机を並べて昼食の準備をしていた。

「あっ、導師だ」

「美味そうな飯であるな！　ルイーゼ嬢よ」

「エリーゼが指揮を執っているからね」

「ルイーゼさん、口を動かす前に手を動かしてくださいな」

「はーーーい」

「ルイーゼ、子供達の教育によくないわよ」

「ううっ……イーナちゃんはすっかり教育ママさんだね」

ルイーゼも、カタリーナも、イーナも、みんなで昼食の準備をしている。

「大人数だから大変じゃの」

「本当、うちは大人も子供も多いわね」

テレーゼとアマーリエ義姉さんもテーブルに食器を並べたり、料理の配膳で大忙しだ。

「そう、細く魔力を流す。それだと多すぎ」

「大分、魔力にコントロールが上手くなったな」

ヴィルマとカチヤは、昼食になるまで先に生まれた子供達に魔法の指導をしていた。

「まだまだですね」

「まったくリサに勝てる気がしないな」

「そうかしら？」

「ルルはまだ魔力が成長しているから、いつかリサを抜くかもしれないが、アキツシマ人の魔力の少ない事よ。まだ成長途中のルルが羨ましい」

「一人前の魔法使いになったら、南の海から海竜（サーペント）を駆逐して、気軽に漁と航海ができるよう、今のうちに強くなっておくのです」

リサは、藤子、ルルに集中して魔法を教えていた。

「あっ、導師だ。いらっしゃい」

「エルヴィン……何をしているのである？」

「手伝いですけど」

導師は、食事の支度を手伝っているエルを見て目を丸くさせた。

リンガイア大陸の常識では、冒険者の野営以外でまずあり得ないからだ。

「導師様からも仰ってあげてください。恥ずかしいので」

ハルカは、エルに手伝いをやめるように説得してほしいとお願いした。

いまだリンガイア大陸の常識では、男性が食事の支度を手伝っていたら、『女性は何をサボっているのだ！』と思われてしまうからだ。

唯一の例外が、野営中の冒険者なわけだが、屋敷でエルが家事を手伝っているとハルカがいい顔をしない。

実は、俺も同じであったが。

「魔族は、男性もやっているから。ここはヴェルの言うとおり、男性も手伝える範囲で家事や育児をしてもいいのではないかと」

「何かに影響されたのであるか？」

「それが、昨日モールさん達が来て……」

昨日、交易の打ち合わせも兼ねて、モール達が奥さんと子供を連れて遊びに来たのだ。

彼らはエリーの経営する会社で幹部候補として働き、社内で知り合った女性と結婚して子供も産まれている。

見事なまでの順応力の高さであり、恩師であるアーネストもさすがに驚いていた。

『それで、考古学の方は？』

『時間がないので……』

『先生、考古学では飯が食えないです』

『時間があれば手伝ってもいいかな？』

『我が教え子達は、みんな忙しいのであるな』

『仕事で忙しいですね』

『休みはちゃんとありますけど、その時は家族優先で』

『先生、結婚するって大変なんですよ』

『かぁーーー、恩師への配慮がなってないのであるな』

とはいいつつ、実は現在のアーネストはバウマイスター辺境伯家がパトロンをしている考古学者、王国のアカデミーから派遣された学者や生徒と組んで王国中の地下遺跡発見と発掘を行っている。

王国政府は、アーネストには餌（遺跡と考古学調査）があれば大人しくしていると判断したわけだ。

ああ見えて教え子への面倒見はいいので、今は人間の生徒達に色々と教えたりしている。

そんなわけで、今はたまにしかバウマイスター辺境伯領に戻って来なかった。

昨日は教え子とその家族を見に来たわけだ。

「アーネストであるか……」

「導師って、アーネストが苦手ですね」

「そんな事がないのである。エルヴィンよ」

導師は体育会系で、アーネストは完全な文科系。
相性が悪いのもあるが、実は自分の好きな事を優先するなど、似ている部分も多い。
近親憎悪も混じって、二人は相性が悪いのかもしれない。

今は共にほぼ同じ魔力量という点も、お互いを意識させるのかもしれなかった。

「大体、あの男と器合わせをするから、某の魔力は奴と同じところで成長が止まってしまったのである！」

「それは言いがかりのような……」

「俺もそう思う」

導師、それは完全な言いがかりです。
もしエリーと器合わせをしても、導師の魔力はアーネストと同量までしか増えなかったのだから。

「話がそれました。モール達は手伝いをしていましたよ」

実はモール達は共働きであった。
奥さん達は、出産後に仕事に復帰している。
そのため、彼らは食事の支度を手伝うなど習慣がついていたのだ。

「この流れが、いつかリンガイア大陸にも入ってくる可能性が高いじゃないですか。先端を行くってのはいいですよ。なあ、ヴェル」

「それはいいけど、エル、お前は絶対に料理を作るな」

男性が家事を手伝おうと手伝いまいと、それは個人や夫婦間の問題だと思う。

俺に干渉するつもりはないが、エルが料理をするととんでもなく不味い物が出てくるので、調理だけはやめて欲しかった。

「ええーーーっ、最近ハルカの料理を見て、俺もいけると……」

「いけない」

和食に似たミズホ料理は、色々と繊細なのだ。

味覚の許容範囲が広すぎるエルには向いていないと思う。

「食材が勿体ないから駄目」

「ヴェルが酷い……」

俺は全然酷くない。

失敗料理なんて食べたくないからだ。

それに、お母さんから言われなかったか？

食べ物を無駄にしてはいけないって。

「ヴェンデリン、息災か？」

「バウマイスター辺境伯殿、お邪魔します」

「本当に陛下は、幻の魔法『瞬間移動』が使えるようになったんすね」

突然、視界にエリー、ライラさん、ルミの三人が現れた。
オットーの事件で俺と器合わせをしたエリーであったが、彼女はあれからすぐに魔力量の上昇が止まっており、俺とは違って器合わせの恩恵をあまり受けていないように見えた。
ところが、今まで魔族では滅多に使える者がいなかった『瞬間移動』を習得し、今では各地を自由に移動できるようになっていた。
今日も、アキツシマ島、バウマイスター辺境伯領西部での視察を終え、ここに姿を見せていた。

「器合わせで使える魔法の種類が増える事はよくあるのであるが、それは魔力量が増えてからというのがこれまでの定説である。不思議である」

「理屈はわからぬが、便利な魔法よな。我が社の拡大と、交通費の削減に多いに貢献しているぞ」

「陛下、利益率の改善も期待できます。自前で『瞬間移動』を持つ事がこれほど便利とは」

「一瞬で取材先まで行ける。便利っすね」

「ブンヤであるか。取材といっても、ただの昼食会である」

「導師さん、ここはバウマイスター辺境伯さんの家族団欒を取材して、世論が好感を持ってくれるように記事を書こうかと思いまして。大スクープのお礼っすね」

ルミは、オットー一味とオズワルド議員による暗殺未遂事件の詳細を独占でスクープして大金星をあげた。

「会社の上層部の連中は顔を渋くさせていたっすけどね。自分を処罰などできないので、気にしては負けっす」

現役の議員が王国貴族と魔導具ギルドから暗殺の仲介を請け負い、高額の仲介料を受け取っていたのだ。

現在、政府与党である民権党は世論と野党から同時に叩かれ、ほぼ機能不全の状態になっていた。

任期満了前に議会を解散する事を阻止できず、次の選挙では惨敗するとまで新聞で予想されるあり様だった。

無理やり任期満了まで居座ると、余計に批判が増して選挙に勝てなくなる可能性があり、今はいつ議会を解散するか決めている最中だそうだ。

「オズワルド議員は？」

「政治資金の流用と脱税で起訴されるでしょうが、懲役はつかないと思うっす。バウマイスター辺境伯の暗殺を受け負った件は、実行犯でもないですし、事件は他国の領地で起こっています。起訴できないそうっす」

「そんな事だろうと思った」

認めてしまうと、王国との交渉の席でその件について責められる事は確実だ。

交渉で不利になってしまうので、意地でもオズワルド議員を暗殺未遂容疑で逮捕しないであろう。

「実行犯達は、このままゾヌターク共和国に戻って来ない方がいいと思っているっすね」

戻って来ても、俺の暗殺を試みた容疑では逮捕できない。
ゾヌターク共和国国内で起こった事件でないので、法的に逮捕できないのだ。
かといって、そのまま無視すれば事実は新聞で報道されている。

『他国とはいえ、大貴族を暗殺しようとして無罪なのは、法治国家としてどうなのか？』という批判が出てくるだろう。

「民権党の議員には弁護士も多いっすからね。法を拡大解釈して逮捕すれば、オットーのような連中からは売国奴だと批判され、逮捕しなければ自分達の支持母体から人権侵害だと批判が出てしまう」

リーダーのオットーは死んだが、他の暗殺に参加した九名と、彼らが乗ってきた魔導飛行船の乗組員達はいまだ収監されていた。
今も拘束用の魔力を吸収するコードをつけられ、そう簡単に脱走できないようになっている。

「トカゲの尻尾切りである！」

「導師さんからそう言われてしまうと反論できないっすね。そんなわけでして、現在、我が国の政治は大混乱っす。民権党政権も儚かったっすねぇ……」

「これは陛下からの情報であるが、現在交渉団は国権党の政治家連中と話し合っているのである。あの連中の方が、手強いながらも交渉はできるだけマシだと陛下は仰っていたのである」

どうせもうすぐ議会の解散と選挙が行われる予定で、大方の予想では民権党が惨敗するであろう言われていた。
それならば、早めに次の政権を担う連中と話し合いをした方がい

いわけだ。

「交渉団団長のレミー氏が、議会の解散と選挙が近いからという理由で、テラハレス諸島から勝手に持ち場を離れて批判されているっすね」

選挙に通らなければ、政治家では政治家ではなくなる。

それでも、団長なのに重要な交渉をサボって選挙準備に入った彼女に対し、魔族達の批判は大きいようだ。

「サルは木から落ちてもサルだけど、政治家は選挙に落ちればただの人だな」

「おおっ！　バウマイスター辺境伯さん！　それって至言っすね。メモメモ……」

ルミは、俺の発言をメモし始めた。

実はこの言葉、嫌々労働組合の命令で選挙応援に行った時、年配の上司から聞いたものだ。

政治家として綺麗事を言ったり、他人から敬意を払われるため、あいつらは選挙に落ちないよう必死なのだと。

義務で入った労働組合だったが、組合費は高く、幹部連中がそれを使って豪遊している噂もあったし、そうでなくても残業だらけなのに休日に動員があったり、俺の記憶の中ではあまり役に立った記憶はない。

そういえば、民権党の支持母体も労働組合だった。

あの連中にはあまり期待できまい。

「バウマイスター辺境伯さんは、民主主義をよく理解しているっすね」

「そうかね？」

前世では、民主主義の世界にいたが、もの凄く詳しいかと言われると微妙な線だ。

「国権党の政治家が、王国の貴族は予想以上に民主主義を理解していて交渉がやり難いって言ってたっす」

「陛下は、バウマイスター辺境伯からたまに話を聞いていたのである！」

『魔族の政治形態についてどう思うか？』と聞かれたので、私見を話しただけだ。

それなりに参考になったらしい。

交渉では、上手くそれを利用して交渉を進めているのであろう。

「もう少し時間が経てば、それなりに落ち着くと思うっすよ」

「我々の方は、もっと早く片付いたのである！」

俺への暗殺未遂事件への関与で、魔導ギルドは解散というか独立した組織としては終焉を迎えた。

帝国と同じく魔導ギルドの一部門として再スタートする事になり、それに反発する旧上層部と年寄り連中は粗方役職から追われている。

代わりに若い魔道具職人が幹部に指名され、魔導ギルドと協力して魔導技術の発展を目指す。

特に最優先なのは、魔族の魔道具技術に追いつく切り札となりそ

うな『魔法陣板』の量産化と、刻み込む魔法陣のパターン研究であろう。
日本でいえば、半導体と制御プログラムの開発をするようなものだ。

成功すれば、魔族の魔道具に十分対抗可能らしい。
ただ、魔法陣を刻み込むシリコン製と極限鋼製の板は、俺が暫く供給しなければいけない。
元々極限鋼は俺しか作れないので、俺が供給するしかないのだが。
勿論、この世界の人間はケイ素なんて元素は知らないので、焼き物の亜種とはいえ、シリコンも提供しなければいけなかった。

「仕事が増えて面倒です。導師」

「我が国のためである。我慢するのである」

導師、あなたは我慢した事があるのでしょうか？
俺はないと思っています。

「魔道具ギルドの年寄り共、みんなヒラに降格して魔道具作りに精を出しているのである！」

「クビじゃないんですね」

「魔力とスキルが勿体ないのである！」

シャーシェウド会長は死んだが、罪人として永遠に不名誉な記録が残る事になった。
一族に魔法を使えないにも関わらず、高給な役職や、コネで魔道具の工房や関連した商会に職を得ていた者がいたが、彼らは全員ク

ビになる事が確定している。
殊更陛下が強要したわけではないが、コネで人を雇うのは、この人物のバックから得られる利益に期待しての事だ。
罪人となったシャーシェウド会長の類縁を雇っても、利益どころか損失しか出ない。
魔法が遺伝しない以上、彼の一族に魔法が使える者はおらず、彼らのバラ色の人生はいきなりどん底へと叩き落とされたわけだ。
シャーシェウド会長の権勢で得をしていたのだから、彼の失脚と同時にそれをすべて失っても、そこに同情する余地はあまりなかったが。

「シャーシェウド会長は死んだが、他の元幹部連中は魔道具の生産量向上に死ぬまで貢献してもらうのである！　陛下が言い含めているので、逃げたらシャーシェウド会長と同じ運命だと言っているのである！」

加齢で多少衰えているが、魔道具作りができないわけではない。
魔道具職人の給金はいいが、死んだシャーシェウド会長と共に魔道具ギルドに損害を与えているので、これからその損失分を罰金として納めなければいけない。
コネで押し込んでいた一族が全員ニートになるので、彼らの面倒を見ながら生活するとなると、庶民並の生活になってしまうであろう。

これは、かなり辛辣な罰かもしれない。

「交渉は、国権党とやらの議員達がテラハレス諸島の来ているのである！　連中は、テラハレス諸島の設備をホールミア辺境伯に譲って撤退する意図があるようである！」

あんな遠方にある孤島群なんて、魔族もいらないのであろう。
警備隊の駐留経費、あまり役に立たない青年軍属達への手当もあり、維持すればするだけ大赤字になってしまう。
とっとと元の持ち主だと主張するホールミア辺境伯に返してしまった方がいいと思っているようだ。

交渉が始まった過程で増築されて建物などは増えていたが、それは残していくらしい。
解体すると余計に費用がかかるし、公式には言わないがホールミア辺境伯への謝罪を兼ねたお礼というわけだ。
領有権は主張していたが、今までまったく使用していなかった島にある建造物があっても、ホールミア辺境伯に何の利益があるのかという疑問はあるが。

テラハレス諸島を交易中継地にするという案も出ていたのだが、やはり場所が不便だという理由で使用されない事になった。
双方、既にある港で交易に関する続きをした方が早いという事もあり、ホールミア辺境伯が返還されたテラハレス諸島をどうするのかは不明であった。

「うちの領地ではないですからね」

「王国直轄地でもないのである。漁業基地にするという意見が出ているようである」

実はあの島々、そのくらいしか使い道がなかった。
農業に適さず、水が不足しやすいので、あまり多くの人が住めないのだ。
魔道具である海水を真水にろ過する装置を使い、漁船の休憩地にするくらいが一番いいのかもしれない。

建物が残るので、そんなに経費もかからないはずだ。

「先生、お食事の支度ができましたよ」

「導師様もどうぞ」

「おおっ！　すまないのである」

「今日は、私も結構手伝いましたよ」

「ベッティは、兄さんに似て料理が上手だからな」

「お兄ちゃんの唯一の特技ですからね」

昼食の支度ができたと、アグネス、シンディ、ベッティが呼びにきてくれた。

この三人も結局俺の妻になり、子供も産まれ、今の生活にも十分に馴染んでいた。

今日も、エリーゼ達と昼食の支度を手伝っている。

「旦那様、今日はアキツシマ島沖産のサーペントの肉料理がメインです」

「涼子、雪、サーペントって減ったか？」

「アキツシマ島の近くはそれなりにですね」

「他の海域はそうでもないです」

普段は飾りながらもアキツシマ島の代官である涼子と、実質代官

職として働いている雪も今日はこの食事会に呼ばれていた。
二人の隣には、親父が曲者っぽい名前の唯もいる。

今日は、まだ結婚していないフィリーネ以外の俺の奥さんが全員揃っていた。

「今の方はいいのであるか？」

「久秀殿に任せています」

導師の問いに、雪が答えた。
アキツシマ島の元領主階級の人間からすれば、涼子、雪、唯の三名はできる限り俺の傍にいて沢山子供を産んでくれ。
その子は、うちに嫁入りなり婿入りさせるからと、今は週の半分以上はバウルブルクの屋敷にいる。
その間の執務は、唯の父親である久秀が代行している。
唯が産んだ子供が上級魔法使いになれそうな素質があり、松永家の跡取りとして申し分ないので、彼はウキウキしながら執務を代行してくれた。

もっとも『唯にもっと子供を産ませて、うちの家に嫁としてくれ』、『跡取りにするから婿にくれ』と希望が殺到して大変なようだ。
涼子と雪にも『公式の行事以外はバウルブルクですごし、もっと沢山子供を産んでください』と懇願したという事情もあるようだ。

「子孫繁栄である」

「導師も子供が沢山いますよね？」

「バウマイスター辺境伯ほどではないのである」

「そうだな。うちなんて一人娘だからな」

一人娘を異常に可愛がるブランタークさんも、俺と導師の話に加わってきた。

前世では考えられない子沢山だが、これもこの世界の定め。

魔族の国は平成日本に近かったが、他はこの世界なりの常識がある。

俺はもう完全にこの世界の人間になってしまっていると思っていた。

魔法が使えても不自然に感じないし、貴族にもなったし、広大な領地もある。

王族や貴族との柵は面倒だが、今は毎日充実した日々をすごしていると言っても過言ではないであろう。

唯一の懸念は、果たして向こうの世界の一宮真吾の体はどうなってしまったのか？

体を乗っ取った形になってしまったヴェンデリンがどうなったのか？

疑問は尽きないが、確認する術がない。

「ヴェル、腹減ったな」

「そうだな。席について飯にするか」

「ほほほっ、余は客人なのでヴェンデリンの隣の席だな」

「エリー様も懲りないね」

「ルイーゼさん、エリー様は交易で我が家に大きな利益をもたらしてくれる重要なお客様ですから。反対側の隣は私が座りますけど」

「エリーゼ、ちゃっかりしてるなぁ……。それはわかっているけどね。エリーゼは正妻だから」

当主として一番の上座に座り、その両脇にエリーとエリーゼが座った。

「それでは、両家の繁栄を祝って乾杯」

「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」

俺の合図で、みんながワインの入ったグラスを掲げて乾杯した。

「それにしても、この未開地には何もなかったのであるが、随分と発展したものである」

「無人の地がこれだからな」

導師とブランタークさんが、ワインを煽りながら今も拡大を続けるバウルブルクについて話し始める。

そう言われると不思議な感覚だが、それを俺が成しているという事実も不思議に感じてしまう。

それでも、俺がこの世界に召喚されたのには、何か意味があったのだと考えられるようになった。

多分、俺は死ぬまで一宮真吾ではなくヴェンデリンとして生きて死んでいくはず。

そして俺の死後、バウマイスター辺境伯家はどうなるのであろうか？

無事に何代か続けばいいなと思いつつ、俺はグラスに入ったワインを飲み干すのであった。

「ヴェンデリン、よく聞きなさい」

「はい」

「私がなぜお前に、それもバウマイスター辺境伯家の八男として生まれたお前に、我らの偉大な初代様の名を授けたのか。わかるな？ヴェンデリン」

「桁違いの魔力があるからかな？」

「そうだ！　お前は、初代様に匹敵する魔力の持ち主。いわば先祖帰りのような存在なのだ」

また、父上からの長い話が始まった。

それもいつも同じ話ばかり。

いい加減に聞き飽きたな。

俺は、ヘルムート王国において広大な領地を持つ大貴族バウマイスター辺境伯家の八男として生まれた。
母アマーリエは側室だけど、生まれながらの魔法の才能で父上に可愛がられている。
それはいいのだけど、いつも俺がバウマイスター辺境伯家の新しい希望なのだとか、先祖の偉大な逸話、それも同じ内容のものを何回も話すのには参ってしまう。

兄上達は……巻き込まれたくないから逃げてしまったようだ。
側室の子供で魔力量が多いから苛められているとかはないが、兄上達は俺を父上の長いお話の被害担当と思っている節がある。
俺も逃げてしまうと父が話をする相手がいなくなってしまうので、仕方なしに話を聞いていた。

「初代様より、我が一族は不思議と魔法の才能が子孫に受け継がれるようになった。我が家には、魔族の血も度々入っているからな。初代様は、何と魔族の王も妻にしたそうだ」

初代様は、随分と大胆な人であったようだ。
とんでもなく貧しい騎士爵家の生まれながら、魔法の才能を生かして様々な功績をあげて大貴族となった。
王家とも血の繋がりがあり、今も五大辺境伯家の筆頭、新領土南ヘスティニア大陸都督との連絡役として、王家からの信任も厚い。

子孫に魔法の才能が遺伝するようになったのは、初代様からだ。
そのおかげで、バウマイスター辺境伯家はこれまで何十人も王宮筆頭魔導師を輩出している。

ところが、初代様からの申し送りによると、魔力の遺伝は段々とその効力が落ちてくるらしい。

実際に、今は昔の中級レベルでも天才扱い。
上級は数十年に一度の奇跡と言われている。
大半は初級レベルという状態だ。
それでも、他の貴族家は魔法の才能が子孫に遺伝しない。
バウマイスター辺境伯家から嫁なり婿を受け入れても、数代でその効力がなくなってしまう。
貴族の中には魔族と婚姻を行うという裏技に走る人もいるみたいだけど、魔族は数が少ない。
それに、数代で魔力の遺伝がなくなるのは同じだ。
魔力量の減少に悩むのは魔族も同じで、どうして魔族までそうなるのか多くの学者が研究しているが不明であった。
元々魔族は、最先端の魔導技術を持っていた。
空気中に微量漂う魔力を収集して魔晶石に蓄え、それを効率よく燃やして動かす魔道具の開発と生産では群を抜く存在である。
魔族自体に魔力がさほどなくても困らない状態だから、必要がないと本能で理解して衰退したのではないかという説が唱えられていた。

人間も同じで、初代様の時代に比べれば圧倒的に魔導技術が進歩している。
少ない魔力で魔道具が動くようになり、魔力が少なくても困るという事はなくなった。
そのため、人間も必要がなくなったので魔力量が減ってしまったのではないかという説を学者が述べていた。

「しかし！　我がバウマイスター辺境伯家の力の源泉は魔法と魔力にある！　困っていたところにヴェンデリンが産まれた！　陛下も！　多くの貴族達も、お前が希望に見えているのだ！」

「希望ですか……。俺は何をすればいいのですか？」

「実はお前に、王家より王女様が降嫁される事が決まった」

「それって、おかしくないですか？」

普通、兄上達の方が優先されるはずだけど……。

その前に、兄上達から苦情は出なかったのであろうか？

「第三王女のイーナ様は、久しぶりに王家から出た天才魔法使いなのでな。お前との婚姻が相応しいと陛下もエーリッヒ達も言っていたぞ」

「えーーーっ！　あいつですか？」

「こらっ！　イーナ様に向かって何て口を利くのだ！」

父上、そうは言いますが、あいつは俺を常にライバル視して面倒な奴なんです。

物心つく頃から顔見知りだけど、いつも魔法勝負を挑まれ、俺が適当にあしらうと、次こそは必ず勝つと捨て台詞を吐かれる。

「父上、いつも勝負する俺の心情を察してください」

もし怪我でもさせると大変だから、手加減するのも面倒なんです。

「ヴェンデリンよ、お前はまだ若いな。女心がわかっていない。実はイーナ様はお前が大好きなんだが、それを素直に伝えられないのだ。勝負を挑む事でお前と絡もうとする。実に健気ではないか」

「そうだったのですか」

それは、思わず好きな異性に対し意地悪をしてしまうという、アレなのか？
でも、全力で『ファイヤーボール』はやりすぎだと思うんだよなぁ……。

「私がそう思っているだけだが」

「父上……」

事実じゃないのかよ！

「何にしてもだ。お前は子供がいない大伯父上の養子となって、分家の当主になってもらう。エーリッヒは優秀な跡継ぎだが、お前もエーリッヒを支えるのだ。他のヘルムートやパウル達は、みんな他の貴族家に婿養子に行ってしまうからな」

最近全体的に魔力量が減ったとはいえ、中級ならバウマイスター辺境伯家から産まれた子供の半数がそうだ。
そのため、バウマイスター辺境伯家には常に多くの子供を作る義務が課せられている。
嫁入りする娘は当然であり、息子も子供に男子がいない貴族家にはとても人気があった。
父上も、現時点で息子十三人、娘二十一人がいる。
まだ足りないと王家から言われているそうで、俺の弟と妹はまだまだ増えそうである。

「そんな状況のため、お前はイーナ様を正室に迎えるのだ」

「それ、エリーゼ達にどう説明するのですか？」

バウマイスター辺境伯家の子供は、早くに複数の婚約者が決まってしまう。

俺の正妻も、教会とも縁が深い王都の有力大貴族ホーエンハイム伯爵家の娘エリーゼに決まっていた。

そういえば、初代様の正妻もホーエンハイム家の出でエリーゼという名前だったそうだ。

治癒魔法の使い手という部分も似ている。

他にも複数の婚約者がいるのだが、今さら王家とはいえ俺に正妻として王女様を押し込むと、いらぬ混乱が起こりそうな……。

「そこは王家が何とかするそうだ。それでだ。ヴェンデリンには重要な仕事がある！」

「もしかして……」

「お前がエリーゼ達に説明するのだ」

「父上がやってくださいよ！」

「嫌だよ。怖いもの」

父上……。

曲がりなりにもバウマイスター辺境伯が、成人前の小娘数人が怖いって……。

「とにかくだ！　私は色々と忙しいので、あとはヴェンデリンに任せた」

父上は早々に話を終わらせてしまい、俺は父上の執務室から追い出されてしまった。

「エル、なぜ俺がエリーゼ達に説明しないといけないんだ？」

執務室から出た俺は、御付きである重臣アルニム家の五男エルヴィンに己に振りかかった理不尽を説明した。

「お館様はお忙しいのだから、そこはヴェルが自前でやらないと」

「エルも手伝えよ」

「俺の嫁さんじゃないもの」

エルは、幼少の頃から幼馴染で親友でもある。
二人きりの時には、かなり砕けた口調で話をした。

「でも、いくら王家でも横入りはないよな」

「本当だぜ。しかも、お相手はイーナ様ときたものだ」

「あの人、本当にお転婆だからなぁ……」

そんな話をしながら自室に戻ると、そこには俺の婚約者達が待っていた。

「あなた、お茶を淹れますね」

「エリーゼ、俺達はまだ正式に結婚しないから『あなた』はどうかと思う」

もうすぐ成人する俺達であるが、正式に結婚する前にその関係を深めておこうと十二の頃から一緒に生活していた。
エリーゼは自分が俺の正室になると疑っていないのに、いきなり王女様の横入りだ。
これを話すのは辛い……というか、これは父上の仕事じゃないのか？

「イーナ様の件ですか？」

「知っていたのか、エリーゼ」

「はい。お父様から連絡を受けました」

エリーゼは、携帯魔導通信機でホーエンハイム伯爵からイーナ様の件について聞いたようだ。
彼は教会の重鎮だから、知っていて当然か。
元々エリーゼにしても長女であり、いくらバウマイスター辺境伯家とはいえ八男に嫁ぐのはおかしいからな。

「仕方がありません。今の王家は、あまり優秀な魔法使いが出ていないのです」

「そうなのか？」

「はい、陛下の御子の中で中級以上の魔力を持つのは、イーナ様だけですから」

魔力の量が王家の力と比例するわけでもないが、やはり優れた魔法使いが多いに越した事はない。

イーナ様と俺との間に生まれた子供の魔力に期待したいというわけだ。

「ヴェル、いまだに魔力が増えているものね」

「まあね」

もう一人の婚約者にして、バウマイスター辺境伯家分家魔闘流師範役オーフェルヴェーク家の次女ルイーゼも話しかけてきた。

バウマイスター辺境伯家で産まれた子供は、物心つくころから初代様が作った訓練マニュアルで魔法を習う。

魔力を増やす訓練も同時に行うのだが、俺は上級を遥かに超えてもいまだに魔力量の限界が訪れなかった。

このまま行くと、初代様と変わらない魔力量まで成長するのではないかと期待されていたのだ。

「面倒な話だな。魔法対決なら、カタリーナとかが互角くらいじゃないのか？」

「どうやらイーナ様は、私など眼中にもありませんようで……」

第三の婚約者、バウマイスター辺境伯家の寄子ながら実質分家のような存在であるヴァイゲル子爵家の長女カタリーナも俺の婚約者として幼少の頃から一緒に生活していた。

成人前にも関わらず、すでに天才だと言われているカタリーナは、俺の見立てではイーナ様と互角か、少し実力が上の魔法使いであった。

それなのに、昔からイーナ様は俺に執着して勝負を挑み、毎回負けていた。

「ヴェンデリンさん、毎日勝負できますわね」
「俺が嫌なの！」
時間が勿体ないから、そう思って当然だ。
「そうですわね。第一、ヴェンデリンさんの婚約者は私達だけで固定だと思っておりましたわ」
「名前が関係しているかも。私も初代様の妻と同じ名のヴィルマだから。みんなもそう」
「名前が同じだからって、旦那と結婚して子供が生まれるとみんな上級になるってか？　そんなわけないじゃん」
同じく分家アスガハン家の次女で魔銃使いのヴィルマと、寄子で実質分家のオイレンベルク男爵家の長女カチヤも話に加わってきた。
この二人も、俺の婚約者であった。
名前が同じというのは、初代様の妻は公式、非公式を合わせて三十名から五十名以上。
子供の数は八十名から百四十名以上とも言われており、その妻の中で名前が伝わっている人物と同じ名前の娘が同じく初代様と同じ名前である俺の婚約者に指名されていた。
同じ名前だから、そう都合よく上級魔法使いが産まれるはずもないと思うが、このところの魔力量の低下は深刻であった。
きっと、王国上層部ですら藁にも縋る思いなのだと思う。
「冗談のような話じゃが、妾も同じ名前だからという理由でフィリ

ップ公爵家から嫁ぐ予定じゃからの。帝国はもっと優秀な魔法使いの確保に苦労しておる」

俺の婚約者には、帝国の娘もいた。

フィリップ公爵家の三女テレーゼ、ラン族出身で褐色の肌が特徴の肉感的な美少女だ。

数百年前から王国貴族と帝国貴族との婚姻は珍しくなくなっていたが、向こうは選帝侯家なので、よほど俺に期待しての事なのであろう。

「それにしても、いくら王女様とはいえ、この状況で割り込む度胸が凄いですね」

「だよなぁ……」

同じく分家から来たリサは、俺よりも五つも年上だった。

彼女も本人が魔法使いなのと、初代様の妻と同じ名前だという理由で俺の婚約者にされている。

「相手が王女様だろうと、ヴェルの方が夫なんだから偉そうにしていれば？　文句言ったら、魔法勝負で負かしてしまえばいいんだよ」

「エル、お前は気楽に言ってくれるな」

「だって、俺の婚約者の話じゃないし」

エル、お前ちょっとムカつく。

「それで、いつ来るんだ？　あのお姫様は」

実はエルも、会う度にイーナ姫が俺に魔法勝負を挑む現場に何度も居合わせていた。
そのため、彼女と顔見知りでもあったのだ。

「あの姫様の護衛もするとなると、すぐにあちこち遊びに行かれると面倒だからな。他の連中と護衛任務の打ち合わせをしなきゃいかん」

俺がただの八男ならエルが一人で護衛すれば済む話だが、先祖返りと言われている魔力のせいで魔族からも注目されているらしい。
父上は、俺への護衛を強化していた。
万が一にも、誘拐でもされたら困るのだそうだ。

当然婚約者達の護衛任務もあり、エルはお転婆で有名なイーナ姫の護衛が大変そうだと溜息をついた。

「ヴェル、お館様から聞いていないのか？」

「何も言わなかったから、父上も知らないのと違うか？　エリーゼは知っている？」

「さすがに、いつここに来るかまでは知らないです」

「姫様なんだから、色々と準備に忙しいんじゃないの？　御付きの人とか多そうだし」

ルイーゼの言うとおり、『一応』お姫様だからな。
王国としても、その身分に相応しい相応の準備が必要なはずだ。

「という事は、暫く来ないだろうな」

「残念ね！　私はもういるわよ！」

「出たな！」

「何よ！　人をお化けみたいに言わないで！」

噂をすれば何とかとは違うと思うが、既にイーナ姫はバウルブルクまで来ていた。

度々顔を会わせた時と同じように、ドレス姿ではなくいつでも狩猟に行けるような恰好をしている。

その装備の素材や作りは王族に相応しいものであったが、婚約者に挨拶するのに相応しい格好には見えなかった。

「私のライバルであるヴェンデリンが婚約者って、パパも王族に中級魔法使いが生まれにくくなっているから焦っているのね」

「ライバルって……一回もヴェルに勝った事ないじゃん」

「うっ！　今度は勝つからいいのよ！」

ルイーゼから事実を指摘され、イーナ姫の顔が引きつった。

「イーナ様、あなたはヴェンデリン様に勝負を挑みに来たのですか？」

「当たり前じゃない」

「安心しました。つまり、ヴェンデリン様と結婚する意志がないと。でしたら、私は当初の約束どおり、ヴェンデリン様の正妻となりま

す」

エリーゼは普段は温和で優しいが、歴史ある大貴族家の令嬢である事には変わりがない。

堂々とイーナ姫に先制の一打を与えた。

「なんでそうなるのよ？」

「私達はヴェンデリン様の妻になる事を嬉しいと思っていますが、イーナ様はヴェンデリン様と勝負できれば満足なのでしょう？　でしたら、無理に妻になる必要はありませんね」

「そんな事はないわよ！　私に勝てない男と結婚するなんて嫌じゃない！」

「（面倒な女だなぁ……）」

自分よりも強い男じゃないと結婚したくないとか、エルが普段好んで読んでいる物語の内容かよ。

「とにかく、これから勝負よ！　私を妻にしたければ、私を倒してみなさい」

「別に、そこまで無理に妻にしなくてもいいかな？」

「こらっ！　私が勝負してあげるんだから、ここは素直に勝負して私を妻にしなさいよ！」

「うーーーん。イーナ様って実はツンデレ？」

「出たわね！　謎のバウマイスター辺境伯家用語が！」

俺も詳しい事情は知らないけど、この言葉も初代様が最初に言い始めたそうだ。

初代様は魔法のみならず、文化、芸術、食、魔導技術の進歩にも貢献した凄い人だからなぁ。

「とにかく勝負しなさい！」

「しょうがないなぁ……」

一回勝負して負かせば、イーナ様も暫くは大人しくしてくれるであろう。

それよりも、今日はみんなで魔の森まで狩りに行く予定だから、とっとと終わらせてしまうに限る。

「今日は、ご先祖様が持っていた強力な切り札があるのよ！　パパが私の嫁入り道具としてくれたの。様々な属性の魔法の穂先を自在に出せ、しかもそれを飛ばす事もできる。伝説の魔槍『飛穂丸』。初代バウマイスター辺境伯が、娘の嫁入り道具に持たせたそうよ」

確か、初代様の娘の一人が王家に嫁いだんだよな。

その娘の母親は槍の名人だったそうで、娘も同じく槍を習っていたそうだ。

「実は私、槍も習っているのよ」

「ふーーーん、前よりも負け時間が二十秒くらい伸びるかもね」

「失礼ね。ルイーゼだっけ？」

「だって、ボク達もそんなものだよ。ねえ？　みんな」

ルイーゼが他の婚約者達に質問すると、全員が首を縦に振った。

「私は、治癒魔法専門なので戦いは無理です」

「魔導武器を使って勝てるくらいなら、誰も苦労しない」

「魔力量に絶望的なまでの差がありますから」

「だよなぁ……。イーナ様、怪我しないようにな」

「ヴェンデリン、夫婦とは最初が肝心じゃぞ。油断して負けて尻に敷かれないようにな」

「油断しても、旦那様が負けるとは思いませんが……」

「あんた達、言いたい放題ね」

イーナ姫は、エリーゼ、ヴィルマ、カタリーナ、カチヤ、テレーゼ、リサの言いように文句をつけた。

「まあいいわ。実際にやってみればわかるのだから」

それからすぐ、俺は新たに婚約者となったイーナ姫と勝負をする羽目になった。

それにしても、魔力が多いだけでこんなに婚約者が増えてしまって。

初代様も奥さんの数がもの凄かったと記録されているが、俺と同

じような目に遭ったのであろうか？

多少魔法に長けていても、俺は貴族で雁字搦めの柵からは抜けられないようだ。

それでも、何とかやっていこうと思う。

きっと、初代様も同じような苦労をして人生をまっとうしたのであろうから。

最終話　そして何気ない日常へ……繰り返す因果？（後書き）

とりえあず、本編は終わりです。
読者のみなさま、応援ありがとうございました。

第0話　一宮信吾という男

「一宮君！　今君が面倒を見ている大下君だが、もう少しなんとかならないかね？」
「課長、もう少しとは？」
「なんかこう、覇気が足りないというか……。私が誘っても飲み会にまったくつき合わないし、　大下君には我が社の一員であるという自覚があるのかね？」

そんなこと言われても困ってしまう。
俺だって忙しいのに、急に課長に呼び出したと思ったら、あまりに具体性のない感想を述べているだけだったのだから。
入社三年目で新入社員の面倒を見るというのはなかなか大変だと思うのだが、これは決して俺が出世頭だからというわけではない。
人手不足で、俺にも教育係の仕事が回ってきただけというのが実情だったからだ。
成績は同期の中で真ん中よりも少し上という自覚があるが、次世代の教育を担うほど優秀だとはとても思えなかった。
それに今俺が預かっている新人君は、教育係の俺よりもよほど物覚えが早いし優秀だろう。
なにより出身大学が、俺よりも圧倒的に偏差値が高いところだったのだから。
ただ彼は今時の若者というか……同じく二十五歳の若造である俺が言うのもどうかと思うが……仕事とプライベートをきっちりと分ける後輩なのだ。
ちゃんと仕事はしているのだから俺は構わないと思うのだけど、就職氷河期世代と呼ばれる年代の課長からすれば、終業後の飲み会を断る後輩などという存在が信じられないのであろう。

今までにもそんな人が一人もいなかったわけないと思うのだが……。

「今度は責任を持って、君が大下君を飲み会に連れて来るんだ」

「教育係というのはあくまでも就業時間中のことでして、就業時間外の飲み会に強制で参加しろとは言えませんよ」

それが労働基準法というものだからな。

「たとえ就業外でも、先輩と酒を酌み交わしながら色々な話を聞くことも大切な仕事なんだ！　いいか！　絶対に大下君を飲み会に連れて来るんだぞ！」

「課長が言ってもダメなら、自分が言ってもダメだと思いますよ」

「そこを首に縄をつけてでも連れてくるのが、本当の教育係ではないのかね？」

勿論そんなわけないのだが、典型的な長いものに巻かれてしまう俺は強く反論することもできず、長時間課長の無駄な怒鳴り声を聞いて残業時間を増やす羽目になってしまった。

その後、念のため大下くんに聞いてみたか、俺に誘われたぐらいで酒癖が悪くて評判の課長が主催する飲み会に参加するわけがないことは伝えておこうと思う。

「今日は彼女とデートなので。一宮先輩も大変ですね」

後輩に同情されてしまった。

それにしても彼女とデートかぁ……羨ましい限りである。

「そんなしょうもないことに気をかけてる暇があったら、もう少し課長らしい仕事をしたらいいのに。あれで就職氷河期を潜り抜けた精鋭とは笑えますね」

確かに、採用が少なかった年代の社員にしては課長は……であった。

噂によると、彼が課長になれたのは他に課長にできる年齢に達した社員がいなかったからだそうなので。

長年不景気なのに、年功序列に拘る日本の会社ってある意味凄いのか、それともなにも考えていないのかどちらかだな。

「一宮先輩、指示された仕事はすべて終わっています。お先に失礼します」
「お疲れ様」
大下君は非常に優秀だ。
この会社で出世できるかどうかわからないけど、彼なら独立してもやってけそうだしな。
先輩である俺の前で、課長の悪口を公言できてしまう度胸は羨ましい限りだ。
俺はそこまで才能がないから、課長の暴言という台風が過ぎ去るまで待ち、終わらなかった仕事を残業して片付ける。
サラリーマンの悲しい現実というやつだ。
「ふう……終わったな」
家に帰ると日付が変わってしまう時刻だな。
明後日は土曜日だから、あと一日頑張れば……コンビニで適当になにか買って帰るとしよう。
帰りにお店による気力もない。
「あーーーあ、王侯貴族の家にでも生まれてくればよかったのに」
明後日からお休みだけど、また家の中で過ごして終わってしまいそうだな。
そんなんだから彼女ができないんだよな、きっと。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n8802bq/

八男って、それはないでしょう！

2023年8月30日21時42分発行